モンスターハンター ～恋姫狩人物語～

黒鉄大和

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

広大な自然に包まれた人とモンスターが共存する世界。人々の歴史は常にモンスターとの互いの命を懸けた戦いの歴史でもあったが、人々はモンスターに対抗する為に様々な知恵や道具を使って強く生きていた。そんな世界の辺境にある小さな村――イージス村。どんなモンスターでさえ進入する事のできない絶壁の上に建つ鉄壁の小さな村の中で人々は平和に暮らしていた。そんな村に修行を終えた一人の少年ハンター、クリュウ・ルナリーフが帰って来た。多くのモンスターと対峙し、仲間達と共に数々の戦いを生き抜き、多くの事を学び、クリュウは強くなっていく。そして、そんな彼の周りにはなぜかかわいい女の子がいっぱい!?

ドキドキドタバタラブコメディー風モンスターハンター小説がついにスタート!

【利用上の注意】本作を読む場合は以下の事をご理解してからご利用ください。

※1　本文に関する問い合わせは感想・作者メールにてお願いします。

※2　本作は恋姫†無双とは一切関係ありません。

※3　本作はにじファンからの移転作品です。初投稿は２００８年3月1日であり、5年以上続いている作品です。その為前半部分と後半部分では文章力に著しい変化がありますので、その点はご容赦ください。

※４　にじファンからの移転作品で支持層もある為に評価は高めになっています。その為、新規の方は面白いかは実際に読んでみて判断してください。その場合は皆様の忌憚ないご意見や感想、評価を頂ければ幸いです。

※５　現時点で３００万文字を突破している為、読破するには相当な気合と膨大な時間を要します。それを覚悟の上で読み進める場合にも十分な休憩を挟みながら無理をせず、ゆっくりと読み進めてください。気分が悪くなった場合はすぐに読むのをやめて医師の診断を受けてください（笑）

※６　連載再開後のあとがきは重要事項を除いては全て活動報告に一本化しています。最新話を読んだ後は連動して更新される最新の活動報告の方にも目を通してもらえれば幸いです。

※７　本作外伝作品として姉妹の友情を描いた《Ｃａｎｎｏｎ†Ｇｉｒｌｓ》も本サイトにて掲載中です。

※８　２０１５年１１月２２日をもちまして、本作は完結致しました。長い間、ありがとうございました！

目次

モンスターハンター　～恋姫狩人物語～（第1期）

プロローグ　1
第1話　密林の青き狩人　16
第2話　歓迎の宴　23
第3話　幼なじみの酒場　29
第4話　女鍛冶師　アシュア　33
第5話　手料理　36
第6話　鍛冶師の心得　42
第7話　密林の異変　46
第8話　青き激戦　50
第9話　深緑の少女　61
第10話　密林の出会い　66
第11話　エレナの逆鱗　71
第12話　新たな師匠　77
第13話　クリュウ家の新たな日常　86
第14話　心優しき女鍛冶師　95
第15話　新たなる装備を目指して　101
第16話　ランポスシリーズ　113
第17話　青爪の襲撃者　125
第18話　青の終焉　146
第19話　灼熱砂漠の戦い　157
第20話　救援要請　177
第21話　砂塵の二騎姫　187
第22話　決戦　砂漠の支配者　201

第２３話　ハンターの登竜門　211
第２４話　密林の大怪鳥　221
第２５話　トラップボミング　239
第２６話　激闘　大怪鳥イャンクック　248
第２７話　戦いの軌跡　264
第２８話　絶交　273
第２９話　もう君の笑顔は見えなくて　283
第３０話　砂漠に潜む赤き盾蟹　291
第３１話　立ち直り　309
第３２話　イージス村の危機　314
第３３話　隻眼の人形姫　319
第３４話　帰って来た懐かしき友　349
第３５話　シルヴァ密林の白い影　360
第３６話　密林に走る稲妻　373
第３７話　サクラの傷痕　最期の雷鳴　387
第３８話　サクラの決意　新コンビ誕生!?　404
第３９話　クリュウの新たな戦い　411
第４０話　ドンドルマの再会　新たな波乱　416
第４１話　火山より熱い二人の戦い　437
第４２話　クリュウ激怒　ヒビの入った関係　458
第４３話　最終激闘バサルモス　469
第４４話　チーム結成　リーダーはクリュウ!?　485
第４５話　ハンターの節約術　501
第４６話　新たな戦いに向けて　508
第４７話　守るべき日々　517

登場人物紹介1 533
第48話 桃毛獣の悪臭騒動 539
第49話 狩場で過ごす三人の夜 554
第50話 ババコンガ迎撃作戦 561
第51話 恋する乙女の壮絶な大逆襲 578
第52話 変わるものと変わらないもの 587
第53話 独立貿易都市アルフレアでの絆 598
第54話 楽しい旅路　ツバメの苦悩 620
第55話 銀吹雪舞う雪山の戦い 625
第56話 雪山の主　雪獅子ドドブランゴ 642
第57話 雪山に響く最期の怒号 659
第58話 勝利の宴　交差する想い 674
第59話 アルフレアでの日々 695
第60話 片手剣の役目 706
第61話 桜花姫爆誕 712
第62話 蒼銀の烈風 724
第63話 対火竜作戦会議 735
第64話 それぞれの想いを載せて 749
第65話 王の領域 760
第66話 最強の飛竜 780
第67話 誇るべきもの 797
第68話 紅蓮業火　死闘の末の敗北 808
第69話 夕暮れの敗走 822
第70話 瑠璃色の夜空の下で 841
第71話 淡い恋風吹き荒れる狩場の朝 860

第７２話　負けない心　クリュウの強き決意　―――――――――――――――――――――883
第７３話　捲土重来　決意の果ての死闘　―――――――――――――――――――――892
第７４話　最終決戦　誇り高き空の王者リオレウス　―――――――――――――――――919
第７５話　月下流麗　差し伸べられる手への想い　―――――――――――――――――943
第７６話　揺れる寂しさ　すれ違う心の行方　―――――――――――――――――――966
第７７話　それぞれの物語　―――――――――――――――――――――――――981
モンスターハンター　～真・恋姫狩人物語～（第２期）
第７８話　狩りも恋もいつでも全力勝負　―――――――――――――――――――1007
第７９話　恋風烈火　激化するクリュウ争奪戦　―――――――――――――――――1024
第８０話　たまには農場へ行ってみよう　―――――――――――――――――――1047
登場人物紹介２　―――――――――――――――――――――――――――1064
第８１話　挟撃のイャンクック　―――――――――――――――――――――1071
第８２話　不憫なフィーリアの小さな幸せ　―――――――――――――――――――1092
第８３話　サクラサク　―――――――――――――――――――――――――1107
第８４話　白雪の下　彼の優しさに温められて　―――――――――――――――――1122
第８５話　幼なじみの想い　ずっと見てたんだから　―――――――――――――――1142
第８６話　クリュウの傷跡　彼の過去の物語　―――――――――――――――――1156
第８７話　前途多難な始まり　仲間集め奮闘記　―――――――――――――――――1169
第８８話　イビルアイ　少女の背負いし悲しき宿命　―――――――――――――――1186
第８９話　共同生活　ルフィールの幸せに満ちた笑顔　―――――――――――――――1203
第９０話　チームの絆　様々な想いが交差する演習場　―――――――――――――――1220
第９１話　シグマＶＳアリア　前途多難な初狩場　―――――――――――――――――1240
第９２話　様々な思惑渦巻く狩場物語　―――――――――――――――――――――1260
第９３話　ランポス迎撃戦　消え逝く命に捧げる想い　―――――――――――――――1282
第９４話　ルフィールの涙　悲しきイビルアイの宿命　―――――――――――――――1303

第９５話　ルフィールの恋心　イビルアイの果ての奇跡　――――1325
第９６話　夢光降り注ぐ幻月輪廻（ムーンロンド）　――――1341
第９７話　大混戦　目指すは優勝狩猟祭　――――1371
第９８話　卒業試験　第７７小隊最後の戦い　――――1398
第９９話　誇りの傷　壮絶な死闘の果ての想い　――――1424
第１００話　桜舞う卒業式　少女の想いは風となりて未来へ翔る――――1457
登場人物紹介３　――――1481
第１回　読者のハートを射止めたのは誰だグランプリ　――――1489
第１０１話　アメリア・ルナリーフ　――――1500
第１０２話　桜花姫ＶＳ飛燕姫　新たな物語の始まり　――――1520
第１０３話　狂走乱舞　雨車軸の如し夜の密林　――――1537
第１０４話　逆境撃破　策士クリュウの秘策　――――1559
第１０５話　セレス密林の夜明け　――――1576
第１０６話　嫉妬に狂う恋姫と頬を赤らめる飛燕姫　――――1597
第１０７話　燃ゆる都と交差する二つの物語　――――1614
第１０８話　サクラの過去と支援隊に迫る赤い波　――――1634
第１０９話　三騎当百　襲い来る赤き悪魔の猛攻撃　――――1661
第１１０話　英雄の丘　サクラの新たなる決意　――――1675
第１１１話　薄氷の上の平和　廃墟に咲く小さな野花の笑顔
第１１２話　月光花の絨毯　星空の下での誓い　――――1711
第１１３話　理想と現実　蒼銀の騎士姫の想い　――――1725
第１１４話　アルトリア王政軍国　――――1743
第１１５話　失われし金火竜の紋章　――――1761

第116話　シェレシーアの巫女　最強のヒロイン降臨　――――1778
第117話　茫然自失　次元が違い過ぎる猛者達　――――1801
第118話　新たなる目標を胸に　少年少女達の新たな物語　――――1817
第119話　おかえりなさい　――――1834
第120話　炎を斬り裂く鎌獄将軍　――――1850
第121話　炎の戦場　変幻自在の死鎌　――――1867
第122話　砕け折れる死鎌の刃先　――――1883
第123話　加速する少女の気づかぬ想い　――――1901
第124話　悪魔のサイレン　すれ違う想いに生まれし亀裂　――――1925
第125話　宣戦布告　フィーリアを想う二人の戦い　――――1942
第126話　女王が君臨せし密林宮殿　――――1959
第127話　クイーン・オブ・ドラゴン　――――1974
第128話　トライアングルハート　――――1995
第129話　果てなき理想を目指して　――――2010
第130話　三位一体　アウトレンジ作戦　――――2027
第131話　太陽のように明るく　月のように儚くて　――――2043
第132話　懐かしき後輩からの手紙　――――2068
第133話　アルザス村に集結するそれぞれの物語　――――2084
第134話　寂しがり屋な突撃娘と意地っ張りな参謀　――――2102
第135話　様々な想い渦巻くドタバタ四重奏　――――2127
第136話　過去の傷跡に誓し想い　――――2152
第137話　孤軍奮闘少年少女物語　――――2173
第138話　離れていても信じる心は共に在りて　――――2195

第１３９話　水竜決戦　仲間を信じて戦い続けて　――――――2213
第１４０話　月下に輝く少女の涙と結ばれていく絆　――――――2236
モンスターハンター　～凜・恋姫狩人物語～（第３期）
第１４１話　動き出す物語　母を想うクリュウの決意　――――――2262
第１４２話　フィーリアとエレナ　クリュウを想う二人の決意
2276
第１４３話　エルバーフェルド帝国　――――――2297
第１４４話　フィーリアの家族　名門レヴェリ公爵家　――――――2317
第１４５話　フィーリアを想う優しき天使と素直じゃない悪魔
2337
第１４６話　一世一代の大直訴　彼を想う恋姫達の決断　――――――2356
第１４７話　心すれ違って　そして本心と向き合って　――――――2373
第１４８話　剣想撃突　月下に確かめ合う幼なじみの絆　――――――2396
第１４９話　帝都エムデン　出迎える妖艶な笑みを持つ者　――――――2412
第１５０話　揺れる王侯会談　思わぬ人物との再会　――――――2430
第１５１話　様々な絆が結びし運命　試される四人の覚悟　――――――2444
第１５２話　星天月下　吹き抜ける夜風が結ぶ出会い　――――――2466
第１５３話　空中挺進　砂海に舞い降りる四人の狩人　――――――2481
第１５４話　破壊神大暴走　希望を打ち砕かれる四人の狩人
2506
第１５５話　大好きな彼の為に　必勝を誓いし最強の戦姫達
2523
第１５６話　戦姫を狙う邪双槍　少年の起こした奇跡の一撃
2546
第１５７話　優しさに満ちた膝枕　守るという意味のすれ違い

2565
第158話　怒涛の逆襲劇　絆に結ばれし乙女達の奮戦　―
2579
第159話　勝利を信じての全力戦　希望の光に掛かる暗雲
2600
第160話　絶望を吹き飛ばす旋風　心優しき銀狼の想い　―
2620
第161話　角竜最終決戦　朝日に染まる砂漠に立つ四人の狩人
2638
第162話　覚悟を決めた少女の夜襲　二人の絆を妨げる溝
2664
第163話　幼なじみとして　あの日失った背中の軌跡　―
2683
第164話　可憐な笑顔花咲かせて　優雅に再臨する微笑の女神
2703
第165話　懐かしき友との談笑　可能性は確信へと変わりて
2720
第166話　恋する乙女の新たなる決意　蒼空の彼方への旅立ち
2736
第167話　想いの込もった夜食　凛々しき戦姫の儚き素顔
2759
第168話　王都アルステェリア　近付く金と銀の運命の絆
2780
第169話　友と再会　豪快な笑顔と共に現れる勇ましき暴風娘
2797
第170話　一年ぶりの再会　少女の恋心は変わらずより強く
2812
第171話　玉座に君臨する幼き少女王イリスとの出会い　―
2832

第１７２話　軍事大国の無邪気な少女王　紐解かれる真実の物語 ―― 2848
第１７３話　二五年前の真実　夜空の下で結ばれる運命の絆 ―― 2865
第１７４話　お姫様と狩人の秘密のデート　真実と直面する決意 ―― 2890
第１７５話　男子禁制　恋する乙女達の秘密の女子会 ―― 2911
第１７６話　クリュウとイリス　二人を結ぶ奇跡の紋章物語 ―― 2931
第１７７話　ロレーヌの真実　二人の想い交差する夜空の軌跡 ―― 2955
第１７８話　ロレーヌ・アルトリア・ティターニア ―― 2974
第１７９話　例えどんなに距離が遠くても　空は繋がってるから ―― 2998
第１８０話　約束の空への旅立ち　悲しみの先にある答え ―― 3017
登場人物紹介４ ―― 3043
第２回　読者のハートを射止めたのは誰だグランプリ ―― 3044
第１８１話　変わらぬ想いを抱き　少女は愛しの彼の前で微笑む ―― 3066
第１８２話　恋姫戦争勃発　二色の瞳を煌めかせる少女の決意 ―― 3084
第１８３話　恋姫達の想いが錯綜するルナリーフ家の事情 ―― 3105
第１８４話　非常警戒態勢　凛々しき戦姫の胸を襲う小さな痛み ―― 3126
第１８５話　一抹の不安を残して　黒狼鳥の咆哮に始まる狩猟

第186話　孤高の黒狼鳥　絆の力で挑みし若き狩人達の戦い　3145
第187話　少女の痛々しき決意　同じ失敗を繰り返さない為に　3163
第188話　空回りする想いを乗り越えた先にあるもの　――　3190
第189話　決意の朝への誓いの果てに動き出す想い　――　3208
第190話　胸の奥で輝き出す淡い恋心　彼の笑顔が眩し過ぎて　3228
第191話　決意を胸に抱きて　少女は未来へ向かって歩き出す　3247
第192話　胸に想いを抱きし少女達の新たなる旅立ちの朝　3262
第193話　望まぬ再会で始まる血塗られた聖剣の闇の軌跡　3278
第194話　憎しみの連鎖　癒えぬシルフィードの心の傷跡　3296
第195話　過去に犯した大罪に苦しみ続けて来た少女の涙　3313
第196話　少年にとって忘れられない悪夢のような一日　――　3327
第197話　泣き叫ぶ少女の悲痛な決意　地を這う少年の雄叫び　3344
第198話　私の帰るべき場所　――　3360
第199話　血塗られた雪景色　過去の痛みに疼く左目を押えて　3378
3393

第２００話　イルファの異変　胸の奥に渦巻く不安を抱きし少女 ―― 3410
第２０１話　山頂に轟きし凶竜の雄叫び　絶望との再会の果てに ―― 3427
第２０２話　一日千秋の果てに　絶望の雪山に現れし最強の戦姫 ―― 3444
第２０３話　心の傷を乗り越えて　覚悟を胸に抱きし人形姫の舞 ―― 3461
第２０４話　幼い頃に交わした約束　交差するそれぞれの想い ―― 3478
第２０５話　氷雪の山に轟きし咆哮　凶暴竜に翻弄される狩人達 ―― 3496
第２０６話　決死の反転攻勢　苦戦を強いられる狩人達の奮闘 ―― 3516
第２０７話　褐色の暴風荒れ狂う山頂　吹雪の中の大激戦 ―― 3535
第２０８話　壮烈な人形姫の覚悟　涙の果てに過去との決別の時 ―― 3552
第２０９話　轟竜最終決戦　過去の血塗られた因縁との決着の時 ―― 3570
第２１０話　安居楽業　少女が勝ち取った幸せに満ちた心の拠所 ―― 3589
登場人物紹介５ ―― 3608
第２１１話　村に迫る空前の災厄　狩人達に託された村民の想い ―― 3620
第２１２話　雪嵐怒涛　嵐天より舞い降りし厄神と狩人達の邂逅

第213話　荒神の如し古龍の猛攻　鋼鉄の暴風吹き荒れし戦場　3638
第214話　鎧風一触　無念の敗走の末に待ち受けていた現実　3653
第215話　恋姫達の決死の出撃　イージス村に迫る空前の厄災　3672
第216話　滅びゆく村　崩れ落ちる少年に振り下ろされる死爪　3688
第217話　槌は力なり　弓は知恵なり　二人が奏でる愛の協奏曲　3715
第218話　絶体絶命　少女の愛が奏でし音色が起こす奇跡の詩　3740
第219話　壮絶な死闘の果てに　燃ゆる空に轟きし激戦の終音　3761
第220話　少年の決意と少女達の想い　別れの朝に交わす約束　3776
第221話　それぞれの決意を胸に懐きて　二人の激闘の果てに　3801
第222話　アルフレア沖海戦　恋する乙女は大艦巨砲主義　3828
第223話　突撃水雷戦隊　鋼の龍王に挑みし男達の激戦の軌跡　3850
第224話　激闘主力部隊　恋する少女提督の決意に満ちた死闘　3866
3885

第２２５話　天と海の艦隊　己の無力さに流れる二人の少女の涙 ―― 3910
第２２６話　彼を助ける為に　名も無き平野に集いし者達の戦い ―― 3931
第２２７話　再び村に舞い戻りし鋼龍　少年の決意と最後の奇跡 ―― 3956
第２２８話　英雄の証 ―― 3971
第２２９話　勝利の朝に集いし仲間達との再会 ―― 3993
第２３０話　それぞれの心の奥底の想い ―― 4011
第２３１話　明日への誓い　動き出すそれぞれの物語 ―― 4035
第２３２話　絶望の闇を照らす奇跡という名の光 ―― 4062
第２３３話　彼女の軌跡　時を越えて動き出す物語 ―― 4079
第２３４話　進む覚悟と留まる覚悟　揺れる心の狭間 ―― 4098
第２３５話　心の奥底に隠し続けてきた想いと揺れる心 ―― 4110
第２３６話　新たなる物語への旅立ち ―― 4130
第２３７話　可憐に咲き　可憐に散る　儚い恋唄の調 ―― 4151
第２３８話　優しさの残酷さ ―― 4170
第２３９話　牙神勝鍛　王者に挑みし狩人達の記録 ―― 4181
第２４０話　新たな村　新たな日々　新たな願い ―― 4207
第２４１話　クリュウの意志を継ぎし者 ―― 4230
最終話　モンスターハンター　～恋姫狩人物語Ｇ～ ―― 4245
エピローグ ―― 4264

モンスターハンター　～恋姫狩人物語～（第1期）

プロローグ

大陸中央部に位置する大都市ドンドルマから北東に遠く離れた辺境の地。大小様々な山が連なるフラヒヤ山脈を背後に、蒼海の海流と西竜洋の海流が接する事で豊かな漁業資源が集まる海に面した、切り立った崖の上にその小さな村はあった。

――イージス村。

西竜洋諸国の神話に登場する神が娘に託した全ての厄災を防ぐ最強の盾、イージス。その名を借りたこの村は周辺地域では最も安全と言われ、鉄壁の守りを誇っていた。その理由は切り立った崖の上にあるからこそモンスターが襲って来ないという単純なもの。だが、単純故にその効果は絶大だ。

安全というものがこの世では最も重視される。その中で鉄壁の守りを持つこの村は付近の地域の中継地点として利用されており、周辺地域との交流も盛んで村の規模の割に訪れる旅人は多い。

イージス村は人口は一〇〇人程。主にセレス密林と呼ばれる密林地帯で採れる珍しい野草やキノコ、鉱石。その他村の中で生産される穀物や豊富な漁業資源で生計を立てており、資源にも恵まれた優れた村である。

そんな辺境の小さな村の崖下に面した漁港には村の屈強な男達が自慢の漁船を連ねている。今まさに海から戻って来た男達は今日の収穫を喜ぶように網に掛かった魚を選別している。

「おい、何か船が来たぞ」

選別をしていた男達の中の一人が何かに気づいたように言う。その声に合わせてピチピチと暴れる魚を見詰めていた男達が一斉に視線を先程まで自分達がいた海の方へと向ける。

確かに、穏やかな海の上を一隻の船がこちらに向かって進んで来る

のが見えた。誰かが「定期船か？」と首を傾げたが、それにうなずく者は誰一人いなかった。

こんな辺境の小さな村に村以外の船が来る事は滅多にない。その中で数少ない例外が定期船。一ヶ月に一度程度で村長が発注した村の生活用品を運びに来る商船の事だ。さすがにこの世の中完全自立する事は難しい。特にイージス村は北国に位置しているので採れない作物だって当然ある。それを補う為のものだ。

だが定期船は一週間程前に来たばかりだ。連続して来る事がない訳ではないが、それでも異常事態だ。しかも近づくにつれて船の外見を見た男達の中で定期船という選択肢も消えた。いつも気さくで肌が黒く日焼けした陽気な船長が操舵する定期船ではなく、それは全く違う民間船だったからだ。村で使われる船は手こぎの小型船ばかり。その船も決して大きい訳ではないが、それでも村の船と比べればやはり大きく見える。

船はゆっくりと定期船用の村の漁港で一番大きな埠頭へと横付けすると、船主らしき男が降りて慣れた手つきで船と岸を縄で繋いで係留する。

接岸作業が終わるのを見計らって村の男達が船主へと近づく。先頭を歩くのは小麦色に焼けた肌が健康的な屈強な男。見るからに海の男という感じの大男だ。

「一体こんな小さな村にどんな了見だい？　食糧でも尽きたか？」

「そうだなぁ。ちょっと真水を分けてもらいたい所だが、本当の理由はちゃんと別にあるさ」

船主も気さくな冗談交じりで返す。その様子を見るに海の経験が長いのだろう。お互い海の男同士、ウソ偽りはなしと暗黙の了解が生まれる。

「なぁに、ちょいとお届け物をね」

「届け物？」

「そう。正確には届け人、になるのかな？」

「届け人だぁ？」

船主の言っている意味がわからず男が追求しようとした時、一瞬強

い海風が漁港を支配した。暴れ狂う風に男達が一斉に目を閉じる。そして、再び目を開けた時、船から一人の少年が降りて来た。
　まるで春の若々しい葉のような柔らかく温かな緑色の髪をさらさらと流し、同色の少年らしい希望に満ち溢れたキラキラと光る瞳をどこか懐かしげに細めながら少年は村を見詰めていると、ふと囲む男達に気づく。そしてその中にいる大男に気づくと、元気良く笑顔と共に声を掛けた。
「――バルドさん、お久しぶりです」
　少年の登場に呆けていた男――バルドはその声にビックリして意識を取り戻す。目の前にいるはまだ子供という感じが抜け切れていない若い少年。だがその誰にでも優しく微笑み、手を差し伸べる心優しい笑顔が特徴的な少年の顔を、バルドは知っていた。
「お前、もしかして――クリュウか？」
「当たり前でしょ？　僕の顔忘れちゃったんですか？」
　少年が困ったように微笑みながらそう答えると、それが確信に変わったのだろう。バルドを始め周りの男達も一斉に彼を歓迎した。
「おぉ、クリュウかッ」
「元気にしてたか？　懐かしいなぁ」
「おぉ、奥さんに似てベッピンさんになって」
「それ、褒め言葉にならないですってば」
　自覚はしている自分のちょっと少女じみた、母親似の顔立ちに思わず苦笑を浮かべていると、背後からバンッと大きな手の平に叩かれて少年は思わずたたらを踏む。振り返ると、バルドが豪快な笑い声と共に彼の背中を叩いていた。
「いやぁ、大きくなったんで一瞬誰だかわからなかったな。しばらく見ないうちに、ずいぶん大きくなったじゃねぇか」
「そ、そうですか？　そう言ってもらえると嬉しいです――できれば、背中を叩かないでもらえればもっと嬉しいんですが」
「ははッ、そう遠慮するなッ」
「いや、遠慮とかそういう問題じゃなくてですね……」
　バルドに背中をバシバシと叩かれるたびに、彼の小柄な体がフラフ

ラと揺れる。当然ある程度は痛いし、力があるので時々倒れそうになるので正直やめてもらいたいのが本音だが、久しぶりに会う彼の元気な姿や、彼が喜ぶ様を見ていると強く言えなくなってしまう。そんな人を思いやる心が、彼は人一倍大きい少年だ。

再会を喜ぶ彼らの姿を微笑ましげに見詰めた後、船主は他の漁師から真水をもらうと早々に立ち去った。この後もまだまだ回らないといけない場所があるらしかった。

遠くに消えて行く船に手を振って見送るクリュウの背中を、バルドは相変わらずの強さでバシバシと叩く。

「どうだクリュウ。ドンドルマでの生活は楽しかったか？」

「はい。やっぱり都会だけあって色々と便利だったし人もすごく多かったです――でも、僕はやっぱりこの村の方が落ち着きます」

そう言って彼が見上げる先には、崖の上に建つイージス村の家々がある。懐かしい、自分の故郷だ。

「嬉しい事言ってくれるじゃねぇか」

バルドは嬉しそうに笑った後、再び彼の背中をバシバシと叩き「ほら、さっさと村に行くぞ。みんなビックリするだろうからな。クリュウが帰って来たって」彼を村へを招き入れる。

「そ、そうですね――あの、バルドさん。そろそろ本気で背中叩くのやめてもらえます？」

困ったように言う彼の言葉を見事に無視して背中を押すバルドに、少年はため息と共に諦めると、切り立った崖の上にある村へ向かう為の長い階段を登り始めた。

クリュウ・ルナリーフ。

それが少年の名前だった。

このイージス村で生まれ育った、つい先日十六歳になったばかりの少年だ。屈託の無い笑顔と分け隔てない優しさから村人には老若男女問わずに好かれる人気者であり――本日付でこのイージス村専属となった駆け出しハンターだ。

クリュウの父親はかつてこの村所属のハンターだった。

この世界に存在する人間以外の人外の存在、モンスター。その中に

は人間と共存する温和なモンスターもいれば、時には人や村などを襲う凶暴なモンスターも存在する。この後者を相手に己が身一つで戦いを挑み、これを討伐・撃退するのがハンターと呼ばれる職業だ。この世界においては子供達の憧れの存在であり、人々の生活に欠かす事ができない存在。

だが輝かしい功績と同時に常に死と隣り合わせの仕事の為、栄光を得る者よりも命を落とす者の方が圧倒的に多い。特に彼のような訓練生を終えたばかりの駆け出しのハンターが最も危険だ。

それでも、ハンターを目指す若者は後を絶たない。

富や名声を求めてハンターを目指す者もいるだろう。単純にモンスターとの戦いを好む為にハンターを目指す者もいる――そして人々を守りたいと願って志願する者も、また多いのだ。

クリュウの父親はそんな誰もが憧れ頼るハンターであった。イージス村に拠点を置いてその周囲の村などの防衛にも尽力し、この辺一帯に住む全ての人間の守護神であった。拠点を辺境の村にして地域を限定にした為、一般的にはあまり有名ではない。だがその実力は英雄と呼ばれるに値するだけのものだったと言われている。

クリュウの父親は故郷であるこの村を守り、村を大きくする事に多大な貢献をした。

今でもまだまだ小さな村に変わりないが、それでも昔に比べればずいぶんと規模が拡張されている。何せ最初のうちはモンスターの皮と柱だけで組んだ天幕（テント）のような建物しかなく、村というよりは野営地。規模も集落くらいのものだった。誇れるものと言えば当時から安全だったこの村の立地くらいだ。

クリュウの父親は周囲の安全を確保し、協力関係にあった村長は村を周囲の中継地点化する為に尽力し、二人の力でこの村は現在、本当にこの地域一帯の中継地点としての役目を果たしている。

村の為に尽力したクリュウの父親は、いつの間にか周辺の村や街にも名が知れ渡るような、地域限定ながら歴戦のハンターとなった。

しかし、そんな彼は今はもうこの世にはいない。

数年前、クリュウの父親はハンターを統括する中央機関であるハン

ターズギルド本部直々の依頼で出撃し、その任務の最中に殉職した。
任務の内容はハンターズギルドの機密事項として全容はわからない。だが後に《古龍》と呼ばれる、天災に匹敵する厄災に位置づけられる桁外れに強力なモンスターの撃退任務であった事がわかった。
どんな奴だったのか、何というモンスターだったのかはわからなかったが、確かな事はその時まだ七歳だったクリュウは尊敬していた父親の背中を、そこで失ってしまった。
父の仇を討ちたい。そんな気持ちがなかった訳ではない。でもそれ以上に、父の代わりにこの村を守りたい。父のようなハンターになりたい。そう願い、クリュウは十二歳の時にハンター修行の為にこの村を飛び出し、ハンターズギルド本部のお膝元にしてハンターの都と呼ばれる城塞都市ドンドルマに移り住み、ハンター養成訓練学校に入学してハンターとしての訓練を四年間積んだ。
それから四年の月日が流れ、十六歳になったクリュウはようやく先日ドンドルマのハンター養成訓練学校を卒業し、こうして故郷のイージス村へと舞い戻ってきたのだ。
切り立った崖の上に位置する為、村に入る為には崖の麓にある洞窟の中に作られた長い階段を登らないといけない。村人は慣れたものだが、外部から来る人間にはなかなか優しくない作りだが、その見返りとして安全なのだから文句も言えない。ちなみに竜車などの階段を使えないものは崖の外周を回るように作られた長い坂道を登る。単純距離ではこっちの方が圧倒的に長いが、階段に比べれば急ではないでどちらを使うかは利用者の意思次第だ。
やっとの思いで長い階段を登り終えると、イージス村の入口が目の前に現れる。木製の扉のない門には治安のいいこの村にはあまり必要がないが、一応門番が常駐している。その駐在所である簡素な木の小屋は門の脇に隣接している。
イージス村は真っ直ぐの広い坂道が伸び、その脇に家々が建ち並び、細い道が横へ伸びその脇にも家が並ぶ。簡単に言えば《‡》のような感じが真っ直ぐに並んでいるイメージだ。この中央道を真っ直ぐ行けばこの村の村長の家兼村人の集会所となっているこの村で一

番大きな建物がある。それ程広くない村なので、ジッを前を見ていれば遠くにそれらしき建物が見える。
　まだ道は都会のように石で舗装はされておらず土が剥き出しだが、それでもちゃんと整備されており生活道路としては問題はない。それどころか道の左右には水路が設けられており、絶えず水が流れている。これは村長の家の裏手にある大きな湖から流れる水で、人々の生活用水となっている。
　中継地点となっている為に村の規模は周辺の村よりは大きい。さらに安全だから永住する人も多い為、しっかりとした木造家屋が並ぶ。
　村の規模としては比較的大きな方だし、水路などの整備が行われている点ではちょっとした街のように住み心地は良い。ただ長い階段には苦労するので、それだけは我慢してもらう他はないが。
　少し見ないうちにまた少し大きくなった村を懐かしそうに目を細めながらクリュウは見詰める。
「前より大きくなったなぁ」
　修行中の身だったので年に一、二度程しか里帰りができなかった。何せドンドルマとここは片道だけで五日間の道のりだ。そんなに長い休暇を学校で取れるのは長期休みだけ。それが大体年二回程しかないのだから仕方が無い。彼が前に村に戻って来たのも半年前。その頃よりも村は確実に大きく成長していた。
　少し見ないうちに子供というものは大人へと成長するが、村というのも生き物だ。少し見ない間に村も成長するのだ。
　クリュウが久しぶりに見る村の景色に感動していると、その背後に立っていたバルドが、それこそ小さな村一帯に響き渡るような大声で「おぉいッ！　クリュウが帰って来たぞッ！」と叫ぶ。その声を至近距離で受けたクリュウは思わず顔をしかめたが、おかげでその声は村全体に十分と響き渡った。その証拠にすぐに歩いていた人が振り返り、家々のドアが開いて村人が次々に出て来る。そしてクリュウの姿を見て皆一様の笑顔を華咲かせた。
「おぉクリュウじゃねぇかッ！」

「あら、クリュウ君。久しぶり、また大きくなったわね」
「やだ、ちょっとかっこ良くなっちゃって」
「元気にしてたか？」
「おぉ、ルナリーフの倅（せがれ）かッ！」
　彼を囲むように集まった村人達はその懐かしい姿に笑顔を華咲かせて彼を出迎える。その人数はどんどんと増えていく。これだけで、彼がこの村の住人にどれだけ好かれているかがわかる。
　クリュウも久しぶりに懐かしい顔に会えて嬉しいのか、笑顔を華咲かせる。新しく住人になった人もいてあいさつを済ませたりと、まだ村に入って数メートルと歩いていないのに、時間はあっという間に過ぎていく。
　自分を歓迎してくれる村の皆を見回し、やっと村に帰って来たんだなぁと実感。嬉しそうに微笑んでしまう。と、その時、
「クリュウウウウウゥゥゥゥッ！」
　そのバルドの大声にも匹敵するような声で名を呼ばれたクリュウは反射的に声のした方へ振り向く。
　長い坂道を、猛烈な土埃（つちぼこり）を上げながら誰かが駆け下りて来る。その速度は常軌を逸していて、ほとんど突撃だ。だがクリュウはそんな突撃して来る人物の顔を見てパァッと笑顔を咲かせる。
「エレナッ！　久し――」
「こんのバカクリュウウウゥゥゥッ！」
「ぼふぅッ!?」
　長い坂道を助走に利用して猛烈な勢いで翔け降りて来たのは少女だった。風に流した茶色の長髪に意志の強そうな翡翠色の瞳が特徴の、一見すると可愛らしい顔立ちの美少女。だが、彼女は突如クリュウの前で跳躍すると、勢いを利用してそのまま突撃。構え、伸ばした足の先は見事にクリュウの顔面に炸裂。それはもう見事な必殺飛び蹴りであった。
　対モンスター戦の実戦経験を積んだはずの新人とはいえハンターであるクリュウの回避力をはるかに上回った一撃はそのまま彼を弾

き飛ばす。防御も受身も取れずにクリュウは無様に吹き飛ばされて地面の上を何度も転がり、倒れた。
一方華麗な飛び蹴りを見せた少女は逆にスタッときれいに着地をしてみせる。審査員がいたら満場一致で満点をつけるような見事な着地だ。思わず、何人かの村人が拍手を送る。
「い、いきなり何するんだよッ！」
激痛に耐えながら勢い良く体を起こすと同時に怒鳴るクリュウ。回避し損ねたとはいえ、そこはハンターの端くれだ。狩場でいつまでも倒れている訳にもいかず、反射的にすぐに起き上がる。
そんなクリュウの前に仁王立ちで立ち塞がる少女。決して高い身長という訳ではないが、なぜか迫力のある彼女の姿は自分よりもずっと大きな存在に見える。
彼女の名は――エレナ・フェルノ。ふわりとした茶髪にクリッとした意志の強い翡翠色の瞳が特徴的な美少女。クリュウの幼なじみでもある。一見すると良家のご令嬢に見えなくもない可愛らしい容姿だが、中身は先程発揮された身体能力から十分予測できるだろう。
理不尽な暴力に対して怒るクリュウに対して、エレナは不機嫌そうな表情を崩さずにクリュウを睨みつけるように見下ろす。その姿は、とてもじゃないが反省しているようには見えない。つまり、自身の行動に何の後悔もない証拠だ。何という自分中心主義、だがそれがエレナという少女だ。
「……帰って来るなら、手紙くらい出しなさいよ」
だがそれは一瞬にして崩れた。先程までの不機嫌一色だった表情は、今は拗ねたように唇を尖らせている。その姿は実に愛くるしく、そして何よりそんな顔をされてしまえばクリュウも怒る事もできず、思わず「ご、ごめん……」と謝るしかない。
「いきなり帰って来るから、お店を飛び出して来ちゃったじゃない」
そう言うエレナは緑色のロングスカーフに白いエプロンドレスを着て、頭には白いヘッドドレスを付けている。これがこの村の酒場の制服だ。小さな村だが、そうした所はちゃんとしているらしい。
エレナはこの村唯一の酒場を経営している。正確には彼女の両親

が経営していたのだが、母親が病気をこじらせてしまい、今は二人共静養の為にこの村を離れている。エレナはそんな両親に代わって酒場を一人で切り盛りしている。実は、結構な苦労人だったり。

どうやらクリュウが帰って来たと知るやいなや、文字通り店を飛び出して来たらしい。まぁ、その後に常軌を逸した飛び蹴りをする所は明らかに普通ではないが。

でも自分の為にわざわざ大事な店を放り出して迎えに来てくれたのが嬉しかったのだろう。クリュウは屈託の無い笑みを浮かべた。

「わざわざありがとうね。僕なんかの為に」

すると、それを見たエレナはほんのりと頬を赤らめると唇を尖らせたままプイッと視線を逸らす。

「べ、別にあんたの為じゃないわよッ」

「え？　じゃあ何で？」

「べ、別に私の勝手でしょッ。あんたには関係ないわよッ」

久しぶりのエレナの理不尽な物言いに、幼なじみとはいえ腹が立たない訳ではないが、久しぶりの再会だ。嬉しさの方が上回ってしまい、ついつい微笑んでしまう。それが気に入らなかったのか、エレナは「な、何よそのムカつく笑顔は」と睨んで来るが、それも笑顔で受け流してしまう。

「いやさ、エレナが元気そうで安心したよ」

「ま、まぁ私は至って健康よ。あ、あんたの方こそどうなのよ」

「僕も全然問題ないよ」

クリュウが笑顔で答えると、エレナは気にした様子もないという感じで「そう」と短くだけ答える。だが彼には見えない位置では小さな笑みを浮かべている事は内緒だ。

二人が久しぶりの再会を喜んでいると、これまで微笑ましげに彼らを見詰めていた村人達が一斉に道を開けた。その様子に二人が振り返ると、割れた村人の間を通って一人の青年がやって来た。キラキラとした少年のような目をした若々しい青年だ。

人間に似ているが、クリュウ達のような人間よりも明らかに大きな鷲鼻と耳が特徴的な種族。彼らは竜人族と言い、人間よりもはるかに

長い時間を生き、高い技術力と知能を持った人間よりも優れた種族だ。
　人間と竜人族は互いのない所を補うように共存し、今では一つの村の村長、またはそれに次ぐ重役に竜人族を招いて優れた村の統治を行うのが通例となっている。
　そんな竜人族の青年はクリュウの前に経つとにっこりと人懐っこい笑顔を浮かべて彼を出迎える。
「お帰りクリュウ君。遠いドンドルマから来るのは大変だったろ？」
「まぁ、基本的には川を使って船で来たのでそれほどは。でもさすがに退屈過ぎて死んじゃいそうでしたよ」
「ははは、活発な君には辛かっただろうね」
　そう言って無邪気に笑う青年。このクリュウ以上に人懐っこい笑顔が似合う彼こそが、このイージス村の村長だ。と言っても彼は二代目で先代の村長の息子。先代村長が村の基礎を作り、この二代目の村長が拡張を行なっているのだ。ちなみに、クリュウの父とタッグを組んで村を拡張させたのが彼だ。人間で言えばたぶん中年くらいの年齢だろうが、寿命の長い竜人族なら若々しい青年の姿でも不思議ではないのだ。
「疲れたのなら一度家に戻るといい。君の家は定期的にエレナが掃除してくれていたから、すぐにでも暮らせるはずさ」
「ありがとうございます。エレナも、ありがとうね」
　クリュウが頭を下げて礼を言うと、村長は「気にしないで」と笑う。父親譲りのこの面倒見の良さが村人を集めたと言っても過言ではない。
「じゃ、じゃあさっさと家に行くわよ。中にあるものも少し変わってるから、私が直々に説明してあげる。感謝しなさい」
　クリュウのお礼を言われたのが恥ずかしいのか、頬を赤らめたまま話を変えるようにエレナがそう切り出す。でも実はもっと褒めてもらいたいのだろう。今からもう嬉しく仕方がないとばかりに頬が緩んでいる。
　だが、クリュウは少し考え込むと「じゃあ、また後で」と離れよう

とする村長を呼び止めた。
「あの村長。何か討伐依頼はないですか？」
その言葉に周りを囲んでいた村人は一斉に驚く。それはもちろん村長も同じで、人懐っこい瞳を大きく見開いて驚いている。
「え？　今からかい？」
村長の問いに、クリュウは「はい」とハッキリとうなずく。
「いや、でも今からなんて……」
「船の上でずっと退屈してたんです。ちょっと体を動かしたいかなって――それに、早く村の役に立ちたいですし」
それは彼の心からの願い、本心だ。その為に、四年間の修行を積んでこうして戻って来たのだ。村の役に立ちたい、そんな強い願いが、彼の瞳を輝かせる。
そんな彼の瞳に負けたのか、村長は少し考え一つの依頼内容を出す。
「そうだなぁ、キノコ狩りに密林に出かけた村人がランポスに襲われそうになったから……強いて言うならランポスの討伐かな」
それを聞いたクリュウの瞳はより輝く。
「ランポス程度なら楽勝ですよ。その依頼、受けさせていただきますッ」
元気良くそう答えると、クリュウは荷物の中からお金の入った巾着を取り出す。
「契約金は一〇〇ｚ（ゼニー）くらいですか？」
「うん？　いや、別にいいよ。この程度の依頼に契約金は必要ないでしょ」
契約金とはその依頼の占有権を買う為に支払うお金の事だ。契約金を支払う事でこの依頼の権利を得る事ができ、その間他のハンターはこの依頼を受ける事はできないようにする為のもの。これは狩り場でハンター同士が遭遇しないようにする仕組みだ。なぜこんなややこしい事をするかというと運悪くハンター同士が出会ってしまったら獲物を狩る事を競い合ったり、獲物を奪い合ったり、最悪相打ちなど多くの事故が発生してしまう恐れがある為だ。契約金とはこう

いった事を未然に防ぐ役割を持つのだ。もっとも、契約金は依頼を終えて無事に帰ってくれれば二倍になって返って来るので投資とも言えるが。もちろん失敗すれば返っては来ない。一種の保険の部分も入っているのだ。

「そうですか。じゃあまぁ、早速行って来ます」

「わかった。でも気をつけてね。僕はハンターじゃないから詳しくはわからないけど、単体ならともかくランポスは集団戦法を取るらしいから油断は禁物だよ――って、そういう専門学校に行ってた君に言うセリフじゃないか」

「いえ、忠告感謝します」

そう礼を述べ、クリュウは早速船から降ろした荷物の中から必要な装備を取り出す。

クリュウの装備は全身チェーンシリーズという初心者用の鉱石で作られた防具で統一されている。と言っても頭に何かを付けるのが嫌いなクリュウはそこだけ何も装備していないし、チェーンシリーズは脚甲がないのでそこはブルージャージーという同じような性能の防具で代用している。

防具を着終え、次に荷物の中から布で包められた剣と盾を取り出す。クリュウの武器は片手剣という種類のもので、小型の剣と盾でセットの武器だ。攻守バランスが取れている武器で、まだ自分に合った武器がわからない時はこの片手剣からスタートする為、ハンター全員がまず最初に手にする武器と言っても過言ではないだろう。

片手剣はそのバランスの良さから最も使い易い武器であるが、反面攻撃力が不足している。その為属性攻撃などが付加されて使用する場合が多いのだが、クリュウはまだ初心者という事で何の付加属性もないハンターナイフという鉄でできた初心者用の武器だ。

他にも武器の種類はあったが、散々試した結果彼は片手剣が一番合っていたのでこうして片手剣使いになったのだ。機動力があり、尚且つ防御もできる。低い攻撃力は知恵（アイデア）と道具（アイテム）で乗り切るのが、片手剣使いの戦い方だ。

準備万端と言いたげに装備の確認を終えると、今しがた来たばかり

の門を出て行こうとする。すると、そんな彼の背中に「ちょっと待ちなさいよッ！」とエレナの呼び声が浴びせられ、それと同時に肩を掴まれた。振り返ると、不安そうな顔をしたエレナがこちらを見詰めていた。表情と同じく、翡翠色の瞳も不安そうに右往左往している。
「い、いきなり行く事はないでしょ……もう少し、ゆっくりしてからでもいいのに」
　どうやら帰って来たばかりで早速狩りに出掛けようとする彼に幾分か不満があるのだろう。それに、まだ初心者の彼の身を案じている。長い付き合いで、クリュウは彼女が想っている事がわかった。だからこそ彼女を安心させるように、クリュウは優しく微笑む。
「大丈夫だよ。ランポスなら何度も狩ってるし、日もまだ高い夕方には戻って来れるよ」
「でも……」
「――僕は村の為にハンターになったんだ。だから、すぐにでも村の為に何かをしたいんだ。例えまだランポスくらいしか狩れなくても、いずれはリオレウスだって狩ってみせる」
　希望に満ち溢れた、新人ならではの生き生きとした表情。それを見て不安に思って彼の腕を掴むのも、信じてそっと背中を押すのも、エレナ次第。だが、クリュウは知っている。自分の幼なじみは小言が多かったとしても――ちゃんと、自分の味方でいてくれる事を。
「……バァカ、リオレウスなんかに村が襲われないのが一番でしょうが」
「それはまぁ、そうだけど……」
　見事に切り返されて困る彼の表情を見て楽しそうにエレナは笑う。そして、一度深呼吸をして自分の中の割れている意見を一つに纏めた。
「――わかった、行って来なさい。私はその間にあんたの家の準備でもしてるわよ」
　笑顔と共に、エレナはそう彼の背中を押した。
「ありがと、エレナ」
「べ、別にあんたの為じゃないわよ。邪魔なランポスをさっさと片付

けてほしいだけよ」
そう言ってそっぽを向くエレナを見て、クリュウは優しく微笑んだ。これが彼女の照れ隠しの時の動作だと、小さい頃から一緒にいる彼にはわかっていた。
「それじゃ、行って来るよ」
ただそれだけ言って、クリュウは村を出た。
来た道を一段飛ばしで駆け降りていく。その表情は多大な期待と若干の不安が入り混じった、新人ならではの生き生きとした表情だ。
小さくなるクリュウの背中を見詰め、エレナは一人胸の前で手を組んで静かに彼の安全を願うのだった。

第1話　密林の青き狩人

イージス村からそれほど離れていないセレス密林が今回の目的地だ。海に面し、背の高い木々などに包まれた原生林。人の手があまり加わっていないからこその自然の世界だ。

一般人は半日ほど掛けて大きく迂回して海路で行くのが比較的安全だ。陸路でも一応行けるが道なき道を歩くので危険だ。だが実際は徒歩で二時間も掛からない距離に位置する。クリュウはあえてそんな陸路を選んだ。ハンターだからこそできる決断だ。おかげですぐにセレス密林に着く事ができた。

セレス密林は高い木が生い茂っているので視界はそれほど良くはない。死角も多く、常にまわりを警戒していないと奇襲を受ける危険性も持っている。しかし死角が多いというのは同時にこちらが身を隠すにも適している。

そんな密林の中で木の木陰でクリュウは休んでいた。

先程からランポスを求めて結構な距離を歩いたが、いまだランポスは現れなかった。

「ふぅ」

クリュウは水筒の中の水をそっと飲むと支給品の携帯食料を食べる。固形の食べ物で味はほとんどせず、正直おいしくはないがお腹は満たされる。

拠点（ベースキャンプ）に置いてあった地図を見ながらクリュウは頬を掻いた。

「ここもダメか。じゃあ、今度は海岸だな」

そう言ってクリュウは地図を道具袋（ポーチ）に押し込んで立ち上がる。

枯れ葉や腐葉土で足が取られる上に木の根を隠してしまうのでとても歩きづらい。そんな腐葉土とかの隙間からはキノコなどが顔を出している。

慎重かつなるべく早く西に向かって歩く。

密林の西側は海が広がっている。

海に面しているので木々が中心部よりは少ないので視界は良好。海風で枯れ葉が溜まらないので足下も心配はない。戦うなら絶好の場所だ。

まわりを気にしながら海岸に向かうと、蒼い海が見えた。白い波が不特定なリズムで砂浜を洗う。その景色はとても心地良くのどかなものだ。

だが、空や海の蒼と違った別の《青》が動いていた。

とっさにクリュウはしゃがんで自らの姿を隠す。

木の陰からそっと覗くと、鮮やかな青色の鱗を纏ったモンスターが数匹海岸周辺を動き回っている。

「ランポスだ」

青い鱗を全身に纏い、黒い縞模様を持つのが特徴的な小型肉食モンスター。それがランポスだ。

ランポスは鳥竜種と呼ばれる種族で、祖先は鳥に近い姿をしていたと言われている。鳥のような尖った顔と嘴（くちばし）を持ち、退化した前脚と発達した後脚。爬虫類（はちゅうるい）の特徴を持ち合わせたモンスターだ。

ランポスはそんな鳥竜種の中でも最も生息範囲が広く、どこにでもいるといっても過言ではないモンスターだ。

木の陰からそっと覗くと、ランポスは全部で五匹いた。どうやら獲物を仕留めて食事中らしい。しかし食べているのは三匹で残りの二匹はまわりを警戒している。

ランポスは群れで生活する生き物だ。その連携力はモンスターの中でも随一の実力を持つ。村長の言うとおり単体なら初心者でも隙を突かれなければ大した相手ではない。しかし集団で襲い掛かれば熟練のハンターでもなければ苦戦するだろう。

幸いまだ相手はこちらには気づいていない。

そっと道具袋（ポーチ）の中を確認する。道具袋（ポーチ）の中には拠点（ベースキャンプ）に置いてあった支給品や持参した道具が入っている。その中には閃光玉も入っていた。

閃光玉とは文字通り光を放つ玉だ。すさまじい光で敵の視界を奪

い、その間に一斉攻撃を加えたり態勢を立て直したりする時間を稼ぐ道具だ。
ギュッと閃光玉を握るが、ランポスを一瞥するとしまった。
閃光玉は初心者には貴重な道具だ。クリュウは修行を積んでいるので完全な初心者とまではいかないが、閃光玉なんかの数はあまり揃ってはいない。その為今回も一発しか持って来ていない。
五匹程度だったらなんとか自分の腕だけで倒せると思ったのだ。
見張り役のランポスが背中を見せた瞬間、クリュウは地面を蹴って突貫した。
ぐんぐんと迫るランポス達をしっかりと視界に押さえてハンターナイフを手に持つ。
食事中に襲い掛かって来る招かざる客にランポス達は体を反らして怒りの声を高らかに上げる。
「ギャアッ！　ギャアッ！」
その声に食事をしていた三匹も振り向く。
突撃して来るクリュウにまず見張り役の二匹が突っ込んで来る。クリュウはすぐさま一番近いランポスに向かって針路を変えて突っ込む。
迫るランポスは口を大きく開けてクリュウに噛み付こうとするが、ぶつかる寸前で体を回転させてそれを避ける。同時に剣を振るって斬り付ける。
赤い血が視界を塞ぎ、激痛の悲鳴と仲間を傷つけられた怒りの怒号が木霊（こだま）する。
右足に力を入れて勢いを殺して反転をすると、すぐさま地面を蹴ってこちらに向いたばかりのランポスに第二撃を与える。
悲鳴を上げるランポスにさらに連撃を加えると一旦離れた。
自慢の青い鱗を赤い血で染め上げ、ランポスは怒りの目でクリュウを睨む。が、そこで彼は力尽きた。
地面に倒れた仲間を見て他の四匹が怒り狂ったように突撃して来る。
正面から迫る一匹目を剣で振り払い、横から迫っていたもう一匹の

攻撃をなんとか盾で耐える。するとその後方から一匹が飛び上がって頭上からクリュウを襲う。
「くッ！」
仲間の血がベットリと付いた剣でランポスは叩き落された。が、ランポスはもう一匹いた。それはクリュウの後方から飛びかかって来る。
「うわッ！」
とっさに盾で防ぐが、ランポスの爪がクリュウの肩を的確に狙う。幸いその一撃は鎧のおかげで防がれたが、鈍い鈍痛が肩を襲う。
「くうッ！　このッ！」
盾で押し返すが、ランポスはきれいに着地して何事もなかったかのようにクリュウを睨む。他の三匹も態勢を立て直す為に一度離れる。
いつの間にかクリュウはランポス達に四方を囲まれた。さすがは連携狩りのプロだと言った所か。
剣を横に構え、盾を前方にかざす。が、
「くッ……」
左肩に鈍い痛みが走る。先程の一撃のせいだ。
鎧のおかげで直接的な攻撃は防がれたが、大人ほどに大きいその全体重と重力を加えた一撃の衝撃は防ぎ切れなかったらしい。
この状況でこの痛みはかなり苦しいが、まだ戦える。
獲物が弱まっている事に気づいたのか、クリュウの背中側にいたランポスはジャンプして上から襲い掛かる。
「ギャアッ！」
「うわッ!?」
突如頭上から声がして顔だけ振り向くと、黒い影があった。次の瞬間、背中にすさまじい衝撃が襲い、そのまま押し倒された。
平均的な大人の体重かそれ以上の重さでのしかかり、勝利の声を上げているランポスの下で、クリュウはうつ伏せ状態で押し倒されていた。
「このッ！　降りてよッ！」
体を捻ると、ランポスはバランスを崩して倒れる。その瞬間に剣を

構える。
下から突き上げる一撃と自らの全体重が加わり、ハンターナイフは油断したランポスの青い体を突き抜け赤い血をばら撒いた。
たったその一撃で、ランポスは沈黙した。
急いで剣を抜くと同時に立ち上がるが、二匹のランポスが襲い掛かる。
一匹目の攻撃を盾で防ぎ、二匹目の攻撃を横に跳んで避ける。
数を三匹に減らしたとはいえ、その機敏（きびん）さは仲間を殺された怒りを受けてより速く、より凶悪になっている。
クリュウは痛む左肩に一瞬顔をしかめる。
「やっぱり、無茶はダメだね」
実はクリュウ、ハンター養成所に入門していた時は最高でもランポスは三匹までしか相手にできなかったのだ。
すでに二匹を片付けているとはいえ、残る三匹は一匹が負傷。残る二匹が無傷という状況。肩を痛めたクリュウは劣勢だった。
剣の刃を見るが、まだ刃こぼれはしていないようだ。
じりじりと迫るランポスを睨み、剣を構え直す。
長期戦になればこっちが不利だ。だったら、
「こっちから斬り込むまでだッ！」
全力で地面を蹴って突撃する。その行動に無傷のランポス二匹が応戦する為に突撃した。
迫る一匹目を体を捻って華麗に避けると、振り向きざまに一撃を加える。もう一体の攻撃を盾でなんとか防ぐと、一匹目にさらなる追撃を与えようとするが、盾で防いでいるランポスが暴れてそれを防ぐ。見事な連携だ。だがクリュウはもう一度盾で押さえ込むと、隙を突いて一匹目に一撃を加える。
体を仰け反らせて悲痛の声を上げるランポスにさらにもう一撃加えると、バランスを崩して倒れた。とどめの一撃を加えると、ランポスは動かなくなった。
目の前で仲間をやられたランポスは驚きのあまり一瞬動きが止まった。だが、その一瞬が彼の命運を分けた。

盾でランポスを押し返し、バランスを崩して仰け反ったランポスに、最も肉質が柔らかい腹に渾身の一撃を加える。
白い腹は一撃で真っ赤に染まり、ランポスは音を立てて地面に倒れた。
自分をかばって死んだ仲間を目の前に、残ったランポスは単身で怒り狂った声を上げて突撃して来る。その勇猛な行動は敵ながら賞賛に値する。
「ギャアアアアァッ！」
クリュウは迫るランポスを避ける事もせず、その誠意に答えて真正面から斬り掛かる。すでにダメージを受けていたランポスはその一撃で絶命した。
五匹のランポスとの死闘を制したクリュウは、荒い息をしたままその場に崩れ落ちた。
「はあ……はあ……はあ……」
肩で息をするたびに今自分が生きているという実感する。
「やっぱり、無理はしない方がいいね……」
そんな教訓を得て、クリュウは息を整える。
思っていた以上に体力を消耗していたので、クリュウはポーチの中から支給品の応急薬を取り出すと一気に飲み干す。
やっと立ち上がるだけの体力が戻った所で腰からハンターナイフとは違う剥ぎ取り専用のナイフを取り出し、先程仕留めたランポス達から必要な物を剥ぎ取る。早くしないと鳥竜種は死ぬと体を分解し始めるので、もたもたはしていられない。
死闘を繰り広げた相手に対する敬意を込めてその体は無駄なく使う。それがハンターとしての礼儀だ。
五匹のランポスから十分な量の素材を剥ぎ取ると、クリュウは倒れているランポス達に向かってそっと手を合わせて目をつむる。
倒した相手の冥福を祈る。それは担当教官、彼にとっては師匠のような人から教わった教えだ。
目を開けて辺りを確認するが、援軍はいないようだ。
ほっと胸を撫で下ろすと、クリュウはズキズキと痛む左肩を押さえ

る。
　戦闘ではあまり痛くはなかったが、こうして安心するとズキズキと痛む。
「……依頼討伐数の三匹はもう倒したし、帰ろう」
　そう言って左肩を押さえながら、クリュウは拠点（ベースキャンプ）に戻って荷物を整えると、セレス密林を後にした。

第2話　歓迎の宴

エレナに言ったとおり、クリュウがイージス村に戻ったのは辺りがオレンジ色に染まった夕方だった。
疲れた体を引きずりながら村に戻った彼を一番最初に出迎えてくれたのは、入り口で待っていてくれたエレナだった。
「く、クリュウ!?」
エレナは現れたクリュウの姿に驚いて駆け寄る。
「ど、どうしたのよその怪我」
彼女の視線はクリュウの包帯の巻かれた左肩に注がれていた。
ここに来る途中肩部分の装甲を一部外して痛み止めにすり潰した薬草を塗った包帯を巻いて応急処置をしていた。おかげでずいぶん痛みも引いている。
「これ？　大した事じゃないよ。ちょっとした打撲」
そう言ってクリュウは心配かけまいと微笑むが、エレナはじっとそんな彼を睨み――
「えい」
「ひぎぃッ!?」
突如怪我した部分を鷲掴みした。その容赦のない一撃にクリュウは悲鳴を上げる。
「くぅ……ッ！　な、何するんだよ……ッ！」
涙目になって怒るクリュウだが、そんな彼をエレナは怒ったように睨む。
「それくらいで痛がるのに何が大した事じゃない、よ」
確かにそうかもしれないが、確認にしてはかなり強い力で握られた。きっと《確認》ではなく《確信》だったのだろう。それはそれで問題があるが……
まだ痛む肩を押さえて睨むクリュウに対し、エレナはフッと柔和な笑みを浮かべると無事な方の手をそっと掴む。
「ほら、私が手当てしてあげる。どうせ応急処置くらいしかしてないんでしょ？」

「え？　そ、そうだけ……」
「早くしなさい。怪我が悪化してのた打ち回るのはあんたでしょ？」
そう言うが、エレナはとても嬉しそうだ。ちょっとケガはしていたが、無事にクリュウが帰って来た事を心の底から喜んでいるのだ。
「ちょっと待ってッ！　僕怪我人ッ！」
「ほら早くしなさいよ！」
エレナに手を引かれ、クリュウは走り出した。
苦笑いする彼の手を嬉しそうに引っ張るエレナの頬がほんのりと赤くなっていたのは、夕日がそっと隠してくれていた。
辺りがすっかり暗くなった頃、エレナに手当てしてもらったクリュウは半年間使っていなかった自分の家で休んでいた。
防具は全部外し、今は普通の私服を着ている。
椅子に深く腰掛け、クリュウは本日の戦利品を眺めていた。
村に来て初めての仕事はなんとか成功したが、まだまだ修行不足だなぁと実感した。
今日はランポスの牙と鱗が結構手に入った。皮も何枚か手に入り、最初にしてはずいぶんと集まっている方だ。
さっき砥石で磨いたばかりのハンターナイフはランプの光に照らされてキラキラと輝いている。
肩の痛みはエレナのおかげでもうほとんど感じなくなっていた。
久しぶりに幼なじみに会えた事は嬉しかったが、まさかその彼女にいきなり手当てしてもらうとは思ってもみなかった。
コンコン……
そんな事を考えていた時、ドアがノックされた。
「はい？」
ドアを開けると、そこには村長が立っていた。
「村長？　どうしたんですかこんな時間に？」
こんな時間と言ってもまだ夜になってそんなに時間は経っていない。だが、大都市ドンドルマなんかと違ってイージス村のような小さな村では十分遅い時間だ。もうこの時間では道に村人の姿はない。エレナの酒場はこれからが本番だが、それ以外の理由で野外を歩く事

はほとんどない。だからこそ、そんな時間にやって来た村長にクリュウは驚いたのだ。
村長は「こんばんわだねぇ」と軽くあいさつすると、包帯の巻かれた彼の肩を見て少し不安そうに問う。
「怪我をしたと聞いたけど、大丈夫かい？」
どうやら彼は自分の怪我の具合を確かめに来たらしい。
「あ、はい。大丈夫です。これくらいの怪我なんて大した事じゃないですし、それにもうエレナが手当てしてくれました」
「そうか。それは良かった。でもあんまり無理はしないでくれよ？」
「はい」
村長の言葉にクリュウは嬉しそうに微笑む。やっぱり彼は本当に優しい人だ。
クリュウの具合があまり悪くはないとわかり、村長は安堵したような表情を浮かべる。すると突然、何かを思い出したように口を開いた。
「あ、そうだ。今日君の歓迎会をやる事になったんだ」
「ぼ、僕のですか？」
驚くクリュウに村長は大きくうなずく。
「僕の家で開くんだけど、もうすぐ始まるんだ。もちろん出席してくれるよね？」
「え、でも悪いですよ。僕なんかの為に……」
あまり人に気を遣わせたくないクリュウは難色を示す。だが村長としては絶対に説得しなければならない。何せ主役がいないのではどうしようもないからだ。
「もしクリュウくんがうんと言わないなら、僕達はクリュウくん抜きでクリュウくんの歓迎会を決行するよ。身代わりの人形なんかを用意して、勝手に、そして盛大に祝う」
「う、それはなんか嫌ですねぇ……」
「それともクリュウくんは歓迎会なんて勝手に催(もよお)されるのは嫌かい？」
「そんな事ないですよ。嬉しいです。嬉しいですけど……」

やっぱりまだ心が決まらずに首を縦に振らないクリュウに、村長は小さくため息をつく。
「もうみんな集まっちゃってるしなぁ……。仕方ない、クリュウくんの身代わり人形の用意をするか」
その強烈な一押しに、さすがのクリュウもついに折れた。
「わ、わかりました！　出席します！」
その返答に村長はぱぁっと笑顔を満開にさせる。本当に笑顔が似合う人だ。
「本当かい？　良かったぁ。じゃあ僕は先に戻ってるから、クリュウくんもすぐに来てね」
そう言って村長は身を翻して走り去った。彼の背中が闇の中に消えるのを見届け、クリュウは部屋に戻ると苦笑いしながら外出の用意を整えた。
村長の家は村の中央部に位置しており、周りの他の家に比べれば二、三倍は大きな木造の家だ。
クリュウが用意を済まして到着する頃には、すでに歓迎会はクリュウ抜きで大騒ぎとなっていた。っていうか、もうただの宴会状態だ。
「あ、あれ？」
一人場のノリに乗り遅れてしまっているクリュウに、村人達としゃべっていた村長が彼を見つけて駆け寄ってきた。
「クリュウくんッ！」
「村長？　これは一体？」
戸惑うクリュウに村長は「ごめんッ！」と頭を下げた。
「実は君が早く来ないからってみんな勝手に始めちゃって、もう飲んで食って騒いでの大騒ぎになっちゃって……」
その言葉に辺りを見回すと、辺りは酒と食べ物の匂いと楽しそうな声に満ち溢れていた。
一応これはクリュウの歓迎会なのだが、その主賓（しゅひん）であるはずのクリュウは完全にこの場では浮いていた。
――結論。
「帰ります」

「ちょっと待ってよクリュウくんッ！」
　反転するクリュウを村長が慌てて止める。だが、呼び止められたクリュウは困ったように振り返る。
「だってなんか僕の事なんてみんな忘れちゃってるじゃないですか」
「そ、それはそうかもしれないけど……。ここで主賓である君に本当に帰られてしまったらこの宴会は一体何になってしまうんだい？」
　村長の必死の説得に、クリュウはため息しながらこの場に残る事にした。
　何やら打ち合わせがあるとかで村長は「楽しんでくれ！」と笑顔で言うと嵐のようにやって来て嵐のように去ってしまった。
　再び一人残されたクリュウは適当に近くの椅子に腰掛けると、楽しそうに飲んだり騒いだりしている村人達をじーっと見詰めた。と、
「こんな所で何してるのよ」
　その声に振り向くと、そこには昼間会った時に着ていた酒場での正装である緑色のロングスカートにエプロンドレスに白いヘッドドレスをしたエレナが立っていた。
「エレナ？　何でそんな格好してるの？」
「あんたの歓迎会で人手が足りないからって私まで借り出されたのよ。だからこうしてウェイトレスの仕事をしてるの」
「そっか、ごめんね。僕のせいで色々と迷惑を掛けて」
　そう言うと、エレナはふんとそっぽを向く。
「べ、別にあんたの為じゃないわよ。村の行事だから参加しただけ。ただ、それだけなんだから」
「ははは、ありがとう」
　素直じゃない言葉だが、その彼女なりの優しさに嬉しくなって笑みを浮かべるクリュウに、エレナもそっと微笑んだ。
「はいこれ」
　そう言って差し出されたのはジョッキ。中身は飲み口いっぱいまで注がれたビールだった。
「これ私のおごりね」
「え？　いいの？」

「いいのよ。あんたは一応主賓なんだから、もっと楽しくしてなさいよ」
そう言った直後、エレナは「じゃあね」と言って再び仕事に戻ってしまった。
一人残されたクリュウはせっかくのおごりであるビールをちょびっと飲んだ。
「……苦い」
そう言ってクイッとグラスを退ける。どうやら自分にはまだ大人の味は早かったらしい。養成所での仲間達は結構ビールなんか平気に飲んでいたが、どうやら自分は自分で思っていた以上にお子ちゃまらしい。
「お、なんだいクリュウくん。ビールが苦手かい？　子供だね」
「これ食べないか？　なかなかうまいぞ」
「クリュウくん。私と一緒に酒でも飲まんか？」
まるでエレナにもらったビールが起爆剤になったかのように、クリュウのまわりには大勢の村人達が集まって来た。
次々に声を掛けられてクリュウは慌てるが、村人達はそんな彼を快く歓迎してくれる。
「クリュウ。一緒に飯で食うか？　修行なんかの話を聞かせてくれよ」
「え？　あ、その――はいッ！」
クリュウはそう答えて皆の輪の中に入って行った。
月明かりが照らすのどかな夜。クリュウの歓迎会（仮）は夜遅くまで続いた。

第3話　幼なじみの酒場

クリュウがイージス村に帰って来てから二週間が過ぎた。
ランポスの異常発生の為にクリュウはこの二週間幾度となくランポス狩りにセレス密林に出掛けた。その際なるべく一対一になるようにし、集団とは戦わないようにしていた。あの時の教訓はちゃんと活用しているのだ。
今日もまたランポスを三匹ほど討伐して村に帰って来た。
「あら、おかえりなさい」
村に戻った早々酒場に向かったクリュウをエレナが出迎えてくれた。
村の中心にある村長の家から少し離れた所に位置するイージス村の酒場。酒場といってもそれなりに用意された彼女の家の一階と雨避けの屋根が付けられたテラスだけで後は木を切り出して作られた机や椅子が置かれた簡素なものだ。
こんな昼間から酒場に来る人などほとんどいない。現に酒場には給仕として働くエレナが暇そうに本を読んでいた。
クリュウに気づいたエレナは小さく微笑み本を閉じた。
「あんまり繁盛してないみたいだね」
「当たり前でしょ？　こんな真昼間から酒場に来る人なんていないわよ」
「ドンドルマなら昼間から人はたくさんいたけど」
「あんな大都市と村を比べないでよね」
「そうだよね。でもだったら何でこんな時間に働いてるのさ」
どう考えても閑古鳥が鳴いている時間帯に働いても暇でしかない。それに店だって儲からない時間帯に無駄に時給を出しては赤字一直線のはず。
クリュウの問いにエレナは小さく苦笑いする。
「だって、私このお店の店長だもの」
「て、店長？　エレナが？」
びっくりするクリュウ。そんな彼にエレナはちょっと胸を反らし

て自慢げに言う。
「そうよ。元々この酒場を開いたのは私のお母さんだもの」
　エレナの母親は重い病気を患っていて数年前からドンドルマで療養をしている。父親はそんな母の面倒を看る為に同行していた。時たま村の重要な資金源であるキノコなどを売る為に村長自らドンドルマに営業に行く事があるのだが、エレナはよくそれに付いて行って両親に会っている。
　エレナの両親にはクリュウもドンドルマにいた時に時折会っていた。
「確かに、おばさんが元気だった頃はこの店で働いてた記憶はあるけど、おばさんが経営してたんだね」
「知らなかったの？」
「う、うん」
「鈍感ね」
　エレナは呆れた顔を浮かべて小さくため息する。そんな彼女の反応にクリュウは「ご、ごめん」と謝る。すると慌てたのはエレナの方だった。
「べ、別に謝る事ないじゃない。ほ、ほら。お店の利益の為にも座って座って」
「う、うん」
　クリュウがカウンターに座ると、エレナは「ちょっと待ってて」と言って厨房の方に入るとグラスを持って来た。その中には水が入っている。
「はい。のど乾いたでしょ？」
「ありがとう」
　エレナからグラスを受け取ると、クリュウはそれを一気に飲み干す。そんな彼の前、カウンターの向こうにいる彼女も先程本を読んでいたように腰を下ろした。
「お母さん達がドンドルマに行った後、この店は村長が代役で営業してくれてたんだけど、二ヶ月くらい前に私に戻してもらったの。お母さんが病気を治して戻って来た時、びっくりさせようと思って」

えへへ、とかわいげな笑みを浮かべるエレナにクリュウも小さく微笑んだ。
「がんばってね。応援してるよ」
そう言うと、エレナは「あ、ありがとう……」と少し頬を赤らめながら小さく礼を言った。
クリュウはそんな彼女に小さく微笑むと「疲れたから、何か持って来て」とエレナに頼む。するとエレナはカウンターからジュースの入ったビンを取り出した。
「あれ？　お酒じゃないの？」
「こんな真昼間からお酒なんか飲まないでよ。それにあんたビール飲めないんでしょ？」
ちょっと小バカにするようにくすくすと笑いながら言うエレナに、ムッとする。
「飲めない訳じゃないよ、ちょっと苦手なだけだよ」
「それは酒場では致命的よ？」
言葉に詰まるクリュウにくすくすと笑いながらエレナは空いたグラスにジュースをそっと注ぐ。
クリュウはエレナに注がれたジュースをぐいっと飲み干すと、机にぐったりと突っ伏した。
「どうしたのよ」
「いやぁ、ちょっとおかしいなって思って」
「おかしいって何が？」
エレナが首を傾げると、クリュウは小さくため息した。
「村に来てから二週間が経つけど、今までに何度もランポス狩りをしてその討伐数はもう三〇匹は超えてるはずなのに、全然数が減らないんだ」
クリュウの疑問にエレナも「そういえばそうね」とうなずく。通常いくら異常発生だとしてもそれだけ狩っても減らないなんて事はない。
「私はハンターじゃないからよくわからないけど、普通ランポスってどれくらいの群れで行動してるの？」

「基本的には三匹ないし五匹で行動してると思う」
「じゃあ、もう十分なんじゃないの？」
「でも依頼はなくならないでしょ？」
「……そうよね」
　エレナは不思議そうに首を傾げる。一般人である彼女の知識ではいくら考えても仮定すら考えられないだろう。だが、
「もしかして……」
　ハンターであるクリュウは一つの可能性を導き出したが、すぐに首を横に振ってその考えを否定する。
「まさかね」
「どうしたの？」
「ねぇ、討伐依頼って今のところランポスだけ？」
「え？　うーんと……そうね」
「そっか。なら問題ないね」
　そう言ってクリュウは笑顔を戻し、ジュースをグラスに注ぐ。
「何よ。言いたい事があるなら言いなさいよ」
　一人で納得しているクリュウにエレナが不機嫌そうに絡むが、クリュウは「何でもないよ」と返すばかりだった。
　ゆっくりと体を休めたクリュウはエレナにお金を払って家に戻った。だが、そんな彼はやっぱりランポスの異常発生が気になっていた。

第４話　女鍛冶師　アシュア

自宅に戻ったクリュウは今日の戦利品を物置の中に押し込む。物置の中には連日のランポス戦で剥ぎ取った多くのランポスの素材が押し込まれていた。牙や鱗はもちろん皮もかなりの量だ。これだけあればランポスシリーズを作るには十分だが、もし作るとするなら後は鉱石を集めるだけだったが、残念ながらランポス相手に全力だったので採掘はほとんどしていなかったので鉱石はわずかにしかない。しかもこの鉱石の一部はちょっと必要なものだった。

クリュウは物置の中から鉱石の入った麻袋を持って家を出た。

村に来てから数日くらい経った頃、村長にある場所に案内された。今彼はそこに向かっている。

彼が向かったのは村外れの丘の上だ。

他の家とほとんど変わらない造りだが、いつも煙突から煙を噴き出し続けるそれは休む暇もなく職人が働いている証拠だ。

クリュウはその家に近づくと木造のドアを軽く叩いた。

「こんにちは。アシュアさんいますか？」

すると、ドアを開けて長い灰色の髪に空の蒼のようなきれいな蒼色の瞳をした一人の女性が出て来た。全体的に柔らかな印象の優しげな女性だ。

「誰や？　何やクリュウくんやないの。どないしたん？」

彼女の名はアシュア・ローラント。クリュウより十歳も年の離れていない彼女は別の地方からドンドルマに鍛冶の修行に行き、師匠の元を離れてからはこのイージス村に来て鍛冶師をしているこの村唯一の鍛冶職人だ。ハンターの武具から主婦の相棒である包丁まで幅広く取り扱っている。

かなりの実力者なのにどうしてこんな辺境の小さな村に来たかはわからないが、彼女のいた地方はかなり独特的らしい。初めて会った時に彼女の口調には驚いた。今までに聞いた事もない特徴的なものだったからだ。

首を傾げるアシュアに、クリュウは麻袋を差し出す。

「何やこれ？」
「鉄鉱石です」
「鉄鉱石？　どないしたん？」
　するとクリュウは腰に装備しているハンターナイフを取り出した。
「そろそろこれの強化をしたくて、これだけあればハンターナイフ改にできますよね？」
　ハンターナイフ改とはその名の通りハンターナイフの改良型。性能が多少向上した武器だ。
　クリュウの問いに、アシュアは自信満々に大きくうなずく。
「十分や。つーかこれならおつりが返って来るでぇ」
「そうですか。なら強化をお願いできますか？」
　クリュウの頼みにアシュアはニャハハと特徴的な笑い声を上げると笑顔でうなずく。
「当たり前やないの。こんくらいあたいの腕ならちょちょいのちょいや」
「本当ですか？」
「当然や――でも嬉しいなぁ。これがクリュウくんからの初めての依頼やねん。張り切ってやらんとなぁ」
　嬉しそうに微笑みながらクリュウからハンターナイフと強化に必要なお金の入った巾着を受け取る。
「じゃあ、よろしくお願いします」
　ペコリと頭を垂れ、来た道を帰ろうとすると「ちょい待ち」とアシュアに呼び止められた。振り返ってクリュウは不思議そうに首を傾げる。
「何ですか？」
「ついでやからあんたの防具も手入れしてあげるわ。そろそろガタがきてるやろうしね」
「え、でも……」
「遠慮すんなや。手入れがちゃんとされてへん防具じゃ動きづらくて戦闘で障害が出ちゃうでぇ？」
　笑顔で言うアシュアだが、その意見はもっともだった。確かにこの

二週間ずいぶん酷使しているのにまともに整備なんてしていなかった。
「じゃあ、お言葉に甘えてお願いできますか？」
「任しときぃ。人も武具もテキトーな休憩が必要や。今日はもう休んでてええよ。明日の朝には終わっとると思うから、そん時に取りに来てぇな」
「わかりました。お願いします」
クリュウは防具を脱いでインナーだけになると脱いだ防具を預け、うやうやしく頭を下げた後家に向かって丘を駆け下りた。
アシュアは小さくなるクリュウの背中を笑顔で見送った後、「ほな、始めるかいな」と言って家に入った。
しばらくして、煙突から噴き出る煙が白から黒に変わった。その煙は一晩中消える事はなかった……

第5話　手料理

家に戻ったクリュウは私服に着替え直すとベッドに横になった。眠くはないがこうして横になっているだけで体を十分休める事ができる。

今日はランポス三匹程度だったが、連日の戦いにクリュウは結構疲れていた。いくら相手がランポスといえど、クリュウはまだ初心者。それを連戦しているのだ。疲れて当然だろう。

窓の外を見るとすでに日はかなり落ちて辺りは薄暗くなっている。今日もまた一日が終わろうとしているのだ。

クリュウは退屈そうにふわぁとあくびをして寝返りを打つ。とそんな時、玄関の木造のドアが軽くノックされた。

「はい、誰ですか？」

「私よ、入るわよ」

そう言ってクリュウの許可も聞かずにドアを開けて入って来たのは予想通りエレナだった。勝手知ったる幼なじみの家。エレナは遠慮もせずに堂々と入って来る。酒場から直接来たのか制服は着たままでその手には何か様々な食材の入ったかごが握られている。

「エレナ？　どうしたの？」

「ちょっとね」

「ちょっとねって……酒場はこれから本番でしょ？」

酒場は基本的に夜が本業である。それはドンドルマのような大都市からイージス村のような小さな村のどこでも同じ事だ。それなのにその酒場のオーナー兼ウェイトレスのエレナがこんな所にいるのは不自然かつ損である。

すると、エレナは「いいのよ」と言ってベッドの上に腰掛けているクリュウに近寄る。

「いいって、どういう事？」

「今日はもうお休みにしたの」

「お休みって何で？　体調でも悪いの？　だったらこんな所に来ないで早く家に帰った方がいいよ？」

「違うわよ。今日はちょっとあんたに用があって休んだのよ」
「僕に用って何？」
　そう問うとエレナはなぜかプイッと背を向けてしまうと「別に、私の勝手でしょ」と不機嫌そうに答えた。
「いや、勝手でしょって……ここ一応僕の家なんだけど」
　首を傾げるクリュウを無視して彼の横を通り過ぎると、エレナはそのまま奥にある台所へ行ってしまった。
「あの、そこ台所だけど」
「わかってるわよ……やっぱり、使われている気配が全然ないわね。ちゃんと料理作ってるの？」
　エレナの呆れたような視線にクリュウは苦笑いしながら気まずそうに視線を逸らす。恥ずかしながら、その返答はノーである。
「う、うん……アプトノスの肉を焼いただけだけど」
「それは料理って言わないのよ。他に何か作れないの？」
「まあ、一応ハンターだから生きるのに必要最低限の料理くらいはできるけど、疲れて作る気にもなれなくて」
　恥ずかしそうに言うクリュウにエレナはわざとらしくため息をする。
「まったく、思ったとおり体に悪そうな生活してるのね」
「ご、ごめん……」
　別に彼女に謝る理由はないのだが、クリュウは雰囲気的に謝ってしまった。するとそんな彼にエレナは小さく笑みを浮かべると、手に持っていたかごをテーブルの上に置く。
「仕方ないわね。じゃあ私が何か作ってあげるわよ」
　突然の驚愕発言に驚くクリュウの視線に背を向けると、エレナはその場で手さげのかごの中から早速食材を取り出し始めた。
　エレナの突然の発言と行動にクリュウは戸惑ったものの、冷静さを取り戻すとすでに食材をまな板の上で切り始めたエレナの肩を掴む。
「ちょっと待ってよ。僕なんかの為に悪いよ。そんな事より酒場に行った方が……」
「そのあんたの為にわざわざ酒場を休んでまで来たのよ？　こうして

食材まで持ち込んだ上に制服のまま来てあんたに料理作ってるの。それとも何よ？　私の料理は食べられないって言うの？」
　唇を尖らせてすねたように睨むエレナにクリュウは慌てて手をブンブン振って否定する。
「そ、そんな事ないよ。エレナの料理がおいしいのは身をもって知ってるし」
「ならいいじゃない。幼なじみとしてあんたの健康を守るのは私の役目なのよ。だから素直にあんたは料理ができるのを待ってなさい」
　そう強く言われてしまうと、これ以上クリュウは何も言えずに小さく笑みを浮かべてうなずいた。
「う、うん……ありがとう」
「べ、別に礼なんていらないわよ。ほら、邪魔になるから出てって出てって」
　なかば追い出されるようにして台所から出たクリュウ。その背後ではエレナが「まったく、本当に私がいないと何にもできないんだから」とクリュウには聞こえないような小さな声でつぶやいた。その表情は言葉に対してとても嬉しそうなものだった。
　リビングに戻ったクリュウはエレナの言うとおりテーブルで待つ事になった。
　慣れた手つきで料理を作る彼女の背中を開いたドアを通して見詰め、クリュウは静かに微笑んでいた。
　料理を始めてから三〇分後、クリュウの目の前にはおいしそうな料理の数々が並べられていた。どれもこれも見た目も匂いも、そしておそらく味も最高のものだ。
「す、すごいな……」
　さすがは酒場で働いているだけはある。彼女しか店員がいないという事はきっと酒場の料理も全て彼女が作っているのだろう。昔から料理や家事は得意だったが、この数年でそれはさらに極められたらしい。
　唖然と料理を見詰める彼の前に座ったエレナは自慢げに胸を反らす。

「ふふふ、どう？　驚いたでしょ？」
「う、うん。やっぱりエレナはすごいよ」
「でしょ？　私が本気を出せばこれくらいチョイチョイってできちゃうのよ。さあ、冷めないうちに早く食べなさいよ」
「う、うん」
　クリュウはうなずくと早速料理を食べ始めた。まず始めに一番手前にあるアプトノスの肉を使ったハンバーグを口にした。
　噛んだ瞬間に広がる肉汁。口の中に広がる絶妙な味付け。最高の焼き加減でこんなおいしいハンバーグは初めてであった。しかも具の中にはミンチ状にされた野菜が入っている。
「これおいしいね」
「ふふふ、当たり前でしょ？　この私が作ったのよ。おいしくない訳がないじゃない」
「そうだよね。でもこの野菜がまたおいしいね」
「でしょ？　苦労したんだからね。あんた全然野菜食べてないみたいだったから極力野菜を食べさせようと思ってミンチにして混ぜたのよ」
「すごいけど、それ大変じゃなかった？」
「大変よ。でも野菜不足で倒れたあんたを介護するよりはずっとマシよ」
　そう言ってイタズラっぽく笑みを浮かべるエレナに、クリュウは小さく笑みを浮かべると、おいしそうにそのほかの料理も頬張る。もちろんどれも美味だった。
　エレナが三〇分かけて作った料理は十分もかからずにクリュウの胃袋に収まった。それだけおいしい料理だったのだ。
「おいしかった？」
　エレナの問いにクリュウはもちろんうなずく。
「うん。おいしかったよ」
「そう。良かった」
　笑顔でうなずくエレナは腰を浮かせると空になった食器を手に持つ。

「あ、食器は僕が片付けるよ」
「あら、ありがとう」
「いいよ。僕はこれくらいしかできないし」
「そうかもね。でも食器洗いは私に任せて。あんたに任せたらお皿を割りそうだもの」
「そんな事ないと思うけど……」
　改めてそう言われてしまうと自信がない。そんな彼の気持ちを悟ったのか、エレナは「まあ後片付けも私に任せて、あんたはゆっくりしてなさい。あんたに何かあったら村が大変だもの」と言ってクリュウを止めると食器を次々に手の上に重ねて台所に消えた。あのバランス力はきっと日頃の訓練の賜物（たまもの）なのだろう。
　クリュウはエレナに言われたとおり隣の寝室で横になった。おいしい料理に快適な休憩。これで吹っ飛ばない疲れはない。
　しばらくベッドの上でゴロゴロしているとエレナが寝室に入って来た。
「じゃあ私帰るね」
「え？　もう？」
「もうって、まだ私に何をさせようって言うの？」
　困ったような表情を浮かべるエレナにクリュウは慌てて否定する。
「違うよ。もう少しゆっくりしたらいいのにって思って」
　そう言うと、エレナは「ありがとう」と小さく微笑んだが、小さく首を横に振る。
「でも明日もあるし、私も家に帰ってしなきゃいけない事があるから今日は帰るね」
「そう。じゃあ気を付けてね。おやすみ」
「ええ、おやすみ」
　エレナはそう微笑むとクリュウの家から出て行った。
　エレナが去った後、クリュウは風呂を沸かして入ると、疲れた体をベッドに投げ出して横になる。そして今日の戦闘の反省やエレナの料理の味、そして明日返って来る武具の事を考えながら、ゆっくりと眠りに付いた。

久しぶりに、ぐっすりと眠れた。

第6話　鍛冶師の心得

翌朝、クリュウは早速アシュアの下に向かった。
まだ朝早いのにアシュアの家の煙突からはもくもくと煙が出ている。
「こんな朝早くからもう起きてるんだ」
感心と罪悪感が入り混じった微妙な表情を浮かべながら煙突から立ち上る煙を一瞥して家に近寄ると、ドアの前に立ってノックをする。
「アシュアさん。僕です。クリュウです」
少しの間を置いてドアが開かれると中からアシュアが出て来た。
「あらクリュウくん。早いねぇ」
そう言って微笑む彼女の目元には薄っすらと隈が浮いていた。心なしか少し笑顔が力ないし、髪もボサボサだ。
「アシュアさん……もしかして徹夜したんですか？」
「当たり前や。夜通しやらんと不可能やったしねぇ」
「別にいつでもいいですのに。無理して徹夜する必要はありませんよ」
「何言っとるん。職人たるものお客を待たせちゃダメなんよ。お客様は神様や」
そう誇らしげに言うアシュアはどこかかっこ良く見えた。これが職人魂というものなのだろう。
「ほら、そないな所につっ立っとらんでこっちへいらっしゃいな。あんたの相方はしっかりと強化と整備しておいたからねぇ」
そう言ってクリュウは中に案内された。
中は外の涼しい空気とは違い蒸し暑かった。あまりの暑さに一瞬顔をしかめてしまう。そんな彼の表情を見てアシュアはくすりと笑った。
「暑いんか？」
「え？　あ、はい」
「こんくらい鍛冶師ならいっつもの事やで？」

「アシュアさんは暑くないんですか？」
　そう聞くとアシュアは笑みを浮かべて意外な答えを言った。
「そりゃ暑いに決まっとるやろ？　人間そう簡単に体質が変わる訳やないんやから。ほら見てみぃ。おでこなんか汗ダラダラや」
　視線を上げると、確かに彼女の額には汗がポツポツと浮いていた。慣れてはいても暑いのは変わらないらしい。
「すごいですね。アシュアさんは」
　素直にそう言うと、アシュアは「そんな事あらへんよ」と言って手の平をヒラヒラと左右に振った。
「それやったらクリュウくんみたいなハンターの方がすごいやろ。あんな恐ろしいモンスターと戦うんやから」
「でも、僕はまだランポスが限界ですよ？」
「そんでも普通の人から見ればすごい事やで？　ランポスなんて、見たらすぐ逃げろって小さい頃から耳にタコができるほど言いつけられとるからねぇ」
　そう言って笑うアシュアは、真っ赤な炎が燃え盛っているタタラに薪（まき）を数本くべた。火がより強く燃え盛る。
「あんたもそのうち砂漠や火山へ行くんやろ？　あないな所に比べたら工房の暑さなんてかわええもんやで」
「でも僕らはクーラードリンクを使ってますよ？」
　クーラドリンクとは暑さを和らげる道具の事。砂漠や火山といった高温地帯は人の体が長時間耐えられるような場所ではない。それを一時的とはいえ和らげて活動を可能にさせるのがクーラードリンクであった。
「そんでも暑さは和らいでも相当なもんやろ？」
「まあ、そう教わっていますが……。なにせ僕はまだ密林戦ですら不安定なんですから。砂漠はまだ先ですし、火山なんてとてもとても」
　そう言うと、アシュアはクリュウの肩をポンポンと軽く叩いた。顔を上げると、そこには頼もしい女鍛冶師の笑顔があった。
「大丈夫や。あんたはきっと強くなるで。うちはそう信じとるよ。せやから、うちも全面的にバックアップするで。これからもバンバン武

具の事なら任せてぇな。あ、でも有料なもんはきっちり代金はもらうから、覚悟しときぃや」
　そう言って笑顔で応援してくれるアシュアにクリュウは嬉しそうに笑みを浮かべてうなずいた。その笑みに満足したのか、アシュアはすっと背を向けてタタラの横にある棚に近づくと、そこからクリュウのハンターナイフ《改》を取り出した。
「刃の部分に純度の高い鉄鉱石を新しく強化したこのハンターナイフ改なら、前よりもずっと切れ味は抜群のはずやで。あたいが保証するから安心してぇな」
「ありがとうございます」
　受け取ったハンターナイフ改は前よりも美しい輝きを放ち、アシュア一押しの美しい刃はどんなものでも切れそうな気がした。
「あと、これがあんたの防具やからね。まったくもう、これ全然整備してなかったでやろ？　繋ぎ目の所がガタガタだったで。こんなんじゃ動きが鈍るし防御力も急降下やで？　武具の手入れはこまめにしてぇな」
「はい、すみません」
　謝りながら防具を受け取るクリュウを見詰め、アシュアは小さく微笑んだ。
　渡されたチェーンシリーズ（＋ブルージャージー）は昨日まで自分が使っていたのと別物のように輝いていた。いつも泥が付こうが傷が付こうが帰って来くると疲れて手入れもしていなかったのに、今目の前にあるのは新品同然に輝いていた。
　汚れはきれいに落とされ、ヤスリか何かで磨いたのか傷もない。
「すごい……新品みたいだ……」
　驚くクリュウにアシュアはフフンと胸を反らす。
「それくらい鍛冶師なら当然よ。でも手入れはちゃんとしといてぇな」
「はい。気をつけます」
　嬉しそうに防具を隅々まで見詰めるクリュウに一度微笑むと、アシュアはふわぁとあくびをした。昨日鉄徹夜をしたおかげですっか

り睡眠不足なのだ。
「さってと、クリュウくんに武具はちゃんと渡したし、ちょっと仮眠でもしよっかな」
「お疲れ様です。ごゆっくり休んでください」
そう言ってクリュウは邪魔をしないようにペコリと頭を垂れて外に出た。後ろからついて来たアシュアは出口で「今日もお仕事がんばりぃや」と見送ってくれた。
クリュウはもう一度お礼を言った後新品同然になった防具や新しく強化された剣などを嬉しそうに見詰めながら丘を下った。アシュアはそんな彼の背中に小さく微笑むとふわぁ、とあくびを一つし、パタンとドアを閉めた。
その日、一晩中煙を吹き続けていたアシュアの家の煙突はずっと沈黙していた。

第7話　密林の異変

家に戻ったクリュウは早速チェーンシリーズを着てみた。
「すごい。動きやすいや」
驚くクリュウ。それもそのはず。着心地がまるで違うのだ。初めてこの防具を使っていた頃のように動きやすい。整備しただけでこれほど差があるものなのだろうか。
「これならランポスに囲まれても大丈夫かな？」
あまりにも弱々しい発言だが、これが彼の限界である。普通初心者のハンターは自分の実力を過大評価して失敗する事が多いのだが、元来の謙虚な性格なクリュウはむしろ自分を過小評価するのでそういう失敗はまるでなかった。
正直言ってクリュウのようなタイプがこの世界では生き残れるのだ。自分の実力を過信している奴ほど無茶な戦いをして逆にモンスターに返り討ちになってしまうのが多数だからだ。
自分の限界を知っているからこそ無茶をせずに戦える。それがこの厳しい世界で生き残る術である。
ハンターに必要なのは技術はもちろんだが、こうした心構えと経験も必要である。それらを兼ね備えてこそ、真のハンターである――と、師匠がいつも言ってたっけ。
師匠や訓練仲間達との日々を思い出し小さく笑う。
「さて、今日も張り切って村の為に仕事をするかな」
そんな大それた事を言っても、結局今日もランポス狩りだ。ちょっと情けないなぁとは自分でも思うが、それが彼の限界であるし依頼もそれくらいしかない。
必要な装備を持ってクリュウは家を出た。
腰に下げている道具袋（ポーチ）の中には今日使う色々な道具が入っている。と言ってもほとんどは使わずに終わってしまう。師匠からの教えで常に準備万端で戦っているので、その装備は依頼に対して重武装なのだ。ちなみに彼の座右（ざゆう）の銘（めい）は《備えあれば憂いなし》だ。

だが回復薬やこんがり肉に砥石は普通だが、肉焼きセットと生肉を多少。薬草とアオキノコをわざわざ持参して向こうで調合して回復薬を作る用意も整え、他には大型モンスターと突如遭遇する事も考えて閃光玉まで用意している。ここまで来ると用意周到のレベルをはるかに超えている。

だがしかし、これだけ用意しているからこそどんな事態にも対応できるのだ。

「でも、ちょっと重いよなぁ」

クリュウは苦笑いした。

普通ならそんなに重くないが、ハンターは軽快な動きが要求される。特に機動力を重視する片手剣ともなればそれはなおさら必須である。それが少しでも阻害されるのは危険を伴う。

目先の小さな勝利を優先するか、いつ起きるかわからない大きな脅威への用意をするか。そのどちらを優先するかはその人次第だ。

クリュウはその低姿勢な性格から後者を選んでいる。いかにも彼らしい選択である。

そんな装備をしながらクリュウは酒場に向かう。ハンターが依頼を受けるのは基本的に酒場というのが定石である。それはこんな小さな村でも同じ事だ。

酒場には朝食を食べに来ている村人が数人いた。みんなクリュウを見ると「おはよう」とか「朝早いね」とか「今日も狩りかい？　がんばってね」、「無理するなよ」等々声を掛けてくれる。クリュウはそれらに笑顔であいさつするとカウンターでサラダの盛り付けをしていたエレナに声掛ける。

「おはようエレナ。朝早いね」

「あ、クリュウおはよう。今日も狩りに行くの？」

「うん。アシュアさんに防具の整備や新しい武器を作ってもらったから試したくてね」

「へぇ、アシュアさんに手入れしてもらったのね」

「うん。もっとこまめに来いって怒られちゃったよ」

「それはあんたが悪いんでしょ？」

呆れ笑いするエレナはカウンターの下から一枚の紙を取り出す。それは依頼書であった。
「今日もどうせランポスでしょ？　ランポスの討伐依頼なら今日もまた来てるわよ」
エレナから受け取った依頼書にクリュウは毛筆でサインする。だが、サインしながらクリュウはその異変に首を傾げる。
「おかしいな、やっぱり依頼は減らないね」
そう言うと、エレナはキョロキョロと辺りを見回し周りに人がいない事を確認するとそっとクリュウに耳打ちした。
「昨日あんたからそれを聞いて気になったんで村長に訊いたんだけど、どうもランポスの大群がセレス密林にいるみたいなのよ」
「大群？　どれくらいの規模？」
「うーん、よくわかんないけど、一〇〇匹近いって話よ？」
「ほんと？」
驚くクリュウに「どうも本当らしいのよ」とエレナはため息する。
「今までに三〇匹くらい狩ってるけど、まだその倍以上いるって事？」
「そうなるわね」
一〇〇匹ものランポスが一斉に行動している事はたぶんないだろう。小さな群れが徐々に集まってそれだけの規模になったのだろうが。だが、もしもそれが一つの群れだったら……
クリュウは複雑そうな顔で考え込む。そんないつになく真剣な彼の表情にエレナが不思議そうに声を掛ける。
「どうしたの？」
「ねぇ、密林で目撃されてるモンスターってランポスとかだけ？」
「そうね。あとはモスとブルファンゴ、ランゴスタくらい。あ、海岸ではヤオザミが何匹か目撃されてるくらいね」
エレナの返答にクリュウは安堵したような笑みを浮かべる。
「そう、なら大丈夫だね」
「大丈夫って何が？」
「ううん。気にしないで――はいこれ」
クリュウから依頼書を受け取ると、エレナは「確かに」と言ってそ

れをしまうと盛り付け終わったサラダを持ってカウンターを出る。
「じゃあがんばって。あまり無理はしないでよね」
「うん。エレナもがんばって」
エレナと別れたクリュウは酒場を出ると村の出入り口に向かう。
「お、今日も仕事かい？　がんばりなよ」
「はい。行ってきます」
いつもあいさつしてくれる門番の人にあいさつをして、クリュウはいつものように村を出てセレス密林に向かって歩き出した。

第８話　青き激戦

セレス密林に着いたクリュウは早速ランポスを探して歩いていた。
だが今日の密林の様子はどうもおかしい。結構な時間歩いているのだがいまだにランポスの姿を見ていない。
ちょっと休憩をと思って近くにあった岩の上にクリュウは腰掛ける。道具袋（ポーチ）の中から布に包まれたこんがり肉を取り出してそれにかぶり付く。すでに携帯食料は全部食べてしまったのだ。
一気に食い終えると口のまわりにベットリと付いた肉汁を手の甲で拭い取り、今度は地図を取り出す。
「おっかしいな。何でいないんだ？」
いつもなら嫌でも目に入るのに、今日はそれがまったくないのだ。
「どうしたんだろ？　もしかして別の森に移動しちゃったのかな？」
それはありえる話だ。ランポスは基本的に小さな群れで各地を動き回る生き物だ。その場所に留まり続ける事もあるが、それはそこがとても住み良い場合だ。それ以外の場合は別の場所へと動き回っている。最近になってこの密林にランポスが大群でいたのはそれらが重なったからだと思う。ならばそれらが別の森に行ってしまったと考えるのが今はベストだ。
獲物がいなくなってしまってはハンターとしては不満な所だが、村に危害を加えるモンスターがいなくなったというのは嬉しい事だ。
「でも、どうするかな」
クリュウは地図を見ながらまだ行っていない洞窟かランポス達がよく集まっている中央部に行くか迷っていた。
洞窟の中は飛竜の巣になっている所もあるが、今のところ飛竜の目撃情報はない。ならばランポスがそこを占拠している可能性もある。
しかし、洞窟という狭い場所でランポスに包囲されてしまったら人海戦術でこちらが圧倒的に不利になってしまう。クリュウ一人ではちょっと荷が重い。
結局、クリュウは密林中央部に向かった。
そして、クリュウの選択は正しかった。

中央部の平地には三匹のランポスがいた。ここは今クリュウが来た道か反対側にある道以外はまわりを全て岩壁で囲まれている。その形はさながら闘技場を思わせる。
クリュウは木の陰に隠れて様子を伺うが、幸い向こうはまだこちらに気づいている様子はない。チャンスだ。
「よし……一気に斬り込んで片付けよう」
クリュウは突撃を決めると腰のハンターナイフ改にそっと手を伸ばす。
「ギャアッ！　ギャアッ！」
柄を握った刹那、後ろから突然鳴き声が発せられてクリュウは慌てて振り返る。そこには一匹のランポスが首を持ち上げて高らかに吼（ほ）えていた。
「しまったッ！」
クリュウは慌てて前を見るが、すでに三匹のランポス達はこちらを向いて背を反り返らせて鳴き声を上げていた。完全に先手を取られた。
「くそッ！」
クリュウは急いで後ろのランポスに突進すると連続して斬り掛かる。鮮血が飛び散ってランポスは悲鳴を上げるが、一対一なら怖くはない。二、三度斬り付けるとあっけなく倒れた。
今度は再び前を向く。三匹のランポスは仲間をやられて怒号を発している。
「ギャアアアアアッ！」
目の前の敵を睨み付けながら、ランポスは一際大きな声を上げる。すると、
「うそッ!?」
クリュウは我が目を疑った。
ランポスの声に呼応して岩壁の上から次々にランポス飛び降りて来たのだ。その数はあっという間に十二匹にもなった。
「十二匹ッ!?　二つか三つの群れが一緒に動いてるのッ!?」
あまりにも突然の事な上信じられない状況にクリュウは慌てる。

「ギャアッ！　ギャアッ！」
その掛け声を合図に前方の五匹のランポスが突っ込んで来る。
五匹でも厄介なクリュウにとって、十二匹なんてものは死に直結する。
一番目に飛び込んで来たランポスをハンターナイフ改で思いっ切り斬り飛ばした。自らの勢いと剣の威力が重なり、その一撃でランポスは沈黙した。
怒り狂った一匹が再び正面から来るが、今度はそれを避けて横を通り過ぎる瞬間を狙って回転斬り。これもまた吹き飛んで沈黙した。
明らかに切れ味と攻撃力が上がっている。しかも防具自体もわずかだが動きやすい。そのわずかが今の彼を救っている。
クリュウはアシュアにに感謝しつつ前方で戸惑っている一匹に狙いを定める。どうやら目の前で仲間を二匹も殺されてどうしたらいいか悩んでいるらしい。
クリュウはそんなランポスに突貫して一気に距離を詰めると、振り上げていた剣を叩き落とす。
「ギャアッ！」
今度は一撃では倒れない。ならばと二撃、三撃とくり返すと、そのランポスも倒れた。
息を整えていると、背後に回っていた一匹が後ろから襲い掛かる。
慌てて振り返って盾でその一撃を防ぐが、今度は新たな後ろからもう一匹が突っ込んで来た。
「うわッ！」
背中を蹴り飛ばされ、クリュウは転倒する。そこへすかさずランポスは跳び掛ってくるが、クリュウは体を捻ってギリギリで回避する。だが立ち上がろうとした時に再び背後から体当たりされてバランスを崩した。
「このぉッ！」
慌てて四つん這いになりながら離れると、一秒後にはさっきまで自分のいた所にランポスが跳び込んで来た。
避けられた獲物を悔しそうに見詰めるランポスからクリュウは一

度距離を置く。
離れたランポスは一度後方にいたランポス達と合流する。どうやら今度は残った九匹で一斉攻撃するらしい。そんな事になったら今度こそクリュウの負けだ。
「くそッ！　こうなったら――」
クリュウは最後の手段と道具袋（ポーチ）に手を伸ばす。
「これでも食らえッ！」
手にした丸い物から出ているピンを抜いて勢い良く前方に投げ付け、すぐに目を閉じる。
放物線を描いて飛ぶ物体はランポス達の前に落ちる寸前で炸裂した。直後すさまじい閃光が辺りを包み込む。その光は目を閉じていても感じられるほどすさまじい光量だ。
「ギャアアアアアッ!?」
ランポス達の悲鳴を合図に目を開けると、そこには先程と何も変わらない密林の光景が広がっている。ただ違う事といえば、ランポス達が苦しそうにもがいている事だ。
先程投げつけ炸裂したのは閃光玉。その名の通りすさまじい光を放ち、相手の視力を一時的に奪う、総攻撃や時間稼ぎなどに多用される道具だ。
だがそんな道具などランポス達はわからない。わかるのは目の前で起きたすさまじい光に目が針を刺されたような痛みを発しながらまわりが見えないというパニック。
クリュウは走り出すと一番手前にいたランポスに一撃を加える。
目が見えないランポスはその奇襲に慌てて反撃しようとするが、いざ反撃しようとした時、彼は絶命していた。
次のランポスに突貫し、ハンターナイフ改で斬り掛かる。
手が痛い。
これほどの連続攻撃を今までした事はない。一撃一撃を加えるたびに手に蓄積される負荷は着実に彼の手を傷めていた。
連続で斬り付けると、ランポスは断末魔の悲鳴を上げて絶命した。
刃を一瞥すると、多少の刃こぼれを起こしている。だが、

「時間がないッ！」
閃光玉の効き目はモンスターによって異なるが、ランポスなら三〇秒ほどである。早くしないとランポス達の視力が回復してしまう。それまでに一匹でも多く減らさなければこちらが危ない。
次なるランポスに斬り掛かる。その瞬間、ハンターナイフ改の刃がさらに刃こぼれを起こした。刃は欠け、小さなヒビが入っている。
クリュウは気にせず斬り付ける。もはや叩き付けるという方がふさわしいかもしれない。ザシュッザシュッという肉を斬る音もいつの間にか鈍くなっている。同時に切れ味も落ち、手に掛かる負担も大きくなる。
ひたすら一心不乱にクリュウは剣を叩き込む。
ランポスは目が見えないながらもクリュウに噛み付こうとするがでたらめな攻撃は当たる事はなく、最後の一撃を入れると、ランポスは地面に倒れた。
「ギャアアアアアッ！」
その声に慌ててクリュウは後退する。それは正解であった。さっきまで目が見えなくて苦しんでいたランポス達はしっかりとクリュウを睨み付けている。
転がっている同胞の亡骸を見つけ、残った六匹は研ぎ澄まされた刃のような鋭い眼光で仲間を殺した敵を睨む。その迫力にクリュウは体を震わせる。
今度こそランポス達は総攻撃をしようと考えているのだろう。一度態勢を立て直す為に後方に下がる。
今のうちに切れ味を回復させようと思ってクリュウは道具袋（ポーチ）の中の支給専用の携帯砥石に手を伸ばす。その時、
「ギャアッ！　ギャアアアアアッ！」
ランポスの鳴き声が変わった。
――怒号から、助けを呼ぶような声に――
「ギャオワアアアアアアアアッ！」
突如響いた謎の鳴き声にクリュウは道具袋（ポーチ）から手を離した。

「な、何？」
震える声でそうつぶやいた刹那、ランポス達の後ろの岩壁の上から一匹のランポスが飛び降りて来た。
そいつに対しランポス達は道を開ける。すると、それがただのランポスではないのがわかった。
ランポスよりもひと回り大きい体を持ち、禍々しく鋭い大爪は鋼鉄だって引き裂きそう。何より頭頂部には血のように真っ赤なトサカがリーダーの証を示している。
それは、ランポス達の頂点に君臨するランポス達のボス――
「ドスランポスッ!?」
ランポスを束ねる親玉――ドスランポスだ。その戦闘能力はランポスとは比べ物にならないほど強く、全くの別のモンスターである。とてもじゃないが、今のクリュウが勝てるような相手ではない。
「無理ッ！　ドスランポスなんて無理だよッ！」
クリュウは剣を腰に戻して慌てて反転して逃げ出す。が
「ギャアアアアッ！」
「うわッ!?」
突如空からランポスが降って来た。それも一匹は二匹ではない。あっという間に新たに現れた五匹のランポスが退路を塞いでしまった。
「まだいたのッ!?」
おそらくはランポス達の中でも強いランポス達であろう。体に刻まれている傷跡が彼らを歴戦の戦士である事を示していた。きっとドスランポスを守る親衛隊か何かなのだろう。
慌てて距離を取る為に横に走る。ドスランポスの方を確認すると、さらに向こうにも岩壁から次々とランポスが降りて来ていた。
「うそでしょッ!?」
一分もしないうちに総勢十八匹のランポスとドスランポスに囲まれるという最悪の事態に陥っていた。
走り続けるがすぐに岩壁に針路を阻まれてしまう。
振り返るが、退路は完全に塞がれてしまっている。

じりじりと敵の包囲網が迫っていた。
敵の大群に対しこっちは単独。しかも武器は刃こぼれしてしまっているハンターナイフ改のみ。閃光玉もさっき使ってしまった。完全にこちらが劣勢であった。
「くそッ！」
クリュウは剣を引き抜くと盾を構える。こうすれば一撃目ぐらいは防げるだろう。
ドスランポスは一度大きく叫ぶと、こちらに向かって突進して来た。まわりのランポスは襲って来ない。どうやらドスランポスは一対一で勝負したいらしい。
これはチャンスと思ったが、二つの退路はそれぞれランポスが塞いでしまっている。しかも頼みの綱である閃光玉はさっき使ってしまった。あれはあくまで大型モンスターと遭遇してしまった際の逃げる時間を稼ぐ為に用意していた物。一個しか持って来ていなかった。
こんな事になるんだったらもっと持って来れば良かったと後悔するが、その後悔はすぐに消えた。
「ギャオワァァァァァッ！」
「あぐッ！」
ドスランポスのすさまじい突進を盾で防ぐが、その勢いはすさまじく、クリュウの体は弾き飛ばされて後ろの岩壁に背中を強(したた)かにぶつけてしまった。
幸い盾で防いだので喰らったのは衝撃だけだったが、もしあの勢いであの大爪をまともに喰らったら、チェーンシリーズの防具なんて簡単に引き裂かれてしまうだろう。
痛みを耐えて立ち上がると、ドスランポスが再び飛び掛って来た。鋭利な牙をなんとか前転してかわすが、間に合わず左足の脚甲に当たって脚甲が小さく砕けた。脚甲のおかげで怪我はしなかったが、鉄を削る音と衝撃に背筋が凍る。
「し、死ぬッ！　本当に死んじゃうよぉッ！」
立ち上がろうとした所に再びドスランポスが突っ込んで来る。慌

てて横に回避するが、あまりにも雑な動きだったので地面に肩を強く打ったが痛がっている暇なんてなく慌てて立ち上がる。すぐ目の前には死が迫っていた。
「ギャオワッ！　ギャオワッ！　ギャアッ！」
仲間を失った事に対する怒りなのか、それとも獲物を見つけたという歓喜なのかはわからないが、雄叫びを上げながら突進して来るドスランポスをクリュウは再び横に転げるようにして避ける。
「くそッ！」
無様に転げたクリュウをあざ笑うかのようにドスランポスはゆっくりと近づいて来る。
その圧倒的な存在に恐怖で体が強張る。その一瞬の隙でドスランポスはクリュウの目の前まで接近するとその体を踏み付けた。
「うぐ……ッ」
人間とは比べ物にならない重みに苦悶の表情を浮かべるが、次に彼が目にしたのは自分を見詰めているドスランポスの凶悪な顔だった。
再び恐怖で体が強張る。
ドスランポスの口から肉が腐ったような息が吐き出され、クリュウの鼻を襲う。むあっとした湿気を帯びた嫌な臭い。もしかしたら自分もあの臭いを出す原因になるかもしれないと思うと背中に冷水をぶちまけられたような冷たさが流れる。
恐怖がクリュウを支配する。
恐ろしさのあまり足も指ももうピクリとも動かない。
この時、彼は初めて死というものの恐怖を実感した。
忘れていた。自分達ハンターはいつも死と隣り合わせだという事を。
自分はいつもその中でも安全地帯にいた上に徹底した準備をして安全を確保していた。しかしどうだろう。いざそれらが目の前から消え、危険と恐怖に投げ出されると自分はもう何もできない。
自分の小ささと改めて実感した――だが、それらの後悔はすでに全て遅かった。
「クアアアアアア」

低い声を上げ、ドスランポスは半開きであった不気味な臭いを発する口をいきなり全開した。禍々しく鮮やかな赤いのどがクリュウを呑み込もうとしている。
「くぅッ！」
もうダメだッ！
クリュウは恐怖に目を閉じて最期の瞬間から目を背けた。
――空気を切り裂く鋭い音が響いた。
「ギャワアアアアッ!?」
突如響いたドスランポスの悲鳴。直後今まで自分を押さえ付けていた重みがなくなった。
恐れていた瞬間が来る気配はなかった。恐る恐る目を開くと、見えたのはドスランポスの尾だった。
ドスランポスはクリュウではない別の何か睨んで警戒を露にしていた。それはランポス達も同じだ。
「一体……何が……」
その時、彼は見た。
――ドスランポスの体に数ヶ所弾痕が生まれ、真っ赤な血が流れ出していた。
「目をつむってくださいッ！」
突如響いた声に反射的に目を閉じる。すると、目を閉じていても強い光を感じた。それは自分もさっき使った閃光玉だろう。
光が消えてからそっと目を開けると、そこにはランポス達の阿鼻叫喚（あびきょうかん）の光景が広がっていた。ドスランポスも苦しげにもがいている。
「早く逃げてくださいッ！」
その声のした方向を見ると、向こうの岩壁の上から誰かが飛び降りて来た。視界を失いパニックになっているランポス達の間を翔け抜けクリュウに駆け寄る。
それは――少女だった。
年は自分と同じくらい。緑色の鎧に身を包み、春の若葉のような美しい翡翠色の瞳が輝き、長い美しい金色の髪が風にそよそよと揺れて

いる。露になっている顔はまるで作られた人形のように美しく整っていて、誰もが振り返るような美貌。まだ幼さが残っているが、将来は相当の美女になるだろうと安易に予想でき、今もその幼さがまたかわいらしいという印象を与え、少女を見た目を柔らかく見せる。
誰が見ても、かなりの美少女である。
「今のうちに逃げましょうッ！」
少女は呆然としているクリュウの手を掴むと力強く立ち上がらせ、そのまま駆け出した。何がなんだかわからないクリュウは素直にその手に従う。
少女に手を引かれて走りながらふと振り向くと、ドスランポスがこちらをじっと睨み付けていた。
「うそッ!?　効き目が短いッ!?」
他のランポス達はまだ目が回復していないのかもがいているが、ドスランポスがしっかりとこちらを見据えて咆哮。全速力で突進して来た。
「き、来たぁッ！」
怯えるクリュウの声に少女は振り返るとクリュウを突き飛ばした。
「早く逃げてくださいッ！」
少女はそう叫ぶと背中に背負っていた銃を引き抜くとスコープで正確な狙いも定めずに目測だけで連続射撃を始めた。
バンッ！　ババンッ！　バンバンッ！
「ギャワァッ！　ギャオワッ！」
無数の銃弾を受けてドスランポスは苦しげに声を上げる。次々に体を貫く弾丸がが与えているダメージは相当なものだろう。
「ギャワァァァァァッ！」
ドスランポスは予想していなかったすさまじい反撃に慌てて身を翻して逃げ出した。他のランポス達はドスランポスに続いて逃げ出した。
少女は銃を背負い直すと再びクリュウの手を掴んで走り出した。
一刻も早く距離を取って再襲撃を防ぎたいのだろう。
クリュウは何がなんだかよくわからなかったが、とにかく少女の後

に続いて全力で走った。

――握られた少女の手は柔らかく、温かかった……

第9話　深緑の少女

ドスランポス達のいたエリアから結構離れた所まで逃げると、少女はやっとクリュウの手が離した。すっかり疲れ切ったクリュウは立っていられずにそのままぐったりと地面に腰を下ろした。
「し、死ぬかと思った……」
肩を激しく上下させて荒い息をしていると、先程自分を助けてくれた金髪の少女が心配そうに顔を覗き込んで来た。
「大丈夫ですか？」
「あ、う、うん。大丈夫」
少女は「そうですか」とつぶやき、安堵したように小さく微笑んだ。そんな彼女をクリュウは改めて見詰める。
きれいな顔立ちをしていた。そよそよと風に揺れる金色の長い髪は柔らかそう。エメラルドのようなきれいな緑色の瞳が自分をしっかりと見詰めていた。
「あの、私の顔に何か付いてますか？」
クリュウの視線に気づいた少女は困ったように顔を手で触れる。何気ないそんな仕草もまた、少女をかわいく見せる。
「あ、いや、何でもない」
クリュウは一瞬ドキッとし慌てて視線を逸らす。その頬はいつになくほんのりと赤く染まっている。そんな彼を少女は不思議そうに見詰め首を傾げる。
とりあえず息だけは何とか整えたクリュウはゆっくりと立ち上がると少女にまだ言っていないお礼を言う。
「ありがとう。君のおかげで助かったよ」
「いえ、当然の事をしたまでです。それよりもお怪我がなくて何よりでした」
そう言って少女はにっこりと優しげに微笑む。
「君もハンター？」
「はい。まだまだ未熟なライトボウガン使いです」
少女は少し照れながら謙遜しているが、先程の彼女の射撃の技術は

すばらしいものだった。誰が見ても相当な実力者であるとわかる。
「あなたは、ハンターになってどれぐらいですか？」
少女はクリュウの装備と彼の顔を交互に見ながら問う。
「えっと、正式なハンターになってまだ一ヶ月も経ってないけど」
「そうですか、でしたらその装備が妥当ですね」
どうやらクリュウの装備を見てすでに彼が初心者であると気づいていたようだ。そもそも初心者用の装備をしているのだから仕方がない。世の中にはわざと弱い防具を身に纏う者がいるらしいが、クリュウは完全に前者だ。
「まあ、まだ僕ぐらいのハンターじゃこれが限界だよ」
そう言ってクリュウは笑った。自分はまだまだかけだしだと理解しているし、実際もそうだから技術も装備もまだ未熟だ。
笑いながら何気なく彼女の装備を見て……絶句した。
「どうかしましたか？」
微笑む彼女は天使のように美しい。しかし、そんな彼女が身に纏っている装備は驚くには十分過ぎるものだった。
――少女の装備は、レイアシリーズで統一されていた――
頭は何も被っていないが、耳にキラキラと輝くのはレッドピアスだろうか。それ以外は深緑の鎧――レイアシリーズを付けている。
レイアシリーズとはリオレイアと呼ばれる飛竜から剥ぎ取れる素材から作れる防具。リオレイアとは雌火竜と呼ばれており雄火竜リオレウスと対になっている上級飛竜だ。
この二頭は典型的な飛竜種であるが、何よりすさまじく強い。体力も攻撃力も防御力も全てが上級飛竜で、熟練のハンターであっても油断できない相手だ。
空中戦を主体とするので厄介な《空の王》リオレウスに対し、リオレイアは《陸の女王》と呼ばれ、徹底した陸上戦を行う事で知られている。例え自分の身が危険になっても瀕死寸前ぐらいに傷つかない限りは敵を排除するまで戦い続けると言われている凶暴なモンスターだ。
もちろんクリュウは戦った事などなく、見た事すらもまだない。

そんな凶暴にして強力な飛竜であるリオレイアから剥ぎ取れる素材は貴重である。それを使ったレイアシリーズを作るには何頭ものリオレイアを倒さなければいけないという事を意味している。そして、そんな強力の飛竜の素材を満遍（まんべん）なく使っている装備を身に纏っているという事は、彼女は何頭ものリオレイアと戦って勝って来た歴戦の戦士（ハンター）という事を意味している。

「君、リオレイアを倒した事があるの？」

恐る恐る訊いてみると、少女はクリュウの問いに笑顔で大きくうなずいた。

「はい。色々な人と協力してもう三〇頭近くは討伐しています」

その自信満々な返答にクリュウは再び言葉を失って絶句する。

リオレイアを三〇頭もなんて……

「仲間と一緒にそれだけの数を？」

「はい。ですが私は流浪（るろう）ハンターなんです。どこの村にも腰を据えず、ひたすら各地を回り続けています。ですので特定のチームとは組まずに臨機応変に依頼に応じてチームを組んでるんです。リオレイアを倒したのはそういった方々のおかげなんですよ」

そう言ってにっこりと微笑む少女に、クリュウは彼女との圧倒的な経験の差を見せ付けられた気がした。

臨機応変にどんな即席のチームでも組めるというのは、彼女が卓越した柔軟性を持っているという事を意味し、それだけ彼女が実力者であるという事だ。

少女は背中に背負ったライトボウガン――ヴァルキリーファイアを持った。これもまたリオレイアの素材を使った貴重かつ高性能な武器だ。

「リオレイアはいいですよね。私は全てのモンスターの中で一番《彼女》が好きです」

そう言って少女は愛しそうにヴァルキリーファイアの雌火竜の鱗で作られた装甲を撫でる。その時の彼女の表情は天使のように幸せそうな笑みだ。

師匠に聞いた事がある。世の中には特定のモンスターをこよなく

愛しているハンターがいると。きっと彼女もその部類に入るハンターなのだろう。リオレイアを《彼女》とか言ってるし。
だが、その実力は折り紙付きだ。何せあのリオレイアと何十回も戦って勝っているのだから。そもそも先程の実力はどんな素人が見ても圧倒的なものだった。
自分はまだハンターが一番最初に倒す飛竜であるイャンクックすら倒していない。正確には学術的にイャンクックは飛竜種ではなくランポスと同じ鳥竜種に分類されるが、その生態は限りなく飛竜に類似しているので世間一般的には飛竜として判断されている。そもそもドスランポスに勝てないようじゃそれもまた遠き夢だ。
世の中には上がいるという事を、ものすごく見せ付けられた気がしてクリュウはため息しながらうなだれた。
少女はなぜかずーんと落ち込んでいるクリュウを見て心配そうに声を掛ける。
「ど、どうしたんですか？　やはりどこかお怪我をされているのでは？」
「……心が痛い」
「はい？」
つぶやかれた言葉の意味がわからず、少女は不思議そうに首を傾げる。
とりあえず少しだけ復活したクリュウは目の前で自分を心配そうに見詰めている少女にうやうやしく頭を下げる。
「助けてくれて、本当にありがとう」
「あ、いえ、そのように頭を下げられるような事はしてませんし。むしろあなたの狩りを邪魔してしまったようで、こちらこそすみません」
礼儀正しく頭を下げる少女に、クリュウは小さく微笑む。彼女が謝る必要なんて全くない。むしろこちらの方が迷惑を掛けた事に謝らなければならないのに。
「そんな事ないよ。もしあそこで君が助けてくれなかったら僕は今頃ドスランポスの胃袋の中にいたもの」
確かにそうだ。あの時自分は万策尽きて覚悟を決めていたぐらい

だ。改めてドスランポスの真っ赤で巨大な口を思い出すと背筋がぞっとする。本当に助かって良かった……

「お役に立てたようで何よりです」

嬉しそうに少女はにっこりと微笑んだ。

少女の笑顔を一瞥し、クリュウは道具袋（ポーチ）の中から応急薬という緑色の液体の入ったビンを取り出す。かなりの体力を消耗していたので今のうちにできるところまで回復しておきたかった。どうせ支給品である応急薬は依頼が完了すれば余った場合は返却しなければいけない。使わないと損だ。

応急薬のビンのコルクを抜いてクリュウは口につけてグッと飲む。無味である為に慣れてしまえば問題なく飲めるのだ。一気に飲み干した、その時、

ドサッ……

突如起きたその不気味な音に驚いて振り返ると、そこに先程まで自分を心配そうに見詰めていた少女の姿はなかった。キョロキョロと辺りを見回すが、影も形もない――なぜか嫌な予感がしてそっと足下を見ると……そこにはぐったりと倒れている少女が。

「ど、どうしたのッ!?」

クリュウは空になったビンを投げ捨て、慌てて少女を抱き起こす。だが彼女の体は力なくぐったりと衰弱していてどことなく顔色も悪かった。

「どうしたの!? どこか具合でも悪いのッ!?」

もしかしたらさっき自分を助けた時に何か怪我でもしたのだろうか。そうなると責任は自分にある。クリュウは慌てて余っている応急薬を取り出そうと道具袋（ポーチ）に手を伸ばす。

「……お……お腹、……空いた、……グキュルルゥって……」

「……はい?」

その直後、少女のお腹からキュルルルゥゥゥとかわいい音が鳴り響いた。

第１０話　密林の出会い

「ほんひょうひ（本当に）ッ！　ほんひょうひはひはほうほはいはふ（本当にありがとうございます）ッ！」
「う、うん。わかったから、しゃべりながら食べるのはやめようね？」
「ひゃいッ！」
そう満面の笑顔で言って少女はおいしそうにこんがり肉をガツガツと食べる。
用意周到に肉焼きセットと生肉を持って来て正解であった。支給品の携帯食料と持参したこんがり肉はクリュウが全部食べてしまっていた。おかげで今こうして彼女にこんがり肉を食べさせてあげられている。
最初は急いで彼女にこんがり肉を食べさせようとしたが、彼女があまりにお腹が空き過ぎて「な、生焼け肉でも……構いません……、何なら……生肉でも……」なんて言い出すのでかなり焦った。
本当に生肉を食べようとする彼女を押さえ、なんとか今はこうして彼女にこんがり肉を食べさせられているという訳だ。ちなみに今彼女が食べているのは四つ目である。
少女は泣きながら嬉しそうに、おいしそうにこんがり肉を頬張る。そんなに感動するような食べ物ではないのだが、今の彼女にとってはリオレイアと遭遇する事よりも嬉しい事なのだろう。それだけお腹が減っているという事だ。
一心不乱にこんがり肉に食らい付く少女に、クリュウは先程まで彼女に向けていた尊敬の眼差しを止めていた。新たに向けたのは親しみだった。すさまじい実力を持っている彼女も、同じ人間なんだなぁと思ったからだ。
残念ながら生肉は四つしか用意していなかったので、これ以上要求されてもクリュウには何もできない。最悪アプトノスを狩って生肉を入手するという手段もあるが、どうやら少女はこれで満足してくれたようだ。だとしても女の子が四個もこんがり肉を食べるとは驚異的な事であるが。

口の周りにベットリと付いた肉汁を手の甲で拭うと、少女は苦笑いしているクリュウに気づき顔を真っ赤にして慌てて頭を下げる。
「ほ、本当にありがとうございましたッ！」
「あ、いや、別にそんなに礼を言われるような事はしてないし、ただ肉を焼いただけだし、だから早く頭を上げてよ」
クリュウの言葉に少女は笑顔で顔を上げる。その翡翠色の瞳は夜の空に輝く星のようにキラキラと煌いている。
少女は照れながら「実は……」と話を始めた。
「この三日間私は少量の木の実しか食べてなかったんです」
「どうして？　肉焼きセットを持たずに事前に調理した肉だけで来たの？　だとしてもそれも全部食べちゃったの？」
「私はあなたと違って依頼でこの森に来たのではなく旅の途中に立ち寄っただけです。ですのでこの森に来るまでに食料は全部食べてしまったんです」
「だとしても旅なら肉焼きセットくらいはあるでしょ？」
「そ、それが……」
言いにくそうに少女は口ごもる。クリュウが首を傾げると少女は恥ずかしそうに頬を赤らめながら小さな声で理由を話す。
「それが、肉を焼いている最中に先程のドスランポスの群れに奇襲されてしまい……肉焼きセットが大破してしまったんです……」
「うわぁ、災難だねそりゃ」
なるほど。いくら優秀なハンターでも調理に集中している時にいきなり襲われれば対応が遅れてしまうだろう。ましてや彼女はガンナー。遠距離戦を主体とするので奇襲で包囲されてしまえば戦いが不利になってしまう。
「それで食料の調達が難しくなってしまったんです。木の実で飢えない程度にやり過ごしたのはいいものの、空腹の状態ではモンスターが徘徊（はいかい）する森を抜けるのは自殺行為。なんとかランポス達がいない時を狙って少しずつ移動していた所に……あなたの悲鳴が聞こえたので急行したんです」
そして、空腹な状態でドスランポスに食われそうになっていた自分

を助けてくれた、という訳らしい。
「そっか、ごめんね。そんなフラフラな状態だったのに無理させちゃって」
「いえ、結果的にこうして食事をさせてもらいましたので、私にとっても良かったです」
「そう言ってもらえると助かるよ。本当にありがとう」
「お礼を言われるような事じゃありませんよ。誰かが助けを求めれば手を差し伸べる。人として当然の事をしたまでです」
「でも僕は命を救ってもらったし」
「それはこちらも同じです。ある意味私もあなたに救われなかったら餓死という屈辱的な死を受け入れるしかなかったのですから」
　そう言って恥ずかしそうに頬を赤く染めて苦笑いする少女に、クリュウも「確かにそうかもね」とおかしそうに笑った。
「ですので、これでお互い様です」
「まあ、君がそう言うなら僕は一向に構わないけど」
「なら、これでおしまいです」
　そう言うと少女は優しく微笑んだ。その笑顔は本当にかわいらしく、まるで天使のような慈愛を含んだ優しげな笑顔だ。
「これも何かの縁です――私はフィーリア・レヴェリと言います。見ての通りライトボウガン使いのハンターです」
　そう言って少女――フィーリアは礼儀正しくペコリと頭を下げた。そんなフィーリアの自己紹介にクリュウも名乗る。
「僕はクリュウ・ルナリーフ。見ての通り片手剣を使う初心者ハンターだよ」
「クリュウ様と言うのですか。いい名前ですね」
「あ、ありがとう」
　今まで名前をほめられるという経験がなかったので、クリュウは少し照れながらも嬉しそうに微笑んだ。
「クリュウ様はどこかの村か街に属されているのですか？」
「うん。イージス村っていう小さな村なんだけど」
「イージス村、ですか？」

フィーリアの何か気になったような口調にクリュウは首を傾げる。
「フィーリア、知ってるの？」
「はい、一応は。この地域の中継点になっている村だそうですが」
「うん。小さな村だけど、周辺の村に比べれば大きな村だからね。と言ってもドンドルマ周辺の村なんかよりはずっと小さいけど」
それは謙遜ではない。本当にイージス村は小さいのだ。辺境にあるのが最も大きな理由で、村民の数はこの前やっと一〇〇人を超えたとかで村長が泣きながら大喜びをしていたほどだ。
「そうですか……イージス村……」
「どうしたの？」
彼女の言葉に首を傾げながら問うと、フィーリアは伏せていた顔を上げてクリュウをじっと見詰める。
「……実は、私はそのイージス村に行こうと思っていたんです」
「え、そうなの？」
「はい。この周辺で狩りを行う為に一度この辺一帯の拠点であるイージス村に行こうと思っていた所でした」
フィーリアのようにこの地域に来た者は一度イージス村に立ち寄る事が多い。それはハンターはもちろん商人や一般人も同じだ。
イージス村はその立地条件の良さからモンスターに襲われる事がないのでこの地域一帯では商人の出入りが最も多い上に地域の中心地にあるので重要な中継点になっている。なのでこの辺一帯で商売や狩りする場合はイージス村に一時的に拠点を置くか用意を整えてから周辺に散るかする為に一度はイージス村に訪れるのだ。
フィーリアの言葉を聞いたクリュウはいい事を思いつき、屈託のない笑みを浮かべると彼女にそっと手を伸ばした。
「だったらさ、一緒に行こうよ。イージス村まで」
「え？」
クリュウの発言にフィーリアは目を丸くして驚く。そんな彼女にクリュウは優しげに笑みを浮かべながら話し掛ける。
「だってさ、一応この辺の地理は僕の方が詳しいし、僕も依頼を一応完遂はさせたから村に戻るし。だったら一緒に行動した方がいいじゃ

ん」
「確かに、一理ありますね」
　フィーリアは納得したように小さくうなずく。だが、そんな彼女のあまり乗り気ではないような反応にクリュウは慌てて言葉を付け足す。
「あ、でも無理にとは言わないよ！　もし嫌だって言うなら僕はこれ以上言わないから。そ、それにこんな素性も知れないような僕と一緒ってのは警戒するよね。ごめん」
　どんどんマイナスの方向に考えていくクリュウにフィーリアは慌てて否定する。
「あ、いえ、そんな嫌だという事はありません。ただ、ご迷惑なのではないかと」
「そんな事ないよ。むしろまだ訊いてみたい事もあるし」
「そ、そうですか？　じゃあ、ご一緒させてもらってもよろしいでしょうか？」
「え？　じゃ、じゃあ……」
　目を大きく見開いてぱぁっと笑顔を花咲かせるクリュウ。そんな彼にフィーリアは優しく天使のような笑みを浮かべる。
「はい。イージス村までのご案内、どうかよろしくお願いします」
「う、うん。任せてよッ！」
　クリュウは笑顔でうなずくとすぐに肉焼きセットを片付け、一度一拠点（ベースキャンプ）に寄って荷物を整えるとフィーリアと一緒に村に向かって歩き出した。
　村から受けた依頼はランポスの討伐だったが、乱戦になったので予定よりも多く狩る事ができた。だが乱戦だったが故に剥ぎ取っている暇がなかったので素材はゼロだ。
　師匠から狩ったモンスターは敬意を払って無駄なく剥ぎ取れと言われてきたので、それだけが心を痛めたが、命が助かったという安堵がそれを和らげていた。
　深い深い密林はそんな二人を気にした様子もなく、今日もまたいつもと変わらぬ大自然の一日を過ごすのだった。

第11話　エレナの逆鱗

イージス村に戻るまでの間にクリュウはフィーリアに色々な事を教えてもらった。

フィーリアは無所属で各地を回っている流浪ハンターで、貴重品は基本的にドンドルマのハンターズギルド本部に預けているらしく、余程の事がない限りそれらの物を出す事はなく自給自足して旅をしているらしい。

フィーリアはすでに多くの飛竜を倒して来ているらしい。それは彼女が身に付けているレイアシリーズを見れば一目瞭然（いちもくりょうぜん）だ。一つ疑問に思ってどうして頭はレッドピアスを付けているのか尋ねると、「私はガンナーなので、風を感じていた方が命中率がいいんです。風の向きや強さで弾は大きく威力や方向を変えますからね」と返してきた。確かにそれは一理ある。だからこそ彼女は裸の頭にせめてもとレッドピアスを付けているのだ。ピアス系は特殊なエネルギー波を出して微弱だが防御力を上げる事ができるがないよりはマシというレベルだ。だが、ピアスの本来の能力は色に応じてある一つの属性攻撃に対する能力を向上させる事だ。これもどうやらそのエネルギー波が能力を上げているらしいのだが、いかんせんクリュウはそんな事詳しく知らないし、ギルド自体も多くは公表していないので不明だ。

すると今度は逆にフィーリアが質問してきた。

「クリュウ様こそどうして頭の防具をされていないのですか？　クリュウ様はガンナーではありませんし」

そう一応訊いているが、彼女の瞳には確信があった。きっと頭の防具を揃える素材や資金が足りなかったのだろうと、初心者にありがちなパターンを予想しているに違いない。実際彼女はそう思っている。

クリュウはそんな彼女の誤解を解こうと笑いながら説明する。

「これは好きで外してるの。僕はフィーリアみたいに風の動きを感じたいとかそんなんじゃなくて、ただ単に頭の防具が嫌いなんだ。邪魔だし、物によっては視界が悪くなったりするでしょ？　そんな事に

なったらいくら防御力が高くなっても飛竜の攻撃なんか喰らったらひとたまりもないからね。だったら避けやすいように視界を確保して少しでも避けやすくしようと思って」
そう説明するとフィーリアは「そうなんですか」と納得した。もう少し問われるかと思ったが、それはなかった。逆に訊き返すとどうやら自分のように頭に防具をしたがらないハンターはそれなりにいるらしい。みんな考える事は同じようだ。
そんな風にお互いの事を話している間に二人はイージス村の麓（ふもと）に到着した。
後は長い階段を上って村の中を目指すだけだ。階段を上る途中フィーリアが「こんなに階段があるんですか？」と力なく尋ねてきたので苦笑いしながらうなずいた。どうやらいくら熟練のハンターだからといってもこれだけの階段を上ればへばってしまうらしい。慣れているクリュウだってちょっと辛いのだ。初めてのフィーリアはかなりのものだろう。
やっとの思いで階段を上り終えて村の入り口をくぐる。するといつも迎えてくれる門番の青年が笑顔で駆け寄って来た。
「やあおかえりクリュウくん――って、そっちの女の子は誰だい？」
門番はクリュウの隣にいる絶世の美少女であるフィーリアを不思議そうに見詰めている。そんな彼にフィーリアはペコリと頭を垂れる。
「フィーリアと言います。クリュウ様と同じくハンターをしている者です」
「ハンター？　君みたいな女の子がかい？」
「はい」
門番は「本当かい？」とクリュウに訊いてくる。
「本当ですよ。僕なんかよりもずっと強いですよ？」
「そっか、女の子がねぇ」
門番の言葉にフィーリアは苦笑いする。
この世界において世間一般的には女性の方が地位が低い。特に下克上（げこくじょう）のように力こそ正義というハンターの世界では

より女性の地位は低い。基本的に筋力や体力が男よりも下回る女性は男ハンターからバカにされる事が多い。少なからず存在する女性ハンターはそうしていつも肩身の狭い思いをしている。それがこの世界だ。

だが、フィーリアのように女性でも相当な実力者になれる事も多い。むしろ女性ハンターはそうした迫害（はくがい）をバネにして伸びる事が多く、時たますさまじい実力を持ったハンターが生まれる事もあるので、実は侮れない存在なのだ。

クリュウの言葉に門番も納得してくれた。彼は人を見た目や性別なんかでバカにしたりはしない心優しい成年なのだ。

「いやぁ、世の中わからないね」

うむうむとうなずくと、門番はふと何かを思い出したように二人を見比べ、なぜかニヤニヤと怪しげな笑みを浮かべる。

「な、何ですか？」

「いやぁ、クリュウくんも隅に置けないね。こんなかわいい子をゲットしてたなんて」

「はあ？」

クリュウは訳がわからないといった具合に首を傾げる。すると門番は「またまた、とぼけちゃって」と言ってニヤニヤとしながら軽く肘を突いて来る。とぼけるも何もクリュウは本当に何がなんだかわかっていないのだ。そんな彼に門番はこのこのと肘をさらに突く。

「だってクリュウくん、ハンターとしての仕事が急がしいのに間を見つけてこんなかわいい彼女を作っちゃうんだから」

「はあッ!?」

これにはさすがのクリュウも驚いた。クリュウが不安そうにフィーリアに振り向くと、彼女は顔を真っ赤にしてうつむいている。そんな彼女にクリュウは慌てて門番を怒る。

「な、何言ってるんですかッ！　僕とフィーリアはそんな関係じゃありませんよッ！　そもそもさっき会ったばっかりなんですよッ!?」

「またまた、別に隠す事ないじゃないか」

「だから違うって言ってるでしょッ!?　フィーリアも何か言ってよッ

！」
「えぇッ!?」
　いきなり話を振られたフィーリアはなぜか顔を真っ赤にしてクリュウを見詰めていた。どうやらクリュウの恋人に見られた事が恥ずかしいらしい。
「えっと……私とクリュウ様は本当に先程会っただけで、それ以外の関係はないですぅ……」
　フィーリアは頬を桜色に染めたまま勇気を振り絞って説明してくれた。だがせっかくの説明もその赤みを帯びた表情が全てをぶち壊していた。
　いまだニヤニヤと笑い続ける門番にクリュウはどうにか話を変えようと話題を模索する。と、そんな彼に門番の方から話題を振ってきた。
「でもクリュウくん。エレナちゃんきっとカンカンに怒るよ？　もうそりゃ飛竜なんてかわいく思えちゃうくらいに」
　どうしてそこでエレナの名前が出てきたのかさっぱりわからなかったが、クリュウはとにかく早く話題を変えようと再び頭を回転させる。と、
「あ、クリュウおかえりなさい。今日はちょっと遅かったわね」
「のうわッ!?」
　タイミング良く近くを通り掛ったエレナがクリュウに気が付いて声を掛けてきた。だが、予想していたのとずいぶん違う反応にエレナは不機嫌そうに唇を尖らせる。
「何よその反応」
「あ、いや、ちょっと驚いただけで」
「何で驚く必要があるのよ」
　睨み付けるエレナの視線にクリュウは苦笑いを浮かべた。だがそのハッキリとしない態度が余計彼女をイラ立たせる。
「笑って誤魔化されると――って、誰？」
　ここにきてようやくエレナはフィーリアの存在に気づいたようだ。じっとフィーリアを見る目は驚きと警戒に満ちている。そんな彼女

にクリュウは慌ててフィーリアを紹介する。
「彼女はフィーリア。さっき密林で助けてもらったんだ」
「助けられたのは私も同じですが」
「あんなの助けたに入らないだろ？　それにそれだと余計話がややこしくなるし」
「で、ですが、それはフェアではありません」
「別にフェアにするつもりはないんだけど……」
　そう言ってクリュウとフィーリアはエレナにはわからない二人だけの話題で話し始める。どちらも謙遜した性格の為か相手を思いやった行動が多い。そんな二人だけの会話を楽しそうに見詰める門番に対し、エレナは明らかに不機嫌さを増していた。
（何なのよ、この女）
　エレナはクリュウと仲良さげに話しているフィーリアを睨む。
　確かに顔はかなりかわいい。外見なら自分だって負けてはいないだろうが、口調を聞く限り性格もずいぶん優しそうだ。それに対して自分は強気な性格なので優しさなんてほとんど出ない。
　そんな自分とはまるで違ったタイプの女の子と仲良さそうに話すクリュウをエレナは不機嫌そうに睨み付ける。
（何よ。何でそんな女なんかと楽しげに話しているのよ）
　すさまじい殺気を含んだ視線を感じてクリュウが慌てて振り返ると、エレナがこれまで見た事のないような冷たい視線で睨み付けていた。
　さっきまで良かったエレナの機嫌がなぜか急激に悪くなっていくのが嫌というほどわかった。その中に含まれる殺気にクリュウは身を震わせる。
「え、エレナ？　何でそんな怖い目してるの？」
「うるさいッ！」
　突如怒鳴られ、クリュウは「え？　え？」と戸惑うばかり。もちろんどうしてエレナが不機嫌なのかなんてクリュウにわかる訳もなかった。
「ふんッ！　クリュウのバぁカッ！」

ついにツンと背を向けてしまうエレナ。一方何がなんだかわからないクリュウは首を傾げるばかりだ。
「あ、あの……」
その声に振り返ると、困ったような表情を浮かべているフィーリアが。
「あ、ごめん」
すっかりフィーリアの存在を忘れていたクリュウは慌てて彼女に向き直る。背中に突き刺すような冷たい視線を感じたが今はとりあえず無視した。
クリュウは両手を大きく広げて満面の笑みを浮かべて彼女を迎えた。
「――ようこそ！　イージス村へ！」

第12話　新たな師匠

村に来たフィーリアは早速クリュウに案内されて村長に会いに行った。その際になぜかエレナが仕事を休んで付いて来た。クリュウは不思議に思って理由を訊くがエレナは不機嫌なままで何も答えてはくれなかった。仕方なく、クリュウは気になりつつもとりあえず村長の家に向かい今に至る。

「彼女がいなかったら僕はどうなっていた事か」

クリュウは彼女と出会った経緯を話し終えた。村長はその話をうなずいたり驚いたりしながら聞き終えると「なるほどねぇ」と言葉を漏らしてにこやかな笑みでフィーリアを見る。

「ありがとう。君のおかげで大事な村の仲間が助かったよ」

「いえ、当然の事をしたまでです」

フィーリアは村長の言葉に小さく首を横に振った。彼女にとってそれは特別な事ではないのだろう。人として当然の事、彼女はそう言っていた。

すると、そんな二人を見て微笑んでいたクリュウは突如後頭部を引っ叩かれた。

「な、何？」

後頭部を押さえて振り向くと、そこには先程までとは違った不機嫌さを放つエレナがギュッと拳を握っていた。その拳は小刻みに震え、瞳はいつもより幾分か鋭い。

「あんた、ドスランポスに襲われたのッ!?」

震える声で怒鳴りながらキッと鋭い目つきで睨み付けるエレナに気圧され、クリュウは「う、うん」と正直にうなずいた。それを聞くとエレナは途端に心配そうにクリュウの体をジロジロと上から下まで見る。

「け、怪我は？」

「え？　あ、大丈夫。その前にフィーリアに助けてもらったから」

その返答にエレナはホッと胸を撫で下ろし安堵の息を漏らすが、すぐにキッと何ともなかったかのような態度を取るクリュウを睨み付

ける。
「何でさっき会った時に言わなかったのよッ！」
胸倉を掴んで本気で怒るエレナに、クリュウは慌てて謝った。
「ご、ごめん。あの時はフィーリアの事で頭がいっぱいだったから」
「私に言えないような事なの？」
「ち、違うよッ！　本当に忘れてただけなんだよ」
そう答えるとエレナはしばし不機嫌そうにクリュウを睨み付けながら沈黙していたが、視線を下げると静かに「バカ」とつぶやいてクリュウに背を向けてしまった。
「ご、ごめん」
クリュウはとっさにそう謝ったが、エレナはそれに何も答えてはくれなかった。
部屋の中に気まずい雰囲気が漂う。クリュウとエレナの気まずい雰囲気にフィーリアまで小さくなってしまっている。そんな雰囲気を破ったのは村長の陽気な声だった。
「まあまあ、こうしてクリュウくんが怪我もなく無事だったんだし、良かったじゃないか」
村長の言葉にもエレナは何も答えず、クリュウの方を一切見ようともしなかった。そんなエレナにクリュウは寂しげに瞳を揺らす。
村長は小さくため息をすると、再び屈託のない笑みで今度はすっかり話から外れてしまっていたフィーリアを見る。
「それで、フィーリアちゃんはここからどの村へ行くんだい？」
村長は壁に掛けてあるイージス村周辺の地図を見詰めながら問う。
「北の山岳地帯に行くならホットドリンクは用意してね。あそこは年中は雪に囲まれてるから相当寒いよ」
ホットドリンクとはクーラードリンクとは反対の効果を発揮する道具で、体温を上げて体の中からポカポカと温めてくれる。これなしで雪山などの過酷な寒冷地帯に行くのは自殺行為に等しい。ハンターだけでなくそのような場所を通る商隊や一般人にも重宝されている品だ。
だが、そんなクリュウの言葉に対しフィーリアは首をそっと横に

振った。
「――いえ、私はこの村に拠点を置くつもりです」
『え？』
突然の驚愕発言に驚く三人に、フィーリアは優しげな柔らかい笑みを向ける。
「ここからなら付近一帯の多種多様な狩り場に行く事ができます。それに、私は各地を回っていますがこの地方は初めてなんです。ですので、できれば早速親交を得たこの村に拠点を置いた方が色々と便利なんです」
フィーリアの言葉にクリュウと村長は顔を見合わせる。するとこの予想とは違った反応に慌ててフィーリアは付け加えた。
「あ、でもご迷惑でしたら他の村や町に拠点をさせていただきますが……」
「そ、そんな事ないよッ！」
村長は慌てて手を大きく振って否定すると彼らしい屈託のない満面の笑みで喜んだ。
「この辺は開拓されていない自然の中だからまだまだ物騒でね。クリュウくんががんばってくれてるけど彼はまだ初心者。一定以上の大型モンスターなんかの狩猟依頼はまだ先になると思うんだ。その間君みたいな優秀なハンターにいてもらえるのならこっちこそ大歓迎だよ」
すごく嬉しそうに手を上げながら言う村長の後ろで、事実を述べられてちょっと傷ついているクリュウが苦笑いしていた。
確かに自分ではまだドスランポスだって無理だろうとクリュウは自覚していた。そんな自分にいきなり飛竜を狩れと言われても不可能だ。
すると、そんなクリュウの気持ちを察したのか、村長は何かを思い付いたように手をポンと叩くと、不思議そうに首を傾げているフィーリアを見る。
「そうだ。これは僕からのお願いなんだけどフィーリアちゃん、クリュウくんの講師をしてくれないか？」

「「え？」」
　村長の突然の提案にクリュウとフィーリアの声が重なった。そんな二人の反応を予想していたのか、村長は屈託のない笑みを浮かべて口を開く。
「いや、ほらね。クリュウくんは確かに素直でがんばり屋さんだ。でも知識がない状態じゃどんなに苦労してもなかなか前には進まないだろ？　ここは歴戦のハンターさんに講師をしてもらった方がいいと思うんだ」
　村長の言葉にフィーリアはなるほど言いたげな納得したような顔をする。一方のクリュウは複雑な表情を浮かべていた。
　確かに村長の意見は正論だ。一応基礎は養成所で習ってきたが、それの応用をしろと言われても難しい。だからこそ優秀な講師に教えてもらえるのはより早く自らを成長させられるという事だ。そして、フィーリアの実力は先程見たとおり講師には打って付けである。
　だが……相手は同年代の女の子である。これがもう少し年上ならギリギリ問題はないのだが、一応クリュウにも小さいが男としてのプライドというものがある。
「あ、あのさ、フィーリアって年いくつ？」
「え？　あ、今年で15になりました」
「と、年下……？」
　クリュウの小さなプライドはさらにズタズタに引き裂かれてしまった。
　自分より年下なのにドスランポスはもちろんだがリオレイアと戦えるなんて、超えられないような圧倒的な実力の差を感じる。確かに彼女に教われば自分はもっと強くなるだろう。でも……
（年下の……女の子に……？）
　クリュウは複雑そうな表情で考え込む。そんなクリュウの胸中を悟った村長はにっこりと笑みを浮かべる。
「クリュウくん。君としては年下女の子に教わるのはプライドが傷つくだろうけど、これも勉強だよ。僕は君にもっと強くなってほしいんだ。そうすれば、村のみんなも安心して生活できるようになるから

ね。村の為なんだ」
「そ、そうですよね」
クリュウは小さくうなずいた。
これは自分だけの話ではない。このイージス村全体にも関わるような話でもある。ハンターである自分の力量でこの村の運命は大きく変わってしまう。ならば、強くなって、この小さな村をもっと大きくしたい。その為ならプライドなんてかなぐり捨てる覚悟だ。
「わかりました。僕は構いません」
クリュウの返答に村長は嬉しそうにうなずくと、次にフィーリアを見る。
「君はどうだい？　もちろんただとは言わない。住む場所と食事はこちらで用意するよ？」
「本当ですか？　それは助かります――私で良ければ引き受けましょう」
そう言ってフィーリアは嬉しそうに微笑んだ。そんな彼女の返答に村長は「ありがとう」とお礼を言って嬉しそうに笑う。
「あ、ありがとう」
クリュウは自分の為に講師を引き受けてくれたフィーリアに恥ずかしそうに微笑む。それを見てフィーリアも優しく微笑む。
「ここにいる間は、クリュウ様とチームを組む事になりました。不束（ふつつか）ながら、よろしくお願いします」
「こちらこそよろしく」
微笑み合うクリュウとフィーリア。
ここに二人の新たな絆が生まれた。信頼し合える仲間として。
これから先一体どんな未来になるのか、それはわからない。だけど、頼れる仲間兼師匠を得て、自分はもっともっと強くなるんだろう。そんな想いが、クリュウの中で光り輝いた。
イージス村を守る為、一人前のハンターになる為、クリュウは新たな一歩を踏み出す事を決意した。
「ちょっと待ちなさいよッ！」
みんなして幸せ気分になっていた雰囲気をぶち破ってエレナは慌

てた様子で叫んだ。
クリュウが不思議そうに首を傾げるのを無視し、エレナは村長を睨むような勢い見詰める。
「何だいエレナちゃん？　もしかして君は反対？」
そう問われると、エレナはとんでもないと言いたげに手を振るった。
「そ、そんな事ないです。クリュウがもっとしっかりしてくれれば私達も安心して生活できますからね」
「手厳しいね」とクリュウは苦笑いした。
「で、でも、食事はともかく家はどうするんですか？　この村に余分な家なんてありませんよ？」
そうである。
イージス村は基本的にこの地域の拠点になってはいるが宿なんてものはない。その代わりに普通の家に一時的に住まわせてもらうという逗留（とうりゅう）が慣習になっているのだが、運悪く今は結構規模の大きな商隊が村に来ていて村中の家は逗留客でいっぱいになっている。例え一人とはいえフィーリアが入る余裕はなかったのだ。
「あぁ、それなら大丈夫だよ」
村長は困った様子など全くなく笑顔を向けた。そして、驚愕の言葉を言い放った
「主従関係ってのは共にいる事で自然と深まるものなんだよ？　だから、フィーリアちゃんにはクリュウくんの家に泊まってもらうよ」
「えええええェッ!?」
すさまじく驚くクリュウとエレナ。そのシンクロ率はもはや神の領域である。
「住み込み、という訳ですか？」
「まあ、この場合はクリュウくんは弟子になるけどね」
フィーリアも少し困っているようだ――当然だろう。いくらなんでも同年代の男女が一つ屋根の下というのは普通は抵抗があるものだ。

「ちょっと待ってくださいッ！」
　そんな二人に代わってエレナが慌てて村長に詰め寄る。
「な、ならフィーリアは私の家に泊めますッ！」
　エレナの苦肉の提案に対し村長は困ったような表情を浮かべる。
「でも、エレナちゃんの家はもういっぱいでしょ？」
「一人くらい無理に詰め込めばなんとでもなりますッ！」
「荷物じゃないんだからさ。幸いクリュウくんの家は彼がハンターだって事もあって誰も入れてないし、ちょうどいいじゃない」
「よくありませんよッ！」
　今度はクリュウが叫んだ。このままでは自分はともかくフィーリアに不快な思いをさせてしまう。それだけは何としても阻止しなければならない。
「いくらなんでも男女が一緒の家に泊まるのはまずいですよッ！」
　そう叫ぶと、村長はやれやれといった具合に肩をすくめる。ちょっと軽くイラっとしたのはクリュウだけではないだろう。
「何だいクリュウくん？　君は何か間違いを犯す気なのかい？」
「ち、違いますよッ！」
　村長の鋭い反撃にクリュウは顔を真っ赤にして慌てて否定する。背中に殺意の込もった刺すような視線を感じるが無視した。
「なら問題ないじゃないか。これが一番の妥当案なんだ。客人である彼女を野宿させる訳にはいかないでしょ？」
「だったら僕が野宿しますッ！　家は彼女に使ってもらって――」
「それはダメですッ！　家主であるクリュウ様を差し置いてそのような事はできませんッ！」
　これにはフィーリアが反撃してきた。彼女らしいといえば彼女らしいが、この反応に困るのはクリュウの方だ。
「それ以外打開策はないでしょッ!?」
　クリュウの必死な言葉にフィーリアも困ったような表情をする。
　しばしの沈黙の後、フィーリアは小さくため息をひとつ吐くと村長を見る。その瞳は何かを決意したような光があった。
「わかりました。クリュウ様と一緒に暮らします」

「「えええええッ!?」」
　再び神の領域のようなシンクロする二人。
「ど、どうしてそうなるのよッ!?」
　エレナが慌ててフィーリアに詰め寄る。そんな彼女にフィーリアは「他に方法がありますか?」と冷静に問い返す。
「だから私の家に来なさいってばッ！」
「いっぱいなんでしょう?」
「だ、だったら私がクリュウの家に泊まるわよッ！　あんたが私の家を使いなさいよッ！」
「それじゃ意味がないでしょッ!?」
　三人はお互いの主張を言い合う。三人とも自分の意見を何がなんでも押し通す覚悟をしており、話は完全に平行線をたどってすさまじい言い合いが続く。そんな三人を見て村長は困ったような笑みを浮かべながら頭を掻く。
「クリュウくん。別に僕は同じ部屋で寝ろなんて言ってないんだよ?　寝る時はもちろん別室。食事や作戦の打ち合わせの時だけ一緒の部屋にいればいいでしょ?」
「ま、まあ、そうですけど……」
「それなら何も問題ないでしょ?　何を恥ずかしがってるんだい?　これも経験だよ。け・い・け・ん」
「うぅ……」
　村長の反撃を許さない言葉にさすがのクリュウも反撃の言葉を失って沈黙してしまう。
　この村長、人に好かれるような人だが、同時に人を丸め込むのもうまいというなかなか食えない人なのだ。
　ついに沈黙したクリュウを見て村長はにっこりと笑った。
「って事で、問題は解決したよ?」
「何で何も言い返さないのよバカぁッ！」
「そ、そんな事言われてもぉッ！」
　エレナは悔しそうにクリュウの襟首を掴んで激しく揺らしながら激怒し、揺さぶられるクリュウももうどうしたらいいかわからないと

いった具合でただ揺れるだけ。もはや万事休すという状態に陥っていた。
一方、うまくクリュウを丸め込んだ村長はフィーリアを見てそっと微笑む。
「じゃあ、クリュウくんをお願いね」
「はい。私の知識をできるだけ多く彼に教えます」
こうして、クリュウとフィーリアの師弟関係が完全に成立した。
微笑む村長とフィーリア、諦めたような感じのクリュウ、一人どうしても納得がいかないと暴れるエレナ。四者三様の反応が響くイージス村は今日もまた平和な一日の終わりを告げる夕日が輝いていた……

第13話　クリュウ家の新たな日常

「……」
「……」
「……」
「……あ、あの」
「は、はいッ!?」
「……」
「……」

　気まずい雰囲気が流れているここはクリュウの家。今ここにいるのはクリュウとフィーリアの二人だけだ。時間は村長の家を出た後ですでにどっぷりと日は暮れている。
　村長の家を出た後早速二人はクリュウの家に上がり込んだのだが、気まずい雰囲気が流れて双方ずっと黙っている。
　お互いどう話を切り出したらいいか困っているようで、どちらも何か話の種を探しているが何もなくこうして沈黙を続けて今に至る。
　最初の頃はお互い私服になったのでそれをほめ合ったりしたが、そんな長続きしない話はすぐに終わってしまい、話題のネタが尽きるとこうして沈黙してしまったのだ。ちなみにクリュウはTシャツの上からダウンベストを着て長ズボンというもので、フィーリアは金色の長い髪をさらりと流し、黄緑色のワンピースの上から黄色いリボンを胸元に付けた白いベストを着ている。ちょっとおしゃれだ。
　何も話し掛けて来ないフィーリアにクリュウはこの状況をどう打破したらいいか必死に考えを模索して壁にぶち当たっていた。
　もうすでに沈黙が続いて五分が経とうとしていた。
（だ、誰か助けてぇッ！）
　クリュウがそろそろ耐えられなくなった気まずさに心の悲鳴を上げた刹那、
　バァンッ！
　すさまじい轟音を立てて家のドアがぶち開けられた。
「な、何ッ!?」

「クリュウッ！」
「エレナッ!?」
そこへ現れたのは肩を激しく上下させながら血走った目でクリュウを睨むエレナだった。酒場からそのまま来たのか彼女の服装は酒場の制服のままだ。
「ど、どうしたの？」
驚いたクリュウは椅子から立ち上がるとぜぇぜぇと荒い呼吸を繰り返すエレナに近寄る。何かあったのだろうか。
まるで酒場からここまで全力疾走して来たかのような疲れっぷりにクリュウは心配そうにエレナに声を掛ける。
「だ、大丈夫？」
クリュウの心配するような声エレナは無視すると突如としてズカズカと部屋に上がり込み、そのまま台所へ一直線に向かって行く。
「ちょ、ちょっとエレナ？」
「台所借りるわよッ！」
言葉自体はお願いの際に使われるものだが、その口調は完全に命令である。そのあまりの迫力にクリュウはつい恐怖でうなずいてしまった。
エレナはそれを確認した様子もなく台所に着くと手に持っていたかごから乱暴に食材を取り出す。
「え、エレナ？　何してるの？」
「決まってるでしょ。夕食を作るのよ」
「え？　それって昨日だけじゃなかったの？」
「気が変わったの。これからは毎日作る」
「えええええッ!?」
驚いて声を上げると、エレナは食材を切っていた手を止めてキッとクリュウを睨み付ける。その瞳の鋭さはもはや辻斬りの勢いだ。
「何？　嫌なの？」
「い、嫌って訳じゃないけど……」
「けど、何よ？」
「いや、何でまた突然そんな事考えたの？」

「私の勝手でしょ？」
「……も、もしかして、フィーリアがいるから？」
ピクリとエレナの体が震えた。
「え？　図星？」
戸惑うクリュウにエレナはキラリと何か不気味な銀色に光る物が向ける。それを見て、クリュウの顔からさーっと血の気が引く。
「ちょ、ちょっとエレナ？　何で包丁を僕に向けてるの？」
恐怖するクリュウに包丁を向けながら、エレナはなぜか頬を赤らめながら鋭い眼光でクリュウを睨み付ける。
「あの女は関係ないわよッ！」
そう叫ぶとエレナは回れ右して再び食材を切り始めた。
包丁の恐怖から解放されたクリュウはこれ以上追及したら命が危ないと悟り、こっそりと台所から離れた。リビングに戻ると不安そうなフィーリアが座って待っていた。
「ど、どうしたんですか？」
心配そうに声掛けて来るフィーリアにクリュウは小さく苦笑いする。どうしたのかと言われても、クリュウの方が理由を知りたいくらいだった。
「僕にもよくわからないけど、今は何もしない方がいいみたい」
「そ、そうですか」
クリュウの言葉に疑問を残すものの、先程のエレナの勢いを見ていたのでフィーリアもそれ以上追求はせずにうなずくと席に戻る。クリュウも素直に席に着いた。
だが幸か不幸か、エレナの乱入により気まずい雰囲気は幾分か和らいだ上に話題まで生まれたので、やっとの思いで二人の会話が再開された。
「クリュウ様とエレナ様は仲がよろしいんですね」
「まあ、幼なじみだからね」
「そうなんですか。どうりで仲がよろしいんですね」
「といっても僕はずっとドンドルマにいたから、会う機会はそうなかったよ？」

そのクリュウの何気ない答えに、フィーリアは驚いて目を見開く。
「クリュウ様はドンドルマのご出身なんですか？」
「いや、この村だよ？　ドンドルマにはハンターになる為の修行としてこの前まで住んでたんだ」
「そうなんですか。私もドンドルマにはよく顔を出していたので、もしかしたらどこかでお会いしていたかもしれませんね」
「そうかもね」
いつの間にか二人の間にあった気まずい雰囲気は完全になくなっていた。おかげで会話が弾み、楽しげな時間が過ぎる。
一方、楽しく話す二人の笑い声を背中に受けながら一人黙々と料理を続けるエレナのイライラのボルテージは急上昇していた。
「少し黙ってなさいッ！　集中できないでしょッ!?」
怒気を含んだすさまじい怒号と同時に台所へのドアに突き刺さった包丁にクリュウとフィーリアは慌てて会話を打ち切った。その時の表情はどちらも何がなんだかわからないといった様子だ。
「あ、あの、私何かエレナ様を怒らせるような事しましたか？」
フィーリアが不安げに訊いてくるが、もちろんクリュウにはそんな事わからない。
「た、たぶん違うとは思うけど……」
自信なさげに返すクリュウに、フィーリアも不安げに台所へのドアの隙間からイライラしているエレナの背中を見詰める。
しばしの不気味な沈黙の中香ばしい匂いが漂い始めた頃、料理を完成させたエレナは料理を持ってクリュウ達の下に来る。
「はいッ！」
バンッと音を立てて料理がテーブルに乱暴に置かれる。皿が割れてしまうんじゃないかというくらいの音に二人はビクリと震えた。
（クリュウ様……ッ！）
怖さで少し瞳を潤ませるフィーリアはクリュウに助けを求めるが、そんなＳＯＳを発せられてもどうしようもないクリュウは困ってしまう。歴戦のハンターであるフィーリアにとってもエレナは相当怖いらしい。

だが、テーブルに並べられた料理はどれも彼女の機嫌とは相反しておいしそうだった。
無言で席に座るエレナ。どうやら彼女も一緒に食事をするらしい。当然といえば当然だが。
「す、すごくおいしそうだね」
「グダグダ言ってないでさっさと食べれば？」
場の空気を和まそうと声を掛けたクリュウだったが、見事に一蹴された。
再び不気味な沈黙の中、エレナは無言で自ら作った料理を食べ出す。
フィーリアがどうしたらいいのかとクリュウをすがるような瞳で見るが、クリュウだってどうしたらいいかなんてわからない。
料理を食べずに見詰め合う二人（エレナ目線）を、エレナは不機嫌そうに睨む。
「何よ。食べないならさっさと寝れば？　どうせ私の料理なんか食べられないんでしょ？」
「そ、そんな事ないよッ！」
そもそも昨日も食べたじゃないか。
クリュウの言葉にも耳を貸さず、エレナはパクパクと食べ進めると、今度はおろおろとしているフィーリアに牙を向ける。
「あなたも食べないなら片付けるけど？」
「え？　あ、その……」
再びフィーリアはクリュウに助けを求める視線を送る。その視線にクリュウは小さくうなずくとエレナを一瞥して料理を口にする。もちろん美味だ。
「ねぇエレナ」
「何よ」
エレナは不機嫌そうにクリュウを鋭い瞳で睨む。そんなエレナを見詰め、クリュウは小さく微笑み素直に感想を述べる。
「これ、おいしいよ？」
「え？　あ、そう……」

エレナは興味なさげに再び視線を皿に戻す。その反応にクリュウが困ったような表情を浮かべるが、エレナはクリュウからは見えない位置で頬をそっと赤らめて小さく微笑んでいた。
「で、では、私もいただきます」
フィーリアもこの流れに身を任せて料理を食べ始める。もちろんエレナの料理は古今東西誰もが食べても味は美味だ。
「あ、本当においしいです」
「でしょ？　エレナの料理は最高なんだ」
「はい。ドンドルマの酒場にも負けてません」
「え？　そ、そうかな？」
二人のほめ言葉の波状攻撃にエレナから険悪な雰囲気が少しずつ消えて行き、次第に友好的なムードが流れ始める。
「こ、これなんか今日のおすすめなんだけど」
エレナがそう言って指差した料理はアプトノスハンバーグに特産キノコ入りソースを掛けたボリュームたっぷりの料理だ。
「うん。これ最高においしいよ」
ハンバーグを食べながらクリュウはお世辞ではなく本心からそう言った。
「ほ、本当？」
「うん」
この言葉がとどめとなり、エレナから完全に険悪な雰囲気が消えた。クリュウにほめられたエレナは嬉しそうに微笑む。
そんなエレナを見て彼女の機嫌が良くなった事を確信し、そっと心の中で安堵するクリュウとフィーリア。
一度機嫌が良くなったエレナはそのまま上機嫌で料理を食べ進める。重い雰囲気もなくなり会話も自然と多くなる。
「へぇ、フィーリアって色んな街や村を回って旅してるんだ」
「はい。どこもとてもすばらしい所でしたよ」
いつの間にか話はフィーリアの旅話になっていた。熱心に気になった事は何でも訊くエレナとそれに丁寧に答えるフィーリア。さっきまでの険悪な雰囲気がうそのように二人は完全に意気投合し

ていた。
一方、そんな女の子二人の会話に参加できずにジュースをちびちびと飲んでその光景を見詰めるクリュウ。いつの間にか仲良くなる二人の横でクリュウは孤立していた。
（なんか……孤立した……）
クリュウは小さく苦笑いすると、話に熱中する二人を邪魔しないようにそっと自室に戻る。話に熱中している二人はそんな彼の退室に気づいていない。
ベッドに腰掛けると壁に立て掛けてあったハンターナイフ改を持ち、砥石を使って刃を磨いて切れ味を直す。激戦を共にした相棒の刃はずいぶんボロボロだったが、砥石で磨くと少しずつだが輝きを取り戻していく。
刃を磨きながらクリュウは今日あった事を思い出す。
「はあ、今日は疲れたなぁ……」
今日は今までで一番刺激的な一日だった。まさかランポスの大群に包囲された上にドスランポスにまで襲われるなんて思ってもみなかった。
「ドスランポスがいたから、あんなにランポスが住み着いてたのか」
だが、ドスランポスの目撃情報は入っていなかった。もちろん村長が悪いのではなく情報がちゃんと回っていなかったからだ。この周囲の村は辺境という事もあって連携力があまりない。それぞれの村が独自にハンターを雇って目的を果たしているので情報があまり回らないのだ。飛竜クラスにもなればさすがに情報は回るが、ドスランポス程度なら回らないらしい。
「もう少し情報を回してほしいな」
ハンターにとって情報の有無は命を左右する重大な事だ。それがちゃんと回らないのはかなり辛いし致命的だ。
今度村長に頼んでみようと考えていると、ハンターナイフ改の刃はすっかり元通りになって光り輝いていた。
「ふぅ、結構使ったな」
砥石は一回限りの消耗品なのでこれだけ刃こぼれしていると結構

な量を使ってしまうのだ。砥石は採掘の時鉄鉱石などに混じって出てくるが、それの量も限られる。今まであまり採掘している暇がなかったのでそのほとんどは売店で購入していた。その為少なからずクリュウの財布に響いているのだ。

すっかり刃が戻ったハンターナイフ改を壁に戻すと、今度はチェーンシリーズを手に取る。せっかくアシュアに修理してもらったのに、今日のたった一度の戦闘ですっかり汚れ、傷ついてしまった。しかも、

「うわぁ……ひどいなぁ……」

唯一チェーンシリーズではない脚甲のブルージャージーの左足部分はドスランポスの爪の一撃を受けて鉱石で作られた装甲は無惨に砕けて大破していた。

「こりゃ、もう使い物にならないな……」

せっかく修理してもらったのに、その日に壊してしまった。クリュウはずーんと罪悪感に胸を押し潰されそうになる。

「でも……このまま脚甲なしってのもまずいしなぁ……」

クリュウはブルージャージーを掴むとエレナとフィーリアが話している部屋に戻り、そのまま入り口のドアに向かう。

「クリュウ様？　どちらに行かれるんですか？」

話に夢中だった二人のうち、クリュウの行動にいち早く気が付いたフィーリアが不思議そうに質問して来た。そんな彼女のクリュウは苦笑いしながら答える。

「ちょっと、アシュアさんの所にね」

「アシュア様？」

「ああ、この村の鍛冶師よ」

エレナの言葉を聞くとフィーリアは「なるほど……」と何か考えた後スッと立ち上がってクリュウに駆け寄った。

「え？　どうしたの？」

「私もついて行きます」

「「え？」」

突然の発言に二人は驚く。そんな二人にフィーリアはそっと微笑

む。
「これからこの村に腰を据える訳ですから、ごあいさつをしておこうかと。鍛冶師の方にはこれからたくさんお世話になると思いますから」
　確かに、ハンターが最も世話になるのは依頼を受注する担当（村長やエレナ）、その村の村長、そして武具の生産・強化・調整をする鍛冶職人だ。あいさつしておいた方がいいだろう。
「わかった。じゃあ一緒に行こっか」
「はい」
　二人で勝手に話を進めて出て行くのを見て、エレナは慌てて立ち上がる。
「ちょッ、ちょっと待ちなさいよ！　私も行くわッ！」
　そう言いながらエレナも慌てて二人を追い掛けて駆け寄る。そんな彼女にクリュウは不思議そうに首を傾げる。
「別に構わないけど……エレナが来る理由は何？」
「べ、別にいいでしょ？　私がついて行っちゃダメだって言うの？」
「そんな事ないけど……」
　不思議そうに自分を見るクリュウの視線に「な、何よ」と不機嫌そうにエレナは唇を尖らせる。その頬は月明かりの下で隠れているが幾分か赤く染まっている。
　クリュウはとりあえずそれ以上は追求せず、フィーリアを向く。
「じゃあ行こっか」
「は、はい」
「早く行きなさいよバカ」
　エレナに後ろから軽く蹴飛ばされ、クリュウは慌てて歩き出す。
　クリュウ、フィーリア、エレナの三人は闇夜の中アシュアの工房に向かって歩き出した。

第１４話　心優しき女鍛冶師

　アシュアの工房は夜だというのに煙突からは絶えず煙が上がっていた。こんな時間までどうやら彼女は仕事をしているらしい。大したものだ。
「ここがその鍛冶師様のお宅なのですか？」
「そうだよ。アシュアさんっていうかなりの腕を持った、ちょっと変わった方言を使う女鍛冶師さんなんだよ」
「なるほど、一筋縄ではいかないという訳ですね」
　フィーリアは興味深げにアシュアの家を見詰める。これから自分がお世話になる所がどんな所か見定めているらしい。
「そのアシュア様というのは、一体どんな方なのですか？」
「それは僕よりエレナに訊いてよ。この村にいる時間は彼女の方が長いんだからさ」
「わ、私ッ？」
　いきなり自分に話を振られて驚くエレナにクリュウは当然でしょと言いたげな視線を送る。フィーリアは今にもエレナに訊きそうな勢いだ。
「い、いきなり私に振られても、どう答えればいいか困るわよ」
「どうって、普通に答えればいいじゃん」
「そうなんだけど……別にあんたが今言った事以外特にないわよ」
「そうなんですか？」
　フィーリアの問いにエレナは「そうなのよ」と答えて小さく微笑む。
「別に口調が変わってる以外はごく普通の人だから、説明するような事は何もないのよ」
　エレナの返しにクリュウも「それなら仕方ないか」と納得する。確かに今わざわざ取り上げて言うような事はなかった。
「まあ、会ってみればわかる事だしね」
「それもそうね」
　基本的に楽観的な性格のこの二人はさほど気にした様子もなく一方的に完結し、一人まじめなフィーリアだけが疑問符を頭に浮かべて

いた。
「アシュアさん。いますか？」
　クリュウがドアを叩くと、「ふわぁーい」と軽いノリの返事が返って来た。少ししてからドアが開くと首からタオルを掛け、片手には小さなハンマーを握ったアシュアが顔を出した。
「誰やと思うたらクリュウくんやないの。こんな夜分遅くに何の用なん？　それにエレナちゃんまでおるし……ほんで、そっちのべっぴんさんは？」
　アシュアは夜に訪ねて来たクリュウ達を快く歓迎してくれた。そして初めて見るフィーリアに興味津々の様子だ。そんなアシュアにクリュウはフィーリアを紹介する。
「この子はフィーリア。今日からこの村に一時的だけど住む事になったハンターです」
「どうも、以後お見知りおきを」
　クリュウの紹介にフィーリアもうやうやしく頭を下げる。そんな彼女にアシュアは屈託のない笑みを浮かべて口を開く。
「おぉ、こんなかわええ子もハンターになる時代なんやなぁ。うちはアシュア。この村で鍛冶師をしとるんやけど、何か武具関係で困った事があったらうちに任しときぃ」
　胸をドンと叩いて頼もしげに微笑むアシュア。見た目は美人なのにこうした所は男顔負けの頼もしさを発揮する。そんな彼女を見てエレナはにっこりと笑ってフィーリアを見る。
「ね？　いい人でしょ？」
「はい」
　エレナの言葉にフィーリアも優しく微笑んだ。すると、そんな楽しげな二人の横で少し落ち着きのない表情をしているクリュウにアシュアが気づく。
「クリュウくんどうしたん？　さっきからキョドってるけど」
「あ、いや、その……」
　クリュウは反射的に手に持っていた物を背後に隠す。そんな彼のバレバレな行動をアシュアはしっかりと見ていた。

「ん？　今何隠したん？」
アシュアの問いにクリュウはドキッとして「いや、そのぉ……」とつぶやく。だが、逃げられないと覚悟を決め、クリュウはそっと隠した物を前に出す。
「あ、あの、これ――ごめんなさいッ！」
慌てていたので経緯なしにいきなり謝った。戸惑うのはアシュアの方だ。
「いきなり何や――って、これ……」
アシュアの目の前に差し出されたのは――大破したブルージャージーだった。
クリュウは「ごめんなさいッ！」ともう一度頭を下げて謝る。アシュアがせっかく徹夜までして整備してくれたのに、いきなり壊してしまったという現実に、クリュウは改めて胸が押し潰されそうになる。
「せっかく整備してもらったのに、たった一度の戦闘でこんなにしてしまって、本当にごめんなさいッ！」
必死に頭を下げて謝るクリュウにエレナとフィーリアは不安そうに見詰める。特に事の経緯を知っているフィーリアは特に不安そうだ。
一方クリュウの必死の謝罪を無視しながらアシュアは壊れたブルージャージーを受け取ると破損状況を確認する。と言っても、もはや破損ではなく大破という修理は絶望的なものであったが。
「……これはまたど派手にぶっ壊れとるなぁ」
「す、すみませんッ！」
「別にあんたを責めてる訳じゃないって」
アシュアは気にした様子もなく屈託のない笑みを浮かべる。その笑顔に、クリュウの中にある不安が少しだけ和らいだ気がした。
「武具なんてもんはいつかは壊れるもんや。そんなのいちいち気にしてたらハンターなんてやってられないやろ？」
「そ、それはそうかもしれませんが……」
「せやから、クリュウくんが気にする事なんてこれっぽっちもないん

やで？」
　アシュアはそう笑い飛ばしてクリュウの肩をポンポンと叩いた。そんな彼女の言葉にクリュウはぱぁっと表情が明るくなる。すると、そんな彼を今度は真剣な顔でアシュアは見詰める。
「そんであんた、怪我はないんか？」
「え？　あ、はい。何とか大丈夫です」
　その答えにアシュアは「そっかそっか」と今まで以上に嬉しそうに笑った。どうやら防具が大破した事よりもクリュウの身を心配してくれていたらしい。何とも心優しい人であろうか。
「怪我がなくて何よりや。ああ良かった良かったでぇ」
　心の底から嬉しそうにアシュアは屈託のない笑みを浮かべる。本当にこの人の笑顔は見ていて清々しい。心の底から支えられる。
　クリュウはそんなアシュアの笑みに心の中にかかっていた靄（もや）のようなものが溶けていくような気がした。
「でもどうするん？　こんなんになったらもう使いもんにならんけど」
　アシュアの至極真っ当な問いに、クリュウは困ったように苦笑いする。そういえばその先はまるで考えていなかった。
「あぁ……どうしましょう？」
「それはあんたが決める事やろうが」
「そうは言われても……どうしましょう」
　うーんと考え込むクリュウに、アシュアはしばし何かを考えていたようだが突如ポンと手を軽く叩いた。何か名案が浮かんだのだろうか。
「せやったらランポスグリーヴなんてどうや？　材料は十分やろ？」
　ランポスグリーヴとはランポスの素材と鉄鉱石を使った脚甲である。それなりに頑丈なランポスの鱗を使っているので、ブルージャージーよりは防御力はいい。
「確かに、ランポスの防具なら初級モンスターの攻撃ぐらいなら耐えられますね」
　フィーリアも笑顔で賛同してくれた。その横ではちんぷんかんぷ

んのエレナが疑問符を頭に浮かべていた。
「私にはサッパリわからないわね」
「そりゃそうさ。一般人にはわからない領域だよ」
クリュウが笑いながら言うと、エレナはバカにされたような気がして顔を真っ赤にするとキッとクリュウを睨む。
「何よ。ケンカ売ってるの？」
「え？　ち、違うよッ！」
唇を尖らせてプイッと背を向けるエレナにクリュウは慌てて誤解を解こうと右往左往する。そんな情けない事この上ないがどこか心和むクリュウを見てアシュアとフィーリアはそっと笑った。
「んじゃ、ランポスグリーヴでええんか？」
「あ、はい」
「ほんじゃ、ちゃんと素材を持って来てぇな」
「は、はい」
「では急いで取りに行きましょう。善は急げです」
「うんッ――おぐッ!?」
優しく微笑むフィーリアに笑顔で返事したクリュウのみぞおちに見事エレナの強力な蹴りの一撃が炸裂した。涙目になって痛みに耐えるクリュウをエレナは見下したような目で睨む。
「何すんだよいきなりッ！」
マジで痛いので結構本気で怒るクリュウだが、エレナはそんな彼をキッと睨むと不機嫌そうにプイッとそっぽを向く。
「知らない」
「知らないって……自分の事でしょ？」
「うるさいな！　知らないったら知らないのッ！」
頬を赤らめて怒り続けるエレナにクリュウは疑問符を浮かべまくるが、当然彼女が機嫌悪い理由なんて彼にはわかる訳もない。
フィーリアの手を借りて立ち上がったクリュウだったが、間髪入れずにエレナの跳び蹴りが炸裂し、クリュウは地面の上にぐったりと倒れた。
さすがにキレたクリュウと不機嫌全開なエレナは家に戻る間ずっ

と言い合い続け、フィーリアはケンカを止めようとするが結局何もできずおろおろとしているだけだった。
家に戻り、ケンカがひと段落した所でクリュウは一人でアシュアに素材を渡しに行った。アシュアはそれを笑顔で受け取ると家の中に入り、途中だった仕事を再開する。クリュウの依頼は優先してやりたいので、どうやら漁師達に作る予定であった銛（もり）は少しだけ予定より遅れそうだ。
「ほんま、クリュウくんの頼みには勝てへんなぁ」
また新たに入った注文にアシュアは苦笑しながら予定を組み直すのであった。

第15話　新たなる装備を目指して

天気は雲ひとつない快晴のある日。村は今頃洗濯日和で主婦達が洗濯に精を出しているだろう頃、クリュウはいつものようにセレス密林で狩りを行っていた。

「せりゃぁッ！」

突進しながらその勢いを利用してクリュウは剣を横になぎ払う。その一撃で目の前にいたランポスは断末魔の悲鳴を上げて吹き飛び、地面に倒れた。

クリュウはすぐに剣を腰に戻すと、剥ぎ取り用ナイフに持ち替えて手早く剥ぎ取る。もう何度もしてきた事なので慣れた手つきだ。

「ふぅ……」

「この辺一帯のランポスは、もういないようですね」

そう言って涼しい笑顔をしながら近づいてきたのはフィーリア。身を包むのは深緑色のレイアシリーズ。上級飛竜である雌火竜リオレイアから剥ぎ取った鱗や甲殻を使った強力な防具だ。背中にはこれまたリオレイアの素材を使ったヴァルキリーファイアというライトボウガンが背負われている。

クリュウはそんな強固かつ貴重な上級装備を身に纏ったフィーリアを見て小さくため息した。

「あはは、やっぱりすごいな。レイアシリーズは」

「そんな事ありませんよ」

そう謙遜するが、並のハンターでは敵わない飛竜の女王であるリオレイアの素材をふんだんに使った防具だ。そのすごさは一般的に使われている防具とは桁違いだ。

「それに比べて僕のは……」

そう言って苦笑いしながらクリュウは自分の防具を見詰める。

頭は何も付けていないが、それ以外はチェーンメイル、チェーンアーム、チェーンライトベルトという初心者丸出しの装備だ。唯一そんな中足の装備だけは新鋭装備。ランポスの鱗と鉄鉱石を使ったランポスグリーヴに変わっている。アシュアが壊れたブルージャー

ジーの後継として作ってくれたのだ。
「履き心地はどうですか？」
微笑ましく見詰めながら問うフィーリアに、クリュウは嬉しそうに微笑みながら爪先で軽くコンコンと地面を蹴る。
「うん。よく足に馴染むよ」
「そうですか。良かったですね」
「あはは、フィーリアの装備には負けるよ」
「もう、またそんな事言って」
しつこく言ってくるクリュウに少し怒るフィーリア。そんな彼女を見ながらクリュウは「ごめんごめん」と笑いながら軽く謝る。
二人はそのまま会話をしながら別のエリアへ移動する。今まで狩り場では一人だったクリュウにとっては、こうした移動中の会話も楽しいのだ。
一方、フィーリアはクリュウの話を聞きながらもしっかりと周囲を警戒する。その辺はやっぱり歴戦のハンターという訳だ。
「ここは以前私達が出会った場所ですね」
「同時に、ドスランポスに襲われた所でもあるけどね」
そう言ってクリュウが見詰めたのは、まわりを岩に囲まれた道はそれぞれ反対側の二ヶ所しかないまるで闘技場のような場所だ。
以前クリュウはここでランポスの群れとドスランポスに襲われた死ぬかと思った。同時にフィーリアと出会った場所でもあるのだが。
「ドスランポスは仲間のランポス達と共に各地を回るモンスターです。クリュウ様の装備を整えるのに一週間掛かりましたので、おそらくはもう他の場所に移動しているでしょうが、警戒は必要ですね」
「確かに、もうあんな思いは嫌だからね」
そう言ってクリュウは苦笑いする。確かに、そう何度も死ぬ覚悟はしたくはない。
フィーリアは「そうですね」と小さく微笑むと鬱蒼（うっそう）と茂る木々を見回す。だが、そこには目的の青い生物は存在しなかった。フィーリアは残念そうに小さくため息する。
「ドスランポスが消えてしまったので、ランポスの数もずいぶんと減

りましたね。これではランポス鱗が手に入りませんね」
　そう。今回の目的はランポスの鱗や皮、牙の採取である。それとそれぞれの腰に掛けてあるピッケルで鉱石の採掘も行う予定だった。
「そうだね、これじゃあランポス装備は揃わないよ。あと少しなのになぁ」
　クリュウは残念そうにため息交じりにつぶやく。
　今回こうしてランポスの素材を集めに来た理由はランポス装備を作る為だ。新米ハンターが一番最初に討伐する人間に害をなすモンスター。それがランポスである。その装備は新米ハンターが一番最初に手に入れる防具だが、その性能はチェーンシリーズより断然上である。これからの事を考えてどうしても装備しておきたい。
　実際、すでに脚に装備しているランポスグリーヴは履き心地はいいし、何より軽い。鉱石だけのチェーンシリーズと違って、ランポス装備の特徴はなんといっても要所要所を守っている頑丈で軽いランポスの鱗だ。ベーシックな装備ながらその安全性と利便性、運動性は折り紙つきである。
「ランポスシリーズですか、懐かしいですね。私も最初は装備してました」
「フィーリアも？」
「そうですよ。何も最初からレイアシリーズをつけてた訳じゃありませんよ？」
「ははは、それもそうだね」
　クリュウがおかしそうに笑うと、フィーリアも小さく笑みを浮かべた。その時、フィーリアの顔から笑みが消えスッと瞳が細まり、クリュウの横で突如屈んだ。
「フィーリア？」
「……ランポスの足跡です」
「え？」
　クリュウも慌てて確認すると、確かに柔らかな腐葉土が何かの力で浅く沈んでいる。なるほど。何かの足跡らしいが、言われないと絶対に気づかないだろう。

「かなり新しいものです。きっと近くにまだランポスは残っていますよ」
　フィーリアはそう言って立ち上がるとランポスの足跡が向かっている先を見詰める。そんな彼女に、クリュウは改めて感心する。
「さすがフィーリア。よくそこまでわかるね」
「狩り場ではこうした積み重ねが必ず役に立つんです。特に飛竜種と戦う時は情報収集がまず最初に必要な事ですから」
「情報って？」
「飛竜種の種類、生態、生息範囲、狩り場の状態などたくさんありますよ」
「へぇ、僕は今までそんな事考えてなかったけど、狩りって奥が深いんだね」
「鳥竜種はそれほど情報を必要としませんが、これから大型モンスターを狩る場合には必ず必要になりますよ」
「うん。覚えとく」
　クリュウはそう言って忘れないように覚える。そんなクリュウの肩をポンと叩き、フィーリアは「先を急ぎましょう」と言って歩き出す。
　二人は足跡を追って進む。しばらく進むと、深い木々に覆われた洞窟の入り口が姿を現した。洞窟の奥は所々の穴から差し込む日差しだけが暗い洞窟内を薄暗く照らし上げている。どこかと繋がっているのだろうか、洞窟からは少し肌寒い風が吹き出しており、頬を撫でるその冷たい風にクリュウは身を震わせる。
「洞窟の中は、あまり入った事がないんだ」
「そうなんですか？」
　フィーリアが驚いたように目を見開く。ここは彼がよく使っている狩場なので、てっきりとっくの昔に制覇していると思っていた。
「うん。洞窟の中って狭いでしょ？　僕みたいな新米ハンターじゃそんな所でランポスに囲まれたらおしまいだからね。あんまり入らなかったんだ」
　クリュウの説明に、フィーリアは納得したようにうなずく。

「そうですか。それは確かにそうかもしれませんね。ですがランポスはこうした洞窟を巣にする事が多いですし、何より洞窟の中は鉱石の宝庫です。鉄鉱石はもちろんうまくいけばマカライト鉱石も手に入るかもしれませんよ？」
　マカライト鉱石とは別名《燕雀石》と呼ばれる精製するとマカライト鋼となる良質な金属が取れる鉱石の事であり、初期防具などの素材に使われる事が多い、鉄鉱石よりは貴重な鉱石だ。
「そうだね。とりあえず入ってみようか」
「はい」
　クリュウは一応何度かは鉱石採掘の為に訪れた事があるので、フィーリアを案内する。もちろん入ってすぐの場所までだ。その奥はクリュウにとっても未経験だ。
　フィーリアはヴァルキリーファイアを構えて通常弾ＬＶ２を装填し付近を、特に後方を警戒しながら歩く。背後から奇襲を受けるのがこの世の中で最も危険な事だ。
　一方、クリュウもハンターナイフ改を構えて前方を警戒する。フィーリアのおかげで警戒する方向が限定されてより集中できる。こういう時こそ仲間という存在が嬉しい事はない。
　岩陰に隠れながら前方へ進んでいくと、細い通路から一転して大きな広場に出た。上には大きな穴があり、そこから太陽の光が注ぎ込んでいる。その光の恩恵を受けて、広場には植物がひっそりと生えている。
「気をつけてください。ここはどうやら飛竜の巣に適した地形のようですね。一応今現在飛竜の目撃情報はありませんので、大丈夫だと思いますが」
　そう言うが、フィーリアはより警戒を強める。
「とりあえず、この先に鉱石採掘に適した場所があるから、そっちに行こう」
　クリュウは付近にモンスターがいないか確認する。すると、小さな猪がノロノロと動いていた。あれはモス。比較的温厚なモンスターで、こっちから攻撃しなければまず襲って来たりはしない。彼らはキ

ノコが好物なので、キノコ採掘の時は彼らの後をついていけば特産キノコなどのキノコが手に入る。ハンターの基本知識だ。
「モスがいるけど、あれは無視しよう」
「はい」
二人は広場を横切る。途中モスが突然現れた侵入者を一瞥してきたが、すぐに興味がなくなったのか再び鼻をヒクヒクさせてキノコを追う。そんなモスを何気なく目で追いかけていると、
「あれは、もしかして厳選キノコ？」
イージス村の特産物の中にはキノコがある。ドンドルマなど都会での需要が高いキノコは村の資金源となっている。そして、厳選キノコとは普段取れる特産キノコの数倍から時には十倍の高値で取引される高価なキノコだ。味がいいのはもちろん、圧倒的にその数が少なく希少価値が高い。《厳選》という名前は伊達じゃないのだ。
今回の目的はあくまでもランポスの素材と鉱石の採掘だが、厳選キノコならちょっとした臨時収入になる。
クリュウは嬉しそうに駆け寄る。彼自身厳選キノコは一度もお目にかかった事はない。フィーリアは付近を警戒しながらも嬉しそうにキノコに駆け寄るクリュウを微笑んで見詰めた。
クリュウはキノコに近づくと驚いた。
「うわ、こんな大きなキノコ初めて見たよ。これは高く売れるぞぉ」
クリュウの言葉に、フィーリアの顔から笑みが消えた。
厳選キノコは普通のキノコと大して大きさは変わらないはず。驚くほど大きなキノコ――それはまだ彼には教えていない危険な存在

――

「クリュウ様ッ！　離れてくださいッ！」
「え？」
フィーリアの悲鳴のような声に振り返った刹那、
「ウキャキャァーッ！」
奇声を上げて、土の中から何かが飛び出して来た。
「うわッ!?」
クリュウは突然の事に尻餅をついてしまう。そんな彼の目の前に

は不気味な仮面を被った小さな人型のモンスターが。
「チャチャブーですッ！」
フィーリアの放った目の前のモンスターの名前に、クリュウは驚く。
チャチャブーとは奇面族と呼ばれる獣人種の一種だ。しかし同じ獣人種でもアイルーとメラルーに比べてその生態はかなり謎に包まれていて、ギルドでも把握しかねている。わかっているのは、チャチャブーは大きなキノコの傘や石を被って地面に潜り、近くに来た者に突如として姿を現して攻撃するという事。アイルーやメラルーと違って人間に友好的ではなく、かなり好戦的。小柄な体形を生かしてすばやい動きで相手を翻弄（ほんろう）し、手にした剣で斬り掛かり、隠し持った爆弾を投げつけてくる。人間よりも小さいながらも筋力は人より強い。その一撃は下手なモンスターの攻撃よりも強力……と、モンスター図鑑に書いてあった事を思い出す。
「クリュウ様ッ！」
フィーリアはすぐさま引き金を引いた。撃ち出された弾丸は寸分の狂いなく小さなチャチャブーへと吸い込まれ、その仮面の一部を粉砕する。
「ウキャッ!?」
突然の攻撃にチャチャブーの動きが止まる。
「今のうちに早く逃げてくださいッ！」
フィーリアの声に慌ててクリュウは立ち上がって逃げ出す。が、
「ウキャキャッ！」
チャチャブーはその身に合った小振りの剣を振り回してクリュウを追う。フィーリアは連続して弾倉の中の全弾を撃ち込むが、すばやく変則的で、しかも小さなチャチャブーにはなかなか狙いが定まらないのか全て外れて地面などに突き刺さる。
「ウキャァッ！」
チャチャブーの声にクリュウはとっさに振り向くと盾を構える。するとその瞬間、跳躍したチャチャブーが剣を振り下ろした。その攻撃は盾によって防げたが、その威力はランポスの比ではない。ビリビ

リと腕が痺れた。
「くぅッ！」
　クリュウは右手に構えた剣を薙ぎ払うようにして横一線に振るう。が、チャチャブーはそれを難なく回避した。しかも見事に着地して
「キャキャッ！」とまるであざ笑うかのように声を上げる。
「このぉッ！」
「クリュウ様ッ！」
　フィーリアの声を無視し、クリュウは剣を振るう。だが、その全てをチャチャブーはまるで踊るようにして避ける。なんてすばやいのだろうか。すると、いきなりチャチャブーが跳躍した。突然の事に対処できず、クリュウは一瞬チャチャブーの姿を見失う。
「ど、どこッ!?」
「クリュウ様！　後ろッ！」
　フィーリアの声に振り返るとそこには――小さな爆弾を構えたチャチャブーの姿が。
「しまっ――」
　言い終わる前に、チャチャブーは爆弾を放った。とても逃げられる距離ではない。反射的に盾を構えるのが精一杯だった。
　ドガァンッ！
　すさまじい爆音と爆風にクリュウは簡単に吹き飛ばされ、壁に背中を強打した。肺の中の空気が一瞬で吐き出され、咳き込む。
「クリュウ様ッ！」
　フィーリアは牽制の為に再装填したばかりの弾を全弾チャチャブーに撃ち込み、急いでクリュウに駆け寄る。
「クリュウ様！　お怪我はありませんか!?」
「う、うん……何とか、大丈夫……」
　クリュウはそう答えて痛む身体を無理やり起こす。が、
「うぐぅ……ッ！」
　突然右肩に痛みが走り、顔がゆがむ。
「ど、どうされたんですか!?」
「どうも、さっきの爆風で跳ばされた時、右肩を強く打ち付けたみたい

……」
右肩に痛みが走る。走る事には問題なさそうだが、戦闘となれば別だ。利き腕が使えないのでは戦う事なんてできない。
痛む肩を押さえるクリュウの前に、フィーリアがヴァルキリーファイアを構えて立ち塞がる。
「クリュウ様は私が守ります！」
そう言うと、フィーリアは突撃してくるチャチャブーをスコープで捉えると間髪入れず連射する。細かく動き回る小さな相手を撃ち抜くのは難しいが、自分に向かって来るのは別だ。敵の向かうべき方向は決まっているので、自(おの)ずと迎撃すべき場所も限定される。一直線に迫るチャチャブーを撃ち抜く事など、フィーリアの腕なら造作もなかった。
無数の銃弾を受けてチャチャブーは戦況の不利を悟ると、慌てて地面に潜った。落としてしまったのだろうか、チャチャブーの仮面が不気味に残されている。
チャチャブー撃退に成功したフィーリアは急いでヴァルキリーファイアを背中に戻すとクリュウの前で屈む。
「クリュウ様。具合はいかがですか？」
「うん、平気。大した怪我じゃなかったみたい」
そう言って笑うクリュウを見詰めるフィーリア。その表情は全てお見通しと言いたげで、
「クリュウ様」
「え？　あ、いでぇッ！」
フィーリアの無言でクリュウの右肩を掴んだ。隠してはいたが、結構痛かった所を鷲掴みにされクリュウは悲鳴を上げる。
「な、何するのぉッ！」
「やはり、怪我をされてますね」
「うっ……」
「見せてください」
フィーリアはクリュウのチェーンメイル部分を脱がせると、インナーに隠れた青いあざを目にする。

「確かにそれほどの怪我ではありませんが、痛いでしょう？」
「うん……」
　フィーリアはクリュウの肩にすり潰した薬草を塗り込んだ包帯を巻いて応急処置をすると、再びチェーンメイルを付ける。
「痛みますか？」
「少し。だけどさっきよりは楽になったよ」
「そうですか」
　フィーリアは笑顔を浮かべるとおもむろに立ち上がった。
「では、帰りましょうか」
「え？　で、でもまだランポスの素材が……」
　驚くクリュウに、フィーリアは笑顔で自分の腰に下げていた素材袋を差し出した。
「私のランポスの素材を差し上げます。これだけあれば足りるでしょう」
「で、でもいいの？　それはフィーリアのじゃ……」
「いいんです。私はランポスの素材は使いませんので、クリュウ様に使ってほしいんです。その方がこの素材も喜びますし」
　笑顔で言うフィーリアに、クリュウは「ありがとう」と笑顔で礼を言って受け取る。ちゃんと素材袋を受け取ってくれたクリュウに笑顔を向けると、フィーリアはそっと手を差し伸べた。
「さあ、帰りましょう。私達の戻るべき場所へ」
「うん」
　クリュウはフィーリアの手を取って立ち上がると、並んで歩き出した。
　負傷したクリュウをかばうように、フィーリアはヴァルキリーファイアを構えて全方位を警戒しながら歩く。そんな彼女を見て、クリュウは改めてこの年下の師匠の存在をありがたく思うのだった。
「い、いだいってばぁッ！」
「うるさいわね！　男だったらこれくらい耐えなさいよ！」
「え、エレナ様！　そのように乱暴をなされては……ッ！」
　わいわいと賑やかなクリュウの家。クリュウが怪我をしたと聞い

たエレナはクリュウの怪我の手当てをしに来たのだ。そこまでは良かったのだが、素直じゃないエレナは乱暴にその手当てをするのでクリュウは悲鳴を上げるし、エレナは怒鳴るし、フィーリアはあわあわとするしと相変わらずなクリュウ家。

五分間の死闘の後、クリュウは涙目で巻かれた包帯を見詰める。

「し、死ぬかと思ったぁ……」

「大げさね。これくらい耐えられなくて何がハンターよ」

「え、エレナ様。あれはいくら何でも……」

腰に手を当てて呆れた声を上げるエレナに、フィーリアがあわあわとする。もう結構見慣れた光景だ。

クリュウはとりあえず立ち上がると、用意していた素材の入った袋を手に取る。そんなクリュウにエレナが驚く。

「ど、どこに行くのよ」

「アシュアさんの所へ。新しい防具の作ろうと思って」

「ふーん、なら付き合ってあげる」

「え？」

そう言ってエレナはクリュウの手から袋を奪い取る。ずっしりと重い感覚に一瞬驚くが、すぐにグッと力を入れて耐える。

「け、結構重いわね」

「だ、大丈夫？」

不安そうに見詰めるクリュウに、エレナは偉そうにわざわざ胸を逸らす。

「当たり前でしょ。私はあんたみたいなへなちょこじゃないの」

「べ、別にへなちょことかは関係ないでしょ。そもそも僕はへなちゃこなんかじゃないよ」

「ふん。怪我人は黙って言う事を聞いてなさい」

そう言ってエレナはクリュウやフィーリアを置いて勝手に出て行ってしまう。

「ちょ、ちょっと待ってよッ！」

「クリュウ様!?　エレナ様まで！　待ってください！」

二人も慌てて家を飛び出す。相変わらず無駄ににぎやかな日常の

クリュウ達だった。

第16話　ランポスシリーズ

「さあッ！　商隊もいなくなったし、フィーリアは私の家に来なさい！」

ある朝、クリュウ手作りのパンと目玉焼きという簡素な朝食を食べていたクリュウとフィーリアは、突然のエレナの登場に口にしたパンを落とし掛けた。

「い、いきなり何？」

村の小さな牧場の絞りたての牛乳を飲み、クリュウが怪訝そうに問う。フィーリアも突然の事に戸惑っている。

そんな二人を睨みながらエレナは堂々と家の中に入って来ると、バンッとテーブルの上を叩いた。その音にフィーリアはビクリと震える。

エレナはキッと二人を睨む。

「フィーリアがここに住む事になったのは、商隊が逗留していたからでしょ？　だから、その商隊がいなくなった今日から、フィーリアは私の家で暮らすの。これ決定事項」

昨日長い間逗留していた商隊が出て行った。彼らは雪山を越えていく予定だったのだが、雪山の天候が悪く、良くなるまで待っていたのだが、昨日ようやく天候が整ったので出発したのだ。仲良くなった商隊の人達と名残惜しい別れをした。それが昨日だ。

そして、すっかり家に余裕ができたのでエレナはこうして自分の家にフィーリアを誘いに来たのだ。元々彼女がここにいる理由は家不足だったからだ。家が足りている今、もうここにわざわざ居る必要はない。そんな思いを胸に抱いてやって来たエレナだったが、その考えはすぐに崩壊する事となった。

「あ、いえ。私はこのままクリュウ様の家に継続させていただきます」

フィーリアはにっこりと邪心のない天使のような笑顔でそう答えた。その瞬間、エレナの高圧的な笑みが崩壊した。

「な、何でよぉッ！」

エレナは慌てて彼女に駆け寄る。その勢いにフィーリアは「はわわ

わッ！」と慌てて姿勢を正し、慌ててその理由を述べる。
「えっと、一緒に暮らしていた方が色々と便利なんです」
「何がよぉッ！」
「そりゃハンターの知識とかだよ。こうした日常の会話の中でもそういう話はするんだから」
「クリュウは黙ってなさい！」
　せっかくわざわざ説明したのに、見事に一蹴されてしまった。クリュウはしゅんと小さくなってパンをかじる。
「で、でも、いくら何でも若い男女が同じ屋根の下にいるのはダメよ！」
「え？　でも今まで何も問題なく生活できましたよ。ねぇクリュウ様」
「へ？　あ、まぁ……」
　はっきりとした答えが言えない。実は何回か不用意にドアを開けてフィーリアの下着姿を見てしまった事があったのでクリュウも答えづらい。だが、そんなクリュウの煮え切らない態度に長い付き合いのエレナはピンとくる。
「クリュウ。あんた何か隠してない？」
　思わず飲んでいた牛乳を噴きそうになったのを、慌てて飲み込む。彼女のこうした勘の鋭さには小さい頃から悩まされてきたものだ。
「う、ううん。何もないよ」
「本当？　もしうそだったら、屠（ほふ）るよ？」
　マジで目が怖いです。
「う、うん。本当だから。信じて」
　クリュウは平静を装う事に努めた。ここでバレれば自分だけでなくフィーリアにも迷惑がかかってしまう。
　エレナはそんなクリュウを訝しげに見詰めていたが、やがてため息をすると小さく微笑んだ。
「わかったわ。その件に関しては目をつむっててあげる」
「あ、ありがとう」
「でも！　同居は許しません！　フィーリアにはうちに来てもらいわ

よ！」
　結局話は元に戻ってしまった。どうやらまだ彼女は諦めていないらしい。クリュウとフィーリアは困ったように顔を見合わすと、そんな二人にエレナは頬を不機嫌そうに膨らませる。
「何よ。不満だって言うの？」
「いや、その。もうフィーリアの狩りの道具とか全部置いてあるし、持ち出すのは大変だよ？」
「問題ないわ。私の家の倉庫は広いもの」
　ふふんと誇らしげに言うエレナ。一体何が誇らしいのかさっぱりわからない。でもそこを追求すればきっと返事は蹴りになるだろうと予想し、クリュウはそれ以上の追及はしなかった。
「武具や素材とかいっぱいあるけど」
「問題ないわよ」
「ランポスとかの皮もあるけど」
「……も、問題ないわよ」
「爆弾なんかもあるけど」
「……」
　エレナはついに黙ってしまった。さすがに家に爆弾を置くなんて想定していなかったのだろう。一応信管は抜いてあるので火災でも起きなければ爆発の危険性はないが、それでも一般人である彼女にとっては怖いだろう。
　クリュウは押し黙ったエレナを畳み掛けようと追撃する。
「それに狩りに関しての話し合いとかもここでできるし」
「むぅ……」
「次の狩りへの準備も一緒にできる」
「むむむ……」
「正直言ってこのままの方がいいんだけど」
「むむむむむ……ッ！」
　エレナはなぜか悔しそうにムキーッと地団駄を踏む。そんな彼女をなだめるようにフィーリアが笑顔を浮かべながら声を掛ける。
「エレナ様。心配なさらないでください。私とクリュウ様の仲は極め

て良好です。ケンカをするなんて事はありませんから」
フィーリアの言葉にエレナは押し黙ってしまう。黙る直前「仲がいいから困るのにぃ……」と何か不満げに言ったのは訊くべきなのだろうか。
エレナはしばしクリュウとフィーリアの顔を見比べた後、悔しそうに再び地団駄を踏む。
「あぁもうわかったわよ！　好きにすればいいじゃない！　勝手にすればいいじゃない！　ふんだッ！」
エレナは突然逆ギレしてそう叫ぶと、「バカバカバカクリュウッ！」と怒鳴りながら大股で出て行ってしまった。
嵐のようにうるさかったエレナが去ると、残るのは朝の静けさだ。
クリュウとフィーリアは困ったように互いの顔を見る。そんな二人の目の前にある目玉焼きからは、もう湯気は出ていなかった。
朝のちょっとした騒動の後、クリュウとフィーリアはアシュアの工房に向かった。そろそろ頼んでおいた例の物が完成している頃だったからだ。
思ったとおり、アシュアの工房の煙突からはもう煙は出ていなかった。二人はそれを確認すると早速ドアに向かう。
「アシュアさん！　僕です！　クリュウです！」
ドアを叩いて呼び掛けるがなぜか返事はない。不思議そうに二人は顔を見合し、クリュウはドアノブを回すと、意外にもカギは掛かっておらずドアは開いた。
「あ、開いてる……」
「入ってみましょうか？」
「う、うん」
クリュウはドアを完全に開けてフィーリアと共に中に入る。カーテンを閉め切っているせいか、奥の部屋はかなり暗い。そっと暗い中を進むと、何かに躓（つまづ）いた。
「う、うわぁッ！」
突然の事に対応できず、クリュウはそのまま転んでしまった。
「クリュウ様!?」

しかし意外にも倒れたのにそれほど痛くはなかった。何か柔らかいものが衝撃から助けてくれたらしい。さて、この柔らかいものは何だろう。顔を守ってくれた特に柔らかい所を触ってみると、柔らかいが弾力がある。それは丸いボールのようなものだった。不思議そうに何度も触っていると、

「あ、あかんて……」

そんな声にクリュウはびっくりする。

「え？　えぇッ!?」

その時、部屋に光が注いだ。フィーリアがカーテンを開けたらしい。

「く、クリュウ様ぁッ!?」

悲鳴のようなフィーリアの声に彼女へ顔を向けると、なぜか彼女は顔を真っ赤にしていた。一体どうしたのだろうと思っていると、

「ニャハハ、クリュウくんは意外とせっかちなんやねぇ」

そんな聞き覚えのある声が――なぜか下からした。視線を落とすと、

「おはよ、クリュウ君」

にこやかなアシュアの顔が目の前にあった。そして、彼女の豊満な胸を――自分の手がしっかりと握っていた。そして自分はどうやら彼女を押し倒したような形になっているらしい。今度はクリュウは顔を真っ赤にする番だった。

「ご、ごめんなさいッ！」

クリュウは慌ててアシュアの上から退いた。アシュアは気にした様子もなく「嫌やわ。そないに焦らんでもええのにぃ」とにっこりと微笑む。その笑顔に先程の柔らかい感触を思い出してクリュウは顔を真っ赤にした。どうも今日は朝からハチャメチャな事が多い。厄日だろうか。

「ニャハハ、散らかってて悪いなぁ。まあその辺に座っといてぇな。お茶淹れてくるから」

「あ、気にしないでください。それより――」

「嫌やわぁ。クリュウくんはせっかちやねぇ。そんなんじゃ女の子に

嫌われてまうでぇ？」
　ニヤニヤと笑うアシュアに、クリュウは苦笑いする。
「今朝早速一人に嫌われて来ました」
「ニャハハ、クリュウくんはモテモテやねぇ」
　アシュアは愉快そうに笑うと「ほんじゃ、そろそろ本題に入るで」と言って、部屋の奥へ行くと、そこに置いてあった白いシーツが被せられた何かを指差す。
「これやこれ。もうできてるから最後の確認してぇな」
　そう言ってアシュアはシーツを外した。すると鮮やかな青色の防具が姿を現した。ランポスの鱗や皮と鉄鉱石を組み合わせた、新米ハンターが一番最初にモンスターの素材を使って作る防具――ランポスシリーズだ。
　チェーンシリーズとは比べ物にならないほど頑丈で、何より鉄ではなくランポスの鱗や皮を使っているので軽く、使い勝手がいいので多くの新米ハンターが重宝するシンプルな装備だ。
　キラキラした目でランポスシリーズを見詰めるクリュウに、アシュアはにっこりと微笑んで「着てみるか？」と問う。もちろんクリュウは嬉しそうにうなずく。
　チェーンシリーズとは着方が違うので少々苦戦したが、アシュアの協力もあってなんとか着れた。
　確かに軽かった。チェーンシリーズよりもずっと軽い。これがランポスシリーズなのだ。そして自分の身体に合うようにぴったりと採寸も合っている。これもアシュアのおかげだ。
「ふむ、似合ってるやないの。良かった良かった」
「お似合いですよ。クリュウ様」
　二人にそう言われ、クリュウは照れたように桜色に染まった頬を掻く。
「あ、ありがとう」
「でもほんまにええんか？　頭何もないと危ないでぇ？」
　アシュアが心配したのはクリュウの防具の着方。実は今回もクリュウは頭の装備は付けていないのだ。それを彼女は心配している

のだが、そんな彼女の問いにクリュウはうなずく。
「はい。こっちの方が何かと便利ですから」
そう答えると、アシュアは「まあ、クリュウくんがええっちゅうなら別にうちは構へんけど」と、とりあえず納得したようにうなずいた。
「それより採寸は合っとるん？　キツイとか緩いとかはないんか？」
「はい。ぴったりです。ありがとうございます！」
「そっかそっか。そりゃ良かったわ」
アシュアはにこやかに微笑むとふわぁとあくびをする。どうやら今回もわざわざ徹夜をしてくれたらしい。目の下に薄っすらと隈が浮かんでいる。
「ほんじゃ、うちはちょっくら寝るね。眠くて眠くて……」
ふわぁともう一回あくびすると、アシュアはそのまま工房の隅にあるソファに寝転んでしまう。クリュウは慌てて横向きに寝るアシュアの背中を揺する。
「アシュアさん。そんな所で寝たら風邪を引きますよぉ」
クリュウの注意も「ええからええから」と手をひらひらと翻（ひるがえ）してスルーすると、そのまま動かなくなった。どうやら完全に眠ったらしい。それだけ毎晩遅くや徹夜をしてくれたんだと思うと、クリュウはますます彼女に感謝する。
クリュウは床に落ちていた毛布をそっと彼女の上に被せると、フィーリアと一緒に家を出た。日の光に照らされて、ランポスの鱗がキラリと光る。
「さてと、じゃあこの装備でちょっと狩りにでも行ってみようか」
クリュウが嬉しそうに言うと、フィーリアも「はい」と楽しそうに笑みを浮かべながらうなずく。
二人は早速酒場へと向かった。すると、酒場ではエレナと村長が何やら話し込んでいた。それも双方共に結構真剣な顔をして。不思議そうに首を傾げながら進むと、エレナが二人に気づいた。
「あ、クリュウ。今日も狩りに行くの？　あ、新しい防具できたんだ」
エレナはクリュウの新たな装備をまじまじと見詰めると、にっこりと微笑んだ。

「良く似合ってるわよ」
「あ、ありがとう」
　エレナの言葉にクリュウは頬を赤らめながら照れたような笑みを浮かべる。すると村長もうむとうなずいた。
「これでまた僕達の村のハンターが成長した訳だ。めでたいめでたい」
　まるで自分の事のように喜ぶ村長。本当に人懐っこい人だ。
　ふと、クリュウは先程二人がしていた会話が気になり、二人に訊いてみる。
「それより今二人で何を話してたんですか？」
　クリュウが不思議そうに問うと、エレナと村長は顔を見合わせて困ったような表情を浮かべる。どうやら何かありそうだ。
「何か、あったんですか？」
　フィーリアも二人の不穏な態度に声を硬くする。すると、エレナは村長を見詰めて一度うなずくと、ゆっくりと重い口を開いた。
「実は、リフェル森丘でドスランポスの目撃情報があるのよ」
　リフェル森丘とは、丘陵（きゅうりょう）地帯にあるなだらかな狩り場の事だ。イージス村からは竜車に揺られて二日掛かる場所にある。イージス村からはセレス密林の次に近い狩り場で、ドンドルマからこの地域一帯へ陸路で抜ける道にもなっているので安全確保が最も望まれる場所でもある。どうやらそこにドスランポスが現れたらしい。
「リフェル森丘を通らないと、この地域に行く道は大きく迂回するしかないのよ。そしたら商隊や通行人も困るのよ」
　エレナも困ったような顔をしている。きっと彼女も店の商品を注文したのにドスランポスの影響で品物が遅れる事を心配しているのだろう。
「ギルドの方は動いてくれないんですか？」
　フィーリアが横から質問する。確かにハンターズギルドの本部があるドンドルマならドスランポスくらい簡単に狩れるハンターを送れるだろう。しかし、

「それがどうもドンドルマの方は飛竜の討伐依頼が重なっていて優良なハンターが足りないらしいんだ。王都の依頼や貴族の依頼、地主の依頼とか断り切れない仕事が多いらしい」
村長も困ったようにため息する。
元来ギルドと王都の仲はお世辞にも良い方ではない。国を統治する王宮の者は人間でありながら飛竜と戦えるハンターを統括するハンターズギルドを警戒しているらしい。彼らに反旗を翻られたら困るからしいが、ハンターは人に武器を向けてはいけないという鉄則がある。もちろん無視する奴もいるが、それでも脅し程度だ。相手をケガさせたり、ましてや殺してしまったらギルドの暗殺部隊であるギルドナイトと呼ばれるハンターを狩るハンターに消されてしまうからだ。誰も好き好んで自分の首を切りたいとは思わない。
そんなギルドの本部があるドンドルマは、百人以上のハンターが拠点を置く一大ハンター都市。世界に名を馳せた歴戦のハンター達もその多くがドンドルマを拠点にしている。だが、そういう場所だからこそ世界各地の依頼が大量に集まり、いくらハンターがいても足りないくらいという状況なのだ。そして今回優秀なハンターの大部分が飛竜狩りに向かってしまったらしく、地方に現れたドスランポス程度ではハンターが出て来ないような状況らしい。
村長とエレナは困ったようにため息する。二人とも村のライフラインが断たれたら最も困る立場な為その苦労も大きいだろう。そんな二人を見て、クリュウもどうしたもんかと考えていると、
「私達が行きます！」
そんな頼もしい声に驚いて振り返ると、そこにはにっこりと微笑むフィーリアが立っていた。途端に村長の瞳が希望の色に染まる。
「そうだ！　今この村にはリオレイアと対峙できるだけの実力を持つハンターであるフィーリアちゃんがいたんだ！　彼女がいれば何も怖くない！」
村長はやけに高いテンションになる。まあ村の危機をが救われるかもしれないという状況なので気持ちはわからないでもないが。
「じゃあフィーリアちゃん。この私からの依頼、頼まれてくれるかな

？」
　どうやら今回の依頼主は村長らしい。まぁ、ドスランポスが現れて困るのはこの村そのものなのだから、彼が依頼するのは当然だろう。
　すると、そんな彼の依頼に対しフィーリアは首を横に振った。
「いえ、私だけではありません。クリュウ様も一緒です」
『えぇッ!?』
　三人は一斉に驚く。特に驚いたのは当事者であるクリュウだ。瞬間的に以前襲われたドスランポスの凶悪な顔が思い浮かんで身震いする。
「い、いや僕はまだドスランポスは早いと思うよぉ……」
　自信なさげに言うクリュウに、フィーリアは「そんな事ありません」と力強く言い切る。
「クリュウ様はもう多くのランポスを相手にしてきました。実戦経験はそれなりにありますし、今まで教えてきた知識や技術を使ういい機会です。それに、新しい道具の初陣にはいいと思います」
「で、でも……」
　渋るクリュウの頭の中ではドスランポスの血のように真っ赤な口が思い浮かぶ。そんなクリュウの不安を感じ取ったのか、フィーリアは優しく微笑み「大丈夫ですよ」と言う。
「あの時とはクリュウ様の実力は格段に上がってますし、防具も新調しました。それに私もちゃんと援護します。ですからご安心を」
「そ、そうは言っても――って、援護？　フィーリアが主力じゃないの？」
「当たり前です。私はガンナー。後方支援が主な役目ですし、私はクリュウ様の講師を任されています。ですのでその実力をしかと見届ける必要があります」
　フィーリアの言う事は全てがもっともなものだ。だが、クリュウはなかなか決断できない。確かにあの時とは明らかにこちら側に分がある。技術や装備はもちろんだが、何よりフィーリアという強力な援軍などがあり勝機は十分である。しかし同時にマイナスもある。まずドスランポスとの本格的な実戦経験がクリュウにはない事。そし

て狩り場がいつも使い慣れているセレス密林ではなくリフェル森丘である事。まだそこには行った事がなく、どんな地形か全くわからない。そんな不安もある中、自分にドスランポスが狩れるだろうか？

不安そうにうつむくクリュウの肩を、フィーリアがそっと叩く。

「これから先もハンターを続けるのであれば、いずれ飛竜種と対峙する事になるでしょう。飛竜は別格のモンスターです。あの気圧される生命力と迫力は、戦い慣れたハンターでも恐れを感じます。こう言っては何ですが、ドスランポスはあくまでランポスの発展型。飛竜と比べれば弱い方です。ドスランポス程度で逃げていては、飛竜なんて夢のまた夢です。ここは覚悟を決めてください」

フィーリアの言葉に、クリュウはうなずく。確かに、ドスランポス程度でうじうじしていたら飛竜なんて一生狩れないだろう。何より、大切な故郷を守る事もできない。

この戦いは、新しい自分になる為の登竜門なのだ。

再び顔を上げたクリュウの瞳に、もう迷いはなかった。

心配そうに自分を見詰めているエレナから依頼書を受け取ると、クリュウは自分の名前を書き込む。そんな彼をエレナは不安そうに見詰める。

「いいの？　今ならまだキャンセルできるわよ？」

エレナの気遣うような言葉に、クリュウは首を横に振る。もう覚悟は決めている。逃げる訳にはいかない。

「大丈夫。必ずドスランポスを狩ってみせる」

「本気、なのね？」

「うん」

「……そう」

エレナは依頼書をじっと見詰めた後、それをフィーリアに渡して二人に向かって小さく優しげに微笑んだ。

「じゃあ、帰って来たらお祝いしてあげる。だから、ちゃんと帰って来なさいよ」

「うん。わかった」

エレナの笑みにクリュウも笑顔で応える。その間にフィーリアも

依頼書に自分の名前を書き込む。そして依頼書は村長に渡され、承認用のハンコが押される。これで契約完了だ。
「じゃあ、早速用意しよう。フィーリア、必要な道具を教えて」
「わかりました。では行きましょう」
クリュウとフィーリアは微笑み合うと、急いで出撃用意をする為にクリュウの家に向かった。
小さくなっていく二人の背中を見詰め、エレナは優しく微笑んだ。
「がんばってね、クリュウ」
その言葉は風の中にふわりと消えていった……

第17話　青爪の襲撃者

森の中を進む竜車に揺られながら、クリュウは眠そうに目を擦る。
「眠いのですか？」
隣でアプトノスの手綱を引いているフィーリアが笑顔で訊いてきた。アプトノスの扱いが素人のクリュウに対し、フィーリアはまるで自分の身体のようにアプトノスを巧みに動かす。やはり踏んで来た場数が違うのだ。
そんな彼女は村にいる時の私服ではなく、深緑の防具――レイアシリーズを着こなしている。耳には炎のように赤く煌くレッドピアス、背中には防具と同じ深緑のライトボウガン――ヴァルキリーファイアが背負われている。
もちろんクリュウも防具を着ており、今回が初陣となるランポスシリーズだ。腰に挿したハンターナイフ改は砥石を使ってすでに切れ味は全開だ。
「うん、まあね」
そう答えると、クリュウは眠そうにあくびをする。穏やかな竜車の揺れが心地良い眠りの世界に自分を引き寄せる。そんなクリュウに、フィーリアはくすくすと微笑む。
「まだあと半日あるんですから、ごゆっくりしていてください」
「えぇ？　まだそんなにぃ？」
昨日の午後にイージス村を出てもう十数時間。手綱はフィーリアに任せ、クリュウはする事もなく外の景色を眺めていた。
この竜車はどうやらクリュウ達の為に村長が用意してくれていたらしく、所有者はクリュウになっている。ありがたくいただき、フィーリアは早速竜車を引くつい最近成体になったばかりの小柄でクリッとした瞳が印象のうら若きかわいいアプトノスに《シルキー》というかわいい名前を付けた。
人懐っこいシルキーはすぐに二人にも懐き、フィーリアの手綱さばきに忠実に従っている。
ここまで来る間に夜こそは寝る為に竜車を止めたが、朝早くすぐに

再び出発した。
　ちなみにクリュウは向かい合うようにして寝るフィーリアを変に意識してしまい、そのせいで睡眠不足だったりする。それがこの眠さの根本的な原因だ。
「はい。リフェル森丘はあの山の向こうですので」
　そう言って指差した先には、確かに岩肌がむき出しになり所々に木々が生えている高い山がある。どうやらあの向こうが丘陵地帯らしい。
「リフェル森丘は遠いなぁ」
「そんな事ありませんよ。狩り場の中には竜車に揺られて二日や三日って狩り場なんて無数にあります。ひどい時には一週間以上掛ける場合もありますし」
「一週間も!?　僕にはそれは無理だぁ」
「確かに、私も一週間はちょっと遠慮したいですね」
　苦笑いするフィーリア。どうやら彼女はそれくらいの遠征を経験したらしい。経験者の言う事は信用性がある。
　クリュウはそんなフィーリアを一瞥し、ぼーっとシルキーの走りを見詰める。そんなクリュウに、フィーリアはくすりと笑う。
（私も、竜車が退屈で仕方がなかった時があったなぁ……）
　自分がまだかけだしだった頃の記憶と、今のクリュウが重なり、懐かしそうに微笑む。自分にもこんな頃があったのだ。
「退屈ですか？」
「うん」
「では、軽くドスランポスの生態を教えますね」
「え？　あ、うん」
　どうやらクリュウは少し興味を持ったらしく、真剣な瞳でフィーリアを見詰める。相当退屈だったのだろう。そんなクリュウに優しく微笑み、フィーリアは口を開く。
「ドスランポスの行動パターンは基本的にランポスと大きな違いはありません。ただし全ての面において強力です。その大きな爪の一撃はヘタな鉄を切り裂き、鋭い牙は骨を砕きます」

「十分怖いんだけど」
　クリュウにとってのドスランポスの第一印象はあの時の奇襲だ。死ぬ思いまでしたので十分怖いのに、フィーリアの説明は嫌がらせにしか聞こえないほどドスランポスの怖さに拍車を掛ける。
「そうですね。しかし攻撃パターンはランポスと変わりません。ですので常に相手の背後や左右から攻撃していれば恐れる相手ではありません。ですが前はダメです。ドスランポスの武器は全て前に向いているので攻撃を喰らってしまいます。ドスランポスの厄介な所は常に手下のランポスを連れている事です。相手が一匹だと思って近づくと仲間を呼びます。ですのでまずはまわりのランポスを排除してください。その際は私がドスランポスの注意を逸らします。次に、ドスランポスは大ダメージを受けると逃げ出します。ドスランポスなどのドスクラス鳥竜種は走り回る事で自己回復力を上げるという特徴を持ち、急激に体力を回復します。ですのでできれば逃げ出す前になんとしても倒してください。見失ったりすれば、再び会敵した時に手下を先程与えたダメージを回復した上に手下のランポスを編制し直しているような状態ですので」
「ずいぶんと厄介だなぁ。もし見失ったりでもしたら大変だ」
「ドスランポスはテリトリーを決まった順番で回ります。本来なら十分下見してそのルートを見極めてそれを逆手に取るのが良策ですが、今回は急な事ですのでそれはできません。とにかく見失わない事です。確かにドスランポスはかけだしハンターには手強い敵ですが、クリュウ様なら必ず勝利できますよ。私はそう信じてますから」
　そう言って満面な笑みを浮かべるフィーリアに、クリュウは苦笑いする。一体どこからそんな根拠のない自信が出てくるのだろうかわからないが、どうやら彼女は心から自分を信頼してくれているらしい。ならば、その期待には応えなければならないだろう。
「とにかく、厄介な敵には変わりありません。十分心して掛かってください」
「うん」
　クリュウはフィーリアの忠告にちょっと緩んでいた気を引き締め

直す。
　それからクリュウはフィーリアに色々な事を質問して教わる事になった。おかげで退屈する事はなかった。そしてそれは実はフィーリアも同じ事であった。
　リフェル森丘はなだらかな丘陵地帯に位置し、草食竜アプトノスが生息している。アプトノスは穏やかな性格で向こうから攻撃してくる事はほとんどない。だがその肉は人々の生活に必要不可欠な栄養源であり、狩場ではハンターが腹を満たす為に狩る場合もある。動きは遅いが力は結構強いアプトノスは人に懐きやすいので飼育されて人々の生活の力なったりする事も多い。特に商人などは商隊を率いる際にアプトノスを移動手段として使っている。そんな人々と密接に関わっているモンスター、それがアプトノスだ。
　他にもリフェル森丘にはランポスが生存し、モスやブルファンゴも生息している。特にブルファンゴ同じ野生のイノシシであるモスと違って気性が荒く好戦的で、しかもその威力は強力で、その威力に牙が加わった一撃はヘタな装備なら破壊できるほどに強い。だが攻撃が全て一直線なので冷静にしていれば避けやすく隙も多いので倒せる。後は警戒するとしたら人間の子供くらいの大きさに異常進化したランゴスタという巨大な昆虫くらいだろう。
　そんなのどかなリフェル森丘には今現在ドスランポスがいるのだ。吹き抜けの穴を潜った向こうの池の近くにリフェル森丘の拠点（ベースキャンプ）は存在する。高い木々が天を多い、狭い場所なのでモンスターは入って来られない。
　クリュウとフィーリアは拠点（ベースキャンプ）に竜車を横付けする。
「ふぅ、やっと着いたぁ」
　クリュウは竜車を降りるなりうーんと背伸びをする。そんな彼の横ではフィーリアが備え付けの共用アイテムボックスを確認する。
「やはり緊急依頼は分が悪いですね」
「え？　何が？」
「アイテムが必要最低限な物しか入ってません。普通なら補助アイテ

ムも入っているんですが……」
　どうやら支給品が必要最低限なものしか揃っていないらしい。緊急依頼はこういう事があるので困る。
「まあ、依頼者が村長だもの。支給品が出ただけでもありがたく思わなきゃ」
　クリュウの前向きな言葉に、フィーリアも微笑む。
「そうですね。その為に万全の用意をしてきたんですから」
　そう言うと、フィーリア支給品の半分をクリュウに渡し、馬車の中から次々にアイテムを取り出す。回復薬から始まり、布に包まれたこんがり肉、砥石、ペイントボール、閃光玉などだ。それらを自分の分だけ道具袋（ポーチ）に入れ、残りはクリュウに渡す。クリュウもそれを道具袋（ポーチ）に入れる。特に砥石は剣士用の道具なので全てクリュウがもらった。
　クリュウが全てのアイテムを入れ終えると、フィーリアは大量の銃弾を腰や太股に備え付けられたガンベルトに装填する。特に使うであろう通常弾は特にガンベルトに装填しておき、残る別種類の銃弾は専用の袋の中に入れ、ベルトのフックに引っ掛けて携帯する。
「弾は十分持って来てありますので、今回の戦闘の最中に弾切れになる事はありませんのでご安心を」
「わかった。まぁ、弾がなくなったら調合するって手もありだけどね」
　ボウガンが使う弾は全て調合可能。それこそ狩場で採取できる素材と素材を組み合わせて作る事も可能なのだ。だが、どうやら今回はその心配はないらしい。
　フィーリアは最後に馬車から直径五〇センチほどの円盤状の金属を取り出した。
「何それ？」
　今まで見た事のないアイテムにクリュウが首を傾げると、フィーリアは小さく微笑みながら丁寧に説明してくれた。
「これはシビレ罠というトラップアイテムです。地面に置いて安全装置であるこのピンを抜くと、中から麻痺効果を持つ特殊な電撃が発生し、これを踏んだ一定以上の大きさのモンスターを一時的に麻痺状態

にできます。この隙に一斉攻撃すれば、大ダメージを与えられます」
「へぇ、そんなアイテムまであるんだ」
「はい。これは対飛竜戦でも使われる重要な道具ですので、クリュウ様もいずれ使う事になるでしょう」
「ドスランポスならともかく、こんな小さな道具で飛竜を足止めできるの？」
「はい。飛竜によっては効かないものもいますが、基本的にどの飛竜にも有効です」
　フィーリアはそう言いながらシビレ罠を腰のベルトのフックに引っ掛ける。一見しただけでは重そうだが、実は軽いのだろうか？
「重くない？　それ」
　クリュウが不思議そうに問うと、フィーリアは笑顔で答える。
「軽いという訳ではありませんがそれほど重くはないですよ。でもこういうのに慣れていないと後々大変です。クリュウ様が持ちますか？」
「え？　僕が？」
　途端にクリュウから笑顔が消える。
　何せ今回はクリュウにとって初めての大型モンスターの狩猟である。そんな時に重いものを背負っていては本来の実力の半分も出せないだろう。しかも片手剣は機動力が何よりも重要な武器でもある。
　一人困るクリュウに、フィーリアはくすくすと笑う。どうやらからかわれたらしい。
「ひどいよぉ。笑う事ないでしょぉ？」
「すみません。今回は私が持ちますが、こういったアイテムには事前に慣れておきましょう。時にはあの荷車も使う事になるんですから」
　そう言ってフィーリアは竜車に備え付けられていた荷車を指差す。結構大きめな荷車で、人二人くらい寝かせてもお釣りが返って来そうなほど大きい。
「あの荷車も使うの？」
「爆弾なんかを持ち歩く時に使います。飛竜種には爆弾はかなり有効です。強固な鱗や甲殻をも吹き飛ばせますからね。しかし爆弾は重

く危険です。ですので荷車で運び、戦闘の際は邪魔にならない場所に置いて戦うんです。爆弾を持ったままで戦うなんてそれこそ危険極まりないですからね」
なるほど。やっぱり狩りは奥が深い。改めてハンターというのは色々な事を知ってなければいけないんだと自覚する。
フィーリアは全ての用意を終えると、にっこりと微笑む。
「では、行きましょうか」
「え？　あ、うん」
先導するように歩き出したフィーリアの後に続いて、クリュウも歩き出す。
拠点（ベースキャンプ）から外で出るには、ぽっかりと空いた空洞を抜けないといけない。言い方を変えれば、そこから一歩出れば、もう狩り場なのだ。
トンネルを抜けるとそこは川沿いのなだらかな場所だった。小さな野原があり、アプトノス達がのん気に草を食べている。
フィーリアは支給品にあった狩り場全体の地図を取り出して見詰める。
「どうやらここは凶暴なモンスターはほとんど出没しない場所のようですね。先を急ぎましょう」
「わかった」
二人は隠れたりする事もなく堂々と野原を横切る。アプトノス達は一瞬二人を見たが、すぐに気にした様子もなく草を食む。なんとも大人しいモンスターだ。
二人はのどかな野原を抜け、坂道を登っていく。ここから先は山頂付近に向かってなだらかな坂が続く。密林と違い、深い緑色の木々が生い茂るという事はなく、のどかな草原が続く。視界は良いが、逆にこちらも隠れられる場所がほとんどない。
しばし歩くと、急にフィーリアが歩みを止めた。
「どうしたの？」
声を出したクリュウにフィーリアは人差し指を自分の口に当てる。声を出すなという事なのだろう。

クリュウが黙ると、フィーリアはそっと岩陰から先を覗く。クリュウもそれに続いて覗くと、そこにはランポスが三匹ほど居座っていた。すると、高い岩壁の向こうからまたランポスが飛び降りて来た。その数三匹。すると先程までいたランポスが山頂に向かって走り出し、新たに来たランポスはその平らな野原を見回す。見張りの交代だったのだろうか。

「ここはランポス達の中継地点になっているらしいですね」

フィーリアが小声でつぶやいた。ふと、クリュウは横を見る。少し先まで野原が続いているのに、その先には急にそれが寸断されている。その向こうは地面がない険しい崖。遠くには高い山が見える。ここまでずいぶん上って来たらしい。崖の上からの景色は目が回るほど高いだろう。そう思うと、吹き飛ばされた時に向こうに落ちれば命はないという恐怖が込み上げる。だが、今いるのはランポスだけ。その心配はたぶんないだろう。

いつまでも動かないフィーリアに、クリュウは不思議そうに首を傾げる。

「行かないの？　相手はランポスだよ？」

クリュウが問うと、フィーリアは首を横に振る。

「今回の相手はランポスのボスであるドスランポスです。ランポス達の敵襲の鳴き声を聞いてやって来られたら困ります」

「何で？　向こうから来てくれれば探す手間が掛からないでしょ？」

クリュウは不思議そうに問う。確かに今回の目的はドスランポスの討伐。ならば向こうから来てくれるなら万々歳なはずだが。だが、フィーリアは首を横に振る。

「先程も言いましたが、ここはランポス達の中継地点になっています。ドスランポスの声に無数のランポスがやって来てしまいます。そうなればこちらが圧倒的に不利です」

フィーリアの説明に、クリュウは納得した。

狩りは常にこちらが有利に事を進めるのが常識だ。何も敵のホームグラウンドで無理して戦う必要はないのだ。

「でもどうするのさ。これじゃ動けないよ？」

「任せてください」
そう言ってフィーリアは背中のヴァルキリーファイアを構える。すぐに腰に下げた弾丸袋から貫通弾ＬＶ１を三発取り出すと弾倉に装填し、わずかに岩陰から歩み出て可変倍率スコープを覗きながら正確に狙いを定める。そして、
バンバンバンッ！
装填された全弾を撃ち放った。それらの弾は全て見事に一番手前にいたランポスの体を貫く。悲鳴を上げるランポスにフィーリアはすぐさま再装填して撃つ。今度は一発でランポスは倒れた。
「ギャアッ!?」
突如倒れた同胞にランポス達は驚く。慌ててその亡骸に近づき辺りを警戒する。この時にはすでにフィーリアは岩陰に隠れているので、ランポス達からは見えない。そして、ランポス二匹が別の方向を見た瞬間、先程と同じ要領で岩陰から出て狙い撃つ。もう一匹のランポスが無数の弾を受けて倒れる。残った一匹は何がなんだかわからず辺りをグルグルと見回す。すると、フィーリアは地面に落ちていた小石を自分達の反対側へと投げた。石が地面に落ち、響いた音にランポスの顔がそちらに向く。その瞬間、再三フィーリアは弾倉の中の弾を全部撃ち出した。無数の弾に体を撃ち抜かれてランポスは吹き飛び、そのまま崖下に消えた。
一分も掛からずフィーリアは三匹をランポスを葬ってしまった。それも、こちらの存在を発見させずに。
「ふぅ、これで安心して通れます」
そう言ってフィーリアはヴァルキリーファイアを背中に戻すと、岩陰から出る。その後に続いてクリュウも出ると、慌てて倒れているランポスに駆け寄って剥ぎ取る。
「クリュウ様。もうランポスの素材は必要ないじゃないですか」
辺りを警戒しながら困ったように言うフィーリアに、必要なものだけ剥ぎ取り終えたクリュウは首を横に振る。
「倒した相手への最大の礼として、剥ぎ取るんだよ。僕らはただの殺戮者（さつりくしゃ）じゃない。ハンターだからね」

「そのお気持ちは立派ですが、時と場所を考えてください。早くしないと新たなランポス達が来てしまいます」
フィーリアの口調はいつになく厳しい。そんな彼女らしくない言葉にクリュウは驚く。こんな冷たいフィーリアは初めて見た。
「う、うん」
フィーリアはクリュウの返事も聞かずに走り出した。一気にここを通り抜けるらしい。クリュウも慌ててその後を追う。先を走る彼女の背中からはピリピリとした緊張感が流れている。そんなフィーリアに、クリュウは不安そうな表情になる。
きっと自分の流儀を貫いたクリュウに嫌悪感を抱いているのだろう。彼女は幾多の戦場を翔け抜けて来た歴戦のハンター。自分のした行為が彼女からすればどれほど危険で愚かしい事だったのかはわからないが、きっとさっきの行為に怒っているのだろう。チームを組んでいる以上、相手の事も考えないといけない。そんな基本的な事も、自分は忘れていたのだ。
情けなくて、言葉も出ない。
無言で彼女を後を追ってその野原を後にする。その先は幅が五メートルほどの細い道が続く。一方は岩壁で、もう一方は険しい崖。自然と身体は岩陰の方に近づく。
二人は無言で道を進む。すると、今度も再び小さな野原が見えた。フィーリアは再び地図を出して場所を確認する。
「ここは、この狩り場の分水嶺（ぶんすいれい）のようですね。ここから山頂、森林地帯へと分岐するみたいです。山頂付近への道は狭いので、モンスターは通れません。ですので、ドスランポスが来るなら森林地帯の方からでしょう」
フィーリアはそう言うと地図をしまう。ここまでほとんど問題なく進んできた二人。ここまではあまりにも無事だった。だが、それもここまでだった。
「ギャアギャアッ！」
突然の鳴き声に慌てて振り返ると、岩壁の上からランポスが吼えていた。

「しまったッ！」
フィーリアは慌てて距離を取ってヴァルキリーファイアを構えて通常弾ＬＶ２を撃つ。だが、ランポスはその前に岩壁から飛び降り、弾は先程までランポスがいた場所を空しく過ぎる。
「ギャアッ！　ギャアッ！」
クリュウは慌ててハンターナイフ改を構えるとランポスに斬り掛かる。だが、ランポスはジャンプしてクリュウの上を通り過ぎ、後ろにいたフィーリアに襲い掛かる。
「くぅッ！」
フィーリアはボウガンでとっさに防御するが、元々防御を想定していないボウガンでは受け止めきれず、ランポスの突進に吹き飛ばされる。
「フィーリアッ！」
あのフィーリアがランポス程度に一撃を入れられるなんて。理由は簡単だった。自分が不用意に突っ込み、ランポスと彼女の攻撃線を邪魔したからだ。だから彼女は弾を撃てず、ランポスの攻撃に対応し切れなかったのだ。
自分の不注意が悪い。
クリュウはギュッと柄を握ってランポスの背中から斬り掛かる。これにはランポスも避け切れず、刃がランポスの青い皮を切り裂き赤い血飛沫（ちしぶき）が上がる。
「ギャアッ!?」
「このッ！」
もう一撃、一撃と連続して剣を叩き込むとランポスは倒れた。だが、事はそれだけでは終わらなかった。
「クリュウ様！」
フィーリアは立ち上がるとボウガンを構えてある方向を睨みつける。その視線を追うと、そこには五匹のランポスがこちらに向かって走って来た。いや、違う。その奥にまたランポスが四匹突っ込んで来る。そして、その中の一匹の身体は他とは違いふた回り異常も大きく、赤いトサカが生え、禍々しいオーラを放っている。

「ドスランポスッ!?」
それはクリュウが以前会った事のあるランポスを統べるボス――ドスランポスだった。
形勢は完全にこっちが不利に陥っていた。八匹のランポスを従えたドスランポスはすさまじい速度で迫る。その速さは人間よりもずっと速い。今から逃げてももう遅い。
「ギャオワッ！　ギャオワッ！」
ドスランポスが叫び、前衛五匹のランポスが襲い掛かって来る。
フィーリアはすぐに後方に下がって迫るランポスを目視射撃する。一匹に命中するが、急いで撃ったのでそのほとんどは外れてしまった。これでは決定打にはならない。
クリュウは迫るランポスに剣を向ける。だが、斬り付ける刃をランポスは横にステップしてその攻撃をかわす。クリュウは勢い良く突っ込んだのですぐには反転できずにたたらを踏んだ。その隙に別のランポスが後ろから襲い掛かる。慌てて盾を向け、鋭利な爪は防げたが、無理な体勢で受け止めたので簡単に吹き飛ばされる。転がったクリュウに向かって、獲物を見つけた喜びなのか、不気味な鳴き声を挙げてドスランポスが突っ込んで来た。
「ギャオワァッ！」
「うわぁッ！」
ジャンプして自分を踏み潰そうとするドスランポスの一撃をクリュウは慌てて横に転がって回避する。先程まで自分がいた所に寸分の狂いもなくドスランポスの巨体が降り立ち地面を揺らす。
慌てて立ち上がろうとしたら、またも後ろからランポスの突進を喰らう。つんのめり掛けて、慌てて手を着いて転倒だけは避けると急いで立ち上がり距離を取って後ろに下がる。そこへランポスが突進して来る。クリュウはその一撃を回避し、その一瞬に剣を叩き込む。勢いのついたその一撃でランポスは吹き飛び、動かなくなった。続いて迫るランポスを一撃を盾で防ぎ、反撃の一撃を加える。ランポスは悲鳴を上げて後退した。すると、その奥にいたドスランポスが一際大きな声を上げる。

「ギャオワッ！　ギャオワァッ！」
「ギャアッ！」
「えぇッ!?」
　すると、突如後ろからランポスの鳴き声。慌てて盾を向けた瞬間、盾にすさまじい衝撃が走った。見ると、ランポスの顔が目の前にある。獰猛（どうもう）な瞳に恐怖するが、すぐに突き飛ばす。押し戻されたランポスの先には、そいつを含めて新たにランポスが五匹。どうやらドスランポスは援軍を呼んだらしい。
「くそッ！」
　クリュウは挟撃を避ける為に横に走る。崖の手前で方向転換し、新たに現れたランポスの後方に移る。
　戦況が見え、クリュウは歯軋りした。
　援軍がこの五匹だけでなく、フィーリアの方にも三匹現れていた。
　クリュウとフィーリアは真っ二つに分断させられてしまっている。フィーリアはランポス八匹を相手にし、クリュウも同じく八匹。しかもこっちはドスランポスもいる。状況は最悪だった。
　クリュウは閃光玉を使おうと急いで道具袋（ポーチ）に手を伸ばす。が、
「ギャアッ！」
「うわッ！」
　突如後ろから何かに吹き飛ばされた。痛みに耐えて立ち上がると、先程まで自分がいた所に新たに四匹のランポスが高らかに吼えていた。クリュウの顔が青ざめる。
「せ、閃光玉……ッ！　な、ないッ!?」
　慌てて探すと、新たに援軍として現れたランポスの足下に転がっていた。どうやらさっきの攻撃で落としてしまったらしい。
「くそぉッ」
　クリュウは剣を構えて四匹のランポスに突進する。一匹を斬り飛ばし、二匹目は叩き斬る。だがどちらも致命傷にはならず、ランポスは後退するだけだ。だがそれで十分。残る二匹は無視し、地面に落ちている閃光玉を拾い上げる事に成功。すぐさまピンを抜いて投げつ

ける。
とにかく無茶苦茶に投げた閃光玉だったが見事に炸裂し、一瞬にして十二匹のランポスの動きを封じる。
「今だッ！」
クリュウはすぐに先程一撃を入れたランポス二匹に斬り掛かって倒し、先程無視した残る二匹も葬る。次に反転して残りの八匹に突貫する。が、
「ギャオワッ！」
「があッ！」
突如横からドスランポスが体当たりしてきた。あまりにも突然だったので、防御も受身も取れず、クリュウは無様に地面に倒れた。
「な、何で……ッ!?」
なぜドスランポスには閃光玉が効いていないのだろうか。答えは簡単。ランポス達の陰にいたおかげで、閃光玉の光を受けなかったのだ。何という悪運の強さだろうか。
ドスランポスは地面に倒れる哀れな人間に近づき、その大きな脚を振り下ろす。
「あぐッ！」
金属が軋む嫌な音と、すさまじい衝撃がクリュウを襲う。ギリギリと防具とドスランポスの爪が擦れる嫌な音が聞こえる。もしチェーン装備だったら、今頃斬り殺されているだろう。
何とか体を起こそうとするが、ドスランポスの重みがクリュウを押さえつける。
ドスランポスは「ギャオワッ！」と叫ぶと、ガバッと口を開く。真っ赤な口からは嫌な腐敗臭が漂い、クリュウを真っ青になる。
周りからは閃光玉の効き目が切れたランポスが遠巻きに見詰めている。
食事の時間だった。
「ギャオォワッ！」
ドスランポスはクリュウに噛み付こうとする。が、その一瞬の隙に、クリュウは道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出し、口でピンを

抜いてドスランポスの口に突っ込んだ。
腕にドスランポスの鋭利な牙が食い込み、激痛が走る。が、次の瞬間閃光玉が炸裂し、ドスランポスはその衝撃に後退る。その隙にクリュウは転がって離れる。が、閃光玉を至近距離で炸裂させたので、いくら目を閉じていてもその光量はクリュウの体を貫いた。
「くぅ……」
視界が見えないという事はない。だが、あまりにも強い光を至近距離で受けた身体はフラフラで力が入らずその場に崩れ落ちる。
ドスランポスの口に突っ込んだ右腕からは血が流れ出る。幸いそれほど深く牙は入っていなかったのか、痛みはあるが何も問題なく動きそうだ。だが、膝をついたクリュウはしばらく動けそうにない。
ドスランポスはその隙にと突っ込んで来る。
クリュウはポーチの中から再び閃光玉を取り出しすとピンを抜いて上に放りその場に倒れた。次の瞬間閃光玉が炸裂し、ドスランポスの視界を奪った。
「ギャワッ!? ギャオワッ!? ギャアッ!?」
混乱するドスランポス。その間にクリュウはなんとか身体を動けるようにする。フラフラと近づき、剣を叩き込む。
「ギャアッ!?」
両手を使って何度も振り下ろす一撃は、ドスランポスの硬い皮膚を斬り裂く。赤い血が吹き出て、ドスランポスは悲鳴を上げる。
身体を動かすうちにようやく体の動きが戻った所で、クリュウは後方に下がる。いつの間にかハンターナイフ改の刃はボロボロだった。クリュウは砥石を使ってそれを直す。その間にドスランポスも視界が復活し、クリュウを凶悪な顔つきで睨む。そのまわりでは八匹のランポスが同じように凶悪な顔でこちらを睨んでいる。
戦いは再び振り出しに戻ったという感じだった。
一方、フィーリアはガンナーが苦手な接近戦を強いられていた。前後左右様々な場所からランポスが襲い掛かり、反撃もできずひたすら回避している。だが、危険なのはクリュウの方であった。
八匹のランポスがフィーリアを押さえている間に、同じく八匹のラ

ンポスを連れたドスランポスの凶悪な瞳がしっかりと自分を捉えていた。どうやら今までの攻撃で、どちらが弱いかを見極めたらしい。そして、弱い獲物――クリュウに狙いを定める。
「クリュウ様！　逃げてくだ――きゃあッ！」
フィーリアの悲鳴に驚いて振り返ると、彼女の持つヴァルキリーファイアにランポスが噛み付き身動きが取れずにいた。そして、その後ろからランポスがタックルし、彼女の軽い身体は簡単に吹き飛ばされる。
「フィーリア！」
転がったフィーリアだが、すぐに立ち上がって距離を取る。さすがレイアシリーズ。その程度の攻撃ではビクともしないようだ。フィーリアはボウガンを構えてすかさず反撃に転ずる。と、そんな流れを余所見していたクリュウにランポスが襲い掛かる。
「うわッ！」
盾でガードし、足に力を入れて吹き飛ばされる勢いを相殺する。そして剣を思いっ切りランポスの皮膚に振り下ろした。強烈な一撃にランポスは仰け反りその隙に第二撃を与える。その一撃でランポスはかなり弱り、とどめの一撃を放つ。が、
「ギャオワッ！」
その鳴き声にほとんど反射的に盾を構えた。すると、ランポスとは比べ物にならない一撃が盾ごとクリュウを吹き飛ばす。
「あうッ！」
地面を無様に転がるクリュウに、ドスランポスが追撃を掛ける。
「ギャオワッ！」
ドスランポスが跳躍してクリュウの上から襲い掛かる。慌てて横に転がって回避するが、今度はランポスが跳躍。ギリギリ回避して何とか事なきを得るが、これでますますフィーリアとの距離は離れた。
一方、フィーリは距離を取りつつ射撃。すでに五匹のランポスを葬っていた。距離さえ取ってしまえばランポスなど恐れる敵ではない。
強い敵に残ったランポスがうろたえている間に、フィーリアは走っ

た。向かうはクリュウの所。見ると、クリュウはドスランポスの追撃で岩壁にまで追い詰められていた。これは一刻の猶予もない。
「クリュウ様！　しばらく目を閉じてください！」
　フィーリアはそう叫ぶと、道具袋（ポーチ）から閃光玉を二つ取り出しピンを抜き、時間差で投げて目をつむる。ゆるやかな放物線を描いて飛ぶ閃光玉が炸裂し、すさまじい光が辺りを包む。後ろから追撃してきたランポスやドスランポスの周りにいたランポスが閃光玉の光で視界を奪われてもがき苦しむ。だが、クリュウの方に向いていたドスランポスには効いていない。謎の光にドスランポスは視線をそちらに向ける。まさにその瞬間、二発目の閃光玉が炸裂し、ドスランポスの視界を奪った。
「ギャオワッ!?」
　何も見えなくなったドスランポスはパニックになる。その隙に、フィーリアは周りのランポスを片付けに掛かる。
「ランポスは私に任せてください！　クリュウ様はドスランポスを！」
「わかった！」
　クリュウはもがくドスランポスに斬り掛かる。ランポスよりもずっと硬い皮だが斬り付けるたびに真っ赤な血が吹き出し、ドスランポスは悲鳴を上げる。
　ドスランポスも慌てて反撃しようとついばんだり爪を振り回したりするが、フィーリアの教えどおりに側面から斬り掛かるクリュウには当たらない。
　斬って斬って斬りまくる。叩きつける一撃一撃がドスランポスに確実にダメージを与える。
　フィーリアも銃撃で次々にランポスを貫く。視界を奪われ、身動きが取れないランポスなど敵ではない。
　フィーリアは歴戦のハンター。その高速に撃ち出される弾は次々にランポス達を襲い、その皮膚を、肉を切り裂き、命を奪う。
　たった十数秒で周りにいた総勢十一匹のランポスは一匹残らず倒れた。

閃光玉の効き目がドスランポスに効いているのはあとわずか。フィーリアはすぐさま弾を変えて遠距離射撃をする。
クリュウはとにかく斬りまくる。その時、まわりのランポスを片付けたフィーリアが撃った弾がドスランポスの体を鋭く貫いた。血飛沫が飛び散る。
フィーリアの撃った弾は貫通弾ＬＶ２。それも至近距離から撃ったので相当な威力持っている。命中した弾は全てドスランポスの体を貫いて反対側から飛び出る。
「クリュウ様！　離れてください！」
その声にクリュウは慌てて離れると、ドスランポスがしっかりと自分を睨みつけていた。どうやら閃光玉の効き目が切れたらしい。すると、
バァンッ！
「ギャオワッ!?」
突如ドスランポスの身体に小さな爆発が起きた。それはフィーリアが撃っ徹甲榴弾ＬＶ２だ。一度突き刺さった後に起爆する特殊弾丸だ。
フィーリアは空一薬莢（やっきょう）を吐き出すとすぐに再装填してもう一発徹甲榴弾ＬＶ２を撃ち込む。弾が大型なので一発ずつしか装填できないのだ。
撃ち出された徹甲榴弾はドスランポスの頭部に突き刺さると起爆。ドスランポスは激痛に悲鳴を上げる。その隙に彼女が狙っているのとは反対側からクリュウが斬り掛かる。
すさまじい猛反撃にドスランポスは悲鳴を上げるとクリュウ達に背を向けて一気に走り出した。逃げる気だ。
「待てぇッ！」
クリュウは慌てて追い掛ける。すると、フィーリアは再び別の弾を装填しドスランポスに向かって撃った。初弾はわずかに右に逸れて外れたが二発目が見事にドスランポスの傷ついた皮膚に炸裂し、べっとりとピンク色の発光粘液がくっ付く。そして今度は何ともいえない匂いが辺りを包んだ。

ドスランポスは気にせず全力疾走で同じ二足歩行とは思えない速度で逃げ、岩陰の向こうへ消えた。
「くっそぉッ！」
クリュウは疲れのあまりその場に倒れる。ドスランポスと人間とでは根本的に体の作りが違う。向こうは走るのに特化しているので勝てるはずもないのだ。
肩を激しく上下させて荒い息をするクリュウにフィーリアが慌てて近づく。
「大丈夫ですか!?」
フィーリアのきれいな顔や金色の髪、レイア装備もすっかり土まみれになっていた。それはクリュウも同じで、新品で輝いていたランポス装備もすっかり土埃を被ってしまっている。
クリュウは荒い息をなんとか平常に戻すと、急いで立ち上がってドスランポスの消えた方向へ走る。だが、
「待ってください！」
フィーリアが後ろから呼び止めた。そんな彼女の言葉にクリュウは驚く。
「な、何言ってるの!? あいつは走り回って回復するんでしょ!?」
それは彼女自身が言っていた事だ。今すぐ追わないとせっかく与えたダメージも無駄になってしまう。だが、フィーリアは柔らかな笑みを浮かべる。
「先程撃ったのはペイント弾です。これでドスランポスの動きは大よそわかります。あとはそれを追って先回りすればいいんです」
ペイント弾とは割ると特徴的な強い匂いを放つペイントの実をカラの実という中身が空っぽの実を組み合わせた弾で、命中すると破裂し闇夜でも光って見えるペイントと、強い特徴的な匂いを付着させる追跡アイテムだ。その匂いは強烈で、どこに行っても風にのってその匂いが伝わってくる。その為その匂いを辿れば簡単に相手に再び遭遇できる。先程彼女が撃ったのはそれだったのだ。ちなみに投擲（とうてき）用のペイントボール、弓専用のペイントビンなどの種類がある。

フィーリアはくんくんと鼻を動かして匂いを探る。クリュウも同じように匂いを探ってみる。すると確かにどこからか独特な匂い届いてくる。この方向はどうやら森林地帯から漂ってくるようだ。
「向こうだ！　急ごう！」
「待ってください！」
走り出そうとしたクリュウを再びフィーリアが止める。不思議そうに振り返ると、そこには今にも泣き出しそうなフィーリアの顔があった。その驚愕の光景にクリュウは戸惑う。
「ふい、フィーリア？」
「申し訳ありません……」
「え？」
フィーリアは突然頭を下げて謝ると、震える手でクリュウの右腕にそっと触れた。その瞬間軽くズキッと痛みが走り顔がゆがむ。忘れていたが、彼は右腕を負傷していたのだ。
赤い血が流れるその腕を見詰め、フィーリアはポロポロと涙を流す。
「……わ、私が……しっかりしてなかったから……クリュウ様に……こんな怪我を……」
泣きながら、フィーリアは道具袋（ポーチ）の中からハンカチを取り出して血を拭う。だが、その手は小刻みに震えている。
「私のせいで……すみません……ッ！」
泣き崩れながら謝るフィーリアに、クリュウは慌てる。女の子に泣かれるという異常事態にものすごく彼は弱い。
「べ、別にフィーリアの責任じゃないよ！　これは僕の不注意で怪我したんだから！」
「そんな事ありません！　私は、クリュウ様の援護をすると言いました。しかし、結果はこの通り援護などできず、クリュウ様一人にドスランポスを押し付けた形になってしまいました。そして、クリュウ様は怪我された。全て、私の責任です……ッ！」
「そ、そんな事ないってば……ッ！」
泣きじゃくるフィーリアをクリュウは必死に励ますが、泣き崩れる

フィーリアは一行に泣き止まない。どうしたらいいかわからないが、とにかく話を戻す。
「と、とにかく今はドスランポスだよ！」
そう言うと、さすがは歴戦のハンター。その言葉にフィーリアも「そ、そうですね」と小さな声で答えるとハンカチで涙を拭った。それを見てクリュウも安堵する。
その後、クリュウはフィーリアに右腕の応急処置をしてもらうと、ドスランポスの回遊ルートの先回りをする為に移動した。今度はクリュウが前で、フィーリアが後ろだ。
後ろからついて来るフィーリアはその間一度も顔を上げる事なくずっとうつむいたままだった。

第18話　青の終焉

森林地帯には木々が空を隠して屋根のようになっている所が何ヶ所もある。そのうちのひとつはまるでトンネルのようになっている。そこが待ち伏せ場所だった。

辺りにはランポスが三匹ほどいたが、奇襲さえされなければ二人の敵ではなくすぐに片付けた。

フィーリアは腰に背負っていたシビレ罠を地面に置く。あとはこの中央にあるピンを抜けば、シビレ罠の完成だ。

「効き目は閃光玉ほどな上に確実に敵の動きを封じます。さらに麻痺状態の時は筋肉が強張って簡単に斬り裂けますので、通常時の倍近くの大ダメージを与えられます」

そう説明すると、フィーリアはピンを抜いた。その瞬間、円盤から黄色い電撃が流れ出す。これでシビレ罠は完成だ。

フィーリアは事の成り行きを見ていたクリュウに作戦内容を説明する。作戦といっても大したものではない。

「クリュウ様はこの陰に隠れていてください。私が囮になってシビレ罠まで誘導します。ドスランポスが罠を踏んで行動不能に陥ったら思いっ切り斬りまくってください。おそらく、それで決着がつきます」

「え？　でも……」

フィーリアを囮にするという事は反対だった。だが、フィーリアは反論は許さないという強い瞳をしている。先程クリュウが怪我した事でかなり警戒しているのだろう。クリュウに少しでも楽な役回りをさようとしているのは明らかだ。

「囮なら僕の方が向いてるよ。わざわざフィーリアがやらなくても――」

「ボウガンと片手剣では片手剣の方が強力です。ならば、必然的に攻撃するのは攻撃力のより高い方にするのは当然です。ですので、このままです」

フィーリアはクリュウの意見を即刻却下した。こう説明されてし

まえばクリュウだって言い返せない。後味は悪いが、納得するしかない。
ドスランポスが現れるまではまだもう少しかかるだろう。クリュウとフィーリアは共に地面に腰を下ろす。
「腕、痛みますか？」
フィーリアは不安げな顔でそう訊いてきた。包帯の巻かれた右腕を、クリュウは気にした様子もなく振る。
「大丈夫だよ。あまり深く食い込まなかったみたいだし、フィーリアの治療のおかげさ」
努めて笑顔で言うが、フィーリアの顔はやはり暗い。目にはまだ薄っすらと涙が浮かんでいる。
フィーリアは正義感と責任感が強い女の子だ。自分の失態のせいでクリュウに怪我をさせた事が辛いのだろう。
黙るフィーリアの肩を、クリュウはポンと叩いた。
「クリュウ様？」
「気にしないでよ。僕とフィーリアの仲じゃないか」
笑顔で言うクリュウに、フィーリアは一瞬ぱぁっと嬉しそうな顔をするが、すぐに沈む。
「で、ですが、私はクリュウ様の講師であって……」
「だけど、僕らは仲間でしょ？　仲間の失態はチーム全体の失態。個人個人がそう落ち込む事ないって」
クリュウは笑顔で言う。
そう、二人はチームなのだ。どんな時も一緒にいて、どんな時も一緒に狩りをする。大切なチーム。チームの中で個人が失敗をしたら、チーム全体の連帯責任。それが当然の事だ。
クリュウの言葉に、フィーリアは目を大きく見開くと、涙を浮かべて嬉しそうな笑顔でうなずく。
「はい！　クリュウ様！」
フィーリアは嬉しさのあまりそのままクリュウに思いっ切り抱き付いた。突然の事に何もできずに押し倒されるクリュウ。目の前にはフィーリアの整った顔。ほのかに香る甘い匂いとサラサラと揺れ

る金色の髪。何もかもが美しい。
「あ、ふぃ、フィーリア……？」
「私、クリュウ様にどこまでもついて行きます！」
ギュッと抱き付くフィーリアに、クリュウはもう顔を真っ赤にして大慌て。
「ちょッ！　フィーリアぁッ！」
クリュウの必死な声にやっと自分のしている行為に気づき、フィーリアも顔を真っ赤にして慌てて離れる。
「す、すみません！」
「あ、いや、こっちこそごめん！」
気まずさに再び黙ってしまう二人。だが、ゆっくりと互いを見詰め合うと、どちらからとなく笑みが零れる。
自分達は背中を預け合った仲間なのだ。まだ自分はフィーリアの背中を守れるほど強くはないけど、でも、いつかはきっと守ってあげたい。そう思った。
幸せな雰囲気が流れる――だが、それは突然終わりを告げた。
「クリュウ様！」
小声で叫んだフィーリアの声に、クリュウも腰を上げる。
フィーリアが陰から覗く先には、赤いトサカを頭に生やしたドスランポスがいた。こちらに向かって走って来ている。
フィーリアとクリュウはお互いの顔を見詰め、うなずく。
刹那、フィーリアが地面を蹴って飛び出す。
ドスランポスはいきなり現れたフィーリアに驚き脚を止め、そのまま一度後ろへ跳んで距離を取る。
「グルゥゥゥ……」
低い声で唸るドスランポス。先程の戦いでフィーリアの実力を痛いほど味わったからか、無闇には攻撃して来ない。だが、距離が開いているのはガンナーであるフィーリアに分があった。
フィーリアはヴァルキリーファイアを構えるとすぐさま徹甲榴弾ＬＶ２を撃ち放つ。射出された弾丸はドスランポスの体に突き刺さり、時間差で爆発する。

「ギャオワッ！　ギャアァァッ！」
ドスランポスはたまらず横へ一度跳び、その後フィーリアに向かって突進して来た。フィーリアはそれを見てボウガンを構えたまま駆け出す。向かう先にはシビレ罠！
「ついて来なさい！」
フィーリアは地面を蹴る。そして、足をつけて後五歩。そこにシビレ罠がある。
（あと少し……ッ！）
が、その時、身体が揺れた。
（え……？）
膝が急に言う事を聞かなくなり、勝手に折れ、つまずき、転んだ。
「あう……ッ！」
フィーリアは苦悶に顔をゆがめる。慌てて立とうとするが、ズキンッと足首に激痛が走る。どうやら足を捻ったらしい。
（こんな時に……ッ！）
「ギャアオワァァァァァッ！」
その怒号にハッと顔を上げると、ドスランポスが倒れた自分に向かって跳躍して来た。
足を捻った状態では、回避する事もできない。
フィーリアは直撃を覚悟して悲鳴を上げた。その時、倒れたフィーリアとドスランポスの間に、クリュウが飛び込んで来た。急いで盾を構えて足に力を入れるが、ドスランポスのすさまじい一撃にクリュウは簡単に吹き飛ばされた。
「うわぁッ！」
クリュウは地面に投げ出されて二転三転すると倒れる。だがすぐに力を振り絞ってフラフラと立ち上がる。
ドスランポスはフィーリアの少し横に着地した。その隙にフィーリアは這って逃げ出す。
クリュウはフィーリアにドスランポスの意識がいかないように道具袋（ポーチ）からペイントボールを取り出し投げつける。ベチャリとペイントが付き、特徴的な強い匂いが辺りを包む。その匂いにドス

ランポスは怒りの声を上げた。
「ギャオワァッ！」
ドスランポスはクリュウに向かって駆け出す。クリュウはその突進を体を反らして回避し、続けざまに剣で斬りつける。そして後方に下がって再び距離を取り、ちらりとフィーリアとシビレ罠の位置を確認する。
「こっちだ！」
クリュウはドスランポスに背を向けて走り出す。そんな逃げ出したクリュウに、ドスランポスは怒り狂ったように追い掛ける。
とにかく真っ直ぐ走る。
それだけを思い、クリュウは足を速める。そして、
「ギャアッ!?　ギャガガガ……ギャア……ッ！」
突如ドスランポスが悲鳴を上げ、振り返る。すると、ドスランポスは体を小刻みに震わし、目を大きく見開いて痙攣（けいれん）していた。その下には電撃を放つ円盤が。
「クリュウ様！」
フィーリアの声にクリュウは駆け出す。剣を抜き、痺れて動けないドスランポスに向かって全力で斬りかかる。
「うわあああぁぁぁッ！」
クリュウはとにかく斬った。
斬って斬って斬りまくる。頭の中には斬る事しか浮かばない。
ただひたすらに剣を振るう。
怪我をした腕が悲鳴を上げるが、それでも攻撃の手は緩めない。ただひたすら目の前の敵を倒す事だけに集中する。
連続して浴びせられる剣撃にドスランポスの青い皮膚がズタズタに引き裂かれ、赤い血が宙を舞い、彼の悲鳴が木霊する。そして……
「グルゥゥゥ……」
その弱々しい鳴き声を最後に、ドスランポスはぐったりと地面に倒れた。血のように真っ赤な瞳から、生気が消える。
そして、辺りは静けさに包まれた。
「やった……の？」

実感がなかった。夢かと疑った。だが、
「クリュウ様！　やりました！」
足をかばいながら満面の笑顔で歩み寄るフィーリアの言葉に、やっと実感する――ドスランポスを倒したのだ。
「や、やったぁッ！」
クリュウはその場で跳ね上がった。
ついに自分は、あの強力なモンスターであるドスランポスを倒したのだ。飛竜なんかに比べればずっと弱いが、それでも今のクリュウにとっては飛竜並みの強敵だったし、飛竜並みに嬉しくて仕方がない。
「やったよ！　フィーリア！」
「はい！」
フィーリアも嬉しそうに微笑む。
クリュウは満面の笑みを浮かべると跪（ひざまず）く。先程自分が倒した彼は、もう息吹を感じない。
そっと手を伸ばし、その大きく見開かれた瞳を閉じてやる。そしてそんな彼の冥福を祈るように、クリュウは手を合わせた。そんな彼の行動にフィーリアも笑みを浮かべると同じように手を合わせた。
「よし！」
クリュウは早速ドスランポスの皮や爪などを剥ぐ。何もかもがランポスとは大違いに大きいし丈夫なものばかりだ。
嬉しそうに剥ぎ取りを続ける彼の横で、フィーリアも同じように剥ぎ取る。だが、その表情はどこか暗く、また泣き出しそうだった。
「……クリュウ様……あの……私……」
「待った。こんな嬉しい時に謝られても気分が落ちるだけだよ」
クリュウはフィーリアが言い切る前に先制する。そんなクリュウの言葉に、フィーリアは一瞬黙るが、すぐに「すみません……」と小さくつぶやく。
そんな小さくなってしまったフィーリアに、クリュウは少し怒ったように言葉を出す。
「まったく、フィーリアは肝心な時にドジるよね。密林で肉焼きセットを壊されて飢え死にしそうになるし、たまに肉とか忘れたり、最後

の最後でこけるし」
今まで彼女が起こしたドジッ子列伝を披露すると、フィーリアはえぐえぐと泣き出してしまう。そんな彼女を、クリュウは苦笑いしながら見詰める。
「それに本当はすごく泣き虫だし」
「うぅ……ごめんなしゃい……」
すっかり落ち込んでしまったフィーリアの頭を、クリュウはそっと撫でた。
「でも、そんなフィーリア、嫌いじゃないよ」
その言葉に、フィーリアはまた別の意味で泣き出してしまう。
「あ、ありがとうございますぅ……ッ！」
「だから、泣かないでよぉ。ほら、帰るよ」
ドスランポスの素材を剥ぎ取り終えたクリュウはそう言って立ち上がる。
「は、はい！」
フィーリアも涙を拭いて立ち上がる。が、
「いた……ッ！」
ついつい怪我した足に重心を掛けてしまい、痛みでその場に倒れてしまう。
「だ、大丈夫？」
「あ、はい。平気です」
笑顔でそう答えるが、これでは立ち上がれない。
まったく自分はどうしてこう肝心な時にドジるのだろうか。自分で自分が嫌になる。どうしたものかと考えていると、
「ほら」
そう言って屈んだクリュウはそっとそんな彼女に背中を向けた。
一瞬何だかわからなかったが、クリュウの言葉に気づく。
「おぶってあげる」
つまり――おんぶだ。
「えッ!?　け、結構ですぅッ！」
フィーリアは顔を真っ赤にして手を全力で振って遠慮するが、足が

動かないのは事実だ。
「ほら、早く帰ろうよ」
そう言うクリュウも頬が赤い。彼だって恥ずかしいのを我慢しているのだ。そんな彼に、場違いながらもかわいいと思ってしまう。
そして気づく。
こんな事をしてもらえるのはもうないかもしれない。
そう思うと、フィーリアの頬は緩み、そそくさと彼の背中に抱きつく。
「じゃ、じゃあ、お願いします」
「任しといてよ」
クリュウはフィーリアを背負って立ち上がった。そんな彼にフィーリアは顔を真っ赤にしながら不安そうに乙女的な質問をする。
「あ、あの、重くないですか？」
「うん。全然」
「よ、良かった……」
安堵するフィーリアにクリュウは不思議そうに首を傾げると、歩き出す。
クリュウの背中でフィーリアはそっと、さらに強く抱き付く。
クリュウはそんなフィーリアを背負いながらとことこと歩く。
そして、トンネルの向こう、光りに向かって歩いて行く。その向こうには二人の勝利を祝うような暖かな日の光が満ち溢れていた……
イージス村への帰りの馬車の中、クリュウは幌の中で眠っていた。あれだけの戦いをしたんだ。疲れて当然だろう。
一方フィーリアは行きと同じように竜車を走らす。シルキーも二人が無事に帰って来た事が嬉しいのか元気いっぱいで竜車を引く。
捻った足は大した事はなく、クリュウが手当てしてくれたのでもう痛みはあまりない。
フィーリアは幌の中で眠っているクリュウを一瞥し速度を緩める。
冷静に運転するフィーリアだったが、先程のクリュウの背中の温もりを思い出し、だらしなく頬を緩めてしまう。
（クリュウ様の背中……ポカポカだったなぁ……）

二人を乗せた竜車は、一路イージス村を目指して突き進んだ。
三日ぶりに帰って来たイージス村では、すでにドスランポスを倒したという情報が回っていて二人は大歓迎された。
フィーリアの足もすっかり元に戻っていて、クリュウの腕も問題なく動く。
竜車を降りた途端、エレナが駆け寄って来て、そのままクリュウに抱き付いてきた。
「え、エレナ!?」
「もう！　心配したんだから！　帰って来るのが遅いわよぉッ！」
そう言ってギュッと抱き付くエレナ。その瞳が濡れてキラキラと煌いている事に気づき、クリュウは謝る。
「ごめん。心配掛けちゃったみたいで。でも、ちゃんとドスランポスは狩ったし、無事に帰って来たからさ」
「そんな事どうでもいいの！　あんた、どっか怪我してない!?」
「え？　あ、いや別に……」
「ほんと!?　って、あんた腕怪我してるじゃない！」
バ、バレた……
「いや、大した怪我じゃないし」
「ほら、早く家に来なさい！　手当てしてあげる！　ありがたく思いなさい！」
「ちょっと待って！　手当てならもうフィーリアにしてもらって――いだい！　右腕は引っ張らないで！　痛いからぁッ！」
そのまま引きずられて連行されるクリュウ。村の人達からも笑いが上がった。これが村のピンチを救った小さな英雄（ヒーロー）だと思うと、笑ってしまう。
村長は二人に置いて行かれて残ったフィーリアに笑みを送る。
「いやぁ、今回は本当にありがとう！　今日は宴会にしようじゃないか！」
「えぇ。クリュウ様の初めての大型モンスターを狩った記念日ですからね」
「いやぁ、めでたいめでたい！　みんな！　宴会の準備だ！」

『おおおおおおおおおッ！』
ノリのいい村人達の気合の入った大声に、フィーリアも嬉しそうに微笑む。
「いい村ですね」
ぽつりとつぶやいた言葉に、村長はうむとうなずく。
「みんないい人達さ。それに、フィーリアちゃんもすっかりこの村に馴染んできたね」
「ええ。私、この村に腰を据えようかな？」
「そりゃいい！　みんな大歓迎さ！　でも、あんまり無理をしちゃダメだよ。無理してこの村にいる必要はない。君の実力はみんなが必要としてるんだから」
「そんなにすごくないですよ、私は」
謙遜するフィーリア。だが、村長はそんな彼女に突如今までの笑顔を消し、真剣な瞳を向けて言葉を放つ。
「《新緑の閃光》が、こんな小さな村にいるのはいい事じゃないよ」
「!?」
村長の言葉に、フィーリアは驚愕する。《新緑の閃光》とは、世間に名の通った彼女の二つ名だった。
二つ名を持つハンターは世間に名が通るほどの実力者という事を意味する。そしてフィーリアもまた新緑の閃光という二つ名を持つハンターであった。
こんな辺境の小さな村に置いておくには、あまりにも惜しい人材という訳だ。
「ど、どうしてそれを……」
「有名だからね。レイアシリーズを身に纏ったガンナーで気が付いたさ」
村長は再び屈託のない笑みを浮かべる。だがその瞳はしっかりとフィーリアを見詰めて離さない。そんな彼の視線を見ていられずフィーリアはうつむく。
「でもね、君みたいな優秀なハンターは、もっと世界の為、多くの人々の為にいるんだ。こんな小さな村じゃ荷が軽すぎる――いずれ、出て

行くのだろう？」
村長の言葉に、フィーリアは何も言い返せない。
「何も今返事がほしい訳じゃない。でも、これだけは聞いてくれ」
村長は真剣な瞳でフィーリアを見据える。
「君はこの村に置いておくにはあまりにも有能過ぎる。もっと多くの人達が、君の助けを求めている。これだけは覚えておいてくれ」
村長はそう言い残すと、すたすたと走り去ってしまった。
残されたフィーリアは、ただ呆然と、一番星の輝く夕焼けを見詰める。
――自分の居場所は、ここじゃないのかな？――
フィーリアは、この時ほど自分の二つ名が恨めしく思った事はなかった。そんなものがなければ、ずっとこの村にいたい。そう思うのに。
自分の名を頼って懇願（こんがん）してきた人達は数多くいた。そんな人達を助け、自分も嬉しかった。
だが、今は違う。
今の自分は、この村で、クリユウと一緒に狩りに出掛けるのが楽しい。
今は自分の為に狩りをしている。
でも、やっぱり自分は、足を止めるべきハンターじゃないのかもしれない。
フィーリアの背中から、夕焼けが大地をオレンジ色に染める。暗い影に包まれた彼女の顔色はわからない。ただ、その唇は、キュッと結ばれていた。

第19話　灼熱砂漠の戦い

ドスランポスを倒してから一ヶ月の月日が流れた。
あれからクリュウは飛躍的に成長した。きっとあの狩りが彼を変えたのだろう。
ドスランポスもこの一ヶ月でさらに二頭討伐し、武器もその素材を使ったドスバイトダガーに変えた。ドスランポスの軽くて丈夫な皮を盾や柄に使い、刃には巨大で鋭利な爪が使われたその威力はハンターナイフとは比べ物にならない強力な武器だ。
防具は相変わらずのランポスシリーズだが、彼はすっかりその防具が気に入っていた。
そんなクリュウはフィーリアと共に今日も狩りに向かった。
二人が向かったのは村から竜車に揺られて三日掛かる場所にあるレディーナ砂漠という狩り場。昼は四〇度を越える湿気ゼロの炎天下で、夜はマイナスを記録する恐るべき場所だ。だが、そんな場所にもモンスターは環境に応じて進化して生きているのだ。
二人は別の村からの依頼でこの場所へ来た。目的はゲネポスの群れの討伐であった。
ゲネポスとはランポスの亜種で、砂漠に住むのに特化したモンスターだ。砂漠の色と同じ茶褐色の鱗に包まれ、その鋭利な牙や爪を使って集団で狩りをする。最大の特徴は鋭利な牙から麻痺効果を持った毒液を分泌する事。噛まれたら最後、体中が痺れて動けなくなる。その間に一斉攻撃を喰らったらアウトだ。
砂漠のハンターとも言うべきゲネポスが、最近レディーナ砂漠で大量発生しているのだ。なんとなく、ランポスの時と同じ感じがした。
「まさか、ドスゲネポスがいるなんてオチはないよね」
拠点（ベースキャンプ）についたクリュウはアイテムの用意をしながらつぶやいた。
セレス密林でのランポス大発生はドスランポスがいたからであった。なので今回のゲネポスの大発生もそれを率いるドスゲネポスがいるのではないかと不安になる。そんな彼の言葉にフィーリアは苦

笑いする。
「ドスゲネポスの目撃情報はありませんからたぶん大丈夫ですよ。ですが絶対にないとは言い切れないので、もし遭遇した場合はこちらは装備不足。その時は一時離脱しましょう」
　そう言うとフィーリアは支給品や持参したアイテムを道具袋（ポーチ）に入れる。クリュウも同じようにアイテムを詰めるが、ひとつ今まで見た事のない薬品を見つけた。
「この白い液体は何？」
「それはクーラードリンクです。飲むと一時的ですが体内の新陳代謝を加速させて発汗作用を高めて高熱に耐えられるようになります。砂漠や火山では必需品です」
「なかったら、どうなるの？」
「死にます」
　さらっとすごい事を言うフィーリアに、クリュウから笑みが消える。
「今ここは岩場なので日差しが直接注ぎ込みませんから問題なく動けますが、砂漠や火山の気候は通常人間が活動できる範囲を超えています。もしもクーラードリンクなしに突っ込むようなバカな事をすれば、三〇分もかからずに死にます」
　初めての厳しい環境の狩り場の実態を知り、クリュウは青ざめ、慌ててクーラードリンクを飲もうとする。が、
「苦い？」
　ふと気になって訊くと、フィーリアは笑顔で、
「無味無臭です。少々粘り気はありますが、問題なく飲めます」
　そう言ってフィーリアはクーラードリンクを飲む。クリュウもそれをまねて飲む。確かに味はないし匂いもない。少し粘り気があって少々飲みにくいが、問題なく飲める。そしてもうひとつ、心地良いくらいに冷たい。のどを通って胃に流れていくのが感じられる。
　全部飲み干すと、フィーリアは「行きましょう」と言って歩き出す。クリュウもその後に続く。
　岩場の高台に位置する拠点（ベースキャンプ）は見晴らしがいい。

だが、どこを見ても砂砂砂というつまらない光景。脇の下り坂を下って下まで降りると、岩場のトンネルが続く。いつの間にか地面は岩盤ではなく砂に変わっていた。そのままさらに進むと、トンネルの終わり。その向こうは砂漠であった。向こうの景色が揺れて見える。蜃気楼（しんきろう）というやつだ。

二人は無言でトンネルから出る。と、

「あ、暑いぃ……」

「暑いですね……」

二人から早速その厳し過ぎる環境の感想が漏れた。

灼熱光線を降り注ぐ太陽は密林や森丘と同じはずなのに、まるで別もののように殺人的暑さを放っている。そしてその熱を砂が照り返し、地面からも熱が上がる。さらに熱風が二人の髪の毛を揺らす。

感想――死ぬほど暑い。

「クーラードリンクを飲んだのに、暑いよぉ？」

「あれはあくまで高熱に体が耐えられるようにするだけで、体感温度は仕方ありません。これでもクーラードリンクで暑さもかなり和らいでいる方なんですから」

「うへぇ……火山はもっと暑いんでしょ？」

「はい。しかも熱気が包まれていますので余計に。まだ蒸し暑くない砂漠の方がマシです」

「……フィーリアは火山も行った事もあるの？」

「何回かは。ですがあまりの暑さに、最初一人で行った時にはさすがに安全な場所で一時的に下着姿になったほどです」

辛い体験談を言うフィーリア。だが、クリュウはふとこの前間違って見てしまった彼女の下着姿を思い出す。白いキャミソールという清楚な出で立ちが頭にフラッシュバックする。

「クリュウ様？　顔が赤いですが大丈夫ですか？」

そう心配する彼女の顔には玉のような汗が流れている。その火照った姿がまたなんとも……

「ご、ごめんなさい！」

とっさに謝ったクリュウだが、フィーリアはなぜ謝られたのかわか

らず困惑する。
「とにかく先を目指しましょう。このままここにいてもクーラードリンクの効き目が切れるだけですから」
そう言ってフィーリアは歩き出す。その後ろからまだ頬の赤いクリュウがそそくさと続く。
一歩歩くたびに砂の中に足が足首辺りまで沈むのは、とてつもなく歩きづらく体力を奪われる。玉のように流れ出る汗も厄介だ。それの原因は体で直接浴びたら串刺しにされるんじゃないかと思うような強烈な日差し。そして、ただ呼吸をするだけで肺が焼けそうになる。あまりにも厳し過ぎる環境だった。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
砂漠の景色は殺風景であった。進めど進めど砂しかない。モンスターにも会わない。体力が急激に失われる。今までの狩り場とは桁違いに過酷だ。
フラフラになりながら進むクリュウの先を進むフィーリアはそんなクリュウと違って疲れた様子もなく歩く。やっぱり踏んで来た場数が圧倒的に違うのだ。今回が砂漠初体験のクリュウじゃそんなの無理だ。
「一度休みましょうか？」
予想していたのだろう。フィーリアは笑顔でそう訊いてきた。クリュウはすがるようにうなずく。
二人は近くの大きな岩の陰で一休みする。日差しが遮られただけでずいぶんと暑さが和らぐと実感した。
クリュウは腰に掛けた水筒の水を飲んだ。だが先の事を考えてのどが軽く潤う程度でフタをする。
一方、フィーリアは支給された地図と睨めっこしている。その姿からは疲労は微塵も感じられない。踏んで来た場数が違うのだと自分に言い聞かせるが、年下の女の子に体力的に負けてしまっている事実はクリュウの小さな男としてのプライドに容赦なく突き刺さる。
「フィーリアはすごいねぇ」
気づくと自然とそう言葉が漏れていた。

「え？　何がですか？」
　クリュウの声に、フィーリアは地図から顔を上げて不思議そうに首を傾げる。
「いやさ、こんな砂漠にいても平然としてるし」
「そんな事ありませんよ。私だって暑くて仕方ありません」
　そう苦笑いしながら言うフィーリアだが、汗を掻いている以外は平然そうに見える。やっぱり踏んで来た場数が……やめよう。なんだか情けなくなってきた。
　しばし休み、クリュウが少し動けるようになってから再び歩き出す。
　燦々（さんさん）と照りつける太陽の日差しにうんざりしながら、二人は歩く。だが、見えるのは砂ばかりで、モンスターどころか虫一匹出て来ない。
「全然いないね、モンスター」
「まあ、砂漠ですから遭遇するのは簡単じゃありません。私達はただ歩いて探すしか手がないですから」
「うぅ……暑い……」
　温暖な気候で育ったクリュウには、この過酷な世界はあまりにも厳し過ぎる。
　フラフラとなりながらそれからも続く退屈な砂の世界を歩いていると、
「ん？」
　遠くに何か動くものを見つけた。ゲネポスだろうか。
「フィーリア。あれ」
「はい。見えています。行ってみましょう」
　二人はその動くものに向かって進む。すると、近づくにつれてその姿が見えてきた。それは砂から生えた大きなヒレだった。まるで海を翔けるサメのようにヒレを砂上に出して砂中を泳いでいるように見える。あれは確か……
「ガレオスですね」
　名前を出す前にフィーリアが先に言った。

ガレオス。それは砂竜と呼ばれる砂漠だけに住む奇怪なモンスター。三角形の頭を持ち、それ以外は脚がある以外は極めて魚類に似たモンスターで、強靭な脚と尻尾を使って砂の中を泳ぎ回る。音に敏感で離れた足音も聞き逃さない。砂中からいきなり襲い掛かり、砂ブレスという砂の塊を吐き出して攻撃してくる。しかも砂上に出ればのろいが、砂中では人間じゃ追いつかないほど速いので捕捉が難しい。分類上通常モンスターに位置づけられているが、その大きさはドスランポスなんかよりも大きい。砂漠では避けて通れない厄介な相手……と、これもまたモンスター図鑑に書いてあった。

数にして三匹。グルグルと広大な砂場を回遊している。厄介な事になった。

「ど、どうする？」

「迂回して行くのも手ですが、それにはかなりの距離を取らないと彼らの聴覚に引っ掛かりますのでかなりの遠回りになります。ここは強硬手段が良いかと」

「強硬手段って、狩るって事？」

「はい」

フィーリアはそう答えるとヴァルキリーファイアを構えた。だがそんな彼女に対しクリュウは慌てる。

「ちょ、ちょっと待ってよ。僕らは音爆弾を持ってないんだよ。どうやって砂中から引きずり出すの？」

音爆弾とは人間には聞こえない超高音を炸裂させる投げ玉で、音に敏感なモンスターならその強烈な爆音に等しきすさまじい大音響にもがき苦しみ、その間の隙を突くという閃光玉などと同じ補助アイテムである。しかもガレオスの場合は砂中から引きずり出す事も可能なのだ。だからガレオスを相手にする時は音爆弾は必需品となる。しかし今回はゲネポスが相手なので持って来ていないのだ。

そんなクリュウの言葉に対し、フィーリアは「そうですね」とうなずいた。しかしフィーリアにはある自信があった。

「確かに今回の目的はあくまでゲネポスでしたので音爆弾はありません。しかしそれは剣士での話。見ていてください」

そう言うとフィーリアはボウガンを構え、弾丸の入った袋から目的の弾を取り出すと装填。そして動き回るガレオスのヒレに狙いを定め……撃つ。

撃ち出された弾は動き回るガレオスに吸い込まれ、命中する直前で炸裂。無数の小さな弾丸が広範囲に撃ち出された。ガレオスのヒレはその無数の弾丸によって撃ち抜かれ血が飛び散る。だがそれでもガレオスは構わず突き進むが、第二射が再び炸裂し血が迸(ほとばし)る。そして、

「ガアァッ！」

悲鳴を上げてガレオスが砂上に飛び上がって来た。その大きさにクリュウは目を見開く。

ガレオスは砂上に落ちるとそこで苦しそうにジタバタともがき苦しむ。

「今です！」

「え？　あ、うん！」

クリュウは慌てて走り出す。砂の上は走りづらく少し足が遅くなるが、それでもすぐにガレオスに到着する。

腰からドスバイトダガーを抜き、クリュウはすかさずガレオスの体に叩き込む。ランポスよりは硬いがそれでもドスランポスのそれに比べればもろい。

一撃二撃と攻撃を加え続ける。が、

「ガアアアァッ！」

突如ガレオスは立ち上がった。クリュウは間一髪のところでバックステップして離れる。

クリュウは立ち上がったガレオスの大きさに改めて驚く。ヒレが立つとその体高は二メートル以上はありそうだ。体長はその倍はあるか。

ガレオスは自分を攻撃して来たクリュウを見つけると低く唸る。距離が離れているのでガレオスは動き出すが、その速度はあまりにも遅い。人間の歩行よりも遅いくらいだ。

「今だ！」

クリュウは緩慢な動きをするガレオスに突貫する。いくら強くてもこんなに動きが鈍ければ簡単に避けられる。
近づくクリュウにガレオスは「グルゥゥゥ……」と低く唸ると、いきなりその大きな身体を仰け反らせた。クリュウはそんなガレオスの行動を不思議に思いながらも構わず突っ込む。
「クリュウ様！　避けてください！」
フィーリアの声に慌てて足を止める。が、もう遅かった。
「ガアアァァッ！」
鳴き声と共にガレオスの口から何かが吐き出された。クリュウはとっさに盾を構える。刹那、盾に鉄球がぶち当たったかのような音と衝撃が走った。そのあまりに威力にクリュウは軽く吹き飛ばされ、暑い砂の上に、クリュウは倒れた。
「い、今のが砂ブレス……ッ！」
砂なんてもんじゃない。あれはもう岩石だ。そのすさまじい威力を受けた左手はビリビリと痺れている。
正面から突っ込むのは危険だ。ならば、
クリュウは横に走った。ガレオスの側面に位置すると一気に距離を詰める。ガレオスは慌てて顔を向けようとするが、遅すぎる。
「てりゃぁッ！」
剣を思いっ切りガレオスの砂色の体に叩き込む。血が噴き出し、ガレオスは悲鳴を上げる。だが、構わず斬り付ける。そして何度か剣を入れると、
「うわッ!?」
突如ガレオスの身体が激しく痙攣した。かと思ったら砂上にぐったりと倒れる。やったのだろうか。
「クリュウ様！」
フィーリアが駆け寄って来る。
クリュウは動かなくなったガレオスを呆然と見詰める。
「ランポスよりは攻撃のひとつひとつは強いけど、動きが緩慢（かんまん）だから結構楽だった」
正直な感想を言うと、フィーリアもうなずく。

「そうですね。砂中にいる時はとても厄介ですけど、いざ砂上に引きずり出せば動きは緩慢なので、ひたすら斬りつけていれば恐ろしい相手でありません」
「へぇ、結構簡単なんだね」
「まあ、単体はそうかもしれませんが、ガレオスもランポスと同じく集団で生活するので一匹に構っていると背後から砂ブレスを喰らうという事もありますので、油断は禁物です」
「まあね。でも楽だったよ」
「集団で来なければ恐れる相手ではありませんが、ドスガレオスにはその常識は通用しません」
「ドスガレオス？」
　ドスガレオスとはドスランポスと同じくガレオスを束ねる大型モンスターだ。ガレオスの身体よりさらにふたまわり以上も大きく、黒い皮膚をしているのが特徴。砂中でも巨体なのにガレオスと同等、またはそれ以上で泳ぐ。砂上に上がったらガレオスと同じく動きは緩慢だが、攻撃力は桁違いに高いし、牙には強力な麻痺毒があり、砂上を滑空して獲物に噛み付き痺れさせるという荒業もする。
「はい。ドスガレオスとガレオスは基本的には同じですが、その攻撃力と巨体を生かした攻撃範囲は圧倒的で、ヘタすれば一撃で吹き飛ばされてしまう事もあります。ですので、ドスガレオスの場合は徹底的に食い下がるのではなく、一撃離脱（ヒットアンドウェイ）を心がけてください」
「わかった」
　フィーリアのハンターとしての知識を、また頭に刻み込む。そしてふと周りを見回すと、残り二匹いたガレオスは別々の砂上で倒れて動かない。これはもしや……
「あ、あのさフィーリア。あのガレオスは……」
「え？　あぁ、私一人で片付けました。ガレオスにはガンナーが向いているんです」
　そうさわやかな笑顔で言うフィーリア。
　いくらガンナーだと倒しやすくても早過ぎだ。クリュウが一匹を

相手にしている間に二匹を片付けておつりの時間までできてしまうのだから。やっぱりフィーリアはすご腕のハンターだ。改めてそれを実感する。
「さすがフィーリアはすごいなぁ」
「そんな事ありませんよ」
フィーリアは謙遜するが、やっぱりすごい。
クリュウは死んだガレオスの前で手を合わせると、手際良く皮膚を切り裂いて鱗などを剥ぎ取る。すると、
「あ、これは《魚竜のキモ》！」
そう嬉しそうに叫ぶと、フィーリアはためらいもなくガレオスの腹の中に手を突っ込む。一瞬クリュウは「えぇッ!?」と声を上げて驚いた。いくらかわいい顔立ちやきれいな髪をしている女の子でも、やっぱりフィーリアはハンターなんだと改めて思う。
そんなこんなでフィーリアがガレオスの体内から引きずり出したのは内臓だった。さすがのクリュウもこれには「うわぁッ！」と声を上げて驚き後退る。
「な、何それ!?」
クリュウが悲鳴に近い声で問うと、フィーリアは笑顔で答える。
「これは魚竜のキモです。これ自体はハンターには無縁ですが、このキモは大変美味でして、貴族や王宮などが晩餐会（ばんさんかい）の為に欲しがる物なんです。これは臨時収入になりますよ」
「わ、わかったから！　そんな気持ち悪い物を持ちながら笑顔で説明するのはやめて！」
あまりにも不釣合いな光景にクリュウは悲鳴を上げる。
フィーリアは苦笑いしつつも素材袋の中にそのキモを入れる。ついでにという具合に砂竜（ガレオス）の鱗を数枚ほど袋に入れ、何事もなかったかのように立ち上がる。
一方、あまりにもショッキングな映像を目撃したクリュウは軽い吐き気を感じていた。今まで彼が見たのは鱗や皮である。内臓のようなものは初めて見たのだ。
「クリュウ様。飛竜種ともなれば内臓も立派な素材です。これくらい

慣れておかないと後が大変ですよ」
　フィーリアはそう軽く言うが、免疫のないクリュウには衝撃が強すぎた。
「と、とにかく先を急ごう」
　少しフラフラしながら歩き出すクリュウの後を、そんな彼の姿におかしそうに笑いながらフィーリアが続く。
　またも続く砂だらけの世界に、クリュウはため息する。
「歩いても歩いても砂しかないよぉ」
「砂漠ですからね。仕方ありませんよ」
　フィーリアは苦笑いして答える。彼女だって彼の気持ちはわかる。まだまだかけだしの頃はそんな風に思った事は何度もあった。今はそれが砂漠というものだと理解してしまったので不思議には思わない。《慣れ》とは恐ろしいものだ。変だと思うのに、変と思わなくなってしまう。だが、こういう《慣れ》こそ油断に繋がる。フィーリアは初心を忘れないようにと心がけてきたが、そう考えると自分もずいぶん《慣れ》に支配されてしまった。
「怖いですね……」
　ぽつりとつぶやく。
「え？　何？」
「何でもありません」
　不思議そうに振り返るクリュウ。その顔には疲労が覗えるが、瞳はキラキラと輝いている。初心者だからこその、何も知らない無垢な瞳。自分はとっくの昔に捨ててしまった輝きだ。
「ただ、クリュウ様がうらやましいんです」
「僕が？」
「はい、そのキラキラした瞳が――私にはないその輝きがうらやましくて」
「フィーリア……」
　少し悲しそうな彼女の笑みに、クリュウは黙ってしまう。なぜそんな笑みをするのか、彼にはわかるはずもない。
「さあ、早くゲネポスを狩って村に帰りましょう。エレナさんに怒ら

れてしまいます」
「そ、そうだね」
普通の笑みをして言うフィーリアに、クリュウはそれ以上の追求はしなかった。訊かない方がいい。そんな警告が胸でしたから。
クリュウが前で、フィーリアが後ろに続いて砂漠を歩く。もうお決まりの陣形（フォーメーション）で、二人は砂だらけの世界を歩く。
ガレオスとの遭遇戦から半刻ほどしたところで、ようやくゲネポスの群れを発見した。
二人は小さな岩の陰に隠れて様子を覗う。
ゲネポスはランポスの亜種だとは知っていたが、本当にそっくりだ。ただし、その鱗は褐色色。いくらか顔つきも恐ろしい。
ゲネポスは五匹。赤い瞳をギョロリと向けて各自それぞれ別方向を見て警戒している。見たところ隙はない。
「奇襲はできませんね」
「強襲するって事？」
「そうですね。ゲネポスの戦い方はランポスと同じです。ですのでランポスに対する対処方法で十分勝てます。しかし噛み付きには注意してください。噛まれたら体が痺れて一時的とはいえ全く行動不能となってしまいます。その間に集団で襲い掛かれば、命はありません」
「う、うん」
ランポスと同じでいいという安堵と、痺れたら一巻の終わりという恐怖に複雑な顔をする。そんな彼の表情に心境を悟ったのか、フィーリアは優しく微笑む。
「大丈夫ですよ。もしクリュウ様が痺れられても、その時は私が全力で掩護しますよ」
「あ、ありがとう」
フィーリアの優しさにクリュウは安堵したように微笑むと、剣の柄を握る。
「後方支援、任せたよ」
「はいッ！」

フィーリアの返事に、クリュウは岩陰から飛び出す。続いてフィーリアもボウガンを構えて走り出すと通常弾ＬＶ３を連射する。突然の攻撃の嵐にゲネポス達は悲鳴を上げる。その間にクリュウはゲネポスに向かって突貫する。だが一番先頭にいるゲネポスがフィーリアの攻撃の嵐の中を突っ切ってクリュウに突進して来た。

「ギャアッ！」

クリュウは自分に突っ込んで来るゲネポスを回避する。そこへ無数の銃弾が炸裂しゲネポスの体を貫く。

連携攻撃。一緒に狩りに出続けたので二人はこれくらいの意思疎通はできるようになっていた。

後方のゲネポスはフィーリアに任せ、クリュウは続いて迫る二匹のゲネポスのうち右側の方に斬り掛かる。

「せいやぁッ！」

ドスバイトダガーがゲネポスの褐色の身体を斬り裂く。

「ギャアッ!?」

突然の激痛にゲネポスは悲鳴を上げて仰け反る。その隙に連続してクリュウは斬り掛かった。

「クリュウ様！」

フィーリアの声に反射的に後退する。すると、先程まで自分がいた所に別のゲネポスが口を大きく開きながら飛び込んで来た。もしフィーリアの声で下がらなければ、あの爪が、牙が、自分を襲っていただろう。

バックステップして離れると、そこへすかさずクリュウに向かって襲い掛かろうとするゲネポスに無数の銃弾の雨が降り注ぐ。フィーリアの後方支援だ。

二匹のゲネポスが銃弾に貫かれて悲鳴を上げる。そして銃弾の雨が止むと血まみれのゲネポス二匹にすかさずクリュウが斬り掛かる。《斬りつける》というよりは《叩きつける》との方が相応しいだろう一撃の数々。

斬って斬って斬りまくる。

薙ぎ払うような剣を振り抜き、手前のゲネポスを吹き飛ばす。吹き

飛ばされたゲネポスは砂の上に倒れて沈黙した。
「ギャアッ！」
もう一匹のゲネポスが牙を向けて襲い掛かって来る。その一撃は盾で防ぎ、その勢いで後方に退避する。が、
「ギャアッ！」
「うわッ!?」
別のゲネポスが後ろから遅い掛かって来た。完全な死角からの攻撃に、クリュウはなすすべもなく押し倒される。
「うぐぅッ！」
クリュウは砂の上に仰向けに倒れた。上にゲネポスにのし掛かられ、動けない。
「くぅッ！　このぉッ！」
「ギャアッ！」
ゲネポスは仲間の仇と言わんばかりに血のように真っ赤な瞳でギロリと睨みつけ、ガバァッと口を開いて鋭利な牙を向ける。そして、
「ぐわぁッ！」
ゲネポスはクリュウの肩に噛み付いた。その瞬間、身体がビクッと痙攣した。体が痺れ、動けなくなる。
（しまったッ！　麻痺が……ッ！）
体が痺れて動かない。ヤバイ……ッ！
麻痺というのは初体験だが、本当に身体が動かない。口も、目も動かせない。聞こえるのは上に乗りかかるゲネポスの獲物を獲た歓喜の声。
恐怖した。
ゲネポスは口をガバァッと開けて噛み付こうと首を下げる。目の前に、ゲネポスの顔が、口が、牙が近づく。
（やられる……ッ！）
「クリュウ様から離れなさいッ！」
至近距離で聞こえたフィーリアの声の後、フィーリアが突貫して来た。ってええッ!?
フィーリアはクリュウに噛み付こうとしたゲネポスにボウガンで

殴り掛かった。いきなり殴り掛かれたゲネポスはバランスを崩してクリュウの上から倒れる。そして、倒れたゲネポスの頭にゼロ距離からフィーリアは容赦なく弾倉の中の弾全部を撃ち出した。ある意味恐怖の後継だ。そして、頭を撃ち抜かれたゲネポスは動かなくなる。

「クリュウ様！　しっかりしてください！」

フィーリアは大事なヴァルキリーファイアを放り投げてクリュウに抱き付く。

「クリュウ様！　死なないでください！」

ギューッと抱き締めて泣きそうな顔でクリュウの顔を覗き込むフィーリア。彼女のきれいな顔が目の前にあってクリュウは心の中で悲鳴を上げる。

痺れていて動けないししゃべれない。なのでフィーリアの激しい抱擁（ほうよう）攻撃に対してクリュウは全く抵抗ができない。

「クリュウ様！　クリュウ様ぁッ！」

「……は……放して……」

「あぁッ！　クリュウ様良かったぁッ！」

ようやく麻痺が解け始め、クリュウはわずかに口を動かして声を絞り出す。

「放し……て……」

「え？　あ、すみません！」

フィーリアは顔を真っ赤にしながら慌ててクリュウから離れる。

ようやくフィーリアの拘束を解かれたクリュウはゆっくりと起き上がった。まだ体はかなり痺れるが、口はもう問題なく動く。

「し、死ぬかと思ったぁ……」

「ご無事で何よりです。それより傷の手当てを」

「え？　あ、うん……」

フィーリアはクリュウの肩の傷を見る。幸いそれほど深くは刺さっていない。これなら放っておいても問題はないだろう。でも一応消毒だけでもしておく。

手当てをやっている間に、クリュウの痺れは完全になくなっていた。

クリュウは何気なく周りを見回すが、すでにゲネポスの姿はない。全て狩ったようだ。しかしその死骸はどこにもない。時間が掛かり過ぎたのだ。
原因はわからないが、モンスターは死すと身体から特殊な成分を分泌して己が亡骸を処分するのだ。だから時間が掛かり過ぎると剥ぎ取る前に消えてしまう。ハンターの常識であった。
「あーあ、無駄にしちゃったなぁ」
「仕方ありませんよ。ですけど、ゲネポスはどうでしたか？」
そう訊くフィーリアに、クリュウはすごく悔しそうな顔をする。
「ランポスとあんまり変わらないけど、慣れない狩り場と麻痺牙にやられた」
「まあ、初めての狩り場ですから仕方ありません。砂漠は足場も悪いですし」
「でもさぁ……」
「そう落ち込む事ないですよ。誰だって初めては失敗するものです」
フィーリアは励ますように笑顔で言う。そんな彼女の優しさに、クリュウは小さく笑みを浮かべて感謝する。
「じゃあ行きましょう。あと十匹は狩らないといけませんからね。さぁ」
座り込むクリュウにフィーリアは笑顔で手を差し伸べる。
「う、うん」
クリュウはそれを掴んで立ち上がった。
「では、行きましょう」
「うん」
二人は炎天下の砂漠を並んで歩く。その先には地平線の向こうまで砂の世界が広がっていた。
その後、クリュウとフィーリアは十五匹のゲネポスを片付けた。元々ランポスの亜種程度の相手にドスランポスにも勝てるクリュウが負けるはずはない。最初こそはその動きの細かな違いや麻痺など知らない事ばかりで苦戦したが、すぐにそれはなくなった。
クリュウ達はゲネポスの鱗や皮、麻痺牙などを手に入れた。特に麻

痺牙はフィーリアによるとシビレ罠の調合素材にもなるらしい。貴重な素材だ。
　目標数の討伐を終えた二人は帰路に着いた。砂漠という慣れない狩り場にくたくたとなったクリュウは帰りの竜車の中でぐったりとしていた。
「ふー、とても気持ち良かったです」
　ほかほかと湯気を体から上げて戻って来たフィーリアにクリュウは笑顔で迎えた。
　フィーリアは今までお風呂に入っていたのだ。砂漠に行ったので体中砂だらけになっていたのでクリュウがお風呂を勧めたのだ。
「ごめんね。小さなお風呂で」
　この家に彼女が住み込みになってから今まで普通にお風呂は使っていたが、やっぱりお風呂は小さいのに変わりない。この村ではこれが平均的だが、ドンドルマのと比べれば多少なりとも小さいのだ。
　そんなクリュウの言葉にとんでもないと言いたげにフィーリアは首を振る。
「そんな、とても気持ち良かったですよ。あ、でも、私が一番風呂をいただいて良かったのでしょうか？」
「いいよいいよ。男が入った後の湯船なんて嫌でしょ？」
「いえ、そんな事ありませんよ」
　タオルで髪を拭きながら椅子に腰掛けるフィーリア。そんなフィーリアの姿に、クリュウはつい見とれてしまう。
　元がかなりの美少女であるフィーリア。それにさらにお風呂上りという要素が加わった魅力は破壊的（お風呂上りは魅力が一・五倍に跳ね上がる）。
　そんな感じで見とれていると、夕食を作りに来ていたエレナの一撃が後頭部に炸裂する。
「な、何するんだよッ！」
　いきなり頭を殴られたクリュウは振り向きざまに怒るが、エレナはそんなクリュウを見下したような瞳で見詰める。
「エッチッ！」

「ち、違うよッ！」
「何が違うのよッ！」
「ち、違うったら違うのッ！」
　言い合う二人にフィーリアは不思議そうに首を傾げる。もちろん二人が言い合っている理由などわかる訳もない。彼女も結構鈍感なのだ。
「さてと、僕もお風呂に入るかな」
　言い合いもひと段落した所でクリュウはタオルを掴んで部屋を出る。
　ランプの炎がゆらゆらと揺れ、部屋を幻想的に照らし上げる。
「エレナ様はお風呂に入られないんですか？」
「私？　私は自分の家で入るわよ――あ、もう沸いてるかな？　じゃあ私一旦家に帰るね。あと一時間は煮込まないといけないから。あのバカが上がったらそう言っといて」
「わかりました」
　エレナは手を振って家を出て行った。
　一人残されたフィーリアはエレナが用意してくれた紅茶を飲みながら本を読む。
　しばらくすると、タオルを首から掛けて頬を赤らめたクリュウがほかほかと湯気を出しながら戻って来た。
「ふー、気持ち良かったぁ……ってあれ？　エレナはどこ行ったの？」
「あ、家に戻られてお風呂だそうです」
「へー、何でまた自分の家のを。ここの使えばいいのに」
「お湯を沸かしてしまったからではないんですか？」
「あー、あり得るね」
　クリュウは笑いながらフィーリアの対面の椅子に腰掛ける。
「何読んでるの？」
「あ、これですか？」
　そう言ってフィーリアは本の表紙を見せる。それはクリュウにも見覚えのあるものだった。
「ハンターに大人気の月刊誌『狩りに生きる』です。都市部のハンター

の皆さんの愛読書です」
「ああ、僕もドンドルマにいた頃はよく読んだな」
「こちらに来てからはお読みになっていないんですか？」
「ははは、イージス村は辺境の村だからね。なかなかそういうのは回ってこないんだよね。残念ながら」
「でしたら私のをお読みになりますか？」
「いや、いいよ。別段読みたいって訳じゃないし」
「でも読んだ方がいいですね。特にクリュウ様のような初心者には重要な事が書いてありますから」
「あー、確かにハンターの基本は読んだね。でも実戦で実行できるかと言われれば難しいよね」
「まあ、状況や相手によって大きく変わりますから、この通りにいくという事はほとんどありませんね。あとは自分の経験や実力が重視されます。これに書いてあるのはあくまで基本ですので、応用は自分で考えるか人に聞くしかありません」
「だよねぇ、僕はまだ想像もつかないよ」
　苦笑いするクリュウに、フィーリアは優しく微笑んだ。
「その為に私がいるんです。クリュウ様がお一人でも十分戦えるハンターになるまでは、ふつつかながら私が講師です。そういった事は私が教えていきますのでご安心を」
「ありがとう」
　クリュウは嬉しそうに微笑む。そんな彼に微笑むと、ふとフィーリアは先日の砂漠での狩りを尋ねてみる。
「初めての砂漠はどうでしたか？」
「それって訊くぅ？」
「ふふふ、そうですね。訊くまでもないですね」
　砂漠は恐ろしく過酷な狩り場だった。
　身を焦がすような太陽の日差しはそれだけでも熱線なのに、砂に熱を溜め込み下からも熱が来る灼熱地獄。よくあんな所にモンスターは住めるなぁと感心してしまう。人間はあんな場所には住めそうもない。

「砂漠かぁ、あんまり行きたい場所ではないなぁ」
「気持ちはわかりますが、ハンターならこれくらい耐えねばなりません。狩り場の中には砂漠より過酷な火山地帯がありますし」
「そりゃそうかもしれないけどぉ……」
　クリュウは今回の狩りを思い出す。ガレオス戦、ゲネポス戦全てにおいて感じたのはあの集中力を奪うような暑さだ。正直辛過ぎる。
「これから先、砂漠はもちろん火山にも行くでしょう。これくらいで悲鳴を上げていたらキリがないですよ」
「うぅ、経験者の言葉には重みがあるぅ」
「とにかく、これからは密林と森丘の他に砂漠も含めた三ステージで狩りを行います。砂漠にもこれからどんどん進出しますからね、覚悟してくださいよ？」
「うへぇ……」
　クリュウはがっくりとする。せっかく風呂に入って体を温めたのに、心は先の事を考えて寒い。
　そんな明らかに嫌がっているクリュウに、フィーリアは昔の自分と重ねて見詰める。昔は自分も彼と同じ時があったものだ。
　それからは普通の会話が続いた。そして戻って来たエレナと一緒に夕食を食べる。いつもと同じ、いつもの光景。
　狩りの話をエレナに話し、エレナはクリュウのダメぶりをからかい、クリュウはふてくされ、フィーリアがフォローを入れる。そんないつもの日常。
　明日もまた狩りがある。この平和なひと時が、続くように……

第２０話　救援要請

砂漠初体験から二週間後、クリュウは砂漠に慣れる為にゲネポスやガレオスの討伐をこなしていた。そのおかげあってか砂漠の暑さや足場の悪い砂の上でも普通に動けるようになった。といっても、やっぱり暑さは変わらないので辛いのには変わりなかったが。

そんな砂漠慣れし始めたクリュウだったが、そんなクリュウに新たな試練が待っていた。

「商隊がゲネポスに襲われたぁ？」

鉱石採掘の為に密林に一人で出掛けていたクリュウが戻ってくると、酒場にいた私服を着ているフィーリアが村長とそう話していた。

二人、特にフィーリアは突然のクリュウの登場にかなり驚いた。そして合わせた視線を気まずそうに逸らすが、すぐに向き直って話し始める。

「……はい。レディーナ砂漠を通過していた商隊がゲネポスの群れに襲われたらしいんです」

フィーリアの言葉にクリュウはようやくその重大性に気づき、彼女と共に近くのテーブルに座って本格的に聞き始める。

「で、商隊は無事なの？」

「現在商隊は近くにあった洞窟に逃げ込んだらしいんですが、ゲネポスに包囲されていて身動きが取れないそうなんです。ですので伝令を走らせて付近の各村に救援要請を求めたそうです」

その一つがこのイージス村にも届いたらしい。テーブルの上には確かに救援要請の依頼書がある。だが、ここでひとつわからない事がある。

「護衛はいなかったの？　普通モンスターが住むエリアを抜ける時はハンターを雇うでしょ？」

この危険なご時世、モンスターの住むエリアを通過する場合は貴重な資金を使ってでもハンターを雇うのが常識だ。ハンターを雇わずにエリアを通過しようとすれば、モンスターに襲われて全財産を失う危険があるからだ。その為にも貴重なお金を使ってでも商隊はハン

ターを雇うのだ。
　クリュウの問いに、フィーリアは力なく首を横に振る。
「実は一応護衛の為に流れのハンターを二人護衛に雇ったらしいんですが、ゲネポスの奇襲に逃げ出してしまったらしいんです」
「何それぇ？」
　この世界にはハンターは大きく分けて三種類存在する。ハンターズギルドに登録した正式なハンター。クリュウのように各村と契約を結んで依頼をこなす村ハンター。そしてそのどちらにも属さない流れのハンターだ。上記二つのハンターには契約者であるギルドや村という監督するものがいるが、流れのハンターにはそれがない。その為に通常ハンターは依頼成功や失敗によってギルドポイントというポイントが存在し、そのポイントによって色々と待遇を得る事ができ、それがハンターのレベルに値する。高ければ高いほど高度な依頼が来て、低ければ簡単な依頼しか来ないというものだ。だが、流れのハンターにはそれがないので自由に依頼を受けられる。その為失敗すればペネルティや減点といった規則に縛られていないので今回のような事態が起きるのだ。といっても、何もハンターは命を懸けてその依頼主を守るという規則はない。自分の身が危なくなったら逃げても規則上は問題ないが、信頼などに大きく響く。一度失った信頼は、そう簡単には戻らないものだ。
　クリュウは流れのハンターを雇った商隊に同情してしまう。
「結果、護衛の消えた商隊は洞窟に逃げ込む事は成功したんですが、護衛なしの中での混乱で重傷者はなくとも軽い怪我をして動けない者もいるそうです。と言っても、包囲されていてはどっちにしろ逃げるのは難しいでしょう。さらに洞窟の中は外とは逆で雪山のような極寒ですから、あまり長い間は隠れていられません」
「なら、早く助けに行かないと！」
　クリュウは慌てて依頼書に名前を書こうとする。一刻の猶予もない。彼は引き受けるつもりだった。だが、毛筆が紙に触れる寸前、その依頼書はフィーリアに奪われてしまう。
「ど、どうしたの？」

「この依頼には問題があります」
「問題？」
「はい。まず一つはゲネポスの数です。報告によるとおおよその数は三〇匹ほどです。それ以上いる可能性もあります。そして何よりもう一つは」
　フィーリアは依頼書の一文を指差す。
「未確認情報ですが、ゲネポスの群れの中に一際大きなゲネポスが群れを指揮していたと書いてあります。おそらくこれはドスゲネポスと考えて良いでしょう」
　ドスゲネポスとはドスランポスと同じくゲネポス達を束ねる親玉の大型モンスターだ。大きさはドスランポスより少し大きい程度で動きもほとんど同じだ。しかし最も恐ろしいのはゲネポス以上に強力な麻痺性の牙。これを喰らえば麻痺して動けなくなってしまう。そうなれば確実に殺される。しかもまわりにゲネポスがいればさらに危険は増す。ランポスの亜種だけあって、やはり厄介な相手だ。
「ドスゲネポスがいればかなり厄介です。ゲネポスやドスゲネポスの執拗（しつよう）な攻撃に麻痺してしまう危険性もあります。今回の依頼はあまりにも危険です」
　フィーリアのいつになく真剣な表情に、クリュウは黙ってしまう。
「本来なら、ドスゲネポス討伐はもう少し先にしたいんです。せめて、対麻痺効果を備えたゲネポス装備を揃えたいのですが、残念ながら素材も時間もありません。私個人としては、クリュウ様の講師として今回の依頼は拒否したいのです」
「そ、そんなッ！　それじゃ商隊はどうなるのさ！」
「今のところ他の村で受注したという情報はありませんが、私達が動かなくとも他の村の誰かが引き受けてくれる可能性があります」
「……誰も引き受けない可能性だってあるじゃないか」
「そ、それはそうかもしれませんが……」
　フィーリアは複雑そうな顔をする。彼女としてはクリュウはまだこの依頼には早過ぎると考えていた。しかももし自分一人で受けるにしても、相手が悪すぎる。距離を取って攻撃する遠距離タイプのガ

ンナーにとって人海戦術は苦手な分野だ。群れで囲まれれば、剣士のように機敏には応戦はできなくなってしまう。さらにドスゲネポスがいるならなおさらだ。

結局、自分が取るべき選択のどれもが封じられている。今回の依頼は拒否するしかないのだ。

「とにかく、今のクリュウ様と私ではかなり厳しい戦いになります。ですので今回は諦めて――ちょッ!?」

フィーリアが言い終わる前に、クリュウは彼女から依頼書を奪い取った。驚く彼女の目の前ですぐさまクリュウはすぐ名前を書き込んでしまった。

「これで良しッ！」

「な、何してるんですか!?」

フィーリアはそう大声を上げると慌てて彼から依頼書を取り返そうとするが、伸びて来た手に対しクリュウは依頼書を高らかに掲げて避ける。

「何考えているんですか！　言ったはずです！　今回の依頼はクリュウ様には早過ぎると！」

いつになく顔を真っ赤にして本気で怒るフィーリア。その怒りは無謀なクリュウを責めるのと同時に彼を心配する気持ちも込められている。だが、

「だからと言っても、商隊を見捨てる訳にはいかないよッ！」

クリュウも必死な表情で言い返す。その彼の強い意思にフィーリアは驚くが、今回は彼女だって譲れない。

「いけません！　危険すぎます！」

「危険なのは百も承知だよ！　でもハンターなら危険は当然でしょッ!?」

「無理と無茶は違います！　未契約の今ならまだ破棄ができます！依頼書を返してください！」

フィーリアは依頼書をを取り返そうと手を伸ばすが、クリュウはそれを拒んで離れる。

「どうしてそんなに否定するんだよ！」

「クリュウ様にはまだその依頼は早過ぎます！　もう少し時間が必要なんです！」
「でも、だからって商隊を無視できないよ！」
「それは他の誰かがやってくれるはずです！」
「誰も受けない可能性だってあるでしょ!?　とにかく、僕はこれを受ける！」
「そ、そんな事私が許しません！」
「だったらフィーリアは来なくていいよッ！　僕一人でやる！」
「そ、そんなぁッ！」
　フィーリアが愕然としたような顔をする。まさかそこまで言われるとは思ってもいなかったのだ。
　いつになく緊迫した二人に、村長とエレナが困ったように顔を見合わせる。
「ちょ、ちょっと二人とも。ケンカはやめなさいよ」
　エレナの言葉に二人は静かに席に座り直す。だが、どちらも顔を合わせようとせず気まずい雰囲気が流れる。そんな二人にエレナは静かに水を差し入れた。そして村長も困ったように長い鼻を掻く。
「まあ、確かに優しいクリュウくんなら見捨てられないかもしれないけど。だからといってフィーリアちゃんの意見も見過ごしできない。さて、どうするか」
　村長も困ったような顔をしている。本当はフィーリアの意見を尊重してクリュウには諦めてもらいたいのだが、彼は意外と頑固なのできっと断らないだろう。その辺は亡き彼の父そっくりである。曲がった事を許さず己が志（こころざし）を貫く。本当に親子揃って不器用なハンターだ。
　しばしの沈黙が続く中、動いたのはクリュウ。いきなり立ち上がると驚く皆に背を向けてしまう。その背中には覚悟したような気迫があった。
「とにかく！　僕は行くから！」
「クリュウ様！」
　クリュウは鉱石が入った袋を担ぐと、村長に依頼書を渡して出て

行ってしまう。フィーリアも「待ってくださいクリュウ様ッ！　考え直してくださぁいッ！」と必死に説得しながら慌ててその後を追う。
　離れて行く二人の背中を見詰め、エレナも不安になって二人を追いかける。一人ポツンと残された村長は困ったようにクリュウから渡された依頼書を見詰めて苦笑いをしていた。
「もう一度考え直してください！」
　倉庫の中で必要な道具を持ち出すクリュウにフィーリアは必死になって説得する。が、クリュウは一貫してそれを拒否する。
「とにかく！　早くしないと商隊が全滅しちゃうんだよ！」
「ですが！　今回は危険過ぎます！」
　フィーリアはクリュウの肩を掴んで必死に止める。だがクリュウは「放してよ！」とその手を乱暴に振り払う。
「クリュウ様ぁッ！」
「フィーリア、どうせ言っても無駄よ。こいつ昔から一度決めた事は決して曲げない奴だから」
　そう言ってフィーリアをの肩を叩いて止めたのはエレナ。驚いて振り返ると、そこには諦めたような顔をしているエレナがいた。
「エレナ様……」
「ごめんね。でも、こういう奴なのよ」
　エレナは呆れたような言葉を言うが、その顔は少し嬉しそうだ。どんなに成長しても、そういう彼らしい部分はまるで成長していない。それがちょっぴり嬉しかった。
「クリュウ」
「エレナ……」
　エレナは小さく微笑むと、クリュウの肩をポンと叩いた。
「どうせ何言っても無駄なんでしょ？　だったらがんばって来なさい」
「エレナ……」
「でも、危なくなったら帰って来なさい。いいわね？」
「うん」
　クリュウはうなずくと、エレナも満足そうにうなずく。

そしてクリュウは必要な荷物を持って倉庫を出ると、村外れに止めてある竜車に向かう。シルキーは大タルの中に入った水をおいしそうに飲んでいたが、クリュウとフィーリアの姿を見ると嬉しそうに鳴いた。

クリュウは荷物を幌の中に入れると、再び倉庫に戻って残った物を運び入れる。そして準備は完了。だが、ここで一つ問題が……

「僕そういえば、竜車運転できないや」

二人は危うく盛大に転びそうになった。何とか耐え抜いたエレナは体をプルプルと小刻みに震わせながら怒鳴る。

「何考えてるのよあんたはッ!? バカじゃないのッ!?」

「ご、ごめん! すっかり忘れてた!」

「はぁッ!? 何が忘れてたよバカクリュウ!」

エレナはブチギレてクリュウの襟首を掴んでガクガクと揺らす。そんなエレナをフィーリアが慌てて止めて二人は離れるが、クリュウは困ったように頬を掻く。

「ど、どうしよう……」

困るクリュウの前で、エレナははぁと大きくため息した。

「仕方ないわね。私が送ってあげるわよ」

「ほ、本当!?」

満面の笑みを浮かべて大喜びするクリュウに対し、エレナは少し頬を赤らめてフンッそっぽを向く。

「し、仕方ないでしょ! あんた運転できないんだから! 仕方なくよ仕方なく!」

そう念押しすると、エレナは「じゃあ私も準備するからちょっと待ってて」と言って走り出そうとする。その時、

「待ってください!」

そう言って二人を止めたのは今まで静観していたフィーリア。驚いて二人が振り返ると、フィリアは何かを決意したような顔でクリュウを見詰めていた。

「わかりました。そこまで仰るなら、私も付き合いましょう」

「フィーリア……」

「待っていてください。すぐに準備しますから」
そう言ってフィーリアは急いで家に戻った。そんな彼女の背中を嬉しそうに見詰めるクリュウ。そんな彼を見詰め、エレナは小さく微笑んだ。
「いい仲間ね」
「うん。僕のわがままに付き合ってくれるなんて、ほんとにいい仲間だよ」
「まあ、がんばって来なさい」
「うん」
その後、完全武装したフィーリアと合流したクリュウは、村長やエレナに見送られてレディーナ砂漠を目指して出発した。
砂漠へ向かう竜車の中、二人に会話はなかった。フィーリアは運転席にいるが、クリュウは幌の中にいたからだ。
クリュウはチラリチラリとフィーリアを盗み見るたび、ため息する。
こうして無理してついて来てくれたのは嬉しい。だが、あんな言い合いの後だ。気まずくて話しづらい。どう話し掛けたらいいかまるでわからない。
「フィーリア、怒ってるよね」
何もしゃべらずに竜車を運転するフィーリアに、クリュウはため息する。
どうしたらいいかわからず、とにかく手元にある道具の調整をする。今回はシビレ罠に予備としてゲネポスの麻痺牙とトラップツールというトラップ系の調合道具の入っている箱を持って来ている。これを調合すればシビレ罠が現地で調合できるのだ。
他にはクーラードリンクを数本持っている。砂漠に支給されているクーラードリンクの数は少ない上、今回は緊急依頼なのでちゃんと支給さているかもわからないからだ。
他にも色々な装備を持って来た。そんな道具に囲まれながら、クリュウは品物を確認する。と、急に竜車が止まった。
「ど、どうしたの？」

クリュウがフィーリアの所に行くと、彼女はなぜかそこで立ち上がってボウガンを構えていた。
「ど、どうしたの？」
「ランポスです」
その視線の先を見ると、竜車を睨むランポスが二匹いた。まさかこんな所にまで出て来るなんとは思っていなかったクリュウは驚く。だが、フィーリアは驚きもせずにスコープを覗き込み、そして無言のままに引き金を引いた。瞬時のランポス二匹は銃弾に貫かれて悲鳴を上げる。構わず連発するとランポスは吹き飛んで倒れた。それを確認するとフィーリアはボウガンを背に背負い直して座ると再びシルキーを動かして竜車を走らせた。
そんな運転を再開したフィーリアに、なんて声を掛けるべきか悩むクリュウ。と、
「困った方です」
フィーリアがため息をしながら口を開いた。
「え？　誰の事？」
「クリュウ様に決まってるじゃないですか」
「そ、そうだよね。ごめん」
「まったく、私は一応あなたの講師として村に置いていただいてるのに、その講師の言う事を聞かないなんて問題児ですよ？」
少し責めるような言い方に、クリュウはしょんぼりとする。
考えてみれば、悪いのは自分の方だ。彼女は自分の事を心配して止めてくれたのに、自分はそれを無視して勝手に行動し、結局彼女を巻き込んでしまったのだ。
「ごめん……」
「なぜ謝るんですか？」
フィーリアは振り返らずに訊く。
「だ、だって、僕のわがままのせいで……フィーリアも巻き込んじゃったし」
落ち込むクリュウにフィーリアは振り返って彼の瞳を見詰める。向けられた瞳は責めるように感じたが、それは誤解だった。次の瞬

間、フィーリアは頬を緩めてフッと笑った。その笑みにクリュウは驚く。
「何を今さら。これまで散々クリュウ様の無茶に付き合わされて来たじゃないですか」
「うぅっ……」
フィーリアの言葉にクリュウは何も言えなくなってしまう。そんなクリュウをくすくすと笑いながら、フィーリアは嬉しそうに言う。
「でも、私はそんなクリュウ様が大好きですよ」
「え……？」
クリュウは驚いて彼女を見るが、フィーリアは再び前を見詰めて運転に集中していた。訊き返したかったが、やめた。
手綱を引く彼女のその後姿にクリュウは小さく微笑むと「ありがとう」と小さくつぶやいて幌の中に戻った。
クリュウからは見えなかったが、フィーリアの頬は真っ赤に染まり、その唇は柔らかに曲線を描いていた。
二人を乗せた馬車はそのまま商隊が助けを求めるレディーナ砂漠を目指して進んだ。

第21話　砂塵の二騎姫

砂漠に到着した二人は早速岩場にある拠点（ベースキャンプ）で対ドスゲネポス戦の用意を整える。
幌から詰め込んだ道具を次々に出して装備する。
「今回は緊急を要する狩猟の為、大タル爆弾を使用します。さらにシビレ罠やその他道具がかなりの量あるので、荷車も使います」
「荷車を？」
「はい。以前にも言いましたが、大タル爆弾は強力な道具です。通常は飛竜に使うんですが、今回は急を要するので大タル爆弾で早々に片付けます。動きの速いドスゲネポスにこれはあまり合った道具ではないんですが、シビレ罠と組み合わせます。しかしシビレ罠が効いている間が勝負ですので、スピードが大切です。詳しい作戦は後ほど。状況変化にともなって変更しますので。とにかく今は商隊が逃げ込んだ洞窟に向かいましょう」
「うん。わかった」
フィーリアはクリュウに説明を終えると荷車に大タル爆弾やシビレ罠、その他多種多様な道具を詰め込むと今度はガンベルトに大量の弾を装備し、残った弾を袋の中に詰めて腰のベルトに掛ける。全ての準備を終えたフィーリアは大きな大タル爆弾などが搭載された荷車を引く。
「さあ、早速行きましょう」
「え？　荷車はフィーリアが引くの？」
驚いたような顔をするクリュウに対し、フィーリアは気にした様子もなく笑顔を向ける。
「はい。後方支援の私が引いた方が効率がいいんです」
「そ、そっか」
何となく女の子に重い物を持たせるのは男としては気が引けるが、確かに前衛の自分が荷物を持っていては逆にお荷物だ。
「では、クーラードリンクを飲んでください」
「う、うん」

フィーリアは早速クーラードリンクを飲む。続いてクリュウも急いで飲み干す。もう慣れたが、やっぱり少し飲みにくい。
クーラードリンクを飲み終えるとクリュウは前衛に、荷車を引いたフィーリアが後方に続いて歩き出す。
岩場を出ると、そこはすぐに灼熱地獄。クーラードリンクを飲んでいくら和らいでいてもその暑さは容赦なく二人を襲う。この暑さばかりは慣れるものではない。
砂漠は相変わらず砂の世界。何も動くものはない死の世界に見えるが、このどこかに大量のゲネポスとドスゲネポスが潜んでいる。
「フィーリア、大丈夫？」
「は、はい――ちょっと待っててくださいね！」
そう言うと、フィーリアは顔が真っ赤になるほど力を入れて荷車を引っ張る。どうやら砂の上のちょっとの上り坂で苦戦しているらしい。
「て、手伝おうか？」
「い、いいです！　これくらい何でもありません！」
そう言うとフィーリアは荷車を必死に引っ張る。砂の上だからか車輪が空回りして抜け出せないらしい。ようやく抜けた頃には、フィーリアは汗びっしょりになっていた。
「だ、大丈夫？」
肩を激しく上下させて荒い呼吸をするフィーリアを心配そうに見詰めるクリュウ。そんな彼の声にフィーリアは「だ、大丈夫です……」と息を荒くしながらも答えた。あまり大丈夫そうには見えないのは気のせいだろうか。
「と、とにかく商隊が逃げ込んだ洞窟を目指しましょう。地図で確認するとこの先のようです」
道具袋（ポーチ）から取り出した地図と照らし合わせながら言うフィーリア。地図を覗き込むと、確かに情報の場所には洞窟がひとつあった。きっとここだろう。
「じゃあ、さっさと行こう。暑いし」
「そうですね」

二人は再び歩き出す。急ぐ狩猟ではあるが今回は荷車を持っているのであまり機敏には行動できないのだ。
歩きながらクリュウは辺りを警戒する。砂漠ではどこからモンスターが出て来るかわからないからだ。フィーリアもボウガンのスコープを使って遠方を確認している。
辺りは不気味なほど静かだった。本当に生命が存在しているのか不思議に思う。
肌を焦がすような熱線と熱が二人を容赦なく襲う。垂れた汗も砂の上に落ちると一瞬で蒸発してしまった。
こんな所に生息できるなんて、モンスターは何てタフな生き物なのだろう。
砂漠という過酷な環境の中を生きるモンスターは、今はその姿を隠している。広大な砂漠で疲れ果てた哀れな獲物を狙う為にだろうか。
どこまでも続く砂漠を見詰めていると、そんな風に思ってしまう。
しばらく歩くと、フィーリアが何かに気づいたようにスコープから目を離した。
「どうしたの？」
「前方にゲネポスの群れを確認しました」
「ほんと!?」
フィーリアからボウガンを借りてスコープでクリュウもその方向を確認する。すると、まだ距離は離れているが、砂塵の向こうに茶色い動くものがいくつも見えた――ゲネポスだ。
「この方向は洞窟があるよね？　つまりあれが包囲しているゲネポスって事？」
「おそらくは。まだ洞窟が見えないので正確な数はわかりませんが、洞窟から多少なりとも離れたこの位置に数匹のゲネポスがいるという事は、本陣はかなりの数が予想されます」
「三〇匹くらいいたりして」
笑い飛ばすクリュウだが、フィーリアは首を横に振る。
「ドスゲネポスがいるとしたら、五〇匹はいるかもしれません」
笑いが止まった。暑さとは違う汗が背中に流れる。

「えっと……」
「ちなみに私がドンドルマで狩りを行っていた頃にはゲネポスの討伐依頼で、ドスゲネポス二匹が率いた別々の群れ、合計一〇〇匹以上のゲネポスを狩りに出て行った四人編成のパーティが見事に依頼を完遂させた事がありました」
「……上には上がいるなぁ」
「まぁ、こう言ってはなんですがクリュウ様はまだまだかけだし。上は五万といます」
「五万人もッ!?」
「いえ、ものの例えなのですが……」
そんなアホな会話を繰り返す二人だが、今回は時間もない。さっさと商隊を救出しなければならない。何せ命が懸かっているのだ。
「ではいつものようにクリュウ様が前衛で、私が後方から支援という形で」
「わかった」
二人はゲネポスに向かって歩き出す。距離にしておよそ三〇〇メートル。二人はその間もまわりを警戒しながら進む。そして距離が一〇〇メートルほどに縮まり、フィーリアは荷車を置いてヴァルキリーファイアを構える。それを合図に、クリュウは地面を蹴って駆け出した。
砂塵の向こうにいたゲネポスもこちらに気づき、敵襲の鳴き声を響かせる。その声に反応して奥からさらに五匹のゲネポスが同じく鳴き声を上げて突進して来た。
クリュウは最初に鳴いて突っ込んできたゲネポスを回転斬りで吹っ飛ばす。砂の上に倒れたゲネポスだが、その程度ではまだ死なない。続いてゲネポス二匹が突撃して来る。最初に一匹を斬りつけ、後続の二匹目の突撃は盾でガード。すぐさまフィーリアの援護射撃が襲い掛かりゲネポスは体を撃ち抜かれる。突然の奇襲に体を仰け反らせて悲鳴を上げるゲネポスに、クリュウは前転して背後に回るとドスバイトダガーを叩き込む。ゲネポスは吹っ飛んで砂の上に倒れて動かなくなった。

次にさらに三匹の後続のゲネポスが突っ込んで来る。クリュウはバックステップして一旦距離を取り、その隙にフィーリアが本領発揮の射撃を開始する。
散弾ＬＶ１を装填したフィーリアは容赦なく連続攻撃を放つ。弾倉が空になると目にも留まらぬ速さで再装填。すぐさま撃ち放つ。
鉄の暴風とも言うべきすさまじい集中砲火。命中寸前で炸裂して無数の小型弾丸が吐き出され、ゲネポスの体や砂を撃ち抜きすさまじい砂煙が舞い上がる。
体中を無数の弾丸に撃ち抜かれた三匹のゲネポスが倒れる。残った三匹は血だらけの体のまま鉄の暴風を抜けて突撃して来る。敵ながらすごい。
「ギャアッ！」
クリュウは突撃してくる先方の二匹の片方にまず一撃を入れ、もう一匹に蹴りを入れる。といってもこれは攻撃にはならずあくまで牽制。続く二撃を最初のゲネポスに叩き込み、ゲネポスは倒れた。蹴りを受けてひるんでいたゲネポスにクリュウはすぐさま薙ぎ払うように剣を振り抜く。それでゲネポスは吹っ飛び倒れて動かなくなる。残った一匹はフィーリアが正確に撃ち出した貫通弾ＬＶ１が頭部を貫き吹っ飛んだ。
ドスランポスを倒せるまでに成長したクリュウと、リオレイアと激闘ができるフィーリアのコンビの前では、ゲネポスごときは敵ではない。
「ふぅ……」
クリュウは暴れる心臓を空気を吸って押さえようとし、そのあまりにも熱い空気に肺が焼かれるような感じがして咳き込む。
「だ、大丈夫ですか？」
置いてきた荷車を取りに戻っていたフィーリアが心配そうに訊く。そんな彼女にクリュウはちょっぴり無理をして笑顔を向ける。
「大丈夫だよ。本当は素材を剥ぎ取りたいところだけど……」
今回は時間がない。師匠の教えに背く事になるが、この際仕方がない。名残惜しげにゲネポスの亡骸を見詰めながらクリュウは歩き出

す。それに続いてフィーリアも荷車を引きながら歩き出した。再び振り向いた時には、鳥竜種は死すと溶解液を出すので溶けてしまったゲネポスの亡骸はすでにない。

二人は再び歩き出した。

熱風が吹くたびに砂が舞い上がり、視界を塞ぐ。障害物がない砂漠で唯一視界を奪うのがこの砂塵（さじん）。

見えぬ周りを警戒しながら二人はゆっくりとだが確実に進む。

「そろそろ洞窟の周辺ですが」

フィーリアは風に地図が飛ばないようにしっかりと押さえながらつぶやく。クリュウはうなずくとで前方を確認するが、砂塵が舞っているのでまるで見えない。

しばし見詰めていると、ようやく視界が晴れた。

「クリュウ様！」

「うわッ!?」

突如後ろからフィーリアに押し倒され、クリュウは受け身もできずに倒れる。幸い下は砂なので痛みはないが、熱い。

「な、何するの!?」

「前方にゲネポスの群れ！　大群です！」

「え？」

クリュウは伏せながら前方を見る。と、距離にして五〇〇メートル先にぽっかりと洞窟が空いていた。そしてその周りには無数にゲネポスが動き回っている。その数は三〇ないし五〇といったところ。クリュウから血の気が引いた。

「ほ、本当に大群だなぁ……」

「これは厄介ですね……」

フィーリアもあまりの数の多さに唇を噛む。これだけの数を二人でやるのは不可能に近い。そして何より、まるで傍観しているかのようにゲネポスの群れの中央にはその倍近い体格を持った大きなゲネポス――ドスゲネポスがいた。頭の上の左右に分かれた特徴的なトサカがリーダーの証だ。

ドスゲネポスを呆然と見詰めるクリュウの横でフィーリアはギリ

リと歯軋りする。自分達の状況の悪さに言葉も出ない。
「クリュウ様……」
その声には《本当に行くんですか？》という確認が混ざっていた。クリュウは決断を迫られるが、揺れている。その時、
ドガァンッ！
「「!?」」
突如洞窟の前で爆発が起きた。ゲネポス達が一斉に動き出す。
立ち上る黒煙の中から現れたのは二人の人間――ハンターだった。
「ハンターッ!? 何でここにッ!?」
「流れのハンターでしょうか？」
驚く二人はそのままその二人のハンターを見詰める。遠くてよくわからないが、二人の武器はランスらしい。しかし片方はその先端から爆音と共に砲撃している。どうやらガンランスのようだ。
二人の奇襲にゲネポス達は慌てるが、ドスゲネポスの一声で一斉に動きが変わる。
まるで軍隊だとクリュウは思った。
ドスゲネポスの掛け声と共にゲネポス達は一斉に五匹程度の小隊に分かれて動き出す。すさまじいチームプレーだ。
一方のランスとガンランスのハンターは一旦後退して洞窟の前で構える。どうやらあの二人が洞窟を守っているからゲネポスは洞窟の中に入れないらしい。
だがランス、ガンランスは共に対大型モンスターの武器。その巨大な槍の一撃は強力な飛竜の鱗をも貫き、その巨大な盾は全武器最高の防御力を誇り、上級武器ではあの火竜のブレスをも防ぎ切る事ができる。しかしその反面機動性が低いので、こうした小型モンスターの群れに囲まれた際は不利な武器でもある。
予想通り、ゲネポスの連続攻撃に二人は次第に押され始めた。これはまずい。
「フィーリア！　援護に行くよ！」
「はいッ！」
クリュウの掛け声と共に二人は一斉に駆け出した。クリュウは先

発、フィーリアは荷車を引っ張って遅れて突撃する。
突如現れた二人に最初に気づいたのはドスゲネポス。
「ギョオワッ！　ギョオワァッ！」
その声に後方にいたゲネポス十匹が方向転換して二人に向かって突撃する。
クリュウは迫るゲネポスに向かって道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出してピンを抜き、投げつける。二人が一斉に目をつむった刹那、閃光玉が炸裂した。
次に目を開けると、ゲネポス十匹とドスゲネポスが目を潰されていた。
二人は目で合図し混乱するゲネポスに突っ込む。邪魔な二匹を薙ぎ払い、そのまま突っ込む。その先にはドスゲネポス。
「フィーリア！」
「はいッ！」
フィーリアは荷車を急停止させてシビレ罠を投げ、クリュウはそれをうまくキャッチする。一瞬ズシンと重みが腕を襲ったが、すぐに無視してドスゲネポスの下に潜り込み、設置。すぐさまピンを抜く。
「ギョオワァッ!?」
ドスゲネポスは悲鳴を上げて痙攣する。シビレ罠成功だ。
「フィーリア！」
そう叫んだ時にはすでにフィーリアが大タル爆弾を二つ抱えて持って来ていた。結構重いからか、その足取りはフラフラしているが、しっかりと前に進む。
「クリュウ様！　急いで！」
フィーリアから片方の大タル爆弾を受け取り、ドスゲネポスの横へ設置。その反対側にフィーリアも設置する。後は起爆させるだけだが、大タル爆弾自体には起爆装置はない。
二人は一斉に駆け出す。そろそろシビレ罠が解ける頃。フィーリアは急いでボウガンを構えて撃ち放つ。その一撃は大タル爆弾を貫通し、爆発した。
ドガアアアアアンッ！

すさまじい爆発が辺りを包む。先程のガンランスの爆発よりはるかに巨大な爆発だ。すさまじい爆風が二人を吹っ飛ばす。
舞い上がる黒煙。ゲネポス達はそれをただ呆然と見詰める。
そしてクリュウとフィーリアはすぐに起き上がって確認する。あの一撃はかなりの威力。何せ飛竜の強力な鱗すら吹き飛ばす威力の爆弾。ドスゲネポスごときではその威力の前では無力だ。
黒煙が晴れた。二人は息を呑む。
見詰める先には……ドスゲネポスが立っていた。
クリュウは悲鳴を上げる。その横でフィーリアは新たな弾を装填して構えた。
ドスゲネポスはギロリと二人を睨みつける。その恐ろしい形相にクリュウは恐怖する。
だが、さすがに大タル爆弾二発は彼にとっても大ダメージらしい。焼け焦げた皮膚からは赤い血がダラダラと流れている。
ドスゲネポスはしばし二人を睨んでいたが、そのうち回れ右して走り出す。逃げ出す気だ。フィーリアが貫通弾Ｌｖ１をドスゲネポスに向かって連続射撃するが、決して深追いはしない。本当は追いたいところだが、今回の依頼はドスゲネポスの討伐ではなく商隊の救出だ。逃げてくれるのはこちらとしては嬉しい事だ。
ゲネポス達は呆然としていたが、慌ててボスの後を追って駆け出す。
残ったのは十匹以上のゲネポスの死骸。このほとんどは先程の大タル爆弾の爆発に巻き込まれたものだ。
二人は去って行くゲネポスの群れを一瞥し、洞窟の前で死守していた二人のハンターに駆け寄る。
二人は膝をついて荒い息をしていた。そんな二人に近づいたクリュウはその姿を見て少し驚いた――二人とも女の子だった。
ランス使いは頭以外をイャンクックの桃色の鱗や甲殻に包まれたクックシリーズに銀色のパラディンランスを装備した、薄桃色の髪をポニーテールで纏めた少女。
ガンランス使いは同じく頭以外に色違いの世にも珍しい青いイャ

ンクック亜種の素材を使ったクックDシリーズに武器は鉱石を使ったアイアンガンランスを装備した同じく薄桃色の髪をツインテールで纏めた少女。
どちらもクリュウやフィーリアと同じくらいの年頃の少女だ。よく見ると二人はそっくりな顔をしている。双子だろうか。
「だ、大丈夫？」
クリュウが声を掛けると、ポニーテールの少女が凛とした鳶色（とびいろ）の瞳でキッと睨みつけてきた。
「あんた誰？　何でこんな所にいるのよ」
礼儀というものを知らないで育ったかのような粗暴な態度。クリュウは怒るよりも呆れてしまう。すると、隣のツインテールの少女が慌てた様子で笑顔を振り撒いた。
「助けていただきありがとうございます」
クリッとした鳶色の瞳がかわいいこっちの少女は礼儀正しい。きっと双子なのだろうが、一体どこで遺伝子が遺伝のボイコットをしたのだろうか不思議だ。
ツインテールの少女はフィーリアにもお礼を言うと自らの胸に手を当てて名を名乗った。
「私はレミィ・クレアと言います。あ、こっちは私の双子の姉でラミィ・クレアです」
「こっちとか言うなッ！」
「うぅ、ごめんなさい」
なるほど。この乱暴で礼儀もクソもない男女がラミィで、こっちの優しくて礼儀正しい女の子の鏡のような子がレミィか。うーむ。やはり双子らしい。ここまで性格が正反対だともはや奇跡としか言いようがない。
クリュウは睨みつけるラミィとじっと見詰めるレミィに今度はこっちが自己紹介する。
「僕はクリュウ・ルナリーフ。彼女はフィーリア・レヴェリ。よろしくね」
クリュウと紹介されたフィーリアは柔和な笑顔を向ける。レミィ

は「こちらこそ」と笑顔で応え、ラミィは「よろしくね」とフィーリアだけに笑顔を向け、クリュウは睨まれる。何か悪い事でもしただろうかとクリュウは困惑する。
ラミィはキッとクリュウを睨んだ後再びフィーリアに向き直るが、そこで硬直した。レミィがそんな姉に気づいて彼女の視線を追い、そして硬直した。
二人の視線の先にはフィーリア――正確には彼女が身に纏うレイアシリーズに集約されていた。
「え？　うそッ!?　これレイアシリーズ!?」
「はわわわッ！　これが噂に聞く雌火竜の素材を使ったレイアシリーズですかぁッ!?」
「え？　そ、そうですよ」
「すっげぇッ！」
「すご過ぎですぅッ！」
二人はハイテンションでフィーリアをキラキラした目で見詰める。
ハンターにとって武器や防具はそのハンターの実力の象徴である。実はすご腕だがあえて弱い装備をする者も確かにいるが、基本的には皆自分の実力に見合った装備をする。そしてレイアシリーズは見た感じまだかけだし（クリュウよりは上だろうが）に近い二人にとっては尊敬の存在であった。
一人残されたクリュウは苦笑いする。
「さ、さすがレイアシリーズだね」
「でもさ、何であんたみたいな人がこんな雑魚と組んでるの？」
グサァッとラミィの言葉がクリュウの胸を貫く。レミィが慌てて「新米ハンターの教習か何かですかぁッ!?」とフォローを入れる。
「建て前はそうですけど、私達は大切な仲間同士ですよ」
フィーリアの言葉に、クリュウはジーンとする。心の中で何度もありがとうとお礼を言ってしまう。
「ええ？　この程度の奴がぁ？」
グサァッとラミィの言葉がクリュウの心を貫く。確かに自分は彼女達のクックやクックDよりも弱いランポスシリーズだ。彼女達に

とっては《この程度》である。
ラミィはジッとクリュウを見下したような目で見る。その視線にクリュウはムッとしながらも耐える。
「あんた、イャンクックを倒した経験は？」
「な、ないけど……」
「はぁ？　バカじゃないの？」
とどめの一撃。クリュウはその場にがっくりと倒れた。
「クリュウ様!?　お気を確かに！」
「お姉ちゃんのバカぁッ！　あぁッ！　大丈夫ですか!?」
フィーリアとレミィが慌ててクリュウを起き上がらせて励ますが、クリュウは泣きそうな顔をしている。
周りには自分と同じくらいの女の子なのに、自分よりも強いハンターばかり。男として、ハンターとしてのプライドが、原形を留めていないくらいボロボロになった。
そんなクリュウをフィーリアは看護する。
すると、ラミィは思い出したように不思議そうな顔をして二人に問う。
「でもあんた達何でこんな所にいるのよ」
「それは、この洞窟の中にいる商隊の救援依頼を受けて――」
「はぁッ!?　それはあたし達が受けた依頼よ!?」
ラミィの言葉に、クリュウとフィーリアは顔を合わせて驚く。まさか二重契約（ダブルブッキング）だろうか。そうなると厄介な事になる。
「きっと緊急の依頼だったから統制がとれてなかったんですね。だからこんな事態に……」
レミィの説明に、三人は納得した。緊急依頼は何かおかしな事が起こるのは結構ある。それだけ急いでいるのだ。今回もそれの一つだろう。
「でもギリギリ四人で良かったですよぉ。それ以上いたら大変でしたぁ」
そう言ってレミィは笑顔を浮かべる。

彼女が言うのは、ハンターのチームは四人という暗黙の了解の事だ。
これにはある伝説が関わっている。それは何十年も昔、シュレイド地方にあるココット山にて行われた古龍討伐の際、後にココットの英雄と呼ばれるハンターと四人の仲間は激闘の末にこれを討伐したが、彼の婚約者であった女性が命を落とした。これがココット村英雄伝説であり、後の世にハンターという存在を世に知らしめた話である。これ以降ハンターは五人以上で組むと仲間を失うというジンクスが生まれ、ハンターは四人以下で組むのが通例になった。レミィが言ったのは五人以上だと不幸が起きるというジンクスからだ。
「まあ、もし死人が出るとしたらあんただろうけどね」
ラミィはクリュウを見ながら笑いながら言う。さすがにこれにはクリュウもカチンをくるが、女の子にむきになる訳にはいかないとグッと怒りを押さえ込む。
無礼極まりない態度をするラミィの横では、レミィがすみませんを連呼している。なんともかわいそうな妹だ。
「とにかく、商隊の方々に会いましょう」
フィーリアの提案に三人はうなずくと、辺りにゲネポスの姿がないのを確認して洞窟に入る。
洞窟の中は当然ながら暗い。そして何より寒い。灼熱の日光が遮られ、冷たい地下水が流れるここは雪山並みに極寒である。暑いのは嫌だが寒いのも嫌だ。
ラミィとレミィ（正確にはレミィだけだが）に案内されて中へ進むと、開けた場所に出た。そこには五匹のアプトノスと五台の竜車が止まっていた。そのまわりには数十人の人々が寒さから逃れようと固まっていた。
「みなさぁん！　ゲネポスの群れは離れましたよぉッ！」
レミィが元気良く言うと、人々の顔に笑顔が浮かんだ。皆一瞬にして希望に満ち溢れる。
「本当かい嬢ちゃん!?」
「本当よ。だったら確かめて来なさいよ。辺り一面砂しかないから」

ラミィが自慢げに言う。ここで頭であるドスゲネポスを追っ払ったのは自分達だなんて言ったら、たぶんあの体に不釣合いなほど大きな槍で貫かれるだろう。
「そうかいそうかい！　じゃあ早速出発だ！」
「助かったよお嬢さん！」
「ハンターさんありがとう！」
人々は口々にラミィとレミィにお礼を言う。そんな光景をクリュウとフィーリアは見守る。と、人々の何人かそんな二人にも気づいた。
「おや？　そっちのハンターさんは？」
「あの方達がドスゲネポスを追っ払ってくれたんですよ！」
レミィは嬉しそうに満面の笑みで話す。途端に人々は二人の周りにも群がって口々にお礼を言う。二人はそれに笑顔を浮かべるが、ふと視界の隅でラミィがレミィの頭を引っ叩いているのが見えた。かわいそうに。
「では行きましょう！　あくまで追っ払っただけですので、いつ戻ってくるかわかりませんから！」
「あんたが仕切るなぁッ！」
ラミィの怒鳴り声を無視し、クリュウは先頭に立って商隊を外へ連れ出す。再びの灼熱地獄。しかしそこにはゲネポス達の姿はない。人々から歓喜の声が上がる。
「じゃあ今のうちに脱出しましょう！」
「だから仕切るなってッ！」
クリュウ達四人のハンターは商隊を護衛しながら灼熱地獄である砂漠を進み出した。

第22話　決戦　砂漠の支配者

クリュウ達四人のハンターに守られた商隊の五匹のアプトノスに引かれた五台の竜車は密集陣形で進む。その前方をクリュウが、左をラミィ、右をレミィ。そして中央の竜車の上にフィーリアが立って商隊を護衛する。

人々も双眼鏡などを使って辺りを警戒している。

商隊は砂漠を横切るようにして進み続ける。もうすぐ狩猟区域を抜けられる。人々に安堵が流れた。その時、

「四時方向から何か来るッ！」

商隊の一人が叫んだ声にクリュウ達はその方向を見詰める。

確かに、何かが砂煙を舞い上げながら突っ込んで来る。あれは……

徐々に迫るそれは、無数の黒い影。しかしそれは近づくにつれてはっきりとし……

「げ、ゲネポスだぁッ！」

誰かの悲鳴に戦慄が走った。

迫って来るのは無数のゲネポスの大群。その先頭には先程のドスゲネポスが走っている。どうやら援軍を呼んで来たらしい。このまま無事に帰すつもりはないようだ。

「商隊の皆さんはこのまま狩り場を抜けてください！　ここは僕らで何とかします！」

クリュウの声に商隊の頭らしき男が「すまねぇッ！」と叫んで全アプトノスを全力で走らせた。

去って行く商隊と迫るドスゲネポス＋ゲネポスの大群を見比べ、ラミィはため息する。

「あんたのせいであたし達まで残るはめになっちゃったじゃない」

「ご、ごめん……」

クリュウが申し訳なさそうに謝ると、ラミィはフンと鼻を鳴らしてそっぽを向く。だが、その表情はどこか優しげだった。

「まぁ、元々商隊を守るのはあたし達の依頼だし。仕方ないわね。レミィ！」

「うんッ！」
　二人は背中に装備していた身長よりも大きなランスとガンランスを構える。クリュウとフィーリアもそれぞれ剣とボウガンを構えた。
「フィーリア。シビレ罠はあと何個？」
「あと二個です。しかし、これだけの大群相手では……」
「焼け石に水だね」
「へぇ、難しい言葉知ってるじゃないの」
「君が言うとバカにしてるようにしか聞こえないんだけど」
「あら、そう？」
「すみません……」
「いや、別にレミィが謝らなくても。悪いのはラミィだし」
「ちょっと！　何で私が悪いのよ！　っていうか勝手に呼び捨てにしないでよバカッ！」
「あの、皆さん……目の前の状況から目を背けないでください」
　フィーリアの言葉に、三人は再び視線を戻す。その先にはもう間近まで迫ったゲネポスの大群が……
「狙うは頭であるドスゲネポスのみです！　リーダーを失えば統制は崩れ、撤退するでしょう！　それでも残る残党は私達の力で十分対処可能です！　いきますよ！」
『了解！』
　四人はそれぞれ一発ずつ手に持っていた閃光玉を投げ飛ばした。刹那、まばゆい四つの光が爆発し、全てを真っ白に染め、戦いの火蓋が切って落とされた。
　閃光玉で視界を塞がれたドスゲネポス以下十数匹のゲネポス。その後方の残った数十匹のゲネポスは突撃して来るが、フィーリアの放った閃光玉がその一部の動きを止める。
「うりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
　まず最初に突貫したのはラミィ。体勢を低くして槍を前方に構え砂煙を上げながら全速力で突き進む。前にいるゲネポスの体を貫き、次のゲネポスを弾き飛ばし、次は貫き、その次はぶっ飛ばす。ランスの強力な突撃の前ではゲネポスはあっという間に潰される。そのま

まラミィは突貫し、ドスゲネポスに突っ込んだ。強力な槍の先端がドスゲネポスの身体を削る。だがわずかに角度がずれた。
ラミィは舌打ちして一旦そのまま走り抜けて急停止すると方向転換。その間にクリュウが突っ込んでドスゲネポスに斬り掛かる。
「うりゃぁッ！」
手に持ったドスバイトダガーを縦横無尽に動かしてドスゲネポスの体を斬り裂く。さっきの大タル爆弾のダメージはかなり残っているはず。それを信じてクリュウは剣を振るう。
「どきなさいッ！」
その声に慌てて後退すると、目の前をラミィが突撃して来た。その一撃がドスゲネポスを吹っ飛ばす。それにしても危ない。
「危ないなッ！」
「あんたが邪魔なのよ！　イャンクックも倒せない奴は黙って見てなさい！」
通り抜けざまに怒鳴るラミィ。戦いの最中だというのに、怒りが込み上げる。そりゃあ自分はまだイャンクックは倒していないが、そこまで言われる筋合いはない。
クリュウはその怒りを剣に込めてドスゲネポスに斬り込む。一撃一撃が確実にドスゲネポスにダメージを蓄積する。
「クリュウさん！　離れてください！」
その声に慌てて後退すると、今度はレミィが突っ込んで来た。走って来た彼女はすぐにアイアンガンランスを背中から抜くと、その砲身でピッタリとドスゲネポスを捉える。その瞬間、レミィのクリッとした瞳が細く絞られる。
砲身からすさまじい熱が放出し、砲身が真っ赤に染まる。
「ファイアァッ！」
刹那、砲身から爆発が起きた。すさまじい火炎にドスゲネポスの体が吹き飛ぶ。ガンランスの超必殺技、《竜撃砲》だ。その威力は火竜のブレスにも引けをとらない強力なもの。唯一の弱点は発射まで時間が掛かるのと切れ味が大幅に落ちること、そして一発撃つとしばらく使用不能になることだが、その威力は折り紙つきだ。

吹っ飛んだドスゲネポスに、レミィはピッタリを砲口を向けて通常砲撃を開始する。先程の竜撃砲に比べれば圧倒的に威力は低いが、それでもかなりの高威力の砲撃にドスゲネポスは悲鳴を上げる。その時、レミィの後方からゲネポスが飛び掛った。
「危ないッ！」
クリュウはレミィの後ろに駆け込んで盾を構える。ゲネポスの一撃は盾に防がれ、反撃の薙ぎ払いがゲネポスを吹き飛ばす。
「ありがとうございます！」
レミィはガンランスを折って空になった薬莢を放出。その先端からはすさまじい熱が放出されている。先程の竜撃砲で熱くなった砲撃装置を冷やしているからだ。まだ第二射までは時間が掛かる。
ドスゲネポスは一度距離を取って後方に下がる。その間にクリュウとレミィは数匹のゲネポスに襲われるが、盾と連携してそれらを突き倒し、斬り倒す。
そこへ再びラミィが突貫して来てゲネポス二匹を吹き飛ばす。そしてそのまま二人に駆け寄ると、クリュウの頭を引っ叩いた。
「な、何すんだよ！」
「あたしの妹に何かしたら刺殺するわよッ！」
意味不明な事を叫んでクリュウを突き飛ばすと、ラミィとレミィは互いの背中を合わせて前後に展開する。これが二人の陣形（フォーメーション）らしい。突撃して来たゲネポスは二人の連携攻撃に次々に散る。
ラミィの強烈な突きに、レミィの高威力の砲撃に、ゲネポスは次々に砂の上に倒れる。
クリュウは一旦二人から離れて商隊を追おうとしたゲネポスを撃滅していたフィーリアに駆け寄る。
「フィーリア！　ドスゲネポスを片付ける！」
「わかりました！」
フィーリアは最後の一匹を至近距離で撃ち抜くと、クリュウと共に敵陣に突っ込む。ゲネポス達はラミィとレミィに集中している。今のうちにドスゲネポスを叩く。

ドスゲネポスは十匹のゲネポスを従えていた。あれが親衛隊なのだろう。そのゲネポスが砂煙を上げて突撃して来た。クリュウとフィーリアはそれを斬り倒し撃ち倒す。
前方から突撃して来たゲネポスを斬り倒し、横から来たゲネポスを薙ぎ払うように斬り倒す。反対側から突撃して来たゲネポスの一撃を盾で防ぎ、剣で斬り付ける。
フィーリアは後方から通常弾ＬＶ２を連発してクリュウを襲おうとするゲネポスを牽制し、吹き飛ばす。
後方支援を受けて、クリュウはドスゲネポスに突撃する。ドスゲネポスは体を仰け反らして鳴き声を上げると、迎え撃つように突進して来た。
「ギョオワァッ！」
突っ込むクリュウにドスゲネポスはジャンプ攻撃をして来る。その一撃を慌てて急停止して盾を構えて防ぐ。腕が痺れるぐらいの一撃に歯軋りして剣を叩き込む。ドスゲネポスの体から血が噴き出し、その血飛沫が頬や髪に付く。
仰け反るドスゲネポスに回転斬りを炸裂させて吹き飛ばす。そこへすかさず後方からフィーリアの銃撃がドスゲネポスを襲う。
「ギャオワァッ!?　ギャギャワァッ!?」
悲鳴を上げるドスゲネポスにクリュウはすぐさま追撃を掛ける。一撃一撃が入るたびにドスゲネポスは悲鳴を上げる。
「クリュウさん！」
その声の刹那、背後で金属音が響いた。振り返ると、背後から襲い掛かってきたゲネポス三匹の攻撃をレミィが盾で防いでくれていた。
「レミィ！　ありがとう！」
「後方は任せてください！」
レミィはそう言うと迫るゲネポス三匹に連続して砲撃と刺突をする。炎上しながらゲネポスが吹き飛ぶのを一瞥し、クリュウはドスゲネポスと対峙する。周りに群がるゲネポスはフィーリアの銃撃によって次々に倒されていく。その姿を一瞥すると、フィーリアが「ここは任せてください」と言いたげな表情をしていた。クリュウはうな

ずく。
「ギャオワッ！」
襲い掛かるドスゲネポスに剣を叩き込み、吹き飛ばす。後方にいたレミィから離れて追撃に向かう。
起き上がったドスゲネポスにすぐさまクリュウは剣を叩き付ける。
茶褐色の皮が切り裂かれ、赤黒い肉から真っ赤な血が吹き出る。返り血が頬に付いた。
「ギャオワァッ！」
ドスゲネポスは怒りの声を上げて鋭い牙が並んだ口をガバァッと開けて噛み付こうとする。それをクリュウは横へ飛んで回避すると、すかさず回転斬りを叩き込む。
「ギャワァッ!?」
悲鳴を上げて仰け反るドスゲネポスに、クリュウは連続して剣を叩き込む。斬り付けるたびにドスゲネポスの真っ赤な血飛沫が舞い上がる。さらなる追撃に剣を下から斬り上げた。
「ギャオワァッ!?」
ドスゲネポスは悲鳴を上げて噛み付いてくる。しかし予備動作でその動きがわかっているクリュウは簡単に避けて剣を構える。
「ギャァッ！」
その声に慌てて盾を後ろに向けると、ゲネポスが後ろから突っ込んで来た。鈍い衝撃が腕に走り、ゲネポスの体重が腕に掛かる。
「このぉッ！」
盾で吹き飛ばすと、すぐさま剣で吹き飛ばす。そこへ三匹が突っ込んで来る。が、そのうちの一匹が横からレミィの砲撃を受けて爆死する。残る二匹が牙を向けて突っ込んで来た。
「このッ！」
クリュウは一番手前のゲネポスを剣で薙ぎ払い、二匹目の牙を盾で防いで剣を叩き込む。刹那、後ろから迫る何かの気配に横へ飛ぶと、そこへドスゲネポスの口が突っ込んで来た。危なかった。
「喰らえッ！」
回転斬りでドスゲネポスに一撃を与えると、続いて二撃、三撃と加

える。
「どきなさいバカッ！」
その声に慌てて横へ飛ぶと、そのすぐ先をラミィが突撃して行った。後もう少し遅かったら本当に刺殺されるところだった。
ラミィはそのまま姿勢を低くしたまま突撃し、ドスゲネポスに強力な一撃を叩き込む。悲鳴を上げるドスゲネポスにとどめとばかしに突撃体勢のまま急停止し槍を思いっ切り突き出す。そのすさまじい威力にドスゲネポスは吹き飛んだ。続いて今度はラミィの連続突きがドスゲネポスの肉を貫いて血飛沫を飛ばす。
ドスゲネポスは慌てたように動きが遅いラミィから距離を取ろうと後方にジャンプする。だが、それはラミィの予想通りな動き。
「レミィ！」
「うんッ！」
ドスゲネポスはその声に慌てて振り返ると、そこには自分に砲口を向けたレミィが立っていた。そしてその砲身は真っ赤に輝いている。
「ファイアァッ！」
刹那、再び巨大な爆発がドスゲネポスを包んだ。火竜のブレスに匹敵する強力な竜撃砲の放った火球の直撃を受けたドスゲネポス。すさまじい黒煙と爆音が辺りを包んだ。まるでそれが戦いの終焉かのように、ゲネポス達の動きが止まった。
そして、天まで昇る黒煙が晴れると……そこにはドスゲネポスが倒れていた。焼け焦げた皮に包まれ、開かれた瞳には生気はない。
――ドスゲネポスに勝った。
クリュウは離れていた所でガッツポーズした。
ボスが倒されたからか、ゲネポス達は一目散に逃げ出した。残るゲネポスはない。それほどまでに彼我の戦力差を思い知ったのだろう。
残されたのはドスゲネポスと二〇匹近いのゲネポスの亡骸。戦闘中に溶けたのも含めれば、一体何体倒したかなんて検討もつかない。だが、自分達は勝った。揺るがない事実だけがそこにある。
……戦いは終わったのだ。
四人は特に怪我もなく無事にこの死闘を切り抜けた。

狩り場から少し出た安全地帯に待機していた商隊に追い付くと、割れんばかりの歓声が上がった。
今さらながらだが、商隊には女子供も乗っている。これでひとつの大きな家族のような存在なのだろう。多くの皆に感謝され、クリュウは嬉しそうに微笑む。
結果として商隊には怪我人は何名か出たが、それでも死者は誰もいなかった。これもクリュウとフィーリア。そしてラミィとレミィのおかげだ。
ここまで来ればもう安心。商隊はたくさんのお礼の言葉を言って去って行った。そんな彼らを見送り、四人は互いを見合う。
「レミィのガンランスすごいね！」
クリュウは先程最後のとどめを挿したレミィの竜撃砲に感激する。そんな彼の言葉にレミィは照れたように笑みを浮かべる。
「そ、そんな……全然すごくないですよぉ」
「そんな事ないって！　そんな重そうな武器を持って走り回れるなんてすごいよ！　僕なんか片手剣だし」
「初心者丸出しよねぇ」
ラミィが呆れたように言ってくる。そんな彼女にクリュウはレミィとは逆に非難の声を上げる。
「ラミィは危ないよッ！　いきなりランスで突っ込んで来ないでッ！」
「あんたがボケッとしてるのが悪いんでしょ!?　当たるんじゃないかってこっちが逆に冷や冷やしたわよ！」
「だったら突進は誰もいない時にやってよ！」
「あんたがうざいくらいドスゲネポスに付き纏ってたから悪いんでしょッ!?」
ギャーギャー言い合う二人に、レミィはあわあわとする。先程ドスゲネポスを爆死させたとは思えないくらいかわいい仕草だ。
一方フィーリアは言い合う二人を見詰め、小さく微笑む。
ラミィはどことなくエレナに似てる気がした。なのでどれだけ言い合っても不安にはならない。今の彼女を満たしているのは勝利の

喜びと全員無事だったという安堵だ。
「では、商隊も無事に脱出できましたし。私達もそろそろ解散しましょう」
　フィーリアの言葉に、言い合っていたラミィがうなずく。
「そうね。一応これは二重契約（ダブルブッキング）だから報酬はあんた達とあたし達で一対九でいいわよね」
「何それッ！　どんなぼったくり!?」
　すかさずツッコミを入れるクリュウ。そんな彼にラミィは呆れたように深いため息をする。
「冗談に決まってるでしょバカ。二対八よ」
「おかしい！　まだおかしいよッ！」
　再び言い合う二人に、レミィも再びあわあわする。そんな彼女の肩をポンと叩き、フィーリアは彼女を安堵させるような優しげな笑顔を向ける。
「ところで、あなた達はどこに拠点を置いてるんですか？」
　彼女が言う拠点とは拠点（ベースキャンプ）ではなく腰を据えている村か街の事だ。そんな彼女の問いにレミィは笑顔で答える。
「私達はアルフレア所属のハンターです」
　アルフレアとはイージス村と同じ地方に位置する海に面した自由貿易都市の事だ。内海に面したドンドルマと違い、外海に面しているアルフレアは船での貿易が盛んであり、海経由で様々な物資が行き交う一大貿易都市として大陸の発展に貢献している。
「アルフレアのハンターと言っても私達はまだまだかけだしで、先輩ハンターさんなんかと一緒に狩りに出る事が多いんです」
　アルフレアはこの地域の重要拠点なので、所属ハンターは実に三〇名近くいるらしい。それでも数百人規模のドンドルマよりはずっと小さい。
　レミィの話に耳を傾けるクリュウに、ラミィは意地の悪い笑みを浮かべる。
「言っておくけど、私達は二人それぞれ一人でイャンクックは倒してるわよ？　もっとも、この子の着ている青いイャンクックはさすがに

二人でやったけどね」
世間一般的に突然変異で通常とは違う体色をした亜種というのは通常体よりも強力な上に弱点属性なども変化し、場合によっては生態まで変わる事がある。亜種というのは出会える確率も低い上に何よりも強力なので、いくら初心者ハンターの登竜門とも言うべきイャンクックであっても、亜種ならば結構な強敵となるのだ。
言い返せないクリュウに、ラミィは勝ち誇った笑みを浮かべる。
「ね、姉さん……」
ため息して頭を抱えるレミィ。どうやらこうした失礼極まりない態度をする姉に振り回されて彼女はいつも苦労をしているのだろう。同情してしまう。
その後、一向は別れた。
帰り際にレミィが笑顔で「今度アルフレアまで遊びに来てくださいね！」と嬉しい言葉を言ってくれ、ラミィが「来るならせめてイャンクックを倒してから来なさいよね！」と高笑いしながら宣戦布告のような言葉を言って去った。
クリュウとフィーリアはそれぞれ拠点（ベースキャンプ）に戻って用意を整えると、シルキーを走らせてイージス村へと戻った。
村へ戻ると、商隊からの感謝の手紙と報酬が送られてきていた。報酬はなんとそれぞれクリュウ達とラミィ達にそれぞれ当初の金額をそれぞれ支払ってくれていた。商隊に感謝しながらも、二人はゲネポスやドスゲネポスの素材を倉庫の中にしまった。今回はかなりの収穫だ。素材はもちろん、初めての四人パーティで狩りをした。まあレミィはともかくラミィとは気が合いそうにはないが。
酒場で報告をすると、エレナが祝いだと言って簡単な食事を用意してくれた。ずっと焼いただけの肉を食べていた二人は嬉しそうにそれを食べ、エレナはそんな二人の無事な姿を見て優しく微笑んでいた。

第23話　ハンターの登竜門

ラミィとレミィと一緒にドスゲネポスを倒してから二週間。その間に二人はドスゲネポス一匹の狩猟を終えていた。その際はゲネポスはあまり数がいなかったので、ドスランポスで慣れたクリュウはあまり苦戦せずに勝利した。

もう彼は鳥竜種は問題なく倒せるまでになっていた。

そんな彼に、ハンターが通らねばならない登竜門がついに現れた。

「クリュウくん。折り入ってお願いがあるんだが」

素振りの練習をして小腹が空いたので酒場で軽い食事をしていたクリュウに、村長が困ったように大きな鼻を掻きながら声を掛けてきた。

「何ですか？」

村長はクリュウの対面に座ると、真剣な顔で一枚の羊皮紙を机に置いた。

「これは？」

「イャンクック討伐依頼だよ」

突然の事にクリュウは食べていたアプトノスの肉とマイルドハーブを挟んだサンドイッチをのどに詰まらせた。慌てて水を飲んで気道を確保する。

「い、イャンクックを!?」

「うん。セレス密林にイャンクックが現れたって情報が回って来たんだ。まだ現れたばっかりで活動範囲は狭いみたいだけど、このまま拡張するとこの村がイャンクックに襲われる可能性があるんだ。だから早急に討伐して欲しいんだけど、この付近の村のハンターはみんな出払っていて、頼めるのはクリュウくんくらいしかいないんだ。危険だと思うけど、やってくれないかな？」

突然の飛竜（イャンクックは飛竜と誤解されがちだが、本当はランポスなどと同じ鳥竜種）討伐にクリュウは言葉を失う。

イャンクック。ハンターなら誰もが必ず通る登竜門。鳥竜種でありながらその体や行動パターンは飛竜に似た部分が多く、飛竜討伐の

コツを掴む為にも必ず通らなければならない道。
ラミィとレミィ、そしてフィーリアもこれを討伐してハンターとして活躍しているのだ。
ハンターならいずれは倒さねばならない相手、それがイャンクックだ。
だが、クリュウはうなずけない。
相手は今までの敵とは比べ物にならないほど強いモンスターだ。大きさは十メートルは近い。これでも飛竜の中では小さい方だから驚きだ。
そんな強力な相手といきなり戦えと言われても、うなずく事なんてできない。
まだ自分には早過ぎる。そんな相手な気がした。ドスゲネポスの際はドスランポスを相手にして来たという幾分かの余裕のおかげで自らフィーリアの反対を押し切って戦ったが、今回はまるで違う未知なる相手。それもかつてないほどの強敵だ。クリュウの戦意は限りなく低い。
「悪いですけど村長。まだ僕には――」
「お受けしましょう」
その突然の声に驚いて振り返ると、そこには春の柔らかな草色のワンピースに麦わら帽子という私服姿のフィーリアが立っていた。いつもの美しいかっこ良さは、今は清楚なかわいさに変わっている。
「ふぃ、フィーリア。今なんて……？」
驚くクリュウはフィーリアに訊き返す。だが、返って来る言葉は変わらない。
「ですから、そのイャンクック討伐をお受けします」
「あぁ、フィーリアが？」
「もちろんクリュウ様も一緒です」
「僕もッ!?」
立ち上がって驚くクリュウに、フィーリアは邪心のない柔らかな笑みで「はい」と答える。どうやら冗談ではなく本気のようだ。
「で、でも僕はまだドスゲネポスまでしか倒してないのに！　そんな

いきなりイャンクックだなんて！」
慌てるクリュウに、フィーリアは真剣な表情を向ける。ワンピースに麦わら帽子でなければもう少し緊張感が増すのだが。
「イャンクックはそれほど恐れる相手ではありません。確かに楽な相手ではないでしょうが、今のクリュウ様の力なら十分戦う事ができます。それに、イャンクックが倒せなくてはこの先ハンターとして戦えません」
「うっ……」
確かにその通りだ。イャンクックは一番最初の飛竜。これが倒せなくてはハンターとしては致命的だ。だけど、だからといって……
「ぼ、僕、自信ないよぉ……」
今でこそそうではないが、自分はドスランポスやドスゲネポスについこの前まで苦戦していたレベルのハンターだ。なのに、いきなりイャンクックだなんてそんな……
うつむくクリュウに、フィーリアは優しく微笑む。
「クリュウ様ならきっと勝てます。私ができる限り支援しますので、行きましょう」
「フィーリア……」
クリュウはじっと依頼書を見詰める。
イャンクック。いつかは倒さねばならない相手。そのいつかには決まった期間はない。つまり、今でも……
「村長、ペンをください」
「クリュウくん。じゃあ……」
顔を上げたクリュウの瞳には、決意の炎が燃えていた。
「この依頼――イャンクック討伐依頼、僕とフィーリアで引き受けます」
「ちょっとクリュウ！　本気なの!?」
酒場を出てすぐ今まで黙って聞いていたエレナが詰め寄って来た。
「うん」
「相手は飛竜なんでしょ!?　危ないわよ！」
「そりゃあ僕はハンターだもの。危険とはいつも隣り合わせだよ」

「そりゃそうかもしれないけど！　怖くないの!?」
「そりゃあ怖いさ。初めての飛竜だし」
　そう言うクリュウの瞳には恐怖がある。いくらフィーリアの援護があっても、今回は今までのランポスの亜種系とは違う。翼を持って空を飛び、他のモンスターを圧倒する生命力を持った、生態系ピラミッドの天辺に位置する飛竜。そんなのを下層の存在でしかない自分達が戦いを挑もうというのだ。怖い訳はない。だけど、
　クリュウは微笑んだ。
「イャンクックを倒さないと、先へは進めない。だったら、全力で倒すだけだよ」
　クリュウの言葉に、隣にいたフィーリアも笑顔でうなずいた。
　エレナはまだ何か言いたそうだったが、二人の笑顔に安心したのか、小さく微笑んだ。どうせ何を言っても無駄だという事は、彼女が一番良く知っている。
「わかった。だったら自分達のベストを尽くしなさい」
「もちろん」
「そのつもりです」
　二人はエレナと別れてアシュアの工房へ向かう。すると、工房の前のカウンターでバルドがアシュアと何かを話していた。
「はいよ。依頼されてた新しい銛(もり)やでぇ。刃には鉄鉱石を圧縮して使ってるから切れ味も耐久性も格段に上がってるでぇ」
「おう。いつもすまねぇな嬢ちゃん。お礼にうまい魚獲って来てやるよ」
「ほんまぁ？　うち嬉しいわぁ」
　近づくに連れて聞こえる会話。どうやらバルドは新しい銛をアシュアに頼んでいたらしい。手に持っている銛はきれいに輝いている。
「うん？　おうクリュウ！　それにフィーリアも！」
　バルドが二人に気づいて声を掛けると、アシュアも「およ？　クリュウくんにフィーリアちゃんやないかぁ」と笑顔を向ける。二人はそれぞれあいさつして近づく。

「バルドさん。新しい銛ですか？」
「おうよ！　嬢ちゃんに頼んでおいたのができたって言うから取りに来たんだ。見ろこの輝きを！　相変わらず嬢ちゃんはいい仕事してくれるぜ！　そうだ。魚が獲れたら二人にも分けてやるぞ」
「それは嬉しいですね、クリュウ様」
「うん。刺身にでもして食べたいな」
「そうかそうか！　じゃあ早速獲って来てやらねぇとな！　じゃあな！」
　バルドは銛を手に馴染むように構えたり空を突いたりして慣らしながら去って行った。その大きな背中を見送り、二人はアシュアに向き直る。
「頼んでおいた物はできましたか？」
「できてるでぇ」
　アシュアはフィーリアの問いに笑顔で答えて工房の中に消える。しばらくして戻って来た彼女の手には帽子があった。バトルキャップ。バトルシリーズのガンナー用頭防具だ。
「男性装備は基本的に顔全体を守るタイプが多いんや。せやけどクリュウ君は視界を遮るのが嫌いなんやろ？　せやからこれや。ランポスヘルムなんかに比べれば全然弱いけど、視界はバッチリ確保できる。ほら」
　クリュウは礼を言って早速被ってみる。なるほど、本当に帽子型だから視界を遮るものはない。これはいい。
「帽子の中には鉄鉱石や円盤石で作った防御板が入ってるから、ちょっとした衝撃なら守ってくれるで。それとそのゴーグルは砂漠なんかじゃ目に砂が入らなくて便利やでぇ」
「ありがとうございます」
　クリュウは礼を言う。その横でフィーリアはアシュアに明日イャンクックを討伐する話をした。するとアシュアは難しそうな顔をする。
「イャンクックかぁ。せやけどその防具で大丈夫やろかぁ。不安やなぁ。それに武器だってドスバイトダガーじゃちょっと辛くなる

でぇ?」
「でも時間がありませんし。これで行きます。この帽子の初陣にもなりますし」
「さっきも言ったけどそれはあんまり頼りにならんでぇ? あくまでないよりはマシって程度であって、イャンクックの一撃を受けたら木っ端微塵やぁ」
アシュアはむむむと唸る。職人として武器や防具を知り尽くしている彼女だからそういう技術だけではない事を心配しているのだ。だが今さら考えたり慌てたりしても何にもならないのも事実だ。
「そうかぁ。ついにクリュウくんもイャンクックかぁ。うんうん、よっしやぁッ! それなら一日あんたの防具と武器を預かるでぇ。明日までに完璧に整備しといたる!」
「ほ、本当ですか!?」
「うむ! 鍛冶師に二言はないでぇッ! この鍛冶師の魂たるハンマーに誓うで!」
「ありがとうございます!」
「良かったですね。クリュウ様」
クリュウは着ていた防具を全てアシュアに渡した。アシュアは早速「任しときぃな!」と笑顔で言って工房の中へ入って行った。それを見送り、二人は家に戻った。
エレナの作った夕食を食べ終えた二人は早速明日の狩りの作戦会議を開く事になった。
長テーブルをクリュウとフィーリアが対面するように座り、横には何となくいるエレナの三人で会議が始まる。
「まずイャンクックですが、今までの相手とは全く違います」
開口一番にフィーリアが言った言葉がそれだった。クリュウとエレナも真剣な表情になる。
「イャンクックの動きは基本的な飛竜の動きとかなり酷似(こくじ)しています。攻撃パターン、行動パターンなどは後の飛竜の参考にもなります。まずイャンクックは鳥のような羽毛はなく竜のような鱗や甲殻で身を包んでいますが、その姿は限りなく鳥に近いです。そして

イャンクックは同じ鳥竜種のランポス種のように人間を食べたりしません。しかし人間を食べないとは言え、テリトリーを侵害されると容赦なく襲い掛かって来ます。大きな耳が特徴で音にすごく敏感です。ですので隠れて待機していても物音ひとつ立ててはいけません。ですが発達した聴覚は特徴であり弱点でもあります。つまり大きな音には恐ろしく弱いので音爆弾や爆弾を使えば一時的に行動不能になりますのでその間は攻撃チャンスです。まずイャンクックの主な攻撃は嘴（くちばし）をハンマーのように縦に連続して振り下ろす攻撃です。そして体全体で体当たりする突進攻撃。これを受けたら大怪我し、最悪の場合は圧死します。しかしその後突進の勢いのまま前へ転倒するのでそれから立ち上がるまでの間は大きな隙と言えます。さらに途中で翼を羽ばたかせて空へ飛んだり後方へ飛んだりしますが、その突風は簡単に身体が吹き飛んでしまいますので注意してください。そして口からは強力な炎の塊のブレスを吐いてきます。前方へ吐き出すパターンと周りに無茶苦茶に放つ二種類があります。ですが撃ち出す最中は大きな隙なので攻撃はしやすいです。とにかくイャンクックを始め多くの飛竜は前方攻撃が主な攻撃範囲です。ですので常に横や後ろをキープして攻撃してください。でも回転攻撃は注意してください。尻尾をムチのように横へ振り払う一撃は最も回避しづらく強力な攻撃です。ですのでこれは警戒してください。以上がイャンクックの主な攻撃パターンです。そしてイャンクックなどの飛竜は劣勢になると飛び立ってエリア移動しますのでペイントボールやペイント弾は必ず付けてください。イャンクックは体力が相当減ると大きな耳を畳むのでこれがあと少しで倒せるという目印になります。体力が少なくなった場合、怒り状態という攻撃力やスピードが一時的に上昇する事が多々です。危険極まりないこの場合はこれまで以上に気をつけてください。あとイャンクックは音爆弾などを受けて動きが止まった後は必ずこの怒り状態になりますのでご注意を。そしてイャンクックを始め多くの飛竜は大怪我を追うと巣に戻る習性があります。巣に戻った飛竜はそこで休眠します。彼らは寝る事で瀕死の傷をも癒す事ができるので巣に向かったら時間

との戦いになります。それらを注意していただければ、イャンクックやその他飛竜も狩る事ができます。質問はありますか？」
　一気に話したフィーリアに対しハンターではないエレナはちんぷんかんぷんだ。一方のクリュウはフィーリアの話した事をこと細かくメモしている。なんとも彼らしい。
「と言っても、私はクリュウ様のように接近戦ではないので戦い方は違いますが、今説明したのは剣士の戦い方なのでご安心を」
　そう付け加えてフィーリアは乾いたのどを潤すように水を飲む。
一方クリュウはフィーリアの説明を頭の中で反芻（はんすう）する。ある程度理解すると、今度は質問に変わる。
「閃光玉は効くの？」
「効きます」
「シビレ罠は？」
「効きます。ただし動きが速いので設置する際は十分気をつけてください」
「落とし穴も効く？」
「効きます」
「爆弾はどう設置すればいい？」
「落とし穴かシビレ罠に掛かった時ですね。ただし先のドスゲネポス戦のようにシビレ罠の際はスピードが命です」
「他に注意すべき事は？」
「まわりにランポスがいる可能性もありますので、先にこれを狩った方がいいです。ですので見付け次第すぐに攻撃に入るのもいいですが、あらかじめイャンクックが現れるであろうエリアで先にランポスなどの邪魔なモンスターを狩って待ち構えるのも手です。ただしこれはエリア選択を間違えると大幅なロスになりますので気をつけてください」
　フィーリアはクリュウの問いにさらさらと答える。さすが歴戦のハンター。何でも知っていて頼りになる。
「とにかく、イャンクックはそれほど恐れる相手ではありません。今までどおりベストを尽くしましょう」

「うん」
クリュウはそれからフィーリアに細かくイャンクックとの戦い方を教わる。そんな二人を邪魔しちゃいけないと、エレナはそっと出て行った。
ひと段落した頃、バルドが早速魚を持って来てくれた。戻って来たエレナはそれを使って腕を振るって夕食を作り、三人はテーブルを囲んでおいしく食べた。
その後エレナが帰った後も作戦会議は続き、夜遅くまで行い、クリュウはベッドに倒れるようにして眠りについた。
翌朝、バルドが用意してくれた船に必要な荷物を二人は入れた。今回はシルキーはおやすみだ。彼女の寂しげな瞳にちょっと後ろ髪を引っ張られたが、今回は仕方がない。
その後クリュウはアシュアの工房へ行ってランポスシリーズ、バトルキャップ、ドスバイトダガーを受け取った。装備してみると、やはりいつもより動きがいい。
「どうや？　動きやすいやろ？」
「はい！　ありがとうございます！」
「クリュウくんは成長期やからなぁ。もう小さくなってるんやぁ。せやから継ぎ目を足して伸ばしたんやぁ。これでまた全力で戦えるでぇ」
「はい！　ありがとうございます！」
クリュウはアシュアに礼を言って完全武装して船着場に向かった。そこにはすでに完全武装したフィーリアやエレナ、村長が待っていてくれた。
「頼むよぉ」
村長の言葉にうなずき、クリュウはエレナを見る。
エレナはじっとクリュウを見詰めていた。何か言いたそうに口を開けては閉じ、開けては閉じを繰り返す。だがついに決意したようにうなずくと、口を開いた。
「必ず生きて帰って来なさいよ。勝手に死んだりしたら、あんたのお墓にモンスターのフンをぶっ掛けてやるんだから！」

「うぅ、死んだ後までそんな嫌がらせは嫌だなぁ」
「だったら生きて帰って来なさい！」
そう怒鳴ると、エレナは踵を返して走って行ってしまった。呆然とするクリュウの肩を、フィーリアはポンと叩く。
「女の子を泣かせるのはダメですよ」
「えぇ？　僕が泣かせたの？　っていうか泣いてたの？」
混乱するクリュウの代わりに、フィーリアが村長とあいさつを終えて船に乗り込む。その後にクリュウも続いて乗り込むと、村の漁師の一人が乗り込んで舟をこぎ始めた。彼が今回自分達を送ってくれる船主さんだ。
離れていく岸で村長達が大きく手を振って見送ってくれた。それに手を振ると、目の前に広がる森を見詰める。この奥に、セレス密林があり、そこにイャンクックがいる。
自然と拳が握られる。
クリュウは腰のドスバイトダガーの柄を掴むと、森を鋭い目で見詰めた。そんな彼を横でフィーリアは見詰め、自分も森を見詰める。
クリュウの初めての飛竜戦が、始まろうとしていた。

第２４話　密林の大怪鳥

太陽が真上に到達する頃、クリュウ達はセレス密林の拠点（ベースキャンプ）での用意を終えていた。
「今回はすごいねぇ……」
改めて持参した道具の数々を見て驚くクリュウ。
荷車には円盤状の金属であるシビレ罠に落とし穴それぞれ二個。人間の子供くらいある大タル爆弾二個にそれより二回りほど小さな小タル爆弾五個。そして同じくらいの大きさで上空に発射して起爆する打ち上げタル爆弾が五個。その他様々な道具を荷車や道具袋（ポーチ）に潜ませている。熟練のハンターが見たらこれからリオレウスを狩りに行くのではないかというくらいの重武装。報酬額から考えても赤字になるんじゃないかというくらいだ。特に爆弾は倉庫にあったのを全て持って来た。
「世の中には罠や爆弾なんて頼らず己が実力だけで戦うハンターがいますが、クリュウ様はどちらかというと罠などを使って確実に戦うタイプです。これから先飛竜と戦う際にどう罠や爆弾を使うかの練習にもなります。さぁ行きましょう」
そう言うと、フィーリアは荷車を引く。その後を慌ててクリュウが追い掛けて前方に出る。いつもの陣形（フォーメーション）だ。
「今回は相手は分類上は鳥竜種とはいえ限りなく飛竜に近いです。ですのでいつも以上に注意してください。いきなり空から襲われる事もありますから上空も十分警戒してください。それと今回は爆弾が多いので途中の護衛は任せましたよ。一撃でも喰らえばイャンクックと戦う前に二人揃って爆死です」
「さらっと怖い事言わないでよぉ」
冗談では済まないので、クリュウはいつも以上に周りを気にする。拠点（ベースキャンプ）を出るとそこは海に面した海岸。すると早速ランポスが数匹いた。
「ここは任せて」
「はい」

周りに危険性がないと確認すると、クリュウはフィーリアを置いてランポスにダッシュする。砂浜を踏むとザッザッザッと音が鳴り、ランポス達が気づく。
「ギャアッ！」
一番先頭にいたランポスがクリュウに向かって突撃して来る。クリュウはそれを回転斬りで吹き飛ばす。続いて突撃して来るランポス二匹には一度距離を取って背後に回ってその片方に斬り掛かる。一撃では倒れなかったので、もう一撃入れて倒すとバックステップして距離を取り、走って来る残った一匹を回転斬りで吹き飛ばす。
わずかの間にランポス三匹は全滅した。クリュウが手際良くランポスの皮や牙を剥ぎ取っているとフィーリアが荷車を引きながらやって来た。
「クリュウ様。もうランポスの素材は必要ないと思いますが」
どこか刺々しい言い方をするフィーリア。そんな彼女にクリュウは驚きながらも自分の主義を述べる。
「でも、倒したならちゃんと有効利用してやらないと。ランポス達の為にも――」
「あなたの師匠はずいぶん変わった方だったんですね」
「そんな言い方しないでよ」
フィーリアの冷たい言い方に、クリュウは不機嫌そうに言葉を出す。
「す、すみません……」
クリュウの怒りが込もった言葉に、フィーリアは慌てて謝る。
「別にその方のハンタースタイルをけなしている訳ではないんです。ただ、そう毎回必ず狩ったモンスターを剥ぎ取っていてはいずれ危険に身を晒す事になります。ですので、クリュウ様には普通のハンターがするように剥ぎ取りは適度にしてほしいんです。チームを組む場合は相手の事もあります。クリュウ様が勝手な行動をされては、仲間をも危険に晒す事になるんです。その辺は気をつけてください」
フィーリアの言葉は全て正論だ。だからクリュウは言い返したりしない。だけど、自分はハンターとしての基礎を教えてくれた師匠を

尊敬しているし、師匠のやり方はマネしたい。だがここまで自分を強くしてくれたのは彼女だ。彼女はもう一人の師匠と言っても過言ではない。だから、師匠の言う事は聞く。
「わかった」
　クリュウはのまだ消えずに残っているまだ手付かずのランポスを名残惜しそうに見詰め、剥ぎ取りようのナイフを腰に戻した。そんな彼を見て、フィーリアは微笑む。
「クリュウ様のモンスターの死を弔(とむら)うという考えはすばらしいですが、こうも考えられませんか？　ランポスは溶けると土に染み込んで栄養になり、木や草を育てます。ランポスのように溶けないモンスターも、いずれは他のモンスターの食糧になります。それが自然の摂理ではないでしょうか？」
「そうだね。そういう考え方もあるんだ」
　クリュウは素直に驚く。そんな彼に満足したようにフィーリアは微笑む。
「では行きましょうクリュウ様。まずは発見しなくてはいけません。その際にはペイントボールを付けてください。もし無理でしたら私がペイント弾を撃ちますが、今回の主役はクリュウ様ですので、なるべくクリュウ様にそういう事もしてほしいんです」
「わかった」
　クリュウはうなずくと再び前へと歩き出す。その後を荷車を引きながらフィーリアが続く。その輝くエメラルドグリーンの瞳は、青い空をじっと見詰める。
　二人はそのまま海岸から内陸部に入る。細く高い木々がひしめくように伸び、光を得ようと縦横無尽に伸びた枝が天空から照らす太陽の光を奪って、辺りは薄暗い。
　木々が並ぶので荷車に支障が出たが、木が生えていない獣道のような場所を通ってなんとか進む。
　腐葉土が柔らかく荷車の車輪を空回りさせるが、クリュウが押してなんとか脱出する。
　密林は森丘や砂漠に比べて荷車の運用が難しい。飛竜と戦うと自

然と道具が増える中、密林はある意味では最も飛竜と戦いづらい場所なのかもしれない。
森林地帯を抜けると、今度は雑草と茶色い地面が交わった広場に出る。木々がないのでとても戦いやすそうだ。
クリュウはそこで足を止めた。
「ここで待ってみる？」
狩りの戦法の一つ、待ち伏せをしようと言うのだ。それに対しフィーリアは鉤（かぎ）状に曲げた人差し指をあごに当てて考える。
「そうですね。これだけ広い上に木々がないのは、この狩り場でも数少ない良い場所です。しかし肝心のイャンクックがここへ来なければ無駄になります。せめてここへ誘き出せれば……」
「肉を焼いてみるとかはダメ？」
クリュウの言葉に、フィーリアは首を横に振る。
「リオレウスやリオレイアなら可能かもしれませんが、イャンクックは肉を食べませんのでそれは無理です。それに別のモンスター、例えばランポスなども引き付けてしまいます」
「そ、そっか……」
フィーリアは何か策を考えながらも荷車から大タル爆弾や小タル爆弾を降ろす。そんな彼女の背中を見詰め、クリュウは何かを思いついたように走り出す。
「クリュウ様⁉　どこへ行かれるんですか⁉」
後ろから驚いたフィーリアの声が聞こえたが、クリュウは構わず走る。
「僕がイャンクックを引きつける！　だからフィーリアはここで待ち伏せの用意をしてて！」
「そんなッ！　危険です！　クリュウ様ぁッ！」
フィーリアの悲鳴のような声を無視し、クリュウは密林の奥へと走り込んだ。
鬱蒼（うっそう）と茂る森の中、クリュウは辺りを警戒しながら進んでいた。
いつも見慣れた森の中も、今は静まり返っている。

いつもと変わらずに進んでいるのに、緊張で胸が苦しくなる。飛竜がこの森のどこかに潜んでいる。そう思うといつも見慣れた木々の向こうが怖くて柄を握る手に力が入る。

「いないな……」

フィーリアと別れて十五分ほど経ったが、いまだにイャンクックは見付からない。イャンクックは桃色の鱗や甲殻に覆われているので、緑景色の密林ならすぐ見付かると思ったのだが、そんな楽観的な思いは脆（もろ）くも打ち砕かれた。

クリュウはフィーリアの待っている場所からは遠くなるが、別のエリアへ向かった。

木々が生い茂る森を抜けると、周りを岩に囲まれ、道は二ヶ所しかないまるで闘技場のような場所。そこはクリュウとは何かと因縁のある場所だった。初めてドスランポスに襲われ、そしてフィーリアと会った場所。

開けた場所に所々に木が密集しているこの場所にも、桃色の巨体はない。

当てが外れたクリュウはため息して踵を返す。

――空気の流れが変わった――

「!?」

驚いて振り返るが、そこには何もない。気のせいかと思って向き直った時、突如日の光が消えて暗くなった。だがそれはすぐに戻る。そして辺りに響くバサバサというゆっくりと、そして力強く風を吹き飛ばす音に上を見上げ、言葉を失った。

蒼い空からゆっくりと、悠然と翼を羽ばたかせて舞い降りてきた桃色の巨体。力強く羽ばたかれる翼はどんな小型モンスターよりも大きい。桃色の巨体からはすさまじく力強い生命力が溢れ出ている。

そしてその桃色の巨体は、静かに、そして鈍い振動と共に地面に降り立った。

それはクリュウが今まで見たどんなモンスターとも違う、別格の存在だった。

桃色の鱗や甲殻に覆われ、青い皮膜に覆われた大きく力強い翼は台

風並みの風を起こしそう。細長い尻尾は大木すらも薙ぎ倒しそうだ。そして巨大な嘴が大半を占めるその顔は鳥そっくり。大きく開かれた耳はどんな小さな音も聞き逃さない高性能ソナー。

桃色の巨躯（きょく）の節々には巨大な筋肉が張り巡らされている。あれはもはや筋肉ではなく天然の鎧だ。

――イャンクック。それが奴の名前だった。

何が飛竜最弱だ。その溢れんばかりの生命力は他とは桁違い。あんなものを狩るだなんて、人間は一体どれだけ愚かなのだろう。

いや、その愚かな人間の一人が――自分だ。

今から自分達は、あの強大な存在を敵に回す。それがどれだけ愚かで、恐ろしい事か。

気がつくと、膝が震えていた。

ドスランポスやドスゲネポスと対峙しても、ここまでの恐怖はなかった。これが飛竜――百獣の王の威圧感。

（と、とにかく、一旦距離を取って……）

下がろうとした時、震えていた膝が突然力を失って転倒した。肩を地面に強打した痛みに一瞬目を閉じた。そして、再び開いた時、奴はこちらをしっかりと見詰めていた。

「クァ、クァ、クァ――クワァァァァァァッ！」

大きな耳をさらに大きく広げ、イャンクックは自分の縄張りを侵す不埒（ふらち）な輩（やから）を撃破しようと大きく叫んだ。そのすさまじい威圧感に、クリュウは転んだ状態のまま動けなくなる。

体が竦（すく）んで、言う事を聞かない。

（そ、そんな……ッ！）

クリュウは必死に体を起こそうとするが、上半身は起こせても足は全く動かない。完全に腰が抜けていた。

「クワァァァァァァッ！」

イャンクックはその巨大な体からは予想もつかないような速さで突進して来た。一気に迫る《怪鳥》と呼ばれるその鳥に似た顔。とっさに盾を構えただけでも、クリュウ自身は自分の反射神経に感謝した。だが、その重量感ある巨体の突撃には、人間なんて木の葉も同然。

クリュウは軽々と吹っ飛ばされた。
数メートル飛ばされて無様に地面に落ちる。体に痛みが走るが、もし盾すら構えてなかったら痛みも感じる間もなく即死だっただろう。そう思うとぞっとする。
イャンクックはその巨体の勢いを止める事はできなかったのか、木々を薙ぎ倒して転倒していた。フィーリアの言うとおりだ。
……フィーリア。
そうだ。フィーリアは待っている。自分がイャンクックを誘き出すのを信じて。
クリュウは起き上がった。先程までの鉛のように重い身体がうそのようにいつもの感覚が戻る。
冷静になった頭は、ゆっくりと起き上がるイャンクックを《恐怖》としてでなく《敵》と判断した。
道具袋（ポーチ）の中からペイントボールを取り出し、クリュウは横へ走った。イャンクックの目がそれを追う。だが、人間のように小さな生き物の小回りは、巨体な奴のそれとは比べ物にならないほど速い。クリュウはすぐにイャンクックの背後へ回り、手に持っていたペイントボールを投げつけた。
イャンクックの桃色の体に、より濃い桃色のペイントが付着する。そして辺りにかぎ慣れた特徴的な匂いが漂う。
イャンクックは自らの自慢の体を汚された事に腹を立てたのか、盛んに叫びを上げた。
「喰らえッ！」
クリュウはドスバイトダガーを抜いて飛び掛った。
縦に一刀両断するかの勢いで剣を振り下ろす。
ギャァンッ！
嫌な金属音のような音が響いた。そして直後に自分の体が向かっていた方向とは逆に吹き飛ばされた。
「は、弾かれたッ!?」
どうやらイャンクックの鱗や甲殻は他のモンスターとは桁違いのように重厚らしい。まさに天然の鎧。

「くぅッ！」
クリュウは諦めずに再びイャンクックの背後へ回って斬り掛かる。だが、結果は同じ。刃はイャンクックの鎧に弾かれてその中にある肉を斬れない。
「化け物かッ！」
クリュウは急いで後退する。あまり執着すると、
「クァ！　クァ！　クァッ！」
先程まで自分がいた所にイャンクックの巨大な嘴が炸裂した。めり込む地面を見て、まるでハンマーだなぁと思った。
イャンクックは間一髪回避した《敵》を恨みがましげに睨むと、巨体を反り返らせる。そんな今までのモンスターにはない動きに注意深く見詰めていると、嘴の端から火の粉が飛んだ。
直感的に盾を構えていた。
イャンクックは反り切った巨体を一気に解放して、まるで人間が腕を大きく振るってボールを投げるかのように体を大きく振って口から燃え盛る火炎液を飛ばして来た。
クリュウの構えていた盾に火炎液が直撃した。ジュワッという不気味な音の後、肩に鋭い痛みが走った――熱い。目だけで見ると、肩から小さな煙が上がっていて、ランポスの鱗でできた鎧が溶けていた。
火炎液はかなりの質量を持っていたのか、クリュウの身体が小さく後退した。
肩の痛みを堪え、クリュウは立ち上がって再び距離を取る。
ふと、左腕に構えた盾を見て、クリュウは絶句した。
ドスランポスの皮で覆われた鉄よりも丈夫な盾が、見るも無惨に表面が溶けていた。もしこれが直撃していたらと思うとぞっとする。
イャンクックはそんな敵を睨み一瞬腰を小さく落とすと、一気に飛び掛って来た。慌てて横へ転がりながら回避すると、イャンクックは一瞬前まで彼がいた場所にハンマーのように巨大な嘴を振り下ろしていた。
続けてイャンクックはクリュウを向いて突撃して来る。クリュウ

はそれを横へ回避。勢い余って胴体から地面に豪快に倒れたイャンクックに、クリュウは剣を振るう。自分と同じくらいの高さの脚に斬り掛かると、弾かれながらも肉を斬って血が飛び出す。初めてイャンクックが悲鳴を上げた。クリュウはそのまま連続して斬り付ける。と、空気を切るような鋭い音に反射的に盾を構えると、直後ムチのように鋭い尻尾の一撃が飛んできた。盾で防いだとはいえ、そのあまりの威力に体が後退する。そこへすぐさま火炎液攻撃が来る。これ以上喰らってはまずいと、クリュウは横へ身を投げ出すようにして回避する。一回転して立ち上がると、イャンクックはこちらを睨んで「クア、クア、クア――クワアアアァァァッ！」と怒りの声を上げる。

――強い。

これが飛竜の力。

とてもじゃないが、並みのモンスターとは格が違い過ぎる。

イャンクックの瞳はギロリと自分を睨みつけてくる。その迫力に腰が抜けそうになったがなんとか堪え、すぐにその瞳を見返す。

イャンクックの瞳は自分しか見ていない。どうやら完全に自分を倒すまでは諦めないらしい。そうなればこっちのもの！

クリュウは剣を腰に戻すと踵を返して駆け出した。イャンクックは突然逃げ出した敵に憤激して「クワアアアァァァッ！」と怒声を上げると翼を羽ばたかせて軽く浮き、そのまま滑空して獲物を追い掛ける。

逃げた訳ではない。フィーリアの元へ連れて行くのだ。そこが、本当の闘技場だ。

後ろから地上生物には出せない高速で滑空してくるイャンクック。頭を爪が通り過ぎる寸前、クリュウは豪快に前へ転倒した。もちろん今の一撃を回避する為だ。一応振り返って目測でやった事だが、ほとんど勘に近かった。

クリュウは自分を通り過ぎて少し離れた前に滑走しながら着地したイャンクックを見詰め、そのままその横を通り過ぎる。イャンクックはすぐさま突撃して来る。後ろから迫る超ヘビー級の突進に、悲鳴が上がる。

「うわあああぁぁぁッ！」
すぐ後ろに奴が倒れた気配。もはや振り返りもせずに走る。
そんな感じで命懸けの鬼ごっこのようにイャンクックを誘導するクリュウだが、全速力を続けていた足がもう限界に達しようとしていた。ガクガクで、ちょっとした窪（くぼ）みがあったら躓（つまず）いて転倒してしまいそうだ。
「うわあああぁぁぁッ！　も、もう無理ぃッ！」
「クワアアアアッ！」
「うおおおぉぉぉッ!?」
クリュウは慌てて横へ跳ぶ。ガクガクの足に無理やり力を入れたせいか、回避というより転倒のように横へ倒れる。すぐさまさっき自分がいた所にイャンクックの巨体が倒れ込んでくる。あと一秒でも遅かったら、きっと押し潰されていただろう。
クリュウはイャンクックが起き上がる前に残った力を振り絞って全力で逃げる。その後を起き上がったイャンクックが追い掛けてくる。
そして、森の終わりが見えた。そこへ向かって全速力で逃げ込む。と、そこは先程フィーリアと別れた広場だった。そして、フィーリアがヴァルキリーファイアを構えていた。
「こちらへ真っ直ぐ来てください！」
その意図がわかったのはすぐ後。彼女と自分を結ぶ直線上に、電撃が見えた――シビレ罠だ。
「クワアアアアッ！」
怒り狂うイャンクックに対し、フィーリアはスコープを覗いて狙いを付けるが引き金は引かない。今ここで撃てば相手の意識がこっちに移ってしまう。それではクリュウの努力も無駄になってしまう。フィーリアは辛いのを堪えながら、こっちへ走って来るクリュウを呼ぶ。
「クリュウ様！　あと少しです！」
クリュウはすぐ後ろまで迫っている恐怖に泣きそうになった。そして、視界から地面に迸（ほとばし）る電撃が下へ消えた瞬間、クリュ

ウは前に倒れ込んだ。
「クアッ!? クワクワァッ!?」
すぐに起き上がると、イャンクックが突進を止めて痙攣している。その桃色の体には電気が流れているのが見えた。シビレ罠成功だ。
「うりゃぁッ!」
クリュウはドスバイトダガーを抜き放つとイャンクックの強靭（きょうじん）な脚に力の限り剣を叩き込んだ。
硬い脚にドスバイトダガーは弾かれながらも斬り付ける。後方からはフィーリアの連続射撃が加勢に加わっている。同じ場所を何度も斬り付けていると、鱗が吹き飛んで赤黒い肉が見えた。すかさずそこへ力の限り剣を叩き込む。
「クワァァァァァッ!?」
イャンクックの悲鳴にクリュウは慌てて後ろへ跳ぶ。そこへ強力な尻尾攻撃がクリュウをかすって通り過ぎた。危なかった。
シビレ罠から抜け出したイャンクックはギロリとクリュウを睨みつける。そこへ嘴を中心に頭部に二発の弾が突き刺さり、直後に爆発した。
「クワァァァァァッ!?」
イャンクックはたたらを踏むとギロリと自分を攻撃したフィーリアを睨む。だが、睨まれたフィーリアは一歩も引く事なく冷静に徹甲榴弾ＬＶ１を撃つ。その一発一発は確実にイャンクックの体へと吸い込まれ、突き刺さり、爆発する。
だが、すさまじい猛攻撃なのにイャンクックはひるむ事なく怒声を上げるとフィーリアに向かって突進した。
「クァクァァァァァァァァァァッ！」
奇声を上げながら突撃してくる巨体をフィーリアは冷静に横へ軽く跳んで避けると、胴体から地面に突っ込んだイャンクックにすぐさま貫通弾ＬＶ２を撃つ。
フィーリアの貫通弾ＬＶ１に体を貫かれながら起き上がったイャンクックの背後からクリュウが飛び掛かる。他の部位を狙っても弾かれるなら、脚に攻撃を集中するだけ。

「喰らえぇッ！」
体全体を使って腕をフルスイングして剣を人間の子供くらいの太さがある脚に叩き込む。その一撃で鱗が数枚飛ぶが、血は流れ出ない。肉は切れなかった。
「このぉッ！」
斬って斬って斬りまくる。鱗が飛び散り、血飛沫が舞う。何度も何度も斬り付けても、イャンクックはまるで効いていないかのように体勢を崩す事もなく悠然と立つ。
「クアァッ！」
脚に群がる邪魔な獲物に、イャンクックは回転してムチのように尻尾を叩きつける。とっさに盾を構えたクリュウだが、そのすさまじい威力に体が簡単に吹き飛ばされてしまう。
「くぅッ！」
飛ばされたクリュウは地面に立つと膝を折る。いつの間にか自分は数メートルも飛ばされていた。なんて常識外れな破壊力だ。
「クリュウ様ッ！　落とし穴を用意してください！　その間は私が引き付けますッ！」
そう言うと、フィーリアは散弾ＬＶ１を連射しながら横へ走る。体に無数の小型弾丸を受けて悲鳴を上げるイャンクックは自分を執拗に攻撃して来るフィーリアを睨む。その視界から、クリュウの姿は消えた。
「今だ！」
クリュウは腰に剣を戻すと広場の端に置いてあった荷車へ駆け寄って円盤状の金属――落とし穴を掴む。そのまま少し離れた場所に走り設置しようと身を屈めた。
「クア、クア、クワアアアアアッ！」
その怒声に驚いてを顔を上げると、イャンクックがこちらに向かって突進して来ていた。遠くにいるフィーリアの顔は真っ青だ。
「クリュウ様！」
「うわあああぁぁぁッ！」
クリュウは慌てて盾を構える。そこへ、イャンクックの巨大な体が

突っ込んで来た。
「ぐあああぁぁぁッ！」
すさまじい重みと激痛の後、クリュウの体は宙に飛び、その後すぐ無様にも地面に激突。そのまま地面の上を二転三転として倒れた。
体中に激痛が走る。すさまじい痛みに、クリュウは呼吸すらままならない。顔を無理やり上げると、視界が真っ赤だった。そしてすぐに血が頭から流れて目を経由して頬を流れているのだと知る。
「あぐぅ……」
なんとか身体を起こそうとするが、激痛がそれを邪魔する。その間に、イャンクックは倒れていた体を起こした。そしてその双眸（そうぼう）でぐったりとしているクリュウを睨む。
「クァ、クァ、クァ、クワァァァァァァァァァッ！」
まるで勝利を確信したかの咆哮に、クリュウは唇を噛んだ。
ここまでか……
クリュウは今にも突撃して来そうなイャンクックを見詰め、最後の瞬間を覚悟した。
ヒュルルルルルゥゥゥゥゥ……
そんな落下音の後、イャンクックの背中に無数の銃弾が雨のように降り注いだ。通常弾、貫通弾、散弾、徹甲榴弾。様々な銃弾がイャンクックを襲う。
もはや狙いなんて無茶苦茶。背中や翼、頭や耳、そして地面に突き刺さる。徹甲榴弾が命中すれば爆発し、イャンクックは炎に包まれる。すさまじい集中砲火だ。
イャンクックはすさまじい猛攻撃に苦しむ。
「クァッ!?　クァクワァッ!?」
視界の隅にいるフィーリアが、上空に向かって目にも留まらぬ速さで連続射撃と装填を交互に行いながら無数の弾丸を放っていた。カラカラカラとすさまじい勢いで空薬莢が辺りに飛び散っている。そして、その表情は正直イャンクックよりも怖かったりする。
「私のクリュウ様によくもぉッ！　焼き鳥にしてくれますぅッ！」
フィーリアは時々恐ろしく怖い時がある。こんな状況なのに意外

と冷静な自分に驚いた。
すさまじい集中砲火に、イャンクックはたまらず悲鳴を上げて空へ飛んだ。すさまじい風圧が追撃してくる通常弾と散弾を吹き飛ばすが、貫通弾は命中する。だが、イャンクックは構わずそのまま天高くまで昇ると水平飛行して別のエリアへ逃げていく。
遠ざかって消えた羽音の後、フィーリアが慌てて駆け寄って来た。その顔はもう涙でグチャグチャになっている。
「クリュウ様ッ！　大丈夫ですかッ!?」
フィーリアは泣きながらぐったりとしているクリュウを抱き抱える。
「こ、こんなに血が……ッ！　クリュウ様ぁッ！」
「……く、苦しい……ッ！」
力いっぱい抱き付いてくるフィーリアにクリュウは顔を真っ赤にさせながらも窒息しかかる。もし彼女が武装していなかったら、今は装甲の奥に守られた柔らかな双丘が押し付けられて、きっと別の意味で死んでいたかもしれない。
「ご、ごめんなさい……ッ！」
フィーリアも顔を真っ赤にして慌てて力を弱めると、クリュウはいろんな意味で助かった。
その後、フィーリアは無言で道具袋（ポーチ）からハンカチを取り出してクリュウの血を拭うと、薬草を取り出して石ですり潰し「少し痛みますが、がまんしてください」と言ってその傷口に塗った。一瞬痛みに顔がゆがんだが、なんとか堪える。最後に、フィーリアはクリュウの頭に包帯を巻いて自分の持っていた応急薬を全部クリュウに飲ませた。
しばらくして、クリュウの顔色は良くなった。フィーリアの適切な処置のおかげだ。
「ありがとうフィーリア。もういいよ。それより早くあいつを追わないと……」
クリュウは半身を起こそうとした。
「ダメです」

「フィーリア？」
　それは彼女の細腕に止められた。そして再び彼女の倒されて膝枕になる。素直にこんな行為を受けているのは彼女が武装しているからだ。もし私服の時にそんな事をされれば柔らかな枕にクリュウは気絶するだろう。
　クリュウが不思議そうに彼女を見詰める。と、
　ポタ……
　頬に水滴が落ちた。
　――それは、フィーリアの涙だった。
　顔を悲しげにゆがめ、クリュウを見詰めるその瞳からは、ぼろぼろと涙が流れ落ちる。
「ふぃ、フィーリア……？」
「……もう、帰りましょう……ッ！」
　彼女の震える口から放たれた言葉は、クリュウの想像を絶するものだった。
「な、何言ってるんだよ！　早くあいつを狩らないと！」
「ダメったらダメですぅッ！」
　フィーリアは起き上がろうとしたクリュウの体を押し倒す。地面に仰向けに倒されたクリュウに、フィーリアは抱き付いた。
　金色の髪から流れるのは彼女が愛用しているシャンプーの香り。それだけでクリュウの心臓は跳ね上がる。だが、すぐにそんな自分が嫌になった。
「うっ……うぅ……」
　肩を震わせ、嗚咽を漏らすフィーリア。その姿は、戦いの時の勇ましい姿とはかけ離れた、普通の女の子だった。
「フィーリア、どうしたの？」
「……お願いです……今回は……諦めましょう……ッ！」
「そんなのダメだよッ！　村が危険に晒されるんだよッ!?」
「それは私が後日イャンクックを討伐すればいい事です！」
「それじゃ意味がないでしょ!?　僕が倒さないと――」
「クリュウ様にはまだ早過ぎたんですぅッ！」

悲鳴のように叫ぶフィーリアに、クリュウは言葉を失う。
ギュッと、フィーリアが強く抱き付いてきた。
「……私の判断の誤りが……クリュウ様を危険に晒し……私のミスが……クリュウ様を傷つけた……私のせいで……クリュウ様が……ッ！」
泣きながら自分を責めるフィーリア。それはドスランポス戦の時にも見た彼女の弱い一面。
彼女は人一倍責任感がある子。だから自分の単純なミスでクリュウが怪我をした事が、耐えられないくらいの苦痛なのだ。
泣き崩れるフィーリアに、クリュウは優しく声を掛ける。
「そんな事ないよ。これはフィーリアのせいじゃない。僕のミスだ」
「違います！　私がこんな依頼を受けたばっかりに……ッ！」
「受けなきゃ、村が危険だった。僕は受けた事に何の後悔もしてないよ」
「で、でも……ッ！　私のミスでイャンクックがクリュウ様に攻撃を加えました！　あれは私のミスですッ！」
「接近して来る奴にもう少し早く気づいていれば、こんな事にはならなかった。あれは僕の状況判断ミス。フィーリアのせいじゃないよ」
「ち、違います……ッ！」
クリュウはフィーリアの言葉を聞かず、無理やり起き上がる。
「だ、ダメです！　まだ起きられては！」
「もう大丈夫だよ」
クリュウはそう言うとゆっくりと立ち上がる。少しふらついたが、すぐにいつもどおりに体が動くようになる。
腕や足が問題なく動くのを確認すると、クリュウはペイントボールの匂いを追う。すると、すぐに匂いの方向がわかった。
「あっちか。じゃあ行こっか」
「だ、ダメですぅッ！」
フィーリアが慌ててクリュウの腕に抱き付いて止める。涙を瞳にいっぱい溜めたその必死な表情はもう威厳なんて微塵もなく、ただ必死に大事な人の無茶を止めようとするか弱い女の子であった。

「今回の依頼は失敗です！　これはもう戦っても無駄です！」
「無駄とか関係ないよ。僕はあいつを狩る。ただそれだけだよ」
「ダメですッ！　クリュウ様にはまだ早過ぎ――」
「そんなに嫌なら、フィーリアだけで帰ってよ」
「なッ!?」
　フィーリアはクリュウの言葉に絶句する。そんな彼女を見詰めるクリュウの瞳には、いつになく冷たい光が宿っていた。その冷たさに、フィーリアの背が凍りついた。
「僕はあいつを狩る。一人でも、狩ってみせるさ」
　力を失った彼女の腕は簡単に解ける。クリュウはそのまま何事もなく歩き出すが、そんな彼を慌ててフィーリアが追いかけて来る。
「ダメです！　危険すぎます！」
「ハンターに危険はつきものだよ」
「とにかくダメです！　一緒にイージス村に帰りましょう！　村長様には私から謝りますから！」
「だから、そんなに帰りたいなら一人で帰ってよ」
「それじゃダメです！　クリュウ様も一緒に――」
「いい加減にしてよッ！」
　突如響いたクリュウの怒号。あまりにも突然で、怖くて、フィーリアは硬直する。振り返った彼は自分をキッと睨む。あんな怖い彼の目、初めて見た。
「クリュウ……さま……？」
「さっきから聞いてれば早過ぎるとか無理だとか。なんでそう簡単に諦められるの!?　何で僕がちょっと怪我しただけでそんなに保身に走るの!?　フィーリアは大げさなんだよッ！」
「そんなッ！　私はクリュウ様の為に――」
「だったら僕を少しは信じてよッ！」
「信じてますよッ！　信じてるに決まってるじゃないですかッ！」
「いいや信じてない！　信じてるなら、この程度の怪我で保身に走ったりなんかしないよッ！」
　返す言葉がなかった。彼が言っているのは全て事実。彼の傷は狩

りに支障はない。だけど、フィーリアは彼が傷つく姿を見たくなかった。ハンターなのだから、怪我くらい当然だ。だけど、やっぱり嫌なのだ。だからこれ以上傷ついてほしくなくて、こうして誤った時に止めてしまう。これは彼の為ではない。自分が辛いからやっているのだ。これでは、全く自分は彼を信じていないではないか。

黙ってしまうフィーリアに向けていた視線を再び前に戻し、クリュウは歩き出す。呆然とするフィーリアに、クリュウは言う。

「僕はイャンクックを倒す。それが僕の使命だ」

そう言って歩き去る彼の背中を見詰め、フィーリアはその場に力なく崩れ落ちるとぽろぽろと涙を流した。

自分は彼から信頼を失ったのだ……

悲しくて、辛くて、涙が止まらなく溢れて、白い頬を濡らす。

うつむかせていた顔を上げた時には、もう彼の背中はどこにもなかった……

第２５話　トラップボミング

鬱蒼と木々が生い茂る森の中を進むクリュウ。双眼鏡を片手に辺りを警戒しながら進む彼の後ろをフィーリアが荷車を引きながら続く。

結局、クリュウ一人だけで行かせる訳にもいかず、フィーリアはとぼとぼとついて来たのだ。

合流してからの二人はどちらも言葉を発さず、不気味な沈黙が漂う。

クリュウはイャンクックを捜す事に集中していて何も話そうとしないが、フィーリアは先程から口を開けては閉じてうつむき、開けては閉じてうつむくという動作を繰り返している。何か話そうとするが、何もできずにいるのだ。

クリュウはきっとまだ怒っている。そして自分は彼からの信頼を失った。なのについて来た自分を彼は快く思っていないはず。後を追いかけたのに、彼は「ありがとう」とか「一緒に行ってくれるの？」とかそういう言葉はなく、無言だった。せめて「ついて来るな」とかなら良かった。無視されるのははっきり拒否されるよりも辛い。

そんな感じで全く会話なく進む二人。前方から漂う嗅ぎ慣れた匂いを追いながら進む。

そして、匂いがかなり近くなって来た時、クリュウはようやく口を開いた。

「フィーリア」

「は、はいッ！」

いきなり話し掛けられ、フィーリアは慌てて返事する。そんな彼女にクリュウは背を向けたまま指示をする。

「まず落とし穴を設置するから、その間イャンクックを引き付けてくれない？」

「え？　ですが私は……」

そこで初めてクリュウは振り返った。瞳を揺らして動揺するフィーリアに、彼は優しく微笑んだ。その笑顔に、フィーリアは目を

見開く。そして、
「信じてるから」
その短くも温かな言葉に、フィーリアの大きな瞳から涙が零れた。
彼はまだ、自分の事を信じてくれている。それが嬉しくて堪らない。
だから、信じてもらっている自分は、ただその想いを無駄にしない為に、全力で戦うだけだ。
「はいッ！」
涙を拭いて笑顔で言うフィーリアに、クリュウはうなずくと再び前を向いて歩き出す。そんな彼の背中を見詰め、フィーリアは満面の笑みを浮かべた。
匂いはこの奥からする。この奥は確か川が横に流れていて反対側は岩壁なので細長い地形のエリアだ。
岩の陰から覗くと、濃い緑に包まれた木々の中に鮮やかな桃色の巨体がゆっくりと動いているのが見えた――イャンクックだ。
クリュウは緊張に身を引き締めるとグッと腰に挿したドスバイトダガーの柄を握る。
「いくよ」
「はい」
それを合図に二人は岩から飛び出すとそれぞれの行動に移った。クリュウが荷車を引いて岩壁の方にそれを停止させて落とし穴を構える間に、フィーリアが突撃した。
物音に怪訝そうに首を回すイャンクック。大きく張られた耳は小石ひとつの微かな音も逃さない。すぐに自分に向かって突っ込んで来る人間を発見し、戦闘モードへ移行する。
「クァ、クァ、クァ、クワァァァァァァッ！」
威嚇（いかく）するように鳴くイャンクックに、フィーリアは道具袋（ポーチ）の中から取り出した物を投げ付けた。だが、瞳は閉じずに彼女は突進した。
刹那、投げられた玉が破裂し、キンッという心地良い音が響いた。人間の聴覚には心地良い音に聞こえるが、聴覚が発達したガレオスや

イャンクックなどには至近距離で爆弾が起爆したかのような強烈な爆音のように聞こえる。そして、そんなすさまじい音を受けたイャンクックはめまいを起こして体を天に向けてフラフラと揺れる。
　すぐさまフィーリアはボウガンを構えて弾を装填し連射を開始する。発射された弾は散弾ＬＶ１。炸裂した弾丸が無数の小さな弾丸を撃ち放ちイャンクックの体を血に染める。一発でもかなりのものだが、フィーリアは容赦なく弾倉の中の全弾を発射。すぐさま再装填し再び連続して撃ち込み、イャンクックを血まみれにしていく。
　一方フィーリアがイャンクックを引き付けている間に、クリュウは落とし穴をフィーリアから少し離れた後ろに設置する。地面に置き、ピンを抜くと特殊な溶液と共に強力なネットが展開される。この溶液には土を一時的に泥化させる事ができる。そしてネットは強力な粘着性を持っていて、どんな飛竜も逃げる事はできない。しかし溶液もネットも空気に触れると急激にその効力を失うので、飛竜が掛かって中で暴れると泥の中やネットの繊維の中に空気が入ってしまうので、飛竜を捕まえていられる時間は十数秒ほどだ。だが、その十数秒こそが狩りでは重要なのだ。
「フィーリアッ！」
　クリュウの呼び掛けにフィーリアが連射しながら後退する。クリュウが再び荷車に戻った時にはもうイャンクックはしっかりとフィーリアを睨みつけていた。しかも口からは火炎液が溢れ出し空気に触れて発火している。激しく首を上下に振りながら体も激しく動かす。理性を吹き飛ばして暴走するそれは、怒り状態であった。
「クワァァァァァッ！」
　怒号と共にイャンクックは火炎液を吐いて来る。だがフィーリアはそれを後ろへ跳んでかわした。そしてそのまま下がって止まった場所は、落とし穴の後ろ。すぐさまボウガンで連射攻撃を再開する。
　遠くに離れた上に執拗に攻撃してくる格下の相手にイャンクックは容赦なく突撃して来る。だが、それこそこっちの思うツボだ。
　クリュウは突撃するイャンクックを一瞥してすぐに大タル爆弾を二つ両手に持つ。ズシリと重いのを耐えてフラフラになりながら歩

く。その間にイャンクックは突如その高さが半分ほどに沈んだ。落とし穴に掛かったのだ。
「クァクァッ!? クワァァァァァッ!?」
突如動けなくなった己が体に怒りと困惑が混ざったような声を上げるイャンクック。その間にフィーリアがクリュウに駆け寄って片方の大タル爆弾を受け取る。起爆は彼女がこの作戦の為に岩陰で腰に下げた小タル爆弾だ。今考えればかなりハイリスクな持ち方だが、速さが何よりも重要なこの作戦では最も有効的なやり方だ。
フィーリアはすぐにもがくイャンクックの首の付け根辺りに爆弾を設置する。あんなに至近距離に置くなんて、さすがフィーリアだ。クリュウも負けじとその横へ設置しようと走る。
ふらつく足は大タル爆弾の重さや疲れだけではない。
恐怖。それがクリュウの心に潜んでいる。
今から自分が駆け寄るのは飛竜。もがき苦しむ巨体がその威風を堂々と輝かせている。
嫌な汗が背中を流れる。
怖い。すごく怖い。
だけど、その恐怖を無理やり押し込んで、クリュウは走った。
そして、フィーリアの置いた大タル爆弾の横へ置く。そして、横に待機していたフィーリアが小タル爆弾を仕掛けてピンを抜いた。後は走って逃げるだけ。だけど、そこで見てしまった――イャンクックの恐ろしい目を。
瞬間、身体が硬直した。まるで何か見えないものに掴まれたように、自分の体なのに言う事を聞かない。
足が、まるで別の人の足のように言う事を聞かない。
視界の隅に、導火線が短くなる小タル爆弾が見えた。危ないと頭では理解してても、体は動かない。頭に《爆死》という単語が流れた。
「クリュウ様ぁッ!」
フィーリアの悲鳴のような声と共に、彼女が突っ込んで来た。二人の体は宙に浮かび、一気にイャンクックとの距離が離れた。彼女の体でイャンクックの姿が消えた瞬間、

ドガアアアアアアアアンッ！
すさまじい爆音と共に爆風が襲う。宙に浮いていた二人の身体は一瞬炎に包まれ、その爆風にさらに勢いを増して吹き飛んだ。
クリュウは勢い良く地面に叩き付けられて転がった。だがほとんど痛みはなくすぐに立ち上がると、さっきまで自分達がいた場所から黒煙が天に向かって伸びていた。そして見つけた。自分から少し離れた場所で体から煙を出しながら横たわる――フィーリアを。
「ふぃ、フィーリアッ！」
クリュウが駆け寄ると、フィーリアは「うぅ……」小さくうめいた。良かった。どうやら生きているらしい。
だが、フィーリアの背中を見て、クリュウは絶句する。
力強い緑の鱗に包まれていた防具が、黒くすす焦げている。焦げているだけで爆風や衝撃にもレイアシリーズは耐えていた。だが、激しい衝撃だけは全てを守り切れなかったのだろう。フィーリアは苦しげに小さな悲鳴を上げる。
「フィーリアッ！」
クリュウが抱き抱えると、フィーリアはゆっくりと目を開けた。
「……よ……良かった……ご無事で……」
自分をかばったフィーリアはぐったりとしている。爆風の衝撃を直撃で受けたらしく相当のダメージを負っているらしい。
「フィーリア……ッ！　僕のせいで……ッ！」
「……これでおあいこですよ……」
そう言って微笑む彼女に、クリュウも無理をして小さく唇だけで笑った。
いつも自分を支えてくれたフィーリアが、今は自分の腕の中でぐったりとしている。その状況にクリュウは焦った。とにかく、早くフィーリアを手当てしないと。そう思って彼女を抱え上げた。
「クア、クア、クア……」
聞こえて来たのは、恐怖だった。
驚いて振り向くと、細くなった黒煙の下に桃色の巨体をしたイャンクックが立っていた。まさかあの爆発を耐えたというのか。まさし

く化け物だ。
「そ、そんな……ッ！」
「……クリュウ様……逃げて……ッ！」
フィーリアの小さな悲鳴も聞こえず彼の見詰める先にいるのは間違いなくイャンクック。だがやはり大タル爆弾の威力はすさまじかったのか、鮮やかな桃色の体は所々黒く焦げ、鱗や甲殻が吹き飛んで赤黒い肉が見える。そしてそこからは真っ赤な血が流れ出している。だが、その大きく開かれた耳が、奴はまだ戦えるという事を示していた。
イャンクックはしっかりと二人を睨みつけていた。
殺される。直感的にそう感じた。
彼女を抱えたままでは奴の突進は避けられない。かと言って彼女を見捨てるなんて言語道断だ。だがこのままでは二人とも死ぬ。
唇を噛んで、せめてもと睨み返す。
この腕の中の人は、必ず守る。
一人と一頭の睨み合いは長く続いたように感じたが、実際は十秒もない。
そしてそれは突如として終わりを告げた。
イャンクックは翼を大きく羽ばたかせて飛び立った。そしてそのまま高く昇り、水平飛行に移って飛び去った。それはまるで見逃してくれたように見えた。
だが今はそれより先にする事がある。痛みに苦しむフィーリアを爆弾や罠がなくなって空いた荷車の上に乗せて引く。向かうは拠点（ベースキャンプ）。
クリュウは振動を与えないように慎重に、そして急いで荷車を引いた。
拠点（ベースキャンプ）に戻ったクリュウはフィーリアを備え付けのベッドの上に座らせて彼女の胴と腰の防具を外す。中から出て来たのは彼女の白い肌。以前間違って着替え中の時に目撃した時と同じように真っ白だ。女性ハンター標準のダブレットは別に色っぽいデザインではないはずなのに、彼女が着ると全く別のものに見えるか

ら不思議だ。
だがそんな白い肌は、背中は別世界だった。
広く広がったあざにやけど。そしてにじみ出る血。それらが彼女の白い肌を汚していた。だが見た感じそれほどひどくはない。これも強固なレイアシリーズのおかげだろう。
クリュウはさっきフィーリアがしてくれたように薬草をすり潰して彼女の背中に塗る。痛みで小さくうめく彼女を、クリュウは心配そうに見詰める。
その上から包帯を巻き、彼女の道具袋（ポーチ）の中から応急薬を取り出して飲ませる。その時「……く……口移しで……お願い……できませんか……？」という彼女の小さな声は無視した。どうやら大丈夫そうだ。
ゆっくりと寝かせると、フィーリアの顔色に生気が戻る。
「ありがとうございます……」
「いいって。お互い様だよ」
そう笑顔で答えると、クリュウはフィーリアを見詰める。怪我は大した事はなかった。応急処置もしたし、このまま安静にしていれば問題ないだろう。
クリュウは立ち上がると装備の確認をする。そんな彼を、フィーリアは不安げに見詰める。その翡翠色の瞳は、全てを悟っていた。
「行かれるの……ですか……？」
彼女が訊いているのは、これからクリュウがイャンクックを追い掛けるのかという疑問だ。だが、彼女はすでに彼の答えはわかっている。そしてもちろん答えも、
「うん。決着をつけてくる」
クリュウのうそ偽りのない真っ直ぐな返答に、フィーリアの表情が痛みとは別に若干曇る。
「そうですか……」
「止めたって無駄だよ。もう決めたから」
「――止めません」
「え？」

その予想していた正反対な答えに驚いて彼女の顔を見ると、フィーリアは優しげに微笑んでいた。明るく、優しく、全てを包み込むような、そんな優しい笑顔。
「止め、ないの……？」
驚くクリュウの問いに、フィーリアはそっとうなずく。
「どうして……？」
「――信じてますから。クリュウ様の事」
「フィーリア……」
「がんばってください。私も回復次第追い掛けますから」
そう言うと、フィーリアは微笑む。その笑顔は本当に優しく、柔らかく、温かい。翡翠色の瞳はクリュウを信じるという想いで満たされ、キラキラと輝いている。
「信じてますから」
もう一度、フィーリアは言った。クリュウはそんな彼女の言葉にクリュウはうなずくと、そっとテントを出る。後ろではフィーリアが小さく手を振っていた。それに笑顔で応え、クリュウは用意を整える。砥石で剣の刃を磨き、トラップツールとゲネポスの麻痺牙やネットを使ってシビレ罠と落とし穴をそれぞれ一個ずつ調合する。
万全の用意を整えなければ、奴には勝てない。
必要なものを全て荷車に載せる。爆弾は残り小タル爆弾四個、打ち上げタル爆弾五個。音爆弾と閃光玉はそれぞれまだ未使用。さらに今調合したばかりのシビレ罠と落とし穴。これだけあれば、なんとか戦えるだろう。
そして全ての準備を整えると、クリュウは道具が満載された荷車を引きながら歩き出す。
フィーリアのいるテントを一瞥し、クリュウは再び狩り場へ繰り出す。
太陽はもう真上ではなく斜め上にある。夕暮れまではまだ時間はあるが、結構な時間が経っていた事に気づく。
潮風が流れる海岸にはランポスはいなかった。最初に通った時に狩っておいて正解だった。

荷車を引きながら、クリュウはペイントボールの匂いを探る。そろそろペイントボールの効き目が切れる頃だが、まだ匂いはする。その匂いを追い掛け、クリュウは歩く。

この先に、奴はいる。

ハンターなら必ず通らなければいけない登竜門。勝たなければいけない相手。

「必ず、勝ってみせる」

拳をギュッと強く握り、クリュウは気合を入れると、蒼穹の空を見上げる。

クリュウは初めての飛竜、しかも後半戦は一人という過酷な状況だったが、絶望はしなかった。

必ず勝てる。そんな想いが心を満たしていた。

クリュウは歩き出す。

――イャンクックと、決着をつける為に……

第２６話　激闘　大怪鳥イャンクック

ペイントボールの匂いを辿って密林の奥へと進む。そこは多くの細い木々に包まれた場所で、奥の方にはこの周辺の川の源泉が湧き出す小さな池がある。

そして奴はそこにいた。

細い首の先にある大きな顔。そしてその顔の半分近くを占める巨大な嘴を水面に差し込んで水を飲むのは桃色の鱗や甲殻に包まれた怪鳥イャンクック。

その巨体には先程の戦闘の怪我がまだある。閉じられている耳は体力が残り少ないからではなく辺りを警戒していないからだ。

クリュウは音を立てないように荷車を置くと、バトルキャップのゴーグルを掛け、道具袋（ポーチ）から音爆弾を取り出してこっそりと近づく。

イャンクックはまだこちらには気づいていないのか、水を飲んでいる。クリュウは草陰を利用しながらゆっくりと近づく。そして距離がかなり縮まった時、突如イャンクックは首を上げて辺りを見回した。慌てて体勢を低くする。気づかれたか。

息を殺して見詰めるクリュウの気配に気づかなかったのか、辺りを何度か見回した後イャンクック再び嘴を水面に突っ込む。今だ！

クリュウは手に持っていた音爆弾のピンを抜いてを投げ付け、一気に突進した。その足音にイャンクックがこちらを向いた刹那、キンッという心地良い音が響き、イャンクックが悲鳴を上げてフラフラと頭をもたげる。そんなイャンクックに向かってクリュウは突っ込む。

「うりゃあああぁぁぁッ！」

構えた剣を力の限りその巨体を支える強靭な脚に叩き込む。鱗を吹き飛ばし、その内にある肉を斬り裂く。舞う赤き血飛沫が奴に微弱ながらもダメージを与えている証拠だ。

「このッ！　このぉッ！」

力の限り剣を振るう。縦からの両断、横への一閃、斜めからの斬り下ろし。様々な連撃を放つ。剣が振るわれるたびにイャンクックの

血が空中をその軌跡を描く。
「クワァァァァァァッ！」
のび状態を脱したイャンクックの叫びに後方へ下がる。再び対面した時、イャンクックは血走った目をしていた。口からは火炎液が溢れ、空気に触れて燃えている。まるで炎の息のようだ。
《怒り状態》。ハンター達の間ではそう呼ばれている大型モンスター独特な特性。正確には学術的には《興奮状態》と言うらしいが、飛竜などの大型モンスターは興奮すると身体能力を桁違いに上げるらしい。特にスピード、パワーは今までとは比にならない。だからこそ、怒り状態になったら逃げるのが得策なのだ。
「クワァァァァァァァァァァッ！」
イャンクックは怒声を上げて火炎液を辺りに撒き散らしながら突撃して来る。そのスピードは今までとは比べ物にならないほど速く、避けるなんて不可能だった。盾を構えてガードするのが精一杯。
突撃して来た巨体の衝撃はすさまじく、耐え切れずクリュウは吹き飛ばされる。地面を二回転した後に起き上がると、胴を地面に投げ出したイャンクックも起き上がっていた。
「クワァァァァァァッ！　クワァァァァァァァァァァッ！」
再び火炎液を吐きながらの突撃。これもガードするが簡単に吹き飛ばされる。
「あぐぅッ！」
肩を強く打ち付け、痛みを堪えながら急いで起き上がると、イャンクックは体を大きく仰け反らせていた。
「うわぁッ！」
無我夢中で横へ身体を投げ出すと、直後に火炎液が飛んで来た。先程まで自分がいた所が真っ黒な炭になる。
無理な体勢で横へ飛んだので、慌てて起き上がった時にはイャンクックが突撃を開始していた。盾を構えるが、そのすさまじい衝撃と共に身体が簡単に弾き飛ばされる。
何度も身体を地面に打ち付け、痛みを堪えながら起き上がると慌てて距離を取る。だが、イャンクックはそのすばやい速さで突撃して一

気に距離を詰める。その突撃はなんとか回避できた。
　クリュウは道具袋（ポーチ）の中に手を伸ばす。怒り状態では周りの音が聞こえないのか音爆弾は効かない。だから取り出したのは閃光玉。イャンクックがこちらを向いた瞬間投擲し、目をつむる。直後、閉じた目にも伝わるまばゆい閃光が迸り、再び瞳を開くとイャンクックが苦しそうに身体を揺らしていた。
　クリュウは地面を蹴って突撃する。剣を抜き放ち、フラフラするイャンクックの脚にその一撃を叩き込む。鱗が飛び、肉が斬れ、血が舞う。イャンクックも必死の反撃をする。脚をバタつかせて纏わり付くものを蹴散らそうとするが、クリュウは一度離れると今度はその顔に一撃を入れた。ドスバイトダガーの鋭利な刃が、イャンクックの大きな耳を一直線に切り裂き、そのまま嘴に裂傷を与える。これにはさすがのイャンクックも悲鳴を上げて仰け反った。その間に再び顔に剣を叩き込む。嘴と耳はズタボロに切り裂かれる。
「クワッ！　クワッ！　クワァッ！」
　イャンクックは頭をハンマーのように何度も上下させてクリュウを追い払うが、クリュウは執拗に攻撃を加える。
「クワァァァァァッ！」
　イャンクックはその巨体を回転させて尻尾をムチのように振るう。その攻撃を盾で防いで後退した後、クリュウはすかさず一撃を加える。
「クワァァァァァッ！」
　地団駄（じだんだ）を踏むイャンクックの巨大な脚から逃れるように後退すると、イャンクックは頭をハンマーのように激しく上下させて襲い掛かる。そのあまりの強さにクリュウは慌てて横へ飛ぶ。ドゴンッという陥没音に振り返ると、イャンクックの嘴が地面を砕いていた。なんという威力だろうか。
　クリュウは一度剣を腰に戻して走る。突如逃げ出した敵にイャンクックは激怒して突撃して来る。だが、それはこっちの思うつぼ。
　クリュウはすぐさま転進して逆方向へ全力で走る。突如方向を変えたクリュウにイャンクックは驚きながらも自らの巨体を押さえき

れずにそのまま木々をなぎ倒しながら前に倒れ込む。
クリュウはそれを一瞥して走り続ける。向かう先は岩陰に置いていた荷車。到達すると小タル爆弾を掴む。振り返るとイャンクックが突撃して来ていた。怒り状態だと速い。
「喰らえッ！」
クリュウは三発の小タル爆弾をピンを抜いて投げ付ける。投擲された小タル爆弾はイャンクックの足下、顔面、翼で次々に起爆。爆炎に身を包む。
「グワァァァァァッ!?」
突如爆発を受けてイャンクックはその場でたたらを踏む。その間にクリュウはシビレ罠を持って駆け出す。
「クワァァァァァッ！」
後ろから怒声を上げ、続いて空気を吹き飛ばす音と共に滑空音。そしてすさまじい突風がクリュウを襲う。そのあまりの風圧にクリュウは動けなくなった。ゴーグルをしていなければ目も開けられないような突風だ。確認すると、イャンクックが前方に豪快に着地していた。
「クワァァァァァッ！」
イャンクックは振り向くと首を激しく上下させて突撃して来る。斜め後方に飛んでそれをやり過ごすと、腰の道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出して投げ付ける。
閃光玉が炸裂して悲鳴を上げて苦しむイャンクックから一度離れ、シビレ罠を地面に置いてピンを抜く。すぐに電撃が流れて設置を終えると、クリュウはドスバイトダガーを抜いた。見ると、その刃はボロボロになっていた。鉄をも斬り裂くドスランポスの爪を使った刃をここまで刃こぼれさせるとは、どんだけ硬い鱗や甲殻なのだろうか。
本当はこの間に追撃をしたかったが、慌てて携帯砥石を使って刃を磨く。磨き終えた時、まだイャンクックは目が見えていなかったが、それもわずかだ。クリュウは道具袋（ポーチ）から回復薬を取り出して一本飲み干す。そして再び向き直った時には、イャンクックの瞳は

しっかりと自分に向けられていた。
「クワァァァァァッ！」
イャンクックは天高く吼えると、火炎液を四方八方に撒き散らしながら突撃して来る。迫り来る巨体に、クリュウは一歩も引かずにその場に留まる。そして、
「クワァァァァァァッ!?」
悲鳴を上げて痙攣するイャンクック。その足下には電撃を流すシビレ罠が。
「うりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
クリュウは全力を込めた一撃をイャンクックの顔に叩き込む。巨大な嘴にいくつものヒビが入った。すかさず二撃、三撃と加え、ダメージを蓄積させる。嘴のヒビはさらに大きく、長く広がっていく。そして、
「せいやぁッ！」
最後に全力を込めて叩き付けた一撃に、イャンクックの巨大な嘴は砕けた。見るも無惨に破壊された嘴の奥から悲鳴が上がる。
仰け反るその巨体にさらに刃を叩き付ける。すさまじい攻撃の連続にイャンクックはたまらず翼を羽ばたかせる。すさまじい突風に動けずにいるクリュウから距離を取って着地したイャンクック。見ると、その大きく張られていた耳は閉じられている。あと少しという合図だ。
クリュウが一度後退して荷車に背を向けると、イャンクックはしばし睨み付けた後に反対方向を向いて足を引きずる。その行動に奴が逃げようとしていると理解したクリュウは慌てて荷車を引いて突っ走る。足を引きずっているせいか、その速度は遅い。だが、クリュウがあと少しで追いつけるってところで、イャンクックは残っている力を翼に込めて羽ばたいた。突風に動けなくなるクリュウだが、荷車から打ち上げタル爆弾を掴み取ると、上空に舞い上がるイャンクックを一瞥して地面に置いてピンを抜く。その間に次の爆弾を設置してピンを抜く。下部から火を噴いて真っ直ぐ上に昇って行く打ち上げタル爆弾。続いて第二派、第三派と飛び立ち、計三発の打ち上げたる爆

弾が飛び立ち、イャンクックの翼や腹、脚で起爆する。そのすさまじい爆撃に、イャンクックはたまらず落下する。慌てて残った落とし穴を掴んで横へ飛ぶと、イャンクックの巨体が荷車の上に落下した。その重量に荷車は粉々に砕ける。そして、置いてあった残った小タル爆弾一発、打ち上げタル爆弾二発がそのすさまじい衝撃に耐えかねて起爆した。爆発が再びイャンクックを包む。クリュウは一度距離を取った。

黒い煙の中から起き上がったイャンクックは、鱗や甲殻が吹き飛び、赤黒い肉を露（あらわ）にし、血がダラダラと流れ出している。その脚や耳、嘴にはクリュウの一撃一撃が傷や裂傷、粉砕という形で現れている。

イャンクックは再び羽ばたいて天に昇ろうとする。慌ててクリュウはポーチからペイントボールを取り出して投げ付ける。そしてそれは見事に命中し、匂いを辺りに撒く。イャンクックは今度こそ天高くまで昇って水平飛行して逃げ出した。

密林に再び静けさが戻る。

クリュウはため息と共にその場に倒れた。

肩が激しく動き、肺が精一杯空気を取り込もうと動き、心臓はもうはちきれんばかりに激しく動く。荒い息が、口からぜぇぜぇと音を立てる。

緊張感の連続であった戦いは一旦終了した。

初めての飛竜戦。剣を持っていた右腕も盾を持っていた左腕ももうガクガクだ。すさまじく硬い体に何度も剣を叩き込み、すさまじい衝撃を受けたりし、両腕は限界に達しようとしていた。

だが、まだ終わってはいない。戦いはまだ続くのだ。

クリュウは上半身だけを起こして道具袋（ポーチ）から回復薬を取り出す。そしてポーチの中で回復薬のビンが三個割れているのに気づいた。さっきの戦闘で衝撃を受けて割れたのだろう。残った回復薬を全部飲み干し、体力を回復させる。

立ち上がると、横に落ちていた落とし穴を腰に下げ、匂いを辿る。匂いの先はどうやら洞窟らしい。あそこには飛竜がよく巣にする天

井が開いた洞窟がある。きっとそこへ逃げ込んだのだろう。なら急がないといけない。フィーリアが言っていた飛竜の特徴、それはどんな傷でも寝てしまえば治ってしまうという反則的な治癒能力だ。時間を掛けすぎればこっちが不利になる。

クリュウは急いで行きたかったが、先程の戦闘ですっかり疲れていて、走る事は極力控えて歩いて向かう。

――いよいよイャンクックとの最終決戦だった。

洞窟に入る寸前、クリュウは前方にいる人影に驚く。

「フィーリアッ!?」

「クリュウ様！　ご無事だったんですね！」

そこにいたのは自分をかばって大タル爆弾で怪我したフィーリアだった。その明るく優しい笑顔にクリュウはなぜか懐かしさを感じてしまう。別れていたのは一時間ほどなのに。

「も、もう大丈夫なのッ!?」

クリュウがそう言うと、フィーリアは苦笑いして肩をすくめた。

「もしもの時の為にと常備していた秘薬を飲みましたから、もう大丈夫ですよ」

「秘薬!?」

それは回復薬やその上の回復薬グレートを上回る最強の回復用のアイテムの事だ。あまりにも貴重で手に入りづらい上に高価なのでクリュウはもちろん持っていないが、飲めば瀕死（ひんし）の怪我でも治ってしまうらしい。

「他にも回復薬や強走薬など持ってきた薬を片っ端から飲みましたから。おかげさまで口の中が大変ですよ」

苦笑いしてフィーリアはぺろりと舌を出す。そのかわいい仕草にクリュウは安堵する。

「良かったぁ……」

「クリュウ様は平気ですか？」

「うん。なんとかね」

本当はもうフラフラだが、ここはあえて空元気を出す。そんな彼を見てフィーリアは嬉しそうに微笑む。

「そうですか、動けるようになってペイントの匂いを辿って洞窟の前に到着し、そこでクリュウ様と合流。クリュウ様」
　フィーリアの瞳が確認するようにじっとクリュウを見詰める。その問いにクリュウは静かにうなずく。
「イャンクックはもうすぐ倒れる。耳を畳んでたからね」
「そうですか。では今頃は寝てるでしょうね」
「かもしれない」
　フィーリアはうなずくと背を向けて木の陰から何かを取り出した。それは一発の大タル爆弾だった。
「あれ？　何でもう一個あるの？」
「先程調合したんです。幸い、大タルは支給品でありましたし、爆薬は持って来てありましたから。本当は釣りミミズでカクサンデメキンを釣って大タル爆弾Gを作ろうと思ったんですけど、ペイントの匂いが流れてきたので諦めてここに来たんです」
　フィーリアはその細腕で気にした様子もなく大タル爆弾を担ぐ。クリュウはちょっぴり敗北感を味わった。
「では、これでイャンクックに素敵なモーニングコールをしてあげましょう」
「もう夕方だけどね」
　そう言って苦笑いするクリュウが改めて空を見ると、もう空はオレンジ色に変わっていた。はるか上空にある途切れ途切れの雲も、夕日の光を浴びてオレンジ色に光っている。まるで空全体が燃えているかのようだ。
「そうですね」
　くすくす笑うフィーリアに、クリュウにも自然と笑顔が浮かぶ。さっきまで死に物狂いで戦っていた事を忘れてしまうような、そんな安堵の時。
「では早くイャンクックを倒して、明日のお昼はエレナ様の手料理でも食べましょう」
「そうだね」
　二人は互いの瞳を見てうなずき合うと、洞窟に向かって歩き出し

た。
　中は日の光が入りにくく薄暗かった。夕方という事もありいつもの昼間よりもさらに暗くて気をつけないと躓きそうになる。そして吹き抜ける湿った風が二人の頬を撫でる。
　しばらく細い道の中で足を進めると、ようやく大きな広場に出た。だが、広場を見回して二人は慌てて岩陰に隠れた。
　広場の天井には大きな岩の切れ目があり、そこからは夕日の光が注ぎ込んで辺りを薄暗いオレンジ色に照らし上げていた。そして、その光に照らされて桃色に輝く巨体は、静かに鎮座していた。
　イャンクックは瞳を閉じて鼻提灯（はなちょうちん）までして眠っている。これにはひとまず安心だ。だが、そのまわりには三匹のランポスが動き回っている。こっちは厄介だ。
「どうしよう……」
　小さくつぶやくクリュウに、フィーリアは「大丈夫です」と言って大タル爆弾を置いてボウガンを構える。弾丸袋から貫通弾ＬＶ２を取り出して装填するとスコープで狙いを付けて引き金を引く。一番手前にいたランポスは頭を撃ち抜かれて倒れた。突然倒れた同胞に残った二匹のランポスは困惑しながら仲間の亡骸に近づく。そこへすぐさまフィーリアが狙いを付けて引き金を引く。撃ち出された貫通弾ＬＶ２は二匹のランポスの頭を同時に貫いた。たった一発で、二匹のランポスは悲鳴を上げる暇もなく地面に倒れた。
「さすがだね」
「そんな事ありませんよ」
　そう言って謙遜しているが、やはり彼女の実力はすばらしい限りだ。二匹同時に頭を貫くだなんて、神技に近い。
　フィーリアは再び眠っているイャンクックを窺うと、小声でクリュウに声掛ける。
「クリュウ様にお願いがあります」
「何？」
「この大タル爆弾を、イャンクックの首の付け根辺りに置いて来てくれませんか？」

「ぼ、僕がッ!?」
「シーッ！」
フィーリアが慌てて口の前に人差し指を立てて息を細く吹く。クリュウも慌てて口を閉じる。幸い、イャンクックは熟睡しているのか起きる気配はない。
「ぼ、僕がするの？」
改めて問うと、フィーリアはうなずく。
「小タル爆弾がないので私が狙撃して起爆させます。ですから、クリュウ様にはこの大タル爆弾を設置してほしいんです」
「で、でも……」
先程の落とし穴で落とした後に大タル爆弾を運んだ時の事を思い出して身震いする。あんな怖い思いをまたするというのか。
「大丈夫です。眠っているので大きな音さえ立てなければ普通に戦うよりずっと安心です」
「で、でも……」
答えを渋るクリュウに、フィーリアは小さくため息する。
「でしたら、私が設置して起爆させますが、それでよろしいんですか？」
「え？」
フィーリアは驚くクリュウに真剣な顔で向き合う。生暖かい風が彼女の金色の髪を揺らす。夕焼けに染められて柔らかく揺れる彼女の髪は、キラキラと輝いているように見える。だが、その表情はいつもの優しさは身を潜め、真剣だからこその怖さを持っていた。
「言っては何ですが。イャンクックは所詮一番下っ端の飛竜です。しかも《飛竜》と言いますが実際は本物の飛竜ではありません。鳥竜種です。これから先、イャンクックにも怖くて立ち向かえないなら、ハンターを続ける資格はありません。これは死に直結します。それでも嫌だと仰るなら仕方ありません。私が設置しましょう」
フィーリアの言葉に、クリュウは黙ってしまう。
確かにイャンクックは本物の飛竜ではないし、本物の飛竜――リオレウスとかリオレイアに比べたら同列に扱うだけ失礼なほどの雑魚

だ。だけど、クリュウにとっては十分脅威には違いない。
だが、このまま引き下がる訳にはいかない。故郷を守る為にも、そして父やフィーリアのような立派なハンターになる為にも、越えなくてはいけない壁がここにある。
クリュウはしばし考えた末に、答えを出した。
「わかった」
大タル爆弾に手を掛けたフィーリアに、クリュウは言った。振り返った彼女に向かって、クリュウは己が決意を言った。
「僕がやる」
フィーリアは「そうですか」と小さく微笑みながらうなずくと、大タル爆弾から手を離す。そして今度はクリュウがそれを掴む。
「いいですか。できれば腹部の下辺りがいいのですが、無理はしないでください。とにかくダメージを与えられるだけ近ければいいんです。設置してクリュウ様が安全地域まで離脱次第、私が起爆させます」
「わかった」
クリュウは大タル爆弾を持つと、フィーリアを一瞥して岩陰から歩み出る。音を立てないように、そっと近づく。一歩一歩が大タル爆弾の重みと心の重みでズシリズシリと重い。それに耐えながら、クリュウは一歩一歩と足を進める。
徐々に近づく眠るイャンクック。その鱗や甲殻、そして嘴などは見るも無惨に粉々に壊れていたが、出血はもうしていない。これも飛竜の桁外れの治癒能力がなせる業なのだろうか。
クリュウは迫るイャンクックを見上げる。やっぱり大きい。人間なんか一踏みで倒せるその巨体。それがさっきまで自分を敵として戦っていたと思うとぞっとする。
足を進めるクリュウはできるだけ近くに大タル爆弾を設置しようとさらに進み、イャンクックの懐に入り込む。そこには自分の剣を弾いた甲殻で覆われたイャンクックの腹が見える。そして、そっと大タル爆弾をイャンクックの足下に設置すると、そろりそろりと後退して離れる。十分距離を取ると、今度は反転して走って離脱する。その

時、岩陰に隠れていたフィーリアが出て来た。そして、イャンクックの足下を射撃できる位置に着くと、ボウガンのスコープを覗き込んで狙いを定め、引き金を引いた。
撃ち出された一発の弾丸は寸分の狂いなく正確に大タル爆弾を撃ち抜く。刹那、
ドガアアアアアアアアアンッ！
すさまじい大爆発が起き、クリュウは背後からの爆風に軽く吹き飛ばされる。すぐに起き上がってフィーリアと合流した時、
「クァ、クァ、クァ、クワアアアアアアアアアッ！」
立ち上る黒煙の中から桃色の巨体が現れた。大タル爆弾の直撃を腹の下から受けたイャンクックの脚は引きずられている。だが、その瞳はしっかりと二人の侵入者を見詰めて放さない。怒りの炎が燃えている。
フィーリアは畳まれたイャンクックの耳を確認し、すぐさま矢を散弾ＬＶ１を撃つ。炸裂した無数の弾丸が無残に壊れた嘴や耳などに命中し、血を吹き飛ばしながらさらに砕く。
「クワアアアアアアッ！」
イャンクックは悲鳴を上げてたたらを踏むと、火炎液を口から漏らして怒号を上げて首を激しく上下に振る。怒り状態になったのだ。
「クワアアアアアアアアアッ！」
イャンクックは火炎液を撒き散らしながら二人に向かって突撃して来る。二人はそれぞれ反対方向に飛んでそれをかわした。
胸から地面に突っ込んだイャンクックにフィーリアは連続して通常弾ＬＶ２を撃つ。その反対側からクリュウが飛び掛かった。
「うりゃあああぁぁぁッ！」
クリュウはドスバイトダガーをイャンクックの背中に突き刺す。その痛みに慌ててイャンクックが起き上がった。クリュウは背中に乗ったままだ。
「クリュウ様！」
フィーリアが驚きの声を上げるが、クリュウは慌てずに剣を連続して背中に突き刺す。鱗が飛び、イャンクックは悲鳴を上げてその場で

激しく体を動かして火炎液を撒き散らす。もう狙っているのではなく邪魔者を遠ざけたいというような気持ちが伝わるほどめちゃくちゃな攻撃だ。

クリュウには火炎液は当たらなかったが、めちゃくちゃに動き回るイャンクックから放り出された。いきなりの事で受け身も取れず、クリュウは地面に叩き付けられると一回転して倒れる。痛みに耐えながら起き上がると、イャンクックはフィーリアに襲い掛かっていた。だが、フィーリアは驚いたりもせずに冷静にそれを避けて道具袋（ポーチ）に手を伸ばす。

「閃光玉を使用しますッ！」

フィーリアはそう叫ぶと自分に向いたイャンクックに閃光玉を投げ付ける。クリュウもすぐに目を閉じた。刹那、視界を閉じていても感じるすさまじい光量と共にイャンクックの悲鳴が響く。再び目を開くと、視界を奪われてもがくイャンクックがいた。

「クリュウ様！　今です！」

フィーリアの声にクリュウは地面を蹴って突貫する。すぐにもがくイャンクックの脚下に潜り込み、ドスバイトダガーを抜き放つ。

「うりゃあああぁぁぁッ！」

横へなぎ払う全力の一閃に、イャンクックはバランスを崩して地響きと共に転倒した。起き上がれずにもがく桃色の巨体。だが、その動きはかなり鈍い。もう限界なのだろう。

クリュウはもがくイャンクックの前に立つと、剣を下に向けて両手で柄を握り、大きく振り上げる。

「これで、終わりだぁッ！」

クリュウは全力で剣を振り下ろした。その一撃はイャンクックの首を貫き、大量の血を舞い上げた。そして……

「ク……クワァ……アァァァァァ……」

小さな鳴き声と共に、イャンクックは動かなくなった。開かれた瞳には先程まであった燃え上がるような生命の輝きはない。

――イャンクックは、死んだのだ。

イャンクックを倒した。それはクリュウにとって万歳したくなる

ような嬉しい事だというのに、それよりも疲労の方がひどかった。
「クリュウ様！」
クリュウはその場でぐったりと倒れた。フィーリアが駆け寄ると、疲れ切った顔で荒い息をするクリュウだったが、その頬は小さく笑っていた。
「や、やったよぉ……」
「すごいですクリュウ様！　本当に倒されたんですね！」
「うん。疲れたぁ……」
クリュウは上半身だけ起こすと、倒れているイャンクックを見詰める。この大きな圧倒的な怪物を、自分達が倒したのだ。嬉しくて飛び回りたくなる――まぁ、そんな元気はないが。
「では素材を剥ぎ取りましょう！」
嬉しそうに早速剥ぎ取り用ナイフを構えるフィーリア。
「あ、ちょっと待って！」
「え？」
驚くフィーリアの手を止めさせると、クリュウは立ち上がってイャンクックの顔に近づくと、開かれた大きな瞳を閉じ、自らの目を閉じて両手を合わせる。そんな彼の行為にフィーリアは小さく微笑むと、自分も胸の前で手を合わせて瞳を閉じる。
激闘の末に倒れたイャンクックの冥福を祈ると、クリュウは小さく微笑む。
「さてと、剥ぎ取りするか」
クリュウは座り込むと剥ぎ取り用ナイフを構えて刃を入れる。だが、硬い鱗や甲殻が邪魔してなかなか刃が刺さらない。
「えっと、うんっと……」
苦戦するクリュウに、フィーリアがお手本を見せる。無理に鱗や甲殻を獲ろうとするのではなく、刃が入りやすい角度と向きを見極めて隙間に差し込んで引き剥がす。クリュウもそれをマネしてやる。最初こそは苦戦していたが、次第に慣れてどんどん剥ぎ取れるようになった。
「イャンクックの素材は防具に使いましょう」

「防具？」
「はい。ほら、ラミィ様が着けていたあの防具ですよ」
クリュウは砂漠で会った超わがままクック娘の格好を思い出す。ランポス装備より重厚な桃色の防具。あれがクックシリーズだ。
「目立つ色だよね」
第一感想がそれだった。確かにあの色は目立つ。イャンクックには失礼だが、もう少し環境に適応した色でもいいだろうに。
「そうですね。しかし防御力はランポスシリーズとは比べ物にならないほど強固ですし、見た目に比べて軽いので、今までとほぼ同じ動きができます。一人前のハンターが最初に着けるのが、クックシリーズなんです」
「フィーリアも着けてた時期があるの？」
「もちろんです。あれは私がまだかけだしだった頃、初めて倒した飛竜。私は一人で三日間掛けて倒しました」
三日も一人で戦ったというフィーリア。自分はたった一日だが、それはフィーリアがいたからこそだ。特にフィーリアは事前に下見などを十分する慎重なタイプなので、そのほとんどはきっと綿密な情報収集だったのだろう。そう思うと、実力の差を思い知らせれるような気がした。
「イャンクックは熟練ハンターはほとんど討伐しません。イャンクックの討伐は新米ハンターの役目というのが暗黙の了解でありますから。ですが、こうして再び戦ってみると懐かしいです。強く、たくましく、気高い。リオレウスなんかにも負けない飛竜です。まぁ、《彼女》に比べたら問題外ですが」
そう言って嬉しそうに微笑むフィーリア。彼女の言う《彼女》とはもちろんリオレイアの事だ。彼女のリオレイア好きはすごい。この前も「リオレイアってどんな奴なの？」と訊くと、目を輝かせて一日中リオレイアのすばらしさを語っていた。あれはある意味狩りなんかよりもずっと疲れた。
「このくらいでいいかな」
クリュウが十分素材を手に入れたと判断してナイフをしまおうと

すると、フィーリアが「まだまだですよ」とまだ素材が剥ぎ取れていない部分を指し示す。クリュウは「こんなに獲るの？」と訊くと「クックシリーズの為ですよ」とフィーリアは笑顔で言う。

それからフィーリアの許可が出るまで二人はずっと剥ぎ取っていた。そして許可が出たのは日もすっかり落ちて外が真っ暗になった頃だった。

第27話　戦いの軌跡

「クリュウ様は、初めてですよね」
「うん」
「なんだか、緊張しますね」
「そっかな？」
「えへへ、そんなに見詰めないでください。恥ずかしいですよぉ」
「ごめん。ねぇ、そんな事よりもう僕限界だよ」
「え？　で、ですが……」
「もうがまんできないよ。ねぇフィーリア。もういいでしょ？」
「うぅ……わ、わかりました。どうぞ……め、召し上がれ」
「いただきまぁす♪」

ここまでの会話に誤解を抱いた方にはすみませんが、決して変な事ではありません。

イャンクックを倒して素材を手に入れた二人は帰るのは明日なので今晩は拠点（ベースキャンプ）で夜を過ごす事にしてここまで戻って来た。そして、もう夕食時だったので近くにいたアプトノスを一匹狩り、フィーリアが持って来たドンドルマ製の高級肉焼きセットを使って夕食の準備をしていた所だ。

クリュウが喜んで頬張っているのはまだこんがり肉だ。その横で苦笑いするフィーリアは、本当はこんがり肉Gを作りたかったのだが、クリュウに押されて諦めたという所。ちなみに初めてとは狩り場で夜を越す事だ。

「うん。すごくおいしいや」
「そうですか。良かったです」

フィーリアは嬉しそうに微笑むと今度は自分の分を作る。その際、彼女は小さく歌を口ずさむ。それは新米ハンターが肉をおいしく焼くタイミングを掴む為に教わる《肉焼きの歌》だ。といっても、実際に歌いながら肉を焼く人は稀有だ。クリュウでさえ歌わないで肉を焼けるのに、熟練のハンターであるフィーリアが歌うなんて意外だった。

「えへへ、ウルトラ上手に焼けましたぁ」
恥ずかしそうに微笑むフィーリア。彼女の手には表面のパリパリ、中のジューシーさが最もすばらしい、こんがり肉Gが握られている。自分の持っているこんがり肉も美味だが、彼女の持つのに比べれば味は落ちる。
「食べますか？」
「ううん。いいよ」
遠慮するとクリュウはこんがり肉にかぶりつく。そんなクリュウに微笑を向けると、フィーリアは肉焼きセットに付いていた箱を取り出す。そこには塩やコショウといった調味料が入っている。そしてそんな中には狩り場ではほとんど無縁なナイフとフォークが入っている。フィーリアはそれを取り出すと別の箱からお皿を取り出して切り分け始めた。
目の前の光景に、クリュウは驚く。
「え？　ハンターってそんな上品に食べるの？」
「いえ、上品だなんてそんなぁ。私がこういう食べ方をしているだけですから」
そう言って恥ずかしそうに笑うフィーリア。初めて会った時こんがり肉をガツガツと食べていたのは、それほどお腹が空いていたからなのだろう。
フィーリアは切り分けたこんがり肉Gを「どうぞ」と言ってクリュウに差し出す。皿の上にはパリパリな皮にジューシーな肉汁を輝かせるこんがり肉Gが、きれいにスライスされて載っていた。いつ入れたのか、脇にはトウガラシと特産キノコで作った特産キノコキムチが盛られている。狩り場の食事にしては結構豪華だ。クリュウはこんがり肉を置くと横にあったビンの中に入った飲み物を飲む。元気ドリンコと言われる、ギルド公認のスタミナ飲料だ。これを飲むだけで今日の疲れも幾分か楽になる。
口を潤すと、クリュウはスライスされた肉を手で掴んで食べる。隣にいるフィーリアがナイフとフォークを使い、小さく切って口に運んでいるのを見るとかなり下品だが、これが普通のハンターの狩り場で

の食べ方だ。
口に入れると、まずパリッという皮のうまさと、肉汁溢れるジューシーな肉が口の中で溶けていく。
「すごいやぁ。本当においしい」
「クリュウ様に喜んでいただき、私も嬉しいです」
フィーリアはそう言って微笑むと、小さく切ったこんがり肉Gを口に入れる。
二人はそのまま今日の狩りの事などを話した。特にクリュウが一人でイャンクックを相手にしていた時の事を話すと、フィーリアは顔を真っ青にして驚き、荷車にイャンクックが落ちて爆弾が爆発した事を話したら軽いめまいを起こした。
お腹一杯食べると、フィーリアは進んで後片付けをした。手伝うと言ったクリュウに「クリュウ様は休んでてください」と言って一人で拠点（ベースキャンプ）の奥にある小さな滝と池に向かった。途中で大きく右へ曲がるので、ここからではその滝は見る事はできない。
クリュウは特にする事もなくぼーっとしていた。
考えるのは今日の狩りだ。人間よりもずっと巨大で圧倒的な強さを持つイャンクックと死闘を繰り広げたと思い出すだけで、体が小刻みに震える。今思えば自分でも驚くくらい戦ったのだ。
これから先、自分はこれ以上のモンスターを相手にするのだろうか。そう思うと、ため息が漏れてしまう。
だけど、フィーリアと一緒ならどんなモンスターも倒せる。そんな気がした。もちろん彼女がリオレイアですら一対一で倒せる強力なハンターだからというのではなく、フィーリアがいてくれれば自分はがんばって戦えるのだ。
彼女の笑顔が、自分の心を奮い立たせてくれる。
そんな事をしばらく思っていたが、ふとフィーリアの帰りが遅いのに気づいた。皿などを洗うにしてはあまりにも長過ぎる。
「おかしいな」
ここからは滝の様子は見えない。
一応ここは狩り場だ。いくら拠点（ベースキャンプ）といえ、絶対

安全という事はない。もしかしたら……
クリュウは腰に下げていたドスバイトダガーを構えて滝に向かった。
曲がり角で顔を出して先を見詰めるが、暗闇のせいでよく見えない。耳には滝の音が聞こえる。ゆっくりと進むと、上を包んでいた木の枝がなくなり、月明かりが注ぎ込んだ。
――そして、見た。
月明かりに照らされる池の中心で、生まれたままの姿をしたフィーリアが水浴びをしていた。腰まで伸びた金色の髪が月に照らされ、キラキラと幻想的に輝く。
まるで月の女神だ。そう思った。
あまりにも突然の出来事な上、そのあまりに美しさに見とれてしまうクリュウ。すると、フィーリアが振り返った。
そして――目が合う。
「え……」
「あう……」
お互いどうすればいいか混乱する一瞬。そして、
「きゃあああああああぁぁぁぁぁッ！」
フィーリアは顔を真っ赤にさせて慌てて水の中に体を沈めた。一方のクリュウも顔を真っ赤にして大慌てで背を向ける。
「ごめん！　本当にごめん！」
「い、いえッ！　ご、ご自由にどうぞ（？）ッ！」
「と、とにかくごめんよぉッ！」
「あ……」
クリュウは全速力で去った。途中木の根か何かに躓いたのか豪快に転んだが、すぐに起き上がって角を曲がって消えた。
残されたフィーリアは真っ赤な顔のまま後ろを振り返る。すると、そこにはさっきまでいた彼の姿はなかった。
フィーリアは安堵したようにため息するが、すぐに唇を尖らせる。
「もう少し、見てくれても良かったですのに……」
フィーリアは別の意味でため息すると池から上がり、岩の上に脱い

であったインナーとレイアシリーズを着ると、パタパタをクリュウを追いかけた。
戻ると、クリュウは剣の手入れをしていた。
「あ、あの、クリュウ様……？」
「え？　あ、戻ったんだ」
振り返ったクリュウは、濡れた体で防具を着たフィーリアを見て、先程の衝撃映像がフラッシュバック。慌てて再び視線を剣に戻す。
そんな彼の仕草に、フィーリアも恥ずかしくなって頬を赤らめる。
「あ、あの……見られましたよね？」
「な、何を？」
「その……わ、私の……裸を……」
最後の方はもう小さく萎（しぼ）んでいく。しかしクリュウはそれをはっきりと聞き取った。本当は聞こえなかったふりをしたかったが、聞こえてしまっては答えない訳にはいかない。頬を赤らめながら
「う、うん……」とこちらも消えそうな声で返す。
「そ、そうですか……」
「う、うん……ごめん……」
「いえッ！　そんな！　クリュウ様が謝る事ないですよぉッ！」
フィーリアは手をブンブンと振ると、再び恥ずかしそうに頬を赤らめてうつむいてしまう。
「そ、その……どうでしたか？」
「ど、どうって？」
「そ、それはその……もうッ！　女の子にこんな恥ずかしい事言わせないでくださいよぉッ！」
フィーリアは突如そう叫ぶと、プンプンと怒ったようにクリュウに背を向けて天幕（テント）の中に入ってしまった。
一人残されたクリュウはどうしたもんかと枝の間から見える月を見上げ、小さくため息した。
イャンクックとの激闘もあり、すっかり疲れ切った二人は早めに休む事になった。だが、ここでひとつ問題が起きた。
「いいからフィーリアがベッドを使ってよ！　僕は地面でも平気だか

ら！」
「そんな事できませんよ！　クリュウ様がベッドを使ってください！　私が地面に寝ます！」
「女の子を地面に寝かせられないよ！」
「クリュウ様を差し置いてそんな事できませんよ！」
ギャーギャーを言い合うクリュウとフィーリア。二人が揉めている理由はベッドの領有権。どちらが床で寝るかを言い争っているのだ。普通はベッドの取り合いになるのだが、地面を取り合うとは基本的に謙虚な性格をした二人らしい。
それからギャーギャー言い合う事三〇分。お互いがぜぇぜぇと荒い息をする中、フィーリアが「妥協案を提示します……」と疲れ切った声で言った。
「な、何……？」
こちらも疲れ切った声。もうどんな妥協案でも呑もうというくらい疲れている。
妥協案を提示しようとするフィーリア。だが、なぜかその頬は赤い。一体どうしたのだろうと思っていると、彼女の薄桃色の唇が動いた。
「そ、その……二人一緒に……ベッドを使う……というのは……ダメでしょうか……？」
「ダメに決まってるでしょッ!?」
クリュウの妥協防衛線の防御能力を遥かに越えるフィーリアの驚愕の妥協案に、クリュウはすかさず反撃する。
「い、一緒にってこのベッドで!?　僕とフィーリアで!?」
「は、はい」
「何でそうなるんだよッ！」
クリュウは疲れと混乱で暴走しそうだった。一方のフィーリアも恥ずかし過ぎて気絶寸前といった感じだ。
「もういい！　僕は寝る！」
そう叫んでクリュウは天幕（テント）の中の隅で横になる。慌ててフィーリアが「ベッドで寝てください！」と叫ぶが、クリュウは無視

して瞳を閉じた。
いくら言ってもテコでも動こうとしないクリュウにさすがのフィーリアも根負けし、妥協案として自分も地面で寝た。場所は反対側とかベッドの横とか色々あったはずだが、彼女はあえてクリュウと少ししか離れていない場所に並んで寝た。
フィーリアはクリュウに見えないように小さく微笑むと、嬉しそうに眠りについた。
こうして長かった一日はようやく終わりを迎えたのだった。
翌朝、迎えの船に乗って二人はイージス村に戻った。
船着場に着いた二人が荷物を降ろしていると「クリュウウウウウウウウウウウッ！」という声が響いた。振り返ると、土煙を上げながら走って来るエレナが。
「え、エレナ？」
「こんのバカあああぁぁぁッ！」
「ぶッ!?」
丘の上から駆け下りて来たエレナはクリュウに回避させる暇を与えず突撃の勢いを殺さずに渾身の飛び蹴りをクリュウに叩き込んだ。
突然の一撃必殺にクリュウは回避も防御もできずに直撃。無様に吹き飛ばされて地面に倒れた。横ではフィーリアがあわあわと慌てている。
「い、いきなり何するんだよッ！」
体を起こすと同時に怒鳴ると、目の前にはエレナが仁王立ちして自分を見下ろしていた。
怒るクリュウに対し、エレナは不機嫌そうな表情を浮かべてクリュウを見詰める。だが、
「……おかえり」
ムスッとした顔で言うエレナ。その言葉と今の彼女の暴力との関連性が全くわからず、クリュウは困惑するばかり。
「怪我はなかったの？」
「今エレナの蹴りで腰を強打した」
「それ以外で」

「特にはないけど……」
クリュウは首を傾げながら答えると、エレナは「あっそう」と簡単に返した。一体何なのだろうか。
エレナはクリュウに背を向けると、彼からは見えない位置で小さく微笑んだ。
「良かったぁ……」
「うん？　何か言った？」
「い、言ってないわよバカぁッ！」
「ごふッ!?」
エレナは顔を真っ赤にさせてそう怒鳴ると、無防備だったクリュウの腹に全力の蹴りを打ち込んだ。その威力はイャンクックにも負けないほど強力で、クリュウは悶絶する。フィーリアは七転八倒するクリュウに慌てて駆け寄った。
そんな騒がしい船着場にはいつの間にか多くの村人が集まっていた。その中には村長の姿もある。
「クリュウくん！　フィーリアちゃん！　無事だったんだねぇッ！」
村長は顔に満面の笑みを浮かべて二人の帰りを喜んだ。そんな彼にようやく痛みが治まったクリュウが荷物の中から怪鳥（イャンクック）の鱗を一枚取り出して渡す。
「これがイャンクックを倒した証拠です。本当ですよ？」
念押しするのは、他の飛竜と違って怪鳥の鱗はたまに狩り場にあるモンスターのフンの中から手に入ったりするからだ。だが、そんな不安は無用だった。
「うん。さっき別の村からセレス密林にいたイャンクックが討伐されたって情報が流れて来たから、信じるよ。それにクリュウくんはうそはつけないからね」
村長は人懐っこい笑みを浮かべる。その笑顔を見て、やっと村に帰って来たんだぁと実感する。
「さぁ、疲れただろぉ？　今日は夜までゆっくり休んでくれ。夕食は僕主催の《クリュウくん初めての飛竜討伐おめでとうパーティー》をするから、ぜひ参加してくれ！　というか二人は強制参加！　無視し

たら二人の人形を置いて僕らで勝手に祝う！」
まるで村に帰って来た時のような勢いだ。この村長、人を集めるのは優しさだけでなくその異常なほどの行動力もあるだろう。
どうせ断れないのだ。クリュウは苦笑いしてうなずいた。そんな彼女の横ではエレナも苦笑いしている。そして、フィーリアは嬉しそうに微笑んでいた。
「さぁ！　準備を再開するぞぉッ！」
すでに準備をしていたところがまたすごい。村長達は意気揚々と村へと戻って行く。その後をクリュウとエレナが何事かを話しながら続いた。そしてフィーリアは一人離れて歩く。
先程の優しげな笑みは消え、その美しく整った顔には、なぜかどこか悲しみがあった。
フィーリアの心の中を、ある想いが流れる。
クリュウはイャンクックを倒した。ハンターとして、イャンクックを倒せれば一応一人前である。いくら自分が協力したとはいえ、そのほとんどは彼が戦い、自分は後方支援と作戦立案ぐらいだ。
もう彼は、立派なハンターになった。
もう自分が教える事は何もない。
「そろそろ、潮時なのかな……」
フィーリアはそう悲しげにつぶやくと、笑顔で話しているクリュウとエレナを見詰める。
この村に、自分の居場所はないのだ。
自分なんかに助けを求める人は大勢いる。そんな彼らを、いつまでも見捨てる訳にはいかない。
困っている人を助けたい。それが自分のハンター道なのだから。
フィーリアの胸に、ある決意が刻まれた。
村と――クリュウと別れよう、と……

第28話　絶交

クリュウが初めてイャンクックを倒してから、二週間が過ぎた。
その後、クリュウとフィーリアはリフェル森丘に現れたイャンクックも討伐。森丘という事もあり視界は十分確保でき、何よりクリュウの腕が上達していた事もあって罠や爆弾を駆使してクリュウはほとんど一人で討伐した。
そして、十分なイャンクックの素材を確保したクリュウは……
「えへへ、やっぱり目立つね」
「そうですね。でもかっこいいですよ」
「そ、そっかな？」
「せやせや。クリュウくんかっこええでぇ」
アシュアの工房の前で照れるクリュウを、フィーリアとアシュアが絶賛する。
今クリュウが着ているのはイャンクックの素材を惜しみなく使って作られたクックシリーズ。胴（クックメイル）、腕（クックアーム）、腰（クックフォールド）、脚（クックグリーヴ）という桃色の怪鳥の鱗や甲殻、翼膜を使った防具だ。その性能はランポスシリーズとは比べものにならないほど高い。ちょっとトゲが多いのと目立つ色というのが難点だったりするが、それを差し引いても今までよりはずっといい。
「でもほんまにええんか？　頭（クックヘルム）はいらへんの？」
「はい。これで十分です」
「せやけどなぁ……」
アシュアの言葉に、クリュウは笑顔を向ける。そんな彼の頭には新調したクックシリーズと違って何も付けていない。二度目のクック戦でバトルキャップは壊れてしまったのだ。なので、今彼は何も付けていない。
「クックヘルムは視界を遮らないでぇ？」
「でも、僕はこっちの方がいいんです」
「まぁ、クリュウくんがええならうちがこれ以上言う事じゃないやろ

うけどぉ」
　アシュアは少し不満そうだ。鍛冶師として、友人として、彼にはより安全な防具を揃えてほしいのだが、クリュウは一貫して首を縦には振らなかった。
「やっぱり、あんまり頭は好きじゃないんです」
「クリュウくんらしいなぁ。まぁ、あんたがええならうちはもう何も言わへんでぇ」
　アシュアはそう言って諦めたように肩をすかしてニコニコと微笑んだ。
　二人はアシュアに別れを告げて家に戻る。
「クリュウ様、とても似合ってますよ」
「ありがとう」
　その途中、フィーリアは何度も彼の装備をほめた。クリュウも嬉しそうに笑顔を浮かべ、自らの新しい装備を見詰める。
　だが、フィーリアの瞳には喜びと同時に小さな悲しみがあった。クリュウは、それに気づいてあげる事はできなかった。
「えへへ、今から密林に狩りに行かない？　この防具を試してみたい」
　そう言って握ったのはドスバイトダガー改。ついでにドスバイトダガーも強化したのだ。見た目はあまり変わっていないが、その性能はさらに上がっている。
「そうですね。ではクリュウ様のクックシリーズ初デビューですね。ちょうどコンガの討伐依頼が来てますし」
　コンガとはゴリラ型のモンスターで、桃色の体毛に覆われているモンスターだ。クリュウ達がランポスを掃討していたら、いつの間にか他の場所からテリトリーを拡大して最近はセレス密林にも現れるようになった。隙の多い攻撃ばかりだが、そのどれもが木だってへし折る一撃なので油断ならない。特に放屁攻撃は厄介極まりない。これは臭い上に気分が悪くなる。これを受けると回復薬や肉などは全て臭いが消えるまで使用できなくなってしまう。消臭玉という臭いを取る専用道具があれば問題ないが、なかったら臭いがなくなるまでは激しい行動はできなくなる。ランポスよりも厄介な相手だ。しかも

ランポスのボスがドスランポスなら、コンガのボスにはババコンガという大型モンスターが存在する。イャンクック並みの大きさで、世間一般的にはイャンクックよりも強いらしい。今のところセレス密林での目撃情報はないが、いつやって来てもおかしくはない。
「コンガかぁ……新しい防具に放屁は喰らいたくないなぁ」
「ではやめますか？　他には特産キノコを採ってほしいという村長の依頼がありますけど」
「結局密林に行けばコンガがいるんだ。どうせならそっちを討伐しよう。ついでに特産キノコも採取すれば問題ないでしょ」
「そうですね。では酒場へ行きましょう」
「うん」
　クリュウは嬉しそうにクック装備やドスバイトダガー改をいじる。そんな彼を見てフィーリアは微笑む。悲しみが混ざったその笑みを、彼は気づかない……
　それから一週間後の事だった。レディーナ砂漠からガレオス討伐依頼を終えて村に戻って酒場で一休みしていたクリュウとフィーリア。その時、フィーリアが衝撃の事実を告げた。
「む、村を出て行くッ!?」
　突然告げられたその言葉に、クリュウは大好物のハチミツ入りのミルクの入ったジョッキを落としそうになった。
「はい。残念ですが……私に直々に依頼が来たんです」
　そう言って彼女が見せてくれた依頼書には、宛名がフィーリアになっている。内容は知らない丘陵地帯に現れたリオレイアの討伐依頼だった。
「り、リオレイアって……大丈夫なの？」
　リオレイアとは《陸の女王》と呼ばれるリオレウスと対を成す上級飛竜だ。彼女はそれを何度も狩ってきたらしいが、それでも危険に変わりはない。
「大丈夫ですよ。今回は依頼された街にいるハンターと合同で狩るのですから」
「そ、そっかぁ……」

クリュウは安堵する。一人より多人数の方がいいのは当然だ。まぁ、世の中には例外というものもあるのだが、ひとまずは安心だ。
「だから村を出て行くって言ったのかぁ。はぁ……驚いた。僕はてっきりフィーリアがこの村を出てまた旅でもするのかと思ったよ」
「そのつもりです」
笑い飛ばそうとしたクリュウは、フィーリアの返答に笑顔が消えた。
「ど、どういう事？」
頭ではもうわかっている事なのに、認めたくないからか脳が理解するのを拒んでいる。だが、フィーリアの返事は変わらなかった。
「言葉どおりです。私は再び旅に出ようと決めました」
「う、うそでしょ……？」
「本当です」
クリュウは浮いていた腰を力なく椅子に戻した。がっくりとうな垂れ、フィーリアの言葉を頭で反芻（はんすう）する。
フィーリアと別れる。それはクリュウにとっては苦痛以外のなにものでもなかった。
今までずっと自分は彼女と一緒に狩りをしてきた。それをいきなり破棄するなんて、そんな事したくないし、できるはずもなかった。
でも、彼女は出て行く気だった。自分を置いて、行ってしまおうとしている。
落ち込むクリュウに、フィーリアは諭すように言葉を繋げる。
「クリュウ様はもうイャンクックを討伐したんです。ですから、もう一人前のハンターになりました。ですので、私が教える事はもう何もありません。私に与えられた講師の依頼は、完遂されました。ですので、私はもうこの村にいる理由はありません。だから出て行こうと決めたのです」
フィーリアはそう言って胸の前に手を当てると、目をつむる。思い出すのは今まで助けた人々の笑顔。それを忘れる事は、できなかった。
「私に助けを求めている人がいるんです。だから、助けに行きます。

今まで休業していた流浪ハンターを、再開する時が来たんです。いつまでもこの村に腰を据えている訳にはいきませんから」
　そう言うフィーリアも悲しそうだ。本当はこの村にずっといたい。クリュウと狩りに出たい。でも、自分に助けを求めている人がいる。その人達を助けたい。誰かを助ける為にハンターになった彼女にとって、それを無視する事はできなかった。
「ですので、明日にでも村を出ようと考えています。クリュウ様には申し訳ありませんが、私は明日出発します。そしたら、これからはお一人でがんばってください。私はいつも応援してますから」
　そう言ってフィーリアは微笑むと、うつむくクリュウの肩に触れた。だが、
「触らないでッ！」
　悲鳴に近いすさまじい声と同時に手を弾かれた。キッと睨む彼に、フィーリアはビクリと震えて驚愕する。
「く、クリュウ様……？」
「どうしても、出て行くつもりなの？」
　顔を上げたクリュウは、すがるようにフィーリアに問う。そんな彼にフィーリアは一瞬迷ったが、返す言葉は変わらず、彼にとっては残酷なものであった。
「はい。ここには長く居過ぎました。これ以上居ては、私の決心が鈍ります。決起するなら今しかないんです」
「そんなぁ……」
「クリュウ様は立派になられました。もう私の助けなんていらないでしょう」
「そんな事ないよッ！　フィーリアがいてくれるだけで僕は十分心強いもの！　お願いだよフィーリア！　ここにいてよ！　ずっと一緒にいようよ！」
　クリュウの言葉に、フィーリアは思わずうなずきかける。だが、首を振ってそれを制す。これ以上はダメなのだ。自分は、止まってはいけない存在なのだから。
「ダメなんです。これは、私の決めた道ですから」

「で、でも――」
「クリュウくん。あんまりフィーリアちゃんを追い詰めないでくれ」
その声に振り返ると、村長が立っていた。その表情は寂しげに揺れている。その横には同じような顔をしたエレナが立っていた。
「クリュウ。フィーリアは無理してこの村にいてくれたのよ？　あんたはもう一応一人でもやっていけるんだから、これ以上フィーリアに心配をかけないでよ」
「だ、だって……！」
「いい加減にしなさい！　フィーリアにはフィーリアの道があるのよ！　あんたにそれを壊す権利なんてないのよ！」
エレナの強い物言いに、クリュウは黙ってうつむいてしまう。
「え、エレナ様、言い過ぎですよ」
「フィーリアもいつまでもクリュウを甘やかしちゃダメよ！　これはあなたの問題なんだから！」
「す、すみません……」
「コラコラ。フィーリアちゃんが困ってるだろ。そこら辺にしておきなさい」
村長が間に入って、エレナは「むぅ……」と小さく唸ると押し黙る。そんな彼女を一瞥し、村長はフィーリアに笑顔を向ける。
「用意は整っているよ。明日にはドンドルマへ船を出すから」
「お世話を掛けてすみません」
フィーリアと村長の会話に今まで黙っていたクリュウは驚いて声を上げる。
「ちょっと待って！　村長はフィーリアが村を出て行く事を知ってたんですか!?」
「え？　うん……え？　クリュウくんは聞いてなかったの？」
「聞いてませんよ！　今フィーリアから告げられたばかりですよ!?」
クリュウと村長、エレナは驚いた顔でフィーリアを見る。すると、フィーリアはうつむいて小さくなり「す、すみません……」と小さく謝った。
「そ、その、なかなか言い出せなくて……ごめんなさい」

「おいおい、明日には出発なんだろう？　クリュウくんに心の整理をさせる暇がないじゃないか。僕らは一週間ぐらい前に告げられたのに」
「そんなに前に!?　エレナも知ってたの!?」
「う、うん。てっきりクリュウにも話してるんだと思って……だから、あんたが落ち込まないようにその話はずっとしてなかったんだけど、本当に何も知らなかったの？」
「うん。今彼女からいきなり聞いた」
「そう……フィーリア、これはあんまりだよ？」
「す、すみません……」
「まぁ、気持ちはわからなくはないけど……」
　別れを告げるなんて、誰もがしたくない事だ。でもだからといって告げずに別れるのはもっとひどい事だ。彼女はそんな想いの中をずっとさまよい、今やっとそれを口にしたのだ。
「……まぁ、そういう事だ。急でクリュウくんには悪いけど……フィーリアちゃんは明日このイージス村を出る。これからクリュウくん一人でこの村を守ってくれ」
　それはハンターとなってこの村に戻って来た時に戻れという事だ。正確にはあの頃よりはずっと腕は上がった。だが、一人に戻るのには変わりない。
　今までずっと、フィーリアと一緒だったのに、それをいきなりなしにするなんて、そんな事できる訳がない。
「で、でも僕はまだフィーリアに教わりたい事が――」
「私は本来人に何かを教えるという人間ではありません。私が責任を持って教えられるのはここまでなんです」
「で、でも……ッ！」
「クリュウ、諦めなさい」
　なんとか言葉を繋げようとするクリュウの肩を、エレナがそっと叩く。その肩は小刻みに震えていた。
　彼の気持ちは痛いほどわかる。自分だって、フィーリアにはずっとここにいてもらいたい。だけど、それは彼女の志を曲げさせる事にな

る。
本当に彼女の事を想っているなら、彼女の誇りを傷つける事だけは、してはならないのだ。
「本当にフィーリアの事を想ってるなら、笑顔で彼女を見送ろ。ね？」
エレナはうつむくクリュウに優しく言った。そんな二人を見詰め、村長は小さくうなずくとフィーリアに向き直る。
「フィーリアちゃん。今日はみんなで最後の夜を過ごそうじゃないか」
「はい。お願いします」
「オッケー！　じゃあ村人総出で豪華なパーティーを開かないとね！」
何だかんだ言ってこの村は祝い事が多い。これも村長の優しい性格がそのまま村に表れているからだろうか。
「クリュウ様もぜひご参加してくださいね」
フィーリアは満面の柔らかな笑みを浮かべてクリュウに手を伸ばす。が、
パンッ！
鋭い音と共にフィーリアの手は弾かれた。驚く皆の前で、クリュウは彼女の手を弾いた右手を下ろすと、キッとフィーリアを睨む。その緑色の瞳の縁には溢れんばかりの涙が浮かんでいた。そんな彼の姿に、フィーリアは言葉を失う。
「く、クリュウさま……？」
「……らいだ」
「え？」
クリュウは小さく言った言葉を、今度は溢れんばかりの感情を込めて叫んだ。
「フィーリアなんて、大嫌いだッ！」
そう叫び捨てると、クリュウは踵を返して酒場を出て行ってしまった。その後をエレナが慌てて追い掛ける。
残されたフィーリアは呆然と、小さくなっていく彼の背中を見詰める。

嫌われてしまった……
それはそうだろう。ずっと内緒にしていたのに、彼以外の人には言っていたのだから。それではまるで、彼を裏切っているようにしか見えない。
誰だって別れは辛い。それは自分も彼も同じはずなのに、わかっていたのに、自分のせいで彼を傷つけてしまった。
嫌われて、当然なのだ。
「うっ……うぅっ……」
勝手に涙が溢れてくる。
自分が悪いのに、勝手に涙が出てくる。泣くなんて、卑怯ではないか。
すすり泣くフィーリアに、村長はそっとハンカチを渡した。彼の好意に甘え、フィーリアはそのハンカチを受け取って目頭に当てる。
こんな別れは、嫌だったのに……
その夜、フィーリアの送別会が大規模に行われた。村人達はフィーリアの旅立ちを悲しみ、そして祝った。
――だが、その中にはフィーリアが最も会いたかった彼の姿はどこにもなかった。
翌朝、いよいよフィーリアの旅立ちの時が来た。
切り立った崖の下にある船着場には多くの村人が集まっていた。皆彼女を見送りに来たのだ――だがやっぱりそこにクリュウの姿はなかった。
「あ、あの、クリュウ様は……？」
準備を整えたフィーリアは恐る恐るエレナに問うが、彼女は首を横に振った。
「ダメよ。声を掛けたけどあいつ、ドアにカギを掛けて全く出て来ようとしないのよ」
「そうですか……」
やっぱり、彼は自分を許してはくれないだろう。
最後に彼の笑顔が見たかったのに、それは全部自分のせいで潰えてしまった。そう思うと自然と視線が下がりうつむいてしまう。

そんな落ち込む彼女に、村長は明るく振舞う。
「仕方ないさ。フィーリアちゃんには悪いけど、僕らだけの見送りだ」
「いえそんな、皆様に見送られるだけでも嬉しい限りです」
村長の言葉にフィーリアは慌てた様子で手を胸の前でブンブンと振る。が、すぐにしょんぼりと落ち込んでしまう。
「でも、最後に……クリュウ様に会いたかったです……」
「あのバカに伝えておく」
エレナの言葉に、フィーリアは小さく微笑むと、船に乗り込んだ。甲板の上で、フィーリアは皆に手を振って集まってくれた今までお世話になった村人達の別れの言葉を叫ぶ。
「今までお世話になりましたぁ！」
「おうよ！　またな！」
「ありがとうございました！」
「ありがとう！」
「元気でなぁ！」
村人達も大声で彼女にお別れや感謝の言葉を向けると、手を振って彼女を見送る。
船は出港し、互いの距離がどんどん開いていく。だが、どちらもその姿が消えるまでずっと手を振り続けた……
海の向こうへ小さくなっていく船を、クリュウは崖の上から見詰めていた。
これから先、自分は一人で戦わなければならない。そして、フィーリアはもういないのだ。
不安と、悲しみが胸を押し潰す。
うつむくクリュウの頬を、涙が流れた。
「さよなら……」
小さく搾り出すように放たれたその言葉は、海風の中に儚く溶けていった……

第２９話　もう君の笑顔は見えなくて

フィーリアがイージス村を出てから二週間が過ぎた。
彼女が消えた悲しみはもうほとんど表には出なくなり、皆いつもと変わらない日々を暮らしていた。
今日もまた平和な一日が流れる。
風に揺れる木々の詩が、イージス村を包む。
いつもと変わらない日々。
――だがたった一人、フィーリアがいなくなった事で変わってしまった者がいた……
「ただいま……」
「クリュウ!?」
酒場で新しく入ったワインなどを棚に並べていたエレナは酒場に入って来たクリュウの姿を見て驚いた。
クリュウは桃色のクック装備を泥だらけにし、無数のかすり傷や打撲などをしていた。幸い大怪我ではないが、怪我をしていたのだ。
「だ、大丈夫!?」
エレナはカウンターの下に常備してある救急箱を取り出して彼に駆け寄る。クリュウはその間に空いている椅子に座った。
「見せて」
エレナはクリュウの防具を脱がすと、体中に残る傷に薬を塗り、絆創膏（ばんそうこう）や包帯、湿布などを貼る。終わった時には包帯などが巻かれ、クリュウは明らかに怪我人という格好になっていた。
「ごめん……」
クリュウは申し訳なさそうに頭を下げた。だがそれは単に怪我を看てもらった事だけに対するものではなかった。
落ち込むクリュウを見てエレナはカウンターから依頼書などの束を取り出すと、ため息混じりにここ最近口にする言葉を言った。
「また、失敗したのね？」
「うん……」
クリュウは力なく答えた。

エレナはため息すると彼が受けた依頼書にバツ印を入れる。最近はこの作業ばっかりだ。
「でもあんたこの二週間ずっと依頼を失敗してるじゃない」
彼女が開いた本には彼の依頼記録が載っている。ここ最近、二週間の間に彼が受けた依頼は十件。だがどれもが失敗に終わっていた。しかもそのどれもがランポスの狩猟やランゴスタの掃討など簡単なものばかり。一件だけ入っていたドスランポスの討伐も失敗に終わっている。今の彼の実力なら決して失敗するようなレベルではないのに、クリュウは立て続けで失敗していた。
エレナは落ち込む彼にそれ以上の追求はしなかった。
彼だって失敗したくて失敗しているのではないとわかっているからだ。
エレナは無言で彼の好きなハチミツ入りミルクを彼の前に置く。
「ありがとう……」
クリュウは小さく礼を言うと、ミルクを飲む。
「それは私のおごりだから、気にしないでね」
エレナはそれ以上何も言わず、再びカウンターに戻ってワインを整える。
酒場にはクリュウとエレナの二人だけしかいない。不気味な静けさが酒場を包んだ。
「ダメなんだ……」
長い沈黙を破って声を出したクリュウの言葉がそれだった。
「ダメって、何が？」
エレナは手を止めてクリュウの話に耳を傾ける。見ると、いつも明るいクリュウの表情が暗く、落ち込んでいた。そんな彼を、ここ二週間ずっと見ている。
「誰かが一緒じゃないと、僕は何もできない」
「またぁ、いつまでも甘えてるんじゃないよ。あんたはやればできる奴なんだから、もっとがんばりなさいよ」
エレナはそんな彼の言葉を否定し、彼を励まそうとするが、クリュウは小さく首を横に振る。

「そうじゃないんだ。ただ――背中が怖いんだ……」
「背中が、怖い？」
どういう意味かわからずエレナが首を傾げると、クリュウはミルクを一口飲む。
「僕は今まで、背中をフィーリアに任せて安心して前を見て戦って来た。でも、フィーリアがいなくなって、僕の背中はがら空きになった。今日も、その前も、その前もその前も、いつも後ろからの攻撃が避けられずにボコボコにされて失敗してきたんだ」
背中を任せて戦って来た彼にとって、それを任せるべき相手のいない戦いは過酷以外何ものでもないのだろう。ハンターじゃないエレナにも、そんな彼の気持ちはわからなくもない。
確かに彼は一人でも戦えるだけの実力はある。でも、それは技術であって本当ではない。いくら優秀な技術を持っていても、今までと全く違うやり方になれば、そしてそれが自分の苦手な分野だったら、実力なんて出せる訳がない。
「僕は、個人ハンターには向いてなかったんだ……」
クリュウは力なくうな垂れる。
そんな彼にどう声を掛けたらいいか、エレナにはわからない。
クリュウはそんな彼女の前で残りを飲み干すと、「ありがとう」と小さく礼を言って酒場を出て行ってしまった。そんな彼を止める事はできず、エレナはギュッとカウンターの下で拳を握った。
数日後、クリュウはリフェル森丘に来ていた。
今日の依頼は交通路を含んだ狩場に現れたランポスの狩猟だ。ドスランポスの目撃情報はないので気楽にできる依頼だ。
だが、今のクリュウにはこれでも十分難しい狩りだった。
岩陰に隠れて前方を窺うと、ランポスが五匹動き回っていた。これくらいなら問題ないだろうと、クリュウは岩陰から出るとランポス達に向かって走り出す。敵襲にランポス達が鳴くが、遅い。
「うりゃあッ！」
クリュウは一番手前にいたランポスを横なぎに一閃する。その一撃でランポスは吹き飛ばされて動かなくなった。ハンターナイフの

頃と違い、ドスバイトダガー改はランポス程度ならうまく入れば一撃だ。
「ギャアッ！」
横から突っ込んで来るランポスは盾を使ってガードし、横へ薙ぎ払うように一閃してのどを斬り裂いて一撃で飛ばす。
一度後方へ下がると、追撃して来たもう一匹に下から上に斬り上げる。ランポスは悲鳴を上げて仰け反る。すぐさまそこへもう一撃を加えると、ランポスは地面に倒れた。
「あと二匹！」
クリュウは前方にいるランポスに突っ込む。
「これで――ぐわぁッ！」
ランポスに飛び掛ろうとした刹那、後ろからすさまじい一撃を受けてクリュウは地面に倒れた。後ろから聞こえる歓喜の声。もう一匹のランポスだ。
「くぅ……ッ！　また後ろから……ッ！」
クリュウは急いで立ち上がると自分に一撃を入れたランポスを斬り飛ばす。とにかく倒したいという思いが先行してしまったその行動は、隙も多かった。
「ギャアァッ！」
「あぐぅッ！」
隙だらけの背後にランポスが飛び掛って来た。そのすさまじい威力にクリュウは押し倒された。もしこれがクックシリーズでなかったら、きっと奴の爪が肉に食い込んでいただろう。さらに間が悪い事に、転倒した際に剣を落としてしまった。痛む体を起こして見ると、自分より二メートルほど離れた剣は場所に落ちていた。慌てて拾うおうと立ち上がった途端、ランポスの飛び掛りを受けて再び転倒する。だが、運が良かった。前に倒れたおかげで剣を取れる位置に来た。すぐに剣を取って立ち上がり、襲い掛かるランポスを下から上に斬り上げる。ランポスの赤い血がクックシリーズをさらに赤く染め、そのまま倒れた。
クリュウはランポス全てを狩った事を確認すると、ぐったりとその

場に倒れた。
息が荒い。体中が痛い。思ったよりもダメージを受けたらしい。
ポーチの中から支給品の応急薬を取り出そうとして気づく。さっき転倒したせいか、ポーチの中で応急薬は三つ全て割れていた。
クリュウは落胆する。
今回は回復薬を持って来ていない。最近依頼を失敗し続けているので契約金は返って来ないで赤字続き。さらにクックシリーズを新調したばかりで、貯めていたお金ももうない。金銭的な問題から、装備は最低限のものしか持って来ていなかった。
「一度、拠点（ベースキャンプ）に戻るか」
クリュウは立ち上がると背の低い草が生える広場を出る。
とにかく早く戻りたい。クリュウは最も短距離である森を抜けるコースを選んだ。
鬱蒼と茂る森の中、クリュウは辺りをしきりに警戒しながら残り少ない体力を極力抑えて歩みを進める。ここはランポスが出現する場所。油断は禁物だ。
だが、どれだけ歩いてもランポスは出てこない。きっとここにはいないのだろう。そう思って森の出口を見て安堵した。が、その油断が悲劇を生んだ。
「あぐわぁッ！」
突如背後からすさまじい突撃を受けてクリュウは地面に倒れた。
背骨が折れたのではないかというくらいの痛みに耐えながら目を向けると、そこには脚を地面に擦らせて今にも突撃して来そうなブルファンゴがいた。
「しまった！」
クリュウは慌てて起き上がろうとするが、背中に激痛が走って起き上がれない。
そして、クリュウが最後に見た光景は――自分に向かって突撃して来るブルファンゴの姿だった。
結局、依頼は失敗に終わった。
クリュウはイージス村に戻るとエレナに頭を下げた。これで十一

回連続で依頼を失敗している。エレナももう何も言わなかった。
クリュウはトボトボと家に戻る。
その道中、クリュウは今回の狩りを思い出す。
ランポスもブルファンゴの攻撃も全て後ろから受けた。
やっぱり、後ろが怖い。
今まで、ずっとフィーリアの後方支援があった。だからこそ自分は前だけに向かって走る事ができた。だが、フィーリアがいない今ではそれは大きな背後の隙を作るだけでしかない。
根本的に、戦い方を変えるしかない。
もう一度ドンドルマの養成所へ行って、教官から単独の狩りを叩き直してもらうかとクリュウは自分にできる最善の策を考えていた。
その時、村の入り口の方で何事か騒がしかった。
「何だろ？」
「クリュウ！」
振り返ると、酒場からエレナが走って来た。パタパタと風に揺れる給仕服は最近はもう見慣れてしまったが、やっぱりかわいいと改めて思った――まぁ、中身は乱暴極まりない男女なのだが。
「あれ、どうしたの？」
エレナが不思議そうに指を挿して訊いたのは村の入り口の人だかりだった。
「いや、僕もわかんない」
「行ってみよっか」
「え？　でも酒場は？」
「どうせこの時間なら誰も来ないわよ。ほら、行きましょ」
エレナはクリュウの手を取って走り出す。そんな彼女に手を引かれ、クリュウは少し照れながらも彼女に続いた。
人だかりの中に入ると、村人達は皆同じ方向を見詰めていた。不思議そうにその視線を追うと、そこには、
「おい誰か！　クリュウくんを呼んで――って、クリュウくん！　君にお客さんだって」
彼に気づいた村長の言葉は、クリュウの耳を通り抜けた。そんな彼

が驚きのあまり言葉もなく見詰める先には、二人の少女が立っていた。
「やっとクックシリーズ？　相変わらずとろいわねぇ」
「お姉ちゃん！　もうッ！　ごめんなさいクリュウさん！」
そこには礼儀もクソもないという感じのポニーテールをした少女と、ぺこぺこと頭を下げるちょっとかわいそうに見えてしまう少女。双子の姉妹がいた。
以前ドスゲネポス戦で共に戦った――ラミィとレミィだった。
前はラミィがクックシリーズでレミィがクックDシリーズだったが、今のラミィはギザミシリーズ、ショウグンギザミという大型の甲殻種モンスターの素材を使った防具にブルーピアスを着けている。そしてレミィは同じく大型甲殻種のダイミョウザザミというモンスターの素材を使ったザザミシリーズを着けている。
どちらも中級飛竜に匹敵する強さを持つモンスターだ。そして二人の背中にはそれぞれガトリングランス、討伐隊正式銃槍と呼ばれるランスとガンランスが備えられている。どちら前よりはぐっとパワーアップしている武器だ。
「な、何で二人がここにいるの？」
驚くクリュウに、ラミィはため息する。その横からダイミョウザザミの甲殻で作られたザザミヘルムを被ったレミィが小さく笑みを浮かべる。
「私達、フィーリアさんに頼まれて来たんです」
「フィーリアに？」
驚くクリュウに、レミィは「はい」と笑顔で答える。すると、隣にいたラミィが不機嫌そうに説明する。
「私達はアルフレアを拠点に色々な依頼を受けてたんだけど、一週間くらい前にフィーリアがいきなり訪ねて来て自分がいなくなった後のあんたを押し付けてきたんだよ」
「フィーリアさん言ってましたよ。「クリュウ様はまだ一人では無理です。ですから、あなた達にクリュウ様の後押しをしていただきたいんです」って」

二人の言葉に、クリュウは言葉を失う。
彼女は自分が去った後の事までちゃんと考えてくれていたのだ。
いつも自分の事を心配して、自分を助けてくれた彼女は、いなくなった後もこうして自分を心配してくれている――なのに、自分がそんな彼女を突き放してしまった。
今になって、どっと罪悪感が圧し掛かった。
落ち込むクリュウの手を、レミィが優しく包んだ。顔を上げると、そこにはレミィが優しげな満面の笑みを浮かべていた。
「クリュウさん。これから私達がアルフレアに戻るまでの二週間という短い間だけですけど、一緒に狩りをしましょうね」
満面の笑みで言うレミィに、クリュウは小さく笑みを浮かべてうなずいた。ゴツンという音と共に痛みが走ったのはその瞬間だった。
「何するの!?」
「うるさいなッ！　私の妹に触れないでよ！　っていうか見ないで！」
「無茶言うなぁッ！」
「ふ、二人とも落ち着いてよぉッ！」
わいわいと騒ぐクリュウ達に、村人達は二人がクリュウの知り合いだとやっとわかったのか、微笑ましく見詰めている。が、その中でたった一人、不機嫌そうに睨む者がいた。
「何でまた女の子なのよ……」
不機嫌そうに言った彼女の言葉はあまりにも小さく、三人の喧騒の中に消えていった……
こうして、クリュウは新たにラミィとレミィという二人の少女ハンターと組む事になった。
そして、エレナの苦悩が再び始まるのだった。

第３０話　砂漠に潜む赤き盾蟹

仲間とは、共に助け合い、協力し、目的に向かって突き進む心許す友の事を言う。

「これが仲間って言うの？」

そう落胆の声を上げるクリュウは強制的に重い荷車を引いていた。

ここは灼熱の熱線が降り注ぐレディーナ砂漠。悠久の砂の景色がどこまでも続く時の流れから取り残された空間。

すさまじい熱線が、クーラードリンクを飲んでいても体を焼く。そんな状態で重い荷車を引くクリュウの体力は急激に失われていた。

「まったく、だらしないわね！」

そう地図を見ながら怒るのはラミィ。彼女が無理やりクリュウにこんな重労働を押し付けた張本人だ。

「クリュウさん、大丈夫ですか？」

そう言うのは後ろから荷車を押してくれているレミィ。彼女が手伝ってくれなかったら、今頃自分は砂の上で息絶えていただろう。

「うん。平気だよ」

クリュウは疲れを隠して笑顔で答える。なんていい子なのだろうか。自分だって暑いし辛いだろうに他人に気を遣うなんて、本当に天使みたいな女の子だ。

「レミィ。あんたは手伝わなくていいのよ。こんなのこの下僕に任せておけばいいの」

それに比べてこの性悪女はなんてひどい奴だ。さりげなく自分を《仲間》から《下僕》に格下げしているし。本当に姉妹なのか、ましてや双子なのかですら疑わしい。まぁ、顔は基本的にそっくりなのだが。

「もう。お姉ちゃんはどうしてそんなにクリュウさんにいじわるするの」

怒るレミィはクリュウを援護してくれる。クリュウは彼女に感謝しつつ、黙ってラミィの返答を待つ。一体どんな返答が返って来るのか気になる。そして、彼女から返ってきたのは、

「何言ってるのよ。これはいじめてるんじゃなくて教育的指導よ」
「ものは言いようだよね」
「何か言った？」
ギロリと睨むラミィに、クリュウは慌てて首を横に振る。もし間違って縦に振っていたら、きっと彼女のガトリングランスで体をぶち抜かれていただろう。
「まったく。あんたはど素人なんだから、こうして下っ端仕事をしてればいいの」
そう言うラミィに反撃できないところが情けない。
確かに彼女達に比べたら自分はまだまだだ。しかも今回の相手では彼女達は先輩に当たる。
今回の依頼はレディーナ砂漠に現れた大型甲殻種――ダイミョウザザミの討伐だ。
ダイミョウザザミとは通称《盾蟹》と呼ばれている。その特徴はまず蟹の形をしている事と、大きな一角竜の頭蓋骨を殻にしている事。そして、その鋏（はさみ）は盾のようになっていて恐ろしく硬い。まず完全防御体勢になったらどんな攻撃も防いでしまう。だからこそ盾蟹と呼ばれているのだ。そして何より、イャンクックよりは手強いらしい。
クリュウが引く荷車を見ても、相手の力量はかなりのものだ。
大タル爆弾三発、小タル爆弾五発、シビレ罠、トラップツールとゲネポスの麻痺牙もある。他にもそれぞれのポーチの中には音爆弾が入っている。完全防御体勢に入ったダイミョウザザミは激しい音には弱いらしい。その為の装備だ。
そして、ダイミョウザザミだけなく甲殻種と呼ばれるモンスターは皆閃光玉は効かないとの事。つまりクリュウ得意のいつもの戦法は使えないという事だ。
今回はそんなダイミョウザザミが相手なのだ。初めてのクリュウに対しきっと二人は何匹も狩ってきたのだろう。そもそもレミィの装備はダイミョウザザミの防具だし。
「ねぇレミィ。ダイミョウザザミってどんな奴？」

「そうですね、一言で言えば蟹です」
「……ごめん、質問を変える――単刀直入に訊くけど、強いの？」
クリュウの訊きたいのはその一点だ。イャンクックすら一人ではまだ苦しいのに、それよりも強いモンスターに挑むのだ。いくら三人でも不安はある。
クリュウの問いに対し、レミィはうーんと唸りながら柔らかそうな桜色の唇に人差し指を当てて考える。
「そうですねぇ、動きはイャンクックよりも遅いですけど、その一撃はイャンクックよりは強力ですね。そしてイャンクックより死角が少ないってのが大きな特徴ですね」
「死角？」
「はい。イャンクックは基本的に前方に対する攻撃に特化してます。尻尾を振り回すのは全方位ですが、それ以外は基本全て前方です。しかしダイミョウザザミは正面、横、そして後ろにも攻撃して来るので厄介です。ダイミョウザザミと戦う場合は回避よりも防御する事優先してください」
「じゃあやっぱりイャンクックよりは強いって事？」
「確かにイャンクックよりは厄介ですが、動きが鈍いので懐には入りやすいですね」
さすがダイミョウザザミの防具を付けているだけはある。奴の大まかな説明や対処方法まで教えてくれた。こういう時、経験者はすごく頼りになる。
「レミィはすごいね」
「そんな事ないですよ……えへへ、似合ってますか？」
そう言ってレミィは後ろから離れてクリュウの横に並ぶと、その場でクルリと回る。彼女が手を離したので荷車が一気に重くなったが、この際は気にしない。
レミィのザザミシリーズは意外と女ハンターには人気が高い。デザインが他の装備よりかわいいからしいが、確かに女の子らしい防具だ。
貴重なマカライト鉱石などを練り込んだ鎖帷子（くさりかたびら）

の上から赤に近い桃色の盾蟹の甲殻を使った色鮮やかな防具。スカート型のかわいらしい腰当。そして何よりザザミヘルムが最も人気が高い。鎖帷子の上からダイミョウザザミの甲殻を使った鍔（つば）にツインテール。愛用する女性ハンターは数多い……と、師匠から聞いた事があった。ただし、火と雷の耐性には非常に弱いので飛竜戦には結構不向きだったりするが、彼女の場合はガンランスなのでその盾の防御と併用すれば問題はないだろう。

「うん。似合ってるよ」

それはうそじゃない。彼女のかわいらしさとかわいい外見のザザミシリーズはかなり合っている。そんなクリュウの言葉にレミィはぱぁっと嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。

「えへへ、ありがとうございます」

「礼を言われるような事じゃないよ」

二人はここが狩り場だという事も忘れて楽しげに会話する。そんな二人の声を背中で聞きながら地図と睨めっこするラミィはすこぶる機嫌が悪い。

自分の大切な妹を口説き落とそう（クリュウにはそんな気持ちはない）とする最低男に敵意が発生する。これも純粋に妹を守りたい姉の想いなのだ。

「レミィから離れなさない下僕！」

「僕は下僕なんかじゃないよッ！」

今にも狩り場で殴り合いになりそうな二人の雰囲気に、レミィはあわあわと慌てて仲裁に入ろうとする。が、その時、地面が小刻みに震えだした。

「な、何ッ!?」

驚くクリュウに対し、二人は互いの顔を見合うとすぐに行動に出た。

「クリュウ！　大タル爆弾の準備！　急いで！」

「う、うんッ！」

クリュウは荷車を止めると載せてあった大タル爆弾を二つ持つ。さらにレミィが残る一つを持った。まさか一度に三発全て使うとい

うのか。
「ここに並べてください！」
レミィに言われたとおりの場所にクリュウは大タル爆弾を置く。遅れて彼女もそこへ大タル爆弾を置いた。そして準備を整えるとガンランスを構える。
「あんたは荷車を引いて後方に撤退して待機！」
ラミィの言葉に素直に従う。本当は前線に残りたかったが、爆弾を積んだ荷車を離すのは当然の判断だ。それに自分は足手まといになる。ここは従うしかない。
クリュウが二人から距離を取った時、遠くの砂が突然隆起し、砂の下から何かが出て来た。
大きな一角竜の頭蓋骨を背負った大きな蟹。赤い甲殻に覆われたその姿は蟹以外の何ものでもないが、その威圧はイャンクックと同等、またはそれ以上だ。
「あれがダイミョウザザミ……」
初めて見たが、かなりでかい。イャンクックぐらいの大きさはある。そして何より硬そう。へたな部分なら簡単に弾かれそうだ。
クリュウが見守る中、レミィは大タル爆弾の後ろでガンランスを構えたまま。ラミィは道具袋（ポーチ）からペイントボールを取り出した。
ラミィはそのままダイミョウザザミに突っ込むと、十分な距離まで詰めた後にペイントボールをを投げ付けた。ペイントボールはダイミョウザザミの硬い鋏に当たって弾ける。直後にあの特徴的な匂いが辺りに流れる。
敵襲にようやくダイミョウザザミが動きを見せた。片側の鋏を振り上げたまま横向きでラミィに突撃して来る。だが、その速度は結構遅い。なるほど、レミィの言ってたとおり死角はないが動きは遅いようだ。
ラミィは走ってレミィの後ろに退避する。するとダイミョウザザミは追い掛けるように横向きのまま鋏を振り上げて突っ込んで来る。
動きは遅い。感覚は掴んでいる。

彼我の距離を目測し、十分な距離に詰まるとレミィは砲撃加速装置を入れる。刹那、砲身が赤く染まり出し、砂漠の暑さ以上の熱が放出される。

そして、迫るダイミョウザザミを見詰め、容赦なく引き金を引いた。

「ファイアァッ！」

ガンランス必殺の竜撃砲が火を噴いた。途端、前に構えていた大タル爆弾も一斉に起爆し、すさまじい大爆発が起きて爆炎が吹き荒れてダイミョウザザミを呑み込み、ラミィとレミィも黒煙の中に消えた。

クリュウは目を疑った。まさかいきなりあんな大技を炸裂させるとは。黒煙の中に消えた二人を心配するが、それは無意味だった。少しして黒煙の中から二人は傷一つなく飛び出して来た。ランス系の強力な盾が二人を救ったのだろう。

一方のダイミョウザザミはいきなり竜撃砲＋大タル爆弾×三を受けてぐったりと倒れている。すかさずラミィが姿勢を低くして全力突撃をする。全速力の突撃はダイミョウザザミの甲殻に衝突し、続いて連続した爆発が起きる。ガトリングランスの付加属性は《火》。触れた瞬間に炎が噴き出すのだ。

ラミィの突撃は弾かれながらも、その甲殻を連続で突いて爆発させた後その横を駆け抜ける。すぐさま反転してまだ起きられないダイミョウザザミに向かって槍を連続で突き出す。

「せいッ！　りゃあッ！　やあッ！」

突き出されたランスはダイミョウザザミの強固な甲殻に衝撃と爆発を与える。さらにレミィも熱を排出中のガンランスをダイミョウザザミの頭部に向けると続けざまに砲撃した。そのすさまじい猛攻撃にダイミョウザザミはたまらず起き上がると、レミィの方へ向いて鋏を横一線に薙ぎ払う。レミィはすぐに盾を構えてその一撃を受け流す。

「えいッ！」

レミィはガンランスを突き出して先端の刃でダイミョウザザミの体を突き刺すと、続いて砲撃。甲殻の一部を爆砕してバックステップで離れる。

ダイミョウザザミは距離を取ったレミィに横向きで突進する。だが、その横からラミィが突撃してダイミョウザザミの右側の脚に激突。ダイミョウザザミはバランスを崩して倒れた。

すぐにレミィはダイミョウザザミの強固な鋏に狙いを付けて連続して砲撃する。その横ではラミィが連続突きをして堅牢な甲殻を打ち砕く。

遠くから呆然と見詰めるクリュウはただそのすさまじい戦いに驚くばかりだった

ダイミョウザザミに攻撃する暇をほとんど与えない。なんて連携された動きなのだろうか。一人が狙われればもう一人が攻撃し、隙を見ては一斉に攻撃する。その動きはプロだ。

きっと、ハンターになった時からずっと二人で戦って来たのだろう。だからこそあれだけの動きができるのだ。

ダイミョウザザミは起き上がると両腕の先にある大きな平たい鋏を天に上げて口からブクブクと泡を吹き出し始めた。その行動にラミィとレミィは大きく距離を取った。どうやら怒り状態に入ったらしい。

ギギギギギ……と甲殻同士が擦り合う音はまるで、鳴く事のできないダイミョウザザミの怒りの声のようだ。

ダイミョウザザミは両鋏を口元に当てる。次の瞬間大きく鋏を開いて口から大量の泡状の水を一直線に放出した。その一撃は前方にいたレミィに直撃する。だが、レミィは盾でその攻撃を防いだ。

どうやらあれがダイミョウザザミのブレスのようなものなのだろう。圧縮された水を一点に放出するその一撃は水とは思えないほど強力で、発生する泡は少し幻想的に見える。

レミィが攻撃を受けている隙に、ラミィが突貫する。だがあと少しで命中という所でダイミョウザザミは今までにない速度で横へ移動してそれを避けた。その速さにクリュウが驚いている間にダイミョウザザミはそのままレミィに接近すると鋏を叩き付ける。とっさに盾で防いだとはいえ、彼女の小さな体はその一撃に吹っ飛ばされた。

「レミィッ！」

クリュウの声にラミィが慌てて反転して突貫する。だがラミィが到達するダイミョウザザミは突如両鋏を地面に振り下ろして勢い良く砂を舞い上げる。するとそのまま砂の中に潜ってしまった。逃げたのだろうか。

二人は武器をしまうと一斉に散って走り出す。一体どうしたのか驚いていると、

ゴゴゴゴゴ……と地面が揺れる音が響いた。それも下から。

「え？　な、何？」

「クリュウさん！　逃げてください！」

レミィの悲鳴のような声が響いた刹那、クリュウのいた地面から巨大な槍が飛び出てクリュウは吹き飛ばされた。続いてすさまじい爆発がクリュウの体をさらに吹っ飛ばす。

「あぐぅッ！」

完全に油断していたところへの一撃で、クリュウは地面に叩き付けられた。直撃こそ体を捻って回避したものの、完全には避けられなかった。接触した脇腹には鈍い痛みが走り、クリュウは顔を苦しげにゆがめながら前を見る。するとそこには先程まで遠くにいたダイミョウザザミがいた。

先程のクリュウの声で他にも敵がいると悟ったのか、ガラ空きだったクリュウを攻撃してきたのだ。

だが、ダイミョウザザミも動かない――いや、動けないでいる。その体からは煙が上がっていた。見ると奴の下には粉々になった荷車があった。どうやらさっきの砂中からの攻撃で荷車を粉砕し、残った小タル爆弾が一斉に起爆したらしい。幸か不幸か、その威力でダイミョウザザミは動けないらしい。

クリュウが痛む体を何とか起こすと、後ろからラミィとレミィが駆けつけて来た。

「あーあ、小タル爆弾全部使っちゃったの？　それにシビレ罠とかも吹っ飛んじゃったし」

ラミィは呆れたように言う。確かに、せっかくの備品は全て吹き飛んでしまった。返す言葉もない。

「ご、ごめん……」
「な、何よ。らしくないわねぇ……」
謝ると、ラミィはなぜか頬を赤らめながらプイッとそっぽを向いてしまう。やっぱり怒っているのだとクリュウが落胆すると、隣からレミィが「大丈夫ですよ」と笑顔で言った。何が大丈夫なのかはよくわからないが。
ダイミョウザザミは三人揃った人間達に向かって正面から突撃する。両鋏を大きく広げ、逃がさないと言わんばかりの迫力だ。
「仕方ないわねッ！　あんたも協力しなさい！」
「う、うんッ！」
クリュウはうなずくと横へ走って距離を取る。反対方向へレミィが走り、ラミィは再び突貫してダイミョウザザミに真正面から挑む。と、ダイミョウザザミは突如動きを止めて鋏を顔の前に立てて姿勢を低くし、脚を畳んで動かなくなった。その直後のラミィの強烈な突撃は簡単に弾かれてしまった。今まで以上の防御力。あれが防御体勢なのだろう。
弾かれてたたらを踏むラミィと、ガンランスを構えたままのレミィ。クリュウは迷わずダイミョウザザミに突っ込むと、道具袋（ポーチ）から音爆弾を取り出すと投げ付ける。刹那、キンッという心地良い音が人間には無害な音が辺りに響き渡った。だがその音は人間にとっては無害でもダイミョウザザミには違った。突如襲って来た物質的攻撃ではない音爆弾の威力にぐったりと両鋏を投げ出して倒れた。今がチャンスだ。
クリュウは剣は抜くと倒れているダイミョウザザミの右の平たい鋏に剣を思いっ切り振り下ろした。硬い鋏に当たるが、血は出ない。まだまだだ。
「うりゃあああぁぁぁッ！」
クリュウは再び剣を振り下ろす。だが結果は同じだ。だけど諦めず、ただひたすら剣を振り下ろす。横ではラミィの突きとレミィの砲撃が炸裂している。クリュウは剣を振り下ろし続ける。と、鋏にヒビが入った。あと一撃。

「これで終わりだあああああぁぁぁぁぁッ！」
クリュウは全力を込めて剣を両腕で振り下ろした。剣と鋏が触れ合った瞬間、ダイミョウザザミの巨大な鋏が粉々に吹き飛んだ。ダイミョウザザミはたまらず起き上がる。急に上がった壊れた鋏がクリュウの体を弾き飛ばした。クリュウは悲鳴も上げられぬまま砂の上を二転三転した後に膝をついた。
二人も一度大きく距離を取っている。
ダイミョウザザミは健在な方の鋏と壊れた鋏を器用に使って砂を掘り、そのまま地面に潜った。三人は警戒して辺りを走り回って翻弄するが、音と振動は全く別の方向に行って消えた。どうやら逃げたらしい。
「ふぅ……」
クリュウは剣を腰に戻すと息を整える。
「クリュウさん！　大丈夫ですか!?」
慌ててレミィが駆け寄って来た。クリュウの体を上から下まで見詰め、怪我はないかどうか必死になって探している。そんな彼女を心配させないようにクリュウはそっと微笑む。
「大丈夫だよ」
「良かったぁ……」
レミィはまるで自分の事のように安堵した。本当に心配してくれていたのだろう。なんていい子なのだろうか。
「当たり前でしょ。ザザミなんかの攻撃で大怪我を負う奴なんて面倒見切れないもの」
それに比べたこっちの子はなんてひどい事極まりない。顔はそっくりなのに同じ双子とは思えないくらいの正反対な性格だ。
ツンとそっぽを向けるラミィを見てクリュウは前途多難だなぁと感じた。
「とにかく、あの大破した荷車から使えるものだけでも持って行こうよ。はい」
クリュウはそう言うと道具袋（ポーチ）から村を出る前に調合したばかりの元気ドリンコを二つ取り出して二人に渡す。これももちろ

んフィーリアから教わった知識だ。
「な、何よ」
「あれだけ接近戦したんだ。これでも飲んで再挑戦だ」
「わぁ、ありがとうございます！」
「ふん。あんたにしては気が利くじゃない」
二人らしい返答に小さく微笑むクリュウ。二人は気にした様子もなくそれを受け取ると飲み始めた。ラミィは一気。レミィはちょびちょびと飲んでいる。ここでも同じ双子なのに正反対な行動だ。もう驚かないが。
三人は瓦礫と化した荷車から使えるものを全て取り出した。幸い、シビレ罠が一個とその他備品が結構残っていた。小タル爆弾は幸か不幸かダイミョウザザミが五発全て直撃してくれたので問題はないだろう。
「さぁて、さっさとダイミョウザザミを追うわよ。どこぞのバカがせっかく鋏を壊してくれた事だし」
そう言ってスタスタと一人で歩き出すラミィ。そのどこか偉そうな背中を見詰め、クリュウはため息する。
「ひどい言い方だなぁ」
あんなにがんばったのになぁ、とちょっぴり落ち込むクリュウに、レミィは小さく微笑む。
「お姉ちゃん、クリュウさんの事をほめてたんですよ」
「あれで？」
「あれでです」
もう一度先へ行くラミィを見詰める。と、そんなラミィは不機嫌そうな顔で振り返ると追い掛けて来ない二人に叫ぶ。
「早く来なさいよぉッ！　置いていくわよバカ！」
「あれで？」
「あれでです」
レミィを疑う訳ではないが、あれは確実に違う。クリュウはそう思った。
これ以上ラミィが暴走しないうちに素直に従った方がいい。ク

リュウは急いで彼女の後を追った。その後ろからレミィがくすくすと笑いながらついて来る。そして、ラミィはあまりにも遅いクリュウにイライラしたようにフンッとそっぽを向いて大またで歩き出した。
二人が来てから一週間、クリュウは少しずつだが変わった。
二人と一緒にドスランポスとイャンクックをそれぞれ一頭ずつ狩った。その際、クリュウはそれまでのような鈍い動きは一切なく、いつもどおりの力がはっきりと出せた。
ラミィが言うには、自分はパーティ向けのハンターらしい。仲間に助けられながら仲間を助けるやり方をするハンター。確かに自分でもそう思う。
ハンターとしての誇りが戻って来たところで今回のダイミョウザザミだ。二人とならどんなに強い相手でもきっと大丈夫という安心。そして結構バラバラなチームワークの不安。二つの思いを心に渦巻かせながらも、クリュウは砂漠を翔けた。
ダイミョウザザミが移動したのは先程の位置から北へ一キロぐらい行った所だった。
砂の上に立つダイミョウザザミはまるで自分達が来る事を知っていたかのように堂々と立って待ち構えていた。そんなダイミョウザザミに対峙しながら三人はそれぞれの武器を構える。
「いいですか。ダイミョウザザミは斜め後ろから攻撃をしてください。そこが数少ないダイミョウザザミの死角ですから」
「わかった」
「死ぬんじゃないわよ」
「そのつもりはないよ。っていうか心配してくれるんだ」
「バカッ！　私と組んでた奴が死んだら目覚めが悪いでしょッ！」
「冗談だよ。何でそんなに顔を真っ赤にして必死に否定するの？」
「……ッ！」
「ま、待てッ！　武器を向ける相手を間違えてるッ！」
「来ますッ！」
ダイミョウザザミは取り込み中の三人を気にした様子もなく砂の中へ潜った。

「散ってぇッ！」
ラミィの掛け声にクリュウは駆け出した。他の二人も別の方向へ散る。直後、三人がいた場所に巨大な槍が砂中から突き出した。もし遅れていたらあれに巻き込まれていただろう。そしたら一撃でやられてた。危ない危ない。
槍は再び砂中に消えると、今度はクリュウに向かって振動が迫って来た。
「うわぁッ！」
間一髪横へ飛んで砂中からの攻撃は逃れられた。巻き上がった砂が雨のようにクリュウに降り注ぐ。
クリュウは口の中に入った砂をペッと吐くと再び走り出す。止まっていたら奴の餌食だ。
再び砂中から槍のように角が突き出される。今度はクリュウのすぐ横だ。
「くそぉッ！」
クリュウは後方へ飛んで距離を取る。相手が砂の中にいては手が出せない。なんて厄介な相手だろうか。これがガレオスなら音爆弾で引きずり出せるが、奴にはそれはできないらしい。
クリュウが一度距離を取ると、振動は今度はラミィに向かって突撃した。だが、ラミィは慌てる事なく横へ飛んでそれを避ける。空しく突き出される角の後、ダイミョウザザミが砂と共に砂上に現れた。すぐさまラミィが突撃して一撃を入れる。距離が離れていたクリュウとレミィは急いで向かう。
クリュウよりは近かったレミィは到着するとダイミョウザザミの脚に向かって連続して砲撃。爆発が砂を舞い上げ、ダイミョウザザミの動きが一瞬止まる。その一瞬にクリュウが飛び込み、ガラ空きだった頭部に剣を叩き込む。
「うりゃあッ！」
クリュウの一撃はダイミョウザザミの頭部に炸裂。細かな破片が散った。ダイミョウザザミはたまらず鋏を振るってクリュウを吹き飛ばす。ギリギリで盾で防いだとはいえ、吹き飛ばされた上に片手剣

の盾はランス系ほど強力なものではない。一撃一撃を守っても確実にダメージが蓄積してしまう。
クリュウに集中していたダイミョウザザミに、横からラミィが突撃する。火属性の効果で噴き出る炎がダイミョウザザミを焼く。
ラミィが走り抜けた刹那、逆方向からレミィが砲撃する。
ダイミョウザザミは逃げるように砂の中へ消えた。だがすぐに角を槍のようにして砂中から攻撃してくる。見えない砂の中、しかも下からの攻撃は厄介極まりない。慣れている二人ならともかく、今回初戦闘となるクリュウは紙一重で避けるので精一杯だ。
「くぅッ！」
クリュウが身を反らして避けた場所に角が突き上がる。クリュウは転がるようにして砂の上に倒れた。震動と共に目の前を砂を巻き上げながらダイミョウザザミが現れる。慌てて起き上がってクリュウは後退した。
「一体いつになったら倒せるの？」
イャンクックは耳を畳み、他の飛竜も弱ると脚を引きずるらしいが、甲殻種であるダイミョウザザミはそういった行動がわかりづらい。後どれくらいと見極めるのが難しいのだ。
だが、クリュウはダイミョウザザミのある異変に気づいた。
先程からずっと怒り状態なのか口から泡を吹き続けているダイミョウザザミ。だが、その泡に紫色の血が混じっていた。さっきまでとは明らかに違うその行動に、クリュウは確信した。
「あと少しだッ！」
きっとあれが弱っている合図なのだろう。クリュウはラミィやレミィと合流しようと走り出す。だが、そこへ怒り状態で今までとは比べ物にならないような速さで突進して来るダイミョウザザミ。
「なぁッ!?」
あっという間に追い付かれ、クリュウは鋏の一撃を受けて吹き飛ぶ。砂の上に情けなく一転二転して転がり倒れた。すさまじい一撃にクリュウは体が痛くて起き上がれない。骨でも折れたのではないかというような激痛だ。

「くぅ……ッ！」
必死に手を着いて起き上がろうとするが、すぐに力尽きて砂の上に倒れる。たった一撃だったが、その一撃はあまりにも強過ぎた。
「バカァッ！」
ラミィが慌てて走るが、間に合わない。ダイミョウザザミはクリュウの目の前まで迫っていた。
目の前にいる巨大な影。
あぁ、自分はここで死ぬんだ。
クリュウの胸を絶望が過ぎった。
振り上げられたダイミョウザザミの鋏がクリュウに振り下ろされた――
ガキィンッ！
すさまじい金属音に似た鋭い音と共に、ダイミョウザザミの一撃は防がれた。
「れ……レミィ……ッ！」
そこには自分をかばうように盾を構えたレミィがいた。奴と同じダイミョウザザミの甲殻でできた防具を輝かせ、レミィはクリュウに小さく笑みを浮かべると、再び前に向き直る。
彼女が握るガンランスの砲口が真っ赤に輝いていた。すさまじい熱が水分がないに等しい砂漠であっても水蒸気を発生させる。
ダイミョウザザミはその熱に何かを感じ取ったのか、慌てて鋏を盾のように構えて姿勢を低くする。また防御体勢だ。
だが、そんなものはレミィの前では無力だった。
すさまじい熱と共に加速された発射装置は限界に達する。噴き出るすさまじい熱。それは最大出力を意味していた。
レミィはしっかりとダイミョウザザミに照準を合わせる。そして、
「ファイアァッ！」
引き金を引いた瞬間、砲口からすさまじい火炎と黒煙が噴き出す。刹那、ダイミョウザザミが大爆発した。竜撃砲の前では、防御など無意味なのだ。
すさまじい威力にダイミョウザザミは黒煙を上げながら倒れた。

そして動かなくなった。
「ふぅ……」
レミィが息を吐き出した音を聞いて、クリュウはやっと現実に戻る。
――自分達は、ダイミョウザザミを倒したのだ。
「大丈夫ですかクリュウさん！」
レミィは熱を放出しているガンランスを背中に戻すと、倒れているクリュウに駆け寄る。体に痛みはあったが、彼女を心配かけさせまいとクリュウは無理して笑みを浮かべる。
「だ、大丈夫……」
「無理してるのがバレバレですッ！」
引きつった笑みと搾り出したような声ではさすがに説得力がなかったのだろう。我ながら自分の演技力の低さに呆れてしまう。まぁ、骨が折れるか折れないかという一撃を受けて平然とした演技ができるのはそれはそれで化け物だが。
クリュウはポーチから回復薬を取り出して飲み干す。これで幾分かは楽になるだろう。
一方ラミィは早速倒したダイミョウザザミを吟味していた。
「大きいわねぇ。もしかしたらビックサイズぐらいはあるんじゃないかしら」
「ビックサイズ!?」
レミィも驚いたように声を上げる。
モンスターには通常体よりも体が大きなものがいる。その大きさによってビックサイズ、そしてキングサイズと呼称が変わる。体が巨大であればそれだけ強いというのも意味している。つまり、今相手にしていたダイミョウザザミはかなり厄介な相手だったという事だ。
「初陣からそんなのを相手にするなんてなぁ……」
クリュウはがっくりとその場に膝を着いた。だが、そんな彼を見てラミィは呆れたように声を上げる。
「バカじゃないの？　所詮は蟹じゃない」
「僕にとっては《所詮》で片付けられるような相手じゃないんだよ」

「クック装備だもんね」
鼻を鳴らして言うラミィに怒る気力もない。それほどまでに疲れていた。日に焼かれた砂は熱いはずなのに、疲れ切っているからかそんな熱さは感じなかった。
ラミィは期待したような反撃がなかったのが不満なのか、不機嫌そうに倒れたダイミョウザザミに近づくと慣れた手つきで甲殻を剥ぎ取る。ダイミョウザザミは甲殻しか基本は使い道はない。あとは鋏ぐらいのものだろう。
「クリュウさん、早く剥ぎ取らないと全部お姉ちゃんに取られちゃいますよ」
レミィはそう笑顔で言うと、膝を着くクリュウにそっと手を伸ばす。クリュウは「ありがとう」と礼を言ってその手を掴んで立ち上がる。
「何してるのよッ！」
「ごふぁッ!?」
「クリュウさんッ!?」
立ち上がった途端にラミィの強力な跳び蹴りがクリュウの体を貫いた。避けられない状態からのすさまじい一撃に、クリュウは吹っ飛ぶ。
「何するんだよ！」
「うるさいうるさいうるさい！　バカバカバァカッ！」
ラミィはそう怒鳴ると、プイッと背を向けてダイミョウザザミの解体に戻る。残されたクリュウは訳がわからず理不尽な暴力で痛む身体を引きずってダイミョウザザミの解体に加わる。
「硬いなぁ……」
硬い甲殻に阻まれて刃がなかなか刺さらない。クリュウが苦戦していると、レミィがコツを教えてくれた。刃を《刺す》のではなく《入れる》らしい。
クリュウがレミィに教えられながら解体するのを、ラミィはどこか不機嫌そうに見詰めていた。余所見していても解体できるのは、それだけ彼女達の方が上という事だ。

十分な量を剥ぎ取り終えると、後は残す。残りは他のモンスターの餌（えさ）となるのだ。こうした生態系を守るのも、ハンターの役目でもある。
「さぁ、依頼は終わったわ。さっさと帰ってお風呂に入りたいわよ。体中砂だらけだもの」
そう言って髪についた砂を払い落とすと、ラミィはとっとと拠点（ベースキャンプ）に戻ろうと歩き出してしまう。
「あぁッ！　お姉ちゃん待ってぇッ！」
「お、置いてかないでよぉッ！」
三人は砂の上を歩いて拠点（ベースキャンプ）に向かう。
三人の歩く砂の世界は、今日もまた永遠の時を刻むように、砂に波紋を刻む。ずっと、永遠に……

第31話　立ち直り

村に戻った三人はすぐに自分の家に戻った。ちなみにラミィとレミィはエレナの家に住み込んでいる。
クリュウは家に戻るなり風呂に入る。水を浴びると大量の砂が流れた。砂漠で狩りをするといつもこうなる。厄介極まりない。
風呂から上がると、私服を着て横になる。ハンターは防具を着て生活する事が多いらしい。それは飛び込みの依頼などにすぐ反応する為らしいが、こんな辺境の村ではそう急ぐような事はほとんどない。気楽でいいものだ。
しばし横になって休んでいると、いつものようにノックなしで玄関がぶち破られる。もうそんな無礼極まりない来訪者はわかり切っていた。
「何寝てるのよ」
「別にいいでしょ」
横になっているクリュウを叩き起こすかのような勢いで部屋に入って来たのはラミィ。この子にはデリカシーという概念がないのだろうか。
ラミィもやっぱり私服を着ている。赤色を基調とした服は彼女の性格にかなり合っているなぁと納得できる。まぁ、口にしたら殺されるだろうが。
「も、もうお姉ちゃん！　いきなり入るのはダメだよぉッ！」
そう言って怒りながら入って来たのはレミィ。ラミィとは色違いの水色を基調としたその服は、やっぱり大人しい彼女に合っている。
「あ、お、お邪魔します」
何て律儀なのだろうか。同じ双子には思えない正反対さだ。
クリュウはめんどくさそうに起き上がると、ペコペコと頭を下げるレミィに向かって頼むように声を掛ける。
「あぁ、悪いけどレミィ。僕疲れてるから。そこのうるさいのを連れ出してくれないかな？」
「わかりましたぁッ！」

「わかりましたじゃないわよッ！　あんたどっちの味方なのよッ！」
クリュウのお願いに忠実にラミィを撤去しようとするレミィ。何て素直なのだろうか。
「それで、一体何の用？」
クリュウはレミィを押さえ込むラミィに問う。すると、ラミィは思い出したようにクリュウに向き直る。
「あ、そうそう。私達明日にもアルフレアに戻るわね」
まるで明日の夕飯の献立（こんだて）を言うかのような軽い言い方でとんでもない事を言いだしたラミィ。クリュウはそのあまりの軽さとすごさに転倒しそうになった。
「じゃあ、そういう事だから」
「ま、待ってよッ！」
何事もなく出て行こうとするラミィを慌てて止める。すると、彼女は不機嫌そうに振り返る。
「何よ」
「何よじゃないよッ！　そんないきなり！」
「いきなりって……私達がこの村に来てからもう二週間よ？　最初に言ってたじゃない」
「うっ……」
確かにそうだ。
二人はクリュウと違ってアルフレアに所属している。まだまだ下っ端とはいえ仕事はたくさんある。あまり長い間空けておく訳にもいかないのだ。
「そ、そっか……」
これでラミィとレミィと組むのも終わりかと思うと、ラミィのいい加減さやレミィの優しさが全て懐かしく感じる。
変に思い出に浸るクリュウに、ラミィはからかうように笑う。
「何よ。私達と別れるのがそんなに寂しいの？」
「そりゃあ寂しいさ」
思っていたのとはまるで違う返答に、ラミィから笑顔が消える。
「二人にはすごく感謝してるし」

「な、何言ってるのよバカッ！」
「え？　僕今おかしな事言った？」
　顔を真っ赤にして焦るラミィに、クリュウは不思議そうに首を傾げる。その横ではムゥと頬を膨らませるレミィが。
「私もクリュウさんと別れるのは寂しいです！」
「ははは、ありがとう」
　クリュウの笑顔に、レミィはにぱぁ嬉しそうなと笑みを浮かべる。そんな笑顔を振りまく妹をラミィは不機嫌そうに見詰める。
「レミィあんた、この村に残りたいの？」
「え？　そ、そんな事はないよ」
「じゃあ、クリュウにアルフレアに来てもらうのは？」
「それが一番いいなぁ」
「ダメだよぉ。僕はこの村のハンターなんだから」
「うぅ、そうでしたぁ……」
　落ち込むレミィは本当に残念そうだ。もし自分がこの村に所属していなかったら、きっと彼女の言葉について行ってしまっただろう。
「あはは、今度そっちにも行くよ」
「むぅ、そう言って一度も来てくれません。クリュウさんはいじわるです」
「あはは……」
　それは純粋に時間がないからだ。アルフレアはイージス村から片道二日は掛かる。往復は四日。滞在期間を考えると、イージス村をかなり空けなくてはいけなくなる。フィーリアが抜けてたった一人のハンターになったクリュウにはそんなに村を空ける事はできない。
「今度は必ず来てくださいね！」
　レミィはキラキラした瞳で見詰める。その瞳には疑う事を知らない無垢な心がある。こんな瞳で見つめられれば無理だなんて今さら言えない。
「う、うん。努力するよ」
「レミィ諦めなさい。今の返事じゃどうせこいつ来ないわよ」
　ラミィはバッサリと切り捨ててしまう。クリュウはつい苦笑いし

てしまう。が、レミィはラミィの言葉に泣きそうな顔になる。
「うぅ、やっぱりクリュウさん、来てくれないんですかぁ？」
「行く！　必ず行くから泣かないでぇッ！」
「こんのバカ！　よくもレミィを泣かせたわねぇッ！」
「泣かせたのはラミィでしょッ!?」
「うるさいわねぇッ！　覚悟しなさい！」
「理不尽だぁッ！」
「クリュウさんのバカァッ！」
その後、クリュウは二人の女の子にボコボコにされた。もしエレナが遊びに来てくれなかったら、たぶん自分は死んでいただろうなぁと、後にクリュウは思った。
翌日、二人は村人に突然別れを告げて出て行った。
この村では出て行く前夜に盛大に送別会が行われると知っていた二人は皆にあまり無理をしてほしくなかったのでこうした別れ方をしたらしい。
村人総出で見送られ、二人の少女は手を振りながら己が守るべき街――アルフレアに帰って行った。
二人を見送った後、クリュウはドスゲネポスの狩猟に向かった。
エレナが心配してランポスの狩猟に格下げするように言ってきたが、クリュウは首を横に振り、ドスゲネポスの狩猟を引き受けた。
もう大丈夫。そんな気がしたのだ。
今まではフィーリアが背中を守ってくれて、自分は安心して戦っていた。
しかしラミィとレミィと組んでからはその戦法はがらりと変わった。それは二人が弓やボウガンのような後衛ではなくランスやガンランスといった前衛だったからだ。
己が背中は自分で守り、仲間を信じて戦う。そう教えてくれた気がした。
二人は確かに相手を守るように動く事もあるが、基本は単身で攻撃などをしている。それが狩りの基本だったのだ。
フィーリアとずっといて忘れていたその基本を思い出した今なら、

自分にできる事なら何でもできるような気がした。
クリュウは十分装備を整えると、フィーリアがいなくなってからは恒例になった村人が運転する竜車に向かった。竜車を引くのはもちろんシルキー。彼女はクリュウを見ると嬉しそうに鳴いた。
「今日もよろしくね」
シルキーの頭を撫でると、クリュウは竜車に乗り込む。
「今日は砂漠でいいんだね？」
「はい。今日こそはちゃんと依頼を完遂させてみせますよ」
「ははは、がんばってくれよ。でもあんまり無理はするな」
青年は優しく微笑むと竜車を走らせた。振り返ると、エレナが手を振ってくれていた。それに自分も手を振って返すと、クリュウは前に向き直る。
そうだ。
この村には自分しかハンターがいない。
自分ががんばらなくて、誰がこの村をモンスターから守る。
クリュウの心に、小さいながらもハンターとしての光が輝いた。
自分はこんな所で止まっている訳にはいかない。
もっと遠くへ、もっと強く、前を見ていないと。
クリュウは腰に下げた相棒――ドスバイトダガー改の柄を握ると、小さくうなずいた。
竜車は砂漠に向かって竜車道を進む。
クリュウは久しぶりのドスゲネポス戦に気合を入れ直し、剣を抜いた。
差し込む光に照らされて美しく煌く刃を見詰め、クリュウは小さく微笑んだ。

第３２話　イージス村の危機

ラミィとレミィのおかげでクリュウが復活してから一ヵ月後、イージス村に創設以来類を見ない危機が訪れていた。

それは突如周辺の村を経由して届いた情報だった。

「シルヴァ密林に飛竜が住み着いた」

村代表の者達を集めた緊急集会で村長が言った言葉がそれだった。驚く一同の中には場所が酒場だったのでエレナも、村唯一のハンターであるクリュウも出席していた。

シルヴァ密林は村人がよく訪れるもう一つの密林地帯。村からは竜車で一日ぐらいの場所にある。海岸に面しているセレス密林と違い、シルヴァ密林は内陸部にある。鬱蒼と茂る森に大きな川が流れ、比較的高い位置にあるのでそこかしこで大瀑布（だいばくふ）が見られるまさに自然の偉大さを感じさせるほどの森。密林というよりはジャングルに近い高湿度な場所でセレス密林よりもずっと人の手入れがされていないだけ、完全な自然世界な場所だ。

クリュウは今までシルヴァ密林には片手の指の数も行っていない。なぜならあの辺は上級鳥竜種であるイーオスが住み着いているからだ。

イーオスとはランポスの亜種である。血のように真っ赤な体に膨らんだ頭が特徴的なその姿は同じランポス種であるランポスとゲネポスがかなり似ているのに対し、基本的な形は同じだが全く別のモンスターに見える。

膨らんだ頭のそのこぶには毒を生成する毒袋があり、獲物に毒を吐きかけて弱ったところを捕食するという狩りの方法を取る。

同じランポス種であるゲネポスも毒を使うが、それとは種類が違う。ゲネポスの持つ毒は神経系の毒で体を麻痺させる。これ自体に致死性はない。獲物が痺れているうちに捕食するのがゲネポスの狩猟の仕方だ。だがイーオスの毒は勝手が違う。イーオスの毒は皮膚から浸透して体組織を壊死させる致死性を持った毒だ。

致死性があるかないかが怖いのではない。なぜなら痺れている間

に生きながら食われるのと、毒で弱ったところを食われるのでは結局結果は同じだからだ。一概にどちらの毒性が強いとかはない。問題はイーオスが他の二種を圧倒するくらい強いという事だ。火山や湿地のような高温高湿度という過酷な環境に適応したイーオスはランポス系最強の体力と攻撃力、そして獰猛（どうもう）さを持つ。それが群れで襲ってくるのだ。新米ハンターには厄介極まりない相手だ。

クリュウもイーオスには会った事はあるがまだ戦った事はない。フィーリアがクリュウにはまだ早いと言って退路を作ってくれていたからだ。そんな相手がいるシルヴァ密林に一人で行くほどクリュウは愚かではない。

村長の話ではそのシルヴァ密林に飛竜が住み着いたらしい。ただ、彼のその言い方からイャンクックではないとクリュウは感じていた。もっと強い奴だ。

「飛竜って、一体何ですか？」

クリュウが問うと、村長は隣の村から届いた手紙の中身を読む。

「どうやらフルフルという飛竜らしい」

「フルフル……」

「ふるふる？」

隣にいたエレナはそのふざけたような名前に困惑していたが、ハンターであるクリュウは村長の言葉に顔色を変えた。彼のその反応に、モンスターには無知な村人達もその飛竜がどれだけ恐ろしいかがわかった。

フルフル。それは中級飛竜に属する飛竜だ。名前とは違いその外見は不気味以外何ものでもない。普通飛竜はもちろん通常のモンスターでさえ首の先には頭がある。それは当然だ。だがフルフルにはない。正確にはあるのだが、それはまるで首の先をちょん切ってその先端に不気味な口を付けたような外見だ。白い粘液に包まれた体皮はまるで幽霊のように不気味。ともかく不気味なモンスターなのだ。

フルフルは他の飛竜とは違い強固な鱗や甲殻で守られているのではなく、その粘液に包まれた体皮で自らの体を守っている。その皮はブヨブヨとしていて大剣などの一撃を包んで跳ね返してしまう。さ

らにこの粘液は衝撃を受けるとその部分が一時的に硬化するので、刃も通りづらいという特性を持つ。厄介な相手だ。
　そしてフルフルは体内にある電気袋（上位やG級と呼ばれる強力な種は呼び方が変わるらしい）から電気を放出するという厄介な攻撃手段を持っている。群がる敵を一掃する為に自らの体に電気を流す技と、口から高圧の電気を球体状にした電気球をブレスのように撃ってくる。地面を這うように進む高速のその攻撃は一斉に三ないし五発を拡散して放つので避けるのが難しい。そしてこの強力な一撃を受けるとヘタすれば即死する事もあるらしい。即死はしなくても一時的にゲネポスに噛まれたように麻痺が起きる。原因はどうやら神経が電気を受けておかしくなるからしいが、詳しい事はわからない。だがその間に攻撃されればほぼ確実に死ぬ。なんともえげつなく、そして凶悪な技を使う飛竜だ。
　ハンター達からもその姿、攻撃パターンから毛嫌いされている飛竜、それがフルフルだ。
「クリュウくん、フルフルって強いのかい？」
　村長が毅然とした態度で訊いてくる。本当は不安なのだろうが、若くても村の長である彼はそれを隠している、そんな感じが彼の目から感じた。
　クリュウは彼を安心させたかったが、今回は相手が悪かった。
「はい。フルフルは中級に位置する飛竜で、確実に強いです。まず僕一人ではどうしようもないくらい強いです」
　自分の実力の低さが情けなくて仕方なかった。罵声を浴びる方がまだましだった。だが誰も彼を責めたりしなかった。みんな彼がこの村の為にがんばってきた事、そしてまだまだかけだしだという事を知っているから。そんな彼らの優しさが、時には傷つく。
　村長はクリュウの言葉に腕を組んで唸る。
　こんなのは村創設以来そうない緊急事態だ。シルヴァ密林とイージス村は近い。いくらフルフルが積極的に生息範囲を広げない飛竜だとしても、確実に来ないという確証はどこにもないのだ。
「仕方がない。ドンドルマのギルドに救援要請を出そう」

村長が下したのは最後の手段だった。
通常村は所属のハンターで事を解決するのが通例だ。だが、その許容範囲を超える事態が起きればギルドに頼むしかない。だが村は基本的にギルドに依頼できるような大金を用意できるほど裕福な所はそうない。だからこそ極力控えたい最後の手段なのだ。しかしだからこそ、それだけ今のイージス村は危機的状況に陥っているという事を意味していた。
「今すぐにでもドンドルマへ救援を向かわせたい。誰か伝令になってくれる者はいないか？」
本当は村長自身が行きたいのだが、混乱した村を離れる訳にもいかない。それに他の者も手を上げない。ここには大切な家族や友がいる。彼らを危険な状態に陥っている村に置いて行ける者などいない。
誰も手を上げず、しばし沈黙が流れる。
「僕が行きます」
そう言って手を上げたのはクリュウだった。
「クリュウくん。行ってくれるのかい？」
村長は感激したような表情をする。そんな彼に応えるようにクリュウはうなずく。
「今この村で一番用がないのは僕です。フルフルは僕じゃ倒せない。だったらせめて、倒せるようなハンターを連れて来ます」
「じゃあよろしく頼むよ。船はこっちで手配するよ」
村長の言葉にうなずくと、クリュウは酒場を出た。すぐにでも出発できるように用意をする為だ。
「ちょっと待ちなさいよッ！」
その声に振り返ると、酒場の制服を着たままエレナが走って来た。
「エレナ？」
「あんたが行くなら私も行くわ！」
エレナはクリュウの前に立つとそう言った。その睨み付けるような鋭い瞳は真剣そのもの。本気で言っているのがよくわかった。だが、そんな彼女にクリュウは首を横に振る。
「いや、エレナはここにいてよ。ドンドルマには僕だけが行くから」

「何でよ！」
「これから酒場はこの村の重要な拠点になる。エレナはこの村にいた方がいい。避難の際、食料を大量に保存してるのは酒場だし」
「で、でも……ッ！」
それでもなお必死に食い下がるエレナに、クリュウは優しく微笑む。
「大丈夫だって。僕が必ず強いハンターを連れて来るから」
その言葉と笑顔に、エレナはついに折れた。確かに彼の言うとおり自分が村を離れる訳にはいかないだろう。それに、エレナは昔から彼を知っている。
クリュウは、やると決めた事は必ずやる。そういう子だって事を。だから、信じた。
「わかったわよ。ドンドルマにはあんた一人で行って来なさい。私は村に残ってあんたの帰りを待ってるから」
「ごめんね」
「あ、謝らないでよ。ただし！　逃げたりなんかしたら地の果てまで追い掛けてドロップキックするからね！」
「逃げないって」
クリュウはエレナに手を振って別れると家に戻り、出発の用意を整える。もし途中でモンスターに襲われた場合を想定して必要最低限なものだけを道具袋（ポーチ）に入れる。
一時間後、クリュウは船に乗ってイージス村を出た。
見送る多くの村人の中にいるエレナも手を振ってくれていた。クリュウの視線に気づくとプイッとそっぽを向いてしまったが。
クリュウはそんな見送ってくれる村人達に力強く手を振る。
自分に、イージス村の命運が掛かっているのだ。なんとしても、優秀なハンターを雇うしかない。それが、自分の使命だから。
こうして、クリュウはドンドルマに向かう為、長い旅に出発したのだった。

第３３話　隻眼の人形姫

イージス村から南方へ遠く離れた、大陸中央部。大内海ジオ・クルーク海の程近くにある大陸最大の城塞都市――大都市ドンドルマ。

大陸最大規模の貿易都市であり、「全ての道はドンドルマに通ず」と言われる程ドンドルマを中心に道路や公的竜車の路線が発達している。その為、陸路での貿易が非常に盛んであり、大陸中から様々な物がドンドルマに集まる。そればかりか外洋と通じるジオ・クルーク海にも面している事から海産物も豊富な上、海路を使った貿易も盛んな為より遠方の物資や、別の大陸の物資などもここに集まる。その為、「ドンドルマに来れば買えない物はない」と言われる程、ドンドルマの品揃えは豊富だ。

大陸最大規模の貿易都市である事に加え、ドンドルマがそれ程までに大都市と呼ばれる所以は、ハンターを統括する中央機関ハンターズギルド本部がこの街にあるからだ。

ハンターズギルドに所属するハンターの数は大国の軍隊に相当すると言われ、ドンドルマがどの国にも属さずに独立し、独自の政（まつりごと）を行えるのはこのハンターズギルドの影響が大きい。

モグリとかを非合式のハンターを除けば、正式な全てのハンターが所属する中央機関、ハンターズギルド。その本部があるドンドルマにはやはり常駐するハンターが多い。だがこれは単純にドンドルマの大陸全体へ迅速に移動できる手段の豊富さなど別の要因が大きいが。

一説にはドンドルマに拠点を置くハンターは数百人とも言われ、他の拠点から出稼ぎなどでやって来るハンターの数は年間数千人とも言われているが、それを知るのはハンターズギルドだけだ。

ハンターズギルドの本部が置かれているだけあって、ドンドルマの防衛施設もまた大陸屈指と言われる程に強大だ。

街の三方は巨大な険しい山が囲んでおり、特殊な気流の関係で飛竜であっても上空から都市内部へ侵入する事はできない。残る開かれた南側にはこれまた巨大な石壁が築かれており、高さも厚さもかなりのもの。その強靭さは軍隊が全ての火力を集中しても突破は不可能

と言われる程だ。
それば かりかここには様々な対モンスター用の防衛設備が施されており、その鉄壁さは筋金入りだ。事実、その長い歴史の中では古龍でさえ撃退したという記録も残っている。
全てのハンターが憧れ、ここを目指すと言われる程、ドンドルマはハンターにとっては理想郷だ。何せ大陸の中心と言っても過言ではない為、各地から様々な依頼や情報が届くからだ。時には凶悪な飛竜、そして古龍の撃退・討伐願いも届く。
だからこそ、彼らは彼地（かのち）を目指すのだ。
大陸で最も安全な都市とも言われている為、商売で訪れる人ばかりか観光で訪れる人も多く、石造りの家が無数に並び、綺麗に並べられた石畳が続く道を大勢の人が行き来している。人々の顔は皆明るく、今日という日を実に楽しんでいるという感じだ。
ドンドルマは地形の関係上斜面が多く、非常に階段の昇り降りが激しいばかりか増築に増築を重ねた事で毎年多数の遭難者を出している。市政は様々な対策を行ってはいるが、未だに道を迷う人は後を絶たない。
そんな中、クリュウは特に迷う事もなくスタスタと目的の場所に向かって歩いて行く。
何しろ、彼は元ここの住民だ。この街にはハンターズギルド公認のハンター養成訓練学校があり、クリュウはそこに在籍していた。なので、寮暮らしだったとはいえある程度の地形は頭に入っているのだ。
だが、そんな彼であっても今日目指す場所は初めてだ。何せ、そこで行うべき事は全て学校側が学内に設けていたので、まず行く必要がなかったのだ。
しばらく無言で歩いていると、辺境の村などでは信じられないきれいな石造りの街並みの中、異様と言える程に巨大な石造りの建物が現れる。
城、と言うにはあまりにも無骨だが、その建築方法は大陸のどの方式よりも堅牢で、最先端。まるで、自分達の技術力の高さを誇示しているかのようだ。

クリュウは、その施設の前で立ち止まる。
「ここか……」
ここが彼が目指していた場所――ハンターズギルド本部だ。村などでは村長や私営の酒場がギルドの代理機能を行っているが、本部のあるドンドルマではハンターズギルド自体がハンターと依頼人の仲介機能をしっかりと果たしている。
ハンターズギルド本部一階や一部その地下に設けられているのが、通称大衆酒場と言われるドンドルマの酒場だ。酒場と言ってもその規模は村のそれとは比較にならない程巨大だ。
昼間だと言うのに、中からは笑い声や怒声、香ばしい匂いや裂けの匂いが中で抑え切れずに外へ溢れ出している。ハンターというのは普通の職業と違って職業柄昼夜の境界が曖昧だ。その為、昼間からハンターたちは暇であれば飲んで騒いで暴れている。一般人の一部から嫌われる理由の一つだ。
今まで入った事のない、ドンドルマの大衆酒場。クリュウは緊張や恐怖で震える体を無理やり気合で止め、意を決して中へと入る。
木製の扉を開くと、まず最初にムッとする匂いにびっくりする。酒の匂い、料理の匂い、汗の臭い、タバコの匂い。ありとあらゆる匂いが混ざり合い、出て行く場所がなくて充満しているらしい。正直、匂いが混ざり過ぎて訳のわからない空間だ。
中は外見通り広く、その設備も非常に豪華だ。一度に百人くらい軽く収容できるのではないか、それ程までに広大だ。
そして、そこで騒ぐハンター達を見て、クリュウの表情が一気に緊張一色に染まる。そこにいたのは上級飛竜の防具や武器を持ったハンターばかり。自分のような素人丸出しなクック装備の人間など誰一人いない。確実に、自分は浮いているとすぐに悟った。
入った途端、数人の屈強そうなハンターが睨みつけてきた。たぶん目付きが鋭いだけで見慣れぬ人間が入った事で一瞬目をそちらに向けた。その程度なのだろうが、緊張しまくっているクリュウはたったそれだけでも逃げ出したくなる衝動に駆られる。だが、そんな弱気な自分を無理やり押しとどめ、踏ん張り、足を進める。

酒が回って豪快に騒ぐハンター達や興味や好奇から見詰めてくるハンター達の視線を感じながら、クリュウは奥へと向かってゆっくりと進む。本当は早足どころか走って駆け抜けたかったが、そんな勇気はない。
「邪魔だ坊主ッ」
大柄な屈強そうな男がクリュウの肩を掴んで道を無理やり通る。装備はどれも自分よりも優れたもので、実力のあるハンターだとすぐにわかる。クリュウは尻餅を着いてしまったが、何も言い返す事ができず無言で立ち上がり歩き出す。
「何だガキ？　そりゃクックシリーズじゃねぇか。そんなんでドンドルマへ来るとはいい度胸してるなッ」
酒が回っているハンターに絡まれたが、とりあえず当たり障りないように愛想笑いでスルー。そんな感じの事を何回か繰り返しながらテーブル群を通り抜けると、ようやく目的の受付に到達する。ここでハンターは様々な依頼や情報を手に入れるのだ。
すると、そんな受付にはこの荒々しいというか荒れ狂った環境にはあまりにも不釣合な美女が待っていた。
長く美しい茶髪にルビーのように輝く真っ赤な瞳が特徴の美女は、かわいらしいハンターズギルドの受付嬢の制服を身に纏っている。間違いなく、クリュウが今まで出会った女性の中で五本の指に入るような美女だ。
受付嬢は呆然と立っているクリュウに気づくと、優しげに微笑んだ。その輝くような笑顔にクリュウは顔を真っ赤にする。
「あら、新入りのハンターさんですか？　ドンドルマへようこそ」
受付嬢は笑顔でクリュウを出迎える。緊張しながらも、その笑顔に助けられクリュウはカウンターの前へと進む。
「まずは自己紹介ですね。初めまして、私はこのドンドルマのギルド受付嬢をさせていただいている、ライザ・フリーシアと申します。以後お見知りおきを」
受付嬢――ライザはそう言って美しい笑みを浮かべる。その笑顔だけでクリュウはいっぱいいっぱいだったが、冷静な部分ではこの笑

顔は営業スマイルだとわかっており、だとすれば世の中はとても恐ろしい。
「ドンドルマで仕事をなされるのでしょうか？　それならこちらの入会書にご記入をお願いします」
　ハンターというのは基本的には傭兵と同じような職業だ。大規模な猟団などに属さない者は大概はフリーなので、街などで活動する場合はそこにあるハンターズギルド支部に登録する。そうしないとそもそもギルドからの仕事は受けられない。
　これは優秀なハンターを見つけたりする検索、違法な事を行う者がいないかを監視、有能なハンターが今どこにいるかを確認するなど様々な事情があっての事だ。面倒だが、これがギルドのやり方なのであれば、ハンターである以上お上の命令には逆らえない。
　ギルドカードと言われる、非合法なハンターでなければ全員が持つハンターという身分証明のようなもの。ここには今までの討伐記録や得意武器などハンターの成績などの個人情報が示されている。
　普通ならまず規約に署名、エントリーシートの記入、ギルドカードの提示など行いそこのハンターズギルドへ登録。そしてギルドカードの成績を見てランク付けを行い、現在の自分の実力に合った依頼の一覧が提示される。だが、今回彼が来た目的はハンターとしてではない。
「いえ、あの……依頼をお願いしたいんです」
　クリュウの言葉に、ライザは驚いたような表情を浮かべて口に手を当てる。
「驚いた、ハンターさんが依頼をするなんて珍しい」
　そりゃそうだろう。ハンターは基本的に受注する側の人間であり依頼する側ではない。そりゃクリュウ自身重々承知している。
　ライザは驚いた様子を見せたものの、職業柄そういう特異な事も経験しているのだろう。それ以上驚く事はなく事務的に話を進める。
「わかりました。ではご依頼とは如何なものでしょうか？」
　クリュウはシルヴァ密林に現れたフルフルの事とその討伐依頼を話した。もちろん村の近場なので緊急を要する事も伝えた。

ライザはクリュウの話に相槌（あいづち）を打ちながら依頼書を作る。
「なるほど。それではこれは緊急の依頼という事でよろしいでしょうか？」
「はい。なので、できるだけ強いハンターを雇いたいんです」
クリュウの言葉にライザはうなずき、そのような追加情報も依頼書に書き加えていく。そして、そっとペンを置いてすばらしい営業スマイルを浮かべる。
「承（うけたまわ）りしました。それではすぐに掲示板に提示しますね」
「お願いします」
「――だけど、正直ちょっと厳しいわよ？」
それまでの美しい営業スマイルから一転、歳相応の少しあどけなさの残った複雑な笑みがライザの顔に浮かんだ。それまでの敬語も消え、まるで友人かのようなフランクな接し方。クリュウはその突然の変化に驚きながらも、彼女の言う事に首を傾げる。
「厳しいって……どういう事ですか？」
クリュウの問いかけに対し、ライザは困ったような表情のままため息を零す。
「まず場所が遠過ぎるわね。と言ってもドンドルマの指定の狩場の中にはもっと遠い場所もあるからそれに比べれば大した距離ではないけど、それでもやっぱり遠い。それに加え、ハンターズギルドはこの密林を狩場と認定していないからそもそもほとんどのハンターがこんな地名を知らないわね」
確かにその通りだ。辺境の村のさらに辺境にある密林地帯の名前を知っているハンターなどそうそういる訳がない。それはある意味覚悟の上だったが、ライザはさらに困難な点を指摘する。
「そして相手が悪いわね。フルフルはその容姿や生態から嫌っているハンターが多くて、まず受けてくれる人が絶対数で足りないわ」
「……そう、ですよね」
それもある意味では予想通りだ。自分だって余程の事がない限り

そんな不気味な飛竜とは戦いたくはない。
　そして、ライザは最後に「一番の問題はこれ」と言って依頼書のある部分を指さして示した。そこは報酬金額の欄だ。
「この金額はギルドの扱っている正規の依頼の半分以下なのよ。ハンターは死と隣り合わせ仕事だから、それに見合った報酬を得られないと動かない人が多いのよ。そうすると、この金額じゃ相当厳しいわね」
「そ、そんな……ッ！」
　確かにクリュウが村長から受け取った今回の出せる限界報酬金は正直言って少ない。ちょうど先日村の拡張工事を行った事と重なった為財政面はかなり厳しいのだ。
「私もみんなに勧めてみるけど、あんまり期待しないで待っててね」
　そう言ってライザは作成したばかりの依頼書を掲示板に掲示する。すでに無数の依頼書が貼っている掲示板ではその依頼書はやはりあまり目立たない。ただでさえ討伐対象がフルフルな事で見向きもされないのに、その上報酬金の低さは致命傷に等しいだろう。
　ライザは依頼書を貼り終えると再びカウンターに戻り、クリュウに「ごめんね、次のお客さんがいるから」と言って彼を横へ移動させると再び営業スマイル全開で次のハンターを出迎える。
　クリュウは居場所がわからず、とりあえず掲示板の前に移動する。そこで掲示板を覗きに来るハンター一人一人にフルフル討伐の依頼を受けてくれるよう頼むが、そのどれもがお断りの返事。丁寧に返されたり遠回しに断れる事もあれば逆ギレされて突き飛ばされる事もあった。それでも、クリュウは必死になって頼み込み続ける。
　何時間も粘って頼み続けたが、引き受けてくれるハンターは一人もいなかった。
　とうとう外の色は茜色を通り過ぎて漆黒に染まり、街灯の明かりが眠らぬ街を照らしだす。
　狩りを終えたチームなどが次々と酒場に現れ、酒場の賑わいは増す。そんな帰って来たばかりのハンター達に対してもクリュウは必死に頼み続けたが、結局誰一人受注してくれるハンターは現れなかっ

た。
　周りが賑やかな喧騒に包まれる中、クリュウは一人空いている隅っこの席に座り、がっくりと項垂れていた。その背中は誰が見ても悲痛に満ち、声を掛ける事すら憚られる。
　頬が熱い。さっきしつこいと言われて酒が回った男に殴られた時のだ。痛いはずなのに、痛みすら感じない。感じるのは熱だけ。それだけ、彼は疲労困憊だった。元々イージス村からドンドルマに来る長旅だけでも疲れていたのに、今日一日中頼み込みまくった上に精神的なダメージはかなりのもの。心身共に限界だった。
　瞳は絶望一色に染まり、濁った瞳で意味もなく地面を見詰める。テーブルにマグカップが置かれる音で顔を上げると、そこには湯気を上らせておいしそうな匂いを辺りに漂わせるホットミルクがあった。さらに顔を上げると、優しく微笑むライザの姿があった。
「ライザさん……」
「クリュウ君、これでも飲んで元気出して」
　一日中酒場で頼み込み続けて時には騒動にもなれば自然と名前も覚えられてしまったらしい。嬉しいような悲しいような……
「でも、僕何も頼んでませんけど……」
「押し売りなんかしないわよ。これは私のおごりね」
　そう言ってライザはウインクしてテーブルから離れる。クリュウが慌てて「あ、ありがとうございますッ」とお礼を言うと、ライザは振り返り優しげな笑みを浮かべて親指を突き立てると、奥へと消える
――今の笑顔は営業スマイルではなく、きっと彼女の本当の笑みだと想う。
　ここに来て初めて優しくされ、クリュウは泣きそうになった。それをホットミルクを飲んで無理やり押さえる。ホットミルクの温かさと甘さが、少しだけ心に希望をもたらせた気がした。
　ホットミルクを飲み干し、クリュウは再び頼み込もうと立ち上がった時だった。
――酒場全体を支配していた喧騒が、一瞬で静寂に変わった。
　何事かと思って見回すと、酒場に一人のハンターが入って来るのが

見えた。
　それはまるで、戦場に現れた戦女神。年の頃は自分と同じくらいか。流れるような漆黒の美しい黒髪に同じく漆黒の瞳をした少女はどこか神秘的で、表情にはまるで感情というものがないかのように無表情。柔らかそうな唇は固く閉じられ、真っ白な肌と合わさってまるで人形のようなイメージを感じらせられる。
　ミステリアス。そんな言語がよく似合う。漆黒の右目に対して同じく黒い眼帯を左目にしている所などが、そのイメージをより膨らませ、妖艶に映す。
　まさに美少女という言葉がそのまま当てはまるような少女。その外見だけで皆が口を閉じて驚くのはわかる。だが同時に、ハンター達は彼女の着ている防具を黙って見詰めている。
　それはどこか異国の鎧のような防具。額当て、胸当て、腰回りは赤褐色の鱗や甲殻で作られた装甲が施され、漆黒のガントレット。肩周りはくすんだ白い布で隠され、足には股の部分が開かれた特徴的な黒いズボン。全体的に要所だけを集中的に守った、機動型の防具だと見てわかる。
　外見は確かに珍しい様式の鎧ではあるが、真に彼らが驚いているのはその防具に使われている素材だ。その素材は、ハンターなら誰もが知っているある龍のもの。
　古龍と呼ばれる何千年、何万年と生きる特殊な龍が存在する。一般的に飛竜種、牙獣種などに区別ができず、詳しい生態が不明、その強力さから天災の一つに数えられる程、神が作りしこの世界最強の生物。それらを総称して古龍と呼ぶ。
　その中でまるで山のように巨大な、最古の古龍とも言われる超弩級のモンスター。
　名を老山龍ラオシャンロン。山という文字が入るように、実際その大きさは一つの山に匹敵し、一歩動くだけで周囲には地震が置き、どんな強靭な要塞も簡単に踏み潰すモンスター。現在までにこの超弩級モンスターの迎撃に成功した例は伝説の中でしか語り継がれていない程だ。

ラオシャンロンは数百年単位で一定のルートを通るモンスターで、その規模や間隔から巨大地震と同じような災害として過去の歴史が物語っている。人類はその龍と何度か戦う事はあったが、いずれも奮闘むなしく踏み滅ぼされてきた。どんな防御施設も、どんな対古龍兵器を使っても、ラオシャンロンは本能のままに歩み続け、その脚元にある小さな生き物の都市など気にもしない。

そんな天災に等しいモンスター、ラオシャンロンから剥ぎ取れる素材を中心にさらに貴重な素材を多数使い、莫大な金額を投入してようやく完成するのが少女の纏う凛シリーズ。レア中のレアで、強力な防具だ。

誰もが知り、憧れる防具を身に纏った少女はそんな好奇や羨望のまなざしに一切目もくれず、淡々と進む。その背中に下げられているのは太刀と呼ばれる、大剣のように長く、片手剣のように細い武器。大剣の攻撃力と片手剣の機動力を合わせ、ガードを捨てた超攻撃型の武器だ。

燃え盛る炎のように真っ赤なその武器は飛竜刀【紅葉】。火竜の素材と火山の火口付近でしか採れない特殊な鉱石、紅蓮石を使って作られた強力な太刀だ。これもレアな武器ではあるが、やはり凛シリーズと比べると少し霞んでしまう。

少女は無言で悠々と歩み続け、カウンターへ向かう。その先にはライザがおり、彼女の姿を見ると嬉しそうに微笑んだ。

「あら、久しぶりじゃない。今までどこに行ってたのよぉ」

まるで友人を迎えるかのような、営業スマイルではない心からの笑顔。察するに、二人は知り合いらしい。まぁ、職業柄納得はできるが。

少女は笑顔で迎えるライザに一切目を合わせず、無言でギルドカードを提示する。それを見てライザは苦笑を浮かべる。

「はいはい。相変わらず返事はないわね……っと。あら、飛竜の討伐数はあんまり変わってないわね。どうせまた護衛依頼ばっかり受けて雑魚相手にしか刀を振るってなかったんでしょ」

ライザはうりうりと少女の柔らかそうな雪のように白い頬を指先で押す。少女は喜ぶ事も嫌がる事もせず無言でそれを受ける。

「んもう、もう少し反応してよぉ」
ライザはつまんないと言いたげに子供っぽく頬を膨らませ、ようやく少女を解放する。その間も皆の視線は依然彼女に注がれている。
誰もがそちらの方ばかり見ていて、これでは声を掛ける事も難しい。どうやら今日はもう頼んでも無理そうな雰囲気だ。
仕方がない、明日また出直そう。クリュウは諦めてカウンターの方へ背を向ける。
「あ、そうだ。ねぇ帰って来たばかりで悪いんだけどこの依頼受けてくれないかしら？　相手が相手な上にちょっと報酬金が少なくて誰も受けてくれないのよ。緊急の依頼なんだけど、どうかしら？」
背を向けた所でライザがそう切り出した。おそらく自分が頼み込んだ依頼を受けてくれるよう説得しているのだろう。少女は無言でそれを聞いていうが、正直クリュウは半ば諦めていた。ハンターはお金で動くのだ。事実、金儲けでハンターをしている者も少なくはなく、今回の持って来た報酬金はそんなハンター達を満足させられる程にはまるで満たない。
クリュウは最悪、村の為にこの武具全てを売り払ってでもお金を作ろう。そう決めていた。
だから――
「……引き受ける」
少女の言葉に自分の耳を疑っても仕方が無いだろう。
「ほ、本当ッ!?」
クリュウは我が耳を疑い、驚きながら少女に駆け寄る。近寄ってみて改めて少女の美しさに驚く。きれいに整った顔は本当に人形のようで、ミステリアスな雰囲気も合わさってまるでどこかの国のお姫様のよう。だからこそ彼女の纏うのがドレスやワンピースではなく無骨な鎧と剣、そして左目を隠す眼帯が異様に感じてしまう。しかしそれが彼女の美しさをより引き立てている。
クリュウの問いかけに対し少女はゆっくりとうなずくと、掲示板の方へと向かい、そこからクリュウの依頼書を取って戻って来る。カウンターに置き、署名欄にすぐに名前を書き込んだ。しかし、そこで彼

女の書く文字が大陸共通語とは異なる事に気づく。
大陸共通語は文字通りこの大陸での共通の言語だ。昔は国や地域で別の言語を話していたのを統一した言語で、今でもいくつかの国や地域では母国語を残しつつ、同時に共通語を使っており、この大陸に住まう時点で大陸共通語は必須と言えよう。
その大陸共通語の文字は言うなれば記号のような形の文字だ。複数の異なる文字を組み合わせる事で一つの単語になるのが大陸共通語。しかし、少女の書く文字はまるでその文字一つで意味を持つかのような象形文字。全く異なる言語だった。
「それって、何語？」
クリュウの問い掛けに、少女は小さく「……東方語」と答えた。
東方とは大陸東部の一部の地域を示すもので、そこに住む人々は中央部や西部とは異なる風習や文化を持つ。元々は東方大陸と呼ばれる別の大陸の人々がこの大陸に訪れ、そこで帰化。東方文化を守りつつ西方文化などを取り入れた特異な文化を独自に発展させている。
「あぁ、この子は東方大陸出身なのよ。と言っても小さな頃にこっちに移住して来たみたいだから、事実上はこっちの人間ね」
ライザの補足説明にクリュウは少し驚いた。一般的な東方人は帰化した東方大陸の末裔を言うのだが、中には東方大陸から実際にこちらへと移り住む者もいる。少女は後者だった。
「これ、何て書いてあるの？」
クリュウが彼女の名前であろう文字の羅列を指さしながら問うと、少女はこちらに片目を向け、静かに答える。
「……私の名前」
「名前、何て言うの？」
クリュウが問うと、少女はゆっくりとこちらへと向き直る。ジッと隻眼でクリュウを見詰めながら、表情を変えずにその柔らかな唇を開く。
「……そう」
「え？」
「……桜（サクラ）春風（ハルカゼ）。それが私の名前よ」

少女――サクラは静かに名乗った。凛とした声で読まれる名前の発音もやはり東方語だ。しかし、よくわからなくてもクリュウにはその名前がすごくきれいだと感じた。彼女にピッタリ、そんな感じだ。

そんな事を思いながら、ふと頭の中に浮かんだ疑問。何となくだが、彼女の名前に聞き覚えがあったのだ。

昔、ずっと昔の事。子供の頃に、そんな名前の娘がいた気がするが、ハッキリとは思い出せない。

そんな考え込む彼をジッと見詰めていたサクラは小さくフッと口元に笑みを浮かべた。突然の彼女の表情の変化に驚く彼の手を、サクラはそっと手に取る。

「……久しぶりねクリュウ。何年ぶりかしら」

名乗ってもいないのに自分の名前を呼ばれ、クリュウは驚く。しかもその口調から彼女は自分の事をよく知っているようだ。

驚く彼の反応を見て、サクラはほんの少しだけ表情を不満げに翳（かげ）らせる。

「……覚えてない？　私の事」

「いや、その、ごめん……」

「……謝る事じゃない。子供の頃の話だから。ただ、クリュウには私を思い出してほしい。あなたは、今も昔も私にとっては大切な人だから」

そう言ってサクラはクリュウの手を優しく握り締める。だが、心なしかその握る力が強くなる。それだけで、彼女の想いが伝わってくるかのよう。クリュウは慌てて必死になって思い出そうとするが、人間の検索機能というのはあまり優れている訳ではない。

必死になって思い出そうとする彼の姿を見て、サクラはその無表情の唇にわずかな笑みを浮かべた。

「……変わってない。あの頃と」

「あの頃？」

「……昔、イージス村によく訪れていた商隊を覚えてる？」

サクラの問い掛けに、クリュウは少し考えてから小さくうなずいた。

子供の頃、イージス村によく訪れる結構大きな商隊がいた。気さくな隊長と笑顔の素敵な奥さんとの隊長夫婦が優しかった事をよく覚えている。そこまで思い出した時、一人の少女の姿が思い浮かんだ。

商隊の隊長夫婦の娘で、よく商隊が村を訪れた際にエレナと一緒に遊んだ記憶がある。あまり話さず笑わない子で、いつもぬいぐるみを抱えていた。強引なエレナに引っ張り回され、ケンカになり、その仲裁に入った自分が「何でこいつを庇うのよッ」と怒られ、そんな自分を小さく笑みを浮かべながら見ていた――確か、その子の名前は……

「……もしかして、サクラなの？」

――記憶が、繋がった。

クリュウの問いかけにサクラは口元に嬉しそうに小さな笑みを浮かべると、静かにうなずいた。

目の前にいたのは、間違いなく昔よく遊んだ昔なじみの少女――サクラだった。

「ひ、久しぶり」

どう話し掛けたらわからず、とりあえず差し支えないあいさつをすると、サクラも「……久しぶり」と小さく返した。そんな二人のやり取りを見ていたライザが驚いたような声を上げる。

「あら、二人って知り合いだったんだ」

「知り合いと言いますか……昔なじみです」

「――へぇ、《隻眼の人形姫》と呼ばれているサクラがこんな新人君とねぇ」

感慨深げにうなずきなら言うライザの言葉に、クリュウは小さく首を傾げる。

「隻眼の人形姫？」

「あら、知らないの？」

ライザは驚いたような顔をするが、残念ながらイージス村みたいな辺境の村に入る情報なんてたかが知れている。ドンドルマにいた時も主に寮暮らしだったの世間の情報には疎い。そんな何も知らないクリュウに、ライザはニッコリと微笑みながら教えてくれた。

「隻眼の人形姫ってのはこの子の二つ名よ。ほら、この子かわいいけ

どいつも片目を眼帯で隠してるし、こんな風に無愛想だからそんな名前が付いたのね」
「そういえば、どうしたのその左目――」
「……こっち」
クリュウが言い終わらないうちにサクラはクリュウの手を掴み、カウンターに敷かれた何かのメニュー表をよく見もせずに一ヶ所に指を落とす。
「……ここ」
ライザはそんなサクラの様子を嬉しそうに笑いながら見詰め、そっとカギを渡す。サクラはそれを受け取ると状況がわからず困惑している彼の腕を引っ張りながら歩き出す。後ろからはライザが「ごゆっくり～♪」と意味ありげな笑みで見送ってくれた。
二人は酒場の中にある階段を登り始める。
ドンドルマのギルド本部は主に一階と一部地下部分を酒場とし、中層は宿泊施設となっている。ギルドの中枢があるのはそのさらに上にある上層部だ。
サクラは何も言わず無言で階段を登り続ける。上に行けば行く程に内装が豪華になっていくのがわかった。どうやら上に行けば行く程ランクが上がるのだろう。最初の簡素な通路に対して、今さっき通ったのはずいぶんと内装が施され、絨毯も敷かれていた。
そのうちサクラは指定の階に着いたのだろう。階段から通路へと向きを変え、クリュウもそれに続く。
しばらく歩き続けると、ようやくゴールとなった。そこは角部屋らしく、通路の一番奥の部屋だった。サクラは相変わらず無言で鍵穴にカギを差し込んで開けると、クリュウの腕をキープしたまま中へと入る。
中はずいぶんと酒場の簡素な作りとは違い内装もしっかりと施されており、かなり豪華な仕上がりとなっていた。
「……そこ、座って」
解放され、サクラが指さした椅子に腰掛ける。椅子と言っても酒場にあったような木製の簡素なものではなく、何かの動物の皮を使った

柔らかな仕上がりのソファだ。素直に座ってみれば、その柔らかさ驚かされる。
「ここは？」
「……さっき私が借りた部屋」
サクラは特に何も言わずに室内の備品をチェックしている。その動きはずいぶんと慣れており、彼女がこういう宿泊施設を使って生活している事が何となくわかった。
しかし、それにしてもこの部屋は豪華だ。自分のような下っ端のハンターは最初に通った階の簡素な安宿がお似合いだというのに、サクラはこんな豪華な部屋を使っている。そう思うと、武具の時点で何となくはわかっていた力量の差を感じてしまい、思わず苦笑が浮かんでしまう。
何気なしにみたルームサービス一覧表の値段もまたお高い事。自分はおそらくこんな部屋を普通に使えるようになれるのは相当先だろうと理解する。
そんな驚きのあまり言葉を失って物珍しげに部屋を見回しているクリュウを見て、サクラは小さな、本当に小さな笑みを浮かべると部屋の隅に置いてある金属製の箱から一本のワインを取り出した。箱の中がちらりと見えたが、中には氷結晶が敷き詰められていた。氷結晶とはその名の通り氷の結晶で常温でも溶けないという不思議な性質を持つ。その為、ハンターの武具の氷系の素材として重宝される上にこういう冷蔵物の保管に使われている。
サクラはワインを持ったまま食器棚からグラフを二つ取り出し、クリュウの対面の席に腰掛ける。しばし部屋を見回していたクリュウはそこでようやく実に十年ぶりぐらいに会う友人と対面した。
「……飲む？」
グラスをこちらに渡しながら問うサクラ。
「え？　あ、僕アルコールはちょっと……」
「……大丈夫。これ、グレープジュースだから」
そう言ってサクラはおかしそうにクスクスと小さく笑う。その笑顔は歳相応でとてもきれいだが、昔の彼女の面影はしっかりと残され

ていた。
「あ、じゃあもらうよ」
サクラは一つうなずくと栓抜きを使ってコルクを開け、二つのグラスそれぞれにグレープジュースを注ぎ入れる。そして、そのうちの一方をクリュウに渡した。
「ありがとう」
クリュウはそれを受け取ると、一口それを口に含んでみる。それに続いてサクラもグラスを傾ける。
口に含んだ瞬間、口の中いっぱいにブドウの香りが広がり、程よい甘さが舌をくすぐり、飲み干した瞬間口の中から喉の奥にかけて清涼感が広がる。こんなおいしいグレープジュースを飲んだのは生まれて初めてだった。
「これ、すっごくおいしいよ」
「……ええ、本当ね。とてもおいしいわ」
「え？　いつも飲んでる訳じゃないの？」
驚くクリュウの問い掛けに、サクラは小さく口元に苦笑を浮かべる。
「……こんな高い部屋、私だってそうそう来ないわ」
「え？　じゃあ何でわざわざ……」
「……クリュウがいたから」
「え……」
言葉を失うクリュウを一瞥し、サクラはそっとグラスを傾ける。
細く絞られた右目がグラスを見詰めていた。だが、その反対側の左目には覆い隠すように黒い眼帯がされている。自分の記憶の中の彼女にはない、決定的な違い。
「……どうして、この部屋に入ったか、わかる？」
突然そう問われて驚くクリュウだったが、応えがわからず素直に首を横に振る。そんな彼を見て、サクラはガントレットを外した。現れたのは白く細い華奢な手。本当に、その小さな手で剣を握り、数多のモンスターと戦ってきたのか、疑ってしまう程にその手も腕も細い。
「……この左目が、気になる？」

そう言ってサクラは白く解い指で眼帯を指差す。気にならないと言えばウソになるが、触れてはいけないという気もした。だから、クリュウは気にならないと装う。
「別に」
だが、そんな彼を見てサクラは小さく口元に笑みを浮かべた。
「……そう、クリュウは昔と変わらない。優しい男の子」
「そうだったっけ？　そんな子供の頃の自分なんてよく覚えてないよ」
「……私は覚えてる。だって、いつも見てたから」
視線を逸らさず、真っ直ぐにそう言うサクラ。その言葉にクリュウは照れたように頬を赤らめて苦笑を浮かべる。女の子にこんな風に言われる経験があまりないピュアな彼らしい反応だ。
サクラは、特にそれ以上その話を掘り下げる事はせず、ふと気になったという感じで問いかけてくる。
「……私の事は、覚えてる？」
「そりゃ、一応ね。さっき全部思い出したからさ」
「……そう、どんな子だった？」
サクラの問い掛けにクリュウは自分の中の過去の彼女の姿を思い出す。そして抱いたイメージをそのまま言ってみる。
「あんまりしゃべらなくて、笑わなくて、いつも何を考えているのかわからない女の子」
言ってからクリュウは慌てて口を塞いだ。思っていた彼女の印象を包み隠さず言ったが、これでは完全に悪口以外の何ものでもない。
慌てて弁明しようとしたクリュウだったが、サクラは特に気にした様子もなくグラスを傾ける。
「ご、ごめん……」
「……構わない。そういう子だったって事は、自分が一番知ってるから」
サクラは無表情でそう語る。怒っているのか、悲しんでいるのか、本当に気にしていないのか。その表情からはそれらの感情のいずれも知る事はできない。もしかしたら、怒っているのかもとクリュウは

慌てて付け足す。
「あ、あともう一つッ！」
「……何？」
「――すごくかわいい子だったッ」
言ってからクリュウは窓から飛び降りたくなった。上って来た階段の多さからたぶん飛び降りればクック装備の自分なら確実に死ねるだろう。
テンパっていたとはいえ、今の自分の発言はあまりにも恥ずか過ぎる。これではまるでプロポーズをしているみたいではないか。
クリュウが顔を真っ赤にしてあたふたとしていると、サクラはグラスをコツンとテーブルに置く。その小さな音でさえクリュウはビクリと震える。
サクラはジッと漆黒の隻眼でクリュウを見詰める。その瞳にはどのような感情が宿っているのか、察する事はできない。怒っていいるのか。それなら、どんな反応をしてくるのか。エレナやラミィなら武力行使。フィーリアやレミィなら会話停止。なら、サクラなら――
――フッと、サクラは口元に小さな笑みを浮かべた。
見ると、真っ白な肌をしている彼女の頬がほんのりと赤らんでいるように見える。表情も今までよりも少し柔らかく、雰囲気も優しげだ。
サクラはクリュウの言葉を噛み締めるかのようにしばしの間を置き、
「……ありがとう、クリュウ」
そう言って、サクラは微笑んだ。それまでの口元だけではなく、顔全体を使った本当の笑顔。その美しくかわいげな笑みに、クリュウはドキッとする。改めて、しばらく会わないうちにすっかり美少女に変貌した彼女の魅力に驚かされる。
サクラは無言で半分程になった自分のグラスとクリュウの空になったグラスにジュースを注ぎ入れる。
「あ、ありがとう」
クリュウはぎこちなく礼を言うと、それを飲む。そんなクリュウの

姿をじっと見詰め、サクラはポツリを零す。
「……クリュウも、かっこいい子だった」
思わずジュースを噴きかける。ここで噴き出さずに済んだのは奇跡に等しい。自分の唇の鉄壁さにこの時程感謝した事はない。
「そ、そうかな？」
平静を装いながら言うと、サクラはこくりとうなずく。
「……ええ、今も、かっこいい」
真正面からそう言われ、クリュウはカァッと顔を真っ赤に染める。サクラのようなかわいい子に「かっこいい」などと言われれば当然の反応だ。
「あ、ありがとう……」
クリュウは恥ずかしそうに微笑むと、ジュースを飲む。そんな彼を一瞥し、サクラは一口ジュースを口の中に含み、そっと片目を閉じる。
「……でも驚いた。こんな形でまたクリュウに会えるなんて」
「そりゃ僕も驚いたさ。それにサクラがハンターになっていた事も。てっきり僕はどっかの都で優雅な生活をして、幸せにしてるかと思ってたよ」
サクラは昔からきれいな子だった。その容姿や商人の娘という事からそういう未来が一番想像しやすい。ましてや、ハンターなどのその対極に位置していると言っても過言ではない。
サクラはゆっくりと瞳を開き、眇める。その漆黒の瞳は、どこかここではない遠くを見詰めているかのよう。
「……そうね。たぶん、お父さんとお母さんはそう願っていたかもしれない」
「だったらどうして……」
クリュウの問い掛けに、サクラはゆっくりと瞳を閉じる。伏せられた顔は表情が見えないが、一瞬見えた彼女の唇が震えているのをクリュウは見逃さなかった。
「サクラ？」
「――二人とも、死んでしまったから」
「え……」

サクラの口から語られたのは、あまりにも信じられない言葉だった。
ゆっくりと瞳を開き、驚きのあまり言葉を失うクリュウを一瞥し、サクラは悲しげに揺れる瞳で遠くを見詰める。その瞳に映るのは、きっと悲痛な光景だろう。
「……いつもと同じ、平凡な旅の途中だった。皆防寒用にマフモフ装備を纏い、ポポに竜車を引かせて、いつもと変わらぬ次の街へ向かっていた時――奴は突如として凶悪な鳴き声と共に振って来て、商隊を全滅させた。それだけ」
淡々と語るその内容の中で、一体どれだけの人が亡くなったのか。おそらく、彼女の両親もその最中に亡くなったのだろう。子供の頃の記憶だけとはいえ、知らない人ではない人の死にクリュウの表情も暗くなる。
サクラはそっと、黒髪の下の眼帯を指差す。
「……この目も、その時に失ったわ。ポポは食い殺され、竜車は見るも無残に破壊され、逃げ惑う人は一人残らず殺された。お父さんとお母さんが死ぬ瞬間も、この残された右目に焼き付いている。それはもう、地獄という言葉以外では言い表せない程、酷い景色だったわ」
淡々と語るのは感情を押し殺しているからだろう。事実、それを語る唇は様々な想いが混ざり合い、震えている。
「……運良く、私は壊れた竜車の残骸に隠れていたおかげで助かった。そこから救助隊が来るまでの三日間、私はした事もないサバイバル生活を送って何とか救助してもらえた――でも、本当の地獄はこれからだった」
サクラの唇が、苦しげに噛み締められる。
「……商隊が全滅した事で失った荷物や資材は莫大で、亡くなった商隊の人の遺族から訴訟を起こされて多額の慰謝料が請求された。保険じゃ全然まかない切れなくて、家や店舗など売れる物は全部売り払ったけど、残ったのは莫大な借金だけだった。莫大な借金を抱えた身じゃまともな職業に就職できないし、そもそも子供の私が働けるような場所はなかった。結局、私はハンターになった」

そう言って、サクラはうつむいた。黒い前髪に隠されて表情は見えないが、震える唇から一体どれだけの苦労を彼女がしてきたのか、それは想像を絶するだろう。人が簡単に想像や予想をしていいものでもない。それだけ、辛い道を通ってきたのだ。

無言で肩を震わせ続けるサクラを苦しげに見詰めながら、クリュウは静かに問う。

「それで、借金はまだ残ってるの？」

「……返済は全て終わってるわ」

「だったら何でまだハンターなんてしてるの？　借金がない今なら、もっとまともな職種に就く事だってできるでしょ？　それなのに何で……もしかして、おじさん達を殺したモンスターに復讐しようとか思ってるの？」

クリュウの恐る恐るという感じの問い掛けに、サクラはしかししっかりとうなずいた。

「……そうね。確かに復讐心がないと言えばウソになる。私はあのモンスターを許す事はできない。でも、恐怖のあまり子供だったから奴の姿をまともには覚えていないの。ただ、恐ろしい怒号を響かせながら、次々に殺戮していった。それだけしか、覚えていない。だから、あいつが結局何だったのかは、いまだにわからない――でも、もしもまた会う機会があれば、その時は一切の容赦なく殺すわ」

全くの迷いもない真っ直ぐで純粋な「殺す」という言葉に、クリュウの背筋が凍りつく。あの優しかったサクラからそんな言葉が出るなんて、それ程までに彼女は自分の人生を狂わせたそのモンスターを恨み、憎み、殺したいを願っているのだろう。

ただの女の子が、そんな壮絶な復讐心を抱く。信じられないし、信じたくもなかった。

自然と、クリュウの表情も曇る。そんな彼の悲痛そうな顔を見てサクラも表情を曇らせる。だが次の瞬間、彼女の隻眼に明確な意志の光が輝いた。

「――でも、それとは別にもう一つ、私にはする事がある」

サクラの言葉にうつむいていた顔を上げ、クリュウは首を傾げる。

「する事？」
　サクラは小さく首肯する。
「……決めたの。私は、私のように苦しむ人をこれ以上増やしたくない。増えたとしても、私が助ける。そう、決めた。英雄気取りと想うならそれでもいい。だけど、私はこれを貫く。きっとどこかに、私の助けを求めている人がいる。その中の、たった一人でも助ける事ができれば、私はいい。ただの自己満足かもしれない。でも、それで誰かの命を助けられるなら、私はそれで構わない。それが、私が両親と片目を犠牲にして手に入れた――夢だから」
　そう真剣に語るサクラの片方しかない瞳は真剣なものだった。きっと心の底からそう思い、信じ、貫いているのだろう。本当に、心の底から……
「……クリュウも、英雄気取りって思う？」
　サクラの言葉にクリュウは言葉を失った。きっと、今までもこうした話をして、そう言われてきたのだろう。特に彼女は女だ。この世界は力が全てなので大多数が男性で女性のハンターは極わずかだ。だからこそ女性のハンターは迫害される事が多く、英雄クラスのハンターになっても嫌われたりする事もある。そんな世界なのだ。
　彼女もまたハンターとして生きてきてそういう辛い目に遭ってきたのだろう。片方しかない瞳は質問に対しあまり積極的ではない。だが――
「そんな事ないよ。僕もそんなハンターになってみたい」
　クリュウの言葉に伏せていたサクラが顔を上げ、その隻眼を大きく見開く。そんな彼女に、クリュウは言葉を続ける。
「サクラの夢はすごくて、憧れを感じる。周りから何を言われても、自分がこうだと決めた事なら、それを胸に突き進むだけだよ。それに、サクラならきっとできる。そんな感じがするんだ。根拠なんかないけどさ」
　照れたように笑うクリュウに、サクラは大きく見開いた右目をゆっくりと閉じ、柔らかな曲線を描く。口元はそっと緩み、それは笑顔になる。

「……やっぱり、クリュウは優しい子。昔と変わらない、私にとっての王子様」
「そんな事ないよ。それに王子って何だよ」
クリュウは頬を赤らめながら照れ隠しのようにジュースを飲む。そんな彼の姿を見ながら小さくほほえみ、サクラもそっとグラスを傾ける。
照れながらジュースを飲む彼の姿を、サクラはジッと見詰める。その頬はわずかだが嬉しそうに綻んでいる。
久しぶりにクリュウと会えた事が嬉しくて仕方が無いのだろう。彼女にとって、幼少期を一緒に過ごしたクリュウは特別な存在だ。あの頃の気持ちは、今も変わらないし、きっと、もっと……
「……クリュウ、好きよ」
突然のサクラの発言にクリュウは飲んでいたジュースを吹き出しそうになるのを何とか堪える。今日一日で一体何回吹き出しそうになった事か。
「えッ!? いや、それはどういう……ッ」
テンパるクリュウはあたふたとするが、そんなクリュウを見てサクラはおかしそうにクスクスと笑う。
「……クリュウ、かわいい」
「か、かわいいって……ッ。さ、サクラ僕をからかったのッ!?」
「……さぁ?」
小さな笑みを浮かべてはぐらかすサクラに頬を赤らめたままのクリュウは呆然とするが、すぐに「からかうなんてひどいよッ」と腕を組んでそっぽを向く。そんな彼の子供っぽい仕草を見てサクラは小さくおかしそうに笑う。
サクラはクリュウを少しだけからかった後、「……それじゃ、本題に入るわ。クリュウ、詳細な状況説明して」と真剣な表情になると本題に入る。クリュウはそんなサクラの切り替えの速さに一瞬呆けたが、すぐに一つうなずくと知っている限りの情報を話した。クリュウが話している間、サクラは一言もしゃべらずに無言で聞き手に徹していた。

「……クリュウは、フルフルと戦った経験は？」
話が一段落した所でようやく口を開いたサクラはまずそれだった。フルフルとはどういうモンスターなのか、詳しく知っているかという問い掛けだ。だが、残念ながらクリュウはフルフルの討伐経験はない。知っている事は全て知識としての情報だけだ。
クリュウが力なく首を横に振ると、サクラは静かに「……そう」とだけつぶやいた。別に責めている訳でも呆れている訳でもない。ただ、事実確認をした程度の認識なのだろう。
「……フルフルは確かに厄介な飛竜。普通の飛竜とはまるで異なる戦い方をするから、苦手意識を持つ人は大勢いるし、事実イャンクックなんかよりも強いわ」
「やっぱり、そうだよね」
「……でも、討伐数は少ないとはいえ討伐経験はある。それに、この程度の相手なら何の問題もないわ――こんなの、ラオシャンロン迎撃戦に比べればマシ」
何を思い出したのか、悲痛そうな表情を浮かべながらそう言うと、サクラはキュッと唇を噛み締める。その唇が少し揺れている事に、クリュウは気づく。
「……何か、あったの？　カルナス防衛戦に、サクラも参加してたんでしょ？」
クリュウの問いかけに、サクラは静かにうなずいた。
カルナスとは大陸西南部に位置する自由貿易都市で、海に面している事から海路が盛んで比較的大きな街だった。
どこにでもある平和な都市。だが一年半前、その街は一瞬で瓦礫だらけの都市の墓場になった。
老山龍ラオシャンロンがカルナスに迫り、カルナスは都市存亡の一大決戦として付近のハンターを総動員させ、即席の防衛施設や防御陣地を築いて街へ迫り来るラオシャンロンに挑んだ。しかし即席の防衛システムや集まったハンター達の努力も空しくラオシャンロンの歩みを止める事はできず――カルナスは壊滅した。
唯一の救いは事前に住民全員に避難勧告が流されていたおかげで

ほとんど犠牲者がなかった事。ハンターもラオシャンロンの桁外れな大きさやその圧倒的な生命力を前にして逃げ出した者も多く、犠牲者は少なく済んだ。
　カルナス防衛戦。今現在最も新しい古龍による被害であり、現在もカルナスは復興の最中だ。
　ドンドルマのハンター養成学校に在学中だったクリュウ。当時街全体が震撼するような大災害として知れ渡り、クリュウ自身愕然とした。
「サクラも、その戦いにいたんだよね？」
「……ええ。私はその当時単身で防衛戦に参加。即席の四人一隊のチームを形成して挑んだわ。即席とはいえいくつか言葉を交わした、仲間。私達の隊は最終防衛線まで粘った数少ないチームの一つだった――だから、見てしまったの」
　サクラは片方しかない瞳を閉じ、その時の事を思い出す。それだけでも全身に悪寒が走り、悔しげに唇と拳が震える――それはまさに、地獄絵図だった。
「……最終防衛線も突破され、ラオシャンロンは街を襲った。と言っても、ラオシャンロンにしてみればただ通り過ぎただけ。それだけで、その後には何も残らなかった。想像できる？　さっきまであった建物が、街が、人々の想い出が、跡形もなく崩れていく光景を」
　それは、想像を絶する光景だったのだろう。唇を震わせながら語る彼女の姿に、クリュウの表情も自然と曇る。一体、彼女はどんな光景を見たのか。それは、現場に居合わせた者にしかわからない、地獄絵図。守ると決めた街が、さっきまであった景色が、跡形もなく崩れる光景。夢であればいいのに、心からそう思ってしまう程、残酷な現実。
「……私は、結局何もできなかった。守ると決めたものは壊され、街は瓦礫の山と化し、作戦は失敗に終わった。私のチームも一人が亡くなった。一人はハンターとして致命傷とも言うべき傷を負い、その後現役を引退したそう。私と同じ軽傷で済んだ一人は、今はどこで何をしているかもわからない。得たものはなく、失ったものはあまりにも大きかった」

サクラはゆっくりと閉じていた隻眼を開くと、自らが纏うラオシャンロンの素材を使って作られた凛シリーズを撫でる。
「……私は決めた。今度こそ、自分が守ると決めたものは絶対に守り抜く。例え腕や足がへし折れようと、血反吐を吐こうと、私の前では誰一人犠牲になんてさせない。その証、戒めとして、私はこれを作った。戦闘中に剥がれた老山龍の鱗や甲殻、角の破片なんかを拾い集め、財産の大半をつぎ込んで……これが、私の決意の表れ」
意志の強い隻眼を輝かせ、サクラは拳を握り締めた。真剣な彼女の表情からは、その決意が本気だという事がわかる。本気で、そんな理想を掲げている。
理想というに文字で片付けるのは簡単だ。だが、その二文字を実際に貫き通すのは並大抵の覚悟ではできない。彼女は、その覚悟をもって己の決めた茨の道を突き進むつもりだ。
――クリュウの知っている子供の頃の気弱なサクラと、今の鋼鉄の意志を貫くサクラはまるで別人のよう。だけど、その自分の決めた事は決して曲げないという頑固な所は、昔と何ら変わっていないようだ。それを知り、クリュウの頬にも自然と笑みが浮かぶ。
そんな彼を、サクラは真剣な表情のまま見詰める。
「……だから、私は困っている人は必ず助ける――クリュウも、助ける」
明確な強い意志を漆黒の隻眼に輝かせながら、迷う事なく断言するサクラ。その力強い瞳にを見て、クリュウはそっと微笑む。
「まさか村を助けてくれるのがサクラになるなんて、世の中わからないね」
「……不安？」
「そ、そんな事ないよッ！　サクラがすごい実力者って事は装備とか見ればわかるし、何より僕はサクラが自分で決めた事は絶対に貫く頑固者って知ってるから。君に任せれば、僕も安心だよ」
「……そう」
「……でも、無理はしないでよね？　さっきの言い方、自分は犠牲になっても構わないみたいだったけど、そんなのは絶対にダメだから。

少なくとも、僕の前でそういう事はなしだよ」
　真剣に語るクリュウの言葉に、サクラはフッと口元に笑みを浮かべる。
「……本当に変わってない。クリュウは優しい」
「エレナには優柔不断だっていつも怒られてるけどね」
「……そう。クリュウがそう言うなら善処するわ」
「うん――村の事、よろしくね」
「……ええ」
　クリュウは立ち上がるとそっとサクラに握手を求めて手を伸ばす。サクラはそれを見て小さく口元に笑みを浮かべて立ち上がると、静かに手を差し出す。
　互いの手はしっかりと結ばれた。それはかつて結ばれていた、でも会わなかった長い間に解けかけていた二人の確かな絆を、村を守る誓いを、心を繋ぐ。
　ずいぶん会わない間に、二人ともすっかり子供ではなくなっていた。互いが、記憶の中のお互いの姿と今の姿を比べ、まだ少し戸惑い、慣れない。
　でも、自然と互いに一緒にいると懐かしくて、ほっとする。それはきっと、解けかけていたとはいえ、二人の絆がずっと結ばれていたからに違いない。
　サクラは手を下ろすと、一歩前に出る。そしてそっと、クリュウの胸に飛び込んだ。
「さ、サクラッ？」
「……クリュウ、また会えて、良かった……本当に、良かった」
　抱きつくサクラの表情は見えないが、その声が小刻みに震えているのを聞いて、クリュウはそっと微笑むと「僕も、すごく嬉しいよ」と言って、優しく彼女を抱き締める。
　記憶の中のサクラとは、やっぱりずいぶん変わっている。ずっと女の子らしくなり、こうして触れ合っているだけでドキドキとしてしまう。元々綺麗な子だとは思っていたが、成長した彼女はもっと綺麗になっていた。

……まぁ、一部昔とほとんど変わってない所もあるが。
「……クリュウ、今すごく失礼な事考えなかった？」
「か、考えてないッ！　断じて全くッ！」
ジト目でじぃ～と見詰めてくるサクラの視線からクリュウは目を逸らす。そういえば、サクラは昔から自分の心を読むのがうまかったなぁと今更ながら重要な事実を思い出したり。
サクラはジト目のままそっとクリュウから離れると、そっと自分の控えめな胸に手と置く。
「……クリュウ、覚えておいて。女の子の価値は局地戦だけで決まる訳じゃない。戦術的勝利を納めても戦略的敗北をしては意味が無い。私は、戦略的勝利を目指すわ」
「うん、よくわからないけど、とりあえずがんばって」
力強く断言するサクラの発言の意味はよくわからないが、とりあえずそう答えておくのが賢明だと思った。
クリュウの言葉だけの応援にサクラは「……私、がんばる」とグッと拳を握り締めて答える。
がんばる方向性をちょっと間違えているような気もしないではないが、気合を入れるサクラを見て、彼女の昔の姿と重なる。
昔の彼女はとても臆病でいつも自分の手を掴んで後ろに隠れていたが、今ではすっかりエレナのように自分の手を引っ張っていく側になったらしい。だが、何事においても全力で立ち向かう所は、あの頃と変わっていないようだ。
自分の夢と信念を貫き続けるサクラ。イージス村の運命は、彼女に託された。
その後、クリュウが別の部屋を取ると言って部屋を出て行こうとすると、サクラは「……今日はここに泊まって」とありがたくも爆弾発言をする。
クリュウは困ったように頬を掻きながら「いや、いいよ。僕は別の部屋を取るからさ」と断るが、サクラは頑なに首を横に振る。
「……クリュウが泊まらないなら、この部屋を取った意味が無い」
サクラはそう言ってクリュウの腕を掴む。心なしか、その瞳がキラ

キラと輝いているように見える。
「……お願い」
ジッと見詰められ、さすがのクリュウも折れた。幸いベッドは二つあったのでとりあえず良しとしよう。
それから色々と大変だった。
急に立ち上がったサクラに「どこに行くの？」と訊けと、サクラはしれっと「……お風呂」と返す。
「そ、そっか。ごめんね」
「……一緒に入る？」
サクラの今日最大の爆弾発言にクリュウは全力で首を横に振って断ると、サクラは無言で奥にあるバスルームへと消えた。
しばらくして出てきたら、サクラは備え付けのガウン姿でのご登場。身体から湯気を足してほんのりと赤いその頬、濡れた長い漆黒の髪を水滴を飛ばしながら靡かせるその姿はクリュウには刺激が強過ぎた。しかもそんな格好でもサクラは眼帯を外さない。
クリュウは慌てて逃げるようにして風呂に入った。
しばらくして風呂から出て来るとサクラは無防備な姿でベッドに寝ていた。同じ部屋の中に男がいるというのにこの無防備さ。信頼されている証拠であると同時にちょっぴり男の子としてのプライドが傷つけられたような気もしないでもないが。
サクラは寝ている時もどうやら眼帯は外さないらしい。その不自然さがまた彼女を魅力的に見せる。
クリュウは顔を赤くしながらとにかく寝ようとベッドの中に潜って無理やり寝る事にした。
明日にでもドンドルマを出て村に戻り、そしてサクラにシルヴァ密林に向かってもらい、そしてフルフルを倒してもらう。
村を救う希望は、サクラのおかげで繋がった。
ずっと村を助けなければという責任感が伸し掛っていたクリュウ。ようやく希望が繋がり安心感を得たのか、今日一日のすさまじい疲労がどっと押し寄せ、クリュウは静かに瞳を閉じて眠りについた。

第３４話　帰って来た懐かしき友

翌朝、クリュウとサクラは酒場で朝食を食べていた。クリュウは比較的安くてボリュームのあるアプトノスの肉と季節の野菜を挟んだサンドイッチを。サクラはそれより少し高いより豊富な具材が入ったカレーを食べている。村から出る時資金を持って来ておいて良かった。と、クリュウは思った。

朝食を終え、ライザに見送ってもらって二人は馬車所に向かった。これを使って港まで行き、そこから船に乗ってイージス村に向かうのだ。

運良くすぐに馬車は手配できた。荷物があるので少し大きめな馬車を選んでおいて良かった。

荷物を運び入れると、馬車は出発した。

ゴトゴトと揺れる馬車の中、幌の入口から見える外の景色を見詰め、サクラはわずかに口元を緩ませた。

「……イージス村、一体何年ぶりかしら」

その言葉に、道具の整理をしていたクリュウは顔を上げる。

「そうだね。もう十年以上も前になるかなぁ」

「……そう、もうそんなになるのね」

「みんなサクラが来たら喜ぶよ。エレナだって大喜びさ」

「……エレナもいるの？」

「うん。今は村で唯一の酒場を営んでるよ。と言っても、ドンドルマなんかに比べると豆粒みたなものだけどね」

「……そう」

そう、サクラがイージス村に来なくなってもう十年以上経っている。その間に村もみんなも大きくなった。もちろんクリュウとエレナ、サクラも……

そっと外の景色を見詰めるサクラはあの頃からきれいな子だったが、今ではさらにその美しさに磨きが掛かった、誰もが認める美少女となっていた。

つい見とれていると、サクラが不思議そうに振り返った。

「……何？」
「え？　あ、いや！　何でもないよ！」
「……そう」
　サクラは不思議そうにじっと隻眼で見詰める。そのきれいな黒色の瞳に見つめられ、クリュウは顔を赤くして慌てて視線を外す。
　サクラはそんな彼を気にした様子もなく再び森を見詰める。
　クリュウはする事もなく積んである積荷を確認する。相手が厄介な飛竜という事もあり、ドンドルマで手に入れた道具は数多い。シビレ罠やトラップツールはもちろん、村では手に入らないような道具を数多く揃えた。これだけあればしばらくの間は道具不足になる事はないだろう。
　イージス村とドンドルマを行き来するにはまず馬車で港まで一日、乗換えで海を定期船で四日。合計片道五日は掛かる長旅だ。
　ハンターという職業柄長旅は慣れてはいるが、片道五日という長旅はそうない。クリュウはすでに五日掛けてドンドルマまで来ていたので、すっかり疲れていた。
「うぅ、いくら馬車や船で移動する事が多いとはいえ、この距離はさすがに疲れるぅ」
「……そう？　私は平気よ」
「そうなの？」
「……ええ、私は基本的にどこかの街や村に腰は据えないから、いつも旅しているもの」
「へぇ、僕はイージス村を拠点に各地に飛んでるけどね」
「……それもいいわね。帰るべき場所があるのは、とても幸せな事なのだから」
　そう言うサクラはどこか悲しそうだった。
　彼女は両親を亡くし、各地を飛び回っているハンター。帰るべき場所なんて存在しないのだろう。それはとても悲しく、辛い事だ。
　クリュウはそんなサクラに屈託のない笑みを向ける。
「だったらさ、サクラもイージス村に来なよ。みんな歓迎してくれるし、あそこは君が帰って来てもいいもう一つの故郷みたいなもので

しょ？」
もう一つの故郷とは言い過ぎかもしれないが、でも彼女はあの村の一員みたいなものだ。いつでも大歓迎だ。
クリュウの言葉にサクラは片方だけの目を少し大きくすると、柔らかく目を細めた。
「……ありがとう」
ただそれだけの言葉だったが、クリュウにはそれが彼女の心が詰まった礼に感じた。
「うん。みんなサクラなら大歓迎さ」
サクラはコクリとうなずく。
あまり話をしないサクラに代わって、クリュウは積極的に話し掛けた。サクラは相槌や短い返事なんかを返してその話をちゃんと聞いてくれた。
十年以上という長い空白を埋めるかのようなその時間は、長い旅のつまらない時間を華やげた。
イージス村までの五日間、クリュウは退屈する事なくサクラと話し続けた。
イージス村の船着場に到着した船から降りると、大勢の村人達が集まっていた。その皆の顔はクリュウの帰りに期待の色に染まっていた。
「クリュウ！」
村人の中から走って来たエレナに気づき、クリュウは手を振る。
「エレナ！」
「こんのアホッ！」
「ごふぁッ!?」
ドボォンッ！
突進の如く駆け寄って来た勢いを使ってエレナは跳び蹴りを放った。それは見事にクリュウに命中。吹き飛ばされたクリュウはそのまま海に落ちた。
「な、何すんだよッ！」
ずぶ濡れで浅橋に上がりながら怒るクリュウ。当然だろう。せっ

かく役目を果たして戻って来た報酬が跳び蹴り＋海へ落下なんてひど過ぎる。
　一方、エレナはそんなクリュウの前で堂々と仁王立ちする。その姿は少女という若さの中にも何か意味不明な勇ましい雰囲気があった。
「遅いのよ。一体どれだけ待たせれば気が済むのよ」
「そんな事言ったって往復だけでも十日は掛かるんだよ!?　これでも早い方だよ！」
「うっ……」
　常に勢いだけで生きているエレナは返す言葉が出て来なかったのか、何も言わずにフンとそっぽを向く。その彼女らしい態度にクリュウは呆れと共に帰って来たんだなぁと安堵も感じた。
「で？　ちゃんとハンターを連れて来たんでしょうね？」
「も、もちろん！　すっごいハンターを連れて来たんだから！
フィーリアにも負けないくらいだよ！」
「へぇ、で？　どこにいるのよ？」
「あ、うん。サクラ！」
　クリュウが笑顔で呼ぶと、船の中に待機していたサクラが出て来た。もちろん凛シリーズという強力な装備を身に纏って。だが……
「落ちなさい」
「のわぁッ!?」
　ドボォンッ！
「何するんだよッ！」
「何するんだよじゃないでしょッ!?　何あんたッ!?　村の危機でドンドルマまで行って女を口説いて来たのッ!?」
　エレナの言葉はもっともだ。サクラは実力はともかく外見はまるでハンターには見えない。しかも凛シリーズのすごさはハンターだからこそわかるもので、普通の一般人にはわからないだろう。服っぽい凛シリーズならばなおさらだ。これならランポスシリーズの方が鎧っぽく見える。その証拠に、村人達に絶望的な雰囲気が流れていた。
　そんな明らかに自分を呆れた目で見詰める皆にクリュウは慌てて

説明する。
「ち、違うよ！　サクラは本当にすごいんだよ！」
「すごいって何がッ!?　胸ッ!?　顔ッ!?　フィーリアにも負けないって女としての魅力とでも言いたいのッ!?」
　クリュウの襟首を掴んでガクガクと激しく揺らす。視界の隅では村長達も絶望的な顔をしていた。みんなの視線が冷たい……っていうか、痛い。
　あぁ、このまま死のう……
　そんな事を思って最期の時を覚悟した時だった。
「……やめて」
　その声に振り返ると、サクラが片方しかない瞳でじっと見詰めていた。その黒く澄んだ瞳に、エレナは「うっ……」と言葉に詰まる。
　サクラは誰が見てもかなりの美少女だ。エレナも美少女ではあるが、サクラの方がきれいな顔立ちをしている。それを感じたからか、エレナはウーッと低く唸って威嚇する。
「う、うるさいわね！　あんたには関係ないでしょ！」
「……関係あるわ。クリュウは私の友達だから」
「サクラ……」
「見詰め合ってんじゃないわよこのアホがぁッ！」
　もう一度海に落とそうとするエレナに、クリュウは必死になって足を踏ん張って耐える。もうこれ以上海に落ちるなんてごめんである。
　そんな桟橋を舞台にした壮絶な攻防戦を見詰め、サクラは小さく微笑んだ。
「……相変わらず、とても仲がいいのね。クリュウとエレナは」
　サクラの言葉に、あと一歩で海に落とせるというところまで追い詰めたエレナは手を離して驚いたように振り替える。
「相変わらずって……前に会った事があったっけ？」
「あー、エレナ。覚えてない？　サクラだよサクラ。昔よく村に来てた商隊の隊長さんの娘さんで、よく三人で遊んでたじゃないか」
　クリュウの言葉に、エレナはうーんと考える事数秒。ハッとしたような表情になり、サクラを凝視する。

「え？　もしかしてサクラッ!?」
「だからそうだって言ってるでしょ」
　エレナはようやく思い出したらしく、先程までの警戒を完全に解いて友達に向ける満面の笑みになる。
「サクラぁッ！　久しぶりぃッ！」
「……あ」
　エレナはサクラに思いっ切り抱き付いた。エレナのそんな行為にサクラは倒れそうになるが、何とかという具合で耐え切った。
「ほんと久しぶりね！　何年ぶりかしら！　あぁもうこんなに大きくなってぇッ！」
「……エレナ、苦しい」
「あ、ごめんごめん」
　エレナが苦笑いしながら離れると、サクラは少し多めに息を吸う。すると、村人達の中から何人もが驚いたような顔をして近づいてきた。彼らはこの村の重鎮達だ。
「まさかサクラちゃんだったとはなぁ」
「元気にしてたか？」
「おぉ、すっかり美人さんになっちゃって」
　村人達は懐かしそうにサクラに話し掛ける。サクラも知っている人が残っていてくれた事が嬉しいのか、頬をわずかながらほころばせる。
「いやぁ、まさかサクラちゃんだったなんてぇ。久しぶりだねぇ」
　村長も嬉しそうにサクラに声を掛ける。エレナもその輪に加わり、皆懐かしき知人との久しぶりの再会を喜ぶ。
　そんな輪の中から完全に置いて行かれたクリュウは苦笑い。
「おーい、僕を忘れてなーい？」
　村人達はすっかり和みムードになっていたが、すぐに村長が今の状況を思い出してサクラを見て難しそうな顔をする。
「サクラちゃんもハンターなの？」
「……えぇ。ドンドルマでクリュウが私を雇った。だから、必ず守る」
「だが、サクラちゃん。本当に大丈夫かい？　相手は強い飛竜らしい

が」
「……フルフルは以前にも倒した事がある。それにリオレウスなんかに比べれば弱い」
「え？　サクラちゃんはリオレウスを倒した事があるの？」
「・・・えぇ。何度か。この武器も火竜の素材を使ったもの」
そう言って背中の飛竜刀【紅葉】を持つサクラに、クリュウは改めて少なからずショックを受けていた。
またも女の子に負けた。
クリュウの小さなプライドは見事に砕けた。
まぁ、まだまだかけだしのハンターのクリュウとずっと前からハンターをしていたサクラとでは経験の差があるので当然といえば当然だが、女の子に負けるのは男としてちょっと情けない。だが今はそれが役に立つ。複雑な心境だ。
「じゃあ、明日にでも行ってくれないかな？」
「……いいえ。今すぐにでも行くわ」
「いやいや、そう焦らない焦らない。今日はサクラちゃんとの再会を祝して宴会だよぉッ！」
「……え？　あ、でも……」
「サクラ。諦めた方がいいわよ。うちの村長はやると決めたら必ずやる人だから。あんただって散々振り回されてたじゃない」
エレナの言葉に村長は「失敬だな」とプンプンと怒るが、まるで説得力がない。サクラはそんな村長にフッと微笑み、「……じゃあ、明日にする」と答える。その答えを聞いた村長の喜びようはもう――
「よぉしッ！　みんな張り切っていくぞぉッ！」
『おおおおおおおおおッ！』
ノリのいい村人達を引き連れ、村長は早速パーティーの準備を進めた。相変わらず無駄にハイテンションで無駄に行動力があり余っている人だ。まぁ、その元気がこの村と活動力と言っても過言ではないのだが。
無理やりパーティーなんてされてサクラは迷惑ではないかと心配していたが、それは杞憂（きゆう）であった。

騒ぐ村人達を見詰め、サクラはわずかながらも笑みを浮かべていた。それだけで、クリュウは十分であった。
その夜、パーティーを終えたクリュウは家に戻った。サクラはエレナの家に泊まる事となり、今頃はきっと二人で楽しげな会話をしているのだろう。ちょっとうらやましい。
そんな事を思いながらクリュウは倉庫の中で明日彼女が使うであろう道具を取り出していた。
シビレ罠や落とし穴、もしかたら爆弾も使うかもしれない。他にも閃光玉とか……
「……フルフルは目が見えないから、閃光玉は効かない」
「え？」
突然の声に振り返ると、そこにはサクラが立っていた。今は凛シリーズではなくエレナの服を借りているのか、薄桃色のワンピースを着ている。眼帯は依然着けてはいるが、その女の子らしい姿に一瞬ドキリとする。
「……でも、フルフルは動きが遅いから、閃光玉がなくてもそれほど苦労はしない。でも電撃は結構厄介」
「っていうかさ、何の違和感もなく勝手に僕の家に入ってるけど」
「……勝手知ったる家。昔と変わってない」
「ははは、まぁ基本的には変わってないだろうけどね。まぁいいや。お茶でも飲む？」
「……ええ」
クリュウは笑みを浮かべるとサクラをリビングに案内する。
サクラを椅子に座らせると、クリュウはお茶を用意して彼女の前に腰を下ろす。
「まぁゆっくりしてよ」
「……ええ」
サクラは差し出されたお茶を飲む。クリュウも自分のコップにお茶を注ぐと飲んでのどを潤す。そして早速話し掛ける。
「じゃあ明日はよろしくね。あと道具ならさっきの倉庫の中にあるから何でも好きなのを使ってよ。爆弾も罠もそれなりの数は用意して

あるから」
「……その事で、クリュウに頼みたい事がある」
サクラはお茶を置くと、真剣な光が輝く隻眼で見詰める。そんな彼女の黒い瞳にクリュウは一瞬戸惑うも自然と真剣なものになる。
「何？　僕にできる事なら何でもするよ」
「……明日、私と一緒に行ってくれないかしら」
「え？」
クリュウはサクラの言葉に思わずコップを取り零しそうになった。それはクリュウが予想していたもののはるか上を通過するような言葉。
「え？　ぼ、僕も明日行くって事？」
「……ええ」
「い、いや僕は無理だよ！　だってまだ飛竜を倒した経験なんてないもの！　イャンクックが限界だよ！」
しかもイャンクックは一人で倒した経験はいまだない。フィーリアの援護を受けてやっと倒して二頭である。そんな自分にいきなり飛竜（フルフル）に挑めだなんて、無茶である。
「……大丈夫。フルフルは私が引き付ける。クリュウにはその間に遊撃してもらいたいの」
「で、でも！」
「……私は、クリュウを信じてるから」
サクラの黒い隻眼がクリュウを見詰める。黒く輝く瞳には、一切の邪念がない。心の底から、クリュウを信じているのだ。そんな瞳に見詰められるクリュウはだんだん断りづらくなる。
「で、でも……何で？　サクラなら一人でも大丈夫でしょ？　それに、もう十年も関係がなかった僕を、本当に信用できるの？　しかも、僕はまだまだかけだしだし」
「……大丈夫。クリュウは経験が少ないだけで、本当は強い。これからもっと強くなる。そう確信してる。だから、明日はその第一歩。それに――」
サクラはじっとクリュウを見詰めた後、口元に小さな笑みを浮かべ

た。その笑顔にクリュウは驚く。その笑顔は、彼が今まで見た彼女の笑みの中で一番優しげなものだった。
「……それに私、クリュウと一緒に狩りをしてみたいから」
そんな言葉ときれいな笑みにドキリとする。
「え？　あ、いや……」
顔を真っ赤にさせておろおろとするクリュウを見詰め、サクラは小さく微笑む。
しばしの沈黙の後、サクラは再び口を開いた。
「……明日、一緒に行ってくれる？」
サクラは再度問う。そんな彼女に、クリュウはまだ赤い頬を掻きながら、
「う、うん……」
と小さく返事した。
サクラはその言葉に小さく「……ありがとう」と返した。
こうして、フルフル討伐に急遽クリュウが加わるという予想外の事態が発生したのだった。
翌日、クリュウとサクラは使いそうな荷物を竜車に積み込んでいた。すでにクリュウが討伐に参加する事は皆に伝えてあったが、相手が相手という事もあり、エレナは不安でいっぱいであった。
「ほ、ほんとに大丈夫なの？　相手はあんたが自分で強いって言ってた化け物なんでしょ？」
道具を竜車に積み込むクリュウに、エレナは不安そうに声を掛ける。そんな彼女に心配されるクリュウだったが、昨日のうちにフルフルの対処の仕方を事細かくサクラに教えてもらったので、ある程度の余裕はあった。
「たぶん大丈夫だよ。サクラは一人での討伐経験もあるし、なんとかなるって」
「で、でも！」
どうしても納得できないエレナに、凛シリーズを身に纏ったサクラが声を掛ける。
「……平気。フルフルは動きが遅いから、逃げようと思えば簡単に逃

げられる。逃げ出す事に関しては、イャンクックよりも楽。油断さえしなければ、それほど苦戦する相手じゃない」
「ほ、ほんと？」
「……えぇ。それに、もし危険に陥っても、私が必ず守る」
「えー、女の子に守られるのはちょっと……」
「うっさいわね！　あんたは黙ってなさい！」
　思いっ切り女の子に実力も迫力も負けるクリュウ。エレナの言葉に激しく落ち込むクリュウを放っておいて、エレナはサクラを見詰める。
「信じても、いいのね？」
「……それはエレナが判断して。でも、私は信じてほしい」
　サクラの片目だけの瞳がエレナを見詰める。彼女が片目になってしまった経緯はもうエレナも知っている。そんな黒い瞳を、その光を、エレナは信じる事にした。
「わかった。がんばってきてね」
「……えぇ」
　エレナが差し出した手を、サクラはそっと握った。
「……必ず、この村を守る」
「お願い」
　サクラはエレナと別れる頃には、クリュウは荷物を全て運び入れ終わっていた。シルキーを引くのは彼女。さすがに一人旅をしているだけはある。
「……じゃあ、行きましょうか」
「うん」
　二人が竜車に乗り込むと、村人達が見送りに来てくれた。
　皆の見送りに喜びながら、竜車は走り出した。
　クリュウは見送る村人やエレナなどに手を振る。そんな彼を見詰め、サクラは馬車を運転しながら口元に小さな笑みを浮かべた。
　クリュウとサクラは一路シルヴァ密林に向かったのであった。

第３５話　シルヴァ密林の白い影

シルヴァ密林に着いた二人は遠くに巨大な大瀑布が広がる崖の上に拠点（ベースキャンプ）を作った。こちらの密林はハンターもあまり使わない為、テントや道具箱といったものは一切用意されていない。その為、安全そうな崖の上であるここに竜車を止め、竜車をそのままテントの代わりにする事にし、これで簡易ながらも拠点（ベースキャンプ）の用意は整った。

竜車から荷車を降ろすと、そこへ使う荷物を載せていく。

爆弾やシビレ罠なども必要だが、今回は特に重要なものがある。それは今クリュウが手に持っている赤い飲み物。クーラードリンクとは反対の効力を発揮するホットドリンクである。極寒の中で新陳代謝を高めて体を寒さから守る効果を持つこれは、今回の戦いでは最重要道具である。

シルヴァ密林には高湿度と暑い気温が重なって蒸し暑いジャングル地帯と、冷たい地下水が流れる洞窟とがある。そのうちの一つである洞窟にフルフルは生息している事が多い。目が退化しているので明るい外が苦手らしい。その為戦う場は主に洞窟になるのだが、冷たい地下水と外の熱気を遮る深さが加わり、洞窟の中は砂漠の洞窟のように極寒地帯となっている。そこで活躍するのがこのホットドリンクだ。

「……洞窟に入る前は必ず飲んで」

「わかった」

クリュウはうなずくとホットドリンクをしげしげと見詰める。実はクリュウ、ホットドリンクを使うのはこれが初めてだ。雪山にはまだ行った事がないし、砂漠の洞窟は長居はしないからだ。そもそも砂漠の洞窟は特に用はない。あるとすれば水竜ガノトトスを狩る時ぐらいだ。ガノトトスとは超巨大な魚竜種モンスターで、普通の飛竜のように飛ぶ事はないが、水の中を自在に動き回り、少しだけなら滑空できる。その大きさはイャンクックの二倍以上。まだ会った事はないが、できれば会いたくないなぁ……

クリュウはそんな事を思いながら落とし穴を荷車に載せる。と、
「……落とし穴は、役に立たないかもしれない」
サクラがポツリと言った。
「え？　どうして？」
「……フルフルは主に洞窟の中にいる。そして、洞窟は硬い岩でできているから、落とし穴は設置できない」
「え？　じゃあ落とし穴はいらない？」
「……いいえ。たまに外にも出て来るから、その時には使える」
「そっか」
クリュウは持って行く物を全部荷車に載せると、率先して荷車を引く。
「僕が荷車を引くね。その方がいいでしょ？」
「……ええ、お願い」
「任しといてよ」
クリュウは笑顔で答えると、荷車を引いて歩き出す。その前を、サクラが守るようにして進む。荷車を持って進む時はもう一人くらい仲間がいるのがベストなのだが、今は二人だけなのでそれは我慢しよう。
サクラは支給品の地図を片手に進む。ちなみに今回は応急薬や携帯食料、携帯砥石などの支給品は村から持って来た。拠点（ベースキャンプ）がないからだ。
二人はまずジャングル地帯に出た。すると、さっきまでの心地良い風から一転、むあっとした湿気を含んだ風に包まれた。
そしてかなり薄暗い。天井を隠すように大量の木が並び、葉を伸ばしているから日光が入りづらいのだ。そして、そんな大量の木から出る水蒸気がこのすさまじい湿度を発生させているのだろう。
砂漠の暑さなんかに比べたらずいぶんマシだが、それでもかなり蒸し暑い。クリュウは額に吹き出した汗を拭う。
「やっぱり暑いなぁ」
「……クリュウはここへ来た事があるのよね？」
「うん。フィーリアと一緒に」

「……フィーリア？」
今まで地図を見ながら話し掛けていたサクラがその瞬間振り返って片方の黒く澄んだ瞳で見詰めて来た。
「……誰？」
「あ、そっか。まだ教えてなかったっけ。フィーリアは僕が前に組んでたハンターの女の子だよ。ライトボウガン使いで全身レイアシリーズを着けてるんだけど、すんごく強いんだ」
「……そう」
あれ？　なんかサクラの瞳がいつになく冷たいような気がするのだが、気のせいだろうか。
「……今は、違うの？」
「うん、彼女はまた旅に出ちゃったんだ。その時ケンカ別れしたからなぁ……今頃何してるんだろ。元気にしてるかな？」
「……そう」
サクラは再び前へ向き直ると無言で歩き出す。そんな彼女にクリュウも黙ってしまい、沈黙が続く。だが、その沈黙は突然の来訪者によって破られた。
「ギャウアッ！ギャウアッ！」
緑の森の中から突如現れた血のように真っ赤な身体に膨らんだ頭を持ったモンスター――イーオス。その数は三匹。クリュウも慌てて荷車を降ろしてドスバイトダガー改を構える。その間にサクラは背中の飛竜刀【紅葉】を抜くと同時に突貫した。一瞬にして間合いを詰めると驚くイーオスを下から斬り上げる。その瞬間、火属性が付加されている刀身から爆発が起きてイーオスの首から上が吹き飛んだ。噴き出す血と体液。イーオスの毒は体内にも流れているが、頭の毒袋を経由してから有害なものに変わる為、噴き出した体液に触れても毒状態にはならない。サクラは崩れるイーオスを避けてその奥のイーオスに突っ込む。イーオスは悲鳴を上げながら体を仰け反らせて一気に解放する。まるでイャンクックの火炎液のようにイーオスは毒液を吐き出した。サクラはそれを地面に剣を突き立てて横へ飛んで避けると、着地した瞬間に突貫。驚くイーオスの体に剣を突く。イー

オスの赤い体に飛竜刀【紅葉】の赤い刀身が突き刺さり、反対側から先端が現れる。悲鳴を上げるイーオスの声を無視し、サクラは剣を横一線に振り抜く。内臓を斬り裂かれ、焼かれ、イーオスは絶命した。

そんなあっという間に二匹のイーオスを片付けたサクラに対し、クリュウは残るイーオスに突貫する。その瞬間、イーオスは体を後ろへ反らした。さっきサクラに向けて放たれた毒液だ。とっさに横へ跳ぶと、さっきまで自分がいた場所に毒液がべちょりと当たった。遠くへ飛ばす為かかなり粘着性がある。

クリュウはイーオスの斜めから突っ込むと、剣を上から下へ振り下ろした。イーオスの血のように真っ赤な体が自らの血でさらに赤く染まる。

「ギャウアッ!」

悲鳴を上げて仰け反るイーオスに連続して斬り付け、体を回転させながら剣を叩き込む。すると、自分よりも大きなイーオスの体が吹き飛んだ。

「やったかッ!?」

地面に倒れたイーオスだが、すぐに飛び上がるように起き上がった。まだ生きている。立ち上がったイーオスは大声で鳴くと突進して来てそのままジャンプ。慌てて横へ跳ぶと、自分がいた場所にドスンとイーオスが跳び込んできた。体勢を崩したクリュウにイーオスはすかさず毒液を吐いてくる。その攻撃は盾を使ってなんとか避けたが、粘着性の強い毒液が盾に付着して嫌な音を立てる。再びイーオスは突進して来て爪で斬りかかってくる。それを盾を受け流し、剣を叩き込む。が、イーオスはその一撃に耐え、再び爪で襲う。クリュウが盾で防ぐと、イーオスは一度後ろへ跳んで間合いを取り、再び突進して来た。クリュウは一度横へ跳んでイーオスの横に移動すると斬りつける。イーオスはすぐさま反応して悲鳴を上げて噛み付いてきた。慌ててそれを盾で防ぐと、再び剣を叩き込む。

「ギャアッ!」

イーオスは悲鳴を上げて吹き飛ぶと地面に倒れ、そのまま動かなくなった。

「な、なんてタフなんだ……」
一匹相手にかなり苦戦した。どれだけ体力を持っているのだろうか。
クリュウは剣を腰に戻すと剥ぎ取り用ナイフを取り出してイーオスを解体する。適当に鱗や牙を剥ぎ取ると、それを剥ぎ取り用の袋に入れる。そんな彼の後ろからサクラが近寄って来た。
「……大丈夫？」
「うん、何とか。いやぁ、それにしてもかなり厄介な相手だねこれ。囲まれたら本気でまずい」
「……ええ。だから囲まれないように注意しないと」
基本的な動作はランポスやゲネポスと同じ。もしランポスとかを狩り慣れていなければ、ここまでの奮闘はできなかっただろう。ただ毒液と好戦的な戦い方、そしてすさまじい体力が厄介だ。だがこれさえ抜けば他のランポス種の対処の仕方と同じなので、慣れればそれほど苦戦する相手ではない。初めてのクリュウがここまで立ち回れたのは日頃の修行のおかげである。
「それにしてもサクラはすごいね。あんなに素早くイーオスを倒せるなんて」
さっきの彼女の動きはきれいだった。素早く近づき、そして強烈な一撃を加えて倒す。自分とは大違いだ。
「……それは、私の武器が太刀だからよ。太刀の方が攻撃力は高いから」
太刀は重いが高い攻撃力を持つ大剣と片手剣の機動性を兼ね備えた武器で、すさまじい攻撃力と機動性を持っている。その為あんなに素早く動け、そして一撃が強烈なのだ。唯一の弱点は攻撃力を高くしたまま極限まで軽量化したので、大剣のように剣でガードができない事。もちろん盾などはないので、ガードは一切できない。超攻撃型の武器なのだ。
しかし、それを差し引いたとしても彼女の動きは見事なものだった。
「ううん。やっぱりすごいやサクラは」

尊敬の眼差しをキラキラと向けると、サクラはほんのりと頬を赤らめて顔を伏せた。
「……は、早く行きましょう」
おろおろとするサクラなんて再会してから初めて見た。そんな事を思いながら剣で盾に付いた毒液を削ぎ落とすと剣をしまい、荷車を引く。
サクラは再びクリュウの前を歩く。
木が乱雑に生い茂る中、彼女は荷車が通れそうな幅を見つけて誘導してくれる。どうしてもの時は剣で切り倒して道を作る。なんて頼りになるのだろう。
ふと、そんな自分よりも知識も技術も上な彼女の背中を見詰め、思い出す。
自分にハンターとしての応用を教えてくれ、自分と一緒に組んでくれたフィーリア。
彼女も卓越した本並みの知識と点をも射抜く優れた技術を持ち、いつも自分を支えてくれていた。
彼女がいたから、自分はこんなにも成長したのだ。
――なのに、今はいない。
彼女は再び旅に出てしまった。
村を出ると言った彼女と対立し、そしてケンカし、そのまま別れてしまった。
今はただ、後悔しかない。
もし、もう一度会えたら、謝ろう。そう決めていた。
「……クリュウ？」
「え？」
すっかり自分の世界に入ってしまっていたクリュウが気がつくと、目の前には彼の顔を覗き込むようにしているサクラがいた。至近距離で見詰める隻眼が、クリュウを慌てさせる。
「……大丈夫？　ぼーっとしてるけど」
「え？　あ、うん。へ、平気だよ」
「……少し、休憩する？」

「ううん、いい。それよりも早く洞窟へ行こう」
「……わかった」
サクラはうなずくと再び彼を誘導する。しかしその間にもチラチラと自分の方を見てくる。すっかり心配させてしまったらしい。
「平気だって。ほら、前に集中集中」
その時、再び前方に赤いものが見えた――イーオスだ。
クリュウはサクラに知らせると再び荷車を置いて剣を抜く。
今度は二匹。一匹はサクラが突進したのでもう一匹にクリュウは突っ込む。
イーオスは突進して来るクリュウに声を上げると飛び掛って来た。襲い掛かる鉤爪を盾で受け止める。鋭い爪が盾の表面に浅い傷を残しながら滑る。受け流しながら体を回転させ、ドスバイトダガー改の刃先でそいつののどを抉（えぐ）った。急所に攻撃を受けたイーオスは悲鳴を上げる事もできずにそのまま倒れて動かなくなった。
「一体くらいだったら急所も狙えるな」
クリュウは剣を腰に戻して剥ぎ取る。その間にサクラが戻って来た。その顔は無表情でどこにもケガはない。さすがだ。
「……クリュウは、必ず剥ぎ取るの？」
サクラは不思議そうに声を掛けて来た。フィーリアにも訊かれたが、やっぱりこんなにこまめに剥ぎ取るハンターは珍しいのだろう。
「うん。倒したらそいつに敬意を払って無駄なく使ってあげなさいって、僕の師匠が言ってたから」
「……そう」
サクラはそう小さく答えると再び歩き出す。そんな彼女の背中を荷車を引きながらクリュウは追い掛けた。
それから一匹ずつで三匹のイーオスに襲撃されたが、それら全てサクラが斬り倒した。もちろんクリュウの出る幕はない。早業である。
そしてようやくジャングルの奥にあるぽっかりと開いた洞窟を見つける。穴自体はかなり大きい。人間や小型モンスターなら余裕で入れるほどだ。
洞窟からは冷たい湿った風が流れて来る。蒸し暑さにそれはかな

り心地良く感じた。と、そんなクリュウの横でサクラはホットドリンクを飲む。クリュウも慌てて飲んだ。少し辛いのはトウガラシを原料にしているからだろう。すぐに体が内側から熱くなる。外の温度と重なってかなり暑い。

「……行きましょう」

サクラはそう言うと先頭に立って歩き出した。そんな彼女の後ろからクリュウも荷車を引きながら追い掛けて二人は洞窟に入る。

洞窟に入るとさっきまでの蒸し暑さがうそのように涼しい。だが、それはすぐに心地いい温度は過ぎて極寒に変わる。ホントドリンクを飲んでいてもちょっと寒い。でももし飲まなかったらと思うとぞっとする。下は地下水が流れていてちょっと滑りそうだ。

洞窟の奥深くに入ると、そこは大きな空洞となっていた。反対側にはさらに奥に行く為の道がある。他には人間が上れないような高い場所にも穴があった。

そして、洞窟の中にはブルファンゴが三匹いた。しかもうち二匹が突進体勢に入っていた。クリュウは荷車を置くと剣を構える。その瞬間、ブルファンゴが突進して来た。ブルファンゴの攻撃は真っ直ぐな為ちゃんと見ていれば避けるのは簡単だ。避けてすぐに剣を叩き込み倒す。イーオスに比べれば楽だ――まぁ、その間にサクラは二匹倒していたけど……

ブルファンゴを倒すと、洞窟の中は静かになった。

クリュウは辺りを見回すが、どこにもフルフルらしきモンスターはいない。

「いないね」

クリュウは洞窟の中央に行って再び辺りを見回すが、やっぱりいない。どうやらここにはいないらしい。この狩場には他にも洞窟があるので、そっちかもしれない。

しかしサクラは辺りをキョロキョロと片方だけの瞳を機敏に動かして見回している。

「サクラ？　どうしたの？」

「……気配を、感じる」

「気配？　でもいないよ？」
首を傾げながら再びクリュウは辺りを見回すが、どこにもいない。どうもここにはいないらしい。クリュウは隅の方に置いてある荷車の方に歩き出す。と、
ポトッ……ジュウッ……
「熱いッ！」
突如肩に水滴が落ちて来た。それはいい。だが、その水滴が皮膚に触れた瞬間熱湯のように熱かった。そして、肩に落ちた水滴がクックメイルを煙を上げて溶かす。その光景にぞっとする。
「な、何この水……？」
「……クリュウッ！　上ッ！」
サクラの悲鳴のような声に驚いて上を見上げた瞬間、
「ボオオオオオオオオッ！」
「なぁッ!?」
洞窟を震わせるほどのすさまじい音と共に天上に張り付いていた白い不気味な巨体が、自分目掛けて落ちて来た。
ズズズウウウウウウウウウウン……ッ！
「……クリュウッ！」
不気味な地響きとサクラの悲鳴が、薄暗い洞窟の中に響き渡った。
地響きと共に現れたのは、鱗や体毛といった他のモンスターにはあるものはなく、常に粘り気を帯びたブヨブヨとした奇妙な純白の皮膚を持ち、ずんぐりとした体型に頭のない首が生え、その先の裂けた真っ赤な口、そこからは粘度の高い唾液（だえき）がしたたり落ちるグロテスクで不気味な飛竜――フルフルだった。
「……クリュウッ！」
サクラは道具袋（ポーチ）からペイントボールを取り出すとフルフルに向かって投げつける。匂いが飛び散り、フルフルがどこにあるかわからない鼻を動かして辺りを窺う。フルフルは目が見えない。だからまだサクラは見つかってはいなかったが、そのペイントボールが奴に自分の存在を知らせた。
伸縮性のある首がニュルンと後ろを向き、移動していたサクラを捉

える。匂いか、音か、それはわからないが、確実にフルフルはサクラに気づいた。
「ヴオオオオッ！」
ずんぐりとした鈍重な巨体を柔らかく使い、身をかがめ、そして弾けるように跳躍する。
白い塊が、正確にサクラ目掛けて襲い掛かった。
サクラはそれを冷静に横へ跳んで避けると、さっきまで奴がいた場所を見る。と、そこにはぐったりと倒れているクリュウがいた。
フルフルは攻撃に失敗し、フンフンと匂いを探る。どうやら発達した嗅覚をフルフルは目の代わりにしているらしい。
その間にサクラはクリュウに駆け寄る。彼は気絶していた。どうやらとっさに盾で防いだが、衝撃に耐え切れずに後ろに飛ばされたらしい。
フルフルの首がこちらに向く。気づかれた。
サクラは腰の道具袋（ポーチ）からある物を取り出すとそれを思いっ切りフルフルの方へ投げ付けた。閃光玉や音爆弾ではない、全く別のもの。落下した瞬間、茶色の煙と共に強烈な匂いが辺りを包んだ。
閃光玉や音爆弾と同じ素材玉を使ったアイテムで、モンスターのフンと調合したこやし玉だ。普通のモンスターならこの匂いに逃げ出すが、フルフルには通常モンスターに対する閃光玉のような効果が発生する。
そして、思ったとおりフルフルはこの強烈な匂いに嗅覚を封じられ、二人を見失った。その間にサクラはクリュウを担いで出口に走る。
後ろから響く強烈な鳴き声。それは見失った獲物に対する威嚇だったのかもしれない。
一時離脱したクリュウとサクラ。そこは洞窟の入り口から少し離れた場所であった。洞窟からはフルフルの鳴き声が時折小さく聞こえるが、ここまでは追って来なかった。サクラは周辺のイーオスを片付け、気絶したクリュウの額に洞窟から漏れる冷たい地下水を染み込

ませたタオルを置く。そして、そんな彼の横に座って辺りを警戒しながら彼を介抱する。幸い大きなケガはなく、かすり傷ぐらいだった。これも彼があの状態でとっさに盾でガードしたおかげだ。もししていなかったらきっと彼は圧死していた。彼の反射神経には驚く。

今回は完全に自分のミスであった。本来狩りというのは狩場の状況やモンスターの特性などをよく把握してからするものだが、今回は緊急と言う事もあり下調べはまるでしていない。フルフルの方は問題ないが、地形が全くわからない。その為地図を見てどうにか把握しようとっしたのだが、地図では限界であった。そして、さっきみたいに奇襲を受けたのだ。

エレナに必ずクリュウを守ると言っておいて、いきなりこれである。

せっかく、クリュウと一緒の初めての狩りだったのに、散々な始まりとなってしまった。この狩りを、昨日の夜はなかなか寝付けないほど楽しみにしていたのに……

サクラは自分の失態にため息する。そもそもフルフルが天井から襲って来るなんて基礎中の基礎ではないか。

クリュウと一緒の狩りだからって、少しはしゃぎ過ぎたのかもしれない。

「……ごめんなさい」

ポツリとそうつぶやいた刹那、クリュウが小さな声を上げて気がついた。

「うん……？　ここは……？」

「……洞窟の前」

クリュウはゆっくりと上半身を起こすと、周りをキョロキョロと見回す。確かに洞窟への入り口が見える。

そして、なぜ自分がこんな状態になっているかを思い出し、ため息した。

「な、情けないなぁ……」

上からの奇襲でとっさにガードしたまではいいが、転倒して後頭部を強打して気を失うなんて、恥ずかし過ぎる。

いきなり気絶するという失態に激しく落ち込むクリュウに、サクラは励ますように優しく声を掛ける。
「……さっきのは仕方がない。クリュウはフルフルとは初めてだったんだから。それなのにあれだけの反射をしたクリュウはすごい」
「そ、そんな事ないよ」
いきなりほめられ、クリュウは照れたような笑みを浮かべる。サクラのようなかわいい女の子にそんな事を言われたら照れてしまうのは仕方がない。と、その時、洞窟の方から不気味な鳴き声が響いた。
「あ、あれがフルフルの声？」
「……ええ」
姿もだが鳴き声まで不気味だなぁとクリュウは思った。
しばらくしてからいつまでも横になってはいられないとクリュウは立ち上がった。体が問題なく動く事を確認し、サクラを見る。
「じゃあ、行こうか」
「……もう平気なの？」
「うん。すっかり言い忘れてたけど、助けてくれてありがとう」
「……礼なんていらない。仲間だから」
「えへへ、そう言ってもらえると嬉しいな」
歩き出したクリュウの後ろからサクラがついて来る。そして、洞窟の前に立つ。吹き出してくる冷たい湿った風に体を小さく震わせると、腰に下げたドスバイトダガー改を抜き放つと盾と共に構える。そんな彼の横ではサクラが飛竜刀【紅葉】を抜いて構えていた。ドスバイトダガー改に比べて細く長い刀身を両手で握って下方に構えている。
「……まず私が斬り込みを入れる。その間にクリュウは背後に回って攻撃して。状況によっては洞窟内に置いて来た荷車に積んだ罠や爆弾も使って。その判断はあなたに任せる」
「い、いいの？」
「……ええ、私はそれに合わせるから」
「だ、大丈夫？　作戦なんてほとんどないけど」
「……平気。クリュウを信じてるから」

そう言うサクラの瞳は優しげだった。そんな事を真正面から言われ、クリュウは照れたような笑みを浮かべるが、突如響いたフルフルの不気味な鳴き声に自然と緊張が走る。横に立つサクラの瞳も優しげなものから彼女の飛竜刀【紅葉】の刃のごとく鋭利なものに変わった。

「……行こう」

「うん」

それを合図に、サクラが走り出し、その後をクリュウが続いて洞窟に飛び込んだ。

第３６話　密林に走る稲妻

薄暗い洞窟の中の広場まで突っ走ると、そこには不気味な白い飛竜――フルフルがいた。

フルフルは鼻を絶えずフンフンと動かして匂いを探っている。それを見てまだ奴がこちらに気づいていないのだと悟り、サクラは地面に流れる水を蹴って突貫。クリュウは背後に回ろうと洞窟の壁際ギリギリを走り抜ける。

サクラは一気にフルフルの懐に潜り込むと、濡れた床に右足を踏ん張って体の勢いを腕に流し、フルフルの白く太い首に強烈な一撃を叩き込む。フルフルは敵の存在よりも先に自らに襲い掛かったすさまじい衝撃の大きさに仰け反った。

「ゴアァァァァァッ!?」

フルフルの弱点属性は《火》。そして飛竜刀【紅葉】はその火属性の剣。叩き込まれた瞬間火竜の体液が組み込まれた刀身が爆発。火に弱いフルフルの皮を焼き切る。

サクラは横へ転がって一度離れると今度は横から剣を振るい、上から下への一撃、突き、下段から上段への斬り上げを打ち込む。そのたびにフルフルの皮膚で小規模な爆発が起きる。

「ヴォウオォッ!?」

特徴的な声を上げて驚くフルフル。だが、攻撃された場所から相手が近いと判断したのか、体を低くし、尻尾の先端を吸盤（きゅうばん）のように地面に付けた。その動作にサクラは後ろへ跳んだ。刹那、フルフルの体が青白く迸った。あれがフルフルの体内の電気袋で発生した電気を体に纏った近距離攻撃なのだろう。クリュウは横目でそれを見ながらフルフルの背後に回る。

サクラからフルフルの尻尾は岩のように硬いのでそこへ狙わないように注意されている。なので、電撃が終わって姿勢を戻したフルフルの下に潜り込み、先程サクラが一撃を入れた場所に剣を叩き込んだ。すると、ブヨンとした気味の悪い感触が剣を伝って腕に響く。これが打撃系の武器の攻撃を弾く特殊な皮だ。切断系の武器に対して

もある程度は力を発揮するのだろう。
クリュウは二撃、三撃と連続して斬る。フルフルの皮はブヨブヨしていて斬りにくいが、斬れない事はない。皮が裂け、真っ赤な血が噴き出す。
「……下がってッ！」
サクラの言葉に反射的に地面を蹴って後退する。と、フルフルはその瞬間に体を低くして自らの白い体に青い電気をバチバチと纏った。もしサクラの声で下がっていなかったらあの電撃を受けていただろう。事前にサクラの指示には絶対に従うように言われていたおかげだ。
後退したクリュウに代わり、サクラは放電を終えたフルフルに鞘に収めていた剣を再び抜いて抜刀の一撃を振り下ろす。その一撃はフルフルの頭に炸裂し、爆発が起き、フルフルはあまりの衝撃に仰け反る。
基本的にモンスターは頭への攻撃が弱い。その為同じ一撃でも他部位に比べてダメージが与えられる。ただし、正面に位置しなければならない為その危険性はどの部位を攻める時よりも高い。だが、それだけの危険性を持っていても余りある攻撃する価値はある。
サクラは二撃目を下から上へその細い腕からは想像できない強烈な一撃を首に叩き込む。そして後ろへ跳ぶ。
フルフルの右斜め横にサクラ。左斜め後ろにクリュウが位置する。フルフルを前後から挟み込むようなベストな位置である。
フルフルはサクラの方を向いて体を波打たせ、首を信じられないくらい伸ばして噛み付こうとする。サクラはそれを冷静に見て横へ跳んで回避する。
フルフルの首は軟骨が多く、首まわりの皮膚も余り気味になっているのでこうして一瞬で首を伸ばして攻撃できるのだ。電撃やこんな変幻自在な攻撃をするのは緩慢（かんまん）な動きを補う為に身に付けた能力なのかもしれない。
サクラに集中しているフルフルに、クリュウは後ろから斬り掛かる。連続して剣を入れると、フルフルは体の向きをクリュウに方に向

けた。正面はまずいとクリュウは後ろへ跳んで距離を取る。が、フルフルは体を縮ませた後一気に解放。クリュウに向かって飛び掛かってきた。
「うわぁッ！」
クリュウは慌てて横へ転がった。すると、フルフルの白い体が地面に鈍い音を立てて激突した。もしあの下にいたらガードをしていても腕が折れていたかもしれない。
体勢が崩れたクリュウをフォローするようにサクラがフルフルの翼を真っ赤な剣で叩き斬る。爆発が起き、フルフルは首を回してサクラに噛み付こうとする。が、サクラはそれを横へ跳んで避ける。その間に体勢を立て直したクリュウは横に走ってフルフルに斬りかかろうとする。が、フルフルは再び姿勢を低くして青白く輝きだした。その光にクリュウは慌てて横へ飛ぶ。かなり無理な体勢だったが、放電は回避できた。危ないところだった。
クリュウは立ち上がると放電を終えたフルフルに斬りかかる。右から左へ、下から上へ、上から下へと次々に連続して剣を振るう。いつの間にか刃にひびが入って欠けていた。かなり切れ味が落ちている。だが、今はとにかく剣を振るう。連続して剣を叩き込み、血飛沫が舞う。フルフルは悲鳴を上げた後再び姿勢を低くして放電した。再び後ろへ跳んでクリュウはそれを回避。サクラも大きく後退して体勢を立て直している。クリュウも一度大きく離れる。そして、フルフルが放電を終えると再び突撃した。が、突如フルフルは脚に対して垂直に横になっていた体を起こし、首を上げた。その動作にサクラは隻眼を見開く。
「……クリュウッ！　耳を――」
「ヴォワアアアアアアアアッ！」
「ッ!?」
すさまじい鳴き声がフルフルの口から飛び出た。しかもそれは狭い洞窟の中で反響し、まるで全方向から襲い掛かる。バインドボイスと呼ばれる飛竜が発する強烈な鳴き声で、そのすさまじい音量と衝撃にクリュウは反射的に耳を押さえた。が、強烈な音量は手を貫いて耳

を襲う。体が硬直し、動けなくなった。頭ではヤバイッとは思っていても、体はまるで動かない。いくら鍛えても、人間は内にある本能には抗えない。恐怖が、体を強張らせる。

わずかに目を動かすと、別方向にいたサクラも同じように耳を塞いで動けなくなっていた。サクラほどのハンターでも、これは耐えられないのだ。

フルフルは再び体勢を戻すが、洞窟の中を反響した声はまだ響き、二人はそれよりもわずかに遅れて体が動くようになった。が、そのわずかな時間が、フルフルに反撃のチャンスを与えた。

フルフルは匂いで二人の位置を確認する。二人はフルフルに対し前方扇状の範囲に立っていた。そしてそれは、フルフル最大の攻撃の攻撃範囲を重なる。

フルフルは再び尻尾を吸盤のようにして地面にくっ付ける。だが、今回は首を大きく反り返るくらい上げて体に電撃を放つ。そしてそれは放電とは違い体に走った電気はそのままフルフルの口へと集中されていく。その動作に、サクラは隻眼を大きく見開く。そしてクリュウも遅れてその動作がイャンクックが火炎液を吐く動作に似ていると気づき、慌てて体を走らせる。

横へ突っ走った瞬間、フルフルの口から轟音を立てて地に落ちる雷のような光を放ちながら三つの光る電気の塊が地を張って高速で二人に襲い掛かった。

フルフル必殺の電気ブレスだ。

「……クリュウッ！」

サクラはクリュウの体を突き飛ばして共に横へ転がった。そのわずか後ろを電気の塊が不気味な音を立てながら通過して行った。

フルフルの電気ブレスは火竜のような派手さはないが、地面を広範囲を一瞬にして走り抜けるので回避しづらい。フルフル最大の脅威だ。

クリュウはサクラに押し倒されたおかげで助かった。サクラもギリギリに回避できたので怪我はない。だが、バランスを崩した二人にフルフルは飛び掛かろうとする。二人は慌てて再び横へ跳ぶ。フル

フルは一瞬前まで二人がいた場所に襲い掛かった。一撃は重いが、その鈍重な動きと重なって大きな隙となり、二人はすぐに体勢を立て直す。

フルフルはゆっくりと体を起こす。クリュウはとにかくシビレ罠を使おうと荷車の位置を確認した。と、その間にフルフルは体を縮めて上へジャンプした。

「えッ!?」

慌てて上を見ると、フルフルは洞窟の天井にへばり付いていた。あの巨体で、あんな芸当がきるのかと驚く。

「……フルフルは天井を移動できる。さっきの奇襲もそれ。奴の動きに注意して下に入らないで。いきなり落下して来て潰されるから」

サクラの忠告にうなずき、クリュウは上を見ながら横へ走った。すると、フルフルは体を大きく左右に動かしながら天井を歩き出した。その動きは明らかにクリュウを追っていたが、クリュウは的確に動いて奴の下に入らないようにする。と、

「ヴォオオオオオッ!」

不気味な声と共にフルフルが降り立った。その瞬間、サクラは再び飛竜刀【紅葉】を構えてフルフルに突撃する。その隙にクリュウは荷車へ走り、シビレ罠を取り出す。サクラはそんなクリュウの動きを確認し、フルフルの前に立つとその頭に向かってその強烈な一撃を叩き込んだ。

「ゴアアアアアアアアッ!?」

仰け反るフルフルに連続して剣を叩き込む。そして、叩き付けるような一撃を入れた瞬間、サクラは体の奥底から噴き出した力に包まれた。

太刀の特殊能力の一つ。詳しい事はわからないが、太刀はモンスターを攻撃すると《練気》と言われる力が蓄積される。それが限界点を突破すると一時的に攻撃力と切れ味が急上昇する。そしてそのままモンスターを攻撃していれば練気は一定を保ち、攻撃力と切れ味は上昇したままになれる。もしくは練気の力を一気に解放して強烈な連続攻撃を放つ太刀奥義の《気刃斬り》をする事もできる。特殊能力

もそうだが、太刀は本当に攻撃型の武器なのだ。
サクラは気刃斬りはせず攻撃力の高いまま横へ移動し、強烈な一撃を叩き込む。そして二撃、三撃と加え、フルフルの動きを封じる。クリュウが設置する時間を稼ぐ為だ。
クリュウはサクラが動きを封じている間に慣れた手つきで手際良くシビレ罠を設置する。罠の設置はクリュウの得意な技だ。そして隅に置いてあった荷車を近くの岩陰に移動する。
「いいよッ！」
クリュウの言葉にサクラは一度距離を離れてシビレ罠まで後退する。これでフルフルが来れば成功なのだが、フルフルはそんなクリュウの期待を見事に裏切って電気ブレスの体勢に入った。二度目という事もあり、一度目よりも早く反応して横へ走った。サクラも横へ走って電気ブレスは失敗に終わった。ブレスを撃ち終わった隙に二人は再びシビレ罠の前に立つ。すると今度は数歩歩いてフルフルは飛び掛かってきた。そして、その着地地点にはシビレ罠が黄色い電撃を放っていた。
「ヴォヴォオオオオオオオオオオッ!?」
シビレ罠がフルフルの体に電気を流しながら奴の動きを止める。先程自ら放っていた電撃とは全く違う風景だ。その隙に、クリュウは岩陰の荷車から大タル爆弾を二個掴んでフルフルの下に設置する。サクラも大タル爆弾と小タル爆弾それぞれ一個を持ってクリュウが設置した付近に手際良く置くと、小タル爆弾のピンを抜いた。導火線に火がつき火花が散る。二人は急いで距離を取ると、それぞれ剣を構える。そして、
ドガアアアアアアアアンッ！
洞窟を破壊しそうな爆発と全てを吹き飛ばす爆風、そしてフルフルの鳴き声にも負けない爆音が炸裂し、フルフルの巨体が倒れた。もがく白い体は爆発の威力でボロボロになっている部分や焦げた部分がある。そこに向かってクリュウは剣を振り下ろした。
「うりゃッ！」
剣をもがくフルフルの脚に連続して斬り付ける。サクラは無防備

な頭に強烈な一撃を放った後、自らの体を包んでいた力を解放。気刃斬りを発動した。大きな剣をすさまじい速さで連続して斬り付ける――いや、叩き付ける。フルフルの頭はボロボロになって大量の血を噴き出す。そして、大きく振り上げた剣は確実にフルフルの頭を捉えた。

「……チェストオオオオオオオオオッ！」

サクラは腹の底から声を出して最後の一撃を叩き込んだ。その一撃に、フルフルの頭は見るも無残にひしゃげた。そのすさまじい攻撃にフルフルはたまらず起き上がる。斬っていた最中のクリュウはいきなり立ち上がったフルフルの脚にぶつかって後ろへ転んだ。サクラも一度後方に下がる。

フルフルは口から青い息を漏らしてフンフンと匂いを嗅ぐ。あの息は怒り状態になったイャンクックが火を噴いていたのと同じで怒り状態を表しているのだろうか。

クリュウは起き上がるとまだ動かぬフルフルの脚に一撃を叩き込む。すると、フルフルは体を縮めた。次の瞬間フルフルの体が伸び、白い巨体は上に跳んだ。見ると、フルフルは再び天井にへばり付いていた。クリュウは上を確認しながら避けるように走ったが、フルフルは全く違う方向へ歩き出した。そしてそのまま壁の上にあった穴へ逃げ込むと、体を下ろし、翼を羽ばたいて消えてしまった。どうやら逃げたようだ。それを見て、クリュウはふぅと息を漏らして剣を腰に戻す。横ではサクラも同じように剣を背中の鞘に戻していた。

「……ペイントボールはまだ効いてるから場所はすぐわかる」

「そうだね」

クリュウは疲れたように岩の上に腰を下ろした。そんなクリュウを見てサクラは口元に小さな笑みを浮かべる。

「……疲れた？」

「ちょっとね。イャンクック以上に神経を磨り減らすよ」

「……そうね。フルフルに近接武器で挑むと放電にはいつも気を配ってないといけないから、大変かもしれないわね」

「でも、ボウガンや弓も距離を取り過ぎると電気ブレスを喰らうから、

厄介な相手には変わりないよ。唯一の救いは動きが遅い事だね」
「……そうね」
　サクラはクリュウに近寄ると、彼の体を上から下まで見詰める。
「……ケガは、ない？」
「うん、なんとか」
「……そう。良かった」
　サクラは安堵の息を漏らす。そんなサクラに微笑むと、クリュウは道具袋（ポーチ）の中から用意していた元気ドリンコを二本取り出し、一本をサクラに渡す。
「これでも飲んでもう一度勝負だね」
「……ありがとう」
　サクラは元気ドリンコを受け取ると口に流し込む。クリュウも一気に飲み干し、続いて応急薬を飲みながら携帯砥石を取り出して流れている地下水で濡らした後すっかり刃こぼれしてしまったドスバイトダガー改の刃に当てて直す。それを見て、サクラも同じように携帯砥石を使う。太刀というのは繊細な武器の為、こまめな手入れが必要なのだ。
「落とし穴はあと一個。トラップツールとゲネポスの麻痺牙がそれぞれ二個あるから二回シビレ罠が作れるね。あと大タル爆弾は一つ。小タル爆弾は一個残ってるし、馬車の中にはまだ大タル爆弾が二個残ってるから、もし足りなくなったら一度戻るのも手だね」
「……ええ。でも、クリュウってこんなに爆弾を使うのね」
「え？　ま、まぁ今回は警戒してずいぶん多いけど。いつもは大タル爆弾二個とシビレ罠と小タル爆弾は一個ずつくらいは使うけど」
「……赤字にならない？」
「ははは、結構ギリギリだね。まぁ、そこは自分で調合して安上がりにはしてるし爆弾は安い時を狙って一度に買うから」
「……大変ね」
「まぁ、片手剣はサクラの太刀に比べて攻撃力が低いから、一人だとどうしても狩猟時間が長くなっちゃって大変だからね。爆弾でも使わないと僕の体力が持たないもの」

「……仲間がいると、そういう事もないのにね」
「確かにね。はぁ、誰かイージス村に腰を据えてくれるハンターいないかなぁ」
まだまだ辺境の小さな村に過ぎないイージス村にはいまだクリュウしか定住しているハンターはいない。せめてあと一人くらいはハンターがほしいものだ。
そんな苦笑いするクリュウを、サクラはじっと見詰める。
「さてと、そろそろ行こう」
シビレ罠を一個作り終えたクリュウはそう言って立ち上がると荷車に駆け寄る。そんなクリュウを見てサクラも立ち上がる。
「……ええ」
サクラは誘導するようにクリュウの前を歩き、その後にクリュウも続く。そしてそのまま狭い洞窟を抜け、来た時とは反対方向に出る。すると、先程までの肌寒さがうそのように今度は汗が噴き出すような温度に変わる。
サクラはペイントボールの匂いを探しながら地図と方向を照らし合わせる。その間に、クリュウは携帯食料を頬張った。
「……あっち」
サクラがそう言って指差したのはさらに密林の奥だ。一体どこへ向かうのかと彼女の持つ地図を覗くと、どうやら中央に流れる川の付近のようだ。
「……気をつけて。こういう川にはガノトトスがいる事もあるから」
「わかった」
クリュウは改めて気合を引き締めて荷車を引く。サクラはそんなクリュウをしっかりと誘導しながら進む。しばし進むと、水の流れる音が聞こえてきた。そのまま歩き続けると、乱雑に生えていた木がほとんどなくなり、背の低い草などが生えた広場に出た。そして横には大きな川が流れていた。かなり川幅が広い。これならガノトトスが現れても不思議ではない。だが、幸いにもガノトトスはいなかった。しかしその代わりにイーオスが三匹動き回っていた。
サクラは無言で剣を構えると突貫。クリュウも荷車を置いて突撃

する。
血のように真っ赤な体が緑色の密林の中ではかなり目立つ。イーオスも二人の存在に気づいて「ギャウアッ！　ギャウワッ！」と敵襲の声を上げた。
サクラは突撃してきたイーオスに横一線に薙ぎ払うような一撃を叩き込む。その一撃でイーオスは悲鳴を上げて真っ赤な血を噴きながら吹っ飛んだ。後ろにいたイーオスを巻き込んで倒れる。まず一匹。巻き添えを喰らったイーオスはすぐに立ち上がるとサクラに毒液を吐き出してくるが、サクラはそれを横へ跳んで回避する。
一方クリュウは残った一匹に剣を叩き込む。イーオスの鱗が弾け飛び、赤い血が噴き出す。悲鳴を上げて仰け反る動作に連続して剣を叩き込む。
「うりゃぁッ！」
「ギャアッ!?」
イーオスは悲鳴を上げて吹き飛ぶ。が、それだけでは死なないのはわかっている。追撃を掛けようと突進する。
「せいッ！」
クリュウは横に払うように剣を振るうが、イーオスはそれを後ろに跳んで避けて剣は虚空を斬っただけだった。イーオスは空振りをしたクリュウに向かって毒液を吐き掛ける。盾で防ぎ、再び剣を叩き込む。刃がイーオスの皮を切り裂き、肉を引き裂く。さらに真っ赤に染まり、イーオスは倒れた。
剥ぎ取りを終えると、クリュウは荷車に戻る。と、サクラは荷車からある物を取り出した。それは村を出る時も気になっていたものだ。
「それ、何に使うの？」
クリュウが指差したのはサクラが持つ虫あみであった。
「……釣りミミズを取る」
そう言うと、サクラは草むらの中に進んだ。すると、そこには光る虫が飛んでいた。きっと光蟲だろう。絶命時に強烈な閃光を放つ虫で閃光玉の素材になる虫だ。そんな光蟲が飛び回る草むらで、サクラは虫あみを振るった。そして、次々に虫あみを振るっていたが、元々

そんなに耐久性がいいものではない虫あみは折れてしまった。だが、彼女の目的は果たされた。
「……捕まえた」
捕まえた色々な虫に混ざって取り出したのは釣りミミズ。名の通り、釣りの際にエサにできる虫だ。
サクラは荷車に載せていた釣竿を取り出すと、針に釣りミミズをつけて川に投げ込んだ。
「釣り？」
クリュウは不思議そうに首を傾げる。今はフルフルを討伐しなければいけないのに、釣りだなんて一体どうするのか。
とりあえずしばし待つ事にした。川のせせらぎの音を聞きながら、ぼーっと待つ。しばらくし、ようやくサクラの竿に当たりが来たのか、サクラは糸を引き始めた。竿を上げると、そこには小さな魚が掛かっていた。
「……失敗」
それは細長い小さな魚。サシミウオであった。
「……食べる？」
「え？　あ、うん」
クリュウはサシミウオを受け取ると口の中のミミズの残骸をきれいに取り、水洗いして口に入れた。川魚は寄生虫などが多くて生では食べられないが、この魚は生でも食べられるので狩場で食すハンターも多い。
「うん。おいしい」
身がプリプリとしていて新鮮さがすごくおいしい。狩場の楽しみのひとつだ。
サクラは再び釣りを開始した。
そうして何度かやって目的と違う魚を数匹釣り上げた後、ついに、
「……ゲット」
そう言って彼女が見せてくれたのはこれまた小さな魚。人間の拳くらいのその魚は絶命時に破裂する性質を持つ魚、カクサンデメキンであった。ボウガンの弾の一つ、拡散弾の最上級クラスである拡散弾

ＬＶ３を作る素材の一つだ。でも一体これをどうするのか。
「……火を起こして」
「え？　あ、うん」
　クリュウは荷車に置いてあった肉焼きセットを取り出すと火打石と乾燥燃料粉末を使って火を着ける。いつも肉を焼いたりするので、火を着けるの手つきも鮮やかだ。
「起こしたけど」
　すると、サクラは筒状の何かを取り出した。それは肉焼きセットに付属している魚を蒸し焼きにする器具だ。最近はただ焼くだけでなく狩場の料理もレパートリーが増えている。ハンターも人間なので、新しいものを求めるのだ。おかげで他にも鍋などが付属している。あまり使わないが。
　サクラはその筒にカクサンデメキンを入れると、本来は肉から突き出た骨を置いて固定する軸に鉄棒を置き、そこへ筒を提げた。この鉄棒は鍋などを下げる時に使うものだ。
　しばし火に掛けていた筒だったが、肉を数十秒で焼き上げるその強い火力にあぶられ続け、突如パンッという音が筒の中で炸裂した。その音にクリュウはビクッと震える。きっと中でカクサンデメキンが弾けたのだろう。サクラはその音を聞いても眉一つ動かさず、筒を見詰める。そして、さらに一分ほどして火を消し、焼けた筒を取り出す。すると、筒から火薬のような匂いがただよって来た。どう考えても焼けた魚が発する匂いではない。サクラはそんな筒を開けた。すると、その中には黒い粉が入っていた。一見すると何だろうかと思ったが、それは破裂して粉々になり、炭化したカクサンデメキンであった。
「それをどうするの？」
「……見てて」
　サクラはそう言うと荷車に置いてある最後の大タル爆弾の蓋（ふた）を外して中にある信管を抜くと、その粉を中に入れた。そして落ちていた太い枝で中身をかき混ぜると信管を入れ直して再び蓋を閉じる。それだけだった。
「……これで、この爆弾は大タル爆弾Ｇになった」

「え？　こ、これだけで？」
「……ええ。これで大タル爆弾を超える強力な爆弾になった。簡単でしょ？」
「う、うん」
　さすがサクラ。ハンターとしての経験の長さが違うからこその知識と技術だ。これだったら自分にもできるんじゃ……
「……でも気をつけて。慣れてないとカクサンデメキンの粉末と爆薬がちゃんと混ざらずに暴発して大怪我をする事があるから」
　甘い期待を感じたクリュウはその言葉に一気にテンションが落ちた。大タル爆弾でも危ないのにそんなものが暴発なんかされたら爆死確定である。
　サクラは釣竿と肉焼きセットを荷車を戻すと、苦笑いしているクリュウを見る。
「……これでもう少し楽になる。行きましょう」
「う、うん」
　クリュウは再び荷車を引いた。サクラは匂いを確認して再び歩き出す。そんな彼女の背中を見詰め、クリュウは小さく微笑んだ。
「……何？」
　サクラは自分を見て微笑むクリュウに振り返った。片方しかない瞳が不思議そうにクリュウを捉える。
「いや、サクラは頼もしいなと思って」
「……そんな事ない」
「ううん。すっごく頼りになるよ。特に僕みたいなかけだしのハンターにはサクラみたいな熟練ハンターがいてくれた方がいいもの」
「……そう」
　サクラは口元にわずかな笑みを浮かべると、再び前を向き直って歩き出す。そんな彼女の後ろからクリュウが追い掛ける。
　その細くも、頼れる背中を見詰め、クリュウは嬉しそうに笑みを浮かべた。
　まだまだかけだしの自分には、彼女のような引っ張ってくれる仲間が必要なのだと改めて実感した。そしてまた、自分はまだまだ本当に

かけだしなんだなぁと思った。
もっともっと色々知って、サクラやフィーリア、そして父のような立派なハンターになりたかった。
今度の戦いも、その道へのまた一歩になる。そう感じていた。

第37話　サクラの傷痕　最期の雷鳴

川に沿ってしばし歩くと、再び別の洞窟が現れた。先程の洞窟よりも穴が大きく、吹き出して来る風は先程の洞窟のより温かい。そして、その風に混じる匂いは、紛れもなくペイントボールのものだった。

「この奥にフルフルが？」

「……ええ」

サクラは目を細めて戦闘モードに入ると飛竜刀【紅葉】を構える。吹き出す風がサクラの黒く艶やかな髪をサラサラと揺らす。

「……まず私が引き付ける。その間にクリュウは荷車を置いて。その後は自由に動いて」

「わかった」

「……行きましょう」

「うん」

サクラは飛竜刀【紅葉】を構えたまま駆け出した。その後をクリュウも駆け出して追い掛ける。洞窟を進むと、そこは開けた岩場であった。天上は高く大地が裂けてできた大きな切れ目があり、そこから光が差し込んで中は明るい。壁からは水が轟々と音を立てて落ちる。まさに滝のカーテンとも言うべき幻想的な光景だ。下にはそんな水が溜まった池があり、そこから先程の川へ水が流れるのだろう。反対側には別の洞窟があり、地面には水が溜まっている。そして、そんな広場の真ん中に、白い体をしたフルフルが立っていた。

フンフンと匂いを探っている。洞窟付近にいる二人は風下にいるのでまだ見つけられないのだろう。クリュウは横へ走って荷車を置く。その間にサクラが突貫する。そして、異変に気づいたフルフルが顔を上げた瞬間、サクラはフルフルの頭に向かって横殴りの一撃を叩き込んだ。

「ヴォオオオオオオオオオオオッ!?」

フルフルの伸びた首がそのあまりの威力にくの字に曲がる。続いて斬り上げるようにして一撃を叩き込み、フルフルはたたらを踏む。

「ヴォオォッ！」

フルフルは口から青い息を噴き出すと同時に再び電気を身に纏う。サクラはそれを冷静に見極めて後退する。放電が終わると、後ろに回っていたクリュウが斬り掛かった。
「喰らえッ！」
クリュウはフルフルの脚に向かって強烈な一撃を叩き込んだ。すると、ぐらりとフルフルの体が揺れ、轟音と共に地面に倒れた。
「ヴァオオオオオッ!? ヴォアアアアアッ！」
立ち上がろうともがくフルフルにクリュウが斬りかかる。連続して脚に向かって剣を叩き込み、血が噴き出す。
サクラはいまだ倒れたままのフルフルの頭部に剣を振り下ろす。豪快に血が噴き出し、再びサクラの奥底から力が湧き上がった。続いて間髪入れずに気刃斬りを放つ。大振りの連続斬りがフルフルの頭や首、首の根などに激突。フルフルは悲鳴を上げる。
「……チェストオオオオオオオオッ！」
掛け声一閃、剣を力の限り叩き落した。
「ヴォアアアアアアアアアッ!?」
フルフルは悲鳴を上げて堪らず立ち上がると続いて姿勢を低くして放電する。青く迸る青い電撃に二人は後ろへ跳んで回避した。
クリュウは剣を腰に戻すと一度離れた。そしてそのまま荷車からシビレ罠を取り出すと横へ走る。と、フルフルは放電を終えたが再び姿勢を低くする。が、電撃が体中から口へ集約され、首が大きく反り返る。その動作にクリュウは目を見開いた。
「ちょっとそれはッ！」
サクラが慌てて連続して斬り掛かって攻撃を封じようとするが、すでに時遅く、轟音と光と共に口から電気ブレスが放たれた。
地面を這うように高速で、そして広範囲に進む複数の電気球にクリュウはその動きを見てほとんど勘で横へ跳んだ。そして、その横を電気球が通り抜けて行った。
「あ、危なかった……ッ！」
クリュウは投げ出した体を再び起こす。すると、再びフルフルの口が光り出した。驚愕するクリュウだったが、横にいたサクラが飛竜刀

【紅葉】を連続して叩き込んだ。その猛攻にフルフルは電気ブレスを撃つ直前で仰け反ってしまい、不発に終わった。
安堵するクリュウだったが、すぐに走り出してフルフルの正面に立たないような位置へ行くとシビレ罠を設置する。続いてフルフルの動きを見ながら再び荷車へ走る。その間サクラがフルフルの動きを封じる。が、連続して斬り掛かるサクラに予期しない事態が起きた。
「ヴォワアアアアアアアアッ！」
すさまじい怪音波のごとく響いたフルフルのすさまじい鳴き声――バインドボイス。その威力にサクラは思わず耳を塞いだ。その隙を突き、フルフルはサクラに向くと体中に走った電気を口に集約させる。その動作にクリュウよりも正面に対峙するサクラも恐怖した。
「……あ」
「ゴアアアアアアアアアアッ」
中距離で放たれた電気ブレスは動けずにいたサクラに襲い掛かった。
「……キャアアアアアアアアアッ！」
サクラの絶叫が響き渡る。
電気ブレスの直撃を受けたサクラは体を激しく痙攣させて地面に倒れ込んだ。
「サクラッ！」
クリュウは慌てて走るとペイントボールを投げ付けた。フルフルの白い体にピンク色の粘液が付着し、強烈な匂いを放つ。その匂いにフルフルはとどめ刺そうとしていたサクラからクリュウに向き直る。それを見て、クリュウはシビレ罠の方へ走った。フルフルはそんな獲物に向かって放電をしながら突っ込んで来た。その初めての攻撃にクリュウはとっさに体を横へ投げ出して回避した。
そしてシビレ罠に向かって走るとその後ろに立って再びフルフルに向き直る。
フルフルはブヨブヨの体をかがめ、跳び上がった。だが、奴の着地地点にはシビレ罠が……
「ヴォアアアアアアッ!?」

シビレ罠に掛かったフルフル一瞬にして体の自由を奪われて悲鳴を上げる。その間にクリュウは少し離れた場所にあった荷車から大タル爆弾Gと小タル爆弾を掴むと走る。シビレ罠の効果時間にはギリギリだが、何とか間に合いそうだ。

クリュウはフルフルの下に大タル爆弾Gを置き、すぐ傍に小タル爆弾を置いてピンを抜くと急いで走る。背後にフルフルがシビレ罠が解けた気配がしたが、そのすぐ後にすさまじい爆発が炸裂した。

そのすさまじい爆風にクリュウは吹き飛ばされた。さすが大タル爆弾G。すさまじい威力の爆発だ。

クリュウは地面の上を何度か転がった後慌てて体を起こして振り返ると、フルフルは転倒していた。急いで駆け寄ると、その体に連続して剣を叩き込んでブヨブヨの皮を斬り裂く。そんなクリュウの攻撃にフルフルはゆっくりと起き上がると、体に青い電気を纏って放電。クリュウはその攻撃に慌てて後退する。

クリュウが距離を置くと、フルフルは放電を終えた。すると、突如フルフルはクリュウに背を向けると脚を引きずって歩き出した。それは残りの体力が少ない時に見せる飛竜の特徴だ。

クリュウは慌てて駆け寄って斬りかかるが、刃が触れる寸前でフルフルは翼を羽ばたかせた。それで発生した風がクリュウの体を吹き飛ばすが、足に力を入れて耐える。するとそのままフルフルは天に昇っていった。クリュウはそれを確認すると急いで倒れているサクラに駆け寄る。

サクラはぐったりと倒れていてぴくりとも動かない。焦げたような臭いが漂い、クリュウの背中に冷たいものが流れる。

「サクラッ！」

クリュウサクラのぐったりとした体を抱き上げた。すると、焦げた臭いはするがそれほど嫌なものではない。微かに髪が焦げた程度だった。そうわかると安堵の息を漏らす。

体を揺すると、う、とうめいてサクラが目を覚ました。

「サクラッ！」

「……く、クリュウ……？　一体――」

「大丈夫？　フルフルなら逃げたよ。脚を引きずってたからもうすぐだと思うけど」
「……そう」
　サクラはゆっくりと体を起こす。
「大丈夫？」
「……ええ。クリュウが助けてくれたのね」
「いや、そんなんじゃないけど」
「……でも、ありがとう」
　そう言ってサクラは微笑んだ。そのきれい過ぎる笑みに、クリュウはドキリとする。こんな美少女に笑みを向けられたら、うぶなクリュウは顔が真っ赤になる。
　サクラはそんなクリュウの肩を借りながらゆっくりと立ち上がった。と、その時何かがパシャと音を立てて水が張った地面に落ちた。
　――それは、眼帯であった。
「眼帯落ちたけど……」
「……ッ!?　……見ないでッ！」
　突如悲鳴のような彼女の声の後ドンとクリュウは突き飛ばされた。続いてサクラのまだフラフラの体は支えを失って倒れる。
「サクラ!?」
「……お願い！　見ないで！」
　サクラは先程までの小さな笑みから一転して泣きそうな顔になっていた。そして、必死に手を使って遮るものを失った左目を隠す。
　目の縁に涙を浮かべ、サクラは嗚咽を漏らす。さっきまでフルフルと死闘を繰り広げていた剣豪とは正反対なサクラに、クリュウは戸惑う。
「さ、サクラ？」
「……お願い……ッ！　見ないで……ッ！　こんな醜い顔……クリュウには見せられない……ッ！」
　どうやら眼帯の下に隠された左目を見られたくないらしい。
　サクラは美少女である。そんな彼女がここまで必死になって隠したい左目とは、それほどひどいものなのだろうか。だから、あそこま

で徹底して眼帯をつけていたのかもしれない。
「……こんな醜い顔を見られたら……クリュウは絶対私を嫌う……ッ！」
「そ、そんな事ないよ！」
クリュウは声を荒らげる。もちろん彼の言うとおり、クリュウは人を外見だけで判断するような人間じゃない。だが、サクラは必死に左目を隠す。
美少女だからこそ、その傷が目立ってしまい、今まで辛い目に遭ってきたのかもしれない。だが、そんな彼女にクリュウはそっと手を伸ばす。
「大丈夫だから。僕はそんな傷くらいじゃ嫌いになったりしないから」
「……うそよ……ッ！」
「うそじゃない。でも、見せたくないならいいよ。だけど、そんな状態じゃ戦えないでしょ？　眼帯は紐が焼き切れてるから使えないし」
「……それは……」
顔を伏せるサクラに優しく微笑み、クリュウは立ち上がる。その瞳には決意の光が宿っていた。
「仕方ない。後は僕一人でがんばるよ」
クリュウの言葉に、サクラは塞がれていない右目を大きく見開く。
「……そ、そんなの……ッ！」
「仕方ないでしょ？　サクラは電気ブレスを受けて弱ってるし、しかも眼帯が取れて動けない。それに対して僕は無傷。そしてフルフルはもう少しで倒せる。なら、答えはこれだけでしょ？」
「……で、でも……ッ！」
「他に何か代案があるの？」
「……」
黙ってしまうサクラに、クリュウは静かに背を向けると荷車に歩き出す。
脚を引きずったとなれば奴はきっと巣に戻って眠るつもりだ。おそらく洞窟の中なので、使えるのは残ったトラップツールとゲネポス

の麻痺牙でシビレ罠が一個ぐらいだ。それでも、十分な力になる。そんな事を考えながら歩く。と、
「……待って！」
その声に振り返ると、うつむきながた立ち上がったサクラがいた。顔からは手が外されているが、垂れた髪がそれの代わりに顔を隠す。
「……クリュウ一人に、危険な目には遭わせられない」
「サクラ？」
「……本当に、見ても嫌わない？」
震える声で言うサクラに、クリュウは向き直ると静かにうなずく。
「うん。約束する」
「……わかった……クリュウを、信じる」
その小さな小さな言葉の後、サクラはゆっくりと顔を上げた。
風が吹き、最後まで隠していた髪が靡いてその全貌が露になった。悲痛な表情を浮かべるサクラの眼帯の下に隠れていた部分は、閉じられた瞳、そして眉毛のすぐ下から縦一直線に伸びた傷跡。
それが、彼女が必死になって隠してきた彼女の本当の顔だった。
「……ッ！」
唇を噛んで、苦しそうにクリュウの言葉を待つサクラ。
クリュウの事は信じている。
だけど、やっぱり嫌われるだろう。
こんな醜い顔を見て、何とも思わないなんて……
「なぁんだ。大した事ないじゃん」
クリュウの優しげな声に、伏せていた隻眼が大きく見開かれた。その視線の先には、優しげな笑みを浮かべたクリュウがいた。
「もっと皮膚がただれてるのを予想してたよ。まぁ、それだとさすがに僕もちょっと自信はなかったけど、それくらいなら全然醜いなんて事はないって」
「……ほ、本当？」
信じられないという顔をするサクラ。
「本当だって」
「……うそよ。クリュウはうそをついてる」

悲痛な声で疑うサクラに、クリュウは苦笑いする。
「それくらいの怪我のハンターならたくさんいるし、僕も見て来たよ」
確かに、ハンターという職業柄傷を持ったハンターは数多い。クリュウ自身そういったハンターは多く見て来た。だから、サクラぐらいの傷なら全然気にならない。
「それにほら、それでも十分サクラはかわいいからさ」
「……クリュウ」
「へへへ、なんか照れるな」
そう言って頬を赤らめながら微笑むクリュウに、サクラも自然と笑みを浮かべた。今まで眼帯で隠されていた眉と閉じられた瞳が加わったその笑みは、とてもきれいなものだった。
「で？　どうする？　行く？　帰る？」
ちょっとからかうようなクリュウの問いに、サクラは不敵な笑みを浮かべて返す。
「……答えは、わかってるでしょ？」
「そうだね――行こうか」
「……ええ」
ペイントボールの匂いを辿ると、それはどうやら反対側の洞窟から漂っていた。どうやらそこが巣らしい。
クリュウはシビレ罠を調合して腰に吊るすと、荷車は置いていく事にした。もう爆弾は全て使ってしまったから、荷物になるだけだ。
振り返ると、サクラは砥石で刃を直し、回復薬も飲んでもう準備を整え終わっていた。
クリュウが駆け寄ると、サクラは静かに開かれた右目を細めた。
「……行きましょう」
「うん。これが最後だ」
二人は不気味な風が吹き出す洞窟に向かって走り出した。
洞窟に入り込むと、そこは最初に入った洞窟のように冷たい地下水が染み出していて極寒であった。吐き出す息さえも白くなる。
二人は落ち着いてホットドリンクを飲み干すと、すぐに体が温まる。やっぱり少しまだ寒いが、かなり落ち着いた。

そこは多少の大きさを持った広場で、イーオスが三匹いるだけでフルフルはいなかった。ペイントボールの匂いはさらに奥から流れてくるので、おそらく奴はこの向こうにいる。
追い掛けて来られても困るので、とりあえずイーオスを片付ける。
荷車を置くという手間がない分、最初に動いたのはクリュウだった。
真っ赤な血のような赤の体をしたイーオスに剣を叩き込んだ。悲鳴を上げるイーオスに体を回転させながら斬り付ける。その一撃にイーオスの体が吹き飛ぶ。倒れたイーオスが起き上がる寸前にもう一撃叩き込もうと駆ける。が、横から別のイーオスが跳びかかって来て慌てて盾を構えたが、その威力に体が吹き飛んだ。
「くぅッ！」
地面に転がった体を起こしたクリュウにイーオスが突撃して来る。が、その斜線上にサクラが現れ、飛竜刀【紅葉】を薙ぎ払うように一撃を入れる。その威力に、イーオスは吹き飛んだ。
「あ、ありがとう」
「……礼は、いらない」
サクラはまだ力が残るイーオスに突貫。起き上がったばかりのその体に鋭い突きの一撃を叩き込む。その瞬間の刀身はあまりの速さに残像が残り、剣が二倍の長さに見えた。その剣先がイーオスの体を突いた瞬間、イーオスは再び吹き飛んで動かなくなった。
その間にクリュウは先程吹き飛ばしたイーオスに突撃する。イーオスは焦ったように毒液を吐いてくるが、クリュウは横滑りのように回避し、イーオスの斜め横から斬りかかる。
「えいッ！」
抜き放った剣がイーオスの体を切り裂き、吹き飛ばす。
ようやく三匹を倒すと、それぞれ素材を剥ぎ取り剣に付いた血を流れる地下水で洗い流す。こうした血は錆（さび）になったりするからだ。
サクラはすでにイーオスを片付け終えていた。やっぱり実力の差である。

吹き抜ける風は相変わらず湿っていて冷たく、肌寒い。そして、その風に乗って匂うペイントの匂い。この奥にフルフルはいる。
「……おそらくフルフルは傷ついた体を癒す為に眠っているはず。本当は爆弾が残っていれば良かったんだけど、それはもうないから、私が一撃を入れて起こすわ」
「うぅっ、ご、ごめん……勝手に爆弾使っちゃって」
「……クリュウが謝る事はない。そのおかげで私は助かったんだから」
そう言ってサクラは口元に笑みを浮かべる。その笑顔にクリュウは安堵の息を漏らすが、すぐにサクラの隻眼が細まった。戦闘モードに入ったのだ。
「……行きましょう」
「うん」
二人は剣を構えるとなるべく音を立てないように奥へ進んだ。再び壁が狭まって狭くなる。小型モンスターの行き来はできるが、飛竜クラスは通れない。きっとさっきの洞窟のようにどこかに穴が開いていてそこから出入りしているのだろう。
そのまましばし進み続けると、再び開けた場所に出た。先程イーオスと戦った広場よりも広く、飛竜もある程度なら動き回れそうだ。そして、そんな洞窟の奥には白い体を不気味に輝かせながらフルフルが静かに鎮座していた。幸いにもフルフルは眠っていて、フルフル以外にはモンスターはいなかった。
「……クリュウは私の後ろへ。私が頭へ一撃を入れた後に攻撃して」
「わかった」
眼帯を外し、隠されていた傷の入った左目が露になったサクラはゆっくりとフルフルに近づく。その後ろからクリュウも近づく。
改めて見て、フルフルの大きさ、そして不気味さに震えが出る。
クリュウはサクラが位置に着くといつでも斬りかかる用意を整える。そして、振り向いたサクラと目を合わせた。その瞳にうなずくと、サクラもうなずき返す。
そして、サクラは飛竜刀【紅葉】を両手で握ると振り上げ、眠るフ

ルフルの顔に向かって全力を込めて叩き落した。
「ヴォアアアアアアアアアッ!?」
首が曲がり、顔が地面に叩き潰される。そのあまりの威力にフルフルは倒れた。そこへすかさずクリュウが飛び掛かる。
もがくフルフルの脚に向かってドスバイトダガー改を叩き込む。血飛沫が舞い、フルフルのブヨブヨの皮が裂ける。すでに何度も斬りつけた脚はボロボロだった。
連続して剣を叩き込むクリュウと別方向で、大振りな連撃を叩き込むサクラ。フルフルの首に強力な一撃を腕の力だけでなく体全体を使って振り回すように振り下ろす。その刃が当たるたび爆発し、フルフルの純白の皮が焼け焦げる。
「ヴォオオオオオオッ!」
フルフルはそのすさまじい攻撃に堪らず起き上がると体を回して短い尻尾で襲う。二人は一度距離を取って離れるが、すぐに斬り掛かる。
クリュウは脚に向かって走ったが、フルフルが回転して目の前に頭が現れた。驚くが、構わずその頭に剣を叩き込んだ。が、それがまずかった。
「ヴォフヴォオッ!」
「ぐがぁッ!?」
「……クリュウッ!」
突如フルフルが剣もろともクリュウの腕に噛み付いた。鋭い牙が嫌な音を立ててクックアームを砕き、強力な酸性の唾液がクリュウの皮膚を焼く。
腕の激痛にクリュウは悲鳴を上げる。そこへサクラがその白い胴体に向かって飛竜刀【紅葉】を叩き込んだ。不意の一撃にフルフルはクリュウから離れる。だが、クリュウは白い煙を噴く腕を押さえたまま倒れた。
「……クリュウッ!」
サクラが慌てて駆け寄って来て、声にならない悲鳴を上げた。そこには辛そうに唇を噛んで痛みを堪えるクリュウがうずくまっていた。

「……クリュウッ！」
「だ、大丈夫だから……ッ！」
「……でもッ！」
「ヴォオオオオォォォッ！」
その声に驚いて顔を上げると、フルフルが電気ブレスの発射体勢に入っていた。
「……ッ！」
フルフルは体を天井に向かって伸ばし、腹が青く輝き、それが首に登っていく。
驚愕のあまり目を見開いたまま動けずにいるサクラ。口に集まる電気に、もう逃げられないと悟った。その時、
「……クリュウッ!?」
クリュウはサクラの前に飛び出すと、盾を構えた。その行為にサクラが何かを叫ぼうとした刹那、
「ヴォオオオォォォッ！」
すさまじい鳴き声と共に電気球が放たれ、クリュウに直撃した。
洞窟にクリュウの悲鳴が轟く。
激しく痙攣した後、クリュウはぐったりと倒れた。
フルフルは何かが焦げた臭いに勝利を確信したのか、歓喜の声を上げた。が、
「……チェストオオオオォォォォォッ！」
突如横からすさまじい剣撃が自らの頭を砕いたのを感じた刹那、体が壁に叩き付けられた。それはサクラ渾身の一撃であった。
倒れたフルフルに向かってサクラは連続して斬る。その隻眼には怒りの炎が燃えていた。叩き付けるたびに剣に力が込もる。そして、体の底から力が湧き上がった。刹那、必殺の気刃斬りが炸裂する。
フルフルの白い体に、すさまじい勢いで剣が襲い掛かった。
爆発の次に爆発。炎に包まれるフルフル。そのすさまじい剣撃の中でもフルフルは激痛に耐えながら必死に悲鳴を上げ、なんとか立ち上がった。が、
「……チェストオオオオォォォォォッ！」

最後の一撃がフルフルの頭に炸裂。爆音と共に大きくフルフルの頭が砕け、鋭利な牙が吹き飛び、大量の血を吐き出した。そして……

「ヴォアアアアアアアアアアア……」

どんどん声が小さくなっていき、フルフルはそのまま力を失って倒れた。そしてそのまま動かなくなった。

フルフルを、ついに討伐したのだ。

だが、サクラは構わず剣を投げ捨ててクリュウに駆け寄った。焦げた臭いがクリュウからし、最悪を予想した。今まで自分が見て来たフルフルの電気ブレスを受けて内側から焼き殺されたランポスやゲネポスを思い出し、そしてそれをクリュウと重ねてしまう。

「……クリュウッ！」

泣きそうな顔でサクラはクリュウの体を抱き締めた。すると、

「……さ……サクラ？」

クリュウはゆっくりと瞳を開いた。それを見て、サクラの隻眼から涙が流れた。

「……良かった」

「……ははは……無理は……するもんじゃないね……」

そう苦笑いすると、クリュウは起き上がろうとしたが、体は痺れて動かなくなっていた。どうやらしばらくはこのままらしい。

クリュウは「フルフルは？」と訊こうとして、遠くに倒れて動かない白い塊を見て笑みを浮かべた。

「……あーあ、おいしい所……取られちゃったな……」

「……ごめんなさい」

「……冗談だって……良かった……これで村も無事だ……」

そう言って笑みを浮かべるクリュウに、サクラも嬉しそうに笑みを浮かべた。が、そんなクリュウの右腕を見て、再び表情が暗くなる。

「……右腕、大丈夫？」

「え？　あ、うん。たぶん」

サクラはひびが入ったクックアームを外した。すると中のダブレットは溶けていた。そして、その下にある腕には軽い火傷の跡があった。

「……良かった。これなら、痕は残らない」
「まぁ、別に残ってもハンターの傷痕は勲章みたいなものだから、別にいいけどね」
「……そんなのダメ。クリュウの体に、そんな傷は似合わない」
「……うーん、僕の為を思って言ってくれているんだろうけど……素直に喜べないな」
くすくすと笑うクリュウに、サクラもそっと笑みを浮かべた。サクラは地下水で湿らせた布にすり潰した薬草を塗り、それをクリュウの右腕に巻いた。一応の応急処置だ。
「あ、あのさサクラ」
「……何？」
「……この状態、何とかできない？」
そう言って頬を赤らめるクリュウは、いつに間にかサクラの膝の上に頭を載せる、いわゆる膝枕状態になっていた。
「……ダメ。クリュウは怪我してる」
「あ、うん……そうなんだけど……」
クリュウは頬を掻きたかったが、残念ながら手はまだ動きそうもない。
そんなサクラの膝枕という状況をしばし楽しんだ（？）後、ありったけの回復薬を飲んでようやく体が動くようになると、早速フルフルの解体に取り掛かった。と、その前に。
「……クリュウ？」
膝を着いて手を合わせるクリュウにサクラが不思議そうに首を傾げる。きっとフィーリアと同じ疑問を持ったのだろう。クリュウはそんな彼女に説明するようにそっと口を開いた。
「こうして、倒したモンスターに追悼を捧げるのが、僕のやり方なんだ」
「……そう」
サクラはそううなずくと、自らも静かに手を合わせた。それを見て、クリュウは笑みを浮かべた。
そしていよいよ解体に入る。フルフルの皮は鱗や甲殻がない分

スッと刃が入るかと思ったがやっぱりブヨブヨしていて刃はなかなか入らなかった。だが、一度入ってしまうとスッと力をあまり入れる事なく切れた。
「これがブヨブヨの皮か。本当にブヨブヨだ」
「……フルフルの皮には特殊な成分などがあって、それを使った防具は特殊能力が付くそうよ」
「うーん、でも、こんな皮の防具はちょっと付けたくないかなぁ」
「……そう、似合うと思うけど」
「そ、そっかな？」
　照れたような笑みを浮かべるクリュウに、サクラは小さく微笑むと、手馴れたようにフルフルの体を裂く。
「……今回の、結構大きいわね」
「そ、そうなの？」
「……普通のより一回りくらい大きいわ」
「へ、へぇ……」
　前回のダイミョウザザミに続いてまたも通常個体よりも大きな相手。どうも最近運が悪いらしい。
　そのまま二人はフルフルの素材を十分剥ぎ取ると、外に止めていた荷車を持って来てそれに素材を載せた。イャンクックの鱗や甲殻と違い、かなり大きく皮を切ったので、人の手だけでは持ち運べなかったからだ。
　フルフルからはブヨブヨの皮の他に、フルフルの体液であるアルビノエキスを空になった回復薬のビンに入れ、さらにフルフルと戦う際は必ず支給される特殊な袋の中にはフルフルの電撃の源――電気袋などが剥ぎ取れた。どれもこれも貴重な素材ばかりだ。
「……帰りましょう」
　サクラはそう言って荷車の取っ手を掴んだ。
「あ、僕が引くよ」
「……いい。クリュウは怪我してるから無理はしない方がいい」
「いや、でも……」
　サクラだってフルフルの電気ブレスは受けている。だが、サクラは

首を振るとクックアームを外して布が巻かれているクリュウの右腕を見詰める。
「……いいから、クリュウは休んでて。モンスターも私が倒す」
「いや、そこまでは……」
「……その手で、剣が握れる？」
「うっ……」
正直言ってそれはかなり厳しい。今だって何もしていなくても小さいが痛みはある。そんなクリュウを見詰め、サクラは優しく微笑む。
「……無理はしない方がいい。こういう時こそ、私を頼って。私達、仲間でしょ？」
「サクラ……」
クリュウはその言葉に嬉しくなる。
サクラが言った《仲間》という言葉は、クリュウの心に美しく響いた。世の中にこれほどすばらしい言葉があるのかと疑ってしまうほど、すばらしい言葉だ。
クリュウはサクラの好意に甘え、荷車を引く彼女の後ろから歩いた。でも一応開いている左手で後ろから押してはいた。そんな彼の行為には彼の優しさが溢れんばかり込められていた。もちろん、サクラもそれは小さく笑みを浮かべながら黙認していた。
二人はそのまま密林の木々の中へ消えて行った……
二人はシルキーがいる拠点（ベースキャンプ）に戻った。
帰って来た二人（特にクリュウ）にシルキーは嬉しそうに擦り寄って来る。そんなシルキーの頭を、クリュウはそっと左手で撫でてやった。
サクラは早速置いてあった荷物の中から予備の眼帯を取り出して左目に着けた。再び眼帯姿になったサクラに少し心残りはあるものの、その彼女らしい姿にクリュウも自然と微笑んだ。
その後、二人は協力してフルフルの素材、荷車や余った道具を全て竜車の中に入れると竜車を走らせ、シルヴァ密林を去った。
すでに空はオレンジ色になり、二人を見送る大自然はまた違った姿

を見せ、悠久の時を刻む風が吹いて木々がゆっくりと揺れていた。

第３８話　サクラの決意　新コンビ誕生!?

二人はその後何事もなくイージス村に帰る事ができた。
村に着いた二人を迎えたのは大勢の村人達。その視線は期待や不安などが混ざっていたが、クリュウがフルフルを倒したを報告すると、それらは全て歓喜に変わり、爆音のような歓声が上がった。
村人達はクリュウとサクラに感謝し、その後は二人が持ち帰ったフルフルの素材などを興味深げに見詰めていた。そんな中、エレナはクリュウの火傷した右腕を見て彼を羽交い絞めにすると、自分の家に連行。すぐに手当てをした。
「ほら、これでもう平気よ」
「あ、ありがとう」
「べ、別にあんたの為じゃないからね。村の為だからね。勘違いしないでよ」
そう言って頬を赤らめながらそっぽを向くエレナに、クリュウは「それでもいいよ」と笑みを浮かべ、エレナはさらに顔を真っ赤にし、一応怪我人であるクリュウに理不尽な暴力を振るった。
エレナの猛攻にフルフルの方がまだかわいかったと改めてエレナの驚異的な戦闘能力を認める事になったクリュウ。
そんな二人を見詰め、サクラは口元に小さな笑みを浮かべていた。
その夜、村長主催の二人の功績を称えた宴会が開かれた。村人全員参加でエレナの酒場に集まったが、もちろん酒場の収容人数の限界は完全に超え、人が道に溢れた。それでも村人達は嬉しそうに二人を称えた。
エレナはいきなりの大儲けに嬉しくもあったが、せっかくのお祭りなのに自分は料理から給仕まで全て賄（まかな）う事になり、ちょっぴり残念でもあった。でもすぐに主婦や女友達のみんなが手伝ってくれ、時間に余裕ができた。
盛り上がる宴会はもう飲んで食って騒いでのドンチャン騒ぎ。当初の目的など完全に吹き飛んでいた。そんな中を掻い潜り、エレナが向かったのはクリュウとサクラが二人で飲んでいるテーブルだった。

給仕の際何度もその楽しげな光景にイラ立ち、すでにハイキックやローキック、ミドルキックにドロップキックをクリュウに炸裂させていた。なのでエレナが近づくとクリュウは恐怖して逃げ出そうとしたが、もちろん捕まる。
「どこ行くのよ」
　静かな怒りを秘めた声に、クリュウは震え上がった。
「ちょ、ちょっとトイレに……」
「トイレは反対方向だけど」
「え？　あ、あはは……」
「うふふふ」
　顔には満面の笑みを浮かべているが、エレナの瞳は全く笑っていない。そのあまりの恐怖に泣きながら逃げ出そうとするクリュウだったが、エレナ渾身のパワーボムを受けて沈黙した。
　一方ぐったりとするクリュウを見詰め、エレナは唇を尖らす。
「何で逃げんのよ……」
　小さく出されたその言葉が聞こえた者は誰もいなかった。
　復活したクリュウはなんとか席に戻った。その横にエレナが座り、二人の正面にサクラが座る形となった。そこへ現れたのがいつも笑顔の村長。
「いやぁ、今回は二人のおかげで助かったよぉ。本当にありがとう」
「いえ、お礼ならサクラに言うべきです。彼女のおかげなんですから」
「……そんな事ない。クリュウがいたから、私もがんばれた」
「え？　あ、ありがとう」
　頬を赤らめて照れたような笑みを浮かべるクリュウにイラッとし、エレナは神速の勢いで彼の足を踏んだ。
「いったぁいッ！　何するんだよエレナ！」
「知らない！」
　エレナは再びそっぽを向き、クリュウは踏まれた足のあまりの激痛に悶絶する。そんな二人を見て本当に仲がいいなと思いつつ、一体このテーブルの下でどのような戦いが繰り広げられているのか、ちょっぴり興味はあるが怖くて見れない村長。サクラは無言のままパリッ

と焼けた七味ソーセージにとろりと溶けたチリチーズをかけた一品を食べ進める。
「あ、それちょっとちょうだい」
「……えぇ」
　復活したクリュウはサクラからソーセージを分けてもらう。
「ちょっと行儀悪いわよ。食べたいなら注文しなさい」
「いいじゃん別に。ちょっとだけなんだから」
「まったく。サクラも迷惑って言ってやんなさい」
「……私は別に構わない」
「ほら！」
「何が「ほら！」よ！　威張るなこのアホッ！」
　村長は直後ドゴンッというすさまじい音の後、クリュウが泡を噴いて椅子から転げ落ちて悶絶する姿を見て、改めてこのテーブルの下は見ないと硬く決心した。
「……大丈夫？」
　さすがにあまりの悶絶ぶりにサクラも心配して駆け寄って来た。そんな彼女に心配掛けまいとクリュウは無理して笑みを浮かべる。
「だ、大丈夫……ッ！　心配はいらないから……ッ！」
「かわいい子の前だからって何格好つけてんのよボケッ！」
　エレナは躊躇（ちゅうちょ）なくクリュウの股間を蹴り上げようとした。が、それはサクラの手に止められた。
「さ、サクラ？」
「……やり過ぎ。クリュウがかわいそう」
「うっ……」
　さすがにやり過ぎたと自覚があったのか、エレナはその言葉に気まずそうに視線を外す。そんなエレナを一瞥し、サクラはクリュウの顔を覗き込む。
「……クリュウ、大丈夫？」
「ははは……いつもの事だから……」
　そう言って疲れながらも笑みを浮かべるクリュウに、サクラも小さく微笑んだ。そんな笑みを浮かべ合う二人を見て、エレナはつまらな

さそうに唇を尖らせる。
　昔なじみの美少女サクラと情けない幼なじみのクリュウ。そんな二人がどうも気にいらない。特にヘラヘラとするクリュウにはフツフツと怒りが込み上がってくる。
「エレナちゃん、楽しくなさそうだねぇ」
　村長はビールを飲みながらエレナにニコニコとした笑顔で声を掛ける。
「そ、そんな事ありませんよ。楽しいです」
「そうかな？　僕にはクリュウくんが気になって仕方がないって見えるけど？」
「なぁッ!?　そ、そんな事ありません！」
　エレナはそう声を荒らげながら言うと、真っ赤になった顔を隠すようにそっぽを向く。そんなエレナを見て、村長はやっぱりニコニコと微笑む。
　しばしエレナをからかった後、村長はクリュウと話していたサクラに声を掛ける。
「いやぁ、本当にサクラちゃんのおかげで助かったよ」
「……役に立てて良かった」
「まさかあのサクラちゃんに村が救われる事になるなんてねぇ。世の中わからないものだなぁ」
　村長はうんうんと深くうなずく。クリュウもサクラに改めて礼を言って笑みを浮かべ、エレナに頭を引っ叩かれた。
　だが、なごやかな会話は突如村長が悲しげに笑みを浮かべ、変わる事となった。
「しかし、これでサクラちゃんともまたお別れか。明日にでも帰るのかい？」
　村長の言葉に、クリュウとエレナの表情が曇る。
　フルフルを倒してサクラは依頼を完遂した。となるとサクラは再びドンドルマに戻るか他の村や街に行ってしまう。
　クリュウの脳裏に、村を去って行ったフィーリアの姿が思い浮かんだ。

サクラもまた、フィーリアと同じように自分から去っていくのだ。そう思うと、泣きそうになる。
エレナは残念そうに、でもそれをできる限りそれを表情に出さないようにしているのか、小さな笑みをサクラに向けた。
「本当にありがとうね。また遊びに来てよ。歓迎するから」
そんなしんみりした空気の中、サクラはまるで別の世界にいるかのように落ち着いた雰囲気を纏っていた。そして、そんなサクラの薄桜色の唇が開いた刹那、周りを驚愕が包んだ。
「……私、この村に腰を据える事にした」
周りの喧騒が一瞬にして消えた。
「え？　あ、え？」
村長は思わずビールの入ったグラスを取り落としそうになった。クリュウも目を大きく見開き、エレナも同じように驚愕し、周りの村人達も驚きの視線を向ける。
「え？　い、今なんて言ったんだい？」
村長が内心興奮しているのを隠しながら努めて冷静に問うが、サクラの返事は先程と同じものであった。
「……私、この村のハンターになる」
「ほ、本当かいッ!?」
村長は思わず立ち上がって大声を上げた。その顔には驚愕の他に新たに歓喜の色が煌く。そんな村長に、サクラはコクリとうなずく。
「……クリュウの手助けがしたい。そう思った」
そう言ってサクラはまだ状況が把握し切れないクリュウに小さく微笑んだ。その笑みに、ようやくクリュウの脳が状況を理解した。
「ほ、本当に？　この村に、いてくれるの？」
「……ええ。クリュウ言ってたじゃない。誰か村に腰を据えてくれるハンターがいないかって。なら、私がなる」
「で、でも、サクラは色々な村や街を回ってるんでしょ？　それはいいの？」
「……直々に依頼が来れば受けるわ。でも、私もそろそろどこかの村や街に腰を据えようと考えていたからちょうどいいし、クリュウは怪

我してる。それに――」
サクラはクリュウを見詰め、小さく微笑んだ。その優しげな笑みに、クリュウはドキリとする。
「――クリュウと一緒に、もっと狩りをしたいから」
その言葉に、クリュウは顔を真っ赤にしておろおろとする。一体どう返せばいいかわからなくなっているのだ。
「え、あ、いや……うん、ありがとう……」
意味不明な返答に対しても、サクラは優しく微笑んだ。そんなサクラに、クリュウも嬉しそうに微笑む。
「まさかサクラと一緒にこれからも狩りができるなんて――これからもよろしくね」
「……ええ」
笑みを浮かべ合って新コンビを成立させた二人。そんな二人に村長が喜びの声を上げ、村人達も拍手や歓声を上げる。
だが、そんな大喜びの雰囲気の中、エレナだけは複雑な心境であった。
サクラがこの村のハンターになってくれるのは嬉しい。まだまだ頼りないクリュウの不安は少なくなるし、何よりサクラとまた一緒にいられるのが嬉しい。
だが……
（何か、すっごくムカつく……ッ！）
クリュウとサクラとの笑顔を見詰め、エレナは胸に痛みと共に何か言い知れぬ怒りを感じていた。
クリュウとサクラ。いいコンビだと思う。だが、それを認められない、認めたくない。そんな思いがエレナの胸の中で渦巻いた。
歓喜の声が上がるイージス村。
辺境にあるその小さな村に新たなハンターが加わる事になった。
様々な気持ちが交錯する中、新たな物語が始まった瞬間であった……
一週間後、クリュウとサクラはセレス密林にいた。
クリュウの右腕もすっかり治り、修理したクックアームの具合もい

い。
今日はクリュウの怪我からの立ち直りを考えて危険な狩りではなく素材採集ツアーであった。その名の通り、素材を集める為に狩場へ入るものだ。
危険なモンスターはおらず、比較的平和な狩場を歩く二人。その腰にはそれぞれの剣だけでなくピッケルや虫あみ、釣竿などが下げられている。
「……クリュウはこの森に詳しいのよね？」
「うん。ここはもう僕の庭みたいなものだから。任せておいてよ」
「……えぇ。信じてるから」
「あ、あのさ、そういう事をあんまり正面から言わないでよ。照れるから」
「……本当の事だから」
「ははは……」
クリュウは照れ笑いを浮かべると、腰に下げていたピッケルを掴んだ。
「この奥の洞窟にいい採掘場があるんだ。行こう」
「……えぇ」
「……あ、あのさ。何で手を繋ぐ必要があるの？」
そう言うクリュウの左手を、サクラが両手で包み込むように握っていた。
「……はぐれたくないから」
「いや、はぐれないって」
そうは言うものの、クリュウはそれ以上何を言うでもなく歩き出した。そんな彼の手を握る隻眼のサクラは、どこか嬉しそうにも見えた。
手を繋いだ二人は洞窟の奥に入って行った……

第３９話　クリュウの新たな戦い

クリュウとサクラがコンビを組んでから一ヶ月あまりが過ぎた。その間に二人は多くの依頼を受け、周辺の安全を守り続けていた。

クリュウはクックシリーズに頭だけは何もないという変わらない装備であったが、武器だけは溜めに溜めた鉱石を使ってオデッセイにしていた。外見はハンターナイフそっくりだが、貴重な鉱石ばかりをつぎ込んだ強力な武器だ。

一方のサクラは単独または複数のハンターと共にクリュウとは別の依頼を受けたりもしていた。特に多いのはやはり彼女の護衛対象は絶対に見捨てないという主義に懇願する護衛依頼だった。そんな感じでサクラは村以外の依頼をこなしながらもクリュウとの連携は息の合ったものになっていた。

そんなある日、サクラが素材採集ツアーから戻って来たクリュウにある話を持ち掛けた。

「え？　ドンドルマへ？」

鉱石や虫、魚などが入った素材袋を置き、簡単な料理を頼んで席に着いたクリュウはサクラの言葉に首を傾げた。

サクラはクリュウの前に座ると、デザートを注文してクリュウに向き直る。

「……ええ。一度、ドンドルマで狩りをしてみたくない？」

「え？　で、でも村が……」

「……この一ヶ月小型のモンスターもかなりの数を狩ったから、きっと大丈夫」

「そ、そりゃあそうかもしれないけど……」

「え？　クリュウあんたドンドルマに移転するのッ!?」

そこへクリュウが頼んだ七味ソーセージにマイルドハーブ、スライスサボテンを頑固パンで挟んだホットドッグとサクラが頼んだ北風みかんジャムを掛けたクヨクヨーグルトを持って来たエレナが驚愕の声を上げた。

「あ、あんたこの村を裏切るって言うのッ!?」

「ち、違うって話おぼおおおぉぉぉッ!?」
「うるさいうるさい！　この裏切り者ぉッ！」
　エレナはクリュウの口にホットドッグをねじ込む。その際ちゃんと鼻を塞いでいるのが彼女らしい。が、空気の出入り口を完全封鎖されたクリュウは涙を浮かべながら悶える。
　そんなクリュウをあの世へ導こうとするエレナの肩を、サクラがそっと叩いた。
「何よッ!?」
「……違う。一時的に、ちょっとドンドルマへ行くだけ。それも一週間から二週間くらい」
「え？　そうなのッ!?」
　エレナは慌ててクリュウを解放した。解放されたクリュウはゲホゴホッと激しく咳き込み、生きている事を改めて神様に感謝した。
「え、エレナ……ッ！」
　危うく殺されるところだったクリュウは怒りの目をエレナに向ける。すると、自分の失態だと自覚しているのか、エレナはぷいっとそっぽを向く。
「あ、あんたが紛らわしい事言うからよ！」
「僕が言ったんじゃないよぉッ！」
「うっ……わ、悪かったわよ。その代わり、それ私のおごりにしてあげるから。許して、ね？」
「そのホットドッグが無事なら考えても良かったけど」
　そう言ってジト目で見詰める先には、先程クリュウの命を奪い掛けた凶器――ホットドッグイが見るも無残な姿で床に落ちていた。
「わ、わかったわよ！　今から新しいのを作り直してあげるから！　これもその新しいのもおごり！　これでどうッ!?」
「いや、そんなケンカ腰に言われても……まぁいいけど」
　エレナは不機嫌そうに厨房へ戻って行った。刹那、その厨房からすさまじく騒がしい音が響いてきた。とてもじゃないが、料理をしているような音には聞こえない。大丈夫だろうか。
「……クリュウ？」

厨房を見ていた視線を振り返ると、サクラが不思議そうに首を傾げていた。
「あ、ごめんごめん。で？　もう一度聞かせて」
「……だから、一度ドンドルマに行かないかって話。この村の周辺は今は平和。でも平和じゃ私達ハンターは存在価値を失う。だから、依頼がたくさんあるであろうドンドルマに行って、その間の生計を立てるの。ドンドルマの依頼は報酬金が高いし、これから先ドンドルマ経由の依頼も発生する可能性もあるから、ハンター登録をした方がいいし、何より知り合いを増やす事はいい事」
「うーん、確かに……」
腕を組んで悩むクリュウ。
確かに一度ドンドルマで依頼をこなすのはいい事かもしれない。ドンドルマには多くのハンターもいて、友好の輪を広める事もできる。そうすれば、情報なども色々と手に入る。
ちょうど今村は平和だ。最近はその影響で素材採集ツアーくらいしかやっておらず、採掘で手に入れた物を売って生計を立てているという状況だ。しかも作ったばかりのオデッセイには大量のお金と素材を使った。状況はかなり厳しい。
悩むクリュウに、サクラは無言でヨーグルトを食べながら待つ。
そしてしばしの沈黙の後、
「わかった。その提案のった」
クリュウはドンドルマへ行く事を決意した。そんなクリュウにサクラは「……そう」と小さく返すと、口元に小さな笑みを浮かべた。
「……持って行く物はそれほどないから、午後にでも出ましょう」
「そ、そんなに早く？　わ、わかった」
「だ、ダメよッ！」
そこへ怒鳴りながらやって来たエレナはホットドッグをテーブルに置いて二人を見詰める。そんな彼女の手から離れたホットドッグは先程と変わらないおいしそうなものだった。あれだけの騒音を立てていたのに、転んでもシェフなのだ。
「……どうして？」

「だ、だってドンドルマに行ってる間にモンスターに襲われたら大変じゃない！」
「……その心配はない」
「で、でもッ！」
「いいじゃないか別に。危険なモンスターはずいぶん狩ったし。その心配はないよ」
「あんたは黙ってなさいッ！」
「もごぉッ!?」
　再びホットドッグを口に突っ込まれ、クリュウは悶絶する。そんなクリュウを無視し、エレナは怒鳴る。
「それに、あんた達二人だけでなんて行かせられる訳ないでしょッ!?」
　その言葉に、言った自分がハッとした。
（わ、私何言ってんのよッ!?）
　顔を真っ赤にしておろおろとするエレナを、サクラはじっと見詰める。
「……これはクリュウの意思。エレナには、邪魔させない」
「さ、サクラ……ッ！」
　やっと口からホットドッグを取り出したクリュウが見たのは、睨み合うエレナとサクラ。その間には火花が散っている。
「あ、あのエレナ？　サクラ？」
「……クリュウはドンドルマに行きたい。違う？」
「そ、それは行きたいけど……」
「……ほら」
「むぐぐ……ッ！」
　エレナはしばし悔しそうにサクラとクリュウを睨んだ後、悔しそうに地団駄を踏む。そして再び二人をキッと睨むと、今度は一転してぐったりとうな垂れた。
「わかったわよぉ……」
　その力ない小さな言葉に、クリュウは安堵の息を漏らした。
　顔を上げたエレナは唇を尖らせて不満そうな表情を浮かべていた。
「もう、何もこんな時期に行かなくても」

「どういう事？」
「今日からしばらくはドンドルマから行商人が来るから、食材や調味料、調理器具を調達しないといけないから村を離れられないのよ。そんな予定がなければ、私もついて行けたのに」
「いや、エレナがついて来る理由はないと思うけど」
クリュウがぼそりと言った刹那、彼の足に強烈な一撃が叩き込まれた。その痛みにクリュウは悶絶する。
しばしの悶絶の後、目の縁に涙をたっぷりと浮かべたクリュウはなんとか起き上がった。そんなクリュウの耳をエレナが握る。
「痛いってばぁッ！」
「あんた、ドンドルマ行って女の子とデレデレなんかしたら、許さないからね！」
「そんな理由で行かないよぉッ！」
もう泣きそうなクリュウの耳を引っ張って不機嫌そうな表情を浮かべるエレナ。そんな二人を、サクラはじっと見詰めている。その隻眼には何ら感情を感じられなかった。
午後、村長や数人の村人、そしてエレナに見送られ、クリュウとサクラはイージス村を後にした。
村を空ける期間は約二週間。これだけ村を空けるのは初めてだ。
多少の心配はありつつも、何度も不安そうに振り返るクリュウの肩を、サクラがそっと叩いた。
「サクラ？」
「……大丈夫。村には、エレナがいるから」
「ははは、エレナならランポスくらいなら一撃で倒しそうだもんね」
「……そうね」
クリュウはサクラの言葉に少し不安が消えたのか、嬉しそうな笑みを浮かべた。そんなクリュウに、サクラも小さな笑みを浮かべた。
そんな仲良き二人が乗るのは船。なので、船を運転する村人の青年はそんな二人を見て帰って来たらエレナに殺されるなぁと思い苦笑した。
クリュウとサクラはドンドルマに向かって川を下って行った。

第４０話　ドンドルマの再会　新たな波乱

巨大な壁で周りを包囲されたドンドルマは、何度見てもその規模の大きさには度肝を抜かれる。辺境の小さな村出身のクリュウにとっては、その大きさは桁違いだ。クリュウ自身ドンドルマで暮らしていた時期があっても、こうして故郷に戻ってから再び戻って来るとその差は改めてすごい。

クリュウは早速師匠に会いに行ったのだが、残念ながら彼は留守であった。どうやら自分の後輩達、つまりは訓練生と一緒に訓練の為の狩りに向かったらしい。相変わらず、自分の技術を若いハンター達に伝授する事をがんばっているらしい。

その後、クリュウはサクラと共に実に一ヵ月半ぶりにドンドルマの酒場に向かった。すでに日は暮れていて、酒場はまた違った風景に見えた。

少し緊張しながら扉を上げると、あのムッとする匂いが漂ってきた。相変わらず酒場の中には多くのハンターが飲んで食って騒いでの大騒ぎをしていた。時刻も時刻なだけあって、人の数も多い。そこかしこで飲んで食べて騒いで暴れたりしている。そんな彼らを見て少しばかり怯えるクリュウに、サクラはその手をそっと握って彼を先導するように歩いた。すると、彼女の凛シリーズに周りの喧騒が止んだ。やっぱりすごい。

二人はそのまま酒場の奥の受付へ向かう。すると、そこにはこの場にはあまりにも不似合いな長い茶髪の美女が制服を着てニコニコと笑っていた。それはクリュウも以前お世話になったライザ・フリーシアであった。

「あらぁ？　サクラの行方がわからないと思ってたら、なぁに？　クリュウくんとずっと一緒だったのぉ？」

ムフフと意味ありげな笑みを浮かべるライザはクリュウの手を掴むサクラの手を見た。その視線にサクラはほんのりを顔を赤らめてスッと手を離す。が、そんな彼女の行為にライザはさらに意味ありげな笑みを浮かべた。

「あらぁ？　ちょっと頬が赤いわよぉ？　どうしたのかしらぁ？」
「……」
「うふふ、お姉さんに全て言っちゃいなさい。クリュウくんと付き合ってるの？」
「……そんなんじゃない。クリュウは大切な仲間」
「あらぁ？　サクラが反撃してくるなんて珍しいわねぇ」
「……ッ！」
　頬を赤らめながら視線を泳がせるサクラに、ライザはニヤニヤと笑みを浮かべる。そんな仲のいい（？）二人を見詰め、クリュウも自然と笑みが浮かぶ。
「二人は仲がいいんですね」
「あら？　やきもち？」
「そんなんじゃありませんよ」
　苦笑いするクリュウに、ライザはくすくすと笑う。そんな笑みもまたきれいだなぁと思いつつ、依然どこか視線の泳いでいるサクラの肩を叩く。
「どうしたの？」
「……別に」
「そ、そう？　気分悪いなら休んだ方がいいよ？　村からドンドルマに来るのは結構長旅だからね。疲れてるんだよ」
「あらぁ？　そうかしらぁ？　恋の病って奴なんじゃないのぉ？」
　ニヤニヤと笑うライザ。本当に楽しそうだ。そんな彼女にクリュウは道具袋（ポーチ）の中からギルドカードを取り出すとライザに提示した。目の前に差し出されたカードにライザはきょとんとするが、すぐにその意味を察して小さく笑みを浮かべる。
「ギルドカード？　もしかしてハンター登録かしら？」
「はい」
「へぇ、ついにクリュウくんもドンドルマデビューかぁ。何かわからない事があったら言ってね。クリュウくんはかわいいから特別に色々教えちゃうからね♪」
　そう笑顔で言ってライザはパチッとウインクした。そんなかわい

らしい彼女の仕草に、クリュウは照れたような笑みを浮かべる。
「あ、ありがとうございます」
「じゃあ、まずはこの書類の必要事項を書いてねぇ」
そう言ってライザは机の下から一枚のギルド登録用紙とペンを取り出した。手馴れた手つきだ。
「は、はい」
クリュウはそれらを受け取ると、ペンを持って項目を埋め始める。
名前、得意な武器、モンスターの討伐記録、今までの履歴などなど、結構書く事があったが、なんとか書き終えた。
「はい。お願いします」
「承りました、ってね。はい登録終了。お疲れ様ぁ。もし何だったら何か食べてったら？　サービスしてあげるから」
「そ、そうですか？　じゃあ何か食べる？」
「……えぇ」
「じゃあクリュウくんはこっちのメニュー。サクラはこっちね」
そう言ってライザは二つのメニューを二人それぞれに渡した。クリュウの紙でできた簡素なものに対し、サクラのは何かの毛皮で装飾された豪華なものだった。
「えっと、この差は一体？」
「悪いけど、前回みたいに一般人じゃなくて正式にここのハンターになったからには、ここのルールに従ってもらうわよ。ここではハンターのレベルによって食べられるメニューが違うの。だから、まだまだかけだしのクリュウくんは下位クラスのを。上位クラスのサクラにはそれに見合ったメニューを上げるの。もちろん金額も上位と下位じゃ雲泥の差よ？」
確かに。サクラのメニューを覗くと、どれも値段がかなり高いものばかり。一番下のでもクリュウのメニューの最高値の三倍はある。
「クリュウくんもこういうのを食べたかったら強くなる事ね。もっとも、サクラが注文したのを分けてもらうのはオッケーよ？」
「……クリュウも好きに食べていい」
「と、とにかくメニューを決めないと。えっと僕はこれ」

「……じゃあ、私はこれ」
「オッケー。どっかのテーブルに座って待っててね」
そう笑顔で言うと、ライザは奥へ消えてしまった。すると代行の受付嬢が出てきて次の客の対応を始める。見事な連係プレーだ。
クリュウとサクラは適当なテーブルに腰掛けた。すると制服を着た女性が水をくれた。給仕担当のギルド嬢なのだろう。
「いやしかし、本当に何から何まで規模が大きいね」
クリュウは改めて村の酒場と比べてこの大きさには驚く。一〇〇人くらい軽く入りそうなほど広い。そんな広い空間に多くのハンターが騒いでいた。中には大人しくしている者もいるが、ほとんどの者がお酒が回って羽目が外れている。
「……ドンドルマは、大陸最大のハンターの都だから、規模が大きいのは当然」
「へぇ」
クリュウは再びハンター達を見詰める。サクラのように女のハンターも何人かいたが、やはりほとんどが男だ。そして装備も色々だ。大剣、太刀、片手剣、双剣、ハンマー、狩猟笛、ランス、ガンランス、ライトボウガン、ヘビィボウガン、弓など様々だ。
防具も多種多様なものばかり。上級飛竜の素材を使った防具を身に纏ったハンターも複数いた。さすがドンドルマである。
クリュウが感心しながら氷水をクイッと飲んだ時、突如後ろから誰かに突き飛ばされた。
「あぐぅッ！」
「……クリュウ！」
押し倒れたクリュウが起き上がると、そこには明らかに正しい道から外れたとしか見えない男が三人いた。武器はそれぞれバスターブレイド（大剣）、ジェイルハンマー（ハンマー）、スティールガンランス（ガンランス）など近接武器ばかりだ。そして防具はガレオスシリーズ、ゲネポスシリーズ、ハイメタシリーズ。どれも下位クラスの防具というところを見ると、実力は凶悪な顔に対してはそれほどでもないらしい。それでもクリュウよりは強いだろうが。

「なぁお嬢ちゃん。こんな青臭いガキなんかより俺達と一緒に楽しい事しねぇか？」
「そうそう。かわいがってやるからよぉ。まぁ、断ってもかわいがってやるけどな」
「女がハンターなんてなめられたもんだな。俺達男がいないと何にもできないくせによ。せいぜい使い道なんて娼婦（しょうふ）ぐらいだろ？　ヒヒヒヒヒ」
　あまりにもありがちな絡み方だ。きっと彼らの脳は頭を振ればカラカラと音を立てるほどしかないのだろう。
「ちょっといきなり何するんですか！」
　クリュウはサクラを守るように彼女の前に立った。もちろんサクラの方が強い。でも、女の子を見捨てるなんて、クリュウにはできなかった。
「あん？　ガキは黙ってろ！」
「あがぁッ！」
　かっこ良く決めても、瞬殺だった。ハンターとしてはともかく、クリュウぐらいの少年が筋肉ムキムキの男三人に勝てるはずがない。一般常識だろう。
　倒れて起き上がろうとしたクリュウの背中を、男が踏みつける。
「は、放せッ！　あがぁッ！」
「威勢のいいガキだな。ちょっとお仕置きが必要か？」
　大の大人三人が倒れて身動きの取れない一人の少年を包囲する。誰が見てもどっちが悪か丸わかりな構図だ。
　ハンマーの男がその腰に下げた獲物を抜き放った。ハンターは人に武器を向けてはならないという鉄則があるのだが、この男簡単に無視した。
「へへへ、俺一度でいいからこいつで人を殴ってみたかったんだぜ。ちょうどいい機会だ」
　振り上げられたハンマーに、クリュウの顔が恐怖に染まる。その時、
「……離れろ下郎」

その凛とした声に振り返ると、そこには飛竜刀【紅葉】を構えたサクラが立っていた。その隻眼にはすさまじい怒りの炎が燃え上がり、その体からはすさまじい殺気の嵐が吹き荒れる――正直、こっちの方がめちゃくちゃ怖い。
「あん？　んだ嬢ちゃん。やるってのか？」
無知とは恐ろしいものだ。何も知らずに威勢のいい大剣使いがニヤニヤと笑う。が、その余裕も、一瞬で消えた。
「……殺す」
その小さくも凛とした声が引き金となり、彼女を包み込む殺気が拡散しすさまじい殺気が酒場を支配した。その殺気に、三人は恐怖する。ついでにクリュウも。
まるで火竜の逆鱗に触れて血走った目で睨まれたかのようなすさまじい殺気。新米ハンターが泣きながら酒場を出て行っても仕方がない。
男三人は今さらながら彼女の装備を見て絶句した。そこには自分達の装備なんて足元にも及ばない天の領域の装備があった。
「す、すまなかった……ッ！」
男三人が慌てて頭を下げるが、サクラの隻眼は血走ったままだ。
「……許さない。クリュウを傷つける者は、誰であろうと――殺すッ！」
『ひいいいいいいいいッ！』
大の男三人の悲鳴が上がった瞬間、サクラは炎を吹き荒らす飛竜刀【紅葉】を思いっ切り振り上げ――
「はいそこまで」
突如そんな声と共に現れてサクラの手を握ったのはライザ。空いているもう一方の手には二人が頼んだ料理が絶妙なバランスで重ねられていた。クリュウは安堵するが、サクラはキッとライザを睨む。
「……放して」
「そうはいかないの。ハンターは武器を人に向けちゃダメ。これは数少ないハンターの掟でしょ？　やるなら拳でしなさい。それなら許すから」

「……わかった」
そう言ってサクラは剣を鞘に納めると、拳を構える。武器がない分威力は大幅に落ちるだろうが、むしろライザという後ろ盾を得た分、殺気の勢いはさらに増す。そして、
「……撲殺開始」
『ひいいいいいいいいッ！』
「も、もういいからッ！　やめてよぉッ！」
クリュウが慌てて止めると、サクラは渋々といった感じで手を下げた。それを見て、男達は逃げるように酒場を出て行った。
静かになっていた酒場は事態の収拾から再びうるさくなった。何て気が変わるのが早いのだろうか。
「まったく、あなたらしくないじゃないサクラ」
「……ごめん」
ライザはサクラを説教しながらテキパキと片手だけで支えていた料理をテーブルに並べる。その動きはまさにプロである。あっという間にテーブルの上にはおいしそうな料理が並んだ。
「じゃあ、ごゆっくり～ぃ♪」
ライザはそう言い残すと再び受付に戻った。
クリュウは目の前の自分の料理――あぶりスネークサーモンの特産キノコと熟成チーズがけを見詰める。もちろんとてもおいしそうだが、サクラの料理を見るとちょっと落ちる。
サクラが注文したのはリュウノテールとキングトリュフのグリル、ロイヤルチーズとシモフリトマトのソースがけだ。もう名前からしても格が違う。もちろん使っている素材も桁違いだ。値段もだが。
「す、すごいねぇそれ」
「……クリュウも食べるでしょ？」
「え？　あ、いや僕はいいよ」
「……これ、クリュウと食べたいから注文した」
なぜかしゅんとするサクラに、クリュウは慌てて笑みを浮かべる。
「だ、だったらもらおうかな！」
「……うん」

するとサクラはいつもの彼女に戻り、手際良く切り分けて取り皿に盛ってくれた。まるで最初からこの状態で来たと思わせるような見事なよそい方だ。自分がやったらきっと肉汁やらソースやらが飛び散って見るも無残なものになっていただろう。
「……はい」
「あ、ありがとう」
クリュウはそれを受け取ると、まずは自分が注文した料理を食べる。あぶられたスネークサーモンがとろりと溶けた熟成チーズと交わり、特産キノコがその味をさらに引き立たせる。かなりの美味だ。これで下位なんて信じられない。
「おいしいなこれ」
「うふふ、気に入ってくれた？　それ、特別に私の手作りなのよ」
そう言って現れたライザは二人のコップに水を足す。クリュウのは先程の騒ぎで空っぽになってしまっていたので満タンまで注いでくれた。
「そ、そうなんですか。なんだかお手をわずらわせたみたいですみません」
「いいのいいの。私の大の仲良しのサクラちゃんの大切な人だもん。これくらい当然よ」
「……」
「あはははは、なんかサクラの目が怖いから行くね」
そう言って逃げるようにして去るライザ。ふとサクラを見るが、いつもと何ら変わらない姿をしている。一体今振り返るまでの間に何があったのだろうか。
「あ、ちなみに、サクラが頼んだのはウチでもトップクラスの値段の料理ね。中級依頼の報酬が一発で吹っ飛ぶ値段の。あなたの為に注文したのよ」
「……」
「ご、ごめんね～ッ！」
ライザは再び逃げて行った。
サクラに向き直ったクリュウは目の前の料理を見詰めてため息す

る。
「ご、ごめんね。何かまた迷惑掛けちゃったみたいで」
「……そんな事ない。これはクリュウと食べたかったから。ただそれだけ」
「で、でも高いんでしょ？」
「……大丈夫。貯金はあるから。それより早く食べないと冷めてしまうわ」
「え？　あ、うん」
　クリュウは再びスネークサーモンを食べる。そして今度こそサクラに分けてもらった料理を食べる。と、それは食の常識を覆すほどのうまさであった。
「おいしいッ！　これすごくおいしい！」
「……喜んでくれて良かった」
　すると、実はまだ口にしていなかった自分の料理をサクラもクリュウに続いて食べる。お味はもちろん、
「……おいしい」
「でしょッ!?　これすごくおいしいね！」
「……クリュウが食べたいだけ食べていいから」
「え？　いいよいいよ！　それより二人で仲良く食べた方がいいって！」
「……そうね」
　なんとも幸せなムード漂うテーブルであった。周りのハンター達もそのあまりの幸せさに微笑んだり、うらやましがったり、怒りを覚えていたり、調子の乗って女ハンターやギルド嬢を口説こうとして断られたり逆襲に遭ったりして失敗に終わっていた。
　ライザもそんな二人を幸せそうに見詰めていた。と、そこへ誰かが受付にやって来た。視線をそちらに向けた瞬間、ライザの顔がぱあっと輝いた。
「久しぶりじゃない。今までどこに行ってたのよ」
「色々な村や街を回ってました。心配掛けましたか？」
「もちろんよ。まったくもう」

「すみません」
「いいのよ」
「あ、これギルドカードです。更新しておいてください」
「えっと……あら、またリオレイアの討伐数が二頭増えてる。さすがね」
「いえ、これは協力してくださったハンターさんのおかげですから」
「またまた謙遜しちゃって」
　ライザは目の前に立つ輝く金髪にレイアシリーズを身に纏った少女ハンターと楽しげに会話していた。少女も久しぶりにライザに会えてとても嬉しそうだ。
「聞いてよ。さっきまた暴動があってさ」
「そうなんですか？」
「ええ、それもまた実力なんて全然下のかけだしに近いハンターよ」
「最近はハンターのモラルの低下が深刻化してますからね」
「そうなのよ。特に新米やかけだしに多くてね。自分の実力を甘く見てるのよ」
「でも新米さんもそういう方々ばかりじゃありませんよ。私の知っている人はとてもまじめで優しい人でしたから」
「あら？　それってあなたが好きだって言ってた新米ハンターの男の子の話かしら？」
「えぇッ!?　そ、そんなんじゃありませんよぉッ！」
「照れちゃってかわいい。一度どんな子か見てみたいわね」
「ダメですよ。その人は自分の村を守ってる村ハンターですし……ケンカして別れちゃいましたから」
「……そうだったわね。ごめんなさい」
「いえ、ライザ様が謝られる事はないですよ」
「そうかしら？　あ、でも私もいい子見つけちゃったわよ？　すんごくまじめで優しくて、そしてかわいい子」
「え？　そうなんですか？」
「ほら、今あそこで楽しげに女の子とディナーを食べてる子よ」
　ライザが笑顔で指差した方向に振り返った少女は、笑顔から一転、

驚愕に変わった。エメラルドのような緑色の瞳がこれでもかと大きく見開かれる。
「どうしたの？」
ライザの声も聞こえず、少女は楽しげに会話をしているクックシリーズの少年を見詰める。そして、気がついた時には走り出していた。
「ちょ、ちょっと！」
ライザの声が聞こえた気がしたが、それどころではなかった。
まさか、こんな所で再会できるなんて思っていなかった。
もう会う事はないとまで覚悟していたのに、こんな所で、こんな形で。
高鳴る鼓動を抑えながら、少女は必死に少年に向かって走った。
少女は少年のテーブルに駆けながら、懐かしきその少年の名を叫んだ。
「クリュウ様ッ！」
「え？」
その声にクリュウが驚いて振り向くと、そこには美しく長い金髪にレイアシリーズを身に纏った少女が立っていた。その姿にクリュウは驚愕する。
それはサクラと再会するずっと以前、自分にハンターとしての能力を色々と教えてくれ、心の底から信頼していたのに、自分から離れて行ってしまったハンターの女の子――フィーリアであった。
「ふぃ、フィーリアッ!?」
驚くクリュウは思わず立ち上がった。
目の前にいるのは紛れもなくフィーリア・レヴェリであった。
あれから結構な時が流れている。だが彼女はその頃とほとんど変わっていない。それはフィーリアから見たクリュウも同じ事であった――いや、違う。もっと強くなっていた。
サクラは突然現れた見知らぬ少女をじっと見詰める。クリュウが言った《フィーリア》という名前、それは彼を見捨てて村を出て行った彼のハンターとしての師匠のような女の子と聞いていたが、まさか

この人が？　というような目線を向けている。
クリュウとフィーリアは互いに突然の再会に驚きのあまりしばし何も言葉を発せなかったが、やっとの思いでクリュウが口を開いた。
「ひ、久しぶり」
「は、はい。お久しぶりです」
二人はどこか気まずそうな雰囲気にそれ以降言葉が繋がらなかった。
フィーリアは不安そうにクリュウの瞳を見詰めた。そんな彼女の胸の中では彼と別れ際のケンカを思い出していた。
自分達は、ケンカしたまま別れたのだ。
こんな状態で何を言えばいいのかわからなかった。
気まずい時間だけが流れていく。
フィーリアは次第にしゅんとなっていく。
きっと自分は彼に嫌われている。そう思っていた。
顔を伏せてしまったフィーリアの背中を、ライザが不安そう見詰めている。と、誰もが二人の間の気まずい雰囲気に言葉を失った時だった。
「元気にしてた？」
その優しげな声に顔を上げると、そこには笑みを浮かべたクリュウの姿があった。あの頃と変わらない、優しげな笑みがそこに。
「怪我とかしてない？　ちゃんとごはん食べてる？」
「え？　あ、はい。平気です」
「そっか。良かった良かった」
クリュウは本当に嬉しそうに微笑んだ。その笑みに、フィーリアは懐かしさ、そして嬉しさから瞳から涙が流れ出した。
「ふぃ、フィーリア？」
いきなり泣き出したフィーリアにクリュウは慌てる。
「ど、どうしたの⁉　何か僕変な事言ったッ⁉」
「い、いえ、その……なんか、すごく嬉しくて……」
「え？」
「だ、だって、私もうクリュウ様に嫌われて、もう二度と会えないって

思ってたから、こうしてまた会えて、笑ってくれるなんて思ってなくて……嬉しくて……ッ！」
流れ落ちる涙を必死に拭き取るフィーリアに、クリュウは小さく微笑む。だが、しばらくしてそれは悲しそうな表情に変わり、彼は頭を下げた。
「ごめん」
「え？　く、クリュウ様!?」
突如頭を下げたクリュウにフィーリアは驚いたように目を見開く。
クリュウはおろおろとするフィーリアに今までずっと言いたかった言葉を繋げた。
「あの時、僕気が動転してて、君にひどい事を言って本当にごめん！　本当は、ちゃんと見送りたかったけど、でも、フィーリアがいなくなるのが嫌で、あんな事を……ッ！　本当にごめんなさい！」
必死に頭を下げて謝るクリュウに、フィーリアはあわあわと慌てる。
「そ、そんな！　クリュウ様頭を上げてください！　わ、悪いのは私なんですから！」
フィーリアは大慌てでクリュウの頭を上げると今度自分が頭を下げる。
「わ、私の勝手でクリュウ様に辛い思いをさせてしまい、本当に申し訳ありません！」
「そ、そんなフィーリアが謝る事ないよ！　悪いのは僕なんだから！」
「そんな事ありませんよッ！　悪いのは私です！」
いつの間にか二人で謝り合戦が開始されていた。その奇妙な光景に周りの皆はおかしそうに笑った。その笑い声に二人は今の自分達の状況に顔を真っ赤にして離れる。
クリュウは照れたように頬を掻く。そんな彼の仕草もまた懐かしい。
「まぁ、また会えて良かったよ」
「そうですね。本当に嬉しいです」
そう言ってフィーリアは満面の笑みを浮かべた。その笑顔にク

リュウも嬉しそうに笑みを浮かべる。そんな二人を見詰め、ライザは嬉しそうに微笑む。一方のサクラは無言で二人を見詰めていた。
「クリュウ様はどうしてまたドンドルマに？」
「村の周りの狩場が平和になっちゃって。仕事がなくなっちゃったから一時しのぎで来たんだ」
「そうなんですか。じゃあこちらには何日かいるのですね？」
「うん。二、三日くらいは」
「じゃあ！　その間はもう一度私と組みませんか!?」
　これはチャンスであった。
　クリュウと組むなんて久しぶりである。二人の絆を結び直すいい機会だ。フィーリアは嬉しそうに微笑む。が、
「……ダメ。クリュウは私と組んでるから」
　その声に初めてフィーリアは彼と同じテーブルに座る少女に気がついた。
　じっと自分を見詰める左目に眼帯をした少女はラオシャンロンの素材を使った凛シリーズというレアな防具に火竜の素材を使った飛竜刀【紅葉】を装備している。それだけでかなりの実力者である事がわかった。
「どなたですか？」
「あ、紹介するね。今僕と一緒に組んでるハンターのサクラ・ハルカゼ。すんごく強くて知識もあって頼りにしてるんだ！」
　まるで自分の事のように嬉しそうに説明するクリュウを見て、フィーリアはムッとする。
　目の前の少女はかなりかわいい。そんな子がクリュウと組んでいるというだけでも嫌なのに、クリュウの笑顔を見ると本当に心の底から信頼しているらしい。
　自分がいない間に、クリュウは新たな仲間を得た。それが彼女なのだ。
　じっと自分を見詰めるサクラという名のハンターの片方の瞳には、敵意のような光があった。その視線に、フィーリアの顔からも笑顔が消える。

「初めまして。クリュウ様と《以前》組んでいたライトボウガン使いのフィーリア・レヴェリです」
「……クリュウと《現在》組んでいるサクラ・ハルカゼ」
二人の間で、一瞬バチバチと火花が迸った気がしたのはクリュウの気のせいではないだろう。
不安げに見詰めるクリュウの前で、睨み合う二人の少女はさらに対立していく。
「……クリュウは私と組んでる。あなたが出る幕はない」
「それはクリュウ様が決める事です。あなたに決定権はありません」
「……クリュウは私とずっと一緒」
「わ、私だってクリュウ様と組んでいた時期もあります！」
「……あなたは過去の女」
「な、何ですってッ！」
睨み合う二人の女ハンター。どちらもすさまじい実力者なので、二人の敵意むき出しの瞳に皆が恐怖する。二人の間に火花が散っているように見えたのはきっと気のせいではない。
「ちょ、ちょっと二人とも！」
クリュウが慌てて止めに入るが、二人は睨み合ったまま。その勢いは今にも互いの武器を抜き放ちそうだ。クリュウがおろおろとしていると、そこへ「はいはい、そこまでね」と言ってライザが仲裁に入って来た。
「まったく、私と特に仲のいい子同士がケンカするなんて」
ライザは困ったような笑みを浮かべる。その後ろではクリュウがまだおろおろとしている。そしてフィーリアとサクラはライザに止められて睨み合う事はなくなったが、双方共に背を向けたままだ。依然その背中から放たれる敵意は衰えてはいない。
「とにかく、ケンカはダメよ。私は二人の味方なんだから」
ライザはそう言うと二人を説得する。クリュウは板挟みの彼女を手伝ってあげたかったが、する事もなく仕方なく席に戻った。
しばしの会話の後、ライザは仕事の為受付に戻って行った。だが、フィーリアとサクラの間には依然溝が空いたままだった。サクラは

そんなフィーリアを無視し、席に戻る。
「……料理が冷めてしまう」
「そ、そうだね」
少し怒ったような彼女の口調に、クリュウは慌てて料理を頬張る。もちろんおいしいが、先程までの感動は一切なかった。それは吹き荒れる冷たい空気のせいだろう。
クリュウとサクラは食事を再開した。が、
「あ、あのクリュウ様。ご一緒してもよろしいでしょうか？」
フィーリアが笑顔でそう訊いてきた。その言葉にサクラの眉がピクリと動く。
「え？　あ、もちろん！　あ、サクラもいいでしょ？」
「……別に」
慌ててサクラに了解を得ようとしたが、返って来たのは素っ気ないものだった。だが、その言葉の奥には何か怒ったような雰囲気があるように感じたのは気のせいではない。
フィーリアは「ありがとうございます」と礼を言うとクリュウの隣に腰を下ろした。その瞬間、サクラの眉がピクリと動く。
こうしてクリュウの横にフィーリア、前にサクラが座る事になった。
フィーリアは自らも料理を注文すると久しぶりのクリュウとの再会に嬉しそうに彼に話し掛ける。
「クリュウ様もずいぶん強くなられましたね」
「そ、そっかな？」
「そうですよ。さすがクリュウ様です」
「あはは、そう言ってもらえるとすごく嬉しいよ」
照れたような笑みを浮かべるクリュウに嬉しそうに微笑むフィーリア。そんな二人をサクラはじっと無言で見詰めている。
クリュウはふとフィーリアの背中の武器に気づいた。その背中には相変わらずヴァルキリーファイアが背負われている。そんな彼の視線に気づいたフィーリアは小さく笑みを浮かべる。
「これはヴァルキリーブレイズです。以前使っていたヴァルキリー

ファイアの強化型ですよ」
そう言ってはにかむフィーリア。きっと彼女はあれからもずっと強敵リオレイアと戦い続けていたのだろう。自分がサクラと一緒に死に物狂いでフルフルと戦っていた頃も、きっと。
「あ、あのさフィーリア？　僕と別れてから、どれくらいのリオレイアを狩ったの？」
クリュウの問いに、フィーリアは「えっとですね……」と指を折って数え始める。その数はあっという間に片手の指を超えてしまう。
「……単独二頭の合同五頭、合計七頭ですね」
「そ、そんなにッ!?」
リオレイアをこの短期間で七頭も討伐するだなんて。クリュウは改めて彼女と自分の間にあるすさまじい実力差に愕然とする。
「今年はリオレイアの数が例年より多くて……って、クリュウ様ッ!?」
「……僕なんてがんばってもそんなのは無理だよぉ」
激しく落ち込むクリュウに、フィーリアはようやく自分が地雷を踏んでしまったと気づき、慌てて笑みを浮かべる。
「く、クリュウ様だってすごいですよ！　この歳でもうイャンクックを倒されてるんですから！」
「フィーリアはもっと早いでしょ？　年下でリオレイア倒してるじゃん」
「はうぅ……」
さらなる地雷を踏んでしまい、フィーリアの笑顔が凍りつく。
どうしたらいいかおろおろするフィーリアに対し、激しく落ち込んだままのクリュウ。そんな不気味な沈黙が二人の間を支配した時だった。
スッとクリュウの手をサクラが両手で包み込んだ。顔を上げると、そこには隻眼を自分に向けるサクラがいた。その瞳はとても優しい。
「……クリュウはすごい。私が一番知ってるから」
「サクラ……」
クリュウの顔に再び笑みが灯った。それを見て、サクラも小さく微笑む。なんとも仲のいい二人だ。そんな二人を見詰めるフィーリア

は、その仲の良さと微笑ましい雰囲気に、自分一人だけ取り残されているような気がした。
自分がいない間に、二人は心から結ばれた関係になっていたのだ。
「こ、こんなはずじゃ……ッ！」
激しく敗北感を味わうフィーリア。
やはり空いた時間の差は大き過ぎる。
この差を埋めるには、どうすればいいかッ!?
フィーリアは必死に考えた。そして、一つの打開策を思いついた。
「く、クリュウ様！」
焦りのあまりフィーリアの声は上ずってしまった。
「な、何？」
クリュウはフィーリアの鬼気迫る迫力に少々怖がりながら返事する。
「あ、明日！　一緒に狩りに出ませんか!?」
フィーリアが思いついたのはこれだった。
命を懸けた危険な狩場に出れば、自分の実力を思う存分発揮できる。そこで二人の絆を結び直せば、まだチャンスはある！
「え？　あ、別にいいけど」
「ほ、本当ですかッ!?」
フィーリアは飛ぶように歓喜した。
これで、クリュウとの絆もまた深く刻まれるはず！　だが、
「……ダメ。クリュウは、私と一緒に狩りに行く」
そう言ってクリュウの手を掴んだのはサクラ。片方しかない瞳はしっかりとした意思を持って、クリュウを見詰める。
「え？　あ、で、でも……」
クリュウは困ったようにフィーリアを見る。だが、クイッとクックアームを引っ張られて振り返ると、そこにはうるうるとしたサクラの瞳があった。
「……クリュウは、私が嫌い？」
「そ、そんな事ないよ！」
「……だったら、一緒に」

「え？　あ、その、フィーリア、ごめん、あの……」
「そ、そんなぁッ！　クリュウ様は私の事がお嫌いなんですか!?」
「ち、違うよッ！」
「クリュウ様！」
「……クリュウ！」
「んがあああぁぁぁッ！」
　二人の少女の間で悶絶するクリュウ。そんなクリュウを二人の少女が必死な表情で見詰めているというある意味修羅場的な雰囲気に包まれるテーブルに、ライザが苦笑いしながら現れた。
「だったら三人で行けばいいじゃない」
「あ、それだ！」
「嫌です！」
「……（フルフル）」
　クリュウは妙案を得たようであったが、二人はそんな妥協策を真っ向から拒否した。そんな二人にライザが苦笑いする。
「二人とも、あんまりクリュウくんを困らせないでよ。かわいそうでしょ？」
「うっ……」
「……」
　ライザの言葉にすっかり熱くなっていたものが消えた二人はそっと浮いていた腰を落とした。そんな二人に安堵するクリュウ。
　すると、そんな三人のテーブルにライザはある一枚の依頼書を提示した。
「隻眼の人形姫と呼ばれるサクラと、新緑の閃光と呼ばれるフィーリアなら、クリュウくんの分を差し引いてもこれくらいの依頼は大丈夫よね」
「今、さりげなく僕をお荷物扱いしましたよね？」
「どう？　やってくれるかしら？」
　笑みを浮かべるライザの提示した依頼書を三人は覗き込んだ。
　依頼書には火山の鉱脈を調査に行った調査団がバサルモスに襲われたので、そのバサルモスを排除してほしいというものだった。

バサルモスとは火山などに生息する《岩竜》という別名を持つ飛竜の事だ。飛竜と言っても飛ぶ事はあまりなく、移動は主に地中が多い。グラビモスという《鎧竜》と呼ばれる強力な飛竜の幼竜でもある。岩に擬態するのが得意でその擬態を見破るのは困難に近い。その体は岩のように硬く、刃が通りづらく弾き返されてしまう事さえある。フルフルなどとはまた別の意味で厄介な相手だ。

しかも火山。クリュウはまだ未経験な狩場である。

ドンドルマに来ていきなりこんな無茶な依頼なんて、正直かなり辛いし遠慮したい。ここは断るのがいいだろう。

「わ、悪いですけどこの依頼はちょっと――」

「わかりました！　お受けしましょう！」

「……望むところ」

「おいぃッ！　僕の意見は完全無視なのぉッ!?」

「あら嬉しいわぁ。やってくれるのね」

「勝手に進行しないでよぉッ！」

クリュウは必死になって抵抗するが、女三人はすさまじい勢いで勝手に話を進行していく。残念ながらこの空間だけは女性優位の世界になっている。

「私とクリュウ様のコンビならこの程度の相手など負けません！」

「……クリュウと私の連携の前では、バサルモス程度恐れるべき相手ではない」

「あなたには絶対負けない！」

「……私だって」

「あのぉ、二人とも忘れないでね。一応二人は仲間なんだからね」

苦笑いするライザの横では、クリュウが頭を抱えてテーブルに伏せている。もう諦めるしかなかった。

依頼書の参加者名にフィーリアとサクラ、そしてクリュウの名前が書かれ、ライザは嬉しそうに微笑む。

依然火花を散らし合う二人の横で、クリュウはもうほとんど泣きながら料理を食べていた。だが、その味はもう何がなんだかわからなくなっていた。

フィーリアとの再会という嬉しいはずの出来事が、また新たな戦いの引き金となってしまい、クリュウの苦難は続くのであった。

第41話　火山より熱い二人の戦い

ドンドルマから船に揺られて三日。ドンドルマのハンター達が一般的に火山と呼ぶラティオ活火山に到着した。

船から下りると、そこはすでに熱気が漂っていてじわりと汗がにじみ出て来る。海風がそれを冷やそうとがんばるが、あまり効果はなさそうだ。

「あ、暑いねぇ。二人とも大丈夫？」

クリュウは努めて笑顔で振り返った。すると、そこにはそっぽを向き合うフィーリアとサクラが立っていた。二人は依然冷戦状態を続けている。

「ふ、二人とも……」

クリュウは苦しげに頭を抱える。

二人はドンドルマからここまで来る船の中でもこんな状態であったのでクリュウはかなり疲れていた。しかもなぜかクリュウの隣で寝る事にケンカになり、結局は三人別々に寝る事になったのだが、二人とも夜中に擦り寄ってきてサクラに関しては背中から抱き付いてきたりしてすっかり睡眠不足になっていた。目の下に薄っすらと浮かんだ隈がそれを主張している。

背中を向け合う二人。どちらも優秀なハンターなのでいざとなればちゃんとしてくれるだろうと信じるしかない。

「頼むから狩りの時は連携してよね。僕バサルモスなんて初めてなんだから」

クリュウはため息すると持って来た道具や支給品を支給用荷車に載せていく。さすがドンドルマの狩場という事もあり、支給品はかなりの数が用意されている。

「村と比べてずいぶん気前がいいよね」

地図に携帯砥石、応急薬や携帯食料、さらにはクーラードリンクに解毒薬まで。全て必要最低限の四人分用意してある。今回は皆それぞれ三個ずつ解毒薬を持って来ていた。

「そういえばこれって解毒薬だよね？　イーオスが出るからその対策

か」
「……違う」
　その声に振り返ると、いつの間にかサクラが立っていた。額当ても装備し、準備万端だ。
「違うってどういう事？」
「……バサルモスは毒ガスを噴出して来る。それに対する備え」
　サクラは淡々と言うが、その言葉にクリュウの顔が急激に曇っていく。
「毒ガスなんて厄介極まりないなぁ」
　接近戦のクリュウにとって、それはかなり厄介な障害でしかない。クリュウはかなり過酷な戦いになるだろうなぁと力なくため息した。すると、そんな彼にフィーリアが自らの解毒薬を渡して来た。
「私の解毒薬、差し上げます」
「え？　で、でもそれじゃフィーリアが」
「私は遠距離攻撃なので毒ガスは届きませんし、届いたとしても私のレイアシリーズは毒を無毒化する性能があるので必要ありません。ですので接近戦を行うクリュウ様が使ってください」
「そ、そうなんだ。ありがとう」
　クリュウは嬉しそうに解毒薬を受け取る。その笑顔にフィーリアは内心やったッと思った。すると隣にいたサクラがピクリと眉を動かす。
「……クリュウ、私のもあげる」
「いや、サクラも同じ接近戦だし毒無効化じゃないでしょ？　それはダメだって」
「……」
　残念そうにしゅんとするサクラに対し、初戦で勝利(？)したフィーリアは嬉しそうにガッツポーズする。そんな正反対な反応をする二人に戸惑いながらもクリュウは準備を整えて出発用意を終える。
「まぁ、とりあえず行こう」
　クリュウはそう言うと大タル爆弾三個、大タル爆弾Ｇ二個、小タル爆弾五個、シビレ罠二個、落とし穴二個、トラップツール四個とゲネ

ポスの麻痺牙、ネット二個などの大きな道具が載せられた荷車の取っ手を掴む。と、
「く、クリュウ様！　荷車なら私が引きます！」
そう言ってフィーリアは荷車の取っ手を掴んだ。
「え？　で、でも……」
「いいんですよ。私は後方支援役ですから。それに、私と組んでいた頃はこうだったじゃないですか」
「そ、そうだったね。じゃあ任せるよ」
「はいッ！」
フィーリアは嬉しそうに微笑んだ。
クリュウに頼られている。そんな嬉しさがフィーリアを包み込んだ。
一方のサクラはそんなフィーリアの先制攻撃の数々に押され、ムッとしていた。いつもは静かな隻眼も今はどこかイラ立っているようだった。
歩き出した三人の中、意気揚々とするフィーリアに対しサクラはどこか不機嫌そうだった。が、そんな彼女に先頭を歩いていたクリュウが笑顔で振り返った。
「じゃあサクラ。いつものように連携攻撃よろしくね」
その言葉に、サクラの顔が小さいながらもぱぁっと輝いた。それは彼女の最高の笑顔であった。
「……うん」
サクラはうなずくとクリュウの横に立った。そしてこの狩場にも何度か来ているサクラは地図を片手に大まかながらも地形の説明をし始めた。それを真剣に聞くクリュウ。
一方すっかり取り残されたフィーリアは頬を膨らませる。
「むぅ、クリュウ様が遠くに行っちゃう……」
フィーリアは悔しそうに唇を噛む。どうやらあのサクラという子はかなり厄介な相手らしい。今回の自分の最大の相手はバサルモスではなく彼女だ。そう察していた。
そんな一人考え込むフィーリアの前ではサクラが事細かく地形の

説明をしていた。
「……ドンドルマの狩場は村の狩場と大きく違ってエリアごとに番号が振られてるの。これを目安に動いた方がいい」
「へぇ、便利だね」
　クリュウは地図を覗き込む。これなら作戦なんかも立てやすい。何とも便利だ。
「……バサルモスは主に溶岩地帯にいるから、まずはエリア４に行きましょう。クーラードリンクは必ず飲んで。砂漠の暑さの比じゃないから」
「わ、わかった」
　三人は拠点（ベースキャンプ）の左側の道を進んだ。すると、その先は洞窟になっていて、そこから肌を焦がすようなすさまじい熱風が吹いていた。
「うわぁ、この先に行くの？」
　ものすごく熱い風にクリュウは早くも戦意喪失しかけていた。が、サクラは「……ええ」とだけ答えてクーラードリンクを飲む。後ろでもフィーリアがクーラードリンクを飲んでいた。仕方なく、クリュウもクーラードリンクを飲む。冷たい味と爽快感がのどを通る。すると、すぐに熱風が気にならなくなった。暑さに対してある程度の温度は遮断してくれるのだ。
「……私が先頭を行く。クリュウは殿（しんがり）をお願い。あなたは私達に挟まれて移動して」
「わかりました」
　二人の表情がハンターのものに変わると、先程までの冷戦状態はどこかへ消えたように二人は連携を組んだ。さすがである。
　感心していると、フィーリアが先程までの真剣な表情を崩して優しげな笑みを浮かべた。
「クリュウ様。私の背中、預けましたよ」
　そのかわいい笑顔にクリュウはドキリとした。
「う、うん」
　二人はほのぼのしい雰囲気に包まれる。そんな二人にピクリとサ

クラは眉を動かすが、無視して歩き出す。今はこんな事をしている場合ではないのだ。
三人はそのまま洞窟の中へ進むと、すさまじい熱気が三人に襲い掛かった。
洞窟の中なのにいやに明るいなぁと思い噴き出す汗を拭いながら進むと、前方に真っ赤な景色が広がっていた。
「うわぁ……」
そこは死の世界が広がっていた。
真っ赤な溶岩が流れ、それが赤い光を発して黒い岩壁に包まれた洞窟の中を照らしていた。そしてその溶岩からはすさまじい熱が流れている。あの死の河はきっと数千度はある。生き物は皆あの中に入れば骨も残さずに溶かされるだろう。
そして溶岩が流れていない足元の黒い岩からもじわりと熱が伝わってくる。もしクーラードリンクを持っていなかったらと思うとぞっとする。
砂漠は主に太陽の熱がすさまじかった。もちろん砂からの反射熱もすごく暑かったが、ここに比べれば優しい。この火山とは体全体にすさまじい熱が襲い掛かる。あまりの暑さに噴き出す汗を拭う。
「暑いなぁ……」
「……ここが火山。こんな世界にもモンスターは住んでいる」
「やっぱり何度来ても暑いですぅ」
三人ともさっきまでの涼しい顔から一転して汗が皮膚を覆っている。一人サクラだけはそれでも涼しい顔をしている。恐るべき精神力。
「……イーオス四匹」
その言葉に視線を向けると、確かに黒い岩壁ではっきりと動く赤い生き物、イーオスが見えた。向こうはまだこちらには気づいていない。
「すごいなイーオスは」
素直にイーオスの生命力には脱帽する。人間にはこんな場所は住めそうにない。木や草も育たないこの過酷な環境でも生きられるの

はすごい。
　しかし、このままでは戦闘は避けられない。それならばまず自分とサクラで突撃するのがいいだろう。サクラとのタッグならイーオスごとき恐れるべき敵ではない。
「じゃあサクラは右の二匹を。僕は左の二匹を叩く」
「……わかった」
「ちょっと待ってください！」
　突撃準備をする二人を止めたのはフィーリアであった。
「フィーリア？」
「私に任せてください」
「え？　で、でも……」
「仲間の実力を把握しておくにはいい機会ですから」
　そう言うとフィーリアは荷車を置き、背中のヴァルキリーブレイズを構えた。そして腰のガンベルトから弾を取り出す。クリュウには懐かしい彼女の動きだ。
　フィーリアはここでクリュウに久しぶりに自分の実力を見せ、サクラに牽制する気でいた。二人が注目する今、絶好の舞台（ステージ）だ。
　フィーリアは貫通弾ＬＶ２を取り出すと弾倉に装填する。
　そして、二人が見守る中右目でスコープを覗き込む。可変倍率スコープのレンズが遠くにいるイーオス大きく映し、その焦点がしっかりとイーオスの頭を捉える。この距離ならロングバレルを付けたヴァルキリーブレイズなら狙撃可能だ。
　そして、引き金を引いた。
　パァンッ！
　撃った後も銃口は微動だしない。そして、狙撃されたイーオスは頭に穴が開いて吹っ飛び、そのまま動かなくなった。
「う、うそ」
　驚くクリュウとじっと見詰めるサクラの前で、フィーリアは再び別のイーオスの頭を捉えて引き金を引く。これもまたイーオスの頭を貫いて吹っ飛ばす。

すでに二匹片付けたフィーリアだったが、残る二匹のイーオスはフィーリアの発砲音や発射時の閃光で位置を掴んだのか、鳴き声を上げると突撃してきた。
迫るイーオスにクリュウは慌てて剣を構える。が、
「大丈夫です」
フィーリアはそう言うと残った弾を一度取り除き、腰に下げた弾薬袋から別の弾を取り出し装填する。散弾ＬＶ１だ。
フィーリアは迫る二匹のイーオスをギリギリまで引き付ける。
「ちょ、ちょっとフィーリア！」
クリュウは動かないフィーリアに慌てて立ち上がろうとする。が、その肩をサクラに掴まれた。振り返ると、その瞳はじっとフィーリアを見詰めている。
「ギャアッ！」
その声に再び前を見ると、イーオスが目前まで迫っていた。
「フィーリアッ！」
刹那、フィーリアは再び引き金を引いた。
ズバンッ！　と撃ち出された弾はすぐさま炸裂し、襲い掛かってきたイーオスに無数の小さな弾が襲い掛かった。赤い体中に穴が開き、真っ赤な血が噴き出る。
「ギャアッ!?」
仰け反るイーオスに第二発が襲い掛かる。イーオスは悲鳴を上げて吹き飛び、そのまま動かなくなる。
フィーリアはスコープから目を外すと、ふぅと小さく息を吐いた。
「片付きましたよ？」
明るい笑顔を浮かべるフィーリアに、クリュウは呆然と立ち尽くす。目の前で起きた事がちょっと信じられなかった。ボウガンは一定の距離が必要なので近距離戦や人海戦術には弱いはず。しかし彼女はそれを見事に破ったのだ――明らかに、以前よりも強くなっていた。
「……いい腕ね」
「ありがとうございます」

サクラも彼女の実力を認めたのか、小さくうなずく。そんな彼女に認められたフィーリアも笑顔でうなずく。
「えへへ、クリュウ様どうでしたか？」
フィーリアはクリュウにほめられる事を期待して満面の笑みで振り向く。と、そこには、
「……何で僕の周りには僕より圧倒的に強い女の子ばっかりなの……？」
座り込んで熱いはずの岩に《の》の字を書いてものすごく落ち込んでいた。どうやらフィーリアの圧倒的な力が、クリュウのわずかにある男としてのプライドをひどく傷つけてしまったらしい。
「く、クリュウ様ぁッ！」
激しく落ち込むクリュウにフィーリアは慌てるが、クリュウは完全に落ち込んでいた。
「く、クリュウ様！　戻って来てくださいぃッ！」
クリュウの肩をガクガクと激しく揺するが、クリュウは遠い目をしたまま。完全に自分の世界に入ってしまっている。
落ち込むクリュウをフィーリアが大慌てで立ち直らせようとする。そんな二人を一瞥し、サクラは無言で歩き出した。
「ちょッ！　ちょっとサクラ様ッ！　クリュウ様を見捨てられる気ですかぁッ!?」
フィーリアの声を背に聞きながら、サクラは歩く。その先には真っ白な岩があった。まず足元の石ころを拾い、その岩に投げ付ける。カンという音が起きたが、別に何も起きない。バサルモスの擬態だったら、こんな小さな衝撃にも反応して地面から飛び出してくる。これはその確認だった。
サクラは無言で辺りにある白い岩全てに石を投げ付けたが、何も反応はない。どうやらこのエリアにはバサルモスはいないらしい。
確認を終えて戻って来ると、その時には何とかクリュウは復活していた。
「……ここにバサルモスはいない。次に行きましょう」
「そうですね」

「やっぱり僕いらないんじゃない？」
「そ、そんな事ないですよぉッ！」
　また落ち込みかけるクリュウをフィーリアが慌てて戻そうとする。すると、
「……クリュウ、手」
　そう言ってサクラはクリュウの手を掴むと、ギュッと両手で握った。驚くクリュウにサクラは口元に小さな笑みを浮かべる。
「……クリュウは、私には必要な存在。この温もりがあれば、私はがんばれる。クリュウは私にとってそんな存在。それじゃ、ダメ？」
「あ、いや、まぁ……うん」
「……良かった」
　サクラの小さな笑顔に、クリュウも嬉しそうに微笑んだ。なんて素直な子なのだろうか。
　一方、フィーリアはうらやましそうにサクラを見詰める。これが自分とクリュウの間に生まれた大きな溝なのだろう。その溝を埋めるだけのものを、彼女は持っている。
　負けそうだ。でも――
「ま、負けません！」
　小声でそう宣言すると、小さくガッツポーズをして気合を入れ直す。
　まだまだ戦いはこれからなのだ！
　――忘れているかもしれないが、今回三人の目的はバサルモスの討伐である。すっかり路線が外れているが、目的はそれだ。
　三人は再び歩き出した。今まで二人だったクリュウにとって三人はかなり安心できた。荷車での移動もスムーズにできる。特に先頭と殿を守りながら荷車を移動できるのはいい。しかも近接戦二人がこうして守り、遠距離攻撃のフィーリアが荷車を引くのはベストな形だ――まぁ、クリュウは女の子一人にこんな重い荷車を任せられないのか、後ろから押してはいるが。ちゃんと後ろも警戒している。
　前方を警戒するサクラ。後方を警戒するクリュウ。そして全体を警戒するフィーリアのおかげで、三人に死角はなかった。特にフィー

リアは時折怪しい場所はボウガンのスコープで見たりしている。こういう時に仲間というのは頼れる。
　途中イーオスに襲われたりもしたが、三人は連携した動きを見せてこれら全てを撃退した。クリュウとサクラの連携。そしてクリュウのクセを知っているフィーリアがその動きを補助する狙撃。クリュウを中心に三人は見事な連携を見せていた。
　真ん中に溶岩の池があるエリア5を抜け、三人が向かったのはエリア6。白い岩が数ヶ所あったが、それらは全て石をぶつけたが反応はなし。ここにもバサルモスはいなかった。
「どこにいるのバサルモスって飛竜は？」
「……じゃあ次はエリア7。あそこは比較的出現率が高いから」
「そうなの？　じゃあそっちに行こうよ」
「あ、じゃあその前にこのエリア8に行ってもいいですか？」
　そう言ってフィーリアはサクラの持つ地図の一ヶ所を指し示した。そこはこのエリアのほぼ真上にある頂上付近だ。
「いいけど、どうして？　このエリア8って地図で見ても飛竜が出るには狭い気がするけど」
「……ここにはバサルモスは出ない」
「わかってます。ですが、ここは貴重な鉱石があるんです」
　そう言ってフィーリアは荷車からピッケルを取り出した。なぜそんな物を持って来たのかずっと不思議に思っていたが、こういう事だったらしい。
「私は火山に来たらこのエリア8で採掘する事にしてるんです。どうですか皆さんも？」
　笑顔で言うフィーリアに対し、サクラはそんな彼女をじっと見詰める。その隻眼には何ら感情は窺えない。
「……私達の目的はバサルモスの討伐。それ以外は必要ない。勝手な行動は困る」
「そ、そうですよね。すみません……」
　しゅんとするフィーリアに、クリュウが怒ったようにサクラを見詰める。

「そんな言い方しなくてもいいでしょ？　ハンターにはそれぞれ自分の考え方があるんだから」
「……チームを組んでいる時に、そんな勝手な個人行動はチーム全体に危機を与える」
「そ、それはそうかもしれないけどさ」
「……クリュウは、どうするの？」
　サクラはじっとクリュウを見詰める。その瞳には彼の意見をしっかりと聞くという思いが込められていた。そんなサクラに、クリュウは返答する。
「僕はフィーリアについて行く。ちょうどオデッセイを作って鉱石が不足してたから」
　クリュウの返事にサクラは一瞬片方しかない瞳を大きく見開いたが、すぐにいつもの大きさに戻る――いや、むしろいつもより細い。
「……そう」
　サクラは小さくそう答えると、そのまま踵を返して歩き出してしまった。
「ちょ、ちょっとサクラ！　どこ行くのッ!?」
「……私の役目はバサルモスの討伐。それ以外の事は無用。クリュウ達は鉱石採掘をすればいい。私はバサルモスを探す」
「サクラ！」
　クリュウの声も聞かず、サクラはエリア８とは反対方向のエリア７に行ってしまった。そんなサクラを見て、クリュウはムッとする。
「何だよサクラの奴」
「あ、あの、すみません……」
「フィーリアが謝る事ないよ。あいつフィーリアと会ってからずっとピリピリしてるんだ。まったく――いいよ行こう」
「あ、はい」
　クリュウとフィーリアは荷車と共に黒い岩の坂を登ってエリア８に向かった。
　真ん中に曲がった溶岩の河が流れるエリア７に向かったサクラは辺りを見回す。だが、バサルモスの姿はなかった。

しかし、今のサクラはバサルモスなんてどうでも良かった。
胸の中に湧き上がる怒りに、不機嫌そうに足元の小石を蹴った。放物線を描いて飛んだ石は真っ赤な溶岩の河に落ちて跡形もなく消える。
「……どうして」
思い出すのはクリュウの態度。
あのフィーリアという子が彼と一時期組んでいた事は知っている。そしてその連携が今でも十分通じる事は先程までの戦闘でわかった。だが、それが彼女をイラ立たせた。
確かに彼女は彼と昔組んでいた。だが今クリュウと組んでいるのは自分である。なのに、いきなり現れて自分からクリュウを取ろうとするのが気に食わない。
そして、クリュウもまたそのフィーリアに味方した。
今までずっと自分と一緒に組んできたのに、彼はそれ以前に組んでいた彼女を選んだ。
どうしてという気持ちが胸の中を渦巻く。
クリュウと一番連携を組めるのは自分だ。
今さらあんな子にクリュウは渡さない。
サクラはキッとエリア８と繋がっている飛び降りるにはいいが登るには高過ぎる壁の前で二人を待った。
今度こそ、クリュウを取り返してみせる。
そんな想いが、サクラの中で渦巻いていた。
一方その頃、火山の頂上付近に位置するエリア８にいるクリュウとフィーリア。
岩壁の亀裂に向かってピッケルを振り下ろすクリュウは楽しそうだった。
「すごいすごいッ！　大地の結晶にマカライト鉱石！　ドラグライト鉱石もあるよッ！」
「良かったですね。これが私が火山での採掘を必ずする理由です。火山には溶岩が流れ、そしてその溶岩が冷えて固まると岩や石になります。その際の不純物の結晶がこうした鉱石になるんです。ですので、

火山は鉱石の宝庫なんですよ」
「すごいすごいッ！」
　まるで小さな子供のように嬉しそうにピッケルを振るうクリュウに、やっぱりつれて来て良かったと思うフィーリア。すると、
「うわぁッ！　何この赤い石!?」
　クリュウが驚いたのは真っ赤な鉱石であった。まるで燃え盛る炎をそのまま固めたかのような真っ赤な不思議な石だった。
「あ、それは火山でしか取れない紅蓮石です。貴重な鉱石ですよ」
「すごいなぁッ！　よぉしッ！　もっと掘るぞぉッ！」
　そう笑顔で言い、クリュウは額に溜まった汗を拭いながらピッケルを振るった。そんな彼の横でフィーリアもピッケルを振るう。
　二人だけの空間。
　やっと、クリュウと心が繋がったような気がした。
　もちろん貴重な鉱石が手に入るのも嬉しいが、それ以上にクリュウとこうして接せられるのが何よりも嬉しかった。
　しかし、気になるのはあのサクラという女の子だ。
「クリュウ様、サクラ様とは一体どういうご関係なんですか？」
「え？　仲間だけど」
「あ、いえ、その、どうしてサクラ様をパートナーに選んだのかと思って」
「あぁ、サクラは昔よく村に来てた商隊の娘で、よくエレナと一緒に遊んだ昔なじみなんだ。でも、サクラはその後モンスターに襲われて両親と仲間、そして左目を失ったんだ。その後生きる為にハンターになったらしいんだけど」
「そ、そんなお辛いご過去があったんですね、サクラ様は……」
「うん。そんな彼女との再会はシルヴァ密林にフルフルが現れて村が危険に陥った時、僕じゃどうにもならなくてドンドルマにハンターを探しに来た時に再会したんだ。そしたら厳しい条件なのに受けてくれてね。その後なんか僕も一緒に行く事になって、フルフルと戦ったんだ。苦闘の末になんとか勝利してね。その後彼女は村に腰を据えてくれたんだ。それから今までサクラと一緒に狩りをしてきたんだ」

「そうだったんですか。私がいない間にそんな事が……お役に立てなくてすみません」
「フィーリアが謝る事じゃないよ」
クリュウは笑顔でそう言うと一度ピッケルを置いて足元に散らばった鉱石を拾い始めた。落ちているのは皆貴重な鉱石ばかりだ。
「たくさん取れましたね」
「うん！　ありがとうフィーリア！」
無邪気に笑うクリュウに、フィーリアも笑みを浮かべた。この彼の笑みが、きっとあのサクラという子も引き寄せたのだろう。そう思った。
ふと思いついた事を訊いてみる。
「クリュウ様は、サクラ様を信頼されてるんですか？」
「もちろん。すっごく頼りにしてる」
「じゃ、じゃあ……私の事は？」
「もちろん信頼してるよ」
その言葉に悶えそうになるフィーリアだが、間一髪それを押さえる。本当に訊きたいのはこの後だ。
すぅと息を大きく吸い、一瞬その空気の熱さにむせそうになるが、なんとか堪えて吸い終えると、顔を真っ赤にしながら真剣な瞳を向ける。
「わ、私とサクラ様、どっちの方が信頼されてますか!?」
「え？　いや、そんなの比べられないよぉ……」
フィーリアの質問に困ったように頬を掻くクリュウ。そんな彼の姿に冷静になったフィーリアは慌てる。
「ご、ごめんなさい！　変な事を訊いてしまって！　わ、忘れてください！」
「え？　あ、うん」
顔を真っ赤にするフィーリアだが、火口からの赤い光に照らされているのでその赤みもクリュウは気づかなかった。
クリュウは採掘した鉱石を袋の中に入れると荷車の上に載せる。いつものシルヴァ密林よりも比べものにならない量の鉱石が手に

入った
「こんなもんでいいでしょ。じゃあサクラの所に行こうか。こっちからエリア7に行けるみたいだよ」
　それは二人が来た道とは逆方向に伸びる道で、エリア7に繋がっている。だが、フィーリアが小さく首を横に振った。
「確かにそちらに行けばエリア7に行けますが、エリア7に行くには岩壁を取り降りる場所があるんです。荷車ではちょっと無理です」
「そうなの？　そうなると一度エリア6に回ってエリア7に行くしかないね」
「そうですね。では行きましょう」
「うん」
　二人は鉱石の入った袋を荷車に載せるとフィーリアがそれを引き、クリュウが前に立って歩き出した。
　細い道を進むと、そこは先程サクラと別れたエリア6だ。そして、エリア7に繋がる道が反対方向にある。そこに向かって二人はエリアを横切る。すでにここにバサルモスがいない事は確認済みだ。イーオスもおらず、安心して歩ける。が、そこでクリュウは不可解な事に気づいた。
「あれ？　あんな岩なんかあったっけ？」
　クリュウが気になったのは中央部に置かれた横に長めな白い岩だった。それはどこにでもある岩であったが、先程サクラ達と確認した時あんな岩があっただろうか。
「クリュウ様？」
　クリュウは一応確認の為に石を拾って近づく。そして、半信半疑ながらそれを投げ付けた。カンッという先程までと同じ音に危惧（きぐ）であったと思った。だが、直後地面が激しく揺れ出した。
「え？　えぇッ!?」
「クリュウ様！　逃げてください！」
　フィーリアの声の刹那、突如目の前の岩が飛び上がった。地面の岩が砕け飛び、クリュウは盾でそれを防いだが、尻餅を着いてしまった。
　目の前の岩が飛び上がると、そこには巨大な岩の塊――いや、岩の

竜がいた。
まるで体全体が岩に包まれたかのような出で立ち。大きさはイャンクックより少し大きい程度だが、その生命力はイャンクック以上だ。
クリュウが岩だと思ったのは、岩そっくりの奴の背びれであった。
岩の体から灰色の翼が生えているが、その重厚な体を飛ばすには少しひ弱な感じがした。だがその分、その岩の体を支える脚は大木のように太く、その体は岩のような鎧に包まれている。
これがバサルモス――岩竜という名にふさわしい飛竜だった。
「グワァァァァァァッ！」
重厚な鳴き声を発したバサルモスは自らの前に倒れている小さな敵――クリュウを捉えた。
突然の事にクリュウはすっかり動く事を忘れていた。しかし目の前に現れた飛竜ににすぐにクリュウは動きを取り戻した。急いで立ち上がり一度バサルモスから距離を取る。その頃にはフィーリアも荷車を端の方へ置いてヴァルキリーブレイズを構えていた。装填されている弾は徹甲榴弾ＬＶ２。どんな硬い鱗や甲殻でさえも突き刺さり、内蔵された火薬が爆発する高威力の弾だ。
スコープを覗き込み、照準を合わせる。狙うは頭だ。
バァァンッ！
引き金を引きロングバレルの銃口から火が噴き出た。撃ち出された徹甲榴弾ＬＶ２はバサルモスの頭部に突き刺さった。刹那、小規模な爆発がバサルモスの頭を包んだ。
「グオオオォォォッ!?」
バサルモスは突如襲った爆発に驚きたたらを踏む。その瞬間、クリュウは駆け出すと腰のオデッセイを抜いてバサルモスの脚に斬りかかった。
「りゃあッ！」
渾身の一撃がバサルモスの岩のような甲殻を襲う。が、
ギャァァンッ！
「なぁッ!?」

すさまじい衝撃と腕を襲う痛みに思わずオデッセイを放してしまった。主を失ったオデッセイはクルクルと空中で回りながら放物線を描いて落下。クリュウの後ろの地面に突き刺さった。
「くッ！」
クリュウは一度後ろへ跳んで距離を置く。バサルモスはそんな弱い敵に向かって一度大きく体勢を低くすると、猛烈な勢いで突進して来た。
まるで岩そのものが突進して来るようだった。その速さに驚き、クリュウは逃げる隙を失った。慌てて盾を構えるが、迫る巨大な岩に恐怖する。
あんなものの突進を受ければ、自分もただじゃ済まない。
だが、今のクリュウにはこれしかできなかった。
地面を震わせながら突っ込んで来るバサルモス。距離はもうない。その巨体が自分に激突するのはあと数秒だ。そして、殺意に満ちた瞳を見た瞬間、クリュウは反射的に目を閉じた。
ドスン・・・
鈍い音と衝撃が――背中から襲った。驚いた刹那、今度は前からすさまじい衝撃が襲い、クリュウの体がまるでボールのように吹き飛ばされた。
黒い岩壁に叩き付けられ、クリュウは倒れた。だが、すぐに起き上がる。痛みが体を襲うが、思ったよりは痛くなかった。驚くクリュウに、フィーリアが慌てて駆け寄って来た。
「大丈夫ですかクリュウ様！」
「フィーリア？　さ、さっきの後ろからの衝撃って、僕を撃ったの？」
先程後ろから襲った小さな衝撃は、フィーリアが撃ったのだと確信していた。だが、なぜ味方を撃ったのか。そして、その刹那に受けたバサルモスの突進が思ったより軽かった事に困惑する。すると、フィーリアはクリュウの体を見回して目立った怪我がないとわかると安堵の息を漏らした。
「良かった。間に合ったみたいですね」
「間に合ったって？」

「先程撃ったのは硬化弾という弾で狙った対象の皮膚を硬化させて防御力を上げるものなんです」
「って事は、さっきバサルモスの突進が軽く思えたのは、そのおかげ？」
「はい」
「そっか、ありがとう」
　クリュウはフィーリアに礼を言って近くに突き刺さっていたオデッセイを抜いて構える。バサルモスは突進の勢いを止め切れなかったのか、二人より少し離れた所でその巨体を反転させていた。
「フィーリア！　あいつ硬過ぎるよ！　刃があの岩みたいな甲殻に弾かれる！」
　先程の衝撃。それは本物の岩に斬り掛かったかのような衝撃であった。その時に起きた腕の痺れはもうないが、あんな硬い甲殻斬れるはずがなかった。
　フィーリアはクリュウの言葉を聞きながら再び徹甲榴弾ＬＶ２を装填する。
「バサルモスの甲殻はまさに岩です。脚などに斬りかかっても弾かれます」
「じゃあどうすればいいのッ!?」
「バサルモスの弱点は腹です。あそこなら剣でもダメージを与えられますし、ダメージが蓄積すると破壊できます。そうすれば柔らかな肉質が姿を現し、そこを攻撃すれば大ダメージを与えられます」
「じゃあ、腹を狙えばいいの？」
「はい。ですが、バサルモスは近距離の相手に対し毒ガスや睡眠ガスを噴出させてきます。これはとっさに息を止めても無駄です。ですので、奴が急に動きを止めて体を仰け反らしたらすぐ離れてください。それが予備動作ですので」
「そんな無茶なッ！」
「とりあえず、まずは落とし穴と爆弾を使いましょう。そして腹を壊します。そうすれば幾分かは楽になります」
「わかった！」

打ち合わせが終わった瞬間、バサルモスが突進して来た。改めて見るとその動きはイャンクックよりも遅い。だが、その突撃距離はイャンクックのそれよりもずっと長い。あれだけの距離をずっと走って来る。

「まずは落とし穴の設置を！」

「うんッ！」

二人は突進して来るバサルモスを左右別々に走って回避した。バサルモスは当てるべき敵が射線上から消えると慌てて脚を止めて急ブレーキするが、勢いのついた巨体はそのまましばらく滑走する。

フィーリアはそんなバサルモスに近づき、引き金を引く。撃ち出された徹甲榴弾ＬＶ２がバサルモスの後頭部に突き刺さり、爆発する。だが、今度はまるで効いていないかのように動きに何の変化もなく振り返る。もう一発撃ち込む。今度は翼に刺さって爆発したが、これも何ら変化はない。

バサルモスは体を大きく仰け反らせるた。だがそれはガス攻撃ではない。フィーリアはその動きに横へ跳んだ。すると、先程まで彼女がいた場所に巨大な炎の塊が飛んで来た。燃える溶岩を口から吐き出すバサルモスのブレスのような攻撃だ。あれを喰らえばひとたまりもない。

フィーリアは一度弾倉から弾を抜くと別の弾を装填する。今度は貫通弾ＬＶ２。これなら重厚なバサルモスの体も貫ける。

こちらに向き直したバサルモスにフィーリアはその一発を撃ち込んだ。撃ち出された貫通弾はバサルモスの背びれに当たると、そのまま内部を貫き、反対側から飛び出す。真っ赤な血がバサルモスの白い岩のような甲殻を染める。

「グオオオォォォッ！」

バサルモスは反撃とばかりに突進して来た。だがその動きを見切っているフィーリア軽々と避ける。そして振り向きざまにもう一発撃ち込む。

一方、フィーリアが戦う間にクリュウは荷車に走って落とし穴を取り出す。荷車との距離を考えてあまり遠くには設置できない。どう

すればいいかと考えていると、バサルモスがこっちに向かって突進しようとしていた。
「クリュウ様！」
フィーリアの声を聞くまでもなくクリュウは動いた。突進を始めたバサルモス。多少こちらを追いかけるように曲がるが、その動きは緩慢だ。
クリュウは白い岩に一度逃げ込む。バサルモスはその横を通り過ぎた。
――チャンスは今しかない。
クリュウは落とし穴をその白い岩の近くに設置した。地面の黒い岩面を溶かし、ネットが張られて準備万端。あとは奴がちゃんとこっちに来るように誘導しなければ。その為にはここに立ち続けて誘き寄せるのが一番だ。
「フィーリア！　爆弾の用意を！」
クリュウの声にフィーリアはうなずくと荷車へ走った。と、その時ふと気づいた。バサルモスはクリュウに向かって再び突進を開始した。だがそんなクリュウの前には落とし穴。これではバサルモスの突進は彼には届かない。だが、その横の白い岩。あれは確か……ッ！
「……ッ!?　クリュウ様離れてください！」
フィーリアは急転進してクリュウに駆けた。が、そんなフィーリアの声にクリュウは「え？」と声を出して振り向く。その瞬間、バサルモスが突っ込んで来た――白い岩に。
ドガアアアアンッ！
すさまじい爆発。まるで大タル爆弾でも爆発したかのような爆風に、クリュウは吹き飛ばされた。地面を二転三転して転がった後、プスプスと煙を上げるクリュウはそのままぐったりと動かなくなった。フィーリアは慌ててそんな彼に駆け寄る。
一方のバサルモスはクリュウの設置した落とし穴に掛かって下半身を地面に埋もれてもがいていた。
フィーリアはクリュウに駆け寄るとその体を抱き起こす。クリュウは気絶していたが、大した怪我はしていなかった。どうやらギリギ

リで盾を構えたらしい。フィーリアは安堵した。
先程の白い岩は爆弾岩とも言われる大タル爆弾と同等の威力を持った爆発する岩で、火山戦ではよくあの岩を利用して戦うのだが、クリュウは火山が初めてだった為そんな岩の存在を知らず、こんな事になってしまった。
フィーリアは自責の念に囚われた。しかし今はとにかく気絶したクリュウと共に離脱をしなければならない。フィーリアはぐったりとするクリュウを背負う。だが、クリュウの方が身長も体重も上。足がふらつく。
「あう……」
必死に歩くが、まるで飛竜の卵や火薬岩を運ぶ時のように体が重く思うように動けない。
悪い条件はさらに重なる。バサルモスが落とし穴を脱したのだ。再びクリュウとフィーリアを睨み付け、突進体勢に入る。だが、クリュウを背負ったままのフィーリアではその攻撃は避けきれない。悲鳴が出る。
そして、バサルモスが地面を蹴った。
「……目を閉じてッ！」
その声に反射的に目を閉じた刹那、すさまじい光が襲った。ハンターなら何度も何度も使った事のある閃光玉だ。再び目を開けた時、バサルモスが視界を奪われてもがいていた。そこへエリア7の方から走って来たのはサクラだった。
サクラはフィーリアからクリュウを奪うと、背中に背負って走り出した。その動きはフィーリアとは全然違って速い。フィーリアは一瞬呆然としたが、すぐに慌てて彼女の後を追った。そしてそのままエリアを脱した。

第４２話　クリュウ激怒　ヒビの入った関係

三人が逃げ込んだのは先程クリュウとフィーリアが鉱石を採掘していたエリア８だった。外に位置している分熱が溜まる洞窟内よりは幾分か涼しい。しかしそれでも火口付近という事もあって暑いのには変わりないが。

サクラはクリュウを横にすると、道具袋（ポーチ）の中から小さな布と腰に下げた水筒を取り出した。そして布を水筒の水で湿らせてクリュウの額にそっと置く。水筒には水と共に氷結晶が入っているのでこんな灼熱地獄である火山でも冷たいままだ。

クリュウは思ったよりは軽い怪我であった。その事に二人は安堵する。

だが、そんな緊張が緩んだ空気はすぐに壊れ、サクラはキッとその隻眼でフィーリアを睨んだ。

「……どういう事？」

サクラの声には怒りの感情が込められていた。

自分がいない間に、クリュウは怪我をした。それも、フィーリアがいながら。

悔しいが、フィーリアはかなりの実力や技術、知識を持っている。そして何よりクリュウからの信頼も厚い。だが、そんな彼女がいながらクリュウは怪我した。これは許されるべき事ではなかった。

サクラに睨まれたフィーリアは「すみません……」と小さく謝ってしゅんとする。それ以外できなかった。

クリュウが怪我をしたのは自分の失態だ。火山で爆弾岩があるのは慣れたハンターなら当然気づく事だ。しかしクリュウは初めて。だからこそ自分がしっかりしなきゃいけなかったのに、注意を怠った為にこんな事に……

落ち込むフィーリアだが、サクラは睨み付けたままだ。

「……謝るならクリュウに言って。私が訊いてるのは、どうしてこんな事になったか、その経緯を聞きたいだけ」

冷静な声に聞こえるが、フィーリアにはわかっていた――その言葉

の奥にすさまじい怒りがある事を。だから、声が詰まる。
沈黙を続けるフィーリアを、サクラも無言で睨む。
しばしの沈黙の後、フィーリアはゆっくりと口を開いた。
「バサルモスと戦闘に入り、クリュウ様が落とし穴を仕掛ける事になったんですが、私の不注意で彼は爆弾岩のすぐ傍に設置してしまい、そのままバサルモスを引き付けてしまったんです。そして、バサルモスの突進を受けて起爆した爆弾岩の爆発に吹き飛ばされて、こんな事に……」
その説明に、サクラから噴き出る怒りのオーラがさらに強まったのをフィーリアは感じて体を震わせる。
「……爆弾岩の存在は、慣れたハンターなら当然気づく事。あなたは火山には何度も来ている。その証拠に、エリア8に採掘に行った。なのに、どうしてクリュウにこんな大事な事を伝えなかったの？」
「わ、忘れてて……」
「……忘れた？　そんな事でクリュウにこんな怪我をさせたのッ!?」
激怒するサクラに、フィーリアは「す、すみません……ッ！」と泣きそうになりながら必死に謝る。だが、サクラの怒りは収まらない。
「……一歩間違えれば、クリュウは死んでたかもしれないのよッ!?」
狩場では一瞬の判断の遅さが命を落とす事に繋がる。そんな事、ハンターなら当然知っている事のはず。なのに、熟練のハンターであるフィーリアがそんな初歩的なミスをし、クリュウを危険に晒した。それが許せなかった。
「……あなたの実力はかなりのもの。それはさっきのイーオス戦でわかった。だからこそ、あなたにクリュウを任せても大丈夫と思ったから、私は別行動した。あなたを信頼した。なのに、あなたはそれを裏切った。そしてクリュウを危険に晒した！」
サクラは怒鳴る。こんなにも怒りの感情を表すサクラは珍しい。それほどまでに怒っているのだ。大切な仲間であるクリュウを傷つけられ、その怒りはすさまじい。そんな彼女の怒りに、フィーリアはずっと黙ったままだ。
「……あなたにクリュウは任せられない。クリュウが起きたら、ク

リュウは私と連携してバサルモスは倒す。あなたは後ろから勝手に撃ってればいい。もう邪魔しないで」
そう言うとサクラは本当はまだ言いたい事が山ほどあったが、これ以上怒っても仕方がないと理性が働き、口を閉じた。
だが、そんなサクラの自分勝手な言い分の数々に、ずっと黙っていたフィーリアもついにキレた。逆ギレではない。こっちも言いたい事は山ほどあった。
「さっきから聞いていれば自分勝手な事ばかり言わないでくださいッ！」
突如激怒したフィーリアにサクラは驚き隻眼を大きく見開く。だが、すぐに先程までの刃のように鋭い瞳に変わる。
「……文句があるの？」
「あなただって、クリュウ様と別行動をしたじゃないですか！　一度チームを組んだら、そうした単独行動は控えるのはハンターの鉄則です！　それをあなたは破った！」
「……違う！　単独行動をしたのはあなたよ！」
「違います！　今回の依頼を受けた受注者はクリュウ様です！　必然的に、チームのリーダーはクリュウ様になります！　そしてクリュウ様は私と行動をしていました！　単独行動をしたのはあなたの方ですッ！」
「……黙れ」
「確かに私のミスでクリュウ様は怪我しました！　ですが、それは元々あなたが別行動をした結果です！　自分の事を棚に上げて、人の事をとやかく言う権利はあなたにはありませんッ！」
「……黙れッ！」
サクラは怒りで顔を真っ赤にしながら怒鳴るとフィーリアに掴みかかって来た。そんな彼女の行動にフィーリアは驚きつつも迎え撃つ。
火山の頂上で、二人の少女が怒りに身を任せてお互いを殴り合う。どちらも大切な人が傷ついて、互いの失敗を言い合い続ける。加速した怒りは二人から冷静さを失わせていた。

「……私は認めない！　クリュウの事を一番わかっているのは私！」
「私だって認めません！　クリュウ様に狩りの事を教えたのは私です！　あの戦い方だって、私が教えた事です！」
殴り合う少女二人の顔は両者共に拳を受けて幾分かはれ上がっている。だが、それでも怒りは収まらない。二人は全力を込めた拳を一斉に構えて、放つ。
「何してんのッ!?」
その声に互いの拳が止まった。振り向くと、そこには上半身を起こしたクリュウがいた。だが、その表情はいつもの優しさはなく、瞳は鋭く二人を睨み付け激怒していた。
二人はクリュウが気がついた事に安堵するも、すぐにその表情を見て背筋が凍りつく。
クリュウは本気で怒っている。そう感じたからだ。
二人はお互いから離れると、そっとクリュウに近寄る。
「クリュウ様、痛い所はありませんか？」
「……クリュウ、平気？」
二人は声を平常心を装いながらも声を震わせながら問う。しかし、クリュウは二人の問いを無視する。
「何してたの？」
クリュウの声は震えていた。しかしそれは二人が出した震えとは違う、怒りからくる震えであった。
「何してたかって訊いてるの」
再び問うが、二人は黙ったままだ。
言える訳がない。二人して冷静さを失って罵（ののし）り合い、殴り合いのケンカにまで発展してしまったなんて。言えば、彼が傷つく。
二人は何も返さない。そんな二人をクリュウはしばし睨んでいたが、それは終わった。小さくため息を吐いたクリュウはそのまま起き上がる。少々足取りはまだフラつくが、問題はない。
そしてそのまま一人で行こうとする。そんな彼に二人は慌てる。
「く、クリュウ様！　どこへ行くんですか!?」

「……クリュウはまだ寝てなきゃダメ！」
二人の必死な声に、クリュウは振り返った。その表情を見て、二人は絶句する。
――クリュウは無表情であった。あの喜怒哀楽が多い豊かな感情を持った彼が、無表情をしている。それは、二人には信じられなかった。
何ら感情を窺えさせないクリュウは冷めた瞳で二人を見る。
「もういい。僕一人でやる」
「な、何を言ってるんですか！　クリュウ様お一人でなんて無茶ですッ！」
「……私と連携を組もう。そうすれば――」
「どうせまたケンカするんでしょ？」
クリュウのその諦めたような言葉に二人は言葉を失う。
光を失った瞳が、二人を見詰める。
そして、二人は気づいた。
――クリュウから、自分達への信頼が一切失われている事を。
「く、クリュウ様？」
「……クリュウ？」
震える声で彼の名前を呼ぶが、クリュウは依然無表情を続ける。
「もういい。二人にはもう何も頼まない。自分だけでやる」
そう言うと、クリュウは腰のオデッセイを抜き、歩き出し、エリアを抜けた。
慌てて二人は後を追おうとした。だが、どちらも体が動かなかった。
クリュウから信頼を失った。
その絶望にも近い恐怖に、二人は何もできなかった。
彼の背中を追う事はできない。
二人はどちらからとなく涙を流した。
そして、痛感した。
人の絆というのは、こうも簡単に壊れ、失われるという事を……
エリア6に戻ったクリュウだったが、すでにそこにはバサルモスは

いなかった。奴が擬態したような怪しげな岩もない。
仕方なく、クリュウは端に置いてある荷車に向かい、その取っ手を掴んで引っ張った。
何もない空間を、クリュウは一人で歩く。
その表情は無表情――ではなかった。
悲しげにゆがみ、唇を強く噛んだ。
自分のせいで、二人はあんなケンカをしたのだろう。
二人が決別したのは自分のせい。自分が怪我をしたから二人はケンカしたのだ。
全て、自分のせいだった。
もう、二人にはこれ以上ケンカをしてほしくない。
だったら、自分一人でやればいい。そんな単純な事にどうして気づかなかったのだろう。
さっきのバサルモス戦で、奴は気をつけさえすればイャンクックよりも楽な相手とわかった。
突進は見ていれば何とか避けられるし、先程のブレスもイャンクックの火炎液の強化型と思えばいい。問題はガス系だが、それはフィーリアの忠告どおり予備動作を見たらすぐ動けばいい。
きっと大丈夫。
まずは落とし穴と爆弾で奴の腹を吹き飛ばせばいい。まだ落とし穴はあと一個ある。
クリュウはエリア７に向かった。サクラによればここはバサルモスの出現率がかなり高いらしい。
細い道を抜けて到達すると、そこは中央に溶岩の河が流れている場所だった。ここがエリア７だ。すると、目の前の広場に横に長い白い岩が不自然にポツンとあった。不思議に思ってよく見ると、そこにはフィーリアが貫通弾ＬＶ２で空けた穴があった。間違いない――バサルモスだ。
クリュウは急いで広場の端に荷車を置くと、落とし穴を掴む。そしてそのままバサルモスから少し離れた場所に円盤状の落とし穴を置き、ピンを抜く。すると、瞬く間に地面が融解して柔らかくなり、次

にネットが開いて準備完了。
次にクリュウはペイントボールを道具袋（ポーチ）から取り出すと、岩に擬態しているバサルモスに向かって投げ付けた。ペイントボールは見事に命中して鮮やかなピンク色が付着。すぐにあの独特の匂いが当たり一面に広がる。すると、地面が揺れだし、前方の岩が起き上がった――やはりバサルモスだ。
バサルモスは辺りを見回す。すると、横に先程自分を変な穴に落とした小さな生き物がいた。瞳に殺意が込められる。
「グワオオオオオオオオオッ！」
バサルモスは大声を上げるとクリュウに向き直り、突進体勢に入った。だがそれはクリュウの思うツボであった。
走り出したバサルモスはすぐに落とし穴を踏み抜き、下半身が地面に沈んだ。クリュウはすぐに荷車から大タル爆弾Ｇ二つを両手に持ち、小タル爆弾を右側の大タル爆弾Ｇの上に置いて走る。かなり重いが、踏ん張るしかない。
そして、クリュウはバサルモスに近づくと慎重に奴の腹付近に二個の大タル爆弾Ｇと小タル爆弾を設置。小タル爆弾のピンを抜いて走った。耳を塞いで前方に倒れ込んだ刹那、すさまじい爆発が轟いた。爆風がクリュウの体を襲うが、伏せていたので飛ばされなかった。
クリュウは起き上がると今度はシビレ罠を取り出してもがくバサルモスの少し横に設置する。これもピンを抜けばすぐさま電撃が迸る。そして先程と同じようにシビレ罠の後ろに身を置く。
バサルモスはやっとの思いで落とし穴から脱出した。その瞬間、下にあった落とし穴はまるで最初からなかったかのように消えてしまった。環境に配慮した有機素材だからだ。
バサルモスは怒りに体を震わせる。
「ゴアアアアアアアアアッ！」
そして再び突進体勢に入る。まだ幼竜だからか、その攻撃は単純過ぎるものだった。
駆け出したバサルモスだが、それはすぐに止まる。

「ガアアアアッ!?」
突如走った体中に痺れにバサルモスは悲鳴を上げる。そして、自らの体が動かない事に激怒する。だが、いくら怒っても動かないものは動かない。
クリュウはその間に大タル爆弾と小タル爆弾を持って走る。シビレ罠は落とし穴よりも持続時間が短い。時間との勝負だ。
すぐに再び腹の付近に大タル爆弾と小タル爆弾を設置して小タル爆弾のピンを抜いて走り出す。すぐに後ろから爆音が響いた。クリュウはそこで向き直ると剣を構える。そこにはシビレ罠から脱したバサルモスがいた。そしてその腹を見ると、先程まであった灰色の甲殻が壊れ、赤い柔らかそうな身が露になっていた――成功だ。
「グワアアアアアアアアッ!」
バサルモスは口から黒い煙を吐きながら咆哮した。その声にクリュウは思わず耳を塞いでしまった。これはフルフルの時と同じ――バインドボイスッ!
(しまった……ッ!)
バサルモスを声をしぼませながら突撃体勢に入った。刹那、クリュウを戒めていた恐怖が解かれた。だが、すでにバサルモスは地響きと共に突進して来ていた。罠や爆弾を使っていたせいで距離が短過ぎた。ガードする事もできず、クリュウは吹き飛ばされる。
宙を飛んだクリュウはそのまま重力に捕らわれて落下。地面に叩き付けられた。すさまじい痛みがクリュウの体を襲う。
痛みを堪えてゆっくりと起き上がると、真上にはバサルモスの腹が見えた。どうやら飛ばされて落ちた場所に奴が止まったらしい。踏まれなくて良かった。
もしさっきフィーリアの撃った硬化弾がなければ、きっと今頃自分は死んでいたか激痛で動けなかっただろう。彼女には感謝しないといけない。しかし、今の状況は最悪だ。真上にバサルモスがいるのでは危険以外なにものでもない。クリュウは痛む体を必死に起こして逃げ出そうとする。が、
「グオオオオオッ!」

突如バサルモスは体を仰け反らせた。その動作に、クリュウは頭の中でフィーリアの忠告を思い出す。
「しまった……ッ！」
次の瞬間、バサルモスの体から紫色の煙が噴き出した。反射的に息を止めるが、頭の中ではそれは無駄であるとわかっていた。そして、クリュウの体は紫色の煙に消えた……
すさまじい爆音の連続を聞いたフィーリアとサクラは慌てて走り出していた。必死に走る二人からは先程までの悲しみなどは一切ない――今や二人はハンターであった。
どんな状況でも突破してみせるという強い想いを持った、歴戦のハンターだ。
「サクラ様！　今はクリュウ様の援護にだけ全力を注ぎましょう！」
「……わかってる！」
二人を突き動かす想いは同じ――クリュウを助けに行く事。
今の二人は先程までケンカしていたケンカ相手ではない。同じ想いを持った同士――仲間であった。
二人はエリア8から細い洞窟を抜けてエリア7に出た。するとそこは先程サクラが二人を待っていた岩壁の上であった。そして右を見ると、そこにはバサルモスが突進していた。その向かう先には――
「クリュウ様！」
「……クリュウ！」
必死に逃げるクリュウの姿があった。
クリュウはなんとかバサルモスの突進を避ける事ができた。しかし、様子がおかしい。クリュウの動きが明らかに鈍い。フィーリアは援護の為に背中のヴァルキリーブレイズを構えてスコープを覗く。すると、クリュウの顔色が明らかに真っ青だという事に気づいた。
「た、大変です！　クリュウ様はきっと毒状態なんです！」
「……ッ!?　わかった。私がバサルモスを引き付ける。その間にクリュウの救出をお願い！」
「わかりました！」
サクラは構わずその高い岩壁を飛び降りた。フィーリアはその間

に弾を装填する。そしてバサルモスに突貫するサクラを一瞥して膝を着いて苦しそうにしているクリュウに照準を合わせて引き金を引いた。
「……クリュウッ！」
その声に顔を上げると、サクラがバサルモスに向かって突進して来ていた。
「……サクラ……？」
意識がもうろうとして来た。
苦しい。まるで体中から力が抜けるように力が入らなくなっている。そして、体中に鈍い痛みが。これが毒なのだ。
すでにバサルモスの突進の直撃を受け、さらに回復する暇もなく毒ガスを受けたクリュウの体力は底を尽き掛けていた。
もう、足が動かない。
（もう、ダメだ……）
そう思った刹那、体に連続して小さな衝撃が襲った。続いて力が戻って来る。それはあっという間にクリュウの体力を十分過ぎるまでに戻った。
慌てて起き上がると、サクラがバサルモスの腹に向かって鋭い一撃を叩き込んでいた。
クリュウが命懸けで壊した腹の内側の柔らかい肉に刺さった剣。さらに剣の付加属性でその肉を焼く。その痛みにバサルモスは悲鳴を上げる。そしてそのまま横へ斬り裂く。
「グオワアアアアッ！」
バサルモスの肉が真横に裂け、大量の真っ赤な血が溢れ出る。
サクラはバサルモスの下から脱出し、そのまま走った。それはクリュウとは反対方向。バサルモスも彼女を追い掛けて反対方向に向かって突進した。
クリュウはそんなサクラが作ってくれた隙に慌ててポーチの中から解毒薬を取り出して飲み干した。すると、今まで体を戒めていた痛みが消える。
「クリュウ様！」

そこへ駆け寄って来たのはフィーリアだ。今にも泣きそうな顔をした彼女は無事なクリュウの姿を見て嬉しそうに笑みを浮かべた。
「良かったぁ。本当に良かったぁ」
「フィーリア……何で……」
驚くクリュウにフィーリアは怒ったような顔をする。だが、それは結構まじめに怒っているのだが、どうしてかかわいく見えてしまう。
「私達はチームです！　仲間を助けるのに理由なんてありません！」
その言葉だけで、クリュウは十分だった。刹那、すさまじい閃光が横から放たれた。きっとサクラが閃光玉を投げたのだろう。振り向くと、バサルモスがめちゃくちゃに尻尾を振り回していた。サクラはその下を潜り抜けてこちらに向かって走って来る。
「……今のうちに！」
サクラの声にうなずき、二人はエリア6に向かって走った。その後ろからサクラが荷車を引っ張って追いかけて来た。
細い洞窟へ逃げ込むと後ろからバサルモスの怒号が聞こえ、クリュウは助かったという実感に安堵の息を漏らした。

第４３話　最終激闘バサルモス

エリア６に逃げ込んだ三人は辺りにモンスターがいない事を確認すると疲れたように腰を下ろした。地面は熱いが、今はそれよりも助かった事の方が大事であった。

クリュウは軽い打撲やかすり傷など負っていたが、大した怪我ではなかった。フィーリアは薬草を取り出してすり潰すとその傷の一つ一つに丁寧に塗る。その間誰も言葉を発しない。

あんな別れ方の後だ。それも当然だろう。一体どうやって声を掛ければいいか双方共に全くわからないのだ。

無言のままフィーリアはクリュウの手当てを終える。

「ありがとう」

そこでクリュウが初めて口を開いた。

「あ、いえ……」

フィーリアはその言葉に返す言葉がわからず、口ごもってしまう。そんなフィーリアにクリュウは「ごめん」と小さく謝った。

「さっきは言い過ぎた。ごめんね」

「そ、そんな！　あれは私が悪いんですから！　クリュウ様を怪我させたのは私の不注意のせいなのに、サクラ様に責任をなすり付けた私がいけないんです！　私の方こそすみませんでした！」

「……違う。確かにあなたの言うとおり、私の単独行動がいけなかった。ごめんなさい」

謝り合う三人の中、クリュウは謝る二人を見て小さく微笑んだ。

「これじゃみんな謝ってばっかりだね。じゃあその件はなしって事で」

「え？　あ、クリュウ様がそう仰るなら」

「……私はクリュウに従う」

二人の言葉に、クリュウは嬉しそうにうなずく。

「じゃあそれは終わり。さっきは助けてくれてありがとう」

クリュウはそう言うと満面の笑みを浮かべた。その無邪気な笑顔に、一応年下であるフィーリアはまるで彼を年下のように思ってし

まった。それほどまでにかわいいのだ。
「あ、いえ、その……」
「サクラもありがとう。やっぱりサクラは頼りになるよ」
「……そう」
素っ気ない返事だが、その表情はわずかながらも嬉しそう微笑んで見える。
「わ、私だって頼りになりますよ？」
自信なさげに言うフィーリアに、ついついかわいいなぁと思ってしまう。
「わかってるよ。フィーリアも頼りにしてるから」
「は、はい！」
「さっきのもフィーリアが何か撃ったんでしょ？」
さっきのとは体力が残り少なかったクリュウが突如回復したあの瞬間の事だ。
「はい。先程のは回復弾ＬＶ２を撃ったんです。回復薬グレートと同じくらい回復できますから」
「回復薬グレートって？」
「あぁ、通常の回復薬よりも大きく回復できる回復薬の事です。今度作り方をお教えしましょうか？」
「うん！　お願い！」
嬉しそうに笑うクリュウは本当に無邪気だ。そんな彼を見て、サクラはやっぱりクリュウは変わってないと思った。子供の頃も、あんな風にいつも無邪気な笑みを浮かべていた。時折見せるあの笑顔が、自分は一番好きだ。もちろん、時折見せる彼の歳相応のかっこ良さもまた好きだが。
三人は仲直りしたという事もあり、これからの事を考え始めた。
「バサルモスには大タル爆弾Ｇ二発、大タル爆弾一発を爆破してなんとか腹は壊す事はできた。それにペイントボールも付けたから、今奴がどこにいるかもわかる。この匂いの方向は、たぶんあっちの方向だと思う」
クリュウが指差した方向を見て、サクラは地図と照らし合わせる。

その方向は、
「……エリア４ね」
　エリア４とは拠点（ベースキャンプ）から最初に入った洞窟だ。あそこなら拠点（ベースキャンプ）にすぐ逃げ込めるので作戦も立てやすい。
「……エリア４は爆弾岩も数多くある。これを利用して戦えば短時間で片付けられる」
「そうですね。ただし高台などがないので私も動き回りながら戦わないといけませんが」
「大丈夫なの？」
「任せてください。これでもリオレイアを単独で狩るだけの実力は持っていますから。これくらいは問題ありません」
　単独ライトボウガンでリオレイアを討伐するには下見を含めたらそれこそ数日がかりだ。フィーリアはそうした長期戦を爆弾や罠などを有効的に使って今まで狩ってきた。もちろん複数の方が断然やり易いのも事実だ。
　いずれ、クリュウがリオレイアと戦うと言ったら全力で助けてあげようと陰ながら思っていた。
　クリュウは地図を見ながら地形を確認する。一度通っていたのでどんな場所かは一応頭に入っている。今までの場所に比べたらずいぶん広いので戦いやすい。
「……残った大タル爆弾は爆弾岩の陰に置いて奴に突進させた方がいい。そうすればその衝撃で爆発した爆弾岩と同時に大タル爆弾を起爆できるから、確実に奴にダメージを与えられる」
「シビレ罠などは一斉攻撃の時に使いましょう。それと、各自自分の判断で閃光玉を投げてください。三人なのでかなり効率良く使えるはずです」
　さすがは熟練のハンターだ。女の子でもクリュウよりはずっとバサルモスの特性や地形の有効な使い方を知っている。ちょっと悔しいが、やっぱり頼りになるなぁとクリュウは思う。
　クリュウは作戦方針が決まると立ち上がった。そんなクリュウに

二人も立ち上がる。
「じゃあまずはエリア４に行こう。あそこなら十分の広さがあって戦いやすいし、何より拠点（ベースキャンプ）と行き来もできる。しかも相手はかなりのダメージを受けているはず。三人で協力すれば恐れる相手じゃない。サクラは僕と連携して攻撃。フィーリアは遠距離からの攻撃と僕らの援護をお願い。やばくなったらさっきみたいに回復弾を撃って」
「はい！」
「……わかった」
うなずく二人に、クリュウは照れたような笑みを浮かべる。
「な、なんか僕が指揮っちゃってごめんね」
「そんな事ないですよ。私はクリュウ様について行きますから」
「……私も、クリュウの考えには従う」
二人ともクリュウを信じているのだ。そんな二人の想いにクリュウは嬉しそうに微笑むと、顔を引き締める。
「じゃあ行こう！　そしてドンドルマに帰ったらみんなで祝杯だ！」
「はいッ！」
「……楽しみ」
三人は一路エリア４を目指して歩き出した。陣形（フォーメーション）はサクラを先頭に荷車を引くフィーリア、そして殿のクリュウ。三人を最も有効的に使った陣形（フォーメーション）だ。
途中クーラードリンクの効力が尽き掛けたので新たに飲み、イーオスなどに襲われたが、連携を組む三人の敵ではなかった。
エリア４に到達した三人は爆弾岩数個と、先程クリュウが付けたペイントボールのおかげで岩に擬態したバサルモスを難なく発見できた。
クリュウ達はまずバサルモスから少し離れた場所にシビレ罠を設置。大タル爆弾二個を一つの爆弾岩の陰に設置し、準備を整えた。
「じゃあフィーリア、お願い」
「任せてください」
閃光玉を握るクリュウの言葉にフィーリアはそう答えると、背中の

ヴァルキリーブレイズを構えた。起き上がったバサルモスに第一撃を叩き込むサクラはバサルモスの少し横ですでに剣を構えている。
フィーリアは貫通弾ＬＶ２を装填し、スコープを覗き込む。バサルモスの真後ろに陣取るフィーリアの位置は貫通弾が最も威力を発揮する位置でもあった。そして、貫通弾がバサルモスの体を貫くように照準を合わせると、引き金を引いた。
バァンッ！　バァンッ！　バァンッ！
一度に装填できる貫通弾ＬＶ２を全弾撃ち込んだ。三発の貫通弾はバサルモスの後ろから前に向かって見事に貫通し、風穴を空け、血が噴き出す。刹那、地響きと共にバサルモスが地中から姿を現した。その瞬間、サクラが突貫。それに呼応してクリュウがバサルモスの眼前に向かってピンを抜いた閃光玉を投げ付ける。閃光玉は見事に奴の眼前で炸裂し、まばゆい光が辺りを包んだ。光が消えた時には、目を潰されたバサルモスが悲鳴を上げて悶えていた。もちろん目をつむった三人の視界は万全だ。
サクラは一直線に突貫し、勢いを殺さずそのままバサルモスの柔らかな腹に向かって突きの一撃を叩き込んだ。
「グワァァァァァッ!?」
目が見えない間に炸裂した強烈な一撃にバサルモスが悲鳴を上げる。
サクラの愛剣、飛竜刀【紅葉】はその真っ赤な刀身の半分をバサルモスの体に突き刺し、その剣からは全てを焼き尽くすような勢いで炎が吹き荒れる。サクラは柄を持ち変えると、体を大きく横へ振って豪快に奴の腹を斬り裂いた。
「ギャオオオオオオオオオオッ!?」
おびただしい血を噴き出すバサルモスに続けて二撃、三撃と剣を叩き込む。
バサルモスは真下にいるであろう敵に向かって体を大きく仰け反らせて毒ガスを噴出させる。だが、その大きすぎる予備動作を見たサクラは難なく後退してそれを避けた。
この間にバサルモスの正面に移動したフィーリアはサクラが後退

したのを見ると装填してあった徹甲榴弾ＬＶ２をバサルモスのむき出しの腹に撃ち込んだ。
徹甲榴弾は一直線にバサルモスの腹に突き刺さり、爆発した。
「グオオオオオッ！」
たたらを踏むバサルモスに次弾を装填したフィーリアは再び発射した。もちろん再びバサルモスの腹に突き刺さり、爆発する。
サクラは二発目の発射が終わると再び突進した。そんなサクラにフィーリアは硬化弾を撃ち込む。サクラほどの腕なら心配はいらないと思うが、念の為だ。
悶えるバサルモスにサクラは薙ぎ払うような一撃を叩き込む。肉が裂け、焼け、血が噴き出す。バサルモスは痛みに体を悶えさせながら再び毒ガスを放つ。が、もちろんサクラはその時には後退している。
続いてサクラは剣を背中の鞘に納めると走り出す。フィーリアも同じくヴァルキリーブレイズを背中に戻して走り出す。向かう先には戦闘の前にクリュウが設置したシビレ罠。
一方ようやく視界を取り戻したバサルモスは口から黒い煙と火の粉を噴きながら逃げる敵を睨み突進する。だがそれは敵の思うつぼだった。
もう少しで踏み潰せると思った刹那、体にすさまじい電撃が走り、体が動かなくなった。それは先程も受けたものだが、やっぱり体は動かない。
「ゴオアアアオオオッ！　ガアアアアアアッ!?」
悲鳴を上げるバサルモスに、クリュウはそのむき出しの腹に向かって斬り掛かった。サクラも横から腹に向かって斬り掛かる。
クリュウはオデッセイを縦に振り下ろす。先程脚に斬り掛かった時には弾かれたが、今度は刃が刺さり、その柔らかな赤い肉を斬り裂く。連続して上から下へ、下から上へ、右から左へ、左から右へ。連続した攻撃を繰り出すクリュウの横ではサクラもその赤い肉に向かって剣を振り下ろしていた。
一方のフィーリアは徹甲榴弾ＬＶ２を連続で頭に撃っていた。単

発装填なので時間は掛かるが、頭部に対し高威力の攻撃はかなり有効だ。バサルモスの岩のような頭で爆発が連続して起き、ヒビが入る。
剣を振るい続けるクリュウとサクラ。
上から下への強烈な一撃を叩き込むと、サクラの体に力が湧き上がった。練気が溜まったのだ。柄を握る手にも力が込もる。
「……クリュウ離れて！」
サクラの声にクリュウは後ろへ跳んだ。その瞬間、サクラは己が体に纏う力を一気に解放した。太刀必殺の気刃斬りだ。その広大な攻撃範囲に仲間を入れる訳にはいかない。
サクラは己が力を剣に叩き込んだ。
今まで以上のすさまじい速さの強烈な連続斬りが腹だけでなく脇腹をも襲う。その強烈な一撃は硬い甲殻をも吹き飛ばし、真っ赤な火炎と共にバサルモスの体を焼き斬る。バサルモスの真っ赤な血がまるで滝のように溢れ出す。サクラはそんな中でも鬼神の如く斬り続ける。そして、最後の一撃を思いっ切り振り下ろした。
「……チェストオオオオオオオオオッ！」
ドガンッ！　と、まるで巨大な岩が落ちてきたかのような音と共に、バサルモスの腹の周りの甲殻が吹き飛び、大量の血が噴き出す。
「グオアアアアアアアアッ！」
バサルモスはすさまじい激痛に悲鳴を上げる。だが、負けじと毒ガスを噴出。強烈な一撃を叩き込んだ後のサクラは反応が一瞬遅れて紫の霧の中に消えた。しかしすぐに大きく後退してバサルモスの真下から待避する。だが脱出したサクラは剣をガンッと地面に突いて杖のようにしながら片膝を立ててしまう。その表情は苦しげだ。やはり毒を喰らったのだ。
クリュウはすかさずポーチから閃光玉を取り出して投げ付ける。これでバサルモスは再び視界を奪われた。その隙にサクラは解毒薬と回復薬を飲む。
クリュウはその間にバサルモスの腹の下に入り込むと全力で斬り上げた。血が噴き出し、視界が真っ赤になる。続いて斬り下げ、右から左への薙ぎ払い。そして体全体を回して回転斬り。刃がその肉を

斬り裂くたびに血が噴き出す。すでにバサルモスの腹はボロボロだ。
クリュウは一度バサルモスから離れる。そろそろ閃光玉の効き目が切れる頃だ。
一方フィーリアは最後の徹甲榴弾ＬＶ２を頭に撃ち込んだ。すると、バサルモスの頭の甲殻が一部砕けた。続いてバサルモスはそのまま転倒。もがき始める。
「めまい状態です！　チャンスですよ！」
フィーリアは自らも貫通弾ＬＶ２を装填しながら叫ぶ。クリュウはその声に駆け出す。サクラも少し遅れて走り出した。
クリュウは一部砕けて内側が露になったバサルモスの頭部に斬りかかる。少し外すと硬い甲殻に弾かれるが、それでもひたすら斬り付ける。
サクラは投げ出されたバサルモスの腹に連続して剣を叩き込む。防御を無視した太刀のその鋭く強烈な一撃の数々にバサルモスの腹はさらにボロボロになる。
フィーリアは連続して貫通弾ＬＶ２を撃ち込む。バサルモスの硬い甲殻すらも撃ち破り、その中の肉を貫く。
すさまじい連続攻撃にバサルモスはたまらず起き上がった。その瞬間クリュウとサクラは後方へ下がり、フィーリアは通常弾ＬＶ３に切り替えて走りながら撃ち込む。
「爆弾岩へ誘導を！」
フィーリアの言葉にうなずき、三人は一ヶ所に向かって走った。その先には大タル爆弾二個を傍に置いた爆弾岩がある。
バサルモスは怒り狂いながら逃げる敵を追い掛けて突進する。
クリュウ達は走り続ける。バサルモスの方が速度は速いので地響きと気配が背中にどんどん近づいて来る。そして、爆弾岩を通り過ぎた瞬間、三人は一斉に横へ跳び、そのまま地面に伏せた。
刹那、すさまじい大爆発が辺りに轟いた。
爆風が全てを吹き飛ばし、爆炎が全てを焼き尽くす。
倒れた三人にも容赦なくすさまじい爆風が襲うが、なんとか吹き飛ばされずに済んだ。

爆風が止み、起き上がるとそこには巨大な黒煙があった。一瞬、クリュウはやったかと思ったが、その黒煙の中から白い岩の塊が姿を現したのを見て舌打ちする。
バサルモスは生きていた。何てタフな生命力だろうか――しかし、それでもかなりのダメージを受けたらしく脚を引きずっている。あともう少しだ。
クリュウは剣を抜いて駆け出した。別方向からサクラも突貫する。
だが、正面に位置したクリュウに向かってバサルモスが姿勢を低くした。その動きに最初に気づいたのはフィーリア。
「クリュウ様！　避けてください！」
その声に慌てて横へ飛んだ瞬間、バサルモスの口で一瞬爆発が起き、一直線にすさまじい炎と熱の柱が横一直線へ放射された。すさまじい熱と轟音。その一撃は反対側の岩壁に激突し弾ける。灼熱の業火が止んだ時、その道筋からは白い湯気が噴き、直撃を受けた黒い岩壁は溶けて溶岩に変わっていた。
「なぁッ!?」
驚くクリュウ。バサルモスのあんな攻撃は見た事がなかった。
バサルモスはすさまじい一撃を入れた後、横へ飛んだクリュウに向かって再び姿勢を低くする。
「うわぁッ！」
クリュウは慌てて横へ倒れるように跳んだ。またあの攻撃が来る。そう直感したからだ。しかし、それは来なかった。バサルモスは先程と同じ姿勢だが、口からは何も出ない。
困惑しながら起き上がると、横から走って来たサクラが「……大丈夫？」と声を掛けて来た。
「う、うん。でもあれって……」
「……あれは熱線。バサルモス最大の攻撃で、ヘタな装備で直撃したら即死するわ」
「そ、そんな化け物みたいな攻撃なのッ!?」
「……でも、バサルモスはまだ幼竜。だから不発も多い。だけど、成長してグラビモスになったら、必ず撃てるようになる。気をつけて」

「うそでしょ……」
一瞬にして岩壁を溶解させるような一撃を持つ化け物。それがバサルモスなのだ。あんな攻撃を喰らったらサクラが言ったように即死だ。なるべく正面には立たないようにしよう。そう思った。
再び剣を構えると、バサルモスの体が連続して貫かれた。フィーリアの貫通弾ＬＶ２だ。悶えるバサルモスにクリュウは再び突撃する。後ろからサクラも遅れて突撃。
バサルモスは迫る敵を見て体を仰け反らせる。すると、ガスが噴き出した。しかしそれは今までの紫色のガスではなかった。白い、別のガス。
「何だこれッ!?」
クリュウは慌てて止まったが、そのガスはそんなクリュウの体をも包み込んだ。サクラはギリギリで止まって避けられたが、白いガスの中に消えたクリュウに目を大きく見開く。
「……クリュウッ！」
白い霧に包まれたクリュウ。すると、なぜかすさまじい睡魔が襲ってきた。
寝てはいけない。そう頭ではわかっているのに、その考えもやがて眠りの中に消え、クリュウは倒れた。
白い霧が晴れると、そこには地面に倒れて眠ってしまったクリュウがいた。
「……クリュウッ！」
サクラが救出に向かおうとする。だが、バサルモスが炎の塊を吐き出して来たせいで回避の為に後ろへ跳び、距離が離れた。舌打ちするサクラ。そこから少し離れた場所にいるフィーリアはすでに回復弾ＬＶ１を装填し、照準をクリュウに向けて撃った。
回復弾ＬＶ１を受けて体力が回復し、さらにその衝撃でクリュウは目を覚ました。
「……え？　ここ、僕のベッドじゃない？」
まだ半分寝ぼけながら目を擦ると、真上にバサルモスの腹が見えた。

「う、うわぁッ！」
　クリュウは慌てて逃げ出す。そして今が戦闘中だという事を思い出した。
「さ、さっきの一体」
「あれは眠りガスです。毒ガスを同じく息を止めていても眠気が襲い掛かり、抵抗できずに眠ってしまうんです」
　そう答えたのは駆け寄って来たフィーリア。彼女の言葉にクリュウは驚愕する。
「そんなのありッ!?　だって眠ったところを踏み潰されれば大変だよッ!?」
「そうですね。そのまま永遠の眠りになってしまう可能性もあります」
「怖い事言わないでよ……」
　クリュウは恐怖に顔を真っ青にする。あんな隠し技を持っていたなんて。
　だが、いつまでも止まってはいられない。別方向からサクラが突貫するのを見て、クリュウも急いで突撃する。
　しかし、後もう少しというところでバサルモスは突如すさまじい鳴き声を上げた。
「ギュアアアアアアアアッ！」
　人間の本能に直接影響を与えるすさまじい鳴声（バインドボイス）に、二人は思わず立ち止まって耳を塞いでしまう。近場にいたフィーリアも苦しげに顔をゆがませながら耳を塞ぐ。
　そんな三人が動きを止めた隙に、バサルモスは一番近い敵――クリュウに向かって体を仰け反らせると炎の塊を吐き出した。真っ赤に焼けてドロドロとした溶岩の塊は空気に触れて激しく燃え上がる。そしてそれがクリュウに襲い掛かった。
　クリュウは直前に動くようになった体でとっさに盾を構えた。そして着弾。まるで岩の塊で殴られたかのようなすさまじい衝撃が盾と、盾を支える左腕に襲い掛かった。耐え切れず、クリュウの体は後ろへ吹っ飛んだ。地面を二転、三転して剣を取りこぼし、クリュウの

体は地面にぐったりと倒れた。
すさまじい激痛と盾で防ぎ切れなかった溶岩が付着した部分の防具が焼けただれながらもクリュウは起き上がろうとする。しかし、力なくその場に倒れた。あまりの痛みに体が動かない。
「クリュウ様！」
フィーリアは急いで回復弾ＬＶ２を装填し、狙いを定める。だが、気が動転していたせいか、バサルモスが自分に向きを変えた事に気づかなかった。
バサルモスは目の前の敵に向かって炎の塊を吐き出した。
迫る熱と質量に「え？」と視線を向けると、そこには炎の塊があった。避けられない。本能がそう悟った。だが、直撃の寸前でドンッという衝撃と共に横へ転がった。おかげで炎の塊は外れる。
直撃寸前でフィーリアを押し倒したのは――サクラだった。
恐怖で一瞬閉じた瞳を開けると、そこには涼しい表情をしたサクラの顔があった。
「さ、サクラ様？」
「……大丈夫？」
「は、はい！」
サクラは起き上がると、バサルモスに向かって突進した。フィーリアも起き上がると急いで回復弾ＬＶ２をクリュウに撃ち込む。
サクラはバサルモスに迫るが、バサルモスは突進体勢に入った。その姿勢にサクラは横へ跳んだ。直後バサルモスは突進するが狙った獲物は当たらなかった。
「グオワアアアアアッ！」
怒りの声を上げるバサルモスに、サクラは横から突っ込むと脚に剣を叩き込む。ギャンッ！　と嫌な音が響き、剣は弾かれた。やっぱり硬過ぎる。
仰け反ったバサルモスに後方へ下がると、毒ガスが噴出された。毒ガスが晴れると、再びサクラは突っ込む。
一方フィーリアもそんなサクラの援護の為に貫通弾ＬＶ１を撃っていた。本当はすぐにでもクリュウに走りたいが、バサルモスは暴れ

回ってサクラを狙う。さすがに一人では危なそうだ。
バサルモスは尻尾を体ごと回転させて振るう。サクラはその一撃を避け切れずに吹き飛ばされた。フィーリアは悲鳴を上げながらも回復弾ＬＶ２を装填してすぐにサクラに撃ち込んだ。ほどなくしてサクラは立ち上がるとフィーリアを見てコクリとうなずいた。きっと礼を言っているのだろう。再び貫通弾ＬＶ１に戻した時には、サクラは再びバサルモスの腹に斬り掛かっていた。
その時、バサルモスの眼前に閃光玉が炸裂した。ちょうど二人は反対方向を向いていたのでその光は受けずに済んだ。振り向くと、そこにはクリュウが立っていた。
クリュウは剣を抜くと悶えるバサルモスの頭に斬り掛かる。狙うは顔の甲殻が壊れた部分。剣を叩き込むとバサルモスは痛みに仰け反る。そこへすかさずフィーリアの貫通弾が連続して撃ち込まれた。
サクラは連続で斬っていたので練気が溜まっていた。しかし解放はせず攻撃力が高いまま力強く剣を叩き込む。
フィーリアは散弾ＬＶ１を装填すると一気に接近して近距離で放った。散弾は撃った直後に無数の小さな弾丸が広範囲に放たれるので、チーム戦向きの弾ではない。しかしこうして接近すれば問題ない。弾は全部バサルモスに当たった。
だが、三人が一斉に接近した瞬間、バサルモスは毒ガスを噴出した。斬っている途中だったサクラとクリュウ、そしてフィーリアも紫色の煙の中に消えた。
クリュウは慌てて後ろへ跳んだが、毒状態となって方膝を着いた。二人を探すと、バサルモスの横からフィーリアに支えられたサクラが姿を現した。サクラは毒状態なのか少し辛そうに見える。だがフィーリアはピンピンしてる。レイアシリーズの毒スキルと抗毒珠で強化されて発動した毒無効のおかげだ。
フィーリアはポーチから閃光玉を取り出すと後ろへ放った。光が炸裂し、バサルモスの視界を奪う。
「……助かった」
「いえ、これでお互い様ですよ」

フィーリアはそう言って優しく微笑む。
サクラは解毒薬を取り出すと飲み干し、解毒する。クリュウもすでに解毒薬を飲んで解毒を終えていた。
「……クリュウは腹をお願い！　私は頭を叩く！」
「わかった！」
クリュウとサクラは同時に駆け出した。後ろではフィーリアが貫通弾ＬＶ１を装填して射撃を開始していた。
クリュウは腹へ、サクラは頭へ斬り掛かる。
すでに幾多の攻撃を受け続けた腹は傷だらけでボロボロになっていた。そこへクリュウはさらに斬り掛かる。
連続の攻撃でオデッセイの刃はボロボロになっていた。だがとにかく斬り掛かる。刃がボロボロでもバサルモスの腹は裂け、血を噴き出す。力一杯回転斬りを叩き付ける。
一方のサクラはバサルモスの頭の前で剣を構えると溜まっていた練気を解放。気刃斬りを発動した。連続して叩き出される強大な一撃の数々にバサルモスの頭にヒビが入り、悲鳴が上がる。
「グワアアアアアアアアアッ!?」
そして、サクラは剣を力強く振り上げると最後の一撃を叩き込んだ。
「……チェストオオオオオオオオオッ！」
すさまじい勢いで振り下ろされた最強の一撃がバサルモスの頭を砕いた。その瞬間、バサルモスはすさまじい絶叫を上げ、そのまま横に倒れた。地響きが地面を揺らす。
そして、バサルモスの瞳から生気が消え、動かなくなった。
動かなくなったバサルモスの前で肩を激しく上下に動かしながら荒い息をするサクラにフィーリアが駆け寄る。そして動かぬバサルモスを覗き込む。
「倒しました……よね？」
「……ええ」
二人は顔を見合わせると、どちらかともなく笑みが零れ、歓喜の声を上げた。

「やったです！　勝ったですよ！」
「……疲れた」
　飛竜刀【紅葉】を背中の鞘に戻したサクラは疲れたように息を吐いて肩を下げる。すると、そんなサクラにフィーリアが満面の笑みを浮かべて抱き付いた。
「やったですよ！　勝ったですよ！」
「……ええ」
　無邪気な笑みを浮かべて大喜びするフィーリアに、サクラは無表情でそれを受ける。すると、そんな二人にクリュウが駆け寄って来た。その表情はフィーリア以上の歓喜の色に染まっている。
「やったよフィーリア！　やったよサクラ！　僕達やったんだ！」
　無邪気に笑うクリュウは二人に思いっ切り抱き付いた。顔を真っ赤にしてあわあわとするフィーリアと顔を真っ赤にして硬直するサクラ。そんな二人にクリュウは満面の笑みを浮かべてギュッと抱き付く。
「く、クリュウ様……ッ！　あ、あのぉ……ッ！」
「……クリュウ、大胆」
「え？　あ、ご、ごめんッ！」
　クリュウは慌てて二人から離れる。その顔は真っ赤だ。一方の二人は顔は真っ赤だが少し残念そうな顔をしている。もう少しクリュウに抱き締めてほしかった。
　気を取り直して三人はやっとの思いで討伐したバサルモスに近づく。すると、クリュウはいつものように手を合わせて倒したバサルモスの冥福を祈る。もちろんクリュウがそういう行為をする事を知っている二人も同じように手を合わせる。
　恒例の儀式を終えると、クリュウは早速バサルモスの解体に取り掛かる。だが、硬い甲殻が剥ぎ取り用ナイフの刃を妨げてしまい、なかなか刃が通らない。そこはフィーリアとサクラがアドバイスをしてくれてなんとか解体を行えた。
　岩竜の甲殻や毒袋などが大量に手に入った。荷車に詰め込む甲殻はまるで本物の岩のようだった。

クリュウは荷車に載せられた岩竜の甲殻をまるで宝石を見るようにキラキラした瞳で見詰める。そんなクリュウを、フィーリアは嬉しそうに微笑み、サクラも口元に小さな笑みを浮かべていた。

クリュウは自分を見詰める二人に振り返ると、満面の笑みを浮かべた。その笑みは天真爛漫、無邪気なものだった。

「じゃあ、帰ろうか」

「はい！」

「……ええ」

嬉しそうに笑顔絶えず歩くクリュウを、フィーリアとサクラは笑みを浮かべて追い掛ける。まるでここが過酷な火山地帯というのを忘れさせるかのような、そんな微笑ましい雰囲気が三人を包み込んでいた。

そして、三人は意気揚々と拠点（ベースキャンプ）に戻ると、その興奮収まらぬまま船に乗り、ラティオ活火山を後にした。

第４４話　チーム結成　リーダーはクリュウ!?

「かんぱぁいッ！」
「乾杯ですッ！」
「……乾杯」
　三人の掛け声と共に三つのグラスがぶつかり、歓喜の音色を上げた。そして三人はグラスに注がれたビールを一斉に飲む。
「ぷはぁッ！　おいしいですね！」
「……勝利の後の一杯は、最高」
　おいしそうにビールを飲むフィーリアとサクラ。そんな二人を見て三人が注文した料理を運んできたライザが嬉しそうに微笑む。だが、ふと視線を外すと、
「に、苦い……」
　クリュウがまだ一口しか飲んでいないグラスを片手に顔一杯で苦そうな表情を浮かべていた。どうやらビールはまだクリュウには早かったらしい。
「あらあら、クリュウくんにはまだビールは早かったわね」
「うぅ、大丈夫です！　飲めますよ！　ほら――苦い……」
　口の周りに泡を付けたまま苦そうな顔をする。そんなクリュウを見て三人は笑みを浮かべた。本当に子供っぽい少年だ。
「やっぱり思ったとおり、あなた達ならきっと勝つって思ってたわよ」
「そんな、これもクリュウ様のおかげです」
「……クリュウがんばった」
「あらあら、クリュウくん大活躍ね」
「そんな事ないですよ。二人がいてくれたおかげです」
　そう言ってクリュウは満面の笑みを浮かべる。その笑みからは本当に心の底からそう思っている事が見て取れた。
「いいチームね」
　ライザはそう言い残すと受付に戻って行った。今日は酒場が大盛況なせいか彼女も忙しいらしい。
　クリュウはそんなライザを一瞥し、目の前の自分の料理――ガブリ

ブロースのステーキに摩り下ろし氷樹リンゴとチリチーズソースがけを見詰める。
「おいしそう。いただきます！」
クリュウは嬉しそうにステーキをナイフで切ってフォークで刺し、豪快に頬張る。もちろんは味は最高である。
「おいしい！」
クリュウはぱぁっと顔を輝かせて食べる。その口の周りは肉汁がべっとりと付いている。そんなクリュウを見詰め、サクラは小さく微笑むとそっと自らの料理を差し出す。
「……これ、食べて」
「え？　ありがとう」
クリュウは自分より数段階レベルの高い者が食べられるサクラの料理を食べてみる。味はもちろんうまい。自分のもうまかったが、やっぱりこっちの方がおいしい。
「いいなぁ、こんなのが食べられるなんて」
「……大丈夫。クリュウもすぐにここまで来れる」
「そ、そっかな？」
「……クリュウはやれる。必ず」
そう言うサクラの瞳はとても優しいものだった。澄んだ瞳は、本当に心の底からそう思っているとわかる。そんなサクラの言葉にクリュウは照れたような笑みを浮かべる。
「あ、ありがとう」
「そ、そうですよ！　クリュウ様なら大丈夫です！」
二人だけの雰囲気になりそうになったのを敏感に感じ取り、フィーリアは慌ててクリュウに声を掛ける。
（二人だけの雰囲気になんてさせません！）
力強く踏み込んで来たフィーリアに、サクラは一瞬その片目で一瞥すると再びクリュウに向き直る。
「……もっと食べていい」
「え？　で、でもそれじゃサクラの分が」
「……平気。私はクリュウに食べてほしい」

「そ、そう？　じゃああと一口」
「く、クリュウ様！　私のも食べていいですよ！　いえッ！　食べてください！」
　そう言ってフィーリアはクリュウに自らの料理を差し出す。いきなり横から突き出された料理にクリュウは驚くも、すぐに笑みを浮かべる。
「ありがとう。じゃあもらうね」
「はいッ！」
「……クリュウは、私の料理を食べればいい」
　サクラはそう言うと自ら皿をフィーリアの皿の上に被せた。そんな彼女の行為にフィーリアはキッとサクラを睨む。
「結構です。クリュウ様は私の料理を食べるんです」
「……しつこい。クリュウは私の料理を食べる」
「私のですッ！」
「……私」
　ガルルルッと睨み付けるフィーリアと涼しいながらも鋭利な隻眼で睨み付けるサクラ。その間に立たされたクリュウはあわあわとする。
「ちょ、ちょっとケンカはやめてよぉッ！」
　クリュウの泣きそうな声を聞いたライザは三人のテーブルが険悪な雰囲気になっているのを見てため息をしながら近づく。
「もう、何やってるのよあなた達は」
　ライザは睨み合うフィーリアとサクラを片手で引き離す。もう一方の手には空になった皿やグラスが奇跡のバランスで重ねられている。プロがなせる業だ。
「クリュウくんが泣いちゃうわよ？」
「な、泣きませんよ！」
　クリュウは顔を真っ赤にさせて怒る。そんなクリュウを見て二人は慌てて睨み合うのをやめる。
「ご、ごめんなさい……」
「……ごめん」

「まったく、クリュウくんを巡ってケンカするなんて。それじゃクリュウくんがかわいそうでしょ？」
　ライザはすっかりしゅんとしてしまった二人に優しげに笑みを浮かべると、落ち込む二人の頭をそっと撫でる。
「もう、いい加減子供じゃないんだから。いい事と悪い事の区別はしてよね」
「はい……」
「……ごめん」
　ライザはやっぱり根が素直な二人を微笑んで見詰めると、今度はクリュウを見る。話から外れていたクリュウはもう一度ビールに挑戦して負けていた。
「クリュウくんは、いつ村に帰るの？」
　ライザの問いに、二人もクリュウを見詰める。そんな三人に見詰められたクリュウは小さく笑みを浮かべる。
「明日にでも帰ろうかと思ってます。本当は二、三日こっちにいるつもりでしたが、狩場までの移動日数が意外と掛かっちゃって。村で待ってる幼なじみがたぶんブチギレてるだろうし。そろそろ帰らないと殺されかねないですから」
「へぇ、また寂しくなるわね」
「そ、そんな事ないですよ。それにまた来ます」
「そっか――ところで、その幼なじみって女の子？」
「え？　あ、はい。凶暴さはリオレウスにも負けないですけど」
　ライザは「ふぅん」とうなずくと、何か意味ありげな笑みを二人に向けた。
「そっかそっか。クリュウくんは帰っちゃうのね。じゃあサクラも？」
「……ええ。私はあの村に腰を据えているから」
「そっかぁ。で？　フィーリアはどうするの？」
　そう言ってライザはフィーリアを見る。クリュウとサクラもそんな彼女を見詰める。彼女は一体どうするのか。それはとても気になった。

すると、フィーリアは優しげな笑みを浮かべた。
「私も一度クリュウ様の村に行きます。久しぶりに皆さんのお顔を見たいですし。ご一緒してもよろしいですか？」
「も、もちろんだよ！　やったぁ、またフィーリアと一緒だぁ」
本当に嬉しそうな笑みを浮かべるクリュウ。そんなクリュウにフィーリアも嬉しそうに微笑む一方、サクラはどこか不服そうな顔をする。そんなサクラをからかうようにライザが耳元で何事かをささやくと、頬を引っ張られた。
「痛いなぁ、何すんのよ」
「……」
ライザは頬をさすりながらぷぅと睨むと、お客に呼ばれたので慌ててそのテーブルに走って行った。
一方、クリュウは嬉しそうにフィーリアと話す。だが、そんな二人を見詰めるサクラの瞳はどこか不機嫌そうだ。そんな彼女の気配を察したのか、クリュウは不思議そうにサクラを見る。
「サクラ？　どうしたの？」
「……別に」
いつになく言葉が短い。長い経験から、彼女の口数が極端に減った時は不機嫌な証拠だ。一体何が不機嫌にさせているのか。それはすぐにわかった。
「もしかして、フィーリアと一緒は嫌なの？」
「……別に」
「ねぇ、どうしてフィーリアをそう毛嫌いにするの？　実力はサクラも見たでしょ？　それにとてもいい子だし」
「……別に、関係ない」
その後、一切何を話し掛けてもサクラは何も答えなかった。それ以上何を話し掛けても無駄だというのは経験からわかっていた。
仕方なく、クリュウはフィーリアと話を再開する。
そんな二人を見詰めるサクラの瞳はどこか暗く、どこか寂しげであった。
翌日ドンドルマを出発したクリュウとサクラ、そしてフィーリアの

三人はイージス村に向かった。だがその道中、サクラは一切口を開かず、フィーリアもサクラに睨まれるなどして極端に口数が少なかった。自然と、クリュウも無口になってしまう。
そんな気まずい雰囲気の中、一行はイージス村に着いた。
クリュウの家は元々ハンターだった父の家だった事もあり、部屋数もハンター四人分が用意されていた。さらに素材を保管できる倉庫もある為、現在サクラもクリュウの家に住んでいるのだ。最初こそはエレナに大反対されて彼女が何度も泊り込んで来たが、今はどうにか収まったらしく回数も減っている。まぁ、それでも三日に一度くらいのペースでやって来るのだが。
三人はそんなクリュウの家に荷物を一通り置くと酒場に向かった。酒場ではエレナがいつものように仕事をしていたが、クリュウの姿を見た途端跳躍、すさまじい跳び蹴りを炸裂させた。
「ごふぁッ!?」
吹き飛ばされたクリュウは地面に思いっ切り叩き付けられた。
「このバカクリュウッ！」
「ちょっと待って！　ぎゃあああぁぁぁッ！」
地面に倒れたクリュウに向かってエレナは跳び膝蹴りを炸裂させた。倒れていたクリュウは避ける事もできず直撃。あまりの痛みに悶絶した。
だが、悶絶するクリュウにエレナはさらなる追撃を加える。見事な蹴りが連続してクリュウの体に叩き込まれる。その勢いは見事だ。あまりの迫力に二人は呆然としていたが、慌ててフィーリアが止めに掛かる。
「ちょっとエレナ様！　乱暴は止めてください！」
「このバカ――え？　ふぃ、フィーリア？　何でいるの？」
驚くエレナにフィーリアは事情を説明し、サクラは悶絶するクリュウに駆け寄る。
「……クリュウ、大丈夫？」
「だ、大丈夫だよ……ひどい時はもっと激しいから……」
そう言って苦笑いするクリュウ。その笑みには長年エレナに虐（し

いた）げられて来たが故の諦めと悲しさがあった。サクラも昔はエレナのクリュウに対してのすさまじいバイオレンスな攻撃の数々を見て来たので、彼の苦しみも幾分かはわかる。
「……クリュウ、かわいそう」
「あはは、ありがとう……」
　クリュウはサクラの手を借りて立ち上がる。昔もこうやってエレナにボコボコにされた後、サクラの手を借りた事があったので、どこか懐かしさを覚える。
　一方、クリュウに対し壮絶な攻撃を叩き込んだエレナは久しぶりのフィーリアとの再会にかなりはしゃいでいた。
「久しぶりね！　元気にしてた!?」
「はい。エレナ様は？」
「この通り元気よ。この村の人達って人使いが荒いから毎日が忙しいけどね」
「大変ですね。何か私に手伝える事がありましたら何でも言ってください。ご協力します」
「ありがとう。あぁ、本当にフィーリアはいい子ね。それに比べてあの二人は」
　そう言って軽蔑の眼差しを向けるエレナ。言っておくが、確かにサクラはあまり協力はしないが、クリュウはほぼ毎日のように扱き使われている。感謝される事はあってもあんなひどい目で見られるような事はない。
「ちょっと待ってッ！　人を散々扱き使ってそれはないんじゃないのッ!?」
「あんたは自発的にしようとしないし、手際が悪いじゃない」
　ものすごく散々な言われようだ。激しく落ち込むクリュウの背中を、サクラがそっと叩いた。今のクリュウには、その優しさがとても嬉しかった。
「ありがとう……」
「……安心して。私は知ってる。クリュウががんばってる事を」
　うるうるとした瞳で見詰めるクリュウと、そんな彼に見詰められ小

さく微笑むサクラ。いつの間にか二人の周りには桃色の空気が……
「二人で何してるんですかぁッ！」
「あんた達いい加減にしなさいよッ！」
ブチギレるフィーリアとエレナの声と、その後のクリュウの悲鳴がいつものように今日も晴れ渡ったイージス村の蒼い空高くに響いた。
その夜、いつものようにフィーリアの歓迎とクリュウとサクラ、フィーリアの初めてのチームでのドンドルマ依頼クリア祝いなどの合同宴会が開かれた。
わいわいと大騒ぎする村人とそれに振り回される酒場のエレナ。なんかドンドルマの酒場に似てるなぁと思いながらクリュウはジュースを飲む。村長にはビールを勧められたが、向こうの酒場の一件からビールは遠慮しておいた。
クリュウが座るテーブルにはフィーリアとサクラ、そして村長が腰掛けていた。
「いやぁ、フィーリアちゃんにまた会えるなんて嬉しいなぁ」
村長は嬉しそうにビール片手にニッコリと微笑む。そんな彼にフィーリアも久しぶりの再会に嬉しそうに微笑む。
「村長様もお元気そうで何よりです」
「いやぁ、病気になる暇なんかないからねぇ。もっともっと村を大きくしないと。クリュウくん達はいつもがんばってくれて助かるよ」
「そんな事ないですよ」
「いえ、クリュウ様はやっぱりすごいですよ」
「えへへ、ありがとう」
「……」
何とも和やかな雰囲気の中、サクラはずっと無言である。ちなみに席順はクリュウを間に挟んでサクラとフィーリアが腰掛け、その前に村長が腰掛けている。なるべく二人を変に接触させない為のクリュウの配慮だ。
「あ、サクラこれ食べる？」
「……いい」
「そ、そう？　ならフィーリアはどう？」

「え？　いいんですか？　じゃあもらい――」
「……食べる」
「「え？」」
　キョトンとするクリュウから皿を取ると、サクラは無言で食べ進める。そんな彼女を見て、クリュウは苦笑いした。
「あ、えっと、じゃあごめん。こっちのでいい？」
「え？　あ、はい。いただき――」
「……食べる」
「ちょっといい加減にしてください！」
　フィーリアが激怒するが、サクラは気にした様子もなくクリュウの手から取った料理を食べる。そのすかした態度がまたフィーリアを激怒させる。
「ちょ、ちょっとフィーリア！　そんなに怒らないでよ」
「だってサクラ様がッ！」
「わかった！　じゃあこれ！　これをあげるから！」
「……食べる」
「サクラ！」
「サクラ様ぁッ！」
「あぁ、ちょっと二人とも落ち着いてね？」
　村長は苦笑いしながら二人をなだめる。
　実は今回のパーティー、村に帰って来てからずっとなんかギクシャクしている三人を心配して村長が開いたのだが、どうやらあまり効果はなかったらしい。
　クリュウはとにかく、どうやらサクラとフィーリアの仲がギクシャクしているらしい。何があったかわからないが、そんな二人の間にクリュウが板挟みになっているようだ。
　どうしたもんかと村長は腕を組んで考える。と、
「いやぁ、盛り上がってるやないのぉ」
　突然響いた特徴的な明るい声に振り返ると、そこには満面の笑みを浮かべたアシュアが立っていた。
「あ、アシュアさん。今までどこに？」

「堪忍なぁ。昨日徹夜してもうてさっきまでずっと寝てたんやぁ。せやからあんたらが帰って来たって知ってひっくり返るくらい慌てて飛び出して来たんや」
　ニャハハと笑うアシュア。そのきれいな灰色の髪は何ヶ所かはねているし、着ている白いシャツは灰や鉄粉でかなり汚れている。どうやら本当に慌てて出て来たらしい。彼女らしいと言えば彼女らしいが、女性としてはちょっと問題がある気がする。
「お疲れ様です」
「あはは、ありがとうな。クリュウくんはやっぱり優しいなぁ」
「いえ、そんな事は」
「あ、村長はん隣ええか？」
「もちろんさ！」
　アシュアはニッコリと微笑むと、村長の横に腰掛ける。
「うわぁ、うまそうな料理やなぁ！　これ食べてええんかぁ!?」
「もちろんですよ」
「いただきまぁすッ！」
　アシュアは満面の笑みを浮かべてムシャムシャとおいしそうに料理を食べる。そのすさまじい食いっぷりに四人は圧倒される。
「うん？　どないしたん？」
　スパゲッティを口いっぱいに頬張りながらアシュアが不思議そうに首を傾げる。その姿に、プッと村長が噴いた。
「アシュアちゃん。その顔おかし過ぎだよ」
「笑うなんてひどいやないかぁ！」
　顔を赤くしてプンプンと怒るアシュアに、村長はおかしそうに笑う。そんな二人を見て、クリュウとフィーリアも自然と笑みが浮かんだ。
「あぁッ！　二人も笑うなやぁッ！」
　アシュアは怒るが、スパゲッティーのソースが頬に付いた状態では迫力もないし、むしろ笑えてしまう。
「アシュア様。頬にソースが付いてますよ？」
「嫌やわぁ」

アシュアは慌てて頬のソースをハンカチで拭き取る。そんな彼女を見て、クリュウはまた笑ってしまった。
一方、村長は嬉しそうに微笑んだ。アシュアの登場で幾分かテーブルの雰囲気も明るくなったからだ。
「あはは、これうまいでぇ。クリュウくんも食べるか？」
「え？　あ、はい」
「はいや」
「え？　ちょ――」
驚いて開いた口に向かってアシュアは料理の盛られたスプーンを突っ込んだ。それを見て、フィーリアの瞳が大きく見開き、サクラの眉がピクリと動く。
「あはは、うまいやろ？」
アシュアは笑みを浮かべてクリュウの口からスプーンを引き抜く。だが、クリュウは味なんてわからなかった。いきなり食べさせられるなんて想像していなかったからだ。
モグモグと、まるで機械的に料理をのどの奥に流し込む。そして、やっと自分の今の状況を理解して顔を真っ赤にする。
「あ、いや、その……」
「あはは、顔真っ赤やでぇ？　かわええなぁ」
アシュアはニコニコと笑みを浮かべる。そんな彼女に、クリュウはさらに顔を真っ赤にする。
「こ、これはその……」
「こんのバカクリュウぃッ！」
突如すさまじい怒号と共に飛来したエレナの強烈な跳び蹴りがクリュウに炸裂した。サクラとフィーリアに挟まれたわずかな隙間にいたクリュウを見事に蹴り抜いたエレナは見事としか言いようがない。
一方、そんなすさまじい技術の蹴りを受けたクリュウは後ろに吹き飛ばされてぐったりと床に倒れた。
「く、クリュウ様ぁッ！」
フィーリアが慌てて倒れたクリュウに駆け寄る。一方のサクラは

クリュウを蹴り飛ばしておきながら見事な着地をしたエレナに詰め寄る。
「……エレナ、ひどい」
「私は悪くないもん！　悪いのはヘラヘラしてるバカクリュウの方よ！」
「……理解不能」
エレナの自己中的な発言にサクラは呆れるが、もちろんエレナは自分は悪いとは思ってはいない。なんとも彼女らしい。
一方、エレナに見事蹴り飛ばされたクリュウはフィーリアの肩を借りて立ち上がる。
「大丈夫ですか？」
「ははは、大丈夫だって。これくらい耐えられなきゃ今頃僕は生きてないよ」
そう言って苦笑いするクリュウ。そんな彼を見て相変わらずバイオレンスな日々を過ごしているんだなぁと同情してしまうフィーリア。
一方、サクラはクリュウに暴力を振るったエレナを容赦なく説教する。無表情で冷静に怒るサクラに、エレナはすっかり丸め込まれていた。
その光景を見て、クリュウは昔を思い出して静かに微笑んだ。子供の頃もエレナの暴走をサクラが冷静に注意するというのがよくあったのだ。
「わ、悪かったわよ……」
すっかりサクラの説教に反省したエレナは珍しく謝った。これもまた昔と同じ光景に、クリュウは微笑む。
「ほら、向こうの人が呼んでるよ」
「え？　あ、はぁい今行きまぁす！　ほんとごめんね！　後でジュース一杯タダでいいから！」
そう言ってエレナは慌てて人ごみの中に消えた。こういう宴会の時はエレナはいつも忙しい。村で唯一の酒場は大変だ。
クリュウは気を取り直して席に腰掛ける。それに続いてサクラと

フィーリアも腰掛けた。いつの間にか村長は村の重役達の所へ行っていた。そしてアシュアは……
「うまうま。幸せやわぁ」
　パクパクと料理を食べ進めている。口の周りにソースが付いていてもお構いなし。これにはクリュウも苦笑い。
「アシュアさん、よく食べますね」
「ニャハハ、うまい料理を思う存分食べる！　これが人生最高の幸せやぁ！」
「ははは、太りますよ？」
「失礼やなぁ。うちは毎日毎日ごっつ暑い部屋ん中で燃え盛る炎と真っ赤に輝く鉄と戦ってるんやでぇ？　むしろカロリーが少ないわ」
「あはは、そうですよね。ご苦労様です」
「ニャハハ、ありがとな。クリュウくんもうちに武具は任しときぃな。ドンドルマの武具店に浮気したら許さへんよ？」
「浮気って……まぁ、僕はアシュアさん一筋ですから大丈夫ですよ」
「ニャハハ、そう言ってもらえると嬉しいわぁ」
　嬉しそうに笑うアシュアとそんな彼女を見て嬉しそうに微笑むクリュウ。一方、そんな二人にすっかり忘れられてしまったサクラとフィーリアはというと……
「先程のエレナ様への根回し、ありがとうございました」
「……クリュウの為だから」
「そうですね。クリュウ様、いくら何でもあれはかわいそうですよね」
「……昔から、変わってない」
「そうなんですか？」
「……子供の時も、いつもクリュウはエレナの跳び蹴りを受けてた」
「そ、それはそれで辛いですね」
　アシュアやエレナの乱入ですっかり二人の間のわだかまりはなくなっていた。特にエレナの暴力に対して二人はかなり結束したらしい。エレナの想いとは裏腹に、状況は好転していた。
　仲良く話す二人を見て、クリュウは嬉しそうに微笑む。と、
「ほんで、フィーリアちゃんはまたこの村にどれくらいおるん？」

アシュアの問いに、自然とクリュウとサクラの視線がフィーリアに集中する。
またお別れが来るのだろうか。クリュウは不安になった。
だが、そんなクリュウの気持ちを察したのか、フィーリアは優しく微笑んだ。
「またしばらくこの村にご厄介になるつもりです。またクリュウ様と一緒に狩りがしたいですから」
「ほ、ほんと？」
「はい。もちろんサクラ様とも」
「……ええ」
いつの間にか仲良くなった二人を見て、クリュウは嬉しそうに微笑む。
またフィーリアと一緒に狩りができる。しかも、今度はサクラとも一緒だ。賑やかで楽しい狩りになりそうだ。
「いやぁ、クリュウくん。両手に花とはこういう事だねぇ」
そう言ってニコニコと微笑みながら村長が近寄って来た。
「べ、別にそういう訳じゃ……」
「照れない照れない。いやぁ、それにしてもクリュウくんにサクラちゃん、そしてフィーリアちゃんも村にいてくれるなんて、幸せだなぁ。それで、君達はもちろんチームを組むのだろう？」
「えっと……」
「もちろん組みます」
「……組む」
「じゃ、じゃあ組む方向で」
「――クリュウくん。もう少し男の子としての威厳を持とうよ」
村長の強烈な一撃に、クリュウは苦笑いする。
男としての威厳なんて、この二人の前では無力である事はすでにクリュウは嫌ってくらいわかっていた。
「それじゃあ、隊長（リーダー）は誰になるんだい？」
村長の問いにクリュウは不思議そうに首を傾げる。
ハンターは狩りをする場合個人で行うか、隊（チーム）を組んで行

う二種類がある。そしてチームを組む場合はそのチームの隊長（リーダー）を決めるのが通例になっている。
　ハンターズギルドではハンターをイャンクックも倒せない新米ハンターでもリオレウスを倒せる熟練のハンターでも上下なく一応同等に扱っている。ハンターランクはあくまで酒場での料理や無謀な挑戦を制限する為に受けられる依頼を区別するのに使うので、ランクが低いハンターが高いハンターに強制されるという事はない。しかし実際はランクの低いハンターは高いハンターには従うのが通例になっている。その為、別にリーダーという指揮官的存在はいらなくてもいいのだが、纏め役がいる方が狩りでも効率がいいので、チームを組むハンター達は皆リーダーを決めるのだ。
　ちなみにギルドではチームは狩りの間こそは拘束力を持つが、依頼が済めばチームは一旦解散状態としている。これは狩りの後で仲間割れなどの無益な争いを避けさせる為の配慮だ。
　村長の問いに、フィーリアとサクラはもちろんと言わんばかりにクリュウを見た。
「それはもちろんクリュウ様ですね」
「……クリュウがリーダー」
「えぇッ!?　ちょっと待ってッ！　それはないでしょッ!?」
　驚き慌てるクリュウに、フィーリアはいえいえと首を横に振る。
「クリュウ様こそがリーダーに相応しいです。サクラ様もそう思いますよね？」
「……えぇ」
「無理無理無理ッ！　そんなの無理だって！」
「大丈夫です。クリュウ様ならきっと」
「……クリュウなら、大丈夫」
「その自信は一体どこから出て来るのッ!?」
　クリュウは必死になってリーダーはフィーリアかサクラの方がいいと訴えるが、二人ともクリュウと指名し続けた。民主主義とは時にどんな武器よりも強力なものになる。
　こりやきっとクリュウがリーダーになるなぁと思いながら、村長は

ニコニコと微笑みながら人ごみの中に消えた。
盛り上がる村人の声の中、クリュウの泣きながらの了承の声が響いたのは、それからしばらくもしない頃であった。
数日後、三人はシルヴァ密林に来ていた。すでにフィーリアやサクラはもちろん、クリュウもセレス密林では役不足になっていたのだ。
今回は増え過ぎたイーオスの討伐である。その為、今回は大タル爆弾もシビレ罠もない為に荷車はなしだ。
シルキーに手を振って三人は密林の中に入る。
この三人でのチームでは二度目の狩りだが、今回は前回とは違いリーダーが存在する。それはもちろん……
「じゃあ行きましょうかリーダー様」
「……リーダー、指示を」
「リーダー言うなぁッ！」
半ば強引にリーダーになったクリュウはため息すると、前途多難だなぁと思いながらも歩く。
密林は今日も日の光を遮って薄暗く、湿度が高かった。防具の中に着ているダブレットに汗が染み込む。
不気味なほど静かな木々の中を進んでいくと、前方に真っ赤な何か――イーオスが群がっていた。なるほど、こんな入り口でも出て来るなんて、結構な数がいるらしい。
クリュウはオデッセイを抜き放つ。
「サクラは僕と連携して挟撃。フィーリアは後方支援を」
「はい」
「……わかった」
何だかんだ言っても、結局いつも指示を出しているのは彼だった。自覚がないだけで、十分リーダーとしての素質はあったのだ。
「行くよッ！」
クリュウとサクラがイーオスに向かって突進する。そしてその後ろでは弾を装填したフィーリアが銃口をイーオスに向ける。
――刹那、密林に銃声とイーオスの悲鳴が静かに木霊した……

第４５話　ハンターの節約術

その日は珍しくエレナと共にドンドルマに訪れたクリュウ達。今日は狩りに来たのではなく道具の補充に来たのだが、その際にエレナも酒場で使う食材や食器などの必需品を補充しについて来たのだ。

「相変わらずすごい品揃えね」

そう言って少し興奮気味に並ぶ品を見回すエレナ。

ここはドンドルマの中心部に位置する自由市場。右も左も店だらけでそれを埋め尽くす大勢の人々。ここは大都市ドンドルマでも一番賑やかな場所だ。

一般市民の他にちらほらとハンターの姿が見えるのは、クリュウ達と同じく道具の買出しに来たのだろう。ギルドが経営する各所にあるギルドショップよりも安く手に入ったり、通常は売っていない貴重な道具や素材が手に入るからだ。

「ふぅん、これは安くていいわね」

エレナは早速食材が並ぶ店に走ると食材の吟味を始める。彼女の前にはたくさんの新鮮な食材が並べられていた。そんな彼女を見て、クリュウは小さく微笑む。

「そこが目的のお店？」

「はぁ？　バカじゃないの？　ここはお肉が安いの。この通りの向こうにある店では安い野菜。別の場所で食器、また別の場所でお酒を買うの。しかもお肉でもアプトノスの肉はあっちの店の方が安くて品質もいいの。目的はこの通りそのものよ」

「え？　そ、そうなの？」

「お店によって値段は変動しますからね。皆さんより安いものを目指してこの通りを歩き回ってるんですよ」

フィーリアはそう言うと目の前に広がるそのすさまじい人ごみに苦笑いする。

クリュウ自身はドンドルマでアイテムを揃える時はギルドショップを使っていたので知らないが、フィーリアとサクラはこの通りでいつも道具を買っているらしい。だからこそ、相変わらずなこの人ごみ

に苦笑いしているのだ。
「……人に呑まれたら迷子決定。みんな固まって動くように」
サクラの言葉にクリュウは緊張した様子でうなずく。こんな場所ではぐれたりでもしたら一巻の終わりだ。
「あ、私はここにはいつも来てるから大丈夫よ」
そう言ってエレナは再び食材の吟味を始めた。どうやら本当に大丈夫そうだ。
「では、私達だけで行きましょう。クリュウ様には私のお得意先に案内しますね」
そう言ってフィーリアはクリュウの手を掴んだ。
「さぁ、行きましょう」
「え？　あ、うん」
クリュウは少し頬を赤らめながら彼女に手を引かれて歩く。とその時、反対の手をサクラに掴まれた。
「……クリュウは、私の知ってる店に行く」
「え？　あ、別にいいけど」
「だ、ダメですよ！　私が最初にお声を掛けたんです！」
「……いい店知ってる」
「私だって知ってます！」
「……私の方がいい店」
「私の方が絶対いいお店ですッ！」
「ちょ、ちょっと二人とも！」
睨むフィーリアと無表情で返すサクラ。二人とも確かこの前仲直りしたはずなのだが、あれ以降もなぜかこうして対立する事が多い。さすがに狩りの時はないが、食事中や雑談中、日常生活では一日最低一回くらいはこうして言い争うのだ。ケンカするほど仲がいいということわざを、村でチームを結成してから二週間ほど経った今もずっとクリュウは信じ続けている。
「ふ、二人のおすすめの場所に行くから！　まずはフィーリア！　これでいいでしょッ!?」
「く、クリュウ様がそう仰るなら」

「……わかった」
こうしていつもクリュウが仲裁に入ると何とかなるが、そのたびに苦労しているのだ。
クリュウ達はエレナと別れるとすさまじい人ごみの中を進む。前をフィーリアが誘導し、人の流れに流されそうなクリュウをサクラがその針路を修正する。見事な隊列だ。
ちょっと目を離したらはぐれてしまうかもしれないという不安の中、人の流れに従ったり逆らったりと歩き続けて数分後、ようやく目的の場所に着いた。それは大通りから少し離れた裏路地にある店。なのにも関わらず十数人のハンターが店に並ぶ商品を眺めていた。
「ここが私のおすすめのお店です！」
自信満々、意気揚々と言うフィーリアにクリュウは「すごいねぇ」と笑顔を浮かべる。が、サクラはじっと店を見詰めたままだ。
「ど、どうされたんですか？」
フィーリアが問うと、サクラはそっと彼女に視線を向ける。
「……ここ」
「え？」
「……私がクリュウに教えようとした店」
「そ、そうなんですか!?」
驚くフィーリアに対し、サクラは凛とした瞳をスッと細める。この表情、喜怒哀楽が少ないサクラが見せる機嫌が悪くなった時の表情だ。
「……私の見せ場がなくなった」
「そ、そんな事ないよ！　だ、だって二人がすすめたって事は確実に信用できるじゃん！　僕こんな穴場を教えてもらって嬉しいよ！」
クリュウが慌ててフォローに入れるが、サクラは暗い瞳を向け続ける。どうやらすっかり機嫌を損ねてしまったらしい。
「ほ、ほら！　早く中を見ようよ！　こ、今度はサクラが案内してよ！」
そう言うと、クリュウはサクラの手を握って歩き出す。すると、サクラは「……任せて」となぜか急に機嫌が良くなった。

一方、二人に置いて行かれたフィーリア。その顔は見る見るうちに悲しげに染まる。
「そ、そんなのずるいですぅッ！」
フィーリアは慌ててクリュウとサクラを追って店の中に入った。
店の中には様々な道具が置かれていた。爆弾や罠はもちろん、回復薬やホットドリンクにクーラードリンク、さらにはキノコや木の実、魚などの調合素材も大量にある。さすがは二人がすすめただけあって物は充実している。人もそれなりにいて賑わっている。
「うわぁ、安いし数もあるね」
「……ここは上級ハンターなら誰でも知ってる店だから」
「え？　じゃあ僕はいいのかな？」
「……別に低級ハンターが来るなって規則はないから大丈夫」
「今、思いっ切り僕を低級って言ったよね？　本当だから言い返せないけど」
クリュウは苦笑いしながら棚に並ぶ商品を吟味する。素材コーナーに入ると、そこには釣りミミズの入ったケースやにが虫やカクバッタなどの虫が入った虫かごが大量に置かれていた。そんな中クリュウが見つけたのは檻（おり）の中で光り輝く虫――光蟲がたくさん入っている虫かごだった。
「うわぁ、光蟲がいっぱいだ」
光蟲はクリュウには必需品である閃光玉の素材になるのでかなり嬉しい。狩場で採取はできるのだが、光蟲はあまり数が多くない為なかなか捕まえられない。ちょうど閃光玉も枯渇していたのでちょうどいい。
「……《残り寿命が短い光蟲　半額セール》。ちょうどいい。向こうの素材玉も二割引だった」
「本当？　そりゃあいい。最近ネンチャク草が採れなくて素材玉がなくなってたから、村へ帰る途中に調合すれば大丈夫だよね？」
「……ええ」
サクラの返事を聞くと、クリュウは嬉しそうに光蟲の虫かごを一つ取った。この中には光蟲が十匹入っている。これが一人のハンター

が持ち運びできる限界だ。密猟などを規制する為にギルドが各アイテムを一度に持ち運びできる数を決めているので、光蟲も十匹しか持てない。ちなみに道具一覧というギルドが配布している表には各アイテムのレア度というものは決まっていて、レベル４以上のアイテムはハンター同士の交換を禁じている。これも密猟を防ぐ為らしいが、結構守られていないのが現状だ。ギルドもある程度は黙認しているらしい。

サクラも無言で虫かごを一つ取る。と、

「クリュウ様！　爆弾が半額セールやってますよ！」

そう言って笑顔で駆け寄って来たフィーリア。クリュウはその言葉に目を輝かせる。

「は、半額ッ!?　本当なのッ!?」

「はいッ！　ギルドショップの余剰品が流れて来たそうで、それが半額なんです！」

爆弾もクリュウはよく使う道具の一つだ。別に爆弾が好きというのではなく、クリュウは自身の体力なども考えた短期決戦型のハンター。だが武器は攻撃力の低い片手剣なので、威力の高い爆弾で補っているのだが、爆弾は値段が高い。報酬と支出のバランスが合わない事もしばしばだ。最近は大タルと火薬草、ニトロダケで調合した爆薬。小タルと火薬草を調合して大タル爆弾と小タル爆弾を作る事もあるが、どちらの素材にも必要な火薬草は砂漠の奥深くか火山にしか生えておらず、あまり採取できないので結局買う事が多い。そんな爆弾が半額なんて、クリュウは歓喜する。

「すぐに買おう！　二人も協力して！」

「もちろんです！」

「……わかった」

クリュウ達はすぐに爆弾のコーナーに向かう。すると、本当に半額であった。これにはクリュウも笑みが隠せない。

「三人なら九個か」

「カクサンデメキンも売ってますので、大タル爆弾Ｇにすれば爆弾の節約もできますしね」

「……トラップツールが一割引」
クリュウ達はとにかく安くて消費率の高い道具を次々に購入した。その時、クリュウは終始笑顔であった。こんなに嬉しそうな彼の笑みを見られて、フィーリアとサクラはどちらも来て良かったと心から思った。
買い物を終えると、かなりの出費になっていたが、ギルドショップなどで買えばもっと出費していたと思うと今日は大戦果だ。
店の貸し出し用の荷車に買い込んだ大量の荷物を載せ、三人はエレナを迎いに行った。すると、エレナもかなりの物を買い込んで笑顔だった。彼女も荷車を引いていたが、その上には大量の食材が載っていた。これでしばらくは食材には困らないだろう。皆、買い溜めできる時にするのは同じらしい。
こうして、お互いに大量の荷物を買い込んでイージス村に帰る事になった。
帰りの航路の間、お互いに自分が買ったものを見せ合ったりした。エレナが選んだ食材はクリュウ達素人が見ても全て見事だった。ちなみに彼女が原価ギリギリまで値段交渉し、時には原価割れさせて商人を何人も泣かせた事は秘密だ。
クリュウ達も自信満々に自らの成果を見せたが、一般人であるエレナにはハンターの道具は理解不能なものばかりだった。だが、そんな彼女でも理解できたのは九個の大タル爆弾と二〇個の小タル爆弾であった。これだけの量があれば船なんか軽く吹っ飛ぶからだ。
エレナは危ないから捨てなさいと何度も怒鳴ったが、せっかく買ったものを捨てる訳もなく、しかもどれも信管を抜いているので爆発する事はない。そう何度説明しても、エレナは終始怖がっていた。
村に着いた途端溜まりに溜まっていたストレスが解放され、エレナが強烈な飛び蹴りを放ってクリュウを悶絶させたのは誰もが予想できた事だった。
七転八倒するクリュウにフィーリアは大慌てで助け出し、サクラはムッとエレナを睨み、エレナは悶絶するクリュウとフィーリアの桃色の空気にブチギレ、踵落としを炸裂させた。

クリュウのすさまじい悲鳴が、今日もまたのどかなイージス村に木霊したのだった。

第４６話　新たな戦いに向けて

クリュウ、フィーリア、サクラの三人でチームを組んでから一ヶ月。三人の連携はなかなかのものになっていた。

基本的にはクリュウを中心としたチームで、クリュウとタッグで戦うサクラ。そしてそんな二人（主にクリュウ）を援護するフィーリア。それぞれのクリュウとの連携が組み合わさったベストな戦法を使っていた。

さらに言えば、荷車なんかを運ぶ時は三人もいれば安心である。必然的に援護役のフィーリアが荷車の担当となり、前方をサクラ、後方をクリュウが護衛する形となる。

すでにこの一ヶ月で三人はフルフルとバサルモスをそれぞれ一頭ずつ狩猟している。

サクラと二人では苦戦したフルフルもフィーリアの援護があれば難なく片付き、バサルモスも基本動作が少ないので二度目という事もあってあまり苦労せずに倒せた。

フルフルは危険だったので狩ったのだが、バサルモスは目的があって狩った。その理由は……

その日、クリュウは嬉しそうにアシュアの元に向かった。そんな彼に続くフィーリアとサクラもどこか嬉しそうだ。三人はそれぞれ防具ではなく私服を着ている。クリュウは茶色いダウンベストにシャツとズボン、フィーリアは黄緑色のワンピース、サクラは白いシャツに青いリボンを胸にし青色のスカートという姿だ。

「楽しみですねクリュウ様」

「うん。この日をどれだけ待ち望んでいた事か」

フィーリアの問いクリュウは嬉しそうに笑みを浮かべる。昨日からずっとこの調子なのだ。彼の笑みは周りを幸せにするので自然と自分にも笑みが浮かぶ。

「この為に集めていたマカライト鉱石や砥石を全部注ぎ込んだからね。お財布も寂しいよ」

「またお金や素材を調達しないといけませんね」

「そうだね。まぁ、その時はもちろんあれを使わないとね」
そう言ってクリュウは嬉しそうにスキップする。本当に嬉しいのだ。そんな彼を見詰め、フィーリアは笑みを浮かべる。ふと、横を歩くサクラを見ると、相変わらず何を考えているかわからない無表情だ。
この一ヶ月、確かにチームの連携は良くなった。だが、サクラは基本的にクリュウとしか話さない。もちろんエレナや村長などとも話すが、狩りをする仲なので必然的にクリュウが一番多くなるのだが、いまだに自分とはあまり話そうとしない。
嫌われているのかいつも不安を感じるが、確かめる術がないままこうして今日も共に会話なく行動している。
なんとかできないかと考えていると、目的地であるアシュアの家に着いた。
クリュウは意気揚々とドアを叩く。
「アシュアさん！　僕です！」
元気良く言うクリュウだったが、返事はなかった。不思議に思って再びドアを叩こうと拳を構える。
「ふぁ～い……」
そんな気の抜けた声と共にドアが開くと、中からアシュアが現れた。
今まで寝ていたのだろうか。アシュアの髪は寝グセがすごくて色んな方向に跳ね回っているし、いつもは元気な瞳もとろんとしている。口の端から垂れるよだれはあまり見ない事にしよう。
それよりも一番厄介なのは服装だ。年頃の女性だというのに古く汚れた作業着。まぁこれは職業柄仕方がないとしても、前を留めておらず、寝相で少しズレた下着が丸見えである。
真正面に立つクリュウは、顔を真っ赤にする。
「ふぉや？　くりゅうくんやないのぉ、おはようなぁ。今日もかわえぇなぁ」
そう言って寝ぼけているアシュアはいきなりクリュウに抱き付いてきた。

「あ、アシュアさん!?」
「ふやぁ、くりゅうくんは抱き心地が気持ちええなぁ」
そう言って寝ぼけるアシュアは大人だからこその豊満な胸を慌てるクリュウの顔面に押し付ける。柔らかくてちょっぴりと漂う汗の匂いに、クリュウは目を回す。と、
「あ、アシュア様！　クリュウ様が大変です！」
フィーリアが慌ててクリュウからアシュアを引き離す。解放されたクリュウは顔を真っ赤にしてフラフラとしている。
「び、びっくりしたぁ……」
「だ、大丈夫ですか？」
フィーリアが心配そうに覗き込む。と、先程の事があり自然と視線は胸に向かい……
「ぼ、僕は何も見てないよ！」
「はい？」
そんな二人を一瞥し、サクラはまだ寝ぼけているアシュアに近づくと、その頬を無言で思いっ切り引っ張った。
「いたたたたッ！　ちょっと何するんやぁッ！」
アシュアはサクラの手を引っ叩くと傷む頬を押さえる。瞳もしっかりとしており、どうやら目が覚めたらしい。
「おや？　おぉ、みんなおはよう。朝は気持ちええなぁ」
どうやらさっきの記憶はないらしい。クリュウはなんか良かったようなそうでもないような複雑な気持ちになった。
「あ、あのアシュアさん。あれはできてますか？」
仕切り直して問うと、アシュアはニッと笑みを浮かべて先程クリュウを襲った胸を張る。
「当たり前や。うちを誰やと思ってるんや？」
「そ、そうですか。良かったです」
ちょっと先程の事もあって直視できずに視線を逸らすクリュウ。すると、そんなクリュウにアシュアが不思議そうに首を傾げる。
「うん？　どうしたんや？」
「アシュア様！　胸です胸！」

フィーリアが慌てて指摘すると、アシュアはようやく自分のだらしない格好に気づいた。
「嫌やぁッ！　もうクリュウくんのエッチぃッ！」
そう言いながらもどこか嬉しそうなアシュア。きちんと胸元を閉め、ようやくクリュウは安堵する。
「とにかく、後はクリュウくんに合うかどうかやで。ちょっと来てぇな」
そう言ってアシュアは家の中に入る。三人もアシュアの指示通りに彼女の後を追って家の中に入る。工房の方からは相変わらず暑い風が来るが、意外にもリビングなんかは窓も空いていてとても涼しい風が流れている。ちょっと問題があるとすれば床や椅子に色々なものが散っている事だろうか。
「あぁ、その辺のもの勝手にどかして座っててぇな」
そう言ってアシュアは別の部屋に消えた。
「勝手にどかして座っててと言われても……」
クリュウはどうすればいいか困って立ち往生してしまう。工具や本、書類などは確かにどかすという気は起きるのだが、椅子に掛けられたブラジャーとかパンツとかまではちょっと……
恥ずかしいのか、ほんのりと頬を赤らめるクリュウ。すると、フィーリアがそんなクリュウの気持ちを察したのか、慌てて散らかってる部屋を片付け始めた。
クリュウは一瞬、女の人の部屋ってこうなのかな？　という悲しい現実を突きつけられたが、すぐにフィーリアとサクラの部屋はきれいだった事を思い出して安堵した。
現在クリュウはフィーリアとサクラと共に自宅に住んでいる。村には新たな家を造る余裕はなく、今はとりあえず三人で使っているのだ。ちなみに夕食の時はクリュウの家でエレナを含めて四人で食事をしている。必然的にエレナが料理を作る。もちろん三人も料理は人並みにはできるが、プロであるエレナの料理の方がおいしいからこういう状態になっているのだ。
フィーリアが猛烈な勢いで掃除をする中、サクラは無言で床に落ち

ていたブラジャーを取る。自分やフィーリアよりずっと大きなブラジャーだ――サクラは無言でそれをゴミ箱に捨てた。
「ちょっと何してるの!?」
一部始終を見ていたクリュウは慌ててゴミ箱の中に手を突っ込む。
「勝手に捨てちゃダメだよ！　大事なものかもしれな――」
どうやらクリュウ、サクラが捨てたものまでは見ていなかったらしい。がっちりと掴んだそれは、男の子は決して使う事のない女性専用の下着。
「のわああああぁぁぁッ！」
顔を真っ赤にして慌てて投擲（とうてき）。放たれたブラジャーはフィーリアの後頭部に炸裂した。
「うわぁッ!?　な、何ですか一体!?　って、これはブラジャー……うぅ、大きいなぁ……」
フィーリアはなぜかブラジャーをまじまじを見詰めている。
一方のクリュウはぜぇぜぇと荒い息をしていた。
「……大丈夫？」
サクラが顔を覗き込むが、クリュウは「大丈夫だよ」と笑って誤魔化す。どうやらここはクリュウにとっては狩場より危険な場所らしい。
「何騒いでるんや？　あ、別に片付けんでもええのに。おおきになぁ」
アシュアはそう言って笑みを浮かべるとおぼんに載ったお茶をテーブルに置く。
「これでも飲んでゆっくりしてぇな。ほんじゃ、うちはあれ取って来るから、ちょいと待っててぇな」
そう言ってアシュアは再び消えた。クリュウ達はとりあえずきれいになった椅子に腰掛けると、アシュアが持って来てくれたお茶を飲む。
「あ、おいしいですね」
フィーリアが嬉しそうにお茶を飲む。確かになかなかの味だった。使っている茶葉が違うのだろうか、少しまろやかだ。
しばらくそうしてお茶を飲んでいると、「すまんすまん。待たせて

もうたなぁ」と言ってアシュアが戻って来た。白いシーツが掛かった自分の身長と同じくらいのその何かを、クリュウに誇らしげに見せる。
「さぁクリュウくん。このシーツを外して見てぇな」
「はい」
クリュウは嬉しそうに立ち上がると、アシュアが持って来たものに近づく。そんな彼を三人がじっと見詰める。
クリュウは一度深呼吸をすると、シーツを掴み、思いっ切り引っ張った。
シーツが外れると、そこには灰色の、岩の鎧があった。正確にはただの岩ではなく岩竜バサルモスの甲殻である。大きく滑らかな肩当が一番の特徴。全身はまるで岩の鎧としか言いようがない防具だ。所々に練り込まれたマカライト鉱石がキラキラと輝く。そして、今回は今までにはない頭装備もある。さすがにそろそろ頭を着けないと危険なので、今回は頭から足まで全て防具で包む形となる。
「うわぁ、かっこいい！」
クリュウはそのかっこ良さに心奪われた。今までのクックは防御力を優先して装備していたが、かっこ良さならランポスシリーズが勝っていた。しかしバサルシリーズは違う。防御力もありそしてかっこいい。まさにクリュウの理想郷であった。
「えぇやろ。早速着けてみてぇな」
そう言って微笑むアシュアに力強くうなずくと、バサルシリーズを着てみる。まず最初に気づくのは一つ一つの防具が今までよりも重い。動きにくいというほどではないが、今までよりずっしりとしている。
頭以外を装備するとかなりかっこいい。鏡を見ながら自分の姿を見て嬉しくなる。だが、一つ難があるとすれば、頭が丸出しだとちょっとかっこ良さは半減する。それは全体的に体格以上に大きいバサルシリーズを着ると頭が小さく見えるからだ。この解決策として、クリュウは残った冑（かぶと）を手に取る。顔を守る為に鋼鉄製のフィルターも付いている。そして後頭部からは真っ赤な何かの羽

が一枚伸びていてそれもまたかっこいい。
クリュウは一度息を吹き出すと、初めての頭装備――バサルヘルムを被る。
改めて鏡を見ると、見事に身体との大きさに合っており、かっこ良さは一気に飛躍した。
フィルターを下ろすと、フィルターの穴から外が見える。意外と視界はちゃんと確保できている。
「えへへ、似合うかな？」
そう言って振り返ると、なぜか三人が固まっていた。
「あ、あれ？　似合わない、のかな？」
急に不安になるクリュウに、一番最初に元に戻ったフィーリアが慌てて否定する。
「ち、違います！　と、とてもお似合いだからつい見とれてしまって……」
そう言って照れたように頬を赤らめるフィーリア。クリュウはそんな彼女の言葉に嬉しそうに微笑む。
「えへへ、ありがとう」
「ただ、ちょっとクリュウ様のお顔が見られないのが残念ですね」
「そっかな？　そんな事ないと思うけど」
そう言ってクリュウはその場で一回転してみる。後頭部から伸びる赤い羽根が風にフワフワと揺れる。
どうやらクリュウはすごく気に入ったらしい。フィーリアもすっかり凛々しくなったクリュウをうっとりと見詰めているし、サクラも表情こそ無表情だが、頬は赤く口元には小さな笑みがある。きっと彼女も似合っていると思っているのだろう。
一方のアシュアは少し苦笑い気味だ。
確かに似合っているのだが、基本的にちょっと小柄なクリュウには少し大きく見えた。でもそれもいつかきっと似合うようになると思うと、自然と笑みが浮かぶ。
「気に入った？」
「はいッ！　とっても！」

嬉しそうに笑みを浮かべるクリュウを見て、アシュアも嬉しそうに微笑む。やっぱり誰かに喜んでもらえるのは嬉しい。そんな彼の笑みを見ていると、安心したのかどっと疲れが押し寄せてきた。
「ふわぁ、徹夜したからうちもう眠いわ」
「あ、すみません。じゃあ僕達も出て行きますね」
そう言ってクリュウはバサルシリーズを着たまま外へ出る。そんな彼に続いてフィーリアとサクラも出ると、アシュアはあくびしながら見送ってくれた。
「本当にありがとうございました！」
「もうええよ。クリュウくんに喜んでもらえてうちも嬉しかったで。ほんじゃぁな。ふわぁ、おやすみなぁ」
そう言ってアシュアは微笑むと、あくびをしながら家の中に入った。
クリュウはペコリと頭を垂れると、嬉しそうに微笑む。
「えへへ、ちょっと試しに行こうかな」
「そうですね。慣れておいた方がいいですからね。私もお供します」
「……私も」
「じゃあ三人で行こうか。何がいいかな」
「あ、コンガの群れの討伐依頼がありましたよ？」
「却下。新品の防具をいきなり屁やフンでは汚したくない」
「そ、そうですね」
「……なら、ドスランポスがいいと思う」
「そうだね。じゃあそれにしよう」
そう言ってクリュウは待ち切れなくなったのか、駆け足で装備を整える為に家に走る。そんな彼を満面の笑みを浮かべるフィーリアと、小さな笑みを浮かべるサクラが追いかける。
クリュウははやる気持ちを抑えて家で必要最低限のアイテムとオデッセイを持ち出し、酒場に向かう。
「え？　クリュウ？」
最初見た時エレナは誰だかわからなかったのか一瞬怖がったが、すぐにクリュウとわかっていつもの強気な態度になる。

「へぇ、それがあんたが言ってた新しい防具？」
「うん！　似合うでしょ？」
「はぁ？　別に」
「そ、そんなぁッ！」
「う、うそようそ！　ちゃんと似合ってるから泣かないでよッ！」
二人がそんな相変わらずなやり取りをしていると、同じく装備を整えた二人がやって来て依頼を受注する。
「じゃあ行こうか！」
クリュウは嬉しそうに微笑むと、村の出口に向かって走り出す。そんな彼の背中を見詰めて二人は静かに微笑むと、その背中を追った。
小さくなっていく幼なじみの背中を見詰め、エレナは「がんばりなさいよ」と小さくつぶやいてそれを見送った。

第４７話　守るべき日々

悠久の時を刻むように砂の上に風が模様を描き、そして消え、また別の模様が刻まれる。その繰り返しが永遠に続く灼熱の地――レディーナ砂漠。

そんな今日もまた永遠の時が刻まれる砂漠で、新たな戦いが幕を開けた。

「いたッ！」

バサルシリーズに身を包んだクリュウはそう叫ぶと砂を蹴って走り出した。ちゃんと頭部まで装備し、完全防備だ。

クリュウが駆ける先には砂の海を威風堂々と翔ける黒い巨大なヒレがあった。ガレオスの親玉――ドスガレオスだ。姿形はガレオスをふたまわり以上大きくした巨体にガレオスよりずっと硬く黒い鱗に包んだモンスター。大きなものはイャンクックをも超え、ドス系では最も手ごわい相手だ。

人が走るよりずっと速いガレオスよりもさらに速いドスガレオスの砂中の泳ぎ。ガレオスと同じく決まった回遊ルートを泳ぐので、クリュウはこの砂地でずっと待ち伏せをしていたのだ。そして、ついに現れた。

クリュウは腰の道具袋（ポーチ）に手を突っ込んで音爆弾を掴む。聴覚が敏感なのはガレオスもドスガレオスも同じ事だ。

すさまじい勢いで迫って来るドスガレオスに向かって、クリュウは音爆弾を構える。と、

バンッ！　ババンッ！

銃声と共に突如ドスガレオスのヒレに風穴が開き、ドスガレオスが悲鳴を上げて砂中から飛び上がって来た。突然の事にクリュウは慌てて後退する。

ドスガレオスは砂の上で激しく暴れるとその巨体を二本足で立ち、目の前にいるクリュウを敵と判断して襲い掛かって来た。

「ガアアアアアッ！」

ドスガレオスはクリュウに向かって砂ブレスを吐いてきた。だが、

クリュウはそれを冷静に見極めて避ける。ドスガレオスはガレオスより全ての能力が高いが、行動パターンは基本的には同じである。ガレオスを狩り慣れているクリュウならばこれくらい造作なかった。
「クリュウ様！」
振り返らなくてもわかる。フィーリアだ。
「もうッ！　砂中から引きずり出すのは私の役目だって言っておきましたのに！」
「ごめん、忘れてた。でもまぁ、無事に引きずり出せたし問題ないでしょ」
「もうッ！」
フィーリアはそう怒りながらもすぐにヴァリキリーブレイズを構える。クリュウもオデッセイを構え、ドスガレオスを見詰める。黒い巨体に退化した濁った瞳。正面から見詰めるとかなりの迫力だ。そして何よりすさまじい生命力を感じる。その圧倒的なまでに強い力に、クリュウは一瞬呑まれそうになるが、首を横に振って邪念を捨てる。
今自分がすべき事はただ一つ。目の前にいるドスガレオスを倒す事だ。
目線でフィーリアに合図を送ると、フィーリアは一度うなずき通常弾ＬＶ２を装填し、すぐさま連続して撃ち放った。
「ガアアアアアッ!?」
ドスガレオスは突然のすさまじい集中砲火に悲鳴を上げて仰け反る。そこへすかさずクリュウが懐に潜って斬り掛かる。
「うりゃあッ！」
太い木のような脚に剣を叩き込むと、肉が裂けて血が噴き出す。連続して剣を叩き込まれ、ドスガレオスは悲鳴を上げてその場で暴れる。盾で蹴りを受け、舌打ちして一度距離を取る。そこへすかさずフィーリアの銃撃が襲う。
「ガアアアアアッ！」
すさまじい銃撃の嵐にドスガレオスはフィーリアに向かって砂ブレスを吐く。だが、フィーリアはそれをあっさりと避け、その間に再

装填した通常弾ＬＶ２を連続して撃ち込む。
悲鳴を上げて仰け反るドスガレオスに、クリュウは後ろから斬り掛かる。が、
「クリュウ様！」
その声にとっさに右に跳んだ。どうしてかはわからない。とにかく右へ跳んだ。それは完全な勘だったが、その行動が彼の命運を分けた。
クリュウがとにかく右へと跳んだ刹那、そこへガレオスが突っ込んで来た。危なかった。もし少しでも考えるのに躊躇していたりでもしたら、きっと今頃はガレオスの鋭い牙と巨体に潰されていただろう。
うかつだった。ボスであるドスガレオスが配下のガレオスを従えているよくある事だったが、すっかり忘れていた。
クリュウはフィーリアに感謝する。と、
「ガアアアアアッ！」
背後からの不気味な声と共に背中にすさまじい衝撃が走り、クリュウは吹き飛ばされた。フィーリアの悲鳴が聞こえた後、クリュウは砂の上に叩き付けられる。後ろに突如砂中からガレオスが姿を現し、砂ブレスを吐いて来たのだ。
「くそぉッ！」
クリュウは立ち上がったが、そこへ別のガレオスが鋭い鳴き声と共に滑空して来た。盾で防ぐが、人間の何倍も大きく重い攻撃に、クリュウは簡単に吹き飛ばされる。
何とか起き上がって周りを確認すると、ドスガレオスのまわりを回遊する三匹のガレオスがいた。そのうちに一匹のヒレが自分に向かって突進して来る。鋭利なガレオスのヒレにでも当たってしまったら、大怪我は免れない。最悪の場合は死という現実が待っているのだ。
クリュウは砂中を自在に翔けるガレオスのヒレ攻撃をギリギリで回避し、剣をそのヒレに叩き込むが、ヒレは硬く逆にクリュウの腕に痛みが走る。

「くぅッ！」
クリュウは慌てて追おうとしたが、振り返った時にはすでにガレオスは遠くに行ってしまっている。なんていう速さだろうか。
だが、そんなクリュウに別のガレオスが砂中から姿を現して砂ブレスを吐いて来た。慌てて盾で防ぐ。と、今度は横からドスガレオスの砂ブレスが飛んで来る。これは間一髪で何とかかわした。
神出鬼没なガレオスとドスガレオスの攻撃に、クリュウは援護役のフィーリアとすっかり距離が開いてしまっていた。
フィーリアはガレオスに襲われるクリュウを一瞥し、散弾ＬＶ１をドスガレオスに叩き込む。せめて、ドスガレオスだけはこっちに留めておきたかった。
ドスガレオスはちょこまか動き回って攻撃して来るフィーリアに激怒し、砂ブレスを吐く。だが、もちろんその程度の攻撃ではフィーリアには当たらない。すると、ドスガレオスは再び砂の中に潜った。
フィーリアは慌ててさらに動き回る。生物最大の死角とも言うべき足元から襲われない為だ。すると、少し離れた所に黒い巨大なヒレが砂から飛び出たかと思うと、そのまま突進して来た。圧倒的な速さでフィーリアを追い掛ける。だが、フィーリアは冷静に道具袋（ポーチ）から音爆弾を取り出すと後ろに放る。刹那、音爆弾が炸裂して心地良い音が炸裂。聴覚に敏感なドスガレオスはたまらず砂の上に飛び出してのた打ち回る。
フィーリアは急停止して拡散弾ＬＶ１を装填し、もがき苦しむドスガレオスに撃ち込む。弾はドスガレオスに着弾寸前で爆散し、その黒い体を火で包み込んだ。
「ガアアアアアッ!?」
悲鳴を上げるドスガレオス。フィーリアはその間にクリュウに走る。
クリュウは砂の中から飛び出て来たガレオスに剣を叩き込む。首を斬り裂かれ、その一撃でガレオスは沈黙した。そこへ仲間の仇と背後からガレオスが砂ブレスを吐こうと飛び出して来た。だが、撃ち出す寸前でフィーリアの銃撃がガレオスの頭を粉砕。一撃で倒した。

「クリュウ様！」
フィーリアは銃口から煙が出るヴァルキリーブレイズを構えながらクリュウに駆け寄る。どうやらクリュウは怪我はないらしい。
「大丈夫ですか？」
「うん。ありがとう」
クリュウはそう言って微笑むが、バサルヘルムのせいでその笑顔はフィーリアには見えない。ちょっぴり寂しいフィーリア。
その時、クリュウは剣を構えた。その視線を追うと、ドスガレオスが起き上がっていた。フィーリアはすぐにクリュウの後方に移動すると後ろから迫っていたガレオスを撃ち殺す。
クリュウはこちらを向いたドスガレオスに向かって突貫した。そしてそのまま脚に剣を叩き込む。
「ゴアアアアアッ！」
ドスガレオスは体を回転させてヒレのついた尻尾で群がる敵を一掃しようとするが、クリュウはそれを盾で防ぐと再び突貫。大きな動きには必ずある隙に飛び込むと、ドスガレオスの下腹部を斬り裂く。真っ赤な血が噴き出し、砂の上に落ちてジュッと蒸発する音が聞こえた。クリュウは構わずその傷口に腰に下げていた小タル爆弾を捻じ込んでピンを抜き、急いで離れる。
ドオォンッ！
「ガアアアアアアアアアッ!?」
ドスガレオスは絶叫して倒れた。そしてそのままジタバタと激しく体を動かす。悶え苦しむドスガレオスにクリュウは剣を叩き込む。フィーリアも連続して銃撃を叩き込む。たまらず、ドスガレオスはさらに激しく暴れ、クリュウはやむを得ず離れる。すると、ドスガレオスは体を激しく動かしてその反動で立ち上がると、前に向かって飛び込み、砂の中に潜ってしまった。
「しまった！」
クリュウが慌てて音爆弾を取ろうと道具袋（ポーチ）に手を伸ばす。と、突然目の前で砂が爆発したかのように砂が吹き飛び、ドスガレオスが飛び出して来た。クリュウは砂に吹き飛ばされて尻餅をついて

しまった。そこへドスガレオスは砂ブレスを放つ。クリュウはそれを盾で防ぐも、吹き飛ばされた。
「クリュウ様！」
しかしバサルシリーズの防御力はすばらしく、ほとんど痛みもなくすぐに立ち上がった。だが、すでにその時にはドスガレオスは砂の中に潜り、穴の開いた黒いヒレを出しながら逃げていく。慌てて二人は追うが、ものすごい勢いで引き離される。フィーリアは走りながらペイント弾を装填するが、ドスガレオスはどんどん離れて行く。その時、
「あ……」
一番最初に気づいたのはクリュウ。
ドスガレオスの針路先に、人影が見えた。黒く艶やかな長髪を風に美しく靡かせるどこか異国風の鎧を身に纏った隻眼の少女。それは別行動をしていたサクラだった。驚きもせずに迫るドスガレオスに向かってサクラは背中に挿した太刀、飛竜刀【紅葉】を構える。そして、ドスガレオスとのすれ違いざま、一瞬で剣を振るった。
――ドスガレオスの強靭なヒレが、横一直線に斬り飛ばされた。
「ガアアアアアッ!?」
たまらずドスガレオスは悲鳴を上げて砂上へ飛び出して来た。あまりの激痛にか、体を倒したままジタバタともがき苦しむ。そんなドスガレオスに、サクラは無言のまま飛竜刀【紅葉】を構え、一撃を入れる。それは見事に首を裂き、致命傷を受けたドスガレオスは一度ビクンと大きく痙攣すると、そのまま動かなくなった。
そこへクリュウとフィーリアがやっと追いついて来た。だが、すでに戦いは終わっていた。
「サクラ！　ドスガレオスは!?」
「……片付けた」
そう言ってサクラは剣を振るって刃に付いた血を吹き飛ばすと、背中の鞘に華麗に戻す。そして安堵するクリュウをじっと見詰める。
「……クリュウ、怪我は？」
「大丈夫だよ。でも疲れたぁ……」

そう言ってクリュウは砂の上に腰を下ろすと、バサルヘルムを外す。春の若々しい木々の葉のような柔らかな緑色の髪が現れ、砂がサラサラと落ちる。その顔は汗でいっぱいだった。
広大な砂漠で動き回るドスガレオスを発見するのはかなり難しく、仕方なく奴の回遊ルートに二時間も待ち伏せしていたのだ。疲れて当然だ。
クリュウは腰にぶら下げている水筒の中の水を飲む。砂漠に長時間いても大丈夫なように氷結晶が入っている水筒の中の水は冷たくてのどを潤す。
そんなクリュウに微笑むと、フィーリアは一度手を合わせてから解体に掛かる。二人も続いて解体に入る。
十分な解体を終えると、クリュウは素材を素材袋の中に入れてバサルヘルムを被って立ち上がる。
「さぁて、依頼は完遂したし、帰ろっか」
「はい」
「……わかった」
周りにはゲネポスが数匹こちらの様子を窺っている。クリュウ達が倒したドスガレオスやガレオスの死体を狙っているのだ。その為、こちらから攻撃をしなければ向こうも攻撃はして来ないだろう。獲物があるのにわざわざ危険を冒すほど、ゲネポスはバカではない。
クリュウ達が十分離れると、一斉にドスガレオスやガレオスの死体に群がってその肉を食べ始める。これが自然の摂理なのだ。
クリュウ達は拠点（ベースキャンプ）に戻ると荷物を纏め、イージス村に戻った。
陽気に歩くシルキーが引く竜車の中、クリュウはいつの間にか眠ってしまっていた。砂漠に長時間いるのは、どんなハンターでも疲れるのだ。
すやすやと眠るクリュウの寝顔を見詰め、フィーリアとサクラは互いに小さく微笑んだ。
イージス村に戻った三人はクリュウが酒場へエレナに報告に行き、フィーリアとサクラは荷物を持って先に癒えに帰ってもらった。

エレナに報告＋跳び蹴り一発を受け、クリュウは自分の家こと三人共同の家に向かう。その途中、道を歩く村人とすれ違う。
「あ、クリュウくんお帰り。怪我はなかった？」
野菜のいっぱい入ったかごを持った女性が声を掛けて来た。いつも野菜や果物を分けてくれるお姉さんだ。クリュウは笑顔で頭を下げる。
「はい。何とか無事に帰ってきました」
「今回はレディーナ砂漠だっけ？　遠いわね」
「はい。片道竜車に揺られて三日ですね」
「そっか、じゃあ一週間ぶりね」
「はい。早く家に帰って体を洗いたいですよ」
「ふふふ、そうね。お疲れ様。あ、これ持ってって」
そう言って女性は野菜がたっぷり入ったかごをクリュウに渡す。
「いつもすみません」
「いいのよ。クリュウくん達のおかげで村は平和なんだから」
そう言ってお姉さんは笑顔で手を振ると去って行った。いつもいつもこうして健康でいられるのは、彼女の手作りの野菜のおかげだ。感謝しなくては。
「おぉ、クリュウおかえり。今回はまたずいぶんと汚れてるな」
男の人が声を掛けて来た。小さな村なのでみんな顔見知りである。
「はい。砂漠でしたから、もう砂だらけで」
「そうか。砂漠は暑いしな。お疲れさん。今度一緒に一杯どうだ？」
「あ、はい。でも、僕はジュースでお願いします」
「ははは！　そうかお前お酒が苦手だったな。わかったわかった。いいジュースを用意しておくよ」
「ありがとうございます」
ただ家に帰るだけなのに、色々な人に声を掛けられる。小さな村であるから顔が知れるのは当然だが、ハンターであるクリュウは村の平和を守っているので皆から慕われる。だからこそ、これほどまでに皆に愛されているのだ。まぁ、彼の人を呼ぶ性格も加わっているが。
その時、道の分かれ道の真ん中に大きな大きな、自分の身長よりも

大きな荷物を背負った青髪の青年が立っていた。クリュウはそれを見て笑顔になると彼に駆け出す。
「アルト兄さん！」
クリュウの声に、青年は振り返ると笑みを浮かべた。
「おぉ、クリュウ。久しぶりだな」
青年はクリュウが前に立つとその頭をよしよしと撫でてやる。クリュウはそれを笑顔で受けると手に持つかごとヘルムをギュッと握り締めた。
彼の名前はアルト・フューリアス。こういう小さな辺境の村や街を回って商品を売買する行商人の青年だ。このイージス村にも定期的に訪れる。クリュウも彼の常連であり、今では彼を兄と慕うまでに二人は仲がいい。
「ねぇ、今日はどんなのがあるの？」
彼が持ってくるのはいつもすばらしいものばかり。自然とクリュウも期待が膨らむ。だが、アルトはごめんと小さく謝る。
「もう出発なんだ。一昨日この村に来たんだけど、クリュウ達は狩りに出てていなくて」
「そ、そっか、残念だな」
「ごめんね。また来るから、それまで待っててよ。今度はもっといい品を持って来るから」
「うん。わかった」
笑顔でうなずくと、アルトはまたよしよしと撫でる。すると、ふとアルトはクリュウを周りを見回す。
「おや、そういえばフィーリアとサクラは？」
「もう先に家に戻ってる」
「そっか、一目見たかったけど仕方がない。それじゃあ、もう行くね」
そう言ってアルトは荷物を全て持つと村の外に向かって歩き出す。クリュウはそんな彼に大きく手を振って見送る。
「じゃあね！　また来てよ！」
「おうよッ！　お前もあんまりフィーリアとサクラを困らせるなよ！
そろそろどっちか決めたらどうだッ！」

「え？　何ッ!?　何それどういう事ッ!?　ねぇアルト兄さんッ！」
アルトはクリュウの問いを無視し、笑いながら村の出口の向こう、下まで降りる長い階段へ消えて行った。クリュウは首を傾げながらも家に向かって歩き出す。
家に戻ったクリュウは裏庭で鎧を脱ぐ。すると砂がサラサラと落ちた。どうやらかなりの砂が入り込んでいたらしい。
「うわぁ、インナーの中まで砂でいっぱいだぁ……」
砂漠から帰って来るといつもこれだ。鎧の繋ぎ部分にまで砂が入り込んでくるし、インナーの中も砂だらけになるので後片付けが厄介極まりない。
できるだけ防具やインナーの中の砂を取り除いた後、クリュウは体の砂を落とそうと風呂場に向かう。日時さえ指定しておけば、エレナが三人が帰って来る頃には風呂を沸かしててくれるのだ。こういう時こそ幼なじみのエレナには感謝する……まぁ、その報酬が毎回のように受けるバイオレンスな必殺技の数々では吊り合いは取れないが。
（まぁ、それでも感謝してるけどね）
クリュウはそんな事を思いながら脱衣所の扉を開く――
「え？」
扉を開いた瞬間、クリュウは目の前の光景に硬直する。
そこには今湯船から上がったばかりであろうフィーリアが、湯気に包まれながら一糸纏わぬ姿で立っていた。
「え？」
フィーリアもそこでクリュウの存在に気づいた。
お互いあまりの出来事に脳が理解するのを拒んでいるのか、どちらも硬直し続ける。だが、徐々に二人の顔は真っ赤に染まり――
「キャアアアアアッ！」
フィーリアは悲鳴を上げると慌ててしゃがみ込んで体を隠す。クリュウも顔を真っ赤にしてあわあわと大慌て。
「ご、ごめん！　悪気はなかったんだ！　入ってるなんて思わなくて……ッ！」
「い、いえッ！　どうぞご自由（？）にッ！」

「とにかくごめんッ！」
クリュウは悲鳴に近い声でそう叫ぶと、転びそうな勢いで脱衣所から逃げた。
遠ざかる足音と転倒音に薄っすらと涙さえ浮かべるフィーリアは顔を上げた。そこには先程までいたクリュウの姿はなく、安堵の息を漏らす。だが、どこか不満そうに唇を尖らせた。
「そ、そんなに必死に逃げなくても……」
どこか寂しげな表情をするフィーリア。その頬はいつになく赤く染まって熱を帯びている。その熱を冷まそうと、フィーリアは再び風呂場に戻って今度は水を浴びるのであった。
一方、フィーリアの裸を目撃してしまったクリュウは頭を抱えていた。
今まで着替え中の姿を間違って見た事はフィーリアとサクラで一回ずつやらかしてしまった。さらには以前イャンクックを倒した後に遠目ながら月明かりの下で彼女の裸体を見た事はあった。だが、今回は目の前で見てしまったのでそれを超えるくらい極めてまずい。いくら湯気が見事に大事な部分を隠していたので一応ギリギリセーフだとしても、世間一般的には完全にアウト。もはや犯罪の領域である。
エレナだったらきっと今頃は自分は生きていないだろう。だが相手はフィーリア。暴力的な事はしない子だ。どうせだったら一発くらいビンタを受けた方がまだ楽だったが、フィーリアはそれをしなかった。
しかし、裸を見られて嫌な女の子がいないなんて事はなく……
「……き、嫌われた。……確実に、嫌われた……」
がっくりと肩を落としてうな垂れるクリュウ。今回は圧倒的に自分が悪い。嫌われても仕方がないだろう。
クリュウはどうしようどうしようと必死に解決策を模索しながら歩く。いつの間にか皆で食事や会話をするリビングに来ていた。中央に置かれたテーブルはいつもみんなで食事や会話をする大切なものである。

小さい頃は、父と笑いながら食事をしていた思い出の品でもある。
クリュウはそっとテーブルを撫でる。
父との思い出の場所は、今では大切な仲間との絆となっている――が、今現在その絆が崩壊の危機に瀕(ひん)している事を思い出し、クリュウは再び頭を抱える。と、
「……クリュウ?」
その声はサクラのものだった。顔を上げて彼女の姿を確認した時、クリュウは再び硬直した。
そこにはバスタオル一枚を巻いただけで、後は白い肌という、風呂上り姿のサクラが牛乳の入ったコップを片手に立っていた。
サクラは先程までフィーリアと一緒に風呂に入っていた。正確にはサクラが入っていた所へ気づかずフィーリアが入ってしまったが、サクラが一緒に入る事を許可して一緒に入り、そして先にサクラが上がったという流れだ。
もちろんそんな事情を知らないクリュウ。そんな彼の前に立つサクラはあまりにも無防備で、湯気が立つ体を特に隠したりもせず立っている。もしあのバスタオルが落ちたらと思うと、クリュウは耐えられずに視線を外す。
「ご、ごめん! すぐ出て行くから!」
「……なぜ?」
きょとんとするサクラ。
「な、なぜってそんなの……っていうかサクラ、そんな姿見られても、恥ずかしくないの?」
「……なぜ?」
「いや、なぜって言われても……」
「……小さい頃、私とクリュウは一緒にお風呂に入った。だから、気にしない」
小さい頃と発育真っ最中の現在とで一緒にされたら困る。どうやらサクラは、こういう事に関しては恐ろしく警戒していないらしい。それはそれである意味フィーリアの時よりも厄介だ。
「と、とにかくごめんッ!」

それだけ叫び、クリュウは決して後ろには振り返らずに自分の部屋に向かってダッシュした。離れていく彼の背中を見詰め、サクラは不思議そうに首を傾げ、牛乳をクイッと飲む。
「……あ」
刹那、彼女の体を唯一隠していたバスタオルが落ちた。
ある意味、命拾いをしたクリュウであった。
数十分後、リビングにあるテーブルを囲むのはそれぞれ私服に着替えたクリュウとフィーリア、そしてサクラの三人だ。
だが、クリュウはもちろんフィーリアも何も言葉を発しない。基本的にあまりしゃべらないサクラはいつものように無言を貫いている。この時ほど彼女をうらやましく思った事はない。
先程の事故（？）のせいで、クリュウは二人に対し、フィーリアはクリュウに対しどう話し掛けたらいいか必死に考えを模索させていた。不気味な沈黙の空間に、サクラのお茶をすする音だけが空しく響く。
「く、クリュウ様……」
意を決して最初に口火を切ったのはフィーリア。その表情はどこか不安げで、今にも壊れてしまいそうな印象を受ける。
「な、何？」
「あの、その、見られましたよね……？」
顔を真っ赤にしながら問うフィーリア。そんな彼女にクリュウもボンッと顔を真っ赤にすると目を泳がせて「あう……」とか「その……」とかを繰り返す。
散々考えた挙句、クリュウはぐったりと頭を下げる。
「ご、ごめん……」
「そ、そんな謝らないでください！　クリュウ様は何も悪くありませんから！」
顔を真っ赤にしたまま必死に自分をかばおうとする彼女は素直に嬉しい。だが、できる事なら今だけは罵ってもらいたい。
クリュウのわずかにあるプライドは、またしても簡単に壊れた。
そんな二人の微妙なやり取りを見詰めるサクラ。一応彼女もこの

話の中にいるはずだが、彼女は先程の事態を気にしていないらしい。
「……同居状態では起こりうる可能性。いちいち気にしていたらきりがない」
サクラの言葉はもっともだ。同居になるとわかった時点で最悪これくらいの事態が起きる事は覚悟していたじゃないか――まぁ、覚悟と実際とでは大きく違うのだが。
「そうですよ。それに私、本当に気にしてませんから」
うそである。本当はかなり気にしているが、クリュウをこれ以上追い詰めたくない。
だが、クリュウにとってはそんな彼女の気遣いこそが一番追い詰められる。
お互いに一歩も前に動き出せなくなってしまった二人に、サクラは無言でお茶をすする。
コンコン……
そろそろ間が持たなくなってきた頃、玄関がノックされてクリュウはこれ幸いと慌てて走って行った。フィーリアも肩の荷が一時的に降りたからかふうとため息する。
「……どっちもどっち」
「わかってますよ。でもどうすればいいか私もわかりませんし……」
困り果てて頭を抱えるフィーリアとそんな彼女を見詰め無言でお茶を飲むサクラ。
一方、玄関に向かったクリュウはドアを開けた途端、すさまじい跳び蹴りを受けて床に叩き付けられて悶絶する。もはや恒例となってはいるが、やっぱり痛い。
「え、エレナ！　たまには暴力なしって方向にはできないのッ!?」
「うるさいわね。これでも手加減してあげてるんだから感謝しなさいよ」
「これ以上威力を上げられたら、たぶん僕は死ぬよ」
「何言ってんのよ。これくらい耐えられなくて何がハンターよ」
「無理言わないでよぉ」
クリュウは上半身だけ起こして自分を蹴り飛ばしたエレナを見詰

める。目の前に仁王立ちして胸を反らすエレナはどこか嬉しそうだ。こうして自分をいじめて楽しむ。昔から彼女は変わっていない。
「ほら、そんな所に座ってないで客にお茶くらい出しなさいよ」
「エレナが蹴り飛ばしたからでしょッ!?」
　あまりにも理不尽な暴力と身勝手なエレナにクリュウはブチギレた。その怒声にフィーリアとサクラが慌てて駆け付けて来る。
「な、何事ですかッ!?」
「……またエレナ」
　慌てて駆け付けた二人はクリュウとエレナの姿に安堵するも、サクラはエレナをじっと睨むように見詰める。
「……クリュウがかわいそう」
「べ、別にサクラには関係ないわよ！」
「……関係ある。クリュウは私の仲間」
　キッと睨むエレナと冷たい瞳を向けるサクラ。そんな二人をあわあわと見詰めるフィーリア。そして、疲れたように立ち上がって呆れたようにため息するクリュウ。いつもの構図である。
「フィーリア、ちょっと手伝って」
「あ、はい！」
　クリュウは睨み合う二人を無視し、フィーリアと一緒に台所へ向かう。
「あ、あのさ、さっきは本当にごめんね」
　唐突に切り出したクリュウにフィーリアはあわあわと手を顔の前でブンブンと振る。
「わ、私は気にしてませんので！　クリュウ様もお気になさらずに！」
「そ、そう？　でもほんとごめん」
「そんなに謝らないでくださいよぉ」
　エレナの乱入のおかげか、すっかり二人の間にあった微妙な溝は埋まっていた。あれだけひどい目に遭っても、これはかなりの戦果だ。少しだけエレナに感謝。
　台所へ着くと、クリュウは茶葉の入ったビンを取り出す。
「フィーリアはそこの棚に入ってるお茶菓子をお願い。一応茶菓子く

らい出さないとまたエレナに蹴られそうだし」
「そうですね。まぁ、これ以上クリュウ様に暴力を振るうのなら、いくらエレナ様とはいえちょっとお灸（きゅう）が必要ですね」
「……フィーリア、目がすごく怖い」
そんな会話を終え、クリュウはフィーリアと共にリビングに向かう。すると、サクラとエレナはすでに椅子に座っていた。なんとも行動が早い事。
クリュウとフィーリアは互いの顔を見合って微笑むと、空いている席に座ってお茶菓子を挟んで楽しげな会話を始める。クリュウがさっきアルトに会ったと話すと、フィーリアはとても残念そうな顔をし、サクラは無言でお茶を飲んだ。
いつもと変わらないクリュウ家の日常。
何もかもが平和で、幸せな日々の連続。
こんな平凡なひと時を守る為に、自分は戦っているのだと改めて思う。
この平和がいつまでも続くなら、必死になって戦うだけだ。
「クリュウ！　それ私にちょうだい！」
「え？　だ、ダメだよぉ」
「何よ！　別にいいじゃない！」
「まだたくさんあるんだからそっちを食べればいいでしょ!?」
「私の物は私の物！　あんたの物も私の物なのよ！」
「無茶苦茶だぁッ！」
「……バカ」
「あ、あの、私のでよろしかったら……」
こんな平和が、いつまでも続いてほしい。
そんな想いが、胸を優しく、温かく満たし、明日への希望に繋がっていく……

登場人物紹介1

《クリュウ・ルナリーフ》
身長　１６２センチ
年齢　１６歳
髪・瞳　春の若々しい木々の葉のような柔らかな緑色の髪と瞳
武器　片手剣オデッセイ
防具バサルシリーズ
スキル　防御力＋２０（防御珠×３）　地形ダメージ減【小】　睡眠無効（耐眠珠×３）
イージス村出身の少年でかけだしハンター。ドンドルマでハンター養成学校で修行を積んで村に戻って来た。まだまだ新人で知識や技術は未熟だが、とっさの機転が冴えている。父のような立派なハンターになる事が夢。誰かを守る為に自分を犠牲にする事も構わない自己犠牲な部分を持つ。優しく穏やかな性格で誰からも好かれるが、反面で優柔不断で乙女心がまるでわからないという欠点を持つ。周りが自分よりも強く有名な女の子ハンターばかりなので、足を引っ張ってるのではないかと内心不安を感じている。いつもは年齢に対して子供っぽいが実はキレると一番怖い。顔立ちは結構女の子に近い。日々エレナの暴力に耐えているというかわいそうなキャラ。これからもっと成長していく。

《フィーリア・レヴェリ》
異名《新緑の閃光》
身長　１５５センチ
年齢　１５歳
髪・瞳　月の金色のような長い髪とエメラルドのような瞳
武器　ライトボウガン《ヴァルキリーブレイズ》
防具《レイアシリーズ＋レッドピアス》
スキル　毒無効（耐毒珠×１＋抗毒珠×２）　体力＋３０（体力珠×４）
レイアシリーズを身に纏うライトボウガン使いの少女ハンター。

クリュウのピンチを救った後に彼とコンビを組む事になる。その後クリュウに戦いの基礎やハンターとしての知識などを教え、共にイャンクックを倒すがクリュウとケンカ別れして村を出てしまう。しかし再会して再びチームを組む。クリュウの一つ年下。優しく清純な女の子で優しい性格のクリュウの事が好き。様々なアタックをするも鈍感なクリュウは気づかない。クリュウが最も信頼するチームメイト。リオレイアをこよなく愛し、何頭も討伐して来た。その実力から《新緑の閃光》と呼ばれている。クリュウと一緒に寝たいとか裸を見られても恥ずかしがるも実は嫌がってはいないという面もあり、実は結構大胆なところもある。

《桜（サクラ）・春風（ハルカゼ）》

異名《隻眼の人形姫》

身長　１６０センチ

年齢　１６歳

髪・瞳　美しく長い黒髪と柔らかな漆黒の隻眼

武器　太刀《飛竜刀【紅葉】》

防具《凛シリーズ》

スキル　回復速度＋１　ガード性能＋２（意味なし）

超弩級古龍ラオシャンロンの素材を使った凛シリーズを身に纏う太刀の使い手の少女。別の大陸の出身者でこの大陸にはない《漢字》という別の国の文字の名前を持つ。商人の娘として小さい頃はよくイージス村に来ていて、エレナやクリュウとはその際によく遊んだ仲。しかしその後彼女の商隊はモンスターに襲われて両親は殺され、彼女自身も左目を失った。生きる為にハンターになった彼女は二度と同じ想いをさせない為に無茶をしてでも依頼は完遂し続けている。無口であまり表情を変えない為、その実力と組み合わさって《隻眼の人形姫》という異名を持つ。子供の頃一人でいる事が多かった彼女に優しく接してくれたクリュウの事が好きで、今もその気持ちは変わらない。むしろ強くなっている。彼を第一優先に考える為、その為エレナやフィーリアと対立する事も多い。チームではクリュウと連携して前衛として戦う。渾身の一撃を炸裂させる時に《チェスト》と叫ぶ

が、これは彼女の故郷の気合を入れる言葉らしい。クリュウに絶対的な信頼を置いており、彼の為なら何でもする純粋な一面も持つ。

《エレナ・フェルノ》

身長　１５８センチ

年齢　１６歳

髪・瞳　きれいな茶色の長髪に翡翠のような緑の瞳

クリュウの幼なじみで女の子。村唯一の酒場の経営者兼厨房担当兼給仕と実はすご腕の子。その料理の実力は折り紙つきで、時たまドンドルマなどからわざわざ食べに来る客もいるほど。勝気な性格で負けず嫌い。素直になれず自分の考えは何が何でも押し通すという困った性格をしている。その上すさまじい戦闘能力を持ち、いつもクリュウにバイオレンスな攻撃の数々を炸裂させている。クリュウとは子供の頃からの付き合いで温厚な彼をいつも振り回していた。実はクリュウの事が好きなのだが、素直になれずにいつも暴力に走ってしまう。最近の悩みはクリュウの周りにかわいい女の子が増えてしまった事。登場全女子キャラで最も強力なキャラクター。読者からも怖いという意見があるが、一応その暴力も愛情の裏返し（困るが）。クリュウが狩りに出ている時はお祈りをしたり、彼が帰って来る夜などは門で待っていたりするなど、女の子らしいかわいい一面もある。

《アシュア・ローラント》

身長　１６８センチ

年齢　秘密やでぇ～

髪・瞳　美しい柔らかな灰色の長い髪に空の蒼のような碧眼

村唯一の鍛冶師で主婦の相棒である包丁からハンターの武器や防具まで幅広く扱っている。クリュウ達ハンターを陰から支える大切な存在。別の村からドンドルマに行って修行を積み、なぜかこの村にやって来た。彼女のいた地方は独特だったのか、とても独特な言葉遣いをしている。大人の色気と子供っぽさを兼ね備えた美女でみんなの頼れるお姉さん的存在でおっとりしていてちょっぴり天然。クリュウの事をまるで本物の弟のようにかわいがっている。ちょっと過激なスキンシップが目立つが、それもまた愛情表現の一つ。朝が弱

いという弱点を持つ。
《村長》
身長　１７２センチ
年齢　僕って何歳だっけ？
竜人族の青年。実際何歳なのかは誰にもわからないが、見た目は青年。彼の父親が設立したイージス村を、今は彼が支えている。村の為にいつも何かを考えては実行している村一番の愛村者。宴会など皆で騒ぐ事が大好きで、その人懐っこい笑顔とその努力する姿、そしてその功績の数々から村人からの信頼は厚い。いつかイージス村をどんな街や村にも負けない大きくて立派なものにするのが夢。登場キャラでは重鎮だが、サブキャラの中でもかなり出番が少ない。
《バルド》
異名？《海将軍》
身長　１８５センチ
年齢　４２歳
イージス村の漁業組合の組合長で現役の船乗り。海の男という言葉がぴったりの人でどんな魚をも釣り上げてしまう。若い頃は嵐の海に出て荒波を物ともせずに突撃して巨大なカジキを吊り上げた伝説を持ち、《海将軍》と呼ばれている。彼が率いる漁船団は荒々しくも強く気高く、漁業だけでなく海の凶悪生物の駆逐から密猟の捕縛まで幅広く活躍。近海の村々から《暴走水軍》と呼ばれ時には恐れられ、時には親しまれている。イージス村の財政は彼らが揚げる海産物の売り上げが大半なので、ある意味クリュウ達とはまた違った形でイージス村を守っている。クリュウの父親とは親友のような関係だったらしい。クリュウにはいつも新鮮な魚介類をおすそ分けしている。作者はいつも完全に忘れていて、思い出した時にしか登場しないかわいそうなキャラ。
《ラミィ・クレア》
身長　１５３センチ
年齢　１５歳
髪・瞳　薄桃色の柔らかなポニーテールと凛とした鳶色の瞳

武器　ランス《ガトリングランス》
防具《ギザミシリーズ＋ブルーピアス》
スキル　業物　砥石使用高速化（研磨珠×１）
双子ハンターの姉でランスの使い手。独立貿易都市アルフレアに属するハンターで、妹のレミィとコンビを組んでいる。エレナに負けず劣らずの勝気な性格で負けず嫌い。まだまだかけだしのクリュウを格下扱いしているが、本当はライバル視している。レミィがどうも彼に気があるみたいで気に入らない。その為クリュウにはきつく当たる事が多い。彼女自身もまだ初心者に近いハンターで、ランスの動きなど基本的な動作はすばらしいが、歴戦のハンターのような機敏な動きはまだできない。その為にレミィと組んでその欠点を二人で補っている。双子という事もありその連携はかなりのもの。最近登場しないがその間もアルフレアで少しずつ実力を上げている。

《レミィ・クレア》
身長　１５２センチ
年齢　１５歳
髪・瞳　薄桃色の柔らかなツインテールとクリッとした鳶色の瞳
武器　ガンランス《討伐隊正式銃槍》
防具ザザミシリーズ
スキル　防御＋３０（防御珠×５）　ガード性能＋１（石壁珠×３）
投擲技術ＵＰ　雷耐性―５
双子ハンターの妹。ガンランスの使い手。独立貿易都市アルフレアに属するハンターで、姉のラミィとコンビを組んでいる。クリュウの事を尊敬し、好いている様子。彼にアルフレアに遊びに来てほしいと頼むも、いまだにクリュウはアルフレアには行けていない。ラミィがよくクリュウにケンカを売るので、いつもその間であわあわとしている。まだまだ自分でも未熟だとわかっていて、日々修行をして強くなっている。ラミィとはお互いの欠点補いながら双子ならではの見事な連携を見せる。現在もアルフレアでがんばっている。

《ライザ・フリーシア》
身長　１６７センチ

年齢　企業秘密です♪
髪・瞳　長いきれいな茶髪に柔らかな赤色の瞳
ドンドルマの酒場でアイドル的存在の超絶美人受付嬢。厨房担当から受付、さらには給仕まで幅広くを扱える。エレナ以上にすごい人物。荒くれ者の多いハンター達の争い事を鎮圧するのがうまく、さらには屈強な男の一撃をも片手で止められ、二階から飛び降りても音もなく着地でき、噂では酔っ払った大勢の男ハンターが襲って来られても全滅させたらしい。様々な謎を持つが、それは全て謎のままとなっている。しかしその美貌と謎を秘めた雰囲気、そして営業スマイルだがその美しい笑顔から酒場では一番の人気者。フィーリアとサクラとは仲がいい。最近はクリュウがお気に入りでかわいがっている。クリュウ達がドンドルマで活躍する際は必ずお世話になる人物。作者ですら謎が多すぎてどう扱えばいいかわからないというキャラ。

第４８話　桃毛獣の悪臭騒動

それは突然知らされた。

「セレス密林に、コンガの親玉が現れたらしいんだ」

酒場でお昼ご飯を食べていたクリュウ達に村長が開口一番にそう言った。クリュウは思わず頬張っていたサンドイッチを落としそうになる。

「こ、コンガの親玉ってババコンガの事ですか？」

「どうもそうらしいんだ」

桃色の毛に包まれたゴリラ型のモンスター、コンガ。溢れんばかりの硬い筋肉は自然の鎧。濃密な筋肉は見た目以上に重く、のしかかられれば即死の恐れがある小型モンスターだ。喰らったらすさまじい臭いで口に含む道具が全て一時的に全滅する放屁攻撃は厄介だが、めったにやって来る訳ではないのでそれほど苦戦する相手ではない。だが、その親玉のババコンガは例外である。

ババコンガは通常のコンガのふた回り以上も大きな体を持つコンガのボスだ。ドスとついていないだけで、親玉クラスのモンスターではかなり厄介な相手だ。何せイャンクックやバサルモスよりも強力な相手なのだ。

まず巨体なくせに動きが素早く、そして見た目以上に重い。空中へ跳んだ後のボディプレス攻撃は地面すら陥没させる威力を持ち、その鋭い爪は大木をも切り裂き、その巨大な拳は岩すらも破壊する。さらには食欲旺盛で常に好物のキノコ類などを細長い尻尾で掴んで持ち歩き、戦闘中であっても腹が減れば食事をするのだが、その食べた際のキノコの種類によってガス状のブレスが変化するのだ。毒テングダケを食べれば毒ブレス、マヒダケを食べれば麻痺ブレス、ニトロダケを食べて炎ブレス。厄介極まりない相手だ。そして何よりも厄介なのはコンガと同じ放屁攻撃。こちらは盛んにするので危険。しかも自らのフンを投げ付けてくるという最悪な相手だ。このどちらも受けるとすさまじい悪臭がし、ヘタなハンターならその臭いで気絶するほど臭い。もちろん口に触れる道具類は全滅である。これを戻す

には臭いが納まるまで待つか強力な消臭効果のある落陽草と呼ばれる草の葉を乾燥させてすり潰した粉を素材玉に練り込んだ消臭玉というアイテムを使うしかない。これを地面に叩き付けると粉が噴き出して強力な消臭効果で悪臭を取り除いてくれる。フン攻撃で付着したフンも、なぜかこれでただの泥に変化するので安心だ。

見た目が不気味で嫌がられるフルフルに対し、その攻撃の仕方から嫌がられるババコンガ。

歴戦のハンターでさえも、ババコンガ相手では眉をしかめて「二度と戦いたくない」と言うほどだ。

そんな相手がセレス密林に現れた。当然クリュウ達が討伐に行くのだろうが、話を聞いていた三人の顔は誰もがものすごく嫌そうだった。運悪く、クリュウが食べていたのは特産キノコなどがたっぷり入った山菜カレーであった。当然食う気は失せる。

「ねぇ、何とか討伐してくれないかなぁ？」

村の危険であるのはわかっているが、今回の相手は戦いたくない。フィーリアとサクラはすでに戦っていて嫌だし、クリュウも周りの話を聞いてすっかり戦意喪失である。そんな三人に村長は必死に懇願する。彼だってババコンガやコンガの放屁やフン攻撃のすさまじさは話には聞いている。それがハンターが戦いたがらない原因だとも。だが、このままにしておく訳にもいかない。セレス密林はイージス村と近くて重要な場所だからだ。

「今回は報酬金も高くしておいたからさ、お願いだよぉ」

村長は何度も何度も頭を下げてお願いする。その必死な姿に先に折れたのはクリュウの方だった。

「仕方ないですね、引き受けますよ」

「ほ、本当かい!?」

「はい」

「ありがとう！　これで村は救われたぁッ！」

大喜びする村長にクリュウはまだ救われたと決まった訳ではないのにと思いながら苦笑いする。そんな彼を見詰め、フィーリアは疲れたようにため息した。

「ババコンガですか。できればあまり戦いたくない相手ですね」
「まぁ仕方ないよ。村の為だもの。なんなら今回フィーリアは待機でもいいよ」
「そんな、クリュウ様一人を行かせるなんてできません。ババコンガなんて鎧袖一触（がいしゅういっしょく）で蹴散らしてみせます」
フィーリアは自信満々に宣言した。そんな彼女に「ありがとう」とクリュウは笑顔で礼を言うと今度は今まで沈黙していたサクラを見る。
「サクラはどうする？　嫌ならフィーリアと二人で行くけど」
クリュウの言葉にサクラは首を小さく横に振る。
「……愚問。クリュウが行くなら私も行く。ババコンガなんて、クリュウがいれば怖くもなんともない」
「じゃあよろしくね」
クリュウは再び村長を見詰める。すると、彼は依頼書とペンを差し出して来た。クリュウはその受注者の欄に自分の名前を書いてフィーリアに渡す。フィーリアも名前を書いてサクラに渡す。そしてサクラも自分の名前を書いて、今度はそれを村長に手渡す。
「必ずババコンガを倒してみせますよ」
「よろしく頼むよ」
村長は嬉しそうに笑みを浮かべると「じゃあコンガやババコンガ用の消臭お風呂を用意しておくね！」と去って行った。どうやらクリュウ達が汚物にまみれるのは決定事項らしい。クリュウは絶対汚物攻撃は喰らわないと心に決めた。
クリュウ達は家に戻るとそれぞれの用意を整える。
防具を着て武器を挿し、道具を道具袋（ポーチ）や船に詰め込んで行く。今回は相手が相手なので時間は掛かるが船を使う事にしたのだ。
必要なものを全て積み込むと、クリュウ達は出発した。
残された村民達は村長の指揮の下大急ぎで消臭風呂の用意に取り掛かった。ある意味、村でも戦いが繰り広げられる事になった。
セレス密林に着いた三人は必要な荷物を荷車に載せて狩場に向

かった。
今回はシビレ罠二つに落とし穴二つ。大タル爆弾Gを四発、小タル爆弾十発、トラップツールとゲネポスの麻痺牙がそれぞれ二個ずつを用意し、後はいつものようにそれぞれ道具袋（ポーチ）に入れている。
今回最も重要な道具は消臭玉だ。それぞれ五個ずつ携帯している。これなしでババコンガと戦うのは自殺行為である。
そんな用意を整えたクリュウ達はいつものように荷車を引くフィーリアを中心に前方をサクラ、後方をクリュウが守る形で進む。
前方を歩くサクラは地図を片手に辺りを見回す。最近はこの辺にもコンガがランポスを押しのけてテリトリーを広げているので警戒を怠ってはいけない。
ランポスは単体での弱さをチームワークでフォローするモンスター。しかしコンガは逆に単体で強いモンスターだ。しかし、ある意味ではコンガの方が倒しやすい。なぜならばチームワークなどないので死角を警戒する必要がないからだ。ランポスの厄介な所は死角から別のランポスが攻撃してくる所。
しかし、ババコンガがいるとなれば別だ。いくらチームワークがないとはいえ、親玉がいれば統制される。そうなると単体の強さに加えてチームワークが加わり厄介極まりない。
ババコンガの恐ろしい所はその強さももちろんだが、こうしたコンガを率いる力が恐ろしいのだ。
クリュウも何度かコンガと戦った事があるが、一対一ではランポスとは桁違いに強い。フィーリアの援護があったから難なく勝てていたが、今回はそれも期待できないだろう。
「まずはある程度コンガを倒して安全を確保しましょう。ババコンガとコンガを一斉に相手にするのは危険ですから」
「そうだね。とりあえずそれが無難だね」
「……コンガを大量に倒せば、親玉のババコンガも出て来るはず」
「とにかく、まずはコンガを一掃しよう」
作戦方針も決まったところで、クリュウ達はさらに進む。そして沿岸部に抜けた。横に海が広がっていて、白い砂浜が美しい。だが、そ

の横の鬱蒼と生い茂る木々の向こうに桃色の何かが動いた。その瞬間、クリュウは前に出てオデッセイを抜き放つ。
「コンガだよね？」
「そのようですね。数は、見える限りでは二匹です」
ヴァルキリーブレイズのスコープを覗きながら言うフィーリアの言葉に、クリュウはうなずくと横にいるサクラを見る。
「まず僕が突っ込んで囮になるから、その後から突っ込んで来て。一応僕とサクラで何とかするけど、フィーリアは掩護をお願い。それと、新たな敵襲も警戒して」
「わかりました」
「……（コクリ）」
すぐにそう指示すると、クリュウは突貫した。その後をサクラも遅れて突っ込む。フィーリアは荷車を一度岩陰に置くと、ヴァルキリーブレイズを構えたまま二人の後を追う。
前方の木々が少し開けた場所にコンガは二匹いた。その奥にもう一匹を確認したので、合計三匹がいる事になる。
クリュウはまず前方にいるコンガに突進する。すると、今まで背を向けていたコンガが敵襲に気がついてこちらを向いた。そして、敵の姿を確認すると二本足で立ち上がって腕を広げ、腰を激しく横に振って鳴声を上げる。威嚇のつもりだろうか。だが、その程度ではクリュウは臆しない。
「うりゃぁッ！」
クリュウは構わずコンガの頭に剣を叩き込んだ。
「グホァッ!?」
コンガの頭は意外と硬く、その一撃では多少頭を陥没させる程度であった。クリュウは舌打ちして一度後方に下がる。
コンガは頭から血を流しながらも吠えると、四本足を使ってかなりの速度で迫って来る。だが、一直線な為クリュウは一度横へ走ってそれを避けると、無防備な背中に剣を叩き込む。背中が裂け、コンガが悲鳴を上げる。だが、それ以上の追撃はせず、クリュウは一旦下がる。なぜかというと、

「ガオォッ！」
　コンガは声を上げると尻からボフゥッという音を立てて茶色い煙が噴き出した。それはコンガ系最大の脅威である放屁攻撃だ。コンガに後ろから迫るというのはこの危険性をはらんでいる。だからこそ、背中からの攻撃はあまり深追いしてはいけない。フィーリアからの教えだ。
　コンガの放屁が終わると、クリュウはすぐさま突進して剣を叩き込む。だが、コンガはそれを横に飛んで回避。失敗したクリュウに向かって鋭い爪を振るう。
「うわぁッ！」
　慌てて盾で防ぐが、その重い一撃にクリュウは横へ飛ばされた。
　コンガは倒れたクリュウに向かってジャンプした。反射的にクリュウは横へ転がる。その判断は正しく、さっきまでクリュウがいた場所にコンガが激突。陥没した。
「ひぃッ！」
　クリュウはその一撃に恐怖する。今まで何度も戦っているが、毎回毎回厄介極まりない。
　コンガは起き上がると横にいるクリュウに向き直る。クリュウも慌てて立ち上がると剣を構え直す。そして突撃してくるコンガに向かって渾身の回転斬りを叩き込んだ。手に重い衝撃がした後、コンガは横へ吹き飛ばされて倒れ、そのまま動かなくなった。
　クリュウは安堵の息を漏らすと剣を一度振って付いた血を払い腰に戻す。周りを確認すると、すでにサクラは一匹を討伐。残り一匹は頭が吹き飛んで倒れていた。きっとフィーリアが倒したのだろう。しかも二人ともすでに剥ぎ取り作業をしている。相変わらず実力の差はすさまじい。
　クリュウは苦笑いしながら腰の剥ぎ取りナイフを抜き、一度手を合わせてから解体に入る。桃色のコンガの毛皮は結構丈夫なので防具の素材にも適している。
　皮を剥ぐと、コンガの残骸をあまり見ずに荷車の余っている部分に毛皮を置く。サクラとフィーリアもそれぞれ毛皮をその上に重ねる。

「クリュウ様、お怪我はありませんか？」
「うん。平気だよ」
「……めんどくさい」
「さ、サクラ様。そんな事言わずにがんばってください」
「……ガンナーにはわからない。放屁を気にしながら戦う剣士の精神的な疲れは」
「そ、それはそうかもしれませんが……」
「まあまあ、どっち道ババコンガ相手ならフィーリアもフン投げとかを気にしなきゃいけないんだから、みんな同じだよ」
　クリュウが慌てて仲裁に入る。こんな時までケンカをされるのは極めてまずい。いい加減狩場まで来てケンカはしてほしくない。だがまぁ、周りの安全を確保しているからこそ二人はケンカしているのも知っている。危険な時にまでケンカするほど二人はバカじゃない。
「でもこんな海辺にまでコンガが出て来るなんて、めったにないよね？」
「そうですね。異常発生の時ぐらいしかこんな所まで出ませんし」
「……それだけ、ババコンガが率いるコンガの数も多いって事」
「そうだね。コンガを一掃するにしても骨が折れそうだ」
　ため息するクリュウに、フィーリアは優しく微笑む。
「大丈夫ですよ。クリュウ様ならきっと」
「そんな事ないよ。むしろフィーリアやサクラがいればこそでしょ？」
「私はクリュウ様を信じていますから」
　その言葉に、クリュウも笑みを浮かべた。バサルヘルムを被っているので見えないが、その笑顔はとても嬉しそうだ。
「ありがとう、フィーリア」
「え？　あ、はい……」
　だが、フィーリアの表情はどこか暗い。不思議そうに首を傾げると、フィーリアは寂しそうな顔でクリュウを見詰める。
「やっぱり、ヘルムを被っているとクリュウ様のお顔が見れなくて寂しいです」

「へ？　そ、そっかな？」
「はい。あぁ、クックシリーズを身に纏って笑顔を振りまいていた頃が懐かしい」
「そ、そうかな？」
「……これに関してはフィーリアに賛成」
　サクラまでそんな事を言う始末。クリュウは困ったようにため息すると一度ヘルムを脱いだ。柔らかな緑色の髪が解放され、春の若葉のような美しい緑色の瞳が輝く。
　クリュウは道具袋（ポーチ）からタオルを取り出すと汗を拭う。それを見て、フィーリアとサクラの表情が明るくなった。そんな彼女にクリュウは苦笑いする。
「やっぱり、クリュウ様のお顔が見られるのは嬉しいです」
「……ずっとそのままで」
「いや、それはちょっと。ババコンガ相手にそれはキツイって」
「……大丈夫。私が叩きのめす」
「ねぇ、それじゃ僕の存在価値がないでしょ？」
　クリュウはため息すると再びヘルムを被る。その時に二人のものすごく残念そうな表情に少し後ろ髪を引かれたが、この際は無視する。
　というか、そもそもヘルムを勧めたのは確かフィーリアだったような……
　残念そうな表情を浮かべている二人を気にせず、クリュウは荷車の背後へ移動する。二人もすぐに立ち直っていつもの隊列（フォーメーション）で歩き出す。そしてそのまま、森の奥へ向かった。
　荒い息をするクリュウ。そしてぐったりとその場に倒れた。ヘルムを外すと顔や髪は汗でびっしょり濡れている。そんな彼にフィーリアが慌てて駆け寄って来た。
「だ、大丈夫ですか!?」
「うん……、何とかね……」
　笑みを浮かべるも、その笑みはあまりに疲れていて力ない。そんな彼の周りには倒したコンガが何匹も倒れていた。少し離れていた場

所ではサクラが木に背を預けて荒い息をしていた。
つい十分ほど前の事、クリュウ達はいきなりコンガの群れの奇襲を受けた。数にして約二五匹。連携などはされておらず断続的に現れて襲われたのだ。三人は何とか全てを倒したが、戦いは苛烈を極め、激しく動き回ったクリュウとサクラは特に疲れ切っていた。
「これもババコンガの影響？」
水筒に入った水を飲みながらクリュウが問うと、フィーリアはうなずいた。
「そうですね。これだけのコンガが来たという事は、比較的近い場所にババコンガがいる可能性は十分あります」
「この疲れ切った状態で、ババコンガとは戦いたくないね」
「そうですね……」
そこへサクラが戻って来た。その表情はやはりかなり疲れている様子。奇襲だった上にコンガのほとんどが彼女に殺到したからだ。おかげでクリュウはヘトヘトながら何とか切り抜けられたのだが。
「サクラ様、大丈夫ですか？」
「……問題ない。ただ、少し疲れた」
あの我慢強いサクラが《疲れた》と言うのだ。彼女の疲労はかなりのものだろう。
クリュウは汗をタオルで拭いながら立ち上がる。
「一度一拠点（ベースキャンプ）に戻ろう。このまま戦ってもちゃんとした実力は出せないよ」
「そうですね。それがいいと思います。サクラ様は特にお疲れでしょうし」
「……ごめん」
「謝らなくていいよ。それより早く行こう。あんまり長居する訳には――」
ヴォオオオオオオオオオオッ！
突然の鳴き声と共に地面がドシンッと轟音を立てて震えた。三人は驚いて振り返ると、少し離れた場所に巨大な桃色の物体がいた。
コンガよりずっと大きく、頭には鋭い毛が集まって角のようなもの

がある。全身筋肉の塊とも言える強靭な体。腕は大木のように太く、その一撃で木なんか簡単に叩き割りそうだ。
今まで倒してきたコンガとは、まるで別の生き物だ。
その桃色の化け物は周りに転がる同胞の亡骸を見詰める。そして呆然としているクリュウ達を睨み、
「ゴヴァァァァオオォォォッ！」
すさまじい鳴き声と共に腰を激しく振る。コンガと全く同じ威嚇なのに、それとはまるで違う圧倒的な恐怖を感じる。
コンガの親玉――ババコンガだ。
クリュウは舌打ちするとオデッセイを抜き放つ。
「こんな時にッ！」
チームの主力たるサクラが疲れているこの状況。最悪であった。
フィーリアは急いで道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出そうとする。だが、仲間を殺されたババコンガはコンガと同じく四足で走って来る。しかも巨体が故にその速度はずっと速い。
「散ってッ！」
クリュウの掛け声に、フィーリアは閃光玉を諦めて横へ跳んだ。サクラとクリュウも急いで跳んで回避する。地面に倒れたが、何とか一撃はかわせた。
クリュウは慌てて起き上がると、ババコンガはこちらを向いて巨大な爪を振るった。コンガとは圧倒的に違うその射程範囲に、クリュウは慌てて盾を構えるもその重い一撃に吹き飛ばされた。
「あぐぁッ！」
クリュウはまるでボールのように簡単に吹き飛ばされて地面に叩き付けられた。バサルシリーズの防御力のおかげでダメージは少ないが、それでもかなりの威力だ。
ババコンガは容赦なくその巨体では考えられないようなジャンプをして来た。コンガと同じ動きに、クリュウはほとんど反射的に横へ跳んだ。刹那、爆音にも似た轟音と共にババコンガの巨体が地面に激突した。なんとか回避はできたが、そのすさまじい威力は地面すらも破壊ししまった。それを見て、クリュウは絶句する。

「……クリュウッ！」
そこへ突っ込んで来たのはサクラ。その動きはまるで疲れを感じさせないほど速い。そのままの勢いで迫り、ババコンガの横から斬りかかる。厚い毛皮を斬り裂き、真っ赤な刀身が裂いた肉を爆発と同時に焼き尽くす。そのあまりの激痛にババコンガはよろめいた。そこへ間髪入れずに二撃、三撃を叩き込む。容赦ない連続攻撃にババコンガは悲鳴を上げて半歩引いた。そこへ渾身の一撃をその顔面に叩き込んだ。たまらずババコンガは後ろへ跳んで距離を取る。同時にサクラも後方へ下がったが、先程までの勢いを失い、ガクンと片膝を着いてしまった。その表情は苦しそうにゆがみ、額には玉のような汗を掻いている。それを見て、クリュウは慌てて走る。サクラの疲れは相当なものであった。クリュウは道具袋（ポーチ）に手を伸ばして閃光玉を取り出そうとする。が、
「グォアアアアアッ！」
「……ッ!?」
突如横からコンガが襲って来た。あまりにも突然過ぎて盾で防ぐ事も受身を取る事もできずに押し倒された。コンガの人間を超える重量に潰され、体が嫌な悲鳴を上げる。息ができず、声も出せない。
「クリュウ様ッ！」
フィーリアはクリュウの上に乗るコンガに貫通弾ＬＶ２を撃ち込む。頭を撃ち抜かれたコンガは悲鳴を上げる事もなく倒れた。フィーリアはすぐにクリュウに駆け寄ると倒れている彼を抱き起こす。
「クリュウ様！　大丈夫ですか!?」
「ケホゲホッ……。だ、大丈夫だよ……」
クリュウは無理して笑うとフラフラと立ち上がる。フィーリアの制止の声を振り切り、クリュウは走った。気が付くと、周りにコンガが数匹集まっていた。親玉の危機に駆けつけて来たのだろう。最悪だ。
視線をサクラに向けると、彼女は必死に立ち回っていた。ババコンガの鋭い爪を紙一重で避けるとすかさず剣を叩き込む。だが、ババコ

ンガは横へ大きく跳んで回避すると両腕を大きくめちゃくちゃに振り回してサクラを襲う。ガードのできない太刀では大きく下がって回避するしかない。ババコンガはとにかく腕を振り回してサクラを襲うが、それは虚空を切る。そして、ババコンガは小さくジャンプするとフィニッシュとばかりに背中から地面に激突。すさまじい地響きと共に地面が揺れる。なんという重量であろうか。

いつの間にか片膝を着いていたサクラは再び突貫しようと構える。

「サクラッ！　目を閉じてッ！」

サクラの返事も聞かず、クリュウは道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出すとババコンガに向かって全力で投げた。クリュウはそのまま勢い余ってたたらを踏む。

放物線を描いて飛んだ閃光玉はババコンガの眼前で炸裂。すさまじい光が爆発した。

「フガアアアアアッ!?」

悲鳴を上げてババコンガはその場で激痛の走る目を掻き乱しながらもがき苦しむ。他のコンガも同様だ。

サクラは安堵の息を漏らすとその場に膝を着いた。すかさずフィーリアが駆け寄る。

「サクラ様！　大丈夫ですか!?」

「……何とか」

そう返すサクラの息はかなり荒い。さすがにコンガ約二〇匹の波状襲撃を受けた後にババコンガでは、歴戦のハンターであるサクラでも辛いらしい。

「今のうちに逃げるよッ！」

クリュウの叫びに二人はうなずく。

サクラはフィーリアの手を受けずに立ち上がると、そのまま走り出す。フィーリアも荷車を引いて急いで離脱する。残されたクリュウはとにかく二人が安全な場所まで行く時間稼ぎをするつもりでいた。だが、もちろん真正面から戦う訳ではない。クリュウ一人ではまだ荷が重過ぎる。とりあえず、ババコンガの視界が復活したらもう一度閃光玉を投げつけるつもりでいた。

そろそろだろう。クリュウは道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出す。そのタイミングはまさに絶妙であった。刹那、ババコンガは顔を真っ赤にして腰を激しく振った。怒り状態なのだろう。

クリュウは多少恐怖しながらもピンを抜いて投げつける。ここまではうまくいった――だが、怒り状態という事を、クリュウは計算に入れていなかった。

「フゴォアアアアアアアアッ！」

ババコンガは突如突進してきた。そして、閃光玉はその速度に対応できずにババコンガの背後で炸裂した。その光景に、クリュウは声にならない悲鳴を上げる。

ババコンガはそのままクリュウの目の前まで迫ると、その鋭い爪を豪快に振るった。木をも斬り刻むその一撃を喰らえば、クリュウの大怪我は必死であった。だが、クリュウの才能はかなりのものであった。とっさに盾を構えながら後方へ飛んだ。その瞬間盾にすさまじい一撃が炸裂した。後ろへ跳んで衝撃を和らげたので腕も折れずに済んだようだ。

「あうぅッ！」

だが、クリュウのダメージは相当なものであった。地面を二転三転して倒れる。急いで起き上がろうとするが、体が思うように動かない。そこへババコンガが迫る。クリュウは動かぬ体にムチを打ってなんとか横へ回避した。だが、その判断が間違いだった事を後に後悔した。

「フゴォッ！」

背後へ転がったクリュウに向かってババコンガは容赦なく放屁攻撃を炸裂させた。爆音にも似た音と共に茶色いガスが放出される。クリュウはそれに直撃し、そのすさまじい風圧に吹き飛ばされた。

投げ出されて地面を転がった後、クリュウは止めていた息を吐いて新たな空気を吸い込み――

「ゲホォッ！　ゴホッ！　うげぇッ！　うっぷ……ッ！」

すさまじい悪臭にクリュウは苦しむ。

刺激臭なのか、目まで痛くて涙が出て来る。そして何よりもすさま

じい悪臭。生ゴミの臭さなんてこれに比べたら無臭と断言できるだろう。それほどまでに臭い。
あまりの悪臭に、クリュウは吐き気までしてきた。
悪臭、目の痛み、吐き気、さらにはあまりの臭さに呼吸困難。クリュウは完全に行動不能に陥っていた。
「うげぇ……ッ！　あぐぁ……ッ！」
まともに呼吸できずに苦しむクリュウに、ババコンガは反転して正面を向く。クリュウはそれにすら気が付かない。
ババコンガは容赦なく目の前で苦しむ獲物に鋭い爪と大木のような腕を振り上げる。その時、すさまじい光がババコンガの正面で炸裂した。
先程と同じ閃光玉。ババコンガは再びもがく。その隙に突っ込んで来たのはフィーリアだった。
「クリュウ様！　うっぷ……ッ！」
クリュウに駆け寄って抱き上げたまでは良かったが、あまりの臭さに一瞬手を離しそうになる。だが、我慢して彼に肩を貸してそのまま走り出す。
後ろでババコンガの怒号が響くが、フィーリアは無視して走る。その横でほとんど引っ張られるようにして走るクリュウは、いまだかつでない悪臭に気を失いそうになっていた。
二人が逃げ込んだのは沿岸部であった。先程コンガを一掃したのでここには一切モンスターはいなかった。
フィーリアの肩を借りながら歩くクリュウに先に到着していたサクラはそのぐったりとした姿を見て目を見開く。
「……クリュウッ!?　どうし――う……ッ！」
サクラの無表情が崩れ、ものすごく嫌そうな顔をして鼻をつまんだ。なんという威力であろうか。
クリュウはフィーリアから離れるとヘルムを脱ぎ捨ててそのまま走って浅瀬に倒れ、
「おえぇ……ッ！」
ついに我慢できずに嘔吐（おうと）した。その際、二人は視線を逸

らしてくれていた。二人の小さな心やりに感謝する。
フィーリアはいまだに悪臭と吐き気で苦しむクリュウに近寄ると、道具袋（ポーチ）から消臭玉を取り出して地面に叩き付けた。すると青白い煙が噴き出し、クリュウ、そして彼と接触していたのでちょっと臭いが移ったフィーリアを包み込んだ。
煙が晴れると、そこには顔の半分を海に洗われながらぐったりと倒れるクリュウが……
「く、クリュウ様ッ!? ご無事ですかッ!?」
「……あ、あんまりご無事じゃない」
消臭玉の強力な消臭効果によってやっとの思いで悪臭から解放されたクリュウ。空気が、こんなにおいしいとは知らなかった。
とりあえずフィーリアは浅瀬に倒れるクリュウを砂浜に引き上げると、いつの間にかすっかりオレンジ色に染まった空を見上げ、サクラに向き直る。
「今日はここまでにしましょうか。もうすぐ日は沈みますし、何よりクリュウ様の戦意が絶望的なぐらい下がってますし」
「……そうね。今日はもう拠点（ベースキャンプ）に戻って明日に備えた方がいい」
もはやもうババコンガとの戦いにすっかりやる気を失い、空気の味に感動している一応リーダーのクリュウを置いて、二人は結論を出した。
「クリュウ様、今日はもう終わりにして拠点（ベースキャンプ）に戻りましょう」
「……わ、わかった」
クリュウはフラフラと立ち上がる。そして、転がっていたヘルムを持ってサクラを先頭にいつもの形で拠点（ベースキャンプ）に向かって歩き出す。
今日の戦いを終えた三人を、そっと夕日の光が淡く照らし上げていた。

第４９話　狩場で過ごす三人の夜

三人が拠点（ベースキャンプ）に戻る頃にはすでに日は沈み、クリュウ達は武器や荷物を置いて食事の用意に入る。
今日はこんがり肉とサクラが調達して来てくれたモスの肉と野菜やキノコがたっぷり入ったスープである。クリュウ一人の時とは大違いだ。
「おいしいね」
「えへへ、クリュウ様にほめてもらって嬉しいです」
「……悔しいけど、おいしい」
エレナには負けるが三人の中では一番料理がうまいフィーリア。今日の料理も彼女が担当したのだ。クリュウとサクラは実力的には同程度である。
「ハンターは自給自足ですからね。これくらい当然です」
胸を張って言うフィーリアに、クリュウは「すごいすごい！」と大喜びする。その無邪気な姿を見て、サクラは小さな笑みを浮かべた。
食事を終えると、三人は焚き火を囲んで暖を取る。と言ってもそれほど寒くはないが。
焚き火を囲む三人は明日に備えての作戦会議を始めた。
「とりあえず明日も今日と同じくまずはコンガの掃討をしましょう。そしてババコンガを誘い出します。沿岸部なら最悪海に逃げ込めますから、そこを主戦場としましょう」
「……罠は先に設置しておこう。その方がいい」
「そうですね。次に戦法についてですが、今までと同じくクリュウ様とサクラ様が前衛でババコンガと肉薄し――クリュウ様、そんなものすごく嫌そうな顔をされても困りますよぉ」
苦笑いするフィーリアの見詰める先には、持って来た爆弾の点検を行っているクリュウ。その表情にはいつもの彼の笑みはない。珍しく眉をしかめている。
「もう罠を仕掛けて動きを止めたらありったけの爆弾でぶっ飛ばそうよ。それを繰り返してれば倒せると思う」

クリュウの言葉にフィーリアは横にいるサクラに耳打ちする。
「クリュウ様、余程あの悪臭が嫌なんですね。いつものクリュウ様の発言とは思えません」
「……気持ちはわかる。私だってあんなのを受けたらやる気を失う」
恐るべきババコンガの放屁攻撃。肉体はもちろんだが精神的ダメージは計り知れないほど破壊的である。いつも真っ直ぐなクリュウが曲がってしまうのだから。
「クリュウ様。お気持ちはわかりますががんばりましょう。さすがにババコンガを倒せるほど爆弾はありませんし、これも試練です」
フィーリアの言葉にも、クリュウはどこか不満そうだ。
正直言ってもうあんなのはごめんであった。歴戦のハンター達が皆嫌うのもうなずける。あんな悪臭、いくら何でもひど過ぎる。またあれを喰らうのかと思うとやる気も失せる。クリュウは力なくため息する。と、
「……じゃあ、やめる？」
「え？」
驚いて顔を上げると、サクラが隻眼でじっとこちらを見詰めていた。その瞳は真剣で、凛として鋭い。
「や、やめるって……」
「……そんなにやりたくないなら、やめればいい。引き時もハンターには必要」
サクラの言葉にクリュウは絶句する。だが、それは悪い事じゃない。ハンターは依頼を必ず成功させなくてはならないという規則はない。無理と思ったら途中でやめる事も可能だ。依頼を成功させる事よりも自分の命を優先する。ハンターとして、人間として、それは当然の事だ。もちろん途中でやめても罰則はない。ただし、信用は失うが、これは長い時間を掛ければ取り戻す事もできる。それに対し、命というものは決して戻らない。
「……引き際を見極めるのも、ハンターとしては重要な事。ここでやめても、誰もクリュウを責めたりはしない」
サクラの言うとおりだ。ここでやめても構わない。だが、

「やめないよ。村の一大事なんだから」
クリュウは先程までの疲れたような表情から一転して真剣な瞳で見返す。
――そう、これは村の危機に直結する。エレナや、村のみんなの命に関わるのだ。
思い出した。
今回はいつもと違う。村の危機を救う戦いなのだ。たかが悪臭くらいでやめる訳にはいかないし、そんな気持ちもサラサラない。
サクラのおかげで、大切な事を思い出した。
「ありがとうサクラ。おかげで目が覚めたよ。必ず依頼を完遂させよう」
クリュウの決意した瞳と言葉に、フィーリアはぱぁっと笑みを浮かべ、サクラも口元に小さな笑みを浮かべる。
「……信じてた。クリュウがそう言うのを」
そう言って、サクラの片方しかない瞳は柔らかく弧を描く。
「……本当に良かった。もしクリュウがやめてたら、私はクリュウを嫌ってた」
「え？　そうなの？」
「……努力して諦めたのなら、それはいい事。努力もせずに諦めるのは悪い事」
「確かに、サクラの言うとおりだ」
「もちろん、引き際を見極めるのも、ハンターとして大切な事ですよ」
「……クリュウは、いいハンターになる」
「そうかな？」
「はい。クリュウ様はきっとすばらしいハンターになりますよ」
フィーリアはまるで疑う事を知らないかのような信じ切った笑みを浮かべる。そんな彼女の笑みにクリュウも自然と笑みが浮かぶ。サクラもどこか嬉しそうに小さく笑った。
元気ドリンコを飲み、クリュウは小さく微笑む。
「まぁ、これ以降ババコンガとは戦いたくないね」
「それは皆さん仰られますね。私も正直ちょっと」

「フィーリアはババコンガと戦った事はあるんでしょ？」
「はい。新人だった頃に一度だけ。あれは確か十二歳の頃ですね。その頃はまだランポスシリーズにチェーンブリッツという初級装備で挑みましたが、コンガの掃討とババコンガとの戦闘は三日間掛かりました。疲れた上に放屁やフンを散々喰らって、人には見せられないようなひどい有様でしたね」
　恥ずかしいのか、フィーリアは頬を赤らめて髪に触れる。そんな仕草もかわいいのだが、クリュウとしては十二歳でババコンガを倒したという所に経験の差を感じずにはいられない。クリュウは十二歳でようやくハンター修行を開始したというのに。クリュウは情けなくて頭を抱える。
「……私も同じ十二歳の時に一度。私も同じように放屁やフンを喰らって悶絶した」
「ですよね。あれはもう二度と戦うもんかと思ってましたが」
「……まさかまた戦う事になるとは」
「……うぅっ、ごめん」
「べ、別にクリュウ様を責めている訳ではないんですよ!?　ですからそんなに落ち込まないでください！」
　あわあわとフィーリアは誤解だと言うが、クリュウとしては二人のババコンガ初挑戦の年齢が一番大きなダメージであった。
「ま、まあ僕は僕のペースでがんばろう。うん。焦る必要はないんだから」
　一人納得するクリュウにフィーリアは首を傾げつつおもむろに立ち上がった。
「どうしたの？」
「あ、いえ、汗を掻いたので向こうの滝で水浴びでもしようかと……」
「え？」
　その瞬間、クリュウはイャンクック戦の後の事件を思い出した。
　水浴びをしていたフィーリアの真っ白の肌と、腰まで伸びた金色の髪が月に照らされ、キラキラと幻想的に輝く、月の女神のような姿を……

そんな事を思い出して顔を真っ赤にするクリュウ。フィーリアもそれを悟ったのか、頬を赤く染めてうつむいてしまう。一人、知らないサクラだけはそんな二人をじっと無表情で見詰めている。
「……私も水浴びする」
「あ、はい。この向こうに滝があるんです。どうせなら一緒に行きましょう」
フィーリアの言葉にサクラはうなずく。そして二人の少女は男子禁制の世界に向かって行った。
一人残されたクリュウはする事もなく天幕（テント）の中に入ると支給されている毛布に包まる。まだ寝る訳ではないが、疲れのせいか横になりたかった。
しばらくぼーっと入り口の向こうに見える焚き火を見詰めていると、フィーリアとサクラが戻って来た。一体向こうでどんな会話をしていたのか気になったが、二人の表情を見て納得する。
サクラは相変わらず無表情。フィーリアはどこか困ったように頬を掻いていた。きっと二人で水浴びはしたまでは良かったが、会話が弾まなかったのだろう。
「あれ？　クリュウ様お休みですか？」
フィーリアが不思議そうに尋ねてきたのでクリュウは起き上がる。
「いや、ちょっと横になってただけ。じゃあ僕も水浴びでもして来ようっと」
「あ、ではこのタオルをお使いください」
そう言って彼女が差し出して来たのは自分が首に巻いているタオル。反射的にクリュウは首を横に振って自分のタオルを取り出した。いくら何でも女の子が使った後のタオルを使えるほどクリュウは大人ではない。
「じゃあ行って来る。先に寝ててもいいから」
「あ、わかりました」
フィーリアの返事にクリュウは安心して滝に向かった。残された二人は結局何の会話もなくそれぞれ毛布に包まった。もちろん、一つしかないベッドは空けておいて。

水浴びから戻って来たクリュウはどちらもベッドを使っていない事に苦笑いした。もちろんクリュウも使うつもりはない。
クリュウはさっき自分が巻いていた毛布を探したが、なぜか見つからない。よく見ると、なぜかサクラが包まっていた。出すのが面倒だったのだろうか？
クリュウはとりあえず残る二枚のうちから一枚の毛布を取り出して二人からなるべく離れた場所に横になった。困った事に二人ともが天幕（テント）の両端にいるので、自然とクリュウは中央に寝る事になる。どうやら二人の仲はまだあまりいいとは言えないらしい。狩りになれば二人とも見事な連携をするのだが、こういう日常面ではそれはないらしい。
仲良くなってほしいのだが、クリュウの願いに反してフィーリアはともかくサクラはフィーリアと仲良くなるつもりはないらしい。困ったものだ。
クリュウはヘルムをすぐ横に置くと眠そうにあくびをする。ふと見ると、二人とも疲れていたのだろう。小さな寝息を立てて眠っている。考えてみれば、二人ともハンターとしてはかなりの実力者だが、女の子なのだ。フィーリアに至っては一歳年下だ。その寝顔はかわいい。もっとも、サクラは寝る時も眼帯は外さないが。
いつか、二人のように強いハンターになりたい。そう思った。それこそ、二人を守れるぐらい強いハンターに。
これから先、この三人でずっと狩りを続けるのだろうか？
サクラは村に腰を据えてくれたが、また出る可能性もある。フィーリアはサクラのように腰を据えた訳ではないのでまた旅立ってしまうかもしれない。
こうして三人でずっと狩りをしていたいが、どうなるかはわからない。
それでも、例え別れる事になっても、今度は前のようにケンカ別れをせずに、ちゃんと笑顔で見送ろう。そう決めていた。
だがまぁ、今はまだこの三人でチームを組んでいたい。
サクラと連携を組んで、フィーリアに背中を預け、モンスターに向

かって突撃する。
そんな戦い方を、ずっと、二人と一緒に……
そんな事を考えながら、クリュウはそっと瞳を閉じた。
明日はババコンガやコンガとの戦いがある。今日の疲れを残さないように、もう寝よう。
……できる事なら、もう悪臭はごめんだ。
そんな事を願いながら、クリュウは眠りに落ちた。

第５０話　ババコンガ迎撃作戦

翌朝、用意を整えたクリュウ達は再び密林に入った。
まだ朝早い密林は静かであった。葉には朝霧が煌き、沿岸部は海風が心地いい。さざ波の音、風に木々が揺れる音が耳を優しく包む。眠りから覚めたばかりの生命の息吹を感じながら、クリュウは大きなあくびをした。
「眠いんですか？」
フィーリアが心配そうに問うと、クリュウは苦笑いする。
「昨日は疲れたからね。まだ寝足りないくらいだよ」
「あまりご無理をされない方がいいです。もう少し休まれてからにしますか？」
「ありがとう。でも遠慮しとくよ。あんまり僕のせいで二人の足を引っ張りたくないから」
「そ、そんな！　私は全然そんな事は――」
「あはは、ありがとう。でも実際僕は二人に比べたらまだまだひよっ子だよ。だからまだまだ二人にも迷惑を掛けちゃうからね。あんまり二人に負担を掛けたくないんだ」
「クリュウ様……」
クリュウは自分を見詰めるフィーリアに小さく微笑むと、出撃前に徹底的に磨き上げたオデッセイの柄を握った。
クリュウ達はいつものように隊列を組んで密林を進む。朝早いせいか、モンスターの数は少ない。時折ランポスやコンガが現れるが、その数は昨日とは比べ物にならないほど少ない。
さらに奥に進み、鬱蒼と木々が生い茂る中を歩く。しかしババコンガは現れない。
「いないね」
クリュウがつぶやくと、フィーリアも「そうですね」と辺りを見回しながら言う。
「……もしかしたら洞窟の中かもしれない。でも狭い洞窟でババコンガと戦うのは自殺行為。放屁されれば洞窟内にいる限り悪臭に苦し

む」
「そうですね。あまり深追いはしない方がいいかもしれません」
サクラの言葉にフィーリアも賛同する。確かに空気の逃げ場が少ない洞窟の中で放屁なんかされたら全滅する恐れもある。そんなのは勘弁だ。
「仕方ない。とりあえずあまり深追いはしない方がいい。一度海岸へ戻ろう」
「そうですね。それが一番です」
「……わかった」
クリュウの言葉に二人はうなずくと、三人は元来た道を戻る事にした。クリュウは改めてそう簡単に目的のモンスターとは出会えない事を実感した。
三人が海岸に戻る頃には日も結構上がっていた。ここまで戻るのに来た時以上にモンスターに襲われたが、もちろん全て撃退した。しかしババコンガは現れなかった。
「ふぅ、ちょっと一休みしよ」
そう言ってクリュウは小さな岩に腰を下ろすとヘルムを脱いだ。フィーリアとサクラもそれぞれ地面に座った。
ここまで来るのでランポスを五匹、コンガを十匹。不気味な羽音を響かせて麻痺毒を分泌する針で襲って来る巨大なハチ型のモンスター、ランゴスタを三匹倒した。目覚めたばかりのモンスターは空腹のせいかいつもよりも凶暴でてこずった。さらにババコンガを求めて歩き回ったせいで、特にクリュウは疲れていた。
「どうぞ」
「あ、ありがとう」
疲れているクリュウを気遣ってフィーリアが元気ドリンコを渡してくれた。クリュウはそれを受け取ると一気に飲み干す。これで幾分かは楽になるだろう。
「いないね」
ポツリとつぶやいた言葉に、フィーリアもため息しながらうなずく。

「すでに今日だけでコンガは十六匹倒しました。これだけ仲間を殺（や）られたら、親玉であるババコンガが動かないはずはないんですが」
「そうだよねぇ、これがドスランポスならとっくに遭遇してもおかしくないし」
「これ以上動き回っても仕方ありません。ここで待ち伏せするのがいいでしょう」
「そうだね。サクラはどう思う？」
「……クリュウの指示に従う」
どうやら満場一致のようだ。三人しかいないが。
「本当は罠を設置したいけど、時間が経って使えなくなったら困るからやめとこう」
「そうですね。では私は狙撃できる場所を探してきます。まぁ、だいたい場所は決まってますが」
セレス密林は近場という事もあり最も三人が訪れる狩場だ。その為どこに何があるか、どこが戦いやすいかなど、三人は熟知していた。そしてフィーリアはどこが狙撃に有効な場所かも調べている。ガンナーの基本だ。
フィーリアは二人から離れると狙撃ポイントへ移動する。残されたのは前衛を担当するクリュウとサクラ。
「じゃあ僕らも岩陰に隠れよう」
「……（コクリ）」
クリュウとサクラも荷車を引いて突然ババコンガが現れても見つからないように岩陰に移動する。
「とりあえずここに隠れて――」
「……ッ！」
サクラは突如剣を抜くと振り向きざまに一閃を振るった。ガンッという鋭い音に振り返ると、そこには人の背丈くらいはある巨大な蟹がいた。サクラは構わず剣を振るう。堅固なヤドに剣が弾かれても、構わず剣を叩き込む。
「ギャーオワァ……」

不気味な断末魔の声の後、それは鋏を投げ出して倒れた。
サクラはそれを見て止めていた息を吸うと、剣を戻した。
「び、びっくりしたぁ。ヤオザミか」
クリュウはオデッセイを納めると小さくため息した。
ヤオザミとは主に密林や砂漠の水辺などに生息する蟹型のモンスターだ。ダイミョウザザミの幼生らしいが、全てのヤオザミがダイミョウザザミになるのではないらしい。詳しい事はギルドでも不明だそうだ。
人間並みの大きさのヤオザミは硬いヤドを盾にして、その大きなハサミで攻撃してくる。厄介なのはまず一つに硬いヤドもだがそのスピードである。通常は遅い動きだが、時には人間の全速力に匹敵する速さで動く事もあるのだ。そしてもう一つは土の中に潜んでいるという事。その為見つけるのが難しく、今みたいに突然現れて襲われる事もあるのだ。
クリュウとサクラは別の岩陰に荷車を置くとヤオザミの剥ぎ取りをする。その殻はもちろんいい素材になるが、一番の魅力はザザミソと呼ばれる内臓の部分だ。一概にザザミソと言うが、甲殻種は他にもいるのでその種類によって異なるが、どれも大変な美味なのだ。保存が難しく需要が高い高級素材なので、高値で売れる。
二人は運良く良質なザザミソを手に入れた。状態が悪いと売れない事もあるのだ。
「いやぁ、いい収入になるぞ」
「……ええ」
「あ、さっきは助けてくれてありがとう。僕全然気が付かなかったよ」
「……礼はいらない。当然の事」
サクラはそれだけ言うと岩陰に腰を下ろした。クリュウもそっと隣に腰を下ろすとヘルムを脱ぐ。やっぱりヘルムは窮屈（きゅうくつ）でクリュウはあまり好きにはなれなかった。しかしだからと言って着けない訳にもいかず、こうして時折脱ぐようにしている。なぜか、二人共その時をとても楽しみにしているらしい。
「フィーリア、そろそろ位置に着いたかな？」

辺りを見回すが、彼女の姿はない。一体どこから援護射撃してくれるのだろうか。まぁ、彼女だったら心配はないだろう。フィーリアの腕はクリュウが一番良く知っている。
「まぁ、背中はフィーリアに任せて、僕達は前に――」
クリュウが話している最中、スッとサクラがクリュウの手に自分の手を添えた。驚くクリュウをサクラはじっと見詰める。隻眼の黒い、吸い込まれそうな瞳が、クリュウを捉える。
「さ、サクラ？」
「……嫌」
「え？」
「……二人きりの時に、他の女の名前は言わないで」
そう言うと、サクラは両手でクリュウの手を包み込む。温もりが、伝わる。
「さ、サクラ」
「クリュウ……」
サクラはじっと、うるんだ隻眼でクリュウを見詰める。
クリュウはいきなりの事にびっくりして動けなくなる。狩場での緊張感が、解けていくような気がした。
サクラはきれいだ。整った顔に薄桃色の唇、いつもは凛としている瞳も、今は柔らかい。そんなかわいい子が目の前にいて、しかもじっとこちらを見詰めている。そう思うと、今まであまり意識してなかった恥ずかしいさが込み上げてくる。クリュウは慌てて視線を逸らそうとするが、サクラはクリュウの両頬を押さえてそれを阻止する。
「さ、サクラ……ッ！」
「……ダメ。私を、見てて」
サクラはそう言うと、そっと朱色に染まった顔を近づけて来る。柔らかそうな唇が、クリュウに迫る。二人の唇が、そっと、合わさ――
「……ッ！」
「うわぁッ!?」
突如サクラはクリュウを突き飛ばした。刹那、二人を隠す岩に弾丸が炸裂した。その位置は二人が唇を合わせる、ちょうどその場所だっ

た。
「な、何ッ!?」
クリュウは驚くが、突如背中が凍り付いた。それはすさまじい恐怖であった。恐る恐る振り返ると、海とは逆側にある何の変哲もない岩壁の一角から、ものすごいダークオーラが噴き出していた。そっと双眼鏡で確認すると、岩の間の人一人が入れそうな亀裂の中に、こちらにピタリと銃口を向けたフィーリアがいた。
「ふぃ、フィーリア?」
「……邪魔者」
サクラはキッと一度フィーリアを睨むと、いつもの無表情に戻って剣の手入れをする。クリュウはそんなサクラを一瞥し、再びフィーリアを見る。せっかく隠れているのに気配バレバレである。もしかしたらババコンガも気づいてしまうかもしれない。と思っていたら、その気配は徐々に収束し、再び気配は消えた。今のは一体なんだったのだろう?
クリュウはふと岩に突き刺さった弾を見る。確実に狙われた。あのフィーリアが、自分達を狙った。一体何が彼女を暴走させたのだろうか。
「フィーリア。君に背中を任せて……いいんだよね?」
複雑な乙女心などまるでわからないクリュウは、どうすればいいかわからず、ちょっと不安になりながらも、岩陰から辺りを見張った。
「まったく!　油断も隙もないんだから!」
フィーリアは不機嫌そうに唇を尖らせると、再び可変倍率スコープで二人を見る。どうやら今の一撃でサクラは引いたようだ。
「クリュウ様の唇を死守できて良かった……」
フィーリアは胸を撫で下ろす。
しかしもしも、あのままクリュウとサクラが唇を合わせていたら、自分はどうしていただろうか。それを見て冷静でいられただろうか。そして、二人に再び会った時、今までのように話せるだろうか。
――クリュウは、サクラの事を、どう思っているのだろうか。
不安が胸を包む。

もしも、二人が相思相愛だったら、自分は、どうすればいいのか。
「そんなの……嫌だよ……」
クリュウとサクラのラブラブな光景なんて、見たくない。だって、自分はクリュウの事を……
バァオオオオオオオオオオッ！
突如響いた空気を震わす咆哮に、三人は反射的に空を見上げた。すると、晴れ渡った空から何か巨大なものが落下して来た。
ドオオオオオオオオオン……ッ！
地響きと共に着地したのは昨日見た桃色の獣――ババコンガだ。
クリュウは道具袋（ポーチ）から閃光玉を掴むとギュッと握る。
バァンッ！
銃声が響き、ババコンガの桃色の毛にさらに鮮やかなピンク色の塗料が付着した。同時にあの独特の匂いが辺りに流れる。フィーリアが撃ったペイント弾だ。
ババコンガは突然の事に鼻を動かして辺りの匂いを嗅ぐ。しかしすでに辺りにはペイントの匂いが充満していて三人の匂いはかき消えている。
ババコンガがこちらを振り向いた瞬間、クリュウは閃光玉を投げた。その後すぐに岩陰に隠れる。刹那、辺りをまばゆい光が包み込んだ。だがそれも一瞬、光が止むとすぐに二人は岩陰から飛び出す。同時に、フィーリアが一斉射撃を開始。もがくババコンガに無数の銃弾が叩き込まれる。
「……クリュウは奴を引き付けておいて。その間に私が罠を張る」
「え？　あ、わかった」
クリュウは驚いた。いつもならサクラが引き付けている間にクリュウが罠を張るからだ。しかし彼女にも何か考えがあるのだろう。決して、ババコンガに近づきたくないという理由ではないはずだ。うん。
クリュウはサクラの言うとおりにババコンガに突貫した。
ババコンガは視界を奪われてもがき苦しんでいる。その顔や腹、腕などには昨日サクラが付けた傷があった。しかし、たった一日でその

傷口は塞がっている。なんていう常識外れの治癒能力だろうか。だが、まだ完全ではないだろう。そこが弱点となるはず。
　クリュウはオデッセイを抜き放つと、ババコンガの頭に剣を叩き込んだ。
「バァオオオォォォッ！」
　視界ゼロの状況でいきなりの激痛にババコンガは悲鳴を上げる。クリュウは構わず第二撃を叩き込む。鋭い刃がババコンガの側頭部に炸裂する。
「ガオオォォォッ！」
　ババコンガは腕を振り回して暴れる。クリュウは一度後ろに下がって距離を取ると、横に回り込んでその脇腹に剣を叩き込む。ババコンガもすかさず腕を振り回してクリュウを吹き飛ばそうとするが、クリュウは再び後ろに飛んでそれを避けた。その瞬間、ババコンガに無数の弾丸が雨のように降り注ぐ。フィーリアからの援護射撃だ。
「グオオォォォッ！」
　ババコンガは悲鳴を上げて仰け反る。その間にクリュウは再びババコンガの横に回って剣を叩き込む。と、突然ババコンガは動きを止めて尻を突き出した。その動きにクリュウは声にならない悲鳴を上げて横へ飛ぶ。刹那、ババコンガの尻から茶色いガスが放出された。放屁攻撃だ。クリュウは地面に転んだが、回避できた。
「あ、危なかった」
　クリュウは立ち上がるとふぅと息を吹く。そして、再びババコンガに突撃した。
　サクラはクリュウがババコンガに向かって走って行ったのと同時に走り出すと、別の岩陰に隠していた荷車に駆け寄る。そしてそこからシビレ罠ともう一つを取り出す。それは紙に包まれた大きな生肉。正確には粉状にしたマヒダケをたっぷりと塗ったシビレ生肉だ。これを食べたモンスターはシビレ罠と同様に一時的だが体が痺れて動けなくなる。ババコンガの旺盛な食欲を利用したサクラのとっておきだ。
（……これで、クリュウにほめてもらえる）

ババコンガを倒す為というのが第一目標であり、決してクリュウに喜ばれたりほめられたりする事が何にも変えがたい最高の勲章であり目標とは彼女は思っていない……たぶん。
シビレ罠とシビレ生肉を持つとサクラは振り返る。現在ババコンガはクリュウが引き付けてくれている。
今のうちだ。
サクラはクリュウの少し後ろにシビレ罠を設置し、すぐに少し離れた場所にシビレ生肉を置く。これで準備完了だ。
サクラはクリュウを向く。するとクリュウが無理な体勢のまま横へ跳んだ。当然だが彼はそのまま転倒した。刹那、ババコンガが放屁。どうやら彼はあれを避ける為にあんな無茶な体勢で跳んだらしい。本当に嫌なのだろう。
クリュウは立ち上がると再びババコンガに向かって突進した。サクラも急いで剣を構えるとクリュウを追って突撃した。
「……クリュウッ！」
その声にクリュウは足を止めた。そこへサクラが駆け寄って来る。
「……シビレ罠とシビレ生肉、設置完了」
「わかった」
サクラがシビレ生肉まで持って来ていた事は意外だったが、彼女の策には感心せざるを得ない。
クリュウは剣を構える。サクラも少し横にズレると飛竜刀【朱】を抜き放った。
ババコンガはようやく視界が回復し、目の前にいる敵を初めて見た。それは昨日仲間を殺し、自らにも攻撃してきた小さな敵であった。そのうちの一人は昨日自分に傷を負わせた奴。
「ブァァァァァァッ！」
ババコンガは頭に血が上って怒り狂う。顔を真っ赤にして目の前の敵に襲い掛かった。
ババコンガはその巨体では考えられないような跳躍をする。そしてそのまま腹を下にして二人の上に落下。クリュウとサクラはお互いに反対に跳んでそれを回避。獲物を失った体は空中で止める事も

できず地面に激突。地面が揺れて陥没する。
「何て威力なんだよッ！」
「……クリュウッ！」
サクラの声にその意味を悟ると剣を納めて走った。その先にはすでにサクラが先導するように走っている。後ろからババコンガが追い掛けて来るのを感じた刹那、銃声が轟いてババコンガの悲鳴が上がった。フィーリアからの援護射撃だ。
岩陰から狙撃するフィーリアは二人が逃げられるように連続して貫通弾ＬＶ１を連射する。銃口に取り付けたロングバレルと射程距離の長い貫通弾のおかげでこの辺一帯全てカバーできる。
ババコンガは見えない敵から執拗な攻撃に堪らず後ろへ跳ぶ。だがそれでもフィーリアからの攻撃は止まない。
「あともう少し」
フィーリアは空薬莢を全て吐き出す。カランカランと軽い音を立てて空薬莢が地面に落ちた。すでに彼女の周りには無数の空薬莢が転がっている。
フィーリアは目にも留まらない速度で再装填すると再びスコープを覗く。すると、すでに二人は罠の後方に着いていた。それを見てフィーリアはスコープから目を外した。
「うーん、私も前に出た方がいいのかな？」
基本的にフィーリアは相手（モンスター）と間合い取って動き回りながら攻撃する中距離戦型のハンターだ。なのにあえて狙撃を選んだ理由は……
「クリュウ様には悪いですけど……、女の子がフンまみれになるのはちょっと……」
困ったようにちょっと赤くなった頬を掻くフィーリア。年頃の少女であるフィーリアの乙女心であった。
「でもまぁ、動き回らず集中できるからいいんですけどね」
苦笑いしながらそう言うとフィーリアは再びスコープを覗き込む。その先にはクリュウがいる（彼女の視界ではサクラはおまけ）。
彼のかっこいい姿に一瞬ドキリとした。自然とグリップを握る手

にも力が入る。
「クリュウ様は、私が守ります！」
すさまじいフィーリアの銃撃の嵐にババコンガが後退したのを見て、クリュウはやっぱりフィーリアは頼りになると思った。おかげで二人は無事に罠まで到達できた。二人が準備を終了すると同時にタイミングを見計らったようにフィーリアの銃撃が止む。日頃の連携のたまものだ。
銃撃が止むとババコンガは怒り狂いながら突進して来た。クリュウはオデッセイを構える。
そのまま激突するかと思われたが、ババコンガはいきなり跳び上がって上から襲って来た。クリュウは慌てて横へ跳ぶ。サクラも舌打ちすると横へ跳んだ。一瞬前まで二人がいた場所にババコンガが落ちて来る。
ババコンガの腹が地面に当たって瞬間、ドゴォンッと大きな音を立てて地面が陥没した。
だが大振りな攻撃な分隙も大きい。クリュウはすかさず地面を蹴って跳ぶとオデッセイで横から斬り掛かる。ババコンガは起き上がると同時に二足で立つと腰を張った。その瞬間、腹に叩き込んだ一撃が弾き返される。
「なぁッ!?」
クリュウは手加減なく剣を叩き込んだので腕が痺れた。
「ヴォフッ！」
ババコンガは再び四足に戻るとクリュウに向き直る。だが、そこへ銃弾の嵐が降り注ぐ。さらに横からサクラが突進。構えた飛竜刀【朱】をババコンガの横腹に叩き込む。迸る血の雨の中、サクラはガッと右足で体の勢いを止めると、そこで体を回転させながら横一線に強力な一撃を叩き込む。刃がババコンガの硬い筋肉に刺さって血が噴き出した。だが、サクラは己の失態に気づいた。
「……ッ!?　ぬ、抜けない……ッ！」
ババコンガの強靭な筋肉に刺さった剣はガッチリと筋肉に包まれてビクともしない。サクラは必死になって抜こうとするが、ババコン

ガが動き回って集中できない。
　ババコンガは横腹に異物をぶち入れた敵を吹き飛ばそうと爪を振るう。サクラは反射的に後退した。もちろん、剣を見捨てて。
「……ッ！」
　サクラは道具袋（ポーチ）の中に手を伸ばすと、両手に二本のナイフを構えた。ギルドに選ばれた者のみが保有を許される特殊アイテムの投げナイフに毒テングダケのエキスを染み込ませた毒投げナイフだ。
「任せてッ！」
　サクラが戦力から外れたと知るやいなや、クリュウはババコンガに突貫する。ババコンガも武器を失ったサクラを無視して突っ込んで来るクリュウに向き直る。だが、すぐにフィーリアからの援護射撃がその背中を砕く。
「ブォアアアアッ!?」
　ババコンガは背中の激痛に悶える。その隙にクリュウは懐に入ると下から上に剣を突き上げた。腹に刺さった剣を引き抜くと、バシャアッと血が噴き出す。ババコンガはクリュウを吹き飛ばそうと巨大な爪を振るう。クリュウはその一撃を盾で防ぐが、衝撃で大きく後退してしまった。そこへすかさずサクラが毒投げナイフを投げ放った。両腕のナイフを飛ばし、すぐに道具袋（ポーチ）から二本を引き抜くとそれを投げる。深々と刺さった四本の毒投げナイフにババコンガは悶える。どうやら毒を受けたらしい。
「うりゃあッ！」
　クリュウはババコンガの腕に剣を叩き落すが、刃が深く刺さらずにわずかな血しか出ない。傷も浅い。なんていう強靭な筋肉をしているのだろうか。さらにババコンガは放屁をして来た。直撃は避けられたが、やはりくさい！
　クリュウはそのあまりの悪臭に涙が出そうになる。
「クリュウ様ッ！　目を閉じてください！」
　その声にクリュウは後退しながら瞳を閉じた。その瞬間炸裂した閃光。ババコンガは再び視界を奪われる。

「クリュウ様！」
「フィーリア!?」
　そこへ連続して銃を撃ちながら走って来たのはフィーリア。クリュウの横へ来ると貫通弾ＬＶ１から通常弾ＬＶ２に切り替える。
「どうして？　狙撃するんじゃなかったの？」
「いえ、サクラ様が戦闘不能となったので慌てて来ました」
　どうやらサクラが剣を失った事でクリュウ一人では荷が重いと判断して出て来たらしい。
「先程サクラ様が仕掛けたシビレ罠のすぐ近くの岩陰に荷車を移動させました。これで爆弾も使用可能です」
　さすがフィーリアだ。ちゃんと考えて行動している。こういう考えて何かをする事に関しては、フィーリアはチーム一の実力だ。
「ありがとう」
　そう言いながらクリュウは剣の刃に砥石を添えて磨く。これまでの戦闘でかなり切れ味が落ちていた。その間にサクラも駆け寄って来た。その手には残った最後の毒投げナイフが握られている。
「……ごめん」
　いつもは凛々しい隻眼も今はどこか弱い。どうやら自分の失態に落ち込んでいるらしい。クリュウはちょっと安心した。サクラみたいな優秀なハンターでもこうしたミスはするのだという事に何か自分に近いものを感じたからだ。
「気にしないでよ。とりあえずシビレ生肉に奴を誘き寄せよう。奴が痺れたら僕とフィーリアはで攻撃する。その間にサクラは剣を抜いてみて。痺れ状態だと筋肉が収縮して抜けにくいかもしれないけど、それ以外に引き抜くチャンスは少ないからね。でも無理はしないで。無理とわかったらすぐに離れて。わかった？」
「……（コクリ）」
　クリュウはフィーリアと目を合わせるとすぐにシビレ生肉の方に向かって走る。サクラも後から続く。そろそろ閃光玉の効き目が切れる頃だ。
　三人はそれぞれシビレ生肉の周辺の物陰に隠れる。警戒されない

為だ。もちろん他のモンスターならこの戦法は使えない。ババコンガだからこその戦法だ。
フィーリアは草陰に隠れると腹ばいになってヴァルキリーブレイズを構える。
ババコンガはどうやら閃光玉の効き目が切れたらしい。消えた敵を臭いで探す。そこへフィーリアは弾倉の中の弾を全て撃ち出す。それらは全て寸分狂わずにババコンガに命中。ババコンガはこちらを向いた。そしてそのまま突進して来た。
四足で突っ込んで来る。クリュウは迫る巨体に逃げ出したくなったが、横に隠れるサクラが小さく「……大丈夫」と言った。その言葉を信じて逃げ出そうとする足を押さえた。
そしてババコンガはサクラの読み通りシビレ生肉の前で止まるとそれを食べ始めた。数秒後、ババコンガは突如体を痙攣させた。成功だ！
「サクラ急いでッ！」
クリュウはそう叫ぶとババコンガの頭に向かって剣を叩き落とす。フィーリアは立ち上がるとババコンガの体に徹甲榴弾ＬＶ１を撃ち込んだ。突き刺さった銃弾は数秒後に中の火薬が炸裂して爆発する。
クリュウはババコンガの頭に向かって連続して剣を叩き込む。砥石を使ったおかげでずいぶんと切れ味も良くなった。腕に掛かる負担も少ない。
「てぇいッ！」
クリュウ渾身の一撃。蓄積されたダメージに耐え切れず、ババコンガの頭の角（正確には硬い毛の集合体）が粉砕された。クリュウはそれに心の中でガッツポーズしてさらに剣を振るう。その間もフィーリアの銃の嵐は続く。
一方のサクラはババコンガの横腹に突き刺さった飛竜刀【朱】の柄を掴むと、全力で引っ張る。だが、やはり動かない。
まずい……ッ！
サクラの中で焦りが生まれる。
早くしないとシビレ生肉の効果が切れてしまう。でも、抜けない

……ッ！

サクラはチラリと横を見た。その先ではクリュウが必死に剣を振るっている。自分の為に、彼は一生懸命になっている。その姿に勇気をもらい、サクラは再び力を込める。

「……ッ！」

それでも動かない。サクラは泣きそうになった。

クリュウの役に立てない。これほどまでの絶望はない。それだけは、絶対に嫌だった。

サクラは腰に挿しておいた毒投げナイフを構えると。飛竜刀【朱】が刺さった傷口に突き刺した。そしてそのまま力を込めて切り裂く。ドボドボと血が流れ出すが構いやしない。必死に傷口をえぐり、広げていく。そして、

「……これでッ！」

サクラは思いっ切り傷口にナイフを刺し込むと、飛竜刀【朱】の柄を握って思いっ切り引っ張った。グラグラしている。いける……ッ！

「サクラッ！　もう限界だッ！」

もう痺れが解けるのだろう。だから限界――いや、まだだ。まだ終わらない。

サクラは全力で剣を引き抜く。と、ついにババコンガが動いた。だがその瞬間、今まで引き締められていた筋肉が緩み、剣がついに抜けた。

サクラは勢い余って後ろに倒れそうになったが何とか堪えた。だがその手にはしっかりと愛器、飛竜刀【朱】が握られている。

ババコンガは散開した敵を睨むと、砕けた頭に手をやって怒号を発した。だが、フルフルなんかに比べれば大した事はない。

クリュウはチャンスと突っ込む。サクラも同じだ。だが、ババコンガはその動きに大きく後退すると四足で地面をしっかりと掴み、口から霧状の赤い液体を噴出して来た。ババコンガのブレス攻撃だ。サクラは隻眼を大きく見開いて急停止するが、クリュウは間に合わなかった。

「ぐあぁッ！」
クリュウの体が液体に触れた途端爆発。煙を纏いながら大きく後ろに吹き飛ばされた。
「クリュウ様ッ！」
フィーリアが慌ててクリュウに駆け寄る。サクラはそれを見て二人を守るように二人の前に立つ。これが大剣やランス系ならガードで守る事もできる。だが、太刀はそれができない。サクラは道具袋（ポーチ）に手を入れて閃光玉を握った。
「ヴオオオォォォッ！」
突如ババコンガは怒鳴り声を上げると、再び前傾姿勢になった。またブレスだろうか。だが、射程が届かないはず。そこまで考えて、サクラは真っ青になった。
「……ダメッ！　逃げてッ！」
サクラは反転すると二人に駆け寄る。サクラの必死な形相にフィーリアは驚いた。そこへ、ババコンガはしっぽにフンを流すと、それをそのまま投げつけて来た。
「……ッ！」
「きゃあッ！」
「うわぁッ！」
三人は避けきれずに全員着弾してフンまみれになった。その瞬間、すさまじい悪臭に気が狂いそうになる。クリュウはもちろん、フィーリアとサクラも悪臭に顔をゆがめて吐き気を感じる。
理性が飛びそうになる中、クリュウはわずかに残った理性の中で次のババコンガの動きを考えて絶望した。
三人とも、やられる……
クリュウは必死に悪臭と戦いながら立ち上がると剣を構える。後ろで倒れながら悶え苦しむ二人の少女は、必ず守る！
ババコンガとクリュウの瞳が正面からぶつかる。
クリュウも、ついに覚悟を決める。だが、ババコンガは突如反転するとそのまま四足で走って離れていく。そして――
ヴォオオオオオオオオオオッ！

すさまじい鳴き声と共に大ジャンプ。そのまま森の向こうへ消えていった。
「逃げた……？　た、助か――おえぇッ！」
助かったには助かったが、その後に残されたのは絶望的な状況であった。
歴戦のハンターであるフィーリアとサクラ、そしてかけだしハンターのクリユウの三人は、しばしババコンガの残していった強烈な肉体的・精神的に大ダメージの悪臭に悶え苦しむのであった。

第５１話　恋する乙女の壮絶な大逆襲

その後三人はフィーリアの消臭玉で何とか強烈な悪臭とまみれたフンから解放された。だが、そのダメージはかなりのものであった。

クリュウは海に飛び込むと泥になったフンを洗い流す。フィーリアとサクラも同様だ。

二人は、クリュウとは一切目を合わせなかった――いや、合わせられなかった。クリュウはその理由をちゃんとわかっているからこそ、何も言わなかった。

（例え僕とはいえ、男の子の前で女の子が吐いちゃうのは、気まずいよね）

確かにその通りだが、ここに《クリュウだから》という言葉も入れておこう。この鈍感少年はきっと理解はしていないだろうが。

クリュウはふとサクラが仕掛けたシビレ罠を見詰める。今も空しく黄色い電撃が流れている。貴重な罠を一個無駄にしてしまった。まぁ、狩りではよくある事だが、やっぱり残念だ。

クリュウは石の上に置かれた自分の道具袋（ポーチ）から元気ドリンコを二本取り出すと、泥を洗い流し終えて岩の上に座ってがっくりと肩を落とす二人に近寄る。

「二人とも元気出して。ほら、これでも飲んで」

「あ、はい……」

「……うん」

二人はクリュウから元気ドリンコを受け取るも、一向に飲む気配はなくぼーっと虚空を見詰めている。その瞳が死んでいるように見えるのはクリュウの気のせいではないだろう。

クリュウにはわかる。あんなのを受ければやる気も失うであろう。昨晩のクリュウと同じだ。正確にはさらに別の理由（こちらの方が大きい）があるのだが。

「あ、あのさ。とりあえず今は少し休もう。ババコンガはそれからだ」

二人から返事はない。クリュウは苦笑いする。

「え、えっと、ちょっと僕辺りを見回ってくるね！」

あまりの気まずさに、クリュウは逃げた。その心の中では戻って来る頃には解決してますようにと必死に神様に祈っていた。
走り去るクリュウを一瞥し、フィーリアはため息をする。もう、泣きそうだ。
「……クリュウ様にだけは、見られたくなかったです……」
「……フンにまみれた姿に嘔吐まで……、……もう、お嫁に行けない……」
二人は泣きそうになりながら何度も大きく深いため息を吐く。
クリュウは優しい人だ。これくらいの事で別に嫌ったりする事はないだろう。だが、これは自分達の精神的な問題。あんな痴態、見せたくなかったのだ。特に――好きな人にだけは。
もう嫌だ。ババコンガとなんてもう戦いたくない。珍しく二人の意見が一致した瞬間であった。
二人がもうほとんど諦めかけたその時、遠くの森からババコンガの鳴き声が聞こえてきた。
「……」
「……」
ブチィッ！
この世の中で、ある意味最も切れてはいけないものが吹き飛んだ瞬間であった。
二人は、ゆらりと立ち上がった。その背中から、何やらどす黒いオーラと紅蓮の炎が舞い上がっているのは幻覚ではないだろう。
うつむく二人。前髪と陰に隠れてその表情は窺えない。だが、確実に二人から放たれるオーラはヤバイ。ほとんど殺気である。
風が吹き、二人の長い髪が揺れる。それはまるで怒りに逆立っているように見える。
「……ババコンガ……ッ！　絶対に許さない……ッ！」
「……この恨み……、晴らさでおくべきか……ッ！」
いつもクリュウに見せる柔らかなかわいい瞳が、まるで剣のように鋭い。しかもただの剣ではなく魔剣とか妖刀とかの部類に入るだろう恐ろしいレベルだ。

二人の睨み殺すかの勢いの瞳が重なる。
「……サクラ様、ちょっとババコンガを叩き潰しに行きませんか？」
「……奇遇ね。私もあのクソザルをぶっ殺しに行こうと考えていた」
「なるほど、考えは同じ、と？」
「……そうらしい。やはりどちらも女という事ね」
二人の口元に、不気味な笑みが浮かぶ。クリュウは、きっとこの笑顔は一生見てはいけないだろう。おそらく三人の信頼関係に亀裂が入る。
二人はくるりとババコンガの鳴き声が響いた森を睨むと、怒鳴る。
「……女の子を辱（はずかし）めた罪ッ！　覚悟しておきなさいッ！」
ババコンガの鳴き声にも勝ると劣らない二人の乙女のすさまじい怒号が、森の木々をビシビシと震わせた。
二人は顔を見合すと、準備を整えて森に向かって突っ込んだ。
歴戦のハンターであると同時に恋する乙女二人はそのまま森の奥へ消えて行った。
「フィーリア！　サクラ！　ねぇ見て！　こんなきれいな花が……って、あれ？」
二人の機嫌を直そうと咲いていた様々な花で作ったきれいな花束を持って来たクリュウは、いるはずである二人の姿がない事に戸惑う。
「フィーリア！　サクラ！　どこにいるのぉッ!?」
クリュウは辺りを見回すが、二人の姿はない。しかし少し離れた所に荷車は置いてあった。という事は二人で散歩でもしているのだろうか。
慰安散歩とでも言うのだろうか？
クリュウは仕方なく花束を二人が座っていた岩の上に置いた。
グオオオオオオオオオオオッ！
「えッ!?」
突如響いたババコンガの鳴き声――いや、悲鳴？
続いて響くのはすさまじい音。木がへし折れる音とか岩が砕ける

音とか……
嫌な予感がクリュウの背中を冷たくした。
「ま、まさか……」
その時、連続して響いた銃声に、クリュウの不安は確信へ変わった。
「まさか……ッ！」
クリュウは慌てて走り出した。一瞬荷車を持って行こうか迷ったが、とりあえず今は置いて行く。とにかく今は二人の下まで行かなくては。
森に飛び込み、鬱蒼と茂る木々の間を必死に走る。その間も戦闘の音が響く。
「クソォッ！　奇襲を受けてないといいんだけど……ッ！」
散歩していてババコンガに奇襲されたのであれば、まずい展開だ。
二人に比べたら、自分なんてちっぽけな存在だ。あの二人なら、ババコンガ程度なら問題ないだろう。
――でも、仲間として、男として、二人を守りたかった。
この向こうで二人が襲われている。
とにかく、走るしかない。二人を救う為には、走るかしないッ！
クリュウは全力で走る。そして、森が開けた……
本当に、自分はちっぽけな存在であった。
目の前で繰り広げられているのは、今までクリュウが体験して来た狩りとは別次元のものであった。
巨大なババコンガが全身血まみれになって吹き飛び、激しく岩壁に叩き付けられた。その振動はここまで届くほど強烈なもの。そして、そんなババコンガに突っ込むのは――
「……チェストオオオオオォォォォォォッ！」
鋭い突きの一撃。空気の壁をも貫く閃光の一撃はババコンガの腹に突き刺さり、真っ赤な流血が噴き出す。サクラはそのまま剣を横へ肉ごと斬り裂く。そのすさまじい勢いは、彼女の練気が限界まで蓄積されている事を物語っていた。
大量の血を腹から噴き出しながら悶えるババコンガに、サクラは容赦なく剣の嵐を叩き込む。突きと斬りの連続。ババコンガの桃色の

毛が絶えず生まれる傷から噴き出す血によって真っ赤に染まっていく。
翻弄されるババコンガ。その顔面に飛竜刀【朱】が叩き込まれ、ババコンガの顔が不気味に変形し、口から吐血と共に数本の歯が吹き飛んだ。
サクラは顔面を押さえて悶えるババコンガから一度距離を取ると止めていた呼吸を再開する。そして再び剣を構えてババコンガを隻眼で睨み付ける。
「……殺すッ！」
サクラの怒号に、クリュウはビクリと震える。
殺すって、言ったよね今……？
サクラは気が付いているのだろうか、彼女の持つ飛竜刀【朱】はもう刃がボロボロである。しかしそれを無視して彼女は剣を振るう。斬るというよりは叩き付けるという方がふさわしいような攻撃の嵐だ。
「死になさいッ！」
殺気全開の声と共にババコンガが背を向ける岩壁の上からフィーリアが現れた。風に揺れる金髪が怖いと思ったのはこれが初めてかもしれない。距離が離れていて表情は見えないが、その背後になぜか冥界への扉が見える……
フィーリアは真上からババコンガに向かって貫通弾ＬＶ１を嵐のように撃ち込む。逃げられない相手だからか、もう狙いなんてめちゃくちゃだ。無数の貫通弾が地面に突き刺さる。岩や土、木や草が吹き飛びグチャグチャになる。多くの外れ弾を出しながらもその倍以上の数の貫通弾がババコンガの体を上から下へ貫いていく。体を無数の銃弾で貫かれ、ババコンガは悲鳴を上げて逃げるように立ち上がろうとするが、そこへサクラの強烈な一撃腹に叩き込まれ、ババコンガは再び岩壁に背中を叩き付けられた。すさまじい衝撃と土煙。土煙が晴れて見えたのは大きく陥没した岩壁にババコンガが後ろ半分が埋まっている光景。今もヒビが大きくなったり砕けた石などがボロボロと落ちている。

あれだけの巨体を岩壁が陥没するほどの力で叩き付けるなんて、人間にできるのだろうか？

悶えるババコンガに向かってフィーリアは徹甲榴弾ＬＶ２をすばやく装填すると、ババコンガの脳天に向かって引き金を引いた。

バァンッ！　と撃ち出された銃弾は寸分の狂いなくババコンガの頭に突き刺さり、爆発する。

「グオアアアアアッ！」

ババコンガは悲鳴を上げて頭を押さえる。だが、その痛みは次の瞬間には感じなくなる事になった。

「……チェストオオオオオォォォォォッ！」

地面を蹴って跳躍したサクラはそのすさまじい銃弾のような勢いのままババコンガに横一線の渾身の一撃を叩き込んだ。切れ味の悪さも、彼女の怒りに研ぎ澄まされて鋭くなる。

横一線に振るわれた剣撃は、見事にババコンガの頭と胴体を引き裂いた。

ゴトッと落ちたババコンガの頭。そして頭を失ったババコンガの巨体は力を失って前のめりに倒れた。ズシン……という鈍い音が、戦いの終わりを告げるゴングに聞こえる。

動かなくなったババコンガを睨み、サクラは飛竜刀【朱】を鞘に収める。フィーリアも岩壁から飛び降りるとヴァルキリーブレイズを背中に戻した。

そして、二人は近づくとパンッと互いの手を叩き合った。勝利を喜んでいるのだろう。

二人は死んだババコンガに一度蹴りを入れるという仰天行為をした後に意気揚々という感じで振り返り――クリュウと目が合った。

「……」

「……」

「……」

この世の中で、これほどまでに気まずい雰囲気はないだろう、とクリュウは確信した。そしてこの状況をどうするか、クリュウは最近多くなったため息をまた一つ増やす事となった。

ババコンガの剥ぎ取りを終え、先程の場所まで戻って荷車を持つと、三人は拠点（ベースキャンプ）に向かって歩く。その間、三人は黙ったままだ。すさまじく気まずくて、誰も声を発せないのだ。どれほど気まずいかというと、クリュウがいつもほぼ欠かさずにしている死者への弔いの祈りができなかったほどだ。まぁ、フンまみれにした相手に弔いもクソもないってのもあるが。

ここでモンスターが出てくれれば幾分か気まずさも和らいだかもしれないが、残念な事に全く出て来ない。モンスターにも空気を読む能力はあるのかもしれない。こっちにしてみれば最悪な能力だが。

とにかく、三人は気まずかった。

このままずっと黙ったままかと思ったが、この状況を打開しようとクリュウが勇気を振り絞って声を出す。

「い、いやぁ！　バ、ババコンガも倒したし、こ、これで村も平和だなぁッ！」

この際棒読みっぽいとかセリフを噛んだとか声が裏返ってるとかは一切なしだ。ここまでできただけでも上出来なのだから。しかし、

「……」

「……」

世の中、努力と結果が結び付かない事は多々あるとクリュウは人生の教訓を得たが、当初の目的は達成できなかった。

気まずい空気は一向に変わる気配はなく、再び無言の時が流れる。

クリュウはため息一つ吐くと荷車の取っ手を握る手に力を入れる。今はクリュウが荷車を引いていて、サクラとフィーリアは並んで少し後ろを歩いている。振り返ると、二人とも視線をおろおろと動かしている。どうやら完全にマイワールドに入ってしまっているらしい。

クリュウは諦めて荷車を引っ張る。そんな彼の背中を見詰めながら、フィーリアとサクラはおろおろする。

先程の戦闘、クリュウにはショックが強過ぎたのだろう。ババコンガをフルボッコにした事もそうだが、おそらくはそれ以上に自分達二人から放たれていたすさまじい殺気。あれにショックを受けていると二人は思っていた。そして実際クリュウはその殺気に軽く恐怖し

ていた。
（あんな姿、クリュウ様にだけは……見てほしくなかったよぉ……）
フィーリアは心の中でもう取り返しがつかない事に泣きたくなった。隣に並ぶサクラもがっくりと肩を落としている。
二人の脳裏に、クリュウの笑顔バイバイというような不吉な言葉が踊る。もしそんな事になったらと思うと、お先真っ暗だ。
フィーリアは泣きそうになって視線を落とした。その時、荷車の上に見慣れないものがあった。それはきれいな様々な花が束ねられた花束。それも二つ。
「あ、あの……」
勇気を振り絞ったが、それでも声は小さかった。だが沈黙のおかげでクリュウにはちゃんと聞こえた。
「な、何？」
「この花束は……？」
フィーリアが指差したのを見て、クリュウは「あぁ……」と小さく声を漏らす。
「それは二人に渡そうと思ってた花束だよ」
「え？　わ、私にですか？」
「……私も？」
二人は瞳を大きくして驚く。そんな二人の反応にクリュウは照れたように頬を掻きながらくすぐったいような笑みを浮かべる。その笑顔に、二人がどれだけが救われた事か。
「いやぁ、ババコンガのフンを喰らって二人とも落ち込んでたから、これをあげて元気なってもらおうと思って花を摘んで束ねたんだけど」
フィーリアとサクラはお互いにその花束を手に取る。色取り取りの花が束ねられたそれは、とてもきれいだ。何より、クリュウの想いがたっぷりと詰まっている。
フィーリアは両腕で包み込むようにそっと花束を抱き締めると、クリュウをじっと見詰める。その表情はとても柔らかな笑みだ。
「あの、これもらってもいいですか？」
「もちろん。二人の為に摘んだんだし」

「あ、ありがとうございます！」
「……ありがとう」
サクラもギュッと花束を抱き締める。まるで、大切な宝物を手に入れたように、隻眼が柔らかな曲線を描く。
まさか花束くらいであのすさまじい気まずさが消えてしまうなんてクリュウは予想外だったが、おかげで気まずさが消えて良かった。
「クリュウ様、先程の事はその……」
「まぁ、さすがに女の子がフンを喰らったりすれば怒るのも当然だよね。それが二人して歴戦のハンターだったってだけの事だよ。気にしない気にしない」
クリュウは笑みを浮かべながらそう言った。その言葉にフィーリアは「クリュウ様……」とキラキラした瞳で見詰める。本当はさらにクリュウに見られたという最重要項目があるのだが、それがなくても十分だった。クリュウの理解力と寛大な心にフィーリアはもう感動全開であった。
「……とにかく、ババコンガは狩った」
「そうだね。これで村長、きっとまた宴会を開くだろうな」
「本当にお祭りが好きな方ですね」
「ほんとほんと。まぁ、小さな村だけどそこがいいんだよね」
「そうですね」
さっきまでの気まずさはどこへやら。弾む会話に笑顔が絶えない。本来の姿を取り戻したクリュウ達は拠点（ベースキャンプ）に戻るまでの間ずっと楽しげに会話を続けた。
日はまだ頂点に上り切ってはいない。これなら今日中には村に帰れるなぁと心の片隅で考えながら、クリュウは青空を見上げる。
初めてのババコンガ。もう精神的にも肉体的にもヘロヘロである。
――感想は、《もう二度と戦いたくない》、であった。

第５２話　変わるものと変わらないもの

対大型モンスター戦を考えて重装備だった今回の狩り。しかし結局爆弾などは使わなかった上にさらにババコンガの素材も加わったので、行きと同じく船を使う事になった。その為、村に着いたのはすっかり夜が深まった頃になった。

村に帰って来た一行。いつものようにクリュウはエレナの跳び蹴りを受けて悶絶。もしもエレナがいつも自分の帰りを不安ながら待っていると知っていなかったら、いくらクリュウでも家出していたかもしれない。そんないつもの光景。

蹴りを喰らった脇腹を押さえながらクリュウは村長に結果報告。大喜びした村長は三人の予想通り宴会を開く事になった。

そして、村人全員が酒場に集まって宴会が開始された。

崖の上に立つイージス村は付近の旅人の中継基地になっているので、村人以外の顔も見えるのはこの村の風景のひとつだ。皆旅の疲れを癒そうと、意味もわからずにこの宴会に参加する。中にはクリュウ達の活躍をほめてくれる人もいたし、ドンドルマや他の街や村の優秀なハンターの話をしてくれる人もいた。

村は村長の家を中心としていて酒場は村の中心部、村長の家のすぐ近くにある。村民だけでなく逗留客も宴会に参加している為、近場にある村長の家や庭も使って大々的に宴会が行われた。逗留客は三〇人ほど、村民は一五〇人ほど。クリュウ達の活躍のおかげで村人も少しずつ増えている。

三人はそれぞれの防具を外していつもの私服で参加している。ちなみに三人ともすでにお風呂は済ませている。いくら消臭玉で匂いは消えたとはいえ、どこか心地悪いし汗も掻いていたからだ。

そんな宴会の中、クリュウは一人でジュースを飲んでぼーっとしていた。その視線は村人達ではなく、その後ろの森に注がれている。

この辺は北部に位置する為に常緑樹林が多い。だが温暖な気候の為落葉樹林も結構存在する。村を守るようにして生える小さな森もそれは同じだ。

クリュウがこの村に戻って来て初めてハンターになった時と違って、紅葉した木々が時が流れた事を表していた。
あの頃はまだまだ未熟だった。それがフィーリアのおかげで一人前となり、サクラのおかげでより正確なものになった。もうあの頃とは違う。そう思った。
「クリュウ様」
「あ、フィーリア」
「こんな所でお一人でどうされたんですか？」
「ちょっとね」
「はぁ……。あ、お隣よろしいですか？」
「もちろん」
「失礼します」
フィーリアはそっとクリュウの横に腰掛ける。その手にはクリュウと同じジュースが入ったグラスが握られている。フィーリアは彼を一瞥した後、一口飲む。
「いい月ですね」
「うん」
二人が見上げた月は暗闇だけの世界を淡い光で照らし上げている。その光は森の木々を薄っすらを輝かせ、とても美しい。
「すっかり紅葉したね」
「そうですね。あっという間でした」
フィーリアもすっかり赤や黄色に色を変えた葉を身に纏った木々を見詰めながら小さく微笑む。その瞳にはどこか懐かしそうな光があった。
「私がこの村に初めて来た時は緑でいっぱいでしたのに」
「時が経つのは早いよ。この数ヶ月は、僕にとって忘れられない、貴重な時間だったと思う。フィーリアやサクラのおかげで、僕は強くなれた。二人には、本当に感謝してる」
そう言ってクリュウはフィーリアに笑みを向けると「ありがとう」と礼を言って小さく頭を下げた。そんな彼の行為に対しフィーリアはあわあわと驚く。

「そ、そんなッ！　全てはクリュウ様の努力の結果です！　わ、私は別にお礼を言われるような事はしてませんよ！」
「そんな事ないよ。フィーリアが基礎や応用を教えてくれたからここまで来れたんだ。本当にありがとう」
「クリュウ様……」
　フィーリアは頬を赤く染めながら照れたような笑みを浮かべる。そんな彼女の笑みに一瞬ドキリとし、クリュウは顔を隠すように月を見上げる。その頬が赤いのは彼女には内緒だ。
「でも確かに、クリュウ様は大きく成長されましたね。特に再会した時はずいぶんと成長されていて驚きましたよ。まぁ、今もどんどん成長されていますが」
「そ、そっかな？」
「はい。クリュウ様はハンターとしての才能があるんですよ。それも優秀な」
「そんな事ないって」
　クリュウはまさかと笑い飛ばすが、フィーリアはいたって真剣であった。本当に、彼はいずれ自分やサクラを超える凄腕のハンターになると予感していた。
「……クリュウは、強くなる」
　その声に振り向くと、ジュースと焼き七味ソーセージが盛られた皿を持ったサクラが立っていた。眼帯に覆われていない隻眼が、しっかりとクリュウを見詰めている。
「サクラ……」
「……クリュウは強くなる。私よりもずっと」
「サクラまでそんな事言って。二人を超えるなんて僕には無理だよ」
　そう言って笑うと、クリュウはジュースを飲む。そんなクリュウを見詰め、サクラはそっと彼の隣、フィーリアの反対側で二人で彼を挟み込むような形でに座るとジュースをクイッと飲む。
「……クリュウ。一緒に食べよう」
「え？　あ、ありがとう」
「……これ、フォークとナイフ」

「ありがとう。用意いいね」
「あの、私の分は……？」
見ると、用意されているのはナイフとフォーク二本ずつ。二人分だ。それもしっかりとクリュウとサクラの前に。フィーリアの前にはなし。
サクラは無表情で、言った。
「……これは私とクリュウの分」
「あ、そうですか……」
予想していたとはいえ、こうもはっきりと言われるとショックは大きい。気にした様子もないサクラに対しフィーリアは明らかにしゅんとしている。
「ちょっとサクラ。あんまり意地悪しないで」
「……わかった」
クリュウが言うと、サクラはスッとどこからかもう1セットフォークとナイフを取り出すとフィーリアの前に置く。
「あ、ありがとうございます！」
フィーリアの顔に嬉しそうな笑みが浮かぶが、サクラは一切それを見ずに「……食べるなら食べて」と素っ気ない。だが、クリュウにはちゃんとそれが彼女なりの照れ隠しだとわかっている。フィーリアもわかっているのか、笑顔で応えるとフォークを構える。
こうして一つのテーブルをイージス村のハンター総勢三人が囲む形となった。
七味ソーセージを摘みながら三人はジュースをあおる。クリュウと違ってフィーリアとサクラはビールも飲めるが、今はクリュウに合わせてジュースを飲んでいる。
わいわいと騒ぐ人々と少し離れた場所にいる三人は楽しげに会話を弾ませる。と言ってもサクラはあまりしゃべらないので相槌を打つばかりだが。
楽しげに話しながら、クリュウはふと思う。
こうして楽しく会話し、狩場では命を預け合う仲間。それがこの二人なのだ。ずっとこの二人と一緒に狩りをしたいが、未来なんて誰に

もわからない。サクラは腰を据えてはいるがまた出て行ってしまうかもしれないし、フィーリアはまだ客人扱い。正式にこの村のハンターになった訳ではないのだ。
「ずっと、このままでいたいね」
クリュウの何気ない言葉に、二人は驚いて顔を上げた。サクラは「……そうね」と小さく返してくれたが、フィーリアからの返事はついになかった。
彼女のも悩んでいるのだろう。旅をして色々な人の役に立ちたい。そう願っているし目的にしている彼女は立ち止まる事はできない。でも、クリュウとサクラとは一緒にやっていきたい。相反する想いに、フィーリアは挟まれているのだ。その苦しみは表情に出ている。クリュウは小さく「気にしないで」と言って彼女のグラスにジュースを注ぐ。
「あ、ありがとうございます」
「出て行く時は、今度こそちゃんと見送るから。フィーリアがいないと寂しくなるけど、大丈夫。もう僕は昔とは違うから。でも、出て行ってもまた来てね」
「クリュウ様……」
彼の優しい想いに、フィーリアは安堵する。自分の事を心配してくれる彼が、本当に嬉しくてたまらない。
笑顔を浮かべるフィーリア。だが、
（え？　でも私が抜けたらクリュウ様はサクラ様と二人っ切りで……）
その時、今日あったサクラの大胆行動（クリュウにキスを迫る）を思い出す――途端にものすごく不安になってきた。
（ま、まさか私がいなくなった後に何か良からぬ行動を起こすのでは……）
フィーリアはサクラを盗み見るが、彼女は相変わらず表情の読めない無表情でジュースを飲んでいる。
（え、エレナ様が黙ってるはずがないですよね！　きっと大丈夫です！　大丈夫ったら大丈夫です！）

まるで自分に言い聞かせるように何度も心の中で叫ぶ。どうやら彼女が二人からいなくなる事があったとしても、それは当分先になりそうだ。
「何か注文して来るけど、何かいる？」
クリュウは二人の注文を聞くと酒場の方へ歩き出す。すると、
「あんた達こんな端っこで何してるのよ」
エレナがいつもの緑色のロングスカートにエプロン、頭にはヘッドレスという給仕服でやって来た。相変わらず宴会の時は忙しいらしい。その手には注文が書かれた紙の束が握られている。
「別に何をしてるって訳じゃないけど」
「ふーん、まあいいけど」
そう言うとエレナはくるりと身を翻す。立ち去ろうとする彼女の背中を見詰め、クリュウは声を掛ける。
「あのさ、何か手伝おっか？」
「え？」
その言葉に驚いて振り返るエレナ。すると、そんな彼女が見詰める先には小さく笑みを浮かべた彼がいた。
「何か忙しそうだし。僕も手伝うよ」
「べ、別に手伝いなんていらないわよ」
クリュウの優しい言葉にエレナはふんッとそっぽを向く。その頬が赤いのは、先程お客におごってもらったお酒のせいだけではないのかもしれない。
「え？　で、でも忙しそうだし」
「いいったらいいのッ！　あんたはお客様で私は店員！　あんたはゆっくりしてなさい！」
そう叫ぶように言うと、エレナはダッと走り出す。だが、興奮していたせいか足元不注意。舗装されていない道だからこその土の凸に足が引っ掛かった。気が付いた時には視界が自分の意思と関係ない動きをしていた。
転ぶ……ッ！
エレナは受身の体勢に入った。だが、それは徒労に終わる。

「……え？」
倒れる直前でに、自分の体が誰かに抱き止められていた。驚いて視線を巡らせると、そこには……
「大丈夫？　怪我はない？」
そこにはいつもの屈託のない笑みを浮かべたクリュウの顔があった。エレナはしばし呆然としていたが、ようやく状況に気づく。
――自分は、クリュウに抱き上げられているという事に。
顔がかぁッと熱くなるのを感じた――恥ずかしい！
「は、放しなさいよバカ――ッ!?」
「え、エレナ？　どうしたの？」
突如エレナは顔をしかめると、右足を押さえた。クリュウも慌てて彼女を地面に降ろす。その間もエレナはずっと右足を押さえていた。
「ど、どうしたの？」
「ちょ、ちょっと捻ったみたい……」
「だ、大丈夫？」
「平気よこれくらい」
そう言ってエレナはフラフラと立ち上がる。
「む、無理はしない方がいいよ」
「これくらい大丈夫よ。それより仕事が――っッ！」
「ほら言わんこっちゃない」
「大丈夫よ！　放っといて！」
頑固に怒鳴るエレナ。そんな彼女を見てクリュウは呆れたように笑みを浮かべる。
そう、いくら自分が強くなり、村の景色が変わっても、変わらないものがあるのだ。その一つが、目の前にある。
「まったく、エレナは昔から頑固だよね」
「うるさいわねッ！　あんたには関係ないで――ちょ、ちょっとぉッ！」
「よいしょ……と」
クリュウは突然エレナの肩を支えると、そのまま彼女の体を起こして自分の背中に乗せて立ち上がる――世に言うおんぶというやつだ。

クリュウからは見えないエレナの顔が見る見る赤く染まっていく。
「ち、ちょっと何すんのよッ！　放しなさい！」
顔を真っ赤にしながらエレナはクリュウの頭をポカポカと殴る。
「いててッ、殴らないでよ！」
エレナの暴行を抵抗せずにクリュウは歩き出す。周りの人達が二人を見て優しげな笑みを浮かべている。それを見てエレナはさらに顔を真っ赤にする。
「や、やめてよ！　恥ずかしいでしょ……」
「だって放っとけないでしょ」
エレナは「え？」と彼の横顔を見る。いつも見ている子供っぽさがまだ残る彼の顔が、なぜかとても頼もしく見えた。
「怪我人なんだし、一応女の子なんだからさ……」
その言葉に、ドキッとする自分がいてエレナは顔を赤くする。
「ど、どういう意味よ《一応》ってッ！」
「気にしない気にしない。言葉のあやだよ」
そう言ってクリュウは気にした様子もなく歩き出す。みんなに見られて恥ずかしくないのかと思ったが、彼の頬がちょっと赤くなっている事に気づいて、エレナは小さく笑みを浮かべた。
いつも自分の後ろに隠れて泣き虫で弱虫だったクリュウが、みんなに見られて恥ずかしい思いをしながらも、怪我をした自分をおぶってくれている。
いつの間にか、身長もすっかり追い抜かれてしまってるし、力だって本気を出さないだけで幾分かクリュウの方が強くなっている。
「やっぱり、男の子なんだよね……」
「え？　何か言った？」
「なッ!?　何でもないわよバカッ！」
「そ、そう？」
クリュウは少し気になりつつも視線を再び前に戻す。もうすぐ酒場のカウンターだ。そこへ行けば応急キットもある。
ギュッと、幾分か彼女の手が首を強く抱き締めた。
「バカクリュウ……」

その小さなつぶやきは、周りの喧騒に掻き消えて彼の耳には届かなかった……
「まあ、軽い捻挫（ねんざ）ですね」
騒ぎを聞きつけてやって来たフィーリアはそう言いながらエレナの素足にすり潰した薬草を塗り付けてその上から包帯を巻く。
「大した事はありませんが、しばらくは大人しくしててください。特にクリュウ様を跳び蹴りするような事だけは双方共に痛いですからダメですよ」
「わかった」
包帯を巻き終えると、フィーリアは笑顔で立ち上がる。
「いい機会です。エレナ様は少しお休みなさってください。クリュウ様達もがんばってくれてますから」
そう言ってフィーリアは視線を別の方へ向ける。エレナもそっと盗み見るように視線を向ける。二人の視線の先では――
「おいクリュウ！　早くビール持って来い！」
「はいただいまッ！」
「クリュウ君！　こっちはサンドイッチ三個追加ね！」
「はいッ！」
「酒がないぞッ！」
「はいいッ！」
エレナの代わりにクリュウが必死に給仕をしていた。そりゃあもうほとんど泣きそうなぐらい振り回されている。エレナの大変さを身をもって体験していた。
「クリュウ様、大変そうですね」
「いい気味よ」
「そんな事言ってはいけませんよ」
ふと、二人は別の場所に視線を向ける。そこにはサクラもクリュウと一緒になって給仕をしていた。ただしやっぱり美少女なだけあって大人気だ――営業スマイルはなしだが。
「サクラちゃん、ぶどう酒追加お願いね」
「……（コクリ）」

「サクラちゃぁん。おじさんにお酌（しゃく）してよぉ」
「……嫌」
「サクラちゃん笑顔笑顔！」
「……無理」
「――ぐあぁッ！」
「……お触り禁止」
　さすがサクラ。大人気で振り回されながらもしっかりとお客の対応をし、違反客には鉄製のおぼんによる強烈な脳天直撃を炸裂させている。ちなみに今の逗留客はそっとサクラのお尻に手を回そうとしたが、触れる直前に鉄おぼんを脳天に受けたのだ。
「さて、クリュウ様とサクラ様ばかりに押し付けてはおけません。私も手伝いますね」
「あ、うんごめんね」
「いいえ。困った時はお互い様ですよ」
　フィーリアはそう言うと、柔らかな顔に満面の笑み（営業スマイル０ｚ（ゼニー））を浮かべてお客の対応をする。その笑顔もあって人気はもちろん首位独占。ただしサクラ同様に違反客に対しては鉄製のおぼんを（笑顔で）炸裂させている。侮れない……
　一部エレナより二人の方が酒もうまいという声が聞こえてエレナはブチギレそうになるが、足のをかばって我慢する。と、
「クリュウくんやないかぁ。そうや、うちのお酒の相手してぇな」
「あ、アシュアさん困ります！　うわぁッ！」
「ええやないかぁ。クリュウくんはほんまかわええなぁ」
「こ、困りますよ！」
「あはは、顔真っ赤やで？」
「そ、それはアシュアさんの胸が――ごはぁッ！」
　突如飛来したエレナ渾身の跳び蹴りがクリュウを吹き飛ばした。そのあまりの激痛にクリュウは悶絶し、後先考えずに怪我した足で跳び蹴りを炸裂させたエレナも激痛に悶える。そんな二人を見詰めながら皆は大笑いし、サクラはため息し、フィーリアは慌てて二人の看護に走る。

いつもと変わらない日常。だけどその中にも変わっていくものがある。
何が変わって、何が変わらないのか。それはわからない。
だけど、時間というものは一秒一秒確実に進み続けている。
月明かりの下、イージス村はまたいつもと同じ日常を過ごしている。誰もが笑い、誰もが楽しめる、そんな時間を。
アシュアは二人の悶絶を見ながらグラスを傾ける。と、ぶどう酒の水面に小さな紅葉（もみじ）の葉が浮かんでいた。
「風流やなぁ……」
アシュアはそうつぶやくと、ぶどう酒をクイッと飲んだ。
今日もまた、平和な一日だった。
そして明日も、明後日も、平和な日々であるように……

第５３話　独立貿易都市アルフレアでの絆

定期的に出ている定期船に揺られながら、クリュウは海の向こうに見えてきた巨大な都市を見て驚く。
「うわぁ、大きいなぁ。それにすごい壁」
「……アルフレアはこの付近の貿易都市。人口も多い。飛竜以外のモンスターならあの壁が防ぐし、飛竜が来ても街には常時二〇人前後のハンターがいるから対処可能。この辺一帯では一番安心」
「へぇ、さすがアルフレアだね」
サクラの説明に、クリュウは再び巨大な街――アルフレアを見詰める。
独立自由貿易都市アルフレア。高い壁に覆われて通常モンスターは入る事のできないこの付近一帯の貿易を一手に引き受ける巨大な貿易都市だ。ドンドルマなんかよりはもちろん小さいが、市場の規模は貿易街なのでドンドルマよりも大きい。特に海産物に関してはこちらの方が優れている海辺の中都市だ。
そして、ラミィとレミィがいる街でもある。
「この街にはラミィとレミィっていう双子のハンターがいるって事は前にも話したよね」
「……（コクリ）」
「すいぶん久しぶりだなぁ。元気にしてるかな」
「……そう」
「え？　何で二人の話をした途端に背を向けるの？　ねぇちょっと！」
後ろでクリュウが声を掛けて来るが、サクラは無視する。その表情はどこか不満そうに子供っぽく頬を少し膨らませている。
「……せっかく、二人っきりなのに……」
サクラはぽつりと不満そうにつぶやく。
クリュウはそんなサクラを見詰めながら困ったように頬を掻く。
その時、船員が「まもなく到着します！　お忘れ物のないようにお願いします！」と言いながら船内を歩いて行った。他に乗っていた客も

次々に荷物を纏める。
「サクラ。そろそろ着くって。荷物纏めよう」
「……わかった」
クリュウとサクラは自分達の荷物を纏めると船内から出て甲板に出る。
海風を心地良く思いながら近づいて来るアルフレアを見詰め、クリュウは笑みが浮かぶ。
「どんな街だろ。楽しみだな」
そのまるで子供のような無邪気な笑顔に、サクラは小さく笑みを浮かべる。
クリュウとサクラ、二人っきりの初めての旅であった。
時は少し遡（さかのぼ）って一週間前、それは突如として起きた。
「クリュウ様ッ！　お暇をもらってもよろしいでしょうかッ!?」
朝の優雅なひと時、ミルクと砂糖をたっぷり入れたコーヒーにサンドイッチで朝食をしていたクリュウ。そんな彼に興奮しながらそう言ったのはフィーリアだ。
「え？　ど、どうしたの？」
クリュウと彼の隣でサンドイッチと紅茶で朝食を取っていたサクラも不審そうに首を傾げる。そんな二人の反応にフィーリアは興奮冷めぬまましゃべる。
「私直々に狩りの依頼が来たんです！　ですので行きたいのですがッ！」
異常なほどものすごく嬉しそうな笑みを浮かべて話すフィーリアに、クリュウちょっと引いていた。一体どうしたというのだろうか。
「べ、別にいいけど」
「ほ、本当ですかッ!?　やったぁッ！」
クリュウの返答にフィーリアは万歳して大喜び。そのテンションの高さにクリュウとサクラは不思議そうに互いの顔を見合う。
「えっと、もしかしてリオレイアの討伐依頼？」
フィーリアがここまで大喜びをする狩りといえば彼女が最も愛する飛竜、雌火竜リオレイアくらいしかないだろう。だがそれにしても

この異常なテンションの高さは……
「そうなんですよぉッ！　しかもただのリオレイアじゃないんですぅッ！」
「へ？　どういう事？」
　クリュウの問いに、フィーリアはもう笑顔が止まらない。クリュウとサクラはいつでも逃げれるように少し腰を浮かせた。
「それがリオレイアの亜種なんですよぉッ！　またの名を桜リオレイアッ！　もう嬉しくて嬉しくてッ！」
「り、リオレイアの亜種ッ!?」
「……私？」
　亜種というのは主に鱗や皮などの体色が通常体とは異なり、肉質や弱点属性が変化した突然変異モンスターの事を言う。そして、俗に亜種は通常体よりも強力なものが多い。
　フィーリアの言うリオレイア亜種というのは別名桜火竜という桜色の鱗や甲殻に覆われたリオレイアの事。個体数が少なく、幾多の古書の中にも登場する聖なる存在として祭られている幻のリオレイアだ。もちろん通常のリオレイアよりも強い。ちなみに、さらに珍しいリオレイア希少種という黄金のリオレイアがいるらしい。
　とにかく、そんな超珍しいリオレイア亜種の討伐依頼がリオレイアハンターとも言えるフィーリアに舞い込んで来たらしい。ようやく彼女のテンションの高さが理解できた。
「そっか、僕は別に構わないけど。大丈夫なの？」
　亜種は通常体よりも強い。師匠から習った事を思い出してクリュウは不安になるが、フィーリアはえっへんと胸を反らす。
「これでも桜リオレイアはすでに三頭狩っています。もちろん一人ではありませんが、今回も向こうに行ってハンターを集める予定です」
　さすがフィーリアとしか言いようがない。フィーリアの桜リオレイア討伐済みという言葉に、クリュウの食欲が失せたのは不慮の事故としか言えないだろう。
「ですので今日の昼にも出たいと思います！　では村の事は任せましたよ！」

「ちょ、ちょっと――」
クリュウが止める暇もなく、フィーリアは全速力で家に向かって行った。あんなに生き生きとした彼女を見るのは初めてかもしれない。
「えっと……」
「……クリュウと私。二人っきり」
「という事になるよね」
「……（コクリ）」
こうして、突如として村のハンターはクリュウとサクラだけとなってしまった。
しかし運が良かった。ここ最近はクリュウ達の地道な努力によってランポスなどが村の近くまで来ていないので、フィーリアがいなくても問題はなかった。それどころかハンターとしての依頼も最近は素材採集ツアーかキノコ狩りくらいしかなかった。
フィーリアは桜リオレイアとの戦いの為に早速ドンドルマに向かって旅立った。そしてクリュウとサクラはクリュウが思い出したようにアルフレア行きを決め、こうして定期船に乗ってやって来た。という事だ。
イージス村を出て計一週間、行き着いたアルフレアは活気に満ち溢れていた。人々は色々な物を求めて一般人も商人も、そしてハンターも忙しく動き回っている。
クリュウとサクラはそんなアルフレアの中央に位置する自由市場にいた。市場には多くの店舗が立ち並び、露店の数もすさまじい。都市自体の大きさは劣るが、市場はドンドルマをも超えるような規模だ。商人同士の競りも苛烈を極め、怒号のような怒鳴り声が響いて次々に値段が決まっていく。まるで戦争だ。
市場の真ん中には街全体から見える巨大な時計塔が立っている。竜人族の技術を用いたその時計はどういう仕掛けで動いてるのかはわからないが、正確に針が動いて時を刻む。そして一時間後ごとに鐘が鳴り響いて人々に時間を知らせている。
この世界において時計塔が設置されている都市はアルフレアやド

ンドルマ、ミナガルデなどその他数都市の限られている。アルフレアがどれだけ重要な都市かがわかる象徴だ。
さらにハンターは対モンスター戦として街の外で戦うのならば、人々の争いや犯罪を守る為に街の中で戦う自警団まで組織されている。おかげで犯罪率はそれほど高くはないし、発生しても自警団のおかげで多くが解決される。
都市機能としてはドンドルマよりも優れた街、それがアルフレアであった。
賑わう自由市場を歩くクリュウとサクラ。ちなみに二人ともしっかりと体を武装で包んでいる。こういう場所では武器や防具で相手の力量を測るので重要な事だからだ。と言ってもクリュウは相変わらずヘルムは被っていないが。しかも皆の目線はほとんどサクラに注がれる。やはりここでも凛シリーズはすさまじい威力を見せていた。
「さすがサクラだね。注目の的だよ」
「……私はクリュウにだけ見ててほしい。それだけでいい」
「……あのさ、さり気なく恥ずかしい事を言わないでくれるかな？」
そんないつもの二人は色々な店を覗きはするが、一切何も買わない。ここに来た目的はハンターとして仕事を探しに来たのだ。遊びに来た訳ではないし、買い物をするにしてもそれは帰る時だ。単純に荷物が増えるだけだ。
そんなこんなで二人は自由市場を覗いた後に街の中央部から少し外れた、ギルドが設置されている酒場に向かう。ギルドと酒場が一緒なのはどうやらどこも同じらしい。その方が勝手がいいからだろう。
クリュウとサクラが向かったアルフレアの酒場は木造建築。街の中でも丘の上の位置する為に窓からはオーシャンビューが堪能できる。まぁ、ハンターはそういうのはあまり興味がないのだが。
二人が中に入ると、中にはかなりの人がいた。特に多いのはハンターだが、もちろん一般人もいる。酒場はハンターの為だけにあるのではないのだ。
酒やタバコ、様々な料理などの匂いがドンドルマの酒場のように充

満していないのは、開け放たれた窓や木造だからこその風通しの良さで海風に消されているからだ。どこかドンドルマより清潔そうに見える。
　クリュウとサクラは奥の受付に行きギルドカードを提示してハンターの登録をする。受付の女性は美人な方が受けがいいのかやっぱり美人だ。と言ってもライザの方がきれいだなぁとクリュウは内心思っていた。
「承りました。ではごゆっくりと。依頼の方はあちらの掲示板に貼ってあります。あと向こうの掲示板はチーム募集の掲示板です。どちらも目を通しておいた方がいいですよ」
　受付嬢は笑顔１００パーセントでクリュウ達に説明をする。その笑顔が営業スマイルである事はドンドルマの酒場での経験でちゃんとわかっている。
　二人はとりあえず依頼掲示板を覗いてみる。イージス村以上ドンドルマ以下というくらいで依頼書が貼ってある。下はキノコ狩りから上は飛竜の討伐依頼。結構豊富な品揃えだ。
「さて、どれを受けよっか」
　クリュウは何かいい依頼はないかと探す。だが、なかなか手頃なものがない。上級飛竜の討伐はクリュウではまだ無理だし、ドスランポスとかはあまり乗り気ではない。
「ねぇサクラ。どれがいいと思う？」
　クリュウはサクラに問う。するとさすがはサクラ。
「……私達はまだこの辺の地形を知らない。まずは簡単な依頼を受けて地形を把握する。もしくはここのハンターと合同で狩りをする」
「なるほどねぇ」
　何とも的確な意見だ。やはりこういう時も彼女は頼りになる。
　という事で二人は今度は仲間募集の掲示板へ向かう。すると様々なハンターが仲間を探しているらしい。依頼ごとの仲間を募集するのもあれば恒久的な仲間を募集する紙もある。ただし今回二人が見るのは前者の方だ。
「うーん、やっぱり昼だともうみんな狩りに行っちゃってるせいかい

いのがないね」
「……そうね」
　ハンターは時に何日も掛けて狩場へ行かなければならない。だからこそ皆朝に出掛けてしまうのだ。その為、この時間帯は主に仕事のないハンターか狩りを終えて帰って来たハンターが食事や宴会をしているのだ。
「仕方がない。とりあえず今は腹ごしらえをしておこうよ」
「……そうね」
　クリュウとサクラはとりあえず昼食とする事にした。海に面している街という事もあり海産物は豊富。二人は早速魚介類のメニューを注文する。
　サクラは女王エビとココット米のパエリア。クリュウはスネークサーモンや他の魚をウマイ米に盛った海鮮丼を注文した。
　しばらくしてウエイトレスの女性が二人の食事を持って来た。目の前に置かれた料理はもう見るだけでもおいしいそうだ。
「ごゆっくりどうぞ」
　営業スマイルを炸裂させたウエイトレスはテーブルから去る。その途中ハンターの男にお尻を触られそうになったが、神業的な回し蹴りで男を粉砕。「今度そのような行為をされたら死なしますよ♪」と言い残して仕事を再開する。そんな彼女を見てため息する最近女性恐怖症の不安を抱くクリュウであった。
「うわぁ、おいしそう」
「……そうね」
「いただきま～す！」
「……いただきます」
　二人はほぼ同時に料理を口の中に入れる。味はもちろん最高。魚の身のプリプリ感がまたたまらない。噛めば噛むほど甘味が染み出して来る。イージス村も海に面しているが、アルフレアは漁業に力を入れているだけあって味も抜群だ。
　二人はとりあえず食事をしながらこれからの予定を組む。フィーリアの方は相手がリオレイア亜種という事もありかなりの日数が必

要とされると予想。なのでこっちもそれなりの日数を確保してある。ちなみに帰りには魚介類を買っておくようにとエレナに頼まれている。何とも抜け目のない子である。
「とにかくまずは地形に慣れる事だね。とりあえず今日は素材採集ツアーでもする？」
「……そうね。それが一番。今日は情報を集め、そして狩りに出る。それがいい」
「うん、わかった。とりあえずその方向で」
とりあえず基本路線は決まった。二人はその後細かなやり取りをしながら食事を進める。
食事を終えた二人はテーブルを囲みながら無料配布されているアルフレア周辺の狩場の概要が書かれた紙を見ながら相談する。
アルフレアから行ける狩場はドンドルマ並みに充実していた。どの地域にするかによっても大きく変わって来る。特にクリュウはまだ沼地や湿地帯、雪山と呼ばれる場所には行った事がない。その為話し合いは細かく行われるのだ。
半時ほど経った時、クリュウは突然立ち上がった。
「……クリュウ？」
「あぁごめん。ちょっとトイレ行って来る」
クリュウはそう言うとトイレに消えた。一人残されたサクラは何をするでもなく適当に先程の紙を見詰める。
「お嬢さん、俺達と一緒に一杯どうだい？」
その聞き飽きたセリフにサクラはため息した。そんな彼女を囲むのは三人のハンターの男。装備は下級か中級ぐらい。己の力量を理解していない愚かな連中だ。
「お嬢ちゃんかわいいね。どうだ？　一人なら俺達と組まないか？」
「……必要ない」
「そうつれない事言うなよ」
相変わらずこういう連中はしつこい。明らかに自分の事をいやらしい目つきで見ている。その不快な視線には虫唾が走る。これがクリュウと同じ男。比べるまでもなくこいつらは最悪だ。

「……しつこい」
「なぁそう言うなって。俺達と一緒に――」
「……いい加減に」
「何をしているんですかッ！」
　武器に手を掛けようとした刹那に響いた声に、四人は訝（いぶか）しげにその声の主を見る。それは先程入って来たばかりのハンターの女の子であった。全身ザザミシリーズを身に纏ったツインテールの少女。その背中には巨大な銃槍――シザーガンランスが背負われている。
　サクラは不思議そうに少女を見詰める。少女はサクラを囲む三人のハンターに近寄ると、自分より頭一つ以上大きな三人の男達に向かって堂々と対峙する。
「あなた達！　この人嫌がってるじゃないですかッ！」
「あん？　誰だテメェ」
「この街のハンターです！　あなた達は外部のハンターですね？　街の雰囲気を乱さないでください！」
「おいおい、俺達は別に普通にこのお嬢ちゃんと親しくなりたいだけだぜ」
「それが迷惑なんです！　とにかく離れてください！」
「うーん、そうだなぁ。このお嬢ちゃんほどじゃないけど、あんたもかわいい顔してるからな。あんたが俺達と付き合ってくれるなら考えてやってもいいぜ？」
「え？　そ、それはダメですよ……ッ！」
　少女は慌てて距離を置こうとするが、その手を男に掴まれる。
「おいおい、逃げなくてもいいじゃねぇか」
「は、放してくださいッ！」
　今度は三人がかりで少女に標的を変える。サクラは凛とした隻眼を鋭くさせて立ち上がった。
「……ちょっと」
「あん？　何だ嬢ちゃん。あんたも俺達と――ギャアッ！」
　男に対してのサクラの返答は椅子による後頭部強打であった。バ

バコンガすら太刀一本で岩壁に叩きつけられるだけの見た目に反した強力な腕力によって打ち出された一撃はたったそれだけで男を他のテーブルを巻き込みながら吹き飛ばし、気絶させる。
残った男達、そしてザザミ少女は目を大きく見開く。その目に映るのは、いつでも太刀を抜き放つ用意が整った、殺気を身に纏う自分達とは明らかに実力差があるとわかる少女――サクラが立っていた。
「……殺すわよ」
たったそれだけで、男達は顔面蒼白にして慌てて逃げ出す。
「……待ちなさい」
「はいぃッ！」
「……このゴミ持って行きなさい」
「はいいいいいッ！」
ゴミ扱いされた気絶した男を引っ掴み、男二人は逃げるようにして出て行った。周りからは拍手喝采。先程のウエイトレスは苦笑いしながら倒れたテーブルや椅子を直す。
サクラは気にした様子もなく放出していた殺気を消すと、くるりと背を向ける。と、
「あ、あのッ！」
その声に振り向くと、ザザミ少女がこちらに屈託のない笑みを向けていた。
「助けてくれてありがとうございました！」
「……いや、元々はあなたが助けてくれた。礼を言うのはこっち」
「いえ、私は口を出しただけですし、そもそも逆に助けられちゃったからダメですよ」
少女は照れたように笑みを浮かべる。なんとも笑顔がかわいい子だ。
「あの、あなたは外部のハンターさんですか？」
「……（コクリ）」
「そうですよね。あ、それ凛シリーズですよね？　ちょっと見せてもらっていいですか？」
「……ええ」

少女は嬉しそうに凛シリーズを見詰める。細部まで見ながら「へぇ」とか「うわぁ」とか「すごぉい！」とか声を上げている。ちょっと照れくさいサクラであった。
「すごいです。相当名の知れたハンターですよね。あ、私の名前はレミィ・クレアと言います。ここアルフレアのハンターです。と言ってもまだまだ新入りの部類ですけど」
「……レミィ・クレア？」
聞き覚えのある名前にサクラがピクリと眉を動かした。と、
「レミィ。またお節介をしおったのか」
その声に視線を向けると、そこにはフルフルシリーズ（なぜか男性用）に身を包んだとてもかわいらしい顔をした少女が立っていた。肩にさらりと掛かるくらいの黒髪に黒瞳をしたかわいらしい少女だ。
――だが、サクラは少女を見て隻眼を丸くする。それは向こうの少女も同じだった。
「……ツバメ？」
「うむ？　おぉ、誰かと思ったらサクラではないか。久しぶりじゃのう」
ツバメと呼ばれた少女は屈託のない笑みを浮かべるとサクラに近づく。サクラもそんなツバメに幾分か瞳を柔らかくする。
「……久しぶり。元気にしてた？」
「無論じゃ。そういうサクラも元気そうで何よりじゃ」
「え？　あのツバメさん。お知り合いですか？」
「うむ？　そうじゃよ。彼女の名はサクラ・ハルカゼ。ワシと同じ別の大陸の出身でな。小さい頃からの付き合いなのじゃ。ハンターの訓練も一緒に受けたのじゃが、どうもサクラは天才でワシは全然勝てなかったのじゃ」
「ツバメさんが勝てないなんて、すごいんですねサクラさんって」
「……そんな事ない」
「謙遜するでない。しかし本当に久しいのぉ。一年振りになるか」
久しぶりの再会に言葉を弾ませる二人。
一方、すっかり忘れられたレミィはどうしようとキョロキョロと辺

りを見回す。と、サクラが座っていた席の反対側に食べ終わった食器とバサルヘルムが置かれている事に気づいた。
「あのサクラさん？　お連れの方がいるんですか？」
「……え？」
　その時、サクラは思い出したようにレミィに向き直る。
「……あなた、レミィ・クレアって言ったわよね？」
「は、はい。そうですけど」
「じゃああなたが――」
「ど、どうしたのこの有様ッ!?」
　その声に三人は一斉に振り向いた。するとそこにはトイレを終えて戻って来て酒場の惨劇の跡を見て驚くクリュウがいた。その姿を見て、レミィは瞳を大きく見開く。
「く、クリュウさんッ!?」
「え？　れ、レミィッ!?」
　二人は互いの存在に驚き合う。レミィはタッと走り出してクリュウの前に立つと、興奮気味に話し掛ける。
「ど、どうしたんですかクリュウさん？　なぜアルフレアに？」
「え？　あ、ちょっと村の周辺が静かになっちゃったからここまで仕事を探しに来たんだ」
「そ、そうだったんですか――あ、お久しぶりです」
　思い出したように慌ててあいさつをするレミィ。その律儀さは相変わらずのようだ。そんな彼女にクリュウは小さく微笑む。
「元気にしてた？」
「はい。あ、姉さんも元気にしてますよ」
「ラミィは元気の塊みたいな子だからね。ある意味彼女が元気じゃない方が怖いよ」
「そうですね」
　二人はどちらからとなく笑い出す。
　何ヶ月ぶりの再会だろうか。クリュウもレミィも再会をとても喜んでいる。特にレミィなどずっとクリュウにアルフレアに来てほしかったので嬉しそうに話し掛けている。傍から見てもとても仲が良

さそう。そんな二人を見詰め、サクラがピクリと眉を動かす。
「サクラ？　どうしたのじゃ？」
「……何でもない」
　ツバメは「ふむ」とクリュウを見詰める。どうやら力量を窺っているらしい。彼は今バサルシリーズを着けているのでだいたいはわかるだろうが。
「……クリュウは強い。疑うつもり？」
　クリュウを疑われる事にサクラは知り合いだろうが容赦せずに睨む。そんな彼女の鋭い目つきに対しツバメは「いやいや、疑ってはおらんよ」と首を横に振る。
「うむ。いい目をしたハンターじゃ。お主も良き仲間を見つけたようじゃの」
「……クリュウは強いし優しい。大切な相棒」
「ふむ。どうやらお主も認めているようじゃし、問題はなかろうて」
　ツバメはそう言うと楽しげに話す二人に近づくと、レミィと楽しげに話しているクリュウに声を掛ける。
「話の間に入ってすまない。お主がクリュウというのじゃな？」
「え？　あ、うん。君は？」
「申し遅れた。ワシはツバメ・アオゾラと申す。お主の連れのサクラと昔からの知り合いのハンターじゃ」
「サクラの知り合い？　そうなの？」
「……えぇ。小さい頃からの知り合い」
「へぇ……。あ、改めまして。僕の名前はクリュウ・ルナリーフ。よろしくね」
「うむ。よろしくなのじゃ」
　ツバメはにっこりと笑みを浮かべるとうむうむと何度もうなずく。その姿にクリュウはつい見とれる。
（かわいい顔した子だなぁ。髪なんてサラサラだし、笑顔もかわいいし。でも何で男用の防具なんて着てるんだろ？）
「うむ？　どうしたのじゃ？」
「え？　あ、何でもない」

慌てて視線を逸らすクリュウに、ツバメは「うむ？」と不思議そうに首を傾げる。すると、止まった会話を繋げるようにレミィが口を開く。
「ツバメさんは私達とチームを組んでいる方なんです。とってもお強いんですよ」
「へぇ、そうなんだ」
「いやいや、ワシはまだ修行中の身。まだまだ未熟者じゃよ」
「もう、謙遜しないでくださいよ」
「真実を言ったまでじゃ。ワシより強い者などこの世には大勢おる。ワシなんてまだまだ小者じゃよ」
　ツバメはそう言うと屈託のない笑みを浮かべる。その笑顔は本当に見ているだけでこちらが幸せになってしまうような笑顔だ。
「ツバメさんは十分お強い方です。あ、そういえばクリュウさん。フィーリアさんは元気にしてるんですか？」
　レミィはクリュウとフィーリアが別れた後を知らない。クリュウはフィーリアと再会した事。サクラとの出会い、そして今は三人でチームを組んでいる事を説明した。
「すごいですね。私達も姉さんとツバメさん、あとリーダーのジークフリートさんって方とでチームを組んでるんですよ」
「へぇ、レミィ達もチームを組んでるんだ」
「はい。やっぱり仲間が多い方がいいですから」
　そう言ってレミィは嬉しそうに笑みを浮かべる。その笑顔を見る限り、いいチームなのだろうと推測できる。
「ジークはヘビィボウガンの使い手でな。前衛のワシら後方から支援し、的確な指示をしてくれてとても頼りになるのじゃ。ワシらの頼れるリーダーじゃ」
　ツバメも嬉しそうに語る。本当にいいチームなのだろう。ちょっとうらやましい。
「いいね。やっぱりリーダーは必要だね。僕達のチームにもリーダーがほしいよ」
「……私達のリーダーはクリュウ」

「そうなんですかッ!? すごいじゃないですか!」
「名目だけだよ。実際に指揮してる訳じゃないし、二人とも僕の動きに合わせてくれるから十分統一されてるし」
そう苦笑しながら言うクリュウに、それでもすごいと言うレミィ。彼の言葉に首を横に振って否定するサクラ。どちらもクリュウがリーダーに適任だと思っているのだ。だが、
「ふむ」
ツバメだけはそんな彼を見詰めながら他の二人とは違う反応を見せていた。そんなツバメの反応には気づかず、クリュウはふと問う。
「そういえばそのジークフリートさんとラミィはどうしたの?」
「うむ。ラミィとジークは二人で狩りに出ていて今はいないのじゃ。ワシとレミィは二人が戻って来るまでの一週間、レミィと二人で狩りをしようと思っててな」
どうやらラミィとそのジークフリートというハンターは共に狩りに出ていて今はいないらしい。ツバメの言葉を聞く限り二人が戻って来るのは一週間ほど掛かるようだ。
「ワシらはこの後狩りに出るつもりじゃが」
「へぇ、何を狩るの?」
「うむ。イルファ山脈高地の雪山に現れたドドブランゴの討伐じゃ。本当はジーク達と合流する方がいいのじゃが、二人は出ておるし、ワシら以外にこの依頼を受けるハンターはいのうてな。ちぃとキツいがワシらで狩るつもりじゃ」
そう言って小さく笑みを浮かべるツバメ。どうやらその狩りはちょっと過酷になるらしい。
イルファ山脈はアルフレアの北に離れた場所に広がる山脈である。イージス村からも行く事は可能だが、基本はアルフレア経由である。北方地域に位置する為山は一年のほとんどが雪に覆われている極寒の地。そんな場所にもハンターの狩場は存在するのだ。
雪山と呼ばれるその狩場は気温は余裕でマイナスを下回り、ホットドリンクなしで行くのは余程の防寒装備をしなければ自殺行為となる火山や砂漠とは違った過酷な場所である。

そして、ドドブランゴというのはババコンガと同じ牙獣系に分類される大型モンスターだ。ブランゴという小型の雪猿を率いるボスモンスターで、仲間とのチームプレーは全モンスターでもトップクラス。一声上げれば仲間が次々に現れる厄介な相手だ。
ババコンガよりも強力で、ババコンガがパワーを重視したモンスターならドドブランゴはスピードを重視したモンスター。すばやく細かい動きで敵を翻弄し、隙あれば強力な一撃を叩き込んでくる。地形を利用し雪の中から突然現れたり、巨大な雪玉を投げて来たりする。しかもこの雪玉とドドブランゴが吐く氷ブレスと呼ばれる体内で形成した極寒の冷気は当たればたちまちに体が凍り付いて動けなくなったり動きが鈍くなったりする厄介な付加を持っている。間違いなくクリュウが相手してきたどのモンスターよりも強い相手だ。
それを二人で倒そうとするなんてすごいとしか言いようがない。
「そうなんだ。大丈夫なの？」
「うむ。レミィは動きの鈍いガンランスなので向かない敵じゃし、ワシの武器は奴の苦手な火属性じゃないが、努力するまでじゃ」
そう言ってツバメは背中に挿した二本の剣をを引き抜いた。双剣と呼ばれる片手剣の剣を両手に装備したような形の武器だ。盾がないのでガードはできないが、その分二本の剣のおかげで手数が増えた、太刀とはまた違ったタイプの攻撃型の武器。太刀は練気が溜まると攻撃力が上がり切れ味も上昇するが、双剣も体内の力を解放してすさまじい連続攻撃を行える鬼人化というものができる。ただし、その高い攻撃性の代わりに太刀よりも短いので攻撃範囲は狭く、体力の消耗も激しく、その手数からどの武器よりも切れ味が落ちるのが早いという多くの欠点を持つ。さらに鬼人化は攻撃本能を一時的に活性化させる為、慣れたハンターではないと理性を失い周りが見えなくなるという怖さも持つ。双剣は全武器の中で最もクセのある武器なのだ。
ツバメが構えたのはギルドナイトセーバーという貴重な鉱石を大量に使って作られた双剣。最初はギルドナイトというギルド本部に身を置くハンターズギルドの特殊部隊に属するハンターが持つ事を許された剣だが、最近は武器の多様化からギルドナイト以外でも許可

制だが保有する事ができるようになった。これもその武器の一つだ。ちなみに許可証をもらうのはかなり難しいらしいが、ツバメは通ったらしい。
　水晶を切り出し作ったかのように美しい刀身は、見る者を魅了するすばらしい武器である。ちなみに付加属性は水。ドドブランゴは火に弱い為今回の狩りでは意味を成さない。
「へぇ、ツバメって双剣を使うんだ」
「うむ。色々な武器を試したが、双剣が一番手に馴染んだのじゃ」
「僕も色々な武器を試したけど、結局片手剣が一番良かったよ」
　苦笑いするクリュウは昔武器の選定をしていた頃に大剣やハンマーなどを無理に振り回して転倒。後頭部を強打した苦い記憶があるが、それは誰にも言えないトラウマだ。
　そんなクリュウに、ツバメはいやいやと首を横に振る。
「片手剣も良い武器じゃ。バランスの取れたその動きは、近接武器の中では一番サポートに適しておるからのぉ」
「そうだね」
　ツバメとの会話でクリュウは自然と笑みが生まれる。結構話が合うので話していてとても楽しいのだ。
　ツバメは背中にギルドナイトセーバーを納めると、ふむとレミィに向き直る。
「レミィ。準備もあるからもう行かないとまずいんじゃが」
「あ、そうですね。わかりました」
　レミィは思い出したように驚くと、ペコリと二人に頭を垂れる。なんとも礼儀正しい子だ。
「では私達はこれで」
「うん。がんばってね」
「はいッ！　クリュウさんもがんばってくださいッ！」
　クリュウの言葉に嬉しそうな笑みを浮かべると、レミィはツバメと共に酒場から出て行った。その後姿を見詰め、クリュウは笑顔になる。
　二人ならきっと大丈夫。そう思った。

「……クリュウ。私達も依頼を決めましょう」
そう言ってサクラはレベルの低い依頼書の束を持って来る。
「そうだね。さてどうしようか――え？」
その時、何か違和感を感じた。気のせいではない。確かに背後から誰かに見られているような、そんな気がしたのだ。サクラも気づいているのか、口を閉じている。
クリュウは気になってそっと振り返る。すると、
「あ……ッ！」
そんな声と共に入り口から顔を出していた顔が慌てて引っ込んだ。今のは……
「れ、レミィ、だよね？」
「……そう見えた」
クリュウは再び前を向く。するとまたあの視線。振り返ると、彼女はまた慌てて隠れる。一体どうしたのだろうか。クリュウとサクラは顔を見合わせる。すると、
「まったく何をしておるんじゃ」
そう言いながらツバメが戻って来た。だがその顔は小さな苦笑いを浮かべている。どうしたのだろうか。
ツバメは「うーむ」と唸りながら困惑するクリュウの前に立つ。小柄なツバメはクリュウよりちょっと身長が低い。その為クリュウは少し視線を下げて対峙する。
「ど、どうしたの？」
「うむ。ちとクリュウに頼み事があるのじゃが」
「何？」
ツバメはふむと一度口を閉じてしばし何かを考えた後、再びクリュウを見る。そして、驚くべき言葉を発した。
「ちとワシらと一緒に狩りに行ってくれんじゃろうか？」
「へ？」
クリュウは目をパチクリさせる。いきなりの展開に頭が追いついていないのだ。そんな彼の反応は予想済みなのか、ツバメは気にせず言葉を続ける。

「ふむ。実はさっきも言ったように相手がドドブランゴ相手じゃレミィは不利じゃ。ましてや肉薄するのはワシ一人。ちぃと難しいのじゃ。そこでクリュウと組みたいのじゃが」
「ぼ、僕と？」
「うむ。レミィもそれを望んでおっての。むしろクリュウが来てくれんとレミィの悲しい顔を見ながら狩りをせねばならんのじゃ。それはちぃと精神的にも辛いしのぉ」
　クリュウは再び入り口を見る。レミィは顔だけ出しながら必死にツバメを見ている。クリュウが自分を見ている事に気づくと慌てて顔を引っ込めた。
「すまぬが、同行してくれんか？」
　ツバメも上目遣いで頼む。ちょうと身長が少し低いので、上目遣いの目線は見事にクリュウに直撃する。そのうるうるとした瞳が、クリュウの胸をドキドキさせる。
「え、えっと、あの……」
「……ダメ」
　クリュウの返答よりも先にサクラが拒否の言葉を出す。するとツバメはこれも予想済みだったのかふむと彼女を見る。
「これはワシとクリュウの話じゃ。サクラは関係ないじゃろう？」
「……関係ある。私とクリュウは仲間」
「ふむ。お主の言いたい事はわかるのじゃが、こっちも通したいものがあるのじゃ。もちろんお主にも協力はしてもらうつもりじゃ。これで四人。問題なかろう？」
　そう言ってツバメは再びクリュウを見る。窓から入った海風がふわりとツバメの柔らかな髪の毛を揺らす。
「それで、どうなのじゃ？」
「う、うーん……」
　クリュウは迷う。
　確かにレミィやツバメとは一緒に組みたいが場所は雪山、相手はドドブランゴ。どっちも初体験なのでクリュウとしては正直辛い。そして、何よりもこれが最大の問題なのだが……

「だ、だってレミィ達を組むと僕以外女の子になるんだよ？　それはちょっと……」
もはやズタボロなクリュウの微かに残った男としてのプライドが、これ以上傷つく訳にはいかなかった。
確かにサクラは強いしレミィも結構な実力者。話を聞く限りツバメも結構な実力者だ。メンバーとしては問題ないのだが、明らかに比率が悪い。
女の子だらけで狩りに出るのは、ちょっと気が引けたのだ。
「そういう事で悪いけど、今回はパスさせて――」
「……お主もか」
クリュウの言葉を遮るように出されたツバメの声は、何やらものすごく落胆している。そしてなぜかサクラも何か思い出したようにポンと手を打った。
「……そうだったわね」
何か納得したらしい。
「ま、まさかサクラ。お主も忘れておったのか？」
「……ごめん」
「……な、なぜなのじゃ」
ツバメはものすごく落ち込んでいる。一体何がどうなっているのか。
「えっと、僕何かまずい事した？」
「……クリュウは悪くない。悪いのは紛らわしいツバメの方」
「好きでやってる訳じゃないぞ！」
ツバメはキッとクリュウを睨む。その剣のように鋭い視線に、クリュウは「え？　ええ？」と困惑するばかり。そしてなぜかツバメの瞳には薄っすらと涙が……
「お主は間違っておる！　ワシは、ワシは……ッ！」
そして、クリュウ史上最も驚く事になるツバメの爆弾発言が飛び出した。
「ワシは男じゃぁッ！」
「えええええええええッ!?」

クリュウはめちゃくちゃ驚く。
ツバメが男？　ありえない。だってこんなにかわいくて声もきれいで、口調こそちょっと妙だがそれがまたかわいらしい――どう見たって女の子だ。だが、
「ワシの装備を見よッ！　これは男物じゃぞッ！」
クリュウは改めてツバメの装備を見る。確かに、ツバメの防具は男性用のフルフルシリーズ。それは紛れもない事実だ。
「え？　じゃあ、本当に？」
「当たり前じゃッ！　ワシはれっきとした男じゃ！　女子（おなご）ではないんじゃッ！」
そうかわいい声で怒鳴りながら、ツバメはクリッとした瞳の縁に涙を浮かべる。その姿はどう見てもかわいい女の子なのだが……
「ツバメさんってどう見ても女の子にしか見えないので、防具を作る時はいつも説明しないと女物を作られちゃうんです。それに男の人にも何度もナンパや痴漢をされたりするんですよ」
いつの間にか近寄っていたレミィの説明に、クリュウは納得した。
彼女――じゃなくて彼はその女の子にしか見えない外見のせいで色々と苦労をして来たのだろう。ある意味彼女――じゃなくて彼を女の子として見るのは、トラウマなのだろう。
「ワシは男じゃッ！　だからこのチームは男二人に女二人！　問題なかろう!?」
「う、うん。そうだね」
確かにその通りだ。ツバメが男の子ならば、これで一番大きな問題は解決だ。ちょっと不安要素は残っているが。
ツバメはごしごしと涙を拭き取ると、改めてクリュウに頼む。
「クリュウ。改めて問う。ワシらと一緒に狩りをしてくれんじゃろうか？　そしてワシは男じゃ。これは忘れるでないぞ」
「う、うん。そういう事ならいいかな？」
サクラに返事を聞こうとしたが、彼女は首を縦に振った。どうやら昔からの付き合いであるサクラもツバメが男の子という事を忘れていたのか、ツバメが男の子だとわかると一切の抵抗はやめた。

「じゃ、じゃあよろしくお願いね」
「うむ！　良き仲間ができた！　ワシにとっても同じくらいの男友達ができて嬉しいぞ！」
そう言って屈託のない笑みを浮かべるツバメ――あぁ、やっぱりどう見ても美少女にしか見えない。
ツバメは早速自分が持っていた依頼書をクリュウ達に差し出す。参加者名の所に名前を書く為だ。クリュウは自分の名前を書きながらふとツバメの名前を見る。サクラと同じで見た事もない形の文字で『燕　青空』と書かれている。きっとこれでツバメ・アオゾラと読むのだろう。
サクラも名前を書き終えると、ツバメは早速受付にこれを提出し、正式にこの依頼を受けた。これで晴れてチーム結成だ。
「ではそちらも準備を行ってください！　一時間後、ここに集合です！　では解散！」
クリュウと一緒に狩りができる事になりものすごく嬉しそうなレミイは重いシザーガンランスを背負いながらピョンピョンと跳ねて喜ぶ。その笑顔はとてもかわいらしい。
「……クリュウ。ホットドリンクを買いに行こう」
「うん。わかった」
こうして、クリュウ、サクラ、レミイ、ツバメという新たな組み合わせでの初めての狩りが、始まる事になった。

第５４話　楽しい旅路　ツバメの苦悩

一時間後、クリュウ達は酒場の前で合流。それぞれ用意を整えて街の入り口に向かう。

ギルドから支給されるアプトノスが引く竜車に荷物を詰め込み、それぞれも乗り込むとアルフレア出発する。今回の運転手はツバメだ。

アルフレアからイルファ山脈は竜車なら二日という所にある。それまでの間は森が続く。人が通る道にはあまりモンスターは出て来ないが、それでも警戒は怠らない。

ツバメが運転をしている間、クリュウ達は作戦の立案や行動などを練る事になった。何せ初めてのチームだ。いまだにチームの実力は未知数。どう作戦を立てるかにも困ってしまう。

クリュウはサクラとはいつも組んでるしレミィとも何度か組んでいる。しかしクリュウはツバメと、サクラはレミィと組むのは初めてだ。どういう戦い方になるかもわからない。

さらに今回は全員剣士という偏ったチームとなった。いつものようにフィーリアなどのガンナーからの掩護はない。いつもとは違う戦い方になりそうだ。

レミィの考えはまず動きは鈍いが強力な盾で攻撃を防ぐ事ができるガンランスの自分が前衛に出てドドブランゴを引き付けて攻撃。その間に機動力と手数で攻める双剣のツバメと機動力と攻撃力に優れた太刀のサクラがドドブランゴを徹底的に叩く。機動力重視でサポートに適した片手剣のクリュウは遊撃役。ドドブランゴと戦いながら閃光玉や罠、爆弾の設置。さらにはドドブランゴと連携して攻撃して来るであろうブランゴを駆逐するという最も過酷な役回りとなった。

「これで大丈夫ですか？」

レミィが今回一番動きが多くなるであろうクリュウに確認を問うと、クリュウは「もちろん問題なし」と笑顔で応える。元々彼はサクラとフィーリアを組んでいてもそういう役割が多いし、何より彼自身も得意だ。

クリュウの返事にレミィは笑顔でうなずくと、今度はサクラと打ち合わせに入る。双方共に今回の狩りが組むのが初めて。お互いの力量をある程度確認しているのだ。
そんな二人を一瞥すると、クリュウは幌の外で一人竜車の操縦をしているツバメに近寄る。狩場ではないと一応ヘルムであるフードを被らないのが彼の主義らしい。クリュウも基本的に狩場以外ではヘルムを外している。それと同じようなものらしい。サラサラとした髪が風に揺れて何とも絵になる光景だ。
「順調？」
クリュウが声を掛けると、ツバメは振り向いて小さく笑みを浮かべる。
「うむ。このアプトノスは大人しいから扱いやすいのぉ。これなら予定通りに行けるぞ」
「そっか」
クリュウはそっとツバメの横に腰掛ける。ツバメはクリュウを不思議そうに見詰めながら手綱を引く。そんな彼のクリッとした瞳に見詰められてやっぱりまだドキッとするクリュウ。危ない危ない。
クリュウはツバメと対峙するように彼を見詰めると、にっこりと微笑む。
「よろしくねツバメ」
「うむ？　今更どうしたのじゃ？」
「いや、今までフィーリアやサクラ、ラミィやレミィみたいな女の子ばかりと組んでたから、男の仲間ってのが初めてなんだ」
「うむ。それではワシはクリュウの男仲間一号じゃな」
「うん。まぁ、外見はどうであれ僕にとっては初めての男仲間だね」
「……今、ものすごく気になる言葉が聞こえたような気がしたのじゃが」
「気のせい気のせい」
楽しそうに笑うクリュウを見て、ツバメは小さく苦笑いする。彼にとっても同世代の同性ハンターと組むのは久しぶりの事。ちょっぴり嬉しかったりする。

「そういえばそれってフルフルシリーズだけど、一人でフルフルは倒したの？」
「うむ？　いや、一人だったり仲間と一緒だったりそれぞれじゃよ」
「そうなんだ」
「うむ。このフルフルシリーズは理屈はわからんが傷の治りが少し早い回復速度＋1というスキルで発動してるんじゃ」
「へぇ、そういえばサクラも回復速度＋1が発動してるよ」
「うむ。そうじゃな」
「他には何かあるの？」
「うむ。ワシのこの防具は他にもチーム戦に適しておってな、ワシが回復薬を飲むとどういう訳かこのフルフルの皮を使った防具から気化した回復薬が周りに拡散し近くにいるお主ら仲間も回復させる事ができるのじゃ」
「広域化？　すごいね！　初めて見たよ！」
「うむ。装飾品をスロットに加えられるだけ加えてなんとか広域化＋2にしたんじゃ。まぁ、単独の時は回復速度を＋2にするんじゃが、今回はチーム戦。しかもガンナーがいないから回復弾も望めない。そうなるとワシが回復薬を飲んで皆を回復させんとな」
　そう言ってツバメはにっこりと微笑む。なんともかわいらしい笑みだ。こんな彼女なら、いつでも大歓迎だ。
「頼りにしてるよツバメ」
「うむ。任しておくのじゃ」
　そう言ってツバメは胸を拳で軽く叩く。何とも頼りになる相手だ。その時、後ろに気配を感じて振り返ると、なぜかじーっと自分達を見ているサクラとレミィ。
「ど、どうしたの二人とも？」
　なぜか二人の目がすごく悲しげに見えるのは気のせいだだろうか。クリュウが一人首を傾げていると、
「クリュウさんは、ツバメさんのような方が好みなんですか？」
「へ？　ど、どういう事？」
「……クリュウ、ツバメのどこがいいの？　教えて」

「え？　あ、いや……」
　なぜ泣きそうな顔でそんな質問をするのか、クリュウは全くわからない。すでに頭が混乱中だ。
「えっと、それはどういう事なの？」
「だから！　クリュウさんはツバメさんのような女の子が好きなんですかって訊いてるんです！」
「なぁッ!?」
　クリュウは顔を真っ赤にする。こういう話題が昔から苦手なクリュウはどう答えたらいいかわからずおろおろする。ちなみにツバメも別の意味でおろおろしている。
「……確かにツバメはかわいい。でも、私だって負けてない」
「私もです！　クリュウさんどうなんですか!?」
「お主ら根本が間違っておるぞ!?　ワシは男じゃ！」
　ツバメは慌てて二人の中にある自分＝かわいい女の子という間違った方程式を正そうと必死になる。だが、そんな彼の横で、
「そ、そんな事いきなり言われても……ッ！　そりゃあ僕だってツバメはかわいいと思うし、優しいし、頼りになるし……好きだし」
「「……ッ!?」」
　爆弾発言炸裂。サクラとレミィは顔を真っ青にしてフラフラと後退（あとずさ）る。一方のツバメはクリッとした瞳やかわいい顔を驚愕に染めて慌てる。
「クリュウ！　お主も何か間違っておらぬか!?　お主はワシを男仲間と言ったであろう!?　なぜ女子扱いするのじゃッ!?　それとそっちもなぜそんな絶望的な顔をするのじゃッ！」
「まだ僕恋愛とかよくわかんないんだけど、ツバメみたいな彼女なら、僕も大歓迎だよ？」
「ぬぉッ!?　何を言い出すのじゃッ！　ワシは男じゃ！　彼女にはなれんのじゃぞ!?　っていうか今のお主のセリフにドキリとした自分が怖いぞ……ッ！　何なのじゃこの胸のドキドキは!?」
　ツバメが大混乱していると、サクラとレミィがグッと拳を握り締めて何か決意したような顔をする。

「だ、だったら私ももっと優しくなります！」
「……私も」
すっかり間違った方向に全力疾走している四人。
サクラとレミィはツバメのようにもっと女の子らしい女の子を目指す事を心に決め、クリュウは自分の理想の女の子が案外フィーリアやツバメのような優しい女の子なのかなと考え、クリュウのドキドキ発言にちょっぴり頬を赤くしてドキドキするが、ハッと自分が男だと思い出して慌てて三人を説得し直すツバメ。
今まで以上に何ともドタバタなメンバーは、その後何事もなく進み、イルファ山脈の高地――雪山と呼ばれる狩場に到着した。

第５５話　銀吹雪舞う雪山の戦い

イルファ山脈高地――別名イルファ雪山。夏のわずかな期間を除いては常に雪に覆われたこの極寒の地は、ハンターにとって過酷な狩場の一つだ。

この狩場は主に雪が軽く地面を覆う麓（ふもと）と極寒の洞窟、そして吹雪が突発的に起きる山頂付近とに分かれる。麓以外はホットドリンクなしでは体力の消耗が激しい寒さなので、この地ではホットドリンクは必需品だ。

火山や砂漠とはまた違ったこの過酷な地でもモンスターは住み、近場には人々も村を作って住んでいる。そんな人々を守る為に、ハンター達はこの過酷な地に足を踏み込んでモンスターと戦うのだ。

そして、クリュウ達もまたその一人として、このイルファ雪山に足を踏み入れた。

その第一感想は……

「寒いいッ！」

クリュウは悲鳴のように声を上げて体を震わせる。

ここは麓の高台の上にあり防風林に守られた拠点（ベースキャンプ）。雪山ではまだ比較的に温かい方に位置するが、それでも寒い。イージス村も北方に位置しているので寒くはなるが、ここまで寒くなる事はない。これが常温だというのだから驚きだ。

「さ、寒いよぉッ！」

「クリュウは雪山が初めてじゃったな？　ここはまだ暖かい方じゃ。山頂や洞窟はもっと寒いぞ」

ツバメは何度もここには来ているのは慣れた様子。しかし慣れたと言っても寒くない訳ではなく、白い息を吐きながら何度も手を擦り合わせている。

「うぅ、ここまで寒いなんて……」

「そうですね。何度来てもやっぱり寒いですよ」

そう言ってレミィも体を震わせている。サクラも「……寒い」と言って手を擦り合わせている。皆やっぱり寒いのだ。それを見て同

じ人間なんだと心の隅で安堵するクリュウ。
　ツバメはそんな寒さに耐える皆を見詰めながら天幕（テント）の横に置かれている道具箱の中から支給品を取り出す。
「これじゃこれじゃ」
　そう声を上げて彼が取り出したのは小さな皮の袋であった。
「ツバメ、それは何？」
　クリュウが問うとツバメは支給品と同じ物を自らの道具袋（ポーチ）からも取り出す。
「うむ。これは解氷剤という氷や雪を溶かす粉状の薬品が入った袋じゃよ。ドドブランゴの攻撃の中には当たれば体を凍らせるものがあるからのぉ。これなしでドドブランゴと戦うのは自殺行為なのじゃ」
「これの事？」
　クリュウは出発前にサクラに持たされたツバメの持つのと同じ皮袋を取り出す。サクラが「……これ必要」と言って有無を言わさずに持たせた物だ。
「おぉ、そうじゃよ。凍った時に衝撃があれば割れるのじゃが、解氷剤がない場合は誰かに壊してもらうかモンスターの攻撃を受けると壊れるのじゃが、仲間の動きはわからんし、モンスターに攻撃されればそれどころじゃないからのぉ。これは必需品なのじゃ」
「雪山に出る大型モンスターは凍結攻撃を持つ場合が多いので、覚えておいてくださいね」
「うん。わかった」
　クリュウは解氷剤を持てるだけ道具袋（ポーチ）の中に入れる。他にもホットドリンクに回復薬や回復薬グレート、こんがり肉、砥石にペイントボール、閃光玉などなど様々な物が入っている。そこにさらに支給品の応急薬と携帯食料を詰める。他のメンバーも同様だ。さらに荷車には大タル爆弾Ｇ四個と落とし穴二個、シビレ罠が四個。トラップツールとゲネポスの麻痺牙が三個ずつなどが搭載されている。
「しかし、クリュウは爆弾なんて危険なものを使っておるのじゃな」
　ふとツバメがつぶやいた。その声にクリュウは「何？」と首を傾げ

る。
「いや、何でもない。それも個性というものじゃろう」
「はい？」
　世の中的に、あまり爆弾を使用するという習慣は浸透していないのが現状である。危険だとか運搬が厄介とか高額だとか様々な理由からよっぽどの事がないと使われないのだ。まぁ、クリュウは世間知らずなのでそういう世の中の常識を知らないのだが。
　ツバメもレミィが爆弾を使う事が多いので別段気にした様子はなかった。ちなみに彼女曰く昔自分達をゲネポスの大群から守ってくれた勇者様が爆弾でドスゲネポスを爆破する姿に憧れて使い始めたらしいが……
「まさか、お主……」
「へ？　何か言った？」
「いや、何でもない」
　この瞬間、ツバメの中で謎が一つ解決した。
　話は戻って今回爆弾が少なめなのは大タル爆弾ではなくより威力の高い大タル爆弾Gである事と、ドドブランゴが主に出現する山頂付近は地面が硬い岩盤なので落とし穴が使えず、その為持続時間の短いシビレ罠を使う訳だが、それだと設置の時間なども考えてあまり使えない手段の為少ないのだ。ちなみに起爆はレミィの砲撃で爆発させる手はずになっている。
「変わった荷車だね」
　クリュウがふと思ったのは今回ギルドから借りた荷車の形だ。別段変わったような所はないが、車輪が木製でなくて鉄製になり、細かいトゲが生えているのだ。
「ふむ。これはスリップ防止がされた雪山専用の荷車じゃ。凍った地面や雪が積もった地面は普通の車輪では空回りして動けなくなるからのぉ」
「へぇ、そうなんだ」
　また一つ勉強になった。
　クリュウは脱いでいたバサルヘルムを被ると、準備を終える。他の

皆も準備を終え、荷車を中心に集まる。そして、
「では皆の衆！　出陣するのじゃ！」
「おーッ！」
「いつの間にツバメさんがリーダーに？」
「……生意気」
　こうして初めてチームで出撃する事になったクリュウ達。特にクリュウは初めての雪山という事もあってより一層緊張していた。
　ガンナーがいないので今回はクリュウが荷車を担当する事になった。隊列（フォーメーション）はクリュウを中心に先頭をレミィ。右をツバメ。左をサクラが守る形となった。
　拠点（ベースキャンプ）から最初のエリアまで行く間も、クリュウはキョロキョロと辺りを見回す。どこからモンスターが出てくるか全くわからなくて不安なのだ。すると、そんな彼の肩をツバメがポンと叩いた。振り返ると、フルフルヘルムと呼ばれるフードを被ったツバメが優しげな笑みを浮かべていた。
「そう緊張するでない。ワシらがいるのじゃ。安心せい」
「う、うん。ありがとう」
「うむ」
　フードに隠れた黒いクリッとした瞳が嬉しそうに細まる。本当に彼女――じゃなくて彼は頼りになる。クリュウは彼女――じゃなくて彼の言葉を信じて安堵する。
　そんな二人をサクラはどこかつまらなそうにじーっと見詰めている。
　そんなこんなで一行はまず最初、狩場の入り口に到着する。広い広場で黄緑色の小さな雑草が地面を覆い、その上から雪が溶けきらずに所々残っている。周りは雪を被った針葉樹林が囲み、横には小さな小川が流れている。そして遠くには白色に染まった美しい山々が望める。なんともきれいな場所だ。
　そんな平穏な入り口にはクリュウが見た事のないモンスターが数匹いた。慌ててオデッセイを構えるが、そんな彼をツバメが制す。
「あれはポポという雪山に生息する大人しい草食獣じゃ。森丘などに

いるアプトノスと同じでこちらが危害を加えねば無害じゃよ」
　ツバメがそう言ってその姿を微笑みながら見つめるモンスターはポポ。体中を茶色い長毛で覆い、口の両横から巨大な牙が生えたマンモス型モンスターだ。ツバメの言うとおり大人しい草食獣で、主に雪山に生えているわずかな草木を食べている。人にも慣れやすく雪国の村や街ではアプトノスのように労働力として使ったり食料にしたりしている。ちなみにポポの舌は栄養満点で美味なので高く取引ができる。
　クリュウ達が入って来るとポポは一度こちらを見るがすぐにまた地面の草を食（は）み始める。どうやら危害がないと判断されたらしい。人の背丈より高い大人のポポ四匹が川の水を飲んでいる小さな子供のポポ二匹を守るように囲んでいるのは微笑ましい。
「どうしますか？　狩ってみます？」
　じっとポポを見詰めていたクリュウにレミィが問う。どうやら狩りたいように見えたらしい。だがそれは間違いだ。
「ううん。そっとしておこうよ」
　あんな微笑ましい光景を血で汚したくなかった。そんなクリュウを見てレミィは優しくにっこりと微笑む。
「クリュウさんは優しいですね」
「……クリュウはアプトノスは必要最低限しか狩らないから」
「そうなんですか？」
「うん。なんか肉食獣やブルファンゴは構わず狩れるんだけど、アプトノスやポポはちょっと狩りづらくて」
「うむ。気持ちはわかるのじゃがモンスターに同情していては立派なハンターにはなれんぞ」
「わかってるよ。ちゃんと必要な時は狩ってるから安心して」
「それならば良いのじゃが、そういう優しい性格のハンターは早死にする場合が多いのでな、クリュウにはそういう結末を迎えてほしくないんじゃ」
「ありがとう。気をつけるよ」
　クリュウ達は平和そうに生きているポポを避けて進む。ハンター

は手当たり次第にモンスターを狩ればいいというものではないのだ。
　比較的のどかな麓からクリュウ達は徐々に山を登っていく。さっきよりは高地だが、それでもまだ黄緑色の草が地面を覆い、雪が残っている。ここまで来る間にもポポは数匹会ったが全てスルーした。
　そんなこんなで次の広場に出たクリュウ達。するとここにもクリュウ初体験のモンスターがいた。人より少し低いくらいの体を白や茶色の毛を覆い、巨大な角を生やしたシカ型のモンスター。一瞬ケルビというシカ型の大人しく臆病な性格をしたモンスターを思い浮かべたが、違った。ちなみにケルビの角は良薬の材料としてかなり高値で売買されるので一時期はハンターや密猟者によるケルビの乱獲が起きたが、ギルドが規制をして今ではそれもなくなった。そしてクリュウはポポなどと同じ理由で狩った経験はあまりない。
「あれはガウシカという草食獣じゃ。アプトノスやポポと同じくこちらが何もせねば問題ないのじゃが、ひとたび怒らせればあの巨大な角で襲われるから気をつけるのじゃよ」
「うん。わかった」
　とりあえずこれも無視していいらしい。クリュウは安堵した。だが、世の中には例外というものが存在するもの。通り過ぎようとしたクリュウ達を警戒してか、一匹のガウシカが角を構えて突進して来た。
「ちょっとぉッ！」
「うむ。仕方ないのぉ」
　驚くクリュウの横にいたツバメはふぅと小さくため息を吐いた後、背中に挿したギルドナイトセーバーを抜き放つと両手に構える。ガウシカは構わず突っ込んで来る。結構早い。
「むぅッ！」
　ツバメは突っ込んで来るガウシカとの距離を見切り、通り過ぎざまに二本の剣を一斉に叩き込む。途端にバシャァッと真っ赤な血、そしてどういう理屈かはわからないが剣身から水が噴き出す。いきなりの攻撃に驚くガウシカに、ツバメは構わず右剣を上から叩き、左剣を横から斬りつける。そして最後とばかりに両方の剣をまるで一本の

剣のように重ねながら体を捻って叩き込む。それで、ガウシカは動かなくなった。
「ふむ。まぁこんなものじゃろうて」
そう言ってツバメは剣に付いた血を水と共に振り払い、背中に挿し戻す。
あっという間に終わった双剣の鮮やかな攻撃に、クリュウはビックリする。流れるような二本の剣による攻撃。相手に反撃のチャンスを与えない見事な連続攻撃だ。単純に片手剣の剣を二本構えたというものではないらしい。
「あれでもツバメさんはまだ鬼人化してませんから、まだまだ序の口ですよ」
驚いているクリュウにレミィがそう言うと、ツバメはいやいやと謙遜気味に首を横に振る。
「ワシなどまだまだじゃよ。それにここから先はより危険なモンスターもおるからな、気を引き締めて行くぞ」
「あ、ちょっと待って！」
出発しようとする一行を止めて、クリュウは慌てて倒れたガウシカの前にしゃがむと、一度手を合わせた後に剥ぎ取りに入る。そんな彼の行動をサクラがそっと説明する。
「ふむ。良い心がけじゃな」
ツバメはそう言って小さく微笑む。ツバメの中でクリュウの株価が上昇した瞬間であった。
クリュウは角と毛皮を剥ぎ取ると、それを荷車に載せる。雪山に来て初めての戦果だ。
「待たせちゃってごめん。じゃあ行こうか」
「そうですね。この先からは洞窟に入るので、ホットドリンクを用意しておいてくださいね」
レミィの言葉にクリュウはうなずくと再び荷車を引っ張る。
残ったガウシカは無視を決め込んだのかクリュウ達を気にせずに草を食べていた。そんなガウシカを後にしてクリュウ達はさらに山を登っていく。

坂を上っていくと、段々と草が雪に消え、その洞窟の前に着いた頃には地面は真っ白な雪に覆われていた。雪山用の車輪のおかげで雪の上でもしっかりと進める。

白い山壁にぽっかりと開いた暗い洞窟。内側から吹いてくる風は冷たく、肌に触れるとどうしようもない冷たさが襲う。

「うぅ、本当に寒いなぁ」

「ここから先はホットドリンクを飲んでください。洞窟の中は所々天井に穴が開いてますから光はあります。途中には大型モンスターの巣に使われる巨大な空洞がありますので、まずはそこを見てみましょう」

そう言うと、レミィは手に持っていた赤い液体の入ったビンをクイッと飲む。続いてツバメ、サクラと次々に飲み、最後にクリュウも飲んだ。

トウガラシを材料に使っているので味はちょっと辛めだが嫌な味ではない。飲んだ途端に体の内側から熱が生まれ、寒さが和らいだ。すごい効力だ。

「全員飲みましたね？　じゃあ行きましょう」

レミィを先頭に、クリュウ達は洞窟の中に入った。ホットドリンクのおかげか、先程よりも冷気が暖かく感じる。まぁ、それでも寒いのだが。

洞窟の中は細い道になっていて、レミィを先頭にサクラ、クリュウ、ツバメの順で一列になって進む。特にツバメはランゴスタを警戒して辺りを見回している。

そんな感じで進んでいると、今までずっと黙っていたサクラがススゥッとクリュウに近寄って来た。

「……クリュウ」

「サクラ？　どうしたの？」

「……寒い」

「そりゃ雪山だもん」

何を当たり前な事をとクリュウが笑った瞬間、サクラは無言のままクリュウに抱き付いた。驚くクリュウにサクラは構わず身をすり寄

せる。
「ちょっとサクラ！」
「……クリュウ、温めて」
「無茶言うなぁッ！」
「な、何してるですかぁッ！」
　レミィが顔を真っ赤にして慌ててクリュウとサクラの間に入るが、サクラはそれをうまく回避してさらにクリュウに熱い抱擁（ほうよう）をする。あまりの勢いにクリュウは耐えられずに押し倒された。
「ちょっとサクラ！　やめてよぉッ！」
「……あぁ、クリュウは温かい」
「サクラさん！　ずるいですよぉッ！　私も寒いですぅッ！」
　何か間違った方向に進み、いつの間にかクリュウはサクラとレミィに押し倒される形となった。さすがのクリュウも女の子二人に上から押さえつけられれば身動き不能。体をすり寄せる二人の美少女に無駄に体温を急上昇させる。
　そんな三人を見詰め、ツバメは苦笑いした。
「うむぅ、クリュウは大変じゃのうぉ」
　二人の女の子に押し倒されたクリュウ。そろそろ助けてあげようと、ツバメが一歩踏み出した瞬間、
「ギャアッ！　ギャアァッ！」
　突如響いた声にツバメはハッとして振り向くと、自分達が目指して進む方向から白いランポスが数匹現れた。レミィとサクラも慌てて武器を構え、クリュウも立ち上がる。
「ら、ランポス？」
「……違う。あれはギアノス。雪山に住むランポスの亜種」
　保護色である白い鱗に背中には青い縞模様があるまるでランポスの色だけを変えたように見えるモンスターは名をギアノスと言う。雪山のような寒帯に適応した体を持ち、寒さで動きが鈍った敵を集団で襲うランポスの亜種だ。
「うむ。基本動作はランポスと変わらんし、強さもランポス程度じゃ。気をつけるのは口から吐き出す氷液じゃな。ギアノス程度のそれで

は凍ったりはせぬが、ドスギアノスのは凍る。覚えておくのじゃ」
「うん」
今回の相手はギアノス。どうやら氷液を吐いて来るらしいが、大した威力ではないらしい。レベルもランポス程度。地形に慣れていないのでこちらの動きが鈍かったとしても問題はないだろう。
クリュウはグッとオデッセイの柄を持つ手に力を入れる。と、
「……私が行く」
そう言ってサクラは三人の前に踏み出した。
「サクラ？」
「……私はまだ、二人に力を見せていない。後の事も考えて、仲間の戦い方や実力は見ていた方がいい」
「うむ。そうじゃな。ではお主がどれだけ強くなったか見定めるまでじゃ」
「はい。がんばってくださいサクラさん！」
サクラはうなずくと背中に背負った飛竜刀【朱】を引き抜いて構える。そして、黒い眼帯に覆われていない隻眼をスゥッと細める。それはサクラが戦闘モードに入った合図だ。
ギアノスは全部で三匹。一斉に駆け出して襲って来る。だが、サクラは構わず雪の地面を蹴って前方にジャンプした。驚くギアノス達の上からサクラは飛竜刀【朱】を叩き込む。その一撃で一匹のギアノスは体を真っ二つに引き裂かれた。
「ギャアァ！　ギャア！」
残ったギアノス二匹は警戒して一度後ろに飛ぶと、体を後ろに反らして口から水色の白い冷気を発した液体を飛ばして来た。あれが氷液なのだろう。サクラはそれを横に軽く跳んで避けると、一気に地面を蹴って前にいるギアノスに横一線で剣を薙ぎ払う。ギアノスの体が吹き飛び、岩壁に音を立てて叩き付けられ、動かなくなった。
最後の一匹が仲間の仇と勇敢にも突っ込んで来るが、それは無謀であった。サクラは冷静に剣を構え直すと、地面を蹴って鋭い突きの一撃を決める。体を串刺しにされ、ギアノスは絶命した。
サクラは一度息を吐くと、ギアノスから剣を引き抜き、剣を振って

血を落として背中の鞘に収める。
あまりにもあっけないくらい短い戦闘であった。これが実力の差というものだ。
レミィは「すごいですぅ！」と拍手喝采をし、ツバメも「うむ。見事じゃ」と小さく拍手している。クリュウも二人に合わせて拍手。
「さすがサクラ。一撃一撃が鋭いね」
「……ありがとう」
サクラは頬をちょっと赤らめて小さく笑みを浮かべると――そのままクリュウに抱き付く。すぐにまたレミィが加わり押し倒され、先程と全く同じ光景が広がる。どうやらフィーリアという邪魔者がいない今、サクラは攻勢に出たらしくやけに積極的であった。
「ちょっとツバメ助けてぇッ！」
ツバメは愉快な仲間達に小さく笑みを浮かべると、そんなちょっとドジだけど優しい親友のような存在に思えるクリュウを、そっと助けるのであった。
途中にある大きな氷の柱にクリュウがはしゃいだり、きれいな白い花を付けた雪山草と呼ばれる草を採ったりしながら先に進む。途中何本か分かれ道があったが、レミィとツバメは地図を見ながら導いてくれる。
そして、一行が到着したのは先程レミィが言っていた大型モンスターの巣である。中は確かにかなり広く、天井も高い。奥の方には大型モンスターが行き来するであろう巨大な穴が天井に開いている。
そんな洞窟の中には目的のドドブランゴはおらず、代わりに数匹のギアノスがいた。洞窟戦となった場合邪魔になるので先に狩っておく。
ギアノスを片付けた後、一行は山頂付近を目指して出発する。ドドブランゴが出るのは主に山頂付近。
クリュウは味気ない携帯食料を食べながら歩く。すでに拠点（ベースキャンプ）を出発して半日。そろそろ日が本格的に傾き始めるだろう。
「夜の戦いは控えたいのじゃが、仕方ないのぉ」

「夜でも戦うの？」
「うむ。夜の方がギアノスとかの数も減るしのぉ」
「ふーん、だったら何で控えたいの？」
「うむ。この山は夜は気流が不安定なのじゃ。じゃから夜は突発的に吹雪いたりするのじゃ。視界が悪くなれば奇襲を受けたりこちらの統制が崩れてしまう可能性があるのじゃ」
「どっちもどっちだね」
「じゃが、今日は雲も少なかったようじゃし、問題ないじゃろう」
そう言ってツバメはかわいげな笑みを浮かべる。そんな彼を一瞥し、クリュウは初めての夜戦を覚悟して気合を入れる。
しばらく進んだ頃、
「あそこが出口です」
先頭を歩いていたレミィが指差したのは外に通じる穴であった。入り込む光はオレンジ色。もう夕方なのだ。
「まずワシとレミィが出よう。辺りにモンスターがいなければ、またはいた場合は駆逐してから合図を送る。そしたらクリュウとサクラも出て来くるのじゃぞ」
そう言ってツバメはレミィと共に洞窟の外へ出た。奇襲に対する備えだ。
クリュウは洞窟の中から二人の動きを見る。二人とも辺りをキョロキョロ見回した後、手招きした。どうやらモンスターはいないらしい。
クリュウはサクラと共に洞窟を出る。あまりの明るさに一瞬目を手で隠すが、再び見るとそこは一面雪景色であった。しかもちょっと遠くの崖から見える夕日が雪をオレンジ色に染めてなんとも美しい景色を作り上げていた。
一行が到着したのは後ろを岩壁、前を崖に囲まれた横長い広場。夕焼けに染まった一面の雪景色が自然とクリュウから緊張を取る。
「きれいだねぇ」
「うむ。確かに美しいのぉ」
ツバメはそう言ってフードを脱ぐ。解放されて風にそよそよと揺

れる黒い髪を押さえ、笑みを浮かべる。その人懐っこい笑みが夕日に染まり、かわいさを倍増させる。
「風が気持ちいいのぉ。なぁクリュウ」
そう言ってツバメはクリュウに向かって笑みを向ける。それがかわいい事。クリュウは頬を赤らめるとバッと反対を向く。
「うむ？　どうしたのじゃ？」
「な、何でもない！」
「……まさかお主」
「ち、違う！　別にいやらしい意味じゃなくて純粋にかわいかっただけで！」
「じゃからワシは男じゃッ！　かわいいとか言うでないッ！」
「……クリュウ。私は別にいやらしい意味でもいい」
「わ、私も！　クリュウさんなら！」
「お主らバカじゃろッ!?　もう少し考えて行動せぬかッ！」
ツバメはもう必死になって仲間達の間違った道を正そうとする。本当に仲間想いの優しい子なのだ彼は。ただし、クリュウのセリフに夕日以外の理由で頬が赤くなったのは秘密だ。
そんな緊張感の外れた会話を終えたクリュウ達はとりあえず辺りを散策する。クリュウも一度荷車を壁脇に置くと、白い雪を踏み締めながら歩いてみる。
「うーん、ちょっと歩きづらいなぁ」
いつもと違う足場に若干の不安はあるが、とりあえず問題はなさそうだ。崖の下を覗いてみようかと思ったが、あまりにも高そうなのでやめておく。
ツバメやレミィ、そしてサクラも周りを警戒する。突然の奇襲に備えているのだ。
「うむ。どうやらここには何もいないようじゃな。次の場所に行くぞ」
「うん。わかった」
ツバメの声にクリュウが振り返った刹那、サクラが背中の太刀を引き抜いた。クリュウは目を見開いて驚く。

「さ、サクラ？」
「クリュウッ！　後ろからブランゴじゃッ！」
ツバメの声にクリュウが驚いて振り返ると、岩壁に両側を囲まれた細道からクリュウが見た事ないモンスターが三匹現れた。
白い毛に覆われた体に赤や青という鮮やかな色の顔をしたコンガに似たモンスター、ブランゴだ。雪山の寒さに耐える為に進化したモンスターで、コンガよりは体力や攻撃力こそ低いが、素早く、ランポス系なみの仲間との連携さを持つ。集団で襲われたら厄介な相手だ。
「ヴォフゥッ！　ヴォゥッ！」
ブランゴは自分達のテリトリーに勝手に入って来た敵を見つけると、一度後ろに跳んで距離を作ってすぐさま攻撃態勢に入る。数は三匹。一番手前にいたクリュウに向かって、ブランゴは三方向から囲む。
クリュウは腰に挿したオデッセイを引き抜くと構える。サクラ達も慌てて駆け寄って来るが、クリュウは多少の余裕があった。
コンガとは何度も戦闘はしている。体力も低いのであれば問題ないと思ったのだ。
先手必勝。クリュウは先手を掛けようと横に動きながらタイミングを見計らう。と、そんな彼よりも先にブランゴ達が動いた。
クリュウの右側にいたブランゴはいきなり地面を蹴って四足で突進して来た。そして、そのあまりの速さにクリュウは驚き、対処が遅れた。
「ぐぅッ！」
あまりの速さにクリュウはガードする事もできず、横からブランゴの体当たりを受けて軽く吹き飛ばされる。転びこそはしなかったが、クリュウは脇腹を押さえて膝を着いた。
直後、クリュウの前にサクラとツバメ、そして少し遅れてレミィが展開する。
「大丈夫かクリュウ!?」
「う、うん」
「……気を抜いちゃダメ。ブランゴは動きが素早いから気をつけて」

「怪我はないですか？」
「うん。平気」
クリュウはそう答えると立ち上がる。バサルシリーズの堅牢さの前ではブランゴ程度の攻撃ではあまりダメージにならない。
小型モンスターとの戦闘に適していないガンランスのレミィは一度後方に下がり、クリュウ、ツバメ、サクラのそれぞれが三匹のブランゴと向き合う。
先頭のブランゴがクリュウに向かって突進して来るが、その斜線上にサクラが割り込むと飛竜刀【朱】で薙ぎ払う。その一撃でブランゴは吹き飛ばされると、雪の上をゴロゴロと転がった後動かなくなった。火属性に弱いブランゴにとって、サクラの炎の一撃は致命傷だったらしい。
たった一撃でやられた仲間を見て、残ったブランゴは驚く。その隙を突いてクリュウ、そしてツバメが突っ込んだ。
「りゃぁッ！」
クリュウはオデッセイをブランゴの体に叩き込む。血を噴き出して激痛に身を悶えさせる。構わずクリュウは剣を振るう。だが、ブランゴは横へ飛んでそれを避ける。クリュウは慌てて追い掛けて斬り掛かるが、またも逃げられる。
「このぉッ！」
クリュウは回転斬りで剣を振るうが、また避けられる。すると、その隙を突いてブランゴが突進して来た。その一撃を盾で防ぐと、また一撃を入れる。ブランゴは悲鳴を上げると後ろに跳んだ。そして再び突進。クリュウは横に跳んで回避しようとするが、ブランゴは直撃直前で急停止し、横に移動したクリュウに向かって爪を振るう。それは何とか盾で防ぐと、もう一撃剣を横一線に炸裂させる。吹き飛ばすような一撃でブランゴはようやく倒れた。
「す、すばしっこいなぁ……」
クリュウは動かなくなったブランゴを一瞥し、ふとツバメを見る。すると、ちょうど彼もブランゴを片付けたところらしい。
「ブランゴは基本的に攻撃よりも回避行動の方が多いからのぉ。逃げ

回って厄介じゃのぉ」
　そう言ってツバメは苦笑いする。彼の言うとおり、ブランゴの基本動作は攻撃よりも回避の方が多い為、一撃を入れるのが厄介なのだ。
　クリュウはブランゴの剥ぎ取りを終えると、ブランゴの毛やとがった爪などを荷車に載せる。すると、ツバメが小さな岩の上に腰を掛けて携帯食料を食べていた。
「やっぱり少し味気ないのぉ」
「まぁ、とりあえずお腹を膨らませる程度のだからね。あ、こんがり肉があるけど食べる？」
「いや、そこまで空腹ではないのでな」
　ツバメはそう言うと残った携帯食料を口に入れて食べ終える。
　クリュウは辺りを見回るレミィの背中を見詰める。サクラは少し離れた場所で携帯砥石を使って飛竜刀【朱】の刃を磨いていた。
「どうじゃ？　ブランゴの感想は？」
「戦いづらいね」
「そうじゃろ？　ワシも最初は辛かったもんじゃ。まぁ、今でも厄介な相手じゃがのぉ」
「そうだね。でもこれをドドブランゴ戦の時は僕一人で立ち回らなきゃいけないんでしょ？」
　今戦ってみたが、正直言ってちょっと自信がない。予想外に動きが素早いのだ。あんなのに集団で襲われた上にドドブランゴも警戒しなきゃいけないなんて、かなり辛いだろう。
　少し自信なさげなクリュウに、ツバメはにっこりと微笑む。
「大丈夫じゃ。クリュウがピンチになったらワシが助けるからのぉ」
　その言葉と優しげな笑みに、クリュウはちょっぴり顔を赤らめて視線を逸らす。正直その笑顔は直視できない。
「クリュウ？　どうしたのじゃ？」
「な、何でもないよ」
「……頬が赤いようじゃが」
「ゆ、夕日のせいだよ！」
　クリュウはそう言って彼に背を向け続ける。そんな彼の態度にツ

バメはおかしそうに小さく笑みを浮かべる。
「わ、笑わないでよぉ」
「すまんすまん」
「もぉ」
「……クリュウ？　顔が赤いけど」
切れ味を回復させたサクラが不思議そうにクリュウに尋ねるが、クリュウは無言を貫いた。その後サクラはツバメにも問うが、彼も笑顔で無言を貫いてくれた。
「ここにもいませんし、頂上付近に行ってみましょう」
レミィの意見に賛同し、クリュウ達は荷車を引いて山頂を目指して坂道を登って行く。周りを岩壁に覆われた細道を進む。その道はしばらく続いたが、頂上付近になって道が少し開ける。
「この先が頂上です。ドドブランゴがいる可能性が一番高い場所ですので気をつけてください」
「わかった」
レミィの忠告を聞き、クリュウは自然とオデッセイの柄を握る。
岩壁が広がっていき、視界が広がる。そして――
頂上は周りを岩壁に囲まれた闘技場のような場所だった。数ヶ所岩壁が崩れてその先には崖が広がっているが、どこもかしこも真っ白だ。
そこには三匹のブランゴ、そして、巨大なブランゴがいた。
普通のブランゴよりも何倍も巨大な体に巨大な牙、黄色っぽい髭（ひげ）が特徴の四足で歩く雪山の主――ドドブランゴだ。
「散開するのじゃッ！」
ツバメの号令にレミィとサクラが展開し、クリュウも岩壁に荷車を置くとオデッセイを抜き放って構える。
ドドブランゴはその気配に気づいて振り返る。そして、自分のテリトリーを犯した敵を睨み、体を反らす。
「ヴォオオオオオォォォォォッ！」
雪山中に響き渡るようなドドブランゴの怒号が、戦いの幕開けとなった。

第５６話　雪山の主　雪獅子ドドブランゴ

ドドブランゴはいきなり現れた敵を見定めるように警戒する。いつ突進して来るかわからない状況の中、打ち合わせどおりレミィが前方に出てその後ろでサクラとツバメが飛竜刀【紅葉】とギルドナイトセーバーを構える。

クリュウはそんな三人から少し横に移動してオデッセイを抜き放った。

十数秒の沈黙の後、再びドドブランゴは咆哮。直後に四本の足を蹴って前方に跳躍――ではなくすさまじい勢いで突進して来た。その尋常ではない速度にクリュウは驚く。

ドドブランゴのすさまじい突進に対しレミィは横に跳んで避ける。同時にサクラとツバメも横に跳んだ。

突進を避けられたドドブランゴは急停止。そこへツバメが突貫する。

「うりゃッ！」

ツバメはドドブランゴの後ろ右足に二本の剣で連続して斬り掛かる。右剣で横一線に斬り、左剣で縦に斬る。すさまじい切れ味でドドブランゴの硬い毛や皮膚を斬り裂いて血を噴き出す。

サクラもドドブランゴの顔面に向かって飛竜刀【紅葉】を炸裂させる。直撃した途端爆発し、ドドブランゴは悲鳴を上げて半歩下がった。そこへすかさずレミィが近寄ると腰を低くして砲口でドドブランゴを捉える。すぐさま砲撃加速装置を点火。途端に砲身が真っ赤に染まり、すさまじい白い蒸気を噴出させる。ドドブランゴもそのすさまじい熱源に気づいて振り返る。だが、もう遅い。すでにロックオンされている。

「ファイアァッ！」

ガンランス必殺の竜撃砲が爆発し、ドドブランゴの顔面が炎に包まれた。そのすさまじい威力にドドブランゴは雪の上を転がって悶える。そこへサクラ、ツバメ、そしてレミィが一斉攻撃を仕掛けた。

一方のクリュウは邪魔なブランゴと戦闘中だった。すでに一匹を

片付け、残り二匹のうちの一匹に斬り掛かる。
「ヴォウッ！」
斬りつけられたブランゴは反撃とばかりに爪を振るってクリュウを襲う。その一撃はバサルメイルの肩を守る巨大なバサルモスの甲殻に当たるが、その程度の攻撃では意味がない。結局それが彼の最後の抵抗で、次のクリュウの一撃で倒れた。
「ヴァオゥッ！」
残った一匹が怒り狂いながら爪を振るうが、クリュウはそれを横に軽く跳んで避けると、オデッセイを叩き込む。一撃、二撃を入れ、ようやくブランゴを倒した。直後、すさまじい爆音に驚いて振り返ると、レミィの竜撃砲が炸裂した瞬間だった。
炎に包まれたドドブランゴは巨体を支えられずに転倒して悶絶。そこへすかさず三人が襲い掛かる。クリュウも急いで駆け寄るが、その途中にクリュウは驚きの光景を見た。
ツバメは倒れたドドブランゴの傍に駆け寄ると、両方の手に構えた剣を天に突き上げて頭の上で交差。その瞬間二本の剣が赤い光に包まれた。
「行くぞよッ！」
ツバメはその瞬間――舞った。
今までとは比べ物にならない速度の連続斬りを炸裂させた。右剣、左剣を鋭く、速く、次々に繰り出して斬りまくる。右の斬撃を叩き込み、続いてその勢いを殺さないまま左の斬撃を斬りつける。神速の斬撃を連続して繰り出し続けた。そのすさまじい速度は目にも留まらないもの。剣から放出される赤い光が軌跡のように残るだけだ。
噴き出るドドブランゴの血、そして剣から噴き出す水がツバメを包み込んだ。
最後に一斉に二本の剣を叩き落し、すさまじい血が噴き出す。
うちに秘めた戦闘本能を双剣を通して一時的に解放し、無数の斬撃を目にも留まらぬ速さで繰り出す双剣奥義――鬼人化だ。
乱舞するツバメの別方向でもサクラが溜めに溜めた練気を一斉に解放して気刃斬りを炸裂させ、レミィも強烈な突きと砲撃を組み合わ

せた連続攻撃を繰り出す。
「うりゃあッ！」
クリュウもそれに加わってドドブランゴの白い毛皮にオデッセイを叩き込む。直後、ドドブランゴが堪らず起き上がった。
「ヴォオオオオオォォォォォォッ！」
『……ッ!?』
ドドブランゴは自分に群がる敵の動きを止めようとすさまじい怒号（バインドボイス）を上げる。多くのバインドボイスを経験してきたクリュウであっても、やはりこれには慣れる事はなかった。
本能に直接恐怖を呼び起こすその声に立ち竦（すく）み、そのすさまじい音量に耳を塞ぎながら体が動かなくなる。理性では動かなくてはならないのに、体が言う事を聞いてくれない。
（動かなきゃッ！）
クリュウは必死に恐怖に抗おうとするが、体はやはり動かない。他の皆も同じ。いくら歴戦のハンターとなったサクラであっても、この恐怖には打ち勝てないらしい。
必死に目だけを開いていると、驚くべき光景を見た。地面から雪を吹き飛ばして数匹のブランゴが飛び出して来た。知識ではドドブランゴの一声で部下のブランゴが現れるのは知っていたが、最悪の状況であった。せっかく片付けたのに、これでまた振り出しに戻ってしまった。
恐怖に体が動かなくても、どうしてかそういう部分は冷静だった。
ドドブランゴの鳴き声が小さくなり消えた。ようやくクリュウ達は体が動くようになる。だが、それよりも一瞬速くドドブランゴは動いていた。いきなり二本足で立ち上がると、両腕を頭の上に上げる。その動きにツバメの「逃げるのじゃッ！」という悲鳴が聞こえた刹那、ドドブランゴがその巨体を地面に叩き付けた。
そのすさまじい一撃にレミィが巻き込まれて吹き飛んだ。間一髪盾でギリギリガードしたおかげでほとんどダメージはない。だが、被害を受けたのはレミィだけじゃない。周りにいた三人もドドブランゴのすさまじい重量の一撃で震えた地面からの震動に平衡感覚を奪

われて少しの間動きを封じられた。
「レミィッ！」
　クリュウは倒れたレミィに駆け寄る。そんな彼の行動にサクラがドドブランゴに剣を叩き込む。ドドブランゴに一番ダメージを与えられるのは攻撃力が高く、弱点属性である火を備えたサクラだ。その強烈な一撃にドドブランゴは一度大きく後方に跳んで距離を開く。逃げるドドブランゴの目を逸らそうと、ツバメがドドブランゴにペイントボールを投げ付けた。
「こっちじゃッ！」
　ツバメの動きを追って、ドドブランゴが体の向きを変える。そして、突然地面を蹴ってすさまじい速度でツバメに突進。ツバメはそれを前に転がるようにして跳んで避けた。サクラはそんなツバメを見て慌てて追い掛ける。だが、ドドブランゴは突然今度は後ろに大きくジャンプした。突然の行動にサクラは対処が遅れてドドブランゴの足に蹴り飛ばされる。雪の上を二転三転し、雪まみれになりながらもしっかりと両足で立ち上がった。凛シリーズは見た目以上に防御力が高いのだ。
「サクラ！　大丈夫か!?」
　遠くのツバメの声にサクラはうなずく。その口の端からは血が流れていたが、拳で拭い取ると背中に挿した飛竜刀【紅葉】を構える。同時にツバメも武器を抜き放って構えた。
　ドドブランゴはツバメの方へ向くと突然その巨大な拳を雪の中に突っ込んだ。刹那、地面にある大きな雪の塊を抱え上げ、それを思いっ切り上に投げ飛ばした。しかもそれはツバメに向かって降り注ぐ。
「ぬぅッ!?」
　ツバメはそれを横に跳んで避ける。だが、そこへドドブランゴが拳を大きく振って体を投げ出すように前方にジャンプして来た。ツバメの前方に背から落ちると、そのままゴロゴロと体を乱暴に回転させて突っ込んで来る。ツバメは避けきれずに直撃。激痛と共に吹き飛ばされて壁に叩き付けられた。

「かはぁ……ッ！」
すさまじい衝撃に肺の中の空気を全て吐き出し、激しく咳き込む。だが、咳をするたびに体に鈍い痛みが走った。致命傷ではないが、かなりのダメージを受けた。ガードのできない双剣では直撃は辛い。
サクラはツバメを助けに行こうとするが、そこへ邪魔するかのようにブランゴが襲って来た。サクラはそんなブランゴに向かって薙ぎ払うように剣を振るう。一撃で一匹が倒れ、二匹目がその隙に体当たり。鈍い衝撃にサクラの体は後ろへ転がった。そこへ別のブランゴが突っ込んで来るが、サクラはそれを横に跳んで避けると剣を振るって吹き飛ばす。
これで残るは一匹。そう思った刹那ドドブランゴが咆哮。途端に地面からまたもブランゴが四匹現れた。サクラは目の前にいた一匹を斬り飛ばして隻眼で新手を見詰める。
「……厄介ね」
サクラは再び剣を構えるとモンスター達を見詰め続ける。
一方クリュウは倒れたレミィを抱き起こす。いくらガードしてもダメージがない訳ではない。クリュウは心配したが、レミィは意外と大丈夫であった。
「ご心配を掛けさせてしまい、申し訳ありません」
「何言ってるんだよ。僕達仲間でしょ？」
「ありがとうございます」
レミィはそう笑顔で言うとクリュウに一瞥を送ってドドブランゴを見る。クリュウもそんな彼女の動きにうなずくと二人は同時に走り出した。その時、不意に妙な感覚に襲われる。体を包み込む柔らかな何か。そして自然と元気が出て来る。まるで体力が回復したようだ。
「ツバメさんの広域化ですね！　助かります！」
「これが広域化……」
よく見るとレミィの表情も幾分か和らいで見える。どうやら彼女のダメージも広域化によって幾分か回復されたらしい。すごい能力だ。ふと壁に背中を預けるツバメを見ると、その手には回復薬が握ら

れていた。
広域化は仲間想いのツバメに良く合った組み合わせだと心から思った。
ドドブランゴは横に跳んで一度ブランゴに敵を任すようにして離れる。その隙にレミィはツバメに走り、クリュウはサクラに向かって走る。
「大丈夫ですかツバメさんッ!?」
「……うむ、すまないのぉ」
回復薬を飲んでもまだ少し元気のないツバメ。レミィはその前に立つと盾を構えてドドブランゴを見詰める。とりあえずツバメが動けるまで盾で攻撃を防ごうとしているのだ。
「……すまん」
「気にしないでください」
ツバメはもう一本回復薬を飲む。同時に三人の体力も回復した。
一方、クリュウは剣を振るってブランゴを吹き飛ばすサクラに駆け寄ると、横からサクラを襲おうとするブランゴに剣を叩き込んだ。突然後ろから襲われたブランゴは驚き動きが止まる。そこへクリュウの追撃が炸裂し、ブランゴは悲鳴を上げて倒れた。
「サクラ大丈夫ッ!?」
クリュウの問いに、最後のブランゴを斬り飛ばしたサクラは小さくうなずく。
ブランゴ全滅。しかしドドブランゴを中心にお互い反対の位置にクリュウとサクラ、レミィとツバメに分断されていた。
クリュウはチラリとツバメ達を見る。ツバメは何とか立ち上がったがまだ本調子になれないだろう。だったら、自分が行動するしかない。
クリュウはダッと駆け出してドドブランゴに急接近する。ドドブランゴも自分に迫るクリュウに気づいて顔を向ける。
チャンスだ。
クリュウは道具袋（ポーチ）からお得意の閃光玉を取り出すとドドブランゴに向かって思いっきり投擲した。これでドドブランゴの動

きを封じて攻撃を掛ける。クリュウの十八番（おはこ）であった。だが、それは失敗に終わった。
　ドドブランゴはいきなりクリュウに向かって突進。投げられた閃光玉は移動したドドブランゴの背後で炸裂した。驚愕するクリュウにドドブランゴが激突。クリュウは悲鳴も上げられずに吹き飛ばされた。雪の上に激突したクリュウの体は雪煙を舞い上げながら雪の上を転がり続け、そして動かなくなった。
「……クリュウッ！」
　サクラが悲鳴のような声を上げて彼に駆け寄る。
　ツバメはまだ痛む体にムチを打って立ち上がると、レミィの制止の声を振り切ってドドブランゴに向かって突進する。
「こっちじゃッ！」
　ツバメはドドブランゴに向かって駆け寄るが、ドドブランゴは大きく後ろにジャンプしてそれを避ける。ツバメは逃げるドドブランゴを追いかける為に走った。だが、今度はドドブランゴが前方に向かってジャンプし、ツバメに襲い掛かる。ツバメは急停止してほとんど身を投げ出すようにして横へ跳んだ。彼が一瞬前までいた所にドドブランゴの巨体が激突する。
　ツバメは双剣を引き抜くとドドブランゴに接近。振り向いたドドブランゴのその白い毛皮に向かって連続して剣を叩き込んだ。だが、ドドブランゴは後ろに跳んで逃げる。しかしそこにはすでにレミィがガンランスを構えていた。
　ドドブランゴに向かってレミィは連続して突きと砲撃を繰り出す。砲撃には火属性が加わっているので火に弱いドドブランゴはその攻撃に悲鳴を上げる。そこへツバメがドドブランゴの懐に飛び込むと双剣を抜き放ったと同時に鬼人化。すかさず乱舞を開始する。
　一方、サクラは倒れたクリュウに駆け寄る。
「……クリュウッ！　しっかりして！」
「な、なんとか大丈夫みたい……」
　そう言ってクリュウはフラフラと立ち上がった。激突の寸前で盾を構えた上に地面に激突する直前に受身を取った為に大ダメージは

避けられた。
　クリュウは回復薬グレートを一気に飲み干すとツバメとレミィが引き付けているドドブランゴを見詰める。
「まさか閃光玉をあんな形で避けられるなんて予想外だったよ」
「……気をつけて。ドドブランゴの素早さは厄介」
「痛感したよ」
　クリュウは苦笑いすると再び道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出してギュッと握った。
「もう一度閃光玉を使って奴の動きを止める」
「……わかった」
　サクラの返事にクリュウは駆け出した。サクラもその後を追って走り出す。
　クリュウとサクラの接近に気づいたツバメとレミィがドドブランゴから離れる。そして、ドドブランゴがこちらを向いた瞬間にクリュウは閃光玉を投げつけた。瞳を閉じても感じられる強烈な光が炸裂し、ドドブランゴの悲鳴が響き渡る。再び瞳を開くとドドブランゴが目を潰されてもがき苦しんでいた。
　クリュウはすぐさまオデッセイを抜き放つと、ドドブランゴに向かって叩き込んだ。白い毛を斬り裂いて血飛沫が舞うが、クリュウは構わずに二撃目を叩き込もうと腕を振り上げる。
「クリュウッ！　下がるのじゃッ！」
　ツバメの声が聞こえた直後、ドドブランゴが大きく暴れた。振り回された腕がクリュウを襲った。クリュウはそれをとっさに盾で防ぐが、勢いは殺せず大きく後ろに後退した。そこへツバメが駆け寄って来る。
「大丈夫か？」
「う、うん。びっくりした」
「ドドブランゴは閃光玉を受けても暴れ回るから気をつけるのじゃ」
「そ、そうなんだ」
　よく見るとドドブランゴは滅茶苦茶に拳を振ったり前後左右にジャンプで動き回ったりしている。あんなにも動き回られたらク

リュウお得意の戦法は使えない。
「ど、どうしよう」
「とりあえず今レミィがシビレ罠を取りに行っておる。それを使って奴の動きを止めた後、全員で一斉攻撃をするのじゃ」
「わかった」
「……（コクリ）」
　クリュウはシビレ罠を掴んで走って来るレミィを見てオデッセイの柄をギュッと握る。隣に立つサクラも飛竜刀【紅葉】を構え、いつでも大丈夫だ。
「持って来ました！」
　駆け寄って来たレミィの手にはシビレ罠がしっかりと握られていた。それを見てツバメはうむとうなずく。
「よし、ここに仕掛けるのじゃ」
「わかりました！」
　ツバメの指示にレミィはすぐさま指定の場所にシビレ罠を置くとピンを引っ張った。麻痺性の電撃が流れ出し、準備完了だ。
「皆武器を構えるのじゃ！　良いか？　奴がシビレ罠に掛かったら総攻撃を掛けるぞ！」
「わかった」
「わかりました！」
「……（コクリ）」
　四人はシビレ罠の後ろに立つと閃光玉で視界を潰されて暴れ回るドドブランゴを見詰める。クリュウもそんなドドブランゴを見詰めながらオデッセイの柄をグッと掴んだ。
　閃光玉の効き目が切れたドドブランゴは怒号を発しながら視界から消えた敵を見回す。すると、少し離れた場所でその敵が一塊になっていた。口から外気よりもさらに冷たい雪の混じった白い息を荒々しく吐き出しながら、ドドブランゴは怒りに身を任せて敵に向かって突進する。
　――理性が飛んでいなければ、彼らの前にある異物にも気づいていたかもしれない。

「グオオオオオッ!?」
突進して来たドドブランゴはシビレ罠に掛かって悲鳴を上げながら体を硬直させる。痺れて動かない体を必死に動かそうとするが、それは無駄だった。
「今じゃッ！」
ツバメの掛け声の後、四人は一斉に飛び掛った。それぞれツバメとクリュウがドドブランゴの右側から、サクラが正面、レミィが左側から攻撃を仕掛ける。
「せいやッ！」
すかさず鬼人化して乱舞を開始するツバメを一瞥し、クリュウはオデッセイをドドブランゴの体に叩き込む。硬い毛皮に阻まれるがクリュウは構わず剣を連続して剣を振るった。真っ赤な血が噴き出すが無視。ただひたすら剣で斬り付ける事だけを考えて腕を振るう。
サクラは連続して剣を叩き込んだ後溜まった練気を解放して気刃斬りを炸裂させる。剣がドドブランゴの体を斬りつけるたびに小爆発が起きドドブランゴの弱点である炎がその体を包み込む。さらにレミィも突きと砲撃を繰り返していた。弾がなくなると一度砲身を上に向けて弾倉から空薬莢を吐き出して弾を再装填。再び砲撃を開始する。
二人の強力な炎攻撃に加えクリュウの地道ながらの必死の攻撃。さらにツバメの目に留まらぬ速さの連続斬り。動けぬドドブランゴはすさまじい攻撃の嵐を耐えるしかなかった。
四人は力の限りそれぞれの武器を叩き込み続けた。
シビレ罠が解ける直前レミィが「離れてくださいッ！」と三人に叫び、クリュウ達はドドブランゴから離れた。刹那、レミィは腰を低くして砲撃加速装置を点火。途端に砲身が真っ赤に染まり、シュゴオオオオオオっと真っ白な高熱の蒸気が噴出される。そして、
「ファイアァッ！」
ドガアアアアアアアアンッ！
必殺の竜撃砲が爆裂し、直前にシビレ罠の効力が解けて体の自由を取り戻したドドブランゴはそのすさまじい爆撃に横に吹っ飛ばされ

て倒れた。もがくドドブランゴにサクラがすかさず連続して気刃斬りの嵐を叩き込む。
「グオオオォォォッ！」
ドドブランゴは怒号を発しながら起き上がると目の前にいるサクラに巨大な腕を薙ぎ払うように振るう。サクラはそれを横に転げるようにして避けた。すかさずレミィは「いやぁッ！」とドドブランゴに全体重を掛けた一撃と突き刺すと刃が刺さったままゼロ距離で連続で砲撃した。激痛にドドブランゴが悲鳴を上げる。
「うりゃあッ！」
レミィが作った隙を突いてクリュウはドドブランゴの顔面にオデッセイを叩き込む。その刃先がドドブランゴの鋭利な牙に激突した瞬間、牙は破砕した。
「グオオォォォッ!?」
自慢の牙を折られてドドブランゴは悲鳴を上げる。クリュウは内心ガッツポーズしたが、怒り狂うドドブランゴは牙を折ったクリュウに向かって巨大な腕を振り下ろす。クリュウはそれを横に跳んで避けた。そこへ鬼人化したツバメが連続斬りを側面から叩き込み、クリュウも続いて剣を振るうがドドブランゴは後ろに跳んでそれらの攻撃を避ける。
「うむぅ……」
最後の一撃を避けられ、ツバメは悔しそうに唸ると鬼人化を解いた。クリュウは彼の肩が激しく上下しているのを見て一歩前に出る。
双剣の鬼人化は体力を大幅に消費する。熟練の使い手でさえ連続して使えば疲労で戦闘不能になってしまう技。事実、ツバメもかなり疲労している。しかも彼はドドブランゴの直撃を受けているのでダメージも最も大きいだろう。
「ツバメは下がって少し休んで」
「うむぅ、しかしじゃな……」
「そんな状態の方が危ないよ。倒れちゃうよ？」
「うぬぅ……」
「……下がって」

サクラはフラフラのツバメの肩を引いて前に出た。そんな彼女の行為にツバメも諦めて「すまぬのぉ……」と言って後方に下がる。さらにレミィも彼の前に立つと巨大な盾をグッと構えた。
「ツバメさんは遊撃に回ってください」
「すまぬ……」
申し訳なさそうに謝るツバメにレミィは一度小さく微笑むと再び前を向く。その視線の先にはこちらを睨み付けるドドブランゴ。
「レミィはツバメをお願い！　サクラッ！」
「……（コクリ）」
言葉だけでわかる。それが二人の絆であった。
クリュウの想い――二人でドドブランゴをひとまず撃退しようという想いに、サクラはうなずいた――彼ならそういう判断をすると信じていたのだ。
そんな二人の絆をちょっぴりうらやましいなぁと思いながらレミィは衝撃に備えてグッと姿勢を低くして盾を構える。
「グオオオォォォッ！」
ドドブランゴは怒号と共に足元の雪の塊を投げつけて来る。クリュウとサクラは互いに横に跳んで避け、レミィはその巨大な盾で防いだ。
ドドブランゴはさらに二撃目とばかりに雪を上空に打ち上げる。その雪は寸分違わず――クリュウの頭上に飛来する。クリュウはそれを横に跳んで避けるが、地面に落ちた雪の塊はその衝撃で砕け、その破片がクリュウの脇腹にぶち当たり、クリュウは小さな悲鳴を上げた。
「くぅ……ッ！」
クリュウは痛みに一瞬目をつむってしまった。狩場で目をつむるなとあれだけ師匠に言われていたのに、本能とは日々の訓練をも無にしてしまう。
――その一瞬視界が封鎖された間に、ドドブランゴはクリュウに向かって突進して来ていた。
「うわぁッ!?」

クリュウはとっさに体を横に投げ出すようにして避ける。一瞬前までいた彼がいた場所にドドブランゴの巨体が突撃して来た。すかさずサクラが側面から連続して飛竜刀【紅葉】を縦や横に振り回して斬り掛かる。肉が裂けて血が舞い、爆発が肉を焼く。ドドブランゴはそんなサクラを潰そうと両手を振り上げて二足で立ち上がる。サクラはすぐに後ろに跳んで回避。直後に彼女がいた場所にドドブランゴの腹が激突した。

レミィは体を投げ出して起き上がろうとするドドブランゴに連続して砲撃を放つ。続いてツバメが側面から斬り掛かる。鬼人化していなくても、その動きは峻烈（しゅんれつ）だ。

クリュウも遅れてドドブランゴの顔面に剣を叩き込む。二撃、三撃と剣を連続して斬り付けていると、ドドブランゴのボスの証である髭が小さな破砕音と共に折れた。

一度ならず二度までも。ドドブランゴは怒り狂いながら後ろに跳ぶと、クリュウに向かって突進。クリュウは横に跳んでギリギリ避けた。だが、口から白い息を吐きながら血走った目をするドドブランゴの動きは早く。クリュウが体勢を立て直した時には正面を向けられていた。

「しま――」

直後、ドドブランゴはクリュウに向かって白い霧状のブレス炸裂させた。ドドブランゴの雪ブレスだ。直撃を受けたクリュウはその風圧に吹き飛ばされて雪の上を転がって倒れる。腕に力を込めて起き上がろうとするが雪ブレスの影響で体は所々が凍り付き、彼の動きを著しく封じていた。

「くぅ……ッ！」

関節などが凍り付いてギシギシと音を立て、細かな氷粒を落としながらクリュウは立ち上がる。だが、今にも倒れてしまいそうなほど体の動きが鈍い。

「……クリュウッ！」

サクラがクリュウに駆け寄ろうとするがその前にドドブランゴが立ち塞がって巨大な腕を振るって彼女を襲う。幸いギリギリで後ろ

に跳んだサクラは無傷だったが、クリュウとの距離を離されてしまう。ツバメは側面へ移動してドドブランゴの背後から斬りかかる。痛みにドドブランゴが振り返った瞬間、レミィが閃光玉を投げてその動きを封じた。

クリュウは鈍くなった腕をなんとか道具袋(ポーチ)まで動かし、そこから解氷剤を取り出して袋の紐を緩めて中の粉を凍った部分に振り掛ける。その瞬間、今まで凍っていた氷がうそのように消え、関節の動きが戻った。同様に他の凍結部分も解氷し、クリュウは動きを取り戻す。

「クリュウさん！　大丈夫ですか!?」

レミィが不安そうな瞳をしながら駆け寄って来たが、クリュウは「大丈夫だよ」と腕を軽く回してみる。それを見てレミィは安堵の息を漏らした。

「良かった……」

クリュウは微笑むレミィを一瞥し、回復薬を一つ飲み干す。彼の視線の先ではまだドドブランゴが視界を封じられていたが、腕を激しく動かしたり動き回ったりしていてとてもじゃないが近づけそうもない。やっぱり動きを封じるには罠しか無理らしい。

「……クリュウッ！」

「無事か!?」

サクラとツバメもクリュウを心配して駆け寄って来た。皆それぞれ雪などを被って白く染まっているしダメージを受けている者もいる。しかし幸いにも致命傷は誰も受けていなかった。

「……クリュウ」

「うん」

クリュウとサクラはお互いを見てうなずき合うとドドブランゴに向かって突進した。突然の事に驚くレミィに対し、ツバメは「ふむ」と口元を綻ばせて二人の背中を見詰める。

走りながらクリュウは道具袋（ポーチ）の中からペイントボールと取り出すとドドブランゴに投げつけた。すぐさまオデッセイを腰から引き抜いて構えるとドドブランゴの脇腹に力を込めて叩き込んだ。

さらにドドブランゴの顔面にサクラの抜刀が炸裂する。激痛にドドブランゴが悲鳴を上げて半歩引いた。すかさずサクラとクリュウの連続斬りが炸裂。サクラは頭部を、クリュウは側面を徹底的に攻撃する。

クリュウはグッと柄を力強く握ってオデッセイを叩き込んだ。肉が切れて鮮血が舞うが、入った剣は重い。全身筋肉のようなドドブランゴの肉質は意外と硬く、剣を叩き込むたびに腕に負担が掛かる。サクラのような両手掴みならともかくクリュウは片手。そのダメージがダイレクトに襲い掛かるのだ。だが、

「こんなのバサルモスに比べたら何でもないよッ！」

クリュウは成長した。

様々なモンスターを戦い、強くなった。それは力や技術だけではなく経験や知識も蓄えた。だからこそ、ドドブランゴという強敵を前にしてもクリュウは一歩も引かないのだ。

傷ついた場所を集中して狙いダメージを蓄積させていく。ドドブランゴだって無敵ではない。ダメージが蓄積されればいずれ倒れる。当然の事だ。

「うりゃあッ！」

気合と力を込めて剣を振り落とすが、直撃寸前でドドブランゴは後ろに大きく跳んでそれを避けた。見るとサクラも最後の一撃を逃したらしく、振り下ろした太刀の先端が雪に埋もれていた。

ドドブランゴは二人の動きが一瞬止まったのを見て四足に力を込めて俊足の突進をして来る。サクラはギリギリで横に回避し、クリュウも横に回避しながら盾を構える。直後ドドブランゴの肩がぶつかり、クリュウは大きく後ろに吹き飛ばされたが足を踏ん張って体勢だけは崩さなかった。

クリュウはすかさず剣を構え直して斬り掛かるが、ドドブランゴは横に大きく跳んでその一撃を回避する。勢い余ったクリュウはたたらを踏んだ。

サクラは太刀を下段に構えながらドドブランゴに接近する。さらに別方向からレミィとツバメも突進し、三人がドドブランゴを包囲し

た。一斉攻撃。だが、
「ブオオオオオオオオオッ！」
バインドボイスが炸裂し、三人は足を止めて思わず耳を両手で押さえて動けなくなった。動く事ができたのは遠くにいたクリュウだけ。
「みんなッ！」
クリュウは急いで走るが、ドドブランゴの声を聞いて雪面の中からブランゴが数匹現れ、うち一匹がクリュウの前に立ち塞がった。
「邪魔だよッ！」
クリュウはブランゴに剣を叩き込むが、ブランゴはそれを横に跳んで避けると突進して来る。脇腹に直撃を受け、クリュウは小さな悲鳴を上げて雪の上に横転した。
一方サクラ達も動かぬ体に焦る。誰もが次の一撃を覚悟した――だがドドブランゴは四人とは予想外の行動を取った。
ドドブランゴは突如四人に背を向けて走り出した
「逃げるつもりじゃッ！」
ツバメが逸早く反応して走るが、時すでに遅し。ツバメの刃先が届く寸前、ドドブランゴは咆哮と共に大ジャンプ。岩壁の向こうに飛んで行ってしまった。その桁違いの跳躍力と突然の事にクリュウは呆然としたが、すぐに戻る。
とりあえず邪魔なブランゴを排除し、四人は集まった。それぞれ怪我こそないがそれなりに疲労しているのが見て取れた。
「まだ足を引きずる動作をせんという事は、奴は巣には戻らんじゃろうな」
「そうですね。きっと先程の広場に移動したんでしょう。クリュウさんの付けたペイントボールの匂いもそっちの方角から漂ってきますし」
「……じゃあ、さっきの場所に戻る」
サクラはそう言いながら砥石を使って切れ味を回復させている。クリュウも思い出したように砥石を取り出して切れ味を戻す。かなり叩き込んだのでいつの間にか刃は少し欠けたりしていた。
ツバメとレミィも同様に砥石を使って切れ味を正す。その間にク

リュウは荷車まで駆け寄ってそれを引いて皆の場所に戻る。
「とりあえずシビレ罠に掛けて一人一個大タル爆弾Gを設置して起爆しよう。さすがのドドブランゴもそれだけの爆弾を受ければ無事じゃ済まないだろうしね」
「うむ。そうじゃな」
「確かに、このまま爆弾を使用しないというのは厳しいですね。起爆は私の竜撃砲で行いましょう」
「……（コクリ）」
作戦方針が決まり、四人は再び隊列（フォーメーション）を組んで歩き出す。向かう先は先程の雪原。そこにドドブランゴはいる。
まだまだ戦いは続きそうだ。
クリュウはふと空を見上げる。どこまでも澄んだ星空がすごくきれいだった。
風が冷たい。クリュウはそろそろホットドリンクの効き目が切れる頃だと思い出して新しいホットドリンクを飲む。これでもう三本目。残り二本分の時間で倒さないと、それは事実上の失敗となる。
クリュウがホットドリンクを飲むのを見て他の三人もクイッとホットドリンクを飲み干し、新たな戦場に向かって歩き出す。
星空が美しい夜の雪山。日が沈み、より一層寒さが険しくなった。
バサルヘルムの隙間から入り込んでくる冷気が頬を撫で、クリュウは小さく身震いし、星を見上げながら歩く。
「……やっぱり寒いな」
彼のふとつぶやいた言葉に、三人は小さく笑みを浮かべてうなずいた。
月の光に見守られながら、クリュウ達は新たな戦場に向かった。

第５７話　雪山に響く最期の怒号

クリュウ達が広場に出ると、そこにはすでにドドブランゴと数匹のブランゴが待ち構えていた。先頭に立つドドブランゴは憎き敵を睨み付けると怒号を山中に響かせる。それが戦いの合図となった。

「目を閉じてくださいッ！」

レミィはそう叫ぶと同時に閃光玉を投擲した。突撃体勢に入っていたドドブランゴの眼前でそれは炸裂し、視界を潰す。周りを囲むブランゴも同様だ。

視界を奪われてもがき苦しむドドブランゴとブランゴ。その間にクリュウは荷車を端に置くとすぐにシビレ罠を取り出して少し離れた場所に設置する。他の三人はそれぞれ大タル爆弾Ｇを掴むとクリュウに駆け寄る。クリュウの分はツバメが持ってくれていた。

「クリュウの分の大タル爆弾Ｇじゃ！」

「ありがとう！」

ツバメから大タル爆弾Ｇを受け取るとクリュウは三人と一緒にシビレ罠の後ろに移動する。四人が見詰める先でドドブランゴはまだ視界が回復できずに暴れ回っていたが、そろそろその効き目も切れる。クリュウはグッと両手でしっかりと大タル爆弾Ｇを掴む。

そして、突如ドドブランゴは動きを止めると背を向けていたクリュウ達に振り向きしっかりとその双眸で睨み付けて来た。閃光玉の効き目が切れたらしい。

ドドブランゴは白い息を吐きながら怒鳴ると雪を蹴り飛ばして全力疾走でクリュウ達に突進する――だが、鋭利な爪が憎き敵を斬り刻む寸前で、ドドブランゴの体は強制的に停止させられた。その足元には麻痺性の電撃が放電されるシビレ罠が。

「グオオオォォォッ!?」

気づいた時にはすでに遅かった。

「今じゃッ！」

ツバメの言葉を聞くよりも前に全員は動き出すとそれぞれの手に持つ大タル爆弾Ｇを痺れて動けないドドブランゴの周りに設置する。

「終わったよッ！」
「皆さん離れてくださいッ！」
　レミィはそう叫ぶといまだにもがき苦しむドドブランゴと大タル爆弾Ｇ一個とに照準を合わせて姿勢を低くすると砲撃加速装置を点火。再び白い蒸気を噴出し始めるシザーガンランス。その砲口はしっかりと獲物を捉えていた。
「ファイアァッ！」
　すさまじい爆発と共に竜撃砲が発射され、さらにそれは大タル爆弾Ｇを爆破。連鎖爆発を起こしてドドブランゴは爆炎に包まれた。超強力な爆弾を一斉に起爆した事による爆風や衝撃波はクリュウ達をも容赦なく襲い、サクラは吹き飛ばされ、ツバメは飛ばされる事はなかったがバランスを崩して尻餅を着いた。クリュウに至っては吹き飛ばされた上に顔面から雪にダイブしてしまう。レミィは盾でそれら全てを防ぎ、先ほどと寸分変わらぬ場所にいた。
　レミィはシザーガンランスを背中に戻すと巨大な黒煙から距離を取るように離れる。その背に背負われているシザーガンランスの放熱装置は真っ赤に焼け、白い蒸気が噴出し続けている。これでまたしばらく竜撃砲は撃てなくなった。
　クリュウはサクラと共に立ち上がると天まで昇る巨大な黒煙を見詰める。それはツバメやレミィも同様だ。
　真っ白な世界を黒く染め上げる黒煙を見詰めながら、クリュウは「やったの？」と隣に立つサクラに問うが、サクラは状況を見定めるように黒煙をその隻眼で見詰め続けていた。と、
「……まだみたい」
　そう小さく答えると、サクラは背中の鞘に収めていた太刀を構えた。サクラに続いてクリュウ、ツバメ、そしてレミィと次々に武器を構えて黒煙を睨み付ける。そして……
「ゴァオオオオオォォォォッ！」
　大地を震わせるような怒号に黒煙は吹き飛ばされ、黒い煙の渦の中から白き雪山の主――ドドブランゴが姿を現した。白い毛皮には黒い焦げや幾つもの傷があり血だらけだが、ドドブランゴはその四本の

足でしっかりと大地に立っていた。その威風堂々とした姿にクリュウは驚愕する。
「うそでしょッ!?　効いてないのッ!?」
「……大丈夫。効いてる」
　残酷な現実に戦意を失いつつあるクリュウの肩を、サクラがそっと叩いた。その横顔はとても凛々しく、彼女が言うならと思ってしまうが、それでも疑ってしまう。
「でも、立ってるよ?」
「……大タル爆弾G四発なんて、リオレウスの甲殻ですら吹き飛ばせる威力。ドドブランゴごときに効かないなんてありえない」
「そ、そうかもしれないけど……」
　クリュウは彼女の言葉に改めてドドブランゴを見る。すると彼女の言葉を裏付けるようにドドブランゴに異変が起きた。
「むぅッ！　足を引きずっておるぞッ！」
　ツバメの言葉どおりドドブランゴは突如足を引きずって歩き出した。それはモンスターが弱っている証拠だ。
　身構えるクリュウ達だったが、彼らの予想に反してドドブランゴはそのまま足を引きずってクリュウ達とは別方向に向かう。
「逃げるつもりじゃッ！」
　ツバメはそう叫ぶと急いで逃げるドドブランゴを追いかける。クリュウとサクラもそれに続き、遅れてレミィも追撃。ブランゴが邪魔するがサクラとレミィがブランゴを一掃。二人が作った隙を突いて残ったクリュウとツバメがドドブランゴを追撃する。
　足を引きずるドドブランゴはそれほど速くない。一番最初に走り出したツバメはなんとかドドブランゴの側面に追いつくと双剣を引き抜いて連続して斬り付けた。遅れてクリュウもドドブランゴの後部にオデッセイを叩き込む。だが、二人の猛攻撃を無視してドドブランゴは足を引きずりながらも歩き続ける。
「止まってよぉッ！」
　ドドブランゴの後足の表皮をオデッセイの刃が斬り裂いて真っ赤な血が噴き出るが、ドドブランゴは止まらない。

「止まるのじゃッ！」
ツバメも連続して剣を振り回す。二本の剣がすさまじい速度で暴れ回ってドドブランゴの白い毛皮を真っ赤に染めるが、ドドブランゴの足は緩まない。そして、
「くぅッ！　離れるのじゃッ！」
ツバメの声にクリュウがドドブランゴから離れた刹那、ドドブランゴは咆哮と共に大ジャンプして雪を被った岩壁の向こうに消えて行った。一瞬でも遅れていたら巻き込まれていただろう。
「逃げられたぁッ！」
クリュウは悔しそうにドドブランゴの消えた空を見上げる。ツバメも「逃がしてもうたか」と残念そうにため息した。ブランゴを片付けたサクラとレミィも残念そうにドドブランゴが消えた方向を見上げながらため息する。
「逃げられちゃいましたね」
「うむ。残念じゃ」
「……空気を読まない奴」
「コラコラ」
集まった四人は幸いにも誰も怪我はなく無事だった。クリュウはとりあえず残っているブランゴから剥ぎ取りを行う。サクラはそんなクリュウの解体作業を見守り、レミィは荷車を持って来た。そしてツバメはくんくんとペイントボールの匂いをかぎながら手に持つ地図と位置を見比べている。
「ふむ。どうやら今度こそ巣に向かったらしいな」
「巣ですか。では眠っている可能性もありますね」
「大タル爆弾Gが残ってれば大ダメージを与えられたのにね」
解体を終えたクリュウは合流すると残念そうにつぶやく。睡眠時は緊張が解れている為か通常時よりも大ダメージを負わせられる。その状況で大タル爆弾Gを使えばかなりの大ダメージを与えられたのだが、さっき使ったので全部だったのでそれは不可能だ。
「まぁ、その際は私の竜撃砲で代用します。威力はかなり下がりますが現在使える攻撃の中では一番威力がありますから」

「そうだね。じゃあ任せるよ。やっぱりレミィは頼りになるなぁ」
「そ、そんな事ないですよ……ッ！」
はわわと顔を真っ赤にしながら慌てるレミィ。そんな彼女を見てクリュウとツバメは微笑ましげに小さな笑みを浮かべる。と、
「……私は、頼りにならないの？」
サクラがクリュウの袖をちょこんと引っ張って寂しげな隻眼で彼を見詰める。その今にも涙が零れ出しそうな瞳にクリュウは慌てる。
「も、もちろんサクラも頼りになるよ！」
「本当？」
「ほ、本当だよ！　サクラにはいつもいつも頼ってばっかりで、本当に感謝してるよ！」
「……そう」
背を向けるサクラに、クリュウは不安そうにツバメに声を掛ける。
「あ、あのさツバメ。もしかしてサクラ怒ってる？　僕やっぱりまずい事言っちゃったかな？」
「うむ？　いや、あれは違うのじゃよ。気にするでない」
「え？　そ、そうなの？　でも……」
まだ少し不安そうなクリュウの肩をポンと叩くツバメ。彼はちゃんとわかっている――サクラは怒っているのではなく、照れているのだと。
「相変わらずじゃな、サクラは」
クリュウに背を向けるサクラは、その頬が真っ赤に染まっていた。色白の肌でこんなに赤いのは目立ってしまう。だからこそ恥ずかしくてこうして背を向けてしまうのだ。
「……クリュウ」
サクラは頬の紅潮を冷ましながらも頭の中で彼の言葉を反芻（はんすう）する。結果、せっかく落ち着いた頬がまたしても赤みを帯びてしまう。
「サクラ？　大丈夫？」
心配して彼女の顔を覗き込もうとするクリュウにサクラはプイッとさらに彼に背を向ける。もちろん赤面した顔を見られたくないの

だが、クリュウから見れば思いっ切り避けられたように見えて……
「うぅ、ごめんよぉ」
　しょんぼりとしてしまうクリュウ。サクラは慌てて訂正しようとするが、まだ顔が赤面しているので彼に顔を向ける事ができない。それはさらにクリュウにダメージを与えてしまい……
「お、お願いだから嫌いにならないでよサクラ！」
「……ち、違う！　私はクリュウを嫌ったりなんか……ッ！」
「け、ケンカはダメですよッ！」
　わいわいと騒ぐ三人を見て、ツバメは小さく笑みを浮かべる。
「まったく、お主らには緊張感というものがまるでないのぉ」
「うぅ、ごめん」
「いやいや、それくらいの方が体も自由に動くものじゃ。見ているこっちまで緊張が解けるしのぉ」
　ツバメはそっとクリュウの肩を叩いた。彼のクリッとした瞳が、クリュウをじっと捉えて離さない。クリュウはその黒真珠のような美しい漆黒の瞳に吸い込まれそうになる。
「サクラは照れておるだけじゃ。気にするでない」
「ツバメ……」
　見詰め合う二人。雪山だというのにその背景にはなぜか美しい花々が咲き誇り、桜色の雰囲気が流れる。
「……ツバメ、許さない」
「ツバメさんばっかりずるいです」
　じーっと睨む二人の恋姫。その視線に気づいたツバメは慌ててクリュウから離れる。その頬が真っ赤に染まり、瞳はキラキラと濡れている。
「こ、これは違う！　誤解なのじゃ！　そもそもワシは男じゃぞ!?」
「……クリュウは渡さない」
「お、落ち着くのじゃサクラッ！　ワシとてクリュウなどもらっても仕方ないぞ！」
「……ッ!?　つ、ツバメ……、ひどいよぉ……」
「ぬおッ!?　す、すまぬクリュウ！　別にお主を愚弄した訳ではない

のじゃ！　じゃから泣くんでない！」
「ツバメさんひどいですッ！」
「いや、そこはまぁ否定できないのじゃが……」
「ツバメぇ……」
「ぐぬぅ、そ、そんな捨てられた子犬のような目でワシを見るでない！」
「……ツバメひどい。クリュウがかわいそう」
「そもそもお主達のせいであろうがッ！」
　ギャーギャー言い合う四人。すっかり本来の目的であるドドブランゴの討伐など抜け落ちてしまっている。
　しばしそんなコントのような会話を続けていたクリュウ達であったが、ドドブランゴの事を思い出して準備を整える。
「お主らがふざけておるからペイントボールの効き目が切れて見失ったじゃろうが」
　すっかり振り回されていたツバメはすねたように唇を尖らせてそっぽを向く。その頬を紅くしながらの行為にいつもよりかわいさが一・八倍になっている事は自覚はないだろう。
「ご、ごめん……」
　しゅんとするクリュウにサクラとレミィがギロリとツバメを睨む。その睨み殺すかの勢いにツバメはぞっとし、慌てて態度を覆す。
「じゃ、じゃがドドブランゴは瀕死（ひんし）の傷を負っているはずじゃ！　今頃は体力を回復させる為に巣で眠っておるはず！　じゃからペイントボールがなくても大丈夫じゃ！」
「ほ、本当に？」
「本当じゃ！　じゃからお主も泣くでない！　ワシが二人に殺されてしまう！」
「べ、別に泣いてなんかないよぉッ！」
　クリュウは顔を赤くして怒るが、ツバメにとってはそれどころではない。仲間に命を狙われるというありえない危険と隣り合わせなのだ。そんな事を気にしている暇はない。
「……クリュウ、泣いてるの？」

「クリュウさんを泣かせるなんてひどいです！」
「ワシのせいなのかッ!?　ワシが悪いのかッ!?」
「泣いてなんかないよぉッ！」
「えぇいッ！　とにかく行くぞ！　もたもたしていては奴に回復の時間を与える事になる！」
ツバメは無理やり話を戻すとズンズンと先に歩き出す。その後をクリュウが慌てて荷車を引いて追い掛け、サクラとレミィも遅れて続く。
岩壁にぽっかりと開いた極寒の洞窟の中にクリュウ達は再び入る。洞窟の中には数匹のブランゴがいたが、サクラとツバメが駆逐した。
向かう先はドドブランゴがいるであろう巣。先程来た道を引き返すだけなので迷う事はないし、夜のせいかモンスターの数も少ない。
雪を踏み締め荷車を引きながら歩くクリュウ。いよいよ決着すると思うと自然と緊張感が高まる。だが、
「……クリュウ」
「サクラ？　どうしたの――ってちょっと！」
「あぁッ！　何してるですかッ！」
突如サクラは荷車の操舵枠の中に入るとクリュウに抱き付いた。荷車を引くクリュウは逃げる事もできずにサクラに抱き付かれる。もちろんレミィも黙ってはいない。
「ちょっとサクラ！」
「……寒い。温めて」
「できるかぁッ！」
「サクラさん！　クリュウさんから離れてくださいッ！」
クリュウからサクラを引き剥がそうレミィも加わる。レミィが「離れてください！」と叫ぶが、サクラは「……嫌」と一刀両断。「僕の意思は無視なのぉッ!?」とクリュウが逃げたくても逃げれない状況で悶絶する。そして、
「お主達は少し緊張感を持たぬかッ！」
ツバメの限りなく怒号に近いツッコミが炸裂するのであった。
道中そんな具合で、結局退屈する事なく一行は無事にドドブランゴ

が眠る巣に到達した。
月の光がわずかに照らし上げる巨大な空洞――モンスターの巣。昼間だった先程よりも暗いのは夜だからというのは仕方ない。だが、そんな薄暗い洞窟の中に、目的の奴はいた。
洞窟の真ん中で眠るのはドドブランゴ。あれほどの大ダメージを受けていたのに幾つかの傷口が塞がっているのはモンスターの驚異的な治癒能力がなせる業だろう。
「……厄介」
今四人は岩陰に隠れている。なぜならまるでボスであるドドブランゴを守るようにブランゴが数匹が動き回っているからだ。こういう場合に頼りになるフィーリアのようなガンナーは今回のチームにはいない。どうするべきか。
「仕方ない、全員で総攻撃を掛けよう。ただし、ドドブランゴは起こさないように細心の注意は払ってね」
「……（コクリ）」
「うむ」
「わかりました」
クリュウは岩陰からブランゴの動きを見る。まだこちらを向いているブランゴがいるのでタイミングが悪い。だが次の瞬間、全てのブランゴの視線が別方向に向いた。
「今だ！」
クリュウの合図と共に四人は一斉に駆け出した。一番近くにいたブランゴが敵襲に気づいて反撃しようとするが、サクラのすさまじい剣撃により一撃で倒された。残ったブランゴは突然の敵襲に驚いて反応が少し遅れる。その隙にレミィが鋭い突きでブランゴを串刺しに、ツバメが華麗な剣舞で斬り倒す。残る一匹は一番奥で対応が取れたのか、クリュウの一撃目を避けた。だが、彼の奮闘もそこまで。続いてクリュウの第二、第三の攻撃が炸裂して吹き飛ばされ、ピクリとも動かなくなった。
「よし！　皆の衆攻撃用意じゃ！」
ツバメの声にクリュウ達はすぐさま武器を構えた。クリュウはド

ドブランゴの背後へ、ツバメとサクラがそれぞれ両側に、そしてレミィがドドブランゴの正面に立つ。
レミィはチラリと三人を見る。皆小さくうなずいた。準備オッケーという事だ。レミィはそれらにうなずき返すと先程冷却を終えたばかりの竜撃砲を構え、砲撃加速装置を点火させる。
シュゴオオォォォと白い蒸気が噴き出してすさまじい熱を発生させ、砲身が真っ赤に焼ける。その熱だけでドドブランゴが起きないかと不安はあったが、奴の瞳は閉じられたまま。鼻提灯（はなちょうちん）までしている。どうやら杞憂（きゆう）だったようだ。
レミィはグッと腰を低くして重心を低くし衝撃に備える。そして、
「ファイアァッ！」
引き金を引いた刹那、砲口が爆発。すさまじい大爆発が起きた。巨大な炎と黒煙がドドブランゴの白い体を一瞬で包み込み、次の瞬間にはドドブランゴは吹き飛ばされた。とんでもないモーニングコールだ。まぁ、まだ夜なのだが。
「グオオォォォッ!?」
睡眠中にすさまじい一撃を受け、ドドブランゴは悲鳴を上げながらもがき苦しむ。そこへすぐさま武器を構えていた三人が攻撃を開始する。
「うりゃぁッ！」
クリュウはオデッセイを上から下へ体重を掛けて振り下ろす。その一撃はドドブランゴの白い毛皮を引き裂き、真っ赤な血が噴き出す。別方向でもサクラが上から下に飛竜刀【朱】を振り下ろし、すぐさま振り上げ、薙ぎ払った後再び全力で振り下ろした。その連続攻撃に血と炎が舞い散る。
ツバメも負けてはいない。鬼人化すると限界時間までひたすら両方の剣を振り続ける。右剣が斬り裂き、左剣が突き刺す。流れるように剣が暴れ回り横や縦、斜めにも次々に剣が振るわれ、血と水が吹き荒れる。まさに神速の技だ。
レミィも遅れてもがくドドブランゴの正面から突きと砲撃のコンボを連続して行う。

「グオオオオオッ！」
ドドブランゴは怒り狂いながら立ち上がると拳を大きく振って周りに群がる敵を追い払おうとするが、すでにその動きは読まれており当たらない。それどころかさらに勢いを増して攻撃をされる。
「倒れろッ！」
クリュウは横一線にドドブランゴの足を薙ぎ払った。軸足となっていた部分にいきなり全力攻撃を受けてドドブランゴは悲鳴を上げながら横転。すぐさまクリュウはその腹に剣を振り下ろす。
サクラやツバメ、レミィも他方向から連続して攻撃を続ける。
「ガアアアアアッ！」
ドドブランゴは無理やり体を起こすと二本足で立ち上がる。その動作に四人は一斉に離れた。刹那、ドドブランゴが地面に激突して地面が大きく揺れる。幸いにも誰も動けなくなる事はなかったが、距離が離れてしまった。
ドドブランゴは前方にいるレミィに向かって雪ブレスを吐く。レミィはとっさに盾でガードして事なきを得る。ガードした盾が凍りついたが、問題はなさそうだ。
「せいやぁッ！」
ツバメが横から斬り掛かるが、ドドブランゴは後ろに跳んでそれを避けると地面の雪を持ち上げて投げ飛ばす。それはサクラに降り注ぐもサクラは横に跳んで避けた。
「ゴアアアアアッ！」
「くぬぅッ！」
ドドブランゴは四足一斉に地面を蹴ってツバメに突進する。ツバメはそれを横に転げるようにして避けた。すかさずクリュウとレミィが一斉にドドブランゴを攻撃するが、ドドブランゴは腕を振り回してそれを排除しようとする。二人とも盾で直撃こそ避けたがレミィは大きく後退し、クリュウの片手剣はレミィのガンランスと違って小さな盾なので吹き飛ばされて凍った地面の上に叩き付けられた。
「ゲホォッ！　ゴホォッ！」
先ほどまでの柔らかい土ではなく凍った岩盤の上に激しく叩き付

けられたクリュウは全身に激痛が走って咳き込んだ。
「……クリュウッ！」
サクラは一度クリュウを心配そうに一瞥した後、仕返しとばかりにドドブランゴに重い一撃を叩き込んだ。刹那、刀身から噴き出した炎がドドブランゴの純白の毛皮を焼く。ドドブランゴはそのすさまじい炎撃に悲鳴を上げて後ろに大きく跳ぶが、そこへツバメが閃光玉を投げつけて視界を潰した。
目が見えなくて暴れ回るドドブランゴから距離を置き、サクラ達は一度クリュウの周りに集まった。
「……クリュウ。大丈夫？」
「う、うん。何とか」
「ここは狭くて戦いづらいですね」
「うむ。気をつけておらぬとすぐに壁際に追い詰められるしのぉ」
「とにかく、がんばるしかないね」
クリュウの言葉に皆はうなずいた。ツバメは一度砥石で刃を軽く研ぎ、レミィも砲身から空薬莢を吐き出して新たな弾を装填する。サクラはドドブランゴの側面に移動し、クリュウはその反対側に回った。
しばし暴れ回っていたドドブランゴだったが、閃光玉の効き目が切れると白い息を荒々しく吐き出しながらレミィに向かって雪を放り投げる。レミィはそれを横に走って逃げるとすぐにシザーガンランスを構える。
ドドブランゴはレミィが射程外に移動するやいなや今度はすぐ近くにいたツバメに巨大な拳を振るう。突然攻撃をされたツバメは慌てて横に転がるようにして避けた。だがそれは間違いだった。拳は囮。本当の目的は――
「ツバメさんッ！」
「くぬぅッ！」
転がって避けた為雪に体を投げ出すような形になっていたツバメに向かってドドブランゴは容赦なく雪ブレスを放った。風圧に吹き飛ばされるツバメ。地面に転がった彼の体は所々凍りついていた。

「ふ、不覚じゃ……ッ！」
ツバメが一時的だが戦闘不能になるとすぐにサクラは少し離れた場所にいるクリュウに視線を送った後に単騎突貫。自分の何倍はあろうかという巨大なドドブランゴに向かって必殺の気刃斬りを炸裂させる。
「……チェストオオオオオッ！」
とどめとばかりにサクラは渾身の一撃を叩き込む。そのあまりの激痛に耐えられず後ろに跳んで避けようとしたドドブランゴだったが、そこにはすでにクリュウが待ち構えていた。見事な連携だ。
「よくもツバメぉッ！」
クリュウはドドブランゴの背中に向かって大きく剣を振り下ろした。その一撃はドドブランゴの背中を斬り裂き、真っ赤に染める。
響き渡るドドブランゴの悲鳴を背後にレミィは倒れているツバメに駆け寄った。
「大丈夫ですか!?」
「う、うむ……」
レミィはすぐにツバメの体に張り付いた氷を叩いたりして落とす。おかげでツバメは動けるようになったが、そのダメージは大きい。ツバメは回復薬を飲んで回復を図る。と同時に広域化のおかげで他の三人の体力も回復した。
ツバメは立ち上がるとドドブランゴ相手に二人で立ち回る仲間を見る。
「ワシらも負けておられぬぞ！　行くぞレミィッ！」
「はいッ！」
二人は駆け出すと暴れ回るドドブランゴの側面にそれぞれ一撃を叩き込む。
「グオオオオオッ!?」
予期していない場所に攻撃を受けてドドブランゴが悲鳴を上げる。すかさずレミィは弾倉にある弾を全て撃ち出し、ツバメは鬼人化して乱舞。さらにサクラとクリュウも一斉に攻撃を叩き込んだ。
そして、ドドブランゴが自分に向いた瞬間、クリュウは跳躍した。

突如として忽然（こつぜん）と消えた敵に驚くドドブランゴが上を見上げた瞬間――
「てりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
クリュウは落下速度と体重を腕力に組み合わせた全力の一撃をドドブランゴの肩に向かって振り下ろした。
肩から大量の血を噴き出し、ドドブランゴは断末魔の悲鳴を上げる。クリュウが着地に失敗し地面に激突して悶絶した瞬間、ドドブランゴの巨体が大きく揺れた後ズズゥン……と鈍い地響きと共に倒れた――そして、二度と動く事はなかった……
動かなくなったドドブランゴを見て、ツバメの顔がまるで春の到来に合わせて元気良く開花した花のごとくパァッと華やぐ。
「やったぞぉッ！」
ツバメの歓喜の声が、戦いの終わりを告げる福音（ふくいん）だった。
「やったですぅッ！　私達の勝利ですぅッ！」
レミィはピョンピョンと跳ね回って大喜び。サクラもゆっくりと太刀を背中の鞘に収めながら口元に小さな笑みを浮かべる。と、ふと思い出す。
「……く、クリュウッ!?」
サクラは慌てて悶絶しているクリュウに駆け寄る。大した怪我はなさそうだが、かなり痛そうだ。そういえば着地に失敗して盛大に転倒していたような……
「……クリュウしっかりして！」
「だ、大丈夫……ッ！　これくらい……何でもないって……ッ！」
痛みのあまり引きつっていても、クリュウは笑顔を向ける。女の子に心配を掛けさせるのが嫌だという、あまりにもクリュウらしい理由だ。
「まったく、お主達は何をやっておるのじゃ」
そう呆れながら近寄って来たツバメは小さくため息をする。結局、彼はずっとクリュウ達のノリに振り回されていた、ある意味一番の被害者だったりする。

「ほれ、さっさと剥ぎ取って撤収じゃ。早く拠点（ベースキャンプ）に戻って温かい飲み物でも飲みたいものじゃ」
「そ、そうだね。そうしよう」
　やっと痛みから解放されたクリュウはうなずくとドドブランゴに近寄る。ちゃんとその冥福を祈った後、早速解体に取り掛かる。毛皮なのでそれほど苦労する事もなく素材は剥ぎ取れた。毛や牙、髭などを剥ぎ取り終え、それらを荷車に積み込む。荷車にはドドブランゴやブランゴ、ギアノスなど今日狩ったモンスターの素材が大量に積まれていた。
「うむ。これくらいで良かろうて。では皆の衆帰るぞ」
「そうだね。早くゆっくり休みたいや」
「……（コクリ）」
「レッツゴーです！」
　クリュウ達は歩き出し、巣を後にした。
　洞窟の中は依然として薄暗く、日が暮れた雪山の温度は尋常じゃないほど寒い。ホットドリンクがなければ今頃倒れていただろう。そんな道を歩いて帰らないといけないとは、過酷以外の何ものでもない。深夜という事もあってかモンスターの姿が見えない事だけが数少ない良い事だ。
　しばし洞窟を歩き続けると、ようやく洞窟の外に出た。月や星の光だけが照らしているのだが、意外にも結構見えるほど明るい。洞窟の中に長時間いたせいでわずかな明るさも感知できるようになったのかもしれないが。
　クリュウ達は途中の道でモンスターに襲われる事はなくそのまま無事に拠点（ベースキャンプ）に戻る事ができた。
　小高い丘の上に高い木々に覆われた中にある拠点（ベースキャンプ）を、月明かりが薄っすらと静かに照らし上げていた。

第５８話　勝利の宴　交差する想い

「それでは皆の衆！　勝利を祝して乾杯といこうではないか！」
「おおおぉぉぉッ！」
「……おー」
「では乾杯じゃぁッ！」
「かんぱーいッ！」
「……乾杯」
　高らかに掲げられたツバメのビールジョッキに他三人のジョッキがカチャンとぶつかって心地良い音を響かせる。その際に中身が飛び散ってしまったのは仕方がない事だ。
　ここはアルフレアの酒場。ドドブランゴを討伐し終えたクリュウ達は拠点（ベースキャンプ）で一泊した後無事にアルフレアまで戻って来た。そしてそのままこうして祝勝会となったのだ。
　ツバメはビール、サクラはワイン、クリュウとレミィは揃って同じジュースを飲んでいる。同じ酒に弱い者同士、以前からレミィは酒に弱いと知っていたクリュウは改めてちょっと親近感が沸いた。
　ツバメはグビグビとビールを飲む。その行為は男らしいのだが、かわいさ爆発のその容姿のせいで全く男っぽく見えない。むしろその無理した男っぽさがまたかわいらしさをさらに爆発させてしまっている。
　サクラはワインを軽く飲んでいる。その大人っぽい姿もまた美しい。
　クリュウと一緒にジュースを飲むレミィは、ジョッキを両手で抱えている事もありその容姿が加わってかわいさ爆発だ。
　基本的に男所帯のハンター生活の中で、このテーブルには誰もが振り返るような美少女が三人（正確には美少女二人と美少女っぽい男の子一人）もいるのでかなり目立ってしまう。自然と皆の視線が集まる。ちなみに少し前に三人はナンパされたが、サクラが一刀両断して牽制したおかげで絡もうなどと考えるアホはいないらしい。
「ぷはぁッ！　やっぱり勝利の後のビールは堪らんのぉッ！」

ジジイ言葉がこの時ほど似合うセリフもないなぁ、と思ったのはきっとクリュウだけではないだろう。
「そうだね。僕はジュースだけどおいしいよ」
「うむ。しかしクリュウもレミィと同じで酒が苦手とは、人生を損しておるのではないか？」
「むぅ、そんな事ありませんよーだ」
「ははは、すまぬすまぬ」
アルコールが入ってほんのりと紅潮した頬で笑顔を浮かべるツバメ。そのかわいさはもはや兵器の領域に達している。その笑顔に魅了されて数人の野郎どもが気絶したのも仕方ない事かもしれない。
「サクラ、これおいしいよ。食べてみて」
「……ありがとう」
クリュウは自分の料理をサクラにおすそ分けする。サクラは小さな笑みを浮かべるとそれを口にした。
「……おいしい」
「でしょ？　アルフレアは海産物がおいしいって聞いてたけど本当だね」
「当然ですよ。このアルフレアは海の街なんですから。あ、クリュウさんこれを食べてみてください。すっごくおいしいですよ」
そう言ってレミィは自分の料理をクリュウに食べさせようと彼に近寄る。その瞬間、サクラの隻眼が鋭くなった。
「はい、あーんです」
「え？　あ、いやそこまでしなくても……」
「ダメです。口を開けてください」
「そ、それは……、ツバメ助けてぇッ！」
迫るレミィのあーん包囲網にクリュウは援軍を要請する。が、
「うむ。これも青春じゃのぉ。がんばれ」
そう言ってツバメは料理をもきゅもきゅと食べ始める。どうやら助けるつもりは全くないらしい。親友だと思っていたツバメに見捨てられたクリュウはショックを受けるが、その隙にレミィの包囲網がさらに迫る。

「はい、あーんです」
「いや、ちょっとレミィ……」
「……ダメ」
逃げようにも逃げられない状況の中で助けてくれたのは意外にもサクラだった。クリュウは援軍得たりと喜ぶが――これが新たな戦いの始まりとなってしまった。
「……クリュウは渡さない」
「クリュウさんはサクラさんのものじゃないです！」
「……クリュウは、大事な仲間」
「私にとっても大切な仲間です！」
「……一時的なチームに過ぎない。私とクリュウは未来永劫コンビを組み続ける」
睨み合うサクラとレミィの二人の恋姫。決して交わる事のない両者の想いが激しく激突する。そんな二人の揉め事の原因であるクリュウは二人の対立する原因が自分であるなど知らず必死になってケンカを仲裁しようとする。
「ちょ、ちょっと二人ともケンカはやめてよぉッ！」
そんな三人を安全地帯から見守るツバメはやれやれとばかりにため息をすると小さく苦笑いする。
「さぁて、ワシは一体誰を応援すべきかのぉ」
ツバメが誰の応援をしようか考えた時だった。
「レミィッ！　ツバメッ！　久しぶり！」
その声に振り向くと、嬉しそうに満面の笑みを浮かべたレミィそっくりなポニーテールの少女――ラミィ・クレアが手を振っていた。
「お姉ちゃん！」
「おぉ、ラミィか。久しいのぉ」
レミィとツバメも嬉しそうに手を振る。ラミィは笑顔で二人に駆け寄り……クリュウを見て急に不機嫌そうな顔になった。
「えっと……」
「何であんたがいるのよ」
感動の再会、開口一番にこれである。どう返答しようか困惑してい

るとレミィが慌ててフォローに入るようにして説明してくれた。アルフレアに出稼ぎに来たクリュウ達と偶然会った事、そしてそのままドドブランゴを一緒に討伐した事などだ。

一応全部聞いたラミィは「なるほどねぇ」と小さくうなずいた。どうやら納得してくれたらしい。

「二人とも強くてびっくりだよ。日頃の修行のおかげだね」

「当たり前でしょ。あんたみたいなアホに負けるような修行だったらとっくにハンターなんかやめてるわよ」

相変わらずの強気な発言。クリュウはその理不尽な言葉の数々に少し懐かしさを覚えた。一時的だったがラミィとレミィと一緒に組んでいた時は毎日のようにこうして罵倒されたものだ。エレナには肉体的に、ラミィには精神的に。もしあそこにレミィという救いの女神がいなかったら、今日のクリュウは存在していなかったかもしれない。

「ははは、相変わらずラミィは言う事がキツイねぇ」

「ふん、あんたは相変わらず頭のネジがぶっ飛んでるんじゃないの？」

久しぶりの再会をした二人の会話は相変わらずなものだ。レミィが「もう、お姉ちゃんは……」と呆れ、ツバメは「なるほどのぉ」と一人納得し、サクラは無言のままラミィを睨み付けていた。

「ちょっとクリュウ、私のかわいい妹のレミィとかわいい仲間のツバメに変な事してないでしょうね？」

「する訳ないでしょッ!?」

「どうだか」

「ちょっと待てラミィッ！　お主の発言はどこかおかしいぞッ!?　それに何ら疑問も持たずに返したクリュウもおかしいぞッ！」

ツバメが一人で騒ぐが、お互いに何ら疑問も抱いていない二人の会話は止まる事はない。それどころか二人だけでなくレミィもサクラも違和感など感じていない。恐るべきツバメの性別の壁を越えたかわいさだ。

一通り経緯を聞いたラミィは「無茶するんじゃないわよ」とレミィに注意するとレミィの横に腰掛けた。すると、自分を見詰めるクリュ

ウの視線に気づく。
「何よ。邪魔だって言いたいの？」
「え？　ううん、違うよ。ただラミィなんでまたそんな防具にしたの？」
　ラミィの付けている防具はイーオスシリーズ。文字通りイーオスの素材を基本に作られた鮮やかな赤い防具だ。ランポス系の防具では最も性能の高い防具だが、飛竜や大型モンスターの防具に比べればその性能は格段に下回る。以前彼女はギザミシリーズを装備していたはず。という事はわざわざ性能の低い防具に変えたという事だ。
　クリュウが不思議そうに見ていると、ラミィは突如うつむくと小刻みに肩を震わせた。何事かと思っていると、微かに聞こえてくるのは――必死に押し殺している笑い声。
「え？　な、何で笑ってるの？」
「……ッ！　ひぃ……ッ！　も、もうダメ……ッ！　我慢できない――あはははははッ！」
　ついに笑いが堪えられなくなり、ラミィは大声で笑いながら腹を抱え、テーブルをバンバンと拳で叩き始めた。その遠慮のない笑い方に、さすがのクリュウもムッとする。
「そ、そんなに笑う事ないでしょッ!?　そもそも何で笑ってるんだよッ！」
　だが、そんなクリュウの言葉はさらにラミィを爆笑させる事しかできなかった。すっかり周りの目線も自分に集中してしまい、クリュウが怒りと恥ずかしさで顔を真っ赤にしていると、クイクイっと袖を引かれた。振り向くと、じっと見詰めるサクラと瞳が合う。
「サクラ？」
「……あれは、イーオスSシリーズ。上位クラスのイーオスの防具よ」
「え、Sシリーズッ!?」
　クリュウは驚いた。それもそのはず。Sシリーズというのは上位クラスのモンスターから剥ぎ取れる素材を使った防具だからだ。
　上位クラスというのは通常のモンスターよりも強い個体を示す値である。多くのハンターを返り討ちにしてきたり、生存競争を生き

残ってきた歴戦のモンスターは通常の個体よりも強く、それを上位クラスと類別する。
　そんな強い上位クラスのモンスターから剥ぎ取れる素材を使ったS系、またはU系防具は通常のものよりも強固であり、上位のランポス系防具ならば通常の上級飛竜の防具にも引けをとらない性能を有している。
「そ、それ本当にSシリーズの防具なの？　上位クラスって余程の腕がないと引き受けられないんじゃないの？」
「失礼ね。これはれっきとしたイーオスSシリーズだし、私の腕があればこれくらい造作もないのよ」
　胸を反らして自慢げに言うラミィ。その頭に被っているイーオスSヘルムにはSシリーズの証の小さな数枚の羽が誇らしげに風に揺れていた。改めて彼女と自分の実力差を思い知らされてクリュウが落ち込みそうになる。と、
「本当は私達なんかまだ全然上位クラスなんて受けられないんですけど、前に組んだすっごく強いハンターさんと一緒に何度か上位クラスの素材採集ツアーをしたんです。その際に掻き集めた上位クラスのイーオスの素材を使ってこの防具を作ったんですよ」
　レミィはあまりにもあっけなくタネを披露してしまった。そんな勝手な妹の行動にラミィは頬を膨らませて不機嫌そうに唇を尖らせる。
「ちょっとレミィ。勝手に言わないでよ。せっかくの私の武勇伝が台無しじゃない」
「武勇伝って、上位クラスのイーオスに追われて泣き出した事とか？」
「え？　ラミィが泣いたの？」
　驚くクリュウに対し、レミィは「そうなんですよ。もう子供みたいにわんわん泣いて」と話を進めてしまう。その時の彼女の楽しそうな笑顔に、ツバメは小さく微笑んだ。
「ちょっとレミィいい加減にしなさいよッ！　あんたも何勝手に人の恥ずかしい話を聞いてるのよッ！　忘れなさいッ！　記憶を抹消しなさいッ！」

一方のラミィは顔を真っ赤にして怒鳴り散らす。だが、恥ずかしさのあまりの真っ赤な顔と潤んだ瞳のせいでまったくもって説得力がない。
「いや、抹消って言われてもそう簡単に人の記憶は消えないよ？」
「私の正式採用機械槍（ランス）でぶっ飛ばせば大丈夫よッ！」
「武器はそういう使い方をするものじゃないでしょッ!?」
クリュウが身の危険を感じて慌てて後退するが、ラミィは容赦なく背中のガトリングランスの強化型である正式採用機械槍の柄を握る。と、
「……クリュウには手出しさせない」
そう言ってスッとクリュウの前に立ち塞がったのはサクラ。その鋭い隻眼はキッとクリュウに害をなす存在であるラミィを睨み付けている。
今までサクラの存在など気づいていなかったラミィは突如クリュウをかばうようにして立ち塞がった隻眼の少女を睨み返す。
「何よあんた。邪魔しないでよ」
「……（フルフル）」
「どきなさいよッ！」
断固としてクリュウの前から立ち去らないサクラにラミィは憤慨する。そんな二人にクリュウとレミィが慌てて仲裁に入った。
「ちょ、ちょっと落ち着いてよお姉ちゃんッ！」
「サクラも落ち着いてよッ！」
二人に止められ、サクラとラミィは渋々といった具合にお互いの武器から手を離した。それを見てクリュウとレミィはサクラとラミィに互いの紹介をした。
「えっと、私のお姉ちゃんのラミィ・クレアです。よ、よろしくお願いしますね」
「ふん」
「この子はサクラ・ハルカゼ。僕の昔なじみで今は一緒にチームを組んでるんだ」
「……」

互いを紹介したはいいが、お互いにどちらも視線を合わせようとしない。すっかり関係が崩れてしまったようだ。
「ツバメ、何とかしてよぉ」
クリュウはツバメに協力を求めるが、ツバメは眉をひそめて「ワシに何をしろと言うのじゃ」と協力方法を逆に問う。そう言われてしまうとクリュウも黙ってしまう。そもそもそんな方法があったら自分でやっている。
レミィが必死になってお互いを仲直りさせようと奮闘するが、どうやら無理そうだ。クリュウは一度ため息を吐くと再び二人に近づく。と、
「おうみんな。こんな所にいたのか――って、何やってんだ？」
その声に皆の視線が一点に集中する。クリュウも不思議そうに振り返ると、そこには見知らぬ男が立っていた。髪質の硬そうなツンツンとした短めな茶髪に同色の瞳。年は二〇代前半くらいだろうか。野性的な顔つきをしているが、笑ったらとても優しげなその男もハンターらしい。体皮が赤いフルフル亜種から剥ぎ取れる素材を使ったガンナー用のフルフル亜種の防具を身につけている。背中に背負われているのはロングバレルを装備したバストンメイジ。どうやらヘビィボウガン使いのようだ。
「おぉ、ジーク。久しいのぉ」
今まですっかり傍観者モードに徹していたツバメはそんな男に柔和な笑みを浮かべて声を掛ける。ジークと呼ばれた男もツバメを見て「お、ツバメか。久しぶりだな。元気にしてたか？」と笑みを浮かべて答えた。
「今回は確かゲリョスの亜種じゃったか？」
「おうよ。今回は結構苦戦したぞ？　ラミィがいくら自分には毒が効かないとはいえ突進ばかりして、奴の閃光を喰らいまくって気絶。俺の回復薬を全部やった上に俺も回復弾がなくなるまで撃ったぞ」
「ははは、ラミィは突撃ばかりするからのぉ。ゲリョス相手ではあまり得策ではないのじゃがな」
「し、仕方ないじゃないッ！　ランスは突撃以外じゃ動きが遅いんだ

からッ！」
「俺は一撃も喰らわなかったぞ」
「あんたは岩壁の上から狙撃してただけでしょッ!?」
「失敬な。ヘビィボウガンはランスとかと同じで動きが鈍いんだから安全圏から攻撃するのが常識だろうが」
「だ、だからって全部私に押し付けなくても！」
「おいおい、忘れたのか？　攻撃用の火炎弾や貫通弾の他に広域化で回復薬もほとんど飲んじまったんだぞ？」
「し、知らないわよ！」
　恥ずかしいのか、ラミィは不機嫌そうに唇を尖らせて男に背を向ける。ツバメと男はそれを見て笑い、レミィも小さく苦笑していた。一方、すっかり置いて行かれているクリュウとサクラ。それに気づいたレミィが慌てて男を二人に紹介する。
「あ、この人はジークフリートさんです。正確無比の安定した射撃が得意な、私達の頼れるチームリーダーです。あ、ちなみに彼の防具はフルフルUシリーズですよ？」
　つまりは上位クラスの防具という事だ。それはつまり彼が上位クラスの依頼を受けられるだけの実力を持つという事を意味していた。
　見知らぬクリュウとサクラを不思議そうに見ていたジークにはツバメが二人を紹介してくれた。
「ラミィとレミィの知り合いなのか。俺はジークフリート・ディアベルト。長いからジークでいいぜ」
「あ、クリュウ・ルナリーフです。こっちは一緒に組んでいるサクラ・ハルカゼです」
「……（ペコリ）」
「よろしくな。しっかしガンナーなしでドドブランゴは辛かったろ？」
「そ、そうですね。初めてだったので疲れました」
「そうかそうか。っていうかツバメ。お前何でまたドドブランゴなんかの討伐依頼を受けたんだ？」
「すまんすまん、どうしてもドドブランゴの素材がほしくてな」

「難しい相手は俺がいる時にしろよ。この面子でよく勝てたな」
ジークは苦笑いするツバメの額にデコピンする。その様子はまるで仲のいい兄と妹――じゃなくて弟のようだ。
「そういえばフィーリアはどうしたのよ？　あんた彼女とまた一緒に組んでるんでしょ？」
ラミィが思い出したように訊いて来る。レミィも気になるのかじっとこちらを見ているし、知らない名前の子の話にツバメとジークも興味津々だ。
そんな皆の視線にクリュウは一度サクラを一瞥して、苦笑いしながら答えた。
「えっと、フィーリアは今頃リオレイア亜種と楽しく戦ってると思う」
『り、リオレイア亜種ッ!?』
予想通り皆驚く。上位クラスのハンターであるジークでさえ驚きを隠せない。実際問題リオレイアとフルフルでは上位とかの壁があってもやはりリオレイアの方が強いのだ。しかも慣れたガンナーであればフルフルはブレスさえ気にしていれば無傷で勝利できるらしいが、リオレイアはそうもいかない。
「お、俺なんか前に一度リオレイアは相手にしたけどよ、もう二度とごめんだぜ」
「私達なんかまだ全然先よね」
「そ、それを亜種だなんて……」
「一体何者じゃ？」
驚愕と困惑に支配されるツバメ達に、クリュウはやっぱり苦笑いする。リオレイアなんてここにいる面子ではジークやサクラはともかく、それ以外のクリュウ達にとってはまさに神竜のような存在。歯向かえば死ぬっていう方程式すら成り立ってしまっている。
「……フィーリアは、新緑の閃光という通り名で知られてる」
サクラのボソッとした小さな声に、見事に聞き取ったジークはさらに驚愕する。
「え？　お前らの仲間のフィーリアって、あのリオレイアハンターの新緑の閃光なのか!?」

「あ、はい。結構有名なんですか？」
　驚くクリュウに、ツバメが「お主はアホかぁッ!?」と鋭いツッコミを入れる。いまだかつて自分から突っ込んだ事はあってもされた事があまりないクリュウは困惑する。
「え？　あ、え？」
「新緑の閃光といえば多くの下位や上位クラスのリオレイアを討伐し、亜種をも数頭討伐しているガンナー界のルーキーじゃねぇか！」
「その通り名を知らぬ者は普通はおらんぞ」
　ジークとツバメの言葉に、クリュウは改めてフィーリアの実力を知った。あの虫も殺さないような天使のような笑顔のフィーリアが、ひとたび狩りに出れば数多くのリオレイアを狩っているなんて、その実力を見ていなければ絶対に信じないだろう。
　フィーリアの通り名もちゃんと知っているラミィとレミィであっても、同い年なのにレベルが圧倒的に違うフィーリアに苦笑いするしかなかった。
　驚くクリュウだったが、ふと隣に立つ実力者――サクラを見る。
「あ、あのジークさん。隻眼の人形姫ってのはご存知ですか？」
　クリュウの問いに、ジークはもはや呆れるしかなくため息した。
「クリュウとか言ったかお前？　どこの田舎者だよ。これくらいの街のハンターなら誰でも知ってる有名人じゃないか。受けた依頼は例え腕を折ってでも完遂し、護衛依頼は絶対に断らない、依頼者達にとっちゃまさに女神のような存在の凄腕ハンターだぞ――そういえば最近彼女の噂を聞かなくなったな。どこいんだ？」
「――えっと、今僕の隣にいますけど」
『はいッ!?』
「……ッ!?」
「ははは」
　クリュウの言葉に驚くジーク、ラミィ、レミィの三人が驚いて彼女を見る。その視線にサクラはビクッと震えて驚くとクリュウの背中に隠れてしまう。そんなサクラを見て事情を知っているツバメはおかしそうに笑い、クリュウは苦笑いした。

「いやサクラ。別に隠れなくてもいいでしょ？」
クリュウはそっと彼女を前に出そうと身を翻そうとするが、しっかりと背中をサクラに掴まれていてそれは敵わなかった。
一方のジーク達は驚きを隠せない。何しろ隻眼の人形姫と言えば結構名の知れた有名人だ。そんな人物が今目の前にいる。となると、する事はただ一つ。
「サインくださいッ！」
ジークはバッとどこからか色紙と筆を取り出した。そのすさまじい勢いにサクラはビクッと震えてクリュウの背中に隠れてしまう。
「ちょっとジークさんッ！　女の子を怖がらせるなんてダメですよッ！」
「冗談だよ。そんなに怒るなって」
怒るレミィに、ジークは悪びれた様子もなく楽しそうに笑う。ラミィとツバメもそんなジークを見て小さく苦笑いしていた。どうやらこういうやり取りがいつもの光景らしい。
ジークはレミィにそう言った後クリュウの背後からじっとこっちを見詰めているサクラに苦笑いする。
「いやさ、そこまで怯えなくてもいいんじゃないか？」
「だってさ」
クリュウは今度こそサクラを前に押し出す。サクラはそれに対してクリュウを少し怒ったような瞳で一瞥した後、ジークにペコリと頭を垂れた。そんな彼女をジークは改めて見詰め直す。
「しっかし、まさかあの隻眼の人形姫がこんなガキだったとはな。ラミィ達と対して変わらないし、本物なのか？」
ジークが疑うのも無理はない。世間に名の知れたハンターならばもっと熟練のオーラを出しているものである。しかしサクラはまだまだ子供といえば子供。初めて会うのならば疑っても仕方がない。
「ほ、本当ですよ！　サクラは本物の隻眼の人形姫です！」
クリュウはサクラの名誉を守ろうと必死になって断言する。と、
「いやいや、冗談だよ。その武装を見れば彼女がその噂に負けない実力の保持者だってわかる。つまりは本物って事さ」

そう言ってジークは豪快に笑った。どうやらサクラの凛シリーズや飛竜刀【紅葉】が信用性を持たせたらしい。さすがはサクラの武装といったところか。
サクラが信用されて安堵の息を漏らすクリュウ。そんな彼を見てジークはふと、
「にしても、新緑の閃光に隻眼の人形姫を仲間にしてるなんてすごいなお前。って事はお前も強いのか？」
「あ、いえ、僕は全然強くなんかありませんよ」
「ジーク。こいつの言ってる事は本当よ。一緒の二人はすっごく強いけど、こいつまだまだかけだしだから」
苦笑いで回避しようとしたクリュウに、容赦なくラミィの言葉が突き刺さった――サクラがハッと気づいた時にはもう遅かった。
「あぁ、情けないなぁ僕って……」
すっかり意気消沈して落ち込みまくるクリュウ。サクラが慌てて励ましの言葉を掛けるが、クリュウはなかなか元には戻らない。
「……どうやら、禁句を言ってしまったようじゃのぉ」
「わ、私のせいじゃないわよッ!?」
「お、俺が悪いのかッ!?」
「二人ともですよッ！」
ラミィ達がそんなやり取りをしていると、ツバメは一人で給仕娘に新しい料理を注文する。彼の手元にあった焼き鳥は全部なくなっていた。
「ちょっとツバメッ！　あんた何一人で勝手に食べてるのよッ！」
「別にいいじゃろう？　ワシが注文したんじゃから」
「そうじゃなくて！　あんた何一人で高みの見物してるのよッ！」
「いや、今回の狩りではずっとクリュウに突っ込んでおったからのぉ。さすがに疲れたのじゃ」
そう言ってツバメはグイッとビールを飲む。口元についた白い泡がまたかわいらしい。
そんな頼りにならないチームメイトにラミィは地団駄を踏む。
「ま、まぁとりあえずこれも何かの縁だ。今日はみんなで飲んで食っ

て騒ぐか！」
　場の空気を変えようとジークはみんなを席に座らせると料理や酒を注文する。とりあえずテーブルを挟んでサクラ、クリュウ、ツバメとラミィ、レミィ、ジークの順で座る事になり、すぐに酒を飲んだり料理を食べたりと食事を開始する。
　何とかサクラの励ましで復活したクリュウも頼んでおいた自分の料理をもぐもぐと食べ始める。しばらくはそんな具合で飲んで食っての楽しいひと時が続いた。すると、
「……クリュウ、これ」
　そう言ってサクラは自分の皿を差し出してきた。
「あ、ありがとう。じゃあこれあげる。サクラってスネークサーモン好きだったでしょ？」
「……ありがとう」
　付き合いが長い為お互いの好みがすっかりわかっている二人。自然と二人の世界に入ってしまう。それを恨みがましげに見詰めるレミィ。
「く、クリュウさん！　私のもどうぞッ！」
　レミィは遅れを取り戻そうと自らの料理をクリュウに差し出す。と、
「あ、いや、その……」
　クリュウは苦笑いしてなかなか受け取ってくれない。その反応にレミィはショックを受けると、泣きそうな瞳でさらに皿を差し出す。
「どうぞッ！」
「いや、その……」
　クリュウが渋っていると、サクラがスッとレミィに皿を押し戻す。
「な、何するんですかッ！　これはクリュウさんにあげようと――」
「……クリュウは、クック豆が嫌い」
「え？」
　驚くレミィは本当ですかと問うような瞳でクリュウを見る。すると、クリュウは小さく苦笑いしながら返答した。
「あ、うん。クック豆はちょっと苦手なんだ」

「……子供の頃から、変わらない」
「そうなんだよねぇ」
二人の会話に、レミィは絶望感に打ちひしがれた。自分とサクラとでは過ごして来た時間が違い過ぎる。自分が知らないクリュウの事を、彼女は多く知っている。
過ごして来た時間の決定的な違いから、圧倒的にレミィが不利であった。
ウーッと悔しそうに唸るレミィの肩を、ラミィがポンと叩いた。振り向くと、ビールを飲みながら呆れたような顔をするラミィと目が合う。
「あんた、少し落ち着きなさいよ」
「うぅ……」
実の姉にそう言われ、レミィはしゅんとしながらも少しずつ冷静さを取り戻していく。そんな妹を一瞥し、ラミィはジョッキを傾けながらクリュウとサクラを見る。
クリュウとサクラは付き合い自体は最近再会したばかりらしいが、それ以前に子供の頃の付き合いもあるらしい。仲がいいのは当然だろう。だが、納得できない。納得できなくて、イライラして、ビールを飲む速度が上がる。
「ちょっとクリュウ、あんたちょっとその子と仲良すぎない？」
ラミィの少し怒りが込もった声にクリュウは不思議そうに首を傾げる。
「そ、そっかな？　普通だと思うけど」
「普通じゃないわよ。もっと離れなさい」
ラミィは手を突き出して手首を返してシッシッの具合で離れなさいと命令する。そんな彼女の言葉にクリュウは改めてサクラとの距離を見て確かにちょっと近いかなぁと思い、そそくさと腰を浮かして横に少し移動する。が、
「……」
「ちょっとッ！　何であんたまで移動してるのよッ！」
クリュウが横に十センチばかり移動すると、サクラも同じくらい彼

に近づく。これでは先程と全く変わらない。変わった事といえばサクラとツバメの距離が開いたぐらいだろう。
　サクラはクリュウの袖をちょこんと握りながらじっと黒く澄んだ隻眼でラミィと向き合う。何を言われるか警戒するラミィにサクラは一言、
「……邪魔させない」
「邪魔って何よッ！　あんたが悪いんでしょッ！」
「……」
「キーッ！　何なのよ澄ました顔してッ！」
「お、落ち着けラミィ。お前ちょっと飲みすぎだぞ」
　ジークはラミィが飲み干した三つのビールジョッキを見て注意する。常の彼女なら一杯で十分なのに、なぜか今日はかなり飲みまくっている。こんな事初めてだ。
「うるさいわねぇ。私の勝手でしょ」
　ラミィはすっかりアルコールが回って紅くなった顔でジークを睨む。完全に酔っ払っている。ジークはため息すると諦めたらしくビールを飲んだ。
　アルコールのおかげですっかり気持ちがオープンになったラミィはキッと気に入らない女と楽しげに話しているクリュウを睨む。
「ちょっとバカッ！　私の話は終わってないわよ！」
「そうらそうらッ！」
　少し呂律（ろれつ）が回ってない声で言ったのはレミィ。彼女もかなり酒を飲んでいるらしく顔は真っ赤だし目なんかとろんとしてしまっている。だが、それでも瞳はキッと鋭くしてクリュウを見詰める。
　いきなり二人の女の子に厳しい目で見られたクリュウは慌てる。
「え？　ぼ、僕何か悪い事した？」
「してるじゃない！　現在進行形で！」
「えぇッ!?」
「クリュウしゃんは悪い人れす！　女にょ子とでれでれしゅるなんれ！」

怒鳴るラミィとウーッと唸るレミィ。すっかり酒が回った二人は容赦なくクリュウを攻撃する。クリュウが戸惑っていると、サクラがスッとクリュウをかばうように前に出る。自然と、三人の五つの瞳が重なる。
「……クリュウをいじめないで」
「元はといえばあんたのせいでしょ！」
「そうりゃそうりゃ！」
「……酒くさい息でしゃべらないで」
「何ですってッ!?」
「おしゃけくしゃくなんかないれすぅッ！」
睨み合う三人の少女達にクリュウはどうしようとおろおろする。とっさにクリュウは傍観態勢に入っているジークとツバメに助けを求めるが、二人とも助ける気ゼロである。ツバメは「お主の問題じゃ。ワシは関係ない」と冷たい言葉を言い、ジークは苦笑いするだけであった。
頼りにならない二人にクリュウは「バカぁッ！」と怒鳴ると慌てて三人の仲裁に入る。だが、ケンカの原因がいくら止めても無駄である。しかもサクラに声を掛ければラミィとレミィが怒り、逆に二人に声を掛けるとサクラが落ち込んでしまう始末。どうしようもない。
クリュウが打開策を必死に考えていると、突如レミィが動いた。
「クリュウしゃん！」
レミィはクリュウに駆け寄るとその勢いを殺さないままクリュウに抱き付いた。突然の事だったがクリュウはそのタックルを何とか受け止めた。だが、これが新たな火種となる。
「ちょっとあんたッ！　私の妹に何してるのよッ!?」
「……クリュウ、どうして」
ラミィが激怒し、サクラはなぜか絶望的な顔をする。そして突如飛び込んできたレミィは腕の中でとても幸せそうな笑みを浮かべている。ちなみにツバメとジークは苦笑い。
いきなり女の子に抱きつかれたクリュウはもちろんパニックだ。
「ちょ、ちょっとレミィッ!?」

「クリュウしゃぁん」
すっかり酔っ払っているレミィは簡単に引き剥がせそうだ。それほどまでに力が入っていない。だが、それは同時に離したらフラフラ状態という事だ。倒れるかもしれないので離すに離せない訳だ。
クリュウがそうこう迷っているうちにレミィは体をさらに密着させてくる。元から意外と積極的なレミィ。それがアルコールの恩恵を受けて手加減がない今、ある意味彼女は最強である。
だが、レミィがクリュウと密着すればするほどラミィは激昂し、サクラは落ち込んでしまう。そしてクリュウは大慌てだ。
「れ、レミィッ！　と、とにかく離れてぇッ！」
「嫌ですううううッ！」
クリュウは駄々を捏ねるレミィを簡単に引き剥がすと席に座らせる。それでもレミィはまだ抱き付こうとしてくるが、クリュウが「大人しくしてよ」とちょっと怒ると、途端にしゅんとなってしまう。
落ち込むレミィに少し言い過ぎたとクリュウが謝ろうとすると、「ちょっと妹を泣かせないでよッ！」とラミィが怒鳴りながらやって来る。
「い、いや泣いてはいないと思うけど」
「レミィに近づかないでよバカッ」
ラミィはクリュウとレミィの間に入ると落ち込むレミィをそっと抱き締めた。姉の腕の中、少しずつだがレミィも落ち着いているようだ。さすが双子の姉妹といったところか。
クリュウは邪魔しないようにそっと離れる。と、ちょこんと袖を掴まれる感触がして振り返ると、サクラがじっとこちらを見詰めていた。その隻眼はいつになく悲しげに見えるのは気のせいだろうか。
「サクラ？　どうしたの？」
クリュウの問いを無視し、サクラは無言のままそっと彼の腕を抱き締めた。驚いて慌てて離れようするクリュウだったが、サクラはしっかりと彼の腕を抱き締めていて離れられない。
「ちょ、ちょっとサクラ」
「……クリュウ、私を見て」

「え？　あ、うん」
「……私だけを見て。他の女を見ちゃダメ。いい？」
　じっと澄んだ黒い瞳で見詰められ、クリュウは黙ってしまう。心なしかその瞳は濡れていて明かりに照らされてキラキラと淡く煌いている。
「……クリュウ、お願い」
　ギュッと体全体を使って腕に抱きついてくるサクラ。その頬はわずかに紅潮し、瞳はキラキラ。息の掛かるような至近距離からの訴えに、クリュウはうなずき掛けるが、冷静に考えて彼女の言っている意味がわからない。
「えっと、それは一体どういう意味なの？」
「……それは」
　口ごもるサクラ。その頬はさっきよりも紅く染まり、視線を落としてしまう。
　そんなサクラの態度に何かまずい事を言っただろうかとクリュウが戸惑っていると、突如爪先に激痛が走った。あまりの痛さにうずくまる。ここがイージス村なら迷わずエレナに怒鳴るのだが、ここはアルフレア。一体誰が自分を攻撃してきたのか辺りを見回すと――犯人は目の前にいた。
「さ、サクラ……ッ!?　何でだよぉ……ッ！」
　痛さのあまり泣きそうなクリュウを見下ろすサクラの表情は誰が見ても怒っているとわかるもの。頬は真っ赤に染まり、小さな白い拳や肩は小刻みに震えている。
「……知らない。クリュウのバカッ！」
　そう怒鳴ると、サクラはスタスタと席に座り直す。しかもわざわざ間にツバメを挟んでだ。何が何でもクリュウの隣には座りたくないらしい。
　クリュウは爪先の激痛に耐えながら突如怒り出したサクラに困惑するしかない。すると、そんな彼に手を差し伸べる人物がいた。顔を上げると、小さく笑みを浮かべる絶世の美少女――ツバメが立っていた。

「大丈夫か？　災難だったのぉ」
　クリュウは彼の手を借りて立ち上がる。まだ足は痛んだが、とりあえず立つ分には問題なかった。サクラに視線を向けると彼女はこっちに完全に背を向けていた。誰が見ても不機嫌な様子だ。
「ぼ、僕サクラを怒らせちゃったんだよね？」
「そうじゃな。しかしお主には自覚がなかろう？」
「う、うん」
「サクラもその辺は嫌というほど理解しておるじゃろうから、しばらく放っておけば問題なかろう。今はそっとしておくのじゃ」
「わ、わかったよ」
　クリュウはサクラを一瞥した後、そっと席に戻る。もちろんサクラとはツバメを間に挟んでだ。ちょっと傷つく。
　少々落ち込むクリュウをツバメがそっと励ます。そんな光景をジークは苦笑いしながら見詰めていた。
「クリュウ。君はきっとモンスターに殺されるより先に女に殺されるだろうな」
「え？　ぼ、僕ってそんなに人に恨まれるような事してますか？」
「無自覚ほど恐ろしいものはない。気づいていないなら仕方がないな。だが、これだけは言っておくぞ。少し自分の発言に気をつける事。それだけだよ」
　ジークはそう言うとビールを飲む。そんな彼の横ではいつの間にか酔い潰れてしまったラミィとレミィが熟睡していた。
　クリュウが彼の言葉に不思議そうに首を傾げていると、そっとツバメに肩を叩かれた。振り向くと、こちらもいつの間にかサクラが眠そうに船を漕いでいた。
「ちょっと騒ぎ過ぎたな。今日はここまでにしておこう」
「そうじゃな。クリュウも手伝ってくれ」
「う、うん」
　その後クリュウ達は眠りこける三人を何とか起こしてそれぞれの帰路に着く。ツバメ達は自宅に、クリュウとサクラはギルドの木賃宿に泊まる事になった。本当は二人ともツバメの家に泊まる予定だっ

たのだが、ラミィが「ツバメに変な事する気でしょッ!? ダメに決まってるじゃない！」と至極まともな意見を言ったのでクリュウも「そうだね」と素直に従って宿に泊まる事になった。その会話の途中ツバメが「お主ら自分の発言がおかしいと思わぬのかッ!? クリュウとワシに一体何が起きるというのじゃッ!?」と一人で叫んでいたが、無視した。

結局クリュウとサクラはそれぞれ部屋を借りて泊まった。サクラは料金の節約（たぶんそれは後付だと思う）の為にもクリュウと一緒の部屋でいいと言ったが、クリュウがこれを拒否したという流れもあったりした。

こうして、波乱に満ちたアルフレアの一日が終わる事になった。

クリュウは布団に潜ると、ふと今頃も桜リオレイアと戦っているかもしれないフィーリアを心配したが、彼女ならきっと大丈夫だと安心し、静かに眠りについた。

第５９話　アルフレアでの日々

「うぅ……頭痛い……」
「頭がズキズキグワングワンするよぉ……」
「自業自得じゃ」
「ったく、水二杯お願いしまぁすッ！　どうする？　朝飯はやめておくか？」
「い、いらないです……」
「……ご飯の事を考えただけで……は、吐き気が……」
「おいおい、大丈夫か？」
「ふむ。これは重症じゃな」
　そんな会話をしているのは酒場のテーブルに陣を取ったツバメ達だ。ラミィとレミィは昨晩飲み過ぎたせいで完全に二日酔い状態に陥っている。
　二人は運ばれてきた水を飲むと少しは落ち着いた様子。だがまだやはり顔色は悪い。今日はどうやら復活は無理そうだ。
「まったく、あんなにバカみたいに飲むからこうなるんだよ」
「……う、うるさいわね……」
「うぅ……ごめんなさい……」
　二日酔いのせいで完全に元気がなくなっている二人。この脱力感はきっと元気ドリンコを飲んでも回復しないだろう。
　運ばれて来たのはジークとツバメの朝ごはん。とてもじゃないが、ラミィとレミィは食べられそうもない。
「仕方あるまい。今日は休業じゃな」
「ったく、調子に乗って飲みまくるからだバカ」
　もはや反撃する力もないのか、テーブルに突っ伏したまま動かない二人。酔い潰れたせいで風呂も入っていないので、髪は汗や油、酒などに汚れてベトつき、グチャグチャ状態。かわいい顔が台無しである。
　ジークはため息しながらナイフで切って一口サイズにした七味ソーセージをとろけた熟成チーズに絡めて口に入れる。朝から美味

である。ツバメも砲丸レタスや西国パセリなどの野菜を入れたサラダにスネークサーモンの切り身をトッピングして一緒に食べる。朝はサッパリ系が一番だ。ツバメの食事姿は朝昼晩どれも見ていて絵になる。

そんな感じで二人だけで食事をしていると、クリュウとサクラが酒場に入って来た。二人ともどこぞの二人のように二日酔いにはなっていないらしい。適当なテーブルに腰を下ろそうとする。

「おぉ、二人ともおはよう」

ジークが声を掛けると、二人は気づいて近寄って来た。

「おはようございますジークさん」

「おはよう。昨日はよく眠れたか？」

「はい。おかげさまで」

「そうか。サクラも眠れたか？」

「……（コクリ）」

「そうかそうか。どうだ？　一緒に飯でも食べるか？」

「いいんですか？　じゃあお言葉に甘えて」

ジークに席を勧められてクリュウとサクラはツバメ達のテーブルに腰を下ろすと給仕に注文をする。注文を終えたクリュウはふと反対側の席でぐったりと倒れているラミィとレミィに視線を向けた。

「二人ともどうしたの？」

「ただの二日酔いじゃよ」

答えられぬ二人に代わってツバメが答えた。朝仕度も完璧なのか、流れるような美しい黒髪は今日もキラキラと輝いている。おいしい料理を食べて幸せそうな表情を浮かべられると、そのかわいい笑顔に一日のエネルギーをもらえる気がした。

「ツバメ。一日の元気をありがとう」

「うむ？　いや、ワシは何もしておらんぞ？」

いやいや。ただそこにいるだけでいいんだ。それで、今日もがんばろうという力が湧いてくる。本当に、彼女は天使そのものだ。

「ツバメのかわいい笑顔が、僕を幸せにしてくれるんだ」

「なぁッ!?」

「……ッ!?」
　クリュウの何気ない言葉に顔を真っ赤にするツバメ、尋常じゃないショックを受けて涙目になって落ち込むサクラ、二日酔いと静かに苦闘しているが本気で怒っているラミィとレミィ、昨日の忠告をまるで理解していないクリュウに苦笑いするジーク、そしてそんな皆の反応にハテナマークを頭の上に浮かべているクリュウ。朝からクリュウの周りは大騒動だ。
「クリュウッ！　お主またワシを女子と勘違いしておろうッ!?」
「え？　何で？　ツバメはかわいい女の子じゃないか」
「ぬおぉッ!?　クリュウッ！　思い出すのじゃッ！　ワシは男じゃ！
　このフルフルシリーズも男性用じゃぞッ!?」
「ツバメってプライベートシリーズとか合いそうだよね。かわいいし」
「女子用の装備をほめられても嬉しくないのじゃッ！　最後の《かわいい》など言語道断じゃッ！」
「……私、いつか着る」
「サクラッ!?　お主は何か間違った方向に全力疾走しておらぬかッ!?」
「ツバメって優しいし、気が利くし、きっといいお嫁さんになるね」
「無理じゃッ！　性別的に無理じゃッ！　お主らワシを完全に女子と思い込んでおるじゃろッ!?　このギルドカードを見よッ！　性別は《男》と書いておるじゃろうがッ！」
「あぁ、たぶんそれ入力ミスだよ。変更した方がいいよ？」
「これで正しいのじゃッ！　ミスしてるのお主らの頭じゃぁッ！」
　朝からツッコミ全開のツバメ。そんなツバメの元気な姿を見て、クリュウはまたも元気をもらったような気がした。怒っていてもかわいい。それがツバメという女の子だ。
　何を言っても無駄だと判断したのか、ツバメはぐったりと肩を落として椅子に腰掛けた。その落ち込む姿は心から守ってあげたくなる、そんなような弱々しい姿だった。
「ツバメ、悩みがあるの？　僕で良ければ力になるよ？」

「……ワシは、まずワシの本質を見極めてくれる友がほしい」
「何言ってるのさ。僕とツバメは親友じゃないか」
「……クリュウ、そう思っておるのなら少しはワシを理解してくれ、頼む」
　肩を掴んで何度も何度も揺すりながら懇願(こんがん)するツバメ。何が彼をそこまで追い詰めたのか、クリュウにはわからない。
　不思議そうに首を傾げていると、クイクイっと袖を引かれる感触がして振り返る。するとこちらをじーっと見詰めるサクラと目が合った。
「サクラ？　どうしたの？」
　クリュウが問うが、サクラは無言のままクイクイっと袖を引っ張り続ける。
「な、何？　どうしたの？」
　サクラに引っ張られるので、クリュウは仕方なく彼女に近づく。するとようやくそっと手が離されたが、今度はじーっと見詰められる。その隻眼はどこまでも澄んでいて何を考えているのかは読めない。
「サクラ、一体どうしたのさ」
「……ダメ」
「え？　だ、ダメって何が？」
「……クリュウは私だけを見てて。他の女の子を見ちゃダメ」
　小さな、それもちょっと泣きそうな声で言うサクラに、クリュウは何がなんだかわからなかったが、泣きそうな女の子にとどめを刺すなんてできる訳もなくうなずく。
「わ、わかった！　わかったからそんな目で僕を見ないでッ！」
「待つのじゃクリュウッ！　今ワシを女子と認めたであろうッ!?　即刻訂正するのじゃ！」
　そんな朝っぱらからやかましく騒ぐクリュウ達を見て、まだまだ若いとはいえこの中では最年長であるジークはコーヒーを飲みながら小さく笑みを浮かべた。
「お待たせなのニャ！」
　ようやく騒ぎもひと段落した時、そんなかわいらしい声に振り返る

がそこには誰もいない。気のせいかとクリュウが再び背を向けると、
「お待たせなのニャッ！　早く受け取ってほしいニャッ！」
　またしても響いた声にクリュウは再び振り返るが、やっぱり誰もいない。と、視界の下の方で何かが動いた気がした。ゆっくり視線を落とすと、そこにはおいしそうな料理が載った巨大なお盆を持つ小さな影がいた。よくよく見ると、それは人ではなくネコであった。コックみたいな格好をしているが、それは間違いなくネコだ。
　二本足で立ちながら自分よりもずっと大きなお盆を持ったネコはクリッとした瞳でクリュウを見た後ピンとした髭をピクピクとかわいらしく動かす。
「料理を持って来たニャ。さっさと受け取るのニャ」
「あ、ごめん」
　クリュウは慌ててネコから料理を受け取る。全部受け取り終わると「ごゆっくりしていくのニャ」と言い残してトテトテと去って行った。クリュウはその小さな背中が見えなくなるまでじっとそれを見ていた。
「どうしたクリュウ？」
　ジークが不思議そうに問うと、クリュウは「あ、いえ」と小さく言って席に戻る。
「初めて働くアイルーを見たのでびっくりしたんです」
　アイルーとは大陸全土に生息するネコ型のモンスターの事。獣人種という部類に類別され、同種族のメラルーと共に小さな集落を形成して生活している。狩場で会った場合黒毛のメラルーはハンターから道具を盗むので嫌われている。アイルーも仲間が攻撃されれば残った仲間が一斉に攻撃して来るので厄介な相手。しかもそのかわいさから攻撃する事自体迷ってしまうのも厄介な点でもある。
　そんなアイルーとメラルーだが、実はアイルーはかなり知能の高いモンスターで人語が理解する事が可能。その為お金を稼ぐ為に人間社会に溶け込んでいるのだ。今見たアイルーもそのうちの一匹なのだろう。
「アイルーねぇ。個人で雇ってるハンターもいるけど、俺は雇ってな

いな」
　アイルーを個人的に雇うにはそれ相応の実績と信頼がなければ不可能である。ジークはこれを満たしているのだが、必要ないと思って雇ってはいない。
「最近じゃ料理や家事だけでなく一緒に狩りに行くアイルーもいますよね」
　クリュウは以前読んだ人気月刊誌《狩りに生きる》で見た記事を思い出す。今までアイルーを狩りに連れて行くのは禁止とされていたが、最近になってギルドの法律が変更されて一人一匹まで、多人数依頼の場合は連れて行く事を禁止など一部制約はあるものの可能となった。それがオトモアイルーと呼ばれるアイルー達である。
　初心者は最初組む相手がおらず最近はオトモアイルーと一緒に狩りをする事が多くなってきた。一人前になった後も一緒に狩りをしたり、チームを組むようになったらキッチンアイルーに転職して一緒に居続けるなど、人とアイルーの関係はより良いものとなっているらしい。
　クリュウも雇おうと思えば一匹くらいなら雇えるかもしれないが、アイルーを斡旋（あっせん）してくれるネコバァというおばあさんがいるのだが、クリュウはまだ会った事がない。そもそも今では狩りはフィーリアやサクラと一緒だし、家事はある程度クリュウ自身できるしエレナがやってくれたりするので、正直必要かどうか微妙なところだ。
「うむ？　ワシは一匹雇っておるぞ」
　そう言ったのはツバメ。窓が開いているので差し込む光がツバメを輝かせる。煌きを纏いながら紅茶を飲む仕草は元来のかわいさをさらに増大させる。
「ほ、ほんと？」
「うむ。若葉色の体毛をしたアイルーでのぉ、名はオリガミ。ジーク達と組むまでは共に狩りをしておったが、今じゃ家事を任せておる」
「へぇ、すごいねぇ」
「ワシは何もすごくはないぞ。すごいのはオリガミじゃ。それにアイ

ルー達の作る料理には特殊な調理法があって、その料理を食べると体に様々な働きをもたらすのじゃ」
「本で読んだ事があるよ。一時的に筋力が上がったり集中力が上がったりするんでしょ？」
「そうじゃ。狩りの前にその料理を食べるのがワシの日課なのじゃよ。じゃがな、今でこそうまくいっているが、オトモからキッチンに転向させた頃は最悪じゃったぞ？」
「え？　何で？」
「あぁ、そういえばお前オリガミが作った料理を食べて腹壊して何日も寝込んだ事があったよな。それも一回や二回じゃなくて」
　ジークの言葉にクリュウは驚く。アイルーといえば食事の技術は人間でいうプロレベルと聞く。それでお腹を壊すなんて……
「あぁ、懐かしいのぉ。見た目はうまそうなのじゃが、口に含んだ瞬間すさまじい生臭さが襲って来て、言葉では言い表せないような苦いやら甘いやらのまずさが舌を破壊し、胃の中に入った瞬間強烈な腹痛が起きてのぉ、厠（かわや）に直行して一日出れなかった事もあったのぉ」
　遠い目で思い出を語るツバメ。朝日がその横顔を照らし輝かせている。何を語っても良き思い出に聞こえてしまうが、実際の内容は相当ヤバイものである。
「あれは、生物兵器じゃったのぉ……」
「……僕、アイルーを雇うのは根本的に考え直す事にする」
　そんな大博打をするくらいなら絶品料理を作れるエレナに頼んだ方が得策だ。暴力はすさまじいがその料理の腕は確かなものだ。わざわざドンドルマからお客が来たりするくらいだ。
　……そういえば昔、エレナがドンドルマ一の飲食店から直々にオファーが来た事があったが、断っていた。彼女らしいといえば彼女らしい。あの時クリュウが彼女の将来を考えて行った方がと進言したら、言葉には言い表せないほどの暴行を受けた後一週間も口を利いてくれなかった。だがそのおかげで今もこうして楽しくやっている。だから、あれも今ではそれもいい思い出……なのかな？

「……クリュウは、アイルーを雇いたいの？」
サクラがこちらをじっと見詰めながら問うてきた。なぜだかその瞳はかなり真剣なものに見えた。気のせい……じゃないだろう。
「うーん、別にいいかな。アイルーのする事は基本的に僕は揃ってるしね」
「……そう」
そう小さく返事したサクラは何事もなかったかのように食事を始める。その表情がいつもより少し嬉しそうな事に気づいたのは、きっとツバメだけだろう。
「……天然じゃのぉ」
ツバメが何か言ったような気がしたがよく聞き取れなかった。クリュウはそんな事よりもとりあえず食事を始める。頼んだのはサンドイッチとスープのセット。ヤングポテトスープはクリーミーでおいしい。季節の野菜とアプトノスの肉を挟んだサンドイッチも美味だ。
「して、クリュウ達はこれからどうするつもりじゃ？」
二つ目のサンドイッチに手を伸ばした時に不意にツバメに問われた。クリュウはとりあえず食事をやめてホットミルクを一口飲む。
「村に帰るよ。僕のわがままで空けちゃったから、そろそろ戻らないとね」
「そうかぁ、寂しくなるのぉ」
ツバメはすごく残念そうにがっかりしている。そりゃあもう今にもそのかわいらしい瞳から涙がこぼれるのではないかというくらいに。そんなツバメに少しの罪悪感を感じながらも、クリュウは謝る。
「ごめん。こんな僕でも必要なんだよ、あの小さな村はね」
「そうじゃのぉ。お主を見ていると故郷を思い出す。たまにはワシも帰ってみようかのぉ」
そう言うツバメは小さな笑みを浮かべる。本当にかわいらしい男の子――あ、間違えた女の子だなぁとクリュウは思った。
「……お主、今何か心の中で大事な事を言い直して間違えなかったか？」

「え？　いや、別に」
　クリュウは何の事だろうと首を傾げる。そんな彼に「いや、気のせいか。すまん」とツバメは頬を掻きながら首を傾げる。その仕草もまたかわいらしい。
「いつ村に帰るんだ？」
「今日の昼にも帰ろうかと思ってます。サクラとも相談済みです」
　ジークは「そうか」と小さくつぶやくとコーヒーを飲み終える。
「ちょっとあんた、もう帰るの？」
　今まで二日酔いに完敗していたがどうやら打ち負かしたのか、少し顔色が良くなったラミィが不機嫌そうに言った。
「う、うん。村の事もあるから」
「あっそ」
　ラミィは不機嫌そうに短く答えると、ムスッとしてクリュウに背を向けて座る。一体どうしたのだろうか？
「……そういう事か」
　ジークは一人何かを納得したようだったが、クリュウはそれに気づかなかった。
「クリュウさん、またアルフレアに来てくれますよね？」
　同じく復活したレミィが不安そうな顔で訊いて来る。そのうるうるとした瞳に、クリュウは笑顔でしっかりと答える。
「もちろん。また来るよ」
「本当ですかッ!?　約束ですよ！」
「うん。約束だ」
　その言葉に、レミィは嬉しそうにうなずいた。そんな二人を見て不機嫌そうなラミィとサクラ、微笑ましげに見詰めているツバメ、苦笑いするジーク。
　様々な想いが交錯する、そんなある晴れた日の朝の事であった……
　その日の昼、クリュウとサクラは定期船の船着場にいた。その周りにはラミィ、レミィ、ツバメ、ジークの四人が囲んでいる。
「気をつけて帰れよ」
　ジークの言葉にクリュウは「はいッ！」と力強くうなずく。そんな

彼に近づく陰が、
「ふむ。道中にこれでも食ってくれ。ワシの手作り弁当じゃ」
そう言って彼が渡したのは二人分の弁当。それを見たラミィが「あああぁぁぁッ！」と叫び、レミィが「う、裏切り者ぉッ！」と泣き出し、「お主達とは一度徹底的に話し合う必要があるようじゃな」とツバメは頭を抱えながらつぶやいた。
「わぁ、ありがとう」
クリュウはツバメから弁当を受け取ると嬉しそうに微笑む。そんな彼を見てツバメも「うむ。ゆっくり味わってくれ」とはにかむ。その笑顔がまたかわいらしい事。もし同じ幼なじみでもエレナよりツバメのような優しく家庭的な女の子の方が良かったなぁ、と心から思うクリュウ。
「……お主とも、今度二人でゆっくり話がある」
ジト目で見るツバメの言葉に、クリュウは「え？　そ、それって……」と驚き、彼の顔を見て頬を赤らめる。
「……ツバメ、許さない」
「待つのじゃッ！　クリュウは何か甚大な誤解をしておるぞッ！　そしてサクラもそんな辻斬りのような目でワシを見るなッ！　ワシとクリュウは何でもないぞッ！」
「つ、ツバメ。あの、そういう事は二人っきりの時に言ってね？」
「ぬおぉッ!?　クリュウまで何を言っておるのじゃぁッ！」
最後までクリュウ達のノリに振り回されるツバメを見て、ジークはくくくとのどで笑う。その顔は本当に楽しそうだ。
そして、ついに出発。
動き出した定期船の船上から二人は離れていくツバメ達に手を振る。ツバメ達もまたそんな去っていく二人に向かって手を振り、声を掛ける。
風に乗ってくるツバメ達の声、それは――
「お元気で～ッ！　また遊びに来てくださ～いッ！」
「もう二度と来るなバ～カッ！」
「体調を崩すでないぞぉッ！　それと今一度言うがワシはおと――」

「元気でなあああぁぁぁッ！」
「ジークッ！　お主なぜわざわざワシの声に重ねて言うのじゃッ!?」
「すまんすまん」
「まったく。もう一度言うぞぉッ！　ワシはおと――」
「さようなら～ッ！」
「レミィッ！　お主まで邪魔しおって！　えぇいッ！　クリュウよく聞くのじゃぞッ！　ワシは女子ではなくおと――」
「今度レミィとツバメに手を出したら許さないわよッ！」
「ラミィッ！　なぜ邪魔するのじゃッ！　クリュウに誤解を与えたままではないかッ！　それとなぜワシとレミィが同列なのじゃッ!?
性別的におかしいであろうが！」
「ツバメも気をつけなさい。男は狼なんだから」
「おいおい、俺はそんな男じゃないぞ」
「ふん、どうだかね。ツバメも気をつけなさい」
「こりゃ手厳しいな」
「ぬおぉッ!?　ワシは仲間からも誤解されておるのかッ!?　わ、ワシの居場所はどこじゃあああぁぁぁッ！」
　そんなツバメ達の声を聞き、クリュウは笑った。
　本当に、いい友達を持った。そう心から思えた。そんなクリュウを見詰めるサクラもまた、いい仲間を持ったと心から思っていた。
　遠くなるアルフレアを見詰めながら、クリュウは嬉しそうに微笑んだ。
「いい旅だったね」
「……そうね」
　クリュウとサクラはそう笑みを浮かべ合うと、風が冷たい甲板を降りて船内に入る。そんな二人を見守る太陽が、今日も寒空を少しでも暖めようと燦々（さんさん）と輝いていた。

第６０話　片手剣の役目

アルフレアから村に戻ったクリュウとサクラだったが、クリュウは早速エレナの跳び蹴りを受ける事になった。
実質三週間も村を空けていたのでものすごい心配を掛けていたのだ。エレナの涙目で怒鳴る姿を見てしまえば、さすがのクリュウも反撃不能。ただひたすら謝り続けるしかなかった。
その後三日間エレナは一切クリュウに口を利かず、クリュウは必死に彼女に謝るしかなかった。何とか許してもらっても、クリュウは胸にあまり長い間村を空ける事はしないと誓うのであった。
一方、フィーリアはまだ戻っていなかった。それだけ桜リオレイアに苦闘しているのかと思うと気が気ではないが、彼女ならきっと大丈夫とクリュウは信じた。
そして、アルフレアから村に戻って一週間の月日が流れた……
「ギャアオワァッ！　ギャオワァッ！」
自慢の茶褐色の皮膚をズタズタにされ、血まみれになりながらも真っ赤な瞳だけは目の前の敵を睨んで敵意を向け続ける。
肌が焼けるような暑さに体中に汗を掻きながら、クリュウは目の前の敵――ドスゲネポスと対峙する。
肩で荒い息をするクリュウだが、まだまだ体は動く。それに対してドスゲネポスはクリュウの執拗な攻撃を受け続け、もはやその体力も尽き掛けていた。
砂塵が舞い、視界を悪くするが二人の間にはそんなものは意味を成さない。互いに殺気を出し合っているので、目を閉じていても互いの位置などわかってしまう。
ドスゲネポスの周りには彼を守っていたゲネポスの亡骸が数匹転がっている。これももちろんクリュウが倒したものだ。
「グルルルゥゥゥ……」
鋭い瞳で睨み続けるドスゲネポス。そしてそんなドスゲネポスにオデッセイを構えながら対峙するクリュウ。
お互いがお互いの射程に入った状態。どちらが先に動くかで、勝敗

は決する。
そして、風が吹き砂塵を消し飛ばした刹那――双方共に動いた。
「ギャオワアアアアアッ！」
「うりゃあああぁぁぁッ！」
ドスゲネポスの巨大な爪がクリュウのバサルヘルムを吹き飛ばす。そしてクリュウの刃は――ドスゲネポスの腹に深々と突き刺さった。
「グウウウゥゥゥ……」
そんな小さな鳴き声の後、ドスゲネポスは力を失って倒れた。クリュウは荒い息のままドスゲネポスに深々と突き刺さったオデッセイを引き抜く。が、抜き終えた途端彼は剣を取りこぼしてしまった。
「……うぅ……まだ痺れが抜けてないか……」
先程ドスゲネポスとゲネポスに包囲された時に牙攻撃を受けて麻痺してしまった。その時は何とか切り抜けたが、まだ完全には痺れが抜けてはいなかった。
「危なかった……サクラも呼べば良かったなぁ……」
そう言ってクリュウは疲れた体を投げ出すようにして砂の上に座った。
サクラは今村にいる。今回はクリュウ単独で受けた依頼だったのだが、思いのほかゲネポスの数が多く、さらに目の前に転がっているドスゲネポスも今までの中で一番大きいだろう。
久しぶりの単独狩猟だったせいか、ずいぶん自分の単独狩猟の勘が鈍くなっていた。
フィーリアが村を出て行った後しばらく単独狩猟が連続失敗した事があった。あれがまだ未熟だった上に単身が苦手だったからだ。それを克服しようとクリュウは努力し続け、今では単独でもそれなりに倒せるようになっていた。
だが、クリュウの本領はチームプレーにある。彼はチームでだからこそより強く自分を前に出せる。後ろは仲間が守ってくれる。そう信じているから。
今回の依頼はそんなチーム戦をより円滑（えんかつ）にする為の武器を作る為の素材を手に入れる為のものだ。

クリュウはドスゲネポスの死骸に祈りを捧げると、剥ぎ取りナイフを取り出して解体を始める。そして目的のドスゲネポスの皮を手に入れると、意気揚々と拠点（ベースキャンプ）に戻る。

依頼内容はドスゲネポス一匹の狩猟。つまり依頼は完遂だ。その他にも素材袋には手に入れたゲネポスの牙や皮やサボテンの花などがある。

拠点（ベースキャンプ）に戻った彼を待っていたのは一匹のアプトノス。名前はアニエス。雌のアプトノスだ。

村に戻った彼らに村長がわざわざ用意してくれたのがこのアニエスであった。

実はシルキーは現在――妊娠しているのだ。

お相手は村の公用農場で飼われているアプトノスの一匹。常日頃はそちらに預けていたので、その際にカップルになったらしい。

妊娠してしまったのでは無理に働かせる訳にもいかず、仕方なくクリュウはシルキーの後任のアプトノスを村長に頼んでいたのだ。

そして、そんなシルキーの代わりにクリュウに配属されたのがこのアニエスという訳だ。性格は大人しく、子供と大人の間くらい。シルキーよりもずっと若いアプトノスだ。人間で言うとクリュウ達と同じくらいの年齢だ。

日々シルキーで訓練していたおかげで、クリュウもすでに一人で運転できる。なので、今日はアニエスと二人っきりの初旅行という訳だ。

アニエスは拠点（ベースキャンプ）の隅の大きな水溜りに口を突っ込んで水を飲んでいたが、クリュウの気配を感じると顔を上げて「キュオォ」と鳴く。アニエスは他のアプトノスと違って声がすごくかわいい。クリュウもその声が大好きだった。

「アニエス。待たせてごめんなぁ。終わったから帰ろう」

「キュオォ♪」

明らかにご機嫌だ。クリュウが近づくと頬擦りまでして来る。本当にかわいらしい。

クリュウは荷物を整えるとシルキーの頃から使っている竜車に荷

物を押し込み、準備を完了する。
運転席に移動し、手綱を持つ。アニエスはいつもでオッケーと言いたげにこちらを振り返った。それにうなずき、クリュウは手綱を引っ張る。
「出発だ！」
「キュオォッ！」
クリュウはイージス村を目指してレディーナ砂漠を出発した。
村に帰ったクリュウは早速手に入れた素材を持ってアシュアの工房に向かう。
アシュアは店先に出て誰かと話していた。それはクリュウもよく知る人物だ。
「アルト兄さん！」
クリュウの声に背中に大きな荷物を背負った青髪の青年――アルト・フューリアスは振り返った。
「おぉ、クリュウか。久しぶりだな」
「アルト兄さん！　いつ村に来てたのッ!?」
「今さっきさ。もうサクラとも会ったぞ。これから三日ほど村で商売するんだ。クリュウも買いに来いよな」
「もちろん。アルト兄さんの商品は良品ばかりだからね」
「当たり前だ。これでも商人の端くれ。半端な物を売ってたら商人失格だからな」
自信満々に言うアルトに、クリュウは笑みを浮かべる。
アルトはいつも楽しげで自信に満ち溢れている。クリュウはそんな彼を心から尊敬し、憧れていた。本当に優しい。村の誰からも慕われている――ちなみにドンドルマとかでの仕入れの時は別人のように怖いのだが、その顔を知っている者はこの村にはいない。
「クリュウくん久しぶりぃ。今日は一体何の用なん？」
「あ、アシュアさんこんにちは！　えっとですね、今日は新しい武器を作りたいんですけど」
そう言ってクリュウはその自分が作りたい武器とその使い道を言った。すると二人は納得したような顔になる。

「なるほどなぁ、片手剣の低めな攻撃力よりも最初からチームプレー重視の状態異常に変える訳やな。あんたらしいやり方やなぁ」
「確かに。お前が動きを止めてサクラが叩きのめす。フィーリアはその掩護か。シンプルだがベストな選択だな。片手剣使いがチーム戦でよく使う戦法だ」
　二人の言葉にクリュウは自分で考えた戦法に自信を持った。やっぱり自分は補助に回った方がいいのだ。一番攻撃力が高いサクラの為に自分が動く。それが自分達のチームに合ったやり方だ。
「今のところ僕の作れる武器でできる最善の策ですね。もっといい素材があればいい武器を作れるんですが、僕のレベルだとこれが限界ですね」
「そういう事やったらうちも全力でがんばったるでぇ～」
「よろしくお願いします」
　アシュアはクリュウから素材と料金を受け取ると早速工房の中に入っていった。そんな彼女の背中を見送るクリュウとアルト。
「それじゃ俺も商売すっかな」
「あ、僕にも見せて。ちょうど品薄状態だったから」
「任しとけって。今日は結構いい品物があるから期待しろよ？」
「もちろん。じゃあサクラも呼んで来るね！」
「わかった。場所はいつもの所だ。早く来ないと売り切れちまうぜ？」
「い、急いで呼んで来る！」
　クリュウは慌てて自分の家に走って行った。そんな彼の背中に小さく微笑むと、アルトはいつものように村の中央の分かれ道の真ん中でシートを敷いて商品を並べて商売を開始する。アルトの市が開くとすぐに村人が大勢やって来る。クリュウがサクラの手を引いて来た頃にはすでに超満員。辺境の村であるイージス村にとってアルトのような行商人が持って来る商品は珍しい品が多い上に村の道具屋よりも安い時があるので人気がある。
　クリュウとサクラは遅れを取り戻そうと人だかりの中に飛び込んだ。

今日もまた、イージス村は騒がしい一日となりそうだ。

第６１話　桜花姫爆誕

新たな武器を注文して二日後、完成した武器を取りにクリュウはアシュアの家に訪ねていた。
「これでええんやな？」
そう言って彼女が差し出してきた武器を見て、クリュウはうなずく。
「間違いありません。僕がほしかった武器――デスパライズです」
クリュウが受け取ったのはゲネポスの牙や皮を使ったヴァイパーバイトという武器の強化型でドスゲネポスの皮や麻痺袋を使った片手剣、デスパライズだ。
今までの武器が剣らしい姿をしていたのに対し、このデスパライズは異彩を放っていた。ドスゲネポスの皮で包んだ刀身から突き出たドスゲネポスの牙。その形はどこか鋸（のこぎり）に似ている。埋め込まれた牙の先端からは内蔵されたドスゲネポスの麻痺毒が生成される麻痺袋から強力な麻痺毒が染み出している。つまりこれでモンスターを斬りつければ麻痺毒が蓄積され、やがて麻痺状態にできるという訳だ。
片手剣の攻撃力の低さを捨て、主力攻撃手のサクラの補助を目的に作った武器だ。これで麻痺させたらサクラを中心に総攻撃を仕掛ける。仲間の為を思ったクリュウらしい武器の選択だ。
「せやけどあんまり期待すんやないで？　麻痺や毒、睡眠なんか毒素は一回その効力を発揮させるとすぐにモンスターは体内に抗体を生成して対応力を上げるんや。二回目はより毒を与えないとできない。三回目はそれよりもっと。四回目はさらにもっと……って具合でより難しくなるんや」
「わかってます。これはあくまでいい素材を手に入れていい武器を作るまでの繋ぎですから。いくら片手剣が弱いと言っても、僕は属性攻撃を重視したいですから」
「せやなぁ、付加攻撃は剣士やのうてガンナーの方が向いてるからなぁ。剣士のあんたはやっぱり属性攻撃の方はええなぁ」

「そうですね。まぁ、その為にはもっとがんばってモンスターを倒して素材を手に入れなきゃ作れませんけどね」
「そん時はもちろんうちに頼むんやでぇ？　多少やったらサービスしてあげるで」
「ありがとうございます。その時はひいきにさせてもらいますよ」
「任しとき」
　自信満々に微笑むアシュアにクリュウはお礼を言うと新調したデスパライズを腰に下げて酒場に向かう。すでにバサルシリーズは装備済み。早速デスパライズの試し斬りに向かうつもりだったがとりあえずまずは腹ごしらえが先だ。
　酒場には十人くらいの村人が食事をしていた。そろそろお昼時。エレナの酒場にとっては稼ぎ時の時間となる。
　クリュウは村人にあいさつしながら適当な席を探す。と、隅のテーブルにサクラが腰掛けているのを見つけ、クリュウは彼女に駆け寄る。
「サクラ、お昼？」
　クリュウが声を掛けるとビクリと一度驚いたように震えた。振り返って声の主がクリュウとわかるとほっと胸を撫で下ろしてうなずく。
「そっか。あ、ここいい？」
「……（コクリ）」
　クリュウはサクラの許可を得て彼女の正面に腰掛ける。彼女もまだ来たばかりなのかメニューと睨めっこしていた。クリュウもとりあえず料理を選ぼうとメニューを手に取って広げる。日々新しい料理を考えては作ったりしているエレナ。おかげでメニューもずいぶんと多い。これを一人で賄（まかな）えるのは村の小ささもあるが一番はやはり彼女の技量のおかげだ。
　メニューを見ながら料理を選んでいると、別の客の料理を持ったエレナが厨房の方から出て来た。手に持つ料理をテーブルに置き「ごゆっくりどうぞ♪」と天使のような営業スマイルを炸裂させて振り返り――クリュウを目が合った。途端に彼女は二人に駆け寄って来る。

その時の彼女の笑顔はさっきのとは根本的に違う気がしたが、気のせいだろうか？
「いらっしゃいサクラ、他一名」
「略さないでくれる？　すごく空しい」
「あんたの気持ちなんか知ったこっちゃないわよ。で？　何食べるの？」
エレナはクリュウの言葉をスルーして注文を訊いてくる。こういう部分はしっかりとしている幼なじみにクリュウはため息すると料理を頼む。サクラも続いて頼んだ。
二人の注文を聞いたエレナは「店長命令よ。待ってなさい」と言って去った。
「っていうか、エレナは店長でもあって料理長でもあってホールチーフでもあって……あれ？」
「……とにかくすごい」
「そ、そうだね。エレナはすごいよね」
クリュウは心からそう思った。無茶苦茶な事ばかりしているが、仕事はまじめで熱心。やる事はちゃんとやる。そういう子なのだエレナは。子供の頃から、そこは変わらない。
この酒場がこうして運営できているのも、エレナの努力の賜物（たまもの）だ。おかげで今この酒場は村の交流所としても使われていて、少なからず村の発展に貢献している。
本当に、すごい子なのだ。エレナは。
新たな料理を持って来てその帰りに注文を取りまた厨房に消えるエレナのがんばる後姿を見て、クリュウは静かに微笑んだ。自分ががんばっているように彼女もがんばってるんだなぁと改めて実感する
――サクラが冷たい目で見ているのに気づいていないほど真剣に。
「……バカ」
「え？　サクラ何か言った？」
「……別に」
「え？　な、何か怒ってる？　さ、サクラ？」
まるで自覚がないクリュウは不機嫌そうなサクラを見て狼狽（ろう

ばい）する。そんな彼には一切視線を向けずにツンとするサクラ。よく見ないとわからないかもしれないが、頬をわずかに膨らませてふてくされている。
　せっかくの二人っきりなのに他の女を見るクリュウにご立腹なのだが、例によってクリュウは自覚なしだ。こちらの鈍感さも子供の頃から変わっていない。
「ぼ、僕が悪いの？　何か怒らせる事をしたのなら謝るよ」
「……別に」
「と、とにかくごめん！」
「……別に」
　サクラが不機嫌な時の定番言葉である「……別に」が連呼され始めた事にクリュウは心の中で悲鳴を上げる。とその時、そよ風がそっとクリュウの頬を撫でた。何気なくクリュウが視線を上げた刹那、懐かしい声が響いた。
「クリュウ様あああぁぁぁッ！」
　その声に、クリュウの顔がぱぁっと華やぎ、サクラの機嫌はさらに悪くなった。
　村の入り口の方から走って来る懐かしい人物。それはクリュウが最も信頼するチームメイトであり、クリュウとサクラとは別行動で桜リオレイアを狩りに行っていたフィーリアであった。久しぶりのその汚れのない純粋な笑顔に、クリュウは満面の笑みを浮かべて手を振る。
「フィーリアッ!?　久しぶりッ！　無事だ――」
　そこでクリュウの動きが止まった。不審に思って振り返ったサクラもまたフィーリアの姿を見て固まる。
　駆け寄って来るのは確かにフィーリアだ。あの天使のような笑顔を間違える事なんて絶対にありえない。だが、クリュウ達の知っているフィーリアとは多くのリオレイアを狩って来た、二つ名を《新緑の閃光》と呼ばれるハンターだ。だが、二人の前にいる彼女は、前とは大きくかけ離れていた。
「えっと……僕の気のせいかな？　フィーリアが、ピンク色に見える

んだけど……」
「……私にも見える」
「という事は……」
　笑顔が引きつってくるのを感じていると、フィーリアは二人の前に立ちにっこりと天使の笑みを浮かべた。その笑顔は、本当に見ていると元気をもらえるような、そんな笑顔だった。
「お久しぶりですッ！　お元気でしたか？」
「あ、うん。元気だったよ」
「良かったぁ。クリュウ様が無事なのかとても心配してたので、ご無事な姿を見られて安心しました」
　そう言って胸の前に手を合わせて安堵するフィーリア。本当に心配してくれていたのだろう。ここはお礼を言っておくべきところなのだが――残念ながらクリュウはそれどころではなかった。訊いておかなければならない事があるのだ。
「あ、あのさフィーリア」
「はい？　何でしょうか？」
「……その装備、どうしたの？」
　クリュウが訊いたのは彼女の装備だ。外見はまるで変わっていない。防具の形も武器の形も以前と何らから変わりない――ただ、全てが桜色に変わっていた。
　クリュウの問いに対しフィーリアは待ってましたとばかりに嬉しそうな笑みを浮かべる。
「今回の狩猟で念願のリオハートシリーズを手に入れたんですッ！　武器も新しくハートヴァルキリー改に新調しましたッ！　どうですか？　似合ってますか？」
　そう言ってフィーリアは嬉しそうにくるりとその場で回ってみせる。
　彼女の新たな防具はリオハートシリーズと呼ばれる、世にも珍しい桜リオレイアから剥ぎ取れる素材を使った貴重な防具だ。外見はレイアシリーズの桜色バージョンともいうべきもので、今までのが夏に華やぐ木々の葉だとすれば、リオハートシリーズは春に咲き乱れる

花々とも言うべき鮮やかな色だ。背中に背負ったハートヴァルキリー改も同じような感じだ。頭は以前と同じようにレッドピアスを付けている。
　金色の髪が美しい天使のようなフィーリアにとって、リオハートシリーズはあまりに似合っていた。かわいさも美しさも、以前よりグッと磨きが掛かって見える。
　クリュウが呆然としていたのは彼女の装備がより高レベルのものになったからでもあるが、同時に以前よりもかわいく見えたからでもある。
「あ、あのクリュウ様？　に、似合ってませんか？」
　クリュウからの返事がないフィーリアは似合っていないのかと不安そうな表情になる。その落ち込みようにクリュウは慌てて首を激しく横に振る。
「い、いやそんな事ないよッ！　むしろ前より、その……かわいいし」
「……ッ!?」
「か、かわいい、ですか？　そ、そんなぁ……」
　クリュウの言葉に赤くなった頬を押さえながら恥ずかしそうに喜ぶフィーリアと、彼の言葉に愕然としているサクラ。極端に反応が分かれた。
「えへへ、クリュウ様にかわいいって……かわいいって……」
「……クリュウ、どうして……どうして……」
　大喜びするフィーリアと絶望感に打ちひしがれるサクラ、そしてクリュウは自分が言った事が恥ずかしかったのか赤くなった頬を掻いて何もない空なんかを眺めている。
　クリュウとフィーリアの間に、彼女の装備の色のような雰囲気が流れ始めた。その雰囲気にクリュウが耐えられなくなった時、
「こんのバカクリュウウウウウウウウウッ！」
　突如そんな空気をぶち壊すようにしてエレナが飛来。クリュウに向かって強烈な跳び蹴りを炸裂させた。酒場から吹き飛ばされて道の上を砂煙を上げながら転がるクリュウ。フィーリアとサクラが悲鳴を上げる中、見事な跳び蹴りを放ったエレナはスタッと着地した。

吹き飛ばされたクリュウは全身にすさじい激痛が走ったが、それ以上にさっきの空気を何とか脱する事ができた方が良かった。だから、思わず言ってしまった。
「あ、ありがとうエレナ」
エレナの顔からサーッと血の気が引いていった。
「……ご、ごめんなさいクリュウ。私もやり過ぎたわ。だから、その、そんな趣味に走るのはやめてね？　ほんと、お願いだから」
懇願（こんがん）するように言うエレナに、ようやく彼女がすさまじい誤解をしている事に気づいてクリュウは悲鳴を上げる。
「ち、違うッ！　僕はそんなんじゃないんだよッ!?」
「ほ、本当にごめんなさい。こ、これからはもう暴力とか振るわないから。お、お願い、元の普通のバカなクリュウに戻ってぇッ！」
「ち、違うんだッ！　それは誤解なんだぁッ！」
「く、クリュウ様、私がいない間に、そんなぁ……」
「……クリュウ、かわいそう」
「やめてッ！　人をそんな哀れむような目で見るのはやめてぇッ！本当に誤解なんだよおおおおおおおおおッ！」
青空の下、イージス村にもはや恒例となりつつあるクリュウの悲鳴が響き渡るのであった。
帰って来たばかりのフィーリアはクリュウ達と一緒に食事をする事になった。テーブルを中心にクリュウの対面にサクラが座り、その横にフィーリアが座っている。最初はクリュウの横に座ろうとしたフィーリアだったがサクラの猛反対を受け、危うく全面激突する寸前でクリュウが妥協案としてこういう座席を提案したのだ。相変わらずフィーリアとサクラの仲はクリュウが絡むとギクシャクしているのだ。
「ドドブランゴを討伐されたんですか。すごいですねぇ」
クリュウから自分のいない間に起きたドドブランゴ戦の話を聞くフィーリアは、まるで自分の事のように喜んだ。本当にいい子だ。
「そんな事ないよ。あれはみんなのおかげだし。そもそもフィーリアはリオレイアの亜種を討伐したんでしょ？　それに比べたら霞んで

見えるよ」
「そうご謙遜なさらずに。ドドブランゴは厄介な相手ですから、討伐できたなんですごい事なんですよ？　しかもガンナーの掩護抜きの剣士だけのパーティでだなんて」
「みんな強かったよ。レミィもツバメも。特に一番活躍してたのはサクラなんだ。やっぱりすごいよサクラは。すっごく頼りになるもん」
「……え？　あ、ありがとう」
　今まですっかりフィーリアといい感じで忘れられてムスッとしていたサクラは突然自分に話題が振られて驚いたが、すぐに自分をほめてくれたクリュウにお礼を言う。その頬は幾分か赤く染まっていた。
「そうなんですか、やはりすごいですねサクラ様は」
「……別に」
　フィーリアのほめ言葉は完全シャットアウト。クリュウは二人の間にすさまじい緊迫感を感じた。乙女冷戦とも言うべき光景だ。
「そ、それでリオレイアの亜種はどうだったのぉッ!?」
　クリュウが慌てて新しい話題を振る。この場において一番シンプルな回避術だ。そんなクリュウの振った話題に対し、フィーリアはうっとりとしや表情を浮かべ……
「至福のひと時でしたぁ……」
「ありがとうフィーリア。ものすごく楽しかったという事はすさまじく伝わって来たよ」
　これ以上語らせると一日中語っていそうなので途中で強制終了した。それなりの付き合いのおかげか、二人の扱い方をなんとなく理解しているクリュウだった。
「そ、そうですか？　残念です。また聞きたくなったらぜひ言ってくださいね？」
　ここで文句を言わずにうなずくところがフィーリアの優しいところであり天然なところであったりする。
「そういえば、クリュウ様武器を変えたんですか？」
　そう言ってフィーリアはクリュウの腰に下げられているデスパライズを見る。

「あぁ、これはついさっき完成したばかりの新武器だよ」
「私はあまり片手剣が詳しくないのですが、それはゲネポスの素材を使ってますよね？　という事は麻痺属性の武器ですか？」
「そうだよ。よくわかったね」
「モンスターの特性を考えればなんとなくわかりますよ。で？　クリュウ様はどうしてまた麻痺属性の武器を選ばれたんですか？」
「今までの僕の武器はオデッセイだったでしょ？　片手剣はバランスの取れた武器な分攻撃力が低い。その分を付加効果や属性にして攻撃力を補うんだけど、オデッセイは無属性だからそれができないんだ。だから新しく付加効果のある武器を作ろうと思ってデスパライズにしたんだ。これを使えば相手に麻痺毒を蓄積させて麻痺させる事ができる。そうすればサクラを主力として一斉攻撃ができるでしょ？」
　クリュウの説明にフィーリアは驚く。クリュウがそこまで考えて武器を作った事に驚いているのだ。
「く、クリュウ様すごいですッ！　そこまで考えて武器を選ばれたのですかッ!?」
「まぁ、攻撃力はこっちの方が低いからあくまで次の武器までの繋ぎだけどね」
「次の武器、ですか。何にされるんですか？」
「僕はサクラみたいな付加属性の武器がほしいんだ。オデッセイを強化したオデッセイ改は水属性らしいんだけど、岩竜の涙と雌火竜の逆鱗っていう希少素材を使うらしくて作れないんだ」
　オデッセイ改にするには貴重な鉱石と岩竜の涙、雌火竜の逆鱗という貴重な素材が必要となる。鉱石はクリュウも一応少ないながらも持っているので問題ないのだが、重要な部分に使う岩竜の涙と呼ばれるバサルモスの希少素材と雌火竜の逆鱗というリオレイアから一枚取れるかというくらい貴重な素材が必要になる。リオレイアと交戦経験のないクリュウはもちろん持ってなんかいない。
「雌火竜の逆鱗ですかぁ。それは超希少素材ですね。私も多くのリオレイアを狩ってきましたけど、十個ほどしか持ってませんね。差し上

げましょうか？」
「いや、それは規則に反するからダメだって」
　前にも言ったが、ハンター同士でのアイテムの交換はレア度が３以下のものでないとできない。ギルドの規定で、これを破ると不正行為としてギルドに裁かれるのだ。
「大丈夫です！　黙っていればわかりません！」
「いや、そういう問題じゃなくて……そもそも僕のレベルでそんな素材を使った武器なんか持ってたら怪しまれるって」
　クリュウの冷静なツッコミに、フィーリアは肩を落としてものすごく残念そうに重いため息を吐く。
「そうですよね、クリュウ様がギルドナイトに目を付けられるのは絶対にダメですよね」
「……さらっと怖い事言うね」
　ギルドナイトとは以前ツバメが持っていたギルドナイトセーバーを使っているギルド直属の部隊の事。違反行為をするハンターを取り締まるハンターを狩るハンター。ハンターから最も恐れられる存在だ。
　さすがのクリュウもギルドナイトという単語には苦笑いしかできない。と、そんなクリュウの手をそっと握るサクラ。
「……大丈夫。クリュウは私が守る」
「いや、ギルドナイトを敵に回さない事を大前提に行動しようね？　問題はそこじゃないからね？」
　そんなツッコミを入れるクリュウに、サクラは素直にコクリとうなずく。そんな二人を見て今度はフィーリアがムッとする。
「サクラ様。いつまでクリュウ様の手を握られてるつもりですか？」
「……いつまでも」
「いや、もういいからね？」
　クリュウはあっさりとサクラの手を離す。サクラはものすごく不満そうな顔をしていたが、大人しく引いた。すると、ちょうどタイミング良くエレナが料理を持って来た。
「お待たせぇ～。フィーリアとサクラ、他一名」

「……」
「あ、あのエレナ様？　あまりクリュウ様をいじめないでくれませんか？　クリュウ様すごく落ち込んでますよ」
「……かわいそう」
「あぁ、大丈夫大丈夫。こいつ単純だから簡単に復活するわよ」
「ひどいなぁッ！」
「ほら復活した」
「うぐ……ッ」
　返す言葉がないクリュウはふてくされたように頼んだピラフをモグモグと食べる。そんなクリュウを見てつい微笑んでしまうフィーリア、小さく笑みを浮かべるサクラ、呆れながらもどこか楽しそうな笑みをするエレナ。
　イージス村のいつもの光景がそこにあった。
　おいしいエレナの料理を食べながら、みんなで他愛のない話をする。アシュアが混ざったり村長が元気な声を上げてやって来たり、アルトが笑いながら料理を注文したり、他にも知っている村人がクリュウ達を見て楽しそうに笑う。そんないつものイージス村。
　クリュウが守りたいと願う、そんな故郷。
　この三人で村を守っていく。クリュウは心からそう思っていた。
　クリュウは食事を済ませるとデスパライスの試し切りの為に森丘に現れたイャンクックを狩りに向かう。そんなクリュウの両隣には信頼できるフィーリアとサクラが。
「別について来なくても良かったんだよ？」
　アニエスの手綱を引きながらクリュウは言った。だが、それは愚問である事はクリュウだってちゃんとわかっていた。
　二人は笑みを浮かべながら言った。
「クリュウ様と一緒がいいんです」
「……クリュウと一緒」
　全く違うタイプの女の子だが、その想いはどちらも同じ――クリュウと一緒にいたい。それだけだ。
　二人の言葉にクリュウは「そっか……」とだけ返すと、再び前に向

き直る。その表情が嬉しそうに笑みを浮かべている事は、二人もちゃんと気づいている。

信頼できる仲間。それがこの仲間であった。クリュウ、フィーリア、サクラ。お互いがお互いを信用している、そんな大切な存在。

今日もそんな仲間と共に、三人は狩猟に出掛ける。

空はどこまでも蒼い。

今日はずっと晴れていそうだ……

第６２話　蒼銀の烈風

イージス村は平和だった。
付近の狩場にも大型モンスターはほとんど現れず、現れたとしてもクリュウ達の敵ではなくすぐに討伐された。
おかげでイージス村は平和で、旅人達の中継地点としての役割を果たしながらのどかな日々を送っていた。
クリュウ達も平和な村に仕事がなく、ドンドルマまでよく狩りに行くようになっていた。
平和こそが一番だが、そうなるとハンターは存在価値を失う。何とも皮肉な事だ。
だが、クリュウは村の平和を誰よりも願っていた。だから、そんな平和な日々がずっと続けばいい。そう思っていた。
いつまでも、イージス村は平和である。誰もがそう思っていた。
――今日この日までは……
その日、イージス村から竜車に揺られて二日という場所にあるリフェル森丘に――奴が現れた。
のどかな風景の中、アプトノス達は小さな群れを成して崖に面した広場で背丈の低い草を食べていた。
いつもと同じ、そんな日。
だが、そんな彼らを狙う者が――空にいた。
「ギャアアアアアオオオオオオオオオオッ！」
空を震撼させる怒号にアプトノスが顔を上げた瞬間、空から巨大なモンスターが低空飛行で風を纏いながら襲い掛かり、一瞬にして一匹のアプトノスを吹き飛ばした。岩壁に叩き付けられたアプトノスはピクリとも動かない。その灰色の体には巨大な裂傷があり、皮が裂けて真っ赤な血が溢れ出す。
残ったアプトノスは慌てて逃げ出す。仲間を見捨てるのは冷酷だが、生き残る為の生存本能がそうさせているのだ。それに、例え立ち向かったとしても無駄だと彼らはわかっている。
動かなくなったアプトノスにズシン……ズシン……と地面を震動

させながら歩く巨大な赤いモンスター。
天空を飛び回る巨大な翼、敵を薙ぎ倒す巨大な尻尾、狙った獲物を二度と逃がさない巨大な足爪、鍛え抜かれた自然の鎧と言うべき筋肉に堅牢な真っ赤な鱗や甲殻を纏っている巨体。
まるで燃えているかのような紅蓮の体を持つその飛竜は、長い首の先の凶悪な顔を振り、鋭い歯の並んだ口を開く。
「ギャアアアアオオオオオオオッ！」
山中に響き渡るような咆哮。木々が震え、小鳥達が一斉に逃げ出す。
紅蓮の飛竜は倒れたエサにその鋭い歯で噛み付くと肉を切り裂き、食いちぎる。巨大な口に生々しく赤い肉が飲み込まれ、不気味な白い歯はエサの血で真っ赤に染まる。
目を覆いたくなるような光景、それは自然の摂理。弱者は強者に食われる。その姿そのものであった。
紅蓮の飛竜は散々エサを食い散らかした後、その巨大な翼を羽ばたかせて暴風を纏いながら空に舞い上がった。
「ギャオオオオオオオオオオッ！」
圧倒的な迫力を持つ紅蓮の飛竜は空を悠々と飛び去っていく。その姿はまるで空の王者とも言うべき威風を纏っていた。
リフェル森丘に空の王者――リオレウスが現れた……
「クリュウくんッ！　フィーリアッ！　サクラッ！」
テロス密林というドンドルマのハンターが密林と呼ぶ狩場からドスランポス二匹を狩って帰って来た三人がドンドルマに戻って酒場に入ると、それを見たライザが慌てて走って来た。
「ライザさん？　どうしたんですか？」
きょとんとするクリュウ。他の二人も同じような反応だ。一体どうしたというのか。
クリュウの前に立ったライザはいつになく真剣な表情でクリュウを見る。その表情に何かを悟ったのか、フィーリアとサクラも表情を引き締めた。クリュウはいまだに困惑している。
「クリュウくん、落ち着いて聞いてほしいの」

「はぁ、何ですか？」
一拍空けてから、ライザは静かに言い放つ。
「――あなたの村の近くの森丘に、リオレウスが現れたらしいの」
「……え？」
あまりにも突拍子もない言葉に、クリュウは一瞬思考がフリーズした。
フィーリアとサクラは驚愕の表情を浮かべるが、すぐに事の重大性に気づいて苦しそうな表情に変わる。
そして、遅れてクリュウがやっとその危機的状況を理解した。
「そ、そんな……ッ！」
愕然とするクリュウ。それはそうだ。リオレウスというのは上級飛竜に類別される、クリュウが今まで戦って来た全大型モンスターとは比べ物にならない強力なモンスターである。空を飛び回って敵を奇襲したり、その巨体を使って敵を粉砕する、まさに王者とも言うべき飛竜の中の飛竜。それがリオレウスだ。
とてもじゃないが、クリュウが相手にできるようなモンスターではない。
「おそらく、リフェル森丘ですね」
冷静に判断するフィーリアの言葉に、クリュウはまたも驚愕する。
「リフェル森丘って……村からそんなに遠くないよねッ!?」
「……リオレウスの基本行動範囲には、ギリギリ入るくらいの場所」
サクラの言葉にクリュウは冷静さを失う。
自分の故郷が、大切な村が、エレナ達村のみんなが――危ないッ！
「助けに行かなきゃッ！」
「待ってくださいッ！　今回の相手はリオレウスですよッ!?　今までとは比べ物にならない難敵ですッ！」
フィーリアが止めようとするが、クリュウは「わかってるよッ！でも、でも……ッ！」と悔しそうに拳を握る。その辛そうな姿に、三人は掛けるべき言葉を失った。
唇をキュッと噛み、ギュッと握られた拳は小刻みに震えている。
「僕が強くなりたいと思ったのは、村を守りたいからなんだ。なのに、

いざ村が危険になったら、僕は何もできない。そんなの嫌だ。みんなに情けない姿は見せられない！　僕は村を守るッ！　リオレウスを倒すッ！」
「無茶言わないでくださいッ！　今のクリュウ様が勝てるような相手ではありませんよッ!?」
「わかってるッ！　だけど僕がやらなきゃッ！」
「ここは私やサクラ様に任してくださいッ！　私やサクラ様はリオレウスと戦った経験がありますッ！　私達で討伐すれば――」
「それじゃ僕は何の為に今までがんばってきたのッ!?」
「そ、それは――」
　必死にクリュウを説得しようとフィーリアが次の言葉を言おうとした時、彼女の肩をサクラがそっと叩いた。振り返ると、彼女の隻眼がじっと自分を見詰めていた。
「サクラ様？」
「……クリュウなら大丈夫。きっと倒せる」
「さ、サクラ……」
「サクラ様ッ!?　一体何を……ッ!?」
　驚くフィーリアに、サクラは小さく微笑んだ。その笑みにフィーリアは言葉を失う。見詰める隻眼には一切の曇りがない――彼女は本気だ。
「……クリュウはもうリオレウスと戦えるまで成長しているはず。足手まといなんかじゃない。クリュウは信頼できる仲間。だから、大丈夫」
　うそ偽りのない真っ直ぐな言葉――彼女は信じているのだ。クリュウはリオレウスと戦って勝つ。必ず勝って、村を救うと信じているのだ。
　嬉しくて涙が出そうなクリュウ。そんな彼に、サクラは確認するように問う。
「……リオレウスが相手なら、今までとは比べ物にならない戦いになる。私は全力で戦う。今までのように、クリュウのフォローに回れない事もあるかもしれない。それを覚悟してでも、戦う？」

サクラの問い、それはクリュウの決心を確認するものであった――だが、そんなのは愚問だ。クリュウはすでに決心を固めている。
「もちろん、僕は足手まといなんかじゃない。仲間なんでしょ？」
「……そうね、じゃあ決まり」
「よしッ！　じゃあ早速リオレウスを狩りに――」
「ま、待ってくださいッ！　私はまだ許可してませんよッ!?」
そう慌てて声を上げるフィーリア。彼女はクリュウを危険な目に遭わせたくない一心なのだ。だが、ハンターという職業自体が危険な仕事。危険は百も承知。クリュウだって危険なのはわかってるし覚悟の上だ。それでも、フィーリアはクリュウに――大好きな人に怪我をしてほしくないのだ。
まだ納得できないフィーリア。だが、そんな彼女を見詰める冷たい視線。見ると、サクラが隻眼でじっと見詰めていた。
「な、何ですか？」
「……なら、あなたは来なくていい」
「なぁッ!?」
「……クリュウを信じられないなら、邪魔なだけ。私はクリュウを信じてる。だから、一緒に行く。それ以外の何ものでもない」
正面からの真っ直ぐな言葉。その言葉の重みにフィーリアは彼女の決心を知った気がした。
彼女はクリュウを信じている。だから、一緒に行こうとしている。だが、自分だって彼を信じている。彼ならリオレウスだって倒せる。でも、それでも怪我をするかもしれない。もしかしたら大怪我を負うかもしれない。そう思うと、クリュウを信じる気持ちが鈍る。
彼には優しく笑っててほしい。だから、傷ついてほしくないのだ。
二つの相反する思いに苦しむフィーリア。そんな彼女に、クリュウはそっと声を掛ける。
「僕はサクラと一緒に行くけど、フィーリアは無理しなくてもいいよ？　リオレイアとリオレウスじゃ別種のようなもの。動きが変わってやりづらいなら、無茶しなくていいよ。何だったら求人でも出すからさ」

そう言ってクリュウは優しく微笑んだ。
あぁ、この笑顔だ……
あんなにクリュウに悪い事を言ったのに、彼はこんな自分を気に掛けてくれている。本当に優しい人なのだ。彼は。
そんな彼が一大決心と共に空の王者、リオレウスに挑もうとしている。それも、サクラと一緒に。さらに彼は自分が降りるなら別のハンターを求人するとまで言っている。
――彼の信頼を他のハンター、ましてや絶対に負けたくないサクラにだけは渡したくなかった。だから……
「わかりました。クリュウ様がそこまで仰るなら、私も同行しましょう」
「ふぃ、フィーリア……ッ！」
ぱぁっと笑顔が華やぐクリュウ。そんな彼の笑みにフィーリアはドキリとしながらも言うべき事はちゃんと言う。
「リオレイアとリオレウスでは戦い方が違います。今回ばかりは私も苦戦を強いられるでしょう。ですので、私からの掩護はあまり期待しないでください。申し訳ありません」
「いいよ。みんな自分で考えて動くのはいつもの事。何も変わらないよ」
「いえ、ですから今回私は掩護は難しいんです」
「……私も、フォローは難しい」
そう言う二人だったが、そんな二人にクリュウは気にした様子もなく、むしろ嬉しそうに優しく微笑んだ。
「――それでも、信じてるからね。二人の事」
「クリュウ様……」
「……クリュウ」
その言葉に、二人は小さく微笑んだ。
どうやら、自分達は思っていた以上に彼に信頼されているらしい。自分の背中を、命を自分達二人に預けている。
仲間を信頼している。そんな彼に二人は苦笑いするしかなかった。
「まったく、クリュウ様ったら……」

「……まぁ、嬉しいけど」
「そうですね。これは全力で掩護しないといけませんね」
「……私も、かつてないくらいがんばる」
「そう来なくっちゃッ！　じゃあ三人で村を守りに行くよッ！」
「了解ですッ！」
「……わかった」
三人は信頼し合える互いの手を握り合う。
決意は固まった。
村を、故郷を、友を守る為に、今までかつてない大規模な戦いに挑む。
守りたいものを守る為に、新たな戦いに向かう。
リオレウスを倒す。その決意を胸に、クリュウ達は出陣す――
「あ、あのみんな、ちょっと報告があるんだけど……」
かっこ良く出撃しようとしていたところに、おずおずといった感じのライザの声が響く。振り返ると、ライザは苦笑いしていた。
「ライザさん？　どうしたんですか？」
クリュウは不思議そうに問うと、彼女は苦笑いしながら衝撃の事実を口にした。
「あの、そのリオレウス討伐依頼なんだけど……あなた達が騒いでいる間に別の人が受注しちゃったみたい」
ライザの爆弾発言にクリュウはもちろんフィーリアとサクラまで驚く。そりゃそうだ。これからその依頼を受けて出撃しようと決意してたのに、いきなりそれを根本から折られたのだから。
「だ、誰が受注されたんですかッ!?」
フィーリアが慌てて問う。そんな彼女の問いにライザは無言で受付を見た。彼女の視線を追って見ると、そこには一人の少女が立っていた。
手続きを終えたのか、少女はくるりと振り返った。
――その瞬間、クリュウは彼女の美しさに目を奪われた。
純白に近い銀色の柔らかそうな長い髪を結ったポニーテール、作られたのではないかと思ってしまうほど美しく整った顔、太陽を知らず

に育ったのではないかと感じるような真っ白な肌、吸い込まれそうな美しい碧眼。
まるで本の中のお姫様がそのまま現れたかのような、プライドに満ちた凛々しい表情。その美貌は誰もが振り向く美しさだ。
年はクリュウより少し年上くらいだろう。落ち着いた物腰と凛々しい顔が美しい長身の美少女。
高級人形のような端整な美しさは、とてもじゃないがハンターには見えない。
だが、その身を包むのは世にも珍しい蒼色の鱗や甲殻に覆われたリオレウス亜種――蒼リオレウスから剥ぎ取れる素材を使ったリオソウルシリーズ。頭だけは装備していないが、その白い耳には赤色のピアス、レッドピアスが付けられている。
そして、彼女の背中に背負われたのは巨大な剣――大剣だ。それもまた蒼リオレウスの素材を使った煌剣リオレウス。
全身蒼リオレウスの武具で身を包んだ少女。フィーリアやサクラと並ぶような歴戦のハンターであるとわかる出で立ちだ。
少女は手に持った依頼書を見詰めながら歩く。その時、ふと上げられた視線がクリュウと合った。
時が止まったような感覚の後、どうすればいいか困惑する彼に、そっと少女の方から声が掛けられる。
「何か用か？」
澄んだ美しい声音で放たれたどこか威圧的な声と凛々しい表情、そしてそのどこか大人びた雰囲気に、クリュウは一瞬戸惑うが、すぐに
「あ、いえ、別に……」と小さいながらも言葉を返す。
「そうか、邪魔して悪かった」
別に彼女は何も悪くないのに、律儀にも話題の邪魔をした事を謝るとクリュウの横を通り抜けようとする。
「あ、あのッ！」
言ってから自分で驚きながらも、クリュウは少女の歩みを止める。彼の声に少女も足を止めてそっと振り返る。不思議そうに首を傾げながら「まだ何か？」と小さく問う。クリュウは一瞬一躊躇（ちゅう

ちょ）したが、心の中で決心すると少女に問いかける。
「あ、あの。これからリオレウスを討伐にしに行かれるんですか？」
「あぁ。そのつもりだが」
「よ、良ければその依頼、僕に譲ってもらえませんか？」
　クリュウの突然のお願いに少女は少し瞳を大きくして驚く。そしてじっくりとクリュウの姿を上から下まで一通り見てみる。クリュウが着ているのはバサルシリーズ。中級クラスのハンターであると示していた。だが、リオレウスは上級飛竜だ。
　普通に考えれば、クリュウはまだリオレウスは早い。少女もまた彼の装備などを見てそう思っていたが、自分に向けられるその真剣な瞳に何かを感じ、半身だけ振り向かせていた体を完全に彼に向き直す。
「……何か、訳がありそうだな」
「はい……」
「良ければその訳を聞かせてもらえるだろうか？　それで考えたい。無理にとは言わない」
　少女の言葉に、クリュウはサクラとフィーリアが仲間である事を告げてから簡単に説明した。彼女が受けた依頼のリオレウスが自分達の村の付近に現れたという事。そして、村を守る為にも、自分達でそのリオレウスを倒したい、と。包み隠さず、全部話した。
　クリュウの言葉を無言で聞いていた少女の表情は何ら反応を見せていない。ただじっくりと、彼の言葉の真意を探るように聞いていた。
「……という訳なんです。ですから、そのリオレウスは僕達で討伐したいんですッ！　だから、お願いしますッ！　どうかその依頼を僕に譲ってくださいッ！」
　クリュウはそう言うと恥ずかしがる事もなく頭を下げた。それだけ必死という事が伝わって来るような光景だ。フィーリアとサクラも続いて頭を下げる。
　仲間全員で頭を下げて頼み込むクリュウ達を見回し、少女は腕を組んで思考する。そんな彼女の仕草にクリュウは不安げに顔を上げる。
「あの、ダメですか？」

「……ダメだ」
返って来た言葉はクリュウの期待を裏切るものであった。だが、ある程度は予想していた。一度受けた依頼をそう簡単に渡すほど、このハンター世界は甘くはないのだ。
「……そうですか、わかりました。じゃあ、よろしくお願いします」
クリュウは素直に引き下がり、彼女に村の命運を任せると肩を落としながら踵を返す。フィーリアとサクラも残念そうにそんなクリュウの肩をポンと叩いた。
そんな信頼し合った仲間のクリュウ達を、少女はじっと見詰める。
「失礼しました」
フィーリアが最後に丁寧に頭を下げて席に戻ろうとクリュウの手を引いた。その時、
「――依頼は渡せない。でも、君達の気持ちはわかった」
そんな言葉を背後から掛けられ、クリュウは振り返る。そこにいたのは、頼もしい小さな笑みを浮かべた少女。銀色の髪が、明かりに照らされてキラキラと輝く。
「一緒に行くか？」
掛けられた言葉は、クリュウ達の予想を大きく上回るものだった。もはや諦めていただけあって、クリュウの驚きは大きい。驚いて言葉をなくすクリュウ達に、少女はスッと手に持っていた依頼書を差し出す。
「本当は一人で行くつもりだったが、君達の本気に負けたよ。どうだ？　これならお互いに損はないだろう？」
依頼書に名前を書けば、チームを組む事になる。そして、ギルドの規定ではチームを組めるのは四人まで。ちょうどここにはクリュウ、フィーリア、サクラ、そして少女の四人がいる。問題なく、チームが組める。
「い、いいんですか？　僕らが同行しても」
クリュウは不安だった。
彼女は一人でリオレウスを倒しに行こうとしたような人物。フィーリアとサクラはまだしも、自分は足手まといになるのではない

か。それが不安だった。だが、
「構わないさ。村を守りたいのだろう？　なら、共に行こう――空の王者の下へ」
そう言って少女はクリュウに依頼書を手渡すと、次に差し出したのはリオソウルアームの外された純白の手。その意味を理解するのに多少の時間を要したが、クリュウはその意図をくみ取って自らも手を差し出した。
――互いの手が、しっかりと結ばれた。
「僕の名前はクリュウ・ルナリーフです。まだまだ弱いハンターですけど、よろしくお願いします」
「こちらこそ。私の名はシルフィード・エア。周りからは『蒼銀の烈風』なんて呼ばれている。よろしく頼む」
少女――シルフィードはそう名乗ると、一時とはいえ仲間となるクリュウ達を見回し小さく微笑んだ。
フィーリアとサクラも異存はなく、嬉しそうに微笑んでいる。そして、今まで事の成り行きを見守っていたライザも、嬉しそうに微笑んだ。
――これが、クリュウとシルフィードの最初の出会いだった……

第６３話　対火竜作戦会議

依頼書に名前を書き、正式に依頼を受注した四人。シルフィードは荷物を取って来ると五分ばかり離れ、そして戻ってくると早速クリュウ達が座っていたテーブルを囲んで作戦会議を行った。席はクリュウの両側をフィーリアとサクラが座り、シルフィードはその対面に座っている。

「改めて僕の名前はクリュウ・ルナリーフ。見ての通りの片手剣使いです」

「私はフィーリア・レヴェリと言います。武器はライトボウガンを使っています」

「……サクラ・ハルカゼ。太刀使い」

「なるほど。クリュウにフィーリア、サクラか。武器はチームとしてはバランスが取れているな」

シルフィードはクリュウ達の自己紹介にうなずくと、背中に背負った大剣の柄を握る。

「改めて、シルフィード・エアだ。見ての通りの大剣使い。君達と比べて攻撃力はあっても機動力が低い事だけは頭に入れておいてほしい」

大剣使いは名の通り巨大な剣で戦うハンターである。その剣はそれこそ一撃で飛竜の甲殻をぶち破る威力を発揮する事がある。ただしその巨大さ故に重量もかなりあり、背中に背負っている時はまだしも構えると両腕の力だけでその巨剣を支えなければならない。その為に構えている時は動きが極端に制限されるのだ。

構えている最中に動きを制限されるのは大剣の他にはランス、ガンランス、ヘビィボウガンなどが挙げられる。

大剣の欠点はそこにあるのだが、その分威力は絶大だし、太刀に比べて刀身が太く頑丈な為盾として使う事もできる。ただし武器自体を盾に使うので切れ味はその分低下する。

近距離戦において、大剣使いはチームの主力であり最も頼れる存在である。

「まず最初に、君達の武具とスキルを教えてほしい」

仲間の能力を知っておくのは大切な事。それによって戦法や作戦も変わるのだ。
「僕は見ての通りバサルシリーズです。武器はデスパライズで、スキルは防御＋２０、地形ダメージ【小】、睡眠無効です」
「私はリオハートシリーズとレッドピアスです。武器はハートヴァルキリー改。スキルは回復アイテム強化、精霊の気まぐれです」
「……凛シリーズ。飛竜刀【紅葉】。スキルは回復速度＋1、ガード性能＋2、探知、砥石使用高速化」
クリュウ達はそれぞれの武具名とスキルを言った。中には今回の狩りには不必要なものもある。クリュウの地形ダメージ【小】や睡眠無効、サクラのガード性能＋2も太刀使いの彼女には不要なスキルだ。
クリュウ達のスキルなどを聞いたシルフィードは何かを考えるようにあごに手を指を当ててうつむきながら「なるほど」とつぶやくと再びクリュウ達に向き直る。
「私は見ての通りリオソウルシリーズ、頭はレッドピアスだ。武器は煌剣リオレウス。スキルは耳栓、攻撃力ＵＰ【中】、見切り＋1だ」
シルフィードのスキルはかなり戦闘型のスキルだ。
耳栓とは大抵の大型モンスターのバインドボイスを防ぐ能力。詳しい理由はギルドが公開していないから不明だが、飛竜の強烈な怒号を空気中で中和する特殊機能が搭載されており、同時に幾分か恐怖心が和らぐ事によって体の動きを制限される事がなくなるらしい。さらにこの耳栓の上に高級耳栓というものが存在するが、これは全てのモンスターのバインドボイスを防ぐというもので、接近戦を主体とする剣士系のハンターからは重宝されている。
見切りとは時折戦闘能力が上昇し、通常攻撃よりも強力な一撃を放てる能力。攻撃力ＵＰとは文字通り攻撃力を上昇させるスキルだ。
お互いの能力を教え合った所で、シルフィードは次なる質問をする。
「次に、リオレウスの討伐経験がある者は？」
シルフィードの問いに、フィーリアとサクラが手を挙げた。ここで

手を挙げられない自分に、クリュウは恥ずかしくなった。
「なるほど。見る限り君達二人はかなり腕が立つように見えるが」
「あ、フィーリアは今は桜リオレイアの武具を身に纏ってますが、以前はリオレイアの武具を纏っていて新緑の閃光なんて呼ばれてます。サクラも隻眼の人形姫という通り名で通ってるんですよ」
クリュウが説明すると、シルフィードは一瞬驚いたような顔をしたが、彼女達の装備や雰囲気に確信を得たのか、小さくうなずいた。
「なるほど。春を迎えた新緑の閃光に、護衛の女神とまで謳われた隻眼の人形姫か。どちらも相当な実力者だな」
「いえ、そんな事は」
フィーリアが謙遜するが、その身が纏っている桜リオレイアの装備を見る限り全くもって説得力がない。
一方のサクラはじっとシルフィードを見詰め続ける。その視線に気づいたのか、シルフィードは彼女を向く。
「何だ？」
「……蒼銀の烈風、そう名乗った」
「そうだが」
シルフィードの返事に対し、サクラはスッとその隻眼を細める。彼女が真剣になった時の仕草だ。自然とクリュウ達も気が引き締まる。
「……その二つ名は聞いた事がある。確か、《剣聖ソードラント》のメンバーだったはず」
サクラの言葉にクリュウとフィーリアは二人して驚く。そんな三人の視線を受けるシルフィードはその名前にどこか懐かしそうな表情を浮かべると、静かに首肯した。
「確かに。私は元ソードラントのメンバーだった」
その返答に、サクラは「……そう」と小さくつぶやき、クリュウとフィーリアはさらに驚愕の表情を浮かべる。
世の中にはフィーリアやサクラのように二つ名を持つハンターは少ないながらも存在する。これらのハンターはそれが通り名として知られ、折り紙付きの実力者だ。だが、世の中には上が存在するもの。二つ名を持つハンターの上にはギルドの書類などに正式に記載され

る称号持ちという最上級ランクのハンターが存在している。
　称号持ちクラスになると古龍が現れた際はギルドが全力を挙げて居場所を捜索するほどの存在となり、称号持ちはこの世界には極わずかしか存在しない。
　まさに生ける伝説と呼ぶに相応しいハンターなのだ。
　だが、そういう個人で有名なハンターの他にもチームで有名になるハンター達も存在する。剣聖ソードラントもそのうちの一つであり、実力及び知名度も高いチームで、チーム戦においては最強クラスだ。
　かつてカルナスを襲ったラオシャンロンを撃退しようとして失敗し街が壊滅したカルナス防衛戦の時に、サクラのチームと同じく最後まで戦い続けたチームだ。その実力は他を圧倒するもので、炎王龍テオ・テスカトルや風翔龍クシャルダオラを撃退した事もある名実共に史上最強クラスの強さを誇るチーム。ハンターどころか一般人ですら知らない者はいないとまで言われる最強のハンター集団。それが剣聖ソードラント。彼女はそんな最強チームの出身なのだ。
「す、すごいですねッ！」
　クリュウはキラキラした瞳で彼女を見詰める。何しろ相手はあの天下無敵の剣聖ソードラントの元メンバー。憧れないはずがない。だが、そんなクリュウの瞳にシルフィードは視線を逸らした。その表情はどこか不機嫌そう。
「私はもうあのチームとは関係ない」
「あ、すみません……」
　シルフィードの言葉にクリュウは口を閉じた。
　何があったか知らないが、彼女はあの最強のチームから脱退した。もうあのチームとは関係ない。そう思っているらしい。世の中そんなにうまくいかないのだが、クリュウ自身フィーリアやサクラといった二人の無双ハンターと一緒なので気持ちはわからなくもなかった。
「どうして脱退なされたのですか？」
　フィーリアの問いに、シルフィードは苦笑する。
「大した事じゃないさ。ただ、目指す道が違った。それだけだ」
「そうですか……」

いくら有名で強いチームであったとしても、目標とか主義が違うなら共に行動する事はできないだろう。そういう風に些細な違いが後に大きな亀裂となって所属していたチームを去る者も数多い。皆自分の力を振るえるチームを求めて旅をしているのだ。
「ソードラント出身という事は、シルフィードさんも古龍と戦った事があるんですか？」
クリュウはどこか真剣な表情で尋ねる。そんな彼の雰囲気にフィーリアとサクラが不思議そうに彼を見詰める。
彼女達は知らない。クリュウの父を殺したのはその古龍という天災クラスのモンスターである事を。彼が追いかけ続けた父の背中を奪った、クリュウにとっては忘れられない存在だ。
そんなクリュウの問いに対し、シルフィードは首肯する。
「私もカルナス攻防戦には参加したので、ラオシャンロンとは戦った事はある。他にも街を襲ったクシャルダオラを撃退した事はある。と言っても、私はチームでは一番弱かったからな。あまり目立った活躍はしていない。私の剣は奴の鋼の鱗を突破する事はできなかった。奴に決定打を与えて撃退を成功させたのは私以外のメンバー、リーダーとかだったよ」
風翔龍クシャルダオラ。天災クラスに位置づけられる古龍の一種で、全身を鋼の鱗で覆う別名鋼龍とも呼ばれるモンスター。奴が現れれば街は避難勧告が出され、ハンターを投入しても時間稼ぎになるかどうかというくらいの強敵だ。人の身で敵う者は、それこそ剣聖ソードラントなどの世に名を馳（は）せた一部の英雄クラスのハンター達だけである。
そしてクリュウの父は、そんな古龍と戦って命を落とした。クリュウの父は決して弱くはなかった。むしろ辺境でばかり活躍していたから名が知られてないが最強とまで謳われただけの実力者だ。それが命を落とした相手、それが古龍なのだ。
「すごいですね」
「すごくなどないさ。私はまだまだ修行中の身。リーダー達には敵わないよ」

そう言ってシルフィードはテーブルの上に置かれた水滴がたっぷりと付いたコップを手に取って水を飲む。
やはりそのリーダー達とは何かあったのだろう。彼らの事を口にした時、シルフィードはどこか不機嫌そうに見えた。史上最強と謳われるチームの一つである剣聖ソードラントを脱退したほどだ。ケンカ別れでもしたのだろうか
「まぁ、私の昔話はここまでにしておいて、問題はリオレウスだ」
仕切り直すように言うシルフィードの言葉に、クリュウ達は気を引き締める。今は彼女の昔話を聞くのではなくイージス村の脅威となるリオレウスを討伐する為の重要な会議だ。
「クリュウ。君はリオレウスとの戦闘経験はないらしいが、奴がどのような動きをしてどのような戦い方をするか、どんな生態かなどは知っているか？」
「あまり詳しくは知らないです、すみません」
「謝る事はない。これから知ればいい」
そう言ってシルフィードは先程持って来た荷物の中からゴソゴソと何かを取り出した。それは一冊の使い古された付箋（ふせん）や付け加えた紙などが本来の幅から無数に溢れているノート。シルフィードはパラパラとページをめくる。その中の一ページを見つけ出すとテーブルに置いた。
「これがリオレウスだ」
クリュウは提示されたページを見てみる。するとそこにはリオレウスの鮮明な絵と彼女の手書きの美しい達筆文字が無数に埋め尽くすかの勢いで書かれていた。
「これは？」
「私が今までの経験などを書き込んだ門外不出のノートだ。他言は無用」
「あ、はい。わかりました」
シルフィードはさらに付け加えた無数の紙まで開く。余程使い込んでいるのがわかる。無数の矢印が伸びまくって付け加えたページなどの文字や図に無数に繋がっている。かなり見づらいと思うが、実

際は的確な事項などに繋がっていて意外と読みやすい。
「まずこのリオレウスの絵を見てくれ」
　そう言って彼女が示したのは一枚の絵。クリュウはリオレウスを見た事がないのでよくわからないが、フィーリアが言うにはかなり正確な絵らしい。凶悪そうな顔や姿に、絵だというのに威圧感を感じる。
「大きさは十五メートルから二〇メートルくらいだ。イャンクックの倍と考えて構わない」
「そ、そんなに大きいんですか？」
「大きなものだと二〇メートルを超える」
　クリュウはいきなり出鼻を挫かれた気がした。彼が今まで相手にして来たイャンクックやダイミョウザザミ、バサルモス、ドドブランゴとはまるで桁違いの大きさだ。
「基本的な動作だが、奴は主に空戦を主体としている。空中からの奇襲攻撃や低空飛行での強襲、ブレス攻撃などだ。リオレウスのブレスは火球。その名の通り丸い炎だ。体内で凝縮した高温の激しい炎で、主に地上では遠距離タイプの単発だが、空中からだと単発と三連発がある。この威力は大タル爆弾に匹敵するような威力だ。ガードはせずに避けろ」
「そ、そんな強力な攻撃を撃って、リオレウスは大丈夫なんですか？」
　クリュウの何気ない問いに、シルフィードはぽかんとする。そんな彼女の反応にクリュウが首を傾げると、彼女は突如口元を抑えて小さな声を漏らしながら笑った。
「君は倒すべきリオレウスの体調を気にしているのか？　おもしろいな」
　クリュウはその言葉にようやく自分がおかしな事を言っていると気づいて顔を真っ赤にする。
「あ、いや、その……」
「安心しろ。リオレウスの鱗や甲殻はマグマにだってある程度は耐えられる耐熱に関しては最強クラスのものだ。自らのブレスで身を傷つけるような相手ではない。むしろそれだけ強固な鎧を纏っている

と考えてくれ」
　安心どころか脅威でしかない。マグマに耐えられるような強固な鱗や甲殻を持つリオレウス。とてもじゃないがまるで勝てる気がしない。
「大タル爆弾は、ちゃんと利くんですか？」
　クリュウの攻撃スタイルは罠にモンスターをはめて大タル爆弾で粉砕するというもの。クリュウにとっては大タル爆弾が主力とも言える。それが利かないのであれば、絶望的である。だが、
「大タル爆弾は肉質の硬さや鱗や甲殻に関係なくダメージを与えられるから、もちろん利く」
「よ、良かった……」
　安堵の息を漏らすクリュウ。だが、そんな彼を訝（いぶか）しげに見詰めるシルフィード。
「しかし、君は大タル爆弾なんて危なっかしい物を使っているのか？」
「え？　あ、そうですけど」
「珍しいな」
　シルフィードの言葉にクリュウは驚く。自分の戦法って、そんなに珍しいのだろうか。不安になって隣にいるフィーリアを見ると、彼女は苦笑いしていた。
「その、大タル爆弾って威力は絶大ですが誤爆というリスクがあり移動にも荷車を使うので使い勝手が悪く、実はあまり広くは使われていないんです」
「そ、そうなのッ!?」
　自分が今まで普通だと思っていた事が、まさか危険過ぎてあまり使われていない戦法だと知りクリュウは驚きを隠せない。
「……片手剣は威力の低さからチームを組む事が多い。他の単独ハンターは威力の高い武器かガンナーである事が多い。だから、爆弾を使う事はあまりない」
「そ、そうだったんだ。知らなかった……」
　クリュウの今までの戦い方からもわかるように彼は大タル爆弾を使う事が多い。これはクリュウが自らの武器の威力の低さを補おう

と考えた結果なのだが、改めて考えてみれば今は仲間もいる。その必要はなかったのではないか。むしろ今まで彼女達を危険に晒していたのではないか。急に不安になってきた。
　そんなクリュウの心境を悟ったのか、フィーリアはにっこりと微笑んだ。
「大丈夫ですよ。私もガンナーで威力が低いから大タル爆弾を使う事はありましたから」
「……私も、罠に落として起爆する事はある」
　クリュウはそんな二人の気遣いに感謝しながらも、自分の戦法を根本的に考え直そうかと思った。が、
「気にするな。別に悪い戦法という訳ではない。危険な分威力は絶大だから、短期決戦を考えているのならば良策だ」
「シルフィードさんも大タル爆弾は使うんですか？」
「場合によってはだ。君のように毎回のように使う事はないが、グラビモスのような強固な相手の甲殻を粉砕する時などには重宝している」
　クリュウはふとバサルモス戦を思い出した。確かにあの強固な甲殻をぶち破るのは、それこそ大タル爆弾がなければ厳しいものだろう。まして彼女が言ったのはその完全体であるグラビモス。より強固だろう。
　クリュウがそんな事を考えていると、シルフィードはどこか懐かしそうにクリュウを見た。その視線に気づいてクリュウが「何ですか？」と尋ねると、彼女は小さく笑った。
「いや、大タル爆弾を使うハンターには久しぶりに会ったからな。懐かしいと思っただけさ」
「そんなに珍しいんですか？」
「かなりの少数派だ。まぁ、世の中には爆弾が好きで使っている者もいるからな。それに比べたら君はまだマシだよ」
　シルフィードの言葉にはクリュウだけでなくフィーリアやサクラまでもが驚く。
「爆弾好きのハンターなんて、本当にいるんですか？」

「実在する。持てるだけの爆弾とその素材を持ち込んで狩りをするくらいだからな。あまり組みたいとは思わんが――以前私は組んだ事がある」
「そうなんですか。で、どうでしたか？」
「そいつはちょっと……いや、かなり変わった奴だったよ」
「変わった方？　どう変わってるんですか？」
　自分と同じように爆弾を多用するハンターというだけでも興味があるのに、さらに変わった人物と聞いてしまえば興味津々になるのも当然といえよう。そんなクリュウの問いに対し、シルフィードはその奇怪な人物をどう説明しようか逡巡（しゅんじゅん）し、答える。
「……アイルーフェイク以外何も着けていないハンマー使いの女だったよ」
『……は？』
　クリュウだけでなく何気なく聞いていたフィーリアとサクラまでもがポカンとする。それだけ奇怪な事であった。
「えっと、それはどんな冗談で？」
「冗談ではない。真実だ。奴はアイルーフェイクだけを被り他の防具など一切着けずインナーのみ。腰には立派なハンマーを下げているが、攻撃のほとんどが爆弾だったよ。ふざけた格好だったが、腕は大したものだった」
　そこまで言ってシルフィードは目の前ですっかり理解不能状態に陥って呆然としているクリュウ達を見て軽く咳払いする。
「まぁ、この話はここまでにしよう。今はリオレウス戦だ」
　シルフィードが仕切り直すと、クリュウ達もハッとして慌てて頭を切り替える。クリュウは一瞬その奇怪なハンターの姿を思い浮かべてみるが、あまりに奇怪過ぎて想像できなかった。だが、とりあえず自分はその人とは違う事だけは確信していた。
「ぼ、僕は別に爆弾をそんな風には思ってませんから大丈夫ですよ」
「そうだな。郷に入れば郷に従え。今回の狩りも、大タル爆弾を使おう」
「い、いいんですか？」

「構わない。君達の自由にやって結構だ」
何て頼もしいのだろう。クリュウは彼女の頼れる態度や雰囲気、口調などにすでにかなりの信頼を寄せていた。それほどまでに、彼女からは歴戦の戦士というオーラが伝わって来るのだ。
そんなすっかりシルフィードに懐く（？）クリュウを見て、フィーリアとサクラはムッとする。確かに相手は自分達よりも実力は上で頼れそうな人柄だ。だが、同時に彼女は絶世の美少女でもある。二人の不安は募るばかりだ。
「すっかり話が脱線してしまったな。つまりリオレウスは強固な鎧を身に纏っていると考えてくれ」
そう言ってシルフィードは話を戻す。クリュウも再びテーブルの上に置かれたノートを見る。フィーリアとサクラは様子見だ。
「先にも説明したがリオレウスはブレスを吐くので要注意だ。他にも奴は百メートル以上離れていても己が敵に向かって突進して来る。他の飛竜同様突進の後は大きな隙が生まれるが、迂闊（うかつ）に攻撃すれば反撃を受ける。接近戦では首を振って正面の敵を吹き飛ばそうとしたりブレスを吐く。奴が一度距離を取る為に後方に飛ぶ場合も気をつけろ。あの巨体をいきなり空中に飛ばすにはいくら奴の筋肉でも不可能。その為ブレスを撃ってその反動で飛ぶのだ。つまり、他の飛竜同様正面は危険だと頭に入れておいてほしい。だが、側面であっても奴は体を回転させて尻尾で薙ぎ払おうとしてくるから常に注意しておくように」
「……なんか、聞いている限り全然勝てる気がしないんですけど」
リオレウスのすさまじい戦闘能力の数々に、すっかりクリュウの意気は消沈していた。聞けば聞くほど勝算がなくなっている気がするのだ。まるで歩く高速要塞だ。
そんなクリュウに追い討ちを掛けるようにフィーリアが口を開く。
「あと、リオレウスは脚の爪から強力な毒液を染み出させています。上空に上った後ブレスを撃たずに体を大きく揺らしたりしたらすさまじい勢いで毒爪で斬りつけて来ますので、絶対回避。無理でも最低ガードはしてください。解毒薬には限りがありますから」

「さ、さらに毒まであるの？」
　クリュウのやる気をゲージ化したら、もうレッドゾーンである。これだけでもすでに戦意は喪失し掛かっているが、さらにとどめとばかりにサクラが付け加える。
「……口から黒煙を吹いている怒り状態はさらに危険。動きや攻撃力が通常時よりも高いし凶暴化する。空中からはほぼ三連ブレスを撃ってくるようになる。熟練のハンターでも奴の怒り状態の時は戦闘を避ける者がいるくらい」
「……無理」
　クリュウ戦意喪失。
　テーブルに突っ伏してついに動かなくなってしまった。フィーリアが慌てて肩を揺すってみるが、完全にクリュウは沈黙してしまった。
「く、クリュウ様ぁッ！」
「まぁ、確かに初めてでこれだけの情報を聞けば戦意が喪失するのも納得できるが」
「……クリュウ、ファイト」
　三人の美少女に励まされ、クリュウは何とか戦意を多少取り戻す。だが、状況は芳（かんば）しくない。どう考えても自分では勝てそうもない。
「そんな相手、どうやって戦えばいいんですか？」
　クリュウの自信なさげな問いに対し、シルフィードは一瞬ちょっと驚いたような顔をすると、フッと小さく笑った。
「――君の戦いたいように戦えばいいさ」
　返って来たどこか無責任な答えに、クリュウどころかフィーリアとサクラまでもが呆気に取られた。そんな三人の反応に、シルフィードはノートをパラパラとめくる。次に開いたのはイャンクックのページ。
「確かにリオレウスは厄介な強敵だ。だが、基本動作はイャンクックと然程変わらない。つまり、リオレウスは全く未知の敵ではない。今までの経験があれば、十分戦える相手だ」

「た、確かにそうかもしれませんが、クリュウ様はリオレウス初挑戦ですよ？　何かアドバイスを差し上げませんと。私はリオレイアが専門なので、間違った知識を与えてしまう可能性がありますし」
　リオレウスとリオレイアでは多少だが行動や生態などが変わる。フィーリアは自分の間違った発言でクリュウを危険に晒したくないのだ。
　そんなフィーリアの言葉に、シルフィードは「確かにそうだ」と肯定した。だが、その瞳は真剣そのもの。何も無責任な事を言っている訳ではない。
「私はさっき奴の生態を細かく教えた。多少個体によって違った動きをするかもしれないが、基本動作は全て同じだ。今のアドバイスをちゃんと理解し、今までの経験をちゃんと生かせれば、問題はない」
「し、しかしクリュウ様は初めてです。もしもクリュウ様が怪我でもされたら――」
「――怪我などしない」
　その断言のような言葉に、クリュウは下がっていた顔を上げた。落ち込む自分を優しく見詰める瞳。その表情は頼もしく、彼女が気休めなどを言ったのではなく、真実を言ったという事がわかった。
　驚くクリュウに、シルフィードは言った。
「クリュウは私が守る。この身を盾にしてでも、守ってみせるさ」
　刹那、シルフィードは優しげな笑みを浮かべた。その笑顔はクリュウが見てきたどんな笑顔よりも頼もしく、凛々しくて、でもどこか優しくて、自信がみなぎる、そんな笑顔だった。
　彼女と一緒なら大丈夫。そんな根拠のない自信が湧き上がった。
　クリュウの顔がぱぁっと華やぎ、彼は突然立ち上がる。驚く三人の視線を受けながら、クリュウは目の前のシルフィードに向かって勢い良く頭を下げた。
「よろしくお願いしますッ！」
　シルフィードはそんなクリュウの行動に呆気に取られていたが、フッと口元に小さな笑みを浮かべると「こちらこそよろしく」と言ってスッと手を差し出す。クリュウも顔を上げるとそんな彼女の手を

握り返した。
より固い信頼の絆を結んだ二人に対し、フィーリアとサクラはどこか釈然としない感じだった。
「……シルフィード様、要注意人物ですね」
「……クリュウ」
そんな二人の不安をよそに、クリュウとシルフィードは作戦会議を続行した。わからない事を正直に質問するクリュウに、シルフィードは的確にアドバイスを行う。
まるで以前から知っていたように二人の会話は弾んで進む。そんな二人にフィーリアとサクラが警戒したのは言うまでもない。

第６４話　それぞれの想いを載せて

会議は一時間ほどで終了し、クリュウ達は一度シルフィードと別れて準備に掛かった。一時間後に酒場で待ち合わせする事になっている。

自由行動となったクリュウ、フィーリア、サクラの三人は市場にいた。もちろん対リオレウス戦用の道具や素材を買い入れる為だ。

「ネットとゲネポスの麻痺牙はあるから、あとはトラップツールを買えばいいね」

クリュウはそう言うと陳列されている品物の中から工具箱のような物を手に取る。これがトラップツール。罠系統の必需品である。

「他にも色々買い入れないとね。結構消費が激しくて残り少ないのもあるから――って、聞いてる二人とも？」

クリュウはずっと沈黙しているフィーリアとサクラに向き直る。二人は先程からじーっとクリュウを見詰め続けていた。なのに、彼が声を掛けても何の反応も見せない。クリュウはだんだん自分が何か悪い事をしたのかと不安になるが、思い当たる事がない。だからこそ余計に不安になる。完全に負のスパイラル状態だ。

「あ、あの二人とも……」

「クリュウ様、本当にあの方と行かれるんですか？」

今まで沈黙していたフィーリアが初めて口を開いた。だが、発せられた言葉はクリュウを困らせるしかない。

「え？　そ、そのつもりだけど」

「私はあの方を好きにはなれません」

ピシャリと言うフィーリア。その瞳にはいつになく不機嫌さと警戒が見える。まるで初めてサクラに会った時のようで、社交性のいい彼女にしては珍しい。

「ふぃ、フィーリア？」

「……私も、反対」

そう言ってサクラは隻眼でじっとクリュウを見詰める。漆黒の瞳はいつもよりも若干細く見える。それは彼女が真剣だという事を表

している。
　仲間二人にいきなり狩りの根本を叩き潰されるような事を言われたクリュウは驚きを隠せずおろおろと困惑する。
「ど、どうしたの二人とも。何か変だよ？　それにシルフィードさんはいい人だし頼りになるよ？」
「それは、私達が頼りないと仰りたいのですか？」
「そ、そんな事ないってッ！　もう、二人ともほんとにどうしたのぉッ!?」
　クリュウが困ったように問うと、二人はツーンとそっぽを向いてしまう。どうやら二人とももものすごく機嫌が悪いらしい。クリュウは頭にハテナマークを無数に浮かべておろおろするばかりだ。と、
「こんな所で何をしている？」
　その声に驚いて振り返ると、そこには巨大な大剣を背負った白銀の髪をポニーテールで纏めた長身の美少女――シルフィードが立っていた。
「し、シルフィードさん」
　刹那、フィーリアとサクラの鋭い視線がシルフィードに集約された。
「どうしたんですか？　こんな所で」
「市場でする事は買い物しかないだろう？」
「あ、そっか。そうですよね」
　自分で言っておかしかったのか、クリュウはあははと笑った。そんな彼を見てシルフィードは呆れながらも小さく笑みを浮かべる。
　またも自分達を置いて二人の世界に入るクリュウとシルフィードに、フィーリアとサクラはムッとする。
「狩りの為の準備をされてたんですか？」
「あぁ、閃光玉が尽きててね。安売りで買い溜めした所だ」
「そうですか。あ、すみません解毒薬ってどこで売ってましたか？あまり毒を持つモンスターと戦った事がないので手持ちがなくて」
「確かそこの角の店が安売りをしていたはずだが。何ならいくつかやろうか？」

「え？　で、でも……」
　渋るクリュウに、シルフィードは「気にするな」と言って解毒薬が数本入った紙袋をクリュウに押し付けた。クリュウは遠慮がちにそれを受け取る。
「あ、ありがとうございます」
「気にするな。一時とはいえ仲間に変わりはない。助け合いは必要だ」
　シルフィードの何気ない言葉に、クリュウは「そ、そうですよね」と言ってうつむいた。
　ちょっと悲しかった。
　確かにシルフィードはあくまで一時的に組んでいるだけ。クリュウとしてはこんな頼れる人が仲間にずっといてくれたら嬉しいのだが、彼女はその気はないらしい。話を聞く限りチームを脱退してからはずっと一匹狼でハンターを続けていたらしい。誰かと組まないのかと訊いたら「私は馴れ合いは苦手だ。今回のように一時的ならともかく常備誰かと行動をするつもりはない」と一蹴された。
　彼女はこの狩りが終わればクリュウ達とは別離する。そう思うと、寂しかった。
「どうした？」
　シルフィードの問いにクリュウは「い、いいえ。何でもありません」と言って笑って誤魔化した。シルフィードはクリュウのそんな態度に不思議そうに首を傾げたが、すぐに何事もなかったような顔になる。
「私の用は済んだ。すぐにでも出発できるが、君達はどうだ？」
「え？　あ、僕らも大丈夫ですよ。必要なものは全部買い込み、今は他に量が少なくなった物の補充でしたから」
「そうか。ならそろそろ行くか。あまり遅くなってはリオレウスが君の村を襲うかもしれないしな」
「……さらっと怖い事言わないでくださいよ」
　そう言いながらクリュウは歩き出したシルフィードにくっ付いて歩き出す。元々かっこいいというよりはかわいいという顔立ちをし

ているクリュウ。子供の頃エレナに無理やり女装をさせられたら絶世の美少女となってしまい、エレナの心に壊滅的なダメージを与えた実績も持っているが、彼にしてみればそれは触れてはほしくはないトラウマだ。

だからこそ、笑顔を振りまくかわいいクリュウとそんな彼に懐かれるシルフィードの姿はまるで飼い主に懐く子犬を思わせるのだ。

だが、シルフィードに笑い掛けるクリュウは気づいていない――フィーリアとサクラの視線に軽い殺気が含まれている事に。

「うぅ、何でシルフィード様ばっかり……」

「……クリュウのバカ」

そんな二人の言葉が聞こえたのか、クリュウが振り向いた。二人はドキリとして慌てて口を塞ぐが時すでに遅し。二人はクリュウに聞かれたのではないかと不安そうに彼を見る。が、

「二人とも早く行こうよ。ほら早く」

そう言ってクリュウは二人に駆け寄るとその両方の手を取る。いきなり手を握られて二人は顔を真っ赤にして狼狽するが、クリュウは気にせず（気づかず）二人の手を引っ張る。

「ほら早く行こうよ！」

優しげな笑顔で手を引くクリュウに、フィーリアとサクラは自然と笑みを浮かべていた。手を伝って伝わって来る彼の温もりが、心地いい。

シルフィードはそんな三人を見て、小さく口元に笑みを浮かべていた。

クリュウ達は今日も賑わうドンドルマの自由市場を後にした。

一度シルフィードと別れたクリュウ達は荷物を持って待ち合わせ場所である酒場に向かった。その数分後にはシルフィードも合流し、いよいよ出発だ。

この酒場から続く裏手にはギルドがハンターに貸し出す船や竜車などが置かれた場所に繋がっていて、事実上ここからドンドルマのハンターは狩りに出掛ける。クリュウも幾度となくここは使っている。

クリュウはギルドが貸し出してくれた竜車に荷物を積み入れる。

その中にはもちろんクリュウが持ち込んだ大タル爆弾Gの姿もあった。
「大タル爆弾Gか。いくつ持って来たんだ？」
「えっと、全部で八個です。他にも大タル爆弾とカクサンデメキンを三人で三個ずつ持ってきましたので、実質十六個になります。本当は大タルと爆薬も持って来ようかと思ったんですが……」
「……いや、大タル爆弾とカクサンデメキンは置いて行ってくれないか？　そんなに使わないし、竜車の半分を爆弾に制圧されるのはあまりいい気はしない」
「そ、そうですか？　わかりました」
　少し残念そうにクリュウは大タル爆弾を降ろすとギルドの人に後始末を任せた。こういう風に土壇場で道具変更をするハンターもいるので、ギルドには余った道具を一時的に預かる設備があり、帰って来たら預けた道具を受け取る事が可能なのだ――まぁ、その道具達の主が戻って来ないという事も少なくはないが。
　大タル爆弾を九個も降ろすと、幌の中はずいぶんとすっきりした。面積だけでなく威圧感もかなり消えた――まぁ、大タル爆弾Gは八個残っているし小タル爆弾や打ち上げタル爆弾なんかも結構ある。これが全部酒樽なら嬉しいのだが、中には火気厳禁の爆薬がたっぷりと詰まっている。その光景はもはや恐怖でしかない。
「改めて見てみるとすごい量だな。てっきり大タル爆弾が三発くらいだと思っていたんだが」
「相手は空の王者リオレウスですからね。念には念を入れてみました」
「いや、入れるにしても少し手加減をしてくれないか？」
　シルフィードは少々呆れながらもクリュウの真っ直ぐな瞳に苦笑しながら自分の荷物を積み込みに掛かる。クリュウと違ってこっちの手荷物は少ないのですぐに終わる。幌の中の隅っこの方に自分の道具を纏めていると、フィーリアも荷物を持って入って来た。ガンナーである彼女は弾が多いので荷物も結構ある。
「手伝おうか？」

「え？　あ、いえ結構です」
　フィーリアはそう言って断ると大量の弾丸が詰まった荷物をシルフィードから少し離れた場所に置き、がさごそと必要な道具を中から取り出す。そんな彼女の背中に、シルフィードはふと問う。
「フィーリア、君に問いたい事がある」
「え？　何でしょうか？」
　フィーリアは手を止めずにシルフィードに背を向けながら耳を傾ける。そんな彼女にシルフィードはふと思った疑問を問い掛ける。
「君はクリュウと付き合っているのか？」
「ひゃぁッ!?」
　驚きのあまりフィーリアは手に持っていた貫通弾ＬＶ２のベルトリンクを落とした。衝撃で外れてしまった弾がバラバラと散ってしまう。慌てて拾い上げる彼女の顔はいつになく真っ赤に染まっている。
「い、いいえッ！　わ、私とクリュウ様はただのチームメイトですッ！」
　言っててすごく胸が苦しくなったが、「付き合ってませんが付き合いたいですッ！」なんて大声で言えるはずもなく、自分の想いはグッと胸の奥にしまい込む。
　そんなフィーリアの返答にシルフィードは「そうか」とだけつぶやいて自分の方にまで転がって来た弾を拾うと、そっと彼女に渡す。
「あ、ありがとうございます――で、でも何で突然そんな事を？」
「いや、気になっただけだ。他意はない」
「そうですか……」
「ではサクラとは付き合って――」
「絶対にありません」
　キッパリと言い放つ。これは確実な事なので何の後ろめたさも胸の苦しみもない。一瞬外からサクラのくしゃみが聞こえたが、無視した。
　一方即答されたシルフィードは多少驚きながらも「そうか」とだけつぶやいて別の方に散っている弾を拾い上げる。

「こういう男女のチームの場合、恋人関係の者がいる場合があってな。そういう場合ヘタに刺激するとチームの統制が崩れる事がある。だから事前に知っておこうと思ったのが、このチームは問題なさそうだな」
　そう言ってシルフィードは拾い集めた弾をフィーリアに渡すと竜車を降りて行った。その後姿を見送りながらフィーリアは外れた弾をベルトリンクに付け直す。
「付き合うだなんて……そんな事……」
　どこか寂しげにフィーリアがそうつぶやいた事、その時の表情がちょっと泣きそうなほど悲しげにゆがんでいた事を知る者は、誰もいない。
　その頃、クリュウはサクラと一緒に道具の最終調整に入っていた。ポーチの中にとりあえず即時使える物を入れておく。クリュウお得意の閃光玉もしっかり持てるだけの数を持っている。他にもペイントボール、砥石、回復薬、回復薬グレート、こんがり肉など、他にもまだまだ入っているポーチはいつになく膨らんでいる。それだけ持ち物が多いという事だ。
「何せ相手はあのリオレウスだからね。何があるかわからないからさ」
　そう言いながらクリュウはさらに紫色の液体が詰まったビンを入れる。シルフィードに分けてもらった解毒薬だ。さらに水色の液体の入ったビンを取り出す。
「……それは？」
「え？　あぁ、これは栄養剤だよ。知ってるでしょ？　一時的だけど体力を底上げしてくれるアイテム」
「……ええ。クリュウ、栄養剤持ってたんだ」
「あはは、高いからあんまり数はないんだけどね。今回は相手が相手だから奮発してるんだ。他にも一つしかないけど秘薬も持ったんだ」
「……それも、買ったの？」
「ううん。これは前にこの一個だけフィーリアに貰ってたんだ。っていうか秘薬は普通市場には流通してないから自分で調合するしかな

いけどね」
　世の中には市場に流通しない道具も多い。そういう場合は自分で調合して作るしかないのだ。回復薬グレートや秘薬などはそのいい例だ。
「……準備は万端？」
　サクラは砥石で愛武器――飛竜刀【紅葉】の切れ味を磨きながら問う。その問いに、クリュウは笑顔でうなずいた。
「僕にできる事は全部やったよ。後は戦闘だけさ」
「……そう」
　サクラはそう短く答えると、極限まで磨かれて日の光を美しく反射させる飛竜刀【紅葉】を背中の鞘に戻す。こちらの準備も完了だ。
「準備は終わったか？　そろそろ出発するぞ」
　ちょうどのタイミングでシルフィードが声を掛けてきた。彼女もすでに準備を完了し、蒼いリオソウルシリーズの背中には巨大な蒼剣――煌剣リオレウスが背負われている。クリュウは一瞬自分の腰に下がっているデスパライズと見比べて苦笑いした。
　大剣と比べると片手剣はおもちゃみたいだ。だが、この武器には飛竜でさえも麻痺させる強力な麻痺毒が仕込まれている――力が全てではない。こういう工夫も狩りでは重要なのだ。
「わかりました。行こうサクラ」
「……ええ」
　サクラは自分の荷物を持って立ち上がるとクリュウと共に竜車に乗り込む。すでに中にはフィーリアが一人で待っていた。
「フィーリア、もう出発するって」
「え？　あ、はい」
「どうしたの？　浮かない顔して」
　クリュウの不安げな言葉にフィーリアは「な、何でもありませんよ」と笑って誤魔化す。クリュウは彼女の不自然さに気づきながらも、あえて何も訊かなかった――なぜか、訊いてはいけないような気がしたのだ。
　シルフィードは三人と違って幌の外、むき出しの運転席に腰を掛け

ると幌の中を覗き込む。中ではすでにクリュウ、フィーリア、サクラが出発準備を終えていた。
「では出発するぞ。いいか？」
「はい。出してください」
「よろしくお願いします」
「……出発進行」
シルフィードは三人の言葉にうなずくと正面を向き手綱を握る。竜車を引くアプトノスはすでに準備万端だ。
「はぁッ」
パシンと軽く手綱で叩き、アプトノスは歩き出した。続いて繋がれた竜車もゴトンという大きな音と軽い衝撃と共に動き出す。
最初はゆっくりだった速度が徐々に加速し、あっという間にギルド専用のドンドルマの裏口から竜車は飛び出した。周りは森になっている。
クリュウは幌の隙間から後ろに小さくなっていくドンドルマを見詰めながらグッと拳を握った。
「いよいよリオレウスと戦うのか……」
今までの相手とは別格の空の王者リオレウス。ついにクリュウも戦う時が来たのだ。
ついこの間までかけだしだった自分が、こんなにも早くリオレウスと戦えるようになったのはフィーリアやサクラのおかげだ。
今までも多くのモンスターと戦って来た。その前には必ず恐怖というものが付き纏っていたが、今回は今までとは比べ物にならない恐怖があった。
上級飛竜であるリオレウスは熟練のハンターであっても命を落とす事が少なくない相手。今まで運良く生き残ってきたが、そんな運など彼の前では無力になるかもしれない。そう思うと、不安になる。何せその先にあるのは死。死ぬかもしれないという闇がある。
いくら村を救う為であっても、死ぬのは嫌だ。
今までも死ぬかもしれないと思った事はある。だが、今回は《かもしれない》じゃ済まない相手。それほどまでに強大な存在なのだ。

不安や恐怖で、胸が押し潰されそうだった。
「クリュウ様」
そんな時に掛けられた優しげな声に振り返ると、すぐ近くにフィーリアがいた。気が付かなかった。
「フィーリア……」
「そんなに緊張されていては勝てるものも勝てなくなってしまいますよ」
そう言ってフィーリアは微笑むと、そっとクリュウの手を両手で包むように握った。驚くクリュウにフィーリアは優しく言葉を伝える。
「大丈夫です。クリュウ様ならきっと、リオレウスを倒せます。私達がついてますから」
その言葉にどれだけ救われただろうか。胸の中にあった黒く重い不安や恐怖がスッと消えた気がした。完全とは言えないが、それでもずいぶんと軽くなる。
クリュウの表情が変わったのを見て、フィーリアは安堵したように微笑んだ。
「良かった、どうやら幾分か解かれたようですね」
「うん。ありがとうフィーリア」
「お礼なんていりませんよ。私とクリュウ様の仲ではありませんか」
そう言ってフィーリアはクリュウの横に腰掛ける。肩と肩が竜車が揺れるたびに触れる、そんな至近距離。フィーリアは彼の膝の上に置かれた彼の手の上にそっと自分の手を重ねた。
彼の温もりを感じ、フィーリア自身幾分か緊張が解れた。いくら歴戦の戦士とはいえ、緊張しない訳ではない。しかも今度の相手はリオレウス。いつになく不安もあったが、彼の温もりがこうして自分を安堵させてくれる。自分の中の黒く、冷たく、重い不安を、彼の温かさがそっと包み込んで溶かしてくれる。本当に不思議な感覚だ。
フィーリアはちょっぴり頬を赤らめながら少しだけ大胆になってクリュウの腕を取るとそっと抱き締めた。
「ふぃ、フィーリア？」
驚くクリュウに小さく微笑みながら、フィーリアは彼の腕を抱き締

め続ける。お互い鎧を着込んでいるので直接は触れられない。でも、温かかった。
フィーリアは幸せそうな表情を浮かべ、クリュウはどこか気恥ずかしそうに視線を逸らす。何とも言えないくすぐったい景色だ。と、
「……ずるい」
そう言ってサクラはクリュウの正面に腰を下ろして正座すると、そのままクリュウに向かって抱き付いた。
「なぁッ!?」
「さ、サクラぁッ!?」
驚く二人を無視し、サクラは自分の両腕を彼の首に絡め、そのちょっと頼りないが温かく優しい胸に体を密着させる。お互いの温もりが、鎧を通して伝わって来る。
「……クリュウ、温かい」
そう言ってサクラはクリュウに抱きついたまま離れない。そんなサクラにクリュウはおろおろし、フィーリアはムッとする。
「さ、サクラ様ッ！　ご自分ばかりずるいですッ！　ここは公平に腕に抱き付くのではないんですかッ!?」
「……関係ない。クリュウは渡さない」
困り果てるクリュウの前で、二人の恋姫がバチバチと火花が散りそうな勢いで睨み合う。そんな三人を幌の外から覗き見たシルフィードは口元に小さく笑みを浮かべた。
「……私も、こういう仲間がほしかったな」
そう誰に言うでもなく悲しげにつぶやいたシルフィードは、フッと小さく笑みを浮かべるとちょっとだけ速度を緩めた。
もう少しだけ、このうらやましい仲間を見ていたかった……

第６５話　王の領域

リフェル森丘の拠点（ベースキャンプ）に到着した一行は竜車を止めるとアプトノスを繋ぎ止め、早速準備に取り掛かった。
フィーリアとシルフィードは搭載されていた荷車を降ろし、クリュウとサクラは大タル爆弾Ｇを外に運び出す。その他にも罠や道具袋（ポーチ）に入り切らなかった道具が入ったかごを積み降ろしていく。
クリュウは降ろされた荷物を荷車の上に載せていく。とりあえず荷物の関係もあって持てる大タル爆弾Ｇは六発が限界だった。たった六個でも荷車の半分近くを占拠してしまうほど大きいのだ。残った部分に小タル爆弾Ｇ、打ち上げタル爆弾Ｇを載せ、さらに罠やその他の道具類を詰め込んでいく。その慣れた手つきを見てシルフィードは感心する。
「見事ね」
「そんな事ありませんよ」
クリュウは謙遜するが、彼の荷車経験値はかなりのもの。無意識に大タル爆弾Ｇなどの重い物を車輪が付いている後ろに集中させ、前には軽い物を置いている。
「しかし、改めて見ると危険極まりないなこれは」
シルフィードは苦笑いしながら言った。確かにこれはもはや荷車というより移動式の火薬庫とも言えるレベルだ。一発でも攻撃を受ければ即爆死という運命がご丁寧に待ってくれている。
「確かにそうかもしれませんけど、ちゃんと護衛すれば大丈夫ですよ」
「そうだな。君達は今までそうした来たのだろう？　なら問題ない」
シルフィードはそう言うと自らの荷物を降ろしに掛かる。竜車の中だったので降ろしていた煌剣リオレウスも背中に装着し、準備万端。
サクラも飛竜刀【紅葉】を背中に下げて準備を完了している。クリュウ自身もすでに腰にはデスパライズが下げられ、左腕には盾も装着済みだ。残るはガンナーであるフィーリアだけ。
「す、すみません。もう少し待ってください」

申し訳なさそうに言いながら、彼女はガンベルトを装着し、太股（ふとももも）にもガンベルトを装着。その他の弾は専用の袋に入れて腰に下げる。最後に通常弾ＬＶ２を装填して準備完了だ。
「お待たせしてすみません」
「問題ない。では全員準備を完了した所で出陣するぞ」
シルフィードの言葉にクリュウ達はうなずくとここに来るまでの道のりで決めていた配置に着く。
荷車を引くのはフィーリア。その前方をシルフィードが先導し、クリュウは右、サクラは左を護衛する。
総員配置が終了した所でいよいよ出発した。吹き抜けの穴を潜って外へ出るとそこはまず最初はアプトノスがいる川沿いの小さな草原。ここにはあまり危険なモンスターは出て来ない。時たまランポスが異常発生するとここまで出て来る事があるくらいだ。
「周りだけでなく上空も見張りを怠るな。奴は空中からの奇襲攻撃を得意としているのだからな。爆弾を満載した荷車に直撃を受けたら全滅だと覚悟しておけ」
シルフィードの言葉にクリュウはうなずくと空を見上げた。空はどこまでも蒼く澄んでいてリオレウスなどはどこにもいなかった。
「……アルコリス地方に似た景色だな」
シルフィードが言ったアルコリス地方とはドンドルマのハンターが俗に《森丘》と呼ぶ狩場である。このリフェル森丘と同じく穏やかな狩場で、主に初心者ハンターが力をつける為に利用する事が多い。ただしその穏やかな自然のおかげで動植物も豊富な為飛竜が住み着く事もあり、熟練ハンターも使用する万能な狩場だ。
リフェル森丘も初心者ハンターが使う頻度が高いのだが、今回は後者。危険な狩場に変貌してしまっている。
アプトノスはクリュウ達の存在に気づくも敵意がないと感じて食事を再開した。そんな彼らの横をクリュウ達四人は通り抜ける。
広場の奥は少し細い道になっていて、緩やかな坂になっている。ここからはこんな緩い坂が続いて山を登っていく事になる。
クリュウ達はいつものように、シルフィードは幾分か警戒しながら

登っていく。
　五分ほどゆっくりと登っていた時、クリュウは荷車を引くフィーリアが幾分か辛そうな顔をしている事に気づいた。いつもよりも爆弾や荷物の量が桁違いに多く荷車はかなり重くなっているのだ。
「フィーリア、大丈夫？」
　クリュウが声を掛けるとフィーリアは慌てて笑みを浮かべて「だ、大丈夫です……」と答えた。だがその声にはやはりどこか元気がない。疲れているのだ。
「無理しないで。荷車は僕が引くから」
「そ、そんなダメですよ。クリュウ様が疲れてしまいます」
「男の僕の方が力はある。これくらい大丈夫だって」
「し、しかしそれでは隊列が崩れてしまいます」
「戦闘をする前に疲労を蓄積して動けなくなってしまうのでは本末転倒だ。クリュウの好意に甘えるべきだ」
　そう言ったのはシルフィード。いきなり横槍を入れられたフィーリアはムッとして反論しようとする。が、
「ここは僕に任せてよ。フィーリアは護衛をお願い」
　笑顔で言うクリュウにフィーリアは顔を赤らめながら渋々といった具合に首肯して荷車を引き渡し、彼の代わりに右を護衛する。荷車を受け取ったクリュウは彼女の時よりも幾分か早く進み始めた。やっぱり基本は男と女。体力の差はあるものだ。
「大丈夫ですか？」
　フィーリアは不安そうにクリュウに声を掛けるが、クリュウは「大丈夫だよ」と笑顔で返して来る。情けない部分ばかり目立つが、クリュウだって男の子。それもハンターである。こういう力仕事だったらフィーリアやサクラよりは得意である――まぁ、自分の身長並みの巨剣を扱うシルフィードと比べたら、ちょっと自信はないが。
　クリュウが大丈夫だとわかると安堵したフィーリアはハートヴァルキリー改を構えてスコープを覗き込み、辺りを見回す。と、
「前方にランポス数匹を確認！」
　フィーリアの言葉に一行は動きを止めた。肉眼で見ると確かに少

し先の広場に青い何かが動き回っていた。それがランポスだろう。数はこの距離からだとはっきりはわからないが、最低でも三匹は視認できた。
護衛しながら突破する事も可能だが、先に討伐してから安全に移動するのも手だ。どうするのか、クリュウはシルフィードを見て彼女の判断を待つ。
「……強行突破は危険だ。それにリオレウス戦を考えると今のうちに少しでも雑魚は狩っておきたい」
「じゃあ、戦うんですね？」
「あぁ。だがあの程度なら私一人で十分だ。君達はここにいてくれ」
「え？　いいんですか？」
クリュウは不安そうに問う。大剣は一撃が重い分連続攻撃には向いていない。さらに機動性も低く、動き回るランポスのような小型モンスターとは相性はあまり良くないのだ。だが、クリュウの不安をよそにシルフィードは「問題ない」とだけ言って駆け出す。フィーリアがとりあえずいつでも掩護射撃できるように貫通弾ＬＶ２を装填して射撃体勢になる。
巨大な剣を背負いながら何事もなく駆けるシルフィード。ランポスとの距離は詰まり正確にその数がわかる。
「……五匹」
前方にいるランポスは奥のも含めて全部で五匹――問題ない。
「ギャアッ！　ギャアッ！」
一番手前にいるランポスが敵襲に気づいて警戒の声を上げる。周りのランポスが振り向き、自分達に迫って来る敵に向かって怒号を発する。そこへシルフィードは突っ込む。
最初に気づかれたランポスに向かって突進しながら、シルフィードは煌剣リオレウスの柄を握る。
「せいやぁッ！」
自らの体の勢いをそのまま剣に込め、背中の剣を引き抜くと振り上げ一気に振り下ろす。俗に抜刀と呼ばれる技。その威力は絶大で、飛び掛ろうとしたランポスは刀身にぶち当たって吹き飛び、地面の上を

二転三転しそのまま動かなくなった。
一撃で仲間を葬られたランポスは警戒しながらも見事な連携を発揮してシルフィードを取り囲む。そして振り下ろした巨剣を持ち直す敵に向かって二匹が一斉に突進する。だが、
「はあッ！」
シルフィードは剣を横向きに変え、横一線に振り回す。その広範囲で絶大な威力を持つ攻撃にランポス二匹は吹き飛ばされ、一匹は崖下に。一匹は岩壁に叩き付けられて絶命した。
たった十数秒で三匹の仲間を葬られた残る二匹のランポスは驚愕し、一瞬動きが止まった。そこへ一度剣を背中に戻したシルフィードが突進。うち一匹に向かって再び抜刀。ランポスは吹き飛び絶命。残った一匹はついに自分ひとりだけになってしまった事に気づき、慌てて逃げ出そうとする。だが、次の瞬間彼は頭を撃ち抜かれて即死した。
シルフィードは一度息をフゥと吐いて煌剣リオレウスを背中に戻す。そこへ後方に待機していたクリュウ達が駆け寄って来る。
「す、すごいですシルフィードさんッ！」
クリュウは興奮気味に叫んだ。その声にシルフィードは口元に小さく笑みを浮かべると、ハートヴァルキリー改を構えているフィーリアを向く。
「見事な腕だ」
「お褒めいただき光栄です」
フィーリアは小さく微笑むとハートヴァルキリー改を背中に戻す。サクラは相変わらずの無表情でジッと隻眼でシルフィードを見ている。
「ランポスは消えた。すぐに出発するぞ」
そう言って歩き出すシルフィードに、クリュウはついて行く。ランポスの亡骸を少し残念そうに見るが、すぐに首を横に振って前を見て歩き出す。
今はランポスの事よりもリオレウスの方を優先すべきだと思ったからだ。

フィーリアとサクラはクリュウの両側を守るように続く。サクラは周りからの敵襲を警戒し、フィーリアも同じく、特にランゴスタの奇襲を警戒していた。
一行はそのまま広場を抜けて再び細い道を進む。片側を崖、反対側を岩壁に面する細道を歩きながら、シルフィードは支給されていた地図を見詰めていた。クリュウ達はすでに頭に入っているので問題ないが、彼女は初めての狩場だ。地形を把握しなければならないのだ。
「この先は意外と広い場所だな。これならリオレウスも現れるか」
「あ、そこは以前イャンクックが出た場所ですけど」
「なるほど。という事はリオレウスも降り立つ可能性があるな。貴重な情報ありがとう」
「い、いえそんな」
照れたように笑みを浮かべるクリュウ。彼の笑みを一瞥だけして再び前を向き直るシルフィード。そんな二人を見ながらムッとする恋姫が二人。
「……クリュウを無視した」
「クリュウ様もクリュウ様です。少しは私達を信頼してくれてもいいですのに」
ふてくされる二人。完全にやきもちを焼いているのだ。シルフィードが現れてから竜車の中でもクリュウは彼女にくっ付きっぱなし。そしていざ狩場に着いてもクリュウは彼女を追い掛けて笑っている。まるで子犬状態だ――そして、そんなクリュウに絡まれるといううらやましい事この上ない状態にありながらもクールなシルフィードが、二人は気に入らないのだ。
今までは二人でクリュウを取り合っていた。だが、今では圧倒的にシルフィードの独占状態。こんな事許されるだろうか――断じて否！
「サクラ様。ここは一時休戦して共同戦線を張りませんか？」
「……共倒れになるくらいなら組む」
その瞬間、二人の瞳が交差し、互いの手を握り合い厚い握手を交わした。

――この世で最もレベルの低い同盟が組まれた瞬間であった。
「うん？　二人ともどうしたの？」
いつの間にか十数メートル後ろで立ち止まって握手し合っている二人にクリュウは声を掛ける。そんなクリュウの声に二人は慌てて離れると走って追い掛けて来る。
「す、すみませんッ！」
「いや、別にいいけどさ。二人で何してたの？」
「ひ、秘密ですよねサクラ様ぁッ!?」
「……（コクコクコクッ！）」
フィーリアは微妙に怪しい笑みを浮かべ、サクラはいつになく早い首肯で返答する。クリュウはそんな二人に疑問を抱きながらもとりあえず今は追求はしなかった。
「何をしている。早く行くぞ」
「あ、はいッ！」
シルフィードの声にクリュウは慌てて返事をすると彼女の下に向かう。そんな彼を見詰めながらムッとする二人。
「共同戦線ですね」
「……共同戦線」
それを合言葉に二人は互いの絆を確かめ合うと、二人を追い掛けて走る。
先頭を無言で歩くシルフィード。そんな彼女を荷車を引きながら追い掛けるクリュウ。そしてクリュウを取り返す為に同盟を結んだフィーリアとサクラ。
それぞれの想いを交錯させながら、一行はリオレウスを目指して緩い坂道を登り続けた。
「せいやぁッ！」
目の前のランポスに向かってシルフィードの見事な抜刀斬りが炸裂した。ランポスはそのたった一撃で沈黙する。
あらかた片付けたシルフィードは小さく息を吐くとランポスの血で汚れて切れ味の落ちた煌剣リオレウスの刃に携帯砥石を当て、擦って切れ味を直す。そんな彼女の周りには十匹ほどのランポスが転

がっている。これらは全て彼女が倒したもの。それも一分も掛からずに。
　切れ味を直した煌剣リオレウスを背中に戻したシルフィードは広場の入り口に待機させていた三人に手で来るように指示する。その指示に三人が歩いて来る。
　フィーリアとサクラはどこか複雑そうな顔をしている。今の戦闘だけでも十分彼女が自分達よりも実力が上だという事が嫌というほどわかったからだ。動きが制限される巨剣を荒々しく振り回しながらも全て冷静な一撃。とてもじゃないが大剣を使っているようには見えない鮮やかなものだった。
　そしてクリュウは自分の背丈と同じくらいの巨剣を振り回し、ランポスを駆逐した彼女の圧倒的な実力に呆然とするしかなかった。
　そんな一行にシルフィードは冷静に指示した。
「ここは見晴らしがいい。奴もきっと降り立つだろう。ヘタに探し回って体力を消耗するよりここで待ち伏せしていた方がいい。各自辺りの警戒を怠らないように」
　そう言って彼女は広場の中央の方に生えている木に手を掛けると跳躍。鮮やかな足取りで枝に足を掛け、窪（くぼ）みに手を引っ掛け、さらに跳躍してあっという間に天辺まで登ってしまった。
「し、シルフィードさんッ!?」
「私はここから見張る。君達は自由にしてて構わない」
　そう言ってシルフィードは腰に下げていた双眼鏡を取り出すとそれを使って空を見回す。
　すっかり取り残されたクリュウはとりあえず荷車を岩陰に置くと近くにある膝くらいの高さの岩に腰を掛けて空を見回す。
　蒼い空には雲が穏やかに流れている以外には何も変わったものはなかった。
　クリュウは今のうちとばかりに携帯食料を取り出すとかじり付く。相変わらず味気ない食べ物だ。本当に腹を膨らませる程度のものなのだろう。
「クリュウ様、空腹でしたら肉を焼きますけど」

ここぞとばかりに得点を稼ごうと肉焼きセットを取り出すフィーリア。
「え？　いや、別にいいよ。わざわざそんな事しなくてもこれで十分――」
「何を言ってるんですか。食事は生きる活力ですよ。おいしいものを食べれば元気が出ます。それにクリュウ様は育ち盛りなんですから、ちゃんと栄養のある物を食べないといけません」
「いや、狩場で栄養バランスなんて考えてたらやってられないと思うけど……」
「ほらほらクリュウ様、私の焼いたお肉好きですよね？　誠心誠意焼かせていただきます！」
腕を引っ張られながらここまで言われてしまうとクリュウもさすがに断れない。苦笑いしながら「じゃあお願い」と頼むと、フィーリアはぱぁっと笑顔を花咲かせ「はいッ！」と元気良く嬉しそうに答えた。
――という事で、レッツクッキングッ！
火薬草をすり潰して天日干しにした乾いた粉と乾いた草でできた燃料に火種を入れて着火。火が勢い良く燃えたかと思うと安定する。そこにすぐ骨付き肉を軸にセットしてクルクルと回し始める。
ハンドルを回すフィーリアは相変わらずご丁寧に肉焼きの歌を口ずさむ。何とも心地良い音色だろうか。危険な狩場も今だけはピクニック気分だ。
意外と火力が強い肉焼きセット。あっという間に焼けてしまい、一瞬でも見逃すとコゲ肉になってしまう。だが、フィーリアは肉焼きに関しては神レベルだ。っていうかマイ肉焼きセット（高級肉焼きセット）を持参しているくらいだ。
香ばしい匂いが辺りに流れ始め、心地良い歌もついに終わり無言の空間が流れる。この時間こそが肉をおいしく仕上げる重要な時なのだ。
スッとフィーリアの瞳が細まった刹那、この時を逃すまいと骨を掴み一気に火元から外す。その動きは見事としか言いようがない。

そして、彼女の手には香ばしい香りを漂わせる絶妙な焼き加減のこんがり肉Gが……
「えへ、ウルトラ上手に焼けました」
恥ずかしそうに決めゼリフを決めると、キラキラした瞳でこんがり肉Gを見詰めるクリュウに笑顔で手渡す。
「どうぞ、召し上がれ」
「いただきますッ！」
クリュウは嬉しそうにそれにかぶり付く。外はパリパリ、中はジューシー。最高の焼き加減だ。おいしくない訳がない。さっきの携帯食料とは比べ物にならない美味だ。
「どうですか？　おいしいですか？」
「すごくおいしいよ！」
その言葉に、フィーリアは嬉しくて失神しそうだった。もうさっきまでの不機嫌さはどこへやら。ニコニコと笑顔が絶えなくなる。
「あ、サクラ様も食べますか？　そろそろお昼ですし」
「……もらう」
サクラの言葉にフィーリアは笑顔で答えると、生肉を取り出して再び火に掛ける。先程と同じ手順で、またも絶妙の焼き加減で焼けたこんがり肉Gが完成。サクラはそれを受け取ると小さくかぶり付く。
フィーリアはさらにもう一本自分用ではないこんがり肉Gを完成させると木の下に駆け寄って上を見上げる。葉に隠れた向こうにシルフィードが見張りをしている。
「シルフィード様！　お昼ごはん食べませんか!?」
そう声を掛けると、彼女はいきなりかなりの高さの枝から跳躍。そのまま地面にスタッとほとんど音もなく着地した。すさまじい身体能力だ。
「私が焼いたこんがり肉Gです。どうぞお食べください」
「ありがとう」
シルフィードはできたてのこんがり肉Gを片手に持つと、再び跳躍。片手だけで枝に掴まって体を振り子のように大きく振って勢い良くさらに上に跳び、再び元の位置に戻ってしまう。

「あ、あの、一緒に食べないんですかぁ？」
「私は遠慮する。見張りをしなければならないからな」
そう言ってシルフィードは一度こんがり肉Ｇにかぶり付くと双眼鏡で空を見詰める。そんな彼女を見てフィーリアは軽く肩をすくませて踵を返す。と、
「いい焼き加減だ」
風に乗って聞こえてきたその声にハッと振り向くが、声の主であろう彼女は双眼鏡で空を見上げ続ける限り。そんな彼女にフィーリアは小さく微笑み、そっとクリュウ達の所へ戻る。
「あれ？　シルフィードさんは？」
「見張りを続けるそうで、今は木の上にいます」
「そっか。こんがり肉Ｇは受け取ってくれたの？」
「はい。いい焼き加減だってほめられました」
そう言って微笑むフィーリア。その表情にはどこかすっきりしたような感じがする。それを見て「そっか」と微笑むクリュウ。そして無言でこんがり肉Ｇを食べ進めるサクラ。
そんな感じで食事の時間はすぐに終わる。三人は残った骨などを穴を掘ってそこに埋めた。無造作に置いておけばモンスターを呼び寄せる原因になるからだ。
後片付けを済ませたフィーリアは自らも岩壁の上に登ってハートヴァルキリー改を構えるとそのスコープで辺りを見回し始める。
二人に見張りを任せたクリュウは荷車に近寄ると小タル爆弾Ｇ二つと落とし穴を取り出してベルトのフックに引っ掛けて腰から吊るし、さらに大タル爆弾Ｇを一個持つ。
「……クリュウ？」
そんな彼の行動にサクラが不思議そうに首を傾げる。彼が一体何をしているのかわからないのだ。クリュウはそんなサクラに気づくと苦笑いする。
「あ、サクラ。悪いけど大タル爆弾Ｇをもう一個持ってくれないかな？」
「……構わない。でもなぜ？」

「この二つは向こうの岩陰に置いておこうかと思って。ほら、ここって細長い広場でしょ？　もう一方に置いておいた方がいいかなぁって思ってさ」
「……なるほど」
　クリュウ達がいる広場は頂上に向かう道が真ん中付近にある結構広い場所だが飛竜が突進するには方向が制限される幅の細長い広場だ。クリュウはより爆弾を有効に使う為にこの二つを反対側の岩陰に隠しておこうと思ったのだ。
「……わかった」
　クリュウの意図を理解したサクラはそう答えると自らも巨大な大タル爆弾Ｇを持ち上げる。相変わらず大きな上にすさまじく重い代物だ。物騒だし。
　クリュウとサクラはそんな重い大タル爆弾Ｇを持ちながら自分達がいた場所とは反対側に到達するとそっと岩陰に大タル爆弾Ｇ二つと小タル爆弾二つを置いた。岩壁の窪みなので、例えモンスターが突進して来ても誤爆はしない――まぁ、さすがにリオレウスのブレスが直撃したら誤爆は確実だろうが。とりあえずは安心だ。
「これで爆弾を使える範囲は大きくなった」
「……その落とし穴は？」
「うん？　あぁ、地面に置いとこうと思って。もちろんまだピンは抜かないけど、とりあえず設置する手間はずいぶん省けるでしょ？」
　いつ現れるかわからないリオレウスに対して罠を先に設置するのは得策ではない。落とし穴ならネットが空気に触れると急速に粘着性を失うからだ。だから完全な設置はしないが、ピンさえ抜けばいつでも設置できるようにしておこうとクリュウは考えたのだ。
　クリュウはとりあえず脛（すね）ほどの高さしかない草むらの中に落とし穴を置いた。位置的にはすぐ近くに爆弾を隠した岩陰がある、絶好の位置だ。
「これで良し。手伝ってくれてありがとう」
「……礼はいらない」
　そう言って背を向けるサクラ。慣れない人には無視したように見

えるが、実際は違う。クリュウはちゃんとわかっていた――それは彼女の照れ隠しの動作だと。事実、サクラの頬はほんのりと赤く染まっていた。

クリュウは小さく微笑むと腰のベルトに引っ掛けてある水筒を取り出し水を飲む。氷結晶入りの水はずっと冷たくて体を冷ましてくれる。

すると、なぜかジッとこちらを見ているサクラの視線に気が付いた。

「サクラも飲む？」

クリュウは何気なく問いながら自分の水筒を彼女に差し出した。

確かにのどは渇いていた。だが、自分の腰にも自分用の水筒がある。わざわざもらう必要はな――

「……」

なぜだろう、いつの間にか勝手に手が伸びて気が付いたら受け取っていた。

サクラは自分の体の無意識の反応に困惑していた。表情にこそ出ていないが内心かなり焦っている。

「二人に落とし穴と爆弾の位置を伝えてくるね」

そう言ってクリュウはサクラが声を掛ける暇もなく走り出すとそのまま反対側に行ってしまった。一人ポツンと残されたサクラはそんなクリュウの背中を見詰めながら小さく、本当に小さく笑みを口元に浮かべると、クイッと水筒を傾けて水を飲んだ。

のどに潤いを取り戻しながら、ふと彼女の冷静な部分がある事実を教えてくれた。

――これは、いわゆる間接キッスというものなのでは……？

「……ッ！」

サクラは顔を真っ赤にすると慌てて飲むのを止めて急いで蓋を閉める。せっかく冷水で体が冷えたのに、今はさっきよりも体が熱い。

そっと唇に指を当て、恥ずかしさのあまりうつむいてしまう。その顔はもう熟れたシモフリトマトのごとく真っ赤に染まり、今にも湯気

が噴き出そうな勢いだ。
うつむくサクラは自分の行為に恥じ、こんな邪（よこしま）な想いを抱いた事に対してクリュウに謝罪し――ちょっぴり心の中でガッツポーズをしてみたりするのであった。
クリュウ達が待ち伏せを始めてから一時間ほどが経った。依然としてリオレウスは現れず、時たまランポスの襲撃があったが、クリュウとサクラで安易に撃退できた。フィーリアとシルフィードは依然として監視を続けている。
クリュウも見張りを手伝おうとしたが、支給されていた双眼鏡は一個だけでそれはシルフィードが持っている。その為、彼の役目は二人が見張っている間に他のモンスターから荷車を守る事だけであった。
いつ現れるかわからない恐怖はあるものの、クリュウは岩陰に座りながら熱心に勉強をしていた。教材はシルフィードから借りたあのノート。これにはリオレウスの動きなどが正確に書かれていた。
例えば、リオレウスは主に空中戦を主体としてよく空に舞い上がる。その為ハンターからは卑怯者と呼ばれたりするらしいが、それは彼らなりの生きる為の戦い方なのだ。
モンスターに誇りとかは基本的にはない。あったとしてもそれはモンスター同士での話。人間のように命を懸けてなどといった考え方は彼らにはないのだ。あるのは生への執着。生き残る為だったらどんなに無様な姿を晒してでも逃げる。
卑怯などではなく、根本的に人間とモンスターでは考え方が違うのだ。
他にもリオレウスはもちろん地上戦も行える。主に遠距離は突進攻撃とブレス。群がる敵に対しては体を回して尻尾で攻撃したりバックステップブレスを使ってくるらしい。空中からは毒爪攻撃かブレス攻撃。ただしこのブレスは単発と三連発があり、三連発の場合は一発一発で照準を修正してくるので、気をつけなければならない。
怒り状態ならほぼ空中ブレスは三連発。地上戦においても行動が全て速くなり、無茶苦茶な攻撃が増える。これはクリュウ自身もイャンクックなどでわかっているが、怒り状態とはある意味リミッター解

除状態。理性うんぬんを無視してただ生きる為に己が能力を完全解放している。だから攻撃で自らが傷ついても生き残る為に必死なのだ。
骨が折れようが傷だらけになろうが、とにかく生き残れればいい。何せ飛竜の回復能力は尋常ではない。それくらいの傷ならすぐに治せる。だからこそ、無茶をしてでも攻撃ができるのだ。
リオレウスは特に怒り状態になるとかなり凶暴化するらしい。ノートにも怒り状態になったら逃げる事を考えた方がいいとまで書いている。
シルフィードのノートは知識の宝庫だ。彼女の今までの経験や蓄えた知識が全て記載されている。
ハンターの中にはこうして記録を作る者がいるらしいが、どうやらこうして記録し、何度も何度も読み直す事によって個々のモンスターの生態を覚え、戦うらしい。
より安全に、より正確に倒す為の手段なのだ――まぁ、実際は言われてもこんな正確なノートは書けないだろうが。
「……クリュウ」
すっかりノートに集中していたクリュウにサクラが声を掛けて来た。
「サクラ？　どうしたの？」
クリュウの問いを無視し、サクラは彼の横に腰掛けた。無言のままの彼女に、クリュウは不思議に思って声を掛けようとする。が、それよりも先に口を開いたのはサクラの方だった。
「……クリュウは、シルフィードを信頼してる？」
突然の質問だったが、内容はさらに驚くには十分なものだった。それは愚問というのではないかとクリュウは思ったが、彼女のいつになく真剣な瞳に正直に答える。
「そりゃあ信頼してるよ。素人の僕の為に大切なノートを貸してくれたり色々とアドバイスしてくれたり。ほんと、あんなリーダーがほしいよ」
「……そう」

クリュウの返事を聞いたサクラは明らかに表情を暗くした。
「さ、サクラ？」
「……じゃあ、クリュウは私達三人で誰を一番信頼する？」
先程よりもさらに真剣な表情で訊いて来るサクラ。その表情には切羽詰ったというような雰囲気まで感じる。黒く澄んだ隻眼は、クリュウを逃がさない。
「ど、どうしたの？　何でそんな事」
「……答えて。クリュウは、誰を一番信頼してる？」
サクラはギュッと、まるですがるようにクリュウの手を握った。必死さ故に迫り、互いの顔の距離はかなり近い。もしここで何らかのアクシデントが起きたら、それはすぐにイベントに直結するような、そんな距離。
目の前に美少女サクラの顔。クリュウは頬を赤くして離れようとするが、サクラはそれを許さない。
「さ、サクラ？」
「……答えて」
サクラはギュッとクリュウの手を握って離さない。答えを聞くまで、何が何でもという気迫さえ見え隠れする。
なぜサクラがこうも必死になるのか、クリュウにはまるで意味がわからなかった。
そもそもクリュウは三人を皆平等に信頼しているつもりだ。誰が一番で誰がビリだなんて、そういう考え方は失礼だと思っている。だからこそサクラの問いには答えられない。
――だが、なぜだろう。サクラに最初に問われた時、なぜか最初に思い浮かんだのはフィーリアだった。彼女の優しげな笑顔が浮かんだのだ。
確かに、もしかしたら内心一番信頼しているのは彼女かもしれない。一番最初に出会い、仲間になってくれた。自分のハンターとしての応用技術を教えてくれたのは、彼女だった。
彼女が自分の背中を守ってくれるから、クリュウは安心して戦えるのだ。

確かにそうかもしれない。でも、だからといってサクラやシルフィードを信頼していない訳ではなく、彼女達にも背中は預けられる。
だから結局みんな平等で、別に誰が一番とか二番とかは……
「……答えて。何で黙るの？」
サクラはさらにクリュウに迫る。だが、彼だってどう答えるべきかわからず必死に考えているのだ。
もはや押し倒すような勢いのサクラに、クリュウはやっとの思いで口を開く。
「ぼ、僕はみんな信頼してる。みんな同じくらい。誰が一番とか、誰が二番とか、そんなのは考えてないよ」
クリュウは正直に答えた。これが彼の本心だったからだ。
サクラはじっと彼の瞳をその隻眼で見詰めていたが、やがて小さくため息すると「……そう」とだけ小さくつぶやき身を引いた。なぜだろうか。その姿はどこか悲しげで、小さく見える。
「サクラ。どうしていきなりそんな事を訊いたの？」
クリュウは今度は自分の疑問をぶつけてみた。なぜいきなりそんな事を訊かれるのか。なぜあんなにも必死そうな顔だったのか――なぜ、そんなに寂しげな顔をしているのか。
サクラはクリュウの問いに対しうつむいたまま何も答えない。
「サクラ？　あ、いや、別に答えたくないなら言わなくてもいいけど」
沈黙を続ける彼女に、クリュウは慌てて話題を変えようと考えを巡らせる。と、そんな彼の手を、サクラがそっと握ってきた。
「……クリュウ、あの」
「さ、サクラ？」
サクラはうつむいたまま、クリュウの手を両手で包み込むようにして握る。クリュウからは見えないが、その頬はほんのりと赤く染まっている。
「……私は、クリュウが一番だから」
クリュウには聞こえないほど、小さな小さな声でサクラはそう言った。

自分はずっと彼が一番だった。子供の頃からずっと、そして今も、これからも……

だから、彼にも自分が一番であってほしかったのだ。だからあの時、彼の口からそう言ってほしかったのだが、それは叶わなかった。

ならば、これから努力して、彼の一番になればいい。そう思った。

「……クリュウ、ずっと一緒」

そう言って、サクラは小さく微笑んだ。それが彼女にとっては最高の笑顔であると、クリュウは子供の頃から知っている。

「え？　あ、うん。これからもずっと一緒だよ。一緒に強くなろうね」

「……そうね」

本当はそういう意味ではないのだが、今回はこれくらいで妥協した。これでも十分サクラにとっては嬉しい言葉だった。

もう少しだけ、彼の近くにいたい。

そう思って、サクラはクリュウにちょっとだけ近寄ろうと腰を浮かせる。

――その時、風の流れが変わったのを感じ、サクラの隻眼がスッと細まった。

「リオレウスだッ！　戦闘用意ッ！」

刹那、怒号のようなシルフィードの声が響くと、彼女はいきなり木の上から飛び降り音もなく着地。すぐさま駆け出した。少し遅れてフィーリアも岩壁の上から飛び降りるとハートヴァルキリー改を構えて走る。

突然の事態に戸惑うクリュウ。そんな彼を照らしていた日の光が一瞬遮られた。驚いて空を見上げる。

どこまでも澄んだ、さっきと何も変わらない蒼い空――だが、そこに何か異質な、巨大な赤い影が見えた。

巨大な翼を持つ、紅蓮の竜。

そこまで見てクリュウは慌てて立ち上がるとバサルヘルムを被り、フィーリア達を追って駆け出した。サクラもそれに続く。

シルフィードはクリュウが設置してあった落とし穴を発見するとするさまピンを抜いて落とし穴を展開させる。そこへフィーリア、ク

リュウ、サクラの三人も合流した。
クリュウは視線の先に暴風を纏いながら舞い降りて来る紅蓮の竜を見て絶句した。
まるで燃えているかのような紅蓮の鱗や甲殻に覆われ、空を制すまで謳われるだけの巨大な翼を羽ばたかせ、全方位に威圧するかのように己が存在感を発する巨大な竜。
クリュウはそれだけで確信した。
――奴は、今までとは桁違いに強い。
紅蓮の飛竜は暴風を纏いながら降りてくる。その下にある草が激しく暴れ回り、中には耐えられなくて千切れ飛ぶものも。
木々が激しく揺れ、小鳥達が一斉に逃げ出す。
全方位に威圧するかのようなその存在感。それだけでクリュウは背中が冷たくなる。
そして、紅蓮の飛竜はその巨体を支える巨大な二本の脚で地面に着地した。その瞬間、ズシン……という鈍い衝撃がずいぶん離れたここまで響いてくる。信じられないような重量感だ。
竜は荒々しい翼を閉じると、その強靭な脚でしっかり地面に立つ。長い首をもたげてキョロキョロと自らの縄張りを侵す者はいないか探す。と、その体色とはまるで違う蒼き瞳がクリュウ達を捉えた。
――刹那、すさまじい殺気の奔流がクリュウ達を襲う。たったそれだけで、理性が危険信号を発し、体が勝手に逃げようとする。クリュウはそれを必死に押し留め、圧倒的な存在感と殺気を撒き散らす紅蓮の飛竜を睨み返す。だがそれは彼の前では、空しい抵抗とも言うべき小ささだった。
紅蓮の飛竜は自らのテリトリーを侵す許せぬ敵を睨み、翼を広げて体を大きく見せて威嚇。そして、沸き起こる激昂を怒号と共に敵に撃ち放つ。
「ギャアアアアアオオオオオオオオオオッ！」
怒号と共に暴風が発生し、クリュウ達にぶち当たる。
クリュウの兜に付けられた赤い羽根が、フィーリアやサクラ、シルフィードの長い髪が暴風に激しく揺れた。

リフェル森丘を舞台にした、クリュウ達と空の王者――火竜リオレウスとの戦いが始まった瞬間であった。

第６６話　最強の飛竜

リオレウスの怒号が、戦いの火蓋を切った。
すでに戦闘態勢に入っているフィーリア、サクラ、シルフィード。彼女達に遅れてクリュウも慌てて戦闘態勢に入る。
「まずは落とし穴に落とすッ！　爆弾用意ッ！」
シルフィードの命令にクリュウとサクラはすぐに岩陰に隠してあった大タル爆弾Ｇをそれぞれ一個ずつ持ち、クリュウはさらに小タル爆弾Ｇも持つ。
「ギャオアアアアアッ！」
何やら動き出した敵に向かって、リオレウスは先制攻撃を掛けようと必殺の突進を開始する。巨体故に歩幅が広く、その速度はクリュウが今まで相手にして来たどの飛竜よりも速い。
迫り来る凶悪な顔と圧倒的な迫力。それだけでクリュウは恐怖して逃げたくなるが、幸か不幸か大タル爆弾Ｇを持っている為そんな激しい動きはできない。
それに、冷静な部分が教えてくれている。
迫るリオレウスの足元には――
「ギャアアアオオオッ!?」
落とし穴が仕掛けてある事をッ！
突進で敵を潰そうを考えていたリオレウスは見事に落とし穴を踏み抜き、下半身を完全に穴の中に埋めた。仕掛けられたネットが纏わり付き、その強大な力で暴れ回るリオレウスを逃がさない。だが、時間が限られている。
クリュウはすぐに上半身だけで暴れ回るリオレウスの近くに大タル爆弾Ｇを設置する。それだけでもクリュウにとっては勇気ある行為であった。以前のクリュウならこんな行為すらできなかっただろう。今までの幾多の経験が、彼を大きく成長させていた。
イャンクックの時のように相手の目を見て動けなくなるなんて事がないように最初から絶対に目を合わせない。
クリュウに続いてサクラも大タル爆弾Ｇを設置した。二つの爆弾

は暴れ回るリオレウスの顔付近に置かれている。すぐさまクリュウは小タル爆弾Ｇを設置してピンを抜くと全速力で走った。すでにフィーリアとシルフィード、サクラも離脱済みだ。
今まで幾度となく使ってきた小タル爆弾Ｇ。その起爆までの時間は完全に把握している。爆発寸前、クリュウは体を投げ出すようにして前に突っ込んだ。刹那――
ドガアアアアアアアアンッ！
すさまじい爆風が身を投げ出したクリュウの体を吹き飛ばし、彼の体は地面に二度三度叩き付けられた。だが、バサルシリーズの防御力はこの程度では問題なく、すぐに立ち上がる。
爆風に髪が乱れるが気にせず、すぐさまフィーリアはペイント弾を装填してリオレウスに向けて撃ち放った。刹那、あの独特の匂いが焦げた臭いを押さえながら辺りに漂う。
黒煙が晴れると、そこにはまるで爆弾など効いていないかのように上半身を大暴れさせて落とし穴から脱出しようとするリオレウスがいた。フィーリアはすかさず今度は貫通弾ＬＶ２を装填して撃ち放つ。弾はリオレウスの体に吸い込まれ、炸裂。血飛沫が散る。
サクラとシルフィードはリオレウスに向かってすぐさま突撃。あれだけの爆発を受けてもまだ落とし穴の中で暴れ回れるリオレウスに突っ込む。
サクラはリオレウスの胴体に向かって抜刀攻撃。そしてそれをすぐに連続斬りに繋げて容赦ない斬撃を叩き込む。
一方シルフィードは安定しないリオレウスの頭の前で急停止しその勢いのまま背中の大剣を引き抜くと、右足を軸に固定し、両腕を一杯まで引き絞り、大剣を背負うようにして構えると、神経を集中し力を溜めていく。
暴れ回るリオレウス。落とし穴の効き目はあとわずか。連続斬りで猛攻撃を行っているサクラが安全の為に距離を取った。刹那、地面にひびが入った。落とし穴が限界に達したのだ。
リオレウスの巨体が戒めを解かれて飛び上がろうとする。だが、飛び上がる直前、シルフィードは溜めに溜めた力を一気に解放。巨大な

大剣を振り上げ、一気に叩き落とす！
「せいやッ！」
全体重に重力、大剣自体の重量、そして限界まで溜めて解放した力を加えたその一撃はリオレウスの頭に炸裂。同時に火属性の煌剣リオレウスから炎が吹き荒れ、ドゴォンッという轟音と共にリオレウスの頭が地面に叩き込まれた。その威力に地面に無数のひびが入る。あまりの猛烈な攻撃力にリオレウスは前のめりに倒れた。飛び立とうとした瞬間に打ち込まれたので、脚が浮いていたからバランスを取れずに倒れたのだ。
シルフィードは横に転がって立ち位置を変えると、起き上がろうとするリオレウスの強靭な翼に向かって再び巨剣を振り下ろす。だがその一撃は奴の強力な翼膜に弾かれ、決定打にはならなかった。
横からはサクラが連続して斬り掛かる。狙うはその巨体を支える筋肉の塊のような脚。体勢を崩すには一番だし、身長の低い人間（ハンター）が一番狙いやすい場所だ。その分相手の懐に入るのでリスクも大きいが。
紅蓮の柱に向かってサクラは剣を連続して全力で振るう。だが、当たるたびにまるで弾かれているような衝撃と共に手が痺れる。それほどまでに奴の鱗は堅いのだ。
「……チッ」
サクラは舌打ちすると一度バックステップして離れた。リオレウスと戦うのは彼女にとっても命懸け。それも最近はクリュウと行動している事が多かったのでブランクもある。ここは慎重に行くべきだ。
一方フィーリアは容赦なく連続して貫通弾ＬＶ２を撃ち続ける。いくら堅牢な鱗であろうが、強力な火薬に撃ち出される小さな銃弾の貫通力には負ける。貫通弾ＬＶ２は確実にリオレウスの体を貫いて行く。
「ゴアアアアアッ！」
リオレウスは最も鬱陶しいフィーリアに対して突進する。フィーリアはそれを冷静に見極めて避けた。この辺の動きは彼女の得意な

リオレイアと同じ動きだ。目標を見失ったリオレウスは止まらぬ自らの巨体にそのまま突進を続け、先程シルフィードが乗っていた木を巻き込みながら倒れて停止した。あれだけの巨木を一撃でへし折るなんて、すさまじい威力だ。

起き上がるのにわずかな隙が生まれるのは基本的に全飛竜に共通する。クリュウはその隙を突いて突撃した。

「せいやぁッ！」

クリュウは全力で奴の脚に向かってデスパライズを叩き込む。刃先に備え付けられた牙がリオレウスの強力な鱗に命中する。刹那、シビレ罠に出るような黄色い電撃が発生した。これが麻痺毒が奴の体内に注ぎ込まれた証拠だ。どうやら麻痺性の毒は空気に触れると発光するらしい。

うまく麻痺毒を注入できたが、一発ではもちろん麻痺になどならない。だが、クリュウはそれ以上の攻撃ができなかった。

リオレウスはクリュウなど無視してこちらに走って来るサクラに向かって突進した。その際、クリュウは突如動き出した奴の脚に蹴られ、悲鳴も上げられずに吹き飛んだ。

「クリュウ様ッ！」

地面の上を二転、三転して止まる。すぐさまクリュウは起き上がったが、体中に鈍い痛みが走った。さらに先程剣を叩き込んだ右腕も軽く痺れている。まるでバサルモスの甲殻に斬り掛かったかのような衝撃。奴の鱗はあまりにも硬く、突破するのはかなり苦しそうだ。

クリュウはすぐさまだ少し痛む体を無視して走り出す。リオレウスはサクラへ突進するも回避されて失敗したらしい。倒れているその背後からシルフィードが近付くと、一度背負い直していた大剣を再び全力で引き抜き振り下ろした。大剣の基本動作は主に動きを阻害する大剣を収納し、攻撃する際に抜刀するというもの。彼女の動きはまさにそれであった。

振り下ろされた煌剣リオレウスはリオレウスの翼に炸裂するが、斬り裂く事はできない。それほどまでに堅いのだ。

そこへすかさずサクラが尻尾に向かって剣を振るった。だが、その

攻撃は全て鱗に阻まれかすり傷程度にしかダメージを与えられない。
「グオオオォォォッ！」
リオレウスは群がる敵を吹き飛ばそうと体を時計回りに回転させ、強靭な尻尾を振り回す。その攻撃にシルフィードは間一髪大剣でガードしたが、ガードのできないサクラは直撃こそ避けたが命中。吹き飛ばされた。
「サクラッ！　このぉッ！」
クリュウは斬り掛かろうとデスパライズを構えながら突進する。だが、リオレウスはこちらに向いた瞬間、顔を右に向けた。次の瞬間、鋭い牙が並んだ口をガパァッと開けてクリュウに向かって噛み付こうと首を振り下ろした。
「うわぁッ!?」
クリュウは慌てて盾を構えた。だが、その威力はすさまじく、クリュウは全力で前進していたのに、大きく後ろに後退してしまった。
ガードには成功したが、手がビリビリと痺れる。一つ一つの攻撃全てが今までとは桁違いなほどに強力であった。
フィーリアはクリュウの突撃が失敗したと見るやすぐさま射撃を再開する。無数に撃ち出される。リオレウスは殺気を振り撒きながらゆっくりと旋回する。
（ブレスッ!?）
その動作にフィーリアは横に跳んだ。遅い旋回の後にはブレス攻撃。歴戦のハンターであるフィーリアはそんな奴らの癖まで見極めていた――だが、それは大きな間違いであった。それはリオレイアの場合だけ、リオレウスはそうとは限らないのだ。
リオレウスは突如翼を広げると地面を蹴って飛び立つ。しかし高くは飛ばず人間の頭ギリギリの高さという低空飛行でフィーリアに突撃して来た。
「きゃあッ!?」
フィーリアは慌てて地面に倒れた。そのすぐ上を巨大なリオレウスが通過した。そして彼女の背後に滑空しながら降下し降り立った。
「だ、大丈夫ッ!?」

クリュウがすぐに声を掛けて来た。
「は、はいッ！」
フィーリアはそう返すとすぐに立ち上がって弾を再装填する。
今回の相手はリオレイアではない。リオレウスだ。先程の遅い旋回はリオレイアの場合は次の動作がブレスであるが、リオレウスの場合はブレスまたは滑空飛行なのだ。フィーリアは改めてリオレウスとリオレイアの違いを感じた。
クリュウは一度シルフィードと合流した。そこには先程尻尾攻撃を受けたサクラも立っていた。
「サクラ、大丈夫？」
「……問題ない」
どうやら大した怪我はしていないらしい。クリュウはほっと胸を撫で下ろす。
リオレウスは再びこちらに向き直ると、クリュウ達三人を睨み付ける。刹那、翼を大きく開き、首を持ち上げた。その動きにシルフィードとサクラの瞳が大きく見開かれる。
サクラは右へ、シルフィードはクリュウの腕を掴んで左へ跳んだ。刹那、首を振り下ろしたリオレウスの口が爆発。巨大な炎の塊が撃ち出された。炎の軌跡を残しながらその一撃は信じられない距離まで飛び、やがて霧散した。
リオレウス必殺のブレス攻撃だ。燃焼性の液体を吐きかけるイャンクックや燃える溶岩を吐き出すバサルモスと違って、リオレウスのブレスはまさに炎の塊。燃え盛る炎がそのまま撃ち出される。だからこそ質量などはなく、撃ち出した威力のまま遠くまで届くのだ。
クリュウは目の前を通り過ぎた巨大な炎撃に絶句した。もしシルフィードが引っ張ってくれなきゃ、今頃直撃して爆死していた。そう理解すると、背中に冷たいものが流れる。
「怪我はないか？」
シルフィードはクリュウを見ずにリオレウスを睨んだまま問う。そんな彼女の問いに、クリュウは「は、はい」とちょっと声を震わせながら答えた。

「あ、ありがとうございます」
「気をつけろ。奴のブレスを受ければ、上級ハンターであっても即死の可能性がある。必ず避けろ。首を持ち上げたら横へ跳べ」
「は、はいッ！」
　刹那、シルフィードは走り出した。サクラもほぼ同時に走り出す。クリュウも負けじと遅れながらも突撃した。フィーリアはそんな三人を掩護するように貫通弾ＬＶ２を撃ちまくる。
　リオレウスは無数の銃弾を浴びながらも無視し、迫る敵に向かってブレスを放った。再び炎の塊が吐き出され、サクラを襲う。サクラは突撃を諦め横へ跳んでそれを避けた。
　残ったシルフィードとクリュウはその間に一気にリオレウスとの距離を詰める。一番最初にシルフィードが到達。すぐさま抜刀攻撃を首に向かって振り下ろす。爆発と同時に炸裂したその強大な一撃にリオレウスは「グゥオ……ッ！」とうめき声を上げて動きを止め、首をブルブルと振るわせる。そこへクリュウが到着し、遅れながらもその脚に向かって剣を振り下ろした。初撃は見事に命中して麻痺毒が迸る。しかし二撃目は命中するも麻痺毒は出なかった。必ず出る訳ではなく、状態異常属性の攻撃はこうした不発も多いのだ。
「このぉッ！」
　三撃目はなんとか麻痺毒が炸裂した。そして続く四撃目を振り上げる。が、突如すさまじい暴風に襲われ一瞬視界が途絶えた。
「うわっぷッ！」
　倒れそうになる体をなんとか堪えて再び目を開けると、そこにリオレウスはいなかった。
「え？　ど、どこッ!?」
「上ですッ！」
　フィーリアが空に向かって貫通弾ＬＶ２を撃ちながら叫んだ。その射線の先を目で追うと、巨大な翼を羽ばたかせて大空を空中停止（ホバリング）しているリオレウスがいた。あまりの勇ましい姿に一瞬目を奪われる。すると、リオレウスはいきなりブレスを放った。その向かう先にはシルフィード。

「くッ！」
シルフィードは横に跳んでそれを避けた。一瞬前まで彼女がいた場所にブレスが着弾。刹那、大タル爆弾Ｇに匹敵するような爆発が起きて地面をえぐり、土の塊が吹き飛んだ。辺りに舞い上がった土がパラパラと舞い落ちる。
一方、サクラはリオレウスが飛んでいる間に荷車に駆け寄って打ち上げタル爆弾Ｇ三つを掴むと奴の真下でピンを抜いて走る。計三発の打ち上げタル爆弾Ｇが打ち上がり、リオレウスの脚や胴体で炸裂した。しかしそれだけでは決定的なダメージを負わす事はできず、リオレウスは何事もなかったように悠々と舞い降りた。
クリュウはすかさず脚に向かってデスパライズを叩き込む。一撃目は不発。二撃目と三撃目は成功して麻痺毒が迸った。
フィーリアは残弾が少なくなった貫通弾ＬＶ２から通常弾ＬＶ３に切り替え、すぐさま連続して撃ち放つ。だが、リオレウスはそんな彼女に向かってブレスを放った。フィーリアは横に転がるようにして回避。背後の岩壁が爆発して吹き飛び、爆風が彼女の金色の髪を激しく靡かせる。
サクラは一度リオレウスの側面に回って近づくと一気に斬り掛かる。炎の連撃がリオレウスの鱗や甲殻に叩き込まれるが、耐火力に優れている火竜の鱗や甲殻はその程度の火力ではびくともしない。
「はあああぁぁぁッ！」
頼もしい掛け声と共に走って来たのはシルフィード。その細腕からは到底思えないような力で巨大な剣を振り上げ、その重量をも加えて一気に振り下ろす。その刃先はリオレウスの尻尾に炸裂。サクラの飛竜刀【紅葉】ではかすり傷しか付かなかったが、その強力な一撃は鱗を吹き飛ばし、血が飛び散った。
「グオオオォォォッ!?」
仰け反るリオレウスの脚にクリュウが連続して斬り掛かる。麻痺毒が迸り、蓄積したダメージでようやく一部の鱗が吹き飛び、血が噴き出した。
「よしッ！」

クリュウは思わず心の中でガッツポーズをした。
リオレウスに襲い掛かる三人を援護するようにフィーリアが連続して通常弾ＬＶ３を波状攻撃する。リオレウスはうなり声を上げるとフィーリアに向かって突進した。サクラとフィーリアは回避し、クリュウとシルフィードはガードした。だが、シルフィードは踏ん張れたが小柄な体格な上に小さな盾しか持たないクリュウは勢いを受け止めきれずに後ろに吹き飛ばされた。
「……クリュウッ！」
「だ、大丈夫ッ！」
クリュウは駆け寄って来ようとするサクラにそう言って制止する。その間にフィーリアは空薬莢を排出して再装填する。
「目を閉じろッ！」
シルフィードの声に三人は一斉に目を閉じた。刹那、シルフィードが投擲した閃光玉が炸裂。リオレウスは悲鳴を上げて視界を奪われた。
「今だッ！」
クリュウは急いでリオレウスの頭に向かって斬り掛かる。麻痺毒と血を迸らせながら、クリュウはデスパライズを振るう。だが、サクラとシルフィードが到着寸前、リオレウスは頭を執拗に攻撃して来る見えない敵に向かって噛み付いてきた。鋭い牙が捉えたのはクリュウのバサルメイルの左側の巨大な肩当て。リオレウスはそれに噛み付くと、なんと堅牢な肩当てを噛み砕いてしまった。クリュウは悲鳴を上げて慌てて後退する。
「クリュウ様ッ！　お、お怪我はッ！」
フィーリアが悲鳴のような声で問うと、クリュウは「だ、大丈夫だからッ！」と焦った声で無事を叫んだ。だが、砕けた肩当てを見てクリュウはぞっとする。あれだけ必死になってもなかなか刃が通らなかったバサルモスの甲殻を使った鎧を、たった一撃で砕くなんて。常識外れの攻撃力にもほどがある。
クリュウが後退したのと同時にシルフィードがリオレウスの眼前に立つと煌剣リオレウスを構え、力を溜める。狙いを定め、限界まで

溜めた力を一気に解放。
「せいやぁッ！」
気合裂帛（きあいれっぱく）。放たれた強力なその一撃は見事にリオレウスの頭に炸裂した。その破壊力はすさまじく、リオレウスの頭を守る堅牢な鱗が吹き飛び、砕け、破壊された。
「グオオオオオオオオッ!?」
悲鳴を上げて仰け反るリオレウス。サクラはそんなリオレウスの翼に向かって剣を振り下ろした。翼膜の一部が裂け、血が迸る。その瞬間、サクラの体を沸き起こる力が包み込んだ。練気が溜まった証拠だ。
攻撃力、そして切れ味が上昇した状態を維持しながら、サクラは連続して剣を振るう。
一方クリュウは一度剣を腰に戻すと荷車に向かって走った。そして荷車からシビレ罠を取り出すと、すぐさま設置する。その間にリオレウスは閃光玉から脱したが、サクラ、フィーリア、シルフィードの猛攻撃を受けて動けない。
クリュウが設置を終えたのを確認し、シルフィードは剣を背中に戻して大きく後ろにジャンプして後退。それを合図にサクラも後退する。
刹那、リオレウスは大きく翼を羽ばたかせて暴風を地面に叩きつけながら飛び立った。そしてちっぽけな敵を見下すような高さを維持し、何やら小細工をしていた敵に向かってブレスを放った。その目標はクリュウだ。
「うわぁッ！」
クリュウは慌てて横へ体を投げ出すようにして跳んだ。刹那、一瞬前まで彼がいた場所が爆ぜた。急いで立ち上がるとクリュウはシビレ罠の無事を確認する。幸い無傷だったようだ。
リオレウスは悠々と降りて来る。だが、シルフィードはそれを待たずに道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出し、ピンを抜いて投擲。クリュウ達は彼女の行動に慌てずに目を閉じた。刹那、目を閉じていても感じるすさまじい光の後、リオレウスの悲鳴と共に轟音が轟き、大

地が揺れた。目を開けると、そこには無理やり落とされたリオレウスが転倒しながらもがいていた。
「す、すごい……」
感心するクリュウだったが、突撃するシルフィードを見て慌てて自分も突進した。
シルフィードは再び奴の眼前で溜め攻撃を放とうと腰を落として限界まで構えた剣に力を込める。その間にクリュウはリオレウスの懐に潜り込むと、連続してデスパライズを振るう。
シルフィード渾身の一撃が再びリオレウスの頭に炸裂。奴の悲鳴が響く。
サクラはクリュウに命中しないように翼に向かって剣を振るう。一撃一撃は大した事ないが、確実にダメージは蓄積している。
フィーリアはリオレウスの周りに集まって攻撃するクリュウ達に命中しないように通常弾ＬＶ３をリオレウスの背中に集中砲火する。
「ギャアアアアオオオオオオオオオッ！」
閃光玉の効き目が切れたリオレウスは翼を広げ、首を持ち上げて大地を振るわせるような怒号を放つ。次の瞬間、リオレウスはその場で回転。巨大な尻尾を大きく横に振るった。その突然の攻撃に、クリュウは避け切れずに盾を構える。が、すさまじい威力に彼の体はまるでボールのように簡単に吹き飛ばされ、地面の上をゴロゴロと無様に転がった。
「……クリュウッ！　よくもぉッ！」
サクラの隻眼に怒りの炎が燃え上がる。刹那、体を纏っていた力を一気に解放。連続して大振りながらも速く鋭い剣撃――気刃斬りを放った。火属性の飛竜刀【紅葉】が炸裂するたびに小規模な爆発が発生する。そして、
「……チェストオオオオオオオオオオッ！」
渾身の振り下ろしの一撃がリオレウスの堅牢な体に炸裂した。今までのモンスターはこのすさまじい攻撃の嵐には耐えられなかった――だが、相手はあの空の王者リオレウス。その耐久性も桁外れであった。

サクラ渾身の一撃を受けても、リオレウスは微動だしなかった。
「……チッ」
サクラは苦々しく舌打ちすると一度後退した。反対側ではシルフィードが抜刀を炸裂させたが、こちらもリオレウスを動かす事はできない。
フィーリアは自分のすぐ横にまで転がって来たクリュウに驚きながらも、冷静に回復弾ＬＶ２を彼に撃ち込んだ。
「だ、大丈夫ですか!?」
「う、うん。何とか……」
クリュウは苦笑いしながら少しフラつきながら立ち上がった。ダメージの為ではなく地面に叩き付けられた衝撃でちょっと平衡感覚が狂っているのだ。だがすぐに安定する。
クリュウはすぐにリオレウスに向かって再び突っ込む。走っている最中、背後から衝撃を受けた。おそらくフィーリアの硬化弾だろう。背後の彼女に感謝しながらクリュウは再びリオレウスに接近する。
リオレウスは纏わり付く敵に体を回転させて尻尾を振り回して殲滅しようとする。しかしその時計回りの攻撃を見切っているサクラはその尻尾の速度に合わせて自らの体を転がすようにして回避。シルフィードも一度距離を取ってその攻撃を回避し、剣を背中に戻して再突撃する。
クリュウはその直後に到達し、無防備なその懐に潜り込むと巨大な脚にデスパライズを叩き込む。踏み潰されるかもしれないという恐怖と戦いながら、クリュウはデスパライズを振るう。
そして、そろそろ後退しようと最後の一撃とばかりに全力を込めて剣を叩き込んだ。
「ギャアアアッ!?　グギャアアアアアアッ！」
その瞬間、突如リオレウスの体が強張って痙攣して動かなくなった。
「すごいですクリュウ様ッ！」
フィーリアの声に、何事かと一瞬戸惑っていたクリュウは理解した

――デスパライズの蓄積された麻痺毒がついに発動し、リオレウスが麻痺状態になったのだ。
「やったぁッ！」
クリュウは喜びながらも再び巨大な脚に向かって連続して剣を振るう。麻痺状態ならば防御を気にする事はない。今はひたすら剣を振るい続けるのみ。クリュウは力の限り剣を連続して叩き込む。
サクラは先程から自分達を襲う厄介な尻尾に向かって気刃斬りを発動して連続的な強烈な一撃の数々を叩き込んだ。刃先がリオレウスの強靭な鱗を粉砕し、爆発と同時に血と肉を吹き飛ばす。
シルフィードは再び無防備な頭に向かって最大まで溜め込んだ溜め斬りを叩き込んだ。すさまじい重量と速度のついたその一撃はリオレウスの頭蓋骨を変形させるようなすさまじい威力。声すらまともに出せないリオレウスが小さな呻（うめ）くような悲鳴を上げる。
フィーリアはここぞとばかりに取っておきの大技を使う。腰のガンベルトから通常弾ＬＶ２三発が込められたベルトリンクを取り出し、弾倉に直結させる。そして狙いを定めて引き金を引いた。その瞬間、内蔵されたモーターが動き出し、リボルバーが回転。銃口から連続して銃弾が放たれた。
ドンドンドンッと吐き出された三発は寸分違わずリオレウスに命中する。同時に空になったベルトリンクを吐き出し、すぐさま次のベルトを装填する。
ライトボウガンの中にはある特定の弾を連続射撃できるものがある。《速射》と呼ばれる能力で、ハートヴァルキリー改は通常弾ＬＶ２の速射が可能なのだ。
フィーリアは速射を利用して今まで以上の連発で撃ちまくる。繰り出される数々の銃弾はクリュウ達に当たらないように全てリオレウスの背中や翼に炸裂する。無数の銃弾のうちの一発がリオレウスの右翼の爪を砕いた。
容赦のない一方的な攻撃の数々。だが、リオレウスだって負けてはいない。麻痺が発生したと同時に体内の防衛機能が麻痺毒を中和させる抗体を作り出し、毒を無力化させていく。そして、

「ギャアアアアッ！」
怒号と共にリオレウスの体に自由が戻った。クリュウ達はすぐさま後退して距離を取る。
プライドが高いリオレウスは自分よりもはるかに劣る敵に対して怒り狂う。威嚇とばかりに翼を広げ、全力で咆哮した。
「グギャアアアアアアオオオオオオオオオオッ！」
すさまじい怒号（バインドボイス）にクリュウは思わず耳を塞いで動きを止めてしまった。ダメだとわかっているのに、体が言う事を聞かない。遠くでサクラも同じく耳を塞いでいるのが見えた。刹那、リオレウスは動けなくなっている敵――クリュウに向かってブレスを放った。
「あ……」
迫り来る火球にクリュウがなす術もなく立ち尽くしてしまう。だが、そんな彼に突如横から何かが激突し押し倒された。すぐさまフィーリアが閃光玉を放ってリオレウスの動きを止める。
一方押し倒されたクリュウは思わず閉じてしまった瞳を開ける。するとそこには自分に覆いかぶさる様にして倒れるシルフィードがいた。
「し、シルフィードさんッ!?」
「どうやら間一髪だったようだな。大丈夫か？」
シルフィードはスッと起き上がるとクリュウにそっと手を伸ばした。クリュウは呆然としながらも彼女の手を掴み、立ち上がった。
「ど、どうして……」
「私のスキルは耳栓だ。リオレウス程度のバインドボイスは私には通じない」
「そ、そうでしたね……すみません」
この《すみません》には彼女のスキルを忘れていた事と彼女に余計な負担を掛けさせてしまった事に対するものだ。少し落ち込むクリュウに、シルフィードは気にした様子もなく煌剣リオレウスの柄を握って彼に背を向ける。
「……先程のリオレウスを麻痺させた事だが――良くやったぞ」

「――え？」
シルフィードはそれ以上は何も語らず、サクラとフィーリアが攻撃するリオレウスに向かって走って行ってしまった。残されたクリュウは呆然とするが、すぐに笑みが浮かぶ。
「は、はいッ！」
シルフィードにほめられ、クリュウは再び気合を入れ直すと遅れて突進した。
暴れるリオレウスの尻尾に向かってサクラは連続して気刃斬りと通常の攻撃を組み合わせて練気を保ったまま斬撃の嵐を炸裂させる。リオレウスは目が見えない状況で襲い掛かる攻撃に尻尾を激しく動き回して敵を排除しようとする。しかしサクラは何度もリオレウスを倒している経験者。それら全てを最低限の動きだけで紙一重で回避しながら剣を叩き込む。
遅れてシルフィードが到着し、剣を構えて力を溜める。そして、暴れ回るリオレウスの頭に向かって渾身の一撃を叩き込んだ。
「せいやぁッ！」
「グオオオオオッ!?」
悲鳴を上げてたたらを踏むリオレウスの懐にクリュウが突っ込む。狙うはずっと集中攻撃していた脚。何度も何度も攻撃していた部分は鱗が剥がれ、赤黒い肉が露呈（ろてい）している。そこに向かってクリュウは全力の一撃を叩き込む。
「うりゃぁッ！」
血飛沫が舞い、さらに傷が大きく深くなる。クリュウはその傷を連続して何度も何度も斬りつける。その一撃一撃が例え微弱であっても、確実にダメージは蓄積している。同時に爆ぜる麻痺毒もまた、再び奴の体内に蓄積されている。一度効果が発動すると体内に作られた抗体のせいで二回目はより毒を与えないと発動しない。クリュウはただひたすら剣を振るった。
フィーリアも通常弾ＬＶ２を速射で次々に撃ち出し、リオレウスの背中や翼へ集中砲火する。いつの間にか左翼の爪まで折れている。翼にも細かな無数の傷が生まれ、血がにじみ出ていた。

「グギャアアアオオオオオッ！」
閃光玉の効き目が切れたリオレウスは己が体に纏わり付く敵に激怒し、口から黒い煙と火の粉を噴き出した。
「怒り状態だッ！　気をつけろッ！」
シルフィードの声の刹那、リオレウスは翼を大きく羽ばたかせたかと思うと、首を持ち上げる。その動きに正面に立つシルフィードはバックステップで距離を取りながら煌剣リオレウスを縦に構えた。
「グワアアオオッ！」
怒号と共にリオレウスはブレスを撃ち出した。移動していたシルフィードは直撃こそしなかったがその爆風を大剣で受け止める。足で踏ん張りながらも、その威力に体が後退してしまった。
シルフィードにブレスを放ったリオレウスはブレスの反動で浮き上がるとそのまま浮きながら後退し、一度クリュウ達から距離を取った。地面に降り立つと、すぐさまブレスを放つ。三人は一斉に横へ飛んでそれを回避した。
通り過ぎていく巨大な火炎の塊。その大きさや熱量、炎の激しさが先程までとは素人にだってわかるほど大きくなっていた。理性を失った怒り状態での攻撃は凶悪化し、威力は桁違いに上昇するのだ。
怒り状態になった飛竜――それもリオレウスを相手にまともに戦うのは危険すぎる。しかもこちらにはリオレウス初戦というクリュウもいる。
シルフィードは再びブレスを放とうとするリオレウスを凝視しながら道具袋（ポーチ）に手を突っ込み閃光玉を取り出すと、奴がブレスを撃ち出す前に投擲。ブレス発射直前で閃光玉が炸裂し、リオレウスはブレスを不発。そのまま悶える。すかさずクリュウが突撃する。が、
「撤退だッ！」
「えぇッ!?」
シルフィードの声にクリュウは急停止して驚く。振り返ると、すでに彼女は荷車を掴んで走り出していた。その後をフィーリアも「急いでくださいッ！」と続く。

「え？　ええッ!?」
「……怒り状態は危険。ここは撤退すべき」
クリュウの肩を軽く叩いてそう言った後、サクラも二人を追い掛けて走り出す。そんな彼女にクリュウも慌ててついて行く。
背後からリオレウスの怒号が響き渡り、背筋を凍りつかせながら必死に三人を追い掛けるクリュウ。
リオレウスとの初戦は、一時撤退という形に終わった。

第67話　誇るべきもの

クリュウ達が逃げ込んだのは森林地帯。天井を覆う木々の葉によって光が遮られて薄暗いエリア。湿気もある程度あり、通常は絶好のキノコスポットだ。上空から下が見えづらいという利点もあるが、同時にこちらからも上空は見づらいという難点もある。

辺りにはランポスもブルファンゴもいない。いるとすればモスぐらいだ。辺りを一応索敵してリオレウスの追撃やランポスの襲撃がないとわかると、一行は一時休憩に入った。

クリュウは安堵からか体の力が抜け、その場に座り込んでしまった。バサルヘルムを脱ぐと、顔や首、若葉のようにきれいな髪などが汗でびっしょりと濡れていた。別段今日は汗を掻くほど暑くはない。この汗は死闘を続けた緊張感から噴き出したものだ。

「クリュウ様、大丈夫ですか？」

フィーリアはそんな彼を心配しながらタオルを取り出すとその汗を拭う。

「大丈夫だよ。あ、自分でやるから」

クリュウはフィーリアからタオルを受け取ると汗を拭う。大丈夫だとは言ったがまだ心臓はバクバクだし、息も荒い。いつまたリオレウスの攻撃があるかわからないという不安に、クリュウはキョロキョロと辺りを見回す。

「大丈夫だ。ここは段差が多い上に狭い。奴の大きな巨体ではここでは満足に動けないだろうから現れん」

そんな彼の不安を拭い取ったのはシルフィードだ。風に揺れる彼女の銀色の髪がわずかな日光を反射してキラキラと輝いているその後姿はどこか幻想的だ。

「あ、あのッ！」

「何だ？」

クリュウの声に振り返ったシルフィードに、クリュウは改めて先ほどのお礼を言う。

「先程は危ない所を助けてもらい、ありがとうございました」

頭を下げてお礼を言うクリュウ。そんな彼をシルフィードはしばし見詰めた後、スッと背を向けると砥石を使って煌剣リオレウスの刃を整える。
「そんな事でいちいち礼など言うな」
「あ、はい……」
お礼を言ったのに冷たく返されたクリュウは途端にしゅんとなってしまう。そんな彼を見てムッとするフィーリアとサクラ。
クリュウは落ち込んだままデスパライズの刃を砥石で整える。さすがリオレウスの鱗とだけあってかなり刃こぼれしていた。
「――肩、大丈夫か？」
そんな声に「え？」と驚いて顔を上げると、すでに刃を整え終えたシルフィードがこちらを向いていた。その碧眼が見詰めるのは――リオレウスに噛み砕かれた左肩の装甲。
「あ、はい。一応大破していますが、動く分には問題ないと思います。怪我もしてませんし」
「そうか」
クリュウの返答にうなずいた後、シルフィードは「辺りを散策して来る」と言って一人で行ってしまった。小さくなっていく彼女の背中を見て、クリュウはちょっぴり嬉しそうに微笑んだ。
「心配、してくれてたんだ……」
ちょっと嬉しいクリュウ。その笑顔は本当に無邪気な子供のようだ――そんな彼を笑みを見て、警戒心全開なフィーリアとサクラ。
「で、でも本当に大丈夫ですか？　無理していませんか？」
「大丈夫だよ。実際体までは被害がないし。十分動けるって」
「……ほんと？」
不安そうに見詰める二人に、クリュウは苦笑いする。
「もう二人は心配性だな。それよりサクラは怪我大丈夫？」
先程の戦闘で、かなりリオレウスの攻撃を受けていたサクラ。怪我の心配をするなら彼女の方が心配だ。
「……問題ない」
「で、でもさ……」

「……平気。気にしな――」
そこまで言って、サクラは突如黙ってうつむいてしまった。そんな彼女の態度にクリュウが不思議そうに首を傾げると、
「……大丈夫じゃない」
「え？　そ、そうなのッ!?　怪我してるのッ!?」
クリュウは慌てて道具袋（ポーチ）の中から包帯やら薬草やらを取り出す。フィーリアも水筒とタオルを取り出して消毒の準備に入る。と、
「……クリュウ、看護して」
ピト……
「ふぇぇッ!?」
「な、何してるですかぁッ!?」
サクラは突如クリュウに寄り掛かるとそのまま腕を彼の首に回してしな垂れ、顔を彼の胸に埋めた。そんな彼女の大胆行動にクリュウは顔を真っ赤にして慌てるばかり。
「さ、サクラぁッ？」
「……少し、こうさせて」
「あうぅ、気分が優れないなら……仕方ないけど……」
怪我をしている彼女に無理はさせられない。クリュウは恥ずかしい気持ちに耐えながらも、彼女の行為を許した。が、
「サクラ様ッ！　即刻クリュウ様から離れてくださいッ！」
フィーリアが顔を真っ赤にしながら怒る。いつもは柔らかく丸っこい瞳も、今は幾分か鋭くかなり怒っているように見える。
「ふぃ、フィーリア？　どうしたの？」
突然怒り出したフィーリアにクリュウは戸惑う。そんな彼に抱き付くサクラは気にした様子もなく彼の胸に頬擦りする。その行為が、フィーリアをさらに激怒させる。
「どう見ても怪我などされてないじゃないですかッ！　うそつかないでくださいッ！」
「え？　サクラ、怪我してる訳じゃないの？」
「……怪我はしてない。でも、すごく疲れた」

そう言ってサクラはスッと隻眼を閉じる。
確かに攻撃力もあり機動力もあるので必然的にチームの主力となってしまう太刀。そんな太刀を使う彼女は、先程の戦闘もかなり動き回ってリオレウスと肉薄していた。体力の消耗が最も激しいのは彼女だろう。
「疲れたのなら仕方ない。少し休ませてあげようよ」
「そ、そんなぁッ！」
愕然とするフィーリア。そんな彼女は小さく微笑むクリュウの腕の中のサクラが勝ち誇った笑みを浮かべたのを見逃さなかった。
「……フッ」
「何ですかッ！　その人を小バカにしたような笑い方はッ！」
悔しそうに怒るフィーリアだが、サクラはそんな彼女を無視してクリュウに抱き付く。完全に場の主導権を握っているのはサクラの方だ。
圧倒的に不利な立場にいるフィーリア。鈍感なクリュウはそんな彼女を見て相変わらず首を傾げている。
「と、とにかく休むのなら横になるのが一番ですッ！　そんな不安定な場所で休めば余計疲れてしまいますッ！」
「……ここが一番落ち着く」
サクラは涼しくフィーリアの文句を退けてよりクリュウに密着する。元々あまり感情を表には出さないサクラが小さいながらも幸せそうな笑みを浮かべているその姿は、それだけ彼女がこのひと時を幸せに感じているという証拠だ。
だが、このようなサクラの独占状態を許していいのか――断じて否ッ！
「クリュウ様、私も気分が優れないのですが……」
額に手を当てて体をフラつかせる。演技丸出しなフィーリアの行動にサクラはピクリと眉を動かす。だが、結構天然なクリュウはこんな簡単な演技も見抜けなかった。
「だ、大丈夫フィーリア？」
本気で心配してくれるクリュウに多少の罪悪感を感じながらも、

フィーリアは「うぅ、ダメですぅ」と弱々しく言ってその場に座り込む。慌てるのはもちろんクリュウ。
「横になった方がいいよ。見張りなら僕がしておくからさ」
「ありがとうございます……」
フィーリアはにっこりと微笑むが、サクラを見ると途端に表情を険しくする。そんな彼女を見るサクラは一言。
「……三文芝居」
「放っといてください！」
小声で言い合う二人に、クリュウは「どうしたの？」と不思議そうに問う。フィーリアは「何でもないですよ」とにっこりと微笑んだ後、サクラに対抗する為に恥ずかしさを堪え、顔を真っ赤にしながらサクラとは反対方向からクリュウに抱き付いた。
「……ッ!?」
「ふぃ、フィーリア……ッ!?」
「私もここが一番落ち着きます。だから、しばしこうさせてください」
そう言ってフィーリアも負けじとクリュウにしがみ付く。戸惑うクリュウからは見えない位置で、二人の恋姫の壮絶な睨み合いが開始された。
「……邪魔」
「それはこちらのセリフです」
「……離れて。クリュウは私だけのもの」
「それは横暴って言うんですよ。クリュウ様は誰のものでもありません。私はただこうしてクリュウ様のお傍にいられればいいんです」
「……離れろ。これは最後通牒」
「そっちこそ離れてください。返答次第では宣戦布告とみなします」
クリュウには気づかれないような小声で互いを牽制し合う二人。その勢いは戦争にまで発展しそうな勢いだ。サクラの隻眼は鋭く刃のように恋敵を捉え、フィーリアの両眼はしっかりとサクラをキッと睨み付ける。その睨み合いには殺意すら薄っすらとにじみ出ていた。
そんな壮絶な争いがすぐ近くで行われているなど知る由もないクリュウは不思議そうに二人を見詰める。と、

「付近には危険なモンスターは存在しない。リオレウスもどうやらエリアを移動し――何をしているんだ君達は？」
戻って来たシルフィードは不思議そうに首を傾げる。
リオレウスが住まう狩場で一人の少年に二人の少女が抱き合っている姿を見れば、誰だって戸惑うものだ。
「あの、二人とも疲れているみたいなんです」
「そうか。まぁ相手がリオレウスでは当然だろう。もうしばらく休憩するか？」
「そうですね」
クリュウは二人の状態を見てもう少し休憩しようかと考えていたが、そこは二人もハンター。長期戦になればこちらが不利になるとちゃんとわかっている。
「大丈夫です。それよりも一度態勢を立て直しましょう。そしてリオレウスの怒り状態が解けた頃を見計らって第二戦を開始しないといけませんね」
「……第二戦は罠を中心に慎重にいくべき」
クリュウから離れて真剣な顔で言う二人。年相応な女の子であっても、やっぱりハンターなのだとクリュウは感心した。
「確かに、今回のリオレウスは平均個体より大きい」
「そうなんですか？」
「あぁ、一回り弱くらいは大きいな」
シルフィードの返答にクリュウは苦笑いした。最強の飛竜と恐れられるリオレウスとの初戦が平均よりも大きな個体とは、厄介極まりない。
「せっかく罠や爆弾があるんだ。次の戦闘ではトラップ戦を重視して戦おう。先程のような戦いで構わないが、クリュウとフィーリアには罠を張ってほしい。できるか？」
シルフィードの問いに、クリュウは力強くうなずく。三人の時でも罠を担当するのは常にクリュウであり、そこだけは自信があった。
「大丈夫です。罠や爆弾は得意ですので任せてください」
「そうか。常日頃の戦闘では君が罠や爆弾を担当しているのか？」

「はい」
「なるほど。君は《罠師》や《ボマー》というスキルが似合いそうだな」
罠師とはトラップを設置する速度が速まり、調合が必ず成功するというスキル。ボマーとは爆弾の威力を上げ調合が必ず成功するスキルの事。どちらもクリュウにはぴったりなスキルだ。
「あはは、そうですよね。いつかそんなスキルを手に入れてみたいですよ」
実際、戦闘ではサポートに回る事が多いので、そういうスキルがあった方が何かと便利だ。余裕ができたらそんな防具を作ってみたいと常々思っているクリュウ。
シルフィードはそんなクリュウの言葉に「そうか」とだけ返すと、携帯食料をかじりながら地図と睨み合いをする。
「戦いはまだまだ始まったばかりだ。日もすでに頂点から下がり始めている。この調子だと日をまたいでの戦闘になりそうだな」
「そんな事になってリオレウスに眠られたら大変ですよ？」
「確かにそうだ。だが急ぐあまりに無茶をして怪我、最悪死ぬ可能性を考慮すれば少し長引いてもこちらの方が確実だ。いくら飛竜の治癒能力がすごくても、一日で回復できる傷など表面程度。内側の傷まで完全に治すにはそれこそ一週間程度は掛かる。今回は爆弾も多いから内側へのダメージは大きい。この戦法の方がメリットが多いのだ」
確かにその通りだ。急ぐあまりに怪我したり、最悪死者が出てしまっては手遅れだ。それならば多少時間が掛かっても確実な方がいい。賢明な判断だ。
「夜戦も行うんですか？」
「いや、夜戦はなるべく控えた方がいいだろう。特にクリュウはリオレウスとの戦闘は初めてだ。初戦でいきなり夜戦は辛いだろうし危険。夜は攻撃せずにこちらも拠点（ベースキャンプ）に戻って体力を回復させるのが一番だ」
「そうですね」
シルフィードとフィーリアの話し合いを聞きながら、クリュウは申

し訳ない気持ちでいっぱいだった。自分のせいで作戦を大幅に変更させてしまっている。それが情けない。
考えないようにしていたが、やっぱり自分は足手まといでしかないのだ。今の自分の実力では、元々リオレウスなんて受注する事もできないレベルだ。それを無理してこうして立っているに過ぎない。それが自分だ。
三人ともリオレウスなんて何度も狩って来た歴戦のハンター達。そんな彼女達の動きを阻害しているのは自分という弱くて無力な存在。
――やっぱり、無理して依頼を受けたのは間違いだったのだろうか……
不安になるクリュウ。と、そんな彼の肩をそっと叩く者がいた。振り返ると、そこには自分とほとんど身長が変わらない隻眼の少女――サクラが立っていた。
「サクラ……」
「……顔を見ればわかる。また、自分を責めてた」
「そんな事ないよ」
小さく笑って誤魔化すが、付き合いの長いサクラは誤魔化せない。スッと隻眼が細まるのは彼女が真剣な時だ。
「……クリュウは、笑って誤魔化す。だけど、私には通じない。瞳を見れば、わかる」
「……やっぱり、サクラには敵わないな」
苦笑いするクリュウ。子供の頃から彼女には誤魔化しが通じない。元々彼がそういう事が苦手というのもあるが、彼女には通じないのだ。
「ねぇサクラ。僕って頼りになってるのかな？」
ふと訊いてみた。こんな事を訊くのはダメなのかもしれないが、それでも聞いてみたかった。彼女の気持ちを――
サクラは一瞬だけ瞳を大きく見開くと、再び細める。だがそれは真剣な瞳ではなく――笑みを含んだもの。
「……クリュウがいるから、私はがんばれる。だから、頼りにしてる」

「サクラ……」
「……クリュウはもっと自分に自信を持つべき。あなたは、いずれ私をも越える逸材だから」
「まさか。そんな事絶対にないって」
「……なぜ、そう言い切れる？」
「言い切れるさ。僕は極普通のハンター。君やフィーリア、シルフィードさんは歴戦のハンター。その差は埋まらないよ――僕達の間には、越えられない壁があるんだよ」
　クリュウの返答に、サクラは何も答えなかった。ただ、どこか寂しげな瞳を下げてそっと背を向けると、そのままクリュウから離れた。声を掛ける間もなく……
「サクラ……」
「クリュウ様？　どうかされたんですか？」
　シルフィードと話し合いを終えたフィーリアがどこか不安そうに声を掛ける。そんな彼女にクリュウは「何でもないよ」と小さく笑う。
　フィーリアはその笑み何か違和感を感じていた。どこか寂しげな、そんな笑顔。
「クリュウ様、何があったんですか？」
「気にしないで。何でもないから」
「でも……」
「今はリオレウスの事だけに集中しようよ。そろそろ出発した方がいいのかな？」
「……そうですね」
　フィーリアはまだ何か言いたげだったが、それ以上何も言わなかった。あまり詮索して嫌われたくないし、もし何かがあるのなら、彼の方から自分に頼ってほしかった。
「シルフィードさん、もうそろそろリオレウスの怒り状態も解けているでしょうか？」
　クリュウは地図を見たまま無言のシルフィードに声を掛けた。そんな彼の問いに対しシルフィードは「たぶんな」と返すと地図を道具袋（ポーチ）に収めた。

「では、もう行った方がいいですか？」
「準備は終わっているのか？」
「はい。いつでも出発可能です」
「そうか。ではそろそろ行くべきだな」
　そう言うとシルフィードはフィーリアとサクラも呼んで出発を告げた。二人とも用意はすでに完了しており、すぐに出発となった。
「では出陣する。奴はおそらく頂上付近にいるだろうと推測されるだろう。上空警戒をしながらそこへ向かう。各員は第二戦を覚悟し万全の体勢で臨むように」
「はいッ！」
「わかりました」
「……（コクリ）」
「では行くぞ」
　それを号令に一行は出発した。シルフィードを先頭に荷車をクリュウ、サクラが右、フィーリアが左を担当して護衛する隊列（フォーメーション）だ。
　クリュウは歩きながらふとサクラに振り返ったが、彼女はクリュウと目を合わせるとスッと視線を逸らしてしまう。
「サクラ……」
「……自分を見限る人は、嫌い」
「べ、別に見限っている訳じゃないよ」
「……クリュウは、もっと自分を誇るべき。あなたの力は、いずれ私を越えるもの。私は確信してる――クリュウは、もっと強くなるって」
　そう言うサクラは、小さく微笑んでいた。どこか楽しげで、嬉しそうで、恥ずかしそうな、年相応な女の子の笑顔。その笑顔に、クリュウも自然と微笑んでいた。
　自分が彼女を越える。そんな事ありえないと考えながらも、どこか嬉しかった。自分を認めてもらったような気がして、嬉しかった。
「ありがとう、サクラ」
「……（フルフル）」
　サクラはお礼を言われたのが恥ずかしいのか、ちょっぴり頬を赤ら

めて視線を下げた。歩く速度が速まり、自然と彼女が隣に並ぶ。
一瞬見えた彼女の口元には、小さな笑みが浮かんでいた。
そんな並んで歩く二人を斜め後ろから見詰めるフィーリアも、小さく微笑んでいた。
本当はクリュウを彼女に独占されるのは嫌だが、それ以上に落ち込んでいる彼はもっと嫌だった。だから、彼を励ましてくれている彼女には感謝している。邪魔をしないのは、そのお礼だ。
「――譲るのは一回だけですからね」
唇を尖らせて小さくつぶやくフィーリア。その表情はどこか嬉しそうであった。
天井を木々の枝が覆い塞ぎ日の光をかなり遮断する薄暗い森林地帯を抜け、一行は再び低い草が生える山場の広場に出た。
先程までリオレウスがいただけあって、モンスター達はいなかった。
クリュウ達はペイントボールの匂いを追ってリオレウスがいるであろう山頂付近を目指して長い坂道を登り始めた。
――ちなみに、その道中でサクラがクリュウに抱きつきフィーリアの堪忍袋の緒が切れてケンカになり、クリュウが慌て、シルフィードがため息したという事故があったりする。

第６８話　紅蓮業火　死闘の末の敗北

ペイントの匂いを追って一行が辿り着いたのは山頂付近の小さな広場。あまり背の高い木はなく大きくても二メートル前後、野の所々にきれいな花が咲いている。周りを岩壁や崖に覆われていて眼下の景色は清々しい眺め。ここに至る道幅が狭いのでアプトノスがいない為かそれを獲物にするランポスもめったに現れない狩場とは思えないようなのどかなエリアだ。ただし道幅が狭過ぎる故に荷車を持ち込む事はできなかった。その為荷車は途中で置いて大タル爆弾Ｇ四個と小タル爆弾Ｇを四個、落とし穴とシビレ罠を一個ずつ持って登って来たのだ。

奥には高台があり、そのさらに奥にある道を上に登って行くと洞窟がある。その奥に飛竜が巣に使う頻度が高い場所がある。

そんなエリアに――奴はいた。

低い唸り声を上げなら、ズシンズシンと重々しい地響きと共に歩く空の王者リオレウス。口からは黒煙や炎が出ていない。すでに怒り状態は収まったらしい。

クリュウ達はエリアに入ってすぐにある岩陰や草陰に息を殺しながら隠れている。爆弾などは岩陰に隠し、それぞれ必要な道具や武器を構えている。シルフィードの指示があればいつでも突撃可能だ。

シルフィードは閃光玉を握っていた。奴がこちらを向いた瞬間に閃光玉を炸裂させて動きを封じ、先制攻撃を仕掛けるつもりなのだ。

すでにクリュウは落とし穴を、フィーリアとサクラはそれぞれハートヴァルキリー改と飛竜刀【紅葉】を構えて攻撃準備を完了している。

そして、リオレウスが辺りを見回しながら長い首を持ち上げてこちらを向いた瞬間、シルフィードは閃光玉を投擲した。

刹那、すさまじい閃光が迸りリオレウスの視界を潰した。悲鳴を上げるリオレウスに向かってすぐさまフィーリアが新たなペイント弾を撃ち込み、サクラは突撃を開始。遅れてシルフィードも突撃。クリュウは側面から回って落とし穴を設置し、すぐさまリオレウスに肉薄する。

見えない群がる敵にリオレウスは体を回転させて尻尾で薙ぎ払おうとする。だがサクラはその動きを読みながら姿勢を低くして尻尾を回避。すぐさま剣を振るう。先程の休憩で研いだ刃はリオレウスの強靭な鱗を爆発と共に吹き飛ばす。

シルフィードは回転するリオレウスの傍に駆け寄ると何もない場所で突如大剣を引き抜いて溜め始める。失敗したのかと思った刹那、クリュウは目を疑った。

回転したリオレウスの頭が寸分狂わずシルフィードの方へ向き、その瞬間溜めに溜めた力を一気に解放したシルフィードの強力な一撃がリオレウスの頭に炸裂したのだ。

「グギャアアアオオオォォォォッ！」

悲鳴を上げるリオレウスからシルフィードは一度距離を置く。すぐさまフィーリアの徹甲榴弾ＬＶ２がリオレウスの顔面に突き刺さり起爆。悶えるリオレウスに容赦なく第二射が命中し起爆する。

暴れるリオレウスの足元ではサクラが気刃斬りと通常斬りをうまく組み合わせて練気を維持したまま攻撃していた。そこへクリュウが到達し足に向かってデスパライズを振るう。迸る麻痺毒を見てサクラは場所をクリュウに譲ってシルフィードがリオレウスの動きを止めた間に尻尾に向かって気刃斬りを炸裂させる。

「……チェストオオオォォォォッ！」

「グワアアアオオオォォォォッ！」

サクラの最後の一撃が炸裂したと同時にリオレウスの視界が復活。肉薄していた三人はすぐさま後退する。そこへリオレウスのバックジャンプブレスが炸裂。爆風に飛ばされながらも三人はリオレウスから距離を取った。

リオレウスはまずブレスをシルフィードに放つが、彼女はそれを横へ跳んで回避。背後にあった木々が爆砕した。

次にリオレウスはサクラに向かって突進。巨大な体を凶器に変えて襲い掛かるリオレウスにサクラは岩陰に隠れた。狭い岩幅にその巨体は強制的に停止させられ、サクラには後一歩届かない。目の前で憎々しげに睨むリオレウスの顔面に、サクラは容赦なく剣を振るう。

動きが止まったリオレウスにクリュウはすぐさま斬り掛かる。足を中心に剣を振るうと返り血と共に麻痺毒が迸る。先程のように麻痺させるにはまだまだ毒が必要だ。
岩幅に阻まれてこれ以上進む事のできないリオレウスはヤケクソとばかりに届かぬ敵（サクラ）に向かってブレスを放つが彼女はそれを間一髪で回避した。長い黒髪が数本灼熱の炎で焼かれた以外は外傷はない。
リオレウスは次なる敵を探して振り向く。そこへフィーリアの放った徹甲榴弾ＬＶ２が頭に炸裂。悲鳴を上げるが容赦なくさらに一発が命中し起爆する。その間にシルフィードは奴の巨大な足に向かって横薙ぎ一線で剣を振るう。そのすさまじい威力にリオレウスはバランスを崩して横倒しになった。
クリュウはすかさず腰に下げていたデスパライズを引き抜いてリオレウスに襲い掛かる。
「喰らえッ！」
両腕を使った渾身の一撃が鱗を吹き飛ばして血が舞う。同時にリオレウスの体内へ麻痺毒が侵入しわずかながらも蓄積したが、まだ力を発揮するには程遠い。クリュウは構わず連続して剣を振るう。
リオレウスは周りに集まる敵を吹き飛ばそうと突進して振り払う。クリュウとシルフィードはガード、サクラは回避してその一撃をやり過ごす。
背の低い木々を薙ぎ倒しながら前方へ転倒するようにして急停止するリオレウス。不幸にも先程仕掛けた落とし穴の横を通り過ぎてしまった。クリュウは小さく舌打ちすると側面に回る。サクラとシルフィードは真っ直ぐ突進。フィーリアは三人からは少し離れた位置で冷静にスコープを覗いて照準を合わせている。
風の動きを肌で感じ、正確に狙いを定めるフィーリア。今日は南風がわずかに強い。彼我の距離を目測で測定し、わずかに横に角度をつけて風に流されても着弾予定地に命中するように銃口の向きに角度をつける。口で言うのは簡単だが、不定期に変わる風力や動き回るリオレウスがそれを邪魔する。こんな高度な技術ができるガンナーは

世界を探しても数少ない。彼女はそれだけの力を持っているのだ。
「ここッ！」
一瞬でタイミングを見出し引き金を引く。撃ち出された弾は横風にほんの数センチ流されるが、最初に角度をつけているので狙った場所に寸分狂わずに命中した。突き刺さったのは頭。弾種は徹甲榴弾ＬＶ２。時間差で中の火薬が爆発する。刹那、
「グギャオオオォォォッ!?」
悲鳴を上げてリオレウスは倒れた。立てずにもがき苦しむリオレウスに驚いていると、風に乗ってフィーリアの声が聞こえた。
「今ですッ！　総攻撃を掛けてくださいッ！」
そう叫びながら自身も通常弾ＬＶ２を装填して速射を開始する。
リオレウスは立つ事もできずにもがき苦しむ。ハンマーなどの打撃武器またはボウガンの徹甲榴弾は頭に命中すると脳に直接ダメージを与えられる。その結果蓄積されたダメージがある一定の限界を超えるとめまいが起きてモンスターは一時的に行動不能に陥るのだ。ボウガンで気絶させるのは至難の業だが、フィーリアはそれをやってのけた。
「ナイスだッ！」
シルフィードはそう叫びながら突進する。身軽なサクラはすでにリオレウスの翼に向かって連続して気刃斬りを炸裂させている。続いてクリュウがシルフィードより先にリオレウスに斬り掛かった。
「はあぁッ！」
気合を入れて斬り掛かる。迸る麻痺毒が先程から何度もリオレウスの体内に流れている。一度目以上の毒を与えないと発動しないのなら、まだ発動はしないだろう。クリュウはとにかくひたすら剣を振るい続ける。
サクラも容赦なく気刃斬りを炸裂させている。そのすさまじい嵐のような剣撃にリオレウスの翼膜はボロボロになるが、決定打は与えられない。フィーリアの放つ通常弾ＬＶ２はそんなクリュウ達を避けて正確にリオレウスの体に命中している。さすがだ。
そして、シルフィードはリオレウスの背後で抜刀し剣を構えてい

る。力をどんどん溜め、ある一定の限界を超えた瞬間、
「はあああぁぁぁッ！」
気合と共に振り下ろす。その一撃はリオレウスの堅牢な鎧でさえもぶち抜いて内部の肉を斬り裂き、血が滝のように噴き出した。
「ギャアアアアアアアアアッ！」
悲鳴のようにリオレウスの怒号が響き、シルフィードは剣を背中に戻して後退する。それを見てサクラとクリュウもリオレウスから離れた。直後、リオレウスはゆっくりと立ち上がった。目の前には憎き敵。自分の誇りを汚す憎き敵がいる。
「ギャアアアオオオォォッ！」
怒号を上げ、容赦なく体内の火炎袋と呼ばれる器官で練り上げた灼熱の業火の塊を撃ち出した。爆音と共に撃ち出された炎の一撃は轟音を纏いながら敵に襲い掛かるが敵はそれを回避してしまう。
リオレウスは怒号と共に突進を仕掛ける――だが、後一歩のところでそれは封じられた。
「ギャアアアオオオォォッ！」
再び下半身が地面に沈み視界が低くなるこの感覚。最初に会敵した際に敵が使った小賢しい罠だと気づいた時にはもう遅かった。
再び脱出しようともがくリオレウスを見て、クリュウはすかさず爆弾を隠した岩陰に駆け出す。それを見てサクラとシルフィードも続いて追いかける。ただ一人残ったフィーリアはとっておきの《秘密兵器》を弾倉に込めて撃ち放った。反動が大きく、ちょっと後退ってしまう。撃ち出された弾はリオレウスの頭に命中し薄い水色っぽい煙を吹き出した。一発しか一度に装填できない大型弾なのですぐさま次の弾を装填する。するとそこへクリュウが大タル爆弾Gと小タル爆弾Gを一個ずつ、シルフィードが大タル爆弾を一個、サクラが新たにシビレ罠を持って戻って来た。
「時間がありませんッ！　すぐに仕掛けますよッ！」
「スリル満点だな、これは」
苦笑いしながら重い大タル爆弾Gを持って走るシルフィード。クリュウはリオレウスに近付いて難なく爆弾を設置する。経験の差か、

その動きは鮮やかだ。シルフィードは内心ちょっと恐怖しながらも大タル爆弾Ｇを設置。クリュウはすぐさま小タル爆弾Ｇのピンを抜き、二人で一斉に走り出す。

リオレウスの周りの地面にヒビが入っている。もう持ちそうもない。脱出と起爆。どちらが先なのか……

地面が裂け、リオレウスの体が落とし穴から解放される。だが、飛び立つ直前に爆弾が起爆しすさまじい大爆発が起きた。

サクラとクリュウ、フィーリアは慣れたようにその爆風に耐えるが、日頃あまり爆弾を使わないシルフィードは爆風に煽（あお）られてちょっとよろけた。

大タル爆弾Ｇ二発というのはかなりの威力だが、リオレウスは黒煙を巨大な翼で吹き飛ばしながら上昇する。再び空中ブレスかと思われたが、リオレウスはそのままさらに高空まで上昇を続け、水平飛行に移るとそのまま飛び去っていく。

「逃げられたか……」

クリュウはふうと息を吐いて緊張を緩める。が、

「いや、まだだ」

シルフィードはそう言いながら剣を背中に戻して空を睨み続ける。見るとサクラとフィーリアも武器を背負って空を見上げていた。その視線を追うと――リオレウスが上空を大きくエリアを囲むように旋回していた。

「あ、あれは……？」

「旋回して私達を空から強襲しようと狙いを定めているんだ――散開ッ！」

シルフィードの号令と共にサクラとフィーリア、そしてシルフィード自身もバラバラな方向に走り出した。呆然とするクリュウにシルフィードが怒鳴る。

「走れッ！　狙われるぞッ！」

「は、はいッ！」

クリュウも慌てて走り出す。

少し小狭いエリア内で四人のハンターがバラバラな方向に走り回

る。何とも奇妙な光景だ。だが、これが奴の攻撃を撹乱させる最も有効な手であった。
　リオレウスは上空で狙いを定めると翼を大きく羽ばたかせて急降下。高度を低くして全速力で空中突撃をして来る――狙いはクリュウだ。
「ぬわあああああぁぁぁぁぁッ!?」
　岩壁を越えて頭スレスレの高度で突撃して来るリオレウスにクリュウは悲鳴を上げながら前方に倒れるように回避。刹那、彼の直上をリオレウスが轟音と暴風を纏いながら滑空して通り過ぎて行った。そしてそのまま崖を越えて急降下して視界から消えた。
「だ、大丈夫ですかッ!?」
　比較的一番近くにいたフィーリアが倒れたクリュウに駆け寄る。と、
「うぅ……ひぐぅ……」
「く、クリュウ様ぁッ!?」
　駆け寄ったフィーリアは驚き慌てる。なぜなら、クリュウが泣いていたからだ。
「こ、怖かったよぉ……」
　あまりの恐怖にクリュウは泣き出してしまった。情けないのではない。誰だって巨大な飛竜の凶悪な顔が目と鼻の先にまで迫って自分に襲い掛かって来たら涙が決壊するのは仕方がない事だ。
「だ、大丈夫ですか？」
「う、うん……」
「はうぅ……ッ！」
　突如フィーリアは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。
　グシグシと手の甲で涙を拭うクリュウ。その赤くなった目や頬を流れる涙、そしてその怯えた表情――不謹慎ながら、かわいいと思ってしまった。
「は、反則ですよこんなの……ッ！」
「そうだよねぇ。あんな攻撃なしだよぉ」
　微妙にかみ合っていない反則の向かう先。フィーリアが不意打ち

的にドキドキしているとサクラとシルフィードが駆け寄って来た。
「大丈夫か――って、泣いているのか？」
「……クリュウ、かわいそう」
「だ、大丈夫大丈夫。大丈夫です」
クリュウは涙を拭ってちょっと無理しながらも笑みを浮かべる。その表情を見てどうやら怪我はないようだったので安堵するシルフィードは今度はなぜかうつむいているフィーリアを見る。
「フィーリア、君は大丈夫か？」
「ひゃ、ひゃいッ!?」
顔を真っ赤にしてものすごく慌てているフィーリアに、シルフィードは首を傾げる。
一方、クリュウを泣かせたリオレウスが降りて行った崖を睨みサクラは一言、
「……殺す」
「あのサクラ？　全方位にすさまじい殺気を放つのはやめてくれない？　こっちまで身の危険を感じちゃうから」
そんなわずかな間に流れるいつも通りの雰囲気。だが、それはすぐに崩れる。崖下からあの巨大な羽音が響き、突風が吹き荒れる――刹那、リオレウスが崖下から現れた。
リオレウスは憎々しげに敵を一瞥して上空を滑空。暴風を纏いながら地面に降り立つ。すぐさま四人は散開し、クリュウとサクラは側面から、シルフィードは正面から向かい合う。そこへフィーリアの銃弾がリオレウスを襲う。炸裂した弾は着弾と同時に薄い水色っぽい煙を放った。それを見て、シルフィードは指示を出す。
「クリュウッ！　サクラッ！　攻撃は中止だッ！　リオレウスを撹乱するぞッ！」
その指示にクリュウは首を傾げながらもうなずいて従う。サクラはすでに理由がわかっていたのか無言のまま剣を収納した状態で走る。
ちょこまかと動き回る敵にリオレウスはブレスを放つが、もちろん当たらない。そこへフィーリアの銃弾が炸裂する。

リオレウスはちょこちょこと攻撃して来る敵に向かって突進する。フィーリアはそれを回避すると通り過ぎざまに撃ち放つ。
巨体故に勢いを殺せないリオレウスは体を投げ出すようにして急停止する。そこへ装填したばかりの弾を撃ち放つ。
リオレウスは再び遠くから攻撃して来る敵に向かって突撃する。だが、撃ち出された銃弾がリオレウスの鼻先に命中した瞬間、その動きは止まった。
リオレウスは突如周りに放っていた殺気を消すと、そのまま崩れるようにして倒れた。そしてなんと寝息を立てて眠り始めてしまった。
「え？　ど、どうしたの？」
状況がわからず混乱するクリュウに、サクラが小さく説明してくれた。
「……フィーリアの睡眠弾ＬＶ２が利いたのよ。今奴は眠ってる」
「眠らせた？　あのリオレウスを？」
「……ええ」
クリュウは先程まで自分達に殺気を嵐のように放って殺しに掛かっていたリオレウスを見て本当に寝ているのか不安になった。だが、奴はのん気に鼻提灯（はなちょうちん）までしてぐっすりだ。自然と安堵してしまう。
こうして見ると、凶悪なリオレウスもちょっとだけ怖くない――まぁもちろん、すさまじく怖いのには変わりないが。
――だが、時間が限られている。
フィーリアは銃を背に背負うと三人を呼ぶ。ここからは時間との戦いだ。
「リオレウスが眠っている間に残る大タル爆弾Ｇを全て設置して爆破しましょう。その方が安全ですし威力もあります。急いでください！」
クリュウはうなずくとシルフィードと共に残る大タル爆弾Ｇが隠してある岩陰に走る。フィーリアは起爆の用意を、サクラは砥石で刃を研いでいる。
師匠に習ったが睡眠付加による眠りは強制的に眠らせた不安定な

もので、ちょっとした衝撃でさえ起きてしまう上に持続時間が短い。事は急がなければならない。
「これだ！」
クリュウは隠してあった大タル爆弾Ｇを掴む。次にシルフィードが最後の爆弾を掴んで共に走り出す。残っている大タル爆弾Ｇはこの二つだけ。あと二発は拠点（ベースキャンプ）に置いてきているので、事実上これが最後の爆弾だ。
クリュウとシルフィードは大タル爆弾Ｇを持ってリオレウスに駆け寄る。眠っているとはいえその凶悪な顔は何度見ても慣れるものではない。
二人はリオレウスの顔の両側に大タル爆弾Ｇを設置する。そして急いで離れた。
「いいよッ！」
「わかりましたッ！」
フィーリアはハートヴァルキリー改を構えてスコープを覗き込んで狙いを定める。リオレウスに当たらないように気をつけながら大タル爆弾Ｇに照準を合わせる。そして、
バァンッ！
撃ち放たれた銃弾は寸分の狂いなく大タル爆弾Ｇに命中。刹那、大タル内の信管がその衝撃で発火。カクサンデメキン入りの爆薬に引火して大爆発を起こした。
すさまじい爆発に消えるリオレウス。クリュウ達は襲い掛かる爆風に耐えながらリオレウスを確認する。だが、黒煙に包まれた奴の安否はわからない。
「やった、かな？」
「……わからない」
横にいるサクラもじっと鋭い隻眼で黒煙の柱を睨むばかり。
辺りには焦げ臭い匂いが漂い、大タルの破片や土がパラパラと落ちて来るだけで何の変化もない。黒煙は相変わらず天に向かって伸び続ける。
クリュウは目を凝らして黒煙を凝視する――刹那、黒煙の中で何か

が動いたのを見逃さなかった。
「サクラッ！」
「……わかってる」
近くにいたシルフィードとフィーリアもわかっていた――奴のすさまじい殺気に。
「ギャアアアアアオオオオオオオオッ！」
怒号と共に暴風が吹き荒れ、黒煙が吹き飛ばされた。荒れ狂う嵐のような突風に包まれたのは紅蓮の凶竜。所々鱗や甲殻が吹き飛び血が溢れ出すという少なくないダメージを負っていながらも、大地にしっかりと二本の脚で踏ん張り立つ空の王者――リオレウス。
大タル爆弾Ｇ二発を受けただけあってさすがにボロボロだが、その闘志は衰える事はない。むしろ凶悪なまでに激しさを増している。
――まだ、戦いは終わりそうになかった。
次の攻撃に備えて武器を構え直すクリュウ達を睨み、リオレウスは荒れ狂う激昂を怒号と共に撃ち放つ。
「グギャアアアアアオオオオオオオオオオッ！」
強烈なバインドボイスにクリュウ達は恐怖のあまり耳を塞いでしまった。と、
「しっかりしろ！」
耳栓のおかげでバインドボイスが通じないシルフィードが三人の肩を揺らして解放する。おかげでリオレウスよりも先に行動が可能になった。
リオレウスは口から黒煙と炎を噴き出す。その姿は怒り状態。危険信号だ。
怒り狂うリオレウスは翼を広げて火炎袋の中で練り込んだ爆炎をブレスとして撃ち放つ。四人はそれを冷静に回避した。クリュウも少しずつだがリオレウスの動きがわかるようになっていた。
クリュウとシルフィードが右へ、サクラとフィーリアが左へ回避した。
リオレウスは二手に分かれた敵に対して翼を羽ばたかせて上空に舞い上がる。

「また飛んだッ！」
クリュウは悔しそうに睨むと走り出す。他の三人もブレスを警戒して走り出した。そこへリオレウスがブレスを放って来る。クリュウから少し離れた地面に命中して爆発した直後、リオレウスは第二射を撃ち放った。再び爆発が起きる。今度はクリュウの真後ろ。狙いを修正しより正確な一撃だ。
リオレウスの空中ブレスの連続攻撃はあと一回。クリュウはシルフィードから得た知識で次の奴の攻撃を先読みして岩陰に隠れた。刹那、リオレウスはブレスを放った。その一撃は岩に炸裂して爆発する。パラパラと大小様々な砕けた岩がクリュウに降りかかるが、クリュウは盾でそれを防ぎながら岩陰から飛び出す。
リオレウスは自分の攻撃を全て回避した敵を睨みながら降下して着地。そこへすかさずフィーリアの貫通弾ＬＶ１が炸裂する。反撃とばかりにリオレウスも彼女に向かって突撃した。その速度は怒り状態なので通常時よりもずっと速い。クリュウは悲鳴を上げるが、フィーリアは全力で横に走って体を投げ出すようにして回避した。間一髪だ。
勢い余って倒れ込むリオレウスに、今度はサクラが襲い掛かる。先程の滑空攻撃の間にずっと維持していた練気はなくなっているので多少威力は下がるが、それでもかなりの威力だ。だが、その鋭い剣先が炸裂する寸前でリオレウスは大空に舞い上がってしまう。地面に叩きつけられる暴風に動きを封じられたサクラは小さく舌打ちして再び空に逃げるリオレウスを睨む。
三連発ブレスを警戒してクリュウはリオレウスからかなり距離を取る。ここまで来ればブレスだって届かないだろう。そう思って道具袋（ポーチ）の中から回復薬を取り出す。が、
「――え？」
リオレウスはブレスは撃たなかった。ただ、クリュウを睨んだまま体を激しく動かし――
「逃げろクリュウッ！」
シルフィードの悲鳴が聞こえた刹那、信じられないような速度でリ

オレウスがクリュウに向かって一直線に襲い掛かってきた。クリュウはほとんど反射的に盾を構えたが、小さな片手剣の盾では防ぎ切れないような連続した巨大な爪の連続攻撃。表面を覆うドスゲネポスの皮はいとも簡単に引き裂かれ、すさまじい衝撃がクリュウの細腕に直撃する。

質量が違い過ぎる。

目にも留まらない連続した爪攻撃。一撃目は何とか守り切れたが、二撃目は不可能だった。盾を弾かれ、がら空きになった懐にリオレウスの巨大な爪が突き刺さった。

「がはぁ……ッ！」

悲鳴も上げられず吹き飛ぶクリュウ。その体は離れた岩壁に激突してぐったりと地面に倒れた――岩壁には、彼の体が擦れて残った血の跡が……

「嫌あああああぁぁぁぁッ！」

フィーリアが絶叫のような悲鳴を上げて慌ててクリュウに駆け寄る。サクラも冷静さを失って悲鳴を上げながら彼に駆け寄る。シルフィードは唇を噛んで道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出すと再び最初の位置に戻ったリオレウスに向かって投擲。炸裂した光にリオレウスは悲鳴を上げて飛行不能となり地面に激突した。すぐにシルフィードもクリュウに駆け寄る。

「クリュウ様ぁッ！　クリュウ様ぁッ！」

狂ったように彼の名を呼び続ける彼女の腕の中で、バサルヘルムが脱げ露になった口から血を流すクリュウは気を失ってぐったりとしていた。爪が突き刺さった脇腹付近はバサルモスの甲殻でできた胸当（バサルメイル）と腰当（バサルフォールド）で守られていたが、それらはリオレウスの爪に砕かれ、真っ赤に染まっている――それが彼の血だと理解するのにそう時間は掛からなかった。

「撤退だッ！」

シルフィードはこれ以上の継戦は不可能と判断してすぐさま撤退指示を出す――だが、フィーリアもサクラもそんな指示など聞こえてはいなかった。二人とも、血まみれのクリュウに冷静さを失い周りな

ど見えてはいない。
「しっかりしろッ！　このままでは全滅だぞッ！」
シルフィードの怒号にハッとする二人――だが、すでに遅過ぎた。
視界が復活したリオレウスは塊になっている敵に向かって鋭い牙が並ぶ凶悪な口を開く。その暗闇ののどの奥に火花が迸った刹那、爆音と共に巨大な業火の塊が撃ち出された。
迫り来る火炎の塊にサクラとフィーリアはなす術もなく最期の瞬間を覚悟した――が、そんな二人の前に立ち塞がったのはシルフィード。襲い掛かるブレスに向かって煌剣リオレウスを横に構えてガード体勢になる――刹那、山の山頂付近の小さな広場が爆発と共に爆炎に包まれた。
崩れる岩壁、崖下に向かって落ちる無数の瓦礫（がれき）――四つの小さな黒煙。それらは全て下に広がる森の中に消えて行った。
煙が晴れた時、燃える草木の中に四人の姿はどこにもなかった。
消滅した敵に向かって、大地を震わせるリオレウスの勝利の咆哮が力強くリフェル森丘全体に響き渡った……

第69話　夕暮れの敗走

日がすっかり傾き、蒼穹の空をオレンジ色に染め上げる夕暮れ時。リフェル森丘の木々も空と同じ淡い赤みで身を包み、どこか幻想的な光景が広がる。

そんな夕焼けに染まって燃えるような色合いをする崖の下に広がる森の中に、フィーリアは倒れていた。

「……うぅ」

そんな小さな声が柔らかそうな唇の間から漏れた刹那、閉じられていた彼女の翡翠色の瞳がゆっくりと開いた。

ぼやけた暖かな光に包まれた光景や自分が横になっているという感覚などが徐々に彼女の意識を覚醒させる。

まるで寝起きのように頭がぼーっとしながらも、フィーリアはゆっくりと体を起こす。が、その途端に全身に鈍い痛みが走り、顔をしかめて浮いた体は再び地面に倒れた。皮肉にも、それが彼女を完全に覚醒させる事となる。

「……ここは、一体」

フィーリアは全身の痛みに堪えながらゆっくりと上半身だけ起こすと、辺りを確認する。

そこは森の中であった。空を染め上げる柔らかな赤色が今が夕方だと表していた。そして、全身に走る鈍い痛みを感じながら、起き上がったばかりの彼女は状況を整理する。

「確か私はリオレウスと戦っていて……」

そこまで思い出した途端、彼女はハッとなっていきなり立ち上がった。全身の痛みに一瞬顔をしかめるが、今はそれどころではないと心の警鐘がうるさいくらいに鳴り響く。

「クリュウ様ッ!?　サクラ様ッ!?　シルフィード様ッ!?」

仲間の名前を呼ぶが、誰一人返事はなかった。

周りには、誰一人いない。どうやら逸（はぐ）れてしまったらしい。フィーリアの不安はその現実にどんどんと大きく膨れ上がる。

常の彼女なら仲間と別れたくらいで動揺する事はない――だが、今

は非常事態だ。リオレウスの毒爪を受けたクリュウの血まみれの姿を思い出し、一気に顔から血の気が引く。
「……早く発見しないと……手遅れになる……ッ」
クリュウを失うかもしれない。そんなとてつもない恐怖が痛む体を無理やり動かして前に進もうとする。全身を包む鈍い痛みの中、フィーリアはふと空を見上げる。さっきまで蒼い空が広がっていたのに、今はすっかり夕焼けに染まっている。どうやらかなりの間気を失っていたらしい。
見上げる視線の先、見えたのは夕焼けによって茜色(あかねいろ)に染まった崖。単純に見ても一〇〇メートル近くはある。どうやらあそこから落ちたらしい。よく無事でいられたと驚いてしまうような高さだ。
幸いどうやら枝に引っかかって落下速度が緩み、さらに秋だからこその枯葉がクッションになってくれたらしく大した怪我もなく助かったらしい。風に当たって頬がヒリヒリするのは、きっと枝か何かで切ったのだろう。
痛む体を引きずって歩くフィーリア。次第に慣れてきたのかだんだんと足取りが軽くなる。
歩き始めて三〇分、あまり崖下付近から離れないようにしてたぶん同じような場所に転落したであろうクリュウ達を捜したが、発見する事はできなかった。
足取りはだんだんと重くなる。
――もしかして、もうこのまま誰とも会えないのではないだろうか。
そんな不安が心を過(よ)ぎった刹那、木の陰に何かが見えた。モンスターなのか。壊れていなかったハートヴァルキリー改を構えながら、ゆっくりと迫る。人差し指はいつでも引き金が引けるような構えだ。
そして、そのまま木の陰に隠れながらその《何か》を確認する――すると、そこには少女が一人倒れていた。
どこか異国風な鎧を身に纏った、黒く艶やかな長い髪をした少女――

―そこまで確認し、フィーリアは慌てて彼女に駆け寄る。
「サクラ様ッ！」
それは逸れた仲間の一人――サクラであった。
急いで抱き起こすとサクラで間違いなかった。
いつもクリュウを巡って何度も対立してきた恋のライバル。いつもムカつくくらい冷静で多少の事ではビクともしない人形のように美しい少女。だが今の彼女は本当の人形のようにピクリとも動かない。閉じられた隻眼は、見下したような視線を向ける事はない。
「サクラ様ッ！　しっかりしてくださいッ！」
フィーリアは肩を揺すって必死に起こそうとする。
確かに彼女は恋のライバルで、いつもいつもクリュウを独占し、自分とクリュウの仲を邪魔してくる恋敵だ――でも、恋のライバルであると同時に、彼女は仲間だ。クリュウという絆が結んだ、掛け替えのない仲間。その彼女が、死んだようにぐったりとしているなんて、悪夢以外のなにものでもない。
「サクラ様ッ！　目を開けてくださいッ！」
必死に彼女の名前を呼び続ける事数十秒、サクラが小さなうめき声を上げた。その瞬間、パァッと希望に満ち溢れるフィーリア。
「サクラ様ッ！　しっかりしてくださいッ！」
その声に、薄っすらとサクラの隻眼が開かれた。ぼんやりとしながらも意識を取り戻した彼女を見てフィーリアは安堵の息を漏らす。
「……ふぃ、フィーリア？」
「サクラ様、ご無事で何よりです」
「……ここは？」
「わかりません。私達どうやらリオレウスのブレスを受けて崖下に転落したようなのですが……」
フィーリアに支えられながら、サクラはゆっくりと起き上がった。フィーリアと同じく彼女も転落によって全身に打撲や擦り傷があるせいか、少々辛そうな表情を浮かべている。
「大丈夫ですか？」
心配するフィーリアに肩を借りサクラはフラつきながらも歩き、木

の幹に背を預けて座った。フィーリアに比べてサクラはかなり体力を消耗していた。そんな彼女を見てフィーリアは自分の道具袋（ポーチ）から回復薬グレートと元気ドリンコを取り出して彼女に手渡す。
「これを飲んで元気を取り戻してください」
「……迷惑掛けて、ごめんなさい」
「迷惑だなんて思ってませんよ。私達は仲間じゃないですか」
「……ありがとう」
　サクラは小さく礼を言うとそれを受け取ろうと手を伸ばす。だが、その手がそれらの品物に触れる寸前でピタリと止まった。不思議そうに首を傾げるフィーリアを見詰めるサクラの顔色が、真っ青に変わっていく。
「ど、どうされたんですか？」
「……クリュウは？　クリュウはどこ？」
　サクラの言葉に、フィーリアはハッとして負傷している彼の事を思い出した。今現在わかっている状況の中で、最も危険な状態に陥っている可能性があるクリュウはいまだ発見されていない。自分達をかばってブレスの直撃を受けたシルフィードも見つかってはいない。状況は最悪であった。
「クリュウ様、及びシルフィード様の行方は依然不明です。私が発見できたのは、サクラ様お一人なんです」
「……じゃあ、クリュウは怪我したままって事？」
「おそらくは」
「……捜さないとッ！」
「サクラ様ッ!?　ご無理をなさってはいけませんよ！」
　フラフラな体に無理を押して立ち上がろうとするサクラをフィーリアは慌てて止める。しかしサクラはそんな彼女の制止を振り切って立ち上がる。だが、フラついた状態では満足に立つ事もできずに倒れる。が、間一髪でフィーリアが支えたので倒れる事はなかった。
「そんな状態では捜索なんて不可能ですよ！」
「……放してッ！　私なんかより、クリュウを助けないとッ！」
「それはわかってますッ！　しかしその体では……ッ！」

「……私になんか構わないでッ！　クリュウにもしもの事があったら、取り返しがつかなくなるッ！」
悲鳴のように怒鳴り散らすサクラ。その隻眼を見ただけでわかる。いつも冷静沈着な彼女が冷静さを失っている。大事な人の命が懸かっているという現実に、冷静でいられるほど彼女は非情にはなれないのだ。
だが、そんな彼女を助けないとと思う気持ちのおかげで、フィーリアは冷静でいられた。
「確かに、今になって思うとあの傷は結構危険です。早急に見つけないといけません」
「……急がないと、手遅れになる！」
サクラはフィーリアの手を振り切って歩き出す。だが、そんな彼女の肩をフィーリアが掴む。その妨害するかのような行為にサクラは振り返って血走った隻眼で睨み付ける。
「……邪魔する気ッ!?」
「――邪魔なんてしませんよ。私だってクリュウ様が心配です。でも同時に、サクラ様も心配なんです。だから、一緒に行きましょう。私の肩、貸してあげますから」
そう言ってにっこりと微笑むフィーリアにサクラは呆然と立ち尽くす。しばしの沈黙の後、ようやくその言葉の意味を理解したのかサクラは小さくうなずいた。
「……助かる」
「困った時はお互い様ですよ。仲間ですし」
そう言ってサクラの腕を自分の首に回して肩を貸すフィーリア。サクラの方が身長は高いのだが、それでもおかげでかなり楽になる。
「さぁ、早くクリュウ様やシルフィード様と合流しましょう」
「……えぇ。早くクリュウに会いたい。そして、抱き締めたい」
「そ、そんなのダメですよッ！　私だってッ！」
「……そして、同じベッドで一夜を過ごす」
「反則ですッ！　それはルール違反ですッ！　私達は同盟を組んでいたのではないんですかッ!?」

「……恋に卑怯もクソもない。どのようにして恋敵（ライバル）を蹴落とすか――恋は戦争」
「わ、私だって負けませんよッ！」
すっかり目的が変わってしまった上にシルフィードの存在も完全に抜け落ちてしまった二人は、早くクリュウと合流する事を目的にゆっくりとだが森を歩く。
互いに支え合うその後姿は、二人の恋姫が友情という絆で結ばれている事を表しているかのように、柔らかな夕焼けに照らされていた。
フィーリアとサクラが共にクリュウとシルフィードの捜索を始めてから半時ほどが経過した頃、今の今まで気を失っていたシルフィードはゆっくりと目を覚ました。
まず目に入ったのは灰色の光景。そこが洞窟の中であるとわかるのに少し時間が掛かった。そして、自分が横になっているという感覚。そこまで気づいてゆっくりと体を起こそうとする。だが、
「ぐぅ……ッ！」
ひどい痛みが体中に走った。どうやらかなりの怪我をしているらしいが、動けないという事はなさそうだ。無理を承知で何とか起き上がる。その時、
「……ダメですよ……まだ起きては……」
弱々しく、どこか苦しそうな聞き知った声に驚いて振り返ると、そこには岩壁に背を預けて力なく座るクリュウがいた。
「クリュウッ!?　無事だったのかッ？」
「……無事、なんでしょうか？」
そう言って苦笑いするクリュウは――真っ黒に染まっていた。
彼が身に纏っていたのはバサルシリーズ。白っぽい灰色の岩竜の甲殻で作られた鎧。だが今の彼が身に纏っているのは黒い鎧だ。所々に赤がべっとりと付いたその光景に、シルフィードの背筋は凍りつく。
その黒や赤の正体は――彼の血であった。
「クリュウ……」
「……ここまでの傷になると……自分じゃどうしようもなくて……回

復薬や回復薬グレート……秘薬も飲んだんですが……応急処置にもならなくて……」
　それはそうだろう。回復薬などの薬品はあくまで《体力を回復させる》ものだ。傷を直接治す力はない。特に彼のように負傷した場合は、一刻も早い処置が必要であった。
「傷を見せてみろ」
　そう言って彼に向かって手を伸ばす。と、その時自分の腕に包帯が巻かれている事に気づいた。よく見ると、腕だけではなく脚や胸、腹や肩に至るまで様々だ。防具も全て外されている。
「これは……」
「……すみません……シルフィードさん……火傷を負っていたので……すり潰した薬草を塗って包帯を巻いたんですが――あ、もちろん変な所は見てませんからね……」
　そう言って少々頬を赤らめるクリュウ。彼の場合は本当に見ないようにがんばりながら巻いたのだ。自らの方が重傷なのに、努力賞ものである。
　通常ハンターは防具の下に下着代わりのようにインナーを着込んでいる。シルフィードも同じで、防具を脱ぐといきなり裸という事はなかったのが幸いだ。
「そうか、ありがとう」
　シルフィードは素直に礼を言った。防具を脱がされた事に多少の恥ずかしさはあるが、それも彼が自分を助けようとがんばってくれたおかげだと思うと、そのむずがゆさまで心地良い――こんな感覚初めてだ。
「……最初に合流したのが……僕じゃなくて……サクラやフィーリアだったら良かったのに……すみません……」
「謝るな。君は私を助けてくれたのだ。私は感謝している」
「……でも……見てはいなくてもその……シルフィードさんの肌とか……触ってしまいましたし……」
　顔を真っ赤にしながらだんだんと小さくなる声で言うクリュウ。彼は同世代の男子に比べてずっと純粋な男の子なのだ。ハンター養

成学校の時も周りの男子が女子風呂を覗きに行こうなどと実行する中、必死に止めようとしたくらいに純粋なのだ。そんな彼にとって手当てとはいえ女性の体に触るのは覚悟がいる事だったのだ。そして、そんな覚悟をしてまで、彼女を助けたかったのだ。

そんな彼の心境や想いを、シルフィードはしっかりと感じ取っていた。罪悪感を感じている彼に、シルフィードは気にした様子もなく言う。

「私は女である前にハンターだ。そのような恥じらいはとうの昔に捨てた。気にするな」

男と女で差別されるハンター世界。彼女自身も女だからと蔑まされた事は幾度とあった。実力も知らずに性別で判断する輩（やから）など所詮大した事はないのだが、それでも居心地がいいとはお世辞にも言えなかった。

だから、この世界を生きる為に自分は女を捨てたのだ。ハンターとして生きるのに女というものが障害となるなら、捨てるなど構わなかった。

クリュウは罪悪感など感じる必要はない。そう思っていた。だが、

「……ダメですよ……シルフィードさんはきれいなんですから……きっと、幸せになれるはずです……だから……そんな悲しい事……言わないでください」

クリュウのか細い声に、シルフィードは驚いたように彼の顔を凝視する。そんな事を言われたのは初めてだった。

女としての幸せ。そんなの当の昔に捨てたはずだった。なのに、彼にそう言われると、その捨てたものが掛け替えのないものに感じてしまう。

女だからという理由で蔑まされてきた。だから、自分の大志を阻む女を捨てたのだ。なのに、そんな自分に女だからこその幸せを願うクリュウ。

彼が変わっているのか、それとも自分が変わったのか。それはわからない。でもなぜか、《女》という部分も含めて自分を認めてくれた彼の言葉が――嬉しかった。

「そんな事、初めて言われたよ……変わってるな君は」
「……変わって……ますか……？」
「相当な」
「……あんまり……嬉しくないです……」
そう言って苦笑いするクリュウに、シルフィードはフッと口元に小さな笑みを浮かべた。
――なぜフィーリアやサクラが彼の傍にいるのか、少しだけわかった気がした。
自分が今まで触れた事もないような優しさ。彼はそれを持っているのだ。誰にも負けない優しさ。その優しさが、自然と周りを笑顔にさせる――自分も、その一人であった。
「……こんな仲間が、私は欲しかった」
「え？　何か言いまし――ゲホォッ！」
突如クリュウは激しく咳き込み始めた。しかも咳をするたびに口からはベチャッと真っ赤な血の塊が吐き出される。その姿に、シルフィードの顔から血の気が引く。
「クリュウッ！　大丈夫かッ!?」
「……は、はい……大丈夫で――ゲホゴホッ！」
激しく咳き込むクリュウ。シルフィードは改めてクリュウの怪我の具合を見る。タオルで押さえられている右脇腹から出血し、白い鎧は今も溢れ出す血の赤とすでに乾いて黒く変色した血に染められていた。
傷は思ったよりはひどくはなかった。リオレウスの爪を受けてこれだけの傷で済んだ方がそもそも奇跡的なのだ。バサルシリーズの強固な防御力がなかったら、完全に即死していただろう。
だが、それでも状況は芳しくない。いくら傷の状態が予想よりは良かったとはいえ重傷は重傷。早く適切な治療を受けないといけなかった。
シルフィードは辺りを見回す。するとすぐ横に置かれた脱がされた防具の中に道具袋（ポーチ）を見つけ手に取る。そして中から取り出したのは筒状の道具。それを見たクリュウは少しうつむいてしま

う。
「……すみません」
「気にするな。今は君の怪我を治す事を優先するのは当然だ。報酬などを気にしている場合ではない」
「……はい」
シルフィードはそう言ってまだフラつく体を何とか立たせて洞窟の外に出る。洞窟といっても洞穴のような小さなものだ。五メートル程度で出口に到達すると、筒の先端から飛び出している紐を掴み、一気に引き抜く。その途端、シュボッという音と共に黄色い煙が噴き出した。シルフィードはそれを外に放ると再び彼の下に戻る。
「もう少しの辛抱だ。もうじき救護アイルーが来るはずだ」
「はい……」
救護アイルーとは狩場に生息するギルドと契約を交わした医療アイルーの事だ。アイルーの技術は様々な分野において人間を超えるもので、爆弾生成術の他に医療術もまたアイルーの方が上。その為ギルドでは負傷したハンターを救助し、適切な治療をして生存性を高める為にその地域に住むアイルーと契約を交わしてハンターを救助させている。
ギルドにとってはもちろんハンター救助が目的だ。一方のアイルーはというと救護する事でハンターが受けている依頼の初期報酬の三分の一を受け取ってそれを給料としている。街に出稼ぐ他にアイルー達はこうした事でもお金を集めて暮らしているのだ。
先程シルフィードが使用したのは依頼を受けた際にギルドから支給される救護発炎筒という救護アイルーを呼ぶ為の道具だ。その調合方法はギルドが秘匿しているが、ほのかに煙から漂う匂いにはマタタビの匂いが混じっている。アイルーやメラルー以外の生き物にはまるで効力がないのでモンスターを呼び寄せる危険性もない。
シルフィードは再び先程の場所に腰掛ける。クリュウはついに背を預けて座っているのも辛くなったらしく今は横になっている。
「大丈夫か？」
「……は、はい……ゲホゴホッ！」

無理して笑みを浮かべるも、すぐに激しい咳で苦悶にその笑みも歪んでしまう。息も荒く、額には脂汗を浮かべ、表情は辛そう。一刻の猶予もなかった。

シルフィードは自らも怪我しているのに気にせず彼の横に移動すると腰掛けた。そして辛そうに息をするクリュウの背中を優しくさすってやる。

「苦しいか？」

「……大丈夫です……けど、痛いです……」

苦笑いしながら答えるクリュウ。少しでもシルフィードに負担を掛けさせたくないという想いが込められたその笑顔に、シルフィードは小さく微笑む。

「無理はするな。今は自分の事だけを考えていろ」

「は、はい……」

そう答えると、クリュウは静かに目を閉じた。眠いのではなくもう瞳を開けておくのもしんどいのだ。それほどまでに今の彼の体力は限界に達していた。

自分の横で苦しげに荒い息を繰り返すクリュウに、シルフィードは力なくため息した。

ドンドルマの時、守ってみせると豪語したのに結果は彼にこんな大怪我を負わせ、自分も火傷を負って満足には動けない状態。情けなくて言葉も出ない。

自分の不甲斐なさが彼にこんな大怪我を負わせた上に、今もこうして怪我で苦しむ彼を自分は助ける事ができない。今はただ、救助が来るのを待つしかない。できる事といえば、こうして背中をさすって少しでも彼を安堵させてあげる事ぐらいだ。

「すまない……」

気がつくと言葉が漏れていた。その小さく弱々しい声に、クリュウが目を開けた。その瞳が見たのは悔しそうに唇を噛む彼女の姿。

「……どうして……謝るんですか……？」

「――私は無力だ。君一人を守る事も助ける事もできない。無力な存在だ」

「……そんな事ないですよ……僕は……シルフィードさんがいてくれて……すごく嬉しいです……」
「いるだけでは、無意味ではないか」
「そんな事ありません……いてくれるだけで……十分なんです……」
その心からの声に、シルフィードは瞳を大きく見開く――刹那、その頬を一筋の涙が流れた。
「え？　えぇッ!?」
突如泣き出してしまったシルフィードにクリュウは慌てて起き上がり、傷口に激痛が走って悲鳴を上げる。
「だ、大丈夫か？」
「……な、なんとか……ッ！　それよりシルフィードさんこそ……ッ！」
「す、すまない。そんな風に言われたのは初めてだったから」
「……そ、そうなんですか？」
瞳に薄ら涙を浮かべながら見詰めるクリュウに、シルフィードは自嘲的な笑みを浮かべる。
「私が蒼銀の烈風と呼ばれている事はもう知っているだろう？　おかげで危険な依頼ばかり送られてきて、どれも私ならやれて当然という雰囲気だった。失敗すれば責められ、存在も否定される。周りには舐められ、理不尽な暴力を受けた事もあった――生きる為には、機械のように振り回されてでも勝つしかなかった」
「そんな……」
「――だから、君の優しさが、私には何にも代えがたいように嬉しいのだ」
そう言うシルフィードは小さく微笑んでいた。いつもクールで鋭い眼光をする彼女のその笑顔はとても優しげで、きれいだった。
有名になればなるほど個人の自由は失われていく。彼女はそんな自由の奪われた世界をずっと生きてきたのだ。小さい頃から、ずっと……
サクラも、護衛依頼は絶対に断らないし放棄しない隻眼の人形姫と呼ばれていたので、彼女を雇ってわざわざ危険なコースを選ぶ依頼者

は少なくなかったらしく、そのたびに彼女は自らの体に傷を負いながら必死に護衛したという話を聞いた事があった。それを聞いた時、クリュウは激怒した。

フィーリアも同じようにわざと危険な依頼に投入された事が何度もあったらしい。彼女は笑顔で今ではいい思い出だと語っていたが、その時のクリュウは怒りで頭がどうにかなりそうだった。

ハンターを、サクラやフィーリアを道具としか見ていない輩がいる事が許せなかった。

そして、シルフィードもまたその犠牲者であった。

クリュウは知らない。

モンスターを討伐して、村人総出で感謝してくれるという恵まれた経験をしている彼には、そんな三人の気持ちはわからない――でも、許せなかった。

「……シルフィードさん」

「何だ？」

「……僕は……シルフィードさんの事を……そんな風には思ってません……」

「クリュウ……」

「――僕は、シルフィードさんを大切な仲間って思ってますから」

シルフィードは小さく微笑むと「ありがとう」と言って彼の若葉色の髪をそっと撫でた。その柔らかな感触に、クリュウも小さく微笑むとそっと瞳を閉じた。

血にまみれるクリュウを見て、シルフィードは立て掛けてある煌剣リオレウスの柄を握った。今モンスターに襲われた場合、迎撃ができるのは自分だけ――彼を守れるのは自分だけ。その想いが彼女を奮い立たせる。

視界の向こう、木々の間で何かが動いた気配がした。柄を握る手にも力が入る。

「……シルフィードさん？」

「クリュウはここにいて」

「し、シルフィードさん……ッ！」

クリュウは止めようとするがシルフィードはその制止を振り切って煌剣リオレウスを構えたまま洞窟の外に出てしまう。彼女は現在全く防具を着ていない。ランポスの一撃でも喰らえば大怪我になってしまう。

――それでも、彼を守る為に戦わなくてはならないのだ。

近づいてくる気配。シルフィードは煌剣リオレウスを構える。狙う木々の間から迫る何か。グッと柄を握り、迎え撃つ。そして――

「ふぇッ!?」

「……」

木々の間から現れたのはランポスなどのモンスターではなく――逸れていたフィーリアとサクラであった。

「無事だったのか」

シルフィードは安堵の息を漏らすと煌剣リオレウスを下ろした。そんな彼女を見てフィーリアに笑顔が浮かぶ。

「シルフィード様、ご無事だったんですねッ！」

「あぁ、何とかな。だがブレスの直撃を受けてこの様だよ」

「す、すみません……」

「気にするな。こうして全員無事だったのだからな」

「……全員？」

サクラの隻眼が大きく見開かれた。その彼女の視線に、シルフィードは小さく微笑み背後の洞窟を指差す。

「怪我しているが、クリュウも無事にあの洞窟の中にいるぞ」

その言葉に、フィーリアとサクラの顔に満面の笑みが浮かんだ。フィーリアに至ってはボロボロと涙を流す始末。

「よ、良かったぁ……良かったですぅ……ッ！」

泣き崩れてしまうフィーリアの金色の柔らかな髪を、シルフィードはそっと撫でる。サクラも薄っすらと浮かんだ涙を拭い取る。二人とも、本当に心配していたのだ。

ふと、サクラは洞窟の傍で黄色い煙を上げる発炎筒に気づいた。

「……救護アイルーを呼ぶほど、危険な状態なの？」

フィーリアはその言葉にピクリと震え、今度は別の涙を流し始め

る。
「そ、そんなぁ……ッ！」
「大丈夫だ。確かにひどい怪我だが、命に別状はない。だが、私達ではどうしようもないからな。救護アイルーを呼んでいるのだ」
命に別状はないという彼女の言葉に、二人とも心から安堵した。そんな二人に小さく微笑むシルフィード。
「ここは私が見張っていよう。君達は早くクリュウに会いに行ってやってくれ。その方が彼も喜ぶ」
「はいッ！」
「……ありがとう」
二人は大喜びで洞窟の中に入って行った。そんな二人の後姿を見てシルフィードは小さく微笑むと発炎筒を見詰め救護アイルーの到着を待ち続ける。
一方洞窟の中に入った二人は奥で横になるクリュウを見つけ、今までずっと心を押し潰していた不安が一気に消えたのか、泣き出してしまった。
「く、クリュウしゃまぁ……ッ！」
「……良かった……ッ！」
二人は涙を流しながら彼の無事を喜ぶ。そんな二人の気配にクリュウはゆっくりと瞳を開く。そこには逸れてしまって心配していた二人の元気な姿があった。
「フィーリア……サクラ……？　二人とも……無事だったんだね……」
「クリュウ様は大丈夫ですかッ!?」
「……大丈夫って言いたいけど……ちょっと辛い……」
「……クリュウ。もうすぐ救護アイルーが来る。それまでの辛抱」
「うん……」
フィーリアはクリュウが生きていてくれた事が本当に嬉しかったが、同時に血まみれ彼の姿を見て心を痛めた。サクラも、血にまみれた彼の姿に隻眼を苦しげに細めた。だが、クリュウはそんな二人に小さく微笑む。

「二人こそ……怪我はない……？」
「私もサクラ様も全身に打撲などはありますが、大丈夫ですよ」
「そう、良かった……」
クリュウはそう言うと嬉しそうに微笑んだ。二人が無事だった事が本当に嬉しいのだ。
フィーリアとサクラもクリュウのその笑顔を見て少しだけ安堵できたのか、小さく微笑む。
数度お互いの状況を伝え合ったところで、サクラはクリュウを休ませようとフィーリアの手を引っ張って外へ出た。フィーリアはクリュウの傍にいたかったのだが、それでは彼にいらぬ気遣いをさせてしまうとサクラが言うと、渋々といった感じで従った。
外へ出ると、シルフィードが岩に腰掛けて辺りを警戒していた。
「シルフィード様」
フィーリアが声を掛けると、シルフィードが振り返る。
「クリュウの様子はどうだった？」
「……あまりいいとは言えませんね。救護アイルーはまだでしょうか？」
「そろそろだと思うが……」
シルフィードは黄色い煙を上げ続ける発炎筒を一瞥し、夕焼けに染まる空を見上げる。先程までは空一面茜色だったが、今では藍色の空も徐々に広がり星々が煌き始めている。
「……一分以内に来なきゃ斬り殺す」
「そんな無茶な」
「――いや、どうやら命拾いしたようだな」
「え？」
シルフィードの言葉に二人は彼女の視線を追う。すると、木々の間を何か小さなものがこちらに向かって走って来ていた。
人一人寝れるくらいの大きさの荷車を二足歩行をした二匹のネコが引っ張っている――救護アイルーだ。
救護アイルーはシルフィード達に近付くと荷車を急停止させた。
「遅れてごめんニャッ！　怪我人はどこニャッ!?」

職務に忠実なアイルーが早速遅れた事に関して頭を下げて謝る。その必死に働くかわいらしい姿を見ては怒るなんて事は――
「……崖の上からの紐なしバンジーと息止め潜水二四時間、どちらか好きな方を選べ」
「放してニャァッ！　どっちもバッドエンドルートニャァッ！」
無表情でアイルーの顔面を片手で握り締め持ち上げるサクラから提示されたのは理不尽な死刑判決。アイルーは必死になって謝るが、サクラは表情こそは無表情だがブチ切れ寸前であった。
「も、申し訳ないニャ。リオレウスが飛び回っててこっちも動きを制限されて到着が遅れてしまったニャ。本当にすまないニャ……」
もう一匹のアイルーが改めて頭を下げて謝った。
ハンターを助ける事が役目の救護アイルー。だが彼らだって死にたくはない。ハンターを助けたい気持ちはあるが、自分の命だって大切だ。そもそもリオレウスが飛び回っている状況でここまでがんばって来てくれただけでも感謝しなければならな――
「……罠に誘き寄せる生肉が不足してる」
「放してニャァッ！　アイルーは食べてもおいしくないニャァッ！」
「……大丈夫。食べるのはリオレウスだから」
「全然大丈夫じゃないニャアアアァァァッ！」
両方の手で一匹ずつアイルーの顔面を握り締めながら淡々と死刑方法を述べるサクラ。その隻眼は本気（マジ）だ。
このままだと本当に二匹を殺しかねないサクラを、フィーリアが慌てて止める。シルフィードは疲れたように小さくため息した。
「それで、怪我人はどこにいるニャ？」
サクラから解放されたアイルー達はすぐに職務に戻る。シルフィードは「こっちだ」と言ってアイルー達を連れて洞窟に入った。サクラとフィーリアもそれに続く。
「クリュウ。救護アイルーが来たぞ」
シルフィードの声にクリュウは薄っすらと瞳を開いた。するとそこにはフィーリア、サクラ、シルフィードの他に二匹のアイルーがいた。アイルー達はすぐにクリュウの傷口を確認する。

「ウニャ……、傷はそれほど深くはないニャ。これならオイラ達の技術があれば問題ないニャ」
「ほ、本当ですかッ!?」
「ニャハハ。オイラ達アイルー族の医療術ニャらこれくらい余裕ニャ」
「……だったらさっさとしろ。殺すわよ」
「ニャアアアアアッ！　わかったニャッ！　だから剥ぎ取りナイフは腰に戻してニャッ！」
　サクラの脅迫に耐えながら慌ててクリュウを運ぼうとするが、それはシルフィードがやってくれた。彼女の肩を借りて何とか立ち上がったクリュウはそのまま洞窟の外に置いてある荷車に載せられる。ずいぶん貧相な荷車に見えるが、詳しい事は不明だがどうやらアイルー族の技術が満載されている優れ物らしい――見た目は完全に貧相な荷車にしか見えないが。
「じゃあ、クリュウを頼む。治療を終えたら拠点（ベースキャンプ）のベッドで寝かしておいてくれ」
「わかったニャッ！」
「クリュウ様をお願いします。お気をつけて」
「任せるニャッ！」
「……もしもの時は――覚悟しなさい」
「「命を懸けてやらせていただきますニャァッ！」」
　救護アイルー達はそんな悲鳴のような声を上げながら全速力で荷車を引いて森の中に消えて行く。その小さな背中を見詰めるサクラは小さく「……お願い」とつぶやき、彼が元気になる事を切に願っていた。
　そして、アイルー達の姿が完全に消えるとシルフィードは洞窟の中に戻る。そして脱いでいた防具を着直し、煌剣リオレウスを背中に挿す。
「私達も戻るぞ。クリュウの状態を見て依頼を続けるか棄権するかを決めよう。もし続けるにしても今日はもう遅い。明日にするべきだ」
「そうですね。早く無事なクリュウ様とお会いしたいですし」

「……（コクリ）」
依頼を続行するにしても棄権するにしてもとりあえず一度一拠点（ベースキャンプ）に戻る事を決めた三人はリオレウスを警戒しながら一路一拠点（ベースキャンプ）を目指して歩き始めた。
三人の戦姫を包み込むような空はいつに間にかすっかり藍色に染まり、星々が神々しく煌き、月が柔らかな淡い光を静かに照らし上げていた。

第７０話　瑠璃色の夜空の下で

フィーリア、サクラ、シルフィードの三人は一度山頂付近に行き荷車を拾ってから拠点（ベースキャンプ）に向かった。幸いリオレウスと出会う事はなく三人は無事に拠点（ベースキャンプ）に到着した。

拠点（ベースキャンプ）には先に到着していた救護アイルー達が帰り支度を整えていた。三人と視線が合うと二匹はニッコリと微笑む。

「……笑うなんて不謹慎」

「ニャアアアアアッ！」

早速二匹の頭を鷲掴みにするサクラにシルフィードは苦笑いし、フィーリアは慌てて二匹を解放する。この二匹が対人恐怖症にならなければいいのだが……

「それで、クリュウの具合はどうだ？」

やっと解放された二匹にシルフィードが問うと、涙目で二匹は天幕（テント）を指差した。

「治療は成功ニャ。あとはぐっすり眠れば明日にはほとんど問題なく動けるようになるニャ」

「そうか……、だそうだ。良かったな」

そう言って振り向くと、フィーリアが涙をボロボロと流しながらクリュウの無事を喜んでいた。見た感じ最も彼の無事を心配していたのは彼女だ。無事だと知って、涙が止まらない。

「あ、ありがとうございます……ッ！」

泣きながら感謝するフィーリアにアイルー達もニッコリと微笑んだ。こうして感謝される事が、彼らにとって最高の報酬なのだ――まぁ、きっちり報酬金はもらうのだが。

「あとこれ、仲間が森の中で見つけた物ニャ」

そう言って彼がシルフィードに手渡したのは爆発で吹き飛ばされて行方知れずとなっていたクリュウのバサルヘルムであった。

「すまない。助かったよ」

「良かったニャ」

シルフィードに感謝されて嬉しそうに笑うアイルー達。そんな二

匹にそっとサクラが背後から近寄った。
「……ねぇ」
「ニャァッ!?」
その恐怖の声に二匹はビクリと震える。また何か死刑判決を受けるのかと恐る恐る振り返る。と、そんな二匹の頭をサクラはそっと撫でた。驚く二匹が見たのは、彼女の柔らかな隻眼だ。
「……ありがとう」
「ウニャ……、どういたしましてニャ」
「あ、あんたも怪我はするニャよ」
「……わかった」
サクラと二匹のアイルーは固い握手を交わす。その光景にフィーリアは小さく微笑んだ。シルフィードは背を向けて天幕（テント）に近づくと背中に下げていた煌剣リオレウスを下ろして立て掛けた。
「そうニャ。あんた怪我してるみたいだからこれをやるニャ。ギルドには秘密ニャよ」
そう言ってアイルーはどこからか小箱を取り出すとサクラに手渡した。
「……これは？」
「アイルー族の技術で作られた万能薬ニャ。傷も打撲も火傷もこれで吹っ飛ぶニャ」
「……いいの？」
「秘密ニャよ。その代わり、リオレウスを倒してほしいニャ。オイラ達の住処(すみか)もアイツの攻撃をいつ受けるかわからないのニャ。オイラ達はともかく、子供達を助けてほしいニャ！」
リオレウスが現れた事によって困るのは何も人間だけではない。彼らのようなアイルーなどの他の生き物にも危害が加わってしまう。
リオレウスを倒すというのは、彼らを助ける事にもなるのだ。
アイルーのクリッとした真剣な瞳を見詰め、サクラは小さくうなずいた。その隻眼は真っ直ぐと前だけを捉えている。
「……安心して。私達が必ず倒すから」
「頼むニャッ！　ハンターのお嬢さんッ！」

「信じてるニャよッ！」
救護アイルーは三人に頭を下げると荷車を掴んで走り出す。その小さな背中をサクラは小さく手を振って見送った。
救護アイルーがいなくなると三人は早速アイルーに貰った万能薬をそれぞれの傷や打撲、火傷などに塗った。これで明日には全員が全快しているだろう。それを終えるとシルフィードは焚火の用意に取り掛かる。フィーリアとサクラはすぐさま天幕（テント）の中に入ってクリュウを見に行った。
天幕（テント）の中に一つだけあるベッドの上で、クリュウは静かに寝息を立てていた。どうやら頭を打っていたらしく頭にも包帯が巻かれ毛布の間から見える手などにも包帯が巻かれていて痛々しい姿だが、彼の寝顔を見る限り大丈夫らしい。
「クリュウ様の寝顔……」
「……（ポッ）」
二人の恋姫は愛しの彼の寝顔にすっかり釘付け状態。そこまでは良かったのだが突如サクラがクリュウのベッドに潜り込もうとするという暴挙を決行。もちろんこれに対してフィーリアが激怒して恒例のケンカが始まってしまった。そんな騒がしい二人にシルフィードはため息する。
「少し静かにしろ。クリュウが起きてしまうだろうが」
その言葉に二人は顔を見合わせて慌てて離れた。そしてクリュウが起きていない事を確認して安堵の息を漏らした。そんな二人を見詰めるシルフィードは小さく口元に笑みを浮かべる。
「そろそろ夕食にしよう。手伝ってくれ」
「は、はいッ」
「……（コクリ）」
三人の戦姫は早速夕食の準備に入った。エレナほどではないがフィーリアも結構料理上手で、サクラもそれなりに料理はできたので一時間もしないうちにおいしそうな料理が並んだ。今日のメインはモス肉と山菜が入った山の幸鍋だ。
――その中に一つだけある真っ黒な物体。これを料理と呼ぶには

ちょっと勇気がいるだろう、そんな品だ。
「え、えっとぉ……シルフィード様？　これは何なのでしょうか？」
「……一応、コゲ肉」
「えっとぉ……、コゲ肉って確か外は真っ黒中は焼き過ぎでカチカチというイメージがあるんですが……」
「……すごい。中まで全部炭化してる」
　料理上手な二人の哀れむような視線に、シルフィードはいつになく頬を赤らめて恥ずかしそうに頬を掻いた。
「すまない。料理は苦手なのだ」
「苦手にしてもこれはちょっと……」
「……ひどい」
「返す言葉もない」
　完璧超人シルフィードの意外な弱点に驚きつつも、フィーリアはふと気になった事を訊いてみた。
「このような状態で、今までどうやってハンターをして来たのですか？」
「街では酒場で料理を食べ、狩場では買い込んだこんがり肉などを食べていたのだが――君達を見ていると自分が情けなく思えてきたよ」
　そう言って苦笑いするシルフィード。そんな彼女にフィーリアはサラダの盛り合わせを差し出す。
「ちゃんと栄養バランスを考えて食生活は管理してください。という訳で、シルフィード様にはこのサラダを食べてもらいます」
「いや、私は野菜が苦手で――」
「ダメです。食べてください」
　フィーリアはそう言って有無を言わせずシルフィードにサラダを押し付けた。意外とこういう所では頑固なフィーリア。サクラが逆らっても無駄だと言いたげな瞳を向けると、シルフィードは苦笑いしながら諦めた。
　そんなやり取りの後、夕食が開始された。
　フィーリアが作った料理は全て美味で、初めて食べるシルフィードも「狩場でこんなおいしい料理を食べるのは初めてだ」と言って絶賛

した。苦手だったサラダも最初こそは渋っていたがフィーリアに無理やり食べさせられると意外とおいしいのに驚き、結果全部食べてしまった。

軽い雑談を交わしながら続いた食事は十分ほどで終わった。後片付けも行い、三人は再び焚火を囲むようにして座る。

「不思議だ。君のサラダは全然嫌じゃなかったよ」

「えへへ、嬉しいです。これはエレナ様というクリュウ様の幼なじみの方に教えてもらった調理法なんです」

「クリュウの幼なじみ？　彼の村にいるのか？」

「はい。他にもたくさん、クリュウ様の大事な方が村にはいらっしゃいます。もちろん私やサクラ様にとっても、特別な存在です――だから、守りたいんです」

イージス村はクリュウの故郷であると同時に二人にとっても大切な、故郷のような存在だ。守りたい、大切な居場所。

二人の濁りのない真っ直ぐな瞳に、シルフィードは「そうか……」と小さく返した。

嬉しそうに村の話をする彼女を見て、シルフィードは彼女の事を羨ましく思った。自分には守るべき村やものは存在しない。自分が何の為に戦っているのか、いまだに見つかってはいない。

昔は故郷の小さな村を守る事に全力を注ぎ、皆に感謝され、それを誇りに戦っていた。だが、そんな自分の故郷は――

「どうしたんですか？」

一人、昔の記憶に浸っているとフィーリアが心配そうに顔を覗き込んできた。そのクリッとした瞳は真っ直ぐで、心の底から心配されているのだとわかる。

「何でもないさ。それより今日は明日に備えてもう寝た方がいい。怪我の事もあるからな」

そう言ってシルフィードは立ち上がると二人に背を向けて離れ、天幕（テント）に立て掛けてある煌剣リオレウスの柄を握って引き抜いた。道具袋（ポーチ）からは砥石を取り出し、すっかり刃こぼれしていた刃をきれいに整える。そんな彼女の背中を一瞥し、フィーリアは

サクラと顔を見合わせる。
「ではサクラ様、明日に備えてそろそろ就寝しましょうか」
「……私はいい。起きてる」
「え？　どうしてですか？」
「……クリュウが心配だから。私が寝ずに看護する」
「だ、ダメですよ！　サクラ様は怪我をされてるんですから！　そういう事は私に任せてください！　サクラ様はお休みになるべきです！」
「……あなたには関係ない」
「関係大ありですッ！」
今にも再び言い争いを始めそうな二人に、シルフィードは小さく苦笑いする。
――これがリオレウスと死闘を繰り広げていたハンターだと思うと、すっかり緊張感というものも緩んでしまう。
だが、歴戦のハンターである二人もさすがに疲れているのが見て取れた。そんな二人にシルフィードは小さく口元に笑みを浮かべた。
「クリュウの事は私に任せて、君達はもう寝なさい」
「え？　そ、そういう訳には……ッ！」
「明日もリオレウスとの戦いだ。疲労を残されて戦われては困る」
シルフィードの少し強い言い方にフィーリアは黙ってしまった。そんな彼女とサクラの肩をシルフィードはそっと叩いた。
「いいから寝ろ。こういう時こそ、年長者に任せておけ」
「は、はい……」
「……（コクリ）」
やはりかなり疲れていたのか、二人は素直に従った。歴戦のハンターである二人でもさすがにリオレウスとの死闘は相当な負担になるのだ。二人はそれぞれシルフィードに挨拶を済ませると足早に天幕（テント）の中に消えた。そんな二人にシルフィードは小さく、
「ゆっくり休め」
そう言い、パチパチと弾ける音を立てながら燃える焚火の近くに腰掛けると、その揺らめく炎を見詰める。

静かな木々の中、炎に焼かれて弾ける枝の音だけが小さく響き渡っていた……

眠らない街と謳われるドンドルマであっても最も活気が小さくなる、世界の全てが寝静まったかのような時間である真夜中。そんな全てが眠る時に、クリュウは目覚めた。

そっと目を開けると、そこは見慣れぬ天井。それが拠点（ベースキャンプ）の天幕（テント）の天井だとわかるのに少々の時間を要した。

体をゆっくりと起こすとバサルシリーズは脱がされ、今はインナーと包帯だけという姿に気づいた。軽く包帯に手を当ててみるが、痛みはなかった。

「助かったのかな……？」

リオレウスの毒爪の直撃を受けてよく無事だったと自分でも驚く。リオレウスの凶悪な顔を思い出すと今でも体が震えてしまう。まだ恐怖心が残っているのだ。

もう夜中だが、すっかり目が覚めてしまったクリュウは起きようと視線を横に向ける。と、そこには毛布に包まってフィーリアとサクラが眠っていた。クリュウが唯一のベッドを使っていたので、彼女達はどちらも地面で眠っている。

「悪い事しちゃったな……」

クリュウはベッドから降りると自分の荷物から上着を取り出して着込んだ。そして静かに寝息を立てている二人を起こさないようにそっと外に出る。思った以上に外気は寒い。考えてみれば季節はもう冬に限りなく近い秋だ。あと一ヶ月ほどでイルファ雪山は全面立ち入り禁止になるだろう。季節が変わるのは早いものだ。

天井の木々の葉の間から差し込む月の光だけが薄く照らし上げる、すっかり生命が寝静まった空間。起きているのは自分一人。無音の世界。そんな世界に、自分の他に起きている少女――シルフィードがいた。

パチパチと小さな音を立てて燃える焚火に当たりながら本を読んでいるシルフィード。どこか邪魔しちゃいけないような雰囲気にク

リュウはそそくさと天幕（テント）に戻る。と、
「誰だ？」
　その第三者に対してのみ掛けられる声に、クリュウはビクッと震えて驚く。熟練のハンターであるシルフィードの索敵能力は常人のそれをはるかに上回っているのだ。
「あ、えっと……」
　クリュウはそっと顔を出す。すると、こちらを見詰める彼女と目が合った。その瞬間、シルフィードの表情に小さな笑みが浮かぶ。
「……なんだクリュウか。怪我の具合はどうだ？」
「あ、はい。もう大丈夫です」
「そうか、良かった――そうだ、腹減ってないか？　夕飯食べてないだろう？」
　そう問われた途端、お腹が小さく鳴ってしまいクリュウは頬を赤らめて苦笑いした。どうやらお腹はかなり素直らしい。
「少しだけ……」
「そうか。夕食の鍋が残っているからな。食べるなら温めるが」
「あ、ありがとうございます」
　シルフィードは本を閉じて横に置くと、焚火の横に大きな葉で蓋をした鍋を取って火にかけた。これはフィーリアがクリュウの分と残しておいたものだが、どうやら早速役に立ったらしい。
　火に安全に鍋を掛け、ふと顔を上げるとクリュウが先程と変わらぬ位置でこちらを見詰めていた。
「どうした？　こっちへ来い」
「は、はい」
　クリュウは小走りで近づくと、シルフィードの対面に腰掛けた。肌寒い気温も火の周りだけは心地良いくらいに温かい。
「今日は冷え込むな」
「そうですね。冬が近いですから」
「寒いのは苦手だ」
「そうなんですか？　じゃあこれから大変ですね」
「冬は冬眠でもしてるか」

「あははは、それは名案ですね」
おかしそうに笑うクリュウにシルフィードは口元に小さく笑みを浮かべると火に数本枝を加える。その途端、パチンと小さな音を立てて火が弾ける。
それからしばし二人の間に会話はなかった。ただ火に炙（あぶ）られた枝が弾ける音だけが響くだけ。
お互いに気まずさがあった。クリュウは自分のせいで全員を危険に晒した事。シルフィードは彼を守り切れず怪我をさせてしまった事。それぞれの気まずさが、沈黙として二人の間に見えない壁を作っていた。
それから数分後、火に掛けられて温まった鍋からいい匂いが漂い始めた。
「いい匂い」
「そうだな」
シルフィードは蓋代わりに被せられている葉を取った。途端にさらに強いおいしそうな匂いと水蒸気が解放されて噴き出た。クリュウは鍋の中身を覗き込み嬉しそうに微笑む。
「おいしそう……」
「美味だったぞ。まぁ、フィーリアと付き合いの長い君なら当然わかっているだろうが」
「フィーリアの料理はおいしいですよね」
「食材を切ったのはサクラだ。まったく、二人揃っていい腕をしているよ」
「そっか、これサクラが切ったんだ」
じっと鍋を見詰めるクリュウ。そんな彼を見て、シルフィードは小さく笑みを浮かべた。
嬉しそうに喜ぶ彼を見て、フィーリアだけでなくサクラもがんばったと伝えたかった。だからつい言ってしまった。こんな事初めてだ。
「シルフィードさんも手伝ったんですか？」
クリュウはふと気になってみて問う。が、それに対してシルフィードは小さく苦笑いした。その質問は愚問としか言いようがない事は

彼は知らないのだ。
「一応こんがり肉を作ろうとしたのだが……コゲ肉の究極形態が完成してしまったよ」
「何ですか？　コゲ肉の究極形態って」
「中まで見事に炭化した食べたら間違いなく腹を壊すような一種の兵器だ」
「……どうやったらそこまで見事なコゲ肉ができるんですか？」
　さすがのクリュウも苦笑いしかできない。それもそのはず。ハンター養成所ではまず最初に生肉の調達、そして調理が基本修行の中にあるのだ。肉が焼けないなどハンターとしてはかなりの致命傷だ。っていうか、卒業不可能なはずだが……
「シルフィードさんって、料理苦手なんですか？」
「苦手というレベルではないな。いわゆる混ぜるな危険って警告ものさ」
　そう言って苦笑いするシルフィードだが、気にしていない訳ではない。むしろかなり気にしている。才色兼備と呼ばれる素晴らしい女性であっても、何かしら意外な弱点があるものだ。彼女の場合は料理がそれに当てはまるらしい。
「しかし、さすがにいつまでも肉が焼けないという訳にはいかんな……」
　どうしたもんかとため息するシルフィード。と、そんな落ち込む彼女にクリュウが慌てて手を差し伸べる。
「だ、大丈夫ですよ！　シルフィードさんならきっとすぐ上達しますって！　僕も協力しますから、がんばりましょうよ！」
　笑顔でそう力強く言うクリュウに、シルフィードは小さく笑みを浮かべた。
「……優しいのだな。クリュウは」
「そんな事ありませんよ。僕なんてまだまだ」
「そう謙遜するな。君は十分すばらしい人間だ――っと、そんな事を言っている間にできたようだな」
　シルフィードは話を切り上げると熱々に温まった鍋におたまを入

れて適量をお椀によそう。辺りにはすっかりいい匂いが漂っている。
「まずはこれくらいでいいか？」
「あ、はい。ありがとうございます」
　シルフィードは湯気を上げるお椀を箸（はし）と共にクリュウに手渡す。が、彼の指がお椀に触れる寸前、シルフィードは小さく腕を引いた。
「シルフィードさん？」
「怪我はもう大丈夫そうだが、一人で食べられるか？」
「え？　全然問題ないですけど……何でですか？」
「いや、食べられないのであれば私が食べさせてやろうかと――」
「全然大丈夫ですッ！　そのようなお手数は必要ありませんッ！」
　クリュウは力強くきっぱりと断言した。普段は優柔不断な彼だが、こういう時にはすさまじい即決力を発揮するのだ。あまり意味はないのだが。
「そ、そうか。なら受け取れ」
　あまりにクリュウが焦りながら言うのでシルフィードは不思議に思って首を傾げるが、彼はそんな彼女の手からお椀を受け取り安堵の息を漏らして食事を開始する。
　とりあえず息を数回吹き掛けてから一口。
「熱ッ……あ、でもおいしい」
　いつもいつも狩場ではこんな感じの料理を食べているのだが、改めてフィーリアの料理はおいしいと思った。
「だろ？　まさか狩場でこんな豪華な食事にありつけるとは思ってもみなかった」
「シルフィードさんはどんな食事だったんですか？」
「うん？　買っておいたこんがり肉とかを食べてたな。温めると必ず黒焦げになるからそのままで」
「……苦労してますね、色々と」
「言うな。負けた気がするから」
　そんな彼女の言葉にクリュウは苦笑いすると改めて息でしっかりと冷ましてから汁をすする。味はもちろん美味。体の底から温まる、

肌寒い今日みたいな日には最適だ。
　おいしそうに汁をすするクリュウ。そんな彼を見詰めるシルフィードの口元には小さな笑みが浮かんでいた。その笑みに気づいたクリュウは首を傾げる。
「何ですか？　僕の食べ方が変ですか？」
「あ、いや違う。すまない」
「別に構いませんが、理由がすごく気になります」
　クリュウがそう言うと、シルフィードは突然天を見上げた。木々の枝のせいでほとんど空は見えないが、隙間からは星の瞬（またた）きが美しく輝いているのが見える。
「シルフィードさん？」
「……ちょっと昔話をしたくなった。聞いてくれるか？」
「へ？　あ、別に構いませんが」
　クリュウは不思議そうに彼女を見詰める。シルフィードはそんな彼の言葉に小さく礼を言うとそっと瞳を閉じた。まるで、昔の光景を思い出しているかのようだ。
「昔……と言ってもつい五年ほど前の話だ。私はその頃かけだしのハンターとして日々様々な依頼を受けていた。子供だったせいか、狩りが楽しくて仕方がなかったよ。その頃の私は故郷の村に拠点を置いて活動していた。狩りに出てモンスターを狩れば村の人達が喜んでくれた。今思えば、その感謝の言葉や笑顔がほしくて、狩りが楽しかったのかもしれん」
　その気持ち、何となくだがクリュウにもわかる気がした。彼も依頼が成功すれば村の人みんなで祝ってくれる。そんな嬉しさも、彼が戦う理由の一つでもあるのだ。
「私の家族は父と母、そして私と弟で成り立っていた。父は世間でも名の通ったハンター。母も以前はハンターで父の相棒だったらしいが、結婚してからは引退して普通の主婦になった。二人とも優しくて笑顔の絶えない、大好きな両親だった。弟は昔から無愛想な私と違って喜怒哀楽の多い元気で活発な少年だった。本当に、いい子だったよ」

自分の過去を話しているシルフィード。そんな彼女の言葉を真剣に聞くクリュウだったが、その時すでにその違和感に気づいていた――彼女が語る事すべてに過去形が付いている。その意味がわかるのに、そんなに時間は掛からなかった。

――自分と、似ている気がした……

「シルフィードさん……」

「毎日が楽しくてな。皆の笑顔を守りたいと思った。ドンドルマみたいな大都市など興味はない。自分はただこの村を、人々を守りたいを思っていた――だが、それは突然終わりを告げた」

シルフィードは辛そうに眉を歪めて唇をキュッと噛んだ。その表情をクリュウは知っている。自分もそんな表情をする時がある。

「……それは外部からの依頼で一週間ほど村を空けていた時に起きた。村は突如現れたリオレウスとリオレイアの番（つが）いに襲われ――壊滅した。生存者はゼロ。父も母も、弟も、友や親しかった村人達も皆殺された。私がそれを知って慌てて帰った時には、無残な光景しか残されていなかった。焼け崩れた家、踏み潰された畑――見知った顔の死体。それはもう地獄のような景色だったよ。私は、その場で泣き崩れた」

シルフィードはそこまで言うと、しばし黙ってうつむいた。小刻みに震えるその肩を見て、クリュウは声をかける事はなく黙っていた。こういう時は何もしない方がいい。自分自身の経験からそう思い、何もしなかった。

パチン、と火に焙られていた木の枝が弾ける音が響いた。

「……後の事は、よく覚えていない。周辺の村や街から救護隊や支援隊が来たが、そんなものは必要なかった。そうだろ？　助けるべき人々はすでに全滅しているんだから。助ける事も復興の手伝いをする事もできない。簡単な調査だけを終えて、それらは全て帰ったよ」

「仕方が、ないですよね」

「そうだ。仕方がないのだ。別に私は彼らを薄情だなどと責めたりなどしていない。むしろ焼け焦げた家などから村の人達の遺体を掘り出して丁重に葬ってくれた事を心から感謝している」

「……村を襲ったリオレウスとリオレイアは？」
「後日、周辺の村などが私の村の仇と合同でギルドに依頼を発し、それを受けたハンター達によって討伐されたそうだ」
　シルフィードは新しい枝を数本束のまま火にくべた。火はより一層強く燃え上がる。まるで、彼女の魂のように。
「私は守るべきものを一挙に全て失った。おかげで立ち直るのに数ヶ月かかってしまった。立ち直る前は村を守れなかった自分を責めたが、いつまでも落ち込んでいられんしな。立ち直った後は私の村のような犠牲を少しでも喰い止める為に戦った。ただそれだけを目指して戦い、勝ち続けていたら、いつの間にか蒼銀の烈風などと呼ばれるようになっていた。私は二つ名をもらえるような大した人間（ハンター）ではないのだがな」
　そう言って自嘲気味に笑うシルフィード。だが、クリュウは首を横に振る。そんな事ない。彼女は立派なハンターだ。まだ出会って短いが、それだけは絶対自信を持って言える。
「シルフィードさんは立派な方です。もっと自分に自信を持ってください」
　だが、クリュウのそんな励ましの言葉もシルフィードは首を横に振って否定する。
「私にそんな資格はない。私はただ犠牲を出さない為に戦ってきた。だがそれは単なる自己満足でしかない。誰の為でもない、自分の為さ。君のように何かを守る為に戦っているのではない。そんな私を認める必要はない」
「シルフィードさん……」
　自分も彼女のように辛い過去がある。追い続けていた父の背中を突然失ったあの時の事は、今でもはっきりと覚えている。
　彼女の瞳には、自分と似た悲しみの光がある気がした。大切なものを失い、心に穴が開いたようなあの瞳だ。
「私は君がうらやましい。守るべきものがあり、頼れる仲間がいて、目的がある。私には、何一つないものを、君は持っている」
「そんな事ありませんよ。シルフィードさんだって、きっとあるはず

です。まだ見つからないだけで、きっと守るべきものも、頼れる仲間も、目的もきっと。それにシルフィードさんも僕にはないものをたくさん持ってるじゃないですか。僕だって、シルフィードさんがうらやましいです」
　クリュウの言葉に、シルフィードは一瞬だけ瞳を大きく開いたが、すぐにフッと小さく口元に笑みを浮かべて瞳を細める。
「……君は、どこか弟に似ているな」
　シルフィードの言葉に、クリュウはハッとする。彼女が言う弟とは、村が滅んだ時に亡くなったという彼女の弟。
「そう、なんですか？」
「あぁ、いつも真っ直ぐ前だけをキラキラとした希望に満ち溢れた瞳で見詰める、心優しい少年だった。さっきも言ったが、無愛想な私と違って本当に明るい自慢の弟だったさ。生きていれば、ちょうど君と同じくらいの歳になっていただろう」
　どこか嬉しそうに話すシルフィードを見て、クリュウは胸が苦しくなった。きっと、本当に大好きな弟だったのだろう。だからこそ、そんな彼を失った苦しみは計り知れない。
「……僕は、シルフィードさんの弟さんのような立派な人間じゃないですよ」
「そんな事はないさ。君は十分立派だよ。故郷の為に戦える、ハンターにとってこれ以上ない名誉な事を、君はやっているんだ。私は、ただその手助けをしているに過ぎない」
　シルフィードは小さくため息を吐くと、火の中に新しい枝を数本加える。揺らめく炎に照らし出されたその表情は、歴戦のハンターとは違う、一人の少女の悲しみを映し出していた。
「シルフィードさん……」
「すまない。食事時にするような話ではなかったな――忘れてくれ」
　そう言って、仕切り直すように笑みを浮かべるシルフィード。だが、その笑顔がどこか暗く見える事に、クリュウは気づいている。
　モンスターと共生するこの世界では、彼女のようにモンスターに襲われて両親や友人、故郷を亡くす者は数多く存在する。理不尽な自然

の暴力。人間はそれに立ち向かう為に武器を手にそれらの脅威と戦ってきた。それがハンターであり、自分達の職業だ。
だが、いくらハンターが大勢いても全てを守るなど到底できない。全てを守るなど、妄言にしか過ぎないのだ。だから人々は自分の守るものを守り、そしてその輪が大きくなって全体を守る事に繋がる。でもそれは表面的なものでしかない。どんなものにも穴はあり、その穴がある事によって、傷つく者が必ず存在する。彼女も、そして自分もその犠牲者の一人なのだ。
「……僕も、父さんをモンスターに殺されました」
沈黙の中突如放たれた彼の言葉に、シルフィードは下げていた視線を上げて彼を見る。その表情は自分の知らない、彼の悲痛な姿。
「そう、なのか？」
「父は村の周囲を守る守護神のような存在でした。強くて、優しくて、どんな小さな犠牲でも決して許さない、まるで正義感の塊のような人で、僕にとっては誇りに思える最高の父親でした。僕は小さい頃から、父さんのその広い背中を追い掛けて育ってきました。しかし、父さんはギルドからの依頼を受けて出て行き、そしてそのまま帰って来ませんでした」
「そんな事が……」
「でも、僕はそんな父さんに憧れてハンターを目指す事にしたんです。父さんのような立派なハンターになって、みんなを守れるような、誰も悲しまない、誰も傷つけない、そんなハンターになりたいんです――これが、僕の夢なんです。父さんから受け継いだ、大切な夢」
クリュウはそっと胸に手を当てた。
思えば、父の背中を見て自分はハンターを目指した。いつか父と一緒に狩りに出る。そんな小さな夢すらも胸に抱いて――でもそれは叶わなかった。
父の死。それが自分を変えたのだと思う。
父が命を懸けて守ったものを、今度は自分が守りたい。そう思うようになった。だからこそ単身ドンドルマに移り住んでハンター養成所に通った。そこで教官や師匠の下で猟友達と一緒に必死に訓練を

重ね、四年の歳月の末に卒業し、自分が守るべき村に戻った。
そして、新しい日々が始まったのだ。
エレナや村の人達との再会から始まり、フィーリアやサクラ、アシュア、ライザ、ラミィ、レミィ、ツバメなど多くの人達との出会いがあった。シルフィードとの出会いもまた、その中の大切な一つ。
「僕は、自分の大切なものを守れるような立派なハンターになりたいんです。だから、僕は村の脅威となる存在は全て排除します――リオレウスも、必ず倒して見せます」
彼の鋭く真剣なその瞳に、シルフィードはフッと小さく笑った。
初めて彼と出会った時、一匹狼として生きてきた自分が彼らを仲間にした理由。それは彼の瞳がきれいだったからだ。
自分の志を貫き、それに向かって不器用でも一生懸命前に進もうとしているその汚れのない瞳。自分はそれに惹かれた。だから、共に行こうなどと言ってしまったのだ。
後悔はしていない。むしろ感謝しているくらいだ。一匹狼として戦ってきた自分に、仲間という温かな存在を教えてくれた。実力主義のソードラントとは違う、互いを支え合う、心優しい――本当の仲間というものを。
――きっと彼は、強くなる。そう思った。彼の人を集める力は、いずれ大きな力となる。
孤独の中にはなかった、清々しい気持ち。まさか自分よりも年下で、どこか頼りなさげなこんな少年にそんな大切な事を教えられるとは、世の中わからないものだ。
小さく笑みを浮かべるシルフィード。そんな彼女に、クリュウはそっと手を伸ばした。その手を見て首を傾げながら顔を上げると、そこには木々の枝の合間から見える月光に照らされた、どこか幻想的な彼が真剣な瞳を自分に向けていた。
「――守ります」
「何？」
「僕、シルフィードさんも守ってみせます。今はまだ守られてばっかりの頼りない子供でも、いつかきっと、シルフィードさんだって守れ

るような立派なハンターになってみせます。だからその時は、今度は僕がシルフィードさんを守ってみせます」
――不覚にも、その時の彼の言葉や姿にドキリとした自分がいた。だが、それが一体何を意味しているのか、それはわからなかった。
ただ一つ言えるのは、胸がドキドキし熱くなった事。心地良い温かさが胸を優しく包むような感覚。こんな感覚初めてだ。
「シルフィードさん？　顔が赤いですけどどうしたんですか？」
その言葉にハッとし、慌てて頬を両手で押さえる。すると、火に当てられた表面だけの熱さじゃない、内側からの熱さが少し冷えた手のひらを温めた。
「な、何でもない」
「風邪ですか？　無理はなさらずもうお休みになった方が……」
「大丈夫だ。風邪ではない。だが確かにもう夜遅い。私は寝る事にするよ。君はどうする？」
「僕はとりあえずフィーリアが残してくれたこれを食べてから寝ます」
「そうか」
シルフィードはそう答えて横に置いてあった本を持って立ち上がると、彼に背を向けて天幕（テント）に向かって歩き出す。そんな彼女にクリュウは「温かい格好をして眠ってくださいね」と声を掛けた。すると、彼女はそこで立ち止った。
「なぁクリュウ」
背を向けたまま声を掛けてくるシルフィード。そんな彼女にクリュウは「はい、何でしょうか？」と返事する。
「君が私を守れるほどのハンターになるのは、まだ相当先だろうな」
「ま、まぁそうですよね」
苦笑いするクリュウ。そんな彼に、シルフィードは背を向けたまま言葉を続ける。
「それまでは、私のような経験の豊富な者に守ってもらえ。そうして、少しずつ経験を積み、そして強くなれ。君はきっと、いいハンターになれるさ」

「はい。ありがとうございます」
「――だが、君が言ったいずれ私を守ってくれるという言葉、楽しみに待っているぞ」
そう言って、シルフィードは天幕（テント）の中に消えた。彼女の背中が暗闇に消えるまで、クリュウは呆けていた。そして、彼女が言った最後の言葉を思い出し、小さく笑みを浮かべる。
「がんばらなくちゃッ！」
みんなを起こさないように小さな声で気合を入れ直すと、食事を再開する。心なしか、先程よりもおいしく感じられた。
十分ほどで食べ終えたクリュウは、天幕（テント）に戻った。するとフィーリアやサクラと同じようにシルフィードも地面に毛布に包まりながら横になって眠っていた。
またも迷惑を掛けてしまったなぁと思いつつ、クリュウはちょっぴり罪悪感を感じながらもベッドに入って眠った。
疲れがまだ残っていたのか、すぐに眠りについた。
月明かりに照らされる天幕（テント）の中、四人の少年少女達は次なる戦いに備えてしばし体を休めた。

第７１話　淡い恋風吹き荒れる狩場の朝

小鳥のさえずりが心地良い清々しい朝。
全ての生命が柔らかな朝日に照らされて目を覚ます中――いまだに毛布に包まって起きられない者が二名ほどいた。
「ほら、起きてフィーリア。朝だよ」
昨日ゆっくり休んだクリュウは朝にはすっかり回復し、四人の中で一番早く起床した。彼より少し遅れて起きたサクラが今は朝食の用意をしている。
クリュウは薪の準備をしたり火を起こしたりなどをした後、まだ寝ているフィーリアとシルフィードを起こそうと天幕（テント）に向かい、今こうしてフィーリアを起こしている所だ。
「フィーリア、朝だよ」
クリュウが声を掛けると、フィーリアは小さな声で「もう朝……？」と訊いてくる。
「そうだよ。ほら朝ごはんもうすぐできるから、起きて」
「……ふわぁい。わかったぁ……」
モソモソと布団の中で数度寝返りを打った後、フィーリアはのそりと起き上った。だがまだ完全には起きていないのか、細い目をしきりに袖で擦っている。寝る際は防具を脱ぐのが基本なので、今の彼女はインナー姿。所々ちょっとはだけているその無防備な姿は、クリュウには結構な威力を放つらしく、慌てて視線を逸らす。
「ほ、ほら！　早く起きる！」
その声に今までずっと目を擦って眠気と戦っていたフィーリアがようやく眠気に勝利したらしく、細かった瞳がスッと大きく開く。
「……ふわぁ、よく寝た」
大きなあくびを一発炸裂させ――そこでようやく彼の存在に気づいた。
「おはよう」
「く、クリュウ様ッ!?　お、おはようございますッ！」
ようやくいつものフィーリアに戻ったらしく、口調も彼女らしい敬

語になった。
　目覚めたらいきなりクリュウの顔。これはかなりの衝撃だったらしく、フィーリアは朝っぱらから顔を真っ赤にしてうろたえてしまう。
「み、見ましたかッ!?」
「な、何を？」
「……その、……寝顔、とか……」
「え？　う、うん」
　その返答に、フィーリアは恥ずかしさのあまり両手で真っ赤な顔を覆い隠してしまう。彼女の人生の中でも最高クラスに位置づけられる失態だ。
「……うぅ、私もうお嫁に行けません……」
「な、何でッ!?」
　フィーリアの突然の仰天発言にクリュウは慌てる。一体何がどうなったらそういう事になるのか、彼はまるでわかっていないのだ。
「寝顔を許すのは契りを結んだ殿方だけです！　そ、それなのに……ッ！」
　もう恥ずかしくて顔も上げられないフィーリア。
　一方フィーリアの乙女主張に対しクリュウは首を傾げるばかり。まるでもって全然理解していない。そりゃそうだろう。小さい頃はエレナと一緒に寝たりしていたので女の子の寝顔なんて珍しくもないような人生を歩んできた彼にとって、寝顔とはそんなに重要な事には思えないのだ。
「な、何かよくわかんないけど、ごめん……」
　ともかく悪いのは自分。それはわかっているクリュウは申し訳なさそうに謝った。すると、そんな彼をフィーリアは上目遣いで見詰める。口を小さく開いては閉じ、また開いては閉じと何かを言いたそうだが、勇気が出ないのか声にはならない。
　だが、ついに意を決して言葉にして彼に放つ。
「……で、できればその……私はクリュウ様と契りを結びたいのですが……」

つぶやくような小さな声での、彼女の人生の中で最大級に勇気を振り絞った全力告白。
フィーリアは恥ずかしまくりながらも心の中でガッツポーズした。そして、淡い期待を抱きつつ、彼の返事を待つ。
そんな彼女の想いなど全く気付かないクリュウは、
「え？　今何か言った？」
――聞いていなかった。
まぁ、彼女の声がすさまじく小さかったので聞こえなかったのも仕方がない事かもしれないが、フィーリアのショックはすさまじく……
「……もうお嫁に行けません」
「いや、そもそも寝顔云々以前に僕はもっとヤバイもの見ちゃってるし。現に今だって」
そこまで言ってクリュウは突然頬を赤らめてスッと視線を逸らした。そんな彼の不自然な行動にふと自分の格好を確認し――絶句する。
「えっと……とりあえず服を正してもらえると嬉しいんだけど」
追撃のように放たれたクリュウの発言に、フィーリアは顔を真っ赤にして悲鳴を上げる。
「キャアアアアアッ！」
「ご、ごめんッ！」
フィーリアは急いで毛布を被り、クリュウも彼女に背を向ける。とそこへ今の悲鳴を聞いて何事かとサクラがやって来た。そして、二人の微妙な空気を見て一言。
「……うるさい」
「ごめん……」
「すみません……」
サクラは二人を――特にフィーリアを睨むとクリュウに小走り気味に駆け寄り、彼の手をグッと掴んだ。
「……手伝って」
「え？　あ、うん。じゃあちょっと悪いけどフィーリア、シルフィードさんを起こしておいて。お願い」

「わ、わかりました」
「……早く」
サクラはクリュウの手をグイグイと引っ張って彼を連れて行こうとする。そんな彼女の行動にクリュウは苦笑いしながらついて行って天幕（テント）から出て行った。
残されたフィーリアはまだほんのりと赤い頬を抑えながら服装を正す。そしてふと思い出す。彼が言っていた《もっとヤバイもの》とは、きっと着替え姿とか風呂上がり姿の事だろう。確かにあれらに比べれば寝顔なんて小さいものだ。だが、
「……クリュウ様のバカ」
彼にはもう少しデリカシーというものを考えてほしい。直接は言ってないとはいえ、そういう事を平気で言ってしまう所はマイナス点だ。
――まぁ、それを差し引いても彼女の彼に対する評価は天文学的数値で常にプラスなのだが。
「まぁ、クリュウ様は天然ですからね。自覚がないのでは注意もできませんし。仕方ないですね」
軽く諦めているフィーリアはあまり気にした様子もなく彼に頼まれた通り、あれだけの騒ぎがあったのにまだ毛布に包まって眠るシルフィードを起こしに掛かる。
「シルフィード様、起きてください。朝ですよ」
フィーリアは早速毛布に包まって眠るシルフィードの背中を揺すって起こそうとするが、シルフィードは時折「うん……」と小さな寝ぼけ声を出すだけ。まるで起きる気配がない。
「シルフィード様。もう朝なんですから起きてくださいよ」
「……う……うん……」
「もうすぐ朝ごはんできるんですから」
「……うぅ……あと五分だけ……」
「《あと五分》なんて言う人の五分は大概信用できないんですよ。これ世界の常識です」
「……じゃあ、あと五〇分……」

「怒りますよ？」
なかなか起きないシルフィードに、フィーリアはちょっと驚いていた。まさか彼女がここまで寝起きが悪いとは――昨日の料理下手や野菜嫌いに続き、意外にも彼女は弱点が多いようだ。
それから三分ほど経ち、ようやくシルフィードがのそりと起き上った。だが、頭から毛布を被り、鋭い瞳は濁り、完全な無表情でぼーっとしている。どうやらまだ完全には起きておらず寝ぼけているらしい。
「シルフィード様、大丈夫ですか？」
「……あ？　朝か？」
「はい。今日はいい天気ですよ」
「そぉか……、朝か……すまない」
「謝る必要はないですよ。それより顔を洗われてスッキリなさった方がいいですよ？」
「……あぁ、そうする」
そう言ってゆっくりズズゥ……と音と共に歩き出すシルフィード。
「あ、あのシルフィード様！」
「……うむぅ？　何だ……？」
「――毛布は置いて行った方がいいと思いますが」
シルフィードはなぜか毛布の端っこを握ってそれを引きずりながら洗顔に向かおうとしていた。先程の妙な擦るような音はこれが原因だ。
「……あぁ、そうだな」
シルフィードは毛布を手放すと改めてゆっくりと滝の方へ洗顔に向かう。そんな彼女の後姿を見て、フィーリアは若干の不安を感じつつも起床すぐの重労働（？）に多少疲れながら天幕（テント）を出た。
「あ、フィーリア」
その愛しの声を聞いた瞬間、今まで疲れに満ちていた顔がうそのように笑顔がパァッと華やぐ。振り返ると、新しい薪を数本抱いているクリュウと目が合った。
「く、クリュウ様ぁッ」

「シルフィードさんは起きた？」
「はいッ。今洗顔に向かわれている所ですッ」
「そっか。じゃあシルフィードさんが来るまでに用意を終わらせないとね。あ、フィーリアも手伝ってくれる？」
「もちろんですッ！」
フィーリアは快く引き受けた。愛しの彼の頼みを断るなんて、恋する乙女にはできない。むしろ頼られているという実感に感謝感激状態だ。
フィーリアは笑顔全開。鼻歌まで演奏するほど陽気な気分で彼に頼まれた皿並べをする。と言っても人数は四人だし狩場での料理はそこまで品数はないのですぐに終わる。
「他に何かありますかッ？」
クリュウに頼られる事が嬉しくて嬉しくて仕方がないフィーリアはすぐさま彼に次の仕事を問う。その表情はわくわくという言葉が似合いそうなくらい生き生きしている。
そんな期待に満ちる彼女の問いに対し、クリュウは首を横に振る。
「ううん。もういいよ、ありがとう」
「そ、そうですか……」
途端にシュンとなってしまう。大好きなおもちゃを取り上げられた小さな子供を思い出させるような落ち込みっぷりだ。だが、そんな彼女に神様からのご褒美が炸裂する。
「あ、そうだ。僕さっきからおにぎり作ってるんだけど、フィーリアは中に何を入れてほしい？」
「く、クリュウ様の手料理ですかッ!?」
一瞬前まで相当落ち込んでいたのに、愛しの彼の手料理が食べられると聞いて一気に嬉しそうな笑みに変わるフィーリア。その翡翠色の瞳はまるでエメラルドのようにキラキラと輝いている。
「う、うん。まぁ僕はおにぎり担当だから、別に料理って言えるようなものじゃないけど」
「そんな事ありませんッ！　クリュウ様が握ってくれたおにぎりなら私毎日でも食べたいですッ！」

「そ、それはさすがに飽きると思うけど」
「クリュウ様の手料理なら飽きるなんて絶ッ対にありませんッ！」
「そこの《絶対》にそんなに力を入れて宣言しなくてもいいと思うけど……」
　クリュウは興奮しまくるフィーリアにちょっと引きながらも改めて先程の質問を問い直す。
「でさ、フィーリアは具は何が好き？」
「私は別に何でも構いません！　クリュウ様が作ってくださるならトウガラシ入りでもッ！」
「口の中がラティオ活火山になると思うけど……とりあえず参考にしたいから何かない？　できれば普通ので」
「そ、そうですね……私は焼きスネークサーモンが入ったおにぎりが比較的好きですね。あ、他にも特産キノコキムチが入ったのも好きです」
「そっか、ありがとう。その二つを中心に作ってみるね」
「は、はいッ！」
　クリュウは早速おにぎり作りに向かう。そんな彼の後姿を見詰め、フィーリアはいつの間にか無意識に出ていたよだれを顔を真っ赤にして慌てて拭う。
「えへへ、クリュウ様の手料理……楽しみだなぁ」
　朝からラッキー全開。今日はいい事ありそうだと胸躍らせるフィーリア。そんな彼女をじぃっと見詰める少女が一人。
「……」
　サクラは無表情のまま、クリュウの隣で料理作りを再開する――なぜだろう、いつになくその無表情が怖く感じるクリュウだった。
　冷たい水のおかげですっかり目が覚めたシルフィード。先程までの情けない姿はすっかり消え、眼光は鋭く、足取りも凛々しい。頼れる姉御復活という感じで天幕（テント）の方へ戻って来た。
「あ、シルフィードさんおはようございますッ！」
　焚火の周りに料理を並べるクリュウは早速シルフィードにあいさつする。そんな彼の律儀な行為に対し、シルフィードも「おはよう。

よく眠れたか？」と小さく笑みを浮かべて返す。
「はい。おかげさまで傷もすっかり治りました。これなら今日も十分戦えます」
「そうか。できれば今日中にリオレウスは倒したい。昨日は様子見な部分もあったから、今日が本格的な戦闘となる。昨日より過酷な戦闘になるだろうが、がんばれるか？」
　シルフィードは試すような笑みを浮かべてクリュウに問う。だがそれは愚問としか言いようがない事はクリュウもシルフィードも知っている。クリュウはフッと口元に笑みを浮かべると、真剣な眼差しでシルフィードと対峙する。
「もちろん、昨日のような失態はもうやりませんよ。今度こそ必ずリオレウスを狩って、笑顔で村に帰ってみせます」
　クリュウの言葉に、シルフィードはフッと口元に笑みを浮かべると無言のまま彼の横を通り過ぎた。その瞬間、ポンと彼女は彼の肩を叩く。その意味にクリュウは笑みを浮かべると振り返り、その頼れる背中に続くようにして歩き出した。
　シルフィードとクリュウが加わり、ようやく一行は朝食を開始した。
　並べられた料理はサクラが作ったものだ。フィーリアには劣るが、彼女も人並みには料理ができる。クリュウも料理が作れる事もあり、おにぎり担当及びサクラの補助を行った。四人の中で唯一料理がまるでできないシルフィードはそんな三人を見て苦笑いする。
「まったく、食事時に関しては私は完全に足手まといだな」
「そんな事ありませんよ。シルフィードさんもきっと料理がうまくなるはずです」
　クリュウはそう言いながら皆に季節の野菜とモス肉の煮込みスープを渡す。トウガラシを多少入れたピリ辛の味付けが朝の肌寒さを和らいでくれる。
　フィーリアは並べられた料理を見回した後、早速楽しみにしていたクリュウが握ったおにぎりに手を伸ばす。と、
「……中には私が握ったのもある」

「なぁッ!?」
サクラの一言にフィーリアは悲鳴のような声を上げると、朝っぱらから血走った目で目の前に並ぶおにぎりを睨みつける。
「ふぃ、フィーリア？　目がすごく怖いんだけど……」
戸惑うクリュウの声など聞こえず、フィーリアはどれがクリュウが握ったもので、どれがサクラが握ったものかをかなり真剣に見定めている。だが、おにぎりの握り方に個性が出るとしてもさすがのフィーリアもそれを見分ける事はできない。
「い、一体どれですかぁ……ッ！」
「いや、中身は食べてみないとわからないと思うけど……」
クリュウの発言は間違いである。彼女が真剣に選んでいるのは中身ではなく、彼が握ったおにぎり限定である。
クリュウとシルフィードは互いに顔を見合わせて小首を傾げる。クリュウは彼女が苦手な中身を入れたかと不安になり、シルフィードはおにぎりがロシアンルーレットにでもなっているのかと警戒する。
そんなこんなで三分ほどフィーリアがおにぎりを睨んでいると、思わぬ人物から助け船が出た。
「……これがクリュウが握ったものだと思う」
サクラが無表情のまま指差したのはフィーリアに最も近い位置にあるおにぎり。フィーリアの表情がパァッと華やぐ。
「あ、ありがとうございますッ！」
フィーリアは感謝感激して早速彼女が指差したおにぎりを取り、まるで大切な宝物を見るようなキラキラした瞳でしばし見詰め、
「いっただきまーすッ！」
笑顔満点でかぶりつく。
――もう少し彼女が冷静だったら、おにぎりを手に取った瞬間小さく口元に笑みを浮かべるサクラに気づいたかもしれなかったが、すでに手遅れであった。
「うにゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
静かなリフェル森丘の朝に、少女の悲鳴が轟いた。
七転八倒。おにぎりを食べた瞬間フィーリアは顔を真っ赤にして

悲鳴を上げながら転げ回り始めた。
「ふぃ、フィーリアッ!? どうしたのッ!?」
慌てて駆け寄るクリュウに、フィーリアは涙目になって地面に落ちて砂が混じってしまったおにぎりを指差す。
「ひゃ、ひゃらいれふぅッ！」
「え？ 何って言ったの？」
「彼女の状態を見るに、辛かったと言っているのではないか？」
目の前で七転八倒するフィーリアを見ながらも冷静なシルフィードはそう言うと、水がたっぷり入ったグラスを彼女に手渡す。フィーリアは迷う事なくそれゴクゴクと飲み始める。そして、グラスの中の水を全て飲み干すと、かわいらしい舌を外気に晒し、涙目になりながら再びクリュウを見る。
「か、辛いです……ッ！ 尋常じゃないほど辛いですぅッ！ 舌が痛いぃッ！」
「えぇッ!? そんなに辛いのッ!? だってレシピ通りの特産キノコキムチだよッ!? ピリ辛ではあっても激辛では――って、何このおにぎりッ!? 中身全部トウガラシじゃんッ！」
クリュウが拾い上げたおにぎりの中身は、これでもかと詰め込まれた乾燥させて粉末状にした料理に使いやすい調理用トウガラシ。辛いどころか舌が痛くなるのも当然だ。
「な、何でこんな兵器のようなものが入ってるのッ!?」
クリュウはせき込み始めたフィーリアの背中をさすりながら自分の料理の手順を思い出す。と、その疑問はあっけなく解明した。
「……ごめんなさい。それ私の。間違えた」
そう言ったのはこれだけの大騒ぎをしながらもシルフィードのさらに数段上で冷静なサクラ。無表情のまま謝罪する。
「これサクラのッ!? 何でまたこんなものをッ！」
「……私辛いもの好きだから」
「いやおかしいよッ！ これはもう辛いとかのレベルじゃないってッ！」
サクラはクリュウに支えられるフィーリアに近づくと、深々と頭を

下げた。
「……ごめんなさい。間違いは誰にでもありますから……」
「い、いえ……、間違えた」
フィーリアは努めて笑顔で返すが、かなりのダメージだったのかその笑みも引きつってしまっている。
サクラはそんな彼女にスッと近づくと耳元でこうささやいた。
「……どれがクリュウが握ったおにぎりか、あなたにはわからないでしょ？」
「なぁッ!?」
驚くフィーリアは見た。
立ち上がり、背を向けて歩み出すサクラの口元に小さな笑みが浮かんでいる事を……
（わ、わざとやったのッ!?）
ここで初めて、フィーリアはこれがサクラの陰謀であると気づいた――もう相当手遅れだが。
それからのフィーリアはかなり暗かった。
どれがクリュウの握ったものかわからない上に、先程のサクラの勝利宣言の前に絶望したフィーリアはその後一切おにぎりには手を出さなかった。
クリュウとシルフィードも先程の激辛おにぎりを目の当たりにしたせいか、警戒して一度割って中身を確認してから食べている。サクラは無表情のままなぜか並べられたおにぎりをバラバラな場所から一切迷わずに選んで食べている。誰も知らないが、それらは全てクリュウが握ったものだったりする。恐るべき観察眼。
そんな感じで食事もある程度終わりに近づいた時、
「……あ、あのさ」
クリュウは突然箸を止めると、いつになく落ち込んだような表情で口を開いた。その彼らしくないほどに暗い声に、自然と三人の箸も止まって彼を見る。
「……クリュウ？　どうしたの？」
サクラが小首を傾げながら問うが、クリュウは何も答えずしばし沈

黙してしまう。そんな彼に三人が不思議そうに顔を顔を見合わせた刹那、クリュウがゆっくりと重い口を開いた。
「ごめんなさい……」
「え？　なぜクリュウ様が謝られるんですか？」
「君が謝る理由など、私はないと思うが」
「……（コクリ）」
　三人はなぜクリュウが突然謝ったのかわからず、不思議そうに彼を見詰める。そんな三人の視線を受けながら、クリュウはフルフルと首を横に振る。
「僕のせいで、昨日はみんなを危険に晒した。ごめん……」
　クリュウの言葉に三人はようやく彼が何を謝っているのかわかった。それは昨日クリュウが瀕死の重傷を受けて倒れた際にリオレウスのブレスを受けてチームが全滅し掛かった事だ。彼は自分のせいで皆に多大な迷惑を掛けた事に対して謝ったのだ。
「僕がリオレウスの動きをちゃんと見てなかったから怪我をして、さらにはみんなを危険に晒した。本当だったら、僕はみんなに非難されて当然の失態をしたのに……」
「そんな事ありませんよ。誰だってミスはするものです。特にクリュウ様は今回初めてリオレウスと戦われたのですから、知らない事ばかりで仕方ない事ですよ」
　落ち込むクリュウをフィーリアが慌てたように励ます。だが、クリュウの表情は依然として暗いままだ。
「……クリュウが謝る必要はない」
　サクラは凛々しい隻眼を向けながらそう言い放つ。だがクリュウは首を横に振る。
「謝る事はちゃんと謝らないと――ほんと、僕ってお荷物だよね」
「……そんな事ない」
「ううん。だってきっと、僕がいない方がもっと有効的にリオレウスと戦えたはずだもの。それだけの力を三人は持ってる。僕は、みんなの足を引っ張ってるだけだよ」
「……クリュウは足でまといなんかじゃない」

「でも僕は――」
「……それ以上言ったら、本気で怒るから」
「え？」
　驚いたように顔を上げてクリュウはサクラを見る。じっとこちらに向けられている隻眼はいつになく厳しく、刃のように鋭く細い。クリュウは知っている。それは彼女が本気の時の瞳だという事を。
「……クリュウは全力で戦った。だけど経験不足の不意を突かれて怪我をした。そんなあなたを誰も怒ってないし、責めてもいない。初めてなら、当然の事。皆、そういう失敗を繰り返して成長している。それは私も、きっとフィーリアやシルフィードも変わらない」
　サクラの言葉に、フィーリアとシルフィードはうなずいた。
　誰だって、最初から全てができた訳じゃない。皆、必死に努力して経験を積み、色々な失敗を乗り越えてこうして強くなってきた。皆、最初は同じスタート地点から始まる。
「……なのに、クリュウは自分を責める。確かに今回の危機はクリュウの失態から始まった。それは事実」
　その突き放すような言葉に、クリュウは途端にしゅんとしてしまう。それを見てフィーリアが慌てて反論しようとするが、シルフィードに止められた。
「……でも、クリュウが必死になって一生懸命戦っていたのも事実。誰も、クリュウを責めたりしてない。だから、クリュウが謝る必要はない。あなたが今言う言葉は一つだけ――今度こそリオレウスを倒す。それだけでいい」
　そう言って、サクラはフッと小さく笑みを浮かべた。その心から優しげな笑顔に、クリュウは瞳を大きく見開く。
「そうですよ。私達は仲間です。どんな時も一蓮托生（いちれんたくしょう）の存在です。感謝する言葉はあっても、謝罪の言葉は必要ありません。それが、真の仲間というものです」
「まぁ、私は今回急遽参加したメンバーだが、一応君達の仲間に変わりはない。私は君達を信じているし、クリュウを信じている。あれは不慮の事故だ。気にする事はない」

フィーリアとシルフィードそう言ってそれぞれ優しく微笑む。
優しく微笑んでくれる三人を見て、クリュウはうつむいてしまった。フィーリアが不思議に思って近づく。と、
「みんな――あ、ありがとう……ッ」
「えぇッ!?　く、クリュウ様、泣いているんですかぁッ!?」
驚き慌てふためくフィーリアの目の前で、クリュウはボロボロと涙を流して泣いていた。何度も手の甲で涙を拭うが、後から後から溢れて来て止まらない。
一方、目の前でクリュウに泣かれたフィーリアは完全に混乱状態。どうすればいいか右往左往するばかり。そんな彼女を冷たい瞳で見詰める少女が一人。
「……クリュウを泣かせた」
「ち、違いますよッ！　私は何もしてませんよぉッ！」
フィーリアは無罪を主張するが、サクラはプイッとそっぽを向くとフィーリアを押しのけてクリュウに近づき、そっとハンカチで涙を拭う。
「……泣かないでクリュウ」
「ご、ごめん。僕、みんなに嫌われたんじゃいかって思ってたから……だから……ッ！」
「……クリュウを嫌いになるなんて、絶対にあり得ない。私は、クリュウが好きだから」
「ありがとう、サクラぁッ」
泣きじゃくるクリュウを、サクラはそっと抱き締めて彼の頭を優しく撫でる。その光景は何とも微笑ましく、温かなものだ。そんな二人を見詰め、シルフィードはフッと小さく笑みを浮かべる。
「まったく、クリュウはどうやら案外泣き虫のようだな――ってフィーリア？　なぜ君まで泣いているんだ？」
「うぅ……どうしていつもサクラ様ばっかりぃ……ッ！」
なぜかすごく悔しそうに出しそびれたハンカチを噛みながら涙を浮かべるフィーリアをシルフィードは不思議そうに見詰める。
しばしサクラの腕の中で泣きじゃくった後、クリュウは今度は顔を

真っ赤にして慌ててサクラから離れた。その時、サクラがすごく残念そうな表情を浮かべた事は誰も気づいていない。
クリュウは涙をしっかりと拭い取ると、今度は心配そうに自分を見詰める三人に向かって小さく笑みを浮かべた。
「ありがとうみんな。僕、みんなの事大好きだよ！」
『……ッ!?』
全くもって自覚なしのクリュウから突如奇襲的に言い放たれた言葉に、三人は一瞬にして顔を真っ赤にしてうろたえてしまう。
「わ、私まだ心の準備が……ッ！」
「……クリュウ、大胆」
「な、なぜ胸がドキドキするのだ……ッ!?」
「どうしたの？」
自覚なしのクリュウは三人の心の中の出来事なんてまるでわかっていない。屈託のない笑みで首を傾げるばかりだ。
そんな淡い恋心満載なちょっと騒がしい出来事の後、一行はリオレウスとの再戦に備えて万全の準備を整え始めた。荷車に残った大タル爆弾G二発や小タル爆弾G、打ち上げタル爆弾Gなどの爆弾類の他、調合し直した罠やその他道具を詰め込めるだけ詰め込み、さらに自分達の武器や防具の確認もする。念には念を入れるものだ。
「クリュウ様、お体の具合は大丈夫ですか？」
肩や脇腹が壊れ、応急処置で直したばかりのバサルメイルを確認するクリュウに、フィーリアは不安そうに訊いた。
「うん。もうすっかり良くなったよ。バサルメイルもこれだったら使えそうだし、何も問題ないよ」
「でも、万が一何かあったら……」
彼に対しては極度の心配性であるフィーリアの瞳には昨日目撃した悪夢のような光景――血まみれで倒れるクリュウの姿が焼き付いて離れない。もしもまたあんな事になってしまったら……そんな不安が重くのしかかる。
うつむいてしまうフィーリア。そんな彼女の肩をクリュウは優しく叩いた。顔を上げると、そこには大好きな彼の笑顔がある。

「大丈夫だって。今度こそうまく立ち回ってみせる。昨日戦ったおかげでリオレウスの行動パターンはある程度わかったからさ。心配しないで」
「で、でもぉ……」
　それでも心配なフィーリアに、クリュウは少し拗ねたように言う。
「フィーリアは僕を信じてくれないの？」
「そ、そんな事ありませんよッ！　で、でも心配なのは仕方ないじゃないですか……」
　再びうつむいてしまうフィーリア。その瞳には迷いがある。だが、そんなフィーリアの手を取り、クリュウは笑みを浮かべたまま優しく声を掛ける。
「リオレウスを倒して、みんなで村に帰ろう。ね？」
「クリュウ様……」
　そんな彼の言葉にフィーリアは小さく微笑むと、ほんのりと頬を赤らめてコクリとうなずく。握られた手から伝わる彼の温もりが、心地良い。
「わかりました。クリュウ様がそこまで仰るなら、もう私は何も言いません。ただ、あなたの事を信じて戦うだけです」
「ありがとう、フィーリア」
　嬉しそうに微笑む彼の笑みに、フィーリアはドキリとした。そして、今更ながら彼に手を握られている事に気づき、その柔らかく温かな感触に顔を真っ赤にする。
「あ、あのクリュウ様……ッ！　そ、そのぉ……ッ！」
「え？　あッ！」
　クリュウも自分の行為に気づき、頬を赤らめながら慌てて手を離す。
「ご、ごめんッ！」
「い、いえ、私はそのぉ……」
　チラリとフィーリアは彼の手を名残惜しそうに見詰める。先程まで繋がれていた際にあったあの心地良い温もりは、今は朝の冷たい風に当たってより冷たく感じてしまう。

本当はもっと彼に手を握っていてもらいたかったが――そんな事恥ずかしくて言えない。
互いに頬を赤らめながらチラチラと見詰め合って黙る。そんなくすぐったいような初々しい桃色の雰囲気に包まれる二人を見詰め、不機嫌になる少女が一名。
「私は準備完了だ。君達の方は――ってサクラ？　なぜ君はすでに武器を構えているのだ？　なぜ音も立てずに二人に近づく？　ま、待てッ！　今は武器を振り上げる時ではないッ！」
無表情のまま飛竜刀【紅葉】を振り上げてフィーリアに襲い掛かろうとするサクラを間一髪でシルフィードが止める。サクラは無表情無言のままシルフィードに拘束されながらも前へ前へ進もうとするが、残念ながら体格はシルフィードの方がしっかりしているので、力負けして押さえつけられた。
そんな取っ組み合いのような必死の攻防を繰り広げる二人に、ようやくクリュウとフィーリアも気づく。
「ちょ、ちょっと二人で何してるんですかッ!?」
「サクラッ！　武器を構えちゃダメだってッ！」
慌てて止めに入る二人だったが、偶然にもシルフィードをフィーリアが、サクラをクリュウが確保する形になった。これが状況の急転直下に大きく関係した。
「……く、クリュウ？」
後ろからクリュウに羽交い絞めにされるサクラは、湯気が出るのではないかと思うほど顔を真っ赤にして途端に脱力。抗う術を失った。
「ちょ、ちょっとサクラ大丈夫？　体調でも悪いの？」
急にぐったりとしてしまったサクラをクリュウは心配するが、サクラは「……大丈夫」と小さくつぶやくようにして答えた。
「で、でも顔赤いよ？　熱でもあるんじゃ……」
「……大丈夫」
「そ、それならいいけど……」
クリュウは心配しながらもとりあえずサクラを解放する。だが、彼女はなぜかクリュウから離れようとはせず、むしろ自分からそっと彼

に抱きつく。
「ほんとに大丈夫？　体調が悪いなら無理はしないでよ」
「……平気。でも、ちょっとだけこうしていたい」
「い、いいけど……」
　すっかり脱力してしまっているサクラを、クリュウは心配しながら抱き支える。彼には見えないが、抱かれるサクラは頬を赤らめながら小さく笑みを浮かべていた。
　そんな彼女を見てフツフツと怒りの炎を燃え上がらせる少女が一名。
「な、何でいつもサクラ様ばっかり……ッ！」
「まったく、朝っぱらから騒がしいな君達は」
　クリュウと同じくらい鈍感なシルフィードは二人の想いなど知らず、ただただ騒がしい仲間達に苦笑するばかり――ただ抱き合う二人を見て、胸が締め付けられるような感じがした事には内心困惑していた。
「……何なのだ、この感じ」
　それぞれの様々な想いが交錯する事しばし、ようやく皆が落ち着きを取り戻した頃シルフィードは仕切り直すようにして咳払いする。それを合図に今まで緊張感なんてほとんどなかった三人も真剣な表情で彼女を見る。そんな三人に、シルフィードも真剣な瞳を向け、開口一番にこう言った。
「決着をつけるぞ」
　その決戦宣言に、クリュウは一瞬リオレウスの凶悪な顔を思い出し恐怖するが、すぐに頭を振ってその映像を消す。そんな彼をフィーリアが不安そうに見詰めていた。
「昨日の戦闘でリオレウスにもかなりのダメージを与えられた。飛竜種の治癒能力は確かに驚異的だが、完全回復には数日を要する。たった一晩の睡眠ぐらいではまだダメージは相当残っている。特にクリュウの策である大タル爆弾Ｇによる内部ダメージは相当なものと思われる。それらの状況を見るに、今日中に決着はつくだろう。だが、ダメージが残っているとはいえ相手は飛竜の王とも謳われる火竜

リオレウス。油断は禁物だ」
　シルフィードの言葉に、三人はしっかりとうなずく。リオレウスの討伐経験があるフィーリアやサクラはもちろん、昨日の戦闘でリオレウスの凶悪なまでの戦闘能力の高さを実感したクリュウも、その表情は緊張に満ちている。
「特にモンスターは身の危険を感じている時、つまり追い詰められている時に怒り状態になりやすい。最後まで気を抜かないように――まぁ、君達ならそれくらいわかっているだろうがな」
　そう言って小さく笑うシルフィード。その笑顔に、三人の緊張も幾分か緩んだ。適度な緊張はより高い集中力を生み出すのだが、過度な緊張は逆に体の動きを鈍らせ、様々な障害となってしまう。だからこそ、あまり緊張しすぎてはいけないのだ。
　さすがシルフィードさんと、仲間へのそんな気配りができる彼女に感心するクリュウと、シルフィードの目が突然合った。
「え？」
「――今日は昨日とは戦法を大きく変える」
　クリュウから目を逸らした途端、シルフィードはそう言い放った。
「昨日の戦闘ではクリュウが初めてのリオレウス戦であった事、爆弾や罠などのトラップが豊富であった事から積極的な攻撃は避け、爆弾や罠などを多用して戦闘を行った。だが今回はすでに爆弾も罠も相当数消費した事、さらに長期戦になればこちらが不利であるという事も考え全力で総攻撃する」
　シルフィードの判断は適切であった。昨日はクリュウの実力未知数、彼の初リオレウス、爆弾や罠が豊富という事もあり短期決戦・安全第一という戦い方をした。つまりシルフィードが全力でリオレウスの注意を自分に向けさせ、残る三人、特にクリュウへの攻撃を減らしながら爆弾や罠を多用してダメージを蓄積。さらに短期決戦という事もあって頭に攻撃を集中するという少々乱暴な戦い方であった。だが今日は昨日とは違い大タル爆弾Gは二発しかなく、さらにクリュウの実力もわかった事もあり確実にダメージを与えて倒すという戦法に切り替えたのだ。

だが、そんなシルフィードの言葉にフィーリアは反論する。
「しかし、クリュウ様は昨日大怪我をされた身です。あまり無理をさせたくはありません」
クリュウの身を第一に考えるフィーリアは、シルフィードと対峙する。だが、シルフィードも引き下がらない。
「昨日の怪我は彼の情報不足が原因だ。だが、幸いな事に昨日のうちにリオレウスはほぼ全ての行動パターンを行った。もう不意打ちはないだろう。それに、これはクリュウ自身が選んだ依頼だ。彼が倒さなくては、意味がないのではないか？」
その言葉に、フィーリアはクリュウを見た。サクラもシルフィードも先程からずっと黙っている彼を見詰める。三人の視線を浴びるクリュウは、小さくうなずいた。
「村を守るのは僕の役目。だから、僕がリオレウスを倒さなきゃ意味がないんだ。フィーリアやサクラの気持ちもわかるけど、僕は自分の力を、あの巨大で凶悪なリオレウスに試してみたい。僕の力がどこまで対抗できるかはわからないけど、でも戦いたいんだ」
「クリュウ様……」
「……クリュウ」
「わがままで、ごめんね。でも、父さんはリオレウスを一人で狩れたんだ。僕はまだそんな事はできないけど、できる限り自分の力で戦いたいんだ。だから、協力してほしい」
そう言ってクリュウは真剣な瞳を三人に向けたまま、そっと手を差し出す――共に戦ってほしい。そんな想いを込めて……
フィーリアとサクラはしばし黙ったまま何か考えるように思案顔をしていたが、だんだんと不安な表情になっていくクリュウを見て、小さくため息した。
「まったく、クリュウ様は意地悪な方です」
「……昔から、クリュウは意地悪だ」
「えぇッ？　そ、そんなに僕って意地悪なのぉ？」
二人の言葉に別の意味で落ち込むクリュウ。だが、そんな彼の差し出された手を、優しく包む温かさがあった。見ると、二つの手が自分

の手を包んでいる。顔を上げると、そこには小さく笑みを浮かべたフィーリアとサクラが立っていた。
「私達が、クリュウ様のお願いを拒めないのはわかってるじゃないですか」
「……返答など、決まっている――任しておいて」
「フィーリア、サクラ……ありがとうッ」
二人の言葉に嬉しそうに笑うクリュウに、フィーリアは嬉しそうな笑みを浮かべる。サクラも小さいながらも笑みを浮かべていた。
「お礼なんていりませんよ。クリュウ様の頼みでしたら私、ひと肌でもふた肌でも脱ぎます！」
「ありがとうフィーリアッ！」
「……礼なんていらない。クリュウの為だったら下着姿にでも裸エプロンにでもなってみせる」
「いや、それは正直困るんだけど……」
「わ、私だってがんばりますッ！」
「いや、がんばるの方向性がおかしいような……」
「……恥ずかしいけど……二人っきりの時なら……一糸纏わぬ――」
「ストッープッ！　もうそれ以上言わなくていいからッ！　気持ちはありがたく受け取っておくからッ！　だから脱がなくていいッ！」
すっかりいつもの調子に戻った三人を見て、シルフィードは小さく苦笑する。
「まったく、のんきな奴らだ――うん？　なぜ私は防具を脱ごうとしているのだ？」
無意識のうちに動いていた手を止めてシルフィードは自分の無意識の行動に首を傾げた。そしてまだ脱ぐか脱がないかという意味不明な論争を続けている三人を見てさすがに呆れる。
「……あぁ、サクラ。とりあえず君は恥じらいを持て。給仕服とネコ耳に何の関連性があるのだ？」
「……最強の衣装だと思う」
「意味不明な発言は控えろ。そういう事は帰ってから徹底的に話し合え」

「こんな恥ずかしい話題を徹底的に話し合うなんて無理ですよぉッ！」
　クリュウが顔を真っ赤にしながら悲鳴を上げ、やっとの思いでその無意味で恥じらいのない論争は終結した。この論争でフィーリアが顔を真っ赤にして気を失った事は、ある意味仕方のない事かもしれない。
　フィーリアを起こし、シルフィードは仕切り直すように再び咳払いしてクリュウ達に指示を出す。
「クリュウは私と連携を組め。君は前回と同じく罠などを多用し、なおかつ麻痺毒を蓄積して動きを止める事を主軸に戦ってくれ。罠などを取りに行く際は私に合図をしてから頼む。その間は私が奴の動きを止める。それ以外の時は常に私の傍にいて離れるな。いいな？」
「は、はいッ！」
「……クリュウと組むのは私なのに」
「今回はシルフィード様の指示に従いましょう。最優先事項はリオレウスを倒す事です。クリュウ様も、それを望まれています」
「……わかった」
　渋々といった感じでうなずくサクラにフィーリアは小さく笑みを浮かべる。そんな二人にもシルフィードは指示を出す。
「サクラは前回同様リオレウスに肉薄し、奴を撹乱（かくらん）してくれ。ただし前回と違いクリュウがより接近戦を強いられるので、その補助も頼む」
「……わかった」
「フィーリアも前回と同じく主に援護を頼む。今回は特にクリュウの動きに注意し、彼がダメージを受けたらすばやく回復弾を撃てるようにしてくれ。今回の主役はクリュウだからな」
「わかりました。全力で援護させていただきます」
　二人の返事にうなずくと、シルフィードは改めて一同を見回す。皆、昨日以上に凛々しい顔つきをしていた。そんな皆にシルフィードは小さく笑みを浮かべると、真剣な瞳で見詰め、声を張り上げる。
「決戦の時は来た！　出撃するぞッ！」

『はいッ！』
背を向けて歩み出すシルフィード。その背中に背負われた煌剣リオレウスは一部黒く焦げている。命を懸けて全滅の危機を救った証だ。
クリュウはその焦げ跡を見て、もう二度と彼女にあんな負担はさせない為にも、全力で立ち向かう事を心に刻む。
陣形（フォーメーション）はシルフィードの指示に従って再編し、巨大な剣を振るう為に機動力が劣るシルフィード自身が荷車を担当し、前方をサクラ、右をクリュウ、左をフィーリアが護衛する形だ。
岩のトンネルを抜けると、そこはもう狩場――リオレウスと死闘を繰り広げる事になる、自然という名の闘技場だ。
クリュウは今度こそリオレウスに勝つと決意を新たに、腰に下げたデスパライズの柄をグッと握った。
決意を固めたのはクリュウだけでない。フィーリア、サクラ、シルフィードも同じだ。
復活を果たした四人のハンターは、火竜リオレウスが住まう山脈を登り始める。
快晴の蒼き空の下、天空の王――リオレウスとの決戦が始まろうとしていた。

第７２話　負けない心　クリュウの強き決意

「これで最後だッ！」
　背後から仲間の怒りに燃えながら突撃して来るランポス。クリュウは目の前のランポスの体から剣を引き抜くと、血飛沫を吹き飛ばしながらデスパライズを振り向きざまに振るう。その剣先は容赦なくランポスの首に炸裂し、バシャァッと大量の血を吹き飛ばして首が吹き飛ぶ。頭部を失ったランポスの体は血を傷口から噴き出しながら横倒しになって崩れた。
　血で汚れたデスパライズを振って血を吹き飛ばし、腰に戻すクリュウ。そんな彼の周りには無数のランポスの死骸が血まみれで横たわっている。数にして約二〇匹前後。これら全てをクリュウ一人で全滅させたのだ。
　クリュウは一度周りを見回す。ここは初めてリオレウスと遭遇したエリアだ。シルフィードが乗っていた木は昨日リオレウスの巨体の一撃を受けてへし折れている。そして昨日と違うのは大量に転がっているランポスの死骸。敵の残党が残っていないか確認すると、後方の岩陰に隠れているフィーリア達を呼ぶ。
「もういいよ。ランポスは全滅したから」
　その声に岩陰から出て来た三人は広場に無数に転がるランポスを見て少なからず驚く。まさかここまでの数とは思わなかった。
「リオレウスに住処を追い出されたのでしょうか？」
「その可能性はあるな。でなければドスランポス抜きでこれほどの群れが形成される事はないだろう」
　フィーリアの推測にシルフィードもうなずく。二人の表情は険しい。なぜならランポスが追い出されたという事はリオレウスが現在活動している事を示している。昨日の今日で幾分か弱っていたとしても、奇襲の可能性もあるとなると厄介なのだ。
　一方サクラは小走りでヘルムを脱いで一息ついているクリュウに駆け寄ると、道具袋（ポーチ）からハンカチを取り出してクリュウの汗を拭う。

「あ、ありがとう」
「……（フルフル）」
クリュウにハンカチを手渡し、サクラは改めて周りに転がるランポスを見詰める。これを全部クリュウが殺（や）ったのだ。その時の彼の動きを岩陰から見ていたサクラは、内心驚いていた。
クリュウの動きは、昨日よりも速く鋭かった。何かが吹っ切れたような、いつも以上の実力が出ているような気がした。それを証拠に、倒れているランポスのほとんどが的確に急所を狙われて一撃で倒されている。
「……すごい」
素直にそう思った。
初めて会った時に比べ、動きは格段に良くなっている。隙も減り、無駄な動作がない。彼の成長速度は一般の人のそれよりもずっと速い。ハンター養成所を卒業してわずか数ヶ月でリオレウスと戦えるまでに成長するなんて、天才クラスのハンターでなければできない。普通だったら数年は掛かるものだ。
偏（ひとえ）に、彼の日々の努力のおかげだろう。
フィーリアもサクラも知っている。
彼が毎日朝早く起きて素振りや立ち回りの練習をしている事を。
薄々は感じていた。彼が自分やフィーリアの実力に負い目を感じている事は。だからこそ彼は少しでも負担を減らそうと、人一倍の努力をしている。
昔からそうだった。彼は何事も人の何倍も努力して強くなっていた。子供の頃泳げなかったのに、毎日毎日海に出かけては泳ぐ練習をし、今ではかなりうまく泳げるまでになった。
そんないつも必死で陰ながら努力している彼を、サクラはずっと見てきた。そんな彼の姿に――恋したのだ。
確かに、彼はまだまだ正直自分やフィーリアには動きは劣っている。しかしとっさの機転に関してはもしかしたら自分やフィーリアよりも冴えているかもしれない。先程も背後から狙われた際に後ろに蹴りを叩き込んでランポスを牽制（けんせい）。ひるんだ隙に鋭い

一撃を叩き込んで倒したり、追われた際にはツタを使って回避し、岩壁に激突してフラつくランポスに上から襲い掛かって一撃で葬り去る。彼のとっさの行動にはいつも驚かされるばかりだ。
「……クリュウの戦い方は、養成所で培（つちか）ったもの？」
「まあね。でも僕のは結構自己流なんだよね。片手剣って万能な武器だから、色々な戦い方があるんだ。僕はそれを組み合わせて自分に合った戦い方で戦ってるんだけど」
「……クリュウはすごい」
「そんな事ないよ。確かにハンター養成所では上位成績優秀者にはなったけど、実戦じゃ全然ダメだよ」
さりげなく言った彼のセリフに、サクラは隻眼を大きく見開いて驚く。
「……上位成績優秀者？　クリュウが？」
「うん。見えないかな？」
苦笑するクリュウだが、サクラは驚いたままだ。
この世界においてハンターになるには二つの方法がある。
一つはサクラやフィーリア、そしてシルフィードのように直接師匠に弟子入りする形。もう一つはクリュウのようにハンターズギルドに公認されたハンター養成所に入学する形。どちらも最後にはドンドルマのハンターズギルド本部で免許所得試験というもの受けてハンターになる。
ハンター養成所はハンターズギルド公認な為、組織形態は全て統一されている。各学校の中で成績上位十人は《上位成績優秀者》に選ばれ、表彰されるのだ。そして何より、英雄クラスのハンターの多くがこの上位成績優秀者から現れる場合が多い、まさに金の卵とも言うべき存在、それが上位成績優秀者なのだ。
「……クリュウはやっぱりすごい」
「でも僕十位ギリギリだったし、当時コンビを組んでた子は僕より年下だけど学年首席だったからなぁ」
「……ドンドルマのハンター養成所は大陸最大規模の養成所。そこで上位成績優秀者になるなんて、すごい」

キラキラした隻眼で見詰めるサクラに、クリュウは照れ隠しの笑みを浮かべて赤くなった頬をこそばゆそうに掻く。
「僕は学科試験で教科書をひたすら暗記したからなぁ。技術の実力だけだったら僕なんてずっと下だよ」
確かに、ハンターは実力主義な世界なので学科を怠る訓練生は多い。だがそれにしても上位成績優秀者になるには、相当な努力が必要だ。
サクラは毎夜遅くまで机に向かって教科書を覚えている彼の姿を想像して、クスリと笑った。
――やっぱり、子供の頃から好きだった彼は、変わっていない。
「……クリュウはもっと強くなる。私は、そう確信してる」
「ははは、ありがとうサクラ」
サクラの言葉にクリュウは照れたようにはにかむと、そっと彼女の頭を撫でた。その温かさに、サクラは嬉しそうに隻眼を細める。
本当は、こんな風に子供扱いされるのはあまり好きではないのだが、彼の温かな手に触れられると心地良くて幸せな気分になれる。何より、彼と触れられているという事が嬉しいのだ。
「子供の頃から、サクラはほんとに頼りになるよ」
「……ほんと？」
「うん。何度エレナの暴力から助けられた事か」
おかしそうに笑うクリュウに、サクラも小さく笑みを浮かべる。子供の頃から変わらない、二人の親しい関係――だが、サクラは内心もっと親しい関係になりたいと思ってはいるが、彼にはその気持ちは伝わっていない。
彼の昔から変わらない鈍感さに、サクラは心の中で小さくため息した。
そこへ後ろで話し合っていたフィーリアとシルフィードが合流した。
「おそらくリオレウスは頂上付近にいるはずだ。これより先はより危険になる。そこでクリュウに荷車を頼む。私が先頭に立って皆を誘導する」

「わかりました」
　先程までの柔和な笑みは消え、クリュウは緊張したような表情でうなずいた。その横ではサクラがゴソゴソとなぜか道具袋（ポーチ）をあさっている。
「どうした？」
「……クリュウに渡すものがある」
「僕に？」
　サクラはコクリとうなずくと道具袋（ポーチ）からオレンジ色の液体が入ったビンを取り出し、クリュウに手渡す。
「これは何？」
「……硬化薬グレード。それを飲んで」
「え？　そ、そんなレアアイテムを僕に？」
「……クリュウには、少しでも安全に戦ってほしい」
　そう言ってサクラはプイッと背を向けてしまった。だが、その行動は三人には丸わかりで、皆小さく笑っていた。そんな皆に背を向けるサクラの頬は、薄らと赤く染まっていた。
　クリュウはサクラの気持ちに感謝し、硬化薬グレートを一気に飲む。味は少々苦いが問題なく飲める。途端に体が内側から温かくなるのを感じた。ホットドリンクとはまた違った感じの温かさだ。
　一方、目の前でサクラにポイントを上げられたフィーリアは悔しそうに唇を噛み、シルフィードはなぜか自分の道具袋(ポーチ)をあさって落胆していた。
「何はともあれ、これでクリュウが少しでも戦いやすくなったのは事実だ。いよいよリオレウスとの決戦だ。皆、用意はいいな？」
　シルフィードの問いに三人は一斉にうなずいた。その表情は皆真剣で、瞳には本気の炎が宿っている。その力強さにシルフィードはうなずくと、皆の先頭に立つ。
「私達が協力すれば、リオレウスなど恐れる敵ではない。己を、そして仲間を信じろ。私は、君達を信じているぞ」
　そう言って歩き出すシルフィード。その背中にクリュウとフィーリアは力強く返事し、サクラは小さくうなずいた。

再びシルフィードを先頭に荷車をクリュウ、右をフィーリア、左をサクラが護衛する形で歩き出す一行。
空の王者リオレウス。
確かに凶悪なまでに強く、おそらく飛竜最強の敵だ。
でも、自分達四人が力を合わせれば、勝てない敵ではない。
クリュウはグッとデスパライズの柄を握った。
その瞬間、最初に感じたのはふわりと頬を撫でる柔らかな風だった。ついで、上空から燦々と輝いていた日の光が何者かによって遮られる。
空には雲ひとつない快晴の青空だった。
そんな事ができるのは、この険しい山々の頂よりもさらに高くを飛べる者だけだ。
クリュウは反射的に振り仰ぐ。
するとそこには影があった――巨大な影。
逆光になっているせいで細部まではハッキリしない。わかるのは大きさだけだ。
「グギャアアアオオオオオッ！」
殺気をみなぎらせたすさまじい怒号。奴は昨日自分に傷をつけた許せぬ敵をしっかりと覚えていた。ただひたすら、その敵を殺す事だけを考え飛び回り――そして見つけた。
怒りに燃える瞳が、日の光を受けてギラリと不気味に輝く。
赤い、燃え盛る炎のように赤い鱗。
空を覆わんばかりに広げられた、皮膜に包まれた翼。
全身からみなぎる圧倒的な迫力と力。何度も会っていても、決して慣れる事はない恐怖の塊。それが奴の凶悪なまでの生命力。
クリュウの中で答えが出るよりも早く、シルフィードの声が響き渡った。
「リオレウスッ！」
その瞬間、すさまじい暴風が四人に叩きつけられる。草などが激しく靡き、千切れ飛ぶ。砂埃が荒れ狂い、四人は動きを封じられた。
「クリュウッ！　荷車を岩陰に隠せッ！　急げぇッ！」

怒鳴るシルフィードにはいつもの余裕は消えていた。
いくら予想していたとはいえ、こうもいきなり現れるリオレウスに焦っているのが皆にも伝わる。その焦りは、皆の瞳を正面へ向けさせる。
クリュウは急いで離脱して岩陰に荷車を置く。その間にサクラとフィーリアはそれぞれ武器を構え、戦闘態勢に入る。
リオレウスは殺気と暴風を吹き荒らしながら圧倒的な迫力と共に舞い降りて来る。
シルフィードは一度後方に走って距離を取る。もちろんフィーリアとサクラも一緒だ。そこへクリュウが合流し、四人は戦闘態勢に入る。
リオレウスは離れた敵に対し殺気みなぎる瞳でギロリと睨みながら、さらに降下。そして――
ズズウウン……ッ
鈍い地響きと共にリオレウスは木の幹に匹敵しそうな巨大な二本の脚で地面に降り立った。どんな岩をも砕く巨爪で地面を抉りながらしっかりとその巨体を支える。
一瞬、不気味な沈黙が流れた刹那、
「グギャアアアアオオオオオオオオオオッ！」
すさまじい怒号と共に殺気の奔流が四人に襲い掛かる。たったそれだけで、クリュウはビクリと委縮してしまう。
やっぱり、怖い。どんなに修行をしていても、人間である限り決して消せない恐怖という感情。背筋が凍りつき、体が動かなくなる。
「……ッ！」
「――私を頼れ。今度こそ君を守ってみせる」
恐怖の中、そんな言葉と共にポンと肩を叩かれた。視線を向けると、シルフィードの横顔が見えた。その凛々しく美しい姿に、クリュウは安心感を覚えた。そしてその安心感は、自分の中で渦巻く黒い恐怖を優しく包み、溶かしてくれる。
「君は私が守る。だから、安心して戦え」
その言葉に、どれだけ感謝してもし切れないだろう――でも、違う。

「クリュウ？」
クリュウは一歩、シルフィードの前に出た。こちらを睨みながら攻撃のチャンスを狙っているリオレウスを睨み返し、堂々と三人の前に出る。
「――決めたんです。もう僕は、足手まといにはならないって」
「クリュウ……」
「クリュウ様……」
「……クリュウ」
三人の恋姫に背を向け、クリュウはデスパライズを引き抜いた。日の光に照らされて輝く刃を一瞥し、構える。
いつもいつも自分はフィーリアやサクラに頼って来た。そして、今回も何度もシルフィードを頼ってしまっている。
――でも、それじゃダメなのだ。
父のような立派なハンターになる為にも。何より、大切だと思える仲間を――女の子を守れるようになる為にも、いつまでも頼って背中に隠れていてはダメなのだ。
だから、もう背後には隠れない。
フィーリア、サクラ、シルフィード。皆歴戦のハンターばかりだ。でも、それを抜いてしまえばみんなどこにでもいる普通の少女達だ。そんな彼女達を――守りたい。
それが、クリュウの決意だった。
「フィーリア、サクラ、シルフィード――絶対に勝つよ」
その瞬間、三人の恋姫は大きく瞳を見開いた。一瞬、彼の頼れる後ろ姿に見とれるが、すぐにそれは小さな笑みに変わり、うなずく。
それらを一瞥し、クリュウも小さく笑うと再びリオレウスに向き直る。
ご丁寧にこちらの準備が整うまで待っていてくれたらしい。さすが王者。プライド高いだけでなく、礼儀もわかっている。
――クリュウは初めて、リオレウスに共感が持てた。
奴は、全身全霊をもって自分達に挑もうとしている。ならば、こちらも全力で迎え撃つのみ。それが彼に対する最大の礼儀だ。

「行くよッ！」
「はいッ！」
「……負けないッ！」
「いつでも構わんぞッ！」
その瞬間、四人は一斉にリオレウスに向かって駆け出した。
正面から堂々と突っ込んで来る敵にリオレウスはすさまじい怒号を放ち牽制する。
「グギャアアアオオオオオオッ！」
天高く響き渡る怒号が、のどかな狩場を再び戦慄の戦場へと変える。
リオレウスも堂々と四人を迎え撃つ。誇り高き空の王として――
クリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィード対リオレウスの、壮絶な最終決戦が始まった。

第７３話　捲土重来　決意の果ての死闘

リオレウスに向かって駆けるクリュウは腰の道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出す。その動きを三人はしっかりと見ていた。

「目を閉じてッ！」

投擲するクリュウの言葉よりも早く三人は瞳を閉じた。

激しい光が炸裂し、リオレウスの悲鳴が轟く。再び瞳を開いた時、リオレウスは視界を封じられてもがき苦しんでいた。

クリュウはすぐさまリオレウスの懐に潜り込むと、その巨体を支える脚に向かって剣を振り上げる。狙うは昨日集中的に攻撃していた場所。モンスターの驚異的な治癒能力はすさまじく、その傷口はすでに塞がっていた。だが、まだ完全ではないのか身を守る鱗はないむき出しの状態。クリュウはそこに狙いを定め、振り上げたデスパライズを一気に叩き込む。

「喰らえッ！」

強固な鱗に邪魔される事なく、デスパライズはリオレウスの肉を斬り裂き、大量の血を噴き出す。

「グギャアアアオオオォォォッ！」

悲鳴か怒号かはわからない声を上げるリオレウス。どうやらかなりのダメージになったらしい。クリュウはすぐさま二撃、三撃と剣を叩き込む。三撃目で血に混じって空気に触れて迸る麻痺毒が炸裂。リオレウスの巨体を封じる為に奴の体内に蓄積される。

暴れるリオレウスの脚。ちょっとでも触れれば途端に吹き飛ばされるだろう。クリュウは感覚を研ぎ澄ましてそれらの動きを見極め、紙一重で次々に回避して攻撃を叩き込む。

一方、シルフィードはクリュウが攻撃を開始した瞬間さらに加速。昨日集中的に狙っていた頭を通り過ぎ、翼の下をすり抜け、そこで反転。すぐさま煌剣リオレウスを抜き放つと構えて体中の力を巨剣を支える両腕に注ぎ込み溜める。

狙うは、視界を封じられて盛んに動き回る――尻尾。

「はあああああぁぁぁぁぁッ！」

気合裂帛。限界まで溜め込まれた力を一気に解放。全力で振り下ろされる巨剣はリオレウスの尻尾の中間部分に吸い込まれ、見事に炸裂。鱗を吹き飛ばしながら肉を斬り裂き、大量の血飛沫が舞い上がる。

「ギャアアアアアアアアアッ！」

悲鳴を上げてたたらを踏むリオレウス。シルフィードはすぐさま剣を斬り上げ、今度は溜めなしで勢いを殺さずに剣を叩き込む。再び炸裂した一撃に傷口はより深く広がり、真っ赤な血が飛び散る。

シルフィードの狙いは尻尾の切断。短期決戦ではなく確実に仕留めるなら、唯一全方位攻撃に使われるこの尻尾を何とかしなければならない。尻尾を切断すれば、戦況はグッとこっちが有利になる。

シルフィードは再び寸分狂わぬ場所に剣を叩き込んだ。と、そこへサクラが合流。シルフィードの行動の意味を瞬時に判断したサクラはすぐさま抜刀の一撃をシルフィードの反対側から叩き込む。その一撃は鋭くリオレウスの尻尾を斬り裂き、血を飛び散らせる。

斬り上げ、斬り下ろし、そして振り抜き。次々に流れるような剣の動きで確実にリオレウスの尻尾にダメージを蓄積させる。同時に、サクラの自身にも力が蓄積される。

だが、リオレウスだって目が見えなくとも狙われているのが尻尾だとはわかっている。群がる敵を吹き飛ばそうと尻尾を激しく振り回す。尻尾の先端には骨か、それとも鱗が進化したものかは不明だが巨大な棘（とげ）が数本生えている。もしもあんなものを喰らえば、最悪一撃で即死してしまうかもしれない。シルフィードとサクラはすさまじい緊迫感の中、振り回される尻尾を避けながら確実に一撃一撃を叩き込む。

一方フィーリアは通常弾ＬＶ２の速射を使ってリオレウスに集中砲火をしている。次々に撃ち出される弾丸は容赦なくリオレウスに降り注ぎ、強固な鱗や甲殻がわずかながらも削られ、剥がれ落ちる。リオレウスにダメージを与えられ、注意も引き付けられる。まさに一石二鳥だ。

フィーリアはすさまじい集中砲火を行いながらも頻りにリオレウ

スの下で攻撃しているクリュウを確認する。もし彼がダメージを受ければ、すぐに回復弾を撃つ為だ。
　そんな仲間達の動きにも注意しながら、クリュウはリオレウスの真下で立ち回る。次々に剣撃を叩き込むが、そろそろ閃光玉の効き目が切れる頃。クリュウは最後の一撃とばかりに剣を振るうと、腰にデスパライズを納めて一度を距離を取る為に大きく後退する。同時に、シルフィードとサクラも一度剣を納めて距離を取った。その直後にリオレウスは視界を回復させて周りに群がる敵に向かって怒号を放つ。
　凶悪なまでの迫力に委縮するクリュウ。そんな彼の横にシルフィードが駆け寄って来た。
「私は尻尾切断を狙う。クリュウはなるべく私から離れないように自由に戦ってくれ」
「尻尾切断ですか。じゃあ、シビレ罠を使いますか？」
「必要ない。シビレ罠はもっと後の方、総攻撃などに使いたい。尻尾は地道に攻めるしかないな。だが、君が痺れさせてくれれば、仕事はやりやすくなるのだがな」
　そう言って試すように見詰めてくるシルフィード。そんな彼女を見て、クリュウはしっかりとうなずいた。
「わかりました。シルフィードさんの為にも、がんばりますッ」
　シルフィードはクリュウの言葉に満足そうにうなずくと、再びリオレウスと対峙する。リオレウスは目の前に堂々と立つシルフィードに狙いを定め、ブレスを撃ち放つ。だがシルフィードは横に跳んでそれを回避した。
　一方クリュウはブレスを撃つと生まれる隙を突いて一気にリオレウスとの距離を詰める。そんな彼を援護するようにサクラがブレスを撃ち終わったリオレウスの顔面に抜刀斬りを叩き込む。
「……はぁッ！」
　縦斬りからすぐさま横斬りへ繋げ、次々に剣撃の嵐を叩き込む。だがリオレウスも負けじと至近距離からブレスを撃ち放つ。サクラは間一髪で横に身を投げて回避した。彼女の艶やかな黒髪が数本焼け焦げる。

目標を見失った火球はそのまま直進し、彼女の背後にあった岩壁に直撃。爆発と共に岩壁の一部が吹き飛んだのを見てクリュウは改めてリオレウスの凶悪なまでの戦闘能力を思い知った。
クリュウは一度距離を取る為にバックステップ。尻尾の範囲外に脱出する。刹那、リオレウスはフィーリアに向かって突進。しかしフィーリアはその一撃を横に跳んで紙一重で回避する。勢いを止められず、リオレウスは体を投げ出すようにして無理やり停止する。
サクラはその隙を突いて一気に接近。チームの中で最も動きが俊敏なのは彼女だ。
リオレウスが起き上がる直前にはすでに奴の尻尾に到達。背中の鞘に納めた飛竜刀【紅葉】を抜き放ち、そのままの勢いで一気に振り下ろす。鋭い刃先はリオレウスの強固な甲殻や鱗を切断し、その奥の肉を斬り裂く。血が噴き出してサクラに降り掛かるが、その直前でサクラは一定の距離を取る。この状態で肉薄しても危険だという事がちゃんとわかっているのだ。
リオレウスは逃がした敵を追うように巨大な体をその場でゆっくりと回して振り返る。その瞬間、再びまばゆい光が炸裂して視界を奪われる。
「ギャアアアアアッ！」
閃光玉を投げたのはクリュウ。シルフィードは内心彼の絶妙な閃光玉の使い方に感心すると視界を塞がれたリオレウスに突撃する。狙うはすでにサクラが攻撃している尻尾。だが、リオレウスは近寄られないように体を回して尻尾を大きく振り回す。シルフィードはとっさに伏せて回避すると、再び突進する。
サクラも振り回される尻尾を屈んで回避すると、脚の関節に向かって振り上げの一撃を叩き込む。常に動く関節には鱗などはなく、全身鎧のようなリオレウスの生物としての数少ない弱点の一つだ。そんな場所に一撃を受けたリオレウスはくぐもったような声を上げて一瞬だけ膝を折る。その隙にシルフィードは翼の下をくぐり抜けて剣を構える。力を溜め、全力で刃先を打ち込む場所を見抜く。狙うは先程一撃を叩き込んだ傷口だ。

グッと柄を握る手にも力が込もる。盛んに動き回る尻尾に狙いがなかなか定まらない。だが、シルフィードはスッと瞳を細く絞り、気合と共に一気に振り下ろす。
「はあああああぁぁぁぁぁッ！」
全力を込めて放たれたその一撃は、暴れ回る尻尾の動きを完全に見抜き、見事に狙った傷口に炸裂する。火属性特有の小規模な爆発と共に血飛沫や鱗が吹き飛び、リオレウスは激痛に悲鳴を上げる。
視界がきかない中、リオレウスは狙われている尻尾を必死に振り回して尻尾への攻撃の緩和、同時に周りに群がる敵を殲滅しようとする。サクラは距離を取って回避し、シルフィードは威力を流すようにガードして防ぐ。
一方クリュウは姿勢を低くしてリオレウスに突撃する。頭の上を尻尾が巨大な影や風圧と共に通り過ぎるのを無視し、再び懐に潜り込むと抜き放つと同時にデスパライズを振るう。肉が裂け、血と共に麻痺毒が迸る。確実に麻痺毒は蓄積しているはず。
「このぉッ！」
もう一撃と剣を構えるクリュウだったが、その寸前でリオレウスは視界を回復。目の前のシルフィードに向かって突進。クリュウは突如動き出した脚に巻き込まれて砂煙の中に転がる。
「クリュウ様ッ！」
フィーリアはすぐさま回復弾ＬＶ２を装填し、クリュウが消えた砂煙を見る。砂煙が晴れると、クリュウが片膝をついていた。どうやら間一髪で避けられたらしい。フィーリアは彼の無事な姿を見て安堵の息を漏らすと再び通常弾ＬＶ２を装填してリオレウスを撃つ。
一方のクリュウは間一髪でガードして何とか直撃を避けていた。ゆっくりと立ち上がり怪我がない事を確認すると、リオレウスを見る。シルフィードは突進をうまく避けたらしく、勢い余って倒れたリオレウスの尻尾に向かって剣を振り下ろしている。その反対側ではサクラもまた翼に向かって流れるような一撃を叩き込んでいた。
「僕もッ！」
クリュウは再びリオレウスに向かって突進する。しかしリオレウ

スは翼を広げて暴風と共に上空へ飛び立つ。クリュウはその風圧につい目を閉じてしまう。再び開いた時、奴はゆっくりとこちらに振り向いて来る。
「逃げろクリュウッ！」
　シルフィードの声と同時にクリュウは駆け出す。リオレウスはそんなクリュウに向かって空中から狙いを定め、ブレスを撃ち放つ。クリュウはとっさに岩壁に跳び込んだ。刹那、岩壁にブレスが直撃して爆発。爆音と共に地面が震える。そのあまりの威力に岩壁上部が崩れ出してクリュウに破片が降り注いで来た。
「うわぁッ！」
　クリュウは落ちてくる岩の破片を次々に避け、避けられないものはガードして事なきを得た。再び岩壁から飛び出すと、同時にリオレウスが着地した。
「はあぁッ！」
　シルフィードは横薙ぎに剣を振るう。その刃先は鋭くリオレウスの脚に炸裂し、リオレウスはグッと一瞬膝を折る。そこへサクラが突撃し、リオレウスの顔面に向かって剣を振り抜く。
「……ッ！」
　刃先から爆発が起き、リオレウスの頭を炎が包む。しかし耐火能力に優れているリオレウスの鱗の前にはそのような小さな炎は意味を成さない。そんな事、もちろんわかっている。
「ギャアッ！」
　リオレウスは首を大きく振ってサクラに噛みつこうとする。が、そこへフィーリアの貫通弾ＬＶ２が飛び込んでリオレウスの首を貫いた。
「グギャアアアアッ！」
　首から血を流しながら怒号を放つリオレウス。その口元からは黒煙が噴き出し、瞳は血走っている。完全な怒り状態だ。
　怒り狂うリオレウスは首を撃ち抜いたフィーリアに今までとは桁違いの速さで容赦なく突撃する。フィーリアは慌てて回避するが、完全な回避はできない。迫り来るリオレウスにフィーリアは小さな悲

鳴を上げる。が、そこへ飛び込むようにして閃光玉が炸裂。間一髪でリオレウスの動きが強制的に停止された。フィーリアはそのまま地面に倒れると慌てて起き上がる。
「い、今のは……」
「フィーリアッ！　大丈夫ッ!?」
　立ち上がったフィーリアに駆け寄って来たのはクリュウ。クリュウは無事なフィーリアの姿を見て小さく笑みを浮かべて安堵の息を漏らした。
「良かったぁ。間に合ったみたい」
「では、先程の閃光玉は、クリュウ様が？」
「うん。ほとんど勘で投げたんだけどね。うまくいって良かったよ」
　クリュウも慌ててとっさに投げた閃光玉。だがその閃光玉によってフィーリアは救われたのだ。彼に助けてもらったという実感に、フィーリアにも自然と笑みが浮かぶ。
「ありがとうございました」
「お礼なんていらないよ――っと、今のうちに攻撃しないとッ！
フィーリアは引き続き援護をお願いッ！」
「お任せくださいッ！」
　クリュウに頼られているという実感を改めて感じ、フィーリアは再び気合を入れると貫通弾ＬＶ２を撃ち放つ。その一撃は容赦なくリオレウスの背中を貫く。
　リオレウスに駆け寄るクリュウにサクラが合流する。
「……援護する」
「ありがとう。じゃあ行くよッ！」
「……（コクリ）」
　サクラはダッとさらに加速してクリュウを追い抜くとリオレウスの顔面に再び剣を叩き込む。何も見えない状況でいきなり顔面に攻撃を受けた事によってリオレウスは悲鳴を上げてたたらを踏む。その隙にクリュウは翼の下に潜り込むとデスパライズの柄を握る。
　すでに幾多の攻撃を受けている脚はボロボロ。鱗は剥がれ、傷だらけで血がにじみ出している。だが、それでも尚リオレウスは立ってい

る。何ていう化け物なのだろうか。
「でも、負けられないんだッ！」
ここでリオレウスを倒さないと、村が危険に晒される。
今頃、エレナは何をしているだろうか。自分の帰りを待っていてくれているだろうか。
戦いの最中なのに、ふとそんな事が思い浮かんだ。
そういえば、村を出てドンドルマから直接リオレウス討伐に向かったから、もう二週間以上も村には帰っていない――こりゃ、帰ったらエレナの跳び蹴りのオンパレードを受けるだろうなぁ。
せっかく守っても、報酬が蹴りでは採算が合わないどころか逆に大損だ。せめて何かごちそうしてもらいたいが、蹴りは避けられないだろう。
そんな事を思っていると、自然と緊張が緩む。途端に今まで以上に視界が広く見えた。どうやら緊張して視界がいつの間にか狭まっていたらしい。と、
「うわぁッ!?」
突如視界の隅から尻尾が襲い掛かって来た。とっさに屈んで何とか回避。視界が広がったからこそ回避できたのだと思うと、ちょっとだけエレナに感謝。
「でも蹴りはごめんだよッ！」
クリュウはデスパライズを引き抜くと、両手でしっかりと握る。すでに何度も攻撃しているデスパライズの刃は幾分か欠けている。だが、まだ戦える。
「うわあああぁぁぁッ！」
クリュウは両腕の力を精一杯使って上から下に向かって剣を振り下ろす。彼の全力を込めたその一撃はリオレウスの脚に縦一直線に肉を抉(えぐ)るようにして傷を作り、バシャァッと血が噴き出す。さらにリオレウスが悲鳴を上げる直前、刃先の欠けたドスゲネポスの牙の先端から強力な麻痺毒が流れ出し、空気に触れて発光。そしてそのままリオレウスの体内に流れ込む。
すでに幾多の攻撃でリオレウスの体内には麻痺毒が蓄積され続け

ている。そして、その一撃がついに引き金となった。
「グオオオオオオオオオオッ!?」
リオレウスは悲鳴を上げて突如としてその場で痙攣（けいれん）を始めた。ついにリオレウスが麻痺状態になったのだ。
「や、やったぁッ！」
「よくやったッ！」
シルフィードの激励にクリュウは疲労の中にも小さく笑みを浮かべると、再び真剣な表情に戻って剣を振るう。今がまさに攻撃のチャンス。クリュウはリオレウスの真下でとにかくがむしゃらに剣を振るった。今この時に全力を注ぐ。それだけを考えて……
フィーリアもまた今まで以上の勢いで集中砲火を与える。しかしさすがフィーリア。無数の弾丸を休む事なく撃ち込んでいるのにその全てがリオレウスの背中や翼に命中。的確に真下にいるクリュウ達に当たらないようにしている。
サクラは動きを強制的に止められたリオレウスに突貫。その顔面に向かって溜めに溜めた練気を一斉に解放。すさまじい剣撃の嵐――気刃斬りを炸裂させる。
爆発的に戦闘能力を向上させる気刃斬りはまさに剣撃の嵐。右へ左へ、上へ下へ、様々な方向に剣が舞う。それを自在に操作しながらリオレウスの眼前でサクラが舞い踊る。
息を止め、この瞬間に全力を注ぐようにしてまるでダンスのように華麗に舞う。右足に重心を置いて振り抜き、すぐさまその勢いを使って剣を叩き落とし、体を捻って回転と同時に剣を横薙ぎ一線に振るう。その鋭過ぎるまでの剣撃の嵐にリオレウスのボロボロな頭はさらに形が変形し、真っ赤な血が噴き出す。
容赦のない連続した剣撃の嵐に、リオレウスは悲鳴を上げる事もできずに動かぬ体を必死になって動かそうとする。しかし、当然体は動かない。怒りだけが積もり積もっていく。
クリュウ、フィーリア、サクラの猛攻撃が続く中、シルフィードは一人沈黙していた――正確には体の奥底から湧き上がる力を練りに練って、この一撃に全力を込める為に動かずにいる。

痺れた事によって動かない尻尾は格好の的。クリュウがせっかく作ってくれたチャンスを、無駄にはできない。そんな想いがシルフィードの中で大きく、強く広がっていく。
グッとさらに姿勢を低くし、限界まで力を溜める。
そろそろ麻痺が解ける。その瞬間が最大の攻撃チャンスだ。
「散開ッ！」
シルフィードの指示にクリュウとサクラは一斉にリオレウスから距離を取る。ちゃんと自分の声をわかってくれた事にシルフィードは感心し、狙いを定める。すでに腕には巨大な大剣を一気に振れるだけの力が溜め込まれている。今にも爆発しそうだ。
そして、リオレウスの脚が微妙に動いた瞬間――シルフィードは叫んだ。
「はあああああぁぁぁぁぁッ！」
軸足を固定し、体全体を使って自分の背丈ほどはありそうな煌剣リオレウスをその細腕からは考えられないような怪力で振り上げ、全力で振り下ろす。その剣先は寸分の狂いなくリオレウスの傷ついた尻尾に炸裂――その瞬間、リオレウスの尻尾が一刀両断された。
「ギャアアアアアアアアアッ!?」
リオレウスは悲鳴を上げながら前に倒れ込み、そのまま失われた尻尾の激痛に悶え苦しむ。
一方リオレウスの尻尾を切断したシルフィードの煌剣リオレウスはその刀身の半分近くをヒビの入った地面に埋めていた。そのすさまじい破壊力を物語っている。
地面に沈んだ大剣を持ち上げて再び背中に戻すシルフィード。その横には切断されたリオレウスの尻尾が無残な形で落ちていた。
実に鮮やかな技の前に、一瞬三人は呆けてしまう。そんな三人にシルフィードは一喝。
「まだ戦いは終わっていないッ！　気を抜くなッ！」
シルフィードの怒号にハッとし、三人も慌てて再び戦闘態勢に戻る。
リオレウスはゆっくりと起き上がると、目の前の敵に向かって怒号

（バインドボイス）を放つ。殺気の奔流が荒れ狂い、大地を震わせる。
幾多の攻撃を受けてボロボロになっても尚威風堂々と立つその姿はまさに王者。決して情けない姿は晒さない、そんな誇りを胸に生きる王者の風格そのものだ。
リオレウスの怒号（バインドボイス）を遮断できる耳栓のスキルを持つシルフィードは構わず突っ込む。むしろ彼女にとってこの咆哮時は攻撃のチャンスなのだ。
リオレウスの眼前に駆け込み、背中に下げた煌剣リオレウスの柄を握り締めると、そのままの勢いで剣を振り抜く。
「喰らえッ！」
左足をガッと地面のわずかなへこみに引っ掛けて体を急停止。しかし勢いはそのまま軸足となった右足を中心に体を回転させる力に変え、遠心力が加わった勢いは煌剣リオレウスに注がれる。
シルフィードは全力で煌剣リオレウスを横薙ぎに振り抜く。巨大なその刀身は殴り飛ばすかの勢いでリオレウスの左側頭部に炸裂。火属性の小爆発が加わり、強大な威力となってリオレウスを襲う。
「グギャアアアアアアアアアッ！」
炸裂した煌剣リオレウスによって、リオレウスの顔の左側に目から口元までに大きな裂傷ができ、大量の血が噴き出す。
「グワアアアアアアアアアッ！」
怒り狂うリオレウス。バッと翼を広げて首を持ち上げる。その動作にシルフィードはすぐさま剣を盾のようにして横向きに構える。
刹那、リオレウスの口から爆炎のようなブレスが撃ち放たれた。そのあまりの威力にすさまじい爆音と同時に地面が爆砕。荒れ狂う暴風がクリュウ達を吹き飛ばし、立ち上る炎と煙、そして砂塵がシルフィードの姿を隠す。
暴風から目を守るように片手を添えながら、細く目を開いてクリュウはシルフィードの姿を捜す。だが、辺りは砂煙しか見えない。
「シルフィードさんッ！」
「グワアアアアアアアアッ！」
再び炸裂する怒号とブレス。一発一発に全力を込めたブレスが数

発発射され、岩壁や地面などが次々に爆発し跡形もなく消える。砂煙はより一層ひどくなり、いつの間にかクリュウはシルフィードだけでなくフィーリアとサクラの姿まで見失ってしまった。
「みんなッ！　どこにいるのッ!?」
　クリュウは必死に辺りを見回して三人の姿を探す。と、その時空気の流れが変わった事を敏感に感じ取った。なぜそんな事ができたのか、自分でもわからない。でも、勘でわかった。
　続いて響く地響き。そこまで理解した瞬間、クリュウはとっさに盾を構えた。刹那、視界ゼロに等しい中、砂煙を掻きわけてリオレウスが突っ込んで来た。ガバァッと開いた口はクリュウに噛み付こうとしているように正確にクリュウに迫る。
「……クリュウッ！」
　突然、クリュウは横から誰かに押し倒されて地面に転がった。そのわずか数センチ横をリオレウスの巨体が暴風を纏いながら通り過ぎて行った。
　うつぶせに倒れるクリュウは、自分の背中に誰かが覆い被さっている感触に慌てて振り返った。見えたのは黒く艶やかな見慣れた長髪。
「さ、サクラッ!?」
「……無事？」
「う、うん。ありがとう」
　サクラはフルフルと首を横に振る。
「……礼はいらない」
　サクラは先に立ち上がるとスッとクリュウに無言で手を差し伸べる。クリュウはその手に掴まって立ち上がった。だが、砂煙に覆われていて視界がはっきりしない。わかるのは、ギュッと握られたサクラの温もりだけ。
「これじゃ周りが見えないよ」
「……気をつけて。いつリオレウスの攻撃があるかわからないから」
　サクラはそう言うと周りの気配を探るように辺りを見回す。クリュウにはわからないが、サクラくらいのレベルになると気配で対処できるらしい。それは先程助けられた事でも立証されている。

クリュウもこれまで培ってきた経験から何とか気配を探る。先程もそうしてとっさに盾を構えたのだ。しかし今度は全然わからない。さっきのはまぐれだったらしい。
不安に胸が押し潰されそうになる。そんな彼の気持ちを悟ったのか、サクラがギュッとより強く手を握り締めて来た。
「サクラ……」
サクラは何も言わず、気配を探る事に集中している。ただその手は、しっかりとクリュウの手を握り締めて離さない。そんな彼女の気持ちにクリュウは感謝する。
――クリュウは気づいていない。サクラが手をギュッと握って来たのは、彼の為でもあると同時に自分の為であるという事を。
サクラのように経験豊富なハンターでも、完全に気配を探り切る事はできない。さっきクリュウを助けたのだって、彼の悲鳴が聞こえたからというのが大きい。本当は自分だって不安だし、怖い。そんな想いを紛らわせる為に、手を握ったのだ。
その時、突如辺りに暴風が吹き荒れた。すさまじい風圧に、クリュウとサクラは吹き飛ばされて地面に倒れる。その直上を巨大な何かが通り過ぎて行った。それが何なのか、二人は確認するまでもなかった。
慌てて立ち上がり、暴風のおかげで晴れた辺りを見回す。すると、少し離れた場所にシルフィードとフィーリアの姿を見つけた。
「シルフィードさんッ！　フィーリアッ！」
クリュウとサクラは二人に急いで駆け寄る。フィーリアはそんな二人を一瞥し、彼らの背後に向かって閃光玉を投げた。刹那、振り返ったリオレウスの眼前で炸裂。再びリオレウスは視界を封じられた。
「お怪我はありませんかッ!?」
「僕は大丈夫。サクラも」
「……（コクリ）」
クリュウの言葉にフィーリアはほっと胸を撫で下ろす。砂煙に消えたクリュウ（一応サクラも）の安否が確認できず、フィーリアはずっ

と不安に胸が押し潰されそうだった。構えられたハートヴァルキリー改の弾倉にはフルで回復弾ＬＶ２が装填されている。
「それより、シルフィードさんは大丈夫ですか？」
　クリュウは先程リオレウスのブレスを受け止めたシルフィードに怪我はないかと問う。シルフィードはそんな彼の言葉に口元に小さな笑みを浮かべてうなずく。
「リオソウルシリーズは耐火能力に優れている。何せ蒼リオレウスの鱗や甲殻でできてるのだからな。あの程度の火力では問題ない」
　恐るべき蒼リオレウスの防具、リオソウルシリーズ。クリュウは改めて自分と彼女のすさまじい差を感じた。
「でも皆さん無事で良かったです。これからどうしますか？」
　フィーリアは弾倉に貫通弾ＬＶ１を装填しながら問う。サクラもシルフィードの次の指示を待っている。クリュウは今のうちとばかりに砥石を使ってボロボロになったデスパライズの刃を研ぐ。でもちゃんとシルフィードの指示を聞くように構えている。
　シルフィードはそんな三人に向かってリオレウスを一瞥してから指示を出す。
「リオレウスの尻尾は切断した。これで奴の全体攻撃はほぼ封じられたも同然。さらに奴も相当体力を疲弊（ひへい）して来ているはず――たたみ掛けるぞ」
「はいッ！」
「……（コクリ）」
　四人は再びそれぞれの武器を構え直して戦闘態勢に入る。刹那、リオレウスの視界が復活して、再び殺気の奔流が吹き荒れる。
「グギャアアアアアアアアッ！」
　怒り狂うリオレウスは四人に向かってブレスを撃ち放つ。四人は一斉に左右に跳び、クリュウとシルフィードは右へ、フィーリアとサクラは左へ回避する。しかしすぐさまリオレウスは突撃を開始して四人に襲い掛かる。四人はより間隔を開くようにして散開。リオレウスは誰もいない空間に体当たりする事になった。
「シルフィードさんッ！　罠を使いたいんですがッ！」

「わかったッ！」
シルフィードはクリュウの声にうなずくと、すぐさまリオレウスに突貫。サクラもまたそれに遅れながらも突進する。
「貴様の相手はこの私だッ！」
シルフィードは立ち上がって振り返るリオレウスの顔面に煌剣リオレウスを叩き込む。予期しない強力な一撃にリオレウスは悲鳴を上げてたたらを踏む。そこへサクラが突っ込み、地面を蹴って跳び上がった。
「……はあああああぁぁぁぁぁッ！」
サクラは空中で抜刀すると、その鋭い刃先を下段に構えてリオレウスの翼の上を滑空。飛竜刀【紅葉】の刃先を翼膜に突き付けて一気に斬り裂く。
「グオオオオオオオオオッ！」
翼膜に突き刺さった飛竜刀【紅葉】はそのまま滑空するサクラの勢いを利用してズバァッと引き裂く。しかし角度が甘かったせいか、完全に寸断する事はできなかった。
サクラは悔しそうに舌打ちすると、そのままリオレウスの背後に着地しようとする。だがそこへリオレウスの尻尾が襲い掛かって来た。いくらシルフィードが切断したとはいえそれは先端部分。付け根から中部までは残っており、そこが襲い掛かって来たのだ。
空中では回避する術がない。サクラは何もできないままリオレウスの尻尾に直撃。そのまま悲鳴も上げずに吹き飛ばされて地面に転がった。手放された飛竜刀【紅葉】は彼女の後ろに刺さり、凛【鉢金】という彼女の暁色の額当てがカランと小さな音を立てて地面に落ちた。
「サクラ様ッ！」
フィーリアはすぐさま回復弾ＬＶ２をサクラに向かって最大装填数である三発を発射。すぐに彼女の下へ駆け寄る。
「よくもッ！」
倒れたサクラを一瞥し、シルフィードは煌剣リオレウスを握り直してリオレウスの翼に巨大な刃先を叩き込む。

一方のクリュウはサクラが吹き飛ばされた事に慌てたが、すぐさまフィーリアが回復弾を撃って駆け寄ったのを見て、とにかく急いで荷車に駆け寄ってシビレ罠を取り出す。
「シルフィードさんッ！」
クリュウが声を上げると、リオレウスと肉薄するシルフィードはすぐさま後方に距離を取る。しかしリオレウスは逃がすまいと逃げるシルフィードを追い掛けて突進する。
「くぅ……ッ！」
あっという間に追い付いて来るリオレウスはシルフィードに向かって噛み付こうと鋭い牙が無数に並ぶ巨大な口をガバァッと開いて襲い掛かる――だが、間一髪でクリュウが放った閃光玉が炸裂。リオレウスは強制的に動きを停止された。
「シルフィードさんッ！　大丈夫ですかッ!?」
クリュウがシルフィードに駆け寄ると、シルフィードは武器を構えたまま振り向き小さく笑みを浮かべる。
「あぁ、助かったよ」
クリュウはほっと胸を撫で下ろすが、すぐにサクラの事を思い出して彼女に駆け寄る。シルフィードはサクラの事は二人に任せ、再び突撃。少しでも注意を引き付けるつもりでいた。
「サクラッ！」
クリュウが駆け寄った頃にはサクラはフィーリアに肩を借りて立ち上がっていた。しかし少々足取りが危ない。かなりのダメージを負っているらしい。
「サクラ大丈夫ッ!?」
「……問題ない」
「む、無理してはいけませんよッ！　フラフラじゃないですかッ！」
サクラはフィーリアの制止を振り切って一人で立ち上がると、地面に刺さる愛刀を拾い上げて構え直す。だがその動きが先程よりも格段に落ちているのはクリュウでもわかった。
「フィーリアッ！　サクラを安全な場所まで連れてってッ！　ここは僕とシルフィードさんで押さえるからッ！」

「えッ!?　し、しかし……ッ！」
「早くしてッ！」
「わ、わかりましたッ！」
「……ッ!?　い、嫌ッ！　私はクリュウを守るッ！」
　クリュウの指示にいつも冷静沈着なサクラがまるで別人のように冷静さを失って声を荒げる。だが、こういう時に感情的になるのはより危険。クリュウの決意は変わらない。
「そんな状態じゃ戦えないでしょ？」
「……」
「サクラとフィーリアは撤退。フィーリアはサクラを安全な場所まで連れて行ってから合流して。それまでは何とか僕とシルフィードさんで耐えるから。急いでッ！」
　クリュウはそう言うと単独でリオレウスと対峙しているシルフィードに向かって走る。そんな彼の背中を見送り、フィーリアはサクラに肩を貸して反対方向に歩き出す。
「急ぎましょうッ！」
「……わかった」
　サクラは少々落ち込んだような声で答えると、フィーリアに肩を借りて歩き出す。その足取りはおぼつかないまま、無念の戦線離脱となった。
　サクラとフィーリアの離脱を独断で下したクリュウは、シルフィードに怒られるのではないかと少々の不安があった。しかし、駆け寄る自分に気づいて近づいて来たシルフィードは――
「まったく、君らしいというか何というか」
　苦笑するシルフィード。クリュウは怒られなかったと安堵するが、そんな彼女の笑みに申し訳ないという気持ちが込み上げる。
「す、すみません……」
「君が謝る事じゃないさ――っと、じゃあその分しっかりと働いてもらおうかッ！」
「はいッ！」
　閃光玉の効き目が切れて向き直るリオレウスに対峙するクリュウ

とシルフィード。怒り狂うリオレウスは巨大な翼を羽ばたかせて、暴風と共に天に舞い上がる。襲い掛かる暴風を二人はそれぞれ盾と剣で防ぎ、上空へ飛び立ったリオレウスを見詰める。
「走れッ！」
「はいッ！」
リオレウスからの空中攻撃を避ける為に、二人は左右別々に走り出す。
反対方向に逃げる敵にイラ立ちながら、リオレウスは翼を大きく羽ばたかせて方向転換する。追い掛けるのはクリュウだ。
「クリュウ気をつけろッ！」
シルフィードの声にクリュウがハッとなって振り返ると、リオレウスが上空から自分を睨みつけていた。そしてガバァッと巨大な口を開くと、のどの奥、体内にある火炎袋で練り込んだ強烈な炎の塊をブレスとして撃ち出す。
爆音のような轟音と共に撃ち出されたブレスは一直線にクリュウを襲う。着弾寸前、クリュウは真横に身を投げ出すようにして回避。ブレスは外れた。しかし、立ち上がろうとしたクリュウに向かって再びブレスが襲い掛かる。
「うわぁッ！」
慌てて再び横へ跳ぶ。ギリギリで回避できたが、今度は至近距離で爆発したのでそのすさまじい爆風に吹き飛ばされ、クリュウは数メートルもの距離をゴロゴロと転がった。そこへリオレウスは最後の一撃とばかりにブレスを撃ち込む。クリュウは迫り来るブレスに慌てて起き上がる。が、その時にはすでに目の前まで火炎が迫っていた。無駄だとわかっていてもとっさに盾を構えた。
「させるかぁッ！」
そこへシルフィードがクリュウとブレスの射線上に入り込んで来た。驚くクリュウの前でシルフィードは煌剣リオレウスを横に構えてガード体勢になる。直後にブレスが直撃し、辺りを爆発が包む。
爆発の中に消えた二人の敵に、リオレウスは勝利を確信して悠々と大地に降り立とうとする。しかしそこへ突如黒煙の中から小さな玉

のような物体が放たれた。気づいた時には遅く、玉はリオレウスの眼前で炸裂。まばゆい光が辺りを包み込み、リオレウスに衝撃と共に視界を奪う。その瞬間、リオレウスはバランスを崩して落下。地面に叩き付けられた。

そして、倒れるリオレウスに向かって黒煙の中からシルフィードとクリュウが飛び出す。そのどちらも煤焦げていたりしているが、無傷だった。

シルフィードがうまくブレスを受け止めたおかげで、二人は助かったのだ。

前を走るシルフィードに、クリュウは改めて彼女は頼りになると思った。あんな危険な行為、自分はたぶんできないだろう。でも、おかげで助かったのだ。

彼女にこうしてブレスから身を守ってもらうのは、これで三度目。彼女には本当に感謝してもし切れない。

「クリュウは罠を仕掛けろッ！　急げッ！」

「はいッ！」

突撃するシルフィードと別れ、クリュウはリオレウスから少し距離を取った場所にシビレ罠を仕掛ける。すぐさまもう一度荷車に走り、今度は落とし穴を手に取ってシビレ罠のさらに後方に設置した。

一方クリュウがお得意のトラップを設置している間に、シルフィードは視界を封じられてもがくリオレウスの翼に煌剣リオレウスを振り下ろす。翼を引き裂かれ、真っ赤な血がバシャアアアアアッと噴き出しリオレウスは悲鳴を上げる。すぐさま振り下ろした剣を持ち直し、横薙ぎに脚に振るい、今度は胴体に向かって振り下ろす。その重量ある一撃はリオレウスの強固な鱗や甲殻さえも粉砕し、肉を抉るように傷を負わせる。

見えない敵に一方的に攻撃される。それは誇り高き空の王者であるリオレウスにとって屈辱以外のなにものでもない。

「グオオオォォォッ！」

リオレウスは憎き敵を吹き飛ばそうとその場で時計回りに回転する。しかしすでに尻尾を切断されているのでその攻撃範囲は狭い。

シルフィードは最低限の動きだけで回避すると、再び強力な一撃を叩き込む。
「シルフィードさんッ！」
設置を終えたクリュウが叫ぶと、シルフィードはすぐさま武器を収納し、踵を返してクリュウの下へ駆け寄る。その際に設置されている罠を確認する。
「そろそろ閃光玉の効き目が切れる。気をつけろ」
「はい」
クリュウとシルフィードはシビレ罠の後方にて武器に手を掛ける。奴がシビレ罠に掛かったらすぐさま抜刀攻撃をする構えだ。
二人が準備を整えて見詰める中、リオレウスは閃光玉がの効き目が切れた嬉しさからか、天に向かって吼える。そして、クリュウ達に向かって振り向くと、怒りに燃える右目でギロリと憎き敵の姿を捉える。
「グギャアオオオオオオオオオッ！」
怒りのバインドボイス。安全な間合いがあるので効果はないのに、その殺気に満ちた怒号はビシビシと二人の本能に警鐘を鳴らす。
自然と、デスパライズの柄を握る手にも力が込もる。
リオレウスは逃げずに自分と対峙する敵に向かって再び怒号を放つと、その敵を踏み潰す為に突撃する。
迫り来る死という恐怖。すさまじいその迫力に逃げ出そうとする弱い自分を戒（いまし）め、グッと柄を強く握り締めて迫り来るリオレウスを睨み付ける。
そして――
「グオオオオオオッ!?　グワオオッ！　ギャアアッ!?」
再び全身に痺れが駆け抜け、体が一瞬にして動かなくなる。自分の体なのに、自分のものではないかのように動かない。何とか必死になって体に力を込めて動こうとするが、全く歯が立たない。
完全に体の自由を奪われたリオレウスに向かって、クリュウとシルフィードは一斉に大地を蹴って突撃する。
「喰らえッ！」

クリュウはリオレウスの顔面に向かってデスパライズを叩き込む。鱗が剥がれ、傷が生まれて血が噴き出し、内蔵された麻痺毒が迸る。すぐさま次の一撃に繋げて横薙ぎに振るい、再び縦、そして回転斬りにまで繋げて攻撃。ステップと共に立ち位置を変えて再び剣を叩き込む。クリュウの容赦のない攻撃の数々に、リオレウスの怒りの炎は激しく燃え上がる。

さらに攻撃はクリュウだけではない。無防備な胴体に向かってシルフィードは溜め斬りを炸裂させる。その一撃はリオレウスの強固な鱗や甲殻を吹き飛ばし、中の肉を斬り裂き血を飛び散らせた。

振り下ろしの一撃はすぐさま横薙ぎに繋げ、再び煌剣リオレウスを構え直して力を溜める。そしてリオレウスがようやくシビレ罠から解放された瞬間、再びシルフィードの強力な一撃がリオレウスに叩き込まれる。

「ギャオオオォォォッ!?」

悲鳴を上げてたたらを踏むリオレウス。二人はその隙にすぐさま後ろに設置してある落とし穴にまで後退。リオレウスと距離を取る。

リオレウスは激痛に耐えながら再び離れた敵を睨み、怒りの炎を凝縮して撃ち放つ。ブレスは待ち構える二人に襲い掛かるが、二人は完全にその弾道を見切っており、簡単に回避する。

自らの攻撃をあざ笑うかのように余裕で回避する敵にリオレウスは怒り狂いながら突撃する。怒りで冷静さを失った彼が求めるのは勝利の血の味。ガバァッと黒煙を吐き出す口を大きく開き、このまま突撃して噛み付く。今の彼が考える事はそれだけだ。

怒りとは冷静さを失わせ、動きを単調にしてしまう。それは本人が決して気づく事はない。だが、対峙する者にはその変化は手に取るように分かる。

迫り来るリオレウスにクリュウは恐怖を打ち負かしながら対峙する。そんな彼の横では、迫り来るリオレウスを見詰め――小さく口元に笑みを浮かべるシルフィード。

リオレウスがその笑みに何かを察した時にはすでに手遅れ。その瞬間、突如襲った一瞬の地面喪失。その次の瞬間には体が一気に降下

して目線が半分近くの高さまで下がる。そして、下半身は地面に陥没し、周りの土などが粘りついて来て動きは封じられる。
小賢しい敵の策だとは頭では理解している。でも、上半身しか動かせずにその場に拘束されたという焦りから、もう何も考えられずに暴れ回る事しかできない。
リオレウスが落とし穴に引っ掛かった瞬間、クリュウとシルフィードは地面を蹴ってリオレウスに襲い掛かる。
「うりゃぁッ！」
暴れ回るリオレウスの胸に向かってクリュウはデスパライズを叩き込む。血と共に迸る麻痺毒が再び着実にリオレウスの体内に注ぎ込まれる。クリュウは構わず連続して剣を振るい、次々に攻撃を当てて行く。
シルフィードは上半身だけで暴れ回るリオレウスに向かってグッと姿勢を低くして巨大な剣を構えたまま、どんどん力を溜めていく。そして力が限界に達した瞬間、
「はあああああぁぁぁぁぁッ！」
限界まで溜め込まれた力を一気に解放。爆発的な力で振り下ろされた巨剣の一撃はリオレウスの胸をズバァッと引き裂き、大量の血を噴き出す。
「ギャアアアアアアアアッ！」
激痛と怒りで咆哮するリオレウス。暴れ回る力もより強くなり、激しく抵抗する。クリュウはその動きに激突しないように注意しながらひたすら武器を振るう。すでにデスパライズにはベットリとリオレウスの真っ赤な血が付着している。それでもクリュウは全力で武器を振るい続ける。
今までにないほどの長期戦に手は力を込めるたびにズキズキと痛む。それでもクリュウは諦めない。
ここでリオレウスを倒さないと、村が危ない。
自分の役目は、故郷のイージス村を守る事。今回の戦いはその役目そのものだ。絶対に負けられない戦い。
ただ武器を振るう事だけに集中するクリュウ。そんな彼に向かっ

てシルフィードが叫ぶ。
「後退だッ！」
シルフィードの声に、クリュウはすぐさま攻撃を止めてバックステップで距離を取る。シルフィードも同じだ。
刹那、落とし穴が限界を越えてしまい、リオレウスは地面から脱出。巨大な翼を羽ばたかせて浮き上がると、元の土に戻った落とし穴だったものの上に重々しく降り立つ。
再び対峙する両者。
すでに勝敗は決しているとも言っていい状況であった。
体も誇りもボロボロな空の王者リオレウスに対し、クリュウとシルフィードは疲労こそしているものの無傷同然。まだ戦う力は残っている。
リオレウスの口から絶え間なく噴き出ていた黒煙が消えた。
刹那、リオレウスは二人に背を向けて歩き出す。その片足はズルズルと引かれている――それはモンスターが弱っている証拠だ。
「逃げる気だッ！」
シルフィードはすぐさま追撃する。クリュウは一度荷車に走り、打ち上げタル爆弾Gを数個抱えて走る。
シルフィードは逃げるリオレウスに向かってペイントボールを投げ付けてから煌剣リオレウスを叩き込む。しかしその刃先が触れる寸前、リオレウスは翼を大きく羽ばたかせて空へ飛び立った。舌打ちするシルフィード。しかしすぐそこへクリュウが到達すると慣れた手つきで一斉に打ち上げタル爆弾Gの狙いを定めてピンを抜く。次々に打ち出される打ち上げタル爆弾Gはリオレウスの脚や翼、胸などに次々に命中して爆発するが、リオレウスはそれに耐えてさらに高空へ逃げる。ついに打ち上げタル爆弾Gの射程外にまで上昇したリオレウスはそこで水平飛行に移ると、空の向こうへ去って行ってしまった。
広場に再び平穏な風が通り抜け、二人の緊張の糸も切れる。シルフィードは深く息を吐きながら煌剣リオレウスを背に戻す。クリュウは疲れのあまりバサルヘルムを脱いでその場にぐったりと座り込

む。
「大丈夫か？」
心配するシルフィードにクリュウは「大丈夫です……」と力なく答える。口ではそう言ったが、実際はもうヘトヘトだ。腕だってズキズキ痛む。
クリュウが息を整えている間にシルフィードは荷車に歩み寄り、それを引っ張って再びクリュウの下に戻る。疲れているのは確かだが、それにしても自分以上に激しい戦いをしていたのに動く余裕が残っているシルフィードに改めてクリュウは敵わないなぁと苦笑いする。
「どうした？　怪我でもしたのか？」
クリュウが右手のバサルアームを外して石の上で薬草をすり潰しているのを見てシルフィードが不安そうに訊いて来る。
「いえ、ちょっと無理したせいで腕が痛くなっただけです。薬草を塗っておけば問題ないですよ」
そう言ってクリュウはすり潰した薬草を包帯に塗り、右手に左手で巻こうとする。しかしなかなかうまくいかない。すると、スッとシルフィードの手が伸びて包帯とクリュウの手を掴み、丁寧に巻いてくれる。
「あ、ありがとうございます……」
「礼などいらない。仲間なら助け合うのは当然だ。料理はダメでもこれくらいは私でも出来るからな」
「まぁ、治療の仕方を知らないのはさすがにヤバイですからね」
「そういう事だ。生きるか死ぬかに直結する問題だからな」
「いや、食事が作れないというのも直結すると思いますが」
「そうだな」
クリュウのツッコミにシルフィードはおかしそうに小さく笑う。その戦闘時とはまるで違う優しげなお姉さんのような笑みに、クリュウは一瞬ドキッとする。
「これで良し。包帯はきつくはないか？」
「え？　あ、はい。大丈夫です。ありがとうございました」
クリュウは丁寧に礼をすると、アームを付け直して道具袋（ポーチ）

の中から回復薬グレートを一本取り出し飲み干す。さらに常に常備している元気ドリンコを二本取り出す。
「どうぞ」
　そのうちの一本をシルフィードに渡した。
「ありがとう」
　シルフィードは元気ドリンコを受け取る。クリュウは残った一本を一気に飲み干す。シルフィードもゆっくりと飲む。
　元気ドリンコとしばしの休憩で体力を回復させたクリュウは立ち上がった。すでに十分息を整えるだけの休憩はした。戦闘終了直後に比べれば体の軽さが全然違う。
　シルフィードもクリュウと同じく疲れを取った。二人とも砥石で武器の切れ味を直し、素材を調合して罠を作り直した。準備は万端だ。
「どうやらリオレウスはこの山の頂上付近に向かったらしいな。脚を引きずっていた所を見ると、眠るかもしれないな」
「この山の頂上には飛竜が入れそうな洞窟がありますけど」
「おそらくそこが巣だろうな。案内してくれ」
　すぐさま歩き出すシルフィードに、クリュウは「え？」と驚く。まさか二人だけで行くつもりなのだろうか。
「あ、あのシルフィードさん。フィーリアやサクラと合流した方がいいのでは」
「いや、脚を引きずったという事は眠って体力を回復する可能性が高い。寝てしまえば奴は驚異的な治癒能力で回復してしまう。そうなればこっちが不利になる。時間がない」
「で、でも……」
　クリュウはサクラとフィーリアが消えた方向を不安そうに見詰める。と、その視線の先で何かキラリと光るものが見えた。それを見てクリュウの瞳が大きく開く。
「あれは……ッ」
「クリュウ？」
　駆け寄ったクリュウが拾い上げたのは、先程の戦闘で取れたサクラ

の額当てだった。
額当てを見詰めたまま動かないクリュウに、シルフィードが近づく。
「それは……」
「……サクラは、大丈夫ですよね？」
クリュウは振り返り、背後に立つシルフィードに問う。
先程の戦闘で負傷したサクラの無事が、クリュウの中で不安となって大きくなっている。
サクラは大切な仲間だし、子供の頃からの付き合いだ。そんな彼女が怪我をして今も苦しんでいるかもしれないと思うと、不安で胸が押し潰されそうになる。
すがるような必死なクリュウの瞳に、シルフィードはしばし沈黙する。その沈黙が、クリュウの中の不安をより大きく、黒く染めていく。
「シルフィードさん……」
「――彼女が凄腕のハンターだという事は、君の方がよく知っているのではないか？」
「そ、それは……」
「ならば、君が信じないでどうする？　少なくとも、君よりはずっと彼女と共にいた時間が短い私は、彼女を信じている」
シルフィードは迷わずそう断言した。そのうそ偽りのない真っ直ぐな言葉に、クリュウは少しだけ安心を得た。自然と口元に小さく笑みが浮かぶ。
「そうですよね。信じる事が大切ですよね。さすがシルフィードさん」
「そんな事ないさ」
そう言ってキラキラとした瞳で見詰めるクリュウに背を向けるシルフィード。クリュウからは見えないが、彼女の頬はほんのりと赤く染まっていた。
「じゃあ、早くリオレウスを追いましょう。きっとフィーリアも途中で合流してくれるはずですから」
「そうだな。では行くぞ」

「はいッ！」
歩き出すシルフィードを追い掛けるようにして、荷車を引っ張って歩き出すクリュウ。その瞳は希望に満ち溢れていて、純粋にキラキラと光っている。その視線が、ちょっぴりくすぐったいシルフィードは彼には見えない位置で小さく照れ笑いしていた。
クリュウはどこまでも澄んだ蒼い空を見上げ、そっと脱いでいたバサルヘルムを被る。狭まった視界で見詰めるのはこのリフェル森丘で最も高い山の頂。あそこにある洞窟に、きっとリオレウスはいる。
長かった戦いもこれが最後。気合を入れ直し、王の住まう砦とも言うべき山頂を目指し歩く。
二人を見守る大空は、雲ひとつない快晴。空の王者との最終決戦に相応しい天気であった。

第７４話　最終決戦　誇り高き空の王者リオレウス

山頂へ向かうクリュウとシルフィード。二人だけで大丈夫かという不安をクリュウが抱いていると、反対方向からこちらに向かって歩いて来るフィーリアとサクラと再会した。
「お二人ともご無事で何よりです」
フィーリアは開口一番に二人が無事だった事への安堵の言葉を言う。常に仲間の無事を心配する彼女らしい言葉だ。
「私達は問題ない。それよりサクラ、君は大丈夫なのか？」
「……（コクリ）」
シルフィードの問いに首の動きだけで答え、サクラはパタパタとクリュウに小走りで駆け寄ると、上から下まで何度も何度も丹念に彼の体をチェックする。
「さ、サクラ？」
「……良かった。怪我はない？」
どうやら怪我がないかチェックしていたらしい。常にクリュウの無事だけを心配している彼女らしい言葉だ。その気配りをもう少し他の仲間にも注いでほしいが……
「うん、僕は大丈夫だよ」
クリュウの言葉にサクラの背後にいたフィーリアはホッと胸を撫で下ろした。彼が実は怪我しているのではないかと少しでも不安があっただけ、彼のその言葉は彼が無事という何よりの証拠だ。
しかし、サクラは無表情のままじーっと何かを見詰めていた。クリュウがその視線を追うと、それは自分の右腕だった。
「右腕がどうかした？」
「……薬草の匂いがする」
「えぇッ!?」
まさか防具の下に軽く塗られた薬草の匂いを嗅ぎ付かれるとは思っていなかったクリュウとシルフィード。愛の力は時に人知を超えた力を発揮する事があるのだ。
「クリュウ様、お怪我をされているんですか？」

フィーリアが見せてくださいと言わんばかりの勢いで右手を掴んで来た。クリュウはそんな彼女に「大丈夫だよ」と言って安心させる。
「ちょっと手を酷使し過ぎて痛くなっただけだから。怪我ってほどのものじゃないよ」
「で、でも大丈夫ですか？」
「うん。もうほとんど痛みもないし、これなら問題ないって。それよりもサクラの怪我の方は大丈夫なの？」
そういえば騒がしかったせいですっかり忘れていたが、サクラの怪我は大丈夫なのか。一時的とはいえ戦線離脱したほどなのに、見る限りでは無事に見えるが。
「……大丈夫、問題ない。持って来た薬をありったけ飲んだから」
「それって、大丈夫って言うのかな？」
ちなみにサクラが飲んだのは秘薬を始めとして強走薬グレート、鬼人薬グレートに硬化薬グレート、活力剤等々、もう手当たり次第というようなもの――それだけ早くクリュウの下に駆けつけたかったという彼女の気持ちの表れだ。
「でも、無事で良かったよ。心配してたんだよ」
「……あ、ありがとう」
クリュウに心配されていた。それが嬉しくて仕方がないのか、サクラはうつむいて彼に見えない位置でニヤニヤと小さく笑みを浮かべ、体を微妙にクネクネさせる。もちろん隣に立つフィーリアには丸見えだ。
「むぅ……」
サクラばっかりいい想いをしてムッとするフィーリア。相変わらず何事においてもサクラはフィーリアの一歩先を進んでいるようだ。
そんな二人の間の争いの原因であるという自覚などまるでないクリュウは全員無事に揃った事に嬉しそうに笑みを浮かべる。そんな彼を一瞥し、シルフィードは二人に状況を説明する。リオレウスが巣に逃げた可能性が高い事、次の戦いが最後になるだろうという事など、二人がいない間に起きた事を説明する。
「そうですか。でも山頂には途中の細道に阻まれて荷車は持って行け

ませんよ。爆弾や罠の運搬にかなり苦労しますが」
「……眠っている時に爆弾を使えば大ダメージを与えられる」
「そうだよね。じゃあ必要最低限の装備だけ持って行こうよ。僕が運ぶからさ」
「では方針は決まったな。急いで向かうぞ」
「「はいッ！」」
「……（コクリ）」
シルフィードを先頭に再び荷車をクリュウが担当し、フィーリアとサクラが左右を守るおなじみの陣形（フォーメーション）で進む一行。
四人全員が揃えば、一人一人は小さくてもリオレウスに対抗できるだけの力を出せる。それが仲間というものだ。
シルフィードは、自分の信頼の置ける一時的とはいえ仲間であるクリュウ達を誇りに思えた。
こんな仲間と一緒に狩りができれば、きっと楽しいだろう――そんな事を思いながら。
一行は最終目的地である山頂を目指して荷車を捨てて、爆弾をクリュウとシルフィードが、罠などはそれぞれが分担して運びながら先を急いだ。
一行は再び舞い戻って来た。
昨日リオレウスと死闘を繰り広げた末に、王の逆燐に触れて逆襲の業火で吹き飛ばされて全滅した山頂手前の広場。この先にある高台、そのさらに向こうにある洞窟が目的地である飛竜の巣だ。
クリュウ達の予想では瀕死のダメージを受けているリオレウスは巣に戻って傷を癒す為に眠っていると思われた――しかし、奴はそこに威風堂々と待ち構えていた。
「り、リオレウスッ!?　何でここにいるのッ!?」
「待ち伏せかッ！　戦闘用意ッ！」
予想外のリオレウスの行動にシルフィード、フィーリア、サクラはそれぞれ武器を構える。クリュウは自分のとシルフィードの大タル爆弾Ｇを慌てて安全そうな岩陰に隠してから武器を構えた。
意外にもリオレウスは攻撃して来なかった。ただこちらをじっと

見詰め、低く唸るだけ。隻眼となった彼は先程のような怒り狂う事はせずに佇（たたず）む。
　睨み合う双方。どちらかが動けば、戦闘が開始されるような緊張の時。クリュウはじっとリオレウスの動きを見詰める。すると、そんなリオレウスと瞳が合った。しかし恐怖はない。ただ互いを見詰め合うだけで、何も起きない――しかし、クリュウはその時確かにその隻眼に王の誇りが見えた気がした。
「決着をつけようって事……？」
　リオレウスは何も反応はない。ただ、じっとクリュウを見詰めるだけだ。だが、それが答えだった。フッと、口元に小さな笑みが浮かぶ。
「――全力で行くよ。正々堂々真っ向から戦いを挑んで来る彼に、こっちも全力で行こうよ。それが彼に対する最大の礼儀だからね」
　彼の突拍子もない言葉に三人は驚いたような顔をして彼を見る。そんな三人が見たのは真剣な顔でリオレウスと対峙する彼の姿。そのいつになく凛々しい姿に、一瞬三人はドキッとする。
　シルフィードは頬を少し赤らめながらフッと小さく笑みを浮かべると、日の光を浴びて輝く煌剣リオレウスを構えながら数歩前に歩み、クリュウの横に立つ。
「まったく、君は本当に変わってるな」
「そうですか？」
「――だが、嫌いではないぞ」
　そう言って、シルフィードは堂々と自分達と対峙するリオレウスを見る。
　本当にモンスターにそんな人のような想いがあるのかはわからない。だが、誇り高く自分達と対峙するリオレウスの姿を見ると、彼の言う通りかもしれないと思えてくる。
　今まで、自分は多くのリオレウスと対峙して来た。彼のように思った事は実は何度もある。それだけ、リオレウスというモンスターは格が違う存在なのだ。
　初めてリオレウスを倒した時の喜びは、今でも忘れない。
　だがその後、何度戦ってもあの喜びは得られなかった。慣れとは、

そういう人の気持ちさえも変えてしまうのかもしれない。
――だが、今は違う。もしかしたら、あの時と同じような、それを越えるような喜びを感じられるかもしれない。
この仲間達と、彼と一緒なら――
「――そうですね、敬意をもって、全力で迎え撃ってあげましょう」
「……敵ながら称賛に値する」
フィーリアとサクラも小さく笑みを浮かべると、最後の戦いに堂々と挑もうとするリオレウスに対峙する。シルフィードはうなずき、再び視線を前に向ける。そんな三人を一瞥し、クリュウはリオレウスを見る。
天空を制す誇り高き空の王者リオレウス。死すべき場所は、己が領域である空を望める場所。どうやら彼は自分の墓場はあんな暗い場所ではなく、堂々と戦い、そして空の下と決めたらしい。さすが王者――だが、当然死ぬ気はさらさらないらしい。最後の一瞬まで死を諦めないで戦い続ける。本当に誇り高いモンスターだ。
クリュウはグッと柄を握り直すと、隻眼のリオレウスと対峙する。
「これで最後だ。決着をつけてやるッ！」
「グオオオオオオオオオオッ！」
リオレウスは天高く響き渡るような勇ましい鳴き声を上げる。それを合図にクリュウ、サクラ、シルフィードは一斉に走り出す。そんな三人を援護するようにフィーリアの集中砲火がリオレウスに撃ち放たれる。
襲い掛かる三人とフィーリアの砲撃にも屈せず、リオレウスは怒号を発して体内で練り込んだ業火を爆音と共に撃ち出す。空気に触れてより激しく燃え上がる火球は容赦なく三人に襲い掛かる。だが直線的なその攻撃を三人はそれぞれ横に跳んで回避し、すぐさま突撃を再開する。
渾身のブレスをかわされるも、リオレウスは諦めずに今度は突撃で真っ向から勝負する。狙うは先頭を翔けるシルフィード。しかしシルフィードは横に跳んで回避。リオレウスは突撃の勢いを止められずに身を投げ出して急停止。そこへフィーリアの連射が襲い掛かる。

だが、リオレウスは彼女の攻撃など効いていないかのように立ち上がると、翼を大きく羽ばたかせて暴風と共に天に舞い上がる。
上空からではクリュウ達の動きは丸見えだ。リオレウスは自分の領域にまで執拗に攻撃して来るフィーリアを睨むと、体を激しく動かす。その動きにフィーリアは反射的に横へ身を投げ出すようにして動く。
刹那、リオレウスが急激にフィーリアに接近して巨大な毒爪で彼女を斬り刻もうと襲い掛かって来た。だがフィーリアは間一髪それを回避。リオレウスは悔しそうに彼女を睨むと再び空へ舞い戻ってバランスを立て直してからゆっくりと地面に降り立つ。その真下にはクリュウが――
「グオオオオオオオオオオッ!?」
地面に足を着いた瞬間、リオレウスは下半身を地面に陥没させた――クリュウが設置した落とし穴だ。
落とし穴を成功させたクリュウはすぐさま攻撃に転じた。脱出しようと暴れ回るリオレウスの無防備な胸に向かって切れ味を取り戻したデスパライズで斬り掛かる。鮮血と共に爆ぜる麻痺毒。一撃一撃を確実に叩き込む。
一方、クリュウの機転に遅れながらもサクラとシルフィードも攻撃を開始する。一見しただけでは飛竜の強固な鱗に攻撃すれば容易く折れてしまいそうな細い刀身の飛竜刀【紅葉】を絶妙な角度で刃を入れる事で最大の攻撃力とし、流れるように振るうサクラ。暴れるリオレウスに的確に刃を入れるのはかなりの技術を要する。それだけに彼女の持つ飛竜刀系は高度な技術と経験が必要とされるが、彼女はそれを見事に兼ね備えているのだ。
「……ハッ!」
気合と共に打ち出される剣撃はリオレウスの強固な鱗さえも最大の切れ味で両断し、肉を裂き、血が飛び散る。
火属性の影響で刀身から吹き荒れる炎がより攻撃力を高め、激しく燃え上がる。飛び散る火花を振り払う事もなくただひたすらに剣を振るい続けるサクラ。火花を纏ったその姿は、まるで炎の姫のように

可憐で、そして鋭い。
　爆発を攻撃力に変えて舞うサクラの反対側では、シルフィードが巨大な大剣――煌剣リオレウスを構えて力を溜めていた。限界に達すると同時に、力の限り剣を振り下ろす。
「はあああああぁぁぁぁぁッ！」
　叩き込まれるその一撃はリオレウスの鱗や甲殻を吹き飛ばして肉を斬り裂き、爆発によってさらにダメージを深々と与える。すぐさま横に振り回すようにして剣を振り抜き、再び縦に振り落とす。白銀の美しいポニーテールが激しく、そして華麗に舞う。汗や土、埃にまみれた顔も美しい。
「うおおおおおぉぉぉぉぉッ！」
　横殴りのような重い一撃が、リオレウスの横腹に激突。その激しい痛みにリオレウスは苦痛の悲鳴を上げた。そこへクリュウが渾身の一撃を叩き込む。
「うわあああぁぁぁッ！」
　振り抜かれたデスパライズはリオレウスの腹部を斬り裂き、血と麻痺毒を迸らせる。刹那――
「グギャオォッ!?　ゴオオオォォォッ！」
　落とし穴に下半身の自由を奪われた状態でリオレウスは突如その巨体を痙攣させて倒れた。麻痺状態に陥ったのだ。これでリオレウスは完全にその動きを封じられる。
「いっけえええええええッ！」
　クリュウは伏せるようにして上半身を倒すリオレウスの顔面に向かってデスパライズを振るう。飛び散る血を無視し、ただひたすらこのチャンスを無駄にしないように全力で攻撃。握るだけでも痛みを感じる右手に無理やり力を込めてデスパライズを振るう。
「……ハッ！」
　すぐ横で踊るようにして飛竜刀【紅葉】を振るうサクラ。その動きは先程まで戦線離脱していたとは思えないほど過激だ。目にも留まらぬ速さで打ち出される剣撃の嵐。それらは全てリオレウスに容赦なく叩き込まれ、鮮血と炎を迸らせる。

激しく燃える炎に照らされる彼女の顔は無表情ながらも疲れが見え隠れしていた。これほどの長期戦は彼女にとってもかなりの負担になっているのだ。それに彼女はチームで最も激しく立ち回る太刀使い。その体力消耗は計り知れない。だが、

「……はぁッ！」

打ち出される剣の一撃はまるで疲れを感じさせないほど鋭く、速い。踏み込むと同時に突き出すような突きの一撃がリオレウスの身に突き刺し、抜くと同時に横へ全力で振るう。そのままの勢いで振り上げ、剣を構え直して一気に振り下ろす。

「……チェストオオオオオオオオオッ！」

強固な火竜の鱗を吹き飛ばして炸裂したその一撃はバシャアアアアアアッと大量の血を噴き出させる。悲鳴も上げられないリオレウスはただその激痛に耐えるしかできない。

嵐のように暴れ回るサクラに対し、シルフィードは一撃一撃に全力を込めて叩き込む。振り上げた煌剣リオレウスは自身の重量、重力、シルフィードの腕力などが重なって何倍にもその威力を上げてリオレウスに襲い掛かる。

「はあああああぁぁぁぁぁぁッ！」

刃先が触れた瞬間ドォンッという小さな爆音と共に爆ぜる煌剣リオレウス。火山の溶岩でさえも耐えうる強固な鱗が吹き飛び、中の無防備な肉が斬り裂かれ、血が噴水のように噴き出す。

煌剣リオレウスは勢い余って地面にその刀身の半分を沈めてしまうが、すぐさまシルフィードは構え直して横に体全体を使うようにして大きく振るう。その際にクリュウやサクラに当てないように見事なタイミングと位置で振り抜いた。

横に振るった後は再び天を裂くようにして頭上に構え、両腕の力を全力で使って一気に振り下ろす。荒々しくも鋭いその一撃は容赦なくリオレウスの肉を引き裂く。

逃げられないリオレウスの周りで暴れ回る三人から少し離れた場所からは仲間に当たらないようにフィーリアが的確な援護射撃をしている。

クリュウのような勇ましさも、サクラのような過激さも、シルフィードのような破壊力はない。だが、それでもガンナーにはガンナーの戦い方がある。一点を的確に撃ち抜き、最小の力で最大のダメージを与える。確かに剣士に比べれば危険は少ない。だが、より高度な技術を要される。それがガンナーだ。

「私だって、負けられませんッ！」

フィーリアはスコープを覗き込んでしっかりと狙いを定めると、手ぶれなどでも動かないように銃身を支えて数ミリ単位の攻撃場所を選び抜いて弾丸を撃ち放つ。そのどれもが鱗と鱗の隙間などに命中し、無防備な肉の部分に炸裂。着実にダメージを与えていた。

四人の容赦のない全力攻撃の嵐に、リオレウスは成す術がない――だが、相手は誇り高き空の王者リオレウス。逆境に屈するほど愚かな存在ではない。むしろ闘志はより激しく燃え上がる。

「グギャオオオオオオオオオッ！」

怒号と共にリオレウスは麻痺から脱した。体内で急速に抗体を生成し毒を中和したのだ。人間にはできない、モンスターの驚異的な能力が成せる技だ。

再び落とし穴に下半身を封じられて暴れ回るリオレウス。だがすでにその巨体を封じ込めるだけの力は落とし穴には残っていなかった。

「ガオオオオオオオオッ！」

ついに落とし穴が壊れ、暴風と共にリオレウスの巨体が空へ舞い上がる。その風に肉薄していたサクラとシルフィードは吹き飛ばされる。だが寸前で距離を取っていたクリュウと最初から遠距離にいたフィーリアは無事だった。

クリュウはすぐさま次なる手を打つ。道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出すと、振り向きざまにリオレウスの視線の先に投擲。炸裂した閃光玉はゆっくりと舞い降りて来るリオレウスの視界を封じ、リオレウスはバランスを崩して悲鳴と共に地面に叩き付けられた。

シルフィードはクリュウの機転に驚きつつも、再び跳びかかる彼の姿を見てすぐさま自らも攻撃を開始する。サクラも同じように反対

側から跳び掛かる。
「うおおおおおぉぉぉぉぉッ！」
グッと柄を握り直し、シルフィードは振り払うようにして横薙ぎに剣を振るう。その一撃はリオレウスの左脚の膝後ろに命中し、リオレウスは堪らず悲鳴を上げてその場に転倒した。
倒れたリオレウスに向かって、四人は一気に総攻撃を仕掛ける。
一度転倒してしまえばその巨体を再び起き上がらせる事は難しい。リオレウスは必死に起き上がろうともがくが、なかなか起き上がれない。
クリュウはもがくリオレウスの顔面に向かって剣を振るう。だが、すでに限界を超えていた彼の握力はついに力尽き、刃先が強固な鱗に触れた瞬間甲高い音と共にデスパライズは弾かれてしまった。
「あ……ッ！」
手から離れたデスパライズは彼のずっと後ろの地面に突き刺さり、空振って勢い余ったクリュウはその場に転倒してしまった。
「クリュウ様ッ！」
フィーリアは慌てて彼に駆け寄る。サクラとシルフィードはすぐさまリオレウスを押さえようとさらに攻撃を加える。その間にフィーリアは彼のデスパライズを回収し、彼に駆け寄る。
「大丈夫ですかッ!?」
「う、うん……」
そう答えるが、クリュウは右腕を押さえて苦しげな表情を浮かべていた。無理をして右手を酷使し続けた影響だ。
心配するフィーリアに「大丈夫だから」と答え、彼女の手からデスパライズを受け取り再び右手に構える。痛みはあるが、握れない事はない――まだ戦える。
「クリュウ様、ご無理だけはなさらないでくださいね」
「わかった」
クリュウはグッとデスパライズを再び握り直すと、フィーリアに援護を任せてリオレウスに突撃する。リオレウスは転倒したままサクラとシルフィードの猛攻撃を受けて起き上がれずにいた。

だが、その圧倒的な力をいつまでも押さえ付ける事などできず、リオレウスは怒号と共に勢い良く起き上がる。視界が回復しているのか、ギロリと自分を包囲するサクラやシルフィードを睨み首をもたげる。その動きに二人はハッとして慌てて後ろに跳んだ。

刹那、リオレウスは地面に向かってブレスを撃ち放った。爆風が辺りに吹き荒れ、木々が激しく揺られる。サクラとシルフィードもその爆風を受けて吹き飛ばされた。

「サクラッ！　シルフィードさんッ！」

クリュウが二人の名前を呼ぶと、二人はすぐさま体勢を立て直した。どうやら無事らしい。クリュウは安堵するが爆風を利用して上空へ飛び立ったリオレウスを見て緊張が走る。

上空で体勢を立て直したリオレウスはすぐさま反撃に転ずる。三連続ブレスを容赦なくクリュウ達に撃ち放った。接近していたフィーリア以外の三人は四方八方に走ってこれを回避しようとする。サクラとシルフィードは十分な距離があったのでうまく回避できたが、クリュウは回避するも至近距離で爆発し、その爆風に吹き飛ばされて地面を転がる。

「クリュウッ！　大丈夫かッ！」

「は、はいッ！」

シルフィードの声に返事し、クリュウは起き上がった。地面に打ち付けられた際に肩を打ってズキズキと痛む以外は大丈夫そうだ。

全ての攻撃を回避されたリオレウスはクリュウ達を睨みながらゆっくりと暴風を纏って舞い降りて来る――だが、その足元には……

「ふぃ、フィーリアッ!?」

舞い降りて来るリオレウスの脚元には――地面に伏せて何かをしているフィーリア。

フィーリアは恐れる事なくリオレウスの脚元で何かを設置すると、急いでその場を離れる。刹那、リオレウスがその地面に着地――その瞬間再び下半身が地面に沈んだ。

「落とし穴かッ！」

「今がチャンスですッ！　爆弾を使いましょうッ！」

リオレウスの動きを落とし穴で封じたフィーリアはすぐさま岩陰に隠しておいた大タル爆弾Gに走る。遅れてクリュウも駆け出し、残るサクラとシルフィードは落とし穴で暴れるリオレウスに向かってできる限りダメージを与えようと剣を激しく振るう。
フィーリアは岩陰に駆け込むと、大タル爆弾Gを一つ掴む。続いてクリュウも残る一つを持ち、二人はそれぞれ計二発の大タル爆弾Gを構える。
「急ぎましょうッ！」
「うんッ！」
二人はすぐさまリオレウスに向かって走り出す。落とし穴に動きを封じられて暴れるリオレウスの周りではサクラとシルフィードが肉薄して戦ってリオレウスの抵抗を押さえている。
「サクラッ！　シルフィードさんッ！」
クリュウの声に二人は振り返る。大タル爆弾Gを持ったクリュウとフィーリアの姿を確認し二人はすぐさま邪魔にならないようにリオレウスから離れた。
クリュウとフィーリアは互いに目で合図すると全速力で暴れるリオレウスに駆け寄る。サクラとシルフィードに見守られる中、二人は左右の胸の前にそれぞれ一個ずつ設置。すぐさま爆発危険範囲外にまで離脱する。
「フィーリアッ！　急いで起爆しろッ！」
「はいッ！」
フィーリアは走りながらハートヴァルキリー改を構えると、目測で狙いをすばやく定めて引き金を引く。バァンッと撃ち出された弾丸は寸分の狂いなくクリュウが設置した方の大タル爆弾Gに命中。刹那、大タル爆弾Gは起爆しもう一発にも誘爆して大爆発。黒煙と爆風が辺りを包み込み、辺りを警戒しながら四人は再び合流する。
クリュウは天に向かって立ち上る黒煙を見詰める。だが、リオレウスの姿はその黒煙に隠れて見えない。倒したのか、それともまだ生きているのか、わからない。
「気をつけろ、自分の目でしっかりと確認するまでは気を抜くな」

「わかってます」
クリュウは黒煙を注視しながら道具袋（ポーチ）から回復薬を取り出して一気に飲み干す。これであともう少しは戦えるだろう。
フィーリアとサクラ、シルフィードも立ち上る黒煙を武器を構えながら注意深く見詰める。
そろそろ落とし穴の効力が切れる頃、自然と四人にも緊張が走る。
突如、辺りに激しい暴風が吹き荒れる。クリュウ達は叩きつけるように吹き荒れる暴風に思わず目に片手を添えて守った。
「まだかッ！」
シルフィードの悔しそうな声に視線を向けると、黒煙をその勇ましい翼で吹き飛ばし悠々と天に昇るリオレウス。大タル爆弾Ｇ二発の威力はすさまじく、その身はよりボロボロに傷ついていた。だが、それでも彼はまだ倒れない。王としてのプライドが、その身を支えているのだ。
クリュウは改めてリオレウスの底力と迫力、そしてその誇りの高さに驚かされ、感動する。
今まで多くのモンスターと戦って来たが、これほどまでに力強さを放つモンスターはいなかった。
その自慢の身がボロボロになっても、王の誇りを胸に血にまみれた翼を羽ばたかせ、傷だらけの足を引きずってでも立つ。それがリオレウスだ。
暴風と共に天から舞い降りて来るリオレウスは鋭い双眸（そうぼう）でクリュウ達を睨みつけながら再び地面に脚を着く。巨大な毒爪でしっかりと大地を掴み、鋭い眼光でクリュウ達を睨むと、そのボロボロな体から思えないような力強い怒号を放った。
「さすがリオレウス。まだ戦うというのか」
シルフィードはフッと口元に笑みを浮かべながら煌剣リオレウスを構える。その表情はどこか楽しげに見えた。
「ですが、もうリオレウスはほとんど戦う力はないはず、一気に攻勢に出ましょう」
「そうだな」

フィーリアとシルフィードはクリュウを見る。サクラも無言でクリュウを見詰めている。どうやら、彼の判断で決めるらしい。
クリュウは三人の視線に小さくうなずくと、瀕死の状態でも誇りは見失わない気高き空の王者を見詰め、デスパライズを構える。
「これで決めるッ！　行くよッ！」
「あぁッ！」
「はいッ！」
「……（コクリ）」
クリュウの掛け声と共に四人は一斉に走り出す。リオレウスはそんな真正面から挑んで来る敵に向かってこちらも真正面からブレスで迎え撃つ。四人はそれぞれ左右に散開して回避。すぐさま再び突撃する。
リオレウスはブレスを回避した敵に向かって今度は自分からも突撃する。力強い鳴き声と共に突進するリオレウス。満身創痍な体からは考えられないような速さで四人に襲い掛かる。
「散れッ！」
シルフィードの掛け声に三人は散開。だがシルフィードだけは回避せずに剣を構え、力を溜め始める。クリュウは彼女の大胆な行為に驚くが、すぐさまその意図を察して反転、追い越したリオレウスを追撃する。サクラとフィーリアも同じだ。
自分を噛み潰そうとすさまじい速度で突撃接近して来るリオレウス。シルフィードはその凶悪なまでの迫力に屈する事はなく冷静に目測と勘で彼我の距離を測って武器を構える。そして――
「はあああああぁぁぁぁぁッ！」
ドゴオオオオオオオオオオンッ！
「グギャアアアオオオオオオッ!?」
リオレウスの凶悪な口が直撃する寸前、シルフィードは全力で煌剣リオレウスを迎え撃つようにして叩き込んだ。その一撃は接近するリオレウスの凶悪な顔に炸裂し、リオレウスはそのすさまじい威力に悲鳴を上げて強制的に動きを停止させられた。
シルフィードはすぐさま横薙ぎに剣を振るって連撃に繋げる。続

いてサクラがギリギリまで体勢を低くして弾丸のような速度で接近し、リオレウスの側面で急速反転して襲い掛かる。目にも留まらぬ速さで鮮やかな気刃斬りを炸裂させる。
さらにフィーリアが残り少ない弾丸を惜しみなく次々に装填して撃ち放つ。容赦のない弾丸の雨のようなすさまじい集中砲火がリオレウスの動きを封じる。
最後にクリュウが到着し、三人の集中攻撃に完全に動きを封じられているリオレウスに向かって剣を構える。
リオレウスは群がる敵を吹き飛ばそうとその場で短くなった尻尾を振るって回転する。シルフィードとサクラはそれぞれ後退して回避し、範囲外のフィーリアは構わず射撃を続ける。そこへクリュウが突撃する。
回転によってこちらに向いた顔に向かって、クリュウは両手でデスパライズを上段に構えて突進。リオレウスの鋭い隻眼と、目が合う。
「うわあああああぁぁぁぁぁッ！」
クリュウは目を逸らす事なくリオレウスと対峙し、構えたデスパライズを全力で振り下ろす。その一撃はリオレウスの右顔に炸裂し、鱗を吹き飛ばして大量の血を吹き飛ばす――刹那、デスパライズの刀身が中程から小さな音と共に折れ飛んだ。
「グギャアアアアオオオオオオオオオ……ッ！」
リオレウスは断末魔の悲鳴を上げて天を仰ぐように首を持ち上げると、そのまま力を失って横倒しになるようにして倒れた――山々に響いた彼の最期の声は、やまびことなってしばらく鳴り続けた。
フィーリア、サクラ、シルフィードが見守る中、クリュウは刀身が折れたデスパライズとバサルヘルムを地面に捨てて、倒れたリオレウスに近づく。
「グウウウウウ……」
リオレウスは、まだ生きていた。だが、もはやその命の灯は消えようとしている。
クリュウはリオレウスの眼前に立つと、彼と目を合わせる。先程までは見上げていた彼の瞳は、今では見下ろす形になっている。

「リオレウス……」
「グウゥ……」
クリュウはそっと、リオレウスの頬に触れた――確かな、生命の温かさを感じた。
リオレウスは薄れゆく意識の中、目の前の自分に打ち勝ったちっぽけな存在でしかない敵の姿をしっかりと目に焼き付け、果敢に挑んで来た彼らの勝利を、そして自らの敗北を認めた。
その時、頬に何か温かなものを感じた。
それは、目の前の小さな敵から流れ落ちた涙。なぜ涙を流すのか、人間のような繊細な感情を持たない彼にはきっとわからないだろう。
クリュウは泣きながら彼の頬を撫で、そっとつぶやくようにして言う。
「ごめんね――ゆっくり、休んで」
それが、彼が聞いた最後の音であった……
命の灯が消えたリオレウスの瞳。クリュウはそっとその瞼（まぶた）を閉じる。
静かになった狩場に、一陣の風が吹き抜ける。
「クリュウ」
声と共に肩をそっと叩かれ、クリュウは振り返る。そこには小さく笑みを浮かべたシルフィードが立っていた。
「まったく、君は本当に変わったハンターだな」
「そうですね」
スッと、視界の端からハンカチが挿し出された。
「サクラ……」
「……これ、使って」
「ありがとう」
クリュウはサクラからハンカチを受け取ると、それで流れ出る涙を拭った。
リオレウスの死を目の当たりにして、クリュウは初めて生と死というものを見た気がした。今までも様々なモンスターの死を目撃して来たが、今回は特別だった。

特別な想いを抱いてしまう。それがリオレウスという強大で誇り高いモンスターなのだ。
「――その涙を、決して忘れるな。私達はハンターだ。殺戮（さつりく）者じゃない。その涙が証だ」
シルフィードはそう言い残すと、天を仰ぐ。
空はどこまでも晴れ渡っていて、いい天気だ。心地良い日差しが頬を緩ませる。
クリュウは完全に涙を拭い取ると、サクラにハンカチを返し、今度は屈託のない笑みを浮かべる。
「泣いてちゃダメだよね。ここは、勝利を喜ぶべきだよね」
「そうですよ。私達はリオレウスに勝ったんです」
「……（コクリ）」
二人の言葉にクリュウはうなずくと、天に向かって握り拳を突き上げる。
「やったあああぁぁぁッ！」
その歓喜の声はすぐさまフィーリア達にも飛び火し、四人は喜びに包まれる。
それからが大変だった。
サクラがクリュウに抱き付いて離れようとせず、フィーリアも負けじと反対側から抱きついて彼を挟んで睨み合う。さらにリオレウスを倒した事で喜びまくっているクリュウは心も広くなったのかそんな二人をギュッと力強く抱き締めてしまった。
愛しの彼に抱き締められてサクラは顔を真っ赤にして硬直、フィーリアに至っては嬉しさのあまり顔を真っ赤にさせて気絶してしまう始末。クリュウはそんな二人の異変に慌てまくる。
そんな三人の行動を少し離れた場所から見守るシルフィードは彼に抱き締められたり介抱されたりしている二人を羨む自分がいる事、なぜか胸に感じるチクリとした痛みに困惑する。
そんな様々な想いが交差する勝利の狩場。
クリュウ達はフィーリアが意識を取り戻すと早速リオレウスの剥ぎ取りに掛かる。

「あ、シルフィードさんちょっと待ってください」
剥ぎ取りナイフを構えてリオレウスに近づくシルフィードをクリュウが慌てて止める。突然呼び止められたシルフィードは不思議そうに振り返る。
「何だ？」
「剥ぎ取る前にする事があるんですよ」
「うん？　何だそれは？」
クリュウはシルフィードの前に立つと、そっとリオレウスの前に膝をついて手を合わせて目を閉じる。全力で戦った相手の冥福を祈る、彼らしい習慣だ。
「命は皆平等です。クリュウ様は、倒したモンスター一体一体にああしてその冥福を祈っているんですよ。余程の事がない限りは必ず」
フィーリアの説明にシルフィードは納得したようにうなずくと、小さく苦笑するような笑みを浮かべる。
「本当に、変わった奴だなクリュウは」
「そうですね。でもそれがクリュウ様のいい所ですよ」
そう言ってフィーリアは嬉しそうにはにかむ。その笑顔を見てシルフィードもまたフッと口元に笑みを浮かべて彼に振り返る。すると、クリュウの横にちゃっかりとサクラが膝をついて彼と同じように手を合わせていた。
「あぁッ！　抜け駆けは禁止ですよッ！」
慌ててフィーリアは反対側に膝をついて手を合わせる。そんな三人を見てシルフィードは小さく苦笑しながらため息を吐くと、立ったまま手を合わせた。こんな事をするのは初めてだ。
しばし、リオレウスの冥福を祈る四人。クリュウはスッと瞳を開くと、どこまでも蒼い空を見上げた。きっと、リオレウスはこの空の向こうへ逝っただろう。
自分に合わせて手を合わせてくれた三人に向き直り、クリュウは小さくはにかむ。
「ありがとう。じゃあ早く剥ぎ取っちゃおう。もうヘトヘトだよ」
「そうだな。早くドンドルマに戻って一杯やりたい所だ」

「私はふかふかのベッドで眠りたいです」
「……私も眠りたい。クリュウの腕の中で」
「なぁッ!? そんなのずるいですッ！ だ、だったら私はクリュウ様に腕枕してほしいですッ！」
「いや、そんな事絶対しないからね」
そんないつものやり取りをしながら四人は剥ぎ取りに掛かる。何度もリオレウスを倒している三人はもちろんだが、立派なハンターに成長したクリュウもまた少し戸惑いながらも丁寧に剥ぎ取りをする。
耐火能力に優れた火竜の鱗や甲殻、翼膜や火炎袋を剥ぎ取り、空いたビンには火竜の体液を採取して詰める。リオレウスの素材は全てにおいて貴重で高級なのでできるだけ多く素材を採取しておきたい所だ。
素材は全て採取する訳ではない。死んだモンスターの肉はランポスなどの肉食モンスターのエサとなり、アプトノスを襲うランポスの数は減る。腐った肉や骨は土壌を豊かにして草木の栄養となり、アプトノスなどの草食モンスターのエサとなる。自然のものは自然に返す。それが自然の摂理だ。
そんな感じである程度の素材は残して剥ぎ取りをほぼ終えたクリュウに、シルフィードは「危ないから離れてなさい」と言ってクリュウをリオレウスから遠ざける。
「あ、危ない？」
困惑するクリュウの前でシルフィードとサクラはリオレウスの背中の上に乗った。背中にはかなり大きな甲殻があるが、二人はそれを丁寧に剥ぐ。中から出て来たのは無防備な肉の部分。二人はそこに刃を当てて切り裂くと、桃色の肉の下から巨大な白い背骨が剥き出しになる。
サクラは道具袋（ポーチ）からドンドルマ出発時に支給された耐火能力に特化した長めの特殊袋を取り出す。そういえばあれは何に使うか気になっていた。
サクラが無言でうなずくと、シルフィードもうなずき返してその背骨と背骨の間に刃をスッと入れる。その途端、そこから炎が噴き出し

た。
　驚くクリュウに対しシルフィードは怯んだ様子もなくより深くに刃を入れて切断。もう一方も完全に切断し、慎重に切り出した背骨を持ち上げる。炎はより激しく骨の中心部から噴き出ている。すぐさまサクラが燃える背骨を袋で包む。あっという間に炎は消え、完全に密封するように口を縛る紐をシュッと引き締める。どうやら作業は終わったようだ。
「ね、ねぇフィーリア。あれって何なの？」
「あれは火竜の骨髄（こつずい）です。空気に触れると発火する性質を持っているのであのように密封できる特別な袋でないと運搬ができないんですよ」
「へぇ、そんな厄介なものも素材になるの？」
「はい。火竜の骨髄は発火力がすごいので、火属性の武器の素材になったり鍛冶場で使われるたたらの高火力燃料としても重宝されてますよ」
「じゃあ、アシュアさんのたたらにも使われてるのかな？」
「さぁ、火竜の骨髄は高級燃料ですから私営鍛冶場ではあまり使われてないと思いますよ。ドンドルマの鍛冶場なら毎日のように使われているようですが」
　確かに、剥ぎ取るにも運搬にも手間が掛かる上に個体数が少ない火竜の素材なだけに、値段が高騰するのは当然かもしれない。規模が大きいドンドルマのような鍛冶場でなければ毎日のように使うのは難しいだろう。
　火竜の骨髄の採取を終えたサクラとシルフィードが無言のまま戻って来る。
「火傷しませんでしたか？」
　先程の炎の激しさからクリュウはシルフィードの火傷を心配したが、シルフィードは口元に小さく笑みを浮かべた。
「何度も言っているだろう？　私の防具は耐火能力に優れているんだ。あの程度の炎など問題ないさ」
「そ、そうでしたね」

「まぁ、心配してくれた事は素直に嬉しいぞ」
そう言ってシルフィードはクリュウの頭を優しく撫でた。クリュウは突然の彼女の行動に顔を赤らめて照れたように小さく笑う。そんな二人を見てムッとするフィーリアとサクラ。
「クリュウ様のバカ……」
「……バカ」
そんな二人の気持ちなどもちろん気づかないクリュウは出発準備を整える。依頼対象（リオレウス）は討伐した。もうここに長居する理由はない。
他の三人もそれぞれ剥ぎ取った素材などを持って帰り支度を整える。ちなみにサクラは何も持っていない。彼女には素材を持つ事によって動きが制限される三人を護衛する役目があるのだ。
「サクラ、護衛任せたよ」
「……任せて。クリュウは絶対に私が守り抜く。この命に代えても」
「いや、そこまでしてもらわなくても……」
「頼むから、クリュウだけではなく私達も守ってくれ」
護衛の女神とまで謳われるサクラなら護衛任務は一番の得意分野だ。
ただし、得意であると知っていても一抹の不安が拭えない一行。彼女の目はクリュウしか見ていない――かなり心配だ。
まぁ、常時はともかく有事になれば誰よりも心の切り替えがうまいサクラ。三人の不安は杞憂（きゆう）でしかない。
クリュウは苦笑いしながらふと腰に下げたデスパライズを見た。刃先が中程から折れてしまっている。刃先はすでに回収を終えていた。
「バサルメイルにデスパライズ……アシュアさんに謝らないとなぁ」
やっとの想いで倒したリオレウス。だが、その影響による後日の負担はかなり大きい。エレナの跳び蹴りもきっと避けられないだろう。
クリュウがこの先の事を考えてため息していると、準備を終えたフィーリアが近づいて来る。
「クリュウ様、準備は終わりましたか？」

「え？　あ、うん」
「そうですか。では行きましょう」
「わかった」
すでに用意を整えて待っている二人に向かってフィーリアは手を振りながら近づく。クリュウもそれに続くが、一度だけ振り返ってリオレウスの亡骸（なきがら）を見る。残されたあの亡骸はランポスなどの肉食モンスターのエサとなり、骨や残った肉は土となって木々を育てる――彼の死は、決して無駄ではない。
クリュウは再び前を向いて歩き出す。その視線の先で待っているのは心強い仲間達。
天真爛漫な笑顔で手を振るフィーリア。
無表情でじっとこちらを見詰めているサクラ。
腰に手を当てて口元に小さな笑みを浮かべるシルフィード。
本当にいい仲間と出会えた。今回の戦いでは、改めてそれを感じた。
クリュウは小さく笑みを浮かべると、三人に手を振りながら走り出す。頼れる仲間達の下に向かって……
途中でリオレウスの尻尾の剥ぎ取りを済まし、一行は拠点（ベースキャンプ）に無事に戻った。すぐさま帰り支度を整え、半時もしないうちに出発してリフェル森丘を後にした。
森丘から走り去る彼らの馬車を、山の中腹辺りから数匹のアイルーが手を振って見送っていた事を彼らは知らない。
戦いは終わった。
長かった飛竜の王リオレウスとの決戦は、クリュウ達の勝利で終わった。限りなく辛勝というものだが、勝利は勝利だ。
一人馬車の運転をするシルフィードはふと幌に振り返る。幌の中では疲れて眠ってしまったクリュウを中心に右側をサクラ、左側をフィーリアが陣取る形で眠っている。何とも微笑ましい光景だ。
シルフィードはそんな三人を見て小さく口元に笑みを浮かべると、馬車の揺れを押さえるようにして少しだけ速度を落とした。
蒼い空を仰ぎながら、シルフィードはぽつりと悲しげに言葉を漏ら

す。
「……これで、彼らともお別れか」
一時組んだ仲間とはいえ、本当に心から信頼し合える仲間だった。
もうこんなチームとは出会う事はないだろう。きっとこれはいい思い出になる。
手綱を握る手が少しだけ震える。
何かが変わる訳ではない。元に戻るだけ。何も恐れる事はない。ただ、戻るだけなのだから。そう自分に言い聞かせる。
様々な想いが渦巻く胸を一度押さえ、シルフィードは思う。
――このまま、ずっと彼らと一緒に狩りをしてみたい、と。
こんな事を想ったのは、初めてだった。
シルフィードはもう一度だけ振り返る。気持ち良さそうな顔で眠るクリュウを見て、やっぱり離れたくないと思ってしまう。
ずっと一人で戦って来て、これからもずっと一人で戦う覚悟をしていた。だけど、今回の狩りでその覚悟が揺らぐ。
なぜずっと一人で戦って来たのか。それは仲間というものを信じられなかったからだ。
剣聖ソードラント。ハンター達からは羨望の存在かもしれないが、実際はチームというよりは強力な個人の集まりのようなものだった。個人個人がすご過ぎてそれをリーダーが的確に纏めている。仲間とは程遠いものだった。
危険な狩りを、そんな連中と戦って来た。何度も怪我をして悔しい思いをして来た。
だから、仲間なんていらない。自分一人で戦い続ける。そう決めて彼らの呪縛から逃げ出し、こうして蒼銀の烈風とまで呼ばれるまでに強く成長した。
なのに、クリュウ達と狩りをして、仲間という存在がうらやましく思ってしまった。
だがそれは決して願ってはいけない願い。
今回クリュウは自分の故郷を守りたいが為にリオレウスに挑んだ。フィーリアとサクラはそんな彼について行く形で参加したのだ。自

分とは明らかに目的が違う。
彼らは三人チームなのだ。今回の戦闘での連携を見て、その連携力がかなりのものだとわかった。ちゃんと役割分担もされているし、誰かが危険に陥ればすぐさま他の二人が援護に回る。見事なものだ。
そんな彼らのチームを、壊したくはなかった。
チームの人数が増えれば自然と戦術も変わって来る。その変化が、彼らをダメにしてしまうかもしれない。そう思うと、一歩が踏み出せない。
もしも自分にもっと勇気があったら、きっとこう言っていただろう。
――これからも一緒に、狩りをしてくれないか？――

第７５話　月下流麗　差し伸べられる手への想い

『かんぱぁいッ！』

テーブルの上でカチャンッときれいな音を立ててぶつかり合う四つのグラスやジョッキ。中にはなみなみと注がれたワインやビール、ジュースなどが入っておりぶつかった衝撃でその飛沫が飛び散った。

シルフィードはジョッキになみなみと注がれたビールをグイッと一気に半分ほどまで飲み干す。シュワシュワとした炭酸とほど良い苦みが疲れを癒してくれる大人の味だ。

「プハァッ、……やはり勝利の後の酒はうまいな」

「そうですねぇ」

「……（コクリ）」

「僕だけジュースだけどね」

ビールを豪快に飲むシルフィード、白ワインをおいしそうに飲むフィーリア、一見しただけではわからないが小さく微笑みながら赤ワインを飲むサクラ、残念ながら酒が苦手な為にオレンジジュースを飲むクリュウ。飲み物一つを取ってもこうもバラバラになるチームというのも珍しい。

リオレウス討伐を終えてリフェル森丘を発（た）ち、長旅の末に一行はやっとの思いでドンドルマに帰還。一度荷物を置いたり数日ぶりのお風呂に入ったりなどをしてからギルド受付のあるこの酒場に向かい受付に報告をして報酬をもらい、そのままこうして打ち上げをしている所だ。

討伐した証としてモンスターの素材――今回は火竜の鱗――を一枚提出して簡単な書類を書いて報酬を受け取るのがギルド流。書類には支給専用アイテムの残存数、狩場の状況などをわかる限りで書く。手間な作業だがこれが自分達の後からその狩場を使うハンター達の為の情報になるのだ。小さな村とは違うギルドだからこそのやり方だ。

クリュウは報酬を受け取る際に自分が医療アイルーを使ったのだから報酬は受け取らないと言い出したが、フィーリアとサクラが強く

反対して無理やりな形で報酬を押し付けられた。そしてそのお金を使って打ち上げ中という訳だ。
　ちなみに席順はクリュウとシルフィード、フィーリアとサクラに分かれてテーブルを挟む形で座っている。最初、フィーリアとサクラがクリュウの隣を巡って一触即発な状態になった為、クリュウは怖くなって空いているシルフィードの隣に腰を落ち着けた訳だ。
　余談だが、クリュウの対面に二人して座る事になった二人は、今度はクリュウの正面を巡って一触即発。クリュウが慌ててジャンケンで決めてと提案し、フィーリアが彼の対面を勝ち取った訳だ。その時のサクラはすさまじく不機嫌そうだった。
「クリュウ様、どうぞこれをお食べくださいッ」
　フィーリアは早速攻勢に出る。狩場では散々サクラに先手を打たれてクリュウにいい所を見せられなかった。その遅れを取り戻す為にもここは正念場だ。
「え？　あ、ありがとう」
　クリュウはなぜか必死になっているフィーリアの迫力にちょっと引きながらも、ありがたく彼女の料理をもらう。今回のリオレウス討伐でクリュウの注文できる料理のレベルも上がったのだが、やっぱりまだまだフィーリア達の方が上である。
「……うん。やっぱりこっちの方がおいしいね」
「遠慮なさらずにもっと食べてくださいッ」
「い、いや自分の料理あるし」
　ちなみにクリュウが食べているのはガブリブロースステーキ。猛牛バターとギルド伝統の秘密のタレを使った値段も手頃でボリュームもある料理だ。手頃と言ってもランポスに苦戦していた頃と比べればかなり高いのだが、今の彼の収入から考えれば普通ぐらいだ。技術だけでなく金銭面でも成長したクリュウであった。
「……これあげる」
　そう言ってクリュウにサラダの盛り合わせを分けてくれたのはサクラ。この瞬間、クリュウには見えない位置でフィーリアとサクラが睨み合う。

「ありがとう……って、きゅうりがある……」
「……好き嫌いはダメ」
「うう、わかったよ」
　きゅうりがあまり好きではないクリュウに有無を言わせずに食べさせるサクラ。フィーリアは目の前でいきなり自分の知らないクリュウの弱点をサクラに突かれ、悔しそうに彼女を睨む。共に過ごした時間の差がこうもハッキリと現れるとは……
　ちなみに、最近肉料理が多くなって来た彼の栄養バランスを考えてサラダを渡したというサクラの思いやりは誰も気づいていない。
　そんな対面に座る二人の恋する乙女にすっかり振り回されているクリュウを一瞥し、シルフィードは無言でビールを飲む。ちなみに彼女が食べているのは黄金魚の幻獣チーズとシモフリトマトソース和えムニエルだ。フィーリア達よりもさらに上のクラスの料理。もちろん値段も破格だ。
「それにしてもシルフィードさんの料理すごいですね」
　クリュウは以前ドンドルマで黄金魚を釣り上げるという依頼を受けた事があった。その際に釣り上げた黄金魚はものすごく高価な値段で取引され、驚かされた記憶がある。その魚を使った料理なのだ、気になるのも当然と言えよう。
「食べるか？」
「え？　いえ僕はそういう意味で言った訳じゃなくて……ッ」
「構わんぞ。食事は皆で楽しんだ方が美味だ」
　そう言ってシルフィードは小皿に簡単に盛り付けるとスッと彼に渡す。
「あ、ありがとうございます」
　パァッと満面の笑みを浮かべて小皿を受け取るクリュウ。その邪心のない純粋な笑顔につい三人は不意打ち気味にドキリとする。元々比較的女顔なクリュウの笑顔は破壊力抜群だ。
　フィーリアとサクラは顔を真っ赤にさせて彼を見詰め、シルフィードは鼓動の早くなる心臓に困惑するばかり。そんな三人の心中など全く理解していないクリュウは嬉しそうに笑みを浮かべながらムニ

エルを口にする。
「お、おいしいですこれッ！」
　口に入れた瞬間、言葉にはできないようなおいしさが口の中いっぱいに広がる。このうまさを口で説明するのはきっと不可能だろう。絶品の品というものはその味に相応しい言葉など存在しないからだ。
「そ、そうか。それは良かった」
　満面の笑みを浮かべて嬉しそうにムニエルを食べるクリュウを見て、シルフィードの口元に小さな笑みが浮かぶ。こんなに喜ばれるのであれば、ちょっと奮発していつもは頼まないような高級料理を頼んだ甲斐があったものだ。
「あ、あのぉ……」
　おずおずと手を上げてこちらをじーっと見詰めて来るフィーリア。何故か捨てられた子犬を想わせるようなその潤んだ瞳。その視線を追うと――手元にある黄金魚のムニエル。
「好きにしろ」
　シルフィードの素っ気ない言葉にフィーリアは一瞬瞳をパチクリとさせた後、彼女の言葉の意味を察してパァッと笑みを浮かべる。世の中の男達が一瞬で悶絶するようなかわいさ爆発の笑顔だ。
「あ、ありがとうございますッ！」
　フィーリアは弾んだ声でお礼を言うと、少し少なめなくらいに小皿に盛る。早速とばかりにその絶品黄金魚のムニエルを食べてみる。その瞬間、フィーリアはとろけそうなくらいに幸せそうな笑みを浮かべた。
「お、おいしいですぅッ」
「それは重畳（ちょうじょう）。好きなだけ食べてくれ」
「い、いえこれで十分ですよ」
「そうか？　クリュウはどうする？」
「え？　あ、僕もこれで十分です。シルフィードさんの分が少なくなっちゃいますし」
「気にしなくてもいい。私はビールがあればそれで十分だ」
　大人びた雰囲気や容姿をしているだけあって、ビールを飲んでも違

和感はなく、むしろかっこ良く見える。この黄金魚のムニエルだって、食事というよりは酒の肴に近い感覚で頼んだものだ。
一口ムニエルを頬張り、そのおいしさに少しだけ口元を緩める。と、そんな彼女の前に突如視界の端からスッと小皿が出て来た。何事かと小皿を持つ白く細い手を追うと、
「サクラ？」
「……ほしい」
何とも単刀直入な要求だ。今回の狩りで彼女の性格が結構わかったシルフィードは小さく苦笑しながら「好きなだけ持って行け」と返す。サクラはその返答に小さくうなずき――
「ちょっと待てサクラ。さすがに皿ごと持って行くのは勘弁してくれないか？」
サクラは本当に好きなだけ――つまり皿ごと全部持って行こうとした。これにはさすがに苦笑を通り過ぎてちょっと笑顔も引きつる。まだほとんど手を付けていないだけに余計だ。
一方のサクラはそんなシルフィードの言葉に無表情のまま感情の込もっていない声で、
「……好きなだけ持って行けと言ったのはあなた」
「いや、常識の範疇（はんちゅう）で勘弁してもらえないか？」
わがまま、という訳ではない。ただクリュウやフィーリア以上にサクラは純粋なのだ。真っ直ぐ過ぎて、言葉の意味そのもので理解してしまう。実に彼女らしい天然ボケだ。
シルフィードだってそこはわかっている。だが無自覚というものほど厄介なものはない。彼女をどう説得したものかとシルフィードが困っていると、
「さ、サクラッ！　そんな無茶な事言わないのッ！」
さすが彼女と付き合いの長いクリュウ。すぐさまサクラの天然暴走を止めに入る。
「ほらッ、僕の料理で良ければあげるからさ」
そう言ってクリュウはまだ食べている途中のガブリブロースステーキを差し出す。黄金魚のムニエルとは比べ物にすらならない品

だが、サクラは無言でそれを見詰め、コクリとうなずいた。
　シルフィードはそんな二人のやり取りを一瞥し、取り返した黄金魚のムニエルを一口食べる。と、
「このステーキも結構おいしいよ。ほら」
　天然少年クリュウ。何の違和感もなくカットしたステーキをサクラの口元まで運ぶ。サクラもいきなり目の前に差し出されたステーキに思わず口を開いてしまい、
　パクッ、モグモグモグ……
「ね？　おいしいでしょ？」
　笑顔で言うクリュウの言葉に、ようやく自分が何をしたのかを理解してサクラは顔を真っ赤に染める。
「……あぅ、く、クリュウ……ッ？」
「うん？　どうしたの――」
　ここでクリュウもようやく自分がした行為に気づいたのか、急に顔を真っ赤にしてうつむいてしまう。サクラも掛ける言葉を失ってしまい沈黙。二人の間に淡い桃色の雰囲気が流れる。
「な、何でいつもサクラ様ばっかりぃ……ッ！」
　目の前でクリュウに料理を食べさせてもらったサクラを悔しそうに見詰めるフィーリア。その瞳は薄らと涙が浮かんでいる。
　シルフィードは突然目の前で恋人同士のような行為をした二人を見て固まっていた。
　一瞬にして会話が消えたテーブル。聞こえるのは周りで騒ぐ他のハンター達の喧騒だけ。気まずい雰囲気が彼らを包み込む。と、
「いやっほぉ～ッ！　みんな無事だったんだねぇ～ッ！」
　いい意味で不謹慎なほど明るい声に四人は一斉に振り向く。するとそこに優しげな笑みを浮かべながら手を振って、ドンドルマ酒場の看板娘ことライザ・フリーシアが駆け寄って来た。
　ライザは四人のテーブルまでやって来るとその中のクリュウに向かってニコッと微笑む。その笑顔にクリュウはドキッとする。
「クリュウ君も無事だったんだねぇ」
「は、はい。何とか」

「……って事は、リオレウスには勝てたのね？」
「はい。かなり苦戦しましたが、何とか勝てました。シルフィードさん達のおかげです」
「そっかそっかぁ。クリュウ君もついにリオレウスを倒したのねぇ。それで宴会って訳かぁ」
ライザは納得納得とばかりにうむうむと何度もうなずく。
突然のライザの出現に驚くクリュウ達。だが幸いな事にライザの登場によって気まずかった雰囲気はすっかり消えていた。
ニッコリと微笑むライザ。すると、ふと何かおもしろい事を思いついたように意味深な笑みを浮かべる。
「じゃあ私も混ぜてもらおっかなぁ」
「え？　別に構いませんが、仕事はいいんですか？」
「今日は非番よ。制服着てないんだから」
そういえば、ライザはいつも着ているギルドの制服ではなく紺色の薄手のコートに薄水色のブイネック、紺色のショートパンツという私服姿だ。
「へぇ、ライザさんの私服姿なんて初めて見ましたよ」
「そうだっけ？　うふふ、似合ってるぅ？」
「え？　あ、はい。とってもお似合いです」
「ふふふ、ありがとうね」
ライザは笑顔でウインクする。その威力は全く関係ない別のテーブルの野郎どもが嬉しさのあまり悶絶して気絶してしまうほど。その直撃を受けたクリュウもカァッと顔を真っ赤にさせてうつむいてしまう。ライザはそんなクリュウをおかしそうに笑いながら見詰める。
一方、そんなクリュウを見ておもしろくないのはフィーリアとサクラ。ムスッとした表情でライザを睨む。二人のちょっと殺意が込もった視線に気づいたライザは小さく苦笑いする。
「もうフィーリアもサクラも。大丈夫よ、私は彼に手を出したりなんてしないから」
「ふえッ!?　ち、違いますよぉッ！」

「……不潔」
ライザの意味深な言葉にフィーリアとサクラは顔を真っ赤にさせてうつむく。そんな二人を見てライザはまるでお姉さんのような優しげな笑顔を浮かべると、二人の頭を撫で撫でする。
「まったくもぉ、いつまでも子供ねぇ」
「子供じゃないですよぉッ！」
「……発言を撤回して」
「なぁに一人前ぶっちゃって、あなた達はまだまだ世間知らずのお子ちゃまよ」
「むぅ……」
「……」
ライザに髪をワシャワシャと掻き乱される二人だったが、抵抗はしなかった。ただ赤らめた頬を恥ずかしそうにうつむいて隠すだけ。全く逆とも言うべきタイプの二人だが、ライザという共通の友の前では不思議と似て見えてしまう。
ライザは二人を十分かわいがった後、補助席を持って来てクリュウとフィーリアの横に腰掛ける。
「なかなかおいしそうな料理が並んでるわね。ふーん、クリュウ君もなかなかの物食べてるじゃない」
「あ、ありがとうございます」
クリュウは少し照れながらステーキを一切れ食べる。
ライザも給仕の女の子を呼んで軽くあいさつをしてから注文をする。いつも注文を受ける側の彼女が注文をする光景は結構新鮮だ。
「それにしても、今思うと蒼銀の烈風と呼ばれるあなたがクリュウ君達とよく組む気になったわね。今までずっと一人で戦い続けて来たのに、どういう心境の変化？」
ライザは心底不思議そうな感じでシルフィードに問う。ずいぶん親しい相手への話し方だが、ライザはこの酒場の看板娘だしギルドの受付嬢だ。どこかでシルフィードと接点があってもおかしくはない。
「大した事じゃない。クリュウの強い想いに興味を持っただけだ」
「僕の、ですか？」

首を傾げるクリュウを一瞥し、シルフィードはそれ以上何も言わずに無言のままビールを飲む。すると、そんな彼女を見てライザは目を丸くする。
「あら？　あなたお酒はいつも一杯くらいしか飲まないんじゃなかったかしら？」
ライザはすでに空になったジョッキを見て驚いたような顔をする。さすがギルド嬢、すさまじい観察力だ。これにはシルフィードも驚いたように目を大きく見開く。
「あ、あぁ。いつもは一杯くらいしか飲まんが――良く知ってるな」
「これでも私ギルド嬢だからね。お客さんの特徴を覚えるくらい朝飯前よ」
「……今は夕食」
「細かい事は気にしないの、サクラ」
上機嫌なライザ。何かいい事でもあったのだろうか？　そこへ彼女の注文した料理とお酒が運ばれて来る。ライザはご機嫌なままクイッとおいしそうにワインを飲む。
「ライザ様、今日はいつになくご機嫌ですね。何かあったんですか？」
皆の疑問を代表してライザと最も親しいフィーリアが訊いてみる。さすがフィーリアだ。
フィーリアの問いにライザはむふふと楽しそうな笑みを浮かべる。
「別に何もないわよぉ」
「ご冗談を。ライザ様今日はすごくご機嫌じゃないですか。何かあったんですよね？」
「まぁ、あったといえばあったし、なかったと言ったらうそになるわね」
「……あるんじゃん」
サクラの冷静過ぎるツッコミに対してもライザは気にした様子もなく嬉しそうに笑みを浮かべる。
「実はね、今日は同僚の結婚式だったのよ」
「そうだったんですか。それはめでたいですね」
「そうなのよぉ。純白のウエディングドレス、私もいつか着てみたい

わぁ」
　ライザはキラキラとした瞳で天を仰ぐ。夢見る乙女にとって結婚とウエディングドレスはまさに幸せキーワードなのだろう。
「結婚かぁ……」
「……ウエディングドレス」
　フィーリアとサクラは早速自分の結婚式やウエディングドレス姿を想像してみる。どんな想像をしているかは乙女の秘密だが、サクラは顔を真っ赤にしてニヤけてるし、フィーリアに至ってはよだれまで垂らしている始末。安易に想像できそうだ。ちなみに新郎の方はわざわざ言うまでもないだろう。
「ライザさんのウエディングドレス姿ですか。きっと似合うと思いますよ」
「うふふ、ありがとうクリュウ君」
「ライザ。君には彼氏というものはいるのか？」
　シルフィードはふと気がついたように問う。すると、ライザは肩をすくませる。
「ううん、残念だけどいないわね」
　ライザは心底残念そうに答え、ワインを一口飲む。刹那、美女美少女が四人も揃っているおかげで周りから注目されていたクリュウ達。ライザの恋人いない発言に一斉に野郎どもがガッツポーズ。共にいる女達は彼らを軽蔑したような眼差しで見詰めた。
「そうなのか？　君は美人だしてっきり彼氏持ちだと思っていたが」
「もう、おだてたって何も出ないわよ？　まぁ、こういう仕事柄ラブレターや告白なんて散々受けてるけどね、私は恋愛には妥協する気はないから、これだと思う男がなかなかいないのよねぇ」
　そう言ってライザは小さくため息する。周りの野郎どもからも一斉にため息が漏れたが、これはきっと別の意味だろう。
「ライザ様の好みの男性というのは、どういうタイプなんですか？」
　フィーリアが気になったように問うと、ライザは「そうねぇ……」としばし天を仰ぎながら考え、ふとクリュウの方を見る。突然見られたクリュウは不思議そうに首を傾げた。

「そうねぇ、クリュウ君だったら彼氏にしてあげてもいいかな」
「ふえッ!?」
「なぁッ!?」
「……ッ!?」
　突然のライザの爆弾発言にクリュウは顔を真っ赤にして大慌てし、フィーリアとサクラは一斉にライザを睨み付ける。シルフィードはどうしたもんかとしばし傍観態勢に入った。
「ぼ、僕がですかッ!?」
「うん。クリュウ君かわいいし素直だし。結構好きよ?」
「あうぅ……あ、ありがとうございます……」
　ハンター達にとってはアイドルのような存在であるライザ。その美貌は折り紙つきだ。そんな彼女に笑い掛けられてしまえばどんな男も悶絶必須。クリュウも顔を真っ赤にして照れているのを隠すようにしてうつむいてしまう。
「あはは、照れちゃってかわいい～」
　ライザは楽しそうに笑いながらクリュウの頭を撫で撫でする。
　もちろんライザはクリュウをからかっているのだ。確かに彼の事は好きな部類に入るが、それは例えを上げるなら弟に対するような《好き》であって、フィーリアやサクラとは違うものだ。シルフィードはちゃんとわかっているらしく、冗談をぶちかますライザを見て小さく苦笑している――だが、世の中には冗談が通じない者もいる訳であって……
「クリュウ様は渡しませんッ！　ライザ様とはいえ、勝手な行動をされるなら容赦はしませんよッ！」
「……覚悟はできてるだろうな」
　血走った目でライザを睨むのはフィーリアとサクラ。全方位に放つ殺気は怒り狂うリオレウスを思わせるほど、かなり怖い。
　冗談が通じずに激昂する二人に、さすがのライザも笑顔が引きつり慌ててなだめ始める。
「ちょ、ちょっと待ってよ二人とも。冗談だからね冗談。ほ、本気になられても困るんだけど……」

「私は本気ですッ！　この気持ちは一時の気の迷いなんかじゃありませんッ！」
「……私は子供の頃からずっと想い続けてる」
「意味が違うッ！　本気の意味の捉え方が違うわよッ！」
　お酒が入っているせいかいつになく攻撃的な二人に、ライザは戸惑いながらも二人の誤解を解こうと慌てて説明する。そんな三人を見てクリュウは小さく苦笑いする。
「――さて、じゃあ私は行くぞ」
　ガタンと隣で小さく音を立てて立ち上がったシルフィード。クリュウは驚いたように彼女を見詰める。
「行くって、どこにですか？」
「うん？　家だが」
「あ、じゃあ僕送って行きますよ」
　クリュウは残ったジュースを一気に飲み干して立ち上がる。そんな彼にシルフィードは驚いたように瞳を見開く。
「いや、すぐそこだが」
「夜に女の人を一人にさせちゃいけないって言いますから。色々と危ないですし」
「私がそういう輩（やから）に屈するとでも？」
「……たぶん大丈夫でしょうけど、念の為って事で――ちょっと、話したい事もありますし」
「私に話？　彼女達の前では言えないような事か？」
「いえ、そういう訳じゃないんですが……こんな状態じゃ二人で話した方がいいかなぁって」
　そう言ってクリュウは未だにライザと言い合う二人を見る。白熱する論争の最中、三人はグイグイとお酒を飲んでいる。これは長期戦になりそうだ。
「まぁ、確かにこの状態じゃ何を言っても無駄だろうな。わかった、ついて来い」
　シルフィードも納得したようにうなずくと、壁に立て掛けてあった煌剣リオレウスを背負って酒場を出る。クリュウもそれに続く。

酒場の外へ出ると、そこは酒場の華やかさとは別世界の静かな世界。満天の星空に月が淡く照らし上げる街並みは幻想的な光景だ。
ここは市民の行き来が賑やかな市場通りから離れた場所なので、眠らない街と言われるドンドルマであっても夜の静けさを放っている。
シルフィードとクリュウはそんな誰もいない月明かりに照らされるだけの道を並んで歩く。
「きれいですね」
「何がだ？」
「星空ですよ。すっごくきれいですよ」
キラキラした瞳で天を見上げるクリュウの視線を追って、シルフィードも星空を見上げる。
普段は然程気にしない夜の空。だがこうして改めてじっくりと見てみると、その美しい輝きに心奪われる。
「確かに、きれいだな」
「イージス村の星空はもっときれいですよ」
「ほぉ、それはぜひ一度行ってみたいものだな」
「――来て、みませんか？」
「何？」
クリュウの突然の申し出にシルフィードは驚いたように視線を下げて彼を見る。その瞬間、彼の真っ直ぐな瞳が自分をじっと見詰めている事に気づく。だがその瞳は少し不安げに揺れていた。
「行くというのは、旅の途中でという事か？」
「そ、そうじゃなくて、その……、僕達と……僕と組みませんか？」
クリュウの言葉に、シルフィードは一瞬瞳を大きく見開いた。だがすぐにいつものクールな表情に戻る。
「組むというのは今回のような一時的なものではなく、これからずっと一緒にという意味か？」
「は、はい」
その途端、今まで穏やかだった彼女の表情が硬くなる。それを見てクリュウはさらに不安そうに瞳を揺らす。
「あの、ダメですか……？」

「私は誰とも組まない。今までもこれからも変える気はない。今回のはただの気まぐれだ」
　それはうそである。本当は彼の言葉に揺れる自分がいる。でも彼女の中で決意という鎖がそんな彼女の気持ちを封じているのだ。その言葉はまるでそんな自分を押さえるように自分に言い聞かせているかのような言葉だ。
　断られる。そんな焦りからクリュウは慌てて彼女の手を握って必死に訴えた。
「ど、どうしてもダメですかッ？」
　ギュッと手を握り締めながら不安げに見詰めて来るクリュウにシルフィードは風で乱れた髪を整えながら少々困ったような表情を浮かべる。
「なぜ私なのだ？　君にはフィーリアとサクラという心強い仲間がすでにいるではないか。私が加わる必要性があるようには思えないが」
　彼女の言う通り、すでに自分にはフィーリアとサクラという心強い仲間がいる。今回の狩りでもその連携が確かなものだと改めて確認もできた。三人でこれからも狩りを続けて行く事は全然可能だ。だが、このチームには決定的に足りないものがある。それは――
「僕は、シルフィードさんのような隊長（リーダー）がずっとほしかったんです」
「リーダーだと？」
「はい。今僕らのチームは明確なリーダーが存在しません。書類上は僕がリーダーになっていますけど、実際は二人が僕に合わせて戦っているんです。そもそも上級ハンターである二人をランクの低い僕が指揮する事自体が間違ってるんですよ。僕にはそんな指揮能力ありませんし」
「そんな事はないと思うが……」
　シルフィードはあまり強くは言わなかったが、内心はそんな事はないと思っていた。確かに未熟な部分は多々あるが、今回の彼の動きを見る限り比較的このチームでは一番指揮能力があるように見える。フィーリアとサクラがクリュウをリーダーに立てたのはあながち間

違っていないのだ。
　だが、クリュウは力なく首を横に振る。
「そんな事ありませんよ。いつも僕のせいで二人には迷惑を掛けてしまってばかりで……」
「それは君の思い込みだ。二人は本当に君を信頼している。迷惑だなんて思ってはいないさ」
「でも、いつも危険な目に遭わせているのは事実ですよ……」
「クリュウ……」
　自分を責めてどんどんと小さくなっていくクリュウを見て、シルフィードは何だかいたたまれない気持ちになって来る。
「だから、今後の為にもシルフィードさんのような頼れるリーダーが必要なんです」
「いや、私は一匹狼だぞ？　一番指揮とは無縁の存在だが」
「そんな事ないですよ。今回の狩り、僕は何度もシルフィードさんの指示に助けられましたし、すごく心強かったです。だから、これからもシルフィードさんの指揮で狩りをしたいんです」
　必死に訴えるクリュウの姿と言葉に、シルフィードの決意はさらに揺らぐ。
　今までこんなに自分の存在を必要とされた事はなかった。いつも淡々と仕事をこなし、一人で戦い続けてきた自分をここまで必死に必要された事はない。だからこそ彼の必死の熱意が新鮮に感じ、心の奥底で嬉しさを感じてしまう。
　蒼銀の烈風と呼ばれ、孤高に戦い続けてきた。その氷のような心が、ついこの前出会ったばかりの自分よりも小さな年下の少年に溶かされていく。何とも不思議な感じだ。
　――なぜだろう、彼と一緒なら今までの自分には見つからなかったものが見つかるかもしれない。そんな風に思ってしまう。
　じっと自分を見詰めて来る彼の視線と、瞳が合う。その吸い込まれそうな汚れのないキラキラと輝く純粋な翡翠色の瞳に、気持ちが傾いて行く。
　――優しくて、笑顔が素敵で、誰よりも人一倍努力をして必死にが

んばる彼を、守ってあげたい。そんな想いが胸を満たしていく。
　その想いは彼が弟に似ているから来るものなのか、それとも別のものなのか、今の彼女にはそれはわからない。だが、わからない中にもわかる事はある――彼と共に狩りを続けたい。その気持ちだけは、どんなに言い訳を並べても変わる事はなかった。
「身勝手だって事はわかってます。いくら理由を並べた所でそれは変わりません。でも、これだけは言わせてください」
　クリュウの真剣な瞳と、シルフィードの心揺れる瞳が重なる。
「――僕は、シルフィードさんとこれからもずっと、ずっとずっと一緒に狩りをしたいんです」
　真っ直ぐ過ぎる、うそ偽りも飾りも付けない言葉。単純であり、単純であるが故に心に響く想い。その想いは、確実に彼女の心にも伝わった。
　シルフィードは何も答えず、無言のまま踵を返してクリュウに背を向ける。狩りの間は何度も助けられたその頼もしい背中が、今は耐えがたい絶望に姿を変えてクリュウの前に立ち塞がる。
　――シルフィードは、仲間になってくれない。
　そんな想いがクリュウの熱くなっていた心を急激に氷のように冷たくしていく。
「……勝手な事ばかり言って、ごめんなさい。僕がわがままでした。シルフィードさんの想いも無視して自分の都合を押し付けてしまって、すみませんでした」
　クリュウは丁寧に頭を下げると、もうこの場にいる勇気もなく逃げ出そうと彼女に背を向けて走り出す。
「――君の村の星空、見てみたいな」
　その小さな、まるでつぶやくような言葉にクリュウの足が止まる。振り返ると、シルフィードは自分を見詰めていた。その瞳の中にある優しさ、何度も何度も助けられたその優しさが、クリュウの心を射抜く。
　驚いたように振り返る彼のおかしな顔を見て、フッと口元が緩む。
「まったく、君は本当に変わった奴だな」

「そ、そうですか？」
「……だが、嫌いではないぞ？」
「シルフィードさん？」
　口元に小さな笑みを浮かべたまま歩み寄るシルフィード。クリュウはそんな彼女をただ見詰める続ける。そして、彼の目の前までやって来たシルフィードは――優しく、彼の頭を撫でた。
「シルフィード……さん？」
　呆然と見詰めて来る彼の頭を優しく撫でながら、シルフィードは言った。
「――こんな私で良ければ、これからも君の力になろう。よろしく頼むぞ」
　一瞬、何が起こったかわからなかった。
　だが、自分に向かって優しく微笑む彼女の姿を見て、それが現実であるという事に気づく。
「ほ、本当ですか……？」
　自分でも声が震えているのがわかった。
「あぁ、本当だ」
　その言葉に、クリュウは大きく瞳を見開く。そして、溢れ出る熱さが目の縁に集まり、ツゥッと夜風で冷えた頬を温かさを残しながら流れる。
「く、クリュウッ？」
　突然泣き出したクリュウを見てシルフィードは先程までのかっこ良さは消えて年相応の少女のように慌て出す。
「ど、どうしたッ？　私、君を傷つけるような事を言ったかッ!?」
　さっきまでの彼女とは別人のように右往左往するシルフィードを見て、クリュウはおかしそうに笑った。その途端、シルフィードの顔は見る見るうちに真っ赤に染まっていく。
「な、なぜ笑うのだッ!?　笑うとはひどいではないかッ」
「ご、ごめんなさいッ」
　謝ってはいるが、クリュウは笑いが堪えられなくてまだ笑ってしまっている。そんな彼の笑いが明らかに自分に対するものだとわ

かっているシルフィードは「何を笑っているかはわからないが、それは決して気分が良いものではないぞ」と言ってプイッと背を向けてしまう。どうやら拗ねてしまったらしい。彼女にもそんな女の子っぽい所があるのだとちょっと意外で驚きながらも、慌てて謝る。
「ごめんなさいごめんなさいッ！　もう笑いませんからぁッ！」
「理由は何だ？　なぜ私が笑われる必要があるのかまるでわからんのだが」
　シルフィードは本当にわからないといった具合に首を傾げる。クリュウは言うべきか言わざるべきか少し悩んだ後、正直に言ってみた。
「いえ、シルフィードさんの慌てふためく姿がおかしくて、つい……」
　途端、見る見るうちにシルフィードの顔は再び真っ赤に染まり、プイッとまたも背を向けられてしまう。
「人の慌てふためく姿を笑うとは、あまりいい趣味とは思わんぞ」
「ご、誤解ですってッ！　僕にそんな趣味はありませんよッ！　ただ本当におかしいというか、かわいいなぁって思っただけでッ！」
「ッ!?　……一つ忠告するぞ、君はもう少し自分の言動に気をつけるべきだ」
「ふえ？」
　背を向けたままそう言ったシルフィードを見詰め、クリュウは困惑したように首を傾げる。そういえば以前、ツバメ達のリーダーをしていたジークフリートにも同じような事を言われた事がある。そんなに自分の言動はおかしなものなのだろうか？　もちろん天然少年であるクリュウが気付く訳もなく、首を傾げるばかり。
　そんなまるでわかっていないクリュウを見てシルフィードは疲れたようにため息する。相当な天然だとは思っていたが、ここまで来るとある意味才能だ。
　だが、そんな彼がどうしても気になる。その邪な心がない真っ直ぐな生き方をする彼が、気になって仕方がない。
「でもシルフィードさんが仲間になってくれて本当に良かったです」
　笑顔で言うクリュウを見て、シルフィードはふと自分の中で引っ掛

かっているものに気づいた。そしてそれはあまり無視できるようなものではなく、即刻変えるよう彼に言う。
「クリュウ。仲間になる条件として頼みがあるのだが」
「条件？　頼み？　何ですか？」
　仲間になる条件。クリュウは一転して表情を引き締めると彼女の言葉を待つ。一方のシルフィードはなぜか彼に背を向けていた。彼からは見えないが、月明かりの下でも彼女の頬は明らかに赤く染まっている。
「う、うむ。その、あのだな……」
　シルフィードはそこで一度大きく深呼吸すると彼に向き直って言い放つ。
「――その他人行儀のような敬語、やめてはくれないか？」
「へ？」
　クリュウはあまりにも突拍子もない事を言われてポカンとする。仲間になる条件だというのだからさぞかし難問をぶつけられると思っていただけにその予想外の要求に唖然とする。
「え？　敬語をやめてほしい、という事ですか？」
「そうだ」
　シルフィードは真顔で答える。頬は相変わらず赤く染まっているが。
　冷静になって来たクリュウは早速首を傾げる。
「何でですか？　別に支障はないと思いますが」
「私はこれから君達の仲間になる。その関係には例え私がリーダーとなっても上下関係は存在しない。だから敬語は必要ない」
「そ、それはそうかもしれませんが、一応リーダーですし。元々僕は年上の人には基本的に敬語で接して来ましたし」
「それをやめてほしいと言っているのだ。私は君にフィーリアやサクラと同じように対等に接したい」
　ふと、その《対等》というものが仲間としてのものなのか、それとも胸で高鳴る正体不明の熱さに対するものなのか考えてしまう。だがシルフィードはフルフルと首を横に振って今はそんな事を考える

時ではないと無理やり考えを頭の外へ追い出す。
一方のクリュウは困惑顔だ。
「そ、そんないきなり敬語をやめろと言われても困りますよ……」
「何を言う。君は一度私を呼び捨てで読んだだろうが」
「え？　そ、そうでしたっけ？」
クリュウはシルフィードの言葉に驚愕すると、自分の記憶を辿ってみる。だがそんな記憶はどこにもなかった。またいつものように自覚がなかったのだろうと気づき、シルフィードは苦笑する。
「まぁ、覚えていないのならそれでも構わない。だが、私はクリュウと対等な立場でいたいのだ。仲間なのだから、年とか経験とか関係なく接せられる、そんな仲にな。だから、君には敬語抜きで接してもらいたい」
シルフィードは真剣そのものであった。本当にクリュウを信頼しているからこそ、彼の自分に対するどこか一線を引いた態度が嫌なのだ。信頼しているなら、フィーリアやサクラと同じように対等に扱ってほしい。そう願ってしまう。
そんなシルフィードの願いに、クリュウは複雑そうな顔をする。
「し、シルフィードさんがそこまで言うんでしたら構いませんけど……」
「頼む」
「わ、わかりました」
クリュウは覚悟を決めたようにその場で大きく数回深呼吸して気持ちを整える。そして月明かりの下、小さく笑みを浮かべて……
「じゃあ、これからよろしくね――シルフィ」
その瞬間シルフィードはドキリとし、カァッと顔を真っ赤に染める。それを隠すように彼に背を向けた。
「あ、あれ？　ダメかな？」
急に不安になるクリュウに、シルフィードは背を向けたまま首を横に振る。
「い、いや。別に問題はない。これからはそう接してほしい」
「う、うん」

「だが、一つ訊いていいか？」
「え？　何を？」
「――な、何なのだ？　シルフィとは」
「え？　あ、そっちの方が親しみを込めて呼びやすいかなぁって思って。ダメかな？」
「いや、ダメではない。むしろ良いというか、その……」
　そこまで言ってシルフィードは沈黙してしまった。首を傾げるクリュウからは見えないが、シルフィードの顔は月明かりの下でもはっきりとわかるくらいに真っ赤に染まり、人差し指同士を胸の前でツンツンさせている。
「そ、そのような呼び方をされた事がないので、驚いただけだ」
「そうなんだ。じゃあ、シルフィードって呼び直そうか？」
「いや、それで構わない――それで頼むッ！」
　バッと振り返って力強く言うシルフィードにクリュウは一瞬ビクッと驚くが、すぐに親しみを込めた笑みを浮かべる。
「じゃあ、改めてこれからもよろしくね。シルフィ」
「あ、あぁ――よろしく頼む。クリュウ」
　二人は互いに微笑み合うと、どちらからとなく手を差し伸べ、握り合う。
　煌びやかな星々に見守られながら、二人は固い絆を結び合う。
　温かな頼れるリーダーの手を握って、嬉しそうに微笑むクリュウ。そんな彼の手を握り、その笑顔にちょっとドキドキしながら口元に笑みを浮かべるシルフィード。
　どちらも、新しい物語の始まりを予感していた。
　彼の温かな手を握りながら、シルフィードは内心苦笑する。まさか本当に仲間になってしまうとは思ってもみなかった。だが、悪い気はしない。ずっと一人で戦って来た自分に仲間ができるというのは、とても嬉しい事だ。
　仲間とは何か。その答えが、彼らと共にいる事で見つかるかもしれない。
　何より、この自分よりも年下で身長も低い少年と一緒にこれからも

狩りができる。それが最も嬉しい――と、自分は一体何を考えているのか。なぜ、彼と一緒に狩りをしたいなどと考えるのか。なぜ――こんなにも胸が熱くなるのか。
　シルフィードは彼と一緒にいると今まで体験した事のない感覚に襲われる。そしてその感覚が一体何を示しているのか、それはわからない。
　だが、一つだけ言える事がある。それは――
「引っ越しの準備をしないとな」
「あ、そっか。仲間になったんだから村に来なきゃいけないのか。でも、大丈夫？」
「心配するな。ハンターという生活柄、あまり荷物はないのでな。素材や武具、生活に必要な最低限なものしかない。帰ったらすぐに準備をして、明日には出発できるようにしておく」
　すでに時刻は日付が変わる少し前くらい。いくら少ないとはいえそれなりの重労働になるだろう。
「手伝おうか？」
「いや、私一人でやる。中には下着とかの類もあるのでな」
「あ、そ、そうだよね」
「見てみるか？」
「い、いいよッ！　そういうのは見ちゃいけないものだからッ！」
　顔を真っ赤にして全力拒否するクリュウ。そんな彼を見てシルフィードはおかしそうにクスクスと笑うが、ちょっとだけショックを受けていた。
（そ、そこまで全力否定するほど、見たくないのか……って、私は一体何を考えているんだぁッ!?）
　彼と一緒にいると時折感じるこの不思議な想い。そしてその想いに自分の心が少しずつ変わっていく感覚に、シルフィードは少しだけ不安を覚える。
「とりあえず家に送って行くだけ送って行くね。じゃあ行こっか」
　そう言ってクリュウははにかむと、何の前触れもなくシルフィードの手を握った。その瞬間、シルフィードの胸がドキッと高鳴る。

「く、クリュウ？」
「もう夜遅いし寒いからさ、早く行こうよ」
クリュウは早く早くと言わんばかりにシルフィードの手を引っ張って走り出す。そんな彼に手を握られ、シルフィードは赤くなった頬を夜風で冷ましながら彼に連れられて走る。
煌めく星空の下、二人の少年少女はその淡い闇の中に静かに溶けて行った。

第７６話　揺れる寂しさ　すれ違う心の行方

翌朝、フィーリアとサクラは朝食を取る為に酒場に向かった。するとそこにはすでにクリュウとシルフィードが仲良く食事をしていた。二人の朝の爽快感は、この瞬間に一気に消し飛んだ。

「な、何でクリュウ様とシルフィード様が？　っていうか、シルフィード様はもう私達とは関係がないはずじゃ……」

「……どういう事？」

困惑したように立ち尽くす二人をいち早く発見したのはクリュウだった。クリュウは二人の姿を見つけると嬉しそうな笑みを浮かべて二人に手を振る。

「お～いッ、二人ともこっちこっちッ！」

朝からクリュウの笑顔を見れたというのに、なぜか二人は素直に喜べない。その笑顔の意味が、何となく嫌ぁな予感がしたからだ。

二人は少し警戒しながら彼に言われるがままテーブルに腰掛ける。席順はなぜかクリュウがシルフィードの横に移動したのでフィーリアとサクラが二人の対面の椅子に座る事となった。

二人が料理を注文し終えると、クリュウは待ってましたと言わんばかりに嬉しそうな笑顔を浮かべて口を開く。

「えへへ、二人に報告がありま～す」

その瞬間、フィーリアとサクラは一斉にこの場から逃げ出したくなった。なぜかはわからない。これが女の勘というものなのだろうか。

「シルフィが仲間になってくれたんだよッ！　これからは正式に僕達のリーダーとして狩りでは指揮してもらうんだ！　僕達四人で力を合わせれば、どんなモンスターだって怖くないッ！　これからは四人でがんばっていこうッ！」

『……』

返って来たのは沈黙。同じ沈黙でもシルフィードは少し照れたように頬を赤らめてコーヒーを飲んでいるが、フィーリアとサクラはどちらも揃って固まっていた。

予想外の反応にクリュウは困惑し、自分の上げ過ぎたテンションが急に恥ずかしくなって頬を赤らめて静かに椅子に座り直す。
「えっと、何この反応？　何で二人とも沈黙してるの？」
クリュウはてっきり二人も大喜びしてくれると思っていたのだが、実際はこんな状態。クリュウは自分の予想とはまるで違う二人の反応に困惑するばかり。
「あ、あのちょっとよろしいでしょうか？」
そんな中おずおずと手を上げたのはフィーリア。
「どうしたの？」
「えっと、本当にシルフィード様が仲間になられたのですか？」
「そうだけど、嬉しくないの？」
「い、いえ、嬉しくない訳ではないのですが……ちょっと急だったもので」
フィーリアの発言にサクラもコクコクとうなずいている。確かにちょっと急な話だ。そういう事はもっと時間を掛けて考えるのが普通なのだが。
「それに、そういう重要な話は私達にも相談してほしかったです」
「……（コクコク）」
フィーリアの少し怒ったような言い方に、クリュウは途端にしゅんと小さくなってしまう。確かに何の相談もせずに独断で決めてしまったのはまずかった。彼女達だって大事なチームメイト。チームに関わるような事は真っ先に相談しなきゃいけない相手のはずなのに。
「ご、ごめん……」
さっきまでの笑顔はすっかり消えて落ち込むクリュウ。そんな彼を見て一転して慌て始めるのはフィーリアだ。
「ちょ、ちょっとクリュウ様ッ!?」
「……泣かした」
「そ、そんな私のせいなんですかッ!?」
「……最低」
「そんなあああぁぁぁッ！」

「落ち着け。別にクリュウは泣いていないから」
暴走する二人を、シルフィードが冷静に止める。ある意味このチームにはシルフィードのような常識人が一人くらいいる方がバランスがいいらしい。
「ともかく、勝手ながらそういう事になった。二人に何の相談もなしに決定した事は謝るが、これからは正式なチームメイトだ。よろしく頼む」
そう言ってシルフィードは丁寧に頭を下げてあいさつする。そのかしこまった態度にフィーリアも慌てて「こ、こちらこそよろしくお願いしますッ」と丁寧にあいさつを返す。こういう律儀な所が彼女らしい。
一方、無礼極まりない上に協調性も限りなく低いサクラは一人ムスッとしたような顔でシルフィードを見詰めていた。その視線に気づき、シルフィードは彼女にも頭を下げる。
「サクラも、よろしく頼む」
「……断る」
見事な拒否の即答。そのあまりの鮮やかさに三人は一瞬言葉を失う。相変わらず彼女はオブラートに包むというやり方を知らない直球勝負。ある意味そのストレートさは脱帽ものだ。
「ちょ、ちょっとサクラ。いきなり何言ってるんだよ」
慌ててクリュウが間に入って来るが、サクラは無言でシルフィードを睨むばかり。その鋭い隻眼にシルフィードの表情も硬くなる。
「断る、とは一体どういう意味だ？」
「……言葉通りの意味。私はあなたのチーム入りを認めない。それ以上でもそれ以下でもない」
「なぜだ？　私が入ると何か問題があるのか？」
「……このチームは今までずっとこの三人でやって来た。それはこれからもずっと同じ。あなたが入る余地なんてない。邪魔なだけ」
サクラの容赦のない牽制（けんせい）に、シルフィードの表情が険しくなる。一触即発、そんなピリピリとした空気が辺りに漂い始める。

「ちょ、ちょっと待ってよサクラッ！」
　睨み合う二人の間に慌てて入り、クリュウは無表情ながらもどこか不機嫌そうなサクラに視線を向ける。
「サクラは何が不満なの？　シルフィの力はサクラだって今回の狩りで十分わかったでしょ？　彼女の指揮があれば僕達はもっと連携ができる。何も問題ないじゃないか」
「……私は今のままのチームで構わない」
「ど、どうして？」
「……私達のチームはクリュウを中心に編成されている。クリュウと連携をする私、クリュウを援護するフィーリア。この連携で今まで戦って来た。それを壊してまで彼女を入れる必要性はない」
　サクラの冷静な言葉に、シルフィードの表情が曇る。確かに彼女の言う通り、クリュウ達のチームは今までクリュウを中心に編成されていた。だが、シルフィードが入る事で彼女がリーダーとなれば様々な部分で編成が細かく変わって来る。サクラは今までのやり方を壊してまでシルフィードを入れる必要はないと思っているのだ。
　だが、そんなサクラの言葉にいつもは温厚なクリュウもムッとする。
「そんな言い方しなくてもいいでしょ。シルフィに謝ってよ」
「……必要ない」
「サクラッ！」
「ま、待てクリュウ。私は気にしていないから落ち着け。それに彼女の意見ももっともだ。勝手に決めた私達が悪かったのだ」
　サクラの失礼極まりない態度に激怒するクリュウをシルフィードが慌てて止めに入る。フィーリアは突然激怒したクリュウにビクッと震えて小さくなっている。
　サクラはしばし無表情でクリュウと睨み合っていたが、次第に彼の普段は見慣れない怒った瞳に耐え切れなくなり、視線を落としてしまう。そんな彼女を依然と睨み続けるクリュウ。
「文句があるなら僕に言ってよ。シルフィに無理を言って仲間になってもらったのは僕なんだから。何が不満なのさ」

普段は怒る事なんてほとんどないクリュウの怒りに、サクラはすっかり委縮してしまう。だが、そんな彼女を一瞥しムッとしたような目でフィーリアは彼を見る。
彼は何もわかっていない。なぜ彼女が頑なにシルフィードのチーム入りを拒否する理由を、彼は何もわかっていないのだ。
「私も、あまり快くは思ってはいません」
突然フィーリアからの思わぬ発言に、クリュウは驚いたように彼女を見る。
「ふぃ、フィーリアまで……どうしてだよ」
「こういう事は個人が独断で勝手に決めるべき事ではありません。チームである以上、私達に相談するべきでした。いくらクリュウ様といえど、勝手過ぎます」
フィーリアの言葉に、サクラが小さくうなずいた。
本当はこんな理由なんてどうでもいいのだ。本当の理由は、自分達に相談なしに勝手に彼が決めた事に対する空しさ、自分達は信用されていないのではないかという疑念、そして、シルフィードという頼れる存在の出現によって自分達への信頼が揺らぐのではないかという不安。そんな気持ちが嬉しいはずのシルフィードの仲間入りを素直に喜べなくしている。
だが、そんな二人の胸中など知らないクリュウは頑なに拒否する二人を見てだんだんと苛立ちを募らせていく。
「そ、そりゃあ勝手に決めた事は謝るよ。でも何が不満だっていうのッ!? シルフィが頼れる存在だって事は今回の狩りで二人もわかってる事でしょッ!?」
「お、落ち着けクリュウ。私のせいで君達が仲違いしては意味がないではないか。もっと冷静に話し合わないと」
いつもはケンカなどしない仲良いクリュウチーム。それがシルフィードという新メンバーを巡って急速に険悪な雰囲気に包まれていく。その雰囲気に、だんだんとフィーリアとサクラの視線も下がって行く。四人の中で最も居心地が悪いのは好きな相手に非難されているこの二人だろう。

「私は君達の絆を壊す気などないのだ。なのに、私が原因でこんな状態になってしまうのでは本末転倒だ。クリュウ、今回のチーム入りは見送るべきではないか？」
　クリュウ達の絆が壊れる事を最も恐れているシルフィードはすぐさま自分が身を引く事を提案するが、それは逆にクリュウの焦りを増幅させるだけに過ぎなかった。
「そ、そんなッ！　シルフィは何も悪くないでしょッ!?　悪いのはフィーリア達じゃないかッ！」
「わ、私達が悪いって言うんですかッ!?」
「……クリュウは何もわかってない」
「わからないよッ！　君達が一体何を考えているのか、僕には全然わからないよッ！」
　クリュウの言葉に二人は見開くと、傷ついたように落ち込みうつむいてしまう。対立する三人を見てシルフィードの表情も曇る。クリュウは落ち込む二人に少し言い過ぎたと思い口をつぐむ。
　朝の活気がわき始めて盛り上がる酒場において、クリュウ達のテーブルだけが無言で気まずい舞い降りる。と、
「何朝から辛気臭い顔してんのよ」
　このドンドルマにおいて聞き慣れた元気の出る声に振り返ると、そこにはギルド支給のギルド嬢制服を着こなした朝から笑顔が美しいギルドの看板娘、ライザがお盆を片手に立っていた。
「あ、ライザさん。おはようございます」
　クリュウはすぐさま律儀にも彼女にあいさつをする。どんな状況であっても礼儀を忘れないのが彼のいい所だ。
「おはようクリュウ君。ぐっすり眠れた？」
「はい。おかげさまですっかり疲れも取れました」
「それは良かったわ――で？　一体何朝からケンカなんかしてるのかしら？」
　ライザの笑顔での問いに、クリュウは複雑そうな表情でうつむくフィーリアとサクラを見る。二人はその視線に対しても一切顔を上げようとはしなかった。

「原因はすべて私にあるのだ」
そう言って黙る三人に代わってシルフィードがライザにこの状況を説明した。ライザはシルフィードの言葉に相槌を打ちながら三人を見る。いつもの明るい雰囲気が一転して気まずい沈黙を続ける三人に、ライザも困ったような表情を浮かべる。
「なるほどねぇ。だいたいの状況はわかったわ」
ライザは一通りシルフィードから説明を受けると、腕を組みながら何度もうなずいた。そんな彼女をクリュウ達は静かに見詰めている。
皆の視線を受けながら、ライザはため息すると小さく苦笑する。
「これはクリュウ君が悪いわね」
「ぼ、僕ですかッ!?」
ライザの言葉にクリュウは驚いたように瞳を見開いて驚き、逆にフィーリアとサクラはホッとしたような表情を浮かべた。シルフィードは一人冷静に事の成り行きを見守っている。
「そんな、ライザさんまで……」
「まずクリュウ君。君は確かに今後のチームの為を思って彼女をチームに入れたのよね？　それは別に構わないの。むしろ私としても大賛成なくらいよ。でもねクリュウ君、そういう大事な事は事前にフィーリア達と話し合わないと。勝手に決めちゃいけないわ」
「そ、それはそうですけど……」
「彼女達が怒っているのはそこなのよ。事前に何の相談もしないで勝手に決めちゃうから、自分達は信頼されていないんじゃないかって不安になっちゃってるの。クリュウ君は無自覚なのかもしれないけど、君のそういう無神経さは考えものよ。もう子供じゃないんだから、勝手な行動は控えてちょうだい」
まるで弟を叱りつける姉のような雰囲気でライザはクリュウを叱る。フィーリアとサクラは一応ホッとするが、ライザに怒られてうつむいてしまったクリュウを見て複雑そうな表情を浮かべた。シルフィードは一人冷静に事の成り行きを見守っている。
「あ、あのライザ様。もうそれくらいにしておいては……」
だんだんクリュウがかわいそうになって来たフィーリアがそおっ

とライザを止めようと間に入るが、ライザはそんな彼女を呆れたような瞳で見る。
「フィーリアは甘過ぎるのよ。しっかり怒る時は怒らないとダメよ」
「で、でも……」
「元はと言えばあなた達が彼に抵抗したのが始まりじゃない。気に入らないのはわかるけど、少しは彼の考えだって理解してあげなさいよ。今回の事はあなた達も悪いんだから」
「す、すみません……」
今度はフィーリアが落ち込んでしまう。シルフィードはだんだんと居心地が悪くなって来るような気がした。ふと未だ被害なしのサクラを見ると彼女は少し不安そうにクリュウを見詰めていた。どうやら彼を心配しているらしい。
その時、サクラの隻眼がスッとこちらを向き、目が合った。途端に視線を逸らされてしまう。どうやら自分は彼女に嫌われてしまったらしい。先が思いやられる……
シルフィードが疲れたようにため息をした、その時、
「もういいよッ！」
突如として今まで黙っていたクリュウが叫んだ。驚く一同を前にクリュウは涙目になりながら立ち上がるとそのまま困惑するシルフィードに駆け寄り、
「行こうシルフィッ！」
「え？　お、おいクリュウッ！」
クリュウはシルフィードの手を握るとそのまま彼女を連れて出口の方に行ってしまう。慌ててフィーリアとサクラが後を追おうとするが、
「ついて来ないでッ！」
「……ッ!?」
クリュウに怒鳴られ、二人は一瞬にしてその場から動けなくなる。クリュウはそんな二人を無視してシルフィードを連れて酒場を出て行ってしまった。
呆然と立ち尽くす二人といなくなった二人にライザをため息した。

「結局、みんな子供なのよね……」
「お、おいクリュウッ！　どこへ行くつもりだッ!?」
酒場を出た後も手を離さずに引っ張るクリュウにシルフィードは腕を引っ張って彼を急停止させる。残念だが常に重い大剣を振り回す彼女の方が腕力があるのだ。
シルフィードに利き手を封じられて動けなくなるクリュウ。だが、彼は振り向きもせずに黙ったまま背を向け続ける。そのどこか悲しげな背中を見詰め、シルフィードは困ったようにため息した。
「泣いているのか？」
「……泣いてないよ」
クリュウはそう言うが、背中越しに聞こえてくる小さな嗚咽がそれを否定してしまう。シルフィードはそんな素直じゃないクリュウに小さく苦笑すると、彼の肩をポンポンと叩く。
「まったく、君は素直じゃないな」
シルフィードはそれだけ言うと後は何も言わずに彼の背中をさすり続ける。クリュウはそんな何も訊いて来ない彼女の心づかいに気づきつつも、礼を言うだけの余裕はなく必死に流れる涙をゴシゴシと拭い取る。
「ご、ごめん……」
「気にするな」
しばしそうやってシルフィードは何も言わずにクリュウの背中をさすり続けた。クリュウが少し泣くのが落ち着くのを見計らって彼女は彼から離れると、近くにあった木製のベンチに静かに腰を下ろした。
「隣、空いてるぞ」
「……あ、うん」
クリュウはシルフィードに促されるままに彼女の横に腰を掛けた。若い男女がベンチに腰を掛けている光景は恋人同士のように見えなくもないが、どちらもハンターの防具を着ているのでかなり違和感がある。そもそも二人はそういう関係ではないが。
どこか落ち込んだようにうつむくクリュウの横で、シルフィードは

雲ひとつない蒼穹の空を見上げている。彼女は彼から声を掛けてくるまで待っているつもりであった。
　それから数十秒の沈黙の後、クリュウは小さく「ごめん……」と口を開いた。シルフィードは空に向けていた視線を彼に向ける。
「謝る相手は私ではないだろう？」
「だ、だってあれはフィーリアとサクラが……ッ！」
「確かに彼女達の言い方にも問題はあるだろう。だが、根本的に勝手に私のチーム入りを決定した私達が悪い。それは君もわかっているだろう？」
「そ、それは……」
　シルフィードの言葉にクリュウは言いよどみ再びうつむいてしまう。そんな彼の頭を、シルフィードは優しく撫でる。
「だったら、早く謝った方がいい。私も付き添ってやるから」
「う、うん……」
「――だがまぁ、どうやらこっちから出向く必要はないようだがな」
「え？」
　口元に小さな笑みを浮かべているシルフィードの視線を追うと、少し離れた建物の陰からこちらを不安げに見詰めているフィーリアとサクラと目が合った。その瞬間、二人は慌てて身を隠す。だがすでにバレバレである。
「尾行がヘタな奴らだな」
　シルフィードはおかしそうに口に拳を当てて愉快そうに笑う。クリュウもおかしそうに笑ってしまう。狩りに関しては驚異的な二人だが、一般生活を見ている限りではどこにでもいる普通の女の子なのだと改めてクリュウは思った。
　二人して笑っていると、どうやらそれが気になったらしく再び二人は顔を出す。クリュウが視線を向けると慌てて引っ込むが、すぐに二人して転んで路上に飛び出して来た。どうやら二人して慌てまくったせいで転んでしまったらしい。周囲にいる人々が好奇な目で二人を見詰める。起き上がった二人はその視線に気づき、顔を真っ赤にさせてその場から動けなくなってしまった。

「助けてやったらどうだ？　困っている女の子を助けるのは、男の役目だと思うが？」
　シルフィードの言葉にクリュウはうなずくと急いで二人の下に駆け寄る。二人はうつむいたまま顔を上げず、クリュウの存在にも気づいていない。
「ふ、二人とも大丈夫？」
　だから、いきなり真上からクリュウに声を掛けられた二人は驚いたように頭を勢い良くもたげた。
「く、クリュウ様ッ!?」
「……く、クリュウ……」
「ほら、掴まって」
　クリュウが二人にそれぞれ手を差し伸べると、二人は少しだけ迷ったが素直にその手を握った。クリュウはゆっくりとその手を引っ張って二人を起き上がらせる。
「あ、ありがとうございます……」
「……ありがとう」
「どういたしまして――あ、あのさ……さっきはごめん」
　手を離すと同時に頭を下げて謝るクリュウに二人は一瞬驚いたように瞳を大きく見開くが、すぐに状況を理解して慌て出す。
「ちょ、ちょっとクリュウ様ッ!?　お顔を上げてください！」
「……クリュウ、どうして」
「さっきは僕が悪かった……本当にごめん……」
　素直に二人に頭を下げて謝るクリュウ。そんな彼を見詰め、シルフィードは小さく口元に笑みを浮かべた。だが、クリュウに突然頭を下げられたフィーリアとサクラはそれどころではなかった。
「い、いえッ！　謝るのは私達の方ですぅッ！　だから、本当にごめんなさいッ！　そして顔を上げてくださいぃッ！」
「……クリュウ、顔を上げて。クリュウに謝られるなんて、嫌……」
　大慌てで必死にクリュウの頭を上げさせようとするフィーリアと薄らと隻目に涙を浮かべるサクラ。そんな二人の前でクリュウはひたすらに頭を下げ続け、互いに謝り合って一向に終わる気配がない。

そんな彼らを見てシルフィードは呆れながらも小さく笑っていた。
「まったく、何をやっているのか……」
「――ねぇお母さん。あの人達は何やってるのぉ？」
「シッ。見ちゃいけません」
「……そろそろ、止めた方が良さそうだな」
そう呟いてシルフィードは白い頬を少しだけ紅潮させながら、周りの視線に気づかずに未だに謝り合戦を続けている三人を止めに入った。
再び酒場に戻って来た一行を、ライザは快く出迎えてくれた。四人はすぐに迷惑を掛けたと謝るが、ライザは気にした様子もなく笑顔で四人を先程彼らが使っていたテーブルに案内した。テーブルはそのままで、フィーリアとサクラの朝食が湯気を立ち上らせながらおいしそうな匂いを辺りに振りまいている。
「二人は朝食まだだろう？　まぁ、ゆっくり食べながら話をしようじゃないか。あ、ライザ。私にコーヒーを頼む。クリュウはどうする？」
「え？　あ、じゃあ僕はいつものを」
「はいはい」
クリュウの言葉にライザはニッコリと笑みを浮かべてうなずく。
「うん？　クリュウ、いつものとは何だ？」
「え？　あぁ、さっきも飲んでいたハチミツミルクだよ。僕は基本的にそれを飲む機会が多いからね」
「なるほど……またずいぶん子供っぽいものを飲むんだな君は」
「う、うるさいな。僕の勝手でしょ」
頬を赤らめてツンとそっぽを向くクリュウに、シルフィードは笑いながら「すまんすまん」と謝る。何だか仲の良い姉弟のような二人に、ライザは笑みを浮かべながら厨房へ消えた。だが、この光景に言い知れぬ不安を抱く者が二名……
「な、何だか嫌な予感がするのですが……」
「……奇偶ね、私もよ」
「あれ？　二人とも座らないの？　早く食べないと料理が冷めちゃう

よ？」
　二人は一抹の不安を抱きながらもクリュウに促されて席に着いた。ちなみに席順は先程と変わっていない。
　四人が座ると、それを見計らったようにライザがコーヒーとハチミツミルクを持って来た。クリュウは礼を言ってから両手でコップを包み込むように持ちながら幸せそうな笑みを浮かべて飲む。その笑顔に三人がドキッとした事は秘密だ。
　一方のシルフィードはミルクや砂糖を入れないブラックのまま、大人の味でコーヒーを飲む。同じチームメイトとは思えないほどの差だ。
「そ、それで話を戻しますけど、本当にシルフィード様が仲間に入られるのですか？」
　タマゴサンド片手に真剣な顔でフィーリアはシルフィードに問う。シルフィードはそんな彼女の問いにコーヒーを飲みながら答えた。
「そのつもりだ」
「という事は、シルフィード様もイージス村へ？」
「あぁ、すでに準備は整えてある」
　シルフィードの言葉にフィーリアは本当に二人だけで決めてしまったのだなぁと改めて軽いショックを受けるが、すぐに隣で味噌汁をすするサクラに相談する。
「サクラ様、どうしますか？」
「……また一からチームの編成を考え直す必要がある」
「え？　じゃあ――」
「……仕方がない。あんな嬉しそうなクリュウを悲しませる事は、もうしたくない」
　そう言ってサクラは嬉しそうにシルフィードと話しているクリュウを見てため息を一つ吐くとお茶をすする。そんな彼女を見詰め、フィーリアは小さく笑みを浮かべた。
「……サクラ様は、本当にクリュウ様の事を大切に想っていらっしゃるのですね」
　フィーリアの言葉にサクラは無表情を貫くが、その頬がほんのりと

赤く染まっている事にフィーリアはちゃんと気づいていた。
「でも、私だって負けませんからね」
「……好きにして」
「はいッ！」
――意見は纏まった。
「シルフィード様」
その声にシルフィードはコーヒーカップをテーブルに置いてフィーリアを見る。フィーリアはそんな彼女に向かって小さく微笑むと、自分達二人の答えを言った。
「わかりました。シルフィード様、これからもよろしくお願いします」
フィーリアの言葉にシルフィードは一瞬だけ瞳を大きく見開くと、すぐにフッと口元に小さな笑みを浮かべてうなずく。
「あぁ、よろしく頼む」
シルフィードが差し出した手を、フィーリアは小さく笑みを浮かべて握った。
フィーリアと握手を終えると、今度はサクラに手を伸ばす。サクラはシルフィードの顔を一瞥すると、その手を握る。
「サクラも、よろしく頼む」
「……好きにして」
「君も素直じゃないな」
「……うるさい」
頬を赤らめながら素直じゃない言葉を言うサクラにシルフィードは小さく微笑み、その手をしっかりと握った。
そんな握手し合う三人を見て、クリュウも嬉しそうに笑っている。何はともあれ、こうして正式にシルフィードが仲間になったのだ。嬉しい事だ。
「良かったねシルフィ」
「あぁ、こんないい仲間に出会えたのも全て君のおかげだ。ありがとう」
「そんな、お礼を言うのはこっちの方だよ。ありがとう」
嬉しそうにはにかむクリュウとその笑顔に小さく笑みを浮かべる

シルフィード。どこからどう見ても仲のいい姉弟に見える二人を見詰め、フィーリアはふと疑問を抱いた。
「そういえばクリュウ様。いつの間にシルフィード様と敬語抜きの関係になられたのですか？　それにシルフィって……」
「あぁ、昨日の夜に仲間になってくれるよう頼んだ時にね。シルフィってのは愛称みたいなものかな。こっちの方が呼びやすいし」
「少し気恥ずかしいがな」
そう言って照れ笑いを浮かべるシルフィードに、クリュウは笑いながら話しかける。そんな仲のいい姉弟のような二人を見詰め、フィーリアは苦笑いを浮かべる。
「な、なぜでしょう。ものすごく不安なんですが……」
「……同感だ。何か、胸騒ぎがする」
女の勘で正体不明の不安を抱くフィーリアとサクラ。
二人の気持ちなど気づかずに楽しそうにシルフィードに話し掛けるクリュウ。
そんな彼の言葉に小さく笑みを浮かべてうなずくシルフィード。
そしてそんな四人を受付で微笑ましげに見詰めるライザ。
ドンドルマの酒場は様々な出会いがある不思議な場所。今日もまた、その場所で新しい絆が結ばれた。
クリュウ達の新たな物語の歯車が、ゆっくりと回り始めた瞬間であった。

第７７話　それぞれの物語

数日後、クリュウ達は実に三週間ぶりにイージス村に帰って来た。その中には初めてクリュウの故郷であるイージス村に訪れるシルフィードもいた。
「ここがクリュウの故郷か」
船から降りたシルフィードは目の前の切り立った崖を見上げながら感慨深そうに言った。
「うん。ここが僕の故郷のイージス村。見ての通りの立地だから地上のモンスターからは襲われる心配はほとんどないんだ。まぁ、今回のように空を飛ぶ飛竜には弱いけど」
「なるほど。村の本体はこの崖の上にあるのか？」
「そういう事。その為にはあの長い階段を上らないといけないけどね」
そう言ってクリュウが指差したのは洞窟。よく見ると奥には上へ行く為の階段があり、崖の外周にも所々崖を回るような階段が見える。この洞窟の中と崖を回るような長い階段を上らないとイージス村に入る事はできないのだ。
「これでは竜車や馬車は登れないな」
「大丈夫だよ。竜車や馬車はあっちの上り坂を登れば村に行けるようになってるんだ。と言っても崖全体を回るような長い迂回路だけどね」
「そうか。意外と規模の大きな村のようだな」
「まぁ一応この地域一帯の中継点の役割を担ってるからね。ドンドルマ付近の村に比べたら多少見劣りはするけど、辺境の村の中では最大規模だよ」
「なるほど」
初めてイージス村を訪れるシルフィードにクリュウは村の詳しい情報を教える。そんな二人を見詰め、荷物を持って船から降りて来たフィーリアとサクラはため息した。
「クリュウ様、道中ずっとシルフィード様にベッタリでしたね」

「……生きた心地がしなかった」
「……お気持ちはわかります」
目の前でクリュウとシルフィードのラブラブ（？）な光景をドンドルマからイージス村までの数日間ずっと見て来た二人はすっかり疲れ切っていた。サクラに至っては一体何本もの鉛筆を折ったかは定かではない。
そんな二人の胸中など知らぬクリュウは屈託のない笑みを浮かべてシルフィードに話し掛ける。シルフィードはそんなクリュウが説明してくれる事一つ一つにも興味深げにうなずく。
「なるほど。村の概要は良くわかった。だが実際に見てみないとわからない事もある。百聞は一見に如かず。そろそろ村の中に入りたいのだが」
「あ、うん。じゃあそろそろ行こうか」
クリュウはすぐに用意を整えて後ろで寂しく待機していた二人に声を掛けた。その時の二人の笑顔はあまりにもかわいそう過ぎるほど輝いていた。
一行は荷物を持ってサクラを先頭にクリュウ、フィーリア、シルフィードの順番で階段を上って行く。
数分後、四人はやっとの思いで門の前まで辿り着いた。慣れている三人に対し、初めてイージス村名物、《心臓破りの大階段》に挑戦したシルフィードは若干息を切らしていた。だがさすがである。初めてフィーリアがこの階段に挑戦した際は肩を激しく上下させて息をしていたほど。それに比べれば大したものだ。
門を見詰めるシルフィードに振り返り、クリュウは笑顔満天で腕を一杯に広げる。
「改めてようこそッ！　ここが僕の故郷で、シルフィの新しい故郷になる――イージス村だよッ！」
実に三週間も空けていただけあって村人達はクリュウ達の姿を見ると驚いたような表情を浮かべながら駆け寄って来た。口々に怪我はないかとかどこに行っていたとか初めて見るシルフィードの事を訊いて来たり――中にはクリュウ達がいない間にリフェル森丘にリ

オレウスが出て一時避難勧告が出ていたなどの話もあった。もちろん、彼らはまさかクリュウ達がそのリオレウスを討伐したとは知らない。辺境の村までそんな細かな情報は流れて来ないのだ。
クリュウ達は軽く応答に答えながら村に帰ったらまず一番に会いたい少女に会う為に村唯一の酒場へ向かった。
酒場に向かうと、案の定美しい茶髪を流した緑色のロングスカートにエプロンドレス、頭には白いヘッドドレスという酒場の制服を来た経営者兼料理長兼給仕係、つまりは一人で全てやりこなしている少女――エレナが暇そうに翡翠色の瞳でぼぉっと遠くの景色を眺めていた。
クリュウはそんな久しぶりに会う幼なじみに満面の笑みを浮かべて叫ぶ。
「エレナぁッ！　ただいまぁッ！」
――その瞬間、エレナの姿が消えた。
「え？」
「――こんの万年小春日和がああぁぁぁぁッ！」
刹那、爆音と共に悲鳴を上げる事も許されずにクリュウの体が一瞬で吹き飛ばされた。地面を土煙を上げながら叩きつけられるように激しく転がり、十数メートルほど転がった後に止まった。しかし、地面にうつ伏せで倒れるクリュウはピクリとも動かない。
「く、クリュウ様ぁッ!?」
慌ててフィーリアが駆け寄る。シルフィードはいきなりの事に目を丸くして呆然とその場に立ち尽くす。そして、比較的冷静なサクラはクリュウを神速で蹴り飛ばして音もなく着地したエレナを冷たい隻眼で睨む。
「……あなたはクリュウを殺す気なの？」
「あの程度で死ぬような奴じゃないのは、あんただって良く知ってるでしょ」
「……でも、怪我はする」
「知らないわよそんな事。それは体を鍛えていないクリュウの責任でしょ」

「……極悪非道にも限度がある」
サクラに冷たく責められるエレナはムッとしたようにフンッと背を向けてそっぽを向く。サクラはそんな彼女の背中を冷たい目で睨み続ける。そこへフィーリアの肩を借りて村に帰って早々に満身創痍となったクリュウが戻って来た。
「い、いきなり何するんだよ……ッ」
何も悪い事をしていないのにいきなり必殺技的な高威力の跳び蹴りを受けたクリュウは涙を浮かべながら恨みがましげな目でエレナを睨む。そんなクリュウに対しエレナはプイッとそっぽを向く。
「あんたが悪いのよ」
「僕が何をしたって言うのッ!?」
「そんなの自分で考えなさいッ！」
「理不尽過ぎるでしょッ！」
エレナの態度に本気（マジ）でブチ切れ掛けるクリュウをフィーリアが慌てて止める。サクラは相変わらずエレナを睨み、シルフィードは戸惑うばかり。
「な、何がどうなっているのだ？」
目の前で起きたイージス村名物の一つにも認定されつつあるエレナの強烈な跳び蹴りにシルフィードが困惑していると、そんな彼女の存在にエレナが気付いた。
「っていうか、あなた誰？」
訝（いぶか）しげにシルフィードを見詰めるエレナに、クリュウが思い出したように彼女を紹介する。
「えっと、この人は新しく僕達のリーダーになってくれたシルフィード・エア」
クリュウの紹介にシルフィードはエレナに一礼する。エレナはそんな彼女の礼に「よ、よろしく」と、とりあえずあいさつをして再びクリュウを睨む。心なしか、先程よりもさらに瞳が鋭くなっている。
「……ふぅん、三週間も村を空けて何をしてるのかと思ったら、こんな美人さんをナンパしてたのねぇ」
「え、エレナ？」

「――とりあえず、歯を食い縛りなさい」
「へぇ？　ど、どういう――ごふぅッ！」
クリュウが言い終わる前に、エレナはクリュウの目の前で神速の回転蹴りを彼に向かって炸裂させた。跳び蹴りには劣るがそれでもかなりの破壊力を備える蹴りを受けたクリュウは簡単に吹き飛ばされ、無様にも地面に叩きつけられて何度か転がって倒れた。
「く、クリュウしゃまぁッ!?」
もはや涙を浮かべてクリュウに駆け寄るフィーリア。シルフィードは慌てて背中に背負う飛竜刀【紅葉】の柄を握るサクラを止めに掛かった。
村に帰って来たばかりのクリュウを二回も蹴り飛ばしたエレナ。だがまだ彼女の胸の中では怒りが収まる事はなく激しく燃え上がっている。
「あんた達がいない間、この村がどんだけ危険な状態だったかわかってるのッ!?」
エレナの言葉に、飛竜刀【紅葉】をシルフィードに取り上げられてふてくされていたサクラが振り返って首を傾げる。
「……危険な状態？」
「そうよッ！　あんた達がいない間にリフェル森丘にリオレウスが現れたのよッ！」
四人は一斉に顔を見合わす。もしかしなくても、そのリオレウスは自分達が討伐したリオレウスの事だろう。時期も場所もピッタリだ。
「幸い、そのリオレウスは周辺の村と共同でギルドに出した討伐依頼を受けたハンター達に討伐されたらしいけど。一歩間違えれば村が壊滅してた可能性だってあったのよ？　村長の命令で討伐されるまで村人全員がこの村から避難して、本当に大変だったんだから！　もうッ！　そんな時に限ってあんた達誰もいないんだからッ！」
村唯一のハンターであるクリュウ達がいない間に起きたリオレウス事件を細かく説明し、所々で見事にクリュウを批難するエレナ。まさかそのリオレウスを討伐したのがクリュウ達であるとは夢にも思っていないようだ。

そこへフィーリアの肩を借りながらクリュウが戻って来た。故郷という最も心落ち着く場所に来てからわずかな間に二回も蹴り飛ばされるとは、あまりにもかわいそう過ぎる。
「まったくッ。あんたはどうせ役に立たないだろうけど、フィーリアとサクラがいてくれればギルドに大金を出して依頼なんて頼まずに済んだのに」
四人は一斉に財布に手を当てる。その大金は今現在彼ら四人の生活費として今も携帯しているのだ。気まずい事この上ない。
「今回はまぁ村に被害は出なくて済んだけど、こういう時に備えてあんた達がいるんだから、村を守るっていう大前提を忘れないでよね。村に被害が出たら跳び蹴りぐらいじゃ済まないんだからッ！」
「ご、ごめん……」
さっきまで彼女の理不尽な暴力にボコボコにされていたクリュウだったが、彼女の言葉に謝るしかできなかった。今回は、村を離れていた自分達が悪いのだから。
すっかり落ち込んでしまったクリュウを見て、エレナはフンッとそっぽを向く。少し言い過ぎたと自覚しているせいか、頬がほんのりと赤い。
「そ、それで！　あんた達は一体今までどこに行ってたのよ」
気まずくなった空気を打開しようと、エレナは新しい話題を振った。
「えっと、ドンドルマの方に」
「ふぅん。無理はしてないでしょうね？」
「え？　あ、うん。大丈夫だよ」
「本当でしょうね。あんた昔っから自分の身の丈に合わない事を無理して怪我するんだから。狩りも程々にしておきなさいよ」
「う、うん。心配してくれてありがとう」
「ば、バカッ！　そんなんじゃないわよッ！」
クリュウの何気ない言葉にエレナは顔を真っ赤してフンッとそっぽを向いてしまう。
いきなり怒鳴られて背を向けられた事で怒らせてしまったのでは

ないかと不安になるクリュウだったが、背を向けるエレナの頬がちょっぴり嬉しそうに緩んでいる事を彼は知らない。
「まったく、クリュウは私がいないとダメダメなんだから」
「え？　何か言った？」
「な、何でもないわよッ！」
　エレナは顔を真っ赤にさせながら怒鳴ると、再びフンッと彼に背を向けてしまう。それを見てやっぱり怒らせてしまったのだとクリュウはまたも落ち込んでしまった。
　そんな微妙にかみ合わない子供の頃からの幼なじみ二人を見て、シルフィードは首を傾げた。
「二人は、仲が悪いのか？」
「まさか。むしろその逆ですよ。ケンカするほど仲がいいと言うじゃないですか」
「そ、そうなのか？」
　微妙に天然が入っているらしいシルフィードは不思議そうに首を傾げながら二人のやり取りを見詰める。
　そんな感じで道の真ん中でクリュウ達が騒いでいると、
「おぉ、クリュウ君じゃないかぁッ！　久しぶりだねぇ！」
　邪念が全くない元気なその声に振り返ると、たくさんの野草や薬草、キノコなどが放り込まれた大きなカゴを背負った村長がこちらに手を振りながら駆け寄って来た。
「村長、久しぶりです」
「うんうん、本当に久しぶりだね。いやぁ、少し背が伸びたんじゃないかい？」
「そ、そうですか？」
「こりゃ僕の身長を追い抜くのも時間の問題かな？」
　久しぶりに会う村長は、相変わらず笑顔が似合う好青年であった。この邪心のない少年のような笑顔を見ると、やっと村に帰って来たのだなぁと実感できる。
「今帰って来た所かい？」
「はい。村長も今帰って来たんですか？」

「そうだよ。いやぁ、もう知ってると思うけどリフェル森丘にリオレウスが現れてね。それの討伐費用に村の予算が結構なくなっちゃってね、今はこうして少しでもお金を集めようと森に入っては野草やキノコを採取して売ってる訳よ」
村長は笑顔で楽しそうに言うが、内容はかなり重い。そしてその費用を報酬としてもらっている四人の気はさらに重くなっていた。自然と表情も曇ってしまう。
「うん？　どうしたんだい？　浮かない顔なんかして」
急に表情を暗くさせた四人に、村長は不思議そうに首を傾げる。そんな彼に苦笑いしながらクリュウが近づく。
「あの、村長。実はそのリオレウスについて少しお話があるのですが」
「うん？　何だい？　リオレウスならギルドに派遣されたハンターに討伐されたけど」
クリュウは一度シルフィードを一瞥すると、ゆっくりと口を開いた。
「――実は、そのリオレウスを討伐したのは僕達なんです」
場所を酒場に移し、テーブルを囲んでクリュウ達は村長とエレナに今回の事を説明した。
ドンドルマにいた時にリフェル森丘にリオレウスが現れたと聞いた事から始まり、シルフィードとの出会い、彼女と共にリオレウスと戦って勝った事、そして新たにシルフィードが仲間になってくれた事などを話した。
全てを話し終えると、真剣な顔で話を聞いていた村長に笑みが戻った。
「そうかぁ、まさかリオレウスを討伐してくれたのがクリュウ君達だったなんてね」
「はい。かなりの強敵でしたが、シルフィやフィーリア、サクラの協力のおかげで勝つ事ができました」
そう言ってクリュウは同じ長椅子に座る三人に笑い掛ける。その笑顔に三人は照れたように顔をうつむかせた。そんな四人を見て村長は楽しそうに笑みを浮かべる。

だが、そんな嬉しそうに笑うクリュウの首根っこをエレナが突然掴んだ。驚いて振り返ると、全員に水を配り終えたエレナが不機嫌そうに立っていた。
「え、エレナ？」
「あんた、やっぱり無茶してたんじゃないッ！」
エレナに怒鳴られ、クリュウは途端にしゅんと落ち込んでしまう。
「ご、ごめん……」
「謝ればいいって問題じゃないでしょッ！　相手はあの火竜リオレウスよッ!?　並のハンターじゃとても太刀打ちできないようなモンスターじゃないッ！　そんなのを相手にするなんて、あんたにはまだ早過ぎるわよッ！」
「で、でも勝てたんだし……」
「そんなのフィーリア達のおかげに決まってるでしょッ！」
激しく激昂して怒鳴り散らすエレナだったが、それが本当は心配の裏返しだという事をみんな知っている。ついこの前までイャンクックと激闘を繰り広げていたクリュウがこんな短時間でリオレウスと戦えるまで成長したのは確かに彼の才能のおかげだろう。だが、だからこそそんな無茶な戦いを繰り広げる彼をずっと心配して来たエレナは自分の身も考えずに誰かの為に戦おうとする彼の無茶な行動を怒っているのだ。
こんなに心配してるのに、彼はそんな自分の気持ちなども考えずに危険に飛び込んでいく。それが許せないのだ。
「リオレウス相手なら死んでもおかしくないのよッ!?　今回は良かったけど、あんたは死ぬ可能性と隣り合わせだったって自覚はないのッ!?　村が助かっても、あんたが死んだら意味ないでしょッ！　あんたみたいなダメダメな奴でも、いなきゃ困るのよッ！　子供の頃からずっと一緒なんだから、もう私にはあんたがいない生活なんてありえないのよッ！　私には、あんたが必要なのッ！」
感情に任せて怒鳴り散らすエレナだったが、途中から意味不明な恥ずかしい事を言っている事に気づき、顔を真っ赤にして慌てて彼に背を向ける。そんな彼女を、じっと見詰めるクリュウ。

「え、エレナ……」
「か、勘違いしないでよねッ！　あんたみたいなアホでもいないと寂しい――じゃなくてッ！　一応いなきゃ困るのよッ！　べ、別に私はあんたなんかいなくても平気……だけど。と、とにかく私の知り合いに死人が出たら目覚めが悪いでしょッ！　そうッ！　そういう事なのよッ！　だから他意はないんだからッ！　変な誤解しないでよねッ！」
　必死になって本心を隠す言い訳を並ばせるエレナだったが、恋する乙女同士であるフィーリアとサクラにはバレバレである。二人ともムッとしたような顔でエレナを見詰めている。
　村長は一人ニコニコと何か意味深な笑みを浮かべている。彼の笑顔は時折純粋度１００パーセントとは違った意味を持つ事があるのだ。
　軽く天然なシルフィードはそんなエレナの言葉をそのまま受け止めてしまい、やっぱりまだちょっと二人の仲を心配していた。
　そして、当の本人はと言うと、
「ご、ごめん。心配させちゃったみたいで……」
　ただ純粋に自分を心配してくれていたエレナに対し謝る事しかできなかった。そんな彼を見てホッとしながらもちょっと不満が残るエレナは、
「ま、まぁ村を救ってくれたんだから今回は大目に見てあげる。その代わり、もう無茶はしないでね」
「ぜ、善処（ぜんしょ）します」
「……この世の中でその言葉ほど信用できない言葉はないと思うのは私だけ？」
　とりあえず仲直りできたようなので、村長は一度嬉しそうにうなずくと今度は新しく村の住人になるシルフィードに向き直る。
「それで、シルフィードちゃんは本当にこの村に住むのかい？」
「えぇ。そのつもりです――あの、ちゃん付けはやめてもらえませんか？」
「かわいいじゃないか」

「かわ……ッ！」
　普段言われる事などまるでない《かわいい》という単語にシルフィードは一気に顔を真っ赤にさせる。そんな彼女を楽しそうに見詰めながら村長は笑う。
「それで話を戻すけど、シルフィードちゃんの住む家が考えないといけないね」
「そ、その事について私から提案があるのですが」
　ちゃん付けされて恥ずかしいのか、頬を赤らめたままシルフィードは村長と対峙する。
「提案って？」
「今現在、この村でクリュウ達三人は同じ家に住んでいるそうですね」
「そうだよ。彼の両親はハンターだったからね。ハンターに必要な設備や装備は一通り揃ってるから、一から家を建てるって手間が省けてるんだ。何せここは小さな村だからね。自由に使えるお金も少ないのさ」
　そう言って村長は苦笑いした。彼のように小さな村の村長というのは色々と苦労も多い。その中でも一番困るのが財政面だ。だからこそ、彼は少しでも村の為になればと森に自ら野草などを採取に行ってそれを売って村の財政に少しでも当てているのだ。
　シルフィードはそんな村の現状も幾分か理解していた。旅をしている中でこの村のようにお金にあまり余裕がない村や町などはたくさん見て来たからだ。
「今回の移住は私の独断ですので、村長や村の皆さんにはあまり迷惑をお掛けしたくはないんです。しかし、いくら私でも一戸建て一つを買うようなお金はありません。そこで考えたのが、私も彼らと共に共同生活をしようかというものです」
　その瞬間、今まで比較的穏やかだった空気が一瞬にして鋭さを持った。
「共同生活？　つまり、君もクリュウ君の家に住むという事かい？」
「はい。私はまだ彼らとは付き合いも短いので、互いの事をもっと知る為にもいい機会だと思うのです。まぁ、これは私の考えなのでク

リュウ達に反対されれば元も子もないのですが」
　そう言ってシルフィードは小さく苦笑すると、隣に座るクリュウを見る。彼女の視線に気づいたクリュウは少し困ったような表情を浮かべた。
「本当に僕の家に住むつもりなの？」
「そのつもりだが、ダメか？」
「ダメって訳じゃないけど……、シルフィはいいの？　男の僕と一緒に住むんだよ？」
「問題はないだろう。すでにフィーリアとサクラは同棲しているのだろう？　何か問題が起きている訳でもないし、そもそも君はそういうタイプではなさそうだからな。何の不安も心配もないが」
　世の中ここまでキッパリ言われてしまうと反論する言葉も出て来なくなってしまうものだ。
「まぁ、クリュウ君は僕が知っている男の中では最も女性に対して人畜無害な存在だからね。それは僕が保証してあげるよ」
「……素直に喜べないんですけど」
　複雑そうな表情を浮かべるクリュウを一瞥し、シルフィードは今度はすでに彼と同棲している二人を見る。
「どうだろうか？　君達と共に住むのがベストだと思うのだが」
「……私個人としては反対。だけど、クリュウが望むなら仕方がない」
「そうですね。何はともあれ私達はもうチームメイト同士ですから」
　二人とも渋々といった感じで了承した。本当はこれ以上クリュウの周りに女の子を増やしたくないという点で二人の意見は一致しているのだが、同時にこの前のようにクリュウとケンカはしたくないという点でも二人の意見は一致しているのだ。
　クリュウの周りに女の子が増えるのは嫌だが、クリュウに嫌われるのはもっと嫌。恋する乙女の複雑な葛藤の末の結論がそれであった。
　シルフィードはそんな二人の言葉に一度うなずくと、改めてクリュウに向き直る。
「二人は構わないと言っている。あとはクリュウが了承してくれれば可能になるのだが」

「うーん、まぁシルフィが一緒に暮らしたいって言うなら仕方ないね。それに僕達は同じチームの仲間なんだから」
そう言ってクリュウはどこか諦めたような、でもちょっと嬉しそうな笑みを浮かべた。そんな彼に、シルフィードはどこか大人びた雰囲気からはほとんど見られないような年相応の少女の笑みを浮かべる。
「ありがとう」
その純粋で美しく、でもまだ幼さを少し残した少女の笑顔にクリュウは顔を赤く染めると、照れたように小さく笑って頬を掻く。そんな二人を見て早速自分達の判断は間違っていたのではないかと不安に陥る二人の前で、エレナは怒ったような顔でクリュウを睨んでいた。
「え、エレナ？　どうしたの？」
なぜか怒っているエレナの視線に気づいてクリュウが振り返って問うと、エレナは「クリュウのバカッ！」と怒鳴ってフンッと背を向けてしまった。
困惑するクリュウと、そんな彼にため息する二人、そっぽを向くエレナ、そして一人クールに水を飲むシルフィード。そんな彼らを見詰め、村長は小さく笑みを浮かべる。
「こりゃまた賑やかになりそうだねぇ」
そう言って村長は居並ぶ少年少女達を見回し、嬉しそうに微笑み続ける。村長として住民が増えるのは嬉しい。それが村を守るハンターなら万々歳だ。
一方のエレナは楽しそうにシルフィードと話をするクリュウを不機嫌そうに睨み付けていた。その瞳が意味するものを、クリュウは気づいていない。
青空の下、久しぶりに帰って来たイージス村はいつものように平和な雰囲気で包まれていた。クリュウは改めて村に帰って来たのだとしみじみと実感した。
「すみませんでしたぁッ！」
「な、何や突然？」
ドアをノックされて玄関のドアを開けた瞬間いきなり目の前でクリュウに頭を下げられたアシュアは驚いた。

ここは村中心から少し離れた丘の上に建つアシュアの工房。彼女は今日も一日工房に篭（こも）っていたのでクリュウが戻って来た事など知らなかった。だからこそいきなりの彼の訪問に驚いたのだが、それ以上に突然謝られた事に対してアシュアは困惑する。
「ど、どうしたんやクリュウ君。いきなり謝るなんて」
困惑するアシュアにクリュウは折れたデスパライズと今自分が着ているバサルメイルを見せた。それを見てアシュアは納得する。
「なるほどなぁ。こりゃまたえらいぶっ壊れ方やなぁ」
「ご、ごめんなさい」
再び頭を下げるクリュウにアシュアはにっこりと笑みを浮かべるとその頭をそっと優しく撫でる。
「あんたが謝る必要なんて全然ないんやで？　武具は戦えば壊れるのは当たり前や。いちいち気にすんなや」
「で、でも……」
「あんたはそんな事に気にせんで全力で戦えばええんや。壊れたらうちが完璧に直したるから」
「アシュアさん……」
「――まぁ、修理代はきっちり請求させてもらうけどな」
「さ、さすがアシュアさん……ッ」
右手の人差し指と親指を丸めてお金の形を作って笑うアシュアに、クリュウは敵わないなぁと思いながら苦笑いした。
「せやけど、今回はほんまにえらい具合にぶっ壊れとるな。一体何と戦えばこうなるんや？」
「えっと、ちょっとリオレウスと戦って……」
クリュウの言葉にアシュアは一瞬ポカンと呆けた。しかしすぐにいつもの調子に戻ると、屈託のない笑みを浮かべる。
「ほんまにリオレウスと戦ったんか？」
アシュアはまだ半信半疑らしく、クリュウの脇腹をうりうりと突いてからかう。だが、当然本当の事なのでクリュウもむきになって返す。
「本当ですよッ。信じてくださいッ！」

「わかったわかった。信じるから泣かんといてえな」
「な、泣いてませんよッ」
　確かに泣いてはいないが、薄っすらと目の淵（ふち）に涙を浮かべていては説得力はない。アシュアはそんなクリュウの頭を優しく撫で撫でする。
「まぁ、あんたはうそはつかんええ子やからな。うちは信じたるで」
「アシュアさん……ッ」
「――ところで、倒した証の火竜の鱗とか見たいんやけど」
「やっぱり信じてないじゃないですかッ！」
　クリュウの鋭いツッコミにアシュアはおかしそうに声を上げて笑うと、彼の頭をポンポンと叩く。クリュウはその手を払い除ける事なく、ちょっと恥ずかしそうに頬を赤らめながらもそれを受け入れた。
　アシュアに許してもらって、ちょっとだけ気が落ち着いたクリュウは彼女に今後の武具について少し話し合うと、家に戻った。
　家にはすでにフィーリア、サクラ、エレナ、そして今日からここに住む事になったシルフィードの四人がすでにいた。
　クリュウが帰って来ると早速シルフィードが声を掛けてくる。
「ここが君の家か。なかなかいい家だな」
「そっかな？　あ、シルフィの部屋を決めないとね。ついて来て」
　クリュウに案内されて荷物を持ったシルフィードは彼の後を追って二階に上った。二階にはすでにフィーリアとサクラの部屋があり、シルフィードはサクラの隣の部屋をあてがわれた。ちなみにクリュウの部屋は一階にある。彼がせめて男女では階を変えると貫き通した結果だ。
　シルフィードにあてがわれた部屋はベッドと机だけで窓が一つというシンプルな部屋。他の二人の部屋も同じような間取りだが、現在は私物が置かれて個性豊かな部屋に変わっている。
　シルフィードは荷物を置き、簡単な掃除と私物の設置を始める。部屋は彼女自身に任せ、クリュウ達は一階のリビングでお茶をしていた。
「変な気を起こしたら、殺すからね」

「べ、別に起こさないよ」
「どうだか」
　エレナはどこか不機嫌そうにクリュウに突っかかって来る。そんな彼女の態度にクリュウは困惑するばかり。フィーリアとサクラは無言でそんな二人のやり取りを見守っている。
　エレナはしばし不機嫌そうに沈黙していたが、クリュウを一瞥して小さくため息した。
「まぁ、今回はあんた達に助けられたんだし。感謝してるのは本当だから、あまり強くは言わないわ。あのシルフィードって人にもあんたを守ってもらったっていう借りもあるし」
「借りって……」
「と、とにかくッ。今回は結果を残したから許してあげるけど、今度また無茶をしたら本気で蹴り倒すからねッ！」
　そう言ってフンッとそっぽを向くエレナにクリュウは「わ、わかったよ」と渋々うなずく。彼だってエレナにすごく心配をさせてしまった事に負い目を感じているらしく、あまり強くは返せないらしい。
　だが、彼からは見えない位置でエレナは頬を赤く染めていた。そんな彼女を見てフィーリアは小さく苦笑し、サクラは無言で見詰める。
「ねぇクリュウ。リオレウスを倒したのなら素材を持ってるわよね？　ちょっと見せてよ」
　エレナは話を変えると一転してリオレウスの素材に興味津々。クリュウは小さく苦笑いしながらも素材袋を取り出してその中から手の平ほどの火竜の鱗を一枚取り出して机の上に置く。
「これが火竜（リオレウス）の鱗だよ」
「へぇ、怪鳥（イャンクック）の鱗よりなんか鋭い印象を受けるわね」
「この鱗のすごい所は溶岩にだって耐えられる耐火能力なんだ。これを使えば強力な防具ができる」
「ふーん、まぁ私はハンターじゃないから詳しくはわからないけど。やっぱりリオレウスともなれば素材まですごいものなのね」
　エレナは火竜の鱗を手に取って光にかざしたりして見定める。と言っても一般人の彼女には詳しい事なんかはまるでわからない。で

もそんな彼女にもリオレウスというものは桁違いなモンスターだという事がわかるほど、火竜の鱗は荒々しく燃える炎のような威圧感を秘めているのだ。
「そういえば、サクラの武器ってこの火竜の鱗を使ってるんでしょ？」
　エレナの問いにサクラはコクリとうなずいた。
　彼女の持つ飛竜刀【紅葉】は火竜の素材を余す事なく使った太刀だ。そのデザインはリオレウスの荒々しさを再現しているかのように全体的に鋭い印象を受ける。
「じゃあ、あんたもサクラみたいなリオレウスの武器を作るの？」
「いや、それはまだわかんないよ。素材は十分足りているから武器でも防具でも作れるとは思うけど、問題はお金だからね。作るとしたら少し資金集めをしないと」
　リオレウスの武具ともなればすさまじい金額が予想される。最初の頃のランポスシリーズのそれとは比べ物にならない。
「ふーん、ハンターってのはお金が掛かるものなのね」
「まぁ、その分成功すれば大量の報酬も約束されてるけどね」
「あっそ。じゃあ今度私に何かおごりなさいよ」
「何でそうなるんだよ」
　エレナの無茶に呆れながらもクリュウは「わかった。今度何かおごってあげるよ」と笑って了承した。日頃何やかんやで世話になっているので、それくらいはしてあげても良かった。
「ほんとッ!?　じゃあ今度一緒にドンドルマに行った時にお願いね」
「まぁ、極端に高いのはやめてね。僕だってお金がたくさんある訳じゃないんだから」
「わかってるわよ。私だってこれでも経営者だもの。お金の苦労はわかってるつもりよ」
「そうだよね。ほんと、お疲れ様」
　そう言ってクリュウが微笑むと、エレナは顔を赤くしてプイッとそっぽを向く。
「な、何よ突然」
「いや、いつも大変だなぁって思ってさ」

「そんな事ないわよ。それよりもハンターなんて危険な仕事をしてるあんたの方が大変じゃない」
「まぁ、そう言われるとそうだけど」
「ほんと、無理はしないでね。あと村を空ける事も多いけど、ちゃんとご飯食べなさいよ。栄養をしっかり摂ってたっぷり寝る。たったそれだけでも体調は全然違うんだから」
「わかった。心配してくれてありがとう」
「べ、別にあんたの心配をしてる訳じゃないわよ。これはフィーリアやサクラにも共通する事だし、あんたに倒れられたら私達が困るんだもの。勘違いしないでよねッ」
　顔を真っ赤にしてフンッとそっぽを向くエレナにクリュウは小さく微笑む。彼女が自分の事を心配してくれているのだと彼だってちゃんとわかっている。子供の頃からの幼なじみという関係は伊達じゃない。
　そんな自分達以上に長い年月を掛けて築かれた絆で結ばれた二人を見て、フィーリアは何か決意したような表情で胸の前で両方の握り拳をグッと握る。
「私だって、負けられませんッ」
　そんな彼女の隣で、サクラもまた表情こそ無表情ながらも黒色の眼帯で覆われていない右目は何やら闘志に燃え上がっていた。
　クリュウ達がそれぞれの想いを胸に会話を弾ませていると部屋に荷物を置き終えたシルフィードが降りて来た。
「楽しそうだな」
「あ、シルフィ。部屋はもういいの？」
「あぁ。元々あまり荷物は持って来てないからな」
「そっか。あ、後で村の中を案内してあげるよ」
「ほぉ、それは助かる」
　シルフィードは小さく口元に笑みを浮かべると、空いている席に腰を下ろした。そんな彼女にクリュウが笑顔で話題を振ると、すぐに彼女も話の輪の中に入る事ができた。
　同年代、それも年が近い者同士だからこそ会話は盛り上がる。

楽しげな話の中、シルフィードはいつもの大人びた雰囲気の中にもどこか年相応の少女らしい笑みを浮かべていた。
ずっと大人の世界で生きてきた彼女にとって、クリュウ達のような近い年の友人は少なかったのだろう。だからこそ、自分の無防備な部分をさらけ出せるのだ。
さっきまで警戒心バリバリだったエレナも今ではすっかりシルフィードと笑顔で会話をしている。どうやら意外と気が合うらしい。
クリュウはそんなシルフィードを見て小さく微笑む。
クールでかっこいいシルフィードも好きが、こういう少女らしい雰囲気の彼女も好きだ。
久しぶりに落ち着ける平和なひと時を大切に感じながら、クリュウは小さく笑みを浮かべ続けた。
その夜、予想通りお祭り好きな村長はシルフィードの歓迎会を大々的に開いた。
シルフィードはすぐに自分なんかの為に迷惑を掛けたくないからと断ったのだが、例によって《本人が来ないなら代わりに人形を置いて勝手に祝う》と宣言。クリュウに諦めるように言われて宴会に参加する事になった。
クリュウ達はそれぞれ私服姿で歓迎会に参加した。
クリュウは灰色のシャツにガウシカの皮でできたジャケット、茶色のズボン。フィーリア、サクラはごく普通のTシャツにスカートという女の子らしい姿。シルフィードはスカートの代わりに紺色のズボンと、それぞれ今まで纏っていた鎧を捨てたラフな格好になっている。
初めてお互いに私服姿を確認した時、シルフィードを見てクリュウは赤面し、フィーリアとサクラは一斉に落ち込んだ。それを見てシルフィードは困惑していた。
――分厚い鎧を脱いだシルフィードの美しい体つき。特に着やせするタイプだったらしく解放された胸は予想以上に大きかった。それこそフィーリアやサクラでは敵わないくらいに。
改めて彼我の戦力差を思い知ったフィーリアとサクラは泣きそう

な顔でずっとシルフィード――特に自分達とは桁違いに大きな胸――を睨みつけていた。
そして、そんな悲しい（？）出来事があって今に至る。
「ほんと、私なんかの為に気を遣わなくてもいいのだが」
一応主賓であるシルフィードだったが、最初に皆の前で村長に紹介されてからは端の方にいたクリュウ達の下へやって来てずっと彼らと共にいる。
「気にしなくていいって。シルフィの歓迎会ってのも一応あるけど、どちらかって言うと普通に騒ぎたいだけなんだから」
「そうなのか？」
「うん。村長はお祭り好きだからね」
「そうか。それならばいいのだが」
シルフィードは辺りを見回す。なるほど、確かに彼の言うとおり皆思い思いに飲んで食って騒いでいる。それを見て幾分か肩の荷が下りた気がした。
「でも、なんかやっと村に帰って来たって気がしますね」
微笑みながら言うフィーリアの言葉に、クリュウは「そうだね」とうなずいた。
「村を空けていた三週間、この間に色々な事があったよね。シルフィと出会ったり、リオレウスと戦ったり。短い時間の間に、本当に色々な事があったよ」
「そうですね」
「私もそうだ。君達と出会えて、本当に良かったと思っている」
「えへへ、奇遇だね。僕もそう思ってるよ」
見詰め合って微笑み合う二人を見て、フィーリアの笑顔が引きつる。
（……す、素直に喜べない……ッ！）
シルフィードという新しい仲間との出会いは嬉しいに決まっている。しかし、楽しそうに会話を紡ぐ二人を見ていると、胸がざわついて仕方がない。これが女の勘というものなのだろうか。
このままではマズイ。恋する胸が警鐘を激しく鳴らしまくる。

「あの、クリュウ様ッ」
「え？　なぁにフィーリア？」
「ほ、星がすごくきれいですよぉッ！」
　フィーリアの言葉にクリュウとシルフィードは一緒に空を見上げる。そこには美しい光を神々しく煌かせる幻想的な星空が広がっていた。
「ほぉ、確かに美しい星空だな。ドンドルマよりもずっときれいだ」
「ね？　僕の言ったとおりでしょ？」
「あぁ。本当に美しい星空だ」
　騒がしい喧騒から切り離された別世界にいるように、二人は静かに星空を見上げた。美しい星々の光が淡く自分達を照らし上げる。無数の星が集まってできた光景は、さながら星の川。その美しさに二人は心奪われる。
　目の前で二人して幸せそうに星空を見上げるクリュウとシルフィードに、フィーリアは今にも泣き出しそうな顔で頭を抱える。
「な、何でこうなるのぉッ!?」
　自分のやる事なす事全てが自分の不利に働くような気がして激しく自信を失うフィーリア。目の前で幸せそうに笑い合う二人を見て、じわりと涙が浮かんでくる。
「こ、このままじゃ……ッ」
「……何してる」
　その声に振り返ると、そこには今までどこに行っていたのか不明だったサクラが両手にグレープジュースを一杯ずつ持って立っていた。
「さ、サクラ様ぁッ」
「……バカ」
　抱き付こうとするフィーリアを華麗に回避し、サクラはクリュウとシルフィードを見る。その瞬間、サクラは硬直した。しかしすぐに動きを取り戻す。さすがサクラ、頭の切り替えの速さは天下一品だ。
「……クリュウ」
「え？　あ、サクラ。どうしたの？」

「……これ、あげる」
そう言ってサクラはクリュウにグレープジュースを渡した。なるほど、二杯も持っていたのはそういう意味があったのだ。
「ありがとうサクラ」
クリュウは笑顔でそれを受け取る。その瞬間、サクラは華麗に足捌（あしさば）きでクリュウとシルフィードの間に潜り込む。いきなりの事にシルフィードも驚く。
「……クリュウ。星がきれいだ」
「うん、そうだね。サクラもやっぱりそう思うでしょ？」
「……（コクリ）」
あまりにも見事で鮮やかな技であった。一瞬にしてサクラはシルフィードを押しのけてクリュウとの二人の世界に突入する。フィーリアはがっくりとその場にうな垂れた。
「さ、サクラ様恐るべし……ッ」
自分には絶対にできないような見事な動きと構え。サクラは史上最強の恋する乙女であった。
「どうした？　気分でも悪いのか？」
その頼もしい声に顔を上げると、自分を心配そうに見詰めているシルフィードと目が合った。
「い、いえ。大丈夫です」
「そうか？　気分が優れないのなら無理はしないでもう休んだ方がいいぞ」
自分を丁寧に気遣ってくれる彼女を見て、フィーリアは自分の愚かさが恥ずかしくなって赤面して顔をうつむかせてしまう。
（シルフィードさん、いい人だぁッ！）
「本当に大丈夫か？　水か何か取ってきてやろうか？」
「ご心配には及びません。ちょっと考え事をしていただけですから」
「そ、そうか。なら構わないのだが」
シルフィードはまだ納得していないようだが、それ以上の追求はしてこなかった。さすが年長者。大人な振る舞いが良く似合う。
危機を回避できたと安堵するフィーリア。そんな彼女の横にシル

フィードは並ぶと、じっくりと星空を見上げる。
「だが、本当にきれいな星空だな」
「そうですね。ドンドルマと違ってここは空気が澄んでますから」
シルフィードとフィーリアはしばしそうやって美しい夜空を見上げていたが、やがてどちらからともなく振り返り、互いの顔を見合う。
「フィーリア、改めてこれからもよろしくな」
「こちらこそよろしくお願いします」
改めてあいさつし合う二人。どちらからともなく笑みが零れる。
フィーリアはそんなシルフィードを見てやっぱりいい人だと思った。
「二人で何してるの？」
クリュウが近づいて声を掛けると、フィーリアは慌てた様子で頬を赤らめながら「な、何でもないですぅッ！」と答える。クリュウは首を傾げながらシルフィードを見るが、彼女は無言で首を横に振った。
「どういう事？」
「……知らない」
「――って、サクラ様ぁッ！　何当たり前のようにクリュウ様の腕に抱き付いているんですかッ！」
「……」
「《当たり前の事をして何が悪い》と言いたげな顔をしないでくださいッ！　今すぐ離れるですッ！」
「……断る」
「断言すればいいという問題じゃないですよッ！」
フィーリアは顔を真っ赤にさせて激昂するとクリュウの右腕に抱き付くサクラを引き剥がしに掛かる。だが、サクラは無言でクリュウの腕にガッチリとしがみ付いていて離れようとしない。冷徹に、冷たい怒りの炎を宿らせた隻眼で睨むだけ。
「そ、そんな怖い目なんか――」
「……」
「怖過ぎですよぉッ！　もう辻斬りとかの領域じゃないですかぁッ！」
フィーリアは今にも泣き出しそうな顔で叫ぶと、サクラを引き剥が

す事を断念し、逆にクリュウの左腕に抱き付く。
「サクラ様一人に独占させるなんて、そんな勝手許す訳にはいきませんッ！」
「……離れろ」
「絶対に嫌ですッ！」
　激しく睨み合う美少女二人に挟まれ、クリュウは苦笑いする。
「あ、あのさ。お願いだから仲良くしてよ」
「サクラ様が悪いんですッ！」
「……責任転嫁、見苦しい」
「何ですってぇッ！」
「と、とりあえず離れてくれないかな？」
「絶対に嫌ですッ！」
「……却下」
「――何で、そんな変な部分だけは意見が合うの？」
　そんな似てないようで実は似ている二人を見てクリュウは小さく苦笑する。そんな彼らを見てシルフィードは小さく口元に笑みを浮かべていた――右手が寂しそうに開いたり閉じたりを繰り返している事は秘密にしておこう。
　そんな固まって騒ぐ四人に向かって陽気な声が投げ掛けられた。
「おぉ、クリュウ君。こないな所にいたんか。何やみんな揃って楽しそうやなぁ」
「アシュアさん」
　四人に近づいて来たアシュアはニャハハと明るい笑い声を上げると、フィーリアとサクラに両側から抱き締められて身動きのできないクリュウを見て一言。
「両手に花やなぁ」
「冗談言ってないで助けてくださいよぉッ！」
「悪いなぁ。うちは女やから二人の味方やねん。ま、がんばってぇな」
「そ、そんなぁ……ッ！」
「――サクラ様、あなたとは一度決着をつけないといけないようですね」

「……同感だ。これで終わりにする」
「そして二人は何やってるのぉッ!? 何か命を懸けた最後の戦いみたいな雰囲気だけどッ！」
今にも衝突しそうな二人を慌てて止めるクリュウ。だが二人はクリュウを挟んで睨み合うばかり。そんな新たな仲間達を見詰め、小さく苦笑するシルフィード。そんな彼女にアシュアが笑みを浮かべたまま近寄ってきた。
「あんたがクリュウ君の新しい仲間かいな？」
アシュアの声に振り返ったシルフィードは小さくうなずく。
「あぁ。大剣使いのシルフィード・エアだ」
「うちはアシュア・ローラント。あんた達ハンターの武具から主婦の相棒である包丁まで何でも取り扱うしがない鍛冶師や」
「ほぉ、あなたは鍛冶師なのか。となるとこれから色々と迷惑を掛ける事になりそうだな」
「せやなぁ。まぁ、こっちこそ色々とこれからよろしくなぁ」
「こちらこそ。よろしく頼む」
小さく口元に笑みを浮かべながらシルフィードが差し出した手を、アシュアは屈託のない笑みを浮かべて握った。
どちらもフィーリアやサクラでは敵わない大きな胸の持ち主。並んで立つとその迫力は計り知れない――だが、それでもやっぱりアシュアの胸の方が大きい。
シルフィードはその後幾つかアシュアと話をした後、いつの間にかエレナにボコボコにされているクリュウを見て小さくため息して苦笑しながら助けに向かった。
今にもクリュウに蹴りかかりそうなエレナをシルフィードがなだめるように止める光景を見ながら、アシュアも小さく苦笑した。
「何か、色んな意味で賑やかやなぁ」
クリュウを中心に騒ぐエレナ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人。そんな彼らを取り囲むイージス村の優しい村民達。アシュアも村長も楽しそうに五人のやり取りを見守っている。
クリュウはフィーリアに後ろから抑えられているのに今にも飛び

掛ってきそうな勢いのエレナをシルフィードの背中に隠れながら対峙する。ふと辺りを見回せば見知った人達が自分達の事を見て愉快そうに笑っていた。それを見てクリュウは急に恥ずかしくなって顔を真っ赤にするとシルフィードの陰に隠れるような形で顔を隠す。が、それは自然とシルフィードに抱き付く形になり……

「お、おいクリュウ……ッ」

いきなりクリュウに抱き付かれたシルフィードは顔を赤らめながら困ったように右往左往してしまう。戦闘では頼れる彼女もこういう事態には弱いらしい。

一方、そんなクリュウの暴挙を見逃せない少女は――

「エッチッ！　変態ッ！　スケベッ！　セクハラッ！」

「お、落ち着いてくださいエレナ様ッ！　ここは冷静に――」

「……殺す」

「ダメですよサクラ様ッ！　村の中で抜刀は禁止ですッ！」

「せやけどフィーリアちゃん。あんたもさりげなくボウガン構えるのはやめようや」

怒号と笑い声が交わるいつも賑やかなイージス村。月と星々の淡い光に照らし出されるその小さな村には、いくつもの物語がある。

クリュウ・ルナリーフの物語。

エレナ・フェルノの物語。

フィーリア・レヴェリの物語。

サクラ・ハルカゼの物語。

シルフィード・エアの物語。

アシュア・ローラントの物語。

他にも人の数だけたくさん存在する物語の数々。それらが集まり、この小さくも賑やかで平和なイージス村という物語を作り出している。

昨日の思い出や今日の経験を積み重ね、明日への物語に繋いでいく。

彼らの物語は、これからもずっと続いていく。明日も、そして明後日も……

モンスターハンター　～真・恋姫狩人物語～（第２期）
第７８話　狩りも恋もいつでも全力勝負

真っ赤に溶けた岩などが溶岩となって地表を流れる姿はまさに炎の川。専門的に言うと溶岩流というものが、ここには無数に存在する。

昼と夜では地形すらも変わってしまう上に焼ける大地がその周囲の気温すらも生物が住まうには過酷過ぎるまでに高温にした、まさに生命が住まう事のできない死の大地――火山帯。

しかし生物は長い歴史の中で進化を遂げ、この過酷な大地に住まう力を身に付けた。そして環境が厳しければ厳しいほど生物は強く、凶暴に成長する。

この食料すらも満足に得られない不毛の死の大地を生き残る為、生物達は己が生き残る為に厳しい環境の中で戦い、生き残ってきた。

――だが、人間は違った。

生物達が何千代にも及んで歩んできた長い歴史なんかを持たず、己の知識と技術を使ってこの過酷な環境に足を歩み入れる事ができた。

そんな無粋な侵入者を、自然は容赦しない。

過酷な環境を生きてきた猛者達は、そんな人間達に襲い掛かる。

だが、人間達だって負けてはいない。己が知識と技術を身に纏い、襲い掛かるモンスター達を迎え撃つ。それがハンターという者達だ。

苛酷な環境の中、ハンターとモンスターの死闘は苛烈を極めていた。

ドンドルマのハンター達が火山と呼ぶ狩場、ラティオ活火山。そのうちエリア３と呼ばれる溶岩の池に囲まれた場所ではハンターとモンスターの壮絶な攻防戦が繰り広げられていた。

襲われているのは八台の竜車で編成されたキャラバン隊。竜車を引く草食獣アプトノスは襲い掛かる敵に混乱に陥るが、それを操る竜主が見事な操縦で彼らの暴走を食い止めている。

非力なキャラバン隊を襲うのはこのラティオ活火山をねぐらとし

ている血のように不気味な赤い体皮を身に纏ったモンスター、鳥竜種イーオス。獲物に毒液を吐いて仕留めるランポスの亜種としてランポス系最強のモンスターだ。個体でも厄介な上に集団で襲いかかって来るので、この火山では最も厄介で危険な相手だ。

キャラバン隊に襲い掛かるイーオスは数十匹にも及ぶ大軍団。しかも離れた場所で体格のいいイーオス数匹に守られた彼らよりも一回りも二回りも大きな体に紫色の不気味なトサカと持ったイーオスの親玉、ドスイーオスが時折鳴き声を上げて部下達に命令を下している。ドスイーオスという親玉の命令を忠実に守るイーオス達は見事な連携攻撃でキャラバン隊を襲う。

キャラバン隊にはその商隊の荷物、つまり商品などが満載されているだけでなく多くの人達が潜んでイーオスの猛攻撃に震えていた。

この世界にはちゃんとした交通手段というものはまだ完全には整備されていない。その為、地域と地域を行き交う場合、特に女性や子供を連れた場合などはこのようなキャラバン隊と一緒に行動し、途中まで同行させてもらうというのが通例である。

竜車の中には若い女性や子供達が泣きながら必死に自分達の無事を祈っていた。

普通に考えれば、これだけのイーオスの大群に襲われていたらとっくに彼らはイーオス達に襲われていたはず。しかし、実際は違っていた。

四人の若きハンター達が、襲い掛かるイーオスの群れからキャラバン隊を必死に守り抜いていたのだ。

仲間の犠牲で生まれた隙間に向かって、イーオス一個小隊の三匹が突進する。

「させるかぁッ!」

突撃するイーオスの目の前に現れたのは真っ赤な火竜の素材で作られた空の王者の威圧感を再現した荒々しいデザインの上級防具――レウスシリーズを身に纏ったクリュウ。手に持つのは同じく火竜の素材で作られた炎の片手剣――バーンエッジ。その鋭い剣先がまず先頭のイーオスの首に炸裂し、一撃で付加属性の炎の爆発と共に吹

き飛ばす。
眼前でいきなり小隊長が吹き飛ばされたイーオスは驚き、その場に止まる。そこへすぐさまバーンエッジが襲い掛かる。
爆発と共に身を焼く激痛に悲鳴を上げるイーオス。すぐさま隣のイーオスが反撃で襲い掛かるがクリュウはそれを横に回避。虚空を切る爪を一瞥し、すぐさま反撃に転ずる。
「はぁッ！」
バーンエッジの鋭い一撃はイーオスの真っ赤な体皮を引き裂いて炎と共に血を迸らせる。悲鳴を上げて仰け反るイーオスに追撃を仕掛けようとするが、もう一匹が仲間を守ろうとクリュウに向かって毒液を吐いて来る。クリュウは小さく舌打ちして後ろにジャンプ。直後、彼がいた場所に紫色の粘着性のある毒液が付着。火山特有の火薬草と呼ばれる枯れたような外見の草が不気味な色に染まって本当に枯れた。
イーオスの毒は、それこそ受けたら解毒薬を使わなければ命を落とす事すらありえる危険な毒だ。その威力を目撃してクリュウは改めて体勢を立て直す。
だが、そこへドスイーオスの鳴き声が響き、援軍として五匹のイーオスが突っ込んで来る。
「なぁッ!?　このぉッ！」
クリュウは急いで腰の道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出すとイーオス達に向かって投げ付ける。炸裂した閃光によってイーオス達は一斉に視界を封じられた。しかし、死角があったのか二匹のイーオスが同じく閃光玉の炸裂で一瞬とはいえ動きを封じられたクリュウの横を通過した。
「まずいッ！」
クリュウは慌てて追おうとするが、またもドスイーオスの命令を受けて三匹のイーオスがそれを阻むようにクリュウに襲い掛かる。
「邪魔するなッ！」
クリュウはバーンエッジを振るって追い払おうとするが、イーオスは後ろに軽くジャンプしてそれを回避するとクリュウを取り囲む。

完全に動きを封じられたクリュウは悔しそうに自分の防衛線を通過したイーオスを見る。すると、そこへ古風な異国の鎧、凛シリーズを身に纏った黒髪に黒い眼帯を左目にした隻眼の少女――サクラが突撃するイーオスの眼前に立ち塞がった。

「……ここは通さない」

背中に下げた長刀、太刀と呼ばれる武器を抜き放つ。その瞬間逆ったのは青き稲妻。バチバチと飛び散る雷撃の火花にイーオスが警戒した瞬間、サクラは地面を蹴って突進した。

「……甘いッ！」

逆る雷撃の一閃。横一線に放たれた鬼神斬破刀は一撃でイーオス二体を吹き飛ばす。逆る雷撃がその身の内側を貫通するように貫き、倒れたイーオスは感電しているのかビクビク震えている。サクラは容赦なく動けぬ二体のイーオスの首を切断。息の根を止めた。

イーオスを片付けたサクラはクリュウにコクリと一回うなずくと、鬼人斬破刀を背に戻して走り去る。クリュウはほっと胸を撫で下ろすと、再びイーオス達を向き直る。

クリュウが守る反対側を蒼リオレウスの防具、リオソウルシリーズにレッドピアスをつけた美しい白銀の長髪を流す長身の少女、シルフィードが大降りの一撃を横に振り回して一度に三体のイーオスをぶっ飛ばす。振るわれたのは鎌蟹と呼ばれるショウグンギザミの素材を使ったキリサキ。以前彼女が使っていた蒼リオレウスの素材を使った煌剣リオレウスよりも攻撃力の高い大剣。ただし、付加属性は何もない無属性武器だ。

ショウギンギザミの鋏を使ったキリサキの一撃は強烈無比。イーオスは一撃で動かなくなった。

しかし一撃が強い大剣は対大型モンスター用とも言うべき武器で機動力は片手剣や太刀などには劣る。一撃で三体を撃破したシルフィードだったが、同時に三体のイーオスの進入を許してしまう。

「しまったッ！」

シルフィードはキリサキを背に戻す。同時に刃先がスライドして武器の全長が短くなる。その動きはまるで本物のショウグンギザミ

の鋏のようだ。
慌てて追い掛けるシルフィードだが、ドスイーオスは抜け目がない。すぐさま命令を下してシルフィードの行き先に部下を配置して封じる。
「どけッ！」
抜刀と同時に再びリーチが長くなるキリサキを縦に振り下ろす。一撃でイーオスは動かなくなるがまだ三体が残っていた。
焦るシルフィード。だが、キャラバン隊に襲い掛かるイーオス達は一瞬にして無数の銃弾を受けて血まみれになってその場に倒れた。
竜車の一台の上に立って高所からイーオスを狙撃したのはハートヴァルキリー改という桜リオレイアの素材で作られたライトボウガンのスコープで狙いを定める、同じく桜リオレイアの素材を使った防具、リオハートシリーズにホワイトピアスをした金色の長髪を流した少女、フィーリア。
彼女の撃ち放った散弾ＬＶ１は見事に襲来するイーオスを薙ぎ払った。だが、間髪入れずにクリュウとシルフィードの防衛線を突破するイーオスが次々にキャラバン隊に襲い掛かる。
「しつこいですねッ！」
フィーリアは周りに仲間がいない事を利用して散弾ＬＶ１を撃ちまくる。炸裂する無数の弾丸が次々にイーオスの体を血に染めて倒していく。だが、倒せる限界数以上のイーオスがフィーリアの迎撃能力を上回る勢いでキャラバン隊に襲い掛かる。
「来ないでぇッ！」
散弾を撃ちまくるフィーリアだが、ついに一匹のイーオスが竜車に襲い掛かった。
ビリビリビリビリッ！
動物の皮でできた幌はイーオスの鋭い爪に簡単に引き裂かれた。
「キャアアアアアッ！」
幌を破って顔を突っ込んできたイーオスに女性が悲鳴を上げた刹那、
「……死ねッ！」

竜車を乗り越えて幌の上から飛び降りたサクラはイーオスに向かって鬼人斬破刀を突き刺すように構えて落下。直後にイーオスの体を貫いた。
動かなくなったイーオスの死骸を振り払い、破れた幌の前に立つサクラ。背後からは子供達泣き声や悲鳴が響く。その声を聞き、サクラは一瞬だけ顔を苦しげにゆがめる。
「……守ってみせるから」
サクラは鬼人斬破刀を構えると襲い掛かるイーオスに向かって突撃した。
クリュウ達はキャラバン隊を二段構えで守っていた。まず最も危険な外周をクリュウとシルフィードで守り、その援護及び二人が漏らしたイーオスの狙撃をフィーリアが担当し、最終防衛線としてキャラバン隊を死守する役目には護衛の女神とまで謳われたサクラが当たっている。
クリュウ達はリーダーであるシルフィードの立てた作戦に従ってキャラバン隊を守っていた。しかし圧倒的な戦力を持つドスイーオス率いるイーオスの大軍相手に苦戦を強いられていた。
すでに四人ともかなり疲労している。キャラバン隊も次第に岩壁に追い詰められ、クリュウ達も陣形（フォーメーション）を維持するのも難しくなっていた。
特に疲労が激しいのは剣士の三人。クリュウとサクラは機動力を生かして激しく立ち回り、対大型モンスター武器とも言うべき巨大な大剣を不得意な小型モンスターであるイーオスに振るうシルフィードの動きも最初に比べて明らかに鈍っている。
それでも、クリュウ達は必死になって個々に奮戦していた。もはや指揮系統など完全に潰（つい）えている。
すでに各自閃光玉も尽き果て、それぞれの武器だけで戦っている状態だ。
イーオスの群れの執拗な波状攻撃、火山という過酷な条件下、護衛任務という動きが制限される事態。それら全てがクリュウ達に不利に働いている。

迫り来るイーオスを薙ぎ倒したクリュウ。レウスヘルムの下に隠されている顔は汗でぐっしょり濡れている。口から吐き出される息は荒く、のどはカラカラ。バーンエッジを握る右手もズキズキと痛む。

「一体何匹いるんだよ……ッ！」

倒しても倒しても沸いて出てくる赤い悪魔。頭では司令塔であるドスイーオスを倒せば状況を打開する事もできるとわかっているが、この状態ではそれも不可能だ。四人でも苦しいキャラバン隊を守りながらの防戦。とてもじゃないがドスイーオス討伐に一人でも戦力を分ける事など不可能であった。

クリュウは武器を構えたまま辺りを見回して状況を確認する。現在ドスイーオスに統率されているイーオス達はシルフィードを集中的に攻撃していた。動きが鈍い大剣使いの彼女の方が倒しやすいと踏んでいるらしい。

「フィーリアッ！」

「は、はいッ！」

クリュウが呼ぶと、フィーリアは彼を取り囲むイーオスを攻撃する。いきなりの奇襲に驚き動きが止まるイーオスを無視し、クリュウはシルフィードに向かって走った。

フィーリアはクリュウが抜けた穴をフォローするように攻撃し、サクラはシルフィードが撃ち漏らしたイーオスを最後の防衛線として防いでいる。

しかし、イーオス達も頭がいい。シルフィードを抜けた部隊もサクラの足止め部隊と本部隊に分けて襲っている。サクラ一人では持たない。

そして、ついにイーオスの一匹がサクラとは別方向からがら空きの竜車に突撃した。クリュウはすぐさま反応してこれを追う。

イーオスは先程と同じように爪で幌を破って中に進入しようとする。幌が破れた途端現れたイーオスの顔に子供達が悲鳴を上げる。運悪く、その竜車は子供を一括して集めた竜車であった。

大人の声など聞こえずに泣き喚いて混乱する子供達。イーオスは

まるでどれを食べるか吟味するように辺りを見回し、一番手前で涙を浮かべながら動けずにいる桃髪金眼のツインテールの小さな少女をギロリと睨む。その不気味な瞳に、少女は小さな悲鳴を上げる。
「た、助けて……ッ」
「ギャアォッ！」
「キャアアアァァァッ！」
不気味な口をガバァッと開けて鋭い牙で食らおうとしてくるイーオスに少女が悲鳴を上げた刹那、
「させるかッ！」
横からクリュウがイーオスに向かって跳び蹴りを放った。イーオスは悲鳴を上げてその場に押し倒される。すぐさまクリュウは毒液を吐いて抵抗しようとするイーオスののどを切り裂いて息の根を封じた。
「危なかった……」
クリュウは安堵の息を漏らして振り返る。すると、幌の隙間から少女がこちらを涙で濡れた瞳で震えながら見詰めていた。幌に近づきバイザーを上げて瞳を見せ、クリュウは目を細めて微笑んだ。
「必ず守ってあげるから」
少女はちょっと警戒しながらもクリュウの言葉にコクリとうなずいた。クリュウはそれにうなずくと、バイザーを下ろして再びイーオスの群れに突撃した。そんな彼の背中を、少女は胸の前で手を組みながら見守る。
「シルフィッ！」
クリュウは苦戦するシルフィードの脇から襲おうとしたイーオスを斬り倒した。すぐさま二人は合図も何もなしに背を合わせる。
「すまないクリュウ」
「お礼なら後で聞くから。今はこいつらを片付けるよッ」
「わかったッ」
クリュウとシルフィードが連携攻撃を開始すると、それに呼応して一斉攻撃とばかりにサクラとフィーリアも前線に立った。
四人の一斉反撃は形成を幾分か好転させる事に成功した。特に

フィーリアの容赦のない散弾の雨は一斉にイーオスを吹き飛ばし、前線を押し戻す。
イーオス達は一度距離を取ってクリュウ達と対峙する。容赦なく睨みつけてくるイーオス達だが、すでに仲間の半分以上を倒されているせいか警戒していて動かない。
不気味な沈黙の中、部下達の不甲斐なさに痺れを切らしてドスイーオスが怒号を上げながら突撃して来た。
ドスイーオスの突撃にイーオス達も再び攻撃を開始する。反撃とばかりにクリュウ達も突撃して応戦。再び戦闘は苛烈な混戦に変貌した。
襲い掛かるドスイーオスを相手にするのはクリュウ。散弾を装填しているフィーリアと機動力に欠けるシルフィードは群がるイーオスを攻撃し、サクラは二人が撃ち漏らしたイーオスを蹴散らしている為にクリュウの援護には回れない。
鋭い牙で噛み付こうとするドスイーオスの一撃を横に回避し、クリュウはバーンエッジをドスイーオスに叩き込む。刃先が触れた瞬間炸裂する爆発は刃と共に肉を焼き切る。しかしドスイーオスはまるで効いていないかのように後ろへジャンプするとクリュウに向かって鋭い爪を振るう。クリュウは火竜の素材でできた盾でその一撃を防ぐ。しかしその瞬間横からイーオスが飛び掛って来た。
「うぐぅ……ッ！」
無防備な死角からの攻撃にクリュウは耐え切れずに転倒した。そこへ別のイーオスが毒液を吐いて来た。間一髪地面を転がるようにして回避し、何とか立ち上がる。
「邪魔だッ！」
クリュウは目の前のイーオスを薙ぎ払うと、低く唸るドスイーオスに突貫。真正面からバーンエッジを側頭部へ叩き込む。これにはドスイーオスも「ギャオォッ!?」と悲鳴を上げてたたらを踏んだ。
続いて怯むドスイーオスの側面に回ると、今度はバーンエッジを体を回転させて振るう。炎と共に爆ぜる血を無視し、そのまま次の斬撃に繋げる。

「ギャオワッ！　ギョオォッ!?」
攻撃しては場所を変えてまた攻撃というクリュウの撹乱するような動きにドスイーオスは混乱する。必死に反撃をするがその攻撃は全て虚空を斬るだけ。
ドォンッ！
「ギャオォッ!?」
一瞬にして視界から敵が消えた直後、背後から斬撃が炸裂して悲鳴を上げるドスイーオス。クリュウはドスイーオスが振り返るのを待たず動き、その側面に剣を振るう。
ドスイーオスを翻弄しながら攻撃を繰り返すクリュウだったが、ボスの危機にシルフィード達に向かっていたイーオス数匹が応援に駆けつけた。クリュウは舌打ちしてドスイーオスから離れる。
常の彼なら閃光玉で動きを封じて一気に攻勢に出るのだが、今までの激戦ですでに閃光玉は尽きている。得意の戦法はもう使えない。
ジリジリとイーオスに包囲されるクリュウは反撃の糸口を探しながら唇を噛む。そこへイーオス三匹が襲い掛かってきた。まず二匹がクリュウに肉薄。鋭い爪や牙で襲い掛かる。
「このぉッ！」
盾で一撃を防ぎ、すぐさまその盾でイーオスを突き飛ばして剣を振るう。しかしもう一匹のイーオスが横から飛び掛かりクリュウを押し倒した。
「あぐぅッ！」
肩を強打して小さく悲鳴を上げるクリュウ。そこへ最後の一匹が毒液を吐いて来た。粘着性の毒が炸裂し、一瞬にして激しい吐き気と脱力感、めまいが襲い掛かる。
「し、しまった……ッ」
クリュウは無理やり体を起こすと毒液を吐いて来たイーオスにバーンエッジを叩き込みすぐさま後退する。しかしすぐに膝を折ってしまう。荒い息が漏れ、激しく肩が上下する。レウスヘルムの下にあるクリュウの顔色は真っ青で、立つ力すら残っていない。
イーオス達は動けぬクリュウに歓喜の声を上げながら包囲網を狭

める。クリュウは道具袋（ポーチ）から解毒薬を取り出そうと手を伸ばすが、その瞬間イーオスが飛び掛って来た。
ドォンッ！　ドドンッ！　ズバァンッ！
襲い掛かるイーオスは突然の銃声と共に襲い掛かる無数の弾丸に体を貫かれて悲鳴を上げて吹き飛ぶ。
「クリュウ様ッ！」
その声に振り返ると、銃口から煙を吹くハートヴァルキリー改を構えたままフィーリアが駆け寄って来た。
「大丈夫ですかッ!?」
「あ、ありがとう。助かったよ……」
クリュウは礼を言うと急いで解毒薬を飲む。その効果はすぐに表れ、吐き気や脱力感、めまいなどは一瞬にして消えた。毒状態が治ったのだ。
「戦況は？」
復活したクリュウはバーンエッジを構えたままフィーリアに問う。
「サクラ様とシルフィード様の奮闘でキャラバン隊は何とか死守できています。しかし、これ以上の長期戦になれば、もう耐えられません……」
フィーリアも相当体力を疲弊させていた。特にチームで最も体力が少ない彼女は高熱地帯での激しい動きで流れ出る汗は止まらず、軽い脱水症状に陥っていた。時たま襲って来る軽いめまいを頭（かぶり）を振って振り払うと再びスコープを覗いて狙いを定め、起き上がるイーオス達に散弾を叩き込む。
「だ、大丈夫フィーリア？」
「……大丈夫、と言いたいですけど、ちょっと辛いかもしれません」
そう言ってフィーリアは苦笑いする。常の彼女は決して弱音を吐かない。その彼女が辛いと言うからにはもう限界に近いのかもしれない。
クリュウは少し離れた場所で奮戦するシルフィードとサクラを見た。どちらも襲い掛かる無数のイーオスに振り回され、完全にリズムを崩されている。それでもキャラバン隊を死守しているのはさすが

だ。しかし、その表情はどちらも辛そうだ。
すでにイーオスの大群と会敵して一時間が経とうとしている。クリュウ達の体力はもはや限界に達しつつあった。
――だが、それはイーオス達も同じ。すでに半分以上の仲間を返り討ちにされ、残ったイーオス達もボロボロだ。
双方共に満身創痍。これ以上の戦闘の継続は不可能であった。
「ギャオッ！　ギャアァッ！」
ドスイーオスが今までと違った鳴き声を上げた途端、イーオス達は回れ右して撤退を始めた。先頭に立ってイーオスと共に逃げ去るドスイーオス。離れて行く赤い集団が消えた瞬間、四人は一斉にその場に倒れた。
イーオスの大群との死闘から一時間後、全速力で狩場を突っ切ったキャラバン隊は何とか安全地帯に到達した。
竜車に乗っていた人達が歓声を上げながら幌の外へ飛び出す。まだ火山帯なので暑いのには変わりないが、クーラードリンクなしでもいられるくらいには気温も落ちている。何より、ずっと狭い幌の中に閉じ込められていたので開放感を味わいたかったのだ。
一方、飛び出す元気がある人達とは違いもはや疲労困憊で立つ事もできないクリュウ達はそれぞれ座ったままぐったりとしていた。
「終わったな……」
シルフィードの心の底からの声にクリュウ達は一斉にうなずいた。
今回彼らが受けたのはラティオ活火山を通り抜けるこのキャラバン隊の護衛依頼。ランクはそれほど高くはなく簡単にクリアできるものだと思って受けたのだが、ギルドのミスかイーオス達はドスイーオスの配下で異常発生していたのだ。そのど真ん中を通過する事になった為に、あれほどの死闘を繰り広げる結果となった。
「……帰ったら、ライザさんに文句言おうね」
クリュウの苦し紛れの冗談にも反応がない。それだけ皆疲れ切っていた。
シルフィードは座ったままうな垂れ、脱水症状に陥ったフィーリアと最も激しく動き回った為に疲労で撃沈したサクラは今は簡易布団

の上でぐったりと倒れていた。クリュウも今はヘルムを脱いで汗でべっとりした髪を拭く力もなくぐったりと座り込んでいる。
疲労困憊なクリュウ達を載せたキャラバン隊はゆっくりと進み始めた。幌の外からは笑い声が響く。それが唯一の彼らの救いであった。
必死に守った笑顔が、何よりも嬉しいものだ。
そんな感じでキャラバン隊の護衛ハンター達がぐったりとしている竜車に、一人の来訪者が現れた。
幌を開けて入って来たのはきれいな桃色のツインテールに金色の瞳をした小さな少女。先程クリュウが守った少女であった。
「あ、いたいたぁッ！」
少女は疲労困憊でぐったりとしている一行を見渡して少し迷ったようだが、クリュウの防具を見てパァッと笑顔を咲かせる。
少女がパタパタと駆け寄って来ると、ぼーっとしていたクリュウも気づいた。
「え？　あ、君はさっきの」
「やっぱりさっきの人だぁッ！　へぇ、もっと大人かと思ったけど、かっこいいお兄ちゃんだったんだぁ」
少女は嬉しそうに天真爛漫な笑みを浮かべると、ペコリと礼儀正しく頭を下げた。
「さっきはありがとうお兄ちゃんッ！」
「お礼なんていらないよ。それより怪我とかなかった？」
クリュウが小さく微笑みながら問うと、少女は大きくうなずく。
「うんッ。お兄ちゃん達のおかげだよ」
そう言って少女は背中に背負っている皮製の鞄（かばん）を下ろすとタオルを取り出し、クリュウの頭に被せてワシャワシャとぎこちない動きで汗を拭く。
「汗拭かないと風邪引いちゃうよ？」
「あ、ありがとう」
グシャグシャな髪型になっても、クリュウは嬉しそうに微笑む。それを見て少女も楽しそうに笑みを浮かべる。

そんな二人のやり取りを他の三人は無言で見詰めていたが、シルフィードは気になったような感じでクリュウに問う。
「クリュウ。その子は誰だ？」
シルフィードが問うと、クリュウは「えっと、さっき僕が助けた子だけど」と答える。すると少女は小さくはにかむ。
「リリア。私の名前はリリア・プリンストンって言うんだよ」
少女――リリアは笑顔で名乗るとクリュウの腕にギュッとしがみ付いた。その瞬間、三人の表情が幾分か険しくなる。
「お兄ちゃんは何て言うの？」
「え？　あ、僕はクリュウ・ルナリーフ」
「へぇ、いいお名前だね」
「あ、ありがとう」
クリュウは少し照れたように頬を赤らめながら小さく微笑む。リリアはそんな彼の笑顔を見て頬を赤らめると、さらにギューッと強く抱き付く。と、
「ッ!?」
突如クリュウは小さな悲鳴を上げると肩を押さえて苦しげに顔をゆがめた。リリアはすぐにそんな彼から離れると心配そうに彼の顔を覗き込む。
「ど、どうしたのお兄ちゃん？」
「え？　あ、ううん。何でもないよ」
クリュウは小さく笑みを浮かべてそう答えた。だが、わずか一瞬の事であったのに三人の恋姫はすぐさまその異変を察知した。
「クリュウ、怪我をしているのではないか？」
シルフィードの問いに、クリュウは「そ、そんな事ないよぉ……」とあからさまに視線を逸らした――真っ直ぐ過ぎるが故にクリュウはうそが苦手であった。
「クリュウ様、右肩を見せてください」
フィーリアがいつになく真剣な表情でそう言った。クリュウはそれでも「大丈夫だってばぁ」と言って右肩を隠す。もはやバレバレだ。
「……観念してクリュウ。これ以上抵抗するなら実力行使もやむを得

ない」
「え？　実力行使って？」
「……私が優しく、一枚一枚丁寧に服を脱がす」
「――ごめんなさい。右肩怪我しています」
　ポッと頬を赤らめながら言うサクラに本気（マジ）を感じたクリュウは一瞬にして怪我を認めた。シルフィードとフィーリアは呆れたように小さくため息し、サクラもまた何かものすごく残念そうにため息した。
「とにかく、傷を見せてみろ」
　シルフィードの言葉にクリュウは素直に従うと、レウスメイルとレウスアームを脱いで上半身インナー姿になって右肩を見せた。すると、肩が幾分か腫れ上がって熱を帯びていた。
「軽い打撲だな。薬草でも塗ってれば治りも早くなる」
　シルフィードの診断にフィーリアはすぐに道具袋（ポーチ）から薬草を取り出そうとする。
「あ、それならいいものがあるよッ！」
　そう言ってフィーリアを制すと、リリアは鞄の中をゴソゴソと何かを探すようにあさり始める。フィーリアは困惑したようにクリュウを見るが、クリュウも首を傾げる。
「あったッ！」
　目的の物を見つけたリリアはパァッと顔を華やかせると、振り返ってクリュウに笑顔でそれを見せ付ける。それは回復薬などが入っているごく普通のビンであった。中に入っているのは回復薬と同じような緑色の液体。波が全然立たない所を見ると、粘り気があるようだ。
「リリア、それは一体何なの？」
　クリュウが問うと、リリアはえっへんと発育途中の小さな胸を反らす。
「これは私が作った打撲に良く効く二四種類の薬草をブレンドした特製塗薬だよ。これを使えば普通の薬草をすり潰したものを塗るよりずっと治りが早いんだから」

自信満々にビンを持ったまま力説するリリア。クリュウは「そ、そうなんだぁ」と半信半疑だ。フィーリア達も顔を見合わせて困惑している。そんな四人の反応にリリアはムスッとする。
「本当なんだからッ！　とにかく塗ってあげるから、お兄ちゃん怪我を診せてッ！」
疑われている事にムキになってリリアはクリュウに迫る。
「わ、わかった。わかったから落ち着いてって」
クリュウは薄っすら涙を浮かべて怒るリリアをなだめると、観念したように怪我を彼女の方へ向ける。
「じゃあ、お願いね」
「うんッ！　任せておいてッ！」
リリアは嬉しそうにパァッと笑顔を華やかせると、早速クリュウの怪我の手当てを開始した。ビンの中にその小さな白い手を突っ込み満遍なく塗り付けると、そのまま手を引き抜いてクリュウの肩にペタリをくっ付ける。
「ひぎぃ……ッ」
「ちょっと染みるけど、我慢だからね」
リリアは小さな手を一生懸命動かしてクリュウの肩のに塗薬をぬりぬりと塗り付ける。クリュウは染みるし冷たいし変な感触だしと内心は結構嫌がっていたが、小さな女の子が一生懸命手当てしてくれているという微笑ましい状況に我慢していた。
薬を塗り終えて小さく一息すると、続けて手を拭いてから鞄の中から包帯を取り出し、丁寧に巻いていく。その手は幾分かぎこちないが、包帯はきれいに巻かれている。
「これで良しッ！　終わったよお兄ちゃんッ」
最後に丁寧に包帯を結ぶと、リリアはそう言って嬉しそうな笑みを浮かべてクリュウを見る。そんな彼女の視線にクリュウも笑顔で応える。
「ありがとうリリア」
「えへへ～」
クリュウにお礼を言われたリリアは頬を赤らめながら今にもとろ

けてしまいそうに嬉しそうな天真爛漫な笑みを浮かべると、クリュウに抱き付く。
「お兄ちゃんだ～い好きぃッ！」
「ちょ、ちょっとリリア」
　かわいくしがみ付いて来るリリアにクリュウは困ったような、でもどこか嬉しげな笑みを浮かべる。
　そんなまるで仲のいい兄妹のように微笑ましい光景を見詰める三人は、
「が、我慢です……ッ。相手は子供じゃないですか……ッ。ここは冷静に、大人な女性の対応を……ッ」
「おいフィーリア。顔が引きつってるぞ」
「……」
「そしてサクラッ！　君はまずなぜ太刀の柄を握っているッ!?　相手は子供だぞッ！」
　今にも暴走しそうなフィーリアとサクラを冷静な年長者であるシルフィードが必死になってなだめる。このチームに入って以来彼女はこのような役柄が多い。しかし時折クリュウとリリアの仲のいい姿を見てはちょっぴり寂しげな表情を浮かべている事は誰も知らない。
　そんな三人の心内など持ち前の鈍感さで全く気づいていないクリュウは笑顔で懐いて来るリリアを本当の妹のように頭を撫で撫でする。リリアは目を細めてその手を受け入れ、とろけそうな笑みを浮かべる――そして、フィーリア達の不安は募っていく。
　そんな感じで道中リリアはずっとクリュウにべったり状態。クリュウもあまり悪い気はしないのかあまり抵抗はせず、リリアはクリュウに抱っこしてもらいながら楽しげに会話をして彼を独占。
　イーオスの大軍団と激戦を繰り広げて疲労困憊なフィーリア達はその光景に強烈な追い討ちを受けてダウン。彼女達にとっては、ドンドルマまでの数日の道のりは長い長い地獄のような時間となってしまった。

第７９話　恋風烈火　激化するクリュウ争奪戦

数日後、キャラバン隊は無事にドンドルマに到着。クリュウ達は感謝していつまでも手を振ってくれたキャラバン隊と別れると早速酒場へ向かった……のだが、

「クリュウ様、一つ質問してよろしいでしょうか？」

「いいけど、何？」

フィーリアは足を止めるとフゥと一回深呼吸する。そして勢い良く振り返って彼の背後を指差した。

「なぜリリアちゃんがついて来ているんですかッ!?」

彼女が指差す先にはクリュウと手を繋いで、先程彼が買ってくれたキャンディをおいしそうに舐めるリリアの姿があった。

サクラもシルフィードも気になっていたらしく、無言でクリュウの回答を待っている。そんな三人の視線にクリュウは困ったような笑みを浮かべた。

「し、仕方ないでしょ。リリアがお姉さんの家がイージス村にあるって言うから、護衛の為にも一緒に行った方がいいと思っただけだよ。キャラバン隊が村に寄らなくなっちゃったんだから」

クリュウの至極まともな正論に、フィーリアは反撃の糸口を失った。サクラとシルフィードも同時にため息する。

実はリリア、あのキャラバン隊と一緒にお姉さんの住むイージス村に行く為に自分の村を一人で出てきたらしい。しかしキャラバン隊はイーオス軍団の襲来で予定より大幅な遅れが生じてしまった為にイージス村へ行く迂回路を中止し、真っ直ぐ目的地に向かうと決めてしまったのだ。

おかげでクリュウ達はキャラバン隊と一緒に村に帰る予定が崩れ、自力で帰る事となった。その為同時に一緒の村へ行くリリアをクリュウが一人旅を不安に思って誘ったのだ。優しい彼らしい判断だが、フィーリア達の気持ちは複雑だ。

「ま、まぁそのお気持ちはわかりますけど……」

フィーリアは葛藤していた。小さな女の子に危険な一人旅にさせ

ておけないという彼の判断は正論だし、彼らしい判断だ。そんな優しい彼を自分は大好きなのだ。
　しかし同時に、あのわずか数日で本当の兄妹のように仲良くなった二人が不安で仕方がない。クリュウも満更でもないような感じなのが余計に不安だ――彼が犯罪的な特殊な性癖を持っていない事が唯一の救いだが、不安は消えない。
「……クリュウのバカ」
「サクラ。気持ちはわからなくもないが、子供相手に本気になるのはどうかと思うぞ」
　それから酒場までの間、クリュウとリリアは楽しそうに会話を続けた。そんな二人をフィーリアはチラチラと世話しなく見詰め、サクラはすっかりふて腐れてしまい、そしてチーム一の苦労人のシルフィードは疲れたようにため息するのであった。
「ほんと～にごめんッ！　このとぉ～りッ！」
　酒場で早速ライザに今回の事を報告すると、彼女は何度も何度も頭を下げてきた。そりゃあもう周りの視線を一気に引きつけ、なぜか自分達が悪者に思えてくるくらいの勢いだ。
「あ、いや。そこまで謝る必要はないんですが。とりあえず報告をと思って、その……」
「依頼ランクと本来のランクとの差額、及び今回の失態に関しての賠償金は全部ギルドの方から支給できるように手配しておくから、ほんとごめんなさいッ！」
　いつもは笑顔全開なライザも、こと仕事に関しては結構まじめなのでこういうミスなどに激しく責任を感じてしまう性格らしい。
「も、もういいですからッ。お願いですから頭を上げてくださいッ。周りの男の人達の視線が滅茶苦茶怖いですッ！」
　周りの猛者達の殺気に溢れた血走った瞳を一手に引き受ける形になっているクリュウは今にも泣き出しそうな勢いだ。そのあまりにもかわいそう過ぎるクリュウの姿に、シルフィードが苦笑しながら入って来る。
「まぁ、何はともあれ皆無事だったのだから良いではないか。ライザ

もそんなに頭を下げる事もない。差額の分はきっちり報酬に上乗せしてもらえればそれで結構。あと、そうだな。一食くらいおごってもらう事で妥協しようではないか。どうだ？」
　シルフィードの提案に、フィーリアとサクラはすぐに即決了承した。きっとこれ以上クリュウの泣き顔を見ていられなかったのだろう。
　ライザもそれで納得してくれたらしく、ようやくいつもの笑顔を取り戻してくれた。クリュウ達は一斉にほっと胸を撫で下ろした。
「ところで、さっきから気になってたんだけどクリュウ君の背中に隠れてる女の子は誰？」
　ここに来てライザはようやくクリュウの背後に隠れるリリアの存在に気づいたらしい。しかしリリアは自分に話題が移ったと気づくとさらにクリュウに強くしがみ付いて隠れようとする。無言で怒りに体を小刻みに震わせるサクラに常に気を配らなければならないシルフィードは疲れたようにため息した。
「あ、この子はリリア・プリンストン。イージス村に向かう途中だっていうから一緒に行こうかと思って」
　クリュウが説明すると、ライザは納得したように小さくうなずきにっこりと伝統の邪念ゼロ営業スマイルを放つ。
「私はライザ・フリーシア。よろしくねリリアちゃん」
　さすがライザ。警戒心バリバリだったリリアを安心させて見事にその警戒心を拭い取った。ギルド嬢の営業スマイルの破壊力は相変わらず桁違いだ。副作用として周囲の男達数人が倒れた事は無視しておこう。
「よろしくねッ」
　すっかり警戒心がなくなったリリアはライザにその小さな手を差し出す。ライザもにっこりと笑みを浮かべてその手を取って握手する。その時の彼女の笑顔は、素の彼女のものだ。
「でもねぇ……」
　リリアと握手を終えたライザはどこか複雑そうな顔でクリュウを見る。その視線にクリュウは「何ですか？」と首を傾げるが、ライザ

は次にフィーリアを見て苦笑した。
「クリュウ君って、自然とかわいい女の子を集める力でもあるのかしら？　年齢を問わず」
「そ、そうかもしれませんね……」
　ライザの言葉にフィーリアは疲れたようにため息した。あながち冗談では済まない状態なだけに彼女の心労も絶えそうにない。見ると、サクラはサクラで楽しげに会話するクリュウとリリアを文字通り指をくわえて悲しげな瞳で見詰めていた。不憫だ……
「ま、まぁとにかく適当なテーブルに座ってて。すぐに料理を作って持って行くから」
　ライザはそう言って厨房へ消え、クリュウ達はとりあえず空いているテーブルに座った。のだが……
「お兄ちゃんの横は私だもんッ！」
「リリアはもうたくさんクリュウ様に抱きついたでしょうッ!?　今度は私の番ですッ！」
「……クリュウの横は、私だから」
　予想通りクリュウの隣を巡ってすさまじい言い合いが始まってしまった。しかも今回は新たにリリアが参加しているだけあってその勢いは苛烈を極めている。注目度はマックスだ。
「あ、あのさ。とりあえずジャンケンで決めない？」
「奇跡は信じるものではなく、自分で起こすものですッ！　運命などに身を任せるほど、私は愚かではありませんッ！」
「すごくかっこいい事言ってるけど、その奇跡があまりにも小さ過ぎるっていう自覚はないの？」
　結局ジャンケンは却下。皆、運命に見放された上にクリュウからも離れるのが相当嫌なようだ。
　しかし、このままでは泥沼化するだけ。クリュウは無言で対面に座ったシルフィードに助けを求めるが、彼女も苦笑して「私の手には負えん」と協力を拒否した。
　クリュウが無駄とはわかっていながらももう一度三人の説得をしようとした時、

「もう仕方ないな。お兄ちゃんの横はお姉ちゃん達に譲ってあげるよ」
　リリアはそう言うとクリュウの隣を巡る争いからあっさりと抜けた。その見た目や年齢に合わない妙な大人な態度にポカンとする二人にクリュウは呆れたように一言。
「大人げなさ過ぎだよ二人とも」
　クリュウの本心からの真っ直ぐな言葉に二人はかなりのショックを受けたらしく、顔色を真っ青にさせるとうな垂れ、そのまま素直に座った。その時ちゃっかりそれぞれクリュウの両隣に腰掛けたのはさすがと言おうか何と言おうか。
　しかし一応ようやく座れたという事でクリュウは安堵の息を漏らした。だが、
「じゃあ私はここに座るぅッ！」
　そう言ってリリアはテーブルの下に潜り込みクリュウの足元から現れるとちゃっかりと彼の膝の上にちょこんと腰掛けた。このリリアの予想を遥かに上回る大暴挙にクリュウとシルフィードは驚き、フィーリアとサクラは殺気を身に纏う。
「り、リリアッ!?　何もこんな狭い所に座らなくても……ッ」
「だって私お兄ちゃんの傍にいたいんだもん。えへへ、お兄ちゃんポカポカだぁ」
　すりすりすり……
「すり寄って来ないでよぉ」
　そうは言うが、やっぱりどこか満更でもないクリュウ。一人っ子の彼にとってこういう妹タイプは案外弱点なのかもしれない。
　一方、リリアに見事にクリュウの膝という未知の聖地を奪われた二人は愕然としている。しかしそれはすぐに怒りへと変わり、顔を真っ赤にさせてプルプルと小刻みに体を震わせる。
「離れなさいリリアッ！　そんな暴挙が許されると思ってるのッ!?」
「……クリュウの膝を返せッ」
　子供相手に本気（マジ）で激昂する二人に半ば呆れるクリュウ。そんな彼の膝の上でリリアはまるで二人を挑発するようにさらに強く

クリュウに抱きつく。
「お兄ちゃん怖いよぉ～ッ」
　誰が見ても明らかに怖がっておらず、むしろこの状況を楽しんでいる感じのリリア。しかし天然というかバカ正直なクリュウは……
「ちょっと二人とも。リリアを怖がらせないでよ」
「く、クリュウ様……ッ」
「……クリュウは、そんな小娘の味方なの？」
「小娘とか言うなよ。ったく、子供相手に何ムキになってるのさ」
　大人げない二人に呆れるクリュウ。そんな彼の膝の上に座って抱きつくリリアはクリュウの言葉にムッとする。
「子供扱いしないでよぉッ。私はもう大人だもんッ！」
「ごめんごめん。今度から気をつけるよ」
　子供扱いされた事に怒るリリアに小さく笑みを浮かべながら謝るクリュウだったが、彼女の頭を優しく撫でている所を見ると全然わかっていないようだ。そして子供扱いを嫌がったリリアもその手を払いのけるなどせず、むしろ喜んで受け入れていた。
　一方、クリュウに見放された形となったフィーリアとサクラはそんな仲の良い二人を見て激しいショックを受けていた。フィーリアに至っては薄っすらと涙まで浮かべて今にも泣き出しそうだ。サクラは無言でリリアを恨めしげに睨みつけている。
　そんなクリュウ達を見詰め、対面にポツンと一人で座るシルフィードは周りの好奇な視線を感じて頬を赤らめながらため息した。
「頼むから、少し静かにしてくれないか？　恥ずかしいだろうが」
　シルフィードの忠告すらも聞こえずにフィーリアとサクラは悔しそうにリリアを睨み、リリアはクリュウにべったり抱きついて甘え、クリュウはそんなリリアの頭を撫で撫でしている。
　シルフィードの何度目かわからないため息が漏れたその時、
「お待たせぇッ。ライザちゃんの特製料理フルコースよッ――って、どうしたの？」
　両手においしそうな料理が並んだトレーを持ったライザが笑顔で登場――したのだが、クリュウ達の異様な雰囲気に困惑したようにシ

ルフィードを見る。
「説明するまでもなく、見たままの状況なのだが」
「……なるほどねぇ」
　ライザはすぐに状況を理解したらしく、小さくため息するとシルフィードを見て苦笑した。
「あなたも大変ね」
「まぁ、こういう点以外では頼れる仲間なのだが」
　シルフィードもそう言って苦笑した。ライザは「そっか……」と小さくつぶやくと、いつもの笑顔を浮かべてパンパンと手を叩きながらクリュウ達の間に入る。
「はいはい。料理持って来たからケンカしないの」
　ライザはそう言って四人の視線を一身に集めると次々に料理をテーブルの上に並べていく。おいしそうな料理や匂いに刺激されたのか、フィーリアとサクラの表情が幾分か和らぐ。それを見てライザは小さくうなずく。
「さぁ、ライザちゃんの特製料理フルコースよ。今回は私のおごりなんだからたくさん食べてよね」
「ありがとうございます」
　クリュウが笑顔でお礼を言うと、ライザは「気にしないで。これはお詫びなんだからさ。ささ食べて食べて」と促す。
　クリュウとサクラは小声で、フィーリアは手を合わせて、リリアは元気良く《いただきます》を済ませて料理を食べ始める。
「これおいしいですッ！」
「そう、良かったわ」
　笑顔で料理を食べるクリュウ達を一瞥し、ライザは振り返ると苦笑しているシルフィードに小さくVサイン。
「万事解決よ」
「さすがと言おうか何と言おうか。君には勝てないな」
「フフフ、ライザお姉さんは何でもできるんです。さぁ、シルフィードも早くしないと料理がなくなっちゃうわよ？」
「そうだな。では私も遠慮なくいただく事にするよ」

そう言ってシルフィードも料理を食べ始める。そんな彼らを見詰めるライザは小さく笑みを浮かべると仕事に戻った。カウンターに戻って料理を受け取り、他の客に配り始める。

天使の営業スマイルを浮かべながら時折クリュウ達の方を見てみると、先程までの険悪な雰囲気はどこへやら。今では笑いながら料理を食べている。リリアとフィーリアも楽しそうに話しているのを見ると、どうやら意気投合したらしい。

ふと、振り返ったシルフィードと目が合った。ライザが微笑むと、彼女も小さく口元に笑みを浮かべた。それはきっと彼女なりのお礼だったのだろう。すぐにクリュウ達に向き直ったシルフィードを一瞥し、ライザは再び酒場の中を華麗に駆け回った。

ドンドルマを出発して数日後、クリュウ達は竜車や船などを乗り継いで無事にイージス村に帰って来た。

荷物を持って船から下りたクリュウは揺れないしっかりとした地面を足を着くと、うーんと背を伸ばして久しぶりの故郷の空気を肺いっぱいに吸い込んだ。

「やっと着いたよぉ」

クリュウが振り返ると、フィーリア、リリア、サクラの順番に三人も船を下りて来た。船の中から「忘れ物はないかぁ？」とシルフィードが確認の声を上げた。フィーリアは「たぶん大丈夫だと思います」と答える。

「うわぁ、高いねぇッ」

リリアは初めて見るイージス村こと彼女の姉が住む村を見上げた。相変わらず鉄壁の断崖絶壁に建っているイージス村は初めて見る人にとっては珍しく見えるらしい。

「ここから結構階段を上るけど、リリア大丈夫？」

「うーん、でもこれからはこの階段に慣れないと村の外と中を行き来できないでしょ？」

「そうだね」

「だから私がんばるッ。早くこの階段に慣れなくちゃいけないもんッ」

「リリアはいい子だね。でも本当に大丈夫？」
「大丈夫だよぉ……あ、でもどうしても無理だったら、お兄ちゃんおんぶしてくれる？」
うるうるとした瞳でクリュウを見詰めて訴えるリリア。クリュウはそんな彼女の頭を優しく撫でると小さく微笑んだ。
「もちろんいいよ。だから無理しないで、辛くなったらすぐに言うんだよ」
「うんッ」
仲のいい兄妹のように笑い合う二人を見て、やっぱり納得できないフィーリアとサクラ。道中は基本的に仲良くしていたが、クリュウを巡ってケンカになった事は幾度もある。そんな二人を止めて毎回仲裁に入るシルフィードは大変だ。
「うぅ、クリュウ様のおんぶ……」
「……うらやましい」
文字通り指をくわえる事しかできないフィーリアとサクラ。そんな二人の内心など知らぬクリュウはリリアと楽しげに会話を続けている。と、
「おいリリア。これは君の物ではないか？」
最終確認を終えて船から出て来たシルフィードはそう言ってリリアに手渡したのはマフラーだ。
「あ、ありがとうお姉ちゃん」
「母君の手編みなのだろう？　大切にしなくてはダメだぞ」
「うんッ」
道中にイージス村の地域は寒いからと彼女の母親が編んでくれたマフラーだと嬉しそうにみんなに見せていたリリア。どうやらそのまますっかり忘れていたらしい。危ない危ない。
「では行くぞ。さっさと家に戻ってゆっくりしたいからな」
「そうだね。じゃあ行こうリリア」
「うんッ」
歩き出すクリュウの手を、リリアはギュッと握った。クリュウも振り返って小さく笑みを浮かべるとその小さな細い手を握り返す。

二人並んで階段のある洞窟の中に入って行く。それを見てフィーリアとサクラが慌てて追い駆け、シルフィードは船主に礼を言ってから苦笑しながらゆっくりと四人の後を追って歩き出した。
「着いたよリリア」
「うわぁッ」
クリュウの背中にしがみ付きながらリリアは目の前に広がるイージス村を見て瞳をキラキラと輝かせる。
そんな二人の後ろではクリュウにおんぶされているリリアをうらやましそうに見詰めるフィーリアとサクラ、そんな二人に苦笑しながらもチラチラとリリアを見るシルフィードがいる。
目の前に広がるイージス村はクリュウがハンターとして初めて帰って来た時に比べて少し大きくなり、家や設備も増えていた。
地面をしっかりと固めてできた道に木造の家々が立ち並ぶ。洗濯物を干す女性や木を切り出す青年、鬼ごっこをして遊ぶ子供達。住人も確実に増えている。
村で一番高い建造物は一ヶ月前に起きたリオレウスのリフェル森丘襲来の後に建てられた矢倉。当番制で村の周りを監視して有事の際は鐘を鳴らして住民達を避難させるものだ。
村の中数ヶ所には地面を掘って作られた簡易防竜壕が備えられている。これによって子供や女性を優先的に避難させる事ができるようになった。村長は住民全員が避難できるまで防竜壕を作ると豪語していたが、一ヶ月でこれだけできれば大したものだ。
他にも村長の意向で月に一回避難訓練や消火訓練などが行われる事になった。これも村を守る為の措置の一つだ。
辺境の村としては有事に対しての備えが充実している。住民の安全安心が第一という村長の気持ちが表れているかのようだ。
本当はドンドルマなどの大都市に備え付けられているバリスタという火薬を使って鋼鉄の矢を発射する固定巨大弩を配備したかったが、予算が足りなくて残念と彼は苦笑していた。もちろんそんな物は破格の値段なので当然こんな小さな村には配備できないが、彼は真剣だ。

村長の村を想う気持ちは住民皆がわかっている事。あのリオレウス襲来以降、村の住人達は今まで以上に団結していた。
クリュウ達もその団結の輪に加わり、このすばらしい故郷を守る為に日々努力を重ねている。
クリュウ達が戻ると、村人達は口々に「お帰り」とか「お疲れ様」と労いの言葉を送ってくれる。その一つ一つが彼らの疲れを癒してくれている。
「あら、クリュウ君。そのかわいい子は誰なの？」
クリュウの家の裏に住むふっくらとした体格に優しげな笑顔が似合う女性がリリアを見て尋ねて来た。
「あ、この子はリリア・プリンストン。この村にいるお姉さんを訪ねて来たんですよ」
「あらまぁ、それは大変だったでしょ？」
「ううん。全然大丈夫だよぉ。途中からはお兄ちゃんがずっと一緒にいてくれたし」
「あらあら、クリュウ君お兄ちゃんだって。仲がいいのねぇ」
「まぁ、僕も妹ができたみたいでちょっと嬉しいです」
「そっか、クリュウ君は一人っ子だもんねぇ」
クリュウの腰にしがみ付いて微笑むリリアの頭を撫でながら、クリュウは村人達との会話を楽しむ。一方、フィーリアとサクラに声を掛けようとした村人達は二人の不機嫌そうな雰囲気に気圧されて近づけずにいた。
「ところでリリア。訊き忘れていたが君の姉は何という名前なのだ？」
一人冷静なシルフィードの問いにリリアは振り返るとニパァと屈託のない笑みを浮かべる。
「アシュアお姉ちゃんだよ」
「――おぉ、何や盛り上がっとるなぁ」
その声に振り返ると、こちらもまたニパァと屈託のない笑みを浮かべたアシュアが立っていた。腰に下げた小さなハンマーは彼女曰く鍛冶師の魂なので風呂に入る以外は手放さないそうだ。

クリュウが驚きと共に彼女に問おうとした刹那、
「アシュアお姉ちゃんッ！」
今までずっとクリュウにしがみ付いていたリリアがピョンと離れると一目散にアシュアに駆け寄り勢い良く抱き付いた。抱き付かれたアシュアは目を丸くする。
「な、何やッ!?　って、あんたリリアやないかッ！　何でまたクリュウ君達とおるねん」
「えへへ、お兄ちゃん達に送ってもらったんだ」
「お兄ちゃん？」
アシュアが怪訝そうにクリュウ達を見ると、クリュウが小さく苦笑いしていた。それを見てアシュアは納得したようにうなずく。
「なるほどなぁ。《お兄ちゃん》ってのはクリュウ君の事か。リリアが世話になったみたいやなぁ。感謝するで」
「お礼なんていりませんよ――それより、リリアのお姉さんってアシュアさんの事なんですか？」
見た限りでは髪の色も瞳の色も二人は違う。血の繋がった姉妹には見えない。するとそんなクリュウの疑問に気づいたアシュアは小さく苦笑した。
「リリアはうちの本当の妹やのうて妹みたいな従姉妹や。似てへんのはそういう理由や」
「あ、従姉妹なんですか」
アシュアの説明にクリュウは納得した。しかしそう言われると確かに二人の屈託のない笑顔はどこか似ている気がした。
「という事は、リリアはアシュアを訪ねて来たのか」
「せや。ちょいと事情があって一緒に住む事になったんや」
「って事は、リリアはこれからこの村に住むって事ですか？」
「そうやで。仲良くしてあげてぇな」
「それはもう喜んで」
クリュウが笑顔で答えるとアシュアに抱きつきながらリリアが満面の笑みを浮かべて「よろしくねお兄ちゃんッ！」と言った。
リリアにクリュウが笑みを向けた時、ふとアシュアは何かを思い出

したように自分に抱き付くリリアを見る。
「せやけど、あんたが来るのは一週間後やなかったか？　何でこないに早く、それもキャラバン隊やのうてクリュウ君達と来たんや？」
　アシュアの疑問にはシルフィードが答えた。彼女がいたキャラバン隊を自分達が護衛していた事、イーオスの大群に襲われて予定が狂った為にイージス村経由を中止にした事、そして村へ帰るついでに村へ向かっていた彼女を一緒に連れて来た事などを説明した。全ての説明が終わると、アシュアは納得したようにうなずいた。
「なるほどなぁ。そらえらい大変やったなぁ。ご苦労さんや」
「いえ、いつもの事ですから」
　クリュウは小さく笑みを浮かべて答えると、アシュアの腰に抱きついてこちらをじっと見詰めるリリアを一瞥し、再びアシュアを見る。
「じゃあ僕らは一度家に戻ります」
「そっか。ゆっくり休みぃや」
「はい。じゃあリリアもまた後でね」
「うんッ。お兄ちゃんありがとうッ」
　リリアと笑顔で別れた一行はクリュウの家ことみんなの自宅を目指して歩き出す。すると、しばらくしてからギュッと両腕を引かれる感触がしてクリュウは振り返った。
「って、フィーリアにサクラ。二人ともどうしたの？」
「むぅ……」
「……むぅ」
　二人はなぜかしっかりとクリュウの腕にしがみ付いて離れようとはしなかった。じっとクリュウを見詰める瞳はどちらもどこかふて腐れたような感じだ。
「えっと……」
「クリュウ様のバカ……」
「……クリュウのバカ」
　二人は一斉にプイッとそっぽを向いてしまう。それぞれに両腕を封じられているのに肝心の二人にそっぽを向かれたクリュウは困ったようにすぐ後ろに立つシルフィードを見る。

「あ、あのシルフィ……」
「まぁ、今くらいは我慢してやったらどうだ？」
「べ、別に構わないけどさ。その、シルフィ」
「うん？　何だ？」
「――何で君も僕の手を握ってるの？」
　見ると、フィーリアが抱きついている右手をシルフィードがちょこんと握っていた。シルフィードはボンッと顔を真っ赤にすると慌てて手を引っ込めた。
「あ、いや、そのぉ……ッ！　こ、これはだな……ッ！」
　顔を真っ赤にしながら手をブンブンと激しく振って常の冷静さを失うシルフィード。クリュウはそんな彼女を不思議そうに見詰める。
「と、とりあえず早く家に戻ろうッ！　風呂にも入りたいしなッ！」
「そ、そうだね。そうしよっか」
　無理やり話題を変えたシルフィードを訝しがりながらも、クリュウは納得して二人を両腕にしがみ付かせたまま歩き出す。
「あ、あのさ。歩きづらいからちょっと離れてくれるかな？」
「嫌です……」
「……嫌」
「だから、何でそういう変な部分だけは意見が合うのさ」
　クリュウは小さく苦笑いした。しがみ付く二人に頬を赤らめて照れながらも振り払う事はなくゆっくりと歩くクリュウ。その両腕にそれぞれしがみ付くフィーリアとサクラはクリュウに久しぶりに甘えられてご機嫌そう。一方、そんな二人を見てシルフィードがどこか悲しげな表情を浮かべていた事は誰も知らない。
　家に着いた一行はそれぞれ順番に風呂に入って汗を流した。家主であるのにクリュウは自主的に一番最後に入る事になった。女の子の前に入るのは何かと抵抗があるのだ。
　体を洗ってからゆっくりと疲労回復の効果がある薬草を溶かした白い湯船に浸かるクリュウはその場でうーんと背を伸ばしてみる。そうすると体中の疲れが一気に抜けていくような気がした。
「生き返るぅ～」

定番のセリフを言って肩まで湯につかる。そのまま口を湯船に入れて息を吐くとブクブクと泡が沸き立った。自分でも子供っぽいなぁとは思いながらもこれが彼の癖であった。
「やっぱりお風呂はいいなぁ」
最後に風呂に入ったのはドンドルマでの宿。それから一週間近く入っていないのだ。一日一回水に濡らした手ぬぐいで体を拭く事はあっても、やっぱりしっかりと風呂に入るのは格別だ。
パシャパシャとお湯を顔に浴びせて顔を拭く。じーんと温まる心地良い熱さがたまらない。
気持ち良くてそのままぼーっと湯に浸かっていると、扉の向こうで何か変な音がした。
「え？　誰かいるの？」
クリュウが声を掛けた刹那、扉がゆっくりと開いた。
「……く、クリュウ？」
「さ、サクラぁッ!?　な、何で何でどうしたのッ!?」
突然風呂場に入って来たサクラ。それも、バスタオル一枚という無防備過ぎるまでの格好――風呂に入る時も眼帯は外さないらしい――でのご登場だ。クリュウは慌てて湯船に深く浸かって背を向ける。
「な、何でッ!?　サクラは一番に風呂に入ったじゃないかッ！」
いきなりの事に完全に混乱状態に陥っているクリュウ。そんな彼に背を向けられているサクラは頬をほんのりと赤らめながらクリュウに近づく。
「……クリュウ、こっち向いて」
「向ける訳ないでしょッ!?」
必死に目を閉じて何も見ていませんとアピールするクリュウ。そんな彼にサクラは少々照れながら口を開く。
「……背中、流してあげる」
「い、いいってッ！　もう体は洗ったしッ！　と、とにかく出てってよッ！」
「……そんな、クリュウは私の事嫌い？」
「そ、そういう事じゃなくてぇッ！」

背後で明らかにサクラが落ち込んでいる雰囲気を感じ取ってはいても決して振り返らないクリュウ。それは彼なりの配慮のつもりであったが、サクラにとってはさらにショックだったらしい。
「……クリュウ、何でこっちを見てくれないの？」
「恥ずかしいからだよッ！」
「……構わない。私はクリュウにだったら見られても大丈夫」
「僕が構うのッ！　僕が大丈夫じゃないのッ！」
そんな感じでクリュウがある意味限界に達しようとした時、バァンッと扉が勢い良く開いた――その時、クリュウは嫌な予感しかしなかった。
「クリュウ様ッ！　どうされましたか――って、なッ、ななななな何やってるんですかぁッ!?」
風呂場に入って来たフィーリアは目の前の光景にこれ以上ないってくらいに顔を真っ赤にして絶句する。そんな彼女の声を背中越しに聴いたクリュウはがっくりとうな垂れ、サクラは不機嫌そうに振り返って彼女を睨む。
「……邪魔。早く出てって」
「サクラ様ぁッ！　あなたは一体何をしているんですかぁッ！」
「……クリュウの背中を流そうとしているだけ」
「な、何を考えているんですかあなたはあああぁぁぁッ！」
顔を真っ赤にさせて怒鳴るフィーリアはズカズカと風呂場に乗り込んで来る。クリュウは内心彼女にも出て行ってくれと叫びたかったが、今叫ぶと明らかに自分にまで飛び火して来そうだと思って無言を貫いている。
「あ、あなたには恥じらいというものはないんですかッ!?」
熟れたリンゴよりもさらに真っ赤な顔で怒鳴るフィーリアだったが、ツンドラ気候如く広陵で凍てついた心を持つサクラは冷たくそれを睨み返す。
「……クリュウに対してなら、そんな小さなプライド捨ててても構わない」
「だから僕が構うんだってばッ！　そんな大事なものを簡単に捨てな

いでよッ！」
「クリュウ様の仰るとおりですッ！　殿方の前で肌を晒すなんて正気の沙汰じゃありませんよッ！　と、とにかく早く服を着てくださいッ！」
　フィーリアは慌てて脱衣所にサクラを引っ張り出そうとするが、サクラは足を踏ん張っててこでも動こうとしない。
　完全に拮抗していてその場から動かない二人に背を向けたまま長時間湯に浸かっているせいで軽くのぼせてきたクリュウが疲れたようにため息した。なぜ疲れを取る為に入った風呂で疲れなければならないのか。
「一体風呂場で何を騒いで――って、な、何をやっているんだッ!?」
　するとそこへ騒ぐ三人を心配してシルフィードがやって来た。しかし目の前の光景に顔を真っ赤にして固まってしまう。
「シルフィード様ッ！　サクラ様を風呂場から引き剥がすのを手伝ってくださいッ！」
「……シルフィード、この女を引き離して」
　二人それぞれに助けを求められるシルフィードは困ったように赤くなった頬を指で掻くと、ふと背を向けたまま背を丸めているクリュウを見る。その後姿を見て小さく苦笑すると脱衣所のカゴからタオルを一掴み風呂場に入る。そして――
「――大丈夫か？　ほら、早くこれを巻いて風呂を出ろ」
　そう言ってシルフィードはクリュウにタオルを差し出した。振り返ったクリュウの顔はお湯とは別の液体でびっしょりと濡れ、恥ずかしさとはまた違った意味で真っ赤に染まっていた。
「あ、ありがとう……」
　シルフィードからタオルを受け取り小さくつぶやくように礼を言ってクリュウはそれを湯船の中で腰に巻く。そんな彼を一瞥しシルフィードは未だ膠着状態の二人に呆れたように声を掛ける。
「二人ともその辺にしておけ。クリュウがのぼせてしまうぞ」
　クリュウがいくら言っても聞かなかった二人だったが、その言葉には鋭く反応した。

「ほ、本当ですかッ!? ど、どうしましょうッ!?」
「……じ、人工呼吸か？」
「いや、普通にもう風呂から解放してやるだけで十分だ」
慌てまくる二人を見て小さく苦笑しながらシルフィードはクリュウに手を差し伸べた。それを見たクリュウはすぐにその意図を察したが、小さく首を横に振った。
「大丈夫だよ。一人で上がれるからさ。とりあえず出て行ってくれる？」
クリュウの言葉に「それもそうだな」とシルフィードは納得すると風呂場から去った。遅れてフィーリアとサクラもこれ以上クリュウの体調を悪化させない為にも急いで出て行った。
騒がしかった風呂場に改めて静けさが戻る。クリュウは一度小さくため息するとゆっくりと湯船から上がる。その時、ふと鏡で自分の背中を見た。
「……これの事をあまり追求されたくないしね」
そう言って苦笑する彼の背中、女性でも憧れてしまうようなきめ細やかな白い肌に走った一筋の古い傷跡。彼はこの傷を、見せたら絶対心配するあの三人にはずっと隠している。もう治ったものなので問題はないが、あの三人の事だ。いらぬ心配は与えたくない。この傷を知っている者は、この村には一人もいない。
脱衣所に出たクリュウはそのままバスタオルで体を拭うと用意してあった私服に着替えて、のぼせてしまったかもしれない自分を心配しているであろう三人の下へ向かった。
その夜、久しぶりに家でくつろぐクリュウ達。夕方には夕食を作りにエレナが来たのだが、早速リリアの事が伝わっておりかなり深くまで追求された。幸い暴行はされなかったが、冷たい瞳でしばらく睨まれたのはかなり効いた。
夕食も食べ終えてクリュウとフィーリア、エレナの三人で会話を楽しむ。こういう時無口なサクラとクールなシルフィードはなかなか入りづらいもので、自然とこういう組み合わせになってしまうのだ。
そこへ、イージス村では珍しくこんな時間に来客者が現れた。一応

家主であるクリュウが立ち上がってドアを開ける。
「はい。誰ですか――」
「お兄ちゃぁんッ！」
　開けた瞬間に何かに強烈なタックルを炸裂させられた。よろけるクリュウの腰ですりすりと彼に頬をすり付ける少女を見てクリュウは小さく苦笑した。
「リリア。ドアを開けた途端にタックルする奴があるか」
「えへへ～、ごめんなさ～い」
　クリュウに抱きついて嬉しそうに頬ずりするリリア。頭を撫でてやると、嬉しそうに目を細めて甘えてくる。さながら子猫のような感じだ。
「すっかり仲良しなんやなぁ。ちょっとうち焼いてまうで？」
　その声に視線を上げると、ドアの陰からニッコリと笑みを浮かべたアシュアが現れた。いつものような煤（すす）や鉄粉などで汚れた作業着ではなく動きやすい私服姿だ。
「どうしたんですかアシュアさん。こんな時間に」
　ドンドルマなら問題ないが、イージス村のような小さな村ではもう真夜中のような扱いの時間帯。こんな時間にわざわざやって来る理由は――
「リリアがどうしてもあんたと一緒にいたい言うて聞かんのや。せやからこうしてお邪魔しに来たっちゅー訳や」
「そうだったんですか。リリア、あまりアシュアさんを困らせちゃダメだよ」
「は～い」
　わかっているのかわかっていないのか。リリアはクリュウに甘え続けたままだ。そんな彼女を一瞥し、クリュウとアシュアは顔を見合わせて苦笑した。
「クリュウ様ぁ？　どちら様でしたか――って、リリアちゃんッ!?　な、何でクリュウ様に抱きついているんですかッ!?」
　そこへクリュウが戻って来ない事を心配してフィーリアがやって来た。しかしすぐに彼に抱き付くリリアを見て表情が険しくなる。

「そないに怖い顔しなさんな。女の子は笑顔が一番やで？」
「あ、アシュアさん？　こ、こんばんわです。え？　い、一体どうしたんですか？」
「なぁに。ちょっと遊びに来ただけや。クリュウ君。そろそろ上がらせてもらってもええやろか？」
「あ、はい。どうぞどうぞ」
　二人は互いに「お邪魔しま～す」「お邪魔するで～」とあいさつをして家に入った。クリュウに案内されて通されたのはリビング。そこにはエレナ、サクラ、シルフィードが待っていた。
「アシュア？　一体何の用だ？」
「……さっきから思っとったけど、うちは何か用がないと来ちゃあかんのか？」
　少し寂しそうに言うアシュアに慌ててクリュウが「そんな事ないですよッ！　いつでも大歓迎ですってッ！」とフォローを入れる。そんな彼の腰に抱きついて甘えるリリアをフィーリアとサクラが、抱きつかれているのに何の抵抗もしないクリュウをエレナが不機嫌そうに睨んでいる。
　そんなこんなで男一人に対して女七人という恐ろしくバランスの悪い総勢八人が村でも比較的大きなクリュウ家に集まった。
　エレナ特製の焼きたてクッキーを囲んでの談笑。なかなか楽しいひと時だ。
「はい、お兄ちゃんあ～ん」
「い、いいって。自分で食べられるから」
「リリアちゃん。お行儀が悪いです。もっとクリュウ様から離れてください」
「……離れろ小娘」
「子供相手に何をムキになっているのだ君達は」
「あんた、今クリュウ君に向けているクッキーは何の意味があるんや？」
「バカクリュウ。あんたはそういう趣味の持ち主だったの？」
「な、何で人を道端に落ちているゴミを見るような目で見るのッ!?」

「そ、そんな……ッ！」
「……クリュウ、かわいそう」
「何か過去に、辛い失恋でもした事があるのか？　私でよければ相談に乗るぞ」
「そっちの三人はなぜそんな哀れむような目で僕を見るのッ!?」
「うーん、クリュウ君やったらリリアを任せてもええかもしれへんな」
「えへへ、応援してねお姉ちゃんッ！」
「そっちはそっちで何勝手に僕を無視した未来予想図を立ててるんですかッ！」
　すっかり女子陣営に振り回されてツッコミを連発させるクリュウは疲れたようにため息を吐くと浮いていた腰を落とす。するとそんな彼に紅茶が差し出された。カップを握る白くて細い手を追うと、その先にはニッコリと笑みを浮かべたフィーリア。
「お茶淹れたんですけど、クリュウ様もいかがですか？」
「ありがとう、もらうよ」
　フィーリアの手からティーカップを受け取ると、それを口に含む。ちょっと熱いが、その熱さが紅茶の味を挽きたてている。
「どうですか？　熱くないですか？」
「うん。ちょうどいいくらい」
「そうですかぁ」
　フィーリアは安心したように笑みを浮かべると、そっと彼の隣に腰掛けた。運良くサクラは用があると言ってなぜかエレナを連れて部屋に戻っているし、リリアは久しぶりに会う従姉妹のアシュアにベッタリ。シルフィードは一人フィーリアが淹れてくれた紅茶を片手に読書をしている。
　そんな絶好の機会にクリュウの隣に座って彼の横顔を嬉しそうに見詰めるフィーリア。その視線に気づいたクリュウは小さく苦笑いする。
「ど、どうしたの？　僕の顔に何か付いてるの？」
「ふぇッ!?　い、いえ何でもありませんよッ！」
　突然話し掛けられたフィーリアは顔を真っ赤にさせるとあわあわ

と両手を激しく横に振る。そんな彼女に不思議そうに首を傾げると、クリュウは再び紅茶を飲む。
「あ、あのクリュウ様。肩はもう大丈夫なんですか？」
「え？　あ、うん。だいぶ良くなったよ。リリアの薬ってすごく効くね」
「リリアちゃんの実家は診療所だそうで、その娘であるリリアちゃんはまだ子供なのに大変優秀な調薬師だそうですよ」
調薬師とはその名の通り薬を調合する職人の事を言う。まぁ、簡単に言うと薬の調合に長けた医者である。様々な種類の薬草や素材を使って薬を作って治療を行う彼らは多くの人々からハンターと並ぶくらいに尊敬されている。
ハンターがモンスターから守ってくれる存在なら、調薬師は怪我や病気から救い出してくれる存在だ。
ただし、ギルドでは専門の調薬師が素材の調合などを仕切っているので、それ以外で調合された物はご法度。簡単に言うと、リリアが作る薬は狩場では使えない。まぁ、大人の事情ってやつだ。
「へぇ、リリアってすごいんだね」
「大怪我などは無理ですけど、日頃の簡単な病気なら医者のいないこのイージス村ではきっと皆さんから必要とされるでしょうね」
「だね。風邪を引いた時なんか隣町まで行かないと薬とか手に入らなかったしね」
「それがリリアちゃんがいる事でかなり改善されるでしょうね」
二人は振り返ってアシュアと楽しげに会話をするリリアを見る。まだ子供なのに、彼女はすごい子だ。
「私達も、負けてはいられませんね」
「……そうだね。僕達はハンターとして、この村を守らないと」
「はい」
横で嬉しそうに微笑むフィーリアを見て、クリュウは彼女達と一緒なら絶対に守り抜ける、そう感じた。何たって、頼りになる心強い仲間達だから。
紅茶を飲み干し一息つくクリュウ。すると、そんな彼にフィーリア

がおずおずと声を掛けてきた。
「あ、あのクリュウ様。散歩にでも行きませんか？」
「散歩かぁ。いいね、行こう行こう」
フィーリアの提案に喜んでうなずくクリュウ。しかし言い出しっぺのフィーリアの喜びように比べたらかなり小さい。それほど、フィーリアは嬉しいのだろう。
「じゃ、じゃあ一緒に行きましょう！」
「うん、行こうか」
そう言ってクリュウは無意識でフィーリアの手を握った。その瞬間、ボンッとフィーリアの顔が真っ赤に染まる。表情はもう今にもとろけてしまいそうなくらい幸せな笑み。嬉しくて嬉しくて仕方がないのだ。
「あ、あのクリュウ様――」
「……抜け駆け禁止」
その冷静すぎる声にフィーリアの顔から笑みが消えた。振り返ると、そこにはムスッとしたような表情を浮かべるサクラ。その後ろには同じような表情をしたリリアと仁王立ちしたエレナが立っている。
クリュウの顔からも、笑顔が消えた。
「お兄ちゃん、どこへ行くのッ!?」
「え、えっとちょっと散歩にと思って、フィーリアと」
「ねぇクリュウ。何でフィーリアと手を繋いでるのか、詳しい説明をしてもらえないかしら？」
「そ、それは構わないけど……何で準備体操してるの？」
「――クリュウ、覚悟しておきなさいよ」
「あ、あはははは……僕、死ぬのかな？」
直後、美しい月明かりに照らされる静かなイージス村に少年の悲鳴が響き渡ったのは言うまでもない。

第８０話　たまには農場へ行ってみよう

リリアがイージス村に来てから一週間後、アシュアの工房の横にある離れの家が改造されてリリアが経営する薬屋が生まれた。風邪薬や傷薬などの常備薬から細かい種類の薬まで様々な種類の薬の他、簡単な道具類なども売られる道具屋も兼任した店だ。

道具屋がないイージス村にとっては待望の道具屋。まだ始めたばかりなので品揃えが悪くても客は訪れ、何よりリリアの一生懸命な姿に誰もが彼女を応援しようと通いつめる様になっていた。

おかげでリリアの店はそれなりに繁盛している。時折経営の先輩であるエレナに色々と教わったりしている姿を見ると、がんばっているんだなぁとつい頬が緩んでしまう――そのたびに、エレナの跳び蹴りを受けているせいかクリュウもすっかりリリアの店の常連客になってしまった。

そんなある日、村長が君達に見せたいものがあるとクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人を呼び出した。そしてもちろんエレナとリリアも一緒だ。

村長は鼻歌を歌いながらスキップ気味で先頭を歩く。そんな彼の背中を追いながら歩くクリュウ達。かわいい女の子達に囲まれながら歩くクリュウにフィーリアがそっと声を掛けた。

「一体何なんでしょう？　村長が私達に見せたいものって」

「さぁ？　見当も付かないな」

「何か、すごく気になりますね」

「まぁ、着けばわかるからさ、今は村長について行こうよ」

「そうですね」

クリュウの言葉にフィーリアはうなずくと彼から離れた。すでに右側をサクラ、左側をリリアに取られてしまったフィーリアは渋々と下がってシルフィードの横に並ぶとため息した。

「……私の横は、そんなに嫌なのか？」

「あ、いえ、そういう意味じゃないんですが……」

苦笑いするフィーリアにシルフィードは多少なりとも傷つきなが

らクリュウ達の後に続く。
　盛んに話し掛けてくるリリアに相槌を打ちながら、クリュウはふと右側を歩くサクラを見た。左目に眼帯をしているサクラはこの位置からだと自分の姿は見えてない。最初こそは左側でいつも彼を視界に捉えられるような位置だったが、最近では彼の利き腕をキープするのが彼女の癖になっている。本人曰くクリュウを目ではなく心で感じたいらしい。
「サクラはいつもその眼帯だけど、他に持ってないの？」
「……眼帯をオシャレにする必要はない。だから、これと同じタイプが数枚程度」
「ふーん、そういえばサクラって寝る時も眼帯してるよね」
「……誰かが傍にいる時は眼帯をしながら眠る。一人の時は外してる」
「そっか。あまり傷跡を見せたくないんだっけ」
「……（コクリ）」
　子供の頃、雪山で正体不明のモンスターに襲われて両親だけでなく左目をも失ったサクラ。今もその黒い眼帯の奥にはその時の傷跡が残っている。
　ふと、クリュウは自分の背中に触れた――隠したい傷跡は、自分にだってある。と言ってもサクラのように嫌な思い出の印ではない。友を守った、栄誉ある負傷ってやつだ。
「むぅ、お兄ちゃん私の話聞いてるのぉッ!?」
　すっかりクリュウに見捨てられた形となったリリアは頬を膨らませてクリュウの腕を激しく揺らす。
「ご、ごめんごめん」
「フンだ。お兄ちゃんのバァカッ」
　プイッとすっかりご機嫌斜めなリリア。クリュウは慌ててリリアのご機嫌取りに奔走する事になった。
　そんな感じでわいわいと騒ぎながら一行が辿り着いたのは村から少し離れた小さな平地。傍には頂上にある生活用水の要となっている湖から流れ出した水が滝となって注ぎ込む川が流れ、反対側には緑

に覆われた崖が多いイージス村の崖とは違った灰色の岩壁が聳（そび）え立つ。
村長はフムと一度うなずき平地を見渡す。よく見ると小さな畑や短い桟橋などもある。村長はそれらを見回し、クリュウ達に向き直るとバッと両手を広げていつもの人懐っこい笑みを全開で炸裂させた。
「君達に見せたかったのはここさッ！」
村長の言葉にクリュウは首を傾げた。確かにきれいな景色な場所だが、一体ここに何があるというのだろうか。
すると、クリュウの疑問を感じ取ったのか村長はその場に仁王立ちしながらフムとうなずく。
「何を隠そう――」
「……隠す必要はない。さっさと言え」
「……サクラちゃん。君はもう少し段取りというものをだね」
「……単刀直入に言え。じゃないと帰る」
クリュウ以外にはものすごく冷たいサクラの言葉に村長はやれやれをいった具合に肩を竦（すく）ませると、苦笑いするクリュウに向き直る。
「実はここは村が保有する農地。正確には第七農地って言う場所なんだけど、ここを借りていた人がちょっとした都合で村を出て行ってしまってね、空地になっちゃったんだよ。そこでこの余った土地を君達に譲ろうかと思って」
村長の提案に、クリュウ達は目を丸くする。
「ぼ、僕達がこの農場を管理するって事ですかッ？」
「うん。どうも他の村のハンターはこういう農地を使って薬草やその他の素材を育てたりして生計を立てているんだって。だから、君達にも必要かなぁって思って」
「な、なるほど」
クリュウは納得したようにうなずく。農地を有効活用して生活しているハンターというのは以前から知っていた。何かと物入りなハンターという職業。少しでも節約する為にも農地というのはいい手段だ。

「でも、いいんですか？　僕らが勝手に使ってしまっても」
「構わないよ。他にも農場は余ってるしね。それに、クリュウ君達にはいつも苦労をかけているからね。財政難で援助金は出せないけど、少しでもお礼をしたいんだよ。だから、自由に使ってくれたまえ」
そう言って村長はフニャっと屈託のない笑みを浮かべた。
その後、村長は施設の簡単な説明を終えると仕事があると言って村へ戻ってしまった。残されたクリュウ達は早速施設のチェックを始めた。
クリュウはまず岩壁に空いた亀裂を見詰めていた。ここは鉱石などの採掘場で、隣に置いてあるピッケルを使って採掘ができるらしい。村長の話だとこの鉱脈は上に行くほど上質な鉱石が取れるらしく、この穴からは鉄鉱石やマカライト鉱石などが手に入るらしい。
「上の鉱脈と繋げるには、ここら辺にハシゴを作るのがいいと思う？」
「そうですねぇ。でもまずはこの亀裂から本当に鉱石が取れるかチェックしないといけませんね」
そう言ってフィーリアはピッケルを構えると、体全体を使って一気に振り下ろす。その一撃は的確に亀裂に炸裂し、キンッという鋭い音と共に岩が砕けて辺りに飛び散った。クリュウは屈んで散らばった石を確認する。
「えっと……」
無数に散らばる石ころの中にそれとは違う石が落ちていた。きれいな黒色の鉄鉱石と美しい青色のマカライト鉱石だ。
「どうやら本当に採掘できるみたいだね」
「そのようですね」
フィーリアはピッケルを戻すと横に置いてある麻袋を手に取りクリュウと一緒に辺りに散らばっている鉱石を集める。とりあえず一通り集め終えたクリュウはフィーリアと共に農場の中央にある畑に向かう。するとそこにはすでにリリアとシルフィードがいる。
「おぉクリュウ。採掘場はどうだった？」
二人に気づいたシルフィードが問いかけてくる。クリュウは「上々だね」と言って鉱石が入った麻袋を見せてみる。シルフィードは「そ

れは良かったな」と言って小さく笑みを浮かべた。
「それで、畑の方はどうなの？」
「うむ。今リリアが土の具合を調べている所だ。私では土を見てもそれが良い土なのか悪い土なのか判別できないからな」
　三人は畑の畝（うね）に腰掛けて土をいじっているリリアを見る。彼女は自分で薬草を育てていた経験があるのでクリュウ達にはわからない土の良し悪しがわかるらしく、真剣な顔で土を眺めたり指でこすってみたりと吟味している。
　確認が終わったのか、リリアは立ち上がると畝を一瞥してクリュウ達に向き直り、満面の笑みを浮かべた。
「うん。いい土だよこれ。種をまいてちゃんと世話すればきっと薬草やカラの実とかたくさんできるよ」
「そっか。ありがとうリリア」
　クリュウにお礼を言われ、リリアは嬉しそうに頬を赤らめながらはにかむ。
「えへへ～。あ、でも肥料を足せばもっともっといい土になるよ」
「肥料ってどういうの？」
「うーん、簡単に言うと動物のフン……モンスターのフンとか飛竜のフンとかだよ」
　笑顔で言うリリアに対し、フィーリアは明らかに顔色を悪くする。クリュウとシルフィードもあまりいい気はしない。
「そ、そんな物が必要なの？」
「まぁ、動物の排泄物には処理し切れなかった栄養が豊富にあるというのは納得できるが……」
「あまり関わりたくない代物だね」
　女の子であるフィーリアとシルフィードはもちろん、クリュウでさえあまりフンを集めたいという気にはならない。狩場ではたまに見かけるが、いつも無視していたものだ。
　一方、畑仕事の経験があるリリアは呆れたように手を腰に当ててため息した。
「もう、畑仕事ならそれくらい当然だよ。それに、ちゃんと見返りだっ

てあるんだから損なんてないんだよ」
「そうは言ってもなぁ。僕達村を空ける機会が多いし、毎日水をあげたりとかはちょっと厳しいしなぁ」
　そう、クリュウ達は狩りに向かえば平気で一週間とか二週間帰って来ない事がある。毎日のように水をあげなくてはならない畑仕事と両立させる事は不可能なのだ。すると、
「じゃあこの畑私に頂戴ッ！　ちょうど薬草を育成する畑がほしかった所だし。お兄ちゃん達は畑使わないんでしょ？　だったら私がもらっちゃってもいいよねッ!?」
　クリュウはシルフィードとフィーリアを見る。するとどちらもコクリとうなずいた。それを見てクリュウもうなずき返すとリリアに向き直る。
「うん。じゃあ畑はリリアに任せるよ」
　クリュウの言葉にリリアの表情がパァッと華やぐ。
「ほんとッ!?　ありがとうお兄ちゃんッ！」
　大喜びするリリアはピョンと跳ねるとクリュウに抱き付く。その瞬間フィーリアとシルフィードの表情が幾分か険しくなる。
「わかったから、抱きつかないでよ」
「えへへ～、お兄ちゃん大好きぃ～」
　すりすりすりと頬ずりして甘えてくるリリアに、あまり強く言えないクリュウ。もし彼に本当に妹がいたらこんな感じのシスコンになっていたかもしれない。
「クリュウ様はリリアちゃんに甘過ぎですッ」
「そ、そっかな？　っていうか何で怒ってるのさ」
「知らないですッ」
　プイッとそっぽを向いてしまうフィーリア。クリュウは訳がわからずに困惑するばかりで助けを求めるようにシルフィードを見るが、彼女はいつの間にか虫が採れる草むらに移動していた。
「えっと……」
「あ、お兄ちゃんッ！　向こうで釣りができるみたいだよッ！　行ってみようよッ！」

「え？　あ、うん」
　クリュウはすっかりリリアに振り回される始末。彼女に手を引かれてフィーリアに声を掛ける暇もなく桟橋の方へ連れて行かれてしまった。
　一人残されたフィーリアは「むぅ～ッ！」と赤らむ頬を膨らませてクリュウを睨む。しかしすぐに空しくなったのか、ため息すると近くにあった岩に腰掛けてまたため息。
　リリアがやって来てからは今まで以上にクリュウと一緒にいる時間が減っている。初めて彼のパートナーになった時はそりゃあもう一日中一緒にいたというか甘えられた。しかしサクラが現れてからはすっかりサクラにクリュウを奪われてしまい、そして今ではそのサクラですらお手上げなくらいの勢いでリリアがクリュウを独占。すっかり自分は出遅れてしまっていた。
「クリュウしゃまぁ……」
　これならサクラに独占される可能性がある狩場の方がまだマシだ。サクラ相手なら少しだけなら自分が甘える隙があるからだ。しかしリリアは手ごわ過ぎる。何せクリュウと一緒に風呂に入りたがったり（これは珍しく意見が一致したサクラとの共同戦線で未遂で終わった）するような子で、文字通り一日中クリュウにべったりなのだ。これでは隙なんてあるはずもない。
　悲しげにため息するフィーリア。本心ではリリアの手が届かない狩場に早く行きたかった。狩りでならクリュウと一緒にいられるし、独占はできなくても今のように全く手が出ないという訳ではない――それはきっとサクラも同じ気持ちだろう。
　フィーリアは先程から桟橋で釣りをしているサクラを見た。すると、そこへクリュウとリリアが釣竿を持って現れた。振り返ったサクラは、遠くから見ても明らかに不機嫌そう。
「……サクラ様、がんばってください」
　桟橋の先端に腰掛けて足をブラーンと投げ出しながら釣りをしているサクラ。無言で釣りを続ける彼女の横には桟橋の片隅に置いてあった釣り上げた魚を入れる為の氷結晶入りの木箱が置いてある。

すでに木箱にはサシミウオやハリマグロなどが数匹入っている。
なぜ彼女が一人で釣りをしているかと言うと――あまりにもクリュウが構ってくれなくて拗（す）ねているのだ。
リリアが来てからクリュウは彼女に振り回されて自分を構ってくれない。甘えてもアタックしてもいつも不発に終わる。すっかり自分が現れて以降のフィーリアの状態に陥っていた――そのフィーリアはもっと悲惨な状態だが。
すっかりふて腐れているというか拗ねているというか、不機嫌そうに糸を垂らすサクラ。その隻眼が見詰めるのは水面に浮かぶ細長い浮き。退屈でしかない。
そうして珍しくサクラがため息をした刹那、
「あ、サクラ。釣れてる？」
愛しの彼の声が響いた瞬間、気だるそうに曲がっていた背筋はピンと伸びて凛々しい姿勢になった。纏う雰囲気も不機嫌なものからまるで花々が咲き乱れる春の花畑のような明るさに一変し、表情も小さいが彼女にしてはすごく大きな笑みに変わる。ピョコンッと飛び出たネコミミとシッポはもしかしたら幻覚ではないのかもしれない。
嬉しくて今にも鼻歌を歌ってしまいそうな上機嫌。長い黒髪を手で優しく撫でながらしおらしい女性を意識して微笑を浮かべて振り返り――刹那、激しく不機嫌そうな表情に変わる。
サクラの冷たい視線の先にはクリュウと手を繋いだりリアがいる。リリアはクリュウの手を引っ張って木箱の中のサクラが釣り上げた魚を覗き込む。
「うわぁ……ッ、すごいねぇッ！」
喜ぶリリアを一瞥し、サクラは無言で釣りを続ける。すると、
「どう？　この川って結構魚釣れる？」
「……ッ!?」
突然クリュウはサクラの顔を覗き込むようにして声を掛けてきた。いきなりの至近距離からの問いかけにサクラはビクッと体を震わせるとサッとクリュウから距離を取る。
いきなり距離を取られたクリュウは困惑する。

「ええっと、サクラ。あの、僕何か君に嫌われるような事したかな？」
「……ち、違う。ちょっとびっくりしただけ」
サクラはそう言って平常心を取り戻すと再び視線を垂れる糸に向ける。クリュウはそんな彼女に再び問う。
「それで、この川って結構釣れるの？」
「……一応釣れる。でもこの桟橋は短過ぎるから浅瀬の魚しか釣れない。もっと桟橋を伸ばして川の中央で釣りができれば、きっとバクレツアロワナとか小金魚とかも釣れるようになる」
「そっか。桟橋の拡張も考えないといけないね。ありがとうサクラ」
クリュウはサクラに礼を言うと、少し離れた場所で釣りをするリリアの所へ行ってしまった。サクラはそれを見てムッとすると再び釣りに戻ってしまう。いわゆる現実逃避というやつだ。
そんな感じでフィーリアとサクラの不満が確実に蓄積している中、シルフィードは一人で虫あみ片手に虫の採取をしていた。まだ虫が生息しやすい環境が整っていないせいか、採れるのは釣りミミズやカクバッタ、にが虫などレア度の低い虫ばかり。虫の死骸なども所々に転がっている始末だ。
「どうやら根本的にこの農場は管理が行き届いていないようだな。アイルーを雇えればいいのだが、この村にはネコバァは来ないしな。どうしたものか」
一人真剣にこの農場の今後を考えていた。さすが最年長者にしてチームリーダー。目先の事には囚（とら）われずに常に先の事を考えている――時折クリュウの方をチラチラと横見している事は内緒だ。
一方その頃、農場の入り口にあるアーチ状の門の下の岩に腰掛けてエレナは眠そうにあくびをしていた。農場の管理なんて、彼女は全く興味がないらしい。
様々な思惑が交差する農場の中、一番楽しんでいるのはきっとリリアだろう。
「お兄ちゃんッ！　ほらほらぁッ！　お魚釣れたよぉッ！」
天真爛漫な笑みを浮かべてリリアが掲げたのはサシミウオ。クリュウが「すごいよリリア」とほめると、リリアはさらに嬉しそうに

笑みを浮かべる。
釣りを楽しむリリアを一瞥し、クリュウは改めて農場を見回す。雑草などが結構生えていて幾分か見苦しい部分もあるが、全体的にはいい農場だ。ちゃんと管理したり改良すればもっといい農場に生まれ変わるだろう。そう思うと今から楽しみだ。
――その想いは翌日には覆る事となった。
「うぅ……、みんな一回休憩しようよぉ……」
クリュウのぐったりとした言葉に離れた場所にいたフィーリア、サクラ、シルフィードも賛成とばかりにうなずいた。
クリュウは近くにあった岩に腰掛けると、首に下げたタオルで汗を拭う。季節は冬だというのに労働の後には汗が出るものだ。
「クリュウ様、お水をどうぞ」
フィーリアは疲れたように汗を拭うクリュウにそっと水の入ったグラスを手渡す。中に入っているのは川の近くにある岩から湧き出るきれいな湧き水だ。
「ありがとう」
クリュウは礼を言って受け取ると、それを一気に仰ぐ。のどを鳴らしながら一気飲みすると、少しだけ楽になった。
水を飲んで落ち着くと、クリュウは改めて目の前の光景を見て苦笑いした。
「いやぁ、なかなかはかどらないものだね」
「そ、そうですね……」
フィーリアも苦笑いしながら彼の言葉にうなずいた。
昨日農場の状態が良好だった事から正式にクリュウは村長に農場をもらう事を伝え、今日早速農場の整備に掛かったのだが……
「思った以上にすごい量だね――雑草って」
まずクリュウ達に襲い掛かった第一の試練は放置されていた間に大量発生した雑草群。腰くらいの長い雑草なんて当たり前。中には人の背丈ほどの高さもある雑草を地道に鎌で刈り取っていく作業はある意味狩り以上に疲れる。
サクラは途中でキレて太刀で斬り飛ばすと言い出したが、太刀は雑

草を斬るには適していないので逆に疲れる事が判明。もちろん大剣なんてもっと意味ない。結局鎌で地道にがんばるしかないのだ。
まぁ、嫌な事ばかりではない。ちょっとだけ嬉しい事もあった。
「キョオオ？」
疲れて座るクリュウを心配したのか、アニエスが近づいてきて顔を舐めてきた。クリュウは「大丈夫だよアニエス」と小さく笑みを浮かべてアニエスの頭を撫でる。するとアニエスは「キュイッ♪」と嬉しそうに顔を彼にすり寄せる。
新たに農場を手に入れたクリュウは早速竜小屋に入れていたアニエスを連れて来て農場に解放した。今まで狭い小屋に閉じ込められていたので広い場所で自由に動き回れるという事にアニエスは大喜び。ついでに雑草を食べてくれるのでクリュウ達の手伝いもしてくれている。
「あの雑草はアニエスのエサになるんですか？」
「そのつもり。干しておけばいい干草になりそうだしね」
捨てる手間が省けて大助かりなのだが、まずは雑草を刈ってそれを束にしなくてはならない。そしてそれこそが四人を疲れさせている最大の理由だ。
「……いっそ焼き払いたい」
「いや、山火事の危険性があるし燃やす必要のないものまで燃えてしまうかもしれんからな、その方法は使えんぞ」
サクラとシルフィードも疲れたような表情で二人の下へ戻って来た。
朝早くから草刈りをしているので、昼時の今はもう四人ともクタクタ。だがおかげで雑草は結構刈り終えた。後は午後に残りを刈り取りその他の設備を整備すれば一応農場の機能は完全に回復するだろうが、まだ時間が掛かりそうだ。岩壁の一部に浅い洞窟があるので、そこを使えばアニエスの小屋を作る必要もないだろう。
「……クリュウ疲れた」
「お疲れ様。でもあともう少しだからがんばろうよ」
「……クリュウ、抱っこ」

「しないって」
抱き付いてこようとするサクラを回避。フィーリアにグラスを返してクリュウは農場を見回すシルフィードに向き直る。
「そろそろお昼にしようっか。朝から何も食べてないし、みんなお腹空いてるでしょ」
「そうだな。じゃあ帰り支度をするぞ。昼食を食べ次第すぐに戻って来て作業再開だ」
シルフィードの言葉に三人はうなずくと帰る準備をする。と言っても手についた泥を湧き水で洗い流すとか持ってきた鎌なんかを安全な場所に置くとか簡単なものだ。そんな具合にクリュウ達が帰る準備をしていると、
「お兄ちゃ～んッ！」
元気なその声に振り返ると、門の下でリリアが満面の笑みを浮かべてこちらに向かってブンブンと手を振っていた。
「リリア？　それにエレナまで」
嬉しそうに笑みを浮かべて駆け寄って来るリリアの後ろからはエレナが続く。走り寄るリリアはクリュウの下まで駆け寄って来ると勢い良く彼に抱き付く。その瞬間殺気立った二人をシルフィードがため息交じりに首根っこをキープする。
「お兄ちゃ～んッ」
腰に抱きついて甘えて来るリリアに苦笑するクリュウ。そんな彼を見て歩み寄って来るエレナは呆れたような表情を浮かべる。
「まったく、ちゃんと作業は進んでるの？」
「失礼な。これを見てそんな事言うのかよ」
「冗談よ。ふーん、結構片付いたじゃない」
「今日中には終わるよ。それより二人ともどうしたの？　僕達これから家に戻って昼食を食べようとしてた所だけど、一緒に来る？」
すると、エレナはフフンとなぜか誇らしげに胸を反らす。そこまで誇らしげに見せるほど彼女の胸は人並み外れて大きい訳ではないが。
「そんな事だろうと思って、ほら。お弁当作って来てあげたわよ」
そう言ってエレナは手に持っていたバスケットをクリュウに差し

出した。クリュウは驚きながらそれを受け取った。
「え？　あ、ありがとう」
「別に。単なる気まぐれよ。食べたくないなら持って帰るだけだし」
　クリュウが礼を言うとエレナは赤らむ頬を隠すようにプイッとそっぽを向く。それが彼女の照れ隠しの仕草だという事はみんな知っている。
「もちろん食べるに決まってるじゃん。助かるよ、ありがとうエレナ」
「べ、別にあんたの為じゃないからね。フィーリア達の為に作ったんだから、あんたは自重しなさいよッ」
「はいはい」
「な、何よその適当な感じは」
「いいからいいから。エレナも一緒に食べようよ」
　クリュウは気にした様子もなくエレナの弁当を嬉しそうに抱きかかえる。そんな彼を見てエレナも怒る気が失せたのか小さく笑みを浮かべると「当たり前でしょ」と言って歩み出す彼に続く。
　フィーリアとシルフィードは顔を見合わせるとおかしそうに笑い合う。
　リリアは相変わらずクリュウにべったりで、サクラはそんな彼女とその頭を撫でるクリュウを見て不機嫌そうにムッとしている。
　昼食を取る為にクリュウ達が陣取ったのは川原。それぞれエレナの弁当を中心に大小様々な石が転がる地面に腰を下ろした形だ。ちなみにクリュウの両側はそれぞれサクラとリリアがキープ。フィーリアは彼に抱き付くリリアの隣になった。エレナとシルフィードはその対面に座っている。
　美少女達に取り囲まれている幼なじみにピクピクと顔を震わせるエレナをシルフィードがまあまあとなだめる。すっかりケンカ仲裁役に納まってしまったシルフィードであった。
　エレナの弁当はサンドイッチを中心としたものだった。特製ソースを絡めたアプトノスステーキを砲丸レタスとパンで挟んだジューシーサンド、煮込みくず肉と刻んだ激辛ニンジンを混ぜたこれまた砲丸レタスで挟むピリ辛ミートサンド、ワイルドベーコンと熟成チーズ

のベーコンチーズサンド、特製マヨネーズとハリマグロツナを掛け合わせたツナサンド、デザート感覚のすり下ろした氷樹リンゴと生クリームで作ったリンゴサンドなど、その他数種類の多種多様なサンドイッチが入ったバスケットを見てクリュウ達は歓喜した。
「これ全部エレナが作ったの？」
「そうよ。今度店で軽食ジャンルに加えようと思ってるサンドイッチの試作品。あんた達の昼食にもなるし私も評価が聞ける、まさに一石二鳥って訳」
フフンと胸を反らすエレナだが、今回ばかりは胸を張ってもいいだろう。クリュウがすごいすごいとほめるとエレナはどんどんニヤける。もちろん彼には見えないように背を向けているが。
一方、女の子最大の攻撃力を誇る料理分野では圧倒的かつ一方的に独占状態なエレナにはさすがのフィーリア達も完敗であった。
相手は玄人（プロ）でこっちは素人（アマチュア）。実際色合いもきれいだし定食などは栄養のバランスもいいし、料理のテクニックも圧倒的に違うし、何より味は格別においしいのだ。
フィーリア達もエレナの料理が大好きだし、今まで食べて来た料理の中でも彼女の料理は格別においしい。
これでエレナがもっと素直で女らしい性格だったら、おそらく誰も勝てないような最強の恋敵（ライバル）になっていただろう。そう思うと内心ちょっぴりほっとしているフィーリア達であった。
「とにかく、そういう訳だから食べて評価を聞かせて頂戴」
素直に食べてと言えない彼女らしい勧め方に苦笑しつつ、クリュウ達はありがたくそれぞれ食べたいサンドイッチを手に取る。
「じゃあ、いただきます」
クリュウはピリ辛ミートサンドをチョイス。見た目を十分に味わった後に一口食べた。細かく刻んだ激辛ニンジンが少量練り込まれた肉はピリピリとした適度な刺激。そして何より煮込まれたくず肉はくず肉とは思えないほど柔らかくジューシー。肉汁と出汁（だし）がジュワっと口の中一杯に広がる。一言で言えば、おいしい。
「ど、どう？　それ結構自信作なんだけど」

エレナは真っ先にクリュウに尋ねて来た。きっと自信作の評価を聞きたいだけではないだろう。
そんな彼女の問いに返すクリュウの言葉はもちろん、
「おいしいよこれ」
「ほ、ほんとッ!?　うそだったら承知しないわよッ？」
「本当だって。僕これ好きだよ？」
クリュウがそう言うと、エレナの表情が明らかにパァッと明るくなる。「そっかそっか」と嬉しそうに笑みを浮かべるその笑顔は今にも鼻歌を歌いそうなくらいご機嫌だ。
「これもおいしいですよ」
「……悔しいけど、美味」
「さすがエレナだな。おいしいぞ」
「エレナお姉ちゃんの料理ってすっごくおいしいから大好きッ！」
フィーリア達の絶賛（特にサクラの敗北宣言）の数々にエレナの機嫌はどんどん良くなっていく。「ふ、ふーん、そうなんだぁ～。これくらい普通だよぉ～」と平然を装うがついに鼻歌まで歌い始めてしまっては意味を成さない。
クリュウは他のサンドイッチも食べたが、やっぱりと言おうか全ておいしかった。自分も料理はできるし、時々エレナに教わったり（本当は無理やり教えられているのだが）していて日々上達しているが、彼女には足元にも及ばない。
リリアは特にリンゴサンドが気に入ったらしい。口の周りにクリームを付けながら笑顔を絶やさずにパクパクと食べ進める。その際にクリュウがハンカチを使って彼女の口元をさり気なく拭った後、フィーリアとサクラは一斉に口元を少し汚して準備を整えたが、結局彼に拭ってもらう事はできず寂しく自分で拭っていた。その時、シルフィードの口元にツナサンドのマヨネーズが付いていた事は偶然だったのだろうか。
そんな感じでサンドイッチ弁当を完食したクリュウ達。食べ終えた後は早速農場の整備を再開する。
「あともう少しだよ。がんばろうッ」

クリュウの掛け声にフィーリアは「はいッ！」と笑顔でうなずき、サクラも無言でうなずき、シルフィードは「あぁ」と返事した。
再び鎌を片手に草刈りを始めるクリュウをリリアが笑顔で応援する。そして後片付けをするエレナもまた、そんな彼の背中を見て小さく微笑んでいた。
日が傾いて空が茜色に染まる頃、農場の整備はようやく終わったのであった。
「アニエス、干草だよ」
「キュイッ♪」
洞窟の中で眠っていたアニエスは大好きなクリュウの足音に気づいて洞窟から出て来た。そんな彼女にクリュウは担いでいた干草をエサ用の木箱の中に放り込む。アニエスは大喜びでそれを食べ始める。その間にクリュウは湧き水を運んで来る。
干草を食べ終えて水もたっぷり飲んだアニエスの体を、クリュウは濡れ雑巾で優しく拭く。アニエスはクリュウに体を拭いてもらうのが大好きだ。
農場にやって来たのはクリュウだけではない。フィーリアはリリアと一緒に畑を耕している。笑顔で先日クリュウが採取して来たモンスターのフンを乾燥させた肥料を土に混ぜるリリアに対し、フィーリアは若干笑顔が引きつっている。やっぱり普通の女の子であるフィーリアにはフンは辛いのかもしれない。
サクラはここ最近の日課のように桟橋の上で糸を垂らして無我の境地で釣りをしている。
シルフィードはたくましいというか、一人でピッケル片手に採掘をしている。
クリュウ達が村長からこの農場を貰い受けてから一週間が経った。リリアの畑は今日耕して明日には種を蒔くそうだ。
今現在この農場には採掘場、畑、虫採取用の草むら、桟橋などの最低限のものしかない。もっと発展させればハチの巣やキノコ育成もできるようになるだろうが、まだまだ始まったばっかりだ。
そして何より、この一週間で変わった事と言えば……

「これ、何とかならないかなぁ」
苦笑するクリュウが見上げたのは門の上にあるアーチ上の看板。そこにはしっかりとした字で《リーフ農場》と書いてあった。もちろん名前の由来はクリュウの苗字のルナリーフから来ている。
クリュウの必死の抵抗も空しく賛成多数でこの名前に決定。民主主義とは時に残酷なものだ。
ちなみにもう一つの候補に《クリュウ農場》というのもあったが、これに関してはクリュウが何とか命懸けで死守した。
何はともあれ、リーフ農場と名づけられたこの農場が、これからのクリュウ達の生活基盤の一部になる事は言うまでもない。
そして今日も、平和な日を農場でだらだらと過ごすクリュウ達であった。

登場人物紹介２

《クリュウ・ルナリーフ》
身長　１６２センチ
年齢　１６歳
髪・瞳　春の若々しい木々の葉のような柔らかな緑色の髪と瞳
武器　片手剣バーンエッジ
防具レウスシリーズ
スキル　攻撃力ＵＰ【大】　探知　（麻痺倍加は耐麻痺玉×１で解除）

言わずと知れたこの物語、《モンスターハンター　～恋姫狩人物語～》の主人公の少年。ドンドルマのハンター養成学校で修行を積んだ後に故郷のイージス村に戻り、以降そこを拠点に活躍している。最初の頃はまだまだ新米ハンターであったが、数々の戦場を命懸けで駆け抜けて経験を積み、ついには信頼できる仲間達と共に火竜リオレウスを撃破。最近ではルーキーとしてだけでなく歴戦の戦姫であるフィーリア達とチームを組んでいるとあって少しだけ有名になって来ている。チームではモンスターと常に肉薄して攻撃する前衛型。片手剣がサポートに強い武器だと自覚がある為か剣士タイプのハンターとしては珍しく道具を多用するトラップ使いでもある。特に閃光玉、罠系統、爆弾類などの使い方はチーム随一の腕前。ハンターとして一人前に成長したが、相変わらずの鈍感で乙女心がまるでわからないのに的確にそこを突いてくる生まれながらの天然。フィーリアやサクラ達恋姫の恋心が彼に届く事はあるのか。第二期でも天然爆発で大活躍します。

《フィーリア・レヴェリ》
異名《桜花姫》
身長　１５５センチ
年齢　１５歳
髪・瞳　月の金色のような長い髪とエメラルドのような瞳
武器　ライトボウガン《ハートヴァルキリー改》

防具《リオハートシリーズ＋ホワイトピアス》
スキル　回復アイテム強化（全癒珠×１）　精霊の気まぐれ　広域化＋１（友愛珠×１＋親愛珠×３）
恋姫の一人。イージス村に戻って来たクリュウと初めて仲間になった少女ハンター。純粋な性格で誰に対しても優しく接する心優しい少女。チーム唯一のガンナーで後方支援や援護を得意とする後衛型。第一期の中盤までは武器も防具も全て雌火竜リオレイアの素材を使った物に統一していたが、終盤からは新たに桜色のリオレイア亜種の素材を使った上記の武具に変更。異名も《新緑の閃光》から《桜花姫》に変わり前よりもずっと強く、そして可憐になった。初めて出会った時からずっとクリュウを想い続けているが、エレナやサクラ、リリアの猛攻撃の前に控えめな性格の彼女はなかなか一歩を踏み出せずにいる為にクリュウとの距離はあまり縮まっていないちょっとかわいそうなキャラ。しかしチームではクリュウが最も信頼しているという事実を彼女は知らない。第二期ではクリュウを奪還する事はできるのか。
《桜（サクラ）・春風（ハルカゼ）》
異名《隻眼の人形姫》
身長　１６０センチ
年齢　１６歳
髪・瞳　美しく長い黒髪と柔らかな漆黒の隻眼
武器　太刀《鬼神斬破刀》
防具《凛シリーズ》
スキル　回復速度＋１　ガード性能＋２（意味なし）　砥石使用高速化（研磨珠×５）
恋姫の一人。クリュウと昔なじみにしてチーム一の俊足と鋭さを兼ね備えた少女ハンター。両親が商人で裕福な家庭の一人娘であったが、数年前に雪山で突然正体不明のモンスターに襲われて両親と左目を失った。基本的に無口無表情というあまり自分の感情を表に出さないタイプ。クリュウとは子供の頃からの付き合いで、彼女はその頃からずっとクリュウを想い続けている。恋愛に関しては素人でク

リュウを想うが為に無茶な行動に出る事がしばしば。ハンターとしては優秀で常に場の流れを読んで的確に状況判断して行動に起こす天才。護衛任務を得意としており自分と同じ想いをさせたくないという想いから護衛依頼は例え腕や足を折ってでも成功させている。その為依頼者達からは他のハンターを圧倒する信頼を得ており民間では絶大な知名度を誇る。世間には《隻眼の人形姫》という通り名で名が通っている。チームでは常に動き回ってモンスターを撹乱しながら鋭い一撃を叩き込む遊撃型。第一期では他を圧倒する存在感と力量でクリュウを独占状態であったが、果たして第二期ではどうなるのか。

《シルフィード・エア》

異名《蒼銀の烈風》

身長　１７５センチ

年齢　１８歳

髪・瞳　純白に近い銀色のポニーテールに美しい碧眼

武器　大剣キリサキ

防具《リオソウルシリーズ＋レッドピアス》

スキル　攻撃力ＵＰ【中】（猛攻珠×１）　耳栓（防音珠×１）　見切り＋１（達人珠×３）

恋姫の一人。クリュウチーム最年長にしてリーダーを務める冷静沈着な知能型ハンター。まだ彼女がかけだしハンターだった頃、自分がいない間にリオレウスに村を襲撃されて両親と弟を失った辛い過去がある。そこから不屈の精神でのし上がり、最強のハンター集団を謳われる剣聖ソードラントに所属していた事もある程の実力者にまで成長。しかし理念の不一致からソードラントを脱退し、今までドンドルマを拠点に活躍していた。《蒼銀の烈風》という異名を持ち、ドンドルマでも一目置かれる存在。クリュウ達と出会い、彼らと共にリオレウスを討伐。その際にクリュウ達のチームを見て仲間の大切さを思い出し、クリュウの誘いを受けて正式にチームに入り、チームリーダーを務めるようになった。容姿端麗で見る者誰もが目を奪われる美少女。男よりも男らしい（＝かっこいい）性格で常にクール。チー

ムの頼れるリーダーである。クリュウは彼女に憧れ、尊敬しているらしく何か難しい事や相談があると彼女にする場合が多い。容姿、実力、性格、人望とすばらしいの一言で一見するとまるで非の打ち所がないが、料理下手、野菜嫌い、朝が弱いなど意外と弱点は多い。クリュウが亡くなった弟に似ているという事から色々と世話を焼いていたが、次第に別の感情が芽生え始め、自分でもそれが何なのかわかっていない。クリュウに勝るとも劣らない天然の持ち主。着やせするタイプで防具を纏っている時はそうでもないが、解放されると全キャラでもトップクラスの胸を誇る。第一期では終盤に登場したので活躍の機会が少なかったが第二期では一体どんな活躍をするのか期待大。

《燕（ツバメ）・青空（アオゾラ）》

身長　１５８センチ

年齢　１６歳

髪・瞳　ふわりと柔らかな黒髪のセミロングにクリッとした黒眼

武器　双剣ギルドナイトセーバー

防具フルフルシリーズ

スキル（チーム戦）　回復速度＋１　広域化＋２（友愛珠×４＋親愛珠×２）

スキル（ソロ戦）　回復速度＋２（速復珠×１）　広域化＋１　砥石使用高速化（研磨珠×５）

サクラの昔なじみで、彼女と同じく別大陸から来た。外見は完全に誰もが振り向くであろう絶世の美少女。そのかわいらしい顔立ちやクリッとした瞳、笑った時の天真爛漫なその表情はまさに天使。純粋なかわいさでは他の恋姫達と互角、場合によっては超えるほどの超絶美少女――と言いたい所だが、性別はなぜか男。本人も男だと必死に訴えているが、そのかわいらしさが全く説得力を無力化してしまっている。武具屋で防具を発注すれば女性用、銭湯で男湯に入ったら警察沙汰、マジで男から告白されたというトラウマありという結構な苦労人。しゃべり方も独特で《～じゃ》という語尾を使い、一人称も《ワシ》となぜかおじいちゃんっぽい。しかしそのギャップが男達には堪らないらしい。クリュウの親友なのだが、たまに彼もツバメの性別を

間違えて接してしまう。ある意味恋姫達にとっては最強の恋敵（違うけど）なのかもしれない。全キャラを通して最もまともな常識人。第一期でのわずかな登場ながらもすさまじい人気を誇るキャラ。第二期ではメインキャラに格上げする予定なので、乞うご期待。

《リリア・プリンストン》

身長　１４０センチ

年齢　１０歳

髪・瞳　淡い桃色のツインテールにかわいらしい金色の瞳

恋姫の一人。アシュアの従姉妹で天真爛漫、純真無垢という言葉が似合う少女。イーオスに襲われそうになった時にかっこ良く現れて助けてくれたクリュウの事が大好き。妹のような存在なので他の恋姫達には真似できないようなアタックをする事が可能。ある意味最強の恋姫。両親が優秀な調薬師で彼女もこの年で立派な調薬師。イージス村では唯一の小さな薬屋兼道具屋を経営。薬草を育てていた経験から畑仕事に強い。恋姫達にとっては自分達にはできないようなやり方でクリュウと親密になっていく最強クラスの恋敵（ライバル）。と言っても、リリアはまだ子供なのでクリュウの事を恋愛部分での好きももちろんあるが、半分くらいは兄に対する好きという兄妹愛的な部分もあるので、まだ反撃のチャンスはある。第二期初の恋姫で、今後の活躍に期待です。

《ラミィ・クレア》

身長　１５３センチ

年齢　１５歳

髪・瞳　薄桃色の柔らかなポニーテールと凛とした鳶色の瞳

武器　ランス《正式採用機械槍》

防具《イーオスＳシリーズ》

スキル　毒無効　防御＋３０（防御珠×３）　ボマー

恋姫の一人。レミィの双子の姉でランス使いの少女ハンター。独立貿易都市アルフレアを拠点に妹のレミィとコンビを組んで活動しているルーキーハンター。エレナに負けず劣らずの勝気で負けず嫌い。素直じゃない性格の為に仲間と衝突する事もよくあり、その度に

レミィが止めに入るというパターンを繰り返している。しかしハンターとしては優秀で同年代のハンターの中では最強クラスの実力の持ち主。ランスらしく突撃が得意でチームではまず先陣を切って突っ込むのが彼女の戦い方。クリュウのいずれ自分を越えるであろう素質を本能的に感じており彼をライバル視している。レミィが何かと彼を気に掛ける事も加わって彼とは対立する事も多く彼に対してキツく当たる事もしばしば。全恋姫の中で最も出番が少ないキャラで、今現在はアルフレアでレミィと共に修行している。第二期での登場予定は今の所なし。

《レミィ・クレア》

身長　１５２センチ

年齢　１５歳

髪・瞳　薄桃色の柔らかなツインテールとクリッとした鳶色の瞳

武器　ガンランス《シザーガンランス》

防具ザザミシリーズ

スキル　防御＋３０（防御珠×３）　ガード性能＋１（石壁珠×３）

投擲技術ＵＰ

恋姫の一人。ラミィの双子の妹でガンランス使いの少女ハンター。独立貿易都市アルフレアを拠点に姉のラミィとコンビを組んで活動しているルーキーハンター。勝気な性格のラミィとは違いレミィはフィーリアに似て謙虚な性格。勝気な性格の為に周りと衝突する事が多いラミィの為にいつも仲裁役として振り回されている。しかしラミィの事が大好きなので苦労はしているが彼女の事を恨んでいる訳ではない。ガンランスはランス以上に動きの制限が大きく、狩りではラミィが突っ込んで隙を作り、その隙を突いてレミィが攻撃するという戦法が二人の基本戦法。二人の連携力はおそらく全キャラを通しても最強クラスである。かわいくて性格もいいのでアルフレアハンター養成学校の頃は少なからず人気があったのだが、怖い姉がいるので言い寄ってくる男はいなかった。しかしエレナで慣れているせいかラミィの攻撃にも屈せずに優しく接して来るクリュウに好意を抱いている。全恋姫の中でラミィに続く出番の少ないキャラで、今現

在はアルフレアでラミィと共に修行している。第二期での登場予定は今の所なし。

第８１話　挟撃のイヤンクック

テティル湿地帯。
イージス村からは標高三〇〇〇メートル級の山々を越えた向こうにある湿地帯で、数ヶ月前までなら山を迂回する形で船で一週間掛かっていた地だ。
しかし一ヶ月ほど前にその山脈を貫通したテティルトンネルが開通してからは竜車で三日と大幅に時間を短縮する事ができた。
テティル地方は主に湿地帯に覆われた土地で、農業の代わりに工業が発展した街や村が多い。蒸気機関を使った文明では大陸一とまで謳われる。ドンドルマでもテティル製の蒸気機械は重宝されており、対古龍用撃竜槍の蒸気機関もテティルの技術が多く取り入れられているそうだ。
工業地帯として有名なテティルであったが、高い山脈にドンドルマまでの陸路を封じられていたので地理的には不便な場所であった。
テティルトンネルはそんなテティルを救う為に、実に十年以上の年月を経て完成したこの大陸の新たなライフラインだ。
現在ドンドルマではテティルトンネル開通までの道のりを題材にした本がベストセラーになっている。テティルを阻む山脈は湿地帯に分類されて断層には大量の水を含んだ破砕帯が無数に存在し、トンネルは何度もその破砕帯にぶつかって噴水事故や落盤事故、崩落事故など起こして十年以上の歳月、実に一〇〇人以上の死者を出しながら完成したトンネルとあって、そのドキュメンタリー本は人々を感動の渦に包んでいる。
そんなテティルトンネルを抜けた先にある狩場がテティル沼地だ。常に深い霧に覆われたこの一帯には毒沼や底なし沼が無数に存在する、火山や砂漠とはまた違った危険な狩場だ。
所々に平地同士を結ぶ洞窟があるのだが、湿地帯という事もあって湿気が多い上に冷たい地下水が常に染み出している結果、雪山のような極寒の地となっている。
こんな場所にもモンスターは存在し、狩場の近くには人も住んでい

る。ハンターはそんな人々を守る為に、今日もこの危険な地に足を踏み入れる。
一年を通してほとんど日の光が差さない上に深い霧が支配するテティル沼地は常に薄暗く、霧の為に視界も悪い。その為突然霧の中からモンスターが現れたりするので他の狩場以上に辺りに気を配らなければならない。
そんなテティル沼地の深い霧の中、突然辺りを震撼させる爆音が響き渡った。
吹き荒れる黒煙の中から現れたのは荒々しい炎の鎧のようなレウスシリーズを纏ったクリュウ。続いて春に咲き乱れる花のようにきれいな桜色のリオハートシリーズを纏ったフィーリアが愛器ハートヴァルキリー改を構えたまま現れる。
「フィーリアッ！」
「はいッ！」
クリュウはフィーリアに合図を送ると道具袋（ポーチ）から音爆弾を取り出し、先程自分達が抜けた黒煙に向かって投擲した。吸い込まれるようにして黒煙の中に消えた音爆弾は直後にキンッという高周波音を放つ。人間には心地良い音にしか聞こえないが、聴覚の発達したモンスターには絶大な威力を誇る。
しかし、音爆弾は効果なかった。
「クワァァァァァッ！」
特徴的な鳴き声と共に現れたのは怪鳥イャンクック。新米ハンターが一人前のハンターになる為の登竜門的存在の飛竜（正確には鳥竜種だが）だ。
だが、黒煙を突き抜けて突撃して来たのは普通のイャンクックではなかった。イャンクックの体は通常鮮やかな桃色の鱗や甲殻に包まれてかなり目立つ姿をしている。しかし目の前のイャンクックはその全てが青色に染まった少し地味な印象を受けるイャンクック。亜種と呼ばれる突然変異体だ。
亜種とは突然変異で生まれた通常体とは異なった体色や肉質、弱点性質を持った個体の事で、平均的に通常体一〇〇〇体のうち一体程度

の割合で生まれて来る特殊なモンスターだ。
そして、亜種に分類されるモンスターは通常体に比べて強い。弱点属性まで変化する事もあるので注意が必要な存在だ。
怒号と共に突っ込んで来るイャンクック亜種は、通常体に比べて幾分か速い。しかしクリュウとフィーリアは一斉に左右に分かれ跳んでこれを回避。イャンクック亜種は空しく誰もいない地面に突っ込んだ。
クリュウとフィーリアはイャンクック亜種の背後に回ると体勢を整える。フィーリアは新たに通常弾ＬＶ２を装填。クリュウも腰からバーンエッジを抜き放つと起き上がるイャンクック亜種を睨む。
口から火炎液を吐き散らして怒り心頭のイャンクック亜種。振り向くと同時に火炎液を撃ち放つ。しかしその一撃は二人には届かず、クリュウはグッと姿勢を低くして弾丸の如き速度で突撃。それを援護するようにフィーリアが速射でイャンクック亜種の動きを封じる。
「クワァッ！　クワァァッ！　クワァァァァァッ！」
迫るクリュウを迎撃しようとイャンクック亜種は無茶苦茶に火炎液を撒き散らす。考えなど何もない。ただとにかく敵を追い払う為だけに撒き散らされる火炎液は統一性など一切なく無茶苦茶。見切り切れずクリュウは大きく迂回してイャンクック亜種の背後へ回った。
「てぇいッ！」
背後からアキレス腱を狙ってバーンエッジを振るう。炸裂した瞬間爆ぜる刀身の一撃はイャンクック亜種の膝を一瞬だけ折る事に成功。その隙を突いてフィーリアが徹甲榴弾ＬＶ２をイャンクック亜種の頭部に撃ち込んだ。側頭部に突き刺さり時間差で爆発した徹甲榴弾ＬＶ２にイャンクックは悲鳴を上げてその場に転倒した。爆発による一時的な脳震盪（のうしんとう）、めまいを起こしたのだ。
「今ですクリュウ様ッ！」
フィーリアが言うよりも早くクリュウは動いていた。突進するようにしてイャンクック亜種に迫ると構えたバーンエッジをイャンクック亜種の顔面に叩き込む。

「うりゃぁッ！」
連続してバーンエッジを叩き込むクリュウ。その一撃一撃は確実にイャンクック亜種にダメージを蓄積させていく。十撃を超えた辺りでバーンエッジの刃先がイャンクック亜種の自慢である扇状の耳を切り裂いた。刹那、めまいから脱してイャンクック亜種が起き上がる。
クリュウはバックステップで距離を取る。その間はフィーリアが通常弾ＬＶ２の速射でイャンクック亜種の注意を引き付ける。見事な連携だ。
「クワアアアアアッ！」
首を激しく上下に動かし、その場でジャンプを繰り返すイャンクック亜種。ギロリをフィーリアを睨むと怒号と共に突撃する。しかしフィーリアは冷静にそれを華麗に避けると転倒するイャンクック亜種の背後へ回って速射を撃ち込む。
続けてクリュウが起き上がる途中のイャンクック亜種に突撃し、巨体を起き上がらせようと力（りき）む脚に鋭い一撃を叩き込む。力を入れている逆方向からの鋭い一撃にイャンクック亜種はバランスを崩して転倒した。
「クワァッ！　クオォッ！」
必死に起き上がろうともがくが、己（おの）が巨体が仇となって起き上がれない。
クリュウはすぐさま比較的肉質が柔らかく同じ一撃でも大ダメージを与えられる翼に剣を叩き込む。爆ぜる炎と血を無視し、ただひたすらに剣撃を叩き込む。
横からはフィーリアが通常弾ＬＶ２の速射でイャンクック亜種を攻撃している。
一方的な攻撃が続くが、やっとの思いでイャンクック亜種は起き上がる。その時にはすでにクリュウは離れているので、イャンクック亜種は反撃のチャンスを失った。
「クワァッ！　クワアアアアアッ！」
怒り狂うイャンクック亜種。怒り状態では音爆弾は利かない。し

かしクリュウは冷静に道具袋(ポーチ)の中に手を伸ばす。その瞬間、イャンクック亜種はジャンプして頭を激しく上下させてくちばしで連続攻撃して来た。しかしその攻撃は飛距離が足りなくて届かない。クリュウは反転してもう一度イャンクック亜種と距離を取ろうとするが、イャンクック亜種もすぐさま突撃して彼を追い駆ける。フィーリアが速射でイャンクック亜種を狙い打つが効果はない。

迫るイャンクック亜種を背後に感じながら、クリュウは道具袋(ポーチ)から玉を取り出しピンを抜くと後ろに投げ捨てる。刹那、迫り来る脅威に向かって激しい閃光が炸裂した。

「クワアアアアアッ!?」

閃光玉で目を潰されたイャンクック亜種。その場で停止すると耳を澄ませて発達した聴覚を使って辺りを探り始めた。

クリュウはすぐさま足音をなるべく立てないようにしてイャンクック亜種に迫る。その間フィーリアが場所を転々を変えながら速射を使ってイャンクック亜種を狙い打つ。ダメージを与えると同時にクリュウの動きをカモフラージュしているのだ。

一日や二日で身につくような連携ではない。クリュウはフィーリアに背を任せ、フィーリアはそんなクリュウの信頼に応えつつ見事な援護をする。二人の絆があってこそできる芸当だ。

イャンクック亜種はすっかりフィーリアの放つ銃声に振り回されてその場を動けずにいた。そこへクリュウが突撃して懐に潜り込み柔らかな腹へ斬りかかる。

「クワアアアアアッ!?」

予期していない突然の一撃にイャンクック亜種は悲鳴を上げてたたらを踏む。クリュウは容赦なくさらに激しく攻撃を続ける。

「クワァッ!　クワァッ!」

イャンクック亜種はその場で時計回りに体を回転させて尻尾をムチのように使って攻撃する。しかしその飛竜種の典型的な攻撃を何度も経験してきたクリュウはその動きに合わせて同じく時計回りに回って攻撃を回避。終わると同時にすぐさま攻撃に転ずる。

一方的な戦いにイャンクック亜種は悲鳴を上げる。刹那、閃光玉の

効き目が切れて視界が回復した。イャンクック亜種はすぐさま翼を激しく動かして突風を巻き起こして体を少し地面から浮かせるとそのまま器用に後退していく。小柄な体に不釣合いなくらいに強力な翼力が成せる技だ。しかしクリュウは突風を盾で防ぐとそのまま閃光玉を投擲。炸裂する閃光はイャンクック亜種の視界を潰し、イャンクック亜種はバランスを崩して落下した。地面に叩き付けられたイャンクック亜種は数秒もがいた後ゆっくりと起き上がる。しかしすでにその時にはクリュウは再びイャンクック亜種の懐に入っていた。

再び始まるクリュウの猛攻撃。フィーリアも援護とばかりに通常弾ＬＶ２の速射を放つ。

あまりにも一方的な戦い。イャンクック亜種はたまらず逃げ出そうと視界がきかぬまま無茶苦茶に突撃する。しかしそこには誰もおらず、逆にそこには岩壁。枯れた細い木を数本巻き込みながら突進するイャンクック亜種はそのまま岩壁に激突して悲鳴を上げる。

クリュウは追撃をしようと走り出すが、振り返ったイャンクック亜種はギロリとクリュウを睨んできた。閃光玉の効き目が切れたのだ。

イャンクック亜種は迫り来る小さな敵に一度威嚇のように怒号を放つと、激しく翼を羽ばたかせて突風を巻き起こす。これにはさすがのクリュウも直撃を受けてその場で動きを封じられてしまった。

フィーリアが必死に弾丸を撃ち込むが、距離が離れているので威力が低下。その為にほとんどの弾が鱗や甲殻に弾かれてしまう。

イャンクック亜種は暴風と共に空へ舞い上がった。フィーリアは根気強く銃身を上に上げて対空砲火するが、イャンクック亜種は弾が届かない高空まで上がって水平飛行に転じ、飛び去ってしまった。

深い霧の中ポツンと取り残されたクリュウはフゥと一息つくとバーンエッジを腰に戻す。そこへフィーリアが駆け寄って来た。

「クリュウ様、ご無事ですか？」

「うん。フィーリアこそ怪我はない？」

「はい。それより取り逃がしてしまいましたね」

フィーリアは残念そうにイャンクック亜種が消えた方向を見詰め

る。クリュウも「そうだね」と同意した。
「とりあえずあいつを追い駆けよう。まだ耳は畳んでいないけど、もうかなり体力は奪ったはずだから、もう一息だよ」
「そうですね。私達に掛かればイャンクックなんて恐れるに足らずですッ！」
力強く宣言するフィーリアに、クリュウは「そうだね」と小さく笑みを浮かべる。
「私とクリュウ様の絆の前では、例えリオレイアであろうとも恐れるに足らずですッ！」
「……いや、さすがにリオレイアは辛いと思うけど」
「問題ありませんよ。リオレイアに関してなら私に任せてください。鎧袖一触ですから」
「……その場合、僕はいらないんじゃないかな？」
苦笑するクリュウの見詰める先で、フィーリアは「大丈夫ですって。クリュウ様がいれば私は勇気一〇〇倍ですから」と全く回答になっていない返事を返す。
嬉しそうに軽くスキップするフィーリア。狩場ではあまりにも不謹慎かもしれないが、彼女の今までの状態を見れば少しだけは目を瞑ってあげるべきだろう。
村にいた時はずっとクリュウはリリアの独占状態。あのサクラですら一時的な奪還をするのに念入りに準備を整えた上で相当な努力を要したほど。とてもじゃないがフィーリアが敵うような相手ではなかった。
そんな状態から抜け出せるのはリリアが来られない狩場のみ。なので久しぶりの遠出と聞いて大喜びするフィーリアの気持ちは良くわかる。
しかし、竜車の中では同じような状態であったサクラがクリュウに全力総攻撃を敢行。ここでもフィーリアは手が出せなかった。
だが、天はフィーリアを見捨てなかった。
今回は今までとは違った特殊な依頼。その為チームを二つに部隊分けする必要があった。その際にクリュウがフィーリアを指名。そ

の結果今こうしてフィーリアは一体どれくらい振りかのクリュウとの二人っきり状態を満喫している訳だ。
　クリュウとしてはここへ至るまでのサクラの猛攻撃に身の危険を感じて彼女を外し、シルフィードを選べばフィーリアとの対立があると考えてあえてフィーリアを指名したという深い考えがあったのだが、フィーリアにとってはそんな事関係ない。クリュウと一緒、それも彼からの直々のご指名。もはや夢見心地状態であった。
「フィーリア、どうかしたの？」
　自分をじっと見詰めて来るフィーリアにクリュウが声を掛けると、フィーリアは「い、いえ何でもありませんよッ！」と顔を真っ赤にさせながら手足をバタバタさせる。クリュウはそんな彼女を不思議に思いつつも、携帯砥石で整えていたバーンエッジを腰に戻して立ち上がる。
「そろそろ行こうか」
「は、はいッ！」
　歩き出すクリュウを追い掛けるフィーリア。その足取りが微妙にスキップになっている事に彼は気づいていないだろう。
　二人は深い霧の中、辺りを警戒しながら進む。だが日の光も差さない濃霧の中では視界はかなり限られる。途中何度も突然ブルファンゴに奇襲されて肝を冷やした。歴戦のハンターであるフィーリアもこの霧の中ではチーム一の自慢の視力も封じられてしまう。
「さっきよりも霧が濃くなって来ましたね。気をつけてくださいクリュウ様――って、クリュウ様ッ!?」
　気がつくといつの間にかフィーリアの周りからクリュウが消えていた。霧の中にポツンと一人取り残されたフィーリアの背に冷たい何かが不気味に流れる。
「く、クリュウ様ぁッ!?　どこですかぁッ!?」
「フィーリア？」
　大好きな声は前から聞こえた。すぐに霧の中に人影が現れ、それは徐々に見知った大好きなクリュウの姿に変わる。バイザーの下の優しげな翡翠色の瞳がフィーリアを心配そうに見詰める。

「だ、大丈夫？」
「クリュウ様ぁッ！　勝手にいなくならないでくださいよぉッ！」
「いや、数メートルほど君の前を歩いてたんだけど」
「この霧じゃ見えないんですよッ！　クリュウ様に何かあったんじゃないかって、すっごく心配したんですよぉッ！」
　彼女の視界からクリュウが消えたのはわずか十数秒ほど。しかしそれでも大好きな彼が目の前から消えてしまうという不安は想像を絶するのだろう。薄っすらと涙を浮かべるフィーリアを見てクリュウも返す言葉を失う。
「ご、ごめん……」
　確かにこの霧では数メートルでも見えなくなってしまう。クリュウはウーッと睨んでくるフィーリアに何度も謝りながら彼女の隣を歩く。
「でも、この霧じゃ狩りどころじゃないよ。サクラとシルフィは大丈夫かな？」
「ここは岩壁に囲まれているので風があまり吹かないんです。なので特に霧が深い場所なんですよ。他の場所はここに比べたらかなりマシだと思いますよ」
　クリュウの隣を独占できるという状況に満足しているのかご機嫌なフィーリア。できれば手を繋ぎたい気持ちもあるのだが、それはさすがに勇気が出ないというかきっかけがないというかであと一歩が踏み出せないでいる。
　クリュウは何度も地図を見ながらイャンクック亜種に付けたペイント弾の匂いが漂ってくる場所を照らし合わせる。
「どうやらこの先の広場に出たみたいだね」
「その辺りは毒沼があるので気をつけてくださいね」
「そりゃまた厄介な地形だね」
　クリュウは小さくため息した。フィーリアも「神経を使いそうですね」と苦笑するばかり。沼地という地形は他の狩場以上に神経が疲れてしまう。
　二人はイャンクック亜種を追い掛けて低地の方へ向かった。する

と、拠点(ベースキャンプ)から出てすぐに見かけた紫色の水が溜まった小さな水溜りのようなものが見えた。あれが毒沼である。近づくと気化した毒を吸い込んでしまう危険な場所だ。致死性はほとんどなく弱毒性の毒素のようだが、狩場においてはそのわずかな体の不調が死へと繋がるのだ。

クリュウは毒沼を一瞥しつつ再び地図を取り出して現在位置を確認する。ペイントの匂いはどうやらこの先の広場から漂ってきているようだ。つまり、そこにイャンクック亜種がいる。

――だが、なぜかその匂いが強く感じられた。この距離でこれだけ濃い匂いがするなんて、まるでそこにペイントが二つ存在するかのように……

「フィーリア」

「ええ、わかってます」

クリュウとフィーリアは悪い予感がしていた。急いで駆け出すクリュウを追い掛けてフィーリアも走り出す。

岩に囲まれた道を駆け抜けている最中、前方から爆音や地響き、そしてイャンクックの鳴き声が響いてきた。二人はそれを聞いてさらに走る速度を速める。

そして、岩壁に囲まれた道を抜けて目の前が一瞬にして大きく開けた。そこには――

「後ろだサクラッ!」

シルフィードの声にサクラはとっさに体を横へ投げ出した。刹那、後方から桃色の鱗や甲殻に覆われたイャンクックが突撃して来た。ギリギリのタイミングで回避できたサクラは投げ出した体を起こして再び体勢を整える。

目の前に倒れ込むようにして突っ込んで来たイャンクックに反撃の為にサクラは必殺の突撃を開始。その途中一瞬だけシルフィードの方を見た。

「うおおおぉぉぉッ!」

巨大な大剣キリサキを横薙ぎに振るい、シルフィードは迫る青色の鱗や甲殻に覆われたイャンクック亜種を攻撃する。その強烈な一撃

にイャンクック亜種は「グワァッ!?」と悲鳴を上げてその場で急停止すると頭（かぶり）を振る。そこへ縦一閃、上から下への重量級の一撃が炸裂。イャンクック亜種は口から火炎液を漏らしながら怒り狂う。

サクラは再び視線を前方に戻すと起き上がろうとするイャンクックの脚に横薙ぎの抜刀を炸裂させる。雷撃が迸るが、イャンクックは何事もなかったかのようにゆっくりを起き上がってしまった。

「……チッ」

サクラは後方に跳んで再び体勢を整えて身構えた。しかしイャンクックはサクラへは向かずイャンクック亜種と戦うシルフィードの方を向く。

「……ッ!?」

サクラは慌てて駆け出すが、剣先があと少しで届くというタイミングでイャンクックは怒号と共に突撃を開始した。

「……シルフィードッ！」

「ッ!?　くそッ……ッ！」

サクラの声に反応したシルフィードは確認する暇もなくとっさにキリサキを盾のように構えてガードする。そこへ横からイャンクックが突撃して来た。盾でガードしたとはいえ直撃を受けたシルフィードの体は吹き飛ばされ数回地面の上を転がった。しかも彼女が倒れたのは毒沼の上。それを見た瞬間サクラは彼女が解毒薬を飲む時間を稼ぐ為にも無茶とわかりつつイャンクック二頭に突撃する。だがイャンクック亜種はそんな彼女に向かって火炎液を吐いて来た。進路を塞がれてやむを得ず急停止したサクラに向かって今度はイャンクックが突撃して来る。

サクラは内心焦りながらも冷静にその動きを見てギリギリで回避。無様にも地面の上に転がった。

受身も取れずに地面に叩き付けられた為全身に鈍痛が走る。一瞬だけ顔を歪めながらもすぐにいつもの無表情に戻りシルフィードを確認する。

「クワァァァァァッ！」

解毒薬と回復薬を飲みたい。だがイャンクック亜種はまるでそれを妨害するかのようにシルフィードに執拗な攻撃を続ける。
ギリギリで回避やガードをしてそれらの攻撃に耐えつつも、毒の影響で体力はどんどん奪われていく。それに比例して体に力が入らなくなり、キリサキを握る手もだんだんと握力が失われて来た。
獲物が弱まっているのを本能的に感じ取ったのか、イャンクック亜種はとどめとばかりに必殺の突撃を開始。迫り来るイャンクック亜種にシルフィードは再びガード体勢になるが、正直耐え切る自信はなかった。
迫り来る絶体絶命と言う名のイャンクック亜種を見詰めながら、一瞬クリュウの顔が思い浮かんだ。彼は、いつもこういう時に颯爽と現れて助けてくれる。きっと、今回もかっこ良く自分を助けてくれるだろう。そう信じていた――だから、彼がもっとも得意とする技を信じて瞳を閉じた。決して恐怖から逃げているのではなく、彼を信じているからこそ、自分の命を預けたのだ。
――刹那、突撃するイャンクック亜種の眼前に玉が飛び込み、すさまじい閃光を炸裂させた。その強烈な光撃にイャンクック亜種は悲鳴を上げてその場で急停止した。
シルフィードは再び瞳を開けた。その瞬間、自分を守るようにしてイャンクック亜種に立ち塞がる彼の背中を見て、口元に小さな笑みが浮かんだ。
――やっぱり、彼は助けてくれた。
「シルフィ、大丈夫？」
背を向けたまま、彼は少し不安そうに訊いて来た。そのちょっと自信なさげな声は、今かっこ良く自分を助けてくれたというのに少し情けなく見えてしまう。だが同時に、そんな彼を守ってあげたい、そんな気持ちが胸の中に溢れる。
「あぁ、助かったよ。ありがとう」
「お礼はいいからさ、立てる？」
「何とかな」
シルフィードがゆっくりと体を起こした刹那、突然毒状態が治っ

た。毒の効果が切れた訳ではない。続いて背中に小さな衝撃が走り失われつつあった体力が回復した。
振り返ると、自分に向かって銃口を向けるフィーリアと目が合った。小さく微笑む彼女の片手には空になった解毒薬。フィーリアの広域化＋1と回復弾ＬＶ２のおかげだ。
シルフィードは目で彼女に礼を言うとクリュウの横に立ち並ぶ。
「イャンクックとはいえ、さすがに二体を相手にするのは苦労するな」
「ご、ごめん」
「謝る必要はない。それより今はさっさとこいつを片付けるぞ」
「了解ッ」
視界を封じられてその場を動けずにいるイャンクック亜種と対面する二人は合図もなく一斉に走り出した。シルフィードはイャンクック亜種の眼前で抜刀すると溜め攻撃の構えを取る。クリュウはその間にイャンクック亜種の背後へ回り込むと待機する。攻撃しないのはヘタに攻撃してシルフィードの一撃が外れる事を警戒してるからだ。
シルフィードはすっかり自分との連携にも慣れて来たクリュウを一瞥して一瞬だけ頬を緩めると再び引き締め直し、巨大な剣を握る手に力を込める。
「喰らえッ！」
気合裂帛。限界まで力を溜めて解き放たれたその一撃はイャンクック亜種の顔面に容赦なく炸裂。クチバシを粉砕した。
「クワアアアアアッ!?」
悲鳴を上げるイャンクック亜種。だがクリュウ達の攻撃はここから始まる。
激痛にたたらを踏むイャンクックの右脚にクリュウのバーンエッジが炸裂。迸る火炎がイャンクック亜種の甲殻を吹き飛ばして血が爆ぜる。クリュウは続けて二撃、三撃と連続攻撃を叩き込みイャンクック亜種に猛攻撃を仕掛けた。
「クワァッ！　クワアアアアアッ！」
イャンクック亜種は砕けたクチバシの端から火炎液を噴き出しな

がらクリュウを潰そうと彼に襲い掛かる。だがそうはさせないとばかりにシルフィードの強力な一撃が翼に炸裂。一瞬にして翼膜は切り裂かれてイャンクック亜種は悲鳴を上げて怒り狂う――だが、ズタズタに切り裂かれたせいでわかりにくいが、イャンクック亜種の耳は折りたたまれていた。それは彼の残り体力が少ない事を示している。

クリュウはそれを一瞬で確認するとすぐさま戦法を変える。一撃一撃正確に叩き込むのではなく、とにかく周りを動き回って攻撃を繰り返し、イャンクック亜種の逃亡を阻止する。

シルフィードはクリュウの考えがわかってはいたが、重量のある大剣では彼のように機敏には動けない。とにかく力続く限り全力でキリサキを振り回すのみ。

クリュウとシルフィードの猛攻撃は着実にイャンクック亜種にダメージを蓄積させている。

もうすぐ勝てる。そんな予感が頭を過ぎった刹那、

「避けてくださいクリュウ様ッ！」

フィーリアの悲鳴にクリュウはとっさに横へ身を投げ出した。一体何事かと確認していては遅い。今まで培ってきた経験がそう告げていたからこそ迷わずに跳んだのだが、どうやらそれは正解だったようだ。

クリュウが避けた直後、そこへイャンクックが突撃して来た。どうやらサクラとフィーリアで押さえていたらしいが、不意を突かれてこちらに突撃させてしまったらしい。

シルフィードはギリギリでガード。その一撃をきれいに受け流して耐えたようだ。

突然の奇襲を何とか回避できたクリュウにサクラが駆け寄って来た。

「……クリュウ、大丈夫？」

「何とかね」

残念ながらバイザーに隠されていてクリュウの表情をサクラは見る事ができない。だが、バイザーの奥にある彼の瞳を見てサクラはうなずく。

「……二体同時は厄介」
「そうだね。でもこれじゃどうしようも」
「――どうやら、状況が変わったみたいですよ」
振り返ると、ハートヴァルキリー改を構えたフィーリアが二人の背後に立っていた。彼女の視線を追うと、突然の突風に襲われた。
「しまったッ！」
クリュウは激しい風に片目を瞑りながら暴風を纏って天高く飛び立つイャンクック亜種を睨む。逃げられたのだ。
飛び去っていくイャンクック亜種を悔しそうに睨みつけ、クリュウは再び前を向き直る。そこはにもう一体の通常体のイャンクックが怒り状態で堂々と立っていた。
クリュウはバーンエッジを構え直すが、シルフィードがそれを制した。
「クリュウとフィーリアは引き続き亜種の方を頼む。おそらく奴は巣で眠って体力を回復させるつもりだ。面倒な事になる前に倒しておいてくれ」
「わかった。フィーリアッ！」
「はいッ！」
クリュウがフィーリアに声を掛けて彼女と共に走り出したと同時にイャンクックはシルフィードに飛び掛って来た。巨大なクチバシをハンマーのように上下に激しく動かして攻撃。シルフィードはそれを大剣を振り回してイャンクックを攻撃しつつその反動でうまく回避した。そこへ反対側からサクラが飛び掛って来た。
「……フッ！」
息を吐くと共に体全体を使って鬼神斬破刀を振り抜く。強烈な鋭い一撃にイャンクックはたまらず転倒した。途端に二人は一斉に動けぬイャンクックへ襲い掛かる。
サクラは目にも留まらぬ速さで華麗な剣撃の嵐を、シルフィードは溜め斬りを構えで力を蓄えて一気に解放。強烈な一撃がイャンクックの頭部に炸裂し、耳とクチバシを一斉に破壊した。
容赦のない一方的な攻撃の嵐。イャンクックは悲鳴を上げて必死

にもがくが、サクラとシルフィードの猛攻は止まらない。
　しばし一方的な攻撃に晒されたイャンクックは怒号を上げて起き上がると、絶妙なタイミングで後退した敵を睨み付ける。だが、睨まれた二人はそれに臆する事はなく、むしろ余裕すらあった。
「……何て事をしてくれたのよ」
「うん？　何がだ？」
「……なぜクリュウとフィーリアに行かせたの？」
「そういう編成で分けたからだが」
「……編成の時から不満だった。クリュウと組むのは私が適任」
「いや、確かに近接戦での君達の連携は見事だ。だが、生憎と私は君達のような機動力はないからな、サクラくらいの機動力がある剣士がいた方が私が楽だと思ったのだ。それに、純粋な連携力で言ったら、あの二人がチーム随一だと私は思う」
「……」
　サクラはムッとしたような表情を浮かべるとツンとそっぽを向く――彼女自身、クリュウとフィーリアの連携力の高さを知っているからこそ、反撃の言葉も出ないのだ。
　シルフィードは小さく苦笑してそんな彼女の横顔を見詰める。ふと、機動力のある剣士を連携相手に選ぶのであれば、クリュウでも適任なのではないかと思い至って少し肩を落とした。
　そんな感じで余裕たっぷりな二人に対し、もはや余裕も理性も何もかもを失ったイャンクック。耳が畳まれている所を見るともはや残り体力も少ないのだろう、決死の特攻の如き突撃で二人に襲い掛かる。だが、
「……邪魔するな。私は今すさまじく機嫌が悪いのよ」
　そう言って跳躍したサクラは迫り来るイャンクックの顔面に体全体と使って鬼神斬破刀をフルスイングして叩き込んだ。すさまじい一撃にイャンクックは再び倒れる。
　本当に機嫌が悪いのだろう。サクラは鬼神斬破刀を荒々しく振り回し、反撃できないイャンクックを一方的に痛めつける。その勢いはすさまじく、シルフィードは出番もなく苦笑するばかり。

そして、あっという間にサクラはイャンクックの息の根を止めて討伐を完了した。それでも尚機嫌は直らないのか、サクラは舌打ちしてイャンクックの砕けたクチバシを一回蹴る。クリュウが見たら怒りそうな光景だが、幸か不幸かここに彼はいない。
「……シルフィード、私達も行く」
「いや待て、今から行っても間に合わんぞ。あの二人なら亜種とはいえ弱ったイャンクックを倒すなど苦ではないはず。二人に任せておこう」
「……二人っきりなんて、許さない」
サクラはプイッとシルフィードの言葉を無視して鬼神斬破刀を背中の鞘に納めると、二人を追い掛けて行ってしまった。そんな彼女の背中を見詰め、シルフィードは苦笑する。
「まったく、一応私はチームのリーダーなのだがな」
言っても始まらないとわかっているからこその愚痴。シルフィードは苦笑しながらもやっぱり仲間想いなリーダーである。仕方がないとばかりにサクラを追い駆けるのであった。
クリュウとフィーリアが到達したのはこの狩場で最も高い崖の上であった。そしてそこでイャンクック亜種は鼻提灯をしながら熟睡中。どうやらここが彼らの巣らしい。洞窟の中は入りづらい上に地下水が染み出しているので極寒。とてもじゃないがねぐらとしては使えないようだ。
「フィーリアは右翼へ。僕は左翼へ回るから」
「わかりました」
二人はすぐにイャンクック亜種を挟撃できるような位置に移動する。幸いゲネポスやイーオスはいないのでその掃討はせずに済んだ。本来なら寝ているモンスター相手には大タル爆弾等が有効なのだが、相手はイャンクックという事で今回は爆弾なしで来たのでそれはできない。
配置に着くと、クリュウはフィーリアを見る。彼女もすでに準備を完了してハートヴァルキリー改を構えて正確にその銃口でイャンクック亜種を捉えている。

フィーリアはクリュウを見て小さく首肯した。それを合図にクリュウは駆け出す。走りながらバーンエッジを引き抜き、両手でしっかりと構えてダンッと地面を蹴って跳躍。イャンクック亜種の顔面目掛けて襲い掛かる。
「うおおおおおぉぉぉぉぉぉッ！」
クリュウは全力でバーンエッジをイャンクック亜種に叩き込んだ。
「クワァァァァァッ!?」
眠っている最中の突然の攻撃にイャンクック亜種は飛び起きて悲鳴を上げる。攻撃と共に跳ね起きた首に激突したクリュウだったが、盾でその衝撃を利用して後方へ下がった。
クリュウの攻撃に呼応してフィーリアも一斉に総攻撃を開始。通常弾ＬＶ２の速射と彼女の神業的な技量が加わった超速射はイャンクック亜種に反撃の隙を与えない。すさまじい猛射撃にイャンクック亜種は悲鳴を上げて脱出しようと無茶苦茶な方向へ駆け出す。
「逃がさないッ！」
フィーリアは素早く徹甲榴弾ＬＶ２を装填してスコープも覗かずに離れたイャンクック亜種に目視で狙いを定め、引き金を引いた。銃声と共に撃ち出された徹甲榴弾ＬＶ２はイャンクック亜種のクチバシに突き刺さると、時間差で起爆。耳元で轟いた鋭い爆音はイャンクック亜種の聴覚に激しい衝撃となって襲い掛かった。結果、まるで音爆弾と受けたようにイャンクック亜種はその場で直立立ちしてフラフラと体を揺らす。
「今ですクリュウ様ッ！」
すぐさま通常弾ＬＶ２に切り替えて速射を再開しながら叫ぶフィーリアだが、クリュウはそれよりも早くイャンクック亜種に向かって走り出していた。
すでに耳は畳まれている。戦いの終わりはもうすぐだ。
クリュウは腰に挿した相棒、バーンエッジを引き抜く。あの空の王者の魂が込もった刀身は荒々しく燃え、激しい火炎が吹き荒れる。
「これで終わりだぁッ！」
跳躍したクリュウは振り向くイャンクック亜種の顔面に向かって

バーンエッジを叩き込んだ。イャンクック亜種は小さな悲鳴を上げてその場に重々しい地響きと共に崩れ落ちると、ついに動かなくなった。
　イャンクック亜種を討伐し終えた事を確認し、クリュウは緊張を解くように小さくため息すると腰にバーンエッジを戻してレウスヘルムを脱いだ。そこへフィーリアが駆け寄って来た。
「やりましたねクリュウ様ッ」
「まぁね。でもやっぱり亜種は普通のより強いね」
「何言ってるんですか。ずいぶん余裕を持って戦ってたじゃないですか」
「そ、そんな事ないって」
　クリュウは少し照れたように頬を掻く。そんな彼を見てフィーリアは小さく微笑んだ。
　リオレウスと戦えるまでに成長したクリュウなら、亜種とはいえイャンクックに後れを取る事はないと思っていたが、予想通りの結果であった。
「さぁ、早く剥ぎ取ってしまいましょう」
「そうだね」
　クリュウとフィーリアは辺りにモンスターがいない事を確認してから倒したイャンクック亜種に近づき、剥ぎ取りを始める。もちろんその前に戦った相手の冥福を祈る儀式は忘れない。
「へぇ、やっぱり基本的には怪鳥の鱗や甲殻と変わらないんだね」
「亜種と言っても結局はイャンクックですからね。当然ですが青怪鳥の素材では火竜のものには遠く及びません」
「まぁ、別に素材目当てで狩った訳じゃないし。とにかくこれで依頼は完了だよね」
「そうですね。向こうはとっくに討伐を終えているでしょうし。もう拠点（ベースキャンプ）に戻ってるかもしれませんね」
「そうだね。じゃあ僕らも早く戻った方がいいね」
「そうですね」
　フィーリアとクリュウは用意を整えると拠点（ベースキャンプ）に

向かって歩き出した。
依頼は一応終わっているので、気持ち的にも余裕が生まれて自然と会話が弾む。何気なく楽しそうに話し掛けるクリュウに対し、フィーリアはもう心の中では号泣するほどに大喜びだ。ここ最近、こんなにもクリュウを独り占めにできた事なんてあっただろうか。いつもいつもリリアとサクラの壮絶なクリュウ争奪戦を文字通り指をくわえて見ている事しかできなかった自分が、今はこうしてそのクリュウを独り占め。こんなに嬉しい事はない。
クリュウに話し掛けられるたびに、二人っきりという幸せに胸がジーンと温まる。
「フィーリア？　何か楽しそうだけど、どうかしたの？」
「いいえ、何でもありませんよ～♪」
ルンルン気分でクリュウに笑顔を振りまくフィーリア。クリュウはそんな彼女の様子に不思議そうに首を傾げるが、すぐに気にしなくなって楽しげに彼女に話し掛ける。
拠点（ベースキャンプ）に戻るまでの道中、まるで狩場全体が空気を読んだみたいにモンスターに襲われる事はなく、フィーリアはクリュウと二人っきりという幸せを目一杯満喫するのであった。
サクラ達がペイントの匂いを頼りにやって来たのは崖の上の広場。そこにイャンクック亜種は横たわって死んでいた。
「……クリュウ」
「うむ、どうやら二人はもうここにはいないらしいな。拠点（ベースキャンプ）に向かったのかもしれん」
シルフィードの冷静な解釈などサクラにはどうでも良かった。ただ本当にクリュウはいないのかキョロキョロと辺りを見回し、本当にいないとわかるとがっくりと肩を落とす。
「もうここに長居する必要はないな。サクラ、さっさと剥ぎ取って私達も拠点（ベースキャンプ）に戻るぞ――って、うむ？」
シルフィードが振り返ると、一瞬前までそこにいたサクラの姿はどこにもなかった。慌てて辺りを見回すと、拠点（ベースキャンプ）の方向へ続く道を全速力で突っ走って行くサクラの背中が見えた。

「お、おいおい……私は置いてきぼりか」
シルフィードは霧の向こうへ消えていくサクラの背中を見詰め、疲れたようにため息した。
そして、さっさと剥ぎ取りを終えてやれやれと肩を竦（すく）ませながら彼女も拠点（ベースキャンプ）への帰路に着いたのであった。

第８２話　不憫なフィーリアの小さな幸せ

　テティル沼地の拠点（ベースキャンプ）は三ヶ所の道から行けるが、どれも人間が通れる程しか幅がないのでモンスターは入って来れない。その奥の小さな湖のほとりに拠点（ベースキャンプ）の天幕（テント）はある。

　クリュウが戻って来ると、湖の水を飲んでいたアニエスが「キュイッ♪」とかわいらしい声を上げてドタドタと駆け寄って来た。

「キュイィッ！」

「こ、コラ舐めるなってッ」

　スリスリと頬ずりしてベロベロとクリュウを舐め回すアニエス。甘えん坊で寂しがり屋の彼女にとってクリュウに拠点（ベースキャンプ）に一匹（ひとり）置いて行かれるのはすごく不安なのだろう。だからクリュウを見ると甘えずにはいられないのだ。

　まぁ、寂しくても決してクリュウの命令を破る事はないので、クリュウとしては安心してロープで繋ぐ事もせずにアニエスを拠点（ベースキャンプ）に置いて行けるのだが。

「あれ？　二人とも帰って来てないよ？」

　アニエスに散々甘えられた後、天幕（テント）の中や辺りを確認したクリュウは二人の姿がない事に首を傾げた。

「おかしいですね。イャンクックの死体はあったから討伐は終わっているはずなんですが……」

　ここに戻る途中でイャンクックの剥ぎ取りを行った二人。今回の依頼はテティル沼地に現れたイャンクックとイャンクック亜種の討伐。これで依頼されたモンスターは全て討伐を終えた訳なのだが、サクラとシルフィードが戻って来ない。

「でもまぁ、そのうち帰って来るよ」

「そうですね。お二方はどちらもお強いですから、それこそ火竜の番（つがい）が現れても撃破してしまうような実力の持ち主ですし」

　フィーリアの言葉に、クリュウは苦笑いしながら改めて二人はすごいなぁと思った。自分では彼女達と力を合わせて辛勝するのがやっ

との相手。それを二体同時に相手にできるとなると、やっぱり自分との差は大きい。
「僕はどこまで行けるんだろ……」
「え？　何か言いましたかクリュウ様？」
「ううん、何でもないよ」
　クリュウはそう言うと不思議そうにこちらを見詰めているフィーリアの横を通り過ぎ、支給品を道具箱の方へ戻しておく。支給品はあくまで支給なので、依頼が終わった後余った物は道具箱に戻しておくのが掟だ。まぁ、ハンターという職業柄生活苦になっている人も少なからずいるので、実際は守られていない事も多いが、もちろんクリュウはそういう事をするようなタイプではない律儀な性格をしている。
「お腹空いたなぁ」
　道具箱の支給品の整理をしながら何気なく呟いたクリュウの言葉を、フィーリアはしっかりと聞き取った。これはチャンスだ。
「あ、あのッ！　お肉焼きましょうかッ？」
「え？　あ、でももうすぐ二人も帰って来るし」
「大丈夫ですよ。それにお二人もきっと小腹くらいは減っている頃合ですし、ちょうどいいじゃないですか」
「そ、そっかな？　じゃあお願いできる？」
「はいッ！」
　フィーリアは満面の笑みを浮かべてうなずくと、早速メンバーで唯一彼女だけが持っている高級肉焼きセットの準備する。その間にクリュウはアニエスにエサを与える。
　鼻歌を歌いながらご機嫌で準備を進めるフィーリア。火薬がこの気候の湿気でダメになっていないかと一瞬心配したが、そんなトラブルもなく順調に準備が進んでいく。
　土台をセットし、火薬を石皿の上に引き、アニエスの干草を少し分けてもらってそこに加え、準備完了。両手に持った火打石を何度も火薬の上で叩いて火花を散らせる。五回目でようやく火花が火薬に引火し、干草と共に炎を立ち上らせる。
　フィーリアは火の勢いが一定になるのを見計らって生肉を固定す

る。そしてすぐにハンドルをゆっくりと、一定のリズムで回し始める。
肉焼きのうたを口ずさみながら嬉しそうに肉を焼くフィーリアを見て、クリュウは小さく微笑んだ。
一方フィーリアはこの千載一遇のチャンスにすっかり有頂天気分。これでクリュウに喜んでもらえば今までの遅れを少しでも取り返せるかもしれない。
クリュウと二人っきり。そしてクリュウの為に肉を焼く。フィーリアにとって今はまさに夢見心地である。
うっとりと、クリュウの横顔をじっと見詰めるフィーリア。すると、クリュウが突然振り返った。
「ふぃ、フィリーアッ!? なんか肉から黒い煙が出てるよッ！」
「えへへ――ふぇッ？ うにゃあッ!?」
フィーリアは慌てて黒煙を噴く肉を取り上げたが、時すでに遅し。生肉はすっかり黒ずんでしまい、焦げ臭い匂いが辺りに広まる。
「肉を焼いている時に余所見しちゃダメだよ」
「うぅ、すみません」
初歩の初歩でミスったフィーリアは恥ずかしさで真っ赤に染まった顔を上げられない。しかし耳まで真っ赤になっているのでクリュウにはバレバレである。
「あぁ、うん。生肉はまだあるから、今度はちゃんとお願いね」
「は、はいぃッ！」
クリュウのありがたいお言葉に、フィーリアは薄っすらと涙を浮かべながら喜ぶ。こういう優しさに、彼女は惹かれているのだ。
気を取り直してもう一度肉焼きにチャレンジするフィーリア。今度こそはと意気込み、しっかりと肉の焼き加減を見詰めながらゆっくりと回す。肉焼きのうたを口ずさむのも忘れない。
勢いの強い火にあぶられてどんどん焼けていく肉。ベストの瞬間は一瞬のみ。その瞬間を逃がすまいとフィーリアは真剣に焼けていく肉を見詰める。そして、
（ここッ！）

「ウルトラ上手に焼けましたぁッ！」
バッと天高く掲げられたのはまさに絶妙な火加減で焼かれた最高の肉、こんがり肉Ｇであった。太陽の光があったらまばゆく光るであろうこんがり肉Ｇを見上げ、フィーリアは満足そうにうなずくと、ちょうどアニエスにエサを与え終えて戻って来たクリュウに「見てくださいッ！　こんがり肉Ｇですよッ！」と自慢げに見せる。
「おぉ、さすがフィーリア。もう肉焼き名人だね」
「えへへ～♪」
クリュウにほめられて大喜びなフィーリア。クネクネと体をクネらせ、顔はもうとろけてしまいそうなくらいニヤけている――それだけ、ずっと寂しかったのだと思うと本当に不憫（ふびん）な子だ。
「どうぞクリュウしゃまぁッ！」
フィーリアが差し出したこんがり肉Ｇをクリュウは「ありがとう」と笑顔で受け取る。その笑顔にフィーリアは天を見上げた。その一瞬だけ、霧が晴れて彼女を神々しい太陽の光が照らし上げた。
「……もう死んでも悔いはありましぇん」
――本当に、不憫な子だ。
そんなフィーリアの想いなど知らないクリュウは天幕（テント）の横の腰ほどの高さの岩に腰掛けてこんがり肉Ｇを頬張った。パリッとした皮と中のジューシーさがまさに最高のハーモニーをかもし出している。適度な塩加減が食欲をそそり、クリュウはおいしそうにこんがり肉Ｇを食べ進める。
「フィーリア、これすごくおいしいよッ！」
クリュウの言葉にフィーリアは「それは良かったですッ！」と笑顔で答え、彼に背を向けるとまた天を見上げて「……生まれて来て、本当に良かったぁ」と喜ぶ。
「フィーリア？　どうかしたの？」
「い、いいえッ！　何でもありませんよぉ」
フィーリアは慌てて笑って誤魔化す。クリュウはそんな彼女の反応に違和感を感じつつも彼女が何でもないと言っているのでそれ以上追求する訳にもいかず一応納得してこんがり肉Ｇにかぶりつく。

そんな彼の横に、フィーリアはゆっくりと腰を下ろした。
「……あ、あのさフィーリア。そんなに見詰められると食べるに食べられないんだけど」
　じーっと見詰めて来るフィーリアにクリュウが苦笑いすると、フィーリアは慌てて「す、すみませんッ！」と顔を真っ赤にしながら視線を外す。
「なんか、僕の顔に付いてるの？」
「い、いえ本当に何でもありませんのでッ！」
　すごく気になりつつもそれ以上の追求はせず、クリュウはこんがり肉Ｇを頬張る。
　数分後、クリュウはこんがり肉Ｇを全部食べ終えて残った骨を土の中に埋めた。後片付け完了だ。
「ふぅ、おいしかったよフィーリア」
「クリュウ様に喜んでもらえて私も嬉しいです」
　そう言って嬉しそうに笑うフィーリアに、クリュウも小さく笑みを浮かべる。
　ここが湿地帯で沼地でなくて霧がなくて、太陽があって風が吹くと揺れる草花があれば最高なのだが、フィーリアにとってはそれ以上にクリュウと一緒にいられる事自体が最高なのだ。
「なんか、こうしてフィーリアと二人っきりってずいぶん久しぶりな気がするね」
「え？　あ、そうですね」
　突然話し掛けられてフィーリアは一瞬驚いたが、すぐに平静を取り戻して答える。そんな彼女に、クリュウは小さく笑みを浮かべながら話しかけ続ける。
「いやぁ、やっぱりフィーリアと一緒ってのが一番落ち着くね」
　そのクリュウの何気ない言葉に、フィーリアの表情がパァッと明るくなる。
「ほ、本当ですかッ⁉」
「うん。サクラは一緒にいると色々と無茶して来るし、シルフィは仲がいいと言っても年上だからね。やっぱり付き合いが長いし、話しや

すいフィーリアが一番だよ」
「……はうぅ」
妙に色っぽいため息の後、フィーリアは鼻から赤い液体を垂れ流した――鼻血だった。
「ふぃ、フィーリアッ!? ど、どうしたのさ一体ッ!?」
「だ、大丈夫ですよぉ……ッ！」
ドボドボドボドボッ！
「全然大丈夫じゃなさそうなんだけどッ！ すさまじい勢いで血が噴き出てるけどッ！」
クリュウは慌ててハンカチを取り出してフィーリアの鼻に当てると、ゴシゴシと荒々しくも急いで血を拭う。
「ちょっとッ！ 僕ばっかりじゃなくて自分でもやってよぉッ！」
「……ふぇ？」
クリュウに抱きとめられながら鼻を拭かれるという幸福状態にすっかり身を委ねていたフィーリアは一瞬呆けたような表情を浮かべた後、慌てて自分もハンカチを取り出して血を拭う。
フィーリアは鼻血が落ち着くと湖で手や防具についた血を洗い流す。その時の彼女の顔はもう熟れたリンゴのように真っ赤に染まっていた。
「は、恥ずかしいですぅ……ッ」
クリュウの嬉し過ぎる言葉を聞いたとはいえ、彼の前で鼻血のオンパレードをぶちかますなんて乙女失格の大失態である。穴があるなら入りたい。そんな気持ちを激しく味わうフィーリア。そんな彼女を心配してクリュウが近寄って来た。
「だ、大丈夫フィーリア？」
「うぅ、何とか大丈夫ですぅ……」
恥ずかしくて顔を上げる事のできなフィーリアに、クリュウは心配するもどうしていいかわからず右往左往。
――二人の間に無言の何ともいえない気まずい雰囲気が流れ始めた刹那、クリュウにとっては救いの女神、フィーリアにとっては天敵が現れた。

「……クリュウッ！」
その声にハッとなってクリュウが振り返ると、拠点（ベースキャンプ）の入口で激しく肩を上下に動かして荒い息をするサクラが立っていた。どうやらここまで全速力で走って来たらしい。
「あ、サクラッ！　今までどこに行ってたんだよッ」
クリュウはすぐにサクラの下へ駆け出す。顔を上げられないフィーリアはうつむいたまま離れていくクリュウの気配に悔しそうに唇を噛む。
サクラはサクラで駆け寄って来るクリュウに向かって残る力を振り絞って駆け出す。
「……クリュウぅッ！」
「サクラぁッ――って、ストップストップッ！」
全速力で突っ込んで来るサクラにクリュウは慌てて急停止すると暴走する彼女に止まるように叫ぶが、《サクラは急には止まれない》という彼女自身の座右の銘のごとくサクラは止まらずに突っ込む。そして、
「……クリュウぅッ！」
「うわぁッ!?」
クリュウの胸に向かってサクラはダイブ。あまりの勢いにクリュウは彼女に押し倒される形となって仰向けに転倒した。
「ちょ、ちょっとサクラぁッ！」
起き上がろうとするクリュウだが、サクラは彼の上から抱き付いて離れようとはせずクリュウは起き上がれない。
「ど、どうしたのサクラ？」
「……クリュウのバカ」
「えぇッ!?　ぼ、僕が悪いのッ!?」
思い当たる節がないクリュウは困惑する。そんな彼の胸に飛び込んだままのサクラは、ほんのりと頬を赤らめてスリスリと頬ずりする。それに気づいたクリュウは途端に顔を真っ赤にする。
「ちょ、ちょっとサクラッ。いい加減離れてよぉッ！」
「……拒否する」

「何で君に拒否権があるのさッ!?」
必死にクリュウは抱き付いてくるサクラを引き剥がそうとするが、近頃リリアの猛攻撃の前に欲求不満に陥っている彼女の暴走は止まらない。このままの勢いで彼の唇も奪って――
「何をしているんですかッ!」
幸せムードから一変、サクラの表情がいつもの無表情に戻った。スッと不機嫌そうに睨む先には仁王立ちしたフィーリアが立っていた。唇の端がピクピクと動いているのは、相当怒っている証だ。
「……邪魔は、許さない」
ゆっくりと立ち上がったサクラは隻眼でキッとフィーリアを睨みつける。フィーリアも負けじとサクラを睨み返す。一触即発な雰囲気が、その場に流れた。
睨み合う二人の恋姫の間で、そのあまりの迫力に声を掛ける事もできずに右往左往するクリュウ。自分が原因だとは気づいていないのが彼らしい。
三人がそんないつものような感じでいると、シルフィードがゆっくりとした足取りで戻って来た。
「全く、君達は一体何をやっているんだ」
動けぬ三人を見て呆れるシルフィードは小さくため息した。すると、そんな彼女に気づいたクリュウが救いの女神を得たの如くパァッと笑顔を華やがせると、彼女に駆け寄った。
「し、シルフィッ！　あの二人をどうにかしてぇッ！」
「いや、私に言われても困るのだが」
「仲間同士のケンカを仲裁するのはリーダーの役目だよ！」
「……君達はなぜ、面倒な時にだけ私をリーダーと頼るのだ？」
苦笑するシルフィードだったが、このままだと二人が本当にマジケンカに発展しかねないので、仕方なく止めに入ろうとする。と、
「お、お願いだよシルフィッ！」
仲裁に入ろうとするシルフィードに、クリュウは抱き付いて必死に懇願（こんがん）する。どうやら彼女が呆れて立ち去ろうとしたのだと誤解しているらしい。だが、突然クリュウに抱き付かれたシル

フィードはいつものクールさが一転してあたふたと慌て始める。
「お、おいクリュウ……ッ」
「お、お願いッ！　僕達を見捨てないでぇッ！」
「み、見捨てたりはせんから……ッ！　と、とにかく離れてくれぇッ！」
だが、クリュウはギューッとさらに強く抱き付いてくる。目の前に彼の顔、そして何より彼に包まれるという事実に頭がクラクラとしてくる。真っ赤な顔を見られたくなくてシルフィードは慌てて顔を逸らすが、それがクリュウにとっては拒否の仕草に見え、
「し、シルフィッ！」
「あふぅ……」
シルフィードが色々な意味で限界に達しようとした刹那、彼女のハンターとしての鋭い感覚がリオレウスにも引けを取らないような凶悪な殺気を感じ取った。ハッとなって振り返ると、そこには……
「……」
――無言で自分を睨みつけて来るサクラとフィーリア。二人ともすさまじい殺気を全方位に噴出させ、辻斬りのような鋭い眼光をしている。なぜか、二人の背後にはそれぞれ火竜リオレウスと雌火竜リオレイアの怒り狂った顔が見える。
シャキン……これはサクラが愛剣、鬼神斬破刀を背中の鞘から引き抜いた音。
チャキ……これはフィーリアが愛銃、ハートヴァルキリー改に弾を装填した音。
ジャリ……これは二人の足が砂と擦れた音。そして二人は、一斉に全力攻撃体勢に入り――
「ま、待てぇッ！」
このままだと本当に殺されかねない状況に、真っ赤だった顔を一転させて真っ青にしたシルフィードは慌ててクリュウを引き離そうとする。
「クリュウ離してくれッ！　私は今命の危機に瀕しているんだッ！」
「た、助けてよシルフィッ！」

「誰か私を助けてくれえええええッ！」
その日、テティル沼地には珍しくクリュウではない大人びた少女、シルフィードの悲鳴が響いたのであった。
翌日、一行はテティル沼地から竜車で半日、テティル地方最大の都市である城塞都市テティリアに到着した。ドンドルマと同じく三方を山に囲まれ、開け放たれている南側は巨大な壁で守っているテティリアは、防衛設備に関してだけはドンドルマを凌駕する難攻不落の城塞都市。撃竜槍だけでなく撃竜針、バリスタ、大砲などドンドルマに装備されている物の他にも様々な設備が備えられている。
テティリアの前身、旧テレステニアは二〇年ほど前に古龍の攻撃を受けて崩壊。新都市テティリアはそれを教訓に要塞を築いてから街を造るという手法で、難攻不落の大要塞となった。
現在このテティリアはドンドルマに対して様々な工業製品を輸出し、見返りに土地柄育たない食糧などを輸入して生計を成り立てている貿易都市。有事の際にはドンドルマと物資を共有する同盟を結んでいるので、補給の面でも難攻不落の都市だ。
巨大な壁の向こうにあるテティリア都市中央部は様々な工場が立ち並び、煙突が無数に存在する。煙突からは絶えず黒煙が空へ上っていく。テティリアは大規模な発展を優先した為、大陸一空気が汚染されている。外部から人が出入りする事が少ないのはその為だ。
そんなテティリアに、クリュウ達はやって来た。壁の門をくぐり、竜場にアニエスを預けてクリュウ達はテティリアの街を歩く。
天高く聳える煙突。その先からは黒煙がもうもうと立ち上り、灰色の空に吸い込まれていく。テティリアの空に太陽が現れるのは月一回程度らしい。
「何か、変な臭いがするね」
「有害物質が大気中に漂っているのだ。その臭いだなきっと」
「あまり長居したい所ではありませんね」
「……臭い」
外部の人間である四人は早速テティリアは自分達には合わないと実感した。遠くの煙突が霞んで見えるのも、大気が汚れているからだ

そうだ。
「とにかく、さっさとギルドに行って依頼完了を報告してしまおう」
そう言ってシルフィードは先頭を歩く。他の三人はそんな彼女について行く。
今回の依頼は村に来た依頼自体はいつもと変わらないものであったが、依頼が完了するとテティリアのギルド支部に報告するというややこしいものであった。これはテティルがまだ山の向こう側、つまりイージス村やドンドルマのある地域との交流不足の為だ。トンネルが開通してまだ日が浅いので、色々と間に合っていないのだ。
途中、一行は最短ルートの為市場を通過した。ドンドルマと同じ活気に満ちた市場だが、工業製品が七割ほどを占め、食料関係の店は野菜などは乾燥野菜、肉も乾燥した干し肉など保存重視のものが多い。これらは主にドンドルマから来ているもの。その為テティル地方では新鮮な食材とはあまり出会えない。この地で生まれた子供は死ぬまで肉は乾いたものだと信じる、という冗談はあながち間違いではないのかもしれない。
珍しい市場にクリュウはちょっと興味を惹かれたが、他の三人がスタスタと進むので仕方なくついて行った。
ドンドルマほどではないが石造りのしっかりした建物がテティリアギルド支部だ。テティリアのギルドもやはり酒場と一体化したもの。どうやらこの組み合わせは大陸共通らしい。
ドアを開けると、酒場特有のむあっとした匂いが鼻を襲う。酒や料理、煙草や体臭などが混ざり合ったこの匂いも、大陸共通だ。
クリュウとフィーリア、サクラは先にテーブルを確保し、シルフィードが受付に向かった。
テーブルを確保した三人だったが、ここでクリュウの隣を巡ってフィーリアとサクラが対立。お互いに武器を構えかねないような勢いだったので、クリュウが慌てて隣にシルフィードを指名して何とか事なきを得た。まぁ、後でシルフィードに怒りの矛先が向くのは当然であったが。
椅子に座ったクリュウは早速レウスヘルムを脱ぐ。若葉色のサラ

サラとした髪が外気に触れて嬉しそうに揺れる。開かれた翡翠色の瞳はいつものように柔らかい印象を持つ。
　そんなクリュウの素顔にフィーリアとサクラは見惚れている。狩りの時はいつもヘルムに隠れているので、こういう時にじっくりと堪能しておかないと。
「あ、あの、僕の顔に何か付いてるの？」
「ふぇッ!?　な、何でもありませんよッ！　ね、ねぇサクラ様ッ!?」
「……（コクコクッ）」
　いきなり声を掛けられて慌てまくる二人に首を傾げるクリュウだったが、そこへ報酬金を受け取ったシルフィードが戻って来た。
「うん？　どうした、何かあったのか？」
　そう言ってシルフィードはクリュウに問うが、彼自身もよくわかっていないのでとりあえず首を横に振っておく。シルフィードはフィーリアとサクラを一瞥して首を傾げたが、追及する気はなく空いているクリュウの横に座る。その瞬間、フィーリアとサクラの眼光が鋭くなった。
「……あ、空いている席に座っただけで、なぜ殺気を込めた視線を向けられなければならないのだ？」
「ご、ごめんねシルフィ……」
　シルフィードにとってあまり居心地がいいものではなかったが、仲間の輪から離れる訳にもいかないし、ちょっとだけ彼の隣が嬉しかったりするので移動したりはしない。そのまま彼女は四つの皮袋に分けて受け取った報酬金をテーブルの上に置いた。
「これが今回の報酬だ。さすがにイャンクック二頭では報酬は安いな」
　手に取ってみたクリュウは彼女の言葉に内心うなずいた。確かにいつもよりも軽い。リオレウスとは比べ物にならないし、これだったら護衛依頼の方が高い。
「何か採掘でもしておけば良かったですね」
　苦笑しながら言うフィーリアの言葉に、シルフィードは「全くだ」と同じく苦笑しながらうなずいた。

「……用件は済んだ。さっさと行こう」
そう言ってサクラは立ち上がると三人に背を向けて歩き出す。シルフィードはそんな彼女の背中を見て肩を竦ませると、自らも立ち上がった。
「仕方がない、そろそろ行くぞ。どうも私はここの空気は合わん」
「そうですね。私もちょっと……」
「本当はゆっくりしたいけど、ここじゃくつろげそうにないしね。さっさと村に帰ってそこでゆっくりしようよ」
クリュウはそう言って小さく微笑んだ。すると、そんな彼の言葉に三人がピクリと肩を震わせる。
「「……村」」
確かに、イージス村は故郷のような場所でゆっくりとくつろげそうだ。だが、忘れてはいけない。あの村には今、魔物が住んでいる事を。
お兄ちゃんと甘えた声で純粋無垢なクリュウを誘惑し、徐々に自分の色に染めようとする自分達の最強の敵――リリア・プリンストンッ！
足を止めてうつむき沈黙する三人に、クリュウは不思議そうに首を傾げる。
「みんなどうしたの？　ほら、早く行こうよ」
「……村には帰らない」
「え？」
クリュウが振り返ると、サクラが無表情で立っていた。その隻眼はいつものように何の感情も窺い知る事もできないほどに冷たい。
「村に帰らないって、テティリアに何か用でもあるの？」
「……用件はない」
「え？　じゃあ何でまた」
「……とにかく、村には帰らない。帰りたくない」
そう言ってサクラは椅子に腰掛けた。完全に動きませんモードに突入してしまったようだ。そんなわがままなサクラにクリュウはため息する。
「ちょっと、フィーリアとシルフィからも言って――」

「わ、私はドンドルマに行きたいです～」
「それは名案だ。このままでは骨折り損のくたびれ儲け。ドンドルマまでちょっと出稼ぎに行くか」
　何の感情もない、まるで台本を棒読みしているかのように抑揚のないセリフを言った後、二人はサクラの肩を叩いて歩き出す。慌てるのはもちろんクリュウだ。
「ちょ、ちょっと待ってよみんなッ！　本気でドンドルマに行くのッ!?」
「……もう少し稼いだ方がいい。それがいい。その方がいい。決定」
　サクラまで棒読み状態。クリュウは三人に違和感を感じていたが、それよりも三人の突拍子もなさ過ぎる提案に混乱する。
「さすがに連続は辛いってッ！　ドンドルマにはまた今度行こうよッ！　だからもう村に帰って――」
「……却下」
「丁重にお断りします」
「それはできんな」
「……何で、珍しく三人の意見が見事に合ってるの？」
　クリュウはため息すると「わかったよぉ……」と泣く泣く従う事にした。そんなクリュウに内心謝りつつも、三人の決意は固い。
「じゃあ、ドンドルマに行くにしても途中村に寄ってからにしようよ。装備とか補充した方がいいし、エレナ達にも伝えないと――」
「……拒否する」
「それはちょっと困ります」
「村には寄らんぞ」
「だからッ！　何でこんな時に限って意見が合うのさ君達はッ！」
　こんな時だからこそ、三人の意見が合ったのだ。
　せっかくリリアから逃れる為に疲れている体を押してドンドルマ行きを決めたのに、村に寄ってしまうなんて本末転倒だ。
「とにかく、私たちはこのままドンドルマへ行くぞ。リーダーの決定には従ってもらう」
「そ、そんなぁ～ッ！」

がっくりとうな垂れるクリュウ。しかしリーダーの決定とあれば従うしかないし、多数決でも自分は負けている。結局、素直にフィーリア達について行くしかないのだ。

がっくりとうな垂れるクリュウを、三人は申し訳なさそうに見詰める。しかし、悪魔からクリュウを守るにはこうするしかないのだ。

結局、一行はテティリアは出発するとイージス村を素通りしてドンドルマに向かう事になった。そしてドンドルマで数日間簡単な依頼を幾つかこなし、さすがに帰らないとまずくなって帰還した。

実に二週間半ぶりに帰って来たイージス村。もちろんクリュウは早速エレナのドロップキックを受けて悶絶。その後はリリアに振り回され、三人は指をくわえて再びの出立を待つしかなかった――ご愁傷様。

第８３話　サクラサク

リフェル森丘。かつて火竜リオレウスと死闘を繰り広げたこの地に、クリュウとサクラはやって来た。
今回は二人だけの狩りだ。正確にはこの森の向こうの村への物資輸送を行う輸送隊の護衛依頼である。
リフェル森丘付近は数日前まで連日豪雨が降り、至る所で土砂崩れや河川氾濫が起きている。その為ライフラインが切断されてしまった村や街も存在し、王政府は被災地に救援物資を送る事を決定した。
しかし、救援物資を送るにしても輸送隊が避けて通れないのがリフェル森丘。つまりは狩場だ。物資や人を獲物にしたモンスターに襲われる危険性が高い為、こうして輸送隊はハンターに護衛を依頼している。そして、その一つをクリュウとサクラが受ける事になったのだ。
小春日和というべき心地良い日差しの下、レウスヘルムまでしっかりと被ったレウスシリーズを着たクリュウと凛シリーズを纏ったサクラは並んで草原の上を歩く。その後ろからは二匹のアプノトスに引かれた二台の竜車が続く。彼らが今回の二人の護衛対象だ。荷台には生活物資などが積まれており、いつもよりも慎重に護衛しないといけない。何せ人の命にも関わるような物資なのだから。
「でもまぁ、場所がリフェル森丘で良かったね」
そう言ってクリュウは辺りを見回す。確かに砂漠や火山と違って広い場所というものが少ない森丘はモンスターに大規模に襲われる事はない。しかも森丘に生息しているのはランポスだ。ゲネポスやイーオスに比べれば相手にもならないようなモンスター。護衛任務とはいえ、リリアを助けた時のような壮絶なものにはならないだろう。
サクラも同意見なのか、そんなクリュウの言葉にコクリと小さくうなずく。そして相変わらずの無表情で前を見詰め、時折その隻眼で辺りを見回す。その間、彼女は無言だ。
無言で忠実に任務を遂行する彼女を見て、クリュウは感心した。さ

すが護衛の女神と謳われるだけのハンター。人の命が懸かっているとなると冗談をやらかす事なく真剣にやっている。ちょっと会話がないのは寂しいが、そんな彼女のまじめさは尊敬できる。

クリュウもそんな彼女を見習って警戒を強化して辺りをしっかりと、時折双眼鏡を使って見回す。そんな彼を、隣を歩くサクラがチラチラと盗み見ている事を彼は知らない。

（……かっこいい）

レウスシリーズを纏った彼の勇姿を見て、サクラはほんのりと頬を赤らめた。

子供の頃から、クリュウはずっと自分にとってはかっこ良くて優しい存在だった。それは今も変わらない――いや、昔よりもずっとかっこいいし、優しい。

そんな彼を今は独り占めにできるのだ。サクラにとって、こんなに嬉しい事はない。

フィーリアは別の単独依頼の為にドンドルマへ。シルフィードも用があると言って一人で出払っている。そんな時にやって来たこの依頼に、サクラはすぐに承諾した。何せ村にはクリュウの布団に潜り込む事数回、天敵リリア・プリンストンがいる。クリュウを奪還するには狩場しかない。それも今回は二人っきり。無表情を装っていても唇の端が自然と吊り上がってしまう。

無言で辺りを警戒しつつも、サクラの頭にはこの依頼を終えた後の事しかない。今回の依頼は行きのみなので、目的地の帰りの途中の街で別のハンターに護衛が変わる。その街は比較的大きな街な上にクリュウ達も何度も訪れている慣れ親しんだ街。街には食堂があるからそこで二人でランチを食べる。その後も一緒にデートのように街を回る。こんな寄せ集めのような企画段階でも、サクラはもうウキウキだ。

律儀に辺りを見回しているクリュウの横で、サクラは早く街に着く事を願って少しだけ足を速めた。と、

「サクラッ」

「……（コクリ）」

――言われなくてもわかる。前方の林の中で何かが動いたのが見えた。どんなに浮かれていても、彼女のハンターとしての勘が鈍る事はない。
クリュウは輸送隊に止まるよう指示し、自分が見て来ると言ってゆっくりと林の方に向かう。自分は輸送隊の直援だ。
バーンエッジを抜いたクリュウはレウスフォールドに下げた五発の小タル爆弾の一つに手を掛けた。サクラはそんなクリュウの背中を、じっと見詰める。
――刹那、林の中から青の襲撃者が襲い掛かって来た。ギャアギャアと威嚇のような声を上げて現れたのは十匹のランポス。さらに横の岩壁の上から六匹が飛び降りて来た。どうやら待ち伏せされたらしい。
輸送隊の男達は悲鳴を上げる。確かに一般人の彼らにとってランポス十六匹なんて敵わない相手だろう。だが、クリュウには物足りないくらいだ。
「ギャアッ！　ギャオッ！」
中隊長らしきランポスの鳴き声に十五匹のランポスは三匹ずつの小隊に分かれてクリュウを取り囲むように展開する。モンスターとはいえ、見事な連携だ。
だが、クリュウは慣れた手つきでランポスの展開が完了する直前で小タル爆弾二発をベルトから外してすぐさまピンを抜いて投擲。二発の小タル爆弾はランポス達の前で小さな爆発を起こした。
突然の事に驚くランポス達。その隙にクリュウは突貫して輸送隊に最も近いランポス三匹に襲い掛かり、あっという間に全滅させる。
一瞬にして仲間を三匹も殺られたランポス達に動揺が走る。だが隊長の命令に再び冷静さを取り戻したのか、今度は二個小隊で襲い掛かってくる。しかしクリュウはそれを冷静に見抜き、再び小タル爆弾二発を投擲。進路に小爆発が起きたランポス達は驚愕してその場に急停止。そこへクリュウが突っ込む。
「はぁッ！」
バーンエッジを横薙ぎに振るい、先頭のランポスの首を切断。続い

てもう一匹のランポスの背中に斬り掛かり、二撃を叩き込んで潰し倒す。
小隊の懐に入り込まれたランポス達は慌てて散開しようとするが、クリュウはそれを封じるように各個撃破。瞬く間にさらに三匹のランポスを片付ける。逃げ出す最後の一匹は深追いはせずに体勢を立て直す。
あっという間に部隊の半数以上を殺されたランポス達は後ろに跳んで隊列を整えると、再び小隊ごとにクリュウに襲い掛かる。しかし結果は変わらずクリュウは残る最後の小タル爆弾を投擲して威嚇爆発を起こし、ランポスの動きを止めて斬り掛かる。ランポスは反撃する隙もなく三匹が倒された。一匹がクリュウの攻撃をすり抜けて輸送隊に襲い掛かったが、当然サクラの一撃で瞬殺された。
もはや継戦は困難と悟ったのか、残る三匹のランポスは仲間の亡骸に目もくれずに敗走する。それらを追撃する事はなく、クリュウはバーンエッジを一回振るって刃に付いた血を飛ばすと、腰に戻す。その鮮やかな剣捌きに戦いを見守っていた輸送隊の男達から拍手が起きる。クリュウはバイザーを上げてそれらに照れ笑いを浮かべた。そんな彼にサクラがトコトコと駆け寄る。
「……お疲れ様」
「こんなの疲れるのには入らないよ。それよりさっさと森を抜けてしまおう。今逃がしたランポスが部隊をまた整えられたら面倒だからね」
昔のクリュウなら《面倒》ではなく《厄介》と言っていただろう。どちらも難しい場合に用いる言葉だが、その意味は大きく違う。片方は実力以内の困難を示し、もう片方は実力以上の困難を示す。
今のクリュウは例え三〇匹ぐらいでランポスが襲い掛かって来ても冷静に撃破できるだけの力を持っている。それだけ、彼は大きく成長していた。
クリュウは輸送隊の隊長と二、三ほど話し合った後、輸送隊は再び前進を開始した。先頭はもちろんクリュウとサクラの双璧が守る形。
辺りを見回して奇襲を警戒するクリュウを見て、サクラは小さく口

元に笑みを浮かべた。
（……今回、きっと私の出番はない）
サクラの予想通り、その後も輸送隊はブルファンゴやチャチャブーに襲われたが、クリュウ一人でそれら全てを撃破。輸送隊は無傷でリフェル森丘の狩場を抜けたのであった。
リフェル森丘の周辺にある村や街の一つ、中継都市カザハ。人口は五〇〇人前後で、リフェル森丘に来るハンターはよく立ち寄る街だ。クリュウとサクラも何度も訪れている、慣れ親しんだ街である。
カザハから峡谷を挟んだ向こう側の街に物資輸送を終えた輸送隊はこうしてカザハ経由で再びドンドルマを目指すのであった。帰りの護衛は別のハンターが行う手はずになっているので、クリュウ達は感謝する輸送隊の隊長や隊員達と別れた。後はこのままイージス村に戻るのみ。だがその前に腹ごしらえだ。
クリュウとサクラは早速街の大衆食堂へ向かう。戸をくぐると、結構広い食堂にはすでに大勢の市民が集まっていた。相変わらず繁盛しているらしい。
二人がどの席に座るか迷っていると、
「いらっしゃいませ――って、クリュウさんにサクラさん。今日はお二人だけですか？」
そう言ってやって来たのはクセッ毛がかわいらしいこの店の給仕娘。クリュウ達も何度もこの店に足を運んでいる為に、すっかり名前を覚えられてしまったようだ。
レウスヘルムを手で持ちながらクリュウは小さく笑みを浮かべる。
「まぁね」
「あはははは、デートですか？」
「……愛の逃避行中」
「席を案内してくれるかな？」
「二名様ご案内～♪」
「……クリュウ、冷たい」
窓際の席に案内されたクリュウ達が席に座ると、少女はメニューを置いて「決まりましたらお呼びください」と言って別の客の方へ注文

を聞きに行った。
　残された二人は早速メニューを開いて料理を決める。
「僕はこのトロトロ煮込みマトングレートカレーってのにするけど、サクラは？」
「……スパイクフグの刺身定食」
「あははは、サクラらしいね」
「……素材の味が一番」
　注文を決めた二人は先程の給仕娘を呼んで注文をする。少女は「少々お待ちください」と言って厨房の方へ消えた。
　ちょうど昼時な為か、店内はかなり賑わっている。皆思い思いに会話を楽しみ、この空間いっぱいに人の声が木霊する。そんな中、二人のテーブルは静かなものだ。
「ご飯食べたら村に戻ろっか。ハンターが一人もいない状態ってのはあまり良くないしね。きっとみんなも待ってるだろうし」
「……ま、待って」
　クリュウが帰路の話を始めたので、サクラは慌ててそう言った。すると、クリュウは驚いたような表情を浮かべて小さく首を傾げる。
「どっか寄りたい所でもあるの？」
「……あ、いや、せっかくカザハに来たんだから。少し買い物をしたくて」
　そう答えると、クリュウはさらに驚いたような表情を浮かべた。そんな彼の反応に、今度はサクラが首を傾げた。
「……どうしたの？」
「いや、サクラにも女の子っぽい所があるんだなぁって」
「……怒るよ？」
「ごめんごめんッ。でも今まで君がハンターの道具以外で自分から買い物したいなんて言った事なかったからさ」
　確かにそうかもしれない。元々自分はフィーリアのように小物や装飾品などで喜ぶようなタイプではない。だから今までそういった買い物をした事はほとんどなかった。
　――でも、

「……私だって、一応年頃の女の子だから」
自分はもう昔の、オシャレなどに無頓着な自分ではない。人並みにはかわいくなりたいと思うし、そういう努力もしてみたい――それが、恋する乙女というものだ。
そんなサクラの言葉にクリュウは少しの間思案顔になると、にっこりと笑ってうなずいた。
「そういう事なら僕も付き合うよ。エレナやリリアにも何かお土産を買って行った方が喜ぶだろうし、サクラにも何かほしい物があれば買ってあげる」
そう言って笑う彼を見て、サクラも小さく笑みを浮かべた。
ちょっと当初の予定とは変わってしまったが、とりあえずデート作戦の第一段階は成功した。彼から見えないテーブルの下でこっそりとガッツポーズ。
デート（サクラ視点）が決まったら次はどんな店に行くかである。クリュウと二人で相談していると、少女が二人の料理を持ってやって来た。
「お待たせしましたぁ」
運ばれて来たのは名前の通りトロトロになるまで煮込まれたマトングレートに季節の野菜や山菜を盛り合わせたカレー。香ばしいスパイスの匂いが食欲をそそる。
サクラの前に置かれたのは透明でキラキラと輝くスパイクフグの刺身が花の形に盛られた見た目もきれいな一品。その他に大雪米の白米や味噌汁などが加わる。
伝票を置いて、少女は「ごゆっくりどうぞ」と言ってその場を立ち去った。二人は温かいうちに早速料理を食べ始める。味はもちろん美味だ。
「すごいなこの肉。口の中で溶けるみたい」
「……おいしい」
どちらも自分の料理には大満足のようだ。すると、サクラが刺身を一切れ箸で摘み、ちょんちょんとタレを絡めると、スッとクリュウに向けて来る。

「さ、サクラ？」
「……あーん」
どうやらサクラ、クリュウに《あーん》をしたいらしい。だが、そんな恥ずかしい事そう簡単にできる訳もなく、
「いや、ちょっとそれは勘弁」
「……あーん」
「だ、だから……」
「……あー……んぅ……」
「――わかった。食べるからそんな捨てられた子犬のような目で僕を見ないで」
表情の変化や口数が少なくても、サクラは瞳一つで自分の感情全てを表す事ができる。相変わらずその潤んだ瞳攻撃にはクリュウは勝てないのだ。
恥ずかしい気持ちを堪えつつ、クリュウはサクラの「……あーん」に素直に従って口を開いた。サクラはゆっくりと箸で摘んだ刺身をそっとクリュウの口の中に入れる。クリュウの口が閉じると、スッと器用に箸を引く。
「……おいしい？」
確かにおいしいにはおいしいのだが、こんな状態でなかったらもっとおいしく感じられただろう。今彼が思っている事の大半は恥ずかしさだ。
「う、うん」
「……良かったぁ」
――まぁ、表情の変化が少ないサクラが隻眼を細めて微笑む姿を見ると、良かったと素直に思える。
そんな仲睦（なかむつ）まじい二人を、観葉植物の陰から見ていた給仕娘は小さく微笑む。しかしすぐに彼女は客に呼ばれて、再び騒がしい店内の喧騒の中へ飛び込んで行った。
昼食を終えた二人は真っ直ぐこの街唯一の大きな商店街へ向かった。観光で来たのなら私服で行けたのだが、依頼の帰りでは仕方なく二人ともそれぞれの防具姿。もちろんクリュウはヘルムだけは被っ

ていないが。
結構大きな商店街には魚屋から八百屋、肉屋などの食料関係から服やアクセサリーといった装飾関係、はたまた家具などの店も立ち並んでいる。
サクラはそれらを見回し、内心ちょっとウキウキしていた。さりげなくクリュウの手を握っているのは彼女らしいが。
「……クリュウ、あれ」
「うん？　服屋か？」
サクラが指差したのは女性向けの服屋。するとサクラはグイグイと握った手を引っ張ってクリュウを連れて行こうとする。
「……早く早く」
「わ、わかったから手を引っ張らないでッ」
結局、クリュウはサクラに連行されるような形で店に入った。店の中には所狭しと女性向けのかわいらしい服やら色っぽい服、中には水着なども置かれている。奥の方に見えた白やらピンクやら紫やら黒、はたまた赤の薄い生地の下着は見なかった事にする。
店に入って来たのがハンターだったという事もあって、店員らしき女性はびっくりしたような表情を浮かべたが、ジッと無言で服を見詰めているサクラを見て納得したようだ。
「いらっしゃいませ。彼女へ服のプレゼントですか？」
「まぁ、そうなりますけど……恋人って訳じゃないですよ」
そう言うクリュウをサクラは一瞬恨めしげに睨むが、すぐに服の方へ視線を戻す。今はとにかくクリュウに自分の魅力を存分に発揮できる服を選ぶのみだ。
「……クリュウ、これ」
「――却下する」
選びに選び抜いた渾身の力作を即却下されたサクラはガビーンと凍りついた。フラフラと後ずさりし、ちょっと涙を浮かべて恨めしげにクリュウを睨む。
「……何が悪い」
「そんな服を着させるくらいなら買うかッ！」

クリュウは顔を真っ赤にさせて怒鳴る。ビシッと指差したのは彼女の持つ服。それは明らかに胸元の生地が少な過ぎ、フリフリのスカートはありえないくらいに短い一品――まぁ、ちょっと力を入れ過ぎたサクラが完全に間違えた路線に走っているのがわかる服であった。

「……うぅッ」

「そ、そんな目をしてもこればっかりは断じて認めんッ！」

クリュウに断固拒否されたサクラはしょんぼりとその大人な服を戻す。名残惜しいが、肝心のクリュウに拒否られたのでは意味がない。

「……じゃあ、クリュウが選んで」

「ぼ、僕がッ!?」

サクラの軽い恨みを込めた反撃に、顔を真っ赤にして驚くクリュウ。途端にあたふたと慌て始める彼を見て内心おかしげに笑うも無表情の仮面は外さないサクラ。

「……当然。人の意見に反対するからには、それに相応するだけの意見を示す必要がある。だから、クリュウが選んで」

「そ、そんなの無理だよッ！　女の子の服なんてわかんないよッ！」

慌てふためく彼に内心笑いつつも、無表情の仮面でじっと彼を見詰め続ける。店員が助け舟を出そうかと近づいてきたが、サクラに睨まれて退散した。プロのコーディネイトもいいが、サクラは愛する彼に選んでほしいのだ。

サクラの無言の圧力にクリュウはついに降参したのか、渋々といった具合に服を選び始める。しかし選ぶからには真剣に吟味してくれるのが彼らしい。時折大胆な服を見つけて頬を赤らめて慌てて戻すという仕草もかわいらしい。

彼が服を選ぶ間は無表情を徹していたサクラだったが、一度だけ堪えられずに吹いてしまった事があった。それは真剣に服を選ぶクリュウに店員が「これなんてお似合いではないでしょうか？」と言ってフリルの付いた真っ白なかわいらしい服を持って来た時の事。クリュウは「サクラにはちょっと合わないと思いますけど」と言った。

サクラ自身も自分にはあんなかわいらしい服装は合わないと思っていたので彼の意見に同意した。すると、
「いえいえ、これは私があなた様にお似合いだと思って選んだのですが」
その予想外にして強烈無比な一撃は、サクラの鉄の仮面を見事に粉砕するだけの威力は十分にあった。
一方のクリュウは今まで以上に顔を真っ赤にすると「僕は男ですよッ！」と激怒。店員は慌てて退散した。その後、しばらくクリュウはショックのあまり無言でその場に立ち尽くしていたが、サクラはそんな彼に先程店員が持っていた服を重ね合わせ、あまりにも似合っているその想像上の女装したクリュウに再び笑いを堪えるのに必死になるのであった。
そんなアクシデントというか事故を何とかやり過ごし、クリュウはやっとサクラに服を選んだ。サクラも納得し、早速試着室へ向かう。
試着室に入ってカーテンを閉めて着替えていると、カーテンの向こうで「これなんていかがでしょうか？」「だから僕は男ですってばッ！」「あぁ、髪の長さが問題なのでしたらこちらに長髪のウィッグがありますよ」「そういう問題じゃなくて、根本的な性別の問題ですッ！」というクリュウと店員の会話が聞こえ、サクラはくすくすと笑ってしまう。
かっこいい彼が好きだが、確かに彼は結構女顔をしている。ツバメほどではないが、きれいに女装をしてらきっとすごい美少女になるだろう――自分以上に。
「……負けられない」
サクラは妙な対抗心を燃やしながら、彼が選んでくれた服を着てみる。備え付けられた鏡で自分の姿を見ると、そこには常日頃では見た事がないかわいらしい自分がいた。
オシャレに無頓着で、必要最低限な事くらいしかしない自分はいつも同じような、素材だけの美しさでいた。それが、こうしてちょっと付け加えるだけでこんなにも見違えてしまうのだ。
きれいになった自分を見て、サクラは改めてオシャレの重要性を実

感した。
なるほど。フィーリアがいつも女の子らしさを気にして徹底していたのはこういう事だったのだ。珍しく、サクラはフィーリアを尊敬した。
「サクラ。着替え終わったぁ？」
カーテンの向こうからどこか疲れたような彼の声が聞こえた。どうやら店員と相当言い合ったらしく疲れてしまっているらしい。そう思うとくすくすとまた笑ってしまう。
「……終わった」
そう小さく答えると、サクラはスッとカーテンを開いた。すると、こちらを見詰めていたクリュウが瞳を大きく見開くのが見えた。恥ずかしくて、赤く染まる頬を隠すようにうつむいてしまう。
カーテンを開いて出て来たサクラは赤いワンピース姿というものだった。過剰ではなく、適度に飾り付けられたフリルがかわいらしくも大人な雰囲気を忘れない。下地は黒色なので、彼女のイメージカラーとも言うべき黒と赤を組み合わせた見事なチョイスだ。胸元はあまり開いていないが、赤い表生地と黒い下生地が自然と彼女の適度な大きさの胸を魅せる。
クリュウらしい、余分な飾りつけはせずに素材そのものを生かすようなデザインの服は、見事にサクラに合っていた――合い過ぎていて、クリュウは声も出ない。
「……どう、かな？」
恥ずかしくてうつむき加減で問うサクラに、クリュウは「うえッ!?」とつい変な声を出してしまい、頬を赤らめて慌てる。
「え、えっと、すごく似合ってると思うッ」
「……ほ、ほんと？」
激しくドキドキと鼓動を刻む胸を押さえながら、サクラはゆっくりと上目遣いで問う。彼にこの鼓動が聞こえてしまうのではないか。そんなありえないような事も心配してしまうほど、サクラは不安だった。
そんなサクラに問われ、クリュウは大きくうなずく。

「ほ、本当にすごく似合ってるよッ！　似合ってて、その――すごく、きれいだよ」
「……ッ!?」
　ボンッと顔を真っ赤に染めるサクラ。そりゃあもう熟れたリンゴのように真っ赤だ。
「……あぅ、えっと……その……、ありが、とう」
「う、うん」
　それ以降、二人の会話は続かなかった。
　どちらもどうすればいいかわからず黙ってしまい、二人の間に微妙な空気が流れてしまう。そこへ店員が入って来る。
「すごくお似合いですよお客さん。いやぁ、彼に感謝してくださいね。すごく真剣に選んでましたので。もう、焼いちゃいますよ」
　店員の言葉にクリュウはさらに顔を真っ赤に染めて「な、何言ってるんですかッ！」と店員に怒ってそっぽを向く。そんな彼を見て、サクラは小さく微笑むと、彼に聞こえるように、でも小さな声で「……ありがとう、クリュウ」と礼を言った。
　――その時の彼女の笑顔は、いつもの彼女の精一杯の小さくも大きな笑みではなく、本当に、年相応の少女の喜びの笑顔であった。
　商店街を歩くサクラは元の凛シリーズに戻っていた。だが、その胸にはしっかりとクリュウに買ってもらったワンピースが入った紙袋が抱き締められている。
　決して安い買い物ではなかったが、隣で小さく微笑みながら上機嫌に歩くサクラを見ていると買って良かったと心から思えた――ちょっと恥ずかしかったが、あれもまた経験というものだ。
　すると、スッとサクラの手が彼の手に伸び、そっとその手を握った。突然手を握られて驚くクリュウを、サクラが横から上目遣いに見上げる。
「さ、サクラ？」
「……ありがとう、これ、大切にする」
「あ、うん」
　――なぜだろう、サクラがいつもよりもずっとかわいく見えてしま

い、自然とクリュウはドキドキしてしまう。彼女の真っ直ぐな瞳がまぶしくて、クリュウはつい目を逸らした。すると、そんな彼を見てサクラは小さく微笑み――

チュッ……

――唐突に、サクラはクリュウの頬にキスをした。

「なぁッ!?」

クリュウは突然の事に慌てて頬を押さえて仰け反る。視線の先には顔を赤らめたサクラが小さく笑みを浮かべた後、プイッと背を向けるのが見えた。

頬に残る柔らかくて温かい感触に、クリュウはもう限界くらいにまで顔を真っ赤にする。それはサクラも同じらしく、互いにこれでもかというくらいに顔が真っ赤だ。

「な、何でまた突然……ッ!?」

状況がまるでわからず混乱するクリュウに、サクラは背を向けたままボソボソというような感じの声で返す。

「……服の、お礼」

「いや、だからっていきなり……その……あの……」

「……嫌、だったの?」

振り返ったサクラがしょんぼりとしているのを見て、クリュウは慌てて首を激しく横に振る。

「も、もちろん嫌ではないッ! 嫌じゃなくて、その、むしろ……嬉しいには嬉しい訳であって、その……」

どう答えれば良いか迷うクリュウ。そんな彼の言葉にサクラはそれで満足と言いたげに微笑むと、彼の手をもう一度掴む。

「……それで構わない。これは私からのお礼だから」

そう言って、サクラはクリュウの右手を両手で掴み、こっちこっちと言わんばかりに彼の手を引く。そんな彼女に引かれる形でクリュウも歩みを再開した。

「サクラ、この事はフィーリア達には……」

「……わかってる。これは、クリュウと私だけの、二人の秘密」

そう言うサクラはとても楽しそうだった。そんな彼女の表情を見

ると、自然と肩の力も抜けて笑みが浮かんでしまう。この安心感は、きっと子供の頃から変わらない。

その後クリュウはサクラに振り回される形ながらも商店街でデート(サクラ視点)を楽しんだ。久しぶりに二人っきりという環境が、二人の距離を今までよりも縮めたのは言うまでもないだろう。

その後、イージス村に帰ったサクラがこれ見よがしにクリュウに買ってもらったワンピースをフィーリア達の前で披露してしまうという事件が発生。フィーリアは泣き崩れ、シルフィードは茫然自失、リリアは泣きながら暴れ出し、エレナはクリュウを半殺しにした。結局いつも苦労するのはクリュウなのであった。もしクリュウが他の人の分までお土産を買っていなかったら、本当に彼は殺されていたかもしれない。

ちなみにサクラがその後、今までよりもオシャレに気に掛けるようになったのは数少ない良かった点と言えよう。

第８４話　白雪の下　彼の優しさに温められて

イルファ雪山。かつてレミィとツバメ、そしてサクラと共にドドブランゴと戦ったこの地は、冬本番直前という事もあって多くのハンターが出入りしている。

どの地域でも通常雪山は冬になれば閉山される。これは冬本番の雪山は豪雪や急激な気温低下など最も危険な状態になるので、安全確保の為に行われる。この場合地元に住む者ですら掟で入れない。もちろん外部の人間であるハンターも同じ事だ。

冬本番になれば雪山は立ち入り禁止。その為、この時期は雪山の依頼が殺到するのだ。次の開山は春まで待たないといけないので、皆必死なのだろう。特に多いのがポポノタンや雪山草の採取。どちらも人々の生活に少なからず影響するだけあって需要も多いのだ。

モンスターを倒すだけでなくこういう一般人には危険な事も行う、それがハンターという職業なのだ。

麓付近は晴れているものの、山の頂は鉛色の厚い雲に覆い隠されていて見る事はできない。気候状態はあまりいい方ではないイルファ雪山にこの日、クリュウとシルフィードという珍しい組み合わせでのコンビが到着した。

イージス村から五日ほど掛けてアニエスの引く竜車で来た二人。イルファ雪山は通常はアルフレア経由で来るのだが、今回は村に来た依頼だったので二人は直接この地にやって来た。

拠点（ベースキャンプ）に到着するとクリュウは竜車から降りた。途端に体中を襲う壮絶な寒さに身を震わせた。

「寒い……ッ」

北国育ちであるクリュウでさえ寒さに身を震わせる程、雪山の気温は恐ろしく寒いのだ。

少しだけ寒さに慣れたクリュウはイージス村からここまで竜車を引き続けたアニエスの頭を優しく撫でる。アニエスは疲れているはずなのにクリュウに撫でられると「キュイッ♪」と嬉しそうに甘えてくる。クリュウは程ほどにアニエスをかわいがった後、すでに道具箱

を確認しているシルフィードに声を掛けた。
「シルフィ。支給品はある？」
「残念だが届いていないようだな。この時期は雪の影響で雪崩や土砂崩れも多い。補給物資が遅れるのは珍しくはないさ」
　そう言ってシルフィードは道具箱を閉めると、持参した道具が満載された道具袋（ポーチ）を腰に掛ける。彼女の装備はいつものように蒼空の王者、リオレウス亜種の素材で作られたリオソウルシリーズと耳に輝く赤い宝石はレッドピアス。武器は鋭さと軽量さを主軸に置いた大剣キリサキ。蒼銀の烈風と呼ばれる彼女にふさわしい強力な武具だ。
　そしてクリュウもまたいつもと変わらない装備。シルフィードと色違いとも言うべき空の王者リオレウスの素材を使ったレウスシリーズに、同じく火竜の素材を使った片手剣バーンエッジ。
　クリュウがレウスヘルムを被り、バイザーを下ろすとシルフィードは「用意はいいか？」と問うて来た。その問い掛けに対しクリュウはヘルムを被ったままうなずいた。
「良し。今回は雪山草の採集だから二手に分かれよう。クリュウは洞窟を抜けて山頂付近へ回ってくれ。私は麓側から迂回して山頂を目指す。どっちの区域も雪山草が良く採れる場所だからな」
「わかった。大型モンスターの目撃情報はないから気楽でいいけど、シルフィは気をつけてね。大剣じゃギアノスに囲まれたら面倒だろうし」
　わかりきった事ながらも、彼に心配されているという事にシルフィードは小さく笑みを浮かべると「わかった」と答えた。
「目標数以上の雪山草を採取、または夕方になったら拠点（ここ）に集合しよう。今日は山頂付近の天候が怪しいから、無理はするなよ」
「了解」
「では行くぞ」
　シルフィードはキリサキを引き抜いてその場でブンッと一回転させて手応えを確認し、背に戻すと歩き出した。それに続いてクリュウも歩き出す。

見上げた空は晴れているも、自分達が目指す山の頂上付近は厚い雲に覆われていて確認する事はできない。
クリュウは前を歩くシルフィードに視線を戻すと、その大きくて頼れる背中に小さく微笑んだ。
拠点（ベースキャンプ）から出て最初のエリアに到着した二人は早速二手に別れた。クリュウはこのまま洞窟を目指してそこから山頂付近を目指すコース。シルフィードは一回麓を回ってから山頂を目指すコース。どちらも雪山草が採れる道だ。
二人は互いに手を振り合うと、それぞれの道に向かって歩き出す。そんな二人の背中を見ていたポポは、すぐにそんな二人の事も忘れてのどかに草を食み始めた。
前に来た時よりも確実に地面に残っている雪の量が増えていた。地面に所々雪が残っているという光景は、今では雪原の中に所々地面が見えているというような状態だ。
シルフィードは辺りを見回して危険なモンスターがいないかを確認する。少し離れた場所にポポがいるが、こちらから手を出さなければ問題はない。
「さて、と……」
シルフィードは早速雪山草を探してみる。雪山では結構見かけられる草だが、こうしていざそれを探すとなるとなかなか見つからない事もある。人間の心理とは不思議なものだ。
だが何も希少植物という訳ではない。程なくして岩陰に生えているのを見つけてシルフィードはそこへ駆け寄ってしゃがみ込む。
雪のように純白の美しい花に濃い緑色の葉や茎を持つ、普通の草花と変わらないような、しかしそれらとは何か違うようなオーラを放つ植物。それが雪山草だ。
「まずは一つか」
シルフィードは雪山草を根っこから引っこ抜くと素材袋に入れる。続いて岩陰の周りをよく見てみると、運良くあと一つ生えていた。シルフィードはそれも採取すると、次のエリアに向かった。
そうして麓をくまなく探した結果、全部で五つの雪山草を手に入れ

た。
山頂を目指して坂道を歩き続けるシルフィード。その前に純白の斜面にぽっかりと空いた洞窟が現れた。別ルートから進んでいるクリュウも通る洞窟の入り口の一つだ。近づくと、奥から外の風なんかよりもずっと寒い風が吹き出していた。その風が頬を撫でた途端、体が勝手にブルブルと震える。ここから先はホットドリンクなしで行くのは暴挙と言える。
「ホットドリンクを飲まないと……」
シルフィードは腰の道具袋（ポーチ）に手を伸ばして中を探る。手に取ったのは赤い液体の入った回復薬などと同じビン。雪山や冷たい洞窟の中などの極寒の地に人間の体を一時的に適応させる薬品、ホットドリンク――の、はずだが。
「うん？」
シルフィードはようやくその異変に気づいた。手に持つホットドリンクをまだ見える太陽にかざして見る――心なしか、いつも飲むホットドリンクと色が違って見えたのだ。
首を傾げつつ、シルフィードはビンの蓋を開けてみた。鼻をそっと近づけて匂いを嗅いでみて――ようやくその異変に気づいた。
「……これは、鬼人薬グレートだよな？」
そうつぶやき、サァーッといつものクールな表情が一転して慌て始めるシルフィード。
シルフィードがホットドリンクだと思って持って来たのは、何と似たような色をした別の薬、鬼人薬グレートだった。これは腕力や脚力といった攻撃に重要な筋肉が一時的に上昇する薬。残念だがホットドリンクの効果は得られない。
「ぬおッ!?　なぁッ!?　ちょ、ちょっと待て……ッ！」
慌てふためくシルフィードはすっかりいつもの冷静さを失って狩場だというのに辺りを見回す事なく座り込むと、道具袋（ポーチ）を引っくり返す。中身を雪の上にぶちまけるのも気にせずあたふたと持って来た道具類を確認する。
回復薬や回復薬グレート、こんがり肉、砥石……鬼人薬グレート

……

「……ほ、ホットドリンク、忘れた……」

その瞬間、後頭部をバットで殴られたかのような衝撃を受けた。そして、自分のアホ過ぎる程のうっかりさに絶望した。恥ずかしくて、顔も上げられない。

「な、何をやっているんだ私は……」

あまりのアホさに笑いそうになる。だが、何とか堪えた。このまま笑ってしまうとそのままずっと爆笑していそうだったからだ。それほど、今の自分の姿はあまりにも滑稽だった。

「ど、どうすれば……」

解決策を必死に考え出すシルフィード。このまま雪山に突っ込むのはあまりにも無茶だ。だが、行かなければ雪山草は手に入らない。それに山頂に行けばクリュウと会える可能性が高い。そうすれば恥ずかしいがホットドリンクを分けてもらう事もできるだろう。

逆に拠点（ベースキャンプ）に戻って支給品かクリュウが来るのを待つという手もある。だが、それはできれば遠慮したかった。理由は簡単、クリュウ一人に仕事を押し付けるのは気が引けたからだ。

だが、このままホットドリンクなしで山頂を目指すのもかなり危険だ。

結局考えが纏まらずその場で考えまくるシルフィード。自分の世界にすっかり入っている彼女は、背後から近づく気配にまだ気づいてはいなかった。そして、

「ギャオワァッ！」

「何ッ!?」

振り返った刹那、水色の粘液が右腕にベチャリと付着した。その途端右腕のリオソウルアームとリオソウルメイルの右肩付近が一瞬にして凍りついて動かなくなってしまった。

「しまった……ッ！」

シルフィードは慌てて体を投げ出すようにその場から跳ぶと、ゴロゴロと雪の上を転がって立ち上がる。そこで初めて自分を襲った襲撃者を見た。

「ギャアォッ！　ギャアッ！」
そこにいたのは白いドスランポス。否、ギアノスの親玉であるドスギアノスであった。真っ白の体に青色の縞模様を背に描き、頭にはリーダーの証である水色のトサカが輝く、雪山の支配者。
シルフィードは急いでキリサキを抜こうとしたが、右腕が凍り付いていて抜く事はできない。武器を出せないという事実に、シルフィードは悔しそうに舌打ちした。
ドスギアノスは基本的にドスランポスと何も変わらない。唯一違う所はギアノスと同じく氷液を吐いて来る所だ。しかしドスギアノスの氷液はギアノスのそれとは比べ物にならないほど大きく冷たい。付着した瞬間一瞬にして凍りつき、獲物の動きを封じる恐ろしい付加能力がある。これを解除するにはドドブランゴの氷ブレスと同様に解氷剤が必要なのだが、シルフィードは持っていなかった。
氷状態を脱するには解氷剤の他に衝撃を与えるか時間が経てば勝手に砕ける。だが今はどちらもできるような状態ではない。
シルフィードは悔しそうに唇を噛むと、威嚇して来るドスギアノスに背を向けて走り出した。このまま武器が使えない状態で戦っても勝ち目などない。いくら歴戦のハンターとはいえ、武器がないのでは話にならない。プライドなどに反するが、今は逃げるしかないのだ。
走り出したシルフィードは広げた道具を拾う暇もなくホットドリンクなしで洞窟の中に入り込んだ。その瞬間、体中に針で刺されたような痛みが走る。人間の限界を超える寒さというのは、痛みとなって人体に危険信号を放つらしい。
必死に逃げるシルフィード。その背後から逃げる獲物に怒りの声を上げて追い掛けて来るドスギアノス。しかし狭い洞窟の中では体格が小さな人間であるシルフィードの方に分があった。ついに細い道に自らの巨体が引っ掛かってしまいドスギアノスは追撃を断念した。
逃げ帰るドスギアノスを見詰め、シルフィードはホッと息をついた。その息は水蒸気というにはあまりにもはっきりしているほど真っ白だった。

何とか逃げ切れたという現実が終わると、今度は雪山の壮絶な寒さが現実となって彼女を襲う。いつもはホットドリンクを飲んで入る場所に飲まずに入ると、こんなにも世界が違うのかと驚く。
だが、いつまでも冷静ではいられなかった。
「……さ、寒い……ッ」
口が勝手にカタカタと振るえ、歯の根が合わない。自分の体を抱き締めるように両手を交差させ、必死に擦って体温を取り戻そうとするが、それ以上の速さで外気が貴重な体温を奪っていく。
このままでは凍死してしまうかもしれない。シルフィードは残る力を振り絞って前へ歩み続けた。このまま洞窟の中にいては本当に危険。まだ山頂なら日差しがあるだけマシのはず。それだけを希望に前へ進み続ける。拠点（ベースキャンプ）に戻るにも、ドスギアノスが待ち伏せている危険性を考えるととてもじゃないがその選択肢は選べない。すでに右腕の氷は解けたが、リオレウスなどと違い小さく機動力のあるドスギアノス相手では大剣は不利だ。
運良く、ギアノスは現れなかった。ガウシカには遭遇したものの、ポポと同じくこちらから攻撃をしなければ通常は攻撃してくる事はない。シルフィードはガウシカに敵視されないように気をつけながら彼らの横を通り抜けた。その向こうはもう外へ繋がる出口だ。
（も、もう少し……ッ！）
温かな日差しを求めて、シルフィードは最後の一歩を踏み出した――視界が、開ける……
ゴオオオオオオオオオオッ！
希望を胸に抱いていたシルフィードを待ち受けていたのは、残酷な現実であった。
そこには温かな日差しも、晴れ渡った青空もなかった。あるのは横殴りな風で荒れ狂う雪による吹雪と、鉛色の雲に覆われた暗い空だけ。
呆然と立ち尽くすシルフィードはその光景が信じられず、前へ歩き出した。洞窟の外に出た途端に吹き荒れる猛烈な風が体を突き飛ばすように襲い、フラフラの足はそれに耐えられずに倒れてしまった。

もう、体が動かない。
今思えば、山頂には悪天候そうな雲が垂れ込めていたではないか。そんな大事な事を今更思い出し、つくづく自分のドジを呪った。
吹き荒れる雪は、倒れたシルフィードの上にも容赦なく積み上がっていく。このままでは危険だとわかっていても、もう立てない。寒くて、お腹が減って……眠くなって来た。
遠のいていく意識の中、目の前に霞んで見える一輪の雪山草。
今頃、彼はどうしているだろうか。
雪山草を見てふと思い浮かんだのは彼の事だった。きっと彼はこの吹雪の中で必死になって雪山草を探しているのだろう。なのに、自分は何をやっているのか。
「……クリュウ……た、助けて……」
まるでそこに彼がいるかのようにシルフィードは最後の力を振り絞って手を伸ばし、雪山草をグッと掴んだ。だが、引っこ抜く力もなく、力尽きたシルフィードはそのまま気絶してしまった……。
その頃、山頂付近に到着したクリュウは吹雪の中で懸命に雪山草を採取していた。
「あ、あったぁ……ッ」
岩陰に生えた一輪の雪山草を採取。クリュウはほっとしたようにため息すると採取した雪山草を素材袋に入れた。すでに袋の中にはノルマを超えた数の雪山草が入っている。
次を探そうと岩陰から立ち上がった瞬間、突風が容赦なくクリュウを襲った。さすがに転ぶ事はなかったが、雪風が容赦なくクリュウの体に叩き付けられる。ホットドリンクを飲んでいるのに、止まっていると勝手に体が震えてしまう。
「寒い……ッ。シルフィ、大丈夫かな？」
別ルートから山頂を目指しているはずのシルフィード。この吹雪では彼女もきっと苦労しているだろう。だが、心配はしても不安はない。何せシルフィードはチーム一の知識と技量、経験を持つ歴戦のハンター。彼女に対するクリュウの信頼はどんな事があっても決して揺るがない。

美しく、鋭く、力強く狩場を翔ける烈風。その華麗で峻烈な姿は見る者皆に勇気を与えてくれる。そして、自分はそんな彼女のようなハンターになりたかった。

英雄扱いをされる父は確かに強かったが、死んでしまった今ではその姿や強さを見る事はもうできない。でも、シルフィードは違う。常に自分の前に立って恐れる事なくモンスターに突撃するその姿は、幻ではない現実。

見えない強さに憧れるほど、もうクリュウは子供ではない。まずは目の前の強さに追いつく為に、努力を重ねる。シルフィードは、クリュウの憧れだ。

自分もいつか、シルフィードのような強くて優しいハンターになる。いつしか、父の背を追い求めていた自分の目標は、シルフィードと隣に立てるだけの力を身に付けるという現実のものに変わっていた。

自分を大きく成長させ、変えてくれたシルフィード。彼女ならどんな苦境や逆境であっても決して諦めずに前へ進む。きっと今頃も、この猛烈な吹雪の中でも迷う事なく前に進み続けているであろう。だったら自分も、こんな所でいつまでも足止めされている訳にはいかない。

クリュウは猛烈な吹雪の中、再び歩み始めた。積み重なった新雪は柔らかく、足場としては最悪だ。それでも、前へ進み続ける――彼女に一歩でも近づく為に。

そうして前へ進みながらも、クリュウは時折辺りを眼を凝らして見回した。すでにノルマである雪山草は取り終えたが、資金集めの為にももう少し採っておきたかった。

しかし、吹雪の為に視界が悪いこの状況下ではなかなか雪山草を見つける事はできなかった。それでも、クリュウは懸命に探した。

その時、荒れる吹雪の向こうに真っ白く染まった山肌にぽっかりと開いた洞窟が見えた。

「あれって、シルフィが出て来る洞窟の一つだよね」

自信なさげなのは、麓の洞窟からこの山頂付近へ向かうと出口が複

数あるからだ。今目の前にはるのはその数ある出口の一つだ。
当てもなく歩き続けていたクリュウは、とりあえずその洞窟を目指して再び歩き始めた。もしかしたらシルフィと合流できるかもしれない。そんな一抹の期待を抱いて。
洞窟に近づいたクリュウだったが、残念ながらそこに彼女の姿はなかった。どうやらこの出口ではなかったようだ。
「そろそろ合流しないとまずいよな……」
そう思いつつも、連絡の取りようがないので合流する場所なんて特定できない。一応山頂で待ち合わせの予定はあったが、残念ながら山頂はこの吹雪で雪崩が起きたらしく道が塞がっていて通行不能。第二合流場所は拠点（ベースキャンプ）なので、このままだと戻って彼女の帰りを待つしかない。できれば合流しておいた方が色々と便利なのだが……
そんな事を色々と頭の中で考えながら歩いていると、洞窟の入口に一輪の雪山草が強風に激しくその身を揺らしながらも健気に生えていた。
「あ、ラッキー」
クリュウはこれ幸いとその雪山草に近づいた。通常、雪山草は一度に花は三つから五つ程度しか咲かせない。だが目の前の雪山草は全部で八つの花が咲いていた。
「おぉ、幸せのスノードロップ」
クリュウが言った《幸せのスノードロップ》とは、数多くの雪山草の中でごく稀に突然変異で現れる五つ以上の花を咲かせる雪山草の事。雪山草は別名はスノードロップといい、五つ以上の花を持つ雪山草は幸せの象徴とされ、人々からは《幸せのスノードロップ》とも言われている。縁起のいい代物だ。
「こりゃ何かいい事があるかもね」
そう言って嬉しそうに微笑みながら、クリュウはその雪山草を片手で引っこ抜く。だが、雪山草はビクともしなかった。相当深くまで根を張っているらしい。
「よぉしッ」

クリュウは今度は両手でしっかりと握り締め、体全体を使って引き抜く事にした。このまま幸せのスノードロップを見逃すなんてありえない。
雪山草を跨ぐように両足をしっかりと地面に着き、両手もしっかりと雪山草の茎を掴む。そして、気合を入れて一気に引っこ抜くッ。
「ぬうううううぅぅぅぅ……ッ！」
全力で雪山草を引っ張るクリュウ。すると、だんだんと雪山草が抜けて来た。あと一息。残る力を振り絞って、最後のラストスパート。
「てぇりゃあああぁぁぁッ！」
ボコッという音と共に見事に雪山草は抜けた――のだが、その根元には真っ白な人の手がぶら下がって――
「うわあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
その恐ろしい光景にクリュウは悲鳴を上げてその場に転倒した。
「お、お化けッ！　幽霊ッ！　な、何でッ!?」
あまりにもホラーな光景に完全に慌てふためくクリュウ。恐る恐る振り返ってみると、そこには確かに雪山草を握り締めてうつ伏せで倒れている女性の死体が……
「雪山草を摘んでいて遭難した女性の幽霊がああぁぁぁぁ――って、あれ？」
もうほとんど涙目で、これ以上怖い目に遭ったら逃げ出そうとまで考えていたクリュウはその女性の姿を見て、一気に冷静さを取り戻した。
雪のように純白色の白銀の美しい長髪、スラリとした長身、蒼火竜の素材をふんだんに使ったリオソウルシリーズ、ショウギンギザミの鋏をモチーフにした大剣キリサキ――
「も、もしかして……シルフィッ!?」
クリュウは慌てて女性に駆け寄ると、仰向けに体を起こした。すると、そこには見知った顔があった。自分の憧れの対象――シルフィード・エアその人であった。
「し、シルフィッ!?　だ、大丈夫ッ!?」
クリュウの腕の中でぐったりとしていて瞳を開かないシルフィー

ド。心なしか彼女の肌がいつも以上に白く見える。桃色の柔らかな唇は紫色に変色し、まるで死んでいるように……

「シルフィッ！　しっかりしてよぉッ！　っていうか、一体何がどうなってるのおおおおおぉぉぉぉぉッ!?」

荒れ狂う吹雪の嵐の中、少年の悲痛な悲鳴は掻き消える事はなく雪山中に空しく響き渡った……

温かい……

まるで、体全体を優しく抱き締めてもらっているかのように心地良い温かさが、氷のように冷えた自分の体を優しく温めてくれる。

その心地良さに、ずっとこのままでいたいと願ってしまう。

もう少し、この温かさに包まれていた。もっと、優しく包まれたい。

この温かさを放さないよう、もっとしっかりと抱き締める。ギュッと抱き締めると、それはまるで抱き枕のように心地良い抱き心地だった。

「ちょ、ちょっとシルフィッ！」

すぐ近くで、彼の声が聞こえたような気がした。

でも、今はこのまま心休まる温かさに身を委ねていたかった。だから、もっとギュッと抱き締めて……

「あうぅ……ッ、ちょっとシルフィ……ッ！　は、離れてぇ……ッ！」

（……うん？）

すぐ近くで恥ずかしそうな声を上げる彼の声を聞いて、ようやくシルフィードはその違和感に気づいた。

夢の中から脱出し、スッと瞳を開く。顔を埋めていたものから引っこ抜き、ボーっと首をもたげると、目の前には頬を真っ赤にして困ったような表情を浮かべたクリュウの顔が……

「……なぁッ!?」

「や、やっと気づいたぁ……」

あまりにも突然の事にシルフィードは慌てて彼から離れた。真っ赤になった顔を隠す余裕もなく、驚愕のあまり見開かれた瞳はしっかりとクリュウを見詰める。

「く、クリュウ……ッ!?　な、なぜ君がここに……ッ!?」

「いや、ここまで君を運んだのは僕なんだけど……」
　そう言って苦笑しながら頬を掻くクリュウ。その時、自分の肩に掛かっている毛布に気づいた。これは雪山での狩りには必須のもので、拠点（ベースキャンプ）に戻れなくなった場合、体温を奪われないようにするものだ。ホットドリンクの数には限りがあるからだ。
「この毛布……」
「あぁ、それ僕のだよ。いやぁ、シルフィってば火で温めても全然起きる気配がないから慌てて一緒の毛布に入って体温で温めたんだけど、成功したみたいで何よりだよ」
「な、何？　一緒の毛布、だと？」
　シルフィードは、足の先から頭の天辺までカァッと体が熱くなるのを感じた。見ずともわかる。今の自分の顔は真っ赤になっているだろう。そんな自分の反応に何を誤解したのか、クリュウも顔を真っ赤にして慌て出した。
「だ、大丈夫だよッ！　べ、別に変な所とかは触ってないからッ！　そ、それにあの時はそれくらいしか思い浮かばなくて、焦ってて――」
「――いや、君がそのような事をする者ではないという事は先刻承知済みだ。今は君の的確な判断と対応に感謝するしかない。ありがとう」
　シルフィードはそう言って深々と頭を下げた。彼に対する感謝の気持ちを伝えるのはもちろんだが、気絶中とはいえ彼と触れ合っていたという事実に真っ赤になってしまった顔を隠す為でもあった。
「お礼なんていらないよ。だって僕達は仲間じゃないか」
　その言葉に、どれだけ気が楽になった事か――同時に、小さな落胆を感じている自分に困惑もしたが。
「それより、これからどうしようか」
　そんな彼の言葉に慌てて辺りを見回すと、そこは洞窟の中だった。と言っても先程自分が通ったような地下水や雪解け水が流れる凍てつく寒さの洞窟ではなく、振り返るとすぐ行き止まり。洞窟というよりは洞穴のようなものだ。
「こ、ここは……？」

「山頂付近にある洞穴だよ。さすがに君を背負って拠点（ベースキャンプ）に戻るのは無理だったから、せめてここまでと思って運んだんだ」
「せ、背負ってだと？」
その言葉にシルフィードはボンッを顔を真っ赤に染めた。気を抜くと頭の中に自分を背負って一生懸命吹雪の中を歩く彼の姿が思い浮かんでしまい、慌てて首を激しく横に振ってそんな邪（よこしま）な考えを排除する。
「し、シルフィ。大丈夫？」
「だ、大丈夫だッ！」
「そ、そう？　ならいいんだけど」
シルフィードの慌てっぷりに不可思議さを感じるも、彼女の言葉を信じて納得するクリュウ。彼の素直な性格に感謝しつつ、シルフィードは数回深呼吸をして冷静さを取り戻す。
冷静さを何とか取り戻すと、辺りを再び見回した。少し先には洞穴の出口があった。そこから見える外は相変わらずの猛吹雪。幸い風向きの関係で洞穴には風が入って来ないようだ。
クリュウと自分から少し離れた場所にはパチパチを音を立てる焚火がある。どうやらこの火のおかげで自分は凍死しないで済んだらしい。
まぁ、気絶していたのであればホットドリンクなど飲めないのでそれが当然の判断といえ――忘れよう。今思い浮かんだ恥ずかし過ぎる仮定は今すぐ、即刻に忘れよう。
「どうしたのシルフィ。顔赤いよ？」
「ぬおッ!?　な、何でもないぞッ！　き、気にするなッ！」
突然彼に話し掛けられ、シルフィードは慌てて彼から距離を取る。小首を傾げる彼の唇を注視している自分に気づき慌てて視線を逸らした――変な妄想のせいで完全に意識してしまっていた。
それっきり、二人の間から会話が消えた。お互いどう声を掛ければいいか模索しているので、その間は何も会話がないのだ。ただ、焚火のパチパチとした音と外の吹雪の音、焚火の上の台に吊るされたヤカ

ンの中のお湯が沸騰するグツグツという音だけが二人の間に流れる。
「そ、そういえばさシルフィ。何で君はあんな所で倒れてたの？」
何とか話を続けようとヤカンのお湯と持参した茶葉で淹れたお茶を自分の湯のみに入れながらクリュウはふと彼女に訊いてみた。すると、一足先にお茶を受け取ってフーフーとかわいらしく息でお茶を冷ましていたシルフィードはその問いにビクッと体を震わせた。
湯のみを持つ手が寒さとは違った理由でカタカタを震え出し、顔は焚火の明かりで隠れてはいるものの真っ赤に染まっていた。
「あ、いや、そのぉ……」
言いよどんで、それ以上の言葉が続かない――まさかホットドリンクを忘れて行き倒れたなんて、とてもじゃないが彼には言えない。恥ずかし過ぎる。
なぜか黙ってしまったシルフィードに、クリュウは慌てた。何か悪い事でも訊いただろうかとあたふたし、何とかこの気まずい雰囲気を打開しようと無理やり笑う。
「ま、まさかホットドリンクを忘れて寒くて倒れたなんて事はないよね～ッ！」
「ブホォ……ッ！」
クリュウの悪気なしの気まずい雰囲気打開の為の冗談は、見事にシルフィードの失態を射抜いた。おかげで心を落ち着かせようとお茶をすすっていた彼女は盛大に噴いてしまった。
「ゲホゲホッ！　ゴホッ！」
激しく咳き込むシルフィード。こんな時いつもならクリュウは「だ、大丈夫ッ!?」とか言って慌てて駆け寄って来てくれるのだが、今回は彼のそんな助けは来なかった。不審に思って涙目の瞳を彼の方に向けると――彼は硬直していた。
「く、クリュウ……？」
「え？　あ、まさか……本当に、ホットドリンクを忘れたの？」
そんな彼の言葉にシルフィードはボンッと顔を真っ赤に染めると、「あぅ……」とか「うぅ……」など言葉にない声を漏らしながらあたふたと慌て始める。そんな彼女の反応に確信を得たクリュウは――爆

笑した。
「あはははははッ！　ちょっとそれ本当なのッ!?　コントとかじゃなくて？　ま、マジで忘れたのッ!?」
爆笑する彼の笑い声に、もう穴があったら入ってしまいたい。なくても自分で掘ってでも入ってしまいたいくらい恥ずかしいシルフィードの顔はこれ以上ないってくらいに真っ赤に染まっていた。
「ほ、本当だ……」
搾り出すような返事に、クリュウはついに壊れた。腹を抱えて倒れ込むと、必死に笑いを堪えようとし始める。どうやら自分に不快な思いをさせないようにがんばっているようだが――肩が小刻みに震え、堪え切れずに漏れ聞こえる笑い声などの演技ではできないようなうそ偽りなしの《本当》の笑いに、むしろ逆に恥ずかしくなる。
（い、いっそ殺してくれぇ……ッ！）
生きた心地がしないというのは、きっとこういう事を言うのだろう。シルフィードは体育座りの体勢のまま恥ずかしくて顔が上げられずにいた。
「――でもさ」
現実逃避しようと思った矢先、そんな彼の声が聞こえた。本当は顔を上げるのも恥ずかしくて嫌なのだが、その声にはなぜか顔を上げてしまった。
顔を上げると、焚火の炎に照らされた彼の屈託のない笑顔がそこにあった。
「逆にそういうドジな所がある方が、親近感が湧くっていうか、一緒にいても緊張しないみたいな感じになれるんだよね」
そんな彼の言葉にシルフィードは驚いたように瞳を見開くと、なぜかうつむいてしまう。そしてチラチラと不安そうにクリュウの方を見る。
「どうしたの？」
「あ、いや、軽蔑してないか？」
「何で僕がシルフィを軽蔑する必要があるのさ」
「だ、だって、雪山にホットドリンクを忘れるなんてうっかり、普通は

やらないぞ……」
「うん。普通はやらない」
「……それでも軽蔑しないのか？」
「しないってば」
「ど、どうして？」
「君のうっかりは今に始まった事じゃないし」
　クリュウの見事な返しにシルフィードはがっくりとその場に崩れ落ちた。どうやら彼の中での自分の方程式ではイコールで結ばれているのはドジらしい。
　彼の中での自分の評価が下がっていく。シルフィードはその事にものすごくショックを受けていた。
　そんな一人落ち込むシルフィードに気づいた様子もなく、クリュウは言葉を続ける。
「でも完璧超人のシルフィにはこれくらいのドジさがあった方がかわいいと思うけどね」
「……なぁッ!?」
　全く予期していない完全なる不意打ちに、シルフィは仰け反った。だがすぐにボンッと真っ赤になった顔を隠すように慌ててうつむく。そんな彼女をクリュウは不思議そうに首を傾げながら見詰める。
「どうしたのさ？」
「……何度も忠告しているが、君はもっと自分の言葉というものに責任を持て……ッ」
　シルフィードの忠告の意味が全くわからず、首を傾げるクリュウ。相変わらず彼の天然さは神から授けられた天才の領域に達しているようだ。
　一方、突然の不意打ちとはいえ動揺してしまった事に激しく自分を叱責するシルフィード。だがドキドキと激しく脈を打つ心臓は冷静さを保とうとする彼女の理性とは反比例に高鳴ったままだ。
（な、何なのだこの感覚は……ッ!?）
　彼と一緒にいるとよく起きるこの感覚。今まで体験した事のないその感覚にはまだ慣れないし、なぜかこの先一生慣れない、慣れては

いけないような気がした。自分でもその理由はわからない。
数回深く深呼吸を繰り返し、ようやく平静さを取り戻したシルフィード。その途端、緊張が和らいだせいか、不覚にもぐぅ～と腹が鳴ってしまった。その音はこの静かな空間にはよく響いてしまった。
カァッと顔が赤くなるのを感じた。そして、自分の空前絶後のドジさを激しく呪う。不覚にも、彼の前なんて――焦り過ぎてなぜ彼の前だとダメなのかという理由については、今の彼女には考える余裕はなかった。
顔を赤らめてあたふたと慌てるシルフィードを見てクリュウはクスッと笑うと、道具袋（ポーチ）の中を漁った。そして、中から取り出したのはこんがり肉。
「ごめんね。採取クエストだったから食材とか全然持って来てなくて。今はこれくらいしかないんだ」
「あ、いや、私は全然構わないというか、むしろ大歓迎というか……」
「そう？」
クリュウはほっとしたような表情を浮かべると、こんがり肉二つを取り出して火に掛けた。このまま食べる事もできるが、できれば温かい状態で食べたい。焦げないように気をつけながら、器用に両手でそれぞれの肉を温める。その技術をじっと見詰めて来るシルフィードの視線がちょっと恥ずかしい。
そんなこんなで肉が温まる頃、洞穴の中には肉の焼ける香ばしい匂いが漂い始めた。その匂いにまた腹が鳴ってしまい、シルフィードは顔を赤らめる。
「もういいよシルフィ」
そう言ってクリュウは湯気が立ち上るこんがり肉を彼女に渡した。シルフィードはそれを受け取って礼を言うと、早速食べ始めた。相当お腹が減っていたのか、フォークやナイフなどで切り分けもせずに直接食べている。まぁ、それが本来のハンターの食べ方なのだが。
クリュウも直接かぶり付いて食べた。口の中に広がる肉汁が、すっかり減っていたスタミナをぐんぐんと回復させ、お腹も満たされていく。

普通の塩―胡椒（こしょう）での味付けのこんがり肉なのに、シルフィードはその肉が今までで一番おいしく感じられた。
それが空腹の為だったのか、それとも別の理由だったのか。わからないけど、とてもおいしかった。
お腹が膨れると気持ちも楽になるものだ。おかげでその後は話題に困る事なく、吹雪が終わるまで二人の会話は続いた。
彼と二人っきり。そんな状況にドキドキする自分に困惑しながらも、シルフィードはこの幸せな時間をたっぷりと楽しんだのであった。
吹雪が終わった頃、洞穴から出た二人を待っていたのは太陽であった。夏のように輝かしく暑さを感じるものではないが、それでもポカポカという温かさが心地良かった。とはいえ寒さは相変わらず。シルフィードは今度こそクリュウから分けてもらったホットドリンクを飲んで準備万端だ。
「じゃあ帰ろう」
「あぁ、そうだな」
屈託のない笑みを浮かべて歩き出す彼に小さく口元に笑みを浮かべながら、シルフィードもその後に続いた。
その帰路は何とも平和なもので、まるで雪山全体が二人の仲を邪魔しないように気を配っているのかと思うくらい一切モンスターが現れなかった。
そうして何事もなく無事に拠点（ベースキャンプ）に戻った二人。早速クリュウはアニエスに甘えられてしまい、シルフィードはそんな彼に苦笑しながら依頼分の雪山草を紐で縛って龍車に積んだ。他にも荷物を全部押し込み、これで任務完了だ。
荷物を積み終えると、二人は竜車に乗り込んだ。運転手にはクリュウが着き、アニエスも嬉しそうに「キュイッ♪」と鳴いた。
「しゅっぱ～つッ！」
クリュウの掛け声にアニエスは「キュイキュイッ♪」と鳴き声を上げて歩き出した。縄で繋がれた竜車もそれに引かれて動き出した。
ガタガタと揺れる竜車の中、シルフィードは幌の隙間から遠くなっ

ていくイルファ雪山を見詰めていた。
今回は心底自分のドジさを呪った。もう二度とこんな事がないように気をつけようと心に刻み――まぁ、結局またやらかすのだが。
本当に今回は最悪――いや、そうでもなかったような……
幌の向こうに見える彼の背中を見て、ドキッと胸が高鳴った。慌てて胸を押さえると、心臓がドキドキといつもに比べて幾分か早く脈打っていた。
「な、何なのだ一体……」
困惑しつつも、楽しそうにアニエスに話し掛けている彼を見て、ふっと頬が緩んだ。
（でもまぁ、楽しかったと言えば楽しかったな……）
肘を立て、すっかり青空に変わった空の下、シルフィードは天に輝く太陽を見上げた。その明るく柔らかな光を――彼に例えながら……
「か、かわいいのか……私は……」
彼に言われた言葉を思い出した時の彼女の笑顔は、年相応の少女の、幸せに満ちた最高の笑顔であった。

第８５話　幼なじみの想い　ずっと見てたんだから

イルファ雪山もついに閉山され、大陸の季節はすっかり冬本番。イージス村に面する海も曇り空の下で荒れ、主の乗らぬ漁船はその波に寂しく揺られる。

曇天の空からは真っ白な雪がフワリフワリと舞い落ち、大地を幻想的な純白の絨毯（じゅうたん）に変えてしまう。

木や家の屋根、野原や道にも真っ白な雪が降り積もり、イージス村はすっかり雪景色に染まっていた。村人達は降り積もる雪を屋根の上から下ろしたり、道に積もった雪を除雪したりなど、すっかり除雪作業に追われていた。家々の暖炉は今日もフル活動だ。

雪が屋根の上に降り積もったクリュウの家の暖炉もまた、その一つだ。

パチンと薪が火にあぶられて弾ける音が良く響くほど、家の中は静かであった。それもそのはず。今この家には住人は一人しかいないのだ。しかも、その一人はというと……

「ゲホッ！　ゴホッ！」

暖炉の火が薄っすらと明るい部屋の中、ベッドの上で横になりながら咳き込むのはクリュウ。赤らんだ顔に玉のような汗、辛そうな表情はまさに風邪の症状そのものだ。額には水と氷結晶を入れた熱冷ましの為の袋が載っている。

最近色々と忙しかったせいで疲れが溜まっていたせいもあってか、クリュウは風邪を引いてしまって寝込んでいた。だが、そんな状態に陥っている彼の周りにはいつもの騒々しい少女達の姿は一人もいなかった。

大陸全体が雪景色に染まっていても、モンスターからの被害は減る事はあってもなくなる事はない。運悪く、フィーリア、サクラ、シルフィードの三人はそれぞれ別任務で村を出ている。人気者というのは忙しいものだ。

一方、そんな三人に対して全然人気などないしがないルーキーであるクリュウは、こんな感じで風邪状態。何とも情けない事この上な

い。
「み、水ぅ～……」
　風邪の時はのどが渇きやすい。しかし枕元の小机に置いてあったヤカンにはもう水は入っていない。すでに全部飲み終えてしまっていた。仕方なくベッドから起きる。すると、玄関が開く音が聞こえた。続いて足音がゆっくりと近づいて来る。それを聴いて、クリュウは小さく笑みを浮かべた。
「クリュウッ!?　あんた何起きようとしてんのよッ！　病人は寝てなさいってばッ！」
　ドアを開けた直後、起き上がろうとしていたクリュウを怒鳴りつけたのはエレナ。手には様々な食材の入った袋が握られている。
「そんな事じゃ治るものも治らないでしょッ！　さっさと寝なさいッ！」
「……あ、でも水が」
「水くらい私が持って来てあげるからッ！　あんたは寝てなさいってばッ！」
　そう言ってエレナはヤカンを引っ掴むと、バタバタと急いで台所へ消えた。クリュウは素直に彼女の言う事を聞いてベッドに戻ると、横になる。すると、そこへバタバタと足音を立てながらエレナが戻って来た。手には水がたっぷりと入ったヤカンが握られている。
「ほらッ！　持って来てあげわよッ！」
「あ、ありがとう……でも、息を荒くするまで急がなくても良かったんだけど……」
「べ、別にそんなの私の勝手でしょッ！　文句あんのッ!?」
「……いえ、ございません」
　顔を真っ赤にして怒るエレナに、クリュウは返す言葉もない。そもそもこっちは看護されている身なので、逆らえるような立場でもないのだ。
「と、とにかくあんたは寝てなさいよ。私はお粥（かゆ）でも作っといてあげるから」
「ありがとうエレナ。ごめんね、僕のせいで……」

エレナだって暇な身という訳ではない。なのに自分の為にこうして時間を割いてくれ、その上食事まで……。本当に申し訳なかった。
すると、そんなクリュウの言葉にエレナはまたも顔を真っ赤にした。
「べ、別にいいわよそんな事。仕方ないでしょ？　フィーリア達はいないんだし、あんたの世話ができそうなのは私くらいしかいなかったんだから。仕方ないじゃないッ」
そう言ってプイッと顔を背けるエレナ。だが、そんな彼女の言葉にさらに申し訳なさそうな表情をするクリュウを一瞥し、エレナはつまらなそうに唇を尖らせた。
「とにかくあんたは寝てなさい。いいわね？」
「わ、わかった……」
エレナはドア付近に置いてあった食材の入った袋を引っ掴むと、不機嫌そうに部屋を出た。エレナが部屋から出て行くと、クリュウは言われた通りに横になる。そして、くしゃみを一発ぶちかまして情けなく鼻水を垂らした。
ドアの向こうで彼のくしゃみを聞いて、エレナはくすりと笑うと台所へ向かった。
勝手知ったる幼なじみの家。台所へ入ったエレナは慣れた手つきで氷結晶冷蔵庫――氷結晶を上部分に入れて冷やす冷蔵庫――に必要な食材以外を入れると、棚などから食器を取り出す。すでにここは彼女にとって第二の厨房のような場所だ。
小さな土鍋を釜戸の上に置き、台所の隅に置いてある薪を数本取り出して釜戸の中に入れる。続いて釜戸の横の小机の上に置いてある火打石と油に浸してある紙を取り、紙に火打石を打ち付けて火をつけると、釜の中にくべる。すぐに筒を構えて息を吹き込んで火を強くさせ、薪に引火させる。あっという間に釜戸の中は火に包まれた。その手つきは慣れたもの。さすがは料理人といったところか。
続いて鍋に水と米を入れて温める。その間にネギを素人ではマネできないような包丁遣いで素早く切り刻む。
温まったお粥にネギに塩、卵を入れてきれいに米に絡める。さらに

彼女特製の調味料を加え、より完成度の高いお粥を作りあげていく。
ハンターにとっての戦場が狩場だとしたら、料理人にとっての戦場は厨房だ。
あっという間にエレナ特製、ネギ卵粥が完成した。
「これで良し。後は……」
コップに汲み置きしてある井戸水を入れ、スプーンやお粥と一緒にトレーに載せる。エレナは後片付けを手早く済ませると、台所から出た。向かうのはもちろん彼の部屋だ。
歩きながら、チラリと自分特製のお粥を見た。結構な自信作なのだが、果たして彼の口に合うだろうか――おいしいと言ってくれるだろうか。
「ば、バカな事考えないの……ッ！」
おかしな事を考える自分に慌ててエレナは首を激しく横に振ってそんな考えを追い出す。
（ば、バッカじゃないのッ!? こっちは作ってあげてる身なんだから、食べて当然じゃないッ！ 無理やりにでも食べさせてやるわよッ！）
そう思ってはいても、やっぱり料理は人に喜んでもらいたいもの。できれば「おいしい」と彼の口から聞いてみたいのが本音だ。
「べ、別に私はあんな奴に喜んでもらいたいなんて、微塵も……微塵、くらいは思ってるかもしれないけど……でも大半は思ってないんだからッ！」
一人でボケとツッコミを炸裂させまくるエレナ。相当動揺しているようだ。まぁ、今この家には自分と彼の二人っきりしかいないのだから、幼なじみとはいえ男であるクリュウを意識してしまうのは当然の事。特に、彼女の場合は……
（別に私はあいつの事を何とも思ってないんだからッ！ こ、これは幼なじみとして当然の事なんだから、他意はないんだからッ！）
そう自分に必死に言い聞かそうとしても、やっぱり意識してしまうのが思春期というものだ。特に彼女の場合は子供の頃からずっと一緒だったとはいえ、男の子が一番成長すると言ってもいい十代前半時代では離れ離れだった。その為に、急成長した彼をかっこいいと思っ

た事は不覚にも何度もあった。自分の知っている彼と、成長した彼のギャップにグッと来てしまう自分が恥ずかしくて仕方がなかった。
「あぁもうッ！　何で私があんな奴の為に悩まなきゃいけないのよッ！　バッカじゃないのッ!?」
　ついに思考が耐え切れなくなったのか、エレナは突然逆ギレした。元々考えるよりも先に行動するタイプである彼女に、思春期だからこその男女の悩みなど許容範囲外なのだ。
　不機嫌そうに足を進め、彼の部屋をノックもなしに入り込む。すると、ベッドに横になりながらクリュウは心配そうに彼女に声を掛けた。
「何かすごく怒鳴ってたみたいだけど……ゲホッ！　だ、大丈夫？」
「う、うるさいわねッ！　病人は寝てればいいのよバカッ！」
　顔を真っ赤にして怒鳴るエレナの迫力に、クリュウはビクッと震えて布団に潜った。エレナの怒りは時にリオレウスよりも恐ろしい。
「ほら、お粥作って来たんだから。さっさと食べなさい」
　そう言ってエレナは彼の枕元の小机にトレーを置くと、机の椅子を拝借してベッドの横に置いて腰掛けた。
「ほら、起きれる？」
　日頃の態度が実に女の子らしくなくても、こういう部分では女の子らしいエレナ。病人のクリュウを気遣いつつ、ゆっくりと起き上がった彼に小さく苦笑した。
「あんた、少しは体調良くなったの？」
「たぶん……昨日よりは熱も下がってるから……ゲホゴホッ！」
「咳は相変わらずみたいね。ちゃんとリリアの風邪薬は飲んでるの？」
「うん」
　幼いながらも優秀な村唯一の調薬師にして、これまた村唯一の薬屋兼道具屋を経営しているリリア・プリンストン。彼女が調合する薬は好評で、風邪薬などは特に需要が高い。彼女のおかげでこの村の風邪患者が風邪を治すまでの期間が大幅に減少した事は、彼女の功績の一つだろう。

だが、いくら優秀な調薬師だとしても、自然の力には敵わないらしく――現在彼女もまた風邪でダウンしていた。正確には、ダウンした彼女を看護していたクリュウに移ったというのが現状である。
そりゃいくら風邪を引いた身だからとはいえ、一日中クリュウにベッタリして話し相手になってもらったり、一緒に寝てもらったり、一緒にお風呂に入ろうとしたり（これはもちろん当時村にいたフィーリア達の大反対を受けて阻止されたが）すれば自然と彼にも移ってしまうのは当然の事。しかも元来の優柔不断な性格から彼女の願いを断る事もできずに体調を崩していても彼女の看護を続けた結果が――こういう状態であった。
「ったく、調薬師とか言いながら風邪でぶっ倒れて、あんたにも移すなんて呆れちゃうわよ」
「……そう言わないでよ。いくら優秀な調薬師と言っても、リリアは子供なんだからさ」
「へぇ、いつも思うけどあんたって良くリリアの肩を持つわね」
ジト目で睨んで来るエレナに、クリュウは寝汗をタオルで拭いながら苦笑を返す。
「別にそういうつもりじゃないけど……」
「ふぅん。ロリコンなんじゃない？　あんた」
「違うよッ！　それは断じて違うッ！」
風邪で体力的に結構厳しい体調であっても鋭くツッコミを返して来るクリュウを見て確実に回復していると悟ったエレナは小さく口元に笑みを浮かべると、お粥の入った小さな土鍋のフタを開いた。途端に白い湯気が解放されて辺りに溶け込み、続いておいしそうな匂いが辺りに充満する。
「うわぁ、おいしそうだね」
「フン。お世辞なんていらないわよ」
「素直な感想を言っただけなんだけど……」
相変わらず素直じゃないエレナに少し呆れつつも、本当においしそうなお粥を見て小さく微笑む。それを見て、エレナも彼からは見えない位置で小さく微笑みガッツポーズした。

「結構熱いから気をつけないとね」
「わかった」
　注意を聞いて早速お粥に手を伸ばそうとするクリュウ。すると、そんな彼の手を突然エレナは制止した。どうしたのと言いたげな彼の視線を感じながら、エレナはスプーンを手に取ると、お粥をそっとかき回す。下の方のまだ熱々のお粥を上にし、適温になった上の部分を下に潜らせる。こうすると全体が満遍（まんべん）なくちょうどいい温度まで下がるのだ。
　熱さも幾分か和らいだ事を確認するとスプーンで一口分お粥をすくう。そして、自分の口元に持って来ると、今度はフゥと息を吹きかけて仕上げとばかりにさらに食べやすい温度にまで下げた。そして
――
「ほら、口開けなさい」
　そう無愛想に言ってズイッとスプーンを突き出すエレナ。この彼女の予想外の行動に驚いたのはスプーンを向けられたクリュウだ。
「えッ!?　あ、いや、一人で食べられるよぉッ」
「いいから、さっさとしなさい」
「で、でも――ゲホッ！　ケホゴホッ！」
「ほらぁッ！　そんな状態のあんた一人に任せておけないわよッ！　さっさとしなさいッ！」
「だ、大丈夫だよぉ……」
「何よッ！　私が作った料理なんか食べられないって言うのッ!?」
「そ、そういう訳じゃ……」
「あぁもういいわよッ！　別に無理に食べなくてもいいものッ！　片付けるッ！」
　ついに怒り出し、本当に片付け始めるエレナに根負けしたクリュウが慌てる。一日三食しっかり食べる彼にとって、例え一食抜きだとしてもそれはかなり辛いのだ。
「わ、わかったッ！　食べるからッ！」
「《食べるから》？」
「食べさせてくださいッ！」

男としてのプライドなど、彼女の前では無力であった。プライドの空砲では何も出来ないし腹も膨れないのだ。
ついに屈服した彼を見て、エレナは一転して楽しそうな笑みを浮かべてご機嫌になる。子供の頃からクリュウは彼女の尻に敷かれ続けていただけあって、彼女もまたクリュウを屈服させるのが楽しくて仕方ないのだ。何という幼なじみの関係であろうか。
「ふぅん、じゃあ仕方ないわね。食べさせてあげる」
エレナは本当に楽しそうな笑みを浮かべてウキウキと片付けようとしていたお粥を小机に戻す。一方のクリュウは自分の中で何か大切なものが折れた気がして少しだけ落ち込んでいる。二人の間にはかなりの温度差が発生していた。
「ほら、この私が直々に食べさせてあげるんだから、感謝しなさいよ」
本当に楽しそうな笑みを浮かべるエレナを見て、クリュウは苦笑しながらもそんな相変わらずな幼なじみを見て少しだけほっとしていた。
考えてみれば、エレナとこうして二人っきりというのはずいぶん久しぶりな気がする。いつもいつもフィーリア達と一緒に行動していたし、彼女達が留守だとリリアが存分に甘えて来るからだ。
「ほら、口を開けなさい」
先程と同じ要領で冷ましたお粥を載せたスプーンをズイッとクリュウに向けるエレナ。ただ、先程と違って表情はかなり楽しそうだ。そんな彼女に逆らう事などクリュウはもちろんできず、素直に彼女の言う事に従って口を開く。
エレナは少し緊張したように一度大きく深呼吸すると、そっとスプーンを彼の口の中に入れる。そして、彼の唇がしっかり閉まってからスプーンを引っこ抜く。スプーンに載っていたお粥はきれいに消えていた。
「ど、どうよ？」
もぐもぐと咀嚼（そしゃく）している彼を不安げに見詰めるエレナ。おいしいのか、それともそうでないのか。料理人としての誇り――乙女としての誇りが試される時だ。

じっくりと味わうように食べるクリュウ。十分に味わった後にゴクリと口の中のお粥を全部呑み込んだ。そして、
「うん。すっごくおいしいよ」
素直な感想を笑顔と共に放つと、エレナはほっとしたような表情になった。そんな彼女を見て、さすがプロの料理人だなぁと改めて彼女のすごさを実感した。幼なじみとはいえ、進む道は全然違う。しかも自分はまだ経験が少ないルーキーなのに対し、彼女は通の間では有名になるまでに料理の腕を上げている。分野は違うとはいえ、素直に尊敬できた。
ただし、彼女が料理の道を目指すきっかけになったのが昔彼自身が彼女の料理を絶賛した事。彼に喜んでもらえるように彼女が日々よりおいしい料理を作る為に努力している事などは彼は知らないだろうし、彼女自身も彼に打ち明けるつもりはない――もちろん恥ずかしいからだ。
エレナは彼の口に合った事にほっとしたような表情を浮かべていたが、すぐにいつものようにプイッとをそっぽを向いてしまう。
「当然でしょ。この私が作ったんだからまずい訳ないじゃない」
「そ、そうだね」
こんな素直じゃない自分は、あまり好きではなかった。素直に《おいしい》と言われたら《ありがとう》と笑顔でお礼を言う事がなぜできないのか。特に彼の前だといつも以上に素直になれない。なぜそうなってしまうか、その理由はわからない。
いつもいつもこうして素直じゃない、女の子っぽくない態度をしていても彼は呆れずにずっと傍にいてくれる。その理由が、子供の頃からの付き合い、つまり幼なじみだからなのか。それとも――
ブンブンブンッと激しく頭を横に振って不覚にも過ぎってしまった考えを一生懸命追い出す。その可能性はない。断じてない。絶対にない――そう、必死に思う自分がいた。
でも、悪い気はしない。
「ほら、次よ次」
それから、エレナはどこかご機嫌そうにクリュウにお粥を食べさせ

続けた。クリュウは正直かなり恥ずかしそうだったが、逆らえる立場でない事は重々わかっているので素直に従っていた。
彼女の手際の良さやお粥の美味さが功を奏し、お粥がすぐに食べ終わった事がクリュウの救いであった。ちなみに「お代わりはいる？」と彼女に問われが、クリュウは丁重に断った。
「とにかく、あんたは寝てなさい。看護は私がちゃんとやってあげるから――言っておくけどこれは幼なじみとして当然の事をしてるだけだからね。他意はないんだからねッ！」
そう言って、エレナは空になった食器を引っ掴むと部屋から出て行った。ようやく静かになった事で安堵するクリュウは布団を肩まですっぽりと被ると、少し寝ようと目を瞑った。
台所に戻ったエレナは慣れた手つきで食器洗いをする。調理から給仕、後片付けに掃除、そして店の経営などを一人でこなす彼女にとって、食器洗いなど日々の仕事の一つに過ぎない。料理や家事が得意な方であるフィーリアの倍近い速度でプロであるエレナは家事をこなしてしまう。
普段は女の子らしくなくても、意外と所有スキル自体は一番女の子らしいエレナ。
食器をキアの実でできたスポンジで磨きながら、エレナはつい口元に笑みを浮かべてしまう。思い出すのはさっきの彼の言葉。
――すっごくおいしいよ――
その言葉を思い出すだけで、自然と笑みが浮かんでしまう。慌てて笑顔を引っ込めるが、しばらくするとまた勝手に口元が緩んでしまう。
「も、もうッ！　集中しなさいエレナ・フェルノッ！」
軟弱な自分を正そうと喝を入れるが、結局笑みが浮かんでしまう所を見ると効果はなかったようだ。だが、そんな状態であってもしっかりと皿を洗い上げる所はさすがは職人だ。
食器洗いを片付け、エレナはピカピカになった食器を見て満足そうにうなずく。次に、まだ洗っていないまな板を軽く水洗いし、再びテーブルの上に載せる。続いて食材などが入った袋から取り出した

のは新鮮な氷樹リンゴ。エレナはそれを手際良く流れるような包丁捌（さば）きで皮を剥くと、八等分に切り分ける。あっという間に食べやすい大きさのリンゴが完成した。
　エレナはそのうちの一つを摘んで口に放り込むと、咀嚼しながら皿に盛ったリンゴを持ってクリュウの部屋に向かった。
「クリュウ、リンゴ剥いて来てあげたわよ。百回くらいお礼の言葉を言いなさいよ」
　そんな調子で部屋に入ったエレナだったが、すぐに口を閉じた。その視線の先では、クリュウが横になって小さな寝息を立てていた。どうやら眠ってしまったらしい。
「何よ。せっかくリンゴ剥いてあげたってのに」
　エレナはつまらなさそうに唇を尖らせると、部屋の中に入って先程の小机にリンゴの載った皿を置くと、椅子に腰掛けてため息した。
「まったく、人が看護に奔走してるのに、のん気なもんよね」
　グチを言ってみるが、彼からの応答はなかった。エレナは益々つまらなさそうに唇を尖らせ、リンゴをさらに一切れ食べた。
　リンゴをくわえながら、ふとエレナは眠る彼の寝顔を覗き込んでみた。スゥスゥと小さな寝息を立てて眠っている彼の寝顔は、思った以上にかわいかった。不覚にもドキッとしてしまった。
「ふ、フンッ。大人しく寝てる分にはまだかわいいもんよね。いつもはギャーギャー口やかましいクセに」
　腕を組んでそっぽを向くが、その頬は確実に赤らんでいる。チラリともう一度エレナは彼の寝顔を見てみる。元来の女顔が加わった彼のその無防備過ぎる寝顔は、ある意味かなりの威力を放っている。フィーリア辺りが見たら確実に鼻血のオンパレードだろう。
「で、でも本当にこいつ、女の子みたいな顔してるわよね……それもかなりの美少女の」
　見れば見るほど彼は男にしておくのにはもったいないくらいのかわいらしい顔立ちをしている。しかしだからと言ってひ弱なイメージとは違った、男のかっこ良さも見え隠れする顔。正直、彼が本気で女を目指したらそこら辺の女子じゃ太刀打ちできないかもしれない。

自分の立場も危ういだろう――まぁ、本人は完全に男方向に突き進んでいるようなのでそんな事はないだろうが。
でも例え顔が女の子っぽくても、いつもいつも頼りなさそうな雰囲気だとしても、自分はちゃんと知っている。彼がそこら辺の男子よりも、ずっとずっとすごい少年だって事を。
誰も知らない。自分しか知らない彼の姿。
子供の頃、大人を連れずに森に彼を引っ張って入った時、森の中で足を挫いてしまった事があった。その時、まだその頃は自分よりも身長が低かったのに、彼は必死になって自分を負ぶって村まで連れ帰ってくれた。
子供の頃、父親に激しく怒られて家を飛び出して森に飛び込んでしまった時、村人総出でも見つからなかった自分を彼は迷わずに見つけてくれて、一緒に父親に謝ってくれた。
子供の頃、森の中でランポスに襲われた時、自分の身長くらいの長さの枝を振り回して応戦し、怖くて泣いてしまっていた自分を必死に逃がしてくれた。
子供の頃、今とは逆で自分が風邪を引いてしまった時、一日中ずっと看護してくれた。
誰も知らない、自分だけが知っている彼の姿。
彼の成長を、ちゃんと知っている。
だって――ずっと見てたんだから……
子供の頃から、ずっと、ずっと……
「――あんたの事、ちゃんと見てるんだからね」
自然と口から漏れたその言葉は、どこか嬉しそうな声色だった。
彼のサラサラとした緑色の髪を優しく撫で、エレナは小さく笑みを浮かべた。その笑顔はいつもの勝気な性格をした彼女からは想像も出来ないような温かい、優しくて可憐な笑顔だった。
「あんたは昔っから無茶ばっかりして、怪我したり泥だらけになってもバカみたいに笑ってて。私の気も知らないで、本当にバカなんだから」
そう言うエレナの顔は、先程までの笑顔は消えてどこか寂しそうな

表情に変わっていた。
「いつもいつも心配してるこっちの身にもなってよ。お願いだから、無茶しないでよ」
それは、彼女の心からの願いだった。
いつもいつも誰かの為に自分から危険に飛び込もうとする度を越えたお人好しバカ。
でも、そんな不器用なまでに真っ直ぐな彼の事は、嫌いではない。好きか嫌いかと問われれば、口では嫌いとは言いつつも、心の中では好きだと断言できるだろう。ただし、それが恋愛感情かと訊かれれば、それは違う……と、思う。
最近、自分の心がよくわからなくなってきた。
確かに彼はかっこ良くなったし、昔よりもずっと頼りになる。今でもまぬけな部分はまぬけだが、それを差し引いても彼は《男の子》に成長している。そんな彼を見て、自分の中に少しはある《女の子》の部分が多少なりとも刺激されているのは事実だ。
でも、自分の胸の中でドキドキと高鳴るこの鼓動。これは本当に《恋》なのだろうか？
絶対に違う。口ではそう言っていても、本当にそうは断言できない自分がいる。
結局、この高鳴りの正体はわからないままだ。だけど、別に嫌という訳ではない。むしろ、胸が温かくて、すごく心地が良い。
まだこの想いの正体は自分ではわからない。だけど、いつかその正体がわかるとしても、今はこうしてこの温もりに身を委ねておきたかった――こんな弟のような幼なじみを、見守っててあげたかった。
そっと、彼の手を握り締めた。その手は昔に比べてずいぶんと硬く、大きくなっていた。それだけ彼が男として成長しているのだろう。それがなんか、少しだけ切ない。彼が自分の知らない彼になってしまうのではないか。そんな不安はある。
でも、彼はきっと変わらない。悪い意味ではなく、いい意味で今のまま、もしくはそれ以上になるだろう。そんな確信があった。
「――信じてるからね」

それが何に対しての意味なのかは、それは彼女しか知らない。
ただ、こうして彼の手を握り締めている彼女は、いつもの男勝りな性格で暴力を振り回す破天荒な厄介少女ではなく、純粋に幼なじみの安否と幸せを願う、一人の心優しい少女であった。
そのしばらく後、エレナはクリュウが目を覚ました事に気づかず手を握り締め続けてしまった。そんな彼女に不思議に思った彼が声を掛けた途端、彼女は顔を一瞬で真っ赤に染めると音速の鉄拳を彼に撃ち込んだ。
その強烈無比の一撃に、せっかく目覚めたクリュウは気を失ってしまうのであった。
それから数日後、フィーリアやサクラ、シルフィードが任務を終えて帰って来た。その頃にはクリュウの体調も全快し、笑顔の花を辺り一面に振りまいていた。その笑顔に、疲れ切っていた三人がどれだけ癒されたかは想像できないだろう。ちなみにリリアも全快していたので結局は彼女に振り回される事になったのだが。
全てがハッピーエンド……とは、ならなかった。
「ケホッ！　コホッ！　うぅ～……」
今度はエレナが風邪でダウンしてしまった。まず間違いなくクリュウが原因である事は言うまでもない。
先日と立場が逆転し、クリュウが彼女の看護に奔走する事になったが、その度に「あんたのせいでしょッ!?　このバカクリュウッ！」と彼女の鋭い一撃を叩き込まれるハメとなった。
不運な事に、風邪による損害は彼女の基本戦闘能力には一切効果がなく、それから彼女が全快するまでの一週間、エレナの家からは一日最低五回はクリュウの悲鳴が木霊する事となったのであった。

第８６話　クリュウの傷跡　彼の過去の物語

テティル沼地は今日も厚い雲が垂れ込めていて太陽の光が届かず薄暗い。湿気を含んだ微風が岩壁や山に沿って流れ、無風地帯では霧が立ち込めている。

そんなテティル沼地にやって来たのはクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人。最近はソロもしくはコンビで依頼を受けていたクリュウ達にしては珍しく四人編成だった。

と言っても、別に飛竜退治に来た訳ではない。四人はこのテティル沼地の洞窟で採れる白水晶の原石の採取依頼でやって来たのだ。白水晶の原石は貴重な素材で高値で取引されるも、特定の条件が揃った場所でしか採取できない。その特定の条件が、この狩場の洞窟に揃っているのだ。

白水晶の原石はある程度の大きさがないと価値を失ってしまう。大きさとしては両腕に抱きかかえる程度の大きさがないとならない為、採取すると戦闘が不可能となってしまう。さらに白水晶の原石はとても壊れやすいので、地面に置くだけでも砕けてしまう可能性があるので置いて戦闘する事もできない。

故に、こういうような運搬依頼の際はチームで動くのが最も良い。今回の依頼での目標数は二個だったので、運搬は男であるクリュウと力のあるシルフィード、護衛には索敵能力に優れている上に遠距離攻撃が可能なフィーリアと機動力に優れたサクラが担当する事になった。

そして現在一行は白水晶の原石の採取を終えて、今まさに白水晶の原石の運搬及び護衛中であった。

ちょっとした衝撃でも壊れてしまうので、慎重に歩くクリュウとシルフィード。その二人を前後で護衛するフィーリアとサクラ。護衛の二人もまた慎重に辺りを索敵して敵襲に備えているが、一行が抜けているのは霧の中。これではフィーリア自慢の視力も使えないので、二人は気配を重要視して索敵している。だが、万全ではない。これまでにもゲネポスに突然襲われて原石を落としそうになった事もある。

慎重に慎重を重ねた索敵が要求されるのだ。
「うぅ、ちょっと辛いなこれ」
そう言ってクリュウは顔をしかめた。抱きかかえた原石を落とさないようにする為に腰を少し落として歩いているので、腰への負担が大きいのだ。
「大丈夫ですかクリュウ様？」
辺りを慎重に見回しながら二人を護衛しているフィーリアが心配そうに疲れ気味なクリュウ尋ねた。そんな彼女にクリュウはちょっと無理して小さく微笑を浮かべる。
「だ、大丈夫だよ」
そんな苦し紛れの笑みに騙されるほど、彼を取り巻く姫達は鈍くはない。すぐに三人は顔を見合わせると、クリュウを気遣うように声を掻けて来る。
「……クリュウ、がんばって」
「拠点（ベースキャンプ）までもう少しだ」
「クリュウ様、がんばってください」
「いや、だから大丈夫だってば……」
苦笑しつつも、そんなみんなの笑顔と気遣いに内心ちょっと喜ぶクリュウ。だが、隣を歩くシルフィードを見て小さくため息した。
シルフィードは自分のよりも大きな原石を抱きかかえているのに涼しい表情を浮かべている。基礎体力に違いがあるので仕方ないといえば仕方ないのだが、女の子に体力で負けるというのは男としては情けない。
「ほんと、情けないなぁ……」
「え？　何か言いましたか？」
「いや、何でもないよ」
苦笑して誤魔化すクリュウをフィーリアは不思議そうに見詰めていたが、すぐに周囲の警戒に戻る。サクラは一度だけクリュウに振り向いたが、またすぐに辺りの警戒を再開する。
そんな感じで四人は一路一拠点（ベースキャンプ）を目指して歩みを進めていた。それは何の変哲もないいつもと変わらない行動。誰

もが警戒の中にももうすぐ帰れるという安堵感が隠れていた。
――その時、場の空気が変わった。
「散開ッ！」
その流れを逸早く感じ取ったシルフィードはそう怒号を上げるとすばやく横へ飛んだ。サクラとフィーリアもすぐさま回避行動に入ったが、クリュウだけが一瞬対応に遅れた。
振り返った瞬間、霧の向こうから巨大な陰が自分に向かって突撃して来た。とっさに横へ体を投げ出すが、完全に回避はできずにその陰に背中が激突。クリュウは悲鳴も上げられずに軽がると吹き飛ばされた。
吹き飛ばされたクリュウは地面に強く叩き付けられてその場に転がった。直後、彼が持っていた白水晶の原石が地面に激しく打ち付けられて粉々に砕けてしまった。
「クリュウ様ッ！」
倒れたクリュウに駆け寄るフィーリアを一瞥し、サクラは隻眼を窄（すぼ）めると背中の鞘から鬼神斬破刀を引き抜いた。その鋭い視線の先にいるクリュウを轢（ひ）いた巨影はゆっくりと振り返った。
巨大な鋭い二本の牙、茶色の分厚い毛皮に覆われた巨体、純白のたてがみ。鋭い眼光は自分のテリトリーを侵した不埒（ふらち）な目の前の敵を吹っ飛ばす事だけに光る。それは巨大なイノシシ。ブルファンゴの親玉――ドスファンゴであった。
「ドスファンゴだッ！」
シルフィードは剣を抜こうとしたが、両腕は白水晶の原石を抱えているので動かない。
「くぅ……ッ」
「シルフィード様は逃げてくださいッ！　サクラ様はクリュウ様をお願いしますッ！」
そう言ってフィーリアは通常弾ＬＶ２の速射をドスファンゴに撃ちまくりながら三人とは反対方向に走り出す。すさまじい猛攻撃にドスファンゴはすぐさま彼女を追って突進を開始する。しかしフィーリアはそんな直線的な攻撃を避ける事などお手の物。ヒラリ

ヒラリとその攻撃から身をかわして速射を続け、三人からドスファンゴを引き剥がす。
自ら囮になって自分達を守ってくれるフィーリアに向かってシルフィードは「すまないッ！」と叫びエリア外に脱出する。サクラは鬼神斬破刀を背中の鞘に納めると、倒れているクリュウに駆け寄った。
「……クリュウッ！」
「うぅ……」
背中を押さえながら何とか起き上がったクリュウ。ダメージはあまり大きくはないが、打ち所が悪かったらしく背中が痛くて立てない。そんなクリュウを見てサクラはすぐに彼の肩を支えながら立ち上がらせると、彼を支えたまま走り出す。
背中の痛みに苦しそうな声で呻（うめ）くクリュウに、サクラは「……我慢して」としか言えなかった。
一方、サクラがクリュウを支えながら脱出を図ろうとしているのを一瞥し、フィーリアはさらに銃弾をばら撒く。突進しようとするドスファンゴの足元に速射を撃ち込んで牽制し、一瞬でも突進を遅らせて紙一重で回避する。巨大な牙が頬を掠めるように通過するたびにゾッとするが、体はまだ全然余裕だ。
ドスファンゴには閃光玉は効かない。ブルファンゴには効くのになぜドスファンゴには効かないのかはわからない。もしかしたら目に遮光板のようなものが付いているのかもしれないが、今はそんな事関係ない。今必要なのはドスファンゴには閃光玉が効かないという事実だけだ。
そして、二人が脱出に成功したとわかると、フィーリアはハートヴァルキリー改を背中に戻して一気に走り出した。突進しようとするドスファンゴの横を通り抜け、三人が逃げた方向に向かう。
反対方向に走り出してしまったドスファンゴは慌てて振り返ると、「ブモォッ！」と怒りの声を上げて前足で地面を何度も擦る。そして、逃げるフィーリアを追いかけるようにして一気に突進を開始した。
背後から迫り来るドスファンゴの速さは人間のそれとは比べ物にならない程に速い。一気に距離が縮まり、フィーリアは背後に迫る巨

大な気配に恐怖する。
　あの巨大な牙に串刺しにされたら、大怪我は免れない。下手すれば死ぬかもしれない。そんな現実が思い浮かび、嫌な汗が噴き出る。その間にもドスファンゴは迫り来る。
「ひゃあああぁぁぁッ！」
　フィーリアは最後の力を振り絞って隣のエリアへと抜ける小型モンスターや人しか行き来できないような狭い洞窟に飛び込んだ。直後、ドンッという音と共にドスファンゴが洞窟に突っ込んできた。だがその巨体が仇となってあと少しという所で牙はフィーリアに届かない。
　フィーリアは慌てて洞窟を駆け抜ける。背後からドスファンゴの悔しそうな声を聞いて、ようやく自分が助かったのだと実感すると、どっと疲れが押し寄せて来た。
　だが、すぐに先程倒れたクリュウの事を思い出し、フィーリアは慌てて駆け出した。洞窟というよりトンネルと言った方が良い道を駆け抜ける。湿った風を頬に受けながら走り抜くと、洞窟は終わり外に出た。そこはまた新たな平地。拠点（ベースキャンプ）からは少し離れてしまったが、大型モンスターでは満足に動き回れなさそうな小さな広場であった。岩壁からは湧き水が染み出し、その下には小さな泉が出来ている。そしてそこに先程先行していた三人はいた。
「皆さんッ！　お怪我はございませんかッ!?」
　フィーリアが駆け寄ると、そこではサクラがクリュウに心配そうに声を掛けていた。その横では駆け寄る自分に小さく苦笑しているシルフィードの姿もあった。しかし、その手には先程まで彼女が抱えていた白水晶の原石はなかった。
「シルフィード様？　原石はどうされたのですか？」
　フィーリアが不思議そうに問うと、シルフィードはバツの悪そうな顔で頬を掻くと、すまなそうに頭を下げた。
「すまない。慌てて狭い洞窟を走ってしまったせいで転んでしまってな。割ってしまったんだよ」
「そうだったんですか」

「本当にすまない。せっかく君が自らを囮にして私達を逃がしてくれたというのに」
「構いませんよ。それよりクリュウ様の容態は？」
「大丈夫。ちょっと背中にドスファンゴの直撃を受けたけど、レウスシリーズのおかげで助かったよ」
　そう言って心配するフィーリアの視線に対しクリュウは安心させようと笑みを浮かべた。それを見てフィーリアとシルフィードはほっとしたように大きさは違えどそれぞれの胸を撫で下ろしたが、一人サクラだけは無言でそんなクリュウを見詰めていた。
「……怪我がないか確認する。防具を脱いで」
「へ？」
　サクラに渡された湧き水で冷たく濡らしたタオルで汗を拭っていたクリュウはそんなサクラの言葉にポカンとする。すると、サクラは突然クリュウの着ている防具を引っ掴むと、グイグイと脱がし始めた。
「ちょ、ちょっとサクラッ!?　な、何するんだよ突然ッ！」
「……脱いで」
「だ、大丈夫だってッ！　怪我なんかしてないからッ！」
「……確認をして損はない。だから、脱いで」
「僕が色々な意味で損をするから嫌だぁッ！」
　激しく抵抗するも、女の子相手に本気になれないという性格が骨身に染みているクリュウに対し、一度やると決めたらクリュウ相手でも容赦ないサクラ。どちらが優勢かなどやる前から決まっている。
「ちょ、ちょっと二人ともッ！　突っ立ってないで助けてよぉッ！」
　クリュウは涙目になりながら必死に防具を両手で防ぎつつ、フィーリアとシルフィードに助けを求める。だが、二人は頬を赤らめながら何度も互いを見合って動かない。
「いや、助けてやってもいいのだが……怪我がないかを確認するのも必要かと思ってな」
「く、クリュウ様は遠慮される傾向があるので、ね、念の為にですね」
「本当に怪我なんかしてないからッ！　本当にお願いだから助けてッ

！」
クリュウが色々な意味で窮地に立たされつつも、二人はなかなか決断せずにいた。理性では助けるべきだとわかっていても、好きな男の人の肌に興味がない訳がないという乙女心が邪魔をし、二人はその間でさまよい続ける。その間にもサクラは冷静に――
「……クリュウの肌、スベスベな肌、ポカポカな肌」
「絶対目的が変わってるよねッ!?」
若干危険な領域に達しつつあるサクラにそろそろ本気で抵抗しようとするクリュウ。その時、クリュウを押し倒して背中に馬乗りしていたサクラの手が止まった。何事かと思って振り返ると、サクラがレウスメイルの下のインナーと地肌の間に手を突っ込んで固まっていた。
「さ、サクラ……？」
突然動きを止めた彼女を不審に思って声を掛けると、彼女は視線をこちらに向けてきた。その隻眼には――なぜか涙が溜まっていた。
「さ、サクラッ!? ど、どうしたのさ一体ッ!?」
「……クリュウ、背中に怪我してる」
「いや、だから怪我はしてないって――」
「……違う。大きな、古傷が」
その瞬間、クリュウは大きく目を見開いた。そしてすぐに背中を隠しながら彼女から離れた。ショックだったせいか、サクラは一切抵抗してこなかった。
「クリュウ様、昔に大きなお怪我をされた事があるんですか？」
実際に傷跡は見ていないが、サクラの反応を見てかなり大きなものだろうと判断したフィーリアは心配そうに彼に尋ねた。彼女の隣に立つシルフィードは無言だが、その瞳はじっとクリュウを見詰めたままだ。
「……クリュウ、子供の頃にそんな傷はなかった」
サクラは相当ショックだったのだろう。がっくりとうな垂れ、立ち上がる力も残されていないようだ。
そんな三人に、クリュウは気まずそうに口を横に結んでいた。彼と

しては、昔の傷跡なんか他人には見せたくはなかった。ただ単に、彼女達に無駄な心配を掛けさせたくなかったのだ。だから今まで一貫してこの傷については彼女達には何も話していないし、エレナだってこの傷の事は知らない。

だが、ついにバレてしまったのだ。

知られてしまえば、仕方がない。ヘタに隠せば余計心配掛けさせるだけだし、そもそも隠す必要もない。これは自分の過去の失態であり、仲間を助けたという証でもあるのだから。

「――昔、ハンター養成学校の期末テストでドスランポスの討伐訓練をやった時に、突然ドスファンゴが現れて僕達を襲って来たんだ。その時、仲間をかばった際に僕はドスファンゴの突進の直撃を受けて大怪我。これはその時の傷さ」

そう言ってクリュウは振り返ると、レウスメイルとインナーの下に隠れていた背中を三人に見せた。その瞬間、傷跡を初めて見たフィーリアとシルフィードは絶句した。

彼の背中には、右肩の下辺りから左腰部分にまで伸びた巨大な傷跡が残されていた。彼の白い肌には合わないくらい、それは残酷な程に巨大な傷跡であった。

「救護アイルーのおかげで何とか助かったけど、傷跡は消えなかった。まぁ、別に傷跡くらいどうでもいいんだけどね。おかげで仲間は助かった訳だし。でもドスランポスは取り逃がして依頼は失敗。後日、ドスランポスもドスファンゴも正式なハンターに討伐されたよ。本来なら依頼失敗じゃ卒業は出来ないけど、突発的なアクシデントだったし一応ドスランポスを追い詰めていた事は事実だったから何とか僕は無事に卒業できたんだ。そして、今こうして君達と一緒に狩りをしてる訳さ。ちなみにこの傷はもう完治してずいぶんが経つから痛みはないよ」

そう言ってクリュウは小さく笑みを浮かべた。その笑顔と彼の言葉に、フィーリア達は安心したようにほっと胸を撫で下ろした。

傷跡から見てもかなりの大怪我とわかるが、もうその傷は痛みを感じないらしい。それだけで彼女達の心にはかなりの安堵が溢れた。

「……でも、クリュウの珠のような肌が」
「別に僕は男だから傷跡なんて気にしないし――っていうか、君は僕の何を心配してるの？」
サクラの相変わらずのズレた発言に苦笑しながら、クリュウはふと思い出したように突然ため息を吐いた。
「クリュウ様？　どうされたんですか？　まさか、やはりどこか怪我をされたのでは」
「いや、そうじゃなくて――白水晶の原石って、確かもうなかったよね？」
クリュウの問いに、三人はハッとしたような顔になるとがくりとうな垂れた。実は白水晶の原石は先程二人が持っていた分しかなかったのだ。いくらピッケルを振り回しても、それ以外は出て来なかった。つまりこれは……
「依頼（クエスト）失敗ですね……」
苦笑しながらそう言ったフィーリアの言葉に、三人はうなずくしかなかった。
その時、曇天の空からポツポツと雨が降って来た。それはすぐに雨足を早め、数分後には地面を叩きつけるかのような豪雨に変わった。四人はとにかく拠点（ベースキャンプ）を目指して依頼失敗という肩の荷が重い現実を背負いながら走った。
結局、依頼は失敗に終わった。もちろん契約金は保険としてギルドに徴収され、返って来ない。ドンドルマに戻ってライザに励まされながら依頼失敗の手続きを終えた一行はそのまま港へ向かい、イージス村に帰る船に乗り込んだ。
穏やかな波に揺られる船の中、クリュウは小さくため息を漏らした。
「久しぶりに依頼失敗しちゃった」
苦笑しながら言うクリュウの言葉に、フィーリアも「そうですねぇ。今後の受注に影響しないといいんですが」と苦笑しながら返す。他の二人は幌の隅で無言を貫いている。基本的にこの二人は無口なので、クリュウはフィーリアと話す事が元々多い。だが、こうして二人で楽

しげに話していると、
「……クリュウ、抱っこ」
「ちょ、ちょっとサクラぁッ！　くっ付かないでよッ！」
「さ、サクラ様ッ！　クリュウ様から離れてくださいッ！」
　すぐにサクラがクリュウに絡んで来るのでフィーリアが怒り出し、クリュウを中心にフィーリアとサクラのクリュウ争奪戦が繰り広げられる。両腕をそれぞれ二人の美少女の掴まれて動けないクリュウは苦笑するしかない。
「二人ともケンカしないでよ。仲良くしようよ」
　――もちろん、例にもよって二人の対立原因が自分であるとは毛筋ほども彼は感じていない。
　そんなクリュウの態度に不満がないかと問われれば大有りなのだが、今は目の前の恋敵（ライバル）を排除する事が最優先事項。二人の言い合いやクリュウの抱き合いはより過激なものになっていく。
　激化する二人の対立にさすがのクリュウも危険を感じ始め、慌てて先程から幌の隅で瞳を閉じて無言を貫いているシルフィードに助けを求めた。
「し、シルフィッ！　た、助け――」
「――クリュウ。少し君に問いたい事があるのだが、良いか？」
　突然瞳を開いてクリュウの目を見ながらそう言って来たシルフィードの言葉に、クリュウはポカンとした。しかしすぐに彼女の真剣な眼差しに気づいて自らも気を引き締める。彼を取り合っていた二人も空気をすぐに察して姿勢を正した。
「それで、一体何？」
「うむ。何、少し気になった事があってな。そこまで気を引き締めるような事ではないさ」
　そう言ってシルフィードはふぅと小さく息を吐いて準備を整えると、彼の目を見ながら竜車に揺られる間ずっと気になっていた事を彼に訊いてみた。
「――君の過去を、教えてはくれないか？」
「え？」

一体何を訊かれるのかと身構えていたクリュウは、予想外のシルフィードの言葉に困惑した。彼の両側にいる二人もお互いに顔を見合わせて首を傾げた。そんな三人の反応も予想していたのか、シルフィードは落ち着きながら言葉を続ける。
「いや、お互い同性という事もあってフィーリアとサクラとは過去を語り合った事は何度も合った。お互いが世間に名が通ったハンターだけに、お互いの過去の狩りや生活、出来事などは実に有意義なものだった」
シルフィードの言葉にクリュウは「そうなの？」と二人に問いかけてみた。二人ともうなずいたので、どうやら本当らしい――ちょっぴり疎外感を感じて、少しだけ落ち込んだ。
「しかし、君の過去というのは訊いた事がない。サクラから訊いた事もあるのだが、どれもあまり役に立ちそうもない――あ、いや、子供の頃の話なのでな」
鋭い隻眼で睨みつけてきたサクラの殺意に込もった視線に、シルフィードは慌てて言い直した。しかし、本音はもちろん前者の方だ。何せ彼女が話すクリュウの過去とは彼のかわいさ、かっこ良さ、他には自分との思い出話ばかり。いつもは無口な彼女がその時だけは熱く語っていた事は今でも忘れられない。特にその話の後の二人の修羅場は忘れたくても忘れられない。酔った勢いも加わって互いに椅子やワインのビンを武器に激しい大ゲンカを繰り広げてしまったのだ。
――まぁ、原因はサクラの思い出の自慢話なのだが。恋敵（ライバル）に向かって自分と彼との思い出列伝（一緒に遊んだなど当たり前。中には一緒に寝たりお風呂に入った実例もあり）をぶっ放せば、そりゃケンカに発展するのは当然だろう。
ともかく、そんな事もあって二人の過去についてはかなり知っているし、二人も自分の過去についてはよく知っているだろう。しかし、クリュウとはそういう話はした事がないので、彼の過去は自分にとっては謎のままだ。
「だから、君の過去に興味があるのだ――君の事を、もっと知る為に

も」
――基本的に天然であるシルフィードは、自分がかなり恥ずかしい事を言っているという事に気づいていない。ただ、なぜか頬を赤らめて照れ笑いするクリュウとムッとしたような表情で自分を睨んで来る二人に困惑するばかり。
「しかし、確かにクリュウ様の過去は私も少しばかり興味があります」
「……子供の頃から今までの空白の時間。その頃のクリュウに、私も興味がある」
だが、もちろん大好きな彼の過去を知りたいという乙女心全開な二人もシルフィードの加勢に加わった。一瞬驚きつつも、シルフィードは再び彼を見て問うた。
「どうだろうか。この際だからぜひ聞いてみたいのだが。もちろん君が嫌だというのであれば無理強いはしない。これは私の――私達の単純な好奇心だ」
そんなシルフィードの言葉に、クリュウはうーんと少しだけ悩むと、小さく笑みを浮かべてうなずいた。
「別にいいよ。隠すような事は何もないし。でも僕なんかの昔話なんて全然つまらないよ？　三人みたいに武勇伝なんてないし」
「構わない。それに、私だって凡人だ。伝記に残せるほどの大した話はない。それは皆同じ事さ」
「そんなものなのかな。それで？　僕のどんな昔話を聞きたいの？」
「そうだな。サクラやエレナも知らない――君の訓練学校時代の話なんかどうだろう？　先程の君の傷跡にも繋がる事だしな。それに、君が当時組んでいたチームメイトというのも気になる」
シルフィードは二人に視線で問うてみた。もちろん二人の返答は首肯。シルフィードもうなずき返し、再び彼を見た。
「訓練学校の話か。学校自体は四年通ってたけど、チームメイトができたのは最終学年の事だしな。じゃあ最終学年の頃でいい？　ちょうど上位成績優秀者に入ったのもその頃だし、それ以前はそれこそ普通な毎日だったからさ」
「構わない。ぜひ話してくれ」

「ぜひお願いしますッ」
「……ぜひ」
「ぜひって言われるほどの話じゃないけど……。わかった。じゃあ話すよ。まぁ、大した話じゃないけどね」
そう言って彼はどの辺りから話すべきかを考え始めた。そもそも自分の過去を自分で言うというのはかなり恥ずかしい。しかし三人の期待するような視線を見ると今更逃れられないと実感し、恥ずかしさを堪えながら一年ほど前の出来事を思い出した。
「そう、あれは……」
クリュウの昔話――クリュウ・ルナリーフの訓練学校時代の物語が、始まった……

第８７話　前途多難な始まり　仲間集め奮闘記

大陸一の大都市、城塞都市ドンドルマ。北、東、西の三方を山に囲まれた天然の要塞とも言うべき位置に建つこの都市は、大陸の繁栄の根源であり象徴でもある。残る南側には巨大な城壁と迎撃区画が設けられ、大砲、バリスタ、撃竜槍などの対モンスター兵器が備えられており、もちろんモンスターとハンターが対峙できるだけの平野も城壁の前にあるので、通常の狩りも行う事はできる。

ドンドルマにモンスターが来るとすればこの南側に限定される。陸からは山に阻まれ、空からは上空に強力な突風が常に吹いているので、陸も空も南側のみしか通行は不可能。その為に都市評議会やハンターズギルド本部都市防衛対策委員会、ドンドルマ自衛騎士団なども南側防衛を基本に迎撃戦略や避難手順を構築している。

守るべき場所が一ヶ所に限定される為に装備は充実し、これまでこの都市はモンスターの攻撃を市内に受けた事はない。古龍でさえ、多くの犠牲を出しながらも市内に到達させた事はない実績を持つ、まさに大陸一安全にして最大の城塞都市、それがドンドルマだ。

そんなドンドルマは経済の街とも商業の街とも貿易の街とも言われるが、最も多く浸透しているのはおそらくハンターの街というイメージだろう。城塞都市という戦う街というイメージと大陸最大の街という事もあって、ドンドルマには例年大勢のハンターがやって来て、駐留している。その数は一〇〇とも五〇〇とも。中には一〇〇〇とも言われているが、実際の人数は不明。何せこのドンドルマを拠点に各地へ狩りに向かうハンターは大勢いるので、実際の人数を把握するのは不可能に近いのだ。

街には大陸全体に情報網を敷いているハンターズギルドの総本山、ハンターズギルド中央総本部、通称ギルド本部が置かれており、他にもハンターの為の武具店や道具店、鍛冶場や宿なども備えられており、まさに街全体がハンターの為に作られた街。人々はそれらと常に接しながら、恒久的な平和な日々を送っている。

そんな都市の東端に、その施設はあった。

大陸全土に多くの優秀なハンターを送り出し、英雄クラスのハンターほとんどがここの卒業生と言われる大陸一のハンター養成施設、ドンドルマハンター養成訓練学校。大陸中から優秀なハンターの卵が集まる、未来のハンターを目指す若者達（若者と言っても、現役の人に比べたらという意味なので、必ずしも若い者達とは限らない）の学び舎だ。

ここでは軍隊のような規則正しい生活を強いられ、中には体罰もあるので例年入学者も多いが退学者も多い場所。学校の周りは人間では越えられないような壁で囲まれ、もし梯子などで登ったとしても鉄条網がその行く手を塞ぐ徹底振り。各所には監視塔も置かれ、二四時間態勢で脱獄者を見張っている。

日々の苦しい訓練に耐えられずに逃げ出す者ややめる者も多い。しかし、実戦ではこれくらいの苦労や困難を越えられないような者にハンターは務まらない。厳しいかもしれないが、これも生徒達の為を想っての配慮だ。

そんな恐ろしい壁や監視塔に囲まれた校舎は、意外にもデザインの良い施設になっている。中央監視塔や伝書バト小屋などのある塔も相まってまるで城のような形になっている。ここで、基本総勢五〇〇人のハンターの卵達が日夜厳しい訓練や学業を学んでいるのだ。

ハンター養成学校は大きく分けて三つの区画がある。一つは最も大きな区画で生徒が学業や構内訓練を行う学校区画。一つは全寮制なので男女別の個室もしくは相部屋、またはチームを組んだ場合は共同生活の為の隊部屋などが備えられた学寮区画。残る一つは中央教官室、教官それぞれの個室兼寮が備えられた教官区画。他にも様々な区画があるが、大きく分けるとこんなものだ。

そんな三区画のうち、学寮区内の一室に、彼はいた。

狭い訳ではないが広くもない一室。二段ベッドが一つ置かれ、そのうちの上段に寝転がりながら教科書を読んでいる若葉色の髪と瞳が特徴の希望に溢れた少年――クリュウ・ルナリーフ第6学年訓練生。

本来、ハンターになる場合は平均して六年程度の在学期間が必要となる。だが中には短期間で卒業技量を身に付ける者もいれば六年以

上の年月を要する者もいる。その為養成学校は実力で第1から第6までの学年を振り分け、最終的に最終学年である第6学年の卒業試験を合格して、晴れてハンターとなれる実力主義が基本となっている。卒業の際に交付されるギルドカードには《ルーキー》の称号が送られる。

実力診断テスト、または学年振り分けテストは半年に一回行われ、そこで留年や及第が決まる。通常は前期試験では不合格となり、後期試験で合格して学年を上げるので一学年一年の時間が必要となる。しかし中には前期試験で合格して学年を上げる者もおり、最短で三年で卒業する事ができる。

しかし、半年で学年を上げるのには相当な努力が必要とされ、それらの者はほぼ確実に上位成績優秀者、全学年を通して校内成績上位十名の中に入る。逆に、この制度のせいで落第や留年も起こりやすいので、訓練の厳しさも加わって毎年ここを去る者も多い。

そんな中、クリュウは日頃の努力もあって安定した高成績を挙げ続け、現在は第6学年に位置している。在学期間はまだ四年も経っていないのでかなりのペースだ。しかも彼は何とかギリギリで校内順位が第１０位。つまり、上位成績優秀者に選ばれたのだ。

上位成績優秀者には特別単位も与えられ、より卒業が近くなる。まぁ、この時期になると単位不足で慌てる生徒というのも必ず現れるのが恒例だ。

すでにクリュウは必要単位数は全て取得し終え、現在は第6学年の必須単位のみを受けている。現在は空き時間という訳だ。

今彼が読んでいるのはモンスター学の教科書で、発見されている全モンスターが飛竜種、鳥竜種、牙獣種などに種族別に分類して書かれており、それぞれの弱点部位や弱点属性、生態や攻撃方法などが大量に書かれている。モンスター学は全学年に必須単位としてあり、現在彼はモンスター学6を受けている。6まで来ると覚える事が多いので大変だ。特に地理学と呼ばれる地形を知り、どんな素材が採取できるかや戦闘の場合での有効的な立ち回りなどを学科や、調合学という文字通り調合に関する学科など、基本的にハンターの学科は暗記科目

が多いので、第6学年ともなると覚えるだけで精一杯な事が多い。
まぁ、ハンターは結局実力社会なので、学科と訓練はだいたい四対六、もしくは三対七なので学業を疎かにする生徒も多い。学科に関しては合格ラインが低いので、最低限の勉強だけでだいたい合格は可能。しかし、その場合はもちろん優秀な成績での卒業は無理だ。
クリュウの場合は根が真面目なのでしっかりと勉強をしている。おかげで上位成績優秀者にもなれた訳だ。もちろん、成績が訓練も含まれるので、そっちでも彼は優秀な成績を出している。
ちなみに、この世界の識字率はそれほど高くはないので、訓練学校に入るとまず最初に文字の読み書きができる者はそのまま第1学年に回り、できない者は初等学年という文字の読み書き専門の講座を受ける事が義務である。その為、文字の勉強だけする為に入る生徒も少なくない。もちろんクリュウは村で村長が片手間でやる寺子屋に通っていたので文字の読み書きはできていたので初等学年を素通りしたが。
そんな具合に、順調に卒業までの道のりを構築しているクリュウは、今も熱心に勉強をしている。教科書には所々線が引かれていたり補足事項を書き込んでいたりと、かなり使い込まれているのがわかる。
「リオレウスとリオレイアそれぞれの希少種は、切断の場合は弱点が頭ではなく翼に変わる……って、そんな化け物と戦う事なんてないって」
発見個体数が火竜の中で最も少なく、未だに謎の多い金火竜及び銀火竜の詳細が書かれたページに苦笑するクリュウ。不確かな情報も錯綜（さくそう）するこの世の中、教科書だって信用できない事もある。この弱点変化にどれだけの信憑性があるかは、定かではない。
だが、一つだけ言える事がある――それは、自分ではそんな幻級のモンスターとは戦わないだろうという事。彼はここを卒業しても自分の故郷の村へ帰るつもりでいた。いくら辺境だとはいえこれらのモンスターはまず現れないだろう。特にこの二頭に関しては《塔》と呼ばれるG級ハンターでないと立ち入りが禁止されている狩場にし

か基本的に現れないらしい。自分とは全く接点などないだろう。
　そんな事を考えながら教科書を読んでいると、部屋のドアが開く音が聞こえた。体を起こしてベッドから見下ろすと、一人の少年が入って来た。
　茶色の髪に端正な顔立ち、スラッとした長身という美男子という言葉や美少年という言葉が似合うその少年はベッドの上のクリュウと視線が合うと、ニッコリと爽やかな笑みを浮かべた。
「相変わらず勉強がお好きですね」
「そんな事ないよ。ただ単に悪い成績を取りたくないってだけだよ」
「いえいえ、その姿勢そのものが偉いですよ。私の周りであなたのようにマジメに勉強をしている者はそうはいませんからね」
「それを言うならクードなんて校内3位じゃないか」
「あれはまぐれですよ」
　ニコニコといつもと変わらない笑みを浮かべる彼を見ながら、クリュウは心の中で断言した。彼の実力は本当にすごい。学業だけでなく、技能においても自分よりずっと優秀な成績を出している。
　彼の名前はクード・ランカスター。上位成績優秀者、それも校内3位という実力の持ち主だ。しかも彼は校内でもかなりの人気者――と言っても、女子陣営のみであり男子陣営からはむしろ嫌われている事も少なくない。その理由はもちろん、彼のこの美しく整った美形にある。その甘いマスクや甘い笑顔、甘い声。そしてさらに元来の謙虚な物腰が加速させ、彼は女子達からアイドルのような扱いを受けており、ファンクラブもあるとか。
　逆に男子からは女子の人気を独占し、いつも愛想笑いしている彼を嫌ったり敵視する者は多い。元々ハンターになるような連中だ。血気盛んで短気、ケンカっ早い連中が多いので、クードみたいなタイプは嫌われやすいのだろう。
　女子には囲まれるも男子からは遠ざかられるクードの前に現れたのが、彼を嫌う連中とは対極に位置するとも言っていいタイプのクリュウであった。クードの方が二つ年上だが、同学年であった彼は他の男子とは違い彼にも普通に接していた。そのうち、二人は親友のよ

うな関係になった。
　さらに第6学年に同時及第した二人は名前が近い事と双方共に上位成績優秀者だという事もあって同室になった。
　以来、いつも共に行動する事が多く、女子からは女顔のクリュウと美形のクードが出来ているという噂が一時期流れたが、クリュウ自身女子からは結構評価されていたおかげで長続きはしなかった。
　この学校では第1学年は基礎授業としてソロの場合が多いが、第2学年以上ではチームを組む事になる。第5学年の時はクードと他二人の女子でクリュウはチームを編成した。
　ちなみに、生徒は全員第1学年の時に自分に合った武器を決めている。クリュウは片手剣で、クードはヘビィボウガンだ。
　クードは持っていた荷物を自分の机に置くと、二段ベッドの梯子を上って教科書を読んでいるクリュウを覗き込んだ。
「な、何？」
「いえいえ。クリュウの勉強する姿、なかなか絵になると思いまして」
「そ、そうかな？」
「はい。とてもかわいらしいですよ」
「……そういう事を平気で言うから、今でも女子の一部に疑われるって自覚持とうよ」
「これは失礼」
　ニコニコとしながらそう言って下に下りた彼を見て、クリュウは絶対にわかっていないと内心断言してため息した。いい奴なのだが、天然と言うか不思議な奴というか、いつも愛想笑いを浮かべているので腹の中の知れない男だ。まぁ、それでもいい奴には変わりないのでこうして親友という関係を持っているのだが。
「そういえばクリュウ。君は明日からのチーム決めをどう思っていますか？」
　突然話し掛けられたクリュウはベッドから下を見る。クードは珍しく真剣そうな顔で書類の一枚を見詰めていた。
「どう思うって、別に何も」
「誰か組みたい人はいるのですか？」

明日から一週間、校内は生徒達で騒がしくなる。その理由はチーム決め期間だからだ。この学校では初等基礎を行う第1学年を除き学年関係なく四人チームを選び、半年間そのチームで全学年共通教科である狩猟学、つまりハンターとしての実技科目を行う。

このチーム決めには事前にチーム申請をする必要がある。その期間が一週間であり、明日からその期間が始まるのだ。

クリュウはうーんと考え込むと、小さく苦笑しながら返した。

「いや、僕は別に誰と組むとは決めてないよ」

「そうですか。では今回も私と組みませんか？　残る二人は明日から決めましょう」

「いいよ。僕もクードの方が組みやすいしね」

「恐れ入ります」

そう言って互いを見合うと、どちらからとなく二人に笑みが浮かんだ。第5学年での一年間、二人は他二名を加えたチームを組んでいた。。第6学年でチームが変わっても、二人は互いを支え合うと最初から決めていたのだ。

容姿も性格も違えど、二人の絆は固く結ばれているのだ。

「ところでクリュウ。この問題はわかりますか？　どうも僕は道具学が苦手なようで」

「それだったら一緒に勉強しようよ。僕も地理学でわからない所があるからさ」

そう言って、二人は部屋の中央に置かれたテーブルに座り、互いに教え合いながら勉強を開始した。途中、クードを慕う後輩の女子数人が訪ねて来て、その子達を含めて勉強会へと発展したのであった。

翌日、早速朝から校内各所でチームの呼び込みや掲示板への掲示が始まっていた。二人も早速仲間を決めようとしたが、呼び込みをする奴というのは自分がリーダー、隊長になりたい奴が大半だ。そういう奴とはあまりいいチームはできないもので、呼び込む者達の周りには人はあまり集まっていない。

普通はこのように通路などでお互いにチームを組み、リーダーなどはお互いの事を理解してから決める。このやり方が一番安全で効果

的という事で、チーム決めの王道となっている。
　他にも掲示板に掲示してとにかくチームを組みたいという者もいる。
　狩猟学は学年関係なく本番の狩猟の為の模擬訓練。実際に狩場に出る事もある危険な科目だ。何度もやる事に意義がある。同学年と組むチーム重視の者や、後輩とわざと組んで後輩達に教える者もいるし、逆に先輩と組んで自分を磨く者もいる。チーム決めとは、それら様々な思惑が入り乱れる重要な行事なのだ。
「しかし、なかなか集まらないね」
「女子は女子と組む傾向がありますからね。数人誘ってみましたけど、ダメでした」
　そう言って肩をすかすクード。確かに彼なら女子を誘う事もできるが、女子は通常女子と組む場合が多い。男を警戒しているのだ。さすがのクードも、狩場という逃げ場のない空間となると女子からも警戒はされるらしい。それでも去年は一緒に組んでくれた女子がいたのだが。
「でもどうする？　このままじゃまずいよね」
「そうですねぇ。初日の間にある程度決めておかないと、期間は一週間あるとはいえ、後半ではほとんどの方がチームを決めているでしょうし」
「とにかく、急いで仲間を探そう」
「そうですね」
　クリュウとクードは手分けして仲間探しに奔走する事となった。クリュウは知り合いに手当たり次第に訊いたが、すでにチームを組んでいる者が数多く、仲間にはなかなかなってくれなかった。
　すでに男子の知り合いはほとんど聞き終えた。残るは女子だが、もちろん女子は仲間になってくれないだろう。創立以来男女混合のチームができた事はほとんどないという事はこの学校の歴史が示している。去年はその例外を見事に生み出したのだが。
　しかし、もはや手段を選んでいられなかった。クリュウは女子の知り合いにも徹底的に訊き回ったが、やはり仲間は得られなかった。

困り果ててため息を吐きながらとぼとぼと通路を歩くクリュウ。このまま仲間が見つからないのではと今日の捜索を諦めかけた、その時、
「兄者ぁ～ッ！」
その声に振り返ると、一人の少女がこちらに向かって走って来る。オレンジ色の髪を赤色のリボンでツインテールに結んだかわいらしい髪形にクリッとした瞳がかわいらしい健康的な小麦色に焼けた肌をした小柄な少女。それはクリュウの知り合いの一人だった。
「あれ？　どうしたのそんなに慌てて」
少女はクリュウの前まで走って来ると、肩を激しく上下させてハァハァと荒い呼吸を繰り返しながら息を整える。ある程度息が整うと、少女はクリュウを上目遣いで見上げた。
「兄者、チームメイトは見つかったんすか？」
「いや、それが全然見つからなくてね。困ってた所だよ」
クリュウがため息を吐きながら返答すると、少女はパァッと笑顔を咲かせた。グッと両手を胸の前で握り締めると、クリュウを見上げながら嬉しそうに口を開く。
「それじゃ、シャルと組んでほしいっすッ！」
「え？　ほ、ほんとッ!?」
驚くクリュウに、少女はブンブンと首を縦に振った。
「本当っすよッ！　シャルは今年こそは兄者と組みたかったんすからッ！」
「それは嬉しいけど、でもいいの？　他の女子と組まなくて」
そう訊くと、少女は自信満々にあまり成長していない胸を突き出してドンと拳を叩き付け――見事にむせた。
「大丈夫か？」
「だ、大丈夫っす」
何とか咳が治まると、再び胸を突き出して拳を胸に打ちつけた。さすがに今回はコツンというくらいの勢いに弱まっているが。
「シャルは女ばかりの狩りは嫌っすッ！　シャルは男の人が命を懸けて戦うような臨場感溢れる狩りの方がいいっすッ！　だから、シャル

は兄者と組むっすッ！」
　少女の言葉にクリュウは彼女らしいなぁと内心微笑みながら、彼女のその言葉に嬉しそうにうなずいた。
「ありがとう。あ、もうクードと組んでるけど、大丈夫？」
「問題ないっすッ！　ランカスター先輩ともうまくやるっすッ！」
「そっか。じゃあよろしくねシャルル」
「うっすッ！」
　嬉しそうにうなずきながら、少女――シャルル・ルクレールは満面の笑みを浮かべた。
　クードにシャルルが合流した事を話した翌日、残る一人を探す為に三人は仲間探しを開始した。クリュウとシャルル、クードの二チームに分かれての捜索だ。
「残る一人、絶対に見つけてやるっすッ！」
　自信満々に拳を握るシャルルを見る。そのクリッとした瞳は、まるで汚れを知らないかのように純粋な光に包まれている。
　シャルルは現在は第５学年に位置するクリュウの一つ年下の後輩だ。クリュウが第５学年の時に当時第４学年だったシャルルと後輩指導という事でコンビを組んだ事があり、それ以来の親交を持つ。
　優しく丁寧に様々な事を教えてくれたクリュウの事を、彼女はいつの間にか《兄者》と呼ぶようになり、彼を尊敬している。
　語尾に《～っす》と付けたり一人称が《シャル》など独特な言葉遣いをしており、見ての通り真っ直ぐでさっぱりとした性格をしている。人一倍努力をする努力家でもある。男勝りな所もあり、男女問わずに人気がある。ただし、少し熱血過ぎる所があるせいか、トラブルも多いという欠点も持つ。
　武器はその小柄な体格には合わないような重量感溢れる武器、ハンマーを扱う。しかしその小柄な体格を生かしての機動力と、その細腕からは信じられないような怪力でハンマーを自在に振り回すなど、技能ではかなり優秀な成績を持つ。しかし、勉強嫌いな為にいつも学科試験は危険な地位にいるので、プラスマイナスで凡な生徒だ。
「それで、兄者は残る一人に目星はあるんすか？」

「いや、それが全然」
「ま、マジっすかッ!?　けど、シャルの知り合いはもうみんなチームを組み終えてるっすよ?」
「そうなんだよねぇ。早く見つけないと本当に見つからなくなっちゃうし」
　困ったように頬を掻くクリュウを見て、シャルルはグッと両拳を握り締めた。
「シャルもがんばって仲間を見つけるっすッ!」
「ありがとうシャルル」
　クリュウが笑顔で礼を言うと、シャルルは頬を赤らめて「お礼なんていらないっすよ」と言って笑みを浮かべた。本当にいい後輩を持ったと心から思える。
「そんじゃ、片っ端からアタックするっすよぉッ!」
「あぁ、がんばってくれるのは嬉しいけど、シャルルは暴走する事があるから程々にね」
「わかってるっすよッ!　さっさと仲間を見つけるっすよッ!」
「あはははは、本当にわかってるのかな……」
　若干空回りしやすいシャルルが暴走しないように注意しながら、クリュウとシャルルは仲間集めを開始した。しかし、シャルルの男女問わずの仲の良さを使ってもなかなか仲間は見つからず、結局その日は仲間は見つからなかった。
　次の日も探したが、見つからない。その次の日も、その次の日も。そうこうしている間に、チームメイトが見つからないまま最終日を迎えてしまった。
　ロビーの椅子に腰掛けてうな垂れるクリュウ。隣ではシャルルもしょんぼりとうつむいてしまっている。そんな二人に、食堂で買って来たジュースを手渡すクード。その顔はいつもの笑顔は消え、申し訳なさそうな表情に染まっている。
「すみません。僕が足を引っ張ってしまって……」
「別にクードのせいじゃないよ。気にしないで」
「そうっすよ。ランカスター先輩のせいじゃないっすよ」

とは言うものの、実際問題チームメイトが見つからない大きな原因はクードにある。彼は男子から嫌われている傾向にあるので、男子で仲間を見つけるのが難しい。かと言って女子は女子で組むのでこちらも難しい。シャルルがいてもなかなかうまくいかない。こういう状態のまま、三人は最終日を迎えてしまったのだ。
「今からでも遅くはありません。僕と組むのをやめましょうか？」
クードの言葉に、クリュウは「僕は絶対に嫌だからね」と言って拒否した。ここで親友を見捨てるような事、彼には出来ないししたくもない。シャルルも「ランカスター先輩を見捨てる事なんかできないっすッ！」と力強く断言した。
「その気持ちは嬉しいですが、現実問題としてチームメイトが見つからないのでは仕方ありません。とにかく、今日中にチームメイトが見つからないと本当に危ないですよ」
「そうだね。もうこうなったら徹底的に走り回るしかないね」
「体力になら自信あるっすよッ！」
「では、最後までがんばりましょう」
クードは優しく微笑むと、シャルルと共に早速ロビーを出て行った。二人はロビーの出口で二手に分かれた。一人残されたクリュウもジュースを飲み干してから再び仲間探しに奔走した。
しかし、一週間も探していたのに早々見つかる訳もなく、探し始めてから三時間が経過したが、クリュウは仲間を見つけられずにいた。すでに大半の生徒がチームを組み終えて申請を済ませているという状況もまた彼に不利的条件を突きつけていた。
散々走り回って疲れてしまったクリュウは再びロビーに戻って椅子に腰掛けて息を整える。そして、天井を仰いだ。
「はぁ……、本当にマズイなぁ……」
期限までに四人見つけないと、集まった人数で授業をしなければならない。しかし授業は四人編成を基本で組まれているので、四人以下となるとかなり厳しい事になる。マジメに授業を受けているクリュウとしては、なるべく避けたい所だ。
「どうしようかなぁ……」

クリュウが本気で悩んでいると、突如ロビーの喧騒が止んだ。何事かと思ってロビーの出入り口を見ると、一人の少女が入って来た所だった。紺色の柔らかな髪をザザミ結びという髪型にした細メガネを掛けた美少女。周りの者達はその子を遠巻きに見つめ、ひそひそと話したり彼女を指差したりし、好奇の目線で彼女を迎える。

少女はそれらの視線を無視してスタスタとロビーに入ると、売店でジュースを購入して空いている席に腰掛けた。周りの者達は相変わらず彼女を好奇や、まるで化け物を見る目で見詰めている。

一方、クリュウはその少女に見覚えがあった。確か、上位成績優秀者のほとんどが第6学年という中、唯一他学年で、それも首席を勝ち取った子だ。

いつの間にか、クリュウもまた彼女を好奇の目で見ていた。すると、スッと少女がこちらを見てきた。その瞬間、二人の視線が重なった。そして、見てしまった……

――メガネの奥の、左右の色が違う、災厄の瞳を。

「……ッ!?」

クリュウは慌てて視線を外した。少女は気にした様子もなくジュースを飲んでいる。そんな彼女をクリュウはそっと盗み見た。

左目は金色、右目は碧色。左右で色の違う瞳をした少女。

なぜ生徒達は一切彼女に近寄らず、遠巻きで好奇な目や嫌悪の目で見ているのか。首席の子は近寄りがたいという事を差し引いても異常だ。その理由は、彼女の瞳にある。

大陸には多くの伝説が広まっている。その中の一つに左右の瞳の色が違う美しい容姿をした女性の話がある。その女性は悪魔で、その美貌で多くの王族や貴族を虜（とりこ）にし、やがて世界を破滅へと導くという伝説――邪眼姫（イビルアイ）。

その伝説から取って、左右の瞳の色が違う者を人々はイビルアイと呼び、嫌悪の対象となっている――と、以前何かの本で読んだ事があった。

再びそっと陰から見ると、イビルアイの少女に近づく男達がいた。

「おいイビルアイ」

先頭に立つ男の声に少女は一度だけ目を向けたが、すぐに無視した。そんな彼女の態度が気に入らなかったのだろう。男は顔を真っ赤にして少女の腕を掴んだ。
「なめたマネしてんじゃねぇぞ悪魔ッ！」
ざわざわと周りが騒ぎ始めるが、誰も少女を助けようとはしなかった。無駄な争いに巻き込まれたくないし、イビルアイの少女をかばったなんて知れたら自分も好奇の目で見られるだろう。そんな危険、誰も冒さない。
「放してください」
少女は感情の籠もっていない声でそう言った。だが、もちろんそんな事で男が手を放すはずもない。隣に立つ男二人が彼女の顔を覗き込む。
「ハッ、本当にこいつ目の色が違うぜ。これが悪魔の瞳って奴か」
「どれどれ？　うわッ！　本当にイビルアイだぜこいつッ！　気をつけろ、石にされるぞッ」
ゲラゲラと下品な笑い声を上げる男達。少女は腕を掴まれたまま「放してください」と小さく呟くだけで抵抗はしなかった。まるで、抵抗するだけ無駄と思っているかのようだ。
か弱い少女が男三人に絡まれているというのに、周りの生徒達は一切彼女を助けようとはしなかった。誰も自ら争いに巻き込まれたくはないし、イビルアイの少女をかばったら周りから何と思われるか怖がっているのだ。それほどまでに、イビルアイとは異形の存在なのだ。
人間は自分の窺知（きち）しがたい存在からは距離を置くもの。その領域には決して踏み込む事はない。それが一番安全だとわかっているからだ。
感情の籠もっていない、人形のように無表情の少女は男達から視線を外した。その瞬間、再びクリュウと目が合った。色の違う瞳、それ以上にその瞳には希望の光なんて存在せず、暗く濁っていた。
少女が諦めたように視線を下げると同時に、クリュウは立ち上がっていた。周りからどう思われたっていい。でも、これ以上見てはいら

れなかった。
「やめてください。彼女嫌がってるじゃないですか」
クリュウは少女の腕を掴む男の太い腕を掴んだ。少女は驚いたような表情を浮かべてクリュウを見詰める。そんな彼女を一瞥し、クリュウは自分の体格の倍はある男達と対峙した。
「何だよ。テメェ、イビルアイの味方をすんのかよ」
「バカじゃねぇのかこいつ」
「ガキはすっこんでろ」
男達は水を差されてクリュウをつまらなそうに見る。だが、クリュウはそんな彼らの視線を真っ向から真剣に睨み返した。
「イビルアイとか、そんな事関係ありませんよ。女の子に男三人で絡む方が見過ごせません。そんな事して恥ずかしくないんですか？」
その瞬間、クリュウを見詰めていた少女の肩がピクッと動いた。
一方、自分達より年下の小柄な子供にバカにされた男達はこめかみに青筋を浮かべてクリュウを睨む。少女の腕を掴んでいた男はその手を離すと、今度はクリュウの肩を力強く握った。肩が潰されるのではないかという激痛に耐え、クリュウは睨み続ける。
「ガキが調子のってんじゃねぇぞッ！」
空いている手で男はクリュウ頭を掴むと、思いっ切り地面に叩き付けた。突然の事に悲鳴も上げられずに床に顔面を強打したクリュウは意識が飛びそうになった。
男はグイッとクリュウの頭を掴んで持ち上げた。たった一撃でクリュウは戦闘不能に陥った。体をブランと垂れらしてもはや抵抗もできないクリュウ。今度は地面に投げ捨てられ、痛みに悶えていると次々に男達の蹴りが炸裂した。
男三人がよってたかって少年に暴行を加える光景は、ケンカが毎日のように起こるこの学内においても危険と判断される状況。周りの生徒達もざわめき始めた。
「やめてくださいッ！」
腹を蹴られて激しく咳き込むクリュウをかばうように、突如少女が立ち塞がった。

「何だよ悪魔。そこをどけよ」
少女は何も言わず、ただ無言で睨み続ける――左右の目の色が違う、邪眼（イビルアイ）で。
少女の生意気な態度に激怒し、男は巨大な拳を思いっ切り振り上げた。
「何をしているか貴様らッ！」
その怒号に、男達は振り返って顔色を真っ青に染めた。
ロビーに入って来て怒鳴り声を上げたのは一人の男。教官は実力を示す為に常に防具を身に着ける事が規則となっている。校内で防具を身に纏っている時点で、それは教官となる。
屈強とまではいかないが鍛えられた肉体にその実力を示すかのような銀色の鱗や甲殻に包まれたリオレウス希少種、通称銀リオレウスの素材をふんだんに使ったシルバーソルシリーズを身に着けた男の名はフリード・ビスマルク。すでに今はハンターを引退しているが、かつては英雄クラスのハンターだったほどの実力者。身に着けているシルバーソルシリーズがその証だ。現在はこのドンドルマハンター養成訓練学校の第6学年を担当する教官。その今も衰えを知らない肉体は彼が有事の際は召集される予備ハンターである為に日々鍛錬を続けている成果だ。
その火竜をもぶちのめす実力と曲がった事を決して許さない性格から、荒くれ者達からは恐れられる武闘派の教官だ。
フリードは男達を睨みながら、床に倒れて咳き込んでいる自分の生徒を一瞥し、再び男達を睨みつけた。
「折檻室（せっかんしつ）まで来てもらおうか」
折檻室、それは校内で唯一暴力が許可されている教官が、思う存分に生徒をいたぶる場所。その名を聞いた瞬間、男達は慌てて逃げ出した。が、
「教育がなってないようだなぁッ！」
フリードは鉄の拳を握り締めて床をダンッと蹴ると、一瞬にして男三人の逃げる背中に拳を叩き付けた。その一撃で、男達は一斉に転倒しそのまま気絶。周りの生徒達はフリードの鮮やかな動きに驚き、そ

の拳の破壊力に恐怖する。
　そこへ遅れて他の教官達もやって来た。フリードは彼らに倒れている男達を折檻室に連れて行くよう指示すると、立ち上がろうとするクリュウに歩み寄った。
「立てるか？」
「は、はい」
　クリュウは何とか立ち上がると、助けてくれたフリードに礼を言って頭を下げた。フリードは運ばれていく男達を一瞥。
「まさか、君が争い事の中央にいるとはな。何があったんだ？」
　フリードの問いに、クリュウは一瞬だけ隣に立つ少女を見た。フリードはその視線を追って少女を見て、納得したようにうなずく。
「なるほどな。お前らしいといえばお前らしいが、無茶はするものではないと今までも言って来たはずだが」
「す、すみません」
「まぁいい。俺はこれからあのバカどもに軽く教育して来る。見た限りでは問題はなさそうだが、万が一体調を悪くしたら医務室に行くんだぞ」
「わかりました」
　そう言って、フリードは男達を運ぶ他の教官達を追ってロビーを出て行った。騒ぎが収まったロビーにはいつもの賑やかさが戻った。生徒達はクリュウと少女を好奇な目で見るものの、先程の騒ぎもあって誰も関わろうとしない。
「怪我はない？」
　起き上がったクリュウは無言で自分を見詰めている少女に小さく笑みを浮かべながら問い掛けた。まぁ、問い掛けている方がボロボロなのは仕方がない。
　少女は何も言わずに一度小さく頭を下げると、踵を返してロビーから出て行った。小さくなっていく彼女の背中に、何となく彼女の事が気になってクリュウも慌てて彼女を追い掛けてロビーを出て行った。
　周りの者達はそんな二人を珍しそうに見詰めていたが、二人の姿が消えるといつもと変わらない日常を取り戻すのであった。

第８８話　イビルアイ　少女の背負いし悲しき宿命

人通りのない通路を無言で進む少女。クリュウは何となくそんな彼女が気になって後を追い掛けた。そして、他に人の姿が見えなくなった頃、少女は突然振り向いた。左右色の違う瞳が、しっかりとクリュウを捉える。

「助けていただいた事には感謝します。しかし、なぜボクを追い掛けて来るのですか？」

少女の問い掛けに、クリュウは「え？　あ、いや別に特に理由はないんだけど……」と口ごもる。何となく気になったからついて来たなんて、理由にならない。

傍から見れば怪しい態度のクリュウを、少女は警戒心全開の鋭い眼光で睨みつける。

「あ、うん。別に何でもないんだ。じゃ、じゃあね」

「――校内順位第１０位。クリュウ・ルナリーフ第６学年生」

「え？」

踵を返して去ろうとしたクリュウに向かって、少女はそう言った。振り返ると、少女はクイッとメガネのブリッジを上げ、左右色の違う瞳でクリュウを見た。

「ど、どうして僕の名前を」

「上位成績優秀者の顔と名前くらい、簡単に覚えられます」

少女はさも当然と言いたげな表情でクリュウを見る。一方のクリュウはそんな彼女の記憶力に素直に驚いていた。

「すごいね。僕はそんなの全然覚えてないよ」

「なら、ボクの事も知らないでしょうね。いいでしょう。ボクはルフィール・ケーニッヒ第４学年生。一応今期の校内順位は首席です」

少女――ルフィールは淡々と自分の名を名乗った。首席という所を自慢するでもなく、まるで名を名乗るように何らその言葉には名乗る以上の意味が感じられない。普通、校内首席を取れば自慢したくなるものなのに、彼女はそれをしなかった。

「それで、ボクに一体何の用なのですか？」

ルフィールはさっさとこの場を立ち去りたいと言いたげな顔でクリュウに問い掛けた。そんな彼女の視線に対し、クリュウは苦笑いを浮かべる。
「う、ううん。何でもないんだ。何でも。じゃ、じゃあねケーニッヒ」
クリュウは再び背を向けて歩き出した。そういえば、なぜ彼女を追い掛けてしまったのか。今思えば不思議でならないが、何となく彼女のあの瞳が、普通と違う色とかではなく、何となく昔の友人に似ていた気がしたのだ。無口で無表情の、いつも自分の背後にくっ付いていた、今はどこにいるかわからない少女の姿に。
「――結局、あなたもボクの瞳が気になっただけなのですね」
そんな事を考えていた時、突然背中に向かってそんな言葉が投げ掛けられた。振り返ると、少女はメガネのブリッジを上げながらこちらを睨みつけていた。氷のように冷たく、刃物のように鋭い眼光が、クリュウを射抜いていた。
「そんなに珍しいですか、このイビルアイが」
「いや、まぁ珍しいと言えば珍しいけど」
「災厄を招く邪眼。そりゃ珍しいでしょう。特にこの学校には各地からハンターを目指す者達が集まる。イビルアイなんて、その中では浮いて当然の存在。いえ、むしろあのように嫌われ、迫害されるものです」
少女の吐き捨てるように言うその言葉の数々に、クリュウは顔を曇らせた。彼女の言葉の端々に言いようのない悲しみを感じたからだ。何というか、その言葉の全てが、現実を持っているような気がする。
きっと、それは今まで彼女自身が周りから言われて来た事なのだろう。その珍しい上に、伝説上の悪魔と同じ目をしたイビルアイと呼ばれる左右色の違う瞳。周りからは好奇な目で見られるだけでなく、さっきのように絡まれる事もあっただろう。
なぜ彼女が男達に絡まれても無駄な抵抗をしなかったのか。それが、今何となくわかった気がした。
――諦めているのだ。どんなに抵抗しても、その人と違う瞳がある限り、これから先もずっとそんな事が続くのだと。抵抗するだけ無駄

だし、抵抗すればもっとひどい目に遭う。そんな悲しい経験が、彼女にはあるのだ。
「あなたも、同じなのでしょう？」
そう言って、ルフィールはクリュウを見た。左右色の違う瞳が、どこか悲しげな色に染まってクリュウの姿を捉える。
その暗い瞳に対して、クリュウは首を横に振った。
「そんな事ないよ。僕は君がイビルアイだとしても、それを理由に嫌ったりなんかしない」
クリュウの言葉に、ルフィールは驚いたようにその色の違う両眼を大きく見開いた。メガネの奥で大きく見開かれた瞳には、自分を真っ直ぐ見詰めるクリュウの姿がしっかりと映っていた。
「何、言ってるんですか？」
「イビルアイだから何だって言うんだよ。たかが瞳の色が違うだけで差別する方がおかしいじゃないか」
「……口では何とでも言えます」
一瞬、クリュウの言葉に動揺したルフィールだったが、すぐに再び冷めたような表情に戻る。むしろ彼が適当な事を言ったと思ったのか、不機嫌そうに彼を睨みつけた。
「ウソなんかじゃないよ。僕は本気でそう思ってる」
「先程も言いました。口では何とでも言えると」
吐き捨てるようにそう言うと、ルフィールは不愉快そうにクイッとメガネのブリッジを上げ、踵を返した。
「ちょ、ちょっとッ！」
慌ててクリュウはルフィールを追い掛ける。するとルフィールは振り返ってついて来たクリュウを至近距離から睨みつけた。イビルアイの鋭い眼光が、クリュウを容赦なく射抜く。
「ついて来ないでください」
「だったら、僕の言葉を信用してよ」
「……なぜそこまでボクに構うのですか？　正直言って迷惑です」
ルフィールは警戒するような目で睨みながら、心底不思議そうに訊いて来た。彼女からすれば、迫害されるはずのイビルアイをなぜここ

まで構おうとするのか本当に不思議に思えるのだろう。
　そんな彼女の問い掛けに対し、クリュウは小さく苦笑しながら頬を掻いた。
「いや、何となく君が僕の子供の頃の知り合いに似てたもんだからさ。気になって」
「……ボクとその方は一切無関係です。例えその方と似ているとしても、ボクはボク。イビルアイのルフィールです。そんな理屈の通らない理由でボクに構われるのは至極迷惑だとボクは思います」
「そ、そんなに迷惑かな？」
「はい。今すぐにでも排除したい衝動に駆られるほど迷惑です」
「ご、ごめん……」
　クリュウが申し訳なさそうにペコリと頭を垂れて謝ると、ルフィールはその間にさっさと歩き出してしまった。またも慌ててクリュウが追い掛ける。
「だから、なぜついて来るのですかあなたは。そういうのを世間一般ではストーカーと言うのではないでしょうか？　いえ、言うのでしょうね」
　不機嫌そうに眉をしかめながらルフィールはクリュウに振り返る。メガネの奥の色違いの瞳は《うざい》《しつこい》《消えろ》の三拍子が揃っているかのごとく鋭い。そんな彼女の視線に対し、クリュウは苦笑いして誤魔化すしかできなかった。
「あ、あのさ。狩猟学の仲間はもう見つかったの？」
　ふと話題を変えようとそう問い掛けた瞬間、ルフィールの眼光がさらに強くなった。不機嫌を通り越しての怒り。言葉で言うなら今までは《消えろ》だったのが《殺すぞ》くらいにまでアンチゲージが跳ね上がった状況だ。
「あなた、本当にデリカシーというものがないのでしょうか？　いえ、全くもって微塵もないですね」
「み、微塵くらいは……」
「ありません」
　キッパリと否定され、苦笑するしかないクリュウ。そんな彼を心底

不機嫌そうに睨みながら、ルフィールはギュッと両拳を握り締めると、吐き捨てるように言い放った。
「イビルアイのボクを仲間にしようなどと考える変わり者が、この学校にいると思いますか？　誰もボクと組もうなどという血迷った考えなど起こしません」
「ち、血迷ったって……。そこまで言わなくても……」
苦笑するクリュウであったが、ここでようやく理解できた事が一つあった。
――彼女は、誰とも組んでいない。組んでもらえていないのだ。
イビルアイという左右色の違う特異な瞳を持つせいで、それと同じ瞳を持つ伝説の悪魔が大陸中に伝わっているせいで、彼女は周りから距離を取られ、孤独にいる。そして、今もこうして一人――いや、違う。まだ彼女の周りにいる人が少なくとも一人はいる。それは……
「じゃあさ、僕と組まない？」
「――え？」
クリュウはそう言って小さく微笑んだ。そんな彼のあまりにも突然で突拍子もないその言葉に、ルフィールは今まで以上に瞳を大きく見開いて驚いた。しかしすぐにそれは細く鋭いものに戻る。クイッとメガネのブリッジを上げ、レンズを通しての鋭い眼光でクリュウを睨む。
「血迷ったんですかあなた」
「血迷ったって、ひどい言われようだね」
「じゃあ、頭おかしいんじゃないですかあなた」
「余計ひどいよ……」
苦笑するクリュウに向かってルフィールは迫る。身長差があるので自然とルフィールはクリュウを見上げる形になった。突然近寄って来た自分に驚く彼を、ルフィールは刃物のように鋭い瞳で睨みつける。
「人間は平気でウソをつきます。それは自分に利益及び不利益が生じる場合です。ボクを傷つけるようなウソをついて、あなたにどのような利益もしくは不利益が生じるというのですか？」

「そんなつもりはないよ。傷つけるつもりも、利益とか不利益なんてものも考えていない」
「ウソですね」
「本当だ」
　ルフィールはクリュウの言葉が気に入らなかった。勝手に目の前に現れ、勝手に意味もなく自分を助け、挙句の果てにイビルアイの自分に仲間になってくれと言い出す。意味がわからないし、勝手に自分の領域に踏み込んでこられるのは不愉快だった。
「ボクはイビルアイですよ？　人々からは忌み嫌われ、迫害されるべき対象。そんな私と、なぜ仲間を組むというデメリットしか生じない暴挙を考えるのですか？」
　ルフィールの問いに、クリュウはしばし沈黙した。一瞬たりとも目を離さない彼女に向かって、しばし考え込んだ末に彼はそっと口を開いた。
「まず、君は校内首席だ。それだけで君が優秀なハンターだって事はわかる。チームに実力のあるハンターを入れるのは当然の事でしょ？」
「確かに、限られた定数の中でチーム全体の能力を上げるには優秀なハンターを入れるというのが一番シンプルで確実な方法と言えましょう。しかし、ここで問題が生じます」
「問題？」
「チームというのは一つの組織、生き物のようなものです。生き物は各器官が正常に働いていないと体調を崩し、病気などになります。それと同じで、チームというものも各員が正常に機能しないと本来の力を発揮しません。チームが正常に発揮するもの、それは信頼だとボクは考えます。多少能力の低いメンバーがいても、その人物に対して他のチームメイトが絶大な信頼を持っているとすれば、チーム全体の士気は向上し、チーム全体の能力は上昇するでしょう。チームや組織というものは決して１＋１が２となる訳ではありません。そこには無限の可能性が存在し、答えは３にも５にも。もしくは１００というものにもなるでしょう――しかし」

ルフィールは《しかし》で一旦話を区切ると、自虐的な表情を浮かべた。クリュウを見詰めるイビルアイが、悲しみに染まった光を微弱に放った。
「ボクはイビルアイです。この時点でチームという組織において必要な信頼というものは確実に消滅します。なぜか？　それはイビルアイが人々から忌み嫌われ、蔑まれ、迫害されるべき対象だからです。例えその理由が非科学的な事であっても、世の中は原因ではなく結果を求めます。なぜイビルアイが忌み嫌われるのかが問題ではなく、イビルアイだから忌み嫌われるというのが当然。つまり、イビルアイのボクがいると、それだけでチーム全体の士気は地に落ちます。いくらボクが優秀なハンターと評価されていても、それはあくまで個人での場合。チームになれば、ボクのイビルアイはデメリットにしかならないでしょう？」
自虐的な笑みを浮かべて、イビルアイを――自分自身の存在意義を否定するルフィール。そんな彼女の姿に、クリュウは胸が苦しむような感覚がした。彼女はずっとこうして周りから蔑まれて来た。そしてそれが当然だと、思い込んでしまっている。それが当然であって、逆らうだけ無駄と。だから、彼女はそれらを受け入れ、自分の存在を否定している。
――自分なんて、生まれて来なければ良かったのに。そんな言葉が、今にも彼女の口から漏れ出しそうで、クリュウは胸が苦しかった。
「あなたが一体何を考えているのか、ボクには全く理解できません。ボクは自分という存在がおかしなものだと思っていますが、あなたはそれ以上におかしい。イビルアイを、なぜ嫌わないのですか？」
心底不思議そうに、本当に真剣に訊いてくるからこそクリュウの心は凍りついた。彼女は、本当に自分を嫌わない存在がこの世にはおらず、むしろ嫌わない方がおかしいと思い込んでいる。
……一体、どれだけの辛い思いをすれば、こんなにも悲しい事を当然と思い込めるのか。
この、どこか冷めたような瞳。やっぱり似ていた。昔、よく村に来ていた商隊の娘で、いつもつまらなそうに人形を抱きかかえていた少

女に。
今、彼女がどこで何をしているかはわからない。でも、彼女と最後に別れた時、彼女は笑ってくれた。冷めたような瞳には暖かそうな光が宿っていた。
自分やエレナという友達のおかげで、彼女は変わった。
だったら、きっと今目の前にいる彼女だって、変われるはず。
「――僕は瞳の色が他と違うからって、その人をそんなくだらない理由で差別なんかしない」
ルフィールの瞳は、再び大きく見開かれた。
「くだ、らない……？」
「そう、くだらない事だよ。人を評価するのは外見じゃなくて中身だって、僕は父さんに教わった。君は見た目は他の人と少し違うけど、本当に少しさ。それ以上に、君は校内首席という実力者。中身で判断するなら、君はとても優秀なハンターだ。僕は、そんな君が必要だと思っている」
「ボクが、必要……？」
「ハンターの世界なんて、結局実力社会さ。そこではイビルアイなんて関係ない。実力さえあれば、みんな認めてくれる。そして、君はそれだけの力を持っている」
「……確かに、ハンターという世界をボクが目指したのはイビルアイとは関係なく、実力さえあれば周りに認めてもらえると思ったからです。その為に誰よりも努力し、今までずっと勉強に勉強を重ねて上位をキープし、今回ついに悲願だった校内首席にまで上り詰めました」
――なぜ、自分はこんな事を言っているのか。
これは、今まで誰にも話した事のない自分の夢。実力さえあれば、きっとみんな認めてくれる。そんな淡い期待を抱きながら、ハンターを目指した、誰にも明かした事のない自分だけの秘密。
どうして、こんな大事な事を初対面の彼に話しているのか。不思議で仕方なかったが、なぜか言いたかった。彼は、きっと自分の話をちゃんと聞いてくれる。そんな淡い、本当に淡い期待を抱いている自分がいた。

そして、もしかしたら――
「……でも、現実は違いました」
――きっと、自分は慰めてほしかったのかもしれない。
「実力社会であっても、結局は変わりませんでした。いくら優秀な成績を取っても、周りからは好奇な目で見られ、差別されました。結局、どこにいてもイビルアイのボクには居場所なんてないんです……」
そう、自分には居場所はないのだ。
何でそんな事にも気づかなかったのか。
自分という存在は、誰にも見られる事なく森の中にでも隠れてひっそりと暮らしていれば良かったのだ。
誰でもいい。自分を認めてもらいたい。そんな無駄な期待を抱いてしまったせいで、結局自分は茨(いばら)の道を進んでしまった。そして、その道の先には、結局何もなかったのだ。
誰も自分を認めてくれない。
自分の居場所なんて、もうどこにも……
「――じゃあ、僕が君の居場所になってあげるよ」
それは、自分がずっと追い求めていた言葉だった。
驚いたように彼にを見詰めると、彼は真っ直ぐと自分を見詰めていた。その自分とは違った両方同じ翡翠色の瞳には、本気の光が宿っているように見えた。
「何を、バカな事を……」
「バカじゃない。僕は本気だよ」
真剣にそう言うクリュウ。そんな彼が、ルフィールにとっては不愉快でしかなかった。そして、一瞬でも期待してしまった自分が許せなかった。今まで何度も騙(だま)されて来たのに、何を今さら期待なんて抱くのか。理解できなかったし、そんな甘い考えをする自分が、本当に許せなかった。
今まで、そんな期待のせいで自分は苦しんで来た。あれだけ苦しい思いをしても、まだ自分は根っこの部分ではわかっていないのか。
何より、平然とそんな大ウソを言える彼が本気で憎かった。許せなかった。もうこれ以上、裏切られ、傷つけられるのは絶対に嫌だった。

そう思うと、目の前の彼が今まで自分を騙し陥れて来た全てと重なる。抑えていた感情が、爆発しそうになった。
　ルフィールは刃物のように鋭い眼光でクリュウを睨みつけると、彼の胸倉を掴んだ。クリュウは一切抵抗はせず、彼女にされるがまま。しかし、ルフィールの方が小柄な体格をしているので、胸倉を掴んだとしてもそのまま掴み上げるなどはできない。
　ただ、周りが恐れて忌み嫌うこのイビルアイで、睨みつけてやる事しかできなかった。
「それ以上いい加減な事を言うと、本気で怒りますよ……」
「いい加減な事じゃない。僕は本気だよ」
　いつになく真剣な顔でそう言ったクリュウはルフィールの邪眼（イビルアイ）を恐れずに見詰め返す。自分の瞳を見ても何ら恐れも不快感や警戒心も、不愉快さも感じていないように見えるクリュウに、ルフィールはバツの悪そうな表情を浮かべると、胸倉を離した。
「もう、放っといてください……」
「放っとけないんだよ」
「これ以上ボクに踏み込まないでくださいッ！」
　悲鳴のように叫ぶルフィールと、クリュウは逃げも隠れもせずに対峙した。そんなクリュウの態度にルフィールは完全に困惑していた。今まで、彼のように自分の瞳に対して好奇な感情を持たず、しつこくお節介をするような人には会った事がなかった。
　蔑（さげす）まれ、疎まれ、忌避される事は慣れていた。それが当然の周りの反応だと思っていた――だけど、目の前の彼は違った。
　――まるで、自分を一人の人間として扱っているような、そんな不思議な感覚。
「何なんですかあなたは……何でボクの領域に無断で踏み込んで来るんですか？　ボクは、これ以上は誰にも近づいてほしくないんです……ッ！」
「どうして？」
「――だって、信じてしまいそうだから……ッ！」
　ルフィールは左右色の違う瞳のどちらからも、ボロボロと涙を流し

ていた。
今までずっと抑えてきた感情が爆発し、もう自分では制御できなかった。溢れ出す感情はまるで滝のように勢い良く流れ出し、この初対面でしかないのに自分の中に勝手にズカズカと入って来て、自分に淡い期待を抱かせてしまう少年に向かって容赦なく降り掛かる。
「信じちゃいけないのに……ッ！　信じたら、裏切られた時にすごく辛いってわかってるのに、ボクはまた信じようとしてる……ッ！　もうこれ以上傷つきたくないのに……ッ！」
涙と一緒に、自分の本音まで勢い良く噴き出す。こんな事、誰にも言った事はなかった。味方がいないなら、自分が強くなるしかないと、弱い自分をずっと押さえつけてきたはずなのに。なのに、こんな簡単に、弱い部分というのは露呈してしまう。
ただ、もう今はそんな事関係なかった。
――今は、例えひと時でもいいから、彼に甘えたかった。
「ボクは、もう誰も信じないって決めたのに……ッ！　あなたのせいで、あなたが優しくするからッ！　信じてしまいそうになる……ッ！　信じちゃダメなのに……信じてしまいそうになる……ッ！」
もはや立っている力もなく、泣き崩れて叫ぶルフィール。クリュウはそんな彼女の横にしゃがみ込むと、わんわんと子供のように泣く彼女の頭をそっと撫でた。手の平をくすぐるように流れる彼女の髪は、何ら他の女の子と変わらなかった。
ルフィールはそんな彼の胸に手を置いて、弱々しくも彼から離れようとした。
「……やめてください……。もう、優しくしないで……ボクの中に入って来ないで……。お願いだから、もうボクに信じさせないで……ッ」
そう言って必死に平静を取り戻そうとするルフィールを、クリュウはそっと抱き締めた。腕の中で、彼女がビクッと震えるのを感じ、そっとその背中を撫でる。
ルフィールは残る力を振り絞って、力の入らない体に無理やり力を送って彼の腕の中から離れようとする。だが、クリュウは決して彼女

を離そうとはしなかった。
「……お願い、放してください……ッ。　これ以上されたら、ボクはもう……戻れなくなってしまいます……。あなたの事を、どうしようもなく信じてしまいます……だから、もう……お願い……ッ」
「構わないよ。僕で良ければ力になるからさ。だから――僕を信じて」
――その瞬間、ルフィールの中で何かが小さな音と共に砕け散った。
ルフィールはそっとクリュウに手を伸ばすと、彼にしがみついた。クリュウもまたそんな彼女をそっと抱きとめる。そんな彼の腕の中で、ルフィールは泣き崩れた。
ボロボロと涙を流しながら泣き崩れるルフィールを見て、クリュウはちょっとだけほっとしていた。あんなに冷たい瞳をしていた彼女にも、こんな弱くて崩れやすい一面があったのだ。いや、たぶんこっちが本当の彼女なのだろう。
今まで必死に自分の弱い部分を隠していたのであろうルフィール。しかし今はそんな弱い部分を隠す事なくさらけ出している。それも、初対面同然の自分に対してだ。
こんな自分でも彼女の力になる事ができる。その事実に、クリュウは不謹慎だとは思いながらもちょっと嬉しかった。
しばらくして、ルフィールはようやく泣き止んだ。クリュウから借りたハンカチで涙を拭うルフィールは、不覚にも泣いてしまった事が恥ずかしいのか頬を赤らめてムスッとしたような表情を浮かべている。
「だ、大丈夫？」
「……ええ。問題ありません」
まだ頬は赤いが、すでに先程までのクールな表情に戻っている。メガネのブリッジをクイッと上げ、メガネの奥のイビルアイでクリュウを見詰める。その瞳は何となく、先程までの冷たさが消えて温かみを持った気がした。
「ボクとしても、狩猟学においてチームを組むのはメリットがありま

す。しかし、すでにあなたはチームを組んでいるのでしょう？　他の方々はボクを快く迎え入れてくれるでしょうか？」
「それは大丈夫だよ。二人ともいい奴だし、僕は二人を心底信頼してる。きっと、君の事も快く迎え入れてくれるさ」
「あなたが信頼されている方々なら、きっと大丈夫ですね――わかりました。あなたの申し出、快く引き受けさせてもらいます」
　そう言って、ルフィールは嬉しそうに無邪気に微笑むと、クリュウの手をギュッと握りしめた。クリュウもそっと握り返し、彼女に向かって嬉しそうに微笑む。
「じゃあ、これからよろしくねケーニッヒ」
「ルフィールと呼んでください。その代わり、ボクもあなたの事はクリュウ先輩と呼ばせてもらいます」
「もちろんいいよ」
「では、こちらこそよろしくお願いします。クリュウ先輩」
　そう言って、ルフィールは年相応の少女のように嬉しそうに微笑んだ。
　ハンカチを返してもらい、立ち上がろうとするクリュウ。すると、そんな彼の服の裾をルフィールはその細く白い手でギュッと摘まんだ。振り返ると、ルフィールが頬を赤らめながら上目遣いで自分を見詰めていた。
「……もう、離しませんからね」
「う、うん」
「……後悔しても、もう遅いんですからね」
「後悔なんてしてないよ」
「……ずっと、ずっと一緒ですからね」
「うん。ずっと一緒だよ」
　クリュウの返答に満足したのか、ルフィールは嬉しそうに微笑みながら立ち上がった。クリュウも続けて立ち上がると、彼女と並ぶ。ルフィールは立ち上がったクリュウの手を握り締めると、彼を見詰める。
「……ボク、意外と執着心強いですからね。覚悟しててくださいよ」

そう言ってルフィールは頬を赤らめながらイタズラっぽく微笑むと、彼の手を引いて歩き出した。クリュウはそんな彼女の笑顔を見て小さく笑みを浮かべると、彼女に引っ張られるままに歩き出した。

クリュウは早速クードとシャルルを呼び寄せ、新しく仲間に加わったルフィールを紹介した。

「この子が新しく仲間になってくれたルフィール・ケーニッヒ第４学年生だよ。彼女は校内首席だからね、チームメイトとしてこれだけ頼りになる子はなかなかいないよ」

クリュウの横で紹介されて恭しく頭を垂れたルフィール。上げられた顔には先程までの少女らしい表情は消え、初めて会った時のように感情の込もっていないような無表情と冷めたイビルアイで二人を見詰める。

一方、新しい仲間ができた事は嬉しいのだが、その相手が噂のイビルアイの首席の子という事に心底驚いている二人。そんな二人の反応に、ルフィールの瞳に陰りが生まれる。

「え？　あ、ダメ？」

二人の予想外の反応に戸惑うクリュウ。まさか、ここまで来て振り出しに戻るなんてオチはないとは思いつつも、二人の反応を見る限りそれも視野に入れないといけないかもしれない。

そんな事を考えながら困惑するクリュウの服の裾を、ルフィールがそっと引っ張った。振り向くと、ルフィールはこちらを鋭い眼光で睨んでいた。きっと「話が違うじゃないですか」と言いたいのだろう。

「あ、いや、その……」

色々な意味でクリュウが板ばさみ状態でいると、突然クードが笑い出した。驚く三人の視線に「あぁ、すみません」と謝りながら、クードはくすくすと口に手を当ててておかしそうに笑う。

「ど、どうしたのさクード」

「いえ、クリュウはおもしろい人だとは思っていましたが、やはりというか期待を裏切らない方ですね。これはおもしろくなってきました」

「お、おもしろくって……」

「私としては何の問題もありません。むしろおもしろくていいじゃな

いですか」
「だから、そのおもしろくって何さ」
　クリュウはため息しながらも内心ほっとしていた。クードはいい奴なのだが、おもしろい事に目がない。普段はとても頼りになるが、おもしろい事があるとそっちに傾いてしまう傾向があるので、その場合は必ずしも味方とは限らないのだが、今回はどうやら味方してくれたらしい。
　クードは了承してくれたので、残るはルフィールの一つ上級生であるシャルルのみだ。そう思って彼女の方を見ると、そこに彼女の姿はなかった。
「あ、あれ？」
　すると、背後で何か言い合う声が聞こえた。振り返ると、そこにはルフィールとシャルルがお互いに鋭い眼光で睨み合っていた。
　その光景にクリュウは驚いた。ルフィールの事はまだまだ知らない事は多いが、シャルルに関しては彼女がどんな子くらいは知っている。人を外見で判断するような子じゃないと思っていたが、やっぱりイビルアイとなると話が変わるのだろうか。
　このままだとケンカに発展しかねないと思い、クリュウは慌てて仲裁に入る。
「ちょ、ちょっと二人とも何して――」
「お前、兄者とどういう関係っすかッ！」
「そうですね。相棒といった所でしょうか？」
「兄者の相棒はシャルっすよッ！」
「シャルル・ルクレール第５学年生。ハンマー使いのハンターですよね？」
「そ、それがどうしたっすか」
「力任せで繊細さに欠けた攻撃。確かに攻撃こそは大雑把ですが意外と動きはいいようですね。しかしお頭（つむ）の方は少し残念な方と聞いていますが？」
「な、何をぉッ！　それだったらお前なんて勉強ばっかりで実技の方じゃ凡な奴じゃないっすかッ！」

「その分知識はあります。ボクは弓使いです。状況を的確に判断して、先輩を援護する事ができます。あなたのようにただハンマーを振り回すだけの方が先輩の仲間というだけで驚きです」
「ウニャアアアアアッ！」
怒りの唸り声を上げてルフィールを睨むシャルルと、自信満々なクールな笑みを浮かべて対峙するルフィール。どうやらイビルアイとかそういう問題ではなく、対極に位置する二人は根本的に馬が合わないらしい。
「こ、これは予想外だったな……」
「いえいえ。おもしろくなって来たじゃありませんか」
「そういう問題じゃないよッ！」
どうやら今回は味方になってくれそうもないクードに頭を抱えながら、クリュウは仕方なく単独で二人の仲裁に入った。
「ほら、これからはチームメイト同士なんだから。仲良くしてよ」
「兄者ッ！　よりにもよって何でこいつなんすかッ！」
「先輩。あなたの人事能力はこの程度なんですか？」
「いや、そんな事言われても……」
「兄者の悪口を言うなッ！」
「今のはあなたに対して言ったのですよ。間接的にですけど」
再び睨み合う両者に、クリュウは疲れたようにため息した。早くも前途多難な気がしてきた。
そんな彼の背後で、クードは楽しそうに笑みを浮かべていた。
その日、教官室に一枚のチーム申請書が提出された。
教官から許可の印とチーム番号が割り当てられ、その申請書は正式に受理された。
第７７小隊
隊長（リーダー）：クリュウ・ルナリーフ第６学年生（１５）《片手剣》
隊員（メンバー）
１：クード・ランカスター第６学年生（１７）《ヘビィボウガン》
２：シャルル・ルクレール第５学年生（１４）《ハンマー》

３：ルフィール・ケーニッヒ第４学年生（１３）《弓》

第８９話　共同生活　ルフィールの幸せに満ちた笑顔

申請書を提出してから三日後、校内は至る所で騒がしかった。新しくチームを組んだ事により、寮の再編が行われているのだ。この学校では狩猟学でチームを組むと、最低でも一ヶ月は男女問わずチームで共同生活をするのが慣例となっている。これは私生活においても互いの事を知る事によって、より親密なチーム関係を築くのが目的である。

決まりでは最低でも一ヶ月は共同生活をしないといけないのが規則となっているが、一ヶ月を過ぎてその共同生活を解くかどうかはそのチームで決める。実際、期間を過ぎたら元の個人もしくは二人部屋に戻る者もいれば残りの期間もチームで過ごす者もいる。

そして今回、新たにチームを編成した事によって寮が再編成され、これから最低でも一ヶ月間は各チームが共同生活をする事になる。それはもちろんクリュウ達も同じだ。

教官から与えられた部屋は寮の最上階の隅に位置する場所にあり、ドンドルマの街並みを見下ろす事ができる。ある意味当たりのような部屋であった。

クリュウがカギを開錠し、ドアを開くと「シャルが一番乗りっすッ！」とまず一番にシャルルが室内に入り、その後をクリュウ、ルフィール、クードの順番で続いて部屋に入った。

奥にリビング兼寝室があり、そこへ至る通路にはトイレや風呂、台所などが隣接されている。この学校は自炊が基本であり、部屋ごとに決まった量の食材が支給されるので、この台所で料理をする場合が多い。食堂での食事は自腹なので、比較的裕福な生徒だけが食堂生活を楽しんでおり、多くの生徒は食堂を間食程度に使っている。そしてもちろんクリュウ達は決して裕福という訳ではないので、多勢の自炊組だ。

シャルルを追ってリビングの方に入ると、そこは結構広い部屋で

あった。中央には四人掛けのテーブルがあり、部屋の両端には二段ベッドがそれぞれ二つ備えられている。
　すると、シャルルは荷物を乱暴に放ると、クリュウに向かって笑顔で駆け寄って来た。
「兄者ッ！　兄者はどこで寝るっすかッ!?」
　ウキウキと嬉しそうに言うシャルルに、クリュウは首を傾げつつも少し考え、部屋の右側の二段ベッドの上段を指差した。
「僕はあそこにしたいけど、いいかな？」
　三人に問うと、全員がうなずいた。クリュウは「ありがとう」と言うと早速荷物を新たな自分のベッドに放った。すると、そんな彼の背を見ながらシャルルが動いた。
「それじゃシャルは兄者の下のベッドを――」
「――では、先輩の下のベッドは私が」
　その瞬間、二人の間で激しい火花が迸った。そんな睨み合う二人の後ろではクードがニコニコと楽しそうに笑みを浮かべている。
「兄者の下はシャルが寝るっすよ。お前は別の所で寝るっす」
「丁重にお断りさせていただきます。ボクは先輩の下のベッドがいいんです。シャルル先輩こそ身を引いていただけないでしょうか？」
「嫌っすよ。それに、先輩の言う事は聞くもんっすよ」
「校内順位はボクの方が上ですよ」
「……ケンカ売ってるんすか？」
「今頃気づいたのですか？」
　結局、あれからクリュウの奮闘も空しくこの二人は対立関係のままだった。元々馬が合わない性格同士な為か、何かある事に二人は対立している。そのたびにクリュウは仲裁に振り回され、疲れてしまっていた。
「いやはや、いつ見ていてもおもしろいですねあの二人は」
「おもしろいって……たまには仲裁を手伝ってよ」
　いつもは頼りになるクードは二人のケンカに対してはこんな感じな為、あまり役に立たない。こういう経緯や女子二人の推薦、クードの辞退などがあってクリュウがこの第７７小隊の隊長（リーダー）に

なったのだ。不本意ではあるが、仕方がない。
「これだけは絶対に譲らないっすッ！」
「譲るって、あなたが所有権を保持している訳ではないじゃないですか」
「この問題そのものっすよッ！　そんな事もわからないっすか？」
「あぁごめんなさい。低俗な言葉遊びではさすがのボクも勝てそうもありません」
「ウニャアアアアッ！」
「二人とも、ケンカはやめてってば」
　こんな具合で、この三日間クリュウはかなり女子二人に振り回されっぱなしであった。正直、まだ狩猟学は始まっていないのに前途多難過ぎて軽く絶望すらも感じてきた。
「まったく、たかが寝る場所くらいでそんなにもめるなよ」
「たかが寝る場所じゃないっすよッ！」
「たかが寝る場所とは聞き捨てなりませんね」
「……何でそんな部分だけ息がぴったり合うのさ」
　呆れるクリュウは小さくため息すると、仕方ないとばかりに二人に妥協案を提示した。それは自分とクードで一つの二段ベッドを上下に分け、女子二人はもう一つの二段ベッドを上下で分けるというもの。クリュウはこれで問題解決したと安易に考えた。だが、現実はそんなに甘くなかった。
「そういう問題じゃないっすッ！」
「先輩の下はボク達二人の問題です。ランカスター先輩など問題外の極みです」
「そうだそうだッ！」
「だから、何でそんな所で息が合うのさ――って、さりげなくクードを責めるのはやめような」
「構いませんよ。おもしろいですし」
「君はおもしろければ自分が非難されてもいいのッ!?」
「おもしろい事の為なら、私は身を削る覚悟はできていますので」
「そんな覚悟はいらないってッ！」

ニコニコと笑みを浮かべるクードのボケを、ひたすらツッコミまくるクリュウ。ものすごく追い詰められている状況だというのに、意外と冷静な部分ではこのボケ三人に対してツッコミが自分だけというのはあまりにも酷である。などと考えられる余裕がある事に驚いた。
「とにかく、さっさと決めようって。もうこの際だから公平にジャンケンな」
「望む所っすッ！」
「不確実な確率に懸けるなど愚かな極み。しかし、このままでは埒（らち）が明きませんしね。仕方ありません」
「シャルはジャンケンじゃ負けないっすよッ！」
「そのような不確実かつ非科学的な事はありません。ジャンケンはグー、チョキ、パーのどれかの三通りです。二人の場合は三×三より九通りとなります。このうちAが勝つのは三通り、Bが勝つのは三通り、引き分けは三通りなので確率はそれぞれ三分の一となります。つまり、あなたが勝つ可能性は三分の一でしかありませんし、ボクが勝つ可能性もまた三分の――」
「ウニャアアアアアッ！」
「……あぁ、ルフィール悪い。シャルルは単純だから難しい事わかんないんだ。その辺にしといてあげて」
「まったく、この程度の事も理解できないとは本当にお頭がかわいそうな方ですね」
哀れむような目でシャルルを見つめるルフィール。何となくだが、彼女が周りから迫害されていたのは実はイビルアイだけじゃない気がしてきた。
結局、自称ジャンケン百戦錬磨のシャルルが敗北。ルフィールは悠然とクリュウの下のベッドを占領した。シャルルはものすごく悔しそうではあったが、白黒ハッキリさせる性格の為に見苦しい行動はせず素直に負けを認めてもう一つのベッドの上段を占領。必然的にクードが下段となった。
こうして、ものすごく無駄な労力を浪費して寝床が決定。四人は持って来た荷物をそれぞれのベッド周りを中心に置き始めた。

私物というのは性格が出る。クリュウ、クード、ルフィールの上位成績優秀者は本がそれぞれの簡易本棚にズラリと並べられ、私物は少なめ。一方チーム内で唯一上位成績優秀者ではないシャルルは本は教科書くらいで適当に置かれ、私物満載。ルフィールは早速そんなシャルルを非難し、シャルルも激しく応戦。またもケンカが勃発した。

「……もう、好きにして」

クリュウは諦めたようにため息を吐くと、ベッド周りの整理を続ける。

ギャーギャーとわめくシャルルとクール過ぎる態度で真っ向から対峙するルフィール。そんな二人のケンカをニコニコとおもしろそうに見詰めるクードと、第77小隊はずいぶんと個性的というか滅茶苦茶なメンバーが揃っている。

クリュウはチーム結成三日で、自分の人選ミスを多少なりとも後悔するのであった。

その夜、あらかた部屋の片付けを終えた四人は夕食作りをしていた。

台所に入って料理をするのはクリュウ。このメンバーの中で最も料理の腕がいい為に選ばれたのだ。ちなみにクードはほとんど料理の経験はなし、シャルルに関しては料理をした経験は全くなしという状態。ルフィールは参考書を見ながらなら常人並みに作れるのだが、○．一グラム単位でこだわる、まさに教科書通りな作り方しかできない為、時間がものすごく掛かる。しかしメンバーの中ではクリュウの次に料理に適している為、クリュウの助手として台所に入っている。

「塩貸して」

「何グラムですか？」

「いや、ビンごと頂戴よ」

クリュウは苦笑しながらルフィールから塩を受け取ると、目分量でフライパンの中に加える。それを見てルフィールは不機嫌そうに眉をひそめた。

「そのような適当な分量でよろしいのですか？」

「え？　うん。だいたいこれくらいだよ」
「だいたい、ですか？　ずいぶんと信憑性のない適当な発言ですね」
「そ、そんな事言ったって。ほら、胡椒（こしょう）少々とか言うじゃないか」
「そうなんですよね。教科書にも少々って書かれていますが、キッチリとグラム単位で書いてもらわないと困ります。だいたい少々ってどれくらいのものなんですか」
「少々は、少々だよ」
「説明になっていません。まったく、料理というのは何とも適当なものなんですね」
「いや、適当というか。そこら辺は経験で何とかしないとね」
　真面目過ぎる故に滅茶苦茶頭が固いルフィールの発言に苦笑しながらも、クリュウは手際良くフライパンの中にすでに切った食材や調味料を加えていく。ちなみに食材を切ったのはルフィールなのだが、その手にはしっかりと定規が握られている。一ミリ単位でしっかりと全て切り分ける彼女。もはや真面目というレベルではなく、単に融通がきかないという感じだ。
「兄者ッ！　次はこれを持って行けばいいんすよね？」
　先程から台所の中の食器棚で食器を選別していたシャルルがクリュウに問うてきた。クリュウは一瞬一瞥して「それでお願い」と指示。シャルルは「うっすッ!!」と嬉しそうに食器を持って台所から出て行こうとする。すると、クルリと振り返りムスッとしているルフィールに一言。
「細か過ぎる奴は嫌われるっすよ」
「大雑把過ぎるあなただけには言われたくはありません」
　ルフィールは容赦なく反撃したが、実際問題先程から役に立っているのはどちらかと言えばシャルルの方だ。さっきからああやって何往復もして皿を持ち運び、その前にはクリュウの指示でテーブル拭きや花瓶に花を挿すなどをしている。一方のルフィールはさっきから定規を駆使して全ての食材を均等に切っていただけだ。
　シャルルは自分の方がクリュウの役に立っていると自負している

のか、ルフィールの発言に怒る事もなく余裕の表情で台所を出て行った。すると、
「ボクも、ちゃんと役に立っていますよね？」
クイッとクリュウの服の裾を引っ張ると、ルフィールは不安げなイビルアイで彼を見上げた。先程までの超がつくほどの真面目っぷりはどこへやら。今は普通のか弱い女の子といった感じだ。
「ちゃんと役に立ってるから。そんな目しないでよ」
「し、しかし……」
そう言いながらルフィールはスッとクリュウに近寄ると、ピトッとクリュウにくっ付いた。少しだけ体重を掛けて寄り掛かって来るルフィールに、クリュウは小さく苦笑した。
「る、ルフィール。危ないよ」
「ちょっとだけですから」
スリスリとすり寄って甘えて来るルフィールに、クリュウは若干頬を赤らめながら小さく苦笑した。
この三日間でわかった事。それは――ルフィールには二つの顔があるという事だ。いつもはものすごく真面目で優等生っぽい感じの彼女だが、クリュウと二人っきりになるとこうして普通の女の子のような一面を見せる。典型的なツンデレであった。
「シャルルやクードが今のルフィールを見たらどう思うかな？」
「だ、ダメです。これは先輩だけのボクなんですから……」
恥ずかしそうに頬を赤らめながら言うルフィールに、クリュウも小さく苦笑しながらフライパンを返す。
いつもこれくらい素直だったらシャルルとも仲良くなれるのになぁと内心思いつつも、なかなかそうもいかないものだ。どうやらルフィールはこちらの顔を自分以外には見せたくないらしい。なぜなのか訊いたら、ルフィールは唇を尖らせながら「デリカシー。この言葉の意味がわかりますか？　先輩」と睨んで来たので、それ以降深い追求はしていない。
「それにしても、先輩は本当に料理がお上手ですね」
「うーん、まぁ両親共に僕が小さい頃に死んじゃったからね。それか

らは自分の事は自分でしないといけなかったし。幼なじみが料理人を目指してたから、散々叩き込まれてさ。それでね」
「ご両親、お亡くなりになっていたんですか？」
「うん。父さんはハンターだったんだけど、古龍と戦って殉職。母さんは主婦だったけど元々はハンターで、ある嵐の日に村の子供を森に探しに行って、そこでモンスターと戦って殉職したんだ」
「そう、ですか……」
　クリュウの言葉に、ルフィールはうつむいた。そんな彼女を見てクリュウはしまったと内心後悔した。暗い話をするつもりは全然なかったのだが、結果的にそうなってしまった。気まずい雰囲気が流れる。
「あ、あのさルフィール。別に僕は――」
「――でも、ご両親の思い出があるだけ、先輩は恵まれていると思います」
「え？」
　焼き終えた料理を皿に盛りながら、クリュウは彼女を見た。すると、ルフィールは悲しそうな表情でじっと自分を見詰めていた。イビルアイが、微かに濡れて光り輝いている。
「――ボクは、教会出身なんです」
「教会？」
　ルフィールの言葉に、クリュウは思わずフライパンを落としそうになった。それだけ、彼女の言葉は衝撃だったのだ。
　教会出身、それはつまり両親が死んでしまったり両親に見捨てられた孤児という事。そういう子供達を集めて世の中に旅立たせる役目を負っているのが、教会だ。
「じゃあ、ルフィールの両親は……」
「ボクは、赤ん坊の頃に教会に捨てられていたそうです。きっと、両親はボクのイビルアイを恐れたのでしょうね」
「そんな……」
　生んでくれた両親に捨てられる。そんな状況など考えた事もなかったし、想像もできないほどの衝撃であった。

どう声を掛けていいか困り果てるクリュウを見て、ルフィールは「そんなに困った顔しないでくださいよぉ」と小さく笑った。その笑顔からは過酷な出生に対する悲しみなどは一切感じられなかった。
「別に教会出身だからって不幸という訳じゃありません。むしろボクにとっては幸せでした。人里離れた森の中という環境のおかげで、ボクの目を怖がったり不快に思う人はいませんでした。教会にいた頃は、ボクにとっては一番幸せだった時間です。やがて独り立ちして教会を出ました。ハンターを目指してこの街に来てから、ボクは自分の瞳の異常さに気づいたんです」
「そっか……」
「このイビルアイでいじめられる度に、何度もここを出て教会へ戻ろうと考えました。しかし、結局決心は着かずにそのまま時は流れ、今はこうして先輩の隣にいる訳です。ボクは、初めて逃げ出さなくて良かったと思いました――だって、こうして先輩の傍にいられるんですから」
そう言って、ルフィールは幸せそうにはにかんだ。そんな彼女の笑顔を見て、クリュウは小さく笑みを浮かべた。
ルフィールは本当に強い子だ。普通、これだけ自分を傷つける悪条件が揃えば絶望しても仕方がないはず。しかし彼女は夢を追い続け、どんな苦境にも一人で立ち向かって来た。そして、今ここにいる事を本当に心から喜んでいる。
「そっか。そう言ってもらえると、誘った甲斐があったよ」
「先輩には感謝してもし切れません。ボクは先輩と出会えた事、心から神に感謝します」
「そこまで言われると、さすがに照れるな」
「照れる先輩というのもぜひに興味があります」
「こいつ」
ルフィールは楽しそうに笑うと、ギュッとクリュウの腕にしがみ付いた。その仕草はまるで大好きな兄に甘える妹の様。クリュウも何となく仲間であると同時に、彼女を妹のように感じていた。
クリュウがそっと頭を撫でると、ルフィールは嬉しそうに微笑み、

さらにギュッと彼の腕にしがみ付き――
「兄者ぁッ！　次は何を持って行くっすかぁ？」
台所にシャルルが入って来る直前、逸早くその気配を感じ取ったルフィールはクリュウを突然突き飛ばすと先程までのかわいらしい少女の顔をすぐさまいつものクールな顔に切り替えた。
「先輩。料理ができたならさっさと持って行って夕食にしましょう。ここにいつまでもいるのは時間の無駄です」
あまりに見事な切り替えっぷりについて行けないクリュウはポカンとしている。そんな彼を一瞥し、ルフィールはできあがった料理を持って台所を出て行った。そんな彼女の背中に、シャルルはあかんべーをする。
「何なんすかあいつは。料理を作ってくれてる兄者に失礼じゃないっすか」
「……あぁ、まぁいいけどね」
「良くないっすよッ！　ここはビシッと言うべきっすッ！」
「いいからいいから。ほら、これで最後だからさ。早く夕食にしちゃおうよ」
クリュウの言葉にシャルルはまだ納得していないようだったが、渋々といった具合にうなずいて残った料理を持った。すると、後ろから続くクリュウに振り返った。
「何？」
「兄者はルフィールに対して甘くないっすか？」
「そんな事ないって。ほら、さっさと行くぞ」
「う、うっす」
クリュウの返事に不満は残しつつも、素直に彼の指示に従うシャルル。意外にも根が真面目なシャルルに続きながら、クリュウはリビングに向かった。
リビングの中央にあるテーブルにはすでに料理が並んでいる。片手に料理を持ちながらもう片方の手で食器を並べているクード。見た目がかっこいいだけにこうして見るとウエイターに見えてしまう。ルフィールもそれを手伝っているようだが、やはりというか並べるに

関しても結構細かい。
「ほら、もういいからみんな座って」
　クリュウがそう言うと、皆素直に従って一斉に椅子に座った。クリュウもまた自分の席であるシャルルの隣に腰掛けた。クリュウの下段ベッドをルフィールに占領されたシャルルに対する交換条件として、彼女の席はクリュウの隣にされているのだ。ルフィールとしては至極納得できないものであったが、理屈自体は通っているので素直に従っていた。
　テーブルに並ぶどれもおいしそうな料理を見詰め、シャルルは目を輝かせる。
「さっすが先輩っすッ！　どれもすごくうまそうっすねッ！」
「見た目だけじゃなくて、クリュウの料理ならどれも美味ですよ」
「そんな事ないって。お世辞はいいから早く食べようよ」
「お世辞ではないんですけどね」
「またまた～」
「……とか言いながら、すごく嬉しそうですね先輩」
「そ、そうかな？」
　ジト目で睨んでくるルフィールの視線に小さく苦笑しながらスルーするクリュウ。そんな彼を見ながら、クードは楽しそうにニコニコと笑っている。
「な、何だよその笑顔は」
「いえいえ。お気になさらず」
「気にせずにいられるかッ！」
　クリュウのツッコミに対してもクードはその涼しい笑顔を崩さない。さらに本当に楽しそうな雰囲気を纏う彼を見ていると、だんだんと怒る気も失せてしまう。すごいスキルの持ち主だ。
「とにかく、さっさと食べてよ。後片付けや皿洗いもあるんだからさ」
　クリュウがそう言うと、三人も納得したようにうなずいた。そして、やっとの思いで全員で『いただきます』と食事が開始された。
「さっすが兄者っすッ！　どれもめっちゃおいしいっすよッ」
　そう言って本当においしそうに頬張る彼女の姿を見ていると、作っ

た甲斐があったと心から思える。だがやはりと言うか、シャルルは肉料理ばかりにフォークを突撃させている。だがこれも予想の範囲内だ。
「シャルル。ちゃんと野菜も食べなさい」
「うええ～？」
　クリュウがサラダを突き出すと、シャルルは明らかに嫌そうな顔をした。だが、ここで引く訳にはいかない。一応チームの料理担当を任されているからには、チームメイトの栄養バランスも考えなくてはいけない。
「シャルは別に野菜なんて食べなくても大丈夫っす」
「ダメだ」
「あ、あれっすよ。肉食動物は体内でビタミンなんちゃらとか野菜の栄養を作れるらしいっすよ？」
「君は人間でしょ？　人間はちゃんと野菜も肉もバランスよく食べないとダメなの」
「しゃ、シャルは大丈夫っすよ。今までだってかなり健康だったっすよ？」
「今までは運が良かっただけだ。文句を言わずに食べなさい」
「い、嫌っすぅッ！」
　フォークとナイフを構えて徹底抗戦しようとするシャルルと、サラダを有無を言わせずに彼女に突き出すクリュウ。それを見て楽しそうにニコニコと笑っているクード。そんな三人を見て、これが三人のいつもの日常なのだぁと納得するルフィール。きっと、三人は自分と出会う以前からこんな事を繰り返していたのだろう。
　――少しだけ、疎外感を感じてしまった。
　決して三人にはそんなつもりはないのだろうが、人間とは不思議な事に環境によってポジティブにもネガティブにも考え方が変わるもの。どうしても今までの経験から、自分はネガティブな方に考えてしまうらしい。
「とにかく、野菜は食べなさい。ルフィール、君からも何とか言ってくれ」

そんな風に考えていると、突然クリュウはルフィールに話題を振った。あまりにも突然の事に驚くルフィールだったが、すぐにそのかしこい頭をフル回転させて彼の期待に応えようとがんばってみた。
「野菜食べないと――死にますよ？」
『……』
――がんばり過ぎて、どうやらかなり発想が飛んでしまったらしい。この間にはちゃんと肉ばかり食べると体調を崩すし病気になりやすいなどちゃんとした過程があるのだが、かなりすっ飛ばしてしまった。
「し、死ぬっすかッ!?　た、食べるっすッ！　シャルはまだ死にたくないっすッ！」
だが、単純な性格のシャルルにはかなりの威力を発揮したらしく、シャルルは真っ青になって慌ててサラダを食べ始めた。そんな彼女の反応を見てクードは声を上げて楽しそうに笑っている。
「いやはや、これはおもしろいですねぇ」
「いや、まぁ結果はどうあれサラダを食べてくれているならいいんだけどね」
ものすごい勢いでおかわりを繰り返しながらサラダを食べまくるシャルルを見ながら、クリュウは小さく苦笑した。そして、決定的な一打を入れてくれたルフィールに振り返ると、優しげな笑みを浮かべる。
「ありがとう。何はともあれ助かったよ」
「べ、別に先輩の為じゃありませんからね。ボクはただうるさいのが嫌だっただけです」
「それでもいいよ」
クリュウは絶えず嬉しそうな笑みを浮かべ続ける。それを見て、ルフィールはツンとそっぽを向くが、その頬は赤らんだまま。照れ隠しの為に頬張ったオンプウオのムニエルは、口では言わないが本当においしかった。
「うぅ……気持ち悪いっす……吐きそうっす……」
「気持ち悪くなるまで食う奴があるかッ！　ルフィール水を頂戴ッ

！」

その後、一人でほぼ全員分のサラダを食べたシャルルはダウン。クードはもう必死に笑いを堪えているらしく目に涙を浮かべながら先程からうずくまって何度も床を叩いている。そんなチームメイト達を見て、ルフィールは冷静にこのチームの今後に不安を感じるのであった。

その夜、消灯時間を過ぎた部屋は一切の照明が消され、薄暗く部屋を照らすのは窓から入り込む月明かりだけ。すでにクリュウ達は全員各々のベッドに入っている。

月明かりに薄っすらと照らされる各々のベッドでは、それぞれが自身の寝やすい体勢で横になっている。

シャルルは掛け布団を蹴っ飛ばしてだらしない格好で爆睡中。クードは横向きで小さな寝息を立てている。ルフィールは布団を頭まで被っている。そして、クリュウは仰向けになりながら天井を見上げていた。

明日は早速狩猟学の授業が入っている。しかし、正直このメンバーで行うのには多少なりとも不安があった。

まずはシャルルとルフィールの関係だ。何かにつけて対立するこの二人が狩場でもケンカを勃発させたら話にならない。ある意味、このチームの要は二人の協調性かもしれない。

他にも学校で訓練の為に戦うであろう大部分の小型モンスターは機動力があり、大概群れで襲って来る。この場合機動力が劣りある程度の間合いを必要とするヘビィボウガンのクードと、一撃が重い分連続攻撃に向かないハンマーのシャルルは不利となる。その為、この場合基本的に動き回るのは機動力に優れた片手剣の自分と弓のルフィールとなる。

その他にもトラップなどを置いたりしてチームを常に支援し、確実にチームの作戦の中心にいるのは万能武器片手剣の自分だ。しかも自分は一応名義上とはいえチームのリーダーだ。この第７７小隊は自分を中心に動く事になる。

考え始めたらキリがない。どんどんどんどん頭の中では明日の授

業の事でいっぱいだ。明日は実際に狩場に出る訳ではないが、演習場には行く可能性がある。作戦を考えておいた方がいいのは当然だ。
そんな事を考えているとすっかり眠気なんて吹っ飛んでしまい、何もない天井を見上げながら様々な戦法を考えるという時間が永遠と続く。
月明かりに照らされながらクリュウがそんな事を考えていると、誰かがハシゴを上ってくるのを気配で感じた。
「誰？」
その声に、ひょこッと顔を出した少女はビクッと震えた。外されたメガネの奥にあったその特徴的な左右非対称色の瞳は、怯えたように震えている。
「る、ルフィール？」
「まだ、起きていらっしゃったのですね」
驚くクリュウが体を起こすと、ルフィールは「失礼します」と言ってベッドの中に入って来た。月明かりに薄っすらと照らされる彼女は昼間とはまた違った輝きを見せる。左の金眼と右の碧眼が、美しく輝く。その腕には彼女の枕がしっかりを握られていた。
「ど、どうしたの？　こんな夜中に」
クリュウが当然のようにそう問うと、ルフィールはなぜか小さく微笑んだ。そして、突然彼の横に自分の枕を置くと、ころんと寝転がった。
「る、ルフィール？」
「先輩……お隣、よろしいでしょうか？」
「えぇッ!?」
再び驚くクリュウの横で、ルフィールは掛け布団を自分にも引き寄せて完全にここで寝る気満々だ。クリュウはそんな彼女の行動に頬を赤らめて戸惑う。
「ちょっと待ってッ。君のベッドは下でしょ？　なのに何でここで寝る事になるのさ」
あまりにも突拍子もない展開にすっかり困惑しているクリュウ。そんな彼の問い掛けに、ルフィールは頬を赤らめながら布団を手繰り

寄せてその赤みを隠すように顔の半分を隠した。何ともかわいらしい行動だ。
「……一緒に、寝たいからです」
「一緒にって、どうしてまた……」
「ずっと、誰かと一緒に寝たかったから……」
「え？」
　ルフィールはそう言って、クリュウの寝巻の裾をちょこんと掴んだ。月明かりの下でも彼女のイビルアイはその異彩な輝きを失わずに光り輝く。
「教会では、みんなと一緒に寝ていました。しかし、こちらに来てからはこのイビルアイのせいで誰も近寄ってくれず、いつも一人で寝ていました。それが、すごく心細かった……。しかし、先輩は違った。ボクのイビルアイを含めてボクを認めてくれた。だから、そんなあなたなら、一緒に寝てもらえるかなぁって思って……」
　上目遣いでそう訴えてくるルフィール。怯えているのか、濡れた瞳が月の光を浴びてキラキラと輝き、その威力を何十倍にも高める。その断りづらい瞳の輝きに、クリュウは困ったように頬を掻いた。
「いや、気持ちはわからなくもないけど……。教会では女子同士だったんでしょ？」
「はい」
「じゃあ少しは疑問を持とうよ。僕は男子で君は女子。一緒に寝るのは色々と問題があるでしょ」
「問題とは？」
「いや、それはまぁ何というか……」
　どう答えるべきか迷うクリュウは困ったように頬を掻いて視線を右往左往させる。そんな彼を見て、ルフィールも彼の言いたい事に気づいたらしい。するとルフィールは気にした様子もなく微笑んだ。
「大丈夫です。先輩が女子に対して校内でも一、二を争うクラスに人畜無害な存在だという事は全女子の間での共通意識ですから。誰も先輩がそのような間違いを犯すなんて思っていませんよ」
「……いや、それは嬉しいけど。何だか釈然としない気が……」

「――それとも、先輩は一夜の間違いを犯すような方なのですか？」
そう言って、ルフィールはジト目になるとススス……とクリュウから遠ざかった。ある意味これは一番傷つく。
「そんな事しないって」
「では、何ら問題はないかと」
「いや、だからね……」
「往生際が悪いですよ先輩。ここは諦めて一緒に寝ましょう」
「それ、絶対君が言うセリフじゃないよね？」
と言いながらも、嬉しそうに布団に潜り込む彼女を見ていると拒否できなかった。彼女が今まで辛い思いをしていた事は出会ってから今まで色々と知った。だからこそ、彼女に対してなかなか強く言えないでいた。
「今日だけだからね」
そう言ってクリュウ自身も横になった。もちろん向かい合う事はなく彼女に背を向けてだが。すると、ルフィールは嬉しそうに無邪気な笑みを浮かべると、そんな彼の背中に抱きついた。驚くのはもちろんクリュウの方だ。
「ちょッ、ルフィール……ッ」
「――これで夜ももう、寂しくないです」
クリュウの完敗であった。
ここまで言われてしまえば、もう彼女を突き放すような事は言えない。元来の優し過ぎる性格が仇となってしまった訳だ。
仕方なくクリュウは抵抗せずにそのまま横になった。背中に彼女の温もりを感じながら、何とも言えない気恥ずかしさを覚える。
やがて、背中から彼女の小さな寝息を感じると、クリュウもやっとの思いで眠りについたのであった。

第９０話　チームの絆　様々な想いが交差する演習場

翌日、ドンドルマから歩いて一時間の所にあるドンドルマハンター養成訓練学校が保有する演習場の一つ、第６演習場には訓練防具であるハンターシリーズを纏った五〇人程度のハンター訓練生が集まっていた。

狩猟学は全校生徒約五〇〇人のうち基礎を学ぶ一年生を除く五学年連続教科で、学年関係なくチームを組み狩場や演習場でサバイバルを行う実技授業。そのあまりにも多い人数を七つのクラスに分けて全部で七つある演習場や実際の狩場などをそれぞれのクラスでローテーション分担し、週二回丸一日を使って授業を行う。

そして、集まったハンター達の中にはもちろんクリュウ達第７７小隊もいた。

皆が固まってガヤガヤとしている群集から少し離れた場所にクリュウ達は陣を取っていた。なぜわざわざ離れた場所にいるかというと、ルフィールの瞳はあまりにも有名な為にこうして距離を取っていないと何をされるかわからないからだ。実際、先程も絡まれたばかりだし、今だって好奇な視線を感じる。

「……すみません」

木の群集側に寄りかかっているクリュウに、反対側に腰掛けているルフィールが小さな声で謝った。

「気にしなくていいよ。元々クードやシャルルといった有名人がいるんだから、こういう視線は受けていたさ」

「……でも」

「君は僕達の大切なチームメイトだ。もっと胸を張りなよ」

そんな彼の優しい言葉にルフィールの頬が微かながらも嬉しそうに綻び、赤みを持った。こんな彼だから、自分はついて行く気になったのだ。

「女の子に胸の事を言うのは、いささか失礼ではないでしょうか？」

「ええッ!?　ち、違うってッ！　そういう意味じゃないよッ！」
ちょっとからかったつもりだったのに、クリュウは顔を真っ赤にして焦り出した。そんな彼を見て、ルフィールはおかしそうに笑った。こういうちょっと冗談が通じないくらいに素直な所も、大好きだ。
「いいですねぇ。青春というのはこうでなくては」
一人いつものようにニコニコと微笑んでいるクード。時折こちらを熱い視線で見詰めている女子達に笑顔で手を振ったりしている。そのたびに女子陣からは黄色い悲鳴が聞こえ、男子陣からは軽く殺意の込められた眼光で睨まれているのだが、その笑顔からは何一つ彼の真意を探る事はできない。
シャルルは先程から準備運動をしている。これから丸一日掛けて行われる演習に気合は十分のようだ。
しばらくして、生徒達の前に三人の教官が現れた。先頭にいるのはシルバーソルシリーズを纏った《教官王》とも称される暴力型教官、フリード・ビスマルク。その背後に控えているのは生徒達の装備しているハンターシリーズの強化型である剣士用のハンターSシリーズを纏った細メガネを掛けた知的そうな金髪赤眼の青年と、丸メガネを掛けた笑顔が似合うほんわかとした雰囲気を纏う白衣を纏った長い桃髪と鳶色の瞳を持つ女性。
クリュウ達も少しだけ生徒達との距離を詰めて教官達に近づいた。
フリードは背後に二人の教官を控えさせ、生徒達を見回してからその大柄な体から威圧感を全方位に噴き出しながら、声を上げた。
「あぁ、今日から貴様らFクラスを担当する事になったフリード・ビスマルクだッ。他の教官と違い、俺は容赦しないからな。全員命を懸ける覚悟をもって俺の授業を受けろッ！　以上だ」
担当教官がフリードとわかった瞬間、目で見てもわかるくらいに皆のテンションが激しく落ち込んだ。フリードの授業は厳しい事で有名だし、体罰万歳な人だ。そりゃ生徒からすればかなり辛いだろう。親しい関係であるクリュウでさえ苦笑するしかできなかった。
続いてフリードの背後に控えていた剣使用のハンターSシリーズを纏った青年が挨拶した。

「えぇ、皆さん初めまして。今回、フリード先生の助手を務めさせていただきます、助教官のクロード・エイブラムスです。まだまだ見習い教官ですが、これからよろしくお願いします」
そう言って、クロードは涼しげな笑顔を浮かべた。クード並みに美形な顔立ちをしている彼の笑顔に、途端に女子生徒達からは黄色い悲鳴が上がった。同時に男子陣営からは殺気が込められた視線が放たれる。
最後に清潔そうな白衣を着た、丸メガネの奥で無邪気に輝く清らかな瞳とかわいらしい顔立ちが特徴的な女性が前に出た。そして、生徒達を見回して屈託のない笑みを浮かべる。
「ハロハロ～。みんな元気か～い？　今回君達Ｆクラスの担当医務官になったシャニィ・ラングレイよ。よろしくね～」
キャハッとかわいさ全開の笑顔を炸裂させた瞬間、野郎達の野太い雄叫びが轟いた。同時に女子陣はそんな男達を冷たい目で見詰めている。男女共に結局は同じような反応であった。
今にもシャニィに押し寄せそうな野郎達を牽制するように、フリードが一つ咳払いした。
「あぁ、言っておくが。ラングレイ先生はこう見えて俺と同等の地位にいるハンターだ。なめて掛かると痛い目にあうぞ」
フリードの言葉に生徒達は驚いて一斉にシャニィを見詰める。するとシャニィは小さく笑みを浮かべて白衣を脱いだ。露になったのは桃色の防具。フルフル亜種の、それも最上級クラスに位置づけられる階級であるＧ級モンスターからしか剥ぎ取れない希少素材をふんだんに使ったＧ級防具、ガンナー用のフルフルＺシリーズだ。天使のようなかわいらしいデザインで、天使のようなシャニィにはピッタリ。男達のテンションもさらに跳ね上がる。
「これでも君達よりはずっと経験豊富なんだから。わからない事があったら何でも訊いてねぇ～」
笑顔でシャニィがそう言うと、早速男達が一斉に質問を開始。しかし授業とは全く関係ないもので、「彼氏はいるんですかッ!?」とか「結婚してますかッ!?」「好きな男性のタイプはッ!?」「好きな料理はッ!?」

「スリーサイズはッ!?」などなど。中にはもはや質問ではなく「結婚してくださいッ！」や「付き合ってくださいッ！」なども。その一人ひとりに、フリードは教育という名の鉄拳をぶち込んだ。
男子生徒の半分を殴り倒した所で、フリードは拳を摩りながら再び生徒達の前に立った。伸びている生徒を別の生徒に起こすよう指示し、全員の視線が自分に集中してからフリードは口を開いた。
「では、これより授業を開始するッ」
指示を受けて生徒達はそれぞれ一斉に演習場の中の森の中に入って行った。
クリュウ達第７７小隊もクリュウを先頭にルフィール、クード、シャルルの順で隊列を組んで森の中に入った。
今回の授業は森の中央にある小屋を各チームごとに目指すサバイバル訓練。普通に歩けば二時間程度の道なのだが、その途中には学校直属のアイルーやメラルー達がトラップを仕掛けている。これらのトラップを突破しながら小屋を目指さなければならない。しかもＦクラスに属するの半分のチームが小屋に到達した段階ですでに到着したチームを合格とし、到着しなかったチームを強制的に失格。失格チームは一日この演習場で一夜を過ごすという罰ゲーム付きの厳しいサバイバル訓練。フリードの話だと夜はアイルー達が腕によりをかけて肝試しを行うらしく、大部分の生徒が何が何でも合格を勝ち取る気でいた。
大部分から除外されるのは肝試しを楽しみにしていたりそういう類（たぐい）を恐れない生徒など、何かと屈強な男達が多い。だが、世の中には例外というのものがあって……
「肝試しですか。クリュウの怖がる姿、ぜひとも見てみたいですねぇ。楽しみです」
「何で罰ゲームを受ける事が前提なのさ？」
すっかり罰ゲームを楽しみにしているクードはいつも以上にニコニコと微笑んでいる。そんな彼の笑顔に、クリュウは疲れたようにため息を吐いた。
別にクリュウ自身がお化けとか幽霊とかが群を抜いて怖いという

訳ではない。一応怖いとは感じるので、人並み程度だ。だが、このチームには怖い話とかが全然ダメな子が……

「シャルは嫌っすよッ！　肝試しなんて絶対にゴメンっすッ！」

必死で叫ぶシャルルだが、その顔はすっかり青ざめてしまっている。

そう、世の中には怪談などの怖い話全般、幽霊やお化けなどを極端に怖がる人がいる。その一人がシャルルであった。

「シャルはマジで怖いものが苦手なんっすよッ！　だから、ランカスター先輩も真面目にやってほしいっすッ！」

もう冗談抜きで必死に頼むシャルルに対し、クードはニコニコと屈託のない笑みを崩さない。その笑顔を見るに、確実にこの状況を大いに楽しんでいる。

「いえいえ、僕だって授業ですし真面目にやりますよ。ただ、人はついミスを犯す事があります。そのついが今回は多くなるかもしれませんね」

「冗談はなしっすッ！」

「シャルルの怖がる姿というのも、なかなかおもしろそうじゃないですか」

「兄者やあああぁぁぁッ！」

シャルルは涙目になってクリュウに助けを求めるが、クリュウ自身もうこうなってしまったクードは止められないので、疲れたようにため息を吐くしかない。

一方、そんな無茶苦茶なチームメイトに対し一人冷静なルフィールは先程から双眼鏡を片手に辺りを見回している。

今回はアイルーが相手なので本物の武器の携帯は禁止されている。その為、それぞれ剣士は全員木製の訓練用片手剣。ガンナーはそれぞれライトボウガンなら猟筒、ヘビィボウガンならボーンシューター、弓ならハンターボウ1という初心者武器を携帯している。ただし、弾は訓練用のゴム弾、矢は鏃（やじり）をゴムにしたゴム矢。その他には剥ぎ取り及び採取などに使う携帯ナイフのみだ。

このサバイバル授業は必ず狩猟学の最初にやる訓練であり、チーム

の連携力の確認及び向上を目指す目的がある。それぞれが選択した本物の武器を使って狩場で本格的な訓練を行うのは次回以降となる。
　クリュウ達が騒いでいる間も、ルフィールは一人真剣に辺りを見回していた。すると、そんな彼女を見てシャルルがムッとしたような表情を浮かべた。
「お前、付き合い悪いっすよ」
「そのような作戦に関係のない会話になど興味ありません」
「士気を下げるような事を平気で言うんすね」
「士気を下げるようなくだらない事を無防備に話しているあなたに言われたくはありません」
「な、何をぉッ！」
「おい二人ともやめろってッ」
　涼しい顔で受け流すルフィールをこめかみに青筋を立てて睨み付けるシャルルとの間にクリュウが慌てて仲介に入る。恐れていた事態が起き始めていた。
「とにかく、今は作戦遂行中だ。ルフィールの言うとおり少しは真面目にやろうよ。シャルルだって罰ゲームは嫌なんでしょ？」
「絶対に嫌っすッ！」
「だったらルフィールの言うとおり、ちゃんとやろうよ」
「う、うっす……」
　クリュウの説得に一応は納得したシャルルであったが、ルフィールがそんな自分を見ている事に気づくと、キッと睨みつけてやった。しかしルフィールは相変わらず涼しい顔でその視線をスルー。その何事にも動じない彼女の態度にシャルルのイライラは募るばかり。
　背を向けるルフィールとそんな彼女を睨み付けるシャルル。犬猿の仲とも言う程に恐ろしく仲が悪い二人に、クリュウは頭を抱えながら疲れたようにため息を吐いた。前途多難過ぎる……
「大変ですね。がんばってくださいね」
「君もチームメイトなら少しは仲裁を手伝ってよぉッ！」
　そんな感じで正直不安要素満載ながらも前進し続ける一行。先頭を歩くクリュウは地図を片手にコンパスなどを使って方向を確認し

ながら歩く。その隣にはルフィールが並び、時々地図を覗き込んではクリュウに指示を仰ぐ。
　ルフィールは校内首席、クリュウもギリギリとはいえ成績上位優秀者。双方頭はいい方なので、自然と二人で作戦の立案などの話し合いを行う。クードはこういう事は全面的にクリュウに任せているので不参加だ。
　そして、メンバー唯一上位成績優秀者でないシャルルはする事もなく先程からつまらなさそうに石ころを蹴りながら殿（しんがり）を担当している。本当は二人の会話に入って行きたいのだが、二人の会話内容は難し過ぎて全然わからなかった。
「兄者のバァカ……」
　拗ねたように唇を尖らせるシャルル。一方、そんな後輩の不満に気づいていないクリュウは地図を片手に辺りを見回しながら歩いていた。すると、
「ふにゃあああぁぁぁッ!?」
　突如背後からシャルルの悲鳴が響いた。驚いて振り返ると、そこには先程までいたはずのシャルルの姿はなかった。代わりに、先程まではなかった穴がぽっかりと開いている。
「あぁ……」
「トラップ、ですね？」
「いやはや、相変わらずシャルルは期待を裏切らない活躍をしてくれますね」
　三人が穴を覗き込むと、二メートルくらい下の底部分でシャルルが倒れて目を回していた。どうやら大した怪我はしていなさそうだ。クリュウがほっと胸を撫で下ろした刹那、後頭部に何かが勢い良くぶつかった。
「いたぁッ！」
　反射的に頭を押さえた瞬間、クリュウの足元が崩れて彼自身も穴に落下してしまった。
「せ、先輩ッ!?」
「あはははは、さすがクリュウ。そう来ましたか」

驚くルルフィールと笑うクードであったが、すぐに一斉に振り返るとルフィールはハンターボウ1を構えて弦にゴム矢を番え、クードはゴム弾を装填したボーンシューターを構える。どちらも背後の草むらの中を正確に捉え、次の瞬間には一斉に撃ち放った。
「アニャァッ!?」
「い、痛いニァッ！」
「見つかったニャッ！　逃げるニャァッ！」
慌てて三匹のアイルーが草むらから飛び出して逃げて行った。どうやらこのトラップを作ったのは彼らだったらしい。辺りに他のアイルーはいないようで、二人は武器をしまうと再び穴の中を確認した。すると、
「クード、ロープ頂戴ッ」
一応念の為にシャルルを背負ったクリュウがクードに向かってロープを求めた。彼に背負われるシャルルは頬を赤らめて嬉しそうに微笑んでいた。すると、恨めしげに睨むルフィールと目が合った。その瞬間、シャルルはフッと勝ち誇った笑みを浮かべた。ルフィールのイビルアイが鋭利な刃物のように鋭く細まった。
「ランカスター先輩。さっさと二人にロープを投げてください」
これ以上二人を密着させておく事は断じて許せない。イライラしながらクードにロープを投げ下ろすよう求めた。だが、クードはそんな三人を見て楽しそうにニコニコと笑っている。
「先輩。ロープを投げてください」
「もう少しこのままにしませんか？　何だかおもしろそうですし」
「クードぉッ！」
「早く投げてくださいッ！」
二人に怒鳴られ、クードは「冗談ですよ」と笑いながらクリュウの方にロープを投げた。だが、その笑顔を見た二人は間違いなく彼が本気だったと感じた。
「しっかり掴まっててね」
「う、うっす……」
シャルルは言われたとおりクリュウの首に回した腕に力を入れて

しっかりと掴まった。すると、自然と二人はさらに密着する形となり、シャルルは恥ずかしそうに頬を赤らめつつもどこか嬉しそうに小さく笑みを浮かべた。
　クリュウはロープを掴んでシャルルを背負ったまま穴から脱出した。そこでシャルルを下ろすと、「怪我はない？」と問う。見た所擦り傷もないようだが、打撲などの可能性は十分にありえた。しかしシャルルは首をフルフルと横に振る。
「問題ないっすよ」
「そっか。これから先もこんなトラップがたくさんあるだろうから、気をつけるんだぞ」
「うっす」
　何はともあれ怪我がなくて本当に良かったと安心するクリュウ。ふと視線をずらすと、一人ムスッとした顔で木に寄り掛かっているルフィールを見つけた。
「どうしたのルフィール？」
「……別に、何でもありませんよ」
　そうは言うものの、プイッとそっぽを向かれてしまった。戸惑うクリュウだったが、すぐにシャルルが改めて感謝して来たので、彼は彼女との会話を始めた。そんな彼を見て、ルフィールは拗ねたような表情を浮かべると、再び彼から視線を逸らした。
　トラップを抜けた一行は再び前進を開始した。その後も様々なトラップが彼らを待ち受けていた。辺りにはトラップに引っ掛かって動けなくなるというほぼ失格状態のチームも少なくない数点在し、トラップの激しさを物語っていた。
　生徒達が目指す小屋は森の中にある崖の上に存在する。なので、大部分は迂回コースでゆっくりと坂を上っていくのだが、そこにはアイルー達のトラップが集中し、様々なチームを襲っている。
　クリュウとルフィールはこの迂回ルートの通行を止め、少々危険だが、崖を上る直線ルートを選んだ。この崖は一応上る事ができるらしいが、危険を伴うので生徒は皆回避している。クリュウ達はわざわざそこを選んだのだ。

そして一時間後、一行はようやく崖の下に到着したのであった。
聳える崖は確かに高いが、驚くほどの高さではない。特に崖の上にある村で育ったクリュウにとっては、この程度は子供の頃にやった木登りや崖登りと対して変わらなかった。
「まず僕が上って上にある木にロープを結んで下に投げるよ」
ここは崖登りの経験豊富なクリュウが先遣を担当した。シャルルやルフィールは心配したが、クリュウは「大丈夫だって」と言って笑顔で返した。
軽く準備体操をしてから、クリュウは崖に手を掛けて上り始めた。スルスルと慣れた様子で安全な足場や手を引っ掛けられる場所を選び、崖全体を右へ左へと移動を繰り返しながらも確実に上っていく。その手つきには下の三人も素直に感心した。
そして、わずか五分でクリュウは頂上まで到着した。そして、クリュウは自身の腰に下げたロープを手に取ると、近くにあった木の幹にしっかりと縛りつけ、もう一方のロープの端を崖下に向かって投げ捨てた。下では投げ捨てられたロープをクードがしっかりとキャッチした。
「さすがクリュウですね。田舎育ちは違います」
「お猿さんみたいっすね」
「もう少し品のある上り方はできないのでしょうか」
「……ねぇ、今何かものすごく失礼な事言わなかった？」
この距離だと三人の声は聞こえないはずだが、何となくバカにされている気がしてイラッとする。根拠はないが、何となくそんな気がしたのだ。
「では、クリュウも待っていますし、私達も行きましょうか」
「じゃあシャルが一番に行くっすッ！」
そう言ってシャルルはロープに手を伸ばす。だが、届く寸前でそれはルフィールに奪われた。当然、横取りされたシャルルは不満を感じて怒り出す。
「な、何するんすかッ！　返すっすッ！」
「――ランカスター先輩。一番をお願いします」

「私ですか？　私は殿でも構いませんが」
「女の子のお尻を見上げる趣味は、あまり感心しませんが」
ルフィールの言葉に、シャルルは慌ててお尻を手で庇った。女性用ハンターシリーズは結構際どいデニムを穿（は）いている。下から見るのはある意味男にとっては絶景かもしれない。
ルフィールとシャルルの非難するような視線に、クードは困ったような笑みを浮かべて両手を挙げた。
「私はそのようなつもりはありませんよ」
「でしたらお先をどうぞ」
「わかりました」
クードはニコニコと微笑みながら二人の視線を軽くスルーし、ロープを掴んだ。
「では、お先に失礼」
そう言ってクードは慣れた手つきでロープを上って行く。さすがに6年生にもなると崖を登る訓練も受けているだけあって動きに無駄がない。あっという間にクードは崖を登り切った。
「次はシャルの番っすねッ！」
クードが登り終わった事を確認し、今度こそと気合を入れ直すシャルル。そんなシャルルを一瞥し、ルフィールはクイッと少しずれたメガネを上げ直す。
シャルルはロープをグッと掴むと、持ち前のバカ力を利用して少々乱暴ながらも勢い良く崖を登っていく。そんな彼女を見上げながら、ルフィールは軽く準備体操しておく。自分にはクリュウやクードのような経験やシャルルのような怪力はない事は重々わかっていた。
シャルルが登り終えた事を確認し、ルフィールはロープを掴んだ。そこで大きく数回深呼吸して準備を整えると、グッと手に力を入れてロープを登り始めた。
崖に足を掛けながら、慎重に、ゆっくり登っていく。落下防止用にロープに引っ掛けたフックが自分の命を支える最後の希望。残りは自分の四肢で踏ん張るしかない。
慎重に、ゆっくりと崖を登っていくルフィール。そんな彼女を崖の

上で見下げながらシャルルは呆れたような声を上げた。
「あいつ、登るのにどんだけ時間掛かってるんすかぁ？」
「彼女は初心者です。私やクリュウのように専門の訓練を受けた訳じゃありませんからね。これくらいが妥当ですよ」
「でもシャルはもうとっくに登り切ってたっすよ？」
「後先も考えずに気合とバカ力で登っているあなたと比べられても」
「なぁッ!?　シャルをバカにするっすかッ!?」
「いえいえ。むしろ私はあなたを評価しています。戦闘においてあなたのような気合は何よりも重要なポイントです。本当に、あなたはおもしろい方ですね」
「……ほめてもらってる事、素直に喜べないのは気のせいっすか？」
「気のせいですよ」
　そんな二人の会話に小さく苦笑しながら、クリュウはルフィールの様子を見守り続けていた。ルフィールは額に汗を浮かべながらも必死になって一生懸命にロープを登っていた。
「ルフィール！　あともう少しだ、がんばれぇ！」
　クリュウの言葉にルフィールは小さく首肯すると、残る力を振り絞ってラストスパートを掛ける。すでに手足は限界に達しつつはあったが、それをシャルルのように無尽蔵にある訳じゃない気合で支えながら必死になって登り続ける。
　そして、手を伸ばせば頂上という時、スッと上に立つクリュウが手を伸ばして来た。ルフィールはもう自分に残る力も少ない事を冷静に見極め、彼の手を掴む道を選んだ。だが、いくら自分が選んだ道を正当化してみても、結局は彼の手を見て反射的に掴んでしまったのが事実だ。
　ルフィールの手をしっかりと握り締めたクリュウは一気に彼女を引き上げた。そして、ルフィールはやっとの思いで頂上まで登ったのであった。
　頂上に到着した途端、ルフィールはその場にぐったりと倒れ伏した。すでに体力は底を尽き、口からは荒い呼吸が繰り返される。そんな彼女に、クリュウはそっと自分の水筒を渡した。ルフィールはほと

んど反射的にそれを掴むと、のどを鳴らしながら飲み干してしまった。
　水分を補充し、ようやく一息ついたルフィール。すると、手に持つ彼の水筒が空になっている事に気づいて慌てた。
「あ、すみません。これ……」
「気にしないで大丈夫。どうせもうすぐ小屋には着くからさ」
　クリュウはそう言うと地図と現在位置を照らし合わせた。崖の上からの景色は良好であり、すぐ近くに川が流れているのを発見し、現在位置を確認する。そんな彼を見詰め、ルフィールは空になった彼の水筒を自分のベルトにぶら下げようとキャップを閉めようとする。その瞬間、ようやく自分の置かれている状況を理解した。
「か、間接……ッ!?」
「んあ？　どうしたっすか？」
　すぐ隣に立っていたシャルルが突然声を上げたルフィールを不思議そうに見詰める。一方、ルフィールはそんな彼女の視線に真っ赤になった顔で慌てて全力で首を横に振る。
「な、何でもありません……ッ」
「そうっすか？　まぁ、別にシャルには関係ない事っすからいいっすけどね」
　シャルルはすぐに興味を失ったらしくそれ以上の追及はしてこなかった。ルフィールはほっと胸を撫で下ろすと、赤らんだ頬を両手で隠すように押さえた。そして、誰も自分の方を見ていない事を確認すると、そっと右手の指先で自分の唇に触れた。
　チラリとクリュウの方を見ると、彼はクードと何やら話し合っていた。自然と、視線は彼の口元に向いてしまう。数秒の沈黙の後、凝視している事に気づいて慌てて視線を逸らした。しかし、それでも時々チラチラと彼の唇を見てしまう。
　クリュウはクードと残りのルートの選定を終えると、道具袋（ポーチ）から携帯食料を取り出してかじる。あくまで栄養補給と空腹を満たす程度の食料なので、味はあまりよろしくはない。まずくもないが、おいしくもない微妙なもの。まぁ、中にはそれがクセになると好

物としている変わり者もいない訳ではないが。
「あと少しで小屋に到着するはず。すでに僕達よりも先にゴールしているチームもあるはずだから、そろそろ出発しようか」
クリュウの言葉にシャルルは力強くうなずき、クードも笑みを崩さずに小さく首肯した。
頬がまだ赤いルフィールも静かにうなずいた。今は間接キスがどうだの言っている場合ではない。不合格になればこの演習場で一夜を過ごさなければならない。正直、シャルルほどではないが自分もそういうのは苦手である。そもそも、一般的に女の子が真っ暗な森の中で野宿をしたいなんて思うはずもなく、当然皆嫌がるものだ。
とにかく、今日は早く寮に帰って温かいベッドに潜り込みたかった。すると、途端に昨晩の事を思い出し、落ち着き始めていた頬はまたしても真っ赤に染まった。
昨夜はそのまま彼のベッドで一緒に寝たのだが、元来の早起きな習慣のおかげで誰よりも先に起床し、朝の準備をした。結果的に誰にも二人一緒で寝ていた事はバレていない。だが、ひとつ間違えればとんでもない状況に陥っていた危険性だって十分にあったと思うと、誰にもバレなくて本当に良かったとほっと胸を撫で下ろす。
「どうしました？」
背後からの突然の問い掛けに、ルフィールはビクッと体を激しく震わせた。バッと振り返ると、そこには笑顔が似合う腹の底が知れない先輩、クードが立っていた。
クードはルフィールの反応に困ったような笑みを浮かべながら頬を掻いた。
「すみません。驚かせるつもりはなかったのですが」
「……何の用ですか？」
「いえ、クリュウ達はすでに先に行ってしまいましたのに、ルフィールが動かないので」
見ると、クリュウとシャルルは二人並んでルフィールとクードから少し離れた場所にいた。どうやら先に歩き始めたものの自分がついて来ない事に首を傾げながら待っているらしい。

「す、すみません。少し考え事をしていたもので――行きましょう」
ルフィールはそう言って自らも彼を追って歩き出す。その背後から、クードもいつもの笑みを崩さずについて来る。
「今日は寒くなりそうですね」
「はい。ですから、野宿なんて絶対に避けたいです」
「こういう寒い日は、人肌が恋しくなりますか？」
「……ッ!?」
バッと振り返ると、クードはいつものようにニコニコと笑っている。だからこそ知れぬ彼の腹の底、真意。一体彼は今何を考えているのか。そして今の彼の言葉の意味――まさか……
「あなた、一体……」
「早く行きましょうか。クリュウが待っていますよ？」
「……」
結局、ルフィールはクードの真意を探る事はできなかった。
一行は一路小屋を目指して最後の道のりを順調に歩み続けるのであった。
クリュウ達第７７小隊はトップ通過とはいかなくとも、十分上位に入る事ができた。おかげで野宿する事は何とか回避できたので、シャルルは涙を見せながら喜び、ルフィールもこっそりとほっと胸を撫で下ろした。
日が暮れ、Ｆクラスはクロードとシャニィ率いる合格組とフリード率いる不合格組と分かれ、野宿する事となった不合格組に羨望と妬みの視線で見送られながら合格組は学校に戻った。
ちなみに、翌日残された不合格組の生徒達が戻って来ると、皆一様に青ざめた表情をしていた。元気だったのは化け物であるフリードくらいのもの。
一体あの夜何があったのかは誰も口を閉ざして明かそうとせず、結局は謎のまま。
生徒間ではその後、その話題については一切触れないという暗黙の了解が生まれたのはまた別のお話。
部屋に戻ったクリュウ達は早速クリュウが夕食の支度を始めるの

であった。皿出しや掃除はクードとシャルルが担当し、クリュウの助手はルフィールが担当するのがベストな配置らしい。
今回はルフィールも教材を見ながら簡単な料理を作る事になったのだが、相変わらず定規を片手に食材を切り、計量器で一グラム単位でこだわる真面目っぷりを改めて爆裂させるのであった。
夕食を食べ終え、ルフィール、シャルル、クリュウ、クロードと四人で決めた順番通り風呂に入った後、翌日の授業の予習や昨日までの授業の復習などを各自互いに教え合いながら勉強した。まぁ、その半分くらいは学科成績があまりよろしくないシャルル一人への勉強会となってしまったが。
そんなこんなで消灯時間を迎え、各自それぞれのベッドに潜り込むと、明かりを消して眠りについた。
友人の何人かが不合格組として演習場に残っている。今頃彼らは何をしているだろうかなどと考えながら眠気を待っていると、ギシ……と何かが軋（きし）む音が聞こえた。身を起こすと、月明かりに薄っすらと照らし出された二段ベッドの梯子をルフィールがそっと上って来た。
「あ、まだ起きていましたか」
「う、うん。僕は寝つきがあまりいい方ではないからね」
「そうなんですか」
そう言いながら、ルフィールは当然のようにクリュウのベッドの中に入って来た。そして、これまた当然のようにクリュウの隣で横になると、彼の掛け布団を少し引っ張って自分に被せる。
「明日も早いですよ。早く寝た方がいいです。では、おやすみなさい」
と言って、堂々とその場で就寝を開始するのであった。
彼女のあまりにも堂々としたその行動に一瞬ポカンとしていたクリュウだったが、すぐに慌てて彼女を揺り起こす。
「ちょ、ちょっと待ってッ。一緒に寝るのは一回だけだって言ったでしょッ？」
小声に絞りつつも焦ったように問い掛けるクリュウに、ルフィールは首だけで振り返った。その表情はきょとんとしている。

「何を言っているのですか？　これからは毎日一緒に寝るんですよ？」
「えぇッ!?」
「声が大きいですッ」
慌ててルフィールは小声で怒鳴るとクリュウの口を塞ぎ、自らの口元に人差し指を立てた。そっと振り返ると、どうやらシャルルとクードは起きていないらしい。それを確認し、ルフィールとクリュウは同時にほっと胸を撫で下ろした。どうやらギリギリセーフらしい。
安堵の息を漏らすクリュウであったが、何やら鋭い視線を感じて視線を落とすと、ルフィールがムッとしたような表情でこちらを睨み上げていた。
「あなたはバカですか？」
「うっ……」
返す言葉もないクリュウに、ルフィールは呆れたように大きなため息を吐いた。
「まったく、本当に先輩はどこか抜けている方ですね」
「返す言葉もありません……」
「返す必要などありません」
きっぱりとクリュウの言葉を封じ、ルフィールは再び「まったく……」とため息交じりでつぶやいた。
「とにかく、もう夜も遅いですし早く寝ましょう」
「いや、だから一緒に寝るのを許可したのは昨日だけであって」
「しつこいですよ。ボクは絶対にここで寝ますからね」
「ちょっとそれは……」
「往生際が悪いです。そもそも一度寝たんでしたら二度も三度も同じ事でしょう？」
「それ、絶対女子の君が言うセリフじゃないよね？」
苦笑いするクリュウの言葉に、ルフィールはジト目になって「今の言葉に他意はありませんからね？」と念押ししておく。ある意味、そんな風に思われる方がダメージが辛い。
「とにかく、早く自分のベッドに戻って寝ようよ。明日は早いんだか

ら」
　そう言ってクリュウはルフィールを追い出そうとするが、ルフィールはそんな彼の手をスッと避け、「おやすみなさい」と早々に挨拶を済ませて毛布に潜った。
「だから、ダメだって言ってるでしょッ」
　運悪く、段々と眠気が押し寄せて来ていい具合の眠さを感じているクリュウは少し語気を強めた声で言いながら、彼女が隠れた毛布をめくり上げた。
「……一人は、嫌なんです」
　そう言って、ルフィールは寂しげに肩を落とした。いつもは透き通るように妖艶に美しいイビルアイが、今はどこか濁ったような色をしてクリュウを見詰めていた。
　先程までの無邪気な感じが消え、悲しみ一色に染まったルフィールにクリュウは何と声を掛ければいいかわからず、呆然とその場に固まる。そんな彼の手を、ルフィールはギュッと握り締めた。
「……やっと、一人じゃなくなったのに。また一人になるのは、嫌なんです」
「ルフィール……」
「夜の暗闇の中、一人っきりで眠るのは、とても怖いんです……」
　涙目になりながら、ギュッとルフィールは握った彼の手をさらに強く握り締めた。自分の手を握り締める彼女の手は、小刻みに震えていた。
　ルフィールは濡れた瞳で訴えるようにクリュウを見詰める。
「……一緒に、寝させてください」
　必死に訴えて来るルフィールに、クリュウは困ったように頬を掻いた。ルフィールとは違った意味で真面目過ぎるクリュウにとって、ルフィールの訴え方はある意味最も彼が苦手とする分野であった。
　しばし悩んだ末、結局折れたのはクリュウの方であった。
「わかった。一緒に寝てあげるからもう泣くなって」
「泣いていません」
「君が泣いてるから僕は折れたんだよ？」

「……じゃあ泣いています」
「何だそりゃ」
苦笑しながら、クリュウは小さくため息を吐いた。自覚はあるが、自分は昔からこういう風に瞳で訴えられるのにはものすごく弱い。言葉よりも純粋な瞳の輝きの方が格段に威力があるのだとしても、自分の瞳耐性の低さにはほとほと呆れてしまう。
一方のルフィールはクリュウを見事に陥落させて嬉しそうに笑っている。そんな無邪気に本当に心の底から嬉しそうに微笑むルフィールを見て、クリュウは小さく笑みを浮かべた。内心、多少の後悔はありつつも「ま、いっか」と諦めが大勢を占めていた。
「とにかく、僕はもう眠いから寝るからね。ルフィールもさっさと寝るように」
「はいッ」
嬉しそうに返事するルフィールに「おやすみ」と言って、クリュウは横になった。もちろん、彼女にはちゃんと背を向けている。真正面から女の子と寝顔を向き合えるほど、彼は大人ではないのだ。
背を向けて横になるクリュウを見詰め、ルフィールは小さく笑みを浮かべると心の中で彼の優しさに感謝した。そして彼の横に寝転がると、そっと彼の背に身を寄せた。
少し冷たい毛布の中、彼の温かさが寂しさという名の氷を溶かすように、とてもとても温かくて心地良かった。
「……ありがとう」
その小さな小さな言葉を最後に、ルフィールはゆっくりと目を閉じた。
ルフィールが眠りについた気配を感じ、クリュウはそっと身を起こした。
隣にはすやすやと気持ち良さそうに眠っているルフィールがいる。斜めから差し込む月明かりは、そんな彼女を薄っすらと煌かせていた。
こうして目を瞑ると、どこにでもいる普通の女の子にしか見えない。だが、その閉じられたまぶたの奥にある瞳は、人とは違った姿を

している。その、たった左右の瞳の色が違うというだけで、彼女は今までずっと辛い思いをし続けて来たのだ。
せめて、寝ている時だけは普通の女の子でいてもらいたい。
「……ほんと、僕って甘いよなぁ」
自覚はありつつも、あまり後悔はしていなかった。
ただ、こうして幸せそうに眠る彼女の寝顔が見れただけで、今の自分は満足であった。
クリュウは小さく「おやすみ」とつぶやくと、自らも横になって瞳を閉じ、静かに眠りについた。

第91話　シグマＶＳアリア　前途多難な初狩場

第一回の狩猟学から数日後、昼休みという事で校内の芝生が敷かれた一角にクリュウ、ルフィール、シャルルの三人が集まっていた。
三人は芝生に直接座り込んでぽかぽかと心地良い日差しの下でゆっくりと昼食を食べていた。
「兄者の弁当は本当にうまいっすよ」
「そうですね。珍しくあなたと意見が合いますね」
「そう言ってもらえるといつも作っている甲斐があるよ」
三人が食べているのはどれもクリュウの手作り弁当だ。昼食も各自生徒が自炊する事となっているので、食堂で済ましたり、こうして弁当で済ます者。時間がある場合は部屋で本格的に料理を作る者もいるが、大部分が弁当組だ。
クリュウはルフィールとシャルルの弁当を毎朝作って渡していた。最初の頃は各自それぞれで食べていたのだが、ルフィールが弁当を食べる場所に困っていると相談して来たので、いつも自分が利用しているここを教え、一緒に食べる事になった。すると、今度はいつも女子達の中心でキャーキャー騒ぎながら昼飯を食べていたシャルルまでもがこちらへ来てしまい、現在はこの三人で昼食を食べるのが通例になっている。
ちなみに、クードは弁当なしで今頃は女子に囲まれながら昼食を取っているだろう。彼は女子に人気があるので部屋以外ではなかなかチーム全員が揃う事はないのだ。ただ、なぜ彼に対して弁当がないかというと、以前5年生の頃に作ってあげたら女子に見せるという暴挙を決行。その後の二人はできている疑惑に拍車を掛けてしまった為に、以降彼に対してだけは絶対に作らないと決めていた。
ここは別にクリュウ達が独占している訳ではないが、あまり人がいない場所だ。少し離れた場所では女子が楽しげに会話を楽しみながら昼食を食べている。まぁ、ここなら自由に自分達の陣地を決められるので、例えルフィールを不快に思っていても距離を取れるので絡まれる心配もほとんどない。おかげでルフィールも安心して食事がで

きている。
「シャルは兄者の弁当があれば午後も全力でやれるっすッ！」
「全力で爆睡するの？」
「え？　あ、いや、そのぉ……」
「授業は睡眠時間じゃないんだからね。ちゃんと勉強しないと。別段君は格別に頭がいいって訳じゃないんだから」
「う、うっす……」
「むしろその対極に位置すると言っても過言ではありません」
「うぅ、言い返せないっす……」
「――それと、野菜はちゃんと食べるように」
「うぅ……」
　クリュウの言葉に明らかに嫌そうな顔をするシャルル。その手に握られている弁当はメインである手作りハンバーグやご飯はきれいに消えているのに付け合せのサラダは一切減っていなかった。
「しゃ、シャルは野菜が嫌いなんすよ」
「それはわかってるけど、バランス良く食べないと体壊しちゃうよ」
「嫌いなものは嫌いなんっすッ！」
　徹底抗戦して断固野菜を食べないと宣言するシャルル。相変わらず彼女の野菜嫌いは治ってはおらず、クリュウは疲れたようにため息を吐いた。
　まぁ、彼女が野菜を全く食べていないかと訊かれれば、答えはノーだ。なぜなら彼女がすでに食べ終えたハンバーグには細かく砕いた様々な野菜を混ぜてあったのだ。彼女の野菜嫌いは今に始まった事じゃない。クリュウだって対抗策はちゃんと用意していたのだ。
　だが、根本的にやはり野菜は食べないといけない。なので、こうしてサラダを付けて彼女の野菜嫌いを克服させようとしているのだが、なかなかうまくいかないものだ。
　すると、そんな彼の努力をいつも傍で見ていたルフィールのイビルアイが鋭くなった。そして、いまだに徹底抗戦する構えのシャルルに向かって、一切の躊躇なく伝家の宝刀を抜いた。
「シャルル先輩。野菜を食べないと――死にますよ」

「……」
直後、シャルルが泣きながらサラダを頬張ったのは言うまでもない。
その日の夕方、授業を終えたクリュウ達はとある一室にいた。そこには見慣れたメンバーが集まっていた。それもそのはず。彼らは皆クリュウ達と同じフリードを担任としたFクラスのクラスメイトだ。
突然呼び出された生徒達は皆困惑しているようだ。クリュウもルフィールやシャルルと顔を合わせるも、すぐに首を傾げる始末。ただクードだけはニコニコといつもの笑みを浮かべいていた。何か知っているのか、それとも何も知らないのか。本当に真意を探れない奴だ。
すると、そんな困惑する生徒達の前に一人の人物が立った。美しい紫色の髪をポニーテールに纏めた絶世の美少女。その強気を通り越して刃物のように鋭い紫色の瞳は見る者全てを威圧する。その威圧感と美貌が、彼女の美しさをより引き立てている。
圧倒的な存在感を纏う彼女は手に持っていたメガホンを口元に構えた。その瞬間、彼女の腕に付けられた腕章が姿を現した。
――《委員長》
「野郎ども、よく集まってくれた。まずはそれに感謝するぜ。サンキューな。だが、こっからの話は別問題だ。耳の穴かっぽじってよぉく聞いておけッ！　聞いてなかったり反抗する者は即刻死刑だぁッ！」
いきなり死刑だと無茶苦茶な事をぶっ放した少女。というか、外見の美しさに明らかに反した口調。彼女こそ先日Fクラス委員長になった生徒、シグマ・デアフリンガー。見ての通り、外見は絶世の美少女なのだが性格は荒々しく豪快な男顔負けなほどに男勝りな少女。口調や性格に多少の問題はあるが、男女問わず統括力を発揮するFクラスの頼れるリーダーだ。
「明日の狩猟学、絶対にBクラスにだけは負けんじゃねぇぞッ！」
ハンドマイクなしでも十分大きな声でシグマが怒鳴ると、生徒達は一斉に耳を塞いだ。この教室は一般的な広さなので別に怒鳴る必要

は全然ないのだが、彼女の話し方はいつも怒鳴りっぱなしだ。
「いいかテメェらッ！　Ｂクラスだけには絶対負けんなッ！　もし負けたりでもしたら、全員死刑だぁッ！」
　こめかみに青筋を立てながら怒鳴るシグマに生徒達の一部はバレないようにため息を吐いた。皆、一様にまたかという感じの表情を浮かべている。一方で困惑したような表情を浮かべている生徒もいる。
　クリュウ達もクリュウはため息し、クードも困ったような笑みを浮かべるのに対し、ルフィールとシャルルは首を傾げていた。
「兄者、何でＢクラスだけには負けちゃダメなんすか？」
「そ、それは……」
「オーホッホッホッホッホッ！」
　突如響き渡った優雅な高笑い。その瞬間、シグマが鋭い眼光で部屋のドアを睨みつけた。同時に、クリュウ達は一斉に疲れたようにため息を吐いた。
「オーホッホッホッホッホッ！　ここがあなた方の拠点ですの？　ずいぶんと品がない事ですの」
　そう言いながら現れたのはクリーム色の長い髪に紫色のバラの花を飾り付けた青色のカチューシャを付けた碧眼の美少女。顔立ちは高貴なもので、纏う雰囲気も他の生徒とは明らかに違う。
　そんな高笑いし続ける少女の声にイライラを募らせるシグマ。
「テメェ、何しに来やがったアリアッ！」
「オーッホッホッホッホッホッ！　あなたの貧弱なクラスの面子を確認しに来ただけですわ」
「んだとゴラァッ！」
　ブチギレるシグマとそんな彼女の怒りを涼しくスルーする少女。見守る生徒達も戸惑う者と呆れる者と二極化している。
　クリュウ達は、呆れる側の生徒であった。
　睨み合う二人の少女を見詰め、生徒達は再びため息を吐いた。
　高貴な雰囲気を纏う少女の名はアリア・ヴィクトリア。この前Ｂクラスの委員長になった、シグマとは犬猿の仲と言われている生徒だ。
　シグマ・デアフリンガーとアリア・ヴィクトリア。この二人の対立

関係はこの学校ではかなり有名なもので、接点の少ない低学年の生徒を除いてほとんどがこの対立関係を知っている。なぜなら、この二人は事あるごとに対立し、クラスを巻き込んで対立するのだ。
　二人とも性格に多少の問題はありつつも、リーダーシップは高いのでこれまでも何度も委員長になり、クラスを巻き込んで対立する事もしばしば。二つのクラスが狩場で激突した事もあり、フリードにすさまじく怒鳴られた事もある。
「いやはや、これはおもしろくなってきましたね」
「……今更だけどさ、君の《おもしろい》って厄介事や面倒事の事を示すよね？」
「うぅ、まさかシャルがそんな対立クラスの一方になるなんて……」
「運が悪かった。そう諦めるしかなさそうですね」
　クリュウ達がそんな感じでため息を吐いている間も、シグマとアリアの対立は続いている。どちらも負けるつもりは全くないようで、牽制し合っていた。
「まぁ、前回は決着がつきませんでしたが、今回こそはこの私が勝たせていただきますわ」
「んだとッ！　勝つのは俺達に決まってんだろうがッ！」
「フンッ。せいぜい今のうちに夢でも見ていなさいな。では、私はこれで――って、あら？」
　宣戦布告を終えて帰ろうとしたアリアは、生徒達の中に見知った顔を発見した。すると、先程までの余裕の笑みは一変し、真剣なものに変わった。そして、その生徒に向かって足早に走り寄ると、
「な、何であなたがこちら側にいるんですのッ!?」
「いや、まぁ、僕が決めた訳じゃないんだけど……」
　そう言ってアリアに詰め寄られながら困ったような笑みを浮かべたのはクリュウ。一瞬にして周りの視線を一身に集める形となった。ルフィールとシャルルも驚いたような表情を浮かべている。
「私のクラスにいないと思ったら、まさかシグマのクラスになっていたなんて……ッ」
「ま、まぁそういう事で。今回は君の手助けはできないよ」

「ふ、フンッ。思い上がりも甚（はなは）だしいですわ。あなた程度の人材など、簡単に補充ができますもの」
「そりゃまた手厳しいね」
「……で、でも。もしもあなたがどうしても私の下で働きたいと仰るのであれば、おじい様に頼んで私のクラスに編入してさしあげてもよろしくてよ？　あなたが有用な人材だという事は事実ですもの」
　アリアの祖父は政界において絶大な権力を有する政治家である。同時に、経営で成功した経営者でもある。権力と資金の両方を兼ね備えた彼女の祖父は、周りからは《総統》と呼ばれ、王政府に対しても絶大な影響力を有する大物政治家。そして同時に、孫娘のアリアをものすごくかわいがっている祖父バカでもある。
「もう一度、私の下で働きません？」
「断る」
　そう言って二人の間に入って来てクリュウの前に立ち塞がったシグマ。アリアはクリュウとの会話中に無断で侵入して来た無礼なシグマを睨みつける。
「あなたに用はありませんの」
「元テメェの腹心だとしても、今は俺のクラスメイトだ。勝手な行動すんじゃねぇ」
「あなたのクラスにいては彼が不幸になってしまいますわ。私のクラスでしたら、有意義な生活ができますもの」
「フン。ここはお嬢様のお遊び場じゃねぇんだぞ」
「何ですってッ!?」
　先程までどんなにシグマに暴言を言われてもクールにスルーしていたアリア。だが今回は突然感情を荒らげると、シグマをギロリと睨みつけた。だがそんなアリアの本気の態度にシグマも対抗して睨み返す。二人の間に電撃が迸っているように見えるのは気のせいではないのかもしれない。
「お、落ち着いて二人ともッ！」
　慌ててクリュウが二人の間に仲裁に入る。だがそんな彼を二人が一斉に攻撃する。

「あなたは黙っていなさいッ！」
「黙ってろボケッ！」
「……前から思ってたけど、君達って実は気が合うんじゃないの？」
　そう言いながら、クリュウはまだ睨み合う二人の間に壁になるように立ちながら、アリアに背を向けてシグマと対峙した。突然こちらを向いて来たクリュウに、シグマは怪訝そうな顔になる。
「何だ？」
「今のはシグマが悪いよ」
「な、何だとゴラッ!?」
「アリアは確かにお嬢様だしわがままだしハンターとはかけ離れた存在かもしれない」
「……あなたは、どっちの味方ですの？」
「――でも、お遊びなんかでハンターを目指している訳じゃないよ。彼女だって、真剣なんだから」
　そう言っていつになく真剣な表情でシグマと対峙するクリュウ。元彼女のクラスメイトだからこそわかる、彼女の本気。確かに遠巻きに見ていれば無茶苦茶でお遊びでハンターを目指しているように見えるかもしれない。でも、近くで彼女の本気を見れば、誰だって彼女が本気でハンターを目指している事はわかる。
　クリュウの他にも元アリアのクラスメイトが数人Ｆクラスには存在し、彼らもまたクリュウと同じようにアリアの味方になった。アリアはそんなクリュウ達を見て、少し涙ぐんでいるようにも見える。
　そんなクリュウ達の思わぬ反撃に、シグマはバツの悪そうな顔をして頭を掻くと、小さくため息を吐いた。
「バカにすんじゃねぇ。テメェら以上に俺はこいつとは同郷で付き合いは長いんだよ。こいつがそういう奴だって事は嫌ってくらいわかってるよ――悪かったな」
　そう言って、恥ずかしそうに赤らんだ頬を掻きながらシグマは素直に謝った。口調や態度がいくら乱暴だとしても、彼女は誰よりも真っ直ぐな志を持った生徒。自分が間違っているとわかると態度こそは素直ではないが、素直に謝る純粋な性格をしている。

そんな彼女だからこそ、周りの生徒達も彼女について行くのだ。
不貞腐れたような表情を浮かべながら謝るシグマに、アリアは小さく笑みを浮かべた。しかし、すぐにその笑顔はいつもの自信に満ちた笑みに変わり――
「シグマの謝る姿、これはなかなかの絶景ですわね」
「あぁんッ!?」
「……アリア、僕がせっかく穏便にしたのをいきなり壊すの？」
「あなたに恩を売られては、私のプライドが許しませんもの」
「いや、恩とかそういう問題じゃないんだけど……」
「そんな事より、私はあなたの気持ちが知りたいのですの――もう一度、私の下で働いてくれません？」
アリアのそんな申し出に対し、クリュウは小さく苦笑を浮かべた。そんな彼の反応に、アリアも彼の答えを悟った。
「……君の気持ちは嬉しいけど、先生が決めたチーム分けをそう簡単に崩す訳にはいかないよ。それに、僕はもうこのＦクラスにチームメイトもできたし」
そう言って、クリュウはルフィール達に振り返った。そんな彼の視線に対して、ルフィールは小さく微笑み、シャルルは嬉しそうに微笑んだ。クードは相変わらずいつもと変わらぬ笑みを浮かべているが、心なしかその笑顔はいつもより柔和に見える。
アリアはそんな彼の仲間達を見詰め、小さくため息を吐いた。クリュウが向き直ると、アリアはどこかすっきりしたような笑みを浮かべていた。
「……あなたにはあなたの道がある。そういう事ですわね」
「アリア様ぁッ！」
再びドアが開いて現れたのは二人の少女。どうやらＢクラスの生徒らしい。少女達の姿を見たアリアは「見つかってしまいましたか」と小さく苦笑した。
「アリア様ッ！　勝手に出て行かれては困りますッ！」
「早く戻って来てくださいッ！　アリア様がいないとホームルームも纏まりませんッ！」

「……まったく、本当にあなた達は私がいないとダメダメですのね」
そう呆れながらも、どこか嬉しそうな笑みを浮かべているアリア。そんな彼女を見て、クリュウもまた小さく笑みを浮かべた。
アリアは二人の少女を率い、ドアに向かった。その途中、カツと踵（かかと）を揃えて振り返った。その視線の先には、小さく手を振って見送るクリュウがいる。そんな彼に向かって、アリアは不敵な笑みを浮かべた。
「例え元クラスメイトだとしても、容赦しませんわよッ！　覚悟しておきなさいッ！」
「了解」
「そしてシグマッ！　今度こそあなたを私に跪（ひざまず）かせて差し上げますわッ！」
「ケッ、やれるもんならやってみらがれ。返り討ちにしてやるッ」
シグマの答えにアリアはフッと口元を綻ばせ、部屋を出て行った。それを見送るＦクラスの一同。そんな彼らに向かって、シグマは堂々とその場に立ちながら口を開く。
「いいかテメエら。あれが俺達Ｆクラスが倒すべきＢクラスの大将、アリア・ヴィクトリアだ。あいつのクラスには、あいつには絶対負けんじゃねぇぞッ！　わかったなッ！」
シグマの掛け声に対し、Ｆクラスの生徒達は一斉に声を上げた。アリアの登場は、彼女の口の悪さも災いして逆にＦクラスを統一させる結果となった。もしかしたら、アリアの狙いはそこにあったのかもしれない。正々堂々、万全のシグマ達を全力で潰す。それが彼女のプライドなのかもしれない。
アリアらしいと思いながら、クリュウが小さく笑っていると、シグマと目が合った。すると、シグマは小さく口元に笑みを浮かべた。
「安心しろ。俺は元アリアのクラスの奴だからってクラスから省いたりするような小せぇ女じゃねぇ。だが、一度俺のクラスになったからには、容赦せずにこき使うからな。覚悟しておけ」
「了解」
クリュウの返事に納得したようにうなずくと、シグマは拳を天に突

き上げた。
「打倒Ｂクラスッ！　そして校内成績首席クラスッ！　俺達Ｆクラスがこの学校の頂点に立つッ！　テメェらッ！　これから半年間俺について来いゴラァッ！」
　刹那、爆音のような生徒達の大声が響き渡った――Ｆクラスが一つになった瞬間だ。
「ヴィクトリア先輩とは、どういうご関係なのですか？」
　Ｆクラスの会議が終わって教室から出たクリュウに対して、ルフィールは早速質問してみた。後ろにいるシャルルも同じ質問がしかったのか、ルフィールの問いに対し彼女と同じくクリュウを見詰めている。そんな二人に、クリュウは特に隠す様子もなく返した。
「アリアとはただの元クラスメイトってだけだよ。前回のクラスでもアリアは委員長で、僕はそのアリアの下で前回のシグマのクラスと戦った。まぁ、言い方をかっこ良くすれば戦友みたいなもんさ」
「もちろん、その時は私も一緒でしたが」
「別にランカスター先輩には訊いてないっすよ」
「おや、これは失礼」
　ニコニコと笑うクードを一瞥し、ルフィールはクリュウを見詰めた。彼の横顔には、一切の迷いは感じられなかった。
「迷いはないのですか？」
「迷い？」
「元クラスメイトと争う事に、先輩は何の迷いも感じていないのですか？」
　ルフィールの問いに対し、クリュウはしっかりとうなずいて答えた。
「向こうが全力で来るって言うなら、こっちも全力で迎え撃つだけさ。真剣に挑んでくる相手に対して、それが最大の礼儀だと僕は思う」
　クリュウの真っ直ぐな返答に対し、ルフィールは小さく笑みを浮かべると「そうですか。先輩らしいですね」と小さく口元に笑みを浮かべた。そんな彼女の隣ではシャルルも「さっすが兄者っすッ！　かっこ良すぎっすよッ！」とキラキラした瞳で彼を見詰めている。

「ほら、さっさと帰るぞ。明日は狩猟学があるんだからね。いい点を取って少しでもクラスの点を上げないと」
「無論、ボクは負ける気は全くありませんから」
「シャルも絶対に負けないっすッ！　売られたケンカは買い占めて全勝っすよッ！」
「これはまた、おもしろくなってきましたね」
　それぞれの想いが交差しながら、四人は部屋に戻った。
　翌日、ドンドルマから少し離れた森の中の小さな広場に、クリュウ達は集まっていた。
　ここはギルドが指定した狩場とは違った、非公式な狩場である。世の中には決してギルドが範囲を決めた中だけにモンスターが住む訳ではない。特にギルドのやり方を良しとしない村や集落も存在する為、ギルドが狩場を決めるにも範囲全てを指定できる訳ではない。
　ギルドが狩場と認定しているのは、世界の一部でしかない。例を挙げれば、イージス村から最も近いセレス密林もつい数年前まではギルドの指定狩場に認定されていなかった非公式な狩場だった場所だ。それはイージス村がまだ発展途上の村であった事や辺境の地だったというのがその理由だ。
　クリュウの父は、ギルド指定の狩場ではない為にギルドの支援も受ける事はできず、村のわずかな報酬や支給物資だけでセレス密林の危機を救っていたのだ。ギルド認定の狩場とは、それだけ危険度が高いという事もあり、村からの報酬の他にギルドからの支援や追加報酬などがある。救護アイルーや拠点（ベースキャンプ）の設置など、村単独では難しいがギルドからの支援があれば設置も可能となり、本格的な狩場となる。
　逆に、村からはギルドにモンスターや古龍の情報などを伝え、有事の際はギルドナイトの派遣を安易にさせるなどの利点も多い。他にもイージス村のように地域の拠点になっている村や街は特にギルドからすれば配下に入れておきたいものだ。
　古龍討伐など、大規模な作戦を行う場合の中継地点、補給基地、司令部創設など。何もギルドが一方的に村を擁護しているのではなく、

村もまたギルドを支える。これがギルドとその系列に入る村や街の関係だ。
そして、クリュウ達が今いるこの場所も昔はギルドに反発する街が独自にハンターを雇っては狩りを行うという非公式な狩場であった。
しかしギルドが決めている生体均衡論、つまりギルドの役目はモンスターの絶滅ではなく、モンスターと人間の共存という大儀に反してモンスターの乱獲を行ったその街はその後市長が事故で亡くなり、市議会の与野党が逆転して親ギルド派の議員が街の権力を握った。その陰ではギルドナイトが市長を暗殺したとも噂されているが、真相は不明だ。
その後、この狩場はギルドからの認定は受けてはいないが、暗黙の了解でギルドも手出しをしない非公式な狩場となった。そして今ではハンター養成学校が訓練狩場としてこの狩場を買収したのだ。街としてもこの狩場には大型モンスターはほとんど出没しない為に運営しても赤字で問題となっていた。無駄な依頼料を払わなくても生徒が狩りをしてくれるので街の安全は保たれる上に逆にお金が入るという事で、街も快く明け渡してくれた。
とまぁ、そんな経緯がある狩場ではあるが、クリュウ達生徒にとっては貴重な実戦ができる場所。そんな歴史などは必要ないし興味もない。彼らが考えるのは、この狩場でもっともっと強くなる。その一点に尽きる。
広場に集まった生徒は約一〇〇人程度。基本的に狩猟学は一クラスずつ行うのだが、クラス同士で対決させる場合はこのように二クラス以上の合同授業を行う場合がある。
今回、合同授業を行う事になったクラスは、シグマ率いるFクラスとアリア率いるBクラス――絶望的なまでに犬猿の仲ともいえるクラス同士が初戦でいきなり激突する事となったのだ。
昨日のアリアの宣戦布告、もしかしたら彼女は今日自分達がFクラスと戦う事を知っていたのかもしれない。だからこその宣戦布告。正々堂々主義の彼女らしい。
FクラスとBクラス。二つのクラスの間にはきちんと国境が引か

れていた。お互いに二メートルほど離れて牽制し合っている。すでにシグマとアリアの個人同士の対立は、ＦクラスとＢクラスのクラス同士の対立になっているらしい。
「オーホッホッホッホッホッ！　初戦の相手が、まさかあなた達Ｆクラスだったなんて。意外でしたわ」
「フン。何をカマトトぶってんだ。昨日宣戦布告して来たって事は、テメェは知ってたんだろうが」
「推測の域で勝手に解釈して結論を出すなんて、愚かな事です事ッ！」
「あぁんッ!?　いつまでもカマトトぶってんじゃねぇぞゴラァッ！　ＢクラスのＢはバカのＢだってか？」
「それを言うのでしたら、ＦクラスのＦとは成績発表での失格扱いという意味ではなくて？」
　すでに激しく睨み合う両クラスの総大将、Ｆクラス委員長のシグマとＢクラス委員長のアリア。二人が激しく対立すればするほど、両クラスの睨み合うも激しさを増す。
　そんな中、騒がしい群集から少し離れた場所から状況を見守っていたクリュウは小さくため息を吐いた。
「まったく、いつの間にか本当にクラス同士で対立してるし……」
「良くも悪くも、さすがは委員長といった所でしょうか」
「感心する所じゃないんだけど」
「これは失敬」
　ニコニコと笑いながら言うクードは、どうやらこの状況を大いに楽しんでいるらしい。彼の大好物はおもしろい事。今の状況は彼にとってはまさに至福の時と言っても過言ではないのかもしれない。
去年もクラス同士が対立しているのを楽しそうに見ていたので、クリュウは確信していた。
「こんな調子で大丈夫なんすか？　せっかく今期の狩場デビューっすのに、ドタバタで終わるの嫌っすよ？」
「互いをライバルと思い、切磋琢磨する事は良い事とボクは考えます。しかし、これではただのいがみ合いでしかないかと」
　シャルルとルフィールもまた珍しく意見を合わせて今日の授業を

心配していた。せっかくの今期初の狩場だというのに、本当にこれで大丈夫なのか、正直不安になってきた。
「まぁ、新しく2年生とかも入ってるから。いきなりランポスとかを狩るような授業じゃないはずだけど、一応狩場って事には変わりないからね。周りがちゃんと見えてればいいんだけど……」
ルフィールという皆からあまり良い目で見られていない対象を抱えるクリュウ達第７７小隊はこうしていつもクラスの輪からは外れている。ルフィールを辛い目に遭わせない為の配慮だったのだが、どうやら今回はそれがうまくシグマ達の異常な場の流れに流されずに済んでいるらしい。特に、このチームには恐ろしく単純で場の流れにものすごく流されやすいバカがいるのだから気をつけないといけない。
「……何か、今ものすごくムカつく事を言われた気がするっす」
「え？　僕には何にも聞こえなかったけど」
頭が単純な分、運動神経や勘などは獣並みのシャルル。しかしハンターの世界ではこういうタイプの方が成長しやすい。自然というのは、計算や予測だけで成り立っているような柔（やわ）なものではない。そういう状況ではシャルルのような野生の勘が優れているタイプの方が有利なのだ。
だが、いくら勘が鋭くても知識なくしてはどうにもならない時もある。野生の勘も大事だが、状況を冷静に見極めて膨大な知識や情報と照合して現在の最も効率的な方法を導き出す、ルフィールのような頭脳型もまた幾分か晩成タイプではあるが成長するものだ。
逆に言えばクリュウのように冷静に見えて意外と実は熱血系だったり、仲間を優先するあまり自分を犠牲にするような考えを持つタイプは短命型だ。以前彼自身もフリードにそう指摘されて苦笑いしていた。
そして、クードは……これは分類不能だ。
同じハンターというカテゴリの中にも、これだけ様々なタイプのハンターが存在する。チームというのはそれらの長所をより高め、短所を補う事により強大な力を持つ。

狩猟学はただ単にハンターとしての能力や技能を高めるだけではなく、こうしたチームでの信頼関係の構築や社交性を強化する事もまた目的の一つだ。
そんな友情を強化するとも言っていい狩猟学の場において、二クラスの大多数はそれを真っ向からぶっ壊すような対立を続けているのだ。ため息のひとつも零れる。
ＦクラスＶＳＢクラスの睨み合いが勃発している最中、生徒群から少し離れた場所にある小屋からフリード、クロード、シャニィともう一人の教官が出て来た。あの小屋はこの狩場での一時的な教官室という訳だ。
教官達が現れた事で一応両クラスの睨み合いは終了した。クリュウ達もＦクラスの最後尾について整列する。
とりあえず整列している生徒達の前にフリード達が並ぶ。
「ヴィレール先生、お願いします」
フリードにそう言われて前に出たのはＦクラスは初対面となるＢクラス担任のヴィレール・レパルス。見た目は健康そうな小麦色の肌と茶髪の、生徒達と同じくらいの年齢に見える青年。しかしその鼻と耳は大きく尖り、普通の人間のそれとは違う。それもそのはず、彼は竜人族なのだ。身に付けているのは真っ赤に燃える炎のような印象のレウスシリーズ。背負っているのは同じくリオレウスの素材を使って作られたランス、プロミレンスランス。
竜人族の中にもハンターになる者はもちろんいる。ヴィレールはその一人だ。
人間と違い竜人族は桁外れに長寿であり、成長及び老化も遅い。その為見た目は青年だが、これでもフリードよりも年上らしく、あのフリードが敬語を使う所を見ると相当な実力者らしい。
ヴィレールはコホンと小さく咳払いすると、Ｆクラスの生徒達に向かってあいさつした。
「初めましてＦクラスの生徒諸君。私がＢクラス担任のヴィレール・レパルスだ。さて、今回の狩猟学は時間制限ありの採取クエストとする。納品する物はこんがり肉三個、バクレツアロワナ五匹、ロイヤル

カブト三匹、黄金石のかけら一個、特産キノコ五個だ。量は多いしエリアを多く移動しなければならないが、これからの授業を考えてまずは狩場というものに慣れてもらう。特にこれは2年生の為というのが大きい。上級生は新入生のフォローを忘れずに。それと、少数ではあるがランポスも出現する可能性がある。戦うか逃げるかは個人の判断に任せるが、無理はしないように。そして、これは毎回言う事で上級生は聞き飽きているかもしれないが聞いてくれ」

そこでヴィレールは一回話を切ると、自分を見詰める生徒達を見回し、釘を刺すように言った。

「狩場での争いはご法度。見つけ次第理由関係なく争っていた者全員を強制失格。クラス点数の減点対象及び反省書を書いてもらう。まぁ、ケンカしなければ何の問題もない。いいか？　クラスの足を引っ張るようなマネさえしなければ、自由にやって構わない。以上だ」

そう忠告してヴィレールは下がり、今度はフリードが前に出た。ヴィレールと違ってフリードは周りを威圧するように生徒達を見回す。その背中には多くのモンスターを葬ってきた金火竜と銀火竜の素材を使った壮烈無比な威力を誇るタツジンブレイドが背負われている。その剣からもまた、威圧感が吹き荒れていた。

「俺とヴィレール先生、クロード、そしてシャニィの四人がそれぞれ個別に狩場を歩き回って貴様らを監視しているからな。変なマネしたら容赦なく首根っこを捕まえてこの拠点（ベースキャンプ）まで連れ帰って説教するからな。覚悟しておけ」

そんな覚悟したくはないのだが、しなければ確実に連行されて地獄を見る事になるだろう。フリードは冗談でこんな事を言う男ではない。本気だからこそ厄介なのだ。

「各小隊の採取率を点数に換算し、クラス点数に加算する。知っているとは思うが、期末試験が終了した段階で最も点数の高いクラス、つまりは優勝したクラスには生徒全員にボーナス単位が与えられる。今後の進級や卒業にも関わる問題だ。心して掛かるように。各小隊長はこの後チーム全員分の支給品を我々まで取りに来るように。今

回は日帰りとするので各小隊ごとのテントは張らないものとする。以上だ」
　フリードから支給品を受け取ったクリュウはすぐにルフィール達の所へ戻った。
「これみんなの支給品。分配しようか」
　そう言ってクリュウは草の上に腰掛けて手に持った袋を地面に置き、中身を取り出し始めた。ルフィール達もそれを囲むようにしゃがんで袋から取り出される支給品を確認する。
　袋の中に入っていたのは地図四枚、携帯砥石四個、応急薬十二個、携帯食料八個。その他袋に入らなかったピッケル、虫あみ、釣竿がそれぞれ二本。携帯肉焼きセット一個と必要最低限なものだけが入っていた。
「釣りミミズはなしですか。実際に自分で採取しろという事ですね」
「そうみたいだね。釣りミミズなら虫あみなしでも採取はできるだろうし」
「では釣りミミズ採集は女子に任せるという事で。防具の中にミミズが入ったりすればおもしろいのですが」
　ニコニコと笑いながら言うクードの発言に、ルフィールとシャルルは頬を赤らめて無言で身を守った。クリュウはクードを見詰めながら小さくため息を吐く。
「……今更だけどさ、クードって結構Ｓだよね？」
「その方がおもしろいですからね」
「……はぁ――とりあえず役目を決めよう。力仕事のピッケルは僕とクード。虫あみと釣りはルフィールとシャルルに任せてもいいかな？」
「わかったっすッ！」
　シャルルはそう言って了承してくれた。どうやら気合が入ったらしく腕をブンブンと振り回してやる気満々だ。しかし、ルフィールは表情を曇らせていた。
「ルフィール？　この組み合わせに問題でもあるの？」
「いえ、的確な配置だと思います。通常の場合でしたら、これで何の問

題もありません」
「通常の場合って……、今の状況に問題があるって事？」
「はい。致命的な問題が」
「それは一体……」
　皆が見詰める中、ルフィールは何やら言いづらそうに口を開けたり開いたりを繰り返す。心なしか、その頬は薄っすらとではあるが赤みを帯びていた。そして、覚悟を決めたようにうなずき口を開く。
「――お恥ずかしながら、ボクは虫が大の苦手なのです」
『……』
　ルフィールの爆弾発言の後、数秒間の沈黙が発生した。その沈黙の間、ルフィールは恥ずかしそうに頬を赤め、気まずそうに視線をそらした。
　そんな不気味なくらいに気まずい沈黙は、突如として起きたのどを鳴らすような笑い声によって打破された。
「いやはや、なかなかおもしろい話を聞きました」
「……やっぱりあなたは最低です」
　軽く涙目になりながらルフィールはキッと誰もが恐れるイビルアイでクードを睨みつけた。しかしクードは気にした様子もなくおかしそうに笑っている。こんな無茶苦茶な性格をしているのに、女子からは人気があるのだから美形というのは恐ろしい。
「じゃ、じゃあ役割を変えようか。本当はこの役割で男子チームと女子チームに分けるつもりだったんだけど。そういう事じゃ仕方ないからね」
　完璧超人のようなルフィールの意外な弱点に苦笑しながら、クリュウはそう切り出した。
「クードとシャルルは釣り及び虫担当。僕とルフィールはピッケルとこんがり肉を担当する。この分け方でいいかな？」
「ボクは構いません」
「力仕事は苦手なので、助かります」
「……僕の方が小柄なんだけど」
「シャルは反対っすッ！」

そう叫んだのはさっきまで気合十分であったシャルルであった。何となく彼女の反対を予想はしていたものの、クリュウは困ったように頬を掻いた。
「反対って……。これが今できるベストな組み合わせだと思うんだけど」
「シャルは兄者と組みたいっすッ！　こんな新参者に兄者の隣は渡さないっすよッ！」
そう怒鳴り、シャルルはキッとルフィールを睨みつけた。しかしルフィールはそんな彼女の視線などそよ風程度にしか感じていないのか、クールな表情で無視した。そのすました態度がよりシャルルの怒りを激増させる。
「べ、別に僕と組むのはシャルルだけって訳じゃないし。虫を平気で触れるシャルルが一番の適役だと思うけど」
「……兄者、シャルも一応はか弱い女の子っすよ？」
「か弱い、ですか。しかしシャルルはずいぶんとその対極にいるような女の子だと思いますが？」
「先輩は黙っててほしいっすッ！　話がややこしくなるっすッ！」
シャルルに怒鳴られるも、クードは楽しそうな笑みを崩さない。どうやらこの状況を大いに楽しんでいるらしい。彼らしいには彼らしいのだが、今は厄介極まりない。
「でもさ、虫が触れないルフィールはロイヤルカブトなんて無理だろうし」
「シャルル先輩。ロイヤルカブトに触れますか？」
「ガキの頃はよく近所の男友達と一緒に山に入って取りまくってたから平気っす」
「虫がダメなら釣りミミズもダメだろうし」
「シャルル先輩。釣りミミズは触れますか？」
「ガキの頃はよく近所の男友達と一緒に川に行って魚を釣りまくってたから平気っす」
「――シャルル。今君ものすごい勢いでルフィールに追い詰められてるって事自覚している？」

クリュウがツッコミを入れるとようやくシャルルも状況を理解したらしく顔を真っ赤にしてルフィールに怒る。しかしルフィールは平然とその怒りの炎を回避している。
「……そういえば、そもそもこの二人をコンビにさせようとしていた時点で作戦失敗だったね」
いい組み合わせかと思ったが、この二人の犬猿の仲という部分をすっかり忘れていた。
しかし、ルフィールを取ればシャルルが怒り、おそらくシャルルを取ればルフィールは拗ねるだろう。というか、そもそも――
「ランカスター先輩と二人っきりなんて、絶対に嫌っすッ！」
自分以外でクードと組ませたら、この面子だと仲違いしかねない。ますます致命的な人選ミスをしてしまったと後悔しまくるクリュウであった。
「全員集合しろッ！」
フリードの声に、クリュウ達も話を切り上げて集まった。すでに他の生徒達の大部分は出発の準備を整えている。クリュウ達はまだ準備段階なので、急がなければならない。
生徒達を見回し、フリードは高らかに声を張った。
「これより狩猟学を開始するッ！　健闘を祈ってるぞ！」
こうして、クリュウ達の前途多難すぎて軽く頭痛がしてくるような最初の狩猟学が始まったのであった。

第９２話　様々な思惑渦巻く狩場物語

狩猟学が開始され、各班は一斉に狩場へ出撃した。
両クラスの先頭を走るのは互いのクラスの委員長、シグマとアリアだ。
「オーホッホッホッホッホッ！　先陣を切るのはこの私ですわッ！　総員私に続いて全速前進ッ！」
「野郎ども俺について来いッ！　全軍突撃だゴラァッ！」
シグマとアリアを先頭に両クラスの生徒達が砂煙を激しく巻き起こしながら全速力で狩場に向かって突っ込むのを、呆然と見詰めるフリード達。
「……えっと」
「あぁ、クロードは新人だから知らんだろうが。シグマとアリアは同郷出身で、互いを根っからライバル視してるんだ。結果、あいつらは毎期毎期クラスを巻き込んで対立する。例によって今回も、という訳か」
「そうなんですか。ですが、ライバルは互いを切磋琢磨させるのには貴重な存在ですね」
「……いや、あいつらの場合はいがみ合いみたいなもんだからな」
「ケンカしちゃメッよ～」
フリード達が呆れながらも皆を追ってゆっくりと歩みを進めた頃、別ルートからゆっくりと狩場に入る小隊があった――クリュウ達、第７７小隊だ。
「どうやら他の生徒達は全員両クラスの委員長を追って正面突破したらしいですね」
「突撃バカ、という事でしょうか」
「バカ言うな」
「正直、シャルはちょっとあの輪の中に入ってみたかったっす」
そんなのん気な会話をしながら、クリュウ達はゆっくりと自分達のペースで最初のエリアに辿り着いた。そこは鬱蒼と木々が生い茂る森の中に突如として現れる広場。かなりの広さがあり、これなら飛竜

だって容易に離着陸ができるだろう。
そんな事を考えながら広場に入ると、突如として木々の間から青い影が現れた。
鮮やかな青の体に黒い縞模様、鋭い歯が並ぶ大きな口に広範囲を見渡せるギョロリとした目。狩場で最もポピュラーな肉食モンスター、ランポスだ。
一匹が現れると続けてさらに数匹が現れ、数にして五匹のランポスが現れた。
クリュウはすぐに先頭に出ると腰に下げたルーキーナイフの柄を握り締めた。
「五匹か。面倒だけど、迂回するほどの数でもないね」
「そのようですね」
続いてクードは二つ折りにして背負っていたボーンシューターを一瞬で連結組み立てし、通常弾ＬＶ１を装填して構えた。
「ランポスなんて、シャルの一撃でぶっ飛ばしてやるっすッ！」
そう言ってシャルルは気合満々といった感じで腰にぶら下げていたサイクロプスハンマーを両手でガッチリと掴んで構えた。自分の体くらい大きなハンマーを、シャルルは易々と持ち上げて気合十分。このチームの主力は、最強の攻撃力を誇る彼女だ。
ルフィールは無言で背負っていたハンターボウ１を一瞬で連結組み立てし、腰に下げた矢筒から数本矢を取り出して弦に番えると、一気にそれを引き絞って発射可能の態勢となった。
ランポスもどうやらこちらに気づいたようで威嚇の声を上げ、二匹が突撃して来た。
「クードとルフィールは援護をッ！　シャルル行くぞッ！」
「うっすッ！」
クリュウはルーキーナイフを収納したまま突撃。その後をシャルルがサイクロプスハンマーを持ち上げ、力を溜めながら続く。さらにその後をルフィールが弓を構えたまま走り出した。
ルフィールは走りながら冷静に彼我の距離を目測し、限界まで引き絞った弦を一気に解放。番えられていた矢が一斉に飛び出した。矢

の数は三本。それが全て突撃する左のランポスに命中し、ランポスは仰け反った。さらにそこへクードが放った通常弾ＬＶ１数発が右のランポスに炸裂し、そちらのランポスも仰け反る。その隙を突いてクリュウは二匹のランポスの中央を突破。そして、

「隙ありっすッ！」

クリュウに続いてシャルルも中央を突破――ではなく、二匹のランポス中央で溜めに溜めた力を一気に解放。ただ振り下ろすのではなく、足を軸にして体ごと回転させてその勢いでもって連続でハンマーを叩きつける。

重量がある分連続攻撃に不向きなハンマー。一撃を入れるたびにその重さに体が持っていかれそうになり、隙が多くなる。熟練した使い手でもその決定的な隙はなかなか埋まらない。そこでハンマー使いは気合を溜めてこうして体ごと回転させてその弱点をカバーする技を持つのだ。

強烈無比なハンマーの連続攻撃に、ランポスは左右に吹っ飛ばされて地面に倒れた。シャルルは回り過ぎた為か少々ふらついたものの、すぐさま再びハンマーを構えてクリュウを追った。

シャルルがランポス二匹を吹き飛ばしている間に前へ出たルフィールは再び矢を三本番えてクリュウを追い掛ける。

一方、自らチームの先陣を切ったクリュウは残る三匹に突撃。まず先頭のランポスに向かってルーキーナイフを引き抜いて強襲。振り下ろした一撃は見事にランポスの側面を斬り裂いた。

「ギャアッ!?」

逆る真紅を振り払いながら、続いて二連続で斬りつけ、さらに自らの体を回転させて回転斬りを炸裂。ランポスは悲鳴を上げて吹き飛んだ。しかしまだ息の根を止める事はできなかったのか、倒れたランポスはすぐに起き上がる。だがすぐにクリュウがさらに追撃を仕掛けて吹き飛ばし、今度こそ倒した。

だがそこへ右方向から残るランポスが突撃して来た。クリュウはとっさに盾でその一撃を防ぐ。しかし今度は反対側からさらにもう一匹のランポスが襲い掛かってきた――だが、突如横から飛来した矢

が襲い掛かろうとしたランポスを射抜いた。三本の矢が体に突き刺さったランポスは悲鳴を上げて仰け反る。その間にクリュウは後ろへバックステップしながら距離を取った。そこへルフィールが合流する。
「先輩の悪い癖ですね。無茶はしないでください」
「ごめんごめん」
ルフィールはすぐに矢を番えて体勢を立て直したランポスに向かって再び矢を放った。しかしランポスは後ろへジャンプし、矢は空しく地面に突き刺さった。だが、それはルフィールの予想通りであった。
「うおっしゃあああぁぁぁッ！」
後ろへジャンプしたランポスに向かって、待ち構えていたシャルルが咆哮した。ランポスが振り返った瞬間、力強く持ち上げられたハンマーがその重量と彼女の腕力を合わせた強大な一撃と共に落下。ランポスは一撃で叩き潰された。
残る一匹は仲間をやられて慌てて逃げ出すが、クードの執拗な攻撃に翻弄されて動けず、シャルルの回転打撃を受けて吹き飛び沈黙した。
「シャルは無敵っすッ！」
見事に四匹のランポスを粉砕したシャルルは高らかに勝利宣言した。さすが全武器最強の攻撃力を誇るハンマー。その一撃一撃は他の武器を圧倒するものであった。
「さすがはシャルルですね。バカと天才は紙一重と言いますが、彼女を見ているとそのことわざを信じてしまいますね」
「素直にすごいって言えないの君は？」
「シャルル先輩がバカという点は抗えない事実だと思いますが。成績がそれを見事に物語っています」
「ま、まぁ学科成績は結構悲惨ってのは事実だけどさ……」
学科は確かにシャルルはかなり悲惨な事にはなっているが、実技ではトップクラスの実力を持っている。体力バカというのはこの世界ではアドバンテージなのだ。

「この程度のモンスターなんて、シャルの敵じゃないっすよ！」
「猪突猛進タイプの手綱をちゃんと引いてあげるのも、苦労するものですね」
「同感です」
そう。確かにシャルルの実力は他を圧倒するものだ。しかし彼女は根本的な性格の部分が単純な為に猪突猛進。つまり直線的な攻撃が多いのが弱点だ。その為、左右からの突然の攻撃に対しては弱いので、大型モンスター戦には適していてもこういう小型複数モンスター戦では弱点となってしまう。
そんな一直線なシャルルを援護し、ランポスの動きを牽制しつつシャルルに誘導していたルフィールとクードの実力もまたすばらしいものであった。ガンナーの役目は支援と撹乱が主だったもので、主力になる事はほとんどない。その為、二人はもっぱら支援に徹してシャルルの強大な一撃を確実にぶち込む為に的確な攻撃を行っている。
そして、クリュウもまた主力兼撹乱という地位を確保している。これは攻撃力は高くはないが機動性に優れている片手剣だからこそ、柔軟な対応が要求されるからだ。
ランスやガンランスの戦法の中にはその大きな盾を利用して自らを囮とし、他のメンバーによる集中攻撃の間モンスターの攻撃全てを引き受けるというものが存在する。
クリュウ達第７７小隊はガンナーが二人なので、こうした囮役がいる方がいい。しかしランスやガンランス使いはメンバーにはいないので、小さいが一応盾を持つ片手剣のクリュウがその任に当たっている。
クリュウが立てた自分達の最も適した戦い方。それはクリュウ自らが囮となって先陣を切って敵に突撃。モンスターの注意を自らに集中させ、その間にさらにガンナー二人の援護射撃を加勢に加えて敵を抑止。そこへシャルルのハンマーが一撃必殺の大打撃を与える。
この連携攻撃こそ、他のチームに比べて総攻撃力が劣るクリュウ達が対抗できる戦法であった。他にもまだ多くの戦法があるかもしれ

ないが、今はこれがベストな選択だろう。
　もちろん、尖兵兼囮役のクリュウにはそれ相応のリスクが伴われる。しかし、二人の援護射撃がある限りそのリスクは低くなる。チームでちゃんと連携さえしていれば、クリュウが危険に陥る事はない。
　これがクリュウがリーダーとして考えた第７７小隊の戦い方だ。チームワークさえちゃんとしていれば十分強力なチームとなるだろう――チームワークがちゃんとしていれば、だが。
「シャルと兄者の連携は天下一品っすねッ！」
「突撃バカのシャルル先輩が何を愚かな事を口走っているんですか。あれは連携とは全くもって言えません」
「これがシャルと兄者の絆っす。そういう型（かた）に縛られた考え方しかできないルフィールは本当に残念な奴っすね」
「基本的な型がすでに破綻しているあなただけには言われたくはありませんね」
「……やるっすかこのクソガキ」
「ボクは全くもって構いませんが。単細胞先輩」
　二人は周りを圧倒するような威圧感を吹き荒らさせながら睨み合う。口調こそ静かなものだが、すでに二人の中では壮絶な攻防戦が繰り広げられているのだろう。それが実際に現実において起きるかは、時間の問題だ。
「狩場でのケンカはご法度と言われているのに。それを自ら冒そうというのですから、この二人は本当に見ていておもしろいですね」
　クードは相変わらず楽しそうにニコニコと微笑みながら事の成り行きを見守っている。確実に二人のケンカを止める気などはさらさらないらしい。
　――正直な話、チームワークはおそらく最悪と言ってもいいかもしれない。
　クリュウは狩場という非日常的な場所でおいても相変わらず日常的な展開を繰り返す三人を見て疲れたように深いため息を吐いた。もはや前途多難し過ぎて悶死しそうだ……
　その後何とかクリュウががんばって、倒したランポスの剥ぎ取りを

行う事には成功したが、この際に剥ぎ取り方でも二人はまたケンカを始める始末。
　睨み合うシャルルとルフィール、それを見て愉快そうに笑っているクード、そして頭を抱えてがっくりとうな垂れるクリュウ。そんな感じでエリアの中心で停止している彼らに近づく影があった。
「あら、これはFクラスのかわいそうな皆さん。ごきげんよう」
　反対側の道からエリアに入って来たのはアリア率いる小隊であった。その先頭を歩くアリアはクリュウ達の姿を確認するといつものように余裕たっぷりな笑みを浮かべる。
「アリア。他のみんなは？」
「すでに計画通りに混雑しない程度で各採取場所に散らせていますわ。シグマは相変わらずバカの一つ覚えのように適当に解散させておりますが」
「シグマは細かい作戦とか考えないからね」
　かつてアリアの所にいた時もシグマは作戦など考えない突撃が多かった。そうなれば策略を練るアリアが勝っていてもおかしくはないのだが、彼女はここぞという時に信じられないような奇跡を呼ぶ幸運力を発揮し、そしてすでに卒業してしまった優秀な軍師のおかげもあって、アリアと互角の戦いを繰り広げていたのであった。
「まぁ厄介な軍師がすでに卒業してしまった今、シグマなど恐れるに足らず。クリュウには残念ですけど、今回は私達が勝たせていただきますわ」
「そうですよアリア様ッ！　シグマさんなんてもう怖くもなんともないですッ！」
「……鎧袖一触」
　自信満々に言い切ったアリア。その後ろから少女二人が賛同するような声を上げた。子供のように無邪気に笑う金髪碧眼のツインテール少女と、同じ金髪碧眼の無表情でポツポツと言葉を発するポニーテールの少女。見ると二人とも顔立ちはそっくりであった。
「あら、ご紹介が遅れましたわね。今回私のチームに属する2年生のレナ・ユンカースと同じく2年生のシア・ユンカース。見ての通り、二

人は双子の姉妹ですのよ」
「レナ・ユンカースです」
「……シア・ユンカース」
二人の少女はアリアの紹介に丁寧に頭を下げた。クリュウも「よろしくね」と言って小さく頭を下げる。
「2年生をチームに。相変わらず後輩の面倒見がいいよねアリアは」
「後輩を支えない先輩など愚の骨頂。知っての通り、私達は各チームにできるだけ低学年を入れておりますの。個人の成長よりも全体の成長。それが私のクラスの方針ですわ」
昔から後輩の面倒見がいいアリア。委員長になってからはこうした自分の方針をクラスの方針としてできる限り後輩の面倒をクラス全体で見る方針を執ってきた。クリュウが彼女のクラスにいた時もまた、それは同じだ。
「まぁ、そこが彼女が皆に慕われる要因の一つなんだけどね」
そう言ってずっとアリアの後ろで周囲を見回していた青髪碧眼の少年が小さく笑みを浮かべながら前に出て来た。その人物とクリュウは、面識があった。
「ディア。相変わらずアリアに振り回されてるんだね」
「お前がいないと、倍以上大変だぞ」
そう言ってクリュウを苦笑させたのはクリュウやアリアと同じ6年生のディア・クルセーダー。クリュウとは元クラスメイトという関係であり、彼と同じくアリアに扱き使われていたある意味での戦友でもある少年だ。
「アリアとディアは相変わらずコンビなんだね」
「勘違いなさらないでほしいですわ。ディアはあくまであなたの補欠的存在でしかないのですよ。本当は今年はあなたと組む予定でしたのに、すでにあなたはクードと組んでしまっていたので、仕方なくディアを組んだまでですわ」
「何だよ。だったらその時にでも誘ってくれれば良かったじゃないか」
「冗談じゃありませんわ。あんな得体の知れない方と一緒なんてこち

らから願い下げですわ」
　そう言ってアリアはクードを道端のゴミでも見るような目で見詰める。女子に人気が高いクードだが、アリアは彼の事をかなり嫌っているらしい。外見に騙されずに根っこの部分で人を判断する所は彼女らしいのだが、それが二人の関係にヒビを発生させているのだ。
　一方、アリアにそんな視線を向けられてもニコニコと笑っているクード。確かに得体の知れないという点ではアリアに一票を入れてもいいかもしれない。
「相変わらずアリアはクードの事が嫌いなんだね」
「むしろ好意を寄せる要素など皆無ですわ。それなのにあなたは彼と一緒にいる。血迷っているのか頭のネジが何本かぶっ飛んでいるか。まぁどちらにしても正気の沙汰ではありませんわ」
「そ、そこまで言う？」
　確かに彼女が言っている事も遠からずも当たっているかもしれない。
　だがまぁ、確かにクードはいつもは厄介極まりない性格をしているが、いざという時はとても頼りになる男だ。それは彼とコンビを組んでいる自分だからこそわかる、それもまた彼の根っこの部分だ。
「――まぁ、今更私には関係ない事ですけど」
　そう言って、アリアはなぜかすねたように唇を尖らせた。そんな彼女に対し、クリュウは小さく苦笑する。
「何でアリアがそこまで怒る必要があるんだよ」
「――はぁ。ほんと、あなたという人はダメダメですわね」
「え？　何か言った？」
「何でもありませんわ」
　アリアは髪をかき上げて深々とため息を吐いた。そんな彼女を様子を不思議そうに見詰めるレナとシア。クードはいつものようにニコニコと微笑んでおり、その心中を察する事はできない。何か知っているのか、それとも何も知らないのか。相変わらず腹の底が見えない男だ。
　一方、すっかり話に置いて行かれている形となっているシャルルと

ルフィール。シャルルは特に気にした様子もなくクリュウとアリアの会話を黙って見詰めている。しかしルフィールはどこか不機嫌そうに二人を見詰めていた。そんな彼女の視線に気づいたのか、アリアはふとルフィールを見ると小さく肩をすくませた。
「――どうやら、長話が過ぎたようですわね。私達はもはや敵同士。昔のような気安い関係ではありませんでしたわね」
「また、強がっちゃって」
「わかったような事を言わないでいただきたいですわね。自分の事を少し過大評価し過ぎではなくて？」
「はいはい」
苦笑するクリュウにアリアは不敵な笑みを浮かべる。そしておもむろに彼に歩み寄り、そっと耳元でささやく。
「あなたのご武運、陰ながら祈らせていただきますわ」
クリュウが振り返ると、アリアはすでに数歩先へと歩みを進めていた。呆けているレナとシアは慌てた様子でアリアを追いかけ、ディアは「ほんじゃ、がんばれな」とクリュウに別れを告げて駆け出した。
エリアを堂々と渡り、アリア達は別のエリアへ繋がる細道の向こうへ消えた。
アリア達が消えた道を小さく笑みを浮かべながら見詰めるクリュウ。そんな彼にムッとしたような表情を浮かべたルフィールは無言で彼の向うずねを蹴り抜いた。
「ぬぐわッ!?」
突然の襲撃と共に炸裂した激痛に悶えるクリュウ。すぐ近くにいたシャルルが慌てて駆け寄る。
「兄者ッ!? だ、大丈夫すかッ!?」
「……る、ルフィール……ッ。な、何で……ッ!?」
あまりの痛みに目に涙を溜めてルフィールを睨むクリュウだったが、ルフィールはそんな彼の視線を無視して歩き出した。クードはクリュウを見てくすくすと楽しそうに笑いながら彼女に続く。どうやら彼はクリュウを心配するつもりは一切ないらしい。
「き、君達って本当に薄情だねッ！ ルフィールなんか当事者で

しょッ!?」
「大丈夫っすよ兄者ッ！　シャルはいつでも兄者の味方っすからッ！」
　そんな会話に多少後ろ髪引かれる感はあったが、苛立ちの方が大きいルフィールは無理やり無視して歩みを進める。
　本当に一度たりとも振り返りもしないルフィールに、軽くショックを受けながらもクリュウは何とか立ち上がった。正直、防具がなかったら立ち上がれなかったかもしれないような一撃だった。
「ちょ、ちょっと待ってよルフィールッ！」
「あ、兄者ッ！　シャルを置いて行かないでほしいっすッ！」
　先に進むルフィールとついでのクードを追いかけて、クリュウとシャルルは慌てて二人の後を追って駆け出した。四人が去ったエリアは先程までの戦闘の痕跡すらも残らず、今日もまた平和な一日を刻むのであった。
　クリュウ達はまず最初に特産キノコ採取を開始した。すでに多くの場所で生徒達が採ってしまった後だった為かなかなか見つからなかったが、穴場的な川辺のすぐ横にある洞窟の入り口に生えていたのを発見。無事に特産キノコ採取を完了した。
　続いて四人が訪れたのは背の高い木々が密集するエリア。ここはよく虫が採取できる場所であり、すでにここにも生徒が二〇人程度が集まって虫あみを片手に走り回っていた。
「僕とシャルルでロイヤルカブトを採取するから、二人はすぐ隣のエリアでアプトノスを狩ってこんがり肉をお願い」
「……不本意ではありますが、了解です」
「お安い御用ですよ」
　クリュウは持っていた携帯肉焼きセットをクードに預け、自身はシャルルを伴って密林の中へ突っ込んで行った。それをどこか寂しげに見送るルフィール。そんな彼女を一瞥し、またいつもの笑みを浮かべたクードは「では、行きましょうか」と言って歩き出す。ルフィールは無言でその後を追った――彼の背後五メートルという距離は、決して縮まる事はなかった。

密林で虫あみを片手にロイヤルカブトがいそうな場所を探すクリュウとシャルル。ロイヤルカブトは夜行性な為、こういう昼間は主に木の根元の腐葉土や洞窟の中などの暗くて湿った場所にいる場合が多い。事実、先程シャルルが木の根元の腐葉土を掘り返してロイヤルカブト一匹を採取している。

クリュウも負けじと腐葉土を掘り返してはロイヤルカブトの姿を探すが、出て来るのは釣りミミズやセッチャクロアリなどばかり。後で釣りをする事もあって、一応釣りミミズは採取しておくが、肝心のロイヤルカブトはいまだに現れない。

「あっれー？」

なかなか現れないロイヤルカブトにクリュウは不思議そうに首を傾げた。

「兄者ぁッ！　また見つけたっすよぉッ！」

そう嬉しそうに駆け寄って来たシャルルの手には自慢の角を掴まれて必死に六本の足を動かしてもがくロイヤルカブトがしっかりと握られていた。それも結構大きい。

「おぉ、また見つけたんだ。すごいねシャルルは」

「こんなの朝飯前っすよッ」

「しっかり朝ごはん食べたくせに」

「うぅ、それは言わない約束っすよ……」

クリュウのからかうような一言にシャルルは恥ずかしそうに頬を赤らめて唇を尖らせると、クリュウの脇腹を軽く小突いた。そんな彼女のかわいらしい攻撃に「ごめんごめん」とクリュウは笑いながら謝罪の気持ちゼロな言葉を掛ける。

「も、もうバカな事言ってないでさっさとロイヤルカブトを捕まえるっすよ。兄者はゼロ匹なんすから、もう少しがんばってほしいっす」

「そ、それを言われると返す言葉もないな」

「返さなくていいっすから、さっさと目標数捕まえるっすよ！」

そう言ってシャルルはクリュウの手を握ると彼を引っ張るようにして走り出した。抵抗する訳にもいかず、彼女に引っ張られるままに

クリュウ自身も走り出す。
「こっちっすよッ！　こっちにロイヤルカブトがいそうな土があるんすよ！」
「わ、わかったから引っ張らないでよ！」
困り果てる彼の手を引っ張って走るシャルルはどこか楽しげな屈託のない笑みを浮かべ、彼を伴って木々の間を縦横無尽に走り回るのであった。
一方その頃、クリュウ達と離別して隣のエリアに移動したルフィールとクードは早速エリア内の草原でのんきに草を食べているアプトノス数匹の群れと遭遇した。
ルフィールとクードが近づいても、アプトノス達は逃げる様子もなく二人の存在を無視して食事を続ける。すると、ルフィールはいきなり背負った弓を構えると、矢筒から三本の弓を引き抜いて弦に番え、ギリギリと弦を軋（きし）ませながら一番近くにいる成体のアプトノスに狙いを定める。
ビシュッ！
ルフィールは容赦なく無言で矢を放った。放たれた矢はアプトノスの側面に命中し、アプトノスは悲鳴を上げる。すぐに残るアプトノスは逃げ出した。非情ではあるが、これが彼らが生き残る為に生み出した方法なのだ。
三本の矢が突き刺さったアプトノスも慌てて逃げ出す。矢が三本程度では致命傷にはならないのだ。
ルフィールは冷静に彼我の距離を目測し、最も矢が威力を発揮する間合いをキープしながら第二射を行う。再び三本の矢が放たれ、それら全ては鈍重で大きな体という格好の的であるアプトノスに命中。しかしアプトノスは一瞬怯んで止まったものの、すぐに再び走り出す。
ルフィールは一本の矢を引き抜くと、弦に矢を番え、今まで以上に弦の限界まで引き絞る。そして、
ビシュッ！
放たれた一矢は吸い込まれるようにしてアプトノスに命中。しか

しそれは今までのように突き刺さるのではなく、アプトノスの体を見事に貫いた。その強烈な一撃にはさすがのアプトノスも横転。地面に横倒しになってもがき始める。
　ルフィールは一気に間合いを詰めてアプトノスに近づくと、矢筒から一本の矢を引き抜いてそれを剣のように構えると、もがくアプトノスに向かって斬りつけた。
　一撃、二撃と斬りつけると、ついにアプトノスは力尽きて動かなくなった。それを確認し、ルフィールは手に持っていた矢を再び矢筒に戻した。
　パチパチパチ……
　振り返ると、クードがいつもの真意を探れないような笑みを浮かべながら拍手していた。しかし、これがクリュウ相手ならともかく、クード相手ではルフィールの表情が和らぐ事はない。むしろその拍手の音がノイズのように聞こえ、不機嫌そうに弓を畳んで背負う。
　クードはそんなルフィールに小さく肩をすくませると、倒れたアプトノスに近づく。腰に下げた剥ぎ取り用ナイフを構えて肉を切り出していく。その間、ルフィールは辺りを見回している。見張りをしているのか、それともクードとはあまり近づきたいのか。真相は彼女しか知らないが、クードは気にした様子もなく黙々と肉を切り分ける。
　するとそこへ隣のエリアに繋がる道の向こうからクリュウとシャルルがやって来た。その瞬間、ルフィールの表情にクリュウにしかわからないようなごく僅か変化が起きた。少しだけ、本当に少しだけ口元に笑みが浮かんだのだ。
「ルフィール、クード。順調そう？」
「アプトノス一匹を倒し、今はランカスター先輩が解体しています」
　クリュウはそっかとうなずくと一人で解体しているクードへ駆け寄った。普通なら彼の本質を知らない女子以外は誰も近寄りたがらないクードだが、クリュウは彼の親友だ。何の違和感もなく接している。
　せっかく合流できたのに、すぐにクードの所へ行ってしまったクリュウに多少の不満を感じつつも、それを口にも表情にも出さないル

フィール。無駄ないさかいを起こさないのが、最も安全で確実な処世術なのだ。
「ルフィール」
珍しくシャルルに名前を呼ばれ、何事かと思って振り返る――突如、目の前に異形の物が現れた。六本の足をカサカサと動かして不気味に蠢（うごめ）くそれは、ルフィールの思考を停止させるのには十分な非現実的な物だった。
瞳を大きく見開くルフィールを見て、シャルルは楽しそうに笑った。
「ニヒヒ、これがロイヤルカブトっすよ。虫が苦手なルフィールにはちょっと刺激が強いっすか？　子供っすねぇ」
ルフィールの反応を見ておかしそうに笑うシャルル。だが、ルフィールの異変に気づいてその笑顔も消えた。
「え？　あ、ルフィール？」
ルフィールは瞳を大きく見開いたまま動かない。だが、顔色は真っ青に変わり、カクカクと体を小刻みに震わせている。そんな彼女の異常事態に、さすがのシャルルも慌て出す。
「る、ルフィールッ!?　どうしたっすかッ!?」
――刹那、ルフィールは倒れた。
目が覚めると、まず飛び込んで来たのはどこまでも晴れた一面の青空。続いて自分が横になっている事に気づき、ゆっくりと身を起こす。辺りを見回してみると、そこは森の木々が気まぐれのように開けた小さな広場だった。
そして、横になっていた自分から少し離れた所ではクリュウがこちらに背を向けて何やら作業をしているようだった。
「……先輩？」
そっと声を掛けると、クリュウが振り返った。一瞬驚いたような表情を浮かべた後、どこかほっとしたような表情を浮かべる。
「あぁ、気がついたんだね。良かった」
「……ボクは、一体」
「いやぁ、びっくりしたよ。いきなり倒れるから脱水症状かと思って

心配したよ」
　クリュウの言葉にルフィールはなぜ自分がこのような事態になっているかを思い出した――そして赤面した。
「――でもまさか、ロイヤルカブトを見て気絶するなんて。ルフィールは本当に虫が苦手なんだね」
　笑顔で言って来るクリュウの言葉に対し、ルフィールは恥ずかしくて真っ赤になった顔を上げる事もできずうつむいたまま。そんな彼女に、クリュウは不思議そうに首を傾げる。
「どうしたのルフィール。もしかして気分でも悪いの？」
「……いえ、大丈夫です」
　ルフィールが「大丈夫」と言ったので、クリュウは心配しつつもとりあえずは前に向き直って作業に戻る。
「あの、先輩。シャルル先輩とランカスター先輩は？」
「二人ならバクレツアロワナを釣りに行ったよ」
「そ、そうですか……」
　そう言って起き上がったルフィールはそっとクリュウに近寄った。クリュウは何やら作業をしているようでこちらの接近には気づいていない。
「先輩」
「うん？　わッ!?」
　手元の作業に夢中だったクリュウにルフィールは突然後ろから抱きついた。幸いにも防具のおかげで柔らかいものが当たらないだけまだマシだったが、鼻をくすぐる石鹸の匂いにクリュウの顔がカーッと熱くなる。
「ちょ、ちょっとルフィールッ！　いきなり何するんだよ……ッ！」
「ボクの接近に気づかない先輩が悪いんですよ」
　どこか楽しげな声で言うルフィール。いつもあまり声や表情に感情が込められない彼女としては珍しい事だ――いや、ある条件さえ満たせば、それは珍しい事ではなくなる。
「……そ、そっか。今は二人だけだったね」
　ルフィールが唯一自らの感情を素直に表に出すための条件。それ

はクリュウと二人っきりになるというもの。いつもは皆が寝静まった夜中ぐらいしか出て来ない本当の彼女が、狩場ではありながらも二人っきりという環境に出て来たのだ。
「先輩。ずっとボクを看病しててくれたんですか？」
「ま、まぁね」
「ありがとうございます。先輩」
そう感謝の言葉を述べてルフィールは彼に回した腕にさらに力を入れて強く抱きつく。完全にデレモードに入ってしまっているらしい。
「ちょ、ちょっとルフィール。今忙しいからまた後でに――」
「……先輩は、ボクが嫌いなんですか？」
途端に腕の力が弱まってルフィールは離れた。振り返ると、誰が見ても明らかに落ち込んでいると見えるくらいに落ち込んでいた。そんな彼女の様子にクリュウは慌てる。
「違う違うッ！　別に僕は君が嫌いなんて事は絶対にないよッ！」
「……本当ですか？」
顔を上げたルフィールは濡れてキラキラと輝くイビルアイでクリュウを見詰める。なぜだか、その姿は雨の中に捨てられた上にお腹を空かせた子犬を思わせる光景だ。
「ほ、本当だよッ！　嫌いなんて事は絶対にない！」
「……じゃあ、好きって事ですか？」
「も、もちろんッ！」
その瞬間、ルフィールの顔がパァッと華やいだ。まるで長い冬が終わって待ちに待った春の到来に合わせて開花するかわいらしい花を思い浮かばせる。
「先輩ッ」
「うわッ!?」
突如としてルフィールはクリュウに思いっ切り抱きついた。クリュウの体は振り返っていた為、自然と真正面から彼女の抱きつきを受ける事となった。そしてそのまま後ろに押し倒される。
「ちょ、ちょっとルフィール！」

「ボクも、先輩の事は大好きです」
「そ、それは嬉しいんだけど……ッ。ちょ、ちょっと……ッ」
押し倒される形となったクリュウは起き上がろうともがくが、そんな彼を押し倒して抱きつくルフィールはさらにギュ―ッとクリュウに強く抱きつく。その顔は、常の彼女からは想像できないような嬉しそうな笑みが浮かんでいる。
「先輩。ずっとずっと、一緒ですからね」
そう言ってルフィールは無邪気に笑った。クリュウもまたそんな彼女の笑顔に小さく笑みを浮かべる。
「まぁ、僕が卒業するまでの間だけどね」
そう言うと、ルフィールはムッとしたような表情を浮かべて「そういう意味じゃありませんよ」と言ってクリュウから離れると、プイッとそっぽを向いてしまった。どうやら気分を害してしまったらしい。
「ルフィール？　ど、どうしたの？」
「……先輩なんて留年してしまえばいいんです」
「それはシャレにならないよ……」
すっかりご機嫌斜めになってしまったルフィールにクリュウは小さくため息を吐くと、再び先程まで続けていた作業に戻った。一方、クリュウに無視されてしまう形となってしまったルフィールはさらにムッとしたような表情になると、再び彼に向き直って彼の背中に抱きついた。
「ちょ、ちょっとルフィール……ッ」
「少しはかまってくれてもいいじゃないですか」
拗ねたように唇を尖らせながら言う彼女の姿に、一瞬でもかわいいなと思ってしまった事は彼女には内緒だ。
「さっきから何しているんですか？」
肩越しに彼の手元を覗き込むと、そこにはクードが持っていたはずの携帯肉焼きセットが置かれていた。すでに携帯燃料に火をつけ終えており、今は火力調整をしている段階のようだ。
「あぁ、君とクードが手に入れてくれた生肉をこんがり肉にしようかと思って」

「なるほど」
納得したようにうなずくと、ルフィールは彼の背中から離れてその横に腰掛けた。
「何か手伝いましょうか？」
「いや、もう調整も終わったから肉を焼くだけだし」
「そうですか。あ、これですね」
ルフィールが指差したのはすでに塩コショウで下味付けを済ませた生肉。クリュウは「そうだよ」と答えてそのうちの一つを掴むと、携帯肉焼きセットの台の上に設置し、ハンドルをクルクルと回し始める。すると、クリュウは突然鼻歌を歌い始めた。それは初心者ハンターが強火な肉焼きセットで絶妙なタイミングで肉を焼き上げる為に習う肉焼きの歌と呼ばれる歌であった。リズムで肉を火から離すタイミングを計るもので、歌詞なんてものは存在しない歌ではあるが。
ただし、これはあくまで初心者が肉の焼き加減を計る為に使う歌なので、実際に狩場に出る頃になると使う者はほとんどいない。訓練生も歌う者と歌わない者に別れてはいるが、いずれ皆歌わなくなる。初々しい歌と言える。
「上手に焼けました、っと」
そうこうしているうちに、クリュウは順調に一つを焼き上げた。それはもう見事なもので、皮はパリパリに焼け、見ただけで中身はとてもジューシーなのだろうなと想像できる。今すぐにでもかぶりつきたくなる衝動に駆られるほどの完成度だ。
続けてクリュウはさらにもう一個を焼き始める。もちろん、肉焼きの歌は忘れない。
「上手に焼けました」
二つ目も見事に焼き上げ、すでに焼き終えた二つのこんがり肉を紙に包んで保存する。すると、じっと自分を見詰めている彼女の視線に気づいて振り返った。
「どうしたの？」
「いえ、先輩が歌う姿なんて初めて見たもので」

「そりゃ僕だって歌くらい歌うよ」
　苦笑するクリュウに、「そういう意味ではありませんよ」とルフィールも小さく苦笑した。
　クリュウは続いて三個目の肉焼きに取り掛かる。ルフィールはそんな彼をじっと見詰めている。肉焼きの歌を口ずさみながら肉を焼く彼の姿に、自然と口元が綻ぶ。
　彼と二人っきり。そして目の前でその彼は肉焼きの歌を口ずさみながら肉を焼いている。何とも平和な光景だ。これが狩場ではなく、そしてお互いに物々しい防具ではなくそれぞれ休日を過ごすような私服だったら、どれだけ微笑ましい光景な事やら。それこそ、それはまるで恋人同士のようで――
「はふぅ……」
「上手に焼けました――って、ルフィール？　顔赤いけど大丈夫？」
「ふえッ!?　だ、大丈夫ですよッ！　ボクは何も変な妄想なんてしてませんからねッ！」
「え？　あ、うん……」
　クリュウは彼女の言動の意味がわからずに首を傾げるが、とりあえずこれ以上の追求はせずに四個目の肉焼きに取り掛かる。すると、ルフィールは「あ、ボクにやらせてください」と言い出した。クリュウは「え？　別に構わないけど」と多少驚きながらも彼女に席を譲った。
「だ、大丈夫？」
「ボクだってハンターの端くれです。肉焼きなんて簡単ですよ」
「まぁ、それはそうかもしれないけど」
「先輩は、ボクの事を信用していないのですか？」
　そう言ってルフィールは悲しげな表情を浮かべた。誰もが恐れおののくイビルアイも、こうなってしまっては全く迫力を持たない。クリュウは慌てて首を横に振る。
「そ、そんな事ないって！　ほ、ほら君に肉焼きの全権を任せるから！」
「……先輩からの頼まれ事。必ずやこの任務完遂してみせます」
「まぁ、お手柔らかにね」

苦笑しながら言ったクリュウの言葉に、ルフィールは嬉しそうに「はいッ！」とうなずくと早速生肉を台の上に設置してハンドルをクルクルと回し始める。同時に、クリュウも口ずさんでいた肉焼きの歌を歌い始める。やっぱり、男の子が歌うよりも女の子が歌う方が絵になる。

どこか楽しげに歌を歌いながらルフィールはクルクルとハンドルを回す。そんな彼女を見てクリュウも自然と笑みが浮かんでしまう。

「上手に焼けました♪」

そう言ってルフィールが台から持ち上げたのは見事な焼き加減のこんがり肉であった。

「おぉ、上手だね」

「これくらいハンターなら当然ですよ」

そう言いながらも、ルフィールはクリュウにほめられたのがすごく嬉しいのか無邪気に笑った。こういう女の子らしい部分を自分以外にも見せれば、シャルルとも仲良くなれるし、イビルアイなんて関係なく友達も増えるだろうに。勉強は器用でもこういう部分では不器用な子だ。

ルフィールはクリュウがそんな事を考えている間も作業を続け、最後の一個も見事に焼き上げた。これで納品用のこんがり肉は全て確保できた。

「これで終わりですね」

「ねぇ、小腹空いていない？」

「え？　まぁ、多少は……」

「じゃあさ、どうせ生肉余ってるからこんがり肉にして食べない？」

クリュウの提案に、ルフィールはしばし思考した後「そうですね」と言って小さく微笑んだ。クリュウは「そっか」と笑みを浮かべると携帯肉焼きセットを自分の方に引き寄せて生肉をその台にセットして回し始める。

強火の炎によって見る見るうちに焼けていく肉と大好きな彼の歌。それだけでルフィールはすでにお腹いっぱいなくらい幸せを堪能していたが、実は結構お腹が減っていた身としては早く食べたいと思っ

てしまう。それも彼が自分の為に焼いてくれているというのなら尚更だ。
「上手に焼けました。はい、ルフィール」
「あ、ありがとうございます」
ルフィールは彼からこんがり肉を受け取ると、「では、お先にいただきます」と言って彼が自分の為に焼いてくれたこんがり肉にかぶり付いた。パリパリの皮と肉汁溢れる肉は絶妙な焼き加減。下味の塩コショウも絶妙なもので、それはもう最高においしかった。彼が焼いてくれたという事実を引いても、本当においしい。料理上手というのは、こういう素材そのものを使った料理でも素人とは違うのだ。
「おいしいです」
「そっか。それは良かった」
ルフィールの言葉にクリュウは笑みを浮かべると、自分用に焼いた肉にかぶり付いた。ルフィールが絶賛する中でも、彼は少し塩を振りすぎたかなとかもう少し焼いても良かったなど、意外と料理には妥協しない性格を露にしていた。だがまぁ、ルフィールがおいしそうに食べている姿を見ていると心から焼いて良かったと思える。
二人して肩を寄せ合いながらこんがり肉を食べる。その光景は確かに狩場であって二人とも防具姿ではあるが、とても微笑ましいものであった。
そこへ、バクレツアロワナを見事に釣り上げて意気揚々とシャルルが戻って来た。その後ろからはクードがニコニコと笑いながらついて来る。
「兄者ぁッ！　見て見てっすッ！　バクレツアロワナ大量っすよ――って、二人して何食ってるっすかッ!?　ずるいっすッ！　シャルもお腹ペコペコっすぅッ！」
そう抗議しながら駆け寄って来るシャルルを見て、ルフィールはいつもの無表情モードに入ると彼との距離を少し開けた。
一方のクリュウは苦笑しながら、すでに消し終えた携帯肉焼きセットに再び火を着けるのであった。

第９３話　ランポス迎撃戦　消え逝く命に捧げる想い

　狩場の西側にある灰色の岩肌が露出するこの崖は大昔の大地震で隆起してできたもので、人間や竜人族の寿命よりもはるかに長い年月をかけて自然が生み出した鉱石が採掘できる場所だ。火山のように希少素材が出る事はないが、一般的に使う鉄鉱石や円盤石、マカライト鉱石などは豊富に採掘できる。
　この狩場には他にも何ヶ所か採掘可能な場所はあるが、黄金石はここでしか採掘された事はない。その為、すでに二〇人程の生徒達が集まってピッケルを振り回していた。
「ピッケルは僕とシャルルが担当するから、二人は僕達が砕き出した破片から必要な鉱石を選んで採取して」
　クリュウの指示に三人はそれぞれ了解し、すぐに余っている岩の亀裂の前に立った。普通の岩肌を削るよりこうした亀裂を使った方が奥の、つまりは誰も触れていない場所から鉱石が採掘できるので、採掘方法としてはベターなやり方だ。
「じゃあ行くよ。シャルル」
「ういっすッ！」
　ピッケルを振り上げ、まずクリュウが一撃を叩き込む。甲高い音と共に破片が飛び散った。続いてシャルルが負けじと体全体を使って思いっ切りピッケルを振り下ろす。クリュウとシャルルの休む事のない波状攻撃に、岩はどんどん削れて破片が彼らの足元に飛び散る。
　一分程度ピッケルを振り、二人は一息ついた。交代するようにルフィールとクードが散らばった破片一つ一つを確認していく。だが、そのほとんどは役立つ事があまりない石ころばかりだ。
「どう？」
「ダメですね。ほとんど石ころです。まぁ、中には鉄鉱石などもありましたので採取はしましたが、肝心の黄金石のかけらはありません」
「まぁ、名前の通り黄金色の石だからね。普通は飛び散った時点で気

づくものだけど、やっぱりないか」
　ルフィールの言葉にクリュウは額についた汗をタオルで拭いながらため息を吐いた。一分振っただけでもすでに彼の腕にはそれなりに痛みが起きていた。そりゃ硬い岩に向かってピッケルを全力で振るえば腕に負担が掛かって当然だ。
「大丈夫ですか？」
　心配そうに見詰めて来るルフィールに、クリュウは「大丈夫だよ」と笑顔で返す。まだまだ腕は大丈夫なので、これはうそではない。
　一方、クリュウと同じか、むしろクリュウよりも力強くピッケルを振るっていたシャルルはというと、
「うっしゃぁッ！　どんどん掘り進めるっすよぉッ！」
　すでに一足早くまたしても全力でピッケルを振るっていた。彼女には疲れるとか限界という言葉が通用しないのだろうか。
「げ、元気だねシャルルは……」
「単純というか、本当に怪力バカなのですねあの方は」
　感心半分呆れ半分のクリュウと、呆れ満点の視線で見詰める二人など気にした様子もなく、シャルルは「うおりゃあああぁぁぁッ！」と気合の入った声と共に連続してピッケルを振るいまくる。本当に疲れなど微塵も感じていないのだろうか。
　そんな感じでクリュウ達やその他数小隊が崖にへばり付いてピッケルを振り回していると、突如として笛の音が響き渡った。それもここからかなり近い場所からだ。
「これは、角笛の音色だよね……」
　角笛とは特定のモンスターの注意を惹く笛の事で、それ以外にも連絡手段や古龍討伐戦などでは大勢のハンターを作戦通りに動かす為に合図として使われるなど、使い方によっては便利な道具だ。
「訓練で狩場に角笛が鳴るって事は……」
「何か危険なモンスターが現れた、という事でしょうか」
　クリュウとルフィールはその角笛の意味を考える。クードもいつになく真剣な顔で角笛の音が聞こえた方角を見詰めている。シャルルは突然の事に首を傾げていた。

周りの生徒達も何事かとざわつき始めた時、突如として森の中からランポスの群れが現れた。数にして何と約三〇匹。奇襲される形になった生徒達は悲鳴を上げて慌てて散り散りになる。その時、
「うろたえんじゃねぇぇぇぇぇッ！」
角笛に勝ると劣らない迫力ある怒号と共にランポス達を追撃するように現れたのは、我らがＦクラス委員長であるシグマ・デアフリンガー。その背後から三人のハンターが駆け寄る。彼女の腹心の仲間達（チームメイト）だ。
生徒達だけでなくランポスすらも皆一斉にシグマを見詰める。それらの視線を一身に受けるシグマは背に背負った大剣、バスターソードを引き抜くと両手でしっかりと柄を握って構えた。そして、再び怒号を放つ。
「テメェらそれでもハンターかコノヤローッ！　ランポスなんかにビビんじゃねぇッ！　全員武器を取れッ！　こいつらを叩き潰すぞッ！」
シグマの迫力ある号令にクラス関係なく次々に生徒達が武器を構える。
アリアのような頭脳派なリーダーもいれば、その一声で状況すらも変えてしまうだけの迫力と頼もしさで皆を率いるシグマのようなリーダーも存在するのだ。
シグマ達を中心に、散り散りになっていた生徒達がランポスの周りを囲むようにして包囲陣を築き始める。その時、
「皆さん目を閉じてくださいッ！」
突然響いたその声に反射的に全員が目を閉じた。刹那、強い光がまぶたの壁を突き破って炸裂。再び目を開けると、あちこちでランポス達が悶えていた。
「こ、これは……」
「良くやったぞエルッ！」
不敵な笑みを浮かべるシグマの横で「はいッ！」と元気の良い声で返事する屈託のない笑みを浮かべる細メガネを掛けたかわいらしい女の子っぽい銀髪赤眼の少年。どうやら彼が先程の声の主らしい。

「シグマッ！」
　クリュウはルフィール達の所を離れて今まさにランポス達に向かって突撃しようとしているシグマに駆け寄る。シグマは「何だッ!?」と横槍を入れられた事にイラ立った感じで振り返った。
「闇雲に突っ込んでもダメだッ！　まずは全員を集めようッ！」
「全員で叩き潰せばいいだろうがッ！」
「数が多すぎるッ！　このままだと各個撃破されるよッ！　全員を一ヶ所に集めて固まって戦おうッ！」
　クリュウの提案にシグマはなおも反抗しようとする。アリアは団体プレーを。シグマは個人プレーを。同じリーダーでも戦い方もまた人それぞれなのだ。そんな彼女の方をポンと叩く者がいた。腰まで伸びる桜色の髪と翡翠色をした瞳を持つ、凛とした顔立ちと優しげな笑顔が似合う美少女。
「彼の言うとおりよシグマ。ここはまずみんなの安全を確保するのが先決じゃないかしら？」
　少女のまるで駄々をこねる子供を諭すような母親の笑顔に、シグマは「チッ」と盛大に舌打ちするとバスターソードを背に戻した。それを見て、少女はニッコリと微笑む。
「しゃあねぇな。テメェの策に乗ってやるよ」
　そう言ってシグマは彼に体ごと振り返った。彼女を囲むように他のチームメイトも振り返る。
「エル。閃光玉はあといくつだ？」
　シグマの問い掛けにエルと呼ばれた少年は「ちょ、ちょっと待ってくださいッ！」と言って道具袋の中を確認する。
「あと二つです。調合しても三つが限界です」
「上等だ。エル、その完成している閃光玉をよこせ。その後お前は後ろに下がってもう一個作った後は援護に徹しろ」
「で、でも……」
「大丈夫だ。俺に任せておけって」
　ニッと白い歯を見せて頼もしげに笑うシグマに、エルは「わかりました。がんばってくださいッ！」と言って後ろへ下がった。それを確

認し、再びランポス達と向き直るシグマ。
「ルナリーフ。一つ頼み事をしてもいいか？」
「遺言なら聞くつもりはないよ」
「バカ、冗談言ってる状態じゃねぇだろ――まぁいい。みんなを一ヶ所にまとめてくれ。その間は俺達が押さえる」
「……わかった。気をつけて」
「あぁ」
　すぐにクリュウはルフィール達の所へ戻ると、彼女達と共に散らばっている生徒達の誘導を始めた。そんな彼を見て、少女はくすくすと笑う。
「フェニス。笑ってないでさっさと行くぞ」
　背負ったバスターソードの柄を掴みながら言うシグマの言葉に、フェニスと呼ばれた少女も「仕方ないわね。まぁ、がんばりましょう」と言って背負っていたハンターボウ1を構える。
「結局こうなりやしたか。まぁ、それも一興って事ですかね」
「シルト。ふざけてないで、今回ばかりは少し真面目にやって」
「わーってますよ」
　フェニスの言葉にツンツンした茶髪に琥珀色の瞳をした背の高い、彼女にシルトと呼ばれた少年が笑いながら答えた。シルトは背負っていた巨大な銃槍、アイアンガンランスを構えた。体格がいい彼だからこそ仕えるような重装備だ。
「わかってんな。俺達の今の目的はランポスの殲滅じゃなくて、生徒達が一ヶ所に集まるまでの時間稼ぎだ。無茶はせず、慎重にやるぞ」
「あら、あなたから慎重なんて言葉を聞けるとは意外ね」
「そーっすね。罠とわかっていてもその罠ごとぶっ壊して突っ込む委員長としては意外な言葉ですぜ」
「……テメエら、これが終わったら覚悟しておけよ」
「あら、それは早々の勝利宣言と受け取ってもいいのかしら？」
「好きにしやがれ」
　フェニスのからかうような言葉にシグマは口元に不敵な笑みを浮かべながら返す。そんな二人を見て、シルトは小さく肩をすくませる

と、改めてその重量感あるアイアンガンランスを構える。
先頭を大剣使いのシグマ、その右斜めを後ろを弓使いのフェニス、左斜め後ろをガンランス使いのシルトがそれぞれ武器を構える。先程離脱したエルはクリュウと同じルーキーナイフを武器とする片手剣使い。これがシグマ達のチームメイトだ。
「行くぞッ！」
シグマの掛け声と共に放たれた閃光玉を合図に三人は一斉に走り出す。視界を封じられて混乱するランポス二匹をシグマはバスターソードで薙ぎ払う。吹き飛んだ二匹のランポスだったが、致命傷にはならずすぐに起き上がるもそこへフェニスの放った矢がとどめとなって突き刺さり、二匹のランポスは倒れた。
シルトは二人の攻撃で慌てて生徒達の方へ走り出す閃光玉の影響範囲外にいたランポス達の前に立って道を塞いでいる。それでも突撃してくるランポスには砲撃で牽制し、立派に砦の役割を行っている。
そんな三人の活躍によってできた隙に生徒達はクリュウ達に誘導されて一ヶ所に集まる。そこでクリュウはさらに指示を飛ばす。
「大剣、ハンマー、ランス、ガンランス使いは前衛をッ！　片手剣、双剣、狩猟笛は前衛から少し距離を開けてガンナーを死守ッ！　ガンナーは後衛からとにかくランポスを撃ってくださいッ！」
クリュウの指示を受けて前衛を大剣、ハンマー、ランス、ガンランスが担当し、後衛をガンナーが行い、そのガンナーを守るように残る片手剣、双剣、狩猟笛が固まる。
本来、狩場において四人以上でパーティを組むのはご法度だ。ハンターの祖であるココット村の英雄が五人で戦い、そのうちの一人死んでしまった事から四人以上では死者が出るというジンクスの為だ。実際、ギルドも通常依頼は四人を定数としている。しかし、今回はギルドが関係していない学校の訓練。ジンクスなんか当てにならない死より、各個撃破による確実な死を天秤に掛ければ、訓練生の彼らは後者を選ぶのだ。
一人前のハンターならご法度な決まりも、訓練生ならば破っても大

きな問題にはならない。一人前だからこその自由もあれば、訓練生だからこその自由もあるのだ。
「シグマッ！　こっちは準備完了だよッ！」
数に物を言わせてシグマ達は次第に劣勢になっていた。クリュウの言葉に三人はすぐさま後退する。ランポス達は逃げる獲物を追って、群れを成して突撃して来る。
シグマ達が前衛の陰に隠れるのを確認し、クリュウは迫り来るランポス達を見詰める。
「まだですッ！　弾や矢の威力を最大にする為には、もっと引き付けて下さいッ！」
迫り来るランポスの群れに焦る気持ちを何とか押さえ込み、冷静に戦局を見極める。本人は否定しているが、彼はリーダーとしての素質を十分に持っているのだ。
そして、前衛とランポスの大群との距離がなくなり掛けた刹那、
「撃てぇッ！」
クリュウの指示に合わせて後衛のガンナーから一斉に弾と矢が放たれた。一斉に放たれた矢や弾は外れも多いが、その大部分は見事にランポスの前衛に命中。次々に急停止し、ランポス達の動きが乱れる。ガンナーはそこへさらなる連続射撃を行う。
ガンナーからの集中砲火に乱れるランポス達に向かって、前衛の剣士達が一斉に襲い掛かる。大剣の強力な薙ぎ払いやハンマーの叩き潰し、ランスの突き、ガンランスの砲撃。先程までの劣勢はあっという間に逆転した。
暴れ回る前衛の中にはシャルルの姿もある。彼女は「うりゃあああああぁぁぁぁぁぁッ！」と気合の入った声と共にサイクロプスハンマーを振り回している。他のハンター達も彼女に負けじと様々な攻撃を繰り出す。
しかし、そんな前衛の攻撃の間や彼らを飛び越えてランポス達が十匹程度突破してしまった。だが、このような事態もちゃんと想定済み。クリュウの布陣に抜かりはない。迫り来るランポスに向かってクリュウを先頭に中衛部隊が襲い掛かる。前衛は主に機動力に劣る、

攻撃力が高いなどの武器を集中させ、中衛には機動力のある武器を集めている。攻撃力は低いが、壁のようにハンター達は展開して彼らの攻撃を後衛に向かわせないようにする。
前衛と中衛が必死に戦闘を行う中、後衛のガンナー部隊は休まずに弾や矢を撃ち続ける。とにかく撃ちまくる生徒もいれば、クードやルフィールのように正確な射撃を行う者もいる。しかし、それらの攻撃は確実にランポスの数を減らしている。
そして戦闘開始から数分後、一匹のランポスが身を翻した事で残るランポスが慌てて逃げ出した。その数は八匹。クリュウ達の猛反撃により部隊の大部分を失ってしまったようだ。
あっさり引き上げていくランポス達に呆けている生徒達。そんな中、真っ先に勝利という事実に身を震わせる生徒がいた。
「シャル達の勝利っすよおおおぉぉぉッ！」
シャルルの歓喜の声を合図に、生徒達の歓喜の声が爆発した。そこかしこで男女、年齢、クラスなど関係なく互いの奮闘を称え合う。2年生は初の実戦での勝利に興奮しっぱなしのようだ。
だが、もちろん犠牲は出てしまった。数人の生徒が怪我を負い、他の生徒達によって手当てを受けている。幸い、どれも軽い怪我で済んだ。
数人を見張りに立て、激戦を制した生徒達はぐったりとその場に腰掛ける。その中には中衛部隊の先陣を切って二匹のランポスを葬ったクリュウもいる。
「先輩ッ！」
後衛としてクリュウの周りに群がるランポスを集中的に射抜いていたルフィール。疲れ切ったように木に寄り掛かりながら座っているクリュウを見て慌てたように駆け寄る。怪我をしているのではないかと心配したが、どうやらただ疲れているだけで怪我はしていないようだった。
「先輩、大丈夫ですか？」
「僕は大丈夫だよ。それよりルフィールは大丈夫？」
「先輩に守ってもらったので、怪我一つしていません」

「そっか。良かった……」
　クリュウはほっとしたように安堵の息を漏らした。自分の事よりも仲間の事を心配するとは、何とも彼らしい。その優しさが、自分のような人々を集めるのだろう。
「立てますか？」
「立てるには立てるけど、疲れちゃって」
　そう言って、クリュウは困ったような笑みを浮かべた。そりゃランポスの群れの中で奮闘したのだから、疲れて当然だ。何せこれだけの混戦は狩猟学でも珍しいくらいなのだから。
　ルフィールはそっと彼の隣に腰を下ろすと、見事な勝利をした事で盛り上がる生徒達を見詰める。クリュウの策や指揮あってこその勝利だと言うのに、誰もが皆自分達の勝利と思い込んでいる。正直、あまりいい気持ちはしない。
「己の力量も弁えない愚か者どもですね、あの方々は」
「ルフィール。そういう事言わないの」
「だって……」
「勝ちは勝ちさ。僕達もみんなと同じように喜ぼうよ」
「……まったく、あなたという人は」
　苦笑しながらも、ルフィールは彼の事を心から誇りに思えた。こんなすばらしい人と一緒の隊にいられる。これほど名誉な事はない。例え彼の実力を皆が認めなくても、自分だけは彼の事を信じて認めたい。
「やっぱり、先輩はすごいです」
「そんな事ないよ。学年首席の君には全く敵わないって」
「勉強なんて、努力していれば誰でもできるようになります」
「その努力がみんなできないからこそ、できるルフィールがすごいんだよ」
　クリュウの言葉に照れたのか、「そ、そうでしょうか？」と少しだけ頬を赤らめて首を傾げる。
「――僕なんて、まだまだだよ」
　そう言って空を見上げた彼の横顔は、いつになくどこか寂しげな雰

囲気を纏っていた。一体どうしたのだろうと声を掛けようとした刹那、
「兄者ぁッ！」
手をブンブンと大きく振りながら満面の笑みを浮かべこちらに走って来るシャルル。ルフィールはいつものように無愛想な顔つきになると、クリュウから少し離れる。そんな彼女に小さく苦笑しながら、クリュウは駆け寄って来るシャルルに声を掛けた。
「大活躍だったねシャルル。すごいよ」
「えへへ、そうっすか？」
駆け寄って来た早々にクリュウにほめられ、シャルルは嬉しそうにはにかんだ。この何事においても真っ直ぐというか素直な彼女の性格は、少しだけうらやましいとルフィールは思った。単純バカな所はいらないが。
「兄者もかっこ良かったっすよ！」
「あはは、ありがとう」
ニャハッと屈託のない笑みを浮かべるシャルル。表裏のない性格だからこその純粋なその笑顔は、同じ女の子から見てもとてもかわいらしいと思う。表裏全開の自分にはできない芸当。ルフィールはちょっとだけ落ち込んだ。
「皆さんご無事で何よりです」
そう言っていつもと同じニコニコとした笑みを浮かべながら歩み寄って来たのはクード。先程までの死闘など最初からなかったかのように平然としている彼には、感心半分呆れ半分といった所か。
「クードも無事で良かったよ。的確な援護、ありがとうね」
「いえいえ。私もスコープからクリュウの活躍を見ていましたが、とてもかわいらしかったですよ」
「……スコープによる邪な盗撮か、男の僕に対する間違ったほめ言葉か。どちらを先にツッコミを入れればいい？」
相変わらず天然なのか計算しているのかわからない彼の発言に振り回されつつも、やっと日常を取り戻してほっと胸を撫で下ろすクリュウ。すると、そんな彼らに近づく一団があった。シグマを先頭に

したチームだ。自然とクリュウとルフィールは立ち上がった。
「よぉ、全員無事のようだな」
「シグマの方こそ。一時とはいえランポス全匹を相手にしてたけど、大丈夫なの？」
「ケッ、ランポスの三〇匹や一〇〇匹。俺の敵じゃねぇっての」
「さすが先輩ですッ！」
　先程見事な閃光玉の投擲を行ったかわいらしい女の子のような外見をした少年、エルがキラキラとした瞳でシグマを見詰めている。その横では弓使いの美少女フェニス、ガンランス使いの長身の少年シルトがエルを微笑みながら見詰めている。
「おっと、俺の仲間を紹介しないとな。この掴み所のない女がフェニス・レキシントン6年生。俺やアリアとは幼なじみで、ずっと俺の相棒をしてくれてる頼もしい奴だ」
「あら。素直じゃないシグマにしてはずいぶんと嬉しい事を言うじゃない」
　シグマは嬉しそうに笑うフェニスを無視し、今度はシルトの方を向いた。視線が合ったシルトは胸を突き出して頼もしげに仁王立ちする。
「こいつはシルト・ランドルフ5年生。特に紹介する程の奴じゃない」
「そりゃひどいですぜ委員長……」
　シグマの容赦ない言葉にシルトは結構傷ついた様子。だがまぁ、先程の戦いを見てもかなりの実力者である事はわかるので、ハンターとしては頼りになりそうな男だ。
「そしてこの男だか女だかわからない点ではルナリーフと同じ子供がエル・アラメイン2年生だ」
「エル・アラメインです！　よろしくお願いしますルナリーフ先輩！」
「……まず君はシグマに対して怒っても構わないんだからね？　あと、なぜ僕をそんな仲間を見るような目で見るの？」
　かなり適当ではあったが、シグマのチームメイトを紹介されたクリュウ達。一応クリュウも自らとその仲間達を改めて紹介した。同じクラスメイトだからこそ、仲良くしておきたかった。

「そして、この子がルフィール・ケーニッヒ４年生。学科では校内首席を見事に取った秀才だよ」
　最後にクリュウはルフィールを紹介した。ルフィールはいつものように無表情のまま四人と対峙し、無言のまま一礼した。顔を上げるとフェニスは「よろしくね」と微笑み、シルトは「よろしくな」と気さくに声を掛けてきた。しかしエルは彼女のイビルアイに少し恐怖を感じているのか、シグマの陰に隠れて「よ、よろしくお願いします……」と小さな声で応えた。そして、シグマは……
「ケーニッヒ。もしテメェの目の事でギャーギャー言ったりするような奴がいたら遠慮なく俺に言え。俺が容赦なくぶっ飛ばしてやる。この何十倍の威力でな」
　そう言ってシグマは自分の背後に隠れるエルの頭を小突いた。
「いたッ!?　な、何するんですか先輩ッ!?」
「うるせぇ。同じクラスメイトに対して怯えんじゃねぇ」
「べ、別に怯えてなんて……」
「だったらシャキッとしやがれ！」
　シグマはグイッとエルの腕を掴むと、そのまま勢い良く前に突き出した。だが、小柄な体格のエルはその馬鹿力を相殺するだけの力はなく、エルはつんのめりながらルフィールの成長途中（と願いたい）の胸に飛び込んでしまった。
「ひゃッ!?」
　クリュウと二人きりの時以外はほとんど表情を変えないルフィールだが、さすがにこれには驚いたような反応をした後、カァッと顔を赤らめた。
「ご、ごめんなさいッ！」
　一方のエルも顔を真っ赤にして慌ててルフィールから離れた。距離を置いた二人はどちらも沈黙を続け、自然と二人の間だけではなく場の空気全体が気まずいものに変わっていく。
「ご、ごめんなさい……」
　エルは今にも泣き出しそうな顔になってルフィールを上目遣いで見詰める。そんな彼に必死に見詰められるルフィールは何とも言え

ない罪悪感を感じていた。これではまるで自分がか弱い彼をいじめているみたいではないか。
　ルフィールはとっさに胸を守っていた腕を下ろすと、くるりと彼に背を向けた。その行動にエルは完全に彼女を怒らせてしまったのだと思い、泣き出す寸前。そんな彼に背を向けたまま、ルフィールは言った。
「人間万事、塞翁（さいおう）が馬。気にしなくてもいい」
「人間バンジー最高？」
　エルの盛大な聞き間違えには、さすがのルフィールもつい吹いてしまった。驚くエルに振り返り、彼女は小さな笑みを浮かべながらそのことわざの意味を教えた。
「人間万事塞翁が馬。人生の何事においても幸福不幸は予測できない。だから、その事にいちいち一喜一憂する必要はない。東方大陸のことわざの一つよ」
「えっと……」
「だから、別に気にしてくてもいいって事」
　そう言って、ルフィールはクリュウの背後に隠れるように移動した。皆からは見えない位置で、彼女は顔を赤く染めていた。突然のことわざは、素直じゃない彼女らしい照れ隠しだったのだろう。それをわかっているのは、きっと彼女に防具の裾を握られているクリュウだけだろう。
「うたく、これだから頭が無駄にいい奴は難しくて困るぜ」
　実技では圧倒的な実力を誇るシグマだが、学科においてはシャルルほどではないが真ん中くらいの成績であるシグマには難しい話だったのだろう。そんな彼女を見て、校内学科７位のフェニスと１８位のシルトは小さく苦笑いしていた。
　一方、突然難しいことわざを投げ掛けられ呆然としていたエルだったが、いつの間にかクリュウの背後に隠れたルフィールをキラキラとした瞳で見つめていた。それはシグマに向けている時と同じ、尊敬のまなざし。
「ケーニッヒ先輩はすごいですねッ！」

突然名を呼ばれ、ルフィールはクリュウの背後でビクリと震えた。しかしそれは表情には出さず、彼からのその熱い視線にプイッをそっぽを向く。そんな冷たい対応をされたのに、エルの尊敬のまなざしは止まらない。
「あら、すっかりエルに気に入られたみたいね」
フェニスは楽しそうに微笑んでいる。同じ笑みでも腹の底の知れないクードとは違って、その笑顔は純粋にこの流れを楽しんでいるように見える。もちろん、その楽しいというのもクードのような厄介なものでは決してない。
「委員長。幸い歩けないような負傷者はいないようですぜ」
「そうか。それは良かった……」
「それと、委員長にお客ですぜ」
苦笑するシルトの背後から現れたのは、アリアであった。背後にはレナとシア、ディアの三人も控えている。
「アリアか」
「シグマ。相変わらずあなたは無茶苦茶な方のようですわね」
「あぁん？」
「……聞きましたわ。私のクラスの生徒がランポスの大群に襲われて、それをあなた方が助けたと。怒涛の攻撃でランポスの群れを生徒達が密集するエリアから追い出し、角笛で危険を知らせていたのでしょう？」
「フンッ。別に狙ってやった訳じゃねぇよ。偶然そういう形になっただけさ」
「――でもまぁ、結局は生徒が密集するエリアに誘導してしまったというのが、あなたらしいですけど」
「うぐッ……」
痛い所を突かれ、シグマはプイッとそっぽを向いた。その頬がほのかに赤らんでいるのは誰が見ても明らかだ。直接は見ていなくても、長い付き合いで彼女の行動パターンを理解しているアリアは小さく口元に笑みを浮かべた。
「何はともあれ、結果的には私のクラスの生徒も助けてくれた。その

点には感謝していますわ――ありがとう」
「……ケッ、テメェに礼を言われると虫唾が走るわ」
シグマの素直でない言葉もしっかりと理解し、アリアは踵を返す。と思いきや、今度は今まで話の流れを傍観していたクリュウに歩み寄った。
「あなたにも感謝していますわ」
「別に僕は何もしてないよ」
「笑えないウソはやめてほしいですわね。あなたの見事な指揮が、自分達を救ってくれたと生徒達からいくつも報告が入っていますわよ」
「あ、あれはシグマの指示を代弁しただけで……」
「笑えないウソはやめてほしいと言ったはずですわよ？　見敵必戦、猪突猛進なシグマにそんな頭脳戦ができるとでも？」
「あ、あはははは……」
笑って誤魔化すが、もちろんそんな事では誤魔化し切れないのは百も承知。アリアはそんなクリュウに小さく口元に笑みを浮かべると、スッと彼の横を通り抜ける。
「――ありがとう」
そう言い残し、アリアはクリュウ達から離れた。レナとシア、ディアの三人も慌てて彼女の後を追う。そんな彼らの後姿を見送り、クリュウは小さく笑みを浮かべた。
完全勝利。とまでは行かなくても、圧勝と言ってもいいくらいな勝利をした生徒達は有頂天であった。シグマの腹心とも言うべき生徒達は見張りに徹しているが、その表情もどこかほっとしているように見える――そして、その心の隙に奴は現れた。
「ギャオワッ！　ギャオワッ！」
その声に見張りの生徒の一人がハッとなって声のした方向を見ると、森の木々の中から一匹のランポスが現れた。だがそれは普通のランポスよりも一回りも二回りも大きい。何より、頭に生えた血のように真っ赤なトサカがそれが普通のランポスとは違う事を表していた。
そして、生徒はその姿を授業でしっかりと頭に記憶しており、悲鳴のようにその名を叫んだ。

「ど、ドスランポスだぁッ！」
　その悲鳴に生徒達は一斉に振り返る。そしてドスランポスの姿を確認するとさっきまでの笑みは消え、皆が絶望に顔を真っ青に染めた。誰かの悲鳴を引き金に、生徒達は一斉に悲鳴を上げながら逃げ惑い始める。さらに追い討ちを掛けるように、ドスランポスの後ろからランポスが八匹現れた。どうやらさっき逃げたランポスが親玉を呼んだらしい。
　逃げ惑う生徒達を見詰めながら、シグマは盛大に舌打ちした。
「大型モンスターはいないって話だっただろうがッ！」
「皆さんッ！　落ち着いて行動しなさいッ！」
　アリアの指示も聞かず、生徒達は我先とエリア外に脱しようとする。だが、ドスランポスは知能型のモンスター。それも計算の内だったのだろう。二ヶ所ある別エリアに繋がる道に突如として五匹ずつランポスが現れてその道を塞いでしまった。
　退路を断たれた生徒達の混乱はさらに激しくなる。クリュウもまたこの絶望的な状況に唇を噛んだ。
　そんな中、ドスランポスに正面から向かい合う生徒達がいた。それはアリアのクラスに属する屈強な男四人で編成された隊だ。その強大な筋力に物を言わせたそれぞれの武器は大剣、ハンマー、ランス、ガンランスという重量武器ばかり。
「ここは俺達で守り切るぞッ！」
『うおっすッ！』
　四人の生徒は一斉にドスランポスに向かって襲い掛かる。だが、ドスランポスは冷静にそれを見極めて後退し、逆に部下のランポスに襲わせた。小さくて動きの素早い小型モンスターに対し、彼らの武器はあまりにも機動力に欠けていた。あっという間に翻弄され、各個分断される。そこへドスランポスが前進し、大剣使いの男に襲い掛かった。
「ギャァッ！」
「ふぬッ！」
　間一髪、大剣自体を盾のように構えて事なきを得たが、人間よりも

力強い筋力を持つドスランポスと男の力は拮抗する。それは何とも熱い戦いだ。だが、いつまでも傍観している訳にはいかない。
「俺達も行くぞッ！」
シグマが一番に突進し、それに続いてフェニス、シルト、アリアの臨時四人部隊が突っ込む。他のメンバーは逃げ惑う生徒達の統制に走った。そして、クリュウ達は道を塞ぐランポスに向かって走り出す。が、
「ギャアッ！　ギャアァッ！」
突然の後ろからの鳴き声に振り返ると、森の中からランポスが三匹現れた。それだけではない。あちこちから次々にランポス達が現れ、その数は三〇匹近くにも及んだ。
「な、何だよこれ……ッ！」
クリュウは歯軋りをしながらルーキーナイフを構えた。それを見てシャルルもサイクロプスハンマーを、ディアはボーンシューターを、ルフィールはハンターボウ1をそれぞれ構える。そして、四人は背を合わせるように円陣を組んだ。
「いいね？　絶対にみんなから離れないで。各個撃破されたら、それこそおしまいだから」
「うっすッ」
「わかりました」
「了解です」
四人は無数に現れたランポス達に包囲されるのを肌で感じながらも絶望はしていなかった。頼れる仲間達に自分の背を預けられる。つまり、自分が担当するのは自身の正面だけ。あとは、他の仲間がやってくれる。
自らの背を預け、自らの全力は真っ直ぐ前に向ける事ができる。それが――
「チームって奴さ」
その声に驚いて振り返ると、そこには好戦的な笑みを浮かべたフリードが威風堂々と立っていた。
「ふ、フリード先生ッ!?」

「おう、ルナリーフ。無事か？」
「は、はいッ」
「そうか。それじゃ、こっからは情報を間違えてた俺達教官が汚名挽回といくか」
そう言ってフリードは背負った巨剣タツジンブレイドに手を掛けた。その圧倒的なまでの迫力と威圧感は、生徒達のそれとは比べ物にならない。真に死線を幾度も潜り抜けて来たからこその絶対的な気。その気の前ではクリュウ達も息を呑むしかない。ルフィールもまた正しくは《汚名挽回》ではなく《汚名返上》、もしくは《名誉挽回》であるという秀才ツッコミを入れる事もできなかった。
現れたのは何もフリードだけではない。いつの間にかエリアにはクロード、シャニィ、ヴィレールの三人も現れていた。教官達の登場に、生徒達の混乱も止まっている。
「それじゃ、教官の力を存分と見ていろ」
そう言い残し、フリードは走り出した。それを合図に他の三人も一斉に行動を開始する。
生徒達に見守られながら、フリード達の桁違いの戦いが始まった……
――フリード達の一方的な戦いとなった戦闘はあっという間に終わった。残されたのは二十匹を超えるランポスとドスランポスの死骸。すでに生き残ったランポス達は逃げ出しており、エリアは平和を取り戻しつつあった。
フリードはタツジンブレイドを盛大にブンッと振り回して刃に付いた血を吹き飛ばすと、背負い直す。ヴィレールもまた血に汚れたプロミレンスランスを一振るいして血を吹き飛ばしてから背に戻した。
今回の戦いでほぼ全ランポスとドスランポスを仕留めたのはこの二人だ。クロードとシャニィは二人が戦闘を行っている間に生徒達を一ヶ所に集めたり生徒に襲い掛かろうとするランポスを駆除するなど裏方に徹していた。
クロードの指示でシグマ達と共に先程自分達がピッケルを振るっていた崖の下に集められたクリュウ達。彼の手に握られているのは

クリュウと同じルーキーナイフ――ではなく、同じ形状をしているものの切れ味も攻撃力も桁違いに高く、麻痺属性も加わった武器、タツジンソード。生徒達に近づいてきた二匹のランポスを葬った刃には、血がベットリと付着しており、一度振って血を落としてから腰に戻した。

同じ片手剣使いでも、自分と彼との間には確実に力と経験の差があると感じたクリュウ。いずれ自分も、彼のような片手剣使いになれるだろうか。そんな事をふと思った。

フリードとヴィレールの活躍によってランポスは壊滅し、クロードもフッと肩に入れていた力を抜いた。それを見て、生徒達の緊張もまた必要最低限だけを残して過剰な分は抜ける。そこかしこでざわざわと雑談が始まり、ハートショットボウ2を背に戻したばかりのシャニィには男女問わず多くの生徒が集まっている。さすが人気者だ。もちろん、アリアやシグマ、クードの周りにも生徒達が集まる。

そんな中、クリュウはクロードの行動をじっと見詰めていた。クロードは自らが倒したランポスの前に腰を下ろすと、そっとその場で手を合わせた。

「クロード先生？」

クロードはそうしてしばし黙祷を捧ぐと、腰から剥ぎ取り用ナイフを引き抜いてランポスの解体を始めた。皮や鱗を剥ぎ取り、残った部分は自然に返す。そうして素材を袋に入れ、ナイフを持ったまま次のランポスの亡骸に向かう。そんな事を数度繰り返し、幾分か膨らんだ素材袋を腰に下げて戻って来たクロード。じっと彼を見詰めていると、ふとこちらを向いた彼の視線と目が合った。

「何ですか？」

「あ、いえ。今何をしていらしたのかと思って……」

クリュウの言葉にクロードは「あぁ……」と納得すると、多少ズレていた細メガネをクイッと上げて小さく笑みを浮かべた。その笑顔は、慈愛に満ち溢れたとても優しげなもの。

「ランポスだって命を持つ者です。その命を奪ったからには、彼らの冥福を祈らなければなりません。今のはそういう想いを込めて黙祷

を捧げ、そして残された亡骸をできる限り使う。僕なりの冥福を祈る方法なのですよ」
「モンスターの冥福を、ですか？」
　クリュウは小さく首を傾げた。いまいち彼の言っている事が理解できないのだ。そんな考え方をした事もなければ、そんな考え方を教わった事もない。クリュウが理解できていないのを見て、クロードも少し言い方を変えてみた。
「例えば、肉を食べる為には動物やモンスターを殺さないといけません。野菜を食べる為には、これも植物を殺さないといけません。我々の食事は全てそれらの生き物の命を糧としているのですよ。思い出してみてください。食事をする前に行う《いただきます》というのも、元々は自分達の為に殺されて自分達の栄養となる生き物全てへの感謝とその冥福を祈るものが起源なのです」
「そ、そうなんですか」
　料理は得意でも、その料理に纏（まつ）わる話とか豆知識なんかは人並みでしかないクリュウは純粋にクロードの説明に感動していた。そんな彼を見て笑みを浮かべるクロード。
「狩りだって、本来は失われなくても良い命が失われてしまう。我々ハンターは、その失われなくても良い命を奪うのが仕事です。ですから、私はこうして自らが奪った命は、気持ちを込めて成仏してもらいたいと考えています。これらの行為で本当にそんな事ができるかはわかりませんが、何もしないよりはマシじゃないですか」
　クロードの言葉に、クリュウは自然とうなずいていた。
　確かに彼の言うとおり、自分達ハンターは仕事とはいえモンスターの命を奪う。その命が、せめて無事に成仏してくれるというのなら、生き物を殺すという多少なりとも感じる罪悪感が消えるかもしれない。モンスターの為でもあり、自分の為でもある。彼の行動は、そんなものの表れなのだろう。
「先生はすごい人ですね」
　自然と出たその言葉は本心からのものであった。そんなクリュウの言葉にクロードはフッと口元に笑みを浮かべる。

「君は良いハンターになれますよ」
「え？　そ、そうですか？」
「《ハンターは殺戮者ではない。ハンターは自然との共存者である》。これは私の師匠の言葉です。倒したモンスターの冥福を祈るというのも、その師匠の教えなのです」
「先生の師匠、ですか？」
「相手を傷つけるという事は、その痛みを理解する事が必要です。それがなければ、それはただの殺戮者でしかありません。あなたは、その《痛み》をちゃんと理解しています。それが、良いハンターになるとても大切な条件なのです」
「痛み、ですか」
　クリュウはクロードの言う言葉を何となくは理解していたが、具体的には良くわからなかった。そんな彼の反応を見て「全てがわからなくても、今は欠片で十分です。いずれ全てを理解した時、本当のハンターになれますよ」と言い残すと、クロードはフリード達の所へ去った。
　残されたクリュウはしばし胸に手を当てながらその場に立ち尽くしていた。そんな彼をルフィールが少し離れた場所から心配そうに見詰めていた事に、彼は気づいていなかった。
　結局、ドスランポスやランポスの大群に襲われた事で狩猟学は中止となってしまった。もちろん、両クラスの壮絶な得点争いも、今回はお預けだ。
　今回の事件はどうやら街側に監視ミスがあったらしく、ドスランポスとランポスの群れを見落としていたらしい。しかしさらに事前に学校側関係者が確認調査を行っていたのだが、そこでも見落としがあったらしく、今回は双方の単純なミスが重なってしまった事で起きてしまった。
　幸い、怪我人は出たものの皆軽傷で済み、生徒達は無事に学校に戻る事ができた。

第９４話　ルフィールの涙　悲しきイビルアイの宿命

問題となった狩猟学から数日後の夜、学校区画の中にある石造りの大きな建物。それは生徒会館と呼ばれており授業のない生徒がスポーツを楽しんだり様々なスポーツ大会、生徒総会などが開かれる場所であり、全校生徒を余裕で収納するに十分な大きさを持っている校内最大規模の建物だ。

そんな生徒会館には大勢の生徒達が集まっていた。しかし球技大会をするでも堅苦しい生徒総会を開くでもない雰囲気。会場には端から端までを長いテーブルが数列もあり、そこには豪華な料理などが並んでいる。それを囲んでいる生徒達は皆一様に笑顔であり、とても楽しげな雰囲気に包まれていた。ちなみに会場の端に椅子は用意されているが、基本的に立食である。

実は今日はこのドンドルマハンター養成訓練学校の創立記念日。その為今日は授業は全て休みであり、生徒達はドンドルマの街に遊びに出たり寮でゆっくりしたりとそれぞれの休日を楽しんだ。そして夜はこうして大規模なパーティーが開かれ、生徒達は豪華で美味な料理や様々な飲物（酒は禁止）を肴（さかな）に仲間達との会話を楽しんでいる。まぁ、中には仲間との会話を肴に料理を食べまくる生徒もいるが。

学校と言いつつも制服などない服装自由な為、普段から私服を着ている生徒達。だが今日は特別な日とあって皆自分の持てる服の中でも選りすぐりの上等な服を着ている。程度に違いはあれど、皆いつもより華やかだ。

生徒達は皆基本的にクラスごとに集まって食事をしているが、厳格な定義はなく同郷の出身者や元クラスメイト、中には恋人同士などクラス関係なく楽しんでいる者も少なくない。

そんな中、いつものように皆の輪から離れて隅っこの方にクリュウとルフィールは陣取っていた。

ちなみに今日のクリュウは全身黒いスーツに白いワイシャツ、赤色の紐ネクタイという格好。始業式や終業式、そしてこのようなパーティーの時限定に着る彼の持つ服の中で一番高価でかっこいい服装だ。

一方のルフィールはフワフワのフリルたっぷりの真っ白なドレスを着ている。頭にはフリルと花飾りをあしらったカチューシャで飾り立て、髪もいつものザザミ結びではなく後ろで白いリボンで結ったポニーテール。少しだけお化粧をした顔にはいつもの細メガネは掛けられてはいない。軽度の近視なので授業でなければなくてもあまり不自由しないのだが、光の角度によってはイビルアイを隠す為、彼女はいつも細メガネを愛用している。しかし今回は服装に合わせて珍しく外していた。

いつになくオシャレな格好をしているルフィール。例年ならこんな格好するどころか部屋に閉じこもっていた彼女だが、今年は特別だ。

先程彼にこの格好を見せたら「かわいいよ」と言われて有頂天になっていたが、今はいつもの冷静さを取り戻している。

他のメンバーはと言うとクードは女生徒達に捕まり、シャルルもクラス関係なく集まった友人達と一緒にいる。必然的に残されるのはこの二人であった。

クリュウ自身も元クラスメイト達からのお誘いはあったが、寂しげな笑みを浮かべながら「いいですよ。ボクの事は気にしないでください」と言って見送るルフィールを見てその誘いを断ると彼女と一緒にいる方を選んだ。

わかっていた事だが、ルフィールには友達と呼べる存在がクリュウ達以外には全くいない。イビルアイという他の人と瞳の色が違うだけ、たったそれだけでずっと迫害されていたのだ。今でこそこうして自分が一緒にいるが、それまではきっとずっと一人だったのだろう。去年までの創立記念日だって、きっと部屋でずっと一人でいたに違いない。そう思うと、今更ながら悲しくなってしまう。

せめて、自分が卒業するまでの間は彼女の傍にいて幸せにしてあげ

たい。究極のお人好しである彼らしい思いだ。
「……先輩」
「うん？」
「別にボクの為に無理はしなくてもいいですよ。先輩もシャルル先輩のようにお友達と楽しんでください。ボクは大丈夫ですから」
　どこか力ない笑みを浮かべながらハチミツ入りホットミルクを両手で抱えるように持つルフィールが言った。どっからどう見ても無理をしているのは丸わかりだ。本当はそんな事は嫌なのに、相手の事を想って自らを犠牲にする。彼女らしいというか、どこか自分に似ている気がしてクリュウはフッと微笑む。
「いいの。僕はルフィールと一緒で十分楽しいから」
「でも、お友達は大切にするべきだと思います」
「それを言うならルフィールだって大切な友達だよ」
「先輩……」
　ルフィールはクリュウの言葉に嬉しそうに微笑むと、うるんだ瞳をハンカチで拭った。そんなルフィールの頭にクリュウはポンと手を置くと、そっとその柔らかな髪を撫でる。
「泣く事ないでしょ」
「泣いてなんかいません……」
「素直じゃないね君は」
　おかしそうに笑いながら、クリュウは彼女の頭を撫で続ける。ルフィールはそんな彼にプイッとそっぽを向けてしまう。ただその頬はほのかに赤らんでおり、きっと二人っきりの時なら彼に抱きついてしまうほど嬉しいのだろう。
「あ、あの料理取って来ますね。先輩の分も任せてくださいッ」
　これ以上優しくされると本当に皆の前だと言うのにデレてしまいそうになり、ルフィールは慌ててそう言うと小走りに彼から離れた。皿を二枚取り、バイキング形式で並んでいるおいしそうな料理に近寄る。すると、それまでテーブルの近くで楽しく談笑していた生徒達が彼女に気づいて口を閉ざした。それは波紋のように辺りに伝わり、彼女の周りから笑顔が消えた。

空気が変わった事は彼女自身が一番良くわかっている。皆の冷たい視線に今にも逃げ出しそうになるが、グッと堪えて前進を続ける。彼の分も持って行くと決めた以上、何が何でもそれだけは成し遂げないとならない。

ローストビーフを見つけ、早速取ろうとトングに手を伸ばす。だが、指先がそれに届く寸前で横から伸びた手によってそれは取られてしまった。横を見ると、見知らぬ女生徒が数人こちらを向いたまま立っていた。先頭に立つ縦ロールの少女がトングを片手にカチカチと鳴らしながら人を小バカにしたような笑みを浮かべる。

「あなたに差し上げる料理はないわ」

彼女の言葉に後ろの女生徒達も加勢に加わる。周りを見回すが、もちろん誰も助けてはくれない。こういう場合は無視するのが一番と今までの経験でわかっているルフィールはプイッと反転する。だが、そんな彼女の行き先を縦ロールの背後にいた女生徒達が塞いでしまう。

ルフィールの周りに女生徒達の円陣が組まれ、彼女の退路を塞いでしまった。

ニヤニヤとこちらを見詰めて来る女生徒達を一瞥し、おそらくこの中のリーダー格と思われる縦ロールの方に向き直る。縦ロールは相変わらず人を小バカにしたような笑みを浮かべ続けている。

「……ボクに何の用ですか？」

「別に用なんてないわよ」

「だったら邪魔しないでくれますか？」

冷静に返すルフィールの言葉に対し、縦ロールの表情が不機嫌そうに歪む。

「下級生の、それもイビルアイの分際で上級生に歯向かうの？」

「別に、そんなつもりはありませんよ」

それから縦ロールからは言葉による嫌がらせが続いた。しかし悲しくもこういう事に慣れているルフィールはそれら全てを器用にスルーしている。縦ロールとルフィールとでは経験の差が違うのだ。

ルフィールに全て器用に受け流されてしまい、縦ロールはついに悪

口も出なくなってしまった。それを見極めたようにルフィールは「失礼します」と言ってその場を去る。周りを囲んでいた女生徒達は悔しそうに彼女を睨むが、ルフィールは気にしない。
　輪の中から脱し、ようやく解放され疲れたようにため息する――事件はその時起きた。
「そういえば、あの子いつも6年生の男子と一緒じゃない？」
「あぁ、あの女の子っぽい人の事？」
「物好きもいるものよね。顔はまあまあだけどそれってキモくない？」
「うわッ！　チョーキモイんですけど」
「あんな女の子しか一緒にいられないなんて、きっと童貞よ童貞」
「チョーキモーイッ！」
　キャハハハハッと下品に笑う女生徒達。それはどこにでもある女子が行う普通会話と言ってもいいくらいの定番。しかし、女子の中で育った事がない為にそんな免疫などない。何よりも自分を救ってくれた大切な存在であるクリュウを冒涜するような発言は、絶対に許せなかった――この瞬間、いつもは冷静沈着な彼女の中で何かがキレた。
「先輩の事を悪く言うなッ！」
　突然の怒号に女生徒達が驚いて振り返ると、そこには激昂したイビルアイの少女――ルフィールが立っていた。
　ルフィールは驚いて固まっている女生徒達に早歩きで迫ると、怒り狂ったように怒鳴る。
「ボクの事はどれだけバカにしても構わない。だけど、先輩の事を悪く言うのは絶対に許さないッ！」
　誰もが恐れる邪眼（イビルアイ）を鋭利な刃物のように鋭くし女生徒達を睨み付ける。女生徒達はそんなルフィールの眼光に一瞬呆けていたが、すぐに負けじと彼女を睨み返す。
「何よあんた。何キレてんの？」
「マジうざいんですけど～」
「バッカじゃないの？」

女生徒達はめんどくさそうにルフィールを睨み付ける。さっきまで何を言ってもどこ吹く風のようだったのに突然怒り出した彼女に戸惑っている者も少なくない。そんな彼女達を怒りの眼光で睨み付けるルフィール。
「先輩の悪口は、絶対に許さないから……ッ！」
怒りに震える彼女の言葉に縦ロールは何かに気づいたらしい。すぐに余裕たっぷりな、意地の悪い笑みを浮かべてルフィールに対峙する。
「あなた、あの男の事が好きなの？」
「……ッ!?」
突然の予想だにしない彼女の言葉にルフィールは顔を別の意味で赤く染めた。そんな彼女の反応を見て縦ロールは確信を得たようにさらに笑みを増す。
「好き、なのね」
「……そんな事、あなたには関係ない」
「ふーん。イビルアイのくせに生意気ね」
そう言って縦ロールは周りにいる女生徒達に一瞥を送る。すると、女生徒達は一斉に動き出してルフィールの腕や肩などを掴んで動きを封じた。
「何を……ッ!?」
「ちょっとこっちまで来てもらうわよ」
その頃、クリュウは一人で会場の中を歩いていた。いつまで待っても帰って来ないルフィールを探しているのだ。
「おっかしいなぁ」
彼女は料理を取りに行くと言っていた。しかし一番近いテーブルには彼女の姿はない。テーブルは複数あるが全て同じ料理が置かれているのでなくなりでもしない限りは別のテーブルに行く必要はない。そして彼らから一番近いテーブルには今の所空の皿は見当たらない。
クリュウは戸惑いながらも改めてルフィールの捜索を再開した。これがシャルルならどこかで道草を食っていると簡単に予想できる

し、友人の多い彼女なら心配する必要もないだろう。だがルフィールはまさにその対極に位置するような子なので心配は尽きない。
　そんな感じで一人ウロウロとしながら彼女の姿を探していると、そんな彼に近づく者がいた。
「ルナリーフ先輩ッ！」
　名前を呼ばれて振り返るとかわいらしい少女のような少年、エルが小走りで駆け寄って来た。彼もクリュウと同じようなスーツ姿だが、なぜだか男装したかわいい女の子というイメージが抜けない感じだ。その後ろからはフェニスが優雅な歩みで近寄って来る。彼女は白いフリルがかわいらしい桜色のドレスを着ている。全体的にかわいらしいイメージのドレスなのに、彼女が着るととても美しく見える。
「あら、クリュウ君じゃない。一人なの？」
　まだ会って間もない美少女にいきなり名前で呼ばれたクリュウは頬を赤らめて戸惑う。そんな彼の反応を見てフェニスは楽しそうに笑う。
「二人なら私とデートでもしましょうか？」
　――刹那、周りの男達から放たれた殺意の込もった無数の視線がクリュウの体を串刺しにした。冗談ではなくマジで命の危機を感じたクリュウは冷や汗ダラダラの状態でぎこちない笑みを浮かべながら「い、いえ。連れがいるので結構です」と断る。
　さすが学園の四大女神の一人、《水の女神》と称されるフェニス・レキシントン。その絶大な人気は計り知れない。ちなみに他の女神はその美しい容姿と絶大な信頼と人気を持つ《雷の女神》と称されるアリア・ヴィクトリア、意外かもしれないが容姿端麗で何より皆を引っ張る力強さと熱血魂が魅力のシグマ・デアフリンガーもまた《炎の女神》と称されている。
　そして、今だクリュウとは接点がないが四大女神の中でも一、二を争う人気を誇るのがＡクラス委員長にして現生徒会会長を務めるクリスティナ・エセックス。《氷の女神》と称されており、校内学科順位ではルフィールに唯一接戦しわずかな点差で２位。実技ではシグマと拮抗できるだけの力を持つ、正に文武両道に長けた少女だ。

四大女神のうち三人と交流があるクリュウはある意味おいしいのかもしれないが、本人はそういう気がほとんどないので意味を成さない。ちなみになぜクリュウが同学年の彼女に対して敬語を使うかと言うと、まだ慣れていないというのもそうだが彼女が自分よりも一つ年上だからというのが大きい。
「連れ？　一人じゃないの？」
「えぇ。ルフィールがどっか行っちゃって探してたんですけど」
「あぁ、あの弓使いの子ね」
ここで「イビルアイの子ね」と言わない辺りが彼女の優しさを感じる。フェニスは「私は見てないわね」と言ってから辺りを見回す。だがもちろん、すでにずっと探しているクリュウが発見できないのに見つかるわけもなく、フェニスは小さな笑みを浮かべた。
「いないみたいね」
「えぇ。本当どこ行っちゃったのか」
「あの、僕見ましたよ」
エルの自信なさげな声。一瞬そのまま素通りしかけたが、二人は驚いたように一斉に彼に振り返った。突然二人に視線を向けられてエルは一瞬ビクッと震える。
「それ、本当？」
「は、はい。先程数人の女子と一緒に外に出て行くのを見ました」
「ルフィールが？」
それはかなりおかしな話だ。こう言うのも何だが、彼女にはおそらく友達と呼べる存在は自分やシャルルを除けばいないはず。本人もそう言っていたので合っているだろう。だが、そんな彼女が数人の女子と一緒に外に出た――なぜだか、嫌な予感がする。
「それで、どこに向かったかわかる？」
「いえ。でも西側のドアから出て行ったのでそっちの方向かと」
「そっか。ありがとう」
クリュウは二人に礼を言うと、エルに教えられた西側の出口に走った。そんな彼の後姿をエルは首を傾げながら見送り、フェニスはいつになく真剣な表情で彼の姿が消えるまで見詰め続けた後、踵を返して

群衆の中に消えて行った。
「キャァッ！」
今まで掴まれていた腕を突然離されたかと思ったら、力強く突き飛ばされてルフィールはつんのめって倒れた。石畳で舗装された床に倒れたルフィールは身を起こして振り返る。月光をバックにして立つ女子生徒達の表情は暗くてわからないが、きっと意地の悪い笑みを浮かべているに違いない。
「ここがどこだかわかってるわよね？」
「……備品倉庫ですね」
「そう。ここには狩猟学で使う防具や武器、道具類をしまっておく倉庫よ。そしてここは夜には人気がない事で有名。しかも今日は創立記念パーティーがあるからさらにね――ここなら助けを呼んでも誰も来ないわよ」
その言葉を合図に、縦ロールの周りにいる女生徒達が一斉に動き出した。扉を閉めて退路を完全に封じると再びルフィールの腕や肩を捕まえて動きを封じる。もちろんルフィールだって抵抗はするが、数人掛かりで押さえられてしまってはどうしようもない。
「あなたは本当に生意気ね。イビルアイってだけでも嫌われ者なのに、そういう態度はムカつくわ」
ゆっくりと歩み寄りながら縦ロールはそう言うと、ルフィールのドレスの胸元を掴み――無言のまま一気に引き裂いた。
「……ッ!?」
「あら、かわいらしい下着ね」
破かれたドレスから顔を出したのはドレスと同じ純白のキャミソール。いつもは冷静で表情を変えないルフィールもこれには顔を真っ赤に染める。
「な、何を……ッ!?」
「でもあなたの格好って地味なのよね――私達がもっと良くしてあげるわ」
「や、やめて……ッ！」
ルフィールは必死になって抵抗するが、数人掛かりではその抵抗も

ほとんど意味を成さない。伸びる手が次々に彼女のドレスを掴んでは力強く引き裂いていく。女子の弱い力でも、貧弱なドレスは簡単に破けてしまう。ドレスと一緒にキャミソールまで引きちぎられ、一分もしないうちにルフィールは引き裂かれて所々真っ白な肌が露出するボロボロのドレス姿に変わり果ててしまった。胸元もキャミソールと一緒に引きちぎられてしまい、今は両腕で必死に隠している。

涙目になってキッと邪眼(イビルアイ)で睨み付けるが、彼女達だってその瞳に何らかの能力があるとは思っていないので余裕の表情で見詰め返す。

「うふふ、ずいぶんマシになったじゃない。イビルアイには相応しいわね」

楽しそうに笑いながら、縦ロールはルフィールから奪ったカチューシャを壊した。飾りつけの花は踏み潰され、見るも無残な姿に変わる。それを見詰め、ルフィールは唇を噛んだ。

せっかくこの日の為に、彼にかわいいと言われたくて勇気を出して片目を眼帯で塞いで街に出て洋服屋で買って来たドレス。実際、彼には「かわいいよ」と言われて気に入っていたドレス。なのに、今ではもうその見る影もないほどにボロボロになってしまった。

「何胸なんて隠してるのよ。隠すほどもないくせに」

「どうせペッタンコでしょ」

そう言って女生徒の一人がルフィールの両腕を掴んで引き剥がすと、もう一人の女生徒が隠されていた胸を見てニヤニヤと下品な笑みを浮かべる。

「本当にペッタンコじゃない。どれどれ？」

女生徒はルフィールのまだ膨らみ始めたばかりの胸を鷲掴みにした。その瞬間、ルフィールはビクッと震えてさらに顔を真っ赤にする。

「キャハハハッ！　何これまな板？　本当に凹凸ないじゃん」

「……くッ！」

「悔しかったら胸を大きくしてからにしな」

二人は散々罵倒してからルフィールから離れる。もはや隠す気力

もないのか、ルフィールは解放された腕をだらんと垂らしてうつむいた。視界の隅ではドレスの端を靴で踏まれているのが見えた。しかも何度もグリグリグリグリと踏みつけているので、ついに切れてしまった。するとその足は再び別の部分を踏みつけた。別の場所ではいつの間にか脱げてしまった真っ白のハイヒールがヒールの部分が折れた無残な形で転がっているのが見えた。

ドレスはもはやズタボロ。そして彼女自身の気力や誇りもズタボロにされてしまった。さっきまではすごく楽しくて仕方がなかったのに、今ではもうこんな状況。

――結局、イビルアイの自分が人並みの幸せを願ってはいけないという事なのだろうか。

自分は伝説の化け物と同じ瞳を持つ、普通の人とは違う。それが原因で今までずっと虐げられてきて、もはや慣れっこになっていた。以前の自分なら、この程度の事じゃ何も感じなかっただろう。だが、良くも悪くも自分は変わった。

――クリュウ・ルナリーフ。

彼と出会って、自分は変わった。

彼は自分を普通の女の子のように接してくれた。それはとても嬉しくて、何もなかった自分に希望をくれた。そんな彼が大好きで、ずっとずっと一緒にいたのだ。そんな彼に気に入られたくて、普通の女の子のような幸せを願い、こうして普通の女の子のようにオシャレをした――でも、イビルアイの自分にはそんな普通の事は認められないのだ。

悲しくて、涙が頬を流れた。

彼と出会わなければ、こんな悲しみを感じないで済んだだろう。でも、同時にそれは嬉しさも感じなかったはず。彼と出会えた事に一切の後悔はない。だけど――こんな無残な格好で、こんな辛いを思いをするなら、楽しい事はもういらない。どうせその後にはこうした絶望が待っているのだから。

今までがそうだったのに、自分は有頂天になってすっかりそれを忘れていた。

「……ボクは、幸せになっちゃいけないの？」
「はぁ？　何を言ってるのよ。イビルアイに幸せになる権利なんてある訳ないじゃない」
……やっぱり、そうなのだ。イビルアイの自分は、人並みの幸せを得る事すら許されない。
――そんな当然の事、今更思い出した。
もういい。何もかもがどうでも良くなった。このまま、以前のような何の感情も抱かない人形のような自分に戻って――
「ルフィールッ！」
閉められていたはずのドアが勢い良く開かれた。驚いて振り返る女生徒達に少し遅れながらルフィールもまた濁った瞳で見詰めた――その瞬間、彼女の瞳に光が戻った。
神秘的に光り輝く月光に照らされた彼は、どうしてこう自分が危機に陥っていると必ず駆けつけてくれるのか。一回目は初めて出会った時、そして今回。出会ってから二回、こうして彼は駆けつけてくれた。
ほろりと、頬に涙が流れる。
「……せん……ぱい……？」
ひどい姿になって涙目で自分を見詰めて来るルフィールを見て一瞬驚いたクリュウだったが、すぐに状況を理解して彼女を囲む女生徒達を睨み付ける。
「お前ら、何やってんだ？」
自分でも驚くくらいに低くて怖い声に、ルフィールがビクッと震えるのが見えた。自分ではわからないが、きっと今の自分は余程恐ろしい形相をしているのだろう――それほどまでに、憤激しているのだ。
突然のクリュウの乱入に驚いていた女生徒達だが、すぐに彼一人だけであるとわかるといつもの余裕を取り戻した。そして、ルフィールにも放った人の感情を逆なでするような声で彼を迎える。
「あら、誰かと思えばいつもこの子と一緒にいる人じゃない」
縦ロールは余裕たっぷりな表情でクリュウと対峙する。他の女生徒達はすぐにルフィールの周りに集まって彼女を包囲した。女子生

徒の間からこちらを見詰めるルフィールは怯えたような瞳をしている。その瞳を見て、クリュウは胸を痛めた。同時に、彼女をこうした女生徒達に激しい憎しみを抱く。こんな黒い感情が自分の中にあったなんて、自分の事なのにまるで他人の事のように驚く。
「一体何の用かしら？」
「……お前らが、ルフィールをそうしたのか？」
「生意気な下級生の、イビルアイに対して礼儀を教えただけよ。上級生に歯向かう下級生なんて信じられない事でしょ？」
「……そんなくだらない事でか？」
「くだらない？　バカじゃないのあんた？　あんたみたいな奴がいるから下級生に舐められるのよ。それに――」
縦ロールはルフィールに振り返ると、まるで道端に落ちているゴミでも見るような目でルフィールを見詰める。それは確実に、同じ人間を見る目ではなかった。
「イビルアイの扱いなんてこの程度で十分よ。こんな女、さっさと消えちゃえば――」
それ以上先を彼女はしゃべる事ができなかった。突然クリュウは彼女の胸元を掴むと容赦なく横にあった備品の詰まった木箱に投げ捨てたのだ。縦ロールは背中を強打して激しく咳き込む。それを見て女生徒達から余裕が消えた。
「先輩ッ!?」
「あんたよくも先輩をッ！」
好戦的な少女がクリュウに拳を振り上げて迫るが、クリュウはそれをギリギリで回避してがら空きになった脇腹に向かって拳を叩き込む。少女は悲鳴を上げて倒れると、激しく咳き込みながら悶える。
「どけ」
その氷のように冷たい怒りが込められた声に、ルフィールを囲んでいた少女達は一斉に彼に道を開いた。あまりの恐怖に泣き出す者もいる。クリュウは構わずルフィールに近寄る。
「せ、先輩後ろッ！」
ルフィールの悲鳴に振り返ると、少女の一人が箒（ほうき）を振り

上げて襲ってきた。クリュウはギリギリで回避するが、間に合わず右肩を激しく打たれた。一瞬顔をしかめるが、すぐに少女の箒を掴んで奪い取ると、がら空きの少女の腹に蹴りをぶち込み吹き飛ばす。少女は後方にいた二人の女生徒を巻き込んで倒れた。

クリュウは打たれた右肩を押さえながらルフィールに近寄ると、彼女の前に立って少女達と向かい合う。ルフィールはそんな彼の背中を呆けたように見上げる。

目の前の光景に、ルフィールは驚きを隠せなかった。あの温厚な性格をした彼が、女の子相手に容赦なく暴力を振るう姿が信じられなかった。彼の本気の怒りを見て、ルフィール自身怖くなっていたのだ。

「ルフィール」

だから、自分の名前を呼ばれて体が勝手にビクッと震えてしまった。そんな自分の反応を感じ取ったのか、彼はとても優しい声を掛けてくれた。

「――もう大丈夫だからね」

その言葉に、どれだけ救われた事か。

ルフィールは今にも泣きそうになりながら「はい……ッ」と小さな声で答えた。クリュウはそんな彼女の返事を聞いて一瞬だけ小さく口元に笑みを浮かべたが、すぐに再び険しい顔つきに戻って少女達と向き直る。

「僕の仲間をずいぶんとかわいがってくれたみたいだね」

「えぇ。それはもう全身全霊を込めてね」

立ち上がった縦ロールもまたクリュウと同じように憤激した様子。怒り狂った眼光でクリュウを睨み付けるが、クリュウもまた激怒する彼女達を睨み返す。こっちの方が今にも全員殴り倒したい衝動に駆られる程に激怒している。纏うオーラも彼の方が格段に恐ろしい。ルフィールはそんな彼に怯えながらも、自分の為にこんなにも怒ってくれる彼に心の底では感動していた。同時に、そんな事を考える自分の不謹慎さにも呆れてと、意外と忙しい。

「あなた、私が誰だかお分かり？」

「さぁ。お前みたいなクズ女をいちいち覚えていられるか」
クリュウに暴言を吐かれ、縦ロールのこめかみに青筋が立つ。そしてもはや余裕すらもなくなってヒステリックな声で今度は叫び出した。
「私はGクラスの副委員長よッ！　私に歯向かうって事は、Gクラス全体を相手にする事と同義なのよッ!?」
それは委員長の側近だからこその脅し文句だ。大抵の場合はそれで解決するのだろうが、今回はそんな姑息な手段は通じない。根が真っ直ぐだからこそ、クリュウにはそんな手は通じない。
「だからどうした。今ここでお前を殴って二度と僕やルフィールに逆らえなくすればいい事だ」
自分でも驚くくらいひどい言葉が次々に出て来る。憎悪とは、自分自身の本来の性格までも捻じ曲げてしまうらしい。だが、今はその方が都合が良かった。
「手を出せば、あなたに責任が行くわよ?」
「ルフィールに対する行為を見れば、どっちが悪者かはすぐにわかると思うけど?」
「ハッ。イビルアイがどうなろうと知ったこっちゃないわよ。どうせみんなイビルアイの方が悪いって思うに決まってるわ」
「……どこまでも根が腐った女だな」
ギリッと歯軋りし、真っ白になるくらいまで握り締めた拳はブルブルと震える。本気で、今すぐにでも彼女の顔面を殴り飛ばしたかった。そんな激昂を何とか理性で止めているが、そろそろ限界に達しつつあった。
縦ロールはそんな彼の姿を見て性根が腐り切った笑い声を上げる。世の中、これほどまでに不快な笑い声はないに違いない。そう思えるほど、それは腐った笑い声だった。
「イビルアイなんて死んだって誰も困らないゴミのような存在じゃない」
「お前……ッ」
「ゴミをどう扱おうが、私達の勝手じゃないッ！」

「――ゴミはテメェだコノヤローッ！」
我慢の限界に達し、全力で縦ロールの顔面を殴ろうとしたクリュウの拳を止めたのは、自分と同じく怒り狂った者の迫力満点の怒号であった。
女生徒達が驚いて振り返り、クリュウとルフィールもドアの外を見る。すると、そこには見知った顔がいくつもあった。
先頭に立つのは憤怒の形相をしたシグマ。その横には同じように自分が今まで見た事もないくらいに激怒しているアリア。他にもその背後にはレナとシアとディア、フェニスとシルト。そしてシャルルとクードの姿もあった。
突然のシグマ達の登場に女生徒達は一切の余裕が失われて狼狽（ろうばい）を始める。クリュウとルフィールもあまりにも突然の事に呆けてしまう。先程まであんなに憎しみに支配されていたのに、今では冷静さを取り戻しつつあった。
「あなた達、一体何をしに来たのよッ!?」
余裕を失ってヒステリックに叫ぶ縦ロールの言葉に、憤激するシグマがその何倍もの迫力のある怒号で返す。
「仲間を助けに来たに決まってんだだろうがッ！」
「仲間ッ!?　こんなゴミみたいな連中がッ!?　イビルアイがッ!?　バッカじゃないのッ!?」
「んだとゴラァッ！」
「ゴミはあなた達ですわ。私は、あなた方を絶対に許さない」
アリアの凛とした放たれた鋭い声はシグマとはまた違った迫力を持つ。ＢＦ両クラスの委員長からの宣戦布告のような言葉に、縦ロールが邪悪な笑みを浮かべた。
「それは私達Ｇクラスに対する宣戦布告かしら？」
「えぇ。そう取ってもらっても結構ですわ」
「アハハハハッ！　あなた方は本当にバカなのねッ！」
「んだとッ!?　どういう意味だッ!?」
「イビルアイを仲間に引き入れて、クラス全体が一致団結できるとでも本気で思ってるのッ!?　バカバカバカッ！　こんなクズがいたん

じゃクラスの統制もできないわよねッ!?　ここに集まっている連中の数を見ても、あなた方二人が共闘しても私のクラス一個にも及ばない。それに、あなた方のクラスから裏切り者が出たらおもしろくないかしら？」
　縦ロールはどこまでも卑劣な女だった。彼女の言葉にはさすがのシグマとアリアも言い返せない。彼女達はイビルアイなんて関係なくルフィールを同じ学校の生徒と思っているが、クラスは必ずしも同じ考えではない。今イビルアイのルフィールを仲間として迎え入れた場合、きっと諸手を振って賛同する生徒はクラスの四分の一にも満たないだろう。多くは中立的立場であり、そして残る反抗的な輩もいる。対するGクラスはイビルアイ云々関係なく委員長や副委員長の指示でクラス対決も辞さないだろう。
　いつの間にか、シグマとアリアは劣勢に追いやられていた。
　月明かりの下、縦ロールの不快な笑い声だけが響き渡る。
「いいわよッ！　やってやろうじゃないの！　あなた方程度なら私のクラスだけで十分よ！」
「テメェ……ッ！」
「本当に腐った女ですわね」
「吐き気すら感じるわ」
　シグマ、アリア、フェニスの三人は縦ロールを怒りと呆れの眼光で睨み付ける。アリアの背後にはレナとシアがピッタリとくっ付いてGクラスの面々を睨んでいる。
「全員シャルがぶっ潰してやるっすッ！」
　シャルルに至ってはもはや今ここで対決も辞さない構えだ。ディアとクードも程度は違えど委員長の指示があればそれに従う意向だ。クードから笑みが消えているほど、この状況は真剣そのものだ。
　苦渋の表情を浮かべるシグマやアリア達を見て、縦ロールは好戦的な笑みを浮かべる。
「これより私達GクラスはBクラス及びFクラスに対して宣戦布告するわッ！　邪眼（イビルアイ）の呪いで朽ち果てるがいいわッ！」
「――その決闘、BFクラスに代わってこの私が引き受けよう」

その凛とした声が響いた刹那、場の空気が一瞬にして急低下した気がした。体感温度にして氷点下。まるで氷の棒を背中に突き刺されたかのように、全身が凍りつく。
声のした方を全員が注視する。すると、闇の向こうから一人の少女が姿を現した。雪のように真っ白なブレザーとスカート、サファイアのような美しい青色のネクタイを締めた格好。白と水色の中間の、まるで氷河のような色をした長い髪をポニーテールで纏め、海のような濃い青色の鋭い眼光が光る。人形のような精錬された美しさとその恐ろしさが彼女の魅力を引き立てる。まるで全てを凍りつかせるかのような雰囲気と迫力を秘めたその美少女。彼女の事を知らない者はこの学園には存在しない。
彼女の背後には同じような格好の男女十人程度の生徒が続く。少女、そしてその後ろに続く彼らの腕には各クラス委員長と同じく腕章が付けられている。だが、そこに書かれているのは《委員長》ではなく――《生徒会》。
「生徒会とAクラス全軍。これだけの戦力が相手になればGクラスといえどただでは済まんぞ」
クールな表情に鷹のような鋭い眼光でGクラスの面々を威圧する美少女。彼女こそ校内学科次席にしてAクラス委員長、そして生徒会の長である生徒会長を務める、場合によっては教官以上の権力を有する、四大女神の中でも一、二を争う美貌と人気を持つ最強の戦姫。氷の女神とも称される彼女の名は――クリスティナ・エセックス6年生。
生徒会会長兼Aクラス委員長であるクリスティナの登場に驚く皆を無視し、クリスティナは一歩一歩と進んでシグマやアリアの前に立つ。
「生徒会長ともあろう人が、何でこんな所にいるんだ？」
「先程貴様の子犬がやって来て、貴様らを助けてほしいと頼まれたのでな」
「あいつ……」
シグマはいつも自分にくっ付いている情けない後輩の余計だが嬉

しい行動に苦笑した。そんな彼女を一瞥し、クリスティナはまずシグマ達一同を見回し、彼らと対立しているGクラスの女生徒達、そしてその奥にいるクリュウとルフィールを見詰める。
「なるほど。彼の言う通りな状況だな」
クリスティナは一度うなずくと、自分の登場に狼狽しているGクラスの女生徒達を刃物のように鋭い眼光で射抜いた。純粋な恐怖であれば、ルフィールのイビルアイなんかよりもずっと恐ろしい。
「今日は創立記念日だ。皆の気持ちの羽目が外れてしまうのは仕方がない事。だから私達も通常よりは厳しくはしていなかった。せっかくのパーティーだ。水を差すような無粋はせん――だが」
クリスティナの眼光が不気味に光り輝いた。その瞬間、場の空気がさらに低下。氷が張ってもおかしくないような体感温度と恐怖に、皆が震え出す。
「校内の風紀を乱す輩は絶対に許さん。Gクラスの副委員長？　副委員長ならば皆の模範となる行動をしろ。貴様は副委員長などと名乗る資格はない」
威圧感全開のクリスティナの言葉に縦ロールはその場にペタンと座り込むと、うつむいたまま動かなくなった。他の女生徒達も同じような状態になり、あっという間に制圧が完了した。
先程まで怒りに燃えていたシグマ達はそのあまりにも呆気ない終わりにしばしその場で固まっていた。そんな彼女達を無視し、クリスティナは震える女生徒達の横を通り過ぎると、クリュウとルフィールの前に立った。
「あ、あの……」
礼を言おうとしたクリュウをも無視し、クリスティナは自らの上着を脱ぐと座ったまま自分をイビルアイで見詰めているルフィールにそれを放った。ルフィールは投げられた上着を受け取って驚いたようにそれを見詰めると、再び彼女を見上げる。
「……それでも羽織っていろ。今日は冷えるぞ」
「え？　あ、ありがとうございます」
ルフィールの戸惑いながらの礼に、クリスティナは一瞬だけフッと

口元に笑みを浮かべた。驚く二人に背を向けて、クリスティナは歩き出す。
「それに、その格好は風紀を乱すからな」
彼女に言われてルフィールは改めて自分の格好を思い出し大赤面。慌てて上着を羽織るとキッと鋭いイビルアイでクリュウを睨みつけた。
「み、見ないでくださいッ！」
「え？　あ、ご、ごめんッ！」
クリュウも顔を真っ赤にして慌てて彼女に背を向ける。外の方ではシグマがディアの、アリアがシルトの首を掴んで無理やり視線を逸らせていた。二人とも悲鳴を上げているが、この際は仕方がない。クードはシャルルに背を押されてドアの陰に消えた。こういう部分では女の子というのは団結するらしい。生徒会の男子生徒もまた女生徒達に睨まれながら皆背を向けている。
そんな中、クリスティナは女子に命令してGクラスの女生徒達を捕縛。教官室に連れて行くよう指示した。
「まったく、宴を楽しむ事もできんな」
「お前がパーティーを楽しむ光景なんて想像できねぇぞ」
「ひどいな。私だって女だ。男子にエスコートされて踊ってみるのも――貴様、何を笑っている」
そんな会話をシグマとクリスティナがしている一方、アリアとフェニスがルフィールに近寄って彼女を慰めている。そんな女子達を見てクリュウは邪魔しないように立ち去ろうとする。
「ちょっと待ちなさい」
だが、突然フェニスに腕を掴まれてしまいクリュウは振り返った。すでにルフィールはしっかりとクリスティナの上着を着ているので一応大丈夫。まぁ、スカートもズボンも穿いていないので上着だけだとかなり短いワンピースのような感じで目のやり場に困りはするが。
「彼女を部屋まで送り届けてあげて」
「え？　僕よりアリア達の方がいいと思うけど。女の子同士だし」
「……わかってないわね」

フェニスの言葉に「何が？」と問い返したが、彼女は答えてはくれず「とにかく、連れて行ってあげて」と強引にルフィールを押し付けてきた。
「ルフィールはそれでいい？」
「……わ、私は構いません」
まだ赤い顔を隠すようにうつむきながら言うルフィールに、クリュウも「じゃあ、部屋まで送って来ますね」と言って彼女の背中に手を添えながら歩き出す。そんな二人の背中を見詰め、フェニスは優しげな笑みを浮かべていた。
「普通の女の子なのね、ルフィールちゃんも」
そう言って親友に振り返ると、彼女はどこか複雑そうな表情でクリュウとルフィールの背中を見詰めていた。それを見てフェニスも困ったように苦笑した。
「ごめんなさいね。余計な事だったかしら？」
「誤解しないでくださる？　別に私は何とも思っていませんもの」
そう言ってアリアは彼女の横を通り過ぎた。そんな彼女の後姿に「もう、素直じゃないんだから」と苦笑しながら彼女の追いかけるフェニス。アリアが歩き出すと、レナとシアが駆け寄って彼女に抱きついた。
一方、寮の方へ歩いて行くクリュウとルフィールの後姿をじっと見詰めるシャルル。そんな彼女の背後から近づく者がいた。
「いいんですか？　二人っきりにしても」
「フン。今回だけっすよ」
「……意外としっかりしてるんですね」
「失礼っすね。シャルはこれでもあんな奴よりずっとずっと大人っすよ――って、ランカスター先輩ッ!?」
ここでようやく振り返って背後にいたのがクードだとわかったシャルル。そんな彼女に向かってクードはいつものようにニコニコと楽しげな笑みを浮かべる。
「クマさん柄のパンツを穿いていてもですか？」
「んなもん穿いてないっすよッ！」

そんな二人から少し離れた場所では連行される女生徒達を睨むクリスティナ。ふと今も楽しげな笑い声と曲が流れて来る生徒会館を見詰め、一瞬だけどこか残念そうな表情を浮かべると殿となって生徒会役員達と共に教官室へ向かった。

月明かりの下、様々な者達がそれぞれの向かう先に散っていった……

第９５話　ルフィールの恋心　イビルアイの果ての奇跡

　部屋に戻ったルフィールは私服に着替えてポニーテールだった髪を再びザザミ結びに戻して細メガネを掛け、いつもの格好になるとリビング兼寝室となっている部屋のテーブルの横に腰掛けた。台所では今クリュウがお茶の用意をしている。程なくしていつも嗅ぎ慣れている紅茶の匂いが漂い始め、ティーポットにティーカップ、小さな手作りケーキが載ったトレイを持ってクリュウがやって来た。
「落ち着いた？」
「はい。お手数をお掛けして申し訳ありません」
「いいっていいって。そんな事よりも熱いお茶でも飲んでゆっくり温まろうよ」
　クリュウは彼女の前にティーカップとケーキ、フォーク等を置いて、自らの分のティーカップを対面の席に置いて座ると、ティーポットを持って彼女のカップに注ぐ。香ばしい香りが何とも言えない安堵感をもたらせてくれる。そして温かくなったカップを両手で包むようにして持つと、そっと口元に運んでフーフーと冷ましながら飲む。おいしかった。紅茶自体は普通に売っている市販品なのに、彼が淹れてくれたというだけでどんな紅茶よりも、おいしくて嬉しい。
「ケーキも食べてみて。今回は結構自信作なんだ」
　そう言って彼が勧めたのはクリームたっぷりのロールケーキ。彼はこうして時々ケーキを作ってくれる。前はティラミスだったし、その前はチョコレートケーキだった。もちろん、どれもおいしかった。
「いただきます」
　ルフィールはフォークでロールケーキを一口サイズに切ると、クリームを絡めてから口に運んだ。クリームたっぷりなのに甘過ぎない絶妙な甘さとフワフワのスポンジにも少しだけ砂糖が入っておりどこを食べても程よく甘くておいしかった。
「甘くておいしいです」

「それは良かった。今回はちょっと普通の砂糖じゃないカロリー半分っていう特別な砂糖を使ったから不安もあったんだよ」
「カロリー半分……先輩は女の子の気持ちがわかりますね。でもどうして突然？」
「え？　この前君が体重計に乗って落ち込んでるのを見たからなんだけど……」
「そ、そんな所見ないでくださいよッ！」
　顔を真っ赤にして怒るルフィールに、クリュウは「ご、ごめんッ！
　別に悪気があって見た訳じゃ――ルフィールそれはダメッ！
フォークを投げるのはマジで危ないからッ！」と悲鳴じみた声で慌てて謝る。彼としてはもちろん悪気なんてないし、彼女の為を思ってカロリーを押さえたケーキを作ったのだが、料理の技術よりも彼には乙女心を理解する事に努めてほしい。
「まったくッ」
　まだ赤い顔でフンッとクリュウにそっぽを向きながらケーキを頬張るルフィール。怒ってはいても彼が作ってくれたケーキは手放さない所が彼女のかわいらしい所だ。そんな彼女を見て苦笑しつつもほっとしたクリュウ。
「良かった。あんな事があったからもっと落ち込んでるかと思ってたけど、いつもと変わらないね」
「――そんな事ありませんよ」
　そう言ってこちらに向き直したルフィールの表情は、先程までのような明るいものではなかった。今にも壊れてしまいそう。そんな風に思ってしまうほどに弱々しく、儚い。
「これでも無理して笑ってるんですから、少しは察してくださいよ」
　弱々しい苦笑を浮かべながらルフィールはそう言うとスッと立ち上がって彼のすぐ横に移動して座り直す。そして、そっと彼にしな垂れた。
「ボクだって目以外は普通の女の子です。そう簡単に立ち直れませんよ」
「ご、ごめん……」

「謝らないでくださいよ。それに、こういう時はできれば慰めてほしいです」
「ご、ごめん……」
「……もう、謝らないでって言ってるのに」
　またも謝り掛けたクリュウは慌てて口を閉じたが、「ごめん」に代わるだけの言葉は出てこずに黙ってしまう。そんな彼を見てルフィールは小さく苦笑を浮かべた。
　しばらくの間、二人には何の会話もなかった。クリュウはどう声を掛ければいいか迷っているようで、ルフィールはそんな彼にしな垂れかかってずっと沈黙を続けている。
　長い沈黙に耐えられなくなり、何か話題をと思って必死に頭をフル回転させるクリュウ。そんな彼の心中を察したのか、ルフィールがスッと動いた。振り向くと、彼女はじっとクリュウを見詰めていた。部屋に灯された明かり火に照らされて揺れるイビルアイが、じっと彼を捉える。
「ルフィール……」
「ありがとうございました」
「え？」
「助けに来てくれて。ボク、すごく嬉しかったです」
　そう言ってルフィールは年相応の少女のようにはにかんだ。その笑顔と言葉に彼女の言いたい事を理解したクリュウもまた優しげな笑みを浮かべる。
「僕は当たり前の事をしただけだよ」
「それが嬉しいんです――今まで、誰かに助けてもらうなんて事なかったですから」
「ルフィール……」
「それに、助けれくれたのが先輩だったというのもネックですよ。他の誰かでもない、先輩だからこそ嬉しいんです」
　そう言って無邪気に笑うルフィール。二人っきりの時にしか見せないその笑顔には、先程の事件など微塵も感じられないほどに輝いていた。そして、そんな彼女に感謝されまくりのクリュウは頬を少し赤

らめていた。
「そんなに堂々と言われると、さすがに照れるよ」
「事実を述べただけです」
「ははは……」
「――でも、本当に嬉しかったです」
そう言って、ルフィールは小さく笑みを浮かべるとクリュウの腕にしがみ付いた。甘えるように頬ずりし、彼の温もりを体全体を使って感じる。この温もりが、永久凍土の自分の心に春をもたらしてくれたのだ。
一方のクリュウは彼女の行動に頬を赤らめながらも振り解くなど無粋なマネはせずに固まっていた。というか、腕に柔らかく当たる発展途上の小さな二つの膨らみを意識し過ぎて頭がフリーズしているとも言える。そんな彼の状態など気づかずにルフィールは楽しそうに笑みを浮かべ続ける。
開け放たれた窓からは風の音しか聞こえない。どうやら自分のせいで生徒会館で行われていたパーティーは中止されてしまったらしい。ちょっとだけ罪悪感。
ふと、自分の格好を見てみる。いつもと変わらない、普通の私服。ついさっきまではきれいなドレスを身に纏い、彼にもかわいいと言ってもらえた――でも、もうあのドレスはない。思い出すだけで、胸が締め付けられるように痛む。
あんな出来事さえなければ、あの後パーティーのフィナーレダンスを楽しむ事ができただろう。もちろん、踊り手に彼を誘うつもりでいた。
でも、もうそれはできない。パーティーもドレスも、もう終わってしまったのだから。
胸に残る空しさは辛い。でも、今こうして彼と一緒にいられる。それだけが、唯一の救いだった。
確かに、あの時は本当に怖かったし悲しかった。自分の存在を全否定された気がして。でも本当はあの程度の事などに動じてはいなかった。皮肉にも、今までそういう事をされ続けてきたからこその耐

性が救ってくれたのだ。本当に辛かったのはドレスをダメにされた事。そして彼を巻き込んでしまった事。そっちの方がずっとずっと辛かった。何より、あの優しい彼を女の子に対しても手を上げるほどに怒らせてしまった。その事が、苦しい。

そっと彼の横顔を見てみる。照れたように頬を赤らめながらそれを誤魔化すように紅茶を飲んでいる。それはとても微笑ましいもので、年上なのについかわいいと思ってしまった。外見の愛らしさもあって、それは本当の気持ち。

パッと見た限り、彼はいつもと変わらない。だけど、ほんの少しだけその表情が辛そうに見えるのはきっと気のせいではないはず。ハンターという生き物を殺す職業には合っていないのではないかと思うほどに優し過ぎる彼。きっと、カッとなったとはいえ女の子に暴力を振るってしまった事を後悔しているのだろう。

もちろん暴力を振るった事は悪い事だ。でも、それは自分を守る為に仕方がなかった事。正当防衛の範囲内だ。でも、そんな一般常識など関係ない。結局は本人の気持ち次第。だからこそ、彼は後悔しているのだ。

助けに来てくれた事は本当に嬉しい。自分にとって、あの時の彼は教会で生活していた頃、仲の良かったシスターに夜眠る際に読んでもらった絵本に出て来る勇者そっくりだった。でも、その事で彼が苦しんでいる。全部、自分のせいだ。

頭が良過ぎる上にこれまでの経験からどうしても悪い方悪い方へ考えてしまう癖があるルフィール。彼と二人っきりという嬉しい環境なのに苦しむ彼を見てどうしても自分を責めてしまう。そして、次第に心が折れていく。

「ルフィール？」

突然立ち上がったルフィール。クリュウが「どうしたの？」と声を掛けるのを待たずしてルフィールはフラフラと自分のベッドに入ると、深々と毛布を被ってしまった。

「る、ルフィール……」

何か声を掛けるべきか悩んだ末、クリュウはしばらく彼女を一人に

しておく事にした。こういう時は一人になるというのも一つの手。そしてそれは今の彼女には最も必要な選択であった。

部屋から彼が出て行く気配を感じ、彼に心の中で感謝しつつ謝罪。

部屋に一人残されたルフィールは毛布を深々と被り、その中で今まで無理して堪えていた色々なものが涙と一緒に溢れ出し、さめざめと泣き崩れた……

それから一時間経ってもクードもシャルルも部屋には帰って来なかった。代わりにシグマが部屋を訪ねて来て二人は彼女のチームの部屋に泊まる事になったと伝えられた。それは明らかな校則違反ではあるが、どうやら生徒会長クリスティナのお墨付きらしく堂々としたものらしい。彼女には感謝しっぱなしだ。

帰りにクリスティナの所へ寄るというシグマにルフィールが借りていた彼女の上着を返すよう頼み、その後クリュウは沸かしておいた風呂に入って自らのベッドで読書を開始した。彼が読書している間、一度だけルフィールは起き上がると風呂に入った。しかし上がるとすぐにベッドに潜ってしまい、クリュウは小さくため息した。

そして消灯時間。寮中に消灯時間を知らせる角笛が鳴り響き、一斉に各部屋の明かりが消されて寮は暗闇に包まれる。まぁ、当然こんな時間に寝るなんて不可能だという連中はきっと小さな明かりだけで寮友とダベっているだろう。ちなみにシグマ達の部屋も全員が起きており、みんなで大富豪などを楽しんでいたりする。

一方、クリュウとルフィールは模範生らしく一切の明かりを消してそれぞれのベッドに入っていた。部屋を薄っすらと照らすのは窓から降り注ぐ淡い月の光だけだ。

クリュウは毛布に包まって眠っていた。正確には目を閉じて睡魔が訪れるのを待っていたのだが、睡魔というのは来なくてもいい時には来るくせにこういう来てほしい時にはなかなか訪れない。何とも天邪鬼な奴だ。

さらに目を閉じているとどうしても今日の事を思い出してしまう。確かに性根が腐った最低な奴らだったが、相手は女子だ。なのに自分はカッとなって容赦なく暴力を振るってしまった。ルフィールを救

い出せた事は本当に良かったが、それだけが後悔として胸に残っていた。
　そんな事を考えていると余計に眠気は遠ざかってしまうもの。明日は一限から普通に授業があるのだ。寝不足で授業中寝てしまう訳にはいかないのでとにかく雑念を追っ払って眠る事だけに集中する。
「……先輩」
　そんな時に声が聞こえた。
　身を起こしてみると、二段ベッドのハシゴの所に薄っすらとした月明かりに照らされるルフィールがいた。メガネを外して髪も重力に任せただけという就寝時の格好。淡い月明かりに照らされるイビルアイはどこか幻想的な輝きを放っている。
「ルフィール？　どうしたの？」
　クリュウの問いに対し、ルフィールは沈黙を続ける。よく見ると、淡い月明かりに照らされるその頬は若干赤らんで見えるし、もじもじとどこか落ち着かない様子。それを見て、何となく彼女が次に言うセリフを予想できた。
「……一緒に、寝てもいいですか？」
　恥ずかしそうに言うルフィール。予想通りの答えだったものの、改めてこう真正面から言われるとこれがまた困ったものだ。いつもなら即答で拒否するのだが、何せあんな事があってすぐの夜。どうしても彼女に対して強く言えなくなってしまう。しばし考えた末の回答は、
「……ほ、本当の本当に今回だけだからね」
　以前にもそう言った記憶があるが、あれからも彼女は時々自分が眠った後に潜り込む事が数回あった。どれも彼女が一番の早起きだった事で何とか誰にもバレなかったが、こうして真正面から訊かれるのは今度で二回目。そしてそのどちらも彼女の訴えるような瞳に負けてしまったのだ。
　クリュウの返答にルフィールは嬉しそうに微笑むと、「失礼します」とご丁寧にあいさつをしてからベッドの中に入って来た。パジャマ姿でわざとなのか無意識なのか胸元を少し開き、風呂から出てあまり

時間が経っていないせいか水気を含んだ髪と火照った表情、そして石鹸の香りなど無防備すぎる。クリュウはそんな彼女の姿に少しだけ頬を赤らめる。だが運良く月明かりだけが頼りの状況下ではルフィールには気づかれなかったらしい。
「いや、だからその……」
　服装を正してほしいと頼もうとした刹那、ルフィールは突如クリュウに抱きついて来た。突然の事に驚くと同時に顔を真っ赤にしてあわあわと慌てまくるクリュウに対し、そんな彼の胸に顔を埋めるルフィールはとても幸せそうな表情。
「ちょ、ちょっとルフィールッ！」
　慌てて彼女を引き剥がそうとするが、ルフィールは離れる事を頑なに拒みさらに強く抱きついて来る。そんな彼女の突然の行動に慌てていたクリュウだが、自分に抱きつきながらルフィールが微かに肩を震わせているのを見て冷静さを取り戻した。
「ルフィール、どうしたんだよ一体」
「ごめんなさい……」
　顔をもたげたルフィールのイビルアイには薄っすらと涙が溜まっていた。それは今にも溢れ出してしまいそうなほどにか弱く、まるで彼女自身の脆（もろ）さを表しているかのように儚い。
「本当に、ごめんなさい……」
「何で君がそんなに謝る必要があるのさ？」
「――ボクのせいで、先輩を苦しめてしまいました」
　ルフィールのその言葉に、クリュウは一瞬表情を硬くした。だがルフィールはその瞬間を決して見逃さず、やっぱりという感じで顔をうつむかせる。
「先輩は人を殴るような人じゃありません。なのに、ボクのせいで無理をして……」
「別に無理なんかしてないさ。それに僕だってムカつく時はムカつくし、人を殴る事だってあるさ」
「確かにそうかもしれません。人間も所詮は本能に生きる生物です。しかし、人間には他の生物にはない理性というものがあります。その

理性を放棄して、先輩は彼女達を殴った。これは、先輩の性格からは信じられない事です」
　自分の知っているクリュウという人間は、困っている人に手を伸ばせずにはいられない極度のお人好し。例えその先にどんな困難が待ち受けていても、前だけを見詰めて歩み続ける。他人の為なら自らを犠牲にしても構わないという危険性も孕んだ、究極のお人好しだ。その彼が人を殴った。それほどまでに、自分は彼を追い詰めてしまった。その事が、苦しい。
「ボクのせいで、先輩は人を殴り、そしてそれを後悔して苦しんでいる。全部、ボクのせいです……」
「ルフィール……」
「ごめんなさい……本当に、ごめんなさい……」
「……もういいから――泣かないでよ」
　言われてから気づいたのだろう。ルフィールは頬を流れる涙を慌てた様子で袖で拭うと、「ごめんなさい、ごめんなさい」と何度も繰り返す。そんなルフィールを、クリュウはそっと抱き締めた。
　何も言わず、無言のまま抱き締め続ける。掛けたい言葉はたくさんあるが、今は何も言わない方がいい。言葉よりも行動の方が、時には効果がある事もあるのだ。
　無言で抱き締めるクリュウの腕の中で、ルフィールはさめざめと泣き続ける。
　自分の腕の中で泣き崩れる少女は、とても小さくて弱々しい。どこからどう見ても、普通の女の子だ。目の色が違う、《そんな程度》の事で彼女の運命は大きく狂わされている。
　バカらしい。人間の価値はその程度の事で決まるものではない。外見だけで人を判断するのは器の狭い人間か、人を見定める価値も方法も知らない愚か者だ。
　確かに、外見もまた人の価値を判断する材料の一つだろう。だが、所詮は《一つ》だ。それだけで決定事項ではない。内面を知り、その人の心の姿を見て、共に過ごして本当の《その人》を見て判断する。それがその人の価値だ。

たかが目の色が違う。その程度の事で彼女を迫害し、己がくだらなくてカスのようなプライドや優越感に浸っているような人間は、人と関わり合う価値も権利もない。そういう連中はそういう連中同士と組んで負け組の道を勝手に転がり落ちていればいいのだ。

ルフィールの価値は、そんな瞳で決まるものではない。彼女の内面は皆が知る校内学科首席だけではなく、自分達が知っている仲間と距離を置きながらもしっかりと仲間の為に様々な事を考えて行動に起こしている頼れるチームメイトという一面、シャルルとの友達だからこその口ゲンカする普通の子としての一面、そして今の所自分にだけ見せてくれる本当はとても弱くて誰かが支えてあげないと倒れてしまいそうなくらい儚い少女としての一面。他にも、ルフィールには様々な姿があり、それら全てやまだ知らない姿なども総合して、《ルフィール・ケーニッヒ》という一人の少女になる。

彼女を迫害する奴らは、そんな彼女の本当の姿を知らずに、知ろうともしないで勝手に彼女を見限っている愚か者達だ。

何が伝説の悪魔と同じ瞳だ――何がイビルアイだ。

クリュウにとっては、皆が忌み嫌うそのイビルアイだってルフィールという一人の少女を形成する一つのチャームポイントに見えている。むしろ、なぜ皆がそれを嫌っているのかがわからない――ルフィールのこの異色の瞳が放つ神秘的な輝きが、皆には見えていないのだろうか？

ルフィールの本当の価値を理解しているのは自分だけ。そんなおこがましい事は思っていない。でもせめて、本当の彼女を理解している数少ない者の一人として、彼女を支えてあげたい。彼女の味方になりたい。その気持ちは本当だ。

「ルフィール」

そっと声を掛けると、ルフィールはゆっくりと顔をもたげた。涙に塗れるイビルアイは弱々しく煌く。そんな彼女の瞳（イビルアイ）を見詰め、クリュウはそっと微笑んだ。

「例え世界中の人が君の事を忌み嫌っても――」

クリュウの言葉にルフィールは悲しげに顔をしかめた。彼女の場

合、その例えは決して《例え》で済まない。だが、クリュウはすでにある決意を固めていた。純粋に彼女の事を想っているからこその、硬くて決して揺るぐ事のない強い決意。

「――僕は君の味方だよ」

その瞬間、ルフィールの瞳（イビルアイ）が大きく見開かれた。そんな彼女に向かって小さな笑みを浮かべながら、クリュウは言葉を続ける。

「もちろん、それは例えであって君の味方は僕だけじゃない。シャルルもクードも、アリアやシグマ、レキシントンさんだって君の味方だよ。敵は多いかもしれないけど、味方だってたくさんいる。君は、決して一人なんかじゃないんだから」

そう。ルフィールには多くの仲間がいる。自分だけじゃない、自分達を囲む皆が自分の、そして彼女の味方だ。

今まで彼女は一人だったかもしれない。だけど、もう一人なんかじゃない。かけがえのない仲間がこうしてできた今、もう一人で苦しまなくてもいい。喜びは二倍に、悲しみは半分に。それが仲間であり、友達だ。

ルフィールはクリュウの言葉にしばし沈黙していたが、彼の腕の中で小さく一度うなずくと、ゆっくりと赤らんだ顔をもたげた。じっと見上げるイビルアイには、先程までとは違った涙が浮かんでいる。

じっと自分の言葉を待っているクリュウを見上げながら、ルフィールは一度彼の言葉を心の中で反芻（はんすう）してみる。

――僕は君の味方だよ。

その後の言葉も嬉しかったが、彼女にとっては《その言葉》が一番嬉しかった。

教会を出て初めてできた友達。初めて自分を助けてくれた人。そして、一生この人の事を尊敬し、少しでも恩返ししていこうと決めた人――ずっと一緒にいたい。そう心から思える人。

――でも、自分は彼と一緒にいてもいい存在なのだろうか。時々、幸せを感じるたびに思ってしまう。

自分は不運を呼ぶ。それは呪いでもなんでもなく、この瞳そのもの

が呼び込む自分だけを不幸にするもの。だけど、自分と一緒にいると、その不運が彼にも襲い掛かってしまうのではないか。事実、自分のせいで今回彼は窮地に追い込まれた。その事実が、ルフィールの中で冷たく渦巻く。

「……ボクは、先輩と一緒にいてもいい存在なのでしょうか？　そんな権利、イビルアイのボクにあるのですか？」

自然と、そう言葉が漏れ出していた。

――不安。

何よりも一番に彼の事を最優先に考えるルフィール。だが、自分という存在が、彼にとっては何らアドバンテージにならない。むしろ足を引っ張っているのではないか。そんな不安が、ずっとあった。

もしも、自分が彼にとって邪魔な存在だというなら、足かせとなるなら……自分は……

「バカな事言うなよ」

いつになくひどく不機嫌そうな彼の声にハッとなって顔を上げると、じっと自分を見詰めている彼と目が合った。だが、その翡翠色の瞳は声色と同じく不機嫌そうに細まり、自分を睨んでいた。

なぜそんな目で見られなくてはいけないのか。訳がわからずに困惑していると、ポンと頭に彼の手が載せられた。直に伝わって来る彼の優しげな温もりに、自然と頬が緩んでしまう。だが、自分の置かれた状況を思い出すとその笑みは消えた。顔を上げると、相変わらずクリュウは不機嫌そうな表情を浮かべていた。

「先輩……？」

「あのなルフィール。誰かと一緒にいる事に権利なんて必要ないんだよ。一緒にいたい、そう思うなら一緒にいればいい。それだけの事じゃないか。それを存在とか権利とか、はたまたイビルアイだとか。僕がそんな事を気にするような人間だと思ってたの？」

不機嫌そうに言うクリュウの口調はどこか厳しい。それは当然だろう。権利とか存在とか、そういう自分を卑下にする考え方はクリュウが最も嫌うものであり、尚且つ自分がそんな薄情な、まるで今まで彼女を虐げてきた者達と同じ考えをしていると彼女に思われていた

という事が許せなかった。まさにそれは一種の裏切り行為だ。
「先輩がそんな人じゃないという事は重々承知しています！　で、でも……ッ」
慌てて彼の誤解を解こうとしたルフィールだが、その次の言葉を言おうとして言いよどんだ。一度目を伏せ、クリュウの表情を盗み見るように確認してから、とても小さな声で言う。
「……やっぱり、ボクは普通の人とは違います。目の色が違う。先輩にとってはたったそれだけの事かもしれません。しかし、ボクにとってはそれが全てなんです。この瞳のせいで、ボクの人生は狂ってしまった。それほどまでに、とても重要な事なんです――だから、怖いんです」
不安そうに、クリュウのパジャマの裾をしっかりと握りながら、ルフィールは搾り出すような声で続ける。
「先輩の事は信じています。でも、ボクは心のどこかで先輩を疑っている。やっぱり他の人と同じで、いつかボクは見捨てられるんじゃないかって。ボクには今まで教会の外で味方なんていませんでした。それが、先輩と出会ってからは次々にできました。それが、怖いんです。何も失うものがないのなら、失う苦しみや悲しみを味わわなくて済む。だけど、ボクは失いたくない、そう思ってしまいました。みんなと一緒に、この幸せが続けばいい。心からそう思っていました。だけど――」
そこでルフィールは一度区切ると、ブルブルと体を震わせた。月光に照らされるその表情は苦痛に歪んでいる。思い出したくもない悪夢。だけど、それが自分の中に《猜疑心（さいぎしん）》を蘇らせてしまった。
「今日の事で、思い出してしまったんです。今まで自分がどんな扱いを受けていたか。だからこそ、この幸せもいつか壊れてしまうんじゃないか。失いたくない、やっと手に入れた幸せ。なのに、それはとても簡単に壊れてしまう砂上の楼閣（ろうかく）に過ぎません。ボクは、もう辛い思いは嫌です――ボクだって、まだ十三歳の女の子ですッ！
こんな苦痛をいつまでも味わい続けて、平気な訳ないじゃないです

かッ！」
心を蝕（むしば）む黒くて冷たい不安。それから逃げるように、忘れるようにルフィールは叫ぶ。
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖いッ！
全てを失うのが怖い。
一人になるのが怖い。
――クリュウの見捨てられるのが、怖いッ。
「ボクだって、本当はこんな気持ちを持ったまま先輩に接したくありませんッ！　でも、今までの経験からどうしても人を心から信用できないんですッ！　いつもどこかで疑ってしまう、恩人である先輩に対してもですッ！　こんなの嫌なのに、こんな自分は嫌いなのに……ッ！　ボクは、最低の人間ですッ！」
ギリリッと音がするのではないかというくらい力強く歯軋りした。握られた拳は血の巡りを阻害し、真っ白になっていた。いっその事、この拳で自分の中にいる《猜疑心》という名の自分を殴りつけたかった。
クリュウは他の人みたいに自分を裏切ったりしない。わかっているのに、頭ではわかっているのに心が拒絶してしまう。そんな自分が、嫌で嫌で仕方なかった。
例えそれが長い外界での生活で身に付けた身を守る術（すべ）だとしても。失う時の悲しみを少しでも和らげる為に疑惑という保険をかけておく。今まではそのやり方に守られていて、感謝すらしていた。でも、今はそれが邪魔で邪魔で仕方がない。嫌で嫌で堪らなかった。
ずっと忘れていたはずなのに。このままずっと、気づかなければ幸せでいられたのに。一度着いてしまった疑惑という名の炎は、消える術を知らない。なぜなら、今まで消す必要がなかったからだ。
彼を疑いたくないのに、疑ってしまう。せっかく手に入れた幸せが、壊れてしまう。ルフィールは恐怖と絶望に身を震わせた。心が壊れるというのは、こんな感じなのかもしれない。そんな事を考える意外に冷静な自分がいる事に気づき、ますます自分が嫌になった。

そして何より、きっと自分は彼に嫌われた。きっとそうに決まっている。自分の事を心から信頼し、仲間と思っていただろう彼を、自分は裏切っていたのだから。

自分は最低の人間だ。嫌われて当然の事をしたのだから……

残ったのは絶望と消失感、そして空しさだけだった。改めて、自分の中でどれだけ彼の存在が大きくなっていたかがわかった――もう、彼なしの自分は考えられない。それほどまでに、《クリュウ・ルナリーフ》という人間は、自分にはなくてはならない支えだったのだ。

――そして今、自分はその支えを失った。今までで一番辛い、失う苦しみと悲しみ。絶望感だった。

辛くて辛くて、涙が零れ落ちる――そっと、その涙を拭われた。

「……え？」

驚いたようにゆっくりと顔を上げると、そこにはもう見る事もできないと覚悟していた彼の笑顔があった。どうして、彼は今自分に向かって笑ってくれているのか。意味が分からず呆然とするルフィールの頭を、クリュウはそっと優しく撫でた。

「……ったく、もっと僕を信用してくれてもいいじゃないか」

そう言ってクリュウはルフィールの小柄な体をそっと抱き寄せた。突然彼に抱き締められたルフィールは状況が理解できずにおろおろとしている。そんな彼女を体全体を使って包むように抱き締めるクリュウは、そっと彼女に言葉を送った。

「あのなぁ、前から言おうと思ってたけどルフィールは考え過ぎな所があるよ」

「な、何を……」

「他人を全部理解するなんて、できる訳ないだろ？　誰だって家族や親友と呼べる存在にだって隠している事なんてたくさんある。そんなのをいちいち気にしてたら気苦労で倒れちゃうよ」

クリュウが言っている言葉の意味を理解するのに、少しばかりの時間が必要だった。そして、十分な時間を使ってゆっくりと彼の言葉の真意が脳に染み渡って理解した時、言いようのない《怒り》が膨れ上がった。誰もが恐れる邪眼（イビルアイ）が鋭く輝く。

「そんな単純な事を言っているのではありませんッ！　ボクは、先輩を裏切っていたんですよッ!?」
「時には親を殺したいと思う事は思春期や反抗期なら誰だってある事さ。でも、実際はもちろん殺さない。犯罪とかそんな大層な事なんかじゃなくて、本当は親の事が大好きだからだよ。それと同じようなもんさ」
「全然違いますッ！　ボクは先輩の気持ちを踏みにじっていたッ！　先輩の信頼に対し、ボクは心の中ではそれを疑い、裏切っていたッ！　何で、何で怒らないんですかッ!?　怒ってくださいよッ！　ボクは最低の人間ですッ！　そんな情けは必要ありませんッ！　殴るなら殴ってもらった方がマシですッ！」
感情が暴走して止まらないルフィールの泣き叫ぶような怒号が轟く。
自分はクリュウの好意をずっと踏みにじっていた。裏切っていた。最低の行為をした。なのに、彼はそれを気にした様子もない――それが、腹立たしかった。
なぜ怒ってくれないのか。こんな同情を受けるくらいなら、素直に殴って罵声を浴びせられる方がずっとマシだ。
ルフィールは意外とプライド高い所がある。クリュウの行動は、そんな彼女のプライドを激しく刺激していた。
――いや、そんな事は後付けの理由に過ぎない。
本当は、戸惑っているのだ。自分のした最低の行為を彼は気にした様子もなく受け止めてくれている。その信じられない現実に、激しく動揺しているのだ。だから何とか自分を納得させられる状況を作り上げようとしているのに、彼にはそれが通じなくてさらに動揺する。そんな悪循環に陥っていた。
だが、そんなルフィールの言葉を気にした様子もなく、クリュウは彼女を抱き止め続ける。そんな彼の腕の中、いつの間にかルフィールは暴れる事も泣き叫ぶ事もせず、じっと彼を見詰めていた。まるで、彼の言葉を待っているかのように……
じっと見詰めて来るイビルアイをじっと見詰め返しながら、クリュ

ウはそっと、優しげな笑みを浮かべた。
「――僕は、ルフィールの事が大好きだよ」
「……なッ!?」
　クリュウの突然の発言にルフィールは顔をボンッと真っ赤に染めてあたふたとし始める。そんな彼女の反応にクリュウは笑みを浮かべたままそっとその頭を撫でる。
「僕はルフィールの事が大好きだから、そんな事くらいじゃ君を嫌いになんかならないよ」
「にゃ、にゃにを言っているのでしゅかッ!?」
　テンパり過ぎて呂律が怪しくなっているルフィールは顔を真っ赤にしたまま怒鳴る。だがクリュウはそんな彼女の頭を優しく撫で続ける。すると、撫でられるたびにルフィールは大人しくなっていく。
「ボクは先輩を裏切っていたんですよ？　なのに、何で……」
「言ったでしょ？　僕はルフィールの事が大好きだって」
「そ、そんな事を堂々と……」
　こんな状況だというのにクリュウに《大好き》と言ってもらえて嬉しくて仕方がないルフィール。必死になって顔に出そうになる笑みを堪えているが、口元は堪えきれずに小さな笑みを浮かべてしまっている。そんな彼女の様子に気づいていないクリュウは、さらに言葉を続ける。
「それに、僕はルフィールに絶対の信頼を寄せてる。例え君が僕の事を心の底では疑ってたとしても、僕の君に対する信頼や気持ちは揺るがないよ」
「そ、そんな詭弁必要ありませんッ！」
「詭弁か……。確かにそうかもしれない。だって正直、君の話を聞いた時ショックだったもん」
　そう言ってどこか悲しげな表情を浮かべるクリュウを見てルフィールは罪悪感で胸が押し潰されそうになった。やっぱり、自分は最低の人間だ。信頼を寄せていた恩人である彼を失望させたのだから……
　落ち込むルフィールの頭を撫でながら、クリュウは「でもさ……」と

言葉を繋げる。
「そんな事やっぱり些細な事でしかないよ。僕はそんな程度の事は気にしないよ」
「で、でも……ッ！」
　何とか食い下がろうとするルフィールを見て、クリュウは怪訝そうに首を傾げた。
「何でそんなに食い下がるのさ。もしかして、君は僕に嫌われたいの？」
「そんな事ある訳ないじゃないですかッ！　ボクは、先輩に嫌われるなんて絶対に嫌ですッ！」
「だったら、もういいじゃん。僕は気にしないって言ってるんだからさ」
「……先輩」
　そう言って笑ってくれるクリュウの笑顔を見て、ルフィールは体中の力が抜けたような気がした。最悪を予想していて、なけなしの勇気貯金をはたいて覚悟もしていたのに、彼はそんな予想を大きく裏切った。もちろん、良い方向にだ。
「本当に、許してくれるんですか？」
　まだ信じられないルフィールは、再度念押しするように問う。そんな彼女の問い掛けに対しクリュウは笑って答えた。
「許すも何も、ルフィールは何も悪い事はしてないじゃん」
「で、でも……」
「僕が人を殴った事について気にしてるなら、それはもういいよ。僕だって男だ。長い人生の中ではそういう事もあるって。気にしなくてもいいよ」
「先輩……」
「それより明日は授業があるだろ？　もう寝ちゃおうよ。二限からのルフィールと違って僕は一限から調合学があるから早く起きないといけなんだし」
「そ、そうだったんですか。す、すみません……」
「いいからいいから。さっさと寝ちゃおうよ」

そう言ってクリュウはベッドに横になった。ルフィールはそんな彼の後姿をじっと見詰めていたが、すぐに自らも横になって掛け布団を被った。

何となく彼の方を向くのが気恥ずかしくて、二人は互いに背を向け合う。だが、意外にも動いたのはクリュウの方だった。

「せ、先輩……？　ひゃッ!?」

振り向こうとしたルフィールは背後からクリュウにしっかりと抱き締められた。突然の事に顔を真っ赤にしてあわあわとうろたえるルフィールに対し、クリュウは何も語らずにそっと彼女の体を抱き締め続ける。

次第にその温かな温もりに優しく包まれる感覚に身を任せ、ルフィールは心地良さを感じ始めた。内にある不安を溶かすように温かい彼の腕の中、次第に眠気が訪れた。

今日は色々な事があった――いや、もう日付は変わっただろうから昨日という方が正確か。そんな事を思う自分に苦笑しつつ、昨日あった事を思い出す。

久しぶりにひどい目に遭ったが、それ以上に素敵な事があった。

改めて、クリュウ・ルナリーフという人間の事を尊敬した。やはり、自分が慕うだけあって彼はすごい人だった。普通ならこんな自分の裏切り行為に怒って当然なのに、彼は怒る所かそれを含めて改めて自分を迎え入れてくれた。

本当に心優しい人だ、クリュウ先輩は――そして、改めてクリュウ・ルナリーフという少年を好きになった。

ずっと違うと思っていたが、もう隠しようがない。だって、今回の事でわかってしまったのだから。

夢の中に落ちていく寸前、ルフィールは大好きな彼の腕の中で頬を赤らめながら、こう確信した。

――ボクは、先輩の事が大好きです……――

第９６話　夢光降り注ぐ幻月輪廻（ムーンロンド）

翌日、一限の授業が始まる少し前に緊急集会を知らせる角笛が校内に鳴り響いた。授業を控えて準備をしていた者や二限や三限からの授業に備えて惰眠を貪っていた生徒達は慌てて準備をすると急いで昨日創立記念パーティーが開かれた生徒会館に集まった。

クラス別に分かれて並ぶＡ～Ｇの七クラス。五〇〇人もの生徒達は突然の緊急集会に困惑している様子。

Ｆクラスの列に並ぶクリュウとルフィール、シャルルもまた困惑していた。

「どうしたんだろ一体。今日は調合学が小テストがあるからって結構勉強してたのに」

「そうですね。もしかして昨日のボクの事が原因なのでしょうか？」

「うぅ、まだ眠いっすよぉ～……」

朝に若干弱いクリュウだが、すでに起床から時間が経っているので問題ない。ルフィールは朝に強いので問題なしだが、朝にものすごく弱い上に昨日は夜更かしまでしていたシャルルは滅茶苦茶眠そうだ。

「昨日は夜更かしでもしたのか？」

「う、うっす。消灯後もずっとゲームやってたっすよ。寝たのはたぶん日付が回ったずっと後っす」

「……何でそんなに起きてるんだよ」

「……今日シャルは三限からっすから。それまで爆睡でもしてるつもりだったんすよ。それがこんな事に……ふわぁ」

盛大なあくびをするシャルルに苦笑しつつ、よく見るとシグマも盛大なあくびをしていた。それを見てまた苦笑。

「私はしっかりと眠れましたよ。そうですよねシルト？」

「えぇ。いつも僕が受けている待遇、理解できました？」

なぜか意気投合しているクードとシルト。何があったのかシャルルに尋ねると、どうやら危険分子扱いを受けてシグマにリビングから追い出されて廊下で寝ていたらしい。ちなみにシルトはそれが日常だそうだ。まぁ、元々お試し一ヶ月ではチームによっては余程の事が

ない限り男女が一緒の部屋で眠る事は当然だ。そして、クリュウ達は問題なく暮らしているが、中にはシルトのような扱いを受けている男子も少なからずいるのだ。ハンターを目指すだけあって、女子も一筋縄ではいかないたくましい子が多い。

「でもエルはちゃんとベッドで寝てたっすよ？」

「たぶん、完全に女子扱いされてるんだろうなぁ」

というか、完全に害のない存在として扱われているのだろう。女の子の部屋に雄のペットがいても誰も気にしないというのときっと同じ理由なのだろう。

今日もエルはシグマの横で盛んに彼女に話し掛けている。まだ半分くらい寝ぼけているのではないかと思ってしまうほど眠そうなシグマはそれらに「あぁ……」とか「おう……」とか曖昧な返事を繰り返している。それでも笑顔で話すエル。本当にいい子だ。

そんな感じでそれぞれが次第にこの集会の理由についての雑談から本当の雑談に変わり始めた頃、生徒会館のドアが何の前触れなしに開かれた。そして真っ白な制服に身を包んだ生徒達が規則正しく道を作るように並び、ステージ横の階段までそれが続く。

ざわざわと騒いでいた生徒達はそれを見て皆一斉に黙り、ドアの向こうから現れるであろう人物を待つ。

沈黙が迎える中、威風堂々とした佇まいと共に現れたのは我がドンドルマハンター養成訓練学校に君臨する生徒達の長。時には教官よりも強大な権力を有する全校生徒を統括する美しき姫――クリスティナ・エセックス。またの名を氷の女神。

クリスティナが道を通ると、彼女が通り過ぎる寸前にいる生徒会役員が見事な敬礼をしてみせる。

さすがクリスティナ生徒会長が編成した歴代生徒会役員の中でも類を見ない忠誠心と日々の努力を忘れない最強のメンバーだ。というか、もうこれは生徒会役員というよりは一つの兵隊のようだ。

クリスティナは生徒会と同時にＡクラスも束ねているのだが、生徒会の仕事をしている時はＡクラス副委員長がクラスを統括している。事実、Ａクラスの一番前、本来は委員長がいるべき所には別の男子生

徒が立っている。彼がＡクラス副委員長なのだろう。しかしそれはあくまで彼女が生徒会の仕事をしている時の代役であり、基本的にはＡクラスもまた彼女の指揮下に入っている。

皆に見守られながらクリスティナがステージに上がると、控えていたいかにもハンターという感じの屈強そうな大柄の生徒が敬礼した。それに対し、クリスティナが初めて答礼した。確か、彼は前回の生徒会総選挙で生徒会副会長に就任した男だ。

豪華な佇まいの教卓を挟んでもう一方にいるのはメガネにツインテールといういかにも真面目そうな少女。彼女もまたクリスティナに敬礼する。彼女も前回の生徒会総選挙で就任したもう一人生徒会副会長だ。

男の副会長が執行部（騒乱鎮圧・治安維持を行う実力部隊）、女の副会長が総務部（主に書類仕事やイベントなどの企画を行う事務部隊）のそれぞれ部長も兼任しており、生徒会長であるクリスティナがその二つの部署を統括する組織形態をしているのが生徒会だ。役員数は約五〇人と一つのクラスほどの規模を誇る。

生徒会とＡクラス。二大組織を統括するこの学校の生徒の中で最も強大な権力を有する生徒会長、クリスティナは教卓の前に立つとしんと静まり返った生徒達を一回見回す。その美しさ、凛とした姿に多くの生徒達が心を奪われる。

「昨日は創立記念パーティーを中断してしまい、申し訳なかった」

我らが生徒会長の第一声は謝罪の言葉から始まった。驚く生徒達の前でクリスティナは深々と頭を下げる。それに合わせて両副会長、そして道のように並んでいた生徒会役員（執行部役員）もまた一糸乱れぬ動きで頭を下げた。

「実は昨日反乱分子の鎮圧を私自ら行った為、事後処理の為に断腸の思いで宴を中断したのだ。生徒諸君には申し訳ない事をしたと思ってはいるが、これが私に任せられた役目故、どうか許してほしい」

クリスティナの言葉に昨日の夜は突然パーティーを中断されてブーブー文句を言っていた生徒達も黙っている。元々あのパーティーを企画したのは生徒会総務部だ。その点では感謝しているし、

さらに言えば治安維持も兼ねた長を彼女に任せた時点で彼女の行動を阻害するような事は皆望んでいない。満場一致で四期連続で生徒会長になった彼女に反意を抱く生徒など、この学園には存在しないのだ。

一方、昨日のパーティー中断が自分達のせいだという事に決定印を受けたクリュウ達の顔は一様に暗い。仕方がなかったとはいえ、罪悪感を感じずにはいられない。

ざわざわとする生徒達を静かにさせ、クリスティナは続ける。

「そこで昨日緊急に官生会議（教官・生徒会合同会議の略）を行った結果、本日を緊急の休日とし、夜は改めてパーティーを開く事にした」

クリスティナの言った言葉の意味がわからず、生徒達は一瞬ポカンとした。しかし次第に脳がその言葉を理解し、至る所でざわざわとし始める。そんな生徒達に向かって、クリスティナは頼もしい笑みと共に最後の詰めを言い放った。

「――つまり、今日も休みだという事だ。皆の者、今日こそ大いに楽しむといい」

刹那、爆発音のような歓声が生徒会館全体に響き渡った。

その後、解散となった生徒達は思い思いの休日を楽しむ事となった。

しかし突然の休日の為、予定のない生徒達。街に行く者は多かったが、校内に残る生徒もまた少なくない。

クリュウ達はルフィールを気遣って街に行くという選択肢を捨てたので、必然的に校内に残る事となった。しかし昨日の今日という事もあってシグマやアリアも校内に残ってクリュウ達の部屋を訪ねて来た。

結局、クリュウ達の部屋にシグマやアリアなどが詰め掛けて大騒ぎとなった。シグマは最初こそ他クラスのアリアにケンカを売っていたが、最終的にはみんなでわいわいと楽しむ事となった。

シャルルは昨日の雪辱戦と言って再び大富豪を始めようと進言。クリュウ達も巻き込んでゲームに没頭した。

仲間と一緒になって休日を楽しむ。そんな今まではできなかった

事を大いに楽しむルフィールの姿を見て、一同は内心ほっと胸を撫で下ろしていた。
楽しいひと時は、あっという間に過ぎて行った……
その夜、生徒会館で改めてパーティーが開かれた。昨日と同じような間取りでテーブルが置かれており、そこには昨日と同じように豪華な食事が並んでいる。そして生徒達もまた昨日と同じように着飾っている。
パーティーも終盤。それぞれでこのイベントを楽しむ生徒達の中、クリュウ達はいつものように隅っこの方に陣取っていた。クリュウは昨日と同じ黒いスーツ姿。隣に立つシャルルは紺色のドレスに白いカーディガンという出で立ちだ。その他にも男装のようにクリュウと同じようなスーツ姿のシグマとクリーム色のドレスを着たアリア、同じデザインの水色のドレスを着たレナとシア、スーツ姿のディアとシルト、昨日と同じ桜色のドレスのフェニスなど、今日の面子は豪華であった。
炎の女神、水の女神、雷の女神と、三女神が集まるだけあって隅っこにいてもクリュウ達は注目の的だ。
「うぅ、動きにくい格好だから腹一杯食えなかったっすよ～」
色気よりも食い気なシャルルはドレスが気に入らない様子。それでもしっかりと着飾っている点ではやはり彼女も乙女という事のようだ。まぁ、それでも常人の何倍も食っていた所は彼女らしい。
「それにしても、ケーニッヒの奴遅いな」
そう言って何度も会場に設置してある時計を確認するシグマ。こういう巨大施設でないと、時計なんて高価なものは置けないのだ。ちなみに校内には中央にチャイムを備えた大時計塔とこの生徒会館の二ヶ所に時計が設置されている。
「何かあったのかしら」
フェニスもまた先程から何度も時計を確認しては困ったようにため息する。
「遅過ぎっすよ。シャルは早くデザートが食いたいっす！」
「まあまあ、もう少し待ってあげようよ」

短気なシャルルを押さえつつも、遅いなぁと思いながら何度も時計を確認するクリュウ。
実は三〇分ほど前、この面子の中にはルフィールの姿もあったのだ。ただしドレスは昨日ダメになってしまったので、いつものような私服姿だったが。そこへクリスティナが現れてルフィールを連れて行ってしまったのだ。
そして、それから三〇分ほどが経ったが、依然として二人は戻って来ていないのだ。
「それにしても、生徒会長もよく教官陣を説得できましたわね」
「そうですね。授業を潰してその上パーティーだなんて……」
「……脅迫？」
「ありえなくないですわね」
アリア、レナ、シアが言う通り。そもそもよくこんなパーティーを開けたものだ。教官達を説得し、さらには臨時の予算まで組んで開くとは、生徒会という組織のすごさを改めて見せ付けられた気がした。
「生徒会はいつも黒字運営だそうですから。その余った予算を使ったのかもしれませんね」
エルの発言に皆がなるほどとうなずいた。
各地に設置されているハンター養成訓練学校には基本的に学費は存在しない。市民から徴収する税金やギルドが稼いだ資金などが予算として回されて運営している。学費という壁で優秀なハンターを育てられないなんて事がないようにする為だ。
しかし、支給される予算はいつも最低限のもの。その為他校や以前まではこの学校もいつもギリギリ。たまに赤字運営という状態だったのだ。しかしクリスティナが生徒会長に就任してからは生徒達に市内での清掃活動を命じたり生徒だからこその低賃金での簡易依頼を行い、報酬を得ると同時に生徒達の成長も促す。その他様々な方針転換により、ドンドルマの訓練学校は彼女が生徒会長になってからの四期、年換算で二年間ずっと黒字運営状態が続いている。
「改めて思うけど、やっぱりウチの生徒会長はすごいですね」
シルトの言葉に「そうかぁ？　俺は清掃活動とかダルいからあんま

りなぁ」とシグマがめんどくさそうに答える。まぁ、彼女みたいな生徒も多いが、同時にこうした生徒自治を見事に実現させてくれているクリスティナに感謝している生徒もまた多いのだ。
　そんなみんなの頼れる生徒会長様が開いた今夜のパーティー。だが、その肝心の主催者でもあるクリスティナはルフィールと一緒にどこかへ行ったきり帰って来ていない。よく見ると、先程から警備員やウェイター、ウェイトレスに扮した生徒会役員の動きが慌しい。どうやら自分達の主であるクリスティナ生徒会長を捜しているようだ。確かこの後の予定では生徒会長であるクリスティナの宣言で今日のメインイベント、ダンスが始まる事になっている。
「僕達も捜しに行った方がいいかな？」
　クリュウの言った言葉に皆が仕方がないと言いたげにうなずく。その時、
「すまない。遅くなった」
　背後から声を掛けられ、クリュウ達は一斉に振り返った。するとそこには純白の美しき姫が二人いた。一人は生徒会役員が必死になって探していた生徒会長クリスティナ。氷の女神と称され皆にクールな印象を与え続けてきた学園の戦姫。しかし今は美しい純白のドレスに身を包み、薄っすらと化粧をしているのかいつものクールな感じとは違って美しくてかっこいい大人な女性の魅力を感じさせる。
　クリュウ、ディア、シルト、エルの男性陣四人が顔を赤らめてクリスティナの姿に見惚れるのも仕方がない事だ。ただし、シャルル、アリア、シグマ、フェニスの女性陣四人がそれぞれの男子の頭を引っ叩いたが。ちなみにクードはニコニコとしており、やはり腹の読めない奴だ。
　そして、そんなクリスティナの背後に隠れるようにしているもう一人の姫。それはルフィールであった。クリスティナと同じデザインの純白のドレス。彼女と違ってルフィールの頭には純白のカチューシャが載せられ、いつもの細メガネも今はない。その格好は偶然なのか昨日のパーティーで彼女自身が着ていたドレスによく似ていた。クリスティナと同じく薄っすらと化粧がされており、とてもかわいら

しい。
　クリスティナとルフィール。同じような格好をしても一方は誰もがその魅力に心を奪われる美しき姫。一方はまだあどけなさと幼さが残るものの、未来に十分過ぎるまでの美しき片鱗の期待を感じさせるかわいらしい姫。それぞれの魅力が十分に引き立たれている、そんなドレス姿であった。
　二人の突然のドレスアップにクリュウ達は言葉を失ってただただ固まるしかできない。そんな皆の反応を見てクリスティナが頬を薄っすらと赤らめながら自らの格好を確認する。
「な、何なのだ？　この格好、どこかおかしいか？」
「おかしくなんてないっすよッ！　すげぇきれいですッ！」
　そう興奮しながら断言したのはディア。クリスティナの美しき姿を一秒たりとも逃さないという感じで彼女のドレス姿を目に焼き付けた後、興奮冷めやらぬ勢いのまま「どうかこの後のダンスをご一緒に――ぎゃぁッ!?」とダンスのお誘いをしようとした刹那、シアが突然ディアの膝を蹴り抜いた。あまりの激痛に悶えるディアを一瞥し、シアはアリアの方を向く。
「……害虫駆除完了です」
「よくやりましたわ」
　アリアは満足そうにうなずくとシアの頭を撫でた。するといつもは感情が顔に出ない無表情少女シアの顔に薄っすらとだが《嬉しさ》の表情が浮かんだ。
「な、何しやがるシアッ！」
「やっぱり男ってキモイよねぇ……」
　そう言ってレナはわざとらしく多きため息を吐いた。その言葉にディアは激しく落ち込んだらしく「どうせ俺なんてキモイさ……」と床に座り込んでしまう。ついでにレナの言葉にクリュウ、シルト、エルの三人がとばっちり的なダメージを受けた。
「レナ、そのような事を言ってはなりませんわ。キモイのはそこのポンコツ限定の話であって、殿方というは皆とても良い方ばかりですわ――そして、ある日突然どうしようもなく素敵に思えてしまう……」

アリアはそう静かに言うと、じっとクリュウを見詰めた。そのどこか熱を帯びた視線に気づいたクリュウが振り向くと、アリアは顔を赤らめて慌てて視線を逸らした。顔を逸らされたクリュウは困惑したように首を傾げる――赤面するアリアを悲しげに見詰めると、レナとシアは一斉に振り返ってクリュウを睨み付けた。それこそ親の仇を見るような容赦のない怒りの眼光。その視線にクリュウは言いようのない恐怖を感じて慌てて視線を逸らした。

（……あ、あれ？　僕、二人にあんな目で睨まれるような事したっけ……？）

困惑するクリュウだったが、ふと別の強い視線を感じて振り返った。すると、いつの間にか生徒会の男子生徒と何かの打ち合わせをしているクリスティナの背後からじっとルフィールがこちらを見詰めていた。クリュウと視線が合うとルフィールはうつむいて視線を逸らしてしまったが、すぐに戻して再び二人は見詰め合う形になる。

「あの……」

頬を薄っすらを赤らめながら近づいてきたルフィールはそっと声を掛けてきた。クリュウが「何？」と返事をすると、ルフィールはしばしその場で胸の前で組み合わせた手をいじってうつむいていたが、意を決したように顔を勢い良くもたげると、潤んだ瞳（イビルアイ）でクリュウを見上げる。

「ボクのこの格好……どうでしょうか……？」

まるで獲物にそっと近寄るランゴスタの羽音のように小さくてか細い声でルフィールは言った。クリュウはその言葉をしっかりと聞き取り、一度ルフィールの新しいドレス姿を確認。そして、

「うん。すごく似合ってる――かわいいよ」

「そ、そうですか……」

クリュウの言葉に頬だけでなく顔全体を真っ赤にさせ、ルフィールは先程以上に小さな声でそう答えるとうつむいてしまった。

――顔を上げていると、嬉しくてどうしようもなく真っ赤になった上に制御不能なくらいにニヤケてしまう自分の顔を公共の往来で晒す事になってしまう。彼だけになら恥ずかしくはあるが構わない。

だが、彼以外の人には自分のこんな顔は見てほしくなかった。見られたら、恥ずかしくて死んでしまうかもしれない。
　そんな状態と必死になって一人で戦うルフィールにクリュウが声を掛けようとした刹那、
「おぉ、盛り上がっているみたいだな」
　聞き慣れた声に振り返ると、そこには我がＦクラス担任であるフリードが立っていた。相変わらず防具を纏っているらしく、今日も銀色に輝くシルバーソルシリーズを頭以外に重厚に身に纏っている。その後ろには純白のワンピースの上にピンク色のカーディガンを着た丸メガネがかわいらしいシャニィ、男子生徒の基本的なオシャレ服の模範とも言うべきスーツ姿のクロードが続く。
「フリード教官、それにクロード教官にシャニィ医務官まで。お三方もパーティーに？」
「まぁな。いやはや、先程まで教官会議があってな。どこかのじゃじゃ馬生徒が教官達の面子を見事に台無しにしてこんな大層なイベントを開いてしまってからな。元教え子の事もあって、俺もひどく嫌味を言われたぞ」
　そう言ってフリードはクリスティナの方を見る。クリスティナはクールな表情で彼の視線を受けると、優雅な歩みでフリードの方に近づき、スカートの裾を持ってまるで貴族の娘のような美しい一礼をした。
「今回の私の強引なやり方を陰から根回ししてくださり、感謝します」
「なぁに。今回はクラスが違うが、お前はいつまでも俺の大切な生徒だ。遠慮せずにどんどん面倒事を押し付けてくれ」
　そう言ってフリードは盛大に笑うとその大きな手でクリスティナの頭をポンポンと優しく叩いた。比較的女子の中では長身のクリスティナでも、体格自体が普通の成人男性のそれとは逸脱しているフリードの前では普通の大きさに見えてしまうから不思議だ。
　フリードの大きな手が邪魔で彼女の表情は見えないが、クリスティナは無言で彼の柔らかいとは言いがたいがとても優しい手を受け続ける。

「うわぁ～！　みんなおめかししちゃってかわいいぞッ！　男達よ、胸に大志を抱いて女子にアタックだ！　女達よ、アタックしてくる男達を完膚なきまでに叩き潰せ！」
「……ラングレイ医務官。それでは男側があまりにもかわいそうでは？」
「冗談に決まってるじゃない。本気にするなんてクロード君は真面目すぎるぞ！　もっと気楽になりなさい。この私のように！」
「……いえ、医務官のようになったらそれはそれでアウトです」
　クロードの控えめなツッコミに対してシャニィは「ニャハハハハハッ！」と独特な笑い声で返す。見た目はとてもひかえめそうな女性なのに、性格は真逆のとてもハイテンションでスキンシップの激しい人。それがシャニィ・ラングレイであった。
「おほ？　フリンっちは何でスーツなのよぉ。あなたもドレスを着ればいいじゃない」
「誰があんなヒラヒラとしたもん着れるか！　それとその気合の抜ける呼び方はいい加減やめろッ！」
　体全体を使って激しく抱きついてくるシャニィに、罵倒とそれなりの暴力で返すシグマ。だがシャニィはさすがハンターというべきか、ただ単に常人を逸脱しているのかは不明だが、それらの攻撃を全て回避しながらシグマに絡む。この二人はいつもこんな感じなので、Ｆクラスの面々やアリア達は見慣れている。
　美女二人が絡むシーンに何か変な妄想スイッチが入っていたディアはシアの鉄拳が鳩尾（みぞおち）にクリーンヒットして地面に伏した。
　シルトは先程からフェニスと話し込んでいる。あの二人、よく一緒にいるしとても仲がいい。一部噂で二人は付き合っているのではないかともされているが、本当なのかもしれない。まぁ、本当の所は本人達しか知らない事だ。
　そしていつの間にかシグマから離れたシャニィは今度はシャルルに絡んでいた。だが、シグマに対してのような過剰なスキンシップはなくお互いに大きな声で話しては豪快に笑っている……あの二人、結

構気が合うようだ。
「およ？　そういえば今日は珍しくクリスっちがオシャレしてるわね。苗字と同じでエロかわいいぞ！」
「……ラングレイ医務官。それは明らかなセクシャルハラスメント行為に該当します。生徒会長の権限で追放しますよ？」
「もぉ、クリスっちも冗談が通じないわね。でも本当にかわいいわよ。ねぇビスマルク先生？」
　突然話を振られたフリードは「お、俺か？」と一瞬困惑したが、クリスティナの姿を見ると自信満々に大きくうなずいた。
「あぁ、いつもの凛々しいクリスティナもいいが。こういう女の子らしいクリスティナの方が俺はいいと思うぞ。やはりお前も女の子なのだからオシャレにしていた方がいい」
「そうですか」
「何だか、娘を嫁に出す父親のような気分だな！」
　ガハハハハッと豪快に笑うフリードの言葉にクリスティナはくるりと背を向けると「私はこれで。そろそろダンスパーティーの開会宣言があるので」と言ってクリュウ達から離れた。それが合図となったかのようにフリード達も離れて行った。
　四人を見送ったクリュウはそろそろ引き上げようと考えていた。残るは今回のパーティーのメインイベントであるダンスのみだ。だがクリュウは踊るつもりなどなかった。特に踊りがうまい訳でも一緒に踊ってくれる人がいる訳でもない。別に強制参加ではないのだから、わざわざ恥ずかしい思いをして人前で踊る必要などないのだ。
　料理は食べたしみんなとも楽しく話せた。もう思い残す事はないし、さっさと立ち去ろう。そんな事を考えながら皆に帰る事を伝えようとした刹那、「あーにじゃッ！」という元気な声と共にシャルルが抱きついて来た。
「のわッ!?　しゃ、シャルルッ？　いきなり抱きつかないでよ」
「いいじゃないっすか別に」
「お前なぁ……」
「そんな事より兄者！　シャルと一緒に踊ろうっす！」

「はいッ!?」
　今までシャルルの言動に驚かされて来た事は多々ある。だが、今回の発言はいつも以上に驚愕するものであった。あまりにも驚き過ぎて、クリュウは一瞬フリーズする。
「えっと……踊る？　僕が、シャルルと一緒に……？」
　ようやく思考が回復した所でやっとの思いで出せた言葉がそれだった。まだ若干先程の驚愕のダメージが残るクリュウに対し、シャルルはいつものように元気全開で話を進める。
「そうっす！　せっかくの機会っすからね、思い出作りの為に一緒に踊るべきっす！」
「いや、別に僕は……」
「何言ってるっすか！　今の思い出は今しか作れないんすよ？　思い出の数は多ければ多いほど幸せになれるんす！　さぁ、兄者もシャルと一緒に幸せになろうっすッ！」
「いや、そんな事言われても……」
　やけに今日のシャルルはしつこい。いつもはクリュウが言いよどんだ所で「ご、ごめんっす。兄者に迷惑掛けちゃダメっすよね？」と少し冷静になり、結果的に「や、やっぱりダメっすか？」と弱々しく最後の訴えをし、結局クリュウが根負けして了承するというのが常のパターンだ。しかし今回のシャルルはやけに必死に見える。どうしてそんなに自分とダンスをしたいのだろうか。世界鈍感王決定戦があったら間違いなく優勝候補となるであろうクリュウは不思議そうに首を傾げる。
「あ、あのクリュウ」
　そんな事を思っていると背後から声を掛けられた。振り返ると、そこにはどこか落ち着かない様子のアリアが目線を伏せて立っていた。よく見ると薄っすらと顔が赤く、時折目線を自分に向けては目が合うと避けるように視線を下げてしまう。
「アリア？　どうしたの？」
「い、いえ。大した用事じゃないんですのよ。ただその……私踊る相手がいませんの」

「そ、そうなの？」
「……ダンスは二人セットになって行うものですわ。でも、私は踊ってくれる殿方が誰もいませんの」
　そう言って、何かを訴え掛けるような視線で見詰めて来るアリア。だが世界レベルの鈍感さを持つクリュウにはその程度の事は通用しない。
「でもさ、アリアは雷の女神って呼ばれてるくらいだからさ、一緒に踊りたいと思う人は大勢いると思うけど」
　確かに、アリアは学園四大女神に選ばれるだけあって美人だ。シグマと違って女の子らしさもちゃんとあり、フェニスのような優しさも兼ね備え、クリスティナのような近づきがたい美しさではない。それに人望も厚く、彼女を慕う生徒は四大女神の中でもトップクラスに多いだろう。そんな彼女が踊る相手がいないと言えば、我先にと男達も押し寄せるだろう。
　すると、アリアはクリュウの言葉にムッとしたような表情を浮かべる。
「だ、誰でもいいという訳ではありませんわ！　私にだって踊ってもらいたい殿方がいるんですのッ！」
　クリュウのいい加減な物言いについ熱くなってしまったアリア。そしてふうとため息を吐いて冷静さを取り戻す――だが同時に、自分が恐ろしくとんでもないぶっちゃけ発言をしてしまったという事実に気づき、顔をこれまで以上に真っ赤に染めた。一方のクリュウはいつもは鈍感なくせにこういう面倒な時に限って勘が鋭かった。見事に彼女の言葉の最後の部分を拾い上げる。
「え？　アリアって好きな男の人がいるの？」
「ふぇッ⁉　い、いやその……わ、私は……」
「そっかぁ……。アリアもやっぱり女の子なんだね」
　あまりのテンパり具合に彼の受け取り方によっては大変失礼な物言いにもツッコミを入れる余裕がない。真っ赤になった顔を必至に隠すようにうつむきながら、玉のような汗をダラダラと流すアリア。
　ここで一気に言うべきか。それとも、もう少し迂回してからの方が

いいか。でも彼は一筋縄ではいかない鈍感男。迂回ルートでは気づかない可能性が高い。ではストレートに？　そんな恥ずかしい事、絶対にできない。
　頭の中で色々な事がグチャグチャになって訳がわからなくなるアリア。
「アリアの好きな人はわからないけど、応援してるから。がんばって！　アリアならきっと成功するよ！」
　――今現在進行形で失敗の可能性が限りなく大きくなっているという事を、満面の笑みを浮かべながら言う彼は気づいていない。
　彼は全くの誤解をしている上に、自分の気持ちなど一切気づいていない――その現実に、鉄のように硬いアリアの心が無残にも折れた……
「うわあああぁぁぁんッ！　クリュウなんて大バカ者ですわあああぁぁぁッ！」
「えぇッ!?」
　突然激しい勢いで泣き出したアリアはくるりとその場で驚くクリュウに背を向けると、スタミナゲージ全開の勢いでダッシュ。生徒会館から出て行ってしまった。
　突如として泣きながら出て行ってしまった雷の女神。周りにいた者達は一斉にクリュウに集中し、中には殺気の込もった視線を向ける者もいる。それらの視線から逃げるように、そしてアリアを追おうと走り出そうとしたクリュウの脛に突如として激痛が走った。悲鳴を上げる事もできずに蹲る。目に一杯の涙を溜めながら顔を上げるとそこには無表情で立つシアがいた。どうやら彼女の恐ろしい威力の蹴りが脛に炸裂したらしい。
　文句を言おうとしたクリュウだったが、彼女の氷のように冷たい眼光と背筋が凍るような殺気に口が動かなくなる。
　シアはクリュウに恐ろしい殺気を放った後、アリアの後を追って行った。その後を姉のレナが続く。だがその途中で突然くるりと振り返ると、蹲りながら彼女に視線を向けていたクリュウに向かって、レナは全く感情の込められていない笑顔のまま親指を立てた手を首

の前で横に動かすというジェスチャーをした――俗に言う《首を切る》《死ね》などの意味を持つ恐ろしいジェスチャーだ。
クリュウに見事なとどめを刺したレナはシアとアリアを追って生徒会館から出て行った。
何とか立ち上がったものの見事に放置されたクリュウはこの状況が理解できずに困惑する。すると、そんな彼の膝に再び激痛が走った。またしても蹲って激痛に耐えるクリュウが顔を上げると、そこには仁王立ちしたシャルルが立っていた。
「しゃ、シャルル……ッ！　お前まで人体の急所を見事に貫きやがって……ッ」
「兄者のバァカッ！　人でなしッ！　女たらしッ！　バァカバァカッ！」
クリュウに反撃の隙を与えずに散々に怒鳴り散らし、シャルルもまたアリア達が消えたドアに向かって走って行ってしまった。
二度に渡る膝がダメージを回復する暇を与えない見事な波状攻撃を受け、しかも自覚がない為に理不尽に感じる精神的ダメージも加わってある意味満身創痍なクリュウ。しかし周りからの視線にさらに殺気が加わった事によって、クリュウは嫌な汗を流す。忘れがちだが、シャルルは男女問わずとても社交的に交流するタイプの為、ものすごく友達の数が多いのだ。今新たに加わった殺気は、彼女の友人勢力だろう。
ある意味クリュウがそれらの視線に対して限界に達しようとした時、突如として会場内の照明が落ち、辺りは真っ暗な暗闇に包まれた。突然の事に生徒達がざわざわとしていると、すぐに明かりが戻る。ただし今まで会場を照らしていた各所にあった灯火ではなく、生徒会館の天井にある窓から注がれる月の光だ。今まではどうやら黒い布で覆われて隠されていたらしい。
月の光は一直線先を神々しく照らす。そこは生徒会館のステージであり、先程まで有志や生徒会役員によって演奏が行われていた場所。そして、その月の光に神々しく、そして美しく照らされる姫がいた――生徒会長、クリスティナ・エセックスその人だ。

「――これより、本日のメインイベントであるダンスパーティーの開会をここに宣言する。皆、男女問わず友好の輪を広げ、明日の友との信頼を築けるよう祈っている。雛鳥（ひなどり）も、いずれは天空を翔ける荒鷲となる。未来という名の空を制する若き荒鷲達に栄光あれ」

ハンター訓練生と熟練ハンターを鷲に例えるのは彼女の口癖の一つだ。そしてその口癖を見事に締めくくりの言葉とし、彼女のダンスパーティー開会宣言は終了した。

再び一瞬の暗闇の後、各所に灯火が灯って会場内を明るく照らし上げる。その時にはすでにクリスティナの姿はステージにはなく、代わりに先程までＢＧＭを流していた生徒会役員（総務部）による演奏隊が配置を完了していた。

指揮者が指揮棒を振り、演奏が開始された。先程までの静かなメロディーとは違って、どこか高揚感を感じさせるテンポの高い曲。それに合わせてあちこちで生徒達によるダンスが開始された。

「それじゃ、俺達も踊って来ます」

「じゃあね」

そう言ってシルトとフェニスは二人一緒になってクリュウ達から離れた。そしてそのままシルトが差し出した手をフェニスがそっと取り、二人は他の生徒達のようにダンスを始める。周りからは嫉妬や羨望の眼差しが集中砲火されるが、二人の息はピッタリだ。

「ケッ、見せ付けやがってあのバカップルが」

「あ、あの先輩ッ！」

優雅に踊る二人をどこか寂しげに見詰めるシグマに、緊張した面持ちのエルが声を掛けた。シグマは「何だ？」とめんどくさそうに振り返る。彼女の視線と合うと、エルはボンッと顔を真っ赤に染める。

「お、おいおい大丈夫か？　熱でもあんじゃねぇのか？」

「だ、大丈夫ですッ！　そ、それよりも先輩ッ！」

「だから何だよ」

「そ、その……」

まるで火山の溶岩に照らされているかのように真っ赤になった顔

をうつむかせて何かをゴニョゴニョとつぶやくエル。そんな彼のハッキリとしない態度にイラつくシグマは容赦なく喝を入れる。
「男なら言いたい事はハッキリと言いやがれッ！」
「は、はいッ！」
　シグマに怒鳴られてビクッを体を大きく震わせた後、エルは意を決したように相変わらず真っ赤だが真剣な表情になって顔を上げる。いつになく真剣な彼の瞳に、自然とシグマの顔も引き締まる。
「せ、先輩ッ！　どうか、僕と踊ってくださいッ！」
「……はぁ？」
　彼の真剣な瞳に「せ、先輩ッ！　どうか、僕と決闘してくださいッ！」という状況を想定していたシグマであったが、エルから放たれたのは彼女の予想のはるか斜め上を見事に通り過ぎるような言葉であった。
「お、踊るだと？　俺と、お前がか？」
「はいッ！」
　戸惑うシグマに対し、エルはキラキラとした瞳で彼女を見詰める。その瞳には不安の色はあれど大きな期待に満ちていた。純粋過ぎる彼のきれいな瞳に、シグマが半歩下がる。
「わ、悪い冗談は寄せ。一体何の罰ゲームだっての。この俺がダンスをする姿なんて想像するだけで吐き気がするぜ」
「そんな事ありませんッ！　きっととても可憐でかわいらしいですよッ！」
「ば、バカ……ッ！　変な事言うんじゃねぇよッ！」
　こういう人格柄、シグマはどうしても女子にモテる。その女子達からは《かっこいい》とか《凛々しい》、良くても《美しい》と言われる事はあれど、《かわいい》などと言われた経験は一切ない。しかも今回は見た目が女の子であっても一応は男の子。二重の意味でいつもはこの程度の事はクールに流すシグマがうろたえる。
「だ、だいたい何で俺がお前なんかと踊らなきゃいけないんだよ」
　そのキラキラした瞳を直視できずに目を逸らすシグマの照れ隠しに放たれた言葉。だがそれは純粋な心を持つエルには言葉通りの意

味となって直撃する。
「そ、そんなぁ……。やっぱり僕じゃ先輩に釣り合わないでしゅか……？」
　涙が混じって語尾がハッキリしないエルの言葉に対しても、シグマは一貫して視線を逸らし続ける。だが、エルのうるうるとした、まるで小動物のような瞳が容赦なくシグマに降り注ぎ続ける。
「……うぅ。わ、わかったよぉ。踊ればいいんだろ、踊れば……」
「ほ、本当ですかッ!?わぁいッ！」
　大喜びするエルに対し、シグマは頬を赤らめながら疲れたように大きなため息を吐く。ハンター訓練生として実技では百戦錬磨を誇るシグマであったが、こういう事においては全く免疫がないので非常に脆い。
「じゃあ行きましょう先輩ッ！」
「お、おい引っ張んじゃねぇッ！　それと言っておくけど俺はダンスなんて踊れねぇぞッ！」
「大丈夫ですッ！　今回は僕がしっかりとエスコートしますから！」
　満面の笑みを浮かべながらシグマの手を取って走るエルと、そんな彼に手を引かれながら渋々といった具合に、でもどこか楽しそうな表情を浮かべるシグマ。どこからどう見ても仲のいい姉妹にしか見えない。場合によっては兄妹にも見えなくもない異色の組み合わせの二人が、ダンスをする生徒達の群れに消えて行った。
　あっという間に先程までいた多くの人物が消え、ディアもまたいつの間にか消えており、残されたのはクリュウとクード、ルフィールのみ。
「それではクリュウ。私と一曲踊りますか？」
「……あのさ、本当に今度こそ誤解じゃ済まなくなるよ」
「冗談ですよ」
「君の冗談は冗談に聞こえないんだよ……」
　クリュウが苦笑しながら言うと、クードは「そうですか？」といつものようにニコニコと笑いながらとぼける。本当に腹の底がわからない男だ。

「では、私はこれで。先約がありますので」
そう言ってクードは歩き出す。クリュウの横を通り抜け、彼の背後にいたルフィールの横をも通り抜ける。だが、その一瞬、
「――がんばってください」
ハッとなってルフィールが振り返ると、クードは背を向けながらヒラヒラと手を振っていた。その後姿に、初めて彼の本当の優しさを見た気がした。
いつもは何を考えているかわからず、明らかに人をおちょくり倒しているようなイメージしかない厄介な先輩のクード。だが本当は、誰よりも自分を応援してくれていたのかもしれない。今思えば、彼は様々な部分で自分の心を見透かしたような言動や、ちょっとした配慮もしてくれていたような気がする。
じわりと、胸に熱いものがこみ上げてきた。
「ランカスター先輩……」
「――忠告を一つさせてもらいます。色気づくのはいいですが、今更胸にパットを入れたって無駄ですよ」
少し距離が離れているからこそのちょっと大きめな声で堂々と乙女の秘密を暴露するクード。周りの視線が一斉に自分のちょっとだけ偽装した胸に集中し、ルフィールは顔を真っ赤にして慌てて胸を両腕で隠し、それらの視線にイビルアイで睨み返す。
キッと最後に殺気が込めた視線をクードに向けるが、彼はニコニコとこちらを見て笑っている――前言撤回。やっぱりあいつは嫌な奴だ。
容赦なく鋭いイビルアイで睨みつけていると、クードの周りに多くの女生徒が集まってきた。距離が多少ながらある上にＢＧＭや人々の声に掻き消されてよく聞こえないが、断片的に「踊ってください」とか聞こえるので、きっと皆クードを踊りに誘っているのだろう。ムカつく奴だが、顔だけはいいから女子には相変わらずモテる。まぁ、自分は死んでもクードになんかは靡かないが。
クードを踊りに誘う女子達を見て、ルフィールはハッと自分の当初の目的を思い出した。慌てて振り返ると、クリュウが一人だけ。彼が

いなくならなくてほっとしたと同時に、いつの間にか自分と彼の二人っきりになっている事に気づく。これはまたとないチャンスだ。
「あ、あの先輩……」
「じゃあルフィールはパーティーを楽しんでてよ。僕はそろそろ部屋に――えっと、ルフィール？　なぜそんな泣きそうな目で僕のスーツの裾に必死にしがみ付いてるの？」
「バカですかッ!?　あなたはバカなのですかッ!?　いいえ、バカなのですねッ!?　確定事項としてバカなのですねッ!?　完全無欠にバカなのですねッ!?」
「……今までの人生で五回も連続でバカなんて言われるのは初めてだよ」
「本当ならあと七回は言いたいくらいですが」
「か、勘弁してよ……」
「そんな事より、何をさりげなく帰ろうとしているのですかあなたは」
ルフィールはそう言って不機嫌そうにイビルアイでクリュウを見詰める。そんな彼女の視線に対し、クリュウは「いや、もうダンスしかないなら帰っても大丈夫かなと」とちょっと自信なさげに返す。すると、案の定ルフィールは怒る。
「今宵のパーティーのメインはダンスですよッ!?　なのに、そのダンスをせずに帰るだなんて信じられませんッ！」
「そ、そうかな？」
「世間知らずというか、非常識です」
「……君の一切の隙を与えない波状罵倒攻撃の方がずっと非人道的だと思うけど」
ズタボロに言われて少なからずダメージを受けているクリュウだったが、先程のシャルルと同様にやけにダンスにこだわるルフィールの態度が気になる。
「ルフィールって踊るのが好きなの？」
「人並みです。好きでも嫌いでもないというレベルです」
「じゃあまた何でそんなに張り切ってるのさ」
「そ、それは……」

クリュウの問いに対し、ルフィールは頬を赤らめて視線を逸らした。時折クリュウの方を見ては目が合うと視線を逸らすという動作を繰り返す。そんな彼女の態度が気になりつつも、クリュウは言葉を続ける。
「僕だって好きでも嫌いでもないけどさ、恥ずかしいじゃん。それにダンス自体だって人並みにしか踊れないんだから、わざわざする事もないし」
「先輩はどうして積極的にならないんですか」
「いや、積極的になる理由がないし。それにルフィールだって踊りたいならさっさと踊ってくればいいじゃん」
「――先程のヴィクトリア先輩の言葉を借りますが、ダンスは二人セットになって行うものです。ボク一人では踊れません」
「もちろん踊る相手もいるんでしょ？」
「先輩はボクの友好範囲の狭さを見くびっていませんか？」
「……って事は、もしかして……」
「そのもしかしてです」
だいたい予想はしていたとはいえ、こう見事に予想を断定されると苦笑が浮かんでしまう。本当は断ってもいいのだが、どうしても彼女に対しては強く言えない。いつもと変わらない無表情。だが、その瞳は間違いなく期待と嬉しさが混じっている。こんな純粋な瞳で訴えられれば、どんな無茶難題を言われてもがんばってしまう。そんな気がする。
クリュウが諦めたと確信すると、ルフィールはそっと彼に向かって手を差し伸べ、弱ったモンスターに向かって竜撃砲を撃ち込むかのごとくとどめの一撃をぶっ放した。
「――先輩、ボクと一曲踊ってください」
ルフィールの言葉に対し、クリュウは恭しくその場で一礼する。
「喜んで」
――クリュウもまたその場で一礼し、そっと彼女の手を取った。
顔を上げたルフィールの顔にはこれまでで最高に幸せそうな笑みがあり、クリュウもまた慈愛に満ち溢れた満面の笑みを浮かべてい

る。
手を取り合った二人はそのまま、曲に合わせて、弾むように踊り出した……
ダンスパーティーはずいぶんと盛り上がっているようだ。
会場の隅に立って生徒達のダンスを見守るフリード。教官王と呼ばれ生徒達からは信頼と恐怖という相反する印象を持つ彼だが、今日はいつもとは違うどこか優しげな、まるで子供の成長を見守る父親のような瞳をしていた。
見知った顔がいくつも楽しそうに踊っている姿を見ると、それだけでも楽しくなる。ふと視界にシャニィとクロードのペアが入った。明らかにシャニィが主導権を握っており、豪快でパワー溢れる彼女のダンスにすっかりクロードが振り回されている。それはダンスというのはあまりにも華麗さに欠ける踊り。だが、二人の周りでは笑いが絶えない。
「なかなかいいコンビだな」
そう言った刹那、クロードを振り回していたシャニィの手と彼の手が離れた――一瞬で群衆の中にクロードが消えると、直後に何かが壊れる盛大な音が聞こえた。
「ハハハハハッ！　まるでコントだな！」
おかしそうにフリードは豪快に笑う――その時、背後から誰かが近寄る気配がした。振り向くと、そこにはクリスティナが立っていた。純白のドレスを身に纏う彼女の姿は、どこかのお姫様に見える。
「クリスティナか。どうした？　お前は踊らないのか？」
「先生こそ、踊られないのですか？」
「ガハハハッ！　俺がダンスをするような男に見えるか？」
「見えませんね」
「お前は踊れるだろ？　誰か誘って踊って来い。お前なら誰を誘っても了承してくれるぞ」
「……そうですか。では――」
何かを一瞬だけ逡巡した後、クリスティナはスカートの裾を摘んでその場で恭しく一礼した。その様は気品があり、華麗で上品。本当に

どこかの姫と言われても納得してしまう。そんな美しさがあった。
「クリスティナ？」
「――フリード先生。私と一曲踊ってくださいませ」
「はぁ？　お、俺がか？」
「ええ」
　フリードは目を白黒させる。全く予想をしていなかった、あまりにも突然の事に驚いているのだ。そんな彼を、クリスティナはじっと見詰める。
　フリードはそんな彼女の視線に対して困ったように苦笑する。
「おいおい、俺はダンスなぞ踊れんぞ」
「構いません。私の動きに合わせていただければ、十分ダンスになります」
「そこまでして俺を選ばなくてもいいだろ。さっきも言ったが、お前なら求めればいくらでも男なんて――」
「――ダンスを申し込む相手は誰でもいいという訳ではありません。特別でないと、ならないんです」
「特別だと？」
「ええ」
　クールな表情で返すクリスティナに対し、フリードは首を傾げた。確かに自分は彼女の担任を数度やっているし、その後も授業によっては担当教官になった事もあった。試験勉強の為に補講をしてやった事もあったが、どれも他の生徒にもやっている事で、自分が彼女に特別視される理由など思いつかなかった――だが、世の中にはそういう行為そのものが、特別になってしまう場合があるのだ。
「何で俺がお前の特別なんだ？」
　フリードの何気ない問い。しかしそれはクリスティナは十分に予想していた言葉だった。
　ずっと、一緒にいたのだから。彼の性格など手に取るようにわかる。
　学年首席。皆、その肩書きに自分とあまり深く接しようとはしなかった。ただでさえ自分はきれいだから目立つのに。自分で自分の

事をきれいと言うのはいささか抵抗はあるが、客観的に見ても自分の容姿は美しい部類に入る。それもかなり上位の。
その為、周りからいつも自分は孤立していた。それに、学年首席という肩書き自体もまた、自分へのどうしようもないくらいに強いプレッシャーだった。いつも1位でないといけない。皆の期待を裏切ってはいけない。そんな重圧が、まだまだ幼かった心に重くのしかかっていた。
何もかも捨てて逃げ出したい。そんな衝動に駆られた時、声を掛けてくれたのが彼だった。
「困った事があったら俺に何でも相談しろ。俺はお前達生徒の味方だ」
初めての二者面談。初めての担任であったフリードの言葉が、全ての救いの言葉だった。自分は言うとおり、彼に何でも相談し、自分が進むべき道を教えてもらった。友達の事、成績の事、勉強の事、私生活の事。まだまだ知らない事が多い1年生な為、担任のフリードに多くの事を相談し、多くの事を教えてもらった。
彼に教わった通りにし、次第にクラスにも馴染めるようになった。それまで重圧でしかなかったプレッシャーも、いつの間にか自らを鍛える為の試練と変わっていた。何もかもが、一変したのだ。
フリードには感謝してもし切れない。恩師を問われれば、彼の名前を真っ先に答えるほど、自分にとってフリードはとても大きな存在となった――やがてそれは、少女から大人の女性へと成長していく中で、別の想いへと変わっていった。
生徒会や生徒会長に立候補したのも、少しでもフリードの役に立てればと思っての事。今までの自分は、《氷の女神》と呼ばれて来た自分の姿は、そんな彼に対する想いの表れであった。
そして今、自分は絶好のチャンスにいる。氷の女神とも称される自分は、こんな一世一代の勝負の時だというのにも冷静でいた。かわいげがないと言われればそうかもしれないが、これが自分のチャームポイントなのだと開き直ろう。
一度だけ大きく深呼吸し、呆然としている彼の顔を見上げる。その

ちょっと間抜けな感じの顔にちょっと笑ってしまったが、それが絶妙な具合に女の子らしい笑みになる。無愛想なよりかは、こっちの方が断然いいだろう。
全ての準備は整った。この今ままでに費やしてきた日々、そして様々な反対を押し切り、ねじ伏せて実現させたこのパーティー。その全てが、今日この瞬間の為にだけ使われて来た礎（いしずえ）だ。
美しき碧眼に彼の姿を捉え、クリスティナは小さく息を吸って、
「――フリード先生……私、あなたの事が好きです」
自らの想いを言った。
「……な、何だと？」
突然のクリスティナの告白に、フリードは困惑していた。同時に、顔面が熱くなるのも感じる。
教え子から告白されるという展開、よく訳のわからん恋愛小説を読むシャニィがそんな展開を言っていたような気がするが、そんな事自分には関係のない事だと思っていたし、起きる訳もないとも考えていた。だが実際は、今目の前で起きてしまっている。それも、相手はこの学園一の美少女だ。
狩りでは百戦錬磨のフリード・ビスマルクも、こうなってしまっては形無しだ。「あ、いや……」とか「う、うむぅ……」など返事にもなっていない言葉を搾り出すだけで精一杯だ――だが、そんな彼の反応もクリスティナはもちろん予想済みだ。
「今はまだ返事は結構です。ただ、私の気持ちだけは伝えておきたかったので」
「クリスティナ……」
「クリスと呼んでくださいって、何度も言いました」
「あ、あぁ。そうだったな――クリス」
困惑しながらも彼女の言うとおりに彼女を呼ぶと、クリスティナはこくりとうなずいた。
「――さぁ先生、夜はまだ長いですよ。一曲、私と踊ってくださいませ」
そう言ってクリスティナは笑った。それは年相応の少女の、幸せに

満ちた最高の笑顔だ。
　クリスティナはフリードの手を取ると、驚く彼の巨大な体をグイグイ引っ張って踊る者達の中心へ向かう。教官王と氷の女神という校内にいる者なら知らぬ者はいないという程の有名人二人の組み合わせに、周りの視線が集中する。
　そして、フリードが何か言い出す前に、クリスティナは曲に合わせて一歩を踏み出した。自分の何倍も大きなフリードをしっかりとリードし、クリスティナは踊り出す。
　その日、ダンスパーティーに一人の恋する美しき姫が舞い踊った。その踊る姿は、幸せに満ちた恋する乙女の姿そのものであった……

第９７話　大混戦　目指すは優勝狩猟祭

創立記念のダンスパーティーから二ヶ月の月日が流れた。
あれから、クリュウとルフィールの仲が何か劇的に変化したという事はなく、いつも通りの日々が続いた。変化したといえば、前に比べてエルが積極的にシグマにアタックしている事だろうか。シグマは「正直疲れる」と愚痴っていたが、別に嫌という訳ではないらしい。
彼女としてはエルの事を本当の弟のように思っている。一方のエルはシグマに対して特別な想いを抱いているのは一目瞭然だ。だが、当のシグマはどうやらその事に気づいていない。周りの者は二人の問題だからと特に協力するような事はなかったが、一度だけアリアがエルの為に立ち上がってシグマに詰め寄り、それが原因でクラスを巻き込んだ大ゲンカにまで発展した事もあったが、結局何の変化もない。
もう一つ変わった事と言えば、フリードとクリスティナが妙に互いを意識しているように見える。気のせいかもしれないが、どうやらあの創立記念のダンスパーティーで何かあったらしい。パーティーの直後には二人が付き合っているという衝撃的な噂が校内に吹き荒れ、フリードは教官会議に掛けられるわクリスティナは無言を貫くわで大騒ぎ。まぁ、結局は学園一の美少女と学園一の破壊神であるフリードでは釣り合わないという冷静さを取り戻した皆の判断でうやむやに終わったが、結局の所は本人達しか知らない事だ。
その後、クリュウ達の学園生活は特に何の騒ぎもなく順調に進んでいた。元々成績が優秀な方であるクリュウや校内首席の成績を有するルフィールは問題なく授業をこなす一方で、常に赤点ギリギリのシャルルは四苦八苦。毎日毎日クリュウ自ら彼女の勉強を見てあげるという生活が続いていた。
あと一つ変わった事といえば、ルフィールを囲む周囲の環境が大きく変わった事だろう。
ＦクラスとＢクラスではそれぞれシグマとアリアがルフィールに対しての差別行為を働いた生徒がいたら容赦なく厳罰を加えると早

くに言っていた事や、クリュウなどの計らいによって少しずつだが彼女を普通の友人と認め、迎え入れる生徒が増えていた。他にもあのクリスティナが生徒総会で一切のいじめや差別の撤廃。それに反する者は退学も視野に入れた厳罰に処すると宣言した為、表立った彼女への嫌がらせは全くなくなっていた。

三人の女神の活躍によって、ルフィールは彼女が夢見ていた《普通の女の子》として暮らせるようになっていた。だが、本人が一番に望むのは、結局はクリュウと一緒にいる事。今も相変わらずクリュウを巡ってシャルルと日々対立を続けている。しかも最近はその争いにアリアまで加わり騒ぎが拡大。彼女に付き添うレナとシアの中でクリュウに対する評価はもはや再起不能なまでに落ちていった。

そして、全てのターニングポイントであったダンスパーティーから二ヶ月。学校最大の行事が幕を開けた。

何度となく足を運び、クリュウ自身はすでに地図なしでも全体を把握できるようになった狩場。ここはクリュウ達Ｆクラスとアリア達Ｂクラスが初めて合同で狩猟学を行った狩場であり、その後も何度もクリュウ達を成長させてくれた場所だ。

そんな狩場に、多くの生徒達が右往左往と行き来している。いつもの狩猟学と違い、生徒達は皆それぞれ肩に自分が属するクラス別に色分けされた腕章を付けている。

色は全部で七色。つまり、全クラスの生徒がこの狩場に集結している訳だ。ただし全員ではなく、各クラスから選ばれた選抜チームではあるが。

なぜこのような全クラスが入り乱れるような状態になっているかというと、今日は一期に一度ある《狩猟祭（しゅりょうさい）》と呼ばれる全クラス対抗で校内一のクラスを決める大会なのだ。もちろん、クラス点に大きく影響するので、全クラス本気で挑んでいる。

狩猟祭の内容は総合狩猟形式（フルハンティング）と呼ばれる形式で、各自に配られたポイント表に書かれた素材を時間内にどれだけ集められるかというもの。それぞれ素材ごとにポイントが割り振られており、例えば竜石【小】は１００ポイント、百葉のクローバーは５

００ポイント、竜岩は２０００ポイントなどと決められている。これはギルドで決められているトレジャーと呼ばれる特殊クエストと同じ条件で、通常時の狩場では採取できない特殊素材がポイントの対象となる。

時間内にそれぞれのクラスから選抜されたチーム（各クラス三チーム十二人）の合計ポイントがクラスの取得ポイントとなり、全クラスで最も高いポイントを獲得したチームが優勝というものだ。ちなみに集めたポイントの一部はそのままクラスポイントになるので、優勝できなくてもクラスの点数を上げる事もできる。ただし、優勝すれば大きなボーナスポイントが入るので、やはり全クラスが優勝を目指す。

それぞれのクラスの選抜部隊がクラスの為に一心不乱、勇猛果敢、粉骨砕身にがんばっている。

そして、そんな狩猟祭はすでに開始されてから一時間が経過していた。残り時間はあと二時間。生徒達は冷静に素材集めに奮闘している。

そんな中、Ｆクラス代表チームの一つにクリュウ達第７７小隊の姿があった。

「見つけました」

草むらで素材の捜索をしていたルフィールはそう言って一掴みの草を掲げた。それは竜草と呼ばれる対象素材で、ポイント数は１００ポイントである。

「こっちもちょうど捕まえたっすよ――あ、ルフィールは見ない方がいいっすよね」

そう言いながらルフィールにシャルルは鷲づかみしている竜虫【雌】と呼ばれる虫を見せ付けるように彼女に向ける。加算ポイントは３００ポイントだ。

「べ、別にその程度の虫ではボクは怖がりません」

「だったらちゃんと直視するっすよ。そんな必死になって視線を逸らしてんじゃ説得力がないっす」

「こ、心の目で見ています」

「……相変わらず虫がダメなんてダメダメっすねルフィールは」
「シャルル。あんまりルフィールをいじめないの」
そうシャルルを叱ったのは川辺で釣りをしていたクリュウ。その手にはちょうど釣り上げた竜魚【中】が握られている。ちなみに彼の足元にはすでに釣り上げた竜魚【大】一匹、竜魚【中】二匹、竜魚【小】六匹が大きな葉の上に並べられている。竜魚【大】が５００ポイント、竜魚【中】が３００ポイント、竜魚【小】が１００ポイントなので、合計２０００ポイントだ。
「べ、別にシャルはいじめてる訳じゃないっすよ」
「そう？　僕にはそう見えたけど」
そう言ってクリュウは再び釣りに戻る。そんな彼に、シャルルはムッとしたように頬を膨らませる。
「ふ、フンッ！　兄者のバァカッ！」
「シャルルッ！」
怒るクリュウに「フンッっすッ」と背を向けるシャルル。背後でクリュウが大きなため息を吐いたのが聞こえたが、ため息をしたいのはこっちの方だ。
ふとルフィールを見ると、まるで先程のやり取りなどなかったかのように冷静な表情でクイッとメガネを上げ、再び草むらの中でポイントになりそうな草や実の捜索を再開する。そしてもう一度クリュウの方を見て、大きくため息。
「何でこいつばっかり……」
シャルルは最近悩んでいた。
ずっと一緒だと思っていたクリュウが、すぐ近くにいるのにすごく遠くにいるような気がしてならないのだ。
理由は簡単――ルフィールだ。
クリュウはどうしてもルフィールの味方になる事が多い。元々真面目な為に正しい行動をする事が絶対的に多いのはルフィールの方なので、正解を導き出すとどうしても彼女と同意見になってしまうのは仕方がない。だが、それを差し引いても明らかにクリュウは自分よりルフィールを贔屓（ひいき）にしている。

それに、いつもいつも彼はルフィールと一緒だ。二人でどこかへ行こうとしても、常に彼の隣には彼女がいるので出し抜けができない。それに対してクリュウとルフィールは二人で行動する事がしばしば。明らかにバランスがおかしい。

さらに言えば、ダンスパーティーの際もクリュウは自分とは結局踊らなかったのに、ルフィールとは踊っていた。その事実が決定的にシャルルにダメージを与えているのだ。

――兄者は、シャルよりルフィールの方が好きって事っすか……？

――

確かにルフィールはかわいい。女の自分から見ても彼女の整った顔立ちはきれいだと思う。左右で色の違うイビルアイなんて、さしたる問題ではない。むしろチャームポイントでもある。メガネもよく似合う知的なイメージが第一印象の美少女。

かわいくて頭が良くて自分ほどじゃないが実技でも好成績を出している。まさに容姿端麗文武両道、二代目生徒会長様と言ってもいいくらいな完璧超人だ。

それに対して自分はどうだ？

容姿はかわいい部類には入るだろうが、彼女ほど飛び抜けている訳ではない。学業成績はいつも赤点ギリギリで勉強は大の苦手。実技は他を圧倒するも、それは女の子らしさには入らない。むしろやり過ぎはマイナスポイントだ。

一応料理ができるルフィールと全くできない自分。物事全てにおいて細かくて気が利くルフィールと物事全てが大雑把で猪突猛進な自分。女の子らしいルフィールとそうではない自分――完全に負けている。そりゃもう最初から勝ち目なんてないくらいに……

考えていてどんどん鬱になっていく。シャルルは急に走りたくなって虫あみを投げ捨てると全力疾走を始めた。後ろからクリュウの声が聞こえたが、今はその声から逃げたかった。

全力で走り、とにかく彼から離れたかった。離れて、少し冷静になりたかった。

どれだけ走ったか。いつの間にかさっきまでは川辺の野原にいた

はずなのに、今は鬱蒼と木々が生い茂る森の中にいた。時折聞こえる鳥の声が聞こえる程度の静寂さが、今の自分にはちょうど良かった。
全力疾走したので上がる息を整える為に、一応周りが安全かどうかを確認してから腰を下ろした。
追い掛けて来てくれるかなぁとちょっとだけ期待したが、彼は追って来てはくれなかった。正確には追って来ていたのだが、シャルルがその野生児のような見事な身体能力で振り切ってしまった為にクリュウは彼女を見失ってしまったのだ。
だが、そんな事実を知らないシャルルは不機嫌そうに自分が走って来た方向を睨む。
「……フン、兄者なんかもう知らないっす」
悲しくて、くすんとちょっと泣いてしまった。
元々シャルルは寂しがりやなタイプ。だがそれが恥ずかしくていつも隠すように元気一杯に振舞っているのだ。おかげで周りからはいつも明るいと思われているが、実際は彼女だって普通の女の子。落ち込む時は落ち込むし、悲しい時は悲しむ。
――自分はそんなに強い子じゃないのに、周りが自分を勝手に強い子だと思っている。それが苦しい。
本当は大好きなクリュウに甘えたい。今まではそれで大丈夫だったのに、ルフィールが現れてからはそれさえも奪われてしまう。支えを失った建物が簡単に崩れるように、支えを失えば自分は簡単に壊れてしまう。砂上の楼閣。
自分はバカだと自覚はある。バカだから、ペース配分なんて考えないで突っ走ってしまう。心のエネルギーは無限にある訳じゃない事くらいはわかってるのに、バカだからその使い方が下手クソだ。
ルフィールほどじゃなくても、彼女の十分の一でもいいから少しでも頭が良かったら、こんなに苦労しなくても済んだかもしれない。
ルフィールに負けたくない。大好きなクリュウを、取られたくない。
自分は彼女よりもずっとクリュウとの付き合いは長い。彼女の知らない彼をたくさん知っている。なのに、どうしても勝てない。負け

る要素しかない。
　でも、負けたくない。例え可能性が1パーセントだとしても、その1パーセントに全力を注ぐのがシャルル・ルクレールというバカの一つ覚えの猪突猛進娘だ。だが、例え突っ込むにしても、少しでもいい。何か可能性を得たいと思うのは、決しておかしな事じゃないと思う。
　何か、何かないのだろうか……
「あら？　あなたはクリュウのチームの……ルクレールではなくて？」
　その声にハッとなって顔を上げると、そこにはBクラス委員長のアリア・ヴィクトリアが立っていた。その後ろにはレナとシアが続く。
「ヴィクトリア先輩……」
「どうしたんですの？　どこか怪我でも？」
「だ、大丈夫っす。怪我なんかしてないっすよ」
「そ、そう？　ならいいんですけど。遠慮されなくてもよろしくてよ？」
「本当に大丈夫っすから」
　シャルルが笑うと、アリアはやっと納得したようでほっとしたように安堵の笑みを浮かべる。そんな彼女を見て、シャルルは改めて彼女のすごさを知った。
　例え敵対するクラスの生徒であっても、まるで本当の仲間のように心配して気遣う。本当に優しい人だ。そして何より学園四大女神に入るくらいきれいでリーダーシップもある。クリュウだけじゃなく男の人はこういう女性を好むのだと改めて理解する。
「……シャルも、ヴィクトリア先輩みたいに美人で女の子らしかったら、兄者はシャルから離れなかったのかな」
「……本当、何かあったの？」
　心配するアリアに、ついシャルルは話してしまった。急速に仲を進展させていくクリュウとルフィールの事、最近クリュウが自分にはあまり構ってくれない事――それが、寂しくて辛い事……
　涙声になりながら全部を話し終えると、そっと優しく抱き締められた。うつむいていた顔を上げると、アリアが自分をしっかりと抱き締

めてくれていた。
「ヴィクトリア先輩……？」
「その気持ち、すごくわかりますわ。辛かったでしょうね……」
「……ほ、本当すっか？　シャルの気持ち、わかるんすか？」
「わかりますわよ――私だって、同じ気持ちですもの」
　そう言ってアリアもまた、どこか寂しげな笑みを浮かべた。その笑顔に驚くと共に彼女が自分と同じ苦しみを持っている事に気づき、シャルルもまたアリアをそっと抱き締めた。
　抱き合う二人を、特にアリアを見て控えるレナとシアもまた悲しげな表情を浮かべている。
「彼の所に戻るのが辛いなら、今は私の所にいてもいいんですのよ？
　ちょうど、どこかのバカが直前になって風邪を引いて戦力が減っていた所ですし」
「で、でもアリア様。他クラスのメンバーを迎え入れるのはルール的に……」
「レナ。彼女も私の大切な仲間に違いはありませんわ。それに、《他クラスの生徒をチームに入れて参加してはならない》なんて、ルールブックのどこにも書いてありませんわ」
　そう言ってアリアは頼もしい笑みを浮かべた。本当はそんな当たり前な事は当然皆が守ると前提して書いていないのだが、そこを見事に揚げ足を取って逆手に取るとは、さすが策士アリアだ。
「……アリア様、かっこいい」
　ほぉ、と頬を赤らめてそんなアリアの姿に見惚れるシア。
「それでは、私達が大活躍して宿敵シグマのFクラスを潰し、そして間接的にクリュウに乙女の鉄槌を下しましょうッ！」
「おうっすッ！」
「そうでなきゃアリア様ッ！　あんな男、ギッタンギッタンにしてやりましょうッ！」
「……二度とアリア様の前に現れないよう、肉片も残さず消しましょう」
「いや、そこまでは……」

「……気になってたっすけど、二人は兄者の事が嫌いなんすか？」
何はともあれ、新たにシャルルを仲間に入れたアリアチームは木々が生い茂る森の中、反クリュウという志を元に結束を固めた。
シャルルは自分に構ってくれないクリュウをギャフンと言わせてやると心に誓い、アリアもまた最近付き合いが悪くずっとルフィールにばかり構っているクリュウに仕返しを、そしてレナとシアはそんな大好きなアリアを苦しませるクリュウを本気で叩き潰そうと、全くもって意思統制はできていないものの一部利害が一致した四人の奇妙な同盟関係が始まった。
そして、その後新アリアチームは怒涛の勢いで進撃を開始し、他クラスを脅かすまでにその勢力を拡大したのであった。
シャルルの捜索を行いながらも素材集めに奮闘するクリュウとルフィール。先程別行動で素材を集めていたクードも合流し、今は三人でまだ入っていない森の中に突入していた。
「木陰や草陰から突然ランポスが現れる事があるから気をつけてね」
「初心者じゃないんですから、それくらいわかりますよ」
「いえいえ。それがクリュウの愛の表れなのですよ。私達は大変クリュウに愛されているのですね。違いますか？　ルフィール？」
完全に自分の気持ちを知っているのにも関わらずおちょくり倒してくるクードに怒りを覚えるが、いきなりクリュウの前で激怒する訳にもいかず、仕方なく黙って耐える。クードはそんな自分の気持ちすらもわかっているのか、ニコニコとムカつく笑みを続ける。本当に嫌な奴だ。
睨み付けるルフィールとそんな彼女の視線を真正面から受けながらニコニコと笑みを浮かべ続けるクード。そんな二人の視線の攻防戦に気づいていないクリュウは辺りを見回す。
「あ、見っけ」
そう言ってクリュウが草陰で摘んだのは百葉クローバーと呼ばれる珍しい百もの葉がついたクローバーだ。ポイント加算は５００ポイントだ。
「これで百葉クローバーは三つ目か。結構ポイント集まったんじゃな

いかな？」
「ざっと計算して、四人の合計点数は１万４２００ポイントです。内訳はクリュウ先輩が５２００ポイント、シャルル先輩が４２００ポイント、私が３８００ポイント、ランカスター先輩が１０００ポイントです」
「ルフィール、全員分の点数を把握してるの？」
「ええ。ちなみに先輩の場合は魚の点数が大きいですね。私は草や実、竜石など。シャルル先輩は虫類。そしてランカスター先輩は数が少ないので計測できません」
「さりげなく非難されてしまいました」
　そう言ってクードは肩を竦める。だが相変わらずその顔には笑顔の仮面がばっちりと付けられており、彼の腹の中はわからない。だが、まず間違いなくルフィールの皮肉も彼は全く気にしていないだろう。
「まぁ、クードには鉱石採掘を頼んだのに、すでにかなりの採掘場を他の生徒に占領されていたっていう仕方のない理由があるしね」
「過程などには何の意味もありません。必要なのは結果です。ランカスター先輩はチームの点数にほとんど貢献していない。それが結果です」
「いやはや、手厳しいですねぇ」
「反論があるなら点数を稼いでください」
　睨むルフィールとなぜかニコニコと笑っているクード。この二人はどうも仲が悪い。正確にはルフィールが完全にクードをシャットアウトしているのだ。まぁ、彼に関わっているとイライラする気持ちはわからなくもないが。
「二人ともケンカしないで。今は早くシャルルと合流する事が大事でしょ？」
　クリュウが説得するように言うと、ルフィールはプイッとそっぽを向き、クードは肩を竦める。どうやら不満はあるようだが一応納得はしてくれたらしい。ほっと胸を撫で下ろす。
「それにしても、シャルルはどこへ行っちゃったんだろ」

そう言いながら、クリュウは辺りを見回してみる。だが、シャルルどころか動くものの姿が一切見えない。確かに彼女はこっちの方へ走って行ったのだが、すでに周囲にはいないらしい。
「まったく、野生バカのシャルル先輩には毎回毎回迷惑させられっぱなしです」
「そう言うなって。ポイントでは僕に続いて二番に稼いでる働き者じゃないか」
「ま、まぁそれはそうかもしれませんが……」
不満そうにブツブツと何かをつぶやくルフィールはどうやら納得していないようだ。まぁ、点数自体はクリュウやシャルルの方が上だが、個数的には彼女が一番なのだ。理由はクリュウは主に魚、シャルルは虫と単体でかなりのポイントが稼げるものばかり採取しているのに対し、釣りでは釣りミミズがダメで虫は大の苦手なルフィールは主に点数の低い草や実、竜石など点数が低いものを多く集めてポイントを稼いでいる。何だかんだいって彼女が一番の努力家であった。
「しっかし、ほんとどこ行っちゃったんだろ」
そんな具合にシャルルの姿を追いながら森の中を探索していると、突然目の前の草むらが動いた。
――何かいるッ。
クリュウが何か合図をする訳でもなく、クードとルフィールは一斉に武器を構えた。忘れがちだが、二人も立派なハンター候補生なのだ。クリュウもすぐさま訓練用の武器であるルーキーナイフを構えた。
三人が揺れる草むらに警戒心を向けていると、草むらの中から何かが現れた。クリュウの武器を握る拳にも力が入る――だが、現れたのはモンスターではなく人間だった。それも、シグマ達であった。
「うおッ!?　驚かすんじゃねぇッ！　危ねぇだろッ！」
激しく怒るシグマにクリュウは慌てて謝る。よく見ると、シグマは両腕を使って何かを抱いていた。どうやらかなり大きな鉱石らしい。
クリュウの視線に気づいたのはエルだった。
「これは堅竜岩というとても希少な鉱石です。ポイント換算すればこ

れ一つで４０００ポイントにもなるんですよ」
「よ、４０００ポイントッ!?　それはすごいね」
　たった一つでルフィールの今までの苦労を一瞬で追い抜いてしまうほどのポイント。そのすさまじさにはクリュウ達も驚きを隠せない――まぁ、クードはいつものようにニコニコと笑っているが。
「ただし、運搬にはこのようにかなりの制限を受けるのでチームでないとできない荒業だけどね」
「それに、シグマくらいの力がないと運搬も難しいわね」
　シルトとフェニスの言葉にクリュウは納得したように頷く。確かに一攫千金は可能だが、その分リスクも大きいのだ。だからさっきはあんなに怒ったのだろう。ちょっとした衝撃でもどうやらその堅竜岩は壊れてしまうらしい。
「でもこれで僕達Ｆクラスの点数は結構大きなものになるね」
「おうよッ！　俺達でトップはいただきだッ！」
「――オーホッホッホッホッホッ！　そうはさせませんわよッ！」
　聞き慣れた高笑いと共にシグマに向かって無数の銃弾が降り注いだ。シグマは「うおッ!?」ととっさにバックステップで回避。何とか堅竜岩も壊れずに済んだ。
　壊れていない事に一瞬ほっとするも、シグマはすぐさま銃弾が襲い掛かって来た方角を睨み怒号を放つ。
「いきなり何しやがるアリアッ！」
　シグマの怒号に対し、少し離れた場所にある岩陰からアリアが姿を現した。その背後にはライトボウガンを構えるレナとヘビィボウガンを構えるシア――そして、なぜかシャルルの姿もあった。
「しゃ、シャルルッ!?　何で君がアリアの所にいるのッ!?」
　驚くクリュウの言葉に対し、シャルルはプイッとそっぽを向いてしまう。明らかにご機嫌斜めだ。そんなシャルルに代わってアリアが自信満々な態度で口を開く。
「今大会ではシャルルは我がＢクラスの助っ人として一時的に私のチームメイトになっていただきましたわ」
「えええええッ!?」

驚きの声を上げたのはクリュウだけだが、もちろん他の面子も心の中はかなり驚いているだろう。あえて冷静を保つ者、驚き過ぎて逆に声も出ない者――約一名は相変わらず腹の底が読めない笑みを浮かべているが。
あまりの急展開にフリーズするＦクラスの面々の中、逸早く復活したのは我らがＦクラス委員長であるシグマであった。
「クリュウッ！　テメェ自分のチームメイトくらいしっかり管理しろやッ！　よりにもよってアリアに味方するなんて前代未聞だぞゴラッ！」
怒り狂うシグマの怒りは容赦なくクリュウに向けられる。一応クリュウは第７７小隊の隊長（リーダー）だ。隊員（チームメイト）の監督責任を問われても仕方がない。だが、これに対してルフィールがクリュウを守るように反撃する。
「先輩は何も悪くはありません」
「んだとゴラッ！」
「――悪いのは、Ｆクラスの生徒というプライドもなくいつもだらだらと怠けている哀れ過ぎる万年小春日和な最低先輩であるシャルル先輩だと思います」
「……テメェ、意外と毒舌なんだな」
呆れ半分感心半分という具合のシグマの視線を無視し、ルフィールはその光り輝くイビルアイを惜しみなく使ってシャルルを見下したような視線で見詰める。
「……最低最悪などうしようもない先輩だとは思っていましたが、まさかここまでとは……幻滅しました。ルクレール先輩」
もはや名前で呼ぶ価値もないという事だろうか。ルフィールはシャルルの苗字の方で彼女の名を呼ぶ。
一方のシャルルは彼女にしてはかなり耐えた方だったが、ルフィールの容赦のない物言いの数々についにブチギレた。まぁ、彼女でなくてもあれだけ言われれば誰だって怒って当然だろうが。
「いい加減にするっすッ！　人が黙っていれば好き勝手言いやがってッ！　もう我慢の限界っすッ！」

「へぇ。ルクレース先輩に我慢なんて高等技術が使いこなせたとは意外です」
……なぜ、すでに二人は互いに全力で戦闘態勢になっているのだろうか？
互いに睨み合いという見事な攻防戦を繰り広げている二人はとりあえず無視し、クリュウはアリアの方を向く。すると、目が合ったアリアは頬をほんのりと赤らめて視線を逸らした――刹那、レナとシアから放たれた殺気が容赦なくクリュウの方へ向いた。
「……えっと、二人とも何で僕をそんな恐ろしい目で見るの？」
年下の女の子に恐れを抱くのは恥ずかしいし情けない事だが、本当に二人の突き刺すような視線と殺気が怖いのだ。年相応の怒りとは明らかに違う、マジで今すぐにでもその銃口が一斉に自分に向いて銃弾の嵐が起きてもおかしくないような雰囲気だ。
「……あの、アリア？　ルール上参加している生徒を狙った攻撃は禁止されているのは知ってるよね？」
「ええ、もちろん。私がそんな単純な事を見落とすと思って？」
「じゃ、じゃあ今の攻撃は明らかにそれに違反してるんじゃ……」
「これは心外ですわね。私達は別にあなた方を狙っているのではなくてよ？」
「え？　そうなの？」
「えぇ――シグマが持っている堅竜岩を狙っているんですの。できればそのまま銃弾が貫通してもいいですけど」
「確実に俺を間接的に狙ってるだろうがッ！」
アリアの発言に今にも飛び掛りそうなくらい激怒するシグマ。しかしここで飛び掛れば確実に堅竜岩が壊れてしまう。彼女の中にある人よりも結構少ない自制心が間一髪の所で彼女の怒りを踏み止ませた。そんなシグマを少し意外そうに見詰めていたアリアだが、突然ふうと小さくため息を吐いた。
「――さて、冗談はさておき」
「確実に冗談じゃなかっただろうがテメェッ！」
クールなアリアに対して先程から猛烈な勢いでイライラを募らせ

ているシグマ。相変わらずな二人に苦笑するクリュウ。ふと何かの視線に気づいて振り向くと、こちらをジト目で見詰めているシャルルと目が合った。しかしすぐに彼女の方から視線を外されてしまう。
「えっとぉ……」
「とにかく、今ルクレールは私達のチームメイト。私達Ｂクラスは改めてあなた方Ｆクラスに宣戦布告しますわ」
「上等だッ！　必ずテメェをぶっ潰すッ！　裏切り者も容赦しねぇからなッ！　覚悟しておきやがれッ！」
　鬱蒼と茂る森の中、木々の枝や葉を震わせるような気迫を全方位に最大噴出するシグマとアリア。そんな二人のやっぱり相変わらずな姿に皆が苦笑する中、クリュウだけはシャルルの背を見詰めていた。一度だけ振り返った彼女の瞳が、少し悲しげに見えた気がして……
　アリア達の強烈な宣戦布告に触発されて、堅竜岩の運搬を終えたシグマはすぐさま信号弾を上げてシグマチーム、クリュウチームを合わせた全チームを集合。打倒Ｂクラスの決意を新たなものとし、目指すは優勝のみと結束を固めた。
　一方その頃、アリアもまた自分の配下の参加しているＢクラス全チームを集合させて打倒Ｆクラスで団結力を強化していた。
　ＦクラスとＢクラス。双方と共に相手クラスを撃滅すべくポイント集めに躍起になった。クリュウ達もあまり乗り気ではなかったがシグマの脅迫じみた命令の前では逆らう事もできず今まで以上にポイント集めに必死になる。
　だが、ここで一つ誤算が起きた。
　ＦクラスとＢクラスの勢いに触発され、他クラスもまた猛烈な勢いでポイント集めを開始。狩猟祭はかつてないほどの盛り上がりを見せていた。
　同時刻、ベースキャンプに待機する各クラスの応援団の元には次々に各クラスのポイント追加情報が入り、ボードに掲げられた各クラスの点数は休む暇なく次々に更新されていく。
　各クラスの応援団もまた死力を尽くして応援を行い、Ｃクラスは見事な筋肉を持つ男達の応援団を。Ｅクラスはチアガールなどを取り

入れ、各チームの応援合戦も激戦を極める。
「は～いッ！　Ｅクラスに２５００ポイント追加だよぉッ！　おおっとッ!?　今の点数でＥクラスがＤクラスの点を追い抜いたぁッ！　Ｅクラス、怒涛の二クラス抜き達成だッ！　ってあれ？　おぉッ!?　何とＤクラスが新たに３２００ポイントの追加だッ！　これで逆転だ逆転ッ！　勝負はさらにわかんなくなってきちゃったぞぉッ！　どのクラスもがんばれぇッ！　特にＦクラスがんばってぇッ！」
　司会進行役のシャニィはいつものように元気良く多くの教官や生徒が辞退した総合司会を行っている。彼女の天真爛漫な笑顔が爆薬となり、各クラスの熱はさらに熱くなる。
　そんな応援してくれるクラスメートの為にも、参加する各クラスの代表チームは死力を尽くしてポイント集めに必死になっていた。特に、事の原因となったアリア達の奮闘は目覚しいものであった。
「ランポス撃破ですわッ！」
　鉄刀と呼ばれる基本的な形をした初心者用の太刀を構えながらアリアは嬉しそうに勝利宣言をした。そんなアリアの姿にレナとシアがまるで世界を救った英雄に向けるような拍手喝采を送る。そんな二人に合わせるように草むらの中から現れたアイルーもまた拍手した。ただし肉きゅうだから音はしないが。
「すばらしい腕だニャ。オイラ感動したニャ」
「ありがとうですわ。では例のものを」
　アリアが言うとアイルーは「ウニャッ！」と何やら小さな木箱を彼女に向けた。それは上に人の腕が入るくらいの穴が開いた箱。アリアは真剣な顔になると木箱の中に手を突っ込み、中のものを手だけで吟味しながら引き抜いた。その手には一枚の紙が握られている。アイルーはそれを受け取ると中を確認し、自らのポーチの中から紙に書かれていた指定の品をアリアに渡した。
「おめでとうニャッ！　竜石【大】だニャッ！」
「本当ですのッ!?　やりましたわよッ！」
　喜ぶアリアの手には大きな琥珀色の石が握られていた。竜石【大】は５００ポイントと竜石系の中では一番の得点だ。ランポスから受

け取れる中では最高得点の代物だ。
　トレジャー及び訓練学校で採用されている総合狩猟形式（フルハンティング）では通常時では何の役にも立たない素材にポイントを指定して行う。採取なら問題ないが、モンスターを倒した場合には近くにいる監督役のアイルーの持つ木箱でくじ引きを行い、選んだ紙に書かれた素材がアイルーから手渡される方式を取っている。つまり、どんな素材が手に入るかは運次第なのだ。
「さすがアリア様ですッ！」
「……幸運の女神」
「私だけの力ではありませんわ。これは、みんなの勝利ですのよッ！」
　高らかに宣言するアリアの言葉にレナとシアは涙目になっていた。ちょっと危険な感じがする……
　そんな三人を一瞥し、シャルルは草むらで一人虫あみを振っていた。すでに彼女の腰に下げられた虫かごには多くの虫が入っており、かなりのポイントとなっているだろう。
　だが、いくら点数の高くて珍しい虫を捕まえても嬉しくもなんともなかった。普通なら大喜びしてすぐにクリュウに見せに行くのだが、今はそのクリュウとは別行動をしている。
　何というか、寂しかった。
　本当はクリュウと一緒にいたいのに、彼は全然自分に構ってくれない。それが寂しくて、辛くて、自分は逃げ出してしまった。
　さっき会った時、自分が彼を裏切ったという事実を知った時の彼はとても悲しそうな表情を浮かべていた。それを見て、自分の軽率な行動を後悔した。その後悔が、ずっと頭に残って離れなかった。
「はぁ……」
「元気が取り得のあなたからため息なんて、明日は雪でも降るんではなくて？」
　その声に振り向くと、そこにはアリアが立っていた。レナとシアはどうやら近くの草むらで草や石を探しているらしい。自然と二人っきりという空間になっていた。
「天候観測所の予測じゃ明日は雲ひとつない快晴っすよ」

「あら、そうだったかしら？」
　そんなとぼけたような事を言いながらアリアは慈愛に満ちた笑みを浮かべた。その笑顔はどこかクリュウと似ているような気がして、少しだけ気持ちが楽になったような気がした。
「……クリュウの事ですの？」
　見事に言い当てられて固まるシャルルの反応を見て、アリアは確信を得たようにうなずいた。
「やっぱり、そうですのね」
「な、何の事っすか？　シャル、全く意味がわからないっすよ？」
「……あからさまに視線を逸らしながら棒読みのセリフ。あなたって本当にウソが下手なのですわね」
「うぐッ……」
　返す言葉もなく恥ずかしそうに顔を赤らめながらうつむくシャルル。そんな彼女の姿を見てアリアは小さく口元に笑みを浮かべるとそっとシャルルの頭を優しく撫でた。
「ヴィクトリア先輩……」
「アリアでいいですわよ。一時的とはいえ、私達は同じチームメイトなのですから」
「アリア先輩……」
　涙ぐむシャルルをアリアはそっと抱き締める。彼女の美しい髪から漂う甘い香りが、シャルルの心をゆっくりと穏やかにさせていく。
「焦らなくていいんですのよ――あのバカは、いい意味でも悪い意味でもそう簡単には陥落しない難攻不落の要塞。まぁ、難しければ難しいほど燃えるようなタイプじゃないと心が折れますけど」
　そう言って苦笑するアリアを見上げ、シャルルは何かに気づいたように瞳を大きく見開いた。
「アリア先輩、もしかして兄者の事……」
「アリア様ぁッ！　ら、ランポスですぅッ！」
　シャルルの言葉はレナの悲鳴に中断されてそれ以上続く事はなかった。振り向くと、ランポスが二匹レナとシアの前で吼えていた。それを見たアリアはスッと瞳を鋭くさせると背中に下げた鉄刀の柄

を握りながら走り出す。少し遅れてシャルルもサイクロプスハンマーの柄を握りながら走り出した。
「レナとシアには指一本触れさせませんわよッ！」
怒涛の勢いでランポス二匹に襲い掛かるアリア。いつもの優雅な振る舞いや大人な余裕は姿を消し、勇猛果敢に攻め込む。今の彼女はアリア・ヴィクトリアお嬢様ではなく、仲間と共に危険な狩場を駆け抜けるハンター、アリア・ヴィクトリアなのだ。
仲間の為に奮闘するアリアの背中を見て、シャルルはニッといつものようなイタズラっぽい笑みを浮かべた。
その時、一匹を葬ったアリアの背後からもう一匹のランポスが襲い掛かった。レナとシアの悲鳴が重なり、振り返ったアリアの眼前にはランポスの牙が迫り、彼女は顔を真っ青にした。
「吹っ飛ぶっすッ！」
鋭利な牙がアリアに届く寸前、真横からのすさまじい攻撃にランポスは吹き飛ばされて地面を二転三転。そして動かなくなった。遠くから監視役のアイルーが駆けて来る。
「ルクレール……」
「シャルルでいいっすよ。これで貸し一つっすね」
ニッと健康的な白い歯を見せて笑うシャルルにアリアはにっこりと微笑むと「ええ。必ず返しますわよ、シャルル」と自信満々に言った。その笑顔にシャルルは満足そうにうなずく。
「おめでとうニャッ！　さぁくじを引くニャッ!?」
驚くアイルーの視線を追って振り返ると、森の反対側からランポスが三匹こちらに向かって走って来ていた。どうやらさっきのランポスの悲鳴を聞いて駆けつけた増援らしい。
「雑魚がいくら来ても無駄っすよッ！　シャルは無敵っすッ！」
「あら、私も無敵のお嬢様ハンターですのよ？」
アリアとシャルルは互いの顔を見合って笑うと、真剣な表情になって突撃して来るランポスを見詰める。そして二人は同時に地面を蹴ると、真正面からランポスに突っ込んで行った……
「は～いッ！　各チームお疲れ様でしたぁッ！　ではいよいよ集計結

果を発表しちゃうわよぉッ！　一体どのチームが優勝するのか、校長先生お願いしますッ！」
　生徒達が見守る中、朝礼台の上に小柄な竜人族の老人が上がった。彼こそこのドンドルマハンター訓練養成学校の校長。教官や生徒達の頂点に君臨する学校の長だ。
　校長を見守りながら、各クラスは意外にも落ち着いていた。やる事はやった。後悔はない。勝っても負けても恨みっこなし。各チーム、やれる事は全てやったのだ。それはシグマやアリア、クリュウ達も同じ。皆、校長からの発表を待つ。
「それでは発表しゅぶッ!?」
　――校長の口から何か飛び出した。
「おぉ、しゅまんしゅまん。入れ歯が飛んでもうた」
　校長は軽く笑うと入れ歯を再び口に戻す。その一連の動作に、緊張していた生徒達から力が抜けた。この校長、毎回のようにこうして入れ歯が吹っ飛ぶのだ。もはや慣れっこだとしても、緊張している時にやられれば威力は絶大だ。
　呆れる生徒達の視線を咳払いで誤魔化し、校長はいよいよ発表する。
「第７位、Ｇクラス７万６２００ポイント。第６位、Ｅクラス８万２１００ポイント、第５位Ｃクラス８万３２００ポイント。第４位Ｄクラス９万１０００ポイント」
　最下位から次々にクラスの順位が上がられる。歓喜の声は少なく、皆落胆したようにため息を漏らす。彼らの順位は決まり、優勝は残る三クラスで争われる。
　校長は再び「おほんッ」と咳払いすると、第３位のクラス名を挙げる。
「第３位、Ｆクラス１２万９６００ポイント」
　刹那、シグマは悔しそうに「クッソォッ！」と叫んだ。彼女だって相当がんばったのだが、どうやら今回はダメだったらしい。クリュウやルフィールもやっぱり悔しかった。
　少し離れた場所では未だに呼ばれていないＢクラス委員長のアリ

アが見事な高笑いを響かせている。今のシグマにとって、これほど不快な笑いはないだろう。
「続いて第2位準優勝はBクラス。点数は3位のFクラスとわずか100ポイント差の12万9700ポイント」
　刹那、Bクラスからはまるで優勝したかのような歓声が上がった。優勝ももちろん大事だが、それ以上に打倒Fクラスを見事に果たせた事に歓喜しているのだ。アリアも嬉しそうにクラスメイト一人一人と握手する。もちろん、シグマは大変に不機嫌そうだ。
　そして、未だに呼ばれていないのだから順位が確定しているのに一切歓声が上がらないクラスがあった。すでに順位が確定したクラスの生徒も、その伝説のクラスの優勝を祝おうと校長に集中する。
「優勝は、大会新記録である32万4200ポイントを獲得したAクラス」
　――刹那、会場がしんと静まり返った。
　さっきまで喜んでいたBクラスの面々も目を瞬かせている。
　今、恐ろしく信じられない点数を聞いたような気がした。32万4200ポイント？　BクラスやFクラスの倍以上の点数を取っての圧倒的な勝利。その現実が、未だに生徒達は信じられなかった。
　優勝したAクラス委員長、クリスティナ・エセックスは台の上に上がると校長から表彰状とトロフィーを受け取った。それでもAクラスからは歓声は上がらず、皆当然の事のような表情で拍手している。恐るべき軍隊クラス……ッ！
　見事な優勝演説を行い、クリスティナは台から降りた。その先には各クラスの担任である教官達が拍手しており、その中には惜しくも敗れたFクラスの担任であるフリードの姿もあった。
「おめでとうクリスティナ」
「ありがとうございますフリード先生」
　普通の教官と生徒の会話。まるであの夜の出来事などなかったかのように二人は接する――と思われたが、
「フリード先生。約束、守ってくださいますよね？」
「うむ。約束だからな。ちゃんと飯をおごってやるぞ」

「二人っきりで、という条件付ですよ」
「わ、わかった」
どうやら二人は互いのクラスがどちらが優勝するかで賭けていたらしい。そして結果はフリードの敗北。という事で、どうもフリードがクリスティナを食事に連れて行くという事になったようだ。一見するとただの教官と生徒の会話に見える二人の間では、秘密の出来事が進行中という訳だ。
……どうやら、前回は１２万ポイントで優勝したのに今年は桁違いな点数になったのには、彼女なりの絶対に負けたくないという意思の表れだったらしい。
かくして、狩猟祭は終わった。各クラス善戦したが結果はＡクラスの圧倒的勝利で終った。むしろその圧倒的な敗北感が互いのいがみ合いをなくしたのか、帰り道では皆クラス関係なく和気藹々とした会話をする。
そんな中、異常に暗いのはクリスティナに圧倒的な敗北を喫したシグマとアリアだ。互いに肩を支え合いながらぐったりとした感じ歩く二人の背中は見ていられない。
レナとシア、エルは盛んに二人に元気を出すように言うが、二人が復活するのには少しばかり時間が必要そうだ。
そんな中、今回ばかりはＢクラス生徒として参加した為にＦクラスの生徒達とは少し距離を置いているシャルル。まぁ、彼女の事だからどうせ明日にはいつもの関係に戻るだろうが、とにかく今は彼女の周りには誰もいなかった。
「シャルル」
クリュウはそんなシャルルにそっと近づいた。クリュウの声にシャルルは振り返る。
「兄者……」
「お疲れ様。大変だったでしょ、アリアの下って。彼女結構人使いが荒いからね」
「別に、シャルは平気だったっすよ」
「そっか」

クリュウは「僕はアリアにはよく振り回されてたからね。シグマの攻撃を防ぐ最前線で指揮をさせられた事も多々あったし」と言って苦笑した。そんなクリュウに対し、シャルルは黙っている。

しばし二人は何の会話もなく歩き続けた。何を話し掛けるでもなく隣を並ぶように歩くクリュウに対し彼の方を何度もチラチラ見るシャルル。何か言おうと口を開き、やっぱりやめて閉じるという動作を繰り返している。だが、意を決したようにシャルルは再び口を開く。

「あ、あの先輩――」

口を開いた途端、クリュウはシャルルの頭に手をそっと載せ、優しく撫でた。驚くシャルルに振り返り、クリュウは小さく笑みを浮かべた。

「気にしなくていいよ。僕もシグマも、Fクラスのみんなも気にしてないからさ」

「兄者……」

なぜ自分が言おうとした事を彼がわかったのか。自分はクリュウやシグマ達Fクラスを裏切った。許されないとしても謝っておきたいと思って勇気を出して口を開いたのに、彼はそれを制した。なぜ、自分の考えが読まれたのか。

フッと小さな笑みが浮かんだ。

――簡単な事だ。自分と彼はどこぞの新参者に比べれば長い間彼と一緒にいるのだ。お互いの考えなど、簡単に読み取れてしまうのだ。

でも、謝らなくてはいけない。そう思って再び口を開くが、またしてもクリュウに頭を撫でられてそれは失敗に終わる。

「あ、兄者ぁ……」

「そういえば、シャルルと二人っきりなんて結構久しぶりだよね」

懐かしそうにそう言うクリュウの言葉に、シャルルはムッとしたような顔になる。

「いつもお邪魔虫がいるっすからね」

「そんな事言わないの」

「フンッす」
「ルフィールもクードも何か用事があって別行動してるから、今は二人しか僕達のチームはいないんだね」
「そ、そうっすか」
　平静を装って返すが、内心はガッツポーズ全開なシャルル。今は誰にも邪魔されず、本当に久しぶりな二人っきりを楽しめるとわかると、シャルルの顔にもキラキラとした笑顔が灯る――これはチャンスだ。
「それでさ――って、シャルル？」
「えへへっす」
　突然の自分の行動に戸惑う彼を見上げながら、シャルルは嬉しそうに微笑んだ。今彼女はクリュウの腕にしがみ付いて身を寄せている。それはまるで仲のいい恋人同士にも見えるポーズだ。
「どうしたのさいきなり」
「最近の兄者は冷たいっす」
「そ、そう？」
「そうっす。いっつもルフィールの事ばっかり……少しはシャルルの事も構ってほしいっす」
　恥ずかしそうに頬を赤らめながらも、いじけたようにツンとするシャルル。そんな彼女のどこか寂しげな横顔を見て、クリュウは小さく「ごめん……」と言った。
「確かに、ルフィールの事ばっかりだったからね。シャルルまで気が回らなかったのは事実だし、謝るよ。ごめんね」
「べ、別にシャルは謝ってほしい訳じゃ……」
「でもさ、ルフィールの境遇を見てるとどうしても放っておけなくて……」
「それはわかってるっす」
　そう。わかっているのだ。ルフィールは今までずっと苦しい思いをして来た。今やっと、人並みの幸せを得るまでに彼女はなった。彼女の境遇は自分も知っているので、彼女が幸せになる事なら喜んで応援するだろう。それが友達というものだ。

だが、彼女の幸せには間違いなくクリュウが絡んでいる。これはまだまだ子供だが女の子には小さい頃からすでに完備されている女の勘がそう感じていた。
友達として、彼女の幸せは願う。でも、クリュウを取られるのだけは絶対に嫌だった。頭ではわかっているのに、心が理解を拒む。考えるよりも行動する自分は、どうしても心の方で動いてしまう。
どうすればいいか、こんな難しい事は自分でもよくわからない。
その時、頭の上に置かれていた彼の手がその場でポンポンと跳ねた。顔を上げると、そこには大好きな彼の笑顔があった。
「でもさ、今くらいは構ってあげられるよ。ルフィールもクードもいないからね」
「兄者……」
「そうだ。この後どうせもう授業もないんだからさ、一緒に街に行かない？」
「え？　兄者とシャルが、二人っきりでですか？」
「うん。ついでに夕食もどっかで食べてきちゃおうよ。おごってあげるからさ」
クリュウが笑顔でそう言うと、シャルの顔にパァッと笑みが華やいだ。胸が熱くなり、鼓動が早くなる。この感じ、ずいぶん久しぶりな気がした。そして、ずっとこの感じがほしかったのだ。
「行くっすッ！」
「そっか。じゃあ部屋に戻ったら支度しないとね」
「シャルがんばるっすよッ！　クローゼットの奥にスカートがあったから引っ張り出すっすッ！」
「……スカート、奥にあるんだ。まぁ、シャルルはいつも基本的にズボンだからね」
「だってスカートは動きづらいっすから。走ったら下着が見えるし」
「色気よりも行動力か」
「……今、シャルの事をバカにしたっすか？」
「そ、そんな事ないよ」
慌てるクリュウの顔をシャルルはじーっとジト目で見詰める。そ

の視線に気まずそうにクリュウは視線を逸らした。そんな彼の反応に笑いながら、シャルルは一歩前に出てその場でくるりと一回転。ハンターシリーズではなく普通の女の子らしい私服なら、きっとスカートが翻ってかわいらしいのだろう。だが、防具を纏って天真爛漫に笑う彼女の姿は、どうしてもこっちの方が似合ってしまうほど彼女らしい。
「兄者ッ！　そうと決まったら善は急げっすッ！　早く来るっすッ！」
「わかったわかった。でもそんなに急ぐと転ぶよ？」
「平気っすよッ！　ほら、早く早くっすッ！」
　そう嬉しそうに言いながら、シャルルはクリュウの手を握って引っ張る。そんな彼女の姿を見て、こんな純粋に楽しそうな彼女の笑顔は久しぶりに見た事に喜びと少しの罪悪感を感じるクリュウ。今まで、彼女にはずいぶん辛い思いをさせてしまっていたらしい。
　せめて、今日だけは彼女の為にがんばらないと。こういう時こそ男を見せるんだ！
「何をおごってもらおうかな。シャルは肉が好きっすッ！　肉が食いたいっすッ！」
「ちゃんと野菜を食べないとダメだよ」
「うぅ、わかってるっすよ……。でも、その分肉もたくさん食べるっすッ！　今日は食いまくるっすよッ！」
　大喜びな彼女の笑顔にクリュウ自身も嬉しそうに笑みを浮かべながら、そっと手持ちの財布の中と貯金の残高を思い出して苦笑した。どうやら、かなりの出費を覚悟しないといけないらしい。
　でもまぁ……
「兄者ぁッ！　大、大、大好きっすッ！」
　こうやって嬉しそうに微笑んでくれる彼女の為なら、これくらい安いものだ。
　シャルルはクリュウと二人っきりのデート（彼女視点）、そしてたらふくおいしい物を食えるという二重の幸せにもう笑顔全開。クリュウもちょっと懐は厳しいが、そんな彼女の笑顔を見て自身も嬉しそう

に笑う。
　二人は約束どおり学校に戻るとすぐに準備をし、ドンドルマの街へ出発した。いつもの感じの私服姿のクリュウの横には、珍しくスカートを穿いた女の子らしい格好のシャルルが並んでいる。
　そして二人の、事実上のデートが始まったのであった……
「……あのさ、シャルル。食べ過ぎると太るよ？」
「シャルルはいくら食っても太らない体質っすから平気っすよッ！
さぁッ！　食い尽くすっすよッ！」
「……はぁ」
　――その日、クリュウのマネーゲージはいにしえの秘薬を求めるまでに減ってしまうのであった。

第９８話　卒業試験　第７７小隊最後の戦い

学園生活なんて、長いようであっという間に過ぎて行ってしまう。期待に胸を膨らませて毎日が輝いていた低学年。次第に学校に慣れて来てちょっと調子に乗って教官に怒られる中学年。自らの進むべき道を決め、その夢に向かって努力を重ねる高学年。

一流のハンターになる。彼らが目指すのは目的は違えど目標はそこにある。

名誉の為、金の為、自らの本来の夢の土台として。それもまたハンターを目指す理由であり別に間違ってはいない。だが、多くのハンター訓練生は皆純粋に何かを守る為にハンターになろうとしている。特に自らの村や街を守りたいと思う者はその中でも多い。

夢に向かって生徒達は一生懸命スタートラインを目指す――そう、まだスタートはしていない。卒業してからやっとスタートなのだ。しかも、まずは新米ハンターの登竜門であるイャンクックを討伐するまではジョギング程度の道のりでしかない。本当の意味で過酷で、しかしやりがいを感じられるのはそこからさらに先。それを目指し、日々の訓練や学業を学んで来た。

そして今期もまたドンドルマハンター訓練養成学校にもこの季節がやって来た。

――卒業シーズンが。

肌寒い冬を越え、花々が咲き誇る春。この季節はドンドルマの訓練学校も忙しくなる。

学期末テストが終了してしばらくした今日この頃、教官達は長く苦しかった採点作業を終えて机に突っ伏している。疲れ果ててはいるが互いの奮闘を称え合う教官達。一人の教官が「今日は飲みに行くぞッ！」と声を掛けると皆疲れなど吹っ飛んだように歓声が上がる。

一方の生徒達も長く苦しい学期末テストを終えて羽を思う存分伸ばしていた。テストが終了した直後はほとんどの生徒が現在の教官達のような状態になっていたが、時と共に回復したようだ。

だが、まだ試験は全て終わってはいない。最後の科目、実技試験が

残っているのだ。
　これはチームでランダムに指定されるギルドが公認した本物のクエストを行うもので、そこで今までの訓練や知識をフルに発揮してクリアをするというもの。もちろん、訓練生相手にいきなり火竜リオレウスを狩れなんて無謀な事はなく、本当にかけだしハンターが実際に行う程度のものでしかないので、実際はそれほど大変ではない。一部難しいクエストがあり、それに当たらない限りは問題なく、基本的に教科書通りの事をしていれば十分点数を得られる。
　しかしこの試験は通常学年の生徒にとっても進級に大きく影響する上に、卒業を控えた6年生にとっては卒業が懸かった大事なもの。羽は伸ばしているが皆それなりに緊張感を残していた。
　通常学年の生徒からは《最終試験》。6年生からは《卒業試験》と呼ばれる生徒達最後の戦いは、一週間後にまで迫っていた。
　試験休みなのに遊ぶ事もせず、クリュウは真面目に勉強していた。机に座って教科書や参考書を広げ、ノートにとにかく書いて覚えまくる。朝には毎朝の日課としている剣の鍛錬も忘れない。全ては一週間後の卒業試験の為だ。
　難問にぶつかり、散々考えた末に頭を抱えてしまったクリュウ。そんな彼の背中を見てものん気なのはシャルルだ。
「兄者ぁ。少しがんばり過ぎじゃないっすか？　もっと肩の力を抜いた方がいいっすよ」
「……勉強する気すらも抜けているシャルルには言われたくないよ」
「むぅ……」
　クリュウの言葉にシャルルは頬を膨らませて不機嫌そうに彼を見る。だがクリュウはそんな彼女の視線を無視して再び教科書と睨めっこ。最近、勉強を焦っている為にクリュウは何事においても素っ気無くなっていた。それがシャルルにとっての最大の不満だった。
「シャルと一緒に遊ぼうっすよッ！」
　ついにはそんな事を言い出すシャルルに、さすがのクリュウも呆れたような顔で振り返った。
「あのなぁ、シャルルだって試験に合格しないと進級できなくて留年

するんだよ？」
「大丈夫っすよ。今回の学科試験は結構いい点が取れたっすから、あとはシャルの得意な実技のみ。全然問題ないっす！」
自信満々に言うシャルルに、クリュウは大きなため息を吐いた。
確かに今期の学期末テストでシャルルはいつも以上にいい点を取った。しかしこれはクリュウやルフィールが自分の勉強時間を削って彼女に勉強を教えた結果だ。もちろん、彼女の努力自体が最大の力ではあるが。
一方のクリュウは前回よりも順位を上げて今期は８位となった。猛勉強の末の勝利。試験終了後倒れるようにベッドで爆睡したのは必然だった。
アホなシャルルに構っている時間はないと教科書に再び目を向けるクリュウ。だが目の前にある問題はやはり解けない。何度考えても意味がわからないのだ。問題文の意味がわからなければ、答えなんて出るはずがない。
そんな感じでクリュウが必死に唸りながら考えていると、机の端にコトッと小さな音を立ててマグカップが置かれた。中には子供の頃からの大好物であるハチミツ入りのミルクが入っていた。
視線を上げると、そこには小さなトレイを胸に抱いたルフィールが立っていた。
「ルフィール……」
「根を詰め過ぎても何も生まれません。むしろ無駄に体力を消耗するだけです。そんな素人の付け焼刃のような勉強方法ではいくら勉強をしても無意味ですよ」
容赦なくクリュウの努力をバッサリと叩き斬ったルフィール。その腕には金色の腕章が付けられていた。それは式典などで使われる校内首席を意味する腕章。彼女は何と２期連続で学年首席という偉業を成し遂げたのだ。努力の天才とは彼女の事を示すのだろう。
ちなみにまたしても惜しくも２位となったクリスティナの腕には校内次席を意味する銀色の腕章が付けられている。
「さ、さすがに本物の校内首席に言われると堪えるね……」

苦笑するクリュウを無表情で見詰め、ふと教科書に目を向ける。クリュウにとっては難題だった問題も、彼女にとっては十分答えられる問題となる。
「この問題の答えはAです。解き方は――」
いつもはクリュウの方が彼女を引っ張っていくのだが、勉強となると立場は逆転してしまう。知的に輝く細メガネは決して伊達ではないのだ。
「そっか。そういう意味だったんだ。ありがとうルフィール」
「当然の事をしたまでです」
そう言ってルフィールは「失礼します」とキッチンへ戻って行った。二人っきりの時ならきっと大喜びして抱きついてくるくらいの行動をしただろうが、一応シャルルがいるのでクールモードで対応したルフィール。きっと今頃はキッチンでデレデレしているに違いない。
「しかし、いよいよ卒業ですか。長かったようで短かったように感じます」
「まだ卒業できるって決まった訳じゃないでしょ」
「それもそうでしたね」
クリュウのツッコミにいつものようにニコニコと笑っているクード。彼は前期と順位は変わっていない。その笑顔の奥に一体何が潜んでいるかは、校内首席であるルフィールでさえ回答不能だ。というか、永遠の謎だろう――まぁ、この場合の謎は謎のままの方がいいが。
「さすがに校内3位のクードは余裕だね」
「いえいえ、そんな事ありませんよ。残念ながら学科は問題なくても実技となると心配な場所は多々ありますからね」
「そっか、僕は知識がちょっと不安だな。調合系の試験だとちょっとマズイかも」
「調合は覚えるのが多くて困りますね」
「まぁ、調合書の持ち込みは可能だから大丈夫だとは思うけど。不安は尽きないよね」
卒業試験は実技ではあるが、クエストによっては調合を行わなければならない場合もある。その為、生徒達は皆必須アイテムでもないの

に調合書は欠かせない。何せ膨大な量の知識を頭の中に全て入れられる者など現役ハンターでもごくわずか。大多数は今でも調合書を狩場に持ち込むほど、調合というの難しく奥が深い。もちろん、まだ訓練生であるクリュウ達などは持ち込むタイプだ。
「調合書なんてかさ張るだけだと思いますけど」
そう言ったのはいつに間にか戻って来たルフィール。そんな彼女の発言にクリュウは苦笑した。
「確かにそうだけど、持って行って損はないでしょ。調合書の内容全部を記憶している人なんてそういないし」
「ボクは全部覚えていますけど」
「……ごめん。君が本当に努力に努力を重ねて校内首席になったって事実を忘れてたよ」
そう、世の中には彼女のように調合書の内容全てを把握した者も少ないながらいるのだ。本当に少ないのだが。
「とにかく」
そうクリュウは話を区切ると、パタンと開いていた教科書を閉じた。
「この試験にさえ合格すれば、僕はこの学校を卒業してハンターになれる。そしたら、父さんが必死に戦って残してくれた村を、一人になった僕をここまで育ててくれた村にも恩返しができる。やっと、ここまで来たんだ」
クリュウはそう言うと本当に嬉しそうな笑みを浮かべた。この三年間、彼は人の何倍も努力してきた。一年ごとに一学年を上げる通常進級ではなく、ずっと前期と後期で学年を一つずつ上げて来た。学業では校内８位に。実技でもかなりの好成績を残してきた。全ては辺境にあるのに父が死んで以来専属のハンターがいない故郷の村を守る為。自分をここまで育て、応援してくれた皆を守る為。そして、大好きだったのに突然失われた父の背中に少しでも追いつく為……
卒業を、本当に楽しみにしているクリュウ。そんな彼を見詰めるルフィールの表情はなぜか暗かった。大好きな彼が自分の夢に向かって一生懸命突き進んでいる。本来なら応援してあげるべきなのだろ

うとは彼女の卓越した頭脳では十分に理解している――だが、彼が卒業するという事はイコール彼との離別。別れを意味しているのだ。
もちろん、自分だって卒業すればどこかでまた彼を会えるかもしれない。例えばドンドルマに拠点を置いたなら、きっと彼も出稼ぎかなんかでやって来るだろうからその可能性は高くなる。だが確実に一年間、半年に一回学年を上げたとしても、一年は会えない。
大好きなのだ、クリュウの事が。
その大好きな彼と別れなくてはいけない。その忘れようとしていた現実がついに目の前にまでやって来た。今回の校内首席を勝ち取った本当の原因は、そんな認めたくない現実を忘れるように勉強に没頭したからに他ならず、本当なら自分はこんな首席の座を受ける資格などない。本当に努力を重ねたクリスティナなどに申し訳がない――まぁ、クリスティナ自身もフリードに喜んでもらう為に猛勉強していたのは内緒だが。
いつもは勇気や元気をくれる彼の笑顔が、今は辛い。
すぐ近くにいるのに、とても遠くにいるように感じる。
別れたくない。ずっと一緒にいたい。その想いが、自分の中でどんどん大きくなる。そして、こう願ってしまう。
――卒業なんて、してほしくない。
「最低……ッ」
「え？　何か言った？」
彼の声を無視し、ルフィールはリビングを出て行った。そんな彼女の行動に首を傾げるクリュウと、珍しく真剣な眼差しで見詰めるシャルル――そしていつものように腹の底がわからぬ社交辞令てきな笑みを浮かべているクード。
ルフィールはそのまま部屋を飛び出すと一気に走り出した。冷静な部分がこれではいつもバカにしていたシャルルと同じではないかとツッコミを入れる。そしてそんな自分の冷静さに吐き気を感じた。
途中、クラスメイトの女子が声を掛けてくれたが無視して突っ走った。今は、立ち止まりたくなかった。
彼女がやって来たのは昔はよくクリュウと自分とシャルルの三人

で、今ではそこにシグマ達やなぜか別クラスのはずのアリア達が混じって一緒に昼食を食べる中庭。芝生一面の中、一本だけ堂々と中庭の真ん中に生えている大きな木。ルフィールはその木に駆け寄ると、思いっきりその幹に拳を叩き入れた。何度も何度も拳を叩き込み、皮が剥がれて血が滲み出ても拳の連打は止まらない。

最後の一撃とばかりに腕を振りかぶって叩き入れた一撃を最後に拳を止めた時には、白い拳は少し赤く染まっていた。今更になって痛みが走り、顔をゆがめ、その場に崩れる。

芝生の上に仰向けになり、ゆっくりと流れて行く雲を見詰めながら、ようやく冷静になったルフィールは吐き捨てるように言った。

「ボクは……最低だ……」

ハンターズギルド本部は所属する全てのハンターを統括すると共にその強大な影響力から各国の支配者でさえ恐れを抱く巨大組織でもある。その建物はドンドルマのほぼ中央にあり、高く大きな建物に置かれている。隣接するようにドンドルマの酒場もあるが、そこはハンターならば本物でなくては入れない。まさに訓練生から見れば聖地のような場所だ。

そんなハンターズギルド本部の中庭に、生徒達が集められていた。いよいよ、最後の試験が行われようとしていた。

「っていうか、何でまたテメェらと一緒なんだよッ！」

「それはこっちのセリフですわ」

通常クエスト数などから二クラス合同で行われるこの学期末試験。6年生から見れば卒業試験だが――もはや仕組まれているのではないかと疑ってしまう。今回もくじ引きでB・Fクラスが合同で行われる事になったのだ。

学期末試験や卒業試験という大切な試験のはずなのに、相変わらず睨み合う両クラス。二ヶ月前に行われた狩猟祭以来、二クラスの対立はさらに激化。もはや担任であるフリードやヴィレールさえも手が付けられないというか、半ば諦めているほどだ。

両クラスの委員長同士が強烈な睨み合いをしている頃、Fクラスのほぼ中央に位置するクリュウはその光景を見て苦笑を浮かべていた。

「最後の最後まで二人は変わらないなぁ」
　そう何気なく言うクリュウの《最後》というセリフに、ルフィールの表情が曇る。そんな彼女の表情など見えていないクリュウは改めて装備の確認をする。どんなクエストが来ても万全の用意をしてきたつもりだが、不安は残る。狩場に持って行ける道具の数はギルドの決まりで決まっているのだから。
「一体どんなクエストになるかな。できれば簡単な方がいいけど」
「シャルは難しい方が燃えるっすッ！」
　クリュウとシャルルの会話を聞きながら、ルフィールはシャルルと同じく難しいクエストを心の底で望んでいた。もちろん難しい方がやりがいがあるというのも若干あるにはあるが、大多数はクエスト失敗という可能性を期待していた。もしも失敗すれば、クリュウの卒業も危うくなるかもしれない――そんな最低な事を考える自分が、本当に嫌で仕方がなかった。
「ルフィール？」
　突然声を掛けられ驚いてうつむかせていた顔を上げると、すぐ近くにクリュウが立っていた。予想外の近さに慌てて一歩距離を取る。そんな彼女の反応にクリュウは首を傾げた。
「どうしたの？　さっきからぼーっとしてさ」
「な、何でもありません」
　平静さを装うルフィールだったが、何度も何度もメガネの位置を直すという行為は明らかに落ち着けていない証拠。クリュウもそんなルフィールを心配そうに見る。
「体調でも悪いなら無理はしない方がいいよ」
「大丈夫です。全くもって問題ありません」
「そ、そう？　ならいいんだけど……」
　こんな自分を心配してくれる彼の優しさに感謝しながらも、そんな彼の想いを踏みにじっている事に対して申し訳がなかった。自分は、心配してもらう価値なんてない……
　黙ってしまったルフィールに違和感を感じ、声を掛けようとした時、生徒達の前に用意された台の上にフリードが上った。自然と皆の

視線は彼に向かい、クリュウも仕方なくフリードの方を向く。
　そして、フリードの開会の言葉と共に、最終試験が始まった……
「ちょ、ちょっと待ってぇッ！」
　自分でも忘れていたが一応第７７小隊の隊長であるクリュウはくじ引きで引いた番号とクエスト番号を見比べて悲鳴を上げた。番号が書かれた紙を握る手はブルブルと震えている。間違っても武者震いではない。
「おぉ、お前は運がいいな。今日用意したクエストで一番いいものを引いたんだな」
「間違いなく僕の今日の運勢は最悪ですよッ!?」
　ついには頭まで抱えてその場に蹲ってしまったクリュウを心配してルフィールとシャルルが近寄る。そして、ふと見えた彼の手に握られた紙の番号とクエスト番号が書かれた資料とを見比べた。
　――クエスト番号２８番　スティリア草原に出没するドスランポスを討伐せよ――
　スティリア草原はドンドルマから南に竜車で半日行った先にあるギルド公認の狩場の一つ。この地域は温帯地方に属しており、今の季節は花々が美しく咲いている風光明媚（ふうこうめいび）な場所だ。ひざより高い草はなく、木も少ない為に視界は良好。ただし草原を囲むようにして広がるスレーリアの森は木々が密集していて逆に視界は悪くなるが、逆にこちらも身を隠すにはうってつけだ。
　ここは狩場で必要な技術をかなり経験できる。ドンドルマの新米ハンターなどにとってアルコリス地方とこのスティリア地方は経験を積むにはうってつけ、登竜門のような場所だ。
　クリュウ達は学校指定の竜車に乗ってスティリア草原に降り立った。平野とは違い木々が生い茂る山の上にスティリア草原の狩場の拠点（ベースキャンプ）はある。そこはスティリア草原を一望できる絶景が広がる場所で、木々の枝や葉が屋根のように隠してくれるなかなかの立地だ。遠くにはドンドルマを囲む険しい山々が見える。
　ここまで運んでくれたアプトノスに近くの小川で汲んだ水と新鮮な草をたっぷりと与え、いよいよクリュウ達は天幕（テント）に入っ

て早速作戦会議を行う事とした。
「はぁ……」
「兄者、ドンドルマからずっとため息ばっかりっすよ」
「そりゃため息をつきたくもなるよ。何でまたドスランポスなんてレベルの高いクエストなんだよぉ……」
「それは先輩の神が与えてくれた奇跡の引きの良さのおかげです」
「そいつは絶対に死神だよ死神」
「まぁ神様には変わりませんからね。怒らせないようにしっかりとがんばりましょう」
　やる気満々のシャルルに冷静なルフィール、そしていつものように笑みを絶やさないクードというおなじみの面々に囲まれながらも、クリュウはため息を吐く。
「そんなにため息をしてはダメですよ。どちらにしても依頼を受けたからには達成しなくては一人前のハンターにはなれません。覚悟を決めてください」
　そう言ったのはクリュウ達に同行する事になったクロード。さすがにドスランポス相手では訓練生であるクリュウ達だけではもしもの場合に本当に死者が出かねない為、こうして教官（クロードは助教官だが）が一人配置されたのだ。他にもブルファンゴ二〇匹討伐やランゴスタ五〇匹討伐など生徒だけでは心配なクエストにはそれぞれ教官が同行している。その他のハンターには採取クエストや調合クエストなどを除いては学校所属のオトモアイルーが護衛に付く事になっている。アイルーだからとナメて掛かると痛い目に遭う。彼らは生徒達よりもずっと場数を踏んだ猛者達なのだ。
　そして、そんなオトモアイルーでもどうにもならないほどに難しく危険なクエスト。それがクリュウ達が受注したドスランポスの討伐であった。何でもこの地域に突然ドスランポスが出現し、周囲のランポスの群れが次々合流して戦力を拡大しているらしく、近隣の村々に危険が及ぶ為に討伐依頼がギルドに出されたらしい。しかしランポス達の戦力はまだまだ少ない為、危険度は低いとしてこうして訓練クエストに回されたのだ。だが、危険度自体は低くても相手はあのドス

ランポスだ。油断はできない。
「とにかく、まずは地図を見せて」
もはや逃げられないと諦めたのか、クリュウはいつもの第７７小隊隊長としての顔になる。それを見てシャルルは嬉しそうにうなずくと四人の前に地図を広げた。
「この狩場は何というか、特筆すべき事は何にもないっすね。新米ハンターの訓練狩場だけあって、見晴らしはいいし資源は豊富。戦闘には絶好の場所っすね」
「向こうから奇襲されない分、こっちも奇襲戦法は使えないか」
シャルルはこの小細工なしの狩場に満足しているようだが、クリュウはじっと地図を見詰めながら考える。こういう何の特徴もない狩場が一番厄介だったりするのだ。例えば、飛竜相手では相手はこちらと同じく自由に動けるので楽なようで実は難易度は高くなる。それを証明するかのようにアルコリス地方とスティリア地方は新米ハンターの練習場であると同時に今まで多くの飛竜が住み着いた経歴がある危険な狩場でもある。
今回は飛竜相手ではないのであまり心配しなくても大丈夫だが、平地では数で押して来るであろうドスランポスと配下のランポス達の方が優位になる。しっかりとした場所で戦わないとこちらが劣勢になってしまう。これが草原や森丘と呼ばれる狩場の恐ろしい所だ。
「考えてても仕方がないっすよッ！　現れた敵は全部叩き潰せばいいんすよッ！」
見敵必戦を掲げるシャルルの言葉に対し、クードは「考えるのは私達に任せてください。戦いでは期待していますからもう少し待ってくださいね。お互い適材適所でがんばりましょう」といい事を言っているようで実はシャルルをバカ扱いする発言をする。だが単純バカのシャルルはその言葉の真意を知らずに「がんばるっすッ！」と気合を入れる。そんな彼女につい笑ってしまったクリュウ。
笑うクリュウに「兄者ッ！　何で笑ってるっすかッ！」と怒るシャルルに「ごめんごめん」と謝る。ふと、先程からずっと黙っているルフィールに声を掛けた。

「ルフィールは何か意見はある？」
突然話し掛けられ、ルフィールはハッとなってクリュウの方を見る。
「ぼ、ボクにですか？」
「そうだよ。いつもなら何か意見を言って来るのに今回は何も言わないからさ」
「今回の狩りの作戦を考えていただけですよ」
そう誤魔化したが、本当は彼の事を考えていたのは秘密だ。これが彼との最後の狩りになるかもしれないと思うと、どうしても落ち着いてなんかいられなかった。
「それで、何か意見はある？」
再度問うクリュウに、ルフィールは地図の一角を指し示した。彼の事を考えていてもしっかり作戦まで練っているのは実に彼女らしい。
「平地で包囲殲滅されるよりは、この川を背後に背水の陣で決戦を挑むのも手かと。もしもの場合、我々は川を渡って逃げられますが、ランポスなどは川にまでは追って来ませんでしょうから。危険に見えて一番安全な策かと」
ルフィールが考え出したのは実に奇抜な作戦だった。普通なら退路を封じられる川辺での戦いは何としても避けたいものだが、彼女はあえてそれを逆手にとって自分達の優位な戦いに変える。勉強はできるが、彼女は決して教科書（マニュアル）通りな考えしかできない訳ではない。こんな具合に時々斬新なアイデアを思いつくのだ。ある意味、彼女はハンターよりも軍師として各国の騎士団などの参謀本部にいた方が伸びるタイプかもしれない。
「なるほど、確かにそれはいいアイデアだね」
「ただし、実際に川の幅や勢い、水深などがわからない限りは使えません。もしもの場合はこの後ろがシレーリアの密林地帯になっている平野で反対方向から突進してくる敵軍を迎撃撃破する戦法も使えますが、離脱の際に密林では逆にランポスに捕まる可能性があります。かと言って崖での背水の陣は確実に全滅しますし、平野では包囲殲滅もありえて危険です。……すみません。敵軍の規模がわからないと、

作戦も決まりませんね」
　作戦には情報が不可欠だ。刻一刻と変化する情勢の中で的確な作戦を立案・実行するには変化するたびに情報が必要となる。初めてこの狩場に来た四人は圧倒的にその情報が不足していた。
　だが、情報がなくても地図を見ただけで地形を大方理解し、それだけで大まかな作戦方針まで決めてしまうとは、ルフィールは本当にすごい。その頭脳に、クリュウ達は今まで何度も助けられて来たのだ。
「いや、大まかな作戦が決まっただけでも十分過ぎる収穫だよ。ありがとうルフィール」
　笑顔で礼を言うクリュウに、ルフィールは「別に大した事ではありません」とそっぽを向いてクールに返す。だが彼らからは見えない位置でルフィールの頬はほんのりと赤らんでいた。
「それじゃ、とりあえず偵察に行こう。もしもそこでドスランポスに遭遇したらペイントボールを付けるだけで極力戦わずに離脱。とにかく決戦場の視察が第一条件だからね。それでいい？」
　クリュウの問いにシャルルは「オッケーっすよッ！」と快諾しクードもにっこりと笑いながらうなずいた。
「ルフィールもそれでいい？」
　クリュウに問われたルフィールはクールな表情のままクイッと知的そうに見える細メガネを上げ、右は紺碧の空のような美しい蒼、左は空に煌く太陽のように美しい金という左右で瞳の色が違う邪眼（イビルアイ）で彼を射抜く。
「構いません」
　ルフィールの返事を聞きクリュウは大きくうなずくと立ち上がった。それに合わせて三人も一斉に立ち上がる。
「それじゃ、みんなで力を合わせてドスランポスを討伐するぞッ！」
「おおおぉぉっすッ！」
「ええ」
　決意を新たにする三人を見詰め、一人ルフィールだけはどうしても心からクエストの成功を望めなかった。皆に対する裏切りだとはわかっていても、やっぱりダメだった。

――どうしても、クリュウには卒業してもらいたくなかった……

万全に準備を整えた一行は拠点（ベースキャンプ）から出陣。山を下って平原に降り立った。いきなり広大な平原がそこに広がっていた。遠くまで見通せる代わりに、こちらもまた隠れられるような障害物はない。奇襲を受ける心配がない分、全員武器は構えてはいない。

クリュウは支給された双眼鏡で遠くを確認する。すると、気づかなければ肉眼ではハッキリとは確認できないが、双眼鏡で見ると自分達の向かう方向にランポスの姿が見えた。数は三匹。機動力と攻撃力のバランスが取れた彼らの最も基本的な陣容だ。

「偵察、もしくは見張り役らしきランポスがここから二〇〇メートルほど先にいる」

クリュウの言葉に三人は目を凝らす。すると、クードとルフィールは何とか緑の景色の中で薄っすらと青いものが動いているのが見えた。ランポスの体色は目立つ青だが、こうして遠くから見ると意外と保護色になっている。

一方、田舎が生み出した最強の野生児であるシャルルは――

「見えたっすッ！　数は三匹で、どうやらうちに二匹がケルビを食ってて、残る一匹が見張りって感じっすかね」

――彼女の視力はもはや常人とは逸脱している。これまでずっと一緒に狩りをしていたから慣れっことはいえ、改めて彼女の基礎スキルの高さには驚かされる。

「強行突破するっすッ！」

「シャルル先輩は突撃しかできないなら黙っててください」

「な、何ぃッ!?」

「いや、シャルルの言うとおり強行突破しよう」

クリュウの発言に大喜びするシャルルに対し、ルフィールは不満そうな表情を浮かべる。当然だ。ランポスが敵襲の鳴き声を上げたらドスランポスが向かってくるかもしれない。さっき極力避けようと言っていたのに、これでは逆効果だ。

そんなルフィールの言いたい事を察知したクリュウは「何も無謀な事は言ってないよ」と苦笑を浮かべた。

「でも密林地帯に迂回してもいずれはランポスに見つかるでしょ？
それなら草原地帯の方が敵襲の早期警戒には便利だし、何よりランポスを倒してから全力でその場を離脱すれば一時的にランポス達の目をそっちに向けられる。警戒はされるけど、一番早く安全に敵の懐に潜り込むにはこっちの方がいいと思うんだけど」
　クリュウの意見にも一理ある。ドスランポスは自らの縄張りを常に巡回しつつも、配下のランポスを見張り役として点在させる知能派のモンスター。遅かれ早かれ敵の警戒網には引っ掛かってしまう。ならば、一時的でもいいからそれを逆手に取る。クリュウもまたルフィールと同じで奇抜なアイデアを思い浮かぶタイプなのだ。というか彼女のがうつったというのが正しいか。
「わかりました。そういう考えの下の行動なのでしたら問題はありません」
　ルフィールも承諾し、いよいよ強行突破を実行する事となった。
「いい？　この距離から走っても到達する頃には僕達の方が息が上がって満足には動けなくなる。できる限り徒歩で近づき、相手に気づかれたらそこから全力疾走で接近する。僕とシャルルは構わず直進し、ルフィールとクードは途中で武器を構えて遠距離からの援護をお願い」
　クリュウの指示に三人がうなずく。それを確認し、クリュウもまたうなずき返して一行はゆっくりと歩みを進める。
　まだランポスはこちらには気づいていない。だが、隠れられるような場所はないのですぐに気づかれるだろう。
　ランポスは慣れたハンターから見れば大した相手ではない。飛竜戦の際は邪魔になるが、それ以外では特に問題ではない。だが、それは慣れたハンターにとっての場合であり、クリュウ達訓練生から見ればランポスだって十分厄介な敵である。油断はできない。
　慎重に歩みを進めるクリュウ達。ルフィールはいつでも矢を放てるように矢筒に右手を伸ばして矢を数本掴み、左手一本で折り畳んでいた弓を広げた。重量ある為に機動力が低いクードのヘビィボウガンと違い、弓は見た目通り軽いので機動力に特化している。こういう

小型モンスター相手でも、弓はボウガンと違いある程度の接近戦も可能。そして飛竜戦の際にも十分な援護能力を持っている。まさに多目的武器とも言うべき武器。それが弓であった。

教会にいた頃、自分の唯一の特技は弓であった。元々は遊びで作ったおもちゃの弓矢から始まり、どんどん腕を上達させ、少し大きいくらいの点にしか見えないほどの距離からリンゴを射抜けるまでに成長した。精密射撃だけでなく連射や一斉発射なども覚えていった。

両親が捨てた世界から自分という一人の人間を認めてほしい。そんな気持ちを胸に実力社会のハンターを目指したきっかけの一つが、ハンターの武器に弓があった事だ。

弓は大剣やハンマーのような破壊力も、双剣や太刀のような鋭さも、ボウガンのような優れた援護能力はない。でも、その矢一つで戦局を操り、仲間を守り、強大な敵をも打ち砕く。

――この一本の矢で、戦局を大きく変えるのだ。

「バレたッ！　走ってッ！」

クリュウの叫び声にハッとなり、ルフィールは条件反射的に駆け出した。前方を見ると、三匹のランポスが鳴き声を上げている。ついに気づかれてしまった。

全力で草原を駆けながら、ルフィールは三本の矢を矢筒から引き抜くと一斉に弦に番えた。弦を限界まで引くと弓全体軋む音がする。これは決して相棒（ゆみ）の悲鳴ではなく、合図だ。

刹那、指から離された三本の矢は弦の加速力を受けて射出。風を切り裂き空を駆け抜ける。それらの矢は吸い込まれるようにして突撃しようとしていたランポスの一対に襲い掛かった。

「ギャアッ!?」

三本の矢はそのままランポスの体を突き抜けるともう一匹のランポスの体に深々と突き刺さった。

先制攻撃を受けてランポス達は混乱に陥った。そこへ途中で集団から離れて展開したヘビィボウガンで狙いを定めていたクードからの援護射撃が届く。動こうとするランポスの眼前に銃弾を撃ち込み、動きを封じる。それを手助けするかのようにルフィールの矢もまた

彼らの周りに次々と突き刺さる。
完全に動きを封じられたランポス達。そのうちの焦る先頭の一匹に向かってシャルルはハンマーを構えて気合を溜めながら突撃する。腰を落として両手でしっかりと柄を握り、ランポスの眼前に到達。
「うおおりゃあッ！」
溜めた力を一気に解放し、体全体を使って自らを軸とした回転攻撃を放つ。強烈無比の一撃は容赦なくランポスの側面に叩き込まれた。よろけるものの何とかその一撃を防いだランポスだったが二撃、三撃と次々に強烈な一撃が襲い掛かり、ついに吹き飛ばされる。
地面に転がったランポスの目の前にはルーキーナイフを構えたクリュウが待ち構えていた。慌てて立ち上がろうとするランポスの首に向かって、クリュウは剣を振るった。頚動脈（けいどうみゃく）を断たれ、血がバシャァッと噴き出しクリュウの頬に数滴真っ赤な飛沫が付いた。クリュウはそれを拳で拭い取ると、動かなくなったランポスを一瞥し迫り来るランポスの方へ向き直った。
仲間を殺されて怒っているのか、大きく口を開いて鋭利な無数の牙を見せ付けながら突進してくるランポス。だがそこへルフィールが放った二本の矢が飛来し口の中に炸裂。上あごを貫き、鏃（やじり）がランポスの眼前に現れる。
「ギャアァッ!?」
突然口を貫通されてもがくランポス。そこへクリュウの自らの体を軸にして最大の一撃を叩き込む回転斬りが炸裂。皮膚が裂け、血が迸る。慌てて後退するも、クリュウはそれを追いかけてさらにもう一撃を加えた。その一撃に吹き飛ぶランポスだったが、致命傷にはならなかったらしくすぐに立ち上がった。だがそこへクードの放った貫通弾ＬＶ１が飛来し、頭部を打ち抜いた。ランポスは再び吹き飛ばされ、今度こそ動かなくなった。
残る一匹のランポスは慌てて逃げ出そうとするがルフィールの放つ矢が針路を塞ぎ逃げられない。もたもたしているうちにシャルルが現れ、ランポスの眼前で振り上げたサイクロプスハンマーを思いっ切り叩き落した。その一撃でランポスは潰れ、即死した。

見事に三匹のランポスを葬ったクリュウ達は一時的に緊張を解いてほっとため息を漏らす。
「みんなお疲れ。怪我はない？」
「全然大丈夫っすよッ！」
元気良く答えるシャルル。どうやら本当に大丈夫そうだ。クードも「いやはや、クリュウの動きには見惚れてしまいますね」といつものように疲れるような発言をしているので問題はない。
「ルフィールは平気？」
「問題ありません」
ハンターボウ1を背中に戻し、ズレたメガネをクイッと元の位置に正すルフィール。こちらも大丈夫そうだ。
クリュウは皆の安全を確認すると、倒れたランポスの前にしゃがみ込むとその前でそっと手を合わせた。他の三人もそれぞれ座ったり立ったりとバラバラだが手を合わせる。仕方がないとはいえ、三つの命を奪った事に変わりはない。せめて、あの世では幸せになってほしいと願う。
冥福を祈った後、クリュウはランポスの解体に取り掛かる。他の者もそれぞれ剥ぎ取りや武器の手入れなどを行った。そこへ今まで後方で戦いを見守っていたクロードがやって来た。
「君達は珍しい子達だね。僕なんかのやり方を真似るなんてさ」
「先生の考えに賛同しているからこそですよ。僕達は別に単なる殺戮者（さつりくしゃ）って訳じゃないんですから」
「そうだね」
クロードの倒したモンスターの冥福を祈る行為は結局クラスにはあまり浸透しなかった。一部、クリュウ達や数人の生徒がこれを実施している。元々はクリュウがクロードの考えに賛同して始めたのがきっかけで、今では彼を真似て他の三人もするようになった。各個人ではしてる生徒は少ないながらもいるが、チーム全体で行っているのはクリュウ達第７７小隊だけである。
「兄者ッ！　敵襲っすッ！」
慌てたように叫ぶシャルルの指差す方向を見ると、遠くの密林の中

からランポスが五匹ほど現れた。すでにクードは長距離射撃で攻撃を開始しているが、距離がある為に決定打にはなっていない。
「これ以上こんな隠れる場所も何もない所で戦っても不利になるだけだよ。みんな向こうの密林に逃げ込んでッ！」
クリュウの指示にシャルルとルフィールが駆け出す。続いてクードが武器を畳んで走り出す。クロードは一応仲間という形ではないのですでに単独で戦いの邪魔にならないように去っていた。三人を追い掛けるようにして走るクリュウは追って来るランポス達に向かって道具袋（ポーチ）から支給専用閃光玉を一つ取り出し、ピンを抜いて後ろに投擲した。すぐに前に向き直ると背後から猛烈な光量が炸裂し、ランポス達の悲鳴が響いた。
走りながら振り返ると、ランポス達は目を回してその場で立ち止まってフラフラとしていた。見事に閃光玉大成功だ。
クリュウはほっと胸を撫で下ろすとルフィール達に続いて鬱蒼と木々が生い茂る密林の中に飛び込んだ。
途中二度ほどランポスと交戦したが、一行は何とか当初の目的地である川辺に到着した。幸い川幅はそれほど広くはなく流れも穏やか。ただ雪解け水が加わって水温自体は冷たかったが、命を落とすよりはマシだ。
川の前は草原と同じように背の低い草が生い茂っている。対岸は細かい石が堆積しており、川の向き一つでこんなにも自然は変わってしまうらしい。
大昔にここから見える大きな山、アウエル山は活発な火山であった。今でこそ死火山となったが、その時の噴火の名残でこの草原には所々に噴火の際に吹き飛ばされた溶岩の塊が冷えて岩となって点在している。この川辺にもそれはあり、防御陣地として使えそうだ。
「ルフィール。ここで決戦は大丈夫そう？」
「そうですね。水は冷たいですけど問題ないでしょう。まぁ、川を渡って逃げるというのは最後の手段ですので、そういう状態にならない事が重要です」
「いやはや、水に濡れるクリュウはまさに水も滴るいい男という訳で

すね」
「クード。君はもう黙ってて」
いつもの調子で自分をおちょくって来るクードにさすがのクリュウも呆れ気味。だがクードはいつもと同じように腹の底が知れぬ笑みを崩さない。
一方、クードの発言に対しては実は内心ルフィールとシャルルは同感を示していた。女顔ではあるが一応男なので、濡れる姿というのもかっこいいだろう。ちょっとだけ最悪の状態を期待してみたり。
「でも女子二人の濡れ姿もぜひ見てみたいですね」
「ランカスター先輩はもう黙っててっす」
「……それ以上ふざけた事を言うのであれば射抜きますよ？」
身を守るように両腕で体を包みながら赤らんだ顔でクードを睨む二人。そんな視線に対してもクードは「冗談ですよ」と笑って誤魔化す。誤魔化しているはずなのに、なぜ汗ひとつなく余裕を保っているのだろうか。
「しかし、クリュウはどう思います？　二人の濡れ姿には興味ありませんか？」
突然話を振られ地図と睨めっこしていたクリュウは「ぼ、僕？」と戸惑ったような表情を浮かべた。そしてなぜかそんなクリュウをどこか真剣な瞳で見詰める二人。
「いや、そういう状態にならない事が最善でしょ？　風邪引くし」
「そういう意味ではなく、女子の水に濡れた姿というのは目の保養にはなりませんか？」
「いや、特には……」
クリュウの返答になぜかルフィールとシャルルはがっくりと肩を落とした。一方クリュウはというと平静を装って返したが、地図の方に視線を戻した彼の頬は若干赤らんでいた。彼だって一応思春期の男の子。そういう話題とかに興味がない訳ではないが、女子の視線があるのでクールを装ったのだ――まぁ、その結果二名の女子が落胆する事になったが。
「なるほど、クリュウは女よりも男に興味があるのですね」

「何でそうなるんだよッ！」
クードのからかうような発言に対しクリュウは軽くキレた。自分には全くそういう趣味はないというのに、この男のせいで一時期周りから誤解を受けて男子からは引かれたような目や哀れむような目、女子からは感動した視線や嫉妬に狂う視線などを受けてひどい目に遭った事だってある。
「では女が好きなのですね？」
「当たり前でしょ」
顔を真っ赤にしながらもハッキリと言い切った彼の返答にクードは満足したように数度うなずくと、後ろの二人に振り返った。二人はもう顔を赤らめてうつむいていたが、クードの視線に顔を上げた。
「良かったですね」
「「ッ!?」」
クードの発言に驚く二人だったが、すぐに怒りに染まった鋭い眼光で彼を射抜いた。しかしそれでもクードは楽しそうに笑みを崩さない。そんな三人の姿を見てクリュウは不思議そうに首を傾げた。
その時、森の中からランポスが現れた。数は六匹ですぐに見つかる。
すぐにクードは岩の陰に隠れて武器を構えた。動きの遅いヘビィボウガンはこうして砲台にするのが一番利口な策だ。
クリュウとシャルルが並ぶようにして武器を構えながら川辺の前線に立ち、そのすぐ後ろに矢を番えたハンターボウ1を構えるルフィールが続く。そしてそのさらに後ろの岩にボーンシューターを構えたクードが陣を取る。近距離、中距離、遠距離の三段階で構えた陣はクリュウ達のお得意の戦法であった。
鳴き声を上げて突撃して来るランポスに対し、クリュウは盾を前にいつでもガードできるような構えで右手に持った剣に力を込める。そして、眼前に現れたランポスの爪攻撃を盾で防ぎ、溜めた力を一気に解放するように剣を刺突。鋭い剣先は吸い込まれるようにしてランポスの肉に突き刺さる。
「ギャアァッ!?　ギャワッ！」

激痛に悶えるランポスに蹴りを加えると同時に剣を引っこ抜き、ランポスを吹き飛ばして距離を取る。しかしすぐさまクリュウは突撃し、起き上がろうとするランポスに回転斬りを叩き込む。二撃、三撃と剣を振るうとランポスは吹き飛んで動かなくなった。それを確認してから他のメンバーの様子を見ると、シャルルが二匹のランポスに囲まれて悪戦苦闘していた。

「シャルルッ！」

慌てて駆け寄ろうとするが、別の一匹がクリュウに飛び掛って来た。とっさに地面に転がるようにして回避するが、シャルルとの距離は開いてしまう。そこへルフィールの放った矢が飛来し、ランポスの体を射抜く。だがどれも致命傷にはならずランポスはもう一匹のランポスと合流してクリュウとシャルルの間に入って針路を塞ぐ。

ルフィールに援護を頼もうとしたクリュウだったが、彼女は残る一匹に接近されて苦闘するクードの援護に回っており今すぐには援護は頼めそうもない。

二匹のランポスに挟撃されてフラフラのシャルルの姿にクリュウはとにかくランポスに突進する。だがそんな直線的な攻撃はランポスに読まれて回避される。さらに反撃とばかりにランポスの鋭利な爪が襲い掛かる。ギリギリ盾で回避するも一旦距離を取ってしまい結局は距離は縮まらずクリュウは悔しそうに唇を噛んだ。

一方のシャルルも必死にハンマーを振るうが、ランポス達はそれをバックステップで回避すると一撃一撃の後の隙を狙って彼女に飛び掛った。

「くぅッ！」

慌ててハンマーを盾のようにして構えたが、元々ハンマーはガードには向かない形状をしている為直撃こそ避けられたが吹き飛ばされて地面に転がった。その際、サイクロプスハンマーだけがランポス達の所に取り残されてしまった。

体に走る痛みを堪えながら何とか立ち上がるシャルル。武器を失ってしまったのではどうする事もできないが、彼女だって訓練生とはいえハンターである。すぐに道具袋（ポーチ）から閃光玉を一つ取

り出す。
「みんな目を瞑るっすッ！」
そしてシャルルはピンを抜いた閃光玉を投擲。炸裂する寸前でクリュウ達やシャルル自身も目を瞑る。膨大な光量がランポス達の目に直撃。シャルルの前方の二匹だけでなくクリュウの前に立つ無傷のランポス、計三匹のランポスの視界を潰した。
「ありがとうシャルルッ！」
クリュウは視界を潰されて一時的な行動不能に陥ったランポスにルーキーナイフを振るう。右へ左へと流れるような剣捌きで次々に鋭い剣撃を叩き込み、ランポスは吹き飛んだ。だが致命傷にはならず立ち上がる。しかしすぐに刺突を繰り出してとどめを刺し、ランポスは今度こそ倒れて動かなくなった。しかしそこへ背後からもう一匹のランポスが迫る。その気配に慌てて振り返ると、目の前にランポスの口が広がっていた。赤黒い口の中の肉と腐敗臭が鼻を襲う。
「ッ!?」
やられるッ！
そう思った直後、ランポスの真横から数本の矢が飛来してその腹や足などに次々と突き刺さり、ランポスは仰け反る。その隙を突いてクリュウは何とか距離を取った。
さらに第二派の数本の矢群がランポスの体を貫き、そのうちの一本は首を貫いてランポスの息の根を止めた。
目の前で倒れたランポスを見てほっと胸を撫で下ろすクリュウ。そんな彼に背後から近づく者がいた。
「油断大敵です先輩」
振り返るとそこには左手に弓を持ち、右手でクイッとズレたメガネを正すルフィールが立っていた。腰に下げられた矢筒にはまだ十分な矢があるが、最初に比べてそれなりに減っていた。それらのほとんどがクリュウの援護に使われたのだ。
「ありがとうルフィール。助かったよ」
「残るはシャルル先輩に群がる二匹のみです」
見ると、クードは倒れたランポスを剥ぎ取っている最中であった。

どうやら接近されていたランポスを討伐したらしい。
「まだシャルルが戦ってるのに何悠長に剥ぎ取ってんの？」
「問題ありません。シャルル先輩は単純バカで猪突猛進でいつも前しか見ていない救いようがないアホですが」
「……ルフィール、僕もさすがにそれはひどいと思う」
「――ハンターとしての腕は全校生徒の中でもトップクラスの猛者です。心配など必要もありません」
　自信満々にそう言い放ったルフィールを見て、クリュウは小さく微笑んだ。いつもケンカばかりしていても何だかんだ言ってちゃんとシャルルの事を信頼しているらしい。ちょぴり感激。
「――と、そうこう言っているうちに終わりそうですね」
　ルフィールの言葉に再びシャルルの方を向くと、ちょうどシャルルが振り上げたサイクロプスハンマーが一斉に二匹のランポスを叩き潰した瞬間であった。一匹は完全に潰れ、もう一匹は下半身を潰されてしばしもがいていたが、すぐに力尽きた。それを確認し、シャルルは額や頬を流れる汗を道具袋（ポーチ）から取り出したタオルで拭って一息ついた。
「あ、危なかったっす……」
「ほんとだよ。あんまり無茶しないでよね」
　クリュウの言葉にシャルルは「う、うっす」とちょっとだけ反省。でもすぐに復活していつものような能天気さを取り戻した。良くも悪く彼女は単純であった。
　すぐにクードも合流し、互いに大きな怪我がないかなどを確認する。どうやら全員無事らしい。そしてすぐにランポスの死体が腐敗液で溶けないうちに祈りを捧げてから剥ぎ取ると、今後の対策などを練り始めた。
「ドスランポス相手なら今と同等かそれ以上のランポスも同時に相手にする事になるね。ちゃんと作戦を立てておかないとまずいね。特にガンナーの二人は接近戦になったら危険だし」
「ボクは一応接近戦も可能なので問題ではありませんが、ランカスター先輩は危険ですね。しかしランカスター先輩が安全に狙撃でき

るポイントは見た所ありませんし、スコップも時間もないですので塹壕を掘る事もできません。先程のように溶岩岩の陰に隠れて狙撃してもらうしかありませんね」
　ルフィールの発言にクリュウはしばし頭の中で作戦を練る。いつもの陣形はまだ戦った事はないが対飛竜戦に使う戦法だ。実際にハンターになった際に飛竜と戦っても困らない練習の為の陣形だが、今回はこれを変える。相手は飛竜よりもずっと小柄で機動力もあるドスランポスとその配下のランポスが複数。幸い、このチームは剣士とガンナーが二人ずつになっている。それらの情報を組み合わせ、クリュウは作戦変更を行う。
「ここからは二人一組（ツーマンセル）で行こう。シャルルとクードで一隊。僕とルフィールで一隊とし、剣士は常にガンナーを死守し、ガンナーは剣士の援護を全力で行う事。下手な陣形よりもこっちの方が効率がいい。ただし、大本の作戦である背水の陣は保つように。深追いはせず、近づくランポスをまずは駆逐。敵の陣形が崩れたら一気に切り込んで打撃を与える。これでどう？」
　クリュウの瞬時に編み出した作戦に、三人は了承したようにうなずく。さすがに戦場となればシャルルも自分のわがままで文句は言わない。それくらいのマナーはわかっているのだ。ただし、振り向いた際の顔はものすごく不服そうだったが……
「先輩」
　散開して各々の準備に取り掛かるシャルルとクードに習ってクリュウも道具袋（ポーチ）から携帯砥石を取り出してルーキーナイフの切れ味を回復していた時、近づいてきたルフィールがそっと声を掛けて来た。
「どうしたの？」
「ボク、先輩を必ず守ってみせますから」
　そう言い残し、ルフィールは去って行った。そんな彼女の背中を見詰めながら、クリュウは小さく笑みを浮かべる。
「それは僕だって同じだよ」
　切れ味を取り戻したルーキーナイフを掲げる。太陽の光を浴びて

キラキラと輝く剣を見詰め、クリュウはスッと顔を引き締めると腰に剣を戻して準備を整える。
周りを見渡し、全員の準備が完了している事を確認するとドスランポスが現れるであろう密林を見詰める。
こちらの準備は完了だ。あとは、ドスランポスが現れるのを待つだけ。皆も自分と同じように密林をじっと見詰め、その時を待ち続ける。
――そして、その時は突然に訪れた。
密林の中から突然青い竜が姿を現した。ランポスよりも一回りも大きな体に真っ赤なトサカはリーダーの証。ランポスの頂点に君臨する密林の王――ドスランポス。ギョロリと辺りを威嚇する鋭い眼光は見るもの全てを恐怖させる。
ドスランポスに続いてランポスが六匹現れる。そして、彼らの瞳とクリュウ達の瞳が合った。
一瞬の空白の後、空気が張り詰めた。互いに戦闘モードとなり、戦闘態勢に入る。ドスランポスを中心にランポス達が展開し、あっという間に鶴翼陣形を形成する。クリュウ達もまたそれぞれの武器を構えて対峙する。そして、
「ギャオワッ！　ギャオワァッ！」
ドスランポスの威嚇。それがドスランポス・ランポス連合対クリュウ達第７７小隊の戦いの合図となった……

第９９話　誇りの傷　壮絶な死闘の果ての想い

ドスランポスの鳴き声を合図に、ランポス達は一斉に動き出した。尖兵としてまず二匹がクリュウ達に襲い掛かる。だが、うち一匹はルフィールの的確な射撃によって行動を封じられ、最終的には頭部を貫かれて倒れた。

残る一匹はそのまま突貫を続け、先頭に立つクリュウに襲い掛かる。

「ギャァッ」

鋭い爪で襲い掛かって来るランポスに対し、クリュウはその一撃を右に回避。すかさずルーキーナイフを振るって反撃を試みるが、ランポスはそれをバックステップで回避した。しかしすぐさまそこへサイクロプスハンマーを構えたシャルルが突撃し、ランポスに襲い掛かる。

「うおりゃあああぁぁぁッ！」

超重量武器であるハンマーを振り上げ、ランポスに向かって振り落とそうとする。だがその直前でドスランポスの命令を受けた別のランポスが横から襲い掛かった。シャルルはとっさにハンマーを真下へではなく横へ振り払う。実際には重力の重さが加わって斜め打撃になったが、その一撃で襲い掛かって来たランポスは吹き飛んだ。そこへクリュウが追いつき、本来彼女が狙っていた方のランポスにルーキーナイフを振るう。だが、クリュウの動きを読んでいたのか、ランポスは後退して事なきを得る。

シャルルに吹き飛ばされたランポスは地面に転がるもすぐに起き上がって後退。再び双方のギリギリの間合いが生まれる。

「やっぱりドスランポスがいるとランポスの動きが正確になるから厄介だね」

どんなに数が多くてもリーダー格がいなければただの烏合の衆。だが、例え少数でもしっかりとしたリーダーがいればそれは精鋭へと変化する。ドスランポスの指揮能力の高さはクリュウ達の予想を超えていた。

「ランポスの数が少ないのは助かったっすけどね」
シャルルはそう言ってサイクロプスハンマーを構える。その横ではルフィールも新たな矢を三本引き抜いて弦に番える。
「いざとなったら撤退すればいいだけです。無理や深追いはせず、慎重にやれば大丈夫です」
ルフィールは冷静にそう言うと、番えた矢を撃ち放った。その一撃は吸い込まれるようにしてドスランポスに襲い掛かる。だが、その直前で横からランポスが移動してドスランポスを守る盾となった。
「なッ!?」
三本の矢は全てランポスに命中。ランポスは悲鳴を上げて吹き飛んだ。先程シャルルの一撃を受けていたそのランポスはついに力尽き、動かなくなった。
地面に倒れて動かなくなったランポスを一瞥し、ドスランポスは今まで以上の怒号を上げ、辺りに暴風のような殺気を撒き散らす。ランポス達もまた仲間の死を見て怒り狂う。そのあまりの迫力にクリュウ達は呑まれ、一気に場の空気はドスランポス達に傾いた。
硬直するクリュウ達に先手を打つように、今度はドスランポス自らが突撃して来た。狙うは仲間を殺したルフィール。
「くッ!」
ルフィールは後退しながら矢を撃つ。だがドスランポスはそれを紙一重でかわしてルフィールに接近。ついに目の前にまで追いつかれてしまった。ドスランポスの鋭い爪が、ルフィールに襲い掛かる。
「ひッ!?」
「このぉッ!」
巨大な爪がルフィールを引き裂く寸前、クリュウが横からドスランポスに向かってタックルした。だが、人間の大人よりも重い体重のドスランポスに対し、クリュウは平均的な男子より小柄な為に押し倒す事はできなかった。しかしほんのわずかだがドスランポスを動かした事によって爪の軌道がズレ、爪はルフィールの顔のギリギリ横を通り過ぎた。髪の毛が若干切れてヒラヒラと落ちるのを見てルフィールは真っ青になった。

「今のうちに離れてッ！」
　クリュウの言葉にルフィールは慌てて逃げ出す。だが、背を向けた事で後方が見えなくなり、次の瞬間ジャンプして来たランポスの蹴りを受けてルフィールは悲鳴を上げる事もできずに倒れた。その上に、ランポスが圧し掛かって動きを封じる。
「ギャアッ！　ギャアッ！」
　今度こそ仲間の仇。ランポスは爪を振り上げてルフィールに襲い掛かる。
「い、嫌ぁッ！」
「うおおおりゃあああああぁぁぁぁッ！」
　爪がルフィールの背中を切り刻む寸前、突撃して来たシャルルのハンマーがランポスに横薙ぎに襲い掛かる。その圧倒的な質量と威力にランポスは簡単に吹き飛ばされた。
「何してるっすかッ！　グズグズすんなっすッ！」
　サイクロプスハンマーを構えるシャルルに並ぶようにルフィールは立ち上がると、すぐに矢を弦に番えて構える。
「少し油断しただけです」
「フン。その油断が狩場では命取りになるんすよ」
「油断時々真面目なシャルル先輩に説教されるなんて、ボクもう日の下を歩けません」
「……ほぉ、ケンカ売ってるっすか？」
「半額セールなので」
「ずいぶんと安売りじゃないっすか。それなら買ってやるっすよッ！
　ただし――」
　迫り来るランポスにシャルルはサイクロプスハンマーを横薙ぎに振るって吹き飛ばす。地面を二転三転したが起き上がるランポスを見詰めながら、ニッと口元に笑みを宿す。
「――この戦いが終わった後っすけどね！」
「えぇ。その時は容赦しませんから」
　番えた矢を背後から迫っていたランポスに撃ち放つルフィール。三本のうち二本は外れたが一本は見事にランポスの体を貫いた。仰

け反るランポスに再び矢を構えて威嚇する。
「そんじゃ、シャルが泣かせる前に死ぬなっすよ？」
「もちろんそんなつもりは全くありませんのでご安心を。シャルル先輩こそ今日の夕食の煮込みハンバーグを食べる前に死なないように」
「何すかそれッ!?　シャルはそんなに食い意地は張ってないっすよッ！」
「そうですか。ではせっかく奮発したロイヤルチーズと一日じっくり旬の野菜やガブリブロースの骨などで煮込んだダシを加えた特製ソースを絡めた絶品煮込みハンバーグ、シャルル先輩はいらないんですね？」
「いるっすよッ！　何すかその滅茶苦茶うまそうなハンバーグッ!?　絶対食べるっすッ！」
「よだれ垂れてますよ」
　慌ててよだれを拭き取るシャルルを見てルフィールは小さく笑みを浮かべると、表情を硬くして正面から威嚇してくるランポスをその鋭いイビルアイで睨む。
「行きますよシャルル先輩」
「お前が仕切るなっすッ！」
　そう言い残し、シャルルはサイクロプスハンマーを構えて突撃した。目指すはドスランポス。その針路を塞ぐように先程ルフィールを押し倒したランポスが立ち塞ぐが、シャルルは「邪魔っすッ！」とハンマーを横薙ぎに振るってこれを吹き飛ばす。二発もシャルルの破壊力抜群の打撃を受けたランポスは沈黙した。
「うおっしゃぁッ！」
　シャルルは勝利のガッツポーズ。だが、その背後から別のランポスが襲い掛かって来る。
「ギャアッ！」
　その声に驚いて振り返ると、まさにその時ランポスがジャンプしてシャルルに飛び掛って来た。声を上げる事も逃げる事もできない。その鋭い牙と爪が自分の体に突き刺さる瞬間を覚悟した時、横から五本の矢が襲来。全本ランポスに命中し、その衝撃でランポスは横に吹

き飛ばされた。
地面を二転三転し、より深く矢が刺さるもランポスは起き上がる。恨むような目で見詰める先には、弓を構えたルフィールが立っていた。シャルルは自分を助けてくれた彼女に向き直る。
「お前……」
「先程の先輩の言葉、そのまま返させてもらいます――その油断が狩場では命取りになるです」
そう言ってルフィールは矢筒から矢を一本引き抜き、弦に番える。グイッと腕を引き弦を限界まで引き伸ばし、ランポスに狙いを定めて撃ち放つ。その最大威力の一撃はランポスの体を易々と貫き、ランポスは吹き飛び動かなくなった。
「これで先程の借りはなしです」
「フン。わかったっすよ」
その時、二発の銃声が轟いた。一発は外れたが、もう一発はランポスの頭部を見事に貫いた。どうやらようやくクードの支援射撃が始まったらしい。
続いてさらに三発がドスランポスの体を貫いた。ドスランポスは銃弾が飛んで来た密林の方をどこか戸惑ったような感じで一瞥した後、慌てて逃げ出した。慌ててクリュウが追い掛けるが、残っていたランポスがその針路を塞ぐ。命懸けの殿役だ。
最もドスランポスに接近していたクリュウが動きを封じられたので、残る二人もドスランポスを追う事はできない。だが、ドスランポスが現れたのとは違う方向の密林に消える寸前、クードが撃ち放った銃弾が命中した。途端に独特の匂いが辺りに流れ出す。どうやらクードは追跡用のペイント弾を撃ったらしい。これでしばらくの間はドスランポスを見失わなくて済む。
ドスランポスは密林の中に消え、殿役のランポスは三人掛かりであっという間に討伐された。
クリュウ、ルフィール、シャルルの三人はランポスの剥ぎ取りを終えるとそれぞれの装備の確認や手入れを行う。クリュウとシャルルは武器に砥石を当てて切れ味を回復させた。

しばらくして、森の中からクードが現れた。いつもと変わらずにニコニコと笑っているが、彼の防具には所々擦り傷や泥が付着していた。
「ど、どうしたのクード？」
「いえ、大した事じゃありません。ドスランポスはどうやら後方に増援を用意していたらしく、その増援勢力と交戦した為にこんな状態に。まぁ、全部討伐したので問題ありませんが」
「そ、そうだったんだ。ヘビィボウガンのクードには荷が重かったでしょ？　何匹だったの？」
「四匹です。間合いを確保しながらの戦闘だったので多少苦労はしましたが」
「本当にお疲れ様」
「例えどんなに疲れていても、クリュウの可憐な笑顔を見る事ができれば元気百倍です」
「……ごめん。それ以上僕に近寄らないで」
いつものようなやり取りをする二人を見て、ルフィールとシャルルは苦笑を浮かべた。一瞬、ここが狩場であるという現実を忘れそうになるが、そこは卵とはいえハンターの端くれ。しっかりと周りに危険がない事を確認しているからこその余裕の現われでもあった。
だが、まだ気を抜くのは早い。今回のクエストはドスランポスの討伐。まだドスランポスは討伐していない。気を抜くのは奴を討伐してからだ。
「クードのペイント弾のおかげでドスランポスの場所は把握できるね。匂いの強さや向きから見て、おそらくこの辺だと思うけど」
そう言ってクリュウは地図を取り出してドスランポスがいるであろう場所を示す。だが、ここで彼らは一つの大きな決断をしなければならなかった。
それは、大本の作戦をどうするかである。
本来、今回の狩りではこの川辺を決戦場として待ち伏せ及び撃滅を想定していた。だが、ドスランポスもバカではない。敵が出た場所は迂回する可能性だってある。そうなれば、ここで待機するのは無意味

となってしまう。
だが、だからと言って追撃戦やドスランポスが来るであろう場所での待ち伏せての迎撃戦だとしても、本来の待ち伏せ場所であるここに比べたら地形の制限などや思いもよらない事態になる事もあり危険度は上がる。
安全を選ぶか、確実を選ぶか。クリュウ達第７７小隊は決断を迫られる。そしてそれは、リーダーであるクリュウの一存で決定すると言ってもおかしくはない。
「シャルは追撃戦がいいっすッ！　こんな所で来るかわからない敵を待つのは性に合わないっす！」
「ボクはここでの迎撃戦が一番安全な戦いが展開できると思います」
「私はどちらかと言えば追撃戦以外の迎撃戦がいいですね。ヘビィボウガンは動かないで戦うのが最も良いですから」
三人はそれぞれの主張をリーダーであるクリュウに言う。だが、結果的に決断を下すのはリーダーであるクリュウだ。三人は主張をしっかりと言うが、クリュウの判断に全てを任せていた。彼が決めた事を、全力遂行する。それが三人一致の想いであった。
そんな三人の視線と想いに対してしばし目を瞑っていたクリュウであったが、ついに決断を下した。開かれた瞳は美しい翡翠色。その煌きは、迷いなどない。
「ドスランポスの動きを予測して別の場所で待ち伏せしよう。これは今までの僕達の訓練や知識を試す最終試験。安全なのもいいけど、実戦では安全なんて結局は存在しない。だったら――本物のハンターらしく戦ってみよう」
クリュウの真っ直ぐな言葉に、三人は一斉にうなずいた。
作戦方針は決まった。クリュウ達はドスランポスの動きに注意しながらその動きを予想し、奴が来るであろう密林地帯で待ち伏せする事にし、川辺を後にした。
密林地帯は日の光が鬱蒼と生い茂る木々の葉が塞いでしまうので、木漏れ日だけが照らす為に薄暗い。だが、決して暗過ぎない為に視界は十分に確保できる。視界での問題があるとすれば、やはり密集して

いる木や藪（やぶ）によって遠く所か近くすらも見えない場所がある事だろう。
　そんな密林地帯で、一つの戦いが起きていた。
「ギャオワッ！　ギャオワッ！」
　怒号を撒き散らすのは傷だらけのドスランポス。体には無数の傷や矢が突き刺さり、かなりのダメージを受けている。だがその瞳には並々ならぬ怒りと闘志が宿っている。その先には四人のハンターの姿があった。
　先頭に立つのは全身泥や掠り傷だらけで大きく肩を上下させて息をするクリュウ。握っているルーキーナイフも刃零れし、これまでの戦闘の激しさを物語っていた。
　そんな彼の背後には同じように全身泥と掠り傷だらけのルフィール、シャルル、クードが立っている。三人とも息が乱れている。特に重量武器であるハンマーを振り回し続けていたシャルルの疲労はもう限界に達しており、重いハンマーは地面に落ちている。柄を握る腕には、もう力は残されていなかった。
　ルフィールも矢筒の中にはもうほとんど矢は残っていない。それどころかドスランポスに突撃され、とっさに盾にしたハンターボウ1はドスランポスに噛み砕かれ、原型を残しているのが不思議なくらいにボロボロ。弦は切れて弓としての機能は残っていない。
　クードもすでに弾切れ。さすがにもう余裕もないのか、クードの顔には笑顔はない。ただ疲れたように辛そうな顔がそこにあるだけだ。
　周りには激戦を物語るかのように数匹のランポスの死骸が転がり、無数の矢が地面に突き刺さっている。
　やっとの思いで四対一にまで追い込んだのに、すでに二人が事実上の戦闘不能。残る二人のうち一人は本来の戦い方ではない矢による近接戦闘のみ。つまり、まともに戦う事ができるのはクリュウのみとなっていた。
　だが、そのクリュウももはや限界に達しつつあった。機動力がある為に戦闘の際は縦横無尽に動き回って時には遊撃、時には囮となって戦う片手剣使い。その体力の消耗の激しさはかなりのものだ。事実、

ルーキーナイフを握る手にはもうほとんど力が込められていない。取りこぼさないでいるのが不思議なくらいであった。
ほとんどの戦闘能力を削がれているクリュウ達ともはや満身創痍のドスランポス。幸か不幸か、どちらもギリギリの状態で拮抗していた。その為に攻勢に出る事も逃げ出す事もできず、こうして膠着状態が続いている。
だが、クリュウにはまだ秘策が残されていた。盾が付けられている左手をそっと道具袋（ポーチ）に伸ばす。道具袋（ポーチ）もすっかり軽くなり、もう回復薬や応急薬、携帯食料などもほとんど残っていない。だが、その中に一つだけこの状況を打開できる最後の切り札が残されていた。クリュウはそれを掴むと一気に引き抜いた。それは一個の玉。ルフィール達もそれを確認し、身構える。
クリュウはその玉に付いているピンを引き抜くと、ドスランポス目掛けて投擲した。そして、クリュウ達は一斉に瞳を閉じる。
――直後、すさまじい威力の光が炸裂した。
最後の閃光玉は見事に炸裂し、ドスランポスの視力を潰した。ドスランポスは突然視力を封じられてその場でもがき苦しむ。そしてそれは視界を潰されただけではなく、動きまで封じられた事を示す。
クリュウは残る力を振り絞って右手に力を込め、ルーキーナイフを強く握る。振り返ると、ルフィール達と目が合った。皆、疲れている。だが、もう戦いはこれで終わる。皆、クリュウに向かって静かにうなずいた。それを見て、クリュウもうなずき返す。
そして、クリュウはドスランポスに向き直ると走り出した。
迫るドスランポス。
これで終わり。全ての力を込めてルーキーナイフを振り上げる――
――突然、木々が押し倒されて激しい音が響き渡った。
あまりにも突然の事でドスランポスに振り下ろすはずだったルーキーナイフを止めてしまったクリュウ。他の三人も突然の事に驚いているようだ。
突然、クリュウ達の左側に位置する少しは離れた所にある木々が薙

ぎ倒されたのだ。
一体何事かと四人はその場所を見詰め――絶句した。
そこには巨大な重戦車があった。
小柄なシャルルよりも大きな牙を二本備えた、前方突撃に特化したそれは猪突猛進という言葉の究極形態。
茶色の硬く厚そうな全身を覆う毛はまるで装甲。白い飾り毛は長としての風格をまざまざと見せ付けられる。
そして、その鋭い瞳は自らのテリトリーを侵す不埒な輩に対して全力の怒りを放っている。
ちょっとした木くらいに太い足を何度も地面で擦るその仕草は、登場してすぐだというのに戦闘準備を終えている事を示していた。
それは、通常のブルファンゴよりも二倍以上大きな体を持つブルファンゴの長――ドスファンゴであった。
「な、何で……」
突然のドスファンゴの襲来に、クリュウ達は驚きのあまり動けなかった。皆、瞳を大きく見開いて現状を理解できず、その場に呆然と立ち尽くす。
「ブフォッ！」
動けないクリュウ達に対し、ドスファンゴは先手必勝とばかりにいきなり突撃して来た。
迫り来る強大な突進力。ブルファンゴの比ではない筋肉量から為せるブルファンゴを凌駕する速度での突進。一瞬にしてクリュウとの間合いが詰まる。
「うわぁッ！」
恥も外聞もなくとにかく横へ逃げるように跳ぶクリュウ。顔面を地面に強打して一瞬クラッとしたが、おかげでドスファンゴの突撃を回避できた。
ブルファンゴなら訓練で倒した事は何度もある。その経験から、突進の後の隙をついて態勢を立て直そうとクリュウは考えていた。だが、それは大きな間違いであった。
突進したドスファンゴは予想を裏切って滑走距離が短く、しかも巨

大な体からは想像もできないような俊敏さで牙を振りかざして反転。地面に転がったクリュウを再び射程に捉えた。
「は、早いッ!?」
再び猛突撃を仕掛けてくるドスファンゴに、クリュウはまたしても横に体を投げ出すようにしてこれをギリギリで回避した。すぐ横をその一撃で簡単に人間を牙で貫けるドスファンゴが通り抜ける瞬間、今まで感じた事のないほどの恐怖が襲いかかる。
二度に渡る体を投げ出してのギリギリの回避。もう次の一撃は避けられない。
クリュウの横を通り過ぎたドスファンゴはその背後にあった木に激突。いとも簡単に薙ぎ倒してしまった。もしもその一撃を受ければ、大怪我は免れない。
しかも、ドスファンゴの登場によって隙が生まれたドスランポスはこれ幸いと身を翻して逃げ出した。慌ててクードがその前に立ち塞がるが、ドスランポスは止まる事なくクードに突進して彼を吹き飛ばして逃走。見失ってしまった。
吹き飛ばされたクードは地面に転がった。だが、彼は起き上がれずにその場でうずくまって動けないでいる。見ると、彼の肩口からは血が流れ出していた。ただの突進かと思ったその一撃だったが、どうやらあの一瞬でドスランポスの爪が肩を切り裂いたらしい。ハンターシリーズ程度では、ドスランポスの爪を完全に防ぐ事はできないのだ。
「ランカスター先輩ッ!」
慌てて駆け寄るシャルルにクードは「だ、大丈夫ですよ」と額に脂汗を浮かばせながら無理して笑う。だがすぐに激痛が襲い掛かり、その場にうずくまってしまう。
ドスランポスを逃がしてしまった上に負傷者が出た事に状況は最悪の方向へ転がっていく。
一方、ドスファンゴに狙われているクリュウはそれどころではない。すでにこれまでの戦闘からの疲労で足はガクガクで、すぐに立ち上がる力も残されていない。だが、そんなクリュウをドスファンゴは

確実に狙っている。
　ドスファンゴとクリュウが一直線に並ぶ。絶体絶命と思われたその時、ドスファンゴのこめかみにゴツッと小石がぶつかった。厚い毛皮と筋肉の鎧を持つドスファンゴに対しては何のダメージにもならないわずかな衝撃。だが、その一撃でドスファンゴの意識の矛先が変わった。
　荒々しい鼻息を吹かせながら振り返った先には、ルフィールが立っていた。手には数個の小石が握られており、そのうちの一つがドスファンゴに投げつけられたのだ。
「ルフィールッ!?」
「早く逃げてください先輩ッ！」
　クリュウはすぐには起き上れそうにない。それは彼のフラフラの動きを見れば一目瞭然だ。ドスランポスとの戦いで最も相手と肉薄して危険な戦いを繰り広げていたのは機動力があり攻撃から支援まで幅広く担当した彼であった。その疲労が相当なものであろうという事は容易に予想できる。
　だったら例え本来の攻撃手段が失われていても、現在チームで唯一まともな攻撃力と機動力を残している自分がドスファンゴを引きつけて彼への脅威をなくすしかない。
　自分がドスランポスに想定以上に接近されて危険に陥った時、彼は危険を顧みずに自分をかばいながら全力攻撃して間合いを確保できるだけの時間を確保してくれた――今度は、自分が彼を助ける番だ。
　こちらを向くドスファンゴの圧倒的な強大さに、本能的に恐怖を感じる。その恐怖に体が強張って動かなくならないうちに無理やり足を動かして移動する。ドスファンゴに対して、正面に立つのは危険行為そのものなのだ。
　ドスファンゴの動きや生態は教科書を丸暗記している。ドスファンゴはブルファンゴと違って旋回速度が速く、ブルファンゴのように走り出したら勢いがなくなるまで止まれないという事はなく、その圧倒的な筋力で無理やり自らの巨体を停止させる荒技を持っている。それらを駆使し、ドスファンゴは短距離の連続した突進が可能なの

だ。
だからこそ、ドスファンゴと戦う場合は正面は危険。必ず斜めに自分の位置をキープして向き合わなければならない。
斜めに動いた直後、ドスファンゴが一瞬前まで自分がいた場所に突撃して来た。直前に動いていたので何とか回避できたが、一瞬でも遅れていたらあの大きく鋭利な牙の直撃を受けていただろうと思うと血の気が引く。
恐怖で逃げ出したくなる気持ちを無理やり押し込み、ルフィールはドスファンゴに肉薄。手に持っていた矢をドスファンゴに向かって突き出す。鏃（やじり）は深くはないにしてもドスファンゴに突き刺さり、血が爆ぜた。
だが、その一撃は大したダメージではない。ドスファンゴは何事もなかったかのように身を翻してルフィールに正面を向く。しかしその直前でルフィールは何とか斜めに移動し、ギリギリでドスファンゴの突進を回避した。
ギリギリの連続。ここまで無傷で回避できたのが奇跡なくらいであったがそろそろ限界に近づきつつあった。足がフラつき、ついに躓いて転倒してしまった。
膝を強打し、激痛が走る。何とか身を起こそうとするが、膝が痛くて立ち上がれない。腕だけで何とか起き上がろうとするも、やはり立ち上がれない。その間にもドスファンゴはルフィールに狙いを定める。
「ひぃ……ッ!?」
頭を振って突進する構えをするドスファンゴを見て、死という恐怖が襲い掛かった。ドスファンゴの鋭い眼光が射抜かれ、指一本すらも動かせなくなる。
「ブモォッ！」
荒い鼻息と共に走り出したドスファンゴに、ルフィールは殺されると覚悟した。その時、
「うおおおりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
突進するドスファンゴの横から現れたのはサイクロプスハンマー

を振り上げたシャルル。もうハンマーを持ち上げる力すらも残っていなかったはずの、無理やりの突進攻撃。
　自らの体を軸にし、重いハンマーをブン回す。その一撃は多少のブレはあるも見事にドスファンゴの横っ腹を打ち砕いた。
「ブモォッ!?」
　突然の横からの衝撃にドスファンゴは怯んだ。その一瞬が、ルフィールが起き上がる時間へと繋がった。無事にルフィールが立ち上がった事を確認し、シャルルはフッと小さな笑みを浮かべるとその場に倒れ込んだ。重々しい音と共にサイクロプスハンマーが地面に落ちる。
「シャルル先輩ッ!?」
　だがドスファンゴが怯んだのは一瞬の事。自らを攻撃して倒れたシャルルに向かってドスファンゴは容赦なく突進の構えを見せる。しかしそこへ先程のルフィールと同じようにクリュウが石を投げて注意を引いた。単純なドスファンゴはすぐにクリュウの方へ向き直って突進する。迫り来る明確な殺意に恐怖しながらも再び身を投げ出して何とか回避。
　一方、ルフィールはうつ伏せに倒れたシャルルに駆け寄ってすぐ横に膝をついて起き上がらせる。仰向けになったシャルルは激しく肩を上下させて荒い息を繰り返している。どうやら怪我をしている様子はないが、疲労困憊という状態であった。
「シャルル先輩……、何で……」
　――何で自分なんかの為に。そう言おうとしたルフィールの口をシャルルの拳が塞いだ。
「うるさいっすよ……。シャルはただ……当然の事をしただけっす……」
「当然の事……？」
　左右で色の違うイビルアイでじっと見詰めて来る、生意気でいつも自分に反発して来るかわいくない後輩。だけど同時に、彼女は自分にとっては大切な――
「――仲間を助けるのに、理由なんてないっす……」

その言葉に、ルフィールの中で何かが弾けた。瞳から無意識に涙が流れ出し、頬を垂れる。これに慌てたのはシャルルであった。
「な、何で泣くっすかッ!?」
「な、泣いてません。これは目にゴミが入ってですね……」
そう言って必死に涙を拭うルフィールを見て、シャルルは「ほんと、素直じゃないっすねぇ……」と少々呆れながらも小さく苦笑した。そして、必死に涙を拭うルフィールの頬に垂れる涙をグシグシと拳で拭うと、フラフラの体にムチを打って無理やり立たせる。
「う、動かないでくださいッ！」
「……戦力外になったシャルルは負傷したランカスター先輩を連れて離脱するっす。その間の足止めと――兄者を任したっす」
そう言って拳を突き出すシャルル。ルフィールはその意味を悟るとグシグシと涙を拭い、同じく拳を突き出す――二人の拳が、コツンと当たった。
この瞬間、二人の友情は誰にも負けない確固たる絆へと変わったのであった。
ドスファンゴとクリュウ・ルフィールとの戦いは実に十分以上も続いていた。すでに疲労困憊のシャルルと負傷したクードはエリアからの離脱を終え、あとは二人が撤退するだけであった。しかし、ドスファンゴはその撤退すらも許さない。間髪入れずに突撃を繰り返す為、いまだに二人は逃げるに逃げられない状況が続いていた。
しかも、クリュウのルーキーナイフはすでにドスファンゴの表皮に弾かれるまでに疲弊し、弓を失ったルフィールはひたすら矢での直接攻撃のみ。これではいくら攻撃してもドスファンゴにまともなダメージを与える事はできない。
一方、無尽蔵と言っても過言ではないほどにスタミナを持つドスファンゴにしてみればまだまだ全然余裕の状況。長く立ち回れば立ち回るほど、クリュウとルフィールが不利になっていく。
閃光玉はすでにドスランポスとの戦いでもうない。もしあったとしても、ドスファンゴには閃光玉が通じない為意味がない。シビレ罠でもあれば良かったのだが、今回の狩りでは持参も支給もしていな

かったので手元にはない。
　すでにドスランポスとの長期戦とドスファンゴとの戦いで二人の体力は限界に達しつつあった。幾分か余裕のあった回避も、すでに本当にスレスレでの紙一重の回避に変わり、いつその巨大な牙に貫かれてもおかしくないような状況に変わっていた。
　ドスファンゴを挟んで両側に位置するようにクリュウとルフィールは展開していた。これが最も回避しやすい陣形（フォーメーション）であり、二人が何とか生き延びている確固たる安全性の証拠でもあった。
　すでに息が荒く、肩を激しく上下に動かして呼吸をする二人。のどは水分を失い、痛いくらいに乾いている。唾を呑むのも苦しく、肺は度重なる激しい伸縮運動に悲鳴を上げていた。
　足はガクガク。走り回るどころか立っている事自体が奇跡とも言えるような状態であった。
　特に、一般的に男子に比べて女子の方が体力は少ない。その為にルフィールの疲労は同等以上に動き回っているクリュウよりも危険な状態。いつ倒れてもおかしくはなかった。
　フラフラの状態のルフィールを見て、クリュウは苦しげに唇を噛んだ。もう、ルフィールは限界だ。これ以上この戦闘と言うにはあまりにも一方的過ぎる状況が続けば、確実に彼女は力尽きる。
　グッと、ボロボロのルーキーナイフを握る手に力が込もった。その脳内に、故郷の村に残して来た幼なじみの少女の言葉が過ぎった。
　――男ならか弱い女の子を命懸けで守りなさいよッ！――
「ルフィールッ！　僕が囮になるから、その間に逃げろッ！」
　そう叫び、クリュウは突進した。いつも作戦をじっくり考え、的確な攻撃を重視する彼からしてみれば異例の何の考えもなしの一直線突撃。それだけ、彼は追い詰められていたし、仲間を守りたいという気持ちが強い表れでもあった。
　クリュウはドスファンゴの背後から接近すると、ルーキーナイフを叩き込んだ。だが、刃先がボロボロのルーキーナイフはいとも簡単に弾かれてしまい、刃は硬い皮の下の肉には届かない。

「クソッ！　このッ！　このぉッ！」
　それでもクリュウは諦めずにルーキーナイフを振るい続ける。そんな小ざかしい敵の執拗な攻撃にドスファンゴも鬱陶しくなって、その小さな敵に向かって体と頭を使って牙を叩き付けた。
　迫り来る重槍。クリュウはとっさに盾を構えた。何とかガードはできたが、圧倒的な力によってクリュウの体は簡単に吹き飛ばされてしまう。地面を二回転ほど転がり、全身に鈍痛が走る。
「先輩ッ！」
　慌てて駆け寄ろうとするルフィールにクリュウが「来るなッ！」と怒号を放つ。いつもは優しい彼の本気の怒気と剣幕に、ビクッとルフィールは震えてしまい、踏み出した足をそれ以上先に進める事ができなくなってしまう。
「いいから、早く逃げてッ！」
「で、でもぉ……ッ」
「行けええええッ！」
　怒号と共にクリュウは再び突進する。そんな彼の姿を見て、ルフィールはグッと感情を押し込んで彼とは反対方向に走り出した。
　後ろではクリュウが死闘を繰り広げている事が感じられた。自分を逃がす為に、彼はボロボロの体に無理をさせて必死に奮闘している。
　――逃げたくない。
　彼を危険な目に遭わせて自分だけが助かるなんて、そんな事は絶対に嫌だった。
　本当は、背なんか向けたくない。今すぐにでも引き返して彼と一緒に戦いたい。
　でも、もう自分にはドスファンゴと立ち回るだけの体力は残っていない。助けたいと思っても、こんな自分では足手まといになってしまう。だから戦力外の自分を離脱させるのは最善の選択だ――そんな事を冷静に考える自分は、本当に最低な奴だ。
　でも、彼は自分に逃げろと言った。必死になって、自分を逃がそうと今でも後ろで戦っている。そんな彼の想いを、無碍（むげ）にする

事はできない。
逃げたくない。でも、彼の気持ちを無視したくない。二つの相反する想いが、ルフィールの中で渦巻く。その葛藤が、足枷（あしかせ）となって足を鈍らせる。
走って行くルフィールの背中を見詰めながら、クリュウは荒い息を繰り返してドスファンゴと対峙していた。
「ブモォッ」
興奮状態のまま勢い良く突撃して来るドスファンゴ。クリュウは右へ走ってそれを回避しようとするが、完全には回避できずとっさに盾でガード。直撃こそ避ける事ができたが、その圧倒的な突撃力の前では人間の子供程度簡単に吹き飛んでしまう。
「かはッ！」
吹き飛ばされたクリュウはドスファンゴがへし折った木の幹に背中から激突。その衝撃と激痛に肺の中の空気を全部吐き出して地面に倒れた。
「先輩ッ！」
その光景にルフィールは慌てて引き返した。冷静な部分が引き返してはダメだと警鐘を鳴らしているが、そんなのは無視だ。
確かに、今更戻っても自分は足手まといにしかならないだろう。でも、だからといって倒れた彼を放ってはおけない。大好きな彼の危機を無視できるほど、彼女は薄情にはなれなかった。
「先輩から離れろぉッ！」
クリュウに再び突進を掛けようとするドスファンゴに向かって、ルフィールはとっさに足元に落ちていた石ころを拾って投擲。その一撃は威力こそないものの見事にドスファンゴのこめかみに命中した。
「ブホォッ!?」
突然の予期しない一撃に、何の威力もないものの驚くドスファンゴ。しかしすぐに驚きは怒りに変わり、巨大な牙を振りながら振り返る。怒り狂う殺気の漲（みなぎ）る鋭い眼光は、しっかりとルフィールを捉える。
荒い鼻息を吹き荒らし、猪突猛進で突撃するドスファンゴ。ル

フィールは横へ何とか回避するが、それは紙一重での回避であった。どうやら疲労は自分の思っていた以上に体を鈍らせているらしい。
横を通り過ぎたドスファンゴに向かって、ルフィールは矢筒から数本纏めて矢を引き抜くと腕を振り上げてドスファンゴに叩き付けた。ほとんどの矢が折れてしまったが、何本かはドスファンゴの体に突き刺さる。ダメージは然程ないだろうが、それでもドスファンゴは驚いたように身を震わせる。
ルフィールがドスファンゴを引き付けている間に立ち上がったクリュウ。すでに残る体力はわずかしかないが、それでも自分の体にムチを打って無理やり立たせた。立っているのもやっとな足を気合だけで突き動かして前に進む。
手に握るルーキーナイフはもう切れ味はないに等しいほどにボロボロだ。これではドスファンゴの厚い毛皮に傷をつける事も叶わないだろう。それでも、これだけが自分を守る唯一の武器には違いない。
自分の失態のせいでせっかく逃げていたルフィールが再び危機に晒されてしまっている。状況はまたも振り出しに戻ってしまった。その責任は、クリュウの背に重く圧し掛かる。
この絶体絶命な状況をどうにかしないといけない。クリュウは今まで様々な危機を乗り越えてきたように必死になって考えを巡らせる。だが、これほどの窮地は今までなかった。いくら考えても、いい案は浮かばない。
逃げた二人がクロードを呼んだと仮定しても来てくれるのはいつになるかわからないし、そもそも二人がクロードと合流できたのかも不明。そんな不確かで当てにならない希望ではこの状況はどうする事もできない。
自力で何とかするしかない。でも道具も体力もほとんど残っていないし、お互い武器はもう使い物にならないような状態。こんな状況を打開できる策など――思い浮かばなかった。
「くぅ……ッ！」
この時ほど自分の無能さを呪った事はない。必死に考えても何も

浮かばず、時だけが過ぎていく。その間、ルフィールの危険度はどんどんと増している。
ついに持っていた最後の矢も折れてしまった。それでも、ドスファンゴの毛皮には何本か矢が突き刺さっている。しかしそれはこの状況を打開できるだけの威力はない。むしろ、ドスファンゴの怒りを激増させるだけ。
「ブフゥッ！」
荒い鼻息を吹き、ドスファンゴは右足で何度も地面を擦る。狙いを定め、全力突進する構えだ。
対するルフィールは肩を上下に激しく動かしながら荒い息を繰り返している。もう、今にも膝をついてしまいそうなくらいに疲労困憊。立っているのはいつも自分が非科学的だと断言している気合だけだ。
そして、動けないルフィールに向かってドスファンゴは全力突撃して来た。迫り来る絶体絶命、必死、死そのもの。
確実に殺される。そう、覚悟して瞳を閉じた――その時、
「ルフィールぅッ！」
そんな彼の必死な声と同時に、自分の体は横からの強い衝撃に抱かれ、そのまま吹き飛ばされた。だがそれは想像していたドスファンゴの突進にしては痛くない。むしろ、慣れ親しんだ温かさと匂いであった。死と隣り合わせだというのに、なぜか安心感が胸を満たしてくれる。
彼の温もりと、彼の匂い。そうわかるのに時間は掛からなかった。だが、その匂いの中に異臭が加わっていた。鉄の嫌な臭い――違う、血の臭いだ。
そこまで気づいて慌てて目を開けると、そこには彼の胸があった。見上げると、そこには苦痛に歪む彼の顔。そしてピッと頬に飛んで来た――血。
直後、ルフィールの背に鈍痛が走った。地面に背中から激突し、一瞬肺の中の空気を全部吐き出して目がくらくらしてしまう。だがすぐに新しい酸素を補給するとそのめまいも治り、視界がハッキリとす

る。ゆっくりと、起き上がる。
そして、全ての状況が目の前に広がった――
自分を抱き締めながら倒れるクリュウ。瞳を閉じ、口からは血が垂れ、ぐったりとしている。そして、彼の背中が、信じられないほどに真っ赤に染まっていた。
ハンターメイルの背の部分は強烈な一撃を受けて砕け、彼の白い肌を晒している。そして、その肌には見るも無残な裂傷が走り、そこから真っ赤な血が溢れ出ている。
頬に付いた彼の血を拭う。指に付着した赤い光景に、体が震えだす。圧倒的な恐怖が、彼女の理性を砕いた。
「い、嫌ああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!!!!」
ルフィールは絶叫しながら倒れているクリュウの体にしがみ付いた。いつも自分に優しげな笑顔を向けてくれる彼の顔には表情はなく、キラキラと輝く瞳は閉じられている。そして、背中からは血が溢れ出している。
目の前の地獄に、ルフィールは半狂乱になった。
「先輩！　先輩ッ！　クリュウ先輩ッ！」
必死になって彼の名を呼ぶが、クリュウの瞳は閉じられたまま開かない。
一瞬見えたドスファンゴの牙は、真っ赤に染まっていた。あの凶悪な牙が、クリュウの背中を貫いたのだ。
自分がもたもたしていたから。そんな自分なんかを守る為に、彼は自らを盾にした。おかげで自分には怪我はない。でも、その代わりに守ってくれた彼自身が大怪我を負ってしまった。その現実に、ルフィールの目の前は真っ暗になった。
ポタポタと涙が零れ落ちる。
自分の無能さが、世界で誰よりも大切に想っている彼を傷つけた。もしかしたら、命すらも危ういかもしれない。
何が校内首席だ。何が優等生だ。自分の力は、彼を守るどころか足手まといにならないだけの力もない。知識だけ無駄に詰め込み、技術ではシャルルにも劣る。その結果がこれだ。

知識がなくても並外れた技術を持つシャルルは、自分を救う為に残っていた力を使い果たして力尽きてしまった。そして、クリュウもまた自分をかばって大怪我を負ってしまった。
結局、自分は皆の足手まといにしかなっていないじゃないか。そのせいで、こうして大好きな彼を傷つけてしまった。その現実が、ルフィールの心に恐怖と絶望となって襲い掛かる。
もうドスファンゴの事など頭からなくなっていた。激しい後悔と絶望、恐怖、自己嫌悪。吐き気までする程に追い詰められる。イビルアイからは、留め止めなく涙が溢れ出ていた。
行動不能に陥ったクリュウとルフィールに、ドスファンゴは容赦なく突進の構えを見せた。そして、力を存分に溜めて突撃を仕掛けようとした時、どこからともなく飛来した投げナイフがドスファンゴの側面に突き刺さった。
「ブホォッ!?」
突然の予想外の一撃にドスファンゴは仰け反った。そこへ現れたのはハンターSシリーズを纏ったクロードであった。
「お二人とも、ご無事ですかッ!?」
そう言って二人の様子をすぐに確認すると、ドスファンゴと対峙するような位置に移動して腰に下げたタツジンソードを構えた。煌くタツジンソードの刃はドスファンゴの毛皮も切り裂きそうなくらいに鋭い。
「ルクレール君ッ！　二人を連れて逃げてくださいッ！」
「うっすッ！」
すると、藪の中からシャルルが飛び出して来た。戦線を離脱した時とは違い、いつものような元気に溢れている。
シャルルは二人に駆け寄ると改めてクリュウの具合を確認して唇を噛んだ。本当は藪に隠れていた時もすぐにでも助け出したかったのだが、クロードの指示で隠れ続けていた。今ではよく耐えたと自分をほめたいくらいだ。
クリュウの容態は一刻を争うほどに切羽詰っている。シャルルはルフィールからクリュウを奪い取ると背中に背負った。自分よりも

身長も体重もあるクリュウの体を脅威の怪力で担ぎ上げると、今度はルフィールの手を握り締めた。
「さっさと逃げるっすよッ！　ほら立つっすッ！」
だが、いくら手を引いてもルフィールは立とうとはしなかった。
「何してるっすかッ！　早くするっすッ！」
まるでシャルルの声など聞こえていないように、ルフィールはうつむいたままブツブツと何事かを呟いている。よく聴くと、それは自分を責める言葉ばかり。シャルルが一番嫌いな後ろ向きな発言の数々だ。
クリュウが命の危機に瀕しているというのに、勝手に自分の世界に入り込んで迷惑を掛けるルフィールに、シャルルはカッとなって彼女の頬を殴りつけた。ここで平手打ちではなく拳というのがシャルルらしい。
突然殴られて驚いたようにシャルルを見詰めるルフィール。だが、その瞳はしっかりと自分を見詰めている。それを確認し、ほっと内心一安心。だが、表情は相変わらず険しいままだ。
「過去を悔やむ暇があったら今を必死になって未来を変えろっすッ！
今お前がやるのは、兄者を助ける事じゃないっすかッ!?」
シャルルの純粋で真っ直ぐな言葉は、凍り付いていたルフィールの心を動かした。ゆっくりと氷が解け、瞳に生気が戻る。
――そうだ。今自分がやらなくてはいけない事。それは、クリュウを助ける事だ。
「……そうですね。シャルル先輩の言う通りです」
「――やっといつもの憎たらしい目になったっすね。やる気が戻ったらさっさと逃げるっすよッ！」
「はいッ！」
走り出すシャルルの背を追うようにしてルフィールもまた走り出した。後ろではクロードとドスファンゴが戦闘を行っているが、クロードが完全に場の流れを掴んでいた。さすが教官という所か。まぁ、彼は助教官だが。
そんな事を考えられるだけ平静さを取り戻すと、改めて前を走る

シャルルの背に背負われたクリュウの容態を見てみる。
こちらに向けられている彼の背は血で真っ赤に染まり、直視できないほどひどい怪我であった。
自分のせいで、彼を怪我させてしまった。そう想うと胸が引き裂かれるような想いがする。
――でも、今は後悔よりも先に自分が出来る事を最優先にしなければならない。今自分がやる事は、彼を助ける事に他ならない。それ以外の事は全て後回しだ。
「……先輩ッ。必ず助けますッ」
シャルルとルフィールは全速力で狩場を駆け抜け、拠点（ベースキャンプ）へと走った。
拠点（ベースキャンプ）には二匹の救護アイルーが待機しており、到着したルフィールとシャルルはすぐさま彼らに負傷したクリュウを預けた。
「頼むっすッ！　必ず、兄者を助けてくれっすッ！」
「お願いしますッ！」
二人の強い願いに、救護アイルーは「任せるニャッ！」「絶対助けてみせるニャッ！」と言ってクリュウを荷台に乗せて拠点（ベースキャンプ）から飛び出して行った。ルフィールとシャルルは、彼らが見えなくなってもじっとその方向を見詰め、クリュウが助かる事を祈った。一応、頭の片隅程度にクードの無事も祈ってはいたが。
それからすぐ、日が暮れた頃にクードが戻って来た。どうやらドスファンゴは彼によって討伐されたらしい。装備が不十分だった上に連続戦闘での疲労を差し引いても、やはり本物のハンターの実力は訓練生とは桁違いだと改めて感じた。
二人の事が気になって落ち着かない二人に、クードは自ら夕食の支度をした。本来はこういう部分でも訓練生に任せるのがこの試験の一環ではあったが、今回は特別だ。このままでは二人は食事すらもしないだろう。
クードが作ったのは山菜鍋であった。季節の野菜や野草をふんだんに入れ、モスのバラ肉もたっぷりと入っているボリューム満点の

料理。味も野菜や野草の味や肉の旨味が汁に溶け込んでいて美味である。
　ルフィールとシャルルはとても料理を食べている余裕はなかったが、せっかくクロードが作ってくれたという事もありとりあえずもそもそと食事をする。あの大食漢であるシャルルが勢い良く食べない辺り、やはり二人の心労が相当な事を表していた。
　元気のない二人の女生徒を前にし、クロードは小さくため息した。こういう時、フリードなら一体どんな言葉を掛けるのか。経験の浅い自分では、掛ける言葉も思い浮かばない。助教官ではあるが、教官には違いない。なのに、教官なのに生徒に掛ける言葉がないなんて、情けなかった。
　気まずい沈黙だけを残した夕食を終え、それぞれが無言で時の経過を待っているとアイルーの鳴き声が聞こえた。その声に三人は驚くべき俊敏さで拠点(ベースキャンプ)の入口に目を向ける。すると、狩場の方から二台の荷車がやって来た。二匹ずつのアイルーが押した荷車には、それぞれ包帯とインナーと姿のクリュウとクードが横になっている。
「あ、兄者ッ！」
「先輩ッ！」
「ニャニャニャッ！　そこをどくニャッ！　どっせぇいッ！」
　全速力で突撃して来たアイルーは突然荷車を急停止させ、押していた腕を一気に上に挙げて荷台を勢い良く傾けた。慣性の法則に従って二人の体は勢い良く投げ出されて地面に転がった。それを確認し、アイルー達は仕事をやり遂げたような清々しい表情を浮かべて荷車を回れ右させる――直後、シャルルの見事な跳び蹴りが炸裂した。
「ウニャアアアアアッ!?」
　吹き飛ばされた二匹のアイルーはそのまま地面に突き刺さった。吹っ飛んだのはもちろんクリュウを投げ飛ばした方のアイルー二匹。クードを投げ飛ばした方の二匹のアイルーは慌てて逃げ出した。もちろん二人はそちらは追わない。用があるのは突き刺さった方のアイルーのみだ。

「な、何をするニャッ!?　それが義理堅い救護アイルーにする仕打ちかニャッ!?」
「鬼ニャッ！　人間は鬼なのニャッ！」
　頭をズボッと引っこ抜くと、アイルーはすぐさま激怒して非難の声を上げる。だが、その頭をグワシッとシャルルに鷲掴みにされる。両方の手でそれぞれのアイルーを持ち上げるシャルルの表情はブチギレる一歩手前。ビキビキとこめかみには青筋が浮かび、つい本気でアイルーの頭を握り潰しそうになる。
　ぶらぁんと揺れるしかないアイルーはそんなシャルルの激しい怒気に身を震わせた。
「な、何ニャッ!?　何でそんなに怒ってるニャッ!?」
「オイラ達はあんたの連れを治して連れて来たのにッ！」
　意味がわからないとテンパりまくる二匹。何せ自分達はマニュアル通りの見事な救護アイルーっぷりをしたというのに、殺され掛けているのだ。そりゃ理不尽に思うのも仕方がないだろう。だが、論理とか常識とかが通用せず感情だけで猪突猛進。それがシャルル・ルクレールであった。
「怪我人の兄者を投げ捨てる奴があるっすかッ!?」
「だ、だからそれはマニュアル通りの事なのニャッ！」
「投げ捨てて目が覚めてようやくオイラ達の仕事が終わりなのニャッ！　言うなれば、ちゃんと治ったのかという確認なのニャッ！　これは救護アイルー法第二章第五項の――」
「シャルは難しい事はわかんないっすよッ！」
　見事なブチギレ。シャルルはフルスイングでアイルー二匹を全力投擲。アイルー二匹は悲鳴を上げながらどっぽぉんッと天幕（テント）の横にある池に突っ込んだ。
「ニャニャァァッ!?　お、溺れるニャァッ！」
「肉きゅうが濡れるのは嫌ニャァッ！　気持ち悪いニャァッ！」
　池で溺れる二匹。慌てて岸に上がろうとすると、そこには左右で色の違う瞳をした少女――ルフィールが立っていた。すると、スッと手を指し伸ばしてきた。二匹はパァッと笑顔を華やかせると、その手を

取る。
「ありがとうニャ」
「た、助かったニャ」
口々に感謝の言葉を述べるアイルー二匹。ルフィールは無言でうなずくと、二匹を引き上げる――そして、シャルルに負けないフルスイングで再び池に放り投げた。
「ニャニャニャアアアアアアアアアアッ!?」
どっぽぉんッ！
「……怪我している先輩に対する非道な仕打ち、許しません」
「珍しく意見が合ったっすね。シャルも絶対に許さないっす」
恐ろしい同盟が締結され、二人の鋭い眼光は溺れる二匹に向けられる。アイルー達は泣きながら必死に助けを求めるが、二人は助ける気などさらさらない。クロードは急変した状況について行けずに呆然としている。
四面楚歌。まさにそんな状態であった二匹のアイルーに、意外な救いの手が現れた。
投げられたのはロープ。二匹は慌ててそのロープを掴んだ。ルフィールとシャルルは驚いたように振り返ると、そこにはロープを掴んだクリュウが立っていた。
「せ、先輩ッ!?」
「あ、兄者ぁッ！」
「……頼むからさ、僕が意識を失っている間に問題を起こすのだけはやめて本当に」
苦笑しながらロープを引くクリュウ。彼の助けを得て、二匹のアイルーはようやく救出された。二匹ともぜぇぜぇと激しく荒い息を繰り返している。わずかな間に、完全に疲労困憊となっていた。
「大丈夫？」
「し、死ぬかと思ったニャぁ……」
「助けてくれてありがとうニャ」
「お礼を言うのは僕の方だよ。手当てしてくれてありがとう」
クリュウの言葉にアイルー達はクリッとした瞳を向けて嬉しそう

に笑みを浮かべた。
「お礼なんて必要ないニャ。これがオイラ達の誇りある仕事なのニャ」
「元気になって良かったニャ」
二匹とも本当に心から嬉しそうな笑みを浮かべると、ブルブルと体を震わせて毛に付いた水を吹き飛ばす。そしてある程度水気を取り除くと、「そんじゃ、オイラ達は行くニャ」「もう無茶はしちゃダメニャよ」と言って荷車を押して拠点（ベースキャンプ）を出て行った。クリュウはその背中が見えなくなるまでずっと感謝の言葉を述べながら手を振って見送っていた。
二匹が森の向こうへ消えるのを確認してから、クリュウは二人に振り返る。彼の美しい翡翠色の瞳に見詰められ、ルフィールとシャルルは言葉を失う。さっきまで、最後に見た血だらけの彼の姿が頭の中から離れなかった二人にとって、今のクリュウはあまりにも呆気なく復活したので少し現実について行けていないのだ。
そんな二人の心内を知ってか知らずか、クリュウは二人の姿を改めて確認するとほっとしたように優しげな笑みを浮かべた。
「良かった。二人とも、怪我はないみたいだね」
クリュウのそのいつもと変わらない優しげな言葉に、ようやく二人は今目の前に広がっている現実を理解した。
――クリュウが、無事に帰って来てくれた。
「先輩ッ！」
「兄者ぁッ！」
「え？　ちょ、ちょッ――」
ルフィールとシャルルは一斉にクリュウに抱きついた。突然の少女二人のタックルに等しい抱きつきに対し、全く警戒していなかったクリュウは耐える事ができずに二人を巻き込んで後ろに倒れた。
「痛ぁッ！」
背中を地面に強打し、クリュウは悲鳴を上げて悶えた。普通に動けるまで回復したとは言っても、彼はまだ怪我人に変わりはない。完全には治ってはいない背中を強打すれば、そりゃあ悶絶する。

「あ、兄者ぁッ!?　大丈夫っすかッ!?」
「しゃ、シャルル先輩がタックルするからぁッ！」
「なぁッ!?　シャルのせいだって言うんすかッ!?」
「当然ですッ」
「ひ、ひどいっすッ！　お前だってものすごい勢いで兄者を押し倒したじゃないっすかッ！」
「お、押し倒したなんてそんな……ッ！」
「……あの、どっちでもいいけど早くどいてもらえるかな？」
　その言葉に二人は一斉に下を向く。そこには自分達の下敷きになって苦笑している彼の姿があった。二人は一瞬固まった後、カァッと顔を真っ赤に染める。
「ご、ごめんっすッ！」
「すみませんッ！」
　二人は慌てて退くと恥ずかしくてその場で縮こまってしまう。クリュウはそんな二人の姿に苦笑しながらを身を起こす。すると、そこへクロードが歩み寄って来た。
「ルナリーフ君。怪我はもう大丈夫なのですか？」
「はい。まだ若干痛みはありますが、もうこうして動き回る分には回復しました」
「それは良かった。あれだけの怪我でしたから、アイルーの医学でも完全には治らないのではないかと心配していましたが、どうやら杞憂だったようですね」
「――いえ、やっぱり完治とまではいきませんでしたよ」
　クリュウのいつもとは違うどこか弱々しい声にクロードだけでなくルフィールとシャルルも不思議そうに彼を見詰める。そんな三人の視線に対し、クリュウは小さく力ない笑みを浮かべた。
「傷は残るそうです。それも、背中全体を覆うような大きなものが」
　――その瞬間、場の空気が凍りついた。誰もが言葉を失い、驚きを隠せないでいる。そんな皆の反応を予想していたのか、クリュウは驚く事もせずに立ち上がる。
「まぁ、傷なんてハンターという職業柄あって当然の事ですからね。

別に構わないんですけど」
「そ、そんなのダメっすッ！　兄者の真珠のように白くてきめ細やかな肌に傷なんて、絶対にダメっすッ！」
「……いや、そんなに肌の事をほめられても、僕男だから気にしないし。むしろ少しは小麦色になってほしいの願うんだけど」
「ダメったらダメっすッ！　シャル、今からあのバカアイルー達を追って傷を消すように言うっすッ！」
「ちょっと待てぇッ！　君の場合《言う》じゃなくて《脅す》でしょッ!?　それに無理なものは無理なのッ！」
　まるで自分の事のように大激怒し、クリュウの手を離れて本当にアイルー達を追いかけて行きそうな勢いのシャルル。そんな彼女をクリュウは必死にって抱き止める。これ以上問題を起こされる訳にはいかないのだ。
　そんな二人の押し問答を、ルフィールは少し離れた場所からじっと見詰めていた。シャルルを羽交い絞めにして押さえているクリュウの背中、まるでその奥にあるものを隠すように巻かれているその白い壁。その奥には、自分の一生を懸けても消える事のない失態が刻まれている。
「だからぁッ！　落ち着いてって――る、ルフィール？」
　暴れるシャルルを羽交い絞めにして何とか押さえていたクリュウの背を、いつの間にか近づいたルフィールはそっと指先で撫でる。この奥に、自分の消す事のできない失態が刻まれている――自分のせいで、彼にその傷を負わせてしまった。
「る、ルフィール……」
　左右で色の違う瞳、イビルアイからボロボロと涙を流すルフィールに、クリュウはシャルルを放して振り返る。解放されたシャルルも泣いているルフィールの姿を見ると急に大人しくなった。
　顔を隠すようにうつむきながらさめざめと泣くルフィール。そんな彼女を目の前にし、クリュウは慌てる。
「ちょ、ちょっとルフィール。な、何で泣くの？　僕何か君に悪い事した？」

突然泣き出された事に慌てまくるクリュウ。そんな彼の背後にいるシャルルは慌てる彼の姿を見て小さく苦笑しながらも何の言葉も発しない。いつもなら真相がわかっていても「何女の子を泣かしてるっすかッ！」とからかって来るお調子者であるが、ちゃんとふざけていい時と悪い時の区別はできるのだ。

小さく嗚咽を繰り返しながら泣き続けるルフィールに、クリュウはどうすればいいか困惑する。

「……ごめんなさいッ」

シャルルに助けを求めようとした刹那、ルフィールのそんな小さな声を聞いて振り返る。すると、先程までは下げられていた彼女の顔が上がり、赤く腫れたイビルアイでルフィールはじっとこちらを見詰めていた。

「ルフィール……」

「……ボクのせいで、先輩に一生消えない傷を負わせてしまいました」

ルフィールの言葉に、クリュウはようやくルフィールが泣き出した理由に気づいた。彼女を助けた際に負った背中の傷。アイルー達の懸命な治療の甲斐あって傷口は塞がり、今ではほとんど痛くないまでに回復した。しかし、傷跡だけはどうしても残ってしまうという。

ハンターという過酷な道を選んだ時からこれくらいの傷なんて覚悟していた。でもルフィールは、そんな自分の傷に対して責任感を感じてしまっているのだ。

確かに彼女を助けた事で傷を負ってしまったのは事実だ。でも、これは自分から進んで彼女を助けた為に負った傷。つまりは自分の責任だ。むしろなぜあそこで完全に回避できなかったのか。そっちの方が悔やまれる。

彼女が責任を感じる必要なんて全然ないのに、根が真面目なルフィールにとっては自分の失態が犯した大きな責任となって重く圧し掛かっているのだろう――何というか、本当に彼女らしい。

今にも倒れてしまいそうなほどに弱々しいルフィール。涙は止まらず流れ続け、イビルアイは悲しく煌く。表情は悲痛なもので、激しい後悔と自責の念、罪悪感など負の感情がごちゃまぜになったような

苦しいもの。今まで見て来た彼女の表情の中で、一番苦しげに見える。
「ごめんなさい……ごめんなさいッ……」
そう何度も繰り返すルフィールの頬を流れる涙を、クリュウはそっと指先で拭い取った。驚いたように見詰めて来るルフィールが見たのは、いつもと変わらない大好きな彼の笑顔。自分を救ってくれた、太陽だ。
「クリュウ……先輩……？」
「――いいんだ」
そう言って、クリュウはルフィールの小柄で華奢な体を引き寄せ、そっと抱き締めた。驚くルフィールの体を、両手でしっかりと、優しく包み込む。
「せ、先輩ッ？」
「――バカだな君は。傷なんて、ハンターを目指した時に十分覚悟していたさ。今更気にする事じゃない。ルフィールだって、覚悟の上の事だったでしょ？」
「そ、それはそうかもしれませんが……。でも、今回はボクの失態で先輩に一生の傷を――」
「――それに、僕は後悔なんてしてない。だって、ルフィールがこうして無事でいる。君を救う事ができた。それだけで、僕は十分だよ」
クリュウの言葉に、ルフィールの瞳が大きく開かれる。じわりと目元に溜まる涙は、さっきまでのものとは違う。ずっと澄んでいて、きれいな涙。表情も先程までの苦痛は消え、頬を赤らめて感無量といった所か。
クリュウはそんなルフィールをそっと抱き締めながら――断言する。
「この傷は僕の誇りになる――仲間を救った、勲章みたいなものだよ」
――その言葉に、どれだけ救われただろうか。
気づいた時には、自分は彼に自分からも抱きついて声を上げて泣いていた。彼に許してもらって良かった、彼に嫌われなくて良かった、彼が無事で良かった――彼と出会えて、本当に良かった。

感動、歓喜、安心。それらの感情が心の中で溢れ、涙となって溢れ出す。自分はこんなにも子供だっただろうか。常の自分ならきっと否定していただろう。でも今は、子供で良かったと思える。大人になったら、こんな素直な気持ちは消えてしまうかもしれない。

でもきっと、この気持ちだけは大人になっても変わらない。そう断言できる。

――ボクは、クリュウ先輩が大好きだ――

その後、クードもすっかり回復して一行はクロード引率でドンドルマへ戻った。

クエスト自体は失敗してしまったが、これは予想だにしていないドスファンゴの襲来というイレギュラーのせいであり、一応ドスランポスを追い詰めていた事は確かな為、特例としてクリュウ達それぞれに合格点が与えられた。

卒業単位を全て取得し、クリュウは大喜びした。そんな彼を、どこか素直に喜べないルフィール。

――でも、大好きだからこそ、大好きな先輩の卒業を、ちゃんと祝わなければいけない。

ルフィールの心は、いつの間にか十分大人に成長していたのであった……

第１００話　桜舞う卒業式　少女の想いは風となりて未来へ翔る

出会いがあれば別れがある。

ドンドルマに植林された東方大陸原産の桜と呼ばれる木が美しい花々を咲き誇らせる季節。街の人々はその美しさに目を奪われ、そして新たに旅立つ若き荒鷲達の門出（かどで）を祝う。

周りを桜の木で覆われた生徒会館では、今まさに厳（おごそ）かな雰囲気を纏って卒業式が行われていた。

主役は会場の中心に整然と並んだ第６学年の生徒達。その後ろには有志で集まった在校生が先輩達の最後の晴れ舞台をこの目に焼き付けようと真剣な表情で居並んでいる。中には先輩との思い出が過ぎったのだろう、泣き出す生徒までいる。それは６年生も同じで、長く苦しかった学園生活もこれで終わり。そう思うと口やかましかった教官でさえ思い出すと泣けてしまう。見守る教官達でさえ、ほとんど関わりのなかった他学年の教官さえも感動を感じずにはいられない。

卒業式とは、そんな不思議な空間だ。

整然と並ぶ６年生の生徒達の中、クリュウもまた他の生徒達と同様にステージの上で祝辞を読み上げる校長をじっと見詰めている。

纏うのは卒業記念パーティーでも着ていたスーツ。胸のポケットには卒業生の証である桜の木の枝が挿されている。咲き誇る桜の花は新たな季節の訪れを象徴し、それは自分達にとって新たな進むべき道を指し示すものだ。

隣にはクードが相変わらずな笑みを浮かべながら立っている。何と言うか、やはり長身の彼はスーツがよく似合う美青年という感じだ。それに対して自分は小柄な体格と中性的か若干女の子風な顔立ちのせいでどうしても男装をしている少女に見えなくもない。比較対象がずば抜けすぎているというのを差し引いても、若干ダメージを受ける。

一度新たな自分へのステップの為にこの長めの髪を短髪にしようと考えた時、ルフィールとシャルル、なぜかクードにアリアまでもが大反対し、一時期友好関係に亀裂が入った事もあった。おかげで今もなお彼は長めの髪をこれ以上は切れずにいるが、確実にこの長い髪が女の子風に見える大きな原因の一つだ。

校長の長くて退屈な話を無視してそんな事を考えていると、そういう思い出もまた懐かしく感じてしまう。みんなで笑った事、楽しかった事、怒った事、悲しんだ事。様々な思い出が、今では全部いい思い出だ――それは背中の傷も同じだ。

あれから傷は完全に治ったが、結局やはり傷跡は残ってしまった。それも、背中全体を覆うような大きなものだ。しかもこれが原因でルフィールはあれからもこの傷を気にしてか、以前よりも遠慮がちになってしまった気がする。あの事件の後、ルフィールは夜にベッドに忍び込む事も、自分から進んで二人っきりになろうとするのも止めている。やはり、責任感の強い彼女は、どうしても自分を責めてしまうのだろう。それで、自分との距離を一定に保っている。

最初こそ悲しかったが、今ではそれにもすっかり慣れた。それに、自分はもうすぐ卒業してこの学校から、この都市から去ってしまう身。いつまでも彼女の支えを自分一人で行い続けるのはやめたかった。

良い仲間達に囲まれ、クリスティナやシグマの努力の甲斐あって今ではルフィールを迫害する生徒はかなり減っている。彼女自身も、以前はどうしてもイビルアイのせいで他人を突き放すような行動や言動が多かったが、それも落ち着いていた。おかげで今ではユンカース姉妹とも打ち解けて、よく一緒に昼食を食べたり街に買い物に行ったりしている。

この一年で、ルフィールを囲む環境は一変した。

そしてそれは、クリュウ自身も同じ事であった。

この一年は、今までの学園生活で最も充実してて、本当に楽しかったと思える期間であった。良き仲間達と出会い、共に死闘を生き残り、勉学に励み、遊んだ。何もかもが、本当に満載であった。

そして、ついに卒業を迎えた。この自分を育ててくれた学校とも、多くの事を教えてくれた教官達とも、共に切磋琢磨し合った友人とも、お別れだ。

卒業証書授与。生徒が一人ひとりステージに上がって校長から直接卒業証書を受け取る。証書には学校の印とハンターズギルド長官の印、ドンドルマ市長の印など様々な関係者の印が押されている。そしてそれは同時に、彼らに自分達がハンターに認められた証拠であった。

卒業証書を受け取った瞬間、生徒達は新米ハンターとなってギルド本部から《ルーキー》の称号を得る。そして、それは新しいスタートの瞬間であった。

最初にドンドルマハンター養成学校の生徒達代表にして普通の教官以上の権限を持ち続けていた生徒会会長――いや、もう前生徒会会長と言う方が正しいか――氷の女神ことクリスティナ・エセックスが卒業証書を恭しく受け取った。そんな彼女を見守るのは彼女の後任にして先日新生徒会会長に就任した前生徒会副会長にして前総務部部長を兼任していた桃髪ツインテールに勝気な瞳の少女。いつもは鋭い瞳は柔らかくカーブを描き、涙を浮かべて先輩の晴れ舞台に感動していた。

Bクラスに入りBクラス委員長にして雷の女神と呼ばれているアリア・ヴィクトリアが証書を受け取る。その姿を、在校生の中からユンカース姉妹が涙を流しながら見守っていた。

その他C～Eクラスまでも感動の渦の中に終わり、ついにFクラスの番。名前を呼ぶ教官もFクラス担任のフリードに変わり、まず最初に呼ばれたのはFクラス委員長にして炎の女神と呼ばれたシグマ・デアフリンガー。いつもは大雑把な彼女も、今回はしっかりとした正装（スーツ）姿で壇上に上がると、校長から卒業証書を受け取った。その瞬間、クリスティナやアリアに負けないくらいの拍手が鳴り響いた。在校生の中から号泣しているエルが「せんぱぁいッ！」と叫ぶ。それに対しシグマはグッと親指を突き出した。その男らしい態度に、会場の拍手は更に大きく広がる。

その後Ｆクラスの他の６年生が次々に証書を受け取って行く。再び場の空気が変わったのは水の女神と呼ばれているフェニス・レキシントンが壇上に上がった時だ。美しいドレスを纏った彼女は校長から証書を受け取ると恭しく一礼。そして教官達に一礼し、さらに見守ってくれていた生徒達にも一礼した。その優雅で律儀な態度に会場の拍手は鳴り止まない。ふと、フェニスは在校生の方に目を向けた。そこには拍手で自分を見送ってくれるシルトの姿があった。フェニスはそんな彼に一度微笑むと、壇上を降りた。

続いて壇上に上がったのは乙女心を射抜く微笑みを浮かべた美少年、クード・ランカスター。証書を受け取った際の拍手は主に女子からが圧倒的だった。「ランカスター先輩ッ！」「おめでとうございまぁすッ！」と少女達の泣きながらの声援に対し、クードは優しく微笑む。腹の底は知れないが、本当に紳士的な奴だ。

――そして、ついにその時が来た。

「クリュウ・ルナリーフ」

フリードに名を呼ばれたクリュウは「はいッ」と大きな返事で答えるとゆっくりとした足取りで壇上に上がった。剣と銃が交差した紋様の校旗に一礼し、教官達にも一礼。そして、校長の前に立って一礼した。校長もしっかりと答礼し、卒業証書を構えるとその文面を読み上げる。

「卒業証書。クリュウ・ルナリーフ。右の者は我が校の課程を卒業した事を証する。ドンドルマハンター養成訓練学校校長、オリバー・リュッツオウ」

――一瞬、校長の名前を「そういえばそんな名前だったな」と若干忘れていた事は内緒だ。

「おめでとう」

校長から証書を受け取り、クリュウは最後の一礼をする。その瞬間、拍手が響いた。だがもちろんクリスティナやシグマに比べたらずっと小さい拍手だ。でも、それが自分のこの学校での評価であった。目立つ事もせず、普通の学生として過ごしていた自分にはこれくらいが丁度いい。

そして何事もなくリハーサルの通りに壇上から降りようと生徒達の方を向いた際――それは起きた。
「クリュウ先輩ッ！　おめでとうございますッ！」
そんな声が会場中に響き、クリュウだけでなく生徒や教官達が一斉にその声の主を見た。皆の視線を集めたのは、在校生の隅っこの方にいたルフィールであった。イビルアイに一杯の涙を溜め、泣きながら拍手をしている。その姿を見て、クリュウの平常心が急にバランスを崩した。
「ルフィール……」
イビルアイのせいでたださえ目立つので、あまり目立ちたくないといつも愚痴っていた彼女が、こんな目立ちまくりな事をするなんて。それも、自分の為に。
ここ最近彼女との仲があまり良くなかったのもあって、その姿を見て目頭が熱くなった。
――しかも、これだけでは終わらなかった。
「兄者ぁッ！　おめでとうっすぅッ！」
ルフィールの肩を抱きながらブンブンと手を振っているのはシャルル。彼女もまた目には一杯の涙を溜めていた。
「シャルル……」
次第に、止まっていた拍手が再び少しずつ鳴り響きだす。
「おめでとう、ルナリーフッ！」
「おめでとうですわッ！」
同じ卒業生のはずなのに、シグマとアリアまでもが全力拍手。二人の女神の拍手に、場を満たす拍手はさらに膨れ上がる。
「おめでとう」
「みんなで一緒に卒業ね」
クリスティナとフェニスもまたその拍手に参加する。
四大女神の拍手は、その場にいる全員の盛大な拍手の先駆け。いつの間にか、クリュウを包む拍手の大きさはクリスティナやシグマをも超えていた。
彼は知らない。仲間を救う為に大怪我を負い、その結果一生残って

しまう傷跡を誇りと言い切った彼の存在は、いつの間にか生徒達の目標であり誇りになっていた事を――彼が、自分達ハンター訓練生の鑑（かがみ）だと。

教官達も拍手し、あの不仲であったユンカース姉妹も拍手をしてくれている。クードもまた笑みを浮かべながら拍手をしているが、その笑顔はどこかいつもとは少し違うような気がした。

皆に盛大に祝われ、ついにクリュウは感極まってしまったのか涙を流した。だがそれはさらなる拍手の起爆剤となって会場を感動で満たした。

スタンディングオベーション。皆が席を立ち、盛大な拍手で彼の卒業を祝った。

そんな中、ルフィールは頬を流れる涙をグシグシとドレスの袖で拭いながら、大好きな先輩の勇姿をしっかりと目に焼き付けていた。そして、ある決意を胸に秘め……

卒業式はその後は予定通り進行し、無事に終わった。卒業式終了後、すぐに総合得点によるクラス順位が発表された。

Ｂ及びＦクラスは同点で２位となった。クラス委員長として共に表彰状を受け取る際アリアとシグマは互いの顔を見合うと小さく笑みを浮かべ合い、皆が見守る中しっかりとした握手を交わした。その時の拍手は、彼らの人生の中で最高レベルのものであっただろう。

そして、優勝は大方の予想通りＡクラスとなった。しかしまさか、Ｂ・Ｆクラスの点を足してもまだお釣りが出るような点数を叩き出されるとは思ってもみなかった。何というか、ここまで完敗するとある意味清々しいくらいだ。

クリスティナは副委員長と共に優勝旗と表彰状、トロフィーを受け取り、皆の温かい拍手に祝われた。

結局、シグマとアリアが豪語していたクラス優勝は失敗し、さらに最低限の目標であった互いのクラスには勝つというのも失敗。だが、不思議と悔しくはなかった。

表彰式も終わり、卒業生は各々のクラスに戻るとそこで後輩達との最後の別れをする。後輩の中には泣いてしまう生徒も多く、その涙に

影響されて卒業生達も泣いてしまうという、悲しくも嬉しさが混じった雰囲気が場に流れる。
Ｂクラスではユンカース姉妹がアリアに抱きついて号泣するという事態が発生し、Ｆクラスでもシグマにエルが泣きながら抱きつき、シグマが対応に困るという事態が起きていた。
後輩皆がそれぞれ先輩達との最後の別れを惜しんでいる中、クリュウは一人で窓から天を見上げていた。桜の花が輝くに相応しい快晴が、そこには一杯に広がっている。
「先輩」
その声に振り向くと、そこにはルフィールが立っていた。クリスティナにもらった創立記念のやり直し会で着ていたあの純白のドレス姿だ。その姿を見て、クリュウは小さく微笑む。
「さっきのはびっくりしたよ」
そう言うと、ルフィールは恥ずかしそうに頬を赤らめた。
「あ、あれはちょっと頭のネジが何本かぶっ飛んだボクの人生最大の失態です」
「あはははは――でもさ、すっごく嬉しかったよ」
笑みを浮かべながら言ったクリュウの言葉に、ルフィールはまだ若干恥ずかしいのか頬を赤らめたまま、でも嬉しそうに微笑んだ。その笑顔は、本当に年相応の少女の笑みであった。
ルフィールはクリュウの隣に並ぶと、先程までの彼と同じように快晴の空を見上げた。吹き込む風は心地良く、彼女の紺色の髪をサラサラと吹き流す。創立記念の時とは違い、髪型はザザミ結びのままでイビルアイと並ぶトレードマークの細メガネもしっかりと掛けられている。
「いい天気ですね」
「そうだね」
「絶好の卒業日和じゃないですか」
「うん。こんないい天気の日に新たな旅立ちができるなんて、僕は幸せ者だよ」
「……新たな旅立ち、ですか」

そう繰り返し、ルフィールはうつむいた。ずっと現実から目を背けていたが、もう逃げられない。

――今日で、クリュウは卒業してしまった。午後には、校内にいる6年生は全員それぞれの道に向かって出発する。もちろん、クリュウもその一人だ。彼は多くの生徒達同様、自分の故郷の村に帰るらしい。彼自身長い事村を離れているので、村の友人や幼なじみとやっと会えると喜んでいた――そのいつもと変わらない笑顔が、今日は見ててとても悲しかった。

クリュウとこうして一緒にいられるのもあと少し。彼のおかげで、本当にこの半年間は幸せだった。彼のおかげで友人も増えた。皆が自分をクラスメイトと認めてくれた。今までにない幸せを感じられた。しかし、やはり一番大きな幸せは彼と一緒にいられた事。その彼が、卒業し、自分の前からいなくなる。その現実が、本当に悲しかった。

「……ダメですねボクは。先輩の卒業を祝わないといけないって頭ではわかってるのに――やっぱり、先輩とずっと一緒にいたいと願ってしまいます」

それはルフィールの葛藤の末にやはりどうしても受け入れられない本心であった。彼と過ごした日々は、本当に幸せだった。そして、ずっと彼と一緒にいたい。そう心から願っていたのに、その想いは結局夢と終わってしまった。

自分は無事に来期から第5学年に進級し、シャルルも合格点ギリギリで第6学年になった。そして、クリュウは卒業生として自分の進むべき道に向かって歩き出す。

頭ではわかっているのに、やっぱり心は理解を拒む。自分はどうやら、自分が思っていた以上にまだまだ子供だったらしい。

うつむきながら、目頭が熱くなるのを感じた。泣いちゃダメなのに、自分は何て弱い人間なんだ……

ポン、と優しく暖かな手が頭に載せられた。顔を上げると、クリュウは空を見上げていた。

「出会いがあれば別れがある。それが一期一会って事でしょ？」

「……先輩」
「でもさ、別に一生の別れって訳じゃないんだからさ。またきっとどこかで会えるよ。僕は故郷のイージス村に拠点を置くつもりでいる。だって元々、僕は父さんが守り抜いて来たあの村を守りたくてハンターを目指したんだから」
イージス村。それが彼の生まれ故郷であり、これからも彼が居続ける村の名前。片道ドンドルマから港まで竜車で一日、船で四日。往復で十日掛かる辺境の小さな村だと彼から聞いていた。行く気があれば行く事も可能だが、学生の身としてはそれはなかなか難しい距離と日数だ。
「――最低で一年」
「え？」
「もしも君が二期連続で進級したら、一年後には僕と同じ本物のハンターになれる。そうすれば、自分の思った通りに時間が作れるでしょ？　そしたら、イージス村まで来てよ。そうすればまた会えるよ」
二期連続で進級。口で言うのは簡単だが、それは恐ろしく難しい事だ。低学年の頃なら習う事も基礎だけなのでまだいい。その基礎を使った応用科目を中心とした高学年の5、6年生を二期連続進級なんて相当な努力が必要とされる。
普通なら無理と断言するに違いないこの難問。だが、ルフィールは違った。
「……何を当たり前な事を言っているんですか。ボクは校内首席ですよ？　そんなの当然の目標、決定事項に決まっているじゃないですか」
そう言って、ルフィールは自信満々な笑みを浮かべた。
ルフィール・ケーニッヒはこのドンドルマハンター養成訓練学校の首席であり、努力の天才だ。あのクリュウでさえ6年生は何とか半年でクリアしたのだ。ルフィールにとっては当然の道筋だ。
「一年で卒業し、また先輩を会うのは決定事項です。ボクが不満を言っているのは、その一年間が長過ぎるというその一点に尽きます」
「一年くらいあっという間だよ」

「口で言うのは簡単ですが、一年は三六五日あります。その三六五日は時間に換算すると八七六〇時間となり、その八七六〇時間を分に換算すると五二万五六〇〇分となり、この五二万五六〇〇分を秒に換算すると三一五三万六〇〇〇秒となり、この三一五三万六〇〇〇を――」
「もういいッ！　桁がでか過ぎて頭が痛くなって来たぁッ！」
「それくらい途方もないほどの年月だと言っているんです、一年と言うのは」
　普通に生活している分には絶対に使わないであろう桁での数字に悶絶するクリュウを、ルフィールは若干呆れ気味の視線で見詰める。だがその視線は、次第に熱いものに変わっていく。
「――その途方もない年月を、先輩と離れ離れになるのが寂しいんですよ」
「え？」
　クリュウが顔を上げると、すぐさまルフィールはプイッとそっぽを向いた。だが完全には背ける事はできず、熟れたシモフリトマトのようにその横顔は真っ赤に染まっていた――そんな彼女の姿は、とてもかわいらしく見えた。
「――僕だって寂しいよ」
　そう言って、クリュウはポンと彼女の頭の上に手を載せる。ルフィールはそんな彼の手を拒む事はせず、されるがままになっている。だが、じっとこっちを見詰めて来る視線から察するに、やめてほしくはないらしい。
「この半年、ルフィールとはずっと一緒にいたからね。それが突然一緒じゃなくなるのは、僕だって寂しい。でも、その悲しみを乗り越えた先に、また出会えた時の感動が増す。そう考えれば、少しは楽になると思うよ」
　そう言うクリュウの表情は真剣であった。ウソも間違った事も言っていない、正論中の正論。だが、ルフィールはその正論を頭では理解していても、やはり心は拒む。
「……先輩は、大人ですね」

「そんな事ないよ。誰だって、別れは悲しいものだからね。でもさ、さっきも言ったけど別に一生の別れになる訳じゃない。最低一年耐えれば、また会えるんだからさ」
「先輩が狩りで命を落とせば、今生の別れになりますが？」
「……怖い事をさらっと言わないでよね」
それが冗談では済まないのだから恐ろしい。何せ熟練ハンターが強力なモンスターとの戦闘で命を落とすよりも、学生上がりの新米ハンターがドスランポスやイャンクックなどとの戦いで命を落とす方がずっと多いのだ。クリュウは今まさに、その一番危険な時期にいるといってもおかしくはない。
だが、苦笑する彼の姿を見ながらルフィールは確信していた――クリュウならそんな事はないだろうと。
彼は普通に見えればどこにでもいそうなごく平凡な新米ハンターだ。でも、その内に秘める心の強さと、将来を思わせる片鱗など。彼はいずれ英雄クラスのハンターになれる。そう確信している。
彼は今、その為の第一歩を踏み出そうとしている。同時にそれは、自分との一時期の別れに直結する。
本当は別れたくない。ずっと一緒にいたい。そう思っている。
でも、本当に彼の事を想っているなら、ここで止めてはいけない。本当に彼の為を想うなら、彼の足手纏いにだけは絶対になってはならない。
今の自分のできる事、それは――
「……わかりました」
「ルフィール？」
振り返ったクリュウが見たのは、さっきまでのどこか悲しげな雰囲気を纏ったルフィールではなかった。何かを決意し、それに向かって強く進もうとしている、天性の負けず嫌いの校内首席、ルフィール・ケーニッヒの姿であった。
「一年です」
「え？」
「ボクは必ず一年で卒業してみせます。そして、今度こそ先輩の片腕

になれるような立派なハンターになって、また先輩の前に現れます。その時は、また一緒に狩りに行きましょう」
　その強く美しい瞳に、クリュウは笑みを浮かべながらうなずいた。そのうなずきに対し、ルフィールはやっと素直になれた気がした。そして、優しげな笑みを浮かべる。
「今ならハッキリと、心を込めて言えます――卒業、おめでとうございます」
　窓際で二人向かい合いながら笑い合っているクリュウとルフィール。そんな二人の姿をバカ騒ぎする群衆の中からシャルルとクードが見詰めていた。
「いやはや、あの二人は焼いてしまうくらいにお似合いですね」
「ふ、フン。そんな事ないっすよ。シャルの方が兄者とベストカップル賞受賞ものっす」
「焼いているのですか？」
「そ、そんなんじゃないっすよッ！」
　顔を真っ赤にして怒るシャルルを見てクードは心底楽しそうに笑う。本当に人をからかうのが楽しくて仕方がないという厄介人物なのだ彼は。
「まったく、これだからランカスター先輩は――って、あのバカッ！どさくさに紛れて何してるっすかッ！」
　ルフィールがクリュウの手を握り締めたのを一瞬にして見抜き、シャルルは激怒しながら二人の方へ駆けて行った。すぐにキレまくるシャルルと冷静沈着なルフィールのケンカが勃発。そんな二人に挟まれたクリュウは必死になってケンカを止めようとするが、原因がいくらがんばっても火に油を注ぐだけだ。
　そんな感じで目立つくらいに騒ぐ三人はクラス中の注目を浴びていた。シャルルとルフィール、どちらが勝つかと賭け事が始まったり、二人を応援する声なども響く。二人のケンカは、いつの間にかＦクラス全体を巻き込む恒例行事となっていたのだ。
　シャルルがルフィールに飛び掛って彼女の頬を引っ張ると、ルフィールも反撃とばかりにシャルルのチャームポイントであるツイ

ンテールの片側を掴んで引っ張る。そしてすぐに取っ組み合いのケンカに発展し、クラス中が大騒ぎになった。
結局、そのバカ騒ぎはフリードがやって来て怒られるまで続いたのであった。
――そして、ついにその時がやって来た。
校門が開き、多くの在校生に見送られながら卒業生が出て行く。この門を潜ったその瞬間から、彼らはハンター訓練生から本物のハンターとなる。緊張や嬉しさ、寂しさや怖さを感じながら、卒業生は次々に出て行く。在校生達はそんな先輩の姿を見ながら、いつか自分達もと想いながら見送る。
「じゃあ、俺達は先に行くぞ」
そう言うシグマの両隣にはアリアとフェニスが並ぶ。この三人は同郷という事もあって一緒に帰るらしい。何だかんだ言っても実は仲がいいのだシグマとアリアは。
「じゃあ、みんな元気でね」
微笑むフェニスの笑顔は、どこかいつもと違って悲しみが感じられた。やはり、別れと言うのは辛いものだとその笑顔を見て改めて感じる。クリュウも「元気でね」とどこか悲しげな笑顔で返す。
「クリュウ」
視線を向けると、アリアがじっとこちらを見詰めていた。彼女もまた、どこか悲しそうな笑みを浮かべている。それを見て本当にお別れなんだなぁと改めて気づかされた。
「アリアも元気でね」
「ええ。あなたもお元気で。もしよろしければ、いつか私達の国にも来てほしいですわ。小さな国ですけど、良き君主が統治するとても平和で、すばらしい国ですわよ」
「うん。いつか機会があったら行ってみるよ」
クリュウの返答に対し、アリアはこの日初めて心から嬉しそうな笑みを浮かべた。そんな彼女の背中を、シグマとフェニスが小さく笑みを浮かべながら見守る。
「じゃあ、行くぞ」

そう言ってシグマが歩き出すと、フェニス、アリアと続いて三人も歩き出す。クリュウ達の他にユンカース姉妹、エル、シルトに見送られ、三人は門を潜って故郷の街へ帰って行った。そんな先輩達の姿を、四人はしっかりとその目に焼き付けた。

クリスティナは見送りに来てくれたフリードに一礼すると、在校生達の割れんばかりの声を受けながら門を潜る。だがその寸前で突然彼女は踵を返すと、小走りでフリードの前まで戻って来た。そして――背伸びをし、一瞬の隙を突いてフリードの頬に口付けを炸裂させた。

歓声は消え、不気味な沈黙だけがそこに残る。

突然の事に驚き過ぎて固まるフリードに、頬を赤らめながらクリスティナは微笑むと、戻って来た時と同じように小走りで門を駆け抜けて行った。

残されたのは残っていた卒業生や在校生、教官達の恐ろしい視線。その後フリードは校長や教官主任、教官委員会の面々を相手に辛いお説教を受ける事になった。

フリードが連行された後も卒業生達は次々に出発していく。しかもクリスティナの影響を受けたのか、時々卒業生と在校生のカップルが別れ際のキスを炸裂させる光景が見られるようになった。

その光景に頬を赤らめながら苦笑するのはクリュウ。昇降口の前に立つ彼を見送ろうと、彼の前にはルフィールとシャルルが立っている。

「な、何なんすかッ。さっきからイチャイチャしやがってッ」

「……公然わいせつですね」

「ま、まぁ気持ちはわかるけどね。少しは自重してほしいかな」

三人とも頬を赤らめながら互いに向き直り苦笑し合う。だがすぐにお別れムードが戻り、三人ともどこか寂しげな表情を浮かべてしまう。特にルフィールとシャルルの表情はどちらも暗い。そんな二人に、クリュウは優しく微笑みながら両手でそれぞれの頭を撫でた。

「そんな顔しないでよ。せっかくの新たなスタートだっていうのに、暗くなっちゃうじゃないか」

「ご、ごめんっす……」
「申し訳ありません……」
どちらも、やっぱりいつもの元気がない。そんな二人に苦笑しながら、クリュウはそっと二人を抱き締めた。突然の事に驚きを隠せないでいる二人を両腕で包みながら、クリュウはそっとささやく。
「今までありがとう。二人の事は、絶対に忘れないからね」
そんなクリュウの言葉に、二人はついに我慢の限界になったのか泣き出してしまった。シャルルは声を上げて号泣し、第三者がいる前ではクールを装っているはずのルフィールもさめざめと泣いてしまっている。そんな二人に、クリュウは苦笑いする。
「もう、別れ際の顔って結構覚えるものなんだよ？　お願いだから泣き顔だけは勘弁して。できれば笑って見送ってもらいたいな」
クリュウのそんな願いに対し、二人は律儀に涙をグシグシと拭き取ると、それぞれ笑みを浮かべた。若干無理しているのはバレバレだが、それでも泣き顔に比べたらずっとマシだ。クリュウも安心したように小さな笑みを浮かべる。
「卒業したら、僕の村に遊びに来てね。そうすれば、また会えるからさ」
クリュウの言葉に、二人はしっかりとうなずいた。その瞳は涙に濡れてはいるが、頬にはもう流れていない。
そっと二人を離すと、クリュウは荷物を持つ。すでに大方の荷物は事前に港の方に送ってある。それと一緒に、船に乗って村へ帰る予定だった。事前に手紙を出しておければ良かったのだが、色々と忙しくてすっかり忘れていた。
まぁ、手紙なしでも別に問題はないだろうとクリュウは楽観視していた。ちなみにそのせいで到着早々に幼なじみの飛び蹴りを受けて悶絶する事になるのを、彼は予想すらしていなかった。
「じゃあね。二人とも、元気でがんばって」
そう言って、クリュウは二人に背を向けて歩き出した。そんな彼の背中に向かって、ルフィールとシャルルが声を掛ける。
「先輩ッ！　お元気でぇッ！」

「兄者ぁッ！　卒業したら、絶対に会いに行くっすからねッ！」
そんな二人の声に対し、クリュウは手を振って応える。
歩みを進めると、近づいてくるのはアーチ状の校門。これを潜って外へ出れば、もう一人前とはいかなくても半人前のハンターにはなれる。そう思うと、自然と緊張してしまう。
だが、意を決して歩みを進め校門の直下。そのまま、外に向かって一歩を踏み出した。気がつくと、校門を越えていた。振り返ると、ルフィールとシャルルが必死になって手を振って見送ってくれている。せっかく涙を拭いたはずなのに、ボロボロと涙を流している二人。クリュウはそんな二人に向かって笑みを浮かべると、最後に大きく手を振って前に向き直る。
振り向きたくなる衝動を堪え、前だけを意識して進み続ける。気がついた時には、もうドンドルマハンター養成訓練学校の校舎はずいぶんと小さくなっていた……
自分が乗る予定であった竜車が落盤事故で道を塞がれてしまって到着が遅れている事を知ったのは竜車のターミナルに着いてからの事であった。その為、予定よりも出発の時間が一時間ほど遅れてしまう事になった。
別に急いでいる旅ではないので、クリュウは別段気にした様子もなく時間つぶしにとドンドルマの街の端にある公園へ向かった。そこは桜の木が数本植えてあったので、今はちょうど見ごろな満開模様。公園はさほど広くないしこの時間はあまり人もいなかった。
ベンチに腰を掛けて、ぼぉーっと空を見上げている。そんな時間をずいぶんと過ごす。
しばらくして街の中心部にある時計塔の鐘が鳴った。まだ余裕はあるが、そろそろ戻ろうかと立ち上がった時の事だった。
「先輩ッ！」
突然のこんな所にいるはずがない声に驚いて振り返ると、そこには肩を上下させて荒い息を漏らすルフィールが立っていた。どうやらここまで全力疾走して来たらしい。
「る、ルフィールッ!?　何でこんな所に……」

「先輩が乗るはずだった竜車が遅れていると知ったので、もしかしたらまだいるんじゃないか思ってとターミナルに行ったらこの公園に来ていると聞いたので」
そう荒い息混じりで言いながら、ルフィールは駆け寄って来た。そしてそのまま、クリュウの胸に飛び込む。
「る、ルフィールッ!? ちょ、ちょっと――」
「少しだけッ！ 少しだけこうさせてくださいッ！」
悲鳴のように言うルフィールの言葉に、クリュウは黙ってしまった。抱きつく彼女の肩が震えているのが見えたのはそのすぐ後。それを見てしまうと、何と声を掛けたらいいかわからなくなってしまった。
「ほんの少しだけ、最後に先輩の温もりを覚えておきたいんです……ッ」
「ルフィール……」
そんなルフィールの姿に、クリュウはそっと彼女の体を抱き締めた。
そうして、しばらくの間二人はそうして抱き合い続ける。すると、次第にルフィールも落ち着いたのか、しがみ付いて来るルフィールはとても安心したというような表情を浮かべていた。
「ルフィール」
「……もう、大丈夫ですよ」
そう言って、ルフィールはそっとクリュウから離れた。
向かい合い、互いを見詰め合う二人。まるで最後の姿を目に焼き付け合うように、二人はどちらも小さな笑みを浮かべていた。
「これで最後です。今度こそ、さようならですね」
「そうだね」
「最後に、ボクから先輩へ無病息災健闘不敗を祈るおまじないをしてあげますね」
「おまじない？」
何かなとクリュウが不思議そうに首を傾げた瞬間、ルフィールは突然再びクリュウの腕の中に飛び込んで来た。首に両手を回し、グッと

強く引き寄せられ、眼前に彼女の真っ赤に染まった顔が現れる。
――刹那、クリュウの唇に柔らかいものが押し付けられた。
目の前には今だかつてないほどに近い彼女の真っ赤な顔があり、唇には熱いくらいの温度とマシュマロのように柔らかいものが当たっている。
長いようで、本当は一瞬。彼女が離れると同時に、唇を押さえつけていた熱も消える。
何が起こったかわからず呆然としていると、ルフィールは今だかつてないほどに顔を真っ赤にさせていた。本当に頭から湯気が出ておかしくないほど、彼女の顔、そして体は熱くなっていた。
「さ、さようなら！」
逃げるようにしてルフィールは踵を返して公園から出て行き、すぐにその小さな背中は街角に消えた。
呆然とその場に残されたクリュウは、ふと熱があった分風に触れてやけに寒く感じる自らの唇に指を当てた。あの熱と柔らかさは、まだしっかりと唇に残っている。
――それがキスだとようやく理解できた時、クリュウはボンッと顔を真っ赤にさせた。
それからすぐ、クリュウは竜車に乗ってドンドルマを後にした。
翌日、港に到着するとすでに着いていた荷物を持って船に乗り込み、故郷のイージス村に向かった。
そして、彼の本当の物語が始まったのであった……
「――あれからもう一年。今頃、ルフィールときっとシャルルも卒業してそれぞれの道に向かって突き進んでると思う。そしていつか、約束通りこの村にも来てくれるかもしれない。その時は、おめでとうって言ってあげたいと思ってる」
そう締めると、クリュウはジョッキに注がれた好物のハチミツ入りミルクを飲み干した。そんな彼が座るテーブルの正面にはフィーリア、サクラ、シルフィードの三人の他にエレナの姿もあった。
ここはイージス村。それもエレナの酒場であった。
村へ帰る途中、やっぱり恥ずかしくて簡単に説明を終えたクリュウ

だったが、三人は納得しなかった。村についてからはエレナまで加勢に加わり、こうしてハチミツ入りミルク一杯を報酬にクリュウは自らの過去を根掘り葉掘り説明させられていた。
「――なるほど、訓練生時代には今の我々に引けを取らないような良い仲間達がいたのだな」
シルフィードは口元に小さく笑みを浮かべながら、自らが注文していたブドウジュースを飲む。そんな大人な反応を見せるシルフィードに対し、フィーリアはムスッとした表情を浮かべながらリンゴジュースを飲んでいた。
「……ずるいです。そんなにクリュウ様に大切にされているなんて、不公平です」
「それ、どういう意味？」
苦笑しながらもクリュウはほっと胸を撫で下ろしていた。どうやら命の危機は脱したらしい。何せありのままを話すにはやっぱり恥ずかしいし、何より女の子が関係する話になると四人が全員表情を険しくして不機嫌になっていくので必要最低限の説明をしつつ四人が納得できるような内容に調節するのには苦労した。特にルフィール関係の話は地雷だらけ。とてもじゃないがキスやら一緒に寝たやらは絶対に言えない。言ったら最後、崖から突き落とされるかもしれない。
話し疲れたというだけではないのどの渇きを潤し、何で昔話をしただけでこんなに苦労するのかと思いクリュウは苦笑した。そんな彼を、じっと見詰める二人の少女。
「クリュウ、本当にそれが全部なの？」
ジト目で見詰めながら疑ってくるエレナに対し、クリュウは「ほ、本当だよ。これで全部さ」と笑って誤魔化す。だが、その隣にも疑い深い少女が座っている。
「……話の途中途中を省略した感じがする。むしろ、私はその省略していた話に興味がある」
「そ、そんなものはないってばぁッ！」
完全に疑いの目を向けて来るサクラ。彼女の洞察力や推理力は人

並み外れているのは知っていたが、改めて彼女の危険性を再認識させられた。
「と、とにかく僕の話はここまでッ！　ほ、ほら早く荷物を片付けちゃおうッ！」
　そう言って無理やり話を終わらせ、クリュウは家に戻っていないので椅子の横に置いてある荷物を手に取ると、逃げるように店を出て行った。
「あ、コラ待ちなさいッ！　まだ話は終わってないのよッ！」
「ま、待ってくださいッ！　私もやっぱり納得できませんッ！」
「……女絡みな気がする。許さない」
「だあああぁぁぁッ！　ほんとにもう何も話す事はないってばあああぁぁぁッ！」
　追い掛けてくる美少女達（バーサーカー）から逃げるようにクリュウは家に向かって全力疾走。そんな彼を追い掛けるようにフィーリア達も全力で走る。
　土煙を上げながら小さくなって行く四人を見詰め、シルフィードは小さく口元に笑みを浮かべると全員分の勘定をテーブルの上に置いてからゆったりとした足取りで皆の後を追った。
　他の幼き少女達とは違い例え怪しくても彼が言いたくない事は追求しない。皆よりも年上で数々の場数を踏んで来ただけあって、シルフィードは大人でありクールであった。
「……逃げるのが得意なクリュウの事だ。きっと四人を巻く為に村長の家の方を隠れながら回るに違いない。先回りしてみるか」
　――前言撤回。彼女もものすごぉく気になっていたらしい。
　雪が降り積もる冬の真っただ中である北の辺境にある小さな村から、少年の悲鳴が轟いたのはそれからすぐの事であった。
　桜咲き誇る春、大陸最大の都市であるドンドルマから西へ竜車で数日。シルクォーレの森とシルトン丘陵からなるこの地方は『温厚な心』という意味を持つアルコリスと名づけられている。名の由来の通り、ここはとても穏やかで草食竜が平和に暮らしており、のどかな時間が流れている。

この地方はどの国にも属さずに独立しているドンドルマと、西シュレイド王国の南端にあり国から自治権を認められている大規模都市であるミナガルデと狩場を共有している。この穏やかな地方は資源も豊富な上に新米ハンターを育成するにはとても適しており、お互いにハンター中心の街な為に昔はその領有権を求めて争った経緯があるが、現在では共同領有という形で一応決着はしていた。

その為、このアルコリス地方はドンドルマのハンターだけではなく、ミナガルデのハンターにとっても親しみ深い狩場なのであった。

――そんなアルコリス地方の狩場、森丘では一つの戦いが終わろうとしていた。

「クワアアアアアッ！」

特徴的な鳴き声を放ちながら突進して来る桃色の鱗や甲殻に身を包んだ飛竜。巨大なクチバシとレーダーのような耳を持つそれは正確には飛竜ではなくドスランポスなどと同じ鳥竜種に分類されるのだが、事実上の飛竜として扱われているモンスター。

新米ハンターの登竜門、怪鳥イャンクックだ。

イャンクックは《敵》に向かって必殺の体当たりを決める。だが、その小さな《敵》は華麗な動きでそれを回避。イャンクックの巨体は何も踏み潰す事はできず、勢い余って前のめりに倒れて地面を滑走する。

ゆっくりと起き上がるイャンクック。だがその姿はすでに満身創痍という状態であった。クチバシは砕け、耳は破れ、様々な部分で鱗や甲殻が飛び散ってしまって血を流している。破れた耳が畳まれているという事は、体力ももうほとんど残っていないのだろう。

何より、一番痛々しいのは体中に突き刺さっている無数の矢。特に関節部に密集して突き刺さっており、動くたびに激痛が走るのであろう、イャンクックはそのたびに苦しげな唸り声を上げている。

だが、その瞳に宿るのはすさまじい殺気と憎しみ。自分をここまで追い込み、傷つけたのは自分よりもずっと小さな生き物。圧倒的に有利のはずの自分が、こんな非力な存在に敗北するなど――絶対に許してはならない。

「クワアアアアアアアアッ！」
怒り狂うイャンクック。その殺気を全身に浴びるのは彼とは比べ物にならないほど小さな体をした紺色の髪を流した少女。
身を包むのは着心地が良くて耐久力もあるケルビの皮をメインに使った緑色の防具、バトルシリーズ。武器は基本的な形をしたハンターボウ3。初心者の武器としては十分攻撃力がある武器だ。何より、ずっと使っていた武器の強化型だけあって扱いやすい。
バトルキャップの下には太陽の光を受けて煌く知的なメガネ。少女はイャンクックの殺気など気にした様子もなくクール。動き回ってズレたメガネを、片手でクイッと直す――その瞬間、メガネの奥で二色の瞳が輝いた。
もはや戦略も戦術もない苦し紛れの突進攻撃。少女は迫り来るイャンクックとの彼我の距離を冷静に見極め、奴の巨体の大きさを計算し、ギリギリの間合いで最低限の動きだけで回避する。その見事な動きは、ただの新米ハンターとは明らかに違う。
焦らず、常に余裕を保ち、冷静に状況分析をしながら戦う。それが彼女の戦い方であった。
ゆっくりとした動作で矢筒から矢を引き抜き、弦に番えた。そして、イャンクックがこちらへ向き直る瞬間に矢を放つ。放たれた矢は吸い込まれるようにイャンクックの頭に突き刺さった。
「クワクワアアアアアッ！」
激怒するイャンクックはその場で地団駄を踏む。その間に少女は新たな矢を構えながら横へ移動する。イャンクックはその動きを追うように巨体自体をゆっくりと移動させる。そして、先回りするかのように口から火炎液を放った。だが少女はその攻撃すらもしっかりと見切っていた。これまでの戦闘で、すでに奴の動きは全て見切った。もはや、不意の一撃は受けない。余裕で火炎液を回避すると、お返しに矢を三本放つ。どれも見事に頭に命中し、イャンクックは仰け反る。
その隙を、少女は見逃さない。すぐさま腰の道具袋（ポーチ）から音爆弾を取り出すと、こちらに向き直ろうとしているイャンクックに

向かって投擲。直後に甲高い音が炸裂。人間の耳には何ともない音だが、イャンクックのような音に敏感なモンスターにとってはとてつもない衝撃となって襲い掛かる。その結果、イャンクックは天を仰いでフラフラとしながらその場に立ち尽くす。その間に、少女は矢から三本の矢を抜いて弦に番え、ギリギリと軋むほどに引き絞る。そして、限界まで引いた弦を一気に解放。矢は高速で撃ち放たれ、空気の壁を貫いてイャンクックに命中。腹、翼、脚を見事に貫く。

「クワアアアアッ！」

火炎液を口から漏らしながら怒り狂うイャンクック。一本の矢を番えたまま動かない少女を見てチャンスとばかりに渾身の突進を仕掛ける。だが、迫り来るイャンクックに対し少女は無表情のままギリギリと矢を引き絞り続ける。

――勝った。

イャンクックが自分の勝利を確信した時だった――突然、足元が崩れた。

「クワァッ!?」

突進は強制的に止められ、さらには崩れた地面に下半身が吸い込まれた。そしてそのまま、粘着するネットが体中にへばり付き、完全に動きを封じられた。イャンクックは必死になってもがくが、脱する事はできない。

そして、イャンクックの目と少女の目が合う。

蒼と金。二色の瞳が細められた瞬間、放たれた矢がイャンクックの頭を貫いた。その一撃で、イャンクックは倒れた。

落とし穴に体の半分を埋めて死したイャンクック。少女は武器をしまってから近づくと、完全に死んだ事を確認。そして――そっと手を合わせ、瞳を閉じて自分と死闘を繰り広げた彼の冥福を祈る。

しばしの沈黙の後、スッと瞳が開かれた。碧眼と金眼。メガネの奥に煌く双方で異なる色の瞳は、大陸に伝わる伝説の化け物、邪眼姫（イビルアイ）と同じイビルアイ。人々から忌み嫌われる、異形の存在。

確かに、今でもこの瞳を見て知らない人からは不気味がられたり遠ざけられたりもする。だが、昔のようにそんな自分の運命を諦めてな

どはいない。
かつて、この瞳を含めた自分を認めてくれた人がいた。この瞳を、きれいと言ってくれた人がいた。
その人は自分よりも先に自分の夢を目指して旅立ってしまった。
少女は、その人を自分の失態のせいで命の危機に晒し、一生残る大怪我をさせてしまった。その人は気にしていないと言ったが、少女はやはり激しく後悔し、もう二度と同じような過ちは犯さないと心に誓い、努力に努力を重ねて自分を磨いて来た。
そして今日、ついにハンターの登竜門であるイャンクックを討伐した。
本当なら大喜びしてもいいはずだ。でも、自分が目指すはのもっともっと上。この程度の事で喜んでなどいられない。きっとあの人は、もっと自分よりも上にいる。その人と並ぶだけの実力をつけるまでは、止まる事はできないのだ。
雲ひとつない快晴の空を、柔らかな風が吹き抜く。少女はふと空を見上げ、その眩しい太陽を手をかざしながら見詰める。温かくて明るい太陽は、まるで彼のようだ。
「……待っててください先輩。ボク、もっともっと強くなりますから」
その瞬間、少女に今日初めての笑みが浮かんだ。優しく、柔らかいその笑顔は年相応の少女がするかわいらしいもの。そのイビルアイが見詰める先に、彼女の目指すものがあるのだろうか。
ルフィール・ケーニッヒ。後に《光眼姫（シャインアイ）》という名で大陸中に知れ渡る伝説のハンターとなる少女の、第一歩の瞬間であった……

登場人物紹介３

《ルフィール・ケーニッヒ》
身長　１５０センチ
年齢　１３歳（現在１４歳）
学年　第４学年（現在は卒業）
髪・瞳　艶やかな紺色のザザミ結びの髪とイビルアイ（左目：金、右：碧）＋細メガネ
武器　弓《ハンターボウ１》　現在《ハンターボウ３》
防具刃《ハンターシリーズ》　現在《バトルシリーズ》
スキル《ハンターシリーズ》探知（訓練防具の為自動マーキングは解除）、剥ぎ取り鉄人
《バトルシリーズ》探知、攻撃力ＵＰ【小】　ぶれ幅ＤＯＷＮ　装填速度＋１

過去編メインヒロインにして恋狩史上最強の恋姫。学生時代のクリュウが背中を任せた弓使いであり、その正確無比の一撃は多くのランポスやランゴスタからクリュウを守って来た経歴を持つ。大陸伝説にある災厄の象徴である邪眼姫（イビルアイ）と同じく両目の色が違うイビルアイの持ち主。このイビルアイのせいで今まで周りからひどい迫害を受け、両親からも捨てられたという悲しい過去を持っており、その為に自分の悲しき運命に逆らわずそれが当たり前の事だと思って生きて来た。しかしクリュウと出会い、彼に認められた事によって次第に明るくなっていった。そして、自分を光ある世界に導いてくれたクリュウの事を好きになり、様々なアタックを仕掛けていた。性格は年齢にしては大人で冷静沈着。常に次の一手を考える頭脳型であり、とてもクール。理論的な考え方をしており、常に理論武装をして自らの正当性を強固に推し進める頑固な面もある。しかしそれらの《できる子》は全て今までの処世術からの仮面であり、本当はとても寂しがりやで笑顔がかわいらしい普通の女の子。校内首席というのも次席であるクリスティナのような天才型ではなく努力に努力を重ねた結果であり、実は天才ではなく努力の天才とも言うべき

がんばり屋。これらの本当の自分はクリュウの前でしか決して出さない為、また違ったタイプのツンデレ。恋に関しては結構大胆であり、夜中にクリュウの布団に忍び込んだり別れ際にキスをお見舞いするなど爆弾行為を数々行って来たが、結局は全てクリュウの鈍感の前に撃沈してきた。現代編での登場が唯一確定しているキャラ。

《シャルル・ルクレール》

身長　１５５センチ

年齢　１４歳

学年　第５学年

髪・瞳　柑橘類のようなオレンジ色のツインテール髪に同色の瞳

武器　ハンマー《サイクロプスハンマー》

防具《ハンターシリーズ》

スキル　探知（訓練防具の為自動マーキングは解除）、剥ぎ取り鉄人

過去編サブヒロインにして、コンセプトは《過去編でのフィーリア的キャラ》と元々の設定がかわいそうなキャラ。学生時代のクリュウとチームを組んだ一人で、元気印の猪突猛進天真爛漫体育系少女。クリュウとはルフィールよりも一年長い付き合いであり、彼の事を《兄者》と呼んでいる。誰にでも優しく接するクリュウに惹かれ、彼に好意を寄せる一人。性格は猪突猛進という言葉が擬人化したかのように単純で直進しかできない不器用な子。逆に一つの事に対しては気合と根性で恐ろしいくらいに推し進める力を持つ。自分が女の子っぽくない事は自覚しており、そこを突くとすごく落ち込んでしまう。クリュウと二人っきりになったり、楽しく話そうとするもののいつもルフィールに横取りされる結果となり、努力が実らない典型的な幸薄ヒロイン。武器はハンマーで性格通り一直線で単純な攻撃の連続。しかし力自慢なだけあってその一撃一撃は強烈無比。学科は赤点連発の問題児だが、実技ではベスト１０入りするほどの実力者。現代編で登場するかはまだ未定だが、ルフィールを除けば最有力候補。

《クード・ランカスター》

身長　１７８センチ

年齢　１５歳

学年　第６学年
髪・瞳　きれいな茶色の髪と瞳
武器　ヘビィボウガン《ボーンシューター》
防具《ハンターシリーズ》
スキル　探知（訓練防具の為自動マーキングは解除）、剥ぎ取り鉄人
過去編でのクリュウの親友（悪友？）であり、彼のチームメイトの一人。コンセプトは《ハ〇ヒの古〇と恋〇無双の超〇を足して２で割ったような謎多きキャラ》。長身で笑みが素敵な美少年。そのイケメンっぷりで女子には絶大な人気を誇る反面、妬みや恨みから男子からは絶大な不人気を誇る生徒。武器はヘビィボウガンを使い、的確な射撃を行う優等生で学業でも校内３位と文武両道。ひょんな事からクリュウとつるむようになり、事あるごとに妙な絡み方をしてくる。彼のその異常に親しい行動や口調とその容姿、そしてクリュウの女の子っぽい容姿が加わって以前には女子の間で《二人はデキている疑惑》が持ち上がった事もある。ルフィールとシャルルが加わったチームでは三人を事あるごとにおちょくり倒して笑っている。常に笑みを浮かべており、その腹の中は作者である僕すらも全くわからない本当に謎多きキャラ。現代編で登場するかはまだ未定。
《シグマ・デアフリンガー》
身長　１６８センチ
年齢　１５歳
学年　第６学年
髪・瞳　美しく艶やかな紫色のポニーテールの髪と同色の瞳
武器　大剣《バスターソード》
防具《ハンターシリーズ》
スキル　探知（訓練防具の為自動マーキングは解除）、剥ぎ取り鉄人
クリュウ達Ｆクラスの委員長にして学園の四大女神の一人、《炎の女神》の異名を持つ少女。シャルルに負けず劣らずの猪突猛進型で口調や態度は男以上の漢（おとこ）の娘で常に気合と根性で様々な難局や逆境を打ち破って来た実力を持つ。怒号で生徒達に気合を入れ、問題には自ら陣頭指揮を執り、誰よりも先に先陣を切るなど典型的な前

線指揮官タイプ。この性格は故郷の国軍に従軍している父親譲り。チームメイトのフェニスとBクラス委員長のアリアとは同郷の出身であり、アリアとは故郷の頃から何かと対立してきた経歴があり、訓練学校でもクラスを巻き込んでの対立をしばしば起こしており、今回もまた壮絶なクラス戦が行われた。何かと男扱いされてはいるが、その美貌と存在感の強さから四大女神に選ばれるほどの美少女でもある。同時に、乱暴ではあるがとても仲間想いでもあり彼女に対する現・元同クラス生徒からの信頼は厚い。現代編で登場するかはまだ未定。

《アリア・ヴィクトリア》

身長　１６２センチ

年齢　１５歳

学年　第６学年

髪・瞳　白っぽいクリーム色の長髪と碧眼＋カチューシャ

武器　太刀《鉄刀》

防具《ハンターシリーズ》

スキル　探知（訓練防具の為自動マーキングは解除）、剥ぎ取り鉄人

クリュウ達Ｆクラスと敵対するＢクラス委員長にして四大女神の一人、《雷の女神》の異名を持つ少女。シグマ、フェニスとは同郷の出身でありシグマとはその頃から互いをライバル視して切磋琢磨し合っている。故郷では準王族レベルの名門貴族の娘であり、祖父は西シュレイド王国の有力政治家という生粋のお嬢様。しかしなぜかお嬢様には全く似つかないハンターを目指し、シグマとフェニスと共にドンドルマの養成学校に入学。徐々にその頭角を表し始めていた。お嬢様生活が長かった為に口調とその仕草は貴族そのもの、若干高飛車な所はあるがとても仲間想い、特に後輩の面倒見が良く人望も厚い。ハンターとしては直感的に動くシグマに対し念入りに作戦を練って動くタイプ。シグマとは故郷の頃からの因縁で互いのクラスを巻き込んだ対立を幾度となく起こして来た。５年生の時にクリュウと同じクラスになり、彼が自分の腹心を務めた事もあって以前から気になる存在であった。その彼が別クラスになり周りに女子が増え

始めて慌て出している。さりげなくクリュウに想いを匂わせる発言をするも、全て玉砕して来た。現代編で登場するかはまだ未定。

《フェニス・レキシントン》

身長　１６５センチ

年齢　１６歳

学年　第６学年

髪・瞳　腰まで伸びるきれいな桜色の髪と翡翠色の瞳

武器　弓《ハンターボウ１》

防具《ハンターシリーズ》

スキル　探知（訓練防具の為自動マーキングは解除）、剥ぎ取り鉄人

シグマとアリアと幼なじみにして四大女神の一人、《水の女神》の異名を持つ少女。シグマのチームメイトであり、シグマとアリアとは同郷の出身。幼い頃から色々と対立し続けて来たアリアとシグマの間に立って仲裁役に徹していた隠れた苦労人。父が故郷の国の政治家の為、名門貴族のアリアと高級軍人であるシグマと対等な関係でいられた。アリアとシグマがハンターになると決起し、そんな二人について来る形でハンターを目指している。学業では上位成績優秀者に入るほどだが、実技は結構普通の成績。養成学校に来てからも二人の仲裁役に徹している。慈愛に満ち溢れた性格と笑みから、四大女神の中でもクリスティナに並ぶほどの人気を持つ。しかし、実はチームメイトのシルトが彼氏。故郷に帰ってからも二人の仲裁を行っている。現代編で登場するかは未定。

《クリスティナ・エセックス》

身長　１７２センチ

年齢　１７歳

学年　第６学年

髪・瞳　流れるような氷河色の長髪と海のような深い蒼色の瞳

武器　太刀《鉄刀》

防具《ハンターシリーズ》

スキル　探知（訓練防具の為自動マーキングは解除）、剥ぎ取り鉄人

ドンドルマハンター養成訓練学校生徒会会長にしてＡクラス委員

長、学年次席、学園四大女神の一人、《氷の女神》の異名を持つ少女。ドンドルマハンター養成学校始まって以来の秀才と謳われている。才色兼備で真っ直ぐに生きる彼女の姿に多くの生徒が心を動かされ、人望も厚い。歴代生徒会長の中で最も優秀であり、並の教官以上の影響力を有している。生徒自治を掲げ、生徒会長当選と同時に改革を行い生徒会の権力を増大。生徒自治を見事に実現させた。他にも彼女は数々の伝説を成し遂げた。状況を冷静に見極め考えるクールさと間違った事は絶対に許さない正義感を兼ね備える。その美貌から四大女神の中でもトップクラスの人気を誇り、彼女に想いを寄せる男子生徒（一部には女子生徒も）は数多い。だが、６年生創立記念やり直しパーティーでフリードと踊り、フリードと食事に行くなどフリードが好きなのではないかという疑惑が激震の如く学園に蔓延。一度は相手があのフリードという事もあって沈静化したが、卒業式の時にクリスティナがフリードの頬にキスをするという爆弾行動が起き、噂は真実になった。卒業後の進路は不明。現代編での登場予定は未定。

《エル・アラメイン》

身長　１５４センチ

年齢　１３歳

学年　第２学年

髪・瞳　きれいな銀髪と澄んだ碧眼＋細メガネ

武器　片手剣《ルーキーナイフ》

防具《ハンターシリーズ》

スキル　探知（訓練防具の為自動マーキングは解除）、剥ぎ取り鉄人

シグマのチームメイトの少年。かわいらしい女の子のような外見をしており、いつもシグマの後ろにくっ付いて行動している。ハンターとしては平均より少し下くらい。シグマを尊敬し、憧れを抱いている。そして同時に好意を寄せているらしく、時々男を見せるがシグマの常が十分そこら辺の男以上に漢なので掻き消されてしまう不憫な子。周りにはすでにシグマが好きという事はバレバレであり、何でこんないい子があんな粗暴な娘に惚れているのか疑問視されている。現代編での登場するかは未定。

《ユンカース姉妹：レナ・ユンカース、シア・ユンカース》
身長　１５５センチ
年齢　１４歳
学年　第２学年
髪・瞳【レナ】美しい金色のツインテールの髪と透き通った碧眼
【シア】美しい金色のポニーテールの髪と透き通った碧眼
武器【レナ】ライトボウガン《チェーンブリッツ》
【シア】ヘビィボウガン《ボーンシューター》
防具《ハンターシリーズ》
スキル　探知（訓練防具の為自動マーキングは解除）、剥ぎ取り鉄人
アリアのチームメイトである双子のハンター。姉のレナは明るく無邪気な性格をしており、妹のシアは無口無表情でいつも何を考えているかわからない。どちらもアリアの事が大好きであり、アリアが好意を寄せているクリュウに対して敵対心を抱いている。どちらもアリアの為ならどんな手段も選ばないという若干怖い所がある。二人ともガンナーでありソロでは凡だが、二人合わさるとかなり強力。現代編での登場は未定。
《フリード・ビスマルク》
身長　１８２センチ
年齢　３５歳
武器　大剣《タツジンブレイド》
防具《シルバーソルシリーズ》
スキル　攻撃力ＵＰ【大】（猛攻珠×２）、心眼、抜刀術（抜撃珠×３＋抜刀珠）
Ｆクラスの担任にして《教官王》との異名を持つ教官。現役時代は準英雄クラスの実力を持っていたが、体力の衰えと後任の育成の為にハンターを引退し、ドンドルマハンター養成訓練学校の教官となった。引退した今でも体力強化の為に毎日の修練を欠かしておらず、その体は自然の鎧とも言うべき強度を持つ。学校の中では規則違反をする者には容赦なく鉄拳制裁を加え、その戦闘力の高さから生徒達に恐れられている。だが、それは人一倍生徒達の事を心配している事の

裏返しであり、本当は生徒を助ける為なら自ら命を捧げる覚悟をしている。現代編での登場は未定。

《シャニィ・ラングレイ》

身長　１６６センチ

年齢　女性に年齢を訊くのはメッ♪

髪・瞳　柔らかな桃色の長髪にきれいな鳶色の瞳＋丸メガネ

武器　弓《ハートショットボウ２》

防具《フルフルＺシリーズ、頭部は三眼のピアス》

スキル　広域化＋２（親愛珠×２）、高級耳栓（防音珠＋絶音珠）、加護珠×３で悪霊の加護解除

狩場で傷ついた生徒に応急手当を行うＦクラスの医務官。教官でありながら現役のハンターでもあり、フリードとは違って非常勤。実力はかなりのもので、フリードが認めるほど。医務官としての腕も良く、その容姿やかわいらしい性格から生徒達からの人気も高い。いつもはほんわかした感じのオーラを纏っているが、一度狩場で本気モードになると歴戦の猛者となる。現代編での登場は未定。

《クロード・エイブラムス》

身長　１７２センチ

年齢　２４歳

武器　片手剣《タツジンソード》

防具《ハンターＳシリーズ》

スキル　探知、攻撃力ＵＰ【小】、ダメージ回復速度＋１、抗絶珠で気絶倍加解除

Ｆクラスの副担任の助教官。シャニィと同じく現役のハンターの為非常勤。ハンターとしてはそれなりの実力を持つが、どちらかと言えば教育者としての方が優秀。真面目な性格でハンターとして、教育者としてフリードの事をとても尊敬している。ハンターは殺戮者ではないという師匠の教えを忠実に守り、今もそれを守り通している。クリュウにハンターとしての心構えを教えた人。現代編での登場予定はなし。現代編での登場は未定。

第1回　読者のハートを射止めたのは誰だグランプリ

クリュウ「み、皆さんこんにちわ！《モンスターハンター　～恋姫狩人物語～》主人公を務めさせてもらっています、クリュウ・ルナリーフです。ほ、本日は僕が司会を担当します。至らない点は多いとは思いますが、よろしくお願いします！」
アシュア「司会助手のアシュア・ローラントや。よろしゅうな」
クリュウ「アシュアさん、今日はよろしくお願いします」
アシュア「んな硬くならんでも大丈夫やで？　気楽にやろうやないの」
クリュウ「そ、そういう訳には……」
アシュア「という訳で、今回は《第1回　読者のハートを射止めたのは誰だグランプリ》こと《第1回　モンスターハンター　～恋姫狩人物語～　キャラクター人気投票》の結果を発表するでぇ～。今回はベスト5形式で5位から発表していくでぇ～」
クリュウ「で、ではまず第5位から発表です」

クリュウ「おめでとうございますッ！」
ツバメ「な、何じゃ一体ッ!?　何事じゃッ!?」
アシュア「という事で第5位は23ポイント獲得、ずいぶん前に登場したキャラなのに絶大な人気を保ち続け、第3の性別を持つ超人気キャラ、ツバメ・アオゾラさんやぁ！」
ツバメ「じゃから、一体何事じゃと言っておるッ！　クリュウ、しっかり説明せいッ！　それと第3の性別とは何じゃッ!?」
クリュウ「ほ、ほら。休載一ヶ月の間に人気投票してたでしょ？あの結果が出たから今こうして5位から発表していた所なんだ」
ツバメ「そういえばそんな事しておったの。つまり、ワシは第5位という事か？」
クリュウ「そういう事」

ツバメ「そ、そうか。ずいぶん昔に登場したからすっかり忘れられておったかと思っておったが、そうか5位かぁ」
アシュア「おんやぁ？　頬を赤らめて読者受けを狙っていますか？」
ツバメ「なッ!?」
クリュウ「アシュアさん。素直に「照れてるんじゃないんですか？」って訊いてください」
アシュア「こっちの方がおもしろいやないの」
ツバメ「べ、別にワシは読者受けも照れてなどもしておらんッ！」
クリュウ「それにしても、やっぱりツバメはかわいいからね。人気が出るのもわかるよ」
アシュア「ほんまかわええなぁ。こんな妹ならいつでも大歓迎や」
ツバメ「ワシだけかッ!?　この状況に疑問を感じているのはワシだけなのかッ!?」
クリュウ「という事で、恋狩では唯一一貫してツッコミに徹し続ける稀有な存在、ツバメ・アオゾラさんでした」
ツバメ「何じゃその締め方はぁッ！　もう少し中継っぽい事をせいッ！」
アシュア「じゃあ、あんたの趣味は何や？」
ツバメ「趣味じゃと？　そうじゃのぉ、茶を飲みながら碁を嗜む事かのぉ。いや、縁側でオリガミを膝に置いて心地良い日差しを浴びながら昼寝するのも好きじゃのぉ」
アシュア「という事で、ツッコミと外見のボケがすごくても内面のボケはからきしなツバメさんでしたぁ～」
ツバメ「……ワシは、おもしろくないのか？」

クリュウ「続いては４５ポイント取得の第４位、蒼銀の烈風ことクールなチーム指揮官、シルフィード・エア！」
シルフィード「な、何事だ一体？」
クリュウ「おめでとうございますッ！　４位ですよ４位ッ！」
シルフィード「そ、そうか」

アシュア「わかってないのに適当に返事するのはあんたの悪い癖やでぇ」
シルフィード「く、クリュウ。できれば説明をしてほしいのだが」
クリュウ「えっと、キャラ人気投票の結果です」
シルフィード「なるほど。それで私が４位という事か？」
アシュア「そうやでぇ」
シルフィード「私にはもったいないくらいの栄誉だな。私より４位に適任の者はたくさんいるだろうに」
クリュウ「そんな事ないよ。シルフィは永久不滅の４位だよ！」
シルフィード「そ、そうか？　クリュウに言われると嬉しいぞ」
アシュア「……天然の二人の会話って、何でこんなに癒されるやろうなぁ～」
クリュウ「そうだ！　シルフィの趣味って何？」
シルフィード「私の趣味？　いや、特にこれといったものはないが」
アシュア「そこを何とか頼むでぇ。オチがほしいんや」
クリュウ「お、オチって……」
シルフィード「そうだなぁ。趣味とは若干違うが、最近料理の練習をしているのが日課だ」
アシュア「え？」
シルフィード「そうだ。今日はちょっと自信作を持って来たのだが、味の判定を頼んでいいか？」
クリュウ「ふえ？」
シルフィード「少々焦げてしまったが、ようやく原型は保てるようになった卵焼きだ」
二人「「……」」
シルフィード「どうした？」
クリュウ「いや、そのぉ。僕はこれからまだ３、２、１位と発表があるからまた今度ね！」
アシュア「い、行こうクリュウ！」
シルフィード「そうかぁ、がんばるんだぞ。あまり遅くならないうちに帰って来い」

クリュウ「わ、わかったぁッ！」
アシュア「あないに真っ黒で炭化した物体が卵焼き？　あれで少々って言うんか？　それに、何かわけのわからんゼリー状の物体が載ってなかったか？」
クリュウ「せめて、何かの間違いで片栗粉が入ってしまったのだと祈ります」

クリュウ「続いてはシルフィとは僅差４６ポイント取得の第３位、隻眼の人形姫こと無口無表情暴走娘、サクラ・ハルカゼ！」
サクラ「……」
クリュウ「……あの、サクラ？　そろそろ離れてくれないかな？」
サクラ「……だが断る」
アシュア「あんたは相変わらずわがままやなぁ」
サクラ「……クリュウ、一緒にディナーを食べに行こう」
クリュウ「いや、僕まだ仕事残ってるし」
サクラ「……大丈夫。作者なんて首筋に鬼神斬破刀を当てれば簡単に言う事を聞く」
クリュウ「ダメだからねッ！　キャラが作者さんを脅すなんてあってはならない事だよッ!?」
サクラ「……問題ない。向こうでは日常茶飯事」
クリュウ「例えそうだとしても絶対にダメだからねッ!?」
アシュア「……裏事情をさりげなく暴露するのはやめへんか？　色々と各方面に迷惑が掛かるし」
クリュウ「とにかく、サクラは３位になったの。銅メダルものなんだよ？」
サクラ「……鉄の塊なんていらない。私がほしいのは、クリュウだけ」
クリュウ「僕をどうする気なのそれッ!?」
サクラ「……（ポッ）」
クリュウ「何で顔を赤らめるのッ!?　一体何をさせようとしてるのッ!?」

アシュア「いやぁ、やっぱりサクラっておもろいなぁ～」
クリュウ「しかしまぁ、サクラが3位なんて驚いたなぁ。てっきり2位とか下手すると1位かと思ってたのに」
サクラ「……私の人気を妬んだ組織票が入ったか、票を操作された結果」
クリュウ「純粋に読者からの票のみで計算してます」
サクラ「……ならば、私の躍進を快く思わない連中のせい――フィーリア派とか」
クリュウ「さ、サクラ？」
サクラ「……今までは見逃してた。でも今度は許さない――叩き潰す」
クリュウ「さ、サクラぁッ!?　どこ行くのッ!?」
サクラ「……今回の人気投票でフィーリアに1票でも入れた奴全員を潰す」
アシュア「あかんってッ！　それはほんまにあかんッ！」
サクラ「……まずは、筆頭格を潰す」
クリュウ「い、行っちゃった……」
アシュア「……フィーリアにポイントを入れた方、くれぐれも夜道は気をつけてなぁ～」

クリュウ「続きまして第2位こと準優勝者は、６０ポイント取得。その二色の瞳で多くの読者を虜（とりこ）にした過去編メインヒロイン、ルフィール・ケーニッヒさんです！」
ルフィール「たくさんの投票ありがとうございます。こんなにも大勢の方々に応援してもらい、ボクは幸せ者です。これからも、ボクと先輩の末永い幸せを見守っててください。ボクに票を入れてくれた方々には副賞としてボクと先輩の結婚式の招待状をプレゼントします」
クリュウ「いや、そんな副賞ないからね？　そもそもそんな予定もありませんから」
ルフィール「……先輩はひどい方です。僕の初めてを奪っておい

て」
クリュウ「いやいやいやッ！　君の方からだったよねッ!?　しかも表現が何か卑猥（ひわい）だよねッ!?」
ルフィール「ボク、先輩にだったら卑猥な事でも拒みません。むしろ全力で受け入れる方向です」
クリュウ「絶対にないからねッ!?　僕はそんな見境ない獣じゃないからねッ!?」
アシュア「いんや、男はみんな獣って言うしなぁ～」
クリュウ「アシュアさんも話をややこしくしないでくださいッ！」
ルフィール「今回は残念ながら2位という結果に終わりましたが、次こそは1位を取ってみせます。ですので皆さん、これからもルフィール・ケーニッヒをよろしくお願いします」
アシュア「ぶっちゃけ読者の1位よりもクリュウの中での1位が本来の目標やろ？」
ルフィール「それなら問題ありません。ボクはすでに先輩と一夜どころか何夜も過ごしておりますし、唇を重ね合った仲です。このボクの築き上げた経歴を追い抜く事など、決してできないでしょう」
クリュウ「だからッ！　いちいち表現をわざと卑猥な方向にしないでよねッ！」
アシュア「ってな訳で、最強の恋姫ことルフィール・ケーニッヒはんでしたぁ～」

クリュウ「ではいよいよ1位、優勝者の発表です――と、その前にですね。5位には入れなかった5位～10位までを一挙に発表します。どうぞ！」
6位　クリュウ・ルナリーフ　17ポイント
7位　レミィ・クレア　16ポイント
8位　エレナ・フェルノ　12ポイント
9位　クリスティナ・エセックス　10ポイント
10位　アシュア・ローラント／シャルル・ルクレール　9ポイント

アシュア「うちは出番が少ないから仕方ないけど、それでも9ポイントも入ってるなんて。感謝感激やでぇ～」
クリュウ「僕、一応主人公なんだけど……」
アシュア「災難やったなぁ。主人公がベスト5に入らないなんて、作品として問題かもしれへんで？」
クリュウ「うぅ……」
アシュア「まぁ、キャラ投票って言ってもぶっちゃけヒロイン投票みたいなもんやから仕方ないって。せやけど総合では6位でも男子ランキングでは1位やないか。ようがんばったで」
クリュウ「う、うん。応援してくれた皆さん、本当にありがとうございました――って、あれ？　何かおかしくない？」

クリュウ「では、いよいよ第1位優勝者を発表します。一体誰なのでしょうかッ!?」
アシュア「まぁ、大方の予想通りやと思うけど」
クリュウ「第1回　モンスターハンター　～恋姫狩人物語～　キャラクター人気投票グランプリ、堂々の1位はこの人！　無敵の純情可憐姫、フィーリア・レヴェリッ！　獲得ポイントは何と、他の追随を許さぬ102ポイントッ！」
フィーリア「……ふぇ？」
アシュア「さ、三桁やと？」
クリュウ「す、すご過ぎだよ。僕の5倍以上のポイント……」
サクラ「……ま、負けた。完膚なきまでに……」
シルフィード「わ、私の倍以上のポイントか……」
ルフィール「……」
ツバメ「というか、偏り過ぎであろう？」
クリュウ「うわッ!?　何でみんなここにいるのさッ!?」
シルフィード「い、いや。1位は誰なのか気になってついて来たのだが……」
サクラ「……尾行した事を激しく後悔」
アシュア「せやなぁ。これはいくらなんでもひど過ぎやなぁ」

フィーリア「えっと、先程から一体何の話をしているのですか？全く話が見えないのですが」
クリュウ「えっと、キャラクター人気投票の結果なんだけど」
フィーリア「ふえッ!?　じゃ、じゃあ私が１番になっちゃったんですかッ!?」
アシュア「せやで」
フィーリア「うわぁッ！　感謝感激ですッ！　応援してくださった皆様、本当にありがとうございます！　私、皆さんの期待に応えられるようもっともっとがんばります！」
サクラ「……とりあえず、１位記念として水着姿になってもらおうか」
アシュア「いやいや、裸エプロンがええやろ」
ルフィール「いえ、狩人ＴシャツＸとザザミＸグリーヴをＲ１８０、Ｇ１３０、Ｂ１００で着けて街中に放つというのも」
フィーリア「一体何の相談をされているんですかッ!?」
シルフィード「どれも危険だが、最後のが地味に一番恥ずかしいぞ」
クリュウ「そ、それにしてもまさかこんなに票が集中するなんて。ズバリ、その理由を専門家の方に訊いてみましょう！」
??「心理専門家、ライラック・サザーランド。愛称はライザと言います」
フィーリア「ライザさんじゃないですかッ！」
ライザ「あははは、まぁぶっちゃけフィーリアは最古参ではないけど二番目に登場した恋姫だからね。それに、他の癖のあるキャラと違って純情可憐娘だから多くの読者の支持を得られるたんでしょうね」
クリュウ「今回の選挙は過去編終了後という事で一部では追い風に乗ったルフィール躍進がささやかれていたのですが」
ライザ「そうね。でも台風並みの大風が吹こうがフィーリアの地盤の厚さの前にはそよ風程度でしかなかったのよ。むしろサクラやシルフィードに対してはかなりの逆風だったでしょうけど」
クリュウ「有権者がどのような反応をするかは、日頃の選挙者達の

行動から判断されるのですね。それではライザさん、この結果は夏の参――」
フィーリア「おかしくないですかッ!? 何で小説の人気投票が国の行く末を左右する国政選挙のような扱いを受けているんですかッ!?」
ライザ「あはッ、だってこの方がおもしろいじゃない」
フィーリア「そういう問題じゃありませんッ！」
クリュウ「まぁ、とにかく今回の結果では現状恋狩で最も人気のあるキャラはフィーリアだって事だよ」
フィーリア「えへへ、ありがとうございます」
サクラ「……夏の参院選では負けないから」
シルフィード「いや、違うだろ。がんばるのは次回の人気投票だ」
サクラ「……その前に、災いの芽は先に焼き払っておく」
ルフィール「災いの芽、ですか？」
クリュウ「あぁッ！ サクラ、ダメだってッ！ ちょっとシルフィ、サクラを止めて！」
シルフィード「わ、私がか？」
サクラ「……フィーリア派を根絶やしにする。まずは筆頭格から」
アシュア「あかんッ！ 全員でサクラを止めるんやッ！ 血の暴風雨になるでッ！」
シルフィード「ま、待てサクラッ！ まずは落ち着くんだッ！」
サクラ「……獅神抹殺」
ルフィール「明らかに二人は決定事項なんですね」
ライザ「……まぁ、一度暴走したサクラを止めるにはクリュウ君が本気にならないとね」
フィーリア「何で人気投票1位の私よりサクラ様が目立っているんですかッ!?」
クリュウ「そこなのッ!?」
ライザ「あらあら、結果に関係なくフィーリアってどうしても一歩引いた感じになっちゃうのね。でも、この結果をちゃんと受け止めてしっかりと彼女を活躍させてね」
作者「は、はい……」

ライザ「それと、私の出番をもっと増やすように」
作者「善処します……」
ライザ「「善処します」って、最初からやる気のない言葉よね？」
作者「全力でがんばらせてもらいますッ！」
ライザ「うんうん。楽しみにしてるわよ」
作者「……はぁ」

エレナ「……私、プロローグから登場してる最古参の恋姫なのになぁ……」
シャルル「シャルだって、がんばったんすよ……？」
レミィ「出番、ほしいなぁ」

という訳で、今回のキャラ投票の結果はフィーリアの圧勝という形で終わりました。
いやはや、いくらかは予想していたとはいえまさかここまで大差となるとは思いませんでした。サクラ二人掛かりでもフィーリアの人気には勝てないという事ですね。
うーん、恋狩で一番人気があるのはサクラかなぁと思っていた時期もありましたが、やっぱりフィーリアなんですね。さすが初期設定ではメインヒロインだっただけの事はあります。
しかし、ルフィールの台頭もまた目覚しいものです。３位のサクラとは１０ポイント以上も差をつけてますからね。過去編だけのキャラにしては異常です。
そんな新興勢力に敗れた３位サクラと４位シルフィード。この二人は本当に最後までデッドヒートでしたよ。抜きつ抜かれつを最後の一票まで争っていたものです。本来、人気投票とはこういうものなのでは……
さらに、ルフィール以上に出番が少ない上にずいぶん前に登場して以来ずっと登場していないはずなのに見事ベスト５入りしたツバメ。この子の人気の高さこそ本当の意味での異常ですね。これは、第２期で活躍させないと。

そして、主人公でありながらベスト5入りを逃したクリュウ。しかし、これでも彼なりに奮闘した方ですよ。ヒロインばかりに票が集まる中、よくここまで戦えたものです。

……エレナは、もうどんまいとしか言いようがありません。忘れがちですが、彼女はプロローグから登場している最古参の恋姫なんですよね。なのに連日の暴力に対する賛否両論に巻き込まれて……

でも今更エレナから暴力を抜いたら、何というか焼け野原のごとく何も残らないですし……難しい所です。

レミィのイメージはフィーリアをさらに幼くした感じと大雑把なものですが、それでもしっかりとした支持基盤がある事に驚きです。ちなみに姉のラミィ5ポイントでアリアと同率12位です。ライザが3ポイントで13位となっています。

僕としては、恋姫でもない（この作品での恋姫とはクリュウに対して好意を抱いているキャラを示すので）クリスティナの台頭には驚きました。ベスト5入りはしないものの、シャルルを押しのけて上位に入っています。恐るべき氷の女神。

ベスト10入りすら逃しましたが、それでもクードは8ポイントで11位。男キャラとしては3位（ツバメを女子とした場合は2位）という快挙です。投票理由はあの謎な感じがいいだそうです……このキャラ、意外と使い勝手がいいんですよね。エレナと組み合わせたらおもしろそうです。

という訳で、これにて《第1回　モンスターハンター　～恋姫狩人物語～　キャラクター人気投票》を終わりとしたいと思います。参加してくださった方々には最大級のありがとうございますを。

そして、これからも恋狩こと《モンスターハンター　～恋姫狩人物語～》をよろしくお願いします。

それとフィーリア派筆頭格の神威先生と獅子乃様、月のない夜は背後に気をつけてください（笑）

ではでは～。

第１０１話　アメリア・ルナリーフ

朝日に照らされて煌く雪が大地を覆っている。昨日の昼間から夜中まで振り続けた大雪は一瞬にして大地を白一色に染め上げてしまった。銀世界というのは、こういう景色の事を言うのだろう。

北国に分類されるイージス村では雪なんて冬では当然の事。ただ、隣接するセレス密林は亜熱帯地方に属する。これは上空の気流によってラティオ活火山の熱風が吹き込むからしいが、詳しい事はわからない。ただ言えるのは、イージス村で大雪が降れば、セレス密林は大雨になるという事だ。

雪がたっぷりと屋根などに降り積もり、イージス村の朝は早速除雪作業から始まる事となる。

道はもちろん雪の重さで家が潰れないように屋根に上って雪を下ろしている村人は多い。建っている家々の屋根全ての上に人がいる光景は、イージス村の冬では珍しくない。

そして、その中に一人の少年も混じっていた。

防寒着として狩場でも実際に使われているマフモフシリーズを纏い、自分の家の屋根に積もった雪を下ろしている少年。まだ遠い春に輝く若葉のような緑色の髪と瞳、ちょっと少女っぽい顔立ちが特徴的な彼の名前はクリュウ・ルナリーフ。このイージス村専属のハンターの一人だ。

「ふぅ……」

疲れたようにため息を漏らし、持っていたスコップを屋根の上にまだ積もっている雪に突き刺す。雪の厚さはだいたい膝下くらい。これでも除雪前は腰くらいまで積もっていたのだから彼の奮闘は見事なものだ。

「雪かきなんて何年ぶりだろ……」

雪国であるイージス村に住むクリュウだったが、ついこの間まではドンドルマでハンター修行をしていた。ドンドルマでは雪はここに比べれば頻度も量もずっと少ない。その為、雪かきなんてもうずっとしていなかったのだ。

子供の頃は普通にできていた作業なのに、やはり継続しないと体が追いつかないらしい。慣れない作業に若干腰が痛む。クリュウはそっと腰を掛けた。

クリュウの家は村の中でも高台に位置する。その為、この屋根からは村の全貌が見えると言っても過言ではないほどに良く見渡せる。どこの家の屋根も真っ白に染まり、その一つ一つに人が登って雪かきをしている。道の方でも除雪作業は進んでおり、メインストリートはすでにほぼ除雪を完了している。ちなみに、この村独特の伝統で雪かきは屋根を男が、道などは女性や子供がやる事になっている。他の村と違い、男が全て除雪をして女子供は家の中という訳ではない。これは先代の村長が「村を作るのは君達だ。そこに男女も年齢も人種もない」と豪語していた名残だ。ただし、それでも屋根の上は危険という事で、いつの間にか区分けが生まれたのだが。

クリュウの家は結構大きな家だ。彼の父と母が共にハンターという職業で積み立てた資金は都市部でも相当なもの、こんな辺境では大金中の大金だった。そのお金を使ってこの家を建て、もしもの時や家族で幸せに過ごす為に貯蓄までしっかりしていた。その貯蓄のおかげで、ハンターという働ける状態になるまでクリュウは一人暮らしができていたのだ。

結局、そのお金は家族全員で幸せに暮らすという意味では使われず、もしもの場合に適応されてしまったが。

クリュウがハンターを目指すきっかけとなったのはハンターだった父に対する憧れであった。母は自分が生まれると同時にハンター家業を辞めて専業主婦となった為、彼の憧れは父一点に注がれた。

そして、本格的にハンターを目指したのもまた、憧れのハンターであった父の死からであった。父のようなハンターになりたい、父の代わりにこの村を守りたい。その想いが、彼をここまで導いてくれた。

父はギルドからの依頼で古龍討伐に向かい、そこで命を落とした。せめてもの救いは、父の遺体は発見されて村に戻って来れた事だろう。

一方の母は父が死んでからしばらくして、狩場で命を落とした。

とっくの昔にハンターを引退していたのに、あの嵐の日に村の子供がセレス密林に野草を採りに行ったまま帰って来ないという事で単身で捜索に向かった。翌日、帰って来たのは子供だけ。彼女が言うには、嵐の中に現れたモンスターから自分達を逃がす為に、母は自ら囮となった。子供は泣きながら逃げた為詳しい内容はわからない。すぐに捜索隊が編成されて密林を捜索したが、発見できたのは血にまみれた母の昔の愛防具のＧ・ルナＺヘルムの額当てだけ。結局遺体は見つからなかった。

遺体となって帰って来た父と、遺体すらも帰って来なかった母。父の遺体と母の形見の破片は共に村の合同墓地に埋められている。

父のようなハンターになりたい。そう願ってドンドルマのハンター養成訓練学校に入った。でも、ハンターという難しさをそこで十分理解したクリュウは、いつの間にか父だけではなく村の子供の為に命を懸けた母の事もまた尊敬できるようになった。

子供の頃の凄惨な出来事だった為に、その時の自分は自分を捨てて戦った母を憎んだ。その時の記憶が、彼の母に対する想いを一定以上寄せ付けなかったのだ。でも、心も体も成長し、ハンターになった今ならわかる。

――母も立派なハンターであったのだと。自分の誇りなのだと。

村長から何度も聞いた事がある。銀色の防具と大きな剣を振りかざす父と、金色の防具とライトボウガンを巧みに操った母。父だけでなく、母もまた英雄と呼ぶにふさわしいハンターであった、と。

「母さん、かぁ……」

何で今更母の事を思い出したのだろう。理由を探っていたらそれはすぐに見つかった。この景色、昔よく母と見た景色であった。母は何と言うか、母と言うより姉という感じの人だったのを覚えている。やんちゃで、笑顔がとてもかわいらしい人だった。男しか登らないこの屋根の上にも平気で登り、よくここで一緒に夜空を見上げたり食事をしたりしたものだ。

――ここは、母との思い出の場所なのだ。

正直、いつも村を空けていた事が多かった父よりも母との思い出の

方がずっと多い。なのに、父ばかり追い求めてしまったのはやはり憧れや男の子の父の背中を追うというものが原因なのだろうか。
そういえば、母は自分がハンターになると言っていた時に「そうね。でもハンターってすごく大変で、ママあんまりおすすめできないなぁ」とさりげなく反対していた記憶がある。今の自分を母が見れば、どんな風に思うだろうか。
今でも瞳を閉じれば思い出せる母の声。
やはり、父の記憶よりも母の記憶の方が鮮明だし数もある。子供の時にはわからなかったが、自分をここまで成長させてくれたのは母のおかげというのが一番大きい。
久しぶりにこの屋根に上り、母の事を思い出した。それほどまでに、自分はこの村を空けていた期間が長かったのだ。
クリュウが一人哀愁を漂わせていると、そんな彼の家からフィーリアが出て来た。吹き抜く風に身を震わせながら、フィーリアは屋根の上を見上げる。
「クリュウ様ぁッ！　雪かき終わりましたかぁ？」
フィーリアの声で現実に戻ったクリュウは「何とかね」と笑顔で返した。フィーリアはその返事にうなずくと「昼食の用意ができましたので、クリュウ様も早く来てくださいね」と笑顔で言う。
そういえば朝早くから簡単な朝食だけで雪かきをしていた。自分では気づかなかったが、実は結構空腹だったのだろう。フィーリアの言葉に腹は正直にグゥと鳴った。
「わかった。今行くよ」
そう言ってクリュウはスコップを持ちながら掛けてあった梯子で下に降りる。降りて来たクリュウにフィーリアは「お疲れ様です」と労（ねぎら）いの言葉を掛ける。
「外は寒いです。早く家に入って体を温めてください」
「そうさせてもらうよ」
クリュウは笑顔でそう言うとフィーリアと共に家に入った。家の中は暖房がしっかりと機能しており外とは別世界のように暖かい。今までずっと寒い外にいたクリュウにとっては何よりも嬉しい歓迎

だ。
玄関からすぐの場所にリビングがある。そこではすでにサクラとシルフィード、エレナの三人が彼の到着を待っていた。
「遅いわよクリュウ！　せっかく用意した料理が冷めちゃうじゃない！」
そう怒るのはこの料理のほぼ全てを作ったエレナ。何と言うか、もう普通にこの家にいる事が多過ぎてツッコミすらできない。
「……クリュウ、手を洗って早く座って」
「ごめんごめん。すぐ洗って来るよ」
そう言ってクリュウは苦笑を浮かべながら急いで洗面所に向かう。そんな彼の背中を見送り、サクラは堂々とクリュウの席の左側の席に腰掛ける。逆にクリュウの右側にはフィーリアが座り、エレナとシルフィードはその対面に腰掛けた。これが現在のクリュウ家の基本的な席順である。以前まではクリュウの隣を賭けて壮絶な戦いが繰り広げられていたが、クリュウがこの争いの終止符を打つ為にくじで定位置を決めたのであった。
ちなみに、リリアが混じる場合は一応席はシルフィードの隣となっているが、クリュウの膝の上に陣取る事が大半であった。その為、リリアがいる時は大概大騒ぎになる。そのたびにクリュウは振り回され、食事をするだけなのに疲労困憊になるというのをもう何度も繰り返していた。
そんな幸せ過ぎる苦労人、クリュウは手洗いうがいを終えてリビングに戻って来た。そして、いつものようにフィーリアとサクラの間の席に腰掛ける。
「それじゃ、全員揃いましたので。いただきます」
フィーリアの掛け声と共に、少し早めの昼食が開始された。
今日の献立は様々な具が入ったサンドイッチをメインに、ガブリブロースの骨の部分を煮込んで作ったダシにすり潰したシモフリトマトとくず肉、細かく刻んだまだらネギとヤングポテトなどの野菜をふんだんに入れた特製トマトスープだ。
クリュウは早速茹でて柔らかくなった砲丸レタスとガビアルカル

ビ、薄切りしたシモフリトマトと熟成チーズをマスターベーグルで挟んだワイルドサンドイッチ（エレナ命名）を頬張る。口の中に広がるシモフリトマトの酸味とガビアルカルビの旨味が何ともいえない。砲丸レタスがガビアルカルビの豊富な肉汁をベーグルに染み込ませるのを防いでいるので、いつまでもモッチリとした食感が壊れない。全体的な味を熟成チーズがまろやかにしてくれる。

「うん。すっごくおいしいや」

「でしょ？　今度ウチのランチメニューに加えようと思ってるの」

「人気爆発だね」

「他にも色んなサンドイッチがあるのよ。どんどん食べてね」

自信作を誉められてエレナは上機嫌だ。クリュウもまたエレナの自信作のサンドイッチの数々には驚くばかり。いつの間にか、すっかり料理の腕は超えられてしまった。元々は自分が最初に料理を始めたのだが、一緒にやるうちにどんどんエレナは上達し、そのうち「料理人になるッ！」と夢を抱いてしまったほど。そして今は、その夢を見事に実現させているのだ。

「私はこれが一番美味しいと思います」

フィーリアが選んだのスネークサーモンと茹で砲丸レタスと特製ドレッシングを絡めたサンドイッチ。エレナは嬉しそうに「それは女性に優しいカロリーを控えめにしたサンドイッチなのよ。油が使えないから特製ドレッシング作りには苦労したわ」と誕生までの秘話を語る。

カロリー控えめ。女性にとってこれは魔法の言葉なのだろう。そういう事をあまり気にしないクリュウにとってはガッツリしたものを食べたいという欲望が強いが。

サクラが先程から食べているのは猛牛バターで焼いたワイルドベーコンとアプトノスの卵を使ったスクランブルエッグにシモフリトマトを使った特製ケチャップを絡めたシンプルな一品。だが、アプトノスの卵は安定供給が難しいので、エレナ曰く日替わりランチの一つに入れるらしい。しかし、貴重な素材を使っているだけあってシンプルながら深みのある味らしい（サクラ談）。

「私はこれが一番うまいな」
　シルフィードがそう絶賛したのは高級素材であるギガントミートをトロトロになるまで煮込んで作ったビーフシチューを中に仕込んだサンドイッチと言うよりはビーフシチューパンのようなもの。口の中で広がる旨味がたまらない一品だ。
「それもギガントミートが高いから安定供給は難しいわね」
　それに値段もたっぷりとギガントミートを使うので少し割高になってしまうらしい。庶民レベルに合わせておいしい物を作るというのは、なかなか難しいものだ。
「まぁ、私の力があれば何とかなるわよ」
　そう言って明るく笑う凄腕料理人兼敏腕経営者兼カリスマウェイトレス。気楽と言うか、余裕の表れだろうか。
「がんばって。応援してるから」
「任せなさいって」
　クリュウの言葉に対しエレナは自信満々に言い放った。何とも頼れる幼なじみだ。
　一方のフィーリアとサクラは先程からコソコソを何かを話し合っている。どうやらエレナの最大の攻撃力である料理技術では二人は劣る為、その技術を会得しようとしているらしい。だが、素人とは言えないがそれでもアマチュアの二人がいくら味わっても、プロの作る味の隠し味などまではわからない。すぐに二人とも表情が暗くなった。
　シルフィードはシルフィードで自分には料理の才能がないからこそエレナの料理技術を心から尊敬していた。何せこの前クリュウの付き添われながら卵焼きに挑戦したが、完成したのは炭化した謎の物体。クリュウは無理してその見た目最悪の料理（？）を「料理は味が大事だから」と言って食し――卒倒した。
　自分には料理の腕がないだけではなく、料理を兵器に変換する能力でも備わっているのだろうか？
「本当に、うまいなぁ……」
　粗末な食生活だった自分が、クリュウ達と共に行動するようになっ

てからは見違えるような理想的な食生活に変貌した。そういう意味でも彼らに対して心から感謝している。
「ほらクリュウ。これもおいしいから食べてみなさいって」
トマトスープを飲んでいたクリュウにエレナは別のサンドイッチを渡す。その表情はとても幸せそうで楽しそうに見える。クリュウもまた嬉しそうにエレナからサンドイッチを受け取る。その姿は仲のいい恋人同士に見えなくもない。
「……これあげる」
そう言ってサクラはお気に入りのタマゴベーコンサンドをエレナに渡した。そういえばずっとサクラが一人で食べていたのであまり食べていなかった。エレナは「ありがと」とお礼を言って受け取り……
「……あ、あんたッ」
「……」
エレナはすぐさまサクラを睨んだ。だが、サクラはクールな表情を浮かべている。そのカマトトぶりに、エレナの怒りがフツフツと湧き起こる。
渡されたサンドイッチにはケチャップで《死ね》と書いてあった。それは見事にサクラの様々な想いを全て表したかのような言葉であった……まぁ、全ての想いを言語化したものが《死ね》というのは彼女らしいが。
そんな二人の緊張感漂う状況に気づいていないクリュウは笑顔を綻ばせながらもきゅもきゅとサンドイッチを頬張っている。その姿に、フィーリアとシルフィードは心癒される。
「ふが？」
口いっぱいにサンドイッチを頬張る美少女顔の少年――あぁ、癒されるのもうなずける。
食事が終わり、クリュウ達はそれぞれの時間を過ごす。クリュウは暖炉用の薪を割りに裏戸から外へ出て行き、シルフィードはリリアの店に調合に使う素材の買出しに向かい、エレナは店へと戻り、サクラは週一でドンドルマから村へ送られて来る瓦版を椅子に座って読ん

でいる。
一方、フィーリアはと言うと……
「うにゃぁん♪」
暖炉の正面に位置するソファに寝転がって暖まっていた。彼女曰く自分の故郷は温暖な気候だった為に寒いのは苦手らしい。それにしても、暖炉の前で丸くなったり伸びたりと、まるでアイルーのようだ。
そんなそれぞれの時間を過ごす中、クリュウは一人黙々と巻き割りを行っていた。昔に比べて腕力だけはついたので一振りで薪は簡単に割れる。
切り株の上に薪を置き、手斧で四つに切り分ける。その単調な作業の繰り返しだ。すっかり気温も上がり、もうマフモフではなくても厚手の服装なら十分過ごせる。それに、軽い運動をしているようなもので薄っすらと汗も掻いていた。
「フゥ……」
とりあえず必要な分だけ切り終え、クリュウは一息つく。汗を拭うと、北風が汗に染みるように冷たい。思わず身を震わせてしまった。その時、一瞬だけとても温かい風が頬を撫でた。それはまるで、人の手のような温かさ。驚いて吹き抜けた風を追うように視線を向けると、枯葉が二枚風に乗って空へ上って行った。そして、そのまま村の奥の方へ消えていく。その先は……
「……行ってみるか」
クリュウは小さく笑みを浮かべながら、手斧を切り株に置いて家の中に戻った。
いつの間にか椅子に座って編み物をしているサクラとソファでくつろいでいるフィーリア。現在家にいるのはこの二人だけだ。シルフィードはリリアの家に、エレナは店にいる。
「あのさ二人とも、ちょっと出掛けて来るから留守番頼んでいいかな？」
クリュウの問い掛けにサクラは手を止めてこちらに振り返り、首を傾げた。

「……どこかに行くの？」
「うん。まぁちょっとね」
「……そう。なら、私もついて行く」
そう言ってサクラは編み物をテーブルに置いて立ち上がった。その会話を敏感に聞き取っていたのだろう、フィーリアがソファから飛び起きて「私もついて行きますッ！」と断言した。
予想していたとはいえ、あまりにも予想通りな展開にクリュウは苦笑しながらも「仕方ないなぁ」と了承する。
準備を整え、と言っても特に持って行く物はないのですぐに家を出る。クリュウを先頭に行き先を告げられていない二人はとにかく彼に続いて歩く。
クリュウが向かったのはリリアの店であった。二人は彼の目的地を見て眉をひそめた。ここは幼邪神の本陣、自然と警戒するし狩場に似た緊張感が流れる。
そんな二人の様子など知らないクリュウは特に気にした様子もなくリリアの店に入る。様々な道具や薬が置かれた棚の行列の向こうにあるカウンターで、リリアとシルフィードが何事かを話していた。すると、こちらに気づいたリリアがクリュウを見てパァッと笑顔を華やかせた。まるで少し早い春が来たかのような印象を受ける。
「クリュウお兄ちゃんッ！」
パタパタと軽快な足音を立てながら駆けて来たリリアはそのままクリュウに抱き付いた。その瞬間、フィーリアとサクラの瞳が鋭くなる。
「コラコラ、店員なんだからちゃんとカウンターにいないと」
「いいもん。どうせ今日はみんな雪かきで来ないし。それに今の私はお兄ちゃんだけの店員さんなんだから！」
「どういう意味だよそれ」
「えへへ」
何とも仲睦まじい兄妹という感じだ。リリアはかわいさ全開の笑みを浮かべながらクリュウに抱きついて甘える。クリュウもまた本当の妹のように思っているリリアの甘えに対して頭を撫でてあげる。

抱きついても拒否されず、それどころから優しく頭を撫でてもらうなんて、フィーリアやサクラでは逆立ちしたってできない事。二人は悔しそうな表情を浮かべて今はこの地獄のような苦行に耐える。
　一方、そんな四人の様子を一望できるシルフィードは苦笑を浮かべるとあまり事態が悪い方へ転がらないようにさりげないフォローを入れる。
「それで、君は一体何の用でここへ来たのだ？」
「あぁ、そうだ。リリア、雪山草ってあるかな？」
「ふえ？　あるけど、薬でも作るの？　だったら私に任せてくれれば……」
「いや、薬じゃなくて雪山草自体が必要なんだ」
「ふぅん……、わかった。ちょっと待ってて」
　リリアはクリュウから離れると店の奥に向かう。その背中が完全に見えなくなった所でフィーリアは不思議そうに首を傾げながら問う。
「雪山草なんて何に使うんですか？」
「まぁ、いずれわかるよ」
　クリュウがそう言うので、フィーリアはそれ以上追及する事はできなかった。それに、いずれわかると言うなら今無理して問う必要もないだろう。そう結論を出したのだ。サクラもまた無言を貫いている。
　やがて、店の奥からリリアが戻って来た。両腕を使って抱き締めるように持っているのは小タル。その中には真っ白な美しい花を咲き誇らせる雪山草がたくさん挿さっていた。
「これが今店にある全部だけど」
「十分過ぎるよ。じゃあ、十本程束ねてくれる？　できればきれいにラッピングしてほしいんだけど……」
　――刹那、場の空気が一瞬にして凍りついた。
　クリュウはその恐るべき豹変を遂げた状況に一切気づいておらず、無数の雪山草の中から良さそうなものを一人で選んでいる。そんな彼を、四人の恋姫がじっと見詰めていた。
「く、クリュウ様が……は、花束を……？」

「……どういう事？」
「つ、つまり。その花束を渡す相手が、いるという事か？」
「え、えぇッ!?」
　四人は改めてクリュウの横顔を見詰める。クリュウは相変わらずの鈍感っぷりを発揮して雪山草を選び続けている。その横顔はいつもと変わらない彼の顔だ。すぐにバッと四人は円陣を組む。その動きは見事なものだ。
「ど、どういう事ですかこれはッ!?」
「まさか、彼はすでに好きな女性でもいるのか？」
「そ、そんなぁッ！」
「……許さない」
「お、落ち着けサクラッ！　とりあえずその手に持った瓶を置け！　それは下手すれば下手するぞッ!?」
　そんな完全にパニック状態に陥っている恋姫達を置いといて、クリュウは難なく十本の雪山草を選んだ。財布に手を伸ばしながら、ここでようやく四人の方へ向く。
「リリア。ラッピングしてくれる？」
「ふえッ!?　う、うん」
　リリアはカクカクとした動きでカウンターに戻ると、雪山草を白い紙と水色のリボンでシンプルだが色合い抜群のラッピングをする。クリュウはその出来に満足し、なぜかラッピングを終えたままうつむいて沈黙しているリリアに声を掛ける。
「それで、これはいくら？」
「ふえッ!?　え、えっとぉ……そ、それはあげる！」
「え？　いや、でもそれは……」
「い、いいからいいからッ！　っていうか今話し掛けないで！　何かが解き放たれそうだから！」
「そ、そう？　ありがとう」
　意味不明な事を叫ぶリリアに多少困惑するも、すぐに気を取り直してきれいにラッピングされた花束を掴み、「じゃあねリリア。ありがとう」と礼を言って店から出て行く。三人はしばし固まっていたが、

慌ててクリュウを追って店を出て行った。
「おぉリリア。しっかり繁盛してっかぁ？」
「……」
「ちょッとリリアッ!?　一体どないしたんやッ!?」
「……」
「え？　何か知らんけどきれいなお花畑が川の向こうにある？　あかんッ！　それは絶対に渡っちゃあかん川やッ！　リリア、しっかりせいッ！」
　リリアの店から、アシュアの悲鳴が轟いたのはそれからすぐ後の事であった。
　ある場所を目指して歩くクリュウと、少し後ろから重い足取りで彼を追うフィーリア、サクラ、シルフィードの三人。わずかな間でその表情はまるで大連続狩猟を終えた後のようだ。
　もはや言葉を発する気力もないのか、無言でクリュウを追う三人。だが、一歩一歩足を進めるたびに重くなっていく。心が行きたくないと拒んでいる証拠だ。ただ歩くだけなのに、こんなに気が重くなる事も珍しい。
　そんな三人の様子に全く気づいていないクリュウはゆっくりとした足取りで通り掛かる村人一人ひとりにあいさつをしながら歩いて行く。ちなみに彼にあいさつされた村人が次にフィーリア達にあいさつしようとするが、とても声を掛けられるような雰囲気ではない為にあいさつせずに逃げるように立ち去って行く。
　そんな前後で雰囲気がまるで違う四人。とにかくフィーリア達はクリュウの後を追ってとぼとぼと歩き続ける。すると、次第に住宅街を離れて行っている事に気づいた。こっちの方は三人はまだ来た事がなかった。
「住宅街を抜けましたけど……」
「どういう事だ？　街外れにでも住んでいるのだろうか」
「……」
「サクラ。頼むからその鋭利に尖った枝は捨ててくれ。それは下手したら本当に下手するぞ」

そんな会話をしながら、三人はクリュウを追って歩き続ける。そして、周りを囲む林が途切れて視界が一気に開けた。そこに広がっていたのは……

「ぼ、墓地？」

そこは崖に面した広い芝生が広がる場所であった。そして、そこには規則正しく多くの十字型の墓石が並んでいた。

そう、ここはイージス村唯一の集合墓地であった。この村で亡くなった者はほぼ間違いなくここに埋葬されている。

予想のずっと上をぶっ飛ぶような展開に呆然としている三人を置いて、クリュウは慣れた様子である場所を目指す。それは最も崖に近いブロック、つまり最も景色がいい場所に建てられている墓石群であった。そして、クリュウは一つの墓石の前で止まった。手に持っていた花束をそっと墓石の前に置くと、いつもモンスターを狩った後にするように手を合わせる。そこへ遅れてフィーリア達もやって来た。

墓石に近づくと、そこに彫られている名前を見る事ができた。

《アメリア・ルナリーフ》

墓石にはそう名前が彫られていた。

「クリュウ様、これは……」

フィーリアが問うとクリュウは小さな、どこか悲しげな笑みを浮かべて言った。

「――これは、僕の母さんの墓だよ」

「これが、クリュウ様のお母様の、お墓……」

クリュウの母が命を落としたのは彼が子供の頃だった為、この墓石も数年前に建てられたもの。だが、墓石はとてもきれいに手入れされておりそのような年季は感じられない。まるで、つい数日前に建てられたのではないかと疑うほどだ。

「とてもきれいですね」

「僕がドンドルマにいる間は村の人達が手入れをしてくれてたんだ。母さんは、この村の英雄だからね」

そう言うクリュウは嬉しそうな笑みを浮かべていた。それはまるで母の功績を心から喜んでいるようだ。

以前にエレナから聞いた事がある。クリュウの父はギルドの任務で古龍討伐に向かい、そこで命を落とした。それはクリュウが８歳の頃であった。

そしてクリュウの母、アメリア・ルナリーフが命を落としたのは彼が１０歳の頃。ある嵐の日にセレス密林に入ったまま帰って来なかった村の子供を単身で捜索しに向かい、そしてそこで子供を庇いながら謎のモンスターと戦い――亡くなった。

遺体で帰って来た父と違い、母は遺体すらも帰って来なかったという。つまり、この墓石の下には彼の母はいないのだ。あるのは、遺留品であるＧ・ルナＺヘルムの額当てのみ。

形だけの墓。でも、クリュウはこれを母の墓としてずっと手入れして来たのだ。

腰に下げた水筒を取り、中に入っている水をたっぷりと墓石に掛ける。そんな彼のいつもとは違う背中を見詰めながら、フィーリアは複雑な心境になった。

自分は忘れていたのかもしれない。彼は父と母を失うという辛さを乗り越えて、ここまで来たのだと。

今思えば、サクラは両親を失い、シルフィードは両親と弟も失った。そしてクリュウも両親を。それら全てが、モンスターによるものであった。彼らがハンターを目指すのは、ある意味当然の結果だったのかもしれない。

それに比べて、自分はどうであろうか。

両親は共に健在で故郷の街に暮らしている。二人の姉も、それぞれの道に向かってしっかりと歩んでいる。

この中で、何も大切な人を失っていないは自分だけ。その事実を再認識し、フィーリアは自分がここにいてはいけないような衝動に駆られた。

「……おば様、お久しぶりです」

そう言って墓石の前に跪（ひざまず）くサクラ。彼女はクリュウの両親が健在であった頃に何度も村を訪れていた、この中でクリュウ以外で彼の両親を知っている者。その想いは複雑だろう。

「……おば様覚えていますか？　私は、忘れた事はありません」
　サクラは遠い目で、蒼い空を見上げる……
「……おば様が作ってくれたクッキーで、三日三晩腹痛に見舞われたあの日の事を」
「あのさ、母さんの墓石の前で恨み事は言わないでくれる？」
　そう言って苦笑するクリュウに、サクラは「……別に恨んでなどいない。ただ、あの時の苦しみは今でも夢に出て来るほど強烈だったと報告してるだけ」と無表情で答える。
「いや、確実にそれは恨み事だよ？　まぁ、母さんの料理は致命傷というか劇薬だった事は事実だけど」
「そ、そうなんですか？　クリュウ様料理がお上手ですから、てっきりお母様仕込かと思ってましたが」
　驚いたようにフィーリアが言うと、クリュウは何とも言えないような複雑な表情を浮かべる。
「その逆だよ。僕が料理を作らないと、母子共に中毒死するからね。子供ながら、そりゃ必死になって料理を作ったもんさ」
　……不謹慎だとは思いながらも、なぜかものすごく納得するフィーリアとシルフィードであった。
「それにしても、何で突然お母様のお墓参りなど。もしかして今日は、お母様の命日なのですか？」
「いや、何となくだよ。ほら、さっきまで僕雪かきで屋根に上ってたでしょ？　子供の頃、よく母さんと一緒に上った事を思い出してね。それでだよ」
「……ず、ずいぶんアクティブなお母様なんですね」
「まぁ、何というかやんちゃな人だったからね。あの人は」
「……天然な人だった」
　サクラも何度コクコクとうなずく所を見ると、どうやらかなり癖のある人物だったらしい。でも、クリュウの母の事を話す二人はどこか楽しげに見える。
　クリュウの母を知っている二人と、知らない二人では反応が真っ二つに分かれてしまう。

「して、君の母上はどのような人物だったのだ？　聞く所によると、相当な腕を持つハンターだったようだが」
　Ｇ・ルナＺシリーズは古龍に匹敵する力を持つ黄金に輝くリオレイア希少種、それもＧ級に認定された個体からしか取れない強力かつ超希少素材で作られた最強クラスの防具である。それはつまり、彼の母は現役時代は大陸に名を馳せてもおかしくはない英雄クラスの実力者という事になる訳だが。
　シルフィードの問いに対し、クリュウは何とも複雑そうな笑みを浮かべた。
「エレナから聞いたなら知ってると思うけど、母さんは結婚と同時にハンターを引退したからね。僕は母さんのハンター時代の事はよく知らないんだ。詳しい事は村長とかに訊いた方がいいと思うよ」
「そ、そうであったな」
「まぁ、一つ言えるとすれば、母さんは村を救った僕の誇りだって事かな」
　そう言って無邪気に微笑む彼を見る限り、本当に心からそう思っているのだろう。こんな素敵な彼に成長したのも、間違いなく彼の母の偉業の一つだ。三人は墓石を見詰め、心の中で最上級の感謝の気持ちを伝えた。その想いは彼の母、アメリア・ルナリーフにも届いているだろうか。
「ハンターとしての母さんはよくわからないけど、母としての母さんはよぉく知ってるよ」
「どのような母だったのだ？」
「うーん、何ていうか母といよりどっちかと言えば姉っぽい母さんだったな。いつも天真爛漫に無邪気に笑ってて、毎日を楽しそうに過ごしてたね。趣味は近所の子供と一緒にサッカーをする事だったって人だったし。食事前には「ク～くん、ママお腹空いた～」って床に転がってゴロゴロしてたし、勉強を訊いても「ママ難しい事わかんなぁい」って逃げては僕にじゃれ付いてきたり。本当に母親なのかと思うほど子供っぽい人だったよ」
「な、何というか、すごい母上だったのだな」

シルフィードはどんな顔で返せばいいのかわからず、困惑したようにとりあえず笑って返した。フィーリアは「そうなんですか？」とサクラに問うが「……あの人は子供以上に子供だった」と彼女も認めた。どうやら本当に色々な意味ですさまじい母だったらしい。
「なるほど、そんなお母様がいたからこそクリュウ様はとてもしっかりした方へ成長されたのですね」
「……ダメ親ほど、子供はしっかり育つの法則」
「……だから、一応母親なんだからさりげなく非難するのはやめてってば」
そんなバカなやり取りをしている三人の輪には入らず、シルフィードは一人クリュウの母の墓の前に膝をついて、その真っ白な墓石を撫でる。
「クリュウの母上、彼は本当に良くやっております。いずれ、あなたを追い越すようなハンターになるでしょう。それまで、私が責任を持って彼を守ります。ですから、安心してください」
そう言って、シルフィードは微笑んだ。その瞬間、彼女の頬を柔らかな風が撫でた。シルフィードは一度コクリとうなずくと、ゆっくりと立ち上がる。
「そろそろ戻らないか？　どうもここは風が寒くて敵わん」
「そうだね。じゃあ帰ろうか」
クリュウは最後に墓の前に立って「また来るからね」と優しげな笑みを浮かべながら言い、踵を返す。三人もまた墓に向かって一礼すると、彼を追って歩き出す。そんな彼らを見送るアメリアの墓には、彼女が大好きであった雪山草の花が風に揺れていた。
墓地を出る直前、村の方から一人の少女が歩いて来た。鳶髪のきれいな髪をポニーテールに束ね、同色のクリッとした瞳が可愛らしい、リリアより少し年上に見える少女だ。
女子三人は村人の誰だからわからない様子だったが、クリュウは彼女に気づくと「こんにちは」と声を掛けた。すると少女はクリュウに向かってペコリと頭を垂れて近寄って来た。
「こんにちはクリュウさん。お母様へごあいさつに？」

「うん。久しぶりに会いたくなってさ」
「そうですか。あ、じゃあこれ差し上げます。お供え物にしようかと思ってたんですが、皆さんでどうぞ」
　そう言って少女は手に持っていたバスケットをクリュウに渡した。中を開けると、そこにはきれいに並べられたクッキーが入っていた。作りたてなのだろう、香ばしい匂いが辺りに漂っている。
「いいの？」
「はい。その方がアメリアさんも喜ぶと思いますので。では、私はこれで」
　そう言って少女はペコリと頭を垂れると、クリュウ達とは反対に墓場の方へ入って行った。そんな彼女の背中を、四人は見詰める。
「クリュウ様、今の方は一体……」
「あぁ、彼女はエリエ・フォルシア。あの日、母さんが助けた子だよ」
　エリエと呼ばれた少女はクリュウ達が見詰める先で墓地の奥、アメリアの墓へ向かう。
「あぁして毎日のようにお墓参りしてるんだ。母さんの墓がいつもきれいなのは彼女のおかげさ」
「……大したもんだ。普通なら、罪悪感で近づく事すらもできないだろうに」
　シルフィードは自分よりもずっと年下の、でも自分よりもずっと強い心を持つエリエを感心したように見詰める。フィーリアやサクラも、同じようにエリエを見詰めていた。
「恩返しだってさ」
　クリュウはエリエに背を向けると、そう言った。
「罪悪感じゃない。自分を命を懸けて助けてくれた母さんに少しでも恩返ししたいって。前に訊いたら彼女はそう答えたよ。ほんとに、大した子だよ」
「……クリュウ様は、エリエちゃんを恨むなんて事はしないんですか？」
　フィーリアは不謹慎だとは思いながらも、訊かずにはいられなかった。

彼女を助ける為に、母親は死んでしまった。ならば、普通ならその助けた子であるエリエを恨んでもおかしくはないはず。だが、今の彼の口調からはそんな気持ちは一切感じられなかった。
フィーリアの問いに対し、クリュウは小さな声で答えた。
「そりゃ最初の頃は恨んださ。でもさ、母さんは何があっても人を恨んだり憎んだりしちゃいけないってずっと言ってた人だったし、彼女の献身的な態度を見ればそんな気はすぐに吹っ飛んださ。むしろ、最初の頃は毎日のように泣きながら謝りに来られて、そりゃもうこっちが悪い気になるくらいだったよ」
そう言って昔を思い出したのか、おかしそうに笑うクリュウ。その邪心のない真っ直ぐな笑顔を見て、三人はほっとしたように笑みを綻ばせた。
「接点は少ないけど、今ではある意味で妹みたいなもんさ。彼女のお母さんには何かと面倒見てもらってたしね」
「そうですか」
「……って、暗い話はこれくらいにしてさ、早く家に帰ってこのクッキー食べようよ」
笑顔で振り向く彼の言葉に、三人もまた笑顔を浮かべながらうなずく。
「そうですね。エリエちゃんのクッキー、楽しみです」
「……甘過ぎない事を望む」
「クッキーかぁ。私が作ったら黒焦げの謎の物体になるだろうなぁ」
それぞれの笑みを浮かべながら、クリュウ達は村の方へ戻って行く。すっかり雪化粧された村は、今もまだ除雪作業や凍結防止の為に塩を撒く作業が続いている。人手が足りないのだろう、家に戻ったクリュウ達だったがすぐに村長から応援を頼まれて村の作業を手伝う事になった。
イージス村の春は、もうすぐだ……

第１０２話　桜花姫ＶＳ飛燕姫　新たな物語の始まり

それは春の風がようやくわずかながらも北国であるイージス村に届いた日の事だった。
ようやく海にあった氷などが溶け、イージス村の経営を支える重要な事業の一部である漁業が再開された。バルト率いる漁船団が無事に漁を終えて崖下にある村の港に戻って来た時、そこには一隻の船が泊まっていた。村の船でも定期便でもないその船には船主らしき男が乗っており、岸にはかわいらしい黒髪黒瞳の少女が立っていた。すると、船は出航する。男が手を振って来たのでバルトも海の男としての礼儀として手を振る。再び岸を見ると、少女がこちらを待っているかのように埠頭（ふとう）に立っている。
バルトはそれぞれの船に岸へ接舷命令を出し、自らの船は真っ直ぐと少女の横へ接舷した。大漁だった春魚の入った網を助手の男と共に埠頭へ上げると、少女が笑顔で駆け寄って来た。
「何だぁ？　こんな辺境の村に嬢ちゃん一人で一体何の用だい？」
バルトは日焼けで黒くなった肌とは逆の真っ白な歯を見せて笑う。すると、少女は突然先程までの笑顔を引っ込めて不機嫌そうな顔になった。だが、不機嫌そうな顔もまたかわいらしい。
「阿呆！　ワシは男じゃッ！　嬢ちゃんなどではない！」
「えぇ？　だけどよぉ……」
どっからどう見てもかわいらしい少女にしか見えないが……すると、バルトはある事に気づいた。真っ赤なローブを着ているのでよくわからなかったが、その背には二本の細い剣が背負われている。
「お前、ハンターか？」
「うむ。修行の旅の末にここへ来たのだが、クリュウというハンターは今ここにおるかのぉ？」
「何だお前、クリュウの知り合いか？」
「そうじゃ。一度チームを組んだ事もあるぞ？」

少女（？）の言葉にバルトは改めて優しげな笑みを浮かべた。
「クリュウの知り合いか。それはわざわざご苦労だったな。奴は今村にいるぞ。これが終わったら案内してやろうか？」
「それには及ばん。それさえわかれば十分じゃ。邪魔したのぉ」
少女（？）は深々と頭を下げると、埠頭の端に置いてあった荷物を背負って崖の上の村に繋がる道へ向かう。バルトはそれを見送ると、再び作業へ戻る。
長い長い坂を見上げ、少女（？）は「道のりはまだ長いのぉ」と早くもため息。その時、背後に気配を感じて振り返ると、そこには大量の鉱石を詰め込んだ荷車を引っ張る女性が立っていた。
「何や自分？　こないな所に突っ立って」
どこか独特な口調でそう言った女性は、少女（？）の身なりを見てすぐにピンと来たようだ。
「あんた、ハンターやな？　って事は、クリュウ君の友達なんか？」
「クリュウを知っておるのか？」
「バカ言わんといてぇな。この村であの子を知らん者なんておらへんで。みぃんな、あの子達にはいっつも感謝感激の大バーゲンなんやから」
「なるほどのぉ、クリュウも相変わらずがんばっているようじゃのぉ」
少女（？）はまるで自分の事のように嬉しそうに微笑んだ。そんな少女（？）を見て、女性もまた柔和な笑みを浮かべる。すると、何か名案を思いついたようにポンと手を叩いた。
「そうや、あんたちょい手伝ってくれへんか？　武具の素材に使う鉱石を取り寄せたんやけど、結構重くてなぁ」
「うぬ？　お安い御用じゃよ」
なぜかどこか誇らしげにペッタンコな胸を強調する少女（？）。女性は「ほんまぁ～ッ！　めっさ助かるわぁッ！」と柔和な笑みを浮かべながら喜ぶ。
少女(？)は荷車に近づくと、中に詰め込まれた鉱石を見て「ほほぉ」と感嘆の息を漏らす。
「武具の素材という事は、お主は鍛冶師なのか？」

「そうやでぇ。ウチは奥様の右腕となる包丁からリオレウスの甲殻を叩き割る大剣まで幅広く扱うこの村専属にして唯一の鍛冶職人なんや」
「ほほぉ、ずいぶんと若い鍛冶師もいるもんじゃのぉ」
「若くても腕は自信あるんやで？　クリュウ君の友達なら少しだけ割引たるで？」
「それは助かる。では参ろうか」
「せやなぁ。ほんま、女の子にこないな力仕事させて悪いなぁ」
「……ちょっと待て」
荷車を引こうとした女性はそんな少女（？）の声に振り返ると、そこにはうつむいた少女（？）が仁王立ちしていた。その華奢な肩と小さな拳はプルプルと小刻みに震えている。
「どないしたんや？」
「……じゃ」
「な、何や？」
首を傾げる女性に向かって、少女（？）は心の底からの叫びを放った。
「――じゃから、ワシは男じゃあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
少女（？）の悲痛な声は、天高く響いたのであった。
春はもう少し先だが、すっかり真冬の寒さはなくなり幾分か過ごしやすくなって来た今日この頃。クリュウとフィーリアはエレナの店で昼食を取っていた。
昼時とあって忙しそうに働くエレナを一瞥し、クリュウはふわぁとあくびを一発する。それを見て、以前気に入ったスネークサーモンと茹で砲丸レタスと特製ドレッシングを絡めたサンドイッチを食べていたフィーリアはおかしそうに笑った。
「リラックスしてますねクリュウ様」
「そりゃ狩りの時はいつも気を張ってばかりなんだから、こういう休みの時くらいしっかりリラックスしないとね」
そう、今日は珍しく休みだった。いつもならセレス密林に入って採取をしたり時たま増え過ぎたランポスなどを間引くなどするのだが、

今日はそれすらもない休みだ。なぜ休日なのか、それは……
「それにしても、シルフィードは単身でアルコリス地方でリオレウス討伐、サクラはセクメーア砂漠で商隊の護衛。やっぱり人気者は指名で依頼が来て大変だね」
そう、現在シルフィードとサクラはそれぞれの指名依頼を受けて狩りに出ている。残ったのは知名度なんてほとんどないに等しいクリュウと先日リオレイア狩りを終えたばかりで充電期間のフィーリアの二人だけ。特に急ぐ依頼もない為、二人は村でゆっくり過ごそうと決めて今に至る。
「平和だねぇ……」
「平和ですねぇ……」
ハンターという職業柄、常に戦争状態と言っても過言ではない状況の中で生きている。その為、人一倍平和というものに対して感受性が豊かなのだ。
命の危機がない心からゆっくりとできる時間。ある意味、ハンターにとっては最も大切な時間なのかもしれない。
そうして、二人して午後の平和なひと時を満喫していた時だった。
「――クリュウッ！」
突然名前を呼ばれ、クリュウは驚いて振り返る。すると、村の入口の方から誰かが手を振りながら駆け寄って来るのが見えた。
真っ赤なローブを着たかわいらしい黒髪黒瞳の美少女。フィーリアは見慣れぬその少女に首を傾げる。だが、クリュウはその姿を見るやパァッと笑顔を華やかせた。
「ツバメッ！」
それは以前アルフレアで出会ったサクラの友人であり、共にドドブランゴを討伐した同じハンターのツバメ・アオゾラ。双剣使いでとても独特なしゃべり方をする――《少年》だ。
防具は以前のフルフルシリーズから亜種のフルフルDシリーズになってはいるが、背中に下げられている二本の細い双剣、ギルドナイトセーバーは健在だ。
一体何ヶ月ぶりだろうか。何せ以前再びアルフレアを訪れた際に

すでに彼らのチームは解体されていたのだ。どうやらリーダーであるジークフリートが抜けた事によって自然とチームは解散し、ツバメはハンター修行の為にその時にはすでにアルフレアを発っていたのだ。

残されたラミィとレミィのクレア姉妹は相変わらず姉妹でアルフレアを拠点に活躍している。最近では双子のハンターという事もあってドンドルマの雑誌に掲載され意外と知名度を上げているらしい。

そんな経緯もあって、ツバメとはあれ以来全く音信不通であった。それが突然ツバメの方からイージス村を訪れて来るなんて誰が予想していたであろうか。

「久しぶりッ！　今までどうしてたのさ」

「すまんのぉ。気の向くままにハンター修行で様々な国や街を回っておっての、ようやく戻って来れたのじゃ」

そう言ってツバメは顔の前で手を合わせる。そんなツバメの答えに対し、クリュウは小さく苦笑を浮かべる。

「どうせなら手紙の一つくらいくれれば良かったのに。修行の旅に出たって聞いた時は本当に驚いたんだから」

「すまんすまん。旅という事もあってその場に留まる事がほとんどないからのぉ、手紙を書く機会がなかなかなかったのじゃよ。心配掛けて悪かった」

「まぁ、無事で何よりだよ。こうしてまた会えるなんて、本当に嬉しいな」

「ワシも感謝感激じゃ」

そう言って、二人は無邪気に笑い合った。元々似た者同士とだけあってアルフレアの時もすぐに意気投合してしまった二人だ。数ヶ月の空白があっても、その時に築いた絆がしっかりと今でも結ばれているらしい。

そんな具合に久しぶりの再会を喜ぶ二人に対し、すっかり置いてきぼり状態のフィーリアは困惑したような表情を浮かべていた。というか、正直かなり困惑している。

「え、えっとクリュウ様？　そちらの方は……」
　フィーリアの問いに対し、クリュウは「あっ」と何かに気づいたようだ。
「そっか。フィーリアとツバメは初対面だっけ。ほら、前にサクラと一緒にドドブランゴ討伐に行った話をしたでしょ？　その時にレミィと一緒にチームを組んだサクラの古い友人だよ」
「あぁ、そういえばそんな話もありましたね」
　納得したようにうなずくフィーリアに対し、初対面と言う事でツバメはコホンと小さく咳払いをすると彼女に向かって自らの名を名乗った。
「初めましてじゃな。ワシの名はツバメ・アオゾラ。見ての通り双剣使いじゃ。よろしく頼むぞ」
「こちらこそ。私はフィーリア・レヴェリと申します。武器はライトボウガンを使います。よろしくお願いします」
　二人は互いの名を名乗り合うと、無邪気に笑い合った。二人ともとても真っ直ぐな性格をしている為、その言葉や笑みには一切の邪心がない。何というか、見ていてもとても癒される。何せ二人とも絶世の美少女であって……
「えっと、話は変わりますがアオゾラ様？」
「ツバメで構わん。して何じゃレヴェリよ」
「あ、私もフィーリアで構いませんが。そのぉ、クリュウ様とは一体どのようなご関係で？」
「うぬ？　いや、以前一緒に狩りをした程度の付き合いじゃが」
「そ、そうですか。えっと、本当にそれだけですか？」
「何を疑っておるんじゃ？」
　ツバメは心外だと言いたげな表情を浮かべる。クリュウも「ツバメとは仲のいい友達だけど」と一応彼なりの返答をする。そんな二人の言葉にフィーリアは慌てる。
「い、いえ別に疑っているという訳ではなく。そのぉ……ツバメ様があまりにもかわいい方なので、もしかしてクリュウ様と深い関係なのかと……」

「おい」
「うーん、まぁツバメがかわいいのは事実だけどね。これだけの美少女なんだから、僕なんか相手にされないよ」
「ちょっと待て」
「そんな事ありませんよ。クリュウ様はとても魅力的な方です。もし良ければ、わ、私がクリュウ様の……」
「待てと言うておるのが聞こえんのかッ！」
　頬を赤らめてもじもじとしながらのフィーリアの勇気を振り絞った発言を見事に掻き消したのは、ツバメであった。ピキピキとこめかみを震わせ、険しい表情をしている所を見ると、どうやらかなり怒っているらしい。
「な、何ですか一体……」
　せっかく勇気を振り絞って言えたのに邪魔をされ、フィーリアはふて腐れたような表情を浮かべながらツバメを見る。クリュウも突然怒鳴られて戸惑ったような表情を浮かべている。そんな二人に向かって、ツバメは震える声で問う。
「お主ら、何か重大な誤解をしておらんか？」
「重大な誤解、ですか？」
「いや、別に何の誤解もないと思うけど……」
　二人は意味がわからないと言いたげに首を傾げる。そんな二人の反応に、ツバメの堪忍袋の緒がブチッという盛大な音と共にブチギレた。
「ワシは男じゃあああぁぁぁッ！」
　ツバメの怒号が、空しいくらいに村中に響き渡った……
「何騒いでんのよッ！」
　ツバメの怒号すらも上回るような怒号と共に、突風を纏ったエレナの強烈な跳び蹴りがクリュウに炸裂。クリュウは悲鳴を上げる事もできずに盛大に吹き飛ぶと、土煙を上げながら地面に転がった。
「く、クリュウ様ッ!?」
　あまりにも突然過ぎる急展開に戸惑うフィーリアの前に、華麗で残虐なる跳び蹴りを見事に炸裂させたエレナが仁王立ちする。その表

情は、ブチギレる一歩手前という感じでとても怖い。
「フィーリア、あんたもあんたよ。今がどんだけ忙しい時間帯か、あんたもわかるでしょ？」と、エレナは比較的優しい問い方をする。ただしなぜだか「わかるわよね？　ブチ殺されたいの？」という心の声を連想させる。
フィーリアは顔を真っ青にして激しく首を上下にコクコクと振るっている。百戦錬磨のハンターであるフィーリアであっても、本気でキレるエレナには手も足も出ないのだ。
すっかり萎縮してしまったフィーリアに区切りをつけ、今度はツバメの方に向くエレナ。
「そんで、あんたは誰よ」
さっきまでの燃え盛るような怒りから打って変わって今度はまるで吹雪吹き荒れる雪山のように冷たい怒りを放つエレナ。なぜだろう、こっちの方が何倍も怖い。
そんな絶対零度の怒風を真正面から受ける形となっているツバメ。そのあまりの恐怖に一歩下がっている。
「わ、ワシはツバメ・アオゾラ。クリュウとサクラの知り合いのハンターじゃ」
とりあえず名前とどのような関係者であるかは答えた。そんなツバメを、エレナはまるで見定めるかのように上から下までじっくりと観察すると、
「何でまた訳のわかんない女が増えてるのよッ！」
テーブルの上にあった鉄製の灰皿を投擲。それは見事にクリュウの後頭部に炸裂し、クリュウは再び地面に倒れた。
その容赦のない残虐性にすっかり怯えたツバメは慌てたように事の経緯を説明しようとしたが、エレナはそれを無視して再び給仕などに戻った。本当はこんな事をしている程暇ではないのだ。
鬼姫が去りほっと胸を撫で下ろす二人。しかしフィーリアはハッとなって慌てて地面に転がったまま動かないクリュウへ駆け寄った。どうやら無事らしい。あれだけの一撃を受けても大したダメージを受けていないとは、日頃のハンターとしての訓練の賜物（たまもの）

か、それとも子供の頃からの悲しき宿命によるものなのかは不明だ。
　とにかくここにいては危険だと思い、ツバメは急いで立ち去ろうとする。だが、
「逃げんじゃないわよ」
　……世の中には、たったその一言だけで人を束縛する事も可能なのだとツバメは初めて経験したのであった。
「ふぅん、あの時にクリュウが言ってたのってあんたの事だったんだ」
　お昼時を過ぎ、ようやく一段落した酒場。先程まで賑わっていた店内はすっかり静かになり、客はクリュウ達を除くと誰もいない。村と言う小さな環境では都会のように常に客がいるという状態にはならないのだ。その為決まった時間に客が集中し、結果的に毎日三回（特に昼食と夕食時）エレナは戦争状態となるのだ。
　そんな戦争の一つを終えたエレナは早速クリュウ達と共にテーブルを囲んでツバメの話をしていた。と言っても、エレナは以前にアルフレアでの出来事はクリュウに根掘り葉掘り問いただしており特に訊くような事などはなかったが。
「あれからしばらくしてジークフリートがチームを抜け、ワシも修行の為にアルフレアを出たからのぉ。今思えばラミィとレミィには悪い事をしたのぉ」
「大丈夫だよ。二人ともコンビでがんばってるみたいだし、最近は双子の美少女ハンターって事で雑誌にも取り上げられてちょっと有名人だし」
「おぉ、そういえばミナガルデでそんな記事を読んだ事があったのぉ」
「今じゃ二人には時々だけど指名で依頼が入るらしいよ」
「それはすごいのぉ――そういえば、サクラはどうしたのじゃ？」
　思い出したように辺りをきょろきょろと見回すツバメ。だがもちろんサクラがひょっこりと現れるはずもない。クリュウは苦笑しながら答えた。
「サクラはその指名依頼で一人で出てるよ。あとチームリーダーのシルフィも同じく指名依頼で留守」
「そうなのかぁ、残念じゃのぉ――うぬ？　という事はお主らは留守

番という訳か？」
「まぁ、そういう事ですね」
「フィーリアも指名依頼から帰って来たばかりって事で今村にいるだけだけどね」
「……何か、バランスの悪いくらい精鋭が集まっているチームらしいのぉ。クリュウには指名依頼は入らんのか？」
　ツバメはさりげなく訊いたつもりだったが、それは見事にクリュウの胸を貫いた。クリュウはフッと冷めたような顔を浮かべるとため息混じりに愚痴る。
「僕みたいな無名のハンターに指名依頼なんて来る訳ないでしょ」
　チームメンバーの女子陣三人は錚々（そうそう）たるメンバーであり、皆差はあるがそれなりの有名人だ。それに対してクリュウは名前なんて全く知られていない無名のハンター。唯一、「蒼銀の烈風、桜花姫、隻眼の人形姫と組んでる男のハンターがいるらしいよ」くらいが若干広まっているくらいだろう。
　元々このチームでは自分は足手纏いなんじゃないかと常に思っているクリュウ。それはまさに彼の心を傷つけるには十分過ぎる威力を放っていたのだ。慌ててフィーリアが励ましに掛かり、エレナは呆れる。
　一方のツバメは腕を組んで何かを考えていた。そして、思い出したように言う。
「お主の名、他の街で聞いた事があるぞ」
「え？　ほんとッ!?」
「うむ。ドンドルマのギルド嬢が嬉しそうに話しておったぞ」
　期待していただけあってクリュウの落胆度は大きかった。きっとそれはライザの事だろう。確かに知られてはいるの部類には入るが、それは違う。ちなみにクリュウは外見がかわいらしい事もあって、ドンドルマのギルド嬢達の間でちょっとしたアイドル扱いされているのは内緒だ。
　またも落ち込むクリュウを見て、ツバメは慌てる。
「冗談じゃよ。お主ならいずれサクラ達のような名の知れたハンター

になるから安心せい」
「その自信は一体どこから来るんだよ」
　ツバメの台詞にクリュウは苦笑を浮かべた。
「それで、ツバメはどうしてこの村に来たの？　純粋に僕達に会いに来てくれたの？」
　話題を変えようとクリュウがずっと気になっていた事を問うと、ツバメは「確かにそれもあるが、ちと違うの」と答えた。そしてフッとかわいらしい笑みを浮かべ、こう言った。
「――ワシは、この村に腰を据えに来たのじゃよ」
『……』
「……何か反応してくれんか？　スベっているみたいでいい気はせんぞ」
　一拍置いて……
『えええええええええッ!?』
「なぜそこで一斉に驚くのじゃッ!?」
　そりゃ驚かない方がおかしいだろう。旅の途中で寄っただけとか、補給のついでに立ち寄ったとか、純粋にクリュウ達に会いに来たというならわかるが、腰を据えるなんて予想外にも程がある。
「な、何で？」
「何でと言われても、ワシは元々アルフレアでラミィ達と組む前はサクラと同じように流浪ハンターだったのじゃ。しかし、いざアルフレアで腰を据えてみるとこれがなかなか便利での、再び旅に出たがまた腰を据えたくなったのじゃ」
「なら、アルフレアでラミィちゃんやレミィちゃんと一緒に組んだ方がよろしいのではないでしょうか？」
　フィーリアの疑問はもっともだ。ツバメの話を聞く限り腰を据える良さを理解したのはアルフレアであり、ラミィやレミィと組んでいた頃の話だ。ならばもう一度アルフレアで二人と組み直すのが筋というものではないだろうか。
　フィーリアの問いに対し、ツバメは小さく首を横に振る。
「あの二人はコンビでこそその真価が発揮されるのじゃ。それに、今

ではコンビであるが故に知名度を増している。今更ワシが戻る隙などなかろうて」
「じゃ、じゃあ何でイージス村なのさ」
「うむ。ここにはお主とサクラがおる。程度は違えどどちらもワシの友人じゃ。腰を据えるならできれば知り合いがいる場所にしたくての。それに、サクラもフィーリア、そしてそのエアとやらも知名度の高いハンターであろう？　すると必然的に単独依頼が増え、村を留守にする事も多かろう。そうなれば残るのはクリュウ一人、少しでもお主の力になりたくてのぉ」
　そう言って、ツバメは優しく微笑んだ。その慈愛に満ち溢れた笑みはとても可憐で、かわいらしい。こんなも純粋な心を持つ美少女、大陸中を探してもそうはいないだろう。
　自分の力になりたい。そう言ってくれる友人は一生の宝だ。クリュウは感動し、嬉しそうな笑みを浮かべた。
「ありがとうツバメ。やっぱり君はいい奴だなぁ！」
「う、うぬ。じゃがワシはサクラなどに比べれば実力はまだまだじゃ。あまり期待はせんようにの？」
「大丈夫だよ。ツバメと一緒なら僕は古龍だって討伐できるよ！」
「その自信は一体どこから来るんじゃ」
　呆れながらも、悪い気はしないのだろう。ツバメもまた嬉しそうに微笑む。
　一方、二人の会話にすっかり取り残された形のフィーリアは不安そうな瞳でそんな二人を見詰めている。
「クリュウ様、とても楽しそうです……」
　自分はアルフレア遠征に参加していない。約一ヶ月ほど村を空けていた間に、こんなにも親しい友人ができていたなんて。何より、ツバメはとてもかわいらしい。それがフィーリアの中で不安となって激しく渦巻く。
　エレナもまたエレナで楽しげにツバメと話しているクリュウを不機嫌そうに見詰めている。
　そんな二人の様子に気づいたクリュウは「どうしたの？」と声を掛

けるが、二人は「な、何でもありません」「何でもないわよ」と答えるばかり。クリュウもクリュウでそれ以上の追求はしないので、テーブルを境にして不穏な空気が流れる。
共に過ごして来た日々はエレナが圧倒的に長い。それには到底及ばなくても、誇りにできるだけの期間をフィーリアも共にしている。なのに、ツバメはたった数日だけでクリュウとあんなに親しくなっている。明らかに要注意人物だ。
それに、クリュウのツバメに接する態度は若干自分とは違うような気がする。何となくだが、自分と接する時よりも遠慮がない。それはまるで、エレナと接する時とよく似ている――自分にはある彼の遠慮が、ツバメに対してはないのだ。
親友。そんな言葉がパッと思い浮かぶほど、二人は仲がいい。そしてそれは同時に、自分の立場が危うくなりつつある事を示していた。
せっかくサクラがいなくてリリアも大掃除で店を出られないという絶好の機会を得たのに、まさかこんな事で簡単に崩壊してしまうなんて……自分は、本当に運がない。
クリュウとの甘いディナーは、もう実行不能だ。その落胆は大きくフィーリアは深いため息を吐いた。
――だが、神様はある意味フィーリアを見捨ててはいなかった。
「やっぱりここにいたんだねぇ～」
そのどこかのんびりとした声に振り返ると、店の入口に村長が立っていた。背中にはかごを背負っており、中にはたくさんのキノコや野草などが満載されている。密林での採取の帰りだろうか。
「クリュウ、彼は誰なのじゃ？」
「あぁ、この人がこのイージス村の村長さんだよ」
「おぉ、この後にでも挨拶に伺おうと思っていたが、ちょうど良かった」
「クリュウ君？　彼は一体誰なんだい？」
村長の言葉が、ツバメに激震となって襲い掛かった。
「い、今何と申した？」
震える声でツバメは村長に迫る。突然迫られた村長は驚いたよう

に「い、いや君の名前を訊いただけなんだけど……」と困ったようにつぶやく。
「ち、違うッ！　先程の発言、一言一句間違えずに言うてみいッ！」
「えっと、クリュウ君？　彼は一体誰なんだい？　かな？」
「お、おぉッ！　わ、ワシの事を見た目だけで男と認めてくれたのはお主が初めてじゃッ！」
　困惑する村長や若干引いているクリュウ達を無視し、ツバメは泣きながら狂喜乱舞する。一体何がツバメをそこまで感動させたのか、ここにいる全員は全くもって理解できていない。
「決めたぞッ！　ワシは一生お主の為にこの村を守る事を誓うぞッ！
　どんな無理難題とて打ち砕いて見せようッ！」
「え、えっと、ありがとう。それでクリュウ君、この子は一体……」
　ここでクリュウがようやく補足説明を行い、ツバメの名前と自分との関係、そしてこの村に住みたいという経緯などを説明した。すると、村長はにこやかな笑みを浮かべる。
「そうかそうか。新しい住人かぁ。それにハンターというのならもう大歓迎だよ。早速宴をしないといけないね」
「気遣いは無用じゃ。ワシはお主の命とあればこの命投げ出す事も厭（いと）わんぞ」
「うーん、命は投げ出さなくていいんだけど。ちょっと君達にお願いがあって来たんだ」
「お願い、ですか？」
　一体何事だろうと首を傾げるクリュウに向かって、村長は今晩のおかずは何がいいか尋ねるように軽い調子で問う。
「実はセレス密林にゲリョスの番が現れたらしくてねぇ。悪いんだけど、村の安全の為に討伐をお願いできないかな？」
　一瞬、辺りに静寂が訪れた……
「ゲリョスの二頭同時討伐ですね？」
　逸早く、というか最初から全く動じていないのはフィーリア。さすが幾多の死線を潜り抜けてきただけあってこの程度の事なら動じないらしい。

一方、硬直したままでいるのはクリュウとツバメ、そして民間人であるエレナの三人だ。
「げ、ゲリョス二頭ですか？」
「うん。しかも片方は亜種だよ」
「あ、亜種とな？」
「君達ならきっと大丈夫だと信じてるよ。じゃあエレナちゃん、これが正式な依頼書だから、三人の受注手続きをお願い」
そう言って村長は依頼書をエレナに渡して去った。この間、彼は全く切羽詰った表情は浮かべずにこやかに笑っていた。それが彼の特徴とも言えるが、それだけ三人に対しての信頼が厚いというのだ。
「まぁ、フィーリア一人でも余裕だと思ったからじゃない？」
全くもってその通りではあるが、そんなストレートに言わなくても……
「ゲリョスとその亜種を同時討伐か。この前のクック同時討伐みたいなものだね」
「そうですね。ただ違う事はゲリョスはクックより若干強いという事と、クリュウ様がまだゲリョス討伐経験がないという事でしょうか」
「うぅ、未知のモンスターを同時討伐かぁ……」
ハンターというのは十分な下準備をして狩りに挑むものだ。二頭同時討伐ならまずは一頭を最低一回討伐し、その癖を身に覚えてから二頭同時や複数の依頼を受けるのが通常の流れだ。しかし今回は緊急依頼の為そんな事をしている暇はない。クリュウはいきなり初ゲリョス戦、それも二頭同時討伐をしなくてはならないのだ。
「うむぅ、ゲリョスはワシも討伐経験はないのぉ。フルフルの亜種ならば討伐した事はあるのだが」
どうやらツバメもゲリョスは初の試みらしい。これはさらに不安が増大したような……
「ゲリョスとゲリョス亜種の弱点属性は共に火です。フルフルのように亜種とで弱点属性が変化する事はありませんし、亜種自体も通常体より若干タフというだけで基本的な戦い方は変わりません。ゲリョスの二頭同時討伐は同時討伐依頼の中では比較的簡単な部類に入り

ます。無理はせず、常に自分のリズムを崩さずに立ち回れば案外楽に終わるかもしれませんよ」
　この時、クリュウは村に残っていたのがフィーリアで本当に良かったと思った。もしもサクラだったら「……強襲撃破」なんて四文字で終わりそうだし。
「フィーリアがそこまで言うなら、何とかなるかもね」
「はい。クリュウ様なら問題ありませんよ」
「良し。じゃあ受けよう！　ツバメはどうする？」
「愚問だぞクリュウ。ワシも当然受ける。お主と村長殿の為にもがんばらないとのぉ！」
「その意気その意気」
　イエーイと二人はそこでハイタッチ。何というか、口調こそまるで違うが二人はかなり似た者同士らしい。
　エレナは「仕方ないわね。なるべく怪我はしないでよね。応急薬の経費とかってバカにならないんだから」と経理の面から忠告しつつ、本当は皆の安全を願っているのはクリュウ達だってわかっている。
　という事で、三人はゲリョス及びゲリョス亜種の同時討伐――クエスト名《立ちこめる瘴気》を受注した。
　リーダーはフィーリアとツバメの推薦もあってクリュウとなり、一番上に若干子供っぽい文字で《クリュウ・ルナリーフ》と書かれ、その下のチームメイト欄にフィーリアの女の子っぽい丸文字で《フィーリア・レヴェリ》と達筆で《燕・青空》と続く。最後にエレナが承認印を押し、これで晴れて依頼受注が完了となる。
「それでは各自準備を整えてからここに集合しましょう。私は弾を調達して来ますので」
　そう言って、フィーリアは二人と別れた。リオレイア討伐を終えたばかりで弾の備蓄は少ない。リリアの店には弾も売っているので回復薬なども含めてフィーリアは一括で買うつもりでいた。
　リリアの店に向かう最中、フィーリアは嬉しくて笑みが止まらなかった。
　クリュウとの狩りなんてずいぶん久しぶりだ。実際の日数的には

そうでもないのだが、何となくずっと出番がなかったような気がするのはなぜだろう。
とにかく、クリュウとの狩りとなれば自分のすごさを最大限に発揮する事ができる絶好のチャンスだ。ツバメも参加する事になったのは余計だが、問題はない。自分とクリュウの連携力の高さの前ではその程度障害にすらならないのだから。
嬉しくて笑顔が止まらない。もう心の中は幸せムード全開だ。
そんなフィーリアを、じっと見詰める者がいた。
笑いながら歩くフィーリアに、声を掛けるべきか掛けざるべきか悩むアシュア。結局、去って行く彼女に向かってアシュアは無言で立派な王国式の敬礼をしてみせたのであった。
その後、準備を終えた三人は一度酒場に集合し、村長が用意した船に乗ってセレス密林へ向かう事となった。
クリュウはセレス密林が初めてであるツバメに地図を見せながら事細かく地形の説明を行う。フィーリアはそれに対しての補足説明と、簡単にゲリョスの生体を説明。船にいる間はそれらの話で時間は費やされたのであった。
そして、船はついにセレス密林へと到着したのであった……

第１０３話　狂走乱舞　雨車軸の如し夜の密林

昼間にイージス村を出た為、セレス密林に到着する頃にはすっかり日が暮れて夜になってしまっていた。しかも昼間の晴れ晴れとした空をは打って変わり、空には分厚い鉛色の雲が覆っている。そして、先程からは雨が降って来てしまっていた。

クリュウの判断で一度は雨が降り終わるまで拠点（ベースキャンプ）に待機した一行だったが、次第に雨脚は強くなっていった為、雨天決行で狩りを行う事となった。

拠点（ベースキャンプ）で準備を整える三人の中、クリュウの表情は若干暗かった。

「どうしたのじゃ？」

持って来た荷物を見てため息をするクリュウを心配してツバメが声を掛ける。すると、クリュウは荷車の上に置かれた荷物を指差した。見ると、そこには大タル爆弾Ｇや小タル爆弾Ｇが置かれている。

「雨の中じゃ爆弾は使えないでしょ？　爆弾なしで飛竜討伐なんて結構ハードだなぁって」

「まぁ、火属性に弱いゲリョス相手では特に威力を発揮するであっただろうに。残念じゃの」

「なんか、討伐する自信がなくなってきたような……」

「……お主は一体どれだけ爆弾を多用しておるのじゃ？」

そうは言うものの、今のクリュウの実力があれば爆弾がなくてもゲリョス程度なら討伐も可能だろう。クリュウの装備を見てツバメはそう確信していた。

「しかし、いつの間にかずいぶん強そうな武具を纏うようになったのぉ」

「え？　あ、そっか。ドドブランゴ相手の時はまだバサルシリーズだったもんね」

「うむ。どうやら完全に追い越されてしまったようじゃな。お主の成長速度は目を見張るものだの」

「そんな事ないよ。リオレウスって言ったってまだ単独じゃ討伐でき

そうもないし」
「何を言うておる。ワシなどまだリオレウスと遭遇した事もないのじゃぞ？　倒しておるだけすごいではないか」
「そ、そっかなぁ」
「うむ。ワシもお主には負けておられん。より一層の修行が必要じゃの」
　雨嵐吹き荒れる中、二人は互いに笑みを浮かべ合った。そんな中、フィーリアは先程からせっせと道具箱の中から支給品を取り出していた。今回は毒主体のモンスターであるゲリョス相手なので、支給品には解毒薬が必要最低限の量が入っている。だが、フィーリアはしっかりと自身も限界個数まで持ち込んでいるので、これらは二人に渡すものだ。
　続いてクリュウが持ち込んだ爆弾にしっかりと雨避けのシートを被せる。雨になると思っていなかったので持ち込んだのだが、今回は外での使用は不能。間違いなく戦局に影響を与えるだろうが、三人がかりなら問題ないとフィーリアは見ていた。それにゲリョスが洞窟の中に入ってくれれば爆弾を使う事もできる為、一応持って行く事となっていた。
　全ての準備を整えると、フィーリアは支給品を道具袋（ポーチ）に詰め終えた二人に近づく。
「お二人とも、準備は終わりましたか？」
「うん。不安は残るけど準備自体は終わってるよ」
「一言余計じゃ。男なら不安なんて気合で打ち消すのじゃ」
「ツバメは偉いね」
「ふふん。これでもワシだって一人前の男じゃからのぉ」
「じゃあ行こうかフィーリア」
「はい」
「……なぜ二人して無視するのじゃ？」
　こうして一行は拠点（ベースキャンプ）を出発した。陣形（フォーメーション）はフィーリアを先頭にその後ろをクリュウが引く荷車が続き、殿をツバメが担当する事となった。

大粒の雨が空から大地に向かって無数に降り注ぐ中、一行は海岸沿いからまず捜索を開始した。だが、夜の暗さと雨雲に月明かりすらも塞がれた密林は暗く、視界は悪い。何より雨によって地面がぬかるんでしまい、足を取られるなど昼間の晴れの時とは比べ物にならないほど厄介な状態になっている。何より、季節的には温かい地域であるセレス密林でも冬、イージス村の春よりも気温自体は高いが、それでも冷たい雨に体温を奪われるので体力の消耗も激しい。

「クシュンッ！」

くしゃみをしたのはクリュウ。防具の隙間から流れるように雨が注ぎ込み、風が吹くたびに冷える。その寒さは雪山などに比べればずっと楽だが、それでもそれなりに寒いのだ。

「大丈夫ですか、クリュウ様？」

自身もまた雨に濡れて寒いはずだが、フィーリアはクリュウの体の心配をする。だが、クリュウは「う、うん。大丈夫だよ」とフィーリアの方は見ないまま若干頬を赤らめながら答えた。この雨によって濡れたフィーリアがいつもの１．５倍かわいく見えているのは内緒だ。

「しかし、この雨は厄介じゃのぉ」

後続に続くツバメもまたこの寒さには若干ながらもうんざりしているようだ。

ちなみに、今回のクリュウ達の武具はクリュウがレウスシリーズとバーンエッジ。炎属性の武器を持つ彼が今回の主力となる。フィーリアはいつものようにリオハートシリーズとホワイトピアス、武器はハートヴァルキリー改だ。火炎弾を撃つ事ができるので、今回はフィーリアもまた主力の一人となる。そしてツバメは来た時同様にフルフルＤシリーズ、武器だけは炎属性の双剣を持っていなかった為攻撃力重視のサイクロンという草刈鎌のような双剣を身に付けている。

「私とツバメ様の防具にはレベルは違いますがどちらも広域化スキルがあります。回復薬には影響がありますが、解毒薬に関してはどちらも完治します。なので今回は誰が毒状態になってもすぐに仲間の援

護が期待できますね」
「ワシのは広域化＋2じゃ。回復薬の効果も半減する事はないからのぉ、安心して戦うが良い」
「やっぱり広域化スキルのあるメンバーがいるといいね。頼りにしてるよツバメ」
「うむ。大船に乗ったつもりでドンと任せておけなのじゃ」
「あの、私も＋1ですが広域化スキルがあるのですけど……」
　そんな会話をしながら一行は海岸沿いに進む。しかし、ゲリョスはおろかランポスやコンガの姿さえも見えない。いつもは海岸周辺にいるヤオザミもだ。
「小型モンスターが全然いないね」
「おそらく、ゲリョスに追い出されたのでしょうね。二頭同時討伐という場合、大概は巣を求めての雌雄の番です。二頭の連携の前ではランポス程度など簡単に追い出されてしまいますからね」
「……じゃが、タフな奴は生き残っているようじゃのぉ」
　そう言ってツバメが見詰める先には、ぼんやりとした明かりが見える。しかもその明かりは縦横無尽にゆっくりと動いたり時には一瞬で別の場所に移動するなど、変幻自在の動きをしている。
「あれは……」
「大雷光虫ですね」
　それは大雷光虫と呼ばれるモンスターだ。正確には無数の雷光虫が球体状の群れを形成して飛んでおり、それら全ての虫が発光する事によって夜でもよく見える程に光を放っているのだ。大雷光虫はランゴスタやカンタロスと同じく普通の虫が突然変異をしてあのような生態を持ったと考えられている。その理由は諸説あるが、今の所古龍の体内で何らかの影響を受けて突然変異を起こしたと考えるのが最も有力な説である。
「大雷光虫なんて初めて見たよ」
「夜行性のモンスターですからね。普段昼間に狩りをする事が多いクリュウ様とは接点がなかったのでしょう」
「奴を倒すと稀に雷光エキスと呼ばれる素材が手に入るぞ。雷属性の

武器を作る場合よく使う素材じゃの。どうする？」
「今は無視しよう。無用な戦いはなるべく避けた方がいいからね」
クリュウの言葉にフィーリアとツバメは笑顔でうなずいた。こういう何気ない優しさが、彼の周りに人を集める力の根本にあるのだろう。
大雷光虫を無視し、一行は今度は海岸から内陸側のエリアを目指して上り坂を登り始めた。山という程ではないが、この辺は丘がいくつもあり、それら一つ一つがエリアに指定されているのでこうして坂を登るのだ。ただ、雨で地面がぬかるんでおり荷車の車輪がスリップしたりするなど、その道はいつにも増して過酷なものとなってしまった。
ようやく最初の丘エリアに到着した時、クリュウは疲れたように大きなため息を吐いた。後ろから押していたツバメもフゥとため息を漏らしている。
「しかし、本当に何にもおらんのぉ。こんなに静かな狩場は初めてじゃ」
「大型モンスターの同時討伐の際や古龍戦の場合は良く起きる現象ですね」
「うぬ？　お主、古龍の討伐経験があるのか？」
「まさか。私程度じゃ熟練のハンターと四人掛かりでリオレウスとリオレイアの同時討伐が限界ですよ」
「それでも十分すごいのじゃが……」
「あははは……」
同じチームメイトのはずなのに、男女の間にはそう簡単に埋める事のできない実力という名の溝があった。踏んで来た場数が数も質もフィーリアが群を抜き過ぎているのだ。
フィーリアがすご過ぎて忘れがちだが、クリュウやツバメも年齢に対しては優秀な方である。
そんなアンバランスな組み合わせの一行は次なるエリアを目指そうと歩み出す。その時、薄暗い空の光をも一瞬妨げた影が一行の上を通り過ぎた。見上げると、空から何かが降りて来るのが見えた。

リオレウスに比べれば小柄だが、人と比べればずっと大きなその巨体はしなやかに翼を羽ばたかせて舞い降りてくる。闇の中に溶け込んでしまいそうな紺色の体は、普通の飛竜とは大きく異なる。

やがて、それはゆっくりと地面に降り立った。

――毒怪鳥ゲリョス。

大きさも種族もイャンクックと同程度ではあるが、その全身を包むのは強固な甲殻ではなく弾性に優れたゴム状の皮。多くの飛竜が強固な甲殻や鱗で敵対するモンスターやハンターの打撃や斬撃を防ぐのに対し、ゲリョスはそれらの攻撃を吸収し、時には跳ね返す能力を持つゴム質の皮を全身に纏っている。ある意味ではフルフルに良く似た術で生き抜いてきた種族だ。そして、そのゴム質の皮がシビレ罠の電流すらも防いでしまうので奴にはシビレ罠は通用しないのだ。

ゲリョスの恐るべき点は他にも数多い。一つは全身を包む強固なゴム質の皮。もう一つはイャンクックが火炎液を吐き散らすのに対しゲリョスは毒液を吐いて来る事。この毒はイーオスなどの粘着性のものとは違い揮発性の高い毒であり少し吸っただけでも毒状態になる恐ろしいものだ。もちろんイーオスなどの毒とは比べ物にならないほど強力で長時間に渡って体にダメージを与えるものなのだ。

だがより厄介なのはゲリョスは頭の上のトサカに電気を溜め、それを強力な閃光として辺りに爆発させる能力だ。これは一定範囲内の自分を除くもの全ての視界を潰す強力なもので、閃光玉と良く似ている。ただし閃光玉よりも激しい光の為、例え瞳を瞑っても光は容赦なく眼球を直撃するのでその程度では防げない。同時に、それだけ強力な光にも耐える眼光を持つゲリョスには閃光玉は通じない。

そして、最も厄介な点は死にマネ。これはゲリョス特有の身を守る技であり、死んだふりをして敵を引きつけ強力な反撃を叩き込んだりそのままやり過ごしたりする時に使う。厄介な点は普通に見ただけではこれが死んだのか演技なのかが判別できない点にある。その為、飛竜全体的には雑魚に分類されるゲリョスであっても多くのハンターがこれに騙されて返り討ちになっているのだ。

クリュウは訓練学校時代に習った事を頭の中で反芻しながら二人

に指示を出す。
奴は首を上げ、キョロキョロと辺りを見回す。まだ見つかってはいないが、気配には気づいているらしい。しかしそれも時間の問題だろう、先制攻撃を仕掛けるならすぐに行動を起こさなくてはならない。
「フィーリアはここから援護を。僕は左から、ツバメは右から、左右で挟撃を仕掛ける」
「了解じゃ」
「はい」
クリュウの指示ですぐさま戦闘陣形（アタックフォーメーション）を形成する三人。今回はいつもの四人一組（フォーマンセル）ではなく三人一組（スリーマンセル）の為、攻撃手が一人減る。特に太刀のサクラ、大剣のシルフィードといった強力な一撃を入れる攻撃手、言うなれば主力が欠けている為全体的に前衛に掛かる負担は大きい。
クリュウ達の戦い方は常にシルフィードが敵に最も接近し、自らに敵の攻撃を引きつける。その間にサクラが安全な背後に回り猛攻を仕掛け、遊撃役のクリュウは道具などを使って前衛を援護しながら攻撃を仕掛ける。そして後衛のフィーリアは狩場の流れ全体を見て状況指示と支援攻撃をするというもの。今回は囮役はガードのできるクリュウ、猛攻撃手は手数がある分一度攻撃するとしばらく動けなくなる双剣のツバメ、そしてフィーリアはいつものように状況指示と支援攻撃に徹してもらう手はずになっている。
フィーリアはすぐさまハートヴァルキリー改を構えると、素早く弾種をペイント弾にセットしてスコープで狙いを定める。そんな彼女と荷車を置いてクリュウとツバメはそれぞれ左右に分かれて挟撃を仕掛ける。
すると、ゲリョスがまず最初に捉えたのは左側から迫るクリュウであった。
「ギュワアアアアアッ！」
特徴的な鳴き声を上げ、ゲリョスはその場でジャンプして翼を激しく動かして威嚇。すぐさま体を反らし、首を砲身のようにして毒液を吐いて来た。それはクリュウの針路を塞ぐように着弾。右に体を反

らしながら回避したので当たりはしなかったが、地面に付着した毒はすぐに気化し、強烈な刺激臭を辺りに振りまく。
クリュウは構わず突進してバーンエッジを引き抜く。その瞬間、バーンエッジの刀身が激しく燃え盛る。その姿はまさに炎を纏う剣だ。
毒液を吐いた事で下がったゲリョスの頭に向かってバーンエッジを振り下ろした。小規模な爆発が起こり、ゲリョスの顔面が燃える。
「ギャアァッ!?」
突然の頭部への攻撃。しかも苦手な炎という事もあって呻くゲリョス。クリュウはすぐに前転してゲリョスの懐に潜ると脚に向かって斬りかかった。
バーンエッジの刃は吸い込まれるようにゲリョスの脚に炸裂。だがその感触は今まで倒して来たどんな飛竜とも違う物であった。しっかりと刃が当たったはずなのに、弾かれるような感触。完全に弾かれている訳ではないが、それでもしっかりとは刃が刺さらない。
習った通り、本当にゴムみたいな皮だ。
そこへツバメが反対側から到着。一対の鎖鎌、サイクロンを引き抜くともう片方の脚に向かって斬りかかる。
「ぬおッ!? 何じゃこの感触はッ!?」
ツバメもまたゲリョスの奇妙な感触に驚いているらしい。その時銃声が響いた。途端に辺りに嗅ぎ慣れた匂いが漂い始める。フィーリアがペイント弾を撃ったのだ。
「ギュアァッ!」
ゲリョスは纏わりつく敵を振り解こうと体を右回転させる。だがゲリョスの左斜め後ろに立っていたツバメには当たらない。クリュウもまたすでに後退してゲリョスの尻尾の長さから十分な距離を取っていた。その時、
「うわッ!?」
突然襲い掛かって来たゲリョスの尻尾。クリュウは咄嗟に盾を構えた。勢い殺せず一歩後退したものの、何とかその一撃を防ぐ事に成功した。

「大丈夫ですかクリュウ様ッ!?」
少し離れた場所から通常弾ＬＶ３を撃っていたフィーリアが声を掛けてくる。クリュウは「だ、大丈夫ッ！」と答えてまだ若干しびれている左手が無事か確認し、距離を取る。
ゲリョスには尻尾に骨がない。尻尾全てが一つの巨大な筋肉の塊であり、しかも伸縮性が異常に優れている。それが伸び縮みするゴム質の皮と合わさって変幻自在に長さを変える事ができるのだ。先程受けた一撃も尻尾が伸びた事によって攻撃範囲が広まった事によるものだ。
知識では知っていても、実際に見るのとでは全然違うのだ。まさかここまで伸縮性がすごいとは予想外である。
距離を取ったクリュウに対し、ツバメはゲリョスの脚元でサイクロンを振り回している。ゴム質の皮の感触に苦戦しているものの、何とか刃先を皮の奥の肉に当てる事に成功しているらしく、血が飛び散っているのが見える。
そんなツバメを吹き飛ばそうと、ゲリョスは彼を正面に捉えると首を振り下ろしてついばもうとする。ツバメは間一髪横に転がって回避したが、すぐに再びゲリョスが正面に捉える。転がった事で体勢が整っていないツバメに、ゲリョスは首を振り下ろす。
ズバァンッ！
「ギャオォッ!?」
寸前で頭部に炸裂した銃弾が爆ぜる。その予期しない一撃にゲリョスは仰け反った。その一瞬を使ってツバメは立ち上がって距離を取る事に成功した。
「すまぬッ！」
サイクロンを構えたまま、ツバメは援護してくれたフィーリアに礼を言う。フィーリアはそれを見て安心したように微笑むと、再び銃身をゲリョスに向け、引き金を引く。撃ち出された銃弾はゲリョスの首元に命中し、中に仕込まれた火薬草が発火して小爆発が起きた。ゲリョスのような火属性に弱いモンスターに有効な銃弾、火炎弾である。

フィーリアが作った一瞬の隙を二人は取りこぼす事なくそれぞれ攻守どちらにも転じられる距離を取った。そのすぐ後、ゲリョスは怒りの声を上げながら三人の位置を確認。最も近い位置にいたツバメに向かって飛び掛った。飛び掛かると同時にに首を激しく上下に動かし、クチバシをハンマーのように叩きつけて来る。ツバメはそれを横に転がるようにして回避すると、すぐさまゲリョスの懐に入り込みサイクロンを構える。

「とりゃぁッ！」

右手の小振りだが切れ味の高い剣で強固な皮に一筋の傷をつけ、左手の大振りで威力のある剣でその傷をこじ開ける。続けてツバメは体を捻ると、まるで大剣を力強く振り下ろすかのように両手に構えた二本の剣を同時に全力で振り下ろす。その強烈な一撃は二度の攻撃で微弱ながらも傷ついているゲリョスの皮を貫き、血を迸らせる。

それらの動きをほぼ一瞬で終えると、深追いはせずすぐにゲリョスの懐から脱出する。双剣は武器の射程が短いのに対し片手剣のようにガードができない。最も深く懐に入りながら回避主体となる為深追いし過ぎれば思わぬ一撃で怪我をしてしまう。冷静な判断力がなければ扱う事のできない癖のある武器、それが双剣だ。

一方のクリュウはツバメが攻撃に入った瞬間には駆け出してゲリョスに迫る。だがツバメが距離を取ったすぐ後、ゲリョスは今度はフィーリアに向かって駆け出した。この間も着実に火炎弾を当てていたフィーリアは目をつけられていたようだ。

「フィーリアッ！」

すぐに体を捻ってゲリョスを追いかける。ゲリョスは毒液を左右に吐き散らしながら今まで見た事もないような無茶苦茶な走り方でフィーリアに迫る。フィーリアは武器を背中に背負うと、横へ駆け出してその狂走を回避する。そこへクリュウが追いつき攻撃を仕掛ける。が、

「ッ!? ぐわぁッ！」

突然急停止したゲリョスは死角から迫っていたはずのクリュウに向かって振り返りもせずにそのムチのようにしなる尻尾を叩きつけ

て来た。突然の急停止にとっさに盾を構えたクリュウ。何とか直撃こそ避けたがその圧倒的な力の前にクリュウの体はまるでボールのように吹き飛ばされた。
「あぐッ!?　かはッ！」
受身を取る事もできず、クリュウは背中から地面に落下。しかし勢いは止まらずそのまま二、三回後転して泥の中にうつぶせに倒れた。
「い、痛ッ……」
全身に痛みを感じながらも、クリュウはすぐさま立ち上がった。幸い、地面が雨でぬかるんでいたおかげで怪我はする事はなかった。
泥まみれになりながらも立ち上がったクリュウを見てフィーリアはほっと胸を撫で下ろすと、反撃とばかりにフィーリアは空薬莢を排出し、新たに徹甲榴弾ＬＶ１を装填。これらを一瞬で行うと再び一瞬スコープを覗いて微妙に銃口を調整してトリガーを引く。撃ち放たれた今までとは一回りくらい大きな弾丸は吸い込まれるようにしてゲリョスの頭部に突き刺さった。数秒遅れて起爆し、火炎弾のような小爆発がゲリョスの頭を包む。
「グワァッ!?」
その一撃にゲリョスは悲鳴を上げて仰け反った。フィーリアはすぐに空薬莢を排出して新たな徹甲榴弾ＬＶ１を装填する。徹甲榴弾ＬＶ１は威力こそ高い。しかしボウガンの種類にもよるがハートヴァルキリー改では一回に一発しか装填ができない為連射力に欠ける。だがそれを差し引いても、これは強力な弾丸なのだ。
ゲリョスが仰け反ると同時に駆け出したツバメは再びゲリョスの懐に潜り込むとサイクロンを抜き放ってその鋭い刃先をゴム質の皮で覆われた脚に叩き込む。そして再び深追いはせずに離脱した。ゲリョスはちょこまかと攻撃して来るツバメに向かって毒液を吐くが、ツバメはそれを右に避けて回避。構えていた双剣を再び背に戻して横に走る。
移動するゲリョスを追うように体を回転させて毒液を吐くゲリョス。しかしその背後からは再びクリュウが迫っていた。
「うりゃあッ！」

ツバメが傷つけた箇所に向かって、クリュウはバーンエッジを抜刀。痛んでいたゴム質の皮は燃え盛る炎の熱で溶け、千切れる。刹那、続けざまに今度は刃先が肉を斬り裂いた。ゲリョスはたまらず翼を羽ばたかせて空へ逃げた。その風圧でクリュウは一瞬動きを封じられる。

ゲリョスはそのまま低空でエリアの中央部へ移動。ゆっくりと地面に降り立とうとする。だがそこにはすでに待ち構える者がいた。二本の剣を抜き放ち、降りて来るゲリョスを睨むのはツバメ。

「ワシの斬撃の嵐、受けてみるが良いッ！」

ツバメはそう叫ぶと、サイクロンを天に掲げて重ね合わせた。その瞬間、ツバメの纏う気の流れが変わった。刃物のように鋭くなった瞳には今まで見えなかったものが見え、筋肉は有り余るエネルギーに震え、頭の中にはただ敵を殺戮する事だけが思い浮かび、殺気を辺りに振りまく。

飛竜種の怒り状態と同じ、理性の箍（たが）が外れてただ目の前の敵を殺す事だけに全ての身体能力のリミッターを解除、まるで獣のように闘争本能のみが特化したこの状態を、人は鬼人化と呼ぶ。

双剣使いのみが使う事ができる、辛い修行を乗り越えて会得できた双剣必殺奥義だ。

漲（みなぎ）る力が足の筋肉を強化し、風圧すらも耐える事ができる。風圧で動きを封じられないツバメは、降りて来たゲリョスに向かって己が殺戮魂を剣に込めて叩き込む。

「うおおおぉぉぉッ！」

右剣の斬撃を炸裂させ、その勢いを殺さずに左剣に繋げ、そしてまた左剣の勢いで右剣を叩き込む。その連続によって斬るたびに速度が増していき、右剣と左剣を目にも留まらぬ速さで次々に打ち出す。傍目には滅茶苦茶に剣を振っているようにも見えるが、その一撃一撃はしっかりとした目的があって打ち出されている。

鬼人化は一時的に獣のような闘争本能ムキ出しの状態になる。それはつまり理性の箍が外れる事によって発動される訳だが、本当に理性が吹っ飛んでしまえば敵はおろか味方さえにも斬りかかる危険も

ある。何より、攻撃だけしか考えられないので回避など高等思考は存在しない為に返り討ちに遭う事さえある。
双剣使いはこの鬼人化を暴走させず、紙一重に理性を残す修行を行い、鬼人化をコントロールできてこそ真の双剣使いとなる。その為、双剣は癖があり上級者向けの武器というイメージが定着しているのだ。実際、ギルドも上級武器として認めている。
ツバメは見事に鬼人化をコントロールしている。滅茶苦茶に見えても全ての攻撃が一点に集中されている。
とどめとばかりにツバメは両方の剣を天に上げ、一気に同時に振り下ろす。その強力な一撃は幾多の連撃でボロボロになっていたゴム質の皮を斬り裂いた。
ゲリョスは着地と同時の猛攻撃に慌てて体を回転させて振り払おうとするが、ツバメは軸となる両脚の間に入ってこれを回避。しかもそこで再び目にも留まらぬ猛攻撃を仕掛けた。これに対しゲリョスは今度は翼を羽ばたかせて《飛ぶ》というより《跳ぶ》のようにわずかに浮き上がって再び着地する。自身の巨体をも浮き上がらせる風圧で真下にいるツバメを排除しようと考えたようだが、今のツバメには風圧などそよ風程度の威力しかない。着地と同時に再び猛攻撃を仕掛け、ゲリョスはたまらず転倒した。
横倒しになったゲリョス。チャンスとばかりに攻撃の機会を窺っていたクリュウがすぐさま飛び掛かる。ゲリョスの頭部にあるトサカに向かって、燃え盛るバーンエッジを叩き込む。このトサカを壊す事によってゲリョスは閃光攻撃を封じられる。ゲリョスとの戦いで最も重要で戦局を左右する部位破壊地点（キーポイント）だ。
頭を狙うクリュウに対し、フィーリアは弾種を再び火炎弾に変更して翼や胴体など狙い撃つ。
一方、先程まで猛攻撃を仕掛けていたツバメは双剣を下に振り下ろすと同時に鬼人化を解いた。刃物のように鋭かった瞳はいつものクリッとした愛らしい瞳に戻り、身に纏っていた殺気は一瞬にして消え、身体能力は常時のものに戻る。
元に戻ったツバメは肩を上下に動かしながら荒い息を繰り返す。

一時的とはいえ身体能力の限界を超えた力を出す鬼人化はスタミナの消耗が著しく激しい。特殊な薬、強走薬や強走薬グレートなど使用しない場合では個人差はあるが長時間の使用はできない。鬼人化は強力な分体に掛かる負担もまた大きいのだ。

幸い、熱くなった体は雨の冷たさですぐに冷える。息を整え、ツバメは再びゲリョスに突進する。まだ倒れているゲリョスに迫ると、今度は鬼人化はせずに通常状態で斬り掛かる。ジタバタと暴れる脚に二撃を叩き込んだ所で、ゲリョスは起き上がる。

「クワッ！　グワァッ！」

突然ゲリョスは首を大きく上下に動かし、天に向かって伸びる鼻と頭の上にある奇妙なトサカを打ち鳴らし始めた。その動作を逸早く察知したのは距離を取っていたフィーリアだ。

「閃光ですッ！　逃げてくださいッ！」

フィーリアの声に二人は慌てて動き出す。だがまぶたを閉じても瞳に直撃する、背を向けても一説には空気中の水蒸気に反射して瞳に炸裂する常識を打ち破る圧倒的な光量を防ぐ事など、方法は数少ない。クリュウは盾を構えて光を受けないように顔面を守り、ツバメは急いで背を向けて光の範囲外に脱出しようとする。

「クワアアアアァッ！」

鳴き声と共にトサカが爆発したかのように激しい閃光を辺りに振りまいた。射程外にいたフィーリアも一瞬視界を封じられ、その強大な光量に目がチカチカする。

一方のクリュウは見事にガードを成功させた。ツバメは結局脱出する事はできず、最後の手段とばかりに格好悪いが手段を選んでいられないと体を前に投げ出して顔を地面に埋めて光を遮断。何とか全員回避する事に成功した。

閃光が不発に終わったが、クリュウ達の動きを封じる事はできた。特に、まだ足元にいるクリュウは絶好の獲物だ。

ゲリョスはまだガード体勢でいるクリュウに向き直ると、首を上下に激しく振ってついばみをして来た。ガード体勢だったのでそのままガードには成功したが、ゲリョスはしつこく何度もついばんで来

る。その一撃一撃がハンマーのように強力な攻撃の前に、クリュウの左腕は悲鳴を上げる。そして、ついにガードが限界に達し、盾が弾かれた。

「……ッ!?」

がら空きになった胸に向かって、ゲリョスはついばみの一撃を振り下ろす。その一撃でクリュウは再び吹き飛ばされた。地面を二度三度と転がるも、再びクリュウは立ち上がる。レウスシリーズの防御力の高さのおかげで大した怪我はなかった。

すぐには行動できないクリュウを守るように、フィーリアは徹甲榴弾ＬＶ１をゲリョスの頭に命中させて怯ませ、その隙にツバメがゲリョスの懐に潜り込んで回転斬りを仕掛けて引きつける。

二人の援護もあってゲリョスはクリュウに更なる追撃を仕掛ける事はなかった。クリュウは二人に感謝しつつ減った体力を回復しようと道具袋（ポーチ）の中の回復薬グレートを手に取る。その時、

「あ、あれ？　閃光玉が一つなくなってる……」

ゲリョスには閃光玉は通じない。しかしゲリョスとの戦闘中にランポスなどの小型モンスターの動きを封じる為と用意していた閃光玉が一つ消えていた。拠点（ベースキャンプ）を出発する際、道具類は全て確認しており、その時にはしっかりと五発持っていたはずだが、道具袋（ポーチ）の中には四発しか入っていない。

「盗まれたか……」

ゲリョスの厄介な点の一つは、器用にくちばしを動かしてハンターの道具袋から道具を盗んで来る事。メラルーの飛竜版と考える事もできるが、メラルーと違い倒しても奪われたアイテムは決して返って来る事はない。何より、戦闘中に貴重な道具を奪われるのはかなりキツイ。幸い今回はランポスなどの姿がなかったので良かったが、状況によっては致命傷に繋がってもおかしくはないのだ。

だが、その時のクリュウは不思議な事に笑みを浮かべていた。実はクリュウ、今回閃光玉を用意したのは雑魚の動きを封じる為だけではなく、ゲリョスの癖を見抜いて持ち込んでいたのだ。

ゲリョスは何でもかんでも見境なく盗む訳ではない。光モノ、つま

り鉱石や閃光玉といったキラキラとしたものや光を発するものを好んで盗む癖がある。これを逆手にとって、これらを囮として貴重品を盗まれないようにする。ゲリョス戦の際に熟練ハンターが良く使う手である。

ゲリョスの生態はしっかりと訓練学校時代に勉強していたクリュウは、閃光玉を囮として使う事としたのだ。持って来た道具の中には盗まれたら困るものも多い。だからこそ、予想通りの結果に喜んでいるのだ。

「クリュウ様ッ！　お怪我はありませんかッ!?」

装填数が多い通常弾ＬＶ３に弾を切り替えて射撃を続けているフィーリアの問いにクリュウは「平気だよッ！」と返す。そしてすぐに走り出し、ツバメの援護に回る。

クリュウが懐に入ると同時にツバメはそこを脱出。ゲリョスは近づく者全てを一層しようと尻尾を伸ばして振り回すが、ツバメはそれを転がりながら回避。さらに元の大きさに戻った尻尾に向かって回転斬りを放つ。一方のクリュウはツバメに変わってゲリョスの足元でバーンエッジを振り回す。ツバメの幾多の攻撃で傷ついた箇所を集中的にバーンエッジで焼き払う。血が噴き出し、ゲリョスはたたらを踏んだ。

その時、ゲリョスは再び鼻とトサカを打ち鳴らし始めた。閃光攻撃が来るとクリュウはガードに入り、ツバメもまた武器をしまって回避の体勢に入る。

そして、数度打ち鳴らした後、ゲリョスは体を大きく見せるように翼を広げ、首を上げて辺りに閃光を振りまこうとする。だが、その寸前でフィーリアの放った銃弾が命中。トサカが光を放つ寸前でそれは爆発し、たまらずゲリョスは閃光を強制的に止められて横倒しになった。

徹甲榴弾が爆発する事によって一時的に脳震盪（のうしんとう）を起こしてめまいを起こさせる、ガンナーでの気絶攻撃だ。正確無比な射撃を求められるこの技ができるのは上位クラスのガンナー以上の、一部に限られる。フィーリアはそれを見事にやり遂げたのだ。

すぐにフィーリアは徹甲榴弾ＬＶ１の空薬莢を排出し、続いて再び火炎弾を装填して攻撃を開始する。
一方のクリュウとツバメは倒れたゲリョスに向かって突撃。クリュウはすかさず抜刀の一撃をゲリョスの頭部に命中させ、ツバメは再び鬼人化してゲリョスに対して壮烈無比の乱舞を行う。
火炎弾とバーンエッジの炎撃とサイクロンによる神速連撃の一斉攻撃にゲリョスは慌てて起き上がった。そして、突然目の周りを赤く染めるとまるで狂ったように毒液を口から漏らしながら首を激しく上下させ、翼を羽ばたかせてその場で数回ジャンプする。
モンスターが命の危機を感じた時に行うリミッター解除――怒り状態だ。
「グワアアアアアアアアッ！」
怒り狂ったゲリョスは突然走り出した。怒り状態になったと同時にゲリョスの足元から逃げていたクリュウは巻き込まれなかったが、一度乱舞をすると数秒動く事のできないツバメは回避できずに巻き込まれた。ゲリョスに蹴られたのか、ツバメは通過したゲリョスの背後にゴロゴロと転がった。これを見てフィーリアは未使用の火炎弾を排出し、すぐに回復弾ＬＶ２を二発撃った。そのおかげか、ツバメはすぐに起き上がるとゲリョスから離れる。だがダメージは残ったままなのだろう、ツバメは雨でぬかるんだ地面に足を取られて転倒した。しかも運が悪い事に、ゲリョスは振り返ってツバメを正面に捉えた。
「ツバメッ！」
いつもならここで閃光玉を投げて動きを封じるのがクリュウの常套（じょうとう）手段だ。しかしゲリョスには閃光玉は通じない。フィーリアも今まさに回復弾ＬＶ２から通常弾ＬＶ２に切り替えている最中なので援護射撃はできない。その間も、ゲリョスは慌てて起き上がろうとするツバメに向かって毒液を吐こうとしている。もう、考えている暇はない――クリュウはとにかく駆け出した。
ようやく装填を終え、フィーリアがハートヴァルキリー改を構えたと同時にゲリョスはツバメに向かって毒液を放った。地面に落ちる

までは粘着性があるゲリョスの毒液は気化しながら毒の塊となってツバメに降り注ぐ。直撃を覚悟したその時、横から現れたクリュウが盾を構えた。
　ドンッとまるで鉄球が当たったかのような重い衝撃が盾にぶつかり、クリュウはツバメを巻き込んで後ろに転がった。
　追撃をしようとするゲリョスの動きを封じようと、フィーリアは通常弾ＬＶ２の速射を放つ。隙のない波状射撃にゲリョスの意識はフィーリアの方へ向いた。その隙にクリュウとツバメはそれぞれ起き上がって距離を取る。
「す、すまぬクリュウ」
「いいからッ！　フィーリアの援護に回るよ！」
「りょ、了解じゃッ！」
　ゲリョスはフィーリアに向かって毒液を撒き散らしながら無茶苦茶な走り方で襲い掛かる。目の前まで迫られているので横に逃げる事もできないし、ライトボウガンには盾もない、言わば絶体絶命の危機。しかしフィーリアは冷静にハートヴァルキリー改を構えながら何と迫り来るゲリョスに向かって転がった。
　クリュウとツバメが驚く中、フィーリアはゲリョスの股の下を通って背後に転がり出た。一歩間違えればあの巨大な脚に蹴り殺されていてもおかしくはない神業である。
「す、すごいのぉ……」
「大丈夫フィーリアッ!?」
　立ち上がったフィーリアはクリュウの方を向いてコクリと確かにうなずいた。どうやら本当に無傷のようだ。
　一方、フィーリアに突撃を回避されたゲリョスは止まる事なく壁際まで行くと、今度は全く違う方向に全力疾走。またしても壁際で旋回し、別方向へ駆け出す。その動きはもうパニック状態とも言うべき無茶苦茶なものだ。
　狂走するゲリョスから距離を取り、三人は一度集まる。
「皆さんお怪我はありませんか？」
「大丈夫。ツバメは平気？　さっき飛ばされてたけど」

「う、うむ。何とか受身が取れたので大したダメージではない」
そう言うとツバメは道具袋（ポーチ）から回復薬を取り出し、一気に飲み干した。するとツバメの着ているフルフルDシリーズから嗅ぎ慣れた回復薬の匂いが漂って来た。同時に、まるで回復薬を飲んだように体に纏わりついていた疲労感や鈍痛などが和らいだ。
クリュウがツバメに「ありがとう」と礼を言った直後、エリア中を走り回っていたゲリョスが再びこちらに向き直った。そしてそのままジャンプして距離を縮め、さらに連続でついばみを行ってクリュウ達に襲い掛かる。しかしすでに三人は解散してゲリョスの正面から離れていたので攻撃は受けなかった。
クリュウとツバメは再びゲリョスの懐に潜り込むと、それぞれ攻撃を開始する。クリュウはバーンエッジをひたすら振り、ツバメもまた鬼人化して乱舞する。フィーリアも少し離れた位置から通常弾ＬＶ２を撃って支援している。
ゲリョスは必死になって尻尾を伸ばしながら体を回転させたり、ムチのように尻尾を振り回すが、二人は攻撃のたびに位置を変えてそれらの攻撃を回避している。しかしそれでも時々暴れ回るゲリョスの脚に強打されておりダメージ自体は少しずつ重なっている。だがそれを補うように今度はフィーリアが回復薬を飲んで広域化によって二人の体力を回復させ調整している。見事な連携だ。
ゲリョスはたまらず翼を羽ばたいて少し浮きながら再び風圧で二人を吹き飛ばそうとする。クリュウはこの風圧で動きを封じられたが、鬼人化しているツバメにはそんな小細工通用しない。浮いているゲリョスの脚に神速の乱舞を叩き込む。
「グギャァッ!?」
ゲリョスは痛みにバランスを崩したのか、突然落下して横倒しになった。
「さすがツバメッ！」
ツバメのナイスプレーにクリュウはすぐに倒れたゲリョスに向かって斬り掛かる。狙うは頭の上のトサカ。何度も何度もバーンエッジを叩き込み、心の中で壊れろと祈る。その時、ビキッという今

までにない音と感触が響いた。見ると、トサカにヒビが入っている。あともう一撃。クリュウは今まさに起き上がろうとしているゲリョスのトサカに向かって体全体をフルスイングさせて全力の回転斬りを叩き込んだ。その一撃に、ゲリョスのトサカは跡形もなく砕け散った。

「ギャアアアアアッ!?」

トサカを壊され怯むゲリョス。だが、クリュウの攻撃はまだ終わらない。もたげられた頭が再び元の高さに戻った瞬間を狙い、再び全力で回転斬りを叩き込む。視界がぐるりと回る中、フィーリアの連続射撃やツバメの乱舞している姿が見えた。

負けられない。自分だって、やる時はやるんだ。

そんな想いを込め、クリュウはバーンエッジをゲリョスの側頭部へ叩き込んだ。

「グオオオォォォッ……」

今までにない低い声でゲリョスは鳴くと、顔を天に仰ぎ、横倒しに倒れた。そしてそのまま動かなくなった。

雨ですっかり冷えた体とは違い、クリュウの胸の中には熱いものが込み上げて来た。

「や、やったぁッ！　ゲリョスを倒したよ！」

雨の中クリュウは大喜び。雨が顔に当たって目が少し痛いが、そんなの今までの地面を転がったりゲリョスに蹴られたりした痛みに比べれば大した事じゃない。むしろ火照った顔には心地いいくらいだ。

ツバメもまたフゥと息を漏らして鬼人化を解いて武器をしまう。クリュウのように表立っては喜んではいないが、彼だって十分喜んでいる。その証拠に、赤いフードの下は笑顔が輝いていた。

勝利に喜ぶ二人に対し、未だに真剣な顔を崩さないのはフィーリア。いつもならクリュウに駆け寄って一緒に勝利を喜ぶのだが、今回ばかりは違った。

本当に勝ったのだろうか……

実はフィーリア、ゲリョスとの戦闘経験は一度しかない。通過点として一度倒したきりで、しかもその当時組んでいた仲間と一緒に討伐

した。その際は全員が火属性の武器で四人掛かりで戦ったので、死にマネをする暇なくあっという間に討伐してしまった。なので、フィーリアはゲリョスの死にマネを知らない。知識でしか、知らないのだ。

ゲリョスの死にマネは本当に死んだように見えるらしい。幾多のハンターがこれに騙され、奇襲を受けて命を落としているそうだ。

だが、いくら何でもこれは演技ではないだろう。さっきまで辺りを包み込んでいた殺気も消え、倒れたゲリョスからは生命の息吹すらも感じる事はできない。本当に死んでいるようだ。

ゲリョスが死んだと判断し、フィーリアもまた緊張を解いた。と言っても完全に解いた訳ではない。まだ亜種の討伐が残っているのだから、気を抜く事はできない。

「早く剥ぎ取りを終えて亜種の捜索に向かいましょう」

フィーリアの言葉にツバメは「う、うむ。まだ亜種が残っておるのか。気が重いのぉ……」とつぶやく。その言葉にフィーリアは苦笑した。

一方のクリュウは一番乗りとばかりにゲリョスに近寄る。舌をだらんと垂らしながら死んでいるゲリョスの開けられた瞳を見ると、完全に瞳孔が開いている。いくら何でも演技で瞳孔までは開けないと、クリュウもまた安心して二人を呼ぶ。さっさと剥ぎ取りを終え、亜種の討伐に向かわなければならない。

手を合わせようとした時、クリュウは不思議な事に気づいた。

ゲリョスの目の周りが、赤いままであった。だが、それ自体別に珍しい事ではない。飛竜を怒り状態のまま倒せばしばらくの間は死体もその状態にある。

何の問題もないはず。なのに、なぜか変な胸騒ぎがした。嫌な予感が、警鐘が胸の中で鳴り響く。

その時、突然死んだはずのゲリョスの目がギョロリとこちらに向いた――それを見て、クリュウは全てを悟った。

「……ッ!? 逃げて二人ともッ!」

クリュウが叫んだ直後、死んだはずのゲリョスが蘇った。違う、死んだフリをしていたのだ。再び、辺りにはゲリョスの放つ殺気が一瞬

にして広がる。殺気すらも消す事ができる演技なんて、無茶苦茶過ぎる。
体を激しく動かし、周りのもの全てを破壊しながら起き上がるゲリョス。そして、最も接近していたクリュウに向かってまるでハンマーのスイングのように翼を叩き落した。
迫り来る翼に、クリュウはとっさに盾を構えた。直後、左腕が折れるそうになる程に強い衝撃が盾に激突。そのすさまじい勢いにクリュウの体は吹き飛んだ。一瞬の浮遊感の後、背後に立っていた木に背中から激突。その強烈な激痛と衝撃にクリュウは肺の中の空気を全て吐き出して地面に倒れた。
間一髪クリュウの叫び声で留まった二人は目の前で復活を果たしたゲリョスに唖然としていた。だがすぐにフィーリアはクリュウの名を叫びながら吹き飛んだ彼の方へ駆け寄る。ツバメは再びサイクロンを構えて囮役になろうとしていた。
その時、クリュウの方へ駆けていたフィーリアに降り注ぐ光が一瞬途切れた。驚いて顔を上げると、空から何かがゆっくりと降りて来るのが見えた。
「ま、まさか……」
雨が激しく降り注ぐ中ゆっくりと効果してくるのが紫色のゴム質の皮に包まれた、ゲリョスより若干派手な色をした飛竜――ゲリョス亜種。
その光景に、フィーリアとツバメは呆然と奴が降り立つのを見守るしかない。
地面に降り立つと、ゲリョス亜種はキョロキョロを辺りを見回している。まだ気づかれていないが、状況は最悪へと変わっていく。
セレス密林に降り注ぐ雨。それはまるでクリュウ達の悲鳴を掻き消すかの如く激しさを増していった……

第１０４話　逆境撃破　策士クリュウの秘策

篠突（しのつ）く雨が降り注ぐセレス密林。夜の空はその雨雲によって月明かりすらも遮られて暗い。激しく地面に叩きつけられる雨はまるで全ての音や生命の息吹すらも洗い流すかのよう。

そんな暗闇に支配された密林を舞台に、一つの戦いが新たな展開を迎えようとしていた。

ゲリョス相手に態勢を立て直そうとした途端に現れたゲリョス亜種。まだこちらには気づいていないが、すぐに気づかれるだろう。一方のゲリョスもまた仲間の到着に気づいていないのか、こちらを睨みつけたままだ。

まだ亜種には気づかれてはいないとはいえ、状況は限りなく絶望状態だ。

二頭のゲリョスは偶然にも連携するかのように左右に分かれており、どちらも別エリアへの道を塞ぐように立っている。

追い込まれた二人だったが、さらに二人の背後にはゲリョスの全力反撃を受けたクリュウが膝を折っていた。意識はあるようで何とか身を起こす事はできたが、ガードした際の衝撃で左腕を痛めたらしく、右腕で痛む場所を押さえながら苦悶の表情を浮かべていた。

そんなクリュウの姿を一瞥し、フィーリアもまたこの状況に表情が険しくなる。

相手は下級クラスの飛竜（正確には鳥竜種だが）。だからといって彼らの攻撃をまともに喰らえばこのリオハート装備であろうと砕け、大怪我を負う事になる。狩りとは、どれだけ武具が優れていても常に死と隣り合わせなのには変わりない。

そんな者を相手にしているというのに、現在の状況は極めてマズイ。相手はゲリョスとゲリョス亜種の二頭。通常体の方はかなりのダメージを与えたが、それでもまだ脅威に違いない。ゲリョス亜種に至ってはまだペイント弾一発すらも与えていないのだ。

一方のこちらはハンターが三人。うち剣士が二人でガンナーが一人という三人編成では最もポピュラーな編成だ。しかし片手剣使い

のクリュウは詳しくはわからないが怪我を負っている。双剣使いのツバメは怪我こそないものの、連続した鬼人化の影響か幾分か疲労が見える。ガンナーであり幾多の場数を踏んで来たフィーリアはほぼノーダメージだし剣士のように激しく動き回っている訳ではないので体力的には余裕であったが、如何せんこの状況ではその程度何のアドバンテージにもならない。

絶体絶命の危機。

フィーリアはパーティーの中で最もハンターランクが上であり、唯一の上位ハンターとしてせめて二人だけでも助けようと単身で突っ込む覚悟を決めた。

火炎弾は亜種用にまだ残っているし、鉄甲榴弾はＬＶ２がある。仲間がいないなら、散弾ＬＶ１を使うのも手だ。

一瞬にして頭の中で様々な考えを駆け巡らせる。だが、そのどれもが危険だし失敗する確率の方が大きい。幾多の戦局を潜り抜けて来たからこそのフィーリアの弱点の一つ、頭で考え過ぎて結論を出してしまう癖。それが今は限りなく自分の足を引っ張っていた。

だが、もう考えている暇はない。

ツバメの前に出でて、フィーリアは玉砕覚悟の突撃を仕掛ける――その時、突然背後で物音がした。驚いて振り返ると、そこにはさっきまで苦痛で膝を負っていたクリュウの姿はなかった。

辺りを見回すと、何とクリュウは単身でゲリョス亜種に突っ込んで行くではないか！

「く、クリュウ様ッ!?」

「何を考えておるんじゃッ！　危険じゃ戻って来いッ！」

焦る二人だが、動けなかった。すぐ目の前にはゲリョスがいる。こちらが少しでも背を向ければ途端に襲い掛かって来るだろう。

フィーリアは今すぐに駆け出してクリュウを止めたかった。でも、今ここで自分が動けば自分だけではなくツバメにも危険が及んでしまう。それはあってはならない事だ。

「クリュウ様ッ！　戻って来てくださいッ！」

自分にできる事は、こうして必死に彼を呼び止める事だけ。だが、

彼は自分の声など全く聞かずにゲリョス亜種に突っ込んで行く。
背後から二人の声を聞きながらも、クリュウは止まる事なく突撃を続ける。ゲリョス亜種との距離は貫通弾なら届く距離にまで近づいている。まだ相手は自分とは反対側を向いているので気づかれてはいない。これは、時間との戦いだ。
さらに距離を縮めた時、ゲリョス亜種がこちらに振り向こうとした。その寸前で、クリュウは素早く道具袋（ポーチ）から何かを取り出し、ゲリョス亜種の方へ投擲。そのまま伏せるように地面に転がった。
放物線を描いて飛んだそれはゲリョス亜種の足元で弾け、辺りに茶色い煙を噴き出し始める。しかも、その煙は異常に臭い。まるでババコンガの屁攻撃のような臭さが、エリアの一角を支配する。
茶色の臭い煙に囲まれたゲリョス亜種は驚いたように声を上げると、逃げるように翼を羽ばたかせて空へと飛んだ。そしてそのまま水平飛行に移り、別のエリアへと逃げていく。
まだ異臭の中に倒れているクリュウはそれを見上げると、ほっとしたように笑顔を浮かべた。
遠くからこの光景を見詰めていたフィーリアはクリュウの行動に驚いていた。
あれはこやし玉と呼ばれる素材玉にモンスターのフンを練り込んだ道具で、投擲すると素材玉の中で発酵してさらに臭さを増した異臭が茶色の煙となって噴き出すもの。飛竜に気づかれていない場合で使用すれば、その飛竜をエリア外へ強制退去させる特殊道具だ。
気づかれれば逆に自らの視界を塞ぐ諸刃の剣。クリュウはそれを見事に成功させ、ゲリョス亜種をこのエリアから遠ざけた。彼の仰天行動に驚くと共に、彼に感謝する。
状況は決して良くなった訳ではないが最悪の事態は免れた。クリュウは今までのような攻撃はできないだろうが、ダメージを与えたゲリョスが残った。これならば、何とかなる。
このやり取りの間にゲリョスは怒り状態が解けたようだ。そして今まで睨み合いが続いていたが、突然ゲリョスの方が動いた。

「グワァッ！」
首をもたげ、投擲するように毒液を吐いて来る。フィーリアとツバメは左右にこれを回避。しかしゲリョスはしつこく、最も厄介な相手と判断したツバメに向かって連続で毒液を吐き続ける。
「くぬぅ……ッ！」
ツバメは何度も地面を転がってこれを回避するが、ついにツバメのすぐ横で毒液が破裂。気化した毒を吸ってしまった。途端に体全体に倦怠感と鈍痛が走る。頭もズキズキと痛み、顔色は一瞬で真っ青になった。吐き気がし、普通に呼吸するのも辛い。ツバメはあまりの苦しさに膝を折った。
フィーリアは急いで解毒薬を飲もうとするが、ゲリョスはそれを待たずしてツバメに襲い掛かろうとする。が、その寸前で戻って来たクリュウがゲリョスの尻尾に向かってバーンエッジを叩き込んだ。筋肉の塊であるが故に様々な神経が集中している尻尾に突然の炎撃。ゲリョスは驚いて一瞬動きを止めた。その一瞬が、ツバメを救った。
フィーリアが飲んだ解毒薬が広域化によってツバメを解毒。体が元に戻ったツバメは急いで再び転がってゲリョスの正面から外れた。そのすぐ後、ゲリョスがジャンプして襲い掛かる。だがすでにその着地地点にはツバメはいない。
「助かったッ！　礼を言うぞッ！」
ツバメは二人に感謝し、お礼とばかりにゲリョスの懐に潜り込んで鬼人化。再び乱舞を始める。
一方のフィーリアは回復弾ＬＶ２を装填し、クリュウに装填可能全弾を撃ち込んだ。これでクリュウの体力はほぼ回復しただろう。
クリュウはフィーリアに礼を言うと、ツバメを追うように再びゲリョスの尻尾にバーンエッジを叩き込んだ。ゲリョスの切断での弱点部位は尻尾。さらに武器は同じくゲリョスが苦手な火属性。知識をフルに使って、厄介なトサカを壊した今クリュウは尻尾を集中的に狙う。
尻尾を執拗に狙うクリュウを追い払おうとゲリョスは再びムチのように尻尾を振り回すが、クリュウはこれらの攻撃を地面に転がって

回避する。頭のスレスレを尻尾が通過する恐怖はかなりのものだが気にしてなどいられない。ゲリョスの尻尾攻撃はしつこいのだ。
執拗に襲う尻尾攻撃をクリュウは何とか回避するが、最後の一撃だけは回避できずにガード。だがさっきのガードで痛めていた左腕は簡単に弾かれ、完全にはガードできず後ろに吹き飛ばされた。
だがそれでもクリュウはすぐに立ち上がると再びゲリョスの尻尾を狙ってバーンエッジを振るう。
一方のツバメもまたゲリョスの脚に向かって連続して剣を振るっていた。幾多の連撃で切れ味は若干落ちているが鬼人化している時にはそんな事関係ない。弾かれる力よりも筋肉の出す力の方が上回っているからだ。
さらに少し距離を置いた所からはフィーリアが通常弾ＬＶ２の速射で支援攻撃を行い、ゲリョスを完全に翻弄していた。
三人の圧倒的な攻撃の連打に、再びゲリョスは怒り状態に入った。それを確認すると三人は一度ゲリョスから距離を置く。ゲリョスはそんなクリュウ達に向かって連続して毒液を吐き続け、辺りには異臭が漂う。
クリュウとツバメはゲリョスの攻撃を避けながらだが着実に攻撃をヒットさせ、フィーリアもまた連続して通常弾ＬＶ２でゲリョスを狙う。それらの攻撃に対しゲリョスはまたしても狂ったように毒液を吐きながらエリア全体を使って逃げ回る。だが、すでにクリュウはその動きを読んでいた。ゲリョスのパニック状態での狂走は一定の法則がある。つまり、決まったルートを走るのだ。
クリュウは走り回るゲリョスの動きを見て素早く荷車から落とし穴を取り出すと、ルートの中央に設置。そのクリュウの行動を見て二人もすぐさま落とし穴近辺に集まる。
そして周りが見えていないのか、ゲリョスは真っ直ぐに落とし穴に直進。見事にそのまま落下した。
「ギャオオォッ!?」
突然動きを封じられ、ゲリョスはさらに怒り狂う。必死になって脱出しようとするが、もちろん一定時間は決して抜け出す事はできな

い。
　クリュウとツバメは詰めとばかりに一斉に襲い掛かる。スタミナの限界に達しつつあるツバメだったが、気合と根性で必死に乱舞。クリュウもバーンエッジを必死に振るってゲリョスの腹を斬りまくる。フィーリアもまた通常弾ＬＶ２の速射でゲリョスを撃ち続ける。
　落とし穴の拘束時間いっぱいまで攻撃を続けるクリュウ達。しかしついに落とし穴が壊れてゲリョスが羽ばたいて浮かび上がった。怒り状態が解けたのか、目の周りの赤みは消えた。だがその直後、乱舞中だったツバメが最後の一撃をとゲリョスの顔面に向かって二本のサイクロンを叩き込んだ。この一撃にゲリョスは悲鳴を上げて落下して転倒。そのまま動かなくなった。
　辺りには再び静けさが戻る。だが、先程の失敗もあってかクリュウ達は警戒を怠らない。クリュウはフィーリアの方を向く。その視線に対しフィーリアはこくりとうなずくと、散弾ＬＶ１を装填。連続して倒れたゲリョスに向かって撃ち放った。
　一撃、二撃入れてもゲリョスは動かない。だが三撃目を入れた途端再びゲリョスは激しく体を動かして起き上がった。その瞬間を狙って、クリュウは突撃。ゲリョスの顔面に向かってバーンエッジを叩き込んだ。
「グギョォッ!?」
　この一撃でゲリョスは再び怒り出した。一撃を入れて怒り出す、これは奴が弱っている証拠だ。
　クリュウの考えは見事に当たっていた。怒り状態になったゲリョスだが、今度はそのまま翼を羽ばたかせて逃げ出す。フィーリアが撃ち落とそうと必死に散弾ＬＶ１を乱射するが、ゲリョスはついに射程外まで脱出して別のエリアへ逃げていった。
　ペイント弾の匂いは、どうやら洞窟の方から漂って来る。おそらく体力回復の為に巣で眠るつもりなのだろう。だが、それこそクリュウ達の思う壺だ。
　とりあえず戦闘終了だ。ツバメは鬼人化を解くと座り込んでしまった。雨に打たれる肩は大きく上下に動いている。クリュウもま

た疲れたように地面に腰掛けると、ずっと被っていたレウスヘルムを脱いだ。雨と汗に濡れた若葉色のサラサラとした髪がようやく解放される。バイザーに隠れていたクリッとした翡翠色の瞳には少なからず疲労の色が見える。
　そんなクリュウに、フィーリアがそっと近づく。
「クリュウ様、お怪我はありませんか？」
「……ちょっと左腕を痛めたかな。でも薬草を塗っておけば大丈夫だよ」
「でしたら、雨曝しのままではいけません。洞窟の中へ行きましょう」
　フィーリアの提案で、クリュウ達は一度近くの入口から洞窟の中に入った。ここをさらに奥へ行けばゲリョスが眠る巣に行く事ができる。
　狩場に来てからずっと雨を浴び続けていた三人はようやく雨から解放され、それぞれ髪についた水を振り払う。防具の下のインナーはもうビショビショで正直かなり気持悪いが、どうせまたゲリョス亜種討伐の為に雨の中に行かなくてはならないのだから乾かす必要もない。
　洞窟の中で少し休憩する事にした三人はそれぞれ携帯食料で簡単に腹を満たし、今はフィーリアがクリュウの左腕にすり潰した薬草を塗っている所だ。
「しかし、先程のお主の行動には驚いたぞ」
「え？　何が？」
「こやし玉じゃよ。よくあんなものを持っておったな」
「そうですね。いつもはあんな物持ち込んでいませんが」
「二頭同時討伐となると、一度に二頭現れる事もあるって事でしょ？
　でも同時に相手なんてできないからさ、気づかれないうちにもう一体には別のエリアに行ってほしくてね。道具箱の中にもしもの時に備えて用意していたこやし玉を持って来てたんだよ。いやぁ、成功して良かったぁ。気づかれたらこやし玉はアウトだからね」
　クリュウは笑っているが、二人はそんなクリュウの考えに正直かなり驚いていた。こやし玉は確かにエリア外にモンスターを退去させ

る手段に使われるが、メジャーな道具ではない。何せ原料にモンスターのフンを使うので使用には抵抗があるし、しかもこの道具はけむり玉同様に相手に気づかれていない場合のみでしか効力を持たない。それだけの距離に近づく間に気づかれる事が多いので、普通のハンターはあまり使わない道具だ。フィーリア自身、フンという事もあって抵抗があるから使った事はないし、正直その存在すら忘れていた。

だがクリュウはそのマイナーな道具を使って見事にゲリョス亜種を追い払う事に成功した。彼の柔軟な発想と閃きにはいつも驚かされる。自分のように、柔軟さが次第に失われつつある熟練ハンターにはできないかけだしだからこその荒業だ。

「すごいのぉ。ワシはこやし玉なんて使った事ないから思いつきもせんかった」

「僕だって使うのはこれが初めてだよ。でもほら、一応学校で習ってたからさ。あの頃に必死に試験勉強で覚えた内容って、意外と覚えてるもんだね」

「……意外とって、忘れたらいかんじゃろ」

「あはは、それもそっか」

拠点(ベースキャンプ)を出て以来、三人の顔に笑顔が浮かんだ。だがいつまでも休憩していられない。こうしている間にもゲリョスは体力を回復しているのだから。

「フィーリア、爆弾は使える？」

「はい。大タル爆弾G二発と小タル爆弾一発、いつでも行けます」

今回の狩りにはいつもの半分程度しか爆弾を持ち込めなかった。クリュウの戦い方は爆弾重視であるが爆弾はコストが高い。買うとなると下手すれば赤字になる事もあり、クリュウはリーフ農場で栽培した火薬草とニトロダケで爆薬を調合し、さらに大タルだけリリアの店で買い、これと調合して大タル爆弾を調合。さらに同じくリーフ農場近くの川でカクサンデメキンを釣り上げて大タル爆弾と調合し、ようやく大タル爆弾Gを製造。なるべく自給自足で製造していたのだが、現在イージス村は冬という事もあって素材が底を尽き始め、すぐに用意できたのはこの二発が限界だったのだ。

だが、何はともあれようやく爆弾を使う事ができるのだ。クリュウの顔にも自然と笑みが浮かぶ。
「やっと爆弾が使えるよ。やっぱり飛竜戦の醍醐味はこの破壊力抜群の一撃にあるよね」
「……お主、以前にも増して爆弾至上主義に磨きが掛かっておらんか？」
ツバメのさりげないツッコミをスルーするクリュウ。だがフィーリアは「今ここで使うのも手ですが、まだ亜種の方が無傷で残っています。そちらに残されてはいかがでしょう？」とより強敵になるであろう亜種に対して切り札を残しておいた方がいいと提案。しかし、クリュウは首を横に振る。
「ゲリョス亜種が確実に洞窟に入るか確証がない今、確実に当てるのならば今をおいて他にはないでしょ」
「……そうですね。手早く通常体を倒してから亜種の方へ向かいましょう」
クリュウの意見に、フィーリアも納得したように賛同する。ツバメは普段爆弾など危なっかしくて使わないので、この辺の判断は二人に任せていた。
三人は再び用意を整えると、一路巣を目指して洞窟を進み始めた。途中には大雷光虫が飛んでいたが、三人は無視して目的地を目指す。狭い道を行った先にある天井に大きな穴の開いた巨大な洞窟の広間。ここが飛竜の巣であり、以前イャンクックもここで討伐した最終決戦場とも言うべき場所だ。そして、その広間の中心にゲリョスが眠っていた。
三人は小声でそれぞれの役目を確認すると、すぐさま行動に移る。クリュウとツバメが大タル爆弾Ｇをそれぞれ一発ずつ持ってゲリョスにそっと近づき、その懐に設置。そしてすぐさま離脱を図る。そして、爆発圏外でハートヴァルキリー改を構えたフィーリアが通常弾ＬＶ３を爆弾に向かって撃ち放った。
吸い込まれるようにして弾丸は爆弾に命中。そして、大爆発した。辺りに吹き荒れる爆風と爆音、洞窟が倒壊するのではないかと思うよ

うな衝撃にクリュウ達は耳を押さえて地面に伏せている。
　爆音の中、ゲリョスの悲鳴が聞こえたような気がするがそれどころではない。
　やがて辺りに漂っている土煙や煙が消えると、そこにはゲリョスが横倒しになって倒れていた。三人は武器を構えたまま警戒し続けるが、ゲリョスは起き上がる気配はない。だが念の為フィーリアが通常弾ＬＶ２の速射でゲリョスを狙い撃つが、それでもゲリョスは起き上がらない。それを見て、フィーリアはほっと胸を撫で下ろした。
「どうやら、今度こそ死んだようですね」
「……ほんと？」
「大丈夫ですよ。さすがにあれだけの攻撃の末に大タル爆弾Ｇ二発。ゲリョスには致命傷ですから」
　まだ疑っているクリュウにフィーリアは苦笑しながら自ら前に進んでゲリョスに近づこうとする。だがクリュウはそれを制すると自ら先頭に立ってゲリョスに近づく。死にマネ後の反撃を受けた身なので正直かなり怯えているが、ゲリョスの瞳を覗き込み、顔を何度かパシパシ叩いた後、ようやく死んだと確信したのかほっと胸を撫で下ろした。
「心臓に悪いねゲリョスって……」
「まぁ、お気持はわかりますが」
　そんな二人から少し離れた場所ではまだ爆弾の衝撃から立ち直れていないツバメがフラフラしていた。
「ツバメ、大丈夫なの？」
「……お主ら、この衝撃を受けてなぜ平気な顔をしておる？」
「え？　別に普通の事だけど」
「どんだけ爆弾を多用しておるのじゃッ!?　あれか、「狩りは爆発だぁッ！」とでも言うのかッ!?」
　まぁ、これは当然の反応だろう。下手すればあの爆発で洞窟が崩れ生き埋めになっていたかもしれないのだ。飛竜に殺される覚悟は想定していても、仲間の攻撃で殺されるという展開は全く想定していないのだから。

「ツバメ様、郷に入れば郷に従えですよ」
「……ワシ、いつか仲間の攻撃で爆死するかもしれんぞ」
「大丈夫だって。それにほら、爆弾を使うとなんかスッキリしない？」
「するかぁッ！」
　そんなやり取りをしつつ、とりあえずクリュウ達はゲリョスの剥ぎ取りに掛かった。もちろん、その前にはしっかりとゲリョスの冥福を祈る。
　ゴム質の皮という奇妙な素材の剥ぎ取りは結構苦労した。何せあれだけの攻撃に耐えただけあってなかなか切れないのだ。しかし、何とか時間は掛かったが剥ぎ取りを終え、それぞれの素材を荷車に載せる。
　剥ぎ取りを終えた三人は荷車に集まると、まだ一撃すらも与えていないゲリョス亜種の対策を話し合う事となった。
「残るはゲリョス亜種。弱点属性は同じですし肉質にも変化はありません。ただ若干動きが素早く、怒り状態の場合は攻撃力と俊敏性の割合も上がります。まぁ、簡単に言えばゲリョスの強化型とも言うべきものです。その点さえ注意すればゲリョスの時の立ち回りと何ら変更はありません」
　フィーリアの説明に、ツバメは腕を組んで唸る。
「うむぅ、ゲリョス相手にあれだけの苦戦を強いられたのじゃ。亜種相手、それも連続戦闘となるとちとキツイのぉ」
「ですが、討伐しなければ村の安全は保障できません。一刻も早く討伐しなければ」
「それはわかっておるが、奴には閃光玉もシビレ罠も効かん。そのおかげで先程は苦戦したしのぉ」
「麻痺弾を撃てればいいのですが、残念ながらこのハートヴァルキリー改は麻痺弾を撃てません。睡眠弾は撃てますが、爆弾がないのではあまり意味はないでしょう」
「え？　フィーリアって睡眠弾なんて持って来てたっけ？」
「あ、いえ。正確には睡眠弾ＬＶ１の調合用にネムリ草を持って来ているんです。リリアちゃんの店、ちょうど睡眠弾ＬＶ１の在庫がな

かったらしく、仕方なくネムリ草だけ調達し、カラの実はこの狩場ならどこでも採れるので現地調合して使おうかと」
フィーリアの返答に対し、クリュウは何かを考え始めた。今、彼の頭の中では様々な事が考えられている。この逆境を打ち破る秘策、そんなものがあるだろうか。いや、きっとある。それを信じて、クリュウはひたすら考える。
突然黙って考え込み始めたクリュウに、フィーリアとツバメは何事かと思いながらも邪魔しないように黙る。
しばらくして、クリュウはフゥとため息を吐いた。そして顔を上げると、そこには笑顔があった。
「フィーリア、そのネムリ草ちょっと使いたいんだけど、いいかな？」
「え？　別に構いませんが……」
「何じゃ？　何か名案でも思い付いたのか？」
「そ、そうなんですかクリュウ様？」
二人のどこか期待するような眼差しに対し、クリュウは「まぁね」と笑みを浮かべながら答えた。そんなクリュウの言葉に、二人にも笑みが浮かぶ。それを見て、クリュウは自信満々に言った。
「これでもドンドルマのハンター養成学校では上位成績優秀者に入った事もあるんだ。基礎知識だけなら自信がある。まぁ、任せておいてよ」
クリュウに連れられて、一行がまず向かったのは海岸であった。
雨で幾分か増水しているが、海の大量の水の前では例え豪雨であってもたかが雨。膨大な水量に比べれば微々たるものでしかない。
クリュウは砂浜に向かうと、そこで何かを採取し始めた。きれいな貝殻や黒真珠が取れる場所である。だが、クリュウが欲しがっているものはそのどちらでもない。彼が手にしたのは、数個の石ころであった。
「クリュウ様？　そんな石ころどうするつもりですか？」
「投げて使うとでも言うのか？」
「まあまあ、お楽しみは後にね。じゃあ次に行くよ！」
なぜか意気揚々としているクリュウに続き、一行は再び移動を始め

た。
　次にやって来たのは細い木々が密集する広場。ここは崖に面しており、大きな岩が多くその陰にはキノコが数多く自生している場所だ。同時に、アプトノスやモスのエサ場でもある。だが、今回はアプトノスもモスもゲリョスを恐れてかいないが。
　クリュウはここでキノコが群生している場所で採取を始める。特産キノコやアオキノコを無視し、彼が手に入れたのは黄色いキノコ、マヒダケだ。
「マヒダケ、ですか？」
「さっきから一体何を採取しておるんじゃお主は？」
「いいからいいから、次行ってみよう！」
　再びクリュウ達は別のエリアへと移動した。
　続いてのエリアは今度は日当たりがいい場所であり、野草が多く生える場所。クリュウはエリア中を駆け回って目的の素材、ネンチャク草とツタの葉を手に入れた。
「良し。これで全部かな」
「この素材を使って一体何をするつもりですか？」
「というか、どこに何があるか完全に覚えておるのじゃな」
「まぁ、この狩場はいつも来てるからね。じゃあ一度一拠点（ベースキャンプ）に戻るよ」
　クリュウはそう言うと自ら荷車を引いて拠点（ベースキャンプ）へと向かう。そんな彼の背中を、首を傾げながら二人は追いかける。
　一体、彼の頭の中ではどんな秘策があるのだろうか。
　拠点（ベースキャンプ）に戻った一行はそこで夕食を食べる事とした。これからまた戦いになるのだ、今のうちに腹ごしらえしておいた方がいい。
　料理の担当はフィーリアとなり、ツバメはこんがり肉の準備に掛かる。
　一方、クリュウはというと一人黙々と作業をしていた。すり鉢を用意し、様々な素材を粉状にしたりドロドロにさせたりして調合を行っている。その横には彼が採取したものやフィーリアから貰ったネム

リ草、そしてツバメからもらった生肉が置かれている。
　黙々と作業をしているクリュウを見て、ツバメは首を傾げる。
「じゃが、クリュウは一体何をしようとしておるのかのぉ」
「さぁ、私にはわかりません。でも、クリュウ様の秘策なら必ず私達が優位になれるものなのでしょう」
「そうじゃのぉ」
　一人だけ背を向けて記憶を頼りに次々に調合していくクリュウ。時々ミスって燃えないゴミが生まれてしまってはいるが、余分に素材を採取していたので構わずにどんどん調合していく。
　しばらくして、フィーリア達の準備は終わった。床には動物の皮でできたシートを置き、その上には様々な料理が並んでいる。雨で濡れて冷えた体を温める為、ピリ辛料理が多い。
　ツバメはトウガラシの粉を少し振り掛けたモス汁を飲んでパァっと笑顔を華やかた。
「おぉ、これは美味じゃ」
「お口に合ったようで良かったです」
「お主、いい嫁になれるぞ」
「えへへ」
　ツバメに誉められフィーリアは嬉しそうに微笑むと、まだ作業をしているクリュウの方へ向く。
「クリュウ様、一度中断して夕食を食べてください」
「そうじゃぞ。せっかくの飯が冷めてしまうではないか」
　そんな二人の言葉に対し、クリュウは無言。集中している証拠ではあるが、ここは一度切り上げてもらわないと困る。
「仕方ないのぉ」
　そう言ってツバメは立ち上がると、クリュウへと近づく。その気配にも気づいていないのか、クリュウは黙々と調合を続けている。
「ほれクリュウ。調合はそこまでにして飯を――」
「できたぁッ！」
「ぬおぉッ!?」
　今まで黙っていたのに突然大声を上げたクリュウに驚くツバメ。

そんな事気にせず、クリュウは満面の笑みを浮かべながら振り返ると、黙々と調合していた品々を二人に見せる。
「やっとできたぁ。結構ゴミになったのもあるけど、必要最低限の分は確保できたよ」
　そう言ってクリュウは調合した品々を愛おしげに見詰める。完成した道具は全部で三種類、捕獲用麻酔玉二発、けむり玉一発、シビレ生肉一個だ。
　石ころとネンチャク草で素材玉。ネムリ草とマヒダケで捕獲用麻酔薬。素材玉と捕獲用麻酔薬で捕獲用麻酔玉。素材玉とツタの葉でけむり玉。マヒダケと生肉でシビレ生肉。生肉とネムリ草以外は現地調達した素材、そして現地調合でこれらの道具を見事に作り上げたのだ。
「クリュウ様、これ全部お一人で作られたのですか？」
「うん。基礎的な調合方法は覚えてるからね。まぁ、でもちょっと失敗してゴミも結構できたけど」
　そう言ってクリュウは苦笑を浮かべた。だが、調合というのは熟練のハンターであっても失敗するほど難しいのだ。比率を少しでも間違えればゴミになる。だからこそ調合を重視するハンターは例えG級ハンターであっても調合書を狩場に持ち込むのだ。
「捕獲用麻酔玉という事は、奴を捕獲するのか？」
「そう。討伐するには時間も労力も掛かるからね、連続狩猟や同時狩猟なら一体くらい捕獲した方が効率もいい」
「なるほどのぉ。しかし、このけむり玉とシビレ生肉は何じゃ？」
「これは最初の奇襲に使うんだ。まずけむり玉でゲリョスの視界を封じ、その上で奴の近くにシビレ生肉を設置。気づかれなければこれを食べる可能性は十分にある。そして、シビレ生肉を食べて麻痺した所で最初の先制攻撃を仕掛ける。ただ遭遇するよりこっちの方が最初に大ダメージを与えられるでしょ？」
「なるほど。一回のみですが、閃光玉の代わりという事ですね」
「そういう事。本当はこういう時にこそ爆弾を使いたいんだけど、爆弾はもうないしあってもこの天気じゃ使えないしね」

「……とりあえず爆弾が最優先事項なのじゃな、お主は」
「すでにゲリョス通常種は討伐済み。通常種の時は亜種を警戒しての戦いだったけど、今回はその心配もない。今度こそ自分達のペースで慎重に、そして確実にやろう」
「はいッ！」
「そうじゃな」
「……まぁ、とりあえず腹ごしらえが先だね」
　そう言ってクリュウは苦笑しながら食卓に加わる。狩場にいる間は常に神経を尖らせておかないといけない。例え拠点（ベースキャンプ）であっても絶対に安全とは言い切れない。拠点（ベースキャンプ）をリオレウスに焼き尽くされた事例だってない訳ではないのだから。
　だが、今こうしてみんなで食事を囲む間はどうしても気が緩んでしまう。気心触れ合える仲間との楽しい会話を交えながらの食事は、疲弊した精神力を満たしてくれる貴重な時間だ。
「しかし、本当にうまいのぉ。クリュウはいつもこんな美味なるものを食べておるのか？」
「別にいつもって訳じゃないけど」
「じゃが比較的こうなのであろう？　うらやましいのぉ」
「ほんと、フィーリアにはいつも感謝してるよ」
「そ、そんなぁ」
　クリュウにお礼を言われ、フィーリアは頬を赤らめて嬉しそうに微笑む。そんなフィーリアを見てツバメは小さく苦笑するとモス汁を静かにすすった。
　この時間だけは、クリュウ達もハンターという職業を忘れて歳相応の少年少女でいられる貴重な時間であった。
　食事を終えた三人は、ゲリョス亜種との戦闘に備えて準備を整え始めた。爆弾は使ってしまったので荷車の必要はない。クリュウとツバメは砥石を使ってそれぞれの武器の切れ味を正し、フィーリアも残弾を確認。まだ火炎弾は半分ほど残っているし、その他の弾丸もまだ十分に残っている。
　クリュウは先程自分で調合した道具を道具袋（ポーチ）に入れて準

備完了。ツバメもしっかりと切れ味を戻し、フィーリアも準備を整え終わった。
雨はまだ降り続き、時刻は深夜。真っ黒な雲で見えないが、その空の向こうにはきっと無数の星々が煌いている事だろう。そして、その雨降り注ぐ密林にはまだ一撃も与えていない無傷のゲリョス亜種が潜んでいる。
クリュウは手に持っていたレウスヘルムをしっかりと被り、バイザーを下げる。その奥にある瞳はすでに真剣。
「それじゃ、行こうか」
その声を合図に、三人は拠点（ベースキャンプ）から出発した。
今、クリュウ達の最後の戦いが始まろうとしていた。

第１０５話　セレス密林の夜明け

拠点（ベースキャンプ）から出発して一時間後、狩場中を捜索したがゲリョス亜種の姿はどこにもなかった。
　先程ゲリョスとゲリョス亜種と遭遇した丘の上のエリアに向かうが、そこにもゲリョス亜種の姿はない。クリュウは困ったような表情を浮かべながら防水仕様の地図を取り出す。
「おかしいなぁ。こんだけ探してもいないなんて」
「すれ違いになっておるのではないか？」
「そうかもしれませんね。ここは一度分散して捜索しませんか？　その方が発見率はグッと上がりますし」
「何を言っておるんじゃ。こちらにはけむり玉とシビレ生肉は一回分しかないのじゃ。分散してもしクリュウ以外のワシやお主が遭遇したら、せっかくの奇襲戦法が使えないではないか」
「しかし、このまま無意味に動き回るのは体力を消耗するだけです」
　ツバメは分散反対を、フィーリアは分散賛成をそれぞれ支持した。話し合いは纏まらず、二人は最後の頼みとばかりに先程から空を見上げているクリュウの方を向く。三人なら、クリュウが支持した方が過半数を取る事ができる。
「どうじゃクリュウ？　分散して捜索かこのまま全員で捜索か。どちらにする？」
「クリュウ様、ご決断を……」
　二人の言葉に対し、クリュウは無言で空を見上げ続ける。すると、突然手を道具袋（ポーチ）に手を伸ばし、けむり玉を構えた。クリュウの行動に驚く二人に対し、クリュウは小さくつぶやく。
「こっちから行く必要は全くなくなったみたいだね……」
　その言葉に二人が顔を上げると、どちらも表情が険しくなった。
　雨風を吹き飛ばしながら舞い降りてくる飛竜。奇妙なトサカと特異な皮に全身を包んだその姿は通常のものと何ら変わらない。だが、その纏う皮の色は紺色ではなく紫色。闇夜でも目立つ緑色の模様は巨大な目にも見える。

そして、奴はゆっくりと大地に降り立った――毒怪鳥ゲリョス亜種。
背を向けているゲリョス亜種に向かって、クリュウは単身で素早く近づくと手に持っていたけむり玉を投擲。ゲリョス亜種の足元に転がったけむり玉は辺りに真っ白な煙を噴き出し始める。それは次第にエリアの一角を支配するまで広大に広がり、ゲリョス亜種の姿を包み隠す。
ゲリョス亜種は突然の煙幕に警戒しているのか、キョロキョロと辺りを見回している。だが視界は完全に封じられており、その行為は無駄だ。
続いてクリュウは煙幕を利用して堂々とゲリョス亜種の正面に立つとシビレ生肉を設置。すぐさま離脱を図った。すでに岩陰に隠れている二人と同じく、クリュウもまた木の陰に身を隠した。
やがて、けむり玉の効果が切れて煙は次第に風に流されていき掻き消えた。視界が回復したゲリョス亜種は今のは何だったのだろうと首を傾げつつ、正面に向き直る。すると、そこには生肉が置いてあった。先程まで、こんな物あっただろうか。
ゲリョス亜種は不思議に思いながらもそっと近づき、鼻で匂いをかぐ。それは間違いなく肉であった。ゲリョス亜種は周囲に敵対する者がいない事を確認すると、チャンスとばかりに一気にかぶり付いた。その瞬間、隠れている三人がガッツポーズをしたのは言うまでもない。
ガツガツと生肉を食べるゲリョス亜種。だが、突然――
「ギャオオォッ!?」
全身に痺れが走った。体の動きは完全に封じられ、口すらも満足には動かせない。
「今だッ！」
ゲリョス亜種が痺れると同時に隠れていたクリュウ達は一斉に飛び出した。フィーリアは徹甲榴弾ＬＶ２を装填してゲリョス亜種の頭部を狙う。クリュウは脚に、ツバメは尻尾に向かってそれぞれ攻撃を開始する。

ツバメは痺れて動けないゲリョス亜種の尻尾に到達すると鬼人化。グッと視界が狭まり、狙う獲物の姿だけを捉える。狙うは、この尻尾。
「うおおおぉぉぉッ！」
叫び声と共にツバメは乱舞。無数に斬り出される斬撃の嵐は次々にゲリョス亜種の尻尾を斬り刻む。
クリュウもまたゲリョス亜種の脚を集中的に斬る。バーンエッジが炸裂するたびに炎が爆ぜ、火花が迸る。何度も何度も執拗に炎の斬撃を繰り返す。縦横無尽に振るわれるバーンエッジ。そろそろ麻痺が解ける頃、クリュウは最後に回転斬りを叩き込みゲリョスの懐から離脱。刹那、ゲリョス亜種の体の自由を奪っていた麻痺毒が効果を失った。
「グワアアアアッ！」
怒号を上げるゲリョス亜種。だが尻尾ではまだツバメが乱舞を続け、フィーリアもまた徹甲榴弾ＬＶ２を撃ち続けている為に動きは封じられている。クリュウは再び斬り掛かろうとするが、ゲリョス亜種は尻尾を執拗に狙うツバメを追い払おうと尻尾を伸ばしてムチのようにして襲う。
「ぬおッ!?」
ツバメは武器をしまうと回避の為に前のめりに倒れた。だが、執拗なゲリョス亜種は逃げるツバメに再び尻尾を叩き付ける。倒れているツバメは次なる回避が間に合わない。襲い来る尻尾にツバメが直撃の覚悟をした瞳を閉じた瞬間、衝撃が襲い掛かった。地面を何度か転がる感触がし、体中に痛みが走る。だが、それは予想していた衝撃や痛みにしてはずいぶんと軽い。恐る恐る目を開くと、横にはクリュウが倒れていた。
「く、クリュウッ!?」
「僕は大丈夫。ツバメは？」
「わ、ワシも平気じゃ。まさかお主……」
ツバメに尻尾が直撃する寸前、クリュウがツバメの前に立って盾を構えたのだ。結局は吹き飛ばされてしまったが、おかげでツバメには大した怪我はなく、クリュウもまたガードのおかげで大した怪我はし

ていない。ただ、痛めた左腕にほとんどの衝撃が直撃した為にかなりの苦痛に耐える事になった。
二人に攻撃をさせない為、フィーリアはすぐに通常弾ＬＶ２を装填すると速射でゲリョス亜種を狙う。ダメージこそ少なくても執拗な連続射撃は鬱陶しいのか、ゲリョス亜種は狙いをフィーリアに変えて毒液を吐き掛ける。フィーリアはこれを回避すると、位置を変えて再び速射。ゲリョスの反撃が来れば再び回避して立ち居地を変えて速射。これを繰り返す。
たった一人でゲリョス亜種と交戦しているフィーリアを見て、クリュウはすぐに駆け出してゲリョス亜種を追う。ツバメは立ち上がると回復薬を二つ飲んでから追いかける。これで三人の体力は再び十分なものになっただろう。
ゲリョス亜種に背後から駆け寄るクリュウ。だがゲリョス亜種はフィーリアの銃撃から逃げるように後ろに飛ぶ。突然迫って来たゲリョス亜種はあっという間にクリュウを追い越して彼の背後を取った。しかも、クリュウは風圧で動きを止められている。
「クワァッ！」
ゲリョス亜種はチャンスと毒液を吐いた。放物線を描きながら毒液はクリュウに直撃。その重々しい衝撃にクリュウは前方に吹き飛び、倒れた。
フィーリアが悲鳴を上げ、追撃阻止の為に猛烈な速射をゲリョス亜種に叩き込む。この集中砲火にゲリョス亜種はたまらず怯み、クリュウへの追撃を断念した。
一方、フィーリアのおかげで何とか危機を脱したクリュウであったが、体中に鈍痛と倦怠感、そして吐き気や頭痛など毒による影響で苦しんでいた。だが、毒状態はほんの一瞬であった。突然スッと毒が抜けたように体が全快する。驚いて振り返ると、ツバメが空になったビンを持って手を振っていた。どうやら解毒薬を飲んで広域化による解毒をしてくれたらしい。
「ありがとうツバメッ！」
「なぁに、さっきの借りを返したまでじゃ」

ツバメはニッとかわいらしい笑みを浮かべるとビンを捨ててサイクロンを構える。そしてすぐさま鬼人化するとゲリョス亜種に向かって突撃した。ゲリョス亜種はフィーリアを狙って執拗に毒液攻撃を繰り返す。だがその背後からツバメが接近し、尻尾に向かって斬りかかった。突然の予期しない一撃にゲリョス亜種は驚いてたたらを踏む。その間にフィーリアは再び徹甲榴弾ＬＶ２を装填すると、ゲリョス亜種の頭に狙いを定めてトリガーを引いた。撃ち出された弾丸はゲリョス亜種のこめかみに命中。一瞬遅れて起爆した。

「グオォッ!?」

これまでの蓄積が加わり、ゲリョス亜種はめまいを起こして転倒した。ツバメは構わず乱舞を続け、フィーリアもまた火炎弾に切り替えて猛烈な集中砲火を浴びせる。クリュウも負けじとゲリョス亜種のトサカに向かってバーンエッジを叩き込んだ。

必死に抗うゲリョス亜種の翼や脚の動きに注意を払いつつ、クリュウはひたすらにトサカに目掛けてバーンエッジを振るい続ける。爆ぜる炎は熱く、クリュウ自身にも熱となって襲い掛かる。レウスシリーズを纏っているからといって熱くない訳ではない。だが、雨によって冷えた体にはちょうどいいくらいだ。

「せいやぁッ!」

尻尾を集中的に狙っていたツバメは最後の一撃を叩き込むと、一端ゲリョス亜種から離れて鬼人化を解いた。大きく方を上下させて荒い息を繰り返すツバメ。その苦しげな表情は鬼人化によるスタミナの消耗の激しさを物語っていた。

ツバメが離れてすぐ、ゲリョス亜種はようやく起き上がる事に成功した。だが、顔をもたげようとした瞬間クリュウのバーンエッジが炸裂。この一撃に、ゲリョス亜種の中で何かが切れた。

「クワアアアアアアアアッ!」

ゲリョス亜種は怒号を放ちながら狂ったように首を激しく上下させる。目の周りは通常種と違って緑色に変化しているが、毒液を吐きながら血走った目をしている点は通常種と変わらない怒り状態だ。

ゲリョス亜種は「クワッ、グワオォッ」と鳴き声を上げながら鼻先

とトサカをぶつける動作を何度か繰り返す。クリュウは盾を目の前に構え、フィーリアとツバメはそれぞれ安全圏に離脱した。その直後、ゲリョス亜種は怒号を放ちながら辺りに閃光を爆発させたが不発に終わった。だがゲリョス亜種はしつこく再び鼻先とトサカを打ち鳴らし始める。クリュウはその場から動けずに再びガードをし、ツバメとフィーリアは安全圏で目を庇いながら反撃の機会を窺う。そこへ再び閃光が炸裂。

光が収束すると同時に、ゲリョス亜種は突然前方に向けてジャンプした。その先にはガード態勢のままのクリュウ。直後、ゲリョス亜種の強烈な蹴りを盾に受けたクリュウは吹き飛んだ。

「クリュウ様ッ！」

「クリュウッ！」

地面の上を二転、三転したクリュウだったがすぐに起き上がると「大丈夫ッ！」と二人に無事を叫んだ。だが、正直もうあまりガードはできなさそうだ。左腕はガードのたびに悲鳴を上げるように激痛を発する。

「クワァァァァァァッ！」

ゲリョス亜種はジャンプすると起き上がったばかりのクリュウをついばもうとする。クリュウは慌てて横へ飛びこれを回避。すぐにツバメが駆けつけ、ゲリョス亜種の脚に斬りかかる。

「グワァァァァァァッ！」

「くぬぅッ!?」

ゲリョス亜種は突然走り出した。ツバメはそれに巻き込まれる形となり、走り去るゲリョス亜種の背後にゴロゴロと転がった。それを見たフィーリアはツバメを守るように弾種を通常弾ＬＶ２に変更。速射でゲリョス亜種の目を自分に引き付けながらツバメからゲリョス亜種を引き離す。

フィーリアを追うように移動するゲリョス亜種の動きに注意しながら、クリュウは倒れたツバメに駆け寄る。

「だ、大丈夫ツバメッ!?」

「へ、平気じゃ……」

そう言ってツバメは立ち上がるが、一度小さく立ちくらみをしたのかフラつく。
「本当に大丈夫なの？」
「問題ない。鬼人化で疲労が蓄積しているだけじゃ。まだまだ戦えるぞ」
「そ、そう？　ならいいんだけど……」
「ワシの事は構うでない。それより、早く前線に戻れ。男がいつまでも女子（おなご）一人に死線を任せておくでない」
「わ、わかった。でもツバメ、無理はしないでよね」
「わかっておる。さぁ行けッ！　ワシも息を整えたらすぐ戻るッ！」
ツバメの言葉にうなうずくとクリュウは再び駆け出した。ゲリョス亜種は未だにフィーリアを執拗に追い回している。それらの攻撃を、フィーリアはギリギリの紙一重で回避していた。速射は絶大な威力と持つが、同時に反動が大きく走りながら撃つ事ができず、撃つ場合は一度動きを止めなければならない。その為、一撃離脱するのが非常に難しい。しかし、それだけの連射をされれば、モンスターは自然と速射を行うガンナーを執拗に追うようになる。仲間を援護する為に自分を囮にする場合はこれ以上ない方法と言ってもいい。
すぐ横で爆ぜる毒液に冷や汗を流しながら、フィーリアは横に転がって速射を放つ。それら全弾は見事にゲリョス亜種の頭に命中。しかし、まだトサカは健在だ。あれを破壊しない限り、ゲリョス亜種の閃光は封じられない。
「クワッ！　クワァッ！」
ゲリョス亜種はいくら追っても捕まえられないフィーリアに嫌気が差したのか、首をもたげて鼻先とトサカを打ち鳴らし始めた。それを見て、フィーリアは目を見開く。
この動作は閃光攻撃。だが、今から走っても閃光の範囲外に脱する事はできない。振り返って地面に倒れれば回避できるが、それでは動きを封じられてしまう。閃光の後、ゲリョス亜種が攻撃に転じれば回避できない。
絶体絶命の危機。だが、

「喰らえッ！」
ゲリョス亜種の背後に現れたクリュウは閃光を放とうとするゲリョス亜種の尻尾に向かって渾身の力でバーンエッジを叩き込んだ。予期しない強烈な一撃に、ゲリョス亜種は悲鳴を上げて怯んだ。その隙に、フィーリアはゲリョス亜種の正面から逃げるように横へ走った。
「ありがとうございますッ！」
フィーリアはクリュウに礼を言うと、ゲリョス亜種から距離を取って火炎弾を装填。連続してそれを叩き込んだ。その容赦のない一撃にゲリョス亜種は狂ったように突然走り出すと、毒液を撒き散らしながらエリア中を全力疾走し始めた。
クリュウはすぐに追いかけようとするが、ゲリョス亜種の全力疾走の前では人間の足は敵わない。フィーリアはその間も火炎弾を着実にヒットさせ、ダメージを与える。
全力疾走するゲリョス亜種。だがその動きは通常体と同じコースを走っていた。それに気づいた時、ゲリョス亜種の通るであろう部分にツバメが落とし穴を設置した。一瞬で地面と同化するネットが広がり、設置完了。ツバメは笑みを浮かべながら拳を突き出した。それを見てクリュウはうなずくと急いで落とし穴の方へ向かう。フィーリアもまた一発一発確実にヒットさせながら落とし穴の方へ走った。
一方のゲリョス亜種はそんなクリュウ達の行動など見えていないように全力疾走し、壁際で転回。そして、クリュウ達の方へ真正面から突っ込んで行った。待ち構えるクリュウ達は、一斉に武器を構えた。
「ギョワアアアアアッ!?」
ゲリョス亜種は疑いもせずに落とし穴を踏み抜き、下半身から地面に埋まった。その瞬間、ネットの繊維が空気に触れて粘着質を展開。溶解した土もまた加わり、ゲリョス亜種の動きを完全に封じた。
突然身動きを封じられてパニックに陥るゲリョス亜種。クリュウ達は一斉に総攻撃を仕掛けた。
再び鬼人化したツバメはその外見に似合わないような勇ましい咆

哮を上げてゲリョス亜種の腹に向かって乱舞。神速の連撃は斬りづらいゴム質の皮を少しずつだが傷つけ、裂傷を走らせる。
クリュウも全力でバーンエッジをツバメとは反対の背中に向かって叩きつけていた。爆ぜる炎が熱に弱いゴム質の皮を少しずつだか溶解させ、露になった肉を斬りつけ血を迸らせる。
この一撃一撃は、圧倒的な生命力を持つモンスターの前では本当に微々たる一撃でしかないのだろう。だが、例え微々たるものだったとしても、積み重なればその生命力すらも打ち砕く事ができる。そう信じて、クリュウはバーンエッジを振るう。
そして、そんな二人から少し離れた所からはフィーリアが冷静に、的確に火炎弾を当てていく。残り弾数はわずか。だからこそ一撃一撃を正確に当てていく。三発撃ち、空薬莢排出と次弾装填を同時に行い、再びスコープを覗きながら弾が最も威力を発揮する頭に向かって正確に引き金を引き続ける。
三人の猛攻にゲリョス亜種は悲鳴を上げながらもがき苦しむ。だが、まだ拘束時間はある。三人は最後の一瞬まで猛攻を続けた。爆ぜる炎と迸る血飛沫。それらの一撃一撃全てが、確実にゲリョス亜種の体力を奪っていた。
「グワッ！　ギャワッ！　ガアアッ！」
必死になって脱出しようとするゲリョス亜種。次第に落とし穴の周りの地面に亀裂が走り、落とし穴は限界に達しようとしていた。それでも三人は攻撃の手を一切緩めない。
「りゃあああぁぁぁッ！」
痛む左腕に構わず、クリュウは両手でバーンエッジを構えると全力で振り下ろした。その一撃は見事にゲリョス亜種の紫色のゴム質の皮を斬り裂き、血が噴き出した。
「ギャアアアアアッ！」
ゲリョス亜種は悲鳴を上げながらも、ようやく落とし穴を脱して空中に浮かび上がった。その風圧にクリュウは動きを封じられたが、鬼人化しているツバメと範囲外にいるフィーリアは再び降りて来るゲリョス亜種を見詰める。怒り状態が解けたのか、ゲリョス亜種の目の

周りは元の色に戻っていた。
脚が地面に着く直前、ツバメはゲリョス亜種の脚に向かって乱舞した。突然の攻撃にバランスを崩したのか、ゲリョス亜種は「ギャオォッ!?」と悲鳴を上げて墜落。横倒しになった。
「今じゃッ！」
ツバメは残りのスタミナが少ないのも構わず乱舞を仕掛ける。フィーリアは残りの火炎弾全弾を撃ち込むように全力射撃。そしてクリュウは、悶えるゲリョス亜種の頭に向かってバーンエッジを叩きつける。爆ぜる炎と鋭い剣先が叩き込まれるたびにトサカは妙な音を立てる。そして、渾身の回転斬りを叩き込むと今までとは違う異様な音が響いた。見ると、トサカに小さいながらヒビが入っている。
「あともう少しッ！　うわッ!?」
さらなる一撃を入れようと構えたクリュウだったが、それを防ぐようにゲリョス亜種は慌てて立ち上がると風圧で群がる敵を吹き飛ばす。だが鬼人化しているツバメの猛攻は止まらない。
激痛に耐えながらゲリョス亜種は閃光を放とうとトサカと鼻先を打ち鳴らし始める。これに慌てたのは最も接近し、ガードもできないツバメであった。すぐに鬼人化を解いて走るが、とても範囲外には逃れられそうもない。
考えている暇はなかった。後先考えずとにかくツバメは閃光が爆発する寸前で地面に向かって飛び込んだ。閃光の後すぐに立ち上がって振り返ると、ゲリョス亜種はどうやら再び閃光を放とうとしているらしくトサカと鼻先を打ち鳴らしている。その足元にはまだクリュウが残っていた。ガードができるとはいえ、一人で前線に取り残される形となってしまった。
「くぅッ！」
すぐに合流したいが、閃光攻撃が終わるまでは近づく事はできない。そして、ゲリョス亜種は再び閃光を放とうと顔を勢い良く天に突き上げる。その直前、クリュウは突然ジャンプした。その行動に、離れた場所にいたフィーリアとツバメは驚く。
「させるかッ！」

空中にいながら、クリュウは天に向こうとするゲリョス亜種のトサカに向かって渾身のバーンエッジを叩き込んだ。炎が爆ぜ、異様な破砕音が響く。バランスを崩して落下したクリュウはそのままゴロゴロと転がったが、すぐに身を起こしてガードの体勢になる。

一方のゲリョス亜種は閃光攻撃をしなかった。いや、できなかったのだ――ゲリョス亜種の上にあった奇妙なトサカは、跡形もなく消し去っていたのだから。

「クワアアアアッ!?」

一瞬遅れてゲリョス亜種の悲鳴が轟く。自慢のトサカを壊されたからか、ゲリョス亜種は再び目の周りを緑色に染めて怒り狂う。その矛先はもちろんトサカを砕いたクリュウだ。

「グワッ！　グオッ！　グワッ！」

ゲリョス亜種はクリュウ目掛けて激しく頭を打ち付けるようについばんで来る。クリュウはとっさにガードしたがその一撃がクリュウの左腕の限界だった。ガードはできたものの、そのまま大きく後ろに吹き飛ばされてしまった。

だがゲリョス亜種の怒りはその程度では収まらない。追撃を仕掛けるように何度も何度も執拗についばんで来る。その連続攻撃にクリュウは何度も地面を転がって回避するが、ついに一撃が脇腹に直撃。クリュウは吹き飛び地面に転がった。

「貴様ぁッ！」

鬼人化状態で怒り狂いながらツバメがゲリョス亜種の尻尾に全力の一撃を叩き込んだ。この攻撃にゲリョス亜種は悲鳴を上げて仰け反る。だが、ゲリョス亜種の怒りが収まらないと同じくツバメの怒りも収まらない。

クリュウを襲った事に対する怒りが爆発し、その怒りが全て両手に握られているサイクロンへと注がれる。疲労を感じさせない、むしろより鋭くなった神速連撃にゲリョス亜種は慌てて尻尾を振り回すが、すでに懐に入っているツバメにはそんな攻撃は効かない。

さらに、空から無数の弾丸が降り注いで来た。それらは容赦なくゲリョス亜種の体を次々に貫いていく。外れた弾は地面を砕き、当たっ

た弾は肉を切り裂く。それはいつの間にかエリアの隅の方にある登れる岩の上に登ったフィーリアの怒りの貫通弾ＬＶ２の集中砲火であった。

ツバメにフィーリア。どちらもいつもはクリッとしたかわいらしい瞳を消し、刃物のように鋭い眼光でゲリョス亜種を射抜く。どちらも、クリュウを痛めつけた事に対する怒りの表れ――ある意味、今の二人はモンスターで言う所の怒り状態だ。

足元ではゴム質の皮を斬り裂くツバメの乱舞。上空からは容赦なく身を貫く鉄槌の如きフィーリアによる銃撃の嵐。ゲリョス亜種はたまらず転倒した。その時、ゲリョスの尻尾に炎がぶつかった。驚いてツバメが振り返ると、そこにはバーンエッジを構えたクリュウが立っていた。先程の一撃でかなりダメージを負っているらしいが、ツバメと視線がぶつかると笑顔を浮かべた。そして、ゲリョス亜種の方を向くと真剣な表情に変わってバーンエッジを振るう。そんな彼に、フィーリアは回復弾ＬＶ２を撃ち込んだ。

三人の総攻撃にゲリョス亜種は悲鳴を上げながら慌てて起き上がると再びトサカと鼻先を打ち鳴らし始める――だが、鼻先がぶつかって音を立てるべきトサカは、すでに壊れてそこには存在しない。無防備なその姿は、狩人（ハンター）達から見ればただの的だ。

ツバメは最後の力を振り絞って乱舞を仕掛け、クリュウもまたバーンエッジを力の限り叩き込む。フィーリアは貫通弾ＬＶ２を連射してゲリョス亜種を貫いていく。

「クワアアアアアッ！」

ゲリョス亜種は閃光を撃ち放つモーションをする。だがもちろん閃光を放つ為のトサカはすでに壊れているので光り輝く事はない。その間も三人の猛攻は続く。

そして、閃光のモーションから降りて来た頭に向かって、

「喰らえッ！」

クリュウは体全体を回転させるように回転斬りを叩き込んだ。その一撃にゲリョス亜種は弱々しい悲鳴を上げて倒れた。そしてそのまま動かなくなり、辺りを包んでいた殺気も消え、密林らしい静けさ

が戻る。聞こえてくるのは激しい雨音と風の音だけ。
雨に濡れながら、クリュウは左肩を押さえた。それを見てフィーリアが慌てて彼に駆け寄る。ツバメもまた鬼人化を解くとその場で膝をついて肩を激しく上下させて苦悶の表情を浮かべている。
だが、そんな状態であっても三人は決してゲリョス亜種から目を逸らす事はなかった。これで死んだとは三人とも思っていない、これは明らかに死にマネだ。しかし、この間に三人は次なる戦いに備えて全員が回復薬や回復薬グレート、栄養剤などを飲み、携帯食料を食べて腹を満たす。
そして、三人が準備を整えた頃、ゲリョス亜種は突然辺りに再び殺気を振りまいて足掻くように体を激しく動かしながら起き上がった。それを見て、三人は再び武器を構える。
だが正直クリュウ達、特に左腕を負傷しているクリュウと疲労困憊のツバメはこれ以上の戦闘は辛い。フィーリアもまたこの雨で着実に体力を奪われている。モンスターにとっては大した事のない雨でも、繊細な生き物である人間には確実に影響を与え、時にそれは命を奪う事にも繋がる。
すでにゲリョスを討伐し、ゲリョス亜種とも激戦を繰り広げた三人の疲労はかなりの域にまで達していた。完全な休憩は望めなくても、小休憩くらいはほしかった。
そして、それは驚く事にゲリョス亜種も同じだったらしい。
ゲリョス亜種は突然クリュウ達に背を向けると翼を大きく広げながら下手な走りで去って行く。それを見たフィーリアは慌てて走り出し、ペイント弾を装填。飛び立とうとするゲリョス亜種に向かってペイント弾を撃った。もちろん命中だ。
ゲリョス亜種はペイントの匂いと共に雨雲が垂れ込める空を水平飛行しながらクリュウ達の前から去った。それを見て、三人はようやく全身に纏っていた緊張を解いた。疲労困憊のツバメは倒れるように座り込むと、荒れる呼吸を整えようと再び大きく肩を上下させる。
フィーリアは座り込んだクリュウに駆け寄ると、すぐに左のレウスアームを外して怪我の部分の包帯を解き、怪我の部分を診る。一応新

しい薬草を塗ったが、これ以上ガードを続ければ左腕が折れてしまう可能性だってあった。
「クリュウ様、もう無理はなさらないでくださいね」
「わかってる。それより、ツバメは大丈夫なの？」
「ツバメ様は疲れ切っているだけで怪我はないようですね。ただ、鬼人化はスタミナを激しく消費するので、双剣使いは長期戦には向かないんです。一度休憩を取った方がいいようですね」
「そうだね。ゲリョスも巣には向かってないようだから、寝られる心配もないしね」
「そうですね」
「……じゃが、見方を変えればまだ奴には余裕があるという事じゃろ？」
「「……」」
ツバメの何気ない一言に、クリュウとフィーリアは同時に何とも言えないような複雑そうな笑みを浮かべる。それを見て、ツバメは自分の失言に気づく。
「す、すまん……」
「いや、事実だし。別に謝る事じゃないよ」
「そうですよ。どんな状況であれゲリョスを討伐しなければならない事には変わりありませんから」
そう。今回の依頼はゲリョスの二頭同時討伐。状況がどうであれ二頭のゲリョスを討伐しない事には成功とは言えない。そして、通常種はすでに討伐済みだが亜種はまだ余力を残した状態にある。対するこちらはすでに双剣使いのツバメの疲労は相当なもの。クリュウはまだ体力的には余裕があるが、左腕を痛めている。正直、これ以上の戦闘は避けたい所だ。
状況は限りなく劣勢だ。だけど、希望はある。
「でも、死にマネをしたって事はそれなりに弱ってるって証拠でしょ？　あと一歩だよ」
クリュウは二人を励ますようにあえて笑顔で言った。自身も左腕を痛め、疲労もかなりのものなのに。

チームという組織において最も大切な事は士気だ。どれだけ劣勢な中であっても、士気が高ければ逆転の可能性はある。逆に、どれだけ優勢であっても士気が低ければ思いがけない一撃で形勢が逆転してしまう。
士気とは、それだけ重要な事なのだ。
だが、きっと彼はそんな事考えてもいないだろう。ただ偏（ひとえ）に、みんなに元気になってもらいたい。笑顔でいてもらいたい。そんな一途な気持ちからの行動だろう。そして、そんな彼の想いに二人はちゃんと気づいている。
「そうじゃな。あと一息じゃの」
「はい。次で決着をつけましょう」
クリュウの笑顔に、二人もまた笑顔で返す。クリュウはその笑顔を見て嬉しそうにうなずくと、ゆっくりと立ち上がった。左腕には新たな包帯が巻かれ、これであと一回くらいの戦闘なら大丈夫だ。
「それじゃ、一度一拠点（ベースキャンプ）に戻って休憩しよう。そして、その後にゲリョスとの最後の決戦だ」
一度一拠点（ベースキャンプ）に戻った三人はそこで少しの休憩を取って準備を整えると、ペイントの匂いを追って一路ゲリョス亜種との最後の決戦に臨むのであった。
雨降り頻（しき）るセレス密林。ゲリョス亜種がいたのは池に面したエリア。ここは飛竜だけでなくアプトノスやランポスも水を飲みに来る貴重な水のみ場だ。
そして、奴はそこにいた。
ゲリョス亜種は池に背を向けて、クリュウ達の来る道の方を向いている。当然、エリアに入った瞬間に見つかった。
「クワアアアアアッ！」
怒号を上げるゲリョス亜種を見詰め、クリュウはバーンエッジの柄を握る。
「……これを、最後の戦いにしよう」
クリュウの言葉に、二人は静かにうなずいた。
ゲリョス亜種は閃光を放とうとするが、トサカがなければ閃光は放

つ事はできない。つまり、今は最大の攻撃チャンスという事だ。
三人は誰が言った訳でもなく一斉に走り出した。
クリュウは右へ、ツバメは左へ走ってゲリョス亜種を挟撃。正面からはフィーリアがハートヴァルキリー改を構えると残りわずかの火炎弾を装填。すぐさまスコープで狙いを定め、連続で引き金を引く。撃ち出された三発の火炎弾を続けざまに頭に受けたゲリョス亜種は悲鳴を上げて仰け反った。その隙に、左右から迫っていたクリュウとツバメが一斉に襲い掛かる。
「我が神速の剣を受けてみよッ！」
構えたサイクロンを天に向け、ツバメは鬼人化。クリッとしたかわいらしい瞳は鋭くなり、純情可憐な笑みを浮かべる顔には獣の形相が浮かぶ。
「うおおおおおおおおおッ！」
勇ましい咆哮と共に、ツバメは神速の乱舞をゲリョス亜種の脚に叩き込んだ。拠点（ベースキャンプ）で最大まで研いだサイクロンの刃は鋭く、鬼人化の鋭さも加わり、まるで斬れないものなどないかのように勇ましく踊る。
ツバメに負けていられないと、クリュウもまたバーンエッジを空いている方の脚に向かって叩き込んだ。刃先は触れると同時に炎を纏い、ゴム質の皮を焼き斬る。
振り下ろした一撃を殺さず、その勢いを利用して回転斬りに繋げ、上段からの斬り下げ、下段からの斬り上げ。突き、そして再びの回転斬り。それらの動作を一瞬の休憩を挟まずに連続で行う。勢いを利用してのそれらの攻撃は、攻撃を重ねるたびに鋭さを増しているように錯覚するほど鋭い。爆ぜる炎もまた勢いを増し、雨粒は刀身に触れる前に水蒸気となり消滅する。
クリュウは水蒸気を纏いながら再びの回転斬りをゲリョス亜種の脚に叩き込む。もはやゴム質の皮は解け切れ、露になった肉はその刃先に抉られて血を噴き出した。その激痛に、ゲリョス亜種は悲鳴を上げる。そこへ、フィーリアの撃ち放った最後の火炎弾が側頭部へ命中。ゲリョス亜種はたまらず横倒しに倒れた。

「グワッ！　ゴォッ!?」
　ゲリョス亜種は必死になって起き上がろうとするが、その巨体が仇となってなかなか起き上がれない。その間もフィーリアの通常弾ＬＶ２ＬＶの嵐、ツバメの乱舞、クリュウの業火は続く。
　三人の容赦のない攻撃の嵐に、ゲリョス亜種は悲鳴を上げ続ける。
　ようやく起き上がる事ができると、ゲリョス亜種は怒号を放ちながらツバメに向かって突撃した。だが、ツバメはこれをきれいに避ける。突撃に失敗したゲリョス亜種だったが、まるで最初から彼など狙ってはいなかったかのようにそのまま壁際まで走り、そこで転回。再び別の方向へと狂走を続ける。
「往生際が悪いですねッ！」
　エリア全体を走り回るゲリョス亜種には剣士の二人では追い付けない。フィーリアが必死になって通常弾ＬＶ３で狙撃をするが、距離があるので大したダメージにはならないし狙いづらい。
　ゲリョス亜種の動きを見て先回りして何とか追いついた二人だったが、ゲリョス亜種は急停止すると背後から近づく二人に向かってムチのようにしなる尻尾を叩きつけて来た。二人はそれぞれ左右に分かれて回避したが、せっかくの一撃の機会を失ってしまった。
　ゲリョス亜種は翼を羽ばたかせて上空へ飛び上がると、そのまま水平飛行に移った。
「逃げたのか？」
「いや、あれは……」
　ゲリョス亜種は逃げる事はせず、エリアの周りを周回するように飛ぶ。それを見たクリュウはすぐさま走り出す。クリュウの考えに気づいているのか、フィーリアもハートヴァルキリー改を背負うと同じく走り出す。一人、ツバメだけは二人の謎の行動に戸惑っていた。
「な、何をしておるんじゃ？」
「何やってんのッ！　一ヶ所に留まってると上空から襲われるよッ！」
　クリュウの言葉にようやくツバメが二人の行動を理解した直後、上空で獲物を見定めていたゲリョス亜種は一ヶ所に留まっているツバ

メに狙いを定めると高度を下げ、鋭い脚の爪を構える。
「ツバメッ！　後ろッ！」
クリュウの悲鳴に驚いて振り返ると、上空からゲリョス亜種が自分に向かって突っ込んで来るのが見えた。
「ぬおぉッ!?」
ツバメは慌てて地面に向かって飛び込むように伏せた。その直上を掠るかのような距離でゲリョス亜種が通過したのを感じ、嫌な汗が全身から噴き出した。
上空からの強襲に失敗したゲリョス亜種はそのまま地面に降り立った。すぐに一番近くにいたクリュウが駆け寄りバーンエッジを叩き込む。爆ぜる炎にゲリョス亜種は体を回転させて尻尾で追い払おうとするが、クリュウはその動きに合わせて立ち居地を変える事でこれを回避する。そこへさらにフィーリアからの支援射撃が加わり、ゲリョス亜種は悲鳴を上げる。
ゲリョス亜種は風圧でクリュウの動きを封じたが、その間にツバメは鬼人化しながらゲリョス亜種の懐に潜り込む。
「懐がガラ空きじゃあああぁぁぁッ！」
乱舞乱舞乱舞。鬼人化中のツバメの猛攻を止める事は誰にもできない。神速で振るわれるサイクロンには雨粒すらも付着する事は許されないほど、素早く、そして鋭く舞う。
フィーリアの支援射撃に加え、さらにクリュウも攻撃に合流。三人の猛攻はさらに激しさを増す。
ゲリョス亜種は必死になって尻尾を振って追い払おうとするが、彼らの攻撃の嵐は止まらない。そのあまりの激しさにゲリョス亜種は悲鳴を上げ続ける。そして、
「グオオオォォォ……」
弱々しい鳴き声と共に、ゲリョス亜種は地面に倒れた。しばしもがいた後、ピクリとも動かなくなった。
狩場に静けさが戻り、雨音だけがザーザーと音を立てている。
クリュウとツバメはすぐさまゲリョス亜種から離れる。二人がフィーリアを向くと、彼女はコクリとうなずいて散弾ＬＶ１を装填

し、引き金を引いた。
撃ち出された弾丸は銃口のすぐ近くで破裂し、倒れているゲリョス亜種に無数の銃弾となって襲い掛かる。何発かは地面を抉るが、この距離ならほとんどがゲリョス亜種に命中する。
五、六発撃った頃、そんなフィーリアの猛攻に耐え切れなくなったのか、ゲリョス亜種は突然起き上がった。やはり死にマネをしてこの場を逃れようとしていたらしい。
すぐさまクリュウが突撃。ゲリョス亜種の顔面に向かってバーンエッジを叩き込んだ。その一撃に、ゲリョス亜種が怒り狂う。毒液を口から撒き散らしながら、目の周りは鮮やかな緑色に染まる。
たった一撃で怒り状態になる。これは弱っている証拠だ。クリュウ達は自分達の勝利が目前にまで迫っている事で最後の追い込み、ラストスパートを掛ける。
フィーリアは弾種を通常弾ＬＶ３に切り替える。主力となる通常弾ＬＶ２はもう弾切れだ。
ゲリョス亜種は付きまとうクリュウを追い払おうと自身を回転させて尻尾を振るうが、クリュウはこれを姿勢を低くしながら転がって回避する。それどころか、一ヶ所に留まっているが為にフィーリアの猛攻を受ける羽目になった。
すると突然ゲリョス亜種は付き纏うクリュウに背を向けて、脚を引きずりながら移動を始めた。もう残り体力がわずかな証拠。ここで逃がしたら巣で眠られてしまう。
クリュウはバーンエッジを腰に挿すと走った。フィーリアが必死になって狙撃するが、ゲリョス亜種は構わず移動し続ける。だが、その速度はクリュウの本気の走りよりは遅い。何とかクリュウは追いつくとゲリョス亜種の尻尾に向かってバーンエッジを叩き込んだ。
「グギャオォッ!?」
その一撃に怯むゲリョス亜種。
「ツバメぇッ！」
「了解じゃッ！」
後から来たツバメはそのままゲリョス亜種を追い抜くと、腰に下げ

た落とし穴を地面に仕掛けた。いつもはあっという間に広がるネットも、今では妙に遅く感じられる。
設置を終えると、ツバメはすぐに落とし穴の後方へ下がった。それを確認し、クリュウはバーンエッジを腰に戻すと道具袋（ポーチ）から捕獲用麻酔玉二発を両手に握り、ゲリョス亜種の正面に移動する。
フィーリアも射撃を止め、その光景を見守っている。
ゲリョス亜種はとにかくこの場から逃げたい。そんな想いから周りが妙に静かになった事にも気づいていない。そのまま歩き続け、そして――
「グワオオォッ!?」
落とし穴を踏み抜き、ゲリョス亜種は悲鳴を上げる。必死になってもがくが、当然逃げる事は敵わない。
クリュウはゲリョス亜種の頭に向かって捕獲用麻酔玉を一発投げ付けた。それは見事顔面に命中して破裂。白い煙を噴き出し、それらはゲリョス亜種の鼻の中に消えていく。だが、一発ではまだ効果がない。残りの一発で、全てが決まるのだ。
失敗という二文字が頭を過ぎる。もし残り体力がまだ残っている方だとすれば、捕獲は失敗に終わる。そうなれば、こちらの劣勢は計り知れないものになるだろう。
不安はある。でも、
「今じゃクリュウッ！」
「クリュウ様ッ！」
二人の声が、そんな不安を吹き飛ばした。
三人でここまでやったのだ。それを信じないでどうする――きっと、成功する。
クリュウはうなずくと、暴れるゲリョス亜種に向かって最後の一発を投げ付けた。それは再びゲリョス亜種の頭に命中し、破裂。噴き出した煙はスゥとゲリョス亜種の鼻に消えていく。そして――
「グオオオォォォ……」
ゲリョス亜種は地面に倒れた。そして瞳を閉じ、眠り始めた――捕獲成功だ。

いつの間にか、雨は止んでいた。水溜りに足が触れると、それは波紋として広がり、ゲリョス亜種の頭にピチャンと音を立てて当たる。

雲が切れ、山の向こうから眩い光が現れた――朝日だ。

セレス密林全体を明るく照らすその光に照らされるゲリョス亜種。さっきまでの勇ましさはどこへやら、情けないような鼻提灯をしながらぐっすりと眠っている。

朝日を眩しげに見詰め、クリュウはほっとしたように笑みを浮かべた。

フィーリアもツバメも、現れた朝日を見て達成感に満ちた笑みを浮かべている。

雨ですっかり濡れ、冷えた体には、その温かな光はどんな暖炉よりも温かく感じられた。

セレス密林での二頭のゲリョスとの死闘は、ここに幕を閉じたのであった……

第１０６話　嫉妬に狂う恋姫と頬を赤らめる飛燕姫

雨ですっかり泥道になったイージス村のメインストリート。そこではいつにも増して人々が右へ左へと慌しく動き回っていた。ただの賑わいとは違うその慌しさに、帰って来たばかりのシルフィードとサクラは首を傾げる。

「あ、二人ともお帰り。ってか、あんた達一緒の依頼だったっけ？」

入口で呆然と立っている二人に声を掛けたのは握り飯やサンドイッチなどを満載したトレイを両手に持ったエレナであった。

「いや、偶然ドンドルマで会ったのでな。一緒に帰って来たのだ」

「ふぅん、そうなんだ」

「しかし、一体何の騒ぎだこれは？」

その時、シャベルやピッケルを持った村の男達が同じ方向へ走って行った。それを見て、エレナは「あぁ」と納得したようにうなずくと困ったような笑みを浮かべた。

「それが、昨日の大雨で村の一角が土砂崩れしちゃったのよ」

「なるほど。被害は？」

「村外れだから家も人もなくて犠牲者はないわね。でも湖から引いている生活用水川がこの土砂崩れで一部決壊しちゃってね。今は水を止めて土砂撤去と決壊修復をしてる所。たぶん夕方には直るとは思うけど、それまではちょっと水はさっき大タルに汲んだ分がとりあえずの生活水ね。村長の家にあるから、使うんだったら分けてもらいなさい」

「結構甚大な被害なんだな」

「他の村と違ってこの村は水道整備が整っているからね。それが壊れたとなると当然被害は大きくなるわ。まぁ、普通に生活している分には他の村なんかよりずっと住み心地はいいんだけどね」

イージス村は村長が逐一村の整備や規模を拡大している為、近隣の同規模の村及びちょっとした都市よりも様々な面で機能が充実している。村の中央部に生活用水用の川を作ったのもその偉業の一つだ。今回はそれが壊れたので、他の村以上に二次災害が大きくなってし

まったのだ。
「それで、君の持っているそれは？」
「あぁ、作業している人達用の昼食よ。あんた達も食べる？」
「いや、遠慮しておこう。それより、クリュウはどこだ？　その作業に参加しているのか？」
　シルフィードはそう言って辺りを見回してみるが、どこにも彼の姿はなかった。すると、エレナは「クリュウなら今村にはいないわよ」と答えた。
「村にいない？　どうしてまた」
「フィーリアとツバメって子と一緒にセレス密林に現れたゲリョス二頭を討伐に向かっているわよ」
「……ツバメが」
　そこで初めて今まで黙っていたサクラがつぶやいた。
「ツバメ・アオゾラ。あんたの知り合いなんでしょ？」
「……ええ」
「一緒に行ったという事は、ハンターなのか？」
「……双剣使いよ」
「双剣……、それはまた癖のある武器を使うのだな」
　シルフィードは感心したようにうなずくと、「引き止めてしまってすまなかった。何か私で手伝える事があれば手伝うが」と自ら言い出す。エレナは「ありがと。でも大丈夫よ」と笑顔で答えた。
「力仕事は男達に任せておけばいいし。それより疲れてるんでしょ？　ゆっくり休みなって」
「問題ない。力仕事でも料理でも何でも構わんぞ」
「シルフィード、あなたも一応女の子なんだから力仕事は男達に任せておきなさいって。それと、あなたが料理をすると兵器しか生み出さない事はわかってるでしょ？」
「……生物兵器」
「……わかってはいるが、そうストレートに言わなくても」
　料理下手というレベルではなく食材で兵器を生み出す能力を持つシルフィード。自分の料理の破壊力のすさまじさは自覚しているが、

これでもがんばっている方なのだ。そこを根本から否定されるとさすがに落ち込む。
そんな会話をしていると、一人入口の方を見詰めていたサクラが何かに気づいた。そして、フッと口元に小さな笑みを浮かべる。
「……帰って来た」
その言葉に二人が振り返ると、クリュウとフィーリア、そしてツバメの三人が入口に現れた。全員防具は泥まみれで戦いの壮絶さを物語っていた。だが、その表情はどれも晴れ晴れをしている。
「あ、シルフィにサクラ。帰って来てたんだ」
先頭に立つクリュウは二人の姿を見ると嬉しそうに笑みを浮かべた。その無事な姿を見て、三人は内心ほっとしていた。すると、ツバメがそんなクリュウの前に飛び出した。その視線はジッとサクラに注がれている。
「久しいのサクラ。元気にしておったか？　まぁ、見る限り元気そうじゃがのぉ」
サクラは無言で駆け出した。迫り来るサクラにツバメは嬉しそうに笑いながら手を広げる。そして――サクラはツバメの横を素通りした。
「うぬ？」
「さ、サクラッ!?　うわぁッ！」
振り返ると、サクラがクリュウに抱きついて彼を押し倒すのが見えた。地面に倒れたクリュウに抱きついたまま、サクラは嬉しそうに彼の胸に頬ずりしている。当然、このサクラの暴挙にフィーリアが顔を真っ赤にして激怒し、二人はいつものように戦闘態勢に入った。
そんなサクラを見て、ツバメはがっくりと肩を落とした。
「久しい友人よりも近しい想い人。寂しいのぉ……」
「悪気はないのだ。それは君自身が一番良く知っているのではないか？」
その問い掛けにツバメが顔を上げると、そこにはシルフィードが立っていた。
「お主は……」

「私はシルフィード・エア。名目上はクリュウ達のチームの隊長（リーダー）になるな」
「おぉ、お初にお目にかかる。ワシの名はツバメ・アオゾラじゃ。よろしく頼むぞ」
「よろしく頼む、とは？」
　困惑するシルフィードに、ようやくサクラを引き剥がしたクリュウが説明に入った。と言っても、ツバメがこの村に腰を据える事にしたという話程度だが。
　クリュウの説明に、シルフィードは納得したようにうなずいた。
「なるほど。村の常駐ハンターは多ければ多いほど好ましい。こちらこそよろしく頼む」
「うむ。大船に乗った気で安心するが良い」
　ツバメは嬉しそうに笑みを浮かべ、自信満々に胸を反らす。シルフィードは新たな仲間の登場に心底喜んでいた。まぁ、クールな表情からその内心を察するのはかなり難しいが。
　一方、ツバメとは子供の頃からの付き合いであるサクラは……
「……帰れ」
「な、何じゃと？」
　サクラの思いも寄らぬ言葉にツバメは驚きを隠せない。他の者も驚いたような表情を浮かべてサクラを凝視している。それらの視線に対し、サクラは無表情を貫き通す。
「さ、サクラ。何でそんな事言うのさ、ツバメは友達なんでしょ？」
　クリュウの問いに、サクラは「……ただの腐れ縁」とあっさり切り捨てた。クリュウは背後で「ぐはぁッ！」というツバメの叫び声と何かが倒れる音を聞いたが、とりあえず今は聞かなかった事にする。
　クリュウの視線に対し、サクラはフゥと小さくため息を吐いた。
「……村常駐のハンターはすでに四人。ギルド規定の最大メンバーもまた四人。ツバメが入る場所なんてない」
「サクラッ！」
「……これは事実。古龍級でなければこの絶対条件は決して破ってはならない。これは大陸中の大小の村や街全てに共通する事」

サクラは間違った事は言っていない。ただ極論であり言い方が悪いだけなのだ。
ハンターチームは最大で四人までしか組む事はできない。これはココット村の英雄が五人で戦いを行った際に彼の婚約者が死亡した事により、以降四人以上では死者が出るというジンクスと英雄に対しての敬意から決まった暗黙の絶対ルール。これを破る事はハンターを愚弄する事と同じだ。
イージス村にいるハンターはクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人。そして四人はすでにチームを組んでいる。ここにツバメが加わるとすれば、誰かが弾き出される事になる。サクラはそう言っているのだ。
何だかんだ言っても、彼女だってこのチームの事が好きなのだ。ここから、誰か一人でも欠ける事を嫌がっている。先程の発言はそこから来る想いが込められた彼女の本心の表れであった。
サクラの言葉に、クリュウだけでなくフィーリアとシルフィードも黙ってしまった。ハンターではないがイージス村のギルド支部のような事を行っているエレナもまた安易な発言はできないと黙っている。
そんな中、ツバメは「何じゃそんな事か」と軽く笑い飛ばした。その反応に、サクラの隻眼が鋭くなる。
「……ツバメ、これは笑い事じゃない」
「すまんすまん。じゃが、気にするでない。ワシは基本的にお主らのチームに入ろうなどろは考えておらんよ」
その言葉に五人は一斉に首を傾げた。そんな皆の反応に、ツバメは苦笑しながら答える。
「ワシはソロでこの村に腰を据えるつもりじゃ。例えばサクラが単独依頼で留守の時、チームの補充として参加する事はあっても、四人が常駐している時には加わるつもりはない。お主達の絆を壊したくはないからのぉ」
「ツバメ……」
「それに、ワシにはラミィ達と組んでいた期間以外では常に背を預け

ていた相棒がおるしの」
「相棒？」
「――主殿ぉッ！」
　突然の声に振り返ると、マフモフシリーズを纏った若葉色のアイルーが大量の握り飯やサンドイッチが載った大きなトレイを掲げながらトテトテと走って来た。それを見て、ツバメが「おぉ」と声を漏らす。
「アイルー？」
「まったくッ！　オイラのいない間にどこに行ってたニャッ！」
「すまんすまん。ちょっとクリュウ達と一緒にゲリョス退治をな」
「ニャッ!?　だ、大丈夫かニャッ!?　怪我はないニャッ!?」
「平気じゃ。ゲリョス如きワシの敵ではないぞ」
　かなり苦戦していた事実は、今ここでは言わない方が良さそうだ。そう結論付け、クリュウは苦笑を浮かべた。
　アイルーは「本当かニャ～？」と疑うような視線でツバメを下から上までじっくり観察。そして怪我はないと結論付けると納得したようにうなずいた。
「無事で何よりニャ。だけど、今度はオイラを連れてってほしいのニャッ！　主殿の背中はオイラしか守れないのニャッ！」
「すまんすまん。あとでマタタビ一個あげるから勘弁じゃ」
「オイラは純粋に主殿の身を案じてるのニャッ！　その純情を物で買収するなんてひどいニャッ！」
「マタタビ三個でどうじゃ？」
「……オイラは主殿の忠実な僕（しもべ）なのニャ。主殿の命令は絶対ニャ」
　マタタビ三個、金額にして４２ｚで買収されたアイルー。ツバメは呆れたようにため息を吐きながらすでにマタタビをものすごく楽しみにしてスキップしているアイルーを見詰める。
「紹介が遅れたの。ワシのオトモアイルーのオリガミじゃ。サクラとクリュウには以前話した事があったと思うが」
　そういえば、以前アルフレアに行った時にそんな話をした。あの時

言っていた生物兵器を生み出したと言われるアイルーはどうやらこの子らしい――シルフィードとどちらが兵器を生み出す腕を持っているのか気になったのは内緒だ。
「お初にお目にかかるニャ。オイラはオリガミ。主殿に命を救われ、それ以来忠義を尽くす義に生きるアイルーニャ」
「命を救われた？」
「気にするでない。いつもの誇張した発言じゃ」
「誇張なんかじゃないニャ！　主殿はオイラが子供の頃に荒れる川に流された時に命懸けで助けてくれた命の恩人ニャッ！」
　オリガミは本当に嬉しそうな笑みを浮かべながらウキウキと自分とツバメの絆を話しまくる。クリュウ達はその話に感動しながら聞き入っているが、ツバメは顔を真っ赤にして「公共の往来でワシを羞恥死させる気かッ！」と激怒する。
「それより、お主も何か仕事中ではないのか？」
　とにかく話題を変えようとを顔を赤らめたまま言うツバメの言葉に、オリガミは思い出したようにピンッとヒゲを伸ばした。
「そうだったニャッ！　急ぎましょう姉御！」
「誰が姉御よ！　とにかく、私とオリガミは急いでるからここで。じゃあね」
　そう言い残し「ほらさっさと走るッ！」と怒鳴りながら先を走るエレナの言葉に「はいニャ～ッ！」と答えながらオリガミは必死になって追いかける。そんな二人を見て、ツバメは心底驚いたような顔を浮かべていた。
「一体何がどうなっておるんじゃ？　ワシがいない間に何かあったのじゃろうか」
　ツバメやフィーリアが去って行くエレナとオリガミの背中を見詰めている中、クリュウはシルフィードから簡単に事の経緯を聞いていた。
「川が壊れた？」
「そうだ。村の生活用水は全てあの丘の上にある湖から供給されているだろ？　その水を流す川が決壊したそうだ。今はその修復作業が

急ピッチで行われているらしい」
「僕達も手伝った方がいいかな？」
「いや、村の事は村人に任せるべきだろう。それより君達もゲリョス相手とはいえ二頭同時討伐だ。疲れただろ？　早く家に帰ってゆっくりしよう」
「その前に今回の狩りの報告を村長にしなくちゃね。ゲリョスは討伐、ゲリョス亜種は捕獲ってね」
「捕獲？　ではもうギルドに引き渡したのか？」
「うん。セレス密林管轄のアイルーが近くのギルド支部に捕獲引取り要請をしてくれてね。その引渡しなんかで帰るがの遅くなったんだ。本当なら昼前には帰って来れたはずなんだけどね」
「そうか。ならばさっさと用事を済ませて家で休むといい。昨日の雨で体力も激しく消耗しているだろうしな」
「そうだね。ちょっと疲れちゃったし……って、サクラ？　何してるの？」
　サクラはクリュウの左腕をくんくんと匂いを嗅いでいる。そして何かに気づいたような表情を浮かべると、責めているような、心配しているような何とも言えない瞳でジッとクリュウを見詰める。
「な、何？」
「……クリュウ、怪我してる」
「何？　そうなのか？」
　サクラの発言に驚くシルフィード。一方のクリュウは「べ、別に怪我なんてしてないよぉ～」と笑って誤魔化すが、サクラの隻眼は真剣。一切の冗談は通じなかった。
「……まぁ、大した事じゃないんだけどね」
「怪我しているなら尚更早く家に戻って休め」
「う、うん。そうする。でもサクラよくわかったね」
「……微かにだけど、薬草の匂いがする」
「……サクラにバレないようにわざわざ薬草を剥がした上に念には念を入れて水で洗い流したのになぁ」
「……無駄な努力。私の鼻は例え消臭玉を使っても薬草の匂いを嗅ぎ

分ける事ができる」
「もはやそれは人間業じゃないよね？　それ」
やっぱりサクラ相手ではどんな常識も通用しないのだを改めて理解し、クリュウは苦笑した。
サクラは「……手当てしてあげる。来て」と言ってクリュウの右腕にしがみ付くとグイグイと引っ張り始める。もちろん、そんな横暴に対してフィーリアは黙っていない。
「クリュウ様は怪我されているんですよ!?　迷惑を掛けないでください！」
「……怪我を未然に防げなかった貴様に言われる筋合いはない」
その一撃で、フィーリアは押し黙ってしまった。それを言われちゃ返す言葉もないのだ。悔しげにサクラを睨み、申し訳なさそうな瞳でクリュウを見詰める。それを何度か繰り返すと、しょんぼりと落ち込んでしまった。
「べ、別にフィーリアの責任じゃないよ。これは僕のミスなんだからさ」
そう言ってクリュウはサクラから離れるとフィーリアに駆け寄って必死に彼女を励ますが、クリュウが怪我を負った事実は変わらない。しかし、彼の言葉にフィーリアは少しずつ元気を取り戻していった。
一方、クリュウに見捨てられる形になったサクラは不機嫌になっていた。こっちはクリュウと会うのは一週間近くぶりなのだ。なのに自分よりも長い時間、それも一緒に狩りをしていたフィーリアに対して嫉妬心を抱くのは当然の事だ。そして、自分なら決してクリュウにそんな無理をさせない。そんな強い想いもあった。
ぶすっとしていると、そんな彼女の頭の上にポンと手が乗っけられた。視線を上げると、そこには小さく苦笑を浮かべたシルフィードが立っていた。
「そうふて腐れるな。今焦らなくてもこれから時間はたっぷりある。ゆっくりと甘えればいいだろう？」
シルフィードの言葉に、サクラはプイッとそっぽを向ける。そんな

子供っぽい仕草をするサクラに、シルフィードは苦笑しながら優しくその頭を撫でる。
「まったく、君は大人なんだか子供なんだからわからないな」
「……うるさい、黙れ着痩せ女」
「しばくぞ」
珍しくバチバチと火花を散らし出すシルフィードとサクラ。クリュウはそんな二人の仲裁にも入ったりと右へ左への大騒ぎ。そんなある意味幸せな苦労をしているクリュウを見て、ツバメは「大変じゃのぉ」と小さく苦笑を浮かべた。
その夜、村では川の修復作業終了、ゲリョス討伐、ツバメの歓迎を含んだ宴が催された。様々な祝いが混ざってはいるが、一番はやはり新しく村の仲間に加わる事になったツバメの歓迎祝いだ。
その外見の良さと真面目な性格からすぐに村人とも打ち解けられたツバメ。村の子供達にもすっかり懐かれてしまい、今は子供達と一緒にテーブルゲームに勤しんでいる。
そんなツバメを遠くから一瞥し、クリュウはフゥとため息を漏らした。
「どうされましたクリュウ様？」
隣に立つフィーリアが笑顔で訊いて来た。今は二人とも私服に戻っており、クリュウはTシャツにズボンというラフな格好。フィーリアもまたTシャツの上にケルビの皮でできた着心地が良くて保温性も優れたジャケットを羽織り、あまり短過ぎないスカートという出で立ちだ。
「いや、ツバメもすっかり村の住人になったなぁと思ってさ」
「そうですね。ツバメ様は本当に社交性豊かな方ですからね。少しはサクラ様に分けてあげたいくらいです」
「……余計なお世話」
突然の声にフィーリアはビクッと体を震わせた。振り返ると、そこにはサクラが立っていた。以前までは適当な服を着ていたのだが、とある出来事からオシャレに目覚めた彼女は私服姿を一変させた。様々な服を着るようになったが、比較的良く着るのはこのような異国

の服であった。彼女曰く自分の出身の大陸での民族衣装。上下一体化しており、ボタンで留めるのではなく腰の帯で全体を引き締めるように留めるデザインで、純白の生地には彼女の名前を同じ桜の花が柄として描かれている。髪型も服装に合わせて長い黒髪をポニーテールで結っており、白いうなじが眩しい。
「うわぁ、かわいい服ですねぇ～」
フィーリアは感動したようにパァっと笑顔を華やかせ、キラキラとした瞳でサクラの着ている服――着物を見詰める。その視線に対し、サクラは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。
「……この前ドンドルマの市場で仕入れた新作」
「すごいかわいいです！　いいなぁ～」
「……絶対に貸さないから」
「わ、わかってますよ～……」
落ち込むフィーリアに、サクラは完全勝利という感じの表情を浮かべる。
サクラは何着かこのような着物を持っているが、決して誰にも貸そうとはしなかった。厳重に保管しており、彼女曰く「……勝手に開けたら爆発するから」だそうだ。そもそも帯びの巻き方とか着方とか普通の服とは桁違いに難しいのだ。サクラは簡単にそれをするが、他の人間なら大変な事になるだろう。
「……クリュウ、どう？」
頬を赤らめ、何かを期待するように訴えるサクラの瞳に、クリュウは頬を赤らめながら半歩引いた。今まで何着か彼女の着物姿は見せてもらった事はあったが、今回のそれはその中でも一、二を争うくらいに、かわいかった。
「う、うん。似合ってると思うよ」
「……良かった。クリュウに喜んでもらえて」
「サクラ……」
「……押し倒したくなった？」
「するかッ！」
クリュウのツッコミに対し、サクラは至極不満そうな表情を浮かべ

る。何というか、彼女は本当に目指す方向が間違っているとしか言いようがないほどぶっ飛んでいる。天才と何とやらは紙一重と言うが、彼女にはその言葉がすごく当てはまると思う。
「まったく、君達は一体何をしているんだ……」
その呆れたような声に振り返ると、そこには声と同じく呆れたような表情を浮かべたシルフィードが立っていた。クリュウと同じくTシャツにズボンというラフな出で立ちだが、着痩せするタイプの彼女の胸は鎧と言う圧迫から解放されてその大きさを存分に周りに放っていた。
「うん？　皆、なぜ私の胸を見ているのだ……？」
不思議そうに首を傾げるシルフィードを、フィーリアとサクラはまるで親の仇を見るような目で睨みつけていた――主にその巨大な胸を。
「わ、私だって寄せてあげれば……ッ！」
「……胸なんて脂肪の塊。騙されてはダメ」
「何の話だッ!?」
シルフィードは顔を真っ赤にすると慌てて胸を隠す。彼女からしてみれば肩が凝るし鎧を作る時に特注しないといけないし、何よりハンターという職業には無縁のもの、むしろ邪魔な存在だ。だが、それは胸の大きな者の贅沢な悩みであるという事に変わりはない。その逆の勢力から見れば激怒するような内容だ。
ギャーギャーと騒ぐ乙女三人に対し、クリュウは疲れたように大きなため息を吐いた。だが、二人に責め立てられて激怒しているシルフィードの胸をチラリと見ては、顔を真っ赤にしている。この点に関しては彼だって歳相応の男の子なのだ。
「……胸なんて脂肪の塊。騙されてはダメ」
「うわぁッ!?」
完全に油断していた瞬間に突然背後から声を掛けられ、クリュウは心臓が飛び出すかと思うくらい驚いた。バッと振り向くと、そこにはかな～り不機嫌そうな表情を浮かべたサクラが立っていた。
「さ、サクラ……ッ!?」

「……でも、クリュウはそんな脂肪が満載な胸の方が好みなの？」
「べ、別に僕は……ッ」
「そうなんですかクリュウ様ッ!?」
「ふぃ、フィーリアまで……ッ。別にそんな事ないって！　胸は小さい方が――」
――なぜだか、その先は言ってはいけないような気がした。遠くからじっとシルフィードがとても悲しげな瞳で見詰めているのを目にし、クリュウは硬直する。
「ち、小さい方が好みなんですかッ!?」
「……クリュウ？」
改めて言っておくが、クリュウは女性を胸の大きさで判断するような人間ではない。そりゃ大きい方が興味を引くし、気になるのは男として当然の反応だろう。でも彼は人を外見では判断しない。内面をしっかりと見極める人間なのだ。
そんな彼に対して、乙女達の要求はかなり酷なものと言えよう。三人の必死の視線の集中砲火を浴びるクリュウ。もう何が何だかわからなくなり、パニックに陥りながら叫んだ。
「か、完全なペッタンコがいいッ！」
『……』
クリュウ、死す。色々な意味で。
「お主は一体何を叫んでおるんじゃ？」
そこに現れたのはようやく村人の包囲網から脱出できたツバメ。サクラと同じような着物姿だ。一応着物には男物と女物があるのだが、彼の場合どっちにしろ着物美人に見えてしまうから不思議だ。
クリュウの爆弾発言に対し大きい胸を持つシルフィードと、決して小さくはないがペッタンコという程ではないフィーリアとサクラは茫然自失のままそんなツバメを見た――特に、その平原のようにペッタンコな胸を。
「そ、そんな……」
「ぺ、ペッタンコだと……ッ」
「……クリュウは、ツバメが好みって事？」

「一体何の話じゃ？」
全く話が見えないツバメは首を傾げながらクリュウに問う、だがクリュウもまたパニック状態とはいえ叫んでしまった大失言に対し顔を真っ赤にして慌てまくっているのでそれどころではない。
「クリュウ？　何を赤くなって騒いでおるんじゃ？」
「ち、違うんだッ！　別に僕はツバメみたいな胸の子が好きって訳じゃなくて……ッ」
そこまで言ってクリュウはツバメに振り返った。そして硬直する。その視線は着物姿のツバメのペッタンコな胸一点に注がれていた。そして、
「あ、うぅ……」
「待てぇッ！　今お主はワシの胸を見て顔を赤らめたじゃろッ!?　どういう意味じゃそれはッ！」
「ひ、ひどいですツバメ様ッ！　メインキャラでもないのにクリュウ様の心を鷲掴みにするなんて！」
「どういう意味じゃそれはッ!?　あと今の発言さりげなくひどいぞッ！」
「……ツバメ、許さない」
「落ち着けサクラッ！　お主はまず落ち着くのが最優先事項じゃッ！
太刀を一体どこから出したかなど無粋な事は問わぬから、まずはその太刀で一体何をしようとしておるのかだけ訊かせてくれッ！」
「ツバメ、と言ったか？　ちょっと話があるから人目に付かない場所まで来てくれないか？　なぁに心配するな。痛いのは一瞬だけだから」
「何をする気じゃッ!?　ワシを悲鳴すらも届かない林の奥深くにまで連れて行って一体何をするつもりなのじゃッ!?」
狭まる嫉妬に狂う恋姫三人の包囲網に、ツバメは頭を抱えた。せっかく平穏を求めてこのイージス村まで来たのに、これではまるで逆の展開だ。
「うぬぅ、この村に来たのは間違いだったのかぁ……？」
苦悩するツバメ。そんな彼の肩に、ポンと手が置かれた。顔を上げ

ると、そこにはクリュウが立っていた。口元に小さな笑みを浮かべているが、その瞳はどこか悲しげだ。
「居場所ってのは誰かに決められるものじゃない。自分が安堵できる場所を、自分で選んでこそ居場所になる。ここがツバメにとって本当の居場所なのかはわからない。でも、僕はツバメにずっとここにいてほしいと思うし、ここが君の居場所だって信じてる」
「クリュウ……」
「だから、間違いだったなんて悲しい事言わないでよ」
「す、すまん……」
クリュウの言葉にツバメは申し訳ない気持ちでいっぱいになった。彼や村人皆は自分の為にこんなにも盛大に歓迎してくれている。その気持ちに反する行いなど、決してしてはいけないのだ。
落ち込むツバメの手を、クリュウはそっと握り締めた。驚いて下げていた顔を上げると、そこには優しげな微笑を浮かべたクリュウがいた。
「クリュウ……」
「僕はツバメが一緒にいてくれた方が嬉しいよ」
「う、うむ。ワシも同じ気持ちじゃ」
「だったらさ――」
一呼吸置いて、クリュウは無邪気な、そして慈愛たっぷりな満面の笑みを浮かべた。
「――ずっと僕の傍にいてよ」
「……クリュウ」
互いの瞳に互いの姿を映すように、クリュウとツバメは頬を赤らめながらじっと見詰め合う。周りの喧騒などを無視して、心臓の音が聞こえてしまうのではないかというくらい、二人の鼓動は高鳴る。
美しい星々が煌く夜空の下、二人の距離はグッと縮まる。それはまさに互いの息が届いてしまう程の……
「何してんのよバカクリュウッ！」
ある意味間一髪という所で月をバックにしてエレナが放ったドロップキックがクリュウの顔面にクリーンヒット。クリュウは「ぼべ

らぁッ!?」と奇妙な悲鳴を上げて吹き飛んだ――だが、飛んで行った彼を追う恋姫は誰一人いなかった。
「く、クリュウッ!?」
　慌ててツバメが駆け寄ろうとすると、その前にサクラが立ち塞がった。邪魔をされ文句を言おうと彼女の瞳を見た時、ツバメの顔からサァッと血の気が消え失せた――サクラの隻眼が、戦闘時のように鋭くなっていた。
「さ、サクラ？」
「……友人としてのせめてもの情け。遺言は聞いてあげる」
「おかしいじゃろッ!?　なぜ情けを掛けられても死ぬ事が前提なのじゃッ!?」
「情けなんて無用ですよ～。生まれて来た事を来世でも後悔するくらい徹底的にやりましょ～」
「理不尽にも程があるじゃろうがッ！　ワシが一体何をしたと言うのじゃッ!?　それとお主キャラ何か変わっておらんかッ!?」
「まったく、公共の往来で騒ぐなといつも言っているだろう。ここは場所が悪い、ちょっと話があるから人目に付かない場所まで来てくれないか？　なぁに心配するな。一瞬で片がつくから」
「じゃからお主は何をする気なのじゃッ!?　ワシをそれこそ人一人埋めても気づかれないような林の奥深くにまで連れて行って一体何をするつもりなのじゃッ!?」
　完全に正気の沙汰を失っている恋姫達。無表情、笑顔、平静とそれぞれ表情こそはいつもと全く変わらないが、全員瞳が怒り狂う火竜リオレウスも尻尾を巻いて逃げ出すのではないかというくらいに血走っている。
　そんな中、表情も瞳も激怒一色のエレナは三人のまどろっこしいやり方にもブチギレていた。
「もう面倒よッ！　とりあえずこいつをぶっ殺してから話を聞きましょうッ！」
「無理じゃッ！　死んでは何も話す事はできんッ！　死人に口なしじゃぁッ！」

四人の怒り狂う恋姫達の猛攻に、ツバメはもはや完全に包囲された。頼みの綱はクリュウだけ、一縷の望みを掛けて彼の方へ振り返る。そこに広がっていたのは――

「お兄ちゃんは私だけのお兄ちゃんだからね。フフフフフフフフフ……」

淡い桃色のツインテールをした小さな女の子がこれまた血走った目で気絶しているクリュウの襟首を掴んで引きずっていく瞬間であった。

この瞬間、全ての希望を失ったツバメはこう思った。

――あ、ワシ死んだな――

刹那、イージス村に珍しくクリュウ以外の悲鳴が轟いたのであった。

その後、満身創痍のツバメはクリュウの家に招き入れられる事になった。ハンターは一ヶ所に集中していた方が何かと便利という村長の計らいだったのだが、これが新たな火種となる事になる。

フィーリア達女子の部屋が密集する二階にツバメの部屋を用意したら、ツバメが「ワシは男じゃッ！　クリュウの隣の部屋が空いておろうッ！　そこが良いッ！」などと叫び、フィーリア達と大ゲンカ。結局はツバメが最後まで初志貫徹した為に彼の部屋はクリュウの隣の部屋となった。

だが、しばらくの間はツバメとフィーリア達の間にものすご～く気まずい雰囲気が流れ、クリュウは心休まるはずの家で心労を重ねた。それが原因の一つになったのかは不明だが、ゲリョス討伐を終えた二日後、彼はひどい風邪で寝込んでしまうのであった。

第１０７話　燃ゆる都と交差する二つの物語

それはまさに青天の霹靂（へきれき）であった。

まだ夜は明け切っていない空は朝焼けと星空が入れ替わる直前のわずかな時を刻んでいる。日が上がれば朝が来て一日が始まる。この世界が生まれて以来何万回、何千万、何億。数える事でもできないだけの回数繰り返してきた《いつもの事》だ。

いつもと変わらない日常の始まりであり、これからもずっとそれが続く。誰もがそんな当然の事を疑いもせずに受け入れ、日々を過ごしている。

だが、人々は知らない。その当然というのが、何万分の一、何億分の一の割合が複雑に組み合わさって誕生している奇跡だという事に。そしてその奇跡は、ほんの少し歯車が狂っただけでも非日常へと変わり果てる。

それが、世界の運命であった……

中継都市ヴィルマ。大都市と大都市を結ぶ交易ルートの中間地点にある中規模都市。様々な物がここを経由し、大陸を縦横断して東西南北様々な街や村へと物資が送られる。ここは交通の要所であり、大陸の物流の一角を担う重要拠点だ。

朝になればいつもと変わらぬ様々な人や物が行き交う賑やかな街の一日が始まる。誰もがそう信じ、疑う事なく朝を待っていた。

――だが、彼らに降り注いだの恵みの光ではなく、災厄の業火だった。

わずか数分で街は一面炎に包まれた。街の各地で爆発が起き、火柱がようやく明るくなり始めた空へ立ち上り、黒煙が空を黒く染め上げていく。

街は一瞬で地獄絵図と化した。

建物が崩れ、道は砕け、それらは無機質な瓦礫（がれき）へと変貌していく。悲鳴や怒号が飛び交い、そして爆音の中に消える。

親からはぐれた子供の声が響く。だが、誰もその子に手を差し伸べない。人々は狂ったように逃げまどい、子供などには見向きもしな

い。
逃げる人々の上に建物が崩れ、下敷きになる。炎が荒れ狂って逃げまどう人々に襲いかかる。
一面の炎の中、逃げ惑う民衆を見下ろす《王》の姿があった。王は無様に逃げ惑う人々を鬱陶しげに見つめ、その巨大な翼を羽ばたかせる。風に乗り、翼から放たれたのは無数の炎鱗。一面を覆う炎色の煌めきはまるで炎の雪を思わせる。一見すると、それはとても美しく幻想的な光景だ。だが次の瞬間、それは再び地獄となる。
王はその立派な牙を打ち鳴らした。その瞬間に炸裂した火花が炎の雪に触れた途端、激しい爆発が吹き荒れた。それらは無数に辺り一帯に散らばっている炎鱗に次々に誘爆し、一瞬にして辺り一面を吹き飛ばす大爆発となる。
激しい爆音と爆風、爆炎が吹き荒れ、原型を留めていた建物を粉砕し、瓦礫を粉々にし、焼き尽くし、そこにいた人々を巻き込む。
それは一瞬の事であった。視界が晴れた時には王を中心に全てがなくなっていた。もはやそこに街の一部があったとは思えないほど、一面の焼け野原。その中心に佇む王は、その圧倒的な力を見せつけるかのように静かに君臨していた。
そして、自分こそこの世界の頂点だと言いたげに己が声を轟かせる。
「グオオオオオオオオオッ！」
中継都市ヴィルマに炎王龍テオ・テスカトルが現れ街が壊滅的打撃を受けたという知らせがドンドルマに伝わったのは、それからしばらく経った頃の事であった。
大都市ドンドルマ。ここはハンターの都であり、この大陸の中枢とも言っていい独立都市である。シュレイド王国が分裂する以前からハンターズギルドは王国と敵対しながらこのドンドルマを拠点に様々な街や村に支部を建設してその勢力を拡大していた。シュレイド王国が東西に分裂してからは、ハンターズギルドに対抗できる勢力はごくわずかになった。
そんな世界中に散っているハンターを統括するのが、ドンドルマに

あるハンターズギルド中央本部である。ここでは支部や古龍観測所など様々な場所から情報を集め、その時その時で様々な決断をする場所。そして今、その会議室では今まさにある決定の為に会議が紛糾していた。
「今すぐにでも支援隊を出すべきですッ！」
テーブルを叩きながら力説するのは、この幹部会会議で唯一幹部ではないのに参加を許されているギルド嬢を束ねるギルド嬢長、ライザ・フリーシアであった。
ライザは苛立ちながら今まで何度言ったかわからない言葉を再び繰り返す。だが、自分を見詰める他の幹部達の視線は冷たい。頭に血が軽く上っているライザを、隣にいた初老の幹部がなだめる。
「落ち着きなさいライザちゃん。ワシらは何も支援隊を出さんと言っている訳ではない。ただ早急な出撃は少し待ってくれと言っているんじゃ」
いつもは比較的味方でいてくれるのに、今日に限ってこの幹部はライザの意見には反対していた。いつもは味方なのに、という事実がさらにライザを苛立たせる。
「何をぐずぐずしている必要があるのですかッ！　今この間にもヴィルマの民衆は苦しんでいるッ！　ヴィルマは我がドンドルマにおいても物流の大拠点ッ！　手を差し伸べるのに何の不満もないでしょうッ!?」
「やかましい小娘じゃ」
そう言ったのはライザの対面に座る白髪一色の老人。この幹部会で実質大長老に続くナンバー2の男だ。そして、ことごとくライザの意見に反対を唱える彼女が最も嫌う存在だ。
「良いか小娘。我がドンドルマは一ヶ月前に火竜の番に襲われて被害を受けたカティールに支援隊を送っておる。その時、貯蓄していた支援物資のほぼ全てを使い切ってしまったのじゃ。今現在、支援物資は足りない。それを今から集めて送るから時間が掛かると言っておるんじゃ。そんな事もわからんのか？」
ライザを常識を知らない小娘だと思っている彼らしい言い方だ。

だが、言い方こそひどいがその内容は納得できるものだ。支援物資が足りないから支援隊を送るのを少し遅らせる。それは間違いではない。だが、ライザは納得しない。
「わずか量でもすぐに送るべきですッ！　水と携帯食料と医療品、最低限これだけでも今すぐに送るべきですッ！　災害において水と食料、そして怪我人に必要な医療品は迅速な対応を迫られますッ！」
「じゃから、何度も言っておるだろう？　その物資が足りないと言っているんじゃ」
「だから少なくてもいいから早急に送れって言ってるんでしょッ!?」
いつもの柔らかな笑顔が消え、憤怒で怒鳴り散らすライザの言葉を幹部達はまるで聞き分けのない子供を見るような目で見詰めて取り合おうとしない。結局、幹部ではないライザの意見など参考にもしないという事だ。例え幹部だったとしても、彼女が危険人物だと思われている以上味方は少ないだろう。
ライザは聞き分けのない棺桶に片足を突っ込んだ老いぼれどもを睨みつけながら、憎々しげに言葉を吐き出す。
「そんなに、ヴィルマが滅びる事をお望みですか？」
ドンドルマがヴィルマの存在を多少なりとも快くは思ってはいない事はわかっていた。ヴィルマは物流の大拠点である為、ドンドルマに入る物資にもヴィルマ経由は少なくない。だがヴィルマはそこで少ないながらも物資に対して関税を義務づけている。これが厄介なのだ。
ドンドルマはヴィルマ経由の物資を大量に購入している。わずかな関税も積み重ねれば大金の流出になる。ギルド幹部はこの関税に対して再三、再四ヴィルマに撤廃を要求したが、ヴィルマは交易都市の為にこれを拒否。表向きには良好な関係の両者だが、その裏では対立も激しかった。
今回の災害でヴィルマが崩壊すれば物流の流れは変化する。そうなればドンドルマに入る物資に関税が掛かる事もなく、ギルドとしては面倒なヴィルマが消えた上に関税まで撤廃される。まさに万々歳な状態だ。

「ライザちゃん、ワシらは別にそんな事を思ってはおらんよ」
隣の優しいおじいちゃんという感じの幹部の言葉に、ライザは少しだけ冷静を取り戻す。例えここにいる幹部連中全員がそう思っていたとしても、この男だけは違う。それだけはわかっていた。伊達に何年も一緒に連携して幹部達と戦って来た訳ではない。
「だったらどうして早急な支援隊の出撃を反対するのですか？」
ライザの問いに対し、初老の男性は小さく首を振った。
「ワシだって送れるものなら送りたいのじゃ。しかし、相手はあの炎王龍テオ・テスカトル。情報によると上位クラスに位置づけられるとはいえ、並みのハンターじゃ返り討ちにされる。そんな危険な場所に裸の支援隊を送りつけるのは自殺行為に等しい。ワシらは支援隊の命も預かっている。軽率な判断はできんのじゃ」
初老の男の諭すような言い方に対し、ライザはさらに冷静になった。確かに、テオ・テスカトル相手に支援隊を送っても犠牲が増えるだけだ。まずはテオ・テスカトルを倒す、もしくは撃退する事が優先される。
「あの街には《灰狼》がいる。それにハンターの数も他の街に比べればいるだろう？　少しの間なら堪えられる。もしかしたら撃退するかもしれん。今は時が来るのを待つだけだ」
当然な事を言わせるなと言いたげな対面の男の言葉に、ライザは再び怒りの炎を燃え上がらせる。
彼の言う《灰狼》とは一人のハンターを指し示している。実力があり、以前から何度もギルドハンターに入隊する事を勧めてきた男だ。だが、例え彼がいたとしてもテオ・テスカトル相手は厳しい。それだけ古龍とは恐ろしい存在なのだ。
ライザはやってられないと言いたげにテーブルをバンッと叩いた。その激しい音に幹部達が驚きどよめく。そんな使えないクソジジィ達を睨みつけ、ライザは「失礼しますッ」と踵を返す。
「ら、ライザちゃんッ！　どこへ行くのじゃッ!?」
「ギルドが動かないなら私一人で動かします。精鋭のハンターを収集し、同時に支援隊も送ります。私の独断で」

「き、貴様ッ！　ワシらの決定を無視するのかッ！　それはギルドに対する反逆と取っても問題ないなッ!?」
「お好きにどうぞ。ただ、私はギルドの花であり看板であるギルド嬢を束ねるギルド嬢長だけではなく、数千人のギルド労働者を統括する労働組合の組員だという事もお忘れなく」
　ライザの言葉に男は憎々しげにライザを睨み付ける。その目には明確なる敵意が宿っていた。
「ワシらを脅すつもりか？」
「私にそんな大それた力はありませんよ。ただ私の知っている幹部の皆様の秘密を大々的に暴露し、労働組合を動かして幹部会の不信任案を強行採決。幹部会を解散させ、選挙し、ここにいる方々の半数ほどをただの老いぼれにするだけです」
　ライザと男との間で激しい睨み合いが起きる。そのままライザが部屋を飛び出していくような雰囲気の中、「ほっほっほ」と場の空気にあまりにも似つかない笑い声が響いた。皆の視線は、一斉に笑い声を上げた方へ向く。そこにいたのはキセルを吹かせた小さな老人であった。
「ギルドマスター……」
　誰かが言った。
　そう、彼こそのこのギルドの内政を統括するギルドの副長、ギルドマスターであった。
　ギルドマスターはしばし笑うと、うむうむと何度かうなずいた。
「……確かに、事は一刻を争うな。良し決めたッ。ライザ、すぐに精鋭のハンターを集めてヴィルマに派遣。同時に馬を使った迅速支援隊を編成して派遣。さらに竜車隊でドンドルマにある残存支援物資を全てヴィルマへと持っていけ」
　ギルドマスターの決断に、幹部達はどよめく。そんな中、ライザはパァッと笑顔を華やかせると「ありがとうございますッ！」と深々と頭を下げて部屋を飛び出した。
　まだどよめきが止まらない部屋の中、ギルドマスターの笑い声は良く響いた。

ギルド内部の通路を、ライザは全速力で翔けていた。その隣を会議室の前で控えていた彼女の腹心のギルド嬢がヒィヒィ言いながら走っている。
「ら、ライザさんッ！　それで精鋭のハンターは誰を収集するんですかッ!?　剣聖ソードラント？　黒き稲妻？　堕天使？　もしかして雷帝覇王？」
女性が上げたのはどれも称号持ちや準称号持ちと言ったハンターズギルドが誇る最強のハンター達ばかり。だがライザはそれら全てに首を横に振った。
「違うわ。第一、剣聖ソードラントに任せれば街が本当に崩壊しかねないし、残る面子はみんな別依頼で大陸中に散っている」
「じゃあ、一体誰を？」
「――そろそろ帰ってくる頃だから、あの子達に任せるわ」
「あの子達って……まさか――へぷぅッ!?」
走っている事を忘れていたのか、ギルド嬢はバランスを崩してその場に転倒した。そんな腹心を置いて、ライザは大衆酒場に向かって走り続ける。そんな彼女の中では、精鋭と呼ばれる二人の人物の顔が浮かんでいた。
後でまたあの老いぼれが文句を言うかもしれないが、知ったこっちゃない。いずれあいつらはこの手で引きずり下ろす。
大衆酒場に翔け戻ったまさにその時、酒場の中に二人の人物が入って来た。それを見て、ライザはニヤリと不敵な笑みを浮かべる。
そして、いつもの営業スマイルを顔に貼り付け、二人を向かえる。
「お帰りなさい。帰ってきて早々悪いけど古龍狩って来てくれないかしら？」
ギルドの裏手にある依頼を受けたハンターに貸し出される竜車が集結するターミナルに、一台の竜車が到着した。運転席に座って手綱を引いて竜車を引くアプトノスを停止させたのはリオソウルシリーズを纏った純白に近い銀色の長い髪をポニーテールに結った大人びた少女――シルフィード・エア。
「着いたぞ」

後ろに向かってシルフィードが言うと、ドアが開いて三人の少年少女が降りて来た。
「ふぅ、やっぱり火山は遠いねぇ」
うーんと体を伸ばしながらそう言ったのはレウスシリーズを纏った若葉色の髪の少年――クリュウ・ルナリーフ。
「そうですねぇ。ずっと座ってたので腰が痛いですよ」
苦笑しながら腰をとんとんと叩くのはリオハートシリーズを纏った長い金髪の少女――フィーリア・レヴェリ。
「……私はクリュウと一緒ならどんな苦も耐えられる」
恥ずかしげもなく堂々と言い張るのは凛シリーズを纏った長く艶やかな黒髪を流した少女――サクラ・ハルカゼ。
ドンドルマから北に離れた辺境の小さな村、イージス村に所属するハンター達である。それも四人中三人（女子陣のみ）が世間に差はあれど浸透した二つ名を持つ実力者達。桜花姫（フィーリア）、隻眼の人形姫（サクラ）、蒼銀の烈風（シルフィード）と言えばドンドルマでは実力はもちろんその美貌もあってそれなりに有名人だったりする。
一方、そんな凄腕の美少女達に囲まれるという羨ましい事この上ない状況にいるクリュウはというと、特に二つ名がある訳でもないし実力だって三人には劣る。この年でレウスシリーズを纏っているというのはすごい事なのだが、周りの面子が面子だけに霞んでしまう。ぶっちゃけ、かなり凡に位置する実力のハンターだ。
なぜこんなパッと見女の子にも見えなくもない感じの頼りなさげな少年にこれほどの猛者（おとめ）達が集まっているかと言うと――
「あぁッ！　どさくさに紛れて何クリュウ様の腕に抱きついてるんですかッ！　抜け駆けは禁止ですよサクラ様ッ！」
「……先に抜け駆けしたのは貴様。昨日の夜、寝ているクリュウの手を握って寝てたのは知っている。これで相子」
「ッ!?　き、気づいてたんですかッ!?」
「……ちなみにそれに気づいて貴様の手を踏みつけたのは私」
「どうりで朝から右手がヒリヒリすると思ったらサクラ様の仕業だったんですかッ!?」

「えっと、僕の知らない間に何があったの？」
「……」（↑クリュウの手を恋しげに見詰めるシルフィード）
――言わなくても、バレバレなくらいわかりやすい。ちなみにクリュウ本人はそんな三人の想いなど微塵も気づいていない史上最強の鈍感少年である。
そんないつも桃色の空気を放ちまくる一行は竜車を降り、依頼達成の報告をしに大衆酒場へと向かう。すると、前から別のハンターが二人こちらに向かって来た。酒場の裏手でありハンターがドンドルマを出立する際は必ず使う場所なので他のハンターとすれ違う事は別に珍しい事ではないのだが、クリュウは何となくその二人が気になった。銀色の鎧を着た青年と金色の鎧を着た少女。詳しい事はわからないが、どちらもリオレウス及びリオレイアの希少種から剥ぎ取れる素材を使った防具だという事はわかった。どちらも強力な飛竜であり、それの素材を使った防具を纏う二人はそれに見合っただけの実力を持つのだろう。それこそ、今自分の前を歩くシルフィードよりもずっと上の実力者だ。
強力であり色合い的にも目立つ防具だけではない。クリュウが気になったのはその纏う雰囲気であった。よくはわからないが、何となく纏う雰囲気が普通の人とは違う、そんな感じがしたのだ。
「アホか、さっさと買いに行け！」
「はいいいい！」
何やら話していた二人だったが、突然青年の方が怒鳴った。その怒気に少女は情けない声を上げて全速力で元来た道を駆けて行く。ケンカでもしたのだろうか？　一人残された青年の方は深いため息を漏らす。
――何だろう。どこか自分と同じ苦労を感じさせる背中であった。
「クリュウ？」
クリュウはシルフィードを追い抜いて小走りでその青年の方へ近づいた。ただ何となく、頭を抱えた青年が気になったのだ。もしかしたら気分でも悪いのかもしれない。そんな事を思いながらクリュウはそっと青年に近づく。

「あ、あの……」
「……早くしろあのボケがぁッ！」
「ひぃッ!?」
小さく声を掛けようとした途端、青年は突然烈火の如き怒号を放った。至近距離でそれを受ける形となったクリュウは驚いて尻餅を着いてしまった。その瞬間、クリュウの単独行動を見守っていた少女三人の群れの中から一人の夜叉が飛び出した。姿勢を低くして空気抵抗を減らしつつ、必要最低限な歩幅と歩数で一気に彼我の距離を音もなく詰め、背負っている鬼神斬破刀を引き抜き――
「……ハンターが人に武器使うのは御法度だぞ、気を付けろ」
「……ッ!?」
気配を消しつつ完全に死角を狙って回り込んでの奇襲だったはず。なのに、サクラが武器を引き抜く寸前で青年は振り向きざまに腰に下げた剥ぎ取りナイフを素早く引き抜いてサクラの喉元に突きつけた。
サクラは予想だにしていなかった反撃に眼帯に隠れていない右目を丸くする。だがしかしすぐにその瞳を刃物のように鋭くし、ナイフを突きつけてくる青年を睨み付ける。
「……御法度も何も関係無い。貴様はクリュウを驚かせた」
「クリュウ？」
サクラの言葉に青年は疑問符を浮かべながら少し前に立ち上がってサクラと青年の互いに人間離れしたやり取りを目を丸くして見詰めていたクリュウの方を見る。
クリュウはその視線に対し緊張したように縮こまると、すぐさま無礼極まりない突然の奇襲攻撃を敢行したサクラの方に慌てて駆け寄る。
「さ、サクラッ!?　いきなり何してるんだよッ!?」
「……クリュウを驚かせた。これはどんな罪よりも重い重罪、万死に値する」
「その程度でッ!?」
「……十分な理由」
「いやいやいや、絶対におかしいからねッ!?　今のは冗談抜きで下手

したら本当にこの人死んでたからねッ!?」
「……むしろ今生きている事に感謝してほしいくらい」
サクラはあまりにも常識知らずだとは前々から思ってはいたが、これでは完全に常識知らずではなく常識外れである。仲間が驚かされたら驚かした相手を斬り殺す。何という思考回路を持っているのだろうか。
クリュウは呆れつつもそんな無茶苦茶で迷惑極まりない行動を取ったサクラを叱りつける。すると、さすがのサクラも怒るクリュウ相手には反撃する気も力もないのか、むしろクリュウに怒られた事がものすごいダメージになったのか、しゅんとなって抜き掛けていた太刀から手を離す。それを見て、青年の方もゆっくりとナイフを下ろした。
サクラに納刀させてほっと一息ついたクリュウはすぐに青年の方に向き直って慌てて深々と頭を下げる。
「ほんっっっとうにすいませんッ！」
「……いや、なんか俺も君を驚かせたみたいで悪かった」
「……そうだ、貴様が悪い」
「さ、サクラァ！」
どうやらサクラ、クリュウを驚かせたという理由だけで怒っている訳ではないようだ。おそらく、今現在一番怒っているのはきっと彼のせいでクリュウに怒られたという理不尽な逆恨み。その証拠に、先程よりも瞳が鋭くなっている。
クリュウはそんなサクラを見て疲れたようにため息を漏らす。その時、今まで傍観の構えでいたフィーリアとシルフィードが歩み寄って来た。
「……クリュウ様、一体どうなされたのですか？」
「公共の往来で何をやってるのだお前達は……」
フィーリアは純粋にクリュウと、ついでにサクラの心配をしている様子。一方のシルフィードはだいたいの流れをわかっているのか、呆れつつも相変わらずな二人を見て苦笑していた。すると、ふと青年の方を向いたシルフィードと青年の目が合った。その瞬間、青年の目が

少しばかり大きく見開かれた。
「おっ、君は確か……剣聖ソードラントのシルフィードさん、だな？」
どうやら、青年はシルフィードの事を知っているらしい。そのやり取りを見て驚くクリュウであったが、すぐに苦笑を浮かべた。
自分と違い、シルフィードは実力もあり、容姿端麗、しかも色々と嫌な噂しか聞かないが最強と名高い狩猟集団である剣聖ソードラントに所属していた経歴もある彼女はそれなりに有名人だ。知っている人がいる事は別段驚く事でもないのだ。
一方、自分を知っている青年を見てシルフィードは頭に疑問符を浮かべていた。
「確かに私はシルフィードだが、どこかで貴方にお会いしたかな？」
「あぁいや、覚えてないなら構わない。それよりも何故この子達といる？　ソードラント見習いか？」
青年は純粋な疑問を訊いただけなのだろう。その言葉や瞳には皮肉を言うような悪意などは感じられなかった。しかし、見習いという扱いを受けて苦笑するクリュウに対し、サクラはひどくご機嫌な斜めになった様子。再び青年を鋭く睨みつけた。
一方のシルフィードもまたクリュウ達を見習い扱いされた事が気に入らなかったらしく、若干不機嫌そうな表情を浮かべて小さく首を横に振った。
「……私はあれから抜けたのだ。今は彼らがチームメイトさ」
「抜けた、ソードラントから？　へぇ、面白い事する子もいたもんだ」
それもまた純粋な感嘆の声であった。剣聖ソードラントはどれも性格破綻者という烙印を押された一般常識からかけ離れた存在だが、実力こそ大陸最強クラスの猛者達だ。その強さに憧れる者は今でも少なくはない。シルフィードはそんな者達が憧れている立場を自ら放棄した――彼らとは、根本的に理念や思想が合わなかったのだ。
そこで初めて今まで黙っていたクリュウが青年に声を掛けた。
「えっと……シルフィと知り合いなんですか？」
「シルフィ？　あぁシルフィードさんとか。まぁ一応顔見知りって事になるんだが、彼女は覚えていないらしい。まぁあの時と今とじゃ装

備してる防具も武器も違うからな、しゃあねぇさ」
　青年はそう言うと苦笑を浮かべた。クリュウはそんな彼の言葉の端々から彼がいい人だという事を感じ取る。一応、というフォローを入れておけば、顔を覚えていないシルフィードが負う罪悪感が軽減される。彼がそれを狙って言ったかどうかはわからないが、意識でも無意識でもそういう配慮ができる人は悪い人ではない。そう判断するとクリュウも少しだけ緊張を緩め、改めて青年の防具を見る。間近で見ると改めて彼の防具の質の高さに驚かされる。鍛冶職人ではない為具体的な性能はわからないが、ハンターだからこそ使われている素材のすごさは誰よりもわかる。
「へぇ～。という事はやっぱり凄いハンターなんですよね？　防具を見たら分かります」
　はにかみながら言うと、青年は「んな大層なもんでもないさ」と笑い飛ばす。自分の実力や武具を自慢するでもないその潔い姿は、改めてクリュウに好印象を与えた。一方の青年もシルフィードの方を一瞥し、クリュウの方に向き直る。
「ところで君達、名前は？　蒼銀の烈風がソードラントを捨ててチームに選んだんだ、興味深い」
　青年は純粋な好奇心でそう訊いて来た。クリュウは照れたように頬を掻きながら、小さくはにかむ。
「クリュウ、クリュウ・ルナリーフです。ほら、皆も！」
　そう名乗り、クリュウはすぐに振り返って皆にも促す。だから、クリュウが名乗った直後「ルナリーフ……ッ!?」と青年が彼の苗字の部分で驚いた事に気づかなかった。
　クリュウの言葉に対し、サクラは相変わらず敵意剥き出しで「……人に名乗らせるには先ず自分から名乗るべき」と冷たい言い方で返す。そんな無礼極まりないサクラにクリュウは「サクラァ……！」と叫びながら泣きそうになる。本当に、彼女の将来が心配で仕方がない。
　一方、青年の方はサクラの言葉に対しそれはそうだとばかりに小さく笑った。

「そうだ、確かに正論だ。俺はジン、ジン・フォルクス。見た通りしがないハンターだ。さて、俺は名乗った、君達の名を改めて訊こう」
青年――ジンは自らを名乗り終え、再度クリュウ達に向き直る。そんな彼の律儀な態度に対し、フィーリアは礼儀には礼儀で返すべく恭しく一礼する。
「私はフィーリア・レヴェリと言います。よろしくお願いします」
そう名乗り、フィーリアは屈託のない天使のような微笑を浮かべる。
人当たりのいいフィーリアが名乗ると、クリュウがサクラにも促す。サクラはものすごく不服そうではあったが、クリュウが言った事を無視する事もできず、渋々という感じで名乗る。
「……サクラ・ハルカゼ」
「成程な、《桜花姫》に《隻眼の人形姫》、シルフィードさんが選ぶだけの事はあるな」
シルフィードと同じく、フィーリアとサクラもこのドンドルマでは多少なりとも名が知られているだけあってジンも納得した様子。そんなやり取りを見て、自分だけが無名だなぁなんてちょっぴり傷つくクリュウ。
「つかぬことを訊くが、クリュウ君、君はどこ出身だ？」
「え？」
完全に自分は話題から外れていると思っていたクリュウは突然自分に話題が振られて驚いた。少し間を空けてから「えっと……」とどう説明したもんか考える。
「イージス村、って言っても分からないですよね。辺境の田舎です」
イージス村は本当に辺境にある小さな村だ。村長には悪いが、知名度はゼロに等しいしこれと言った特産物もない。どこにでもある、普通の片田舎の村だ。
「そうか？　旨い飯屋があると聞くが」
どうやら、辺境の小さな村でも誇れる有名なものがあったらしい。エレナの酒場は通の間では有名とは聞いていたが、こうして実際に知っている人を都会で発見すると驚きと共に嬉しさがこみ上げて来

る。別段、酒場に貢献した事はないが。
「……フィーリアちゃん、名字はレヴェリと言ったね？　今俺がイメージしてるハンターは、君の姉でいいのかな？」
「はい……多分そうです」
　今度はフィーリアに話が振られたのだが、どうやら彼女の姉の話らしい。以前、彼女には姉が二人いると聞いてはいたが、そのうちの一人の事らしい。しかしなぜジンは苦笑し、それに答えるフィーリアもまた何とも言えない苦笑を浮かべているのだろうか。
「……あの人の妹がこんなに礼儀正しい子とは、世界の神秘だな」
「あはははは……」
　フィーリアは何とも言えないような表情を浮かべながら乾いた笑い声を上げる。フィーリアの姉については存在自体は知ってはいるが詳しくは知らないが、話を聞く限りどうやら豪快な性格をしているらしい。そりゃ確かに豪快とは程遠い位置にいるフィーリアとの関連性に驚くのは当然だ。
「姉から常々話は聞いています、フォルクス様。貴方が――」
「ストップ。それは言わなくて結構だ、目立つのは嫌いでね」
　すっごいハンターに出会えて嬉しそうに話すフィーリアの言葉を、ジンはそう制した。止められたフィーリアはきょとんとしているが、本人が言う通り目立つのが嫌いなのだろう。という事は、武具の性能から見ても本当にすごい有名人なのだろうか。残念ながら片田舎のイージス村にはそんな情報はなかなか入らないからわからないが。
「へぇ、フィーリアってジンさんと知り合いなんだ！」
「いえ、姉の知り合いですよ」
　苦笑しながらフィーリアはそう言った。確かに、最初に互いに名を明かしていたのだから知り合いという事はないだろう。ただ、フィーリアの姉が知り合いという事で話だけは聞いていたという所か。世の中って、結構狭いのだと改めて思うクリュウであった。
　その時、今までずっと黙っていたサクラが輪の中に入って来た。相変わらずジンに対して敵意むき出しだが、その瞳が若干、若干だが、本当に若干だが尊敬の念が浮かんでいた。

「……それよりも、貴様よく私の攻撃を躱（かわ）したな」
サクラは本当に音もなく忍び寄った。だが、ジンはそれを最初から気づいていて反撃して来た。サクラとしてはそれがどうにも腑に落ちないのだろう――何か、負けた気がするから。
すると、ジンは呆れたように「あれだけ殺気が込められた攻撃なら誰でも気付くぞ」と苦言を呈す。
サクラはムッとしたように再び鬼神斬破刀の柄を握った。すると、ジンははぁと疲れたようなため息を零した。
――刹那、ジンの姿が消えた。違う、目では追えないような速度で加速して飛び出したのだ。サクラは突然のジンの動きに一瞬反応が遅れて慌てて鬼神斬破刀を抜こうとするが、刀身が五センチ程顔を出した頃にはすでにジンはサクラの背後に立っていた。
「……何お前も武器構えてんだ阿呆」
あまりの速さに目が追いつけず、四人が慌てて振り返った時にはジンはサクラの背後で弓を構える金色の防具を纏った少女の頭を思いっきりぶっ叩いていた。
「うみゃ!?　だってだって、凄いこの子ジン睨んでたし！」
「そんな理由で気配を殺して弓構えて近付いてきたのか？」
呆れるジンに対し、少女の方は涙目になりながらむぅと不満そうな表情を浮かべながら叩かれた頭を弓を持っていない方の手でさする。今、結構すごい音がしたが、これが二人のスキンシップだとしたらかなり荒々しい。
一方、そんな二人のやりとり以前にジンの常人を逸脱した身体能力を目の前で見た四人は目を丸くしていた。特にクリュウなんてシルフィードやサクラが相当な実力者だと思っていたから、それ以上の動きをする者を見た事がなかったのだ。逆に実力はあるが世の中には自分より強い者など大勢いると思っている女子陣も、さすがにジンの動きには驚きを隠せなかった。
振り返ったジンはそんな四人の反応を見て苦笑を浮かべる。
「いやすまない、こいつは一応俺の相棒（パートナー）のシィ・シャネルだ。ほら、ちゃんと挨拶する！」

ジンは少女――シィをそう紹介した。するとシィはプンスカと怒り始める。
「一応じゃないもん！　生まれてからずっと一緒だもん！」
「いいから挨拶、シルフィードさんは覚えているか？」
「……う～ん、誰？　痛ぁッ!?　挨拶？　うぅ……こんにちは」
調子に乗るシィにジンは容赦なく頭を何度もぶっ叩く。ヘルムを被っているからとはいえ、その光景は激しいとしか言いようがない。若干涙目になっているが、優秀な防具を被っていてもそこまで痛いのだろうか。
ジンに怒られる形でペコリと頭を垂れるシィ。するとクリュウは慌てて「あ、こちらこそ」と頭を下げる。そんなクリュウと自分の相棒を見比べてジンは小さくため息を漏らす。
「……で、買ってきたのか？」
ジンが問うと、シィはオフコースとばかりに元気満々にビシッと親指を立てる。
「勿論！　はいこれジンの分。元気ドリンコ少なくなってきてたでしょ？」
「……何故俺の持っている物はそんなに詳しい？」
呆れ半分、感心半分と言う感じでジンはつぶやく。どうやらシィという少女は自分の事は恐ろしくうっかりしているが、相棒のジンの事になると抜け目がないらしい。そういう点では若干であるがフィーリアに似ている。それ以外では年齢や髪の色、防具の系統も二人は良く似ていた――まぁ、性格はまるで逆だが。
「さてと、クリュウ君達もクエストか？」
いつもの事なのか、ジンは大して気にも留めずにふと思い出したように尋ねる。クリュウはそんなジンの問い掛けに対し苦笑しながら答える。
「いえ、僕達は村に帰るところですよ――帰ったらまた飛び蹴りが待ってますが」
ジンは彼の言う言葉の意味がわからずに首を傾げる――まぁ文字通りの意味なのだが。ここ最近はセレス密林も安定しており、こうし

て遠出して稼がないと生計が立てられないという状況にある。その為に村を空ける時間も多く、一人（最近はツバメやリリアと一緒だが）で留守番している身の彼女に寂しい思いをさせているという後ろめたさもある。本人に言えば有無を言わせぬ跳び蹴りで粉砕されるが、だからこそなるべく早く帰るようクリュウとしても努力はしているのだ。

ある意味で、蹴られるだけで済むなら仕方がない事だという諦めもある。

あははは と乾いた笑いをするクリュウに、ススッとサクラが忍び寄って彼の腕にしがみ付く。

「……大丈夫、私がクリュウの側にいる」

サクラＶＳエレナ。ある意味一番危険な頂上決戦の構図が浮かんだのか、クリュウは苦笑を浮かべる。すると、そんなサクラの暴挙にフィーリアが怒り出す。

「私だって！」

そう叫ぶと、フィーリアはクリュウのもう一方の手にギュッと抱き、クリュウを挟んでサクラとフィーリアの睨み合いが開戦される。そんな美少女二人にしがみ付かれているクリュウは恥ずかしさに頬を赤らめながらも状況が状況なだけに苦笑を浮かべるしかない――そして、さりげなくシルフィードは少しだけクリュウとの距離を詰めてみたり。

そんなクリュウ達を見てこのチームの根本的な問題であり、そして絶対に崩れる事のない強固な絆の正体に気づいたのだろう、ジンは苦笑しながらそんな彼らを見詰めている。

「それじゃあお別れだ、俺達はクエストなんでな」

そう言ってジンはゲートと呼ばれるターミナルの入口の方を指差した。クリュウは二人を何とか引き剥がし、「そうですか……」と別れを惜しむように言う。

「……また会えるといいですね」

「……そのままくたばればいい」

「さ、サクラァッ！」

どうやらサクラは完全にジンの事を敵視しているらしい。最初から最後までその言動は一切の容赦がない。ジンもそんなサクラの容赦のない言葉に苦笑する。
「悪いが俺はしぶといぞ、また暇があったらイージス村に行ってみるよ」
「そうですか、歓迎しますよ！」
「……村の前の階段から転げ落ちて死ねばいい」
結局、クリュウは最初から最後までジンに頭を下げっぱなしであった。ジンは気にした様子もなくそんなクリュウに労いの言葉を掛けつつ、「じゃあな」と踵を返した。
クリュウは離れていくジンとシィの姿が見えなくなるまでずっと手を振り続けた。二人の姿が見えなくなると、クリュウは振り上げていた手を下ろし、フィーリア達の方に振り返る。
「それじゃ、僕達もそろそろ行こうか」
「はいです」
「……（コクリ）」
「そうだな。久しぶりのドンドルマだ。どうだ？　報酬を受け取ったら久しぶりに一杯やるか？」
シルフィードはニヤリと笑いながらジョッキを持つようなジェスチャーをして三人に向ける。それを見てパァッとフィーリアが笑顔を華やかせる。
「そうですね。たまにはパァーッとやりましょうッ。ねぇクリュウ様」
フィーリアはパッと笑顔のままクリュウに振り返る。そんな彼女の笑顔を見ながら、クリュウは内心迷っていた。何せさっきまでなるべく早く村に帰ろうと思っていたばかりだ。リリアだって自分が帰って来るのを待っているだろうし、ツバメ一人にいつまでも負担を掛けさせる訳にもいかない。
だが、だからと言ってここ最近ずっと依頼をこなし続けていたので確かに息抜きらしい息抜きもしていなかった。ハンターという激しい生活の中では、オンオフをしっかり切り替えた方がいいというのは

わかっている。それに、フィーリアは無邪気に楽しそうにしているし、シルフィードも言い出しっぺなので顔では平静を装っているが、その実は結構楽しみにしているのだろう。シルフィード以上に表情が変わらないサクラも先程からじっとこちらを無言で見詰めている。あの目は何かを訴えている時の目であり、彼女が考えている事など、お見通しであった。

三人の少女達の視線に対し、クリュウは決心したようにうなずくと、フッと笑みを浮かべた。

「それじゃ、ちょっとだけだよ？」

――刹那、三人の少女の歓喜の声が響いたのは言うまでもない。

第１０８話　サクラの過去と支援隊に迫る赤い波

ターミナルから酒場は隣接している。これはもちろん受注後すぐに出発できるようにする為だ。当然、ターミナルから酒場へもすぐである。

外から入る入口に比べて少々簡素な感じの入口から酒場に入ると、そこには見慣れたいつもの光景が広がっている。だが、今日はそれが少しおかしい。

「……変」

ぼそりとサクラが皆を代表するように言う。当然、残る三人もその異変には気づいていた――何だか、静かなのだ。いつものように多くのハンターが多くのテーブルをそれぞれ囲むようにしており、かなりの人数がいるはずなのに、その誰もが声を発さない。異常な光景だ。

多くの人が、四人に注目していた――否、四人が通って来たターミナルへの出口を見詰めているのだ。

いつもの喧騒を失った酒場は、見慣れたはずの景色なのにまるで知らない場所に来たのではという錯覚を覚えさせる。

四人は何が何だかわからずに出口の前で棒立ちになる。すると、そんな四人の姿を見た彼女はいつものように元気良く声を掛けてきた。

「みんなお疲れ様ぁ～ッ！　こっちこっちッ！」

いい意味で場違いなその声に四人が視線を向けたのはカウンター。そこでは声に劣らず元気たっぷりな様子でブンブンと手を振ってこちらに笑顔を振りまくライザの姿があった。当然、この不思議な空気に包まれた酒場の状況に困惑している四人はこの場で最も詳しそうなライザの方に向かう。

「あ、ライザさんこんにちわ」

礼儀正しくクリュウがペコリと頭を下げると、それに倣ってフィーリアも頭を垂れる。

「はい、こんにちわ」

ライザはニッコリと微笑みながらそんな礼儀正しいクリュウとフィーリアに挨拶を返す。そんな三人のやり取りを黙って見守って

いたシルフィードはそれが終わるや否や早速単刀直入にライザに疑問を投げ掛ける。
「何だか酒場の様子がおかしいが、何かあったのか？」
「うーん、まぁちょっとした事件がねぇぇ」
「事件？」
物騒なキーワードに眉を顰（ひそ）める。もちろんフィーリアやサクラ、クリュウも程度は違えど同じような表情を浮かべている。
そんな四人を見て事の真相を話すべきか誤魔化すべきかライザは一瞬悩む。何せ、これは誰にでも口外できるような情報ではない。と言っても、大雑把な内容自体はすでに噂という形で人々に耳にも伝わってはいるが。
結局、ライザは話す事に決めた。四人は友達であり、何より全員が程度は違うものの実力者ばかり。この非常時では少しでも有能なハンターは確保しておきたいのだ。
「中継都市ヴィルマは知ってるわよね？」
当然だというばかりにフィーリア、サクラ、シルフィードの三人はうなずく。そんな三人に対しクリュウは恥ずかしげに首を横に振った。それを見てライザは苦笑する。
「まぁ、イージス村とは無縁のような街だからね。知らないのはある意味当然ね」
「す、すみません。辺境過ぎて外の情報があまり入って来ないもので」
「いいのよ。ヴィルマっていうのはこの大陸での物流の拠点の一つになっていて、地理的に重要な中継都市の事よ。ドンドルマに比べると規模は小さいけど、防衛装置が多数置かれた中規模都市ってとこね」
ヴィルマを知らないクリュウの為にライザは手短で簡潔にその説明をする。詳しくは知らないクリュウでも、何となく大きな、とても重要な街だという事はわかった。
「それで、そのヴィルマがどうしたんですか？」
皆の疑問を代表してクリュウが尋ねると、ライザは笑みを引っ込めて真剣な表情を浮かべた。その変貌ぶりに、ただ事ではないとクリュウ達の表情も引き締まる。

「……実は、そのヴィルマが――壊滅したのよ」
「え？」
思わず声を発したクリュウと同じくフィーリア、サクラ、シルフィードの三人もライザの言った言葉の意味がわからず困惑したような表情を浮かべている。そんな三人の反応を予想していたのだろう、ライザは真剣な表情を崩さないままその口に出すのも恐ろしい事実を四人に告げる。
「数時間前、ヴィルマから非常事態宣言の発令及び防共協定に基づく緊急援軍要請が届いたの。現在ヴィルマには今日未明に突如襲来した炎王龍テオ・テスカトルの攻撃を受けて街の大半が崩壊。現在も街付きのハンターが必死の抵抗をしているものの、すでに数人のハンターの死亡が確認されているそうよ」
ライザの放った言葉は、全てが異常過ぎて理解するのに時間が掛かった。
ヴィルマという街は辺境の村でなければ大抵の人が知っている大きな街らしい。それが、たった数時間で崩壊の寸前に瀕している。そんな事、普通では決してありえない事だ。
そして、炎王龍テオ・テスカトル。古龍の中でも好戦的で凶暴、炎を操り近づく全てのものを焼き払う炎を従えし絶対王。
人の前には滅多に姿を現さず、現れれば街の一つや二つを一夜にして焼け野原に変える自然の暴力。普通の人間はその長い人生の中で一度も会えず、書物や言い伝えでしかその存在を知る事ができない古龍。
――それが、今ヴィルマに現れて壊滅的な被害を与えている。そこまでわかった時点で、誰よりも早くフィーリアがライザに迫った。
「え、援軍は向かったのですかッ!?」
状況が状況だけにフィーリアも必死だ。言葉こそ放たないが、クリュウ、サクラ、シルフィードの三人も気になった。そんな四人の疑問に対し、ライザはコクリとうなずく。
「先程精鋭のハンターを向けたわ。彼らなら上位クラスのテオ・テスカトルなら討伐も容易ね。何せG級の古龍だって討伐してしまうよ

うな生ける伝説だもの」
　ライザの言い方から推測するに、どうやら派遣したのは大勢のハンターを集めた猟団ではなく少数精鋭のハンターらしい。そこまで考えが至った時、ふとクリュウはさっき別れた二人の姿を思い出した。
「まさかそれって、ジンさんとシィさんですか？」
　クリュウの口から予想だにしていなかった二人の名前が出てライザは驚いた。
「クリュウ君、何で二人の事を知ってるの？」
「さっき、ターミナルでちょっと話をしただけです」
「……そっか――そうよ。あの二人がヴィルマ救援に向かったハンターなの」
　ライザはそう断言した。彼女が言うのだから相当な実力者なのだろう。さっきあった時に感じたあの異常な気配は、勘違いなどではなかったのだ。
「でも、たった二人で古龍を相手にするなんて無茶ですよッ！」
　そう叫ぶクリュウの声を、ライザは「むしろ他のハンターが一緒だと二人の邪魔になるわ」と切り捨てる。それは贔屓などではなく事実なのだ。ライザの目はそう言っていた。
「大丈夫よ。あの子達は負けないし死なない。そういう子達なのよ」
　まだ会って間もない二人を心から心配するクリュウを見て、ライザはそんな彼を安心させるように優しく微笑む。
「古龍って、すごく強いんだよね？」
　振り返ったクリュウの瞳はいつもの温かさが消えていた。まるで氷のように冷たく、彼らしくない瞳。
　古龍――それは個体の正体は不明だが憧れていた父の背中を奪った憎き存在。それに、もしかしたら母の命をも奪ったかもしれない存在だ。彼が古龍を憎み恨むのは当然の事だろう。
　冷たい瞳を向けて彼が問うたのは炎王龍テオ・テスカトルと並び恐れられる猛烈な風と鋼鉄の鎧を身に纏った古龍、風翔龍クシャルダオラと戦闘経験のあるシルフィード。
　シルフィードはクリュウの視線に対し「私は戦ってないに等しいが

な」と前置きし、
「――強い。並の飛竜など比ではない程にな」
そう、断言した。
クリュウはそんなシルフィードの返答に対して「そっか……」とつぶやく。
いつになく真剣で、でもどこか悲しげな表情を浮かべているクリュウを、三人は心配そうに見詰める。ライザもまた、彼と古龍の宿命の事は知っていた身。そんな彼に古龍の話をした事を後悔した。
そんな四人の視線や気持ちに気づいたのだろう。クリュウは伏せていた顔を上げて四人の顔を見ると、心配掛けまいと小さく笑った。
「大丈夫だよ。別に自分の今の実力じゃ古龍なんて勝てないなんて事わかってるからさ」
――次の瞬間、その笑顔が消えて瞳に本気の炎が燃え盛った。
「――でもいつか、勝ってみせます。父さんと、母さんの仇は必ず討ちます」
クリュウの真剣な瞳と、飛び出した爆弾発言に皆は驚いたような表情を一瞬浮かべたが、すぐにそれは優しげな笑顔に変わる。
「その時は、及ばずながら私も力を貸すぞ」
小さな笑顔を浮かべながらそう言ったのはシルフィード。クリュウは驚いたように彼女を見詰める。
「いや、でも……」
「水くさいぞ。仲間なんだから、共に闘うのは当然だろう?」
「シルフィ……」
「わ、私もお供しますッ!」
何だかいい感じの雰囲気に包まれる二人を見て、慌ててフィーリアが間に割って入る。クリュウは嬉しそうにフィーリアに感謝をし、フィーリアは大喜びし、シルフィードはどこか寂しげにそんな二人を見詰める。
「……夫婦は一蓮托生。死ぬまで私はクリュウに付いて行く」
サクラもまたそんなクリュウと共に闘う事を宣言する。クリュウは嬉しそうに笑うが、彼女の発言の中に一ヶ所おかしな単語が含まれ

ていたような……
「ふ、夫婦ッ!?　そんな大ウソよくつけますねッ！」
「そ、そうだぞ。第一君達はまだその前段階でもないように見えるが」
ブチギレるフィーリアと狼狽するシルフィード。二人の言葉に対し、サクラは何をバカな事を言いたげに哀れんだ目で見詰める。
「……遠くない将来の話。私はいずれサクラ・ルナリーフになる」
サクラはある意味今年一番の爆弾発言をぶっ放した。何が何だかわからず困惑するクリュウと、そんな皆のやり取りを見て苦笑を浮かべるライザ。
「そ、それなら私だってフィーリア・ルナリーフに……えへへ……」
「シルフィード・ルナリーフ……ゴロが悪いな」
すぐさま二人も反撃しようとするが、フィーリアは口に出した瞬間嬉しさのあまりよだれを垂らし、シルフィードは己の長すぎる名前を少しだけ恨んだ。
「……クリュウ、子供は何人ほしい？」
「なぁッ!?　わ、私は三人はほしいですッ！」
「……盛りの付いたモンスターね」
「そういう目的で言った訳じゃありませんッ！」
軽蔑の眼差しを向けるサクラと、そんな視線に対し顔を真っ赤にさせて必死に反撃するフィーリア。そんな当人を置いて暴走する二人の会話についに付いて行けなくなったシルフィードは苦笑しながら困惑するクリュウの肩をポンと叩いた。当然、彼は彼女の方を向く。
「まぁ何だ。私達は皆君と同じ道を歩みたいという事だ。仲間だからな、遠慮はするな」
「シルフィ……」
「私では頼りないかもしれんがな」
「そんな事ないよッ！　シルフィの事はすっごく頼りにしてるよッ！」
「そ、そうなのか？」
クリュウの言葉に意表を突かれた形のシルフィードは少し慌てる。そんな彼女に、クリュウはえへッと微笑む。

「ありがとう、シルフィ」
「あ、あぁ……」
バッとシルフィードはクリュウに背を向ける。彼からは見えないが、その顔はいつもはクールな彼女にしてはありえないくらいに真っ赤に染まっていた。
そんな公共の往来だというのに桃色の空気を振りまくクリュウ達に苦笑しつつ、ライザはふと思いつく。
「あのね、ちょっと緊急で依頼を受けてほしいんだけど」
唐突に切り出したライザの発言に、クリュウ達は一斉に彼女の方を向く。
「緊急依頼、ですか？　それはヴィルマ関連の？」
クリュウが尋ねると、ライザは「ええ」とうなずいた。その瞬間、女子陣三人の表情が硬くなる。クリュウの身を案じての反応であり、ライザは慌てて手を横に振る。
「違う違う。別にあなた達にテオ・テスカトルと戦えなんて言わないわよ。そっちはもう手は打ったしね」
「ならば一体どのような案件なのだ？」
「あなた達に、第二次支援隊の護衛を頼みたいのよ」
「第二次？　という事は第一次はもう準備は整っているのか？」
「ええ。第一次支援隊の護衛には知り合いのギルドハンターに任せて、もうじき出発するわ。あなた達には次の第二次支援隊の護衛を頼みたいのよ」
ライザが言うには、災害援助は迅速さが要求される。その為第一次支援隊は必要最低限な物資を量は運べないが迅速に届けられる馬車を用い、それ以外の優先度若干低い物資を大量に乗せた第二次支援隊は竜車を用いるそうだ。その護衛を、クリュウ達に頼んでいるのだ。
「それは、ずいぶんと責任重大ですね」
「古龍が現れた場合、他のモンスターはその気配にヴィルマ周辺から追い出される。そんな中を竜車で突っ切るのは並大抵な事ではないな」
フィーリアとシルフィードは冷静にその依頼の危険度と成功率を

天秤に掛ける。できない事はないが、どんなイレギュラーが起きるかわからないという不安もある。
「別に戻って来たばかりの私達でなくてもいいだろう？　ここは天下のドンドルマだ。私達と同程度やそれ以上のハンターなど大勢いるだろう？」
「生憎、称号持ちは全員出払っちゃってるの。あなた達くらいの実力を持つハンターなら確かに大勢いるわ――でも、あたしが心から信頼できるハンターってのは、そんなに多くないのよ？」
　そう言って、ライザは無邪気に笑った。その笑顔に、クリュウ達はじんわりと胸の奥が温かくなるを感じた。人から信頼されているという事実は、何とも心地良いものだ。
「今回のヴィルマに対する支援は大長老から私に一任されてるの。だから、護衛に選抜するメンバーは私が信頼できる人の方がいいのよ――お願い、引き受けてくれないかしら？」
　ライザはそう言ってカウンター越しに頭を下げた。彼女から無理難題な依頼を押しつけられる事はこれまで何度かあったが、こうして彼女が自ら頭を下げて本当の意味での《頼み事》というのは初めてだった――それだけ、事態は緊迫しているのだろう。
　ライザの行動にクリュウが慌てて口を開く寸前、スッと前に出たのは意外な人物だった。
「さ、サクラ？」
　凛とした立ち姿でライザの前に立ったサクラであった。鋭く細められた隻眼はまるで刃物のよう。一見すると怒っているように見えなくもないが、クリュウはその本質を見抜いていた。そして、彼女が次に発する言葉も、
「……引き受ける」
　――それが、サクラ・ハルカゼという少女（ハンター）なのだ。
「ほ、ほんと？　あ、ありがとうサクラッ！」
　受注が口約束とはいえ達成された事でライザは嬉しそうに笑い、カウンターを乗り越えてサクラをギューッと抱き締める。そんな彼女の抱擁を、サクラは不機嫌そうに引き剥がす。

「……勘違いしないで。私は護衛依頼を切り捨てたくないだけ。目に見えるもの全てを守る、自分の信念を貫くだけ」
隻眼の人形姫と言えば護衛依頼。そう言われるほど彼女は幾多の護衛任務を引き受け、それらを見事完遂して来ている。それは彼女自身がハンターになるきっかけから来る使命感に違いない。自分と同じ想いをする人を生み出さない為、彼女は血反吐を吐こうが腕が折れようが必死になって護衛任務に固執して、達成して来た。
そんな護衛任務を、サクラは見捨てる事ができないのだ。
「……私とシルフィードはカルナスの悲劇を知っている。私はあんな悲劇を生まない決意として、この凛シリーズを纏っている。だから、防げなかった償いとして、せめてその復興の役に立ちたい。それだけよ」
そう言って、サクラはギュッと唇を噛んだ。握り拳はブルブルと震える――本当は悔しくて仕方がないのだろう。あんな悲劇を生みたくない一心でがんばって来たのに、また何も守れなかった事が。
――人形のように感情表現をあまり表に出さないサクラだが、本当は誰よりも責任感が強く、理想家で、優し過ぎる。それがサクラ・ハルカゼという少女なのだ。
ライザは何も言わず、そっとサクラを抱き寄せる。先程と違い、サクラもそれを拒まない。ただ悔しげに、肩を小刻みに震わせ続ける。
そんなサクラの姿を見て、クリュウは急に自分が恥ずかしくなった。古龍で苦しんだのは、サクラも一緒なのだ。彼女は守ると決めた街を救えなかった。仲間を一人失うという最悪の犠牲まで出したのに、守れなかった。
目に見えるもの全てを守る。そんな志を持つ彼女にとっては、悪夢としか言いようのない最悪の結末だ。サクラはそんな苦しみを乗り越え、今では隻眼の人形姫と呼ばれるまでに実力を上げた。
そんなサクラに今自分ができる事は、ただ一つ。
「……ライザさん。その依頼、僕も引き受けます」
結局、クリュウ達はライザが提示したその依頼を引き受ける事となった。シルフィードは早速ヴィルマや周辺地域の現状、護衛対象の

編成などをライザに根ほり葉ほり尋ねた。それらを総合的に判断し、最終的にチームでの依頼受注を決定したのはもちろんリーダーの彼女だ。
「テオ・テスカトルに追い出されたかなりの数のイーオスが周辺に散らばっているらしい。支援隊はその中を突っ切る形になるが、今まで通り前衛と後衛の二段構えで応戦すれば問題ないだろう。フィーリア、できるだけ多くの散弾を持って行ってくれ」
「わかりました」
「サクラにはいつも通り最後の砦になってもらう。激しく動き回る事になるだろうから、強走薬グレートを持参してくれ」
「……（コクリ）」
「クリュウは私と共に閃光玉を中心に戦おう。持てるだけの閃光玉を持ってくれ」
「わかった」
　シルフィードはすぐに各自にそれぞれ細かい指示を飛ばす。シルフィードがリーダーとしてチームに加わってからは彼女の指揮がこのチームを飛躍的に成長させている。最初の頃はソロ狩猟ばかり行ってきた者同士サクラとシルフィードの対立も多かったが、今ではサクラもシルフィードに作戦の全権を委任している。他人と協調するのを嫌うサクラとしては異例の事だが、それだけ彼女の指揮力の高さと作戦立案能力が優れている証拠だ。
　各自に細かく指示を飛ばし終えたシルフィードは各自準備の為に再集結は一時間後として一度解散とした。三人はすぐにシルフィードに言われた道具を調達しに酒場を飛び出す。その後を、シルフィード自身がゆっくりとした足取りで続く。
「ありがとね」
　その声に振り返ると、ライザが嬉しそうな笑みを浮かべて立っていた。シルフィードはフッと口元に小さな微笑を浮かべると、背を向ける。
「状況が状況だしな、仕方がないだろう。それに、友人の必死の頼みとあれば無碍にもできん。君にはいつも世話になっているからな」

そう言い残し、シルフィードは酒場を出て行った。ライザはそんな彼女の背中を見送ると振り返り、
「――ありがとう」
薄っすらと瞳を濡らしながら、そうつぶやいた。
一時間後、四人は再びターミナルにいた。そこではすでに護衛対象となる十台の竜車が待機しており、それら全てに大量の物資が詰め込まれていた。
シルフィードは早速支援隊の隊長とあいさつを交わし、必要最低限の指示や情報交換を済ませるとクリュウ達の所に戻る。
「向こうの準備はすでに完了しているそうだ。君達の方は問題はないな？」
シルフィードの問いかけに対し、三人は首肯を返す。それを確認してから、シルフィードは出発の号令を放った。
二列に並んで動き出す竜車隊。四人はそれぞれ危険地帯まで旗車に乗り込んで体力を温存する。その間もそれぞれがそれぞれの武器の手入れを行い、その時に備える。
クリュウは今回攻撃力を重視してオデッセイを引っ張り出して来た。現在ではこのオデッセイは雑魚モンスター掃討の際に使われる専用武器となっている。
一方、女子陣の武器はそれ自体が完成度が高い武器ばかりなので変更する必要もなく固定。サクラは鬼神斬破刀、シルフィードはキリサキといったいつもの愛武器を備えている。ただしフィーリアだけは今回は散弾を多用するという事でハートヴァルキリー改よりも散弾ＬＶ１の装填数が二発多い、以前使っていたヴァルキリーブレイズを装備していた。
久しぶりの元相棒を入念に調整しているフィーリアを見て、クリュウはどこか懐かしさを感じた。
「フィーリアが緑色の武器を持つのを見るの、すっごく久しぶりだよね」
「そうですね。桜リオレイアの武具に統一してしまってからは使っていませんでしたから」

「そういえば、フィーリアは以前はリオレイア通常種の素材を使った武具を統一していたらしいな」
フィーリアが《深緑の閃光》から《桜花姫》に移り変わった直後にチームに加わったシルフィードは、以前の彼女の姿を知らない。興味深げにシルフィードはヴァルキリーブレイズを見詰める。
「この子にはずいぶんお世話になりました。でもまだまだ現役ですからね、今回はがんばってもらおうと思ってます」
そう言ってフィーリアは久しぶりに握った元相棒の懐かしい感覚に微笑みながら、いざ戦闘の際に弾詰まりなどが起きないよう入念にチェックする。
一方のサクラは早々に調整を切り上げて一人隅っこで目を瞑りながら鎮座していた。まるで精神を集中しているかのようなその出で立ちに、クリュウ達は先程から彼女に声を掛けられずにいる。
いつもなら一度はクリュウを押し倒しているのに、今回のサクラは不気味なくらい静かであった。それだけ今回の任務に対する思い入れが深いのだろう。クリュウはそう解釈していた。
だが、シルフィードはそれだけではないと感じていた。サクラの異常なまでの冷静さ。まるで、内に沸き起こる不安や焦りを必死に押し殺しているかのような、無理をして維持している冷静さに感じられた。
「サクラ、君はヴィルマと何か関係があるのか？」
シルフィードの問いに対し、驚いたのはクリュウとフィーリアであった。二人は互いの顔を見合わせた後、一人沈黙を貫くサクラを見る。
三人の視線を一身に受けるサクラはそれでも無言であった。だが、シルフィードが再度尋ねようと口を開き掛けた時、スッと彼女の右目が開かれた。
「……ヴィルマには、私の師がいる。それだけよ」
つぶやくように言われたサクラの発言はクリュウ達を驚かせるには十分過ぎる威力であった。
「さ、サクラの師匠？」

「……正確には師というよりは、私に戦い方を教えてくれた恩人と言う方が適当ね」
「そんなお方が、ヴィルマにいるのですか？」
「……さぁ？」
　フィーリアの問い掛けに対し、サクラは無責任な発言を返す。そんなサクラの態度にフィーリアはムッとする。だがサクラはこう続けた。
「……彼の故郷がここだったというだけ。私が彼と出会ったのは別の街でだったから。それに、今はどちらも多忙だから連絡も取り合っていなかったから、今現在彼がヴィルマにいるのか確認の取りようがない」
　サクラは無表情で答える。そんなサクラの返答に対し、フィーリアは自分の浅はかさを恥じた。別にサクラは自分に対して無責任な発言をしたのではなく、むしろ無責任な発言をしないように言葉を少なくしていただけなのだ。
　サクラは不器用な子だ。わかっていたのに、サクラのその不器用な心遣いに気づかなかった自分は仲間失格だ。
「その師とは一体何者だ？　私達が知るような名の知れたハンターだろうか？」
「……《灰狼》、名前くらいは聞いた事があるでしょう？」
　サクラが示したその二つ名に、フィーリアとシルフィードは目を見開いて驚いた。それは都市部にいるハンターなら知らぬ者はいない程の有名人であった。一方、辺境出身のクリュウは一人首を傾げている。
「ほ、本当なのか？　あの灰狼が師だというのは？」
「……ええ」
「す、すごいじゃないですかッ！」
　興奮する二人に対し、サクラは冷静だった。正確には優越感についつい唇の端がつり上がるのを我慢して必死に冷静を装っているのだが。
「えっと、空気を壊すようで悪いけど。灰狼さんってすごい人なの？」
　恥ずかしそうにおずおずと手を挙げたクリュウ。シルフィードは

予想していたのだろう、簡潔な説明をしてくれた。
「灰狼というのは私と同じ大剣を使うハンターなのだが、独自の剣術でまるで大剣を太刀のように扱い、無双の強さを持つ男だそうだ。私も人伝（ひとづて）の噂話でしか聞いた事がないが、とにかく凄腕の大剣使いらしい」
「そんなすごい人が、サクラに戦い方を教えたの？」
「……元々あの人の剣術は昔出会った太刀使いの動きを参考に編み出されたもの。太刀使いの私はある意味一番技術を拾得できた。他にもハンターとして様々な事を教わった。今の私がいるのは、あの人のおかげというのが大きい」
　サクラの言葉に、クリュウ達は心底驚いていた。サクラという少女は想いを寄せているクリュウ以外の人間を自ら進んで褒め称える事は通常ありえない。常に自分こそ最強だという聞き方によっては傲慢にも聞こえる発言を連発し、自ら他人との必要以上の関わりを遮断する。これは人と話すのが苦手な彼女の不器用さが原因だ。そんな彼女がこんな事を言うのは、本当に異例中の異例であり、それだけ彼女にとって、その灰狼という男の存在は絶大なのだろう。
「……もう三年以上昔の事よ。さっきも言ったけど、今は連絡の取り合いもない。だから今あの街にあの人がいるかも不明――ヴィルマと聞いて、ちょっと思い出しただけ」
　サクラはそれで話は終わったと言いたげに口を閉ざした。これ以上その話を語るつもりはないのだろう。
　一方、サクラの突然の驚愕事実を知った三人は程度は違えど驚きを隠せなかった。だが同時に納得もできた。サクラの類稀なる実力の根底には、そんな凄腕ハンターからの教育があったからだ。彼女自身もそれを認めている。
　シルフィードは無言になったサクラを見て小さく笑みを浮かべると、幌から顔を出して運転手にスピードを上げるよう頼んだ。程なくして支援隊の速度は少しだけ増した。
「……なぜ行軍を早めた？」
　サクラはシルフィードを射貫くように睨みつけながら問う。その

視線はシルフィード考えをわかっていて敢えて問うという感じ。そんなサクラの視線に対し、シルフィードは小さく肩を竦ませる。
「気になるのだろう？　師がヴィルマにいるかどうか。いるとしたら無事なのだろうか。テオ・テスカトルの迎撃に出ているのではないか。大丈夫なのか。そんな気持ちが渦巻いているのだろう？　だから少しでも早く到着できるよう速度を上げたのだ」
「……余計なお世話だ」
サクラは不機嫌そうに眉をひそめる。瞳はさらに鋭く細まり、まるで彼女の背に携えられた鬼神斬破刀の刃先のよう。常人ならば恐怖するようなサクラの鋭利な視線でもシルフィードは一度たりとも視線を逸らさずに対峙する。
「君が冷静さを失っている事はわかっている。気持ちはわからないでもないが、少し落ち着け。冷静を失っては本来の力を出し切れない。特に君の場合はな」
シルフィードの言葉にサクラは無言で睨み続け、シルフィードも一度たりとも視線を外さない。そんな二人の険悪な雰囲気を見て、慌ててフィーリアが状況を打開しようと間に入る。
「そ、そうですよッ。サクラ様の強みは仲間が傷ついても眉一つ動かさない冷静さじゃないですかッ。そのサクラ様が冷静さを失ったら価値が半減――って私は一体何を口走っているんでしょうかッ!?」
実は一番テンパっているフィーリアは右往左往。そんな彼女の姿を見てシルフィードとクリュウは苦笑い。そしてサクラは……
「……人を血も涙もない冷血人間みたいに言わないで」
不機嫌そうにサクラを睨みつける。フィーリアは慌てて「す、すみません～ッ！」と一生懸命頭を下げまくる。そんな彼女にサクラは容赦なく嫌味の集中砲火を浴びせる。
一見すると状況はより混沌としたように見えるが、クリュウとシルフィードはサクラの瞳が柔らかくなったのを見過ごさなかった。フィーリアは別に狙ってやったのではないのだろうが、結果的に雰囲気はずいぶんと改善されていた。
「……冷静さを失っていた事は認める。だがそれを理由に貴様らの足

を引くような愚行は侵さない」
サクラはそう言い切ると今度こそ無言となった。瞳を閉じて再び瞑想状態になり、周りからの接触を拒否する。だがそれは先程までの触れる事すらも拒否するものではなく、冷静さを取り戻すからそっとしておいてくれというものに変わっていた。
三人はそんなサクラをそっとしておく事に決め、彼女の抜きでの今後の作戦を緻密に話し合い始めた。
支援隊は夜通しでヴィルマへ向かって進み続けていた。ゆっくり休憩していられるほどヴィルマの状況は芳しくはないのだ。
支援隊の隊員達と同じく、クリュウ達も交代で見張り役として起きており、他の面々は皆眠りについていた。
現在の当番はクリュウであった。一時間後にフィーリアと交代する事になっており、事前に眠っていたおかげで眠気のないクリュウは任務を全うしていた。
十台の竜車のうち、先頭を進む旗車に一行は乗り込んでいる。クリュウは物資が満載された幌から出て幌の上に座り込んでいた。現在他の三人は物資が満載された狭いスペースに雑魚寝状態で眠っている。ぶっちゃけ、いつもの護衛依頼よりも待遇が悪いが、それはいつも以上に物資が満載されているからに他ならない。
幌の上はそんな中と違い広々としている。ちょっと足場は悪いが、座っている分には問題ない。
クリュウはフィーリアほど視力が良い訳でも、サクラのように夜目が優れている訳でも、シルフィードのように集中力がある訳でもない。何とも中途半端な位置であった。
夜風を浴びながら、月光の光に照らされるクリュウは今はレウスヘルムを脱いで横に置いており、風が吹くたびに彼の若葉色の髪が踊る。
一人で見張りをしているのは暇だ。かといって話し相手もいないので無言で平原を見詰めるしかない。退屈な時間をそうして黙って過ごす。そんな時間がまだまだ残っている頃、幌の上に上がって来る者がいた。

「……クリュウ」
「サクラ？　どうしたのさ一体」
　それは自分と交代して眠っているはずのサクラであった。驚くクリュウを無視し、サクラは無言で幌の上に上がると彼の横にゆっくりと腰掛ける。
「サクラ？」
「……きれいな月夜ね」
「え？　あ、うん。そうだね」
　サクラの言う通り今日は雲一つない天候の為、闇夜を照らし上げるように煌めく満月が美しく、星々が輝くきれいな月夜であった。
　だが、クリュウはその光景を素直に喜べなかった。ずっと前方、月明かりでは十分には照らし切れずに黒い森の先をじっと見詰める。
「この夜空の下で、一つの街が滅びへ向かっているなんて。信じられないや……」
「……世界は複数の奇跡から成り立って形成されている。その歯車が一つ狂っただけでその奇跡は崩れ、災厄を生み出す。私達が生きるこの世界は砂上の楼閣に過ぎない」
「哲学だね……」
　クリュウはサクラの言葉に妙に納得していた。昔母も同じような事を言っていた。
　――私達の平和な日々は当然の事なんかじゃないの。ちょっとしったショックで簡単に壊れてしまう、その程度のものなのよ――
　子供の頃はその言葉の意味がよくわからなかったが、今だったらその意味は痛いくらいにわかる。
　ちょっとしたショックで両親が死に、自分一人だけ取り残される。そんな災厄を経験したからこそ、痛いくらいにわかるのだ。
　平和は当然のものではなく、掛け替えのないもの。そんな当たり前の事実を理解している人間が、この世の中に一体何人存在するだろう。人々は長い平和の中で、そんな事実を忘れているのかもしれない。
「例えそうだとしても、僕達は僕達にできる事を全力でがんばるだけ

だよ」
今の自分達にできる事。それはこの支援隊を無事にヴィルマまで送り届ける事だ。この十台の竜車には災厄に家を追われたヴィルマの市民の命を繋ぐ生活物資などが満載されている。例え街の崩壊は防げなかったとしても、人々の命は守りたい。支援隊の隊員達と同じく、クリュウ達もその想いは同じであった。
「……クリュウらしい」
サクラはそうつぶやくと、小さく笑った。その笑顔を見て、クリュウはほっとする。今日ずっとサクラは元気がなかったので、その笑顔は安心をもたらす。
「あのさ、サクラ。君の師匠ってどんな人なの？」
サクラの様子を見て、クリュウは今日ずっと気になっていた事を訊いてみた。サクラはしばしの無言の後、つぶやくように声を出す。
「……私と同じ、不器用な人。自分の信念は決して曲げず、それを何が何でも貫こうとする頑固者。でも、本当は誰よりも優しい人」
「何だか、サクラみたいだね」
「……そう？」
「うん。人と関わるの不器用で、自分の考えは曲げない頑固者で、いつも冷たい態度ばかりだけど本当はすごく優しい。さすがサクラの師匠、よく似てるよ」
「……私が優しくて忠実なのはクリュウに対してのみ。それ以外の人間なんて関わるだけ無駄」
「そういう事言わないの」
クリュウは苦笑しながらサクラを小突く。確かに最初の頃は本当にクリュウ以外に対する配慮なんてなかった。フィーリアと日々対立ばかりしており、そのたびにクリュウが仲裁に入るという日々を繰り返していた。
だが今ではフィーリアともシルフィードとも、エレナやツバメ、リリアなど多くの仲間と共におり、皆に対する配慮や気配りも不器用なりにしている。
昔のサクラは本当に近づくだけで斬られるのではないかと感じる

くらい刃物のように鋭い印象だった。でも今はそれも少し丸くなっている。元々他者との関わりを自ら断っていたサクラを心配していたクリュウとしては、良い方向に向かっていると感じている。
「こんな時に訊く事じゃないけど、師匠に会えるかもってのはやっぱり嬉しいの？」
　クリュウは不謹慎だとは感じつつも気になって尋ねたが、サクラは無言だった。でも、クリュウはその瞳を見て「そっか……」とだけつぶやく。二人の間にどんなやり取りがあったのか、それは二人にしかわからない。
　その後しばらく、二人は特に会話もなく無言で夜空を見上げ続けた。その間も支援隊は順調にヴィルマへと進み、そろそろシルフィードが警戒厳とした地帯へと入る頃だ。
「サクラ、ここは僕に任せてもう寝たら？」
　クリュウの言葉にサクラは小さくうなずき――その場に横になり、クリュウの膝の上にころんと頭を載せる。
「えっと……さ、サクラ？」
　サクラの突然の行動にクリュウは頬を赤らめながら戸惑う。そんな彼を無視してサクラは無言で彼の膝を枕にしてスッと瞳を閉じる。その頬が赤らんでいるのは内緒だ。
「ここは寝づらいって。幌の中で寝た方が……」
「……ここがいい」
「いや、でも……」
「……ここがいい」
　サクラはそう繰り返して動こうとしない。こうなると頑固者な彼女は絶対に動かないという事は付き合いの長いのでわかっている。クリュウは恥ずかしさを抑えてため息を零す。
「風邪引いても知らないよ」
　サクラが小さくうなじくのを感じつつ、クリュウは再び見張りに専念する。下から「……クリュウ」と小さな彼女の呼ぶ声がし、クリュウは下を向く。するとそこには寝転がってこちらを向いて横になるサクラが。

「……心配してくれて、ありがと」
そうつぶやくように言い、そっと微笑んだ。その小さいながらも心からの笑顔に、一瞬とはいえクリュウはドキッとしてしまった。同時に、自分の心の中を完全に見透かされていた事に驚きつつも恥ずかしそうに苦笑を浮かべる。
そのうち、サクラは小さく寝息を立て始めた。クリュウはそんなサクラを起こさないように注意しながら見張り役を再開するのであった。
サクラが寝入った後も支援隊は進み続け、距離と共に時間も経過していった。
ガタゴトと乱暴に揺れる幌の中、フィーリアが目覚めたのはそんな時だった。体を起こし、ふわぁと小さくあくびをして握った拳で目を擦ると少し目が覚めた。
「うぅ……、そろそろ交代の時間ね」
体に掛けていた毛布をきれいに畳み、手鏡で寝癖などをしっかりと直して身支度を整える頃にはすっかり眠気も覚めていた。念入りに何度も確認するのは交代相手がクリュウだからという乙女心。
「良しッ」
隣で座りながら眠っているシルフィードに気を遣いながら小さくガッツポーズ。
幌から出て幌の上へと繋がる梯子を上ると、揺れる竜車の上で夜風に当たりながら見張り番を務めるクリュウの背中を見つけ、パァッと笑顔が華やぐ。
「クリュウ様。交代のお時間で――にゃあッ!?」
笑顔で幌の上に上った瞬間、その笑顔が凍り付いた。自分の声で気づいたのか振り返ったクリュウの膝では小さな寝息を立てて眠るサクラの姿が。
「な、何でサクラ様がクリュウ様に膝枕をしてもらって眠っているんですかッ!?」
「シーッ！　フィーリア静かにッ！」
小声でのクリュウの注意にフィーリアは慌てて手で口を押さえて

黙る。だが再びクリュウの膝を枕代わりにして眠っているサクラを見てムスッとする。
「どういう状況なんですかこれは？」
「いや、話せば長くなると言うか何と言うか……」
　困った困ったと苦笑するクリュウを一瞥し、フィーリアはクリュウに膝枕してもらって気持ち良さそうに眠っているサクラを悔しそうで、羨ましげに見詰める。
「もう交代の時間だっけ？」
　サクラを見詰めていたフィーリアはそんなクリュウの問いに慌てて「ひゃ、ひゃいッ」と噛んでしまい恥ずかしさのあまり赤面する。クリュウはそんなフィーリアに苦笑しながら膝枕状態で眠っているサクラを見下ろす。
「起きてもらったのに悪いけど、僕はこのまま見張りを続行するよ」
「え？　で、ですが……」
「気持ち良さそうに眠ってるサクラを起こすのもかわいそうだしさ」
　見ると、クリュウの膝を枕にして眠るサクラは心地良さそうに小さな寝息を立てて静かに眠っている。その寝顔を見ていると、確かに起こすのはかわいそうと思えてくる。それほどまでに、サクラの寝顔はかわいらしい。
「……黙ってればきれいですよね、サクラ様って」
「あははは……」
「でもよろしいんですか？　クリュウ様は眠らなくても」
「うん。しっかり仮眠しておいたから平気。だからここは僕に任せてフィーリアは――」
「――それでは私もお共させていただきます」
　クリュウの言葉を遮ってフィーリアはそう言うとクリュウの横に静かに腰掛けた。
「で、でもさ……」
「一人よりも二人の方が何かと効率がいいですよ。それに、一人だと退屈ですよ」
　そう言ってフィーリアは微笑んだ。クリュウは「そっか」とだけつ

ぶやくとそれ以上何も言わずフィーリアが隣にいる事を黙認する。
　小さなかわいらしい寝息を立てながら眠っているサクラを見て、フィーリアは小さく微笑む。
「こんな無防備なサクラ様、初めて見ました」
「そっかな？」
「はい。サクラ様っていつも隙のない感じですからね。同じチームの仲間でも、クリュウ様以外には決して無防備な姿は晒しません。心を許すのは一人だけ。一途でかわいらしいですね」
「僕ってそんなに信用できる人間なのかな？」
　サクラから絶大な信頼を得ているという事実に自分では役者不足なのではないか。そんな想いがクリュウの胸を過ぎる。
　そんなクリュウの言葉に、フィーリアは小さく首を横に振る。彼にはわからないかもしれないが、自分とサクラは同じ想いを抱く者同士だからわかる。その想いは決して両立はしない敵同士だとしても、同じ想いには変わらない。
「クリュウ様でないとダメなんです。サクラ様が唯一心を許し、心から信頼し、忠義を尽くすのは、クリュウ様お一人なんですから」
　フィーリアの言葉に、クリュウは何も答えなかった。ただ無言で眠っているサクラの寝顔を見下ろし、その艶やかな黒髪をそっと撫でる。その姿に、フィーリアは小さく微笑んだ。
「……それじゃ、サクラの期待に応えられるようがんばらないとね」
「その意気です」
　フィーリアの言葉にクリュウは小さく微笑み、サクラの頭を優しく撫でる。その瞬間、サクラは「……うぅん」と小さく寝ぼけた声を上げて寝返りを打ち――クリュウに抱き付いた。
「なぁッ!?」
　それまで微笑ましげに見詰めていたフィーリアだったが、このサクラの無意識の暴挙は許せなかった。
「寝ていれば何をしても許されると思ったら大間違いですッ！　即刻クリュウ様から離れてくださいッ！」
「ちょ、ちょっとフィーリア、シーッ！」

大声を上げるフィーリアにクリュウは慌てて静かにするように怒るが、その間もサクラはさらにギューッとクリュウに強く抱き付く――当然、サクラは起きていてわざとしているのは言うまでもないだろう。

二人の美少女の間で流されるままのクリュウ。このままでは背中のヴァルキリーブレイズを引き抜きかねない勢いのフィーリアをなだめつつ、ふと平野の方を目に向けた時、クリュウの表情が一変する。

「クリュウ様……？」

その異変にフィーリアは戸惑ったような表情を浮かべる。そこで初めてサクラがむくりと起き上がり、クリュウの視線を追って硬直する。続けてフィーリアも同じく視線を向けた瞬間、その表情が凍り付いた。

三人の視線の向こう、暗闇の平野を埋め尽くすような異形の赤の波が蠢（うごめ）いていた。

「……イーオスの群れ。それも、ものすごい数」

平静を装うように冷静な感想を述べるサクラだったが、その頬を嫌な汗が流れる。

イーオスの大群。数は暗闇の中なのでよくはわからないが、百匹近い数だ。そんな大群が、まるで竜車と併走するようにして突き進む姿は不気味だ。

その光景に逸早くこの状況の危機に気づいたのはフィーリアだった。

「た、大変ですクリュウ様ッ！　あの大群、方角的にヴィルマを目指していますッ！」

フィーリアの言葉に二人の表情からいよいよ余裕が消え去った。

現在ヴィルマはテオ・テスカトルの襲撃を受けて大変な被害を受けている。撃退・討伐できたのか、それともまだ交戦中なのか、それすらもわからない状況の中一つだけわかる事。それはヴィルマに更なる悲劇が迫っているという事だ。

呆然とする二人に対し、クリュウの行動は素早かった。すぐさま幌の上から飛び降り、まだ中で眠っているシルフィードを叩き起こす。

「シルフィ大変だッ！」
「……うぅ？　もう交代なのか？」
シルフィードは寝起きが弱い。十分な睡眠が取れずまだ眠くて仕方ないらしく、起きたはいいが目はしょぼしょぼで体は左右にゆらゆらと揺れている。だが、シルフィードはハンターだ。クリュウの次の言葉で彼女のハンターとしてのスイッチが入る。
「イーオスの大群を発見したんだッ」
その報告にシルフィードは完全に覚醒する。横に立て掛けてあったキリサキを掴むと、すぐさま幌から飛び出して梯子を上って幌の上へと移動。その後をクリュウも続く。
「状況は？」
シルフィードの問いに対し、フィーリアは真っ青の表情のまま闇の向こうを指差した。シルフィードがその方向を確認すると、その表情が凍り付いた。
「……まさかここまでとはな。かなりの規模の遭遇は考えていたが、これは予想外だぞ」
「あの大群、どうやらヴィルマを目指しているみたいなんだ」
クリュウの言葉にシルフィードはさらに表情を険しくさせる。それだけ、状況は最悪の方向へと突き進んでいるのだ。
「……向こうはまだこちらには気づいていないようだな」
イーオスの動きを見る限り、どうやらまだこちらには気づいていない。だがこのままでは見つかるのも時間の問題だろう。
支援隊を護衛する役目を受けたチームを率いるリーダーとして、シルフィードはすぐに取るべき行動を決定する。
「すぐに転進だ。このまま気づかれないうちにイーオスの群から離れるぞ」
それは当然の選択であった。自分達の任務はこの支援隊の護衛。ならばこの場合は当然イーオスの群れから離れるちうのが一番の選択に違いない。だが、当然この判断に反対する者がいる。
「それじゃあの群れを野放しにするのッ!?」
まず反対の声を上げたのはクリュウであった。彼はイーオスの群

れを指差し、声を荒げる。
「あのままじゃあの大群はヴィルマになだれ込む事になるんだよッ!?
それなのに、見て見ぬふりをするのッ!?」
「落ち着けクリュウ。私達の目的は何だ？　この支援隊の護衛だろう。私達が成すべき事はこの支援隊を無事にヴィルマに送り届ける事。わざわざ戦いに身を投じる必要などない」
シルフィードの意見は至極正論であった。自分達の役目はあくまで支援隊の護衛であり、彼女の選択はその安全を最優先させる最も良い選択だ。
クリュウ自身もそれに気づいているのか、シルフィードの正論に一瞬口を閉ざす。だがすぐに反論を返す。
「でも、そのヴィルマがイーオスの大群に囲まれてたり占拠されてたら本末転倒でしょッ!?」
「だとしても、私達の任務目標は変わらないぞ」
シルフィードは揺るがない。チーム全員の命を預かるリーダーとして生半可な決断は下せない。だが同時にクリュウの気持ちもわかる。その相反する想いの間でリーダーというのは辛い決断をしなくてはならないのだ。
折れないシルフィードについに追撃の手段を失ったクリュウは黙ってしまう。それを見てシルフィードは「異論はないな」と念押しし、早速運転手達に転進の命令を出す。
「……私は貴様の命令には従わない」
冷たく突き放つように放たれた言葉にシルフィードは驚いて振り返る。そこにはクリュウの横に立って自分を睨むサクラの姿があった。
「どういう事だ？」
「……文字通りの意味。私が従うのはクリュウだけ。自惚れるな」
サクラは隻眼を刃物のように鋭くさせてシルフィードを睨みつけると、呆然としているクリュウの手を掴む。
「さ、サクラ？」
「……私とクリュウはこれから別行動を取る」

サクラの爆弾発言にシルフィードとフィーリアは驚愕して目を大きく見開く。そんな二人を置いて、サクラは同じく驚いているクリュウの手を引いて止まっている竜車から降りた。
「ま、待てサクラッ！　勝手な行動は許さんぞッ！」
「……何度も言わせるな。私に命令できるのはクリュウだけ。貴様にそのような権利はないし、あっても私は従わない」
サクラは冷たく言い放つと、クリュウの手を引いて隊から離れて行く。引っ張られるクリュウはその途中何度かシルフィードの方を気まずそうに振り向いたが、結局サクラと共にイーオスの群れへ飛び込んで行ってしまった。
見えなくなった二人の背中に、シルフィードは頭を抱えて深いため息を零す。
「……無鉄砲にも程があるぞ」
だが、抱えるその顔は笑顔だった。何とも予想通りの反応をした二人。だがその考えは決して嫌いではない。理屈じゃ説明できない感情での行動。自分はどうも理屈っぽい性格をしているせいでそんな直感的な行動は決してできない。ある意味、それができる二人が羨ましいのだ。そして、そんな二人だからこそシルフィードは好きなのだ。
「フィーリア」
後ろでもぞもぞと何か言いたそうにしているフィーリアの名を呼ぶと、フィーリアは「ひゃ、ひゃいッ！」と噛みながら返事した。その声に苦笑しつつ、シルフィードは言う。
「支援隊の護衛は私単独で行う。君はあの無鉄砲コンビの援護に回ってくれ」
「い、いいんですか？」
「構わん。私も支援隊を安全が確保できる場所にまで誘導したら駆けつける。それまで二人の事を頼んだぞ。ただし無理はするな。危険と判断したらすぐさま離脱しろ。いいな？」
「は、はいッ！」
シルフィードの命令にフィーリアは感動したように笑顔を華やか

せると、見事な敬礼をして反転。すぐさま二人の後を追って走り去っていく。
その背中を見送り、シルフィードは苦笑する。
「全く、揃いも揃ってお人好しな連中だな」
すぐさまシルフィードは支援隊を率いてイーオスの群から離脱を計る。
こういう裏方的な役目は自分は良く似合う。そんな事を考えて苦笑しながら、シルフィード率いる支援隊は動き出した。

第１０９話　三騎当百　襲い来る赤き悪魔の猛攻撃

暗闇の平野。一見すると何もないように見えるその光景の中に、突如として目映い閃光がが迸った。突然の強烈な光が照らした一瞬に見えたのは赤い絨毯（じゅうたん）。それが無数の赤いモンスターでできた地獄の光景だと理解するのにそれほど時間は必要としなかった。

暗闇から一転して一瞬迸った目を焼くような閃光に、その場に犇（ひし）めき合っていたイーオスの群れの一部が実際に目を焼かれて視界を失う――そこへ、彼らは飛び込んだ。

先陣を切ったのは俊足のサクラ。音もなく平野を駆け抜け、視界を封じられたイーオスに背負った鬼神斬破刀を振り抜く。煌めく刃先が吸い込まれるようにイーオスの鮮やかな赤い体を斬り裂き、その身をさらなる赤で染め上げる。

横薙ぎ一閃。振るわれた太刀は猛烈な風を纏いながら密集するイーオスを一瞬で三匹吹き飛ばす。さらに二匹を斬り飛ばし、邪魔な一匹も蹴り飛ばす。視界を奪われているイーオス達は反撃する術もなくその猛烈な剣撃の嵐に蹴散らされていく。その働きはまさに国士無双、一騎当千、獅子奮迅。さながら戦場に現れた戦女神だ。

サクラがまず先陣を切ってイーオスの隊列を乱すと、遅れてクリュウが突撃を掛ける。サクラのような俊足さも攻撃力も鋭さもないが、その一撃一撃は慎重に、そして確実にサクラが漏らしたイーオスを蹴散らす。振るわれるオデッセイの刃先はそのたびに確実にイーオスを吹き飛ばす。

「このぉッ！」

クリュウは視界を封じられてもがくイーオスに何度も斬り掛かってようやく撃破する。ランポスやゲネポスに比べてイーオスはランポス系最強のモンスターだ。体力も桁違いの為にランポスを相手にする時とは比べ物にならないほどの時間と労力を要してしまう。特に攻撃力が全武器の中でも低い部類に入る片手剣ではその差は大きい。その為どうしても全武器の中でトップクラスの攻撃力を持つ太

刀を扱うサクラに比べて出遅れてしまうが、それでも確実な一撃を積み重ねて次々にイーオスを撃破していく。
　あらかた奇襲攻撃で隊列を乱す事に成功した二人は互いの背後を守り合うように背中を合わせて一息つく。この間に二人は八匹のイーオスを撃破していた。内訳はクリュウが三匹でサクラが五匹だ。その他にも数撃を入れて幾分か弱らせたイーオスが数匹。それが奇襲攻撃での戦果であった。
「……閃光玉の数は？」
「限界数の五個全部持ってるよ」
「……そう。私は今使ったからあと四個」
「二人で九個。結構キツイね……」
　相手の総数は約百匹。それに対してこちらはたった二人。その絶対的な戦力差を埋めるにはあまりにも非力な数だ。
「……やっぱり無茶だったのかな？」
　あまりにも劣勢過ぎる状況に自ら突っ込んだ事にクリュウは早くも自分の軽率な行動を恥じた。やっぱり自分は甘過ぎる。冷静なシルフィードに比べてあまりにも単純だ。
「ごめんねサクラ。こんな無茶な戦いに巻き込んじゃって」
　そして何よりこんな無茶な戦いに彼女を巻き込んでしまった事が悔やまれた。彼女は自分をとても信頼してくれている。なのに、自分はそんな彼女の期待に応えられるような行動をしているだろうか？
　危険な戦いにわざわざ巻き込んでいる自分が、彼女の信頼を得る権利などあるのだろうか？　そんな自問自答が繰り返される。
「……クリュウ」
　閃光玉の効き目はあとわずか。考えに耽（ふけ）るクリュウを現実に呼び戻したのは巻き込んでしまった彼女の声だった。振り返ると、そこには月光に照らされて凛とした彼女の顔があった。
「……巻き込んだなんて言わないで。これは私の決めた事だから」
「でも……」
「……危険とわかっていても、誰かの為に飛び込んで行く。そんなクリュウだから、私はついて行くの」

「サクラ……」
「……そんなクリュウが、私は好き。最高の伴侶（パートナー）」
その時初めてサクラは振り返り、小さく微笑んだ。月光に神々しく照らされるその笑顔はとてもきれいで、かわいらしい。クリュウは一瞬惚けたようにその笑顔に見入ったが、すぐに自身も笑顔を浮かべる。
「ありがとうサクラ。やっぱりサクラは僕にとってすっごく頼れる相棒（パートナー）だよ」
「……ええ。私とクリュウは唯一無二の伴侶（パートナー）」
「うん。最高の相棒（パートナー）だよ」
……二人の間でちょっとした感覚のズレがある事は、この際無視しよう。これを指摘するのは野暮と言えるだろう。
刹那、閃光玉の効き目が切れて視界を封じられていたイーオス達が一斉にクリュウとサクラの姿を捉える。乱れていた彼らの隊列も徐々に整っていく。二人はすっかりイーオスの大群に囲まれる形となってしまった。
「……四面楚歌ね」
「状況はさらに最悪になっちゃったね」
二人の顔からいよいよ余裕が消える。周りは逃れられぬようイーオス達が何重にも陣を展開し、すでに二人が突っ込んで来た背後も封じられた。
クリュウはジリジリと包囲網を狭めるイーオス達に警戒しつつ、道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出し、それを真上に投擲。その瞬間、二人は一斉にそれぞれの方向へ突進する。
刹那、閃光玉が炸裂。背を向けていた二人に対し包囲網の前衛にいたイーオス達はその光に目を焼かれ視界を封じられる。
一匹のイーオスが悲鳴を上げて失った視界に右往左往する。そこへクリュウの跳び蹴りが炸裂した。顔面を蹴られて転倒するイーオスの喉にオデッセイを叩き込むと、それでイーオスは動かなくなる。
クリュウは視界を奪われて混乱するイーオスの前衛に次々に襲いかかる。縦横無尽に動き回って次々にイーオスに斬り掛かり、それら

を撃破していく。閃光玉で視界を奪われたイーオス達は反撃する術もなく次々に倒れていく。クリュウは幾分か返り血を浴びつつも無視して剣を振るう。その姿はいつもの優しい彼とは比べ物にならない、夜叉のような猛攻だ。

いつの間にかクリュウの周りには多くのイーオスの死骸が転がっていた。少し離れた場所にいるサクラの周りも同じような状態だ。どちらも周りに群がるイーオスに剣や太刀を振るい、次々にイーオス達を撃破していく。

閃光玉の効き目が切れ、イーオス達は目の前の光景に絶句する。そこには多くの仲間の亡骸が転がっており、その中心には同胞の血に塗れた憎き敵が立っている。

「ギャアッ！　ギャギャッ！」

一匹のイーオスの声に呼応するように次々にイーオスが声を上げていく。それを合図に他の大多数のイーオスが次々に再び陣形を組み直す。その寸前、サクラが閃光玉を放ち再び二人の攻撃が開始される。

だが、イーオスはモンスターの中でも知能型のモンスターだ。この単調な攻撃の連続にすでに布石を打っており、視界を奪われてもがく前衛の背後から閃光玉の範囲外に待機していたイーオスが次々に二人に襲い掛かる。イーオス達の反撃だ。

視界を奪われたイーオスの一匹を片づけたクリュウに背後から別のイーオスが襲い掛かる。寸前で気配に気づいたクリュウは横に転がるようにして回避し、すぐに立ち上がって状況確認。前方に明らかに自分を見詰めているイーオスが五匹。クリュウはその光景に歯軋りする。ちらりとサクラの方を見ると、同じように閃光玉の影響を受けていない数匹のイーオスの波状攻撃に苦戦をしている所だった。

クリュウが余所見をしている間にイーオス達は先制攻撃を仕掛けた。一瞬の隙を突かれたクリュウはこの攻撃に防戦となってしまう。

次々に連携して襲い掛かるイーオスに対し、クリュウは盾でそれらの攻撃を防ぐので精一杯だった。反撃したくてもそれを阻止するように別のイーオスが攻撃して来る。敵ながら見事で厄介な連携力だ。

「くぅ……ッ」
自分よりも重く、全体重を掛けて襲い掛かって来るイーオスの猛攻を盾一つで耐え抜くクリュウだったが、その衝撃は確実に彼の左腕に蓄積されていく。
防ぐたびに腕が痺れ、力を入れてないとあっという間に盾としての機能を失ってしまう状態。閃光玉を使いたくてもイーオス達の波状攻撃の前では片手を道具袋（ポーチ）に突っ込めるような余裕はない。
周りを囲まれている為後退もできず、反撃する事も、閃光玉を使用する事もできない。絶体絶命の危機だ。その間に閃光玉も効き目も切れ、他のイーオス達が次々にクリュウの周りを包囲する。当然、サクラとの間にはより強固な壁が築かれてしまい、合流は不可能となった。
「さ、サクラぁッ！　うぐわッ!?」
イーオスの毒液を盾で防いでできた一瞬の隙を突いて、別のイーオスがクリュウに突進を成功させた。人間の大人以上の体格と質量を持つイーオスの一撃に、比較的小柄な体格のクリュウは耐え切れずに吹き飛ばされる。
地面に転がるクリュウ。鳩尾にヒットした為に激しくせき込むが、もちろんイーオス達はそんな隙を逃さない。さらに追撃を仕掛けて行く。
「……くそッ」
クリュウは痛みに苦しみながら襲い掛かって来るイーオスの攻撃を地面を転がるようにして回避。距離を取って何とか立ち上がる。しかしそこへさらに別のイーオスが突進し、クリュウの背後から襲い掛かった。
「がはッ!?」
背中に飛び掛かられたクリュウは受け身も取れずに無様に地面に転がった。
全身に痛みが走り、すぐには起き上がれない。そこへイーオスが怒号を放ちながら跳び掛かってくる。その光景にクリュウは思わず目を瞑ってしまった。

――刹那、一発の銃声が轟いた。
ハッとなって目を開くと、自分の上に跳び掛かろうとしていたイーオスが空中で頭を撃ち抜かれて悲鳴も上げる事もできずに吹き飛ばされる光景が飛び込んで来た。
続けて猛烈な連射が開始された。一発の銃弾が着弾の寸前で無数の小型弾丸をバラ撒き、犇めき合うイーオスに次々に襲い掛かる。猛烈な散弾の雨であった。
痛む体を何とか起こした所へ散弾を連射しながら駆け寄って来る少女の姿があった。月の光に神秘的に照らされる金髪の美少女。手にした銃で猛烈な弾幕を張ってイーオス達を牽制及び撃破して戦場を翔けるその姿は彼女もまた戦女神だ。
「クリュウ様ぁッ！　ご無事ですかッ!?」
「ふぃ、フィーリア……」
駆け寄って来たフィーリアは構えていた閃光玉を上空に放り、二人を囲むイーオスの視界を封じる。もちろん二人は目を閉じてその光をやり過ごしており問題はない。
クリュウに背を向けるようにして手にしたヴァルキリーブレイズ構えるフィーリア。ここまで全速力で走って来たのだろうその頬は赤らみ、額は汗で濡れ、肩を上下させながら呼吸を繰り返している。そんな彼女の姿にじわりと感動を感じつつ、クリュウは小さく笑った。
「ありがとうフィーリア、助かったよ」
「もう、無茶はしないでくださいよッ」
「シルフィは？」
「支援隊を安全な場所に誘導してから合流するそうです。それまで耐えてほしいと。でも無理はするなと」
「そっか……、結局みんな巻き込んじゃったんだ。ごめん……」
「謝らないでくださいよ。きっかけはそうでも、最終的にこの道を選んだのは私達です。クリュウ様が謝る事じゃありません」
「で、でも……」
「――そうですね、でしたらこの戦いが終わったらクリュウ様の手料

理が食べたいです。それでチャラという事で」
　そう言って、フィーリアは無邪気に微笑んだ。クリュウはその優しげで無邪気な笑顔に気持ちが楽になるのを感じ、小さく微笑んでうなずく。
「わかった。それじゃ、腕によりをかけて作らせてもらうよ」
「約束ですよ。えへへ、それじゃ私張り切っちゃいますよぉ」
　フィーリアは嬉しそうにはにかむ。しかしそれはすぐに消え、周りを囲むイーオス達の包囲網を真剣な瞳で見回し、構えていたヴァルキリーブレイズに新しい弾を装填する。瞳には真剣な光が宿り、構えた銃身が勇ましげに煌く。
「……クリュウ様、背中は任せましたよ」
「わかった。こっちこそ任せるからね」
「了解ですッ」
　それを合図に二人は再びイーオスの群れに突っ込んだ。
　クリュウは先程と同じく襲い掛かって来るイーオスの攻撃を回避しながら攻撃に失敗した事で見せる一瞬の隙を突いて剣を振るい、着実に仕留めていく。先程までと違い、背後はフィーリアが守ってくれて三方のみに集中できるおかげでかなり立ち回りやすくなっている。
　一方、同じく背後をクリュウに任せているフィーリアも同様に三方に対し猛烈な散弾ＬＶ１の嵐を浴びせている。散弾は一発の銃弾から無数の弾丸を放ち辺り一帯を一掃できる弾なので、こういった無数の小型モンスターを相手にする場合は最も適した弾丸だ。
　フィーリアの猛烈な弾幕にイーオス達は近づく事もできずに次々にその凶弾に倒れていく。彼女の参戦により戦いは再びクリュウ達が有利に展開していった。
　さらに、猛烈な風と共に数匹のイーオスが吹き飛び二人を囲む包囲網の一角が破壊された。驚いて振り返ると、そこには稲妻を纏う太刀、鬼神斬破刀を構えた夜叉姫サクラが立っていた。
「さ、サクラ大丈夫ッ？」
「……問題ない。イーオス程度、私の敵じゃない」
　強がってはいるが、激しい戦闘を物語るように彼女の防具は泥や返

り血で汚れ、余裕を持って行動する彼女にしては異常なほど汗を掻いている。息も荒く、とても余裕とは言えない状態だ。
疲労が蓄積して動きが鈍り始めている剣士二人を援護するようにフィーリアの散弾ＬＶ１の嵐がさらに激しさを増す。空薬莢を排出し、すぐさま新しい弾丸を装填する。その繰り返しが目にも留まらぬ速度で行うのがフィーリアというガンナーだ。
「クリュウ様とサクラ様は私の後方をお願いしますッ！　お二人の背後はお任せくださいッ！」
体力的に余裕があるものの、無数のイーオスを相手にしなければならないという状況に焦るフィーリア。そんな彼女の切羽詰った指示に二人はすぐに従う。
「わかった。頼むよフィーリア」
「……失敗は許さない。死ぬ気で遂行しなさい」
二人の言葉にフィーリアは小さくうなずき、ものすごい早さで空薬莢を排出し、すぐさま新しい弾丸を装填し、ほとんど狙いなど定めず弾幕をバラ撒く。その猛烈な弾幕にイーオス達は近づく事もできずに次々に薙ぎ倒されていく。
背後をフィーリアに任せたクリュウとサクラの剣士二人は再びイーオス達に襲い掛かる。クリュウがまず閃光玉を使ってイーオス達の視界を封じ、そこへサクラが突貫。猛烈な剣撃で一斉に数匹のイーオスを吹き飛ばす。遅れてクリュウも突撃し、二人は次々にイーオスを粉砕していく。
目を潰されてもがくイーオスにクリュウはオデッセイを二撃、三撃と叩き込み、回転斬りで吹き飛ばす。しかしそこへ閃光玉の効力外から突撃してきたイーオスが襲い掛かって来た。
「グワァッ！」
怒号を上げながら突撃して来るイーオスの一撃を盾で防ぎつつ、さらにもう一匹の毒液攻撃を回避。突撃して来た方のイーオスに一撃を入れ、再び距離を取り体勢を立て直す。
しかしすぐに別のイーオスが間髪入れずに飛び込んで来る。クリュウはそれを再び盾で防ぎつつオデッセイを叩き込み吹き飛ばす。

そして再び間合いを開けて体勢を整え、反撃して来るイーオス達を迎え撃つ。
すぐ傍ではサクラが嵐のような猛烈な剣撃で次々イーオスを撃破している。背後でも同様にフィーリアが雨のように銃弾を降らせて辺り一帯のイーオスを叩き潰す。そんな二人の少女に負けず劣らずの勢いで、クリュウもまた次々にイーオス達に強襲突貫を繰り返して粉砕していく。
三人の猛攻撃の嵐に次々にイーオスが倒されていく。仲間が次々に倒されていく光景にイーオス達の連携が次第に崩れていく。その時にはすでにイーオスの群れは総数の半分以上を駆逐されており、辺りには無数のイーオスの死骸が転がっている。飛び散る血の色と合わさり、周辺一帯はまるで真っ赤な絨毯を敷いたような地獄絵図が広がっていた。
しかしそれでもイーオス達は攻撃の手を緩めず、果敢に攻め込んで来る。しかもクリュウ達は着実に疲労が蓄積しており、さらに頼みの綱の閃光玉もついに底を着いてしまった。状況は再びクリュウ達の劣勢に傾き始めていた。
さらにイーオス達が個々では攻撃せずに必ず二匹ないし三匹での集団攻撃に戦法を変更した事がそれに拍車を掛けていた。これにより反撃の隙はさらに減り、特に剣士の二人は防戦の一方となってしまっていた。
再び次第に包囲網が縮まり、自然とクリュウ達は背を合わせる形となってしまう。
「……まずいよ、もう刃がボロボロだ」
「……私もよ」
「……こっちも散弾ＬＶ１、全部撃ち尽くしてしまいました」
状況は最悪中の最悪だった。敵の総数こそ半数に減らす事には成功したが、怒濤の総攻撃をし続けた為に敵の中枢に入り過ぎて退路は完全に遮断されている。頼みの綱の閃光玉や散弾ＬＶ１はすでに使い切ってしまっており、この状況を好転させるだけの手は全て失われていた。

すでに半刻近く戦い続けている三人の疲労はもはや隠し切れるレベルではなく、三人とも苦しげに荒い呼吸を繰り返している。
このままでは全滅。そんな最悪の想像を必死に頭を振って思考の外に追い出そうとするが、その展開はいよいよ現実味を帯びて来た。
クリュウがグッと刃零れしたオデッセイを構えた時、隣にいたサクラが一歩前にでた。驚く二人に背を向け、サクラは同じく刃零れした鬼神斬破刀を構える。その背中に、並々ならぬ決意を感じたのは気のせいではない。
「……ここは私が死守する。二人は逃げて」
そう言ってサクラは必殺の突貫の構えを見せる。だがそんなサクラの肩を強く掴む手があった。驚いて振り返ると、そこにはクリュウの真剣な顔があった。
「……クリュウ」
「誰かが犠牲になる方法は除外だよ。そんな方法、誰も喜ばない。もちろん、僕もだ」
「そうですよ。今はこの状況を三人で切り抜ける方法を考えるのが先決です」
二人の言葉に一瞬瞳を大きく見開くサクラだったが、すぐ瞳は鋭く細まる。まるで刃物のように鋭い視線で、対峙するクリュウを睨み付ける。常の彼女なら絶対にしないこの行動に、彼女の焦りを感じる事ができた。
「……甘い考えは捨てるべき。この状況で全員が助かる道があると考えるのは無意味な希望に等しい」
「だとしても、僕は最後まで諦めない。僕は無駄に諦めが悪いからね」
小さく笑いながら言うクリュウの言葉にサクラは小さく苦笑した。どうやら自分一人が犠牲になるという方法は無理のようだ。そもそも、自分が犠牲になった所でこの状況から二人が脱する事もまた難しい。結局、三人の力を結集して挑まなければわずかな好転も期待できないらしい。そう判断すると、サクラは一か八かの突撃を諦めて徹底抗戦の決意を固めた。
ジリジリと迫るイーオスの包囲網。クリュウ、フィーリア、サクラ

の三人は残る力を振り絞って最後の反撃に構えを取る。その時、遠くからイーオスの鳴き声が響いた。
「……え？」
驚くクリュウ達の前で、近くで数匹のイーオスが鳴き、次々に周りを包囲していたイーオスが逃げ始めた。先程までの見事な連携は総崩れとなり、イーオス達は四方八方に散って行く。
あまりにも拍子抜けな展開に驚きつつも、助かったという事実に三人はへなへなとその場に座り込んでしまった。もはや気力だけで立っていたに等しい状態だったのだ。足はガクガクで震え、うまく力が入らない程だ。
「た、助かったぁ……」
「ふえぇ……」
緊張の糸が切れたクリュウとフィーリアはその場にぐったりと座り込んで脱力する。一方のサクラは疲れて満足に動かない体に何とか最低限の力だけを留めながらこの突然の状況変化に考え込んでいる。
クリュウは大きなため息を吐き、ふと顔を上げた。すると散り散りに逃げていくイーオス達とは逆にこちらに近づいてくる人影が見えた。雲が月に掛かっているのでよくは見えない。
次の瞬間、雲に覆われていた月が顔を出し月光が大地を淡く照らし上げた。その神秘的な光を全身に浴びながら歩み寄って来たのはまるで月の女神――シルフィードであった。
「どうやら無事のようだな」
その声にフィーリアとサクラもシルフィードの存在に気づいてそちらを向く。
「遅いですよシルフィード様。もう戦いは終わってしまいましたよ」
到着の遅れたシルフィードに珍しくフィーリアが噛みつく。それほどまでに厳しい戦いだったのだ。サクラも同じように「……今更何の用？」と冷たい視線を向ける。そんな二人の厳しい視線に対しシルフィードは苦笑を浮かべた。
「ひどい言われようだな。これでもがんばった方なんだが」

「がんばった？　シルフィ、一体何をしてたの？」
疑問を感じたクリュウが問うと、シルフィードは苦笑しながら自らがやって来た方を指指す。
「ここからそう遠くない場所にいたドスイーオスを始末するのに手こずってな。やはり大剣には荷が重いぞ」
苦笑しながら言うシルフィードの発言に三人は一斉に驚き、そして納得した。
なぜイーオス達が突然散り散りに敗走したのか。それはシルフィードがその総指揮官であるドスイーオスを倒したからだったのだ。優秀な軍隊も指揮官を失えば烏合の衆と成り果てる。だから親玉のドスイーオスを倒されてイーオス達はついに自分達の敗北を認め、死ぬのを恐れて我先にと敗走した。
――結局、今回も一番冷静なシルフィードの行動が最終的に全員の危機を救ったのだ。
「あはは、やっぱりシルフィには敵わないなぁ」
「全くです。おいしい所全部取られちゃいました」
シルフィードの凄過ぎる働きぶりにクリュウとフィーリアは苦笑する。サクラは不機嫌そうに「……泥棒猫」とつぶやく。そんな三人の反応にシルフィードもまた苦笑を浮かべる。
「おいおい、なぜ私が責められるのだ？」
「別に責めてる訳じゃないよ。むしろやっぱりシルフィはすごいなぁって思っただけだよ。さすがだね、その冷静な判断力に憧れるよぉ～」
クリュウのベタ誉めにシルフィードは頬を赤らめて「そ、そんな事ない……」とつぶやき、彼の顔を見ていられず背を向けてしまう。そんな彼女の反応にクリュウは首を傾げた。
「あれ？　僕、何か変な事言った？」
「いえ、むしろ羨ましい限りです……」
問われたフィーリアは苦笑しながら羨ましげにシルフィードの背中を見詰める。もちろんサクラは嫉妬の視線だ。そんな二人の視線に対し、シルフィードがちょっとだけ優越感に浸っていた事は内緒

だ。
「でもやっぱり全部は倒せなかったね」
「君はどれだけ高望みをしているんだ。総数の半分を駆逐した上に、その親玉のドスイーオスを倒したのだぞ？　これ以上ない大戦果ではないか」
「でもさ、少なくなったとはいえ、ヴィルマの方角にもイーオスが逃げて行った。完全には防ぎ切れなかった」
　顔を伏せながら悔しげに握った拳で地面を叩くクリュウ。そんな彼の姿にシルフィードは小さく微笑むと震える彼の肩を優しく叩いた。
「そう自分を責めるな。君は良くやった、私で良ければそれを保証する」
「シルフィ……」
「落ち込んでいる暇があるのなら一分一秒でも早くヴィルマに到着してその残党を排除する事を考えたらどうだ？　それに、私達の役目は竜車に満載された物資を無事にヴィルマに送り届ける事だ。違うか？」
「……そう、だよね。僕達の任務はまだ続いてるんだよね」
　ゆっくりと顔を上げて言うクリュウの言葉にシルフィードだけではなく、フィーリアとサクラも小さくうなずいた。それを見て、クリュウの瞳に再び力強さが戻る。
　クリュウは「良しッ」と力強く声を上げて一気に立ち上がった。だが蓄積していた疲労はかなりのものだったらしく、立ち切る寸前でグラリとバランスを崩してしまう。
「危ないッ」
　倒れる寸前でシルフィードが崩れ掛けたクリュウの体を支えた。
「あ、ありがとう」
「大丈夫か？　辛いのなら負ぶってやろうか？」
「い、いいよそんな恥ずかしい事。一人で大丈夫だからさ」
　クリュウは頬を赤らめながらシルフィードの提案を却下し、今度こそ自分の足でしっかりと立つ。そんな彼の姿を見て一人シルフィー

ドが残念がっていたのも秘密だ。
「みんなこそ大丈夫？　怪我とかはない？」
すぐに自分達の心配をする彼の優しさに胸を暖かくしながら、三人はそれぞれ大丈夫と返す。実際、四人全員は疲労の上軽い擦り傷や打撲はしているものの奇跡的に大きな怪我はしていなかった。
「全員歩けるな？　支援隊はあの森の中に停めてある。少し歩くが、行くぞ」
そう言って先頭をシルフィードがゆっくりと歩み始め、その後ろを三人が続く。その背後には四人が討伐した無数のイーオスの亡骸が溶解液で溶けて消えてなくなっていた。まるで何事もなかったかのように平野は静けさを取り戻す。
そんな不気味な平野を後にし、四人は森の中に停めてあった支援隊と合流し、再びヴィルマに向かって進み始めるのであった。

第１１０話　英雄の丘　サクラの新たなる決意

イーオスとの戦いから二日後、その後は順調に進み続けた一行はついに中継都市ヴィルマに到着した。そして、その被害の激しさに隊員だけでなくクリュウ達も愕然とした。

「な、何だよこれ……」

つぶやくように言ったクリュウの視線の先には瓦礫と化した街並みだったものが広がっていた。大通りに隣接するように建つ店らしき建物はそのほとんどが全壊もしくは半壊という状態。奥にもまだ街並みは続いているが、一見する限りでは全てが瓦礫と化している。

鼻に突くのは焦げ臭さ。まるで街全体が焼却されたように瓦礫の大半は煤焦げ、焦げ臭さが漂っている。

これが炎を操る古龍、炎王龍テオ・テスカトルに襲われた街の被害の規模の大きさであった。それも複数ではなく、たった一頭のモンスターによるもの。その圧倒的なまでの力と被害の大きさは、ある程度予想していたクリュウ達のその予想を遙かに上回るものであった。

数日前まではきっと街の中枢として人々で賑わっていた大通りも、今では瓦礫の山や大きく開いた穴などのせいで見るも無惨な姿に変わり果てていた。

災害から日があまり経っていないという事もありまだ瓦礫などを所定の場所に運搬する段階。地面に開いた穴には砂を積めて荷車の運搬ができるよう最低限の事はしなきゃいけないし、大通りは最優先で瓦礫の撤去や倒壊の可能性のある建物を除去など、問題は山積状態だ。

だが人々が一丸となって街の復旧に当たる姿は、あまりの被害の大きさに呆然としているクリュウ達に大きな希望を抱かせた。

「まさかこれほどの被害だとはな……」

シルフィードは壊れた街並みを見回し眉を曇らせながらつぶやいた。フィーリアも「ひどいですね……」とその被害の大きさに胸を痛めるようにしてつぶやく。

一人、サクラだけは無言でその街並みを見詰めていた。ただ、その

瞳は悔しげに鋭く細まっている。
目の前の光景に呆然としている四人に対し、支援隊の隊員達はすぐに正気を取り戻し、シルフィードに「野営陣地に向かいます」と報告し、再び出発の準備を整える。
「野営陣地？」
「どうやら建物の被害が多く、復興指揮所は街外れの丘に陣地を築いているらしい。今からそっちに行くそうだ。私達も向かうぞ」
シルフィードの指示に従い、クリュウ達は崩れた街並みにひとまず別れを告げ、再び竜車に乗り込む。
街中の道の大半は竜車が何台も通れるような状態ではなく、支援隊は一度街から出てその外周を回るようにして街のほぼ裏手にある復興指揮所を備えた野営陣地に向かう。そこは簡易で建てられた天幕（テント）が複数置かれただけの簡易的な場所であった。
支援隊の竜車はその一角に停まり、すぐに待機していた係員が隊員と一緒になって物資の積み卸しを始める。
事実上この時点でクリュウ達の任務は達成された。支援隊の隊員はこのまま街の復興に当たり、竜車を引いていたアプトノスもまた復旧作業の貴重な馬力役となる。その為、帰りの護衛は免除されているのだ。
物資を右から左へ運搬する人達を見守りながら、一応任務がひと段落してほっと胸を撫で下ろすクリュウ達。あとは支援隊の竜車一台が結果報告の為にドンドルマへ戻るのに一緒に乗って帰ればいいだけだが、どうやら街の被害が思っていた以上に深刻だった為、当初の予定よりも出発が遅れるらしい。隊員の話によると少なく見積もっても三日。場合によっては一週間程度掛かるらしい。
「それじゃ、それまで私達はどうすれば良いのでしょう？　街があの状態では宿場に泊まる事も叶わないでしょうし」
予想外の宿泊にフィーリアが困ったようにシルフィードに問う。本来の予定では泊まるつもりもなかったので、当面の問題としては宿泊場所の覚悟が優先されるが、街の被害状況を見る限り難しそうだ。
「とりあえず指揮所の関係者に相談して適当な場所を確保してもらう

しかないな。なぁに、こっちは支援隊の護衛という名目で来ているんだ。天幕（テント）の一つくらいは借りられるだろう」
そう言ってシルフィードは一人指揮所の天幕（テント）に向かって歩き出す。
「あ、待って。僕も行く」
その後をクリュウが追い掛け、さらにそんな彼を追ってフィーリアが「ま、待ってください～」と慌ててついて行く。だが、ただ一人サクラだけはその場を動かなかった。
隻眼でじっとクリュウ達の姿が天幕（テント）の陰で見えなくなるのを見届けてから一人無言で三人が向かった方向とは違う道に歩き出した。
指揮所の天幕（テント）は他の天幕（テント）と違い普通のものの何倍もの大きさで、中央にはギルドの紋章が描かれた旗がはためいている。
シルフィードを先頭にその中に入り、クリュウとフィーリアもそれに続いて天幕（テント）の中に入る。外見通り中は結構広々としているのだが、所狭しにテーブルが乱雑に並べられ、その上には書類が山積みになっている為見た目的にはかなり圧迫感を感じる。その間をハンターズギルドの腕章をした人々が縦横無尽に世話しなく動き回っている。それだけでものすごく忙しいという事だけは見て取れた。
「あのさシルフィ。すごく今更だけどちょっと今はまずいんじゃない？　みんな忙しそうだし」
「そ、そうですね。ここは一度出直した方が……」
「……確かに。仕方ない、改めて出直すか」
指揮所の中の忙しさを前にしてクリュウ達は出直す事を決めて踵を返す。その時、
「何や、何か用か？」
掛けられた声に驚いて振り返ると、そこには一人の女性が立っていた。茶色のウェーブ掛かったセミロングの髪に好奇心に満ち溢れた子供のような目をしている。鮮やかな赤色の一見すると普通の服に

見える制服を身に纏ってはいるが、クリュウ達ハンターはその制服には見覚えがあった――否、畏敬の象徴として知っているのだ。
ギルドナイト。ハンターズギルドに忠誠を誓った特殊なハンター達の事だ。その仕事は新モンスターの生態調査や新狩場の生態系の調査などからこういった災害時の陣頭指揮、違法行為を行うハンターの逮捕、果てはギルドに敵対する者を闇の向こうに葬り去るなど、正直普通のハンターからはあまり好かれていない存在だ。
当然、クリュウ達もギルドナイトの女性を見てあからさまに警戒心を露わにして身構える。そんな三人の反応にギルドナイトの女性は苦笑を浮かべた。
「そないに警戒せんといてぇな。別に取って食おうなんて考えてへんから」
「いや、すまない。つい条件反射でな」
「別に構わへんよ。慣れとるからなぁ――そんで、こないな所に一体何の用や？」
女性は別にクリュウ達を邪険にするでも追い出すでもなく、明るい笑顔再度何をしに来たのかを問う。そんな彼女の問いに対しシルフィードが一歩前に出た。
「いや、我々は先程到着した緊急災害第二次支援隊の護衛をしていたハンターなのだが」
「おぉ、それはご苦労様やったな」
女性は笑顔でクリュウ達を労う言葉を掛ける。シルフィードは「まぁ、仕事だからな」と素っ気なく答え、その続きを話す。
「本来ならばすぐにでも往復する竜車に乗ってドンドルマへ帰る予定だったのだが、どうやらその竜車の出発が遅れる事になったらしくてな、しばらくの間ここに滞在しなければならない。その為の宿を提供してほしいのだが」
「なるほどなぁ。大体の事情は把握したで。ちっと待っててて」
「あ、あぁ」
女性は慌ただしく奥の方へ消えて行った。それを見送り、クリュウ達はほっと一息する。

「ふぇ、やっぱりギルドナイト相手では緊張しますね」
「全くだ。どうも私は彼らが苦手だな」
「そう？　すごく優しそうな人に見えたけど」
　クリュウはそう言って小さく首を傾げた。相手を見た目で判断しないという彼らしい言葉に二人は小さく苦笑しながら己の器の小さを恥じた。自分達はどうにも彼のように純粋に人を判断する事ができない。今まで生きて来た環境が違うとはいえ、これは彼の純粋過ぎる性格が大きな原因だ。そして、そんな純粋さを二人は尊敬し、そんな彼だからこそ惹かれるのだ。
　しばしの間待たされた後、先程のギルドナイトの女性が幾つかの書類を持って戻って来た。
「すまんすまん。部屋がごっつ散らかっとってな、引っ張り出して来るのに手間取ったわ」
「それは悪かったな。それで、どうだった？」
「天幕（テント）も結構パンパンでなぁ。せやけど何とか一件だけ天幕（テント）を確保したでぇ。滞在する間は狭くて悪いけどその天幕（テント）を使ってな」
　女性の言葉に三人はほっと胸を撫で下ろした。内心野宿になるのではないかという不安があったので、屋根のある宿を確保できた事に安堵したのだ。
　女性は続けて数枚の書類をシルフィードに手渡した。どうやら使用許可の降りた天幕（テント）までの地図と主な装備、避難誘導路や生活物資提供施設など必要な情報が記された書類のようだ。
「すまないな、苦労掛けて」
　頭を下げて感謝するシルフィードに合わせ、クリュウとフィーリアも頭を垂れた。それを見た女性は「気にすんなや」と笑い飛ばす。
「ライザさんは重要な第二次支援隊の護衛を赤の他人なんかに任さへんからな。あんたらもライザさんの知り合いなんやろ？　そないな連中を悪いようにしたらウチがライザさんに怒られてもうからな」
　笑いながら言う女性の言葉の中に知った人の名前が出て来た事に三人は驚いた。

「あなたもライザさんのお知り合いの方なんですか？」
「せやでぇ。せやからウチがこの復興作業の陣頭指揮を任せられてるんや」
「陣頭指揮？　貴殿がここの現場監督なのか？」
　驚くシルフィードの問いに女性は「正確には上司がいるんやけどな。まぁ似たようなもんや」と苦笑を浮かべる。
「ギルドナイトドンドルマ本部所属、エミル・ラグナスや。よろしゅうな」
　女性――エミルはニカッと健康的な白い歯を見せながらチャーミングに笑う。口調こそアシュアに似ているが、雰囲気自体はライザに良く似ている感じの優しげな女性だ。
「あ、ご丁寧にどうも。フィーリア・レヴェリです」
　恭しく律儀に一礼するフィーリアを見て、エミルは「あぁ」とうなずいた。
「ふーん、あんたがあのレヴェリさんの妹か。噂には聞いてたけど、ほんま正反対な子やなぁ」
「あはははは、良く言われます」
「……今更だけどさ、フィーリアのお姉さんってどんな人なの？」
　苦笑するクリュウに「いずれご説明しますよ」と同じく苦笑しながら言うフィーリア。そんな二人から視線を外し、エミルはシルフィードの方を見る。
「そんで、あんたは？」
「シルフィード・エアだ。世間的には《蒼銀の烈風》の方が知られているしがない大剣使いだ」
「ほぉ、あんたが……」
　シルフィードの装備を見てエミルは納得したようにうなずいた。どうやら噂通りの実力を持っているという事を装備で判断したらしい。そして最後に、クリュウを見る。
「って事は、あんたも結構な有名人なんか？」
「……この順番だと無意味にハードルが上がるよねぇ」
　クリュウだけでなく彼の言葉にフィーリアとシルフィードも苦笑

を浮かべた。唯一エミルだけが会話の流れがわからず首を傾げている。
「僕はクリュウ・ルナリーフです。二人と違って二つ名もない凡なハンターですよ」
自嘲気味（クリュウ自身は本当の事だと思っているが）に言うクリュウの言葉にすかさずフィーリアが「そんな事ないですよッ」とフォローを入れる。シルフィードも「そう自分を卑下するな」と苦笑する。いつもと変わらない三人のやり取りだ。
「……ルナリーフ、ねぇ」
一人、エミルだけは先程までの笑顔を引っ込めて真剣な表情を浮かべてクリュウを見詰めていた。ジンと同じく、彼の名字の繰り返しながら……
「あれ？　そういえばサクラは？」
ここに来て今更ながらクリュウはサクラの姿が見えない事に気づいた。辺りを見回すも彼女の姿はない。
「そういえばそうだな。師を探しに行ったのだろう。まったく、勝手な単独行動は控えるよういつも言ってるのに」
そうは言うもののシルフィードは決して怒ってなどはいなかった。せっかく会えるのだから、
「あと一人、隻眼の人形姫という二つ名を持つサクラ・ハルカゼって子がいるんですけど……ちょっとどっかに行っちゃったみたいで」
「……ほんま、どんだけごっつ豪華な面子が揃ったチームなんや」
エミルは苦笑しながら蒼々たる面々を見回す。ライザが送って来ただけあって、程度は違えど有名所ばかり。改めて彼女のの広さには驚かされる。
「あんたらのサポートも業務の内やな……しゃあない、なんかあったらうちに言ってなぁ。話聞いたるさかい」
「あ、ありがとうございます」
明るく笑うエミルの言葉にクリュウは感謝しつつ、早速力を借りてみる事にした。この街の事は今し方来たばかりの自分達より先遣として数日早く到着している彼女の方が詳しいはずだし、もしわからな

くても知っている人を紹介してもらおう。そんな期待を込めて、クリュウは本当に何気なく訊いたつもりだった。
「では早速ですみませんが、灰狼というハンターをご存じですか？できれば紹介していただきたいのですが……」
――だから、その瞬間エミルの表情が凍り付いた事に困惑してしまった。
「え？　あ、あの……」
「あんたら、ゾルフさんの知り合いなんか？」
なぜか声を震わせながら問うエミル。きっとそのゾルフという人が灰狼という人の名前なのだろう。
「あ、いえ。僕達は面識はありませんが、サクラの師匠がその人だって聞いたので」
「そう……」
先程までの明るさは完全に姿を消し、エミルは沈痛の面もちを浮かべたまま無言となってしまった。彼女の突然の豹変に困惑するクリュウに対し、フィーリアとシルフィードはそんな彼女の様子からある一つの、最悪の可能性を導き出した。
「ラグナス殿、まさか灰狼殿は……」
震えるシルフィードの問いかけに対し、エミルは力なく首を横に振った。その動作に、ついにクリュウもその意味を理解し頭が真っ白になった。
「サクラ……」
自然と、彼女の名前をつぶやいていた……
街の中心部、テオ・テスカトルが暴れ回った為に被害が甚大な中央広場に、その仮設テントは建てられていた。
テントには簡易的に木の板に文字が書かれた立て札が立てられている。
――炎王龍大災害慰霊碑建設予定地――
ここには今回の炎王龍テオ・テスカトルの襲撃事件で犠牲になったハンターや民間人の遺体が合葬されている。
ヴィルマの人々のすぐ傍の場所に埋葬しよう。そんな声に答え市

議会がここを指定し埋葬を行い、献花台を設置。街の復興が終わってから、ここに犠牲者の名前を刻んだ慰霊碑を建設する事がすでに決まっていた。それまではこの仮設テントが献花台として慰霊碑の代わりとなる。

テントの中の献花台には多くの花束や故人が好きだったのだろう果物や本、子供も犠牲になった為おもちゃなども置かれていた。

中でも一際目立つのは台の上に山積みされた大量のお菓子。今回のヴィルマ防衛戦で命を落としたあるハンターに対する供物だそうだ。良く見ると台の上だけではなくその後ろにも大量に置かれている。すさまじい量だ。

現在は街の復興に人手の大半が向けられているので、ここには人の影はない。そんな場所に、彼女はいた。

無表情でゆっくりと献花台に近づくと、途中で購入した花束をそっと置いた。隻眼で見詰めた先には今回の災害で亡くなった人の名前が紙に羅列されていた。これは主に民間人で結構な人数の名前が羅列されている。ただし行方不明者もいるので正確な数や名前は把握できていないのが現状だ。これらは本格的な慰霊碑が建設された時に刻まれる予定となっている。

一方、すでに仮とはいえ置かれている御影石に刻まれているのは今回の戦で命を落としたハンター達の名前が刻まれている。その中から彼女はすぐに目的の人物の名前を見つけた。何しろその名前は一番前に書かれていた。

――灰狼　ゾルフ・ヴァルフレア――

隻眼の少女――サクラは無言で背負った鬼神斬破刀を引き抜くと煌めく剣身を地面に突き刺した。元々は石畳がきれいに敷かれていたここも、テオ・テスカトルが破壊の限りを尽くした為石畳は粉砕し、その下の地面がむき出しになってしまっている。

続いて花束を持っていたとは別の方の手に持っていた酒瓶を突き刺した太刀にそっと掛ける。酒は太刀に沿って下へと流れていき、地面を濡らしていく。

「……貴様が好きだった酒だ。ありがたく思いなさい」

そうつぶやき、サクラはその場にゆっくりと腰掛けた。酒瓶の中にはまだ半分以上酒が残っている。サクラはそれを無言で煽（あお）った。あまり酒を飲まないサクラにしては珍しい光景であった。

一気に半分近くまで飲み干し、地面に置く。酒に濡れた口周りを手の甲で拭い、横に置いた酒を一瞥する。

「……まさか、土産が供物になるとは思わなかったわ」

そうつぶやき、サクラは空を見上げた。数日前はこの空が黒煙に包まれていたそうだが、今は不謹慎なくらい晴れ渡った青空が広がっている。

「……いい場所ね。貴様の墓にはもったいないくらい」

返って来るのは風の音だけ。サクラは小さく苦笑を浮かべるとそっと地面を撫でた。

「……何年ぶりかしら。貴様の下で短いながらも修行をして、互いの目標に向かって別離してから。貴様の噂は時々聞いてたけど、私の噂は聞こえてたかしら？　一応弟子なんだから、少しくらいは知っていたでしょう？　私、がんばってたんだから」

風が、ヒュッと音を立てながら頬を撫でた。撫でられた頬を指で触れ、小さく笑う。

「……そう、ありがとう」

もう一度、酒を地面に振り撒いた。一瞬浮かび上がった小さな虹。だがそれはまるで幻だったかのように消えてしまう。

「……それにしても、あんたらしい死に方ね。誰かを守る為にその犠牲になるなんて――ほんと、バカバカしい」

――刹那、地面が濡れた。酒でもない、雨でもないそれは、そっと頬を流れて地面に落ちる。

「……死んだら、何もできないじゃない。話す事も、触れる事も、どこかに行く事も、見る事も、何もできない。死んだら、全て終わりなのよ」

つぶやくように、責めるように紡がれる悲痛な言葉。それは彼女の根底にある想い――死んでしまったら、全て終わってしまう。幼い時に両親と死に別れた彼女の心にある強烈な想い。

「……泥水を啜ってでも、木の皮を剥いで腹を満たしてでも、生に縋（すがり）りつく。生きるって、そういう事でしょ？　命は、決して金や物じゃ代用できない唯一無二のもの。貴様は、それを人の為に失った。ほんと、バカげてるわ――でも、今の私ならそう思わない。私にも、命を投げ出してでも守りたい人ができたから。ううん、再会できたから」

昔は、命は何があろうと投げ出してはならないものであり、それを投げ出すのは愚の骨頂。そう思っていた。両親を目の前で殺された彼女にとって、生きるとはそういうものだと思うのは当然の事だった。

だが今は少しだけ違う。命を投げ出す事は絶対にダメだという根底は変わりないが、それが何か自分の命を懸けてでもやり遂げたい、守りたいものだったら、それだけの価値があるものだったら、最後の手段として、自分の命を武器にするのもいいかもしれない。そう思うようになった。

自分は、好きな人の為なら命を投げ出しても構わない。そう思っている――クリュウと再会できて、そう思うようになった。

だから、きっとゾルフもそういう人を守って自らを盾にしたのだろう――それならば、きっと彼の死も意味があったのだと思えるし、彼が守り抜いたものが今も存在し続けるなら、彼も報われるだろう。

「……そういう事なら、約束を破った事も許すわ」

ゾルフとサクラの交わした約束――それは、自分が師の横にいても恥ずかしくないようなハンターになったら、また一緒に狩りをしよう。昔、別れ際に交わしたたった一つの約束。

結局、それは叶う事はなかった。唯一の心残りがあるとすればそれくらいだ。あの世で会ったら斬り殺すと心に決め、サクラは師の眠る大地の土を一握り握り締めて立ち上がる。

「……私は貴様と違ってまだやらないといけない事がある。貴様との再会は、まだ当分先になる」

太刀を引き抜き、表面を流れる酒を一度振るって吹き飛ばしてから背に戻した。

「……師よ。私は貴様を忘れない。そして、私はここに宣言する――私は貴様を越える」
風が吹き、彼女の艶やかで長い黒髪を激しく揺らす。前髪が揺れ動き、露わになった隻眼にはもう涙はなかった。あるのは強い意志の光。目的の為ならどんな手段を使ってでも厭（いと）わない、そんな想いが見え隠れする光だ。
「貴様はそこで私に抜かされていくのを指をくわえながら見ているがいい――否、私の中で見守っててくれ」
そう言って、サクラは握り固めた土を――口の中に放り込んだ。ザラザラとした食感と土特有のあの臭い、子供の頃転んで食べたあの土の味が口一杯に広がる。吐き出しそうになるのを必死に堪え、サクラはそれを残っていた酒と一緒に一気にのどの奥に流し込んだ。
「……これで貴様の魂の一部は私と共にある。約束を破ったバツとして、私が死ぬまで見守ってなさい」
口元を手の甲で拭い取った直後、サクラは笑った。それは人から見れば小さな笑顔でしかなくても、彼女にとっては満面の笑顔。最上級の笑顔であった。
「……弟子の活躍、楽しみにしてなさい。天国まで名を轟かせてみせるから――サクラ・ハルカゼ。覚えておきなさい。それが貴様の弟子であり、最強のハンターの名前よ」
サクラはその場で一礼すると空になった酒瓶を手に持って踵を返す。そのまま一度も振り返る事なく、彼女は丘を去った。
そんな彼女の背中を見送る献花台では彼女が置いた花束の花が風にそよそよと揺られていた。
エミルから今回の災害での犠牲者が合葬された街の中心部にある慰霊碑建設予定地を教えてもらった三人は早速そこへ向かって歩いていた。
目的地に近づくにつれて、三人の表情が曇っていく。元気が取り柄と言ってもいいクリュウも今回ばかりは表情が暗い。
「……サクラ、この事知ってるのかな？　自分の師匠が命を落としてる事」

「私達よりも先に探しに出ているからな。その可能性は十分過ぎるくらいありえる」
「だとしたら、きっと落ち込んでいますね、サクラ様」
仲間の消沈している姿は、見たいものではない。特に常に無表情を貫いているサクラの落ち込んだ姿など、想像もできないし、したくもない。
サクラに会ったら何て声を掛ければいいか。そんな事を考えながら歩いていた矢先、反対側から目的の人物――サクラが歩いて来るのが見えた。
「さ、サクラッ!?」
最初に気づいたクリュウが驚きの声を上げると、目を伏せていた背後の二人も気づいて顔を上げ、硬直する。
固まる三人に対し、サクラはいつもと変わらぬ様子で現れた。何を考えているかわからない瞳と乏しい表情。必要な事以外は開く事のない口。何もかもがいつもの彼女であった。
そんなあまりにもいつも過ぎるサクラの姿に拍子抜けを喰らった三人はポカンとしている。もしかしたらまだ例の事は知らないのかもしれない。そんな想いが三人の胸を過ぎった。
「……何？」
自分を凝視して固まる三人を見て不思議そうに首を傾げるサクラ。隻眼には明確な戸惑いの色が見えた。
「あ、いや何でもない。それよりサクラ、急にいなくなったりしないでよ。心配したじゃないか」
とりあえずいつも通り接する事に決めたクリュウ。シルフィードとフィーリアもこれに乗って「そうだぞ。勝手な行動はするな」「心配したんですよぉ」といつも通りに接する。
「……そう、ごめんなさい」
――その瞬間、三人の背中に氷水がぶっかけられたかのような異常な冷たさが広がった。
あの天上天下唯我独尊なサクラが素直に謝った。それもクリュウだけでなく、フィーリアやシルフィードにまで。その異常さに三人は

驚愕する。
「さ、サクラ。どこに行ってたの？」
声が震えないように必死に抑えながら、クリュウは絞り出すように訊いた。本当はこんな残酷な事問いたくはない。でも、訊かない訳にはいかなかった。
三人が息を呑むように見詰めるその先で、サクラは一度背後を振り返ってから「……大した事じゃないわ」とつぶやき、
「……あいつの墓参りをして来ただけよ」
それは三人にとって最悪の展開であった。状況に耐えられずめまいを起こすフィーリアを隣にいたシルフィードが支える。そのシルフィード自身悲痛な表情でサクラを凝視していた。
クリュウは一人胸を押さえた。心臓が握り潰されるかのように痛み、悲鳴を上げる。ギシギシと痛む胸をギュッと鷲掴むその手に、スッと触れる手があった。驚いて顔を上げると、そこには心配そうな表情を浮かべたサクラが間近に立っていた。
「……クリュウ、平気？　大丈夫？」
「サクラこそ、大丈夫なの？」
まだ痛む心臓を押さえながら、クリュウはもう片方の手で彼女の手を握り締めた。細くて簡単に折れてしまいそうな白い彼女の手。時々忘れかけていた想いが、強く蘇る――彼女だって、自分と同い年の女の子だ。無敵ではないし、完璧ではない。支えてあげないと、簡単に壊れてしまうほどに脆い普通の女の子なのだ、と。
「……別に。私はいつも通りよ」
確かに、パッと見はその通りだ。フィーリアとシルフィードもそう思っているようで、若干戸惑ったような表情を浮かべている。きっと二人の目には『サクラは師の死にも動じない鉄の心を持つ乙女（ハンター）』のように映ったのだろう――だが、それは間違いだ。クリュウはそう確信していた、だって……
「無理しなくていいんだよ」
クリュウはそう言ってサクラの細い体を抱き寄せた。驚くサクラが「……く、クリュウ？」と戸惑ったような声を上げる――ほんと、ど

れだけ自分達を心配させたくないという想いで無理をしているのだろうか、この不器用過ぎる優しい娘は。
「サクラって昔から一人で全部背負い込んじゃう癖があるよね。でもさ、辛い時くらい僕を頼ってよ」
　クリュウの言葉にサクラは驚いたような表情を浮かべた後、小さな笑みを浮かべた。しかしすぐに頭を振る。
「……平気。それにこれは私個人の問題。クリュウには関係がない」
「関係ないって言われてもね――そんな辛そうな瞳をしたサクラを、放ってなんかおけないよ」
　その言葉の後、サクラはビクリと震えた。きっと先程よりも驚いたに違いない。その証拠に、明らかに彼女は動揺していた。
「……な、何で」
「サクラの微妙な表情を読み分けるくらい、僕なら造作ないよ。子供の頃からほんとに変わってないんだもん」
　そう言ってクリュウが微笑むと、サクラの隻眼が大きく見開かれた。それはすぐに細い弧を描き、頬が赤らみ、目の縁に想いが溜まる。
「……クリュウには、敵わない」
　クリュウは無言で彼女の頭にポンと手を置くと、その艶やかな髪をそっと撫でる。サクラはまるでアイルーのように目を細めてそれを受け入れると、スッと手を伸ばしその手を握り締めた。
「……ほんと、敵わないや」
　顔を伏せ、肩を震わせ、サクラは小さな嗚咽を漏らしながらクリュウの手を握り締める。クリュウはそんな彼女の頭をもう一方の手で再びそっと撫で、しっかりと抱き止める。
　何も言わず、ただ抱き止めてくれるクリュウの腕の中、サクラはずっと堪えていたもの決壊させて泣き崩れた。
　どんなに強がっても、どんなに無理をしても、結局はサクラだって一人の女の子に変わりはない。誰かが手を差し伸べて、支えて上げないと簡単に壊れてしまう。
　クリュウはそんな彼女の支えになりたいと思っているし、サクラもまた自分の支えは彼以外は認めない。ある意味、最もベストな組み合

わせなのかもしれない。
　クリュウの腕の中、最後の意地として声を押し殺しながら泣くサクラの姿にフィーリアとシルフィードは優しく微笑んで見守っている。
「今回は特別ですからね」
「……全く、クリュウは心底すごい奴だと感心するな」
　いつもは決して人前では見せないサクラの涙に、三人は心のどこかで抱いていた誤解を訂正する――サクラは決して冷徹な鉄の心を持つ鋼の乙女ではなく、どこにでもいる普通の女の子なのだと。
　そんな当然な事を忘れさせてしまうほど、サクラは不器用ながらも周りに気を遣っていたのだ。その事実に感動すると共に仲間にそんな負担を掛けさせていた事に三人は静かに心痛める。
　晴天の空の下、一人の少女の涙が静かに地面を濡らした。

第１１１話　薄氷の上の平和　廃墟に咲く小さな野花の笑顔

サクラが泣き止んだ後、四人は街中へと向かった。街と言っても右を見ても左を見ても瓦礫だらけの廃墟のような景色に変わりはない。住民達はそんな気が遠くなるほど無数に散らばっている瓦礫を片づけている。まずはこの瓦礫をどうにかしない事には次のステップには行けないのだ。

そんな状態だというのに、人々の表情は明るい。そこかしこで笑い声がし、皆が協力し合って大きな瓦礫などを撤去する。子供達も小さな瓦礫を拾っては父親の所へ持って行く。

家や財産を亡くしたとは思えない程、人々は明るかった。その光景に驚きつつも、大変救われた。街全体が暗い雰囲気に包まれていたら、それこそ神経が持たない。

四人が全員ハンターという事もあり、人々は気軽にあいさつをしてくれる。何とも強い街だ。

街に所属するハンター達が文字通り命を懸けて自分達を救ってくれた。その想いが彼らを突き動かしているのだろう。

犠牲は決して少なくはないが、残されたものは多い。人々に笑顔がある限り、ヴィルマは姿形が廃墟になろうと、街が死ぬ事は決してない。

そんならしくもない事をクリュウが考えていると、グイッと腕を引かれた。驚いて振り返ると、そこには道中ずっと手を繋いでいた（繋がされていた）サクラがジーッとこちらを見詰めている。

「ど、どうしたの？」

「……お腹空いた」

そう言って、サクラはくぅとかわいらしい腹の虫を鳴かせる。その音にクリュウは小さく苦笑した。

「そういえばもうそんな時間だよね。でもまぁ、街全体が食糧不足のようなものだからね、贅沢は言ってられないよ」

「そうですよサクラ様。不謹慎な発言は控えてください」
「……私の辞書に《不謹慎》の三文字はない」
「ずいぶん我が道を突っ走った辞書だな」
　サクラの見事な天上天下唯我独尊絶対自分至上主義的発言に苦笑しながら、シルフィードは辺りを見回す。
「……大きな声では言えんが、携帯食料なら護衛任務で支給された奴がまだ残っているぞ」
「……私も大きな声では言えませんが、長旅を想定してこんがり肉を全員分確保しています。生肉と高級肉焼きセットもバッチリです」
「……何だかんだ言って、君達も不謹慎だよねぇ」
　苦笑しつつも、自身も空腹状態なのは変わりはない。クリュウは小さく苦笑すると「天幕（テント）に行こうか。もう荷物も運び終わっているだろうし」と三人を促す。
「そうだな。ここにいても私達は邪魔になるだけだしな。早々に退散しよう」
「そうですね――と、その前に……一体いつまでクリュウ様の腕を独占してるんですかサクラ様ッ！」
　ここでついに今までは彼女の心境を考慮して大目に見ていたフィーリアがブチギレた。キッと睨む先には当然の事をしているだけだと言いたげに堂々とクリュウの腕にしがみ付くサクラ。
「……何？」
「何じゃありませんッ！　いい加減クリュウ様から離れてくださいッ！」
　ブチギレるフィーリアに対し、サクラは「……なぜ？」と言いたげな表情を浮かべつつ小首を傾げる。その常軌を逸するような冷静さは、フィーリアをさらに激怒させる。
「ムキーッ！」
「お、落ち着けフィーリア。サクラに正攻法が通じない事は今に始まった事じゃないだろ」
　激しくイラ立つフィーリアをシルフィードが冷静に宥める。すっかいこの立ち位置にも慣れたものだ。

一方、フィーリアの文句を物ともしないサクラは平然とクリュウの腕にしがみ付いたままだ。そんな彼女のスキンシップに対し、クリュウは苦笑い。
美少女に抱きつかれているという事で周りの注目を惹いてしまっている状況に対する恥ずかしさといつも通りなサクラに安堵するのと、その内心は複雑だ。
そんなワイワイと騒ぎながら一行は知らず知らずのうちにその場所に足を踏み入れていた。
「おい、あれは……」
最初に気づいたのはシルフィードだった。彼女の真剣な声に残る三人もその視線を追い、体を強ばらせる。
――そこにあったのは、王冠を奪われた王の亡骸であった。
燃えるような真っ赤で勇ましい翼に、高熱の炎が発する紫色の炎に似た色の鱗に全身を覆われ、王というに相応しい立派な炎を象徴するかのような真っ赤なたてがみ。
その大きさは空の王者と呼ばれる火竜リオレウスよりも一回りほど大きい。何より驚くのは、その強靭な四足。
飛竜は後足と翼へと発達した前足で構成される。火竜リオレウスや鎧竜グラビモス、角竜ディアブロスであっても例外はない。
しかし、古龍観測所の発表によると古龍に類別されるモンスターは全て四本足であり、その多くがさらに前足の進化とは関係のない別の進化を遂げた翼を持っている。例外としては以前カルナスを崩壊させた老山龍ラオシャンロンには翼はないが、彼もまた四足という前提に当てはまる。
教科書でしかその存在を知る事のできなかった自然が生み出した最強の驚異――古龍。
そのうち、古龍四天王とも称される一角を担うのがこのヴィルマを壊滅させ、多くのハンターの命を奪い、討伐され、今こうして自分達の目の前で横たわっている――炎王龍テオ・テスカトル。
「これが、テオ・テスカトル……」
初めて見る古龍の姿に、クリュウはぞくりと背筋が凍るのを感じ

た。死して尚、彼の王の放つ絶対的な存在感と圧迫感は消える事はない。まるで自分のような小物などが近づく事すらも許されない、そんな気が起きてしまう程に王の威厳は絶対だった。

「本当に、四足なんですね……」

クリュウと同じくこの面子の中では初めて古龍の姿を間近で見たフィーリアはその書物でしか知らなかった姿に驚く。テオ・テスカトルはその強靭な四足を使って陸の女王とも呼ばれる雌火竜リオレイア以上に突進力に優れている。半信半疑だったが、この強靭な、しかも四本の足を見ればそれも頷ける。そして、その事実に背筋が冷たくなった。

古龍四天王の一角、風翔龍クシャルダオラとの交戦経験があるシルフィードは四足という飛竜などと違うか体つきには驚かないが、やはり初めて見るモンスター、それも古龍となると表情も険しくなり、真剣な瞳で横たわるテオ・テスカトルの亡骸を見詰める。

そして、このテオ・テスカトルに師を殺されたサクラの表情もまた険しい。憎悪、畏怖、殺意、困惑、驚愕、それら全ての感情が入り交じったかのような複雑な瞳でその亡骸を見詰める。

辺りを見回すが、先程まであった住民の姿はない。誰もが死して尚恐怖を抱かせるような圧倒的な王に近づこうとしないのだろう。

ギリッ……

そんな音にクリュウは振り返り、凍り付いた。そこには歯軋りするサクラが立っていた。その表情は常の無表情からは想像もできないような憎悪に歪み、瞳には明確な殺意の炎が燃え盛っている――普段決して見る事のできない、本気で憤激するサクラの表情。それに気づいた他の二人も驚きのあまり言葉を失っていた。それこそ、テオ・テスカトルを初めて見た時よりも驚愕が大きい。

「さ、サクラ……」

刹那、サクラは背負った太刀、鬼神斬破刀の柄に手を伸ばす。その光景に慌ててクリュウが止めようとした時、そんな彼のすぐ横を何かが高速で通り抜けた。

ドンッと鈍い音に振り返ると、倒れたテオ・テスカトルの横にコロ

コロと石が転がっていた。
「人殺しッ！　父ちゃんを返せよ化け物ッ！」
振り返ると、そこには男の子が幾つかの石ころを握り締めて立っていた。その表情は純真無垢な子供には不釣り合いな憎悪に歪み、瞳からは涙が溢れ、でも殺気に満ちた瞳は憤怒の対象から目を離さない。
「何だよッ！　何なんだよッ！　オイラの街を滅茶苦茶にして、父さんまで殺して……ッ！　一体オイラ達が何をしたって言うんだよッ！　何でこんな事したんだよッ！　何とか言えよ化け物ッ！」
怒鳴り散らしながら、少年は石ころを何発も何発もテオ・テスカトルの亡骸に投げつける。だが、すでに命を失った彼に何を言っても無駄だし、答えもない。そもそも生きていたとしても人と話す事はできない。だが、そんな不謹慎で野暮な事は決して口が裂けても言えない。少年は普通にこのヴィルマで家族と暮らしていただけなのに、突然その全てを奪われた。その激しい怒りを、ぶつけられる相手と言ったらその張本人であるテオ・テスカトルくらいなのだ。
「人殺しッ！　化け物ッ！　このこのッ！」
少年は泣き叫びながら石ころを投げまくる。そんな彼の背後から慌てた様子の女性が駆け寄り抱き締めた。きっと彼の母親なのだろう。
怒りが収まらず暴れる子供を抱き抱え、母親はクリュウ達に気づくと深々と一礼してそそくさとその場を後にした。
残されたのはクリュウ達とテオ・テスカトルの死骸だけ。不気味な静けさが、辺りを包み込む。
「……ごめんなさい。冷静さを失ってたわ」
寸前まで爆発一歩手前だったサクラは静かにそうつぶやくと、柄に伸ばしていた手を引っ込める。それを見てクリュウは心の中でほっと安堵の息を漏らした。
殺気に染まった瞳はいつも通りガラス玉のように透き通り、小さく苦笑を浮かべながらクリュウを一瞥する。
「……亡骸に怒りをぶつけても、何にもならないわね」
その言葉に、クリュウは何も返せなかった。それは倒したモンス

ターには敬意を払いその魂が成仏できるよう祈っている自分に対する配慮であった。もしも亡骸を痛めつけるような行動を取れば、それはクリュウの信念に背く事になる。サクラはそれを嫌って刀から手を離した。それがわかっているからこそ、クリュウは何も言葉を返せなかった。

確かに亡骸を痛めつけるのは自分の信念に反する。だが、テオ・テスカトルに師を奪われたサクラの心境を思うと、その信念が乱れる。そして、そんな信念の為に怒りの矛先を失うしかないサクラの悲痛な姿に、胸を痛める。

「サクラ、ごめんね……」

「……気にしないで。私はクリュウの信念には賛成している。だから、これは私の意志。クリュウが謝る事は何もない」

「でも……」

続けようとするクリュウを拒絶するように、サクラは背を向けた。クリュウはそれ以上何も言う事はできず、沈黙する。

クリュウとサクラ、チームでも随一の仲の良さを誇る二人が気まずそうに黙ってしまい、フィーリアも掛けるべき言葉を失ってしまっている。

一行の間に気まずい沈黙が降りたその時、突然グゥ……と小さな音が無音の世界にひどく良く響いた。驚いて振り返ると、そこには赤面して自分の腹を押さえたシルフィードが立っていた。

「す、すまない。腹が減ってしまって……」

恥ずかしさに顔を真っ赤にさせて狼狽するシルフィードの姿をしばし三人はポカンと見詰めていたが、まずはクリュウが噴き出した。

「もう、シルフィードは」

「す、すまない……」

「でも私ももうお腹ペコペコです。早く戻ってご飯にしましょう」

それをきっかけに話題を取り戻したクリュウとフィーリアは笑いながら言葉を繋げる。シルフィードもまた顔はまだ赤いが、いつも通りに戻った雰囲気にほっと胸を撫で下ろす。

一方、いつもの調子を取り戻す三人に対しサクラは無言を貫いてい

た。元々こういう状況でもあまりしゃべらない子なのでそれが異変の沈黙なのかいつもの沈黙なのかは判断できない。だが、
「……そうね」
小さな、本当に小さな笑みを口元に浮かべてそう言ったサクラ。
明確な理由や証拠がある訳ではない。でも、友人として、仲間としての勘が《大丈夫》だと告げていた。
「じゃあ、行こうか」
そう言ってクリュウはそっとサクラに右手を伸ばす。その手をサクラは一瞬驚いたように見詰めていたが、フッと小さな微笑を浮かべて握る。
「サクラ様ばっかりずるいですぅッ！」
まるで小さな子供のように拗ねながら駄々を捏（こ）ねるフィーリア。クリュウは少しだけ逡巡した後、サクラにそうしたように左手を差し伸べた。すると、フィーリアはおもちゃを貰った子供のように大喜びして握る。
右手にサクラ、左手にフィーリアを繋ぎ、クリュウは小恥ずかしくも手を伝って感じる二人の温もりに小さな笑みを浮かべた。
「まったく、君達は……」
一人、シルフィードだけは小さく肩を竦ませて「さっさと行くぞ」と先頭を歩く。その後ろを慌ててクリュウが続き、そんな彼の両手にはそれぞれサクラとフィーリアがしがみ付いている。先頭を歩くシルフィードが時折振り返り羨ましげにクリュウの手を盗み見ている事は秘密だ。
信頼できる仲間と愛しの人に囲まれながら、サクラはそっと小さな、でも満面の笑みを浮かべていた。
天幕（テント）に戻った一行はすぐに食事の用意を始める。用意と言ってもこんがり肉を肉焼きセットを使って温め直したり、保存用の乾燥野菜を水で戻し、こんがり肉のスライスと一緒に茹でた野菜スープを作る程度。後は保存用のパンを添えるだけ。すぐに用意が整い、四人は小さなテーブルを囲んで食事を開始する。ちなみにクリュウの横はサクラが陣取り、クリュウの正面にはフィーリア、その隣でク

リュウからは対角線上の場所にシルフィードが腰掛ける。これが三人（主にフィーリアとサクラの間）での妥協点の席順だ。
「いただきます」
　クリュウの掛け声を合図に三人も手を合わせ食事が開始される。簡単な料理しか並んでいないが、こんがり肉はフィーリアの特製だし、スープはクリュウが味付けをしている事もありどれも美味だ。まさにシンプルイズベスト。
　適当に話題を振って楽しげに談笑しながら食事を進めていると、ふとクリュウが手を止めた。
「どうした？」
　シルフィードがパンをかじりながら問うと、クリュウは小さくため息を漏らした。
「ヴィルマの人達は一日の食事も危うい状態なのに、僕達がこんな物を食べてていいのかなって……」
「お気持ちはわかりますが、私達が護衛した支援物資には当然食糧が含まれているはず。質素な物には違いないですが、食事自体は十分配給できると思います」
　確かにフィーリアの言う通りだ。自分達が無事に物資を輸送した事により、短期的とはいえ食糧問題はこれで解決するはず。クリュウが言うような深刻な状態ではない。
　だが同時に、支給されるのは携帯食料や水などの必用最低限の物ばかり。栄養バランス重視で味は簡素で今自分達が食べている物よりも豪勢さはさらに劣る。
「我々はハンターだ。依頼はないとはいえ、もしも先日のイーオスの残党を始めとしたモンスターがこの街に攻め行って来た場合はこれに応戦する必要がある。その時に備えて腹を満たすのだから、食べ応えのあるものでないといかん。それに、私達が持っている食糧など四人で数日分だ。ヴィルマにはそれこそ何百人と難民がいる。どの道これを配ろうと考えてもとてもじゃないが量が足りない。無駄口は叩かず、今は戦に備えて腹を満たせ」
　そう言ってシルフィードはスープをすする。言い方はキツイが、彼

女が言う事は全て正論だ。自分達の食糧は少な過ぎて話にならない。改めて突きつけられたその現実にクリュウは静かに落胆した。
理想主義のクリュウと、現実主義のシルフィード。いくら仲が良い二人でも根本的な主張の違いがあり、それは決して相容（あいい）れる事はない。二人の間には決定的なまでに踏んで来た場数の違いがあるのだ。
「そう、だよね。ごめん、変な事言って」
「いや、私の方が大人げなかったな。すまない。だがこれだけは理解してくれ。現実的には君の考えは不可能だが――私はそんな君の考え方は嫌いではない」
そう言ってシルフィードは静かに笑った。その笑顔にクリュウもまた「ありがと」と礼を言いながら小さく笑みを浮かべた。
そんな二人の様子を見てフィーリアは嬉しそうに笑みを浮かべると「スープおかわり持ってきますね」と気を利かせてくれる。シルフィードは「すまない」と言ってカップを渡し、クリュウは「僕はもういいや」と言って断る。
「サクラ様はおかわりなさいますか？」
フィーリアは今も尚ずっと沈黙を続けているサクラに問う。サクラは無言で首を横に振って拒否の意を示し、フィーリアはシルフィードと自分の分を鍋から取り出してカップの中に入れる。まだ作りたてだけあって湯気が立ち上り、おいしそうな匂いが鼻を通り食欲を刺激する。これに少し胡椒を入れるのもまたうまい。
「シルフィード様どうぞ」
「あぁ、すまないなフィーリア。ありがとう」
いつもと変わらないやり取り、いつもと変わらない食事、いつもと変わらない光景。だがここは被災地であり、天幕（テント）から一歩外に出ればそこには廃墟が広がっている。そう思うと、こうしていつもと変わらぬ日常を送っている自分達がどうしても不謹慎に見えて仕方がない。一歩外に出れば、突然非日常の世界に放り投げられた人々が何百人といるのに。その想いが、どうしてもクリュウは心の底から抜け切れなかった。

「……ごちそう様」
クリュウはまだ自分の取り分が残っているにも関わらずフォークと置いた。どうにも食事がのどを通らないのだ。
「クリュウ様、もうよろしいのですか？　まだ残っていますのに……」
「……うん。何か食欲が沸かなくてね。ちょっと散歩にでも出て来るよ」
「あ、クリュウ様……ッ」
フィーリアが慌てて呼び止めるが、クリュウは無言で天幕（テント）から出て行った。残されたのは三人の少女達と彼の残した食事だけ。
「……クリュウには少々この現実は辛かったのかもしれんな。良くも悪くも、私達は経験上こういう場数も踏んではいるが、彼は違う。この現実とは思えない現実を受け入れるのには、もう少し時間が掛かるのかもしれんな」
静かにシルフィードがそう言うと、二人は小さくうなずいた。クリュウは自分達とは違いまだ経験や踏んで来た場数が未熟過ぎる。決して自分達の事を過大評価しているのではなく、事実を言っているに過ぎない。
クリュウはリオレイアを単独で狩る力はまだないし、ラオシャンロンやクシャルダオラとの交戦経験もない。女子陣三人とクリュウとの間にはまだ大きな差があるのは事実に変わりない。
「クリュウ様……」
フィーリアはクリュウが残した料理を片づけながら彼が出て行った天幕の入口を見詰める。彼がこうしている間にも戻って来てくれる事を願ったが、それは叶う事はなかった。
サクラもまた無言で彼が座っていた席を見詰め、シルフィードは静かにスープをすすった。
天幕（テント）から出たクリュウは一人で再び街の中を当てもなく歩いていた。
廃墟と化した街並みが続く道をゆっくりと歩いていると、瓦礫を載せたリヤカーを引く親子とすれ違った。向こうが丁寧に頭を下げて来たのでクリュウも慌てて頭を垂れる。その後も人とすれ違うたび

に頭を下げられ、クリュウは何とも言えない微妙な気分になった。
「……マントでも羽織って来れば良かったな」
ドンドルマのようなハンターが大勢いる大規模な街や、イージス村のような見知った人しかいない小さな村と違い、ヴィルマは初めて来る中規模都市。それもハンター数名が今回のテオ・テスカトルとの戦闘で戦死している。そのせいかただでさえ目立つハンターの防具姿がより目立って仕方ないのだ。せめてヘルムを被ってれば良かったのだが、レウスヘルムは天幕（テント）の中に置いて来てしまった。
クリュウは自分の浅はか過ぎる無計画な行動を反省しつつも、ついさっき出て来たばかりの天幕（テント）に戻るの気も起きず、結局はそのまま当てもなく街中を放浪する。
周りを見れば人々が復興作業に勤しんでいた。復興と言ってもまずは半壊、もしくは全壊した家の瓦礫の下から自分の私物や私財を確保したり、倒壊しそうな建物を崩したり、飛び散った瓦礫の除去など。復興以前の段階だ。
こういう災害時には当然と言ってもいい程火事場泥棒とも言うべき者が現れる。倒壊した人の家の瓦礫の下から勝手に私財などを盗む者がその多くだ。現在は臨時の自警団を中心にエミルなどのギルドハンターの指揮の下で警戒や監視を行っている。
災害当時に比べればずいぶん沈静化したが、まだ混乱は続いているのが現状だ。
右を見ても廃墟、左を見ても廃墟。前後も廃墟が続く光景にクリュウは頭が痛くなった。その全てがクリュウの知っている常識とは懸け離れる過ぎていて理解が追いつかなかった。
一つの街がたった一日で壊滅的打撃を受けて崩壊し、大勢の難民を出してしまう。そんな事実が、信じられなかった。
家一件建てるのにも何ヶ月も掛かる。街なんてその集まりだから、ヴィルマのような街が生まれるまでにはそれこそ何十年という年月を要する。なのに、それが壊れるのはたった一日。人々が積み重ねてきたものが、たった一日、たった一頭のモンスターによって壊されてしまった。

理解しろと言われてもできっこないし――行き場のない憤りが胸を熱くする。
サクラはカルナスで、シルフィードは故郷の村で、フィーリアも詳しくは知らないがどこかの街か村で同じような光景を見ている。だからあんなにも冷静でいられるのだろうか。だとしたら、彼女達も初めて目撃した時は自分と同じような気持ちを感じたのだろうか――否、きっと自分のそれよりもずっと辛かっただろう。特にシルフィードは両親と弟を、サクラも元チームメイトを一人失っているし、今回も自分の師匠と言うべき人を亡くしている。その辛さは自分とは比べ物にならない。
――技術も経験、自分はあの三人に比べてあまりにも未熟過ぎる。今回の事でクリュウはその事実を改めて痛感した。
そんな鬱（うつ）な事を考えながら歩いていると、少し離れた場所に小さな茶髪のお下げをしたかわいらしい女の子が一人で瓦礫の中から何かを引っ張り出そうとしているのが見えた。それ自体は同じような光景を何度も見ているので別段気にならなかったが、クリュウの視線は少女の引っ張り出そうとしている物の上に積み上がった瓦礫だった。元は家だったのだろうが、今では危険に積み重なった瓦礫の山だ。その脆さは少女がその下敷きになっているものを引っ張り出そうとするたびに震えている事が証明していた。
嫌な予感がしてクリュウが声を掛けようとした刹那、ついに耐え切れなくなった瓦礫が音を立てて崩れ出した。少女の背丈よりもずっと高い場所からボールくらいの大きさの瓦礫が少女に向かって崩れ落ちる。
崩れる瓦礫に少女が悲鳴を上げて座り込んだ直後、狩場で鍛えた脚力を生かしてあっという間に少女の前に回り込んだクリュウは構えたオデッセイの盾でボール程の大きさの瓦礫を弾き飛ばした。続けて拳程の大きさの瓦礫が数個落ちて来たが、クリュウはそれを全て盾で防ぎ切った。
「ふぅ……」
盾を下ろして一息ついた後、クリュウは足下に座り込んで涙目に

なっている少女を見た。どうやら瓦礫は一個も彼女には当たっていないようだ。ほっと胸を撫で下ろすと、そっと少女に向かって手を伸ばす。
「大丈夫？　怪我はない？」
クリュウの問い掛けに少女はビクッと震えた後、恐る恐るとうなずいた。
クリュウは「そっか」と笑顔で返すと、少女が引っ張り出そうとしていた物を見た。瓦礫に埋もれていて一部しかわからないが、どうやらそれはぬいぐるみらしい。
「危ないからここで待っててね」
クリュウはそう言うとぬいぐるみを掘り出し始めた。少女には重くてどかせない瓦礫も、見た目こそ少女に見えなくもないが一応十六歳の男子のクリュウの腕力があれば何とかどかす事もできた。数分後、クリュウは少女のぬいぐるみ――かわいらしくデザインされたリオレウスのぬいぐるみを少女に渡した。
「はい、どうぞ」
クリュウがぬいぐるみを手渡すと、少女はクリュウと出会って初めて笑顔を浮かべた。ギュッとぬいぐるみを大切そうに抱き締め、キラキラとした純真無垢な瞳でクリュウを見詰める。
「ありがとうお姉ちゃんッ！」
――刹那、勢い良くクリュウがずっこけたのは言うまでもない。
「ご、ごめんなさい」
「いいよ。たまにこうやって間違われるから慣れてるし。とりあえず、わかってもらえればいいよ」
「う、うん。じゃあもう一回――ありがと、お兄さん」
「どういたしまして」
少女の誤解を訂正し、クリュウは今度こそ一息ついた。
瓦礫の下にあったせいで少々薄汚れてしまったリオレウスのぬいぐるみを、少女は大切そうにしっかりと抱き締めている。よっぽど大切な物だったのだろう。無事で何よりだ。
「お兄さん、ハンターさんなんだぁ」

少女の方を見ると、彼女は自分の装備を見て目を輝かせていた。子供にとってはハンターというのは正義の味方というイメージが強いのは自分も昔はそうだったのでわかっている。クリュウはそっと微笑んでうなずいた。
「そうだよ。と言っても、僕はドンドルマから送られて来た外部のハンターだけどね」
「そうなんだぁ。えへへ、ご苦労様」
そう言って少女は無邪気に微笑んだ。クリュウは少女のそこ抜けた明るさと優しさに微笑みつつも、内心は複雑な心境だった。
街付きのハンターは命懸けでテオ・テスカトルと戦い、先行したジンとシィは恐らくその討伐戦に荷担しているはず。それに対し自分は食糧などの物資運搬の護衛という難易度がグッと低い慣れたような依頼でここに来た。
少女は家やたくさんの宝物を失った。辛い状況にいるはずなのに、こうして自分に労いの言葉を向けてくれる――彼女の労いの言葉に報いれるだけの事を、自分はしているだろうか。そんな疑問が心にチクリとトゲとなって突き刺さる。
「それ、レウスシリーズだよね。かっこいいなぁ」
「そうだよ。詳しいんだね……えっとぉ」
「サラ。私の名前はサラ・ブヴァルディアだよ、よろしくね」
そう名乗り、少女――サラは無邪気に微笑んだ。名前を教えてもらい嬉しくはあるが、知らない人には無闇に名乗らない方がいいと後で注意しようと心に決める。
名乗られたからにはこちらも礼儀として名乗らないといけない。例え子供相手でもその辺の礼儀は変わらない。
「僕はクリュウ・ルナリーフ。見ての通りのハンターだよ」
「クリュウお兄さん……うん、やっぱりお兄さんの方が呼びやすいや。このままでもいい？」
「もちろん」
そう答えるとサラは嬉しそうに微笑み、改めてクリュウのレウスシリーズを興味深げに見詰める。

「すごいなぁ、こんな身近にレウスシリーズを見れるなんて夢みたい」
「サラちゃんはリオレウスとかレウスシリーズが好きなの？」
「うんッ。私ね、夢があるんだ。いつかハンターになって、リオレウスと戦って、レウスシリーズを手に入れて、もっと高い所を目指す。この街を守れるくらい――ううん、世界中の人を守れるようなハンターになりたいの」
　そう無邪気に自分の夢を語るサラを、クリュウは微笑ましげに見詰めていた。昔の自分も彼女のように無邪気にそんな大層な夢を掲げて、そこに向かってひたすらに突っ走っていた――何だか、昔の自分を見ているみたいだ。
「それにしても、女の子なのにハンターになりたいなんて珍しいね。何か理由があるの？」
「うんッ。あのね、昔おばあちゃん家からの帰りに商隊の人と一緒にここに帰って来る途中、ランポスの群れに襲われたの。その時、護衛してくれていた女のハンターさんが守ってくれたんだ。すごいんだよッ。まるで飛んでいるみたいに速くて華麗で、近づくランポスを細長い剣で次々に薙ぎ倒したの。ランポスの数は商隊の人数よりも多いくらいだったのに、その人は一匹たりとも竜車には近づけなかった。私、その時決めたの。いつかあの人みたいなハンターになって、私みたいな子供を守りたいって」
　嬉しそうに理由を語るサラの姿は、やっぱり昔の自分と重なる。父の姿に憧れ、凄腕のハンターになると夢を持っていたあの頃の自分に――まぁ、今では現実はそんな甘くないと身近で痛感してはいるが。
「ねぇ、今度はお兄さんの話を聞かせて」
「僕の？」
「うん。そうだなぁ、じゃあやっぱりリオレウスとの戦いのお話がいいッ」
　キラキラと目を輝かせながら言うサラのお願いに、クリュウは苦笑しながらうなずくしかなかった。この純真無垢な瞳を見て断れる奴がいたら目の前に連れて来てほしい。
　仕方なく、クリュウはリオレウスと初めて戦ったあの戦いの話をす

る。正直、かなり自分の恥を暴露するような話だが、サラの純粋な好奇心に満ちた爛々と輝く瞳の前にウソを言う訳にもいかず、結局正直に話す事にした。
　太陽がすっかり下り、山の間から覗くように大地を暁色に染め上げる。廃墟と化したヴィルマの街並みも同色に染まり始めた頃、クリュウはサラの手を繋ぎながら街の大通りを歩いていた。ここはこの街のメインストリートであるが正式な名称はなかった。しかし後に今回の事件を機に街を救った英雄の一人の二つ名を取り、この大通りは灰狼通りと呼ばれる事になる。
　そんな道を、二人は夕日に照らされながら歩いていた。
「こっちでいいんだよね？」
「うんッ。こっちこっち」
　クリュウの手を掴んでこっちこっちと嬉しそうに引っ張るサラ。今クリュウはサラを親の下へ無事に届けようと彼女の両親がいる避難所に向かっていた。
　サラと出会ったのはまだ日が高かった頃。すっかり日も高くなってしまっている上に、こんな治安状態も混乱の中にある街中に子供一人を放流できる程クリュウは薄情ではない。
　フィーリア達が心配しているかもしれないが、事情を説明すれば問題ないだろう。そう結論づけてクリュウはサラに手を引かれるまま歩いていく。
「今日は色々とありがと、お兄さん」
　遠くに避難所が見えた所で突然サラが振り返って言った。クリュウは「どういたしまして」と笑顔で返す。
「リオレウスの話も聞けて嬉しかったッ」
「恥を披露したような話だけどね」
　苦笑しながらクリュウが言うと、サラは「ううん、とってもかっこ良かったよ」と満面の笑顔でそう言った。
「やっぱり私、ハンターになるッ」
「うーん、僕的にはおすすめできないなぁ。結構辛くて大変だよ？それに、サラちゃんは女の子なんだからもっとそういう方面の夢でも

いいと思うけど」
「お兄さんの仲間は女の人ばっかりなのに」
「まぁ、彼女達は例外というか、僕以上にハンターというか、比較対象にする事自体が間違っているというか」
「それに、お兄さんだって女の人みたいな顔だよ？」
「……子供の純粋さって、時にどんな刃物よりも鋭く胸を抉るよね」
　若干傷つきつつも、サラの幼いからこその真っ直ぐさには何かと救われる。今日一日でかなりの非現実さを痛感したクリュウにとっては、サラの純粋さが何よりも心を支えてくれた。
「えへへ、お兄さん。また明日も会ってくれる？」
「うーん、まぁ大丈夫だと思う。少しの間この街に滞在する事になりそうだし」
「そうなんだッ。じゃあ一緒に避難所に行こうよッ。私お兄さんと一緒がいいッ」
「いや、それは勘弁。仲間を待たしてるからさ」
「えぇ～。つまんな～いッ」
「ごめん。また今度ね」
　さっきまでの笑顔はどこへやら。すっかりふて腐れたように唇を尖らせて石ころを蹴るサラ。クリュウは苦笑しながらもこればっかりはどうしようもないと「ごめんね」と繰り返す。するとサラは振り返り、
「じゃあお兄さん、そこに屈んで」
　なぜか腰に手を当て、もう一方の手で自分の前を指差す。クリュウは素直に従って「こう？」と屈んでみる。
「――お兄さん、大好き」
　そう言って、サラは自分と同じ高さくらいになったクリュウの頬にチュッと唇を当てた。驚くクリュウにサラは頬を赤らめながら「えへへ」とはにかんだ。
「ママに教わった大好きな人に感謝の仕方だよ。お兄さんが初めてだぁ」
「あ、ありがと……」

突然の事に頬を赤らめながら戸惑うクリュウ。相手が自分よりも年が半分程の少女だという事実を忘れてしまうくらいの狼狽だ。
とりあえす頭でも撫でておこう。そう思いながら手を伸ばす――寸前、それを遮るように猛烈な勢いで何かが地面に突き刺さった。
「どわッ!?」
「キャッ!?」
二人して突如として飛来し、地面に突き刺さった物を凝視する。それは一本の刀だった。クリュウはなぜかその刀にものすごく見覚えがあった。そして、冷や汗ダラダラでぎこちなく振り返り、凍り付いた。
――少し離れた所、全力投擲をした後と思しき構えをしたサクラが立っていた。その背後にはフィーリアと知るフィードの姿もある。
「さ、サクラ……ッ。それにフィーリアとシルフィまで」
驚きのあまり狼狽するクリュウ。一方、女子三人は静かだった。正確に言えば、無言でものすごい圧迫感と殺気を吹き荒らしているのだが。
「クリュウ……、人の趣味にあれこれ言うのは野暮だとはわかってはいるが、さすがにそれはヤバイぞ。国や地域によっては犯罪だし、道徳的にも……」
若干引きながらも、精一杯の優しさで真っ当な道へと誘うシルフィード――確実に彼女の中で自分の評価が猛烈な勢いで急降下し、尚且つものすごい誤解が生じている。
「……残念です。クリュウ様のご友人が一人世界から消えようとしています」
天使の微笑みを浮かべながらすさまじい事を言い放つフィーリア――だが、その瞳が全く笑っていない事に彼女の言動が冗談ではない事を悟った。
そして愛刀、鬼神斬破刀を槍投げの応用で常識外れの全力投擲をしたサクラは……
「……遺言は聞いてやる」
「とりあえずフィーリアとサクラは落ち着いてッ！　どっちも殺気が

猛烈な勢いで溢れ出してるッ！　それからシルフィもそんな道端のゴミを見るような目で僕を見ないでッ！　地味にそれが一番傷つくッ！」

クリュウは突然の事に戸惑っているサラを守るように彼女の前に立って三人の暴走娘を止める。だがすでにサクラは攻撃態勢に入っているし、フィーリアもいつの間にかヴァルキリーブレイズを構えている。これ以上ない絶体絶命のピンチだ。

この危機的状況をどう打破すればいいか。クリュウはかつてない程の勢いで様々な方法を考える。

打破策その1

「いやぁ、目にゴミが入っちゃって」→あからさま過ぎて殺される。

打破策その2

「ちょっとした事故なんだッ！　転んだ拍子にサラちゃんの唇が――」→やっぱり殺される。

打破策その3

「えへへ、やっぱり小さな女の子はかわいいね」→肉体的な死と同時に社会的にも殺される。

……おかしい。全ての選択肢が最終的にはバットエンドに至ってしまう。何これ、結局死ぬの？

クリュウは必死に思考をフル回転させるが、この状況を打破できるだけの策はなかなか浮かんで来ない。その間にもサクラとフィーリアの包囲網はさらに狭まって来る。

そんな中、一番最初に冷静さを取り戻したのはシルフィード。状況を改めて見回して慌てて止めに入る。それを見て状況が幾分か好転したと見てほっと一息するクリュウ。

「ごめんねサラちゃん。怪我とかは――サラちゃん？」

クリュウの問い掛けなど一切聞こえないという感じにある一点を見詰めて微動だしないサラ。その表情は驚愕一色に染まっていた。

「サラ、ちゃん？」

彼女の視線を追うと、そこには地面に突き刺した鬼神斬破刀を回収するサクラが。

「……何？」
サラの視線に気づいたサクラは不思議そうに首を傾げ、隻眼でサラとクリュウを交互に見る。
サクラを凝視したまま固まるサラ。しばしの空白の後、彼女はつぶやくように言った。
「……ハンターのお姉さん」

第112話　月光花の絨毯　星空の下での誓い

避難所に着いた一行はそこでサラの両親と出会った。別に話さなくてもいいと照れるクリュウの意見を棄却し、サラは両親にクリュウに助けてもらった事、さらにはサクラが自分の憧れのハンターだと嬉しそうに話してしまった。

そこからが大変だった。その話にサラの両親は頭を何度も下げて感謝し、町内会の人々も一緒になってクリュウ達を大歓迎。食事は質素であったが、歌や踊りを披露したりの簡単な歓迎会を開いてもらい、結局クリュウ達が解放されたのは日が落ちてからずいぶんと時間が経った頃であった。

先程までの喧噪とは打って変わって静かな帰路の途中。クリュウは隣を歩くサクラを見る。

「ほんとにサラちゃんの事覚えてないの？」

それはさっき、サラが自分の事を覚えているかサクラに問うた時の事。サクラは表情を一切変えずに淡々と「……覚えてない」と一刀両断。サラはその言葉にひどく傷ついたような表情を浮かべた後、「そっか。お姉さん忙しいから、いちいち覚えてなんかないよね」と悲しげに笑ってそう言った。その時の彼女の悲しげな笑みが、瞳に焼き付いて離れない。

「……護衛対象、それも便乗していただけの子供の顔なんていちいち覚えてなんかいられない」

クリュウの問いに対し、サクラはやっぱり淡々と答える。その淡泊さにクリュウは少しムッとした。

「そんな言い方ないだろ。それに覚えてないって可哀想じゃないか」

クリュウが少し怒ったように言うと、サクラは鋭い隻眼でクリュウを射貫く。その瞳が怒っているように見えるのは気のせいだろうか。

「……私が今まで一体何百人を護衛して来たと思ってるの？　それだけの数の人間を覚える記憶力は持ち合わせていないし、あったとしてもそれは別の事に使うべき。無意味だわ」

サクラの返答に対し、クリュウは言葉に詰まった。言い方はキツイ

が、相変わらず彼女が話すのは全て正論。返す言葉が見あたらないのだ。あるとすれば、
「だからって、サラちゃんが可哀想だよ……」
絞り出すように言ったクリュウの言葉に、サクラは突然足を止めた。振り返ると、そこにはうつむきながらその場に立ち尽くす月光に照らされた彼女の姿があった。
「……いい加減にして」
弱々しく発せられたサクラの声は、震えていた。
「……クリュウは本当に無神経過ぎる」
再び上げられた彼女の顔は悲痛に歪み、瞳は濡れて月明かりに反射してキラキラと輝いている。そんな彼女の姿にクリュウは言葉を失った。
「……付き合ってられないわ」
そう吐き捨てるように言い残し、サクラは頭を振ってその場で踵を返した。クリュウの声を無視し、そのまま暗闇の中へ消えてしまった。
彼女の消えた闇を見詰め、クリュウは戸惑いの声を上げる。
「な、何なんだよサクラの奴……」
「……今のは、クリュウ様がいけないと思います」
「同感だな」
背後でずっと黙っていたフィーリアとシルフィードは静かにそう言った。当然、クリュウの視線は二人に向く。
「ぼ、僕が悪いの？　だってあれはサクラが……」
「サクラ様の状況を思い返してください。サクラ様は師を失ってあれでも精神的にかなり不安定なんですよ？　そんな状態のサクラ様を追い詰めるような言動をすれば、ああいう反応をするのは当然です」
「追い詰めるって、僕はそんな……ッ」
「君は無意識かもしれんが、無意識だからと言って何もかもが許される訳ではない。師を失って悲しむ彼女を支えられるのは、残念ながら君以外にはいない。なのに君はサクラに対してひどく冷たいではないか」

「別に冷たくなんかないよッ」
「そう思っている事が無自覚で、知らず知らずに人を気ずつける最も厄介な事です。クリュウ様は知らないでしょうが、クリュウ様が天幕(テント)から出て行った後、サクラ様は真っ先にその後を追ったんですよ。それからずっと、クリュウ様に再会できるまでずっとサクラ様はクリュウ様を探していたんです。心の拠り所を求めて、必死になって」
「そんな……」
「やっとクリュウと再会できたのに、君はサラという子供の事ばかりか、サクラに無理難題を押しつける始末。それではサクラが耐えられる訳ないだろう？　あの子は攻めは強いが攻められる事には弱いタイプだからな」
フィーリアとシルフィードの言葉にクリュウは自分の行動を思い返し、ようやく彼女達の言わんとする所を理解した。
サラと楽しげに話している間、隅っこの方からサクラが寂しげな瞳で自分を見詰めていた事も……
「サクラ……」
やっと自分の無自覚な行動に気づいたクリュウを見てフィーリアは疲れたようにため息を漏らす。
「わかったのでしたらすぐにでもサクラ様を追ってください。あの勢いだと通行人に襲いかかる可能性だってありますよ？」
「冗談では済まないぞ、彼女の場合。早く追いかけろ」
二人の言葉にクリュウは「わ、わかったッ。二人は先に帰っててッ」と言い残し、慌ててサクラの後を追って闇の向こうへと消えて行った。
月明かりの下、残された二人はすでに見えなくなった彼の背中が消えた方向を見詰め、踵を返す。
「まったく。クリュウ様は本当にまったくです」
いつになくプンスカと怒るフィーリアをシルフィードが「まあまあ」と落ち着かせる。
「彼の無自覚さは今に始まった事じゃないだろ？」

「それはそうですけど……」
「まぁ、少しは周りにもちゃんと目を向けてほしいのは事実だがな。サクラだけでなく、君にもな」
「……ほんと、いつになったら私の気持ちは届くのでしょうか」
「いっその事押し倒してしまってはどうだ？」
　からかうように言うシルフィードの言葉にフィーリアは「そ、そのようなふしだらな事……ッ」と顔を真っ赤にさせて狼狽する。シルフィードはそんなフィーリアの反応を見て静かに笑った。
「冗談だ。まったく、君は純情だな」
「も、もうからかうなんてひどいですシルフィード様ッ」
「すまんすまん。だがそれくらいの事をしないと状況は打開しないというのも事実だろ？」
「うぅ……、何であんなにも鈍感な人を好きになってしまったんでしょうか……」
「あははは……、だが――後悔はしていないのだろう？」
　シルフィードの試すような問い掛けに対し、フィーリアはムッとしたような表情を浮かべた後、満面の笑顔を浮かべて自信満々に答えた。
「はいですッ」
「……そうか。まぁ、サクラも私にとっては大切なチームメイトだ。どちらか片方を応援する訳にはいかんが、まぁ悔いのないようがんばれ」
「はいですッ」
　シルフィードの激励に対しフィーリアは満面の笑顔でうなずくと「それでは先に天幕（テント）に戻っていましょう。お二人が戻って来たらすぐに夕食ができるよう用意しないといけませんし」と言って帰路への一歩を踏み出す。
「そうだな。私も何か一品作ってみるか」
　腕が鳴ると言いたげに腕をグルグルと回すシルフィード。そんな彼女の爆弾発言に対しフィーリアは苦笑する。
「シルフィード様はリーダーなんですからどっしりと構えていてくだ

さい。食事の用意は私一人で十分ですから」
「――気のせいか、さりげなく台所に入る事を拒否されたような」
「き、気のせいですよ。ほ、ほら早く行きましょう」
首を傾げるシルフィードの腕を引っ張り、フィーリアとシルフィードは一足早く天幕（テント）へと帰って行った。
月明かりに照らされる道を、サクラは一人駆けていた。瞳は不機嫌そうに細まり、地面を睨み付ける。
「……クリュウのバカッ……クリュウのバカッ……クリュウのバカッ……クリュウのバカッ……クリュウのバカッ」
先程からその言葉を繰り返しながら内に燃える怒りを噴き出しながら進み続ける。
だがそのうち、だんだんと空しさが胸を満たし始めた。
心の拠り所であるクリュウに構ってもらえない。それが根底にある怒りであり、同時に寂しさでもある。
「……クリュウの、バカ」
最後にはそんな弱々しい声しか出なかった。彼の名前を口に出すたび、怒りよりも寂しさや空しさの方が大きくなってしまう。
いつの間にか駆け足だった速度もとぼとぼとした歩みへと変化していた。
ずっと地面を見詰めている視界が、じわりと歪む。それが涙だという事に気づくにはそれほど時間は掛からなかった。
足を止め、彼が追い掛けて来ているのではないかという一抹の希望を抱きながら振り返る――だが、そこに彼の姿はなかった。
自分から彼を拒絶するように逃げて来たのに身勝手な事を思い、勝手に落胆する自分に嫌気が差す。
正確に言えば一応クリュウは追い掛けて来ているにはいるのだが、何せチーム随一の俊足を誇るサクラの本気の全速力で開けられた距離はそう簡単に埋まるものではなく、クリュウはまだずっと後ろの方を走っている段階にいるのだ。
そんな事など露知らず、サクラはさらに落ち込む。足下に転がっている石ころを蹴り、ふて腐れたように唇を尖らせ、しかしすぐに寂し

げに表情を曇らせる。
「……クリュウ」
彼の名をつぶやき、地面を見詰めながらとぼとぼと一人夜道を歩く。その時、前方に人の気配を感じた。チーム随一の索敵能力を持つサクラだからこそわかるわずかな気配。まるで、自ら気配を可能な限り遮断しているかのよう。自然と、背中の太刀に手が伸びる。
「――人に武器を向けるなと前にも言ったろ？」
闇の向こうから投げ掛けられたその言葉に、サクラは聞き覚えがあった――否、忘れる事などできない敗北。自然と太刀の柄を握る手に力が込もる。
今まで雲に隠れていた月が顔を出し、辺りがその光に照らされて明るさを纏う。
現れたのはまるで読み物の中に登場する魔女のようなオーブ姿の男性だった。純白のその服は服と言うにはあまりにも特殊な材質。一見すると柔らかそうに見えるが、その実は並大抵な攻撃は吸収、もしくは弾いてしまう抜群の防御性能を持つのだろう。同じような素材にフルフルがいる。
詳しくはわからないが、あれは防具だ。ハンターであるサクラは一目でそれを見抜いた。
じっと見詰めるサクラの視線に男は苦笑しながら鍔の広い帽子の鍔を人差し指でグイッと上げる。露わになったのはやっぱり知った顔であった。
「……貴様」
「名乗っただろ？　他人知人問わず貴様扱いかお前は」
そう言って呆れ半分感心半分という感じで苦笑するのは先日ドンドルマで会ったハンターの青年――ジン・フォルクスであった。
予想通りの人物の登場にサクラは気を緩めるどころかより警戒心を露わにした。この男は侮れない。先日の一件でサクラは彼に対してそのような人物評価を下していた。
「おいおい、全くの他人って訳じゃないんだから、少しは警戒心を解けよな」

「……断る。貴様は要注意人物だからな」
「そんな評価を下されてるなんてな」
ジンは苦笑しながら肩を竦ませると、サクラの背後を伺う。
「お前一人か。他の面子はどうした？」
「……貴様には関係ない事だ。即刻私の前から消え失せろ」
「ここは公共の道だ。その指示には従えないな」
「……ならば、力づくで消すまでよ」
そう言ってサクラは背負った鬼神斬破刀の柄を握り、少しだけ引き抜いて刃を露わにする。鬼神斬破刀の独特の波紋が月明かりを浴びて怪しく輝く。
遭遇してまだ一分程しか経っていないのにすでに臨戦態勢のサクラにジンは面倒だと言いたげにため息を零す。
「何だ、ずいぶん機嫌が悪そうだな。クリュウ君とケンカでもしたのか？」
ものの見事に言い当てられたサクラは無言で肩を小刻みに震わせながら顔を真っ赤に染め、瞳をさらに鋭くさせる。それを見てジンは一言、
「あぁ、図星か」
「……殺すッ」
その宣言を実行するかの如く、サクラは鬼神斬破刀を素早く抜刀すると同時に地面を蹴って前方に向かって飛び込むようにして跳躍。チーム随一の俊足と身軽さを誇る彼女のずば抜けた身体能力が生み出す最強の突貫。本気の彼女の突貫は今までモンスター、人間問わず外れた事はない必殺。ジンとサクラの間合いは一瞬で消えた。
立ち尽くすジンに向かって、サクラは容赦なく横薙ぎ一閃で太刀を振るう。今まで外れた事のない一撃にサクラは勝利を確信する――だが、その一撃は虚空を斬り裂いただけだった。
勢い余って多々良を踏むサクラ。一瞬で横へ移動してサクラの一撃を回避したジンはそのままサクラの右手から鬼神斬破刀を叩き落とした。
「ハンターが人に武器を向けるのは御法度だと言っただろうが」

先程までのどこかに余裕を残した顔は消え、ジンは真剣な表情を浮かべて手を着いたサクラに言う。だがサクラはそんな彼の指図など聞かない。すぐさま鬼神斬破刀の鞘を背から抜くと着いた左手を軸にして回転。右手に構えた鞘で今度は風を切るような神速の突きを放つ。

常人なら回避できずに無様に散るその一撃も、ジンは片手で叩いてその軌道を変えて回避。後先考えずの突貫を失敗したサクラの懐はがら空きだ。そこへ拳を叩き込んだ。

「……かはッ!?」

自らの突貫の勢いと真逆の方向からの一撃を一点に受けたサクラは吹き飛ばされ、地面に倒れた。肺の中の空気を全て吐き、激しくせき込む。これでもジンはかなり手加減したのだが、思いの外サクラに勢いがあり過ぎた。

一度ならず二度までも自分の攻撃パターンを読まれた。サクラは悔しげにジンを睨み付けながら、自らの敗北を知る。

「人に武器を向けるのはハンターが最もしてはならない禁忌。一度ならず二度もそれを破ったんだ、文句はないだろ」

ジンは地面に転がったサクラの鬼神斬破刀の本体と鞘を回収し、鞘に納めると片手でそれを確保する。

武器を奪われ、心もズタボロになったサクラはその場に膝を着いた。

その直後、彼女の保護者とも言うべきクリュウが到着した。

「ほ、本当にすみませんでしたッ」

事の経緯を知ったクリュウはもう頭が地面に接触するゆな勢いで何度も何度もジンに頭を下げまくる。さすがのジンもクリュウの今にも泣き出しそうな勢いの土下座の応酬にたじたじだ。

「いや、もういいから頭を上げてくれ。これじゃまるで俺がいじめてるみたいだぞ」

苦笑しながらジンが言うと、ようやくクリュウは頭を上げた。その表情はここまで全力疾走して来た上に到着早々の謝罪の連発という肉体的・精神的疲労でずいぶんとくたびれていた。

「そういえば、君達は何でここにいるんだ？」
　ようやく話がひと段落したという事でジンは思い出したように問う。隣で無愛想に立っているサクラにため息を漏らしていたクリュウは慌てて答える。
「あ、僕達はジンさんが出発した後ライザさんに頼まれてヴィルマへの支援物資輸送の護衛で来たんです」
「なるほど、相変わらずライザさんは抜け目のない手際だな」
「ですね」
　お互いライザの事はそれなりの付き合いで知っている仲だけあり、どちらも彼女の常人を逸脱したスキルの高さに苦笑を漏らした。
　ちょうどその頃、遠く離れたドンドルマのギルド嬢の宿舎で一日の疲れを癒すシャワーを浴びていたライザが一発くしゃみをした事はこの場にいる誰も知らない。
「それで、君達は一体何があったんだ？　通行人に突然襲いかかる所を見ると、余程の事だとは思うが」
　ジンの問い掛けに対し、クリュウは「えっと、その……」と困ったような声を漏らす。どこから説明したら良いのやら悩んでいるのだ。それを見てジンは小さく口元に笑みを浮かべると、踵を返す。
「……邪魔になる前に消えさせてもらうぞ。後は二人でゆっくりやってくれ」
「あ、いえ別に邪魔なんて事は……ッ」
「冗談だ。それに元々俺も帰る途中だったんだ。早く帰らないとシィが何かしでかしてないか不安だしな。じゃあな」
　そう言い残し、ジンは二人から離れていく。クリュウはその背中に向かって慌てて「お勤めご苦労様でしたッ」叫び頭を下げた。
「……まるで引退するみたいで縁起でもねぇや」
　苦笑しながらジンは振り返らずに片手を振って闇の向こうへと消えた。
　ジンの姿が消えると、クリュウは全身に（みなぎ）らせていた緊張を解いて一息つくと改めてサクラの方へと向き直る。ジンとのやり取りの間、サクラは一人ずっと誰とも目を合わす事なく無言を貫いて

いた。
「ごめん……」
どう切り出せばいいか逡巡していたクリュウは、結局そう口火を切った。どんなに言葉を並べても、何よりも伝えたい気持ちはこれであった。
ここで初めてサクラは振り返り、クリュウを見た。一見するといつも通りの無表情だが、クリュウにはわかる。その隻眼は鋭い。まだ怒っているのだろう。当然だ、自分はそれだけの事を彼女にしたのだから。
サクラは何も言わず、無言でクリュウを見詰めるだけ。クリュウはその視線から逃げる事なく対峙しながら、言葉を続ける。
「サクラの気持ちも考えずに勝手な事言っちゃって……本当にごめん」
そう言ってクリュウは頭を下げた。サクラは何も言わずにそんなクリュウを見詰める。
クリュウは何も言わないサクラの無言に恐怖を感じた。今回ばかりは、サクラは許してくれないかもしれない。そんな想いが胸を満たし、こうして彼女の前にいる事に躊躇（ためら）いが生まれる。
「……ごめん、今は僕なんて見たくもないよね。ごめんね……」
クリュウは顔を上げたが、サクラの目を見る事ができなかった。そのまま、彼女から逃げるように背を向けて歩き出す。こんな逃げ出すような行動は本心では嫌で仕方がなかったが、今はこうする以外に術が思い浮かばなかった。
早く彼女の前から消えよう。そう思いながら早足で歩き出すクリュウ。その手を彼女は掴んだ。
振り返ると、相変わらずの無表情で立つサクラが自分の手を掴んでいた。ただ、瞳だけは唯一先程までの鋭さは消え、どこか寂しげな、お腹を空かせた子犬のような瞳に変わっていた。
「……付き合って」
そう言ってサクラは有無を言わせないとばかりに背を向けると、クリュウの手を掴んだまま歩き出す。自然とクリュウは自分が来た道

とは反対方向へと向かう事になった。
いつの間にか二人は街の中央からずいぶんと外れた場所に来ていた。サクラはその間一切言葉を発しず、クリュウも自分から切り出す勇気がなく互いに無言を貫いていた。
そのまま街を出て、林の中を突き進む。さすがにクリュウもこれ以上先に進むのは危険だとサクラに引き返そうと言ったが、彼女はこれを黙殺した。
まぁ、いざとなれば二人とも一応武装しているので何とかなるとクリュウもそれ以上強くは言う事はできなかった。
林に入って数分後、ようやく出口に達した。今まで周りを囲むように生えていた木々がそこで一斉に途切れ、視界が一気に開ける。そこに広がっていたのは……
「うわぁ……ッ」
そこにはまるで絵本の中の世界のような幻想的な光景が広がっていた。
天から降り注ぐ月と星々が美しく映った静かな湖。その周りには薄紫色の野花がまるで絨毯のように咲き誇っていた。光虫が集まり花の周りを飛び回る。星々の煌めきを受けて花々は輝く。そんな美しい幻想的な光景が、そこに広がっていた。
「きれいな所だね」
「……街で聞いたけど、予想以上ね」
ここはヴィルマの住民にとって自慢の場所であり、ヴィルマに観光などで来た人の多くはここを目指す。ちょうどこの時期は湖の辺に咲く月光花（シェレシーア）というこの地域特産の花が一斉開花する季節。ヴィルマではこの時期にこの花を敬い、街の永遠なる平和を祈る祭典として月光祭が行われる。
テオ・テスカトルが現れたのは、その祭の準備をしている最中の事だった。永遠の平和を願う祭典は、その平和を奪う存在によって砕かれた。当然、街がこんな状態では祭なんてできっこない。
ヴィルマの崩壊の影響により観光客も全て消えたので、今まさに見頃の月光花（シェレシーア）を見に来る者は自分達を除いて他にはい

ない。
「……貸し切りね」
そうつぶやくと、サクラはクリュウの手を引っ張って月光花（シェレシーア）の絨毯の中に入る。まるで淡い紫色の海の上を歩いているかのよう。二人の人間の登場に光虫達は慌てて飛び立ち、二人の周りには無数の光虫が飛び回り、光の粒子に包まれる。それもまた美しい光景だ。
「うわぁ……」
クリュウはその光景にすっかり目を奪われていた。今まで見た事もないような光景に、まるで子供のように無邪気に笑顔を浮かべる。その笑顔を見て、サクラが小さく微笑んだのは内緒だ。
サクラはそのままクリュウの手を引きながら歩き続け、湖の辺に腰掛けた。当然、クリュウもその隣に静かに腰掛けた。
風もなく、波もない湖はまるで空を映す鏡のよう。空の美しさも加わり、まるで上下で星空に挟まれているかのような不思議さを感じる。
「……きれいな所ね」
「そうだね」
「……やっと、普通に接してくれた」
「え？」
驚いて彼女を見ると、サクラは口元に小さな笑みを浮かべていた。先程までのような怒りや寂しさはその隻眼には感じられず、ただこの時を楽しむ。そんな彼女の想いが輝いていた。
「……クリュウ、普通じゃなかった」
「ご、ごめん……」
「……クリュウは少し謝り癖を直した方がいい。私みたいに、悪いのは全部他人や社会のせいにすれば楽よ」
「いや、それってダメ人間の象徴的発言だよね？」
クリュウのツッコミにサクラは「……そう？」とくすりと笑った。クリュウもまた「そうだよ」と笑う。
二人はいつの間にか、いつもの二人に戻っていた。そんな二人を祝

うように、光虫も彼らの周りで優雅な踊りを踊る。
「あのさ、サクラ。さっきの事なんだけど……」
改めてちゃんと謝ろうと口火を開くクリュウ。しかしサクラはそんな彼の唇に人差し指を当て封殺した。
「……謝られるのは好きじゃない」
「ご、ごめん」
無言でサクラはむにっとクリュウの頬を引っ張った。
「……謝られるのは好きじゃない」
「ひょ、ひょへん」
「……謝られるのは好きじゃない」
「ひゃ、ひゃいッ」
サクラは良しとばかりに頬を離した。強く引っ張られた訳じゃないので別に痛くはないのだが、絵面的にとりあえず頬を押さえるクリュウ。そんな彼を見て、サクラは小さく笑う。
「……謝られるより、一つだけお願いを聞いてほしい」
「別にいいけど……、何をすればいいの？」
クリュウが問うと、サクラは無言でクリュウに向かって倒れた。そのまま彼の膝の上に頭を載せ、いわゆる膝枕状態となった。驚くクリュウに「……動かないで」と言うと、そのままの状態に落ち着く。
「さ、サクラぁ……？」
「……このままがいい」
「も、もしかしてお願いってこれ？」
「……えぇ」
「……ほ、他の選択肢はないの？」
「……壱、一緒の布団で寝る。弐、一緒にお風呂に入る。参、女装する。四、私に「愛してる」と百回言い続ける。伍、今ここで膝枕をさせる」
「五番の膝枕でお願いします」
クリュウは頭を抱えながらそう答えた。どう考えても他の選択肢は桁が違う。というか、女装はまず絶対にない。サクラは自分に男として死ねとでも言うのか……それほど怒っているとでも言うのか。
サクラの選択肢を深くまで考えた結果彼が選んだのは膝枕だった。

ちなみに、全ての選択肢がサクラの欲望だというのは秘密だ。
恥ずかしそうに頬を掻きながら困ったように表情を浮かべるクリュウに対し、サクラはそんな彼の膝枕を満喫していた。贅沢を言えば防具があると彼の温もりは感じられないし、正直硬くて寝やすいとは言えないので防具を脱いでほしいのだが、防具の下はインナーだけなのでクリュウは絶対にそれを嫌がる事は明白だ。サクラ的にはむしろ全力でウェルカムなのだが。
まぁ、きれいな星空をバックに頬を赤らめながら照れる彼の顔を見詰めというのも悪くはない。
「……ずっと、夜が明けなければいいのに」
「え？　何か言った？」
「……何でもないわ」
首を傾げるクリュウにそう言って、サクラは天を仰いだ。そこには満天の星々が煌めいている。
死んだ人は星になるという子供騙し的な民話がある。そんな非科学的な事は信じてはいないが、もしも本当だと仮定すればこの星空のどこかに父と母の星があり、師の星があるのだろう。
「……それって盗撮に値するのかしら」
「何か言ったサクラ？」
「……何でもないわ。気にしないで」
首を傾げるクリュウを一瞥しつつ、サクラは再び星空を見上げる。そして、フッと小さな笑みを口元に浮かべた。
「……私は幸せよ。安心なさい」
その言葉に応えるように、星が一つ夜空のキャンパスから零れ落ちた。

第113話　理想と現実　蒼銀の騎士姫の想い

日付が変わる頃、二人は天幕（テント）へと戻った。とっくに寝ていると思って慎重に天幕（テント）に入ったクリュウだったが、テーブルを挟むようにして二人はコーヒーを片手に起きていた。
「お帰りなさい、ずいぶん遅かったですね」
「寒かっただろう？　コーヒーでも飲むか？」
二人は帰って来た二人を暖かく迎えた。クリュウは意表を突かれて困惑したような表情を浮かべていたが、すぐに「僕はいつものをお願い」と答える。その返答に対しフィーリアは「はい。ハチミツ入りホットミルクですね」と笑顔で答えて用意を始める。
サクラの横を通り抜ける時、フィーリアは足を止めた。「……ずいぶんと遅いお帰りですが、どこへ行っていたんですか？」
怒ったように睨みながら言うフィーリアに対し、サクラはクールに返す。
「……赤線地帯よ」
「なぁッ!?」
「……冗談よ。私にはお茶をお願い」
そう言い残し、サクラはちゃっかりクリュウの隣の席に腰掛けた。フィーリアはからかわれた事に顔を真っ赤にさせて怒ると、不機嫌な表情のまま天幕（テント）の奥にある肉焼きセットの台にセットしてあったお湯でお茶を淹れる。そんな彼女を見てシルフィードはため息。
「サクラ。あまりフィーリアをからかうな」
「……騙される方が悪いのよ」
「ほんと、我が道を突っ走ってるな君は」
「……誉めても何も出ない」
「安心しろ。期待してもいないし、そもそも誉めてなどもない」
シルフィードの言葉を気にした様子もなくサクラは無言でテーブルに置いてあるコップと水の入ったビンを手に取る。コップに水を注ぎ、それを一気に飲み干す。

そこへフィーリアがお茶を運んで来る。無言でお茶を置いて立ち去り、サクラもそれを無言で受け取り無言で飲む。
「ケンカでもしたの？」
二人の微妙な空気に気づいたクリュウがサクラに問うが、サクラは「……別に」と答えるだけ。フィーリアは彼のホットミルクを作る為に奥に行ってしまったし、クリュウは疑問は残りながらも沈黙する。
「……まぁ、君が原因なんだがな」
クリュウの天然っぷりにシルフィードは静かに苦笑した。
しばらくしてホットミルクを完成させたフィーリアが戻り、ようやく四人揃って椅子に腰掛ける。
「一応向こうに四人分の布団は用意したが、寝る場所を決めないといかんな」
そろそろ寝ないとならない時間となり、シルフィードはあまり自分からは振りたくはなかったが、避けて通れないその話題を口にした。
予想通り、フィーリアとサクラの表情が一変。まるで火竜リオレウスと対峙している時のような緊張感が天幕（テント）の中に広がる。
無言で互いを牽制し合うようにして睨み合うフィーリアとサクラ。苦笑するシルフィード、ホットミルクを飲んでふにゃっとした笑顔を浮かべているクリュウ。
「クリュウはどこで寝るんだ？」
膠着状態となった二人に代わってシルフィードが問うと、ホットミルクの味にとろけていたクリュウは「ふえ？」と困惑する。そしてなぜか真剣な瞳、若干血走っている女子陣の視線を見て納得したようにうなずく。
「大丈夫だよ。みんなはそっちで寝て。僕はこっちで寝るからそれなら安心して――」
「却下ですッ！」
「……断る」
「何でッ!?　そういう事じゃないのッ!?　っていうか何で二人はまた意見が一致してるのッ!?」
見事な共闘を見せる二人に苦笑しながら、シルフィードは冷静に助

け船を出す。
「すでに布団を敷いてしまったしな。こっちは入口に近いから風が入って風邪を引いてしまうかもしれんぞ。まぁ、向こうのどれかを選んでくれ」
シルフィードの言葉に「いや、でもさ……」と困ったような表情を浮かべるクリュウ。言わんとしている事は理解しているのだが、どうにも素直に納得できないらしい。ここでもう一押し。
「君が決めてくれないと私達の寝床も決まらんのだ。早急に頼むぞ」
「わ、わかった」
シルフィードの一押しにクリュウはついに折れた。その瞬間沈黙を続ける二人がこっそりガッツポーズをしたのは内緒だ。
クリュウは少し考えた後、「じゃ、じゃあ……」と選ぶ。
「左端の布団にする」
彼が選んだのは左詰めで敷かれた四つの布団の最奥。布団に出入りする場合は三人の足下を歩かなければならないが、ある意味最も安全（？）な場所だ。
「……そう睨み合うな。これでも引き留めてやったんだからありがたく思え。彼の隣はまぁ、公平にじゃんけんとかでも決めてくれ」
激しく睨み合う二人にため息しながらシルフィードはそう言うと、好物のハチミツ入りホットミルクを飲んで幸せそうに微笑んでいるクリュウを見て小さく笑みを浮かべつつ、二人の為に残しておいた遅い夕食を用意するのであった。
「……なぜこうなった？」
布団に入りながら、シルフィードは先頃から何度目かわからぬ同じ文句を繰り返した。
自分の右隣にはクリュウが寝ていて、左隣にはフィーリアが寝ている。
あの後フィーリアとサクラは互いにクリュウの隣を譲らず、最終的には互いに武器を構える一触即発状態にまで悪化。結局クリュウが身の安全及び二人の妥協案として自分の隣にシルフィードを配置した訳だ。ここで妥協案として真ん中に自分が入って両隣を二人にす

るというおいしい状態にならないのが彼らしい。
ともあれ、思わぬ展開に一番驚いているのは完全に傍観者に徹していたシルフィードであった。
すでに早寝早起なフィーリアと何だかんだで色々と疲れたサクラは先程から寝息を立てている。右隣ではクリュウがこちらに背を向けて横になっている。
そんな自分の置かれた状態を見てシルフィードはもう何度目かわからぬため息を漏らす。
いつもは二人の猛攻の前に一歩引いた位置に徹している自分が、まさかこんな最前線に出るとは。世の中わからないものだ。
「何を冷静に状況把握をしているのだ私は……」
正確には予想外の展開にらしくもなく完全にテンパっているのだが。
右を見ると、いつもは二人の向こうにあるクリュウの姿がすぐそこにある。手を伸ばせば届いてしまう、そんな至近距離だ――なぜか、胸の鼓動が高まる。まるで全力疾走した後のように、心臓が無茶をする。顔が火照り、無性に彼に触れたいという想いが胸いっぱいに広がる。
「な、何を考えているのだ私は……ッ」
今すぐにでも布団から飛び出て洗面所で顔を洗いたい。そんな衝動に刈られる程に顔は赤く、熱くなっていた。
すぐ近くにクリュウがいる。その現実に頭がおかしくなったみたいに意味不明で無茶苦茶な思考が飛び回る。
まるで磁石に引き寄される鉄鉱石のように、手が勝手に彼の背中へと伸びていく。
「な、何をしているのだ……ッ」
慌てて暴走する右手を左手で制する。だがしかし、今度は左手までもが自分の意志と関係なく勝手に彼の方へと伸びる。まるで太陽の方向に向かって伸びていくツタのよう――本当に自分の意志とは関係ないのだろうか。本当は、心の奥底で抱いている想いがそうさせているのではないか。そんな事を想い浮かぶ。

「一体私は何を考えているんだぁ……ッ！　しっかりしろシルフィード・エアッ！」
　小声で己を奮い立たせるシルフィード。だがしかし彼の方へと手が伸びていく。それどころか少しずつ体まで動く始末。結局、
「ちょ、ちょっとだけなら……」
　ついにプライドが折れたシルフィード。まるで以前読んだ恋愛小説のヒロインのように胸をときめかせながら手を伸ばす。あと少しで指先が届く。妙な興奮が胸の高鳴りを最高潮にまで引き上げる。そして、
「シルフィ、起きてる？」
「ぬおッ!?」
　突然予想もしていなかった人物からの声にシルフィードは慌てて手を引っ込めて姿勢を正す。その直後、あと少しで届きそうだった彼の背中が起き上がった。
「どうしたのシルフィ。さっきからブツブツと」
　心配そうに首を傾げながら自分を見詰めるクリュウにシルフィードは毛布を頭からすっぽり被って激しく首を横に振る。
「な、何でもないッ！　決して一時の感情に屈した訳ではないぞッ！」
「……何だかよくわからないけど、とりあえず静かにしよう。二人は寝てるみたいだし」
　この組み合わせでは珍しくクリュウの方がツッコミを入れると、シルフィードは慌てて口を手で塞ぐ。途端、顔がさらに別の理由でカァッと赤く染まり熱を帯びる。
「ほ、ほんと……何をしているんだ私は……」
　あまりの恥ずかしさに顔を上げられないシルフィード。彼女の心の葛藤を知らないクリュウは不思議そうに首を傾げた後、おもむろに立ち上がった。
「どこかに行くのか？」
「ちょっと眠れなくてさ。軽く散歩でもしてくるよ」
　そう言ってクリュウは三人の足下を慎重に歩いて抜けると、天幕（テント）から出て行った。しばし呆然とその光景を見詰めていたシ

ルフィードだったが、慌ててその後を追った。
　天幕（テント）を出ると少し先をゆっくりとクリュウが歩いているのが見えた。それを追い、早足で向かう。
「シルフィ……」
「私も同じだ。ちょっと眠れなくてな、散歩でもしたい気分だ。同行しても構わないか？」
「うん。でも別にどこへ向かうとかは決めてないけど、いいの？」
「構わんさ。散歩なんだからな。気の向くままに歩けばいい」
　シルフィードの言葉にクリュウは「そっか」とだけつぶやくと無言で歩みを進める。その後シルフィードが同じように無言で続く。
　しばらくそうして無言で廃墟となった街並みをゆっくりと歩く。
「あのさ、シルフィ」
　沈黙を破ったのはクリュウの方からだった。振り返り、背後からゆっくりと続くシルフィードを見る。シルフィードは「何だ？」と歩みを止めて彼と向き合う。
「この景色を見て、シルフィはどう思う？」
　そう言う彼の背後には、廃墟が広がっていた。崩れた家や店がただの瓦礫と化して転がっている。これが数日前まで活気に溢れた街の景色だったと、誰が信じられるか。
　真剣な瞳で問うて来るクリュウに対し、シルフィードは思った事を正直に述べた。
「ひどい有様だと思うな。完全に復興できるには下手したら数年の時間を要するかもしれんな」
「……冷静だね、シルフィードは」
「自慢にはならんが、私はこういう光景を何度も経験してる。故郷の村もこれに近い状態になって廃村したしな」
　シルフィードはこんな状態となった街や村を何度か見ているし、実際自分の故郷がリオレウスによって滅ぼされた時にはこれに近い状態だった。炎は消えたはずなのに、焦げ臭さがいつまで経っても抜けない。むしろ自分の村は木造家屋ばかりだったので瓦礫すらも残らず、一面に焼け焦げた柱が散乱しているというさらにひどい有様だっ

たが。
「僕も、こういう光景を何度か見れば、そんな風になれるのかな」
「わからん。だが、君はそうならないでほしいと私は願っている」
廃墟と化した街並みを見詰めながら、シルフィードは本心からそう思った。彼には、こんな景色は何度も見てほしくはない。心からそう思う。
「自分でも良くわかってる。三人に比べて経験も踏んで来た場数の数も全然違うし、自分が考えている事は全部甘くて非現実的だって。でも、やっぱりこんなの間違ってるよ」
クリュウは廃墟を見詰めながら、ギュッと拳を強く握り締めた。その肩は空しさや悔しさ、理不尽な現実に対する怒りなど、様々な感情で震えている。シルフィードはそんな彼の肩を、そっと叩いた。
「若いな君は」
「シルフィだって僕と年はそんなに変わらないでしょ？」
「年齢の問題ではない。何というか、君は昔の私に良く似ている」
「昔の、シルフィに？」
クリュウは思い当たる事があった。それは彼女が村をリオレウスに襲われ、両親や弟を失う以前。小さな村の為に毎日一生懸命になって狩りをしては、村の人達に喜ばれて、それで充実していた頃。彼女曰く、その頃の彼女は自分と良く似ていたそうだ。彼女が言う昔の自分とは、きっとその頃の事。
「私もその頃は世の中の不条理さに憤りを感じ、抵い続けた。きっと何とかできると奔走し、無茶をしたもんさ。だが、成長というのは必ずしも良い事ばかりではない。結局私はその不条理さを運命と諦め、受け流す術を覚えてしまった。まぁ、悪い例だと思ってくれ」
「シルフィ……」
「昔は本当に子供だったんだ。全てを救いたいなんて理想を掲げていてな。本当に救えるのなんて、目に映るだけ。いや、すぐ手が伸ばせる者だけ。時にはそれすらも救えない。そんな現実を知らなかった子供だったんだ。今の私は、そんな理想を捨てた現実主義の塊だ。だから、君の甘い理想主義を否定し、切り捨てる――だが、それはとて

も懐かしい。君は、私の過去にそっくりだ」
　小さく口元に苦笑を浮かべながらシルフィードはそう言うと、表情を引き締め、真剣な面もちでクリュウを見詰める。
「だからこそ、私が成し遂げられなかった事を君に託しているのかもしれない」
「シルフィにできなかった事……」
「私は途中で諦めた。だが君には、それを貫いてほしいを思う。だから、この光景に慣れてほしくはない。でも、忘れてほしくもない。ただ、これがこの世界の一つの姿だという事は覚えておいてほしい」
「シルフィ……」
「私にはできなかった事、君はきっとできる。私はそう信じているからこそ、君の傍にいるのかもしれないな。だからこそ、私はその為なら君に力を貸そう。例えこの身が滅びようとも、それが私の決意だ」
　月光を全身に受け、白銀の長い髪を優雅に揺らすシルフィード。いつもは結ってある髪も、寝る時は解放する。
　いつもとは違うロングヘア姿のシルフィード。月光を反射し、まるで髪自体が輝いて見えるその姿は、月下に舞い降りた妖精――否、騎士姫。
　その凛々しく美しいシルフィードの姿に、クリュウはつい見入ってしまう。目が離せなくて、その姿を目に焼き付けたくて、瞳が大きく開かれる。
「どうした？」
　怪訝そうに小首を傾げるシルフィード。クリュウはその声に「な、何でもないよッ」と慌てて視線を外す。その頬が赤らんでいるのは、シルフィードからは見えない。
「……全てを守りたい。母さんが良く言っていた言葉だよ」
「君の母君が？」
「ほんと、子供っぽい人だったから。でも、僕はそんな母さんの言葉を胸に、今日までがんばって来たんだ。これくらいの事で折れたりなんかしない」
　そう言うと、クリュウはギュッと拳を握り締めた。それは先程まで

の想いからの震えではない、決意の震え。その拳に、シルフィードはフッと口元に笑みを浮かべる。
「明日――もう今日かだっけ？　復興活動に参加してみる。ハンターで鍛えた体力が少しは役立つかもしれないからね」
「そうか。ならば、私も同行するぞ」
「え？　で、でも……」
「気にするな。これは私の意志だからね。それに、腕力と体力なら君よりあると自負しているしな」
　自慢げに豊満な胸に拳を当てて断言するシルフィード。そのセリフがさりげなくクリュウを傷つけ、自分の乙女ゲージも減少させている事に気づいていない所は、どこか天然な実に彼女らしい。
「そうと決めたからには明日に備えてさっさと寝なければな。天幕（テント）に戻るか」
「そうだね。ちょうど心地いい眠気も来た所だし」
　欠伸（あくび）混じりに言うクリュウの言葉にシルフィードも「そうだな。私も今ならすぐに眠れそうだ」と小さく欠伸する。
「じゃあ、戻ろうかシルフィ」
「あぁ」
　天幕（テント）に向かって歩き出シルフィード。そんな彼女の手をクリュウは徐（おもむろ）に掴んだ。
「く、クリュウ？」
　突然手を繋がれて慌てるシルフィードに微笑むと、クリュウはその手を引っ張る。
「早く帰ろシルフィ」
「あ、あぁ」
　予期しないクリュウとの手を繋いでの帰還。シルフィードは狼狽しながらも手から伝わって来る彼の温もりに安心感を覚え、一歩一歩進むたびに胸が温かさに満たされる。
　自然と頬が緩み、微笑を浮かぶ。
「……たまには、こういうのもいいな」
「え？　何か言った？」

「いや、何でもないさ」
首を傾げるクリュウに小さく微笑みながら、シルフィードは彼に手を引かれて歩みを進める。
月光に淡く照らされる夜道を、少年と少女は星空を見上げながらゆっくりと闇の向こうへと消えて行った。
翌朝、有言実行の如くクリュウは早速復興作業に加わっていた。もちろんシルフィードも一緒だ。体力に自信がないフィーリアは炊き出し班に加わり、馴れ合いを好まないサクラは単身でどこかに消えてしまった。
屈強な男達に囲まれながら、瓦礫が満載されたリヤカーを必死に引っ張るクリュウ。ハンターとして持久力に優れた体力は持ち合わせていても瞬間的な体力は持ち合わせていないクリュウ。その上小柄な体格が災いし、思っていた以上に活躍はできていない。それでも諦めない根性で必死になってさっきからずっとリヤカーで瓦礫を片づけている。
「くぬぅ……ッ！　お、重い……ッ！」
「大丈夫かクリュウ。手伝うか？」
そう訪ねて来たのは大の大人顔負けに腕力で重い木材を軽々と持ち上げているシルフィード。二人とも防具ではなく作業着姿だが、彼女は作業着が良く似合う。
「いや、一人で大丈夫だから。シルフィは自分のペースでがんばって」
「そうか？　じゃあ、何かあったら呼んでくれ」
そう言い残しシルフィは木材を抱えたまま立ち去る。いつもは防具に隠れている豊満な胸も作業着では隠す事ができない。屈強な男達がその胸に鼻の下を伸ばしている事にも気づいていないのは実に彼女らしい。
「……ほんと、漢（おとこ）って感じだよね、シルフィは」
それは決して女の子を誉めるような誉め言葉ではないのだが、その誉め言葉は彼の心からの感想であった。だからこそより厄介なのだが。
「僕もがんばらないと」

気合いを入れ直し、重いリヤカーを必死になって引っ張るクリュウ。そのがんばる姿に周りの大人達が励まされている事に気づいていない所もまた実に彼らしい。
余所者、それも政治的には好ましい関係ではないドンドルマから派遣されてきたハンター達の地道な活躍が、後の両都市の関係改善の礎になるのはそれから数年後の話だ。
クリュウとシルフィードはそうして朝から昼過ぎまで復興作業に従事。太陽が天辺から少し外れた頃、慰霊碑建設予定地となっている広場にクリュウとシルフィードを始めとして復興作業に参加していた人々が続々と集まっていた。
土や埃に塗れる屈強な男達の中、首に掛けたタオルで汗を拭うクリュウとシルフィードはある意味異色だった。
「あはははは、疲れたねぇ……」
「一日でバテたか？　ヴィルマは完全復興するまでこの毎日の繰り返しだぞ」
「うへぇ……」
先が思いやられるとばかりにがっくりと肩を落として落ち込むクリュウに苦笑すると、シルフィードは汗をタオルで拭う。
しばらくして、女性や子供達が広場に到着した。昼食などの食事担当の炊き出し班だ。もちろんその中にはエプロン姿のフィーリアの姿もある。
「お疲れ様ですクリュウ様、シルフィード様。これ、お二人の昼食です」
二人の姿を見つけて駆け寄って来たフィーリアは笑顔でそう言うと手に持っていた水とサンドイッチを二人に手渡す。それに対しクリュウは渋い表情を浮かべた。
「え？　クリュウ様サンドイッチお嫌いでしたか？」
「ううん。そうじゃなくて、この食糧はヴィルマの人達の物でしょ？　僕達が貰っていいのかなって」
今自分が持っているサンドイッチは、昨日自分達が運び込んで来た食糧の一部だ。それは被災したヴィルマ市民に対する配給食糧であ

り、当然ヴィルマ市民の為のものだ。
自分達はヴィルマ市民ではない部外者だ。そんな自分達が、彼らの食糧の一部を食べる事は許されるのだろうか。
「男が細かい事を気にするな。せっかくフィーリアが一生懸命作ってくれたんだ。ありがたく受け取っておけ」
そう言って特に気にした様子もなくサンドイッチを頬張るシルフィード。フィーリアも「そ、そうですよ。それに腹が減っては戦はできぬという言葉もあります」とせっかく彼の為にがんばって作った手料理を何とか彼に食べて貰おうと説得する。だが、クリュウは小さく首を横に振った。
「僕はいいや。十分休憩できたし、作業に戻るよ」
そう言ってクリュウはフィーリアに昼食を返す。フィーリア「で、でも……」と尚も食い下がろうとするが、クリュウは背を向けてそれを拒否する。彼の背中を見て、フィーリアは諦めたように沈黙した。
「お兄さん、食べないの？」
突然の声に振り返ると、そこにはフィーリアと同じようにエプロン姿のサラが首を傾げながら立っていた。
「サンドイッチ嫌いなの？　だったら普通のパンもあるよ？」
「いや、そうじゃなくて……」
「どういう事なの？」
食事を断るクリュウを純粋に心配するサラに、クリュウは困ったような表情を浮かべる。子供相手に先程のような難しい考えを言っても無意味だろうし、だからと言って適当な理由を付けるとしても簡単にこの状況を切り抜けられるような的確な理由が見つかる訳でもない。その間も「お兄さん大丈夫？」と心配するサラに激しい罪悪感。
「えっと、そのぉ……うん、食べる。食べるから」
ついに、クリュウの方が陥落した。その瞬間サラは安心したようにはにかみ、フィーリアが膝を折った。そんな彼女の肩をシルフィードがそっと叩く。
「そう肩を落とすな。子供相手じゃ意外と頑固なクリュウとはいえ折れるのは仕方がない。君はがんばったさ」

「……うぅ、サクラ様やエレナ様、シルフィード様に負けるのは悔しいですが納得はできます。でも、あんな子供相手に敗北するなんて……ッ」
「……最近、本気でクリュウはロリコンなのではないかと心配になるな」
「何だか、すごい誤解を受けているような気が……」
クリュウはフィーリアから改めてサンドイッチを受け取ると、それを口にする。当然、フィーリアお手製ならまずい訳がなかった。
「あの、どうでしょうか？」
過程は違ったが、結果的にはクリュウに手料理を食べてもらった。当然フィーリアは彼の口にあったかどうか気になる。
だが、そんな心配は杞憂である。彼女の料理の腕は今まで食べて来た料理が証明している
「うん、おいしいよ」
クリュウからの嬉し過ぎる誉め言葉にフィーリアは頬を赤らめてふにゃっと照れたような満面の笑顔を浮かべる。
「良かったです。いつも使っている調味料の大半がない状態だったので心配してましたが、何とかお口に合う品になったようですね」
「口に合うどころかすごくおいしいよ。やっぱりフィーリアの料理の腕は一級だね」
「そ、そんなぁ……」
嬉し過ぎる彼からの誉め言葉の波状攻撃に、フィーリアはすっかり陥落状態。真っ赤になった顔を隠すように彼に背を向けるが、その顔はもうにやけが止まらない。
そんなフィーリアに苦笑しつつ、シルフィードは最後の一口を頬張って食事を終える。
「いやぁ、嬢ちゃんいい腕してるね」
水を飲んで水分補給するシルフィードはその声に振り返った。そこには自分達が働いていた区域を仕切っていた初老の男性が立っていた。周りの人達の話を聞く限り、どうやらこの街の大工の頭領らしい。

「最近の若者はなっとらんが、嬢ちゃんはいい腕をしてる。筋肉が見事に鍛え上げられているのぉ。どうじゃ？　ハンターをやめてワシの下で大工の修行を積まんか？　嬢ちゃんならいい大工になるぞ」
　シルフィードはそんな頭領の言葉に苦笑しながら答える。
「申し訳ないが、私はハンター一本と決めているんでな。その誘いは引き受けられない」
「そうかぁ。いい筋肉してるのにのぉ――それにいい胸もしておるしのぉ」
　頭領の言葉に周りの男達が一斉に何度もうなずいた。
　突然のセクハラ発言にシルフィードは顔を真っ赤にして胸を両腕で守る。そんな初々しい反応をするシルフィードを見て頭領は「ほっほっほ」と笑い声を上げる。
「頭領はほんと胸好きですよね。俺はあの子の方が好みっすよ」
　そう頭領に声を掛けた男はクリュウと別れて給仕係として右へ左へと走り回って給仕を行うフィーリアを見る。良く見ると一生懸命がんばる彼女を多く多くの男達が微笑ましく見詰めていた。
「ほっほっほ。主は相変わらずのロリコンなのじゃな」
「ご冗談を。かわいいものを愛でたいという気持ちは古今東西の共通意識です。あの一生懸命で可憐な姿を見て心震える者がいるとしたらそれは人間ではありません。頭領こそ巨乳好きでいらっしゃる」
「胸の大きい娘は世界を救うのじゃ」
　恥ずかしがる事なくセクハラ発言を連発する男達にシルフィードは若干引いていた。フィーリアはそんな男達の発言に構っていられない程忙しいらしくスルーしている。クリュウはとりあえず男代表としてため息混じりにシルフィードに「何かごめん」と謝ってみたり。
「頭領も先輩もダメダメっすね。確かに二人ともいい娘ですけど、俺達は彼女を一押ししやす」
　木材調達の為に森の方へ向かっていた別動隊所属の青年は自信満々に言いながは背後を指さした。そこにはクリュウ達と共にヴィルマにやって来たアプトノスが大量の木材を積載した荷車を引いて待機していた。その山積みにされた木材の天辺に、彼女はいた。

「あの娘もすごいっすよ。あんな細い剣で太い大木も斬り倒す豪快さ、木材を一定の大きさに斬り抜く繊細さ。相反する力を見事に使い分ける、ウチの建設に欲しい人材っすよ。何より、あの何を考えているかわからないミステリアスな雰囲気、そしてあの眼帯ッ！　最高じゃないっすかッ！」
「……お主はミステリアス系が好きじゃったの」
　さらにセクハラ発言を行う者が増えてある意味混沌として来た。シルフィードは呆れて首を横に振ると、「行くぞクリュウ。バカが移る」とバッサリ切り捨てて気まずそうに苦笑しているクリュウと共にその場を離れた。ちなみにその後も巨乳好きとロリコン好きとミステリアス好きの男達の壮絶な戦いは繰り広げられるのだが、ここでは割愛する。
「サクラ。どこに行ってると思ったら木材調達の班に加わってたんだ」
　サクラと合流したクリュウは驚いたようにそう言った。まさか人と馴れ合うのを嫌うサクラが復興作業に協力するとは思っていなかったのだ。そんなクリュウの発言に対しサクラは無表情で答える。
「……森で昼寝してたら半ば強引に手伝わされた」
「自ら率先して、じゃない所はサクラらしいね」
　実に彼女らしい。協力するつもりなどなく森で昼寝している所も、でも最終的には協力してしまう所も。
「お疲れ様ですサクラ様。昼食のサンドイッチはいかがですか？」
　サクラの姿を見て駆け寄って来たフィーリアはそう言ってサンドイッチを差し出す。サクラはそれを一瞥し、
「……私は和食がいい」
「わがままを言わないでください。この状況を見て良くそんな事が言えますね」
「……私はＫＹだから」
「自分で言いますか……」
「……《空気なんて読まない》の略」
「本当に我が道を突っ走ってますねッ！」

サクラの天上天下唯我独尊自分絶対至上主義的発言の連発に頭がくらくらするフィーリア。改めてサクラは自分では扱い切れないとわかり、そしてそんな彼女の手綱を引いているクリュウの大変さとすごさを実感した。
「……今失礼な事、考えなかった？」
「か、考えてませんよッ!?　だ、断じてッ！」
まるで心を読んだとしか思えないタイミングでの問いに対しフィーリアは狼狽しつつも何とか誤魔化す。
（ほ、本当に同じ人間なんですかこの人……ッ）
「……今失礼な」
「考えてませんッ！　神に誓いますッ！」
「……神様ってのはずいぶんと安っぽいものね」
サクラの言葉にフィーリアは恥ずかしさのあまり顔を真っ赤に染める。そんなフィーリアを見てサクラはフッと小馬鹿にしたような笑い方をすると、サラと話しているクリュウへと近づく。
「……ぴと」
「うひゃッ!?　さ、サクラぁッ!?」
「何してるんですかサクラ様ぁッ！」
突然クリュウの腕を取ってしがみ付くサクラ。当然クリュウは顔を真っ赤にして驚くし、フィーリアもまた顔を真っ赤にして怒鳴る。そしてシルフィードは静かに苦笑を浮かべている。今回はそれに困惑したような表情を浮かべているサラも加わる。
「サクラ様抜け駆けは禁止だと何度言えばわかるんですかッ!?　即刻クリュウ様から離れてくださいッ！」
「……だが断る」
「断るなあああぁぁぁッ！」
「……フィーリアの敬語が壊れたぞ」
ブチギレるフィーリアに対しサクラとシルフィードは冷静だった。正確に言うとシルフィードは驚くのを忘れるほど驚いているのだが。クリュウとサラは困惑のあまり言葉を失っている状態だ。
「と、とりあえず落ち着け。少しは公共の目というものをだな」

「……公共の目は既成事実に最適ね」
「もう、何からツッコミを入れていいのやら私には判断できんぞ」
呆れるシルフィードの発言はもちろん無視してサクラは困惑状態のまま硬直しているクリュウの腕にこぞとばかりに抱きつく。
「サクラ様ばっかりずるいですぅッ！　わ、私だってッ！　えいッ」
フィーリアはフィーリアでこの状況を逆手に取ってちゃっかりサクラに奪われた右腕ではなく反対の左腕をキープする。それがさらにクリュウの混乱に拍車を掛け、さらには二人の恋する乙女の激しい睨み合いに気づいた様子もなくサラが「サラもぉッ」と何を勘違いしたのかクリュウの腰にしがみつく始末。
周りの男達はその光景に笑ったり口笛を吹いたり、ガチで悔しそうに泣いている人もいたりと多種多様。
プライドとクールな自分という鎖に縛られたシルフィードはそんな三人の少女達をうらやましげに見詰めるばかり。
一人、当事者であるクリュウだけは今すぐこの場を逃げ出したい衝動に駆られるが、両腕及び腰をブロックされている状況では逃げ出す事もできず、顔を真っ赤にして言葉にならない声をあらふたと漏らすばかり。
遠い異国の地においてもいつもと変わらぬクリュウ達一行。周りが村だろうか狩場だろうが廃墟だろうが、彼らのいつも通りなノリは変わる事はないのだろう。
今日も今日とて、そんないつもと変わらない一日がこのまま続く。誰もがそう思っていた。
――だが、それはけたたましく鳴り響く警報によって消し飛ばされた。
街の中央部に建てられた急造の櫓（やぐら）から鳴り響く警報に、人々は表情を険しくして見やる。
「ど、どうしたの？」
「わからない。まさか敵襲？」
困惑するクリュウに対しシルフィードは冷静だ。こういう時こそリーダーとして指示を飛ばさないといけない。一体何が起きている

のか。確認の為に情報を集めようとしたその時、それは姿を表した。
「な、何だあれは……ッ」
シルフィードだけではなく、人々もその存在に気づいて空の向こうを見詰める。クリュウもまた同じようにその方向を見やり、そして見た。
「……何、あれ」
青空に浮かぶ雲の島。それを突き抜けて現れたのは無数の黒い点。数はおよそ五〇。そしてそれは徐々にこちらへと近づき、その姿を大きくさせ、ハッキリとした形を見せる。
それは巨大な気嚢（きのう）を背負った巨大な飛行船であった。それも一隻や二隻ではなく、五〇近い点全てだ。しかも良く見ると、その側舷からは無数の大砲らしき物が突き出ている――軍艦だ。
空を飛ぶ巨大な軍艦。それはこの大陸においてある一国の象徴を表し、無敵艦隊とも称される唯一の軍隊。
「……王軍艦隊」
誰かがそうつぶやいた。
ヴィルマに突如現れた謎の飛行艦隊。
刹那、クリュウ達の新たな物語の始まりを告げる汽笛が空に鳴り響いた。

第１１４話　アルトリア王政軍国

そこは美しい都市であった。

透き通るような水が溜まる広大な湖、ラミリーズ湖の中心に浮かぶ大きな島。湖の対岸とは四方をそれぞれ一本の跳ね橋で結び、人々はそれを行き来してこの街に入る。有事の際は跳ね橋を上げて敵軍の進軍を断念させる難攻不落の城塞都市――アルトリア王政軍国王都、アルステェリア。

その街の建物は真珠のように純白の塗装をされており、美しい湖の青、浮かぶ森の緑、そして建物の白が織りなす色彩の美しさは訪れる者全員を感動させる。

街中には川が流れており、景観を重視して街中には蒸気機関車は通っていない。その為、この街の主な交通手段として川が使われている。アルステェリアが別名《水の都》と呼ばれる所以（ゆえん）はこれだ。

街の外側を一般人が住む区画として街の賑わいの大半はここに集中している。市場ももちろん一般人地区に置かれており、連日多くの人々で活気に溢れている。一般に下町と呼ばれる場所で、街全体の敷地の四割をこの地区が占めている。

三割は極力伐採を禁止した森が広がっており、自然との調和が美しい。

一割は中心部にある小さな湖を囲むようにして隣接する貴族区だ。普段貴族というのはそれぞれの領土を納める為にここにはいないが、有事や緊急時に王都に長居する場合を想定した用意だ。

そして、その湖が残り二割を占めている。その中心には巨大で美しい純白の城が建っていた。

湖の中心にあった小山のような島に建てた純白の城の名はアルトリア城。このアルトリア王政軍国の中枢である。

城の一番高い塔にはこの国の国旗が翻っている。竜に乗った騎士を模したこの旗は、かつての独立戦争での英雄にして後のアルトリア初代女王となったヴィルヘルム・アルトリアの勇姿を表している。

現存する世界最古の絶対君主制国家であるアルトリアはドンドルマなどがある大陸から離れた洋上に浮かぶ複数の小さな島々で形成された海洋国家。

この国を他国から見れば三つの姿がある。

一つは世界トップクラスの蒸気機関技術を持っているという事。大量生産に適したテティル連邦共和国、流通に適したドンドルマ、そして少数精鋭のアルトリア。多くの国がこの二国一都市で製造される製品を欲しており、この技術力こそアルトリアの発展の礎となっている。

一つは世界でも珍しい女帝統治国家である事。これは初代女王となったヴィルヘム女王の影響が大きかった事と、元々この地帯が神の御遣いとして巫女が強大な権力を有していた民族的な理由が大きい。

そしてもう一つ、政治的な意味合いではこちらの方が強いアルトリアの姿。それは――世界最強の軍事力を有する事だ。

まずはアルトリアの近代史を説明しよう。

元々は弱小国家に過ぎなかったアルトリア。先々代女王、シェレス・アルトリア・フランチェスカが統治していた時代に大陸最強の国家シュレイド王国が分裂。大国の崩壊を見て世界の軍事バランスが崩れ、同国分裂後数十年間世界では様々な小国同士が戦争をし合う戦国時代に突入した。その最中、アルトリアはその立地的に海に面した国からは補給線の大拠点として狙われ、幾多の国と戦争に突入した。

シェレス女王は初代女王ヴィルヘルム女王に負けず劣らずの騎士王であり、海に面していた事で当時から軍事の大多数を海軍に集中。押し寄せる敵艦隊を自ら陣頭指揮して幾たびも粉砕撃破し、他国からは《提督王》と呼ばれ恐れられた。最後の戦いでシェレス女王は命を落としたが、その志は臣下が継ぎ、最終戦争に勝利した。

以降、アルトリアに挑もうとする国はなくなった。世界の軍事バランスがようやく安定したというのも大きいが、アルトリアの軍事力に恐れたというのもまた大きい。

シェレス女王の娘にして第二王女だったロレーヌ・アルトリア・ティターニアがその後新女王として即位。御年十六歳の事であった。

ロレーヌ女王は母の意志を継ぎ海軍力を中心に自国の技術を軍事に特化した結果、世界一の海軍力を有する事となった。第二位はエルバーフェルド帝国であるが、保有する艦船の数もさる事ながら、単艦戦闘能力も秀でており、その実は倍近い戦力差とも言われている。

本土に敵が上陸した事及び領土内に現れるモンスターを撃破する為に陸軍、アルトリア聖騎士団を編成。現在ではハンターズギルド以外でモンスターを撃退できる数少ない組織となっている。

そして現在、第三軍として発足した空軍、アルトリア王軍艦隊が最も他国が恐れる部隊として有名であった。

世界で唯一飛行船を主力とした部隊であり、対空兵器などそもそも思想すらない他国はこの艦隊を撃破する術がない。空から爆弾や大砲の雨を降り注ぐこの飛行戦艦を相手にできる国など、どこにも存在しないのだ。

ロレーヌ女王は無限に軍事力増大を続け、最終的にはそれまでのアルトリア王国をアルトリア王政軍国と国名すらも変更して軍国化を押し進めた。

国土こそ小国ながら海上物流の拠点であり、世界屈指の蒸気機関技術を持ち、尚且つ世界最強の軍隊を有するアルトリア王政軍国。

母の意志を継ぎ、一代でアルトリアを軍事大国に押し上げたロレーヌ女王だったが、元々病弱であった彼女は去年崩御した。アルトリアの絶対的な独立の確定をした事は功績として大きいが、軍事力拡大の為に増税や必要な公共事業さえも削減したなど、国民からの支持は低かった。

現在はその娘、イリス・アルトリア・フランチェスカが王位を引き継いで政（まつりごと）を遂行している。

イリス新女王はそれまでの母の軍拡化方針を停止させ、現存戦力の維持に軍事費を確定。減税政策や公共サービスの徹底などそれまでの方針とは大きく舵を切った政策を行い、国民の絶大な支持を得た。

国民に優しい政策を執る新女王。しかし彼女の絶大な人気の理由はもう一つの理由の方が大きい。それは――

アルトリア城の中枢にある女王の間。幾人の衛兵に守られたこの

部屋に、一人の青年が入った。
飾り気の少ない軍服を身に纏った灰色の髪に碧眼、右目にモノクルと呼ばれる方眼鏡をした青年の名はジェイド・クルセイダー勲功爵。若干二七歳にして総軍師に就任した天才青年だ。
総軍師とは他国では宰相に相当するこの国のナンバー2の権力を有する国務大臣であり、同時にアルトリアが世界に誇る最強の軍隊、アルトリア王軍艦隊を指揮する王軍艦隊司令長官（空軍大将）も兼任している。
ジェイドは広く、様々な高級品が並び、豪華なシャンデリアに美しく照らし上げられた女王の間に入り、王座まで続く赤い絨毯の上を優雅に歩く。そして、その中間で恭しく一礼する。
「先程炎王龍テオ・テスカトルに襲撃されて崩壊したヴィルマから救援要請が届きました。如何なさいますか陛下？」
ジェイドが問いを投げ掛けた先には王座がある。そしてそこには一人の少女がその体格には不釣り合い過ぎる大きな王座に座っている。
銀色の美しい長髪に凛とした意志の強い碧眼。顔立ちはまるで職人が半生を掛けて造形したかのような美しさで、肌は白く陶磁器のよう。今はまだ幼い印象が強いが、数年後には大陸中に知られるような美少女になる事が期待できる。彼女こそ現アルトリア王政軍国君主、イリス・アルトリア・フランチェスカ女王陛下である。
「ジェイド。お主はそのような下らぬ事を問う為に妾（わらわ）の前に立っているのか？」
凛とした瞳を鋭くさせ、静かに怒りの炎を燃え上がらせるイリス女王。その怒気に控えていた小間使い達はビクリと肩を震わせる。
ジェイドはそんな女王の怒気に対し「左様でございます」と冷静に返す。
しばしの沈黙の後、イリス女王は「良い。頭を上げよ」と言葉を掛ける。ジェイドが顔を上げると、女王は小さく苦笑を浮かべた。
「また老いぼれどもが其方（そなた）の案を棄却したのじゃろ？　全く、時代錯誤の棺桶に片足どころか両足を突っ込んだ化石どもが生意

気な……」
「陛下、そのような汚い言葉を御身がなされては困ります」
「良い。小間使い達は妾の味方じゃ、密告はせんし、しても奴らが妾の権力に逆らえる訳なかろう？」
　ふふんと先程までの威厳に満ち溢れた表情から一変して年相応のイタズラっぽい笑みを浮かべるイリス女王。小間使い達もくすくすと笑っており、部屋の中には穏やかな空気が流れる。
　ジェイドもまた小さく苦笑した後、再び表情を堅くした。
「陛下の仰る通り、先程枢密院で棄却されました。ですので、こうして陛下の緊急一勅令（ちょくれい）の声明を頂きに参上した次第です」
　ジェイドの報告に改めて「老いぼれどもめ」と苦々しくつぶやくイリス女王。そんな王にジェイドは「陛下、ご指示を」と促す。
　イリス女王は小さくうなずくと、その大き過ぎる王座から立ち上がった。窓から注ぎ込む太陽の光を全身に浴びキラキラと輝く一国の主は、その絶大な権力の発動を宣言した。
「緊急勅令を発動するッ！　すぐさま支援隊を組織し救援物資を国中から掻き集めるのじゃッ！　ジェイドはその指示を各省の大臣に通達後、王軍艦隊の稼働可能の全軽巡洋艦に支援隊の移動手段に任命せよ」
「陛下が王軍艦隊を動かすのは予想済みでしたが、なぜ輸送艦ではなく軽巡洋艦なのですか？」
「愚か者。輸送艦は物資を積み込むのには優れてはいるが足が遅い。軽巡洋艦なら高速で移動が可能だろう？」
「しかしそれでは積み込みができる物資の量が限られます」
「必要最低限の砲弾や爆弾を下ろし、その弾薬庫に物資を入れればより積み込める。さらに軽巡洋艦全艦で輸送すれば輸送艦数隻に匹敵する量の物資の運搬ができる。護衛には駆逐艦を十数隻と戦闘準備をさせた軽巡洋艦を二隻程度つければ問題なかろう。それと、支援隊は其方が指揮してくれ」
「私が、ですか？」
「そうじゃ。こういう場合は妾が信頼できる者に陣頭指揮を任せた

い。頼まれてくれるか？」
　イリス女王の問い掛けにジェイドは「仰せのままに」と恭しく一礼すると踵を返して部屋から出て行った。それを見送ると、イリス女王は再び王座に腰掛け、そっと手を組んで祈りを捧げる。
「……神よ、妾の赤子（せきし）達に幸運を授け賜え」
　数万の軍人、数百万人の国民の命を預かるアルトリア王政軍国の君主、イリス・アルトリア・フランチェスカ女王。国民からは敬愛され、し良き王として、心癒す皆のアイドルとして、齢（よわい）十二歳の少女王は今日も難しい国政の舵を切るのであった。
　ジェイドはすぐさま再び枢密院を開くと、その場でイリス女王の緊急勅令発動を宣言。緊急勅令とは大臣などの意見を無視し、女王が全決定権を持つ命令の事を言い、絶対君主制国家であるアルトリアでは決して逆らう事のできない命令である――それこそ、国民が反対していても戦争に突入できる程の権限なのだ。
　緊急勅令の発動。各大臣や各委員長、両院の議長などのが集まる政の中枢を担う枢密院でこの命令が発動されてしまえば、それまで反対されていたとしても反対意見が棄却されてしまう。反対派の閣僚達はジェイドを憎々しげに睨みつける。それらの視線に対しジェイドは気にした様子もなくクールに指示を出す。
「農水大臣。すぐに備蓄している食糧の一部を出してロサイス軍港に集めてください」
「了解しました」
　ジェイドの指示に背の高い壮年の男、農林水産大臣のアルフ・レキシントン男爵は待ってましたとばかりにすぐに部屋から飛び出して行った。彼は賛成派の一人だ。
「小僧、また陛下に泣きついたのか？」
　憎々しげに言うのは白髪に白髭を携えた老臣、貴族院議長のオスカー・クロムウェル公爵。前女王の頃から貴族院議長を務めている古参の国務大臣だ。何かとイリス女王やジェイド総軍師の案に反対意見を唱える嫌な奴だ。
「私は陛下と一心同体。陛下も私の意見に賛成を表明したまでの事で

す」
「フン、小僧と小娘が生意気に……」
「貴様ッ！　陛下を愚弄する言動は重大な国家反逆罪に値するぞッ！」
　クロムウェルの不敬発言にすかさずジェイドが怒り狂う。それを見てクロムウェルはやれやれとばかりにわざとらしくため息を零す。
「図に乗るなよ依怙贔屓（えこひいき）。貴様が陛下の幼少時の武官だったというコネがなければ、貴様は一介の衛兵に過ぎなかった事を忘れるな。それと私が忠誠を誓うのはアルトリアという国。小娘女王など飾りに過ぎん癖に生意気になりおって。良いか？　女王などというものは我々枢密院の決定にただうなずいていればいいのだ」
「貴様ぁッ！」
「お止めなさい、クロムウェル貴院議長、クルセイダー総軍師」
　名目上国のナンバー2と実質ナンバー2という二人の喧嘩に他の大臣達は恐ろし過ぎて声も出ずに震える中、議長席に座る女性が威厳ある声でそれを制した。白っぽいクリーム色の長髪に凛とした碧眼、四〇歳という年齢を疑うほど若々しい彼女こそこの枢密院の議長を務めるアルカディア・ヴィクトリア大公。実質のナンバー3であり、王家と血縁関係にある名門ヴィクトリア家当主でもある。
　アルカディアの声一つで二人は互いにそれ以上の言葉を発する事はなく、クロムウェルは杖を突きながら建設大臣と共に出て行った。それを契機に他の大臣達もそそくさと出て行き、部屋にはジェイドとアルカディアだけが残された。
「ジェイドよ、そう熱くならないのです。全く、いつもは冷静沈着なのに陛下の事となるとなぜそうもすぐ暴発してしまうのですか」
「も、申し訳ございませんヴィクトリア枢院議長」
「二人の時は昔のようにアルカで良いと何度も言っておろう？」
「ハッ、申し訳ありません。アルカ様」
　アルカディア――アルカは嬉しそうに微笑むと席を立って分厚い書類を手に掴んだ。
「クロムウェル貴院議長が何らかの妨害をするかもしれません。私の

方からも各省や委員会に根回しをしておきましょう」
「助かります」
「あなたは総軍師として、すぐに隷下の王軍艦隊の編成に取り掛かりなさい」
「了解しました」
アルカディアは安心したように小さく微笑むと、部屋から出て行った。ジェイドはそれを見送ると身を包む軍服を正し、気合いを入れて部屋から出て行った。
ロサイス軍港。王都アルステェリアの郊外、ラミリーズ湖の畔（ほとり）にあるこの港は海軍ではなく空軍の管轄にある。それもそのはず、ここは王軍艦隊主力、第一機動艦隊の本拠地であった。
平野には数多くの飛行船が停泊している。全長百メートル程の飛行駆逐艦から、全長三百メートルにもなる飛行戦艦まで、その総勢は目を見張る。
飛行軍艦の気嚢（きのう）の外装はゲリョスのゴム質の皮をベースにしており、大砲の弾でさえ跳ね返す防御力を有している。これこそが王軍艦隊の無敵さを象徴する技術の一つである。
王軍艦隊主力、王都防衛の任を受けている第一機動艦隊には王軍艦隊旗艦『クイーン・アルトリア』を始め四隻の飛行戦艦を有している。他の第二機動艦隊（北部防衛）、第三機動艦隊（南部防衛）は主に巡洋艦や旧式戦艦などで編成されている。この三艦隊を合わせて王軍艦隊と呼ぶのだ。
ジェイドは軍港の中を走る蒸気機関車に乗って第五戦隊旗艦、軽巡洋艦『シェフィールド』に乗り込んだ。
「長官。現在第二、第三機動艦隊から軽巡洋艦が続々とこのロサイスに集結しつつあります」
燃え盛る炎のような真っ赤な髪をポニーテールで結った赤眼の女性、彼女は総軍師補佐官兼王軍艦隊参謀、エイリーク・アトランティス少佐。補佐官という立場から常にジェイドの傍に控えており、剣術の腕も優れているので彼の武官としての役目も務めている。
「一六〇〇（ヒトロクマルマル）には出港準備が整う予定です」

「支援物資は？」
「すでにレキシントン農水大臣が手配しており、農水省からの報告では一四〇〇（ヒトヨンマルマル）にはここロサイスに集まるそうです」
ジェイドの問いに対しエイリークは資料を片手に素早く、そして的確に答えていく。ジェイドはその答えを聞いて時折考え事をしながら最終的な判断を決めていく。
「護衛任務はこの『シェフィールド』と『レゾリューション』、『レイフォール』。第六、第七、第八駆逐隊に手配しています」
エイリークの返答にジェイドは「わかった」とつぶやくと、自身も資料を手に持ってそこに書かれた内容を読み始める。そんなジェイドの横顔を見詰め、エイリークは「ところで」と話を切り出した。
「この支援隊、まさか長官が率いられるのですか？」
「あぁ。陛下直々の任命だからな」
「……陛下の命令ならば仕方ありませんが」
そこまで言って言い淀むエイリークに、ジェイドは資料から視線を外して彼女の方を見る。
「何だ、何か問題でもあるのか？」
「当然です。長官は我が国の総軍師、宰相に等しいお方です。そんな長官が自ら国を空け、蛮族の住む大陸へ向かわれるなど危険過ぎます」
エイリークが言った蛮族とは大陸に住む者達の蔑称だ。シェレス女王時代、大陸国家はこのアルトリアに幾度となく侵攻して来た侵略軍。その為こうした大陸に住む者達を敵視する者達も少なくないのだ。エイリークも祖父が海軍軍人として戦争に参加し、命を落とした。その経緯から彼女は祖国に侵略侵攻して来て、祖父の命を奪った大陸の者達を決して快くは思ってはいないのだ。
「君が大陸の人々を嫌っているのはわかるが、ヴィルマは我が国と少なからず貿易関係を築いている。そのヴィルマが支援を求めている以上、我が国としては手を貸さない訳にはいかないだろう？」
ジェイドの問い掛けに対し、エイリークは心外だとばかりに瞳を鋭くさせる。

「私は個人的な理由で長官の大陸行きに反対している訳ではありません。私が心配を申し上げているのは、内政の方です」
「内政？」
「長官がいない間、クロムウェル貴院議長が野放しになります。私はその危険性を危惧しているのです」
　エイリークの進言に対し、ジェイドは納得したようにうなずいた。確かに、この補佐官は自分の個人的な理由を仕事に押しつけるような愚考はしない。常にあらゆる可能性を考え、それを進言しているに過ぎない。今回の事もジェイドが留守の間、クロムウェルが妙な動きをしないかという事を危惧しているのだ。
「問題ない。クロムウェルは所詮貴族院の議長に過ぎない。私がいなくても枢密院をヴィクトリア大公が守っている限り奴も大きな動きはできまい。すでにヴィクトリア大公には動いてもらっている。抜かりはない」
　ジェイドの返答に対しエイリークは驚きつつも「不躾（ぶしつけ）な進言、申し訳ありませんでした」と深々と頭を下げた。自分が思っているような事は、当然彼もとっくに気づいていてその根回しを回している。自分が仕えている男は、本当にキレ者だという事を改めて認識したエイリーク。
「構わんさ。君のお節介さにはいつも助けられているからな。これからもお節介頼むぞ」
「か、からかわれては困ります長官……ッ」
　カァッと顔を真っ赤にさせて怒るエイリークい苦笑しつつ、ジェイドは部下を呼ぶと指示を出し始める。
　まだ青年と言ってもいいような若々しい己が主の凛々しき姿に、エイリークは頬を赤らめながら見入っていた。
　予定時刻の十分前、蒸気機関車が無数の貨物車を引いてロサイスの軍港に入って来た。この貨物車一つ一つに満載に等しい量の物資が詰め込まれている。その量はドンドルマがヴィルマに送ったものの五倍近い。蒸気機関という最先端の科学力を持つと共に海洋貿易国家としてヴィルマと同じく物資の中継地点として関税を取ってお

り、尚且つ世界でも有数の農業国家でもあるアルトリアの貿易黒字が成せる業だ。
　一部の物資は他の街から陸路で渡ってきた事もあり、尚且つ農林水産大臣のアルフ・レキシントン男爵の護衛の為にも聖騎士団の団員が数名護衛についている。ジェイドはその中に見知った顔を見つけて驚いた。
「デアフリンガー団長。どうしてここに？」
「辺境部隊の視察から帰って来るついでにこの物資の護衛を任されたのでな。アルカの命令で」
「……団長を指名するとは、相変わらず無茶苦茶なお方ですねアルカ様は」
「まったくだ」
　ジェイドの言葉に苦笑する立派な口髭に聖騎士団の制服を身に纏った筋肉巨漢の男。彼こそアルトリア三軍の一角、陸軍に相当するアルトリア聖騎士団を率いる団長（陸軍大将）、オメガ・デアフリンガー伯爵。枢密院の常任顧問官の一人だが今回は辺境視察で参加していなかったのだ。
「そう言ってはいけませんよ。アルカの根回しがなければこれだけの物資を集めるのは難しかったですからね」
　そう言って二人の間に入って来たのは農林水産大臣のアルフ・レキシントン男爵。巨漢のオメガよりも背丈こそ高いが、体が細いので二人が並ぶとボールと枝のようだ。
「アルフも大変だな。これから大陸へ向かうんだろ？」
「えぇ。農水大臣として食糧物資の配給などを管轄しなくてはいけないので。オメガ、悪いけど留守の間妻と娘の事を任せておいてもいいか？」
「婦人の方は構わんが、娘の事は娘の方が適任だろう？　ちょうど今はアルカの娘と三人で王宮にいるだろうからな」
「相変わらず、親も子も仲がよろしいのですね」
「まぁ、うちの娘とアルカの娘はよく色々な事で張り合ってはいるがな」

アルフもオメガもとても娘を溺愛している事で有名だ。その娘達もとても仲が良くいつも一緒に行動している。親が仲がいいという事で子供の頃から一緒にいる幼なじみだし、一緒に社会勉強も兼ねてドンドルマのハンター養成学校に在学していた経歴もある。性格が全く違う三人なのに、なぜか気が合うらしい。

アルカの娘はヴィクトリア家の次期当主として日々勉強の中にいるし、オメガの娘も現在は父の部隊で少尉候補生として日々鍛錬を続けており、アルフの娘も父のような政治家になる為に日々勉強中。そんな中でも三人は時間を見つけては今でも親しい関係を続けている。

そんな子煩悩な二人に苦笑しながら、ジェイドは無言で傍に控えているエイリークから関係資料を受け取り、それをアルフに手渡した。

「今後のスケジュールを羅列して書いておきましたので、目を通しておいてください」

「はい。ではこちらも、食糧物資のリストです。どうぞ」

アルフから資料を受け取ったジェイドは一度それをエイリークに預け、ジェイドは二人に一礼してその場を後にした。きっとあの後二人はお互いに自分の娘にかわいさで熱弁を振るうに違いない。そう思うと自然に漏れる苦笑を見てエイリークもまた苦笑を浮かべた。

「どちらも軍人、政治家としてはとても優秀なお方なんですけどね。どうにもお子様の事になると父親になってしまいますね」

「あんな立派な人に愛されている娘さんが羨ましいよ」

そう二人は笑い合うと早速部下に運ばれて来た大量の物資を各艦に搭載するよう命じ、ジェイドは自ら先頭に立って陣頭指揮をし、急ピッチで積み込み作業を進めるのであった。

出港時刻。角笛による出撃の合図がロサイスの港に鳴り響いた。

中心部から少し外れた平野に集結していた支援艦隊の各艦艇。碇を上げ、蒸気機関で動く巨大なプロペラが回り、気嚢に入ったガスの浮力と合わさり、巨大な飛行船が次々に浮かび上がる。

『第八戦隊出港しまぁすッ！』

『第十一戦隊出港しまぁすッ！』

『第七駆逐隊出港しまぁすッ！』

第六戦隊旗艦兼ヴィルマ支援艦隊旗艦の軽巡洋艦『シェフィールド』の艦橋には次々に各戦隊や駆逐隊の動きが入って来る。そんな慌ただしい艦橋の中心、本来は第六戦隊司令官が座る椅子には王軍艦隊司令長官のジェイドが座っている。その横には本来の主である第六戦隊司令官と総軍師補佐官のエイリークが控えている。

「『シェフィールド』出港しますッ」

軽巡洋艦『シェフィールド』艦長の号令一下、兵達の動きがさらに慌ただしくなった。機関室では国産の蒸気タービンが唸りを上げ、灼熱地獄と化すボイラー室では機関兵達が汗と煤まみれになりながら燃え盛る火室の中にシャベルで燃石炭を放り込み出力を上げていく。

燃え盛る火室の熱が水を蒸発させ、生み出された蒸気がシリンダーに送られ、シリンダーがピストン運動を起こしプロペラを回転させて推進力を生み出す。

軽巡洋艦『シェフィールド』はゆっくりと上昇を始め、地上から離れて行く。すでに上空にて待機している他の艦の隊列に加わり、まだ出港できていない艦を待つ。

風上に艦首を向け、前進微速で相殺してその場に止まる。煙突から噴き出す黒煙だけが背後に流れていく。

各戦隊、各駆逐隊ごとに隊列を組む艦隊は事前に決められた艦隊位置に隊ごとに移動し、全軍出撃の態勢を整える。

最後の艦が出港し、軽巡洋艦及び駆逐艦で編成された総数四七隻のヴィルマ支援艦隊が陣形を組み終える。

「全艦配置完了しましたッ」

兵の報告にジェイドは小さくうなずくと、王軍艦隊司令長官として命令を発した。

「全艦前進微速」

「前進微速ッ！」

支援艦隊旗艦の『シェフィールド』が動き出すのを見て、他の艦も次々に前進を開始。それが次第に全艦に伝わっていき、まるで一つの生き物のように四七隻の飛行船が動き出す。

祖国の王都、敬愛するイリス女王の住むアルトリア城に別れを告

げ、ヴィルマ支援艦隊は一路ヴィルマに向けて海を越えての大遠征に向かうのであった。
「二人とも見て。支援艦隊が出撃して行くわよ」
王宮の中庭に椅子とテーブルを置いてティータイムを興じていた腰まで伸びる美しい桜色の髪の少女が翡翠色の瞳で王都から離れていく艦隊を見上げながら友人に声を掛けた。
「そうですわね。フェニスのお父上も乗艦なされているのでしょう？」
ティーカップを優雅に持ちながら微笑みながら返したのは白っぽいクリーム色の長髪をカチューシャで整えた碧眼の少女。その動作や口調、姿全てに気品を感じさせる、まるで上流階級のお嬢様だ。
「ええ。農水大臣として食糧物資を管理しないといけないので」
「大変ですわね。ヴィルマは確か、ドンドルマからそれほど離れてない場所でしたわね」
「……ちょっと足を運んでみたかったわね」
どこか寂しげにつぶやく桜髪の少女の言葉に、カチューシャの少女も「そうですわね」と寂しげに呟いた。
「もうすぐ一年になりますわね。私達がドンドルマの学校を卒業してから」
「そうね。みんな今頃どうしてるのかしら？」
「きっと、それぞれの道に向かって努力していますわね」
「私達だって負けてないわよ。ほら、この前だってこの三人でバサルモスを討伐したじゃない。あの時の父様の狼狽っぷりは忘れられないわね」
「いじわるな娘ですわね、あなたは」
くすくすと笑う優雅な二人に対し、先程から少し離れた場所で木刀をひたすら素振りしている少女がいた。紫色の長髪をポニーテールで結った、凛々しい顔つきの聖騎士団の制服を身に纏った美少女。そんな彼女にカチューシャの少女は眉をしかめながら注意する。
「シグマ、こんな時に素振りなんて下品ですわよ。さっさと席に着いてほしいですわ」

「生憎俺はお前らと違って貴族でもお嬢様でもねぇからな。一族揃って軍人の家系だからそんな作法は知らねぇな」
「何を言っていますの。あなたは私達の武官なのですから、それくらいの作法をしてもらわないとこっちが赤っ恥ですわ」
「ケッ、知ったこっちゃねぇし。そもそも俺はこんな任務親父に無理やり任させれただけだ。本当なら一人でもリオレウスをぶっ潰すってのによ」
「冗談も休み休みにしてほしいですわ。あなたの実力でリオレウスに挑んだら上手に焼かれちゃいますわよ？」
「……こんがり肉、あれって時々無性に食べたくなるわよね。父様ははしたないとか言いますけど、あれはかぶり付いて食べるのが一番よね」
「ですわね。日々丁寧に料理されたものを食べていると、時々ああいう素材本来の味を食べたくなりますわね」
　学生時代が懐かしい。そんな会話をしていると自然とポニーテールの少女もこちらに近づいてきた。用意されていた紅茶――ではなく自分で用意してい水筒を手に取り一気に中の水を飲み干し一息。
「あの頃は良かったな。難しい事考えずにバカみたいに騒げてよ。今は背負うものが多過ぎてそうもいかねぇ。ハンターとしての仕事なんて、聖騎士団の仕事の方が多くてなかなかできねぇしな」
「そうですわね。私も次期当主としてやらなければいけない事は多いですわ。昔みたいに、己の信念だけではやっていけませんわ。それが貴族ですもの」
「そうね。私も似たようなものよ」
　たった一年で、少女達を取り巻く環境は一変していた。次期当主として、政治家として、軍人として。道は違うもののそれぞれ背負うものができた。その為に目標は生まれたものの、今までのように自分の自由は制限されてしまう。これを幸せと見るか、不幸と見るかは当事者にしか判断できないし、そう簡単に判断できるものでもない。
「そういえば、フェニスはまだ彼と手紙のやり取りをしているのよね。いいですわね」

「あら、やきもち？」
「べ、別にそんなんじゃないですわッ」
くすくすと笑う桜髪の少女の言葉にカチューシャの少女は顔を真っ赤にしてプイッとそっぽを向いた。その照れた横顔を見てポニーテールの少女が苦笑する。
「ルナリーフの地元は手紙が届きにくい環境だしな。結局一年近く音信不通なんだろ？」
「……ええ。会いに来る事もなく、本当に薄情なお人ですわ」
「確かに寂しいわよね――でも、今も好きなんでしょう？」
桜髪の少女の問いに、カチューシャの少女は頬を赤らめながらコクリとうなずいた。
学生時代、彼女には片思いの少年がいた。彼は底なしの明るさと優しさで当時委員長としてクラスを束ねていた自分を支え、落ち込んだ時には励ましてくれた。最後の学年では逆にシグマのクラスになってしまったが、その後も敵対しているはずなのに彼は気にせず自分に色々と気遣ってくれた。その優しさが、温かさが、信頼となり、いつの間にか恋心に変わっていた。
「しっかし、あんな女みたいな鈍感野郎。俺は今でも何がいいのかわかんねぇぜ」
心底わからないという感じに肩をすくませるポニーテールの少女を、それまで頬を赤らめていたカチューシャの少女はキッと彼女を睨み付ける。
「ショタコンなあなたには言われたくないですわ」
「ハァッ!?　俺のどこがショタコンだゴラァッ！」
「……私、知ってますわよ。あなたがエルと今も手紙のやり取りをしている事」
「なぁッ!?」
今度はポニーテールの少女の方が顔を真っ赤にする番だった。カチューシャの少女は勝ち誇った笑みを浮かべ、桜髪の少女は「あらあら」と楽しげに笑っている。
「あ、あれは向こうが一方的に送って来るからだッ！　俺は無視もで

きねぇから仕方なく返信をしてやって、すると向こうから返信があって、俺が返信して、返信されて、返信して……」
　最後の方はゴニョゴニョと聞き取れないくらい小さくなってしまい、少女は顔を赤らめながら人差し指をツンツンさせる。そんな彼女を見てカチューシャの少女は盛大にため息を漏らした。
「結局、想い人と何の連絡のやり取りをしていないのは私だけですのね」
「アリア……」
「ちょっと待てッ！　べ、別に俺はエルの事をそんな風には思ってねぇぞッ！」
「そんなに気になるなら会いに行けばいいじゃない。ヴィクトリア家の権力を駆使すればこの国だけでなく大陸国家ですら動かせるじゃない」
「無視すんなゴラッ！」
「……やろうと思えばできなくもないけど」
「けど？」
　不思議そうに首を傾げる桜髪の少女の視線の先で、なぜかカチューシャの少女は頬を赤らめながらツンとそっぽを向いて唇を尖らせた。
「わ、私の方から行くのは何だか負けた気がして嫌なのですわ」
「……あの、アリア？　恋に勝ち負けなんてないんだけど……」
　負けるなんて絶対嫌と断固として折れない親友の姿に、桜髪の少女は小さく苦笑を浮かべると呆れたようにため息を漏らした。負けず嫌いな彼女がそれを負けと認定した以上、それを撤回させる事はまず不可能のだろうという事は長い付き合いで重々わかっていた。
「そんなんで告白とかできるの？」
「わ、私からなんて絶対に嫌よ。それこそ負けじゃない」
「いや、だから何が負けなのか……」
「私は彼の方から告白させてみせるまでですわ」
「……それは、たぶん……いや、絶対に無理だと思う」
　自分の記憶が正しければ、彼女が想いを寄せている少年は並大抵の鈍感さを凌駕した猛者である。何しろ、当時すでに親友以外に身近に

二人も好意を寄せている美少女がいたのに、全くもってそれに気づかなかったという記録もある。その彼の方から告白させる――ある意味、火竜の番を同時討伐するよりも難しいだろう。
「ったく、考えても仕方ないだろ。思い立ったら全力突貫すりゃいいじゃねぇか」
「……世の中、あなたみたいな猪突猛進単純単細胞な人間ばかりじゃありませんのよ」
「あぁんッ!?」
　それをきっかけに、カチューシャの少女とポニーテールの少女の激しい言葉の言い合いが始まった。桜髪の少女はそんな二人を見て「あらあら」と困ったような笑みを浮かべながら、蒼天の空を見上げた。煌く太陽が大地を力強く照らし上げる光は肉眼で見るにはあまりにも強過ぎて、でもとても温かい。
「……今日も、いい天気ね」
　――アルトリア王政軍国。
　それはクリュウのかつての学友、アリア・ヴィクトリア、シグマ・デアフリンガー、フェニス・レキシントンの故郷であり、クリュウにとっても後に人生の大きな転換点となる国である。

第115話　失われし金火竜の紋章

謎の飛行艦隊はヴィルマ郊外上空に集結すると、信号角笛を鳴らし合いながら順番に着陸していく。その艦隊連携力はきっと軍関係者なら舌を巻くような見事なものだ。

最後の一隻が着陸する頃には街で復興作業をしていた人々が野次馬の如く次々にその平野に集結していた。その中には当然クリュウ達の姿もある。

「大きいね……」

クリュウはまずその飛行船の大きさに驚かされた。一隻の大きさはリオレウス十匹分に相当するだろうか。全長は二〇〇メートル近い。そんな巨艦が五〇隻近くも集結している。圧巻の光景だ。

「あれはまだ中型の部類だ。王軍艦隊には全長三〇〇メートルに達する軍艦もあるそうだ」

「さ、三〇〇メートルって……ッ」

クリュウはもはや今自分の目の前に広がっている光景を疑うしかなかった。これまで辺境の小さな村で暮らして来た彼にとって、空を飛ぶ船、それも全長数百メートル規模の船など見た事もないし、その存在すら信じられなかった。しかし、現実には今目の前にその巨艦が五〇隻近くも停泊している。

「あれが王軍艦隊。噂には聞いていましたが、実物を見るのは初めてです」

「当然だ。王軍艦隊は本来は本国防衛の要。有事でもなければ渡洋遠征して大陸にまで来る事はないからな」

「……それが何でこんな所に」

フィーリア、サクラ、シルフィードはその艦隊の姿を見て緊張した面もちで話を進めている。一方、クリュウはそんな三人の会話を聞いて、一つ質問を。

「あ、あのさシルフィ。その王軍艦隊って、一体何なの？」

その瞬間、三人は一斉にクリュウの方へ振り返り、驚愕に満ちた表情で彼を見詰める。当然、クリュウは焦った。

「え？　ぼ、僕何か変な事訊いた？」
「いや、まさか王軍艦隊を名前すらも聞いた事もない者がいるとは思わなくてな」
「……すみません、田舎者で」
苦笑しながら謝るクリュウに「いや、頭を下げられても困るのだが」とシルフィードは困惑しつつも、丁寧に教えてくれた。
「では、アルトリア王政軍国。この名前くらいは聞いた事はあるだろ？」
クリュウは静かにうなずいた。それくらいは知っていて当然だ。
アルトリア王政軍国。大陸南東部の海に浮かぶ複数の島々で構成された海洋国家であり、現在世界で最も科学力が進んでいる国とも称される技術大国の事だ。
アルトリアには優秀な蒸気機関製造工場及び技術者が集まっており、アルトリア製の蒸気機関は世界一と言っても過言ではない。
流通に適したドンドルマ、大量生産に適したテティル連邦共和国、そして少数精鋭のアルトリア王政軍国。この二国一都市が現在大陸の三大蒸気機関とされている。
そして、アルトリアはその地形的条件から海上の貿易拠点として栄え、昔は多くの国々がその地を狙って戦争を仕掛けた。だがアルトリアはその蒸気機関技術を軍事力に特化させ、優秀な兵器を次々に生み出し、小国程度の国土に対し大国に肩を並べるほどの軍事力を有する軍事国家となった。
現在では大国の一員として大陸全体の政治・経済・軍事軍事・環境など様々な事を話し合う大陸均衡会議の常任理事国に腰を据えている超大国だ。
「そのアルトリアが誇る世界初にして唯一の飛行船を主力とした軍隊、それが王軍艦隊。あの艦隊はまさにその王軍艦隊の一部だろうな」
シルフィードの説明にようやく事の重大性が理解できたクリュウ。
なぜ、そんな大国の主力を担う軍隊がわざわざ大陸全体から見れば中規模都市に過ぎない、それも先程の災害で壊滅的打撃を受けたヴィ

ルマに現れたのか。
群衆の中には「戦争が始まるのか」「アルトリアが攻めて来たんだ」「また戦争が起きるのか」と疑心暗鬼の輪が広がっていく。
「ええかッ！　ウチらの指示がないうちに勝手な行動をしたらアカンでッ！」
エミル達ギルドナイトが混乱する住人の統制をしているが、野次馬と化し、さらに《戦争》という単語がさらに混乱に拍車を掛けている住民達はそんな声など聞いていないかのように艦隊に目が釘付けになっていた。
すると、エミル達ギルドナイトの制止を振り切って艦隊に近づく一団があった。それはヴィルマ市議会の議員やヴィルマ市長など、この街の内政を司る者達だ。
それに呼応するように艦隊中心部、最後に着陸した軍艦から向こうの一団が降りて来た。毅然と軍服を着こなした見るからに軍人という者達に囲まれているのは、見た感じヴィルマ側と同じ政治家っぽい。
双方は群衆と艦隊のちょうど中間点で接触すると、互いに挨拶を交わした。
「ここからじゃ何も聞こえないね。当然だけど」
「……『アルトリア王政軍国所属、ヴィルマ支援艦隊。ただいま到着いたしました』『我らの為に遠路はるばるありがとうございます。我々ヴィルマ市民一同、貴殿らを歓迎いたします』」
無表情のまま淡々と声音すらも変えずに言葉を発するサクラ。その言動にシルフィードは大きく目を見開いた。
「サクラ。君には彼らの声が聞こえているのか？」
「……まさか。私はイャンクックじゃない」
「そ、そうだな。そんな人間離れした聴力はさすがの君でも持ち合わせてはいないか」
「……昔、人の弱みを握る技術を体得する時に習った読唇術を使ってるだけよ」
「結局人間離れしているのか君はッ！　しかもその技術を体得する為

の理由が激しくえげつないぞッ！」
「……女子なんて大抵こんなものよ」
「クリュウッ！　今の発言は全力で記憶を抹消しろッ！　今すぐにだッ！」
　珍しくシルフィードがサクラに振り回される光景に苦笑しながらも、クリュウはとりあえずサクラの人間離れした技術に力を借りる事にした。
　散々シルフィードをおちょくり倒したサクラは再びその人間離れした読唇術を発動させる。
『アルトリア王政軍国総軍師、ジェイド・クルセイダー勲功爵です。今回の支援艦隊の全指揮を陛下から仰せつかりました』
『それはそれは。まさか総軍師様直々に来られるとは思いませんでした。改めて遠路はるばるご苦労様です』
　今サクラはヴィルマ市議の一人と、王国側の集団の中央に立っている青年との会話を読唇術で披露している所だ。
「シルフィ、総軍師って何なの？」
「アルトリア王政軍国において、国王の右腕となって采配を振るう国務大臣だったか。まぁ、他国の宰相、ナンバー2に相当するお偉いさんだ」
「あんなに若いのに、一国のナンバー2……」
『それで、補給物資の方は』
『国中の備蓄食糧をかき集めて持って来ました。当分の間は食糧不足になる事はないでしょう。その他、災害時に役立つであろう道具類も大量に各艦に積載されています』
『感謝します。イリス女王陛下にはヴィルマ市民一同感謝していたとお伝えください』
『了解しました。ただ陛下はその謝辞に対し、きっとこう答えられるでしょう『我らも大陸の民も同じ神の赤子。兄弟が助けを求めているのならそれに助けの手を伸ばす。当然の事をしているまで』と』
『陛下の広大なお心、感謝致します』
「イリス女王って？」

「アルトリア王政軍国の現国王の事だな。私も詳しくは知らんが、国民から絶大な支持を受けている女王だそうだ」
ここでサクラの読唇術の対象が変わった。今度はその総軍師と呼ばれた青年の横に立っていた男が口を開く。
『お初にお目に掛かります。アルトリア王政軍国農林水産大臣、アルフ・レキシントンです。今回の食糧分配は私が指揮させてもらいます』
クリュウは農水大臣と名乗った男の言葉に一人首を傾げた。
「レキシントン……、まさかね……」
農水大臣の名字の部分に若干の引っかかりを感じたが、特に気にする事でもないと判断しそんな雑念を思考の外へ追いやった。
その後も両者の話は続いたが、クリュウ達には関係のない事ばかりだった上に、サクラが飽きてしまったのでそれ以上の話は聞かなかった。
しばしの話し合いの後、双方共に場所を変える為に用意していた竜車に乗って街の方へと消えていった。
残されたのは約五〇隻の軍艦の大群とそれを見に来た群衆だけ。もう見飽きて帰る者も多かったが、それでも大多数の人間はまだその珍景に見入っている。
さらに状況は動く。今度はエミル達ギルドナイトが先程総軍師の横に控えていた向こう側の上級将校らしき赤髪の女性に呼び出され、こちらは旗艦らしき艦の方へと消えていった。
今度こそ事態の動きは完全に終わり、群衆もちらほらと帰路に着き始める。クリュウ達も後ろ髪を引かれる気持ちはあったが、とりあえずその場を離れた。
突然の異国からの訪問客に最初こそ驚いた住人達だったが、テオ・テスカトルに街を破壊されたという事実はそれを大きく上回っている。住人達はすぐに異国の艦隊など忘れたように瓦礫の撤去作業などに戻った。クリュウ達もとりあえずは途中で止まっていた復興作業に戻る。
「やっぱり重いぃ……ッ」

瓦礫満載のリヤカーをクリュウは必死になって引っ張る。だが、単純計算でクリュウ二人から三人分の重さの瓦礫が搭載されたリヤカーはなかなか進まない。
「動けぇ……ッ」
そこへこの光景を見たサラがパタパタと駆け寄って来た。そしてリヤカーの横に立つと、クリュウを手伝うように押し始める。
「う～ん……ッ」
「あ、ありがとサラちゃん。でも危ないよ？」
「私もお兄さんを手伝う……ッ」
気持ちは嬉しいが、子供一人分の力など所詮は役に立たない。しかし、その気持ちだけでもクリュウにとっては十分過ぎるくらいに心強かった。
サラと一緒にリヤカーを引っ張るクリュウ。そんな二人の姿に食事の後片づけをしていたフィーリアが気づく。
「わ、私も手伝いますッ」
慌ててリヤカーに駆け寄ると、サラの反対側に立ってリヤカーを押し始める。
「あ、ありがとフィーリア」
「いいえ、お気になさらず」
さすがにフィーリアの力が加われば何とかリヤカーも動き出した。一度動き出してしまえば後は止まらない限りは少しだけだが楽になる。
そのまま三人は瓦礫の集積場所まで行き、リヤカーに乗せられていた瓦礫を積み下ろす。やっと重いリヤカーから解放されたクリュウは額に浮かぶ汗を拭いながら微笑む。
「二人ともありがと。助かったよ」
「えへへ、お礼言われちゃった」
「あ、クリュウ様。良ければ私のタオルをお使いください」
「ありがと」
クリュウはフィーリアからタオルを受け取ると、それで汗を拭う。そのままタオルを首に掛けると、再びリヤカーに手を掛ける。

「それじゃ、戻ろうか」
今度は空っぽなので軽い。リヤカーはクリュウ一人が引き、フィーリアとサラはその左右を歩く。
そのまま何気ない雑談を交わしながら元来た道を歩いていると、対向方向から住民とは違う一団が現れた。
「あれって……」
ピッチリと見事に軍服を着こなし、銃や剣などを武装した集団――王国軍人の一団だ。
「……あまり関わらない方が良さそうですね」
小声でフィーリアが進言し、クリュウも「そうだね」と小さく答えて道の端に針路を変える。
王国軍の一団は数にして十数人程度。しかしその全員が武装している姿は物々しい。一般市民とは違い、戦争になるのではなんて不安はないが、確かにこの出で立ちは一見しただけでは友好的には見えない。
目を合わさないように横を通り過ぎようとするクリュウ達。今はこちらは全く武装をしていない。おかげでハンターには見えないが、関わってしまった場合は脅しとしての武器も使用ができない。ここは干渉するのを避けるのが得策だ。
横を通り抜ける一瞬、クリュウは何気なくその一団を見た。その時、あるものの姿に目が釘付けになった。それどころではなく、体も止まってしまい、両脇を歩いていた二人は驚いたように立ち止まって振り返った。
「あれって……」
クリュウが凝視していたのは軍人の一人が掲げている国旗。先程の軍艦にも必ず掲げられていた飛竜に乗った騎士を模した旗。それがアルトリアの国旗であった。
だが、クリュウが見詰めていたのはもう一つの旗。
王冠を被ったおそらく銀火竜と思われる竜に騎士が乗って天を翔ける姿を模した旗。国旗とは少しデザインも違うし、竜の姿もよりリアルなものになっている。

その旗の姿に、クリュウは目が離せなかった。そして、フィーリアの制止を振り切り、クリュウは物々しい武装をした軍人の一団に丸腰で近づいた。
「あ、あの」
クリュウの声に一番近くにいた兵が「何の用だ？」と威圧するような声で返して来た。体格差もあるので、かなり怖い。
「一般人か。我々は急いでいるのだ。邪魔をしないでくれ」
「す、すみません。でもちょっと質問が」
「くどいぞ坊主ッ。邪魔だ、どけッ」
今にも腰に下げた剣を抜きかねない勢いにクリュウは体を硬直させる。そこへ今までおろおろとしていたフィーリアが慌てて駆け寄って来た。
「す、すみませんッ！　クリュウ様、邪魔してはいけませんッ！　退散しますよッ！」
「で、でも……」
ここはまずクリュウの安全を最優先しようと必死になって彼の手を引っ張るフィーリア。そんな彼女の行為にクリュウも諦めて退散しようとした時、
「――少年。我らに問いたい事とは？」
その声にフィーリアの方に向けていた顔を再び一団の方へと戻すと、そこには先程までの軍人ではなく一人の青年軍人が立っていた。その姿を見て、クリュウは目を丸くした。
「総軍師……」
先程ヴィルマの市議達と話していた、それも一国のナンバー2である総軍師と呼ばれていた青年――ジェイド・クルセイダーであった。
クリュウのつぶやきに対し、別の軍人が「総軍師様と呼べッ！」と怒鳴り、「構わん。彼らは我が国の国民ではない」とジェイドは静かに戒める。
「して少年。君の問いとは？」
いきなり一国の、それも大国と呼ばれているアルトリア王政軍国のナンバー2の登場に驚きつつも、クリュウはこの二度とないであろう

チャンスをしっかりと握りしめた。
「あの、その旗は一体何なんですか？」
　クリュウの指先を追ったジェイドは頭上に翻るその旗を見て
「あぁ」と声を漏らす。
「これは王紋旗だ。我がアルトリアを統べる女王、イリス・アルトリア・フランチェスカ様の母君、前女王様が使われていた王紋を模したものだ。これがどうかしたか？」
「あの……、金火竜の旗はないんですか？」
　クリュウの問いかけに対し、ジェイドの瞳が鋭くなった。それだけではない。周りにいた軍人達も一瞬で表情を険しくさせて緊張を漲らせている。
「あの、その……すみません」
　クリュウは彼らの逆鱗に触れたと気づいて慌てて謝る。するとジェイドは小さくため息を零した。
「銀火竜の対を成す金火竜の紋章……覚えておけ少年。我が国において金火竜の紋章は禁忌の紋。不用意に問えば命の保証はない」
「す、すみませんッ」
　命の保証はないという言葉に、クリュウは慌ててさらに謝る。フィーリアも一緒になって頭を下げると、ジェイドは「良い。以後気をつけてもらえばそれで構わん」と淡々と言う。
「疑問はそれだけか？　ならば我々は先を急ぐので失礼する」
「ま、待ってくださいッ。せ、せめて何で金火竜の紋が禁忌になっているか、それだけでも……ッ」
　兵を率いて出発しようとするジェイドに再度声を掛けて引き留める。それに対しジェイドは振り返り、再びクリュウの前に対峙する。
「禁忌と言ったはずだが」
「それでも、どうしても知りたいんですッ」
　クリュウは睨むように険しい目つきで見詰めるジェイドの視線に臆する事なく真っ正面からそれと向き合う。その真剣な瞳にジェイドはフッと小さく口元に笑みを浮かべた。
「いい目をしている。その真剣さに免じて、簡単に説明するぞ。金火

竜の紋章は現女王とは別系統の王族を意味し、その血筋は今の王家からは消失した。言わば、失われた王族を意味する紋章だ。それだけしか言えないな」
そう言い残し、ジェイドは兵を率いて今度こそクリュウ達の前から去った。今度はクリュウもそれを止める事はなく、静かにその行軍を見送る。
アルトリアの一団が見えなくなった事を確認し、フィーリアがそっと近寄って来た。
「あの、クリュウ様。金火竜の紋章がどうかしたんですか？」
フィーリアの問いに対し、クリュウは「何でもない」と小さく答え、律儀にリヤカーの横で待っていたサラにすら声を掛ける事なく、リヤカーを引いて歩き出す。その後をフィーリアとサラが慌てて続く。
無言で前だけを見詰めて歩くクリュウに何度か声を掛けようとしたが、今はそっとしておいた方がいいと勘が告げていたのでフィーリアもまた無言を貫いた。サラもまた、そんな二人の空気を察して口を閉じている。
三人は無言のまま来た道を帰って行った。
その後の復興作業も、クリュウはどこか上の空のような状態が続いた。そんな彼の異変にサクラとシルフィードは心配そうな視線をクリュウに注ぐ。
「クリュウは一体どうしたのだ？」
「……知っている事全て吐け」
フィーリアはどう説明したものか悩みつつも、とりあえず先程あったクリュウとジェイドのやり取り全てを二人に話した。すると、それを聞いた二人も先程のフィーリアと同じような表情を浮かべる。
「金火竜の紋章か。サクラ、君は何も知らないのか？　この面子の中では子供の頃のクリュウを知っているのは君だけだが」
「……知らない。知っていたら私だって驚かない」
「それもそうだな。うーん、エレナなら何か知っているかもしれんが、今ここにはいないしな」
「クリュウ様と金火竜の紋章……一体どんな繋がりがあるんでしょう

か」
「詳しくは当人に訊いてみない事には仕方がないが、彼の様子から見るに自分からは言いたくないようだな。まぁ、時期が来たら自分から言ってくれるかもしれん。今は、その時を待つ他ないな」
シルフィードの言葉に一応は納得した二人だったが、その視線はぼーっと空を見上げるクリュウに集中している。どちらの瞳も、彼を心配する想いで満ちている。
シルフィードはそんな三人を見て口元に小さく笑みを浮かべると、「ほら、突っ立ってないで作業に戻るぞ」と先陣を切って作業へと戻り、フィーリアとサクラもそれぞれの担当部署に去った。
一人残されたクリュウ。ゆっくりと流れていく白い雲を見詰め続ける。そんな彼の肩をシルフィードがそっと叩いた。
「考え事をするのは構わんが、やる事やってからにしてくれ。仕事は山ほど残っているぞ」
「う、うん。そうだね」
シルフィードの言葉にクリュウはまだ引っかかりを感じてはいたが、作業に戻った。だが終始、やはりどこか上の空という状態は続いた。
その夜、フィーリア、サクラ、シルフィードの三人は街の郊外に仮設置されている大衆風呂場に来ていた。
アルトリアの軍艦は蒸気機関で動いている。燃石炭を燃やし、水を沸騰させて蒸気化し、その蒸気でピストンを動かして動力に変えている。その為ボイラーは高熱となる。
アルトリア艦隊司令部は四七隻の軍艦のうち、二隻の軽巡洋艦を選抜。冷却水の一部とボイラーから排出された熱水を混ぜて災害以降風呂に入れていない市民の為に仮設の風呂場を設置。市民は何日かぶりの風呂に大喜びで殺到していた。
治安維持の為、男湯と女湯は街を挟んで離して設置。さらにそれぞれ男性軍人と女性軍人が警備及び案内を行っている。
殺到する市民を誘導路に導く女性軍人の横を通り抜け、ようやく湯船のある天幕（テント）の前にやって来た三人。

「数日ぶりの風呂か。やっと汗を洗い流せるな」
タオルを首に掛けながらご機嫌そうに言うシルフィード。今日は復興作業で力仕事に加わっただけあって、汗を流したいという気持ちは人一倍強いのだろう。
「そうですね。濡れタオルだけじゃやっぱり不十分ですし、クリュウ様の前で汗臭いのだけは絶対に避けたいので嬉しい限りです」
同じく乙女的な理由でお風呂を心待ちにしていたフィーリアも笑顔が満開。シルフィードは「乙女だな」と小さく苦笑を浮かべる。
一方、無言を貫き通しているのはサクラ。しかし、風呂が嬉しいのは隠し切れていないようだ。
「サクラ。手ぬぐいを頭に載せるのは風呂に入ってからにしたらどうだ？　それと、後でそのカバンに忍ばせている牛乳を一本私にも貰えないだろうか？」
「……サクラ様、ものすごくお風呂楽しみにされているんですね」
「……そんな事はない」
珍しく羞恥で頬を赤らめるサクラの姿に新鮮さを感じつつも、妙に大人っぽかったり子供っぽかったりする彼女の態度に苦笑する二人。
「クリュウ様も今頃は並んでいる頃合いでしょうか？」
「そうだな。むしろ男湯は街から若干近いから、すでに湯船の中かもしれないな」
「……クリュウと一緒に入りたかった」
「そ、そんな恐れ多い事をッ！　で、でも気持ちはわかります」
「……君達のような輩がいるから、男湯と女湯が真逆に設置されているのかもしれんな」
常人には拾い切れない強烈なボケを炸裂させるサクラと天然ボケを要所要所で放つフィーリア。そんな二人の強烈なボケを自分一人でツッコミ切れるかどうか。シルフィードはそんな心配をしつつ苦笑しながらすでに絶好調にボケを飛ばす二人を見詰める。
いよいよ自分達の番となり、三人は天幕（テント）の中に入る。天幕（テント）に入るとまずは脱衣所。三人はそれぞれ空いている棚をキープして身に纏っていた服を脱ぎ始める。

汚れた服を脱ぐと、現れるのはきれいな白い肌。
服を脱ぎ、体を洗う際に使う手ぬぐいを持ち、さらに三人とも長髪なのでゴムで結って髪を上げ、これで準備完了。
「さぁ、入るか」
脱衣所の横はすぐに浴槽となっている。穴を掘り、水を通さないシートで覆い、そこにお湯を張った簡易的なもの。地面にもシートが被されているので土で足などが汚れる事もない。すでに市民の女性が何人も湯船に浸かり、復興作業で疲れた体を癒している。
「まずは体を清めんとな」
シルフィードは空いている鏡の前に腰を下ろす。その右側にフィーリア、左側にサクラがそれぞれ腰を下ろした。
用意されている洗剤で手ぬぐいを泡立て、体を洗い始める。シルフィードとサクラは無言で、フィーリアはご機嫌に鼻歌を歌いながら。
埃や泥、汗で汚れた体を磨きながら、ふとサクラは隣に座るシルフィードを見る。
まさに女性らしい体つき。擬音で言うならボンッキュッボンッ。見事なプロポーションだ。狩場ではいつも鎧に隠れている大きな胸は、彼女が体を洗うたびにその存在を主張するように揺れる。
「……」
サクラは無言のまま、自分の胸を触った。良く言えば控えめ、悪く言えばペッタンコ。
自分とシルフィードは二歳の年の差があるが、だとしても二年でこの差が埋まるとは決して思えない。
女性の魅力は何よりも胸。男性は女性の大きな胸にメロメロになるというのは一般常識だ。その常識を照らし合わせれば、シルフィードの胸はその極地とも言うべきだろう。そして、自分の胸はその対極に位置する。
決して自分では手に入らない女性の宝玉とも言うべき大きな胸。サクラはそんなシルフィードの胸を憎々しげに睨みつける。
「うん？　ど、どうしたサクラ？　なぜそんな親の仇を見るような目

で私の胸を睨んでいるのだ？」
「……胸の大きな女性はみんな死ねばいいのに」
「ど、どうしたのだサクラ――ひゃあッ!?」
　憎々しげにシルフィードの胸を睨んでいたサクラだったが、やっぱり羨ましいという気持ちの方が強く、自然と伸びた手がシルフィードの大きな胸を鷲掴みにした。突然胸を掴まれたシルフィードはいつものクールさからは想像もできないような乙女な悲鳴を上げて顔を真っ赤にさせる。
「な、何をしているのだ君はッ!?」
「……この柔らかさ、弾力、張り……これが、同じ胸だとでも言うのか」
「い、意味不明な事を言ってないで離さんかッ――ひゃんッ。あ、あまり強く揉むなッ！」
　嫌がるシルフィードを無視し、サクラは執拗にシルフィードの胸を揉みまくる。その目が若干血走っているように見えるのは気のせいではないのかもしれない。
「一体何を騒いでいるんですか――って、お二人とも一体何をしてるんですかッ!?」
　髪を洗い終えたフィーリアは騒ぐ二人の方に振り返り、二人の（主にサクラの）奇行を目撃。顔を真っ赤にして声を荒げた。
「えぇい離せサクラッ！　フィーリアも見てないでサクラを何とかしてくれッ！」
　一心不乱に自分の胸を揉みまくるサクラを引き剥がそうとシルフィードが全力を出すが、ある意味弱点をキープされている状態ではうまく力が出せず未だにサクラを引き剥がせずにいる。
「……貴様も触ってみろ。これが男を惑わせる女の武器の最強形態だ」
「わ、私は遠慮しますッ！　さ、サクラ様もそのような卑猥な行動は即刻やめてくださいッ！」
「……これが神が与えし宝具だとでも言うのか」
「さっきから何を言っているのだ君はッ!?　い、いいから離れろッ！
　ふぃ、フィーリアも早く助けてくれぇッ！」

シルフィードの大きな豊満な胸を揉みまくるサクラ。先程からフィーリアの視線はその揉まれる大きな胸に集中している。まるで、信じられないものを見るかのような驚愕と、決して敵わないという敗北感、そして嫉妬。様々な感情が彼女の瞳には渦巻いていた。
「い、いい加減にせんと本気で怒るぞ――にゃあッ!? ふぃ、フィーリアッ!? な、何をするッ!?」
サクラの執拗な胸への攻撃ですでに手一杯なシルフィード。だがここにさらにフィーリアまでもが我を失ってシルフィードの胸に襲いかかった。
「こ、こんな大きくなるものなんですか……ッ!? わ、私もこんなに大きくなるのでしょうか……ッ!?」
シルフィードの大きくて柔らかくい胸を片手で揉みながら、自分の建造中の胸も揉んでみる。だが、その差は歴然だ。
右胸をフィーリアに、左胸をサクラに鷲掴みにされるシルフィード。顔を真っ赤にし、涙目になりながら普段のクールな彼女からは想像もできないようなかわいらしい声を漏らす。
「ひゃ、ひゃめろぉ……ッ。む、胸は弱いんら……ッ。や、やめれくりぇ……ッ」
呂律も回っていない。立って逃げようにもすでに腰が抜けてしまい、もはやシルフィードは抵抗する術もなく二人の観察対象として胸を揉まれ続けるしかない。
「ひゃ、ひゃめれふれえええぇぇぇッ!」
珍しく、シルフィードの悲鳴が轟いたのであった。
十分後、ようやくシルフィードは解放されたが、すでに腰が抜けてしまって立つ事もできず、あらでもない姿で床に転がっている。
「……も、もう私はお嫁に行けん」
しくしくとさめざめと泣くシルフィードを無視し、散々大きな胸を堪能した二人は湯船に浸かりながら先程のシルフィードの胸に対する感想や意見を真剣に、そして激しく議論していた。
「……フン。所詮胸なんて邪魔な脂肪に過ぎん」
「そ、そうですよね。無駄に大きいのなんて、年取った時に悲惨になる

だけですッ」
散々シルフィードの胸を無許可で揉みまくった挙げ句、彼女の胸を全面否定するような発言。倒れているシルフィードの拳がプルプルと怒りに震えている。
「……それに、クリュウは胸はない方が好みだ」
それは以前、クリュウがテンパった末に口走った失言。結局あの発言は撤回する機会もなくズルズルと現在まで尾を引いている。
サクラの発言に、床に転がりながら静かに怒りの炎を燃え上がらせていたシルフィードがピクリと反応する。
「そ、そうですよねッ。胸なんて飾りだっていう事ですよねッ!? む、むしろ全くない方が好みですしねッ！」
「……ペチャパイ最強伝説」
刹那、二人が纏う空気がどよーんと重くなった。何度か自分のそれぞれシルフィードに比べたら若干やないに等しい胸だが、全くない訳ではない。ある意味、中途半端。
「……それに、言っててすごく空しくなってきました」
「……事実上、女としての敗北宣言を叫んでいたに過ぎない」
言えば言うほど自分の胸がない事を認めなければならず、二人は次第に自分の女としての魅力に自信を失い始めていた。
何度か自分の寂しい胸を触っては、がっくりと肩を落として深いため息を漏らす。
一方、床に転がっているシルフィードもまた自分の大きな胸を何度か触り、重々しいため息を零す。
子供の頃から年齢の割には大きな胸を持っていたシルフィード。周りの子、男子からは妙な目で、女子からは尊敬と嫉妬の目で見られていた。その他の子とは違う大きな胸に、子供の頃からコンプレックスを抱いていた。
ハンターになってからは防具で隠す事ができていたので、自分のその大きな胸を気にする機会は少なかった。しかし、クリュウの貧乳好き宣言（誤解）以降、そのコンプレックスにより拍車が掛かっている。
「……私も、せめてフィーリアのようなかわいらしい胸なら」

ふにふにと胸を触っては、そんな叶わない夢にため息を零す。
毎日防具の下でサラシをきつく巻いて少しでも胸が小さくなるような涙ぐましい努力を彼女がしている事は内緒だ。
「「……はぁ」」
湯煙漂う風呂場で、三人の恋姫はそれぞれの悩みの末に絶望し、重々しいため息を零すのであった。
その頃、クリュウは――
「いや、ですから僕は男ですからッ！　男湯に入らせてくださいッ！」
――その女の子らしい顔つきの為、ちょっとばかし男湯に入る事に難航していた。

第116話　シェレシーアの巫女　最強のヒロイン降臨

風呂上がり、三人は脱衣所で体にバスタオル一枚を巻いた姿できれいに横一列に並び、サクラが持参した牛乳を一気に飲み干していた。
「ふぅ、うまいな」
「……風呂上がりの牛乳は美味」
「そうですね。牛乳をたくさん飲めばきっと胸も――」
――せっかくいい心地で風呂を出たというのに、見事に自分で地雷を踏み抜いて自滅するフィーリア。ついでにサクラも巻き沿いで誘爆していたり。
「……アホか私は。これではまた大きくなってしまうではないか」
シルフィードもまた別の意味で自滅していた。
三人がそれぞれの理由で落ち込んでいると、キャッキャッと笑いながら女の子が風呂場から出てきた。
「あれ、お姉さん達だぁ」
「サラちゃん？」
風呂上がりで濡れている髪をフルフルと振って水気を飛ばし、えへへと無邪気に微笑む少女はサラであった。
「お姉さん達もお風呂？」
「えぇ。サラちゃんも？」
「うん。まだお母さんが入ってるけど。私はあんまり長湯は好きじゃないから」
「そっか。でも久しぶりのお風呂は気持ち良かったでしょ？」
「うんッ。すっごく気持ち良かったぁッ」
えへへと無邪気にかわいらしく微笑むサラ。その純真無垢な笑顔に三人は不覚にも一瞬ドキッとしてしまった。
無邪気に微笑むサラに同時に背を向け、三人はそれぞれ頭を抱える。
「ふ、不覚にも一瞬かわいいと思ってしまいました……」

「な、なるほど。クリュウの気持ちもわからなくはないが……」
「……私、色々な自信を喪失しそう」
落ち込む三人の背中を首を傾げながら見詰めるサラ。だがその視線はゆっくりとシルフィードの胸に注がれる。
「だがクリュウが彼女に抱いているのは恋愛感情ではなく、言うなれば兄妹愛と言うべきものに――ひゃあッ!?」
考え込んでいたシルフィードの背後に近づいたサラは突如その大きな胸を両手で掴んだ。自分の小さな手じゃ納まり切らないようなシルフィードの大きな胸にサラは興味津々だ。
「うわぁ、大きいお胸ぇ。ママよりも大きい」
「や、やめんかッ！」
再び顔を真っ赤にしてサラの手から逃れると、揉まれた胸を両腕で庇う。いつも冷静沈着でクールなシルフィードだが、先程からその冷静さはすっかり失われていた。
「ねぇ、何を食べたらそんなに大きくなるの？　やっぱり牛乳？」
キラキラとした純粋な瞳で問うサラに、シルフィードは頬を赤らめたまま「し、知らんッ」と怒鳴る。すると、
「確かに、一体何を食べればそのような状態になるのでしょう」
「……牛乳ではない。それなら今頃私はボインボインよ」
先程散々シルフィードを弄（もてあそ）んだ二人も再び興味を持ち始め、シルフィードの胸を凝視する。そんな三人の視線に対し、シルフィードは「き、君達なぁ……ッ」と声を震わせながら拳を握り締める。
「いい加減にせんかあああぁぁぁッ！」
珍しく、シルフィードの怒号が響き渡った。
「何？　シェレシーアの巫女？」
大衆浴場から出た三人とサラ、サラの母の五人。帰路の途中でサラの母が口にした聞き慣れない単語。
「えぇ。このヴィルマでは月光花（シェレシーア）が咲く頃、今がちょうどその時期なんだけど、月光祭というお祭りが開かれるの。今回はこの災害で中止になったんだけど、せめて祭りの花形である巫女の歌

だけはって声が強まってるのよ」
「巫女の歌、とは？」
「毎年街の選りすぐりの女の子が祭りの最終日にコンサートを開くのよ。歌って踊って、数日間に渡る祭りの取りを務めるの」
「ほぉ、なかなか面白そうなイベントですね」
「えぇ。祭りの花形、お客の中にはこれを見る為に遠路遙々来る人もいるくらいの人気なのよ。それに歴代の巫女の中にはその後歌手や女優の道に進んだ人もいてね、参加する巫女側も本気。コンサートって言葉じゃ片づけられない程盛大なイベントなのよ」
「なるほど。だからせめてそれだけでも決行したいと言うのですね。被災した市民の激励も兼ねられますし」
　納得したようにうなずくシルフィード。しかし、サラの母は「でもね」と困ったような表情を浮かべながら続ける。
「何か問題が？」
「えぇ。それが、今回選ばれた巫女が全員程度は違うけど怪我しちゃって、とてもじゃないけど参加できないのよね。求める声は高まっても、肝心の巫女が参加できないんじゃどうしようもないのよ」
「……確かに、どうしようもないが。やけに貴殿は詳しいですね」
「うふふ、だって私がその運営委員会の委員の一人だもの」
　いたずらっぽく笑う母親。その無邪気な笑顔は娘のサラに良く似ている。そんな彼女の言葉にシルフィードは「なるほど」とうなずく。
「しかし残念ですね。そういう状況では巫女の歌は聴けそうもないです」
　話を聞いていたフィーリアも残念そうにつぶやく。街の人達が望んでいるのに、肝心の巫女が参加不能ではどうしようもない。関係ない身でも、心痛い。
「そうだな。残念だが仕方があるまい」
「――いえ、策はあるわ」
　サラの母は立ち止まると、力強くそう宣言した。突然立ち止まった彼女に先行していた四人が振り返る。母の手を握っていたサラも不思議そうに首を傾げながら母を見上げる。

サラの母は自信満々と言いたげなオーラを全身から放ちながら、首を傾げているシルフィード、フィーリア、サクラ――クリュウの四人を見回す。
そして、高らかに宣言した。
「――あなた達に、ヴィルマの巫女を頼みたいの」
刹那、少女達の驚愕の声――及びクリュウの悲鳴に近い叫び声が天高く轟いた。
サラとサラの母を避難所に無事に送り届けた後、四人は自分達の天幕（テント）へと戻った。
「……面倒な事になったぞ」
椅子に座り、開口一番にシルフィードが言った言葉がそれであった。
先程、サラの母に頭を下げられて頼まれた巫女の代役。シルフィードは拒否をしたのだが、サラの母の必死なお願いにとりあえず「考えさせてください」と時間の猶予だけもらった。だが、とても断れそうな雰囲気ではない。
「フィーリアやサクラはともかく、私はそういうのは似合わない。自殺行為に等しいと思うが」
「そ、そんな事ありませんよ。もしもこのメンバーで行う場合、シルフィード様の存在は絶対に必要です」
……自分とサクラでは胸が物足りなさ過ぎる。ここは豊満な胸を持つシルフィードを足してようやく全体的なトータルとなるだろう――そんな事を考える自分が情けなくて仕方がない。
「……無関係な人民の為に羞恥を晒す必要はない」
サクラは無表情のままそう断言した。ぶっちゃけ、その気持ちは他の二人も強い。そこまで過激な思いではないが、恥ずかしいから嫌だという気持ちは強い。
しかし、だからと言って頭まで下げられたからには断るのは忍びない。そんな心の葛藤がフィーリアとシルフィードにはあった。
「そもそも私は踊りなんてできないぞ」
「……普通の民間人は踊りとは一生無縁が当然」

民間出身の二人の意見が珍しく一致した。二人の言う通り、普通は踊りなんて無縁で一生を過ごすものだ。
「わ、私は一応家の作法で簡単な踊りは何とか」
詳しくは知らないが、普通の民間出身ではないフィーリアのみが種類は違うものの踊りの経験がある。だからと言って人前で踊れる訳ではないが。
「私は踊りの経験がない素人だ。そもそも、人前に出るのはあまり好かん」
「そうですね。恥ずかしいだけですし、私もできれば拒否したいです」
「……私は断固拒否する」
三人とも辞退の決意を固めていた。サクラはともかくフィーリアとシルフィード、特にフィーリアは人の役に立ちたいという気持ちは一番強いが、でも今回は羞恥心の方が高いらしい。
そんな三人を見てクリュウは残念そうに苦笑する。
「そっか。みんなの歌って踊る姿、見てみたかったのになぁ」
残念そうなクリュウのさりげない言葉に、三人の恋姫の決意が若干揺らぐ。
「ご、ご冗談をクリュウ様。わ、私の拙い踊りなど見るに耐えませんよ」
「そんな事ないよ。フィーリアならきっとすごくきれいな踊り子になれると思うなぁ」
「はふぅ……ッ」
クリュウの無意識の集中砲火にフィーリアは顔を真っ赤にしてフラフラと後ずさる。威力抜群のクリュウの誉め言葉にすでに陥落寸前だ。
「き、気を確かにフィーリアッ！　まだ意識を持って行かれる段階じゃないぞッ！」
崩れかけるフィーリアの体を支えながら、シルフィードは今にも意識を失いそうなフィーリアに声を掛ける。
「わ、私もう思い残す事はありましぇん……ッ」
「死ぬなバカあああぁぁぁッ！」

「……阿呆」
一人クールなツッコミを炸裂させるサクラの隣で状況を把握できずに首を傾げるクリュウ。そんな彼の服の袖を、サクラがくいくいと引っ張る。
「……クリュウ、私も？」
サクラの祈るような問い掛けに対し、クリュウは一瞬何の事かわからず疑問符を頭に浮かべたが、すぐに彼女の言いたい事を理解して笑顔でうなずく。
「うん。サクラの踊る姿もすっごくきれいだと思うよ」
「……そう」
そうつぶやき、サクラはクリュウに背を向ける。そのまま無表情の仮面が外れ、にへらとだらしない笑顔が浮かぶ。クリュウからは見えないがシルフィードの方からは丸見えだ。サクラのだらしない笑顔に苦笑するシルフィード。
「……君達二人は幸せ者だな」
クリュウにきれいと言ってもらえて大喜びする二人を、少し羨ましそうに見詰めるシルフィード。その時、ふと何かを思い出したような表情を浮かべ、一人困惑しているクリュウに尋ねる。
「ちょっと待て。先程の話、確か君も代役の対象ではなかったか？」
シルフィードの問いかけに、クリュウはぽかんとした表情を浮かべる。その後、おかしそうに笑い飛ばした。
「そんな事ないよ。僕は男だよ？　そんな訳ないじゃん」
「いやしかし、確かにそう言っていたぞ？　それに、巫女は四人ではなかったか？」
「そ、それはそうだけど。まさかそんな……」
クリュウは若干表情を強ばらせながら視線を外す。どうやら、内心は薄々でも気づいていたのかもしれない。あの時、サラの母が自分も見ていた事も――
「クリュウ様の――」
「……女装姿――」
――刹那、二人の恋姫の瞳がキラリと不穏な輝きを見せた。

突然不気味な沈黙をした二人を無視し、シルフィードはあごに手を当てて思考する。
「クリュウの女装姿か。興味はあるな」
「いや、持たれても困るんだけど」
苦笑しながら言うクリュウに対し、シルフィードは自信満々に宣言した。
「大丈夫だ。君ならそこら辺の女子よりもかわいらしい女の子になれるぞ」
「……あのさ、僕は男だからそんな風に背中を押されても何も嬉しくないんだけど」
シルフィードの天然発言に相変わらず痛む頭を押さえながら弱々しいツッコミを入れるクリュウ。女装には嫌な経験しかない為、いつもの力強いツッコミが失われてしまっている。
深いため息を漏らし、シルフィードの根本が間違っている思考をどう訂正しようかとクリュウは困ったように頬を掻く。その時、
「恥ずかしいですが、困っている市民の為ですッ。ここはぜひにも参加しましょうッ」
「……絢爛舞踏祭」
突如として先程まで巫女になる事に拒否の意を示していたフィーリアとサクラが一転して参加の意を示した。これにはクリュウとシルフィードが驚く。
「ほ、本気か君達。さっきまでとは意見がまるで正反対だが」
「私達にできる事をするまでです。ハンターとしてテオ・テスカトル及びその後に現れたイーオスの群は全てフォルクス様とシャネル様が討伐及び撃退をされました。今の私達はハンターとしてできる事がない。だからこそ、別の形でも困っている皆様の為に、決起したまでです」
「……言っている事は非常にすばらしいのだが。なぜ頬を赤らめて興奮したような眼差しでクリュウを見詰めているのだ？」
頬を赤らめてクリュウを見ては怪しげな笑顔を浮かべるフィーリア。

首を傾げるシルフィードに音もなく忍び寄ったサクラはその耳元でつぶやく。
「……クリュウの女装姿を見る為なら、羞恥心など捨てる。フィーリアと私の統一意見」
「なるほど……」
事情を理解したシルフィードは苦笑を浮かべるが、ふとクリュウの女装姿を想像してみる。すでに常の状態でかわいらしい女の子っぽい顔立ちをしているクリュウ。もしも本気で女装させればものすごい美少女になるのではないか。そして、それは自分も非常に興味がある――それこそ、二人と同じく羞恥心やプライドを放棄できるほどに。
「ふむ。そういう事なら私も協力しよう」
シルフィードの言葉に二人が歓声を上げる。
「ご協力、感謝します」
「なぁに、私自身興味はある。利害は一致するからな」
「……共闘作戦」
三人の恋姫達は大義の下に一つとなった。武器があればそれぞれの武器を天高く掲げて合わせたいくらいだ。
一方、一人完全に取り残されているクリュウはそんな三人の同盟を見てなぜか背中が寒くなった。本能的に、三人の同盟に恐怖を感じているのだ。
「えっと、三人は巫女代役を引き受けるという事でいいんだよね？」
「あぁ、我々四人はその巫女の代役を引き受ける事にしよう」
「そっか。がんばって――え？」
シルフィードの言葉にクリュウの笑顔が凍り付いた。状況が理解できずに困惑し、若干フリーズ状態。そんな彼を置いて三人の話は進む。
「それじゃ早速サラの母上に報告しないとな。詳しい取り決めはそれから相談しよう」
「そうですね。できれば私はあまり目立たない方がいいんですが」
「……右に同じ」

「ふむ。だがこの面子ではフィーリアとクリュウが目立つ形の方が絵になると思うが」
「クリュウ様と私がコンビですか？　そ、それだったら……」
「――あのさ、いくら僕でも拾い切れないような特大のボケを放っておいてそのまま放置するのはやめてくれないかな」
　勝手にどんどん話を進める三人を止めたのは、両手で頭を抱えるクリュウ。うつむいている彼の表情は三人からは見えないが、引きつった笑顔を浮かべてこめかみの辺りがピクピクと震えている――限りなく、キレる寸前だ。
「どうしたクリュウ。頭などを抱えて。頭痛でもするのか？」
「そ、そうなんですかクリュウ様ッ!?」
「……頭痛薬、呑む？」
「もうどっからツッコミを入れればいいのか……」
　天然三人娘の強烈なボケによる頭痛に耐えながら、クリュウは引きつったままの笑顔で「えっと……」と言葉を探す。
「とりあえず、君達が巫女代役を引き受ける事はわかった。でもさ、何でそこに僕の名前があるの？」
「そ、それはサラちゃんのお母様がお決めになった事ですから。私達はそれに順守しているだけですが」
　とりあえず女子同盟の締結には成功したフィーリアだったが、ここから女装を嫌がるクリュウをどう引き入れれば良いかが問題だ。フィーリアは助けを求めるようにサクラの方を見詰める。すると、サクラは無言でコクリとうなずいた。
「とりあえずさ、一番基本的で重要な事を言うけどさ、僕は男だから」
「……問題ない」
「あるよねッ!?　性別っていう基礎で大問題があるよねッ!?」
「……女装すればいい」
「そういう問題じゃないでしょッ!?」
「……安心して。クリュウはすごい美少女になれる。私が保証する」
「だぁかぁらぁッ！　そんな事保証されたって何も嬉しくないしッ！
　男としての何か大切なものが崩壊しかねないのッ！」

自信満々に宣言するサクラにはどんな理屈や一般論を提示しても無駄である。そんな事重々わかっているはずのクリュウがそんな基本的な所を忘れてサクラに翻弄されている。それほど《女装》というのは彼にすさまじい精神負担を掛けるらしい。

珍しくサクラをコントロールできずに頭を猛烈な勢いで掻きまくるクリュウ。さすがのシルフィードも心配になって「お、落ち着けクリュウ」と声を掛けた。すると、クリュウは若干涙目になった瞳でキッとシルフィードを見る。

「これが落ち着いてられるッ!? 僕の質素な男としての尊厳が失われようとしてるんだよッ!?」

「……質素だという事は自覚してるんだな」

いつもの調子を完全に崩して慌てふためくクリュウを見ているのはなかなか面白いのだが、さすがにこれ以上は本当に彼の精神に甚大な損傷を与えかねない。

「クリュウは女装は嫌なのか？」

「当たり前でしょッ!? 女装が好きな訳ないじゃんッ！」

「いや、しかしクリュウなら大丈夫だと思うが」

「中途半端に女の子っぽい顔立ちしてるから余計に嫌なのッ！ ボケにならないから嫌なのッ！ シャレにならないから嫌なのッ！」

必死になって叫ぶクリュウの顔立ちは中途半端というよりはどちらかと言えば女子のそれに近い。普段はできるだけ男の子っぽい格好を彼自身が意識しているので何とか男子に見えてはいるが、本気で女装させればそこら辺の女子よりもハイレベルな美少女に化けるのは間違いない事は彼のその顔立ちが証明している。だからこそ、フィーリア達は彼の女装を強く支持しているのだが。

事実、彼は昔ふざけたエレナに女装させられて恥を掻いた経験というかトラウマがあるのだ。その時の女装した彼の破壊力は幼き頃のエレナが女子としての自信を一時的とはいえ喪失してしまう程だった。そういう経緯から、クリュウの女装はクリュウ及びエレナの間では共通の禁忌となっているのだ。

「とにかく、僕は絶対女装なんかしないからねッ！」

そう叫ぶように宣言すると、クリュウはこれ以上言う事はないとばかりに三人に背を向ける。
クリュウの強い拒否に対し、フィーリアとシルフィードの間ではすでに諦めムードが漂い始めていた。彼を想う二人はそんな彼が嫌がる事を強制する気はない。これ以上の説得は不可能だった。
「……問答無用」
刹那、音もなくクリュウの背後から忍び寄ったサクラは彼の首元に向かって手刀打ち。素人相手に無駄がなく全く容赦のない玄人の一撃に、クリュウは簡単に気絶した。
倒れそうになる彼の体を支え、サクラは無表情で振り返り、口をあんぐりと開けて固まっている二人に向かってビシッと親指を立てる。
「……任務完了」
「な、何してるですかあああぁぁぁッ！」
静かな夜に、発狂したフィーリアの悲鳴が轟いた。
クリュウを気絶させた三人はすぐにサラの母の所へ行って四人での巫女代役を引き受ける旨を知らせ、早速練習の為に今回の災害で被災しなかった市民館に入った。
気絶しているクリュウはサラの母が預かる事になり、とりあえず三人は曲の練習。
「知らない曲だったら困りましたけど、知っている曲で助かりましたね」
「そういう情報に疎い私でも何度か聞いた事がある曲だからな」
「……この程度の歌は簡単ね」
三人はそれぞれ決められたパートの練習に入る。フィーリアとサクラは歌においても優秀であった。すぐにそれぞれのパートを克服する。一方のシルフィードは苦戦しながらも何とか歌えるようにはなった。
「それでは三人で合唱してみましょうか」
個別練習を終えて早速合唱に入ろうとする三人。その時、
「にゃあああああぁぁぁぁぁぁッ!?」
すさまじい悲鳴が三人の耳を貫いた。その音量に若干頭がくらく

らするのを堪え、声のした方に振り返る。
「な、何事ですか？」
「今のは、クリュウの声ではなかったか？」
「……アイルーのものまね？」
　困惑する三人。その時、隣の部屋に繋がるドアが吹き飛んだ。同時にそこから何かが転がって来た――それは少女であった。
　柔らかな長い茶髪を靡かせた翡翠色の瞳の少女。クリッとしたかわいらしい瞳に小さな鼻、小さくて柔らかそうな潤った唇、赤く蒸気した頬、何とも愛らしい顔立ちをした美少女だ。
　身長はサクラと同じくらいで、女子としては平均より少し高いくらい。纏っているのはかわいらしいデザインの少し布地の少ない黄緑を基調とした衣装。胸は控えめというか、完全なペッタンコ――ある意味、クリュウの好みの理想形（？）だ。
　突然乱入して来たものすごい美少女に三人は困惑のあまり固まっている。そんな三人に気づいた美少女はクリッとした瞳にぶわぁッと涙を溢れさせる。
「み、みんなッ！　この格好は一体何なのさッ！」
　初見のはずの超絶美少女から発せられた声。しかしそれは忘れるはずもない大好きな聞き慣れた声であった。
「き、君はまさか……クリュウか？」
「そうだよッ！　っていうか、何なのこの格好はッ!?」
　超絶美少女――女装したクリュウは何が何だかわからないと頭を抱えて悶絶している。一応スカートを履いているのでそんなに足をバタバタさせたら大変な事になるのだが、本人は全くそれに気づいていない。それどころではないのだ。
「お、落ち着けクリュウ」
「これが落ち着いてられるかぁッ！」
　クリュウらしい鋭いツッコミを受け、シルフィードは一人ほっとしていた。この容赦のない攻撃力抜群のツッコミはまさにクリュウのものだ。そして、自分では対処し切れないサクラの常軌を逸したボケをカバーできる唯一のもの。

「あぁ、やっぱりクリュウのツッコミが一番だな」
シルフィードは心からそう思った。そんな彼女の言葉にクリュウは「えっと、それはボケなの？　ツッコミを入れておいた方がいいの？」と冷静に困る。
一方、そんなクリュウの女装姿を真剣な瞳で見詰める者が二名――フィーリアとサクラだ。
「く、クリュウ様の女装されたお姿……」
「……想像以上の完成度」
二人の目の前で自信の格好にため息を零すクリュウ。その姿はどこから見ても美しい美少女にしか見えない。愛らしいその姿は、本来の女子である自分達から見てもかわいいと断言できる。それこそ、自分達と同等、もしくはそれ以上だ。
そんｎ呆然としている二人に気づいたクリュウは不思議そうに小首を傾げる。
「どうしたの、二人とも？」
いつもと何ら変わらない彼の仕草。でも女装したその姿で行われると、とても愛らしいものに変わる。それこそ二人の胸を貫通弾ＬＶ３で貫くような見事な貫通力で。
小首を傾げるクリュウ（女装版）にバッと背を向けて胸を押さえるのはフィーリア。
「な、何ですかこの胸の動悸はッ!?　ドキドキが止まりません……ッ！」
顔を真っ赤にして女装姿のクリュウを直視できないフィーリア。その隣ではサクラが無言でクリュウを見詰めている。
「……」
……ブババババッ。
静寂を打ち破る奇怪な噴射音。サクラはものすごい勢いでドボドボと鼻血を噴出していた。その尋常じゃない量に全員が驚く。
「い、一体何事だッ!?」
鼻血を大量に噴射しながら倒れたサクラにシルフィードが慌てて駆け寄る。シルフィードに抱き起こされたサクラはなぜかまるで思

い残す事は何もないと言いたげな満足し切った表情を浮かべて横たわっている。
「お、おいッ！　しっかりしろサクラッ！」
「……我が人生に一点の悔いなし」
「あるだろッ!?　むしろ悔いしか残していないだろうがッ！」
「……霧の向こうに美しい川が見える」
「か、川？」
「……川の向こうに、この世のものとは思えない美しい花畑が」
「……お、おい。まさかそれって」
「……向こうにお父様とお母様が笑顔で私を呼んでいる」
「行くなぁッ！　それは絶対に渡ってはならんあの川だぞッ！　この世のものとは思えないじゃなくて、この世じゃないんだッ！」
　なぜか生と死の狭間を彷迷うサクラの肩を掴み、シルフィードは慌てながら彼女の肩をガクガクと揺らす。
　様々な形で三人の恋姫を見事に翻弄する美少女クリュウ。本人は全くそんな自覚はなく、翻弄される三人の姿に相変わらず可憐に小首を傾げている。
「みんなどうしたのさ。何か変だよ？」
　クリッとした瞳で見詰められ、シルフィードはカァッと顔を真っ赤にして「こっちを見るなッ！」と怒鳴る。
「うえッ!?　ど、どうしてッ!?」
「どうしてもだッ！」
　意味も分からずシルフィードに怒鳴られ、クリュウは困惑が止まらない。サクラは相変わらず鼻血が止まらないし、フィーリアもシルフィードもドキドキが止まらない。
「ずいぶん盛り上がってるじゃない」
　そこへ満面の笑顔を浮かべたサラの母がやって来た。部屋の様子を見て一目で状況を理解したらしく、そして女装姿のクリュウを見て一言、
「やっぱり私の目に狂いはなかったわね」
「いえ、僕は男なのでその段階ですでに狂っているのではないかと

……」
　クリュウの冷静なツッコミに対し、サラの母は小さく首を横に振ると大胆不敵な笑みを浮かべ、力強く宣言した。
「《かわいい》という大義名分の前に、男か女なんてものは些細な事よッ」
「全然些細なんかじゃありませんよッ！　大問題ですッ！」
「かわいいものが正義なのよ」
「結局かわいければ何でもいいんですかッ!?」
「Ｙｅｓッ！」
「……ダメ人間がここにいる」
　一般論が全く通用しないサラの母相手にがっくりと肩を落とすクリュウ。彼の中で少なからず自身の常識が崩壊したのは言うまでもない。
　サラの母の理解不能な言葉に頭を抱えながらがっくり肩を落とすクリュウの横で、フィーリアがサラの母に向かって親指を立てる。それに気づいたサラの母も満面の笑みと共に同じく親指を立てる。その姿はまさに職人だ。
「という訳でクリュウ君はそれを着て巫女を務めてね」
「何がという訳ですかッ!?　だから僕は女装は絶対に嫌だって言ってるじゃないですかッ！」
「何を仰る。そんな女装をする為に授かったような見事な女顔をしておきながら」
「しばき倒しますよッ!?」
　温厚なクリュウの口から《しばき倒す》なんて言葉が出る事にシルフィードは驚く。それほど、彼が追いつめられているという事だが、だからといってここまで来て彼の女装を諦めるのも忍びない。どうしたもんかと頭を捻っていると、ゆっくりとサクラが起き上がり、クリュウに近寄る。
「……クリュウ。これは人助けよ」
　自分の理解の範疇を越えたサラの母の言動に頭痛すら感じるようになっていたクリュウ。ただ、サクラの放った《人助け》という単語

にはピクリと反応した。
「人助け？」
「……そう。これは人助け。ヴィルマの人達は祭りを楽しみにしていた。巫女の歌を楽しみにしていた。でも、今回の事件で祭りは中止になった。巫女の歌も」
　常の無表情が消え、寂しげな表情で訴えるような瞳でクリュウを見詰めながら言葉を続ける。その瞳は、涙で薄っすらと濡れてランプの光でキラキラと輝いている。
「……今のヴィルマは、住民が一丸となって復興の最中。でも連日の作業で人々が疲れている。そんな彼らを、彼らが楽しみにしていた巫女の歌で癒す。これは冗談やおふざけじゃない、本気の人助けよ」
「人助け……」
「……瓦礫の街と化した自分の故郷を見詰め続ける日々。それは想像を絶する精神的な負担。その負担を、ほんのわずかでも、一瞬でも忘れさせる。それって、とても大きな人助けでしょ？」
「そ、それはそうだけど……」
「……クリュウは子供の頃こう言ってた。「誰かの為に一生懸命になれる人になりたい」って。その気持ちは、嘘だったの？」
　サクラは真剣な瞳で彼を見詰める。まだ自分が左目を失う以前、何もかもが幸せに満ちていたあの頃の彼の言葉。今も、その気持ちは変わってはいないのか。彼女の瞳は、真剣にそれを問うていた。
　そんなサクラの問いかけに対し、クリュウは静かに答える。
「……嘘なんかじゃないよ。僕の気持ちは、昔から変わってなんかいない」
「……そう」
　信じていたクリュウの言葉に、サクラは安心したように微笑む。心の底からの安堵であった。
「あのさ、サクラ」
「……何？」
　首を傾げるサクラに対し、クリュウは困ったように頬を掻きながら言いづらそうに口を開く。

「……言ってる事はすごく立派なんだけど――とりあえず、鼻血を何とかしようか」
――依然、サクラの鼻血は止まっていなかった。
止まらない鼻血を噴き続けながら、サクラは涼しい表情を浮かべながら一言。
「……大した事じゃない」
「いや、絶対大した事だからねッ!?　絶対止めた方がいいし、説得力半減だからねッ!?」
「……それを言うなら、女装姿のクリュウも説得力が不足してる」
「う、うるさいなッ」
「……でも、すごく似合ってる」
「うるさぁいッ！」
ぽっと頬を赤らめるサクラの嬉しくない誉め言葉に対し、クリュウもまた頬を赤らめながら怒る。だが怒った顔も今のクリュウではまた違った一面を表してしまう。それを見てサクラはほぉとため息を零す――ついでに鼻血も零す。
「とりあえずサクラ。君はそろそろ本気で鼻血を何とかしないと危険だぞ」
痛む頭を押さえながら冷静にツッコミを入れるシルフィードであった。
「人助け、かぁ……」
鼻血噴射が止まらないサクラに苦笑を浮かべていたフィーリアはそんなクリュウの言葉に驚いて振り返る。そこには彼の背中があり、彼の正面にはサラの母が腕を組んで立っている。
「クリュウ様……？」
美しく艶やかな茶髪を靡かせ、クリュウはその翡翠色の瞳でサラの母を真剣に見詰める。そして、半ば諦めたようにため息を零し、苦笑を浮かべる。
「……わかりました。人助けって事なら、僕も協力しましょう」
「え？　ほんと？」
「はい。女装するのは不本意ですが、それで街の皆さんが少しでも元

気になってくれるなら」
心から嫌がっていた女装を、人助けの為ならと仕方なく了承するクリュウ。その彼の覚悟と底なしの優しさに、三人の恋姫の心は見事に撃ち抜かれた。ぶっちゃけ、もうメロメロだ。
クリュウはそのまま振り返り、今度はフィーリア達を見る。彼に見詰められ、三人は自然と姿勢を正す。そんな彼女達に向かって、クリュウは優しく微笑んだ――純情可憐純真無垢天真爛漫超絶美少女の格好で。
「そういう事だから、これからよろしくね」
――刹那、三人の恋姫が一斉に鼻血を噴出したのは言うまでもない。
一週間後の夜、ヴィルマの中央広場には大勢の人が集まっていた。連日の復興作業で薄汚れた服や汗に塗れた疲労が浮かぶ顔が、彼らの苦労を表している。だが、今日の彼らの顔はいつもとは違っていた。皆、何かを心待ちにするかのように表情が明るい。そして、そんな彼らの視線は広場の中央に設置されたステージに注がれている。
そんな次々に集まってくる人々を、ステージ正面に掛けられたカーテンの隙間から覗くクリュウ達。その表情は予想外の盛況ぶりに困惑が隠せない。
「ま、まさかこんなに集まるなんて……」
「嬉しいような、恥ずかしいような……」
「……やめる？」
「この状況でそれはマズイだろ。暴動が起きるぞ？」
カーテンを閉め、改めて事の重大性を認識してがっくりと肩を落とす四人。そんな彼らはすでに巫女用の衣装に着替えている。
この地域独特の民族衣装をモデルにした衣装で、テーマは女騎士。胸や膝などを鉄の鎧が守り、でも鎧にしては腕やお腹、太股など露出が多い。そこは完全にステージ衣装という事だ。
先日クリュウが着ていたかなり大胆な衣装は四人の強い反対で却下され、代替案としてこれが衣装となったのだ。さすがの四人も、あんな衣装を着て大衆の面々に出るのは恥ずかしいのだ。特に、フィー

リアとサクラは一緒に踊るシルフィードの動けば揺れるその大きな胸と比較されるのを死ぬほど嫌なので必死だったのだ。
とはいえ、この衣装だって露出は結構ある。腰は下着のような穿き物の上から一枚の薄い布を巻いただけ。お腹と太股は露出し、四人はその白い肌を晒す事になる。ちなみにクリュウだけは背中に腰程までの長さのマントを羽織っている。これは彼の背中の古傷を隠す意味を持っているのだ。
クリュウ（一応女装時の名前はクリムと命名）は黄緑を基調とした衣装だ。今回はショートカット型の茶髪のカツラを被っている。
フィーリアは桜色の衣装、サクラは赤色、シルフィードは青色とそれぞれイメージカラーが決まっている。ちなみに今回フィーリアはいつものロングヘアではなくツインテールにしてかわいさを倍増させている。
今回の歌ではメインボーカルは比較的かわいい声を持つクリュウとフィーリアが担当。逆に美しい声のサクラとシルフィードはサブボーカルとして二人を引き立てる役目を負っている。
曲は四人も知っている現在大陸で最も有名なアイドルユニット、《ザザミーズ》の有名曲。ザザミーズとはザザミシリーズを纏った美少女三姉妹で結成されたアイドルユニットで、その知名度及び影響力は史上最強のアイドルユニットとも賞される程だ。この三人も最初のデビューはこのヴィルマでの巫女だったのだから、月光祭の巫女というのは大陸でも注目度の高いイベントだ。
今回は災害の影響もあって非公式でのイベントなので街の人々のみが観衆となっているが、それでもかなりの人数が集まっている。
予想外の観衆の人数にすっかり四人は緊張してしまっている。特に自分はこういう格好は似合わないと終始つぶやいていたシルフィードは落ち着かないのか先程からずっと肩をさすっている。そんなシルフィードの肩を優しく叩くのはクリュウ。
「クリュウ……」
「まぁ、緊張する気持ちはわかるよ。僕もそうだし。でも、一人じゃないんだから。みんなで一緒。がんばろ」

クリュウの優しい言葉に、シルフィードは「あぁ」とうなずく。自然と、胸を締め付けていたものが少し消えたような気がした。その様子に若干のやきもちを焼きつつも、そんな彼の言葉に自分達もちょっとだけ気が楽になったのも事実。
「練習通りやればいいんだからさ。がんばろ」
そう笑顔で言って、クリュウは手を伸ばす。そんな彼の意図に気づいた三人は互いの顔を見合った後、同じように手を伸ばす。
四人の手が重なり、心が一つになる。
「絶対成功させるよッ！」
「了解ですッ」
「……御意」
「当然だ」
そして、四人の手は一斉に天に舞い上がる。
「それでは登場していただきましょうッ！　ラブプリンセスの皆さんですッ！」
司会がユニット名（サラの母が命名）を叫ぶと同時に一気にカーテンが開く。その瞬間、会場が一瞬にして静まった。例年ならここでものすごい歓声が轟くのだが、今年は違った。街が被災後だから、このイベントが非公式だから。そんな理由ではない。純粋に、表れた四人の巫女のあまりの美しさに言葉を失っているのだ。
スポットライトを浴びながら四人は登場。それまでのはち切れんばかりの歓声が止んでしまった事に驚きつつも、練習通りに進める。
「皆さんこんにちわッ。今回の巫女を務めさせていただくラブプリンセスです。私達の本業はハンターなので、見た目で甘く見ると痛い目に遭いますよッ。私はメインボーカルを担当します、《天真爛漫》のフィーリアですッ」
一番責任の大きいトップバッターを務めたのはフィーリアだ。いつもとは違うツインテールの金髪を揺らしながら、羞恥心とも戦いつつ皆の役に立とうとあえて先陣を切ったのだ。そんな彼女の健気さが観衆にも届いたのか、一瞬遅れて大歓声が響き渡る。その大き過ぎる歓声に驚きつつも、場の空気を何とかこちらに向けさせる事に成功

した事でほっとしつつ、フィーリアは振り返って三人に微笑む。
「続きまして、サブボーカルを担当します眼帯がトレードマークの東方大陸出身の天上天下唯我独尊自分絶対主義の申し子、《最終兵器》のサクラ様ですッ」
　フィーリアの見事（？）なアドリブでの紹介に観衆の視線は一斉にサクラに注がれる。そんな皆の視線に対し、サクラは無表情のままその場で一礼する。
「……どうも皆様初めまして。サブボーカルのサクラです。今回は《ラブプリンセスの最初で最後の一日限りの大ライブ、フィーリアのぽろりもあるよ》に来ていただき、真にありがとうございます」
「ないですよッ！　何で私がぽろりをする必要があるんですかッ!?」
「……そうね。申し訳ありません、タイトルに虚偽がありました」
「当然です」
「……零れるほどフィーリアはありません」
「あなたには一番言われたくないですッ！」
　いきなり見事な漫才（結局はいつもの会話の延長線）で会場は一気に笑いに包まれる。会場の空気がさらにこっちに引き寄せられる。策士サクラの見事な策略だ。
「……えっと、続きましてもう一人のサブボーカルをご紹介します。戦場に咲く一輪の花、騎士姫とはまさに彼女の事を言うクールドジなラブプリンセスのリーダーッ！　《天然巨乳》のシルフィード様ッ！」
「……フィーリア、一つ気づいたのだが、君の紹介文には悪意を感じるのは気のせいだろうか？」
「き、気のせいですよ。日頃の鬱憤をこの場を借りて全世界に流出しようなんてこれっぽっちも思っていませんよ？」
「……君とは一度ゆっくりと話をした方がいいな」
　すっかりフィーリアのテンポで進む事に前途多難だとため息を零しつつも、そこで深呼吸して自分を見詰めている観衆に向かって恭しく一礼する。
「ラブプリンセスのリーダーを務めるシルフィードだ。皆の者、今宵は我らの歌で日頃の疲れをどうか癒してほしい」

フィーリアの見事な勇ましき言葉に会場の歓声がはち切れんばかりに轟く。それこそこれまでで一番なんじゃないかというくらいの歓声量だ。その人気に軽く嫉妬する二人。
「ちなみに今回のメンバーで一番ぽろりの可能性があるのはシルフィード様ですよね」
「……ラブプリンセスの乳担当」
「君達はいい加減そのネタから離れないかッ！」
今度はトリオでの漫才（結局これもいつもの会話の延長線）に会場は大爆笑。歌って踊れるだけではなく漫才もできるある意味万能なユニットかもしれない。
すっかり最初から暴走している三人にため息し、今までずっと沈黙を続けていたクリュウがようやく口を開く。
「ど、どうも。フィーリアと一緒にメインボーカルを担当します、えっと……《四面楚歌》のクリムです」
「……クリム様、四面楚歌ってどういう意味ですか？」
フィーリアの問いは愚問だろう。実際会場の観衆はクリュウの四文字チョイスに共感しているのかうんうんとうなずいている。会場の皆も、この中で一番まともそうなのがクリュウだというのは見事に見抜いているようだ。
「えっと、歌も踊りも素人なので、皆さんを楽しませられるかわかりませんが、全力でがんばらせていただきます。どうか、最後までよろしくお願いしまちゅッ」
――最後の最後でお約束とも言うべき見事な噛みっぷり。クリュウは顔を真っ赤にしてあわあわと狼狽を始める。その純真無垢で初々しい反応に会場の歓声が一気に高まる。観衆の声で空気が震えているかのような、ものすごい歓声だ。間違いなく、今までで一番の大きさだ。
偶然とはいえ、見事に観衆の心を掴んだクリュウ。その絶妙な天然さとかわいさを近距離から見ていた三人の心が見事に撃ち抜かれていたのは内緒だ。
何とか観衆の心を掴んだラブプラスの四人。前置きはこれくらい

にして、いよいよ歌う時が来た。
「それでは皆さん、最後まで楽しんでくださいねッ！」
フィーリアの掛け声を合図に四人それぞれの配置に移動。そしてステージ裏の音楽隊の演奏が始まると、会場のボルテージが一気に急上昇する。巫女の歌というだけでも盛り上がるのに、今年の巫女は例年一人いるかいないかというレベルの美少女が四人も（クリュウは美少女ではないが）揃っているのだからその興奮も例年以上の盛り上がりを見せる。
そしてステージ中央、観客から見て右手にフィーリア、左手にクリュウというメインボーカル二人が立ち、その斜め後方に右をサクラ、左をシルフィードというサブボーカルが並ぶ。そして、歌が始まる。
クリュウとフィーリアの可憐な声に、会場はさらに盛り上がる。歌う二人に代わり、後方の二人が踊って支援。入れ替わり、今度はサクラとシルフィードが前に出てそれぞれのソロパートを歌い、その間クリュウとフィーリアが可憐なダンスを披露。そしてサビの部分ではソプラノを担当するクリュウとフィーリアの声、アルトを担当するサクラとシルフィードの声が重なり、見事なハーモニーとなる。その完成度の高さと踊りながら歌う彼女達（一人男だが）の姿に会場のボルテージはマックス。
クリュウ達はそんな観衆の声に応えるよう、そしてその観衆の声に負けないようさらに張り切って歌い、踊る。スカートが翻り、白い肌が煌めき、笑顔が飛び散り、髪が揺れ、マントがはためく。
瓦礫の街と化したヴィルマの中心で、今年も人々の熱狂の声と巫女の歌声が響きわたる。
――後に、この四人の美少女による歴代最高峰とも言われるユニット、ラブプリンセスは伝説の巫女として語り継がれる事となる。ちなみに、四人の中で最も人気を獲得したのは純真無垢で天真爛漫な笑顔を振りまき、前置きのあいさつで噛み、さらには歌の途中で転ぶというアクシデントをしつつもめげずに最後まで可憐に歌って踊り続けたクリムという少女だったという。

第１１７話　茫然自失　次元が違い過ぎる猛者達

ライブを見事にやり終え、四人は自分達の天幕（テント）へと戻った。天幕(テント)に入ると同時にすぐに椅子に腰掛ける。四人とも、相当の疲労を感じている。だが、不思議と嫌な疲労感じではない。むしろ清々しいくらいだ。

「ふぅ、何とか終わったな……成功、でいいんだよな？」

まず最初に口火を開いたのはやれやれとばかりに椅子に腰掛けたシルフィード。疲れてはいるが、その表情は明るい。

「もちろんです。大成功でしたよ」

シルフィードの問いかけに対し笑顔で言うのはフィーリア。彼女も顔に疲れが見えるが、表情は明るい。

「サラちゃんのお母様も絶賛してくださいましたし、観客の反応も上々でしたから」

「そうだな。恥ずかしかったが、まぁこれも珍しい経験をしたと思えば良いか」

そう言ってシルフィードは凝った肩を軽く揉み、ポニーテールに結っている紐を解き、縛っていた髪を解放する。さらりと流れる髪を掻きあげ、今度は反対側の肩を揉む。慣れない事をして相当疲れているらしい。

一方、椅子に座って腕を組みながら目を瞑って沈黙を続けるのはサクラ。ライブではチーム一の身軽さからの一番動き回っていただけあって疲れたのだろう。よく見るとスゥスゥと小さな寝息を立てている。そんな珍しいサクラのかわいらしい姿に、フィーリアはそっと微笑む。

「疲れたのだろうな。おいサクラ、寝るんだったら布団を用意してやるからもう少し待ってろ」

「……眠い」

シルフィードが肩を揺らすと、サクラはそうつぶやくと共に眠そうにしょぼしょぼの目を手の甲で擦る。しかしすぐに目がゆっくりと閉じられ、また小さな寝息を立て始める。

「あ、サクラ様まだ寝ないでくださいッ！　クリュウ様、サクラ様の布団の準備を手伝ってください」
「あ、うん」
　水を一杯飲んで一息入れていたクリュウはフィーリアの言葉にコップを置いて畳んである布団を敷く。
「準備できたよ」
「ありがとうございます。ほらサクラ様、布団の準備ができましたよ。寝るんでしたらそこで寝てください」
「……クリュウの腕枕」
「却下ですッ」
　油断も隙もないサクラに牽制しつつ、フィーリアは眠気でフラフラのサクラを布団に寝かせる。本当に眠かったのだろう、横になった途端サクラは眠ってしまった。
　小さな寝息を立てて眠るサクラに、フィーリアは微笑む。
「本当にお疲れでしたんですね」
　かわいらしい寝顔で眠るサクラの姿を見詰めながら嬉しそうに言うフィーリアの言葉に、シルフィードも「そうだな」と微笑みながら同意し、そっと眠っているサクラに毛布を掛ける。
「あぁ、すまないがフィーリア。コーヒーを頼めるか？」
「あ、はい。ブラックですよね」
「すまんな」
「いいえ。あ、クリュウ様はハチミツ入りのホットミルクでよろしいですか？」
「あ、うん。ありがと」
　早速フィーリアは簡易キッチンで飲み物の用意を始める。そんな彼女の背を見送ってから、クリュウとシルフィードはそれぞれ席に着いた。
「それにしても、君の人気はすさまじかったな。すごいぞ」
「……それ、誉められても嬉しくないや」
「そ、そうだな。すまん……」
　あははと乾いた笑い声を上げるクリュウ。若干、今回の女装がト

ラウマになっているようだ。予想はできたのに見事に地雷を踏んだ形のシルフィード。
「だが、皆楽しんでくれたようだし、やって良かったな」
「そうだね。恥ずかしい想いをしただけの事はあったよ」
「確かに。私もあんな赤面ものの衣装は二度とごめんだな」
「そっかな？　すごく似合ってたと思うけど」
　クリュウの何気ない感想に対し、シルフィードがピタリと動きを止める。その頬はハッキリと赤く染まっている。
「な、何をバカな事を。私はあんな格好は恥を晒すだけだぞ」
「そんな事ないよ。すごくかわいかったよ？」
「なッ!?　ば、バカッ！　変な事を言うなッ！」
「え、えぇッ!?　何で怒ってるの？」
　突然怒り出したシルフィードに困惑して首を傾げるクリュウ。彼は気づいていないが、怒鳴って背を向けたシルフィードの顔は真っ赤になっていた。唇の端も意識とは関係なく勝手に緩んでしまっている――要するに滅茶苦茶嬉しいのだ。
「か、かわいいだと……ッ!?　こ、この私が、か、かわ……かわわ……ッ!?」
　――ものすごい動揺するほど嬉しいのだ。
　背を向けたまま意味不明な言葉を連射するシルフィードの背を見詰めながら、クリュウは首を傾げ続ける。そんな彼の前にコトンと湯気の立ち上るホットミルクの入ったマグカップが置かれる。
「クリュウ様、あの、私の姿はど、どうでしたか？」
　指を胸の前でツンツンさせながら顔を真っ赤にして小声でクリュウに問うフィーリア。その瞳は真剣にクリュウを見詰めている。そんな彼女の問いに対し、クリュウは満面の笑みを浮かべながら答える。
「もちろん、フィーリアもすっごくかわいかったよ」
「ふえッ!?　え、えへへ……そうですかぁ？」
　クリュウからの嬉し過ぎる誉め言葉に、フィーリアは頬を赤らめながら喜ぶ。頬がすっかり緩んでしまってだらしない笑顔を浮かべる。

そんなフィーリアの反応を見て、シルフィードは小さく苦笑を浮かべた。
「フィーリア、余韻に浸っている所すまないが、私のコーヒーは？」
「あ、そうでしたッ！　す、すみませんすぐ用意しますッ！」
　我に返って慌ててシルフィードのコーヒーを用意を始めるフィーリア。彼女やクリュウは気づいていないが、もちろんこれはシルフィードの見事なフォローであった。これ以上想い人の前でだらしない笑顔を浮かべるのはマズイという彼女の的確な判断だ。
　あわあわとコーヒーを準備するフィーリアの背中に苦笑を浮かべた後、シルフィードは早速ハチミツ入りのホットミルクを飲んでいるクリュウの方へ向き直る。その表情はまるで狩りの前の作戦会議の時のように真剣だ。
「クリュウ、これ以上のヴィルマ滞在は私としては避けたいのだが、どうだ？」
　突然のシルフィードのヴィルマからの離脱提案に対し、クリュウはさして驚かずに静かにホットミルクを飲む。まるでその問いは予想通りというような余裕だ。
「奇遇だね。僕もそろそろ、と思ってたんだ。これ以上ここに滞在してても別れが辛くなるだけだし、僕らのできる事はもうない。それに、エレナやリリアをこれ以上待たせておくのは危険だしね」
　最後の部分は冗談混じりだが、それも確かな理由の一つであった。自分達は村所属のハンターだ。その村をこれ以上放置している訳にはいかない。以前とは違い、村にはツバメと彼のオトモアイルーのオリガミが常駐しているので多少は長居もできるが、それもそろそろ限界だ。ここから村に戻るのだって今日明日のレベルではない。ドンドルマでライザに報告する事もある。街の郊外に停泊しているアルトリアの飛行艦ならそれこそ一日とかでも着くかもしれないが、こちらは竜車と船だ。そんな簡単に着くほど、辺境の田舎村であるイージス村までの道のりは短くはない。
「そうですね。この街にはフォルクス様やシャネル様を始めとしてギルドナイトも複数駐在していると聞きます。そのどれもが私達より

も高位の方々ですので、有事の際に私達の出番なんてないでしょうし」
　そう言って会話に入ってきたのはフィーリア。シルフィードの前にコーヒーを置き、クリュウの隣の席に腰掛けて会議に加わる。
「そ、そんなに強い人達なの？」
　フィーリアの発言にクリュウは純粋に戸惑った。彼としては自分のチームの女子陣は全員自分よりもハンターとしては優秀だし実力もある。目の前でフィーリアの正確さと驚異の連射力、サクラの俊足と鋭さ、シルフィードの類稀なる指揮力と豪快だが繊細な一撃を目にしているクリュウからしてみれば、彼女達の実力は十分過ぎるように見える。それを上回るようなハンターがこの街には複数人いるとは、すぐには信じられないのだ。そんな彼の疑問に対し、シルフィードは一つ首肯する。
「詳しくは知らないが、彼らの武具を見る限りまず間違いないな。君はあまりG級や上位ハンターとの面識がないから私程度が最強クラスと思っているかもしれないが、私よりも実力のあるハンターなんて巨万（ごまん）といるぞ」
「ご、五万人もッ!?」
「いや、実際に五万人いるという訳ではなくてな。そもそも全ハンターの人口を足しても五万人もいないぞ」
　天然なボケを炸裂させるクリュウに冷静にツッコミを入れつつ、シルフィードは彼の隣にいるフィーリアに視線を向ける。
「フィーリアの姉もその一人だな」
「は、はい。姉は上位ハンターとして今も各地で活躍されています。風の噂では、近くG級へと昇格されるとの事です」
「クリュウの両親も、君からの情報によると十分な実力者、それこそキングクラスやエンペラークラスといったG級ハンターの中でも高位の位にいたのだろう？　あの忌々しいソードラントの面々もまたその一人だ。それに比べれば私達はまだまだ未熟過ぎる」
　それは決して謙遜ではなく、彼女自身が心から思っている事だ。彼女は今まで自分よりも実力のあるハンターと何人も接して来た。ど

んなにがんばっても、どんなに修行を積んでも、埋められない差を彼女は痛いほど経験してきた――性格破綻者の集まりとはいえ、実力こそは最強クラスと称されるソードラントの面々と接してきたからこそわかる、彼女の葛藤。

「……あのさ、こんな時に訊く事じゃないとは思うけど……どうして、シルフィはソードラントなんかにいたの？」

シルフィードが発した《忌々しい》という単語にクリュウは前々から気になっていたその質問を投げかけてみた。剣聖ソードラントと言えば実力こそ最強クラスだが、性格破綻者で結成されたチーム。狩りを楽しむ為にわざと市街戦を行ったり、民間人を囮にしたりと悪い噂が絶えない連中だ。

そんなチームに、なぜシルフィードが属していたのか。前に一度訊いた事があったが、その時は彼女は何も話さなかった。一体どうして、彼女はソードラントに加わっていたのか。

クリュウの問いに対し、シルフィードは無言になった。不気味な沈黙が数秒続いた後、シルフィードは小さくため息を零す。

「……昔、力が全てだと信じて突っ走っていた頃にな。彼らの力に憧れていたのさ」

それだけを言うと、シルフィードはそれ以上語る事はなかった。今はそれだけしか言う気がないのだ。彼女にとってソードラント時代の自分は、今の自分とはまるで違う。家族を殺したモンスターという存在全てを憎み、虐殺する為だけに剣を振るっていた殺戮者。そんな頃の自分を、今の彼らに話すのは躊躇いはあるし、できれば一生知ってほしくはない。そんな想いから、彼女は昔の事はあまり多くは語らないのだ。

シルフィードの短い説明に対し、クリュウはもちろん納得した訳ではないが、「そっか……」とつぶやいて話題を終える。人には誰にも知られたくはない過去がある。それを無理に引き出すのは関係の破綻にも繋がってしまうからこそ、彼は深くは問わない。そんな彼の配慮に感謝しつつ、シルフィードは一言だけ彼に言う。

「君は優しい心を持っている。その心を決して憎しみに染めず、その

ままの君でいてほしい。私のように、力に溺れるな」
「うん。わかった、約束する」
そもそもクリュウはそんな気は毛頭ない。シルフィードと違い、クリュウは父と母、それぞれの殺したモンスターがどんな奴なのかを知らないから、例え復讐心があってもそれをどこにぶつければいいのかもわからない。
だが、もしも両親を殺したモンスターの正体がわかったら、彼はきっと復讐に走るだろう――純粋過ぎる心は、道を誤ればいとも簡単に黒に染まる。クリュウは期待と共にそういう危険性も持ち合わせている子だ。
だからこそ、シルフィードはそれを阻止し、止めるのが自分の役目だと思っている。実の弟は守れなかったが、せめて弟のように想っているクリュウだけは守ってみせる。そんな強い想いが彼女の中には存在した――弟のように。その部分に引っかかりを感じながら。
そんな二人のやり取りを見守るフィーリアの心境は複雑だ。クリュウとサクラはモンスターによって両親を殺されている。シルフィードはそれに加えてかわいがっていた弟も殺された。皆、ハンターになるのはある意味当然とも言うべき道を歩いてきている。それに対し、自分はどうだろうか？
両親は健在で、それもとても裕福な家庭だ。体の弱い心優しい本好きな長女は博学で様々な分野でその知識を遺憾なく発揮し、現在では古龍観測所の研究員の一人として働いている。昔から腕っ節が強く豪快で男勝りな次女はG級ハンターとして今もどこかで自分では届かないような武勇伝を刻んでいるだろう。
――三人と違い、自分は何も失ってはいない。むしろとても恵まれているのだ。その差が、フィーリアが三人に対して強く物事を言い出せない最大の理由であり障害となっている。だから、フィーリアはあまり自分の家族の事を話そうとはしないのだ。
そんなフィーリアの心境とは関係なく、クリュウとシルフィードの会話にひと段落がついた。シルフィードはブラックコーヒーを飲み干すと、「ちょっと夜風に当たって来る」と言って天幕（テント）を出

て行った。
　天幕（テント）の中には眠っているサクラとクリュウ、そしてフィーリアだけが残される。
「あ、クリュウ様。ホットミルク、おかわりされますか？」
「え？　あ、うん。ありがと」
　クリュウと二人っきり（眠っているサクラはカウントしない）という状況をようやく理解したフィーリアは若干頬を赤らめながら、クリュウに接する。同じ状況でもクリュウは全く意識してないが。この辺が三人の女子陣及び村の女子陣、そしてクリュウの以前の学友の女子陣の共通意見、《最強の鈍感》に通ずる。
　クリュウの新しいホットミルクを淹れたフィーリアは何事かを考え込むクリュウの凛々しい姿にしばし見とれていたが、ふとその姿に思い出す。
「そういえばクリュウ様、以前アルトリアの総軍師様と話されていた事ですが。あの、失われた王紋とか何とか……結局、あれは一体何だったんですか？」
　フィーリアが問うたのは以前彼がアルトリアの総軍師、ジェイドと話していた話の事だ。あの時は訊けるような雰囲気ではなかったが、今だったら何か教えてもらえるかもと期待したのだ。だが、クリュウは静かに首を横に振る。
「何でもないよ。ちょっと引っかかりを感じただけだから」
「ですから、その引っかかりというのは一体……」
「――ごめんフィーリア。僕もまだその引っかかりに自信が持てないんだ。だから、何も答えられない」
　クリュウの返答は、心優しい彼なりの遠回しでの拒否であった。クリュウが話したくないというのならそれを無理に問いただす訳にもいかず、フィーリアは納得はしてはいなかったが「わかりました」と引く。
「でも、いつか話してくださいね。私、クリュウ様のお力になりたんです」
　真剣にそう言うと、クリュウは「ありがと、フィーリア」と小さく

はにかんだ。
翌朝、ヴィルマを出発すると決めた四人は、天幕（テント）を提供してくれたエミルや色々と（主にサクラが）迷惑を掛けたジンに別れを言っておこうとこの街に最初に訪れた野営陣地へと向かった。その途中、クリュウはジンに会わなければいけないという事で若干不機嫌になっているサクラに彼に対して謝るよう説得するも、こればっかりはサクラは決して首を縦には振らなかった。この面子の中で意外かもしれないが一番プライド高いサクラにとって、自分に屈辱を与えた相手に頭を下げるのは自分に対する最大の侮辱となるのでこればっかりはクリュウの頼みとはいえ絶対に従わなかった。
説得に失敗し、どうしたもんかと頬を掻くクリュウに隣を歩くフィーリアが「大丈夫ですよ。フォルクス様はそのような事でいちいち気にされるような方ではないとお姉様も言っていましたし。ただ、シャネル様には黙っておいた方が良さそうですね」と声を掛ける。クリュウはとりあえず（主に最後の部分に対して）うなずいた。
そんな状態で四人は野営陣地へと到着した。クリュウは別に何の警戒心もないが、他の面子は違う。この中には自分達とは根本が違う存在、ギルドナイトがいる。別にギルドナイトから直接何かされたという経験はないが、ハンターである以上警戒するのは当然だし、不快感を持つのも仕方がない。ただ、クリュウはそういう部分が欠落しているのだが。
意を決してギルドの旗がはためいている天幕（テント）、野営本部へと入る――寸前で、向こうから入口の布が開けられた。現れたのはギルドナイトの少女であった。きれいな黒髪を流した、青色のギルドナイトの制服を着た少女。驚く一行に対し、少女はきれいな笑顔を浮かべる。
「何かご用ですか？」
「あッ……」
開けようと思っていた所で向こうから開けられた事で掴むべき布を失った手を宙に浮かべたまま呆然とするクリュウ。そんな彼に対し、少女は笑顔を浮かべ続ける。

「貴女方が二次部隊の護衛をして下さったハンターさんですよね？何かご用でしたら私が伺いますが？」
少女の問い掛けに対し、クリュウは「あ、あの……ッ」と声を絞り出す。刹那、彼の背後でフィーリアとシルフィードが身構える。現れた見知らぬギルドナイトに対し、完全に警戒心を露にしていた。クリュウの隣に立つサクラは無言で相手を睨み殺すかのような眼光で睨みつけている。そんな三人の反応に対し、少女は小さく苦笑を浮かべる。
すでに臨戦態勢の三人に対し、クリュウは一瞥をくれてそれを制するとわざわざ出迎えてくれた少女に対し笑みを浮かべながら声を掛ける。
「ええっとですね、中にエミルさんいらっしゃいますか？」
クリュウの問い掛けに対し、少女は「え、ええっとですねぇ……」とつぶやきながら何とも言えない複雑な表情を浮かべながら一度だけ背後を振り返る。
「……いますけど、今はちょっと――」
『あぁもぉえぇやんシュリン！　どーせろくな書類なんてあらへんわ！　止めよぉや！　うちジンとシィとこ行ってくる！』
『そう言ってお前は何日この書類の山から逃げて来た!?』
『お、お二人共落ち着いて下さいませぇぇ！』
「――……こんな状態ですけど大丈夫ですか？」
天幕（テント）の中から響く喧騒。どうやら中にエミルはいるようだが、取り込み中のようだ。それも特大の。どうやら真面目な上司だか同僚だかの男に対し、エミルが駄々を捏ねているようだ。
普通のハンター達からは畏怖の対象とされているギルドナイトが駄々を捏ねて騒いでいるという喧騒に、クリュウ達は状況を理解できずに戸惑う。そんな彼らの反応を見て少女は小さくため息を零すと、何とも言えない複雑な笑みを浮かべてこちらに向き直る。
「……すみません、中は今混沌と――」
『ヨ～ナァ～ッ！　お客さんやろ～！　案内して来ぃ！』
「――……どうぞ中へ」

今度は大きなため息を零してから幕を開けて少女はクリュウ達を中に案内する。とりあえず、あれだけ騒いでおきながら外の会話をしっかり聞いているエミルのイャンクック並みの聴力に驚きつつ、クリュウ達は少女に案内されて天幕（テント）の中に入る。

中に入ると、ギルドの腕章を着けた人間が書類の束を持ったり木箱を持ったりしながら縦横無尽に動き回っていた。辺りには書類の山が築かれ、各所に置いてあるテーブルもテーブル本来の台の部分が見えないほどに書類が山積みされている。そして、そんな書類の山々の中央に、不敵な笑みを浮かべたエミルがどっかりと椅子に腰掛けていた。まるでここは自分の城と言いたげな、ある意味王者の貫禄だ。

ちなみに、きっとテーブルの隅っこで血走った目で書類を睨みながら筆を動かして仕事に徹している男がさっきエミルと言い争っていた上司なのだろう。女子（エミル）の理不尽さに振り回される男の疲労が見える背中に、ちょっとだけ親近感が湧いたクリュウであった。

自らの城に入って来た客人（クリュウ）達を見詰め、エミルはニッと笑を見せる。

「久しぃなぁ。あんたら意外に何も面倒事起こさんかってくれたさかい、うちらが出しゃばらんで楽やったで。まぁ、ジンに喧嘩売りよったけどな、あんたは」

そう言ってエミルは苦笑しながらサクラの方を見る。それに対しサクラは瞳をスッと鋭くしてギロリとエミルを睨み返す。それまでの警戒という構えから、一気に敵意へと変貌する。

「……貴様、なぜ知っている？」

明確な敵意とふざけた事をぬかしたら斬り殺すと言いたげな鋭い殺意を纏いながら、サクラはエミルに問う。サクラのいつにない本気の危なさにクリュウ達は下手に手を出せずに呆然とするばかり。周りで動き回っていた人達もサクラの絶対零度の殺意にまるで凍りついてしまったかのように足を止めている。

エミルが言ったのは先日のサクラが八つ当たりでジンに襲い掛かった事だ。しかし、あそこに彼女の姿はなかったはず、だとしたらジンが話したのかもしれないが、彼の性格を見る限りそういう事を簡

単に人に言いふらすような人には見えない。
だが、エミルは誰もが恐れるサクラの本気の威圧に対してもあっけらかんと笑い飛ばす。まるで効いていないというか、眼中にもないと言いたげな余裕だ。
「うちには夜間パトロール言うかったるい業務があるさかいな。おもろかったから止めへんかったわ」
笑いながらエミルはそう言った。つまり、こっそり隠れて見ていたという事だ。そんなエミルの衝撃発言に対しその場にいたクリュウは驚きを隠せない。何しろ、そんな気配はまるで感じ無かったからだ。それにいくら頭に血が登っていたとはいえあのサクラの驚異的な気配探知能力の探知網にも引っかからないなど、それこそ人間業ではない。
噂ではギルドナイトの仕事には要人の暗殺も含まれると言う。つまり、本当に気配を完全に消す事も序の口と言う事なのだろう。だが、実際に体験してみてその完成度の高さには驚かされると同時に恐怖すら覚える。
一方、あっけらかんと自分の探知能力にも引っかからずにただ見ていただけというエミルの発言に対し、サクラは明らかに敵意、殺意、不快感、嫌悪感のゲージが一気に上昇する。それに合わせて隻眼もまた冷徹な鋭さに不気味に輝く。
横に立つクリュウはそんなサクラの纏うブリザードのような殺気に対し、本気で恐怖していた。ある意味、サクラの本気の怒りにあまり触れた事のない彼にとって、今のサクラは前例にないほどに怒り狂っているように見える。
彼女を良く知るからわかるが、エミルのような余裕たっぷりな腹の底がわからない人間が、サクラがこの世で一番嫌う存在なのだ。特に、負けず嫌いなサクラにとっては自分よりも実力や技術が上な者というだけでも嫌悪の対象になる。エミルはまさに、サクラにとっては嫌悪の対象でしかない。
サクラの本気の怒りの眼光に対し、エミルは相変わらず笑顔を花咲かせていおる。まさにどこ吹く風と言いたげな余裕っぷりだ。

「……安心しい、見逃したるで。どうせあいつに勝てる《人間》なんておらへん、何回でも売りに行きぃ。ついでに《今のまま》あんたじゃ後千年鍛練し続けてもあいつに一太刀も当てれへんし？」
　まるでわざと言っているのかもと思わせるほど――いや、確実にわざと言っているのだろう。サクラのプライドをズタボロに引き裂くような発言を笑いながらぶっ放すエミル。この発言にはさすがのクリュウも少しカチンと来る。確かに彼女の実力はサクラよりも上だ。それは確実だし納得もできる。だが、だからと言ってそんな言い方はないだろう。クリュウから見れば、まるで自分の実力を誇示して下の人間を嘲笑っているようにしか見えない。
　仲間を侮辱される事、それはクリュウにとっては最も嫌う発言だ。すぐさま言い返そうと半歩足を前に出した直後、目の前のエミルが忽然と姿を消した。驚いた瞬間、
「こんなんでもうち、ギルドナイトやねんで？　流石にジン以外の相手やったら取り締まらなな～」
「……ッ!?」
　振り返ると、いつの間にかエミルはサクラの目の前に立って彼女が抜こうとしていた鬼神斬破刀の柄を上から押さえつけていた。まるで一瞬で移動したみたいな彼女の行動に対し、クリュウ達は驚愕で固まる。
「……ほれ、《うち程度》の歩法に騙されるんやろ？　っていうかうちギルドナイト、そのリアクションおかしない？」
「貴様……！」
　サクラはエミルの手を振り払うように彼女から距離を置くと、それこそ化物（モンスター）を相手にするかのように臨戦態勢になる。瞳はもはや刃物と形容にするのが幼稚な程に鋭く細まり、怒りで頭に血が上っているのだろう。先程までの絶対零度の怒りはまるで火山の溶岩のような燃え盛る怒りへと変貌している。
　サクラの機嫌が猛烈な勢いで悪くなっているのを感じ恐怖するクリュウ達とは違い、エミルは相変わらずあっけらかんとしている。
「はぁ……師匠譲りでうちら《ギルドナイト》を怖がらんねんな、アン

タ。しかも師匠よりも噛み付いてきよる。危なー」
「……エミル、遊びは終われ。《速さ》に関してはお前、ギルドナイト最速だろ？　史上唯一ジンとシィの動きの『一部』を体得したのは灰狼だが、二人の《歩法》を体得したのは灰狼以外にお前がいるんだからな」
「体得なんてしてへん。ゾルフさんのは《飛跳（ひちょう）》、うちのは《虚影（きょえい）》。あいつらの歩法の『一部』を使っとるだけや。しかも初歩やで初歩」
　書類仕事をしていた上司の男の発言に対しやれやれと頭を振ってため息するエミル。何というか、常にのらりくらりしていて掴み所がない人だ。
「言（ゆ）うとくけど、外部から来たハンターん中やったらあんたらが《最弱》や。シルフィードさんかてヨナと同程度やろな。《剣聖》はそらまぁ強いけど、うち苦手やし、ええイメージ無いわ。真の《強さ》は《力》と《心》。あの剣聖共（へんたいども）がその条件満たしとるとうちは思えんし？　せやからアンタ、抜けたんやろ？」
　ニヤリと笑いながら自身を見詰めてくるエミルに対し、シルフィードは眉をしかめる。あまり過去の事を言われたくはないシルフィードにとって、彼女の発言はお節介以外の何ものでもない。しかも事実とはいえ《最弱》扱い。自分はともかく仲間を侮辱される事は不快感でしかない。正直、あまり率先して近づきたくはない相手だ――まぁ、剣聖を変態扱いする点については同意はするが。
「世界は広いで？　自分に自信を持つんはええ事やけど、満足はしたアカン。もっと上の領域に行きたいんならレベル上げてかなアカンなぁ。も・ち・ろ・ん、うちもザコいから自分にも言えるけど」
　刹那、エミルの姿が輪郭を失いまるで霞のように霧散した。そして、ガタンッという何かが揺れる音が響き、振り向くと先程座っていた椅子にエミルがどっかりと腰を下ろして座っていた。その光景に四人は改めて彼女の異常さに息を呑む。
　呆然とする四人に向かって、エミルはニヤリと笑いながら人差し指で天井を指差した。まるで、早く上に来いと言いたげな無言のジェス

チャーだ。
挑発的な彼女のジェスチャーに対し、ムッとするのはクリュウ。何というか、今まで色々な人と接して来たがエミルはその中でもズバ抜けて《嫌な人》というジャンルに入る。あまり人を嫌う事のないクリュウの人物評価の中で、それはある意味稀有な存在だ。
明らかに不機嫌そうな表情になるクリュウの横ではフィーリアもまた同じような感情を抱いていた。ただでさえギルドナイトというだけで評価は低いのに、この挑発的な態度。十分嫌うに値する存在だ。
サクラは当然もはや彼女に対しては嫌悪感や敵意しか持っていないし、シルフィードも必要最低限の関わり以外は御免という状態。正直、もうここを退散したい気分でいっぱいだった。
そんな四人の内心を知ってか知らずか、エミルは手をヒラヒラと返す。
「アンタらには期待しとぉよ。うちもライザさんも。せやから焦らず、じっくり己磨きぃ。……んで、うちに何用や？」
今更彼女に期待されても嬉しくもなんともないと思いつつも、ここに来た目的がある以上まだ彼女に問いたい事はある。皆を代表するようにして一歩前に出たのはクリュウ。先程《嫌な人》と評価した相手と話すのはあまり気は進まないが、ここは腹を括るしかない。
「あの……僕達ジンさんに会いたくて、ここに来たんです」
「ふぅん……謝罪の言葉なんてあいつら受け取らへんで？」
エミルは笑いながらそう返す。おそらくはサクラの件についての謝罪と誤解したらしい。まぁ、一応はそれもあるが、クリュウ達の目的は別にある。
一方、クリュウのセリフに対しギルドナイトの少女が首を傾げた。
「……《僕》？」
「なんや、どないしたヨナ？」
「え？　あ、いえ……何でもありません」
……とりあえず、いや絶対ものすごく失礼な勘違いをされたような気がするが、もう慣れたのでここはスルーしておく。

「いえ……僕達もうヴィルマから出るので、最後に挨拶しとこうと」
「……ふぅん。まぁえぇや、連れてったる」
見事な安請け合い。これにはさすがの彼女の上司の男も悲鳴のような声を上げる。
「!?　雑務（しごと）は!?　せめてこの場にはいろ！」
「気にすんなや、老けてまうで？」
そんな上司の言葉もどこ吹く風。エミルは気にした様子もなく再び霞のように消える。上司が慌てて振り返った時にはすでにエミルはクリュウの背後に移動していた。
「ほな案内したる。早（は）よぉ行くで。うち、アンタら連れて上司（シュリン）から逃げ切れる自信無いさかい」
「うわッ!?」
クリュウは突然エミルに首根っこを掴まれると、グイッと引っ張られる。その途端、ボンッと何かが破裂する音がして一瞬で天幕（テント）の中は白煙に包まれた――狩場で使用する目眩まし道具（アイテム）の一つ、煙玉だ。
「にゃあああぁぁぁッ!?」
「く、クリュウ様ッ!?　ちょ、ちょっと待ってくださいッ！」
「……逃げるなクソ尼ッ！」
「あぁ、すまんが貴殿の部下ちょっと借りるぞ」
クリュウの首根っこを掴みながら走るエミルをフィーリア、サクラ、シルフィードの三人が慌てて追い掛ける。振り返ると、天幕（テント）の隙間からもくもくと白煙が立ち上っている。さながら火事に見えなくもない。煙から逃げるように中にいた人々が咳き込みながら逃げ出すように天幕（テント）から出て来る光景を見ながら、シルフィードは改めて「すまん」と謝っておく。そして、猛烈な勢いで翔けるエミルと彼女に首根っこを掴まれて悲鳴を上げるクリュウを追い掛ける。

第１１８話　新たなる目標を胸に　少年少女達の新たな物語

「あんたら、ライザさんのお気に入りやんな？　ジンとシィはライザさんの紹介で知ったんか？」
「いえ、偶々ギルドのターミナルで話しただけです」
「……そんな浅い付き合いやのに、わざわざ別れの挨拶かいな。律儀やなぁ、尊敬するわ」
　ニカッと笑いながら言うエミルの言葉に若干痛む首を押さえながらクリュウは苦笑する。
　何というか、ものすごい荒っぽい方法で脱出した五人は追手が来ない事を確認してからこうしてまだ瓦礫が産卵している街道を歩いている。その途中でエミルは思い出したように尋ねたのだ。
　まぁ、さすがの彼女も知らないだろうがそのターミナルでもサクラはジンに斬り掛かっているという経緯があったりする。これ以上ないってくらいに迷惑を掛けている以上あいさつくらいはしておかないと。そんな彼の心境を知って知らずかサクラは相変わらずエミルの背中を睨みつけている。何かあれば懲りずにまた斬り掛かる気満々だ。
「ところで、どうやってジンさん達のいる場所へ？」
「ギルドナイトは仕事上、詮索能力鍛えなアカンねん。あの二人は独特の気配を纏ってるさかい、居場所なんて一瞬な」
　すれ違う住民から掛けられる挨拶に、片手を上げて答えながらエミルが言う。ずいぶんと親しいというか人気があるなぁと変に感心するクリュウ達。ハンターからは毛嫌いにされているギルドナイトも、こういう災害派遣などをされるので一般市民からは比較的好印象を受けているらしい。というか、さりげなくサクラ以上の索敵能力を披露しているエミルに驚くと共に、後ろでサクラがさらに機嫌を悪くするのを感じクリュウはやれやれと苦笑を浮かべる。すると、そんな彼の反応を見てエミルは思い出したようにクリュウに尋ねる。

「あんたらやけに自然体であの二人の事言うけど、もしかして二人の二つ名も称号も知らん？」
　エミルの問いに対し、クリュウは首を傾げる。
「あ、やっぱり有名なハンターなんですか？　凄い高レベルな防具を着ていたので、有名人だとは思ってましたけど。皆は知ってる？」
「……こらアカンわ」
　クリュウの反応に対しエミルは額に手を当ててため息混じりにつぶやき首を振る。そして彼に尋ねられた女子三人をすがるように見詰める。しかし、
「……あんな奴、私は知らない」
「私もだ。会った事があると彼は言っていたが、思い出せなくてな」
　自分とクリュウ以外の事はとことんどうでもいいサクラと、天然ボケの天才シルフィードはそれぞれ首を横に降る。そんな二人の反応にエミルはがっくりと肩を落とした。その時、皆の反応に呆然としていたフィーリアが慌てた様子で口を開いた。
「《千手》のフォルクス様に《月光》のシャネル様ですよ！　姉の知り合いで、特にシャネル様は一ガンナーとしては死ぬ前に一度は会ってみたい存在です！」
「……ッ!?」
「なッ!?」
「せ、千手ッ!?」
　両の拳を控えめな胸の前で握り締め、いつになく興奮したような感じで言うフィーリアの発言に対し、クリュウ達はそれぞれ目を見開いて驚く。その二つ名は、ある意味ハンターの間では有名なものであった。
　一方、自分から言っておいて何だがクリュウの反応を見てちょっとだけ驚くフィーリア。
「珍しくクリュウ様もご存知なんですね」
「たまには僕だって知ってるよ！　養成所の教科書にも載ってたよ!?」
　そこで《たまに》とつく所が、田舎者の悲しき性（さが）か……

「へぇ……あいつら遂に教科書に載ったんか！　そらおもろい！」
　エミルはエミルで違う所で驚くと共に大笑いする。
「……あいつらが」
「そんな大物を忘れるとは、不覚だ……」
　サクラとシルフィードもまた驚きを隠せない。特に面識のないサクラはともかく、実際にどこかで会った事がある（ジン談）シルフィードは驚くと共にそんな有名人を忘れてしまった自分のアホさに軽く嫌気が差した。
「千手って、史上最速最年少でG級ハンターになった伝説のハンターだよね⁉　なんでフィーリアそんな事知ってて普通に接してたの⁉」
「え？　あ、いえ、お二人があまり目立つのが嫌いと仰っていたので」
「ついでに、ゾルフさんに独特の剣術を教えたのもジン、《千手》やで」
　何気なく言ったエミルの言葉にピクリとサクラが反応した。そんなサクラの反応を見てエミルは小さく苦笑する。
「や～っぱ知らんかったなアンタ。アンタの師匠たる『灰狼』のゾルフさんの剣術はなぁ、当時若干九歳の少年から教わった剣術を独自に改良、と言うより簡略化して発展させたもんなんや。謂わば派生型やな。アンタもその『派生型』の流れは組んどるやろ？　大元はアイツな訳やね」
「……」
　エミルの言葉にサクラは黙ったように無言になる。自分が師と仰いでいた人物のバトルスタイルが子供の動きを真似たものだった事、何よりその子供があの男だという事に少なからずショックを受けているのかもしれない。彼女の内心を探れない為、想像するしかできないが。
　黙ったサクラの反応を見てエミルはいじわるっぽく笑う。そんな笑顔を見て、クリュウは改めてこの人とは気が合わないと少し不機嫌になる。人の苦しむ姿を見て笑えるなんて、どういう神経をしているのか。
　だが、サクラはそんなエミルの挑発的な態度に対していつもと変わらない自分主義を掲げる。

「……そんな事関係無い。私がいつか越えればいいのだから」
「へぇ……んなら楽しみに待っとこか。ゾルフさんの《友》として」
サクラの言葉に対して、エミルはニヤリと唇をつり上げて笑う。そんな挑発的な笑みに対してもサクラは自分を見失う事はなく、真っ向から向かい合う。そんな凛々しい彼女の姿を見て、クリュウは改めてサクラのすごさを見た気がした。
自分が決めた事は決して曲げない。ただそれだけに突き進む。そんな彼女の真っ直ぐさにはいつも救われ、尊敬し、頼りになる――彼女は決して口先だけではないのだ。
「覚悟は結構、するんはタダや……さ、そろそろやな」
そう彼女が言った直後、風に乗って何かが聞こえて来た。
「……歌声と、笛の音、ですか？」
「綺麗な音色と歌声ですね」
「奏でとんがジン、歌っとんがシィや。良かったなぁ、あいつら珍しく機嫌ええで」
「……巫女のあれ、彼女達の方が私達より向いてたんじゃないのか？」
「シルフィード様、それは言わないで下さいよ……」
「あぁ……あの祭か？　うちも押してみたんやけど、断られたわ。ほれ、テントにおったギルドナイトのヨナにシィ、ヴィルマのハンターのリリス言う子と、《朱郭》のティリア言うやり手のハンターをな。ゾルフさんや散った仲間達の為にもどうや、って訊いたらジンが「もう四人の枠埋まってる」って言いよって……皆ルックスは抜群やさかい、イケる思たんやけどなぁ……あんたらがアカンかった訳やないで？」
察するに、知人の女子陣をあのステージに立たせたかったらしい。そういう事なら邪魔をしてしまったようで多少の罪悪感を感じつつも、クリュウとしては《だったらもっと早く立候補してほしかった》という想いの方が強くなってしまっているので若干恨んでみたり。
その間に、風に乗って聴こえていた音色と歌声がピタリと止んだ。
「……あ、止まりましたね」
「気まぐれやさかいな」

未だに若干の余韻に浸っているクリュウ達だったが、そんな彼らに向かって向こうから響いてきた大声がそんなムードをブッ潰す。
「あんなの聞きながら出来るかッ!? 聞き入るだろ!?」
「……誉めてるのか? 貶してるのか? ややこしい発言は止めろ、面倒くさい」
「困ってんだよ!」
待ちの中央広場に堂々と鎮座している慰霊碑。以前までとは違い仮の慰霊台ではなくちゃんとした慰霊碑が置かれている。献花台には今もなお多くの花束が置かれている。それに隣接するように設置されている天幕（テント）の奥から誰かの怒気に混じった声と、果てしなく冷静なジンの声が飛んで来た。
キョトンとする四人に対し、エミルはやれやれとばかりに首を横に振りながらそんな四人を引き連れてその天幕（テント）の裏側へと回る。そこには横笛を持ったジンと、その隣でシィが瓦礫に座っていた。更にはその手前、ちょうどエミル達に背中を向ける形で両の腕が無く、風に袖をユラユラと遊ばしている男性が一人、セミロングの茶髪をシュシュにより高い位置で纏めた女性が一人。その奥では片方の腕に包帯をグルグルに巻かれながらも、一応形だけ片手腕立ての格好をしている青年と、双剣を構えた少女が一人。
いきなり見知らぬ人物が大勢現れた事に軽く驚くクリュウ達。彼らは知らないが、今回の災害で炎王龍テオ・テスカトルと死闘を繰り広げて辛うじて生き残ったヴィルマのハンター達だ。
「一々文句を言うなマイルズ、リリスちゃんはちゃんと素振りしてたぞ? 太刀筋は乱れまくってたが……それにこの程度で集中力切らすな馬鹿。女湯のど真ん中でも集中して剣振れるぐらいにならないとな」
「例えが変だろ!? バカかお前は!?」
なぜこんな所で腕立てをしているのか不思議だが、その姿勢のままジンに怒鳴る青年。一方そんな彼の怒号に対しジンはまるで気にした様子もなくさらりと受け流し、それがさらに青年のイライラを増幅させる。そんな彼に向かってやれやれとばかりに軽くため息しつつ

エミルが口を挟む。
「何言うてもムダやでマイルズ。それにアンタ、回復に努めろ言うとるやろ？　鍛える前に早よ骨くっ付けぇ」
「うぇ……エミルさん……」
「おーおー、生意気な反応しよるなぁ。うちに隠れて筋トレか？　千年早いわ、回復に努めろ言うとるやろこの戯け」
　エミルに怒られ、マイルズと呼ばれた青年はバツの悪そうな顔を浮かべる。そんなマイルズのあからさまな態度にエミルは今にもブチギレそうなのを寸前で堪えているかのように青筋を立てている。
「リリスもや。アンタもまだ安静にしときぃ。初めてで、しかもあんなちゃっちい武器で炎王龍の甲殻に何べんも挑んだんや、腕に負担めっちゃ掛かっとる。腕痛めたくなかったら休みぃよ」
　リリスと呼ばれた若い女性は手厳しいとばかりに苦笑を浮かべる。
「ちゃっちい……ですか。結構苦労して作ったんですけど……」
「古龍相手やったらあんなんちゃっちいわ。相手が悪いねん。弾かれまくったやろ？」
　何というか、この人は本当に裏表がないんだなぁと感心してしまう。誰であろうと容赦なくスパッと切れ味抜群の言葉で切りかかってくる。口じゃ絶対に勝てない。そんな事をクリュウが思っていると、エミルはふと振り返って自分達を手招きした。何事かと、クリュウ達は前に出る。すると、
「……客か、なら俺は引くべきかな。そろそろ三人もクエストこなして帰ってくるだろう。採点してやるか」
「では私も。ボウガンの整備してきます」
　ヒラヒラとした袖を着た青年とその隣にいた女性が立ち上がった。そんな二人に対し、エミルが引き止める。
「邪魔と違（ちゃ）うで？　ゾルフさんの弟子もおるし、残ったらどうや？」
「……その《弟子》が会いたいのは俺じゃないでしょう？　話なら生前ゾルフから聞いています。気遣いなく」
「……では」

青年は静かに答え、両の袖を揺らしながら、女性は顔を伏せて表情は分からないが、取り敢えず別れ言葉を残して踵を返す。エミルの後ろにいたクリュウ達とすれ違うのだが、一切目を合わせようとはしなかった。当然、サクラが不機嫌そうに睨みつける。

エミルは去っていく二人の背中を見詰め、静かにため息を零す。

「……まだ早かったか。全っ然癒えとらんなぁ」

「貴女でも無理でしょうが。自分達の知らない《忘れ形見》ですよ？　それがいきなり目の前に出てきたら混乱しますし、《心》がどうなるか分からないでしょう？　人はそんな強くありません。……それに、今回のお目当ては俺達ですよね？」

やれやれと首を振ったエミルに、奥からジンがサラリと言う。二人の会話や状況から察するに、今の二人はサクラの師匠――ゾルフという亡きハンターの知り合いらしい。再び振り返って二人の背中を探すが、すでにその時には彼らの姿はどこにもなかった。

エミルははぁと大きなため息を零すと、クールに佇むジンの方を見る。瓦礫に座っている彼の横ではシィが腕に抱きついてまるでじゃれつくアイルーのように甘えている。その光景に目のやり場に困るとばかりに頬を赤らめながらクリュウ、フィーリア、シルフィードの三人はそれぞれ適当な方向を見ている。サクラは相変わらずジンを睨みつけたままだが。まるでそれに対抗しているのか、ジンはその何気に微笑ましい光景とは相反するような鋭い瞳で不敵な笑みを浮かべている。

「……正解、アンタらに客や。相手は分かるやろ？　適当に話したり。後、マイルズとリリスもここ残りぃ」

「……流石エミルさん、聡明で有難い」

「大体慣れたわ、アンタらの扱い方」

エミルは先程の二人、マイルズとリリスの方を一瞥してジンに言う。残るように言われた二人は一体何事かと首を傾げながらクリュウ達とエミルとジンの方を何度も見比べている。

それからエミルはクリュウの方を振り返って顎をジンの方へと動かした。どうやら何か言えと伝えたいのだろう。そう判断しクリュ

ウは小さくうなずくと、少し前に出てジンと向き合う。
「お久しぶりです」
「……そんな日が経ったっけな？　まぁいい、久しぶりで合わせよう」
彼の言う通り、別にそんなに時間が立っている訳ではないがクリュウはとりあえずそうあいさつした。ジンの言葉に合わせるように隣にいるシィも小さく会釈する。そんな二人の様子を見ていたエミルは小さく微笑んだ。
「友達が増えたんやなぁ～二人。お姉ちゃん嬉しぅて泣きそうやで～」
演技だというのは丸分かりだが、泣いているフリをしながらエミルはジンに感激の声を上げる。一方のジンは至って冷静というか、平静のままエミルのボケをスルーする。
「……いつから姉になったんです？」
「……なんや冷たいわ～。《あん時》はライザさんにしがみついて泣いたりうちに励まされたり、ゾルフさんに叱れたり可愛かったのに。反抗期？」
「また古い話を……」
「そんな昔やったか？　守ったらななーってライザさんと話したん、つい最近な気ぃするで？」
カラカラと笑いながらからかうエミルに対し、ジンは呆れたようにため息を零す。どうやらこれが二人のいつものノリらしい。だとしたら、ジンに軽く同情してしまう。
まぁ、確かに二人のその姿を見れば姉弟に見えなくもないが、だとすればずいぶんと疲れる姉を持つ事になる。
そんな事を考えながら、とりあえず自分達が入っていく隙もないので一応クリュウは黙っていた。すると、エミルは突然こちらに振り返った。自然と、反射的に姿勢を正す。
「ほなうち帰るしな、今日は雑務やらな後々面倒やし。せっかく出来た《友達》や、大事にせなお姉ちゃん怒るさかいな？」
「だから……！」
「あーあーそういやぁ、結局ちょっとサボったさかいお姉ちゃんも上

司（シュリン）に大目玉食らいそうやわ。そんときゃぁお姉ちゃんしっかり慰めてな？」
ジンが何か言い返す隙を与えず、エミルは楽しげに軽い笑い声を上げながら去って行く。その後姿はその美しい容姿と同じく美人なのだが、その性格は残念としか言いようがない。
エミルは最初から最後まで人をおちょくり倒しまくる、まるで愉快な嵐のような人だった。この場合の愉快は本人限定で周りは果てしなく迷惑極まりないのだが。何となくクリュウは、昔の悪友の姿とエミルが重なって見えた。
一方、散々エミルに一方的におちょくり倒されまくったジンはガックリと膝に両手を乗せていた。どうやらずいぶんと親しい間柄でもあのテンションはなかなか慣れないようだ――まぁ、あれを慣れてしまったら人間として終わりのような気もするが。
「……気を取り直そう、何か用か？」
ため息を一つ零した後、それまでの振り回されっぷりとは打って変わって真剣な表情で尋ねながらジンはクリュウ達に対峙する。どうやら彼の中で今までの流れはなかった事にしたらしい。それは正解ではあるが、人はそうも簡単に気持ちの切り替えができるものだろうか。一体どれだけの苦労を重ねればそのような技術を会得できるのか――まぁ、会得したいとは思わないが。
ジンの問い掛けに対し先頭に立つクリュウは一瞬その気迫に押されるが、別にイタズラをして怒られる子供という訳ではないのだから、堂々と対峙する。それに、自分には彼に尋ねておきたい疑問があった。
「あ、いえ。僕達はもう少しでこの街を出るので挨拶と――ちょっと話を訊きたくて」
「……ほぉ、話なぁ」
クリュウの態度を見て何かを感じ取ったのか、ジンは短くそう答えた。彼の性格を見るにあまり自分の事を話したがらないのは何となく予想できる。エミルが勝手に口走ったからこそ、今自分が知っている知識はきっと彼は自分からは言わないような内容だ。相手の望ま

ぬ疑問を問い掛けるのだから、こちらとしても気構えてしまう。だが、
「――ゾルフさんの事か？」
ジンは特に隠す事なくそう言った。そしてそれはクリュウが尋ねようとしていた事そのものだった。彼のあっさりとした返しに驚きながらも、納得はできた。自分が彼に尋ねる事と言えば、むしろそれくらいしかないだろう。
一瞬サクラの方を一瞥し、クリュウは改めてジンの方へ向き直る。
「《灰狼》ゾルフ・ヴァルフレア。大剣使いの常識を余裕で覆す程の機動力と速さ、変幻自在の変則的な剣さばきが特徴のハンターだった」
「いえ、それは一応知っています……」
一体どんな話をしてもらえるのかと思って期待していたが、彼から語られたのは至極一般的な知識だ。それこそ自分がサクラなどから教えてもらったレベルの、至って普通の情報。もちろん、彼が尋ねたい事はこんな事ではない。
なぜそんな話をしたのか。見ると、ジンは困ったような表情で天を仰いでいる。それを見るに、どうやら今の話でこっちが諦めてくれる事を願っていたらしい。もちろんそんな話ではこちらは引き下がらない事もわかっていたのだろう。短い付き合いだが、何となく彼はあまり他人と話をしたがらない性格のようだから、面倒事を回避しようとしたのだろう。
だったら、ここはむしろこっちから切り込むべきだ。クリュウは覚悟して一歩前へ出る。その隣ではサクラがジンを辻斬りのような目で睨みつけていたりする。
「僕が知りたいのはもっとこう……どんな方だったのかなぁ、とかです。その、珍しくサクラが凄い敬意を払ってますし、関係が深かったジンさんなら何か知ってるかなって」
「……クリュウ、私はいつもクリュウに敬意を払ってる。珍しくなんかない」
「うん、関係ないね……」
サクラのボケをスルーしながら、クリュウはジンを見詰め続ける。

どんな回答が返って来るのか、ある種期待しながら待っていたが、彼から返って来たのは残念な内容だった。
「一般的に広がってる話以外で俺達が話す事？　そんな物は無いな。俺達の不用意な発言で偉大なる《灰狼》、ゾルフさんに泥を塗りたくない」
　ジンはクリュウの問いに答える事なく、若干遠まわしながら答える事を拒否した。それを見て隣に立つサクラはムッとした様子だったが、クリュウは黙って彼の自分に向けられる視線を見詰め返す。その真っ直ぐな視線は、彼の本音というか、信念のようなものを感じた。
　彼は答えたくない理由をちゃんと語っていた――ゾルフの顔に泥を塗りたくない。それが答えない理由だ。
　死んでしまった人間の事を、残された人が語る事は簡単だ。だがそれはすべて客観のものであり、第三者から見た姿でしかない。そしてその姿は必ずしもその人の真の姿とは限らないのだ。語り方次第、捉え方次第で印象は大きく代わってしまう、そんな意味のないものだ。
　自分の言葉ひとつで、人の印象を変えてしまう。ならば、語らない方がその人の為でもある。ジンはきっと、そんな想いを抱いているのだろう。ならば、クリュウは――
「……わかりました。じゃあその事は何も訊きませんね」
　彼の想いを尊重する事に決めた。ジンは決して無責任などではない。むしろ自分勝手な責任を被って、故人を愚弄したくはないのだ。その心意義、クリュウは決して嫌いではない。
「悪いな。これが《俺達》なんだ」
　そう言って、ジンは少し困ったように笑った。彼自身、自分が言った発言の真意がクリュウにしっかりと届いているか自信がないのだろう。ある意味で口下手とも言えるが、それも含めて彼なのだ。
　クリュウはそんなジンの姿を見てもうこの件については何も尋ねないと決めた。だがもう一つ、彼には尋ねておかなければならない事があった。
「じゃあもう一つ。ハンターとして訊きたい事があるんです」
「……それなら答えられそうだな。うん」

先程とは違い、今度の問いは単純に先輩ハンターに対する後輩からの質問だ。これなら別に遠慮する必要もない為にジンも少し考えながらも了承してくれた。そんなジンの言葉に一つうなずき、クリュウはジッと彼を見詰めながら、その疑問を口にした。

「――古龍を相手にするのは、どんな感じですか？」

――周りの空気が変わった事に、クリュウは気づいていた。見なくてもわかる。皆、今の自分の発言に驚愕しながら見ているに違いない。

クリュウにとって、古龍はある意味宿命の相手だ。父を殺し、おそらく母の命を奪ったのも種類や個体は違うだろうが、それでも分類学的には古龍種によるもの。ハンターとして高みを目指す以上、いずれどこかで戦う事になる相手。それが古龍だ。

今回もその古龍が街で暴れ、壊滅的な被害を与えた。多くの住人や街を守ろうとしたハンターが死んだ。天災と同等に扱われるような存在。ハンターは、時にはその天災に挑みかかる。

そしてそれは、決してクリュウも人事ではない。何年先か、そもそも天災が自分の周りに現れるかもわからない。だがそれでも、決して出会わないという事はない。何より、クリュウにとって古龍は、因縁の相手だ。

ジンはクリュウの疑問に対して一瞬彼の背後の女子達を見た。全員、クリュウ口から《古龍》という単語が出た瞬間、明らかに表情が変わったのを彼は見逃さなかった。その様子を見て、彼と古龍の少なからずの因縁を察したのだろう。少し考え、ジンは静かに口を開いた。

「……少し散歩でもするか、クリュウ君。その問いの答えはその時言おう。君達三人は、大人しくそこで待ってて欲しい。心配は要らないから、まぁ俺信用無さそうだが安心してくれ。君達三人にはもっと面白い話を聞いといてもらう……シィ」

「は～い」

これまでずっとジンにベタベタと寄りかかっていたシィは元気よく返事を返してピョコンと動いた。そんな彼女の耳元でジンは何か

を呟いた後、肩をそっと叩く。その瞬間、シィは天真爛漫な笑みを浮かべた――だが、心なしかそれは面白いイタズラを思いついた子供を思わせた。
「……さて、散歩しようかクリュウ君。シィ、そっちは任せたぞ？」
「はぁ～いッ！　バッチリだよぉ～」
のん気極まりない猫撫で声で返事をしながら、シィは胸を張る。そんな彼女の反応を見てジンは静かに微笑を浮かべると、クリュウの肩を叩いて歩き出す。クリュウは一瞬背後の三人に振り返ったが、すぐに彼の背を追って歩き出した。その背後では彼を追おうと動いたサクラの前に、一瞬にしてシィが割り込んで針路を塞いでいた。
睨み合いながら、静かに互いを威嚇し合う二人。心配ではあったが、ジンは振り返る事なく進むので、クリュウはそれに従った。
クリュウとジンは、一体何を語り合ったのか。
そして残された三人とシィ達が一体どのような会話をしたのか。
それはまた、別のお話……
数時間後、クリュウ達は空になった竜車を率いる二次支援隊を率いてヴィルマを後にした。ドンドルマに戻ったら、この竜車は再び支援隊として使われるらしい。だからこそ、無事に届ける必要がある。ドンドルマに戻るまでが、ライザから受けた依頼なのだから。
見送りらしい見送りは特になかった。クリュウはジンから得た教訓を胸に刻みながら、彼と堅い握手を交わし、何やらわずか数十分の出来事の間にシィの事を《師匠》と呼ぶフィーリアなど、疑問はいくつか残ってはいたが、彼らにはまだやる事が残っているので引き止める訳にもいかず、素っ気ないお別れとなった。でもまぁ、その方が彼ららしいとも思った。
彼らはまだヴィルマに残っているらしい。ヴィルマの残存ハンター達も、今後はヴィルマ再建に全力を尽くすそうだ。ドンドルマも表面上は支援を約束しているらしい。まぁ、ライザがいる限り大丈夫だろう。
それと、謎の飛行船を寄越してきたアルトリア王政軍国。世界は広いというが、あんな物を生み出して運用している国もあるのだと、

ヴィルマとはまた違った意味で経験になった――同時に、一つ気がかりも生じていた。
竜車に揺られながら、クリュウはボーッと空を見上げていた。ヴィルマを出てからずっとその調子であり、フィーリアとサクラの心配も頂点に達しつつあった。
「クリュウ様、喉乾きませんか？」
「……クリュウ、大丈夫？」
二人の心配に満ちた声にクリュウはゆっくり振り返り、彼女達の姿を見詰める。
今回のヴィルマ戦では、多くのハンターが死んだ。生き残った者達も、多くの仲間を失っていた。
もしも、自分の周りでそのような事が起きたら。今こうして自分を心配してくれている彼女達も、失ってしまうかもしれない。
口の中に、鉄の味が広がる。
「く、クリュウ様ッ!? ち、血が出てますよッ!?」
慌てふためくフィーリアが見たのは、クリュウの唇から垂れる血。彼は突然自分の唇をギュッと噛んだかと思ったら、そのまま唇を切って血を出した。慌ててハンカチを取り出す彼女を見て、クリュウは自分の異常行動にようやく気づいた。
「あ、ごめん……」
「何考えてるんですかッ!? ご自分の大切なお体を、自ら傷つけてどういうおつもりですかッ!?」
本気で怒るフィーリアを見るのは珍しい。それほど、彼女は本気で怒っている。それも、自分の身を案じてだ。本当に、心優しい子だ。
「……クリュウ」
サクラもいつになく不安そうにこちらを見詰めている。二人の心配に満ちた瞳が、今はすごく苦しい。
彼女達を失いたくない。そんな気持ちが、胸に満ちていた。
これから先も、ずっと彼女達と一緒にいたい。それを叶える為に、どんな厄災をも跳ね除ける力がほしかった。自分がもっと強くなって、彼女達を守れるくらいに強くなったら。そうすれば、誰も失わな

い。自分がもっと強く、圧倒的な力を手に入れれば――
「……昔の私のような顔になっているぞ、クリュウ」
　これまでずっと事の成り行きを黙って見詰めていたシルフィードが、静かにつぶやいた。その言葉にクリュウはハッとなる。気づけば、フィーリアとサクラが先程とは別の意味で不安そうな表情を浮かべていた。まるで、怖いものでも見たかのように、震えている。
「クリュウ様……怖い顔してました」
「……クリュウ」
「あ、ごめん……」
　自分で気づかないうちに、とても怖い顔をしていたのだろう。慌てて笑顔を取り繕うが、すでに小細工が効くような状況ではなかった。二人とも、自分にどう言葉を掛ければいいか迷っているようだ。
「君が考えている事を、当ててやろうか？」
　ゆっくりと立ち上がったシルフィードはそんな事を言いながら彼に近寄ると、彼の横に静かに腰掛けた。凜とした表情は、いつも自分達を頼もしく導いてくれる。頼れる我らのリーダーだ。
「今回の事件で犠牲になったハンター達のように、いつか私達の誰かが倒れるのではないか。そんな不安を覚えたのだろう？　そして、私達を守れる程強くなりたいと願った。それこそ、どんな力でも構わないとな。違うか？」
　シルフィードの言葉はまるで自分の心の中を読んだかのように、全て正解だった。首の動きも、自ずと縦に動いた。それを見てシルフィードは「そうか……」と小さくつぶやくと、突然彼の頭の上に手を乗せ、そのままワシャワシャと髪を掻き乱した。
「ちょッ!?　な、何するのさッ!?」
「確かに、以前君は私の事も守ると言ったな。だがな、それはあくまで覚悟でいいんだ。それくらい強くなるっていう覚悟でな」
　それは以前、シルフィードを仲間に誘った際にクリュウが言った言葉。シルフィードの事も守れるようなハンターになりたい。そう、彼は言った。それが、今まで一人で戦って来た戦乙女に希望の光を与えた事を、彼は知らない。

困惑する彼を前に、シルフィードはゆっくりと優しげな笑みを浮かべた。
「――私達は仲間だろうが。誰が守るとか守られるとか、そういう事はどうでもいい。チームだからできる事は、互いの欠点を補う事だ。皆で助け合って、皆で強くなればいい。誰かが犠牲になる必要など、ないんだからな」
それは、不器用な彼女なりの、不器用な励ましの言葉だった。
クリュウはその言葉に少し驚いたように沈黙したが、やがてゆっくりとその口元に笑みを浮かべた。
「そうだね。僕達は、仲間なんだから」
そんな彼の言葉に、フィーリアもすかさず「はいですッ！　私達はまだまだ未熟者ですから、みんなで助け合いましょうッ！」と笑顔で言う。その横ではサクラも無言ではあったが、優しげな笑みを浮かべて静かにうなずいた。
そしてシルフィードの方を見ると、彼女は明後日の方向を見ながら「ま、まぁそういう事だ。どういう事か、自分でもしっかり伝えられたかわからないが、まぁそういう事だ」と照れているのか、意味不明な発言をしている――でも、今のクリュウにはしっかりとその《そういう事》が伝わっていた。
「じゃあ、みんなでもっと強くなる為にも、もっともっと狩りをしないとね」
「の、望む所ですッ！」
「……我が覇道の前に立ち塞がる者は、何人（なんぴと）たりとも斬り倒すわ」
「覚悟は立派だが、通行人に襲いかかるのだけはやめてくれよ」
シルフィードが言ったのは、全部事実だ。
誰も、このメンバーの中に完璧な者などいない。皆、長所があって短所がある。強みがあって弱点がある。得意があって不得意がある。個人個人ではどうしようもない事でも、皆で連携して、お互いにその穴を埋め合えば、一人の時よりもずっと強くなれる。
誰か一人ががんばるのではない。皆でがんばって、皆で笑って、皆

で泣いて。そうして、強くなっていけばいい。
クリュウの中で少しだけ、不安の雲が消え去った。まだ完全に消えたとは言えないが、それでも今はこれで十分だ。
竜車に揺られながら、クリュウ達は早速次の狩猟についての会議（ミーティング）を開始した。もっともっと強くなる。あの化け物染みた二人を超えられるくらいに――この四人で。
ヴィルマでの短い出来事は、少年少女達をまた一つ大人へと成長させていた……

第119話　おかえりなさい

春の訪れを感じさせる心地良い日差し。最近ようやく地面を覆っていた雪が溶け、辺りはゆっくりとではあるが春に向けて着実に近づいている証を見せていた。雪の下から顔を出した地面からは春にはきれいな野原になるのを予感させる芽が至る所から顔を出している。

分類上は北国に位置づけられる場所にあるイージス村もようやく春が目の前まで迫っている状態であった。

朝日に照らされるイージス村の朝はもうすでに始まっている。各家からは朝食の支度で窯に火を入れている証拠に煙が上がっている。春は近いとはいえ、それでもなお村の朝は寒い。しかし子供達はすでに元気良く外を走り回っている。皆、男女関係なく今日も楽しくハンターごっこに勤しんでいる。ハンターごっことは文字通りハンターを真似て遊ぶ事だ。兜のつもりか、少年達は頭に鉄鍋や帽子を被り、手には紙を巻いて作った剣と鍋の蓋を持って片手剣のつもり。女子は特に武装らしい武装はせず、手には銃の形をした木の枝を握って「バンバン」と銃声を口で言っている。

ハンターごっこと言いながら全員ハンター役で、モンスターはいないというツッコミ所満載な遊びではあるが、そこは指摘しないのが大人の約束だろう。ちなみに、言わなくてもわかるだとうが男子はこの村の片手剣使いのクリュウを、女子はライトボウガン使いのフィーリアをそれぞれ真似ている。純粋に武器が作りやすいというのもあるが、子供達の間ではこの二人が人気の対象であった。

クリュウはこの村の出身だし、在住する全ハンターで最も長い間この村にいるので純粋に子供達との接点が多いのだ。元々彼自身が子供っぽい性格をしているのでよく子供と遊んでいた事もあって彼は男女問わず村では大人気のハンターなのだ。続いて長いフィーリアはあの謙虚で優しい性格から村の子供達にとても好かれている。好かれ過ぎて男子からスカートをめくられたりといたずらの対象にもなっているが。

残るサクラとシルフィードはそれぞれ子供との接点はとても少な

い為、嫌われているという訳ではなく尊敬とか信頼の対象から外れているのだ。サクラはあの性格だから子供相手でも無視なんて日常茶飯事だし、シルフィードはいつも一人で何か作業をしていたりするので子供と遊ぶ機会がない。その為、社交的なクリュウとフィーリアの人気だけが異常なほど上がっているのだ。

村の子供達に愛されるようになった少年ハンター。そんな彼の幼なじみは……

朝の柔らかな日差しが窓から入り、部屋を優しく照らし上げる。そんな部屋に、エプロンと三角巾という防具に箒という武器を携えた掃除人（ハンター）が孤軍奮闘していた。

「ふぅ、だいたいこんなもんかしら」

外は寒いとはいえ、部屋の中は暖炉のおかげでちょうどいいくらい。そんな中を掃除の為に動き回っていたから、彼女の額には薄らと汗が滲んでいる。彼女はそれを手の甲で拭い取ると、自分の努力が見事に反映されている部屋を見回す。まさに埃一つないという見事な清掃状態。少女は満足げにうなずくと、三角巾を取る。その瞬間、三角巾で隠されていた茶色の長く美しい髪が解放され、優雅に揺れる。

「あ、お姉ちゃんッ！　廊下の雑巾がけ終わったよぉッ！」

そこへ廊下から小走りで嬉しそうに叫びながら現れたのは桃色の髪をかわいらしいツインテールに結った天真爛漫な笑顔が似合う金色の瞳をした少女。その姿を見て箒を持った少女は小さく微笑む。

「お疲れリリア。お腹空いたんじゃない？　そろそろ朝ご飯にしましょ」

「やったぁッ！」

少女――リリアは諸手を上げて大喜びする。そんな彼女の喜ぶ姿を見て、茶髪の少女も楽しげに微笑む。

「それじゃ、一階に降りるわよ」

そう言って少女――エレナはもう一度だけきれいになった部屋全体を見回し、クリュウの部屋を後にした。

一階に降りたエレナは早速朝食の支度を始める。すでにメニューを決めて素材を持ち込んでいるのですぐに料理を開始した。

今日の朝食は比較的簡単にできるホットサンドだ。専用の特殊なフライパンもわざわざ家から持って来ていて準備にぬかりはない。
具となる素材をそれぞれ適当に切り、後はパンで挟んで焼くだけだ。忙しい朝を乗り切る、簡単でおいしい朝食の定番だ。
ホットサンドを焼いている間に今度は飲み物の準備をする。リリアが仕入れた新鮮な果物を搾って即席のフルーツジュースを手早く完成させる。そして、焼き終えたホットサンドを半分に切って皿に盛って完成だ。
「うん。我ながら完璧な出来映えね」
エレナは自分の力作を見て満足そうに微笑む。ホットサンドの断面からは熱を受けてちょうどいい感じになっている具と、とろーりと溶けるチーズが顔を出している。パンの焼き加減も絶妙だ。
その香ばしい香りが台所からリビングの方へだだ漏れなのだろう。リビングからリリアの「まだ～？」という催促の声が聞こえる。
エレナは「はいはい」と苦笑を浮かべながらできたばかりのホットサンドとフルーツジュースを持ってリビングへと向かう。
「ほら、できたわよホットサンド」
「わーいッ！」
再び諸手を上げて大喜びするリリアの前に香ばしい香りを辺りにホットサンドの盛られた皿を置き、その横にフルーツジュース、布巾を置いておく。
「熱いから気をつけなさいよ」
「いっただきまぁす～ッ！」
行儀良く手を合わせてからリリアはホットサンドを食べ始める。だが思いの外熱かったらしくすぐに口から離す。その姿にエレナは小さく苦笑を浮かべる。
「だから熱いって言ったじゃない」
リリアは今度はちゃんとフゥフゥと適度に冷ましてから食べる。今度はちょうど良かったのか、おいしそうに頬張る。
「ふぉいふぃッ！」
「口に物を入れたまましゃべるんじゃありません」

そう言ってエレナはリリアの額を軽く小突くと、再び台所へと戻る。先程から焼いていた自分の分のホットサンドがちょうど焼き上がる頃合いだった。
皿に盛りつけ、再びリビングに戻るとすでにリリアは半分に切ったうちの片方を食べ終え、もう一方の方を食べ始めていた。
「食べるの早いわねあんた」
「だってすんごくおいしいんだもんッ」
「あっそ」
リリアの大絶賛に対しエレナの反応は素っ気ない。しかしそれはあくまで表向きであって、その実は彼女に背を向けてガッツポーズしてみたり。
自分の席に座ると、早速ホットサンドを食べ始める。慎重に冷ましてから頬張ると、口の中いっぱいにホットサンドの味が広がる。思っていた通りの見事な出来映えに満足だ。
しばし二人は無言でそれぞれホットサンドを食べていたが、リリアが手に持っていた半分のホットサンドが半分程になった頃で彼女がふと思い出したように口を開いた。
「お兄ちゃん達、全然帰って来ないね……」
「……そうね」
寂しそうにつぶやくリリアの言葉に、エレナもまたどこか遠くを見詰めながら同じく小さな声で返す。
クリュウ達が村を出てから一ヶ月近く経つ。村に入る細々とした依頼はツバメとそのオトモアイルーのオリガミがいるので村全体としては特に不自由はないが、ずっと帰って来ない四人を心配している村人は少なくない――リリアとエレナもその一人であった。
「ど、どうせまたいつものようにかわいい女の子に振り回されているんじゃないの？」
寂しげにうつむくリリアを励まそうとエレナは無理に明るく振る舞う。だがしかし、元々クリュウ達は二週間も掛からないで帰って来る予定だったのに、連絡もなしに一ヶ月も帰って来ていないのだ。クリュウはともかく他の女子陣の実力はいずれも信頼できるものでは

あるが、だからと言って心配が消える訳ではない。
　そんな事を思うものだから、自然とエレナの表情も曇ってしまう。すると、それに気づいたリリアがはにかんだ。
「あははは、かもね。お兄ちゃんって女難の相が出てそうだし。それもメガトン級の」
　リリアの笑顔の冗談に対し、エレナはハッと顔を上げる。そして彼女の笑顔を見て、自身もそっと微笑む。
　――リリアに心配されてちゃダメなのよ。あのバカ達がいない間は、この私がしっかりしなきゃいけないんだからッ――
　気合いを入れ直すと、エレナは「ありがと、リリア」と微笑みながら彼女にお礼の言葉を言う。リリアは嬉しそうにはにかみながら「どういたしまして」と答える。そんな彼女の笑顔に小さく微笑み――しかし、それを再び曇らせる。
「……あいつの場合、冗談じゃ済まないのよねそれ」
「た、確かに……」
　幼なじみの、大好きな兄の空前絶後にして史上最強の天性の天然ジゴロっぷりには、ほとほと悩まされ、振り回され、疲れさせられている二人の少女のため息が重なった。
　クリュウの家の掃除を終えた二人はそれぞれ自分の店に戻って今日もまた営業を開始する。昼頃まではちょこちょこと人が入っていたくらいだったが、ランチタイムになると一気に忙しくなる。この時間はその応援にツバメとオリガミ、リリアも駆けつけてくれるが、それでも忙しい事に変わりはない。特に重要なキッチン係はエレナ一人なのでキッチンはさながら一人戦争状態だ。
　――あまりの忙しさにツバメが制服が違うと猛烈に抗議していたが無視した。
　ランチタイムを終え、ようやくひと段落した頃にエレナはようやく昼食を食べる。もちろん手伝ってくれた三人（正確には二人と一匹だが）にもそれぞれ賄い食だがご馳走する。給料を払うと言った事もあったが、三人とも手伝いだからとそれを受け取らず、せめて昼飯だけこうして提供しているのだ。

「それにしても、クリュウ達は遅いのぉ」
「ニャにもニャいといいんニャけどニャ～」
ツバメとオリガミも音信不通となっている四人を心配していた。エレナは「大丈夫よ、あのバカ達なら」と心配ないと言うが、その胸の中はやっぱり心配は消えなかった。
三人が帰った後、エレナは再び一人になった。
誰もいない店内。適当な席に座ると、そのままぼーっとしている。最近はこんな事ばかりだ。
四人が――クリュウがいる時はこうして自分が暇をしていると彼が訪ねて来て他愛のない雑談で笑ったりしていたが、今その彼は村にはいない。その事実に、胸がキュッと引き締められる。
「バカクリュウ……どこで一体何してんのよぉ……」
拗ねたように唇を尖らせ、エレナはテーブルに突っ伏す。頬をぴたッとテーブルに付け、視線はいつも彼が上って来る坂の下に注がれる――彼が、いつものようにそこを上がって来てくれるのではないか。そんな淡い期待を抱きながら。
「お～いエレナ。客が来てるんやけどぉ～」
その声にハッとなって顔を上げると、店の入口に苦笑を浮かべながらアシュアが立っていた。いつもと同じ煤汚れた作業着姿だ。腰には鍛冶職人の魂の小さなハンマーが常に下げられている。
「あ、ごめん。気づかなかった」
「何や。あんたらしくないなぁ。そこ座ってええか？」
「あ、ええ」
アシュアはそう言ってエレナの座っているテーブルの対面の席に腰掛けた。そして横に置かれているメニューを見ずに注文する。
「ホットサンド作ってくれへんか？」
「それ朝食メニューよ？」
「そうなんか。いや、リリアがすんごくうまかったってウチに自慢しよってな。朝から何も食べんかったからちょうどいいと思ったんやけど。しゃあないな。そんじゃ何か別の奴でも……」
「いいわよ別に。どうせ今暇だし」

「ほんまか？　悪いなぁ」
エレナは「ちょっと待ってて」とアシュアに言い残すとキッチンに入る。壁に吊り下げている朝クリュウの家に持ち込んだホットサンド用の二つのフライパンをくっ付けたようなフライパンを手に取ると、窯の上に置く。窯の中には薪と古紙を入れて火を点す。吹き筒で空気を入れて火力を上げ、後は常に薪をくべ続けながらこれを維持するだけ。何とも慣れた手つきだ。
朝に作ったのと同じ食材を同じ要領でパンに挟み、後はフライパンで挟みながら焼くだけだ。その間、エレナはジッとそれを見詰め続ける。
「そういえば、あいつもおいしいって言ってくれたのよね……」
そうつぶやき、エレナは懐かしげに笑う。
クリュウがこの村に戻って来てからは酒場の新メニューは彼に試食させてから最終判断して加えている。このホットサンドも、最初は彼に食べてもらって「おいしい」と言ってもらえたから、こうしてメニューの一つになった。
あの時の彼の顔は今でも忘れない。基本的に子供っぽい彼だからこそ、素の反応をしてくれる。おいしい時は無邪気に笑いながら、本当においしそうに食べてくれる――元々、自分が料理人を目指すキッカケになったのは両親が酒場を経営していた事と、彼に自分の料理を認めさせる事。二つの理由からだった。
クリュウは子供の頃から料理下手な彼の母親に代わって料理を引き受けていた経緯から料理がうまかった。自分はいつもそんな彼の料理に憧れ、嫉妬していた。女の子であるはずの自分が料理ができず、男のクリュウが料理ができる。その事実に何度情けないと思った事か。
――まぁ、当時は動きやすいからと髪型をショートカットにして、家で本を読むクリュウの首根っこを掴んで森に探検に向かっていたエレナに女の子らしさを求める方が酷ではあったが。
負けず嫌いのエレナはそれから料理を猛勉強してクリュウに追いつき、そしていつしか追い抜いていた。本当ならそこで終わっても良

かった。でも、彼は自分に料理人になる事を勧めた。ちょうどその頃、母親が病気で倒れて酒場の経営が難しくなった事もあり、エレナはこの酒場を引き継ぐ事にした。

そして、今に繋がる。

ハッと気づいた時、ホットサンドがちょうどいい焼き加減を迎えていた。エレナはすぐに皿に盛りつける。

「……ったく、何であいつとの思い出ばっかり。バッカみたい……」

そうつぶやき、エレナは皿と持ってホールへと戻る。アシュアはそれを見て「待ってました料理長ッ」と調子良く行ってエレナを迎える。

「料理長って、キッチン担当は私一人だけなんだけど」

苦笑しながらエレナはアシュアの前にホットサンドを置く。それを見たアシュアは感嘆の声を上げた。

「ほぉ、これはほんまにうまそうやなぁ」

「実際においしいわよ。失礼ね」

「これは失敬」

エレナは苦笑しながらアシュアの前にホットサンドを置いた。アシュアはそれを興味深げに見詰める。

「な～るほど、これがクリュウ君とエレナちゃんの愛の結晶な訳やなぁ」

ふむふむとうなずきながらアシュアはホットサンドを観察する。一方、アシュアのさりげない発言に対してエレナは顔を真っ赤にする。

「な、何バカな事言ってんのよッ！」

激しく動揺しながら激高するエレナの怒鳴り声に対し、アシュアはニヤニヤとイタズラっぽく笑う。

「ここのメニューはクリュウ君に味見してもらってから加えてるんやろ？　料理は愛ってクリュウ君が言っとったから二人の愛が生み出した料理って言っただけやで？　別に深い意味はないで」

アシュアの言葉にエレナは自分がものすごい勘違いをしていた事に気づきさらに顔を赤面させる。だが、彼女の笑顔は明らかにわざと紛らわしく言ったとエレナに確信を持たせる。

「う、うるさいッ！　ふざけた事言ってると没収よッ！　没収ッ！」
　そう言ってエレナはホットサンドを取り上げる。それに対しアシュアは「そんな殺生なぁッ！」と腕を伸ばして取り返そうとするが、エレナはそれを許さない。
　しばしそんな攻防戦を繰り返した後、涙目になって「いじめッ子やッ！　いじめッ子がここにおるぅッ！」とアシュアが叫び出したのでエレナは仕方なくホットサンドを返した。
「くすん、冷めてもうたらどうするんや」
「そんなに時間は経ってないわよ。むしろちょうど良く冷めたんじゃないの？」
　アシュアはテーブルの横に置いてあったおしぼりを手に取ってきれいに手を拭いてから「ほな、いただくでぇ～」とホットサンドを手に取って頬張った。
　口いっぱいに頬張り、頬を膨らませながらもきゅもきゅと満面の笑顔で食べるその姿に、エレナは不覚にも一瞬かわいいと思ってしまい、先程までとは違う意味で頬を赤らめた。
　ごくんと呑み込むと、アシュアはほぉとため息を零す。
「ふぅ、幸せ味やぁ～」
「ほんと、幸せそうに食べるわねぇ～」
　満面の笑みを浮かべるアシュアの姿に皮肉じみた事を言うエレナ。しかしそれは決して皮肉ではなく本心からの言葉。作った側から見ればこんなにおいしそうに食べてもらえれば作った甲斐があるというものだ。
「ほんまうまいでこれ」
「当然でしょ。この私が作ったんだから。おいしいに決まってるじゃない」
「自信過剰なやっちゃなぁ～。ま、ほんまにうまいからええけど」
　アシュアはそう言って次の一口を食べ、「ほんま幸せ味やぁ～」と笑顔を満開に咲かせる。そしてあっという間に完食した。
「ごちそうさん。うまかったでぇ」
「お粗末様」

エレナは皿をキッチンに置いて慣れた手つきで紅茶を用意し、再びアシュアの所へ戻る。
「紅茶飲むでしょ？」
「別料金やろ？」
「いいわよ。サービスよサービス」
「ほんまか？　ならもわうわ」
エレナはティーポットを傾けてカップに紅茶を注ぐと彼女の前に置き、続いて自分の分も注いでから元いた席に座る。
「店員がくつろいでてええんか？」
「いいのよ。どうせこの時間はお客は来ないんだし」
「……いや、ごっつ目の前におるんやけど」
「あんたは客というより友達でしょ？」
「お、嬉しい事言うてくれんなぁ。ほんじゃタダって事で――」
「１ｚたりともまけないわよ」
「――ほんま容赦ないなぁエレナちゃんは」
アシュアは苦笑しながらいい香りを漂わせる紅茶を一口飲む。
「そういえば、こんな時間に昼食って。あんたまたこんな時間まで寝てたの？」
「失礼な。今日は朝からずっと工房で仕事してたんや。人を駄目人間みたいに言わんといてな」
「……寝癖ついてるんだけど」
「ウチは寝癖は気にせん主義なんや」
「気にしなさいよ。曲がりなりにも女子でしょ？」
「……エレナちゃん、さりげなくひどい事言うなぁ」
あはははは、と全く容赦のないエレナの言葉に少しばかり傷つきながら苦笑するアシュア。
「ウチは仕事一筋やからええんや。仕事が恋人みたいなもんやし」
「それ、嫁ぎ遅れた女子の言い訳なんだけど」
「ほんまあんた容赦ないなッ！」
「冗談よ冗談。気にしないで」
「……笑えない冗談はやめといてぇな」

がっくりと肩を落とすアシュアに苦笑しながら、エレナも紅茶を一口飲む。こうして紅茶を一口飲むだけで心からリラックスできるのだ。
「いい天気ね」
空を見上げればそこには快晴の青空が広がっている。ゆっくりと流れる雲を見ていると、ランチタイムの喧噪がうそのようなのんびりとした時間だ。
「そういや、クリュウ君達から何か連絡はあったんか？」
紅茶を飲みながら思い出したように言うアシュアの言葉にエレナは小さく首を横に振る。
「ないわよ。ったく、一体どこで何してんのよあいつらは」
「まぁ、ハンターって仕事柄突然緊急の依頼を受けたとかそんな感じやろか」
「それにしても手紙の一つくらい寄越したっていいじゃない」
拗ねたように唇を尖らせながら言うエレナの言葉にアシュアは「せやなぁ」と苦笑を浮かべながらうなずく。
「でもサクラちゃん達も一緒なんやから心配はないやろ」
「サクラがいるから余計に心配なんだけど」
「……あはははは、せやなぁ」
サクラ相手では決して笑い事ではない。何しろ彼女の度を越えた大胆さというか無茶苦茶さ加減は筋がね入り。クリュウの寝込みを襲うくらい彼女ならやりかねない――正確にはすでに何度かしでかしてはいるが。
「確かにサクラは不安やけど、フィーリアちゃんとシルフィードちゃんもおるんやし。そないに心配せんでもええんやないか？」
「致命的なドジをしでかすシルフィードと、間違った方向へ全力疾走するフィーリア、そして天上天下唯我独尊なサクラ。むしろ不安要素しかないんだけど」
「……ウチが悪かった」
今更ながら自分の村に所属する主力ハンターチームが恐るべき均衡状態で成り立っている事を再認識し、アシュアは苦笑交じりにため

息を零す。全員、ハンターとしては優秀なのだがどうにも心配は絶えない。
「つたく、帰って来たらただじゃおかないんだから」
「……あははは、クリュウ君も大変やなぁ」
「自業自得よ」
アシュアは苦笑を浮かべながらもちゃんとエレナの気持ちは察していた。自分と話しながらもずっと彼がいつも通る坂を見詰め続ける彼女の拗ねた横顔を見て、「ほんま、素直やないなぁ……」とつぶやく。
「帰って、来たら……」
エレナの見詰める先に、彼の姿はどこにもなかった。
日が落ち、月明かりに幻想的に照らされるイージス村。小さな田舎村に過ぎないこの村では、都会ではまだ人々が歩き回る時間帯でも皆家に入ってしまう。時間的にはまだ違うが、事実上の深夜に等しい状態になる。
人間は一日に三度の食事を取る。そのたびに戦争状態になる村唯一の酒場であるエレナの酒場も店じまいの支度を始めた。キッチンにはまだ洗い終えていない皿が積み重なっており、店を閉めたとしても彼女はまだまだする事は多い。
一応入口はあるのだが、ラッシュ時など客が自由に行き来できるように三方に壁を造らず解放しているエレナの酒場。いつものようにその三方に暖簾を下げ、椅子を全てテーブルの上に置き、軽く掃除を済ませる。
村の人々は信用してはいるが、一応用心の為に盗まれては困るものや現金などは金庫に入れ、準備完了だ。
「あ、営業中の看板片付けないと……」
すでにこの時間では人が来ないからと、よく忘れてしまう看板の片付け。急ぐ事もないのでエレナはゆっくりとした足取りで外に出ると、営業中と書かれた看板を見る。これを中に入れて入口に鍵を閉めれば完全な店じまいだ。残った時間は、自分の自由時間となる。あとは今日も営業日誌も兼ねている日記をつけて終わりだ。そんな事を

考えながら看板を掴む。
「あ、もう店じまいだった？」
背後から掛けられた声に驚いて振り返ると、そこにはレウスシリーズを纏ったままレウスヘルムだけ脇に抱えた幼なじみ――クリュウが困ったように頬を掻きながら月明かりを背にして立っていた。
「クリュウ……」
「ひ、久しぶりだねエレナ」
怒られると思っているのだろう、クリュウはちょっと怯えながらもなるべく平静を保って笑顔を浮かべる。その微妙な表情からは彼自身のずっと村を空けていたという罪悪感が感じ取れる。
エレナは突然のクリュウの再会に驚きのあまり硬直していたが、状況を理解するとカァッと怒りが湧き上がる。問い詰めたい事はたくさんあるし、言いたい事だってたくさんある。どれだけ心配していたか、全部ブチ撒けてやりたい程、言いたい言葉はたくさんあるのだ。だが、エレナはあえてそれら全てをグッと堪えた。いつもなら感情に任せて理屈なんて関係なしに攻め立てたかもしれない。でも、冷静な部分が教えてくれる――いつもいつもそれでケンカになるのだ。
せっかくこうして彼の方から会いに来てくれたんだ。自分に怒られるのを承知で。
いつまでも、自分だって子供じゃない。そんな彼の気持ちを、しっかり理解できるだけ、エレナだって成長していた。
大人の余裕な笑みを浮かべ、怯えるクリュウに若干イラつきながらも優しく言葉を投げ掛ける。
「……とりあえず、「キャーッ！　痴漢ッ！」って叫べばいいかしら？」
「えええええェッ!?」
――表情と言動がまるで合っていない。どうやら今にも爆発しそうな怒りを無理に堪えた為、間違った方向にそれぞれ暴走してしまったらしい。まぁ、ものすごく直情的なエレナに我慢なんて高等技術をしろと言う方が無理な話なのだろう。
「冗談よ。っていうか、ずいぶんとご無沙汰だったじゃない」
とりあえず冷静さを取り戻して《冗談》という事で誤魔化すと、エ

レナは皮肉めいた事を言う。先に言っておくが本人は皮肉という意識はない。そもそも性格的に彼女に皮肉なんて回りくどい事は意識してなどできないので、これは無意識でのものだ。
一方、いきなり飛び蹴りされる事も覚悟していたクリュウは驚きを隠せない。というか驚きを通り越して恐怖しか抱いていない。人間、あまりにも強すぎる怒りってのはブチギレるを通り越して冷静になったり笑ったりするなど感情の歯車が狂ってしまうもの。クリュウはエレナの怒りが尋常じゃないものだと直感的に感じている為、彼の表情も戦慄に染まっている。
「ご、ごめん……」
搾り出すように謝罪の言葉を掛けるが、エレナは「別に謝ってもらっても困るし」と彼の必死の勇気をピシャリと拒絶する。拒絶されたクリュウはあまりの恐怖に身を縮めてしまう。それでも、今にも逃げ出したい衝動を我慢してそこに立ち続けるのは彼なりの誠意であった。彼女が怒っているのは確実に自分のせいだとわかっているから、逃げも隠れもしたくないのだ。
「あ、あの、エレナ……」
――そして、そんな彼の想いをエレナはしっかりと感じ取っていた。というか、それ以前にクリュウがそういう少年だという事は誰よりも知っている。だって、ずっと一緒にいたんだから……
エレナはふぅと深いため息を零す。クリュウはビクッと体を震わせたが、それは彼女なりの怒りの吐き出し方法だった。
本当はずっとずっと心配してたんだからドロップキック五回くらいぶち込みたいところだが――こうして彼の方からわざわざ会いに来てくれた。その事実だけで、エレナは十分だった。
「手紙くらい書いてくれても良かったんじゃないの？」
「そ、それが。手紙を出す暇がなくて……」
「ふぅん、私に手紙を書くのは全く大切な要件じゃないって事ね」
「ち、違うよッ！　そういう事じゃなくてッ！」
「冗談よ。からかってみただけ。何よそんなに慌ててるのよ」
「うぅ……」

恥ずかしそうに顔を真っ赤にして困るクリュウの姿に、ちょっとだけかわいいと思いつつエレナは彼に背を向けて看板を持ったまま酒場の中へ入ると、入口のすぐ脇にその看板を置き、苦笑しながらそっと外へ顔を出す。
「何してんのよ。さっさと入りなさい」
「え？　でももう店じまいじゃ……」
「いいわよ別に。そんな厳格に決めてる訳じゃないし。どうせあんた夕食まだなんでしょ。賄い程度だったら出してあげるわよ」
「え？　いいの？　何だか、今日のエレナ優しいね」
「う、うるさいわね。さっさと来ないと閉め出すわよ」
「ご、ごめんッ！　ちょっと待ってッ！」
クリュウは慌てて走り出した。
その後、クリュウだけではなくフィーリア、サクラ、シルフィード。それにツバメとオリガミ、リリアとアシュアなどの面々が次から次へ集まり、結局エレナの酒場から明かりが消えたのは日付が変わった後の事であった。
そして、その日の彼女の日記にはいつもと変わらない日誌の後、こう付け加えられていた。
――おかえりなさい、クリュウ――
その夜、皆が寝静まった頃クリュウは一人一階にある空室――亡くなった彼の母、アメリアの部屋にいた。
彼女が亡くなってからクリュウはこの部屋を頻繁に掃除している。ドンドルマへ養成学校に行っている時も毎年必ず一回は掃除の為に帰郷していた程だ。
この部屋はある意味では開かずの間となっている。クリュウが誰であろうと入室を許可していないからだ。フィーリア達はもちろん、幼なじみのエレナでさえ入る事は許されない。ドアには鍵を掛け、その鍵は自分の部屋にしっかり保管している。ドンドルマに行っていた間はわざわざ向こうに持って行ったほど厳重に保管している。
――誰であろうと、母との思い出を汚してほしくないというクリュウの親を想う気持ちの表れであった。

そんなアメリアの部屋の奥に置いてある胸元くらいの高さの棚。ここには生前、母が身につけていたアクセサリーや衣類などが入っている。その一番上の唯一鍵が掛けられている引き出し。クリュウは手に持っていた何本かの鍵が集まった鍵束からその鍵を選んで鍵穴に入れる。鍵を回すと、中からカチッという音がして鍵が開いた。

クリュウはそのままゆっくりと引き出しを開く。

中には箱が入っていた。平べったい、木箱だ。それを取り出し、ゆっくりと開く。中に入っているのは一つのペンダントであった。金色のチェーンが通されたある紋章が施されたペンダント。

そのペンダントに描かれているのは――王冠を被った金火竜に騎士が乗って天を翔ける姿を模したもの。

ヴィルマで知った、アルトリア王政軍国の失われた金火竜の禁忌の紋章であった。

「どうして、母さんがこの紋章を……」

母の遺品の一つにして、おそらく母が最も大切にしていたペンダント。今でもこのペンダントを片手にどこか遠い目をして空を見詰めていた母の背中を思い出す。母にとって、かけがえの無い大切な品。

なぜそれが、大国アルトリア王政軍国の失われた紋章を象っているのか。

――クリュウがその意味を知るのは、それから数ヶ月後の事であった。

第１２０話　炎を斬り裂く鎌獄将軍

ラティオ活火山。活発な火山が絶えず噴煙を噴き続け、本来は星々が煌くであろう夜空は黒く塗り潰され、地表には不気味に赤く輝く溶岩の川が流れる。ここはまさに死の大地とも言うべき過酷な場所だ。

そんな狩場の拠点（ベースキャンプ）に一隻の船が接舷した。降り立ったのは四人のハンター。クリュウ達であった。

「う、うーん……疲れたぁ。遠いねここは」

そう言いながらクリュウはすっかり固まってしまった体を伸ばす。イージス村からドンドルマまでも時間は掛かるが、ドンドルマからラティオ活火山まではさらに時間が掛かる。本当に長旅になるのだ。その結果狩場に到着したのはこうして日没後となってしまったのだ。

「……眠い」

さっきまで寝ていたサクラは何度も目を擦って目を覚まそうとしているが、いつもは凛とした隻眼もさすがに寝起きとあってはしょぼしょぼとしている。こういうサクラもまた珍しくてかわいらしい。

「うむぅ、すでにこの場所でも強い熱を感じるのぉ」

火山の方から噴いて来る熱風にツバメは感心する。自然のすごさというのは本当に人間の手には負えないほどすごい。これだけの距離でも熱風を感じるなんて、世界中どこの踏鞴（たたら）を探したって存在しないだろう。

「感心してないで準備を整えてくれ。支度ができ次第すぐに出発するぞ」

そう言ってシルフィードは船の中に詰め込まれていた道具箱を地面に置くと、その中から支給されている道具類を取り出すと四人分に分ける。支給品は地図や応急薬、携帯砥石、ペイントボール、そして火山の必需品であるクーラードリンクなどだ。他にはいくつかの弾丸が支給されているが、今回は村唯一のガンナーであるフィーリアが不参加なので関係ない。

今回の依頼はクリュウ、ツバメ、サクラ、シルフィードの剣士四人で受注している。フィーリアは単独で別任務で留守にしており、今回

はこの四人でチームを組む事になった。
シルフィードは支給品を四人に均等に分ける。ただし切れ味が最も消耗しやすい双剣使いのツバメには携帯砥石を全て渡すなど状況調節はちゃんとしている。この辺はさすがはリーダーと言った所か。
支給品を道具袋(ポーチ)の中に入れ、持参した道具も最終確認。クリュウは脱いでいたレウスヘルムを被り、準備完了。全員の支度が終わるとシルフィードは一度うなずく。そして、
「出陣じゃッ!」
「……それ、私の役目なんだが」
かくしてクリュウ、ツバメ、サクラ、シルフィードの剣士四人チームは拠点(ベースキャンプ)を後にした。
時間は少し戻って五日前、フィーリアが単独依頼で村を離れると同時にクリュウ、ツバメ、サクラ、シルフィードの四人も村を出発してドンドルマに到着した日。用事があるというツバメと別れた三人は酒場に向かうとライザが早速とばかりにクリュウ達を捕獲してある依頼を頼んで来た。それは、
「ショウグンギザミの討伐ですか?」
「そうなのよ。ラティオ活火山で新しい燃石炭が豊富に採れる鉱脈が発見されたんだけど、ちょうど今そこはショウグンギザミの縄張りになってるのよ。今まで何度か発掘隊や調査隊がそのショウグンギザミに襲われて被害が出てるの。それを何とかあなた達に討伐してほしいのよ」
ライザはそう言うと「お願い! お姉さんからの頼みを聞いて~!」をパンと手を合わせて頭を下げる。どうやら余裕っぽく振舞っているが、その実は結構切羽詰っているらしい。
「大事な任務のようだが、ならば私達ではなくてもいいだろう」
「そういう訳にもいかないのよ。ちょうど実力あるハンターがみんな出払っちゃってるのよ。本当ならこのまま帰って来るまで待つしかなかったんだけど、ちょうどいいタイミングであなた達が来てくれて助かっちゃった」
「……最悪のタイミング」

「んもう、そんな事言ってるとお姉さん怒っちゃうぞ～」
そう言ってライザはサクラにギュッと抱きつくと頬ずりする。サクラはすごく嫌がって「……放して」と何度も言うが、ライザは構わず「あぁ～ん、サクラってほんとかわい～い」とさらに強く抱きつく始末。その光景に周りにいた野郎どもが悶え苦しんでいるのはとりあえず無視しよう。
「それで？　私達に討伐任務を受けてほしいという訳か？」
「その通り！　ダメかしら？　このままじゃ私左遷されちゃうよ～」
ライザ程のギルド嬢がこれくらいの事で左遷する事は絶対にないだろうと確信しているサクラとシルフィードはこの程度では流されない。だが、人を疑う事を知らない単純お人好しのクリュウは――
「そ、そんなぁッ！　ライザさんが左遷されちゃったら困ります！」
ライザの言葉を本気で信じている様子。シルフィードは疲れたようにため息した。
ハンターとしてはそれなりに優秀だし、人望もかなり厚いクリュウ。だがこの単純というか人を疑う事を知らないかのような純粋さは何とかしてほしい彼の数少ない欠点と言えよう。まぁ、同時に長所でもあるのだが。
「シルフィ！　ライザさんの為にもこの依頼を受けようよッ！」
「……君の事だからどうせそう言うとは思っていたよ。仕方がない、引き受けるか」
諦めたように言うシルフィードの言葉に、サクラもまた仕方ないとばかりに了承した。何だかんだ言っても、実は二人も結構なお人好しなのだ。
三人が受注してくれる事になり、ライザは満面の笑みを浮かべた。
「ありがとうみんな～ッ！　やっぱり持つべきものは友達よね～！」
「……まったく、君には勝てんな。全部計算のうちなのだろう？」
「……今度クリュウを誑（たぶら）かしたら許さない」
「うふふ。何の事かしら～？　お姉さん難しい事わかんな～い」
満面の営業スマイルを炸裂させるライザを見て、サクラとシルフィードは改めてライザ・フリーシアという人間は侮れないとしっか

り頭に刻み込むのであった。
かくして、三人がラティオ活火山でのショウグンギザミ討伐依頼を受注する事になった。そこへ後から用を終えて合流したツバメが加わり、四人は一路ラティオ活火山を目指したのであった。
拠点（ベースキャンプ）を出発した一行がまず向かったのはエリア4。ここは拠点（ベースキャンプ）に隣接する溶岩の池が点在する洞窟内の空間であり、クーラードリンクなしでは普通に行動する事すらもままならない程の熱がこもった過酷な場所だ。
シルフィードを先頭に荷車を引くクリュウ、右をサクラ、左をツバメが護衛する陣形（フォーメーション）でエリアに入った四人。彼らを迎えたのは数千度の溶岩から吹き荒れる熱風。息をするだけで焼かれるような熱さが肺に襲い掛かる。クーラードリンクを飲んで熱さが和らいでいるとはいえ、そのあまりの暑さに全身から汗が噴き出す。
驚いた事に、以前バサルモス討伐の際にこのエリアには訪れた事があったがその時とはまるで地形が変わっていた。あの時は広い空間でありとても戦いやすい場所だったが、今はエリアの中央部まで溶岩の河が続いており、大きく迂回しなければならない面倒な地形になっていた。
火山は昼と夜で溶岩の噴き出す量が違う為、こうして昼夜で地形が変わってしまうそうだ。昼では絶好の決戦場であるここも、夜では比較的戦いづらい場所になってしまう。火山の恐ろしい点の一つだ。
そんな変わりやすい地形が続く火山。額に浮き出た玉のような汗を拭いながら、シルフィードは地図を確認する。
「ショウグンギザミが現れるのは比較的このような洞窟の場合が多い。それと、奴はその爪と軽量化された体で天井にへばり着く事もできる。天井を注意しながら進むぞ」
そう言うシルフィードの背にはショウグンギザミの素材を使った大剣キリサキが担がれている。そのフォルムはとても鋭いもの。これはショウグンギザミの鎌をイメージしたものらしいが、ショウグンギザミはこんな物騒なものを振り回す化け蟹らしい。

クリュウは荷車を引きながらここに来るまでにシルフィードから教わった事と学校で習った知識を合わせて考えていた。
鎌蟹とも称されるショウグンギザミはダイミョウザザミと同じく甲殻類に分類されるモンスターで、ダイミョウザザミがヤオザミのボスのように、ショウグンギザミはガミザミのボスであり、ショウグンギザミが生息するとその付近一帯にガミザミが異常発生する事が多い。ガミザミはヤオザミと同じく時折信じられないような速度でハンターを襲う事があり、特にガンナーからは狩場の天敵とも言われる厄介な相手。ショウグンギザミ戦での厄介な点の一つは、異常発生するガミザミに対する対処にもある。
ショウグンギザミもまた厄介な相手だ。盾蟹と称されるダイミョウザザミは大きな盾のような爪で叩きつけるような大振りの一撃をするのに対し、ショウグンギザミは鎌蟹という名の通り鎌状のハサミを鋭く、そして速く放って来る。しかも通常時はそうでもないが、怒り状態になると普段は折り畳んでいる本物の刃を展開させる特徴を持つのだが、この展開された時と畳まれた時とでは倍近くリーチが長くなる。それは全モンスター最長のリーチを持つとも言われ、両腕を広げると自身の倍近い範囲に一度に攻撃できる。
さらにショウグンギザミは基本的に動作は遅いのだが、ガミザミ同様突然ハンターの全力疾走よりも速い速度で襲い掛かって来る事もあり、気の抜けない相手だ。
今までの飛竜や普通のモンスターは回避重視の戦い方になるが、ショウグンギザミ相手ではどうしてもガード重視の戦いになる。今回のチームでガードができるのは大剣のシルフィードと片手剣のクリュウ。太刀のサクラと双剣のツバメはガードができない為回避主体になるが、ショウグンギザミ相手ではいつもよりも深追いはできそうにない。
シルフィードは事前の作戦会議でいつもと同じように自身がショウグンギザミに最大接近して常に肉薄して主力攻撃手兼囮役を担う事を決めている。いつもと同じくチームで最も危険と隣り合わせなのはリーダーであり最年長、経験豊富なシルフィードだ。危険ではあ

るが、これが最も効率が良くて安全な策なのだ。特に、クリュウの実力ではシルフィードがある程度負担を負わないと危ない。自分がチームの足を引っ張っている自覚はあるクリュウとしては、いつもいつもシルフィードにばかり負担を掛けてしまい申し訳ないと思っている。

だからこそ、毎回毎回なるべくシルフィードに負担を掛けないようがんばるよう心がけているのだ。

今回、シルフィードはいつもと同じくリオソウルシリーズにレッドピアスで武器はキリサキ、サクラは凛シリーズに鬼神斬破刀、ツバメはフルフルDシリーズにサイクロン、そしてクリュウはレウスシリーズにデスパライズをそれぞれ装備している。

ショウグンギザミの弱点属性は雷。この中で雷属性の武器を持っているのはサクラだけだ。クリュウもゲリョスを倒した事でフルフルの電気袋と組み合わせたサンダーベインという雷属性の片手剣を先日作成したが、攻撃力も属性攻撃力も大した事ないという事で今回はデスパライズで代用する事になった。

荷車には大タル爆弾G四発と小タル爆弾G五発、打ち上げタル爆弾G十発を搭載。シビレ罠は各自一個ずつで四つ、回復薬やこんがり肉などは各自で持っている。比較的道具類は多めだ。これは落とし穴が効かないショウグンギザミを警戒してクリュウが多めに道具を発注したからである。

地図を片手に先導するシルフィードに続くように、クリュウ達が続く。そんな中ツバメは荷車に満載された爆弾類を見て呆れ半分感心半分という感じでため息した。

「クリュウ、お主は本当に爆弾を多用しておるのじゃな」

「そっかな？　普通だと思うけど」

「この量を見て普通と言い切れるとはのぉ……」

ツバメは今までの自分の手法とは大きく違うクリュウ達の狩りの手法に戸惑いながらも、郷に入れば郷に従えという言葉通り早く慣れようと努力していた。だが爆弾を使うにしても爆弾メインの戦いにはなかなか慣れないものだ。

最初の頃は自分も同じ気持ちで戸惑っていた。今のツバメの姿と昔の自分を重ね合わせ、シルフィードは小さく微笑んだ。もっとも、比較的まだ爆弾をサブとして使っていた頃からの付き合いであるサクラは気にした様子はなかったが。

一行は溶岩の河を迂回するような形でエリア内を進む。だが、それを遮るようにエリアには五匹のガミザミが点在していた。うち二匹がこちらに気づいたらしく、鎌を振り上げて威嚇している。それを見てツバメがサイクロンを構えた。

「このまま突っ切るのは難しいのぉ。ここはワシに任せてお主達は先に行っててくれ」

「……待って」

そう言って離脱しようとするツバメのフルフルDメイルをサクラが無造作に引っ張った。フード状のフルフルDメイルを引っ張られた結果、ツバメは首を締められた。

「ゲホゴホッ！　な、何をするんじゃッ!?」

「……わざわざ突っ込む必要はない。このまま無視して進めばいい」

「じゃが、この距離なら奴らが本気で走ればあっと言う間に……」

「……その時に迎撃すればいいだけ。それに、これがあれば足止めは十分できる」

そう言ってサクラが手にしたのは音爆弾であった。炸裂すると閃光玉が眩い光を放つのに対して人間には無害でも音に敏感なモンスターならめまいを起こす程の高周波を発する道具だ。

「……ガミザミは硬い殻に覆われている分、音爆弾の肉質無視の衝撃には弱い。これをぶつければめまいを起こして足止めできる」

「そういう事だ。殿はサクラに任して先を急ぐぞ」

そう言ってシルフィードは地図を片手にしながら足早にエリアを突っ切る。それを追うようにクリュウ、ツバメ、サクラの順で続く。一行を追うように二匹のガミザミが追いかけて来るが、その速度は遅い。一匹が通常時とは比べものにならないような速度で追撃して来たが、殿を務めるサクラに呆気なく斬り殺された。

一行は無事にエリア４を抜け、隣のエリア３へと移った。ここもま

た昼間とは違って溶岩の池が少し中央部まで侵食している。エリアに入った一行を出迎えたのは、またしてもガミザミの群れであった。これにはさすがのシルフィードも足を止める。
「ここは突っ切るのは難しそうだな。仕方がない、各自散開してガミザミを各個撃破するぞ」
シルフィードの指示に従い、全員でガミザミ掃討に向かう。クリュウもまた荷車を岩陰に置いてからデスパライズの柄を握りながらガミザミの群れに突っ込んだ。
まずクリュウは目の前にいるガミザミに狙いを定め、デスパライズを引き抜くと同時に斬り掛かった。その一撃はガミザミの殻に命中したが、そこは思った以上に硬く、弾かれる事はなかったが十分な一撃とはならなかった。
クリュウの先制攻撃に対し、ガミザミは両方の鎌を正面に構えて押し出すように斬り掛かって来た。クリュウはそれをバックステップで回避すると、攻撃モーションの後にできる一瞬の隙を突いて今度はガミザミの脚、それも関節部分に向かってデスパライズを叩き込んだ。全身を硬い岩のような甲殻で守っているバサルモスであっても関節部分は数少ない弱点となる。同じように、ガミザミもまた関節部分には薄い殻しかなかった為容易く一撃が入った。しかもそのまま脚を切断。ガミザミは仰け反った。
すかさず今度はガミザミの顔面に向かってデスパライズを叩き込む。ガミザミは反撃とばかりに片方の鎌を横薙ぎに振るうが、クリュウはそれを盾を使って受け流すとがら空きの顔面に再びデスパライズを叩き込んだ。この一撃にガミザミの頭部は砕け、紫色の血が噴き出してぐったりとその場に倒れた。
「後ろじゃクリュウッ！」
ガミザミを一匹倒したと同時に掛けられたツバメの声にクリュウはとっさに横へ転がった。先程まで自分がいた場所を見ると、そこにはもう一匹のガミザミが鎌を振るい終えた体勢でいた。どうやら全速力で背後から襲い掛かって来たらしい。
再びデスパライズを構えた時、現れたガミザミの背後からツバメが

駆け寄り、ガミザミに二本の剣を連続して叩き込んだ。容赦のない連撃にガミザミは鎌を投げ出すようにして倒れた。
　ガミザミが死んだ事を確認すると、ツバメはサイクロンを背に戻す。そこへ自身もデスパライズを腰に戻したクリュウが近寄る。
「さっきはありがとツバメ」
「礼には及ばん、元々このガミザミはワシが攻撃していたのじゃからな。むしろ阻止できなかったワシには責任がある。すまんかったのぉ」
「ううん。後ろを警戒してなかった僕も悪いんだし。声を掛けてもらったのでチャラって事で」
「クリュウ……」
　早速手を合わせてガミザミから鎌蟹の小殻やとがった爪、ザザミソなどを丁寧に剥ぎ取るクリュウ。そんな彼の後姿を見詰め、ツバメは小さく微笑んだ。
　そこへ他のガミザミを片付けたシルフィードとサクラが戻って来た。二人とも無傷で余裕の勝利だったという事を物語るかのように表情は涼しげなものだ。
「そういえば、ワシらは今どこを目指しておるんじゃ？」
「エリア6及び7だ。ここは比較的ショウグンギザミが姿を現しやすい」
「なるほどのぉ」
　ガミザミの群れを掃討したクリュウ達は再び陣形（フォーメーション）を組むと安全になったエリアをゆっくりと進み始める。だが、油断ならない。ショウグンギザミは火山の岩盤をも突き破って土の中を移動するモンスター。突然足元から襲われる事だってないとは言い切れないし、ショウグンギザミまでいかなくてもガミザミもまた地中に潜んでいる場合が多い。知らずに上を通り、突然下から襲われるなんて火山ではよくある事だ。
　先頭を歩くシルフィードには背後に続くクリュウ達の為にもガミザミが潜んでいない事を確認しながら進む。ガミザミといえど肺呼吸には変わりないので、地面に潜んでいても呼吸するたびに土が吹き

上がるのが特徴だ。それを注意深く見ながら歩きつつ先導する。
先頭を歩くというのはもしも見つけられなかった場合はシルフィード一人が襲われる形になる。そういう意味でも、先頭と言うのは大変な役目なのだ。だからこそ、リーダーである彼女が自ら前に出ているのだ。
クリュウはそんな危険な役目を務めるシルフィードの背中を、やはり頼もしげに見詰める。
改めて思うが、本当に彼女が仲間になってくれて良かった。信頼という面ではフィーリアやサクラだって同じくらいに信頼している。時間が長いというのもあってか若干フィーリアに対する信頼の方が大きいが、それでも同じくらいだ。
だが、頼れるという面ではシルフィードは秀でている。自分より年上でいつもみんなを的確に指揮して戦闘を行い、尚且つ常に死線に身を置いて皆を庇いながらチーム随一の強烈無比な一撃を叩き込む。最も危険な役回りではあるが、彼女にしか出来ない芸当。その上自分が危機に陥った時は身を挺して助けてくれたり、本当に頼りになる。
彼女が仲間になってくれて、本当に良かった。彼女がリーダーを引き受けてからは、狩りもずいぶん安定している。正直フィーリアは助言や支援は得意だが指揮は苦手だし、サクラは指揮なんて全く出来ない。作戦方針全てが《強襲撃破》の四文字で片付くほどだ。自分は指揮なんて論外。その為三人パーティーの時はいつも不安定な戦いだった。それが彼女が指揮してくれるようになってからは驚くくらいチームは安定した。
本当に、彼女には頼ってばかりで申し訳なく思いつつも、頼れるその背中に少しでも追いつきたいという目標でもあり、最高の司令塔（リーダー）だと思う。
クリュウのキラキラとした瞳に見詰められている事に気づいているのか、シルフィードの頬が赤く染まっていた。ただしそれは溶岩に照らされているからかの判別は出来ないが。
じっとシルフィードの方ばかり見ているクリュウに、右側を護衛しているサクラは若干不機嫌だ。せっかくクリュウとの狩りだという

のに、今回クリュウが話しているのはシルフィードやツバメばかり。そりゃシルフィードは自分と違って頼れるし助言だってうまいし――胸も大きいし。ツバメとは仲がいいのは良く知っている――美少女だし。

――なぜだろう、考えれば考える程追い詰められているような気がする。

ただ、クリュウは大きな胸には興味がないとこの前言っていた――ただし、平原のようにペッタンコが好みだそうだ。自分は、同年代の子に比べて若干だが小ぶりだ。正直な話、年下のフィーリアにも劣る。ただ、それをもってしてもペッタンコには程遠い。シルフィードが大山、フィーリアが山なら自分は丘だ。平原ではない。

思わぬクリュウの好みの暴露、正直まだ引きずっている……

「どうしたのじゃサクラ？　気分でも悪いのか？」

自分を心配しているのか、反対側を守るツバメが声を掛けてきた。振り向くと、愛らしい瞳でこちらを心配そうに見詰めている。本当にツバメは心優しいし、いい友人だとは思う――だが、今のサクラにとっては最大の恋敵。その憎しみは全てツバメの真っ平らな胸一点に注がれる。

「な、何じゃ？　なぜワシの胸をそんな親の仇を見るような目で見詰めるのじゃ？」

「……死ねばいいのに」

「なぜじゃッ!?　なぜいきなり友達からそのような発言をされなければならんのじゃッ!?」

クリュウが隻眼萌えなら苦労しないのにと、本気で思うサクラであった……

背後で何事か騒いでいる二人を注意しようとクリュウが振り返ろうとした時、コツンと頭に何かが降ってきた。足を止めて見ると、コロコロと小石というか岩の欠片が転がっている。

「どうしたクリュウ？」

突然足を止めたクリュウを不審に思って振り返ったシルフィードの問いを無視し、クリュウは小石を見詰める。そして、それが降って

来た天井を見上げ、絶句した。
――そこには黒い岩に覆われた天井では異色の純白の竜の顔が張り付いていた。そこまで頭が理解した時、クリュウは走り出すと同時に叫んだ。
「ショウグンギザミ直上ッ！　散開してッ！」
クリュウの叫びに三人は直上を確認。そしてすぐに状況を理解して散開した。そこへ一瞬遅れて天井から奴が降って来た。
細く鋭い六本の足でしっかりとその身を支える、全体的に鋭い印象を受ける青い巨大蟹。ギシギシと軋むような音を立てながら槍のように鋭いハサミを構え、無機質な黒玉状の瞳で辺りを見回す。背には自らの何倍の大きさを持つ鎧竜グラビモスの頭殻を背負い、ダイミョウザザミと同じく弱点を隠している。
溶岩から発せられる赤い光に照らされる長い爪に身軽な体、そして鎧竜の頭殻。まさに死角などないとも言いたげな風貌を持つ奴の名前は――鎌蟹ショウグンギザミ。
クリュウは急いで荷車を壁際まで運んでから戦線に向かう。その時にはすでにサクラがチーム随一の俊足でショウグンギザミに向かって突貫していた。
サクラは姿勢をできる限り低くして風の抵抗を最小限にし、恐るべき速度で突進。そんな彼女を迎撃するようにショウグンギザミはハサミを横薙ぎに振るうが、サクラはさらに加速してハサミが振るわれる直前に突破。ハサミは虚空を切り裂く。一気にショウグンギザミの懐に入り込んだサクラは背に納刀していた鬼神斬破刀を引き抜き、目の前の細い脚に向かって叩き込む。狙いは関節部分。クリュウの持つ片手剣よりは重量はあるが、かといってシルフィードの大剣のように力任せの破壊力はない。大剣が叩き潰す武器なら、太刀は斬る武器。大剣と太刀は似て非なる武器なのだ。
関節部分に向かって刀を振るうと同時に刀身から電流が迸る。
「キシャアッ！」
サクラの攻撃に対し、すぐさまショウグンギザミは標的をサクラに絞って反撃を開始する。鎌を振るってサクラを吹き飛ばそうとする

が、すでにサクラはそのリーチから脱出している。深追いはせず、一撃一撃を確実に入れるのがショウグンギザミとの正しい戦い方だと熟知しているのだ。
一方、サクラの突撃に対しシルフィードも遅れて突撃する。その時にはサクラがうまく立ち回り、ショウグンギザミの背後をシルフィードに向けさせていた。個人プレーが多いサクラだが、ちゃんちチーム戦での戦い方もわかっている。シルフィードは万能なサクラの実力に感謝しながら接近。完全に自分に気づいていないショウグンギザミの背後――グラビモスの頭殻に突撃。背負ったキリサキを引き抜き、収納されていた刃をスライドさせて展開し、突撃の勢いと自慢の腕力を融合させて豪快に大剣を頭殻に向かって叩き落す。
「うおおおぉぉぉッ！」
今まで幾多のモンスターの大打撃を与えてきたシルフィードの強烈な一撃。クリュウとサクラはその威力を信頼し、ショウグンギザミが怯む瞬間を待つ――だが、その期待は鉄同士をぶつけるような鋭い音と共に弾かれた。
「くぅッ！」
シルフィード必殺の叩き斬り。しかし振り下ろされたキリサキはグラビモスの頭殻に弾かれてしまった。全力で振るった分その衝撃もまた大きい。手が痺れ、シルフィードは思わずキリサキを離してしまった。
「しまったッ」
キリサキは地面に突き刺さる。さらに間が悪い事に弾かれたとはいえその衝撃は大きかったのだろう。ショウグンギザミはヒラヒラと逃げ回るサクラではなく一瞬動きの鈍ったシルフィードを標的に変えた。シルフィードはすぐに反応し、キリサキの回収を諦めてバックステップで距離を置く。直後、一瞬前までシルフィードがいた場所にショウグンギザミのハサミが振るわれる。
攻撃を回避したシルフィードを追うようにショウグンギザミはハサミを高々と掲げながら蟹特有の横歩きでシルフィードを追う。シルフィードは急いで逃げ、サクラがそれを阻止するようにショウグン

ギザミの背後から猛攻撃を浴びせるが、ショウグンギザミは止まらない。その時、クリュウが動いた。
シルフィードを追いかけるショウグンギザミの正面に突っ込むと、鎌を掲げたことで無防備になっている顔面に向かって引き抜いたデスパライズをアッパーの如く打ち上げ、叩き込んだ。思わぬ顔面への一撃を喰らい、ショウグンギザミは怯み脚を止めた。そこへツバメも合流し、動きの止まったショウグンギザミに向かって二本の剣を突き刺すように前に放ち、腕を広げる要領で斬り裂く。
「せいやぁッ！」
続けて左剣を斬り上げ、右剣を斬り落とし、振り抜いた右剣を今度は体を使って回転するように逆向きに斬り上げ、続けて回転の勢いを載せた左剣も斬り上げ、最後に大剣を相手に向かって叩き込むような動きで重ねた両方の剣を身を捻りながら一気に叩き込む。その流れるような動きでわずかな間に複数の攻撃を炸裂させる。
容赦のないツバメの連続攻撃に再び動き出したショウグンギザミは彼に向かって体を向き直す。だがそこへサクラが脚に向かって横薙ぎの一閃を振るう。電流が迸り、火花が爆ぜる。この攻撃でショウグンギザミは再びサクラの方へ振り返る。サクラに向かってその長いハサミを叩き付けるが、サクラはそれを後方に退避して回避。鈍い音と共に地面が砕け、ハサミは軽く減り込んでいた。
地面からハサミを引き抜くと、ショウグンギザミはまるで周りから群がってくる敵に嫌気が差したかのように、ハサミを左右に大きく広げてその場で回転する。突然の全包囲攻撃にすでに範囲外に移動していたサクラとツバメに対し、接近していたシルフィードとクリュウはそれぞれ盾を構えてガードする。だが少し押されながらも耐え抜いたシルフィードに対し、クリュウはその小さな盾と体格では堪え切れず後ろに吹き飛ばされた。
「クリュウッ！」
すぐにツバメはクリュウとショウグンギザミの間に割り込んでショウグンギザミの追撃を阻止する構えを取る。だがそれよいも一瞬早くサクラが再びショウグンギザミに接近。がら空きの脚に向

かってこれまで溜めて来た練気を一気に解放し、気刃斬りを炸裂させる。双剣の乱舞に続く手数、大剣の一撃にも引けを取らない太刀の気刃斬り攻撃。猛烈な連続斬りの嵐はショウグンギザミの細い脚に向かって容赦なく叩き込まれる。その絶大な威力の前に、ショウグンギザミは耐え切れずに脚を折って横倒しに倒れた。

「見事だサクラッ！」

そう叫ぶと同時に走り出し、シルフィードは悶えながら必死に起き上がろうとするショウグンギザミのがら空きとなった顔面の前に立つと、キリサキを背負うように構える。グッと足を固定し、体中の力を全てこの一撃に込めるように力を溜めていく。そして、ショウグンギザミがようやく起き上がった瞬間、

「うおおおおおぉぉぉぉぉッ！」

全身に蓄えられた力を全て一気に解放。キリサキを振り上げ、そしてそこから全身の力と重力を重ねて一気に叩き落す。その破壊力抜群の一撃は寸分狂わずショウグンギザミの顔面に激突。ショウグンギザミは悲鳴を上げ、口から大量の灰色の血を吐き出した。

「ギシャアアアアアッ！」

刹那、ショウグンギザミが口から大量の泡を吹きながら怒号を上げて今まで折り畳んでいた本当の鎌を展開させた――怒り状態になったのだ。

クリュウは怒り状態になった事で広げられたショウグンギザミが鎌蟹と呼ばれる由縁となった真の姿を見て息を呑む。

「何だよあのバカげたリーチは……」

広げられた鎌はそれこそ最初に振るっていたハサミと同じくらいの長さがある。要するに、ショウグンギザミは今までの二倍近いリーチを持つ事になった。それはつまり、よりクリュウ達が危険に晒されるという事だ。

想像以上のリーチの長さに絶句するクリュウに対し、サクラはまるでそんな事関係ないとばかりに再び姿勢を低くして突貫する。だがそう何度もショウグンギザミだって同じ手は喰わない。

目の前のショウグンギザミだけを視界に捉え、猛烈な勢いで突貫す

るサクラ――だが、突如ショウグンギザミはその視界から消えた。
「……え？」
「サクラ後ろッ！」
クリュウの悲鳴に驚いて振り返ると、そこにはさっきまで前方にいたはずのショウグンギザミが今まさに振り上げた鎌を振り下ろそうと立っていた。
「……ッ!?」
そして、ショウグンギザミは容赦なくその鎌をサクラに向かって叩き込む。サクラの真骨頂である突貫は防御を捨てた一点突破の突撃攻撃。想定外の出来事にサクラは逃げる事もできず、その一撃を腹部に受けて吹き飛ばされた。
「サクラぁッ！」
吹き飛ばされたサクラはクリュウの横と突き抜け、地面に叩き落されゴロゴロと転がって止まる。すぐにクリュウがサクラの所に走り、シルフィードとツバメは急いでショウグンギザミの足止めに走る。
地面に倒れたサクラはハサミを受けた腹部を押さえながら激しく咳き込んでいる。幸い、凛シリーズの強固な防御力のおかげで斬れる事なく出血はしていなかったが、それでも激痛が彼女の腹部を襲う。
「サクラッ！　大丈夫ッ!?」
駆け寄ったクリュウはすぐにサクラを抱き起こす。サクラの腕を自分の肩に回し、ぐったりとしている彼女の体を支える。いるもは凛と鋭い彼女の隻眼が、今は痛みを堪えるかのように苦しげに細まっていた。
「サクラ、平気？」
「……だい……じょうぶよ……」
とりあえず、すぐに戦闘を再開できるような状態ではなかった。クリュウは一時撤退を考え、シルフィードにその旨を知らせようと振り返り――絶句した。
「くぬぅッ!?」
「がはッ!?」
ショウグンギザミの回転攻撃に、シルフィードはガードするも吹き

飛ばされ、ガードのできないツバメはその一撃をもろに受けて吹き飛ばされる。地面に叩き付けられて悶えるツバメと、ガードしたとはいえ全身に猛烈な負担を受けて膝をつくシルフィード。

クリュウの目の前で、仲間達が危険な状態となっていた。

そして、まるで無力な敵をあざ笑うかのように、その中心でショウグンギザミはその長い鎌を振り上げて余裕を見せている。

――鎌蟹ショウグンギザミ。それはクリュウが今まで経験した大型モンスターの中で最も厄介な相手であった。

第１２１話　炎の戦場　変幻自在の死鎌

全身を襲う激痛に耐えながら、ツバメはすぐに回復薬を飲み干した。一本では足りず、もう一本飲み干して何とか体力だけは一撃を受ける前程には回復する。そして、彼のフルフルＤシリーズは広域化＋２が付いているので彼が回復した分だけエリア内にいる他のメンバー、クリュウとシルフィード、そしてサクラもまた体力を回復した。

ツバメの広域化の恩恵を受けたサクラは「……平気。一人で立てる」とつぶやくように言ってクリュウの肩から離れた。だが、まだ少し足元がフラついており、すぐの戦線復帰はやはり無理そうだ。それを遠目に確認したシルフィードは腰の道具袋（ポーチ）からペイントボールを取り出すと、それをショウグンギザミに向けて投げる。これでしばらくはショウグンギザミを見失う事はないだろう。

「全員エリア２へ退避だッ！　急げッ！」

シルフィードの指示に従い、クリュウ、サクラ、ツバメの三人はエリア２へと繋がる道へと走る。するとまるでそれを追いかけるようにショウグンギザミが鎌を前に向けたまま走り出す。だがその眼前にシルフィードが割り込む。

「行かせるかッ！」

背負ったキリサキを引き抜くと同時に体全体を回転させるようにして横薙ぎに振るう。足元にいきなり強烈な一撃を受けたショウグンギザミはその場で急停止し、自身へ攻撃して来たシルフィードに向かって鎌を振り下ろす。シルフィードはそれをガードするも、重々しい一撃に少しばかり後退する。全身が痛むような衝撃に苦悶の表情を浮かべながらシルフィードが振り返ると、すでにサクラとツバメがエリアを脱出するのが見えた。だが、クリュウだけはこちらに向かって走って来る。

「クリュウッ!?　バカッ！　逃げろといったはずだッ！」

「逃げるならシルフィも一緒だよッ！」

シルフィードの怒号に対し、クリュウもまた怒鳴る。そしてそのままクリュウはショウグンギザミの横からデスパライズを叩き込んだ。

空気に触れて発光する麻痺毒が迸る。こうして何度も繰り返し手入れば、いずれは麻痺状態にする事ができる。だが、今はその時ではない――それに、すでに手は打っている。
クリュウの攻撃に対しショウグンギザミはすかさず標的を彼に変える。慌ててシルフィードが再び自分に意識を集中させようとするが、クリュウがそれを制止する。
「いいからッ！　シルフィは荷車を引っ張ってエリア４へ走ってッ！」
クリュウはそう叫ぶと同時に後ろに向かって走り出す。ちょうど、さっき二人が脱出したエリア２へ繋がる道の方角だ。同時にそれはエリア４へ続く道とは正反対になる。シルフィードは一瞬躊躇したが、クリュウの指示に従ってすぐに岩陰に置いてあった荷車を押してエリア４へと走る。
「クリュウ……」
シルフィードの視線の先で、クリュウはショウグンギザミを誘導するようにエリア２へと続く道へ走っていた。そして、シルフィードは気づいた。次の瞬間、ショウグンギザミは突如脚を止めてその場で痙攣を始めた。その足元には、電流迸るシビレ罠が設置されている。
クリュウはショウグンギザミがシビレ罠に掛かった事を確認すると、そのまま一気に攻勢に出る。このシビレ罠はシルフィードが安全圏にまで脱出できる為の時間稼ぎとして使った。だが、貴重なシビレ罠をただそれだけの為に使うのはもったいない。クリュウはできる限りダメージを蓄積させようと必死にデスパライズをショウグンギザミの脚の関節部分に向かって集中的に叩き込む。
そして、いつもの間隔でその場を離れると、急いでシルフィードを追いかけるように走り出す。その間もショウグンギザミはシビレ罠に掛かったままだ。
ショウグンギザミはどういう訳か他のモンスターに比べてシビレ罠での拘束時間が長い。それこそリオレウスの倍近い時間拘束ができるのだ。今回、全員がシビレ罠を携帯しているのはショウグンギザミに対してシビレ罠が重要なキーアイテムになるからであった。

「クリュウ、君という奴は……」
「シルフィッ！　このままエリア４へ逃げるよッ！」
「……わかったッ」
　クリュウもまた後ろから荷車を押し、二人は急いで元来たエリア４へと脱出する。
　二人が無事にエリアを脱すると同時にシビレ罠が爆ぜ、ショウグンギザミは再び動き出す。だが、すでにその時にはエリアには彼以外に動くものはガミザミ一匹たりともいなかった……
　エリア４へと脱出した二人はそのまま元来た道を戻るようにしてエリア４を抜けて拠点（ベースキャンプ）へと戻った。天幕（テント）の前にはすでにエリア２へと脱出し、そのままエリア１を経由して先に戻っていたツバメが立っていた。
「ツバメッ！　大丈夫だった？」
「ワシは何とかのぉ。じゃが、サクラが今はベッドで休息しておる」
　ツバメが指差す先では、サクラがこちらに背を向けるようにしてベッドで横になっているのが見えた。あのサクラがこうしてダウンしてしまうとは、思いの外ダメージが大きかったのかもしれない。クリュウはすぐにベッドに横たわるサクラに駆け寄る。
「サクラ、大丈夫……？」
　声を掛けると、サクラはゆっくりと起き上がった。乱れた髪を整え、いつものように凛とした輝きを持つ隻眼で彼を見詰め返す。その表情は少しだけ辛そうに見える。
「……平気。ちょっとお腹痛いだけだから、問題はない」
「そっか……、あんまり無理はしないでね」
「……善処する」
　クリュウはサクラの容態が比較的安全だとわかるとほっと胸を撫で下ろした。ショウグンギザミのハサミの直撃を受けてこれだけのダメージで済んだのは、彼女の纏っている凛シリーズの優れた防御力もあるが、とっさに勢いを受け流そうと鎌が振るわれる方向に向かってジャンプした彼女のずば抜けた動体視力と反射神経のおかげだ。
　シルフィードは相変わらず並外れているサクラの運動神経に感嘆

すると同時に彼女が無事だった事にこっそりと胸を撫で下ろす。横に立つツバメはそんなシルフィードの姿に小さく微笑んでいた。
「休んでいる所すまないが、改めて作戦会議を開くぞ」
　真剣な表情に戻ったシルフィードの言葉にクリュウ達は一斉に彼女の方を見る。それらの視線を一身に受けながらシルフィードは作戦会議を始める。
「まず、今回のショウグンギザミだが私が今まで相手にして来たタイプとは違う」
「え、そうなの？」
「殻を見ただろう？　ショウグンギザミはダイミョウザザミと違い決まった殻を持つ訳ではない。竜骨と呼ばれる何らかのモンスターの骨を被る時もあるし、太古に存在した巨大巻貝の殻を背負っている事もある。私が今まで相手にしたのはこの二種類だ。だが、今回の奴は違う。クリュウも見ただろう？」
「……鎧竜、グラビモスの頭殻を背負ってた」
「そうだ。先程上げた二種類とは違い、鎧竜の頭殻を背負ったショウグンギザミは天井にへばり付いて水ブレスを放てるようになる。全員、奴が天井に登ったら注意するように」
　シルフィードの注意に対しクリュウ達はうなずく。そもそも今回はフィーリアというガンナーがいないのでショウグンギザミが天井に登ってしまったらその間はこちらは一切手が出ない。唯一打ち上げタル爆弾Gだけが攻撃手段となるが、水ブレスを放ってくるとなると真下に立つのはかなりのリスクを背負う事になるだろう。
　シルフィードにとっては初めて戦うショウグンギザミのタイプ、他の三人に関してはショウグンギザミの討伐経験すらない。
「サクラ、君ほどの実力ならショウグンギザミの討伐くらいしていそうだが、本当にないのか？」
　シルフィードの問いかけに対し、サクラはこくりとうなずく。
「……火山は商隊の護衛でよく来るけど、だいたいイーオスが相手。悪くてもバサルモスくらいだった」
　シルフィードやフィーリアは主に討伐依頼が来るのに対し、護衛の

女神と称されるサクラはその異名の通り護衛依頼が多い。その為サクラはどちらかと言えば大型モンスターよりも小型モンスターを相手にする方が適しているのだ。彼女必殺の突貫は、元々小型モンスターに商隊が包囲された時、縦横無尽に動き回って対象を守るのに特化した技の派生。

太刀という防御を捨てた超攻撃型の武器、そして彼女の防御を捨てた突貫を主力とする攻撃スタイル。全てが護衛の為に最も適した手段であった。

シルフィードはサクラの返答に対し「そうか……」と小さな声で返すと、改めて真剣な表情を浮かべて皆に向き直る。

「くどいようだが、もう一度言っておく。今回の狩猟には大きく分けて三つの難点がある。一つは、ショウグンギザミには落とし穴も閃光玉も通じない事。なので、動きを止める事ができるのはクリュウのデスパライズによる麻痺と、シビレ罠だけだ。ショウグンギザミはシビレ罠での拘束時間が長い為、これが主な足止めとなる。ただ、今回持参した四つのシビレ罠のうち、すでに一つは私とクリュウが脱出する際にクリュウのを使ってしまった為、残るは三つだ」

「ごめんね、僕の勝手な判断で貴重なシビレ罠を一つ失っちゃって」

「構わんよ。それでお主達二人が無事だったのじゃ。お主の判断は間違いではないぞ」

貴重なシビレ罠を独断で使ってしまった事に多少の罪悪感を感じていたクリュウに対し、ツバメは心から彼のとっさの判断を賞賛する。そんなツバメの優しい言葉に対し、クリュウは「ありがとう」と笑顔で返す。

「心配するな。一応予備としてトラップツールとゲネポスの麻痺牙が二つずつあるから、最大あと五つのシビレ罠が使用可能だ」

シルフィードもまたクリュウを気遣うようにフォローを入れる。サクラも、さりげなくクリュウの手を握っている。

「続いて二つ目だが、ショウグンギザミは基本的に常に動き回るモンスターだという事だ。その為、クリュウの得意とする爆弾攻撃はシビレ罠の最中、もしくは先に設置して相手を誘導し、ペイントボールな

どで爆破するしかない。ガンナーのフィーリアがいれば銃撃で爆破できるが、今回はそれができない」
「だから用意の時に今回は爆弾は頼りにならないなんて言ってたんだね」
「そういう事だ。そして三つ目、これは今回のチームが全員剣士、つまりガンナーのいない剣士のみのチームだという事だ。いつもならフィーリアという優秀なガンナーが後方から頼もしい援護をしてくれるのだが、今回彼女は欠席だ。ショウグンギザミの最大の弱点は殻を割った柔らかい肉質。次に口だ。フィーリアならその口に向かって猛烈な集中砲火を浴びせて我々を援護してくれただろう。だが、今回はそれができない。つまり、我々剣士だけでショウグンギザミの強固な甲殻を粉砕しながら常に接近した状態で戦わなければならないという事。今までガンナーの援護に慣れていただけ、今回は戦い方にも大きく影響するだろう」
　シルフィードの説明を聞きながら、クリュウは改めてガンナーの、強いてはフィーリアの重要性を再認識していた。確かに剣士組の誰かが危険に陥った場合、すぐさまフィーリアは猛烈な集中攻撃でモンスターの注意を自分に向けさせて回復や体勢を立て直す隙を作ってくれる。剣士にはできない、ガンナーだからこその見事な援護を彼女はいつも行ってくれていた――そして、今回はそんな彼女が欠席なのだ。
「確かに、フィーリアがいないのは結構キツイよね」
「回復ならワシに任せておけ。お主らが危険に陥ったらすぐに回復薬を飲んで回復するぞ」
　少し自信を失うクリュウを励ますように、ツバメは満面の笑みを浮かべながら堂々と言う。確かに、彼のフィーリアをも上回る広域化＋2のスキルはチーム戦において絶大な援護になるだろう。その点では皆ツバメの援護を期待している。
「戦法の基本方針は変わらない。私が最前線で奴を引きつけるので、他の三人は一撃離脱を主軸に攻撃をしてほしい。無理はするな。ショウグンギザミのリーチは今まで戦ってきたどんなモンスターよ

りも広い。深追いし過ぎれば先程のようにチームが壊滅的打撃を受ける事になる。ツバメも鬼人化と乱舞はあまり多用しないように」
「わかっておる。乱舞は一ヶ所に留まる事になるからのぉ」
ツバメは心得たとしっかりとうなずく。続けてシルフィードはクリュウとサクラの方へ向き直る。
「君達はいつものように機動力を活かして相手を撹乱しつつ主力として遊撃に徹してくれ。ただしショウグンギザミ相手では死角も少ないから無理はするな。常に余裕を持って行動するように」
「わかった」
「……了解」
その時、シルフィードの鼻がピクリと動いた。彼女だけではなく、その場にいる全員が狩場の方へと振り返る。
「……どうやら、ショウグンギザミは移動したようだな」
「この位置からして……エリア6だね」
「火山のさらに奥まった場所、火口付近じゃな……」
エリア6はツバメが言った通り火口付近にある洞窟内のエリアで、先程のエリア3や4よりも奥にあるエリア5、火口を見下ろせるエリア8、火口から少し外れた場所にある平地のエリア7の三ヶ所に繋がる分岐路的な場所。比較的広いエリアなので戦いやすい場所でもある。
「良し。奴が気まぐれで移動してしまう前にエリア6へ急行するぞ」
シルフィードはそう言うと有言実行とばかりに歩き出す。残る三人はそんなシルフィードを追うように歩き出す。すると、その途中でシルフィードが振り返った。
「サクラ、あまり無理はするなよ。何だったら一時的とはいえ私達三人で戦うが」
先程ショウグンギザミの攻撃を受けたサクラを気遣うようにシルフィードは言う。シルフィードはクリュウと違ってサクラの微妙な表情を読み取るという特殊能力がない為に彼女の具合がわからない。なので、一応の確認であった。
シルフィードの問い掛けに対し、サクラは「……問題ない」と一言

だけでしか返さない。だが、それだけでは本当に平気なのか無理をしているのかはやっぱりわからない。なので、
「大丈夫だよシルフィ。別に無理してるとかじゃなくて、もう本当に大丈夫みたいだから」
助けを求めるようにクリュウを見ると、彼は笑顔でそう断言した。サクラの真意を探るには一度クリュウを通してからが一番手っ取り早く正確だ。改めてこの二人の他のメンバーとは違う絆というものを感じさせられる――ちょっとだけ羨ましい。
「そうか。では、君達の活躍を期待しているぞ」
「出陣じゃッ！」
「……だから、それは私のセリフなのだが」
微妙に噛み合わないながらも、ショウグンギザミとの再戦に向けて拠点（ベースキャンプ）から出発する一行。その眼前には噴煙で星すらも見えない夜空に怪しく輝く溶岩の明かりに照らされた死の大地、ラティオ活火山が広がっている。
エリア６に到着した一行はすぐにその場にいたショウグンギザミに殺到。四人の剣士による総攻撃を仕掛けた。
ショウグンギザミの正面に立って勇ましい雄叫びを上げながら巨大な蒼剣、キリサキを豪快に振るうシルフィード。振り下ろそうとしていたショウグンギザミのハサミごと吹き飛ばし、その強烈な一撃は見事にショウグンギザミの側頭部に炸裂。さすがのショウグンギザミもこの一撃にはハサミを投げ出して倒れる。
シルフィードが作った隙を突いて、他の三人も一斉攻撃する。右はクリュウが、左はサクラが、そして後方からはツバメがそれぞれ攻撃している。
クリュウはショウグンギザミの脚の関節部分を狙ってデスパライズを一心不乱に振るう。数撃に一度弾ける麻痺毒の光。すでに何回も毒を流し込んでいるので、そろそろ麻痺状態になるはず。使い慣れた武器だけあっておおよその見当はつく。
一方、反対側のサクラもまた豪快と繊細が交わった神がかり的な猛攻撃を行っている。斬り下げ、突き、斬り上げ、振り抜き。攻撃の種

類自体は少なくとも、それらの技が目にも留まらぬ速さで繰り広げられている。その速度は双剣の手数にも引けを取らず、無数の攻撃の嵐に付加属性の雷が迸り、彼女の周りにはまばゆい光と火花が飛び散っている。さらに斬れば斬るほどに練気が溜まり、力が満ち溢れる。呼吸のリズムをしっかりと確保し、自分の一撃が最大の威力を発揮するリズムでしっかりと確実にダメージを与えていく。狙いは関節部分、それを射ぬくサクラの隻眼はいつにも増して鋭く輝いている。

そして後方、正確には右斜め後ろという位置で同じく関節部分を狙ってサイクロンを振るうツバメ。双剣特有のまるで踊っているかのような流れを重視した動きで次々に剣を振るい、呼吸と動きを正確に連動させて自分のリズムで剣撃を放つ。二つの剣から放たれる全武器最速の連撃は次々に狙う関節部分に向けて振り下ろされ、傷を生み、灰色の血が飛び散る。

四人の猛烈な攻撃の嵐に、ショウグンギザミは必死になって起き上がろうともがく。だが、ようやく起き上がった直後、今度は正体不明の痺れによって全く動けなくなってしまう。クリュウのデスパライズによる麻痺状態だ。

「いいぞクリュウッ！」

シルフィードは絶妙のタイミングでのクリュウが起こした麻痺に感謝し、すぐにそのチャンスを活かすように麻痺で動けないショウグンギザミの正面でキリサキを背負うように構えて力を溜める。

そして、この麻痺状態に二人の本気が炸裂する。

「……はあああああぁぁぁぁぁッ！」

雄叫びを上げ、サクラは全身に満ち溢れる練気を一気に解放。猛烈な剣撃の嵐――気刃斬りを炸裂させる。

豪快にして繊細で、滑らかで鋭く、そして速く。サクラはその場に自身を固定して全身を使って猛烈な剣撃を浴びせる。電撃が迸り、灰色の血が飛び散り、刀が震える。太刀必殺の気刃斬りの速さは全武器でもトップクラスだが、そこにサクラの速さが加わる事でその剣撃の速度は双剣の乱舞にも匹敵する猛攻撃となる。

両腕の力を限界にまで高めて横薙ぎに刀を振るい、そのままの勢い

で振り上げ、そして一気に振り落とす。
「……チェストオオオオオオオオオッ！」
今までで最大の稲妻が迸り、雷を纏った鬼神斬破刀がショウグンギザミの脚の甲殻の一部を砕き飛ばした。サクラはそのまますぐに横薙ぎに刀を振るいながら後ろにジャンプして詰まった間合いを元に戻す。自身の限界を超えるような剣撃の嵐に息が乱れ、全身は火山の熱気も相まって汗に濡れる。その腕にしっかりと握られた鬼神斬破刀はバチバチと火花を迸らせている。辺りには溶岩の高熱によって気流が乱れて風が吹き荒れている。その風に、サクラの黒く艶やかな長髪が妖艶に揺れる。
「乾坤一擲（けんこんいってき）ッ！　この機は逃さんぞッ！　鬼人化じゃぁッ！」
ツバメは力強く叫ぶと両腕を掲げてサイクロンを交差させる。その瞬間――彼の纏う雰囲気が一変する。
かわいらしい瞳はまるで刃物のように鋭くなり、表情も険しくなる。纏うのは殺気。目の前の《敵》を殺戮する事だけを考え、唸りを上げて歯軋りをする。それはまるで、本物のモンスターのよう。人間が他の生物と違うのは理性というものがあるという点が大きいが、鬼人化はその理性という名のリミッターを解除して闘争本能だけに特化させた、まさに本物のモンスターのような状態だ。
「うおおおおおおぉぉぉぉぉッ！」
遠吠えをするように怒号を辺りに轟かせ、ツバメは姿勢をグッと低くしてそのままの体勢で地面を蹴って跳躍。それはまさに弾丸のような突貫だ。突撃の中にも臨機応変に対応できるサクラの突貫とは違う、まさに真っ直ぐ突っ込む事だけに特化した究極の突貫。
投げ出されているショウグンギザミの脚に向かって、ツバメは雄叫びを上げながら無数の斬撃を繰り出す。目にも留まらぬ速さで次々に繰り出される剣撃の嵐。我武者羅（がむしゃら）に見えて、実は正確に狙った場所――関節部分に向かってひたすらに攻撃を続けている。ギリギリの所で理性で自身をコントロールする、鬼人化の最も難しい技術だ。

猛烈な勢いで剣撃を叩き込むサクラとツバメに対し、シルフィードは力と神経を集中させ、溜めに溜めた力を一気に解放。大剣の重量と彼女の腕力、重力などを組み合わせた強烈な一撃をショウグンギザミの弱点の一つ、口に向かって叩き込む。その一撃でショウグンギザミの口の周辺の甲殻の一部が粉々に吹き飛んだ。
猛烈な剣撃の嵐を叩き込むサクラとツバメ、一撃に全力を注ぐシルフィード。そして、
「うりゃあッ！」
軸足を中心に体自体を回転させ、握ったデスパライズを水平に滑らせるようにショウグンギザミの関節部分に叩き込む。その瞬間、刃の先端に仕込まれたゲネポスの麻痺毒が空気に触れて目映く爆ぜた。
クリュウは自身が生み出した隙を無駄にしない為にも必死になってショウグンギザミに食いついて剣を振るい続ける。常に動き回るショウグンギザミ相手ではこの機会は絶対に逃せないチャンスなのだ。
だが、ショウグンギザミだっていつまでもやられてばかりではない。体内で信じられないような速度で麻痺毒に対する抗体を作り出して毒を解毒し、自身を縛りつけていた麻痺という名の鎖を断ち切る。その間、わずか十秒。
「ギシャアッ！」
ショウグンギザミが麻痺から脱すると同時に四人はそれまでの猛攻撃を中断して一気に後退する。
麻痺の間、一方的に猛攻撃を受けた事でショウグンギザミは口から泡を吹き出し、収納していた鎌を展開させて怒り出す。これで再びクリュウ達の不利なショウグンギザミの圧倒的なリーチが復活した事になる。自然と、先程よりも全員の緊張や警戒心が高まる。あの長くなったリーチの脅威は先程体験したばかりだ。
「リーチの違いに気をつけろッ！　来るぞッ！」
シルフィードが叫ぶと同時に、ショウグンギザミは鎌を振り上げて彼女に迫る。その速度はサクラが一撃を受けた時と同等の高速。シルフィードはあまりの速度に回避を諦めてすぐさまキリサキを横に

構えてガードの体勢を取る。
ショウグンギザミは動かぬシルフィードに向かってその長く凶悪な鋭さの鎌を無機質に振り下ろす。鎌と剣がぶつかった瞬間、鋭い金属音が響き、シルフィードが大きく後退した。何とかガードで耐え切ったものの、その威力は衝撃となって彼女の全身を襲う。
「くッ……」
強烈な衝撃にガクッと膝を落とすシルフィード。すぐさまクリュウ達が動き出す。
「こっちだカニ野郎ッ！」
そう叫び、クリュウは腰にぶら下げていた小タル爆弾Ｇを一発ショウグンギザミに向かって投擲する。小タル爆弾Ｇはショウグンギザミの側頭部に当たり、直後に爆発した。
小タル爆弾Ｇの威力は決して高い訳ではないが、それでも今までにない攻撃方法にショウグンギザミは狙いをシルフィードからクリュウに変え、彼に襲いかかる。
「シャアッ」
ショウグンギザミは怒り状態で長くなったリーチを生かし、鎌を横に広げて自身の倍以上の範囲を攻撃範囲としてクリュウに突進。クリュウは迫り来る圧倒的な圧迫感に耐えつつ、右の鎌の下に飛び込むようにしてこれを回避した。一度地面を転がった後、すぐに起き上がって背を見せるショウグンギザミに襲いかかる。それよりも早く猛烈な勢いでサクラが突貫する。
だが、クリュウを追い抜いて真っ先にショウグンギザミに襲いかかったサクラの鬼神斬破刀の刃先が届く寸前、突如ショウグンギザミは鎌を激しく動かして硬い地面を堀り始める。そしてそのまま信じられないような速度でショウグンギザミは地面の中に姿を消した。
地面に潜る。それは真下から狙われるという危険状態になった事を意味する。
「全員散開しろッ！　急げッ！」
シルフィードの怒号の指示に、クリュウ達三人はすぐさまお互い被らないようにバラバラな方向へと走り出す。

エリア８へ続く道は増加した溶岩によって道を塞がれてしまっている。クリュウはそちらの方向に向かって走っていた。
全速力で走りながらも、クリュウは足下のわずかな震動を感じた。次の瞬間、背後から二本の鎌が硬い地面を突き破って出現。あと数歩分遅かったら、自分はあの鎌で斬り殺されていたかもしれない。そんな恐怖に嫌な汗を掻きながらもクリュウはそのまま走り抜けてショウグンギザミから距離を取る。
クリュウを襲う事に失敗したショウグンギザミは気にした様子もなく次の獲物を求めてすぐさま地面の中に潜ってしまう。再び、誰が狙われるかがわからなくなった。
数秒後、今度はサクラの背後にショウグンギザミの鎌が現れて彼女に襲い掛かった。しかしサクラはこれを逃げ切るように回避した。再び、ショウギンギザミは地面に潜る。
「ぬおッ!?」
ショウグンギザミは今度はツバメの正面に現れて鎌で襲い掛かった。この先回り的な攻撃に対しツバメは横へ体を投げ出すように回避。ショウグンギザミは再び地面の中に潜った。しかしすぐにまた同じ場所に鎌を振り上げながら現れ、今度は潜る事なくそのまま地面の上に這い上がった。
地面に現れたショウグンギザミに対し地面を二転して立ち上がったばかりのツバメが襲い掛かる。だがショウグンギザミはそんなツバメの動きを牽制するように鎌を振るい、ツバメは近づけない。しかし逆方向から今度はサクラが必殺の突貫をし掛ける。
ショウグンギザミの背後にサクラが襲い掛かる。鬼神斬破刀を槍の如く構え、突貫の勢いを殺さぬまま突きの一撃を繰り出す。
関節部分を狙った一撃だったが、寸前でショウグンギザミが動いた為にズレ、甲殻の部分に刀身が命中して弾かれてしまった。しかしサクラはすぐに足を突き立てて急停止し、最後の勢いを乗せて腕と体を旋回させ、猛烈な回転斬りを炸裂。切れ味の鋭さとサクラの技術が加わったその一撃はショウグンギザミの外した関節部分に命中し、灰色の血と付加属性の雷が迸る。

遅れてショウグンギザミの左側に突撃したのはシルフィード。がら空きの脚部分に向かって横薙ぎにキリサキを振り抜く。その重量級の一撃に対しショウグンギザミはバランスを崩して横倒しに倒れた。

「このチャンスを生かさなきゃッ！」

倒れたショウグンギザミに向かってクリュウもまた駆け寄ってデスパライズを振るう。迸る麻痺毒の光を物ともせず、幾多のモンスターを粉砕して来た相棒、デスパライズをショウグンギザミに向かって全力で叩き込む。

クリュウが、サクラが、シルフィードが、ツバメが。剣士四人が殺到し、ショウグンギザミに向かって猛攻撃を浴びせる。だが、ショウグンギザミだって一方的にやられている訳ではない。すぐに起き上がってその長いリーチを誇る鎌を振るって四人を斬り殺そうとするが、寸前で脱した四人は紙一重でそれを回避する。

ショウグンギザミを囲むように四人は包囲網を縮める。しかしショウグンギザミはその包囲網を脱出するように再び地中へと姿を消す。すぐさま四人は散開して地中から狙われるのを避ける為に走り出す。

狙われたのはサクラ。姿勢を低くして猛烈な勢いで翔ける彼女の目の前に鎌を振り上げるが、サクラはそれをずば抜けた身体能力を発揮して跳躍。ショウグンギザミの両鎌の間を通り抜けるような神業的な動きで回避した。

サクラへの攻撃を失敗したショウグンギザミは今度は深追いする事もなくその場で地中から這い上がって来た。その間に隙を突いてシルフィードがシビレ罠をし掛ける。

「シビレ罠をし掛けたッ！　こっちへ来いッ！」

シルフィードの指示に従い、クリュウ達は一斉に彼女の下へと駆け寄る。その背後から、ショウグンギザミが鎌を振り上げながら追い掛けて来る。クリュウは背後から迫るショウグンギザミの気配と圧迫感に嫌な汗を流しながらシビレ罠の上を通り過ぎる。その両側にはサクラとツバメも一緒だ。

「掛かったぞッ！」
シルフィードの声に足を止めて振り返ると、まんまとシビレ罠を踏み抜いて動きを封じられたショウグンギザミがハサミを投げ出して痙攣しながらその場で拘束されている。すぐさま反転攻勢に出る。
クリュウはすぐにショウグンギザミの側面に位置を確保し、デスパライズを振るう。若干切れ味も落ちて来たが、まだまだ問題ない。むしろ今はこの数少ない攻撃の隙を無駄にせずうまく活用する事に全力を注ぐ。
攻撃方法は変わらない。ひたすらショウグンギザミの脚の関節部分に向かって剣を叩き込む。その繰り返しだ。人間とモンスターの間には埋める事のできない体格や体力の差がある。だから、モンスターを相手にした狩りは相手の体力を削ぎ取るような地道な攻撃の繰り返しとなる。それが狩りであり、ハンターだ。
ツバメも鬼人化して乱舞で、サクラは気刃斬りでひたすら攻撃を続け、シルフィードは溜め斬りからその巨大な剣を振り回すように旋回させ、再び叩きつける。
散々攻撃を叩き込んだ後、先程見たシビレ罠の拘束力を推測したクリュウが全員に指示して一斉にショウグンギザミから離れる。直後、ショウグンギザミはシビレ罠から脱した。
「ギシャァッ！」
ショウグンギザミは怒り狂ったようにその場で鎌を広げて旋回して全包囲攻撃をするが、四人はすでにその長いリーチの外に出ているので被害はない。
自分の攻撃は尽（ことごと）く失敗し、尚且つ相手からの攻撃は尽く喰らう。そんな状況から脱するように、ショウグンギザミは再び鎌を猛烈な勢いで動かして地面を掘り、そのまま地中へと消える。すぐさま四人は回避の為に散開して走り出すが、いつまで経ってもショウグンギザミは姿を現さない。だが、油断はできない。相手はこちらが油断したと同時に突然動き出すのかもしれないのだから。
エリア中を四人はそのまま走り続けるが、その後も一行に奴は姿を現さない。全員が違和感を感じ始めた頃、ようやく動きがあった。

「……逃げた」
　ショウグンギザミに付けたペイントの匂いがエリアから消えたのだ。ここで初めてクリュウ達全員は走るのをやめて歩きながら集合する。武器も収納し、最低限の緊張だけ残して無駄に入っていた力を抜く。
「ペイントの匂いは……うぅん、硫黄の匂いを混じってわかりづらいが……東からだな」
「エリア6の東は……隣のエリア7だね」
「おぉ、そこは洞窟ではなく野外だのぉ。やっと外に出られるのじゃな」
「……でもクーラードリンクは必須」
「そうだな。今のうち、全員クーラードリンクを飲んでおけ、各自切れ味の回復など準備が整い次第エリア7へと急行する」
　シルフィードの指示に従い、クリュウ達はそれぞれクーラードリンクを飲んでから切れ味の回復や携帯食料を食べて小腹を満たしたりして準備を整える。

第１２２話　砕け折れる死鎌の刃先

エリア７は流れ出した溶岩が大地の至る所に溜まった溶岩の湖のような地形のエリアだ。周りを岩壁や溶岩池に覆われているので空を飛んだり、溶岩の中を行き来したり、地面を潜れる者以外にとっては脱出口を制限される。その姿はまるで危険な闘技場のようだ。

エリアの中央には大きく突き出るような形で溶岩の河が流れている。昼は溶岩の量が少なく河の一部が冷えて人が通れるようになるのでそれなりにエリア全体を動けるが、溶岩の量が多い夜ではエリア６、エリア３それぞれへ続く道へ行く為にはエリアをぐるっと半周するような大回りをしなければならない、とても戦いづらい地形となる。しかも人間は溶岩には近づく事すらも難しいのに対し、モンスターは程度は違えど溶岩の中に入る事ができる為より不利となる。

そんなエリア７で、クリュウ達とショウグンギザミの戦闘は行われている。

「うおおおおおおおおおッ！」

雄叫びを上げながらショウグンギザミの側面から大剣を振るい落としたのはシルフィード。一瞬にして甲殻の一部を叩き潰し、勢い良く灰色の血が噴き出す。この攻撃にツバメを狙っていたショウグンギザミは彼女の方へ振り向く。

「背後がガラ空きじゃッ！」

自分への注意が逸れたと同時に、ツバメはショウグンギザミの背後で自身を軸にして回転斬りを叩き込む。

シルフィードもショウグンギザミが振り下ろしたハサミを横へ滑るように回避し、勢い余ってハサミが埋まってしまって動けずにいるショウグンギザミの側頭部に向かって豪快に振り上げるようにキリサキを叩き込む。

側頭部へ強烈な一撃を受けてショウグンギザミの体が傾く。倒れそうになる体を支えようとハサミを突き立てるが、そこへサクラが襲い掛かる。

突き立てたハサミに向かってサクラは猛烈な気刃斬りの嵐を叩き

込む。双剣の鬼人化と同じ赤い軌跡を残しながら目にも留まらぬ勢いで鬼神斬破刀を振るう。わずかな間に無数の斬撃を受け、しかもすでにかなりのダメージを受けていたハサミ。ついに……

「……チェストオオオオオオオオオッ！」

サクラ渾身の一撃。その斬撃はこれまでの攻撃の数々でわずかなヒビ割れを起こしていたハサミを真っ二つに斬り裂いた。突き立てられていたハサミはちょうど中程で切断され、辺りのその破片は散らばる。

「ギシャアアアアアッ!?」

右のハサミが砕け、これまで無機質で単調な攻撃を繰り返していたショウグンギザミが初めて絶叫を上げた。途端に残っていた左のハサミが刃を展開させて鎌へと変貌する。口からは猛烈な勢いで泡を噴き出し、纏う雰囲気も純粋な殺意へと変貌する。

その光景を見てシルフィードは小さく舌打ちした。

「しまった……、鎌が折れてしまったか……」

「え？　鎌を壊しちゃいけないの？」

隣で武器を構えていたクリュウがシルフィードの言葉に驚きの声を上げる。そんな彼の問い掛けに対しシルフィードはショウグンギザミを見詰めながら小さく首肯する。

「あぁ、鎌を片方でも折ってしまえば奴はずっと怒り状態になってしまうからな」

「そ、そうなのッ!?　それって、すごくマズくない……？」

モンスターの怒り状態は、それこその文字通り命懸けとなる。理性というリミッターが外れてしまった、ただ目の前の敵を虐殺する事だけに全力を注ぐ。それがモンスターの怒り状態だ。そんな体に無理をさせるような状態はいくらモンスターといえど常には不可能。だからこそ、怒り状態は一時的なものというのが一般的だ。しかしショウグンギザミはその自慢の鎌を壊される事によってこの常識を覆し常に怒り状態となってしまう厄介な相手なのだ。

怒り状態になりながら、鎌を折ったサクラを執拗に狙うショウグンギザミを見詰めながら、シルフィードは「いや」と前置きする。

「悪い事ばかりではない。怒り状態にはなるが、あの長いリーチが半分になるんだ。奴の右側に攻撃の重点を置けるようになるのは正直助かる。さらにもう一方を折ってしまえば、もはやあのリーチは消える。とりあえず、良くも悪くも戦局が動いた証だ」

シルフィードがそう言った直後、ショウグンギザミはその場で鎌を展開させながら旋回した。至近距離にいたツバメは体を投げ出すようにして地面に伏せてこれを回避し、サクラは折れた鎌の影響で短くなったリーチを見極め、右鎌の砕けた先端が掠めるようなギリギリの距離で回避すると、再び攻撃に転ずる。が、ショウグンギザミは彼女の剣先が届く寸前で地面に潜ってこれを回避。すぐさま四人は散開してエリアに散り散りになる。

溶岩の河を挟んで北側へと逃げたシルフィード。その足元からショウグンギザミが鎌を振り上げて現れたが、シルフィードはこれを横へ跳んで回避。失敗したショウグンギザミは再び地面の中へと消える。

次にショウグンギザミは同じく北側へと逃げていたクリュウに襲い掛かった。しかしこの一撃もクリュウは横へと回避して失敗。その後もサクラ、ツバメ、そして再びクリュウに襲い掛かったショウグンギザミだったがそれらの攻撃は尽く失敗に終わった。そして、地下から這い出して再び地面の上に現れる。そこは北側のこのエリアでは比較的広い場所。そこにはすでにクリュウとシルフィードがおり、すぐさま攻撃に転ずる。南側にいたサクラとツバメもすぐさま溶岩の河を迂回しながらも北側へと急行する。

クリュウはできる限り姿勢を低くしてショウグンギザミの懐に潜り込むと、再びショウグンギザミの脚の関節を狙ってデスパライズを叩き込む。剣先が触れた瞬間、麻痺毒が爆ぜる。しかしまだショウグンギザミは麻痺状態にならない。一度麻痺状態になるとモンスターは体内で抗体を作ってしまう為、同じ種類の毒で症状を起こす場合にはその抗体の処理能力を上回るだけの毒を流し込まないとならない。その為、一度麻痺にしたら二度目、三度目と回を重ねるごとに必要な毒の量が増えていく。それだけ、クリュウが当てなければならない攻

撃の数も上がる。
執拗に攻撃して来るクリュウに対し、ショウグンギザミは長いリーチを保っている左の鎌を振り抜くように横薙ぎに振るう。クリュウはその一撃を盾で何とか防ぎ、深追いはせずにすぐさまバックステップで距離を取る。逆にクリュウに意識を向けているショウグンギザミの意識外、がら空きの背後からシルフィードが襲い掛かる。
「でぇりゃあああぁぁぁッ！」
ショウグンギザミと同じく、シルフィードはキリサキを横薙ぎにスイングする。その剣先はショウグンギザミの脇腹付近にヒット。勢いはそれでは止まらずキリサキはそのまま甲殻の一部を砕きながら旋回。ショウグンギザミは堪らずに横倒しに倒れ込んだ。そこへサクラとツバメも合流し、シルフィードは全員を一度自分の近くへと集める。
「全員怪我はないな」
確認をするシルフィードの問い掛けに対し三人は静かにうなずく。全員汚れや掠り傷くらいならあるが、動きに支障が出るような傷はしていなかった。それを確認すると、シルフィードは再びショウグンギザミを見詰める。
「これまでの与えたダメージを見る限り、そろそろ奴も弱ってきているはずだ。最後まで気を抜かず、全力で撃破するぞ」
「わかった」
「……容赦しない」
「了解じゃ」
シルフィードの言葉に全員うなずく。そして、今まさに起き上がったショウグンギザミの方を見て再び全員が剣を構える。それに対峙するショウグンギザミもまた同じように鎌を構えてクリュウ達と向き合う。その口からは怒り状態での泡とは違う、灰色の血の混じった泡が吹き出していた――甲殻類特有の、弱っている証拠だ。
両者はそれぞれの武器を構えたまま動かない。睨み合い、どちらかが動いた瞬間に動く。言いようのない緊張感が辺りを包み、熱風が頬を撫でる。暑さとは違う汗が額や柄を握る手の平にじわりと染み出

す。
　不気味な沈黙は数秒ほどであったが、体感時間はもっと長く感じられた。その沈黙を破ったのは、ショウグンギザミの方だった。ショウグンギザミは突如鎌を振り上げると、地面に突き刺して猛烈な勢いで土を掘る。地中へ潜る気だ。その動きに誰よりも早く動いたのはチーム髄一の俊足を誇るサクラ。姿勢をできる限り低くして空気抵抗を減らして突貫。そしてショウグンギザミが完全に潜り込む寸前、サクラは道具袋（ポーチ）からペイントボールを取り出して投擲した。投げられたペイントボールは回りながら地面へと消えていくショウグンギザミが背負っているグラビモスの頭殻に命中。直後、ショウグンギザミは姿を消した。
　すぐさまクリュウ達は散開して地中からの攻撃に備えるが、全員ある程度予想はしていた。そして、ショウグンギザミはその予想通りの行動を取った。サクラが投げたペイントボールの匂いが徐々に離れ、そしてエリアから消えた。
　ショウグンギザミの気配が消えたのを確認してから、それぞれ武器を納める。シルフィードは地図を取り出すと、ペイントボールの匂いの来る方向、濃度から大凡の見当を付ける。
「エリア5……いや、3か……」
「エリア3って、ショウグンギザミに最初に出会った場所だよね？」
「あぁ、あそこは奴の脚力で天井に登れるちょうどいい地形をしている。ある意味、ショウグンギザミ相手では一番面倒な場所だな」
「つまり、自分の力が最も発揮できる場所に逃げ込んだという訳じゃな」
「……生意気ね。カニカマにしてやろうかしら」
「とりあえず、カニカマにはカニは入ってないって所にツッコミを入れておくね」
「まぁ、言い方を変えればそれだけ奴を追い詰めているという事だ。血の混じった泡を吹いていたから、奴も相当弱っているはず。ここからは奴も文字通り死力を尽くして向かって来るだろう。全員気を引き締めて当たるように」

シルフィードの忠告に対し三人はしっかりとうなずくと、それぞれの武器に砥石を当てて切れ味を直す。シルフィードもキリサキを引き抜くと砥石を当てて刃を磨く。
「それにしても、やっぱりショウグンギザミは硬いね。関節じゃないとすごく弾かれる」
念入りに刃を磨き、掲げて光に当てて輝くを確認するクリュウのつぶやきに対し、シルフィードは刃に砥石を当てながら「あぁ」と返す。
「純粋な硬さならリオレウス以上だからな。それに、変幻自在で機敏な動きをし、他のモンスターに比べて攻撃範囲が段違いに広い。ショウグンギザミが厄介なモンスターと言われているのはその超攻撃型のバトルスタイルと甲殻類ならではの堅牢な甲殻による防御力。攻守に優れている所から来ているからな」
「本当に厄介な相手なんだね」
「そうだな。だが、あともう一息だ」
「うん。それよりシルフィ、怪我とかは大丈夫？　ずっと前線にいたけど」
シルフィードは最初の宣言通り常に前線に立ってショウグンギザミと肉薄していた。それだけに最も怪我の危険性が高い。一見しただけでは怪我はないように見えるが実際は違うかもしれない。クリュウはそれを確認しているのだ。
クリュウの心配そうな問い掛けに対し、シルフィードはほんのりと頬を赤らめる。
「あ、あぁ。私は問題ない。君の方こそずいぶん危ない場面が多く見られたが」
「僕も大丈夫だよ。あははは、やっぱり危なっかしく見える？」
「あぁ、心臓が止まるかと思ったぞ」
冗談っぽく言ってはいるが、実際は本当に止まるかと思ったくらいだ。クリュウはシルフィードも顔負けなくらいに常にショウグンギザミに肉薄して攻撃を繰り返しており、振り回される鎌をギリギリで回避する姿が何度も見られた。
だが危なっかしく見えつつも、その見事な動きに彼の成長が見られ

る。昔は本当の意味で危なっかしい行動が多かったが、今はギリギリでそのラインを超えない程度の動きで戦っている。最初に出会った頃とは比べ物にならない程、彼は成長していた。その事実と実際に成長している彼の姿に、シルフィードは小さく笑う。
「あまり無理はするな。最前線は私に任せて、君は自由に動き回ってくれ」
そう言って、シルフィードは切れ味が回復したキリサキを背負ってクリュウに背を向けると同じく準備を整えたサクラと何やら打ち合わせを始める。そんな彼女の背中を見詰め、クリュウは小さくため息を零す。
「……そうじゃないんだけどなぁ」
ため息混じりにそうつぶやくと、クリュウは携帯食料を頬張った。最低限の味付けしかしていない為、あまりおいしくはない。でもいつもいつも狩場では小腹が減ればこれを食べているのでもう慣れたと思っていたが、今日のそれはいくら噛んでも一向に喉を通らなかった。
ショウグンギザミを追って一行はエリア3へと戻った。エリア内に入るとショウグンギザミはハサミを器用に動かして土の中の何かを食べていた。どうやらこちらには気づいていないようだ。シルフィードは無言で手や目の動きだけで各自に指示を飛ばすと、すぐさま戦闘態勢に入る。
シルフィードの指示に従い、まず最初に先制攻撃を仕掛けたのはサクラ。その俊足で一気にショウグンギザミとの間合いを詰めると、そのままがら空きの脚の関節に向かって鬼神斬破刀を叩き込む。刃先が激突した瞬間電流が迸り、火花が散る。突然の奇襲攻撃に対しショウグンギザミは特に驚いた様子もなくゆっくりと振り返ると、すでに長くなっている左の鎌を食事を邪魔した不届き者に対して容赦なく振るう。サクラはその一撃をしゃがみ込むようにして回避。彼女の頭上スレスレを鎌が勢い良く通り抜ける。
「サクラッ！」
クリュウも急いで駆けつけるが、その間もサクラは執拗に攻撃を続

ける。ショウグンギザミは自分の攻撃をヒラヒラと回避しながら回避後すぐさま攻撃して来るサクラにイラついているのか、滅茶苦茶に鎌を振るう。だが、それらの攻撃もサクラは器用に回避する。

横薙ぎに鎌を空振りし、がら空きになった懐にサクラが入る。そしてそのまま低くなった顔面に向かって鬼神斬破刀を叩き込む。電流が迸り、ショウグンギザミは悲鳴を上げた。

「ギシャァッ！」

怒り狂いながら、ショウグンギザミは振り上げた左鎌をサクラに向かって勢い良く振り落とす。だがサクラはそれをバク転で回避した。そして地面に鎌が埋まって身動きができなくなったショウグンギザミに向かってすぐさま反転攻撃を仕掛ける。

そんな猛烈な勢いで剣撃の嵐を叩き込むサクラに、シルフィードとツバメは呆気に取られていた。

「……な、何じゃあの人並み外れた運動神経は」

「ある意味、彼女がモンスターだな」

自分達の出番はないのではないかと本気で思ってしまう程、サクラの活躍は目覚しかった。そこへクリュウが合流し、サクラを狙って自分には気づいていないショウグンギザミの側面からデスパライズを叩き込んだ。麻痺毒が迸り、ショウグンギザミもようやくクリュウの存在に気づいて振り返る。だが、そうすると今度はサクラが背後から猛烈な気刃斬りを炸裂させ、ショウグンギザミを翻弄する。そこへ遅れてシルフィードとツバメも合流し、ショウグンギザミを包囲するように剣士四人が総攻撃を仕掛ける。

シルフィードが常にショウグンギザミの正面に立って引きつけ、残る三人が正面以外の場所から攻撃を行う。当然シルフィードの危険度は高いが、シルフィードはショウグンギザミの攻撃を避けたりガードしたりでうまく立ち回っている。そんな彼女の奮戦ぶりを横目に、クリュウはデスパライズを叩き込む。すると、再びショウグンギザミは麻痺状態となってその場で動けなくなった。

「や、やったぁッ！」

「良くやったぞクリュウッ！」

シルフィードはクリュウにそう激励を飛ばすと、すぐさまこのチャンスを逃すまいとショウグンギザミの正面で剣を背負うような構えのまま力を溜める。他のメンバーも同じく、ツバメは鬼人化して乱舞、サクラは気刃斬り、クリュウも全力で剣を振るっている。そして、シルフィードも全力を込めて強烈な溜め斬りを叩き込んだ。

「ギシャアアアアアッ!?」

四人の猛攻撃にようやく麻痺状態を脱したショウグンギザミが悲鳴を上げる。そしてそのまま逃げるようにしてグッと姿勢を低くして力を溜め、勢い良く飛び上がった。

「なッ!?」

驚くクリュウの視線の先で、ショウグンギザミは天井にへばり付いている。

「全員散開ッ！　ショウグンギザミの真下に入るなッ！」

シルフィードの怒号に三人は急いで離れる。直後、そんなシルフィードに向かってショウグンギザミはグラビモスの頭殻の口の部分を開く。その光景にシルフィードは慌ててその場から離脱する。直後、グラビモスの頭殻の口の中から猛烈な勢いで高圧水流が噴き出した。一直線にそれはシルフィードのすぐ背後の地面に激突した。硬い岩盤が砕け、粉々に吹き飛ぶ光景に、その威力の絶大さを見せつけられる。高温の地面で水がすぐさま蒸発し、辺りは白い水蒸気で包まれる。

「シルフィッ！」

白い水蒸気の中に姿を消したシルフィードの姿を探しながら、クリュウは彼女の名前を叫ぶ。すると、目の前の水蒸気の壁の向こうからシルフィードが走って来た。

「シルフィ、無事だったんだね」

彼女の無事な姿を見てクリュウはほっと胸を撫で下ろす。シルフィードはそんなクリュウの姿に小さく微笑むと、「あぁ、少し危なかったが何とかな」と無事だとアピールする。

「気を抜くでないぞ。まだ奴は健在じゃ」

ツバメはそう言って鋭い視線を前方に注ぐ。水蒸気の壁で見えな

いが、そこには必ずショウグンギザミがいる。ペイントの匂いだけではなく、気配でそれを感じる。
　しばらくして溶岩から吹き込む熱風が水蒸気を消し飛ばし、辺りは完全に視界が回復する。すると、そこにショウグンギザミの姿はなかった。
「奴め、どこへ行きおった」
　不安気に辺りを見回すツバメ。サクラも鋭い眼光で周囲を睨んでいる。
「ペイントの匂いに変化はない。奴はこのエリアにいるぞ」
　シルフィードもいつでもキリサキを引き抜けるように柄を握りながら辺りを見回す。そんな彼女の後ろで、クリュウは天井を見回す。さっきまでいたはずのショウグンギザミの姿がそこにはなかった。
　地上にも天井にも奴の姿はない。だとしたら、残る選択肢はただ一つ。クリュウはごくりと息を呑み、足元を見詰める。
「まさか……」
　刹那、地面から微かな振動を感じた――その瞬間、クリュウは全てを悟った。
「直下だッ！　逃げてッ！」
　次の瞬間、彼らの足元の地面が砕け、長い鎌を振り上げながらショウグンギザミが現れた。反射的に後方にジャンプしたサクラとシルフィードは無事。ツバメもギリギリで身を投げ出すようにして回避したが、完全に直上だったクリュウはそれに少し遅れた。盾を構えて槍のように突き出された鎌を何とか防いだが、その衝撃だけは防ぎ切れずクリュウは吹っ飛ばされて激しく地面に叩き付けられた。
「クリュウッ！」
　シルフィードがすぐさま彼に駆け寄ろうとするが、まるでそれを邪魔するかのようにショウグンギザミは一瞬前に再び地面に潜り、彼女の目の前に現れる。
「邪魔をするなぁッ！」
　這い出して来たショウグンギザミの顔面に向かって、シルフィードは抜刀したキリサキを叩き込む。反射的に顔面を守ろうと構えた左

鎌を粉砕し、その一撃はショウグンギザミの顔面に容赦なく炸裂。ショウグンギザミは口から大量の灰色の吐血を吐いて悶える。
代わってサクラがクリュウに駆け寄り、ツバメもすぐに回復薬を飲んで全体の回復を図る。
「……クリュウッ、平気？」
「な、何とかね……」
珍しくおどおどと慌てるサクラの姿に苦笑しながら、クリュウはゆっくりと起き上がる。地面に叩き付けられた事で全身が結構痛むが、何とかそれは顔に出さずに済んだ。ただでさえテンパってるサクラをこれ以上心配させないようがんばる所が実に彼らしい。
「……よくもクリュウを……冥界に堕とすッ」
「サクラ、セリフがものすごく怖いんだけど……」
クリュウのツッコミを無視し、サクラは血走った隻眼を不気味に輝かせながら必殺の突貫を仕掛ける。誰も寄せ付けない猛烈な一直線全力疾走。鬼神斬破刀を構え、自らを槍のように突きの一撃を放つ。だがショウグンギザミは再びジャンプして天井に逃げてその一撃を回避する。目標を見失ったサクラはそのままズシャアアアアアアッと地面にダイブした。
「さ、サクラアアアアアッ!?」
地面に倒れたサクラの姿にクリュウは顔を真っ青にして慌てて彼女に駆け寄る。まだ戦闘中だというのに、サクラの無様な姿を見てシルフィードは一人ため息を零していた。
一方、天井に登ったショウグンギザミは這うように動く。その先にはツバメ。
「ワシを狙っておるのか……それは好都合じゃ。時間稼ぎくらいならできるしのぉ」
ツバメはショウグンギザミを引き付けるように小走りでクリュウ達とは反対方向に逃げる。当然、それを追ってショウグンギザミもクリュウ達から離れた。ツバメの行動から彼の思惑を理解したシルフィードもすぐに応援の為に彼の方へと走る。その間に、彼の前でみっともない姿をさらけ出して落ち込んでいるサクラを原因のク

リュウが慌てて励ます。
ショウグンギザミはツバメを追い掛けて移動するが、ツバメはそれを器用に逃げる。そんな彼に向かってショウグンギザミは再び水ブレスを放つが、当然ツバメはこれを回避する。再び辺りに水蒸気の霧が立ち込める。
「クソッ！　これではまた見失ってしまうぞッ！」
ツバメは霧を睨みながら悔しげに叫ぶ。彼を追っていたシルフィードも霧を見詰めて眉をしかめる。だが、奇跡的に霧は下の方にだけ滞留しており、天井付近の視界は良好。幸いショウグンギザミを見失う事はなかった。その時、霧の中から突如火花を散らせながら三発の爆弾が飛翔。それらは狙い違わずショウグンギザミに命中して爆発する。
「打ち上げタル爆弾Ｇ……クリュウか」
霧の中からさらに二発の打ち上げタル爆弾Ｇが発射され、目標に命中。続けざまに五発の打ち上げタル爆弾Ｇの直撃を受けたショウグンギザミは堪らずバランスを崩して落下して霧の中に消える。すぐにその巨体が動いた事による風圧で辺りの霧が吹き飛び、視界が回復する。すると、地面に落っこちて倒れているショウグンギザミに対してサクラが猛烈な勢いで刀を振りながら襲い掛かっていた。暴れ狂う竜の如く電流が迸り、彼女の周りで爆ぜる。
ショウグンギザミは慌てて身を起こすと執拗に襲い掛かってくるサクラに短くなった左右の鎌を振るって攻撃するが、サクラはそれを再びバク転で回避する。そんな一人孤軍奮闘しているサクラから少し離れた場所ではクリュウが一人黙々と作業を行っていた。
クリュウは一人近くに隠してあった荷車から大タル爆弾Ｇ二発を取り出して設置。ショウグンギザミを見事に引きつけているサクラの様子を見ながら全ての準備を整えた。小タル爆弾Ｇ二発を掴むと、サクラの方へと走る。
「準備いいよサクラッ！」
サクラに合図を飛ばし、続けて二発の小タル爆弾Ｇのピンを抜いて連続してショウグンギザミへと投げつける。サクラはすぐさま後退

し、それを追おうとしたショウグンギザミの側面に二発の小タル爆弾Gが命中して爆発。その動きを制する。
「こっちだボロガニッ！」
クリュウの声に反応し、ショウグンギザミは振り返ってクリュウに襲い掛かる。だがクリュウはそれを回避してすぐに撤退する。それを追ってショウグンギザミも移動を始める。その先にはクリュウの用意した地雷原。
クリュウは背後からついて来るショウグンギザミの姿を確認しながら走り続け、大タル爆弾Gの間を突き抜ける。すぐさま振り返り、追い掛けて来たショウグンギザミが大タル爆弾Gの真上に到達した瞬間、道具袋（ポーチ）からペイントボールを取り出して投擲。それは狙い違わず大タル爆弾Gに命中し起爆。爆音と爆風が辺りに吹き荒れる。
盾を構えながら爆風に耐え、クリュウは前方を確認する。
「やれたかな……」
黙々と立ち上る爆煙を見詰めるクリュウ。だが、彼の予想に反して煙の中からショウグンギザミが姿を現す。全身の甲殻が所々吹き飛び、歩くたびに各所の傷口から血が噴き出してはいるが、奴はそこに堂々と立っていた。
「ダメか……ッ」
クリュウはすぐさまバックステップして距離を取る。するとショウグンギザミは突如としてその巨体からは信じられないような速度で鎌を振り上げながら横へ移動した。誰かに目標を変えたのか。クリュウは足を止めてそれを追い掛ける。だが、ショウグンギザミは弧を描くように回り込み、クリュウの背後を狙う。それに気づいたクリュウはすぐに走る方向を変えるが、すでに時遅し。背後に迫ったショウグンギザミはクリュウに向かって横薙ぎにハサミを振るう。
「くぅ……ッ！」
クリュウはその一撃を盾で防ぐも、大きく後ろに弾き飛ばされて後退する。
クリュウのピンチに対してサクラがすぐに援護に駆けつけるが、そ

の刃先が届く寸前でショウグンギザミは再びジャンプして天井に張り付く。刃先がまるで届かぬ天井に逃げたショウグンギザミを憎々しげに睨みつけ、サクラは舌打ちをしながら仕方なく距離を取る。そんな彼女の向かってショウグンギザミは水ブレスを放つ。一瞬前までいた場所の地面がすさまじい水圧で砕けるのを目撃して冷や汗を流すが、サクラは無事にその射程範囲から脱出する。

一方、ショウグンギザミの一撃で大きく後退したクリュウの下にはツバメが駆け寄った。

「大丈夫かクリュウ？」

「何とかね。ちょっと左腕が痛いけど」

「あまり一人で無理をするでない。ワシにできる事があったら何でも言うのじゃ」

ワシを頼れ。そんな想いを込めたツバメの言葉に対しクリュウは「ありがと、ツバメ」と小さくはにかむ。

「立てるか？」

「うん、ありがと」

クリュウはツバメの手を取って立ち上がると、すぐに状況を確認する。現在クリュウとツバメ、サクラとシルフィードの二組に別れ、そのちょうど真ん中くらいの場所の天井にショウグンギザミが張り付いている。打ち上げタル爆弾Gを使ってまた撃ち落そうと荷車の方へ走る。しかしショウグンギザミは彼がそれを実行するよりも先に地面に降り立った。

その背後からシルフィードが雄叫びを上げながら駆け寄る。

「どっせえええええいッ！」

振り上げ、そして叩き付けられたキリサキ。その刃先はショウグンギザミが背負っているグラビモスの頭殻に炸裂。頭殻の右目の部分に当たる場所が砕け散った。先程の大タル爆弾Gの破壊力のおかげだ。このまま叩き続ければ、いずれは強固な頭殻といえど破壊できるだろう。

血の混じった泡を吹きながら、ショウグンギザミは死に物狂いにハサミを振り回して暴れる。しかしクリュウ達はそれらの攻撃を回避

して確実に攻撃を当てていく。すでに、勝敗は決していると言っても過言ではない。だが例え最後の悪あがきだとしても、モンスターのそれはたった一撃で形勢を逆転してしまうだけの威力と危険性を伴っている。油断はできない。
「いい加減堪忍するんじゃッ！」
ショウグンギザミの右斜め後ろでツバメは鬼人化。猛烈な剣撃の嵐を叩き込む。振り返って斬り掛かろうとするショウグンギザミを妨害するように振り向こうとしたその側頭部にシルフィードのキリサキが叩き込まれる。
「シャアァッ!?」
悲鳴を上げて仰け反るショウグンギザミ。その脇腹をサクラの鬼神斬破刀が容赦なく叩き斬る。
三人の猛攻撃に完全に翻弄されるショウグンギザミ。そこへ荷車を取りに行っていたクリュウが襲い掛かる。グッと限界まで姿勢を低くしてショウグンギザミの脚元に侵入すると、事前にサクラから受け取っていたシビレ罠を設置する。それはすぐに効力を発揮し、ショウグンギザミを再三束縛する。
「今だッ！　爆弾用意ッ！」
クリュウの叫び声に首肯し、ツバメとシルフィードがすぐさま近くに引っ張り出しておいた荷車から残る大タル爆弾Ｇ二発をそれぞれ一個ずつ持って戻って来る。そしてすかさずショウグンギザミの両方のハサミの直下に設置する。
「いいぞクリュウッ！　時間がない、急げッ！」
シルフィードの声にうなずき、クリュウは先程と同じくペイントボールを取り出す。そしてグッとそれを握り締め、狙いを定める。狙うは右側の大タル爆弾Ｇ。
「喰らえッ！」
ペイントボールを全力投擲。投げられたペイントボールは寸分狂わず狙った大タル爆弾Ｇの中央部に命中。刹那、猛烈な爆発を起こした。爆音に耳を塞ぎ、爆風に飛ばされそうになるのを耐え、クリュウ達はしかししっかりとショウグンギザミから目を離さない。

巨大な黒煙が熱風に煽られて横向きに流れる。爆心地はまだ濃い煙に包まれていてショウグンギザミの状態は把握できない。
不気味な沈黙が、辺りを包む――その時、ギシギシと何かが軋む音が響いた。
「まさか……」
驚愕するクリュウの視線の先で煙が晴れる。そこには、溶岩の不気味な光に背後から照らされたショウグンギザミが立っていた。全身ボロボロで血に塗れながらも、彼はギシギシと体を軋ませながら一歩、また一歩とクリュウ達へ近づいてい来る。驚愕のあまり動けないでいるクリュウの前にキリサキを構えたシルフィードが立ち塞がる。ツバメとサクラもクリュウの左右に集まる。
ギシギシと体を軋ませながら、ショウグンギザミはゆっくりとクリュウ達に迫る。先頭に立つシルフィードは攻撃でも防御でもどちらの行動にも移行できるようキリサキを構えながら、ショウグンギザミを睨みつける。
ギシギシギシギシ……。傷口から血を噴きながら、ショウグンギザミは無機質に迫って来る。そして彼我の距離がキリサキの攻撃範囲に入り、シルフィードの瞳が鋭くなる。
――だが、そこまでだった。
そこまで歩いたショウグンギザミは突如として力を失いその場に崩れるようにして倒れた。そして、か細い声を上げると、ピクリとも動かなくなる――ひとつの命が終焉を迎えた瞬間であった。
クリュウ達は討伐したショウグンギザミから必要な素材を剥ぎ取ると、疲労感と達成感を味わいながら拠点(ベースキャンプ)へと戻った。常に熱気が立ち込めている狩場内と違い、浜辺にある拠点(ベースキャンプ)は幾分か涼しい。
「疲れたぁ～」
クリュウはそうつぶやくとレウスヘルムを脱いでペタンと砂浜の上に腰を下ろす。ヘルムから開放された新緑色の髪は汗でべっとりと濡れて肌に張り付いている。額には汗が噴き出し、頬を流れる。
このまま寝転がりたい衝動を堪えつつ、クリュウは後ろに手を突っ

張り棒のようにして空を見上げる。いつの間にか、夜は明けようとしていた。昨晩までは垂れ込めていた火山灰も今は落ち着き、空は東の方が明るくなり初めている。海風が汗を蒸発させて熱を奪ってくれる感触は気持ちがいい。
「……お疲れ様。クリュウ、タオル」
クリュウの隣にそっと腰を落とし、サクラは彼に拠点（ベースキャンプ）に置いておいたタオルを差し出す。クリュウはお礼を言ってそれを受け取ると汗を拭う。するとサクラは道具袋（ポーチ）から元気ドリンコを取り出し、それも彼に渡す。
「あ、ありがとう。気が利くね」
「……当然。私の夢はお嫁さんだから」
「へぇ、サクラをお嫁さんにできたらその人は幸せだろうなぁ」
「……」
美人なサクラをお嫁にするのは確かにある意味では勝ち組かもしれない。でも彼女の支離滅裂な性格を重々知っているクリュウとしてはそれが本当の幸せなのかは判断しかねる。一方、さりげなくアピールしたのを見事にスルーされたサクラはサクラで不満げに唇を尖らせて拗ねている。
そんな見事に咬み合っていない二人の姿を傍らで見ていたシルフィードは小さく苦笑を浮かべる。
「まったく、息が合っているのか合っていないのかわからんな、あの二人は」
「そうじゃな。狩りでは見事な連携を見せておったのにの」
「本来のチームでもあの二人はタッグで戦う事が多いからな。その辺の息は合っているさ」
「なるほどのぉ。フィーリアはクリュウを援護し、サクラはクリュウの相棒として戦い、そしてお主はクリュウに負担を掛けないように常に前線に立って戦う。うむ、まさにクリュウを中心に編成されたチームと言っても過言ではないのぉ」
「……そうだな。このチームの強い結束力は、全てクリュウを経由して成り立っている。本当に、すごい奴だよあいつは」

「そうじゃの」
いつの間にか、サクラと何やら楽しげに話しているクリュウの姿を二人は頼もしげに見詰める。彼の人を集める才能には素直に脱帽せざるを得ない。何せ、自分達もまた彼のその才能によって集まった人間なのだから。
「しかし、クリュウは本当に爆弾を多用するのじゃな」
「元々が片手剣使いだからな。狩りの効率を上げる為の方法としては間違いではない」
「確かにの。じゃが、あの爆発は……癖になるのぉ」
「……」
「……冗談じゃ。じゃから、そのような末期の重病患者を見るような目でワシを見るでない」
いつの間にかすっかり意気投合（？）している感じのツバメとシルフィードの姿にクリュウはほっとしたように安堵の息を漏らすと、ゆっくりと立ち上がった。隣ではサクラが「……クリュウ？」と不思議そうに首を傾げている。
「……いい朝日だね」
つぶやくように言ったクリュウの視線の先で、水平線の向こうからゆっくりと顔を出す朝日が静かに輝いていた……

第１２３話　加速する少女の気づかぬ想い

春が近いとはいえまだまだ朝は寒い日が続くイージス村。
朝日がすでに森の木の高さを超え、村人のほぼ全員が起きている時刻。すでに外に出て遊ぶ子供達の姿も見る事ができる、そんな時間――そのような時間になっても、未だにベッドの中に潜り続けている者が一名。
「シルフィード様ッ。もう朝はとっくに過ぎていますよッ。いい加減起きてくださいッ」
ドアを勢い良く開けて現れたのは鎧の代わりにエプロンを身につけ、手にはライトボウガンの代わりにフライパンという武具を見に纏ったフィーリア。その視線の先にはベッドがあり、膨らんだ毛布がもぞもぞと動いている。
「シルフィード様ッ。朝食もできてますから起きてくださいッ」
「……あ、あと五分だけ……」
「ダメです。あと、《じゃあ、あと五〇分》というボケもなしです」
「……あと五時間……」
「本気で怒りますよ？」
そんなやり取りをしばし続けた後、ようやくシルフィードが起き上がる。だが毛布を頭に被ったまま、無表情でぼけーっとフィーリアを見詰める。まだ頭が完全には覚醒していない証拠だ。
「あぁ……朝か……」
「もう皆さんとっくに起きていますよ。あとはシルフィード様だけです」
「そうか……」
シルフィードは「うぅ……」と眠そうに目を擦り、なぜか片手で毛布を掴みながらベッドから起きる。しかし体もまだ完全には覚醒していないのか、歩く足取りはフラフラしている。そんなシルフィードの姿にフィーリアはため息を零す。
「シルフィード様は本当に寝起きが悪いですね。顔を洗ってサッパリしてからリビングに来てくださいね」

「あ、あぁ……」
そう言い残してフィーリアは去った。残されたシルフィードはフラフラと洗面所を目指して歩き出した。
とっくに朝食を食べ終えたクリュウは一人リビングでソファに腰掛けながら訓練学校時代に使っていた教科書を読み返していた。猛勉強した名残として、教科書には様々な書き込みがされ、書き切れない分は別の紙に書いてそれを教科書に貼ったりしていたので本来の倍くらいの厚さになっており、使い込まれてすっかりボロボロになっている。
こうして時折読み返す事で知識が磐石のものになり、いざという時に役に立つ。彼の機転や奇抜なアイデアはこういう積み重ねから生まれているのだ。
今日も特に出かける用事もないクリュウは教科書を読み返している。何度も読んだ事のある文章に目を通していると、ズズゥ……と何かを引きずる音に振り返る。すると、そこには寝間着姿でなぜか毛布を引きずりながらぼーっと部屋の入口にシルフィードが立っていた。それを見てクリュウは苦笑する。
「また寝ぼけてるの？　洗面所は向こうだよ？」
「……ぅ？　そ、そぉか……」
クリュウは「仕方ないなぁ」と苦笑しながら教科書を閉じると寝ぼけているシルフィードに駆け寄る。
「連れてってあげるよ。ほら、こっちだよこっち」
寝ぼけているシルフィードを洗面所まで連れて行こうと彼女の手を引っ張るクリュウ。すると、足元が覚束ないシルフィードはバランスを崩して倒れてしまった――クリュウを巻き込んで。
「な、何事ですか――って、なななななッ!?」
大きな物音に慌てて台所から走って来たのはフィーリア。そこで彼女はその光景を見てしまい、顔を真っ赤にして狼狽する。
彼女が見た光景とは、寝ぼけたシルフィードに押し倒される形で転倒した二人。横になった事で睡魔に負けてしまいまた寝息を立てて眠り始めたシルフィードと、そんな彼女に押し倒された上に運悪く

（もしくは運良く？）シルフィードの豊満な胸の間に顔を埋めるクリュウ。何とも奇跡的な光景であった。
顔を真っ赤にし、ピクピクとこめかみを震わせるフィーリア。一度大きく深呼吸をし――キレた。
「朝から一体何してるんですかお二人はあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
清々しい朝に、少女の怒号は良く響いた……
「いっそ殺してくれ……」
朝の騒動から十数分後、完全に覚醒したシルフィードが発した第一声がそれであった。頭を抱え、リビングのテーブルに突っ伏しながら朝の自分の失態を恥じまくるシルフィード。その正面には苦笑を浮かべたクリュウが座っている。
「す、すまんクリュウ……切腹する……」
「まぁ、別に僕は気にしてないから。そんなに落ち込まなくても」
「……いや、私が気にするのだが」
「――そうですよねぇ～。クリュウ様にとってはむしろ天国のような状態ですものぉ～」
その声に振り返った瞬間、クリュウの表情はまるで怒り狂う雌火竜リオレイアを見たような戦慄一色に染まる。彼の視線の先では、シルフィードの朝食を載せたトレイを持ったフィーリアがこれ以上ないってくらいの清々しい笑顔を浮かべながら立っていた。しかし、瞳は一切笑っていないし、背後から猛烈な怒気が滲み出しており、その姿はとてもじゃないが女神やそれに類するものには見えない。
全くもって笑っていない、むしろ怒りに満ちた眼光に睨まれるクリュウは表情を強ばらせる。
「ふぃ、フィーリアさん？　目がマジなんですけど……」
「私はいつでもクリュウ様と真剣に接していますのでぇ～」
満開の笑顔を華やかせるフィーリアの迫力に、クリュウは今にも逃げ出したい衝動をグッと堪える。ここで逃げたら、後が怖過ぎる……
「シルフィード様ぁ～。朝食ですよぉ～、昨日余ったコロッケで作ったサンドイッチですけどよろしいですよねぇ～」
「まぁ、別に構わんのだが。その、コロッケと偽ってタワシというオチ

は……」
「……シルフィード様、私はそこまで鬼じゃないですよ？」
　シルフィードの中での自分の評価に愕然としつつ、フィーリアは彼女の前に昨日余ったコロッケをパンで挟んだコロッケパンと付け合せのサラダを置く。言うまでもないが決してタワシが挟まっている訳ではない。
「ある意味サクラ様が不在の時で助かりました。もしも見ていたのが私ではなくサクラ様だったら、それはもう言葉では表現できないような事態になっていたでしょうから」
「サクラの場合、それが冗談じゃ済まないから怖いよね」
　フィーリアの冗談（内容はリアル）に苦笑を浮かべるクリュウ。
　サクラとツバメは先日アシュアに整備の為に預けた武具を取りに朝早くから彼女の家に行っており現在不在である。その為、今この家にいるのはここにいる三名だけだ。
「サクラ達はいつ頃戻るか聞いてる？」
「さぁ、整備が終わっているのでしたらそろそろ戻って来てもいいはずですが。何分アシュア様もシルフィード様と同じで朝が苦手な方ですからね」
「……返す言葉もない」
「とりあえずお昼前には帰って来るよう言っておきましたので、それまでには帰って来るでしょう」
「そっか。じゃあそれまでは自由時間だね。今後の予定なんかの話し合いは午後にしよう」
　クリュウの提案にフィーリアは「わかりました」と笑顔で答えて台所へと去る。彼女の後ろ姿が見えなくなってから今度は正面でコロッケサンドを食べているシルフィードにも確認しておく。
「シルフィもそれでいいでしょ？」
「あぁ。私も整備の為にアシュアの所に武具を預けてるからな。後で取りに行くさ、朝は苦手なのでな」
「あははは……」
　何事においても完璧な頼れる姉御、シルフィード・エア。なぜかド

ジ属性がついている事とこの朝の異常な弱ささえなければ本当に完璧超人なのだろうが、このギャップが皆との親近感に一役買っているのは事実だろう。
「シルフィもサクラと同じで定期整備？」
ハンターの使う武具は文字通り自分の命を預ける存在である為、月に一回とかでプロの鍛冶職人に定期整備を頼む事をギルドは推奨している。しかし実際はイージス村のように鍛冶職人がいる村や街など少なく、大都市ドンドルマでも整備費用をケチったり忙しさから疎かにする者が多く、あまり浸透はしていない。
アシュアが自ら率先して整備を引き受けているからこその整備率の高さだ。
しかし、クリュウのその何気ない問い掛けに対し、シルフィードは「いや、ちょっとサイズを変更したくてな……」となぜか頬を赤らめ、視線を逸らしながらつぶやくとうに言う。
「サイズの変更？　身長でも伸びたの？」
「いや、伸びたというか、大きくなったというか……」
「大きくなった？」
ここで勘の鋭い人なら彼女の言う意味を理解して慌ててこの話題（じらい）を回避するのだが、残念ながらクリュウは鈍感男王決定戦全国大会優勝候補クラスに鈍感な為、全く気づいておらず純真無垢に首を傾げている。
そんなクリュウの反応に対し言うべきか言うまいか散々悩んだ末、意を決し、
「その……む、胸が……な、まだ……成長しているというか……そのぉ……」
恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながら言うシルフィード。さすがの鈍感王クリュウもこれにはわかり、同じく顔を真っ赤にさせてうつむいてしまう。
二人の間に、何とも言えない気まずい雰囲気が流れる……
――刹那、その雰囲気を嵐のような怒気が吹き飛ばした。
「へぇ～、まだ成長しているんですかぁ～。やはりおっぱい勝ち組が

違いますねぇ～。ねぇ～サクラ様ぁ～」
「……宣戦布告と見なし、ぶっ殺す」
いつの間にか背後に立っていたフィーリアと、これまたいつの間にか帰って来ていたサクラ。言わばおっぱい負け組二人の嵐のような怒気が吹き荒れる。その気配に、家の中に入りそびれたツバメが小さくため息を零した。
二人の怒気の嵐の真っ只中に取り残されたクリュウとシルフィード。それはまさに、荒れ狂う海の中に取り残された小舟のように、あっけなく潰されるのであった。
「はぁ……」
ため息を零しながらとぼとぼと村の道を歩くのはシルフィード。
半ば強引に追い出される形で家を出た彼女は、予定を大幅に早めて一人アシュアの工房へと向かっていた。
外出という事で先程までの寝間着姿ではなく、今は草色の長ズボンに白いTシャツ、その上から茶色のベストという実に彼女らしいラフな姿だ。いつもは鎧の下で押し付けられている現在も成長を続けている豊満な胸は解放された事を喜んでいるかのように歩くたびに揺れ動く。
振り返ると、まだクリュウの家が見える。今頃、彼は床に正座させられて乙女に対する気配りだとかデリカシーとか、女の子の評価は胸だけで決まる訳ではないとか、自分達はまだまだ成長する可能性があるとか、猛烈な勢いで説教されているに違いない。そんな所に彼一人残したのは心痛いが、何せ二人の目が殺気（マジ）だった以上シルフィードは逃げるしか選択肢は残されてはいなかったのだから仕方がない。
仲裁を任せたツバメが少しでもクリュウの窮地を救ってくれる事を願いながら、シルフィードは一人でアシュアの所へと向かった。
「とりあえず、あんたはもっと女の子らしい格好をするべきやな」
整備を終えた武具を受け取った後、アシュアの家でお茶をご馳走になる事になったシルフィード。淹れたての紅茶を一口飲んだ瞬間、突如アシュアが爆弾発言をぶっちゃけたのだ。

完全に不意をつかれた形のシルフィードは軽く咳き込む。
「な、何を突然……ッ」
「そないに驚く事か？」
むせるシルフィードを不思議そうに見詰めながら、アシュアは砂糖を入れた紅茶を一口飲む。
「よくわからんが、君にだけは言われたくはないぞ」
咳きがひと段落してからシルフィードはのん気に紅茶を飲んでいるアシュアを見ながら言う。
アシュアはいつもと同じく煤汚れた作業着姿だ。彼女の場合家の中だからという訳ではなく、常日頃外に出る時もこの格好だ。
シルフィードの返しに対し、アシュアは「まぁ、そうやなぁ」と苦笑を浮かべる。
「せやかてうちは毎日工房にいるんやで？　着替えなんて面倒な事せぇへんのや」
「それなら私だって」
「あかんあかん。あんたはうちと違うやろ。狩場では防具姿は仕方がない。せやけど、今はオフのはずや。なのに、何やその色気のない格好は」
そう言ってアシュアはシルフィードのラフな格好を非難する。
確かに、あのオシャレに無頓着だったサクラでさえ以前クリュウに服を買ってもらって以来オシャレに気をかけるようになったし、フィーリアは元々実に女の子らしくオシャレに命を注いでいるような熱心ぷりだった。
それに引き替えシルフィードはいつも今着ているようなラフな私服姿ばかり。ある意味以前のサクラ以上に無頓着であった。しかし、シルフィードの場合は、
「色気なんて私には不必要だ。私はとうの昔に《女》を捨てた身だ。そのような事に気をかける必要などない」
何をバカな事を、と言いたげにアシュアの発言を一蹴してしまう。
シルフィードは根っからのハンターであった。生きる為にハンターになり、そして実力をつける為にあらゆるものを犠牲にしてここ

まで力をつけてきた。その際に、自身に不利に働く《女》というハンデを捨てた。
自分はとうの昔に《女》を捨てている。だから、オシャレなど女らしい事をする必要など一切ない。それが彼女の考え方であった。
単に面倒だったからしなかったというサクラとは、根本的に原因が違うのだ。
女などとうの昔に捨てていると切り捨てるシルフィードの言葉にアシュアは苦笑を浮かべながら「そないに悲しい事言うなや」と引き留める。
「あんたええ体してるんやから。それを武器に使わんなんてもったいないやん。あんた顔もええんやからちょっとオシャレしただけでもきっとモテモテになるで」
「興味ないな」
紅茶を飲み直しながら見事に一蹴するシルフィードにアシュアは「そうバッサリと切り捨てんでも」と苦笑を浮かべる。
「ほんま、あんたも一応女の子なんやから。青春時代をそないに過ごしてたらあかんで」
アシュアのしつこい説得に対し、シルフィードは不愉快そうに眉をしかめながら紅茶を飲み干し、コトンとテーブルに置く。
「くどいぞ。私は女である前にハンターだ。そのような女々しい事に神経を割いている暇などない」
不機嫌そうに睨みつけてくるシルフィードの刃物のように鋭い眼光に臆する事なく、アシュアは苦笑を浮かべ続ける。
「女々しいって、あんた女やろ」
「言葉のあやだ。気にするな」
「……あんた、このままやとほんまに彼氏できひんで」
「だから、興味ないと何度言えば……」
「――クリュウ君にも、愛想つかれてしまうで？」
「なッ!?」
これ以上話す事はないとそろそろ帰ろうとすら思っていたシルフィードは、アシュアの何気ない一言に驚愕して動きを止める。それ

を見たアシュアは彼女に見えない角度でニヤリとほくそ笑んだ。
「まぁ、あんたがそこまで言うんならウチもこれ以上は言わんわ。好きにしぃや」
突如アシュアは《これ以上離しても無駄だ》と言いたげにそうため息混じりに言うと、硬直しているシルフィードの前に置かれたティーカップを片付けようとする。だが、その手をシルフィードが慌てて掴んだ。
「ま、待てアシュア。く、クリュウに愛想をつかれるというのは、どどど、どういう意味だ？」
「うん？　何や急に」
わかっているくせに、アシュアはニヤニヤと笑いながらとぼけた風に言う。するとシルフィードは頬を赤らめて狼狽する。
「い、いや他意はないんだが。その、チームメイトに愛想をつかされるというのは困るんだ。た、他意はないんだぞ」
「まぁ、それはわかるんやけど。何をそんなに慌ててるんや？」
ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべながらアシュアは狼狽するシルフィードをからかう。
「あ、慌ててなどいないぞ。な、何をバカな事を……ッ」
「うーん？　顔真っ赤っかやで？」
「ち、違うッ！　こ、これは風邪……そう風邪だッ！　全身に寒気がして関節が痛くてものすごい倦怠感が全身を包んでいるだけだッ！」
「……あんた、それ絶対寝てないとあかんレベルやで？」
からかった本人であるアシュアでさえシルフィードのあまりのテンパりっぷりに引いている。それに気づいたシルフィードは顔をさらにカァッと真っ赤に染める。
「うぅ、穴があったら水を注いで上に枝と枯れ葉で骨組みを作って上から土を被せたい……」
「……穴があったら入りたいやろ？　それじゃたちの悪い落とし穴や」
もはやテンパり過ぎて自分でも何を言っているかわからないのだろう。アシュアのツッコミに対しシルフィードはもうこれ以上な

いってくらいに顔を真っ赤にして涙目になる。それを見たアシュアは一言、
「……あかん、ごっつかわええやん。鼻血出そうや」
「は、話を逸らすなッ！　クリュウが愛想をつかすとは、一体どういう事だッ!?」
　頬を赤らめて鼻を押さえるアシュアにすがりつくようにシルフィード。そのかわいさに軽く悶絶しつつ、アシュアは諭すように言う。
「あのなぁ、いくら実年齢に対して明らかに精神年齢が低い子供で、女の子に対して純情で人畜無害なクリュウ君かて――」
「……それは褒めてるのか？　それともけなしているのか？」
「――男の子には変わりないんや。あの子は特に純真無垢な子やから、女子に対しても子供っぽい理想っちゅーもんくらいある」
「女子に対する理想？　好きなタイプとかそういう意味か？」
「そこまで限定的なもんやない。そうやなぁ、簡単に言えば女子と言えばおしとやかで清潔感があってかわいらしい。そんな感じの今の世の中じゃ絶滅危惧種みたいな女子を、あの子は女の子の理想の形とか思てるんやないか？」
「絶滅危惧種って……そこまで言うか？」
「あながち間違いでもあらへんのちゃうか？　あの子、ずっとあのエレナと一緒にいたんやから。おしとやかな女子に憧れを感じるのはある意味当然やと思うけど」
　確かに、クリュウは子供の頃からエレナのバイオレンスな攻撃の数々を受けていたある意味とてもかわいそうな少年である。女子＝暴力娘（エレナ）という悲惨過ぎる方程式を打破すべく、そういう理想を掲げていてもおかしくはない。何というか、クリュウは本当に世界の汚い部分に触れずに育ったかのような少年だ。
「つまり、あの子は女子に対してそんな感じの理想を持ってるって事や。ここまではわかったか？」
「まぁ、憶測の域は離れないが、確かにそう感じる節はあるのは事実だな」

「せやろ？　ほんで話を元に戻すけど、そんな理想を抱いているクリュウ君に対して、あんたの服装はどう見えると思う？」
　そこで改めてシルフィードは自分の服装を再確認してみる。白いTシャツに茶色のベスト、草色の長ズボンというラフさを最優先にした彼女の最も典型的な私服である――ただし、女の子らしさからはかけ離れている。つまり、クリュウの理想を見事に真っ向から粉砕するような格好だ。
「……絶望的だな」
　がっくりとうな垂れてそう結論づけた。
「やっと自覚したか。せやからうちはもっと女の子らしい格好しぃや言うとったのに」
　苦笑しながらそう言うアシュア。しかしその目はがっくりとうな垂れているシルフィードを温かく見詰めていた。彼女の不器用さというか天然さはよぉくわかっているつもりだし――彼女の彼女自身が気づいていない気持ちもわかっている。だからこそ、こうしてアドバイスをしているのだ。
「わ、私は一体どうすればいいのだ？」
「せやから、ちっとは女らしい格好せいやって」
　珍しく狼狽しながら問うシルフィードの姿に苦笑しつつ、アシュアは至極簡潔に答える。しかし、至極簡潔過ぎてそれではそういう事に免疫のないシルフィードに対しては全く答えになってはいない。
「女らしい格好と急に言われても……」
　シルフィードは困ったように頬を掻く。ハンターとしての知識は豊富に持っていても、とうの昔に捨てたと豪語する女らしい知識に関しては周りの女子の中で最も欠落している彼女にとっては、難問中の難問であった。そんな彼女を見て「こら難航しそうやなぁ」と苦笑を浮かべるアシュア。
「単純に言えばスカートでも穿いたらどうやって事やね」
「そ、そのようなはしたない格好をしなければならないのかッ!?」
「いや、女の子なら至極当然な格好なんやけど」
　顔を真っ赤にさせながらスカートをはしたない格好と結論付ける

シルフィードを見てずっこけるアシュア。内心、ここまでとは想定外だったようだ。気を取り直すように紅茶を淹れ直す。
「あんた、スカート穿いた事ないんか？」
「いや、両親が健在だった頃は親が用意した服を着てたからな。普通に穿いていたが……」
「ふぅん、あんたがスカート穿いてる姿なんか想像できひんなぁ」
「失礼だな。これでも子供の頃は近所でも評判の淑やかな女子だったんだぞ？」
「どれがどうしてこんな子に……」
「……キレるぞ」
　軽く怒るシルフィードに「冗談や冗談。気にするな」と笑いながら言い、「せやなぁ……」と続けながら腕を組んで思考を巡らせる。女らしい格好について全く意識していなかったシルフィードは当然そういう服は持ちあわせていないだろうし、かと言ってフィーリアやサクラではサイズが違い過ぎる。身長はもちろん、胸が大問題だ。
　そうなると……
「ウチの服ならあんたに合うんちゃうかな。身長も同じくらいだし、胸だってどっちも勝ち組やしな」
「……そのような不用意な発言は控えた方がいいぞ。フィーリアやサクラがキレるからな」
「そんなおっぱい負け組の負け惜しみの逆ギレにいちいち付き合ってたらあかんて」
「……本当に容赦無いな君は」
　感心半分呆れ半分という感じでいるシルフィードに「ちっと待っててなぁ」と言い残し、アシュアは奥へと姿を消した。その先に彼女の寝室があり、そこに彼女の常日頃あまり使われない服があるのだ。待たされている側のシルフィードはただ待つしかなく、ただただ見詰め続ける。
　しばらくして、奥の部屋から「準備できたでぇ。こっち来てぇな」と声が掛かり、シルフィードは期待と不安を胸にアシュアの待つ寝室という名の戦場へ赴いた。

「ま、待てアシュアッ！　それはいきなり過ぎるぞッ!?　世の中には段階を踏むという言葉があってだな……ッ！」
「問答無用やッ！　ページ数が迫ってるんやからここは巻きでいくでぇ～ッ！」
「君は一体何の話をしているのだッ!?」
「こっちの話やから気にするな。世の中気にしちゃあかん事がぎょーさんあるんや。これもその一つと思っといてぇな」
「あ、あぁ……」
「そんじゃ、気を取り直してドレスアップタイムやぇ～ッ」
「ま、待て待て待てッ！　やはり心の準備が――にゃあああああぁぁぁぁぁぁ……ッ!?」
　珍しく、シルフィードの年相応の無垢な悲鳴が響き渡るのであった。
「ふぃ～、完成や。ここ最近で一番の自信作やなぁ」
　額に浮かんだ汗を手の甲で拭い取り、アシュアは自慢気に完成したばかりの《作品》を見詰める。
「何か……大切なものを失った気がする……」
　ぐったりとした表情に目にはたっぷりの涙を溜めたシルフィード。その姿は先程までのオシャレのオの字もないようなものとは一変していた。
　纏うのは美しい湖をイメージさせる薄い水色のドレス。胸元を強調するように首と胸で服全体を支えるホルターネックと言われる形のドレスだ。胸元には濃い水色のリボンが結びさりげなく可憐さも残し、純白の付け袖の袖先が濃い青色の紐でリボン結びにされている所もまたかわいらしい。
　全体的にセクシーな感じだが、だからと言って大人な雰囲気を全面に押し出すのではなくあくまで健全な色気を基調としたデザインのドレス。だからこそ、純情な娘であるシルフィードに良く似合っている。ドレスに合わせていつもは結ってポニーテールにしている髪も下ろし、紫色の花を集めた花束をイメージした簪（かんざし）や銀色のチェーンにマカライト鉱石の欠片をはめ込んだネックレスなどの

アクセサリーも素敵だ。
見事に《きれいな女の子》。街を歩いていれば誰もが振り返るであろう絶世の美少女に変身したシルフィード。しかし慣れない格好が恥ずかしくて仕方がないのか、純白の肌は紅潮し、伏せている顔は熟れたシモフリトマトのように真っ赤に染まっており、依然として目は涙目のままだ。
そんな恥ずかしがりまくっているシルフィードの姿に、コーディネートしたアシュアは苦笑を浮かべる。
「そんな恥ずかしい格好かぁ？　ドンドルマならそれくらいの格好の女子ならその辺にも結構おるで？」
「そ、それはそうかもしれんが、私には合わな過ぎるぞ……」
「何言っとんねん。ムッチャ似合ってるで？」
アシュアの言うとおり、シルフィードのドレス姿はとても良く似合っている。似合っているどころかきれいという言葉では表現できないくらいに彼女は輝いている。元々こういうドレス、そもそもスカート自体も着る事はないシルフィードだからこそ、ドレス姿というのはインパクトを増すのだ。
「そ、そうか……？」
最初こそ自分のキャラじゃない格好に困惑し、恥ずかしがっていたシルフィードだったが、アシュアのお世辞ではないベタ褒めや実際に鏡の前に立ってみてようやく自分の姿に少しだけでも自信を持てたのだろう。しばらくすると伏せていた顔は何とか正面を向くようになった。ただ、未だに頬は赤く若干涙目のままだが。
「……信じられんな。私でもドレスが少しは似合うのだな」
「少し所やないで。あんたは元々の素材がええんやから余計似合っとるで」
「……き、きれいという表現が合うのか？」
「せやなぁ。ウチあんまし言葉のボキャブラリーないから在り来（きた）りな事しか言えへんけど、メッチャきれいやで？」
「そ、そうか……」
今まで《かっこいい》と言われた事はあっても《きれい》なんて言

われた事はほとんどなかったシルフィードはその言葉に自然と微笑んでしまう。その笑顔は、まるで女神のようにきれいで、でも妖精のようにかわいらしい、女の子の笑顔であった。
「こ、これならクリュウも幻滅はしないだろうか……」
「アホか。幻滅なんてありえへんし、むしろあんたの威力抜群のドレス姿にメロメロになるかもしれへんで？」
「そ、そうかぁ……？」
無意識なのだろうが、あからさまに嬉しそうに微笑むシルフィードに苦笑しながら、改めて鏡の前で自分の変身した姿に見惚れているシルフィードを見詰める。
こうして見ていると、年相応の少女にしか見えない。いつもは大人びた雰囲気を纏い、皆の頼れる姉御でいる彼女もまだ十八歳の少女。こういう楽しみもまた、必要なのだ。
過去の悲惨な出来事からそういう楽しみを封印し続けてきた彼女にも、そろそろその封印を解くべき時なのだ。
――だって、今の彼女は人並みに恋ができるようになったのだから。
「まぁ、本人にその自覚はまるでないんやけどなぁ」
思春期が始まるより前から女を捨ててしまった為、そういう感情に免疫のないシルフィードは今もなお自分の中に渦巻く《感情》に困惑しているが、いずれその《感情》は花開くだろう。その時の為に、少しでも彼女の役に立ちたかった――ただ、一人の友人として。
まぁ、フィーリアとサクラもまた友人には変わりないのであまり一人に肩入れはできないが、せめて全員が納得出来るよう全力で戦わせたい。その為に、一歩も二歩も遅れている彼女に助け舟を出しているに過ぎないのだ。
ちょっとその場で軽くポーズしてみたりするシルフィードに苦笑しつつ、アシュアはステップ２への口火を開く。
「ほな、早速その姿でクリュウ君に会いに行こうやないか」
「なッ!?」
ニヤリと不敵に笑いながらそう宣言したアシュア。そんな彼女の

爆弾発言に対しシルフィードは先程までの照れたような微笑を消し、驚愕と羞恥に表情を凍らせる。その顔は最初の時と同様に真っ赤に染まっていた。
「何を驚いとんねん。その為にわざわざドレスを着たんやないか」
「そ、それはそうだが……さ、さすがにそれは勘弁願えないか？」
今頃当初の目的を思い出し凍りつくシルフィードだったが、時すでに遅し。声を震わせながら回避を提案するが、もちろんアシュアは認めない。
「そうは問屋が卸さないでぇ？　せっかくおめかししたんやから、キッチリとクリュウ君に見したらんとなぁ」
「い、いや、全力で遠慮願いたいのだが……」
「往生際が悪いなぁ。クリュウ君もあんたのドレス姿見たいと思うんやけどなぁ～」
「……それはないだろう。クリュウは、私のようなスタイルの女性は好みではない。彼の理想は胸がペッタンコな可憐な少女なのだから」
「あんた、さりげなくクリュウ君にロリコンの烙印を押しとるなぁ。それと、それ絶対何かの誤解やと思うで？」
そんなやり取りをしている間に、彼女達の意思とは関係なく状況は確実に変化していた。
神様のイタズラか、ちょうど二人が揉めている頃家の前にはクリュウが迫っていた。いつになく疲れた表情を浮かべているのは当然フィーリアとサクラに猛烈に説教を受けた影響だ。ツバメのおかげで何とか二人の怒りをとりあえず一段落させ、今は家に帰るのも気まずいので気分転換を兼ねての散歩がてらシルフィードを追ってアシュアの家を目指していたのだ。
「……うぅ、何で二人共すっごく怒ってたんだろ。僕、何かしたかなぁ……」
世界が滅んでも彼の強烈な鈍感は直らないと言っても過言ではないクリュウは、当然二人の乙女が怒り狂った理由も検討がつかない。ただ、理由はわからないけど自分が二人を怒らせたという罪悪感だけが彼の胸に渦巻き続けている。

「シルフィに相談すれば、何かわかるかなぁ……」
　そんなこんなで何も知らないクリュウは頼れるチームリーダーを追って、その頼れる姉御がまさかのドレス姿になっているアシュアの家へと到着した。ドアの前に立ち、軽くノックする。
　そのノック音は当然中にいた二人の耳にも届く。
「何や？　客人かいな」
「こ、このタイミングで来客だとッ!?　わ、私は隠れるぞッ！」
「そないに取り乱すなや。別に家に上げたりせんで。どうせ注文の依頼か何かやろ。ちぃと待っててな」
　自身の恥ずかしい極まりない格好（本人視点）にいつもは冷静なシルフィードの取り乱す姿に苦笑しつつ、アシュアは平然と玄関まで行き、ドアを開く。
「悪いなぁ。今ちぃっと取り込んでて、注文ならまた後で――って、クリュウ君やないか」
「あ、どうも。おはようございます」
　ドアの前で待っていたクリュウは出て来たアシュアに丁寧に頭を下げてあいさつする。アシュアも手をひらひらと翻しながら「おはようさん」と笑顔で返す。
「えっと、今取り込み中でしたか？」
「うん？　あぁ、クリュウ君ならええんや」
「はぁ……」
「ほんで、シルフィードに用かいな？」
「あ、はい。まぁ、特筆して用があるという訳ではないんですが」
「ふぅん、まぁええわ。むしろグッドタイミングやでクリュウ君」
　そう言って満面の笑を浮かべてグッと親指を立てるアシュアに「は、はぁ……」と状況が呑み込めていないクリュウ。アシュアは「ええからええから、入った入った」とクリュウを招き入れる。戸惑いつつも、アシュアに手を引かれて家の中へと入るクリュウ。中に入ると、そこには誰もいなかった。ただ、ティーカップが二つテーブルの上に置いてあり、少し湯気も立っている所を見ると先程までアシュア以外の人間がいたのだろうと推測できる。

「えっと、シルフィは……」
「チッ、気配で気づきおったか。せやけど、ここはウチの城や。逃げ切れると思うなや」
「……あの、アシュアさん？　状況が全く呑み込めないのですが」
　困惑するクリュウに「ええから気にすんなや。あんたはちぃっとそこに座って待っとってなぁ」と言い残し、アシュアは奥の方へと駆け出して行った。まるで状況がわかっていないクリュウはとりあえず言われた通りに椅子に座って彼女の帰りを待つ。すると程なくして、
「放せぇッ！　私に恥を晒せと言うのかッ!?」
「今更駄々を捏ねるなや。往生際が悪いでッ！」
「放せええええええええッ！」
「……今の、シルフィの声だった……よね？」
　奥から響く仲間の悲鳴と激しい物音にクリュウが硬直していると、奥の部屋のドアが勢い良く開いてアシュアが飛び出して来た。その両手はしっかりとシルフィードの腕を握り締めている。クリュウの位置からだとまだ腕しか見えていないが、当然シルフィードは先程と同じくドレス姿だ。
　最後の攻防戦。あと一歩という所で必死に抵抗するシルフィードに業を煮やしたのか、アシュアは「堪忍せええええええッ！」と叫びながら全力で彼女を引っ張り出す。その豪快な引っ張りに負け、シルフィードがついに姿を現す。
「……ッ!?」
　その瞬間、二人の目が合った。
　クリュウの目に映ったのは、彼が知っている彼女の姿とはあまりにもかけ離れたものだった。
　水色の柔らかな、可憐なドレスを身に纏うシルフィード。長身とそのプロポーション抜群のスタイルが美しさに変わり、下ろされた白銀の長髪がドレスの蒼と神々しいコントラストを生み出す。
　――きれいだった。
　それは、おそらくクリュウが見て来た全ての女性の中で最もきれいに見えた。まるで空間全体が煌めいているのではないかと思ってし

まう程に彼女は輝いて見える。一瞬、彼女の背後に一対の純白の翼が見えたのは幻覚ではないのかもしれない。
息を呑む美しさ。だけど、恥じらうように顔を真っ赤にして狼狽えているその顔は全体の凛々しさとは違い、年相応の少女のもの――そのかわいさに、ドキッと胸がトキめいてしまう。
シルフィードのドレス姿にすっかり見惚れてしまっているクリュウに対し、当のシルフィード本人は全くもって心の準備ができていない状況で突然最も会いたくない（でも心のどこかでは最も会いたい）と思っていたクリュウを目の前にしてすっかり狼狽してしまっている。顔を真っ赤にさせ、瞳にはたっぷりの涙を溜めて狼狽えるその姿はいつもは大人びて見える彼女がまだ十八歳の少女であるという事実を思い出させる。
「い、いやあああああぁぁぁぁぁッ！」
まるで風呂場を覗かれた少女の悲鳴のような声を上げ、シルフィードはとっさに近くにあった当たったら痛いだろうなぁと確実にわかる分厚い本を全力投擲。それは見事にクリュウの顔面に直撃。当然、彼は気絶した。
倒れた彼の姿にようやく自身が仕出かした暴挙に気づき、駆け寄ってテンパりまくるシルフィード。そんな彼女と彼女の片隅で気を失って倒れているクリュウの姿を見て、アシュアは何とも言えない深いため息を零したのであった。
「す、すまない……」
本日二度目の失態にシルフィードは頭を上げる事ができない。その正面に座るクリュウは「へ、平気平気」と言いながら氷結晶と水が入った小袋を顔面に当てている。あれだけの一撃を受けてこの程度で済むのは奇跡というべきか、それとも当然と言うべきか。彼の今までの人生を振り返ると判断がつかない。
「言うておくけど、それ過剰防衛って言うんやからな？　気をつけや」
「心に刻んでおく……」
アシュアの忠告に対しても面目ないと頭を下げるシルフィード。何というか、今日は彼女にとって厄日なのかもしれない。

とりあえず、シルフィードはいつもの私服姿に戻っている。彼女らしい格好に戻ったと言えなくもないが、何というかとても残念だ。まぁ、おかげで彼女が冷静さを取り戻したのだが。
「まぁ、うちもやり過ぎた思てるし。すまんかったな、お二人さん」
「いや、君は私の為を思ってしてくれたのだから。謝るのはむしろ私の方だ。すまない」
「律儀な子やなぁ。でも、クリュウ君はほんまごめんな」
「いえ、慣れてますからこういうの」
「……慣れちゃ、あかんのやけど」
クリュウのさりげない返答に苦笑しつつ、アシュアは「待っててな。お詫びにお茶でも出したるさかい」と言い残して台所へと消えてしまう。当然、残されるのはクリュウとシルフィードの二人だ。
先程の事もあって、二人の間には何とも言えない気まずい雰囲気が流れ、双方共に沈黙してしまう。その沈黙を破ったのは、クリュウの方だった。
「えっと、シルフィ。さっきのは一体……」
「わ、忘れろッ！　全力で記憶からその忌まわしい映像を消去しろッ！　今すぐにだッ！」
バンッをテーブルを激しく叩いて叫ぶシルフィード。クリュウは「そ、そんな無茶な～ッ！」と軽く暴走しているシルフィードの剣幕にたじたじになってしまう。何というか、どちらかと言えば今日はクリュウにとっての厄日なのかもしれない。まぁ、彼の場合こういう事は日常茶飯事だから一概に厄日とは言えないのだが。
「あ、あれはアシュアが無理やり私に着せたに過ぎない。け、決して私の趣味ではないぞッ!?」
「趣味って、別に普通の事だと思うけど。何でまた突然そんな事になったのさ」
正直、彼が知っているシルフィードという少女はああいう格好をする子ではないし、本人も以前「スカートは好かん」とそういう格好になる事自体を嫌っていた。そんな彼女が突然スカートという過程をぶっ飛ばしていきなりドレス姿になるなんて、何かあるに決まってい

る。クリュウはそう結論づけていた。
　クリュウの問いかけに対し、シルフィードは沈黙する。自然と二人の間に再び沈黙が漂い始め、クリュウは慌てて発言を引っ込める。
「い、いや、別に言いたくない事情があるんだったら無理して言う必要はないんだけど……」
「……アシュアにな、もっと女らしい格好をしろと叱責されて、無理やり女装させられたのだ」
　本当はその過程には彼の存在が重要なキーになるのだが、当然そんな事言える訳もなくその部分は省略する。
「女装って……」
　シルフィードは女子なのだからそういう格好をする事自体は何の問題もないはずだが、本人にとっては女装以外の何ものでもないのだろう。シルフィードらしい言い方にクリュウは苦笑を浮かべる。
「シルフィってああいう格好は嫌いなの？」
「嫌いというか、私にはああいうフリフリした服は似合わないとわかっている。恥を晒すだけに過ぎんからな」
　先程の自分の格好を思い出したのだろう、シルフィードは恥ずかしそうに頬を赤らめながらどこか拗ねたように唇を尖らせながらつぶやく。そんな彼女を見詰めながら、クリュウは「そっかなぁ」と首を傾げる。
「さっきのシルフィ、すっごくきれいだったと思うんだけど」
「な……ッ!?」
　何気なく、心に思った事をぽろっと口に出す癖があるクリュウ。いつもいつもその無意識の言動が周りの人達（主に女子陣）を翻弄するのだが、今回も見事に炸裂した。
　クリュウの無意識の爆弾発言に対し、シルフィードは顔を真っ赤にして慌てまくる。
「ば、バカな事を言うな……ッ！」
「いや、冗談とかお世辞とかじゃなくて、本気で言ってるんだけど」
「より厄介だッ！」
「な、何で？」

クリュウは訳がわからないという感じで首を傾げ、思わぬ形でクリュウに《きれい》と言われたシルフィードは顔を真っ赤にして狼狽しまくり、喜怒哀楽の喜と怒が過剰反応してしまっている。
「わ、私はそういう事に免疫がないのだ。だから、面白半分でそういう事を言われるの非常に困るのだ」
「だから、面白半分とか冗談なんかじゃなくて、本気でそう思ったって言ってるでしょ？　さっきのシルフィは、僕が今まで会って来た女子の中で一番きれいだったと断言してもいいくらいだもん」
「だ、断言するな……ッ」
クリュウの本音だからこそ絶大な威力を発揮する褒め言葉の連撃の数々に、百戦錬磨の戦乙女シルフィードも陥落寸前となっていた。彼に背を向けて必死に平静を装ってはいるが、彼からは見えないその表情は嬉しさのあまり瞳は涙に濡れ、頬は赤らみ、無意識に笑みが浮かんでしまっている。
家族を失い、女を捨てて一人のハンターとして思春期を過ごして来たシルフィードにとってはそういう褒め言葉は全く免疫がないのだ。だからこそ過剰に反応してしまう、ある意味彼女の悲しい宿命が生んだしまった悲劇なのかもしれない。でも、だからこそ、たった一言だけでも彼女は何百万の言葉を並べられても得られない感動を得る事ができる。
たった一言で、ほんの些細な事で至極の幸せを得られる。ある意味、フィーリアやサクラなんかよりもずっと乙女なのかもしれない。
「ほ、本当か……？　本当に、私のドレス姿は似合っていたか？　い、生き恥を晒していただけでは、ないのか？」
「生き恥って……またそういう事言う。本当に本当だって、僕がこんな事でウソをつく訳がないし、つく必要もないでしょ？　かっこいいシルフィも好きだけど、ああいう女の子らしいきれいなシルフィも大好きだよ」
――大好きだよ。たったその一言だけで、シルフィードの胸いっぱいに温かい気持ちが満ち溢れる。
豊満な胸をそっと手で押さえると、まるで狩りの最中全力で走り

回っているかのように心臓が激しく動悸していた。体中が熱くなり、特に顔はお風呂に入っている時のように火照る。手で触れると、すごく熱い。
「ま、まただ。また、クリュウの言動に振り回されてしまう……。胸が熱くなって、ドキドキが止まらない……。な、何なのだこれは……」
　自分の中で渦巻く感情に戸惑いつつも、でもその胸を包みこむような温かさは嫌いではなかった。ポカポカする、この温かさは、ずっと、ずっと感じていたい、そう願ってしまう温かさ。
　背を向けながらブツブツとつぶやくシルフィードの背中を心配そうに見詰めるクリュウ。そこへ、今まで二人の会話を盗み聞きして微笑んでいたアシュアがティーセットを持って戻ってきた。
「お待ちどうなぁ～。アシュア特製のハーブティーやでぇ～」
　アシュアの登場にクリュウはほっとしたように安堵の息を漏らす。そんな彼の姿に苦笑しつつ、アシュアはリビングへと足を進める。その途中、何とか平静を取り戻そうと四苦八苦しているシルフィードの横を通り抜ける。その瞬間、シルフィードと目が合い、アシュアはにっこりと微笑むと何を言うでもなくそのまま通り過ぎる。しかし、そこで足を止める。
「――あんたが自分だけ生き残ってしまった事を負い目に感じる気持ちはわからんでもない。でもなぁ、あんたにだって人並みに幸せになる権利はあるんやないか？　あんたのご両親も、きっとそれを望んでると思うで」
　そう言い残し、今度こそシルフィードから離れてクリュウの所へと歩み寄る。クリュウと楽しげに会話しているアシュアの横顔を見詰め、シルフィードは小さく苦笑を浮かべる。
「やはり、敵わないなぁ……」
　そして、そっと自分の胸に手を当てる。ようやく落ち着きを取り戻し、心臓はゆっくりとリズムを刻んでいる。でも、まだあの温かさは消えず、胸の中に残る。この気持ちが一体何なのか、それはまだわからない。でも、この温かさは大好きだ。
「幸せ、かぁ……」

悲劇から数年間、《幸せ》という単語とは無縁で生きてきたシルフィードにとって、何が幸せなのかハッキリはわからない。でもきっと、

――この胸の温かさが、幸せというものなのだろう。

そう、信じていた……

これ以降、特筆してシルフィードが女の子らしい格好に目覚めたという事はなかった。やはり誉められたとはいえあの格好は彼女に取っては羞恥以外の何ものでもなかったのだろう。

でも、ほんの少し、アクセサリーを身に纏ったり、ちょっとだけ女の子らしい服を組み合わせてみたりと、確実に彼女には変化が起きた。

彼女が普通の女の子として幸せを得る日は、そう遠くないのかもしれない。

第１２４話　悪魔のサイレン　すれ違う想いに生まれし亀裂

　ある日の昼下がり。石造りの建物が密集する大都市ドンドルマは今日も物流の大拠点として盛んな交易が行われている。人々は自分達の目的の為に大通りを行き来している。何度も訪れ、一時期住んでいたから慣れているとはいえ、改めてその人の多さを見てクリュウは驚いてしまう。何しろ、大通りを行き来する人だけで村の人口に匹敵するだけの人がいるのだから、街全体ともなればその数はもはや想像を絶する。

　そんな大通りを感心しながら歩くのは火竜リオレウスの素材で作られた紅蓮色の防具、レウスシリーズを纏ったクリュウとその対を成す桜色の女王、リオレイア亜種の素材で作られた桜色をしたリオハートシリーズを纏ったフィーリアの二人だ。

「それにしても、やっぱりドンドルマはすごい所だね。こうやって大通りを歩いていると改めてそう思うよ」

「そうですね。何せ、大陸一の大都市ですから。大陸の物流の大拠点でもありますし、当然行き交う人や住む人の数も桁が違います」

「だよねぇ。でも、僕はこういう忙（せわ）しない大都市よりもイージス村のような小さくて静かな村の方がいいな」

「そうですね。私も静かに暮らしたいと考えるので、永住するならイージス村のような景色のいい静かな所がいいです」

「だったらずっとイージス村に住んでればいいよ。僕だって、ずっとあの村にいるんだから。ずっとずっと、一緒に狩りをしようよ」

　それはクリュウの心からの想いであった。満面の笑みを浮かべながら言う彼の言葉に、フィーリアは頬を赤らめると「はい、ずっと一緒です」と恥ずかしげにはにかんだ。

　しばしそうして二人で大通りを歩いていたが、そこでクリュウは思い出したようにフィーリアに振り返る。

「そういえば、今日フィーリアが会う予定の人ってどんな人なの？」

今日二人がこうしてドンドルマに来た目的はフィーリアの古い友人と会う為であった。数日前、彼女の両親の所を経由して来た手紙には久しぶりにドンドルマで会おうという内容が書かれていた。たまたま当時単独依頼で抜けていたサクラとシルフィードに対し非番だったクリュウを誘ってこうして二人きりでドンドルマへやって来た訳だ。

フィーリアとしては久しぶりに友人に会える事に加え、こうしてクリュウとデート（彼女視点）ができた事もありご機嫌だ。一方のクリュウもフィーリアの古い友人という人に興味があり、どんな人なのか楽しみにしていた。

「私が昔、かけだしの頃に組んでいたハンターです。武器は狩猟笛を使います」

「フィーリアが僕くらいの頃に組んでた人か。狩猟笛ってハンマーと同じ打撃系の武器だよね？

「はい。ただし、ハンマーと違い《音》で自身やパーティ全体に特殊なスキルを発動させる、いわば究極の支援武器です。支援武器と言ってもその攻撃力はハンマーに匹敵しますが」

「へぇ、狩猟笛のハンターって珍しいよね」

「そうですね。武器によって異なる音が出るので、全ての音符を覚えないとうまくスキルを発動させられませんからね。昔から彼女は記憶力は良かったですから、ある意味一番向いていた武器なのかもしれませんね」

「彼女って事は、女の子なの？」

「はい。年はクリュウ様と同じで私の一つ上になります」

という事は、現在十六歳という事か。フィーリアが昔背中を任せただけあって、きっと今では凄腕のハンターになっているに違いない――そこまで考え、久しぶりにクリュウの男としてのささやかなプライドにヒビが入った。

「それで、その人とはどこで待ち合わせしてるの？」

「酒場ですよ」

そう言って嬉しそうに彼女が指差した先には、見慣れたドンドルマ

の大衆酒場の建物が見えていた。
　大衆酒場に入ると、いつものように中には大勢のハンターでごった返していた。まだ昼頃だというのに、男達は酒を飲んで騒いでと大騒ぎだ。ハンターというのはまったくもって自由な職業だ。
　そんないつもと変わらぬ酒場の中に、異彩を放っている者がいた。ツバメと同じフルフル亜種の素材を使った桃色の防具、フルフルDシリーズを纏ったフィーリアよりも白っぽい金髪をウインドボブと呼ばれるショートカットに切り揃えた琥珀色をした少女。その傍らには同じくフルフル亜種の素材で作られた、まるでフルフル亜種の頭部をそのまま使ったかのような不気味な笛が置かれている。狩猟笛に詳しくはないクリュウにはわからないが、ブラッドフルートと呼ばれる狩猟笛だ。
　少女はぼーっと目の前に置かれている水の入ったコップを見つめたまま微動だしない。その異様な光景にクリュウが戸惑っていると、フィーリアが苦笑を浮かべながら「またあの子は……」とつぶやいた。
「ルー、こっちよこっち」
　フィーリアにルーと呼ばれた少女はぼーっとしたままこちらを向き、そしてフィーリアの姿を見つけた途端それまでの気だるそうな感じが一気に吹き飛び、パァッと満開の笑顔は咲かせる。
「フィーちゃんッ！　ひっさしぶり～ッ！」
　ブンブンと大きく両腕を振って何度もジャンプしながら大歓迎。フィーリアはそんな旧友のまるで変わっていない姿に苦笑しながら、困惑しているクリュウの手を引いて少女に駆け寄る。
「ほんと久しぶりね。二年ぶりだっけ？」
「そうだよぉッ。まったく、フィーちゃんって定住しないでいつも所在不明なんだもん。手紙出しても届かないし」
「ご、ごめんねルー」
「何謝ってんの？　あぁ、それって有名になったからの余裕？　やらしい～」
「そ、そんなんじゃないよッ。純粋に悪かったなぁって謝ってるだけで」

「冗談だよ。あはは、ムキになっちゃって、相変わらずフィーちゃんはかわいいなぁ」
「も、もうッ。からかわないでよルーッ」
「あはは、ごめ～んね」
　少女の言動にすっかり振り回されてしまっているフィーリア。だが、決して嫌がっている訳ではなく、むしろ懐かしい感じを噛みしめているように見える。
　楽しげに話し込む二人の少女の傍で、クリュウはすっかり入り込むタイミングを見失って困惑していた。というか、こんなにも肩の力を抜いて話しているフィーリアを見た事がなかった。彼の中では、フィーリアはいつも敬語を使って話すというイメージがあるからだ。
　楽しげにフィーリアと話していた少女は、そこで初めてクリュウの存在に気づいたようだ。
「フィーちゃん、そっちの彼は？」
　少女の問いにようやくフィーリアもクリュウがいた事を思い出し、慌てて彼の方に向き直る。
「す、すみませんッ」
「あ、いや、別にいいよ」
「フィーちゃん？」
　コホンと軽く咳払いし、フィーリアは改めて首を傾げる少女の方に向き直る。
「紹介するね。今私が組んでいるチームのメンバーの一人、片手剣使いのクリュウ・ルナリーフ様。ルーと同い年なんだよ」
　フィーリアの紹介にクリュウは「よ、よろしく」と少し緊張しながらあいさつする。すると、少女は「ふぅん」とクリュウを隅から隅までじっくりと観察する。その目は、明らかに警戒している目だ。
「も、もうルーッ。クリュウ様に失礼でしょッ」
「あんたがフィーちゃんの今の相棒ねぇ。何だかすごく頼りなさそう」
「ルーッ!?」
　少女の突然の失礼極まりない発言に対し驚くフィーリア。一方の

クリュウは「あははは」と苦笑を浮かべる。自覚している事とこうも見事にクリティカルに突いて来られると、反応に困るものだ。
「クリュウ様はすっごく頼りになるよッ。失礼な事言わないでよッ」
「あはははは、ごめんごめん。まぁ、フィーちゃんが認めた相手なら実力は確かだよね。うん、わかった」
一人少女は何度かうなずくと、クリュウに対峙するように立つ。
「初めましてだね。私はルーデル・シュトゥーカ。フィーリアと同じ故郷出身で、彼女が《新緑の閃光》って呼ばれる頃まで一緒にいたハンターだよ」
少女、ルーデルはよろしくぅと友好的な笑顔を浮かべる。その笑顔に、少しだけクリュウも安心する。
「よ、よろしく。クリュウ・ルナリーフです」
「よろしくねぇ。あ、先に言っておくけど――私のフィーちゃんに手を出したら、潰し殺すからね♪」
――その瞬間、一瞬にして辺りの空気が凍り付いた。
ルーデルは笑顔で言っているが、その瞳は全然笑っていない。真剣に、本気で、潰し殺すのも辞さないという意志がハッキリと燃え盛っている。
ルーデルの本気に、クリュウは本気で恐怖し硬直する。そこに慌てて顔を真っ赤にしたフィーリアが間に入る。
「る、ルーッ！　へ、変な事言わないでよぉッ！」
「変な事？　だってフィーちゃんは私のお嫁さんになるんでしょ？」
「そ、それいつの話よッ!?」
「ほんの十年くらい前の話だよ♪」
「十年は《ほんの》なんかじゃないよッ」
自分の恥ずかしい過去の話を、よりにもよってクリュウの前でされたフィーリアはもうパニック状態だ。一方クリュウは、
「えっと、フィーリアってそういう趣味の人だったの？」
仲間の予想だにしない特殊な趣味に困惑していた。どう反応すればいいか、純粋にわかりかねているのだ。逆に、その正直な反応がフィーリアには辛い。

「クリュウ様違いますよッ!?　私は至ってノーマルですッ！　こ、これは子供の頃の冗談で――」
「ひどいッ！　フィーちゃん、私とは遊びだったって言うのッ!?」
「誤解を招くような言い方しないでッ！」
「一緒にお風呂入ったり、一緒に寝屋を共にした仲なのにッ」
「誤解を招くような言い方しないでってばッ！」
「私はフィーちゃんの事なら何でも知ってるわ。例えば一緒に寝ていると抱きついて来る癖があるとかッ」
「ルウウウウウッ！」
　もはやすっかり弄ばれている感じのフィーリア。顔を真っ赤にして涙目になりながら親友の暴走を必死に止める。何となく、いつも自分がいる立場にそっくりで同情してしまうクリュウ。
「まぁ、冗談はさておき」
「冗談で人の恥ずかしい話を大暴露しないでッ！」
「――さっきのは本気だから。フィーちゃんに手を出したら潰し殺す。いいわね？」
　ルーデルは本気の目でクリュウを見詰める。その刃物のように鋭い眼光はまるで静かなる怒りに燃える雌火竜リオレイアの如く。その恐怖に、クリュウはただただ立ち尽くす。フィーリアも入るタイミングを見失ってしまい、おろおろとするばかり。
　しばし、ルーデルは威嚇するようにクリュウを睨みつけていたが、突然フニャッと笑みを浮かべる。
「ま、フィーちゃんが認めた相手だから大丈夫よね。フィーちゃんの味方でいる限りは仲良くしましょ」
「あ、うん」
「――ただし、フィーちゃんに害を成す存在だと判断した場合は、覚悟しておきなさい」
　そう宣言し、ルーデルは「ごめんフィーちゃん。ちょっと上から荷物取って来るね」とフィーリアに笑顔で言って酒場の上にある宿へと繋がる階段へ消えた。
　まるで嵐のように去って行ったルーデルにすっかり翻弄された形

のクリュウ。すると、隣に立っていたフィーリアが申し訳なさそうに頭を下げた。
「すみません。根はいい子なんですが、どうにも私に対する保護意識が過剰でして。ね、根はいい子なんですが」
「あ、うん。悪い子じゃないって事は何となくわかっているから」
「す、すみません……」
「そんなに謝らないでよ。ちょっと変わった子だけど、君の事をとても考えてくれてるいい友達じゃない」
クリュウが笑顔でそう言うと、フィーリアは顔を上げてパァッと嬉しそうに笑顔を花咲かせる。
「は、はい。私の一番の親友ですから」
「そっか」
嬉しそうに迷う事なく《親友》と断言するフィーリアの笑顔を見て、クリュウもまた嬉しそうに笑う。彼女の笑顔を見る限り、本当に心からそう思っているのだろう。
仲間の親友なら、ちょっと癖のある子だが、きっと仲良くなれるだろう。クリュウはそう思った。
「あ、言い忘れていましたが、ルーも私と同じで二つ名を持っているんですよ」
「へぇ、どんな二つ名なの？」
そこへ「ごめ～ん、お待たせぇ～」と元気な声と共に慌ただしくルーデルが戻ってきた。その笑顔は本当に天使のような可憐さに満ち溢れている。
フィーリアは、苦笑を浮かべながら言った。
「――《悪魔のサイレン》。それが彼女の二つ名です」
――本当に仲良くなれるか心配になってきたクリュウであった。
昼食も兼ねてクリュウ、フィーリア、ルーデルの三人は酒場のテーブルの一角に陣取った。ライザは何やら会議に出ているらしく不在の為、別のギルド嬢がメニューを運んでくる。その際、
「あれ、シュトゥーカってフィーリアと同じ階級なの？」
ルーデルが受け取ったのはフィーリアと同じ階級のメニューで

あった。
酒場のメニューがランクによって頼める数が違うというのはハンターの常識だ。クリュウとフィーリアでは幾分かメニューのランクにも差がある。見た目、ルーデルの装備を見る限り低く見てもツバメと同じくらい。つまり自分と同じか少し下に見えるのだ。
そんなクリュウの疑問に対し、ルーデルは「あぁ」と彼に疑問に気づいたようにうなずく。
「私のこれ、フルフルDシリーズじゃないわよ？　これはフルフルUシリーズ。上位フルフル亜種の素材でできてる防具。ついでに、これもブラットホルンじゃなくてブラットフルート。私とフィーちゃん、どっちもナイトクラスね」
ルーデルの説明にクリュウは納得したようにうなずく。単純に比較はできないが、上位クラスのフルフル亜種なら下位のリオレウスと同等くらいの強さ。それをおそらく単独で討伐、それも装備の素材的にかなりの数を討伐している所を見ると、確かにフィーリアと同等くらいの力を持っていても不思議ではない。
「君のランクはどれくらい？」
ルーデルは反対に今度はクリュウにランクを尋ねてきた。クリュウは苦笑しながら恥ずかしそうに答える。
「一応、ビショップクラス」
「ふーん、フィーちゃんや私よりも下なんだ」
バカにしたような言い方ではなく、ルーデルは素直な感想を返す。フィーリアが「また失礼な発言をッ」と慌て、クリュウは返す言葉もなくただただ苦笑い。
ちなみにイージス村のハンターのランクはそれぞれツバメがルーク、クリュウとサクラがビショップ、フィーリアとシルフィードがナイトクラスに振り分けられる。サクラが実力に対してランクが低いのは単純に大型モンスターの討伐数が少ないからだ。これは彼女が討伐依頼よりも護衛依頼を引き受ける傾向に比例している。
同じナイトクラスと言ってもその幅はとても広いが、とりあえずルーデルはクリュウよりは実力が上という事だ。

クリュウがビショップクラスとわかると、ルーデルは不機嫌そうに腕を組んだ。
「何でまた自分よりもランクが下のハンターと組んでるのよ。これしか組んでくれる人がいないなら、また私と組まない？　うん、そうしようよフィーちゃん」
何とも遠慮のない直球な疑問の問いかけだ。しかもクリュウを指差して《これ》扱い。これにはさすがのクリュウもムッとなる。
その時、今までルーデルのストレートな物言いにずっと振り回されていたフィーリアが今度ばかりは怒り出した。
「いい加減にしてよルー。クリュウ様は私が心から尊敬してるすごいハンターなんだよ？　実力だってあるし、何よりとても仲間想いな方なの。これ以上クリュウ様を侮辱するような事を言うと、本気で怒るからね」
いつになく真剣な表情でフィーリアはルーデルに言う。いつもは柔らかな瞳も静かな怒りに鋭くなっている。フィーリアが怒っている、その見慣れない光景にクリュウは先程までの不機嫌さを忘れて呆然としている。一方、ルーデルは親友の本気の怒りに対して「……わかったわよ」と渋々という感じでうなずいた。
「悪かったね、悪い事ばかり言っちゃって」
「あ、いや、僕は別にいいんだけど」
「不快な想いをさせてしまい、本当に申し訳ありませんクリュウ様」
申し訳なさそうに深々と頭を下げるフィーリアにクリュウは慌てて「いいからいいからッ。頭下げられても僕が困るだけだし」と顔を上げさせる。そんな二人の様子を、面白くなさそうに見詰めるルーデル。
何はともあれメニューを決める。その間、ルーデルは盛んにフィーリアと楽しげに話しかけ続けた。それが久しぶりに親友に再会した嬉しさからなのか、クリュウに対する牽制なのか、どちらにしてもクリュウはその輪からは完全に外れてしまっていた。
しばらくし、料理が運ばれて来てもその状態は変わらずクリュウは若干肩身の狭い思いをする事になった。

食事が終わると、待ってましたとばかりにルーデルが動く。
「ねぇフィーちゃん、これからデートしようよッ」
「ま、また誤解を与えるような言い方を……」
「細かい事気にしないの。それより近くにかわいい服売ってる店があるんだ。行こうよ」
「で、でもぉ……」
そこでフィーリアはクリュウの方を見る。その視線に気づいたクリュウは優しく微笑んだ。
「僕の事は気にしないで、二人で楽しんでおいでよ」
「し、しかし……」
「いいからいいから」
「ほら、許可も出たんだし行こうよッ」
クリュウとルーデルの顔を交互に見て未だに渋っているフィーリアをルーデルは強引に引っ張って行く。
腕を引かれて連れて行かれるフィーリアは一度だけクリュウの方に振り返ると、彼は笑顔で見送ってくれてた。
酒場から二人が出て行き、一人残されたクリュウ。近くを通りかかったギルド嬢を呼び止める。
「すみません、小ビール一つお願いします」
珍しく、苦手なビールを一杯注文した。
ルーデルと共にフィーリアは様々な店を回った。かわいらしい服やアクセサリーがたくさんあり、おしゃれに対して興味津々のフィーリアは当然喜ぶはずだった。しかし、常に頭の片隅にはクリュウの事があり心から喜ぶ事はできなかった。でもせっかくのルーデルの好意を潰したくない一心で楽しく振る舞い続けた。
楽しげに服合わせをするルーデルを見ながら、どうしてもフィーリア気になる事があった。
ルーデルは昔から自分が他の友達と話していたりすると不機嫌になったりする、自分以上のやきもち焼きだ。長い付き合いだから、何となく彼女がクリュウに対してやきもちを焼いている事はわかった。でも、それにしても彼女の彼に対する反応は明らかにおかしい。いく

らやきもち焼きでも、ここまで強く相手を拒絶するような事は今までなかった。
どうして、クリュウに限ってそのような態度なのか。せっかく、クリュウを無理を言って連れてきて紹介したかったのに。自分が、クリュウの事を心から大好きだって、親友に好きな人ができたって報告したかったのに。これではそれどころではない。
自分が好きな人が、自分の親友に嫌われる。こんな関係図は絶対に嫌だった。何とかして、クリュウとルーデルを仲良くさせないといけない。そんな事で彼女の頭はいっぱいだった。
それでも、親友の為に楽しく振る舞い続けるフィーリア。そんな彼女を、ルーデルはじっと見詰めていた。
「ねぇ、フィーちゃんって、あいつの事が好きなの？」
「ッ!?　ゲホゲホッ！」
ショッピングも一段落して近くの喫茶店に入った二人。二人揃って注文した紅茶が運ばれ、早速フィーリアが一口飲もうとした瞬間、ルーデルは唐突に疑問を投げかけた。あまりにも唐突過ぎて全く予想していなかったフィーリアは見事にむせる。
「な、何よ突然……ッ」
「突然なんかじゃないよ。今日ずっと思ってた事よ」
そう言ってルーデルは紅茶を一口飲む。一方のフィーリアは咳き込むのが一段落してから口を開く。
「ずっとって……」
「わからないと思ってた訳？　フィーちゃんが無理して笑ってるのなんてすぐわかるわよ。何年一緒にいたと思ってるのよ」
「……ご、ごめん」
「謝られても困るだけだわ」
申し訳なさそうに謝るフィーリアに対してルーデルは拗ねたような表情を浮かべながらそっぽを向く。フィーリアは顔を背ける親友の姿に自分から言葉を発するのに怯えてしまい、口をつぐんでしまう。当然、二人の間には何とも言えない気まずい雰囲気が流れる。その空気を打ち破ったのはルーデルの方だった。

「それで、どうなのよ」
　ルーデルの口調はもはや問い掛けではない。親友だからこそ、フィーリアの気持ちなんてすぐにわかる。彼の事をどう想っているかなど、丸分かりだ。これは、最後の確認だ。
　ルーデルの投げかけた言葉に対し、フィーリアはほんのりと頬を赤らめながら――こくりと小さく、しかししっかりとうなずいた。
　しばしの沈黙の後、ルーデルは深い溜息を零した。
「私がいない間に、フィーちゃんは一人で大人の階段を駆け上がってた訳ね」
「べ、別にまだそんな関係じゃ……」
「ふぅん、今の言葉をそういう意味に受け取るんだ。相変わらずフィーちゃんっておませさんねぇ」
　くすくすと笑いながら言うルーデルの言葉にようやく自分がからかわれていると自覚したフィーリアは顔を真っ赤にして慌てて怒る。
「も、もうッ！　私は真剣に言ってるんだから、ふざけないでよッ！」
「ごめんごめん。でもさ、ほんとフィーリアって変わってないわね」
「それって褒めてるの？　けなしてるの？」
「どっちもぉ～」
「ルゥウゥウーッ？」
　あはははと楽しげに笑うルーデルに顔を真っ赤にして怒るフィーリア。その姿はクリュウ達といる時のようなどこか遠慮したような感じはなく、心から安心しているように見える。やはりクリュウ達に対してフィーリアは心の壁のようなものが存在するのだ。それは決して拒絶の意味ではなく、彼らは《仲間》であり、クリュウは《好きな人》。ルーデルのような《親友》とは違うのだ。
　散々フィーリアをからかった後、ルーデルは再び表情を引き締めて話を戻す。
「本気なのね？」
　真剣に問うルーデルの問い掛けに対し、フィーリアはしっかりとうなずいた。
「うん。私は――クリュウ様が好きなの」

初恋だった。
フィーリアにとって、初めての恋だった。それまで、どこか男の人というものに恐怖を感じていて苦手意識すらあったのに。そんな自分に、好きな男の人ができるなんて、その頃の自分では絶対想像できなかっただろう。
恋なんて、恋愛小説などの物語の中だけのものだと思っていたあの頃の自分に、今ならハッキリと断言できる。
――誰かを好きになるって、すっごく幸せなんだよ、って――
この気持ちを親友（ルーデル）にも知ってほしくて、今回クリュウを連れて来たのだ。親友に、今の自分がとても幸せなんだって報告したかった。親友だからこそ、祝って欲しかった。
親友（ルーデル）なら、自分の恋を応援してくれる。そう信じていた――この時までは。
「……認めない」
「え……？」
しばしの沈黙の後、搾り出されるようにルーデルが放った言葉。フィーリアは驚いたように目を見開く。
「る、ルーちゃん……？」
困惑するフィーリアを前にして、ルーデルはどこか怒ったような表情を浮かべて彼女に相対する。ギュッと握られた拳は震え、鋭い目付きで親友（フィーリア）を見詰める。
「私はそんなの絶対認めないよ。あんな奴がフィーリアの初恋の相手だなんて、私は認めない」
「な、何言ってるの……？」
「フィーちゃん。それはきっと何かの間違いよ。フィーちゃんがあんな頼りない男を好きになるなんて絶対ありえない。間違いに決まってる」
「間違い……」
その瞬間、フィーリアの中で何かが爆発した。熱いものが胸の中で渦巻き、その熱はどんどん温度を上げていく。
――間違い。そんな一言でこの想いを否定されるなんて、絶対に許

せなかった。
一緒にいて胸がポカポカするのも、彼の笑顔を見て幸せな気分になれるのも、時々見せる凛々しい表情にドキドキするのも――人を好きになる大切な気持ちを。《間違い》なんて一言で片づけてほしくなかった。
――何より、そんな事を親友（ルーデル）の口からなんて聞きたくなかった。
「何よ、それ……」
「フィーちゃん？」
自分でも驚くくらい、いつもの自分の声よりもぐっと低い声。その声が震えている。
――今まで、こんなにも《怒り》を感じた事があっただろうか。それくらいに、フィーリアの心は憤怒に満ちていた。
「何で、そんな事言うのよ……ッ」
心を支配する猛烈な憤激が、堪えられなくて言葉となって荒れ狂う。自分の目の前で、親友（ルーデル）が「ふぃ、フィーちゃん……？」と戸惑ったような声を上げる。その何もわかっていない彼女の表情を見て、激高は臨界点を突破した。
「何でそんな事言うのよッ！」
ここが他の人もいる喫茶店だという事も忘れ、フィーリアは怒号を放つと同時にテーブルを叩いて勢い良く立ち上がる。
「私の大切な気持ちを、何でそんなひどい言葉一つで片づけようとするのッ!?」
フィーリアの突然の怒号にルーデルは驚きを隠せない。あの大人しくてあまり自分の意見を言わないフィーリアが怒り狂っている姿に困惑し、状況が理解できていないのだ。
呆然とする親友の姿に、フィーリアの怒りはどんどんと勢いを増していく。親友（ルーデル）に一言「おめでとう」と言ってほしかっただけなのに。そんな期待を裏切られたという想いが、怒りを加速させる。
「何で……何でそんなひどい事言うのよッ！　私の、初恋なんだよッ

!?　小さい頃から男の子が苦手だった私が、初めて男の子を好きになったこの気持ちを、どうしてそんなひどい一言で壊そうとするのよッ!?　ルーッ！」
　信じられなかった。ずっと、子供の頃からハンターとして一人前になるまでずっと一緒にいた親友（ルーデル）がこんなひどい事を言うような子だったなんて。信じられなかった。
　うそだって言ってほしかった。感情のままに吐き出されるこの言葉の数々は、もしかしたらそんな期待を込めてのものだったのかもしれない。だが、
「な、何よッ！　私はフィーちゃんの為を想って言ってるだけなのに……ッ、何でそんなに怒るのよッ!?」
　今度はルーデルが叫びながらテーブルを叩いて立ち上がった。その表情もまたフィーリアと同じ、憤怒に満ちている。
「私はフィーちゃんの幸せを願ってアドバイスをしてるのよッ!?」
「だったらどうして今の私の幸せを否定するのッ!?」
「それが本当の幸せじゃないからよッ！」
　まるで後頭部を殴られたかのような衝撃に、フィーリアは立ちくらみした。
　今の自分の幸せが、偽りのもの……
　クリュウと一緒にいる時に感じる、どんな幸せにも勝る幸せが、偽りだというのか。
　――そんな訳がない。この想いは、まぎれもない《本物》だ。
「私は、幸せよッ！　クリュウ様と一緒にいられて、一緒にご飯を食べて、笑って、料理を作って喜ばれて、狩りをして……ッ、《本当》に幸せなのッ！」
「だから、それが間違いだって言ってるのよッ！」
「何でよッ！」
「――あんな奴が、フィーちゃんに相応しい相手だなんて間違いだからよッ！」
　一瞬で心が凍り付いた。先程までのラティオ活火山の溶岩の如く燃え盛っていた怒りが、一瞬で凍り付いた。

――どうして、そんな事言うの？
クリュウの事を何も知らないのに、どうしてそんな事を言うのか。
彼の事を彼女は何も知らない。誰かの為に一生懸命になれる所、とてもがんばり屋の所、笑顔がすごくかわいい所、凛々しい顔がかっこいい所、自分が落ち込んでいる時に声をかけてくれる優しい所――彼女は、何も知らない。
彼の優しくてすごい所を何も知らないのに、どうしてそんな事を言うのか。
――とても、悲しかった。
「ふぃ、フィーちゃん……」
いつの間にか、フィーリアは泣いていた。
自分の親友に、自分が好きな人を否定される。これほど辛く悲しい事は他にはないだろう。
怒るを通り越して、悲しい。
「どうして……、そんな事言うのぉ……？」
それは、心からの問いかけであった。どうして、自分の恋を全否定するような事を言うのか。親友と思っていた相手に、どうしてそんな事を言われなくてはいけないのか。
悲しくて、ボロボロと零れ落ちる涙が止まらない。ポツポツと零れ落ちる涙が、テーブルを濡らす。
――もう、いい。
涙を拭い、フィーリアは自分の飲んだ紅茶の代金をテーブルに置いて店を出る。その後をルーデルが代金を支払って慌てて追いかけて来た。
「ちょ、ちょっと待ってよフィーちゃんッ！　私は、フィーちゃんの為を思って……ッ」
「……もういいよ」
追いかけて来たルーデルにそうつぶやいて振り返るフィーリア。その瞬間、ルーデルの表情が凍り付いた。今、自分はどんな表情を浮かべているのだろう。自分ではわからないが、きっとひどい顔をしているに違いない。拭っても拭っても涙は止まらず零れ続ける。

「もう、いい……」
「フィーちゃん……」
フィーリアはそう言い残し、ルーデルに背を向けて歩き出す。ルーデルはその後を追う事もできず呆然と立ち尽くす。
すすり泣きながらとぼとぼと歩く自分の姿は周りから見れば何事かと思われるものかもしれないが、そんな事どうでも良かった。今はただ、この場から離れたい一心だった。
きっと、ルーデルはひどい表情を浮かべながら自分を見詰めているに違いない。でも、もうそんな事もどうでも良かった。
「あいつが、あいつのせいで……ッ」
――だから、ルーデルのつぶやいた最後の言葉も、フィーリアには届く事はなかった。

第１２５話　宣戦布告　フィーリアを想う二人の戦い

その夜、クリュウは一人で酒場で食事をしていた。
本当はフィーリアと一緒にディナーの予定だったのだが、彼女は体調不良を理由にキャンセル。心配すると、「今は一人にしておいてください」とどこか虚ろな瞳で言い、部屋へと消えて行った。
体調が悪いというか、何かとても辛い事があった。彼女の瞳からはそんな事を感じられた。
「……フィーリア、一体どうしたんだろ」
とりあえず、一人になりたいという彼女の意向に従いクリュウはこうして一人でディナーを食べる事になったのだ。今日はライザも非番なので本当に一人きりだ。
いつものように安価でボリュームもありうまいの三拍子、アプトノスのサーロインステーキのライス＆スープセットを注文し、料理が運ばれて来るまでの間、退屈を紛らわす為に依頼掲示板に近寄って適当に見る。
掲示板には様々な依頼が貼られている。ランポスの掃討作戦や草食竜の卵採取のような初心者向けのものからテロス密林に出現した雌火竜リオレイアの討伐依頼など。さすがハンターの都にして大陸屈指の大都市ドンドルマ。依頼のレパートリーもまた大陸一の幅広さを誇る。
ふと隣の掲示板に目を向ければこちらはすでに誰かが受注した依頼に飛び込み参加を求める書類が何枚か貼られている。ドンドルマのような大都市のハンターはクリュウのようにチームをすでに形成している者の他にこうして即席でチームメイトを募集する場合もある。基本的にハンターの人数や規模が桁違いなドンドルマなどの都市型の手法だ。
もちろん、クリュウは単独で依頼を受ける気もどこかのチームに即席で入り込むつもりもない。そもそも今回は武具こそ一式揃えて

持って来てはいるが、それはあくまでハンターとしての当然の行動であり、今回はあくまでフィーリアと一緒に彼女の親友、ルーデルに会いに来ただけに過ぎないからだ。
「ルーデル・シュトゥーカ……そういえば、フィーリアが元気がなくなったのは彼女と出かけて帰って来てからだよね。何かあったのかな……」
何となくそんな気がしてはいたが、でもまさかとも思っていた。フィーリアはルーデルと会えた事をあんなにも喜んでいたし、親友と豪語していた。そんな人と会って半日も経たずしてケンカなんてするものだろうか。しかも、温厚で相手に対する協調能力に秀でたフィーリアが、だ。
考えていても仕方ない。励まそうにも理由はわからないし、そもそもフィーリアは現在誰とも会いたくないと言って部屋にこもってしまっている。ならば、自分としてはこのまま彼女が少しでも回復する事を願うくらいしかできない。
「こういう時、役に立たないよね僕って……」
苦笑しながら自虐的にそうつぶやくと、クリュウは自分の席に戻った。程なくして頼んでいたステーキセットが来て、結構空腹だったクリュウはさっきまでの暗い雰囲気を吹き飛ばすように食事を開始する。
ナイフで一口サイズに切ってフォークで口の中に運ぶとソースと肉の味、そして肉汁がブワッと口いっぱいに広がる。何度食べてもおいしい、クリュウが好きな一品だ。
「うーん、やっぱりシルフィとかが時々食べさせてくれるナイトクラスとかの高い料理より僕はこっちの方がいいなぁ」
どうにも値段が高くて高級な食材を使っている分ボリュームが欠け、上品な味わいの料理よりもこういうタイプの料理の方がおいしく感じてしまう。自分はとことん庶民型な人間だなぁと苦笑が浮かんでしまう。
そんな感じで一人で食事を進めていると、突然横に人の気配がして振り返る。するとそこには知っている人物が立っていた。

「シュトゥーカ？」
隣に立っていたのは先程フィーリアに紹介された彼女の親友、ルーデル・シュトゥーカであった。集会所という事もあって先程と同じくフルフル亜種の素材で統一された武具を身に纏っている。
きょとんとするクリュウに対し、ルーデルはじっと彼を見詰める。その瞳は、先程の警告の時のように幾分か鋭い。
「えっと……」
「前、いい？」
彼女が指差したのはクリュウの正面の空席。フィーリアが座る予定だったその席は彼女が欠席したので当然空席だ。
「い、いいけど」
「そう」
ルーデルは困惑しているクリュウを気にした様子もなく無言で背負っていたブラットフルートを横に置いてから彼の正面の空席に腰を下ろす。改めて見ても片手剣と違い大きくて重量のありそうな武器だ。
「えっと、何か用かな？」
一通り食べ終えたクリュウは一旦フォークとナイフを置いて、無言で正面に座るルーデルに話し掛ける。自分と彼女はさっき会ったばかりなので接点らしい接点はフィーリア繋がりという事しかない。だからこそ、なぜいきなりフィーリアがいないこの場所で自分の前に現れたのか。何か用がなければそんな事はしないだろう。
クリュウの問い掛けに対しルーデルは瞳をより鋭く光らせる。そして、静かに口を開いた。
「回りくどい事は嫌いだから単刀直入に言うけど――あんた、フィーちゃんの前から消えなさい」
有無を言わせない迫力を放ちながら、ルーデルは開口一番にそう言った。反論を許さない決定事項と言いたげな、それはまさに突然の最後通牒であった。
「そ、それってどういう事？」
あまりにも突然過ぎてクリュウは話について行けずに困惑する。

当然だ。さっき会ったばかりの人物に自分のチームメイトから離れろと言われているのだから、困惑しない方がおかしい。
　一方、そんなクリュウの問い掛けに対しルーデルは眉一つ動かさない。
「言葉通りの意味よ。あんたはフィーちゃんにとって悪影響を与える存在に他ならない。だから即刻消え失せろって言ってるの」
「な、何だよそれ。そんな事できる訳ないでしょ」
「できるできないの問題じゃなくて、《しろ》と言ってるの。頼んでるんじゃなくてこれ命令。反論は許さない」
「勝手な事言わないでよッ！　一体何様のつもりさッ！」
　クリュウは思わず大声を上げてテーブルを叩いて立ち上がった。しかしすぐに周りの視線が自分に集中している事に気づいて湧き上がる怒りをグッと堪える。
「……表に出て。話はそれからだ」
「えぇ」
　自分でも驚く程低い声でそう言い、クリュウは自分の怒りをそよ風程度にも感じていないルーデルと共に酒場を出た。
「それで、どういう事なのさ」
　酒場から少し離れた街路。夜という事もあって人気もないので、ここなら思う存分言いたい事が言える。そう思い、クリュウは足を止めると背後から続くルーデルに振り返り、開口一番に再び問う。
「さっき言ったでしょ？　あんたはフィーちゃんにとって邪魔な存在なの。だから、手を引いてって言ってるの」
「邪魔な存在ってどういう意味さ」
「言葉通りの意味。あんたはフィーちゃんに悪影響を与える存在でしかない」
「何を根拠にそんな事を言うのさッ!?」
　我慢できなくなってクリュウは大声を上げて怒鳴る。基本的に温厚で誰に対してもあまり怒らないクリュウ。だが今は珍しく本気で怒っている。それだけ、ルーデルの言動が理不尽で許せないのだ。
　だが、怒り慣れていないという事を差し引いてもクリュウの怒気に

満ちた瞳に対して全く同時た様子を見せないルーデル。クリュウの怒号に対し淡々と答える。
「まず第一に、あんた私やフィーちゃんよりも下位ランクのハンター。それだけでフィーちゃんに悪影響なのよ。知ってる？　フィーちゃん、あんたと組むようになってから大型モンスターの討伐数が減ってる事。あんたと一緒という足掛（あしかせ）があの子の自由を制限してるの」
　あれだけ啖呵を切るような言い出しをしておきながら、ルーデルの言葉にクリュウは返す言葉もない。何せ自分がフィーリアやルーデルよりも下位クラスのハンターという事は変えようのない事実だ。それに彼女の大型モンスターの討伐数が以前より減っている事も薄々気づいていた。元々一人で自由気ままに旅をしながら狩猟をしていた流浪ハンターであったフィーリア。それが一ヶ所に定住すれば、それも自分という下位ハンターと一緒なら当然危険な依頼は受けなくなってしまう。
　ルーデルの言っている事は全てが事実であった。変えようのない事実である。でもだからと言って自分の存在が彼女に悪影響しか与えないという事は許せなかった。フィーリアの親友だか何だか知らないが、自分とフィーリアの関係の何を知っているというのか。自分達の絆を否定するのは、絶対に許せない。
「例えそうだとしても、それが必ずしも悪影響になるとは限らないじゃないか。フィーリアは、村にいる事が幸せだって言ってるんだ」
「それは気を遣っているからじゃないの？　あの子昔から他人に気を遣いすぎる所があるのから」
「まぁ、それはそうだけど」
　一瞬、フィーリアの知り合い同士という事で話しが合ったクリュウとルーデルであった。
　しかしすぐにルーデルは攻撃態勢に移行する。
「あの子はね、天才なの。生まれ持ったガンナーとして優れた天性と日々決して怠らない努力。この二つで今の実力まで上り詰めた本物の天才。これから先もあの子はどんどん強くなっていく。そしてい

ずれ大陸中に、いえ、世界に名を馳せるような伝説級のハンターになるって私は信じてる――あんたは、そんな彼女の未来を潰す存在でしかない」
「ど、どうしてさ。それは、僕が弱いからって言いたいの？」
「もちろんそれもあるわ。でもそれ以上に問題なのは、あんたという存在自体なの」
「僕自体……？」
　ルーデルの言っている言葉の意味がわからず、クリュウは困惑げに首を傾げる。するとそんなクリュウの反応を予想していたかのようにルーデルはわざとらしく大きなため息を零す。
「あんた、思ってた通り頭が鈍いわね」
「な、何だよそれ」
「いい？　フィーリアが何であんたみたいな下位中の下位クラスのハンターと組んでるのか。何をどう勘違いしたか、あの子、あんたを気に入ってるみたいなの」
「そりゃ仲間だし、気が合わなきゃ一緒にいられないでしょ」
「……そういう意味じゃないんだけど、まぁいいわ。とにかく、何を勘違いしたのかあの子あんたに妙に肩入れしてるの。何を勘違いしてか」
「その、勘違いを連発するのはやめてくれないかな。腹立つ」
「だって勘違いだから仕方ないじゃない」
　全く悪びれた様子もないルーデルに、クリュウの怒りは着実に蓄積していく。しかしそんなクリュウの怒気など気にもせずルーデルは自分の意見を続ける。
「あの子はね、子供の頃から男の人に慣れてないの。何しろ名門貴族の娘だもの、同世代の男の子と遊ぶ機会なんてないから、慣れてないから苦手意識を持っちゃって……だからあんたみたいなダメ男でもあの子にとっては新鮮に感じられる。それが間違いに間違いを重ねてこんな結果に……」
　嘆かわしいとばかりに盛大にため息を零すルーデルに軽くブチギレかけるが、とりあえずそこは我慢しておく。というか、それよりも

もっと重要な単語を初めて知った。
「フィーリアって、貴族の家出身なの？」
「はぁ？　あんた、あの子から何も聞いてないの？」
「フィーリアって、あまり自分の過去の事を話さないから……」
「あっそ。言っておくけど冗談とかじゃないから。あの子、私達の故郷のエルバーフェルド帝国の一等貴族、レヴェリ家の三女。レヴェリ家って言ったらエルバーフェルドでは王族に継ぐ高貴な血を持つ一等貴族の中でも最も歴史が長い名門中の名門家。言ってみればあの子、超がつくお嬢様なの」
　エルバーフェルド帝国は大陸北東の地域に一大帝国を築いている列強国の一つ。東シュレイド共和国と国境を接しており、時折国境問題などでいざこざを起こしている。大陸国家の中でも古参に入る国で、平地が基本な国土から騎士団を中心とした陸軍が優れており、現在でも厳しい徴兵制度があり国民の三割が軍人、軍関係の職種についている者も含めれば実に国民の六割に達する軍事国家として有名だ。名目上国家君主に皇帝が存在するが、実際は一党独裁でその党首が全権限を掌握する総統として国家を統治しており、二十年前の大災害によって弱体化していた国力を目覚しい勢いで復興させている。
「っていうか、そんなお嬢様なフィーリアがそもそも何でハンターなんかしてるの？」
　話を聞く限りフィーリアがハンターになるきっかけがない。貴族の令嬢ならば、ハンターなんて対極な職種を選ぶとは思えない。なのに、なぜフィーリアはハンターをしているのか。そんな彼の問いに対し、ルーデルは迷わず答える。その顔にはフィーリアの事なら何を訊かれても答えられるという自信に満ち溢れていた。
「シュトゥルミナさんの影響ね」
「シュトゥルミナさん……？」
「レヴェリ三姉妹の次女にして今は上位ハンターとして活躍しているあの子のお姉さんの一人、上位って言ってもその実力は限りなくG級に近い実力の持ち主よ。フィーちゃんはお姉さんに憧れて同じハンターの道を歩んだの」

フィーリアの意外なハンターを目指した理由を聞いて驚きつつ、《フィーリアの姉》という部分にちょっとした予備知識が頭に蘇った。
「それって、確かものすごいお姉さんだって聞いた事があるんだけど」
「ええ、ものすごいわよ。男女って言うべきかな？　乱暴で粗暴で口の悪い、貴族の令嬢とはかけ離れた人だけど、それがかえってハンターという世界では適所だったんでしょうね。他人にも自分にも厳しい人だけど、どうも姉妹には甘い感じの人ね。そんな性格だからハンターになってもご両親は激しい反対はしなかったけど、フィーリアの時は猛烈に反対されたわね」
「まぁ、彼女を見ていると本当に両親に愛されて育てられたってわかるし」
「でもその時もシュトゥルミナさんがフィーリア側に立って大暴れしてね。ご両親は二人の強い決意に根負けしてフィーちゃんのハンターへの道を認めたの。まぁ、セレスティーナさんがレベェリ家を継承する事が決まってたってのも大きな理由だけどね」
　また知らない名前が出てきて、クリュウは首を傾げながら「セレスティーナさんって？」とルーデルに問う。
「レヴェリ家の長女、つまりフィーちゃんやシュトゥルミナさんのお姉さん。病弱であまり家から出られない人だけど、とても優しくて笑顔が素敵な人なの。妹二人がハンターになる中、彼女は多くの書物を読破して知識をつけ、今ではエルバーフェルドの古龍研究機関、《シュトゥットガルト》の非常勤研究員にまでなったすごい人なの」
　何だか、聞いているとものすごい姉妹だなぁという気持ちでいっぱいになってくる。ある意味完璧と言ってもいい。文に長けた長女と武に長けた次女。そしてその二人の優秀な所を厳選したかのような文武両道な三女。
　今まで知らなかったフィーリアの事がわずか数分の間にものすごい勢いで紐解けていく。ただ、あまり本人の許可なく彼女の過去を知り過ぎる訳にもいかない。ルーデルの話す事はどれも興味深い事だが、これ以上はフィーリア本人の口から聞くべきだろう。そう結論付け、クリュウは話を戻した。

「話を戻すけど、つまり君はビショップクラス程度の実力であり平民の僕とナイトクラスで名門貴族の娘のフィーリアがつり合わないって言ってるの？」
「……まぁ、そういう事。他にも理由はあるけど、どうやらあんた鈍感過ぎてわからないみたいだし。それが余計に腹立つんだけど」
本当はもっと核心に触れる事を洗いざらい言ってしまいたいルーデル。しかしフィーリアの親友としてはこれ以上ハッキリとした事は言えない。反対しているとはいえ、そういう肝心な事は本人が責任を持って言うのが筋だと思っているからだ。だからこそうまく伝えられずにイライラが募る。
一方のクリュウのイライラも募るばかりだ。理由がそもそも理不尽過ぎるし、何よりフィーリアと別れるつもりなど毛頭なかった。フィーリアの親友だか知らないが、横暴にも程がある。
「君の言いたい事よぉくわかった。でも、僕はフィーリアと別れるつもりなんてない。一度してしまった間違いを、二度と犯す訳にはいかないしね。僕とフィーリアは仲間だし、大切な友達だ。その絆を断ち切るなんて、できる訳ないでしょ」
それがクリュウの結論であった。
フィーリアは自分にとって大切な狩猟仲間だし、村の一員で、友達で、かけがえのない存在だ。その彼女と決定的な仲違いの理由なく別れるなど、できるはずもない。彼女とは一度それで関係が断ち切れた事があった。だからこそ、同じ過ちを二度と繰り返す訳にはいかない。
――フィーリアは、大切な存在だから。
クリュウの迷いのない真っ直ぐな返答に対し、ルーデルは小さく「そう……」とつぶやく。
「だいたい、そもそもどうして僕をフィーリアと別れさせようとするのさ」
「さっきも言った。あんたはあの子にとって有害なの」
「それはフィーリア本人が決める事でしょ。少なくとも僕はフィーリアに嫌われてはいないし、彼女が僕の事を有害だなんて思っている様

子もない」
「だから、それはあの子が気づいてないだけで……」
「だったら尚更僕じゃなくてフィーリア本人の方に言うべきでしょ。僕よりも先に、あっちを説得する方が筋ってもんでしょ」
「――したわよッ！」
　クリュウの言葉に噛み付くようにしてルーデルは突然叫んだ。突然の事に驚き固まるクリュウをキッと睨みつけるその鋭い眼光には月明かりの光を反射して煌く宝石が浮かんでいる。
「あんたがフィーちゃんには相応しくないって、間違ってるって、何度も言ったッ！　でも、でも……ッ！　あの子はあんたと一緒にいたいって……、あんたが好きだってッ！　私の声なんて全然聞いてくれなかった……ッ！　昔は私が言う事は何でも従ってくれたのに……私の声に耳を傾けてくれたのに……ッ！　子供の頃からずっといた私より、たった数ヶ月の関係でしかないあんたの方を優先したッ！　全部、全部……ッ！　あんたのせいよッ！　私達の絆を無茶苦茶にしたのはッ！」
　夜の静かな街並みに、その悲痛な声は痛いくらい良く響いた。震える声には彼女の困惑と悲しみ、そして怒りの感情が入り乱れ、混沌。月明かりを浴びてキラキラと輝く瞳は怒りに染まり、鋭く光る。
　クリュウはその瞳に息を呑む。今までこれほどまでに真っ直ぐで力強い怒り、妬み、恨みの感情が混在した明確な敵意を向けられた事がなかった。何が彼女をここまで怒り狂わせ、そして自分に対して敵対心を抱かせるのか。
　……でも、自然とそんな彼女を嫌いにはなれなかった。それはきっと――その怒りの本質にはフィーリアの為を想う、彼女の事が本当に好きという気持ちがあるからかもしれない。
「あんたのせいで……ッ！　私はフィーちゃんに……ッ！」
　猛烈な怒気一色に染まった鋭い眼光で睨んでくるルーデルを見て、クリュウは全てを悟った。先程のフィーリアの様子と、今の彼女の怒りの矛先から全てを理解した。
「……フィーリアと、ケンカしちゃったんだ」

「そうよッ！　全部全部あんたのせいよッ！　あんたのせいで、私はフィーちゃんと……ッ！」
「でもそれは君が無茶な事を言うからでしょ。少しはフィーリアの意見とか聞いてあげたの？」
「知った風な口を利くんじゃないわよッ！　あんたに何がわかるってのッ!?　あの子の何がわかるって言うのッ!?」
「少なくとも、最新の彼女の事は二年間会っていない君よりは知ってると思うよ。二年もあれば、人の人生なんて百八十度変わっても不思議じゃないさ」
　それは人とは違う人生を歩んで来た当人であり、そういった人とは違う人生を歩んできた友を持つクリュウだからこそ言える言葉であった。
　人の人生なんて、一瞬で、たった一度だけ歯車が狂っただけでそれまでのレールとは明らかに違う道へと転がってしまう。昨日まで普通だった事は、たった一度の出来事で変貌してしまう。
　そういった急変化はなくても、長い年月が経てば人なんて変わってしまうものだ。特に、思春期の数年間はそれが最も顕著に現れると言っても過言ではない。
　人の一生なんて、誰にもわからないから……
　ある意味で踏んで来た場数の違うクリュウの冷静な言葉。しかしそれは頭に血が上ったルーデルにとってはまるで自分の事など眼中に無い、余裕ぶった態度にしか見えなかった。当然、彼女の怒りは限界点に達する。
「……いいわ。そこまで言うなら、私だって考えない訳じゃない」
　うつむきながら静かにつぶやくようにしてルーデルは言う。先程までとは打って変わった、不気味なくらいに冷静な声――人の怒りとはある一線を越えると別の段階へと移行する。彼女の不気味な冷静さは、その一つであった。
「考えるって、一体何をさ」
　突然静かになったルーデルの不気味さに一歩身を引くクリュウ。そんな彼の視線の先で、ルーデルはうつむかせていた顔をゆっくりと

もたげた。その瞳は、鋭く煌く。
「――明日、私と付き合いなさい。あんたの力、試させてもらうんだから」
翌朝、クリュウはフィーリアと共に酒場で朝食を取っていた。
「昨日はせっかくのお誘いを断ってしまい、申し訳ありませんでした」
朝食のホットサンドを食べながらフィーリアは改めて昨晩の非礼を詫びる。それに対しクリュウは自身が頼んだサンドイッチを食べながら「いいよ。別に強制って訳じゃないんだからさ」と明るく振舞う。昨晩のルーデルとのやり取りでなぜ彼女が落ち込んでいるかわかってしまったクリュウだったが、今はそれを顔に出さないように努めている。
「あら、ケンカでもしちゃったの？」
「……一応訊きますけど、何でライザ様がクリュウ様の隣で普通に食事をしているのでしょう？」
ジト目でフィーリアが睨む先には、なぜか私服姿でクリュウの横の席に陣取りコーヒーを飲んでいるライザがいる。その手にはトーストが掴まれており、完全に朝の優雅な一時を満喫している。
「別にいいじゃない。私今日は午後出勤だから午前中はフリーなのよ」
「だからと言ってどうしてここに、クリュウ様の横に座っているんですか？」
「気にしない気にしない。たまには私だってクリュウ君を独り占めしたいのよ。何たってこの子かわいいから、ギルド嬢の間でも大人気なのよ」
「……かわいいって言われても全然嬉しくないんですけど」
相変わらず脳天気なライザに対し、クリュウの横というベストポジションを奪われたフィーリアは恨めしげにそんな彼女を見詰め不機嫌そう。そしてクリュウはというとライザの言葉に何とも言えない表情を浮かべている。
いつもとあまり変わらないドンドルマでの日常。唯一違う事と言えばいつもより二名ほど人が足りない事だろう。特にトラブルメー

カーなサクラがいないだけでずいぶんと静かになる。
静かにサンドイッチを食べるクリュウに背後から抱きつくライザにフィーリアが激怒するなど、いつもと変わらない平和な光景がそこにはあった。
だがしばらくして、その状況は一変する。
突如テーブルに叩き付けられたのは一枚の依頼書。叩き付けられた書類の上には手が置かれ、その腕の先は見知った人物が無言で立っていた。
「ルー……」
ルーデルの顔を見た途端、フィーリアは視線を逸らした。昨日の今日だから仕方がないと言えば仕方がないが、その瞬間ルーデルの表情が泣きそうになり、二人の間に気まずい沈黙が舞い降りる。しかしすぐにルーデルを気を取り直すようにクリュウの方を睨みつける。
「昨日の約束通り、クエストであんたの力を試させてもらうわ」
「……わかったよ」
挑発的で不敵な笑みを浮かべるルーデルに対するクリュウもまたいつになく真剣な表情。互いに負けられない戦いだからこそ、真剣で、本気で、ぶつかれる。互いに本当に想っている相手を奪い合うのだから、真剣だ。
二人の瞳と瞳が睨み合い、火花を散らせる。想いの強さが、爆ぜる戦い。互いに一歩も引かない、引けない戦いはすでに始まっている。
「え？　一体どういう事ですかッ!?」
一方、そんな二人の奪い合う対象にして完全に外野扱いのフィーリアは状況が呑み込めず右往左往。そしてなぜかすでに一瞬にして状況を見抜いてイタズラっぽく笑っているライザ。
「うふふ、フィーリアったらモテモテね」
「ま、待ってくださいッ！　なぜお二人が全面対決みたいな感じになってるんですかッ!?」
「黙ってなさいフィーちゃん。これは私とこのバカの問題」
有無を言わせぬルーデルの迫力にフィーリアは言葉を返す事もできずたじたじになってしまう。しかし一方のクリュウはそんな迫力

の直撃を受けているというのに一歩も退く気配なく、むしろ向き合っている。本気だからこそ、耐えられるのだ。
「それで、クエストって何さ」
淡々と話を進めようとするクリュウの誘い言葉に、ルーデルはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。その笑顔に、自然とクリュウも警戒して緊張する。何しろ相手は自分よりもランクが上、フィーリアと同程度の実力を持つ格上の相手だ。どんな無茶を提示してくるかわからない。
――いや、むしろ逆か。いくら憎い相手だとはいえハンターである以上《無茶》という狩人が最もしてはいけない危険を提示してくる訳がない。自分が受注できるクエと彼女が受注できるクエは違う。この場合協力者になるのである程度格上の相手との戦いに身を投じる事はできるが、そこは自分に合わせたクエストにしているかもしれない。
頭に血が上りまくってまともな思考回路が寸断されていない限り、そんな無茶苦茶な事は――
「フィーちゃんの領有権を争うんだから、フィーちゃんのテリトリーで戦わないと。当然、相手は陸の女王、雌火竜リオレイアよッ！」
――残念ながら、ルーデルの思考回路はすでに末期の状態だったらしい。
「意味が全くわからない上に何を無茶苦茶な事を口走ってるんですかルーッ！」
ここに来て今までフリーズしていたフィーリアが慌てて介入して来た。まだ状況の全体図を把握している訳ではないが、とりあえずルーデルがクリュウをリオレイア狩りに連行しようとしている事だけは理解したらしい。
フィーリアの予想通りな介入に対しルーデルは真剣な表情で彼女に向き直る。
「私はまたもう一度フィーちゃんと一緒に狩りがしたい。昔のように、でも昔とは違う今の私達の狩猟を。フィーちゃんは、私と組むのは嫌？」

「そ、そんな事ないッ。で、でも私はクリュウ様が……」
「――僕の事はどうでもいいんだ」
渋る最大の理由を提示した途端、その当人であるクリュウが口を挟む。驚き、フィーリアとルーデルは彼に向き直る。静かに椅子に腰掛けるクリュウもまた真剣な表情を崩さない。
静かに一つ息を零し、困惑しているフィーリアに向き直る。
「まさかとは思うけどフィーリア、君は初めて僕と会った頃に村長が言っていた《僕の教育》で今までずっとチームを組んでいた訳じゃないよね？」
クリュウの言っている言葉の意味がわからず、一瞬困惑するフィーリア。しかしその単語一つ一つの意味を理解すると、それは猛烈な怒りとなって吐き出される。
「そんな訳ないじゃないですかッ！　私は純粋にクリュウ様とッ！　頼れるけどどこか頼りないシルフィード様と、天上天下唯我独尊だけど頼れる時は頼れるサクラ様と、皆さんと一緒に狩りがしたくてずっと一緒にいたんですッ！　そんな、責任とかでずっと一緒に居る訳ないじゃないですかッ！」
フィーリアがクリュウに対して怒鳴るのは、決して特筆して珍しい訳じゃない。でもそれは彼がサクラや他の女子とムカムカする事をしている時のみ。こうした、意見や思考の相違で怒鳴る事はなかった。それだけフィーリアのクリュウに対する許容能力が大きい事と、彼女の彼に対する信頼が強い事が理由だった。
でも、こればかりは許せない。だって――今までの自分達の関係を、絆を、全て偽りのものだったと言われてるのに等しいからだ。そんな侮辱、例えクリュウであっても許せる訳がない。
……いや、クリュウだからこそ侮辱されたくはなかったのだ。この気持ちは、昨日ルーデルに抱いた感情とどこか似ている。
「――僕だって同じだよ」
ギュッと小さな拳を握り締めていると、そんな彼の声を聞いた。ゆっくりと顔を上げると、そこにはいつもの、大好きな彼の笑顔があった。優しくて、温かくて、愛惜しい、心の底から癒される笑顔。

「僕だって、フィーリアやサクラ、シルフィと一緒に狩りがしたいと思ってるし、これからもそうでありたいと願ってる。狩りだけじゃない。日常だって一緒にいたいと思ってる。だって、みんな僕にとってはかけがえのない大切な人だから」
　屈託ない笑顔を浮かべながら断言するクリュウの言葉に、フィーリアはカァッと顔が熱くなるのを感じて慌てて視線を逸らした。自分ではわからないが、きっと今の自分の顔は隠し切れないくらいに真っ赤に染まっているだろう。
　――かけがえのない大切な人。その部分だけが何度も頭の中で繰り返される。本当の意味はサクラやシルフィードも含めているのだが、今の彼女はその部分が欠落している。つまり――自分が彼にとって大切な存在だという事実。それだけで幸せだった。
　顔が真っ赤になっているのを隠そうを顔を逸らしたフィーリア。しかしクリュウからは何とか隠せてもルーデルからは丸見えであり、それを見たルーデルは明らかに不機嫌そうな表情になる。
「――でも」
　クリュウの続けての言葉に、再び二人は彼に視線を注ぐ。
「その気持ちはきっとシュトゥーカも一緒だと思う」
　その言葉に、ルーデルは息を呑んだ。じっと、クリュウを静かに見詰める。
「シュトゥーカだってフィーリアの事を大切に想ってる。僕に対しては無茶苦茶で容赦無いけど」
「当たり前じゃない。何であんたに手加減しなきゃいけないのよ」
「でも、フィーリアを大切に考えてる。それは感じたから、だからかな、悪口言われて罵倒されても、悪い気はしないんだ」
　はにかみながら言うクリュウの言葉にルーデルは若干頬を赤らめて黙ってしまう。彼の本心をそのまま口にしてしまう厄介な所を知らないから一瞬ドキッとしたが、すぐに嫌そうな表情を浮かべて仕切り直す。
「……あんたって、ドMなの？」
「そういう意味じゃないよッ！」

うわぁと口を手で隠しながら一歩下がってあからさまに引いているルーデル。クリュウは慌てて《そういう意味じゃない》と叫び、それを見てライザがおかしそうに笑う。
「と、とにかくッ。お互いに本気でフィーリアの事を想ってるって事ッ！」
恥ずかしさに頬を赤らめながら仕切り直すクリュウ。そう力強く言うと、今度は再びフィーリアの方へ向き直る。視線を向けられたフィーリアは散々《大切》とか《想ってる》という単語を連発されてクリュウと同じように恥ずかしさに顔を赤らめている。そんな彼女に、ルーデルも静かに向き直る。
「私達は本気でフィーちゃんの事を想ってる。それは紛れもない事実よ。悔しいけど、こいつも私と同じ」
「本気だからこそ、負けられないんだ」
本気だから、真剣なのだ。
親友と想い人の真っ直ぐな気持ちを受け、フィーリアは顔を真っ赤にしてコクリとうなずく。そんな彼女を見て二人は小さく微笑むと、同時に言った。
「「それに約束したでしょ――いつか、一緒にリオレイアを狩ろうって」」
ずっと昔に約束した事。二人はちゃんと覚えてくれていた。
フィーリアはブワッと瞳から涙を溢れさせながら、静かにコクリとうなずいた。
いつの間にか席を外したライザは、後輩の子に一枚の依頼書の受理手続きを頼んだ。
――テロス密林に出現した雌火竜リオレイアの討伐指令。クリュウのまた新たな戦いが始まろうとしていた。

第１２６話　女王が君臨せし密林宮殿

ドンドルマから近場の港街へ向かい、そこから船に乗って数日川を上って行った先に広がる密林地帯。ジャングルのように鬱蒼と茂る木々の壁に囲まれた川をさらに上っていくと急に視界が開けて巨大な湖が姿を現す。

ドンドルマやその周囲一帯の川に水を供給し続ける巨大湖。この湖を中心とした密林地帯をテロス密林と呼ぶ。一見すると海のように見えなくもない程に巨大だが、海特有の潮の香りはしない。そよ風に揺られ、湖全体に美しい波紋が広がる。

湖に到着した船はその中央に浮かぶ巨大な島へと向けて針路を変える。あの島こそドンドルマのハンター達が密林と呼ぶ狩場だ。

船は島を迂回するように近づく。島の周りには複数の島々もあって船はその間を縫うようにして進み、目的地である拠点（ベースキャンプ）に到着する。そこは周りを険しい岩壁に囲まれた小さな浜辺であった。前方は浅瀬の為にガノトトスのような大型の水生モンスターは入る事はできず、背後は崖がそびえ立っている事で狭く、飛竜も降り立てないまさに絶好の場所であった。沖合の方を見ると高い山が聳える島があり、島の各所から大量の水が滝となって落ちておりその光景はさながら水のカーテンを纏っているように見える幻想的な光景だ。狩場じゃなければ絶景の観光名所になるかもしれない。

船はその白い浜辺にゆっくりと近づき接舷する。と同時に燃えるように真っ赤なレウスシリーズを纏うクリュウが一番に降り、すぐに船のロープと浜辺から少し離れた土の地面に突き刺さった杭とを結んで船を固定する。その間に春に咲き誇る桜色のリオハートシリーズを纏ったフィーリアと血のように真っ赤なフルフル〇シリーズを纏ったルーデルが船の幌を上げて開放的にし、搭載していた荷物を浜に揚陸する。

テロス密林の拠点（ベースキャンプ）には天幕（テント）は存在しない。三人が乗って来た船がそのまま天幕（テント）の代わりに機能する。その為、船にはベッドや支給品の入った大きな青い箱と今回は

関係ないが納入クエストなどで使う赤い納品用の箱も搭載されている。
　慣れた手つきでロープをまきおえ船を固定するクリュウ。そこは小規模ながら港町でもあるイージス村出身の実力だ。フィーリアとルーデルも作業を終え、続いて支給品の分配や持って来た荷物や武具の最終確認を始める。
「とりあえず応急薬は私とフィーちゃんで三個ずつ貰うわね。残りの六個はあんたが持ってなさい」
　そう言ってルーデルは支給品箱から取り出した支給品のうち、応急薬六個をクリュウに渡す。この判断にクリュウは当然困惑して「え？　僕が六個ももらっていいの？」と問うと、ルーデルは「当たり前でしょ」と呆れたように言う。
「あんた、自分がこの中で一番ランクが低い事忘れてるんじゃないの？」
「う……」
「それと、言うまでもないけどフィーリアはリオレイア戦闘のプロ。私だって何頭かは討伐経験がある。あんただけなのよ、リオレイアの討伐経験どころか遭遇経験もないのは」
「うぅ……」
「る、ルー。そんな言い方しなくても……」
「私は回りくどい事が嫌いなの。いいから、応急薬六個ね。弾丸は当然フィーリアが、携帯砥石は私達で半分ずつね。後は適当に分担しましょ」
　いつの間にかすっかりルーデルが仕切ってしまっている。クリュウは二人よりランクが下だし、フィーリアは従う方が向いているのである意味当然の結果だろうが、それ以前に言葉遣いは悪いがルーデルが指揮慣れしているのだ。
「シュトゥーカって何か指揮慣れてるよね」
「まぁ、誰かの下で動くのが大嫌いだから、どうしても自分で指揮したくなるのよね」
「……何となく、わかる気がする」

ルーデルは、何というかどこかサクラと似てる気がする。自分の主義主張が絶対だと信じ、それに向かって全力で突き進むので周りが見えないタイプ。まぁ、簡単に言えばわがままという事だ。
フィーリアはどちらかと言えば指揮してもらって後からついて行く感じの子なので、ある意味二人が仲良くなるのもわかる気がする。
そんな事を考えていると、ルーデルは別の作業の為に彼の側から離れ、代わってフィーリアが駆け寄って来た。
「クリュウ様、何か手伝う事はありますか？」
「ううん、特にないよ」
「そうですか」
「……あ、ごめん。ちょっとフィーリアにお願いがあるんだけど」
「何でしょうか？」
「もう一度、リオレイアの生体とか特徴、戦い方とか教えてほしいんだけど」
ここに来るまでの間、クリュウはフィーリアからリオレイアについて一通り説明を受けていた。しかしクリュウというのはとても慎重な子。最後の確認として、もう一度聞いておきたかったのだ。そんな彼の頼みに対しフィーリアも「いいですよ」と快く承諾する。
クリュウとフィーリアはその場にゆっくりと腰を落とした。
「雌火竜リオレイアはクリュウ様が私達と合同で討伐した火竜リオレウスと対を成す存在です。しかし、その生体はリオレウスとは大きく異なります」
「リオレウスは空中戦を、リオレイアは地上戦に長けた飛竜なんだよね」
「その通りです。注意すべき点は彼女の体はリオレウスよりも一回り大きい事。これは地上戦に長けている為に空中での繊細な動きを捨てて重量が重くなり、より突進などでの攻撃力を増す為と言われています。リオレウスの時と違い、私達もいる地上こそが彼女のフィールドなんです。それと、リオレウスは別のエリアに移動して態勢を立て直すという行動をする事が多々ありますが、彼女の場合は本当に自分が劣勢となるまで執拗に攻撃を繰り返してきます。言うなればリオ

レウスよりもより好戦的で粘り強いんです。しかもリオレウスのように空中へ飛ぶ事はほとんどなく、上がったとしても態勢を立て直す為の一瞬。リオレウスの時のように空中にいる間にその直下に入って罠を仕掛けたり回復薬を飲むなどの動作はできません。彼女は、リオレウスなどよりもずっと隙がなく、そして凶暴で好戦的です」
「何だか聞けば聞くほどに勝算がなくなっていくような気がするんだけど……」
「お気持ちは察します。しかしそれだけ彼女は強いんです」
　フィーリアは真剣な表情でそう断言した。彼女はリオレイア相手ではまさにプロである。その彼女が冗談抜きで強敵だというのだから、これから始まるであろう戦いは壮絶を極めるのだろう。そう思うと、自然と拳を握り締めてしまう。
「彼女の攻撃手段はリオレウスに似たものが多いです。ただしどれもリオレウスよりも厄介ですね。基本攻撃は遠距離では突進と長距離単発ブレス。中距離でも突進と三発のブレスで彼女の前方六〇度の範囲を吹き飛ばす三連ブレス、近距離では突進、ブレス、旋回攻撃、噛み付き、そして一歩体を引いて一瞬力を溜めて一気に体をバク転のように縦回転させて尻尾を叩きつけてくるサマーソルト。尻尾が直撃すると大怪我する上に毒状態になりますので絶対に回避、もしくはクリュウ様の場合は最悪盾でガードしてください」
「そのサマーソルトってそんなに恐ろしい攻撃なの？」
「当然です。敵対するモンスターに致命的なダメージを負わせる為に生まれた攻撃のようなものですから。剣士でも直撃すれば大怪我、私のようなガンナーなら下手な防具で行けば即死するような強烈な一撃です」
「ふぃ、フィーリアが一撃ッ!?」
「まぁ、私はサマーソルトの範囲外からの中距離射撃に徹しますので、突進とブレスさえ警戒すればいいのでまずサマーソルトで襲われる事はありませんのでご安心を」
「そ、そっか。そうだよね……」
　ほっと安堵の息を漏らすクリュウ。その頭の中にはすっかり

フィーリアがリオレイア戦のプロという根底が消滅してしまっているのだろう。フィーリアは自身の事よりも自分を心配してくれる彼の優しさに嬉しそうに微笑みつつも、すぐに顔を引き締める。
「リオレウスよりも厄介と言われるのが空中戦がなく地上戦に特化している事と先程言いましたよね？　先程上げた攻撃だけでも厄介ですが、彼女の場合はフェイントをかけてくるんです」
「フェイント？」
「突進と見せかけて噛み付き、しかもその後すぐに突進する場合もあります。他にも突進と見せかけてサマーソルト、突進と見せかけて回避した相手を再捕捉して角度を修正してからまた突進したり、全く別の対象に振り返って突進する事もあります。彼女の突進は様々な攻撃へと繋がる事が多いので、単純な突進だと判断して動くのは危険です。それと先程上げたサマーソルトは最大二連続で仕掛けてくる事があるので近づくように回避してはいけません。彼女から距離を取るようにして回避しないと二発目の直撃を受けて大怪我を負います」
「……ほんとに聞けば聞くほどに勝てる気がしないんだけど」
「確かに厄介な相手ですが、今のクリュウ様なら大丈夫ですよ。それに今回は僭越ながら私もご助力いたします」
「リオレイア戦でのフィーリアはご助力なんてレベルじゃないでしょ」
「そんな事ないですよ。それに、肝心なのはクリュウ様のがんばりです。今回の狩猟で、ルーはクリュウ様の力を見極めるつもりですので。勝手なお願いという事は重々承知しておりますが、どうかよろしくお願いします」
　そう言ってフィーリアは深々と頭を下げた。今回の狩りは彼女にとっても特別なもの。ルーデル、そしてクリュウとの初めてのリオレイア狩りでもあるが、肝心なのはこの狩猟の結果で自分と二人との関係が壊れる可能性があるという事。
　自分は当然大好きなクリュウから離れる気はない。でもだからと言って親友を見捨てる事もできない。しかも自分がもしもルーデルを選べばクリュウが、クリュウを選べばルーデルが傷ついてしまう、

まさに八方塞がり状態。この状況を打開するにはクリュウが自分のパートナーとして相応しいという事をルーデルに認めさせて、彼女に諦めてもらうしかない。それが、唯一フィーリアが二人との関係を維持できる手段なのだ。
　自分勝手なお願いだからこそ、フィーリアの胸には罪悪感が渦巻く。自分勝手なお願いのせいで、彼にリオレイアとの戦いを強いる事になってしまった。せめて、それを全力で援護すると心に決めて。
「大丈夫だよフィーリア。僕、がんばるからさ」
　そんな彼女の暗い気持ちに対し、クリュウは明るく言う。驚いて下げていた顔を上げると、そこにはいつものように微笑んでくれる彼の笑顔があった。その笑顔を見た途端、胸がドキッとときめく。
「それに、僕だってフィーリアと一緒にいたいからね。負けられないよ」
「クリュウ様……」
　クリュウは自分で言っておきながら照れたように頬を赤らめながら照れ笑いを浮かべる。そんな彼の姿にフィーリアも「えへへ……」と照れ笑いを浮かべる。
　そして、同時に互いに再び向き合う。
「信じてるからね、フィーリア。今日も援護よろしく」
「私も信じています。クリュウ様が私を守ってくれる事を」
　そう言い合い、二人はどちらからとなくスッと手を差し伸ばし、しっかりと固い握手を交わした。双方共に互いを信頼し合っているからこその心からの笑顔は輝いていて、瞳には確かな決意の炎が宿る――その表情は、立派な一人前のハンターのものだ。
　そんな二人を遠目に見詰めるルーデルはつまらなそうに唇を尖らせる。
「ちょっと、誰も手伝ってくれない訳？」
　嫌味を込もったルーデルの声にクリュウが「ご、ごめんッ」と慌てて手伝いに加わる。その間にフィーリアも手持ちの弾丸の最終確認に入る。
　ルーデルとクリュウは支給品を三人分に分配する。ただ均等に分

けるだけではなく、それぞれに合わせた種類と量。例えばクリュウは応急薬が多め、剣士二人組が携帯砥石を分配し、弾は唯一のガンナーであるフィーリアが担当する。二人は経験は違えどそれぞれ立派なハンターなので作業はすぐに終わった。

クリュウは早速自分の分の支給品を道具袋（ポーチ）の中にしまい込む。すると、隣で同じように支給品を道具袋（ポーチ）に入れていたルーデルが小さなため息を零した。

「……あのさ、あんたにずっと訊きたい事があったんだけど」

「何さ？」

「――あの異常な量の爆弾類は一体何に使うのよッ!?」

ビシッとルーデルが指差した先にはクリュウが持ち込んだ常識外れの量の爆弾類が鎮座していた。大タル爆弾Ｇ六発、大タル爆弾四発、小タル爆弾Ｇ五発。普通のハンターが狩猟で使う爆弾の二倍から三倍近い量の爆弾だ。

「あんたはこの島で鉱脈でも発見しようとか考えてる訳ッ!?」

「いや、普通に狩猟に使うんだけど」

「頭おかしいんじゃないあんたッ!?」

ルーデルの言う事はもっともである。爆弾は危険性が高い為に余程難易度の高い討伐対象を相手にする時のみ、二発乃至四発使用するのが常識である。しかしクリュウはその常識をブチ破る量の爆弾を持ち込んでいるのだ。すっかり慣れてしまったフィーリアはともかく、初見のルーデルがキレるのは仕方がない。

「る、ルー。これがクリュウ様のバトルスタイルなんだから……」

「はぁッ!?　私達がしようとしてるのは狩猟であって戦争じゃないのッ！」

誤爆という危険性にテンパっているルーデルをまあまあとなだめるフィーリア。クリュウはその間にルーデルがボロカスに罵倒した爆弾を次々に荷車に搭載する。とりあえず大タル爆弾Ｇ四発と小タル爆弾Ｇ三発を搭載し小タル爆弾二発はクリュウが腰に下げて携帯する。残りの爆弾はこれ以上持って行けないという事でとりあえず拠点（ベースキャンプ）に置いておく。その手順は実に慣れたもので

あった。
「ったく、仕方ないわね。あんた、私の半径五メートル以内に近づくんじゃないわよ。爆死に巻き込まれちゃ敵わないからね」
「大丈夫だって。爆弾の扱いは慣れてるからさ」
「んなもん慣れるんじゃないわよッ！」
苦笑するクリュウと不機嫌そうに怒鳴りまくるルーデル。元々が対立していた二人なので仲良くなるのは難しいとは思っていたが、正直これでうまく連携できるのか不安が隠せないフィーリア。しかも相手は雌火竜リオレイア。いくら自分が慣れているとはいえ、危険な相手には変わりない。この二人を守りながらの戦闘になると思うと、正直前途多難である。
「でも……何だか嬉しいな」
それはフィーリアにとっては夢の光景なのかもしれない。
自分が愛してやまない陸の女王、雌火竜リオレイアを、子供の頃からずっと一緒だった幼馴染にして親友と、一緒にいると胸がポカポカする大好きな初恋相手と一緒に狩る。夢にまで見た光景がそこにあった。
「ほらフィーちゃん。あんな爆弾バカ放っておいてさっさと行きましょッ」
「あ、ちょっとルー！……ッ」
有無を言わさずフィーリアは早足で進むルーデルに手を引っ張られて連行される。その後ろを少女二人の後ろ姿を見て苦笑を浮かべるクリュウが重い荷車を引いて続く。
ふと空を見上げると、絶好の狩猟日和と言っていいくらいに空は真っ青に晴れ渡っていた。
「雌火竜リオレイア……リオレウスと対を成す竜か」
初めてシルフィードと会った時、クリュウは火竜リオレウスをフィーリア、サクラ、そしてシルフィードと共に激しい死闘の末に討伐した。
あれから数ヶ月。自賛する訳ではないが、今の自分はあの頃の自分とは比べ物にならない程に成長している。今の自分なら、リオレイア

相手でも足手まといにならないだろう。むしろ、チームの数少ないアタッカーとしてがんばらなければならない。
今回の狩りには俊足の突貫と人間離れした機動力を駆使して飛竜を翻弄する無双姫サクラも、強大な攻撃力と卓越した足さばきで常に飛竜と肉薄する騎士姫シルフィードもいない。クリュウのチームでの事実上の主力二人がいないというのはやはり不安ではあるが、正確な援護射撃を期待できる上にリオレイア戦のプロであるフィーリアと、そんな彼女が信頼する未知数ではあるが確実に自分よりも強いであろうルーデルが一緒だ。
いつもとは違うチームでの初めての相手に不安はあるが、それ以上に新鮮な戦いを喜ぶ自分がどこかにいた。
昔ならリオレイアと聞いただけで恐怖しかなかっただろうに、今の自分は未知の戦いを期待している。それだけ自分がハンターとして成長したのだと思うと、ちょっぴり嬉しくなる。
スッと腰に手を伸ばすと、そこにはこれまで数多の戦いを共に勝ち抜いて来た相棒、デスパライズが下げられている。
「……今日もよろしくね」
相棒に小さくそう声を掛けると、クリュウは「良しッ」と気合を入れ直して歩む速度を上げた。
クリュウ・ルナリーフ、フィーリア・レヴェリ、ルーデル・シュトゥーカ。三人のハンターは陸の女王が住まうテロス宮殿（みつりん）へと突入した。
拠点（ベースキャンプ）を出発した三人がまず最初に向かったのは隣のエリアであるエリア４。ここは拠点（ベースキャンプ）から繋がる長い細い弓状の浜辺であった。狭いと言っても大型モンスターが何とか動き回れるだけの広さはあり、フィーリア曰くリオレイアはここにも降り立つらしい。
そんな白い浜辺と青い湖が織り成す美しい光景で最初に出会ったのは自身の体よりも灰色の大きな殻を背負った赤蟹、ヤオザミであった。クリュウの住むイージス村の最も近い狩場であるセレス密林にも生息している甲殻類に分類されるモンスターだ。

エリア４にはそのヤオザミが拠点（ベースキャンプ）との入口付近と次のエリア３へと繋がるトンネルの手前の計二匹がいる。ただしヤオザミは地中に潜れるので実際はそれ以上の数のヤオザミが潜んでいるかもしれない。

いつもならこの時点でサクラが斬り込むのだが、今回はそのサクラはいない。すると、ルーデルがスッとクリュウの方へ振り向いた。

「手始めにこいつ倒して」

ルーデルの言葉にクリュウは小さくうなずいて荷車を置いた。今回はリオレイアの討伐と同時に自分の実力をルーデルに見せるという二つの目的がある。クリュウは素直に従って二人の前に出ると、デスパライズを引き抜いた。

すでに三人の存在に気づいていたヤオザミはゆっくりと横歩きでハサミを振り上げながら迫っている。クリュウはすぐにその背後に回り込むようにして動き、すぐさまデスパライズを叩き込む。狙うは硬い殻ではなく体全体を支えている細い脚。

クリュウの放った一撃は狙い違わずヤオザミの細い脚に命中する。堅い甲殻の一部が砕け、灰色の血が吹き出す。しかしヤオザミは無機質にクリュウの方へ向き直りハサミを横薙ぎに振るう。クリュウはそれを一歩下がってやり過ごすと再び一歩踏み出してデスパライズを叩き込む。

一撃を入れるたびにヤオザミのハサミの範囲外に逃れ、それを避けると再び攻撃に転ずる。その繰り返しを続けていけば確実にダメージは蓄積していく。

そして、脚から力を抜けてヤオザミの体制が崩れた途端、クリュウはとどめとばかりにヤオザミの顔面にデスパライズを叩き込む。その一撃に顔面が砕け、血が噴き出し、ヤオザミは力尽きハサミを投げ出すようにして倒れた。

ふぅと全身から必要最低限の力以外を全て抜き、デスパライズを腰に戻す。そこへ後ろで見守っていたフィーリアとルーデルがゆっくりとした足取りで近づいてきた。

「お見事ですクリュウ様」

「ま、これくらい当然よね」
ルーデルの言葉に苦笑を浮かべ、クリュウは先を見詰める。このエリアには視界に捉えられるだけであと一匹。できれば無駄な殺生はしたくないが、ヤオザミは好戦的なモンスターな上に次のエリアの入り口付近にいるので避けては通れない。どうしたもんかと考えていると、ルーデルが動いた。
「見てなさいバカ。フィーちゃんも――これが今の私の実力よ」
そう言い放つとルーデルは背負った巨大な赤い不気味な狩猟笛――ブラットフルートを担ぎ上げるようにして構える。ハンマーと同じ打撃系武器だが、その構え方はすでにハンマーのそれとは大きく異なる。
ルーデルは次に担いだブラットフルートを体全体を使うようにして横薙ぎに振るい、今度は腕で抱えるようにして構えた。そして笛の側面から突き出している歌口に口を付け、気合いと共に息を吹き込む。
――刹那、美しい歌声が辺り一面に広がった。
笛の先端、膨らみまるでフルフルの口のようなデザインの管尻から奏でられるのはまるで女性の美しい歌声。とてもじゃないがそのデザインからは想像できないような美しい音色。危険な狩場だというのに、クリュウはついその美声とも言うべき音色に耳を傾けてしまう。
美しい音色が、静かな狩場に響く。
一回息継ぎして計二回吹くと、ルーデルは再びブラットフルートを担ぎ上げ、走り出した。その時、クリュウは異変を感じた。
狩猟笛は決して軽い武器ではない。大剣やランスなどに比べれば軽いが、それでも重い武器だ。そんなものを担ぎながら走る速度は当然武器をしまっている時の全力疾走に比べれば劣るのは当然だ。しかしルーデルの走る速度はそれに反してまるで全速力で走っている時に近い速度で走っている。
クリュウの抱いた異変を解決したのは隣にいるフィーリアだった。
「狩猟笛は音によって身体能力や治癒能力を向上させるのが最大の特

徴です。今の音色は使用者自身の移動速度を強化する音色なんです」
フィーリアの説明に納得しているうちに、ルーデルはあっという間に向こう側に到達し、待ち構えていたヤオザミに襲い掛かる。
「せいやぁッ」
ルーデルはヤオザミの手前で足を止め、不安定な砂上という事を諸ともせず踏ん張り、担いでいたブラットフルートを勢い良く左に薙ぎ払った。その一撃はヤオザミの左側面に命中。その瞬間、まるでフルフルの帯電攻撃のようにブラットフルートが電気を帯び、ヤオザミは感電しながらその勢いを受け流す事ができずに吹き飛ばされた。
地面をゴロゴロと転がり怯むヤオザミにルーデルは素早く近づくと、起き上がる隙を与えずにもう一発、今度は反対側から横薙ぎの一撃を叩き込む。その一撃はヤオザミの顔面に命中して頭殻を砕き、再び吹き飛ばす。
地面を転がされ、無理矢理湖の浅瀬に叩き込まれたヤオザミはそのまま息絶える。それはあっという間の出来事であった。
ヤオザミを片づけると、ルーデルは再びブラットフルートを背負い、近づいてくる二人にどうだと言わんばかりにグッと親指を突き出す。
「さすがルー、相変わらず豪快ね」
そう言ってフィーリアは微笑む。久しぶりに親友の動きを見て、自分と同じように成長しているのを純粋に喜んでいるのだ。そんなフィーリアの言葉に「これくらい当然よ」と嬉しそうに笑うルーデル。彼女も親友に誉めてもらって嬉しいのだ。
狩場だというのに楽しそうに笑う二人の少女を見て、クリュウは二人の絆の強さを見せつけられたような気がして、素直に羨ましく思った。
「親友、かぁ……」
その時、自然と頭に浮かんだのはツバメであった。仲が良く、腹を割って話せて、一緒にいて楽しいと思え、信頼できる存在――きっと、自分にとっての親友はツバメなのだろう。ツバメにも、そう思ってててもらいたい。

「それじゃ、さっさと行くわよ。リオレイア相手にあんたがどこまでやれるか見物ね」
　挑発的な笑みを浮かべてさっさと歩いていくルーデルにクリュウはムッとする。そんな彼にフィーリアが「す、すみません……」と申し訳なさそうに謝る。彼女が謝る必要はないのだが、律儀な子である。
「言い方はどうであれ、これは僕のテストみたいなものだからね。がんばらないと」
「その意気です。私も相手が《彼女》であれば全力で援護ができますので。一緒にがんばりましょうッ」
「ありがと、フィーリア」
「くぉらッ！　さっさと来なさいッ！」
　痺れを切らしたルーデルの声に苦笑を浮かべ、二人は足早にエリア4を脱した。
　エリア4の隣にあるのは同じく浜辺のエリアに指定されているエリア3。ここはエリア4に比べて幅が広く立ち回りがしやすい。ただ浜のギリギリにまで鬱蒼と木々が生い茂っており、視界は少々悪い上に横への動きは全て木々の障害を受けてしまう。
　ここはこの狩場の分水嶺とも言うべき場所。ここから島の中央部にある洞窟地帯のエリア7と8、山を登った先にある崖の上の広場をエリア指定されているエリア2、逆に下って行った先にある飛竜の水飲み場として使われる事が多い渓谷のエリア9、クリュウ達が通って来たエリア4、そして太古の昔にここで栄えていたと言われる文明の遺跡があるエリア10。このエリアはまさに様々なエリアを繋ぐ狩場の大拠点であった。
　海と空の蒼、浜辺と雲の白、鬱蒼と茂る木々の緑。この三色のコントラストがテロス密林での基本色となる。そして、その緑に溶けこむようにして《彼女》は威風堂々と存在した。
　一見するだけではその姿を確認する事はできない。まさに自然に身を隠す為に磨きあげられた見事な緑色の体。一般的に自身を自然と同じ色にするのは保護色と言って天敵に襲われないようにする為

と言われている。しかし彼女はその逆。自然に溶けこむ事で獲物に近づきやすくなっている――違う、自然と自身を一体化させる事で、その自然を支配しているのだ。

この世界は、まさに彼女にとっての世界。彼女だけの宮殿なのだ。

細い木々をへし折りながら、重々しい地響きと共に彼女は進む。そして、前方の木々が一斉に折れた時、彼女はついにその全貌を彼らに現した。その瞬間、クリュウはゾクリと背中が凍りつくのを感じた。

――なぜ、自分は余裕ぶっていたのか。

それはきっと、今までの経験が自身に慢心を抱かせていたのだろう。

対を成す火竜リオレウスを討伐し、多くのモンスターを討伐し、幾多の経験や危険を乗り越えてきた自分なら、今度もまたきっと乗り越えられる。そんな過信があったのかもしれない。

だが、自信と過信は違う。彼女はそれを全身から放つ気迫だけでクリュウに見せつける。

密林の深緑に調和する見事な美しい濃緑の鱗と甲殻に全身を覆われ、その巨体を持ち上げるだけの力を漲らせた巨大な翼、長く凶悪なまでに筋肉に覆われた尻尾、ここに生えているどんな木々よりもずっと太く頑丈そうな脚、巨体に対して若干小ぶりな頭、だがその眼光は鋭くクリュウ達を射ぬく。

凶悪なまでに鋭く睨みつけて来る金眼に見詰められ、体は恐怖に震え出す。しかし、クリュウはその圧倒的なまでの迫力と彼女の姿を見て思った――美しい。

これが陸の女王と呼ばれる雌火竜リオレイア。全身を覆う鱗はまるで木々に生い茂る生命力を漲らせる葉のようで、しかしそれはまるで石のように鈍く光り、宝石のように美しい。頭も、脚も、体も、翼も、尻尾も。これが自然が生み出した存在とは思えない程に美しく、勇ましく、恐ろしい。それはまるで自然が生み出した芸術だ。

フィーリアがなぜリオレイアを《彼女》と呼び、敬愛し好んでいるのかがわかる気がした。

双方が沈黙し、見詰め合うだけの沈黙はまるで数時間続いたような

錯覚に襲われる。しかし、実際はほんの数秒。それは一瞬にして、女王が放った猛烈な殺気によって打ち砕かれる。
全身が恐怖に震え、鳥肌が立ち、本能が今すぐに逃げろと最終警告を放つ。しかしそれでも、クリュウは一歩も引かなかった。
多くのモンスターを相手にして抱いていた過信は砕かれた。でも、彼を大きく成長させた経験が今の彼の足をその場に留めさせる。
だが、そんな彼の成長など彼女の前では何の意味も成さない。
刹那、リオレイアは折り畳んでいた翼を展開させる。その大きさはリオレウスを超えるだろう。その翼長は簡単に倍以上の広さに広がり、圧倒的なまでの迫力がさらに巨大化し、濃縮されてクリュウ達を襲う。そして、自信の宮殿に無断で侵入した不埒な輩に対し、女王は沸き起こる激昂を怒号と共に敵に撃ち放つ。
「ゴオオオオアアアアアアアアアッ！」
怒号（バインドボイス）と共に放たれた暴風が、クリュウ達に叩き付けられる。しかし、誰も一歩も引かなかった。
それは彼女からの宣戦布告。
テロス密林を舞台に、クリュウ達と陸の女王――雌火竜リオレイアの戦いが始まった瞬間であった。

第１２７話　クイーン・オブ・ドラゴン

宣戦布告の怒号（バインドボイス）の後、リオレイアはクリュウ達に向かって地面を蹴って猛烈な勢いで突進して来た。この距離なら横へ全力で走れば回避できる。それだけの距離が彼我にはあった。しかし、クリュウは動けなかった。なぜなら彼は重い荷車を引いているからだ。荷車を放棄したとしても取っ手の内側にいる彼はまずそこから出なければならない。今から走っても巻き込まれる事は必至。会敵一番にクリュウに死という恐怖が襲い掛かる。

しかしそれは杞憂に終わった。突進して来るリオレイアに対しフィーリアは冷静に閃光玉を取り出し、振り返ると同時に自分達の背後に投げた。直後、閃光玉が破裂して強力な閃光が辺りに飛び散った。その光にリオレイアは目を潰されて突進を強制停止して悶える。それは三人からわずか数メートルの距離、ギリギリであった。

「あ、ありがとフィーリア」

「お礼は結構ですッ！　クリュウ様は荷車を早く安全な場所にッ！」

そう言い、フィーリアはハートヴァルキリー改を構え、すでに装弾済みの通常弾ＬＶ２を速射機能を使って攻撃を開始する。ルーデルもブラットフルートを構えて動き出す。クリュウも急いで荷車を引いてリオレイアから離れる。

ルーデルは閃光玉で動きを封じられたリオレイアを横目に狩猟笛で演奏を開始した。狩猟笛にとって演奏中は無防備になる為、閃光玉が効いている間は格好の演奏タイムとなる。

ルーデルは構えたブラットフルートを後ろに向かって振り上げ、そのまま地面に叩きつける。その勢いを利用して大きく後方に下がり、今度は再びブラックフルートを振り上げ、そのままの体勢で歌口から息を吹き込む。

再び辺りに美しい音色が響く。しかしそれは先程とは少し違う音であった。その音はまるで空間全体に溶け込むように辺りに響き、自然の岩や木々に反射して辺りに残る。するとルーデルは再びブラックフルートを今度は前方に叩き付け、右足で蹴り上げる。そしてまた

その体勢で演奏をする。これも今までの二つの音色とは異なる音。最後にもう一度後方に叩きつけてから天高く掲げて演奏する。
エリア全体に乱反射してまるでやまびこのように辺りに響き続ける二種類の音色が組み合わさった時、狩猟笛の奇跡が起きる。
荷車を安全な所に置いたクリュウはその音色に全身に力が漲るのを感じた。それはまるで全身の筋肉が強化され、ある種の鎧のようになったような感覚だ。クリュウはまた別の演奏を開始するルーデルを見て、納得する。
「防御力強化の音色か……」
狩猟笛の音色の中には音で人間の身体能力を向上させる力がある。その種類は様々で、攻撃力が上がるものや防御力が上がるものなどがあるが、今回のは攻撃力が上がる音色であった。
今まで同じような効果を持つ小型の笛、硬化笛も使った事がなかったクリュウはその新鮮な感覚に驚きつつも、全身に漲る力に確かなものを感じていた。グッと拳を握り、ルーデルに感謝しつつその礼とばかりに遅れてリオレイアに走る。この間もフィーリア一人の集中砲火は続いている。
閃光玉の影響でその場に留まり、ひたすらに噛み付く動作を繰り返しているリオレイアの正面から左斜め前からフィーリアはひたすらに通常弾ＬＶ２を速射で連射し続ける。速射は速射対応している弾丸を自動的に連射する事ができる分振動や衝撃が重く、腕にかかる負担も大きい。その為慣れない人が使えば銃口がブレて弾の無駄遣いになるが、フィーリアはそれを見事に耐えて一点集中を狙う。スコープを覗いて照準を合わせながらの繊細な銃撃。それら全てがリオレイアの頭に命中する。リオレイアにとって弾丸の弱点部位が頭であるという事はフィーリアは当然熟知している。
フィーリアがひたすらに弱点集中攻撃をしていると、再びルーデルの音色が響いた。三回目の音が耳に届くと、再び体に力が漲る。先程の防御力強化の音色とはまた違う感覚。次の瞬間、腕が軽くなったような感覚を感じた。そればかりか自分の思う通りに体が動く。まるで全身の筋力が強化されたかのように、頭で描いた通りの行動が実際

にできる。
「攻撃力強化の音色……さすがルーね」
　先程の防御力強化の音色とは別に、今度は攻撃力強化の音色。これで三人の攻撃力と防御力は強化された。狩猟笛の最大の存在意義は音色でエリアに存在する味方全員の身体能力を上げる事。狩猟笛はその複雑な操作方法からマイナー武器とされている為あまり浸透はしていないが、チームでは一人いるだけで狩りの成否が大きく変わってしまう。攻撃力の面でもハンマーには一歩劣るものの、それでも絶大な攻撃力を誇る。
　純粋な攻撃武器としても支援武器としても、実に優秀な武器。それが狩猟笛だ。
　フィーリアは演奏を止めて攻撃に転じるルーデルの姿を一瞥し、空になった弾倉に新たな通常弾ＬＶ２を装填して再び速射する。モーターが作動して次々に撃ち出される弾丸。それらは全て的確にリオレイアの頭部に炸裂する。弾丸が射出されるたびに火薬部分の空薬莢が煙を上げながらバラバラと辺りに散らばる。フィーリアの周りには撃ち出された無数の弾丸の空薬莢が無造作に転がっている。
　的確に頭部を狙って集中砲火を行うフィーリア。しかし装弾した弾丸が全て消費されたと同時にリオレイアは閃光玉から回復する。頭を振り、まるでフィーリアの攻撃など効いていないと言いたげな動作の後、視界に最初に捉えた相手――フィーリアを睨みつける。新米ハンターならそれだけで体が硬直して動けなくなってしまう怒りに満ちた瞳。しかしフィーリアの表情は涼しい。
「さぁ女王様。私と死の輪舞曲（ロンド）を踊りませんか？」
　フィーリアはいつもの彼女はしないような不敵な笑みを浮かべてリオレイアを挑発する。人間の言葉がわかるはずもないのに、リオレイアはフィーリアに狙いを定める。
「ゴアアアアアッ！」
　リオレイアはフィーリアを潰そうと全力で駆け出す。しかしフィーリアはこれを横に走って回避し、通り過ぎる瞬間に振り返ってすぐさま装弾数の多い通常弾ＬＶ３を装填。地面に倒れるリオレイ

アのアキレス腱を狙うように一撃を放つ。
起き上がろうとするリオレイアに向かってクリュウは姿勢を低くして突き進む。サクラのような俊敏さがないクリュウの突貫は彼女のそれとは比べ物にならないほど遅く鋭くもない。しかし一気に間合いを詰めてリオレイアの背後、尻尾の下に潜り込むとそこから一気に跳躍して大木のように太い尻尾にデスパライズを叩き込む。刃先が鱗を削り取り、分泌された麻痺毒が空気に触れて眩く光る。
クリュウは一撃を入れてすぐに着地するとそれ以上深追いはせずまた後退する。深追いし過ぎれば自身が危険になる。リオレイアにとってクリュウの一撃など大した威力ではないのに対し、リオレイアの一撃はクリュウにとっては一撃必殺とも言うべき威力。直撃すれば大怪我は免れないし、下手したら致命傷を負ってしまう。それほどまでに人間とモンスターとには大きな埋められない差があるのだ。
クリュウの一撃もまたリオレイアにとっては蚊に刺された程度でしかない。リオレイアは気にした様子もなくゆっくりと振り返る。次の瞬間、
「でぇりゃあああぁぁぁッ！」
いつの間にか振り返ったリオレイアの頭部が来る真下にルーデルが先回りしていた。そして、予想通り振り返るリオレイアの頭部に向かって勢い良くブラットフルートを横薙ぎに叩き込む。側頭部に強い衝撃を受け、さらには苦手な電撃を受けてさすがのリオレイアも悲鳴を上げて怯む。さすが攻撃力の高い武器だけあって一撃が違う。
「もう一撃ッ！」
振り抜いた一撃を反動を利用して腕でそれを持ち上げ、今度は一気にリオレイアの頭頂部に叩きつける。その一撃は絶大で首が落ち、リオレイアの顎が地面にめり込み感電する。
「ルーッ！　深追いはしないでッ！」
「わかってるわよッ！」
ルーデルはすぐにブラットフルートを背負ってリオレイアから逃げるように走り出す。それを援護するようにフィーリアも通常弾ＬＶ３でリオレイアの頭部を狙って邪魔をする。その間にクリュウは

再びリオレイアの背後に回り込むとリオレイアの脚にデスパライズを叩き込む。
しかし、そんな二人の援護も虚しくリオレイアは最も攻撃力の高いルーデルを最優先に潰すと判断したのだろう。逃げるルーデルに狙いを定めて必殺の突進を開始する。置いて行かれるクリュウに対しフィーリアは疾駆するリオレイアの脚に向かって的確に銃弾を当てていく。だが当然そんなチマチマした攻撃では一度走り出したリオレイアを止める事はできない。
リオレイアとルーデルの背中がみるみる近づいていく。その時、ルーデルはその場で突如足を止めて振り返り、何と迫り来るリオレイアに向かい合った。クリュウが「危ないッ!」と叫ぼうとした瞬間、ルーデルは先程のように豪快にブラットフルートを振り、その勢いで振り上げる。そして、全身を使って一気に叩き落す。その先には迫り来るリオレイアの頭。
鈍い打撃音と共に再びブラットフルートがリオレイアの頭を地面に叩き込む。強烈な一撃と激しい電流の嵐を受け、当然リオレイアの突進の勢いは殺され、その場で強制停止となる。そして止まったリオレイアを横目にルーデルは余裕で再び距離を取る。
クリュウはそんなルーデルの神業のような一撃に呆気に取られていた。しかしすぐに頭を振って我を取り戻す。ルーデルの豪快にして繊細な見事な一撃に目を奪われてしまった。ハンターなら格上のハンターの神がかり的な動きを見れば当然目で追ってしまう。クリュウもまたルーデルの動きに見惚れていたのだ。
武器が違うから。そんな一言で片付けられるほど甘くはない。経験と、踏んで来た場数の差が、そこにはあった――彼女の動きが、羨ましかった。
ふと視線を向けると、ルーデルは再び何か演奏を開始していた。しかし自分が見ている事に気づいたのだろう。ルーデルはまるで「どんなもんよ」と言いたげな不敵な笑みを浮かべた。それを見て、クリュウはムッとする。
負けたくない。彼の心に対抗心の炎が燃え上がった。

クリュウは走り出した。その前方には先程のルーデルの一撃で軽くめまいを起こしたのか小刻みに頭を振るリオレイアが立っている。狙うはその脚だ。

ハンマーや狩猟笛のような打撃武器は頭に強烈な一撃を叩き込み続けると、その脳を直接揺するような振動が一時的に脳震盪（のうしんとう）を起こし、強烈なめまいを起こさせる。このめまいでモンスターは立っている事もできずに転倒し、しばらくの間動けなくなってしまう。一般的には《スタン》と呼ぶ打撃系武器の最大の見せ場と言ってもいい繊細かつ豪快な役割だ。

その為、打撃系武器がいるチームは自然と頭をそれ以外の武器が空ける傾向がある。めまいの邪魔をしない為だ。クリュウも頭部を狙うのはやめて、脚にダメージを確実に蓄積していく方法を選んだ。頭のめまいと同じく、脚にもダメージを蓄積させれば転倒させる事もできる。自分にできる最大の役目はこれしかない。攻撃力が低い片手剣だからこそ、確実な方法を選んだ。

しかし近づこうとした所で突如リオレイアはその場で尻尾を薙ぎ払うように振るった。尻尾だけではなく、体全体を回転させての一撃は威力絶大。クリュウは寸前で立ち止まり、その直前を尻尾が空気を薙ぎ倒しながら振り抜ける。あと数歩足を進めていたら大怪我だっただろう。ゾッとしつつも、薙ぎ払い中の飛竜は無防備になる。そこを狙ってクリュウは再び走り出す。

再びクリュウはリオレイアの懐に潜り込むと脚に斬り掛かる。緑色の強固な鱗に刃は阻まれて肉に直接ダメージは負わせられない。しかしそれでも今の一撃で鱗の一部が剥がれ落ちた。今はそれでいいのだ。

あまりにも圧倒的すぎるモンスターに対して、非力な自分達人間ができる事はこうした小さな攻撃の積み重ねでダメージを蓄積させる事だけ。この積み重ねこそハンターにとって大切な事。だからこそハンターには根気強さが求められる。

二度斬りつけ、体全体を使って回転斬りをした所でリオレイアが動いた。纏わりつくクリュウから距離を取るのと、先程から執拗に頭を

狙ってくるフィーリアを潰そうと突進を開始する。クリュウは寸前で離れた事で巻き込まれずに済んだが、リオレイアはフィーリアに向かって一直線に突き進んで行く。
だが、フィーリアは冷静だった。再び道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出して後ろに投擲。炸裂する光の一撃は見事にリオレイアの視界を潰し、またしてもリオレイアの突進は阻まれる。
クリュウはすかさずリオレイアとの距離を詰め直すと共に道具袋（ポーチ）から拳くらいの大きさの玉を取り出し、リオレイアに投げつける。それはリオレイアの尻尾の付け根辺りに命中し、すぐさまハンターなら嗅ぎ慣れた特有の強烈な匂いが辺りに広まる。
クリュウが投げたのはペイントボールだ。これでもしリオレイアがエリア移動してもその後を追える。空を飛べない自分達と違い、空を飛べるリオレイアはその活動範囲が広い。居場所を見失った状態でそれらの範囲をしらみ潰しに捜索しても体力と時間の浪費でしかない。
これでしばらくの間は相手を見失わなくて済む。クリュウは再び攻撃に転ずる。狙うはもちろん脚だ。
一方のフィーリアは再び速射性能が付いている通常弾ＬＶ２を装填し、猛烈な集中砲火を開始する。しかし今度は頭ではなくクリュウがいる反対側の脚。
なぜ弾の威力が最大になる頭部への攻撃を止めたのか。それはリオレイアの正面から突っ込む少女の為だ。
「てぇいッ！」
リオレイアに全力で接近し、眼前で止まるとその場で足を踏ん張り、それまでの勢いを利用して構えていたブラットフルートを振り上げ、スイングするように横薙ぎに振り抜く。その一撃は視界を潰されて動けずにいるリオレイアの左側頭部に電撃と共に炸裂。リオレイアは悲鳴を上げて顔が右に吹き飛ぶ。
だが、ルーデルの攻撃は終わらない。振り抜いた一撃の勢いをそのまま腕を返して反転させ、今度は反対側からリオレイアの右側頭部をブチ抜く。

「ガアァッ!?」
顔の甲殻の一部が吹き飛び、リオレイアの短い悲鳴が響く。
体全体を使っての全力スイングはルーデルの体に大きな負担が掛かる。重いブラットフルートはリオレイアの側頭部を叩いても勢いを消し去る事はできず、腕を持って行かれそうになる。だがそこは狩猟笛使い。足を踏ん張って耐え、再び構え直してすぐさま全力で横薙ぎに振り抜いてリオレイアの側頭部を粉砕する。
連続して左右から繰り出される重量級の一撃の数々。往復で繰り出される爆砕打破は破壊力抜群だ。
見ていてリオレイアがかわいそうになる程の連続攻撃に一瞬見惚れてしまったが、クリュウはすぐに自身の役目に戻る。先程から閃光玉の影響とルーデルの猛攻撃で動けないでいるリオレイアの脚にひたすら剣を叩き込む。しかし動かない相手とはいえ正面だけではなく周りにも感覚を研ぎ澄まさなければならない。なぜならリオレイアは閃光玉で視界を封じられるとその場で軽く足踏みをして尻尾を激しく動かしたり、体全体を回転させて周囲を尻尾や翼で薙ぎ払う動作をするからだ。もしもの時はいつでも盾を構えられるように注意しながら死と隣り合わせの場所で剣を振るい続けるのはとても神経を使う。肉体的疲労とは違う精神的な疲労が蓄積していく。それでも、剣を振るい続ける。
剣士二人がリオレイアに肉薄して奮闘している間もフィーリアは中距離で通常弾ＬＶ２の速射で脚を狙い続ける。その距離は剣士二人にはわからないが、弾の威力が最大となる距離のギリギリの場所。慣れたガンナーは弾の種類に応じてその弾の威力が最大となる場所を選んで間合いを取る事ができる。フィーリアも当然全ての弾丸の間合いを感覚で掴んでいる。
剣士のような豪快さや迫力がないが、剣士にはない繊細さと複雑な状況判断能力が問われる。それがガンナーだ。
「クリュウ様ッ！　そろそろ閃光玉が解けますッ！」
フィーリアは自分が投げた閃光玉の効き目がそろそろ切れると判断し、接近しているクリュウに声を掛ける。クリュウはその声にすぐ

さま距離を置いた。一方のルーデルは最後の最後まで攻撃を加え続ける。相変わらず無茶で豪快だなぁと親友の変わっていないバトルスタイルに苦笑しつつ、フィーリアも射撃を続ける。

そして、ついに閃光玉の効き目が切れてリオレイアの視界が復活する。すぐさまリオレイアは解放された事による歓喜の声を上げる。

「グオオオオオオッ！」

「黙れ（ハルト ディクラッペ）ッ！」

天高く咆哮した後に元の位置に戻ったリオレイアの頭に、ルーデルは全力の一撃を側頭部へ叩き込む。その一撃はリオレイアの左側頭部に命中し、火花が散り、鱗が数枚が吹き飛ぶ。出血して辺りに軽く血が飛び散り、そのうちの一滴がルーデルの頬に付く。そしてリオレイアは耐え切れずに吹き飛ばされて転倒した。これまでの頭部への度重なる集中打撃に、リオレイアは堪らずめまいを起こしたのだ。スタン状態である。

ルーデルは倒れたリオレイアに近づきながら、頬についた血を親指で拭い取り、手甲についた血を無言で舐め取る。その時、彼女は静かに不気味な笑みを浮かべていた。

そして、倒れた事で叩きやすい地面に落ちたリオレイアの頭に向かって、ルーデルは容赦なくブラットフルートを叩き込む。

「ふふふ……、ほらどうしたの？　本気見せてみなさいよ」

静かに、つぶやくように言いながらルーデルは全力でブラットフルートを叩き込み続ける。

「つまらないなぁ……、あんた、ディアブロスって知ってる？　突進する気があるならあれくらい本気で突っ込んで来なさい。中途半端過ぎるのよ……雑魚は……雑魚らしく……強者に潰されてればいいのよッ！　あはははははははははははははッ！

あーっはははははははははははははッ！」

突然不気味な笑い声を上げながら倒れているリオレイアに容赦なくブラットフルートをボコボコに叩き込むルーデル。迸る電撃の光りが照らす彼女の笑顔は恐怖すら感じさせる。その異常な光景にクリュウは絶句し、絶好のチャンスだというのに動けずにいた。そんな

彼の横に、そっとフィーリアが立つ。
「あぁ……、あの子またスイッチが入っちゃったのね……」
「ふぃ、フィーリア？　あれは一体……」
「すみません。あの子昔から興奮するとちょっと《アレ》なスイッチが入っちゃう子でして。一度入っちゃうとしばらくあんな感じで残虐な一面が出てしまうんです。ああなると周りが見えなくなっちゃうんです」
「……それって、危なくないの？」
「とても危険です。ただでさえ性格がキツくて周りと合わせるという事をしない子な上に、スイッチが入ってしまうと手がつけられないものですから、あの子は友達がほとんどできないんです。悪魔のサイレンの悪魔ってのは、あの状態を指し示してるんです」
「……じゃあ、何でフィーリアはルーデルと仲良くなれたの？」
「――あの強引さが、私を殻から解き放ってくれたんです」
その言葉にそっと彼女の方を見ると、ルーデルはどこか嬉しそうに微笑んでいた。
彼女とルーデルがなぜ親友になれたのか。その理由はわからないが、その笑顔からは幸せだという気持ちがしっかりと感じられた。今は、それだけでいい。
「……でもさ、あんな状態じゃ僕も近づけないよね」
「そうですね。まぁ、私に任せてください」
そう言ってフィーリアは慣れた手つきでまだ弾が残っている弾倉から弾を取り出し、新たに通常弾ＬＶ１を装填。通常弾ＬＶ１は入門用の弾丸なので殺傷能力が低い。と言っても当たれば痛いが。
「私も伊達にあの子と長い付き合いじゃありませんよ」
そう言ってフィーリアはハートヴァルキリー改を構える。その照準の先には――笑い狂いながらブラットフルートを残虐に振るい続けるルーデル。
パンッ。
「プギュッ!?」
撃ち出された弾丸は見事にルーデルのこめかみに命中。ルーデル

は倒れた。
「……えっとぉ」
「大丈夫です。こんな事もあろうと、対ルー用の弾頭をゴムにした弾丸ですから」
「……対人用の弾なんてどうして用意する必要が」
フィーリアの言葉通り、ルーデルはすぐに起き上がると「何すんのよフィーちゃんッ！」と怒りの声を上げる。それを見てフィーリアは笑顔で「ほら、大丈夫です」と答え、クリュウは「……前から思ってたけど、フィーリアって容赦無いよね」と苦笑を浮かべる。それに対しフィーリアは不満げに頬を膨らませる。
「べ、別に誰かれ構わず射殺してる訳じゃないんですからね」
「とりあえずシュトゥーカは死んでないし、キャラ設定が間違ってる。この二つにツッコミを入れておくね」
そんなまるでコントのような件をやっているうちに、リオレイアがスタンから回復してゆっくりと起き上がる。その途端、先程までの空気は一変して再び狩猟モードに入るフィーリアとルーデル。その切り替えの速さに呆れ半分感心半分という感じでクリュウも一歩遅れて狩猟に意識を戻す。
フィーリアは再び弾倉に通常弾ＬＶ３を装填し、ルーデルもブラットフルートを構えたまま後退する。クリュウもリオレイアがどんな行動、攻撃しても避けられるようにいつでも走り出せる構えを取る。自然と、三人はリオレイアの正面に散開する形になる。
リオレイアは正面に点在する三人に対し、一人一人をギロリと睨みつける。さらに濃度を増した殺気の奔流が吹き荒れ、クリュウはまるで背中に氷の塊をねじ込まれたかのような寒気に襲われ身を震わせる。
「臆する事はありません。私がついてますから」
恐怖に身を震わせるクリュウに対し、少し離れた場所にいるフィーリアが声を掛ける。その言葉にクリュウは小さくうなずくと、リオレイアの殺気に満ちた瞳を睨み返す。バイザーに隠れたその反抗的な目が気に触ったのかもしれない。リオレイアは次なる目標（ターゲッ

ト）をクリュウに定めた。
クリュウは自分が狙われたと気づくと警戒を強める。そんな彼に狙いを定め、リオレイアは首をもたげてスゥと息を吸い込む――その動作を見たクリュウはとっさに右へと走った。
刹那、リオレイアは猛烈な爆音と共にブレスを撃ち放った。その一撃は強烈な熱量を放ちながら空間を貫く。空気中の酸素で燃え続ける火球は小規模な爆発を繰り返しながら先程までクリュウがいた場所を通過した。直後、背後の木々に火球が命中し爆発。木々は粉々に吹き飛んだ。
背後の木々が粉々に吹き飛ぶ様を見て、もしもあれが自分だったらと最悪の想像をして身を震わせる。しかしすぐに意識をリオレイアに戻し、恐怖を追い出す。
一瞬動けなくなったクリュウに対し、ルーデルはすかさず突っ込む。常に動き回るリオレイアに対して、ブレスを撃った後の隙は貴重なチャンス。それをうまく活用しなくてはならない。
ルーデルはブレスを撃った反動で数秒動けなくなっているリオレイアに駆け寄ると、動き出す前に顔面に一撃を叩き込み、深追いはせずにそのまま離脱する。
一撃を入れた事で狙われるルーデルを援護するようにフィーリアもすぐに通常弾ＬＶ３でリオレイアを狙い撃つ。
仲間二人が動いたのを見てクリュウも動いた。腰に下げていたシビレ罠を取ると、リオレイアから少し離れた場所に設置する。その手つきは実に慣れたものだ。
「こっちに誘導してッ！」
クリュウの声を聞いた二人はすぐに彼の意図を察してリオレイアから離れてこちらに走って来る。しかし、当然リオレイアも振り返り、逃げる二人に向かって単発のブレスを放つ。二人はこれを左右に分かれて回避。その隙に二人は一気にシビレ罠の両側を通過する。
「ゴアアアアアアアッ！」
リオレイアはもう一発ブレスを放つが、三人はこれを簡単に回避する。

二発のブレスを回避した敵に対して、リオレイアは再び突進を開始する。
猛烈な勢いで迫って来るリオレイアから目を話さず、クリュウはしっかりを相手を誘導する。そして、
「ギャオッ!?」
リオレイアはそのままシビレ罠を踏み抜いて麻痺毒で体の自由を奪われて拘束される。すぐさま三人が動けぬリオレイアに襲い掛かった。
頭部ではまたしてもルーデルがスタンを狙ってブラットフルートでボコ殴りにし、クリュウも脚に向かってここぞとばかりにデスパライズを振るいまくる。そして、中距離からはフィーリアが通常弾ＬＶ２の速射で集中砲火を浴びせる。
トリガーを引いている間自動で連射される弾丸の反動に耐え、弾倉が空になるとすぐさま腰のガンベルトから目にも留まらぬ速さで再装填して射撃を再開する。バラバラと排出される空薬莢はカラカラという音を立てて散らばり、その数がリオレイアが受けた銃弾の多さを表していた。それらをチラリと一瞥し、フィーリアは考える。
「まだ、使う時じゃない……」
彼女は対リオレイア戦のプロだ。当然、その準備は万全と言っても過言ではない。持ち込んだアイテムや弾丸は全て今までの経験で編み出したベストの選択。その一つが、決戦弾丸と決めている電撃弾だ。
属性弾の一つで、その名の通り着弾すると電撃を発生させ、物理攻撃とはまた違った属性攻撃を与える弾丸。剣士は武器によって属性が決まってしまうが、ボウガンは対応する弾丸の数だけ可能性を秘めている。
リオレイアの弱点属性は龍属性と雷属性。だからこそハートヴァルキリー改の対応弾種の中から電撃弾を選び、切り札にしているのだ。
切り札だからこそ、大切にしなければならない。属性弾は高価で武器の寿命を大きくすり減らす為に通常弾に比べて持ち込める数が厳

しい。ギルドが道具や弾丸の持ち込める数を決めているのは、道具に頼る事で過信したり無茶をするハンターを取り締まる為。ギルドの規定は絶対なので、フィーリアも従う他ない。だから、電撃弾も規定限界数しか持ち込めていない。

大切な弾丸だから、まだ使えないのだ。ここぞという時に、使わなくては。

それに、今回の狩りではルーデルのブラットフルートも雷属性の武器なのでリオレイアに与えられるダメージも大きい。クリュウも万能麻痺武器デスパライズで戦っている。誰の武器も、失敗ではない。

何より、クリュウもルーデルもフィーリアが認めたハンターだ。そんな二人と一緒なら、この勝負は負けない。そう信じていた。

初恋相手と親友。これほど心強いものはない。ないのだが……

「これが私の所有権を決める争いの一環だと思うと複雑だよぉ……ッ」

ふえぇん、とフィーリアはちょっとだけ涙目になる。

嬉しくもあり、悲しくもある。フィーリアの心境は複雑だ。

そうこうしている間にリオレイアを縛っていたシビレ罠が解け、彼女は自由を取り戻す。すぐさまクリュウとルーデルはリオレイアから離れようとするが、クリュウが脱出する寸前で突然リオレイアは彼の方へ向くと、その凶悪な牙が並ぶ口をバカッと開けて噛み付いてきた。間一髪クリュウは盾でその攻撃を防ぐが、間近でリオレイアの殺意に満ちた瞳を直視してしまったクリュウはまるで体が凍りついたかのように硬直してしまう。

「クリュウ様ッ！」

「あのバカッ！」

二人の声は耳に届いている。危険だというのもそれに直面している自分の方がずっとわかっている。でも、体が動かなかった。

リオレイアは目の前のクリュウに対し鋭い眼光で威圧しながら、スゥッと左足を一歩引く。その動作にフィーリアの表情が凍り付く。

「サマーソルトですッ！」

フィーリアが叫んだ刹那、リオレイアその強靭な脚力と翼力で巨体

を中に浮かした。そのまま、まるでバク転のように体を後ろ周りに回転させた。全長二〇メートルほどの、重量は十数トンはありそうな体が、一瞬にして宙返りする光景は現実離れしている。だが、それが現実だ。

宙返りと同時に強靭な尻尾をムチのように振り上げる。その先には、クリュウがいる。

迫り来る一撃必殺、それも猛毒付加の一撃。クリュウはとっさんに盾を構えた。それは今まで培ってきた経験からの勘であった。そして、それは正解だった。

一瞬遅れて、盾に強烈な一撃が炸裂した。支える腕に激痛が走り、取り零しそうになるのを耐える。踏ん張った足は簡単に外れ、クリュウの体はいとも簡単に吹き飛ばされてしまう。

「クリュウ様ッ！」

目の前で起きた悲劇に慌てるフィーリア。しかし、ルーデルは冷静だった。すぐに腰に下げていた小さな笛を取り出して吹く。それは角笛。モンスターの嫌がる音を出して相手の注意を引きつける道具（アイテム）だ。

ズシン……と地面に着地したリオレイアはその音を聞いてすぐさま狙いをルーデルに変える。

「ゴアアアアアッ！」

怒号を上げてリオレイアはルーデルに突っ込む。しかしルーデルはそれを回避し、走る。それはクリュウと彼に駆け寄るフィーリアとは反対方向。彼らからリオレイアを引き剥がす為の行動であった。

ルーデルがリオレイアを引きつけている間にフィーリアは地面で仰向けに倒れるクリュウに駆け寄る。

幸い、盾で防いだ事で大したダメージはなかった。地面に背中を強打したので激痛こそするが、直撃のそれに比べれば大した事はない。毒状態にもならずに済んだ。

「いったぁ……ッ」

「クリュウ様、お怪我はありませんか？」

先程のクリュウが吹き飛ぶシーンが余程ショックだったのだろう。

フィーリアの方がガクガクと震えてしまっている。クリュウはそんな彼女を安心させようと痛みに耐えて笑みを浮かべる。
「平気平気。こんなのエレナの蹴りに比べたら大した事ないよ」
「……エレナ様が聞いたらバイオレンスな事態になりそうな発言は控えてください」
冗談を言えるクリュウを見てフィーリアはほっと胸を撫で下ろす。しかしすぐに置かれた状況を思い出して振り返る。遠くに一人でリオレイア相手に獅子奮迅するルーデルの姿があった。
すぐさまフィーリアはルーデルの所へと走る。一瞬だけ振り返ると、クリュウは回復薬を飲んでいる所だった。これならすぐに戦線に復帰できるだろう。
孤軍奮闘するルーデルはリオレイアの体全体を回転させての尻尾の横薙ぎをしゃがんで回避すると、一気に懐へと潜り込む。リオレイアが回転してしまったので背後となってしまい、頭は狙えない。しかしルーデルはあくまでも冷静に脚に横からブラットフルートを叩き込む。その一撃に一瞬だけリオレイアの膝が折れて動きが止まる。その一瞬でリオレイアの両脚の間を転がるようにして潜って頭部真下に移動し、ブラットフルートを振り上げ、叩き込む。
「グギャァッ!?」
死角からの一撃にリオレイアが怯む。しかしすぐにルーデルを視界に捉えると脚を引く。その動作にルーデルは右へ跳ぶ。直後、サマーソルトが炸裂。一瞬前まで彼女がいた場所に尻尾が轟音と共に通り抜けた。尻尾は地面を抉り、その威力のすごさを表している。
ルーデルはバックステップで距離を取る。しかしリオレイアは逃げるルーデルにブレスを放つ。向かって来る圧倒的な熱量をヒラリと避ける。もう一発撃って来るが、ルーデルは余裕でこれを回避する。
リオレイアを視界に捉えつつ、ルーデルはチラリと背負ったブラットフルートを見る。すでに攻撃力強化と防御力強化の効果は解けてしまっている。音での身体強化は手軽な分持続効果が短いのが弱点だ。移動速度強化はまだ残っているが、これだってそろそろ解ける。

もう一度一通り吹き直す必要があった。
そんなルーデルの気持ちを感じ取ったようにフィーリアが一気にリオレイアとの距離を詰める。その手に握っているのは閃光玉だ。
チラリとフィーリアはルーデルの方を見て視線で合図を送る。ルーデルはそれだけでわかったようで首肯するとその場で演奏を開始する。それを確認してからフィーリアはリオレイアに突っ込む。リオレイアは角笛の影響でルーデルしか見ていない。そして、再び突進を開始する。
「あなた様のお相手はこの私が受けさせていただきますッ！」
フィーリアはすぐさま後方に閃光玉を投擲する。投げられた閃光玉は放物線を描きながら突進するリオレイアの眼前に現れ、その場で炸裂。目を焼くような強烈な閃光を受け、リオレイアは視界を潰されて悲鳴を上げる。当然、突進は強制停止される。
フィーリアは再び通常弾ＬＶ２の速射で頭部への集中攻撃を開始する。その間にルーデルはひとまず移動速度強化だけを終えてリオレイアに向かう。クリュウはすでにリオレイアに接近して先程までと同じようにデスパライズを振るう。
鱗や甲殻に堅さに腕が悲鳴を上げそうになるが、それでも諦めずに全力で振るい続ける。
ルーデルとフィーリアの目覚しい活躍を目の前にして、自分はまだ具体的な成果を残していない。自分だけ役に立っていないという悔しさと、二人にばかり負担を掛けてしまっている責任感。それが彼を突き動かしていた。
「そろそろ……ッ！」
クリュウの使うデスパライズは麻痺毒を仕込んでいる。刃がうまく肉に入れば刃に染み付いた麻痺毒が体内へと侵入する。それを蓄積していけば、強靭なモンスターといえど抗う事のできない拘束力を発揮する。その時が、ついに訪れる。
閃光玉の効き目が切れ、リオレイアが高らかに怒号を放つ。その直後、クリュウは今までの攻撃で脆くなっていた部分に全力で一撃を叩き込んだ。それは損傷した鱗を弾き飛ばし、そのまま内側の肉の部分

へと刃が炸裂する。その瞬間、リオレイアに蓄積していた麻痺毒が効力を発揮した。
「グギャ……ッ!? グォ……ッ!」
リオレイアは戸惑ったような悲鳴を上げ、その場で動かなくなった――いや、動けなくなったのだ。デスパライズに仕込まれた麻痺毒が効力を発揮した今、例え巨大な竜のリオレイアであろうとその呪縛からは逃れられない。わずかな時間とはいえ、完全にリオレイアの動きが止まったのだ。
「やるじゃないバカッ!」
ルーデルはここぞとばかりに頭部へと回り込んでブラットフルートで叩きまくる。一撃を入れるたびにリオレイアが短い悲鳴を上げ、ルーデルの顔に再び邪悪な笑みが浮かぶ。
「あは……、あはは……、あはははははッ! あーっははははははははははははッ! 壊れろ壊れろ壊れろ壊れろ壊れろ壊れなさいよッ! 死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねッ! あーっははははははははははははははッ!」
スイッチが入ってしまったルーデルは不気味な笑い声と恐ろしい台詞を吐きながら無我夢中でリオレイアの頭を叩き潰す。瞳は危険な光を帯び、完全にイっちゃっている状態だ。
フィーリアは冷静にリオレイアを銃撃をしながらそっとルーデルの背後に近づき、その頭を思いっ切り引っ叩いた。
「痛ぁッ! うえ～ん……、フィーちゃんがぶったぁ……ッ!」
「神聖な狩猟で何暗黒面に染まりまくってるのよあなたは」
「だ、だって楽しいんだもん」
「……恐ろしい事言わないでよ、もぉ」
そんな乙女二人の会話に苦笑しながら、クリュウは自分の作った隙を利用して攻撃を仕掛けている。刃が強靭な鱗にぶつかるたび、それを握る腕に衝撃と共に痛みが走る。まるで鉄を叩いているかのような感触に、クリュウは小さく舌打ちした。
「これじゃ僕の腕がもたないよ……ッ!」
泣き言を言っても仕方が無いのだが、言ってなきゃやってられない

のだ。
麻痺状態の為に動けないリオレイアに対しクリュウ、ルーデル、フィーリアの三人が猛攻撃を仕掛ける。リオレイアは自身に群がる下等生物に怒り狂うが、自身を縛る神経性の毒がそれを許さない。
時間にして十秒程の拘束時間。それでも、クリュウ達の攻撃の数はそれまでの十秒とは比べ物にならない程炸裂した。当然、リオレイアの全身に無数の傷が生まれる。いつの間にか、フィーリアの猛烈な銃弾の雨で右側の爪が砕けている。
体内で効力を発揮している麻痺毒を抗体で駆逐し、リオレイアはようやく体の自由を取り戻す。
「グギャアアアアアオオオオオオオオオオオオッ！」
下等生物如きに自分の体を傷つけられ、一方的に攻撃に晒され、リオレイアの怒りは限界に達した。それまでとは比べ物にならない程に濃い殺気が吹き荒れ、怒号（バインドボイス）と共に距離を取る三人に襲い掛かる。
すさまじい殺気と憎悪の混じった怒号（バインドボイス）に、クリュウは思わず耳を塞いで無防備になってしまう。どんなに経験を積んだ熟練のハンターでも逃れられない本能に直接干渉する《恐怖》。クリュウもまた危ないとわかっていても、生き物としての本能が恐怖に強張り、動けなくなる。理性や思考、感情というものは結局本能の上に積み重なっている部分でしかない。根幹が麻痺すれば、傘下の全てが正常に動かなくなってしまう。
（動け……ッ！　動いてよぉッ！）
心の中で必至に叫んでも、体は恐怖に震えて動けない。それは高級耳栓などのスキルを装備していないルーデルとフィーリアも同じだ。皆、本能からの恐怖に動けなくなっている。
いつもなら、ここで耳栓スキルを備えたシルフィードが構わず突進を仕掛けるのだが、今回のチームには彼女はいない。あの頼れる勇ましい背中は、ここにはないのだ。
（そっか……）
リオレイアを相手にしててずっと感じていた事があった――何か

が違う、そんな感じ。
ここで斬り込むべきか、それとも引くべきか。ハンターの行動は全てが決断だ。その時その時で最良の決断を下し、行動する。それがハンターであり戦闘だ。なのに、今回の狩りではその決断が鈍る。
初めての相手だから、上級飛竜に位置づけられる雌火竜リオレイアだから、あまり来た事のない狩場だから、いつもと違う様々な条件。しかしその中でも最も大きいのは――いつもと違うチームだから。
「任せろ。私が無理にでも隙を作ってやろう。なぁに気にするな、これもリーダーの務めという奴だ」
いつも先頭の、最も危険な場所で戦う頼れる背中も……
「……私は負けない。なぜなら、私の辞書には《敗北》と《プライド》と《手加減》なんて言葉はないから」
無茶苦茶だけど、その人間離れした身体能力で常に場の流れを変幻自在に変える彼女の横顔も……
（二人とも、いないんだよな……）
二人がいない。初めて組んだルーデルというハンター。いつもと違う狩りだ。
今までだってチームの編成が変わった事はあった。でも、それでも決して変わらない事があった――それはサクラかシルフィードの剣士どちらかがいた事。共に先陣で背中を預けあえる信頼できる剣士がいた事だった。
シルフィードは常に敵と肉薄して他のチームメイトに負担を掛けないようにし、サクラもその類まれなる身体能力で敵を翻弄する。どちらも、クリュウが動くべきタイミングを教えてくれた。
でも、今回はそのどちらもいない。だから、自分が動くべきタイミングを測りかねていた。
どうすればいいのかがわかるのに、どのタイミングでそれをすればいいのかがわからない。
決してクリュウが二人に依存していた訳ではない。ただ、完成されたチームとは自分達の攻撃力を最大にする為に互いが互いを助け、補い、共鳴する事に特化している。誰かが前方を見ていれば、誰かが後

方に目を配る。そうする事で前方だけに集中できる。チームとは、そんな互いを助け合う集合体だ。
今まで、多くの強敵を《四人》で倒してきた。いつの間にか、クリュウはあの《四人》での狩猟に慣れていたのだ。だから、いつもと違うメンバーでの狩猟に無意識のうちに戸惑ってしまっているのだ。
（情けないなぁ、やっぱり僕って……）
心の中で、クリュウは自虐的につぶやいた。
口から黒煙と火の粉を噴きながら怒り狂った眼光で敵を睨みつけるリオレイア。纏う殺気もより濃く凶悪に変わっているその姿は俗に言う怒り状態。クリュウ達の攻撃が、ついにリオレイアを激怒させたのだ。
その殺気の奔流にクリュウは呑み込まれていた。思考が麻痺し、ネガティブな事ばかり頭に浮かんでしまう。足は動かず、その場で固まる。
しかしそこは、怒り狂う女王の目の前であった。
「クリュウ様ッ!?」
「あのバカッ！」
リオレイアを目の前にして動かないクリュウに二人の少女が慌てて動く。しかし、動くのが一瞬遅かった。リオレイアはクリュウに対して狙いを定め、スゥと息を吸う。その動作にフィーリアが悲鳴を上げる。
「だ、ダメぇッ！」
その直後、怒号と爆音と共にリオレイアは強力なブレスを撃ち放った。先程よりもより強力なブレスは、一直線にクリュウに向かう。
「……え？」
ハッと現実に戻ったクリュウが見たのは、迫り来る死の炎であった。
――直後、テロス密林に一発の爆音が響き渡った。

第１２８話　トライアングルハート

目が覚めると、そこは布を被せただけの簡素な天井が広がっていた。すぐ横に青空が見えるという事は、どうやら吹き抜けの場所らしい。

横になっているという感覚と見知った天井。そして揺り篭のようにゆっくりと揺れる感じ、海の匂い。ぼーっとしていた意識がしっかりしてくるにつれて、ここが拠点（ベースキャンプ）に停泊させている船のベッドの上だとわかった。

どうして自分がそんな所に横たわっているのか、最初は全くわからなかった。しかし徐々に思い出す。

「……そっか、防ぎ切れなかったんだ」

クリュウは思い出した。自分はあの時、迫り来るブレスをとっさにその小さな盾で防いだのだ。小さいながらも盾として機能した事と、自分の着ているレウスシリーズの耐火性能の高さもあってブレスを防いだ。しかしその威力だけは防ぎ切れずに吹き飛ばされた。そこから先の記憶がない所を考えるに、おそらくあの後頭でも打って気を失ったのだろう。

自分のあまりの情けなさに、クリュウは思わず左手で両目を隠してため息を零した。その時、腕に包帯が巻かれている事に気づいた。恐らく、ガードした時に痛めたか火傷したかしたのだろう。そこら辺の記憶は曖昧だ。

体を起こそうとすると、全身が傷んだ。構わず身を起こして周りを見回すと、やはりそこは拠点（ベースキャンプ）に停泊している船の上であった。

砂浜の方へ目を向けると、こちらに背を向けて焚き火をしているルーデルの姿を見つけた。見回す限り、辺りにフィーリアの姿はない。

クリュウはそっとベッドから降りると、ゆっくりと彼女の方に歩み寄る。

「……ったく、面倒掛けさせないでよね」

近づくと、声を掛けるよりも先にルーデルがそう牽制するように言った。振り返らず、パチパチと音を立てる火を見詰めながら言うルーデルの背中に、クリュウは「ごめん……」と小さく謝る。
「まぁ、大した怪我もしてないんでしょ。私の目の前で死なれたんじゃ目覚め悪いし、まぁ不幸中の幸いって奴ね。良かったじゃない」
そう言ってルーデルは振り返ってニカッと笑みを浮かべた。その笑顔に、クリュウは思わずビックリした。何しろ、ルーデルから睨まれる事はあっても今までこうして笑い掛けられた事がなかったのだから、驚いてしまうのも仕方がない。
「食べる？」
グイッと差し出して来たのは焼き魚だった。真っ直ぐな枝に突き刺したサシミウオを焼き、塩でシンプルに味付けをした簡素だが素材の味を味わえる一品だ。
「あ、ありがと」
「ほんとはフィーちゃんの分なんだけど、まぁいいわ」
「そういえば、フィーリアはどこに行ったの？　まさか一人でリオレイアを狩りに……」
「あんたがブッ倒れた時は怒り狂ってそれくらいの勢いだったけど、今は消耗した道具を補充する為の素材集めに行ってるわ」
「そっか……」
クリュウは焼き魚を受け取ると、とりあえず空いているルーデルの横に腰を下ろした。ここの気候は決して寒い訳ではない。むしろ暑いくらいだが、火というのは見ていると何だかポカポカと心地良い。それは多くの生物が火を恐れる中、人間という生物が火というものを自在に操る術を備えた特別な生き物で、その火の恩恵に守られているからだろうか――まぁ、その炎を攻撃力とする飛竜相手に気絶させられた訳だが。
苦笑しながらクリュウは焼き魚にかじりつく。ちょうどいい焼き加減で、塩加減も絶妙でおいしい。素材の味を十二分に引き出す味付けと焼き加減だ。
「うん、おいしいよ」

「あっそ。まぁ、小腹を満たす程度にはなるでしょうね」
　笑顔で感想を言っても素っ気ない返事で返すルーデル。その反応にクリュウはちょっとだけ戸惑った。何しろ彼の周りの女子と言えばこういう系の事を言えば顔を真っ赤にして喜んだりするタイプの子ばかりなので、素っ気ない反応が新鮮に感じるのだ。何とも幸せな悩みである。
「そういえば、あの後どうなったの？」
　クリュウが言ったあの後とはもちろん気絶した後の事だ。怒り状態になったリオレイア相手によく逃げられたものだ。しかも情けない事に自分というお荷物を背負ってだ。
　クリュウの問いに対しルーデルは「あぁ、あれ」と素っ気なく答える。
「フィーリアが閃光玉で奴の視界を潰して、私があんたを担いで脱出したのよ。フィーリアは殿役として閃光玉から脱した後のレイアを一人で引き受け、私達が安全な場所に到達してから離脱したの」
「そ、そうだったんだ。何かほんと、ごめんなさい……」
「まったくよ。何で女の私が男のあんたを担がなきゃいけないのよ。あんた男としてのプライドないの？」
「あはははは……、最近本当にないんじゃないかと自分でも疑い始めてる」
「はぁ？　何それ」
　クリュウは「何でもないよ」と苦笑しながら言うと、焼き魚を頬張る。ルーデルもそれ以上追求する気はなくもう一匹の焼き魚を手に取って食べ始める。
　それからしばらく、二人は特に会話もなく焼き魚を食べ続ける。
　クリュウは食べ終えると串と骨だけになった焼き魚を砂の中に埋める。放置しておくと匂いで思わぬモンスターを呼び込んでしまう事もある為、食べ終えたものはこうして地面に埋めるのがハンターの常識だ。
「で？　どうよ、初めてのリオレイアは」
　もくもくと無言で焼き魚を食べていたルーデルは唐突にそう訊い

て来た。クリュウは驚きつつも、素直な感想を言う。
「やっぱり強いね」
「そりゃそうよ、上級飛竜だもの。そこらの雑魚とは桁が違うわ」
「だよねぇ」
強い。クリュウは心からそう思った。正直、もしかしたら火竜リオレウス以上の難敵かもしれない。フィーリアの言った通り、リオレイアは地上戦を主としているだけあってリオレウスよりも地上での攻撃能力に優れている。リオレウスのように空中にいる間の大きな隙を利用した態勢の立て直しができず、どうしても向こうのペースで場を支配されてしまう。
リオレイア戦のプロであるフィーリアはその流れを自在に操れるが、初戦のクリュウはそうもいかない。
それどころか、場の流れに乗る以前にチームの流れにも乗れていないんじゃどうしようもない。
「ねぇ、シュトゥーカってチームは組まないの？」
「……あんた、ほんとデリカシーってものがないのね」
クリュウの何気ない質問にルーデルは呆れたように彼をジト目で見る。
「ご、ごめん」
「……まぁ、いいけどさ」
ルーデルは呆れこそしたものの特に気にした様子もなく食べ終えた串と骨をクリュウと同じく砂の中に埋める。
「あんたも見たでしょ。私のアレな姿」
「あ、うん……すごいよね」
「感心されるような事じゃないんだけど……とにかく、私って一度スイッチが入っちゃうとあんな感じになっちゃうのよ。周りが見えなくなって、目の前の相手を叩きのめす事しか考えられなくなる。ソロの時なら別にあれでも問題ないけど、チームじゃそうもいかない。仲間の声が聞こえないどころか、下手したら仲間の頭をプチュッてしかねないし」
「……たぶん、いや絶対その擬音はおかしいよね」

クリュウのツッコミにルーデルは「似たようなもんでしょ。それとも潰れたシモフリトマトを想像させた方がいい？」とからかうように言う。当然、クリュウは無言で頭を下げた。
「だから、誰も私と組もうとしない。私も、誰とも組むつもりもなかった――ただ一人、フィーちゃんを除いて」
どこか嬉しそうに言うルーデルの横顔に、クリュウは彼女が本当にフィーリアを大切に想っているのかを感じた気がした。もしかしたらそれは、自分以上かもしれない。
「フィーちゃんは私の暴走モードを唯一制御できる子なの。やり方はちょっと乱暴だけどね」
「……あぁ、うん。確かに」
「あの子、優しそうに見えて結構ひどいのよね」
「……あぁ、うん。そんな節は確かに」
「だよねぇ～」
フィーリアを奪い合うライバルなのに、同時にフィーリアを良く理解している者同士だからこそわかる事もある。ルーデルは複雑な心境で笑った。
何しろ、フィーリアは人見知りタイプする子な上に出身があれだから友人は意外と少ない。なので、ルーデル自身フィーリアの事についてこういう風に話せる相手がいなかったものだから、こうして話せる事が嬉しくて仕方がないのだ。
それは、クリュウも同じだ。
「……シュトゥーカって、ほんとにフィーリアが大好きなんだね」
「当然よ。何たって、フィーちゃんは私の嫁だからねッ」
「あはははは……」
当然、ルーデルのこれは冗談から出た言葉なのだが、クリュウは単純な為に文字通りに受け取ってしまい反応に困る。
（やっぱりフィーリアってそっち方面の子なのかな……っていうか、どっかに同性での結婚を認めてる国ってあったっけ？）
全力で間違った方向へ突っ走る。こういう勘違いで事態を混沌とさせてしまうクリュウのすごい所なのかもしれない。

「あんたは、どう思ってるのよ」
　そんな事を考えていると、ルーデルがそう訊いてきた。その問いは自分が言ったんだからあんたも言いなさいよという反論許さぬ迫力が含まれる。
「どうって、大切な仲間だと思ってるよ」
「……それだけ？」
「それだけって……後はどう言えばいいのさ」
　大切な仲間という言葉以外で、フィーリアを表す言葉はない。ハンターとして背を安心して預けられる信頼できる仲間であり、ハンター以外でもずっと一緒にいてほしいと思う女の子。かけがえのない、大切な友達だ。
「あんた、それ以上の感情って、ない訳？」
「それ以上の感情って？」
　クリュウは困惑したように首を傾げる。それ以上の感情というのは一体どういう意味なのか。家族とか、そういう部類の事ならフィーリアはもう家族みたいなものだから適応されるが、そういう事なのだろうか。
　ルーデルはクリュウが全く理解していないと悟ると「あんた、ほんとバカ……」と呆れたように深い溜息を零す。
「……例えばだけどさ、あんた――フィーちゃんを彼女にしたいとか思わない訳？」
「か、彼女ッ!?」
　突然の慣れない単語の登場にクリュウは顔を真っ赤にして驚く。そんなクリュウの反応を見てルーデルはまた大きなため息を零す。
「あんたの情緒ってガキレベルな訳？」
「か、彼女って……そんな大逸れた事……ッ」
「何がよ。今時なら別に普通な事じゃない。何なら一線を超えてたって何の不思議もないわよ」
「い、一線って？」
「赤線地帯でナイトフィーバーよ」
「ふぇ……ッ!?」

ルーデルの過激発言の数々に、純真無垢なクリュウは顔を真っ赤にしてたじたじだ。目には恥ずかしさの表れかじわりと涙まで浮かぶ始末。これにはルーデルも少したじろいだ。
「べ、別に泣く事ないでしょ。今時これくらい普通だって言ってんのよ」
「と、都会は進んでるんだね。色々と」
ある種、ドンドルマなどの都会に憧れていた頃もあったクリュウ。しかし今は、猛烈に片田舎のイージス村に生まれた事を心から感謝していた。自分にそんな勇気や度胸、それ以前にそんな関係になれる女の子ができるはずもないと自覚しているからだ――勇気や度胸は確かにないが、そういう関係になりたいと願う、もしくは気づいていない女子が彼の周りには複数人いる事は彼は全く気づいていないが。
「とにかくあんた、フィーちゃんとそういう関係にはなりたくない訳？」
「……わかんない」
「わからない？」
「……彼女とか、恋とか、よくわかんないんだ。確かにフィーリアはすごくかわいくて優しくて、お嫁さんにしたら絶対に幸せ間違いないとは思う。思うけど、よくわからない」
「わからないってあんた……」
「そ、そりゃ女の子を見てドキドキしたりとか、そのぉ、女の子の裸とかに興味がない訳じゃないよ。そりゃ僕だって男だし……ちょ、ちょっと待ってッ！　これって男の子なら当然の事でしょッ!?　だからそんな道端のゴミを見るような蔑んだ目で僕を見ないでッ！あと猛烈な勢いで距離を離すのもやめてッ！」
クリュウの天然過激発言に対し、今度はルーデルが顔を真っ赤にして胸を両手で隠すようにして猛烈な勢いで後ずさりする。その瞳は、女の敵を見るような目に変わっている。
「あ、あんた最低よッ！　変態変態ッ！」
「そ、そんなぁ……ッ！」
「やっぱりあんたの近くにフィーちゃんを置いておくのは危険過ぎる

わッ！　絶対に私があんたからフィーちゃんを奪還してみせるんだからッ！」
　ルーデルはそう叫ぶと逃げるようにして拠点（ベースキャンプ）から出て行ってしまった。あの方向はエリア４……彼女の理不尽な怒りに撲殺されるヤオザミの冥福を祈りつつ、クリュウは一人になって焚き火をぼぉっと見詰める。
「……恋かぁ」
　そうつぶやくと、クリュウは小さくため息を零した。
「クリュウ様のバカ……」
　エリア１から拠点（ベースキャンプ）へ繋がる道にある岩壁に背を預けながら、フィーリアは拗ねたように唇を尖らせながら静かに一言つぶやいた。
　一人で焚き火の横に座って道具袋（ポーチ）の中身を確認するクリュウ。そこへ素材集めから戻ったフィーリアが歩み寄る。
「クリュウ様、もう起きて平気なのですか？」
　フィーリアの声に振り返ったクリュウは彼女の顔を見ると若干頬を赤らめて「う、うん」とうつむき加減に言う。先程のルーデルの発言のせいでまともに直視できないのだ。
「どうされました？　もしかしてどこか痛むのですか？」
「う、ううん。大丈夫、平気だよ平気」
「そ、そうですか？　なら構いませんが、あまり無理はなさらないでくださいね」
「うん、わかった」
　フィーリアはそっとクリュウの横へ腰掛ける。それはいつもと変わらない普通の事なのに、今のクリュウは少しドキッとした。
　焚き火をじっと見詰めるフィーリアの横顔を、知らず知らずのうちに見詰めてしまう。
　改めて見ても、フィーリアはすごくかわいい子だ。かわいいだけでなく、きれいで、上品で、礼儀正しくて、しかも貴族の令嬢というまさに非の打ち所がない完璧と言ってもいい美少女だ。まぁ、たまに暴走したりするが、それを差し引いても彼女ほどお嫁にしたい女子とい

うのはいないかもしれない。
一瞬、自分とフィーリアの新婚生活を想像してしまい、クリュウは慌てて首を横に振って掻き消す。
自分の事を心から信頼してくれている友人をこんな邪な感情や目で見てはいけない。クリュウは最低な自分を戒める。
一方のフィーリアも、どこか居心地の悪さを感じていた。
先程のクリュウとルーデルのやり取りを、聞いてしまったからだ。盗み聞きしていた訳ではないのだが、素材集めから帰って来た所で遭遇してしまい、思わず隠れてしまったのだ。何しろ、敵対する自分の初恋相手と親友の会話だ。気にならない方がおかしい。
罪悪感を感じつつも好奇心に負け、聞いてしまった――全部、聞いてしまった。
クリュウは、本当に《恋》というものがわかっていない。だから、自分やサクラの猛烈アタックも空振りに終わってしまう。自分の事を、そういう風に思ってもらえていないという悲しさ。
でも一方で自分の事をいいお嫁さんになるとか、かわいいとかベタ誉めしてもらった嬉しさ、そして決して女の子に興味がないという訳ではないという希望。
様々な感情が渦巻き、胸の中は複雑だ。そのせいか、妙に緊張してしまい、話し掛ける勇気が出てこない。
二人とも妙に相手を意識してしまい、何とも気まずい沈黙が続く。
数時間にも感じられる、でも実際はほんの十数秒の沈黙を打ち破ったのはクリュウの方だった。
「えっと、素材集めはどうだったの？」
フィーリアは自分が気絶している間に素材集めに行っているとルーデルから聞いていた。当然その成果は同じチームメイトとして気になる。クリュウの問いに対しフィーリアは小さく微笑む。
「ネンチャク草と石ころで素材玉を作り、光蟲と調合して消耗した閃光玉を補充しました。他にもカラの実とハリの実で通常弾ＬＶ２も補充。光蟲をカラの実を用意して決戦弾である電撃弾の補充準備も済ませました。ついでに薬草とアオキノコ、ハチミツもいくつか採取

しましたので、準備万端です」
　ガンナーは言うまでもないが弾丸を消費する。その数は一回の狩猟で低く見積もっても一〇〇発以上。相手が厄介であればあるほどその消費も増え、数百発にもなる。しかし一回の狩猟で持って行ける弾丸はギルドの規定数以上は持ち込めない。その為、ガンナーは不足した弾丸を素材を持ち込んで現地調合したり、現地で採取してその場で調合してその不足分を補うが常識だ。
　フィーリアもまたそういうガンナーとしての性格から調合をよく行う。クリュウがよく使う閃光玉の補充も慣れたものだ。
「さすがフィーリア。頼りになるね」
「そ、そんな事ないですよぉ」
　クリュウの言葉にフィーリアは嬉しそうに頬を赤らめてはにかむ。その笑顔にクリュウもまたほっとしたように安堵の笑みを浮かべる。少しだけ、さっきまでの気まずさが晴れたような気がした。
「それじゃ、すぐにでも狩りは再開できそうだね」
「は、はい。ですがルーがどこかへ行ってしまってますし、それにクリュウ様は先程のダメージがありますから、もう少し時間を置いた方が……」
「シュトゥーカはストレス発散にエリア４に行ったからそこで合流すればいいし、僕は大丈夫だよ。少し寝たし、痛み止めの薬草を塗ってもらったおかげで体も問題なく動くから」
　そう言ってクリュウはその場で立ち上がって軽く体を動かす。ちゃんと動くかどうかの確認と、フィーリアに心配をかけたくないという想いからの行動であった。
　見た感じ元気そうなクリュウの姿に内心ほっとしつつ、それでも念を押しておく。
「クリュウ様がそう仰るなら構いませんが、しつこいようですが無理はなさらないでくださいね。相手が相手ですので、全力で行かないと勝てる戦いも勝てません」
「わかってる。今度こそ大丈夫だからさ」
　そう言ってはにかむクリュウに対し、フィーリアの不安は依然胸の

中で渦巻いたままだ。そして、フィーリアは彼の不調な原因を何となくだが悟っていた。今日のクリュウが、どこか行動を迷ったり渋ったりする箇所が多々見られた。それはきっと……
「今日の主役はクリュウ様ですよ」
「え？」
　気合いを入れ直しているクリュウはフィーリアのその言葉に驚いたように彼女の方を見る。彼の視線の先で、フィーリアはいつになく真剣な表情を浮かべている。
「シルフィード様とサクラ様、チームの要が二人も欠員している状況は正直私としても厳しいです。ですが、一番厳しいのはクリュウ様だと思います。なぜなら、クリュウ様はいつもお二人の補助に回って戦うバトルスタイルを身につけています。だからこそ、その合わせるべき対象がいない今回の狩りはやりづらい事でしょう」
　クリュウはフィーリアの言葉を聞いて一瞬驚いたが、しかしすぐに小さく苦笑を浮かべてため息を零す。
「やっぱり、フィーリアには敵わないなぁ」
「そうですか？」
「何でもお見通しなんだね」
「クリュウ様の事でしたら些細な事でも気づく自信がありますので」
「そうなの？」
「はいッ」
　嬉しそうに満面の笑みを浮かべながら自信満々に言うフィーリアにクリュウはそっと微笑む。しかしそれはすぐに消え、小さなため息を零す。
「ほんと、僕って情けないよね」
「そんな事ないです。クリュウ様は情けなくなんかないですッ」
「情けないよ。サクラやシルフィがいないと自分がどう動けばいいのかわからなくなる。二人に頼ってばかりだったから、こんな事になるんだ」
　自分が情けない。そう言って自分を責めるクリュウ。しかし、今回は決してクリュウが情けない訳ではない。慣れ親しんだチームとは

違う編成で戦えば、いつもと感覚が変わってしまう。例えそれが多少だとしても、命懸けの狩りの世界ではその多少が命取りになる事は少なくはない。冷静に考え、躊躇ってしまう。彼が自分のタイミングがわからないと言ったのは、そういう一瞬の躊躇によってテンポが崩れてしまっているから。

様々な個性あるハンターと臨機応変に組んできたフィーリアと違い、クリュウは確かに複数のハンターと組んで来たが、それでも今の戦い方が固定されてからは必ずサクラかシルフィードがいて自分が動くタイミングがわかっていた。

そして、今回はそのどちらもがいない。慣れていないのだから、うまくいかなくて当然だ。

しかし、常日頃から感じている自分がチームの足を引っ張ってしまっているのではないかという不安や負い目から、クリュウはうまくいかないのは自分のせいだと思い込んでしまっている。しかも相手は彼が今まで戦って来たモンスターの中でもトップクラスの難敵。その圧倒的なまでの強さを前にして、気持ちが下向きになっているのも余計にだ。何しろ、先程はそれで敗北しているのだから尚更だ。

クリュウは扱いが簡単そうに見えて実は難しい。顔では笑って誤魔化していて、心にどんどん負の気持ちを蓄積してしまう。顔は笑っているのに心では泣いているタイプ。父を亡くし、悲しみに暮れていた母をこれ以上悲しませたくはないという親心から生まれたものが、今でも彼の中で生き続けている。

いつもと違うチーム、初めて戦う難敵リオレイア、慣れない狩場、そしてルーデルとの勝負――この戦い、クリュウは背負うものが多過ぎるのだ。

こんな状況にまで彼を追いつめてしまったのは、紛れもない自分だ。フィーリアは意気消沈してしまっているクリュウを見て自分を責めた。

元々ルーデルに彼を会わせたくて、村ではリリアにばかり構っている彼に構ってほしくて、わざわざドンドルマにまで無理を言って来てもらったのに。まさかそこからこんな状況になるなんて、誰が予想で

きただろうか――まぁ、彼の女運の悪さを考えればもしかしたら予想できたかもしれないが。
その時、落ち込むクリュウの横顔を見てフィーリアはハッと気づいた。
いつもならここでシルフィードが励ましたりサクラが過剰なスキンシップを計って自分と大ゲンカになってそういう空気が打破されたりする。しかし、今はその二人がいないのだ。
――落ち込んでいる彼に手を差し伸べられるのは自分だけ。その瞬間、フィーリアはギュッと拳を握り、ゆっくりと開く。
「――でしたら、自分の戦い方をなさればいいと思います」
口から出たのはフィーリアの真っ直ぐな気持ち。紆余曲折せず、無駄な装飾をしていないからこその直球勝負。クリュウはゆっくりと伏せていた顔を上げる。
「自分の戦い方？」
「そうです。サクラ様やシルフィード様の補助としての戦い方ではなく、クリュウ様が主力となって戦うんです」
「僕が、主力に……？」
「今回のチームでは補助は全面的に私が引き受けます。ですので、クリュウ様は誰かに合わせて戦うのではなく、自分の思った通りに行動してください」
「そ、それじゃチームとしての連携力が……」
「問題ありません」
チームワークを心配するクリュウの言葉を、フィーリアは一言で一刀両断した。
「クリュウ様の支援は私が責任を持って引き受けさせていただきます。クリュウ様は気にせず、ただ彼女と戦う事だけに集中してください」
「シュトゥーカは、どうするの？」
「あの子の支援も私が引き受けます。あの子の手綱を引けるのは、親友である私だけですから」
恥ずかしがりながらも、力強くルーデルの事を《親友》と断言する

フィーリア。自分とルーデルの絆は、そんな事じゃ壊れないと信じている――否、確信しているのだ。
「それに、あの子は元々クリュウ様がどのようなハンターなのかを見極める為に同行しているに過ぎません。なので、クリュウ様が活躍していただかないとこの狩りの根本が揺らいでしまいます」
ルーデルは、クリュウが自分とつり合う相手かどうかを見極める為に今回の狩猟を企画・実行している。ならば、肝心のクリュウが主役となって戦ってくれなければ困る。自分勝手な想いだとは重々承知しつつも、それがフィーリアの気持ちであった。
「……がんばりましょう――私は、ずっとクリュウ様と一緒にいたいんです。だから、一緒にがんばりましょう」
屈託のない笑顔でそう言い、フィーリアはクリュウにそっと手を差し伸べる。
力になりたい。一緒にがんばりたい。ずっと一緒にいたい。そんな温かな想いが込められた真っ白な手――クリュウはそっとその手を掴む。
「……そうだね。今回の狩りはただの狩りじゃないんだ。フィーリアの進退が懸かってるんだから――負けられない」
「クリュウ様……」
手を取って立ち上がったクリュウの姿を見て、フィーリアはほっとしたように笑みを浮かべる――彼の瞳に光が戻ったのだ。何事にも諦めず、真っすぐ前だけを見て全力疾走する大好きな彼の瞳の輝き。
「ありがとフィーリア。おかげでまたやる気が出てきたよ」
「私も同じですよ。彼女との戦いはまだまだこれから……先は長いですよ。覚悟できていますか?」
「自信はないけど、全力でがんばるッ!」
「……クリュウ様らしいんですが、何だか頼りないですね」
一人で勝手に落ち込み一人で勝手にテンションを上げるクリュウの姿にフィーリアは困ったように苦笑を浮かべる。時々、本当に時々だが何でこんな子共っぽい人を好きになったのかと思ってしまう。その度に、フィーリアは静かにため息を零す。

そんな複雑な乙女心など微塵も理解していないであろうクリュウは早速準備を開始する。そんな彼の切り替えの速さに苦笑しつつもフィーリアも同じように手早く支度を済ませる。

そして数分後、二人は拠点（ベースキャンプ）を出発した。

エリア４でヤオザミをタコ殴りにしていたルーデルと合流し、三人はリオレイアの追撃を開始した。

第１２９話　果てなき理想を目指して

リオレイアはクリュウ達が撤退した後、隣のエリア２へと移動していた。それを追ってクリュウ達も急いでエリア２へと向かう。
先程の戦いの爪跡や焦げ臭い匂いが残っているエリア３に到達すると、岩陰に置いたままになっていた荷車を回収する。幸い無事だった荷車をクリュウが責任持って再び引いてエリア２へと繋がる坂へと到達する。その途中でルーデルが演奏をして自身の移動速度強化と全員の攻撃力及び防御力強化を行う。
そして、一行は万全の準備を整えてリオレイアがいるエリア２へと侵攻した。
エリア２は広大なテロス密林を見渡せるような山の一角にある崖上の広場。先程のエリア３とは違い高い木々はほとんど生えておらず、見通しがいい。その代わりに下には背の低い草が広く絨毯のように茂っており、薬草などの野草を採取するにはうってつけの場所だ。
そして、そんなエリアの中央に彼女は堂々と君臨していた。
まるで自分達の到着を予感していたかのようにこちらを向いて待ち構えるリオレイア。クリュウ達が戦闘態勢に入ると同時に再びエリア全体を支配するかのような濃密な殺気を振りまく。ギロリと血走った眼光で睨みつけ、怒りを込めて怒号（バインドボイス）を放つ。
「グオオオオオオオオオオッ！」
暴風となって襲い掛かる怒号（バインドボイス）に耐え、クリュウ達は散開する。まずは前衛にいたフィーリアとルーデルが真っ直ぐリオレイアに突っ込むように走る。遅れてクリュウが荷車を安全な場所へ置く為に左へ、崖に向かって走る。
突っ込んで来る二匹の敵に対し、リオレイアは単発のブレスを放って攻撃するが二人はこれを左右に別れて回避。ブレスは二人の中間を虚しく通り抜け、先程彼らがいた坂の横の岩壁を吹き飛ばす。
ブレスを回避したフィーリアはその場で方膝を着いて体を固定し、すでに装填済みの徹甲榴弾ＬＶ２を撃ち放つ。大型弾丸は反動が大きい為、走りながら撃つと狙いがつけづらいのだ。

重々しい発砲音と共に撃ち出された徹甲榴弾ＬＶ２はリオレイアのこめかみ辺りに突き刺さる。一瞬遅れて弾殻内部に仕込まれている炸薬が起爆。リオレイアは突然の事態に悲鳴を上げて怯む。その間にルーデルがさらに接近し、煙を上げるリオレイアの顔面に勢い良くブラットフルートを叩き込む。

「グアァッ！」

リオレイアはルーデルの一撃をに堪えると凶悪な牙が並んだ口を広げて噛み付こうとする。しかしそこへ再びフィーリアの撃ち放った徹甲榴弾ＬＶ２が側頭部に炸裂し一瞬動きが鈍る。その一瞬でルーデルは前転してリオレイアの顎の下を通り抜けると両足の間に達し、そこでアッパーの如き一撃を振り上げる。

「粉砕撃破（ツェアシュラーゲン）ッ！」

腹部に強烈な一撃を受けリオレイアは悲鳴を漏らす。さらにそこへ容赦なくフィーリアの撃ち放った徹甲榴弾ＬＶ２が側頭部に命中して破裂。リオレイアは避けるように翼を羽ばたかせて浮き上がる。風圧でルーデルはその場で動けなくなり、その背後にリオレイアは着地した。このままでは突進かブレスでルーデルが危険に晒される。通常状態での突進速度ならルーデルはギリギリで避けられるだろう。しかしブレスの速度では対応できない。阻止しようにも銃を構えた状態では満足に閃光玉も投げれない。銃を片付けていては当然間に合わない。そう判断したフィーリアはすかさず着地したリオレイアに狙いを定め、頭部の少し上を狙って徹甲榴弾ＬＶ２を撃ち放つ。

距離を取り、怒りのブレスを撃ち放とうと首をもたげた瞬間、飛来した徹甲榴弾ＬＶ２がこめかみに命中。火炎袋に溜まった火炎液が喉を通り抜け、空気に触れて発火。開口された口から炎弾が姿を現したまさにその瞬間、炸薬が破裂して起爆。その衝撃にリオレイアは見当違いな方向にブレスを誤射する。しかも度重なる徹甲榴弾ＬＶ２の爆発の衝撃とルーデルの打撃が加わり、再びリオレイアはスタンを起こして地面に横倒しになった。

「ありがと（ダンケシェーン）ッ！」

ルーデルはフィーリアに礼を言うとすかさず倒れたリオレイアに

接近し、低くなって狙いやすくなった頭を狙ってブラットフルートを叩き落す。潰し、壊し、歪め、砕き、滅茶苦茶にする一撃の連続。
「私に刃向かうなんて生意気よッ！　ふざけんじゃないわよッ！　死ね死ね死ね死ね死ねッ！　死刑（トーデス・シュトラーフェ）ッ！
あーっははははははははははははははッ！」
「……また発狂（ヴァーン・ズィニヒ）しちゃって」
フィーリアは苦笑しつつもとりあえず通常弾ＬＶ２に切り替えて倒れたリオレイアを狙い撃つ。その時荷車を隠し終えたクリュウがようやく合流して攻撃を開始する。狂い笑うルーデルの横を通り抜け、倒れているリオレイアの尻尾に向かって一撃を叩き込む。
今回のチームでは尻尾を切断できるのは唯一の切断系武器である片手剣を持っている自分だけ。リオレイアは尻尾に猛毒を持っている上に、大型モンスターの尻尾は旋回攻撃での攻撃範囲を短くできる為できれば切っておきたい。だからこそクリュウは尻尾を狙いたいのだが、尻尾は常に自分の慎重よりも高い位置にあり、シルフィードの大剣やサクラの太刀のようなリーチの長い武器と違い短い片手剣ではなかなか狙えない。だからずっと脚を狙って少しでもダメージを与えつつ、脚にダメージが蓄積する事で転倒させ、尻尾の高さを無理やり下ろす作戦を彼は考えていた。他にもシビレ罠を使えば筋肉が縮んで痙攣する影響で尻尾が降りるので、そこを狙うという方法もある。それらが今までの経験から編みだしたクリュウの作戦であった。
とにかく今は目の前に転がっている絶好のチャンスを逃さず尻尾に攻撃を加え続ける事に集中する。
脚に比べれば若干細いとはいえ、それでも自分の胴回りよりは太い尻尾に向かってクリュウはデスパライズを叩き込み続ける。硬い鱗に弾かれる度に腕が痺れ、力を入れていないと簡単に手から弾き飛ばされてしまう。それでも、全力で刃先を叩き込み続ける。硬い鱗に阻まれつつも、少しずつではあるが着実に傷は付けている。削ったような鱗にできた傷跡を見ながら、リオレイアも強敵であって無敵ではないという事実に自分を鼓舞しながら必死になってデスパライズを振

るう。迸る麻痺毒と真っ赤な血を横目に、狙うは間髪入れず一点集中波状攻撃。
　片手だけではなく両手を使って力一杯振り下ろすと、鱗が数枚弾け飛んだ。すかさずもう一撃とデスパライズを振り上げた瞬間、尻尾がグイッと持ち上がった。尻尾だけではなく、横倒しになっていたリオレイアが起き上がったのだ。クリュウはすぐに追撃を断念して急いでリオレイアの即応攻撃範囲から脱出するように後退する。
　後退したクリュウに対し、ルーデルはリオレイアが起き上がろうと関係なくさらに間合いを詰める。
「死ね死ね死ね死ね死ねねえええええッ！」
　狂気の叫びを上げながらルーデルはその場で跳躍。重い狩猟笛を担ぎながらとは思えない軽やかさで太陽を背にしてリオレイアの頭上に達すると、そのまま重力と筋力を組み合わせてブラットフルートをぶち込む。
「破壊鎚（ツェアシュティーレン）ッ！」
　爆音に等しいすさまじい打撃音が響く。強烈な破壊力の一撃を受けたリオレイアの頭部はこれまでのダメージの蓄積も合わせてついに砕けた。頭部を守る鱗や甲殻が弾け飛び、柔らかな肉が露になる。リオレイアの深緑の顔が真っ赤に染まった。そして、強烈な一撃の威力はそれだけでは受け止めきれず、リオレイアはそのまま顔面を地面に叩き付けられる。
「ギャアアッ!?」
　悲鳴を上げるリオレイアをルーデルは狂ったように笑いながら容赦なく狩猟笛でボコ殴りにする。その光景を後退したクリュウが複雑そうな表情で見詰める。
「……何だか、リオレイアがかわいそうになってくる」
「心中お察しします……」
　隣でフィーリアも親友の恥ずかしい姿に頬を赤らめてため息を零す。そして、慣れた手つきで通常弾ＬＶ１改を装填してルーデルに撃ち込む。そこでようやくルーデルが正気に戻り、リオレイアから離れた。

ルーデルの猛攻が止んだ事によってリオレイアは今度こそゆっくりと起き上がる。エリアを支配するような殺気はさらに純度を増し、凶悪な瞳には明確な殺意がギラギラと不気味に輝く。そして、散々痛めつけられた事によって再びリオレイアは怒り狂った。

「ゴアアアアアオオオオオオオオオッ！」

激情から湧き上がる怒号（バインドボイス）を放つ。エリアどころか狩場全体に響き渡るような怒りの咆哮。口からは黒煙と炎が漏れ、血走った凶悪な瞳でクリュウ達を射抜く――怒り状態だ。

「怒り状態ですッ！　気をつけてくだ――ブレスですッ！」

フィーリアの声を待たずして、リオレイアはクリュウ達を正面に捉えながら三連ブレスを放って周囲を焼き尽くす。轟音と共に吐き出された炎弾は爆音と衝撃を伴って地面を吹き飛ばす。クリュウは三発目の左側のブレスのすぐ横を通り抜けて大回りするようにしてリオレイアの背後を狙う。しかしリオレイアはクリュウがデスパライズを抜く直前でルーデルに向かって突進を開始した。

ルーデルは自分を狙って全速力で突っ込んで来るリオレイアを視界に捉えながら横へと走ってこれを回避しようとする。その間もフィーリアが通常弾ＬＶ３で気を引こうと攻撃を繰り返す。クリュウも急いでリオレイアの背後から追い掛ける。

だが、ここでリオレイアは思いも掛けない行動を取った。それまで全速力でルーデルに向かって突進していたのを突然急停止してその場で止まってしまったのだ。この行動にクリュウは驚いた。何せ彼の中での突進のイメージは一度走り出したら身を投げ出すようにして強制停止しなければモンスターの巨体は止まらないという常識があったからだ。いくら知識でリオレイアは急停止する事はあると知っていても、まさか実際にはこんなにも呆気無く、そしてきれいに急停止するとは思っていなかったのだ。

驚くクリュウに対し、リオレイアはさらなる驚異的な行動を取った。

突如急停止したリオレイアはその場で振り返ると、背後から追い掛けて来るクリュウを睨みつける。その視線を感じた瞬間、クリュウの

脳裏にフィーリアの言葉が思い出された。
――突進と見せかけて回避した相手を再捕捉して角度を修正してからまた突進したり、全く別の対象に振り返って突進する事もあります。彼女の突進は様々な攻撃へと繋がる事が多いので、単純な突進だと判断して動くのは危険です――
フィーリアの助言が、まさに目の前で起きようとしていた。
「くぅ……ッ！」
クリュウはすぐさま直角に針路を変えて横へと走り出す。直後、リオレイアは怒号を上げながらクリュウに向かって再突進を開始した。
一直線に突っ込んで来るリオレイアの正面を避けるように横へ走るが、彼我の距離が思った以上に詰まっていた為そのタイミングはギリギリ。クリュウは一か八か思いっ切り体を前に投げ出すようにして地面を蹴って跳躍。そのまま地面に倒れ込んだ。そのギリギリ横を地響きを立てながらリオレイアが通過する。間一髪であった。
「助かったぁ……」
安堵の息を漏らすクリュウ――だが、リオレイアのしぶとさは全モンスターの中でもずば抜けていた。
「クリュウ様ッ！」
フィーリアの悲鳴に驚いて顔を上げると、何とリオレイアはクリュウから少し離れた所でまたしても急停止した。そして振り返り、再びクリュウに狙いを定める。この光景にクリュウは絶句した。今の自分は完全に倒れ込んでしまっている。この距離なら普通に走っても避けられるか定かではないのに、それが倒れている状態で起き上がる時間も考えると回避は不可能。
リオレイアは地面に倒れたまま動けないクリュウに向かって再び突進を開始する。地響きを立てながら猛烈な勢いで迫るリオレイアはあっという間にクリュウの眼前に達する。クリュウは咄嗟に盾を構えるが片手剣程度の小さな盾では踏み潰されて大怪我を負う可能性が高い。そんな事彼だって十二分に理解している。だが、今の彼にはこれしか方法がなかった。
最悪の想像と目の前の恐怖から目を背けるようにまぶたをギュッ

と閉じる――直後、まぶたを通してでもわかる強烈な閃光が視界に飛び込み、続けてリオレイアの悲鳴が轟き、地響きが止まる。
ハッとなって瞳を開くと、目の前……本当にわずか肘から手先くらいまでの距離でリオレイアの顔があった。凶悪な牙が並び、人を一瞬で焼き尽くすようなブレスを放つ口が目の前に。その非現実的な光景にクリュウは一瞬思考が止まる。
「何してんのよバカッ！　さっさとどきなさいッ！」
その声にハッとなって振り返ると、後ろから猛烈な勢いでブラットフルートを構えたルーデルが突っ込ん来る。クリュウは慌ててリオレイアの眼前から離れた。直後、ルーデルががら空きの頭にブラットフルートを叩き込む。
「グエェッ!?」
視界を封じられた状況下で突然の攻撃。リオレイアは悲鳴を上げる。
クリュウは一度距離を取って体勢を立て直す。その横に通常弾LV3を撃ちながらフィーリアが駆け寄って来た。
「クリュウ様、お怪我はありませんか？」
「な、何とか大丈夫」
「良かったです……」
「さっきはありがと。おかげで助かったよ」
あの閃光玉がなければ、きっと自分は今頃大怪我または下手すれば即死していたかもしれない。運が良くてもすぐに戦闘に復帰できるような状態にはなかっただろう。あの閃光玉が、文字通り命を助けてくれたのだ。
クリュウのお礼に言葉に対し、フィーリアは首を横に振って意外な言葉を口にした。
「あれは私じゃないですよ。あの閃光玉はルーが投げたものです」
「シュトゥーカが？」
これにはクリュウも驚いた。まさかあの自分を毛嫌いにしている狂乱娘が自分を助けるような行動を取るとは予想していなかったのだ。驚くクリュウに、フィーリアはそっと微笑む。

「あの子、本当はすごく優しい子なんですよ。自分の二面性が人を傷つける事を恐れて誰とも組もうとしない。でも本当はすごく誰かと一緒にいたくて、みんなを援護できる狩猟笛を選んでハンターを続けているんです。ソロハンターなのに狩猟笛を使う矛盾、あの子らしいポカミスですけど」

嬉しそうに語るフィーリアの姿を見て、クリュウもそっと微笑んだ。やっぱり二人は本当に仲がいい。親友と言うにふさわしい関係でおり、彼女はそれを誇りに思っている。そんな二人の関係が、羨ましく思う。

――だから、そんな親友を自分に奪われると思っているルーデルはこんな狩猟に自分を引き込んだ。そう思うと、罪悪感が胸を痛める。確かに、自分は彼女から見ればパッと出の新参者。なのに、そんな奴に自分の親友を奪われている形なのだから、怒りを覚える気持ちもわかる。

自分だって、仲のいい友人が他の人と楽しげに話していたら怒りまではいかなくても嫉妬心を抱くだろう。自分だって、そんなに心の広い人間ではない。

――例えば、昔あんなに自分に懐いていたルフィールが誰か別の人と幸せにやっていたら、嬉しくも思うが同時に寂しさを抱いてしまうだろう。人間の心は、どんな計算式よりも複雑で難解だ。

「みんなが幸せになる方法なんて、やっぱりないのかな……」

「え……？」

「……何でもない――フィーリアッ！　ここからは全力全開総攻撃でいくよッ！」

「え？　あ、はいですッ！」

クリュウは再び気合を入れ直して今まさにリオレイアの振り回す尻尾を後退して回避し、再び攻勢に出ようとしているルーデルに駆け寄るようにして走り出す。そんな彼の背中を一瞥し、フィーリアは弾倉に残っていた通常弾ＬＶ３を取り外す。そして、ガンベルトから取り出したのは決戦弾丸――電撃弾。

「クリュウ様から全力攻撃指示が下令された今、私も本気で挑ませて

もらいます」
弾倉に電撃弾を装填し、フィーリアはリオレイアに振り返る。その瞳には世間に知られている桜花姫とは別の異名《女王殺し》の光が煌めいていた。
「いい加減しつこいわよこのバカ竜ッ！」
連続して重い狩猟笛を振り回すのはかなりの体力を使う。散々リオレイアの頭を殴り続けたルーデルは息を切らし始めていた。肩を上下に激しく動かしながら汗を流す。手に握ったブラットフルートは最初に比べてずいぶんと重く感じる。本当に重くなっている訳ではなく、酷使し過ぎて腕に力が入らなくなっているのだ。
「チッ……、調子に乗ってるんじゃないわよッ！」
ルーデルは再び腕に力を込めてブラットフルートを振り上げる。だが、彼女の体は彼女自身が思っていた以上に疲労が蓄積していたらしい。
「……へ？」
振り上げたブラットフルートを叩き込もうと腕に力を入れた瞬間、突然踏ん張っていた足から力が抜けてしまった。振り上げたブラットフルートどころか体を支えられず、ペタンとその場で尻餅をついて呆然としてしまう。その眼前で、リオレイアが閃光玉の呪縛から解放され怒号を放つ。至近距離での凶悪な殺気の直撃を受け、ルーデルはビクッと身を震わせる。
刹那、リオレイアとルーデルの目が合う。
「あ……」
殺気に満ちあふれた瞳に見つめられ、ルーデルは動けなくなる。それは天敵に睨まれた無力な動物のようで、目の前に迫っている死を脳が理解するの拒むような現象。
目の前の圧倒的な存在に、自身のちっぽけさを見せつけられる。
狩りの間で、ハンターは決してモンスターと目を合わせてはいけないという常識がある。それは、モンスターの《生きる》という強い生命力と圧倒的な存在感を直視してしまい、体が動かなくなってしまう事があるからだ。

新米ハンターがイャンクック相手に敗北する場合の多くが、この常識を破ってしまい動けなくなった所を攻撃されるからだとも言われている。
ルーデルもまた、リオレイアの怒り狂った本気の瞳を見てしまい、体が硬直してしまった。
目の前にあるリオレイアの凶悪な顔。鋭利な刃物のように鋭い牙が並ぶ大きな口の隙間からは怒り状態での黒煙と炎が漏れている。その顔がスゥッと後退した。
二歩、下がった。
――サマーソルトッ!?――
頭ではわかっていても、体が動かない。このままでは　サマーソルトの直撃を受ける。わかっているのに、動かない体に焦りが生まれる。
――う、動きなさいよバカッ!――
そして、リオレイアは翼を広げ、同時に脚の力でジャンプするように巨体を持ち上げてその場で回転する。轟音を立てて迫る毒針が仕込まれた尻尾。ガードのできない狩猟笛使いのルーデルにそれを防ぐ手段はない。せめてもと、ブラットフルートで直撃だけは避けようと構える。
ルーデルがその瞬間に目を瞑った瞬間、激しい衝撃と共に自分の体が――横に跳んだ。
「え……？」
一瞬の浮遊感の後、ルーデルは地面に倒れた。しかし、あまり痛くない。まるで下にクッションがあったかのように、勢いを持ったまま地面に倒れなかった。
予想していたダメージに比べてあまりにも呆気ない感触に困惑しながらゆっくりと目を開けると――
「あ、あんた……」
「痛ぁ……ッ」
目の前に、クリュウの姿があった。それもすごく近い。よく見ると、自分は彼に抱き締められていた。彼が地面に背を向け、自分の背

は天に向いている。
　目の前の光景に一瞬戸惑うルーデルだったが、すぐに状況を理解し、顔を真っ赤に染める。
「ち、痴漢ッ！」
「いくら何でもそれはひどくないかなッ!?」
　慌ててルーデルはクリュウから離れる。体にはまだ彼に抱かれていた感触が残っている。温もりが、残っている。
「……あんたが、助けてくれたの？」
　サマーソルトが直撃する寸前、自分は彼に横から突き飛ばされた。おかげで直撃は避けられた上に、彼が自身をクッション代わりにしたおかげで地面に叩きつけられる事もなかった。
　――彼の身を挺した行動のおかげで、自分は助かったのだ。
「……まぁ一応ね。でも良かったぁ。怪我とかなかった？」
「な、ないわよ。あ、あんたこそどうなのよ」
「平気平気。これくらい何でもないさ」
「そ、そう……」
　自分が無事だった事をまるで自分の事のように喜ぶ彼の姿を見て、ルーデルは頬を少し赤らめて視線を逸らす。
「ちょ、調子に乗ってんじゃないわよ。れ、礼なんか言わないんだから」
「いいよ。さっきの借りを返しただけだから」
「ば、バカじゃないのッ!?　な、生意気なのよ……」
　頬を赤らめながらバツの悪そうな表情を浮かべるルーデル。その無事な姿にクリュウはほっと胸を撫で下ろした。
　――その時、背後で強烈な光が炸裂した。振り向かなくてもわかる。クリュウはゆっくりと起き上がるとまだ座ったままのルーデルにそっと手を伸ばす。
「手、貸そうか？」
　クリュウから差し出された手を見て、ルーデルはムッとしたような表情を浮かべる
「い、いらないわよ。誰があんたの手なんか借りるもんですか」

「そっか」
クリュウは気にした様子もなく手を引っ込め、ルーデルは自力で立ち上がる。
軽く土を払ってから振り返ると、案の定リオレイアはフィーリアの投げた閃光玉で視界を潰されてその場で唸り声を上げている。そんなリオレイアにフィーリアは決戦弾である電撃弾を連射している。着弾すると電撃が迸る特殊弾丸は、雷耐性の低いリオレイアには大きなダメージを与えられる、まさに決戦弾丸と言うに相応しい。
リオレイア相手に全く臆する事なく攻勢を強めるフィーリアの姿、いつになく凛々しくて、きれいで、頼りになる。さすがリオレイア戦のプロだ。
後ろでルーデルが再び演奏を開始する。どうやら音による効果が解けたらしい。攻守強化の音色はずいぶん前に解けているので、おそらく移動速度強化だろう。
「あのさ、シュトゥーカ。一人でがんばり過ぎないで、少しは僕に頼ってよ。確かに僕は君に比べたらランクも実力も下だけどさ、一応ハンターだからさ」
そう言って振り返ると、ルーデルは無視して演奏を続けている。実に彼女らしい反応にクリュウは苦笑を浮かべた。
そして、再びリオレイアの方に視線を戻し、腰に下げたデスパライズを引き抜く。
「――君の盾になるくらいなら、僕だって役に立つ自信はあるからさッ！」
そう言い残し、クリュウは再びリオレイアに向かって走る。そんな彼の背中を、演奏を終えたルーデルが見詰める。
「な、生意気な事言ってんじゃないわよ……ちょっとドキッとしちゃたじゃない、バカ……」
頬を赤らめながらルーデルは不機嫌そうに、でもどこか嬉しそうな表情を浮かべていた。
再び前線に戻って来たクリュウは体ごと旋回させて尻尾を振り回すリオレイアに接近する。この攻撃は尻尾が片側を薙ぎ払っている

間、反対側はがら空きになる。クリュウはタイミングを合わせてがら空きになった側からリオレイアの懐に入り込む。
目の前には巨大な体を支える太い脚が二本。クリュウはそのうちの片方、先程から自分が狙っていた方の脚にデスパライズを叩き込んだ。麻痺毒が迸るが、まだ麻痺させる量には達していない。
モンスターは一度麻痺や毒、睡眠などの状態異常になると以降はより多くの量でないと同じ状態にはならない。これは解毒する際に生み出される大量の抗体によって耐性ができてしまうからだ。
すでに一度麻痺状態にしているので、次の麻痺状態にするには先程以上の量を相手に蓄積しないといけない。当然、クリュウの危険もその分増す。
それでもクリュウは諦めず、ひたすらにデスパライズを振るい続ける。
もう一撃と構えた瞬間、リオレイアの視界が回復する。クリュウはすぐに追撃を中断して距離を取る。モンスター相手に欲張っていては命がいくつあっても足りない。着実で確実。それがモンスターを相手にする場合でのハンターの鉄則だ。
距離を取ったクリュウと中距離から射撃を続けてるフィーリア。リオレイアを中央にちょうどV字の形でクリュウが右に、フィーリアが左に位置する。
リオレイアはフィーリアに向かって全力突進を仕掛ける。だが必要最低限の距離を開けていたフィーリアはこれをギリギリで回避する。身を投げ出して回避すると再突進などに対応できなくなるからだ。
しかしリオレイアはそんなフィーリアの予想とは裏腹にそのまま突き抜けて地面に倒れ込むようにして止まる。
ゆっくりとリオレイアは起き上がると――ゆっくりと振り返る。
「ブレスですッ！」
クリュウはフィーリアの声にすぐさまリオレイアに向かって駆け出す。彼女の言葉を信じ、これを機に一気に彼我の距離を詰める。
リオレイアはフィーリアの言うとおり、ブレスを放った。それも単

発ブレス。リオレイアの正面を避けて走っていたクリュウの横を火球が強大な熱を放ちながら轟音と共に突き抜ける。
そして、ブレスを撃った後の隙を突いてデスパライズを叩き込む――寸前で、クリュウは横へ跳んだ。
デスパライズを振り上げた瞬間、リオレイアが後退する動作を見せた。その行動は危険だと実感していたクリュウはすぐさま回避行動を取った――そして、それは正解だった。
二歩引いたリオレイアはその場でサマーソルトを炸裂させる。しかし寸前で回避したクリュウには届かず、凶悪な尻尾は虚空を斬り裂く。
回避と同時に立ち位置を変え、リオレイアの横に入ったクリュウ。着地する際の風圧をグッと脚を踏ん張って盾で防ぐ。そして着地したリオレイアにすかさず斬り掛かる。
一撃だけではなくもう一撃、もう一撃と三撃を叩き込む。しかしリオレイアはまるでそんな攻撃など気にもせずに距離を取っていたルーデルに向かって走り出す。
「そっちじゃないのに……ッ！」
クリュウはすぐにデスパライズを腰に戻して全速力で追いかける。だが当然リオレイアの速度には到底敵わない。
だが、ルーデルは冷静に閃光玉で自身に迫るリオレイアの突進を阻む。すかさずクリュウは攻撃に出ようとするが、フィーリアがそれを制した。
「クリュウ様ッ！　睡眠弾を使いますので攻撃を中止してくださいッ！」
クリュウはうなずくとデスパライズの柄から手を外す。ルーデルも攻撃の為に前進していたがすぐに演奏に切り替える。
閃光玉の影響でその場で旋回したり噛みついたり世話しなく動くリオレイアにフィーリアは次々に睡眠弾ＬＶ１を撃ち込む。
そして、閃光玉が切れるとほぼ同時に効果を発揮したのか、リオレイアは突然全身から力が抜けてその場に倒れた。その瞬間、エリア全体を支配していた凶悪な殺気が消え、長閑な自然の世界が帰ってく

る。
緊張を解く訳にはいかないが、最高レベルにまで引き上げていた緊張を大きく下げて精神的な負担を減らすクリュウ。ずっと緊張状態を続けていると集中力なども切れてしまう。こうしてオンオフを使い分けないと長い狩猟では体力も精神力も持たない。
眠るリオレイアの片隅にクリュウ、フィーリア、ルーデルの三人が集まる。全員大した怪我はしていなかった。
剣士二人組は携帯砥石を使ってこれまでの戦いですっかり損耗した切れ味を回復させ、フィーリアは携帯食料で小腹を満たす。
全員が一通りの準備を終えると、クリュウはすぐに荷車に走ると搭載されている大タル爆弾Ｇ二発を引っ張り出す。その横からルーデルが同じように大タル爆弾Ｇを引っ張りだした。
「シュトゥーカ……」
「郷に入れば郷に従えよ。これも使うんでしょ？」
「う、うん」
「ほら、さっさと設置して起爆しちゃうわよ。あのバカ竜だっていつまでも暢気（のんき）になんて寝てないわよ」
ルーデルはそう言ってクリュウに背を向けるとさっさと歩いて行ってしまう。そんな彼女の背中に呆然としていたクリュウだったが、慌てて追いかける。
眠っているリオレイアを起こさないように細心の注意を払って近づき、そっと大タル爆弾Ｇ四発を頭の周囲に設置する。そしてすぐさまリオレイアから離れ、爆発危険区域から脱する。
クリュウはすでに起爆の為の射撃体勢に入っているフィーリアに合図を送る。フィーリアはそれに小さく首肯すると大タル爆弾Ｇの一発に照準を合わせ、引き金を引く。
発砲音と共に撃ち出された通常弾ＬＶ３は見事に大タル爆弾Ｇに命中。刹那、大爆発を引き起こした。
一斉に爆発した四発の大タル爆弾Ｇの破壊力は絶大だ。巨大な爆炎の中にリオレイアは消える。とてつもない衝撃波が安全区域にいたはずの三人を吹き飛ばすように襲いかかる。何とか三人はその爆

風に耐え、巨大な黒煙を上げる爆心地を見詰める。
陸の女王と呼ばれるリオレイアがこの爆発で倒れたとは当然三人は思っていない。三人は突然のリオレイアの反撃を警戒しながら黒煙を見詰める。
不気味な沈黙は、突然破られた。突如黒煙が吹き飛ばされ、一直線にブレスがクリュウ達に向かって襲いかかってきた。
轟音と強烈な熱量を伴って迫る火球を十分に距離を取っていた三人は難なく避けた。空振りに終わったブレスは岩壁に炸裂して大爆発を起こす。
背後での爆発を無視し、三人は黒煙の中から現れたリオレイアを見詰める。
強烈な爆発によって爆心地は大きく地面が抉れ、その威力の強さを表している。その中心に、リオレイアは立っていた。
全身至る所が焼け焦げ、鱗や甲殻が剥がれていても彼女は堂々とそこに君臨している。爆発の影響が最も大きかった頭はこれまでのルーデルの攻撃の蓄積もあって鱗が大きく剥がれ赤い肉と血が晒されている。そんなボロボロな姿になっても、彼女の瞳は死んでいなかった。
「グオオオオオオオオオオッ！」
強烈な怒号（バインドボイス）が暴風となってクリュウ達に襲いかかる。その本能に直接影響する恐怖で本能がやかましいくらいに警鐘を鳴らす。
恐怖に体が震える。あれだけの爆発を受けても変わらず立っていられるなんて、常識外れにも程がある。下手なモンスターなら一撃で命を落とす程の威力なのに、彼女はしっかりと自身の脚で立っていた。
想像を絶する強敵。これほどの恐怖と緊張は火竜リオレウス以来だ。
――それでも、クリュウは負ける気はさらさらなかった。
確かにフィーリアの進退が決まるのは大きいが、前のように村の危機だから絶対に討伐しなければ自分の知っている人達が危険に晒さ

れるという事態ではない。だから、正直リオレウスに挑んだ時よりも状況は切迫している訳ではない。もしも負けても、ルーデルに頭を下げてでも説得するくらいする用意はできている。

それでも、クリュウ心にはリオレウス戦の時のような《負けたくない》という強い想いがあった。

状況が追いつめられている訳でも誰かの仇という訳でもなでない。それでも、どうしても負けたくはなかった。

――これは自分のハンターとしての意地とプライドだ。

ここで負けているようでは、いつまで経っても父や母のような凄腕のハンターにはなれない。彼らの背に憧れてこの世界に飛び込んだのなら、こんな所で止まっている暇はない。

自分の夢はサクラと同じ――みんなを守れるようなハンターになる事。

だったら、こんな所で止まっている暇はない。これから先、リオレイア以上の強敵なんてこの世界にはまだ複数存在するのだから。それらの脅威から、みんなを守りたい。

理想論だし、子供のわがままだって事くらいわかっている。それでも、それが彼をここまで突き動かしてきた志だ。

英雄になんてなれなくてもいい、守護神なんて大げさな事も望んでいない。

「僕はただ……今が好きなだけなんだ」

――密林を舞台にした陸の女王リオレイアとの戦いの決着はまだ遠い。

第１３０話　三位一体　アウトレンジ作戦

その後もエリア2を舞台にクリュウ達は戦闘を続けたが、その途中でリオレイアはエリア４へと移動した。逃げる寸前にフィーリアがペイント弾でペイントの上書きをした為リオレイアの位置は把握できている。クリュウ達も携帯食料で小腹を満たしたり砥石で切れ味を回復させるなどの準備を終えてからペイントの匂いを追ってリオレイアを追い掛けてエリア４へと移動する。

だがクリュウ達がエリア3に達した段階でリオレイアは再び移動。今度は拠点（ベースキャンプ）上空を通り抜けてその隣のエリア１へと移動した。クリュウ達はエリア４と拠点（ベースキャンプ）を通過してエリア1へと向かう。

エリア1は湖から離れた密林地帯に位置づけられる場所。少し小高い崖の上にある広い平地で、ここは細く高い木々が至る所に生えており視界はエリア2のように広くはない。背後には巨大な岩壁がそびえ立っており、この時間帯だと太陽が岩陰に隠れてしまっているので若干薄暗い。岩壁付近にはその薄暗さと鬱蒼と茂る木々が風を遮る事から湿った土になっており、そこからはアオキノコや特産キノコなどのキノコ類が取れる。地面に生える草も豊富な為、ここは草食モンスターのアプトノスのエサ場として使われている。

ここは拠点(ベースキャンプ)、エリア2へと続く道。岩壁を登った先にはエリア９へと繋がる細い道もある。

そんなエリア1の中央に木々をへし折って地に立つリオレイア。すでにクリュウ達がエリアに入る前から気づいていたのだろう。こちらをギロリと睨みつけていつでも攻撃を開始できる構えを見せている。

拠点（ベースキャンプ）とエリア1の間の道に荷車は置いているので、身軽なクリュウはすぐに岩壁の方へ走って大きく割り込むようにしてリオレイアに迫る。フィーリアも同じく岩壁の方へ走るとクリュウと別れて一人岩壁に近づき低い段差を登り始める。そしてルーデルはすでにここに到達する前に演奏を終えているのですぐさ

ま攻撃に入る。
　迫るルーデルに対し、リオレイアは必殺の突進で迎え撃つ。地響きを立てながら迫り来るリオレイアに対しルーデルはすぐさま直角に針路を変えて横へ走りこれを回避。すかさずUターンして背後に倒れたリオレイアに追う。
　起き上がったリオレイアは素早く振り向き、ルーデルとは反対側から接近していたクリュウに突進を仕掛ける。しかしフィーリアからの助言でリオレイアの様子を注視していたクリュウはこの突進を予期していた為簡単に回避。だがリオレイアもバカではない。クリュウが余裕で回避するとその場で急停止して逃げるクリュウの方へ向き直って再び突進を仕掛ける。これにはクリュウもさすがに焦ったが、何とか身を投げ出すようにして回避。その少し後方をリオレイアが地響きを立てながら通過する。
　キノコが群生する岩壁のすぐ横に倒れ込んだリオレイア。するとその翼が突如射抜かれた。次々に飛来する鉄槌がリオレイアの翼膜を貫き血飛沫を華やかせる。それは当然フィーリアからの支援射撃であった。彼女はエリア９へと繋がる道の途中、岩壁の崖の上に陣を築き、そこにうつ伏せになって体を固定して援護射撃をしていた。走り回らず、正確に相手を狙えるガンナーにとっては絶好の位置（ポジション）であり体勢（フォーム）だ。
　空になった弾倉に再装填するのは射程距離の長い貫通弾ＬＶ２。これでエリアの大体を網羅できる。ただし前端付近では弾の威力は半分程に下がってしまうので、ある程度引きつけて戦わなければならない。だが、その点についてもフィーリアに抜かりはなかった。
　すでにここに来る前にフィーリアはこの狩場での作戦方針を二人に話していた。この狩場自体フィーリアは何度も訪れており、地形の様々な特徴も全て熟知している。その情報を元にした作戦、簡単に言えばフィーリアがいる岩場付近にリオレイアを常駐させ、彼女の攻撃力を最大としつつ剣士二人が攻撃するというもの。単純だがこのエリアの地形を利用したガンナーにとってはベストな戦法だ。剣士二人組は狭い岩場の間でリオレイアを相手にするのでかなりの負担が

掛かるが、そこは二人は難なく了承している。それにここは拠点（ベースキャンプ）にも近いので態勢を立て直しやすい。フィーリアとしてはここでできる限りリオレイアの体力を削る気でいた。
「ここが正念場ですね……」
そう静かに呟くと、フィーリアはハートヴァルキリー改を構えて起き上がるリオレイアに再び照準を合わせて一発撃つ。銃口から射出された貫通弾ＬＶ２は空気の壁を突き抜ける度に初速よりも速度が落ち威力も落ちていく。しかしそれでもその一撃はリオレイアの翼膜を再び貫く。
一方的な銃撃に対し、リオレイアも反撃に出る。フィーリアの方へ振り返ると、崖の上に陣取るフィーリアに狙いを定め、轟音と共に単発ブレスを撃ち放った。それまでの水平ブレスと違い、角度を付けての斜撃ブレス。炎球はフィーリアのすぐ下の崖の壁に激突して爆ぜる。
「……くぅッ！　で、でもここは彼女の最大射角を超えた角度。直撃はしないんだから……ッ！」
吹き荒れる爆風と飛び散る岩の破片を耐え切り、フィーリアは再びスコープで狙いを定めて銃撃を再開する。引き金を引く度に衝撃で腕に負担が掛かるが、そこは慣れたガンナーである。それらの衝撃に耐え、銃口を一ミリたりとも動かさずに正確な射撃を続ける。弾倉の中が空になればすかさず再装填してできる限り間隔を開けないで連射。弾丸が撃ち出されるたびにその分だけ排出される空薬莢が彼女の周りに甲高い音を立てて散らばる。
クリュウとルーデルが挟撃して押さえ込んでいるリオレイアに、フィーリアはひたすらに銃撃を続ける。
一方、フィーリアの援護射撃を受ける剣士二人組は暴れるリオレイア相手に苦戦を強いられていた。思うように動いてくれないリオレイアに対し、背後からアキレス腱を狙ってブラットフルートを叩き込むルーデル。
「この突進バカッ！　少しは大人しくしてなさいよッ！」
アキレス腱を殴られた事で一瞬膝を折りかけて怯むリオレイア。

しかしそれは本当に一瞬の出来事。すぐに元の状態に戻ると立ち位置を変えようと走るクリュウ目がけて突進してしまう。
「あぁもう動くなぁッ！」
リオレイアに狙われたクリュウはこれを何とか回避すると、フィーリアから距離が離れてしまったリオレイアを戻そうとルーデルに駆け寄る。
「意外と難しいね、これ」
「あんたがミスるからでしょバカッ」
「ご、ごめん……」
「チッ、使えないわね……」
ルーデルの言葉に多少なりとも傷つくクリュウを無視し、ルーデルは木々を押し倒して転倒するリオレイアを見詰める。ゆっくりと起き上がったリオレイアは比較的早い速度で振り返る。その動きに二人はすぐさま左右に分かれる。直後、リオレイアが突進を開始して今度はルーデルを追い掛ける。
ルーデルは自身に向かって突進して来るリオレイアに対し舌打ちしつつも、リオレイアに対し直角で逃げている為に難なくこれを回避する。しかしリオレイアは再び急停止するとその場で信地旋廻してルーデルの方へ向き直り、そのまま再突進。
「しっつこいってのぉッ！」
ルーデルは怒鳴るが、内心は焦っていた。人間の走る速度と飛竜の突進速度は比べ物にならない程違う。このまま走っていても必ず追いつかれる。かと言って再び横へ回避しようにもこの距離では下手に針路を変えてもこれも追いつかれる可能性が高い。回避するには、ギリギリまで引きつけて直撃寸前で横へ跳ぶしかない。だが当然、ギリギリまで引き付けるのは危険極まりない行為だ。
覚悟を決め、ギリギリまで引き付けようと肩越しにリオレイアを見ながらルーデルは彼我の距離を目測で測る。
しかし、ここでリオレイアは思わぬ行動に出た。何と再び急停止したのだ。驚きのあまりルーデルは足を止めて振り返る。すると、リオレイアはいつの間にか背後から迫っていたクリュウに向き直った。

「うわッ!?」
予想だにしていないリオレイアの行動にクリュウは慌てて足を止めるが、足を止めるタイミングが遅すぎた結果止まった位置はリオレイアの眼前。その途端リオレイアが動き、クリュウはとっさに盾を構えた。
目の前にいる敵に向かってリオレイアは首を大きく横に振ってタックルと噛み付きを合わせたような一撃をクリュウに叩き込む。牙こそ盾でガードしたが、その衝撃までは耐えられずクリュウは大きく後退してしまう。
ここで追撃をされればクリュウが危ない。そうルーデルが感じ取り走り出した瞬間、リオレイアの体を無数の銃弾が貫いた。遠距離からのフィーリアの支援射撃だ。この攻撃にリオレイアは一瞬怯み動きを止める。その一瞬を突いてルーデルが一気に距離を詰める。
「いい加減にしなさいよッ!」
止まっているリオレイアの背後から右側、脚付近に達すると同時に背負ったブラットフルートを引き抜き、それまでの勢いを全て注ぎ込んで横薙ぎに脚に一撃を叩き込む。予期せぬ一撃だったのだろう、リオレイアは悲鳴を上げて横倒しに倒れた。これまでクリュウが積み重ねてきたダメージも、幾分か役に立ったのかもしれない。
ルーデルはチャンスとばかりに倒れたリオレイアの頭部を狙ってブラットフルートを叩き込む。クリュウもやっと巡ってきたチャンスを無駄にしない為にも全力で駆け寄り、低くなった尻尾に向けてデスパライズを叩き込む。
もがくリオレイアの頭部と尻尾に対し全力攻撃する二人。遠くからのフィーリアの援護攻撃も正確にリオレイアの体を射貫く。
時間にして数秒。しかしその数秒のうちに三人はこれまでの十数分に匹敵するだけの攻撃を与えられた。
そろそろ起き上がると感じ、クリュウは早々に攻撃を止めて後退する。ルーデルも全く同じタイミングでリオレイアの正面から退避した。
クリュウとしてはそれなりの手応えは感じていた。しっかりと一

撃一撃に全力を込められ、正確に狙えた。だがリオレイアはそんな彼の想いとは裏腹に平然と起き上がる。改めて人間とモンスターの差を思い知らされる。

リオレイアはギロリとクリュウを睨みつけると体を回転させて尻尾を横薙ぎに振り払う。この一撃は何とかバックステップで回避した。

飛竜種の巨体を生かした旋回攻撃は全包囲攻撃の為厄介だが、同時に数少ないチャンスでもあった。全包囲攻撃と言っても同時に攻撃できる訳ではない。片側を攻撃している間は反対側はいかなる攻撃も届かない空白地帯となる。常に動き回っているリオレイアに対しては、本当に数少ない隙だ。

リオレイアはクリュウへの尻尾の薙ぎ払いを失敗するが、気にした様子もなく反対側へそのまま回転する。その瞬間、クリュウの目の前に空白地帯が発生した。すかさずクリュウは一気にリオレイアの懐に潜り込むと回転の軸となっている脚に向かってデスパライズを叩き込む。迸る麻痺毒に一瞥をくれつつ、一撃一撃にしっかりと力を込めて攻撃を繰り出す。

旋回が終わり、クリュウはすぐにその場を離れる。だがリオレイアはそれを待たずしてクリュウの方へ振り返ると二歩引く――刹那、とっさに構えた盾に強烈な衝撃が直撃してクリュウは耐え切れずに吹き飛ばされて背中から地面に叩きつけられて転がる。幸い大した怪我はなくクリュウはすぐに起き上がる。前を見ると、ちょうどリオレイアが地響きと共に地面に降り立った瞬間であった。

サマーソルトを何とか防いだクリュウは冷や汗を流す。一瞬でも反応が遅れていれば大怪我は避けられない所であった。痺れる左腕が、その衝撃の重さを物語っている。

着地したリオレイアがどのような動きをするか。クリュウは一瞬の動きでも見逃さないよう凝視しつつ、いつでも体を動かせるように構えておく。

その時、エリア中に笛の音が響き渡った。リオレイアを挟んで反対側に位置するルーデルはブラットフルートを構えてはいるが、彼女で

はない。音の響く方を見るとそれは岩壁の方――フィーリアの吹いた角笛であった。
クリュウが吹き飛ばされるのをスコープ越しで確認したフィーリアは腰に下げていた角笛を迷う事なく吹いた。
角笛は吹いた対象者がその音を聞いたモンスターに狙われやすくなる。ランス使いやガンランス使いなど防御に優れた武器を携えた者が使用して囮役になる際に使われる事が多いが、今回は違う。
彼女がいる場所がリオレイアの攻撃範囲外であり、自身の攻撃範囲内である事は彼女自身が重々承知している。
――これがフィーリアの考えたこのエリアでの奇策。アウトレンジ作戦であった。
角笛の音色にリオレイアは当然振り返り、再び攻撃を再開するフィーリアに向かって突進する。だが、当然、彼女がいるのは崖の上の為、恐れる事は何もない。
眼下に迫り来るリオレイアに対して構わず貫通弾ＬＶ２を撃ち続ける。直後、岩壁にリオレイアの重量級な巨体が激突。岩壁がその衝撃で震え、伏せていたフィーリアにもその振動は伝わる。常識外れな威力だ。
袋小路のようになっている場所で暴れるリオレイアに近づく事もできず、クリュウは遠巻きにそれを見詰めており、ルーデルはこれを機に演奏を始め、少し前に効果の切れた攻守上昇演奏を行う。
フィーリアを狙って岩壁に体当たりしたリオレイアは叫び声と共に翼を羽ばたかせて飛び上がって後退する。ちょうど袋小路の入口辺りまで後退したリオレイアは着地。勢いを止められず数歩下がったが再び臨戦態勢に入る。
リオレイアはその間も銃撃して来るフィーリアのいる方に向かって斜めに単発のブレスを撃ち放った。その炎球はフィーリアが伏せている横の岩壁に命中して爆散。岩壁の一部が砕け、小さな破片がフィーリアの背中にビシビシと当たる。小石ならともかく拳大よりも大きなの石が背中に当たるのは防具を通しても痛い。しかしあれだけ強固な岩壁をも砕くブレスに直撃するよりは全然マシだ。

砂埃に塗れながらも、フィーリアは冷静にリオレイアを狙って銃撃を続ける。そこへもう一発ブレスが飛んで来た。今度はフィーリアの銃口のすぐ下の岩壁に命中した。至近距離での爆風にフィーリアの体が吹き飛ばされ、すぐ横の壁に背中を叩きつける。肺の中の空気を吐き出し、軽く咳き込む。

「……やっぱり、絶対安全だとは言えないのね」

フィーリアが陣取っていた場所は確かに通常ではギリギリ攻撃が届かない場所だ。しかしリオレイアが自身のブレスの最大射程ギリギリの場所から最大仰角で撃てば、彼女がいた場所も決して安全とは言えない。直撃はしなくても至近距離で爆発すればそれなりにダメージは負う。それでも、下手に立ち回って体力を消耗させるよりはこちらの方が安全策ではある。

リオレイアとばかり戦っているから、周りの人々は自分の事をリオレイアの生態や癖を全て知っていて、全ての行動を見切って立ちまわると誤解している人が多いが、実際はこういう出来る限り安全策を使って戦う、普通の狩りと何ら変りない。そもそも人間が彼女の全てを理解しようなど不可能であり、おこがましい事この上ない。自分はただ、そんな彼女との命を懸けた戦いをこの上ない喜びとしているに過ぎない。最上の敬意を持って、最上の礼儀を重んじて彼女と相対する。

戦うたびに違う行動をする。当然だ、リオレイアにも人間と同じで個性があるのだから、細かな違いはたくさんある。前回とは違い戦いを、敬愛する彼女とどちらかが力尽きるまで繰り広げる。この興奮は、何にも代えがたい。他のモンスターでは決して得る事のできない、自分だけの喜び。

リオレイアは美しく、気高く、凛々しく――そして強い。そんな彼女を敬愛し、彼女との戦いを聖なる儀式に等しいと感じているからこそ、リオレイアとの戦いは興奮する。

この気持ちは、決して他の人にはわからないだろう。だからこそ、自分だけの特権であり、勝手ではあるが自分とリオレイアだけの世界だと感じられる。

こちらを憎々しげに睨むリオレイアの鋭い眼光に体が震える。恐怖もあるが、その女王としての威厳に満ちた闘志が心を震わせるのだ。
「やっぱり、貴殿は最高の好敵手（ライバル）です……ッ！」
フィーリアは再び姿勢を低くして射撃体勢に入ると、遠距離射撃を再開する。
再びのフィーリアからの攻撃にリオレイアは再三ブレスを撃ち放とうとするが、そこへクリュウとルーデルが左右から同時に突っ込む。
「私の嫁に何しやがるのよッ!?」
激昂を力に変え、ルーデルは射撃体勢に入ったリオレイアの脚に向かって全力でブラットフルートを叩き込む。その一撃は今までの幾多の一撃よりも鋭く、力強く、リオレイアの脚を吹き飛ばした。
「グオォッ!?」
足払いような一撃を受け、リオレイアは耐え切れずその場で横転する。そこへまるで狙っていたかのようにクリュウがデスパライズを振り上げて襲い掛かる。狙うはリオレイア最大の難所――尻尾だ。
「ここッ！」
振り下ろした一撃は狙い違わずリオレイアの尻尾の先端部分の付け根辺りに炸裂する。そこにはこれまでの彼が積み重ね続けて来た無数の傷が残されている。それでもまだ彼女の尻尾は健全だ。続けざまにもう一撃叩き込み、すかさず次の一撃へと繋げる。その間もフィーリアからの援護射撃、そしてルーデルもまた頭部に対して集中的にブラットフルートを叩き込み続けている。
しかしそんな一斉攻撃の甲斐もなく、リオレイアはゆっくりと起き上がると翼を広げて飛び上がる。その巨大な翼が生み出す風圧にクリュウとルーデルは行動を奪われる。その間もフィーリアの射撃は続くが、リオレイアは気にもせずそのままクリュウとルーデルの背後へと着地した。そのまますかさず目の前の敵に向かってリオレイアは三連ブレスを撃ち放った。
周りで爆散する炎の嵐の中ルーデルは着弾直前で危険範囲を脱し、

ルーデルよりもリオレイアに近かったクリュウは回避には間に合わなかったが、ガードしてその一撃をやり過ごした。
「グズグズしてないで態勢を立て直すわよッ！」
ルーデルは再びリオレイアに近づくとブレスを撃った事による一瞬の隙でがら空きの頭に向かってブラットフルートを叩き込む。遅れてクリュウも再び脚に近づくとデスパライズを叩き込んだ。しかし二撃目を入れようとした所でリオレイアはその場で尻尾を振り回すように回転を始めた。寸前でその動きを見抜いたルーデルはバックステップでその一撃を回避し、同じくクリュウもリオレイアの両脚の間に転がって事無きを得る。
内側から一撃を叩き込み、すかさずその場を脱する。足の下は旋回攻撃の時は安全地帯となるが、逆にサマーソルトの直撃地帯にもなる。事実、クリュウが脱した直後にリオレイアはサマーソルトを炸裂させた。脱していたクリュウは無傷だったが、彼が数秒前までいた場所はサマーソルトの一撃で大きく地面が抉れ、その威力を見せつけている。
着地の風圧でクリュウが一瞬動きを封じられている間に、ルーデルは回り込んで再びリオレイアの頭部へ一撃を叩き込むと深追いせずにすぐさま転がって正面から回避する。正面はこちらの攻撃力を最大にすると同時に、相手の攻撃力もまた最大となる諸刃の剣だ。そのギリギリの境目を見極めるのは難しく、ルーデルのような感覚で行動するような子でしかできない聖域だ。
リオレイアは三連ブレスで二人の接近を牽制する。木々が爆散し、背の高い木がクリュウの真上から襲い掛かる。横へ跳び回避すると、直後彼が一瞬前までいた場所に木が倒れる。クリュウはそれを飛び越えて粘着性の火炎液が所々で燃えている地面を突き進む。
まるでクリュウの接近を拒むようにリオレイアは翼を広げて飛び上がり、後方へと距離を置く。しかしクリュウもまた全速力で接近し、リオレイアが着地した瞬間には彼我の距離はほぼないに等しいにまで接近している。そこから、クリュウはとっさにしゃがみ込んだ。至近距離で突然姿勢を低くしたクリュウはリオレイアの視界から消

える。突然消えた敵にリオレイアは一瞬困惑する。その一瞬の隙を突いてクリュウはリオレイアの顎の下から思いっ切り蹴り上げた。それ自体は大した攻撃力はないが、死角からの突然の攻撃にリオレイアは一瞬怯んだ。続けざまに今度は打ち上がった頭を上から今度は叩きつけるようにしてデスパライズをぶち込む。ルーデルの狩猟笛のような威力も迫力もないが、その一撃にリオレイアはうめき声を上げて動きを止める。すかさずクリュウはリオレイアの懐に飛び込み、脚の下に移動するとアキレス腱を狙って再びデスパライズを振るう。

一撃を入れると、深追いはせずそのまま転がるようにしてリオレイアの背後へと出る。その直上を尻尾が音を立てて振り回され、遅れて接近していたルーデルの針路を阻む。

旋回した事でこちらに向き直ったリオレイアの眼前に、クリュウは閃光玉を投げ放つ。閃光玉の効果で視界を封じられたリオレイアは悲鳴を上げてその場でたたらを踏む。

「うおおおおりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」

勇ましい掛け声を上げながらルーデルはブラットフルートを構えて突貫する。軸足に一撃を叩き込むと地面を転がって場所移動。右翼下に転がり出るとそのままリオレイアの側頭部へ重撃をぶち込む。その強力な一撃にリオレイアはうめき声を上げて頭を振る。ルーデルは振り抜いた一撃を反転させて反対側を叩き、振り上げ、一気に叩き落す。その一撃にリオレイアは再びスタン状態になって転倒した。

「今よッ！　さっさと尻尾片付けてッ！」

激しい動作の連続にさすがのルーデルも息が上がり始めているのだろう。肩を激しく上下に動かしながら少し掠れた声でクリュウに激を飛ばす。その声にクリュウは一度小さくうなずくと、倒れているリオレイアの後方へと回り込んで再び低くなった尻尾に襲い掛かる。

「いい加減……ッ！　切れろってッ！」

クリュウはもう何度繰り返したかわからないような同様の一撃をまたしても何度も何度も叩き込む。まるで石のように硬い鱗を弾き飛ばしながら肉を切っていく攻撃の数々は着実に彼の腕に負担を掛ける。チーム全体の戦闘継続時間の限界だけではなく、彼自身の連続

攻撃による肉体的疲労もまた限界に達しつつあった。
デスパライズの柄を握る手にも次第に力が入らなくなって、少しでも力を抜いただけで硬い鱗に弾き飛ばされそうになる。それを必死に耐えながら何度も攻撃を繰り返すのは相当しんどい。しかし、それでもこれしか彼にできる攻撃はない。ハンターに一撃必殺なんて言葉はないのだ。
確かにダメージを与えている感触はある。ボロボロの尻尾はあと少しで切れるという事もわかっている。あとは残った力を振り絞って切断するのみ。体力的にも、これがラストチャンスだ。
硬い鱗をかなり弾き飛ばしたとはいえ、それでも幾分か残っており、切れ味がすっかり損耗している剣では簡単に弾かれてしまう。それを力任せに叩き込んでいるのだから、腕には想像を絶する負担が掛かり、激痛が走る。それでもデスパライズの柄だけは離さず、ひたすらにそれを叩き込む。
度重なる集中攻撃でリオレイアの尻尾は鱗も肉も削り取られ続け、自身の新緑色の鱗や甲殻が真っ赤な血に染まる。そして、真っ赤な肉と血の中に一ヶ所白い部分が見えた――それがリオレイアの尻尾の骨だと理解すると同時に、クリュウは両手で柄を握り締め、地面に足を踏ん張って思いっ切りデスパライズを振り上げる。
「でぇりゃあああぁぁぁぁぁぁッ！」
叩き落とされたデスパライズ。骨と衝突した瞬間、ゴリッという不気味な音と共に寸断された。大量の血が噴き出しクリュウのレウスシリーズを真っ赤に染める。そして、
「ギャアアアアアアアアアッ!?」
リオレイアはこれまで以上の悲鳴を上げて前方にジャンプするように転倒した。その衝撃にクリュウは呆気無く吹き飛ばされて地面に倒れた。もう力が入らない右手に代わって左腕で体を起こすと、遠くでリオレイアがもがいている。そして、クリュウから少し離れた場所にはリオレイアの尻尾が落ちている。それを見て、ようやくクリュウは実感する。
「き、切れたぁ……」

しかし尻尾を切られたとはいえリオレイアはまだ健在だ。倒れたクリュウやすっかり疲れ切っているルーデルの姿を見たフィーリアは素早く動いた。再び角笛を使ってリオレイアの気を自分に引きつけつつ崖から降り、こちらに向かって突進して来るリオレイアに向かって道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出して投擲。リオレイアの視界を潰し、続けてペイントボールを付ける。
「撤退しますッ！」
崖から素早く降りてきたフィーリアの指示にルーデルはうなずくと起き上がろうとしているクリュウに駆け寄り、彼の腕を掴んで引っ張り上げる。
「ほら、肩貸してあげるからさっさと逃げるわよッ！」
「あ、ありがと……」
クリュウの腕を自身の首に回し、ルーデルは走り出す。その後ろを背後を警戒しながらフィーリアも続く。
閃光玉によって視界を潰されてもがくリオレイアを残し、クリュウ達はエリア1から脱して隣の拠点（ベースキャンプ）へと撤退した。
拠点（ベースキャンプ）へと撤退した三人はそこでしばしの休憩を取る事にした。
疲労困憊だったルーデルは一人で小舟のベッドを占領して爆睡。そして腕を痛めたクリュウはフィーリアに手当てしてもらっていた。
レウスアームを外して痛み止めにすり潰した薬草を腕に塗ってもらい、その上から包帯を巻く。最初こそ薬草が触れて痛んだが、しばらくするとその痛みも取れ、塗る前よりも痛みが和らぐ。
「これでもうしばらくは大丈夫です。あくまでも応急処置ですけど」
「十分だよ、ありがとフィーリア」
手当してもらった腕を軽く回し、動きに何の支障もない事を確認するとクリュウは再びレウスアームを取り付ける。一方のフィーリアも消費した弾丸の数を確認する。まだ弾切れになる心配はなさそうだ。
レウスアームを取り付け終え、その状態でも腕が動く事を確認し、クリュウは道具袋（ポーチ）から残った携帯食料を全て口の中に押し

こみ、水筒の水で一気に流し込む。その様子にフィーリアは眉をひそめる。
「そんな食べ方すると喉を詰まらせますよ」
「ごめんごめん。でも、これでしばらくは小腹も空かない。回復薬もしこたま飲んだからまだ戦えるよ」
「本当に大丈夫ですか？」
「平気平気」
　笑顔でクリュウが言うとフィーリアはまだ何か言いたそうにしつつも小さく頷き、「あまり無理はしないでくださいね」と念押ししておく。彼女からしてみれば、クリュウが無事でいる事が何よりも大事な事なのだ。
「大丈夫だって。フィーリアは心配性だなぁ」
「クリュウ様だから不安なんです」
「……ごめんフィーリア。今ものすごく傷ついたよ」
　言葉というのは実に難しい。大好きな人に怪我をしてもらいたくないという想いの込められた言葉も、聞き取り方一つで《あなたが情け無いから心配》という正反対な想いに変わってしまう。そんな微妙にすれ違っている二人から少し離れた場所で一人で爆睡しているルーデル。
「それにしても、あんなに豪快に寝てて大丈夫なのかな」
「ルーはオンオフが人一倍しっかりしている子なので、休憩できる時にこれでもかと休憩する子なんです。一度起きればちゃんとまた活動できますのでご安心を」
「それならいんだけど……」
　寝起きというのは一番頭が動かないものだというのは、自身のチームのリーダーが散々教えてくれているので半信半疑でいるクリュウ。するとそんな彼の疑問に答えるように、フィーリアは眠っているルーデルの方を向く。
「ルー。そろそろ出発するよ」
「オッケー」
　まるで起きていたかのようにフィーリアの声にすぐさま起き上が

るルーデル。その鮮やかな起き方に唖然としているクリュウを見て、フィーリアはおかしそうに笑う。そんな二人の様子を見て、ルーデルはムッとしたような表情になる。
「何よ。私が寝ている間に二人でイチャイチャしちゃってさぁ」
「べ、別にイチャイチャなんてしてないわよ。ね、ねぇクリュウ様？」
「そうだよ。フィーリアはわざわざ僕の手当てをしてくれてただけだし」
「ふーん」
　ルーデルはどうでもいいと言いたげにクリュウから視線を外し、クリュウの言葉に少しばかりがっかりしているフィーリアを見て面白くなさそうに唇を尖らせる。そんなルーデルの様子に気づいた様子もなく、クリュウは立ち上がった。
「クリュウ様？」
「それじゃ、僕は爆弾の用意をするよ」
「はぁ？　あんた、まだ爆弾使う気なの？」
「当然でしょ。その為にわざわざ準備したんだから」
　クリュウは気にした様子もなく小舟の近くに置いてある爆弾の所へと近寄ると、爆弾の下準備に入る。もはやお手の物となった大タル爆弾とカクサンデメキンで大タル爆弾Ｇを調合する。どこか楽しそうに調合を開始するクリュウの背中を見て、ルーデルは大きなため息を零す。
「……あいつさ、銃狂乱（トリガーハッピー）ならぬ爆弾狂乱（ボマーハッピー）なんじゃないの？」
「撲殺狂乱（ビーツハッピー）なあなたにだけは言われたくないと思う」
　とりあえず、クリュウの爆弾の調合が終わるまで二人はそれぞれの準備を行う。慣れているクリュウは程なくして大タル爆弾四つを大タル爆弾Ｇ四つに変え、これで一行が保有する大タル爆弾Ｇは六つとなった。
　六つの大タル爆弾Ｇを載せた荷車を見て呆れ返るルーデル。大きなため息を零した後、一人で地図を見詰めているフィーリアに近寄

る。
「それで、リオレイアは今どの辺り？」
「現在は隣のエリア４よ。時間的にそろそろ弱っていてもおかしくない頃だと思うけど」
「なら次でこの爆弾を使って一気に畳み掛けよう。フィーリア、落とし穴の設置をお願いしてもいいかな」
「わかりました」
「……あのさ、この明らかにおかしな状況に対してあんた達はノーコメントな訳？」
一人まだクリュウ達（主にクリュウ）の戦い方に慣れないルーデルはいつも以上の精神的負担に何度も大きなため息を零す。ある意味、彼女が今回の一番の被害者かもしれない――まぁ、彼女も似たようなものだが。
「それじゃ、準備はいい？」
爆弾満載の荷車の横ですっかり元気を取り戻したクリュウの声に、フィーリアは笑顔で、ルーデルは呆れながらそれぞれ返事する。
「ラストスパートだ。気合入れて行くよッ！」
クリュウ、フィーリア、ルーデルの三人は再びリオレイアとの戦いに向けて拠点（ベースキャンプ）を出発した。

第１３１話　太陽のように明るく　月のように儚くて

拠点（ベースキャンプ）に隣接するエリア４。先程ルーデルが散々ヤオザミを片付けていたおかげで、今ここにはクリュウ達と彼女しか存在しない。そこに、彼女はまるで待ち構えるようにしてこちらを向きながら威風堂々と君臨している。

こちらが向こうの動きがわかっているように、彼女もまたこちらの動きをお見通しという訳だ。そして、自身の体力の限界が近い事もわかっているのだろう。ここで決着をつける。そんな気迫が彼女から感じられる。

すでに爆弾を満載した荷車をエリアの端の岩壁に置いたクリュウ。ここに来るまでの間に適当に拾った枝や葉で軽くカモフラージュし終える頃には、戦いの火蓋が切って落とされていた。

「グギャアアアアアアアアッ！」

激しい殺気と共に撃ち出された怒号がエリア全体に轟くと共に、ルーデルとフィーリアが動く。左右に分かれてリオレイアとの距離を詰める。

接近してくる敵に対し、リオレイアは三連ブレスで拒む。二人それぞれの針路を塞ぐようにして着弾するブレスに、ルーデルとフィーリアの足が止まる。その隙を突いてリオレイアが一番接近していたフィーリアに向かって必殺の突進を仕掛ける。

猛烈な勢いで迫るリオレイアを正面に見据え、フィーリアは一瞬で判断して動く。接近していた為に横へ逃げる事もできない状態で、フィーリアはあえて前進する。そして、リオレイアの顔が視界いっぱいに広がった瞬間、彼女は迫るリオレイアの唯一の空白地帯、顎の下へと飛び込んだ。砂の上に倒れ、その上をリオレイアが猛烈な勢いで通り過ぎる。彼女の小柄な体はリオレイアの脚の間を見事に突破したのだ。

突然消えた敵に対して戸惑いつつも、今更急停止する事もできずリ

オレイアは倒れ込むようにして巨体を止める。そこにはちょうど荷車から離れたクリュウが立っていた。
クリュウは倒れたリオレイアの右側面から接近し、起き上がる動作中のがら空きの懐に入り込むと、目の前にある脚に向かってデスパライズを叩き込む。迸る麻痺毒と返り血で視界を遮られながらも、ただ一点を狙って剣を叩き込み続ける。
リオレイアが完全に立ち上がると、それ以上の深追いはせずにすぐさまその場を離れる。しかしリオレイアは逃げるクリュウに向き直ると単発のブレスを撃ち放った。直線上で回避行動中だったクリュウはそれを避ける事ができず、迫り来る凶悪な炎の塊に恐怖しつつ反射的に盾を構える。直後に着弾。猛烈な爆風と爆炎に身を包まれ、クリュウは盾で直撃こそ避けたが衝撃で吹き飛ばされ、湖の浅瀬に飛び込んでしまう。
吹き飛ばされたクリュウを見てルーデルが動く。ブレスを撃った直後で体が固まっていて動けないでいるリオレイアの側面から突っ込む。彼我の距離から頭には間に合わないと一瞬で判断し、ルーデルは勇ましい掛け声を上げながらリオレイアの太い脚に向かってブラットフルートを横薙ぎに振り抜く。その一撃はまだ力が入り切っていないリオレイアの脚を吹き飛ばす。バランスを失ったリオレイアは悲鳴を上げてその場に横倒しになった。
倒れたリオレイアの横を通り抜けるようにルーデルは姿勢を低くして腰にブラットフルートを預けながら突進。無防備に横になっている頭に向かって強烈な一撃を叩き込む。
中距離からフィーリアもこれまでの戦いで節約しながら使っていて、残りわずかとなった電撃弾を装填して最後の攻勢に出る。まるで嵐のように吹き荒れる電撃弾の雨にリオレイアは体を次々に貫かれ、焼け焦げる。ルーデルの執拗な総攻撃も甲殻や鱗を弾き飛ばす。
そして――クリュウは地面を蹴った。
宙に飛んだクリュウはジャンプの際の勢いを回転に変え、空中から重力をも力に変換して回転斬りを叩き込む。翼膜が引き裂かれ、血が飛び散り、麻痺毒が迸る。

リオレイアの背中に飛び乗ったクリュウは剣を両手で持ち、逆手に構える。
「喰らえッ！」
体全体をしならせるようにして剣を構え、一気に振り落とす。その一撃はリオレイアの背中の甲殻を弾き飛ばし、中の柔らかな肉を切り裂き、血を飛び散らせて中の神経を寸断する。耐え難い苦痛にリオレイアは顔をしかめる。クリュウは容赦なく深々と突き刺さった剣を今度は逆向きに引っ張り、引っこ抜いた。その途端、まるで噴水のように真っ赤な血が噴き出し、彼の赤色の鎧を不気味に上塗りする。
「ギャアアアアアアアアッ！」
死に等しい激痛にリオレイアが狂ったように悲鳴を上げて悶える。しかしクリュウは一切の手加減なく、何度も何度も執拗に剣を叩き込み続ける。暴れるリオレイアの背中という不安定な足場でも、彼は寸分の狂い無く狙った場所に剣を叩き込み、突き刺し、貫く。
そして、リオレイアが起き上がろうとした瞬間に放った何度目かわからぬ一撃が加わった刹那、それまで蓄積させていた麻痺毒が再び彼女の自由を奪う。突然痙攣を始めたリオレイアの上でバランスを崩したクリュウは地面に落ちた。落ちた際にぶつけて痛む肩に顔をしかめながら、慌てて自分の方へ駆け寄って来ようとするフィーリアを見る。
「フィーリアッ！」
その声でフィーリアは彼の想いを悟った。足を止めてはっきりとうなずくと、その場にしゃがみ込んで作業を開始する。それを一瞥し、クリュウは再び立ち上がると走り出す。リオレイアに背を向けて。
「ルーデルッ！　ここは任せたよッ！」
「言われなくてもやってるわよバカッ！」
罵声を浴びせつつも、ルーデルは爽やかな笑みを浮かべてクリュウに向かってウインク。しかしすぐさま戦乙女の顔となってブラットフルートを構える。
「ここは、私の独壇場……誰にも邪魔させないわッ！　攻撃開始（アン

グライフェン）ッ！」
　背後で再びルーデルの猛攻撃の気配を感じながら、クリュウはフィーリアを追い抜いて隠してあった荷車を引っ張り出し、危険とわかっていながらもそのまま前線へと舞い戻る。向かう先にはこちらに向かって大きく手を振るフィーリアが立っている。
「クリュウ様ッ！　こちらの準備は整いましたッ！」
「わかったッ！　ルーデルッ！」
「うっさいわねッ！　今行くから待ってなさいよッ！」
　最後の一撃まで容赦しない。それがルーデル・シュトゥーカという狩人（ハンター）だ。しっかりと強烈な一撃を叩き込み、急いで最前線から離脱する。直後、リオレイアは麻痺から解放されて爆音のような怒号を辺り一帯に響き鳴らす。
「さぁ、来いッ！」
「クリュウ様ッ!?」
「ちょッ!?　あんたバカッ!?」
　クリュウは二人の前に出て盾を構える。彼らが狙うのはただ一つ。リオレイアがこちらに向かって突進して来る事。その一点に尽きる。だが相手はこちらも思う通りに動くとは限らない。彼女は遠距離の敵に対しては突進だけではなくブレスという武装も持っている。クリュウはもしもリオレイアがブレスを撃って来たらそれを盾で防ぐ気でいた。
　無茶だって事はわかってる。でも、自分の背中には二人の少女がいる。男なら、女の子を守る為に命懸けになれ、そう幼なじみに教え込まれている。だから、絶対に守ると決めている。自分の夢は、みんなを守る事だから……
　――まぁ、もう一つ理由を上げればここでガードしないと背後に置いてある荷車に着弾。積んでいる大タル爆弾Ｇ六発が一斉に大爆発。爆死しかねないという現実問題があるのだが、この際は無視しよう。
　一瞬の沈黙。クリュウはリオレイアと睨み合う。殺気に満ちた瞳と相対するのは恐怖以外の何ものでもない。しかし、だからと言って屈服する気など毛頭ない。恐怖など、乗り越えてみせる。

――そして、動く。
「グオオオオオッ！」
リオレイアは勇ましい怒号を上げながら一撃必殺の突進でクリュウ達に挑みかかる。その瞬間、クリュウはレウスヘルムの中で小さく笑みを浮かべた。すぐさま武器をしまって後退し、荷車に積んである大タル爆弾Gに手を掛ける。その背後から、リオレイアが襲い掛かった――が、その寸前でリオレイアの脚元が崩落。彼女は悲鳴を上げながら下半身を地面に没した。フィーリアが仕掛けていた落とし穴――つまり、クリュウ達の策に見事にハマったのだ。
「今だッ！　爆弾用意ッ！」
クリュウの掛け声を合図に二人も一声に動く。クリュウが二発、フィーリアとルーデルも同じように各自二発ずつ大タル爆弾Gを手に取って暴れるリオレイアの周りに次々に設置する。全員が設置を終えて安全圏にまで撤退した事を確認し、フィーリアが起爆の為に銃を構える。スコープでしっかりと大タル爆弾Gに狙いを定める。
「爆破（シュプレンゲン）しますッ！」
フィーリアは引き金を引いた。
銃声と共に撃ち出された弾丸は寸分違わず大タル爆弾Gに吸い込まれ、命中。刹那、着弾の際の火花が火種となり、大タル爆弾Gは起爆。その一撃は他五発にも誘爆し、次々に爆破。リオレイアは一瞬にして火炎と黒煙と粉塵の中に消え、強烈な爆風がクリュウ達に襲い掛かる。
クリュウは盾を構え、フィーリアは姿勢を低くして、ルーデルは重いハンマーを錨のようにしてそれぞれ爆風に耐える。
爆風が過ぎ、まるでやまびこのように辺りに爆音が反響しながら小さくなっていくのを耳にしながら、クリュウはゆっくりと盾を下ろす。目の前の、先程までリオレイアがいた場所は今も黒煙と土煙が入り交じった不気味な煙が立ち込めている。
フィーリアとルーデルもその不気味な煙柱を呆然と見詰めている。
「やった……の？　あれだけの爆発なら……」
つぶやくようにしてルーデルは言う。クリュウもその意見に少な

からず賛成していた。確かに、あれだけの爆発を、これまでの長く苦しい戦闘を経たあのボロボロな体で耐え切るなど考えられない。普通に考えれば、彼女は爆死した――はずだ。

でも、クリュウはそう確信しなかった。無言で、再びデスパライズを構える。

――そして、それは現実となって目の前に現れる。

煙の中から、ゆっくりとリオレイアが姿を現した。不気味な煙を纏いながら、ゆっくりとこちらに前進して来るリオレイア。爆発の威力のすさまじさが、彼女の見るも無残に砕け、歪み、血に染まった体が物語っている。その不気味で、非現実的な姿はまるで死神。《死龍》と呼ぶに相応しい、恐怖の塊となって彼らの前に姿を現す。

血を垂らしながら、ボロボロな体でゆっくりと地面を踏みしめてクリュウ達に迫る。その不気味で、でも気高くて、誇り高い女王の姿にクリュウは言葉を失ってその場に立ち尽くす。

もう、彼には策は残されていない。構えたデスパライズはとうに刃こぼれして役に立たないし、体力だってもう残されていない。それはルーデルも同じで、彼女もまたリオレイアの生命力の強さと圧倒的な気迫に呑まれて硬直してしまっている。

そして、リオレイアは最後の力を振り絞って必殺の突進。その動きはそれまでのような速さも威力もない。だが、死を覚悟したからこその気迫はこれまで以上であった。

迫り来るリオレイアに、クリュウとルーデルは為す術も無く立ち尽くす。

万事休す――かと思われたその時、リオレイアが地面のある一点を踏み抜いた瞬間、そこに仕掛けてあったトラップが作動。リオレイアはクリュウのデスパライズよりも強力で即効性の高い麻痺毒を受けて体の自由を奪われる――シビレ罠だ。

「――これで終わりです。何もかも……だから――おやすみなさい」

風に乗り、聞こえてきた声にクリュウがハッとなって振り返ると、フィーリアが銃を構えて立っていた。風が吹き、彼女の美しく長い金髪が優雅に揺れる。そして、その表情は慈愛に満ちた笑みを浮かべて

いた。
――刹那、密林に銃声が轟いた。
拠点（ベースキャンプ）に戻ったクリュウ達はそこでこの狩場を管轄するアイルーに狩猟の達成を報告し、事後処理を頼んだ。
アイルーが去って行くのを見送ると、クリュウは力尽きたように砂浜にガクリと腰を落とし、ずっと被っていたレウスヘルムを脱ぎ捨てる。
「お、終わったぁ……」
解放された彼の顔には汗が浮かび、きれいな若葉色の髪もまた汗ですっかりベト付いてしまっていた。見えていないが、鎧の中も汗でびっしょりとなっている。
「だらしないわねぇ、男ならシャキッとしなさいよ」
そう言うルーデルもまた小舟の上で腰を落としている。彼女もまた顔は汗に濡れ、砂場で戦闘をした為に頬には砂が付いている。何とも情けない格好だ。愛用のブラットフルートもお役御免とばかりに砂場に転がっている。
二人のハンターが疲労困憊でぐったりしている中、フィーリアは小舟に残しておいた荷物の中からタオルを取り出すと、クリュウに駆け寄る。
「お疲れ様ですクリュウ様。これ、お使いください」
そう笑顔で言ってクリュウにタオルを差し出す。クリュウは「あ、ありがと」と礼を言いながら受け取ると、それで顔の汗を拭きとる。その間にフィーリアはルーデルにもタオルを渡し、自身の分で自分も汗を拭う。そんないつもと変わらない様子のフィーリアを見て、クリュウは苦笑しながら小さくつぶやいた。
「やっぱり、敵わないなぁ……」
リオレイアは――捕獲された。
フィーリアは一枚上手であった。もしもの時に備えて独断でシビレ罠を自分達の前に設置し、弾倉にはすでに捕獲用麻酔弾を装填していた。そして、フィーリアは呆然としている自分達とは違って気迫に満ちた最後の特攻をするリオレイアを、捕獲した。

その鮮やかな手つきには、もはや脱帽ものだ。
目の前の事しか考えていなかった自分とは違い、フィーリアはその一手先を呼んで行動していた。経験の差か、ハンターとしての素質の差か、フィーリアには一歩及ばなかったのだ。
それでもまぁ、いいと思う自分がいた。
これが、自分達のチーム。お互いがお互いを助け合う、そんな絆で結ばれたチームなのだから。
とにかく今は、命懸けで掴み取った勝利をしっかりと味わう時だ。反省や後悔は後に回せばいい。そんな事を思いながら、いつの間にか夕暮れに染まる空を見上げ、夕日の暖かさに小さく微笑む。
「すっかり日が暮れちゃったね」
「そうですね。この湖を夜に脱するのは危険を伴いますので、出発は明日の夜明けにしましょう」
「それが無難ね。せっかく依頼を達成しても帰路の途中でお陀仏なんてごめんよ」
「それじゃ、準備しないとね。僕は薪でも拾って来るよ」
早々に自分の役目を決めて立ち上がるクリュウ。しかしそれを見てフィーリアが慌てた様子で駆け寄って来た。
「それは私がやりますッ！」
「え？　で、でも……」
「ダメです。クリュウ様はお見受けする限り相当お疲れのご様子。彼女相手に接近戦で戦うのは様々な疲労もあるでしょう。今しばらくお休みください」
「大丈夫だって。それに力仕事はやっぱり僕が……」
「ダメと言ったらダメです。クリュウ様とルーは拠点（ベースキャンプ）内での準備をお願いします」
そう言い残し、フィーリアはクリュウが動く前に拠点（ベースキャンプ）から出て行ってしまった。彼女の消えてしまった背中に呆然としていると、ルーデルが「それじゃ、お言葉に甘えさせてもわうわ」と気にした様子もなくその場に横になった。
「い、いいのかな……」

「いいんじゃない？　私ほどじゃないだろうけど、あんたも疲れてるんでしょ？　今はあの子の優しさに甘えておきなさい。あの子もその方が喜ぶわよ」
「そ、そうなの？」
「そうよ。あの子は誰かに喜んでもらえる事が自分の幸福っていう変わった子だから。っていうかあんた、少なからず一緒にいるってのに、気づいてなかった訳？」
「……気づいてたよ。本当にいい子だよね」
「ふふん、当然でしょ。何たって、私の嫁だもの」
「あははは……」
　自信満々に断言するルーデルに苦笑を浮かべつつ、クリュウは徐々に沈んでいく夕日を見詰める。
「……すごくのどかだね。さっきまで、リオレイア相手に命懸けの戦いを繰り広げていたとは思えないよ」
「そうね……まぁ、私やあんたと違ってフィーリアは終始余裕を持って立ち回ってたみたいだけど」
「あははは、やっぱり敵わないなぁ」
「バ～カ、フィーリア相手にリオレイアで敵おうなんて無茶なのよ」
「そうだね……」
　何というか、本当に平和だった。
　さっきまでの死闘があったからこそ、何気ないゆっくりと流れる時間が平和に感じられる。
　――でもそれ以上に、ルーデルとこういう風に普通に話せている事に内心少し驚いている。何しろ、ドンドルマ出立時はフィーリアを賭けて対立していた者同士なのに。それが今では本当のチームメイトとして接している。
　まだ決着はついていないが、今はこのままでもいいと思ってしまう。
　今はただ、戦友として同じ勝利の余韻に浸っていたい……
　そのまま特に何をするでもなく時間を潰し、ようやく疲労が幾分か回復した所で二人はキャンプの準備を始めた。

フィーリアが薪や野草や果物まで採取して戻って来たのは、すっかり空が暗くなった頃であった。
夕食は三人がそれぞれ分担して調理した。クリュウとフィーリアは言うまでもないが、驚いた事にルーデルも料理の腕はかなりのものだった。本人曰く「一人身の悲しい才能よ」と皮肉ったが、料理のできる女子というのはポイントは高い――まぁ、それを無意味にさせるほどに彼女の二重人格は破壊力は絶大だが。
密林は動植物が豊富な為、比較的豪華な夕食となった。これが砂漠や火山、雪山だったら持ち込んだこんがり肉や干し肉くらいのすごく質素なものになるのだから上等だ。
夕食を食べ終え、三人はそれぞれくつろぐ。
満腹感と疲労が絡み合い、クリュウは強烈に睡魔に襲われた。いつもならまだ起きている頃であっても、クリュウは睡魔に負けて一足先に床についた。
一人簡易布団で眠り始めたクリュウを見てフィーリアは優しい笑みを浮かべ、ルーデルは呆れつつもどこか朗らかな笑みを浮かべていた。
夜中、クリュウは目覚めた。
思いっ切り寝た為か、寝起きはすごく良かった。
起き上がると、元々船に備え付けられている大きなベッド（今回は女子用）でフィーリアがすやすやと気持ち良さそうな寝息を立てていた。その寝顔はとてもかわいらしく、手に握っているものがぬいぐるみだったら威力絶大だっただろう――残念ながら、彼女が手に持っているのは雌火竜の逆鱗であった。先程の食材採取の際にちゃっかり切断した尻尾から剥ぎ取ったものだ。
「えへへ……もう……戦えましぇん……」
よだれを垂らしながら、一体どんな夢を見ているのか気にならない訳ではないが、何となく知りたくなかった。
そこで気づく。本来ならフィーリアの隣で寝ているはずのルーデルがいなかった。
だがそこはハンターの端くれ。クリュウはすぐに彼女が見張り役

を担っているのだと気づいた。拠点（ベースキャンプ）とはいえ絶対安全という訳ではない。狩場では常に最低限の警戒は怠ってはいけないのだ。

だとしたら、分担もクソもなく勝手に一人で寝てしまった自分はサボりに等しい。クリュウは慌ててルーデルと交代しようと彼女を捜し始めた。

船から降り、クリュウは前方に聳える崖を見上げた。見張り台としては頂上は最高の立地だ。長いツタの葉を上らないといけないが、おそらく彼女はあそこにいるだろう。

クリュウは早速上ろうとツタの葉に手をかける。

パチャン……

昼間とは違って夜は夜で生命の営みが行われている密林では虫の声や波の音、風の音が絶えず響く。そんな中、そのわずかな雫音はなぜかハッキリと聞き取れた。

「何だろ……」

クリュウはツタから離れると、音のした湖の方へと向かう。小舟を迂回するように右回りで行くと、遠くに見える大瀑布と静かに夜を照らす月が輝く幻想的な光景が広がっている。

月の淡い光は水面（みなも）に映り、風で揺れる水面の月はゆらゆらと揺れる。そんな湖に、光輝く妖精の姿があった。

白っぽい金色の肩ほどまでの髪は水に濡れて真っ直ぐ伸び、彼女の白い肌に付いている水滴と同じように月光を浴びてキラキラと煌めく。まるで、彼女自体が輝いている、そんな錯覚に陥る。

幻想的な景色と、美しい妖精の姿が映る光景に、クリュウは時が経つのも忘れて見惚れてしまう。

まるで雪のように白い肌の妖精。だがその肌に一ヶ所、不可思議な場所があった。右肩に記された黒い刺青。剣に絡まる蛇の形をしたその刺青は、彼女の白い肌にはあまりにも不釣合で、禍々しい。

クリュウの視線は自然とその刺青に注がれていた。その時、今まで月を見上げていた彼女がゆっくりとこちらに振り返った――視線が、重なる。

「あ……」
どちらからとなく、声が漏れる。
少女――ルーデルは突然の事に驚愕に満ちた表情を浮かべていたが、見る見るうちに真っ赤に染まっていき、体が小刻みに震え出す。
先に動いたのはクリュウだった。
「ご、ごめんッ！」
クリュウもまた顔を真っ赤にして慌てて踵を返し、逃げようとする。だが、
「ま、待ってッ！」
逃げようとしたクリュウを止めたのはルーデルの声であった。その声にクリュウは足を止める。でも振り返る訳にもいかず、どうしようかと困惑していると「ちょっと待ってて……」とルーデルは言って背後で何かゴソゴソと動いている。
少しの間の後、「いいわよ。こっち向いて」という彼女の声に従い、クリュウはゆっくりと振り返る。彼のすぐ目の前に、ルーデルは立っていた。一枚のタオルを巻いただけの格好だが、先程までの裸身に比べたら全然マシだ。当然髪を拭く余裕もなく、彼女の髪の先からは雫が垂れ落ちる。
こちらをジッと見詰めて来る彼女に視線を合わせられず、クリュウは目を伏せる。
「ご、ごめん……」
「……見たの？」
「いや、その……」
「見たの？」
有無を言わせぬ迫力にクリュウは「ちょ、ちょっと……」と情けないセリフを搾り出す。その返答を聞いて、ルーデルは特に怒る事もなく「そう……」とつぶやく。
気まずい雰囲気の中、クリュウは何となく違和感を感じていた。いつものルーデルならこういう時はエレナほどではないだろうが暴力も振るいかねない。もしくは罵詈雑言の嵐になるだろう。なのに、今のルーデルは不気味なくらい静かだった。それが、彼女らしくない。

頭の片隅に浮かんだ疑問にクリュウはゆっくりと顔を上げる。するとそこには今までの破天荒な少女の姿はなく、どこか物哀しそうな表情を浮かべた月下美人の姿があった。
その時、クリュウは気づいた。ルーデルが胸よりも優先して左腕で肩の刺青を隠している事を……
「シュトゥーカ。それって……」
「うるわいわね。ジロジロ見てんじゃないわよ……」
一瞬いつものルーデルの鋭い眼光が戻り、クリュウは安堵する。でもすぐにそれは再び悲しげな表情に変わる。そうなってしまうとクリュウはどう声をかければいいのかわからず、黙ってしまう。ルーデルも何も言わないので、二人の間には再び気まずい沈黙のカーテンが降りる。
しばしそうして沈黙に支配される二人。だがそれは、突然砕かれる。
「……見たでしょ、私の肩の刺青」
口火を開いたのはルーデルの方だった。クリュウはそんな彼女の問い掛けに対し、こくりとうなずく。それを一瞥し、ルーデルはそっと瞳を陰らせる。昼間の時のような明るい少女の姿とは掛け離れた、暗い瞳。
「これは奴隷の印よ」
「え？」
「――私は、元奴隷なのよ」
ルーデルは、静かに自分の過去を語り始めた。
彼女の生まれ故郷はエルバーフェルド帝国の辺境。お世辞にも裕福とは言えない家に生まれた。
当時のエルバーフェルドは百年に一度と言われた《ローレライの悲劇》から復興の最中であった。エルバーフェルドの火山地帯が一斉に噴火を始め、国土の六割が灰に染まり、作物や家畜は全滅。都市機能も麻痺した上に噴火の際の地震で多くの家屋が倒壊。大国と言われたエルバーフェルドはその大災害で一気に国力を失った。
他国も少なからず被害を受けてい他、様々な要因もあってエルバー

フェルドへの支援は行われなかった。この事が昨今のエルバーフェルドと周辺国との摩擦の原因とされ、今でもエルバーフェルド国民の多くが尊皇攘夷を掲げ、他国を嫌っている。エルバーフェルドが軍事国家へと発展してしまったのは、ある意味仕方がない事かもしれない。

つい数年前までエルバーフェルドはローレライの悲劇を脱する事ができず貧しい国であった。しかし現在は総統と呼ばれる指導者のおかげ急速に国力を回復させている。その速度は空前絶後であり、他国はエルバーフェルドの復讐を強く恐れ、西竜洋諸国の緊張は増している。

話が逸れたが、そんなローレライの悲劇から復興の最中、貧しい家庭に生まれたルーデル。当時全国的に働ける男子は重宝され、働けない役立たずの女子は生きる為に人身売買される事が多々あった。ルーデルもまた、五歳の頃に実の親に売り飛ばされてしまった。場合によっては殺されてしまう事もある時代だったのだから、ある意味彼女は不幸中の幸いだったのだろう。

彼女が売られた先が、奴隷商人であった。彼女の肩の刺青は、その際に焼印された奴隷の証。もちろん、麻酔なんてものはなく、地獄の苦痛だった。

だが、本当の地獄はここからであった。

奴隷商人にとって子供は使い捨ての労働力としか見なされていなかった。幼いルーデルはわずかな食料で過酷な仕事という名の地獄を毎日のようにこなすしかなかった。一人、また一人と家族のように助け合っていた自分と同じくらいの子供が事故や病死、餓死などしていく地獄を、彼女は必死に生きた。親友と呼べる存在を何人も失いながら、彼女は道端のわずかな雑草を食べてでも生き続けた。

しかし、そんな生活も限界に達しつつあった。まともな食料もなく、過酷な作業ばかりやらされたルーデルはすっかり衰弱し、いつ死んでもおかしくない状態になってしまう。

そんな状態で奴隷商人は子供を竜車に積み込んで別の地域へと旅をしていた。奴隷商人の商隊が辿り着いたのは王家に忠誠を誓う譜

代諸侯、レヴェリ家が統治するレヴェリ領。そこで、運命の転機が訪れる。
レヴェリ家は奴隷制度を禁止し、奴隷商人を有無を言わずに逮捕するよう領全体に行き渡らせていた。結果、奴隷商人は逮捕され、ルーデルやその他の子供はレヴェリ家に保護された。
レヴェリ家はエルバーフェルドの中で数少ないローレライの悲劇を受けなかった土地にあった為、他の貴族の統治領に比べて裕福であった。レヴェリ家は奴隷の子供達に里親を探したり、施設に預けたりして子供達を解放した。
ルーデルもまた一度病院に入れられて何とか生き長らえる事ができた。その後は施設に預けられ、平穏な日々を送る事ができるようになったが、すでに奴隷になってから三年の月日が流れており、彼女の心はすっかり壊れてしまっていた。
毎日、他の子供達と遊ぶ事もなく、孤独だった。
そんな彼女のもう一度転機が訪れた。
ある日、レヴェリ家の当主とそのご令嬢が施設に訪れた。当主は子供達にとっては命の恩人であり、共通の《父親》のような存在だった為、多くの子供達が歓迎する中、いつものようにルーデルは一人部屋の片隅で小さくなって座っていた。
何もかもどうでもいい。そんな風に考えていた時、そっと目の前に真っ白な手が差し伸べられた。
顔を上げると、そこにはまるで天使のような微笑みを浮かべた少女が立っていた。元奴隷である汚らわしい自分とは違う、比喩ではなく本当に世界の汚い部分に触れずに育ったのではないかというくらいに真っ直ぐで、きれいで、澄んだ瞳をした女の子。柔らかな金髪が、そっとルーデルの鼻をくすぐった。
視界の片隅では、レヴェリ家の長女と次女が子供達と楽しそうに遊んでいるのが見える。レヴェリ家には三姉妹の令嬢がいるというのはこの領では常識。つまり、今自分の目の前にいるのはその末娘の三女となる。
少女は微笑みながら、絶望の淵にいたルーデルを救う、たった一言

だけど、心から嬉しかった言葉を放つ。
「――私と、お友達になりませんか？」
「それから、私はレヴェリ家にフィーちゃん専用の使用人として引き取られた。使用人と言っても、正確にはフィーちゃんの遊び相手って事。私の生活は、本当に一変した。毎日が幸せ過ぎて、涙が出た。こんな、汚らしい元奴隷という身分の私が、こんな幸せを手に入れる事ができたなんて、今でも信じられない。それでも、私はフィーちゃんに助けられた」
　自分の肩に刻まれた悲しい傷跡、奴隷の証をギュッと握り締めながら語るルーデルの瞳には、薄らと涙が浮かんでいた。
「フィーちゃんは、私が元奴隷だという身分にもかかわらず、対等に扱ってくれた。学校にも行けず、学のない私に一から勉強を教えてくれた。長い月日を経て、私達はお互いを親友と思える存在になった。今じゃ、この刺青なんてフィーちゃんは気にしないわ――だけどね、この刺青と同じように、私が元奴隷だったって事実は変わらない。恥ずかしくて、醜い過去」
　表情を暗くし、ルーデルは吐き捨てるように言う。悔しさと苦痛に耐えるように唇を噛み締め、握り締めた拳は白く染まる。
「私が普通の人間として生きていくには、普通の生き方じゃダメだった。元奴隷でも、対等に生きていける環境が必要だった」
　悲痛な表情を浮かべ、悔しそうに話すルーデル。クリュウはそんな彼女の姿を前にも見たような気がした――違う、彼女と同じように一生消える事のない《異質》に苦しみ続けた彼女の姿と、重なる。
　自分の異質さを呪い、苦しみ、悲しみ、抵い、そして諦めていた、あの頃の彼女のよう……
　彼女と同じように、ルーデルも自分の異質さに苦しんでいる。性格はまるで違うし、容姿だって似ていない。だけど、二人には人には理解できない闇を抱え、理不尽な運命を呪い、生きてきた。
　今のルーデルは、もう一年近く会っていない大切な後輩――ルフィールに似ていた。
　――だから、自然と手が伸びていた。

「……え？」
驚くルーデルの姿もまた、あの頃の彼女と同じ反応だ。
クリュウは優しく微笑みながら、ルフィールにやっていたようにそっとルーデルの頭を撫でる。
「だから、ハンターを目指したんだ」
ルフィールも力こそが正義とされる実力主義のハンターの世界に希望を抱いて、ハンターを志した。結局、ハンターの世界でも彼女の異質さは完全な平等にはできなかったが、それでも彼女はその世界で自分の居場所を求めて戦った。
ルーデルもまた、同じなのだろう。
「……そうよ。ハンターの世界は傭兵あがりや祖国から亡命した人、私のような奴隷出身や、前科持ちでも力さえあれば自分の居場所を得られる。だから、私はハンターを目指した」
やっぱりか……
クリュウは言葉には出さなかったが、心の中でそうつぶやいていた。ハンターの世界で生きる者の中には彼女のように人とは違う異質さから逃れるためにハンターになったという人間は珍しくはない。ハンターの世界自体が異質だからだ。
「――わかってる。いくらお姉さんの影響があったって、あの優しいフィーちゃんが突然ハンターになりたいって言い出したのも、私がハンターを目指すと決意したからだって」
実に、フィーリアらしい。かっこいい姉への憧れはきっかけに過ぎず、本当は親友を守りたいという気持ちからハンターを目指した――何となく、そうじゃないかとは気づいていた。
「ハンターの世界は私にとっては天国みたいな所だった。この刺青だって、私だけじゃなかった。私は普通でいられたの……まぁ、狩場での二重人格っぷりにはさすがに引かれてたけどね」
「あれはまぁ、そういうのとは別問題だしね」
「……私はこの世界では普通でいられる。だから、私はこの世界が好き。だってここは、私にとっては目に見えない故郷みたいなものだから。私を、優しく受け入れてくれる――でもね、やっぱり時々思って

しまう。この刺青は人とは違う自分の証。やっぱり自分は周りとは違って、普通じゃない。実際、これを見て私を汚らしい物を見る目で見る連中だって少なからずいる」
　ハンターの世界は本当に多種多様だ。彼女のような訳ありな子もいれば自分のように比較的普通の家に生まれる者もいれば、フィーリアやアリアのように貴族出身の者もいる。だから、誰もが皆同じではない。
　彼女の身の上を知った上で対等に接する者もいれば、蔑む相手もいる。そんな事、一年以上前に散々経験した。
　そして、自分の立ち位置はあの頃から何ら変わっていない……
　クリュウはそっと彼女の頭の上に置いていた手を離す。だが、ルーデルはそんな彼の手を取った。驚く彼を、真剣な、だけど縋（すが）るような目で見詰める。
「――あんたは、どっち側の人間な訳？」
「どっち側って……」
「私の醜い過去の印を見て、私の過去を知って、あんたはどう思った訳？」
　ルーデルは真剣に訊いている。自分の過去を知って、自分をどう思うのか。親友の親友（初恋相手）がどういう人間なのか、彼女は知りたがっている。そして同時に、答えを待っている。
　だから、クリュウは答える。難しい事じゃない――あの時と同じだ。
「――僕は出身が他と違うからって、その人をそんなくだらない理由で差別なんかしないよ」
　それは昔、ルフィールに言った言葉と同じ。彼女も自分の瞳が人と違う事に苦しみ、クリュウはそんな彼女に手を伸ばした。あの時と、同じ。
　クリュウの言葉に、ルーデルの瞳が大きく見開かれる。
「くだ、らないってあんた……」
「くだらない事でしょ？　元奴隷が何だって言うのさ。そんなのを気にする連中はクズ中のクズ。そんな人間の底辺の連中の戯れ言をい

ちいち聞いててもキリがないだけさ。君はフィーリアと何ら変わらない、《普通の女の子》さ」
　そう断言するクリュウの言葉に、ルーデルは驚きのあまりしばし呆然とする――そして、彼女はフッと笑った。
「意外ね。あんたがクズなんて言葉使うなんて」
「よく言われるけど、僕だって男だからね。汚い言葉を使う時だってあるさ。特に、こういう問題に関してはね」
「どういう事？」
「……昔ね、君みたいに人と違う事で周りから蔑まれていた友達がいたのさ。その関係でね」
「ふぅん……あんた、変わってるわね」
「よく言われるよ」
　クリュウが苦笑しながら答えると、ルーデルも小さく笑った。心なしか、その表情が明るくなったように見える。
「ほんと、バカがつくくらいにお人好しなのねあんたは」
「それもよく言われる」
「でもまぁ、私はそういうの嫌いじゃないわよ」
　どこか嬉しそうに笑うルーデルの笑顔にクリュウはほっと一安心する。そんな彼を見て、ルーデルは何か納得したような表情を浮かべた。
「……フィーちゃんが惚れるのも、わかる気がするわね」
「何か言った？」
「うるさい、何でもないわよ」
　首を傾げるクリュウにプイッとそっぽを向けると、ルーデルは一人歩き出す。その先には湖があり、彼女はそのまま膝くらいまで湖に浸かる。
「シュトゥーカ？」
「――ルーデルでいいわよ」
「え？」
「だ、だから……ッ、ルーデルでいいって言ってんのよッ」
　振り返って怒鳴るルーデルの顔は月明かりの下でよく見えないが、

心なしか頬が赤く染まっているように見える。
「ど、どうして……」
「っていうかあんた、さっき私に無断で勝手に呼んでたじゃない」
「そ、そうだっけ？」
　全く記憶にないクリュウ。完全に素で言っていたのだろう。そんな彼の姿に苦笑しつつ、ルーデルはツンとする。
「別に深い意味はないわよ。私の名字って呼びづらいって定評もあるし。その方が私も気楽だからよ。その代わり、私もあんたをクリュウって呼ぶわよ。いいわね？」
「そりゃ構わないけど……何か恥ずかしいね」
「はぁ？　バカじゃないの？」
「あはははは……」
　容赦のないルーデルの物言いに、何となく懐かしさを感じる。たぶんそれは、今頃村で自分の帰りをイライラしながら待っているであろう幼なじみに似ているからだろう。
　そんなクリュウを、ルーデルは無言で手招きする。何事かと思って彼女と同じように膝くらいまで水に浸かりながら彼女と対峙する。
「今回の狩りで、あんたが情けない奴じゃないって事はわかったわ。気に入らないけど、フィーちゃんはあんたと一緒にいたいと願ってる――不本意だけど、今回は諦めるわ」
　それは、今回の狩りの根幹。互いにフィーリアを想っている者同士、負けられない目に見えない戦い。それを、ルーデルは辞退した。
　――負けたのではない。そもそもこの戦いに勝ち負けなどない。互いに、フィーリアを想っている者同士だからわかる、フィーリアの気持ちを最優先にした、妥協だ。
　あれほど喰ってかかってきたルーデルがあまりにあっさりと諦めた事に、クリュウは少なからず面食らう。
「い、いいの？」
「いい訳ないでしょ。でも、それがあの子の幸せなら仕方ないわ……。言っておくけど、別にあんたにあの子をあげた訳じゃないわよ。いつか絶対に奪い返してみせるんだから、覚悟しておきなさいッ」

ビシッと力強くクリュウを指差し、不適な笑みを浮かべて略奪宣言をするルーデル。その真っ直ぐで強い輝きに、クリュウは苦笑しながら「肝に銘じておきます」と答える。そんなクリュウの反応に、ルーデルはジト目になる。
「本当にわかってるんでしょうね？　もしもフィーちゃんを泣かせるような事したら、マジでブチ殺すわよ」
「……わ、わかりました」
「ふぅん、どうも信用できないわね――良し。あんたがフィーちゃんを本気で守れるように、呪いをかけてげるわ」
「いや、すごく困るから。怖いから」
「うるさいわね。ちょっと面貸しなさい」
そう言ってルーデルはクリュウの胸倉を掴む。その突然の行動に、クリュウ慌てる。
「ちょ、ちょっとルーデ――ッ!?」
次の瞬間、二人の唇が重なった……
唇に当たる柔らか感触と熱。それがキスだとわかるのに時間は掛からなかった。その瞬間、至近距離にある彼女の顔が一瞬ルフィールと重なる。
波や風の音が消え、一瞬世界は無音になった。
時間にしたら一瞬のはずが、何分に感じられた。
突然唇を重ねられ、そして同じように突然離れる。
顔を真っ赤にして呆然としているクリュウに、同じく顔を真っ赤にしたルーデルはニッっとイタズラっぽい笑みを浮かべた。
「この私が初キスまで捧げてやったんだから、命懸けでやり遂げなさい――フィーちゃんをお願いね」
波の音が、ゆっくりと戻ってきた……
数日後、三人は日が落ちて都会らしいイルミネーションに包まれたドンドルマに無事に帰った。ライザに事後報告を済ませ、夕食を終えて一息入れていた時の事。
「それじゃ、私はそろそろ行くわね」
ルーデルは唐突に言った。あまりにもあっさりとした別れの言葉

に、一息入れていた二人は一瞬困惑する。
「え？　い、行くって、こんな時間に？」
「悪いねフィーちゃん。ちょっとエムデンの方に用があるから、そろそろ出発しないとまずいのよね」
　彼女の言うエムデンとはエルバーフェルドの帝都。ドンドルマからは陸路で片道一週間ほどかかる場所にある城塞都市で、エルバーフェルドの中枢だ。
「エムデンに？　どんな用事なの？」
「詳しくは言えないけど、シュトゥットガルト絡みね。まぁ、セレスティーナさんからの依頼だから、また環境視察の護衛って所かしら？」
「セレス姉様の？　それじゃ私も行った方が……」
「いいわよ、私一人で十分足りるだろうし。あんたはあんたで今は帰る場所があるでしょ？　今回は私のせいで長居させちゃったし、早く帰って安心させなさい」
「どちらかと言えば、クリュウ様の帰りを待っている方々の方が多いけどね」
「……どんな状況な訳、それ？」
「ちょっと、込み入った事情があって……」
　複雑な笑みを浮かべるフィーリアに首を傾げながら、ルーデルはクリュウの方に向き直って睨みつける。その意味を重々承知しているクリュウは苦笑しながらうなずく。
　それで納得したのか、「さってと、じゃあ行くわね」と言って立ち上がる。
「元気でねフィーちゃん。おへそ出して寝ないように」
「ね、寝ないわよ。ルーの方こそ好き嫌いしないで野菜もちゃんと食べなさいよね」
「大丈夫よ。私は肉食動物と同じで野菜の栄養を体内で作れる程度の能力は持ってるから」
「またそんな無茶言って……」
「……何か、どっかで聞いた事があるセリフ」

呆れるフィーリアと苦笑を浮かべるクリュウを一瞥し、ルーデルは懐から小袋を取り出し、テーブルに置く。
「ここは私のおごりって事で。それじゃフィーちゃん、またね」
「うん、元気でね」
親友の出発を嬉しそうで、でもどこか寂しそうな複雑な笑みを浮かべながら見送るフィーリアに微笑み、ルーデルは背を向ける。
「――っと、クリュウ。悪いんだけど、外まで私の狩猟笛運んでくれる？」
突然振り返ったルーデルは手を振ったまま困惑するフィーリアにではなく、クリュウに声を掛けた。当然、クリュウは驚く。
「い、いいけど。何でまた」
「うるさいわね。女の子に重い荷物を持たせる訳？」
「……いや、君はその重い武器をブン回して戦ってるんでしょ？」
「うるさいッ。さっさとする」
「はいはい……という訳だから、ちょっとごめんね」
「す、すみませんクリュウ様」
親友の横暴っぷりに何度も頭を下げるフィーリアを置いて、クリュウはブラットフルートを持ってルーデルに続いて酒場を出る。外は星々が煌めくきれいな夜空が広がっていて、神秘的な月の明かりが幻想的に大地を彩る。まるで、あの時の湖のように。
「それで、ここまで運べばいいの？」
クリュウはそう言って彼女に背を向けてブラットフルートを酒場の壁に立てかける――と、後ろから抱きつかれた。振り返ると、それはルーデルであった。
「る、ルーデル？」
「……ねぇ、一緒に来てって言ったら、あんたどうする？」
「え？」
背中に抱きついたまま、突然ルーデルはそう切り出した。クリュウは驚いて振り返るが、彼女の表情は見えず、ただ彼女のきれいな金髪が月明かりを受けてキラキラと輝くだけ。
「一緒に来てって、どういう事……？」

「言葉通りの意味よ。私と一緒に、エムデンに……ううん、それからもずっと」
「ど、どうして……？」
「……私さ、こういう性格だから、友達って少ないのよね。誰かと一緒に狩りをしても、フィーちゃん以外はみんな一見さん止まり。狩猟が終わる頃には、いつも気まずい雰囲気しか残らない……。でもさ、あんたと一緒の狩りはそんな事なかった。フィーちゃんと一緒の時のような、満足感と安心感があった。きっと、私とあんたって案外気が合うのかもしれないわね――だから」
ギュッと、腰に回した彼女の腕に力が入る。
「あんたと、もっと狩りをしてみたいなって、思っただけよ……こんな無茶苦茶な私でも受け入れてくれる、あんたと一緒に……ずっと……」
ルーデルのいつになく弱々しい声に、クリュウは黙ってしまう。何か言葉を返さなくてはいけないとはわかっているけど、何を返せばいいのかわからない。下手な言葉で返しても、それは彼女を傷つけるだけにしかならないとわかっているから。
彼女と一緒にエムデンに行く訳にはいかない。自分には行くべき場所、帰るべき故郷がある。残してきたみんなが、自分の帰りを待っているのだ。
「ごめん、それはできないよ。みんなが待ってるからさ」
……答えはなかった。
ただ、背中に張り付いていたルーデルの温もりがそっと離れただけ。腰に回っていた腕も、外れる。
「ルーデ――」
プニ……
振り返ったクリュウの頬に、何かが当たった。視線を向けると、それは指。それを追っていくと、そこにはいつもの人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべるルーデルが立っていた。
「バァカ。冗談に決まってるでしょ？　何本気になってんのよ、キモ」
「お、おい…」

「ちぇッ、あんたさえ落とせば簡単にフィーリアを取り戻せると思ったのになぁ、失敗失敗」
「お、お前なぁ……」
　呆れて怒るに怒れずにいるクリュウに対し、ルーデルはケラケラと笑う。
「ま、一度あんたに預けると言った手前、今更ひっくり返す訳にもいかないしね。私は約束は守る女だから」
「自分で言うかそれ……？」
「うるさいわね――私の大切な親友、任せたわよ」
「う、うん」
　突然真剣な表情になったルーデルの言葉に、クリュウもまた表情を引き締めてうなずいた。そんな彼の返答に納得したのか、ルーデルはニパッと笑う。
「それじゃ、次はあんたの葬式でって事で」
「え、縁起でもない事言わないでよ……」
「あははは、冗談冗談――じゃあね、頼りない騎士さん」
　ルーデルは無邪気に笑いながら手を振り、ブラットフルートを担いで歩き出す。そんな彼女の頼もしいけど、でもどこか寂しげな背中に向かって、クリュウは手を降って見送る。
「今度、イージス村にも来てよ。歓迎するからさ」
　返事はなく、ルーデルは背を向けたまま片手で答えた。
　やがて、夜の闇の中に彼女の真っ赤なフルフルUメイルが静かに消えて行った……
　翌日、クリュウとフィーリアはドンドルマを出発。数日後にはイージス村に無事に到着した。
　当然のようにクリュウはエレナの跳び蹴りを受けて悶絶し、フィーリアが慌て、エレナとサクラが睨み合い、ツバメがそれを仲裁し、リリアがさりげなくクリュウに抱きついてまた新たな火種を起こし、シルフィードが疲れたようにため息を零す。
　そうして、イージス村にいつもの光景が戻ったのであった。

第１３２話　懐かしき後輩からの手紙

暖かな日差しに感化され、春の訪れを喜ぶように野に花々が美しく咲き誇る。

木々は真新しい若葉に包まれ、夏の濃い緑とは違う柔らかな緑に染まる。

長い冬を終え、北に位置するこの大地も本格的に春となる。

若葉に彩られた木々に囲まれたイージス村も、ようやく訪れた春に人々の顔にも笑顔が浮かぶ。子供達も少し薄着になって楽しげに地面を駆け回り、大人も農業に営むものは種蒔きに勤しみ、漁師は解禁となった春魚を求めて漁に出る。

春とは、そんな活気に満ちた季節だ。

様々な職業にとって春は新たな一年のスタートとなる。だが、ハンターという特殊な職業は季節など関係なく、至ってマイペースだ。

今日も、特に仕事もなく村のハンター五人は連れだって酒場でくつろいでいる。

「あんた達ねぇ、いくら仕事がないからってだらけ過ぎじゃないの？」

そう注意するのはハンターと同じく季節関係ない飲食業に就いているエレナ。まぁ、彼女の場合は季節関係なく忙しいのである意味ハンターとは対極な存在だ。

「仕方ないじゃん、冬の間はランポスが増える訳じゃないから、間引きの仕事だってまだ来るのには時間がかかるだろうし。採取クエだって少ないんだから」

そう言うのはこの村のハンターの、色々な意味で中核を担うハンター、クリュウ・ルナリーフ。先日１７歳の誕生日を迎えたばかりのかけだしハンターだ。

「だからって、こう毎日だらけてるとこっちまで怠けグセが移りそうで迷惑なんだけど」

エレナは彼が注文した氷樹リンゴのクヨクヨーグルトを彼の前に起きつつ、呆れたように言う。確かに彼女の言い分ももっともだが、ハンターというのは収入どころか仕事が安定しない職業。忙しい時

は忙しく、暇な時はとことん暇な職業なのだ。
「悪いなエレナ。迷惑をかけてしまって」
イージス村所属のハンターの中で最年長にして一番の常識人であるシルフィードは、ブラックコーヒーの入ったコーヒーカップを片手にエレナに謝る。
「いや、謝られても困るんだけどさ……」
シルフィードの謝罪にエレナはバツの悪そうな表情を浮かべる。本心としては単純にクリュウに絡んでいただけなので、別に本当に責めている訳ではない為にこのように謝られると対応に困ってしまう。
「まあまあ、それだけ現在村の周辺が平和だって証じゃないですか」
そう言って仲裁に入ったのはクリュウの少し前に１６歳になったフィーリア。彼女はクヨクヨーグルトにフルーツジャムを和えて食べている。
「そうじゃのぉ、平和が一番じゃよ」
フィーリアの意見に同調するのは羊羹（ようかん）という東方大陸及び東方地方でのちょっと変わったスイーツに舌鼓を打っているツバメ。その横ではサクラも無言で羊羹をちょこちょこと食べている。
酒場内には、村のハンターの総勢が大集合していた。ちなみにハンターでもありいつの間にかフィーリアに弟子入りしてしまったツバメのオトモアイルーのオリガミは現在は厨房で皿洗いの真っ最中だそうだ。
酒場には彼ら以外に客の姿はなく、ある意味貸し切り状態になっている。その為か、エレナも友達が家に遊びに来た感覚で対応している。
「まぁ、あんた達がこうしてだらだらと過ごして金を無意味に使ってくれれば売上が上がるからいんだけどね」
「あはははは、さすがエレナ。商売精神は忘れないね」
そんな感じで、仕事がない上にそれなりに貯蓄していたクリュウ達はわざわざドンドルマに行く気にもなれず、こうして村でだらだらと過ごしていた。
昨日もそうで、一昨日もそうで、今日もまたそんな一日を過ごす。

誰もがそう思っていたのだが――
「やぁ、みんなお揃いだねぇ」
　そんな酒場に現れたのは背中にキノコや野草などを大量に詰め込んだカゴを背負った竜人族の青年、このイージス村の村長だった。
「村長様、今日も森で採取してたんですか？」
「うん。春になってようやくキノコや野草が芽吹き初めてね。今は春限定の野草なんかが採れるしね」
　村長はいつものように少しでも村の財源を確保しようと採取に行っている。クリュウ達が採取ツアーにあまり参加しないのはこうした彼の仕事を奪わない為でもあるのだ。
「それで、僕達に何か用でもあるんですか？」
　村長がわざわざ酒場に顔を出したという事は自分達に何か用があるのだろう。最近退屈していたクリュウ達は村長が何かの討伐依頼を頼もうとしているのかもと期待してしまう。
　だが、そんな彼らの期待に反して、村長はいつものように屈託のない笑みを浮かべる。
「残念だけど、今は特に危険なモンスターもいないから討伐依頼はないねぇ」
　全部お見通しという訳だ。クリュウ達は村長の答えに一様にがっかりする。そんな彼らに「まあまあ、平和が一番だよ」と笑いかける村長。
「実は用というのはクリュウ君にあるんだ」
「僕に、ですか？」
「うん。さっき定期船が来てね、その時に郵便物を引き取ったんだけど、その中に君宛てのものがあってね。何か大事な内容だと困ると思ったから、届けに来たんだ」
　フィーリア、サクラ、シルフィードには時々指名での依頼が届く事がある。その為村長はハンター宛ての郵便物は最優先に、わざわざ自ら届けに来てくれるのだ。
「はい、君宛ての手紙だよ」
「あ、ありがとうございます」

有名な三人と違い、凡な彼に手紙が届く事はほとんどない。珍しいなぁと思いながら受け取ったクリュウ。
それは至って普通の手紙であった。宛て先は確かに自分名義になっている。
誰だろうと思って手紙を裏返して宛先を確認すると、クリュウは目を丸くした。
「え？　しゃ、シャルルから？」
「シャルル様……？　あぁ、クリュウ様の学友の方でしたっけ？」
「う、うん。一緒にチームを組んだ事もある後輩だよ」
クリュウは手紙に書かれた名前を見て、懐かしさに胸が熱くなっていた。
シャルル・ルクレール。クリュウがドンドルマのハンター養成訓練学校に在学中の際に親しかった後輩だ。ハンマー使いの元気印の女の子で、ちょっとバカだけどいつも真っ直ぐ自分の信じた道を貫く、クリュウにとっては大切な後輩。
もう一年近く会っていない。そんな後輩から突然届いた手紙。一体何事だろうか。
クリュウは早速封筒を開けて手紙を開く。そんな彼を、なぜか全員が真剣な瞳で見詰める。
手紙には実に彼女らしい力強い文字が記されていた。
兄者、元気にしてるっすか？
シャルはいつでも元気いっぱいっすよ。毎日朝昼晩三食欠かさず飯を腹一杯食べて、風邪だって引かない健康道まっしぐらっす。
「相変わらず、無駄に元気な奴だなあいつは……」
実は、兄者に報告する事があるっす。
この前、シャルはついに訓練学校を卒業したっすよ。驚いたっすか？
「おぉ、卒業できたんだ。実技はともかく学力が悲惨だったあいつがなぁ……がんばったんだな」
ついでっすけど、ルフィールもシャルと一緒に卒業したっす。あいつ、兄者との約束を守って一年で二学年上げて卒業しやがったっす。

ほんと、ムカつく奴っすよ。
「……そっか、あいつ本当に一年で卒業したんだ。ほんと、努力の天才だよあいつは」
今は故郷のアルザス村に戻って新米ハンターとしてがんばってるっすよ。この前なんかイャンクックを討伐できて、もう一人前っす。
兄者はもっと上にいるんすよね？　負けないっすよ。
「イャンクックを倒したか。さすがシャルル、実技だったら学年トップクラスだったからな。案外、すぐ追い抜かれるかも」
いつか、兄者の村にも行ってみたいっす。兄者も一度シャルの村に来るっすよ。おいしいブドウをたくさん栽培してる村っすから、極上のワインやグレープジュースでもてなすっすよ。
それじゃ兄者、さよならっす。
「……シャルルの故郷か。今度機会があったら行ってみたいな」
ＰＳ、アルザス村のすぐ近くの密林にガノトトスが現れたっす。できれば助けに来てほしいっすけど、どうっすか？
「――それをまず最初に書けド阿呆ッ！」
突然手紙相手にブチギレるクリュウ。そのすさまじい怒鳴り声に全員が目を丸くして驚いた。
「く、クリュウ様？　な、何事ですか？」
「文法がアホ過ぎるだろッ！　だから学力が底辺のバカなんだよあいつはッ！」
「……クリュウが、女の子相手にバカって言ってる」
「な、なかなか見られない光景じゃな」
「できれば、見たくなかった光景でもあるな……」
「い、一体どうなってる訳？」
「はわわッ、はわわわッ！」
突然豹変したクリュウに女子陣（？）は一様に困惑する。一方、シャルルのバカ丸出しな手紙を読み終えたクリュウは勢い良く立ち上がった。
「く、クリュウ様？」

「すぐに旅路の準備をしないとッ！」
「はいいッ!?」
　フィーリアの戸惑いの声は、この場にいた全員を代表してのものだった。皆、クリュウの慌てっぷりに驚き、意味も分からず旅に出るとか言い出した彼を落ち着かせたのは、それから十分後の事であった。
「なるほど。後輩の村の近くにガノトトスがなぁ」
　ようやく落ち着いてクリュウから事情を聞いたシルフィードは一人思案顔になる。
「確かに、イャンクックを討伐したばかりのかけだしではガノトトスの討伐は難しいだろうなぁ」
「だから急いでたんだよッ」
「じゃがのぉ、クリュウ。お主はガノトトスの討伐経験がないじゃろうが」
「ガノトトスの生態くらいは学校で習ってるし、奴の苦手な火属性と雷属性の武器はどっちも揃ってるから」
　ガノトトスとは水中に生息する水竜種に分類される大型モンスターだ。主な活動は水中だが、地上での活動も可能な水陸両用モンスターで、古竜種などを除けば通常モンスターの中で最大の大きさを誇る。その大きさは通常サイズでリオレウスのキングサイズに匹敵するほどだ。
　リオレウスのように空を飛ぶ訳ではないので活動範囲はそれほど広くはないが、凶暴性や脅威という点では同じく危険なモンスターだ。
　クリュウの話を聞いたシルフィードはふむとしばし考え込んでいたが、スッと閉じていた瞳をゆっくりと開く。
「状況は理解した。ならば早速準備を整えて出陣しないとな。フィーリア、サクラ、すぐに出撃用意」
「了解ですッ」
「……言われなくても」
「――いや、今回は僕だけで行く」

シルフィードの出撃命令に早速準備をしようとした矢先、クリュウはそんな三人を制するように言った。当然、その場にいた全員が驚く。
「く、クリュウ？　何を言い出すんだ君は……？」
クリュウの衝撃発言に出撃命令を却下されたシルフィードはらしくもなく狼狽する。あの冷静なシルフィードが慌てるほど、彼の発言は突拍子もなかったのだ。
「ほ、本気なんですか……？」
フィーリアも目を丸くして驚いている。サクラに至っては驚きのあまり絶句していた。
エレナもツバメも、事を見守っていた村長でさえも驚きを隠せない。そんな皆の反応を見回しながら、クリュウはしっかりとうなずいた。
「これは僕の後輩の為だからね。みんなに迷惑はかけられない」
「そ、そんな……ッ！　迷惑だなんて私達は石ころほども思ってませんよッ！」
「そうだぞクリュウ。君の後輩という事は、私達にとっても他人ではない。人事ではないのだ」
「……クリュウ」
クリュウの言葉に慌てて反論する三人に対し、クリュウは冷静だった。静かに、首を横に振る。
「ありがとうみんな。でも、これは僕の問題だ。シャルルは僕の後輩……だから、後輩を助けるのは先輩である僕じゃないと」
そう言う彼の表情はいつになく真剣であった。そのいつもは見られない凛々しい表情に、女子陣が一斉にドキッとする。
「それに、きっとあいつも僕が一人で来るのを願ってるだろうしね」
「ど、どうしてそんな事がわかんのよ」
「――文字がさ、滲んでるんだよ」
シャルルからの手紙を見ながら、クリュウは静かに言った。その言葉の意味がわからず戸惑っている面々に向かって、クリュウは苦笑を浮かべながら口を開く。

「ガノトトスが現れて村が困っているの事実だと思う。あいつはウソが大嫌いな真っ直ぐ過ぎる奴だから。でもそれ以上にあいつ、僕に久しぶりに会いたいんだと思う。きっとあいつ、一年もの間ずっと我慢してたんだ。本当は別れるのが嫌で、ずっと一緒にいたかったんだ。それを我慢して、一年耐えた。でもさ、さすがに限界なんだと思う――あいつさ、自分では認めないけどすごく寂しがり屋なんだよ」

それは、彼女と一緒の時間を過ごした自分だけがわかる事。彼女がどれだけがんばり屋で、どんな時でも明るく気丈に振る舞う、思いやりのある子か、自分は知っている――そして、そんな彼女にも弱い一面がある事も、自分は知っている。

「まぁ、ガノトトスを討伐するっていう難題もあるけどさ、久しぶりに後輩に会いたいってのは僕も同じ。だから、今回は僕一人で行ってくる。これは、旧第７７小隊の問題だからね」

そう言って、クリュウは微笑んだ。その笑顔に女子陣は一様に黙る。それは自分達の知らない、彼のもう一つの仲間達に向ける笑顔。

一年以上前、フィーリア、サクラ、シルフィードが組むずっと前……今の彼の礎になった、彼にとって大切なもう一つの仲間達。

どこか寂しい気持ちもあるが、彼が過去の仲間を大切に思っているという気持ちには胸が温まる――実に、彼らしい。

「……そうか。そういう事なら、私達が水を差す訳にはいかんな――行って来い、クリュウ」

「シルフィ……」

「後輩にいい格好を見せたいならそう言え」

「そ、そういう訳じゃないけど……」

「照れるな。だが、君もたまには見栄を張ってみるべきだな。君には、それだけの実力がある事はこの私が保証しよう――後輩に、いい先輩の姿を見せてやれ」

シルフィードはそう言ってクリュウの背中を後押しすると、彼女らしい頼もしい笑みを浮かべる。クリュウもそんな彼女の言葉に自信を得たのか、嬉しそうに微笑む。

「ありがと、シルフィード」

「……さて、私はこういう結論に達したが、君達はどうだ？」
そう言ってシルフィードは渋い表情を浮かべている他の女子陣、特にチームメイトであるフィーリアとサクラの方を見る。
「私個人としては賛成しかねますが、私はクリュウ様の決めた事には基本的に従う方針なので」
フィーリアはまだ納得はしていない様子だったが、本人の言う通りクリュウの決めた事を尊重したいという想いも強く、激しい接戦の末に後者が勝ったという感じだ。表情もシルフィードのようにすっきりはしていない。
一方、サクラはというと……
「……嫌。ついて行く」
そう言ってサクラはぷくぅと頬を膨らませる。クリュウに対する独占欲がずば抜けている彼女の場合、一時であっても他の女の子にクリュウを取られるのが嫌なのだろう。断固拒否の構えを見せている。この辺は好きな人の想いを尊重するというフィーリアとの決定的な違いだ。
サクラが拒否権を発動するのは予想できた事だったのだろう。シルフィードはため息を零す。
「サクラ、わがままを言うな。これはクリュウが自分で決めた事だぞ。背中を押してやるのが仲間というものだろう？」
「……仲間なんてその程度。私はクリュウの妻として夫の暴挙を止めようとしているだけ」
「ただでさえ混沌としている状況をややこしくするなサクラ。フィーリアとエレナもそのように迷う事なく戦闘態勢になるな」
協調性ゼロなサクラのわがままとずば抜けた嫉妬心を抱くフィーリアとエレナ。その間で調整役を担うシルフィードはいつもいつも苦労する。
「わがままを言うでないサクラ。本当にクリュウの為を思っているなら、ここは手を引くべきじゃ」
もう一人の常識人であるツバメもまたサクラを注意する。そんな友人に対しサクラは一言。

「……ツバメ、うざい」
「ひど過ぎるじゃろッ!? それが幼少の頃からの付き合いの友人に言うセリフかッ!?」
本当にサクラはクリュウ以外には容赦がない。
シルフィードやツバメの注意を聞かず、サクラはプイッとそっぽを向いて断固拒否の構えを見せる。その姿は比喩ではなく駄々をこねている小さな子供のようだ。
「いい加減にしてくださいサクラ様。わがままを言わないでください」
「……やだ」
フィーリアの説得も無視し、サクラはクリュウの袖を掴んでそのまま彼の背後に隠れる。もはや完全に駄々をこねる子供状態だ。
そんなサクラに対し、クリュウは小さくため息を零すとサクラに向き直ってそっと彼女の肩を叩く。サクラの隻眼と目が合う。
「……クリュウ」
「悪いけどサクラ、今回は僕一人で行きたいんだ。だから、一緒には行けない」
「……ヤダ、一緒に行く」
クリュウが言っても、サクラはぷくぅと頬を膨らませて駄々をこねるばかり。いつもはクリュウの言う事なら素直に聞くサクラも、今回ばかりは一歩も引こうとしない。だが、クリュウはそんなサクラの頭の上にポンと手を置く。
「サクラ。わがまま言わないでよ。この埋め合わせはちゃんとするからさ」
「……むぅ」
お願いと手をを合わせるクリュウを前に、さすがのサクラもすごく不服そうではあるが「……わかった」と折れた。何だかんだ言ってクリュウには弱いのだ。
「……その代わり、帰って来たらデートしてもらうから」
「で、デート? 一緒にご飯食べたりとかでいいの? それなら別にいいけど」

「……少し違うけど、それでいい」
「わかった。じゃあ約束ね」
さりげなくクリュウとのデート（サクラ視点）の約束を取り付けたサクラ。さっきまでの不満そうな顔はどこへやら。今から楽しみで仕方がないのかニヤけてしまっている。
あまりにもサクラが普通に一歩リードした事に呆然としているフィーリアに向かって、サクラはフッと勝ち誇った笑みを浮かべた。
「……恋にも計略は必要」
「なぁッ!?」
そこでフィーリアは全てを理解した。彼女が珍しく駄々をこねたのは、見返りとして彼を独占できる機会を得る為であったという事に――見事な策略だ。
一人勝ちのような状態のサクラを悔しげに睨む。一度普通に彼の一人旅を了承してしまった身としては、今更それを拒否したり何か見返りを要求する事はできない。目的の為なら恥も外聞も簡単に捨て去る事ができるサクラならともかく、フィーリアには無理だ。
同じような条件のシルフィードや、そもそもハンターとしての仕事内容に口出しができないエレナも同様。エレナとフィーリアは悔しそうに勝利の舞を踊るサクラを睨み、シルフィードは羨ましそうに見詰める。
ここでツバメが助け船を出せば状況も変わったかもしれないが、何だかんだ言ってツバメはサクラの味方なのだ。小さく「すまんのぉ」と謝りつつ、喜ぶ友人を温かく見詰める。
そんな女子陣の目に見えない戦いなど当然気づくはずもなく、クリュウは手に持っていた手紙をもう一度見る。
「そういえば、アルザス村ってどこなんだろ？」
自然と言うクリュウの疑問を耳にしたエレナは呆れ顔になる。
「あんた、場所もわからずに飛び出そうとしてた訳？」
「あははは……」
エレナの言葉にクリュウは恥ずかしそうに苦笑いする。すると、そんな彼の疑問を答えたのはそれまでずっと黙って事の成り行きを笑

顔で見守っていた村長であった。
「それがどこの村かはわからないけど、少なくともその手紙はガリアから来てるのはわかるよ」
「本当ですか？」
「うん。手紙の封蝋（シーリングワックス）に花が描かれてるでしょ？
それはアイリスっていう花で、ガリアの国花なんだ。つまり、その手紙がガリア発って証だね」
手紙を裏返して見ると、確かに開けた際に切れた封蝋（シーリングワックス）には確かに花が描かれている。これがガリアの国花、アイリスと言うのだろう。
ガリア、正式にはガリア共和国。西竜洋諸国の一国であり、世界で初めて市民革命によって王政府を打倒し民主主義共和制を実現させた民主主義の原点である国家だ。ちなみに世界で初めて革命で政権を打倒して生まれたのがアルトリア王国である。
西竜洋諸国全ての国と国境を面しており、地理、政治、軍事、文化など様々な面で西竜洋諸国と密接に関わっている国だ。
歴史的建造物も多く、太古の失われた遺産の多くがガリアから発見されている。豊かな自然に囲まれており、良質なブドウが穫れる為にワインやブドウを使った飲み物や食べ物が豊富で、観光大国としても有名な国だ。
ドンドルマからも近く、陸路及び海路どちらでも入国が可能という立地にある。
「シャルルはガリア人だったんだ……」
クリュウはシャルルが《国有（カントリアス）》だという事に少し驚いていた。何しろ、クリュウ自身は《国無（ノンカントリアス）》、国籍なき民なのだから。
この大陸には国家として機能している国はわずかで、そこに住む人々は国籍を持つが、多くの人々が国の存在しない地域に住み、国籍を持たない。
国がない地方ではドンドルマのように都市自体が小さな国家を形成している場合もあれば、地域という区分けの中で最低限の自治機能

を持つ場合もある。イージス村は後者だ。
「国境を越えるとなると手間も掛かるな。直接ガリアに入国するよりドンドルマ経由でギルドに通行手形を支給してもらった方が早いな」
シルフィードは考え込むクリュウにそうアドバイスした。
国という概念のない地域では人々は簡単に行き来ができるが、国が存在してその境目が国境となると話は別だ。検問を通る必要があり、そのチェックに時間が掛かるのだ。特に昨今のエルバーフェルド帝国の急速な国力回復及び軍事力の増大によって各国は国境警備に重点を置いているから尚更だ。
ただし例外もある。ドンドルマのハンターズギルドはそのような国境を簡単にパスできる通行手形を状況次第でハンターに配布しているのだ。これはハンターが国境という壁で行き来を阻まれたり、緊急を要する場合でも検問に時間が掛かって手遅れにならないようにする為に、ハンターズギルドと各国が結んでいる平和協定に基づく処置だ。ギルドの手形さえ貰えば検問は簡単に通過できる。
「ガリア共和国は陸路で行くよりもドンドルマ経由で港へ向かい、そこから船でジョ・クルーク海に出てガリア唯一の港、ブレストから入国するのが一番楽ですよ」
流浪ハンターとして大陸中を旅していた経験のあるフィーリアもまたドンドルマ経由の、それも海路での入国をおすすめする。こういう時、フィーリアやシルフィードの博識さには脱帽してしまい、毎度毎度助けられる。
クリュウは改めて自分は頼れる仲間に恵まれているなぁと、運命と仲間達に感謝する。そして、今回はそんな仲間達とは別行動だ。
「それじゃ、早速準備しないと」
クリュウはシャルルからの手紙を握り締め、急いで酒場から飛び出す。その後をサクラ、フィーリアが追いかける。
「ちょ、ちょっとッ！　ヨーグルトはッ!?」
シルフィードはクリュウが頼んだヨーグルトを持ち帰る事にし、全員分の勘定を済ませる。
「お主も大変じゃのぉ……」

「まぁ、弟や妹の面倒を見ていると思えばどうという事はないさ」
毎度毎度後始末を引き受ける羽目になるシルフィードにツバメは同情するが、シルフィードは小さく微笑む。彼女自身、こういう役柄が嫌いではないのだろう。
常識的故にいつも損な役回りをする事が多い者同士、遅れて酒場から出て行く。
そんな友人達の背中を一人で見送るエレナ。その視線の先には、幼なじみの背中はもう見えない。
残された食器を手に取り、小さくため息。
「あいつも、成長してるって事よね……」
自分を置いて、一人で自分の道を決めて行動するようになったクリュウ。昔は自分に振り回されてばかりだった、あの頃の彼はもういないのだ。
幼なじみの成長を喜ぶ反面、少しだけ寂しい。
カチャカチャと食器を片づけていると、ふとその視線が一カ所に注がれる。そこには彼が食べ終えた食器が置かれている。その瞬間、フッと口元に笑みが浮かぶ。
「……変わってるんだか変わってないんだか」
クリュウの使った皿の上には、彼が子供の頃から嫌いなきゅうりの付け合わせだけが残されていた……
クリュウは一人、自宅の倉庫の中にいた。ここには四人分のこれまで収集した素材や武具などが収納されている。もちろん、彼の武具も全てここに納められている。
クリュウは一人、これまで幾多の敵を共に撃破し、自身を守ってきてくれたレウスシリーズを慣れた手つきで身に纏う。武器にはガノトトスが苦手とする火属性の片手剣、バーンエッジを選んだ。今の自分が用意できる最善の武具の選択だ。
必要な道具類はすでに全て用意を終えている。武具の用意が終わった今、もうこの倉庫にいる必要はない。
クリュウはレウスヘルムを抱きながら、倉庫から出る。外にはすでに見送る準備を整えているフィーリア達が待っていた。

武具を身に纏ったクリュウを見て、フィーリアが微笑む。
「準備は終わりましたか？」
「うん。ここで準備できるものは全部ね。足りない物はドンドルマでも仕入れるよ」
「その方が得策じゃな」
「道具類はすでに港まで運んでおいた。あとは君待ちだが、準備は整ったようだな」
「うん、ありがと」
クリュウは礼を言うと、改めて見送ろうと集まってくれた仲間達を見回す。
フィーリア、サクラ、シルフィード、エレナ、ツバメ。掛け替えのない友達で、頼れる仲間で、大切な人達がそこにはいた。
しばしの間、みんなとはお別れだ。
「それじゃ、行って来るね」
「はい、行ってらっしゃいませクリュウ様」
「……ご武運を」
「がんばって来い」
「気をつけるのじゃぞ」
フィーリア達の出発を後押ししてくれる言葉の数々一つ一つにうなずき返し、クリュウは出発する。
「ちょっと待ってッ」
皆に背を向けた所で、今まで黙っていたエレナが声を上げた。何事かと思って振り返ると、スタスタとエレナが迫り、目の前で止まる。
「え、エレナ……？」
「……はい」
ムスッとした表情でグイッとクリュウの目の前に差し出されたのは、布でくるまれた箱。有無を言わせず、エレナはクリュウにそれを押しつける。
「これは？」
クリュウの問いに、エレナはムスッとした表情を崩さずに言う。
「急な事だったから余り物の寄せ集めだけど、一応お弁当。今回は長

旅なんでしょ？　行く前にしっかり体力つけておきなさい」
　そっぽを向き、頬を赤らめながら言うエレナ。クリュウはしばし呆然とそれを見入っていたが、ハッと我に返る。
「あ、ありがと……」
「ふ、フンッ。言っておくけど、寄せ集めだから変な期待はしないでよ」
「エレナの料理なら何でも大歓迎だし、大期待さ」
「……バカ」
　エレナは不機嫌そうに、でもちょっぴり嬉しそうな、そんな複雑な表情を浮かべ、クリュウに向き直る。
「行ってらっしゃい、クリュウ」
「うん、行って来る」
　見送る仲間達に手を振りながら、クリュウはイージス村を出発した。
　目指すはドンドルマ経由でガリア共和国。そのどこかにあるアルザス村――かわいい後輩、シャルル・ルクレールの住む村だ。
　道中、空腹でエレナに持たされた弁当を開けると、そこには余り物なんてすぐに偽りだとわかる、心を込めた手作り料理が満載されていた。
　あの短時間でこれだけの料理を作れる所は、さすがはエレナと言った所か。
「ありがと、エレナ」
　素直じゃないけど心優しい幼なじみの心遣いに感謝しつつ、クリュウは食事を開始する。
　――やっぱり、おいしいよエレナ。

第１３３話　アルザス村に集結するそれぞれの物語

数日後、ドンドルマでライザに事情を説明して難なく通行手形を入手したクリュウはすぐに港へ行き、そこからガリアへの定期船に乗り込んだ。

翌日には船はガリア共和国領海へと入り、その日の午後にはガリア唯一の港町、ブレストへと到着した。

港では入国管理係の入国審査があったが、手形のおかげで必要最低限の審査だけでクリュウはすぐに入国ができた。

ガリアの建築物は全てただの岩ではなくガリア特産の特殊な白石と呼ばれる白い岩から切り出したものを使っている為、全ての建物が白い。それが、他のごった返した街とは違った清潔感を漂わせ、ここが外国なんだなぁと実感させる。

アルフレアと同じく港町の為、市場は賑やかで海産物を扱っていたり、他国や他地域から輸入した物品を売る店などで賑わっている。

クリュウはすぐにブレストにあるギルド支部へ行き、そこでアルザス村がガリア北西部、西シュレイド王国との国境に程近い、ヒルメルン山脈の麓近くの村だという情報を手に入れ、すぐにブレストを出発した。

同じ方向へ向かう竜車をヒッチハイクしつつ、何度も乗り換えてアルザス村を目指す。ハンターという身分だけあって同乗は安易であった。何しろ、もしもの際は護衛してもらえるのだから、向こうとしてもメリットがあるのだ。

彼がアルザス村に着いたのは、イージス村を出発して十日程が経った頃の事であった。

アルザス村は崖の上に築かれた自然の要塞のようなイージス村とは違い、扇状地に築かれた村であった。周囲は大きな川が囲み、そこに架けられた橋で対岸と行き来する。イージス村とはまた違った鉄壁の守りを誇る村だ。

村の面積自体は結構広いが、そのほとんどが特産のブドウが植えられたブドウ畑で占められているので、イージス村と違って家と家の間

隔が広い。
クリュウはアルザス村を目の前にして、対岸からその姿を見ていた。
「ここがシャルルの故郷か……」
平和で、とても長閑な場所だ。こういう環境なら彼女のように明るくて活発な子が育つのも納得できる。
早速、クリュウは村へと繋がる橋を渡る。さほど高くはない為、橋のすぐ下に川が流れる。水がきれいなのだろう、泳ぐ魚の姿がよく見える。
橋を渡るとすぐ村だ。イージス村と違って門番の姿はなく、簡単に村に入る事ができた。
とりあえず、クリュウはイージス村のエレナの酒場のような場所を求めて歩き始める。長閑な道を歩く間、左手には広大なブドウ畑が続く。特筆して特産のないイージス村と違って、アルザス村は総力を挙げてブドウ作りを行っているようだ。
ブドウで財政が潤っているのだろう、木造建築が主流のイージス村とは違い、アルザス村の民家は全て丈夫な石造りの家だ。同じ辺境の村にも色々あるようだ。
畑が広過ぎて、人を見かけたとしてもわざわざ畑の中に入ってまで行く気はないので、とりあえず村の中心部を目指して歩き続ける。
歩いていると、前方から子供達が走って来た。イージス村と同じ、長閑な村の象徴だ。
楽しそうに笑いながら走っていた子供達。だが、クリュウの姿を見た途端に急停止。呆然と見詰める。今のクリュウは全身をレウスシリーズを身に纏い、しっかりとレウスヘルムも付けているので顔もわからない。ただ、辺境の村にハンターがやって来た、そんな事実だけが残る。
「え、えっとぉ……」
不審者にでも思われたら面倒だなぁなどと考えていると、
「ハンターさんだぁッ！」
子供達は大きな声で口々にそう言うと、あっと言う間にクリュウを

囲んでしまう。彼が困惑していると、その手を取る。
「ハンターさんが来てくれたぁッ！」
「僕達を助けに来てくれたんだねッ！」
「ハンターさん、こっちこっち」
子供達はクリュウの手を取って引っ張る。クリュウは訳も分からず、そして子供相手という状況から仕方なくついて行く。
子供達が案内したのは、驚いた事に自分が捜し求めていた酒場であった。こちらもイージス村の木造とは違い石造りでしっかりとしている。
子供達はクリュウの手を引っ張って早速酒場の中に入る。中は開け放たれた窓から入り込む光とランタンの明かりで意外と明るい。テーブルも多く、広さもある。エレナには悪いが、こちらの方が酒場っぽい。
クリュウが中の様子を見回していると、カウンターに人の姿を見つけた。すると、子供達の方が先に動いた。
「キャンディお姉ちゃんッ！」
その声に、カウンターにいた人物が振り返る。紫がかった水色の髪を右側のサイドテールに纏めた髪型に、金色の大きな瞳が特徴の少女。年の頃は自分と同じくらいか、フレームのないメガネが知的に見せる。
「おッ、少年達じゃないか。またカシールおば様に怒られて逃げてきたのかい？」
知的な見た目に反して、キャンディと呼ばれた少女はニパッと笑みを浮かべて子供達を出迎える。それに対し子供達は心外だと言わんばかりに頬を膨らませる。
「違うよッ。今回はハンターさんを連れてきたんだから」
「ハンターだって？」
そこで初めて少女はこちらに気づいたようだ。クリュウが一礼すると、豆鉄砲を喰らった鳩のような表情を浮かべていた少女も慌てて一礼する。
「いやはや驚いた驚いた。こんな村にハンターさんなんて珍しいから

ねぇ。いくら緊急事態とはいえ、意外と揃うもんだわ」
「は、はぁ……」
「少年達、いい仕事をしてくれたぞ。お礼にキャンディ様特製のキャンディーをやろう。歯磨けよッ」
子供達にキャンディーを渡し、少女はビシッと親指を立ててはにかむ。真っ白な歯が光輝いたように見えたのは見間違いだろうか。
キャンディーをもらって大喜びで去って行く子供達を見送り、少女は再びクリュウの方へ振り返り、笑みを咲かせる。
「改めまして、アルザス村へようこそ。私がこの酒場を切り盛りしているキャンディ・エクレルールだ。よろしくぅッ」
何ともノリのいいあいさつにクリュウは困惑する。秘密の多い美人もいれば、乱暴だけど心優しい幼なじみもいる。酒場関係者は世の中の一般常識と少し違う存在なのだろうか。
「あ、僕は……」
「ストップだよ少年。まずは顔を見せてくれないかい？　あいさつは目と目を合わせてアイコンタクトだよ？」
キャンディに言われ、クリュウは初めて自分がヘルムを被りっぱなしだった事を思い出し、慌ててレウスヘルムを脱ぐ。すると、今度はキャンディの方が驚く番だった。
「ありゃ、厳つい防具の下からこんにちわしたのは、何ともかわいらしい少年じゃないか」
「……いや、あんまり嬉しくない誉め言葉だよ」
クリュウの素顔を、キャンディは興味津々に見詰め、その視線にクリュウは恥ずかしそうにうつむく。そんな彼の反応を見てキャンディは豪快に笑う。
「あっはははッ。かわいいぞ少年、まるで恋を知らぬ乙女のようだッ」
豪快に笑うキャンディの姿を見て、本当に人は見た目で判断してはいけないなぁと思ってしまう。何せ、見た目は完全に知的な少女なのに、口を開くと感情表現豊かで豪快な性格をしている。
「あぁ、すまんすまん。君の名前を聞きそびれてしまったな」

思い出したように言う所を見ると、完全に忘れていたようだ。クリュウはそんなキャンディに苦笑を浮かべながら、改めて名乗る。
「僕の名前はクリュウ・ルナリーフ、よろしく」
「……クリュウ？」
クリュウの名前にキャンディが反応した。その反応はまるでそれ以前から自分の名前を知っていたようだ。
「なぁ、あんた。シャルちゃんの知り合いのクリュウ君かい？」
「シャルちゃんて……シャルルの事？」
「そうそう。知ってる？」
「同じハンター養成学校の後輩だよ。今回はシャルルから手紙をもらって駆けつけたんだけど……」
「ふぅん、あんたがなぁ……」
クリュウがシャルルの知り合いだとわかると、より興味津々に彼を見詰め始めるキャンディ。その視線の直射を避けつつ、今度はクリュウが質問する。
「シャルルを知ってるの？」
「そりゃあ、あの子はこの村では有名人だからね。いつでも元気いっぱいで底抜けて明るい子だから老若男女問わず人気があるのさ。小さな村だしね」
「まぁ、学校でもあいつは人気者だったからな」
学生時代もシャルルは底抜けて明るく、男女関係なく多くの友達を作っていた。当然故郷の村でもその人気は衰える事はないのだろう。
「自慢じゃないけど、私はあの子の姉代わりみたいな存在ね。あの子の事なら微笑ましい事から赤面ものまで何でも品揃え抜群。さぁお客さん、今日はどんなネタをご所望だい？」
「……いや、プライバシーの事なので遠慮しておきます」
「何や、ノリ悪いなぁ。ブーブー」
拗ねたように唇を尖らせるキャンディ。何というか、子供のように感情表現が豊かな人だ。さっきから感情の振り幅が大き過ぎてついて行くのがやっとの状態だ。
「えっと、それでシャルルは今……」

「うん？　ああ、シャルちゃんは今あんたより先に来たハンター二人と一緒に密林に偵察に行ってるわ。あんたも今この村がガノトトスの出現で緊迫してるって事は知ってるでしょ？」
「まぁ、だから来たんだけど……っていうか、僕よりも先にハンターが来てるの？」
「シャルルの知り合いらしくてわざわざ彼女に会いに来たって感じね。その後にガノトトスの事を知ったら率先して討伐に協力してくれる事になったのよ」
　シャルルの知り合いでハンターという事は、訓練学校時代の知り合いだろうか。だとしたら、自分が知っている人かもしれない。
「それってどんな人？」
「うん？　シャルちゃんやあなたくらいの年齢の女の子二人よ。すっごく仲が良くて、まるで姉妹ね」
　キャンディの話を聞いて、クリュウは少なからずがっかりした。もしかしたらルフィールかもしれないと期待したのだが、どうやらは外れらしい。ルフィールはその異質な瞳のせいで友人は少なく、姉妹のような関係の女友達なんてそれこそシャルルくらいだ。自分がいなくなってからそのような友人ができたとすれば別だが、正直その可能性は限りなく低い。
「それで、その三人はいつぐらいに戻って来そうなの？」
「そろそろだと思うよ――っと、話をしてれば」
　キャンディはそう言って入口の方を見る。クリュウの視線も自然とそれを追っていた。ドアの向こうに、人の気配がする。
　――刹那、ドアが豪快に開いた。
「ただいまっすッ！　もうお腹ペコペコで倒れそうっすよぉ。キャンディ、早く飯にしてほしいっすッ！」
　ドアを勢い良く蹴り開けて現れた少女の姿を見て、クリュウは自然と微笑んでいた。
　あの頃から、何も変わっていない。バカみたいに元気で、バカみたいに真っ直ぐで、バカみたいにがんばり屋で。まぁ結局バカなのだが、自分にとっては大切な大切な後輩であり、仲間だ。

オレンジ色の髪を赤色のリボンでツインテールに結んだかわいらしい髪型にクリッとしたかわいらしい瞳、健康的な小麦色に焼けた肌をした小柄な少女。纏うのはケルビの皮を主軸に要所を鉱石で補った鎧と言うには少々ひ弱な防具、バトルシリーズ。腰に携えているのはまるで船の錨を象った特徴的な武器、イカリハンマー。

一年前と変わらない――いや、一年会わない間に少し背が伸びたか。顔立ちも少し凛々しく大人な女性に成長しているような気がする。

一年という年月は、それだけの変化がある年月なのだ。

元気印の少女――シャルル・ルクレールとの再会に、クリュウは胸が熱くなるのを感じた。

一方、元気良く酒場へと入って来たシャルルは店の中の妙な空気に一瞬困惑する。そして、キャンディの前に立っているクリュウの姿を見た途端、目を大きく見開いた。

「あ、兄者……？」

その懐かしい呼ばれ方に、クリュウは笑顔で答える。

「久しぶり、シャルル。元気にしてた？」

クリュウが声を掛けると、唖然としていたシャルルの表情に見る見る笑顔が花開いていく。瞳からはあっという間に涙が零れる。そして、

「兄者ぁ～ッ！」

シャルルは勢い良くクリュウに向かって走り出す。その勢いに任せて容赦のないタックルにクリュウは慌てる。

「ちょ、ちょっと待てシャル――うわッ!?」

「兄者ぁ～ッ！」

クリュウはシャルルの全力タックルを受け止めきれず、そのまま彼女に押し倒される形で倒れた。その際に後頭部を強打してかなりの激痛が走る。

「痛ぇ……ッ、シャルルお前なぁ……ッ」

「兄者！　兄者ッ！　兄者ぁッ！　兄者ぁ～ッ！」

怒ろうとするクリュウだったが、自分に泣きながら抱きつくシャル

ルの姿を見て、すっかり怒る気が抜けてしまう。自然と、口元に笑みが浮かぶ。
「お前ぇ……相変わらずだなぁ……」
　クリュウの皮肉も聞こえず、シャルルはしばしそうしてクリュウに抱きついたまま。彼女が落ち着きを取り戻したのはそれから数分後の事であった。
「取り乱しちまって悪かったっす……」
　ようやく落ち着きを取り戻したシャルルは先程の自分の失態を反省しつつ、恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしている。そんな彼女にクリュウは苦笑を浮かべる。
「いやまぁ、久しぶりで驚いたけど、昔はこれが普通だったからね。気にしてないから」
「うぅ……」
「そう落ち込むなシャルちゃん。人生というのは十回の失敗を経て一回の成功を手に入れる。そういうもんさね」
「シャルは今の所十回の失敗止まりっす……」
　クリュウとキャンディが励ますが、シャルルは思いの外ダメージが深刻だ。一年会わないうちに少しは女の子としての恥じらいが成長した証拠なのだろう。そう思うと、何となく微笑ましい。
「しかしまぁ、久しぶりに会ったけど、お前全然変わってないなぁ」
「むぅ、シャルだって日々成長してるっすッ。その発言は心外極まりないっすッ」
　クリュウが笑いながら言うと、シャルルは心外だと言わんばかりに頬を膨らませて怒る。大人になると変わってないと言われるのは基本的に嬉しいものだが、子供の頃ではその発言は全く逆の意味になるものだ。
「どこか変わったか？」
　からかうようにクリュウが言うと、シャルルはムキになる。
「ちゃんと変わったっすッ。身長だって伸びたし、胸だってしっかり大きくなったっす」
　自慢げにシャルルは胸を強調するが、残念ながらその成長は微々た

るものだ。
「ニャ～ッ、シャルちゃんの負け～」
「どういう意味っすかそれッ!?」
楽しそうに笑うキャンディにシャルルは顔を真っ赤にして怒る。
その姿を見て、クリュウも自然と微笑む。
自分の知らない彼女の日常。ちゃんとやっているんだと安心する。
ちょっとクードとのやり取りに似ているが。
「というか、お前よく卒業できたな。あんな悲惨極まりない成績で」
「……兄者、何か容赦ないっす」
キャンディから離れたシャルルはクリュウを恨めしげに睨みつけつつ、大きなため息を零す。
「確かに成績はかなり絶望的だったす。けど、あの朴念仁のお節介で何とかなったっす。悔しいっすけど、去年はあいつに助けられてばかりだったっす」
悔しそうに、でもどこか嬉しそうに言うシャルルを見てクリュウはほっと胸を撫で下ろした。その朴念仁は言うまでもなくルフィールの事だろう。
「ルフィールに勉強を見てもらったのか？」
「あいつ、結局三期連続で校内首席の地位に居座りやがったっす。それも全科目満点って化け物じみた成績で」
「……あの意地っ張り」
ルフィールは自分との約束を守り、一年で見事に卒業してみせた。その努力は並大抵な事ではないだろう。それも、誰も自分を追い抜けないような断トツの成績で。やるからには全力で、実に彼女らしい。
「あいつのおかげで無事に卒業できたっすけど、後輩だったあいつが同級生で卒業したのが何か腑に落ちないっす。しかも同じクラスだったし」
「あはははは、まぁそれは仕方ないでしょ」
一年で一学年上げて卒業したシャルルと、一年で二学年上げて卒業したルフィール。結局二人は先輩と後輩の関係から同級生となったのだ。シャルルとルフィールが同じクラスで同じ勉強をしてたと思

うと、その奇妙な光景を想像してつい笑ってしまう。
「それで、ルフィールはうまくやってたのか？」
　クリュウの問いかけに、突然シャルルは拗ねたように唇を尖らせる。
「兄者、さっきからあいつの事ばかり聞きたがるっす」
「え？　あ、いや……」
「……まぁ、いいっすけど」
　唇を尖らせて拗ねてしまうシャルルに困惑するクリュウ。すると、ジュースを持ったキャンディがやって来た。
「少年。女の子相手に別の女の子の話をするのは無粋ではないかな？
　見ろシャルちゃんを。すっかり拗ねてしまったではないか」
「べ、別にシャルは拗ねてなんかないっすよ。子供じゃないんすから」
　小首を振りながら言うキャンディの言葉を遮るシャルル。キャンディは「素直になりんさいなぁ」と言いながら苦笑を浮かべる。
　シャルルは一つ大きなため息を零すと、話を続ける。
「まぁ、あいつは元々あの目のせいで周りから避けられてたっすからね。兄者が卒業した後もそのせいで苦労はしてたみたいっすよ」
「やっぱり」
「まぁ、瞳もそうっすけど、それ以前にあのドギツイ性格を何とかしない限りには、友達なんて無理っすよ」
「……やっぱり」
　友達を作りやすい社交的なシャルルとは違い、ルフィールは他人に対してとても冷たい。瞳以前に、彼女には友達を作る能力（スキル）が致命的に欠如しているのだ。
　そこでシャルルは再びため息を零す。
「仕方ないから、シャルが組んでやったっすよ。不本意っすけど、一応知らない仲じゃないから仕方なくっす」
　唇を尖らせながら面倒そうに言うシャルル。だが、その頬が少し赤らんでいるのは丸わかりだ。その突き放すような言葉が本心ではない事もだ。
　シャルルの言葉に、クリュウは嬉しそうに微笑む。

「そっか、がんばったんだねシャルル。偉いぞ」
そう言ってクリュウは昔のようにシャルルの頭を撫でる。すると、シャルルはムッとした表情になる。
「兄者、いつまでもシャルを子供扱いしないでほしいっす」
「え？　やめた方がいい？」
「……っ、続けてほしいっす」
手を離そうとしたクリュウを止め、続行を願うシャルル。やっぱり変わってないなぁとクリュウは苦笑しながらそのまま彼女の頭を撫で続ける。そんな二人の様子を、キャンディが微笑ましげに見詰める。
「それで、ルフィールは今どこに？」
「さぁ？　卒業と同時にあいつとは別れちまったっすから所在不明っす」
「そっか……」
「今頃一人で片っ端からモンスターを叩き潰してるんじゃないっすかね。兄者が怪我した一件以来、あいつかなり攻撃的な戦い方をするようになったっすから」
「そうなの？」
「攻撃型どころか特攻型っす。ガンナーである弓で接近戦を平気で行うっすから。それまであいつ学力は校内一で実技は凡だったっすけど、兄者が卒業してからは実技でも校内トップクラスの成績を叩き出しやがって、本当にムカつく奴っすよ」
面白くなさそうに言うシャルルの言葉に、クリュウの表情が曇る。自分は気にしていないと何度も言ってきたが、どうやらルフィールはまだあの事で自分を責め続けているらしい。
あの時、自分の命が危険になる事を恐れずに彼女を助けたのは、彼女を死なせたくなかったからだ。決して、重い十字架を背負わせる為ではなかったのに……
「バカだな、あいつは……」
自然と、そう言葉が漏れていた。
表情を曇らせるクリュウを見て、シャルルは慌てて話題を変える。

「そ、そういえば兄者の方はどうなん――って、兄者のそれレウスシリーズっすかッ!?」
「……えぇ？　それ今頃気づく？」
今更ながらクリュウの身につけている防具が上級飛竜、リオレウスの素材で作られたレウスシリーズだと気づくシャルル。その表情は驚きに満ちていた。
まぁ、ある意味当然だろう。学業ならともかく、実技では至って平均的だったクリュウが、わずか一年という期間でリオレウスの討伐を済ませているなど、誰が想像できるだろうか。
「兄者、もうリオレウスを倒したんすかッ!?」
まるで宝物を見る子供のようにキラキラとした瞳でレウスシリーズを隅々まで見るシャルルに苦笑しながら、クリュウは小さくうなずく。
「一応ね。この前はリオレイアを捕獲したけど」
「す、すごいっすッ！　能ある鷹は爪を隠すって、兄者はそんなにすごい人だったんすかッ!?　驚きっすッ！」
「……僕は君がそんなことわざを知っていた事に驚きだよ」
クリュウの素の発言に、シャルルは「シャルだってことわざの一つや二つくらい知ってるっすよッ」とご立腹。クリュウは「ごめんごめん」と謝り、話を戻す。
「と言っても、それは僕の力ってよりも仲間達の力が大きいけどね」
「仲間……っすか？」
「うん。今僕は故郷の村で四人編成のチームを組んでるんだけど、みんな僕よりすごい人ばっかりだから。いつもいつも迷惑をかけてばかりだよ」
苦笑しながら語るクリュウの現状に、今度はシャルルが驚く番だった。
「兄者、チームを組んでるんすか？」
「まあね。その方が何かと便利だし、何より楽しいしね」
「まぁ、そりゃそうっすけど……」
クリュウの発言にシャルルは素直にうなずけない様子。クリュウ

がそれを尋ねると、シャルルは拗ねたように唇を尖らせて「知らないっす」と答える。
　クリュウが困っていると、まるでそれを待っていたかのようにキャンディが入ってきた。
「残念ねシャルちゃん」
「な、何がっすか」
「せっかく大好きな先輩とまた一緒に狩猟したかったのにねぇ」
「お前マジで黙れっすッ！」
　あはははと笑うキャンディの首根っこを掴んでガクガクを激しく揺らしながらブチギレるシャルル。一人残されるクリュウは困惑する。
「え、えっとぉ……」
「兄者には関係ないっすッ！　こいつの戯れ言は全て忘れろっすッ！」
「えぇ～、関係ないなんてウソじゃん。だってこの前だって彼の事を思い出して夜遅くに泣――」
「ぬがあああぁぁぁッ！」
　半狂乱になるシャルルは腰に下げたイカリハンマーに手を掛ける。これにはさすがのキャンディも顔色を真っ青にし、クリュウが慌てて止めに入った。何だか懐かしさを胸に抱きながら……
　クリュウは暴れるシャルルの背後から近づき、スッとその両脇の下にそれぞれ腕を入れて羽交い締めにする。その途端、シャルルは糸の切れた人形のように大人しくなった。
「ったく、相変わらず頭に血が上ると無茶苦茶するなお前は……って、シャルル？」
　後ろから羽交い締めにしているので詳しくはわからないが、一瞬見えたその横顔は、少しばかり頬が赤くなっていたような……
「大丈夫か？」
「う、うっす。大丈夫っすから、離してほしいっす」
「あ、ごめん」
　クリュウが解放すると、シャルルはスッと彼から離れて両腕で自分

を抱くように構える。やはり、その頬は赤い。
そんな二人の微妙な空気を見てキャンディは「青春だねぇ～」と意味不明な発言をしながらニコニコと笑っている。
酒場の中は奇妙な雰囲気に包まれた。しかしそれは突然の来訪者によって砕かれた。
「つたくシャルル。一人勝手に突っ走るなって何度言えばわかんのよ。これだからバカは嫌いなのよ」
「そ、そこまで言わなくても……」
酒場に現れたのは二人の少女（ハンター）だった。
シャルルをバカ扱いしたのはそのうちの一方、桃色のツインテールに勝ち気な碧眼が特徴の少女。不機嫌そうに腕を組みながら仁王立ちする姿は実に似合っている。纏うのはダイミョウザザミから取れる素材を使った赤い防具、ザザミシリーズ。背負うのは巨大な武器。二つ折りされているが、連結させれば優に彼女自身の身長を上回るであろう武器は内部に砲撃機能を備えたガンランス。名を近衛隊正式銃槍と言う。
そんな不機嫌なガンランスを携えた少女を宥めるのはその隣の小柄な少女。
紺色の瞳に同色のセミロングに髪を整えた、気弱そうな少女。頭に被っているのは初心者用防具の一つ、円盤石で作られたレザーライトヘルム。しかし他の部分はより高価なマカライト鉱石を主軸に鉄鉱石や円盤石、ランポスの皮などで補強された少し上等な防具、ハイメタシリーズ。
そこまでは至って普通の、比較的かけだしのハンターだという事がわかる。だが、その背負っている武器はクリュウは見た事がなかった。
奇抜なデザインというか、何をモデルにしたのか見た目だけでは判断できない。
おそらくはライトボウガンだと思うが、まず普通のライトボウガンのような銃の形をしていない。全体を茶褐色に青筋模様の入った飛竜の鱗や甲殻で装甲のように守っており、一見すると箱のように見え

る。もっと言えば大きい箱の上に小さい箱が載っており、その小さな箱から銃身が突き出た形。大きな箱の下にはクリュウは実習でドンドルマの中央工城に行った際に一度しか見た事がないベルトコンベアのようなものが二つついている。素人判断だが、全くデザインが理解できない。

ガンランス使いの少女とライトボウガン使いの少女。前者は自分と同じくらいで、後者はシャルルと同い年くらいか、少し下に見える。

そんな突然現れた二人組の少女（ハンター）にクリュウは二つの意味で戸惑っていた。

まず一つは単純に見知らぬハンターが二人、それも自分と同じくらいの年齢の少女が現れた事に対する困惑。もう一つは、ガンランス使いの方の少女に関しては、あまり深く関わった記憶はないが、確かにクリュウが知る人物であった事の困惑だ。

「あ、あんた……」

ガンランス使いの方もクリュウの姿を見て目を丸くして驚いている。どうやら、向こうも彼の事を覚えていたらしい。今度はその隣にいる気弱そうな少女が困惑する番だ。

「お知り合い、ですか？」

「……えぇ、できれば一生会いたくなかった疫病神よ」

今まで以上に不機嫌そうに顔をしかめながら言うガンランス使いの少女の言葉に、クリュウは何も言い返せない。昔、彼女を含めた人達には散々迷惑を掛けた負い目が、彼にはあった。

「エリーゼ、まだそんな事言うっすか？　いつまでも昔の事を気にしてるなんて、気が小さい奴っすね」

そんな二人の微妙な空気など微塵も気づいていないであろうシャルルは普通にズカズカと二人の間に入ってきた。エリーゼと呼ばれた少女はそんなシャルルに呆れる。

「世の中の人間全てがあんたみたいに単純じゃないのよバカ」

「バカと言った方がバカっすよッ！」

「元上位成績優秀者に向かってよくもまぁ……」

わざとらしく大きなため息を零す少女に、シャルルは「う、うるさ

いっすッ！」と顔を真っ赤にして怒る。そんな二人の間で気弱そうな少女はおろおろとするばかり。
　ただでさえ状況が混沌としているのに、シャルルが暴れるものだからより混沌として困惑の一途を辿るクリュウ。そんな彼に助け舟を出したのは、またもキャンディであった。
「シャルちゃん。少年がすっかり置いてきぼりを喰らってるけど、放っておくのかい？」
　キャンディの言葉にシャルルは慌てて笑って誤魔化すが、そんな事でこの状況が誤魔化されるものか。シャルルはコホンと咳払いをすると、困惑しているクリュウの前に立つ。
「兄者に紹介しておくっす。シャルの元チームメイトで一期先輩のエリーゼ・フォートレスっす。同じ学校の出身っすけど、覚えてるっすか？」
「……あ、うん。生徒会の人だった、よね？」
　クリュウが尋ねると、腕組みをした少女――エリーゼはフンと鼻を鳴らす。
「ええそうよ。あんた達が暴れ回るたびにその事後処理にあっちこっちに走り回っていた、生徒会総務部の元部長にして、あんたが卒業した年にエセックス先輩の後任として生徒会会長に就任した、エリーゼ・フォートレス。忘れたとは言わせないわよ」
　エリーゼの所々に棘のある言葉に、クリュウは苦笑を浮かべるしかない。何しろ、本当に彼女達生徒会には迷惑ばかり掛けていた当事者の一人なのだから。
　アリアとシグマのクラスを巻き込んでの争いや、イビルアイであるルフィール絡みでの騒動など、結果的にクリュウは常に騒動の中心におり、ぶっちゃけ実は生徒会からは要注意人物の一人に数えられていた。
　結局、クリュウの周辺で様々な騒動が起き、生徒会は通常業務とは他にその処理に追われる事となった。エリーゼがクリュウに対して明らかな敵意を抱くのは、その時の事を根に持っているからだ。
「えっと、その、その節は本当にごめん」

何となく申し訳なくて、クリュウは素直に頭を下げて謝る。そんな彼の行動は予想外だったのか、エリーゼの態度が崩れた。
「ちょ、ちょっと……今更謝られたって困るんだけど。お互い、卒業した身だし」
「それはそうだけど、やっぱり散々迷惑を掛けたからさ……」
「まぁ、そりゃそうだけど……」
エリーゼは困ったように頬を掻く。彼女自身は学生時代、確かに本当に苦労したのだろうが。ぶっちゃけ今となっては然程気にしていないのだ。何せその後、その騒動の中心人物の一人であるシャルルとチームを組んでしまった為、あまり強く言えないという難しい立場でもあるからだ。
そんな心の中の葛藤の末、エリーゼは大きなため息を零す。
「エセックス先輩が卒業の際、あんた達が起こした騒動は全て水に流すように言われてる以上、あたし一人が意固地を張っても仕方が無いのよね……」
クリスティナ・エセックス。彼女の前任にして歴代最高峰と言われた生徒会長を務めたクリュウと同学年だった少女。彼女を崇拝していたエリーゼとしては、彼女の言う事は絶対だ。過去に迷惑を受けまくったとはいえ、その際も一番事後処理に追われていたエセックスが水に流すと言った以上、いつまでもしつこく言ってはいられない。
「まぁ、あんたも私もこのバカ娘に振り回された、言わば被害者同士。過去の事は水に流しましょう。特に、今は非常時だしね」
そう言って、エリーゼは小さく笑みを浮かべた。その表情からは先程までの敵意はなくなっている。それを見て、クリュウもほっとしたように微笑んだ。
「ありがと、フォートレス」
「エリーゼでいいわよ。苗字で呼ばれるのはあまり好きじゃないから」
「そ、そう？　じゃあ、　僕の事もクリュウでいいよ」
「ま、気が向いたらね」
「あははは……、まぁ、じゃあよろしくエリーゼ

「フン。まぁ、和解したとはいえあんたといると何かしらの面倒に巻き込まれそうだから、あんまりよろしくはしたくないけどね」
「あはははは……」
エリーゼの手厳しい発言にクリュウは苦笑を浮かべて誤魔化すしかない。実際、色々な騒動を起こしているのだから返す言葉もないのだ。
ようやくエリーゼと和解（？）ができた所で、クリュウはそんな彼女の横にちょこんといる小柄で気弱そうな少女の方を向く。
「それで、そっちの子は？」
自分の事だと気づいた少女はビクッと肩を震わせてエリーゼの背中に隠れてしまう。その瞬間、比較的柔らかな表情を浮かべていたエリーゼの表情が険しくなる。
「えっとぉ……」
「あんた、もしもこの子に指一本でも手を出してみなさい。その時は――全力の竜撃砲でぶっ殺すから」
まるで親の仇に向けるような厳しい目つきで睨んでくるエリーゼ。先程までの空気とは一変した状況にクリュウは追いつけずに困惑する。そんな彼に助け船を出したのは、意外にもシャルルだった。
「兄者。エリーゼはレンの事を超溺愛してて超過保護なんすよ。下手な行動したら本気で殺されかねないっすから、気をつけるっす」
「ちょ、ちょっといい加減な事言わないでよッ！　あたしは別にレンの事を溺愛なんてしてないわよッ！」
シャルルの発言にすぐさま反撃を開始するエリーゼ。そんな彼女の必死そうな表情を見て、シャルルはふふんと似合わぬ余裕の笑みを浮かべる。
「ウソつけっす。女同士であるシャルにだって二人っきりで会うだけで激怒されるのに、それを溺愛じゃないなんて言わせないっすよ」
「うぐ……ッ」
シャルルが口で相手を言い負かせている珍しい光景に興味はあるが、大体の事情は察した。そのレンという子はエリーゼに相当かわいがられているらしい。

「ち、違うわよッ。あたしはレンの保護者役だから、この子を監督する責任があるだけなのッ！　それだけなんだからッ！」
顔を真っ赤にして必死に言い訳しまくるエリーゼを見て、シャルルは「何顔真っ赤にしてるっすか？」とイタズラっぽく笑う。
そんな二人の様子を少し離れた所から見ていたクリュウは自然と笑みを浮かべていた。
自分がいなかった一年の間に、彼女はこうやって仲良くできる友人をまた一人作った。彼女が幸せにやっていた証拠を見られたような気がして、内心ほっとしていたのだ。
ふと視線を逸らすと、自分とは違う場所からこの騒動の発端となった少女もまた微笑ましげに二人を見詰めていた。すると、向こうもこちらの視線に気づいたのか、目が合った。
どちらからとなく笑みを零すと、少女の方から恐る恐るという感じで近づいてきた。
「あ、あの。レン・リフレインと言います。よろしくお願いします」
少女――レンはそうあいさつすると、律儀に頭を下げる。クリュウが「よろしく」と返すと少し安心したのか、顔を上げたレンは嬉しそうに微笑んでいた。
「ずいぶん大切にされてるみたいだね、エリーゼに」
クリュウがそう言うと、レンは照れたように頬を赤らめながらも、嬉しそうに微笑み、うなずく。
「エリーゼさんは私にとってお姉さんみたいな人です」
「そっか。仲のいい姉妹って所だね」
二人の関係はまるで本当の姉妹のようだ。それもとても仲のいい。エリーゼは過保護なくらいにレンを溺愛し（本人は口では否定しているが）、レンもエリーゼの事を本当の姉のように慕っている。実に仲睦まじい姉妹だ。
「レンとエリーゼはいつからの付き合いなの？」
クリュウの問いかけに、レンは恥ずかしそうにはにかみながら口を開く。
「半年くらい前に田舎からドンドルマに上京した際にお世話になって

から、ずっとです」
「半年前というと、エリーゼが卒業してすぐって頃だね」
「はい。ドンドルマってすごく都会ですから、右も左も全然わからなくて……。その時にエリーゼさんが親切に私を引き取ってくれて――」
「――ってレンッ！　何勝手な事口走ってるのよッ！」
レンの語りを遮るようにエリーゼが慌てて入って来る。「余計な事言ってんじゃないわよッ」と怒鳴りながらレンの頭を小突くと、キッとクリュウを睨みつける。
「気安くレンに話掛けてんじゃないわよッ。マジでガノトトスより先にあんたをブチ殺すわよッ！」
猛烈に激怒しながらクリュウを威嚇し、レンから引き剥がすエリーゼ。その姿はさながら巣に近づく敵から我が子を守ろうとするリオレイア――滅茶苦茶怖い。
「お、落ち着いて。ね？」
クリュウは怒り狂うエリーゼをこれ以上刺激しないようにそっとその場から後退する。すると、そんな二人の間に今度はエリーゼの背中にいたレンが割って入る。
「え、エリーゼさん。お声を掛けたのは私の方で、ルナリーフさんは何も――へぶッ!?」
必死に弁明しようとするレンに対し、エリーゼは彼女の両頬を思いっ切り引っ張る。むにいっと頬を引っ張られるレンは涙目になりながら「ひ、ひらいれふぅッ」と痛みを訴えるが、エリーゼは問答無用とばかりに引っ張り続ける。そのこめかみがピクピクと震えている。
「あんた、いつからあたしに指図するようになった訳？　へぇ、ずいぶん出世したものねぇ」
「ふぉ、ふぉんなふぉふぉふぁいれふッ！」
「だったら口答えしないッ！　はいかイエスかッ！」
「ふぁ、ふぁいッ」
そんな二人のやり取りを見て呆然としているクリュウにそっと

シャルルが近づく。
「理不尽っすよね、あれ」
「ま、まぁね……」
　クリュウが苦笑を浮かべていると、それまでずっと傍観者に徹していたキャンディが「まぁ、立ち話も何だから座ったら？　今日は特別に超おごっちゃうよぉ？　ジュース一本だけどね」と笑顔で言って四人を一度席に座らせる。
　四人掛けのテーブルにクリュウとシャルル、エリーゼとレンに分かれて座る。クリュウの正面にはエリーゼが陣取っている。
「それで、さっきのブチ殺すの件で思い出したけど、ガノトトスの様子はどうなの？　三人は一度偵察に行ってたみたいだけど」
　クリュウがそもそもの本題に話を戻すと、それまでの明るさは一斉に消えて空気が重くなる。その変化に、クリュウは改めて事の重大性を認識した。
「正直、状況は芳しくないわね」
　そう切り出したのは、偵察組の中では年齢的にも性格的にも必然的にリーダーを務めたエリーゼだった。
「あんたが来る前に一度三人で威力偵察を行ったけど、この面子だと正直厳しい相手ね」
　エリーゼの言った威力偵察とは敵に気づかれずに状況を偵察する隠密偵察とは違い、実際に小規模の戦闘を行って敵の攻撃力や状態などを偵察する方法。つまり、三人は一度ガノトトスと戦闘を行った訳だ。
「まぁ、戦闘と言っても十分程で撤退したけどね。こっちの準備も万全ではなかったし。主に近接武器は肉質の確認、レンには大まかな動きの観察と比較的弾丸が通りやすい場所の捜索を任せたくらいね」
　大した事じゃないと言いたげなエリーゼだが、その実は大したものだ。仲間に適切な指示を送りつつ、状況をしっかり見極めてギリギリのラインですばやく撤退命令を下す。まさにリーダーに相応しい素質に恵まれている証拠だ。
「結果は、正直私達三人じゃ厳しいって結論に達したわ。まぁ、当然

ね。全員イャンクックの単独討伐がやっとくらいの面子だもの。私だってザザミが限界って所ね」
　厳しい表情のままエリーゼは状況は最悪であると断言した。実際問題相当厳しい状況なのは確かだろう。クリュウを除く三人の武具はお世辞にもガノトトス相手に十分とは言いがたい。エリーゼの判断は妥当と言えるだろう。だが、そんなエリーゼの冷静な判断に噛みつく者がいた。
「状況が厳しいってだけでシャルの村を見捨てるっすかッ!?」
　それはガノトトスの行動如何によって故郷が壊滅的打撃を受ける者、シャルルだった。
　シャルルはバンッとテーブルを両手で激しく叩きつけて立ち上がり、テーブル越しでエリーゼに迫る。だがその迫力にビビるレンに対し、エリーゼの表情は涼しい。
「圧倒的な劣性の状況で突っ込んだとして、その状況を打破できる可能性は限りなく低い。あたしはレンを守る義務がある。無茶な作戦に対してそう簡単には首は縦に振れないわ」
　エリーゼの言わんとする事もまた正しい。ハンターは命を懸けて何かを遂行しなければならないという義務はない。依頼も大事だが、まず自分の身や仲間の安全が最優先とされる。そちらを優先した際に、結果的に依頼を放棄する事になってもそれは何の罪にもならない。むしろ当然の判断と言えるだろう。
　だが、そんな一般常識など感情論の前では無意味に等しい。元チームメイトの冷酷過ぎる発言にシャルルのボルテージは一気に跳ね上がる。
「不利な状況だろうと関係ないっすッ！　シャルは村を救う為ならこの命の一つや二つ捨てる覚悟はできてるっすッ！」
「命を捨てる覚悟？　ハッ、そういう軽はずみな発言をする所が、あんたはバカなのよ」
「え、エリーゼッ！」
　もはや怒りに任せて飛び掛かろうとするシャルルをクリュウが慌てて寸前で止める。いつもならこの時点でシャルルも落ち着くのだ

が、今回ばかりは故郷の命運が懸かっているだけあってなかなか落ち着かない。
　腕の中で暴れるシャルルをなだめつつ、ツンとそっぽを向くエリーゼに語りかける。
「言い方はどうであれ、エリーゼの意見は正論だ。僕達は何も命を捨てる覚悟までしてこの村を守るという義務はない」
「そ、そんな……ッ」
　クリュウの発言に、シャルルは頭をハンマーで殴られたような衝撃を受けた。信じていた大好きな先輩からも見捨てられた。その現実にシャルルは一気に心が凍り付き、動かなくなる。
　クリュウはそんなシャルルを一瞥しつつ、最悪の場合は村を放棄して避難する案を打診するエリーゼに向き直り、こう宣言した。
「――生きて帰ってくれば問題はないんだろ？」
　クリュウの言葉に、エリーゼが驚いたように顔を上げる。その視線の先には、真剣な表情を浮かべたクリュウが立っていた。
「あ、あんた何を言って……」
「悪いけど、今は《できる》《できない》という二択の選択じゃない。どう戦うかを決める状況だ。そんな二の次三の次の意見に耳を傾けている暇はないんだ」
「兄者……」
　クリュウの言葉に、シャルルの瞳に再び光が戻る。だが同時にエリーゼの表情は厳しくなる。
「あんた、本気でこの面子でガノトトスに勝てると思ってる訳？」
「だから、勝てる勝てないの問題じゃなくて、勝たないといけないの。今はそれを話し合う場所だ」
「ば、バカじゃないのあんたッ!?　本気で言ってる訳ッ!?」
「もちろん本気さ。本気だからこそ、僕は自分の持てる最高の装備を整えて遙々やって来たんだからさ」
　そう言ってクリュウは自身の纏うレウスメイルの胸元を撫でた。彼の装備しているレウスシリーズならガノトトスの強力な一撃にも耐えられるし、彼が腰に下げているバーンエッジはガノトトスが苦手

とする火属性の武器――準備は万全であった。
　まるでシャルルのバカが移ったかのように無茶苦茶を言うクリュウにエリーゼは呆然とする。一方のクリュウも自身の言い分の無茶苦茶さに内心苦笑を浮かべていた。どうやら久しぶりにシャルルに会ったせいで、自分にも彼女のバカが移ってしまったようだ。
「という訳だから、僕は一人でも行くつもりだよ」
「シャルも行くっすッ！　これはシャルの故郷の命運が懸かった戦ッ！　村専属のハンターのシャルだって戦うっすッ！」
　クリュウの言葉に呼応するようにシャルルも元気良く参戦を表明する。第７７小隊の《一度決めたら決して曲げない》コンビの復活だ。
　自分の意見を全否定して、圧倒的な不利の状況に突っ込もうとする二人を見てエリーゼは頭を抱えて大きなため息を零す。そんな彼女を見て、クリュウは初めて不安げな表情を浮かべた。
「君達は無理しなくてもいいよ。僕とシャルルだけでも何とかするからさ」
「そうっすッ。シャルと兄者のコンビなら不可能はないっすッ！」
　クリュウは二人を気遣うように辞退を勧める。その隣ではどこから来る自信なのかシャルルが事実上の勝利宣言をしている。何というか、本当に単純な子だ。
　そんな、かつてドンドルマのハンター養成学校を騒がせた中心人物二人の結託に、その後処理に奔走していた側のエリーゼは小さく舌打ちする。
「――ったく、これだからバカは嫌いなのよ」
　そう吐き捨てるように言うと、エリーゼは顔を上げる。その表情は何かが吹っ切れたような、スッキリしたものに変わっていた。
「こっちはすでに準備は整えてるのよ。万全とは言えないけど、最善のね。あたしが訊きたかったのは、あんた達にこの厳しい状況に突っ込む覚悟があるか、それだけよ」
　エリーゼの言葉の意味がわからず呆然としている二人にフッと不敵な笑みを浮かべると、壁に立て掛けていた近衛隊正式銃槍を手に取る。ガシンッと二つ折りだった銃身を連結し、自分の身長に匹敵する

ような武器を構えると、自信に満ちた表情を浮かべる。
「こちとら雌火竜リオレイアと交戦経験があるのよ。あの時の状況に比べれば、これくらい何の問題もないわ」
　エリーゼが自信満々に言うと、それまで皆の激しい言い合いにおろおろとしていたレンも嬉しそうにうなずく。
「エリーゼさんが何の問題もないと言えば、何も心配する事はありませんよね」
「当然よ。このあたしを誰だと思ってるのよ。あたしはね、勝てる戦しかしない主義なのよ」
　自信満々に言い放つエリーゼの言葉をようやく理解したシャルルは「う、うるさいっすよ」と悪態をつきながらも嬉しさのあまり涙目になる。
　そんなシャルルの髪を優しく撫でながら、クリュウもまた自信満々なエリーゼを見て苦笑を浮かべる。
「どうやら、お互いこいつのバカが移ったみたいだね」
「ほんとよ、昔のあたしならこんな無茶絶対しないのにね」
　お互いにシャルルと組んでバカが移った同士、考える事はどうやら一緒らしい。大本であるシャルルは複雑そうな表情を浮かべてはいたが、二人とも決して彼女を悪く言ってはいない。今の自分が、お互いに好きなのだから。
　シャルルと深く関わった二人と、シャルル本人の強い絆。それを一人だけ関わっていないレンが羨ましげに見詰めていたのは内緒だ。
　全員の意見が一致した所を見計らったかのように、そのタイミングでキャンディがジュースを持って戻ってきた。
　その冷たい飲み物を片手に、四人は一度冷静になって対ガノトトス用の基本戦術と作戦を練る。議論は長くなり、時には紛糾するなどしながら続き、ようやく作戦方針が決まった頃には日はずいぶん傾き、空は夕暮れに染まっていた。
　出発は翌朝と決め、四人は作戦に沿った準備を整える。クリュウも用意してきた道具類などの準備を終え、さらには村長や村の重役などとの顔を合わせ、全ての下準備を終えた頃には、日はすっかり暮れて

空には無数の星々が煌めいていた。

第１３４話　寂しがり屋な突撃娘と意地っ張りな参謀

その日、クリュウはシャルルの家に泊まる事になった。すでに数日前から泊まっているエリーゼとレンとは違い、クリュウはそこで初めてシャルルの家族に会った。

シャルルの両親はどちらも人が良さそうな優しい人で、二人でブドウ業をしているそうだ。クリュウの事はシャルルから聞いていたらしく、改めて自己紹介する必要はなかった。

ただ、シャルルの父親は自分に対して少し厳しく、逆に母親の方は何かにつけて構ってきては「私ね、本当は息子がほしかったのよぉ」とやたら強調してくるのは、一体どういう訳だろうか。まぁ、そのたびにシャルルが顔を真っ赤にして激怒するのだが。

そして以前シャルルから聞いていた彼女の弟とも会った。驚いた事に活発でバカ丸出しな姉とは違い、弟の方は勉学に秀でており毎日何時間も勉強しているというのだから、姉弟でここまで差が出るものなのかとある意味感心してしまう。

それでも性格は年相応の少年であり、クリュウは他の面子と一緒に弟君とカードゲームなどで遊んだりした。何度も姉の事をよろしくお願いしますと言ってくる、本当にできた子だ。

そんな賑やかなルクレール家から光が消えたのは、それから少し経った後の事だった。

夜中、皆が寝静まった頃を見計らってクリュウは一人家の外に出た。木の根本に腰掛け、そこからきれいな星空を見上げる。目の前に広がる星の海は、これだけ離れていてもイージス村から見えるそれと同じだ。

アルザス村はイージス村よりも南方に位置し、季節もすっかり春なので寒くはない。

数時間後には出発だが、彼は眠れずにいた。何しろ今回は強敵ガノトトスを相手にしながら、フィーリア達の力は借りられない。しかも

一緒に討伐に向かう仲間はお世辞にもガノトトスを相手にするには万全とは言えない。状況は限りなく厳しいのだ。
クリュウの頭の中はそんな不安要素ばかりがごちゃ混ぜになっていて、それが彼に眠気を寄せ付けないのだ。
「はぁ……」
自然と、ため息が漏れる。
彼は非常に不器用な人間だ。周りに心配を掛けたくない為に何でもないように振る舞うが、実際はこうして一人の時に一人で悩む。彼の悪い癖だ。
ガノトトスは当然だがイャンクックよりも危険な相手だ。だが、自分以外の面子はその周辺か少し上くらいのレベルしかない。必然的にガノトトスの弱点属性である火属性の武器、バーンエッジを持つクリュウが主力となる。
状況は限りなくこちらが劣勢だ。一応準備はしてきたとはいえ、それは最善であり万全ではない。
狩りに《絶対》や《安全》がないとはいえ、これはあまりにもハードルが高い。悩まない方が異常だ。
クリュウは頭の中で様々な事を考えながら再び大きなため息を零す。
「こんな時間にこんな所で何してるんすか？」
その声に振り返ると、そこには寝巻き姿でいつもは結ばれたツインテールを下ろしたシャルルが立っていた。
「シャルル……」
「そんな格好で外にいると風邪引くっすよ」
「そうかな？　心地いいくらいだよ」
「……あぁ、兄者は北国出身だったっすよね。シャルはまだこの気温じゃ寒いっすよ」
そう言ってシャルルは身を震わせる。ガリア共和国は内陸国家の為、海からの冷たい冷気が入らないので温暖気候の国。一方のイージス村は冷たいアクラ地方に面する海の為、冬には流氷が観測されるほど年間を通して気温は低めの場所にある村。同じ人間でも生まれた

場所によって適温が変わるのだから、環境変化とは面白い。
モンスターもその例外ではなく、ランポスも亜熱帯や火山地帯に適したイーオス、雪山などの極寒地域に適したギアノスなど、人間以上の変化を見せている。
シャルルは身を震わせながら、それでもクリュウの隣にちょこんと腰掛けた。
「寒いなら家に戻ってたらいいでしょ？」
「兄者と一緒なら平気っすよ」
そう言ってシャルルは嬉しそうに笑みを浮かべると、クリュウにくっ付いて体を預けるようにして寄りかかる。
「シャルル？」
「……何だか、ずいぶん懐かしい気がするっす」
クリュウに体を預けながら、シャルルは小さくつぶやいた。その声は、昼間の脳天気な明るさではなく、どこか月の光のように儚い。
「一年ぶりだもんな」
「……一年じゃないっす。もっと、長いっすよ」
「いや、でも僕が卒業したのは去年で……」
「――最後の学年、兄者の目にはルフィールしか映ってなかったっす」
寂しげに、拗ねたように、シャルルは唇を尖らせながらつぶやく。太陽の下で輝く彼女の大きな宝石のような瞳は、月下の今では輝きが鈍い。
シャルルの言葉にクリュウは「そんな事ないよ」と否定するが、シャルルはゆっくりと首を横に振る。
「誤魔化してもダメっすよ。シャルは兄者との付き合いだけならあいつよりも長いからわかるっす――あの頃の兄者は、あいつの事ばかり構ってて、シャルの事なんか全然見ようとしてなかったっす」
「だからそんな事――」
「――ないって、言い切れるっすか？」
シャルルはいつになく引き締めた表情でクリュウを見詰める。その瞳は真剣で、クリュウはその迫力に押し黙ってしまう。
黙ってしまうクリュウを見て、シャルルはフッと表情を和らげた。

「別に責めてなんかいないっすよ。兄者は昔からそうっすからね。困っている人や悩んでいる人、泣いている人がいたら周りが見えずに全力で突っ走る根っからのお人好し。それがシャルが大好きな兄者っていう男っす。シャルもその底抜けの優しさに助けられた身っすから、文句はないっすよ。ただ――」
シャルルの表情が、悲しげに曇る。
「――ずっと、寂しかったっす」
静かな風が吹き、彼女の夕日のようなオレンジ色の髪を靡かせる。その瞬間、月明かりの下でもハッキリと彼女の瞳が煌めいた。
「シャルル……」
「兄者を責める気はこれっぽっちもないっすよ。ただ、覚えておいてほしいっす。時にはその行動は、全然優しなんかじゃなくて、すごく残酷な事になる事もあるっすから」
シャルルの、彼女らしくない遠回しな言い方にクリュウは一瞬困惑する。そんな彼の反応は予想通りなのだろう。シャルルは小さく苦笑を浮かべる。
「二兎を追うものは一兎をも得ず、っすよ」
らしくないシャルルの諺にクリュウは、何となくその意味を理解した。誰かを助けるという事は、同時に誰かを見捨てなければいけない。そんな簡単な事を、自分は気づいていなかったのかもしれない。
確かに、あの頃の自分はずっとルフィールに掛り切りだった。今思えば、いつも隅っこの方でシャルルがどこか淋しげな瞳で自分を見ていたかもしれない。
「その、ごめん……」
自然と、そんな言葉が漏れていた。だがシャルルはそんなクリュウの謝りの言葉に小さく首を横に振る。
「別に兄者が謝る必要はないっすよ。ただ、兄者はシャルの事を過大評価し過ぎっすよ。シャルだって、寂しい時くらいあるっすよ。一応普通の女の子なんすから」
「シャルル……」
「まぁ、シャルはいつまでも過去の事は引きずらないサッパリとした

性格っすから、別段気にしてもないっすけどね」
　そう言ってシャルルは立ち上がると月明かりをバックにしてニヒッと屈託の無い笑みを浮かべる。その底抜けの明るい笑顔を見て、クリュウも自然と微笑む。
「むしろ今は兄者がわざわざシャルの村に来てくれた事の方が嬉しいっすよ。首都セリーヌからも遠い、西シュレイド王国との国境付近のこんな小さな村なんて、交通の便も不自由な所に」
「当たり前だろ。かわいい後輩からの救援要請なんだから、何が何でも来るに決まってるだろ」
「ほんと、兄者らしいっすよ」
　クリュウの言葉にシャルルは心の底から嬉しそうに言う。そんな彼女の幸せそうな笑みを見ていると、慣れない長旅をしてまで来て良かったと心から思える。
「シャルルは、卒業してからすぐにこの村に戻ってきたの？」
　昼間はすっかりルフィールの事ばかり詮索して聞きそびれてしまっていた、彼女の事を訊いてみる。
「そうっすよ。シャルの夢は、自分の村を守れるハンターになる事。みんなみたいに、富や名声を求めるんじゃなくて、ささやかな幸せを、この大好きな故郷で過ごす。それだけっすから」
　クリュウのクラスメイトの大多数は、富や名声を求めてという者が多く、大概はドンドルマやミナガルデのような大都市に拠点を置く事が多く、実際にドンドルマに訪れた際には意外と知り合いに会う事が多い。
　だが、シャルルやクリュウのように自分の故郷を守れるだけのハンターでいいと考える者もまた少なくはない。そういう意味でも二人は《仲間》なのだ。
「それと、エリーゼとはどういう経緯で仲間になったの？」
　それはクリュウが一番謎に思っていた事だ。常に騒動の中心にいたある意味問題児であるシャルルと、規律に忠誠を誓うと言っても過言ではない生徒会役員、それも最後の年には生徒会長にまでなったエリーゼ。どう考えても二人に接点があるようには思えなかった。

すると、そんなクリュウの疑問を答えるようにシャルルは前置き代わりに小さくため息を零し、その経緯を語り出す。
「シャルが五年生前期で、エリーゼは六年生だった時、シャル達は同じクラスになったっす。その時のあいつはクラスから孤立してたっす」
「孤立？　何でまた？」
「あのエセックス先輩の後の生徒会長っすからね。エリーゼは別に無能って訳じゃないんすけど、前任がすご過ぎたんすよ」
つまり、クリスティナという完璧過ぎる指導者の後任となってしまったエリーゼは全ての指揮や行動がクリスティナと比較されてしまい、「無能だ」「エセックス会長の方が良かった」「回転率が悪い」など散々な評価を受けていたのだ。その為に、クラスからも孤立してしまったらしい。
「まぁ、あいつはルフィールと同じで自分から仲間を作ろうなんて気もなかったのが拍車を掛けてたっすね。そんなクラスから孤立していたあいつでも一応クラスメイトっすから、仲間に引き入れようとした時に一悶着あって」
「……何でそこで一悶着が起きるのかはさておき、何があったのさ」
「ただのケンカっすよ。あいつ、シャルの事をバカにしたからカッとなってこっちも言い返してやって、そのまま激しい怒鳴り合い。最終的に掴み合いの大ゲンカになっちまったっす」
「……女子の発言じゃないよね、掴み合いの大ゲンカって」
「そこをビスマルク先生に捕まえられて、散々怒られた後に罰として無理やりコンビを組まされたのがきっかけっす」
「……自主的に、じゃなかったんだねやっぱり」
ある意味予想通りと言えば予想通りだ。いくら何でもまるで性格が違う、口を開けばケンカにすぐ発展しそうな対局の存在である二人が自主的にコンビを組むとはとても思えない。教官からの強制編成ならば仕方がないし、納得もできた。
「シャルは作戦なんて面倒な事考えずに武器を振り回すだけなのに対して、あいつは作戦ばかり考えて何段階にも戦闘と区分けする女々しい戦い方をする奴っすから、最初の頃はそりゃもう毎日のように怒鳴

り合いの大ゲンカばかりだったっすよ。意見がことごとく対立するんすから、当然っす」
「まぁ、戦い方どころか性格がまるで違うから仕方が無いけど――でもさ、結局は仲良くなったんだろ？」
　シャルルには悪いが、こんな辺境の片田舎の村までわざわざ会いに来るという事は、少なく見積もってもエリーゼとの関係は悪くはないはずだ。
「べ、別にシャルとあいつは特別仲がいいって訳じゃないっすよ。ただの元チームメイトってだけっす」
　ただの元チームメイトが、わざわざこんな所まで来やしないよ。そんな言葉を心の中でつぶやきながら、クリュウは小さく笑みを浮かべた。ルフィールの時と同じく、最初こそ仲が悪くても仲良くなってしまう。シャルルのすごい才能の成せる業だろう。
　頬を赤らめてプイッとそっぽを向く彼女の姿に微笑みつつ、クリュウは彼女の背後で輝く月を見上げる。
　シャルルを昼間に力強く光り輝く太陽に例えるなら、闇夜に淡い光で天空に浮かぶあの月に例えられる彼女は、今頃どこで何をしているのか。心配がないと言えばうそになるし、気にもなる。だが、彼女なら自分の力でどんな逆境をも跳ね返して、背後に多くの乗り越えた試練に振り返る事もなく進み続けている。そんな確信があった。
　こちらも負けてはいられない。そんな気持ちが胸を満たす。
「兄者……」
　彼女の呼び声に「何？」と返そうと視線を下げた瞬間、シャルルはクリュウの正面から抱きついた。驚くクリュウは反射的に逃れようとするが、シャルルはそれを拒むようにギュッと背中に回した腕に力を込める。
「少し、このままがいいっす……」
「いや、でも……」
「――お願いっす。この一年間、ずっと我慢してたんすから……」
　そう言う彼女の声は、少し涙声になっていた。クリュウからはその表情は見えないが、震える肩を見る限りその表情は安易に想像でき

る。クリュウは何も言わず、そんな彼女の頭をそっと撫でる。
クリュウは何も言わずに彼女を抱き留め、シャルルも無言でクリュウに抱きつくだけなので、しばらく二人は無言のまま抱き合い続ける。
震える彼女の肩を見ながら、クリュウは小さく「ごめん……」と零す。そんな彼の言葉にシャルルは無言で首を横に振る。ただ、ギュッと強く抱きつくだけ。
肩を震わせながら抱きついてくる彼女の頭を無言で優しく撫でながら、クリュウは月を見上げる。
闇夜を照らす淡い光を煌かせる月は平等に、二人の姿も優しく照らし続けていた。
翌朝、日が昇ると同時に起床した四人はすぐに出発準備を開始した。準備と言っても事前にアプトノスと竜車は用意されており、すでに道具類や旅の間の食料や生活必需品なども積載されており、あと準備するものと言えば己の武具と自身くらいだ。
クリュウは一人倉庫でレウスシリーズを身に纏い、この戦いの為に選び抜いた武器（バーンエッジ）を腰に下げる。全ての準備を終えて外に出るとすでにシャルル、エリーゼ、レンの三人が準備を整えて待っていた。
「みんな、準備は大丈夫だね？」
「誰に言ってるのよ。とっくに用意なんて万全に決まってるじゃない。もちろんレンだって完璧よ。何せこのあたしがついてるんだから」
フフンと自慢気に胸を反らすエリーゼ。朝っぱらからこの子はずいぶんと元気だ。彼は知らないが、彼女はドンドルマで毎日のようにこれくらいの時間にジョギングをしているのだから、ある意味当然かもしれない。そんな彼女に付き合わされているレンもまた、意外と目をパッチリとさせて起きている。逆に猛烈に眠そうなのはこの戦いに人一倍意欲を燃やしていたシャルルだったりする。
「大丈夫かシャルル？」
「ね、眠いっす……」

とてつもなく眠そうに目をしょぼしょぼさせているシャルル。昨日の夜遅くまでクリュウと一緒に起きていたせいなのは言うまでもないだろう。同じくらい起きていたクリュウはその辺はしっかりしている。クリュウは眠そうにしているシャルルの姿を見て苦笑を浮かべた。
「眠いなら竜車の中で寝てなよ」
「そうするっす……」
そう言ってシャルルはフラフラとした危なっかしい足取りで一足先に竜車の中へと入った。そんな彼女の姿を見て、三人は苦笑を浮かべる。
「あんなんで大丈夫なのかしら」
「あれでもいざとなったらやる子だからね。その点は心配ないと思うけど」
「まぁ、そういう意味では心配はいらないわね。むしろ心配なのは……」
そう言ってエリーゼは竜車の上で直に寝ようとしているシャルルを見て「あ、毛布の用意ッ」と気を利かせて慌てて走り出すレンを見詰める。その視線を追って、クリュウも当然彼女の後ろ姿を見る訳だが。
――直後、レンは特筆して突っかかるような場所が何も無い所で見事にすっ転んだ。言葉を失うクリュウの横でエリーゼが大きなため息を零す。
「むしろ心配なのは、このドジッ子の方なのよねぇ」
そう言って、エリーゼは地面に倒れているレンを起こしに向かう。そんな仲間達の姿を見て、一抹どころか十抹くらいの心配でクリュウは大きなため息を零した。
「今更だけど、不安要素しかないねこのチームは……」
「だから覚悟を決めなさいって事よ。ほらバカレン、しっかりしなさい」
「うぅ……」
鼻を強く打ち付けたのか、赤らめた鼻を押さえて涙目になっている

レンを優しく起こすエリーゼ。口ではああ言っても、本当に面倒見がいいのらしい。仲睦まじい二人の姿は、本当の姉妹の様に見える。
「つたく、こんな君達に村の命運を託さないといけないとは、神様も酷な事をするもんさね」
その声に振り返ると、そこには見送りに来てくれた村の人達の姿があった。その中には、腰に手を当てて苦笑を浮かべるキャンディの姿もあった。
「まぁ、あんたらには期待しとるからね。死なない程度にがんばって来なさいな。私達はあんたらが失敗した時の為に避難の準備でもして吉報を待ってるぜ」
「用意周到と言うべきか、それとも縁起でもないと言うべきか」
「冗談よ冗談。私達アルザス村の村人はみんなシャルちゃんを信じてる。そのシャルちゃんがあんた達の事も信じてる――私達の故郷の命運、あんた達に任せるわ。しっかり頼むでぇ」
そう言ってキャンディはニッと笑みを浮かべて、親指を突き出した。クリュウはそんな彼女の想いを笑顔で受け取り、「全力は尽くすよ」とだけ返す。その言葉に満足したのか、キャンディはうんうんとうなずく。
クリュウとエリーゼ、レンの三人も竜車に乗り込み、これで全員乗車完了だ。すぐにクリュウは運転席に向かい、手綱を持つ。一応竜車の運転に慣れているクリュウが今回は運転手を務める事になっていた。
「それじゃ、行ってきます」
クリュウは手綱を引いてアプトノスを歩かせる。
見送ってくれるキャンディやその他の村人の声を背に受けながら、クリュウ、シャルル、エリーゼ、レンの四人は一路ガノトトスの現れるオルレアン密林へと出発した。
「そういえば、あんたの装備ってレウス装備よね？」
「……今更？　まぁ、いいけどさ」
「う、うるさいわね。驚きのあまり訊くのを忘れてたのよ」
ガタゴトと揺れる竜車の運転席に腰掛けるクリュウ。その隣に

座っているのは意外にもエリーゼであった。
結構目が高くなったというのにシャルルはまだ寝ているし、レンもこの心地良い気温にうとうとととしていたが先程から眠り始めている。運転手であるクリュウは寝る訳にもいかないし、エリーゼも有事の際にはすぐに行動を開始できるよう起きている。今回のチームでは比較的真面目な二人が残っていた。
「正直、あんたがリオレウスを倒したなんて信じられないんだけど」
「まぁ、周りの仲間がみんなすごいから、かな？」
「寄生って訳？」
「……ひ、否定はできない」
事実、自分以外の仲間はリオレイアバスターのフィーリアに護衛の女神のサクラ、頼れる凄腕ハンターのシルフィード。皆、世間ではそれなりに名の知れた実力者達だ。
自分だけでは当然リオレウスなど勝てるはずもなく、あの勝利は彼女達の力のおかげだ。
だがあの時自分だってがんばったのだから寄生と言うには違うし、でも本来はシルフィード単独でもリオレウスは討伐できたのだろうと考えると、寄生と言われても仕方がない気もするし。彼の心境は複雑だ。
そんな彼の複雑な気持ちの表れが顔に出てしまい、彼の表情は難しくなる。そんな彼を見て、エリーゼは小さく苦笑を浮かべた。
「冗談よ。あんたがそんなズルする人間じゃない事はよぉく知ってるから」
「そ、そうなの？」
「真っ直ぐ過ぎるから色々な面倒事を起こしまくってたんでしょうが」
「ご、ごめん……」
「だから、謝られても困るだけなんだってば～」
「あ、ごめん……」
「……はぁ、正直この面子だとあんたに期待しなきゃいけないんだけど、不安しか感じないわね」

「あははは……」
そう言ってエリーゼは深いため息を零す。その表情はいつもの彼女らしくないほどに陰りが見える。
まぁ、それは当然だろう。これから自分達は水竜ガノトトスに挑むのだから。それも、クリュウを除いては二段階くらい課程をすっ飛ばしての挑戦だ。戦力的に言えばお世辞にも十分と言うには程遠い。
「それにしても、ガノトトス相手に勝機がある訳？　勝てる戦しかしない主義なんでしょ？」
クリュウが問うと、エリーゼは大きなため息を零して表情を険しくさせる。
「……まぁ、相当厳しい戦いになるのは必至ね。相手が水辺でしか行動できないという特性を利用して小休憩のように隣のエリアに避難して態勢を整えるみたいな手法が使えるのはありがたいけど、そんなの気休めにしかならないし」
「僕は閃光玉を多用して戦う事が多いけど、ガノトトスは閃光玉が効かないしね」
「落とし穴とシビレ罠をメインに戦う事になりそうね――ところでさ、ずっと気になってた事があるんだけど」
真剣な表情で今後の作戦方針を話していたエリーゼだったが、突然思い出したようにそう切り出した。その表情は先程までの真剣なものから、まるで強烈な問題児を抱える事になった学校教師のように疲れ切っている。
「な、何かな？」
「――荷台に積んであるあの爆弾の量、ちょっと説明してもらいたいんだけど」
運転しながらエリーゼの言葉にクリュウはやっぱりかと苦笑を浮かべた。
現在この竜車の荷台にはクリュウが持参した爆弾が積載されている。正確にはイージス村、ドンドルマ、ブレストなどで揃えた材料を昨日のうちに調合して整えたのだ。数にして大タル爆弾Ｇ六発、小タル爆弾Ｇ五発。クリュウからしてみれば日頃狩りで使う至って普通

の範囲内の量だ。
　前回のリオレイア戦でも初めて組む事となったルーデルと同じようなやり取りをしたが、こうして毎度毎度一から説明するのは正直面倒だ。
「え、えっと、あれは――」
「――まぁ、この面子での火力を総合的に判断した場合、正直あんたの持って来た爆弾はありがたいんだけどね」
　また同じ説明をしなくちゃとクリュウが切り出したと同時に、エリーゼは意外にもクリュウの戦法に好意的な感想を述べた。これにはクリュウの方が驚く。
「お、驚かない訳？」
「まぁ、さすがにあのバカみたいな量は驚くけどさ。効率的と言えば効率的じゃない」
　エリーゼは気にした様子もなく淡々と答える。クリュウは知らないが、エリーゼ・フォートレスという人間は何事においても効率を重視する人間だ。どんな無茶苦茶な案であっても、それが危険に見合うだけの成果を得られ、尚且つ効率的だというのならばその案を採用し、決断したからにはその陣頭に立って行動を起こす。それがエリーゼ・フォートレスという少女であった。
「それに、あたしも爆弾は嫌いじゃないわよ」
　そう言ってエリーゼはニッと、イタズラっぽい笑みを浮かべた。
「そ、そうなの？」
「ガンランスの攻撃自体が爆発攻撃みたいなものだし、あたしとレンだと火力不足になる事もあるから、効率的に狩りを進めるには爆弾の補助が必要な訳よ。まぁ、あくまで補助であってあんたみたいに主力に置き換えようなんて事はしないけどね」
「僕が言うのも何だけど、エリーゼって変わってるね」
「変わり者じゃないと上には行けないのよ。常識に縛られてる無能な連中よりも、奇抜な考えをした者の方が可能性を持っている。クリスティナ先輩やシャルル、あんた達を見ててそう思ったのよ」
　快晴の空の下、流れる雲を見上げながらエリーゼは静かに言う。風

が吹き、その桃色のきれいな長い髪を靡かせる。流れる髪を押さえながら空を見る彼女の横顔は、クリュウが知っている彼女の印象よりずいぶん柔らかく見える。
「エリーゼって、何か変わったよね」
「そ、そう？」
　クリュウの唐突な発言にエリーゼは少しだけ動揺した。思い当たる節がたくさんあるのだ。
「べ、別にそんな事ないんじゃないかしら？」
「そうかな？　何だか丸くなったような気が――しゅぶッ!?」
　正直な感想を述べるクリュウだったが、そんな彼の発言に対してエリーゼは容赦のないビンタで応えた。突然平手打ちされた事に痛む頬を押さえながら驚くクリュウが振り返ると、エリーゼが顔を真っ赤にさせて怒り心頭と言ったような険しい表情を浮かべて仁王立ちしていた。
「え、エリーゼ……？」
「あ、あんたって奴は……ッ！　本当にデリカシーってものがないわねッ！」
　猛烈に大激怒しているエリーゼに対して、クリュウは何が何だかわからずに呆然とする。一体何が彼女をそこまで大激怒させているのか、検討がつかないでいるのだ。
「な、何でそんなに怒ってるの？」
「女の子に対して太っただの言えば誰だって怒るわよッ！」
「えぇッ!?」
　エリーゼの激怒の理由が判明したクリュウだったが、全くもって自分はそんな発言をした記憶はない。だが彼女の剣幕を見るに、確実に自分がそのような失礼な発言をしたのは事実らしい。クリュウは慌てて自分の言葉を頭の中で反芻してみる――答えはすぐに見つかった。
「ち、違う違うッ！　丸くなったって言うのは体型とかそういうのじゃなくて性格だよッ！」
　もう一発ブン殴ってやろうかしらと拳を握り締めていたエリーゼ

はクリュウの必至な弁明に拍子抜けする。どうやら、自分の誤解だったらしいと気づいたのだ。
「紛らわしい事言うんじゃないわよ……」
「ご、ごめん……」
「……わ、悪いのはあんただからね。謝ってなんかやらないんだから」
クリュウの紛らわしい発言がそもそも悪いのだが、脊髄反射的に手を上げた事に対してはエリーゼも負いを感じているのか、頬を赤らめながらバツの悪そうな表情を浮かべて視線を逸らす。そんな彼女を頬をさすりながら見つめ、クリュウは苦笑を浮かべる。
「エリーゼってもっと冷静で冷淡な人だと思ってた」
「う、うるさいわね。あたしだってそういうキャラでやってたのよ一応」
学生時代のエリーゼとはほとんど関わった事がないのでよくは覚えていないが、いつもクリスティナの横で冷静沈着に部下に指示を出していた冷たい人というイメージがある。それに比べて今目の前にいるエリーゼはその頃のエリーゼとはまるで別人だ。
「元々こっちが本来の性格よ。人の上に立つには感情的じゃダメだからね、無理に押さえつけてたに過ぎないわ」
「ふぅん、そういえばエリーゼってメガネ掛けてなかった？」
クリュウの記憶が正しければ、エリーゼは常にメガネを掛けていたはず。そんな彼の問いに対してエリーゼは淡々と答える。
「あぁ、あれは伊達メガネよ。その方が真面目なキャラに見えるでしょ？」
「……つまり、キャラ作りだったって訳？」
「まぁ端的に言えばそうね」
正確に言えばクリュウとエリーゼは一応学友という事になるが、学生自体の彼女と今の彼女があまりにも違い過ぎて、正直懐かしいという感じはあまりしない。どちらかと言えばレンのような昨日初めて会った人というイメージの方が強い。だから、昔の事で話が合うのが不思議な感覚だ。
「……そっか、お互い大変だったんだね」

「あんたはバカみたいに騒ぎまくってただけでしょうが。あたしの大変の大半はあんた達が原因なんだからね」
「ご、ごめん……」
そう言われると返す言葉もなく、クリュウの表情は曇る。そんな彼の様子にエリーゼは苦笑を浮かべた。すると、エリーゼは思い出したようにクリュウの背中を見詰める。
「そういえばあんた、最後の学年の時に背中に大怪我を負ってたけど、今はもう平気な訳？」
エリーゼの言った大怪我とは、クリュウが6年生の時の卒業試験の際に突然乱入してきたドスファンゴとの戦闘中、ルフィールを庇って背中に負った傷の事だ。
「今はもう完全に完治してるよ。ただやっぱり傷跡は残っちゃったけどね」
そう言う彼の背中には今も背中全体を斜めに横切るようにして大きな傷跡が残っている。北国出身者故の色白の肌である彼にとって、その傷はよく目立ってしまう。だが、後悔などしていないし気にもしていない。これは、自分にとっては大切な軌跡なのだから。
「先に言っておくけど、私のチームに所属する限りは怪我なんて負うんじゃないわよ。仮にでも死人や致命傷なんて負われたら目覚めが悪いからね」
「そうならないよう、がんばるよ」
当然、クリュウ自身はそんな気などさらさら無い。もちろん討伐は目標ではあるが、それ以上にみんなで無事に帰還する事が大前提だ。誰一人、落伍者は出したりしない。
シルフィードの言う通り、自分はまだまだ甘い理想主義なのだろう。だが、理想主義を掲げるならその主義を貫くだけの覚悟と心持ちだけは忘れない。自分にできる事と言えば、がむしゃらに前に進み続ける事だけなのだから。
「……さて、あたしは幌の中に入ってるわよ。何かあったら呼んで」
「わかった」
エリーゼはそう言って幌の中へと入る。振り返って覗き見ると、エ

リーゼはうたた寝しているレンにそっと薄手の毛布を掛けていた。その姿は本当の姉のようで、彼女がレンをどれだけ大切にしているかが見て取れる。
すると、エリーゼは振り返った。その先には相変わらずの寝相の悪さで毛布を蹴飛ばしているシャルルが寝ている。エリーゼはため息を一つ零すと、蹴り飛ばされた毛布を拾ってシャルルにそっと掛ける。そんな彼女の姿を見て、クリュウはそっと微笑みを浮かべた。
「……ほんと、面倒見がいいんだな」
幌の中は彼女に任せる事にして、クリュウは運転に集中する。
日は高く、そろそろ昼時かなと考えた時、お腹が小さな音を上げた。その音に、クリュウは一人頬を赤らめて苦笑を浮かべるのであった。

第１３５話　様々な想い渦巻くドタバタ四重奏

オルレアン密林はアルザス村から竜車で半日程という程近い場所にある密林地帯だ。ブドウを主要財源とするアルザス村はブドウの育成に好条件な乾燥した気候にある。これは海の湿った風がヒルメルン山脈を越える際に雨となってほとんど落ちてしまい、山を越えてガリアに吹き抜く際には乾燥した風になるという気候条件からだ。

一方、その山を越える際に捨てられた水分は雨となって西シュレイド王国側の麓に注がれる。その川の水がガリアに入り、アルザス村を囲むように流れている。

オルレアン密林はガリア側の麓にある、山の地形の関係上唯一湿った空気が注がれる場所。つまり、湿気の多い場所に存在する。

オルレアン密林とアルザス村に流れる川は同じヒルメルン川に類別される。つまり、ガノトトスが気まぐれで川を下れば、村は襲撃される事になる。ある意味、以前のイージス村のリオレウス事件よりも村の危険度は高い。

竜車の中で簡単な昼食を済ませ、一行がオルレアン密林に到達したのはそれからすぐの事であった。

オルレアン密林に到着した一行はまず拠点（ベースキャンプ）の設置予定地に向かう。何しろオルレアン密林は通常は禁猟区に指定されているので拠点（ベースキャンプ）がそもそも設置されていない。ここはガリアとシュレイドの国境付近の場所にある為、両国共に互いを刺激しないように武器を持ち込まないという協定が結ばれている為だ。その例外があるとすれば、今回のような危険なモンスターが出現した際に限られる。

クリュウ達は山際の切り立った崖の下に拠点（ベースキャンプ）を定めた。背後は崖、三方はそれぞれ深い木々が生い茂っている為大型モンスターは入って来れない。

地面に降り立ったクリュウ達は早速一拠点（ベースキャンプ）の設

置を開始する。設置と言っても天幕（テント）は竜車の幌をそのまま代用し、後は拠点（ベースキャンプ）の周りに小型モンスターの侵入を阻む簡易的な柵を設置し、その外周を獣避け及び早期発見用の鳴子を設置して準備完了とする。

作業は一時間程で終わり、いよいよ四人は狩場へ出撃する為の準備に取り掛かる。

クリュウはヘルムだけ脱いだ状態で道具類の準備をする。一応支給品は用意してあるにはあるのだが、さすがに辺境の村のだけあってドンドルマのハンターズギルドに比べればお世辞にも品揃えが言いとは言えなかった。

「でもまぁ、音爆弾があるのはありがたいよね」

そう言ってクリュウが道具袋（ポーチ）に入れたのはいつも彼が愛用している閃光玉ではなく、閃光の代わりに強烈な高周波を発生させる音爆弾。今回の狩りではこの道具（アイテム）が文字通りキーアイテムになる。

「シャルル、ガノトトスに対する音爆弾の利用方法と効力は？」

クリュウが問うと、シャルルは「それくらいシャルだってわかるっすよッ！」と頬を膨らませて怒る。

「ガノトトスが水中にいる場合に音爆弾を当てると、飛び出て来るっすッ！」

「正解だ。まぁ、これくらいはわかるよね」

「シャルだって勉強してるっすよ」

えっへんと胸を反らして自慢気に言うシャルル。クリュウは苦笑を浮かべながら、追加問題を出してみる。

「それじゃ、音爆弾を使った際のデメリットとは？」

「うッ……」

途端にシャルルの表情が怪しくなる。妙な汗を掻き、できもしない口笛で誤魔化せているつもりなのだろうか。その姿を見てクリュウは先程とはまた別の理由で苦笑を浮かべる。

「ったく、それくらい常識でしょ」

そう言って二人の会話に入って来たのは準備を完了させたエリー

ゼ。その横では「回復薬良し、携帯食料良し、地図良し……」と言葉に出して装備の最終確認を行っているレンもいる。
「う、うるさいっすね。シャルは小細工が嫌いなんすよ」
「小細工じゃなくて常套手段でしょうが。ったく……レン、代わりに説明してあげなさい」
「通常弾ＬＶ２良し、通常ふぇッ!?」
　装備の確認に専念していたレンは突然自分に話題が振られた事に目を丸くして驚く。そんなレンの姿に大きなため息を零し、エリーゼはレンの頭を引っ叩く。レザーライトヘルムの上からなので決して痛い訳ではないだろうが、叩かれた瞬間レンは「はうッ」と小さな悲鳴を上げる。
「な、何ですか？」
「ガノトトスに対する音爆弾のデメリットは？」
「え？　あ、はい。怒り状態になってしまいます」
「――という訳よ。わかったバカシャルル」
「……くぅッ、バカって言うなっすッ」
　ムキーッと両拳を振り上げて怒るシャルル。エリーゼは深いため息を零すと、ふとレンの方に振り返った。すると、レンはウキウキしたような表情でエリーゼを見詰めている。どうやら正解した事を誉めてもらいたいのだろう。何て健気な子なのだろうか。
　エリーゼはそんなレンのキラキラとした視線から気まずそうに視線を逸らす。
「……お、音爆弾以外に同様の効力を発揮する物は？」
「狩猟笛の高周波及び私のティーガーで撃てる徹甲榴弾各種及び、釣りカエルですッ」
「うぐッ……」
　見事に正解され、エリーゼが追い詰められる。
　クリュウ達は知らないが、エリーゼはレンに対して徹底した教育を行っている。一時は毎日のように過酷な猛勉強を強いさせていた事もある。なので、ドジッ子全開なレンは実は結構知識自体は豊富なのだ。

その原因であり、レンにとっては一番誉めてもらいたい相手はもちろんエリーゼである。だからこそ、がんばって勉強した事を誉めてもらいたいのだ。
ウキウキ拳を握り締め、キラキラと目を輝かせるレン。その眩しいくらいに純情可憐な妹の姿を直視できないでいるエリーゼ。実に素直じゃないお姉さんだ。
「ぐぐぐ……ッ、じゃあ、弾での弱点部位はッ!?」
「頭ですッ」
元気良く応えたレン。だが、その瞬間エリーゼの瞳が輝いた。口元には勝利の笑みが浮かび、いつもの勝気な仁王立ちが復活する。
「不正解よレンッ。ガノトトスの弾での弱点部位は首よッ。この程度の問題が答えられないなんて、あんたもまだまだねッ」
「しゅ、しゅみましぇん……」
天国から地獄へ見事に突き落とされたレン。レザーライトヘルムの下で大きな瞳がうるうると煌く。そんな二人の姿を見ていた部外者（ギャラリー）は――
「……悪魔っすね、あいつ」
「レン、がんばったと思うけど……」
――軽く引いていたりする。
「と、とにかくッ。まずは釣りカエルの採取が先ねッ。シャルル、場所を案内しなさい」
落ち込むレンを横目に気まずそうに表情を引きつらせながらエリーゼは話を先に進める。そんな誤魔化しているのが明らかな口調にシャルルが呆れたようにため息を零す。
「シャルだってここは二回目なんすから、そんな無茶ぶりされても困るっす」
「大丈夫よ。あんたの野生本能なら簡単に見つけられるでしょ？」
「どういう意味っすかそれッ!?」
ムキーッと拳を振り上げて怒るシャルルを連れて、エリーゼは先に進み始める。クリュウはそんな二人に苦笑しながらレウスヘルムを被る。戦闘中ではないのでまだバイザーは下げないが、これで準備は

万端だ。そして自分の仕事である大タル爆弾Ｇ四発を中心に落とし穴やシビレ罠が積まれた荷車を引く。何だかんだですっかり荷車の扱いがうまくなっていた。
　二人の後を追って歩き始めると、少し前をとぼとぼという足取りでレンが歩いている。しょんぼりと肩を落として落ち込んでいるその背中は、見ているこっちの心が痛くなるくらいに淋しげだ。
　クリュウは落ち込むレンの肩をそっと叩いた。
「あ、クリュウさん……」
「良く勉強してるんだね。さすがエリーゼの妹さんだ」
　本当はエリーゼに誉めてほしいのだろうが、このまま放置しておくのもこちらとしても気まずい事この上ない。とりあえず、フォローくらいはしておこうとクリュウがそう言うと、レンはカァッと顔を赤らめ慌ててレザーライトヘルムを深く被って顔を隠す。
「あ、ありがとうございますです……」
　ランゴスタが獲物に迫る時の羽音のように小さな声でお礼を言うレンに微笑み、クリュウは二人を追って歩みを早める。そんな彼の引く荷車を後ろからレンが微弱な力ながらそっと押す。クリュウはその僅かな感触に振り返ると、健気に荷車を押してくれるレンと目が合った。その瞬間、レンはまた慌ててレザーライトヘルムを深く被って顔を隠す。クリュウはそんな彼女の動作に首を傾げながらも「ありがとう」と礼を言って視線を前に戻す。
　そっとレザーライトヘルムを上げ、鍔越しにレンはクリュウの背中を見詰める。その頬はまだ赤らんだままだ。
「……こっちに来て、初めて男の子に誉めてもらったです」
　小さくそうつぶやき、レンは嬉しそうにはにかんだ――次の瞬間、彼女は石ころに躓いて豪快にすっ転んだのであった。
　オルレアン密林にはしっかりとエリア分けされた地図はない。そこでエリーゼは威力偵察の際に狩場全体を巡っておおまかなエリア分けを行っていた。彼女の的確な事前準備のおかげで、今回は全体偵察を省いての行動ができる。
　その結果、エリーゼの描いた地図によるとオルレアン密林は全部で

８つのエリアに分類される。そのうち川に面しているのはエリア５、６。それと川の水が土の中に染みこんで地下水となり、地底に溜まった地底湖となっているエリア８。ガノトトスが出現するのは水辺であるこの三つのエリアのみとされる。

クリュウ達がまず最初に到達したエリア１は深い木々が生い茂った場所。人間の胴回り程の木が無数に生えており、小型モンスターや人間なら動きが阻害される上に大型モンスターは行動が難しいようなエリアだ。エリア内にはケルビが数匹元気に飛び回っているだけで危険なモンスターの姿はない。滝際の場所の為か、この辺は他の場所よりも湿度が高く、目的の物が生息する条件に適している。

早速四人は目的の物を捜索し始める。すると、ある意味予想通りの人物が難なく発見した。

「釣りカエルゲットっすよッ！」

嬉々とした表情を浮かべて高らかに言うのは野生児シャルル。その右手には大ぶりな真っ赤なカエル、釣りカエルがしっかりと握られていた。

難なく釣りカエルを捕まえたシャルルを見て、エリーゼはやっぱりと言いたげな表情を浮かべた。

「さすが野生児ね。難なく発見したわ」

「というか、やっぱり手掴みなんだね。一応虫あみを持って来たんだけど……」

「……す、すごいですぅ」

三者三様な反応を受け、シャルルはそれを一括して感心しているのだと独自解釈。クリュウに向かって「甘いっすね兄者。こいつは結構力があるっすから、虫あみ程度じゃネットを破られるっす。手掴みが一番なんすよ」と力説してみたり。

「そ、それじゃあ荷車の小タルに入れておいて」

釣りカエルを入れておく為に荷車には小タルが載せられている。シャルルは意気揚々と小タルを掴むと、それを滝際まで持っていく。そこで中に少しだけ水を入れると、釣りカエルも中に入れる。その手つきは実に慣れたものだ。

「子供の頃を思い出すっすね。昔はよく釣りカエル同士を紐で結んで綱引きをさせて遊んだっすよ」
　子供の頃から実に男の子のような遊びを満喫していたらしい。道理で釣りカエルの扱いにも慣れている訳だ。学生時代にはロイヤルカブトを鷲掴みにしていたりと、実にアクティブな女の子だ。
「ちなみに、レンは子供の頃はどんな遊びをしてた訳？」
「え？　わ、私はオハジキとかアヤトリをしていました」
「……ごめん、振っておいて何だけど聞いた事もない遊びだわ」
　エリーゼとレンの会話が珍しく噛み合っていない。クリュウは仲のいい姉妹でもやっぱり他人なんだなぁとちょっと驚く。
「そう言えば、レンって出身はどこなの？」
　クリュウが何気なく訊いてみると、レンは恥ずかしそうにはにかみながら答える。
「ココル村という辺境にある小さな村です」
「ふぅん、もしかして東の方？」
「は、はい。よくわかりましたね」
「いや、何となく君の容姿が東方人っぽいし、遊びの名前の感じが東方言葉っぽかったから……という事は、サクラやツバメと同じ文化圏な訳だ」
　彼女と同じ他の地域では見られない独特な髪と瞳の色をした友人達を思い浮かべ、一人納得するクリュウ。すると、今度はレンの方が質問してきた。
「東方人にお知り合いがいるんですか？」
「え？　うん、二人とも僕の村に腰を据えているハンターだよ。もっとも、二人はどっちも東方大陸出身者だけどね」
「本土の方なんですか？　それはすごいですね」
　東方人には大きく分けて二種類が存在する。東方大陸からこちらの大陸に移り住んだ一族の子孫、言わばレンのような人々。もう一つはサクラやツバメのように本来の東方大陸から移住して来た人々。一般的に東方人と言えば全体数の多い前者を示す。レンの言った本土とは前者の東方人が東方大陸を示す場合に使う呼び方だ。

「って事は、ヨウカンとかマンジュウとかは知ってる？」
「はいッ。どちらも甘くておいしい東菓子（あずまがし）です」
「やっぱり同じ文化圏なんだね」
　サクラやツバメと言った東方人に知り合いがいるからこそわかる東方トーク。レンもこちらに来て初めて故郷の話題で盛り上がったのが嬉しいのだろう。とても楽しそうな表情を浮かべている。
　――そんな仲のいい二人を見て、急激に機嫌を悪くする者が約二名。
「って事はその、あれも食べる訳？　豆を発酵させた、ネチャネチャしてて強烈な匂いを発する食材なんだけど」
「ナットウですか？　私も大好きですよ」
「……やっぱりか。他の東方料理ならおいしいって素直に言えるんだけど。あれはどうも食欲が沸かなくて……」
「えぇ～、おいしいですよナットウ」
　同じ趣味や話題があると、人というのは意外にもあっさりと距離が縮まるものである。特に東方地方と西竜諸国や大陸中央部とでは文化などがまるで違う為、彼女のように出稼ぎで中央部へと出て来る東方人の多くは全く違う文化に直面してよくホームシックにかかる傾向がある。だからこそ、故郷の事が少しでもわかる人がいるとまるで子供のように大喜びしてしまうのだ。
　嬉しそうに故郷の話をするレンを見て、エリーゼの瞳がキッと鋭くなる。
「腐った豆の話なんてどうでもいいのよッ！　こっち来なさいレンッ！」
「く、腐ったなんて心外ですッ！　こちらで言うチーズやヨーグルトと同じ発酵食品であって――ふぃ、ふぃらいれふぅッ！」
「口答えしてんじゃないわよ田舎者ッ！」
「ふえええぇぇぇッ⁉」
　エリーゼは不機嫌そうな表情のまま、涙目になるレンの頬を引っ張って連行する。その途中、一度振り返ると呆然としているクリュウをまるで親の仇を見るような、若干殺意の込もった眼光で睨みつけ

る。その瞳が意味するのは――妹にちょっかい出したらブチ殺す、という至極わかりやすい直球的な意味であった。
エリーゼの本気の怒りの直撃を受けたクリュウは恐怖のあまり硬直し、顔が引きつる。
牽制するようにしばし睨んだ後、エリーゼは「ひ、ひらいれふぅッ！　はらひてくらはいぃッ！」と訴えるレンを無視して無理やり連行していく。
エリーゼが遠ざかった事でほっと胸を撫で下ろすクリュウ。すると、そんな彼の後頭部をシャルルが無言で引っ叩く。
「痛ぁッ!?　な、何だよシャルル……ッ！」
「知らないっすッ！」
プンスカと怒りながら、シャルルはまるで八つ当たりをするかのように釣りカエルを次々に鷲掴みにしていく。その怒る背中を見ながら、クリュウは疑問符を頭の上に浮かべまくるのであった。
エリア1で釣りカエルを十分採取した一行は今度こそガノトトスに対しての接敵機動を開始する。すでに威力偵察の段階で確認済みであるガノトトスが出現するであろうエリア5へと向かう。エリア1からアプトノスが穏やかに草を食べているエリア2を抜け、この狩場の分水嶺とも言うべきエリア3へ達する。ここは通って来たエリア2を始めとしてエリア4、5、7へと続く道が通っている。
ガノトトスが出現するであろうエリア5、6、8は全て一直線に繋がっている。その為今回はエリア4と7はまず使う事はないだろう。
エリア5は細長いエリアで、エリア3から入ると正面に幅の広いなだらかな川が見える。それぞれ右に行けば森林地帯のエリア4へ、左に行けば同じ川沿いのエリア6へと出られる。エリア6からは地底湖のあるエリア8へと行けるので、必然的にガノトトスの行動範囲外で最も近い先程のエリア3が前線拠点となる。その為、四人は事前に邪魔になるかもしれないイーオスを片付けてからエリア5へと入場している。
エリア3までの木々が密集した森林地帯に対し、ここは背の高い木は壁際にしか生えておらず、中央部は踝（くるぶし）程の高さしかな

い草が生えている程度。見通しは良好だ。ついでにガノトトスの巨体が暴れ回るだけの広さもある。
エリア5に侵入した四人。先頭に立つクリュウが後続の三人を制止した。
ここから川の様子を見る限り、ガノトトスの姿はない。エリアにはガノトトスとは別にイーオスが三匹動き回っている。
「レン、川の様子を詳しく偵察できる？」
「や、やってみます」
エリーゼの問いにうなずき、レンはティーガーと呼ぶ奇妙なライトボウガンを構える。ライトボウガンのスコープは双眼鏡と同じく遠くの物を大きくして見る事ができる。こういう偵察では実に役立つ存在だ。
「……見た限りではガノトトスの背ビレらしきものは見えません。おそらくはエリア6か8にいるものと思われます」
レンの報告を受けて三人の肩から少し力が抜ける。拍子抜けしたのではなく、遭遇戦に備えて緊張していたのだ。そのうち、今不要な気を抜いたに過ぎない。
「とりあえず、先にイーオスを片付けよう」
事前の作戦方針ではガノトトスを追ってエリアを動きまわるのではなく、一つのエリアの状況を整えて待ち伏せをする事になっていた。いつもの面子なら遭遇戦でも十分戦えるが、今回のメンバーではそれは練度的に難しい。相手が水辺限定でしか行動できないガノトトスだからこそ使える戦法だ。
とりあえず、クリュウはここをその戦場に選んだのだ。
「私に命令してんじゃないわよ。言われなくても――行くわよレン」
「はいですッ」
「シャルも全力全開で行くっすッ！」
エリーゼの掛け声一つで、一斉に三人の少女（ハンター）達が動く。一人動きそびれたクリュウはそんな三人の背中を苦笑しながら見送る。
「レンは左翼のイーオスに、シャルルは右のイーオス。中央の奴は私

が引き受けるッ！」
「はいですッ！」
「任せておくっすッ！」
エリーゼの指示に従い、三人はそれぞれ指定された自身の目標へと接近する。
迫り来る侵入者に対して中央の、エリーゼ担当のイーオスが敵襲の声を上げる。その声に他の二匹も戦闘態勢に入る。
一番最初に目標に到達したのは野生児シャルルであった。姿勢を低くしながら突進しつつ、その腕はすでに背中に携えられたイカリハンマーを掴んでいる。イーオスの少し手前でイカリハンマーを構えると、威嚇の声を上げるイーオスの側頭部に容赦なく一撃を叩き込む。その豪快な一振りにイーオスは悲鳴を上げて吹き飛ばされる。
力任せに振り抜かれたハンマーの重量に、シャルルは一瞬たたらを踏んだ。その動きを見て、やっぱり初心者だなぁとクリュウは感じた。先日の狩猟笛使いのルーデルはあの程度の動きでは一切重心が乱れなかった。使う武器の重量が違うとかではなく、ちゃんと武器と自分の体を使いこなせているか、その差は歴然であった。
しかし荒削りではあってもシャルルの才能もまた驚くべきものだ。一瞬たたらを踏んで動きが鈍ったシャルルだったが、すぐに体勢を立て直して吹き飛ばされたイーオスに果敢に突進する。
起き上がったイーオスは迫るシャルルに向かって毒液を吐きつける。普通なら避ける所だが、シャルルは避けようとしない。次の瞬間、ハンマーを豪快に振るった。
「ストライクっすッ！」
粘着質の毒液はシャルルのイカリハンマーに直撃――打ち返された。これには遠くで見ていたクリュウは度肝を抜かれる。あんな荒業、見た事も聞いた事もない。
打ち返された毒液はそのまま撃ち出したイーオスの顔面に付着する。その瞬間、イーオスは苦しげに悲鳴を上げた。
イーオスの毒は頭の毒袋にある時点では無害であり、敵に向かって吐き出されて初めて毒素が生じる。イーオスの毒牙で作られた毒弾

ＬＶ２でイーオスが毒状態になるのがその証拠だ。
毒状態まで行かなくても毒液が顔面に直撃した事で視界を封じられ、イーオスはパニックに陥る。そんなイーオスとの距離を一気に狭め、シャルルは自分の体を軸にしてイカリハンマーを振り回す。連続攻撃に向かないハンマー使いが編み出した回転攻撃だ。
一撃、二撃は堪えたが、三撃目で耐え切れずにイーオスは吹き飛ばされる。回転攻撃の後に反動で一瞬動けなかったシャルルだが、すぐに追撃を開始する。
「ギャアッ！」
迫り来る敵に対して果敢に反撃を試みるイーオス。だがシャルルは力をグングン溜めながら彼我の距離を一気に詰める。そして、イーオスの眼前でイカリハンマーを大きく振り上げ、
「でぇりゃあああぁぁぁッ！」
一気に叩き落す。ハンマー最大の攻撃力を誇る溜め攻撃大、通称《スタンプ》。その凶悪なまでの破壊力を誇る一撃に、イーオスの体は叩き潰される。ハンマーを上げると、イーオスはピクリとも動かなかった。それを見てシャルルはニィッと勝利の笑みを浮かべる。
「シャルの持ってる武器で一番の攻撃力を誇るイカリハンマーは最強っすッ！」
天高く勝利の∨サインを掲げるシャルル。その動きは、一年前とは比べ物にならない程に成長している事がよくわかった。
一方、同時並行してレンも攻撃を開始していた。イーオスが飛び掛かって来れる距離及び毒液の到達範囲外、要するにイーオスの間合いの外からそれ以上の射程距離を誇るライトボウガンで攻撃する。
ティーガーに装填されているのは攻撃力があり使い勝手のいい為にボウガン使いが主力弾としている通常弾ＬＶ２。片膝を着いてしっかり体を固定して、一撃をお見舞いする。撃ち出された弾丸は一直線にイーオスの胴体に突き刺さる。続けて二撃、三撃と繋げて着実にダメージを蓄積させる。だが一撃一撃だけではライトボウガンの攻撃力では微々たるものでしかない。イーオスも構わずに突進して来る。それに合わせてレンも横に動くが、思った以上にイーオスの迫

る速度が早く、あっという間に眼前まで迫られてしまう。
「ひゃあッ!?」
――偶然か。レンは足元で何かに躓いて豪快にすっ転んだ。結果的に倒れ込んだ事でイーオスの噛み付き攻撃を避ける事になった。
慌てて起き上がり、再びイーオスとの距離を開いてから再攻撃。ガンナーは剣士と違って的確な間合いを常に確保しておかないといけない。ガンナーの防具は剣士よりも頑丈にはできていないし、ライトボウガンには盾が備えられていないのでガードもできない。接近されたら身を守る術がほとんどないのだ。
毒液で応戦して来るイーオス。レンはスコープで狙いを付けながら的確にその口の中に弾丸を捻じ込む。
「ギャオッ!?」
口の中に銃弾が飛び込み驚くイーオス。そこへ連続してさらに銃弾がその身に次々に突き刺さって行く。イーオスは耐え切れずに転倒する。レンはその隙に銃撃を続けながら接近する。
ランポスとイーオスでは体力が倍以上違う。イーオスはしぶとく起き上がって接近するレンに反撃を試みようとするが、その行動は既にレンは想定済み。イーオスの眼前にまで接近したレンは怒号を上げるイーオスの側頭部に向かって――ティーガーで殴りつけた。
その光景にクリュウが驚いていると、さらにレンは右足でイーオスを蹴り飛ばしてたたらを踏ませると、その一瞬の隙でイーオスのこめかみに銃口を突きつける。そして無言のまま引き金を引き、戦いは終わった。
同じライトボウガン使いでもやっぱり違うんだとクリュウは改めて感じた。
間合いを開けながら繊細な攻撃や的確な支援を行うフィーリアに対して、レンは間合いを開けつつも攻勢に出る時はぐっと弾の威力が最大になる所まで接近する攻撃型。同じ武器でも、使う人によってここまで差がある。ガンナーとは個性が剣士以上に表れる。
というか、正直レンの戦い方には驚かされた。キャラクター的にはフィーリアのような支援型のガンナーかと思ったが、実際はバリバリ

の攻撃型のガンナーらしい。
そして、ガンランス使いのエリーゼは――
「せいやッ！」
勇猛な掛け声と共に空気の壁を貫くような鋭い突き攻撃を放つ。その一撃はイーオスの肩へと吸い込まれ、砲口のすぐ下に取り付けられている刃がイーオスの真っ赤な皮膚を引き裂き、同色の血を撒き散らせる。
「ギャアッ!?」
「まだまだ、次ッ！」
グッとガンランスを引き戻し、再び鋭い突きを放つ。腕だけではなく、足、腰、腕など体全体を使っての鋭い一撃。その容姿はまるでレイピアを降る騎士のよう。爆発的な加速力から生み出される一撃は、的確にイーオスの体を貫く。
体を刃で貫かれ、イーオスは悲鳴を上げる。憎々しげに睨む先には、余裕の表情を浮かべた敵の姿がある。
「ぶっ飛びなさいッ！」
エリーゼは容赦なく引き金を引く。その瞬間、ガンランスの名の由来となっている砲撃が炸裂する。強烈な爆発の直撃をゼロ距離で受けたイーオスは悲鳴を上げる事もできずに吹き飛ばされる。
地面に倒れたイーオスに、エリーゼはゆっくりとした足取りで迫る。
迫り来る敵に対してイーオスは慌てて起き上がろうとするが、エリーゼはそれを阻むようにしてガンランスの刃先を胴体に向かって突き刺す。深々と突き刺さった一撃はそのまま胴体を貫通して刃先は地面をも貫き、真っ赤な鮮血を迸らせる。
串刺しにされ、激痛に悶え苦しみ、動けない事に対する焦りからイーオスは暴れるが、その身は自身を貫く刃によって起き上がる事すらできない。
「邪魔なのよ、あんた――消えなさい」
そう冷たく言い放ち、エリーゼは容赦なく砲撃の引き金を連続で引く。

続けざまに炸裂する至近距離での砲撃の嵐。イーオスはそれから身を守る術も避ける術も持たず、ただ無情な攻撃を受け続けるしかない。

弾倉の中が空っぽになると同時に、イーオスは息絶えた。エリーゼは無言で刃を引き抜く。後には焼け焦げたイーオスの死体が残されるだけ。

女子陣三人の各個総攻撃で、イーオスの小隊はあっという間に殲滅された。シャルルは豪快に笑っているし、レンはすぐに装填（リロード）して弾倉をリセットし、エリーゼは淡々と剥ぎ取りを行っている。何というか、実に個性の強い面子が揃っている。

自分の出る幕もなく終わった戦いを見てクリュウは苦笑しながら、準備を開始する。まぁ、準備と言っても荷車をエリア６へと通じる道の木の影に置き、枝などを上に適当に撒いて簡易的に隠すだけ。本来なら爆弾や罠の用意をする所だが、ガノトトスはリオレウスなどとは違い陸上では積極的には動かず、一ヶ所に留まって中距離から遠距離では水ブレス。近距離では旋回攻撃や体当たり攻撃をするのみという、ある意味固定砲台のような戦い方をするので無闇に罠を仕掛けても無駄に終わる事が多い。

ガノトトスに対して罠を仕掛けるのは、ある意味リオレウスやリオレイアに対して行うのよりも難しいのだ。

とりあえずひと通りの準備を終えたクリュウは腰にレウスヘルムを下げながら早速荷車から釣りカエルの入った小タルを取り出す。フタを開けると、中にはシャルルが取っ捕まえた釣りカエルが何匹も入っている。

「……本当に、こんなのでエサになるのかな？」

教科書でしか知らない対ガノトトス用の常套手段。それがこの釣りカエルを使ってガノトトスを文字通り《釣り上げる》という技。ガノトトスはこのカエルが大好物であり、こちらが気づかれいない状態で釣りをすれば、ほぼ確実に掛かるらしい。リオレウスやリオレイアと戦って来たクリュウからしてみれば、大型モンスターがこんな簡単な仕掛けに引っ掛かるなんて信じられないくらいだ。そもそも、

「……人間の腕力で釣り上げられるものなの？」
普通に考えれば圧倒的な体格差と質量の違いがある人間とモンスターなど、力比べにもならないで人間が負けるのは当然だ。それなのに、通常モンスター最大の大きさを誇るガノトトスが人間の力で釣れるなど、到底信じられない。
教科書によればガノトトスは口の中に異物が入ると全身の力が一気に抜けてしまい、タイミング良く人間が全力を注げば釣り上げる事はできると書いてあった。サメが鼻を押さえられると力が抜けるのと同じ理屈とは書いてあったが、それでも信じがたい。
「バリスタにロープを括り付けて引き上げる、ってのならわかるけど。こんな細い糸で釣り上げるなんてできるのかな……」
「何ブツブツ言ってんのよ」
一人考えを巡らせていると、エリーゼが呆れたような表情を浮かべてすぐ横に立っていた。
「いや、本当にこんな物でガノトトスが釣れるのかなって」
「……まぁ、私も常識で考えれば無茶苦茶だとは思うけど」
「でしょ？」
「でも、ビスマルク先生がウソを言うと思う？」
エリーゼの試すような口調に、クリュウは一瞬昔を思い出した。この技を説明してくれたのは、クリュウが最も信頼を寄せている教官、フリード・ビスマルクだった。彼は現役時代にはキングサイズのガノトトスを釣り上げたと豪快に笑いながら言っていた。あの時の自分は、フリードの言葉を微塵も疑わずに彼を尊敬していた――なぜか。それは、彼に対する絶対の信頼があったからだ。
自分が尊敬するビスマルク先生は、決してウソを言わない。シャルルと同じ、真っ直ぐ過ぎるくらいに真っ直ぐな人だったからだ。
フリードがウソを言う訳がない。だったら、彼が教えてくれたこの技も決してウソではないのだ。
「……そうだね、ビスマルク先生がウソを言う訳ないもんね」
「そうよ。私が尊敬するエセックス先輩が惚れた相手よ？　信頼して当然じゃない」

「――でもさ、それってビスマルク先生の化け物じみた怪力が成せる技のような気もするんだけど……」
「……あぁ、そう言われると返す言葉がないわね」
途端に自信をなくしたような表情になるエリーゼを見て、クリュウはおかしそうに笑う。エリーゼも小さく吹き出しながら笑みを浮かべた。
先程レンとの一件があった以降エリーゼはしばし険悪な雰囲気を纏っていたが、ここに来てようやく少しは緩和されたらしい。クリュウは内心ほっと胸を撫で下ろす。
少しして、四人は川辺に近寄ってガノトトスの一本釣りの準備を始める。釣りカエルに針を仕込み、それを川に放り込む。生きているカエルに針を刺すというのは結構残酷だが、これも任務の為。クリュウは多少の罪悪感を感じながら釣り針を付けたカエルを川に放つ。まぁ、当然ながらレンは自力ではできずにエリーゼにやってもらい、レンがお礼を言ってエリーゼが素直じゃないコメントを放つという二人の世界に入っている。
とりあえずガノトトスの気配もないので四人はそれぞれ竿を地面に突き刺してその周りに石などを置いてで固定し、その場を離れる。
「今のうちに小腹を満たしておきませんか？　私、お肉焼きますよ」
そう言いながらレンはてきぱきと肉焼きセットの準備を整える。その横では事前に持ち込んでいた生肉を両手にそれぞれ一本ずつ持って今か今かとレンの準備が終わるのを嬉々として待つシャルルの姿がある。それを見て、クリュウは呆れる。
「シャルル、さっき昼飯散々食ったのにまだ食い足りないの？」
「シャルは育ち盛りだか人よりもら腹が減りやすいんっす。それに、狩場で焼いて食うこんがり肉は滅茶苦茶うまいんすからッ！」
「まぁ、それは認めるけど……」
「ほんと、相変わらずあんたは燃費が悪いわね。そんなに食べてたら太るわよ？」
「問題ないっすッ。シャルは太りにくい体質だからいくら食べても太らないっすッ」

無邪気に、何の悪気もなく、別に自慢するでもなく自然に言い放つシャルルだったが、それは全世界の女性に対する宣戦布告発言とも言うべき危険性を孕んでいる事を、彼女は気づいていない。事実、肉焼きセットの準備をしていたレンがピタリと動きを止め、エリーゼの表情は引きつる。一方、女子ではないクリュウは「お前は無駄に動きまわるからなぁ」とズレたコメントを放っている。

「あ、あんたねぇ……」

顔を引きつらせながら、爆発寸前の激怒を必死に押さえ込みながら震える声を搾り出すエリーゼ。シャルルは知らない、エリーゼはほんの二週間前まで大好きな甘い物を我慢してダイエットをしていた事実を。そして、そんな彼女の苦しむ姿を間近で目撃しつつ、自分も最近ちょっと太ったかもと不安に陥っていたレンは顔を真っ青にしておろおろとしている。

女子陣の空気が変わった。それくらいは鈍感なクリュウにでもわかるが、戸惑うばかりで全く役に立たない。

顔を引きつらせながら、エリーゼは嬉々として「レン、肉焼きの準備はまだっすか？」と無邪気に訊いているシャルルに向かってビシッと指差す。その指先の延長線には――シャルルの控えめな胸が。

「その体質が災いしてんじゃないかしら？　あんた、太らない代わりに胸も全く成長していないじゃない」

その言語に、シャルルの表情が真っ青になる。チラリと自分の控えめな胸を見ると、胸越しに足元がバッチリと見える。シャルルが憧れるのは胸で足元が見えない、そんな大きな胸。自分のそれはその夢を果たすにはあまりにも遠い。

真っ青だった顔は怒りによってカァッと真っ赤に染まる。さっきまで肉焼き、こんがり肉、飯と満面の笑みを浮かべていた顔は今では猛烈な激怒顔へと変貌している。

「お、大きなお世話っすッ！」

「大きなお世話、小さなお胸って訳？」

「……お前、マジでブッ殺すッ！」

怒り狂うシャルルは両手に持った生肉を振り上げる。肉の部分な

ら痛くはないだろうが、突き出た骨の部分なら凶器になりかねない。クリュウは慌てて止めに入る。
「ちょ、ちょっと二人とも落ち着いて。そんな事くらいでケンカしなくても――」
「そんな事って何よッ！」
「兄者はすっ込んでろっすッ！」
二人は一斉にクリュウを怒鳴りつける。二人の激しい憤怒に満ちた表情の直撃を受け、クリュウは押し黙って一歩引く。彼の無自覚さもここまで来ると罪である。
ギャーギャーと言い合うエリーゼとシャルル。学生時代はいつもこんな感じだったのかと思うと、相当周りに迷惑を掛けていただろう。当人達はたぶん気づいていないだろうが。
クリュウはため息を零すと、ふとレンの方を見る。先程まで彼女はてきぱきと肉焼きセットの準備をしていたが、現在はなぜか止まって頻（しき）りに自分の胸をペタペタと触ってはため息を零している。
「大丈夫？　気分でも悪いの？」
クリュウが心配そうに声を掛けると、レンはビクッと体を震わせる。振り返ったレンはなぜか引きつった笑みを浮かべながら「へ、平気ですよぉ……」と返す。
ここは一応危険な狩場なのだが、クリュウ達はまるで村にいる時のような調子でいる。過剰に緊張するよりはいいのだが、これでも一応村の存亡を懸けた戦いに赴いているという事は忘れてもらっては困る。
しばらくしてようやく女子陣が立ち直り、気を取り直して今度こそレンは肉焼きセットの組み立てを終え、四人は戦の前の簡単な腹ごしらえを始めるのであった。
「う、うっま～ッ！　何すかこれッ!?　こんなにうまいこんがり肉初めて食ったっすッ！」
感動の声を上げ、シャルルはガツガツとこんがり肉Ｇを食べまくる。その様子を見て焼いた本人であるレンは嬉しそうに微笑み、クリュウは苦笑を浮かべ、エリーゼは呆れる。

「大げさね、たかがこんがり肉Ｇくらいで」
「何恐れ多い事言ってるっすかッ!? こんなうまい肉を、たかがだなんてッ！」
「バカ。んなもん高級肉焼きセットとテクニックさえあれば誰でも作れるわよ」
　そう言ってエリーゼが見詰める先にはレンの肉焼きセット、正確には高級肉焼きセットがある。これは普通の肉焼きセットと違って性能が極めて良く、こんがり肉の成功率が上がり、さらには絶妙なタイミングでよりおいしいこんがり肉Ｇが作れる優れものだ。クリュウのチームではフィーリアが愛用している道具だ。
「それにしても、高級肉焼きセットなんてレンだと結構手に入れるのにお金掛かったでしょ？」
　知名度もあり大型モンスターを相手にする事が多いフィーリアなら資金は潤っているだろうが、まだまだかけだしのレンではそうもいかない。事実、レンは小さく苦笑を浮かべながら答える。
「そうですね。お小遣いを削って、生活費も切り詰めて、報酬からも少しずつ貯金して、アルザス村に来る前にやっと買えたんです」
「そりゃ大変だよね。ドンドルマみたいな都会って何かとお金が掛かるし。そこまでして欲しかったの？」
「はいッ。色々な人とチームを組んだ際に、皆さんに喜んでもらいたくて。皆さんに笑顔になってほしくて、がんばりましたッ」
　嬉しそうに言うレンの言葉に、クリュウもまた自然と微笑んでしまう。何とまぁ心優しい子だろうか。他人に喜んでほしい為だけに自分の生活を切り詰めて高い装備を整えてしまう。本当にいい子だ。
「――でも、やっぱり一番はエリーゼさんに喜んで欲しかったんです。いつもいつも迷惑ばかり掛けてますから、少しでも恩返ししたくて」
　そして何より、本当にエリーゼを姉のように慕い、親友のように信頼し、大切に想っている。本当の本当にいい子だ。
「エリーゼはきっと迷惑なんて思ってないよ。だって、君をすごく大切にしてるもの。口では言わないだけで、君の事が大好きなんだよ」
　クリュウが思った通りの事を言うと、レンは無邪気に嬉しそうに微

笑む。
「えへへ、私もエリーゼさんが大好きです」
血が繋がった本当の姉妹じゃないけど、本当にいい姉妹だ。エリーゼ・フォートレスとレン・リフレインは。
そんな感じでレンと楽しげに話していると、背後から猛烈な殺気を感じて振り返る。すると、ガツガツと「うま～ッ！」と単純極まりない感想を叫んでいるシャルルの横から、エリーゼが睨みつけているのが見えた。嫌な汗が、流れる。
クリュウは顔を真っ青にしながらレンの方へ向き直る。レンもエリーゼの視線に気づいているらしく、自分のせいでクリュウが怒られている事に罪悪感を感じているのだろう。申し訳なさそうな表情を浮かべて頭を少し垂れる。
クリュウは「いいよいいよ」と言ってレンから離れる。同時に、今度はエリーゼがレンの横に座る。レンが何事か、きっと弁明しているのだろうがエリーゼは問答無用とレンの頬を引っ張る――本当にいい姉妹、なのかな？
クリュウは苦笑を浮かべながらいつの間にか三本目のこんがり肉Gを貪（むさぼ）るシャルルの隣に腰掛ける。
「お前、一体どんだけ食うつもりなんだ？」
「失敬っすね。それじゃまるでシャルが食い意地が張ってるみたいじゃないっすか」
「そのものズバリでしょ」
「う、うるさいっすッ」
シャルルはぷくぅッと頬を膨らませてプイッとそっぽを向き、クリュウを無視してこんがり肉Gを頬張る。その頬は羞恥の為か、少し赤らんでいる。
クリュウは不機嫌そうに、でもガツガツとこんがり肉を頬張るシャルルの姿を見て「お前、やっぱ変わってないなぁ」と苦笑を浮かべる。
「だから、シャルだってちゃんと成長してるっすよッ！」
「わ、わかったわかった。わかったから――口の周りくらいちゃんと拭きなよ」

クリュウはハンカチを取り出すと文句を言おうとするシャルルの口をそれで塞ぐ。そのまま、彼女の油でベットリと汚れた口周りを拭う。意外にも、抵抗するかと思われたがシャルルは微動だせずにそれを受け入れる。
「ほら、これ使っていいから。食い終わったらまた拭いておきなよ」
クリュウはそう言ってシャルルにハンカチを渡すと、一人釣竿の方へと歩いて行く。そんな彼の背中を見詰めながら、シャルルは渡された彼のハンカチをギュッと握り締める。
「……変わってないのは、兄者も同じっす」
なぜか急に食欲が失せ、シャルルは保存用の紙で食べかけのこんがり肉Gをラッピングする。そして、ちょっぴり嬉しそうな笑みを浮かべながら、シャルルはクリュウのハンカチを大事そうに握り締めるのであった。
一人川辺に来たクリュウはそこに並べられた四本の釣竿を見る。今の所、変化はないようだ。
「こりゃ、長期戦になるかな……」
苦笑しながらそう言うと、クリュウは三人の所へ戻ろうと踵を返す。その時、ピクリと一本の釣竿の先端が動いた。振り返ると、それは彼自身の釣竿であった。
「波、かな……」
波で揺れたにしては明確に動いたような気がした。生きエサの釣りカエルのせいかなと、クリュウは何気なく川へと伸びている釣り糸を視線で追い――絶句する。
流れが比較的緩やかな川は、せせらぎの音を響かせながら右から左へと水が流れ続ける。水面には流れによって生み出させる一瞬一瞬で変化する波模様が描かれている。その光景は、自然が生み出した動く絵だ。
その美しい波模様が広がる水面に、何かがある。
水面から突き出ているのは一列に並んだ数本の赤い針。その間に黄ばんだ膜が張られ、まるで船の幌のようにも見える。だが、その用途は決して風を受ける為のものではない。

それは大きなヒレだ。水中には、水面に出たわずかな部分とは比べ物にならない程に大きな影がが横たわっている。
一瞬で状況を理解したクリュウはすぐに自分の釣竿を掴む。引っ張ってもビクともしない――巨大な何かが引っかかっている手応えだ。
次の瞬間、釣竿が強烈な力で引っ張られる。すぐにクリュウは足を踏ん張ってその力に逆らおうとするが、力の差は歴然。グイグイと彼の体は川の方へと引き寄せられる。
「このぉ……ッ」
足を限界まで踏ん張るが、それでも体は川辺へと引きこまれていく。足の先が、川の水に触れる。
「……ぐぅッ」
「兄者ぁッ！」
ここでようやくクリュウの異変に気づいたシャルルが駆け寄って来た。今にも川の中に引きずり込まれそうな彼の背中から抱きつき、
「助太刀するっすッ！」と彼の体ごと後ろへと引っ張る。
「クリュウさんッ！　シャルルさんッ！」
「ったく、何やってんのよバカッ！」
レンとエリーゼも合流し、クリュウの腰、腕、そして釣竿に仲間三人の力が加わる。力比べは何とか互角にまで並んだ。あとは、気合の勝負だ。
「お、重いぃ……ッ」
「当たり前でしょバカッ！　無駄口叩いてないで引っ張りなさいッ！」
「ぬおおおりゃあああぁぁぁッ！」
「はうううッ」
四人は全力で掛かった獲物を引っ張る。すると一歩、また一歩と後退し始める。若干ながら、クリュウ達の力の方が優っていた。
釣竿は今にも折れそうなくらいに撓（しな）る。それよりも糸の方が切れてしまいそうなくらいに引っ張られる。
必死になって釣竿を掴み、引っ張り上げようとするクリュウ。だが

その視線は釣竿には向いていない。彼の視線の先にあるのは、暴れ回るヒレ。
フリードはタイミングが大事だと言っていた。つまりヒレが横や後ろ向き、こちらの引っ張る方向と違う向きの力が働いている間はどんなにがんばっても人間の力でモンスターの巨体は釣り上げられない。
――狙うは、相手がこちら向きになった瞬間。その一瞬だ。
必死に釣竿を引っ張りながら、クリュウはそのタイミングを見極める。そして、その時が来た。
「今だッ！　引っ張れえええええええええッ！」
ヒレの向きがこちらに向いた瞬間、クリュウは声を上げながら一気に引っ張る。他の三人も一斉に全力で引っ張る。
手応えが違った。
先程までの力と力の勝負である引っ張り合いではない。一瞬重かったが、それが過ぎると呆気無いくらいに力が抜ける。クリュウ達は引っ張られる力を失い、一斉に後ろへと倒れる。その頭上を、太陽の光を遮るようにして巨大な影が横切る。その光景に、クリュウはニッと不敵に笑う。
直後、背後に巨大でとてつもない重量を持つ何かが叩きつけられる音と衝撃が響く。四人はすぐに起き上がり背後を確認すると、そこには巨大な生き物がのた打ち回っていた。
胴回りの大きさだけで人の身の丈に匹敵する程の大きさ。全長はイャンクックの二倍以上はあるだろう。全身を覆うのはリオレウスの凹凸激しい鎧のような真っ赤な鱗や甲殻ではなく、水中で高速で泳げる為に特化した平面でツルツルの鱗。だが、その強度はリオレウスにも引けを取らない。色も光の届きにくい深海で身を潜める為か黒を基調としている。
巨大な翼は飛行する為ではなく、水中での機動力を発揮する為パドルの役割を担っており飛行性能はないに等しい。それがガノトトスが飛竜種ではなく水竜種に類別される所以だ。まさに水中に特化したモンスターなのだ。

ただし、グライダーのような短距離での滑空性能は有しており、多くのハンターがこの滑空攻撃で命を落としている恐るべき攻撃だ。
しばしの間、突如無理やり揚陸させられた事でパニックに陥ってうまく立ち上がれずジタバタともがいていたガノトトスだったが、ついに体をバウンドさせるようにして一気に立ち上がる。
その体高もまた、通常モンスターの中ではトップクラスだ。ヒレの先端までの高さは優に人の身の丈三倍はあろうか。陸上で行動する事が少なく、主に水中で活動するからこその巨体だ。
一度威力偵察で戦っているとはいえ、それでもその常識外れなな大きさに圧倒されるシャルル、エリーゼ、レン。クリュウもまた初めて対する為に驚きはしたが、すぐに戦闘態勢に移行する。そこは、三人とは踏んで来た場数が違う。
クリッとした瞳が鋭くなり、すばやくレウスヘルムを被る。バイザーを片手で下ろし、もう一方の手でバーンエッジを引き抜く。一瞬、爆発するように炎が踊り狂った。
クリュウから一瞬遅れて三人もそれぞれ戦闘態勢に入る。常に武器を構えながら戦うハンマーのシャルルとライトボウガンのレンはすぐに武器を構える。一方、鈍重な動きの為に攻撃の際のみ武器を構えるガンランスのエリーゼはグリップに手を掛ける。
リオレウスのように、ガノトトスはバインドボイスは使えない。戦いの始まりを告げるのは、クリュウの一言だ。
「行くよみんなッ!」
クリュウの掛け声を合図に、四人は一斉に動き出す。
川に背を向けていたガノトトスはゆっくりと振り返り、クリュウ達と静かに対峙する。
この瞬間、クリュウ、シャルル、エリーゼ、レンの四人とガノトトスの戦いの火蓋が切って落とされた。

第１３６話　過去の傷跡に誓し想い

まず最も危険であるモンスターの正面を避けるようにして散開するクリュウ達。横に向かって走りながらクリュウはガノトトスの姿を確認する。

水の抵抗を減らす為に尖った顔。裂けたような大きな口に並ぶのは鋭利な刃物のような鋭い刃。その隙間から漏れる息は真っ白で、それが怒り状態だという事を意味している。

ハンターはガノトトス相手では音爆弾や釣りカエルで陸上に上げてから戦うのが普通であるが、この方法だとガノトトスは怒り状態になってしまう。だがガノトトスは怒り状態が解けると今度は再び水の中に潜ってしまうので、また音爆弾などで引っ張り出さなければならない。

つまり、ガノトトスを陸上で相手にする時は常に怒り状態と言っても過言ではない。

全てにおいて今までのモンスターとは勝手が違う。それが水竜ガノトトスだ。

横に逃げるように走るクリュウ。その時、ゾクリとする視線を感じた。見ると、ガノトトスが自分を狙ってゆっくりと旋回しているのが見えた。

すると、ガノトトスはグッと体を持ち上げ、顔をもたげる。その動作に、クリュウはガッと地面を蹴り抜いて一気に加速する。次の瞬間、ガノトトスの口から猛烈な勢いで一直線に水が吹き出した。細い、人間の腕程の太さの水鉄砲。だがそれは鉄砲などと言うにはあまりにも勢いが違い過ぎた。

咄嗟に速度を上げたクリュウが一瞬前までいた場所に着弾した水ブレスは、そのまま地面砕き、吹き上げ、抉り飛ばす。振り返ると、着弾箇所は大きく地面が抉り取られていた。

ただの水が、地面をも砕く凶悪な武器に変わる。それがガノトトスの水ブレスだ。体内に蓄えた水を限界まで圧縮して撃ち出す。その威力は抉れた地面が物語るように、人程度なら一撃で防具まで砕かれ

てしまいかねない程に凶悪だ。
クリュウは目の前でその威力を見せられ、ゾッと背中が冷たくなるのを感じた。
離れ過ぎるのは危険と判断し、ひとまず中距離にまで接近する。その時、ガノトトスの右側面から一直線に猛突撃する者がいた――シャルルだ。
「うおりゃあああぁぁぁッ！」
水ブレス後の一瞬の隙を突いて一気にガノトトスの懐に入り込んだシャルル。ハンマーを構え力を溜めながら接近。そして、自分の胴体よりも太いガノトトスの脚に向かって思いっ切りイカリハンマーを叩き落とす。
小型モンスターなら一撃で吹っ飛ぶような一撃だが、ガノトトスはビクともしない。シャルルは舌打ちして横に転がるようにしてその場を離れると、ガノトトスのアキレス腱を狙って今度は連続してハンマーを叩き落とす。
一撃、二撃と打撃を落とし、三撃目にはスイングを叩き込むが、それでも目の前の脚はしっかりと立ち続けている。
もう一撃、と動くシャルルにクリュウが「深追いはするなッ」と叫ぶ。その声に反応してシャルルは一瞬で撤退に移行する。
シャルルの撤退を援護するように一発の銃声が轟く。刹那、ガノトトスの側頭部に銃弾が一発着弾。一瞬遅れて爆発し、その衝撃にガノトトスの気が一瞬シャルルから逸れる。
怯んだ隙を突いて安全圏にまで撤退したシャルルに代わり、今度はレンが一気に前に出る。使用した徹甲榴弾ＬＶ３から通常弾ＬＶ２に切り替え、連続射撃。狙いは寸分狂わず全弾首に命中する。レンの方を見ると、スコープで狙いをつけながら的確に首を狙って射撃している。先程のエリーゼからの忠告、ガノトトスの弾に対する弱点部位である首を狙い撃ちしているのだ。
エリーゼの言う事をちゃんと遂行する。実にレンらしい攻撃だ。
レンの集中攻撃にガノトトスは鬱陶しそうに彼女の方へ振り返ると、水ブレスを放つ。レンはライトボウガンの機動力を活かしてすぐ

に離脱を図っており、回避する。
レンに気を取られていたガノトトスの足元に、今度はクリュウとエリーゼが同時に攻め込む。クリュウは右脚に、エリーゼは左脚に。それぞれ攻撃を開始する。
クリュウは引き抜いたバーンエッジを引き抜く。空気に触れてバーンエッジの刀身から荒々しい炎が嵐のように吹き荒れる。炎を纏わせた刃を、クリュウは思いっ切りガノトトスの脚に向かって振り下ろす。
刃がガノトトスの鱗に叩きつけられた瞬間、荒々しい炎が爆ぜる。火に弱い水竜の鱗はシャルルの打撃でもビクともしなかったが、クリュウの炎撃に数枚弾け飛ぶ。
「行けるッ！」
クリュウは確かな手応えを感じ、そのまま二撃、三撃と連続してバーンエッジを叩き込む。
そんな彼の反対で、エリーゼもまた攻撃を開始している。
「せいッ！」
鋭い突きの一撃。斬るのではなく、貫く事だけに特化したその一撃はしかしガノトトスの分厚い鱗に阻まれる。弾かれた刀身は滑るようにして全く意図していない方向へと流される。
エリーゼは舌打ちし、今度は踏み込むと同時にガンランスを豪快に振り上げる。狙うは脚と違って堅い鱗の少ない腹。突き出された一撃は先程とは違う手応え。先程は弾かれた刃はしかし、今度はしっかりとガノトトスの腹に突き刺さる。それを見て、エリーゼに不敵な笑みが浮かぶ。
「やっぱり、教科書通りねッ」
エリーゼは知っている。学生時代に散々詰め込んだ知識の中に、ガノトトスの切断系及び打撃系の弱点が腹である事があった。
だが、ガノトトスの体高は高く、残念ながらクリュウの片手剣では届きそうもないし、シャルルのハンマーでも難しい位置取りだ。つまり、ここは自分だけのガノトトスの弱点。
そして、炎撃が最も効果のある部位。

エリーゼは一切の躊躇なく引き金を引いた。その瞬間、突き刺さった刃のすぐ上にある砲口から砲撃の一撃が射出された。至近距離で、しかも傷口に向かって弱点属性である炎攻撃。これは結構なダメージだ。

砲撃の反動で勢い良く刃を抜くと、そこから真っ赤な血が勢い良く吹き出した。エリーゼは一度バックステップで位置を変える。その瞬間、彼女はその大きな盾を構えた。同時にクリュウも同じように小さな盾を構える。

度重なる攻撃に、ガノトトスは半歩引いて身を縮める。次の瞬間、その長い体のリーチを最大に活かして、横殴りのような体当たり攻撃を放った。ただの体当たりではなく、その巨体を活かして広範囲に与える一撃。多くのハンターがこの理不尽な程に広い攻撃範囲に苦しめられ、巨体過ぎる故に目視の感覚が狂ってしまいうまく回避したつもりでも攻撃を受けてしまうなど、ガノトトスの厄介な攻撃の一つだ。

クリュウとエリーゼはそれぞれガードでこの一撃をやり過ごす。ただし、重量があるガンランスを携えたエリーゼはガードしてもビクともせずに、すぐにガードにすぐ移行できる状態で上段突きを放つが、軽量な片手剣を携えるクリュウは勢いに負けて大きく後退を余儀なくされる。当然、すぐに攻撃にも向かえない。これが軽量であり機動力が売りの片手剣の弱点の一つでもある。

クリュウが抜けた穴を埋めるように、様子を窺っていたシャルルが戦線に加わる。

「どぅおりゃあああぁぁぁッ！」

勇ましい咆哮をしながらシャルルはイカリハンマーを構えながら突進すると、溜めていた力を一気に解放してハンマーを振るう。それもただ一撃した訳ではない。足を軸にして体ごと回転し、その勢いでもって連続でイカリハンマーを叩きつける。そして最後の勢いを利用して今度は打ち上げるようにしてフルスイング。

「ガウゥ……ッ!?」

シャルルの強烈な攻撃に、ガノトトスが初めて小さな悲鳴を上げて

怯んだ。さすが全武器の中で最大攻撃力を誇るハンマーだ。それにシャルルの力任せの力が加わった一撃は相当なダメージなのだろう。
シャルルはスイングした後すぐに横に転がってその場を離れる。同じ場所で戦い続けるのは得策ではないと、彼女は勘でちゃんとわかっているのだ。
一方、同じ場所で戦うのが得策という者もいる。先程からエリーゼは自慢の盾を利用してその場で連続して上段突き攻撃を繰り返している。あの体勢こそガンランス使いの真骨頂とも言うべきガード突き攻撃。盾ですぐにガードもできるし、確実に一撃一撃を入れられる戦法（バトルスタイル）だ。
ガンランスは全武器の中でもトップクラスの重量級武器であり、ハンマーのように軸を変える事で動きが阻害されない訳ではなく、構えたら常に動きが鈍ってしまう。その機動力のなさを補うように大きな盾を携えており、ガンランスは他の武器と違って回避ではなく防御主体で戦うのが一般的だ。
そしてエリーゼも、機動力のなさを捨てて一ヶ所に留まりながら攻撃を繰り返している。ガノトトスがまたあの体当たり攻撃を仕掛けるが、エリーゼは全く動じない。
体当たり攻撃に対して回避したのはガードのできないハンマー使いのシャルル。今度はクリュウが抜けたシャルルの代わりに戦線に加わる。そんな三人の剣士とは違い、ライトボウガンのレンは先程から自分の戦いを進めている。
最低限度仲間達の支援をするも、基本的には自分のやりたいように攻撃を繰り返している。支援型ではなく攻撃型ガンナーであるレンの常の戦い方だ。
最大攻撃力を誇る通常弾ＬＶ２を連続して首に向かって当て続ける。だが時々撃ち出された弾に手応えがない。そのたびにレンは唇を噛む。
ティーガーと彼女が呼ぶライトボウガンは東方技術を使われた武器だけあって、ドンドルマの武器職人でもわからない事が多数ある。その為の整備不良のせいか、それともこの武器本来の他を圧倒する攻

撃力の為か、不発弾とまでは行かないが時たま威力の弱い弾丸が吐き出される。一般的に言う会心率が低い武器なのだ。
それでも、その会心率の低さを補うかのように攻撃力の高いティーガー。完全攻撃型の武器であり、支援弾丸が一切使えないばかりか属性弾も全て使用不能。高い攻撃力を活かして通常弾と貫通弾を主力に戦う、それがこの武器の扱い方であり、レンの戦い方だ。
脚元に入ったクリュウはバーンエッジを振るう。剣を脚に叩きつけるたびに爆ぜる炎はガノトトスの鱗を焼き、鋭利な刃は熱せられて弱まった鱗を弾き飛ばす。確実なダメージが一撃一撃重ねられていく。
シャルルと同じように自分を軸に回転し、その遠心力を利用して放つ剣撃は炎を纏ってガノトトスの肉を焼き斬る。迸る血には見向きもせず、ただひたすらに剣撃を叩き込む。
そんな彼の隣ではエリーゼも奮闘していた。
「はぁッ！」
気合裂帛。重力に逆らいながら打ち上げられた銃槍は一直線にガノトトスの腹に突き刺さり、一気に引き抜く。迸る血など気にせず、連続して上段突きを放ち、三撃目で砲撃に切り替えて傷口に向かって砲撃を叩き込む。傷口に対して至近距離で苦手属性の炎撃。エリーゼの攻撃には一切の容赦がない。
ガンランスの必殺技は火竜リオレウスや雌火竜リオレイアの炎ブレスを参考に生み出した竜撃砲だ。だが竜撃砲はその絶大な威力と引換に発射まで一定の時間が必要な上、一度砲撃加速装置と呼ばれる機関を始動させればその場から動く事はできない。しっかりと身を固定しないと発射の衝撃で吹き飛ばされる事があるからだ。
さらに一度使えば加速装置の冷却にもまた一定時間必要で、その間は当然竜撃砲も使用不能となってしまう、まさに必殺技なのだ。
火属性を苦手とするガノトトスに対して絶大な威力を発揮するが、エリーゼはまだその撃つべきタイミングを測れずにいた。何せ連発ができない代物なので、適当にはできない。特にこの余力のないメンバーでは確実さが求められる。

エリーゼは竜撃砲を撃つタイミングを見ながらも、攻撃は豪快にして繊細に。前衛役として十分過ぎる活躍を見せていた。
ガノトトスはその巨大な体を旋回させて周囲を薙ぎ払うが、中心部である脚元にいる二人は構わず攻撃を続ける。中距離を保ちながら攻撃を繰り返しているレンもまた同じだ。
レンは通常弾ＬＶ２を的確に首に向かって連射させている。ガノトトスの巨大の攻撃範囲のギリギリ外であり、弾の威力が最大になる場所。まさに絶好の間合いでの攻撃の数々はガノトトスの意識を分散させるのに大いに貢献している。
ガノトトスは脚元にいる二人に対して体当たりをして追っ払おうとするが、二人はガードでそれをやり過ごす。クリュウは一時的に後退するが、エリーゼは構わず間髪入れずに砲撃を再開する。
ガノトトスは脚元のクリュウとエリーゼの攻撃が失敗すると、今度は距離を開けて攻撃しているレンに対して水ブレスを撃ち放つ。だが当然レンはそんなガノトトスの動きをしっかり見てその場を離れた為、難なく回避する。
一方、このガノトトスの動きを待っていた者が動く。
「うおっしゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
勇ましい雄叫びを上げながら突進するのはイカリハンマーを構えたシャルル。水ブレスを撃って一瞬動きの止まったガノトトスの頭部に向かって限界まで溜めた力を一気に解放するようにイカリハンマーを叩き落とす。その豪快にして強力な一撃にガノトトスが悲鳴を上げて一瞬仰け反った。
シャルルは深追いはせず、すぐに離脱を図る。ガノトトスに対してハンマーは不利だという事は彼女も重々承知している。だからこそ、こうした一瞬の隙を突いての確実な一撃を積み重ねる事に集中している。
本来はもっと肉薄して戦う事を好むシャルルだが、事前にクリュウから今回はそれは自分とエリーゼが担当する為、彼女には遊撃役に徹するよう指示が出ている。彼女の性格を十分理解したクリュウの根回しと彼女のクリュウに対しての絶対の信頼が成せるコンビネー

ションだ。
シャルルは再び中距離を維持してチャンスを待つ。
チームとしての連携はまだまだ未熟だが、とりあえず何とか最低限の連携はできている。クリュウとシャルル、エリーゼとレン、そしてシャルルとエリーゼとこのチームは比較的互いの事を熟知している組み合わせが多い事が短時間でここまで連携力を上達させた一因でもある。ある意味不幸中の幸いと言った所か。
基本的な戦い方はガードが出来るクリュウとエリーゼが常にガノトトスと肉薄してダメージを蓄積し、攻撃型ガンナーであるレンも貴重な攻撃役としてダメージを蓄積しつつできる範囲内で全体の援護を担当し、隙を突いてシャルルが強力な一撃を叩き込む。それぞれ自分の役目をしっかりと遂行している。
クリュウは暴れるガノトトスの脚に気をつけながら、確実に攻撃を積み重ねている。バーンエッジの刀身で吹き荒れる炎は勢いを増し、斬りつける度に炎がガノトトスの鱗を弱らせ刃を通りやすくさせる。大剣やハンマーのように力技ができない片手剣にとっては属性武器というのは貴重な付加要素なのだ。
荒れ狂う炎を操りながら確実にダメージを積み重ねるクリュウ。その隣ではエリーゼがガード突きを繰り返して同じようにダメージを蓄積させている。遠くではレンがソロ射撃を続けており、シャルルもガノトトスがレンに向かって水ブレスを撃つタイミングを狙って頭に向かって打撃を叩き込む。
クリュウを除いた三人は事前の威力偵察で一度軽くでも戦っているので、それぞれ何となくではあるがガノトトスの動きを見て自分がどう動くかをわかっている。そんな彼女達を見て、クリュウは序盤にしてはいいペースだと感じた。
だが、ガノトトスはそんな彼らのペースを掻き乱す。
自慢の巨体を活かして、ガノトトスは両足を軸にして体を回転させる。飛竜種などと同じ旋回攻撃だ。だがその範囲は使うモンスターの体長に比例する為、その範囲は他を圧倒する。
クリュウとエリーゼはそれぞれガードでこの攻撃をやり過ごし、

シャルルはギリギリで回避に成功する。一人完全に安全圏にいたレンはガノトトスの気を引き付けようと連続射撃する。
だがガノトトスは旋回攻撃を終えると間髪入れずに続いて体当たり攻撃を仕掛ける。脚元にいたクリュウとエリーゼはガードで防ぐが、またしてもクリュウは勢いを止められずに吹き飛ばされてしまう。地面に背中から叩きつけられる彼を見て、シャルルが慌てて駆け寄る。レンも一瞬クリュウの方へと意識を向けてしまい、エリーゼは完全に孤立してしまった。
連携の取れていないチームだからこそ陥る状況だ。クリュウは慌ててシャルルに「エリーゼの援護ッ！」と叫ぶが、遅過ぎた。
ガノトトスは突然小さくジャンプすると、バックステップで逃げようとしていたエリーゼに向かって地面を這うようにして突進する。これにはエリーゼも驚き、ガードが一瞬遅れてしまった。ガノトトスの突進の直撃を受け、エリーゼは大きく吹き飛ばされる。
「エリーゼさんッ!?」
吹き飛ばされたエリーゼはそのまま地面の上を何度か転がりようやく止まる。倒れた彼女に向かって血相を変えたレンが慌てて駆け寄る。
予期せぬ事態の連続に、チームは完全にバラバラな動きになってしまった。
「よくも兄者をッ！　エリーゼをッ！」
しかも血が頭に上ったシャルルはクリュウからの指示を無視して全くの無策でガノトトスに襲いかかる。これにはクリュウは小さく舌打ちする。
レンは倒れたエリーゼの横で右往左往しているし、シャルルは一人で突貫してしまう。完全にチームは乱れてしまっている。
クリュウはすぐに腰に携えた角笛を取って吹く。エリア全体に響く角笛の音色に、ゆっくりとシャルルの方へ向き直っていたガノトトスがクリュウの方へ向く。それを確認してから、クリュウは三人から離れるような動きを取った。
「シャルルとレンはエリーゼを連れてエリア３へ離脱ッ！　急いでッ

！」
クリュウの必死な声に頭に血が上っていたシャルルはすぐに冷静さを取り戻し、エリーゼの方へ駆け寄る。倒れているエリーゼは意識はあるようで受けたダメージの痛みに苦しげな声を漏らしている。そんな彼女の横ではレンが涙目になって右往左往している。
「何してるっすかッ！　早くエリーゼを連れて逃げるっすよッ！」
「……は、はいッ」
シャルルの声にレンはハッとなって慌ててエリーゼの体を起こす。シャルルはすぐにエリーゼに肩を貸して歩き出す。レンは背後を気にしながら、一人でガノトトスと立ち回るクリュウの援護に行くべきか、それともエリーゼと一緒にいる方がいいか悩んでいるようだった。
「兄者なら心配ないっすよ」
シャルルがそう断言すると、レンの選択は決まったらしく大きくうなずいて空いている反対側からエリーゼに肩を貸す。
痛みを堪えながら、しかしエリーゼはいつもの表情を崩さない。
「……へ、平気よこれくらい。みっともないから、放しなさいよ」
「バカ言ってんじゃないっすよ。そんな元気のない声で言われて、誰が信じるっすか」
「……チッ、お節介」
「そりゃ兄者譲りっすから」
ニッと笑うシャルルを見て、エリーゼは呆れたように苦笑を浮かべる。
シャルルとエリーゼ、そしてレンの三人は先程前線拠点と決めたエリア３へと撤退した。それを確認し、クリュウの動きが変わる。
脚元でバーンエッジを振るっていたクリュウはガノトトスが旋回攻撃をした隙を突いて懐から脱すると、武器をしまって別の物を取り出す。拳大の大きさのそれをガノトトスの背後から投げつけた。ガノトトスの太ももに当たったそれは桃色のペイントを弾けさせて付着。辺りに独特な匂いを放つ。ペイントボールだ。
クリュウはペイントボールがちゃんと付いた事を確認すると、今度

は回れ右して全力で走り出す。背後からガノトトスが水ブレスで追撃を試みるが、クリュウはそれを横に跳んで回避。そのすぐ後には水ブレスの射程範囲外に脱し、そのままエリアの出口にまで逃げ込む。

エリア5にはガノトトスのみが残され、戦いは一度中断される事になった。

エリア3に逃げ込んだ三人。レンはすぐにエリーゼの治療を開始し、シャルルは辺りにモンスターの気配がないか探りつつ、クリュウの無事を願う。

エリーゼはザザミヘルムとメイル、アームを脱いで上半身インナーだけの姿になる。さらに胸の辺りが痛むらしく、エリーゼはそのインナーまで脱ぐ。つまり、半裸という訳だ。

レンはすり潰した薬草をエリーゼが痛む場所に塗っていく。おそらく軽い打撲だろう。ガノトトスの攻撃をモロに受けてこれくらいの怪我で済んだのはザザミシリーズの比較的高い防御力のおかげだ。

薬草を塗り、包帯を巻いて治療をしている所にエリア4へ逃げ込んでいたクリュウが合流する。が、すぐにシャルルが動いて「みんな大丈――ぶぅッ!?」と心配そうに駆け寄って来たクリュウにドロップキック。全く警戒していなかったクリュウはズシャアアアアアッと地面を滑走する。

「な、何するんだよシャルルッ!」

いきなり蹴られたクリュウは当然抗議の声を上げるが、シャルルは仁王立ちでクリュウの前に立ち塞がる。

「今エリーゼは治療で上半身裸っす。兄者は女の子の裸をそんなに見たいっすか?」

青筋を立てながら静かに言うシャルルの迫力と、状況を理解したクリュウは返す言葉もなく黙って回れ右して背を向ける。それは当然エリーゼの治療が終わるまで続いた。

しばらくしてエリーゼが回復薬を飲んで準備を万端にし、クリュウもようやく三人とちゃんと合流する。

「怪我、大丈夫?」

クリュウが心配そうに尋ねると、エリーゼは「これくらい何て事な

いわよ」と強気で返す。レンの方を見ると、彼女は小さくうなずいた。どうやら本当に大した怪我ではないらしい。クリュウは一人ほっと胸を撫で下ろした。

安心したのか、クリュウは小さくため息を零してその場に腰掛ける。レウスヘルムを脱いでから腰に下げた水筒の中の水を一気に飲む。ついでに頭からその水を被り汗を洗い流す。

「うぅ、スッキリした」

「兄者、豪快っすね」

頭を振って水気を飛ばす彼を、シャルルが尊敬するようなキラキラした目で見詰める。マネをしようと自分の水筒を掴む彼女の頭を、エリーゼが小突いた。

「マネなんかしなくていいわよ。アホらしい」

「か、かっこいいじゃないっすか」

「だからあんたはバカなのよ」

緊張が解けた為か早速いつものようにケンカを始める二人を見て、クリュウは苦笑を浮かべる。レンもいつものエリーゼを見て安心したような表情を浮かべている。

「それで、手応えとしてはどう？」

本題に戻すと言いたげに、クリュウは表情を引き締めて三人に問う。三人もそんな彼の表情を見て真剣な表情になる。

「正直、やっぱりこの面子だとキツイわね」

まずそう言ったのはエリーゼであった。難しそうな表情を浮かべて、正直な感想を述べる。そんな彼女の感想はクリュウの感想と全く同じであった。やはり、イャンクックがやっとな面子でガノトトスは厳しい。

エリーゼはガンランスという武器の関係上常に前線で戦い続けなければならないし、クリュウも似たような戦い方になる。チーム一の攻撃力を誇るシャルルのハンマーはガードができない関係上どうしても回避主体になってしまうので深くは入り込めない。無駄に体力を使う剣士組の精神的・肉体的な負担は大きい。

唯一のガンナーであるレンもまた慣れない大型モンスター相手で

心身共に結構疲れている様子。
まだ戦いは始まったばかりだというのに、すでに女子三人の疲労は結構なものであった。
一方、クリュウだけはまだまだ全然余裕という表情を浮かべている。踏んで来た場数や経験の差が、ハッキリと出ていた。
「さすが兄者っすね、全然動じてないっす」
「まぁ、経験だけならシャルル達よりもあるだろうからね。これくらいなら日常茶飯事だよ」
「何それ、自慢って訳？」
「そういう訳じゃないけど……」
「言っておくけど、あんたのレウスシリーズとあたしのザザミシリーズ、シャルルのバトルシリーズやレンのハイメタシリーズ。性能や防御面に雲泥の差がある事、忘れた訳じゃないでしょうね」
「……ご、ごめん」
エリーゼの釘を刺すような発言にクリュウは黙ってしまう。
クリュウのレウスシリーズの性能は極めて高い。それこそガノトトスと戦うのにも十分な性能を有している。一方女子陣三人の装備は本当にかけだしハンターの物で、性能はあまり高くはなく、彼女達本来の実力に合ったモンスターに対する性能しか持ち合わせていない。自身の実力よりも数段階上に位置するガノトトスに挑むには性能面での心配は看過できない。
極端に言えば、クリュウの防具はガノトトスの攻撃を受けても耐えられる可能性は高いが、彼女達のそれは一撃で砕かれて即死という可能性もあるのだ。慎重になるなと言われても無理な話なのだ。
「エリーゼさん、そこまで言わなくても……」
さすがにレンが間に入って来ると、エリーゼは「べ、別に責めている訳じゃないわよ。ただ、何となくムカついただけ」と気まずそうに視線を外す。
微妙な沈黙が、四人の間に漂う。
そんな空気を打ち破ったのは特に気にした様子もなくかわいげなツインテールを揺らすシャルルだった。

「まぁ、そんな難しい事ばかり考えてたって何も変わらないっすよ。苛立つ気持ちもわかるっすけど、今はそんな事している場合じゃないっす。シャル達の役目はただ一つ、この戦いに勝つ事。それだけっす」
　シャルルらしい、実にバカみたいに真っ直ぐで、バカみたいに正直で、バカみたいに正論な意見だ。そんな彼女の言葉に、エリーゼの表情が柔らかくなる。
「あんたって、本当に無策なのね」
「頭の中でいくら考えても状況は変わらないっす。状況を変えるのは至極単純。行動する事っすよ。考えるよりも先に動く、それがシャルの信条っす」
「……ほんと、バカよねあんた」
　エリーゼは苦笑しながら、でもどこか嬉しそうな表情を浮かべる。彼女の真っ直ぐさには何度も助けられている。正反対な性格だからこそ、違いの利点を頼り合い、欠点を補える。今回もまた、小難しく考えてネガティブになる自分を励ましてくれる。本当に、バカみたいな親友だ。
　だがそれは、シャルルにとっても同じ事だ。
「シャルは難しい事を考えるのが苦手っすから。考えるのはエリーゼに任せるっすけど、考え過ぎは禁物っすよ。世の中悲観してばかりじゃ息が詰まるっす」
「あんたみたいに楽観的過ぎるのも考えものだけどね」
「ニャハハハ、人生は楽しくっすよ」
　エリーゼの皮肉も何のその。シャルルは全く気にした様子もなく笑い飛ばす。彼女の底抜けの明るさが前途多難過ぎて暗くなってしまうクリュウ達にとってはどんな薬よりも効果がある。今はその明るさが、何よりも頼りになる。
「お前、この戦いには故郷の命運が懸かってるとか何とか言ってなかったか？」
「それはそれ。これはこれっす」
「お前なぁ……」

相変わらずな後輩に呆れつつも、その割り切りの良さは毎度羨ましくもある。クリュウはそんなシャルルを見て小さく微笑む。
一方、エリーゼは再び難しそうな表情を浮かべて考え込んでいる。先程の戦いでの敗因を自分なりに分析しているのだろう。勘でしか動かないシャルルとは違い、彼女は一歩一歩進むにしても様々な事態を想定して動く。そういう子だ。
「レン、もしもまたさっきみたいにあたしが倒れたとしても、今度は無視しなさい」
「え？　で、でも……」
「あたしに構わず、作戦遂行が最優先事項。はいかイエスしか認めないわ」
「は、はいです……」
先程は自分が体勢を崩してしまった所に攻撃を受けて大ダメージを負ってしまい、そのせいでレンが動揺し、シャルルが頭に血が上り、チームは総崩れになってしまった。だったら、もしまた同じような展開が起きても、今度はあのような事態になってはいけない。エリーゼが出した結論は、自身を切り捨てるというものであった。
「シャルルも、バカみたいにいちいち頭に血を上らせてんじゃないわよ。ああいう時こそ冷静に行動しなさい」
「う、うっす……」
レンとシャルルに念押しし、エリーゼはとりあえず満足とばかりにうなずく。そして、この間ずっと黙っているクリュウの方へ向き直る。
「あんたは冷静だったみたいだけど、次回もまたその調子でお願いね」
「――断る」
問題は解決と言いたげな表情を浮かべていたエリーゼは、クリュウのその言葉に驚いたように目を見開く。シャルルとレンもまた同じような表情でクリュウを見詰める。三人の視線を一身に受けながら、クリュウはしかし真剣な表情を崩さない。
「三人のうち誰かが一時的でも戦闘不能になった際は僕が角笛を吹いてガノトトスを引きつける。その間に他の二人は負傷者を連れてエ

リアを離脱。さっきと同じで構わない」
「まぁ、そりゃ当然でしょ。シャルルとレンが倒れたら全力で離脱するわよ」
「エリーゼの場合もだよ」
「あ、あたしは別にいいわよ。放っときなさいよ」
「却下だ。僕のチームでは一人の落伍者も出さない。村を出る前にも言ったでしょ？」
　表情を崩さずに言うクリュウの言葉に、エリーゼは不機嫌そうに彼を睨みつける。
「あんた、いつからあたし達はあんたのチームに属する事になった訳？」
「この面子では僕が一番ランクは上だ。悪いけど、僕の指示に従ってもらう」
「ハンターは皆平等なはずよ。ランクの上下がそのまま上下関係には直結しないわ」
「確かにそうだね。でも、この戦いにはシャルルの村の存亡が関わっているんだ。そんな甘い考えに思考を割いている暇はない。嫌なら別に僕はそれでも構わない。僕は僕のやり方で戦うだけだよ」
　クリュウはそう言って踵を返す。離れていく彼の背中を睨みつけるエリーゼとクリュウを何度か見比べた後、シャルルはそっとクリュウの後を追う。何だかんだ言ってもやはりシャルルはクリュウ側なのだ。
　クリュウとシャルルの背中を見送り、エリーゼは小さく舌打ちする。そんな彼女を心配そうにレンが見詰めている。
「エリーゼさん……」
「……ったく、あたしが誰かの下で動くなんて今回限りよ」
　そう言っていつもの不敵な笑みを浮かべるエリーゼ。そんな彼女を見てレンは嬉しそうにうなずく。
「私はいつでもエリーゼさんの下で動きますッ」
「当たり前でしょ。あんたが私と同等、まして上になるなんてアプトノスが生態系の頂点に君臨するくらい不可能な話よ」

「……そ、そうですか」
なぜかがっかりするレンを横目に、エリーゼはシャルルと何か打ち合わせをしているクリュウを見て小さく笑みを浮かべる。
「……頼りない男だと思ってたけど、意外と骨あるじゃない」
クリュウを見ながら、素直な感想を述べるエリーゼ。すると、そんな彼女を見ていたレンは嬉しそうに微笑む。
「エリーゼさん、クリュウさんの事をよく見ていらっしゃいますね」
何気なく言ったレンの言葉にエリーゼは顔を真っ赤にして激怒。震える上に拳を握り締め、無言でそれをレンの頭に振り下ろすのであった。
「――気配が変わった」
「警戒が解けたみたいっすね。これなら釣り上げる事も可能っすよ」
準備を終えたのだからすぐにでも戦闘再開を提示するエリーゼの意見を却下し、しばし機会を待っていたクリュウがついに動いた。シャルルも同調して気合を入れ直す。
一方、エリーゼとレンは二人の行動の意味がわからず困惑している。そんな二人にレウスヘルムを被ったクリュウが静かに言う。
「僕のレウスシリーズ、そしてシャルルのバトルシリーズにはそれぞれ探知スキルが発動してるんだ。今まで僕はあまり探知は気にしていなかったんだけど、今回は役に立つよ」
クリュウの説明に、エリーゼは納得したようにうなずいた。
探知スキルとはモンスターの気配をより鮮明に感じる事ができるスキルの事で、モンスターの動きを気配で感じる事ができるようになる。その中にはモンスターが警戒中か否かを判断する要素も含まれる。
クリュウが待っていたのはこの為であった。探知でガノトトスの警戒が解けるのを狙っていたのだ。なぜならば、ガノトトスを釣り上げるにはこちらが気づかれていてはできない。爆弾と違い、釣り上げる事でガノトトスは激しく地面に叩きつけられて大ダメージを負う。その威力は爆弾に匹敵するとも言われており、火力面で不安が残る今のチームでは少しでも安全に、そして少しでも破壊力のある一撃を加

える事が重要だ。
　クリュウは相手が水辺でしか行動できず、釣り上げる事によるダメージを考えて、このように小休憩を入れながらダメージを蓄積させる戦法を採用していた。時間は掛かるが、この方法が一番安全であり、一番確実だ。
　クリュウの作戦を知ったエリーゼは感心したように腕を組む。
「ふぅん、ちゃんと考えてるのね」
「そりゃあ相手が相手だからね。力押しで行けるような相手じゃないから」
　クリュウが自身の攻撃力の低さから道具（アイテム）や狩場自体の特性や相手の習性を利用する戦い方をしているハンターだからこそ生み出される戦い方だ。一見すると弱腰とか卑怯とも思われるが、ハンターの世界なんて結局は実力社会。結果が評価の対象になり、過程などはどうでもいいのだ。
「エリアに侵入後、すぐにガノトトスを釣り上げる。それからまたさっきのように相手を撹乱しながら攻撃を積み重ねる。誰かが危険に陥れば他のメンバーがすぐに対処。一人でも戦闘不能な状態に陥ったらすぐに撤退する。いいね？」
　クリュウの問いかけに、シャルルは「シャルは兄者に従うっすよッ！」と元気良く答え、レンも「エリーゼさんがそれでいいなら……」とエリーゼの方を見ながら答える。
　そして、エリーゼは……
「フン、お手並み拝見といこうじゃない」
　腕を組みながら答えるエリーゼ。その言動はとても素直じゃないが、その本質はクリュウの指示に従うという意味を持つ。その証拠に、隣にいたレンが嬉しそうにエリーゼを見ている。
　三人の準備が終わったのを見て、クリュウは「それじゃ、行くよ」と号令を掛けて歩き出す。その後ろを「うっすッ」と元気良く返事してシャルルが、「はいはい」と面倒そうにエリーゼが、「ま、待ってくださ――へぶぅッ!?」と慌てて走り出してしまった為に転ぶレンが、それぞれ続く。

準備を整えた四人は、再びガノトトスが支配するエリア５へと足を踏み入れた。
「どっせえええええええいッ！」
シャルルのしおらしさもクソもない勇ましい掛け声と共に、四人は一気に力を込める。タイミングを見て引いた一撃は、暴れるガノトトスを無理やり川から引き上げる。
四人の頭上を通過したガノトトスはそのまま地面に叩きつけられ、苦しげに暴れ回る。それを見て女子陣三人が一気に攻撃を開始する。
これでガノトトスの釣り上げは三回目だ。二回目の時もうまく釣り上げる事に成功し、その後しばらく慎重に立ち回りながら戦った後、深追いはせず早期に撤退した四人は再び隣のエリアでガノトトスの警戒が解けるのを待った後、再びこうして釣り上げる事に成功した。
時間は掛かるが、これが一番安全な戦い方だとクリュウが判断したからだ。小休憩を入れながら戦っているので、比較的四人の体力はまだ余力がある。戦い方が疲労をなるべく蓄積しないような戦法を選んでいるのと、次第に四人での連携が取れて来た事が狩りが順調に進んでいる大きな要因となっている。
クリュウも戦線に加わろうと走り出した。その時、クリュウは暴れるガノトトスの姿を見て何かに気づいた。
「……もしかして」
振り返ったクリュウは釣り上げた川辺と暴れるガノトトスの間を何度も見比べる。そして、自分の考えが確かなものだと確信した時、クリュウの口元に笑みが浮かんだ。
「これなら、もっと手早く大ダメージを与えられる」
狩りがより順調に進む。そう確信して意気揚々よ戦線に加わろうとするクリュウ――だが、順調に進んでいた狩りは思わぬ乱入者によって乱される。
「ギャオワッ！　ギャオワッ！」
突然エリアに響いた声。驚いて四人が振り返ると、エリア４に続く道からこちらに向かって何かが迫って来る。それも複数だ。

血のように鮮やかな赤色の体皮と鱗を纏った小柄な小型モンスター、イーオス。数にして六匹と、厄介な相手ではあるがこれくらいなら何とか撃退する事も可能だろう。だが問題は、そんなイーオス達の背後から続くもう一匹のモンスター。

イーオスと同じく鮮やかな赤色の体。だがその大きさはイーオスよりも一回り、二回りほどは大きい。鮮やかな紫色の大きなトサカは、多くのイーオス達を率いている王冠。攻撃力、防御力、体力など全ての面においれランポス系最強と言われるイーオスの親玉――ドスイーオス。

六匹のイーオスを従えたドスイーオスは、一目散にクリュウ達を目指して突進して来る。その光景に呆然としている四人の背後で、暴れていたガノトトスも起き上がる。

ボス系モンスター二匹による挟撃。偶然とはいえ、そんな絶望的な状況に陥った四人。女子陣三人はまだドスイーオスの登場が信じられないという感じで呆然としている。何せ、この狩場にガノトトス以外にもう一匹ボス系モンスターがいるとは思っていなかったのだから。

そんな三人よりも場数を踏んでいるクリュウはすぐに状況を理解したが、理解しただけで一瞬のうちに圧倒的劣勢となったこの状況を覆せるような案がそう簡単に浮かぶはずもなく、レウスヘルムの下でギュッと唇を噛む。

「……あの時と同じか」

一人つぶやく彼の脳裏には一年前の似たような状況が思い浮かぶ。仲間三人を危険に晒し、自身が大怪我を負った。今にして思えば、彼がリーダーという立場になりたがらない最大のトラウマ。

あの時も今も、狩りの大事な場面で新手が登場して乱された。

あの時も今も、形式的とはいえ自分がリーダーを引き受けている。

あの時も今も――違う。

クリュウはギュッとバーンエッジの柄を握り締める。

あの時と今は違う。この程度の状況で絶望する程踏んで来た場数は少なくはない。一年間に積み重ねた経験や実績、踏んで来た場数が

彼を成長させていた。
今自分がすべき事は、一つしかない。
クリュウは迷わず腰に下げた角笛を取り、肺の中の空気全てを搾り出すようにして大きく鳴らす。エリア全体に響く角笛の音色に、ガノトトスとドスイーオスの目が自分に向くのを感じた。
嫌な汗が、古傷を撫でる。
だが、この傷を負った時の自分と今の自分は――違う。
クリュウはすぐに三人に撤退するよう命じ、挟撃という最悪な状況の中で苦しげに、でも不敵な笑みを浮かべてバーンエッジを構える。
「……さぁて、状況は最悪って感じかな？」
引きつる口元を、一筋の汗が流れ零れた。

第１３７話　孤軍奮闘少年少女物語

右手にドスイーオス及びイーオスの一隊。左手にはガノトトス。その周囲にシャルル、エリーゼ、レンの三人が揃っている。

クリュウを中心とした位置取りは文字通り挟撃状態。しかも角笛を吹いた事で全てのモンスターの意識がこちらに向いている。Ｇ級ハンターでもなければこんな状態に陥れば当然嫌な汗が流れる。

クリュウはレウスヘルムの下で引きつった笑みを浮かべながら、それでもその両の瞳はしっかりと状況を見極めている。

まず最初に動いたのはクリュウだった。ガノトトスの方を向いて水ブレスを警戒しながら、道具袋（ポーチ）の中に腕をねじ込ませる。その途端、それを妨害するようにドスイーオスが鳴き、イーオス三匹が走り出す。ガノトトスも首をグッともたげる。

一瞬の間があり、ガノトトスは水ブレスを撃ち放った。クリュウはそれを体をねじるようにして避ける。目標を見失ったブレスはそのまま突撃して来るイーオスの一匹を吹き飛ばす。この予想外の事態に他の二匹が反射的に足を止めた。その瞬間を狙って、クリュウは道具袋（ポーチ）から腕を引き抜き、握り締めた拳大の玉をイーオスの方へ投げつける。イーオス達に無防備に背を向けたクリュウの行動を見て、三人はとっさに目を瞑った。

――次の瞬間、拳大の玉が破裂して強烈な光が辺りに弾けた。圧倒的な光量はイーオス達の目を潰す。その範囲は広く、後続のイーオス及びドスイーオスもまた目を潰される。

一瞬、たった一発でクリュウはドスイーオスの一隊を一時的とはいえ行動不能に陥らせる。一方、水中を拠点に行動する為に目を然程重要視しないガノトトスは相変わらずクリュウを狙っている。ガノトトスの場合は音に敏感な為、水中での音爆弾が効力を持つのだ。

「今のうちにエリア３へ退避ッ！　急いでッ！」

ドスイーオス襲来で驚愕のあまり立ち尽くしていた三人にクリュウは怒鳴る。そのいつになく余裕のない彼の怒鳴り声に三人は一気に現実へと引き戻される。

いつもならここで一言くらい噛み付きそうなエリーゼも状況が状況だけに黙ってうなずき、すぐにレンの首根っこを掴む。
「逃げるわよシャルルッ！」
「で、でも……ッ」
「バカ言ってんじゃないのッ！　この状況を今のあたし達だけで好転できると思ってる訳ッ!?　寝言は寝ていいなさいッ！」
「そうじゃないっすッ！　兄者一人残して逃げられないっすッ！」
「わからないのッ!?　この状況であたし達がウロウロしている方がいつにとっては邪魔なのッ！　ずっと一緒にいながら、そんな事もわからない訳ッ!?」
エリーゼの怒鳴り声にシャルルはグッと押し黙る。本当はもっと言ってやりたい事はたくさんあるけど、彼女が言っている事が全て正論であるという事くらい、わかっている。だからこそ、言い返せないのだ。
――自分では、クリュウの足手まといになる。その事実が。
……どうしようもないくらい、虚しい。
瞳の中で煌く炎が弱まり、うつむき、悔しげに拳を握り締める。
エリーゼはそんなシャルルを問答無用とばかりにレンと同じように首根っこを掴んで連行する。
「考えてる暇はないのよッ！　ったく、いつも何も考えずに突っ走るのにこんな時に限って考えてるんじゃないわよッ！」
二人の首根っこを掴み、エリーゼは全力で走り出す。
閃光玉の影響で行動不能に陥っているドスイーオス達に背を向けながらガノトトスと対峙するクリュウを見て、レンが「で、でもクリュウさんが……ッ」と叫ぶが、エリーゼは「黙りなさいレンッ！」と怒鳴りつけて無理やり黙らせる。
逆に妙に静かに引きずられているシャルルの方を心配しつつ、エリーゼはクリュウの背中に振り返る。
「言っておくけどッ！　殿役で死んだりしてもかっこ良くなんかないんだからねッ！」
エリア3へと抜ける道へ走って行く三人の背中を見送り、クリュウ

は無言でバーンエッジの柄を握り締める。とりあえず三人が安全圏にまで脱するまでは殿役を引き受けるつもりでいたし、それが責務だとも感じていた。
　クリュウはモンスター全ての視界から三人の姿が映らないように横に走り出す。それを追ってガノトトスがゆっくりと旋回し、水ブレスを撃ち放つ。背後の地面が吹き飛ぶ様を見て冷や汗を流しながら、クリュウはブレスを撃った事で一瞬動きが止まったガノトトスに向かって一気に接近する。そして、巨体を支える脚に向かって構えたバーンエッジを思いっ切り叩き込む。爆ぜる火花を無視し、ただひたすらに攻撃を積み重ねる。
　ガノトトスが動く。その巨体を縮め、まるで力を溜めるような動作が一瞬。次の瞬間、伸縮されていた筋肉が一斉に解放されるように、猛烈な勢いで巨体が迫る。何度もガードして来た体当たり攻撃だ。クリュウはこれも盾で直撃を避けるも、またしても大きく後退してしまう。
　脚で地面を踏ん張りながら吹き飛ばされないように地面を滑る。倒れる寸前で腕を着き、四肢を使っての突撃姿勢になる。だが、再突撃をしようとした彼の視界の隅で状況が変わる。
　閃光玉の効き目はイーオスは長いが、ドスイーオスはその半分程しか拘束力がない。ドスイーオスは鳴き声を上げながらクリュウに向かって突撃して来る。まだ三人の姿が見えてはいるが、角笛の効果でここにいる全てのモンスターが自分に集中している。
　内心、いくら手段がこれしかなかったとはいえ、これは少々やり過ぎたかなぁとヘルムの下で苦笑を浮かべ、その頬を嫌な汗が流れる。
　クリュウはガノトトスへの突撃を断念し、背後から迫るドスイーオスに振り返る。そのまま一切の間もなく無理やり突撃。完全な奇襲だと思っていたのだろうか、ドスイーオスはその動きに驚き一瞬動きが止まった。
「邪魔だぁッ！」
　クリュウは自身の纏うレウスシリーズをも武器にするようにドスイーオスに体当りする。衝突の瞬間、ドスイーオスの体が一瞬ブレた

が、それでも体重の差は圧倒的。残念ながらクリュウはこんな荒業が使える程の体格は持ちあわせてはおらず、当然衝撃で吹き飛ばされるのは彼の方だった。
「くぅ……ッ」
手にしたバーンエッジを叩き込もうと立ち上がった瞬間、背後の気配に反射的に横へ飛び退く。一瞬遅れて、寸前まで自分がいた地面が吹き飛ばされた。ガノトトスの水ブレスだ。
二匹のボスモンスターから距離を置き、クリュウは苦しげに顔をしかめる。
ドスイーオスだけならまだしも、ここには本来の討伐対象であるガノトトスまでいる。双方に注意を向けていないと大怪我を負う事は必至。
追い詰められた状況にいて、クリュウは一瞬故郷に残してきた信頼できる仲間達の顔を思い浮かべる。
「……やっぱり、ついて来てもらえば良かったかも」
そう言って、一瞬を苦笑を浮かべる。しかしすぐに表情を引き締め、目の前の状況に対峙する。この間にもイーオスに対する閃光玉の効き目も解け、状況はより危険度を増す。
クリュウはため息を一つ零し、道具袋（ポーチ）から再び閃光玉を取り出す。無言でそれを前方に投擲し、彼は再びガノトトスに向かって突撃する。
背後で炸裂した閃光玉が再びイーオスとドスイーオスの動きを封じる。その間にクリュウは再びガノトトスに迫るが、ガノトトスは白い息を吐きながら突然そこでジャンプ。そのまま地面に倒れると這いずりながら突撃して来る。エリーゼがやられたあの攻撃だ。
クリュウはすぐに直角に針路を変えてガノトトスの前方から退避するが、ガノトトスの巨体故に広さがそれを許さない。仕方なく盾を構えるとガノトトスの大きなヒレと衝突し、彼の小柄な体はいとも簡単に吹き飛ばされる。そのまま目を潰されてフラフラとしているイーオスの一匹に激突。巻き込んで地面に倒れた。
「くそ……ッ」

こちらに向き直るガノトトスを見てすぐに立ち上がってその場から離れる。一瞬遅れて起き上がろうとしていたイーオスもろともガノトトスの水ブレスが地面を抉り飛ばす。
ガノトトスへ再接近を図るが、それを阻むようにガノトトスは巨体を振り回す。巨大なヒレを備えた尻尾と言うにはあまりにも太過ぎる尾が振り回され、クリュウは一瞬それ以上の接近ができなくなる。だがすぐに脅威でもあるが隙だらけでもあるこの攻撃。クリュウは冷静にもう一八〇度旋回するであろうガノトトスの動きを見て、立ち位置を変える。そして、再びの半旋回でガノトトスは彼の予想通りの動きを見せる。
旋回を終えたガノトトスの眼前には、燃え盛るバーンエッジを握り締めたクリュウが待ち構えている。
「せいやッ！」
クリュウは片足を軸にして体を回転させ、遠心力を利用して体全体を使うようにして回転斬りを放つ。燃え盛る鋭い刃先は容赦なくガノトトスの頬を焼き斬る。
「ギャウッ!?」
これにはガノトトスも怯む。だがそれは一瞬でしかなく、ガノトトスは頭を少し振ると何事もなかったかのように平然とその場で足踏みする。
クリュウは舌打ちしてバックステップでガノトトスから距離を離す。だがそれを追うようにガノトトスは体当たりを放つが、クリュウは寸前でその範囲から脱して事なきを得る。
バックステップで距離を取ったクリュウだったが、今度は閃光玉の効き目が切れたドスイーオスが迫る。クリュウはその場ですぐに回転斬りを放ってドスイーオスの胴体に剣を叩き込むが、ドスイーオスは構わず噛み付いてくる。その一撃は体をひねって無理やり回避し、バックステップで距離を取る。
直後、一瞬前まで自分がいた場所の地面が凶悪な水圧で吹き飛んだ。ガノトトスの水ブレスだ。もしも一瞬でも動きが遅かったらと思うと、嫌な汗が止まらない。

「これじゃ共闘じゃないか……ッ」
モンスターの中には共闘を見せる者がいる。敵対する種族同士でも、自然という世界においてあまりにも異質な《人間》というモンスターを前にすれば、それを全力で排除しようと連携する事がある。連携と言っても、互いに好き勝手に暴れ回るだけなのだが、その矛先は人間に集中する。
クリュウも同じ状態な上に、角笛の効力がさらにそれを加速させているのだ。
これ以上の戦闘は状況的にも、クリュウの体力的にも限界だ。おそらく、もう三人とも安全圏にまで脱しただろう。そう判断し、クリュウは敵の追撃阻止の殿役の任を終え、自身の撤退運動を開始する。
クリュウの行動理由の変化に反応したのか、ガノトトスはそれを阻止するかのように這いずり突進でクリュウに迫る。迫り来る巨大な一撃にクリュウは横へ走り正面を避け、どうしても避け切れないヒレに対しては盾で直撃を防ぐ。だが当然クリュウの体は簡単に吹き飛ばされる。
地面に膝をつくクリュウ。目の前には自分を追い詰めるには十分過ぎるくらいの戦力を有するモンスター混成隊。状況は限りなく絶望的だ。
――だが、クリュウだって何も手がない状態でこんな危険な任を引き受ける程バカではない。
自身の実力の無さには、本来のチームに属している時に嫌という程痛感してきた。だから、せめて実力以外では皆の役に立ちたいと決意し、彼が行き着いた先は片手剣使いならではの道具（アイテム）だった。
この状況を打ち破る術だって、彼は事前に用意してある。
クリュウは苦しい状況下であるはずなのにヘルムの下で不敵な笑みを浮かべる。そして、道具袋（ポーチ）に伸ばした手を引き戻す。その手には拳大程の玉が握られている。
「――悪いけど、君達に付き合えるのはここまでだよ。続きはまた後でね」

クリュウはそう言い残し、握り締めた玉を思いっ切り地面に叩きつけた。地面に叩きつけられた玉は破裂し、中から猛烈な勢いで緑色の煙が吹き出す。それはあっという間にエリアの一角を支配し、クリュウの姿を完全に隠す。

見た事もない敵の行動に警戒するガノトトスとドスイーオス、そしてようやく閃光玉の効き目が切れたイーオス達も煙の外周に展開して包囲網を形成する。

だが、しばらくして煙が晴れた時には――クリュウの姿はどこにもなかった。

「痛ぁ……ッ」

エリア5から脱したクリュウはエリア3と繋がる道の途中でフラフラと道端に寄り、そのままそこにあった木の幹に背を預けるようにして座り込む。

ヘルムを乱暴に脱ぎ捨て、全身に走る鈍痛に汗でビッショリと濡れた顔をしかめる。ガノトトスの巨体での突進を無理にガードしたり、吹き飛ばされるたびに全身を打ち付けるなどして彼の体は多少なりともの軽い打撲等を負っていた。後で薬草でも塗っておけば問題はないが、今はそれをするのも億劫なくらいに疲れていた。何せ、ボスモンスター二匹を相手に一人で立ち回ったのだから、その疲労はかなりのものだ。

「……ふぅ、追手はないみたいだね」

クリュウはエリア5へ繋がる方を見て静かにつぶやいた。

先程エリア脱出の際に彼が使ったのはモドリ玉と呼ばれる道具（アイテム）だ。脱出用の道具（アイテム）で、これを使えばかなりの確率でエリアを脱する事ができる代物だ。あの緑色の煙は相手の視界を潰す事で目で追う事を封じるばかりか、消臭効果もあり匂いでの追撃も封じ、尚且つ特殊な煙故に音すらも遮断してしまい、聴覚による追跡も阻止できる。まさに脱出用の最終兵器と言っても過言ではない道具（アイテム）なのだ。

何とかモドリ玉を使ってエリアの脱出に成功したクリュウ。まずは一安心と言った所か。

緊張の糸が切れ、乱れた呼吸を整える事に専念ししばらくその場で休憩していると、エリア3の方からこちらに走って来る者がいた。その荒っぽい足音を聞けば、見るまでもなくその人物が特定できる。自然と、クリュウの口元にも笑みが浮かぶ。
「兄者ぁッ！　大丈夫っすかッ!?」
やかましいくらいに大声を上げながら走って来たのはもちろんシャルルだ。座っているクリュウを発見すると体当たりするかのような勢いで迫り、彼の前に座り込むとぐったりとしているクリュウを見てあわあわと慌て出す。
「け、怪我してるっすかッ!?　シャルがおぶった方がいいっすかッ!?」
「落ち着いてよシャルル。別に大した怪我はしてないから安心して。ちょっと疲れてたからここで休んでただけだよ」
クリュウが落ち着かせるように優しげに言うと、シャルルは安心したのかぐったりとその場に腰を落とす。
「よ、良かったっす……」
「何だよ。僕が死んだとでも思ってたの？」
「え、縁起でもない事言わないでほしいっすッ。シャルは純粋に兄者の心配をしてただけっすよッ」
心から心配していたのに、それをバカにするかのようなクリュウの発言に聞き捨てならないとシャルルが噛み付く。クリュウは「ごめんごめん」と苦笑しながら謝ると、彼女の背後を見る。
「エリーゼとレンは？」
「二人ならエリア3で待機してるっす。シャルはわからず屋なエリーゼを振り切って兄者を助けに来たっす」
偉いっしょッ、と言いたげに自信満々に胸を張るシャルル。クリュウは無言でそんな彼女の頭を小突いた。
「な、何っすか……？」
「バカ。逃げろって指示を出したのに戻って来る奴があるか」
「うっ……で、でも心配で……」
「君が戻って来た所で状況が好転するとでも？　何だかんだ言っても経験だったら今回のメンバーの中なら僕が一番あるんだから、少しは

信用してよね」
「そ、そういう訳じゃないっすけど……」
心配で心配で、せっかく急いで戻って来たと言うのに戻って来てみればクリュウに説教をされる始末。シャルルは目に見えて落ち込んでしまう。さっきまであんなに元気いっぱいだったのに、本当に感情の上下運動が激しい子だ。
落ち込むシャルルを見て、クリュウは小さく苦笑を浮かべ、そっと彼女の頭を撫でる。驚いて顔を上げるシャルルに向かって、クリュウは優しく微笑む。
「でもまぁ、その気持ちだけはすごく嬉しいよ。ありがとう、シャルル」
クリュウが優しげな笑みを浮かべながらお礼を言うと、シャルルはカァッを顔を真っ赤に染めてプイッとそっぽを向く。
「べ、別にお礼を言われる事じゃないすッ。と、当然の事をしたまでっすよッ」
「……まぁ、威張れる事でもないんだけどね」
そう言ってクリュウは苦笑を浮かべると、ゆっくりと立ち上がる。まだ少しフラつくが、このままここにいても仕方がないので、とりあえず二人のいるエリア3へ向かおうとする。
「ほら、さっさと二人と合流するよ」
「むぅ、シャルは今来たばかりなのに……」
不満げに唇を尖らせるシャルルを見て、クリュウは「わがまま言うんじゃないの」と彼女の頭を撫でながら注意する。彼の髪を撫でられながらの注意に、シャルルは「うっす……」とうなずく。その頬はほんのりと赤らんでいた。
シャルルから手を離し、歩き出そうとクリュウは一歩を踏み出す。が、思いの外疲労が蓄積していたのか、いつもなら何の障害にもならないわずかな地面の窪みに足を取られ、バランスを崩した。
「っと……」
「だ、大丈夫っすか？」
倒れそうになる所を、シャルルが慌てて抱き留める。

「ご、ごめん……」
「大丈夫っすか？　もう少し休んでた方が……」
「平気平気。ちょっとつまずいただけだからさ」
「……兄者がそう言うならいいっすけど、無理はしちゃダメっすよ？」
「わかってるよ。ありがとうシャルル」
　お礼を言ってシャルルから離れようとするクリュウだったが、シャルルは無言でそんな彼の腕に抱きつき、ギュッと両腕で抱き締める。突然腕に抱きついて来たシャルルに不思議そうに彼女の方を見ると、シャルルは目線を外すように地面を見詰めている。その頬は、少し赤らんで見えた。
「シャルル？」
「ま、また転びそうになったら困るっすからね。シャルが手を支えてあげるっす」
「いや、だからもう平気だってば」
「さ、支えるったら支えるっすッ」
　問答無用とばかりにシャルルはグイッと腕を引っ張って歩き出す。クリュウは何となく彼女の気持ちを読み取って苦笑しながらそのまま後に続く。
「ほんと、いい後輩を持ったよ」
　シャルルに聞こえないような小さな声で、クリュウはつぶやく――この言葉からも、彼がシャルルの気持ちをほとんど理解していない事が見て取れるだろう。
　自分の気持ちなどほとんど伝わっていないのは何となくわかってるし、それで腹立たしい事もある。何であんなにも学力は優秀なのにこういう事はバカ全開なのか。
　――だけど、今はこれでもいい。そんな風にシャルルは思っていた。
　大好きな先輩（クリュウ）と二人っきりで、こうして腕を繋いで、並んで歩く。
　……今は、それだけでいい。
　今が幸せなのだから、これ以上の幸せを願うのは罰当たりだ。

だから今は、これでいいのだ……
シャルルはクリュウからは見えない位置で、嬉しそうに微笑みを浮かべていた。
エリア3にはシャルルの言った通りエリーゼとレンが待機していた。
エリーゼは腕を組んで仁王立ちで存在感を全周囲に無駄に放出させ、レンはその後ろでクリュウの姿を見つけると安堵したのかほっと胸を撫で下ろしている。
クリュウが目の前までやって来ると、エリーゼは仁王立ちのまま不敵な笑みを浮かべて彼を出迎える。
「ふぅん、意外とピンピンしてるじゃない。骨の一本でも折れてるかと思ってたのに」
「え、縁起でもない事言わないでよね」
苦笑を浮かべるクリュウを見て、エリーゼも内心はほっとしていた。自分達を逃がす為に死なれたんじゃ目覚めが悪いという大義名分（？）を掲げてはいるが、心の中まで素直じゃない子だ。
一方、《素直》を擬人化させたような汚れのない心を持つレンはクリュウが無事だった事を心から喜んでいた。
「ご無事で何よりです」
「ごめんね、何だか心配かけさせちゃったみたいで」
「いえいえ。でも心配はしていましたけど、不安はありませんでしたよ」
嬉しそうに言うレンの言葉に、クリュウはちょっと驚いた。心配はしていたけど不安はなかった。その言葉の意味がわからず、クリュウは「どういう事？」と聞き返す。
クリュウの問いかけに、レンは無邪気に笑いながら答える。
「だって、信じてましたから。クリュウさんは絶対大丈夫だって」
レンの満面の笑顔での回答に、クリュウは少し照れてしまう。こうも真っ直ぐで、真正面から言われると、反応に困ってしまうものだ。
そんな彼の心中など露知らず、レンは続ける。
「私、知らない男の人とはあまりうまく接しられないんです。ずっと、

知っている男の子しかいない小さな村に住んでたので。それに、ドンドルマに来てからは同世代の男の子なんてほとんど会った事がなくて。正直、クリュウさんともうまくやれる自信はありませんでした」
　でも、とレンは続け、嬉しそうに微笑む。
「クリュウさんは違いました。すごく優しくて、でもとっても頼りになって、女の子みたいにかわいくて。私、クリュウさんと気が合うみたいです。だから、信じられる」
　嬉しそうに言うレンの褒め言葉の数々に喜ぶクリュウだったが、一部分に対して地味にダメージを負っていたり。真っ直ぐ過ぎる言葉故に、その威力は絶大だ。
　地味にダメージを受けているクリュウを前にして、レンはほんのりと頬を赤らめながら、その頬を隠すようにレザーライトヘルムを深く被る。
「最初は、田舎のお兄ちゃんに何となく似てたからかなぁとも思ってましたけど。たぶん違いますね。きっと、私はクリュウさんの事が――大好きなんです」
　その瞬間、色々な意味で時間が止まった。
　レンの爆弾発言に、クリュウは顔を赤らめて固まり、エリーゼとシャルルは逆に顔を真っ青にして固まっていて、レンは三人の様子を見て頭の上に疑問符を浮かべまくる。
「……クリュウ・ルナリーフ。話があるから、ちょっと来なさい」
　しばし沈黙していたエリーゼはそう言ってクリュウの首根っこを掴む。その声はいつもの彼女の声に比べて明らかに低く、氷のように冷たい。放たれるブリザードのような怒気も合わさって、ものすごく怖い。
「え、エリーゼさん？　目がマジなんですけど」
「黙ってついて来なさい。時間は取らせないわよ。ちゃっちゃと殺っちゃうから」
「ちょっと待ってエリーゼッ！　君の言う《やっちゃう》と僕の知ってる《やっちゃう》には重大な齟齬が生じてる気がするんだけどッ!?」
　問答無用でエリーゼに引きづられて行くクリュウは、そのまま明ら

かに人一人くらい埋めても気付かれないような林の中に消えて行った。それを無言で見送るシャルルとレン。
「つたく、兄者は相変わらず過ぎるっす。本当に元上位成績優秀者なんすかね」
「エリーゼさんとクリュウさん、仲がいいんですね」
「……お前、あれを見てどうしてそういう結論に達するっすか？」
嬉しそうに二人を見送るレンを見て、シャルルは呆れたような表情を浮かべる。面倒そうに頭を乱暴に掻く仕草は、彼女もまた相変わらずな証拠だ。せっかくの数少ない乙女ポイントなかわいいツインテールも、これでは見事に台なし。
「そもそも、お前が兄者に向かって《大好き》なんて言うから無茶苦茶な事になってるんすよ？」
「え？　でも私、クリュウさんの事好きですよ？」
全く臆する事もなく断言するレンを見て、シャルルは半歩引く。まさか、ここに来て愛玩系ライバルの登場か？　一瞬にして警戒態勢に入るシャルル。
「……お前、マジで兄者の事が好きなんすか？」
威圧するように睨みながら問うシャルルの問いかけに、レンは気づいた様子もなく満面の笑みを浮かべてうなずく。
「はいッ。エリーゼさんもクリュウさんも、もちろんシャルルさんも大好きですよ」
「……へ？」
全くの邪心なく、純粋に真っ直ぐな言葉で言うレンの言葉にシャルルはポカーンとなる。なぜそこでクリュウと同じ列に自分とエリーゼの名が並列されるのか。
困惑するシャルルを他所に、レンは嬉しそうに続ける。
「私に取っては、皆さん大切な人ですから」
笑顔で言うレンの言葉に、ようやくシャルルも理解した――どうやら、レンの《好き》は自分やルフィールなどとは違う方向性のものらしい。
理解すると、どっと疲れが押し寄せてきてシャルルはため息と共に

肩を落とす。
「……お前、兄者と同じタイプっすね」
「へ？」
あの二人が妙に仲がいいと思ったら、どっちも同じ方向性の天然だからなのか。妙に納得するシャルルであった。
そして、誤解によって命の危険に晒されているであろうクリュウが消えた林に向かって、シャルルは静かに手を合わせる。
「兄者、ご愁傷さまっす……」
――合掌。
しばしの小休憩を挟んで、四人は円陣を組んで中間作戦会議を開く。と言っても、当初の予定とはずいぶん状況が変わってしまい、事態はかなり深刻化している。その為、円陣を組む四人の表情は皆一様に険しい。
「状況を整理すると、私達の本来の討伐対象はガノトトス。しかしこの狩場にはドスイーオスも生息していて、ただでさえメンバーの熟練度的に厳しい戦いは、さらに絶望的にまで厳しさを増した――簡潔に言えば、勝ち目はほとんどないって訳」
エリーゼはそう締めくくると、大きな大きなため息を吐く。そのため息一つに、今の状況がどれほどまでに絶望的かが表れているかのようだ。
「……正直、そろそろ本気で報酬金に対して割が合わなくなってきてるんですけど」
「ガノトトスだけでも必死なのに。そこに加えてドスイーオスとなると、ちょっと厳しいですね」
「ちょっと所か断崖絶壁に追い込まれるくらいに厳しいわよ」
今チームの実質的な参謀役を担うエリーゼの表情は特に険しい。険しいのを通り過ぎて軽くやつれているようにも見える。効率優先主義の彼女にとって、今の状況はその信念に背くかのような苦境となっていた。
ネガティブな発言を繰り返すエリーゼに対し、今度ばかりはシャルルも食って掛かる事はなかった。いくら単純突撃娘なシャルルでも、

さすがにこの状況は気合だけではどうにもならないと理解しているからだ。バカなシャルルでも絶望に打ちひしがれるのだから、事の重大性はかなりのレベルに達している。
　クリュウもまた、その表情は険しい。だが経験の差か、他の三人よりは深刻そうではなかった。先程からずっと目を瞑って何かを思案するように無言で居続けている。
「で、どうする訳？」
　エリーゼは腕を組みながら深刻そうな表情を崩さずに皆に問い掛ける。自然と、その視線はクリュウに注がれた。
　レンとシャルルもクリュウの意見を求めて彼を見詰める。皆の視線を一身に受けたクリュウはしばらく無言を貫いていたが、ゆっくりと閉じていた瞳を開く。
「作戦を変更するしかないね」
「作戦変更っすか？」
「うん。メンバーの一人をドスイーオスの足止めに回す。ガノトトス相手は、残った三人で行う」
　それがクリュウの考えた新たな作戦であった。
　ドスイーオスを無視してガノトトスを相手にするのは極めて危険だ。奇襲などで背後を取られれば壊滅的打撃を受けるのは必至。その為、クリュウは危険度を比べた結果、戦力の分散に至ったのだ。
　だが、この作戦もまた危険である。当然、エリーゼが反対の手を挙げた。
「私達はいっぱいいっぱいなのよ？　この状態で戦力を分散させる方が危険よ」
「だったら、君ならどうするの？」
「そ、そりゃまずはドスイーオスを討伐するのよ。それからガノトトスを討伐すればいい。これが一番安全な策だと思うけど」
　エリーゼは全員による総力戦を提示した。戦力の分散は各個撃破の恐れがある上に、彼女の言う通り今のメンバーでは総力でガノトトスに挑むのも手いっぱいなのだ。その状態で戦力を分散させるのは危険である。

全員でドスイーオス、そしてガノトトスを討伐するのが最も安全な戦い方だ。エリーゼはそう判断していた。
だが、クリュウはそんな彼女の提案に首を横に振る。
「僕らがドスイーオスに構っている間にガノトトスが川を下るかもしれない。そうなれば、当初の目的であるアルザス村の防衛は難しくなる。奴をこの狩場に係留しておくには、逐一奴と戦闘を繰り返す必要がある。全員でドスイーオスに構っていたらそんな余裕はなくなるからね」
クリュウの説明に、エリーゼは無言で聞き手に徹する。彼女としても彼の案もまた正論だと理解しているからだ。本来の討伐対象であるガノトトスを逃がしてしまっては本末転倒。だからチームから一人をドスイーオスに向け、残る三人でガノトトスと戦う。危険だが、正論だ。
しばらくエリーゼは頭の中で様々な展開を予想して沈黙を続けていたが、ゆっくりと閉じていた瞳を開く。
「仕方ないわね。状況が状況だし、あんたの案で行きましょう。戦術的には危険だけど、戦略的にはその方が効率がいいわ」
最終的な効率を考慮した結果、エリーゼはクリュウの案を受け入れた。
エリーゼが納得してくれてクリュウは少しだけほっとして表情を柔らかくした。そしてエリーゼが納得すれば、当然レンもクリュウの案を受け入れてくれた。
「危険ですけど、元々危険な任務ですからね。もうこうなったらドンと来いですッ」
「縁起でもない事言わないでよね。あんたの運のなさは筋金入りなんだから、本当にこれ以上ヤバイ事態になったらどうするのよ」
「す、すみません……」
エリーゼに注意されてしゅんと落ち込むレンに苦笑しつつ、クリュウは今までずっと不自然なまでに沈黙しているシャルルに向き直る。
「シャルルはどう思う？」
「シャルいつでもは兄者に従うっす。考えるのは苦手っすから」

実にシャルルらしい返事にクリュウは「そっか」と小さく口元に笑みを浮かべる。そんな二人を見てエリーゼも同じような表情を一瞬浮かべた後、再び表情を引き締める。
「それで？　そのたった一人でドスイーオスを相手にする役目は誰に任せる訳？」
ガノトトスに比べれば危険度は低い……とはドスイーオスは言い切れない。同じボスモンスターとはいえ、全く生態が異なるからだ。
ドスイーオスは中型モンスターであり、機動力に優れている。しかも配下のイーオスが厄介だ。ドスイーオスとその周りに控えているであろう複数のイーオスを、たった一人で相手にする。ある意味、ガノトトス側と違って仲間から一切の支援が得られないこちらの方が危険かもしれない。
そんな大役を、一体誰に任せるのか。エリーゼは真剣な表情のままクリュウを見詰める。
「エリーゼのガンランスは機動力が低いから小型モンスターを相手にするのは不得手だ。レンのライトボウガンも間合いを詰められやすい小型モンスター相手では分が悪い。しかもどちらもガノトトス戦では欠かす事のできないアタッカー。だから、二人はガノトトス側は確定しているんだ」
エリーゼとレンはガノトトス。武器の特性を理解しているクリュウの班決定に、エリーゼはうなずく。レンもエリーゼと一緒だとわかると、嬉しそうに微笑んだ。
残るは片手剣のクリュウとハンマーのシャルル。どちらも機動力があり、ドスイーオスやイーオスを相手にするのには問題はない。
危険な役目だという事もあるし、何より発案者だけに本当ならクリュウ自身が行きたい。だが、彼の武器はガノトトスが苦手な火属性であり、ドスイーオスに対しては逆に効果は薄い。
指揮する者は時に残酷な決断をしなくてはならない。クリュウは申し訳なさそうに彼女の方を見る。
「あ、あのさ――」
「――その役目、シャルに任せてほしいっす」

クリュウの言葉を遮って、シャルルは立ち上がってそう自分から言い出した。驚く皆の視線を一身に受けて立つ彼女の表情には、並々ならぬ決意が宿っていた。
「その役目は、シャルが引き受けるのが適任っす」
「シャルル、あんた本気で言ってる訳？」
エリーゼは驚きつつも、平静を装うように静かにシャルルに問う。だがその心中は、いつものようにその場のノリや勢いで言っているなら、そんな生半可な覚悟ならば思いっ切りブン殴ってやるつもりだった。
――だが、シャルルの決意は本気だった。
「シャルの武器はガノトトスには効果のない水属性っす。しかもハンマーという武器の特性上ガードができないっすから、兄者やエリーゼのように深くは攻め込めない。水ブレスを撃つ時の一瞬しか、シャルに攻撃のチャンスはないっす。正直、全然役に立てていないっす」
シャルルは先程の戦闘から――いや、一番最初の威力偵察の際の戦闘から感じていた。自分が、武器の特性上深くは攻められない。ガノトトス相手では不利な武器な為に、皆に比べて活躍できていない、と。
事実、シャルルはその武器の特性を知っているクリュウの指示で遊撃役に徹しており、手数では剣士二人に対して当てた回数はわずかだ。
ガノトトス相手では自分はあまり役に立てない。でも、ドスイーオスの足止めなら自分の実力が今までに比べれば発揮できる。
クリュウの言った通り、武器の特性上有利なエリーゼとレンはガノトトスと戦う方がいい。そして、火属性の武器であるクリュウも同じだ。だったら、チーム分けは至極簡単だ。
シャルルは真剣な瞳で三人の前で威風堂々と仁王立したまま、ニッと不敵な笑みを浮かべる。
「――シャルはまだまだ暴れ足りないんすよ」
彼女の決意と覚悟が本気だという、何よりの証拠だ。物的証拠なんてなくても、その瞳が、全てを物語っている――彼女は本気だ。
「……ったく、あんたがその目をしたらもう何を言っても無駄なのよ

ね」
口ではそうでも、エリーゼの表情は柔らかい。彼女の覚悟を知った以上、自分がこれ以上口を出すのは野暮だと、彼女はわかっているのだ――だって、口では絶対に言わないし認めようとはしないけど、彼女はシャルルの親友なのだから。
エリーゼは無言でクリュウに向き直る。その視線には「さぁ、さっさと決めちゃいなさい」と彼に対する信頼の念が込められていた。クリュウはそんな彼女の想いに応えるように静かにうなずき、決意の表情に満ちているシャルルに向き直る。
「僕としても、この役目はシャルルに任せたいと思ってたんだ。危険な役目けど――引き受けてくれるかい？」
クリュウの問いに、シャルルはニッと頼もしい笑みを浮かべ、グッと親指を突き出す。やんちゃなツインテールが、かわいらしく揺れる。
「任せておけっすッ！」
自信満々に、シャルルは胸を叩いた。
大まかな作戦概要の相談を終え、四人は再び出撃準備を整える。
使用した道具（アイテム）の情報などを共有し、保有数の入れ替えなどを行う。特にクリュウがもしも小型モンスターと遭遇した場合に備えて持って来ていた閃光玉の存在は大きい。クリュウは当然それをシャルルに渡す。今回は主力として持って来ていないので、調合素材は持ちあわせてはおらず、最大所持数の五個しか持参していなかった。しかもうち二個は先程の戦闘で使用した為、シャルルの手に渡されたのは三個だ。
「ごめんね。こんな事なら素材をちゃんと持ってくれば良かったんだけど……」
申し訳なさそうに閃光玉を渡すクリュウに、シャルルは気にした様子もなくニッと明るい笑みを浮かべる。
「後悔からは何も生まれないっすよ。何事も前向きに考えるのが状況打破に繋がるっす。元々閃光玉の準備は誰もしていなかったんすから、三個でもあるだけ奇跡なんすよ。この用意周到さは、さすが兄

者っすよ」
「……そう言ってもらえると助かるよ」
シャルルの言葉にクリュウはほっとしたように胸を撫で下ろす。危険な任務を後輩に任せるからには、先輩として、チームの臨時指揮官として出来る限りの支援をしてやりたい。クリュウはガノトトス戦では不要な閃光玉をシャルルに渡した。それ以外にも応急薬や携帯砥石なども自発的に渡す。本当は回復薬や回復薬グレートも渡したかったが、これはシャルルに断られた。
「兄者だって命懸けな戦いなんすから、持つべき物はちゃんと持ってないとダメっすよ。シャルは十分っすから」
そう言ってシャルルは受け取った道具(アイテム)類を道具袋(ポーチ)の中に詰め込む。クリュウは無言でその肩をそっと叩いた。振り返るシャルルに向かって、優しげに微笑みを掛ける。
「……無理はするなよ。危険だと思ったらすぐに逃げるんだ。わかった?」
クリュウの忠告にシャルルはニッと笑って「わかってるっすよ。シャルだってまだ死ぬ気はさらさらないっすからね」と元気良く答える。
「っていうか、兄者は少し心配し過ぎなんすよ」
「シャルルが楽観的過ぎるんだけどね」
そう言って、お互いにどちらからとなく二人は苦笑を浮かべた。そんな二人を見て、エリーゼは呆れたようにため息を零す。
「ったく、あんた達相変わらず仲いいわね」
「そりゃシャルと兄者はラブラブっすからねッ」
自信満々にないに等しい胸を張るシャルルを見て、また別の意味で苦笑を浮かべるエリーゼ。一方クリュウもまた別の意味で苦笑を浮かべる。
「同じチームメイトだからね。これくらい普通だよ」
そんなクリュウの言葉にシャルルは目に見えて落胆し、それを見てエリーゼはまたもため息を零す。
「……あんた、本当に相変わらずよね」

「え？」
きょとんとしているクリュウを見てエリーゼはそう零すと、がっくりと肩を落としているシャルルの肩をそっと叩いてやる。特に掛ける言葉もないが、シャルルはそれを素直に受け入れていた。
そんなやり取りがあって、全員が準備を終えた。ここからはクリュウ、エリーゼ、レン三人によるガノトトス討伐隊とシャルル一人によるドスイーオス迎撃隊の二つの部隊に分かれて行動となる。
準備を終えたシャルルは元気満々と言いたげにグルグルと両腕を勢い良く回し「絶好調っすよッ！」と気合を入れる。そんな彼女の姿に苦笑しながら、クリュウはそっとシャルルの頭を撫でる。
「それじゃ、ここからは別行動だ。僕達の側面の守り、よろしく頼むよ」
「任せておくっすッ。シャルは絶対兄者の期待に答えるっすからッ。兄者こそ、ガノトトスの事頼んだっすよッ」
「そっちこそ任せておけ」
クリュウの返事にシャルルは満足気にうなずくと、グッと拳を突き出す。クリュウもそれに応えるように拳を突き出し、互いに拳をぶつける。
別れの挨拶を済ませた事を確認し、エリーゼが「行くわよレン」とレンに声を掛けて歩き出す。その後ろを「あ、待ってくださいエリーゼさんッ」と慌ててレンが続き、もはや恒例行事とばかりに途中で見事にすっ転ぶ。
そんな二人の背中を見てクリュウとシャルルは苦笑を浮かべ、再び向かい合う。
「それじゃ、がんばってね」
「おっすッ」
シャルルは三人とは反対方向からドスイーオスの迎撃に向かう。
気合充分とばかりに早歩きで去って行くシャルルの背中を静かに見送ってから、クリュウも無言でエリーゼとレンの後を追う。
シャルルなら大丈夫。そう信じて、今の自分は本来の討伐対象であるガノトトスを倒す。そう心に誓った。

オルレアン密林を舞台にした戦いは、新たな局面を迎えようとしていた。

第138話　離れていても信じる心は共に在りて

「うおりゃあああぁぁぁッ！」
　勇ましい掛け声を上げながらシャルルは必殺の突進をし掛ける。目指すは先程から積極的に前に出ようとはせずに全体指揮に徹しているドスイーオス。
　猛然と翔けるシャルルを妨害するようにイーオス二匹が立ち塞がった。シャルルは怒り狂う。
「邪魔するなあああぁぁぁッ！」
　ハンマーを構えながら力を溜めていたシャルルは一切の容赦もなくイーオスの眼前で急停止し、勢いをそのまま遠心力に変えて回転攻撃。連続して振り殴られる重い一撃の連打にイーオスはたまらず吹き飛ぶ。
　回り過ぎて一瞬フラつくシャルル。その隙を突くように別のイーオスが突っ込んで来る。シャルルは勘で動いた。
　イーオスの眼前で、シャルルが消えた――突然シャルルはイーオスの視界から消えるようにしゃがみ込んだのだ。そのままから空きのイーオスの脚を足払い。転倒するイーオスの頭に向かってイカリハンマーを叩き込む。
　一撃、二撃……、三撃目で吹き飛ばす。弾き飛ばされたイーオスはそれで動かなくなる。
「……これで五匹目」
　息を荒げながらシャルルは静かにつぶやく。
　ドスイーオスと遭遇したのは今から十分程前の事。ドスイーオスは四人が撤退している間に仲間を呼び寄せていたのか、率いるイーオスの数は十二匹にまで膨れ上がっていた。
　圧倒的な戦力を誇るドスイーオスに対し、シャルルは単騎。だがシャルルは一切の迷いもなく雄叫びを上げながら突撃。戦闘は開始された。
　シャルルは単騎ながら獅子奮迅の活躍を見せ、四面楚歌の状況の中で一騎当千孤軍奮闘。クリュウから受け取った閃光玉は使わずに、す

でに五匹のイーオスを葬った。
徐々にドスイーオスの指示が増え、相手は防戦の構えを見せる。だがシャルルも激しい動きによる疲労で息が乱れ、息を整える為に動かない。
一種の睨み合いの後、再びシャルルが動く。
バカ故に小細工はせず、バカ故に突撃しか能がなくて、バカ故に真っ直ぐで、バカ故に強力な突撃力。
イーオスが二匹またしても立ち塞がるが、シャルルは二匹の間のわずかな空間に向かって飛び込む。地面の上でゴロゴロと転がり、すぐに立ち上がって突撃を再開する。抜かれたイーオスは慌てて反転するがもう遅い。
他のイーオスも慌ただしく動くが、シャルルの突進には追いつけない。
シャルルは一気にドスイーオスとの距離を詰め、驚くドスイーオスの側頭部に向かってイカリハンマーを殴りつける。
シャルルのバカ力が加わった一撃は破壊力絶大。ドスイーオスは為す術もなく吹き飛ばされた。
地面に叩きつけられ、それだけでは止まり切らずに二転三転して岩に胴体を激突させてくぐもった悲鳴を上げる。
ドスイーオスが吹き飛ばされた事で動揺するイーオス達を前に、シャルルは力強く大地に足を立たせる。
構えたイカリハンマーを豪快に振り回して背負い、右手は柄に当てながら左手の指先で頬に鼻を撫でる。泥がついていたのか、泥が鼻にこびり付いた。
じわじわと後退するイーオスの群れを見回し、そして起き上がるドスイーオスを見詰め、シャルルはニッと不敵な笑みを浮かべる。
「舐めんなよ雑魚ども。シャルルはいつまでもテメェらに付き合っている暇はないんすよ――面倒っすから纏めて掛かって来やがれっすッ！」
シャルルは再び単騎で敵陣に殴り込んだ。
シャルルがドスイーオス及びイーオスの群れと戦っている頃、ク

リュウ、エリーゼ、レンの三人はガノトトス戦に備えて陣地の敷設を行っていた。
「ねえ、本当にここでいい訳？」
半信半疑という感じで問いながら、エリーゼはそっと抱えていた大タル爆弾Gをゆっくりと地面に置く。その隣では同じようにクリュウも大タル爆弾Gを設置している。
エリア5に戻って来た三人だったが、すでにガノトトスの姿はなかった。この頃にはペイントボールの効果は消え、完全に消失（ロスト）した。しかしガノトトスは水辺でしか行動はできない為、行く先は同じ水辺であるエリア6か地底湖のエリア8だけだ。焦らなくてもこの狩場にいる限りは見失う事はない。
それを理由にクリュウは追撃戦を望むエリーゼを説得して当初の作戦の大前提であるこのエリア5での迎撃戦を決めた。今はその為の準備をしている所だ。準備と言ってもクリュウが指定した場所に大タル爆弾Gを設置するだけという実に単純なもの。すでに荷車に搭載していた大タル爆弾G四発を狭い範囲に集中配置している。
「決戦兵器とも言うべき大タル爆弾Gをこんな所に集中配置するんだから、それ相応の考えがあっての事でしょうね？」
大タル爆弾Gは威力が絶大な分使い勝手が悪い。一度設置すると石ころがぶつかった程度の衝撃でも爆発してしまう為、再設置ができなくなってしまう。誤爆の危険性やこの使い勝手の悪さがマイナーな道具（アイテム）と呼ばれる理由だ。
そんな再設置が出来ない貴重な攻撃力を、クリュウは惜しむ事なく集中配置する。その根拠を、エリーゼは問うているのだ。
エリーゼの疑問に対し、クリュウは川を見ながら答える。
「さっき気づいたんだけど、ガノトトスは釣り上げられると同じ場所に落ちるみたいなんだ」
それは先程の戦闘の際にクリュウが気づいた《勝利の鍵》であった。
ガノトトスをこのエリアで釣り上げる事三回。ガノトトスは全て同じ場所に落下した。理由はわからないが、釣り上げた全てのパターンで同地点に落ちる事など、ただの偶然では片付けられない。クリュ

ウはそれを確信して行動したのだ。
　クリュウの説明に、エリーゼはあからさまに呆れたような表情になる。確実な根拠があっての行動かと思っていたのに、クリュウの根拠はそんな実に運頼みのようなあやふやなものであった。当然、エリーゼは不満の声を上げる。
「そんな不確実な情報を頼りに、貴重な爆弾をこんな無茶苦茶な配置にした訳？　あんた、いよいよどうかしてるんじゃないの？」
「ひどい言われようだけど、これが僕の立てた作戦だ。不確実って言うけど、僕はこれを貴重で確実な情報だと信じてる。僕だって運頼みで動いたりはしないよ」
「でもいくら何でも科学的に立証できないんじゃ信じられないわよ」
「……僕を信じて、じゃダメかな？」
　自信なさげに言うクリュウを、エリーゼはしばし無言で見詰める。そして、ため息と共に「あんたを信じるって方がよっぽど根拠がないわよ」と嫌味たっぷりに返す。
　地味に傷つくクリュウを見て、しかしエリーゼは「でもさ……」と静かに続ける。
「あのバカが心の底から信じ切ってる。あたしは、そんなあいつを信じてる。今はあいつに免じて、あんたを信じてあげてもいいわよ？」
　クリュウが驚いて顔を上げると、エリーゼはなぜか不機嫌そうにそっぽを向いて立っている。その頬が若干赤らんで見えるのは見間違いではないだろう。クリュウはそんなエリーゼの素直じゃない言葉に笑顔でうなずく。
「ありがと、エリーゼ」
「ふ、フンッ。言っておくけど、期間限定で更新はできない一回限り。調子に乗るんじゃないわよ」
「……肝に銘じておきます」
　苦笑しながらそう答えると、クリュウは改めて設置した四発の大タル爆弾Ｇを確認する。これでガノトトスに対する一撃必殺の陣地の敷設は終わった。あとは、ガノトトスがこのエリアに入って来るのを待ち構えるだけだ。

「レンからの信号はまだないの？」
エリーゼの問いかけに、クリュウは川辺の崖の上を見詰める。崖の中腹にちょっとした出っ張りがあり、そこはツタの葉で昇り降りができるようになっているが、そこにレンが一人で立って索敵を行っていた。
力仕事は彼女には向かず、もしも爆弾を抱えた状態で転ばれでもしたら大惨事。あとはボウガンにはスコープが備え付けられている為、それを使った索敵が適任との判断からレンは索敵係に徹している。今の所、彼女に動きは見られない。
とりあえず、自分達の役目が終わった事で二人は一息入れる。近くの岩にそれぞれ腰掛け、レンからの報告を待つ。クリュウはいつでも戦闘態勢になれるよう、レウスヘルムは足元に置いておく。そして、腰の道具袋（ポーチ）の中を探って取り出したのは元気ドリンコ。彼はそれを一気に飲み干した。
「エリーゼも飲む？」
「あたしはいいわよ。若いんだから、そんなのに頼らなくても十分」
「……僕、これ必需品なんだけどなぁ」
地味に傷つくクリュウを放置して、エリーゼは淡々と装備の確認をしておく。すでに何度も確認しているのだが、準備にし過ぎるという事はない。慎重な彼女らしい。
「……あの子とは、連絡はとってる訳？」
唐突に、エリーゼはクリュウに話しかけてきた。空になった元気ドリンコのビンを道具袋（ポーチ）に戻していたクリュウはそんな彼女の問いかけに「え？」と零す。
「――だから、あのイビルアイの子よ」
どこか言いにくそうに顔を逸らしながら言うエリーゼの言葉に、クリュウは彼女の言う《あの子》がルフィールの事を示していると気づく。
「……ううん。僕が卒業してから全く連絡は取ってない」
「ふぅん、あんだけあんたにベッタリだったのにね」
エリーゼもクリュウとルフィールが共に過ごした時期と同時期に

在籍していたから、二人がいつも一緒だった事は知っている。生徒会に属したからこそ、彼を中心とした騒動は特にだ。
エリーゼの言葉に、クリュウは何も答えずに立ち上がると川の方を見詰める。エリーゼがその背中に追求しようと口を開いた瞬間、クリュウは静かに言う。
「――無茶してないといいんだけど」
いつになく暗い彼の声に、エリーゼは開いた口を閉じた。何となく、今は何も言わない方がいい。そのどこか淋しげな、二人の間に亀裂を生んだ傷跡が隠れた背中を見て、エリーゼもまた表情を曇らせる。
学生時代、本当に仲の良かった二人を実際に見ているだけあって、今の二人の距離は遠過ぎる。自分はその仲の良さに振り回さえれた身だけど、何となく寂しかった。
「いつか、また一緒になれるといいわね」
自然と、そうつぶやいていた。クリュウはその言語に静かに振り返ると、小さく微笑んだ。
「……そうだね。いつか、また」
見上げた蒼い空の向こう、自分と同じように彼女も空を見上げているだろうか。それさえもわからないけど、きっと彼女はこの自分と同じ空の下で孤軍奮闘でがんばっているのだろう。そう、信じている。
何となくしんみりとしてしまった空気が嫌なエリーゼは、スッと立ち上がった。
「まぁ、その前にあんたがこの戦いで死んで会えなくなるって可能性もあるけどねぇ」
「……笑えない冗談はやめてよねぇ」
苦笑するクリュウを見てエリーゼは小さく笑う――そして、その時が来た。
一人崖で哨戒任務を続けるレンはティーガーに備え付けられたスコープで川の下流を見詰めている。この川の下流はそのままエリア６へと繋がり、最終的には地底湖であるエリア８へと至る。そして、ガノトトスが現れるのはその三ヶ所だけだ。そのどれもにいない場

合は、村へと繋がるヒルメルン川本流へと逃げられた事になる。
レンはスコープで偵察しながら、その最悪の予想もまた頭の隅に置いておく。そうなると、今から追撃したとしても追いつけるかどうか怪しい。
だがクリュウの見通しではガノトトスはまだこの狩場の中にいるとの事。根拠としてはヒルメルン川は理由はわからないが昼夜で水位が変わる特殊な川で、ガノトトスの巨体がヒルメルン川本流の入口に入るには最大水位になる夜中のみとなる。その為、だんだんと夕方が近づいてはいるがまだ水位としては十分ではなく、ガノトトスはこの狩場からはまだ脱出する事はできない。それがクリュウの根拠であった。
エリーゼも同意見の為、今はクリュウが立てた爆弾による戦局打破作戦の準備が進められている。
自分はドジでいつも失敗ばかり。クリュウやエリーゼのように頭がキレる訳でもないので、自分にできる事はそんな二人から与えられた役目をちゃんと遂行する事。ドジをせず、精一杯がんばる事だけだ。
振り返ると、作業を終えたクリュウとエリーゼが岩に腰掛けて何かを談笑しているのが見えた。何となく自分だけ疎外感を感じつつも、自分にしかできない役目を遂行中なのだと言い聞かせて我慢する。
スコープを使ってエリーゼの姿を見て、その後にクリュウの姿を見る。
会って間もないのに、何だかすごく前から一緒にいるかのような安心感を抱かせてくれる。今まで、村以外の男の子と話した経験がない為、しかも男性全体に抱く《怖い》というイメージも彼からは微塵も感じられない。
優しくて、頼れて、かっこ良くて、かわいくて。エリーゼがお姉さんなら、クリュウは何となくお兄さんのような感じ。そんな安心感と信頼感が、レンの中に芽生えていた。
「……不思議な人です」
先程まで笑っていたのに、今はなぜかどこか遠い目をして空を見上

げている彼の姿に、レンはそっとつぶやいた。
そして、今頃になって自分の役目を思い出し慌ててスコープを川に向けた時――それが見えた。
川を上って来る水面から飛び出た大きなヒレ。それだけで、レンは動いた。
すぐにクリュウから預かっていたけむり玉を取り、それを思いっ切り地面に叩きつける。破裂した玉から勢い良く真っ白なけむりが吹き出し、レンはツタを掴んでそこから勢い良く飛び降りた――直後、足がツタに絡まってしまうのであった。
レンのいる見張り台から勢い良くけむりが吹き上がるのを見て、クリュウとエリーゼはそれぞれ戦闘態勢に入る。
事前の作戦会議でレンにはガノトトスを発見した場合、クリュウが託したけむり玉を使ってそれを狼煙代わりにして発見を知らせるという算段になっていた。これは逸早く全体の指示を飛ばす為に、しかし音に敏感なガノトトス相手に音を発する音爆弾や銃声などは使えないという事からの道具（アイテム）の選出であった。
レンは見事に役目を達成し、ツタの葉を使って勢い良く飛び降りる。だがまぁ、一種の運命とも言うべきか。レンは降りる最中にツタの葉に足が絡まったのか、きれいに宙吊りになってしまう。
「ふぇ～ん、ごめんなさいですぅ～ッ」
宙吊り状態のまま、涙目になりながら謝るレンの姿を見て苦笑しながら爆弾の方へ走るクリュウに対し、エリーゼは怒りながらも猛烈に心配している事バレバレな状態で彼女の方へ走って行く。
そんな二人を横目に、クリュウは一人単独で準備を進める。大タル爆弾Gによる地雷原にすぐ横にしゃがみ込み、そこに腰に下げていた落とし穴を仕掛ける。横から飛び出ているピンを引っ張ると丸い装置から地面を溶かす溶液とネットが同時に展開。これで落とし穴の準備は完了だ。
クリュウが落とし穴の準備を終えるのと同じくらいのタイミングで、エリーゼも宙吊りになったレンの回収を終える。その頃には肉眼でも川の下流からガノトトスのヒレが近づいて来るのが見えた。当

然、クリュウの表情も険しくなる。
「釣竿に走ってッ！」
クリュウの指示に従い、三人は一斉に事前に川辺に備え付けられた釣竿に走る。その間も、ガノトトスはゆっくりとエリアの中に侵入してくる。ここで発見される訳にはいかないので、三人はできる限り姿勢を低くしてガノトトスに気づかれないようにして進む。
ガノトトスがエリア内の川の中頃に達する頃には、クリュウ達も仕掛けた釣竿に集まった。クリュウはすぐに釣竿を持ち、ガノトトスを釣り上げる構えになる。水面に浮かんでいる釣りカエルと、その向こうに見えるガノトトスの距離を確認する。
釣竿を構える彼の右からはエリーゼが、左からはレンがそれぞれ手助けするように竿を握る。今回は力自慢のシャルルがいない分、クリュウにはより一層のタイミングの見極めと力が求められる。クリュウは二人の顔をそれぞれ見て、グッと竿を握り締める。
水の上に浮かぶ釣りカエル。それに反応してか、遠くにいたガノトトスがゆっくりとこちらに近づいてくる。ガノトトスは目が悪いとは知っていても、目の前にまで迫られるといつバレるかという恐怖に身が震え出す。実際、この状態で気づかれる事もガノトトス戦では珍しくはない。
クリュウ、エリーゼ、レンの三人は呼吸音すらも消して、文字通り息を殺してその時を待つ。
そして、水面にゆっくりと浮いていた釣りカエルが突然水中に潜った瞬間――ガノトトスが大きな口を開いてそれを呑み込んだ。
「引けええええええええッ！」
クリュウの掛け声に合わせて、三人は一斉に力を込めて引っ張る。さすがに三人、しかも力担当とも言うべきシャルル不在だとかなり厳しい戦いになる。それでも、三人は足を突っ張って精一杯にガノトトスの強大な力に対抗する。
何とか、一進一退の攻防が十数秒続き、双方共に疲労が見え始めた頃合い。クリュウはガノトトスの力が弱まり、こちらに向き直った絶好のタイミングに残る力を一気に解放するように攻勢に出る。

エリーゼとレンもそのタイミングに合わせて一気に引っ張る。
一瞬、グッと重い力があった後、耐え切れずにガノトトスが水面から飛び出した。空中で一瞬もがいた後、そのまま彼らの頭上を通り抜けて陸地へと落ちる。そしてその軌道は、クリュウの予想通りのものであった。
水中から引き摺り出されたガノトトスは地面へ落下。すると、その着地地点には事前にクリュウが仕掛けた落とし穴。ガノトトスはそのまま落とし穴を踏み抜き、下半身が地面に埋まる。
「グゥオッ!? グゥオォッ!?」
動けずもがくガノトトスだが、その背後にはさらにクリュウが用意した決戦兵器――大タル爆弾G四発による地雷原が展開している。
「レンッ!」
エリーゼが叫び、レンがすぐさまティーガーを構える。その頃にはクリュウとエリーゼがガノトトスに向かって突進する。そして、レンがスコープで大タル爆弾Gに狙いをつけると、そのまま引き金を引く。
一発の銃声が轟き、撃ち出された弾丸は一直線に吸い込まれるようにして大タル爆弾Gに命中。その振動で大タル爆弾Gの一つが爆発。その爆風で誘爆するように残る三発も一斉に起爆。ガノトトスは大タル爆弾G四発による大爆発に晒された。
火炎が逆巻き、黒煙の中に消えるガノトトス。猛烈な爆風に吹き飛ばされそうになるも前へ前と進むクリュウとエリーゼ。煙が晴れた時、そこにがあれだけの大爆発を受けても暴れるガノトトスの姿が現れた。だが、これも二人は想定済み。ガノトトスの体力の高さもまたトップクラスなのだから。
もがくガノトトスの至近に最初に達したのはエリーゼ。すぐさま武器を構えると、待ってましたとばかりにガンランス必殺の構えを取る。衝撃に耐えられるように腰を落とし、グッと足に力を入れて体を固定。ガンランスの砲口は真っ直ぐにガノトトスの胴を射抜く。そのままの状態で、エリーゼは砲撃とはまた違う引き金を引く。
内蔵された砲撃加速装置が作動し、装填されている火薬の詰まった

炸薬弾ではなく、砲撃の際に威力を高める為にも用いられる圧力燃料容器内に充填されている液体燃料に発火。燃料が燃え、内蔵されている圧力機が圧力燃料容器内の圧力を上げ、その火力、熱、破壊力を限界にまで引き上げる。その温度は推定でも千度近くに達し、高熱で砲口が赤く染まり、辺りの温度を一気に引き上げる。

そして、臨界点にまで達した容器と砲口を結ぶ圧力開閉器が開き、その凝縮された熱源が空気に触れる事で大爆発。その勢いは唯一の逃げ道である砲口に向かって爆進。刹那、砲口から猛烈な爆発的勢いで炎が噴き出す。火だけではなく飛び散る液体燃料にさらに引火して外に飛び出た火炎はさらに勢いを増し、爆発的な勢いを持ってガノトトスを襲う。

ガンランス必殺の奥義――竜撃砲だ。

すさまじい爆発による衝撃もまた大きい。中の燃料ごと火炎を吹き出した加速装置はすぐさま高熱になった内臓機関を冷そうを圧力燃料容器に接する外壁、ハッチを開く。そこから勢い良く蒸気が吹き出し、それが吹き飛ばす勢いを幾分か軽減する。一種の無反動砲だ。

それでも勢いは止められず、エリーゼの体は大きく後ろに吹き飛ばされる。突っ張っていた足がその勢いを止めようと悲鳴を上げる。つま先が地面を抉るようにして軌跡を残す。

大きく後退しながらも、エリーゼは再びガンランスを構える。ハッチが開かれた事で圧力燃料容器が空気に接する事で冷やされる空冷式。これでしばらくは炉の熱を安全温度まで下げるのと、燃料タンクから圧力燃料容器の中に燃料を再注入するのに時間がかかる。

ガンランスの必殺技にして、最大威力を誇る一撃、竜撃砲。しかしガノトトスは相当なダメージを負っているだろうに、それでもその巨体を激しく揺らして暴れる。大タル爆弾G四発と竜撃砲を喰らってもまだ暴れるだけの力がある事には驚きつつも、想定済みの展開にエリーゼは冷静に前進する。

エリーゼの竜撃砲が炸裂したと同時に、レンも中距離からの射撃を開始する。スコープで狙うは上部のヒレ。暴れるガノトトスに対して首を狙うのは至難の業という事から、とりあえず安定して狙える場

所を選んでの攻撃だ。
一方のクリュウもエリーゼの竜撃砲が炸裂したのを見て接近。暴れるガノトトスの背中に向かって勢い良くバーンエッジを叩き込む。燃え盛る刀身が大タル爆弾Ｇやエリーゼの竜撃砲を受けて鱗が焼け落ちて剥き出しになった肉質に炸裂。焼き切るような一撃に血が噴き出し、ガノトトスが苦痛に暴れる。
踊り狂うように剣を滑らせるクリュウ。準備中に砥石を使って切れ味を最大にまで高めたバーンエッジでの一撃は大タル爆弾Ｇや竜撃砲を受けて弱った鱗をいとも簡単に弾き飛ばし、中の肉を斬り裂く。振り下ろし、斬り抜き、突き、回転斬り。様々な形で嵐のように剣撃の乱舞を叩き込む。
次第次第に疲労が腕に蓄積して来て痛みもあるが、クリュウはそれを歯を食いしばって耐えながら構う事なく次々に全力で剣を振るい続ける。
クリュウの鬼気迫るような気迫に後押しされるように、竜撃砲で後退したエリーゼも戦線に戻る。短い突進のように前進しながらの鋭い突き。その一撃はガノトトスの鱗を吹き飛ばし、刃は深く肉に突き刺さる。一撃を入れると、そのまま横へステップ。一撃を入れ、またステップして横へ移動し、ガノトトスの背後から正面へと回り込む。そして、自分と同じ高さにまで下がった弱点の腹に向かって、エリーゼは連続して突き攻撃を放つ。一撃、二撃、三撃と放ち、そこで砲撃を挟みもう一度突きを放つ。そしてそのまま二発連続で砲撃をぶちかます。
クリュウ、エリーゼ、レンの総攻撃を受けてガノトトスは怒り狂うようにして落とし穴から逃れようと暴れる。そして地面にヒビが入り、落とし穴の限界が見えた頃にクリュウは一度バックステップで距離を取る。大きな盾を使ってガードを主軸にするガンランスのエリーゼは構う事なくそのまま突き攻撃と砲撃を組み合わせた攻撃を繰り返す。元々距離があるレンも構わずに射撃を続ける。
そして、ガノトトスがようやく落とし穴から這い上がった。再び三人を圧倒するような高さにまで立ち上がると振り返って正面に位置

するクリュウを憎々しげに睨みつける。その足元では依然としてエリーゼがガード突きを放っている。
ガノトトスはエリーゼを追い払おうとその場で体当たり攻撃を仕掛けるが、エリーゼはそれを巨大な盾で防ぎ切る。そしてまるで何事もなかったかのように再び鋭い突きを攻撃を腹に向かって突き刺す。
レンもようやく暴れなくなった首を再び狙って攻撃を始める。
エリーゼとレンのコンビの攻撃に翻弄されるガノトトス。足元にいるエリーゼを排除しようと再び体当たり攻撃をし、さらに旋回攻撃をするも全てエリーゼがガードで防ぎ切る。ガノトトスは逃れようと這いずり突進でエリーゼから距離を取るが、レンの銃弾はそれを的確に追尾して命中する。
慎重に、かつ大胆に攻め込むレンの攻撃にガノトトスは鬱陶しげに首を振ると、水ブレスを彼女に向かって撃ち放つ。しかしレンはそれを予測してすでに回避行動をしており、その一撃は何も無い地面を穿（うが）つだけ。しかもそのタイミングを見計らっていたクリュウが水ブレスを撃つ事で一瞬低くなるガノトトスの頭に向かって跳びかかるようにしてバーンエッジを叩き込む。顔が燃え、ガノトトスが悲鳴を上げて仰け反る。
仰け反って一瞬動きが止まるガノトトス。そこへ距離を取られたエリーゼが再び戦線に返り咲く。
「ちょこまか動くんじゃないわよッ！」
突進の勢いで加速した、刺突のように放たれた一撃はガノトトスの太い脚に突き刺さる。予期しない方向からの鋭い一撃に、ガノトトスは堪らずにその巨体を維持できなくなり、鈍い音を地面に響かせて横転した。
「さすがッ！」
クリュウはエリーゼの見事な攻撃を賞賛しつつ、この絶好のチャンスを無駄にしない為に一気に前進する。エリーゼも地面に倒れて動けないでいるガノトトスに向かって再び突きと砲撃の嵐を繰り出し、レンも片膝を着いて体をしっかり固定して反動に耐えながら連続射撃を開始する。

クリュウはついに自分の足元くらいの高さにまで落ちたガノトトスの顔面に向かって燃え盛るバーンエッジを叩き込む。空気に触れ、風を切る度に小さな爆発音を響かせるバーンエッジはガノトトスの頬にブチ辺り、暴れ狂うように炎を絡ませる。鱗が飛び、肉が裂け、焼け焦げる。クリュウは容赦なく連続して剣を振るい続ける。

三人の総攻撃を受けるガノトトスだが、転倒している状態では反撃する事も逃げる事もできない。ただひたすらにもがき続けるだけだ。

ゆっくりと起き上がるガノトトス。それを見てクリュウは前線をエリーゼに託してすぐにバックステップで後退する。

だが、ガノトトスは脚元にいるエリーゼを無視して逃げるクリュウを執拗に狙う。角笛の効果はとっくに尽きているはずだが、どうにも嫌われているらしい。

冗談を考えている暇ではないとガノトトスから視線を外さない。放たれる水ブレスを横へ跳んで回避し、反転攻勢の構えを取る。しかしガノトトスはクリュウが反撃の為に動きを止めた瞬間を狙って這いずり突進。クリュウは慌てて横へ回避するが、思った以上に距離が詰まっていたので完全には避け切れずヒレの縁が直撃。まるで殴られたかのように彼の体は吹き飛ばされる。

クリュウの体はそのまま地面に激しく叩きつけられた。背中を強打して咳き込む彼に向かってガノトトスはさらなる追撃を仕掛けようと振り返る。

だが、振り返ったガノトトスの頭に向かってレンが銃弾を放つ。放たれた二発の銃弾はガノトトスのこめかみ辺りに辺り、一瞬遅れて爆発する。その衝撃にガノトトスは悲鳴を上げて仰け反る。

クリュウを助けるように攻撃するレン。構えたティーガーから二発目の空薬莢が吐き出されると同時に新たに二発再装填する。装填された球は通常弾や貫通弾よりも大きい弾丸。命中した後一瞬遅れて弾首に仕込まれた爆薬が爆発する、徹甲榴弾ＬＶ３。徹甲榴弾シリーズ最強の攻撃力を有し、砲術師である彼女の撃つその一撃はさらに強力だ。

新たに装填された弾丸を再びガノトトスの頭を狙って撃つ。大型

弾丸だけあってその反動も大きいが、扱い慣れたレンは物ともしない。
撃ち出された弾丸は再びガノトトスの側頭部に命中して起爆する。すると、ガノトトスが低い悲鳴を上げてその場で倒れた。まるで先程の転倒と同じような状態だが、まだ脚に対する転倒蓄積は全く溜まっていない。撃ったレン自身も驚いている様子。
「き、気絶……ですか？」
困惑するレンを一瞥し、クリュウは静かにレウスヘルムの下で笑う。
「シャルルの置き土産って訳か……」
モンスターは頭を振動させるような攻撃が蓄積されると、脳震盪（のうしんとう）を起こして一時的に気絶状態になる。主に打撃武器であるハンマーや狩猟笛、そしてボウガンの徹甲榴弾によって陥る。
これまで、シャルルが地味に当てて溜まっていた気絶値が、レンの徹甲榴弾によって発動したらしい。まさに、シャルルの置き土産だ。
クリュウは今はこの場にいないシャルルに感謝しつつ、この絶好の隙を活かそうと反転攻勢に出る。エリーゼも同じくガノトトスに攻撃を再開し、レンも通常弾ＬＶ２に弾を変更して距離を詰めて射撃を行う。
暴れる脚を避けながら、低くなった弱点である腹を狙う。それはエリーゼも同じで、クリュウとエリーゼは横に並びながら攻撃する。
燃え盛るバーンエッジをガノトトスの鱗がほとんどない腹に突き刺す。これまでと違い、その一撃は簡単に刃を通らせる。クリュウは容赦なく連続して剣を叩き込む。その隣ではエリーゼも同様にガンランスを振るう。深々と刃を突き刺し、至近距離で砲撃をブチかます。竜撃砲の絶好のチャンスではあったが、まだ冷却が終っていない。仕方なく突きと砲撃の連携攻撃を繰り返すが、そのダメージもまたかなりのものだ。
レンの撃つ通常弾ＬＶ２の雨もそれに加勢する。堅い鱗で弾き飛ばされる銃弾もあるが、大概はガノトトスの肉に辺り、わずかながらもダメージを蓄積させていく。

転倒よりも長い気絶状態の間に、三人は一気にダメージを与える事に成功した。
ガノトトスはゆっくりと起き上がり、すぐさま旋回攻撃で周囲を薙ぎ払う。エリーゼはガードしてこれを防ぎ、接近していたクリュウとレンは一時ガノトトスから間合いを取る。
ガノトトスの旋回攻撃が終わると、すぐにクリュウは反転攻勢に出ようと走り出す。だがガノトトスはそれから逃れるように彼に背を向けると、そのまま脚を大きく上げるようにして無様な走り方で三人から逃げる。クリュウとエリーゼが慌てて追いかけ、レンも射程範囲内のうちは攻撃していたが、すぐに逃げられてしまう。
ガノトトスはそのまま川辺に達すると、そこからジャンプするようにして川の中へ入ってしまった。クリュウはすぐに音爆弾に手を伸ばすが、それを遮るようにしてガノトトスは一度深く潜った後に水面に飛び出し、上半身を水面から出しながらクリュウに向かって首を下から上に動かしながら水ブレスを放つ。ガノトトスの正面至近から、クリュウの所まで水ブレスが勢い良く一直線に地面を抉る。クリュウは慌ててそれを横に回避した。だがその結果ガノトトスに音爆弾を投げるタイミングを失ってしまう。
「くぅ……ッ」
悔しげに唇を噛みながらクリュウは起き上がる。
ガノトトスを引き摺り出す事に失敗したクリュウに代わってエリーゼが川辺に接近する。だがガノトトスはそれすらも拒むようにして彼女に向かっても同様に水ブレスを放つ。これにはエリーゼも横へ跳んで回避する。ガノトトスの水ブレスは勢いが強過ぎて特殊な施しを行った盾でない限り簡単に弾き飛ばされてしまうからだ。
エリーゼもまたガノトトスに接近できない。ガノトトスはそれを嘲笑うかのように再び水中に潜る。ヒレだけを出して、ガノトトスは川の中を移動する。レンはすぐにペイント弾をヒレに向かって命中させる。クリュウが慌てて川辺に近づき、音爆弾を投げるがすでにガノトトスはその範囲外に脱し、そのままエリアから姿を消してしまった。

静かになったエリアで、三人はぺたんとその場に腰を落とす。皆、激しい戦闘の連続にかなりの疲労が蓄積していた。動き回る剣士組はもちろん、元々二人よりも体力がないレンもぜぇぜぇと肩を上下させて乱れた呼吸を整えている。
クリュウもレウスヘウムを脱ぎ捨てると、腰に下げた水筒を取って一気に中の水を飲む。さらに残った水も頭から被って熱くなった体を無理やり冷やす。
「さすがに三人だとキツイねぇ……」
クリュウの声に、エリーゼが「当たり前でしょうが」と呆れたような声で返す。その間にレンもクリュウと同じように水筒の水をゴクゴクと勢い良く飲んでいる。
クリュウは振り返り、エリーゼと視線を合わせる。言葉とは裏腹に、どちらの瞳にもしっかりと希望の光が輝いているのが互いにわかった。
「――でも、これならやれるよね？」
クリュウが試すように言うと、エリーゼは当然とばかりに腕を組んでいつもの不敵な笑みを浮かべて返す。
「当然よ。言ったでしょ？　あたしは勝てる戦しかしない主義なのよ」
自信満々に言うエリーゼの言葉に、クリュウは満足気にうなずく。そして、水を飲み終えてようやく息が整ったレンの方へ振り返る。その瞬間、レンも同じようにクリュウの方を向いた。彼の視線に対して、レンは無邪気に微笑んだ。
「がんばりますッ」
その一言で、クリュウは十分だった。嬉しそうに微笑んだ後、表情を引き締める。それに合わせて二人の表情もまた真剣なものに変わった。
「小休憩を挟んだ後、ガノトトスを追うよ」
クリュウの言葉に、二人は静かにうなずいた。
「ずおりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
豪快にイカリハンマーを振り殴り、イーオスを纏めて二匹ブッ飛ば

すシャルル。吹き飛ばされたイーオスは地面に叩きつけられ、低い断末魔の声を上げた後動かなくなる。
ぜぇぜぇと荒い息を繰り返すシャルルの周りには、無数のイーオスの亡骸が転がっている。その数は十匹以上。
疲労困憊なシャルルだったが、その瞳には相変わらず強い闘志が宿っている。その瞳で次に睨みつけるのは、仲間を全て失い絶句しているドスイーオス。それを見て、シャルルは不気味に微笑んだ。
「……さぁ大将さんよぉ。小細工はもうなしにして、シャルと正々堂々一騎打ちと行こうじゃないっすか」
汗に濡れた顔でニヤリと笑うシャルルを見て、ドスイーオスは天高く怒号を放ち、一直線にシャルルに向かって突進して来る。それを見て、シャルルは満足気にうなずいた。
「一対一の真剣勝負っすか、そういうのシャルは大好きっすよッ！」
シャルルもまたイカリハンマーを構えて突進する。
血と汗を迸らせながら、シャルルとドスイーオスの壮絶な決闘が始まった。

第１３９話　水竜決戦　仲間を信じて戦い続けて

「うおおおぉぉおりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」

勇ましき咆哮を天高く響かせながら突進するシャルル。地面を深く抉るほど強く蹴り抜き、加速に加速をする突進はドスファンゴを超える。その気迫に呑まれた上にこれまでのダメージの蓄積で反応が鈍っていたドスイーオスは慌てて毒液を吐いて応戦するが、シャルルはそれを避けるという思考すらも放棄していた。ただ真っ直ぐに目の前の敵を殴り飛ばす。彼女の思考回路はその一つに絞られている。

毒液を受けた結果、鎧に粘着性の毒液が付着して皮膚から毒が浸透する。途端に体を襲う吐き気、倦怠感、全身を覆う鈍痛。だがシャルルはそれら全てを無理やり気合でねじ伏せて突撃を止めない。そして、驚くドスイーオスの眼前に達し、豪快にイカリハンマーを振り上げる。

「どぅおりゃあああああぁぁぁぁぁぁッ！」

気合裂帛。振り上げられたイカリハンマーはシャルルの馬鹿力とハンマー自体の重量、重力の影響を受けて絶大な攻撃力となり、ドスイーオスの胴体に叩き落とされる。その絶大な一撃にドスイーオスの重量のある体がまるで紙くずのように吹き飛ばされ、地面の上を二転三転するどころかそのまま岩に激突し、それでも勢いは止まらずに岩の向こうまでぶっ飛ぶ。

全身を強く打ち、フラフラと起き上がるドスイーオス。口からは真っ赤な血を吐き、苦しげに唸りながらシャルルを睨みつける。そんな彼の視線など気にした様子もなく、シャルルは毒で真っ青になった顔で不敵に笑う。

「命が何で一つしかないか、テメェにわかるっすか？」

静かにつぶやくように言いながら、シャルルは無造作に地面に生えている草を引き抜き、その葉を何の躊躇いもなく口の中に放り込み、軽く咀嚼して呑み込む。すると、徐々に彼女の顔色が良くなっていく。

シャルルが食べたのは解毒草。解毒薬の原材料となる解毒作用の

ある野草だ。解毒薬に比べれば効果にはブレがあるが、ドスイーオスの毒も解毒する効力を持っている。
解毒を済ませ、再び気合を全身に纏うシャルルは不敵な笑みを浮かべながら、イカリハンマーを構える。疲労はあるが、今はその人一倍強い気合と根性がそれを補うように燃え盛っている。
「――それは、一発勝負の人生が一番単純明快で燃えるからっすよッ！」
刹那、シャルルはドスイーオスに向かって突撃する。地面を抉り飛ばしながら、全速力で突っ走る。ドスイーオスは毒液を吐いて牽制するが、シャルルは再びお構いなしで毒液を受けながらも突撃を止めない。
眼前にまで迫られ、ドスイーオスはとっさに横へ回避した。だがシャルルは回避された瞬間に左足を地面に突き刺すように軸にして無理やり体を止め、暴れる勢いをそのまま回転力に変えてその場で回転。構えたイカリハンマーを豪快に振り回し、逃げたドスイーオスの背中に向かって振り殴る。回避した直後の為に動けなかったドスイーオスはその一撃を避ける事もできずに再び吹き飛ばされる。地面の上を何度も転がり、木に叩きつけられてようやく止まる。
倒れるドスイーオスは咳き込むたびに吐血を繰り返し、苦しげな息を漏らしながらも懸命に起き上がる。だがそれを待たずして接近したシャルルはドスイーオスの腹を蹴り上げる。
「グエッ!?」
一瞬フッと浮いた後、続けてハンマーで叩きつけられた。その破壊力にドスイーオスの体が地面にめり込む。濁った悲鳴を上げ、血の塊を吐く。今の一撃で、骨の何本かが折れた音がした。
激痛に耐えながら起き上がろうとするドスイーオスだが、シャルルはその頭を踏みつけて動かさない。ドスイーオスの目がギョロリと動き、なぜか空を見上げているシャルルを捉える。いつの間にか日はずいぶんと傾き、もうじき夕方という微妙に赤みが帯びてきた空をバックに、シャルルは先程引っこ抜いた解毒草からまた葉を何枚かもぎ取って咀嚼している。しばしの無言の後、ゴクリと胃に収め、シャ

ルルは静かに視線を下げる。
「何で自分よりも小さな敵にこんなにも圧倒されているのか、信じられないって目をしてるっすね。せめてもの情けって訳じゃないっすけど、冥土の土産に教えてやるっすよ。テメェになくてシャルにあるもの、それは――信じられる仲間っすよ」
異議を唱えるように、ドスイーオスは突然無理やり体を起こそうと動く。上に載っていたシャルルはすぐに飛び降りて距離を取る。その間に、ドスイーオスがゆっくりと起き上がる。悔しげに睨んでくるその瞳に対して、シャルルも睨み返す。
「テメェは本能による主従関係しか知らないからわからないかもしれないっすけど、自分が認めて、自分が信じて、自分が頼れる本当の仲間を持たないってのは、すごく寂しい事なんすよ？　テメェにはその仲間がいなくて、シャルにはいるっす。それが、テメェとシャルの決定的な差っすよ」
黙れッと言わんばかりに怒号を上げ、怒りに任せて突進して来るドスイーオス。シャルルはそれを迎え撃つようにイカリハンマーを構え、力を溜める。
「……今も兄者やエリーゼ、レンはガノトトスと戦ってるっす――いつまでもシャルはテメェに付き合ってらんねぇんすよッ！」
地面を蹴り抜き、シャルルが怒号を上げながら突進する。
ドスイーオスは大きな口を開きその凶悪な牙でシャルルを噛み砕こうとし、シャルルは構えたイカリハンマーでドスイーオスほ粉砕しようとお互いに構える。
シャルルとドスイーオスは猛烈な勢いで迫り――激突。
空に、決着の悲鳴が轟いた……
それまでの主戦場であったエリア５の隣、エリア６。違うと言ってもエリア５と大した違いはない似たような川辺のエリアだ。
クリュウ、エリーゼ、レンの三人は逃げられる直前にレンが撃ったペイント弾とクリュウの探知スキルを利用してガノトトスの警戒が解けてからエリアに侵入し、気付かれないように川辺に近づくが、その途中で気づかれてしまった。

「わ、私のせいですかッ!?」
「違うわよッ！　バカ言ってないで川辺から離れるわよッ！」
自分が何かまたドジをやらかしたのかと慌てるレンの首根っこを掴んで、エリーゼは危険な川辺から一時撤退する。クリュウも音爆弾を投げるべきか一瞬考えたが、とりあえず距離を開ける事にした。
逃げる三人を追うように、ガノトトスは水ブレスを放つ。エリーゼとレンに向けられた一撃はエリーゼがレンを持ちながら回避に成功する。そのうち、水ブレスの範囲外にまで脱した。クリュウも同様に水ブレスの射程外にまで脱する。
一度、川で暴れるガノトトスに注意しながら三人は集合した。
「気づかれたんじゃ釣りカエルは使えないわよ。どうする訳？」
「……音爆弾で引き釣り出すしかないね。このままじゃ怒り状態ではないけど、逆に危ないだろうし」
「音爆弾はあんたに任せるわよ。それからレン、あんたは少し距離を詰め過ぎよ。もっと間合いを開けて戦いなさい」
「で、でも弾の威力を最大にするにはある程度接近しないと……」
「あんたの攻撃力なんて高が知れるでしょうが。それよりもあんたがミスった時にするフォローの方が面倒事なのよ。いいから、あたしの迷惑になる距離にはいない事。わかったわね？」
「……は、はいです」
エリーゼに怒られ、しょんぼりとするレンを見てクリュウはエリーゼに「ちょっと言い過ぎじゃない？」と窘（たしな）める。すると、エリーゼは気まずそうにフンッと視線を逸らす。そんな彼女に苦笑しながら、クリュウはそっとレンに近寄り耳元で囁（ささや）く。
「大丈夫。ああ言ってるだけで、本当は君を危ない目に遭わせたくないだけだから」
「……わかってますよ」
クリュウの言葉に、レンは小さく微笑んだ。逆にクリュウは一瞬面を喰らったような顔になったが、すぐに「そっか……」とつぶやいた。どうやら自分が思っている以上に、エリーゼとレンの絆はしっかりと結ばれているらしい――どこか、羨ましくもある。

「――でも、ありがとうございます。気遣っていただいて、嬉しいです」
そう言って、レンは嬉しそうに微笑んだ。その無邪気で真っ直ぐな笑顔を見て、クリュウは恥ずかしそうに頬を赤らめながら視線を逸らす。すると、その先でまるで親の仇でも見ているように睨みつけてくるエリーゼと目が合った。
「レンに手を出したら、マジで殺すから」
「しないってばッ！　僕をどういう目で見てるのさッ!?」
「……学生時代のあんたを見ている限り、かわいい女の子を周りに侍（はべ）らせてハーレムを築いているとしか思えないけど」
「……まぁ、極端に解釈すれば正解と言えなくもないけどさ」
「極端に解釈なくても、普通に正解だと思うけど？」
軽く軽蔑の念が込められたジト目で見られ、クリュウは気まずそうに視線を逸らす。すると、その視線の先では川の中で暴れているガノトトスが見え、少々の間忘れかけていたが今は狩猟中だという事を思い出す。
「それよりガノトトスだよ。僕が音爆弾でこっちに引き摺り出すから、それから攻撃開始するよ」
誤魔化すように早口で言うクリュウの指示に、エリーゼは何か言いたそうだったがひとまずうなずいて了承する。それを見てクリュウはほっと胸を撫で下ろすと、自分で言った通りに早速音爆弾でガノトトスを引き摺り出そうと動く。だが、それよりも早くガノトトスの方が動いていた。
一度水中深くに潜り姿を消したかと思うと、次の瞬間勢い良く水面に飛び出して来た。その非現実的過ぎる光景にクリュウは絶句した。何と、ガノトトスはヒレを大きく広げて勢いを利用して地上スレスレを滑空して彼らに迫って来た。あれだけの巨体が、信じられないような速度で迫る光景にクリュウは絶句しつつもすぐに盾を構えてガードの体勢になる。一方のエリーゼは隣にいるレンの首根っこを掴んで勢い良く投げ飛ばす。そしてすぐにクリュウと同じように盾を構えた。

エリーゼに投げ飛ばされたレンは地面に叩きつけられた衝撃に一瞬顔を苦痛に歪めるが、すぐにエリーゼが自分を助ける為にガノトトスの攻撃範囲外に投げ飛ばしたのだと気づき、慌てて上半身を起こして二人の姿を確認する。すると、そんな彼女の目の前でガード体勢になっている二人に向かってガノトトスが全身で強力な体当たりで襲いかかる。

凶悪な牙がクリュウを狙うように迫るが、クリュウは盾でうまくそれを防いだ。しかし衝撃だけは流し切れずに吹き飛ばされ、岸壁に背中から強く叩きつけられた。あまりの激痛に、一瞬気を失いかけるが何とかそれだけは耐え、地面に倒れる。

エリーゼもヒレの直撃を盾に受けた。さすがの大きな盾でもその勢いは止められず、エリーゼも吹き飛ばされて地面の上を何度か転がった。

そして、ガノトトスは倒れているクリュウの手前くらいに地面に腹ごと着地し、ジャンプするように起き上がる。

たった一撃で、クリュウとエリーゼが大ダメージを負ってしまった。その信じられないような光景に絶句していたレンだったが、すぐにハッとなり背中に携えたティーガーを構える。

二人が体勢を立て直すまでの、わずかな時間でも自分が稼がないと。レンはすぐに弾倉の中に装填されていた通常弾ＬＶ２を排出（イジェクト）。取り出したのは徹甲榴弾よりも大きな対大型モンスター用弾丸。レンはそれを装填（リロード）し、すぐに構えてその銃口をこちらに背を向けているガノトトスに向ける。そして、無言で引き金を引いた。

これまでとは違う重々しい発砲音が響き、その衝撃にレンの体が軽く後退する。撃ち出された親弾はガノトトスの頭上で炸裂し、中に詰められた複数の子弾が広範囲にバラ撒かれ、爆発。ガノトトスは一瞬複数の爆発に包まれた。

突然の攻撃に驚くガノトトスを見ながら、レンは攻撃が効いた事を確信して第二発を放つ。彼女が使ったのは一発の銃弾から複数の小爆弾が撒き散らされて広範囲に攻撃を与えられる拡散弾ＬＶ２。ボ

ウガンの弾最強の攻撃力を有する大型弾丸だ。
　レンの攻撃に怯むガノトトス。その隙にエリーゼがうまくガノトトスの攻撃範囲から脱出した。しかし体を強く打ち付けたクリュウは痛みで思うように体が動かず、まだ起き上がる事もできない状態であった。それを見てエリーゼが動く。
「援護頼むわよレンッ」
　レンに援護を任せ、エリーゼはこちらに振り返るガノトトスに向かって走る。その最中、腕を突っ伏して起き上がろうとしているクリュウを見る。
「さっさと起きなさいよバカッ！」
　その容赦のない罵声に、クリュウは全身に走る痛みで顔を歪めながら「言われなくても立つって……ッ」と歯を食いしばりながらゆっくりと立ち上がる。とっさに受身を取ったから骨折などはしてはいないが、それでも全身が痛む。クリュウは道具袋（ポーチ）から回復薬グレートを取り出して無理やり飲み、フラフラの状態でゆっくりとガノトトスから離れる。
　起き上がったクリュウを確認してから、エリーゼはガノトトスの懐に一気に入り込み、目の前の巨大な脚に向かって突進の勢いを加えた強烈な突き攻撃を放つ。
「せいやぁッ！」
　貫くような鋭い一撃に、ガノトトスの太い脚に切り傷が生まれ、血が噴き出す。連続して力強く放たれる突き攻撃に加え、砲撃でその威力を増す。
　エリーゼの連続攻撃にガノトトスは煩わしげに体を回転させて蹴散らそうとするが、エリーゼはそれを盾で防ぎ切る。なかなか離れようとしないエリーゼにガノトトスは体当たりを仕掛けようと身を縮める。その瞬間、レンが撃ち出した拡散弾ＬＶ２が炸裂。予期しない一撃にガノトトスは怯み、エリーゼへの攻撃は不発に終わる。
　エリーゼとレンがガノトトスを引きつけている間に、安全圏に脱したクリュウはさらに回復薬グレートを飲んで体力を回復させる。ついでに砥石を使って切れ味を回復させてから、遅れて戦線に加わる。

クリュウはエリーゼに夢中でこちらの動きに気づいていないガノトトスの背後から接近し、その太い脚を動かすアキレス腱目がけて切れ味全開のバーンエッジを叩き込む。
荒れ狂う炎が悲鳴のような爆音を上げながらガノトトスの肉を焼き切る。その一撃に堪らず、ガノトトスは転倒した。
「やるじゃないッ！」
エリーゼはチャンスとばかりにガノトトスの顔面の前に立ち、近衛隊正式銃槍を構える。その砲身に備え付けられたハッチはすでに閉じられており、一撃必殺の射撃が可能という合図。エリーゼは容赦なく引き金を引いた。
再び砲撃加速装置が悲鳴を上げるように加熱し、圧力燃料容器内の圧力が高まる。しばしのチャージ時間があり、爆発するようにして砲口から大爆発。その爆炎は容赦なくガノトトスの顔面を焼く。
エリーゼの竜撃砲がうまく決まったのと同時に、空からは無数の銃弾が飛来。倒れているガノトトスの身を次々に撃ち抜いていく。
ついに調合分も含めて通常弾ＬＶ２の弾薬が切れたレンは、弾種を貫通弾ＬＶ２に変更して攻撃を再開。硬いハリマグロの針の部分を芯にした弾丸の貫通力は高く、ガノトトス程度の体なら簡単に貫いてしまう。
エリーゼ、レンの猛攻に加えて、クリュウの攻撃も激しさを増す。荒れ狂う炎の嵐のようにクリュウはバーンエッジを振り回し、自身も踊り狂う。次々に放たれる炎撃にガノトトスの体が焼け焦げていく。
三人の猛攻撃に晒されて身動きの取れないガノトトス。しばらく蹂躙（じゅうりん）された後にようやく起き上がるが、反撃の隙を与えずにクリュウとエリーゼは一度後退。レンも攻撃しながら距離を開ける。
ガノトトスから距離を取り、全体の状況把握を行うクリュウ。その時、彼は気づいた。
――ガノトトスの背中から生えるヒレが、畳まれていた。そしてそれは、勝利へあとわずかな道だという証でもあった。
モンスターの中には弱ってくると脚を引きずるという動作とは違

う、具体的な体の変化が起こる者もいる。弱ってくると畳まれるイャンクックの耳がその代表であり、ガノトトスのヒレもそれと同じ――つまり、ガノトトスは弱っているという証拠だ。
自分達の勝利まであとわずか。その希望の光に、クリュウの士気も上がる。
「あと少しだッ！　一気に畳み掛けるよッ！」
嬉々とした声で叫ぶクリュウだったが、まるでその総攻撃の合図がわかったかのようにガノトトスは突然回れ右すると、無様な走り方で川の方へと逃げていく。慌てて三人は追うが、間に合わずガノトトスは川へと潜ってしまう。そしてそのまま逃げられてしまった。
さっきまでの張り詰めていた緊張感が消え、川のせせらぎの音だけが響く静かな空間。呆然としているクリュウの横で、エリーゼがジト目で彼を見ながら言う。
「……かっこ悪ぅ」
「お願いだから、それ以上は何も言わないで……」
自分でもかっこ悪いと自覚しているクリュウは恥ずかしそうに顔を赤らめながら頭を抱える。「畳み掛けるよ」と言ったすぐ後に逃げられるとは、穴があったら入りたいくらいに恥ずかしい失態だ。
夢にまで出て来そうな恥ずかしさに顔を上げられないクリュウに、レンは「う、運が悪かっただけですッ。次は大丈夫ですよッ」と必死に励まそうとがんばるが、それを無碍にするかのように「運も実力のうちって言うけどねぇ」とイタズラっぽい笑みを浮かべながら止めを刺すエリーゼ。その言葉にガクッと崩れるクリュウを見て、レンは右往左往するばかり。
しばしそんなコメディーがあって、ようやくクリュウが立ち直ると皆一様に先程までのおふざけモードを消して真剣に向き合う。
「ペイントの匂いはここから北東方向から漂ってくる。北東方向にはエリア1と8だけ。そして、ガノトトスが動けるような水辺があるのはエリア8の地底湖だけだ」
「ヒレを畳んだって事はガノトトスも相当弱っているはず。それこそ瀕死の状態に等しいわ。このまま攻撃を継続すれば、確実に勝てる。

ようやく希望の光が見えて来たって所ね」
「あと少しって訳ですねッ」
ガノトトスは弱っている。
これまでの終わりの見えなかった戦いに、ようやく勝機が見えてきた。それは出口のない道を進み続けるように戦い続けて来た三人にとっては何よりも戦意を回復させるものだ。あと少しで終わる。そうわかれば皆ラストスパートができるし、これまでの努力が無駄ではなかったという何よりの証にもなる。
ようやく見えて来た戦いの終わりに自然と喜ぶエリーゼとレン。特に二人にとっては自分の実力以上の相手だったからこそ、その喜びも大きい。クリュウも、その気持ちは十分理解できるし、昔の自分ならその輪の中に入っていただろう。でも、踏んで来た場数が彼を冷静にさせる。最後の最後が、最も危険である事を、彼は十分知っていた。
「わかっているとは思うけど、油断はしないように。あと少しだとしても、相手が相手だからこれまで以上に気を引き締めて事に当たるよ」
表情を崩さずに言うクリュウの言葉に、エリーゼはそれまでの自分の行動を恥じたように頬を赤らめて「う、うるさいわね。言われなくたってわかってるわよ」とそっぽを向く。その隣ではレンが「ご、ごめんなさいですッ」と慌てて謝る。
「いや、別に謝られても困るんだけど。実際、喜ぶ気持ちは十分分かるし、僕だってこれでも嬉しいんだよ？　でも、本当に喜ぶのは勝った後にとっておこうよ。その方が本当の勝利をより噛み締められるからさ」
そう言って、クリュウは大好きなおやつを楽しみに待っている子供のような純粋な笑みを浮かべる。その笑顔を前にして、レンはほんのりと頬を赤らめて「そうですね。私も楽しみは最後にとっておきますッ」と嬉しそうにうなずく。
そんな二人を不機嫌そうに見詰めるエリーゼ。
「あんたの方が油断しまくってるように見えるけど」
「そんな事ないよ」

「フン、どうだか――ボサッとしてないッ！　行くわよレンッ！」
「えぇッ!?　は、はいですぅッ！」
　意味もわからずエリーゼに怒られ、混乱しながらも慌てて大股でズンズンと進むエリーゼを追い掛けるレン。そんな二人を見て苦笑しながらも、クリュウは「ちょっと待ってッ」と先へ進もうとする二人を止める。
「何よ?　ラストスパートなんでしょ?　さっさと片付けるわよ」
　なぜか不機嫌そうにクリュウを睨みながら言うエリーゼに困惑しながらも、クリュウは二人を呼び戻す。行く気満々だったエリーゼは仕方なく戻り、それに続いてレンも戻って来る。
「何で呼び止めるのよ。もしかして、シャルルの援護に向かうとか言うんじゃないでしょうね?　だったら――マジであんたを殴るわよ?」
　それまでとは違う、より攻撃的な怒りを纏い、エリーゼはクリュウを睨みつける。嫉妬心から来る怒りではなく、本気の怒り。隣に立つレンはそんなエリーゼの気配にビビるが、正面に立つクリュウは表情を変えない。
「あいつは、あんたなんかの言葉を信じて一生懸命にがんばってるのよ。その努力を無駄にするような事は、絶対にさせない。強行するってんなら、あたしの竜撃砲が黙っちゃいないわよ」
　睨みつける鋭い瞳には本気の光が宿り、その光を直視している訳ではないレンは恐怖のあまり身をブルブルと震わせている。彼女としても、エリーゼのここまでの怒りは珍しいのだろう。そんな本気の怒りを向けられているクリュウだったが、その表情にはむしろ笑みが浮かぶ。当然、それを見たエリーゼの表情が険しくなる。
「何よ?　ケンカでも売ってる訳?」
「いや、シャルルはいい友達を持ったなぁって」
「は、はぁッ!?」
　クリュウの発言にエリーゼは顔を真っ赤にして慌てながら「ば、バカ言ってんじゃないわよッ！　何であたしがあいつなんかの友達になる訳ッ!?　ただの腐れ縁だってのッ」と実にわかりやすく、実に素

直じゃない発言をする。クリュウはそんな彼女の反応に小さく笑みを浮かべる。
「安心して。別にシャルルの援護に向かう訳じゃないからさ。きっとあいつもそれを望んでないだろうし。僕が言いたいのは一度一拠点（ベースキャンプ）に戻って残しておいた大タル爆弾Ｇ二発を補充してから向かおうって話だよ」
　クリュウは最後の攻勢となるであろう決戦に備えて、荷車に搭載できなかった大タル爆弾Ｇ二発の補充に向かおうとしていた。貴重な攻撃力であるのは確かだが、四発では爆発が物足りないという面もある。最近フィーリア達が本気でクリュウのそんな爆弾至上主義に密かに悩んでいる事など、当然彼は知る由もない。
　一方、勝手に勘違いして勝手に暴走していたという事に遅れながらも理解したエリーゼは羞恥で顔を真っ赤に染めて顔を引きつらせる。そして、微笑ましげに見詰めて来るクリュウを睨みつけながら近衛隊正式銃槍を構え、その砲口を向ける。これにはクリュウも表情を引きつらせた。
「あ、危ないってッ！　人に武器を向けるのは倫理違反だよッ!?」
「マジであんた、一度だけでいいから竜撃砲を当てさせて……ッ」
「嫌に決まってるでしょッ！」
　恥ずかしさで顔を真っ赤にして激怒するエリーゼを何とかレンが落ち着かせる。怒りの矛先は当然邪魔をするレンに向かうのだが、彼女としては慣れっこなのかエリーゼを冷静に説得する。クリュウとしてはレンに迷惑を掛けてしまった事に罪悪感を感じてはいたが、レンはそんな彼の気持ちも汲み取って気にしないでと微笑む。ほんと、よくできた妹さんだ。
　レンのおかげでようやく冷静さを取り戻したエリーゼ。ただまだ怒っているのかクリュウとは一切目を合わせようとしない。
「持って来た爆弾を使い切ろうなんて、あんたマジで爆弾狂なんじゃないの？」
「違うって。もう、何でみんなそう誤解するかなぁ。僕はただ狩りには爆弾が付き物だって思ってるだけだって」

「……そんな発言をしておいて、それを誤解の二文字で片付けようとしてるあんたが信じられないわよ」
ある意味慣れているのか呆れ返るエリーゼを気にした様子もなくクリュウは「それじゃ拠点（ベースキャンプ）に戻るよ」と言って歩き始める。エリーゼは彼と出会ってから一体何度目かわからぬため息を零し、その後に続く。そしてそんな二人をとても仲がいいと勘違いしたのか、レンが嬉しそうに微笑みながら追い掛ける。
こうしてクリュウ、エリーゼ、レンの三人は一度再準備の為に拠点（ベースキャンプ）へと戻るのであった。
拠点（ベースキャンプ）で残しておいた大タル爆弾Ｇ二発を補充し、さらに損耗した道具（アイテム）を調合して補充も済ませた三人は改めてガノトトスを追って拠点（ベースキャンプ）を出撃する。
最初の時と同じようにエリア１、２、３、５、６の順で進んでいき、エリア６の端にあるツタの葉で覆われた洞窟の入り口に到着する。クリュウはまず道を塞ぐツタの葉をバーンエッジで焼き切って道を作ってから、荷車を引いて進む。先頭はエリーゼが担当し、殿は荷車を押しながらレンが担っている。
密林の湿度の高い蒸し暑さとは打って変わって、洞窟の中は冷たい地下水が流れていてひんやりと寒い。その温度差に身震いしながら三人は進んで行く。
奥に進めば進むほど温度は冷えていき、いつの間にか吐く息が白く染まる程に寒くなっていた。これにはさすがにクリュウの表情も険しくなる。
「結構寒いね……」
身を震わせながらつぶやくクリュウを見て、エリーゼは無言で道具袋（ポーチ）に手を伸ばす。ゴソゴソと中をまさぐり、取り出したのは回復薬などと同じビンに入った赤い液体。エリーゼはクリュウと同じように寒そうに身を縮こまっているレンに「これでも飲んでなさい」と言って投げる。レンは慌ててそれを取ろうと腕を伸ばすが、ビンは見事に両手の間を通り抜けてレンの顔面にヒット。痛みに耐えながらも地面に落ちる寸前で何とかキャッチした。

「痛ぁ……、何ですかこれ？」
「ホットドリンクよ。さっさと飲んじゃないなさい」
　エリーゼが渡したのはホットドリンク。これを飲むと体温が上がって外気の寒さを和らげる事ができる薬で、主に極寒の地となる雪山で使われており、クーラードリンクと同じく民間でも幅広く使われている定番の道具（アイテム）だ。
「な、何でホットドリンクを持ってるんですか？」
　事前の打ち合わせでそんな道具を持って来る事はレンは聞いていなかったらしく驚いている。そういう意味では独断で閃光玉を持ち込んだクリュウと同じだが、蒸し暑いとわかっている密林に持ち込むのはあまりにも不自然だ。
　レンの問い掛けに、エリーゼはフンッと鼻を鳴らす。
「砂漠にある地底湖でも、外気とは関係なしに地下水は冷たい。だから、地下水で満たされている地底湖周辺は寒くなる事もあるのよ。地形に地底湖があるってわかった段階で十分予想できる展開。念の為、持って来てたのよ」
　大した事はないと言いたげに平然と答えるエリーゼだが、その思考は感嘆せざるを得ない。普通はそこまで思考が至らないが、エリーゼはそこまで読んで行動している。まだまだ駆け出しのレベルとはいえ、熟練者並みの頭脳を持っている。
　そんなエリーゼを心の底から尊敬するようにキラキラとした瞳で見詰めるレン。そんな彼女の視線にエリーゼはむずがゆそうに視線を逸らした。
「ほ、ほら。さっさと飲んじゃいなさい。こんな所で鼻水なんて垂れ流されたんじゃ堪んないわ」
　実に素直じゃない言葉にレンは嬉しそうに元気良く返事し、ホットドリンクを飲む。が、ホットドリンクの原料はトウガラシの為、にが虫の体液で相当和らいでいるとはいえピリ辛。辛いものが苦手なレンは一口飲んでヒィヒィと舌をペロリと出して苦しむ。だが当然エリーゼは「バカやってないでさっさと飲むッ」と容赦ない。仕方なく、レンは少しずつではあるがホットドリンクを飲む。

ホットドリンクを何とか飲んでいるレンを見て、エリーゼは自分もホットドリンクを飲む。こちらは豪快に一気飲みだ。
飲み干し、体が熱くなるのを感じて満足気にうなずくエリーゼ。そんなエリーゼにクリュウが「あのぉ……」と小さく声を掛ける。エリーゼはクールな表情で振り返る。
「何よ？」
「僕の分とかって、用意してないよねぇ？」
「はぁ？　何であんたの分まで用意する必要がある訳？」
「……ですよねぇ」
予想通りとはいえ、がっくりと肩を落とすクリュウ。途端にさっきまで以上に寒くなったような気がする。気持ちというのは大切なんだなぁと微妙に冷静な解釈をしてみたり。
身を震わせながら、仕方ないと諦めて前に進もうとするクリュウ。すると、そんな彼の手をちょこんと掴む者がいた。振り返ると、ホットドリンクを飲んだおかげでさっきよりも血色が良くなったのか頬をほんのりと赤らめながらジッと自分を見詰めるレンと目が合う。
「あ、あの、もしよければ、私の飲みかけでよろしいのでしたら飲みますか？」
恥ずかしそうに小さなつぶやくような声で言うレン。ここが無音の洞窟の中じゃなければ気聞き取れないような程に小さな声だ。
そんな声でのレンの善意に、クリュウは戸惑う。
「いや、でもさ……」
「私の事はお構いなく。もう飲めませんから、もったいないですし」
そう言ってレンはどうぞと半分程残したホットドリンクを差し出して来る。
正直、クリュウは困っていた。純粋過ぎるような好意に下手に断る方が悪いが、だからと言って受け取るのも何となく気恥ずかしい。これでも一応思春期の男の子だから、かわいい女の子の飲みかけをもらうというのに少しばかり抵抗があるのだ。変な所は実に歳相応の男子らしい。
散々悩んだ挙句、受け取ってくださいと言わんばかりに笑みを浮か

べながら差し出すレンを見てようやく覚悟を決める。
「じゃ、じゃあ貰うよ」
そう言って受け取ろうと手を伸ばした瞬間、ズイッと目の前が真っ赤に染まった。驚くクリュウが近過ぎて焦点が合わない目の前の物に対して半歩引いて焦点を合わせると、それは今まさにレンから受け取ろうとしていたホットドリンク。それもしっかり一人前の入った物であった。驚きながらそれを握る手を追うと、不機嫌そうに自分を睨みつけているエリーゼと目が合う。
「冗談に決まってるでしょ。さっさと飲みなさいよこのバカ」
「あ、ありがとう……」
「うっさいッ。レンも残さずに全部飲みなさいッ！」
「は、はいぃ……ッ」
レンはエリーゼに怒られ涙目になりながらホットドリンクを一気に飲み干す。そんな彼女を見て罪悪感で胸がいっぱいになりながらも、クリュウはホットドリンクを飲む。飲み終える頃には体が温まり、寒いには寒いのだが先程に比べればずいぶんとマシになっていた。
「助かったよエリーゼ」
お礼を言うクリュウだったが、エリーゼは不機嫌そうに鼻を鳴らして勝手に前進してしまう。仕方なく、クリュウは荷車を引いてその後に続く。
しばらく無言で進む三人だが、最初は単に気まずかっただけの沈黙であったが、今ではそれとは違う意味での沈黙に包まれていた。
気配でもわかる。この奥にガノトトスがいるという事。だからこそ、自然と緊張してしまい口数が減ってしまう。
ひんやりと冷たい風が嫌な汗で濡れた頬を冷やす。次第次第に水や自分達の動く音以外の、奥で何かが暴れるような音や振動が伝わって来るのを感じる。
「……ガノトトスが暴れてるのかな？」
だがそれは少し不可思議だった。探知スキルのおかげで現在ガノトトスが警戒態勢だという事はわかる。でも、それにしては暴れ過ぎ

だ。
意味不明なガノトトスの行動に自然と警戒心が引き上がる。それは他の二人も同じなのか、二人とも真剣な表情を崩さない。
「一体奥で何が起きてるんだ……」
「うおっしゃあああああぁぁぁぁぁッ！　掛かって来いやゴラアアアアアアアアアアッ！」
――その聞き慣れたバカ丸出しの咆哮に、三人は豪快に転ぶのであった。
慌ててエリア８に入った三人。三人がまず最初に出たのは人の背丈程の高さの段が三段で構成された岩場の上。左からは何とか荷車が降りられそうなスロープのような道がある。そしてそこからはエリアの全体を把握できた。
高台の下には結構広い広場のような平坦な岩場があり、その周りを囲むように三方は湖となっている。なるほど、ガノトトスにとっては自身の攻撃力を最大にするに相応しい場所だ。
そして、そんなガノトトスのテリトリーでガノトトスと戦っているバカがいた。
水中から勢い良く上半身を飛び出し、首を回すように横薙ぎに水ブレスを放つガノトトス。地面を穿つような強烈な水ブレスが横から迫るのを目で見なくても気配でわかる。
シャルルは走る速度をさらに上げて水ブレスが届く前に一気に突破。彼女が通り抜けてから一瞬遅れて彼女がいた場所が水ブレスで抉られる。
すさまじい速度で一直線にガノトトスへ突っ込むシャルル。その手には音爆弾が握られ、水中に逃げようとするガノトトスに向かってそれをまるでハンマーを振り回す時のように体を回転させて遠心力を使って勢い良く投擲。音爆弾は水中へと潜るガノトトスの直上で炸裂。キンッという甲高い音が辺りに響き、ガノトトスは苦しげに水面からジャンプして暴れて水の中に落ちる。一瞬の間があって、ガノトトスが勢い良く水の中から飛び出して来た。
ガノトトスが頭上を通り過ぎ、身に纏う水滴がシャルルの頭上から

降る。濡れた髪をブルブルと頭を振って吹き飛ばし、振り返る。やんちゃなツインテールが元気に揺れる。
　着地と同時にクリュウ達とは少し離れた高台の方へ這いずりながら滑っていくガノトトスを視線で追い、そして高台の上にいるクリュウ達と目が合う。その瞬間、シャルルはニッといつもの屈託の無い笑みを浮かべた。
「――遅いっすよ。待ちくたびれて一人で暴れてたっすよ」
「あのバカ……」
　そう言いながらも、クリュウの表情は嬉しそうに笑みが浮かんでいた。彼女の無事な姿が見れて、でも彼女らしいくらいにバカで危なっかしくて、でもこうして目の前で笑ってくれている。それが嬉しかった。
「……面倒事が増えたわね。ほら、そんなアホ面晒してないであたし達も戦線に加わるわよ。ここまで追い詰めたのはあたし達なんだから、それをあいつにおいしい所だけ持って行かれるのは真っ平御免よ」
　そう言ってエリーゼはお先とばかりに高台から飛び降りると、一人無茶に戦っているシャルルの援護に向かう。何だかんだ言って、本当は仲がいいのだあの二人は。
「それじゃ僕も荷車を置いたら戦闘に加わるから、援護よろしく頼むよ」
　クリュウの言葉に、レンは「イエッサーッ」となぜか敬礼して応える。その仕草に笑いながら、クリュウは荷車を引いてスロープを降りて行った。
　クリュウの背中を見送ったレンはそのまま高台の上に陣を構えて射撃体勢になる。装弾するのは射程距離の長い貫通弾ＬＶ３。一発の威力と貫通力は高いが、その分衝撃も大きい為動きが取りづらい弾。でもここから固定砲台として遠距離射撃すれば、その威力を十分に発揮できる。
　レンは無言で貫通弾ＬＶ３を装填（リロード）すると、ティーガーを構えてそのスコープでガノトトスを狙う。立ち上がったガノトト

スの脚元では血気盛んで勇ましい咆哮を上げながらシャルルが突貫するのが見える。レンは静かに、引き金を引いた。
重々しい銃声が響き、強い衝撃と共に撃ち出された弾丸はガノトトスの右脚の根元に命中。そのまま骨盤を貫通し、反対側へと飛び出た。これにはガノトトスも悲鳴を上げて一瞬動きを止める。その一瞬を突いて迫ったシャルルはガノトトスの顔面に向かって横殴りにハンマーを叩き込んだ。
「ガフゥッ!?」
悲鳴を上げて仰け反るガノトトス。側頭部を殴ったシャルルはそのまま前転でガノトトスの脚元に一気突入。そこでがら空きの脚に向かってイカリハンマーを連続で叩きつけ、最後には振り上げるようにして大腿骨を打つ。
ガノトトスは反撃とばかりに体ごと旋回してシャルルを吹き飛ばそうとするが、シャルルはこれをバックステップで範囲外に脱して回避する。
シャルルに代わって旋回攻撃に生まれる大きな隙を突いて突撃したのはエリーゼ。先程までと同じように盾を使ってガード主体で攻撃を繰り返す。
「せいッ！　やぁッ！　はぁッ！　てぇいッ！」
突き、突き、突き、砲撃。再び突きの連続と砲撃を組み合わせての連続攻撃で一気に攻勢に出る。ガノトトスはこれに対して体当たりで応戦するが、エリーゼはこれを盾で防いですぐに攻撃に転ずる。
「ずおりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
ガノトトスの背後からはシャルルが再び勇ましい咆哮を上げながら接近し、イカリハンマーを振るう。そして高台の上からはレンの遠距離射撃が続く。
三人の攻勢を見ながら、クリュウは荷車を隅の方に置き終えてから遅れて戦線に加わる。
ガノトトスは鬱陶しげにレンの方へ向き直ると、水ブレスを放つ。迫り来る高圧放水にレンは横へ転がって回避。寸前まで自分がいた場所が抉られる光景に冷や汗を流すが、すぐに意識をガノトトスに戻

して攻撃を再開する。
「あたしの妹に何してくれてんのよッ！」
　これに怒り狂うのはエリーゼ。瞳が凶悪に鋭くなり、纏う気配は憤怒一色。ガノトトスの脚元に潜り込むと勢い良くガンランスを打ち上げる。鋭い先端の刃先がガノトトスの脆い腹に突き刺さり、そのままの状態で連続砲撃。これにはガノトトスは堪らず悲鳴を上げて転倒する。
　倒れたガノトトスにようやく接近したクリュウはこのチャンスを無駄にしない為にバーンエッジを引き抜く。そんな彼の闘志を表すかのように刀身に巻きつく炎が暴れ狂うように燃え盛る。狙うは倒れた事で攻撃できる位置に下りたガノトトスの腹。怒号のように燃え盛る炎が唸り、その全力を込めてクリュウはバーンエッジを叩きつけた。
　爆発するかのように燃えるバーンエッジが爆ぜる度に火花が辺りに飛び散る。その横ではエリーゼが突きと砲撃の猛攻撃を振るい、頭ではシャルルが咆哮しながらイカリハンマーを叩きつけ、高台からのレンの攻撃が続く。
　ようやく起き上がるガノトトス。しかし反撃できる頃にはシャルルは範囲外に脱し、クリュウとエリーゼは盾をすぐ構えられるようにしながら攻撃を続けている。その時、レンが動いた。
　貫通弾ＬＶ３の威力が弱まるまで離れてしまったガノトトスに、レンが動く。ティーガーを背負い、スロープを降りて荷車に近づく。そこから金属製の円状の道具を引っこ抜くと、ガノトトスの方へ向かう。そして先程目をつけておいた地点に着くと、それを地面に置いてピンを引っこ抜く。その瞬間、円状の下部から地面を溶かす溶液と装填されているネットが一斉に全方位に飛び出し、道具の周囲の地面に特殊な仕掛けに仕掛ける。
　レンは一人満足気にうなずくと、続いてまだ荷車に戻ってそこに置かれた大タル爆弾Ｇを持って再びその仕掛けの場所に向かう。
　自分達とは別に行動しているレンを見て、クリュウはすぐに彼女の意図がわかり笑みが浮かぶ。それはエリーゼも同じなのだろう。レ

ンのその必死な姿に一瞬顔を綻ばせるが、すぐに引き締めて腰に下げた角笛を吹く。間違ってもレンの方へ攻撃がいかないように自身に攻撃を集中させる狙いでの行動だ。実にエリーゼらしい。
「シャルも負けてられないっすよぉッ！」
レンがどんな意図で動いているのかはまるでわかってはいないが、何か考えがあるという事だけはわかっているシャルル。負けていられないとすでにドスイーオスとの戦いで疲れているのにも関わらずそれを感じさせないような嵐のように力強く攻勢を強める。
クリュウもガノトトスの左側面から近づいてバーンエッジを叩きつける。ガノトトスはそれを体当たりで反撃するが、クリュウはガードしてそれを防ぐ。
ガードの衝撃で後退したクリュウに対して重量のあるガンランスを携えるエリーゼは構う事なく突きと砲撃を繰り返し、体当たりで生まれた一瞬を突いてシャルルがガノトトスの顔面を砕く。
そんな三人の猛攻撃を横目に、レンはようやく大タル爆弾Ｇ二発の設置を終える。
レンが準備を終えたのよ同時にガノトトスが逃げ出す。無様な走り方で水辺に向かい、そこからジャンプして湖の中に潜る。
「シャルルッ！」
「任せるっすよッ！」
クリュウの声に答え、シャルルはすぐに音爆弾を投擲。炸裂する高周波にガノトトスが悲鳴を上げて水中から跳び出す。頭上を越えるのと同時に三人は一斉のレンが準備した所へ走る。レンは安全の為シャルルが音爆弾を投げたのと同時に陣地から少し離れた場所でティーガーを構え待つ。
そして、水中から飛び出したガノトトスはそのままレンの設置した落とし穴に向かって落下。罠を踏み抜き、一瞬でガノトトスの下半身が埋まる。予想だにしていなかったガノトトスは驚愕の声を上げてもがくが、抜け出す事は叶わない。
そして、そんなガノトトスのそれぞれの脇腹の辺りにはレンが設置した大タル爆弾Ｇが設置されている。

「任せてッ！」
そう叫んでエリーゼがガノトトスの右側の大タル爆弾Ｇの前に立ち、距離を目測でおおよそ図って位置取りをすると、ガンランスを構える。そして再三、竜撃砲の引き金を引いた。
加速装置が唸りを上げ、圧倒的な熱源が砲口へと集まっていき、赤く光り輝く。限界にまで圧力を掛けた熱源は開放と同時に大爆発。方向から勢い良く飛び出したそれはガノトトスの身を焼くのと同時に大タル爆弾Ｇを起爆。その爆発に巻き込まれてもう一発の起爆し、ガノトトスの体が爆発の中に消える。エリーゼは至近距離での爆発を盾で防いだ。
エリーゼの竜撃砲によって起爆した大タル爆弾Ｇの黒煙の柱に向かって、クリュウとシャルルが同時に走り出し、並走する。
黒煙が晴れ、ガノトトスが姿を現す。まだ落とし穴に引っかかった状態だが、その動きは明らかに弱っている。それを見て、エリーゼとレンが叫ぶ。
「行けッ！　バカシャルルッ！」
「お願いしますクリュウさんッ！」
二人の声に後押しされ、クリュウとシャルルは一瞬互いの目を見合ってからさらに加速。ガノトトスの正面に回り込み、ガノトトスの顔が下がった一瞬を狙って突っ込む。
「うおりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
「これで最後ッ！」
クリュウは右から、シャルルは左からそれぞれの武器を全力を込めて振るう。その強力な一撃はガノトトスの頭の両側から同時に炸裂した。
クリュウとシャルルの全力攻撃を頭に受けたガノトトスは絶叫を上げ、地面に倒れる――そしてそのまま、動かなくなった。
討伐したガノトトスの前で、静かに手を合わせるクリュウとシャルル。あれからもうずいぶん経つというのに、二人ともクロードからの教えをしっかりと守っていた。それが、二人とも嬉しかった。
そんな二人の背中を見てやっぱり仲がいいなぁと、ちょっとばかり

羨むエリーゼ。クリュウが卒業してから半年組んだとはいえ、やっぱりシャルルはクリュウと一緒の時の方が楽しげだ。苦しかった戦いの中でも、彼女は輝いていた。それが、ちょっとだけ悔しい。

そんな彼女の気持ちを感じたのか、淋しげに揺れるエリーゼの手をそっと握り締める者がいた。振り返ると、屈託の無い笑みを浮かべて自分を見詰めているレンと目が合う。

――エリーゼさんには、私がいますよ。そんな言葉が込められた笑顔に、エリーゼは小さく微笑み、「ありがとね……」とつぶやきながら彼女の頭を撫でた。

四人はガノトトスから必要な素材の剥ぎ取りを終えて一路一拠点（ベースキャンプ）を目指してガノトトスの亡骸が横たわるエリア８を後にした。途中でシャルルが討伐したドスイーオスの剥ぎ取りも忘れない。

拠点（ベースキャンプ）に戻る頃にはすっかり日が暮れ、村へ戻るのは明日の早朝と決めて四人はクリュウが腕を振るっての夕食を食べてすっかり疲れ切った体を休める為に眠りにつく。

クリュウ、シャルル、エリーゼ、レンの順で横に並んで眠る四人。心地良さげに眠るシャルルとレンはそれぞれ、大好きなクリュウとエリーゼの手を握り締め、二人もそんな二人の手を優しく握り返す。

四人が見る夢はきっと楽しい夢だと信じて、夜が更けていった……

第１４０話　月下に輝く少女の涙と結ばれていく絆

翌日の昼過ぎ、クリュウ達はアルザス村に戻った。四人が戻るのを待っていたかのように入口には大勢の村人が待っていてくれて四人を出迎えてくれた。そして、クリュウ達がガノトトス及びドスイーオスの討伐に成功した事を伝えると、村中に響くような歓声が上がったのであった。

その夜、村長主催で戦勝祝いとも言うべき宴会が催された。何となく自分の村と同じノリだなぁと苦笑しながらその催しに参加したクリュウ。最初こそ感謝されまくったのだが、次第にただの飲み会に変貌する所もまた似てるなぁと感じながら、クリュウは一人喧騒の中心から離れた隅の方に用意されたテーブルに腰掛けて村特産のグレープジュースを飲んでいた。

村特産のジュースはすごくおいしかった。甘くて、でもそれが甘過ぎずに飲みやすくて、口いっぱいにブドウの味を香りが広がる絶品だ――ただ何となく、どこかで飲んだ事のある味だなぁと心の隅に引っかかりはあったが、特に気にした様子もなくチビチビと飲みながらきれいな夜空を見上げ続ける。

しばしそうして一人の時間を過ごしていると、そんな彼に近づく影があった。

「こんな所にいたんすか？　探し回っちまったっすよぉ」

その声に振り返ると、そこには大きな骨付き肉を右手に、左手にはクリュウと同じく村特産のグレープジュースの入ったコップを持ったシャルルが立っていた。

「僕を探してたの？　そりゃ悪い事しちゃったね」

「いいっすよ。シャルはともかく客人の兄者にとっては知らない人が大騒ぎしているのは居心地が悪いんすよね？」

「いや、そういう訳じゃないんだけど……」

「ニヒヒヒ、困ってる兄者もかわいいっすねぇ」

「……お前、僕が《かわいい》とか言われるのがトラウマだって事知ってるでしょ」

「知ってるっすよ。だからからかってるんじゃないっすか」
「怒るよ？」
「ニヒヒヒ、これも全部クロード先輩の影響っすかね――懐かしいっすね」
　そう言って、シャルルはそれまでのイタズラっぽい笑みを引っ込めると、どこか遠い目をして空を見上げる。この空の下のどこかにいる仲間達の事を想いながら……
「そうだねぇ。僕が卒業してからもう一年以上が経ってるんだもんね。何だか、こうしてシャルルといると懐かしい気持ちになるよ」
「そうっすね。まぁシャルとしては鬱陶しいルフィールやクード先輩がいない今の方が快適っすけどね」
「先輩捕まえて鬱陶しいって……まぁ、気持ちはわからなくもないけど」
「兄者は特にクード先輩に気に入られてたっすからね。二人はデキてる噂が出た時の衝撃は今でも忘れないっすよ」
「……忘れて。今すぐに、一切の断片も残さずにきれいサッパリに」
「ニャハハハ……、まだ気にしてたんすね」
「当たり前だろ。一生のトラウマだよほんと……」
　クリュウはどっと疲れが押し寄せたかのように大きなため息を零す。今思い出すだけでも頭が痛くなる。あの時の女子のなぜか嫉妬に狂った瞳や、これまたなぜか感動的な瞳で見詰められた事は嫌というくらいに目に焼き付いている。後者が後に自分の知らない世界の住人からの反応だとわかり、余計にトラウマに拍車を掛けた事も頭が痛い。
「まぁ、学生時代の思い出はそれだけじゃないっしょ。特に兄者の周りはいつも騒動ばかりだったっすからね。特に最後の年は」
「まぁ良くも悪くも忘れられない半年にはなったよね」
「……ほんと、懐かしいっすよね」
　そう言いながら、シャルルはクリュウの隣の席に腰掛けた。湯気がまだ出ている肉を空いている皿の上に置き、静かにグレープジュースを飲む。

「……兄者は、今もルフィールの事が心配っすか？」
無言で空を見上げているクリュウに、シャルルはそっと問う。その問い掛けに対し、クリュウは静かに答える。
「そりゃ大切な後輩だからね。心配だってするさ。特にあいつは、僕達とは違う苦しみを背負ってるんだからさ」
人と違う。それは人間という生き物にとっては最大の魅力であり、最大の欠点でもある。一人一人違うからこそ、人は強く生きられ、共に行動すればその力は無限だ。だが同時に一人一人違うからこそ誤解やすれ違いが生じ、争いが生まれる。
有史以来、部族や国が他の勢力と戦争になる最初のきっかけになるのは民族争いだと言う。自分とは違う思考や外見をした人間を受け入れる事ができず、争う。
人間とは生物の中で最も知性を持ち、栄えてきた。だが同時に最も醜くて、争いが絶えない生物でもある。
人とは違う、幻想に過ぎない稚拙な伝説に登場する悪魔と同じ瞳を持つ。たったそれだけで、ルフィールは人には説明できないような苦しみを味わって来た。きっと今も、苦しみ続けているのだろう。そう思うと、胸が苦しくなる。
でも、だからと言って今の自分にできる事は何もない。ルフィールは人一倍負けず嫌いな子だから、どんなに苦しくても平静を装って抗い続ける。そんな子だから危なっかしくて、そんな子だから誰よりも強い。
彼女からの連絡が一切ないという事は、今はまだ自分が手を貸す必要がないという事だ。まだ、自分一人の力で何とかなる。そう信じ、戦っているのだろう。
もしかしたら、もう頼りには来ないかもしれない。寂しいが、それがきっと一番なのだろう。
――でも、やっぱりまた会いたいを願ってしまう。妹のように気に掛けていたからこそ、こうして会えない時間が長いと寂しくもなる。
これじゃ自分の方が情けないではないか、クリュウは小さく苦笑を浮かべる。そんな彼の心内を悟ったのか、シャルルはそっとそんな彼

の手を握った。
「シャルル……」
「つたく、あいつは本当にムカつく奴っすね。兄者にこんなにも想われてるなんて、自分がどんだけ恵まれているか自覚する必要があるっすよねぇ」
「いや、どんだけ僕の評価高いんだよ。そんな大したもんじゃないよ僕」
「……ほんと、兄者は残念なくらい変わってないっすね」
そう言って大きなため息を零すシャルル。そのため息の中にはきっと学生時代に行って来た数々の玉砕経験とこれからもまだまだ苦労が続くのだなぁという前途多難な気持ちが込められているのだろう。恋する乙女はいつも苦労ばかりだ。
一方、そんなシャルルの苦労などまるでわかっていない当人であるクリュウはシャルルの発言の意図がわからず首を傾げている。それを見て、シャルルはもう一つため息。
「……ルフィールの事もわかるっすけど、たまにはシャルの事も構ってほしいっすよ」
シャルルはそう言って、クリュウの手の上にそっと自分の手を重ねた。それは彼女にとって、ずっと傍に居てほしかった温もりで、ずっと我慢していた絆であった。
重ねられたシャルルの温かくて柔らかい手に、クリュウはそっと振り返る。いつも元気いっぱいでバカみたいに明るいシャルルの顔が、どこか淋しげに見えたのは気のせいだろうか。
そんな事を考えていると、重ねられたシャルルの手にそっと力が込められた。手の甲を包むように、ギュッと握り締められる。
「どうしたの？」
クリュウが何気なく問うても、シャルルは何も答えてはくれない。ただ、ギュッと手を握り締めるだけ。そんないつもと様子の違うシャルルに、もしかして気分でも悪いのではないか。そんな心配が胸を満たす。
「なぁ、気分でも悪いなら――シャルル？」

――シャルルは、泣いていた。
大きな瞳いっぱいに涙を溜めて、それが限界を超えてポロポロと大粒の涙となって零れ落ちる。その一粒がシャルルの手の甲に落ち、そっとクリュウの手の甲に零れる。
「シャルル……、どうしたのさ？」
「……兄者は、シャルの事をバカにしてるっすか？」
責めているような口調ではなく、ただ一心の問い掛けであった。ボロボロと涙を零しながら、シャルルは小さく嗚咽を繰り返し、重ねた手の握る力を強める。
「シャルだって……あいつと同じくらい――あいつ以上に兄者が大好きっす……ッ。だから……誰よりもシャルの事を構ってほしい……、そんな事思っちゃいけないっすかぁ？　シャルだって……これでも女の子っす。……ウソでもいいから、一度ちゃんとシャルを見てほしいっすよ……」
ボロボロと涙と一緒に零れ落ちるのは、彼女がずっと我慢して来た想いだった。ずっと会いたかった、ずっと甘えたかった、ずっと傍にいてほしかった。ただ一心に、大好きなクリュウと一緒にいたい。自分を見てほしい――自分の事を、構ってほしい。
学生時代はずっと彼はルフィールの事ばかり見ていた。確かに、彼女の境遇を知れば誰よりも優し過ぎるクリュウの事だ。彼女を気に掛けるようにはなるし、力になってあげたいと思うに決まっている。その優しさに惹かれた自分は、そんな彼の優しさの邪魔をしたくはなかった。だから、どうしても強引にはなれなかった。そこにはルフィールは恋敵（ライバル）であったのと同時に、友達だったという事も大きかった。
学生時代、シャルルはすぐ傍にいたクリュウに満足に甘えられなかった。だから、こうしてルフィールのいない今ならちゃんと甘えられる。そんな風に想っていた。
――でも、クリュウは今でも自分ではなくルフィールばかり見ている。それが、シャルルにとっては辛かった。
どうして、自分を見てくれないのか。やっぱり、女の子らしくない

自分なんて眼中にないという事か。クリュウはそういう人ではないとわかっているのに、そう思ってしまう。そんな自分が嫌で、二重の意味で自分を苦しめる。

――シャルルはただ、クリュウに甘えたいだけなのに。

ボロボロと流れる涙を、シャルルはグシグシと拳で拭う。その下にある表情は、いつしか力ない苦笑に変わっていた。

「……悪かったっす。兄者は……こんなシャルじゃ嫌っすよね？シャルは、バカみたいに笑ってて……バカみたいに脳天気で……難しい事は考えない……バカなままがいいんすよね？　だから――」

「――ごめん、シャルル」

クリュウはそっと、シャルルの震える肩を抱き寄せた。抱いてみて、シャルルの体はこんなにも小さかったのかと驚く自分が情けなかった。いつも元気いっぱいで、パワフルで、バカだけど誰よりも真っ直ぐで、頼ってくれて、頼れる後輩。そういう風に思っていた。

――だけど、その体は小さかった。本当に、小さかった。

本当は、シャルルは別に強い子ではない。ただ、周りに心配されるのを嫌って明るく振舞っていただけに過ぎない。そんな事に、なぜ気づけなかったのか。あんなにも一緒の時間を過ごしたのに、何で……

「ごめんな、シャルル……」

今はただ、謝る事しかできなかった。

悲痛な彼の言葉に、腕の中でシャルルがそっとそんな彼の腕を抱き締める。

「……シャルはやっぱり、バカのままでいいっす」

そう言って、シャルルはそっと彼の腕から離れた。数歩進み、そこでくるりと振り返る。美しく輝く月の明かりをバックにして、シャルルはニッと微笑んだ。

「――だって、バカじゃないと兄者を苦しめるだけっすからね」

「シャルル……」

「シャルは別に兄者を責めてる訳じゃないっす。泣いている人がいたら駆け寄られずにいられない。そんな兄者の性格は十分わかっているつもりだし、シャルはそんな兄者が大好きっす――でも、もう

ちょっとだけシャルの事も構ってほしいっすよ」
　ちょっぴり寂しそうな笑みを浮かべながら言うシャルルに、クリュウは小さく「ごめん……」とつぶやく。そんな彼を見て小さくため息を零し、シャルルは神々しく輝く月をバックに静かに頭に手をやる。そして、やんちゃに結ったツインテールを片方ずつ解いた。
　結ばれていたやんちゃに揺れるツインテールが解かれ、シャルルの髪は重力に従ってゆるやかに流れる。肩程のセミロングヘアになったシャルルはそっと彼に近寄り、その手を握り締める。
　クリュウが顔を上げると、そこにはいつもとは違う《女の子》なシャルルの顔が目の前にあった。シャルルはそんな彼の反応を見てそっと女の子っぽく微笑むと――チュッとクリュウの頬にそっと口づけした。
　顔を真っ赤にして驚くクリュウがまだシャルルの唇の感触の残る頬を手で押さえて困惑していると、そんな彼の反応を見て嬉しそうにシャルルが笑う。
「約束の印っすよ。ちゃんと構ってくれないと、許さないっすからね」
　そう言うシャルルの頬もまた、真っ赤に染まっていた……
　突然頬とはいえ勢いでキスしてしまったのが後になって滅茶苦茶恥ずかしくなったシャルルは顔を真っ赤にしたまま「ちょ、ちょっと風に当たって来るっすぅッ」と一人でどっかへ行ってしまった。
　一人残されたクリュウは鮮明に記憶に刻まれた頬の感触に困惑し、未だに手で押さえたまま。その頬もまた赤く、無言でグレープジュースを一気飲み。
「……やっぱり、女の子はよくわかんないや」
　そう言葉を漏らすクリュウだが、本人は相変わらず自身の乙女心に対する理解能力の低さ及び自身の羨まし過ぎる境遇などをまるで理解していない。ここまで来るともはや乙女心に関する判断力が完全に欠落しているとしか思えない。
「うーん……、帰ったらシルフィにでも相談してみようかなぁ……」
　自覚がないとはいえ、その選択肢は彼女にとっては不幸だと気づいてもらいたい。

そんな感じで一人でクリュウが贅沢な悩みに地味に苦労していると、そんな彼の背後から近づく者がいた。
「あ、あのぉ……」
声に振り返ると、そこにはレザーライトヘルムをいつも以上に深く被って顔を隠しているレンが立っていた。その手には湯気を上げるお茶の入ったカップが握られている。
「相談と聞こえたのですが……何かお悩みですか？」
「あ、いや。何でもないよ。うん、何でも」
「そ、そうですか……？」
心配そうにレザーライトヘルムの鍔越しに見詰めて来るレンにクリュウは心配ないよと微笑む。彼女に相談してもたぶん解決しないだろうし、そもそもレンに心配を掛けたくなかった。
「そういえば、エリーゼはどこ？」
話題を変えるようにクリュウは珍しく一緒ではないエリーゼの姿を探す。だが、パッと見回す限りどこにも彼女の姿はなかった。
「あ、エリーゼさんならさっきシャルルさんに捕まってどこかに行きましたけど……」
どうやらテンパっているシャルルの犠牲になったらしい。まぁエリーゼには悪いが、シャルルの性格を十分理解している友人として彼女を任せるとしよう。というか、エリーゼと一緒と言うなら安心だ。
「それで、エリーゼと別々になっちゃったんだ」
「は、はい……。私、あまり知らない人とは話せないので皆さんの輪にも入れずに……」
「僕も一緒だよ。何ならここにいれば？　シャルルは僕がいる場所を知ってるからさ、そのうちエリーゼを連れて戻って来るかもだよ？」
「そ、そうですね。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます」
知っている人に会えたのが嬉しかったのか、レンは無邪気に笑ってクリュウの正面に腰掛ける。持っていたお茶を置いた所で「やぁ少年、青春しているかい？」と陽気な声と共にキャンディが現れた。酒場担当の為、今回の騒ぎでは大忙しだ。先程から見える彼女の動きはドンドルマのギルド嬢やエレナにも負けないような機敏さだ。

「おやおや、珍しい組み合わせだね？　余り者同士って訳かい？」
「まぁ、そんな所だよ」
「……そうかそうか。それじゃ、そんな相棒に忘れられちゃったお二人にウチのおごりでこれをプレゼントしようッ」
　そう言ってキャンディは持っていたクッキーの盛られた皿を二人の前に置く。香ばしい香りの中にはブドウの香りがあり、よく見るとクッキーにはブドウが練り込まれている。ブドウクッキーという訳か。
「あ、ありがとうございます……」
「いやいや、可憐なお嬢さんのその言葉だけでウチは大満足じゃき。ほいじゃ、ウチは仕事に戻るっちょ。何か用があったら「キャンディちゃんッ、大好きだよぉッ」と叫んでお呼びくださいねぇ」
「……いや、それはちょっと」
「ニャハハハ、まぁ気軽に呼んでって事さね。そいじゃぁね」
　楽しげな笑い声を残して、キャンディは喧騒の中へ去って行った。残された二人は彼女のシャルルに良く似た底抜けの明るさに苦笑しつつ、クッキーに手を伸ばす。その瞬間、同時に伸ばした二人の指先が触れた。
「あ……」
「あ、ごめんね」
　クリュウは特に気にした様子もなく手前からクッキーを取って頬張る。口の中いっぱいに広がる香ばしさとぶどうの風味、そして絶妙な甘さ加減がおいしい一品に仕上げてくれている。
「うん、これおいしいや」
　さすがに村特産のブドウを使っているだけあって、その使い道である料理もまた絶品だ。特筆して名産を持たないイージス村と違って特産のあるアルザス村がちょっとだけ羨ましくもある。
　そんな事を考えながらクッキーを頬張っているクリュウに対し、指が触れてから頬を赤らめたまま無言でうつむいているレン。
「どうしたの？　これおいしいけど、食べないの？」
「え？　あ、食べます」

クリュウに声を掛けられ、レンは慌ててクッキーを一枚手に取って食べる。クリュウはそんな彼女の反応に首を傾げながらグラスを傾ける。が、さっき飲み干したグラスは空っぽであった。
「ごめんレン、ちょっとジュース足して来るよ。何かほしい物があれば持って来るけど、何かある？」
「あ、私は結構です……」
「そっか。ちょっと待っててね」
そう言い残してクリュウは喧騒の中心部へと消える。一人残されたレンはクッキをかじりながら、クリュウと触れた指をさすり続ける。
「……えへへ」
ちょっぴり嬉しそうな笑みを浮かべ、その手を大切そうに抱くレン。しばらくそうして待っていると、なぜか嬉々とした表情でクリュウが戻って来た。
「レンッ、これこれッ」
嬉々とした表情を浮かべてクリュウがレンの前に差し出したのは皿には大粒のブドウのような紫色の食べ物が数個あった。
「これは……」
「ブドウマンジュウ。東菓子を模して作った試作品だってさ」
アルザス村では村の特産であるブドウを使って様々な特産品を考えてはこういった機会に試作品を出し、そこでの評価を元にして新しい特産品を作り出す。今回の試作品がこれであった。
「レンは東方人だからさ、当然よくマンジュウも知ってるでしょ？だから口に合うかなぁって。おいしかったら後でアンケートにそう伝えておくからさ」
レンはジッとブドウマンジュウを見詰める。確かにそれはマンジュウによく似ている。大きさが小さいのはブドウの粒を模しているからだろう。触れてみると、普通のマンジュウと違って皮がなく、全体的にしっとりしている。手で食べるのは苦労しそうだ。だから小さな串が備え付けられているのだろう。
レンは串を一本取って一つに突き刺して持ち上げ、しげしげと興味

深げに全体を見詰める。しばしそうして見たり匂いを嗅いだりしてから、一口食べる。
「あ、おいしい……」
口の中に入れた瞬間、懐かしい感じの甘さが広がった。そこにブドウの味が見事にマッチしている。昔食べていたマンジュウとは違うが、これもまたマンジュウであった。
「全体が餡（あん）なんですね……」
「よくわからないけど、おいしいんだ。良かった良かった……」
クリュウはほっとした表情を浮かべると、同じく串を取って一つ刺し、自分も頬張ってみる。
「うん、おいしいや」
口の中いっぱいに広がる甘味に志た鼓を打ちつつ、クリュウは元居た席に戻る。
「あの、ありがとうございます」
ジュースを飲んで一息をついた所で、レンがはにかみながら言った。
「気遣ってもらっちゃって、申し訳ないくらいです」
「別にそういうつもりじゃないから気にしないで。一度とはいえこうしてチームを組んだ仲なんだから、そういうのは一切なしって事で」
クリュウはそう言って笑うと、もう一粒拝借して口の中に放り込む。どうやら地味にこの味が気に入ったらしい。
そんな子供のようにお菓子を食べて笑みを浮かべているクリュウを、レンは先程からジッと見詰めたままだ。そんな彼女の視線に気づいたクリュウは不思議そうに首を傾げる。
「どうしたの？　僕の顔に何か付いてる？」
「あ、いえッ、何でもないですッ」
急に話しかけられ、慌てて視線を逸らすレン。クリュウは不思議に思いつつも特に気にせずに視線をきれいな空に移し、ジュースを一口含む。そんな彼の横顔を、レンはジッと見詰め続ける。
「あの、クリュウさん」
しばらくの間があって、小さな声でレンがクリュウに声を掛ける。

彼が振り向くと、レンは恥ずかしそうに頬を赤らめながら、もぞもぞとテーブルの下で手をいじり、うつむき加減で彼を見詰める。
「その、お願いがあるんですが……」
「お願い？」
そっと、レザーライトヘルムを取る。
「……あの――頭、撫でてもらってもいいですか？」
「えぇ？」
突然の突拍子も無いレンのお願いにクリュウは当然困惑する。そんな彼の反応は予想していたのか、レンは恥ずかしそうに小さな声で説明する。
「その、クリュウさんってどこか村にいる兄さんに似てるんです」
「僕が？　っていうか、レンってお兄さんがいたの？」
「あ、いえ、実の兄妹という訳ではなく、近所に住んでいる大好きだった兄さんです。容姿とかは特に似ているという訳ではないんですが、どことな雰囲気が似てて、どこか懐かしい気持ちになって――胸がポカポカするんです」
そう言いながら、レンはそっと自分の胸を押さえて無邪気に微笑む。その屈託の無い、おそらくクリュウが今まで見て来た笑みの中で一番純粋な笑顔だ。見ているこっちまで幸せになれる、そんな笑顔。
「村を出てからもう何ヶ月経ったかわかりません。一人前になるまでは帰らないと豪語してしまったから、帰るに帰れなくて……。エリーゼさんと一緒にいるのは本当に幸せだと感じてはいますが、やっぱり故郷の事を思い出すと胸がキュッってなるんです」
クリュウは故郷に拠点を置いている今はそうでもないが、学生時代は遠い故郷とはまるで違うドンドルマで故郷を懐かしく感じた事は多々あった。特にレンの場合は文化圏も違うから、その想いはより強いのかもしれない。
「私、元々こちらでの知り合いは少なくて……、だから、クリュウさんのように東方の事がわかる人は初めてでした」
「まぁ、確かにあまり東方地域以外では東方人は見ないもんね。友達に東方人がいる僕はかなり稀有な例だもんね」

「クリュウさんは私が大好きだった故郷の兄さんに似てて、しかも東方での話題が通じる人です。だから、ちょっと故郷の事を思い出しちゃって……」
「……なるほど――寂しいんだ」
「はい……」
どんなに大好きな姉と暮らしていても、どんなにその日々が幸せでも。父や母、子供の頃からずっと過ごした故郷を忘れる事はできない。時々、そんな日々を懐かしく思い、寂しくなってしまう事もある。
その寂しさが、自分の行動で少しでも和らぐなら、断る理由にはならない。
「そういう事なら、別に構わないよ」
「ほ、本当ですか？」
「うん。こんな感じでいいの？」
クリュウはそう言いながらレンの頭を優しく撫でる。彼女が求めている撫で方ではないかもしれないが、とりあえずは自分なりのやり方で撫でてみる。フィーリア、サクラ、ルフィール、シャルルなどにしてきたあの撫で方だ。
レンは黙ってクリュウに頭を撫でられ続ける。まるで、その感触をじっくりと味わうように、眼を閉じて、神経を研ぎ澄ませる。
しばらくそうしてクリュウが撫で終えて手を離すと、レンも閉じていた瞳を開き、顔をゆっくりともたげる。上げられた顔は少し頬を赤らめ、幸せそうな笑みが浮かんでいる。
「あ、ありがとうございます……」
「う、うん……あはは、何だか変な気分」
何というか、自然にするのではないというだけで同じ行動でも妙な気分になってしまう。さっきまでのどこか淋しげなレンの表情が明るくなった事は良かったが。
クリュウも何となく小恥ずかしくて、レンからちょっと視線を逸らして空へと逃げる。こうして見上げると、とてもきれいな星空が瞬いている――と、ちょっと逃げ腰な思考。
空を見上げ続ける彼をジッと見詰めたまま、レンは再びモジモジと

手元をいじり始める。何度か自分の手元を彼を見比べた後、意を決したように口を開く。
「……あ、あの、お願いついでにもう一つよろしいでしょうか？」
「うん？　別にいいけど、何？」
視線を再び彼女に向けると、レンはちょっとだけ頬を赤らめ、恥ずかしそうに、いつもの自信なさげな上目遣いで彼を見詰める。その視線にちょっとドキッとしたり。
「――お、お兄さんとお呼びしても、よろしいでしょうか？」
「えぇ？」
またしも突拍子も無いレンの発言に困惑するクリュウ。それを見てレンは慌てて説明する。
「あ、えっと、クリュウさんが私の故郷にいる兄さんに雰囲気が似ているという話はしましたよね？　だからその、そういう呼び方の方が私としてもしっくりくるというか、呼びやすいんです。あ、でもご迷惑でしたら全然お断りをいただいても……」
「あぁ、いや、別にいいけどね。君の好きなように呼んでよ」
別に呼ばれ方に特にこだわりがある訳でもないし、好き　なように呼んでもらってもクリュウとしては全然構わなかった。というか、すでにリリアに《お兄ちゃん》と呼ばれているし。
クリュウの返答に、レンは目に見えて表情が明るくなり、嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。
「あ、ありがとうございますッ――お、お兄さん」
照れながら、でもどこか嬉しそうにレンはクリュウの事を呼ぶ。そんな彼女の姿を見て、クリュウの顔にも自然と笑みが浮かぶ。リリアの時にも感じたが、《兄》と呼ばれるのはちょっと嬉しい。一人っ子だったから、余計なのかもしれない。
「何だか、改めてそう呼ばれると恥ずかしいね」
「ご、ごめんなさい」
「いや、別に君を責めている訳じゃないからさ」
そう言ってクリュウは嬉しそうに微笑む。そんな彼の笑顔を見て、レンもまた嬉しそうに無邪気に微笑んだ。

「お兄さん、ジュースのおかわりいりますか？」
「え？　あ、うん」
「じゃあ、取って来ますね」
「あ、ありがとう」
「いえいえ、お兄さんの為ですから」
　そう言ってレンは幸せそうな笑みを浮かべて席を立つと、トテトテとしたどこか危なっかしい足取りで走って行く。
　そんな彼女の背中を温かく見守りながら、クリュウはブドウマンジュウを一口食べた――直後、彼の視線の先でレンが何もない所で転倒した。
「お兄さんは、どのくらいこの村に滞在するつもりですか？」
　しばらく黙って月見でもしながらジュースを飲んでいたクリュウに、レンが何気なく尋ねた。クリュウは少し考えるように黙り、口を開く。
「うーん、できれば明日にでもこの村を出発するつもり」
「そんな急に、ですか？」
「村の事が心配だからね――まぁ、僕がいなくてもあの村の守りは鉄壁だから、正直僕がいなくても全然問題ないんだけどね」
　自分の口で言ってみて、改めて空しくなる。謙遜ではなく事実というのが厄介な所だ。
　クリュウの密かな悩みや、彼の村の現状を知らないレンは彼の発言の意図が掴めず、疑問符を頭に浮かべている。
「……でもまぁ、みんな心配するからさ、なるべく早く帰らないと。ここから村に戻るにもまた十日ほど掛かるしさ」
「そ、そうですかぁ……」
　クリュウの返答に、レンはあからさまにがっかりする。せっかく《お兄さん》と呼べるまで仲良くなれたのに、すぐにお別れになってしまうのは、寂しい。
　そんなレンの反応を見て、クリュウも気まずそうに謝る。
「ごめんね。もっと滞在できればいいんだけど、行き来だけでも二〇日くらい掛かるからさ。狩猟時間なんかも含めるとほとんど一ヶ月

村を空ける事になるからね」
　イージス村とアルザス村は大陸の横幅の半分くらいの距離がある。その行き来だけでもかなりの日数を要する為、滞在できる時間は限られてしまう。
　一ヶ月もの間、皆に心配を掛けてしまうのだから、少しでも早く帰って安心させてあげたい。実に彼らしい。
　そんな彼の言葉を聞いて、レンは寂しげな笑みを浮かべた。
「そうですか、残念です」
「ごめんね」
「大丈夫ですよ。それにしても、お兄さんにそこまで想ってもらえるなんて、お仲間さん達は幸せ者ですね」
「そ、そうかな？」
「そうですよ。そして、そんな素晴らしいお仲間に囲まれるお兄さんもまた、幸せ者です」
「……そうだね。僕はすごい幸せ者だよ」
　それは、心からそう思えた。
　気遣い上手でとても仲間想いなフィーリア、無茶苦茶だけどいざという時はとても頼れるサクラ、強く美しく頼れる最高のリーダーであるシルフィード。
　素直じゃないけど本当はすごく優しい幼なじみエレナ、困った時はいつも助けてくれる親友のツバメ、いつも無邪気に笑って甘えてくる妹のようなリリア。
　自分の周りには、本当に良き仲間や友がいる。本当に、自分は幸せ者だ。そう、心から思える。
　そんな彼を見詰め、レンは小さく微笑む。
「私も、もっとがんばらないとッ」
　小声で、そう自分を奮い立たせた。
「いつか、お兄さんの村にも行ってみたいです」
「いつでも大歓迎だよ。ドンドルマからはちょっと遠いけどね」
「どんと来いですッ」
　そう言って無邪気に微笑むレンの姿を見て、クリュウも自然と笑み

が浮かぶ。こんな妹がいたら、本当に幸せだろう。そして、そんな妹を持つエリーゼは本当に幸せ者だ。
　そうこうしている間に、レンは先程クリュウのジュースのおかわりを持って来た時についでに持って来たブドウプリンをおいしそうに食べ始める。ブドウを混ぜたプリンに、ブドウジャムのようなソースが掛かったブドウ尽くしな一品だ。
「私、卵かけご飯とプリンが大好きなんですッ」
「あははは、卵好きなんだねぇ」
　無邪気に笑いながらプリンを頬張るレンを見ていると、こっちまで嬉しくなってしまう。本当に、かわいいの一言に尽きる子だ。
「あ、レン。口元にソース付いてる」
「ふぇ？」
　プリンに夢中になっていたレンは口元にソースの飛沫が付着している事にも気づいていなかったらしい。クリュウは苦笑しながら布巾を取って、そっとソースを拭い取る。
「ほらね。これで大丈夫だよ」
「えへへへ、ありがとうございますお兄さん」
　何て幸せな時間なんだろう。クリュウはほんわかと微笑んでしまう――刹那、背後から雪山のような極寒の冷気が吹き荒れた。ブルブルと体が震え、驚いて振り返ると、そこにはまさに絵に描いたように怒り狂う二人の少女がいた訳で。
「……レンに手を出したら、ブチ殺すって言ったわよね？」
「兄者、本当に相変わらずなんすね」
　不気味なくらいに冷静な二人の声。それを放つ二人の表情は憤怒に満ち、次第次第に氷の怒りは火山に燃え盛る業火のような激しい怒りに変わっていく。
　クリュウは顔を真っ青にしながら、何とか穏便に済ませようと引き吊った笑みを浮かべる。
「え、えっと……話すと長くなるんだけど、聞いてくれるかな？」
「「聞く耳持つかあああぁぁぁッ！」」
　刹那、イージス村から遠く離れたガリア共和国の辺境にある小さな

村に、少年の悲鳴が響くのであった。
　翌日、駄々をこねるシャルルを説得して何とか出発の準備を整えたクリュウ。来た時とほとんど変わらないが、一応幾つかガノトトスの素材は持った。むしろ大タル爆弾Ｇなどがない分帰りの方が身軽だ。
　村の入口にやって来たクリュウ。振り返ると、アルザス村の村人達が見送りにやって来てくれていた。そして、一番前の列にはシャルル、エリーゼ、レン、キャンディの四人が並ぶ。
「私とエリーゼさんはドンドルマを拠点にしていますので、機会がありましたらまたよろしくお願いしますね、お兄さん」
「……何がお兄さんよ。言っておくけど、顔を合わせても声掛けんじゃないわよ。迷惑だから」
　無邪気に笑いながら見送ってくれるレンに対し、エリーゼはまるでここで初めて出会った時のように敵意むき出しだ。これにはこの数日間の努力が見事に無駄になったのだとクリュウは苦笑するしかない。
「またこの村に遊びに来いよな。あんたの村からはすんごく遠いみたいやけど、わざわざ足を運ぶだけの価値があると、ウチは思ってるぜ」
「もちろん。また遊びに来るよ」
　ビシッと見事に親指を立てて見送るキャンディ。本当によくわからなくて、無駄に明るい人だ。さすがシャルルの姉代わりなだけはあると、今更ながら感心してしまうクリュウ。
　そして、視線は最後にムスッとしているシャルルへと向けられる。今日帰ると伝えた昨日の夜からずっとこんな調子で、すっかりふてくされてしまっているのだ。
「……兄者のバァカ」
「シャルル……」
　これでまたしばらくお別れだと言うのに、シャルルは目も合わせてはくれない。唇を尖らせてそっぽを向くシャルルの横顔を見て、クリュウは小さくため息を漏らす。
　そんな二人の様子を見て、呆れたようにため息を零すエリーゼ。
「何やってんのよあんた達……」

エリーゼは隣でふくされるシャルルの頭を軽く小突いた。そんな彼女の拳にシャルルはムスッとする。
「何っすか？」
「別に、あんた達ってほんとバカだなぁって思っただけよ」
「ば、バカって何すか」
「また会えるのがいつになるかわからないって時にこの状況。バカ以外の単語が見つからないわよ」
トゲのある言い方ではあるが、彼女が言っている事が正論であるとは理解しているのか、シャルルは気まずそうに視線を逸らす。そんな友人の姿を見てエリーゼはため息を零すと、その背中を無理矢理押す。
「な、何するっすかッ？」
「意地なんて面倒なもの張ってないで、本能の赴くままに行動しなさい。らしくなわよっとッ」
そう言ってエリーゼはシャルルをクリュウの方へ押し出した。その予期しない力技にシャルルは為す術もなくクリュウの前に押し出される。
突然クリュウの目の前に押し出されたシャルルは慌ててうつむき、クリュウもそんなシャルルの拒否行動を見て掛ける言葉も見つけられずに黙ってしまう。
そんな二人を見てエリーゼは大きなため息を零す。すると、その隣にいたキャンディが突然豪快に笑い声を上げて二人に近づき、気まずい雰囲気の中にいる二人の肩を持って無理矢理くっ付ける。
「な、何しやがるっすかキャンディッ！」
「ちょ、ちょっとッ」
「何二人してらしくない事しやがってるのよッ。お別れと言ったらこうやって熱い抱擁に決まってるじゃないッ」
「お前の常識とシャル達の常識を一緒にするなっすッ！」
クリュウにくっ付いたまま顔を真っ赤にして激怒するシャルルだったが、その赤みの原因の一つは別の意味だったりする。
顔を真っ赤にしてテンパるシャルルと、同じく頬を赤らめて困惑す

るクリュウの二人を見て、キャンディは豪快に笑う。
「青春しなよ若人達よッ。時間は君達を待ってはくれないぜ？」
「……あんたも立派な若人しょうが」
「か、かっこいいですぅ……」
「……いや、ただイッちゃってる人でしょ」
そんな騒がしいギャラリーは放っておいて、クリュウとシャルルは互いに少し距離を開ける。が、それ以上距離を開く事はなかった。
「……本当に行っちゃうっすか？」
しばらくの間があって、クリュウの手を握り、小さな声で尋ねるシャルル。その表情は先程までの意地を張った素直じゃない彼女ではなく、彼女の本質である寂しがり屋から来る、彼女の本当の表情。
クリュウはそんな彼女の表情を見て一瞬躊躇したように視線を逸らすが、すぐに再び彼女に向き合う。
「ごめんね。今は、僕を待ってくれている人がいるんだ。いつまでもその人達に心配を掛けたくないんだ。ごめんね、シャルル」
そう言いながら、クリュウはそっとシャルルの頭を撫でた。シャルルはそれをしばらくの間無言で受け続ける。そして、
「……仕方、ないっすね」
「シャルル？」
諦めたように、シャルルはつぶやいた。彼女の表情は依然として寂しさに満ちてはいたが、それはどこか諦めがついたかのような、サッパリしたものに変わっていた。
「兄者には兄者の《今》があるっす。それを壊す権利は、シャルにはないっすよね……だから、仕方がないっす」
「シャルル……」
「――でも、シャルは諦めた訳じゃないっすよ。またいつか、兄者とチームを組める日を信じて、これからがもがんばるっすッ！」
そう覚悟を決め、シャルルはグッと拳を握り締めて彼と向き合う。
本当は大好きなクリュウとまた離れ離れになるのは嫌だ。でも、彼の決めた事を尊重してあげたいという気持ちもあるし、自分だっていつまでも駄々をこねられる子供ではいられないと、わかっているから

だ。
「また、村に来てくれるっすか？」
「もちろん。その代わり、シャルルも今度は僕の村に遊びにおいでよ。ここみたいに特産品がある訳じゃないけど、この村にも負けない村だからさ」
「必ず行くっすッ。楽しみにしてるっすよッ」
そう言って、シャルルはグッと拳を突き出す。それに合わせるようにクリュウも拳を突き出し、互いにぶつけ合う。二人の、約束の証。
そんな二人を、キャンディやエリーゼ、レン、そして村のみんなが温かい目で見守る。
――そして、その時が来た。
「それじゃ、またね」
クリュウはそう言って皆に背を向けて歩き出す。そんな彼の背中を見て「あ、兄者ちょっと待ってほしいっすッ」と慌てて彼を止めるシャルル。
「どうしたの？」
「これ、この村の特産のグレープジュースっす。ぜひ持って帰ってほしいっす」
そう言って彼女が差し出したのは、クリュウが気に入っていたこの村の特産のグレープジュース。今までは村で消費される分だったからむき出しのビンに入れられていただけだが、彼女が渡したのは輸出向けの製品版。木箱に入った一品だ。
「これって……」
そして、クリュウはそれに見覚えがあった。口元に、自然と笑みが浮かぶ。
「結局、みんな繋がってるって事なんだね」
「うにゅ？　何がっすか？」
「何でもないよ。ありがたくもらっておくよ」
クリュウはシャルルからジュースを受け取り、改めて皆に別れを告げ、今度こそ村の外へ向かって歩き出す。
振り返ると、シャルルが大きく手を振って大声で別れの言葉を叫ん

でいる。その光景はまるで、あの時と同じ。
クリュウはシャルルやエリーゼ、レン、キャンディ、そしてアルザス村の村人達に手を振りながら、アルザス村を後にした。
帰りは出国手続き自体は入国に比べては楽で、ドンドルマを経由せずに直接村に帰ったので少しは早かったが、それでも村に帰ったのは彼が村を出て二〇日以上経っての事だった。
心配で心配で仕方がなかった女子陣は無事に帰って来たクリュウの姿を見てほっと胸を撫で下ろした。フィーリアは薄っすら涙を浮かべ、あれだけ自信満々に送り出したシルフィードも安堵の表情を浮かべる。エレナやツバメも無事に帰って来たクリュウを見てそれぞれ喜んだ。
そして、サクラは……
「……無事で良かった」
サクラも表情と鋭い隻眼を和らげ、ほっと胸を撫で下ろす。そんな彼女を見てクリュウもほっと胸を撫で下ろしつつ、思い出したように荷物の中から例のアルザス村特産のグレープジュースを取り出す。
「サクラ、これ覚えてる？」
クリュウがそれをサクラに見せると、サクラは一瞬驚いたように隻眼を大きく見開くと、ゆっくりと小さな笑みに変わる。懐かしい物を見た、そんな表情だ。
「……当然。それは、クリュウと再会した時にドンドルマで飲んだ、あの時のグレープジュース」
それはクリュウがまだまだかけだしだった頃。イージス村がフルフルの危機に瀕して彼がドンドルマに助けを求めて村に戻って以来初めてやって来たあの日。ライザと出会い、そしてサクラと子供の頃以来に再会したあの時。
彼女に引っ張られるままに部屋へ向かい、そしてそこで久しぶりに話をした。その時に飲んだ、二人にとっては大切な思い出の味。それが、
「あの時飲んだジュースが、まさかシャルルの村で作られたジュースだったなんて。世の中結構狭いものだね」

「……そうね」
一本のジュースを中心に、懐かしさに満ちた会話をする二人。そんな二人を羨ましげに、そして恨めしげに見詰める女子陣。
「な、何でいつもいつもサクラ様ばっかり……ッ」
「心配して損したじゃないッ」
「私が知らない二人、か……。何だか、ちょっと悔しいな」
「じゃの」
それぞれの想いを抱きながら、イージス村の日常が戻って来る。イージス村の柔らかな日差しを受け、アルザス村産のグレープジュースが静かに光り輝いていた。
クリュウが去ってから数日後にはエリーゼとレンも村を後にし、ガノトトスを討伐してから一週間程が経過し、アルザス村にもようやくいつもの日常が帰って来た。人々はブドウの栽培に汗を流し、子供達は楽しげに笑いながら野原を駆け回っている。どこにでもある、長閑な村の姿がそこにあった。
その日もシャルルはいつもと変わらず近くの森林へ野草やキノコなどの採取へ行き、たくさんの野草やキノコなどをカゴに詰めて帰って来た。
依頼主である村長にカゴごと渡し、わずかな報酬金と感謝の言葉を貰って意気揚々と酒場へと向かう。彼女にとってはお金よりもみんなが幸せにいてくれる方がずっと嬉しいのだ。まぁ、前回のガノトトス戦で受け取った報酬金は結構な額だったのでその備蓄があるからこその余裕とも言えるが。
何はともあれ意気揚々と村唯一の酒場であるキャンディの酒場へと向かうシャルル。いつものように「腹減ったっすよぉッ。キャンディご飯大盛りでランチを頼むっすッ」と元気良く中へと入る。そんな彼女をキャンディが笑顔で出迎える。
「やぁシャルちゃん、今日も元気だねぇ。そんな君にとっておきの情報だぜ？　今日のランチは何と幻の高級食材、キングターキーが手に入ったからキングターキーのフライドチキンをごちそうしちゃうぜ？」

「マジっすかッ!?　こんなド田舎にそんな高級食材が届くんすかッ!?
　早く食べたいっすッ！」
　キャンディからの奇跡のようなランチを紹介され、口の中いっぱいにヨダレが広がり、辛抱堪らんとばかりにキラキラとした目で大喜びするシャルル。そんなシャルルの反応に満面の笑みを浮かべるキャンディ。
「すぐ用意するからね」
「おうっすッ！」
「あ、それと君にお客さんだよ？　あそこあそこ」
　そう言ってキャンディが指差したのは店の隅にあるテーブル。そこに腰掛けているのは一人の少女であった。シャルルと同じハンターで、纏うのはシャルルの纏うケルビやガウシカの皮をベースにしたバトルシリーズとは異なり、全身を美しい青色の大きな鱗を繋ぎ合わせて作られたまさに鎧。それは怪鳥イャンクック亜種から取れる世にも珍しい素材をふんだんに使って作られたクックDシリーズ。
　今は狩場ではないからか、クックDヘルムは脱いでその素顔が露になっている。
　青みがかかった紺色の髪をザザミ結びと呼ばれる今時の女の子らしい髪型に結い、細メガネを掛けて本を読むその横顔は知的な印象を抱かせる。その澄ましたような横顔に、シャルルは見覚えがあった――否、忘れられる訳がない。
　少女は静かに本を閉じた。
「……まったく。少しは成長しているかと思っていましたが、相変わらず知性が致命的に欠落しているようですね。要するにバカのままという訳ですか」
　そのムカつくような冷静な悪口的解釈。昔、このムカつく口調に何度も振り回され、何度怒り狂った事か。あの時は本当にムカつくガキだと思っていたが、こうして久しぶりに聞くとその発言が実に素直じゃない挨拶に聞こえてしまうから不思議だ。
「何でも遠路遥々君を訪ねに来てくれたんだってよ。感謝しいな、キングターキーを手土産に持って来てくれたのは彼女なんだぜ？」

「……エクレルールさん。どうやらボクとあなたの間に致命的な解釈の齟齬が生じているようですから訂正しますけど、ボクはあくまで旅の途中で立ち寄ったに過ぎません」
「ニャハハハ、そうやったねぇ。ごめんニャ～、勝手に解釈しちゃって」
「まったく……、どうやらシャルルさんが残念な頭をしているのは環境的要因が大きいようですね。長年の謎が解けたような気がします」
「あニャ～？　何だか私までバカにされちゃったニャ～」
　おそらくは会ってまだ間もないはずのキャンディに対してもこの容赦のない毒舌の波状攻撃。本当に、こいつは人と仲良くなろという概念が欠落しているのではないか。昔から思ってはいたが、相変わらず変わってないようだ。
「……お前、相変わらずっすね」
「そのお言葉、そっくりそのまま丁重に包んで代引で返送させていただきます」
　ゆっくりと立ち上がり、少女はようやくこちらに向く。細メガネの奥に輝くのは、左は太陽のように眩しい金色の瞳。右は南方の美しい海を思わせる碧色の瞳――イビルアイ。
　その生意気に澄ました顔に懐かしさを感じてしまうとは、どうやら本当に自分はバカになってしまったらしい。
　大陸に伝わる左右の瞳の色が違う美しき女の姿を象った、様々な男を惑わした悪魔――邪眼姫（イビルアイ）。それは大陸全土に広く伝わる伝説の悪魔として人々に語り継がれていった。
　その伝説と同じ左右で色の違う瞳を持った少女。生まれてすぐにその瞳に恐れをなした両親に教会に捨てられ、ハンターを志してドンドルマに来てからはその瞳のせいで人々から忌み嫌われ、迫害され、心を閉ざしてしまった。周りの全てがどうでも良くて、価値のない日々だと吐き捨てていたあの頃。
　それが、クリュウと出会ってから変わった。
　彼の優しさに触れ、彼を慕う仲間達に囲まれ、少しずつ心を開いていった。普通の女の子のように笑い、普通の女の子のようにオシャレ

をし、普通の女の子のような日々を過ごし――普通の女の子のように、恋をした。
シャルルにとって、口が悪くて容赦のないムカつく年下の同級生で、クリュウを争った最大の恋敵（ライバル）で、共に背中を預け合った最高の仲間。
ドンドルマハンター養成訓練学校三期連続校内主席という記録を残した天才少女。その名は――
「――久しぶりっすね、ルフィール」
シャルルの言葉に、ルフィール・ケーニッヒは「はい」とうなずき、ほんのちょっとだけ嬉しそうに微笑んだ。
その笑顔は、彼女がようやく手に入れた《生きる》という意味そのものだったのかもしれない……

モンスターハンター　～凜・恋姫狩人物語～（第３期）
第１４１話　動き出す物語　母を想うクリユウの決意

それは遠い記憶の世界。または夢の中の世界……
なぜそこが現実の世界ではないと断言できるのか。
――なぜなら、その世界にはもう現実の世界では会う事ができない、大切な人の姿があったからだ。
「クーくんは、どんな大人になりたいのぉ？」
もう記憶の中だけでしか聞こえない、優しくて懐かしい声。鼻をくすぐるのは、この世で一番きれいだと信じて疑わなかった金色の長い髪。そこから香るのは、彼女が大好きだった雪山草の香り。
じっと、まだ視界が低かった頃の自分を優しげに見詰める、自分と同じきれいな翡翠色の瞳。いつもキラキラと輝いていて、子供である自分よりもずっと子供っぽい。
子供の頃から女の子っぽい顔立ちをしていた自分は、やはり彼女によく似ている。周りからもそっくりだと言われていたし、自分もそう言ってもらえるのがすごく嬉しかった事を、覚えている。
屈託なく笑い、いつも楽しそうにしている。だが、今思えばその顔立ちや振る舞いに、何か普通とは違う高貴なものがあったように、今は思える。
ギュッと自分のまだ何も守れないような小さな手を、大きな手で優しく握り締めてくれる。
自分は、彼女の事が大好きだった。
子供心に、大きくなったら今度は自分が守ってあげる。そんな小さな夢をいだいていたあの頃。
まだイージス村も開拓が今よりは進んでいない頃。ある冬の暖かい日に、そう彼女に尋ねられた。
あの頃の自分は、二人に憧れていた。だから、自分も同じ道を歩むんだと強く想っていた。

「僕もハンターになるッ」
元気良く、ほめてもらいたい一心で大きな声で答えたのをよく覚えている。そして、それを聞いた彼女の笑顔だけど、どこか淋しげだった事もまたよく覚えている。
「う～ん、ママはクーくんにはそういう道に進んでほしくないなぁ」
声のトーン自体は軽いものだったが、その言葉には息子を危険な目に遭わせたくないという親心が込められていたのかもしれない。
「僕は絶対パパやママのようなハンターになるもんッ」
頑固に、拳を振り上げて言い切ったあの頃の自分。今の自分の原点であり、母の想いを無視した今の自分の始まりでもある。
「そっか……。あの人の子供だもんね、一度決めた事は絶対に曲げない……ほんと、中身はあの人そっくりだもんねぇ」
そう言って淋しげで、でもどこか嬉しそうな笑みを浮かべる女性。その胸元に輝く金色のペンダント。そして、そこに描かれた紋章――そこで、世界が終わった。
今の世界にはもういない。記憶の中でしか会う事のできない大好きな人。
自分にとってはたった一人しかいなくて、いつもいつも傍にいてくれて、でも突然いなくなってしまって……
会いたいと願っても、決してそれは叶う事はないと、今の自分はわかっている。
あの嵐の日、いつもと変わらぬ笑顔を浮かべて「夕食はママの大好きなハンバーグでお願いねぇ～」と、いつもと変わらぬ声を残し――でも、いつもとは違う物々しい武装を身に纏って、あの人は家を出て行った。
――そして、二度と戻っては来なかった。
クリュウ・ルナリーフにとって、自分を生んで育ててくれたたった一人の母親――アメリア・ルナリーフ。
……母との思い出は、今もそこで止まったままだ。
目が覚めた。
視界に映るのは見慣れた自分の部屋の天井。まだ夜だから、その天

井は暗いままだ。
ゆっくりと、身を起こす。
部屋に差し込んで来る月の光を追って、クリュウはじっと空に煌く月を見詰め続ける。
「……母さん」
生前、彼女に向けていた子供っぽい呼び方ではなく、成長した自分が彼女を呼ぶ、彼女が知らない呼び方。今でも、少し違和感を感じる。
ギュッと、胸元に掛けられたある物を握り締める。それは、亡くなった母の形見。その中でも最も母が大切にしていた、常にずっと首に掛けていたペンダント。そして、あの嵐の日に忘れていった母の宝物。
ペンダントに描かれているのは、子供の頃には何も感じなかった――王冠を被った金火竜に騎士が乗って天を翔ける姿を模した紋章。
ヴィルマ事件の際に知った、大国アルトリア王政軍国の失われた紋章……
「父さんはこの村出身だった。でも、母さんはどこか異国の出身だって、言ってた……」
今まで気にもしていなかった事実が、これまでの欠片を集めていく事で、一つの形を創り上げていく。
最後のピースが、カチリとハマった音がした……
「――母さんは、アルトリア王家に何か関係があったの？」
そう尋ねても、返って来るのは月の光と風の音だけ。答えは――自分で見つけなくてはいけない。
翌朝、まだ日が上がって間もない頃。クリュウは静かに目を覚ました。ゆっくりと起き上がると、その場で軽く体を伸ばしてしつこい眠気を追い払う。
しっかりと目が覚めるとベッドから降り、すぐ傍の窓に掛かったカーテンを開く。途端に薄暗かった部屋いっぱいに朝のまぶしい日差しが広がる。
窓を開くと、朝の清々しい空気が入り込む。深呼吸して肺いっぱいにその空気を満たす。

「うん。今日もいい一日になりそうだ」
　クリュウは窓を開けたままにして着替えてから自分の部屋を出る。まだ朝早いという事もあって誰も起きていないのだろう。家の中は静かだ。特にいつも騒がしい家なので尚更だ。
　しかしリビングの方へと歩いていくと、次第に人のいる気配と音がしてきた。静かにそのまま歩むと、リビングに着く。ドアを開いて中に入ると、そこにはある意味予想通りの人物がいた。
「おはよう、フィーリア」
　クリュウが声を掛けると、せっせと動いていた少女が驚いたように振り返る。
「お、おはようございますクリュウ様。今日は起床が早いですね」
　そう驚きながら挨拶するのはエプロン姿のフィーリアだった。いつも食事をするテーブルの上にはコネている途中だと思われるパンがある所を見ると、朝食の支度をしてくれていたんだろう。
「ちょっと目が覚めてね。それより、今日の当番フィーリアだっけ？」
　共同生活という事もあり、クリュウの家では家事は当番制となっている。なのでローテションで平等に分配しているだが、フィーリアは確か昨日が当番だったはずだ。
　すると、フィーリアは困ったように苦笑を浮かべる。
「本当はサクラ様が当番なんですが、起きて来られないんですよ。まぁ、昨日単独依頼から帰って来たばかりなのでお疲れでしょうし」
　昨日サクラは護衛任務を終えて帰ってきた事もあり、疲労から珍しくまだ眠っているらしい。フィーリアはそんなサクラの代わりに彼女の当番を自主的に変わっていた。
「優しいね、フィーリアは」
「そ、そんな事ないですよッ。と、当然の事をしているまでですから」
　クリュウに誉められ、フィーリアは顔を真っ赤にして慌てる。そんな彼女を見ながら「僕も何か手伝おうか？」とクリュウは尋ねる。
「私一人で大丈夫ですよ。クリュウ様はゆっくりしてらしてください」
「そ、そう？　ならそうさせてもらうけど。いいの？」

「問題ありません」
フィーリアは笑顔で自信満々に答える。それを見てクリュウは「じゃあ、よろしくね」と言ってリビングを離れた。
外へ出ると、清々しい朝日が村全体を明るく照らしているのが見えた。クリュウはその場で朝の空気をもう一度味わうように深呼吸。
クリュウはそのまま家の横に隣接している倉庫に入る。
倉庫の中には武器や防具、道具類や素材などが大量に詰め込まれている。イージス村所属のハンター五人全員分の区画があり、それぞれの使う武器や防具などが分けられている。奥には共同の道具類が置かれている。ただし爆弾類は主にクリュウの区画に置かれている。
クリュウは自分の区画に入ると、彼の主力武器であるバーンエッジやデスパライズなどに並んで木刀と木製の盾が壁に掛けられている。クリュウはそれを取って倉庫を出る。
倉庫の横には彼の簡易的な小さな自主練場がある。クリュウはその中央に立つと、持った木刀と盾を装備して構えた。
一度大きく深呼吸すると、素振りを始める。
クリュウは狩猟などで村を空けたりする時以外はなるべくこうして自主的に鍛錬を行っている。こうした日々の努力で少しでもシルフィードやサクラのような強い剣士になれるようがんばっているのだ。日々の努力が実践で非常に役に立つという事を彼は十二分に熟知している。
素振りや足捌きなどの動きの訓練から腕立てや村を一周する走り込みなどの基礎体力作りなども怠らない。こうした日々の努力の甲斐あって、クリュウは小柄な体格ながらもその体は結構筋肉質になっている。
ただし最近ではフィーリアやサクラ、それにシルフィードまでが鍛錬をやり過ぎないよう注意するようになった。彼自身は体を壊さないようにという皆の優しい心遣いだと理解しているが、それもあるが三人の本当の理由はかわいいクリュウにあまり筋肉を付けてもらいたくないという、乙女的な理由だったりする。
まぁ、そんな背景がありながらもクリュウは今日もいつもと同じよ

うに鍛錬を行う。
いつもと同じように木刀を素振りをする。だが、いつもなら集中できるのに、今日に限ってはそれができなかった。
頭の中では昨晩見た夢が、母アメリアの事が気になっていた。
母であるアメリア・ルナリーフと、大国アルトリア王政軍国。この二つの接点が、どうしても想像できなかった。いくら考えても考えても仮の答えにもならず、頭の中はモヤモヤでいっぱいだ。
「ダメだ……」
クリュウはいつもの半分の回数で素振りをやめると、その場に腰を落とした。全然動いていないので呼吸は乱れてはいないが、額には薄っすらと汗が浮かんでいる。
クリュウは無言でポケットに手を突っ込む。その中に納められた物を取り出すと、それは母の形見のペンダント。先程着替えた際にここに入れておいたのだ。
日の光を浴びて輝く金色のペンダント。騎士を乗せた金火竜を描いた紋様。それが意味するものとは……
クリュウはしばし無言でそれを見詰めた後、まるでそれを忘れようとするように素振りを再開する。
結局、今日の鍛錬はいつもよりも長くなった。
クリュウが家に戻り、風呂に入って汗を流してリビングに戻ると、ちょうど朝食の準備が終わっていて、すでにサクラ、シルフィード、ツバメの三人が席に座っていた。そしてもう定番となったエレナとリリアの姿もある。
「ごめん、もしかして待った？」
「いやいや、ワシらも今起きた所じゃ。のぉシルフィード」
笑顔で答えるツバメがシルフィードに話題を振るが、シルフィードはボサボサの頭で濁った瞳でぼぉーっとしたまま。相変わらず朝が弱いシルフィードがいつもの凛々しさを取り戻すのにはもう少し時間が掛かりそうだ。
「サクラ、ちゃんとフィーリアにお礼言った？　君の代わりに朝食の支度をしてくれたんだから」

クリュウは片目を閉じて席に鎮座しているサクラにそう言うと、サクラはゆっくりと隻眼を開く。
「……和食が良かった」
隣に座るツバメが無言でとんでも発言をぶっ放すサクラの頭をひっぱたく。頭を叩かれたサクラは不満げな表情でツバメを睨む。
「……痛い」
「当番を代わってもらっておいて言うセリフじゃなかろうが」
呆れるツバメの隣でムスッとしているサクラ。当然その後はクリュウに怒られて渋々という感じでフィーリアに礼を言い、とりあえず収拾する。が、それが終わる間もなくリリアがクリュウに抱きついたりなどして騒動となり、結局いつもの朝が始まる事となった。
「あのさ、シルフィ。ちょっと相談があるんだけど」
朝食を終え、リリアとエレナがそれぞれ自分の店に戻ってからしばらくした頃。コーヒーを飲みながら朝食後のひと時を過ごしていたシルフィードにクリュウは突然そう切り出した。
いつになく真剣な表情で切り出すクリュウに、シルフィードはコーヒーカップをゆっくりとテーブルに戻す。
「相談？　別に構わないが、私でいいのか？」
「もちろん。こういう時はシルフィが一番頼れるからね」
平然と言うクリュウの言葉にシルフィードは一瞬ドキッとし、ほんのりと赤らんだ頬を隠すように頬を掻きながら顔を逸らす。
「そ、そうか。あ、ありがとう」
「う、うん」
妙な反応をするシルフィードにクリュウは首を傾げながらも、話を進めようとする。すると、二人しかいなかったテーブルに無言でフィーリア、サクラ、ツバメの三人がそれぞれの席に腰掛ける。
「みんな……」
「わ、私だって役に立てると思いますッ」
「……クリュウの為なら、命を捨てる事も辞さない覚悟はできている」
「男手が必要ならワシに任せておけ」
クリュウを囲むように座るフィーリア、サクラ、ツバメ。シル

フィードは小さく笑みを浮かべると、正面に座って驚いているクリュウに向かい合う。
「……君は本当に幸せ者だな。君を想う者達がこんなにもいるのだからな」
「シルフィード……みんな……」
自分を囲む四人の姿を見て、クリュウは胸が熱くなるのを感じた。頼りない自分の周りには、こんなにも自分を想ってくれる頼れる仲間がいてくれる。改めてシルフィードの言う通り自分は幸せ者だと心から思った。
「まぁ、頼ってくれるのは嬉しいが、私一人にも限界と言うものがある。察するに、重要な相談なのだろう？　ならば、ここにいる全員の知識や経験を結集した方が得策だ。そう思わんか？」
シルフィードの言う事ももっともだ。皆の力を結集させれば、どんな困難でも打ち勝つ事ができる。事実、自分達は今までそうやって乗り越えてきたのだから。
クリュウは一つうなずくと、その相談と言うのを口にする。
「――アルトリア王政軍国に行くには、どうすればいいのかな？」
返って来たのは沈黙だった。
「あ、あれ？」
困惑するクリュウが見詰める先で、四人はポカンとした表情を浮かべたまま固まってしまっている。
しばらくそうして固まる四人と、困惑するクリュウとで無意味に時間が流れたが、ようやくシルフィードが先陣で復活する。
「アルトリアへ行く、だと？　正気かクリュウ」
シルフィードの疑問はもっともだ。突然大陸北部にあるイージス村から大陸南方の海に浮かぶアルトリア王政軍国へ行きたいなど、無茶苦茶だ。突拍子もなさ過ぎるし、そもそもあまりにも距離があり過ぎる。
困惑するシルフィード達に対して、クリュウは真剣な表情のまま続ける。
「僕は本気だよ。どうしても僕は、アルトリアに行きたいんだ」

クリュウの表情を見て、シルフィードは彼が本気だという事を悟った。自然と、彼女の表情もまた真剣なものに変わる。だが同時に、その表情は幾分か暗い。
「……君の覚悟が本気だという事はわかった。だが、残念ながらそれは不可能に近いぞ」
シルフィードは言いづらそうに、しかしハッキリと答えた。その返答は予想外だったのだろう。クリュウは驚き、困惑する。
「え、どうして？　この前のガリアみたいに普通に入国はできないの？」
この前シャルルの住むアルザス村に行く為にガリア共和国に入国した際はドンドルマ発行の通行手形があったとはいえ、比較的簡単に入国できた。アルトリアは、もっと入国審査が厳しいのか。その程度に考えていたクリュウに、フィーリアが言いにくそうに説明してくれる。
「アルトリア王政軍国は民間レベルでの自国民の大陸への渡航及び、大陸人の入国を禁止しているんです」
「き、禁止ッ!?　つまり、入国がそもそもできないって事ッ!?」
驚くクリュウの問いに、フィーリアは小さくうなずく。
難しいレベルではない。そもそも入国ができないとなればどうしようもないではないか。クリュウがいきなり暗礁に乗り上げる事になった。
「ど、どうして入国を禁止しているの？」
「アルトリアは先のシュレイド王国の東西分裂を発端とした世界紛争の最中、大陸の複数の勢力に侵略され掛けたんです。その時は当時の女王様が犠牲になるも独立を守り抜いたのですが、以降アルトリアは大陸の人々を嫌い、必要最低限の交流しか持たなくなってしまったのです。その為、現在でも人の行き来を厳しく制限しているんです」
フィーリアの説明を聞きながら、クリュウの頭の中には学生時代に受けた世界歴史の授業の内容が思い出されていた。
大国シュレイド王国が東西に分裂した為に世界のパワーバランスが崩れ、様々な国や地域、部族などが交戦状態となり、一種の戦国時

代に突入した。その時代に犠牲になった人の数は数万とも数十万とも言われているが、実際の数字はわかっていない。
　その最中でアルトリアも自衛戦争を行っていた。確かにそういう経緯があるなら、他国との関わりを極力避けるのも納得できる。だが、それではクリュウがアルトリアに行くのは不可能となる。
　何か方法はないのかと頭を巡らせて何とか解決策になりうる案を見つけた。
「この前みたいにハンターズギルドから通行手形みたいなものを支給してもらう事はできないの？　ハンターって普通の民間人とは違うし」
「無理だ」
　クリュウの案を、シルフィードは一言でバッサリ切り捨てた。
「ど、どうして？　ハンターズギルドと国家はハンターを自由に行き来させる為の通行条約を結んでるんじゃないの？」
「……アルトリアとハンターズギルドは、そもそもその条約を結んでいないんだ」
　シルフィードの言葉に、クリュウは絶句する。何せ、彼の中では全ての国とハンターズギルドは通交条約を結んでいると思っていた。まさか、それを結んでいない国家があるなんて、思ってもみなかったのだ。
「フィーリアも言っただろう？　アルトリアは必要以上の外交をしないんだ」
「で、でもそれじゃモンスターが現れた時はどうするのさ。アルトリアだってモンスターは出るでしょ？」
「その為にアルトリアは強力な軍隊を持っているんだ。いざとなれば以前ヴィルマで見た飛行艦や、あれ以上に巨大な戦艦も出撃する。そもそもハンターを必要としていないんだ」
　クリュウはヴィルマで見た巨大な飛行艦を思い出す。リオレウス数体分の全長を持つ巨大な空を飛ぶ軍艦。シルフィードはあの時もアルトリアはもっと巨大な飛行戦艦を保有すると言っていた。確かに、あんな兵器があればハンターなど必要ないのかもしれない。

呆然としているクリュウに、シルフィードは複雑な表情を浮かべながら、静かに言う。
「残念だがクリュウ。一般人がアルトリアに行く方法は、現時点ではないんだ」
シルフィードの断言に、クリュウの表情が暗くなる。そんな彼の顔を見て、シルフィードだけではなくフィーリア、サクラ、ツバメの表情も曇る。特にサクラとツバメはこの手の話題は素人同然の為、適切なアドバイスどころか意見すらも満足にできないので、その無力感は大きい。
部屋の空気が一気に重くなる。それを直に感じるシルフィードは落ち込むクリュウに自身が抱いていた疑問をぶつけてみる。
「ところでクリュウ。なぜ突然アルトリアへ行こうなどと思ったのだ？　私が知る限りの君では、その理由が思いつかないのだが」
シルフィードと同意見と言いたげに、サクラも無言でうなずく。彼女二人からしてみれば、クリュウが突然アルトリア行きを思い立つきっかけすら見えない。
「……ヴィルマで、何かあったの？」
サクラの隻眼がゆっくりと細められる。それは、彼女が真剣な時に見せる自身の愛刀のような鋭さで、煌く。
数ヶ月前、クリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人は炎王龍テオ・テスカトルに襲撃され、壊滅的被害を受けた中継都市ヴィルマへ支援物資を届ける救援隊の護衛を引き受け、ヴィルマへ入った。その際ヴィルマ復興の為に遥か遠くアルトリア王政軍国から救援物資や機材を積み込んだ複数の大型飛行船で編成されたアルトリア王軍艦隊が現れ、ヴィルマの復興の基礎を作り上げた。これがクリュウにとっては現時点で最初で最後のアルトリアとの接点であった。
「確かにアルトリアはあまり交流をしない国じゃから謎は多い。興味が湧くというのもわからんでもないが、お主の様子を見るにそうではないのじゃろ？」
ヴィルマの一件には関わっていないツバメも、大体の事はフィーリ

ア達から聞いていた。そして、それらの情報や彼の様子を見て、静かにそう切り出す。
　ツバメの問い掛けに、そしてサクラの問い掛けにも答える形でクリュウは表情を真剣なものにして、ゆっくりとうなずく。
　いつになく真剣な彼の表情を見て彼の真意を探ろうとするシルフィード、サクラ、ツバメの三人。一方、この中でフィーリアだけが彼の真意の根幹に触れていた。まさかと思いながらも、フィーリアは静かに問う。
「……もしかして、アルトリアの失われた王家の紋章と何か関連があるのですか？」
　フィーリアの問い掛けに、クリュウはしばらくの間を置いて静かにうなずいた。
　一方、二人しか知らない話題にシルフィードが眉をしかめる。
「何だ。二人だけで納得されても困るのだが……」
「……洗いざらい吐け」
「いや、そこまでは求めておらんのじゃが……」
　三人は当然クリュウとフィーリアに説明を求める。特に切り出したフィーリアに視線が集まり、フィーリアは答えるべきかどうか彼と三人を何度か見比べて戸惑う。
「あ、あの……」
「――いや、僕が話すよ。それが筋ってもんでしょ？」
　恐る恐る口を開いたフィーリアを制し、クリュウが静かに切り出す。いつになく真剣な表情を浮かべる彼を見て、四人も自然と同じような表情になる。
「まず、僕の両親の話になるんだけど。僕の父さんの名前はエッジ・ルナリーフ。このイージス村出身のハンターで、村周辺の地域では今でも伝説として語り継がれているハンターなんだ。僕が生まれるまでは世界を股にかけて飛び回ってた流浪ハンターで、その頃に付けられた称号は、《銀翼》」
　クリュウから明かされた彼の父の名と、そして称号。残念ながら名前の方は四人とも聞き覚えはなかったが、称号の方に関してシル

フィードとフィーリアが反応した。
「銀翼……聞いた事があります。十数年程前まで世間を騒がせた凄腕の大剣使い。単騎で様々な古龍を討伐して来た別名《古龍殺し》とも呼ばれたハンターだと……」
「……私も、そのような事を師から聞いた事があるが……君の父上は、そのような凄腕のハンターだったのか」
「子供の頃の話だし、父さんはよく村を空けていたから僕が覚えている事はほとんどないんだけど、すごい有名人だったって事は知ってた」
「でしたらどうして、今まで教えてくれなかったんですか？　お父様が、大陸中に名を馳せたハンターだったと」
「……僕は僕だ。父さんとは違う。目指してはいるけど、違うんだ。だから、英雄の息子みたいな目で見られるのが嫌だったんだよ」
　気まずそうに視線を逸らすクリュウを見て、シルフィードは一人納得した。
　英雄の息子。彼はそれだけで自分を評価されたくはなかったのだ。有名人の子供やその子孫が抱く、誇りの裏に潜む劣等感。自分は自分だ。そう、想ってしまうのも無理はない。
　クリュウが打ち明けた、彼の隠していた闇。シルフィードは彼にそういった闇がある事に驚くと共に、少しほっとしていた。彼にもそういう人には言えない、見せたくないモノがあるのだと――彼も、自分達と同じ一人の若者なのだと。
「話を戻すけど、父さんと母さんは僕くらいの年の頃に父さんが旅の途中で立ち寄った外国で出会ったらしいんだ。母さんは元々ハンターとは無縁の人みたいだったんだけど、父さんに憧れてハンターになり、そこで才能を開花させて父さんと並び立つまでに成長した……そんな風に僕は聞いてる」
　自信を持って言えないのは、全て両親や両親の知り合いから聞いた情報だからだ。自分が生まれる前の親の事など、知る訳がないからだ。
「父さんと母さんは常にコンビで様々なモンスターを討伐し、流浪ハ

ンターとして世界各地を飛び回ってたんだ。でも、母さんが妊娠すると、二人は父さんの故郷であるこの村に戻り、腰を据えた。僕が生まれると、母さんはハンターを引退して専業主婦になって僕を育て、父さんを支えた。それが、両親の主な歴史だよ」
「……周りが赤面するくらい仲がいい夫婦だった。おじ様もおば様もとても優しい人だった」
　この場ではクリュウとサクラしか知らない、クリュウの両親。聞く限りでも二人は相当な実力を持つハンターだった事がわかる。だが、疑問も残る。
「君のご両親の事はわかった。だが、それと今回のアルトリアの件とどんな関係があるんだ？」
　シルフィードの問いかけに対し、クリュウは無言でポケットに手を伸ばすと、そこから何かを取り出す。皆の前に拳を突き出す。握られているのは金色のチェーン。それに吊られているのは同じ金色のペンダント。雌火竜、おそらく金火竜リオレイア希少種に跨い、大地を掛ける一人の騎士を模したエンブレム。母、アメリア・ルナリーフが残した形見のペンダントだ。
「それは……」
　見覚えのない紋様に首を傾げながら凝視するサクラ、シルフィード、ツバメ。しかし、フィーリアだけは驚愕のあまり絶句し、クリュウとペンダントを交互に見合う。そんな彼女の視線に対し、クリュウは「そう……」と静かにうなずく。
「これは母さんが大切にしていたペンダント。そしてそれに描かれるのは、ヴィルマでアルトリアの総軍師に教えてもらった――アルトリアの失われた王族の王紋だよ」

第１４２話　フィーリアとエレナ　クリュウを想う二人の決意

「どういう事だ？」
　突然の突拍子もない話に困惑するのはシルフィードだけではない。フィーリアもサクラもツバメも、困惑の表情を浮かべている。クリュウはそんな三人に対して静かに持論を述べてみる。
「――母さんは、アルトリアの王族に関係のある人なんじゃないかなぁって」
　クリュウの爆弾発言に、四人は驚きのあまり絶句する。普通ならそんな事はありえないと笑い飛ばせるが、基本ウソをつかない真面目な人が、真剣な表情を浮かべながら言えば、《まさか》と若干の信憑性を帯びてくる。それが自分の仲間だと尚更だ。
「まさか、そんな事は……」
　シルフィードが苦笑しながらやんわりと否定してみる。だが、それは正しい。彼の言う可能性は、ゼロに等しいものなのだから。
　シルフィードの否定に対し、意外にもクリュウも「だよねぇ」と苦笑を浮かべた。
「僕も本気にはしてないよ。このペンダントがその紋章が本当にアルトリアの王紋なのかもわからないし。もしそうだとしても城下町なんかで売られているレプリカかもしれない。むしろ、今並べた事例の方が納得できる――でも、同時にそれは母さんはアルトリア人だったって確証にも繋がるんだ」
　クリュウの説明を聞いて、ようやく四人は理解した。そして、クリュウは核心に触れる。
「――僕は母さんがアルトリア人なのか、確証を得たい。そして、母さんの故郷がどんな所なのか知りたい。だから、アルトリアへ行きたいんだ」
　自分の母親の故郷を知りたい。それは、子供として当然抱く想いだろう。それが、死に別れたのなら尚更だ。

クリュウは幼い頃に両親を亡くした。父親の故郷がそのまま自分の故郷になっているので、父親の情報には事欠かない。だが、外国人である母の情報は今まで何もわからなかった。それが今、思わぬ形でその末端に触れ掛けている。自然と、拳を握り締めてしまう。

母の故郷かもしれない遠い異国の地、アルトリア王政軍国。

だが、そんな彼の想いは国家レベルでの大き過ぎる壁で妨げられてしまった。

「……でも、行けないのなら仕方ないよね。国家レベルで入国拒否されてるんだから、僕にはどうしようもないよ」

苦笑しながら軽い口調で言うクリュウだが、その本心は残念で仕方がないという事くらい、四人は痛いくらいわかっていた。

やっと見つけた母親の手がかり。なのに、それは国家という巨大な壁を前にして少しも近づく事ができない。

皆に心配かけないように明るく振る舞ってはいるが、本当はショックが大きいのだろう。

自然と、場の空気が重くなってしまう。それを感じたクリュウは慌てて「そ、そんなに気にしないでよ。僕だって無理な事は無理だって事くらいわかってるからさ。きれいサッパリ諦めたからさ。ね？」と努めて明るく振る舞う。

そんな彼を見て、自分の無力さが悔しいと感じるシルフィード達。仲間が困っているのに、助けてあげる事もできない。それが悔しくて仕方がない。でも、国家レベルとなれば一個人でしかない自分達にできる事は何もないという事もわかっている。だから、尚更辛いのだ。

いつの間にか、全員が黙ってしまい部屋の空気は重く、沈黙が流れる。

こんな空気にしてしまった張本人は自分だという罪悪感からクリュウが慌てて話題を変えようとした時だった。

「――クリュウ様、わずかですが可能性がない訳ではありませんよ」

突然、フィーリアがそう切り出した。当然その場にいたシルフィード、サクラ、ツバメ、そしてクリュウは驚く。

「いや、でも一般人は入国拒否されてるんじゃどうしようもないで

しょ？」
　クリュウの問いかけに、フィーリアは「確かに、その通りです」とうなずく。
「だったら……」
「――でも、一般人じゃなかったら可能性はありますよね？」
　正直、フィーリアが言っている意味が全然わからなかった。それはクリュウだけではなくシルフィード達も同じだ。そんな皆の反応を見て、フィーリアは静かに切り出す。
「サクラ様やシルフィード様はすでにご存じだと思いますが、私はエルバーフェルド帝国の一等貴族出身なんです」
　フィーリアは静かに、そして力強く自身の素性を明かした。彼女にしてみれば、一世一代の爆弾発言だったのだろう。同時に、これはある意味彼女にとっての切り札――でもあったのだが、驚くのはツバメだけですでに知っているサクラとシルフィードはともかく、なぜかクリュウがまるで驚いていないのに気づいて、フィーリアは慌てる。
「え？　お、驚かれないんですか？」
　顔を真っ赤にして、一世一代の大告白が不発に終わったフィーリアの問いかけに対し、クリュウは苦笑しながら答える。
「あ、うん。実は前にルーデルから聞いたんだ」
　クリュウもすでに以前ルーデルとチームを組んだ際に彼女からフィーリアの過去を教えてもらい、その時に彼女が大貴族の娘だという事も聞かされていたのだ。
　それを知ったフィーリアは「そ、そうですか……」と大告白が不発に終わった事でショックを受けつつも、健気に話を進める。
「レヴェリ家はエルバーフェルド初代国王の親友であった人の末裔で、王家の次に古く、そして権力を持つ貴族家です。現在は私の父が当主としてレヴェリ領を統治しています」
「それはわかったけど、それが何でアルトリアへ行ける可能性に繋がるの？」
　クリュウの問いかけに、フィーリアは複雑な表情を浮かべながら答えた。

「お父様に相談すれば、もしかしたらアルトリアへ行く手段ができるかもしれません」
「フィーリアの、お父さんに……？」
「はい。レヴェリ家は政府に対して大きな発言力を持っていますから、もしかすればクリュウ様のアルトリア行きが可能になるかもしれません」
　フィーリアは終始複雑そうな表情を浮かべながら、それでもクリュウの希望に沿えるような可能性を提示する。実際、フィーリアの言葉にクリュウの表情が明るくなっていく。
　一方、生粋の一般人であるシルフィードの表情は相変わらず険しい。
「しかし、本当にそんな事が可能なのか？　いくら君の家が貴族家でも、政府に対してそのような物言いができるとは思えないのだが……」
　シルフィードは険しい表情を浮かべながら疑問を投げかけてみる。確かに、いくらフィーリアの家が貴族の家だとしても国を動かすのは並大抵の事ではないはす。むしろ無茶な話に等しい。だが、そんな彼女の疑問をフィーリアが静かに答える。
「レヴェリ家はエルバーフェルドでは大きな影響力を持つ家です。豊かな土地故に多くの税金を収めており、全貴族家で最も強大な諸行軍を有する領でもありますから、直訴すれば可能性はないとは言えません」
　エルバーフェルド帝国は現在も議会制民主主義の体制を執ってはいるが、現在は事実上政権与党の独裁政権となっている。そんな政府とはまた別に、地方で小さな国のように自治しているのが貴族が統治する諸侯領。そこではある程度独自の司法、行政、立法があり、領の警備をする諸侯軍がある。エルバーフェルドはそうした複数の諸侯領から成る連邦制の国なのだ。フィーリアはそんな強い影響力と戦力を持つレヴェリ家の力を使って、クリュウのアルトリア行きを政府に訴えかけようと言っているのだ。
　そう説明するフィーリアだったが、終始その表情は複雑そうだ。そ

れを見てシルフィードは「あまり気乗りはしない、という感じだな」と素直に言う。
「私としては、お父様にあまり無茶は言いたくはないんです。ただでさえ私がハンターになると無茶を言った際にも反対していたのを何とか説得して了承してもらったんですから。お父様には、いつも迷惑を掛けてばかりですし」
フィーリアが終始複雑そうな表情を浮かべていたのはそれが原因だったらしい。別に両親の事が嫌いという訳ではなく、むしろ大好きだから迷惑は掛けたくない。ただでさえハンターになると認めてもらっただけでも迷惑を掛けてしまった身だ。これ以上は負担を掛けたくはないという親を想う子供心。
「――ですが」
そこでようやく、フィーリアは明るく微笑んだ。いつもの、皆を和ませてくれる優しい天使のような笑顔。彼女には、それがよく似合う。
「クリュウ様の為ですから。今回は子供という身分を目一杯使ってお父様に甘えてみますよ」
そう言ってフィーリアはクリュウに向かって笑い掛けるが、今度はクリュウが複雑な表情を浮かべている。アルトリアに行ける可能性がわずかでも見えた事は嬉しいが、フィーリアと彼女の家族に迷惑を掛けるかもしれないとなると、やっぱり素直には喜べないのだ。そんな彼を見て、フィーリアの表情が曇る。
「……余計な、お世話だったでしょうか？」
「そ、そんな事ないよッ。すっごい嬉しいし感謝してる――でも、本当にいいの？　フィーリアにすごい迷惑を掛けちゃうんじゃ……」
不安気に言うクリュウの言葉を聞いて、フィーリアの表情が変わる。彼女にしては珍しく、ムッとしたようなちょっと怒っている感じの表情だ。
「クリュウ様は水くさいです。私達は共に背を預け合う、頼り頼られの仲間じゃないですか。迷惑なんて、そんな風に想ってもらっては心外ですッ」

いつになく怒るフィーリアの口調に、クリュウは黙ってしまう。そんな彼の肩を、いつに間にか彼の背後に回っていたシルフィードがそっと叩く。
「フィーリアの言う通りだ。仲間内で迷惑なんて言葉を使うんじゃない。彼女のせっかくの厚意を、無碍にする事になる。何より、その発言は彼女の期待を裏切るに等しい。彼女は君の役に立ちたくてがんばろうとしているんだ。そんな彼女に、君が掛ける言葉は一つしかないだろう？」
シルフィードの問い掛けに、クリュウは最初はわからなくて考えたが、すぐに彼女の言葉の真意を汲み取り、フィーリアへ向き直る。そして、
「ありがとうフィーリア。じゃあ、お願いするよ」
笑みを浮かべながら、そう言った。すると、クリュウに笑い掛けられたフィーリアは顔を真っ赤にして「こ、こちらこそよろしくお願いしますッ」となぜか慌てて頭を下げる。彼女がお願いする事は何もないのだが、どうやらテンパっているらしい。
そんなどうも微妙に噛み合っていない二人を微笑ましげに見詰めるシルフィードとツバメ。一方、これまでずっと沈黙し続けているサクラは相変わらずの無表情で何を考えているかわからない隻眼でじっと二人を見詰めている。
「できればなるべく早く行きたいんだけど、いつなら大丈夫？」
「そうですねぇ。帰郷するという旨を家に一報入れておきたいので今日明日は無理ですが、それ以降なら問題ありません」
「それなら一週間後というのはどうだろう？　長旅の準備を考えるとそれくらいがちょうどいいだろう」
シルフィードの意見にクリュウは「そうだね。じゃあ、一週間後で」とフィーリアに頼み、彼女は「わかりました」と笑顔でうなずく。
とりあえず大まかな予定が決まった所で、クリュウはほっとしたのだろう。ようやくいつもの笑みが戻り、協力してくれた皆を見回す。
「みんなありがとう。それじゃ一週間後、僕とフィーリアはエルバーフェルドに――」

「……待って」
珍しくクリュウの言葉を遮って声を出したのはこれまでずっと沈黙していたサクラだった。サクラに話を遮られるとは思っていなかったのか、驚いているクリュウに向かってサクラは鋭い隻眼で見詰める。
「……二人で行くつもり？」
「う、うん。本当は僕の事だから僕一人で行きたいんだけど、フィーリアがいないと話が始まらないから。とりあえず二人でいいかなぁって……」
「……私もついて行く」
サクラは力強く宣言した。そんなサクラの発言にクリュウは困ったような表情を浮かべる。
「いや、でもきっと長旅になるだろうし」
「……クリュウと一緒がいい。クリュウと離れるくらいなら今ここで自害する」
サクラは一歩も引かない様子。そりゃ大好きなクリュウと離ればなれになるのは本気で嫌なのだろう。瞳には明確な意志が宿り、断固ついて行くと決心している。そんなサクラを見てクリュウがどうしたもんかと悩んでいると、シルフィードが苦笑しながら間に入って来る。
「諦めろクリュウ。サクラなら本当にやりかねんぞ」
シルフィードは苦笑しながら「付き合いが長い君ならわかるだろ？こういう時のサクラは頑固だと」と彼に諦めるよう促す。事実、サクラは置き去りにされる事を断固拒否する構えを見せている。いくらクリュウの言う事でもこればっかりは聞けないようだ。
クリュウは大きなため息を零す。だが、その表情は意外にもどこかサッパリしたようなものだった。
「わかったよ。じゃあサクラも一緒だ」
「……嫁として当然の事」
先程までの険しい雰囲気は消え、彼女の表情も幾分か和らいで見える。その微妙な表情の変化を見抜けるのは、今の所クリュウだけだ。

他のメンバーは何となく雰囲気が和らいだくらいでしか感知できない。
正直、フィーリアとサクラがついて来てくれるのは心強い。頼りになるというのももちろんあるが、何より安心感がある。
ただ、ぶっちゃけこの二人だけでは心配でもある。こういう時、最も頼れる彼女にも、傍にいてもらいたい。いつの間にか、クリュウは腕を組みながら壁に背を預けて立っているシルフィードの方を向いていた。
「あのさシルフィ。君もついて来てくれるかな？」
クリュウの問いかけに、シルフィードは珍しく不機嫌そうに眉をしかめた。それを見てクリュウは慌てて「ご、ごめんッ。無理なら無理で全然いいんだよッ」と慌てて前言撤回。だが、シルフィードは腕を解いて彼の方へ腕を伸ばすと、無防備な彼の額に軽くデコピン。額を押さえて驚くクリュウにシルフィードは再び腕を組んで仁王立ち。
「……バカな事を訊くな。当然私もついて行くに決まっているだろう？　そんな当たり前の事をわざわざ口で言わせるな」
シルフィードが怒っていたのはそれだった。そんな当たり前の事をわざわざ確認する彼の行為がムカついたのだ。そんなに自分は薄情で頼りにならないと思われているのか、怒るのと同時に悲しくもなる。
だが、そんな彼女の心境を知ってか知らずか、クリュウはシルフィードの言葉に一瞬申し訳なさそうに表情を暗くしたが、すぐに彼女がついて来てくれるという事実にそれは笑みに変わる。そして、
「あ、ありがとうシルフィ」
無邪気な笑みを浮かべながら、そう感謝した。シルフィードはその笑顔にほんのりと頬を赤らめるとそれを隠すようにそっぽを向く。
「れ、礼を言われるような事はしていないぞ」
珍しく、素直じゃないシルフィードであった。
結局、クリュウだけではなくフィーリアにサクラ、シルフィードまでがエルバーフェルドに行く事になった。そんな四人のやり取りを一人無言で見守っていたツバメは静かにため息を零す。

「……そうなると、ワシは留守番じゃな。長旅の間、村を守るハンターが不在という訳にはいかんからのぉ」
そう言って、ツバメは苦笑しながら村に残る事を選んだ。村を守るべきハンターが一人もいなくなる訳にはいかない。誰か一人残らなければならないとなり、ツバメは自らその待機組に志願した。
「ツバメ……」
「なぁに。ワシとオリガミがおればランポス程度なら鎧袖一触じゃ。さすがに飛竜となると話は変わって来るが、とりあえずの守備は問題ない。村はワシに任せて、お主は自分の成すべき事を貫け」
ツバメは自分の役目をしっかりと熟知していた。直接彼を支えるのは彼から絶大な信頼を受け、これまで幾多の苦境を共に乗り越えてきたフィーリア、サクラ、シルフィードの三人。自分は、そんな彼を陰から支える裏方で十分だと。
横に並んで守る仲間もいれば、背後を守る仲間もいる。自分は、後者なのだと。ツバメはそう自分の役目を決めていた。
「ありがとう、ツバメ」
「なぁに、礼などいらん。ここはワシにとっても大切な《帰る場所》じゃ。守るのは当然じゃよ」
「……そっか。じゃあ、村の事は任せたよツバメ」
「無論じゃ」
ツバメは男らしく拳を突き出して彼の期待に答える証を見せる。クリュウはそれを見て小さく笑みを浮かべると、そっと自身も拳を突き出す。
互いの拳をぶつけ合い、指切りの漢（おとこ）版と言った所か。ツバメはそれに満足したように笑みを浮かべると「それじゃ、早速オリガミに相談しないとのぉ」と言って家を出て行った。
残されたのは、いつもの四人。
これまで多くの苦境を共にしてきたチームであり、互いを心から信頼し合った最高のチーム。クリュウを中心としている為にある意味危うい均衡で纏まってはいるが、同時にクリュウの事になればこれ以上頼りになる絆はないだろう。

そんな最高の仲間達を見回し、クリュウは改めて胸の奥に広がる言葉を、笑顔と共に口にする。
「フィーリア、サクラ、シルフィ――ありがとう」
一週間後、イージス村から村人に見送られて一大の竜車が出て行った。竜車を引くのはアプトノスのアニエス。最近はセレス密林かドンドルマ経由の二択での狩猟ばかりだったので久しぶりの仕事。アニエスは嬉しそうに「キュイッ♪」とアプトノスらしくないかわいらしい声を上げて意気揚々と竜車を引いて歩く。
アニエスの手綱を引くのは運転手を務めるシルフィード。身に纏うのは使い慣れた防具リオソウルシリーズと、同じく使い慣れた武器キリサキ。攻撃力と切れ味が高く無属性な武器で、どんな状況でも最大の力を発揮できる臨機応変に優れた装備だ。
外にいるのは運転をするシルフィードのみ。幌の中にはクリュウ、サクラ、フィーリアの三人もそれぞれ武装して待機している。道中何があるかわからないからこその身構えだ。
クリュウはずっと愛用しているレウスシリーズに万能武器デスパライズを纏い、フィーリアもいつもと変わらずリオハートシリーズにハートヴァルキリー改を武装。サクラは自身の過去の戒めとして決めている凛シリーズに新武器として雌火竜リオレイアの素材を使って作られた飛竜刀【翠】を武装。皆、臨機応変に対応できるような汎用性の高い武装を行っている。
兜のない凛シリーズと、ピアスに変えている女子三人とは違い、クリュウは戦闘時は被るレウスヘルムを置き、長旅に備えての荷物を入れた木箱を背に座っている。だが、その瞳はチラチラと自分の隣を何度も見ている。彼だけではなく、幌の中で同じように座っているフィーリアとサクラ。さらに運転席側の幌の切り込みからシルフィードもチラチラと何度も振り返っている。
そんな四人の微妙な視線を一身に集めるのは、他の四人のハンターと違って防具や武器で武装をしていない少女――エレナ。
エレナは先程から無言で本を読んでいるが、皆の視線には気づいているのだろう。しばらくして顔を上げ、「何よ」と不機嫌そうに問う。

そんな彼女の問い掛けに、クリュウが恐る恐るという感じに口を開く。
「今更だけどさエレナ、本当について来る気なの？」
「別にいいじゃない。狩りに行く訳じゃないんだし」
「いや、そうだけどさ……」
クリュウは複雑そうな表情を浮かべながら、でも返す言葉もなく黙ってしまう。それは他の三人も同じで、まさかエレナがついて来るとは思ってもなかったのだ。
一週間前、エルバーフェルド行きを決定した時にそれをエレナに話したらついて行くと言い出したのが始まりだ。クリュウはもちろんシルフィード達も危険だし長旅になると説得したのだが、ことごとく失敗。結局、こうしてついて来てしまったのだ。
そんな四人の様子を見て、エレナは不機嫌そうにプイッとそっぽを向く。
「何よ。人を邪魔者扱いしちゃってさ。感じ悪い……」
「い、いえ。そういう訳ではないんですが……」
「言っておくけど、私だってアメリアさんの事が気になるのよ。子供の頃はお世話になったし、お姉さんみたいに慕ってた事もよく覚えてる。私にとっても、アメリアさんは大切な人だったの。その真相を知りたい、そんな事も願っちゃダメな訳？　そもそも、フィーリアやシルフィードよりは本人を知っている私の方が適任じゃない」
邪魔者、という訳ではないのだがどうもいつもと違う面子に困惑しているクリュウ達の反応がエレナは嫌で仕方がなかった。仲間外れにされている、そんな気持ちが彼女を不機嫌にさせ、言葉にも棘を持たせる。事実、名指しされたシルフィードはあまり気にした様子はなさそうだが、フィーリアは明らかに落ち込んでいる。それを見て罪悪感から居心地が悪くなり、エレナはさらにプイッと顔を背ける。
「エレナ、そんな言い方しなくたって……」
「うるさい」
なだめようとするクリュウに対してもエレナは容赦ない。何せ、彼女の不機嫌の根本はそんな彼にあるのだから仕方がない。彼女から

してみればここにいる誰よりも長い付き合いであり、アメリアを知っていて、皆と同じくらい彼の力になりたいと想っている（本人は否定するだろうが）。だが、彼がそんな重要な話を真っ先に相談したのがこの三人だった。

自分はそんなにも頼りにならないのか。子供の頃からずっと一緒で、互いの成長を支えあって来た幼なじみなのに、どうして頼ってくれないのか。そんな虚しさと悲しさが胸を満たし、それが結果的にツンとした態度になって表に出てしまう。

エレナの機嫌は直らず、幌の中は何となく重苦しい雰囲気に包まれる。外にいるシルフィードもそれをヒシヒシと感じており、人知れずため息を零す。

その夜、一行は平原で野宿する事になった。ハンター四人が交代で夜番を担当し、その代わりエレナが炊き出し担当と簡単に役割を決めて夕食を済ませ、皆が寝静まる。

パチパチと薪が割れる音を響かせる焚火を見詰めながら、夜番を担当するのはクリュウ。一人だから声を出す事もなく、無言で時折周囲を警戒しながら役目を全うする。

一体どれくらいの時間が経ったのか。月や星の動きで何となくはわかるが、特に気にせずそうして一人の時間を過ごす。

「クリュウ」

虫の声や風の音に耳を済ませていたクリュウがその声に顔を上げると、そこにはエレナが立っていた。

「エレナ。どうしたのこんな時間に」

「別に。どこで何してようと私の勝手でしょ」

「いや、集団行動してるんだからある程度は決まりを守ろうよ」

そう言うものの、正直一人は退屈だったのでクリュウは内心は喜んでいたり。しかしすぐに彼女に「明日はまた早いんだから、早く寝なよ」と自ら話を終える。夜番はとりあえず今は自分だけで十分だし、彼女はハンターではない。あまり無理はさせたくはなかったというのが彼の優しい本音だ。

だが、エレナは「私に指図するなんて、あんたも出世したもんねぇ」

とからかうように言いながら、彼の横に腰掛けた。困惑するのはクリュウだ。
「いや、だからさ……」
「……別にいいじゃない。あんたとこうして二人っきりで話すの、何かすごく久しぶりな気がするし」
エレナの言葉に、クリュウは一瞬ビックリしたような表情になったが、すぐに「そういえば、そうだね」と納得したようにうなずく。
ハンターという職業柄いつも村を空けている事が多いし、オフの日はとことんオフという感じで体を休めたりするくらいだし、そもそも村にいる時はいつもみんなでワイワイとやる事が多く、彼女の言う通りエレナと二人っきりというのはずいぶんと久しぶりな気がする。
「にしても、あんた達と一緒に旅をするのって、これが初めてなのよね」
「そうだっけ？　ドンドルマになら何度か行った事あるでしょ？」
「あれは旅っていう感じはしないでしょ。本格的な用意を整えての旅ってのはこれが初めてなのよ」
「うーん、言われてみればそうだね」
ハンターであるクリュウと、ギルド関連の仕事がわずかながらあるとはいえ一般人のエレナ。進むべき道が違う二人は、自然と離れ離れになってしまう。一緒にいる時間も、削られていく。
昔はいつも一緒にいたのに、いつの間にか幼なじみの二人はそれぞれの進むべき道に向かって歩み続け、いつしか一緒にいる時間が減ってしまった。言葉には出さないが、二人ともそれに対してどこか寂しさを感じているのは一緒だ。
「……あの事件からよね、あんたがハンターを本格的に志したのは」
しばしの間の沈黙の後、ゆっくりと口を開いたエレナはどこか懐かしげに言う。そんな彼女の問い掛けに対し、クリュウはそれまでの穏やかな表情を消し、どこか悲痛さを感じるような、厳しい表情になる。
エレナが言ったあの事件とは、今から約六年前の嵐の日に起きたクリュウの母――アメリア・ルナリーフの謎の死。
突然の大嵐に村の子供エリエがセレス密林に行ったきり帰らず、ア

メリアはその捜索に長年引退していたハンターとして武装を纏い出て行った。しばらくしてエリエは自力で村に帰って来たが、アメリアは彼女を逃がす為に正体不明のモンスターと交戦。そのまま帰っては来なかった。

嵐が去った後、村人総出でアメリアの捜索が行われたが彼女を発見する事はできなかった。それこそ、遺体すらも。

捜索隊が唯一見つけたのは、母が現役時代に愛用していたG・ルナZシリーズのヘルムの、血に塗れた額当てのみだった。

八歳の頃に父を、十歳の頃に母をそれぞれモンスターによって亡くしたクリュウは、それまで子供心の夢としか見ていなかった両親と同じハンターになる事を決意し、十二歳でドンドルマのハンター養成訓練学校に入学する事になった。

そして今、クリュウは父や母と同じハンターになった。まだまだ両親のかつての実力には到底及ばなくとも、彼は両親が遺したイージス村のハンターとして暮らしている。

彼がハンターになると決めたきっかけ、それが母アメリアの死。そして今回、そんな母の過去がわかるかもしれないのだ。

村を出る前、村長に両親の事を聞いた。

父、エッジ・ルナリーフはイージス村の出身。当時村にいたハンターの青年に憧れてハンターへの道を選び、村を出て行った。その間の事は両親からの話だけなので詳しくはわからなかったが、父は流浪ハンターとして世界中を飛び回り、己の実力を鍛えていたらしい。

エッジが十八歳の頃、彼はイージス村から遠く離れた国にハンターとしてやって来て、そこで当時十六歳だった母アメリアと出会った。そして二年後、エッジはアメリアを連れてその国を出た。その後二人は結婚し、アメリアはエッジと同じハンターとなって二人は世界中を跳び回ってコンビで様々なモンスターを討伐していたらしい。

両親がイージス村に戻って住むようになったのはアメリアが二七歳の頃。きっかけはアメリアの妊娠、クリュウが母のお腹に宿った事だったらしい。

クリュウが生まれた後、母はハンターを引退して専業主婦になり子

育てに専念。父は一家の主として立派にハンターとして稼いでいた。
その後、父エッジはクリュウが八歳の頃にギルドからの古龍討伐の極秘依頼を受けて殉職。母アメリアもその二年後にあの事件で命を落とした。
二人とも、子供であるクリュウに自分達の詳しい歴史を語らずして彼の前からいなくなった。クリュウは、無理とはわかっていても少しでも両親の事が知りたくてがんばった。二人とも有名なハンターらしかったので、養成学校時代はよく資料室に入っては両親の経歴を調べたりしたが、出て来るのは称号持ちだった父の事ばかり。母の事は、何も書かれてはいなかった。
母の事が知りたい。子供なら当然抱く想い。
母の死から六年が経ち、今ようやく彼の前に母の過去がわかるかもしれないという光が現れた。クリュウは今回、そんな光を目指しエルバーフェルドを目指している。
そして、最終的には母の祖国――アルトリア王政軍国へ。
自然と、握り締める拳に力が入る。そんな彼の拳を覆い隠すように、エレナの手がそっと添えられた。驚くクリュウが彼女を見ると、焚火のゆらゆらと揺れる明かりに照らされながら、エレナは静かに微笑んでいた。
「ったく、何らしくない顔してんのよ。あんたはいつもみたいにバカ丸出しな顔がお似合いよ」
「……バカ丸出しって、そこまで言う？」
若干傷つきながらも、クリュウもまた自然と微笑んでいた。こうして、いつもと変わらずに接してくれるエレナの存在が、どことなく安心感を与えてくれる。母の事で不安や焦り、緊張などで無駄に力が入っていたクリュウは、そんな彼女を見て自然と肩の力が抜ける。
「心配してくれてるの？」
「バカ言わないでよ。何で私があんたの心配なんてしなくちゃいけない訳？」
「だよねぇ～」
やっぱりと苦笑するクリュウを見てエレナはムッとした表情にな

ると、そんな彼の後頭部を引っ叩く。意味がわからず「いきなり何するんだよぉッ」と怒るクリュウにそっぽを向き、「知らないッ」とエレナはプンスカと怒る。それに対し、クリュウは疑問符を頭に浮かべまくるばかり。
「そういえば、エレナがこうして旅してる事。おじさんやおばさんは知ってるの？」
　両親を失っているクリュウに対して、忘れがちだがエレナの両親は健在だ。ただ、病弱な母を介護する為に両親共に別の場所で暮らしているだけだ。以前までは病気の治療でドンドルマにいたが、一ヶ月前程から少し体調が良くなった事から治療から療養に切り替え、風光明媚なガリア共和国の田舎町に引っ越している。
「一応一報は出しといたわよ。ただ、返事が来る前にこうして出て来ちゃったけどね」
　エレナは気にした様子もなく答える。当然体の弱い母の事は心配しているが、母の事は父に任せている。自分の役目は、両親が残した酒場をちゃんと経営する事。そう思っているからこそ、互いに信頼しているからこそ、表面上はこうして平静でいられる。そういう意味では、クリュウなんかよりもずっと大人なのかもしれない。
「母さんの事が何かわかったら、おじさん達にも手紙で教えないとね」
　クリュウの父親とエレナの両親は幼なじみだ。子供の頃はよく一緒に遊んでいたらしいし、父が母を連れてイージス村へ永住する事を決めた際には何かと世話になったらしい。その後も、良き友人として母も加わって四人仲良く過ごしていた。互いに子宝にも恵まれ、その子供達もまた幼なじみとして仲良く育ち、今に至る。
　クリュウの提案に、エレナも「そうね」と静かに答える。
「それにしても、まさかエレナが本当について来るとは思わなかったよ」
　話題に一段落ついた所で、また別の話題を振るクリュウ。だがそんな彼の言動に対しエレナは不機嫌そうに眉をしかめる。
「何よそれ。やっぱり私を邪険にしてるんじゃない」
「ご、ごめんッ。そういう意味じゃないんだけど……」

「ちょ、何ムキになって謝ってんのよ」
慌てて謝るクリュウを見てエレナもまた慌てる。別に彼女からしてみればちょっとからかったくらいなのだから、そんなに本気になって謝られる方が困るのだ。
「そりゃ、アメリアさん絡みの事だから気になるってのもウソじゃないわよ。でも本当は、あんた達と旅がしてみたかったのよ」
「僕達と？」
「そッ。だったあんた達いつもハンターの仕事でそこら中を飛び回ってさ、いつも私は村でお留守番。職種の違いだから仕方がないのはわかるけど、不公平よ」
「そ、そんな事言われても……」
「それにあんた、最近はいっつもフィーリア達とばっかりじゃない。たまにはあんたの横にいるのが私でも構わないでしょ。元々そういう関係なんだから」
「……え？」
ポカーンとした表情を浮かべるクリュウを見て、エレナは自分が無意識に言った恥ずかしい発言に気づき、見る見るうちに顔を真っ赤に染めていく。
「ち、違うわよッ！　私は幼なじみとしてあんたが無茶しないように監督する責任があるのッ！　だから横にいる方がいいって言ってるだけで、変な意味とかは全然全くないんだからッ！　変な誤解しないでくれる変態ッ！」
「えぇッ!?　僕まだ何も言ってないよッ!?」
「言う気があった時点で有罪よッ！」
「法律も何もないよねそれッ!?」
照れ隠しにクリュウをポカポカと殴るエレナ。本気じゃないので痛くはないのだが、理不尽に殴られる側としては精神的に辛い。特に相手がどうして怒っているのかがわからないなら尚更だ。
「まったく、あんたって本当に成長してるんだからしてないんだかわからないわね」
「それはエレナもでしょ……」

ようやく解放されたクリュウはそう返すとパチパチと燃える焚火に薪を加える。そんな彼の火に照らされる横顔を、エレナはそっと見詰める。
「あんた、やっぱ変わったよね」
しばしの無言の後、それを打ち破るようにエレナがつぶやく。焚火の上台を作り、そこに水を入れた容器を吊るす作業をしていたクリュウはそんな彼女の言葉に「さっきと言ってる事違うけど」と軽くスルーする。だが、エレナは続ける。
「昔はさ、森の中や山の中を私が連れ回してて、むしろ私があんたを守ってたみたいな所だってあったのにさ。今じゃ、私はあんたに守られる側になったのよね」
「そりゃ、職業上当然でしょ？　僕はハンターで、エレナは一般人なんだからさ」
「そういう意味じゃないわよ。腕っ節とかじゃない、あんたは立派な男になったよ」
そこでようやくクリュウは振り返る。きょとんとした表情を浮かべる彼にフッと小さく笑いながら、しかしエレナは静かに言葉を繋ぐ。どこか遠くを見るような目で、夜空を見上げながら。
「そりゃ、今だって女々しくて優柔不断で周りに流されやすい女ったらしだけどさ」
「……すごい言われよう過ぎて泣きそうなんだけど」
「――でもさ、そうじゃないとクリュウじゃないんだよね。すごい所は本当にすごいし、かっこいい時はかっこいい。でも、どこかに私が知っている、子供の頃から変わらないあんたがいる。それが、私としては嬉しいし、安心できる。あぁ、クリュウはクリュウだ。ってね」
「エレナ……」
「だからさ、あんたは立派だよ。ちゃんと、おじさんの背中を追って、前に進み続けてる。子供の頃からの夢を諦めずに続けてるって、すごい事なんだからさ。世界中のバカ達があんたを認めなくても、私だけはあんたを認めるわ――クリュウ・ルナリーフをなめるな、ってね」
そう言って、エレナはニッと笑みを浮かべる。その月明かりに照ら

された彼女の笑顔に、クリュウはドキッとして慌てて顔を背ける。そして、そんな自分の反応に困惑する。
「な、何でエレナなんかに……」
　フィーリアやサクラだったらまだわかるが、相手はあのエレナだ。子供の頃からの付き合いでずっと一緒だった、お風呂も寝る時も一緒だった事もあり、会うたび会うたびに暴言を言われては飛び蹴りされるあのエレナだ。なのに、そんな彼女の笑顔にドキッとしてしまった。それどころか恥ずかしくて目も合わせられない。どうかしてる。
「何よクリュウ。何で顔を背けるのよ」
「べ、別に背けてなんかないよ」
「ふーん、あんた何か顔赤くない？」
「た、焚火のせいだよッ」
　エレナに指摘され、慌てて顔を隠すように背を向けるクリュウ。そんな彼の反応を見て、エレナの顔にニヤァとイタズラを思いついた子供のような笑みが浮かぶ。
「ふーん、焚火のせいにしてはずいぶんと赤く見えるけどなぁ」
　からかうように言いながら、エレナはクリュウの首に両腕を回し、背中から抱きつく。慌てるのはもちろんクリュウだ。
「ちょ、ちょっとエレナッ」
「何よ」
「な、何よって……」
　思った事通り言えるはずもなく、クリュウは顔を赤らめたまま押し黙る。回された腕が柔らかいとか、鼻をくすぐる髪からシャンプーの匂いがするとか、吐息が近いとか。せめてもの救いはモンスターの攻撃をも防ぐ堅いレウスメイルが押しつけられているであろうエレナの胸を防いでいる事だろうか。そんな事を考えてしまい、ますます黙ってしまう。そんな滅多に見られない彼のかわいらしい反応を見て、エレナの顔に益々笑みが浮かぶ。
「あ、もしかしてあんた私なんかに欲情しちゃってる？　発情期？　発情期なのかしら？」
「ち、違うよッ！　誰がエレナなんかで……ッ」

「目を合わせられない今のあんたじゃ全く説得力に欠けるわねぇ～」
ニヤニヤとイタズラっぽい笑みを浮かべながらクリュウをからかうエレナ。その行動は次第に大胆になっていく。
背を向ける彼の、今は籠手（ガントレット）が外された素手を掴むと、それをそっと自分の胸元に当てる。この行動にクリュウはさらにテンパる。
「ちょ、ちょっとエレナ何して……ッ!?」
「ほーら、やっぱり私を意識しちゃってるじゃない。うわぁ、キモ」
そう言いながらもやはりやっている本人であるエレナ自身も恥ずかしいのだろう、彼女の頬も焚火の明かりとは違う赤みを帯びている。だがその表情はどこか嬉しそうだ。
――自分の事をちゃんと《女の子》として見てくれている。それが嬉しくて仕方がないのだ。
子供の頃からずっと一緒の幼なじみというのは親しく接せられるというメリットがある反面、親し過ぎるというデメリットもある。女の子としてではなく、姉弟のように見られる傾向があるのだ。しかし、クリュウはちゃんと自分を一人の女の子として見てくれている。それが、嬉しくて仕方がないのだ。
「か、からかうのもいい加減にしてよッ」
「はいはい。ちょっとした冗談なのに、何マジになってんのよ」
「うぐ……ッ」
返す言葉もなく、押し黙りそっぽを向くクリュウの姿を見てエレナはおかしそうに笑う。笑われたクリュウはさらに不貞腐れて背を向け、それを見てエレナが笑う。しばらくそんな繰り返しをした後、笑い過ぎて目の縁に溜まった涙を拭い、エレナはそっと立ち上がる。
「さてと、そろそろあんたも交代の時間でしょ。私もそろそろ寝るわね」
「はいはい、どうぞ勝手にどこででも寝てください」
唇を尖らせながら不機嫌そうに言うクリュウを見て、エレナは「あんた、何不貞腐れてんのよかっこ悪ぅ」と呆れる。でも同時に、そんな子供っぽいクリュウを見られて嬉しくもあるが。

「別に不貞腐れてなんかないよ」
「何年あんたの幼なじみやってると思ってんのよ。バレバレ」
「……は、早く寝たらいいだろッ」
「はいはい。言われなくても寝るわよ」
顔を真っ赤にして怒るクリュウの声などどこ吹く風という感じに気にした様子もなく手をひらひらと翻しながら背を向けて幌の中へ入るエレナ。
「――クリュウ、何でも自分一人で抱え込むんじゃないわよ。言ったでしょ？　私とあんたは、たった一人しかいない幼なじみ。頼って頼られて……気が向いたら、相談でもしなさいよ。いいわね？」
エレナはそうクリュウに告げると、幌の中へ消える。クリュウはそんな彼女の背中をしばし見詰めていたが、フッと口元に小さな笑みを浮かべる。
「……ありがと、エレナ」
その声は、きっと彼女の耳にも届いただろう。そう、願いたい……

第143話　エルバーフェルド帝国

エルバーフェルド帝国。

大陸西方、内陸に位置するガリア共和国と西竜洋に面する複数の国家で形成される西竜諸国の一角を担う帝政国家で、ガリア共和国、東シュレイド共和国と国境を面するこの国家は過去の大災害から懸命の復興の最中にある国である。

約二〇年前、当時エルバフェールド王国の火山地帯が突然一斉に噴火を始め、それを発端とした地震と津波により多くの家屋が損壊。吹き上がった火山灰で広範囲の田畑が深刻なダメージを受けた。これは大陸有史以来最悪の災害と言われ、後にローレライの悲劇と呼ばれる未曾有の大災害となった。この影響でシュレイド王国分裂事件の前まではシュレイド王国の次に大国と言われたエルバーフェルド王国は一気にその国力を失い、国家は壊滅的状態にまで悪化。

当時国を治めていた王、カイザー3世は全力で復興を指示し、エルバーフェルド国民の多くがカイザー3世の指示の下復興に心血を注いでいた。だが、そのカイザー3世はその後《愚王》という蔑称を与えられる事になった。

きっかけはローレライの悲劇によって被害を受けたのはエルバーフェルドだけではなかった事。追い打ちを掛けるように他の西竜諸国がエルバーフェルドの火山噴火による被害の賠償金を請求していた。カイザー3世はこれらの請求に対しても考慮しなくてはならなかった。なぜなら、すでに当時最強とも言われたエルバーフェルド軍は壊滅的打撃を受けており、尚且つ軍は復興作業で手一杯であり、抑止力としての戦力が意味を成さなくなっていたからだ。他国の恫喝に対し、エルバーフェルドは屈せざるを得なかった。

カイザー3世は疲弊し切った国家を抱えながらも他国に対する賠償金を払った。しかしそれらはエルバーフェルドの支払能力を大きく超えており、遅々として進まぬ支払いに業を煮やしたガリア・東シュレイド連合軍は豊富な地下資源があるエルバーフェルドの生命線とも言うべきルール地域を軍事占領。これに対してカイザー3世

は義勇軍という国軍ではない民間組織を収集し、これに資金を提供する事でルール地域奪還を行った。これは国軍が他国の国軍に対して攻撃をすると戦争になるとの配慮であった。

結果的にルール地域の奪還には成功したものの、賠償金や義勇軍への過剰な資金提供を原因としたハイパーインフレにより、エルバーフェルドの通貨はその価値を失い、復興の為の資金は失われた。

このローレライの悲劇とハイパーインフレの二重苦に国民はついに革命に踏み切り、カイザー3世は国を追われ、エルバーフェルド王国は崩壊。以降議会制民主主義によるエルバーフェルド共和国になった。

しかし、共和制になっても復興は遅々として進まなかった。ハイパーインフレは当時の首相のデノミネーションによって脱したものの、復興に対しての支援や指揮が滞っており、共和国時代のエルバーフェルドは貧困国家と成り果てていた。

十数年、ローレライの悲劇に苦しみ続けて疲弊したエルバーフェルド。だが今、そんな祖国を救おうと一人の少女が立ち上がった。

「私の後ろに続き、諸君がもう一度世界の頂点に君臨する時が来たッ」

「振り返るのは終わりだ。涙を拭い、今こそ前進の時」

「祖国が泣いている。なぜだ？　諸君が祖国の想いを裏切っているからだ」

「誇りを取り戻せッ！　ジーク・ルチア（ルチアに勝利を）ッ！」

絶望の淵にあった多くのエルバーフェルド国民は、その真っ直ぐで力強い言葉に心を揺さぶられた。

時は共和制の限界が近かったエルバーフェルド共和国首都、エムデンの自由広場。突然現れた少女は瞳に力を失った民衆に向かってコンサートを開いた。

その心揺さぶる歌詞と歌声、そして少女の神々しいまでに美し過ぎる容姿が人々に希望の光を与えた。それに加え、彼女は演説でもその才能を開花させ、人々を熱狂させていった。

大衆の心を掴んだ彼女は後に国会議員となり、仲間と共に国家主義民衆党、通称ルチア党を結党した。ルチア党総裁となった少女はその

最中も国民を熱狂させ続け、ついには上院総選挙で圧倒的勝利を勝利を収めて第一党に躍進。彼女は弱冠十四歳にして一国の長、エルバーフェルド共和国首相に就任した。

首相に就任した少女は議会制民主主義によって遅々として進まなかった復興の法案などを議席の数に物言わせて強行採決を連発。野党からは批判を受けるが、すでに国民の多くが少女の味方であり、野党党首が暗殺されるという事態にもなっており、事実上の一党独裁政権となっていた。

様々な法案を強行採決し、最終的には共和制になった事で分権していた司法、立法、行政、軍事を自身に一本化させる全権移譲法を成立。全ての権限を掌握した少女はエルバーフェルド共和国の滅亡を宣言。新たに自身を皇帝であり国家指導者、《総統》としたエルバーフェルド帝国の樹立を宣言した。ここに、エルバーフェルド帝国が誕生した。

ただの少女がなぜここまで躍進できたのか。それは彼女が亡命していた前国王カイザー3世とその后の娘であったという事が大きかった。

国王夫妻はアルトリアへと亡命し、そこでそれまではあまり良好とは言えなかったアルトリア王政府に働きかけてエルバーフェルドを陰ながら支援し、現在の両国の友好の礎を築いた。それを、亡命の最中に生まれた少女は、祖国の復興に心血を注ぐ父と母の背中を見て育ち、いつか自分が父と母が愛した祖国を復興させるという強い想いを抱くようになっていた。

少女は大陸有史史上最高と謳われる頭脳を持ち、さらにそんな少女に協力しようと集まった多くの有能な仲間と共に、ついには国を掌握した。

少女は父カイザー3世の陰の努力を国民に話し、共和国時代は国家機密とされていた他国による賠償金や軍事占領の全てを暴露。怒り狂う民衆の心を復興という道へと見事に導いた。

現在、エルバーフェルド帝国は王国以前のような活気に溢れ、所によっては以前よりも繁栄し、その国力を増大させている。その結果、現在エルバーフェルド帝国と周辺諸国には摩擦が生じている。

その大きな原因とされているのが徴兵制による強制的全国民軍人化計画や、兵器の大量生産による雇用の確保、自衛という名目での異常なまでの軍事力増大、軍人化させるによっての祖国への忠誠心を育む事など、国民を掌握する為に少女が行う軍事国家化であった。

現在ではエルバーフェルド帝国の軍事力はローレライの悲劇前よりも増大しており、他国はエルバーフェルドの復讐を恐れ、これが現在の西竜諸国の緊張状態の原因である。

エルバーフェルド全国民の期待を背負い、総統として日夜祖国復興に励む少女。後にエルバーフェルドの英雄と言われる彼女の名は――フリードリッヒ・デア・グローセ総統。御年十八歳の少女皇帝であった。

エルバーフェルド帝国帝都、エムデン。丘の上に作られたこの街は王国時代は風光明媚な美しい都として栄えたが、現在は復興の最中での雇用の確保と首都城塞化計画で行われた城塞化によって街全体を大きな壁が覆い、街の中にも二重三重に壁を築いたまさに城塞都市。強力な火力を多数有し、エルバーフェルド陸軍の中でも精鋭部隊が駐屯しているこの街は不沈都市とも言われている。

そんな灰色の壁に覆われた街の中には緑も生い茂、自然との共生をテーマにした街作りが行われており、美しい都市を保っている。

街の中央部、丘の最上部にあるのがこの国の中枢。王国時代からエルバーフェルドを導いてきた美しい宮殿、エムデン宮殿がそびえ立っている。ここに、エルバーフェルド帝国の司法、立法、行政、軍事の全てが掌握されている。

豪勢な外見に反してエムデン宮殿の内部はとても質素であった。絨毯もなく、石畳が剥き出しとなり、シャンデリアもなければ花瓶や絵画などの装飾品もない。

フリードリッヒが指導者である自分が導くべき国民を差し置いて豪勢な暮らしなどできないとして家財の一切を売り払ったからだ。これには王族による国家統治を支持する保守派から王の尊厳を害するとして反発を受けたが、フリードリッヒは聞く耳を持たず売却を決定。それでも反発する者はすでに掌握した警察組織を使って国家転

覆罪というエルバーフェルドでは二番目に厳しい罪状で次々に逮捕した。
保守派には首相になる為に何かと協力を得た、言わば同志とも言える者でさえ、自分のやり方に異議を唱えるのであればフリードリッヒは容赦なく蹴り落とした。
自分に逆らう者は全て潰す。国民からは英雄と呼ばれ美化されていても、こうした暗黒の一面もなければ指導者というものは務まらない。
かくして王家の私財は全て売り払い、売却費は全て国家予算に加えた。その結果、エムデン宮殿は一国の長が住まう城にしては、何とも質素な場所になってしまった。
そして、フリードリッヒが仕事を行う総統室もまた、質素であった。部屋は決して広くはなく、むしろ本棚などがあり狭い。その本の多くは国中から集められた資料だ。シャンデリアも絨毯も何も装飾品はなく、部屋の中央にはポツンと簡素なテーブルと椅子が置かれており、もちろんソファなどもない。
目的はあくまで仕事。そんな部屋であった。一応寝室やシャワー室などが隣接はしているが、そちらも簡素な仕上がりになっている。
そんな質素な部屋の椅子に腰掛け、テーブルに置かれた書類の山を片付けているのがこの国の長、フリードリッヒ・デア・グローセ総統だ。
美しい金色の長い髪はボサボサに跳ね、仕事中につけるメガネは微妙に大きさが合わないのかちょくちょくズレてしまい、きれいな碧眼の下には徹夜仕事での疲れで隈が生まれてしまっている。寝不足の為、いつもはマシュマロのように柔らかな肌もすっかり荒れてしまっている。身に纏うのはダサい寝間着。
まさに仕事一筋。歳相応のオシャレに全く興味がないという彼女の性格を表したかのような出で立ちであった。
フリードリッヒは確かに天才であった。政治家として様々な制度の実現や国の正常化をする一方で、科学者としての側面もあり多くの発明で祖国を豊かにしてきた。しかし一方で女の子らしい事には一

切興味がなく、オシャレなどにまるで興味がない。
　このオシャレに無頓着な少女を、皆の心を癒すアイドルとしての一面もあるエルバーフェルド帝国総統にまで押し上げた影の立役者ががいる。それが……
「フーちゃん、そろそろ第一装甲師団への視察に行くから準備して――あぁッ！　またそんな格好してぇッ！」
　ノックもなしに総統室に入って来たのは、黒く艶やかな長い髪に血のように真っ赤な瞳が危ない雰囲気を漂わせる妖艶な女性。身に纏うのはエルバーフェルドの陸軍と海軍を総じた国防軍の黒い制服。短いスカートから伸びる生足もまた麗しい。
　彼女の名はヨーウェン・ゲッペルス宣伝担当大臣。事実上の副総統であり、フリードリッヒの第一同志。そして、オシャレに無頓着なフリードリッヒをここまでのし上げた敏腕マネージャーでもある。
　そんなマネージャーであるヨーウェンは早速フリードリッヒの出で立ちに激怒する。が、元々オシャレに興味のないフリードリッヒは気にした様子もなく顔を上げる。
「……何だ。ヨーウェンじゃないか……そうか、もう視察の時間か。待っててくれ、すぐに支度する」
「待ちなさいッ！　あなたまた徹夜で仕事してたのねッ！　一日七時間はちゃんと寝なさいっていつも言ってるでしょッ!?　あなたの仕事は何ッ!?」
「……総統として国を平和に統治する事。それ以外に何を求めるのよ？」
「それもそうだけどッ！　あなたはアイドルでもあるんだからッ！　そんなみんなを幻滅させるような格好しないでッ！　あぁもうッ！　すぐにお化粧の準備もしなくちゃッ。制服は用意してあるから、あなたはさっさとお風呂に入って汗を流して来なさいッ」
　ヨーウェンは何度も頭を抱えながら部屋の外に待機させていた部下に指示を出し、寝室に備えられている化粧道具を集める。だが、オシャレに無頓着なフリードリッヒの化粧台には書類が山積みになっており、まずはその片付けに奔走する。

ギャーギャー言いながら片付けるヨーウェンを横目に、フリードリッヒは面倒だと言いたげな眼をしながらシャワー室に入った。
しばらくしてフリードリッヒがようやくシャワー室から戻って来ると、すぐにヨーウェンは「早く早くッ！　時間がないんだからッ！　もうッ」と怒りながら彼女の手を引いて寝室に向かう。
そこで凄腕メイクとしての実力を遺憾なく発揮してフリードリッヒに化粧を施す。ファンデーションで荒れたと目の下の隈を隠し、彼女の元々の美しさをさらに引き立てる。ヨーウェンの存在が、フリードリッヒを総統にまでのし上げたと言っても過言ではない。
普通なら数十分から一時間はは掛かるメイクを、ヨーウェンはわずか数分でやり遂げる。これこそ彼女の実力を示しているだろう。
化粧を終えたフリードリッヒに、すぐにそのダサい寝間着をひっぺがし、用意していた国防軍の制服を着させる。最後に、軍帽を被せて完成だ。
パリッとした新しいきれな制服は彼女の凛々しさを引き立たせ、その物腰も実に指導者に相応しい。しかしその化粧によってより美しく端整になったかわいらしい顔つきは人々を魅了し、その声は人々を奮い立たせる。
「はい完成ね。それじゃ、いつもの笑顔の練習とボイストレーニングをしましょう」
「またそれか……。国を統治するのにそんな物がなぜ必要なのだ？」
「アイドルがそんな事言わないのッ！」
「……だから、私は国家指導者だ」
そんないつものやり取りを経て、笑顔の練習やボイストレーニング。ファンサービスなど、こうした日々の努力によってオシャレに無頓着な少女は最強のアイドルを維持している。この維持をそもそも興味がないフリードリッヒに続けさせているヨーウェンの苦労は相当なものだが、彼女自身はむしろここまで無頓着だとやり甲斐を感じているらしい。俗にいうバカな子ほどかわいいと同じ原理だ。
こうして、影の立役者による努力によって今日もフリードリッヒのアイドルとしての姿が維持されているのであった。

エムデンから十数キロ離れた場所には、アルトリア王政軍国の飛行戦艦と同様に国を象徴する兵器を有する精鋭部隊が集結している。
エルバーフェルド帝国とアルトリア王政軍国は友好関係を築いている。ローレライの悲劇の際に唯一支援をしてくれたのがアルトリアであり、その後の賠償金減額に尽力してくれたのもアルトリアであった。その為、両国の国交は盛んになっている。
その友好の表すものとして、エルバーフェルドにはアルトリア以外で唯一蒸気機関車が用いられている。最初こそ輸入だったが、現在ではライセンス契約による国産化が行われており、アルトリアに続く列車大国になっている。
その鉄道を使っての物資の運搬が、復興では大きな力となった。フリードリッヒはこれに着目して線路の上を自由に動き回れる巨大砲、列車砲を開発。現在では国中を網羅するように線路が敷かれ、有事の際には戦局に合わせて列車砲を自由に配置できるようにしている。これにより、他国からの侵略はもちろん国内で大型モンスターが暴れる際には遠方からの攻撃が可能となり、これの撃破効率も大きく上昇した。
国外に対する抑止力として、国内でのモンスターに対する迎撃兵器として、列車砲部隊は日々国内中を動き回っている。
今回はその車両基地に先日辺境でリオレウスの迎撃に成功した部隊が戻って来た為、その激励の為にフリードリッヒが訪れるという事になっていた。
基地には今回の火竜迎撃戦を成功させた部隊が待機している。兵隊の背後にはエルバーフェルド軍の象徴である巨大な列車砲が控えている。
長さにして三〇メートルの車体に二〇メートル以上の砲身を背負った形。搭載された二八センチ砲は陸軍最大の移動式大砲である。ちなみにエルバーフェルド軍最大の大砲は海軍の戦艦が有する三〇・五センチ砲であるが、射程距離ではこちらの方が優っている。その理由は列車砲特有の長砲身のおかげであり、大砲は同口径でも砲身が長い方がより破壊力と射程距離が増加する為だ。

この列車砲には動力はなく、この前に機関車を連結して牽引して移動する。これがエルバーフェルドが誇る最強兵器、レオパルド砲だ。
レオパルド砲を主軸とした陸軍第一装甲師団の兵達は静かに、その巨砲の前に整然と並び、その時を待つ。
――風が吹き、兵達に緊張が走る。その風の中を堂々とした足取りでエルバーフェルド帝国の若き指導者、フリードリッヒと側近であるヨーウェンが歩む。
漆黒の軍服を身に纏い、美しい金色の髪を風に靡かせながら堂々とした足取りで現れるエルバーフェルド帝国総統、フリードリッヒ・デア・グローセ。その神々しいまでに凛々しく美しい姿に、兵達は見惚れる。
フリードリッヒはその勇ましい足取りを止めると、カツと踵を鳴らして見事な敬礼をしてみせる。それは軍隊では異例の事であった。軍隊とは常に上下関係の組織であり、下の者が敬礼して上の者が答礼をするのが常識だ。だが、フリードリッヒはその常識を無視し、兵達に向かって自ら敬礼したのだ。
呆然とする兵達と中、師団長が逸早く冷静さを取り戻し「敬礼ッ」と号令を掛ける。その声にようやく兵達も平静を取り戻し、一矢乱れぬ動きで見事な敬礼をする。その敬礼を見て満足したようにうなずき、フリードリッヒは腕を下ろす。
フリードリッヒに向かって師団長が一歩前に出る。そして、今回の作戦の戦果を改めて報告する。
「戦果損害報告。目標リオレウス一頭の討伐を確認し、任務は成功しました。しかし、被害は戦死者二名、負傷者十四名、レオパルド砲も一輌が大破使用不能となりました」
師団長の報告に、フリードリッヒの隣に立つヨーウェンの表情が曇る。対大型モンスター戦で戦死者が出るのは仕方がない。だが、貴重なレオパルド砲を一輌失ったというのが問題だった。
モンスターの素材の加工技術はハンターズギルドが独占している。ハンターズギルド管轄下の中央工城では毎年ハンターの武具を鍛える鍛冶職人の認定試験が行われ、それに合格した者のみが武具の作成

が可能となる。武具はすでに大まかな作成方法がマニュアル化されており、個々の職人の腕にも多少の変化はあるが、基本的には全てが同じ物。ギルドはこのマニュアルを門外不出とし、もしもこれを破った者はギルドに対する反逆行為として鍛冶職人の資格の永久剥奪。場合によってはギルドナイトによって暗殺される事もある。その為、鍛冶職人は皆ハンターズギルドから離れず、その技術が外に漏洩する事もない。

一方、モンスターの素材の加工技術なら他国の軍隊でもいくらかは可能だが、飛竜クラスの素材は加工には特別な機械や技術が用いられる為に、その加工は難しい。その為、ハンターの身につけるような優れた防具を作る事ができず、軍隊は対大型モンスター戦となると戦死者が毎回のように出てしまうのだ。

優れた防具を得られぬ各国の軍隊は、遠距離からの攻撃を主軸として大砲などの火砲にその技術力を注いでいるのが一般であり、その進化形態とも言うべきなのがこの列車砲、レオパルド砲だ。

レオパルド砲は幾多の対モンスター戦で戦果を上げ、次第に大型モンスターに対してもその威力を発揮して来た。

しかし、兵器という物は一般的に金の掛かる物だ。このレオパルド砲とて一輌の製造費もバカにはならない。この一輌を作る為には国民が必死になって稼いだ多額の税金が使われた。

国民の希望、そして戦略的価値の大きなレオパルド砲。その貴重な一輌を失うなど、軍隊としては問題だ。

師団長はもちろん、兵達も叱責される覚悟はできていた。だが、フリードリッヒが語ったのはそんな彼らの予想とはまるで違う言葉だった。

「君達は、怪我はないのか？」

叱責を受ける覚悟はできていた。だが、フリードリッヒの口から放たれたのは兵達を責める言葉ではなかった。兵達を気遣う、そんな問い掛け。

「は、はッ。我々は全員負傷はしておりませんッ」

一瞬呆けていた師団長だったが、すぐに声を張りながら答える。そ

の言葉にフリードリッヒは「そうか」とつぶやくとフッと口元に優しげな笑みを浮かべる。
「皆、よく無事に帰って来てくれたわね。ゆっくり休んで、次の戦いでも一層奮励の活躍を期待する。以上」
フリードリッヒはそう述べると、カッと踵を揃えて見事な敬礼をし、師団長達に背を向けて歩き出す。そんな彼女の背中を見てクスクスと笑いながら、ヨーウェンも後を続く。
残された兵達はそんな総統の後ろ姿を、呆けながら見詰めている。そして、誰かが言った。
「……俺、一生総統に付いて行くぜ」
その言葉に、兵達は皆しっかりとうなずいた。
「さっすがフーちゃん。人心の心を掴むのがうまいわねぇ。私もちょっぴり惚れちゃった」
ケラケラ笑いながら言うヨーウェンの言葉に、フリードリッヒは無愛想な表情を浮かべながら静かに答える。
「そんな気は毛頭ないわ。私はただ、泥水をすすりながら戦った彼らの鉄の精神に対して激励を述べたに過ぎない」
「うふふ、その無意識に周りの人の信頼を得られる振る舞い。あなたは本当に指導者の才能に恵まれてるわね」
褒めるように言うヨーウェンの言葉に、フリードリッヒは「バカな事を言うな。私にはそのようなすごい能力などない」と彼女の発言を否定する。だが、
「……ただ、私には他の無能な指導者にはない者がある――それは、君達のような私の信念に共感し、支えてくれる仲間と。私を期待して応援してくれる、私と同じ鉄の精神を持つ愛しき国民。この二つがある限り、私は前に進む事を諦めるつもりはない」
そう言い残し、フリードリッヒは進む。その目指す先は今回の戦いで負傷した兵が集められている基地内の軍病院。傷ついた者達にも激励し、きっと心の中では戦死した兵の冥福を祈り続けているのだろう。他国からは冷徹とも言われるエルバーフェルドの総統は、そんな心優しい少女であった。

「……まったく、女の私も惚れちゃうくらいかっこいいんだから」
くすくすと笑いながら、ヨーウェンはフリードリッヒの後に続く。この若き指導者を支える事こそが、今の自分が神から受けた天命であると信じて疑わない。そして友として、彼女の信念と理想を共に叶えたい。そんな事を想いながら、ヨーウェンはフリードリッヒの手をそっと握り締めた。その手は、一国全てを統括する指導者とは思えない程、小さくて柔らかくて、温かかった。
エムデン宮殿に戻ったフリードリッヒとヨーウェン。フリードリッヒは高貴な血統書付きの白馬に、ヨーウェンも黒馬に跨り、その周りを複数の兵が武装しながら護衛している。彼らは軍人で構成される国防軍ではなく、ルチア党所属の武装組織。要するにフリードリッヒの私兵である親衛隊所属の隊員達だ。
宮殿に戻った二人を出迎えるように待っていたのは灰色のクセッ毛の強いロン毛に意思の強い黒い瞳の上から掛けた知的なメガネが特徴の青年。一般的な世界共通の敬礼とは違う、ルチア式と呼ばれる天高くに腕を伸ばす独特な敬礼をするのは、彼が親衛隊所属を意味する。事実、国防軍と同じようなデザインの制服にルチア党のシンボルマークである白い稲妻を模した腕章をつけている。これが親衛隊の証だ。
「お待ちしておりました総統陛下。幹部の方々がお待ちです」
フリードリッヒは「そうか」とだけ答えると、無言のまま青年の横を通り過ぎる。その後ろに続くヨーウェンと並び、青年も歩き出す。
「わざわざ出迎えご苦労様ね。オコーネル親衛隊長」
「好きでやっている事なのでお気になさらず」
クールな表情のままそう無愛想に答えるのはオコーネル・ゲルトハルト親衛隊隊長。ヨーウェンと同じ頃にフリードリッヒの思想に共感した、彼女の副官の一人だ。知的な姿や立ち振る舞い、貴族出身という気品に溢れた彼には熱狂的な女性ファンも多い。フリードリッヒ体制の中核を担う存在だ。
「つかぬ事伺いますが、今日の総統陛下の色は？」
「うふふ、今日は黒でちょっと攻めてみましたぁ」

「……ごふッ」
クールな表情のままドバドバと大量の鼻血を流すオコーネル。それを見てヨーウェンはケラケラと笑い、フリードリッヒは人知れずため息を零す。
エルバーフェルドの貴公子とも言われ、その容姿から多くの女性ファンを持つ有能な幹部オコーネル・ゲルトハルト――だがその本質は、フリードリッヒの正式ファンクラブの会長を兼任する会員番号1番。要するに熱狂的なフリードリッヒのファンなのであった（ちなみにフリードリッヒからは親衛隊長ではなく変態長と呼ばれている）。
統合幕僚本部。ここはフリードリッヒが絶大な信頼を寄せているメンバーのみが入れる特別室だ。フリードリッヒ、ヨーウェン、オコーネルが中に入ると、すでに他のメンバーが揃っていた。皆、それぞれ国防軍式、ルチア党式の敬礼で出迎える。
「総統陛下、我が第一装甲師団へのわざわざの激励ありがとうございました。兵達もきっと喜んでおられる事でしょう。おや、今日もまた一段とお綺麗ですね総統陛下。そのバラのように美しく妖艶で、しかし身を守る為の刺々しさもまた美しい」
そう真剣にフリードリッヒを褒め称えるのは長めの茶髪に柔らかな鳶色の瞳をし、さらに少し着崩した制服の胸ポケットに白いバラを一輪挿した、ちょっとチャライ感じの青年。国防軍総司令官、ヴィルトラント・カイテル陸軍元帥。軍人としては凡将ではあるが、フリードリッヒに対する忠誠心の高さに加え、この八方美人的な性格からそれぞれ誇りを持つ陸海軍の折衝の緩和や武官と文官の対立、さらには政党内の対立する会派の仲裁など調整役としてその力を振るっている男だ。地味に、フリードリッヒ体制を支える立役者。
「カイテル総司令官、総統陛下の前でそのような軟弱な態度をしないでください。陛下に対しては常に鉄の精神をもって毅然とした態度でいるべきです」
そんなヴィルトラントを叱りつけるのは知的なメガネに強い鉄の意思を煌かせる鋭い碧眼をしたショートカットの黒髪をした少女。先程からフリードリッヒの前では微動だせずに直立不動で構えてい

る彼女の名は海軍総司令官カレン・デーニッツ海軍元帥。彼女もまたフリードリッヒとは長い付き合いの古参組の同志。両親共に海軍軍人だった生粋の海軍軍人で、フリードリッヒより一つ年下ながらローレライの悲劇の際に起きた津波で多くの軍艦を失ったエルバーフェルド帝国海軍を再建した実力者だ。
「うーん、怒った顔もチャーミングだよカレンちゃん」
「……総統陛下。砲撃命令をいただけないでしょうか？　今すぐにこの愚か者を排除して差し上げましょう」
　軟弱な態度を崩さないヴィルトラントを見てクールな表情のまま青筋を立てるカレン。真面目が服を来て歩いていると言っても過言ではないカレンと適当で軟弱なフラフラ者のヴィルトラントはいつも対立が絶えないのだ。
「いい加減にせんか若造ども。総統陛下を困らせるような言動は慎みたまえ」
　そんな二人を往（い）なしたのは初老の男。若干白髪の入った短めの黒髪の上から国防軍の軍帽を深く被った姿はまさに古参の戦士。彼の名は陸軍総司令官エリック・マンシュタイン陸軍元帥。フリードリッヒに陶酔するあまり暴走しがちな幹部を往なす存在であり、数少ないフリードリッヒのブレーキ役でもある。
　両親を亡くし、祖国復興の為に単身でエルバーフェルドに舞い戻って来たフリードリッヒを匿い、彼女を娘のように可愛がりながらも同志として彼女を真っ直ぐな道へと導く親代わりのような存在だ。
　エリックの言葉に、さすがのヴィルトラントも「おぉ怖い。旦那の雷が落ちないうちに退散退散～」とふざけた口調ながらも慌てて席に戻る。自分の失態を恥じながら、カレンもエリックに一礼して席に戻った。それを見て他の者も席に戻り、オコーネルも席に座り、立っているのはフリードリッヒとその副官であるヨーウェンだけとなった。そこで初めてフリードリッヒはゆっくりと口を開くと、深いため息を零す。
「ヨーウェン、今更だが君を始めとしてなぜ私の周りにいる者は能力は優秀なのに何かと問題児ばかりなのだ？」

「あらあら～、私まで問題児扱いされてるわねぇ～」
「君が一番の問題児なのよ……」
「総統陛下ッ!? わ、私も問題児なのですかッ!?」
エリックを除けばこの中では一番まともなはずのカレンが心外だとばかりに声を上げる。それを見て「怒ったカレンちゃんもチャーミングだねぇ」とケラケラと笑いながら言うのはヴィルトラント。ちなみにオコーネルは先程からずっとフリードリッヒしか眼中にないのか、彼女を見詰めたまま。時々鼻血を出しているのは見なかった事にしよう。
またもうるさくなる幹部達を見てフリードリッヒはまたも大きなため息を零す。しかしすぐに「静まれ愚か者ども」と冷静に叱りつけ、黙らせる。
肩をすくめながら黙るヴィルトラントに対し、敬愛するフリードリッヒに《愚か者》と呼ばれたカレンはかなりのショックを受けたのか、がっくりと肩を落として席に崩れ落ちる。
ようやく静かになった室内を見回し、フリードリッヒもまた席に腰掛ける。その横を、副官のヨーウェンが静かに立つ。
そして、静かに単刀直入に言い放つ。
「今日で約束の期日だ。我々は西竜諸国への布告通り、エルバーフェルド王国混乱期に略奪されたズデーデン地域奪還の為、同地域へ攻撃する。エリック、すぐに伝令を飛ばして待機中の攻撃部隊に攻撃開始を下令せよ。オペレーション救いの風(ヒルフェヴィント)発動だ」
それは、一歩間違えれば戦争に発展しかねない行動であった。しかし、フリードリッヒは一切の躊躇なく、侵撃命令を下した。
エルバーフェルド軍が、動き出す。
一週間後、エルバーフェルドの大都市ハイデルンに東シュレイド共和国大統領、西シュレイド王国国王、エスパニア王国国王、ガリア共和国大統領、神聖ローマリア法国教皇代理の司教枢機卿を始めとして西竜洋諸国やその周辺の地域や街の君主や有力者が集まった。
皆、苦々しい表情を浮かべながら用意された巨大なテーブルの周りを囲む中、ただ一人エルバーフェルド帝国皇帝にして総統のフリード

リッヒだけは不気味な笑みを浮かべていた――それは、勝利の笑みだ。
突然電撃的にエルバーフェルド帝国はガリア、東シュレイドが合同で統治していたズデーデン地域へ侵撃を開始。元々この地域はエルバーフェルド王国の領土であったが、ローレライの悲劇の最中に賠償対象として奪われた地域であった。当然、ここには多くのエルバーフェルド人が住んでいる。
フリードリッヒは首相になる以前からこの地域の奪還を強く主張していた。そして、エルバーフェルド軍が完全復活した事から奪還作戦を実行に移した。
怒涛の勢いでズデーデン地域に侵撃を開始したエルバーフェルド軍。一歩間違えればガリアや東シュレイドと戦争状態になってもおかしくない状況だったが、フリードリッヒには勝算があった。二国とも国民の多くが戦争を望んではいなかった事だ。どちらも議会制民主主義を掲げる共和制国家の為に世論を無視する事はできない。つまり、反撃はできないと踏んだのだ。そして、彼女の予想通り同地域を支配していたガリア、東シュレイド連合軍はまともな反撃をする事もできずに降伏。ズデーデン地域はエルバーフェルド軍によって占領された。
このエルバーフェルドの侵略行動に対し、ガリアと東シュレイドは戦争回避の為に宥和（ゆうわ）政策として、これ以上の侵略をしない事と捕虜にした兵の即時解放を求める見返りとして、エルバーフェルドのズデーデン地域併合を認めた。これが、ハイデルン会談である。
ハイデルン会談により、ズデーデン地域を併合したエルバーフェルド帝国。フリードリッヒはこれを宣伝大臣であるヨーウェンを通じてすぐに国民に発表。国民は熱狂した。
ズデーデン地域のエルバーフェルド人の解放、元々平民出身だった母の故郷であったズデーデン地域の奪還、国民に対しての更なる支持基盤の確立、エルバーフェルド軍の強力さを確認すると同時に他国への威嚇。様々な思惑を持って挑んだエルバーフェルド帝国最初の軍事行動。それは見事成功に終わった。

今後のズデーデン地域の統治をどのようにするのか。大まかなプランはすでにヨーウェンを通じて閣僚や幹部に伝えてある。後は信頼する臣下がやってくれると信じ、フリードリッヒは特に口を出す事はなかった。彼女からしてみれば、祖国を荒らした蛮族に対して復讐ができた。それで十分だった。

フリードリッヒは総統室に戻ると、そこでまたいつものように書類を片付けていく。しばらくし、机の上の書類が半分になった頃になってヨーウェンが部屋に入って来た。

「フーちゃん、ちょっと報告する事があるんだけど」

「何よ？　今私は忙しいのだから、くだらない事なら後に回しておけ」

「――ロンメル元帥が辺境視察から帰って来たんだけど」

「ヨーウェン、後は任せた」

ヨーウェンの報告を聞くやいなやフリードリッヒは急いで部屋から出て行った。そんな彼女の後ろ姿を見て、ヨーウェンは小さく苦笑いする。

「まったく、アイドルに恋愛はご法度なんだけどねぇ……」

そう言いつつも追いかけたり邪魔をするなどの野暮はせず、ヨーウェンは仕方なくフリードリッヒが放棄した仕事の続きを黙って引き受けるのであった。

エムデン宮殿の中庭にはフリードリッヒが趣味で育てている花が無数に咲き誇っている。今はちょうど春だから、庭は花でいっぱいに包まれている。

そんな中庭の中に、一人の男が立っていた。国防軍の軍帽と軍服を身につけた短めな銀髪碧眼の壮年の男は、静かに咲き誇る花を見詰めている。

大急ぎで中庭に駆け込んで来たのはフリードリッヒ。息を切らせながら辺りを見回すと、すぐにその男を見つける。その途端、いつもはクールな表情を崩さないフリードリッヒに少女の笑みが浮かぶ。

「エルディンッ！」

フリードリッヒの声に、エルディンと呼ばれた男は静かに振り返る。そして、彼女の姿を見ると静かに微笑んだ。

「やぁ嬢ちゃん。元気そうで何よりだ」
一国の長を《嬢ちゃん》と呼び、敬語も一切使わずにフランクに接する男。彼の名はエルディン・ロンメル元帥。フリードリッヒ直属の対モンスター戦専門の独立軍、特殊師団の師団長を務める、元ハンターという珍しい経歴を持つ男だ。
フリードリッヒはエルディンに向かって駆け出す。そして、そのままの勢いでエルディンに抱きついた。
「久しぶりだなエルディンッ！　辺境視察と言って勝手に出て行って、今まで何をしていたッ！　心配したんだからッ」
怒ると共に、やっと会えた事が嬉しくて仕方がないのだろう。嬉しさと怒りが合わさり、複雑な表情を浮かべながら叫ぶフリードリッヒ。しかしその間ずっと彼に抱きついたままだ。そんな彼女を見て、エルディンは苦笑を浮かべる。
「そりゃ悪かった。いや、ちょっと昔の血が騒いでな。ちょちょいとグラビモスを狩って来たんだ」
「また無茶をしたのかッ!?　いつもいつも危ない事はするなと何度も言っているでしょッ！」
「危なくなんかねぇって。ったく、嬢ちゃんは心配性だなぁ」
今日という今日は勘弁ならないとばかりに説教するフリードリッヒだったが、エルディンが「すまんすまん」と苦笑しながら頭を撫でると、フリードリッヒは頬を赤らめて途端に勢いを失ってしまう。
「……ひ、卑怯だぞエルディン」
「弱点を狙うのは戦いの基本だからな。狩りも戦もそこは同じさ」
あっけらかんと言うエルディンに対し、フリードリッヒは頬を赤らめながら不機嫌そうに唇を尖らせる。だが、その表情は怒っているというよりは拗ねているという感じ。エルディンに頭を撫でられているうちに、その表情は自然と笑みに変わっていく。
「それにしても、どうやら今年もきれいに咲いたみたいだな」
エルディンはそう言って中庭に咲き誇る花を見詰める。それを聞いてフリードリッヒは自慢気に胸を反らし、自身が育てた花を見回す。

「あぁ、今年も綺麗に咲いたぞ――父様と母様が好きだった、この国の国花のチューリップもな」
　そう言ってフリードリッヒは庭の一角に咲き誇る小さなチューリップ畑を見詰める。父が好きだった青の花、母が好きだった赤の花、そして自身が好きな白の花。その三色が、きれいに咲き誇っている。
「チューリップか。美しくも、その根には人を殺せるだけの毒を持つ花。まるで君を表したかのような花だな」
「それは、私を褒めていると取ってもいいのか？」
「まぁ、そんな所だな」
　あっけらかんと言うエルディインの言葉に、フリードリッヒは「そうか」とだけ小さくつぶやく。その頬はほんのりと赤らんでいた。しばしの無言の後、フリードリッヒはそっと花の前に屈み込むと、そっとそのうちの白い花の一輪を茎から切る。そしてそれをそっとエルディインの胸ポケットに挿した。
「私が必要としているのは、外見に騙されて毒で殺されるような連中ではない。その毒をも認めてくれる、君達のような臣下だ。私は幸せ者ね」
「その言葉、俺なんかよりもカレンに聞かせてやったらどうだ？きっと喜ぶぞ」
「……私は、一番貴様に聞かせたいのよ」
「ん？　何か言ったか？」
「何でもないわ。それより、戻ったのならさっさとヴィルやエリックに顔を見せろ。これから忙しくなるのだからな」
「――聞いたぞ。ズデーデンへ攻撃をしたらしいな」
　先程までの優しげな表情が消え、真剣な表情でそう問うエルディインの言葉にフリードリッヒの表情も険しくなる。無言で、静かにうなずき肯定の意味を表す。
「……お前、やっぱり諦めてないんだな――祖国の復讐を」
「当然だ。父様と母様、そして愛する国民を散々苦しめた西竜諸国を許すなどできない。特に、忌々しいガリアはな」

吐き捨てるように言うフリードリッヒの顔に浮かぶのは激しい憎しみ。祖国の危機を利用して散々エルバーフェルドの民を苦しめ、父と母の権威を失わせた西竜諸国。その先頭に立ったガリアを、フリードリッヒは許せなかった。

「私はガリアやガリア人を好きだった事はない。そう口にするのを躊躇った事もない――私は敵を絶滅する。根こそぎに、容赦なく、断固として」

そこに浮かぶのは少女でも、国家指導者でもない。ただひたすらに憎しみに狂い、逆襲を胸に誓う、憎しみに囚われた復讐者の顔。

フリードリッヒは無言でエルディンから離れると、そのまま何も言わずに中庭を去る。

残されたエルディンは去って行くフリードリッヒの背中を見詰めながら、小さくため息を零す。そして、胸に挿された純白のチューリップを優しく撫でる。

「復讐に我を忘れ、ただひたすらに殺戮を追う――昔のあいつにそっくりだな」

そう言い残し、エルディンは顔を隠すように軍帽を深く被り中庭を去る。

風が吹き、ゆっくりと揺れるチューリップの花。見た目は美しくも、猛毒を持つその花はまさに、美しき容姿をしながら復讐に狂うフリードリッヒを表しているかのようであった……

エルバーフェルド帝国が、静かに不気味に動き出す。

第１４４話　フィーリアの家族　名門レヴェリ公爵家

イージス村を出てから四日後、一行はエルバーフェルド帝国の国境へと至った。国境付近にはエルバーフェルド軍が武装して監視しており、検問は極めて厳しい。しかし普通なら丸一日は掛かるだろう検問を、フィーリアが手配してわずか一時間程で完了。一行は無事にエルバーフェルドに入国する事ができた。

フィーリア曰く、この領を納める貴族は父の古い友人の一人だそうで、よく自分が時々里帰りする際には色々と手を回してもらっているそうだ。だからこんなにも簡単に入国が許されたのだろう。

入国待ちをする人の列を横目に簡単に入国できた事は少し悪い気もしたが、同時に初めてフィーリアが只者ではないと確証を得られた。ぶっちゃけ、彼女がウソを言うはずはないと皆思ってはいるのだが、あまりにも話が大き過ぎて少し疑っていた部分もあったからだ。

本人を前にしては絶対に言えないが、四人は内心そんな事を思いながらエルバーフェルドの土を踏むのであった。

一行は再び竜車に乗って今度こそフィーリアの故郷であるレヴェリ領に向けて進み出す。入国したとはいえ別に景色が突然変わる訳でもなく、今までとあまり変わりなく進み続ける。そんな中、フィーリアは一人先程の国境付近の街で買った地元新聞を見て険しい表情を浮かべていた。

「フィーリア、一体どうしたの？」

皆を代表するようにしてクリュウが問うと、フィーリアは複雑な表情を浮かべたままゆっくりと口を開く。その様子を見る限り、あまり良い情報ではなさそうだ。

「私達がここへ向かう間に、エルバーフェルド軍がガリア共和国と東シュレイド共和国が共同統治しているズデーデン地域へ攻撃を開始したそうです」

重々しく彼女の口から語られたのは、驚くべき内容であった。国

が、他国の領土に対して攻撃を開始する。それはつまり――
「エルバーフェルドが、ガリアと東シュレイドに対して戦争を開始したって訳？」
戦争。その単語に、皆の表情も自然と険しくなる。
自分達ハンターはモンスターと戦う事で収入を得ている、言わば傭兵のような職業の人間達だ。当然、その戦う対象は異形の存在であるモンスターのみに絞られる。モンスターと戦う事、それが狩りだ。
一方、モンスターではなく人と戦う事を前提とした戦闘集団もいる。それが軍隊だ。当然、その戦う対象は人間であり、多くは他国の軍隊と戦い、殺し合う。軍隊と軍隊が戦う事、それが戦争だ。
シュレイド王国分裂後の数十年は様々な国が領土拡張や資源獲得など様々な理由から戦争を起こし戦国時代となった。しかし大陸国家がある程度強固に明確化されたここ数年はそのような戦争は一切なかった。人々は、このまま二度と戦争など起こらないと信じていた。
――だが、その人々の想いを裏切るように、戦争が始まったのだ。
「……戦いが起きたからと言って、すぐに戦争となるとは限らない」
不安になるクリュウに静かに語りかけるのは今までずっと無言であったサクラであった。閉じていた隻眼をゆっくりと開き、クリュウの瞳を凝視する。
「……国と国とが互いの領土全域を戦場にして全面的に戦う事を戦争とするなら、局地的な戦闘行為は紛争と言う小規模な戦闘に限られる。今回の場合は、後者の可能性が大きい」
「どうして、そう思うの？」
「……ガリアや東シュレイドだって戦争は望んでいない。無益な争いは極力避けようとするはず。なら、エルバーフェルドに対して停戦交渉を持ちかけるはず。一方のエルバーフェルド側も無駄な争いはせず、少ない被害で自軍の強さを見せつけ、優位な状態のまま交渉を持ちかける事を狙っているはず。戦闘はあくまでパフォーマンス。本当の狙いは、政治的な問題」
サクラは流浪ハンターとして世界各地を飛び回っていた経験があ

る。様々な国の状況などを熟知していて客観的に判断できるからこそ、そんな意見が出て来るのだ。しかし世間知らずなクリュウは納得できない。
「先に攻撃したのはエルバーフェルド側なんでしょ？　そのエルバーフェルドの目的は一体何なのさ」
「……戦闘が起きた場所が重要。ズデーデン地域は、エルバーフェルドとガリア・東シュレイドの火薬庫と呼ばれる領土問題が取り沙汰される地域。エルバーフェルドの目的は、かつて奪われたズデーデン地方の奪還」
　サクラの言葉に、クリュウは首を傾げるばかり。無理もない、彼は国を持たない国無（ノンカントリアス）だ。国同士の領土問題などは一番縁がない存在だ。養成学校で習った世界史だって、そんな細かな争いなどは明記されてはいない。あれはあくまで《世界史》なのだから。
　困惑するクリュウに、エルバーフェルド人であるフィーリアが複雑そうにその事情を語り出した。
　かつて、エルバーフェルドがローレライの悲劇に見舞われた際にガリア・東シュレイド連合軍がズデーデン地域を武力制圧し、租借地としてここを奪い取ったのがそもそもの原因。エルバーフェルドはずっと同地域の返還を求めていたが、二カ国はここの資源を欲して返さず、そのまま二〇年以上の時が流れた今、エルバーフェルドは武力による奪還に動き出したのだ。
　フィーリアからの説明を聞いたクリュウの表情が、見る見る険しくなっていく。並々ならぬ怒りが、彼の胸の中で渦巻く。
「それって、明らかにガリアや東シュレイドが悪いよね。それって火事場泥棒もいい所だよ」
「……確かにそうかもしれない。でも当時、隣接するガリアや東シュレイドもローレライの悲劇の影響を受けていた。それに加え、当時両国共に燃石炭の鉱山不足から慢性的な燃料不足にも悩んでいた。どちらの国も、自国の民を守る為に資源獲得に軍を動かしたという経緯もある」

「だからって、そんなの正義じゃないよ」
「……覚えておいてクリュウ――正義なんて、この世で一番信用できない言葉って事を」
　いつになく真剣な表情でそう言い放つサクラ。それは、様々な国家や部族、地域での争いを目の前で見てきたサクラだからこそ言える、自身の経験談。
「……燃料不足に悩み、民を助ける為に他国へ侵撃する。これもその国にしてみれば正義。一方、今回のエルバーフェルドもかつての同胞の住む故郷を武力で奪い返す為に侵撃する。これもエルバーフェルドからしてみれば正義。正義なんて、その立場によって変わってしまう。そして、その戦いに負けた方が悪とされる。それがどんなに正しい事でも、負ければ全て不法とされ、悪となる。正義と悪なんて、物語の中みたいにそんな綺麗には分けられてはいない。もっと複雑で、歪（いびつ）で、醜いものよ」
　それは、童話や小説の中で美化されている《正義》を真っ向から否定するものだった。正義なんて、結局は自分を正当化する為の偽善に過ぎない。立場が違えば、争う両者それぞれが自身の行動を正義とする。そして、力づくで相手をねぢ伏せた者が本当の正義となり、地に踏みつけられた敗者が悪となる。
　この世に正義と悪の戦いなんてない。あるのは、自己正当化の為に使われる薄っぺらい正義と正義の戦いのみ。有史以来、人々は常に己の正義の為に争いを起こしてきた。それは、文明が発達した現在でも変わらない。
「残念だがクリュウ、世の中はそんなものだ。これが、世界だ。私達が暮らす、君が関わって来なかった、な」
　幌の外から話を聞いていたのだろう。シルフィードは静かに前を向いたまま言う。シルフィードもまた、サクラと同じように世界を見て来た一人。世の中、そんな簡単にできてはいない事を、嫌というくらい知っている。
　国家レベルでのいがみ合いや争い。国無（ノンカントリアス）のクリュウからしてみればあまりにも規模が大き過ぎて、争ってきた年数

が長過ぎて、解決の糸口がまるで見えない泥沼の争い。
子供の頃、世界を飛び回っていた両親はよく世界の話をしてくれた。孤立した集落のようだった当時のイージス村では、外の世界は神秘でいっぱいだった。父や母が語ってくれる美しい世界に、少年の心はときめき、憧れた。
――だが実際に触れてみれば、子供心に夢を与えた世界は、あまりにも醜かった。
クリュウは少なからずショックを受けたのか、黙ってしまう。そんな彼を、サクラやシルフィードは複雑な表情を浮かべながら見詰める。二人からしてみれば、今のクリュウは昔の自分と良く似ている。彼と同じように、世界に憧れていたの頃の自分に。
「とにかく、状況が変わったのは事実です。できるだけ早くお父様に会って事情を説明しましょう。時間が経てば経つ程、私達は不利になっていきます」
祖国が起こした争いを知り、複雑な心境を抱きつつも健気にそれを隠しながら、しかし真剣にそう切り出すフィーリア。彼女にしてみれば、祖国の危機は当然気になりはするものの、今自分がすべき事をクリュウの覚悟を全力で応援する事。それには、父に土下座でも何でもして政府を動かしてもらうしかない。その政府が事後処理などで忙しくなれば、その手段は難しくなる。戦線が拡大しようと停戦しようと、だ。
「どちらにしても、国と国との争いなど私達にはどうする事もできないさ。今はとにかく、フィーリアの故郷へ向かう事だけ考えよう」
幌の中に満ち溢れる重苦しい雰囲気を払拭するようにシルフィードはそう言ってこの話題に一区切りをつける。しかし、その後も五人の間には気まずい沈黙がしばらく続いた。
エルバーフェルド帝国に入って竜車を走らせてさらに二日、クリュウ達はついにフィーリアの故郷であるエルバーフェルド南部にある貴族領、レヴェリ領に達した。
レヴェリ領はドンドルマのように三方を美しい山に囲まれた盆地に築かれた場所にある。山のない南側には大きな川が流れ、それを渡

るには一つしかない大きな跳ね橋を通るしかない。この橋は有事の際は上げる事ができるそうだ。その川を越えると、長閑な田園風景と美しい街並みが調和したレヴェリ領中心部が見える。

跳ね橋を越えると入領検査所が侵入を拒む。領によっては自由に行き来できる場所もあるらしいが、レヴェリ領では国境付近と検問と同じような規模で検厳しい検問が行われ、ここを通過しないと入領ができないとフィーリアから聞いていた。

レヴェリ領は豊かな土地のおかげで優良な農作物が大量に取れる為、他の領よりも豊かな場所。その為、他の土地から難民が不法に入領する事を防ぐ為と、山賊や盗賊の類の侵入を阻む目的から、このような厳しい検問が行われ、強力な軍隊をも有しているのだ。

当然、街へ入ろうとしたクリュウ達の竜車も止められる。諸侯兵と呼ばれる貴族が自分や家族、そして領民を守る為に独自に有する軍隊の兵が武装して竜車の前を立ち塞ぐ。皆、ハンターのような防具は着てはいないが、皆大剣のような武器からボウガンのような武器まで、ハンター仕様とは異なる武装をしている。実に物々しい光景だ。

どうしたもんかと悩むシルフィードを見て領主の娘であるフィーリアが慌てて出て行こうとした時、兵達を割って一人の少女が現れた。

全身を真っ赤なフルフル亜種の素材を使って作られたまるで服のような、一見すると防具に見えないがその性能は折り紙つきのフルフルUシリーズを身に纏い、背には同じくフルフル亜種の素材を使って作られた巨大な狩猟笛。クリーム色に近い金色の髪をウインドボブに切り揃え、意思の強そうな琥珀色の瞳がしっかりとシルフィードを射ぬく。

「あんたが、シルフィード・エアね」

「そうだが、君は？」

見知らぬ少女に自分の名を言われ、疑問に思いながら警戒するシルフィードの問い掛けに対し、少女は腰に手を当てながら答える。

「私の名前はルーデル・シュトゥーカ。このレヴェリ領に拠点を置くハンターよ。幌の中に隠れているお二人さんとはまぁ、知り合いって

所ね」
　その声に驚いて幌から飛び出したのはクリュウとフィーリア。そしてその背後にはサクラとエレナも続く。
　皆の視線を一身に浴びながら堂々と仁王立ちする少女――ルーデルは勝気な瞳をキラキラと輝かせ、ニッとイタズラっぽい笑みを浮かべていた。
　ルーデルの根回しのおかげで、簡単に入領できた一行はレヴェリ領の中をゆっくりと進む。目指すは領の中央部にあるフィーリアの家であるレヴェリ城。
　運転役は諸侯兵の一人が代わり、シルフィードも幌の中へと入って皆の輪に加わる。そして、それとはまた違う形で輪の中に入った者がいた。
「久しぶりねぇ、フィーリア。それとまだ生きてたんだあんた」
「も、もうまたそんな事言ってッ！」
「あははは……」
　フィーリアとクリュウはそれぞれルーデルとの再会を喜んでいた。まぁ、クリュウは開口一番にこんな事を言われてしまい苦笑を浮かべてはいるが。
「クリュウ。彼女がフィーリアの友人で、君が以前組んだ事のあるルーデルとやらでいいのか？」
「うん。前にリオレイアを狩った際にね」
「まぁ、基本寄生だったけどね」
「ルーッ！」
「あはははは……」
　相変わらず容赦のないルーデルの言動に苦笑を浮かべるしかないクリュウに対し、フィーリアはそんなルーデルの言動に慌てまくりながら怒る。以前リオレイアを終了した際と同じノリだ。
　一方、ルーデルとは初見の三人は困惑を隠せない。特にあの礼儀正しくて、今の所年下の子相手以外には基本敬語を使うフィーリアが同世代の子に対して敬語を使っていない姿がある意味驚きなのか、完全に間に入るタイミングを見失っていた。

そんな三人を置いて再会を喜ぶクリュウ、フィーリア、ルーデルの三人。話は当然、なぜ彼女がここにいるかという話になるのだが、
「そりゃそうでしょ。言ったでしょ？　ここが私の拠点にしている街なんだから」
と、至極当然な意見で答えるルーデル。確かに、ここはフィーリアの故郷でもあると同時に、ルーデルにとっても第二の故郷とも言うべき場所だ。それに、彼女自身子供の頃に自分をフィーリアの遊び相手として引き取ってくれた彼女の両親には個人的に感謝しており、その時の恩を返す為にもこの街に居続けているのだ。
「でも、何で私達の出迎えに？」
「数日前にあんたから帰郷するって手紙が届いたって領主様に言われてさ。セレスティーナさんがそれならって私に出迎えを頼まれたから待ってたのよ」
「セレス姉様が……」
セレスティーナ、フィーリアの姉の名前だ。その名前がすごく懐かしいのだろう、フィーリアは懐かしそうな、でも嬉しそうな表情を浮かべる。彼女にしても、故郷に戻るのはかなり久しぶりな事なのだ。そんな彼女を、どこか羨ましげに見詰めるクリュウ。
「領主様も奥方様も、そしてセレスティーナさんもあなたと会える事を楽しみにしてるわよ。あんた、一年近く里帰りしてないんだからちゃんと謝っておきなさいよね」
「う、うん」
「え？　フィーリアって、そんなに里帰りしてなかったの？」
「あ、はい……」
「はぁ？　誰のせいだと思ってるのよ。あんたと組み始めてから里帰りしなくなったのよ。しかも一回だけあった里帰りは、あんたに泣かされて帰って来た時だけよ」
「る、ルーッ！　余計な事言わないでよッ！」
速射のような勢いで次々に自分の暴露話をするルーデルの口を、フィーリアは顔を真っ赤にしながら慌てて塞ぐ。
一方、そんなルーデルの口から語られたたった一回の里帰りの原因

であるクリュウは複雑そうな表情を浮かべている。何せ、その一回はおそらく彼女とケンカ別れしたあの期間の事だろう。泣いていた、と言われればどんな顔して接すればいいかわからなくなる。
「あ、あのお気になさらず。過ぎた事ですから」
「う、うん……」
慌ててクリュウにそう言うフィーリアだったが、クリュウの表情は複雑なままだ。自然と、二人の間には気まずい沈黙が降りる。だが同時に、ようやく取り残されていた三人が間に入るチャンスにもなった。
「君の事は以前にクリュウやフィーリアから聞いた事があるが、狩猟笛とはまた珍しい武器を使うのだな」
まず先陣を切ったのはシルフィード。まずは当たり障りの無いハンターとしての話題を振ってみる。
「まぁ、珍しいっていうかマイナーな武器よね。演奏するにはいちいち譜面を覚えないといけないし、譜面（コード）を重視すると武器に制限が生まれるから使い勝手もあまり良くはない。単純なアタッカーとしてならハンマーの方がずっと有能だもの」
「狩猟笛って、そんなに珍しい訳？」
ハンターではない一般人から見れば武器にメジャーとかマイナーがあるという事もわからない。エレナのそんな問い掛けに、ルーデルは「そうね。さっきも言ったけど使い勝手があまり良くない武器だからね」と答える。
「狩猟笛ってのはハンマーのような攻撃武器であると同時に音による支援を可能とした汎用的な武器なのよ。でも武器によって使える音、つまり効果が異なるから性質上の縛りがある。しかも旋律をうまく操るには複雑な音色の組み合わせの譜面（コード）を覚えないといけない。さらに言えば支援武器の都合上チーム全体へ影響する効果が多い事や演奏中の隙からあまりソロ向きでもない。つまり、使い勝手があまり良くないから使う人も少ない。イコールマイナーな武器って訳」
ルーデルが語るのは狩猟笛がマイナー武器と呼ばれる所以。使い

勝手が悪い為に使い手が少ない狩猟笛はハンター全体から見るとやはり使用する人は極わずかだ。だが同時に少数精鋭の言葉通り狩猟笛を使いこなせる者は実力が保証されているも同然なくらいの実力者ばかりでもある。
「ふーん、って事はやっぱりあんたはすごいハンターって事でいいのね？」
「そういう事。まぁ、剣を振るうだけのバカ一辺倒な太刀厨やパワーゴリ押しな大剣バカなんかに比べれば狩猟笛ってのは扱いも戦法（バトルスタイル）は豪快に見えて繊細だからね。要するに太刀や大剣はバカでも扱えるけど、狩猟笛ってのは本当に熟練者しか使えないって訳」
　ニヒヒと愉快そうに笑いながら言うルーデルの言葉に、太刀使いのサクラと大剣使いのシルフィードの眉が同時に顰められる。何というか、相変わらず物怖じしないというか協調性の欠片も感じられない言動をぶっ放すルーデル。
　容赦のない発言をするルーデルを見てフィーリアが慌てて彼女の口を塞ぐが時すでに遅し。シルフィードは大人な対応で「まぁ、確かにそういう側面もあるな」と冷静に答えつつも目付きが険しいし、サクラなんて隠す気は微塵も感じられない程に敵意ムキ出しだ。
　ハンターに詳しくないエレナはキョトンとしているが、板挟みなクリュウは乾いた笑い声を上げながら苦笑するしかない。そんな彼の耳元に、サクラがそっと近づく。
「……あの女、嫌な奴」
「うーん、口下手なだけ……じゃないんだけどねぇ。根はいい子なんだよ、仲良くしてあげてね」
「……クリュウがそう言うなら努力してみる。保証はできないけど」
「お願いね」
　とは言ったものの、サクラはクリュウの傍から一歩も動こうとしない。できるだけルーデルと関わり合うのを避けているのが丸出しだ。まぁ、問題を起こさないのならこれでも別に構わないのだけど、ルーデルとサクラどちらの友人でもあるクリュウとしてはできるだけ二

人は仲良くしてほしいのだが、ある意味この二人の組み合わせは危険かもしれない。
「それにしても、フィーリアから聞いてた他の仲間があんた達なのね。こっちの着痩せしてるだけで本当はムカつく無駄乳が隠れてるのがシルフィード・エアで、この無愛想な眼帯萌えを狙ってる東方人がサクラ・ハルカゼね」
「ルーッ！」
　テンパるフィーリアを見てルーデルは愉快そうにケラケラと笑っている。どうやら容赦がないのではなく、単純にこの状況を楽しんでいるようだ。一方、テンパりまくるフィーリアに対し確実にイライラを募らせているであろう二人。サクラはともかくあの冷静沈着なシルフィードの表情がどんどん険しくなっている所を見ると、すでに危険ゾーンだ。
「……一つ問わせてもらいたいのだが、その発言は我々に対する第一印象から君が脚色しているか？　それとも事前の情報から推測しているのか？」
　ルーデルに問いながらも、シルフィードはジト目でフィーリアの方を見詰める。サクラも同じようにフィーリアを見ており、そんな二人の視線を受けたフィーリアはさらにテンパる――どうやら、二人はルーデルに変な入れ知恵をしたのがフィーリアではないのかと疑っているらしい。
「ち、違いますよッ！　私変な事言ってないですッ！」
「えぇ？　あんたが言ってたんじゃない。胸が大きいからって調子に乗ってるとか、眼帯でキャラ作りなんて白々しいとかさ」
「言ってないわよッ！　ほ、本当ですッ！　信じてくださいッ！」
「……最低」
「あぁ、君は裏表がある子だったんだな。ちょっとショックだ」
「違いますってばぁッ！　ルウウウゥゥゥッ！」
「あははは……」
　わずかな間にまるで嵐のようにクリュウ達のチームを愉快そうに掻き乱すルーデルを見て、クリュウは苦笑を浮かべる。以前に彼女か

ら自分の《異質》さから友達ができないと聞いていたが、間違いなくそれ以外の理由もあるとクリュウは感じていた。
　ルーデルの冗談（だと信じたい）な言動の数々にフィーリアはかつてない程テンパっており、そんな彼女をジト目で見詰めるサクラとシルフィード。何だかんだ言っても実は仲がいい三人にしては珍しく亀裂が入っている光景はなかなか見られないだろう。同時に見たくもなかったが。
「ルーデル、あんまりみんなをからかわいでよね」
　クリュウは愉快そうに笑っているルーデルにそう言って釘を刺す。するとルーデルは「えぇ、これから面白くなるのに」と不満げに言いながらも、しかし意外とすんなりと引き下がった。そんな彼女を見て、ぜぇぜぇと荒い息を繰り返すフィーリアが呆れる。
「何で私の言う事は聞かないのに、クリュウ様の言う事は聞くのよ」
　彼女からしてみれば何気なく訊いたつもりだったのだろうが、彼女の予想に反してルーデルは慌て出す。
「べ、別にそんなつもりはないわよッ。そろそろ引いた方がいいと思っただけで、変な誤解しないでくれるッ!?」
「え？　あ、うん。そんなに必死になって説明しなくても大丈夫だよ？」
「うぐ……ッ」
　きょとんとするフィーリアの返答にルーデルはしまったみたいな表情を浮かべて押し黙る。そんな彼女の横顔を、サクラがジッと見詰めている。
「……怪しい」
「あ、怪しいって何よッ!?　変な事言わないでくれるッ!?」
　サクラの一言に異常に反応するルーデル。その様子を見る限り、確かに怪しい。珍しい組み合わせで言い争いをする二人を見ながら、エレナがそっとクリュウに耳打ちする。
「あんた、また何か厄介事やらかしたんじゃないでしょうね」
「いや、そのぉ……」
　気まずそうに顔を逸らすクリュウ。彼の脳裏には今まさに以前

ルーデルからキスをされた際の映像がフラッシュバック。自然と頬は妙に赤らみ、そしてエレナはそれを見逃さない。
「あんたまた何かやらかしたわねッ！　洗い浚い白状しなさいッ！」
「……クリュウ、何か隠してる」
「サクラッ!?　いつの間に僕の背後にッ!?」
「絶対言うんじゃないわよッ！　言ったらブチ殺すッ！」
　背後から逃げられないようにサクラに抱きつかれ、同じく逃げられないように右腕はエレナがキープ。さらに絶対に言わせないという意味かルーデルはクリュウの胸ぐらを掴んでガクガクと激しく揺らす。
　三人の美少女に揉みくちゃにされるというある意味羨ましい状況に置かれているクリュウだったが、当人としては柔らかいやら痛いやら苦しいやらと大変だ。
　そんな三人の美少女に押し倒されるような勢いなクリュウを見てフィーリアが慌てて止めに入り、さらに状況は混沌となる。ただ一人、冷静に見守っているのはシルフィードだけだ。
「君も大変だなクリュウ」
「そう思うなら助けてよッ！」
　いつの間にかサクラの行動が逃亡阻止の羽交い絞めから手の動きがいやらしくなり始めてクリュウは本気でシルフィードに助けを求める。彼にしかわからないが、サクラの呼気が異常に激しい。
　やれやれとばかりにシルフィードが仲裁に動き、状況はようやく終息するのであった。
　クリュウ達がそんなバカ騒ぎをしている間も竜車は走り続け、レヴェリ領の最奥に到達。長い柵で覆われたこの先が、いよいよレヴェリ家の敷地になる。諸侯兵が守る門が、その入口だ。門の上に翻るのはレヴェリ家の諸侯旗。横長の薄灰地に白の十字、その上から黒の十字が重ねられた、通称《鉄十字(アイアンクロス)》と呼ばれるエルバーフェルド帝国の国旗。諸侯旗はその旗にそれぞれの家紋が描き加えられたもので、レヴェリ家には荒れ狂う風を纏いし風翔龍クシャルダオラが描かれている。

フィーリア曰く、レヴェリ家初代当主はクシャルダオラの力を借りてこの地を支配していた蛮族を滅ぼして生まれたという伝説があり、旗はその時のクシャルダオラを讃えたものから来ているそうだ。
門を潜り、いよいよレヴェリ家の敷地の中に入る。それからしばらく進み、森の中に現れたのは立派な純白の城、レヴェルミナ城。このレヴェリ領を治める当主の一家、つまりフィーリアの家族が住む、そしてフィーリアの家だ。
平民であるクリュウ、エレナ、サクラ、シルフィードはその立派過ぎる城の出で立ちに呆然としている。同じく平民ではあるが実は今もここで暮らしているルーデルと自分の家であるフィーリアはそんな四人の反応を見てルーデルはおかしそうに笑い、フィーリアは謙遜する。
そしていよいよ竜車は城の城門に辿り着く。ここにも諸侯兵が守備しており、ゆっくりと門が開けられる。竜車はそのまま中に入ると、城の正面口に到着する。真ん中に巨大な噴水を構えたその正面口には美しく並んだ大勢の諸侯兵が道を作り、その最奥である正面口の前には壮年の白髪が少し混じった金髪と髭を生やし、碧眼の左目にモノクルをつけた威厳に満ちた男。その隣には美しい白銀の長髪に鋭い翡翠色の瞳が特徴の冷たい印象の貴婦人が立ち、一行を出迎える。
竜車が止まると、幌の中から勢い良く飛び出したのはフィーリア。満面の笑顔に薄っすら涙を浮かべながら、彼女はその二人に向かって走り寄る。
「お父様ッ、お母様ッ」
フィーリアは勢い良く先程までの威厳に満ちた強面とは違い、父親の優しげな笑みを浮かべて両腕を広げて待ち構える男の胸に飛び込んだ。
「おぉ、私のかわいいフィーリアよ。久しぶりだな、少し背が伸びたようだな」
「そういうお父様はまた少し白髪が増えてませんか？」
「ははは、私ももういい年だからな。これからどんどん白くなっていくぞ」

「もう、お父様ったら」
嬉しそうに男と話すフィーリア。察するにあの男がフィーリアの父親、そしてこのレヴェリ領を治める当主らしい。という事は、その隣の女性はフィーリアの母親だろうか。
「フィーリア、家族と再会する時だというのに何という物々しい格好なのですか。あなた、誇り高きレヴェリ家の一員だという事を忘れているのではなくて？」
父親と娘の感動の再会という感じの雰囲気なのに対し、母親である女性は厳しい表情を崩さないままそう注意する。すると、さっきまでの笑顔を引っ込め、フィーリアはまるで叱られているかのように萎縮してしまう。実際、叱られているのだろう。
「あ、すみませんお母様。道中の偶発的な戦闘を警戒して武装したまま来てしまいました」
「まったく、あなたももう十六歳という年頃の娘だというのに、何という格好を……」
「す、すみません……」
「まあまあそう言うな。私はかわいいフィーリアが大好きだが、かっこいいフィーリアというのも嫌いではないぞ。まるで昔のお前を見ているようだ」
「……は、話をすり替えてもらっては困りますわ」
そう怒りながらも、女性の頬がほんのりと赤らんで見える。男の方は気にした様子もなく娘を改めて抱き締め、目には薄っすらと涙を浮かべている。そんな二人を見て、女性の方も初めてフッと口元に優しげな笑みを浮かべた。
仲の良い親子、そんな感じの印象だ。
幌の中でその様子を窺う五人。フィーリアの両親を初めて見る四人に、ルーデルが簡単に説明してくれた。
「あのフィーリアを抱きしめていい年こいて泣いてる親バカなおっさんがフィーリアのお父さんで、このレヴェリ領を治めるレヴェリ家当主、シュバルツ・レヴェリ公爵。隣の瞳が鋭くて怖い感じの女性がフィーリアのお母さん、ヴァネッサ・レヴェリ。元王国軍人で鬼軍曹

として部下をビビらせてきた人で、レヴェリ一族初の平民出身のすごい人なんだから」
　ルーデルの少々失礼な説明を聞いて、とりあえず状況を把握する四人。確かに、二人ともどこかフィーリアに似ている感じだ。
　しばし親子の再会を繰り広げていたフィーリアだったが、思い出したように振り返り、まだ幌の中から出るタイミングを模索している五人に声を掛ける。
「皆様、申し訳ありませんがお父様とお母様に顔合わせお願いできますか？」
　フィーリアがそう言うと、二人の視線も竜車へと注がれる。緊張しながら、まずはルーデルが降りる。その後ろからシルフィード、クリュウ、エレナ、サクラの順で降りる。横一列に並び、ルーデルが一歩前に出て恭しく一礼。
「当主様、フィーリア様とそのご友人の方々の出迎え任務より、ルーデル・シュトゥーカ只今帰還しました」
「うむ、ご苦労だったな」
　シュバルツの言葉に「ありがたいお言葉です」と礼をしたまま答える。クリュウ達から見える彼女の顔には、まるで父親に褒められている子供のような嬉しそうな笑みが浮かんでいた。
　そういえば以前彼女から自分の素性を明かされた際に、孤児は皆レヴェリ家当主の事を父親のように想っていると聞かされた。彼女自身もそう想っているのだろう。そしておそらく、シュバルツの方も……
　シュバルツから離れたフィーリアはクリュウ達の横に並ぶと、一人一人彼らを紹介する。
「こちらの方は私がお世話になっているイージス村の酒場を経営なさっているエレナ・フェルノ様です」
「は、初めまして。エレナ・フェルノです」
　紹介されたエレナはぎこちないながらも一礼する。
「こちらは私が所属しているチームのリーダーを務めていただいているシルフィード・エア様」

「お初にお目にかかります。チームリーダーのシルフィード・エアです」
　こちらは仕事柄目上の人と接する機会が多いのか、慣れた様子であいさつするシルフィード。
「こちらの方は同じく私と同じチームに属するサクラ・ハルカゼ様です」
　サクラは警戒しているのか、特に何も言う事はなくただ一礼する。とりあえず初見に人に対してはまともな対応ができる事がわかった。
「――そして」
　フィーリアは最後にクリュウを紹介する。
「この方が私がお慕い申し上げている、クリュウ・ルナリーフ様です」
　他とはちょっと違う紹介に困惑しつつも、クリュウも「クリュウ・ルナリーフです。フィーリアとは一年程一緒に行動させてもらっています」と緊張しながら答える。
　サクラまでは比較的穏やかに礼をしてくれていたフィーリアのご両親。しかしクリュウになった途端その表情が幾分か厳しくなったのをシルフィードは見逃さなかった。そして、一人苦笑する。
　フィーリアが紹介を終えるとシュバルツは皆を一度見回す。
「いつも娘が世話になっている。私が彼女の父親でこのレヴェリ領を治めているシュバルツ・レヴェリだ。こっちが私の妻のヴァネッサ・レヴェリ。今後とも娘をよろしく頼む」
　夫婦揃って一礼し、クリュウ達も慌てて答礼する。大人から礼をされる事に慣れていないクリュウとエレナや、貴族という高貴な身分の人自ら頭を下げるという行為自体珍しいのだろう。シルフィードやサクラも若干面を食らっているという感じだ。
「長旅で疲れているだろう、さぁ入ってくれ」
　シュバルツはそう言ってヴァネッサと共に侍女によって開かれた玄関の中へ入る。その一歩後ろをフィーリアとルーデルが続き、四人を中に招き入れる。
　豪華な外見に相応しいように、中も豪華であった。高級な絨毯が床いっぱいに広げられ、高そうな絵画や壷が飾られ、二階への吹き抜け

の高い天井には豪勢なシャンデリアが吊り下げられている。
玄関に入ると、真っ直ぐ行った先に二階へと通じる階段がある。中程で左右に分岐するオシャレな作りの階段の中腹に、一人の女性が立っていた。
腰がくびれた優雅なドレスを身に纏い、長く美しい柔らかな金髪を流し、フィーリアと同じ優しげな丸っこい美しい翡翠色の瞳をした美しい女性。遠目に見てもその美しさにクリュウは息を呑んだ。物腰や雰囲気から見るに確実に自分より年上、シルフィードよりも上に見える。だが、可愛らしいという印象を抱かずにはいられない。シルフィードに負けず劣らずな大きな胸に目が行くのを自制し顔に目を向けると、その顔立ちがフィーリアに良く似ている事に気づく。まるで、大人になったフィーリア、そんな印象だ。
女性は現れたシュバルツやヴァネッサに微笑み、そしてその背後にいるフィーリアに気づく。フィーリアも女性に気づき、目を丸くした。
「セレスお姉様ッ!?」
「フィー、お帰りなさい。あら、少し見ないうちにちょっと大人っぽくなったかしら?」
ゆっくりと階段をセレスと呼ばれた女性が降り切ると同時に、フィーリアが駆け出して彼女の胸に飛び込んだ。その豊満な胸に顔を埋め、幸せそうな笑みが浮かぶ。
「あぁ、お姉様の香りがしますッ」
「あらあら、フィーったらお子様ねぇ。あぁ、でもやっぱり可愛らしい。私のかわいいかわいいフィー。こうして抱きしめてあげるのもすごく久しぶりね」
美女二人が抱き合う光景は実に絵になるのだが、初見のクリュウ達は困惑したままだ。そんな彼らにルーデルが紹介する。
「あのお方がレヴェリ三姉妹の長女、レヴェリ家次期当主にして爵位継承権第一位のセレスティーナ・レヴェリ様。まぁ、フィーリアの第一お姉さんって事ね」
クリュウ達は改めてフィーリアを優しく抱き止める女性――セレ

スティーナを見る。あの人がフィーリアのお姉さん。なるほど、そりゃ似ている訳だ。似ているだけではなく、フィーリアに大人の可愛らしさが加わった感じで、フィーリアとまた違った可愛らしい人だ。
「セレスお姉様、お体の具合はいかがですか？」
「ええ、この通り最近はすごく調子が良くてね。ルーにいつも護衛してもらいながら絵を描きに外に出られるくらい元気よ」
　そういえば、セレスティーナは体が弱いと聞いていた。だが見る限り今は彼女の言うとおり調子がいいのだろう。病弱でいつも家に閉じこもって書物を読み込んでいる為とても博識と聞く。確か非常勤の古龍研究機関の研究員だとルーデルに説明された事がある。
「あ、皆さんご紹介が遅れました。この方が私の一番上の姉であるセレスティーナお姉様です」
　フィーリアが思い出したように振り返って紹介すると、セレスティーナはクリュウ達を見回して優しげに微笑み、優雅に一礼する。
「セレスティーナ・レヴェリです。妹がいつもお世話になってます。うふふ、この人達がフィーのお友達？　みんなすごく可愛らしい人達ね」
　コロコロと笑うセレスティーナのかわいい発言に二人程が苦笑を浮かべる。かわいいという褒め言葉に慣れていないシルフィードとそもそもそれが褒め言葉にはならないクリュウの二人だ。
「セレスティーナ、これから彼らと共にお茶でもと思っているのだが、お前もどうだ？」
「もちろんお父様、ぜひご一緒させてください」
　シュバルツの言葉にセレスティーナは手を合わせてそれは名案ねとばかりに笑顔を華やかせる。その無邪気な笑顔もまたフィーリアによく似ている。ちょっとばかしそんなセレスティーナに見惚れていると、クイクイと服の袖を引っ張られた。引っ張ったのはルーデルだ。
「どうしたのルーデル？」
「言っておくけどあんたは私と同じ平民だって事忘れてないでしょうね？　貴族と同席できる事自体異例中の異例なんだから。フィーリ

アの顔に泥を塗らないよう、絶対ミスはしないでよね」
「わ、わかった……」
今更だが、自分達は平民だ。そしてレヴェリ一家はフィーリアも含めて全員が貴族。国無（ノンカントリアス）の自分達には身分の差というのがよくはわからないが、この国では身分は絶対らしい。ルーデルの忠告に改めてクリュウの緊張が増す。
そんなクリュウを見て一抹の不安を抱かずにいられないルーデル。だが気を取り直して彼らより一歩前に出る。
「当主様。その前にお客人の方々には楽な格好に着替えてもらいましょう。申し訳ありませんが、応接室の方をお借りしてもよろしいでしょうか？」
「そうだな。好きにしてくれ」
「はッ。感謝します」
あの無茶苦茶な性格のルーデルもフィーリアのお父さんの前では全く頭が上がらないらしい。それほどまでにすごい人なのだと今更ながら驚く。と同時に、ふと疑問が浮かぶ。
「でもルーデル、僕達はハンターなんだからこれが正装みたいなもんだし、これでも問題ないんじゃ――ぐぎッ!?」
突然猛烈な勢いで脚を踏み抜かれた。防具を着ていなかったら本気で骨が折れてたのではないかというような勢いだ。悶絶するクリュウの耳元でルーデルが小声で激怒する。
「バカッ。貴族の同席するってのにそんな物々しい格好で行こうなんて世間知らずにも程があるでしょッ!? 何もわかんないならいちいち文句言わないで黙って従ってなさいッ！」
ルーデルにボロクソ怒られ、自分の無知さを痛感してひどくショックを受けるクリュウの首根っこを掴み、ルーデルはシルフィード達も連れて歩き出す。ここで一度フィーリアと別れる事になった。

第１４５話　フィーリアを想う優しき天使と素直じゃない悪魔

女子陣は広い応接室で着替える事になり、唯一の男子であるクリュウは隣の半分程の広さの休憩室で着替える事になった。着替えは一応フィーリアから「正装は用意しておいてくださいね」と言われていたので持って来たが、こういう意味だったのかと今更理解する。

荷物の中から取り出したのは懐かしい一張羅（いっちょうら）。ドンドルマハンター養成学校時代に始業式や卒業式、創立記念日のパーティーなどで着た黒いスーツに白いワイシャツ、赤色の紐ネクタイというまさに正装だ。よもや、またこれを着る機会があるとは思ってもいなかった。

クリュウは久しぶりに着るそれに腕を通してみる。少しキツくなった感じがあるが、どうやら一年という間にまた少し背が伸びたりしていたようだ。ちょっと嬉しかったり。

最後に紐ネクタイを締めると、完成だ。用意された鏡の前に立ち、おかしな所がないかチェックする。

鏡に写る自分の姿を見て、どこか懐かしさを感じる。

ふと、急に右手が寂しくなったのを感じた。何度か手を開いたり握ったりし、その異変を考える。答えはすぐに見つかった。

「……ルフィール、元気にしてるかな」

いつも右手を握っていたのは彼女の小さな手だった。いつも不安げな二色の瞳で、自分を見詰めていた。いつも傍にいて、自分が振り返ると人には見えないような角度で嬉しそうに微笑む。

あの月の美しい晩、自分はこの格好でルフィールと踊った。嬉しそうに微笑む彼女の顔は、今も目に焼き付いて離れない。

そして、卒業式の日。嬉しそうで、でもやっぱりどこか淋しげな表情を浮かべながら胸ポケットに桜の枝を挿してくれた彼女の顔も、忘れられない。

今頃、彼女は一体どうしているだろうか。頭の片隅に、いつもそん

な心配が浮かんでいる。
「……大丈夫。あいつは、負けたりなんかしない」
でも、信じているからこそ、大丈夫という想いもある。
自分よりもずっと強くて逞しい子。ルフィールなら、きっとうまくやっているはず。きっと……
そんな事を考えていると、ドアがノックされる音がした。「開いてますよ」と答えても、ノックが続く。
クリュウは首を傾げる。フィーリアやシルフィードなら答えれば入って来るし、サクラとエレナはそもそもノックをしないで突然入って来るので、この反応は見知った四人ではない。
クリュウは不思議に思いながらドアを開いた。すると、そこには輝く美しい金髪を流した、吸い込まれるような翡翠色の瞳をした女性が立っていた。
一瞬フィーリアかと思ったが、違った。目の前の女性は自分より背が低いフィーリアとは違い自分よりも頭半分くらい背が高く、柔らかな笑顔が素敵なオトナの色香漂う――セレスティーナであった。
「ふぃ、フィーリアのお姉さん？」
突然の予期しない来訪者に慌てるクリュウに、セレスティーナは優しげに微笑みながら問いかけてきた。
「お邪魔してもいいかしら？」
「へ？　は、はいどうぞッ」
慌ててドアを全開まで開けて中に通すクリュウ。そんな彼を見てセレスティーナは「ごめんね」と謝りつつも、ちょっとイタズラっぽい笑みを浮かべる。その笑顔にクリュウは心臓が跳ね、顔が真っ赤に染まり慌てて顔を隠す。
フィーリアは誰もが認める美少女だ。シルフィードの凛々しさやサクラの綺麗さとは違う、幼さを残した純真無垢なかわいさが彼女の魅力だ。その魅力を残しつつ、大人の魅力を加えて何乗にもかわいさをパワーアップさせた感じ。まさにフィーリアの拡大発展型とも言うべき美女。
あの妹あってこの姉あり。実に優しげなお姉さんという感じだ。

セレスティーナはゆっくりと部屋に備えられている椅子に腰掛けた。その振る舞いにもどこか高貴なものが感じられ、彼女の美しさにさらに磨きをかける。
ただ、フィーリアとセレスティーナには決定的に違う所が二つある。一つはフィーリアにはかわいさの中にもハンターとしての厳しさがどこかにある。どんなにかわいい女の子でも、武器を振るうという行動からどこかに鋭さを感じさせられる。しかしセレスティーナはそういう物騒な世界には一切触れずに育ったのだろう。そういう鋭さがまるで感じられない。まさに、優しい一色な人だ。
もう一つは、クリュウが自然と目が行ってしまって慌てて逸らし、しかしまた目が行ってしまい慌てて逸らすという事を繰り返す視線の先。フィーリアにはない、大きな胸。知り合いの中ではおそらくトップレベルの巨乳であるシルフィードよりも大きい。アシュアと同じくらいか、もっと大きいかもしれない。
成長期というアドバンテージを使っても、今からフィーリアがこんな大きな胸になるとは思えない。幾分か大きくはなって人並みにはなるだろうが、こんな常軌を逸したものにはならないだろう。
そんな変な下心丸出しな思考を全開でする自分に気づき、クリュウは恥ずかしさと罪悪感から苦しみ、一人悶絶する。そんな彼を見詰め、セレスティーナはくすくすと笑う。
「私とフィーは全然違うわよ。あの子は私なんかよりもずっと魅力的な女の子になるわ」
まるで心を見透かされたかのようなセレスティーナの発言に、クリュウの表情は強ばり真っ赤に染まる。「あ、いや、その……」と狼狽のあまり文章にならない言葉を吐く彼を見て、セレスティーナはおかしそうにくすくすと笑い続ける。
「別に隠す事じゃないわよ。男の子なんだから、当然の反応ね」
「す、すみません……」
「あらあら、謝る事でも全然ないのに」
ころころと笑う彼女の笑顔を、クリュウは直視できない。それほどまでにセレスティーナはかわいらしい人だった。年上の人に対して

かわいらしいというのはおかしいかもしれないが、それ以外に彼女を表現する言葉がクリュウは持ちあわせてはいなかった。
「あなたは確か、クリュウ君……で、いいのよね？」
「あ、はい。クリュウ・ルナリーフです」
「うふふ、そんなに緊張しなくてもいいのに。じゃあ私ももう一度自己紹介。フィーの姉のセレスティーナ・レヴェリ。よろしくね」
　優しく微笑みながら立ち上がって、ドレスの裾をつまんで優雅に一礼しながら改めて自己紹介するセレスティーナに、クリュウは緊張しながら慌てて頭を下げる。そんな彼を見てくすくすと笑いながら、下げられた彼の頭を優しく撫でる。
「うふふ、かわいいわねぇ」
　頭を撫でられ、クリュウは自然と微笑んでいた。
　男だから《かわいい》と言われるのは決して褒め言葉にはならない。でも、彼女に言われるのはちょっと複雑な気分にはなるものの、嫌な気はしなかった。お姉さんにかわいがってもらっているような、そんな幸せな気分になる。
　しばらくそうしてクリュウの頭を撫でていたセレスティーナは、ちょっぴり残念そうにため息を零して手を離す。
「はぁ、私にもこんなかわいい弟がいれば良かったんだけどね」
「僕もセレスティーナさんのような素敵な姉が欲しかったです」
「あら、お世辞がお上手ね」
「お世辞なんかじゃないですよ。すっごく憧れます」
「うふふ、ありがとう」
　嬉しそうにくすくすと笑うセレスティーナをようやく直視できるようになり、クリュウも自然と微笑む。何だか、すごく癒される。
「それで、僕に何か用があったんじゃないんですか？」
　思い出したようにクリュウが言うと、セレスティーナは「そうだったわ。すっかり忘れてた」と自分で驚きながらそう言うと、失敗失敗とばかりにペロッと舌を出す。そのギャップのある子供っぽい仕草一つにも、クリュウはドキッとしてしまう。
「一つ忠告しに来たの」

「忠告、ですか？」
「えぇ。これからお父様やお母様とのお茶会ですけど、お父様には気をつけてね」
「は？　フィーリアのお父さんに、ですか？」
　意味が分からないとばかりに首を傾げるクリュウを見て、セレスティーナは人差し指を自分の唇に付けてうーんとどう説明したものかと少し考え、ゆっくりと口を開く。
「お父様はフィーにそりゃもうベタ惚れなのよ。かわいいかわいい自慢の娘だからね。だから、そのフィーが男の子を連れて来たってだけでもうピリピリしてるの。フィーから時々来る手紙にはいつもあなたの事が書いてあったから、その度にお父様はイライラしていらっしゃったわ。そして事前に貰ったあなたを連れて来るという手紙を読んでから今日まで、お父様はずっとピリピリイライラ。さっきは貴族の誇りに掛けて礼儀的に出迎えてくれたけど、一度父親の顔が出たらもう大変。だから、あまりお父様を刺激しないように。その忠告に来たのよ」
　セレスティーナの忠告に、クリュウは何となく理解した。娘を持つ父親はその娘が彼氏を連れて来るのを最も嫌がると言う。手塩にかけて育てた娘を、どこの馬の骨ともわからぬ男が受け取りの許可をもらいに来るのだから、そりゃ気が気でもないだろう。
　今回の場合、自分はフィーリアの彼氏ではない。彼氏ではないのだが、それでもやはり娘が男友達とはいえ連れて来るのは嫌なのだろう。
　クリュウはあまり経験した事のない親心。ちょっとだけ羨ましくもある。
「わかりました。なるべく穏便に済ませてみます」
　だとしたら、その親心になるべく心配を掛けないようにしないと。
　クリュウの返答に満足気にセレスティーナは微笑む。
「よろしくね――ところで、一つ訊いてもいいかしら？」
「はい。何でしょうか？」
　何でも訊いてください、自分に答えられる範囲なら何でも答えます

よとばかりに自信満々に胸を張るクリュウ。そんな彼の返答にそれじゃあとセレスティーナは微笑む。
「――クリュウ君は、フィーの彼氏さんなのかしら？」
「ふえええええッ!?」
予想を遙かに上回る問いかけに、クリュウは顔を真っ赤にして驚く。しかしすぐに首を激しく横に振って全力否定。
「ち、違いますよッ。僕とフィーリアは一緒に狩りをする戦友であって、恋人とかそんなんじゃないですよッ」
「あら、違ったの？　てっきり私は今日結婚の申し込みに来たのだとばかり……」
「違いますってッ」
顔を真っ赤にして否定するクリュウを見て、セレスティーナはふぅと困ったようにため息を零す。
「……あの子ったら、まだ絶賛片想い中なのね」
「はい？」
「ううん。何でもないわ……でもまずいわね。お父様、完全にあなたが娘を奪いに来たのだと想ってらっしゃるもの。それも、娘だけじゃなくてかわいい女の子をいっぱい連れて」
「……先行き真っ暗なくらいの誤解ですよそれ」
クリュウはがっくりと肩を落とす。今回ここへ来た目的はフィーリアの父であるシュバルツ・レヴェリ公爵に政府への自身のアルトリア行きをお願いする事。しかし肝心のシュバルツとの関係は直接言葉を交わす以前から最悪。前途多難過ぎて涙が出てきそうだ。
ため息を零して落ち込むクリュウ。そんな彼を励ますようにセレスティーナはそっと彼を抱き寄せる。
突然の事に驚くと同時に腕に押しつけられる大きくて柔らかい感触に顔を真っ赤にして慌てまくる。
「せ、セレスティーナさんッ!?」
「うふふ、こんな事フィーじゃできないでしょ？」
イタズラっぽく笑いながら言う彼女の発言に、セレスティーナがわざとしていると理解しクリュウは頬を膨らませるて急いで彼女の腕

から離れる。
「か、からかわないでくださいッ」
「うふふ、ごめんなさいね。あなたってどうにもイジメたくなっちゃって」
　ころころと楽しげに笑う彼女を見ていると、どうにも調子が狂う。まだ頬の赤い顔で複雑そうな表情を浮かべていると、セレスティーナはそっと近寄って来て、顔を覗き込んで来る。
「姉の私が言うのも何だけど、フィーってかわいくない？　あんなかわいい子を彼女にしたいとか、君は思わないのかしら？」
　セレスティーナの問い掛けにクリュウは顔を真っ赤にしたまま、困ったように頬を掻く。ジッと見詰めてくるセレスティーナを一瞥し、クリュウは「そりゃ、フィーリアはすごくかわいい子だと思いますし、あんな子をお嫁さんにできた人はすごく幸せ者だと断言できます」と素直に答える。それは決して彼女の姉の前だからと上乗せしたり膨らませたりした訳ではなく、本心からの彼の返答だった。
　クリュウの返答にセレスティーナは満足そうにうなずくと、「だったらフィーをお嫁さんにしたら？　私としても、あなたみたいなかわいい弟ができるのは大歓迎よぉ」と嬉しそうに答える。
　セレスティーナの言葉にクリュウは嬉しそうに微笑むも、しかしすぐに小さく首を振って表情を引き締める。そんな彼を見て、セレスティーナの表情も少し真剣なものに変わる。
「あなたは、フィーの事が好きじゃないの？」
「……好き、かもしれません。でも、僕はまだ女の子を好きになるというのがどういう事なのかがわかってません。だから、この気持ちがそういうものなのか、自分じゃわからないんです」
　それは、まだクリュウが一人前の男になりきれていない証拠。昔シャルルが読む事を勧めた小説（その時はシャルルが小説を読める事に驚いていたが）では人を好きになる事で力が何倍にもなって強くなっていくというシーンが描かれていたが、自分はそもそも人を好きになるというのがわかっていない。
「そりゃ、フィーリアみたいなかわいい子を見てればドキドキします。

一緒にいるとすごく幸せな気持ちになって、すごく胸が温かくなります。でも、それはフィーリアだけじゃなくてサクラやシルフィードと居ても感じます――もしもこれが《好き》って事なら、僕は最低な人間なのでしょうか？」

もしも今自分が抱いている気持ちが《好き》という事だとすれば、自分は現在進行形で複数の女の子を見てそういう感情を抱いている事になる。それは、男としては最低な事だ。だからこそ、これを《好き》とは認めたくはなかった。

自分の中で渦巻く気持ちに困惑しているクリュウを見て、そんな彼のフィーリア達に対する罪悪感をセレスティーナは気にした様子もなく笑顔で答える。

「仕方がないわよ、男の子なんだもの。かわいい女の子を見てドキドキするのは当然の事。特にあなたの場合は周りにかわいい子が選り取り見取りなんだから」

それにはクリュウもうなずいた。自分の周りの女子は世間一般的に言えばかなりの美少女ばかり。それは男としては実に恵まれている環境なのかもしれないが、彼自身は当然かわいい子ばかりとは思っていてもそれ以上の感情は抱いていない。だからこそ、今こうして困惑しているのだ。

自分の中の感情を悩むクリュウを見て、セレスティーナはそっと質問してきた。

「――クー君は、今まで誰かを好きになった事とかもないの？」

セレスティーナの何気ない問い掛けの中にあった、クリュウは一つのキーワードを聞き逃さなかった。彼女の問い掛けに、ゆっくりと口を開く。

「……その呼び方、すごく懐かしいです」

「あら、そうなの？」

クリュウは小さくうなずくと、春の日差しが注ぎ込む窓へ振り返る。しかし、その瞳が見詰めているのは窓でも、その向こうに広がっているレヴェリの景色でもない。そこに映るのは、遠い昔の想い出。

今でも、時々思い出す事がある。

母が死に、絶望の淵に追いやられたあの頃の自分。何せ、子供のような母の面倒を看る事が自分の生き甲斐にすら感じていたのに、その母が突然いなくなってしまった。
何をすればいいのか、何がしたいのか。何もかもが壊れてしまった。
エレナ曰く、あの頃の自分の目は死んでいたそうだ。否定はしない。だって、自分でもあの頃の自分は死んでいたと言っても過言ではないからだ。
そんな、死んだ瞳で地面を無意味に見詰めていた時あの夏の日――彼女が現れた。
「――君がクリュウ・ルナリーフ君ですね」
澄んだ凛とした声にゆっくりと顔を上げると、夏のきれいな青空と白い入道雲で描かれたキャンバスに、夏の燦々とした日差しを一身に受けて輝く麦わら帽子を被った純白の少女がいた。
純白のかわいらしいワンピースに麦わら帽子が彼女のいつもの格好。服と同じ純白の髪をセミロングに切り揃え、空を同じ美しい蒼色の瞳がジッと自分を見詰めている。
年は自分より何個か上くらいで、まるで人形のように美しく整えられた顔が印象的だった。まだ年の関係で幼さが目立つが、子供心にきれいだと思った事を今でも良く憶えている。
少女はおそらく笑うのが苦手なのだろう。少しぎこちない笑みで、そっと腕を伸ばして来た。
「では、君の事は今日からクー君と呼ばせていただきます。クー君は私の友達第一号なのです」
その慣れない笑顔は、ほんの少しだけ真っ暗だった心に光を挿し込んでくれた。だから、僕は、そんな彼女の手を、そっと握り締めた。
――そして、僕は彼女の弟になった。
「昔、姉にそう呼ばれていたんです」
「あら？　フィーからはあなたは一人っ子だって聞いてたけど」
「あ、いえ。本当の姉弟じゃなくて、姉のように慕っていた人がいたんですよ」

クリュウの説明にセレスティーナは納得したようにうなずくと、頬に指を当てて首を傾げる。そういう子供っぽい仕草もよく似合う人だ。
「その人は、今も君の村にいるのかしら？　フィーの手紙にはそれらしい人は書かれていなかったけど」
「……今は、もう村にはいません。僕が十歳の頃に村を出て行ってしまって以来、今も音信不通です」
ちょっと悲しげな表情で言うクリュウを見て、「ごめんなさい。変な事を訊いてしまって」とセレスティーナは申し訳なさそうな顔で謝る。
クリュウは小さく首を横に振った。
「いえ、もう何年も前の事ですから。今はフィーリア達がいますから、寂しくなんてありませんよ」
「そう……」
セレスティーナはほっとしたように胸を撫で下ろすと、健気に微笑むクリュウの頭を優しく撫でる。
「クー君は立派ね。いい子いい子」
頭を撫でる事はあっても、撫でられる事はあまりない。クリュウはセレスティーナの温かな手を嬉しそうに受け入れる。
「君みたいな子がフィーの旦那さんになってくれれば、私も大歓迎なんだけどなぁ」
嬉しそうに笑いながら言うセレスティーナの言葉に、クリュウは困ったように苦笑する。この場合、どう答えればいいのか必死に考えるが、なかなかいい答えは出て来ない。
「うふふ、ちょっとからかい過ぎちゃったかしら？」
コロコロと笑うセレスティーナの言葉に、クリュウは口元に小さく苦笑を浮かべる。何というか、さっきからずっと振り回されっぱなしだ。遠慮深いフィーリアと違って、セレスティーナは結構グイグイ来るタイプらしい。やっぱり姉妹でも性格は細かくは違うものだなぁと変な所に感心してみたり。
「まぁ、何にせよ今フィーはあなたの傍にいる事を選んでいるそれが

今の彼女の幸せなら、私はそれは尊重してあげたい。だって、私はフィーのお姉さんだから。妹の幸せが一番だから」
そう言って微笑むセレスティーナは、本当に良き姉だ。妹の幸せを誰よりも願い、それを応援している。同時に彼女や公爵夫妻を見ていると、フィーリアがどれだけ愛されているのかがわかる。
大切な娘であり、妹であり、親友である。ここには彼女を結ぶ絆がしっかりと繋がれている。
だが、フィーリアはそんな故郷を離れて今は遠い辺境の地、イージス村に住んでいる。イージス村に、自分に、それだけの価値があるのか。
ここなら、彼女は幸せに暮らせるのではないか。何しろここは彼女の故郷であり、家族がいる。
フィーリアがいるべき場所は、ここではないのか。自分なんかと一緒にいる事は、本当に彼女の為になるのだろうか。
クリュウ自身フィーリアの事を大切に想っているからこそ、彼女の一番の幸せを願いたい。
家族と暮らす事。自分にはもうできなくなった、憧れるシチュエーション。それは、幸せな事ではないのか。
何だか、久しぶりにブルーな気持ちになり、自然と表情が暗くなるクリュウ。そんな彼の頬を、柔らかな温もりが触れる。顔を上げると、優しく微笑むセレスティーナと目が合う。頬に当てられているのは彼女の温かな手だった。
「そんな顔しないで。私はあなたに感謝してるんだから」
「僕に、ですか？」
「ええ。だってあなたは、フィーに幸せを教えてくれた人だから」
「……僕は、本当に彼女を幸せにできているでしょうか？」
クリュウの不安げな問い掛けに対し、セレスティーナは微笑みながらしっかりとうなずく。
「もちろんよ。だって、今のフィーすごく楽しそうだもの。きっと、すごく幸せななのね」
「そう、ですか……」

セレスティーナの言葉にほっと胸を撫で下ろすクリュウ。セレスティーナはそんな彼を見て、本当にいい子だなぁと微笑んだ。なるほど、妹が惚れるのも納得出来る――姉としてはそんな妹と彼が結ばれる事を願いたいが、彼の周りには妹と同じように彼に好意を寄せている女の子が多数いると聞く。

妹が挑む恋の道は相当厳しいだろう。でも、そんな中でもああやって嬉しそうに笑っている彼女を見ると、今が幸せなのだとわかる。

あの子は純粋だから、きっと一緒にいられるだけで幸せなのだろう。

あの子がもっと強い想いを抱くのはもう少し先かもしれないが、それまでは今の幸せが一番だ。そして、そんな幸せを教えてくれた彼には感謝してもし切れない想いだ。セレスティーナにとって、フィーリアは大切な妹なのだから。

――まぁ、時々彼女を泣かせたり他の女の子とイチャイチャしているという話題を聞くと、ちょっとだけプンスカする事もあるが。男の子なのだからと割りきっておく。

今は、彼に全てを任せる。結果はわからないが、妹が彼といるのが幸せだと言うなら、止める気はない。

セレスティーナはそっと彼の手を優しく握り締める。クリュウが驚いて彼女の方を見て目が合った瞬間、セレスティーナは優しげに微笑んだ。

「――フィーの事、よろしくね」

優しげな笑顔の中に、大切な妹の幸せを願う姉の顔があった。大好きなフィーリアを、幸せにしてほしい。そんな願いが込められた笑顔だ。

クリュウは握られた手をギュッと握り返すと、真剣な表情で答える。

「はいッ」

事前の打ち合わせで一度フィーリアを除いた四人は集合する事になっており、クリュウは集合場所である待合室に向かった。

部屋に入ると、まだ誰も来ていなかった。一瞬部屋を間違えたかと

も思ったが、さっきルーデルに案内されたのでここで間違いはない。
クリュウは一人部屋の中に入り、椅子に腰掛けて皆がくるのを待つ。だが、しばし待ってもなかなか誰も来なかった。女子というのは男子の何倍も着替えに時間が掛かると言うが、となるともうしばらくは来ないかもしれない。
時間を持て余したクリュウは一人になって、今更ながら自分がしようとしている事の異質さ、巨大さ、無謀さに緊張してきた。
これから自分は一国の王族に次ぐ家柄の大貴族当主に協力を求め、その後ろ盾を得て今度はエルバーフェルド帝国総統に直談判して異国アルトリアへと向かう。
大まかな骨組みだけでも相当無茶苦茶な事をしようとしているのがわかる。でも、やらなければならないのだ。
シャツの下の首に掛けられている母の形見のペンダント。それが意味する所を、自分はこの目で確かめなければならない。
――母の、故郷へ行きたい。
親類縁者がいない自分にも、もしかしたらそこに行けば母の親族がいるかもしれない。
不安はあるが、同時に期待も当然ある。相反する想いが複雑に絡み合い、クリュウは複雑な表情を浮かべる。
頭の中で何度そんな争っても結論の出ない議論をした事か。いよいよ考え過ぎて頭が痛くなってきた頃、部屋のドアが開かれた。慌ててペンダントをポケットに隠す。
「あんた、ずいぶん早いわね」
そう言って最初に現れたのはルーデルだ。黒を基調としたシンプルなデザインのワンピース型のドレス。帯のように結ばれた純白のリボンが落ち着いた感じに華を添える。
ルーデルの魅力を見事に引き出すドレスだ。それを纏うルーデルもいつもよりグッと魅力的で、クリュウは思わず見惚れてしまう。すると、そんな彼の視線に気づいたルーデルは頬を赤らめて自分自身を抱き締めるように腕を胸元で交差させる。
「な、何よあんた。そんなにジロジロ見ないでよね。キモイんだけど」

「あ、ごめん……ッ」
クリュウも顔を真っ赤にして慌てて視線を逸らす。
互いに話しかけづらく、二人の間に気まずい沈黙が舞い降りる。特に、二人の脳裏にはテロス密林での月下の湖での、あのシーンが思い浮かび、それがさらに恥ずかしさと気まずさに拍車を掛ける。
「な、何かしゃべりなさいよ」
勇気を出してという感じで最初に開口したのはルーデル。しかしその言動は見事にクリュウに丸投げだ。クリュウは困ったように顎に手を添えて少し考え、
「――げ、元気にしてた？」
「……あんたに突破口を見出そうとしたあたしがバカだったわ」
呆れたようにため息と共に言葉を吐くルーデル。クリュウ自身自分の見当違いな発言に呆れていたのでそんな彼女の言葉に返す言葉がなく、苦笑を浮かべる。
「まったく、あんた本当に変わってないわね」
「ルーデルと別れたのは結構最近でしょ？　そう簡単に人は変わらないよ」
「ま、そりゃそっか」
ルーデルも納得したようにうなずくと、迷う事なくクリュウの隣の席に腰掛ける。するとルーデルはクリュウの顔を横から覗き込んできた。
「相変わらずアホ面ねぇ。フィーちゃんは何でこんな奴を気に入ったんだか」
「君も相変わらず包み隠さないよね」
シャルルの時のように一年以上会っていない訳ではない。つい数ヶ月前の事なのに、すごく懐かしく感じられる。それだけ、ルーデルは仲のいい友達だ。一度しか狩りをしていないし、過ごした時間も短いけど、そう自信を持って断言できる。
「ま、それは置いといて」
「できれば置いといてほしくないんだけど」
「――何でまた、ここに来たのよ？」

ルーデルの包み隠さない真っ直ぐな言葉での問いかけ。クリュウは一瞬話すべきかどうか迷ったが、先程自分は彼女の事を友達と断言した。友達に隠し事はしたくない。そう結論を出し、クリュウは静かに口を開く。
「実は……」
「――悩むぐらいなら、別に言わなくてもいいわよ」
クリュウの言葉を遮り、ルーデルはあっけらかんと答える。そんな彼女の言葉に決意して口を開いたクリュウは文字通り開いた口が塞がらない。
「え？　で、でもさ……」
「フィーちゃんがわざわざ超ド田舎のあんたの村から遠方のここに電撃帰宅するって事は、余程重要な事態なんでしょ？　それも、きっとあんた絡みの。あの子、あんたの為ならがんばっちゃうからね」
ルーデルの言うのは、見事に今のクリュウ達の状況を見抜いていた――いや、フィーリアの親友だからこそ、フィーリアの行動を見てこちらの状況を推測したのだろう。彼女の事なら自分が良く知っている、以前彼女が言っていた言葉は本当だったらしい。
「今回はあんたが何か特別な目的の為にここへ来たって頃でしょ？　それも、すごく重要な。なら、今無理して言わなくてもいいわよ。話すべき時が来たら、あんたが迷わずあたしに話せる時が来たら、その時にでも言いなさい。話を聞くくらいなら、付き合ってあげてもいいわよ」
言葉自体は素っ気なくても、その声と表情はどちらも優しげだ。彼女なりの優しさなのだろう。クリュウはそんな彼女の思いやりに、心から感謝する。
「ありがと、ルーデル」
素直に、そう言っていた。
クリュウが笑みを浮かべながらそう言うと、ルーデルはそんな彼を見てカァッと顔を真っ赤に染めて狼狽する。
「は、はぁ？　何であんたが礼を言う訳？　意味分かんないッ」
そう怒りながらプイッとそっぽを向けるルーデルを見て、なぜ怒ら

れたのかわからず困惑するクリュウ。そんな彼に真っ赤になった顔を見せたくないルーデルは背を向けながら仁王立ちする。
　しばらくの沈黙があって、そっとルーデルの口が開く。
「っていうかあんた、あの後フィーちゃんとはどんな感じなのよ」
　彼女が言うあの後とはもちろん彼女とフィーリアを奪い合った、彼女と初めて会った後の事だ。しかし、具体的には特筆して何かが変わったという訳でもなく、クリュウは素直に答える。
「別に、それまでと同じような感じだよ」
「……って事は、何の進展もしてない訳ね。ほっとしたようながっかりしたような」
「え？　何か言った？」
「何でもないわよ。それより、ちゃんとフィーちゃんを大切に扱ってるでしょうね？　今はあんたに仕方なく預けてるだけなんだから、もしもあの子を泣かせるような事したら承知しないんだから」
　前回のフィーリアを巡っての争いは結局引き分けという形で終わった。ただし、彼女の意思を尊重してあくまでクリュウに仮に預けているに過ぎない。なので、ルーデルとしてはクリュウにフィーリアを幸せにできる能力がないと判断すれば即時彼女を回収する構えだ。
　忘れていた訳ではないが、改めてそんな複雑な状況に自分が置かれている事にクリュウは苦笑を浮かべる。
「大丈夫。今の所フィーリアに捨てられるような事はしてないよ」
「フン、どうだか」
　自分の発言をものの見事に信じようとしないルーデルにクリュウは苦笑を浮かべるしかない。何となく彼女とはちょっとした信頼関係を築けていたような気がしていたのだが、どうやら思い違いだったらしい。
　ちょっとだけショックを受けるクリュウだったが、もちろんそれは彼の勝手な思い違いだというのは言うまでもないだろう。苦笑するクリュウの隣で、ルーデルは嬉しそうに微笑んでいた。親友が幸せにやっている事を、彼女はちゃんと知っている。そして、彼の言葉の中にフィーリアに対する優しさを感じられて――嬉しくあり、でも

ちょっとだけ寂しい。
「あんたさ、彼女とかほしくない訳？」
少しの間を置いてルーデルがそう尋ねた。クリュウはそんな彼女の問い掛けに少し考え、苦笑しながら答える。
「そりゃほしいとは思うよ。でもねぇ、僕にはまだ早いかなぁって」
「はぁ？　あんたこの前十七歳になったんでしょ？　むしろ遅いくらいよ」
「そうかな？　でも今はハンターをしたいなぁ。もっと落ち着いてから、そういう事にも余力を回せるようにしたい」
「贅沢な事言っちゃって……」
呆れつつも、内心ルーデルはほっとしていた。フィーリアを始め複数の女子から猛烈アタックを受けているというにの全く靡かない彼を見ていると女性に興味がないのではないかという疑問も浮かんでいたのだが、どうやらそれは杞憂だったらしい。
まだ本気で恋をしたいとは思っていないようだが、とりあえずそういう願望があるという事だけは聞き出せたのは良かった。これは早速フィーリアに報告しないと。
「――じゃあさ、その時が来たら、私があんたの彼女になってあげようか？」
気がついたら、そう口に出していた。
クリュウが「え？」と驚いたような顔になって、ようやく自分が言った発言の意味に気づいたルーデルは顔を真っ赤にして慌てふためく。
「ば、バイトよッ！　時給６０００ｚでやってあげてもいいわよ？」
「……それ、確かリオレイア討伐の時の報酬金に匹敵しない？」
呆れるクリュウにルーデルは「じょ、冗談に決まってるでしょ。からかっただけよ」と頬を赤らめたままプイッとそっぽを向く。そんな彼女の姿を見て、クリュウは不思議そうに首を傾げた後、「そっか……」とつぶやいた。
「な、何がよ」
「いや、ルーデルみたいな子が彼女になってくれるなら、僕は幸せ者だなぁって」

「は、はああああぁぁッ!?」
　クリュウの何気ない返しに、ルーデルは顔を真っ赤にして狼狽する。目付きがキッと険しく細まり、変な事を言うクリュウに逆ギレ。困惑する彼に向かって怒鳴りつける。
「ば、バカ言ってんじゃないわよッ！　こんな二重人格の凶悪性格破綻者をどういう風に見たらそういう結論に至る訳ッ!?」
「じ、自分の事をそこまで言う?」
　顔を真っ赤にして眼前にまで迫るルーデルに苦笑しながら、クリュウはでもしっかりと答える。
「確かにルーデルは変わってるけど、それを上回るだけの優しい心を持ってるじゃん。親友の為にあそこまで必死になれるなんて、すごく友達想いないい人だよ。そういう人ならさ、きっと好きになっても後悔はしないと思う。僕は、ルーデルなら大歓迎だけどね」
「な、なぁ……ッ!?」
「なぁんてね。まぁ、ルーデルじゃ僕は役者不足だけどね」
　そう言って苦笑を浮かべるクリュウ。そんな彼を至近で見詰めるルーデルの顔はもうこれ以上ないってくらいに真っ赤に染まっていた。若干涙目になり、口はわなわなと震えている。
「あ、あんたねぇ……ッ」
「あのさルーデル?　そろそろ離れてほしいんだけどぉ……」
　そこで初めてルーデルは自分とクリュウの異常な距離に気づいた。
「へ、変態ッ!」とルーデルはクリュウを突き飛ばすようにして離れる。が、椅子に座っていたクリュウは背中を椅子に押し付けられるので基本は動いていないが。
「大丈夫?　さっきから顔が赤いけど、熱でもあるの?」
　クリュウは心配そうに立ち上がると距離を置いたルーデルの方へ近づく。しかしルーデルは「く、来るな変態ッ」と怒鳴りながら後ずさり。
　クリュウから避けるように後退しているうちに、あっという間に壁際に追い込まれる。
「くぅ……ッ」

「いや、そんな仇敵に追い込まれたような顔をされても困るんだけど」
クリュウは苦笑しながらスッと手を伸ばすと、そっと彼女の額に手を当てる。その瞬間、ルーデルがビクッと震える。
「うーん、やっぱり少し熱があるんじゃない？」
「う……」
「う？」
「うっさあああああぁぁぁぁぁぁいッ！」
ルーデルは顔を真っ赤したまま突然怒り出して目の前のクリュウを突き飛ばすと、「ふえええええええええんッ」と泣きながら部屋を飛び出して行った。
「る、ルーッ!? どうしたのよ一体ッ!?」
部屋の前まで着ていたフィーリア達は突然泣きながら部屋を出てきたルーデルにびっくりする。しかしルーデルはこちらがまるで見えていないのか反対方向へ全速力で走っていく。フィーリアが慌てて追いかけ、残されたのはサクラ、シルフィード、エレナの三人。
三人は何となく予想しながら部屋に入ると、そこで床に転がって気絶しているクリュウを見つけ、三人揃って小さくため息を吐く。
「あいつ、また何かやらかしたわね……」
「……クリュウのバカ」
「ある意味才能だな……」
珍しく、誰もクリュウを助け起こさないのであった。

第１４６話　一世一代の大直訴　彼を想う恋姫達の決断

意識を取り戻したクリュウはシルフィード達と共に侍女に連れられて大広間へと通された。大理石のタイルが敷き詰められ、絢爛豪華な装飾が施された大きな部屋。中央には長テーブルが部屋の左右を分断し、そこにはすでに数人の侍女と執事らしき男が控えている。テーブルの上にはお茶会の用意がすでに整われていた。

四人は侍女に案内されるままに席に座る。程なくしてルーデルを連れてフィーリアもやって来て、とりあえず未成年組は全員揃った訳だ。

席順は左側にフィーリア、クリュウ、サクラの三人が。右側にルーデル、エレナ、シルフィードの三人がそれぞれ腰掛けている。

クリュウから斜め前に位置するルーデルは先程からクリュウに一切目を向けようとはせず、クリュウは困ったように頬を掻く。そしてそんなクリュウを見て呆れる女子陣。何とも複雑な構成だ。

ちなみにそれぞれの衣装を説明するとフィーリアは白を基調に黒で装飾された、所謂ゴシックロリータ調のドレスを身に纏っている。スカートが膨らんだ白いワンピースの胸元には赤い紐が網のように結ばれ、胸元でかわいくリボン結びにされている。そのワンピースの上から黒いオシャレ上着を纏い、白の清楚さに黒いかわいさを加える。白いスカートの左右と後ろの上部分が黒に隠れ、半袖の袖部分も黒い。最後に腰で大きな黒いリボンで固定している。

フィーリアのかわいさを見事に引き出したデザインのドレスだ。それに合わせるようにいつもは下ろしている髪をツインテールに結っているのもまたかわいらしい。

エレナは赤系を基調とした服を着ている。白いシャツに赤いチェック柄のスカート。腰は前を編み上げた黒い革地のコルセットで締め、足には黒いレース状のレギンスと長い茶色の革ブーツ。最後に胸元には赤い紐ネクタイでかわいらしさを出した、フィーリアとは

また違ったかわいらしいデザインの衣装。
どちらもレヴェリ家で用意された衣装であり、これを買い揃えたのはレヴェリ公爵だそうだ。道理でフィーリア好みのかわいらしい衣装な訳だ。エレナは「私には合わないわよ」と頬を赤らめていたが、フィーリアは「すごくお似合いですよッ」と心の底から賞賛する。すると、「そ、そう？」と実はエレナも満更でもない様子。
一方、シルフィードとサクラはクリュウと同じ持ち込みの衣装だ。
シルフィードは以前アシュアに無理やり着させられ、クリュウに大絶賛されたあのドレス。
纏うのは美しい湖をイメージさせる薄い水色のドレス。胸元を強調するように首と胸で服全体を支えるホルターネックと言われる形のドレスだ。胸元には濃い水色のリボンが結びさりげなく可憐さも残し、純白の付け袖の袖先が濃い青色の紐でリボン結びにされている所もまたかわいらしい。
全体的にセクシーな感じだが、だからと言って大人な雰囲気を全面に押し出すのではなくあくまで健全な色気を基調としたデザインのドレス。だからこそ、純情な娘であるシルフィードに良く似合っている。ドレスに合わせていつもは結ってポニーテールにしている髪も下ろし、紫色の花を集めた花束をイメージした簪（かんざし）や銀色のチェーンにマカライト鉱石の欠片をはめ込んだネックレスなどのアクセサリーも素敵だ。
人前で苦手なドレス姿になっているシルフィードは終始頬を赤らめたままうつむいている。彼女らしくなく、緊張しているらしい。まぁ、慣れないドレス姿というのは彼女にしてみればかなり気力のいる状態なのだろう。いくらフィーリアや侍女達に「きれい」とか「かわいい」とか言われてもそれは彼女を追い詰めるだけでしかない。
隣に座る、程度は違うが同じような状況に置かれているエレナがそっと彼女の背中を叩く。それだけが、今のシルフィードにとっては心の支えであった。
一方、同じ持ち込みの衣装でも威風堂々としているのはサクラだ。彼女も以前クリュウが買ってくれたあの赤いワンピースに身を包ん

でいる。
全体的に大人な雰囲気の赤いワンピース。だが決して過剰ではなく適度に飾り付けられたフリルがかわいらしさも忘れない。下地は黒なので彼女のイメージカラーとも言うべき赤と黒が組み合わさっている。上生地の赤い部分は大きく少し大胆に開いているが、黒い下生地がフリルのように胸元を優しく隠すという少し凝ったデザイン。彼女の流れるような細いスタイルだからこそ成せる芸術だ。
サクラに良く似合っており、尚且つクリュウに買ってもらったというある意味ここにいる全員の服の中で最強のアドバンテージを持つ一品。いつも村で着ているような和服ではなくわざわざこれを選んだのはクリュウが選んだ服はここにいる誰にも負けないという自信と、これこそ自分がクリュウに愛されている証拠だと言いたげな強調の表れ。服装からしてすでにケンカを売っているようだが、悔しい事にすごく似合っている。
そんなそれぞれの勝負服とも言える女子陣の武装。すでに一通りクリュウはそれらの服を賞賛している。というか感想を述べるよう迫られたのだが。
ようやく女子陣の衣装褒めが終わった所で、今度はフィーリアがクリュウの服装を賞賛する。
「クリュウ様もよくお似合いですよ。かっこいいですぅッ」
「そっかな？　ありがとう」
フィーリアの絶賛にクリュウは照れたように頬を赤らめながら笑う。フィーリアに同調するようにようやく慣れたというか諦めがついたシルフィードも話題の中に入ってきた。
「君がそんな服を持っていたとは意外だったな」
「まぁ、最後に着たのは訓練学校の卒業式以来だからね。みんなが知らないのは当然だよ」
クリュウの説明にフィーリア達は納得したようにうなずく。なるほど、そういう事情なら自分達が彼のその格好を知らないのも納得できる。
「よく似合っているぞ」

「ありがと」」
シルフィードにも褒められ、クリュウは少し照れながらも嬉しそうに微笑む。そんな彼の横から、そっとテーブルの下で引っ張る手。振り向くと、ジッとこちらを見詰めているサクラと目が合った。
「サクラ？」
「……かっこいいわ、クリュウ」
「あ、ありがとう」
口元に小さな微笑を浮かべて言うサクラの言葉に一瞬驚くも、すぐに微笑むクリュウ。そんな彼を正面から見詰めるエレナはプイッとそっぽを向いて唇を尖らせる。
「フン、何いい気になってんのよ。せっかくのかっこいい服もあんたが着ると情け無さが滲み出して見るに絶えないわよ」
「あはははは……」
エレナの酷評にクリュウはちょっぴりショックを受けながら苦笑を浮かべる。すかさず珍しくフィーリアとサクラがタッグを組んでエレナに反論し、エレナはバツの悪そうな顔でそっぽを向いて逃げる。
シルフィードは呆れたようにため息を零し、同じような表情を浮かべているルーデルと視線が合うと、互いに苦笑を浮かべ合った。
そんないつものノリを見事に展開するクリュウ達だったが、しばらくするとフィーリアの父シュバルツ、母ヴァネッサ、そしてセレスティーナが三人揃って大広間へと入ってきた。
六人は一斉に立ち上がって三人を迎えるが、セレスティーナが優しく「座ってていいわよ」と促し、六人は静かに席に腰掛ける。
長テーブルの上座にシュバルツが座り、その横でシルフィード達の側にヴァネッサが、その対面でフィーリアの隣にセレスティーナがそれぞれ腰掛ける。
面子が揃い、侍女は執事達が動き始め、いよいよお茶会が開始される――クリュウの、戦いもまた。
お茶会が開始されて五分が経ったが、すでに場の空気は限界に達しつつあった。

お茶会とは名ばかりに、楽しい談笑もなければ優雅な笑顔も一切無い。あるのは気まずい沈黙と、フィーリアの両親の鉄のような無表情と何とか会話を成り立たせようとがんばる娘二人の万策尽きたと言いたげな苦笑、そしてクリュウ達の何とも気まずそうな表情だけ。

直談判するはずだったクリュウも、あまりの気まずさに小鳥のさえずり程の声を出す事もできず、ずっと無言でお茶を飲む。きっと高級でおいしいお茶なのだろうが、極度の緊張状態のせいでほとんど味がわからない。

そんな不気味な沈黙が限界に達した頃、カチャンと一際大きな音を立ててカップを置いた者がいた。音を立てないという礼儀作法をまるで無視した者に、全員の視線が集中する。そんな暴挙をやってのけたのは、ある意味礼儀とか作法とは最も縁遠く、なおかつこの気まずい雰囲気の中で一切表情を崩さずに無表情を貫き続ける猛者――サクラ。

ずっと閉じられていた隻眼が、ゆっくりと、鋭く、不気味に、開かれる。

「……招かれざる客というなら、私は帰るわ」

変化球無しの直球的な物言い。それはここにいる皆が思っていても、決して口には出さなかった核心。あ然とする一同の視線など何のその。氷の無表情を貫くサクラは冷徹にフィーリアの両親を睨みつける。

「……フィーリアの両親だか貴族だか知らないけど、ずいぶんと臆病なのね。言いたい事があるならハッキリ言えばいい。私達平民は、腹を割って話す覚悟などとうにできている」

サクラは椅子から立ち上がり、憮然とした表情で仁王立ちしながらレヴェリ公爵夫妻を睨みつける。煌く瞳に宿るのは本気の光。

冷戦状態からいきなりの宣戦布告。クリュウは慌ててサクラを止めようと腕を伸ばすが、サクラはそれをさらりと回避する。そして、さらに驚くべき発言を繰り返す。

「……私はね、貴族が嫌いなのよ。何の努力もしないで莫大な富を得て、下々から金を巻きあげて優雅に暮らす。何ともいいご身分ね」

空気が凍りつく音がした。
サクラのあまりにも無茶苦茶な発言の数々に、一同は開いた口が閉じられない様子。しかし、レヴェリ夫妻はそれでも一切の表情を崩さない。その余裕な態度が、サクラの静かなる怒りを燃え上がらせる。
「……私は、一度地獄を経験してる。だから、金持ちとか努力をしない奴が一番嫌い。正直、同じ空気を吸っている今は、苦行以外の何ものでもないわ」
もはや会合どころかお茶会すらも粉砕する勢いで言葉を吐き出すサクラ。クリュウやシルフィード、エレナはサクラの容赦がなさ過ぎる発言の連続に顔を真っ青にし、セレスティーナも困惑している。
サクラはしかし、静かに続ける。
「――でも、あなた達は私の親友の家族なのよ」
サクラのものすごい貴族罵声に貴族出身のフィーリアはそりゃあもう今にも泣き出しそうな勢いだったが、その言葉に伏せていた顔を上げる。そこには、いつもの無表情とは違う、小さな笑みを浮かべた友が立っていた。
「……迷惑なくらいお節介で、バカみたいに優しくて、いつも頭の中がお花畑いっぱいの万年小春日和娘だけど――私にとっては、たった一人しかいない親友よ。その親友を悲しませるような事をするなら、私は例えその両親であろうが、貴族であろうが容赦はしない――特に、私とフィーリアが共通に悲しむ事をすれば、その時は一切の容赦なく」
サクラは本気の瞳を輝かせ、スカートの下からどこに入れていたのかとツッコミを入れるのを忘れる程優雅に、そして自然に飛竜刀【翠】を引き抜く。
瞳と同じように不気味に輝く刀身。サクラはいつでも斬りかかれる必殺の構えを取る。
「――斬る」
突然のサクラの武装にいよいよ事態は混沌としていく。何も知らない侍女達は壁際で怯え、クリュウ達はすっかり呆気に取られている。その中で、フィーリアはほろほろと涙を流していた。

ずっと一緒にいて、初めて言われた。
……私の親友。
ずっと、心の中で自分が思っていた事。でも、きっと向こうは自分の事をそんな風には考えていないと思っていた。
だけど、彼女も自分の事をそう想ってくれていた。
サクラが、自分の事を親友だと言ってくれた……
きっと、クリュウに好きだと言われる次くらいに嬉しい言葉。
フィーリアは嬉しくて嬉しくて、笑いながらボロボロと涙を流す。
「あ、ありがとうございますッ」
フィーリアの泣きながらのお礼に、サクラは「フンッ」と鼻を鳴らして刀をしまい、そっぽを向く。その頬は心なしか赤らんでいるように見える。
――優しく、拍手の音が鳴り響いた。
全員が視線を向けたのはこの長テーブルの上座にして、この家、さらにはこのレヴェリ領全体を治める長――シュバルツ・レヴェリ公爵。
先程までの冷徹な無表情は消え、静かに微笑むその姿は良き父と言った具合か。呆気に取られるサクラを一瞥し、嬉し泣きしている娘を、優しく見詰める。
「フィーリア」
父に名を呼ばれ、フィーリアは慌てて涙をぐしぐしと拭い父シュバルツに向き合う。緊張する娘を見詰め、シュバルツは優しく微笑む。
「――良い友を得たな」
フィーリアは止まらない涙をボロボロと流しながら、満面の笑みを受かべて「はいッ」とうなずく。そんな彼女を、姉のセレスティーナも優しげに見守る。
その時、それまでずっと沈黙していたフィーリアの母、ヴァネッサがゆっくりと音を立てずにティーカップを置いた。ゆっくりと閉じていた瞳を開くと、サクラに勝るとも劣らない鋭い眼光で彼女を射ぬく。
「目上の者に対するものとは思えない無礼極まりない発言に加え、自

分の置かれている状況を理解せずに感情に任せて武器を抜く。まったく、礼儀や常識をまるで知らない根っからの平民の小娘ね」
表情を幾らか和らげたシュバルツも妻の冷徹な発言に表情をまた険しくさせる。それに対しフィーリアとセレスティーナの表情もまた暗くなる。二人の様子を見るに、どうやら父シュバルツよりも母ヴァネッサの方が理解を得るのは難しいらしい。
全身から周りを威圧するような迫力が滲み出ている。権力を持つ者としての威厳に満ち溢れた姿だ。かっこ良くもあり、恐ろしい。
しかしサクラはそんなヴァネッサの視線を受けても一貫して無表情を貫く。彼女の鋼の心もまた筋金入りだ。ふざけた事をぬかせば斬り殺す。そう言いたげな迫力は今も周囲に振りまいている。
しばしの沈黙が続いた。すると、それまで険しい表情を浮かべていたヴァネッサの口元にほんの少しだけ笑み浮かんだ。その変化に、この場にいた全員が驚愕の表情を浮かべる。
「礼儀や常識を知らず、感情的に動き回り、どんな苦難にもめげずに立ち向かうバカ――そういうの、嫌いじゃないわ。何せ、私はそんな世間知らずな平民の出ですからね」
それだけ言うと、ヴァネッサは再び表情を引き締めて無言でお茶を飲む。あまりの変化の早さに呆然としていたクリュウ達だったが、次第次第に状況を理解し始める。
――気まずかった状況が、幾分か好転していた。
嵐のように暴れ終えたサクラは静かに席に戻る。呆然と彼女を見詰めていると、サクラはこちらに向いて小さく微笑んだ。それを見て、クリュウは理解する。
「サクラ……」
あれは彼女なりの根回しのつもりだったのだろう。やり方は無茶苦茶だが、実に彼女らしい強引だが真っ直ぐな方法。おかげで事実気まずい状況は幾分か和らいだ。
クリュウがサクラに小声で「ありがと」と言うと、サクラは無言で小さく首を横に振った。彼女なりの大した事じゃない、気にするなという表現だ。そして、サクラはまるで抜刀した刀を再び鞘に戻すよう

に、鋭かった瞳をゆっくりと閉じる。
クリュウは心の中で彼女にもう一度感謝の言葉を述べると、覚悟を決めて声を上げる。
「あの、レヴェリ公爵。今回ここへ来たのは、ある目的の為なのです」
勇気を出してそう切り出した。シュバルツは静かにクリュウの方へ視線を向ける。片目に掛けられたモノクルが不気味に輝き、しっかりと彼を見詰める。その迫力にクリュウは思わず黙ってしまいそうになったが、それを乗り越えて言葉を紡ぐ。
「目的？　それは、君がわざわざ遠方の村から出向くだけの価値があるのだな」
シュバルツの問い掛けにクリュウはしっかりとうなずく。そんな彼の覚悟をしている瞳を見詰めたまま、シュバルツは「述べてみよ」と話を促す。
クリュウは一瞬ルーデルの方を見た。すると、ルーデルは瞳で「言うべきタイミングだと思うなら、言いなさい」と後押ししてくれる。クリュウはうなずき、今回の遠征の目的を話した。
それは証拠もなければ有力な情報もないバクチにすらならない作戦だった。彼がわざわざ村を出た理由は、あまりにも巨大で、あまりにも具体性がなくて、あまりにも無茶苦茶だ。
普通に聞けば時間の無駄もいい所な内容だが、その中身の無さを彼は必死の訴えで補う。
母の事が知りたい。母の故郷に行きたい。親を想う子の気持ちを、必死になって訴える。
クリュウが訴えている間、フィーリア達は皆黙ってそれを待つ。本当は何か手助けをしてやりたい気持ちはあるのだが、その方法がなければ彼の熱意に入る隙もない為、黙って静観を続ける他ない。
必死になって状況の説明をし終えたクリュウは、いよいよ核心に触れる。一度大きく深呼吸して興奮を抑えながら、静かに、しかし明確な決意と共に進言する。
「――僕はアルトリアへ行きたい。その為に、レヴェリ公爵にはエルバーフェルド政府に働きかけてほしいのです。どうか、アルトリアへ

行く道を作ってください」
　クリュウはそう願い、頭を下げた。深く頭を下げる彼を、辛そうにフィーリアが見詰める。本当はそんな事させたくはないが、末娘の自分にできる事は限られている。自分が許可を出す事も、政府に訴える事もできない。それができるのは、父だけだ。
「勝手なお願いだという事は重々承知しております。しかし、僕には他に方法がないのです。どうか、お願いします……ッ」
　そして、クリュウは膝を折り、地面に頭を着ける。
　彼の必死な土下座での願いを見て、シルフィードは苦しげに唇を噛んだ。そして、静かに立ち上がる。
「彼の願いは、そちらに何の利益もない一方的なお願いです。この願いを棄却するのは容易で、もちろんそちらの自由です」
　シルフィードの発言にサクラの瞳が鋭くなる。だがシルフィードは「焦るな」と瞳で言うと、「しかし……」と言葉を繋げる。
「今こうして一人の少年が、長旅を経てここへ来て、必死に願いを訴え、協力をしてもらいやく頭を下げております。勝手な願いだというのは我々も重々承知の上です。ですが、彼の必死さは伝わっているだろうと思われます。その必死さを見て、貴殿はどうお考えになるか。どうか……お力添えをいただきたく」
　シルフィードも静かに膝を折り、彼の横に並んで頭を下げる。二人揃っての土下座にクリュウが話始めてからずっと目を閉じていたヴァネッサがゆっくりと瞳を開いた。
　その視線の先では、いつの間にかサクラまでクリュウの隣で頭を下げていた。クリュウ以外には絶対に頭を下げないサクラが、彼の為にプライドをかなぐり捨てて頭を下げている。その光景に、フィーリアは泣きそうになった。彼女を知っているからこそ、今の彼女の姿からその覚悟がわかる。
　エレナも無言でサクラの隣で頭を下げた。彼女もまたプライドというか負けず嫌いな子だ。当然、人に頭を下げるという行為は嫌で嫌で仕方が無いだろう。でも、そのプライドを捨ててでも、クリュウの力になると彼女は決めていた。

幼なじみの母親で、自分も大好きだった人の事を知りたい。その気持ちは、本物だ。何より、クリュウの為だからこそ、こうして必死になって頭を下げているのだ。
一緒になって土下座してくれる仲間を見て、クリュウは泣きそうになる。でも、まだここでは泣かない。涙を堪え、皆の気持ちを無駄にしない為に、必死になって頭を下げ続ける。
「当主様、私からもお願いいたします。ルーデル・シュトゥーカ、我が生涯一度切りのお願いでございます」
土下座する四人の横で、ルーデルも静かに頭を下げた。四人のように土下座はしないが、それでも深々と頭を下げてのお願い。今まで、レヴェリ家には忠誠を誓いどんな命令でも従ってきたルーデルの最初で最後のお願い。それは、自分の為でも大好きな親友フィーリアの為でもなく――もう一人の親友と心から想う、クリュウの為だった。
彼は自分の身の上を知った上で、フィーリアのように変わらずに自分と接してくれた。
忌々しい過去の傷跡を見ても、不快さを一切見せずに、優しく接してくれた。その優しさに、どれだけ救われた事か――だから、今度は自分が彼を救う番。そう、心から信じて疑わない。
皆が、必死になって父に訴えている。それを見て泣きそうになるフィーリアはシュバルツの傍へ行って――土下座した。
「お父様ッ。お願いいたしますッ」
実の父親に対しての必死の土下座だ。これには冷静に事を見守っていたセレスティーナとシュバルツは目を見張る。
「ふぃ、フィーリア……」
「……私も覚悟は決めております、お父様」
フィーリアはゆっくりと顔を上げると、渋る父に向かって自分の持つ最後の切札を使う。
「聞き入れてもらえなければ――私はレヴェリの名を捨てる覚悟です」
これにはこの場にいた全員が驚く。皆、フィーリアの必死の形相を見て、彼女の本気を悟る。

レヴェリの名を捨てる。それはつまり、家族と縁を切るという意味だ。大好きな家族と縁を切る、そんな覚悟を以て彼女は必死に父に頼み込む。
部屋の中で、若者五人が土下座をし、一人が深々と頭を下げている。しかもそのうちの一人は実の娘で、家族と縁を切る覚悟までしている。これにはさすがのシュバルツも表情を険しくさせる。
クリュウはもっと強く願おうともう一度声を発しようと頭を上げた時、今までずっと黙っていたヴァネッサが静かに夫を見る。
「……あなた、いつまでも結論を出し渋るのは大人気ないですわよ。とうに結論が出ているのなら、さっさと言ってくださいまし」
冷徹な無表情の中に、一瞬優しげな笑みが浮かんだような気がした。
ヴァネッサの言葉に、シュバルツは静かに頷く。そして、頭を下げているクリュウ達を見詰め、「顔を上げよ少年」と重々しく口を開く。
ゆっくりと顔を上げると、シュバルツは真剣な表情のまま静かにため息を零す。
「……侍従長、グローセ総統閣下に一報を送ってくれ。レヴェリ家はアルトリアへ私情で特使を派遣したい。早急の返答を求む、とな」
クリュウは我が耳を疑った。今、シュバルツは何と言ったのか。
呆然とした表情のまま自分を見詰めるクリュウ達の視線を一瞥し、シュバルツは今も自分の横で跪いている愛娘を悲しげな表情で見やる。
「……私の大切なフィーリアよ。お前は私の何だ？」
「娘です。レヴェリ家三女、フィーリア・レヴェリ」
静かに答えるフィーリアの頭を、シュバルツはそっと優しく撫でた。
「娘なら、父親に頭を下げる必要などない。ただ、頼めばいい。父は、本気の覚悟をしている娘を止められる程、非情な生き物ではない。お前は私の大切な娘だ。そのお前が決めた事なら、私は全力で応援する――例え、それがレヴェリの名に相応しくない道でも、父親として、娘の幸せは応援するさ」

その言葉に、フィーリアはずっと堪えていた涙が決壊する。ボロボロと泣きながら、フィーリアは父シュバルツの腕の中に飛び込んだ。
それは、自分がハンターの道へ進みたいと願った時。散々反対されて生まれて始めて家族と大ゲンカをした、今の自分の原点。必死の説得を続けて、最後には許してもらえたあの時。ため息混じりに父が言っていた言葉と同じ。
――レヴェリの名に相応しくない道でも、父親として、娘の幸せは応援するさ。
あの言葉が後押ししてくれたからこそ、自分はハンターの世界でどんな壁にぶち当たっても乗り越えられてきた。
それと同じ言葉を、こうしてまた言ってくれた。自分の選んだ道を、父親はちゃんと応援してくれる。その事実が、嬉しくて嬉しくて仕方がない。
腕の中で泣き崩れる娘を、シュバルツは愛おしげに慈しむ。その姿を、ヴァネッサが口元に小さな笑を浮かべ、セレスティーナが満面の笑みで見詰める。
愛娘の頭を撫でながら、シュバルツはクリュウ達の方へ向き直る。
「娘の友人の願いだ。それに、子供だと思っていた娘がこうして必死の覚悟を以て父の前で頭を下げた。それをするだけの価値が、君達に――君にあるのだな」
口元に小さな笑みを浮かべて言うシュバルツの言葉に、クリュウはようやく自分の願いが聞き入れてもらえたという現実を理解した。
「あ、ありがとうございますッ！」
不安から一転して歓喜に変わった。満面の笑顔で礼を言うクリュウを見て、シュバルツの表情が険しくなる。
「勘違いするでない。私は貴様の願いを聞き入れた訳ではない。私はあくまで、娘の願いを聞き入れたに過ぎない」
「まぁ、素直でなくて」
「う、うるさい」
からかうように言うヴァネッサの言葉に、シュバルツは不機嫌そうに鼻を鳴らす。心なしか、その頬は赤らんで見える。そんな父を見

て、「お父様、大好きですッ」とフィーリアはシュバルツの頬に接吻する。その瞬間、厳格なレヴェリ家当主の顔が崩れる。
「私も大好きだぞ、我が愛しの娘フィーリアよッ」
抱き合う仲の良い親子の姿を、微笑ましげに見詰める一同。そんな中でクリュウはほっと胸を撫で下ろしていた。そんな彼の背中を、誰かがそっと叩く。振り返ると、口元に微笑を浮かべたサクラがジッと隻眼で自分を見詰めていた。
「ありがとう、サクラ」
クリュウのお礼の言葉に、サクラは無言で首を横に振る。それが彼女なりの照れ隠しだという事は知っている。クリュウはもう一度「ありがとう」と述べ、立ち上がる。
もう一方の隣で無言で立つシルフィードと目が合った。
「シルフィもありがとう。やっぱりシルフィは頼りになるよ」
「……私は大した事はしてないさ。その言葉は他の奴らに言えばいいさ」
「もちろんみんなにも言うよ。だから、シルフィにもね。ありがとう」
「う、うむ」
胸が軋むような重い心配事の一つが解決した事で、ようやく彼の顔に本当の笑顔が浮かんだ。その純真無垢で真っ直ぐ過ぎる屈託の無い笑みに、シルフィードがピクリと身を震わし、彼に静かに背を向ける。
「エレナもルーデルも、ありがとう」
笑顔でお礼を言うクリュウに対し、「フンッ」と鼻を鳴らして赤らんだ頬を隠すようにそっぽを向くエレナと呆れたような表情を浮かべるルーデル。
「べ、別にあんたの為じゃないわよ。あくまで私個人としてアメリアさんの事が知りたいだけ」
「そもそもやっと出発点に辿り着いたってだけなのに、何をそんなバカ喜びしてる訳？　そんな楽観主義でどうするのよ」
「シュトゥーカの言う通りよ。まだまだこれからよ」
「あ、私の事はルーデルでいいわよ。その代わり、私もあんたの事はエ

レナって呼ぶから」
「え？　あ、そうね」
　まるで一瞬前までクリュウに呆れていたのがウソのように態度を変えてフレンドリーに接してくるルーデルに、エレナは困惑しながらも笑顔で答える。何となく自分と似ているルーデルとは気が合いそう、そんな予感がしていた。
　名前で呼び合う仲になったツンデレ二人組を嬉しそうに見詰めるクリュウ。すると、そんな彼の背後に近づく者がいた。振り返ると、そこにはもじもじと胸の前で指をいじりながらうつむくフィーリアが。
「フィーリア……」
　フィーリアは顔を一瞬もたげて上目遣いでクリュウを見て口を開きかけては恥ずかしそうに目を落とし、口を閉じる。それを何度か繰り返す。そんな彼女の様子を見たクリュウは何かを悟ると、優しげな笑みを浮かべた。
「ありがとうフィーリア」
　その言葉を待っていたのだろう。フィーリアはそれを聞くと嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。その無邪気な笑顔には、彼に感謝された事が心から嬉しくて仕方がないと書いてある。
　クリュウ達の空気がようやく朗らかになった一方で、満面の笑みを浮かべるフィーリアと彼女と対峙するクリュウをジッと見詰めるシュバルツ。心なしか、その表情が険しい。そんな彼の様子を見て、ヴァネッサとセレスティーナはこっそりとため息を零す。
「……問題はここからなのよね、がんばってねクー君」
　セレスティーナの言葉通り、クリュウの本当の戦いはここからであった。
「君は娘とはどんな関係だ？」
　クリュウ達が席に戻り、お茶会が再開された一発目のシュバルツの言葉がそれだった。
　父の突然の質問にフィーリアは顔を真っ赤にして慌てふためき、問い掛けられたクリュウはきょとんとしている。突然過ぎる展開に他

の一同も同じような反応だ。そんな中でシュバルツだけは真剣な、どこか恐ろしい剣幕を秘めた表情のままクリュウを睨むように見詰めている。
　シュバルツの鋭い眼光にクリュウは表情を強ばらせながら「ど、どんな関係と申されましても……」と困ったように、頼るようにシルフィードを見るが、シルフィードはクリュウと目を合わせるのを避けるように逸らす。こればっかりはシルフィードも助けようがない。
　クリュウは困ったように少し考え、「な、仲間です。大切な、かけがえの無い戦友です」と答える。その言葉にフィーリアは複雑そうな表情を浮かべた。彼女としては《仲間》という扱いでは寂しいが、《大切な》《かけがえの無い》という嬉しい言葉も入っており、どんな表情を浮かべていいか困っているようだ。
　一方、そんな娘の反応を見てシュバルツの表情がさらに険しくなる。
「君は娘と一緒の屋根の下で暮らしているらしいが、娘に妙な事はしていないだろうな？」
　威圧するような視線での問い掛けに、クリュウはすぐに否定はできなかった。恐怖と共に思い出されたのは、まぁ事故だ。そりゃ一緒に暮らしているのだから事故は時たまある。フィーリアの裸も一瞬ではあれ見た事もあるし。
　そんな事を考えていた為に否定が少し遅れてしまったクリュウ。そしてそんな彼を見て同じくそのシーンを思い出したのか顔を真っ赤にしたフィーリアが慌てて「そ、そんな事ないですよお父様ッ！本当ですッ！」と否定するが、時既に遅し。むしろその必死さが立証となってしまうという不のスパイラル。
　シュバルツの表情がいよいよ険しさも限界に達する。もはやキレる一歩手前くらい。そんな彼を見て呆れるのは妻ヴァネッサと長女セレスティーナ。シュバルツの親バカっぷりをよぉく知っている二人ならではのため息だ。
　シュバルツは静かに燃え上がる怒りの炎を瞳に輝かせ、クリュウを射抜く。その姿はさながら怒り狂うディアブロスのような気迫だ。

クリュウは恐怖のあまり、顔を真っ青にして硬直する。
「ルナリーフ君と言ったか。一つ忠告しておくぞ」
不気味に、シュバルツの瞳が煌く。
「――娘に妙な真似をしたら、その時は我が隷下のレヴェリ軍が国境を越えて貴様の首を討つ。ゆめゆめ疑う事なきように」
シュバルツの本気の忠告と言う名の脅迫に、クリュウは顔を真っ青にしながら何度も激しく首を縦に振った。
一方、先程までは顔を真っ赤にしていたフィーリアも父の発言に顔を真っ青にして愕然としている。クリュウの方を見ると一瞬目が合ったが、すぐに彼の方が逸らしてしまう。どうやら、必要以上に効いてしまったらしい。目を避けられた事に、フィーリアは泣きそうになる。
そんな二人と父の姿を見て、セレスティーナは困ったようにため息を零すのであった。
その後もクリュウに対する尋問（？）は小一時間程続き、ようやくお茶会が終わる頃にはクリュウはすっかりシュバルツを恐怖の対象として怯えてしまうのであった。

第１４７話　心すれ違って　そして本心と向き合って

お茶会と言う名の拷問から解放されたクリュウはすっかり疲れ切っており、その横ではフィーリアが必死になって頭を下げている。
今ここは先程クリュウ達が一度集まった待合室。もう少しすると侍女がそれぞれの部屋まで案内してくれる手はずになっているが、それまではここで待機という訳だ。
「ほ、本当にお父様がとんだご無礼を……」
父親の容赦のない尋問に対する非礼を必死に詫びるフィーリア。彼女自身父の容赦のない質問の連続に少なからずダメージを受けてはいたが、その直撃を全弾受けたクリュウの比ではない。
クリュウは疲れ切った表情を浮かべながらも「まぁ、君を心配しての事だから。気にしないで」と微笑で返す。
「とんだ災難だったな。まぁ、身から出た錆だな」
おかしそうに笑いながら言うのはシルフィード。ため息を零す彼の背中をポンと叩くと、手頃な席を見つけて腰掛ける。
「まぁ、見てる分には面白かったけどねぇ～」
ケラケラと笑いながら言うルーデルに、「笑い事じゃないよぉ……」とクリュウは力なく答える。
「でも驚いた。フィーリアの両親って言うからもっと優しくていつも笑顔な、それこそセレスティーナさんみたいな人だと思ってたのに」
エレナのレヴェリ夫妻の正直な印象に、フィーリアは小さく苦笑を浮かべる。
「お父様もお母様もとてもお優しい方ですよ。ただ、レヴェリの誇りという重責を背負っているから、何も背負っていない私のように笑ってはいられないんです――そもそも、親に似ない子供は生まれませんよ」
フィーリアの至極当然な意見に「まぁ、それもそうね。確かにお父さんはすごく親バカ全開な人だったし、怖いけどお母さんも根は優し

そうだったしね」と納得するエレナ。
「根っこの部分では、フィーリアによく似てるかもしれないわね」
「えへへ……」
　エレナの言葉にフィーリアは嬉しそうにはにかむ。すると、そんな彼女の肩に手を回し、グイッと自分の方へ引き寄せるルーデル。
「何よ何よぉ～。当主様の前でかっこいい事しちゃってぇ～。何が「私はレヴェリの名を捨てる覚悟です」よぉ～。このこのぉ～」
　フィーリアに抱きつきながら彼女の柔らかい頬を指先でツンツンと突き、彼女をからかうルーデル。そんな親友の言動にフィーリアは顔を真っ赤にして狼狽する。
「べ、別にそういうつもりで言ったんじゃないもん」
「何よぉ～。照れちゃってかわいいぃ～なぁ。このこのぉ～」
　照れるフィーリアがかわいいのか、ケラケラ笑いながら彼女をからかうルーデル。すると、そんないじわるな親友に反撃とばかりにフィーリアが噛み付く。
「そ、それを言うならルーデルだって「ルーデル・シュトゥーカ、我が生涯一度切りのお願いでございます」なんてかっこつけてたじゃない」
　フィーリアの思わぬ反撃に今度はルーデルの方が狼狽する。
「あ、あれは別にそういうつもりで言った訳じゃないわよッ」
「何が生涯一度切りのお願いよ。それお父様の前で五、六回くらい言ってるじゃない」
「冗談言わないでよッ！　これが三回目よッ！」
「あ、やっぱり一度切りじゃないんだね」
　見事に墓穴を掘ったルーデルを見て、クリュウは小さく苦笑を浮かべる。するとすぐにルーデルは「う、うるさいわねッ！　あんたは黙ってなさいッ！」と激怒する。クリュウは苦笑を浮かべながら彼女から視線を逸らす。すると、いつの間にか隣に立っていたサクラと目が合う。
「……お疲れ様」
「あ、うん。でも一番がんばったのはサクラだよ。ありがとうね」
　サクラは静かに首を横に振る。

「……私はきっかけを作ったに過ぎない。本当にがんばったのはクリュウ」
「そうかな？　僕は必死だったからあまりよくわかんないや」
「……クリュウ、かっこ良かった」
「かっこいいかな？　情けなく土下座してただけだよ？」
「……目的の為なら自分のプライドも捨てて邁進するクリュウの姿は、とてもかっこ良かった」
　そっとクリュウの手を握り締め、熱を帯びた視線を送るサクラ。そんな彼女の姿、それもいつもとは違うドレス姿にクリュウの顔がカァッを赤く染まる。
「あ、ありがとう……」
「……クリュウ、いい子いい子」
　サクラは呆然としているクリュウの頭を良し良しと撫でる。同じくらいの身長だが、一瞬だけその大人びた姿がまるで彼の姉のように見えた。
　クリュウは恥ずかしそうに頬を赤らめながらそれを素直に受け入れる。不思議と嫌な気はしなかった。
「どうしたのさ突然」
「……いつものお返し」
　きっといつも彼が自分にしてくれる事と彼女は同じ事をしているつもりなのだろう。小さく口元に笑みを浮かべながら、彼女は彼の頭を撫で続ける。
　そんな傍目に見ても仲良さげな二人を悔しげに見詰める者が約三名。
「うぅ、何でいつもサクラ様ばっかり……」
「フン、鼻の下伸ばしちゃってさ」
「何よ。私やフィーちゃんだって頑張ったのにさ」
　そんなふて腐れる乙女たちをシルフィードは苦笑しながら見詰める。
「まったく、罪作りな奴だな君は」
「え？　何か言ったシルフィ？」

「何でもないさ。どうせ言っても無駄だろうしな」
シルフィードの発言にクリュウは首を傾げる。そんな彼の横でサクラがじっと彼女を睨む。余計な事を言うなという威嚇なのだろう。シルフィードは何も言わないさと言いたげに肩を竦ませる。
シルフィードはクリュウとサクラから離れると、部屋全体を見回せる場所に移る。そこで部屋を見回すと、そこには自分の仲間達の姿が見える。だが、女子陣全ての視線は――クリュウに注がれている。
シルフィードはフッと口元に笑みを浮かべた。
「……クリュウ、君はどうしようもないくらいに人を引きつける魅力があるらしいな」
心の中で、シルフィードは「まぁ、女限定だがな」と苦笑しながら付け加えるのであった。
それからしばらくして侍女が客人一人一人を用意された部屋へと案内した。
シルフィード、サクラ、エレナの三人は二階の客室に。クリュウは一階の客室に案内された。客室だけあってフィーリアやルーデルの部屋から離れている事から二人も二階の客室に一時的に部屋を移す事になった。
部屋に案内されたクリュウはその部屋の豪華さに目を見張る。ドンドルマのギルドの宿泊施設で言えばかなり上級のハンターが使う事を許されるクラスの部屋だ。中は豪華な装飾が施され、ベッドは見るからに快適そう。広々としており、一人で使うにはあまりにももったいない程だ。
「ほ、本当にこんなすごい部屋を使っちゃっても？」
「はい。当主様のご命令です」
侍女はそう言って一礼すると、静かに部屋を出て行った。残されたクリュウは興味深げに部屋を見回し、ベッドに腰掛ける。信じられないくらい柔らかい事に驚きつつも、改めてフィーリアはすごいお嬢様なんだなぁと感心する。
クリュウは小さくため息を零すと、ベッドに横になった。
ぼーっと天井を見上げながら、クリュウはもう一度大きなため息を

零す。
「何とかなるもんだなぁ……」
クリュウは改めて自分の常識外れの行動に呆れつつ、しかしまさかその行動がこうもあっさりと開かれた事に内心まだ驚きを隠せない。
「違う……まだやっと出発点に立てただけだ」
クリュウはさらにここから先に広がる無茶難題を想像し、前途多難過ぎて頭を抱える。
あくまで今回得たのはアルトリア行きの切符ではなく、アルトリア行きの切符を売る店の整理券を得たに過ぎない。まだここからエルバーフェルド政府、強いては先日西竜諸国に対して挑発的戦闘を断行したこの国の長、フリードリッヒ・デア・グローセ総統に謁見し、そこでアルトリア行きの願いを聞き入れてもらう。正直、今回のお願いよりも困難であろう事は簡単に予想できる。
もしも成功したとしても、今度はそこから異国アルトリアで母の情報をどう集めるか。
大まかな流れは決まっていても、その実は中身はまるでなく、本筋自体も無茶苦茶だ。
何度思い返しても実に実現性が乏しい無茶苦茶な計画とも言えぬ計画。それに、フィーリア達はついて来てくれているのだ――自分を信じて。
「……何で、僕なんかをあそこまで信じられるんだろ」
当人達を目の前にして言えばクリュウと言えど本気で怒られかねない発言だが、これが彼の素直な感想であった。
なぜ、みんなは自分なんかの無茶苦茶極まりない行動について来てくれるのか――自分に、それだけの価値があるのか。本気で、考えてしまう。
「僕に、それだけの価値があるのかな……」
「――それ以上ふざけた事抜かしたら、マジでブチ殺すわよ」
予期しない声にクリュウは驚愕し、慌てて飛び起きる。振り返ると、そこには不機嫌そうに自分を見下ろすエレナが仁王立ちで立っていた。

「え、エレナッ!?　どこから入ったのッ!?」
「ドアに決まってるでしょ。人を幽霊扱いする前にカギくらいかけておきなさいよ」
　至極当然だと言いたげに答えるエレナ。まぁ、彼女の言う通りカギを掛けておかなかった自分にも責任はあるが、そもそもノック無しで無断で部屋に入って来る方が――まぁ、エレナ相手ではその定義は意味を成さないのだが。
「それで、僕に何か用？」
「別に。あんたに会いに来るのに理由なんて別にいらないし――そうね、強いて言えば今のあんたのふざけた発言かしら？」
　口調こそいつもと変わらないが、そう言うエレナの表情はいつになく厳しい。怒れば火山の大噴火のようにブチギレるエレナが、静かに怒る姿はいつもの怒っている時よりも恐ろしい。
　クリュウはそんなエレナの怒りに恐怖しながらも、努めて平然を装う。
「僕、何かエレナを怒らせるような事言った？」
　そのクリュウの何もわかっていない、証拠と言っても過言ではない発言にエレナの表情が静かなる憤怒に染まる。
「驚いた。鈍感鈍感とは思ってたけど、ここまで人の気持ちを理解できない奴だったなんて……」
「何だよ。言いたい事があるならハッキリ言ってよ」
　エレナの人をバカにするような発言に、クリュウもまた不機嫌そうな表情を浮かべる――刹那、頬に鋭い痛みが走った。
　驚くクリュウは反射的に痛みが走った頬を撫でる。そして、次第に熱を帯びる頬を触りながら、クリュウは理解する――平手打ちされたのだ。
　目の前には身を乗り出し、右腕を左へ一直線に振り抜いた後の体勢でエレナが、鋭い瞳で自分を睨みつけていた。
「――ハッキリ言ってやるわよ」
「エレナ……？」
「何であんたを信じられるのか？　自分にそんな価値があるのか？

信じられるから、それだけの価値があるから、みんなあんたについて来たのよッ！」
　静かなる怒りが、激しい激昂に変わる。エレナはクリュウの首根っこを掴み、無理矢理自分の方に引き寄せる。一瞬で、クリュウとエレナの距離は息が届くくらいに狭まる。
「本当にわからない訳ッ!?　あんたの人間性に引かれたから、今のフィーリア達がいるんじゃないのッ!?　フィーリアはあんたと一緒にいるのが幸せだと思ってるからあんたの傍にいるッ！　サクラも子供の頃からあんたの傍にいる事を願ってたッ！　シルフィードはあんたの力になりたくて村に来てくれたッ！　ルーデルだってあんたを認めたからこそ力になってくれてるッ！　一言で言えばこれっぽっちかもしれないけど、本当はもっともっとたくさんあるんだからッ！」
　クリュウは激しいエレナの怒鳴り声に返す言葉もなく、声を発する事もできず、相槌を打つ事すらできずに無言で聞き手側に徹する他ない。
「みんな、あんたを信じてるからこそ、あんたの力になってくれてるんじゃないのッ!?　どうしてそんなみんなの気持ちもわかってくれない訳ッ!?」
「エレナ……」
「自分にそんな価値があるか？　ふっざけんじゃないわよッ！　価値がない相手と一緒にいて何が楽しい訳ッ!?　価値がない相手だったら、こんな所までついて来たりしないわよッ！　人をバカにするのもいい加減にしてッ！」
　悲鳴のように叫び、エレナはクリュウを突き飛ばす。ベッドの上に背中から倒されたクリュウだったが、柔らかいベッドでは当然痛みなどない。
　身を起こし、エレナの方に向き直り、硬直した。
　――エレナは、泣いていた。
　ボロボロと大粒の涙を零し、小さく嗚咽を繰り返す幼なじみ。いつも強気で、決して他人の前で涙なんて流さない彼女が、恥じる事なく

涙を流している――それも、悔し涙だ。
「エレナ……」
「ふざけんじゃないわよ……ッ！　私だって、私だってあんたと一緒にいたいから……ッ！　あんたの力になりたいと思ったから……ッ！　だから、こんな遠い異国までついて来たのに……ッ！　ふざけんじゃ、ないわよ……ッ！」
エレナは泣きながら何かをクリュウに投げつけた。それはクリュウの顔面に命中し、あまりの痛さにクリュウは悶絶する。
痛みを堪えながら起き上がった時には、そこに彼女の姿はなかった。
痛む顔面を押さえながら、ベッドに転がる投げられたそれを見詰める――元気ドリンコ。
きっと、彼女はこれを届ける為にここに来たのだろう。長旅を経て、あんな無茶苦茶な事をやった自分を、自分なんかを心配して……
そっと、そのビンを握りしめる。ガラスの容器に、一つ二つ水滴が落ちる。
「僕は最低だ……」
吐き捨てるように、クリュウは声を震わせながらつぶやいた。
その夜、夕食会を終えた一行はそれぞれの部屋で休む事になった。そんな中、クリュウは一人城の外にいた。
彼がいたのは城のすぐ裏手にある湖。正式な名前はないが、領民からはレヴェリ湖と呼ばれる湖はそよ風を受けてわずかな波を幾重にも繰り返し、水面（みなも）に映る月の形を震わせる。
その静かな水面を、高速で突き抜ける影があった。
水面を滑るように進むのは、平たい石。滑るようにして一度水面に触れ、弾かれて飛び、また水面に触れて飛び上がる。その動きを繰り返して進む。そのうち、水面を弾いていた回転力が失われ、石は急速に勢いを失い、最後はあっけない音を立てて没する。
それは水辺が数メートル離れた場所。そして、水辺に一人立っているのはクリュウであった。
クリュウは無言で脚元に落ちている石の中から手頃な平たい石を

手に取ると、まるで剣を振り抜く時のように腕をスイングさせ、石に回転力を与えて一直線に放る。投げられた石は湖へと走り、再び水面の上を滑るようにして進む。
一体、何個の石をこうして湖の中に放り投げたかわからない。クリュウは無心で、ただひたすらに、一言も発さずに無言で石を投げ続ける。
良さそうな石を見つけ、体全体を使うようにして湖に向かって滑り投げる。その石は綺麗に水の上を滑り、あっという間に今日最高の記録を生み出す。
その時、背後から小さな拍手が響いた。驚いて振り返ると、木陰からお姫様が現れた。
「お上手ですね、クリュウ様」
影から一歩踏み出し、月明かりが彼女を優しげに神々しく照らし上げる。そこにいたのは優しく微笑む月姫。
「フィーリア……」
「ここ、私のお気に入りの場所なんですよ。きれいな景色ですよね」
微笑みながら、フィーリアはそっとクリュウの横に並ぶ。困惑するクリュウの方へ振り向き、彼の疑問を答える。
「お姉様から、クリュウ様はこちらに居らっしゃると聞きまして」
クリュウは納得したようにうなずく。この場所を教えてくれたのはセレスティーナだ。一人になれる静かな場所はないかと彼女に訊いたらこの場所を教えてもらった。
「そっか……」
クリュウは特に何を言うでもなくそう答えると、再び水面に目を向ける。そんな彼の横顔をフィーリアは静かに見詰める。
「エレナ様と、何かありました？」
フィーリアの問いかけに、クリュウは気まずそうに視線を落とす。そんな彼の反応を見て、フィーリアは予想通りとため息を零す。
「やっぱり、何かありましたね」
「どうして、そう思うの？」
「先程の夕食会で、お二人は明らかに違いを避けているように見えま

した。火を見るより明らかです」
「そ、そんなに丸わかりだった？」
「シルフィード様もサクラ様も、とっくに気づいておられるでしょうね」
　フィーリアの言葉にクリュウはがっくりと肩を落とす。自分としては平静を装ったつもりだったが、どうやら仲間達には全てお見通しだったらしい。
「一体、何があったんですか？」
　フィーリアの問いかけに、クリュウは答えるべきか迷う。原因は明らかに自分の方にあり、しかもフィーリアにまで合わせる顔がないような理由だ。
　悩む彼の横顔から視線を外し、フィーリアは足下に落ちていた石を手に取ると、湖に向かって投げ飛ばす――それは一度も水面を跳ねる事なく、一直線に水中へと没した。
「あ、あれ？」
　フィーリアはその結果が予想外だったのか、慌てて足下の石をまた一つ手に取ると、湖に向かって投げる。が、結果は同じだ。
　意外と負けず嫌いなフィーリアは何個か石を拾うと、それを連続して投げる。が、どれもドポンドポンドポンと情けない音と共に水中に没する。
「は、はうぅ～……」
「あはははは……」
　クリュウはそんな彼女の姿を見て苦笑を浮かべると、足下にある水切りに適した石を拾い上げる。
「石は何でもいいって訳じゃないんだ。こういう平たい石じゃないとダメだよ。それを回転をつけて投げる。こうやってねッ！」
　クリュウは今一度石を投げ飛ばす。高速な横回転を受けた石は水面に接した途端その回転力で水を弾き、水面を跳ぶ。回転力が失われるまで石は跳ね続け、数メートル先まで滑った後、没する。
「お上手ですね」
　羨ましいとばかりに石が没した後に広がる波紋を見詰めるフィー

リア。クリュウは「子供の頃にね。よく遊んだから」と苦笑を浮かべる。
「石選びが重要なんですね。じゃあ……これなんて如何でしょう？」
フィーリアが選んだのはクリュウが使っていたような、水切りに適した平たい石だ。
「うん、そんな感じ」
「はいッ」
フィーリアは元気良く返事をすると、水辺に立って勢い良く石を投げる。
投擲された石は弱いながらも横回転を受け、空気を切り裂き、水面の上を滑空。そして、石の底辺が水面に触れ――弾く。
「と、跳んだッ！」
喜ぶフィーリアだったが、石は一度だけ水面を弾いた後、力を失って水中へと没する。
水面に波紋だけを残し、湖に没した石。クリュウは「惜しかったね」と彼女に声を掛けるが、フィーリアは小さく首を横に振る。
「欲張っちゃダメです。ちゃんと一歩を踏み出せた。今は、それだけでいいんです」
どこかサッパリした顔でそう言う彼女の横顔を見て、「そっか」とだけクリュウはつぶやく。
しばし、二人の間に沈黙が舞い降りる。クリュウは何か話題を振ろうと考えるものの、彼女と顔を合わせるのが何となく気まずくて、沈黙を続ける。そんな彼を、フィーリアは悲しげに見詰める。
「ケンカは、ダメですよ」
つぶやくような彼女のセリフにクリュウが振り返ると、悲しげな表情を浮かべたフィーリアがジッとこちらを見詰めていた。
「事情を知らない私が余計な事は言うべきではないんですが、私はお二人にケンカしてほしくありません」
悲しげな表情を一変させ、フィーリアの瞳は本気の色に輝く。心の底からそう想っている証拠だ。
「私で良ければ、相談してください。必ずやお力になれると大それた

事は言いません。でも――たったお一人で悩まれるよりは、一緒に悩んだ方が楽ですよ？」
そう言って屈託なく笑う彼女の笑顔に、クリュウはどこか救われたような気がした。
一人で悩み、考えていた。それを見抜いているかのようにフィーリアはそっと手を差し伸べてくれた。その優しさ、温かさに、胸が熱くなる。
一人で悩んでいても、きっと答えは見つからないだろう。どこか冷静な自分が、そう言っている。
――だから、今は彼女の言葉に甘えてもいいだろうか。
「……すごく情けない理由だし、君を傷つけるかもしれない。それでも、いい？」
クリュウの小声での問いかけに、一瞬反応があった事に驚くフィーリアだったが、すぐに自信満々の笑みを浮かべて胸を叩く。
「ドンと来いですッ」
クリュウはそんな彼女の姿を見て小さく、嬉しそうに微笑んだ。
「ありがと、フィーリア」
クリュウは礼を言うと、静かに事の経緯を話し始めた。と言っても実質的な内容はあまり多くはない。数分と掛からない間に説明は終わってしまう。
「それで、エレナに泣きながら怒られたんだよね」
そこでクリュウの説明は終わる。彼が話している間はずっと聞き手側に徹して沈黙を続けていたフィーリアは、しかし話が終わるとゆっくりと口を開く。
「そんな事言われたら、私だって怒ります」
そう自分の意見を言うフィーリアはどこか不機嫌そう。そんな彼女の反応を予想していたクリュウは気まずそうに「ご、ごめん」とつぶやくように謝る。
「クリュウ様の発言は、クリュウ様を信じて行動を共にする私達に対する侮辱に他なりません。私達の想いを、踏みにじるような言動です」

いつになく真剣に、そして怒る彼女の姿を見て、やはり自分の言った発言は改めて最悪だと痛感せざるを得ない。彼女の言う通り、自分の発言は信じてついて来てくれた彼女達の想いを裏切るようなもの。怒って、当然だ。

自分の中である意味一つの結論を出したクリュウ。しかし、そんな彼を見てフィーリアは首を横に振る。

「クリュウ様は何もわかってません。確かに、クリュウ様の発言は間接的に私達を侮辱するようなものです。しかし、その程度ならエレナ様があのように激怒する事はありません。問題は、クリュウ様の発言の本質です」

「発言の本質？」

「私達はクリュウ様が大好きです。だからこそ、一緒にいるんです。その大好きな人が、自分の事を価値のない人間のように仰っている――こんなに悲しくて、怒り狂う事はありません」

フィーリアは真剣に、困惑するクリュウから一切目を離さずに語る。月明かりを受けた彼女のその姿は、神々しく、有無を言わせぬ迫力を持つ。その迫力に、クリュウは押し黙った。

「クリュウ様はもっと自分に自信を持ってください。もう何度言ったかわかりませんが、クリュウ様はあまりにも自分を過小評価し過ぎです。決して過大評価しろとは言いません。ですが、最低限の自信は持ってください。じゃないと――私が、寂しいです」

そう言うフィーリアは、薄っすらと瞳の縁に涙を浮かべていた。突然泣き出した彼女に慌てるクリュウ。すると、そんな彼の腕をフィーリアが取った。放さない、そんな彼女の意志が伝わるかのように、握る彼女の手には自然と力が込められている。

「私やシルフィード様、サクラ様。程度は違えど皆それなりに名が世に知られたハンターです。有名な私達に負い目を感じる気持ち、私もわからなくはないです。私も、この世界にいる以上いつもルミナ姉様の伝説を耳にします」

彼女の口から聞き慣れない人名が飛び出した。しかしすぐにクリュウはそれが彼女のもう一人の姉、レヴェリ家次女のシュトゥルミ

ナ・レヴェリだとわかった。
彼女がハンターを目指すきっかけになった一つの要因で、彼女曰くシルフィードなんかよりもずっと実力のある、今のクリュウからしてみれば想像もできないような実力者。
自分よりもずっと実力が上の姉。ある意味、自分なんかよりもずっと劣等感が強く感じられるかもしれない。
だが、クリュウと違ってフィーリアは前向きだった。そんなすごい姉を持っていても、それに対して劣等など感じずに、自分は自分だと割り切っている。
「でも、人はそれぞれ歩む道も、歩む速度も違います。それを無理に比較して、落ち込む必要なんてありません。簡単に言えば、クリュウ様と私達では使う武器も戦い方も違います。それを無理に比較する方がおかしな話です。そもそも、誰かと誰かを比較なんて、できないんですよ――だって、自分と同じ人なんて、この世には一人たりともいないんですから。クリュウ様は、たった一人しかいないんですから」
そうフィーリアは断言し、微笑んだ。その笑顔は本当に眩しくて、月明かりの下だと言うのに、まるで昼間に輝く太陽のよう。
クリュウはそんな彼女の言葉に、ようやく小さいながらも笑みを浮かべた。
彼女が言っている程、自分の中では簡単に整理はできないし、割り切れない――でも、少しだけ気が楽になったような気がした。
フィーリア達だけではない。村には今でも伝説として語り継がれている亡き父と母という、今の自分では足下にも届かないようなハンターが名を残している。
子供の頃から、自分の目指す道には常に自分よりもすごい人がいて、自分はいつもそれと自分を比較して、落ち込み、越えてやろうと努力し、でも結局届かなくて空しくなる。そんな事を繰り返していた。ある意味、自分のこの後ろ向きな思考はそんな自分の生き方から生まれた自己防衛なのかもしれない。
――誰も信じなければ、裏切られても辛くない。昔、そう言って周りを拒絶していた二色の瞳を持った少女がいた。程度は違えど、自分

と彼女は同じ自分を守る方法を持っていたのかもしれない。
「……人の事なんて、言えないじゃないか」
つぶやくように言った彼の言葉。その意味がわからず、フィーリアは首を傾げる。すると、そんな彼女の瞳の縁に溜まった涙を、クリュウはそっと指で拭い取る。
「クリュウ様……？」
視線を彼に向けると、そこにはさっきまでと違って幾分か明るげな表情を浮かべたクリュウがいた。
「ありがとフィーリア。少し気が楽になったよ」
クリュウの言葉の意味を一瞬理解できなかったフィーリアは疑問符を頭に浮かべるが、すぐに明るい笑みに変わる。
「そうだよね。昔の僕とは違うんだから、少しくらい自信を持っても、バチは当たらないよね」
「そうですよ。むしろお釣りがたくさん返ってきます」
自信を取り戻した彼を見て、フィーリアは心の底から嬉しそうな笑みを浮かべる。これでこそ、自分が大好きなクリュウ・ルナリーフという少年だ。
「それじゃ、その気持ちを忘れないうちにエレナ様に謝りに行きましょう」
すると、いざエレナと会うとなると途端に自信をなくしたのか、クリュウの表情が曇る。何せ、こっちは泣きながら怒られた身だ。そんな別れ方をしておいて、平然と会いに行ける程クリュウの心は強くない。
すると、渋る彼を見てフィーリアが珍しく眉をしかめる。
「一度決めた事を曲げるのは男らしくないですよ」
ムッとしたように言う彼女のセリフにクリュウは内心「いつも女の子みたいな扱いしてないかな？」と苦笑を浮かべる。しかし、彼女の言う事はまったくもって正論だ。
「……そうだね。ケンカは長引かない方がいいからね――わかったよ。謝って来る」
「クリュウ様ぁ……」

まるで自分の事のようにほっと胸を撫で下ろすフィーリア。本当に人の事を自分の事のように考え、一緒に悩んでくれる、すごくいい子だ。こんな子が彼女にできたなら、その人はすごく幸せだろう。
――姉の私が言うのも何だけど、フィーってかわいくない？　あんなかわいい子を彼女にしたいとか、君は想わないのかしら？
一瞬、昼間セレスティーナの発言が思い出される。すると、妙に緊張してしまい、クリュウは彼女の顔を見る事ができなくなる。頬を赤らめ、気まずそうに視線を逸らす。しかし、どうにも気になってしまいチラチラと彼女の方を見る。すると、そんな彼の態度をフィーリアが不思議そうに見詰める。
「どうされましたかクリュウ様？　私の顔に、何かついてます？」
「あ、いや、その……」
正直に答える訳にはいかない。何せ、理由はおそろしく恥ずかしい赤面ものなのだから。
――娘に妙な真似をしたら、その時は我が隷下のレヴェリ軍が国境を越えて貴様の首を討つ。ゆめゆめ疑う事なきように。
彼女の父親にも妙に念を押された結果、クリュウはどうしても彼女を意識してしまう。
「クリュウ様？」
「あ、いや、何でもない。何でもないんだ、うん」
「そ、そうですか？」
フィーリアは半信半疑ながらも彼が「何でもない」と言うからにはそれ以上は追求しない。謙虚な彼女らしい対応だ。
「とにかく、エレナ様に謝って来てくださいね」
念を押すように言う彼女の言葉にクリュウはうなずく。彼自身、エレナとケンカしたままにしていいとは思っていない。
「わかってる――エレナに謝って来るよ」
そう言ってクリュウは湖の方に背を向け、城の方へと歩き出す。そんな彼の背中を、フィーリアが笑顔で見送る。
「ちゃんと謝るんですよ」
見送り言葉にそう言いながら、フィーリアは小さく手を振る。その

時、歩いていた彼が振り返った。
月明かりを受ける彼は、優しく微笑んでいた。
「ありがとう、フィーリア。やっぱりフィーリアは頼りになるよ」
笑顔での彼の誉め言葉に、フィーリアはボンッと顔を真っ赤にすると、嬉しさと恥ずかしさでパニックに陥る。
「うぇ？　あ、はうぅ……」
言葉にならない声を吐き出す彼女に微笑み、クリュウは一人城へと向かって歩き出す。
――目指すは、エレナの所だ。
一方、エレナはと言うと、きれいな花々が咲き誇る花壇が並ぶ城の中庭にいた。
円形状の中庭にはレヴェリ湖から引かれた水が円状に広がる水路を伝い、水路と水路の間にある花壇に常に水を適度に与える。レヴェリ湖のきれいで栄養のある水を得た花々はどれもきれいで、月明かりを受けてキラキラと輝いている。
そんな円形の中庭の中央には屋根とテーブル、椅子が置かれた休憩できる場所がある。彼女はそこに座っていた。
「ごめんなさいね。こんな時間に誘っちゃって」
緊張するエレナの正面に座るのは、優雅にお茶を淹れるお姫様、レヴェリ家次期当主――セレスティーナ・レヴェリ。
「い、いえ。私も暇してたので、お誘いいただき感服の限りです」
「うふふ、そんなに緊張しなくてもいいわよ」
くすくすと笑うセレスティーナを見て、しかしエレナは内心「緊張するななんて無理よぉ……」とつぶやく。
セレスティーナは女性の自分から見てもすごくきれいな人だ。こんなきれいな人、エレナは今まで会った事がない。本当に、お姫様みたいな人だ。事実、一つの土地を納める貴族の娘なのだから、お姫様なのかもしれないが。
そういう意味では、フィーリアもお姫様だ。確かに彼女を誉める単語を上げるとすれば《お姫様》という単語が当てはまるだろう。だが、セレスティーナはそれを上回る。

あまりにも美人過ぎて、女である自分まで彼女の色香や魅力でクラクラしてしまう。これを緊張するなと言う方が無茶な話だ。
セレスティーナは紅茶を注いだティーカップをそっとエレナの前に差し出す。とても香ばしい紅茶の香りが鼻をくすぐる。
「チューリップティー。この国の特産品よ」
「独特ないい香りですね」
「我が国の国花、チューリップを使った紅茶よ。エルバーフェルドでは一般家庭から王族まで嗜（たしな）む国民飲料ね。隣国にもあまり普及してないから、あなたは初めてかしら？」
「はい。こんな紅茶がある事も知りませんでした」
「うふふ、お口に合うかしら？」
セレスティーナに微笑まれ、エレナは緊張しながらティーカップを手に取る。見た目も香りも実においしそう。仕事柄様々な茶葉を扱う彼女だからこそわかる――この一杯には、生産者の汗と涙と愛が込められている事を。
「お砂糖とか入れる？」
「いえ、まず最初は紅茶本来の味を嗜みたいので」
「あら、わかってるじゃない」
紅茶の味わい方を理解しているエレナを、セレスティーナは嬉しそうに見詰める。
無邪気に笑う彼女の笑顔は、やはりどこか妹のフィーリアに似ている。ずいぶんと物腰は雰囲気は違うが、それでもやはり二人は血の繋がった姉妹なのだ。そう改めて思うと、少しだけ緊張が和らいだような気がした。
「いただきます」
エレナはゆっくりとティーカップを持ち上げ、近くで改めて紅茶の匂いと色を味わい、最後に口に含む。
一口飲んだだけで、口の中いっぱいに花の香りがフワッと広がる。これが、彼女の言うチューリップという花の香りなのだろう。
舌の上を、独特なほのかな甘みと苦みが転がる。言葉ではうまく説明できないが、とにかくおいしい。

「おいしい……」
自然と、口からそう漏れていた。そんな彼女を見て、セレスティーナは「でしょ？」と嬉しそうに笑う。
「レヴェリ産のチューリップティーはエルバーフェルド一おいしいのよ。周りを囲む山の傾斜に茶畑があって、このきれいな空気が絶妙な風通しで茶畑を抜けるの。水も栄養が豊富で、何より農薬を使わない有機栽培が売りなのよ」
「有機栽培……、茶葉を農薬を使わないで作るのはかなり難しいと聞きますけど」
「あら、よく知ってるわね」
驚くセレスティーナにエレナは照れながら「これでも一応村で酒場を経営しているんです。なので、そういった情報は普通の人より詳しいですね」と説明。
「その年で店を持っているなんて、すごいわね」
「病気の療養で村を離れている両親の代行ですけどね」
謙遜するエレナの発言に、セレスティーナの表情が変わる。
「ご両親、お病気なの？」
まるで自分の両親のように心配する彼女を見て、やっぱりフィーリアの姉なのだとうなずかせられる。
「母が病弱で、父はその看護に付き添いで」
「療養先は、どこなのかしら？」
「今はガリアの田舎町でのんびり暮らしているそうです」
ガリア、その単語にセレスティーナの表情が曇る。表情を一変させた彼女を見て、エレナも自分の発言のまずさに気づき、慌てて口を塞いだが時すでに遅し。
――エルバーフェルド帝国とガリア共和国は現在軍事衝突を起こしている国同士。そして、エルバーフェルド人はガリアの事を憎んでいる。
「す、すみません……」
慌てて謝るエレナだったが、そんな彼女の頬をセレスティーナは優しく撫でる。伏せていた顔を上げると、優しげに微笑むお姫様がい

た。
「ガリアはいい国よね。空気や水はきれいで、料理はみんなおいしくて、景色は最高。さすが観光大国って所ね」
「セレスティーナさんは、ガリアの事を憎んでいないんですか？」
ガリアを誉めるセレスティーナに不思議そうにそう尋ねるエレナ。しかし、その問いかけに対しセレスティーナの表情が曇る。
「……そりゃ、恨んでいないと言えばウソになるわ」
つぶやくように言う彼女のセリフに、エレナはやっぱりと納得すると同時に、こんなに慈愛に満ちたセレスティーナでさえ、ガリアは許せないのだと驚く。
「ローレライの悲劇は二〇年くらい前の出来事だから、私も子供心に何となく覚えている大災害。故郷を失った人達が助けを求めてこのレヴェリに大勢押し寄せたわ。みんな、故郷も家族も何もかもを失ってわずかな希望の光を求めてもがいていたわ。そのすぐ後よ、ガリアと東シュレイドの連合軍が次々に私達の国を違法占領していったのは」
セレスティーナの表情が怖い。あんなにも優しさに満ち溢れていた彼女でも、そんな表情を浮かべる。
――エルバーフェルドでのガリアに対する憎しみは、自分達が考えていた以上に、ずっと深い。
一体、彼（か）の国はどれだけの事をすれば、こんなに女神のように優しげな笑みをする人を、こんなにも憎しみに染めるのか。
不気味な沈黙が、二人の間に舞い降りる。ゆらゆらと揺れる湯気がその間を空しく揺れ動き、空に消えるだけ。
「ごめんなさいね。ティータイムには相応しくない話だったわね」
セレスティーナは苦笑しながらそう言うと、この話はおしまいと言いたげに自分のティーカップで紅茶を優雅に飲む。
本当はもっと聞きたい事はあったが、エレナはそれ以上何も言わずに無言で紅茶を飲む。確かに、おいしいお茶を飲みながらする話ではなかった。
「あの、そもそもなぜ私を誘ってくれたのですか？」

話題を変えるエレナの問いかけ。それはずっと抱いていた疑問だ。なぜティータイムに自分を誘ってくれたのか。それこそ、久しぶりに会った妹のフィーリアを誘うのが普通だろう。
すると、セレスティーナはくすくすと小さく笑った。
「そりゃ、あんな悲しそうな顔をしていたら、心配しちゃうわよ」
セレスティーナの返答に、エレナはきょとんとする。しかしそれはすぐに頬の赤らみに変わる。
「か、悲しそうな顔？　私が、ですか？」
「もちろん」
「そ、そんな事ないですよ。私は至って元気一杯です」
元気一杯とアピールするようにガッツポーズをするエレナ。しかしセレスティーナは構わず話を進める。
「クー君とケンカでもしちゃったの？」
無視して紅茶を飲もうと口に含んだ瞬間のセレスティーナの的確な発言。エレナは思わず噴き出しそうになったが、何とか堪えた。
むせるエレナを見て、「あら、図星だったかしら？」ととぼけるセレスティーナ。
「私とあいつがケンカ？　何を根拠に言ってるんですか？」
今更平静を装おうとするエレナだが、どう考えても苦しい。しかしセレスティーナはそれを追求する事なく、大人な返しをする。
「だって夕食の時、あなたあからさまにクー君を避けてたじゃない」
誰が見ても明らかな拒絶だったが、どうやら本人は完全に隠し切れていたと思っていたらしい。信じられないというような表情を浮かべる。そんな彼女を見て、セレスティーナは小さく苦笑を浮かべた。
「ケンカ、したんでしょ？」
まるでお姉さんに問われているかのように、エレナは自分でも不思議な程素直にうなずいた。
「……だって、あいつが」
なぜ、自分は胸の中に渦巻くこの想いを、まだ会って間もない彼女に話しているのか。具体的な理由はわからない。でも、まるで本当の姉に悩み事を聞いてもらっているかのように、スムーズに話せる。

愚痴が混じって、ひどく無茶苦茶な事を言っていると自分でもわかっている。でも、しゃべらずにはいられなかった。そして、そんな話でもセレスティーナはただ黙って、聞いてくれる。
穏やかな表情のまま、じっくりと自分の話を聞いてくれる――まるで、本当のお姉さんのようだ。
紅茶から湯気が上らなくなるまで、エレナは話し続けた。全てを話し終えると、不思議と肩の荷が下りたように楽になっていた。
「ごめんなさい。愚痴なんて、聞いてもらっちゃって」
エレナは恥ずかしそうに頬を赤らめながら黙って自分の愚痴を聞いてくれたセレスティーナに謝る。しかし、彼女はゆっくりと首を横に振った。
「いいのよ。それであなたが少しでも楽になったなのなら、私はそれで満足よ」
心の底からそう想っているのだろう。浮かべる笑みは優しく、温かな慈愛に満ち溢れている。
優しさの女神。そんな言葉が思い浮かぶほど、セレスティーナは優しい人だ。女の自分でも惚れてしまいそうになるくらい、魅力的な人。
「……すごいですね、セレスティーナさんって」
「そんな事ないわ。私はただ、昔と同じ事をしているに過ぎないの」
「昔と同じ事？」
「うふふ、私はかわいい妹に恵まれてるわ。みんなかわいくて、いい子。でも、時々ケンカもしちゃう。そんな時はお姉さんの出番なの。怒る訳でも、同情する訳でもない。ただ、相手の話を聞いてあげて、自分自身で答えを見つける手助けをする。私は、何もすごくなんかないわ――すごいのは、ちゃんと自分で答えを見つけられる子の方よ」
無邪気に微笑みながら言うセレスティーナ。彼女の言う妹とは、フィーリアやまだ会った事のない次女のシュトゥルミナ、そしてきっと、ルーデルも含まれているのだろう。
――本当に、いいお姉さんだ。
「……あなたは、自分がすべき事、見つかったかしら？」

全てを見抜いている。
セレスティーナの問いかけに、エレナは内心「敵わないなぁ」とつぶやきながら、しかし自分の中での決着はすでに着いていた。
エレナは、静かにうなずいた。

第１４８話　剣想撃突　月下に確かめ合う幼なじみの絆

エレナの部屋を訪ねても、彼女はそこにはいなかった。シルフィードやサクラに訪ねても、彼女の居場所はわからなかった。

途方に暮れていると、ルーデルから貴重な情報を得られた。

「エレナならさっきセレスティーナさんと一緒に中庭の方に行くのを見かけたわよ」

もうすっかり名前で呼び合う仲になったらしい。幼なじみとして嬉しくは思うが、今はそれどころではない。ルーデルにお礼を言って、クリュウは急いで中庭へと向かう。

美しい花々が咲き誇る中庭には、優雅に一人で紅茶を飲むセレスティーナがいた。しかし、エレナの姿はない。

セレスティーナに尋ねると、彼女は微笑みながら一通の手紙を差し出した。受け取り、読むとそれはエレナからの手紙だった。

――竜小屋で待つ。

至極簡潔に、それだけ書いてあった。さながらそれは決闘状に見えなくもない。

セレスティーナにお礼を言い、クリュウは急いで竜小屋へ向かった。

月明かりに照らされる竜小屋にはアニエスと、レヴェリ家所属のアプトノスが静かに寝息を立てている。

そんな竜小屋から少し離れた所に、エレナはいた。

こちらに背を向け、神々しく輝く月を無言で見上げている。

「エレナ……」

「何しに来た訳？」

近づこうとするクリュウだったが、それを拒むようにエレナが冷たく問う。

やはり、怒っている。クリュウはその冷たい声にそう確信した。だから、すぐに自分がすべき行動はわかっていた。

「さっきは、ごめん……」
クリュウはそう切り出し、素直に頭を下げる。しかし、エレナはこちらに振り向こうとすらしないで、ずっとこちらに背を向け続ける。
「何で謝ってんのよ？」
「だって、さっきは僕の言動で君を怒らせちゃったし」
「――何で、私が怒ってるか、わかる？」
月を見上げながら、静かに問う。その口調から、彼女の怒りの強さを計る事はできない。ただ、いつもなら激怒するはずの彼女が、こうして平静を装えるという事は、常の彼女の怒りとは次元が違う。
クリュウの頭の中には、先程のフィーリアとのやり取りが思い出されていた。
自分の自信のなさが、彼女の怒りを買った。自分を信じてくれている彼女の想いを、裏切った。改めてその事実を認めると、胸が痛くなる――だが、きっと彼女の受けた痛みはこんなものじゃない。
クリュウは静かに、唇を動かす。
「――僕の情けなさが、君を傷つけたから。だよね？」
エレナは、何も答えない。否定も肯定もせず、無言を貫く。先程のフィーリアと、そして彼は知らないがセレスティーナと同じで、聞き手に徹する。
「調子に乗れとか、過信しろって訳じゃない。でも、僕はもう少し自信を持つべきだ――って、フィーリアに言われた」
エレナの肩が、ピクリと動いた。
「優柔不断で、情けなくて、女々しくて。僕を侮蔑する言葉は大概的を射てる。みんな、僕の自信のなさが招いた言葉だ。僕は、その言葉に正直慣れていたのかもしれない。自分はこういう人間だって、見限ってた」
高望みはせず、自分のできる範囲で努力する。聞こえはいいが、彼の場合は目標とすべきハードルと怪我をしない高さに設定しているに過ぎない――失敗を恐れるあまり、挑戦を拒んだ。
何かに失敗する――それは、命を落とす事。両親は、失敗の中で死んだ。ずっとそう思っていた。

でも、幾分か成長した自分ならわかる。
母は失敗した訳ではない。文字通り命を懸けて守るべきものを守り抜いた。きっと父も、失敗しての殉職ではない。
自分は平凡で、自信を持つ事を拒んでいた。
でも、仲間達はそんな自分について来てくれた。
学生時代はルフィール、シャルル、クロード。他にもアリアやシグマ達も自分を信じてくれた。
フィーリア、サクラ、シルフィード、ツバメ、ルーデル。他にも色々な人が自分を信じてくれた――エレナもまた、その一人だ。
いつの間にか、自分はたくさんの人に頼られるようになっていた。なのに、そんな皆の想いを裏切るように、自分は自信を持つ事を相変わらず拒み続けていた――それが、どれだけ非道な事なのかも気づかずに。
だから、ほんの少しだけ、勇気を出して、自信を持とう。それが、フィーリアに相談して自分が導き出した結論だ。
「――エレナに怒られないよう、少しだけ自分に自信を持ってみるよ。いつまでも、頼りない男じゃダメだからね」
そう言って、クリュウは微笑んだ。その笑顔はどこかスッキリしていて、清々しい。何か、付き物が取れた、そんな感じの笑顔だ。
エレナは振り向かず、何も言わず、彼の結論を聞く。月明かりが、美しくそんな彼女を照らす。
「……何でよ」
「え？」
風に乗って、彼女のつぶやきが届く。しかし、それが意味する所がわからず、クリュウは首を傾げた。
ゆっくりと、エレナが振り返る――その表情は、先程までの穏やかな声と違い、憤怒に染まっていた。
「何で、あんたはいつもいつも……ッ！」
「え、エレナ？」
足下に何かが転がる音がした。見ると、それは一本の長い木の棒――否、木刀だ。

「――拾いなさい」
静かに届く、彼女の憤怒の声。それを聞き、そして足下に転がっているそれを見て、クリュウは全てを悟り、真っ青になる。
子供の頃、エレナと本気でケンカした事があった。その時、彼女は「決闘で決着をつけるわよッ！」と言い出し、木刀で勝負した。
――エレナが、再び自分に決闘を挑んでいる。そう気づいたクリュウは慌てて彼女を止めようとする。
「ちょ、ちょっと待ってエレナッ！」
「――そっちにその気がなくても、こっちはその気が有り余ってるのよッ！」
クリュウの制止など聞かず、エレナは自身の足下に隠していた木刀を手に取り、瞬間駆け出した。
単純な身体能力ではハンターのサクラにも匹敵するエレナの突進はあっと言う間に二人の間を潰す。
迫り来るエレナに対して避けるのは不可能だと経験が叫ぶ。クリュウは反射的に木刀を拾い、大剣で防御するようにガードの構えを取った――直後、防御に構えた木刀に鋭い衝撃が迸る。
女の子の振り下ろした一撃とは思えない力強い一撃に、クリュウは歯ぎしりしながら耐える。伊達にモンスターと戦って筋力はつけていない。
ギリギリと木の刀同士がぶつかり、擦れ、悲鳴を上げるまさに鍔迫り合い。足を踏ん張って耐えるクリュウと、そんな彼の防御を突破しようと力の全てを前進に注ぐエレナ。
目の前に二本の交差する木刀越しにエレナの顔が見える。突撃を阻止された事を悔しげに歯ぎしりしながら、睨むようにクリュウを見詰める。
「ま、待ってよエレナッ。何で決闘になるんだよ……ッ」
「うるさいッ！　あんたは言ってわからないッ！　だから、体に教え込むだけよッ！」
無茶苦茶な言い分だ。クリュウは説得しようと口を開くが、それを見ぬうちにエレナが動く。

クリュウの戦い方は対モンスター戦用のものだ。しかし、エレナは違う。そんな縛りを受けない、もっと自由なバトルスタイル。
エレナは踏ん張るクリュウの足を狙って得意の蹴りをお見舞いする。完全に不意を突かれたクリュウはその一撃に悶絶し、膝を折る。その隙にエレナはクリュウを押し倒すように刀に力を入れる。
体勢を崩されたクリュウは舌打ちし、エレナの木刀を自身の木刀で力を流すように滑らせる。
転びそうになるエレナを横目にクリュウは横へと転がって危機を脱する。が、エレナは転ぶ事なく地面に木刀を突き刺すと、それを軸にして無理矢理体を動かして跳躍。転がって逃げるクリュウの脇腹に必殺の跳び蹴りを叩き込む。
苦しむクリュウ。しかし真上からエレナの木刀が襲う。またも転がってその一撃を回避し、クリュウは痛む脇腹を押さえて立ち上がった。
「……攻撃のどれもが直撃したら大怪我ものだよ」
苦痛に顔を歪めるクリュウの言葉に、エレナは乱れた髪を直しながら平然と答える。
「言ったでしょ？　あんたは言ってもわかんないんだから、体に教え込むって。それくらいの方がちょうどいいのよ」
他に言う事はないと、エレナは再びクリュウに襲い掛かる。ここに来てようやくクリュウも説得は不可能だと悟り、仕方なく防戦に徹する覚悟を決める――が、相手が悪すぎた。
次々に全身を使って木刀を乱舞させるエレナ。クリュウはそれらを身だけで回避したり、木刀で防いだり完全な防戦となる。武器の扱いに関してはクリュウの方が一日の長がある。だが体術という面では一歩エレナに遅れてしまう。
木刀だけで戦うクリュウに対してエレナは木刀を陽動にして執拗に自身の得意技である蹴りを連発する。クリュウは木刀だけではなく彼女のそうした変則的な攻撃にも苦しめられる。木刀が襲って来るのを同じく木刀で受け止めてもそうしてがら空きになった脇腹に向かってエレナは的確に蹴りを入れて来る。いつも自分の使い慣れ

た片手剣と使い方が異なる太刀のような木刀で戦っているという点でもクセの違いが彼を苦しめる。
襲いかかる木刀に対してクリュウは反射的に片手剣の時と同様に左腕を前に出すが、その腕に盾は備えられていない。当然エレナの一撃をまともに左腕で受けてしまい激痛に苦しむ。
「他所見してんじゃないわよッ！」
怒号と共にエレナは地面を蹴って突貫。ランスの突き攻撃のように鋭く木刀を貫くようにして突き出す。クリュウは眼前まで迫る一撃をとっさに首だけ動かして突きの一撃を回避した。だが、強烈な一撃もエレナから見れば陽動に過ぎない。すぐに本物の一撃である膝蹴りを腹部に叩き込む。
「あぐッ!?」
激痛に腰を折るクリュウを前に一歩下がったエレナはそのまま体を回転させて回し蹴りを放つ。激痛に苦しむクリュウはその一撃を避ける事も防ぐ事もできずに脇腹に受けて吹き飛ぶ。
地面に転がるようにして倒れるクリュウ。だがエレナはそんな倒れている彼に向かって容赦なく飛び蹴りを放つ。クリュウはまたしても転がってそれを回避して立ち上がると痛みを堪えながら勢い衰えずに襲い掛かるエレナの攻撃の嵐を防ぎ続ける。
戦いの最中、ようやくクリュウもエレナの動きを見切れるようになって次第に決定打を受けないようになる。
このままなら何とか反撃ができる。そう油断がクリュウの頭を過ぎった――だが、その油断が彼の決定的な敗因だった。
エレナの戦い方はスポーツでもなければ武道でもない。故にルールもなければ卑怯もない。そんな彼女の型にはまらない戦い方が彼との決定的な差だった。
エレナは地面に木刀を突き刺すと、そのまま抉り飛ばす。飛散した砂は放射状に散らばり、クリュウに襲いかかる。
「め、目潰しッ!?」
砂が目に入り、視界を封じられるクリュウ。エレナはその隙にがら空きの彼の胴に蹴りを入れる。腹を押さえて屈む彼の顎に、今度は膝

蹴りを叩き込む。
痛みと衝撃でフラフラになるクリュウの胸倉を掴み、そのまま突き飛ばし、背中から木の幹に叩きつけ、木刀を首元に突きつけて動きを封じる。その動作の間に足で彼の持つ木刀を払い飛ばすのも忘れない。
武器を失い、動きも封じられた。それは文字通り一瞬の出来事であった。
たった一瞬、勝てるかもしれないという油断が生まれた。その隙を、エレナは見逃さなかった。
ギリッと首筋に当てられる木刀が、自身の敗北を見せつけているかのよう。――クリュウの完敗だ。
「……僕の負けだよ。エレナ」
降参、そう示すようにクリュウは両手を上げる。だが、首をロックする木刀は微動出せず、エレナは動かない。
「あのさ、放してほしいんだけど」
クリュウの言葉も聞かず、エレナは彼を解放しようとしない。
「え、エレナ……」
「……言ったじゃない」
「え？」
バッとエレナは顔を勢いよくもたげた。そこで初めて、クリュウは彼女が怒っているのではないとわかった。だって、怒っているなら――何で泣いているのか。
「言ったじゃない……ッ。困ってたら、相談してって……ッ！　なのに、なのに……ッ」
悔しげに、悲しげに、彼女は頬を涙で濡らす。見ているこっちの胸が痛くなるくらい……
「――何で、私じゃないよッ！」
悲痛に顔を歪め、泣きながら彼女が叫んだのがそれだった。
彼女の言っている意味が分からず困惑するクリュウの首元に、エレナ突きつけられた木刀に力が入る。クリュウは苦しさに少し表情を険しくさせるが、文句の言葉が出て来なかった――出て来るはずが、

ないじゃないか。
「何であんたは、いつもいつも私が二番とか三番なのよッ！　あんたの隣にいたのは、いつも私なのに……ッ！　何で、あんたはいつも私じゃないのよッ！」
泣き叫ぶエレナの言葉は全て比喩的で、意味がつかめない――だが、クリュウはこんな彼女の怒りと悲しみを以前にも見たような気がした。
「今回のアルトリア行きの事だってそうッ！　あんたは、私よりも先にシルフィード達に相談したッ！　アメリアさんの事を知ってる私じゃなくてッ！」
エレナは次々にクリュウが自分よりも先に誰かに相談した出来事を挙げていく。それらは、次第に幼い頃へと遡り、
「――ハンターになるって言い出した時もッ！　あんたは私じゃなくてキー姉に相談した……ッ！」
――やっと、思い出した。
子供の頃にも、彼女に同じ理由で泣き叫ばれた事があった――何で、いつも傍にいる自分じゃなくて、他の誰かに相談するのか。
まだ今の半分くらいの身長しかなかったような子供の頃にも、彼女にそうして泣きながら詰め寄られた。
特に理由があった訳ではない。ただ、誰に相談した方が良いアドバイスをもらえるか、子供心に考えて行動していたに過ぎない。だが、エレナは納得できなかった。
沈黙を続けるクリュウを見て、エレナはギリギリと歯ぎしりする。
――本当は、許すつもりでいた。
彼の傍にずっといた自分だから、彼がああも自分に自信を持てない理由は何となくわかっていた。ついカッとなって怒ってしまったが、冷静に考えればそれは彼の自分を守る為の防御線だった。
だから、謝ってもらえれば許すつもりでいた。きっと、彼も反省していると思っていたから。
――でも、そんなのもうどうでもいい。
今こうして怒り狂っている原因は、そんな些細な事を吹き飛ばすだ

けの要因だ。
胸の中に渦巻くのは、怒りと悲しみの二色。嫉妬心にも似た、許せなくて、寂しくて、裏切られたような気がして――胸が、張り裂けそう。
「エレナ……」
――木刀が、乾いた音と共に地面に落ちる。
「悩んだら、真っ先に私に相談してよ……ッ。じゃないと、私の幼なじみとしての立つ瀬が、ないじゃない……ッ！」
うつむきながら叫ぶエレナの頬を、涙が流れる。ポタポタと地面に落ち、跡を残す。
――こんなにも弱々しい幼なじみを見るのは、いつ以来だろうか。
いつも人一倍明るくて、人二倍くらいの努力家で、人五倍くらい勝ち気で、人十倍くらい負けず嫌いで――優しい幼なじみ。
そんな彼女を苦しませ、泣かせているのは、自分だ。
嗚咽を漏らす幼なじみの姿に、クリュウは掛ける言葉を失ったまま、呆然と立ち尽くす。
こんな事、ついこの前もあったような気がした。
彼女のようにバカみたいに明るくて、バカみたいに努力好きで、バカみたいに勝ち気で、バカみたいに負けず嫌いで――バカみたいに優しい後輩。
……シャルルの姿と、エレナの姿が、重なる。
自分は、またあの時と同じように、女の子を泣かせてしまった。人前で、決して涙を流さないような子に……
「ごめん、エレナ……」
胸が痛くなる程の罪悪感。でも、言葉にできうのは結局その三文字だけだった。
人間の使う言葉というのは実に軽い。こんなにも胸の奥が痛くて、苦しくて、冷たいのに、言葉にすればその三文字でしか謝罪の気持ちを表せない。何て不便なのだろうか。
「ごめん。君の気持ちも、何にも考えてなくて……」
頭を下げて、誠意を見せて謝るしか、方法なんてないではないか。

エレナが土下座しろと言えば、躊躇なくする覚悟はあった。でも、返って来るのは不気味な無言の沈黙と、彼女の嗚咽だけ。
気まずい沈黙が、一体どれだけ続いただろうか。
「……許さないから」
エレナはうつむきながら、クリュウの土で汚れた服の裾をそっと掴む。弱々しく、放さないという意志の表れ。
「エレナ……」
コツン……と、クリュウの胸にエレナの額が当たる。
「……私って、そんなに頼りにならない？」
小さな、つぶやくような問いかけ。その声には常の彼女にあるような勢いはない。自信を失ったその問いかけに、クリュウは慌てて否定する。
「そんな事ないッ！」
「……だったら、何で私に頼らないのよ」
彼女の問いかけに、クリュウは黙ってしまう。それを見て、エレナの表情が曇る。
「……答え、られないじゃない」
「それは……」
「……わかった。あんたが私の事をどう思ってるか、よぉくわかったわ」
エレナはそう吐き捨てるように言うと、そっとクリュウから離れる。顔を隠すように垂れる前髪のせいで彼女の表情はわからない。でも、その唇は震えていた。
「あんたを信じてた私が、バカだったのよ……ッ。もういいッ、勝手にしなさい……ッ」
「エレナッ！」
走り出すエレナの腕をクリュウはとっさに掴んだ。腕を掴まれたエレナは当然動けないのだが、エレナはまるで狂ったように「放してッ！　放しなさいよバカぁッ！」と叫びながら暴れる。クリュウはそんな彼女を必死に繋ぎ止める。
「エレナッ、ちょっと僕の話を聞いてよッ」

「うるさいッ！　あんたの事なんかもう知らないッ！　放しなさいよ変態ッ！」
「エレナッ！」
　クリュウは勢い良くエレナの腕を引っ張り、そのまま彼女を抱き寄せた。逃がさない、そんな意志が感じられるようにしっかりと抱き締める。
　エレナは突然の事態に一瞬呆然とそれを受け入れていたが、すぐにカァッと月明かりの下でもわかる程に顔を真っ赤にして暴れ出す。
「は、放しなさいよ変態ッ！　痴漢ッ！　セクハラッ！」
「ひどい言われようで泣きそうだよ……」
「う、うううぅぅぅるさいッ！　今更何をされたって無駄なんだからッ！　私はあんたを信じて――」
「――僕はエレナを信じてるよ」
　耳元でささやかれたその言葉に、エレナの罵声が止まる。一瞬にして辺りは静けさに包まれた。
　エレナは瞳を大きく見開いて彼を凝視する。そんな彼女を見て、クリュウはホッとしたように微笑む。
「やっと、僕を見てくれたね」
　そんな彼の笑顔に、エレナは顔をボンッと真っ赤にすると「う、うるさいッ！」と怒鳴り彼の鳩尾に一発拳を入れる。
「避けられないこの状況でそれは卑怯だって……ッ」
「そういう状況にしてるのはあんたでしょ」
　痛む鳩尾を押さえながら訴えるクリュウの意見を一蹴するエレナ。だが、その表情に幾分かいつもの彼女らしさが戻っている事にクリュウは気づいて、内心安心していた。
「やっぱり、そういう怒り方じゃないとエレナらしくないね」
「な、何よそれ。それじゃまるで私がいつもいつも怒ってるみたいじゃない」
「比率で言えば限りなく常時怒り状態だと思う」
　――容赦なく、一切の予備動作なくエレナはクリュウの股間を膝で蹴り上げた。今まで、何だかんだで急所を狙う事がなかったエレナ

だったが、今回ばかりは躊躇なく蹴った。
声も上げられないような激痛に無言で耐えるクリュウ。彼女を放さなかったのはある意味奇跡と言えるだろう。
「お前、それは本気でなしだって……ッ」
「こんな状況、私だって一杯いっぱいなのよッ！」
顔を真っ赤にしたまま怒るエレナ。その瞳の縁には先程までとは違う涙が溜まっている。
「な、何が「僕はエレナを信じてるよ」よッ！　言ってる事とやってる事が噛み合わな過ぎよッ！」
「……確かに、そうかもしれない――ごめん」
心からの謝罪。クリュウは小さく頭を下げた。そんな彼の至近距離からの謝罪に、エレナが少し慌てる。
「な、何よそれッ？　い、今更謝られても無駄なんだからッ」
「それでも、謝らなくちゃいけないんだ」
頑固に頭を下げ続けるクリュウに、エレナはしばし狼狽していたが、いよいよ諦めたのかため息を零す。
「……とにかく顔を上げなさい。話はそれからよ」
エレナの言葉に、クリュウはやっと下げていた頭を上げる。その表情はいつになく悲痛そうで、エレナは呆れる。
「泣きたいのはこっちなんですけど」
「ごめん……」
クリュウの力ない謝罪の声に、エレナは何度目かわからぬため息を漏らす。
――不思議と、さっきまで胸の中で爆発していた感情が収まっていた。理由はきっと、この頼りなくて情けない幼なじみの、この表情。
昔から、彼がこんな表情になった時は傍にいて、励ましてきた。幼なじみとして当然の役目だと思ってたし、自分は子供心にクリュウの姉だと信じて疑わなかったからだ。
彼にとっての本当の姉は自分ではないとわかっている。でも、自分は彼の姉だと自負している。情けない弟の背中を支え、泣きべそをかく弟にそっとハンカチで涙を拭い、弟を襲うもの全てに彼の前に立っ

て守ってきた。
今では身長も力も追い抜かれてしまい、どちらかと言えばすっかり自分は守られる側になってしまった。それでも、彼の心を支えられるのは姉である自分しかいない。その想いは、変わらない。
「……やっぱり、あんたは変わらないわね――ううん、本当に変わってないのは、私の方なのかもね」
「エレナ……？」
腕の中で、エレナの表情が柔らかくなる。一体、彼女の中で何があったのか。察する事もできぬクリュウは困惑するばかり。そんな彼の唇に、そっとエレナの人差し指が触れる。
「そんな情けない顔されたら、まるで私がいじめてるみたいじゃない。感じ悪ぅ」
「エレナ……」
エレナはそっと、クリュウから離れる。離れる彼女の体を追うようにクリュウの腕が伸びるが、その手は空を切ってしまう。
月明かりの下、エレナは軽い足取りで小さな花々が咲き連ねる野原へと歩む。草を踏んだ瞬間、隠れていた光蟲が一斉に飛び立ち、彼女の周りを浮遊する。
柔らかな光を纏う光蟲が無数に羽ばたく中心に立つエレナ。さながら、その姿はまさに月下に煌めく女神。背中に煌めく翼が見えたのは、幻か。
「ねぇ、クリュウ」
背を向けたまま、エレナは彼の名前を呼ぶ。クリュウはそんなエレナを無言で見詰める。
「――今度は、ちゃんと私にも相談してくれる？　もう、一番とは言わないわ。でも、ちゃんと相談して――私を、頼ってくれる？」
振り返り、エレナは静かに問う。その表情は真剣で、誤魔化したり言い淀む事は許されないゆな雰囲気。だから、クリュウは真剣に答える。
「約束するよ」
「本当？」

「幼なじみだからね。ウソを言うはずがないでしょ」
しばらく、二人は黙ったまま見詰め合う。まるで、互いの瞳を見て確認し合うように、黙って瞳を見詰め合う。
「……そっか」
二人の沈黙を破ったのは、彼女の小さなつぶやき。
フッと、口元に優しげな笑みを浮かべたエレナは両腕を広げ、その場で回転。浮遊する光蟲を纏いながら、笑顔を振りまく。
光輝く光蟲が、風と共に空へ上る。その先にあるのは、満天の星々が煌めく星の海。
光蟲が消え、月明かりだけが彼らを淡く照らす。その光景に、どこか寂しさを感じずにはいられない。
背を向けたまま、彼女は星空を見上げる。
「エレナ？」
「――言っておくけど、別に許してあげた訳じゃないわよ」
「えぇ？」
てっきり許してもらえたと勝手に思っていたクリュウはそんな彼女の発言に困惑する。
くるりと振り返ったエレナはうつむき、その表情は見えないままゆっくりとした足取りで近づいて来る。
「え、エレナ？」
「――そうね、許してほしかったらキスしなさい」
「は、はぁッ!?」
エレナの突拍子もない発言にクリュウは驚愕する。すぐさま顔は真っ赤に染まり、狼狽。
「ちょッ!?　何でそういう話になる訳ッ!?」
一人慌てまくるクリュウに、エレナはするとおかしそうにお腹を抱えて笑う。
「バァカ、冗談に決まってるでしょ？　何テンパってんのよ、おかしいのぉ～」
「え、エレナぁ……ッ！」
からかわれたとわかるや否や、顔をさらに真っ赤に染めて拳を震わ

せるクリュウ。そんな彼を見ておかしそうにエレナは笑い続ける。
「わ、笑うなよ……ッ」
怒るクリュウに謝罪の気持ちゼロの軽く「ごめんごめん」と謝りつつ、瞳の縁に溜まった涙を指で拭い取る。
「じゃあ、一つだけ訊かせて。それで許してあげる」
「な、何だよ」
ふて腐れ気味のクリュウに対し、エレナはそれまでの笑顔を一転させて、真剣な表情で彼を見詰める。そんな彼女の様子を見て、クリュウの表情も変わる。
「訊きたい事って？」
「うん。あんたさ、私の事――好き？」
「え……？」
突拍子もないという点では先程と変わらない問いかけ。しかし、クリュウはその問いかけに対して慌てる事も狼狽する事もなく、呆然とその場に立ち尽くす。そんな自分を見詰める彼女の瞳が、先程と違って真剣なまま。
「え、エレナ……？」
「答えて」
有無を言わせぬ迫力に、クリュウは頬を赤らめながら恥ずかしそうに答える。
「そりゃまぁ、その、好きかと訊かれれば――好き、かな？」
最後の方は耳をすまさないと聞こえないような声だったが、エレナにはその声はしっかりと聞こえていた。
しばしの無言。クリュウは気まずそうに視線を逸らし、一言も離さない。エレナも、ずっと沈黙を続けている。
「そっか……」
そっと、エレナがつぶやく。
「え、エレナ？」
「まぁ、あんたに無理難題を求めても無駄だって事はわかってたけどね……今は、それで良しにする」
「は、はぁ？」

「こっちの話。あんたに言ってもム～ダ」
「何だよそれ……」
　意味がわからないと言いたげにため息を零すクリュウ。そんな彼の様子を見て、彼とはまた別の意味でエレナはため息を零した。
「……まったく、成長してるんだかしてないんだか」
「え？　何か言った？」
「何にも～。お子様クリュウにはわかんない話よ～」
「だから、さっきから何なのそのトゲのある言い方はさ。言いたい事があるなら言えばいいだろ」
「……それが言えたら苦労しないわよ」
「え？」
「あぁもぉうるさいなぁッ。もういいわよッ、私帰るッ！」
　突然怒り出したかと思うと、エレナは困惑する彼を置いてさっさと城へ戻ろうとする。それを見て、クリュウが慌てて追いかける。
「ちょっと待ってッ。結局許してくれたのッ!?」
「知らないッ」
「えぇッ!?　無茶苦茶だよエレナッ！」
「あんたにだけは言われたくないわよッ！」
　困惑するクリュウと怒るエレナ。それは程度は違えど先程までの二人と変わらない。しかし、そのどちらの表情にも、先程まではなかった明るさ――いつもの二人らしさが戻っていた。
　背を向け合い、剣を振るい合い、本心を見せ合い――そして今は、笑い合い。
　二人は並び歩きながら、残り少ない春の夜空の下、月の光や星の煌めきに祝福されながら、子供の頃と同じように家路を目指す。
　子供の頃と変わらない。一方はこのままずっとと願い、一方はもっと先を願い――二人の距離は、少しだけ縮まった。
　二人の背後の星空に、そっと流れ星が一つ零れ落ちる。

第１４９話　帝都エムデン　出迎える妖艶な笑みを持つ者

数日後、クリュウ達一行は帝都エムデンに向かう竜車の中にいた。
長閑な田園風景が続く道を物々しい大軍が闊歩する。
レヴェリ家の諸侯旗を掲げた竜車隊。竜車は総勢十五台。その周りを国内最強の諸侯軍と謳われるレヴェリ軍が護衛している。
レヴェリ使節団は総勢一二〇名。イージス村の全人口に匹敵するような者達は、一路帝都エムデンを目指す。
数十人の兵士が護衛する豪華な装飾が施された十五台の竜車。その中でも一際巨大で目立つ竜車があった。一台一匹で引かれる普通の竜車とは異なり、その竜車は実に五匹のアプトノスで引かれる。
レヴェリ家の家族専用の装甲竜車《ドーラ》。盗賊や山賊などの賊の類に襲われても賊程度の持つ武器なら傷一つ付かない特殊車両だ。
巨大なドーラの中は一つの部屋が丸々入っている。豪華な内装に高級な座り心地が良いソファ。それに腰掛けているのが、この使節団の首脳陣だ。
「やっぱり、レヴェリ家ってすごいね……」
今回の使節団の中核にして発起人、クリュウ・ルナリーフ。
「レヴェリ家はローレライの悲劇を免れた数少ない領地でしたから。領外へ出れば必ずと言っていい程賊に狙われてましたので」
父に直談判して今回の謁見をこぎつけたクリュウを補佐するレヴェリ家三女、フィーリア・レヴェリ。
「モンスターに襲われたらこの武装じゃちょっと厳しいけど。賊程度なら問題ないわ。まぁ、モンスターが現れて私のフィーちゃんに手を出そうものなら、その時は私が容赦なくブッ殺すけどね」
レヴェリ家専属ハンターにしてフィーリアの親友のルーデル・シュトゥーカ。
「あら、でも最近はずいぶん治安も良くなったわよ？　それに、もしモンスターが出たらご飯を上げれば仲良くなれるかも」

どうにもピントのズレた発言をするのはレヴェリ家長女にして次期当主であり、今回の使節団の団長を務めるセレスティーナ・レヴェリ。
この四人が今回の使節団の首脳となる。そして当然その周りにはエレナ、サクラ、シルフィードの三人も控えている。
クリュウ、サクラ、シルフィード、ルーデルの四人は旅路の間にモンスターに襲われた際にすぐに迎撃に迎えるようにそれぞれ武装している。フィーリアは父親から危険な事にはできる限り関わらないようという条件の制限の為、今回は非武装だ。ただし、万が一の場合に備えてちゃんと彼女の武具は用意されてはいるが。
「今更ですが、ご迷惑をお掛けしてしまいすみません」
そう切り出したのはクリュウ。そんな彼の視線の先にいるのは頬に指を当ててかわいい困惑のポーズをするセレスティーナ。
「あら、何でクー君が謝るのかしら？」
「セレスティーナさんはお体が弱いと聞いています。なのに、それを押して今回僕の為に使節団の団長を務めてもらって……」
無理をさせてしまったと罪悪感を感じるクリュウだったが、セレスティーナは気にした様子もなくコロコロと笑う。
「いいのよ別に。何たってフィーの大切な人のお願いだもの。お姉さんがんばっちゃう」
「せ、セレスお姉様……ッ」
コロコロと笑うセレスティーナに、さりげなくとんでもない事を言われたフィーリアは頬を赤らめて怒る。だがそんな妹の抗議もどこ吹く風という様子。
「――それに、久しぶりにフリードリッヒに会いたいかったし、ちょうど良かったのよ」
気にしないでという感じで言うセレスティーナの発言に、シルフィードが反応する。
「フリードリッヒ……エルバーフェルド帝国総統、フリードリッヒ・デア・グローセの事か？」
シルフィードの問いかけに、セレスティーナはうなずく。

「そう。エルバーフェルドの若き救世主、現エルバーフェルド帝国総統兼皇帝、フリードリッヒ・デア・グローセ――私の友達よ」
笑顔で言うセレスティーナの発言に外部の人間であるクリュウ達は驚く。一国の国家君主が友達なんて、そうそうある事ではない。
一方、事情を知っているレヴェリ家の人間であるフィーリア達は驚いた様子はない。
「……これが、私がエルバーフェルド行きを提示したもう一つの理由です。セレスお姉様とグローセ総統閣下はご友人の関係なので、うまくいけばクリュウ様のアルトリア行きの切札になるかもしれないと」
そう言うフィーリアを見て、クリュウは改めて彼女が自分の為に色々と考えてくれていた事を認識し、感謝する。自分のできる全力を注いで、自分の為にがんばってくれている。本当にいい子だ。
「ほんと、今回はフィーリアには感謝してもし切れないよ」
素直に零れる感謝の言葉。すると、フィーリアは頬を赤らめて慌てふためく。
「た、大した事じゃありませんよ。それに、今までクリュウ様にしていただいた恩義に比べればこの程度全く問題ありませんッ」
そう、これはある意味恩返しなのだ。
一緒にいてくれて、笑ってくれて、優しくしてくれて――自分に、初恋を教えてくれて。
今の自分が幸せなのは全て彼のおかげだ。彼と一緒にいるのが幸せで、楽しくて。彼に振り向いてほしくてがんばって、それを彼は褒めてくれて、胸がポカポカと温かくなる。
全部、全部引っ括めて自分は彼に数え切れない程の恩義を受けた。今回は、そんな彼に対する些細な恩返しに過ぎない。フィーリアは、そう思っていた。
笑顔で「クリュウ様のお役に立てる事、それがあなた様に忠義を尽くすフィーリア・レヴェリ最高の喜びであります」と恥ずかしがる事もなく堂々と言うフィーリア。呆然とするクリュウの隣で、シルフィードとサクラがそれぞれ口元に笑みを浮かべる。
「まったく、君は本当に良いまるで忠犬のような仲間を得たな。どう

すればそのような良き仲間を得られるのか、ご教授願いたいくらいだ」
羨ましげに言うシルフィードの言葉にクリュウは少し考え、
「……森の中で空腹で倒れている所にご飯を上げる、とか？」
「それは忘れてくださいッ！　我が人生最大の汚点ですぅッ！」
クリュウの見事な赤裸々発言にフィーリアは顔を真っ赤にして怒る。まぁ確かに、彼女にしてみれば何ともドラマチックに欠ける話だ。そもそも、あの頃の自分はまだクリュウに対して現在のような感情は抱いていなかった、ある意味別人の話と言っても過言ではない。
すると、そんな彼女の耳元でシルフィードがそっとささやく。
「良いのか？　情けない出会いとはいえ、君達の最初の出会いの記憶だぞ？」
「……うぐッ」
からかうようにシルフィードが言う事もまた正論だ。恥ずかしい話ではあるが、あれが自分達の最初の出会いなのだから、思い出は変える事はできない。
「や、やっぱり忘れないでください……」
結局、初めて出会った時の事はやっぱり忘れてほしくない訳で、苦闘の末に彼女が導き出した結論がそれだった。
壮絶な葛藤したかと思えば、恥ずかしそうに言う妹の姿をセレスティーナは微笑ましく見詰める。
竜車の中に穏やかな空気が流れる――が、それも一瞬で終わる。すぐに話は今後の政府への、要するにエルバーフェルド帝国の国家君主、フリードリッヒ・デア・グローセ総統に対する直談判の話へと変わる。
「……五日前、ズデーデン地域で発生していたエルバーフェルド軍とガリア・東シュレイド軍の国境紛争は両軍の停戦という形で終結しました。その二日後にはエルバーフェルド第二の都市、ハイデルンにて三国の首脳及び周辺諸国の首脳陣が集まり、停戦協定を正式に調印しました。一応これで先日より発生していた国境紛争は終結という事になります」

ここ数日のエルバーフェルド国及び、その周辺諸国の大まかな動きを説明するフィーリア。と言っても得られる情報は新聞などで得られる情報ばかりなので、詳しい事はわからない。だが、

「……エルバーフェルドはズデーデン地域の奪還に成功」

ポツリとつぶやくサクラがテーブルの上に放ったのは、その問題の新聞だ。記事には大見出しで《蛮族に奪われた友の地、ズデーデン地域解放》《お帰りなさいズデーデン》《ズデーデン地域統合へ》など、ズデーデン地域がローレライの悲劇の際にガリア・東シュレイドに奪われて以来十数年ぶりにエルバーフェルドの国土に戻った事が書かれている。その他にも、

《ズデーデンの壁崩壊「お母さん、私もお母さんになったんだよ」引き裂かれた家族涙の再会》

《総統陛下、母の故郷奪取に涙》

《総統陛下初のズデーデン入り　領民総出で涙ながらの「ありがとう」》

《千年帝国への第一歩を踏み出す》

《我が軍の怒涛の進撃の前に暴戻（ぼうれい）ガリア・東シュレイド軍次々殲滅》

《レオパルドの雷、鬼畜軍為す術無し》

《内閣支持率一〇〇パーセント　全国民総統陛下と興廃を共にする覚悟》

《総統陛下「奪われた国土は激しい抗議によって国家の膝下に戻ってくるのではなく、戦闘力のある剣によって取り戻されるのだ」》

新聞の至る所でズデーデン地域の奪還や《敵国》ガリア・東シュレイド軍の殲滅に狂喜乱舞する記事が踊る。それを見ているだけで、どれだけエルバーフェルドがこの地域の奪還を喜び、そしてガリア・東シュレイドを憎んでいるかがわかる。

国という枠組みの中で生きる者達の、エルバーフェルドの人々の本心が踊る記事。クリュウはそれを見て悲痛そうに顔を歪める。そんな彼を見て、サクラはため息混じりに言う。

「……これを見て、クリュウはどっちが正義かわかる？　わからない

わよね――だって、正義なんてこの世で最も美化されて、最も醜くて、最も役に立たたない言葉よ」
　これが現実だ。そう言いたげに、サクラは記事の一角を指さす。そこにはガリア・東シュレイドに併合されて以来、十数年ぶりに再会を果たした家族の記事。若き美しかった母はおばちゃんになり、小さな子供だった娘は若き母親となっていた。親子は涙の再会を果たし、母は知らないうちに祖母になっていた。
「ひどい……」
　皆の気持ちを代表するようにエレナがつぶやく。
　親子の絆を、国という境が阻む。距離にしてみればそう遠くはないのに、国境という隔たりがそれを許さない。それが、十数年もの間親子の絆を引き裂いていた――そしてようやく、その絆が取り戻されたのだ。
「……国家とは最強の防衛機構であり、統治機関。そのメリットは計り知れない。でも、デメリットもまた、計り知れない」
「ただし、国境という一見するとただの平野に見える場所にそれぞれが主張し、妥協する国境という見えない壁が生まれる。そして国境とは、時に国家が自らが滅びる覚悟でも得ようと考えるほど重要なものだ」
　シルフィードもまた、サクラに同調するような発言をする。有史以来、国境問題で国家同士が戦争を起こし、滅びた国も少なくない。例えるなら、二つの別の宗教国家があるとして対立している。しかしそのどちらもが実は同じ神を崇拝しており、当然それぞれにとっての宗教上重要な場所、聖地は同一となる。その場合、それぞれの国家がその聖地は自国のものだと主張し、いがみ合い、そして荒そう。他にもその地が作物の育成に適した良地であったり、地下資源が豊富であったり。国家にとって有限である大地は何にも代え難いものであり、それを奪い合い、対立する。
　一つのリンゴを少数の人々で奪い合うのをケンカとするなら、一つの大地を国家同士が奪い合うのは戦争と言う。規模は違えど、その根底は変わらない。ただ、そこに様々な利権や思惑が絡み、複雑になっ

ているだけ。
国家に属さない、国を持たない者からしてみれば国家同士の戦争は理解するのは難しい。特に、クリュウは争いのない平和な片田舎出身だ。基礎の知識や概念がない分、ありのままの現実に戸惑い、苦しむ。
「この記事はエルバーフェルド側のものだ。当然、記事も内容は反ガリア・東シュレイドのものになる。だが一方で事実上の敗戦を喫したガリア・東シュレイド側はこちらと同じく反エルバーフェルドの気運が高まっているであろう。憎しみが憎しみを呼び、また新たな争いが起きる。一度始まってしまった憎しみの連鎖を止める事は、並大抵な事ではない。特に、国家という巨大過ぎる共同体の前ではな」
シルフィード自身も、家族や故郷の村を潰されて憎しみに狂った事もある人間だ。今でこそその憎しみは落ち着いてはいるが、一時は全てのモンスターを憎み、蹂躙（しゅうりん）し、惨殺し、復讐に我を忘れていた事もある。それほどまでに憎しみという感情は強く根深い。
憎しみの恐ろしさを知っているからこそ、言える。
「でも、そもそもはガリアや東シュレイドがエルバーフェルドを侵略したのが悪いんでしょ？」
「事実はそうだが、現実はそう簡単なものではない。サクラも言っていたが、当時のガリア・東シュレイドは国家危機に等しい燃料不足に陥っていた。自国の何千万という国民を守る為に、仕方なく戦争を起こした。それに、元々二国ともにエルバーフェルド王国の軍事力に物を言わせた態度に反感を抱いていたという面もある。どちらが悪いなどと決められる程、事は単純ではない」
第三者視点から冷静に言うシルフィードだったが、ふと自分に向けられる不快な視線を感じて振り返った。すると、フィーリア、ルーデル、セレスティーナ、控えている侍女までもが自分をそのような目で見詰めていた。
「……そうか、君達はエルバーフェルド人だったな。敵性国家に対する擁護発言はあまり心地良い話ではないな。すまない」
謝るシルフィードに、セレスティーナが優しく微笑む。

「まぁ、あまり聞いてて気持ちのいい話ではないわね。でも、私達はともかく他のエルバーフェルド人の前ではそんな事言わないでね――この国では、ガリア・東シュレイドに対する擁護発言をすれば、国家侮辱罪で警察に逮捕される。そういう国なの」
「……言論の自由が封じられている――哀れね」
瞳を閉じたまま、サクラは一切包み隠さず直球勝負。だが、ルーデルはそんな彼女の発言に冷静に返す。
「全ての自由が許される方こそ苦痛よ。だってそれはどんな悪行も許される無法地帯って事でしょ？　少しくらい窮屈な方が人は生き生きとする――それに、様々な考えや理想を持つ大人数を統治するには、それくらいの制限がなくちゃ無理な話よ」
国家に属する者と国家に属さない者。両者の考え方はいつまで経っても平行線のままだ。
自然と、皆の口が閉じられて沈黙が竜車の中を支配する。皆、気まずそうに視線を逸らし、無言を貫く。
そんな皆を見回し、話題を変えようと口を開いたのはセレスティーナだ。
「まぁ、小難しい話題はこれくらいにして。私達が本当に話し合わないといけないのはクー君のアルトリア行きをどう働きかけるか、でしょ？」
皆を和ませる優しげな笑顔でセレスティーナは言う。それをきっかけに話は本来の道へと戻る。
「情報によるとグローセ総統陛下は今日にも帝都エムデンに戻るそうです。私達が帝都に到着するのは明朝の予定ですので、レヴェリ家からの使節団という事でエムデン宮殿へ入城します」
「事前連絡は完了済みか？」
「はい。お父様が政府へ出した書簡の返答の書簡によると、到着次第歓迎するとの旨です」
「フリードリッヒに対する謁見までは許可はまだ出てないけど、レヴェリの名があればそう長くは掛からないはず。まぁ、万が一の時は私が何とかするわね」

「じゃあ、私は竜車隊に残って野営の準備を進めておきます。フィーちゃんやセレスティーナさんの護衛は彼らで十分でしょう」
「……エムデン宮殿の警備図が抜けてるようだけど」
「んなもんある訳ないでしょッ!? あんたは城攻めでもしようって訳ッ!?」
とまぁ、多少脱線はしつつも順調に話が進んでいく。進んでいくのだが、肝心のクリュウは完全に聞き手側になってしまっていた。女子陣があまりにも緻密に計画を考えていたので、意見する隙もないのだ。
自分の為に、ここまで形になったプランを考えてくれるなんて。クリュウはそっと協力してくれる皆に感謝する。
まぁ、お陰様で勝手に話が進んでしまい当事者としての存在感もカケラもなくなってしまったのだが。
「クリュウ様」
気がつくと、椅子に座って事を見守っていた自分の隣にそっとフィーリアが控えていた。数日前の彼女の両親との謁見の際に纏っていたあのかわいらしいゴスロリ風のドレス姿だ。
「お気分でも優れないのですか? 先程からずっとそうして沈黙されておりますが」
「いや、単純にみんなが有能過ぎて僕が口を挟む暇がないだけだよ」
「……まぁセレスお姉様がいますから、任せておいても問題はないとは思いますが。今回の行動はクリュウ様の為のものなのですから、ただ見ているだけでは困りますよ」
「わかってるよ。自分にできる事はちゃんとやるさ。結局、どんなに策を巡らせても最終的にやらなくちゃいけないのは僕なんだからさ」
どんなに根回しをしても、舞台を用意しても、結局は自分の心意気次第。直談判をするのは、自分だ。
「その意気ですクリュウ様。私もできる限り応援させてもらいますッ」
「って、フィーリアには今回もうこれ以上ないってくらい助けられてるけど」

「まだまだがんばりますッ」
「あははは、ありがとう。頼もしいよ」
クリュウはそう言うと、元気にガッツポーズするフィーリアの頭を優しく撫でる。この埋め合わせは必ずするとして、今はとりあえずこれで。
当然、フィーリアは見返りを求めて行動はしていない。今までの恩返し、クリュウの役に立ちたい、そういう想いで動いているのだから彼の考えは杞憂だ。だが、こうして頭を撫でられるのだけは、素直に受け入れてもいいご褒美だ。
優しく頭を撫でられ、フィーリアは幸せそうに顔を綻ばせる。頬を赤らめ、目を閉じ、嬉しそうにはにかむ。
こういう何気ない彼の優しさが、フィーリアは大好きだった。そして、彼女達も――
「バカクリュウッ！　人があんたの為に話し合ってるのに何変な空気振りまいてんのよッ！」
「私のフィーちゃんから離れなさいッ！　今すぐにッ！」
「……クリュウ、私も撫で撫でしてほしい」
「まったく、騒がしい連中だな君達は」
「あらあら～」
あっと言う間にクリュウは皆に囲まれる。エレナとルーデルに怒鳴られ、いつの間にかサクラは左腕にしがみ付き、自然に右腕に抱きつくフィーリアがサクラを牽制し、シルフィードが呆れながらもさりげなくクリュウの服の裾を掴んでいたり、そんな彼らを微笑ましげにセレスティーなが見詰める。
一瞬にしてさっきまでの重苦しい雰囲気も真剣な空気も崩れ、いつもの彼ららしいのん気なムードに包まれる。どんな状況でもそういう空気に変えてしまうのは実に彼ららしい。
どんな苦難にぶつかっても、きっと彼らは自分のペースを崩さない。それは仲間を信じている証拠だ。
互いを信頼し合う仲間達。
一人の少年を想う乙女達。

そして、そんな彼女達の期待に応えようと決意する少年。
様々な想いを乗せて、竜車隊は一路エルバーフェルド帝国の中枢、帝都エムデンへ向かう。
エルバーフェルド帝国首都、帝都エムデン。丘の上に築かれた街はドンドルマにも負けない大規模都市。石造りの家はもちろん、道路も石で舗装されている。大都市らしい外観を持つ街だ。
ドンドルマと違い、丘の上に築かれた街の外周全てを二重三重に外敵を阻む石壁が覆い、さらにその外周は河川事業で川を引き込んで人工的に三角州にしており、決められた箇所の羽橋でしか行き来ができないようになっている。街の周りにはエルバーフェルド軍、正式にはエルバーフェルド国防軍の中でも精鋭の近衛師団が常駐して帝都防衛に任を受けている。線路も当然敷かれており、エルバーフェルド軍の象徴である列車砲も数十輌配備されている。
外敵の進入を阻む街作りに加えて帝都防衛に強力な軍隊を有するエムデンは大陸にある街の中でもトップクラスの難攻不落の城塞都市となっている。
ドンドルマと比べてもう一つ大きく違う点を言うと、斜面に街を作るという点ではエムデンも同じだが、街の中心部は比較的丘の上の平野に築かれ平らである事。増築によって拡大したドンドルマと違って最初から的確な都市開発が行われた為に街がきれいに整然されている事。大通りが曲がらずに一直線に伸びている事もその特徴だ。
栄えるのに合わせて規模を拡大させたドンドルマの街並みも無骨でいいが、こういう計算された街作りもまたいい。
そんなエムデンに、一行は辿り着いた。
国防軍の兵士に案内されて一行が竜車を止めたのはエムデン宮殿から少し離れた場所にある政府専用の来賓野営陣地。他国や国内の諸侯が帝都を訪れる際に護衛に同行した人々に野営の為に用意される場所だ。
レヴェリ使節団はそこに到着するとすぐにルーデルの指示で野営の準備に取りかかる。事前の打ち合わせ通りルーデルはこの場に残って待機部隊の指揮を行う。実際にエムデン宮殿に向かうのはク

リュウ、エレナ、フィーリア、サクラ、シルフィード、セレスティーナの六名だ。
天幕（テント）を設置する兵に指示を出すルーデル。そんな彼女の背後に六人が集まる。
「ここは私に任せて、あんたは自分のやるべき事、がんばりなさい」
振り返らず、ルーデルは誰かを明言せずに言う。だが、その場にいる全員がその言葉が誰に向けられたものかわかっている。
「ありがと、ルーデル。行って来るよ」
クリュウがそう言うと、ルーデルは振り返る事なく手をヒラヒラと翻す。行ってらっしゃい、そういう意味が込められた。
クリュウは一つうなずくと、振り返って待ってくれている皆を見回す。
「それじゃ、行こうか」
皆が、一斉にうなずいた。
宮殿へ向かう道中、一行はあっと言う間に大勢の人々に囲まれた。皆一様に熱気に満ちた表情と情熱をもってクリュウ達にまるでライトボウガンの速射のように質問を連発する。どうやら、エルバーフェルド国内の新聞会社の記者らしい。
記者に囲まれてしまい動けなくなるクリュウ達。しかしすぐにこれを見ていたルーデルが兵士を動かしてこの記者達を追い払い、一行は改めて宮殿へ向かう。
「しかし、すごかったですね」
ハンターの武装を脱ぎ、先日と同じ正装を施したクリュウは乱れた服を直しながら疲れたように言う。
「そうだな。野営陣地に向かう際に街を抜けた時もずいぶん注目されたし、野営陣地にもずいぶん野次馬が来ているようだが」
先日のドレスはさすがに恥ずかしかったらしく、今回はクリュウと同じような男装のようなスーツ姿のシルフィードが戸惑う。
そんな彼らの疑問を答えたのはセレスティーナだ。
「レヴェリ家はエルバーフェルド国内で最も有名な貴族家だからね。しかもお父様は国民に重税を課してまで過剰な軍備増強を続ける政

府をあまり好いてないの。だから、レヴェリの旗を掲げた一団が帝都に定例諸侯会議でもないのに来るのが驚かれたんでしょうね。きっと、国の大方針の根幹に関わる重要な密談が行われると勘違いしてるみたい」

おかしそうに言うセレスティーナの説明に、クリュウ達は納得したようにうなずく。そういう背景なら確かに野次馬も集まるだろうし、記者も必死になる訳だ。

「一国の政府だけじゃ飽きたらず、マスコミや一般人にまで迷惑を掛けるなんて、あんたらしいわね」

呆れるエレナの発言に、クリュウは返す言葉もなく苦笑を浮かべる。ぶっちゃけ彼の中ではまさかここまでの大事になるとは思っていなかった。この辺は彼の世間知らずさが招いた訳で。

「ともかく、早く宮殿に向かいましょう。またマスコミに囲まれたら面倒ですから」

フィーリアの言う通り。今度はルーデルの助けも得られないだろうし――そもそも、サクラが危ない。さっきもあと少し兵士の介入が遅ければ記者に襲いかかるような勢いだった。おそらく、先日の騒動と同じようにドレスのどこかに太刀を忍ばせているだろうし。

クリュウはうなずき、エムデン宮殿へ向かう足を早める。

エムデン宮殿は実に美しい宮殿であった。

王国時代からエルバーフェルドの象徴であり、大陸の数ある宮殿の中で最も美しい宮殿と言われる建造物だ。

エムデン宮殿は巨大な《コ》の字形の本館と繋がって左右に隣接する横長の別館を主として構成されている。それらを総称して本殿と呼ぶ。

本殿の周りにも複数の建物が美しく左右対称に隣接し、全体の宇着くさを際だたせる。

エムデン宮殿の周りには美しい花畑が咲き誇り、地下から湧き出すきれな水が堀を優雅に流れ、宮殿中央広場にある噴水からは幻想的に水が天を目指す。

ドンドルマは比較的新しい街だ。歴史は浅くてこういう歴史的建

造物はない。しかもドンドルマの街並みは圧倒はされるが美しいと感じる事はない。無骨な作りは、それが装飾を必要としないハンターの街だという表れか。
　一方のエムデンは歴史は古く、王族が統治していただけあって景観を非常に大切にしている。その為こうしたエムデン宮殿のような美しい建造物があるのだ。
　初めてエムデン宮殿を目にしたクリュウはそのあまりの規模の大きさと美しさに目を奪われた。建物だけではなく、広大な庭にも手入れが行き届いており、一目見るだけでこの国のすさまじさを見せつけられたような気になる。
「エムデン宮殿は今から二〇〇年程前に当時の国王が諸国に対する自国の象徴として建設して以来、王国時代はもちろん、共和国、そして現在の帝国と国家体制の根幹が変わってもエルバーフェルドの権力象徴であり、国民の誇りです。エムデン宮殿に勝る城や宮殿はこの世には存在せず、並び立つものがあるとすればアルトリア王政軍国のアルトリア城くらいだと言われています」
　エムデン宮殿の美しさの巨大さに驚く一同にフィーリアは自慢気に説明する。彼女だって祖国を愛していない訳ではない。祖国に感心を抱いてもらう事はもちろん嬉しい。エルバーフェルド人にとって、エムデン宮殿は誇りなのだから。
　そうこうしている間に一行は正門の前に辿り着く。重厚な高い鉄製の柵が宮殿の敷地を全て取り囲んでいる為、宮殿内に入るにはこの正門を潜る他術はない。当然、出入口となる正門は厳重な警備がされており、大勢の兵士が武装して常駐している。
　現れたクリュウ達一行を見て、兵士が警戒態勢になる。何せ今はとりあえず停戦条約が結ばれたとはいえ、国を取り巻く現状は厳しい。当然、警備もいつも以上に警戒している。
　フィーリアは持っていたレヴェリの諸侯旗を掲げる。先頭に立つセレスティーナが兵士に事情を説明すると、「少々をお待ちください」と言って兵士の一人が門の脇にある兵士専用の簡易扉で敷地内へと消える。

時間にして一分少々。突如として正門が開くと、兵士達は一斉にその場で直立不動となって敬礼。驚くクリュウ達の前で、開け放たれた正門から一人の青年が現れる。灰色のクセッ毛の強いロン毛に意思の強い黒い瞳の上から掛けた知的なメガネが特徴の兵士達と同じ黒い軍服を纏った美しい美青年。ただ違うのは白い稲妻を模した腕章を付けている所。階級の違いとか、そういう差ではない。

実に端正な顔立ち。甘いマスクとクールな表情が魅力で、女性なら誰もが心奪われてしまうかのような美青年。だがセレスティーナは好みではないのかどこ吹く風という感じ。残りの女子はすでに意中の人がいるので同じく彼の魅力に引き込まれる事はない。

現れた青年を見てフィーリアの表情が緊張に染まるのが見えた。それを見て、彼を知らないクリュウ達も自然と彼がずいぶん立場の上の人間だと悟る。

一方、青年に対して朗らかな笑顔で出迎えるセレスティーナ。

「御機嫌よう。まさか親衛隊隊長自ら出迎えてくれるなんて、意外でしたわ」

「宮殿内へご案内します。どうぞ」

挨拶するセレスティーナを無視して、青年は至極事務的に彼らを招き入れる。その態度に少なからずムッとするクリュウだったが、振り返ったセレスティーナが「あの人はああいう人なの。気にしないで」と笑顔で言う。何でもお見通しなんだなぁとクリュウは苦笑を浮かべた。

青年の後ろに続いて正門を抜けると、噴水広場に辿り着く。その横を通り抜けて、いよいよエムデン宮殿の本館の門を抜ける。

その間に、クリュウはフィーリアから青年――オコーネル・ゲルトハルト親衛隊隊長の説明を受ける。強力な準国軍に等しい組織の最高司令官だと言うのだから、フィーリアが緊張するのも当然か。

オコーネルに案内されたのはとある一室。中に通されると、ずいぶん広い部屋であった。置かれたのは長テーブルとその周りを囲む簡素な椅子だけ。実に質素な外見だ。

ここまでの道のりでも思っていたが、外見は豪華絢爛なエムデン宮

殿だが、その内装は実に簡素だ。絵画もなければ花瓶もないしシャンデリアもない。床には絨毯もなく石畳がムキ出しだ。
そんな簡素な内装の部屋には、すでに二人の女性が待っていた。
長テーブルの上座に優雅に腰掛けているのは黒く艶やかな長い髪に血のように真っ赤な瞳が危ない雰囲気を漂わせる妖艶な女性。浮かべている表情もどこか妖艶な笑みで、クラクラするくらい大人の色香が濃い。ライザやセレスティーナとはまた違ったタイプの《大人の女性》という感じの人物。身に纏うのは国防軍の黒い制服だが、オコーネルのような腕章はつけていない。
そんな怪しい女性の横で直立不動で立っているのは知的な銀縁メガネに強い鉄の意思を煌かせる鋭い碧眼をしたショートカットの黒髪をした少女。大人な色香全開の座っている方の女性に対してどこか幼さを感じる顔立ちは、自分達と同じくらいの年齢を思わせる。だがその冷徹な表情からは本当に自分達と同い年くらいか、という疑問を抱いてしまう程クールだ。
まぁ、年齢に対して時折大人びた表情を見せたり、ずいぶん大人びた人を周りに持つクリュウから見れば比較的普通に見えてしまうのだが。
二人の姿を見た途端、フィーリアの表情がさらに厳しくなった。察するに、今自分達の横に立っているオコーネルよりもずっと上の身分の人間なのだろう。その緊張が、自然とクリュウ達にも移る。
座っている妖艶な女性は怪しげに微笑みながら、ゆっくりと口を開く。
「あら、レヴェリから使いの者が来るとは聞いてたけど、あなただったのね」
「お久しぶりですわね。お元気そうで何よりですわ、大臣」
大人な女性二人のあいさつ。何とも緊張感があるようで、実はあまりない会話だ。だがこの会話の中で二つの事実がわかる。一つは二人は顔見知りだという事、もう一つは相手方の女性はこの国の大臣だという事。大臣がわざわざ出迎えてくれた事と、こんなに若いのにという二つの驚きが彼女を知らぬ者達の間に流れる。

そんなクリュウ達の反応を、妖艶な笑みを浮かべたままの女性が気づく。
「あなたの後ろに控えてるかわいい子達は、外国の方？」
「……まぁ、そうね。よくわかりましたわね」
「私が「大臣だ」って言った途端驚いてたもの。この国の人間なら私の事は知ってて当然だもの」
自信過剰にも思える発言だが、不思議と嫌味には聞こえなかった。あくまで事実を述べているだけ。そんな感じのセリフだ。
「諸国漫遊していた妹のお友達。ドンドルマの方から来てくれてますの」
セレスティーナの説明はまぁ間違いではない。最近は主にドンドルマで活動する事が多いし、そもそも拠点としているイージス村を説明するよりは大陸中で名を知らしているドンドルマの方が説明しやすい。
「ふぅん、ドンドルマからねぇ。さすが大陸中から人が集まるだけあって、かわいい子ばっかり。一度目の保養に行ってみたいわぁ」
女性は先程からセレスティーナだけではなく、その後ろにいるフィーリアやサクラ、エレナやシルフィード、さらにはクリュウを見て《かわいい》と連呼している。ちょっと熱を帯びた視線を向けられながら言うので、言われた側は少し恥ずかしい。
「いけません大臣。あなたは総統陛下の政権の要石。そのような外遊をしている暇などありません」
女性の願望発言に対し一切の容赦なく寸断したのは彼女の横に先程から無言で立っていた方の少女。すると、そんな彼女の発言に大臣が拗ねる。
「カレンったら意地悪ねぇ。まぁ、この国にもまだまだかわい子ちゃんはいっぱいいるから、その子達を全員愛で尽くしたらの話しよ」
「……ご身分を忘れられては困りますよ。大臣が如何わしい事で逮捕などされたら政権への打撃は尋常ではないのですから」
「大丈夫よ。警察はとっくの昔に私の支配下だもの♪」
「……さりげなく恐ろしい発言をするのはやめてください大臣」

「んもう、ちゃんとカレンもかわいがってあげるわよ」
「結構です。私が崇拝するのは総統陛下お一人だけです」
「んもう、つれないわねぇ……」
何とも緊張感のない会話だが、その節々に権力に物を言わせた発言が見え隠れする。呆然としていると、大臣と呼ばれた女性が静かにこちらに振り返る。
「紹介が遅れたわね。私の名前はヨーウェン・ゲッペルス。このエルバーフェルド帝国の国家報道及び国民教育を担当する省庁を管轄する宣伝省の大臣。大臣と言っても他の難しい省庁と違って宣伝を担当するだけだからそんなに立場は強くないわ。よろしくね」
女性――ヨーウェン・ゲッペルスは魅惑の笑みを浮かべながらそう名乗る。彼女が別名《妖艶のゲッペルス》と呼ばれる所以は、その妖艶な笑顔にある。その魅力的な顔立ちだからこそ、宣伝担当大臣という国民の前に最も顔を出す役目を負っているのだろう。
ちなみに彼女はこう謙遜したが、宣伝省は国家プロジェクトの根幹に携わる省庁であり、国内の新聞を全て検閲したりプロパガンダ報道を行う為に国民への影響力は非常に強く、総統の後ろ盾を得ている為に他の省庁に対する圧力もまた大きい。事実上、エルバーフェルドで最も力のある省庁を管轄する大臣だ。
「カレン・デーニッツ国防海軍総司令官だ」
至極簡潔に少女――カレン・デーニッツは名乗る。それ以上語る事はないと言いたげに黙る彼女の姿は、何となく誰かに似ているような気がしたクリュウ。
向こうが名乗ったので、クリュウ達も簡単な自己紹介を済ませる。
そして話はいよいよ本題へと移る。

第１５０話　揺れる王侯会談　思わぬ人物との再会

時間は少し遡る。
定例の閣僚会議を終えたフリードリッヒが席を立とうとした所で、一人の男が慌てた様子で部屋へ飛び込んできた。まだ部屋の中には閣僚の多くが残っており、無作法に入って来た男をある者は怪訝そうに、ある者は煩わしそうに見詰める。それらの視線を無視して男は目的の人物、ヨーウェンの下へ駆け寄る。彼は宣伝省の次席事務官の一人だ。
次席事務官の耳打ちにヨーウェンはわかったという感じにうなずいて彼を退出させる。怪訝そうに自分を見詰めているフリードリッヒへ振り返ると、困ったような表情を浮かべながら今入った報告を説明する。
「レヴェリ家の使節団が到着したそうよ」
部屋の中にざわめきが広がる。
レヴェリ家はエルバーフェルドでは最も有名で高貴な貴族家であり、フリードリッヒ体制をあまり快くは思っていない《数少ない》《珍しい》思考を持つ領主が治めている家だ。フリードリッヒが全権移譲法を成立させてからは定例諸侯会議以外では一切帝都を訪れなくなった。
そのレヴェリ家からの使者が、定例諸侯会議でもないのに帝都に訪れた。異例中の異例の事態に、閣僚達が自分達の知らない国家プロジェクトの密談が行われるのではという疑心暗鬼に包まれる。
「レヴェリからの使い？　我々はそのような事は知りませんが」
宣伝省とは対外的な宣伝で競合し、対立する外務省管轄の外務大臣が自分すらも知らない事をヨーウェンが知っている事に不快感を表しながらフリードリッヒに尋ねる。しかしフリードリッヒは「大した要件ではない」と彼の疑問を無視して立ち上がる。
外務大臣はまだ何か言おうとしたが、隣に立つ運輸大臣が肩を叩いて止める。主が大した要件ではないと言うのだから、臣下はそれに従おう。そう言いたげにうなずく。運輸大臣に止められた外務大臣は

仕方なしにこれ以上の追求をやめる。
部屋を出て行くフリードリッヒ。その後ろをヨーウェンが続く。
「……レヴェリの遣いか。という事は例の件か？」
「たぶんね」
「その件は断ったはずではないか？」
「うーん、そうなんだけどねぇ。断りの一報を入れたら今度のガリアとの国境付近で行う威力軍事演習でレヴェリ領を通る許可を取消すと言ってきて……」
それで断り切れなかったのよねぇ、と困ったように言うヨーウェン。すると、振り返らずに歩いていたフリードリッヒの足が止まる。後ろに続くヨーウェンもそれに従って足を止めると、フリードリッヒが振り返る。
「つまり、レヴェリの要求に屈したと？」
従わぬ者は皆殺しにしても構わない。究極の理想完遂主義者であるフリードリッヒにとって、自分のやり方に逆らう者の存在は鬱陶しい事この上ない。そればかりか刃向かう者に対しては嫌悪や憎悪を抱く程、彼女は反逆を許さない。
フリードリッヒの怒れる瞳は、まさか屈した訳ではないなと脅迫じみた問い掛けだ。そんな彼女の憤怒の瞳に、ヨーウェンは肩を竦ませる。
「とりあえず交渉の為に呼んだだけよ。それ以上の事はまだないわ」
「……交渉の必要などないわ」
「残念だけど、この国には新興政府の私達よりも王国時代から国政に関わってきているレヴェリ家を支持する人も多いのよ、特に保守派はね。そういう勢力を敵に回さない為にも、形式的にも交渉の席を用意しないと」
レヴェリ家は王国時代程ではないが、現在でも強い影響力を持つ貴族家だ。反旗を翻せば複数の諸侯が寝返るだろうし、役人の中にもレヴェリと繋がる者は少なくない。国防軍の将校の中にもレヴェリ家に近しい家柄出身の者もいる。レヴェリ家を敵に回す事は、最悪の場合内乱にまで発展してしまう。しかもレヴェリ家は豊富な地下資源

を持つ領土で、貴重な鉱石などを多く採出している。兵器のコアとなるパーツの素材もレヴェリ産の鉱石が使われている事が多い。
フリードリッヒにとって、ガリアや東シュレイドよりも厄介な《敵》。それがレヴェリ家だった。
「……交渉の件は貴様に一任する。早々に追い払え」
「いいの？　軍事演習とか資源とかボイコットされちゃうかもよ？」
「構わん。演習にはレヴェリ領を避けて通れば良い。資源問題もズデーデン地域である程度は補える。いつまでも古臭い習慣に囚われる前時代的な連中に付き合っている暇はないわ――私達が目指すのは前だけ。後ろに振り返っている暇はない」
そう言い残し、フリードリッヒは去って行く。その背中を見詰め、ヨーウェンはやれやれとばかりに肩を竦ませると一人回れ右して対策を考えるのであった。
一体、どんな無理難題を押し付けてくるのやら……
クリュウから事情の説明を受けたヨーウェンは、正直困惑していた。
レヴェリ家が領主の名を出してまでアルトリアに使者を送りたいとの進言。てっきり何か巨大な計画の一環だとばかり思っていたが、フタを開けてみれば何とも小さな、しかも目の前で不安気に瞳を揺らす少年の為のもの。あまりにも、突拍子がない。
あの政府と敵対とまではいかなくてもあまり良好とは言えないレヴェリ家が、わざわざ政府に頭を下げるような内容の手紙で進言したのが、たった一人の少年の願いを叶える為。
困惑するのはヨーウェンだけではない。隣に立つカレンも先程までの鋼鉄の無表情が壊れ、困惑している。
困惑する二人の様子を、セレスティーナは予想していたのだろう。事の経緯を簡単に説明する。
「このクー君は私の妹、フィーリア・レヴェリのお友達なの。フィーが必死にお父様にお願いして、今回のご進言をしてもらったのですわ。お父様、フィーをとても可愛がっていらっしゃるから」
セレスティーナの説明に何となく事情を呑み込むヨーウェン。つ

まり、娘が自分の友人の願いを叶えたいと父に訴えかけたので、この異常事態が実現したという事か。
「……ずいぶん、レヴェリ家も安くなったものですね」
冷静な口調でそう切り出したのはカレン。表情は先程までの鋼鉄の仮面に戻り、冷徹にクリュウ達を見回す。軽蔑とまではいかなくとも、お世辞にも友好的とはいえない瞳だ。
「カレン。軍の者が内政に口を出さないの」
メッ、と怒るヨーウェンにカレンは無言を貫く。無視した訳ではなく、言われた通り口を出すのをやめたのだ。ヨーウェンは改めて自分の前に座るクリュウをジッと見詰める。
「大体の事情はわかったわ。あなたの母親を想う気持ち、とても微笑ましくて可愛いわ」
「は、はぁ……」
「――でもごめんね。アルトリア行きは許可できないわ」
ヨーウェンはしかし、そう断った。彼女の発言に、少なからずレヴェリ側にざわめきが生まれる。予想はしていただろうセレスティーナはしかし冷静だ。
「ずいぶん簡単に言ってくれますわね。断る理由があるのでしたら、ぜひ聞かせてもほしいですわ」
口調こそ柔らかいが、その問い掛けの内容は厳しい。あまり見ぬ優しい姉のどこか厳しい態度に、フィーリアは不安そうに彼女を見守る。他の者も、ヨーウェンと真正面から対峙する彼女の背中を見詰める。
フィーリアの問いかけに、ヨーウェンは困ったような表情を浮かべて手の平を返す。
「断る理由ねぇ、今の御国の現状を見れば大体わかると思うけど？」
ヨーウェンの言う《御国》の現状とは言わずとも近隣諸国との関係が緊迫化している状況の事だ。停戦したとはいえ、エルバーフェルドと近隣諸国の関係は帝国建国以来かつてない程に緊迫している。エルバーフェルドだけではなく、周辺諸国はエルバーフェルドとの国境付近の兵力を増している。ちょっとした刺激があれば、一瞬で軍事衝

突をしてもおかしくないような状態だ。
「今のエルバーフェルドはとても微妙な舵取りをしなきゃいけないの。その最中に、余計な事に神経を割いてはいられないのよ。悪いけど、私は政治家よ。国の行く末を担う事が、私の責務なのよ」
真っ直ぐな決意が煌めく瞳。その瞳には迷いはなく、決意は揺るぎない。
自分が成すべき事を遂行する。それ以外の事などに構ってなどいられない。表情こそ柔らかいが、瞳は冷徹に輝く。
遠回しに、レヴェリ側の意見など聞く気など全くないと宣言するヨーウェンを見てサクラが半歩前に出るが、隣に立つシルフィードが無言で制止する。
邪魔するな、そう訴えるサクラの瞳と対峙しながら、シルフィードは小さく首を横に振る。黙って聞いていろ、そういう意思表示だ。
サクラが反発の声を上げようと口を開いたのと、膠着状態だった空気が変わったのは同時だった。
「――そうね。自分の信念の為に一生懸命になるのは、すごく素晴らしい事。どんな手段を使ってでも、目的を完遂する。それがエルバーフェルドの鋼鉄の意志よね」
怪訝そうに見詰めるヨーウェンに、セレスティーナは微笑む。その笑顔はいつもと変わらない、優しげなお姉さんの笑顔だ。
「……だったら、私も鋼鉄の意志を通させてもらうわ――数ある貴族家の中で、レヴェリ家だけに許された特権。王侯会談の発動を命じます」
セレスティーナの発言に、ヨーウェンの表情が凍り付く。背後に控えるカレンもまた驚愕に満ちた表情を浮かべる。
専門用語の意味を知らないクリュウやシルフィードは困惑するが、意味を知るフィーリアもまた驚きに満ちた表情を浮かべている。
「……何？」
教えろと言いたげにサクラはフィーリアの腕を引っ張る。振り返ったフィーリアは困惑する仲間達を見て、簡単に説明してくれる。
「王侯会談とはレヴェリ家だけに認められている、国家君主とレヴェ

リ家当主の会談の場を強制的に要求する特権です。レヴェリ家は元々暴走する国家のブレーキ役を担っている貴族家なので、時の君主を呼び出してその暴走を止める為の会談の場、それが王侯会談です」
「……要するに「貴様では話にならない。トップを呼べ」と要求しているって事ね」
「まぁ、サクラ様的に言えばそうですが、内容自体は大筋合っていると思います」
　苦笑しながら答えるフィーリアの説明に、ようやく事の重大性を認識する。セレスティーナは、大臣では話にならないから君主――グローセ総統を呼べと言っているのだ。
「き、貴様ぁッ！　恐れ多くも総統陛下に意見されると申すかッ!?」
　それまで冷静でクールを貫いていたカレンが突如激高する。激しくテーブルを叩き怒鳴るカレンの豹変に驚く一同の中、セレスティーナは平然と微笑む。
「だって、そうでもしないと話が進みそうにないんですもの」
「貴族風情が……ッ！」
「やめなさいカレン。クーデレキャラのあなたが冷静さを失っちゃキャラ崩壊しちゃうわよ」
　まったくもって見当違いな指摘をするヨーウェン。しかしそれで幾分か冷静さを取り戻したのか、カレンは「……申し訳ありません」とつぶやくように謝罪してヨーウェンの背後に戻る。
「さて、話を戻すけど。王侯会談を要求すると言っても、そもそもあなたはレヴェリ家の当主じゃないでしょ？　あれが許されるのは当主のみのはずよ」
　ヨーウェンは冷静に、セレスティーナの発言がハッタリではないかとカマをかけてみる。それに対しセレスティーナは懐から何かを取り出す。それは紐で縛られた一枚の丸まった紙。セレスティーナはその紐を解くと、その紙をヨーウェンに見せる。
「お父様のご署名入りの特例状ですわ。今回に限り、ここでの私の発言の全てがレヴェリ家当主としての発言と認める特例措置。これがある限り、私でも王侯会談の申請は出せますわ」

「……成程。確かにそういう手があるわね」
当然、ハッタリではない。セレスティーナは十分に用意を整えてからこの場に臨んでいる。笑顔が似合う彼女でも、次期レヴェリ家当主としての素質と覚悟は持っている。何の勝算もなしに、勝てぬ戦はしない。
「愚か者。時代はすでにエルバーフェルド王国ではない。総統陛下の統治される帝政国家、エルバーフェルド帝国だ。我が帝国と以前の王国は別の国に等しい。そのようなカビの生えた特権などとうに滅びている」
カレンの自信満々な物言いにフィーリアの表情が厳しくなる。確かに彼女の言う通り、ここはエルバーフェルド帝国だ。自分達レヴェリの力が十分に威力を持っていた王国時代とは違う。実に痛い所を突かれてしまった。
だが、セレスティーナの表情は変わらない。勝てぬ戦は、しないのだ。
「レヴェリ家は初代国王の親友であり、エルバーフェルド王国の誕生及び運営に大きく貢献した一族の末裔。だから、その特権が認められるのは当然ですわね。そして、その特権はエルバーフェルドの憲法に明記されている」
「……何が言いたい」
「総統陛下がここまでの地位に上り詰めたのは、王族だったからですわよね？　エルバーフェルド王国の憲法では王族には強力な権限を与えているはず。その王国憲法があったからこそ、彼女は国家君主になれた。まだ完全な新体制が築けていない今、果たしてその強力な憲法は廃止されているのかしら？」
セレスティーナの反撃に、カレンの表情が険しくなる。痛い所を突いたつもりが、見事なカウンターを受けてしまった形だ。
王国憲法には王に対する絶大な権限を与える事が明記されている。エルバーフェルド王家の正当後継者であったフリードリッヒはこの憲法をフルに使ってここまでの地位に上り詰めたのだ。
憲法を超越した権限を持つには、まだ力が足りない。だからこそフ

リードリッヒは憲法を有効に使って現在の独裁政治を行っている。つまり、憲法を使って今の政権を維持しているのなら、その憲法はまだ生きている。そして、憲法が生きているなら、レヴェリの特権もまた生きているのだ。
悔しげに、しかし反撃する言葉も手段も持ち合わせていいないカレンは厳しい表情でセレスティーナを睨みつけるだけ。
異様な沈黙が、部屋一帯を支配する。皆の視線は、この雰囲気の中心にいる二人の美女に注がれ続けている。
沈黙を貫くヨーウェンだったが、フッと口元が綻ぶ。
「……王大の頃から、やっぱりあなたには一歩敵わないわねぇ」
「うふふ、今は帝大でしょ？　懐かしい名前ね」
先程までの異様な沈黙とは打って変わって朗らかな雰囲気が辺りに流れる。移り変わりの早さについて行けずに戸惑う面々の中、クリュウはそっとフィーリアに声を掛ける。
「王大とか帝大って？」
「エルバーフェルド最難関の国立大学である王国大学。現在は帝国大学と名前が変わっていますが、お二人はそこの卒業生にして同級生。学年首席と次席の関係だったんです」
なるほど、ずいぶん親しげに、そして腹を割って話せるのは二人が深い知り合いだからだったらしい。同級生なら、対立する立場とはいえ幾分か話しやすいだろう。
「お互い、重役にはなりたくないわね。こうして友達でも対立しなきゃいけないんだから」
「あら、何も対立する必要はないじゃない。私達レヴェリ家は王家に忠誠を誓う由緒正しき一族。できれば仲良くしたいわ」
「……相変わらず、無駄に楽観主義よねあなたは」
呆れ半分感心半分という感じで言うヨーウェンの言葉に、セレスティーナは「褒め言葉として受け取っておくわ」とこれまたポジティブ発言。ある意味羨ましい。
苦笑を浮かべるヨーウェンを見て、カレンが「如何なさいますか大臣」と決断を迫る。が、彼女の中での答えはとうに決まっている。

「憲法を使って政権運営をしている私達が、その憲法に背いちゃ本末転倒よ。フーちゃんには追い返すよう言われてたけど、ヨーウェン・ゲッペルス宣伝担当大臣は降参――総統陛下に王侯会談を開く旨を伝えるわ」

エルバーフェルド帝国ナンバー2である彼女の発言に、カレンは何か言いたそうだったが何も言えずにうなずく。

クリュウ達はとりあえず第一の難関をクリアした事で大喜びする。特に不安で胸が押し潰されそうだったクリュウはほっと安堵の息を漏らす。そんな彼らの様子を見て嬉しそうに微笑むセレスティーナ。

準備の為に立ち上がったヨーウェンはそんなセレスティーナを見て小さく微笑むと、不服そうに厳しい表情を浮かべているカレンを連れて部屋を出て行った。

ヨーウェンは早速フリードリッヒに対して王侯会談を開くよう進言した。

最初こそフリードリッヒは拒み、オコーネルに対してクリュウ達の王宮追放を命じ掛けたが、ヨーウェンの「今のこの国は挙国一致が必要不可欠な状態なの。なのに、大勢力であるレヴェリを敵に回すような行為は、国を滅ぼすわよ」と冷静な説得によってフリードリッヒは不満そうながらも王侯会談を承諾した。

不機嫌そうに瞳を厳しくさせるフリードリッヒ。そんな彼女の横でカレンは必死になって自分の不甲斐なさを謝り続ける。

「しっかし、ずいぶんと気が強いんだなそのレヴェリの嬢ちゃんは」

「気が強いというより、自分が決めた事は絶対に曲げない頑固者なのよ」

感心するエルディンに苦笑しながらヨーウェンが言う。そんな彼女の言葉を聞いてエルディンは少し考える。

「芯が真っ直ぐな女か……嫌いじゃないな。ちょっと会ってみてぇな――きれいな女か？」

――ピクリと、フリードリッヒの耳が動く。

「そりゃあもう、何せ麗しき総統陛下が登場する前まではこの国のアイドルはあの美しく気高い花、セレスティーナ・レヴェリ以外に存在

しませんでしたから。昨今は体調を崩されてあり公の前に出なくなり、私も涙を流さずにはいられません。未だに根強い信者は多く、あの花が本気を出せば、我らの麗しき孤高の花の立場も危うい。それほどまでに、彼女はお美しい」

なぜかバラを愛でながら聞いてるこっちが疲れるような言葉を並べてセレスティーナを絶賛するヴィルトラント。そんな彼の発言に呆れるカレンの横で、無関心を装いながらもフリードリッヒの表情が幾分か苦しくなる。その視線は、先程からチラチラとエルディンの方へ注がれる。

エルディンは嬉しそうに笑った。

「そりゃ楽しみだ。なぁ嬢ちゃん、俺もその会談に参加させてくれよ」

「政治に軍人が口を出すな愚か者が」

ピシャリと、不機嫌そうに拒否するフリードリッヒ。だがエルディンはそんな彼女のキツイ物言いに対しては気にした様子もなく「ちぇッ、せっかくきれいな女神様でも拝めると思ったのによぉ」と唇を尖らせる。そんな彼の態度を見て、フリードリッヒの表情がさらに険しくなる。

一方、地味に間接的にダメージを受けていたのはカレン。先程見事に口を出した事を思い出して落ち込む彼女の背中を、ヨーウェンが優しく叩く。

残念がるエルディンを見て、フリードリッヒはふて腐れる。

「わ、私の方が絶対にきれいだ」

恥ずかしそうに言うフリードリッヒに、「あら、フーちゃんが妙な対抗心を燃やしてるわ。そういう事にまるで興味がないのに」とおどけた感じに言う。その口調は彼女の本心を知っててあえてこの状況を楽しんでいるというイタズラ心が見え隠れする。

「そ、そうですッ！　総統陛下の方がずっとお美しいッ！　総統陛下に勝るような美しき女性など、この世には存在しませんッ！」

ここぞとばかりにフリードリッヒを褒め倒すカレン。そんな彼女の発言に幾分か自信を得たのか、フリードリッヒの表情が若干和らぐ。

「セレスティーナは確かに美しい令嬢だ。だが、私の方が絶対に美しい。何せ、私はアイドルだもの」
「あら、いつも「私は国家指導者だ」とか言ってアイドルという肩書きを不燃ごみと一緒に捨ててるくせに」
「う、うるさいわよヨーウェン。そんな無駄口を叩いている暇があるならすぐに王侯会談の用意をしろ。そこでどちらがこの国で一番美しい女神か、決着とつけてやる」
「……うぅん、会談の定義の根本が間違ってるんだけど……まぁ、いっか」
こうして、セレスティーナ・レヴェリ次期当主の申し出は、フリードリッヒ・デア・グローセ総統の承諾を得た。
ここに、帝国初となる王侯会談の実現が成立したのであった。
エムデン宮殿内にある会議室の一つ。そこにクリュウ達は通された。
長テーブルを一方をクリュウ達が腰掛け、反対側にはエルバーフェルド側の首脳陣が並ぶ。と言ってもここまでは先程と面子は変わらない。クリュウ達とヨーウェンとカレン。
だが、二人の間にはこれまでいなかった人物が座っている。
長く美しい金髪は光り輝き、端正に整った顔立ちはまるで人が作ったかのように美しい。意志の強い蒼色の瞳が眩く輝く。
クリュウはその少女の姿につい見入ってしまった。
勝気で頑固そうな所はどこかエレナに似ていて、身長や体格はシルフィードに似ている。しかしサクラのような他者を寄せ付けないような雰囲気を持ち、フィーリアのような高貴さを感じさせられる。
まさに完璧な美少女。クリュウが今まで出会った全ての女子の中でも美しさという点ではトップクラスの美少女だ。
当然、そんな美少女相手なのだから見入ってしまうのは男としては仕方がない。だが、そんな彼の様子を見て女子陣、特に三人の表情が幾分か不機嫌そうに染まる。セレスティーナはその様子を見てくすくすと笑うと、冷徹なオーラを放つ少女に向き直る。
「それじゃ、改めて自己紹介しますわね。私がレヴェリ家次期当主に

して、今回の使節団団長を務めるセレスティーナ・レヴェリですわ」
セレスティーナの自己紹介に、少女は「知っている」と無愛想に答える。そして、少女は腕を組みながら静かに名乗る。
「エルバーフェルド帝国総統、フリードリッヒ・デア・グローセだ。」
少女――フリードリッヒが名乗ると、クリュウ達外部の人間は幾分か驚く。雰囲気や状況から何となく彼女がそうではないかとは思っていたが、まさか本当に自分達と同じくらいの年齢の娘が一国の長だと思わなかったのだ。
だが、同じ世代に見えても纏う雰囲気は冷たく、本当に同世代かと疑ってしまう。
大人びている、とも少し違う。胸に抱く覚悟が違う、そんな何か異質さを感じずにはいられない。
ヨーウェンが話を始めようと口を開くと、フリードリッヒはそれを制した。そして、セレスティーナを、クリュウを睨む。
「……回りくどい事は苦手だ。私達エルバーフェルド政府の回答を言う。貴殿らの申請は引き受ける事はできない。以上だ」
話は終わった。そう言いたげにそれ以降口を閉ざすフリードリッヒ。あまりにもハッキリ、そして即答にあ然とするクリュウ達。交渉の余地がまるで感じられない。
だが、セレスティーナだけは笑顔を崩さない。
「相変わらず人の話を聞こうとしないのねフリードリッヒ」
「くだらない話に耳を傾けている程、私は暇ではないからな」
フリードリッヒはそう言うと、会談は終了だと言いたげに立ち上がった。
「ちょ、ちょっと待て。いくら何でも一方的で横暴だぞ」
そんな彼女の態度に今まで黙っていたシルフィードが立ち上がった。出て行こうとする彼女の前に立ち塞がる。
フリードリッヒは不機嫌そうにそんな彼女を睨みつける。
「どきなさい一般人。一国の君主の前に立ち塞がるなんて、どんな権限でそうしている訳？」
「権力に物を言わせた不躾（ぶしつけ）な態度をする権力者相手に、礼

儀もクソもない」
「何ですって……？」
シルフィードの発言にフリードリッヒの表情が厳しくなる。
同じような身長で、同い年で、似たような雰囲気を持つ二人。でも一方は孤高の冷たさを持ち、一方は冷たくもどこか優しげな雰囲気を持つ。
どこか似ていても、でも根本が違う。そんな二人が、睨み合う。
クリュウとヨーウェンがそれぞれ二人を引き離そうと立ち上がった時、部屋の扉が何の前触れもなく全開する。
驚く一同が振り返ると、そこにはクリュウ達は見知らぬ人物が立っていた。
国防軍の軍帽と軍服を身につけた短めな銀髪碧眼の壮年の男。瞳はまるで少年のように輝き、口元にはイタズラっぽい笑みを浮かべたその男は静かに言う。
「どうした嬢ちゃん？　見知らぬ相手に声を荒げるなんて珍しいじゃねぇか」
軽い口調でそう言う男をヨーウェンが「ロンメル元帥。今は会議中だから勝手に入って来ちゃダメよぉ」と困ったように言う。
男――エルディンは「悪い悪い」と気にした様子も反省した様子もなく返す。
だが、エルディンの登場で場を支配していた険悪な雰囲気は幾分か吹き飛んだ。彼はそれを狙ったのか、それはわからない。ただフリードリッヒは不機嫌そうに彼を睨む。
「エルディン。貴様はここには来るなと命じていたはずだが」
「まあまあ、堅い事言うなや」
呆れるフリードリッヒはさらに非難の声を上げようとして、気づく――自分の前に立ち塞がっていた少女が、驚きに満ちた表情でエルディンを見詰めている事に。
そして、エルディンもまた自分を驚愕に満ちた表情で見詰めている少女に気づく。その瞬間、彼の表情も驚愕に染まった。
「……お前、もしかしてシルフィードか？」

エルディンの問い掛けに、シルフィードは静かにうなずく。その反応に、エルディンは驚いたままそっと彼女に近づく。
「驚いたな。不用意に近づけば斬られるような鋭さに満ちていたお前が、ずいぶんと穏やかになってるじゃねぇか」
「お、お久しぶりです」
シルフィードも緊張した様子でエルディンに一礼する。すると、エルディンは下げられた彼女の頭を優しく撫でた。驚いて顔を上げる彼女を見詰め、エルディンは優しげに微笑む。
「しばらく見ないうちに、復讐の闇から抜け出せたようだな――それに、きれいになったじゃなぇか」
まるで娘の成長を喜ぶ父親のようにシルフィードの頭を撫でながら微笑むエルディン。シルフィードもまたそんな彼の優しげな手を頭に受け、口元に小さな笑みを浮かべる。
そんな二人の様子を、残る面々が困惑げに見詰めている。ここにいる誰もが、二人の接点を知らない。それはクリュウも、フリードリッヒも同じだ。
「シルフィ、その人は？」
「え、エルディン。その無礼な娘、知り合いか？」
二人の問い掛けに、振り返った二人がそれぞれ、どちらも穏やかな笑みを浮かべて言う。
「あぁ、こいつは――」
「この方は――」
「――俺の弟子だ」
「――私の師だ」
異国エルバーフェルドで、二つの異なる物語が繋がった瞬間であった。

第１５１話　様々な絆が結びし運命　試される四人の覚悟

「――俺の弟子だ」
「――私の師だ」
　二人の自分達の関係性の回答に、その場にいた全員が驚きに満ちた表情を浮かべる。
　クリュウは困惑しながら、しかしフィーリア達の抱く疑問を代表するようにして彼女に問い掛ける。
「シルフィの、お師匠様？」
「あぁ。私に大剣術を教えてくれた、私のハンターとしての師。それが彼、エルディン・ロンメル先生だ」
「おいおい、先生とはまた恥ずかしい言い方じゃねぇか。当時のお前はそんな風に俺を呼んだ事なかったじゃねぇか」
　からかうように言うエルディンの言葉に、シルフィードは「あ、あの時の私は別人のようなものだ。今は幾分か礼儀は覚えたと自負している」と珍しく恥ずかしそうに頬を赤らめながら弁解する。すると、エルディンはそんな彼女の頬を指先で突付く。
「何が礼儀は覚えただ。一国の国家元首の前に立ち塞がるなんて、無礼中の無礼だぞ」
「うぅ……」
　顔を赤らめて言い負かされるシルフィード。そんな彼女の姿を、クリュウ達は物珍しげに見詰める。何せ、自分達の知っているシルフィードは実に頼れる姉御みたいなリーダーだ。その彼女が、誰かに言い負かされるだけではなく普通の女の子のように恥じらう、その光景が珍しくて仕方がなかった。
　驚く一同の中、クリュウは「シルフィ……？」と、エルディンの頬をつつかれて頬を赤らめながら「や、やめてくれ」と恥ずかしがる彼女を困惑げに見詰める。その瞳は、驚きに染まっている。
　一方、同じくエルディンと親しげに接するシルフィードに驚愕する

のはフリードリッヒだ。しばし驚きのあまり呆然としていた彼女だったが、逸早くその状態を脱する。
「え、エルディン。その娘が弟子というのは本当か？」
「本当だぞ。ああ？　言ってなかったっけか？　俺が人生に一度だけ弟子を取った事があった話をよ」
「そ、それは……」
　言い淀むフリードリッヒ。確かに聞いた事があった。
　数年前、まだ現役のハンターとして世間を流離っていた頃、一人の少女ハンターを弟子にした事があった、と。
　その娘は家族や友人を村ごとモンスターに皆殺しにされ、全てのモンスターを憎み、瞳に見えるモンスター全てを殺戮する事だけしか考えず、憎しみに狂い、ただひたすらに力だけを求めていた危険な娘――そして、どこか自分に似ていた娘だった、と。
　エルディンが生涯にただ一度だけと決めた弟子にして、危なっかしくて放っておけない妹みたいな子で、復讐に心を囚われた娘。それが、シルフィードだったのだ。
「……クリュウにはあまり話した事はなかったが、昔の私は家族や友人をリオレウスに殺され、全てのモンスターを憎み、視界に入る全てのモンスターを残虐に皆殺しにしていた。復讐に狂い、周りの全てを一切捨てて、ただただ復讐の為だけに剣を振るっていた。どんなモンスターも殺せる力を求め、散々無茶をしていた時代。私には、そんな黒い過去もある」
「シルフィ……」
　初めて聞いた、シルフィードの人には言えない過去。だがそれは、決して他人事にも思えなかった。何せ、一度は自分も復讐に狂いかけた事があった身。自分には、そんな自分を蹴り倒してでも真っ当な道へ戻してくれる幼なじみがいたから道を踏み間違える事はなかったが、彼女には、そういう存在はいなかった。
　復讐に狂い、憎しみに心を染めて、殺戮だけを目的に剣を振り回す。シルフィードは今更ながら、自分の過去の醜く滑稽な姿を思い出し、嘲笑する。

「以前にも言ったかもしれないが、私は力に溺れて剣聖ソードラントに入った。先生とはその時に出会い、そして――私を救ってくれた」
「よせやい、気恥ずかしい」
シルフィードの説明にエルディンは気恥ずかしいのか、照れ隠しのように頬を掻く。そんな彼の様子を、フリードリッヒが不機嫌そうに見詰める。
否定するエルディンに、シルフィードは小さく首を横に振る。
「事実を言っているだけだ。先生は私に復讐以外の道を選べと必死に説得してくれた。その説得のおかげで私は復讐の道を捨て、人の役に立つ道を選んだ。そうしているうちに私は蒼銀の烈風という二つ名を得て――そして、君達と出会った」
今の自分を表す、かけがえの無い仲間達。復讐に狂っていた頃には夢にも思っていなかった、本当の仲間。得られないと思っていたものが、今はこうして自分の目の前に集っている。
「――先生、これが私が得た《今》だ」
シルフィードはクリュウ達の前に立って彼に振り返ると、そう迷う事なく断言した。その真っ直ぐな瞳には一切の迷いはなく、その言葉に嘘偽りが何一つない事を示す証拠。
エルディンはそんな彼女の姿を、自分の知っている頃とは明らかに違う、幸せに満ちた彼女の姿を見て、安心したように微笑む。
「私の運命が変わったのは、二人の人物と出会ったからだ。一つは先生、私を《闇》から救い出してくれたあなただ。そして、もう一人は……」
シルフィードはゆっくりと振り返ると、きょとんと立っているクリュウに向き直る。そんな彼に向かって、彼女はそっと微笑む。
「――私に《光》を教えてくれた、君だ。クリュウ」
「し、シルフィ……？」
――シルフィードは、そっと彼を抱き寄せていた。大切な宝物を抱き締める子供のように、この腕に抱いた宝物を失いたくない。そんな気持ちを込めた、心からの抱擁。
突然シルフィードに抱き締められたクリュウは顔を赤らめて慌て

るが、そっと耳元で彼女のつぶやいた言葉を聞いた瞬間、それは嬉しさの笑みに変わった。
――ありがとう。
それはどんな事よりも嬉しい、魔法の言葉。たったそれだけで、人は幸せになれる。
優しくクリュウを抱き締めるシルフィード。それはいつもいつも頼れる頼もしいリーダーでも、勇猛果敢な歴戦のハンターでも、冷静沈着な客観視ができる策士でもない――ただ今は、一人の少女として、自分を変えてくれた彼に対する心からの感謝。
自分に光を教えてくれた、大切な人――ありがとう。
クリュウを抱き締めるシルフィードの姿を、エルディンは優しげに見守る。しばらく会わない間、心のどこかで彼女の事を心配していたが、それは杞憂だった――なぜなら、彼女はちゃんと幸せを手に入れていたのだから。
と、そんな幸せな二人から少し離れた場所では……
「……ッ！」
「お、落ち着きなさいサクラッ！　早くそんな物騒な物しまいなさいッ！」
「シルフィード様ばっかりズルいですぅ～、抜け駆けはダメですよぉ～」
「フィーリアッ!?　あんたの目が一番怖いわよッ!?」
今にもシルフィードに襲い掛かりそうなサクラと、濁った瞳と不気味な笑顔でシルフィードを見詰めるフィーリア。そんな二人を珍しく引き止めているのはエレナだ。本当は怒りたい気持ちはあるのだが、自分以上に危険そうな二人を前にして妙な冷静さが彼女を引き止めているのだ。
そんなちょっと込み入った事情のある弟子の仲間達を見て、エルディンは嬉しそうに笑う。ちゃんとした友達も、彼女にはいるのだ。
「少年」
エルディンはようやくシルフィードから解放されてまだ頬が赤いままのクリュウに声を掛ける。クリュウは近づいてくる彼の方に向

き直ると、自然と表情は緊張に染まる。そりゃ、自分が目標にする人物の師だと言うのだから、緊張して当然だ。
　エルディンは自分よりも背の低い弟子よりもさらに低い、見た感じ何とも頼りない、でもだからこそ、守りたいものになれるからこそ、彼女を正しい道へ導いてくれた、そんな彼を無言で見詰める。
「少年、名は何と言う？」
「く、クリュウ・ルナリーフ……」
　緊張した面持ちでクリュウが名乗ると、エルディンの表情が変わった。驚いた、そんな感じの表情を浮かべている。しばし興味げに彼を見定めていたエルディン。しかしそれはすぐに、納得したような笑みに変わる。
「……これもまた運命という奴か」
「あの、何でしょうか？」
「クリュウ君、君に伝えなければならない言葉がある。聞いてくれるか？」
　エルディンの問いに、クリュウは不思議そうに首を傾げるも、ゆっくりとうなずく。するとエルディンはそんな彼の前で、そっと微笑んだ。
「――俺の愛弟子を幸せにしてくれて、ありがとうな」
　そう言うと、エルディンはそっと手を差し伸べる。その意味を理解するのに時間は掛からなかった。クリュウはその差し伸べられた手を取る。
「こちらこそ、ありがとうございました」
「おいおい、俺は感謝する理由はあるが君にはそんな必要はないだろう？」
「いえ、僕の知らない過去の事とはいえ、仲間を救っていただいた事実は変わりません――ありがとうございました、彼女を助けてくれて」
　クリュウの言葉にエルディンはしばしきょとんとしていたが、すぐにそれは笑みに変わる。バカにしたのではなく、おもしろい奴だという好意的な笑み。
「変わってるな、君は」

「よく言われます」
　あははは、と乾いた笑い声をあげるクリュウの姿を見て安心したように微笑むと、彼の隣で先程の彼の発言を受けて頬を赤らめながら困ったような笑みを浮かべるシルフィードの方に向き直る。
「いい友を得たな、シルフィード」
「あ、あぁ。みんな私の掛け替えのない仲間だ。そしてクリュウは、今の私の生き甲斐だからな」
「……ふぅん、お前ってこういう頼りげのない男が好みだったんだな。道理で俺に靡かない訳だ」
「ど、どういう意味だそれは？　というか、今の発言に先生の無駄な程に高い自身に対する自信と聞きたくなかった過去の危険が暴露されているようだが……」
　途端にシルフィードはエルディンから距離を取る。何となく急に怖くなって、反射的に胸を隠した。そんな彼女の反応を見てエルディンは困ったように頭を掻きながら苦笑を浮かべる。
「おいおい、思春期全開だな。冗談だ冗談」
「そ、そうか？　何となく身の危険を感じたものでな……」
「しっかし、お前数年の間にずいぶん胸が大きくなったな」
「ど、どこを見ているのだッ!?」
　エルディンのセクハラ発言に距離を戻していたシルフィードは再び距離を取る。先程よりも遠く、そしてより堅牢に胸を隠す。顔は引き吊り、真っ赤に染まって年相応の初な娘の反応そのものだ。
「うんうん、弟子の成長が見られるは嬉しいものだな」
「セリフ自体は良き師という感じが、状況が違うだけでずいぶんと卑猥な発言に聞こえるぞッ!?」
　いよいよシルフィードはクリュウの背中に隠れてしまう。まぁ、クリュウの方が身長は低いので全く隠れ切れていない訳だが。
　一方、そんなセクハラ発言をぶっ放すエルディンに近づく者が三名。
「あ、あのッ！　数年前のシルフィード様のお胸はあんなに大きくなかったのでしょうかッ!?」

なぜか真剣な面もちで彼に尋ねるのはフィーリア。エルディインは鬼気迫る感じで寄ってきた少女達に一瞬驚きながらも「あ、あぁ。だいたいこっちの嬢ちゃんくらいだったな」と、比較的平均的な胸の大きさを持つエレナを指さしながら答える。
彼の回答を得た三人の娘はすぐに円陣を組んだ。
「と、という事は、私達も今後の努力次第では十分成長の余地ありという訳ですねッ!?」
「……まだ、負けた訳じゃない」
「まだまだ挽回できるって訳ねッ！　よぉし、帰ったら早速大量のミルクを仕入れておかないとッ！」
「君達は一体何の話をしているのだッ!?　クリュウも何を頬を赤らめて視線を彷迷わせているのだッ！」
決してシルフィードは仲間には入れない、強固な女子同盟を結ぶ三人と、一人頬を赤らめながら意識的に外界の情報を遮断するクリュウ。そしてそんな四人にすごい勢いで置いて行かれるシルフィードは悲鳴を上げる。
そんないつものノリを見事に披露する五人、特にすっかり振り回されるシルフィードの姿を見て、エルディインは少し驚く。
「お前って、そんなに周りに踊らされる子だったか？」
「……クリュウ達と関わっていると、たまに自分を見失いそうになる」
がっくりと肩を落とすシルフィードを見て、何となく今の彼女の状態を察するエルディインは苦笑を浮かべた。昔の彼女を知っている彼からしてみれば、今の彼女は別人と言っても過言ではない。
「クリュウ君、君から見て、今の彼女はどういう子だ？」
一人落ち込むシルフィードを心配そうに見詰めていたクリュウにエルディインは尋ねる。そんな彼の問いかけに、クリュウが振り返る。
「どういう子、ですか？」
「君から見て、シルフィードはどういう存在かって意味さ」
笑いながら問うエルディインの問いかけに、クリュウは少し考える。そんな彼を、少し離れた場所からシルフィードがジッと見詰める。
しばらく考えてから、クリュウは自身の中に思い浮かんだ彼女の印

象を、素直に吐露する。
「目標にしている人、です」
「目標？」
「僕はシルフィみたいに立派なハンターになりたい。強くて、凛々しくて、かっこ良くて、頼りになって、優しくて。シルフィみたいなハンターになりたい。それが僕の夢で、だから彼女は目標なんです」
笑顔で迷う事なくそう言うクリュウを見て、絶賛されているシルフィードは気恥ずかしそうに頬を赤らめながら視線のやり場に困る。
「わ、私はそんなに大した人間ではないぞ」
「そんな事ないって。僕、シルフィ以上にかっこいいと思う人いないもん」
「……素直に感謝すべき所なのだろうが、どうも素直に喜べないのだが」
屈託の無い笑みを浮かべながら自信満々にそう断言するクリュウを見て、嬉しいには嬉しいのだがどうにも素直に喜べずに複雑な表情を浮かべるシルフィード。
嬉しそうに屈託なく笑うクリュウと、そんな彼の幸せそうな笑顔を見詰め、自然と微笑んでいるシルフィード。そんな二人の様子を見て、ようやく二人の関係性を理解したエルディン。
「なるほどなぁ……」
どうやら、愛弟子は本当の《幸せ》を手に入れているらしい。それが報われていないのが現状のようだが。
「シルフィード」
クリュウの笑みを見詰めていたシルフィードはその声に振り返る。すると、ポンと頭の上に手が置かれた。視線で追うと、その先には優しげに微笑む師の姿があった。
「先生……？」
「――お前は今、幸せか？」
その問いかけはきっと愚問でしかない事を、彼はわかっている。だが、わかっていても、ちゃんと聞きたかった――彼女の口から直接。彼女の言葉で。

エルディンの問いかけに、シルフィードは一瞬きょとんとしたような表情を浮かべるが、すぐに振り返って自分を見詰めている仲間達を見回し、最後にクリュウを見る。
再び前に向き直った時にはもう、それは笑顔に変わっていた――その笑顔も、自分と一緒にいた頃には決して見れなかった、彼女が変わった何よりの証拠だ。
「――幸せです」
シルフィードは迷う事なく、真っ直ぐな瞳を向けながらそう断言する。そんな彼女の姿、そして言葉を聞いたエルディンは静かにうなずく。
「そうか……」
それだけで、十分だった。
弟子が今、こうして幸せにやっている。その事がちゃんと知れた。それだけで、十分だった。弟子の幸せを願う。師なら当然の想いだ。
エルディンはそっと、彼女の頭の上に置いていた手で優しく髪を撫でる。昔は刺々し過ぎてできなかった、弟子との触れ合い。
こんなにも弟子を変えたのが、自分じゃないのは正直悔しい。だが相手があの人の息子だというのだから、ある意味仕方がないのかもしれない――本当に、親子揃ってその底抜けの優しさが人の心の氷を溶かしてしまう。不思議な縁があったものだ。
ふと、彼女の後頭部に手をやった時に気づいた。彼女の髪を結っている白いリボン。何の変哲も飾り気もないただのリボン。しかしそれを見て、エルディンは思わず吹き出した。
「お前、んなボロリボンまだ使ってたのか」
笑いながら言うエルディンの言葉に、シルフィードは慌てて彼から離れると髪留めを隠す。その頬はほんのりと赤らんでいた。
「わ、私の勝手だろう。ちょうどいい髪留めがこれしかなかっただけだ」
仕方がないと言うシルフィードだが、その髪留めがとても大切なものだという事をクリュウは知っている。以前フィーリアがいつも同じ髪留めを使うシルフィードを見て、あまり使わないからと自分の髪

留めを貸そうとした際、シルフィードは「これは私の宝物だから、私はこれで十分だ」と恥ずかしそうに笑いながら言っていた。
　頬を赤らめながら、シルフィードはポニーテールを撫でる。そんな彼女を見て、エルディンが微笑む。
「――やっぱりお前はポニーテールが似合うな」
「せ、戦闘に邪魔になるから結ってるだけだ」
「そうか？　そのリボンをやる前までは適当に髪を流してただけだったろ？」
「い、いちいちうるさいぞ先生。私はもう子供ではないのだから、細かい事に口を出すな」
　そう怒ってシルフィードはプイッとそっぽを向く。そんな素直じゃない愛弟子を見て、エルディンは「子供じゃない、ねぇ……。確かに大人になったが、俺から見ればまだまだガキだよ」と笑いながら言う。すると、シルフィードは顔を真っ赤にして身を守ると、慌てて距離を取る。
「い、今私のどこを見て《大人》と言ったッ!?　セクハラも大概にしないと怒るぞッ！」
　必死になるシルフィードを見てエルディンはおかしそうに笑う。どう見ても弟子をからかい倒しているようにしか見えない。根っから真面目なシルフィードは残念ながら《受け流す》という技が使えないのでいちいち反応してしまう。それをわかっててからかっているのだから質が悪い。
　散々エルディンに振り回されたシルフィード。ようやくエルディンから逃れた彼女はふと自分を見詰めているクリュウの視線に気づく。
「クリュウ？」
「シルフィ、楽しそうだね。何だか僕達と一緒にいる時より生き生きしてるみたい」
　クリュウとしては思った通りの事を口にしただけなので別に他意はないのだが、そんな彼の発言にシルフィードは慌てる。
「そ、そんな事ないッ。私は君達と一緒にいる時が一番だッ。例え師

の前だとしてもそれは覆らんッ」
　眼前に迫りながら力強く断言するシルフィードに、クリュウは若干引きながら苦笑を浮かべる。
「う、嬉しいんだけど……ちょっとシルフィ、怖い」
「なッ!?　す、すまない……、どうにも調子が狂ってばかりだ」
「おいおい、チームメイトを怯えさせんなよな」
「誰のせいだッ!?」
　すっかりいつもの調子を見失い暴走するシルフィード。それを面白おかしくエルディンがからかい、そんな二人の様子、特にいつもは見慣れないシルフィードの慌てっぷりを物珍しげにクリュウ達が見詰める。
　多少様変わりはしているが、すっかりいつもの調子を取り戻したクリュウ達。だが、そんな彼らを不快そうな目で見詰める者がいた。
「おい貴様等、我々の存在を忘れている訳ではあるまいな？」
　その静かだが、言葉の節々に並々ならぬ怒りを込められた声に喧騒が止む。振り返ると、鋭い眼光でこちらを睨みつけるフリードリッヒと目が合った。
　正直、すっかり彼女の存在を忘れていたクリュウ達は気まずそうに視線を外す。そんな彼らを威嚇するように睨みつけながら、フリードリッヒは威風堂々とした歩みで近づく。
「エルディン、貴様は私の臣下のはずだ。その貴様が、主君を差し置いて何をしている？」
　ギロリと、凶悪なまでに厳しい眼光で睨みつけるフリードリッヒに対し、睨まれたエルディンは苦笑しながら降参と言いたげに両手を上げる。
「いやぁ、懐かしい弟子に会ったから、ついな？」
「……つい？　そんな突発的な思いつきでの行動、私が最も嫌う事だと知らない訳ではないわよね？」
「いや、ははは……」
　静かなる憤怒の炎を燃やすフリードリッヒにエルディンは笑って誤魔化す。そんな彼をしばし威圧した後、今度は黙ってこちらの成り

行きを見守っているクリュウ達――シルフィードを睨みつける。
「用は済んだはずよ。早々に立ち去れ凡人共」
「ずいぶんな物言いだな。私は自分の無礼さをずいぶん悩んでいたが、君やサクラを見ていると悩んでいるのがバカバカしく思えてくる」
嫌悪の視線を向けるフリードリッヒに一歩も引かずに対峙するシルフィードの瞳もまた苛立ちが見える。いつも冷静な彼女らしくない。まるで、自分に似ている相手を認めない、そんな雰囲気が互いから発する。
――ちなみにそんなシルフィードの背後でさりげなく侮辱されたサクラが無言で飛竜刀【翠】を引き抜くが、エレナとフィーリアが羽交い締めに止めていたり。
「貴様を見ていると腹立たしいわ。早々に消えろと言ってるのがわからない訳？」
「自分が逃げるのが嫌だから相手に引け、と？　ずいぶん弱虫な国家君主様じゃないか」
「……調子に乗るな愚か者。貴様の首など、簡単に跳ねる事もできるのよ」
「エルバーフェルドの総統様といえば人々を魅了する話術が得意と聞いていたが、どうやらそれは根も葉もない噂に過ぎなかったようだな」
二人の凛々しき美少女の睨み合いと静かな罵声戦。だが互いも一歩も引かず、決して相手の瞳から目を離さない――先に逸らした方が負け。互いに共通する敗北条件だ。
大好きなフリードリッヒを侮辱され怒り狂うカレンの口を塞いで制するヨーウェンは、そんな二人の戦いを楽しそうに見詰めている。あのフリードリッヒとまともに睨み合い、明確な敵対を意志表示する人間はごくわずかだ。それも、彼女と同じくらいの年齢の少女相手だ。
「ロンメル元帥にも困ったものねぇ」
苦笑しながらつぶやくヨーウェンの目の前で敵対する二人。そん

な二人の間に、二人にとって《大切な人》が仲介に入る。
「おいおい、こんな所でケンカなんかするなよなぁ。お前ら、そんなに感情的になるような奴らだったか？」
一応主君になるが実際は目を離せない妹みたいな存在であるフリードリッヒと、同じくどこか危なっかしくて目が離せない唯一無二の愛弟子であるシルフィード。彼にとって掛け替えのない少女二人が睨み合う。彼が仲介に入るのは当然だろう。しかし、それは新たな火種になるしかない。
「嬢ちゃん、一国の君主様がずいぶん幼稚な争いをしてるじゃねぇか。ガリアや東シュレイドに一矢報いた時の指導者様の顔はどこいったんだ？」
大人げない、そう遠回しに注意するエルディンをフリードリッヒが睨みつける。
「エルディン、貴様はいつから私に意見できる程偉くなったの？　ずいぶん出世したものね」
怒りの矛先が自分にズレた事に内心エルディンはほっとした。さて、これからどうこのわがまま娘を落ち着かせようと逡巡し始めたが、
「貴様、先生を侮辱するのもいい加減にしろ」
シルフィードはエルディンの前に立って彼を守る。自分を救ってくれた恩人を、師を、バカにされて黙っていられる程彼女は非道にはなれない。
そんな彼女の後ろ姿を見て彼女の成長ぶりに少し目頭が熱くなるエルディン。しかし冷静な部分ではこのバカ弟子のいい弟子っぷりが事態を余計に混沌とさせてしまったという現実に頭を抱えてしまう。
予想通り、シルフィードの言動にフリードリッヒが噛みつく。
「貴様にとって例えかつての師だとしても、今のエルディンは私の臣下。国防軍対一特殊生物（モンスター）迎撃部隊、独立歩兵師団師団長だ。とうに貴様とは住む次元が異なってるわ」
「だとしても、先生は私の師だ。それは変わらない事実だ。貴様にど

うこう言われる筋合いはない」
「言わせておけば……ッ」
　再び二人は睨み合う。そんな二人を見てため息を零すエルディンは助けを求めるようにずっと静観を決め込んでいるヨーウェンの方を見るが、ヨーウェンはこの状況を楽しんでいるらしく止める気はないらしい。それを見てまたため息を零しながらエルディンはとりあえずヨーウェンにこの状況の根本を説明してもらう。
「なるほどねぇ……」
　ヨーウェンから大体の事情を知ったエルディンは困ったように頬を掻く。
　確かに話を聞く限りではシルフィード、というかクリュウの申し出は無茶苦茶だ。ただでさえフリードリッヒは自分の目的以外の事に余力を割かない人間なのに、今は非常に諸外国との関係が緊迫している真っ最中。唯一の同盟国であるアルトリアに彼らを送れば、それは他国から見ればエルバーフェルドとアルトリアが共闘して西竜諸国に宣戦布告をする為の連携の一環に見えてもおかしくはない。これ以上の軋轢（あつれき）が生じれば、本当に戦争に発展し兼ねない。
　と、ここまではあくまで詭弁だ。確かにそういう事態になる事は予想できるが、可能性としてはかなり低い。そもそも大陸から切り離された海洋国家であるアルトリアは大陸国家に関しての興味が元からない。それどころか、アルトリアと西竜諸国は地理的に大陸を中心に正反対に位置している。同盟国とはいえ遠方の国の為にわざわざ自軍の主力部隊を投入するとは思えない。それは当然他の西竜諸国も想定している。あくまでエルバーフェルドとアルトリアは技術レベルでの同盟と、互いの国で採れる資源の貿易相手程度。軍事同盟にまで進展はしていない。
　そんな事、当然フリードリッヒもわかっているはずだ。なのに、どうしてこうも頑なに彼らの願いを拒否するのか。エルディンはそれがわからなかった。
　睨み合う二人の妹を見て、そしてシルフィードを不安げに見詰めているクリュウを見る。

「……ずいぶん貸しがあるしな、あいつには」
そう吹っ切れたようにつぶやくと、エルディンは睨み合う二人の間に割って入った。突然間に立ったエルディンをシルフィードは怪訝そうに、フリードリッヒは不機嫌そうにそれぞれ見詰める。
「はいはい、そこまでだ嬢ちゃん達」
「せ、先生……？」
「邪魔するなと何度言えば……」
「――なぁ嬢ちゃん。こいつらのアルトリア行き、俺からも頼めねぇか？」
シルフィードとの睨み合いを妨げられ文句を言おうと口を開いたフリードリッヒは、突然彼の口から出た相手方の擁護意見に驚く。
それはシルフィードやクリュウ達はもちろん、今まで何だかんだで黙って聞き手側に徹していたヨーウェンとカレンもが驚かせた。
そして何より、直接言われたフリードリッヒの驚きは一番大きい。が、驚愕で開いた瞳はすぐに鋭く細まり、表情は自分に逆らう反逆者の存在に不機嫌に染まる。しかも相手は自分の懐刀、エルディンだ。
「どういう事だ？」
まるで最初の時のように凛々しく、冷徹で、脅迫めいた口調での問いかけ。しかしエルディンはそんな彼女の問いにあっけらかんと答える。
「いや、曲がりなりにも先生って言われてるからには、弟子の願いをできるだけ叶えてやりたいなぁって」
「……そんな理由で、この私を納得させられるとでも？」
「まぁ、無理だろうな」
睨みながら問うフリードリッヒに、エルディンは苦笑しながら答える。彼の言うとおり、フリードリッヒ相手にこんな理屈は通用しない。
鉄の思考を持つフリードリッヒを説得するのは至難の業だ。だがそこはエルディン。ちゃんと突破口は考えてある。
「じゃあ、交換条件ってのはどうだ？」
「交換条件……だと？」

交換条件という単語を聞いてフリードリッヒの瞳がさらに厳しくなる。交換条件とは通常対等な相手との双方の利害を一致させる事を目的に行われる。彼女から見て、自分と彼らが対等という扱いを受けた事が少し不満なのだろう。だがそこは一国の君主だ。怒りを呑み込み、冷静を装い彼の持つ条件を待つ。

黙って自分の意見に耳を傾ける彼女を見てエルディンは一瞬頬を緩めたが、それはすぐに真剣なものに変わる。

「トブルク基地から救援要請が届いてただろ？　その救援隊を彼らに引き受けてもらうってのはどうだ？」

エルディンの提案にフリードリッヒは目を見開く。それは前代未聞の提案だった。何かと奇想天外な発言をするエルディンだったが、この発言はあまりにも奇想天外にも程がある。

「ロンメル元帥。いくら何でも無茶苦茶過ぎるわ」

頭を抱えながらそう言ったのはヨーウェン。その目は常識をわかっていない彼を多少なりとも幻滅している。だがエルディンは首を傾げる。

「どうしてだ？　俺の部隊は訓練遠征で疲弊してるから今は出動できないって言ってただろ？」

「国防に大きく影響する事柄を、民間人に任せようとするその発想自体が大問題なのよ」

静かな声だが、その口調は呆れを通り越して怒りすらも感じられるカレンの言葉に、エルディンはしかし平然としている。

「その国防が脅かされる状況を見過ごしている方がずっと問題だと思うけどな」

エルディンの至極真っ当な意見に、カレンは答える事ができずに押し黙ってしまう。だが、ヨーウェンはため息混じりにエルディンを説得する。

「その為にあなたの部隊を予定を早めて帰還させたんじゃない。すぐに出動はできないの？」

「無理だな。インフラが整っている国内ならともかく、租借地じゃ機動力に欠ける。ここは専門家に任せた方が早いし確実だ。それに、外

交問題でも後者の方が有利だしな」
　エルディンの意見は全てが正論であり、しかも現実的だ。だからこそヨーウェンも反論に困る。どうしたもんかとヨーウェンが対応を考え倦ねていると、臣下のやり取りの間ずっと沈黙していたフリードリッヒが動いた。
「……確かに、貴様の意見は国防の基本に反するものだが、現実的な対応策だ」
「だろ？」
「……そうだな。今は下手に軍を動かすのは難しい状況だ。こちらとしてもその提案はありがたい」
「ちょ、ちょっとフーちゃんッ」
「じゃあ――」
「――だが、もう一つ条件がある」
　流れがこちらに傾いている。そう感じていたエルディンだったが、フリードリッヒからの新たな条件に表情が厳しくなる。一体どんな無茶難題を言われるのか。
　新たな条件があると明言したフリードリッヒ。しかしその瞳は条件を課すべきクリュウ達を一切見ていない。彼女の瞳に映るのは、エルディンの姿だけ。
「条件は貴様だ、エルディン」
「お、俺？　藪から棒だなぁ……何だ？」
　どんな厄介事を押し付けられるのか、半ばヤケクソで尋ねるエルディン。だが、彼は気づいていないがヨーウェンは気づいていた――凛々しき我らが軍姫が、頬を赤らめて何やら恥ずかしそうにもじもじとしている事に。
「……まったく、世話の焼けるアイドルだわ」
　苦笑しながらつぶやくヨーウェンの言葉に、カレンが首を傾げた。
　言うか言うまいか躊躇い、沈黙を続けるフリードリッヒを見てエルディンの表情が引きつる。そんな口に出すのも躊躇うような内容の願い事とは、一体どんな無茶苦茶な無理難題なのだろうか。疲れたようにため息を零すエルディンを前にして、ようやくフリードリッヒの

覚悟が決まる。
「今後、私の許可無く一切の勝手な行動をする事を禁ずる」
「……はぁ？」
　ようやく明かされたもう一つの条件。一体どんな事を言われるのかと警戒していたエルディンはその明かされた条件を聞いて拍子抜けする。無茶難題以前に、条件の意味がわからなかった。
　困惑するエルディンに対し、フリードリッヒはクールな表情を貫く。その立ち振る舞い、オーラ、口調。全てが実に様になっている絶対権力者。が、その頬が若干赤らんでいる所は年相応の乙女だ。
「お、同じ事を二度は言わん。異論はないな？」
　少しばかりクールな立ち振る舞いが崩れるが、当のエルディンは気づいた様子もなく頭を掻く。その顔には苦笑が浮かんでいた。
「なるほど、風来坊のように世話しない俺をちゃんと鎖で繋いでおきたい訳か」
　一人納得したようにうなずくエルディンだが、そんな彼の自己解釈に対してフリードリッヒは不服そうに唇を尖らせる。
「そういう意味ではない」
「あぁ？　何か言ったか？」
「……何でもない。とにかく――勝手に私の傍から離れるな。それが条件だ」
　言いたい事は言ったと背を向けるフリードリッヒ。実に無愛想な態度だが、ヨーウェンから見ればあからさまな照れ隠しだ。それを見てヨーウェンはまるで不器用な妹を見詰めるような温かい目で見守る。
　一方、エルディンはどうしたもんかと逡巡する。自由気ままという立場はずいぶん気に入っていたので、それを手放すのは正直あまり気が進まない。だが、弟子の願いを叶えてやりたいという気持ちもまた本気だ。
「……わかった。条件を呑もう」
　しばし悩んだ後、諦めたようにため息混じりに受諾するエルディン。苦笑しながら、エルディンは自分を心配気に見詰めるシルフィー

ドの方を見る。あの時は目を離すとどんな無茶をするかわからなくて仕方なく弟子にしたのだが、どうやら自分でも気づかないうちにずいぶんと彼女を可愛がっていたらしい。
苦笑を浮かべるエルディンに背を向けながら、直立不動を崩さないフリードリッヒ。だが、その表情は安堵したように口元に笑みを浮かべていた。それを見て、ヨーウェンが苦笑を浮かべ、カレンはその珍しい彼女の笑顔をキラキラとした瞳で見詰めている。
「先生。話が見えないが、大丈夫か？　先生の自由が失われるように聞こえたが」
心配そうに尋ねるシルフィード。背を向けながらもピクリと反応するフリードリッヒに気づいた様子もなく振り返ったエルディンはそんな自分を心配する弟子を見て微笑んだ。
「気にするな。別に命を差し出せと言われた訳じゃないんだからさ」
「だ、だが……」
「――弟子が師匠の心配をするなんざ一〇〇年早いんだよ。たまには師匠らしい事させろって」
そう言って頼もしげに笑うエルディンを見て、シルフィードも安心したように首肯し、微笑む。
端から見ればそんな二人の姿はいい雰囲気だ。ここまでずっと沈黙を続けているセレスティーナは二人の姿を見て赤らんだ頬に手を添えて「あらあら」と微笑み、フィーリア、サクラ、エレナの三人も釘付けだ。そしてクリュウも安心し切っている彼女の姿を微笑ましげに見詰める。
そんな温かな視線を送る仲間達に気づき、シルフィードは慌てて弁解するが、その慌てっぷりが余計に一同を微笑ませる。そんな弟子の姿を見て、エルディンもまたおかしそうに笑う。
温かな雰囲気に包まれるクリュウ達。しかし、そんな彼らを不機嫌そうに見詰めうる者が一名。
「調子に乗るなよ異人ども。貴様等の願いに譲歩しているのはこちらだ。こちらの気分次第で反故する事も可能だという事を忘れるなよ」
不機嫌そうに言い放つのはフリードリッヒ。その瞳は苦笑するエ

ルディンを一瞥し、しかしすぐにそんな彼の横に立つシルフィードに注がれる。
「生意気なのよ……」
「フーちゃん、一国の国家元首が約束を反故するのは良くないと思うわ。国と国で例えればこれは条約なんだから」
メッと注意するのはヨーウェン。しかしそんな彼女の注意に対しフリードリッヒは鼻を鳴らして平然と言ってのける。
「条約が有効なのは、私にとって有益な間だけよ」
場が一瞬凍り付いた。
条約の締結を最終決定する国家元首であるフリードリッヒ。その彼女が条約を破棄する事に何ら罪悪感を感じていない。エルバーフェルドという国が、目的の為なら手段を選ばないという所以は、こうした彼女の強硬姿勢に他ならない。
戦慄する一同を前にして、ヨーウェンは威風堂々と立つフリードリッヒの頭を小突いた。
「まったく、時と場合を考えなさいよね」
半分呆れつつ、しかし半分は彼女のそんな硬い鉄の意志を尊敬してしまう。
目的の為なら手段を選ばない。一般的には目的の為ならどんな非道な事をしても構わないという悪い意味に聞こえるが、むしろこの言葉の本質はどんな事をしてでも叶えなければならない目的があり、その為なら己のプライドも何もかもをかなぐり捨てる、だ。
フリードリッヒは両親と祖国の復讐の為に身も心も削りながら茨の道を進み続けている。目的の為なら、どんな手段でも使う。条約もまた、そんな過程の通過点に過ぎない。
本当に、胸に抱く大志の為に命を懸けている。そんな彼女の鉄の意志に引かれ、共感し、自分のように多くの同胞がここには集まっている。そんな輪が広がり、今では一つの国という巨大な組織となった。
この国は本当に口だけではなく、彼女と生死を共にする決意を抱いている。
彼女の言葉の一つ一つに、引かれてしまう。本当に、すごい指導者

だ。
「……まぁ、空気を読めないという点は唯一の欠点だけどね」
誰に言うでもなくクショウしながらヨーウェンはつぶやく。
自身の発言で呆然としている事など露知らず、フリードリッヒは無言でいるクリュウの前に立ち塞がる。
全てを射貫く鋭い瞳に見詰められ恐怖するクリュウだが、その恐怖を押さえ込み真摯に彼女に向かい合う。そんな彼の真っ直ぐな瞳を見て、フリードリッヒはそっと尋ねる。
「最後に一つだけ尋ねる――貴様は、目的の為ならどんな手段でも使える人間か？」
フリードリッヒの問いかけに、クリュウは一瞬考える。しかし視線を外さずに見詰める彼女に対し、逃げる事なく堂々と立ち、答える。
「甘い考えだとわかっていますが、誰かが犠牲になるようなやり方は嫌いです。誰かが犠牲になる非道なやり方なら、例え効率的だとしても断ります――でも、僕自身がその対象の場合は一切の容赦はしません。こんな僕にできる事だったら、土下座でも何でもする覚悟はできています」
それは、実にクリュウらしい答えだった。
甘い考えだと自覚していても、やはり誰かが犠牲になるようなやり方は好まない。だがその分、自分が犠牲になるのなら喜んで身を捧げる。程度は違うが、それも一つの目的達成主義だ。
クリュウの甘いけど、覚悟した本心からの返答に対しフリードリッヒは無言だ。彼女自身は非道な手段でも目的達成の為なら厭（いと）わない究極の目的達成主義者。それが、彼女の求めていた答えなのだろうか。
「――まぁ、ギリギリ及第点って所ね」
フリードリッヒはそう答えると、フッと口元を綻ばせた。そのわずかな表情の変化に、不意打ち気味にクリュウはドキリとした。初めて、笑いかけてもらった。
しかしすぐにフリードリッヒは表情を再び真剣なものに変えると、居並ぶ来訪者――クリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードを順

番に見て、一つうなずき口を開く。
「君達の陳情、エルバーフェルド帝国政府として叶えると約束しよう。大国相手とはいえ、こちらは向こうの欲しがる資源を握っている身だ。それを脅迫材料に使えばこの程度の願いを通す事は造作ない」
フリードリッヒの言葉にクリュウ達の、特にクリュウの表情が明るく染まる。まさか、本当に願いが聞き入れられるとは。かなり現実離れした状況に、困惑しながらも五人は喜ぶ。
ただ基本アホなクリュウを除いた比較的しっかりしている女子陣はどこか冷静な部分で《同盟国相手に脅迫する》と平然と言ってのけたフリードリッヒに妙な引っかかりを感じてはいたが。
とにかく、当初の目的の第二段階は果たせた。第一段階は当然レヴェリ家相手の陳情だ。これでようやくアルトリア行きの切符の確保の見通しが立った訳だ。
喜ぶ一同を見てフリードリッヒは一瞬苦笑を浮かべたが、すぐに表情を引き締めて浮かれる彼らを戒める。
「――だが、当然こちらの条件を叶えたらの話だ」
フリードリッヒの真剣な口調に、浮かれていた一同の表情も自然と厳しいものに変わる。
そうだ。いくらエルディンが説得に成功したとはいえ、それは条件付きのもの。一体、自分達に課せられるのはどんな条件なのか。
クリュウも真剣な面もちでフリードリッヒを見詰める。フィーリア、サクラ、シルフィードも同じだ。
四人のハンターを見詰め、フリードリッヒは一拍置いてから金色に輝く長髪を靡かせながら、威風堂々とその条件を言い放った。
「――君達には、セクメーア砂漠に現れた角竜ディアブロスの討伐を命ずる。それがこちらの条件だ」
その条件内容に、クリュウ達の表情が一斉に凍り付いた。

第１５２話　星天月下　吹き抜ける夜風が結ぶ出会い

数日後、クリュウ達は空の上にいた。

蒼い空を優雅に飛翔するのはエルバーフェルド海軍所属の小型飛行船、航空哨戒艦『イレーネ』。文字通り空から敵の主力艦隊を哨戒する偵察艦。武装は最低限なものしかされておらず、軽量を売りにした機動力を発揮する艦だ。

エルバーフェルドはこの『イレーネ』の他にも数隻の同型艦を保有している。どれもがアルトリア製のもので同盟の証として譲渡された艦。大きさはアルトリアで言えば駆逐艦よりも小さい小型艇で、文字通り哨戒任務を行う小型艦だ。とはいえ飛行船を保有している国家はアルトリアと同国からの譲渡艦を持つエルバーフェルドだけ。他の国は気球の発展型のような貧弱なものしかないので、他の西竜諸国から見れば十分な脅威だ。

そんな貴重な艦に乗って、クリュウ達はエルバーフェルドを出国して一路大陸南西部の砂漠地帯にあるエルバーフェルド領、トブルクを目指していた。

西竜諸国はかつては資源獲得の為に大陸全体を巻き込んで戦争をしていた。その際に占領した土地を現在でも保有している国は多く、エルバーフェルドも砂漠地帯との貿易の為に交易都市トブルクとその周囲の土地を租借地として一種の領土として保有している。今回はそのトブルクに常駐しているトブルク守備隊からの救援要請――トブルクの近くにある公地、セクメーア砂漠に現れた角竜ディアブロスの討伐要請として、クリュウ達が派遣された訳だ。

小型艦ゆえに巨大な艦のような階層もなければ部屋の数も少ない『イレーネ』。何だかんだで一同は見晴らしの良い艦橋に集まっている。

艦橋では複数の軍人が忙しなく動き回っている。そんな彼らに指示を飛ばすのがこの艦の艦長だ。そして、その彼の横には海軍総司令

官であるカレンの姿もあった。今回の遠征の責任者としてこの艦に座乗しているのだ。
艦橋には乗組員の他にそれぞれクリュウ、サクラ、フィーリア、シルフィードのハンター四人。海軍総司令官のカレン、お目付け役として座乗しているエルディンの姿がある。
フリードリッヒやヨーウェンは当然国を離れる訳にはいかないので今回は不在。エレナ、ルーデル、セレスティーナの三人もエムデンに残っている。
「それで、この面子だとディアブロスの討伐経験があるのはシルフィードだけか？」
エルディンの問い掛けにうなずく四人。その返答を聞いたエルディンは自分の提案が失敗だったかなぁと困ったように苦笑を浮かべた。
「私は以前に利害が一致しただけのその場限りのチームで討伐した事はある」
そう答えたのは四人の中で唯一ディアブロスの討伐経験があるシルフィード。経験があるだけに他の三人に比べると幾分か余裕があるように見える。
「私はそもそも砂漠自体あまり訪れないので……」
申し訳なさそうに言うのはフィーリア。彼女の言う通り、リオレイアを専門に扱う彼女はそもそも砂漠にはあまり訪れない。時たま砂漠にもリオレイアが現れる事はあるが、稀有だ。
「……討伐経験はない。でも、商隊護衛の際に交戦経験はある」
逆に砂漠を渡りたがる商隊は多いので、その分砂漠に訪れる事が比較的多いサクラ。護衛の最中に現れたディアブロスに対して商隊が逃げる時間稼ぎとして戦った事はあり、四人の中では貴重な経験者と言える。
「戦った事はおろか遠目でも見た事はないです」
そう言いながら自分の発言が情けな過ぎて苦笑してしまうクリュウ。その後「一応、どんな生態で行動をするかは知識では持っています」とお荷物じゃないととさりげなくアピール。

「君達のチームで討伐した最上位のモンスターは？」
「……リオレウスね」
「なるほど。先に言っておくが、ディアブロスはリオレウスよりも難敵だ。リオレウスに殺されたハンターの数より、ディアブロスに殺されたハンターの方が数多い。出現場所が砂漠に限定されるから民間人の被害は少ない為に一般的にはリオレウスの方が脅威に伝えられているが、実際はディアブロスの方が討伐は容易ではない」
　エルディンは脅かす訳でも大袈裟に言っている訳でもない。ただ淡々と事実を述べているだけに過ぎない。だからこそ余計にクリュウ達、特にクリュウはこれから相手にするモンスターの強大さに、恐怖し、胸が苦しくなる。
　今でも鮮明に思い出される、火竜リオレウスとの死闘。まだチームとしての連携は今に比べれば不十分で、自分自身も未熟だったとはいえ、四人の力を合わせて辛くも勝った空の王者――ディアブロスは、そんな彼の王よりも強い。
　あの頃に比べればチームの連携も自身の力も格段に上がっているはずだ。しかし、不安がない訳ではない。
「――どうする？　引き返すなら今のうちだぞ」
　その言葉に、クリュウはハッとなって伏せていた顔を上げる。まるで自分の心の中の葛藤を見透かしていたかのように、エルディンはジッとクリュウを見詰めていた。
「命懸けの相手になる事は確実だ。相手の強大さに恐怖するのは人間として当然の反応だ。そもそも、人間が挑むべき相手ではないのだから、恐れ、引き返しても誰も文句は言わない――ただ、君が望む願いはこの程度の壁も越えられない程の、弱き願いだったのか？」
　責める訳でも、諭す訳でもない。ただの純粋な疑問。しかしそれは、クリュウの胸の中で恐怖と戦う信念に問いかける。
　自分は、母の故郷へ行きたい。母の事を知りたい。母の志を、見てみたい。その気持ちにウソはないし、本気だ。
　どんな屈辱だって耐えてみせる。そう誓った、自分の本気の願い。
　仲間に迷惑を掛けながら、仲間に救われながら、仲間と一緒に、そ

の願いを叶える一歩手前まで来た。例え、その最後の一歩に巨大な壁が立ち塞がっていても、ここまで来れたという事実は変わらない――仲間達の想いも、自身の覚悟も、本物だ。
どれほど巨大な壁でも、越えてやる。そして自分には、そんな自分に力を貸してくれる頼もしい仲間がいる――皆と一緒なら、恐れるものなど何もない。
「……ディアブロスは確かに強敵です。僕一人じゃ、きっと勝てない――でも、僕には心強い仲間がいます。だから、この程度の壁は問題じゃありません」
クリュウはハッキリとそう断言した。誇張でも過信でもなく、これは確信だ。
今まで、自分達は様々な苦境に立ってきた。無理だと諦めかけた事だってある。でも、そんな弱気になった時も自分を支え、共に戦ってきた仲間がいる――どんな困難も、共に乗り越えてきた仲間がいる。
この四人なら、越えられない壁などない。それはクリュウの――四人の少年少女の確信だ。
「そうですッ！　クリュウ様と一緒ならディアブロスなど恐るるに足らずですッ！」
嬉しそうに満面の笑みを浮かべながら言うフィーリア。彼女の屈託のない笑顔は、落ち込んでいたり悩んでいる自分を鼓舞してくれる。
「……問題ない。クリュウが進む道を阻むものは、私が蹴散らす。それだけよ」
いつもの無表情で淡々と宣言するサクラ。でも、その瞳はどこか嬉しそうで、口元に彼にしかわからないような微笑を浮かべて、彼を見やる。
「今の私達なら決して勝てぬ相手ではない。久しぶりに、本気を出すまでさ」
そして、いつもいつも頼もしい言葉、振る舞いで自分達を牽引してくれる。勇ましい横顔の中にも優しさを忘れない、頼れる我らがリーダー、シルフィード。

この三人の頼れる戦姫（なかま）と一緒なら、自分は絶対に負けない。そう、心から信じている。
四人を結ぶ絆は、本物だ。互いが互いを信頼し合う、本当の仲間。
エルディンは、そんな四人の姿を見て微笑んだ。
「ほんと、昔の俺達を見ているようだぜ……エッジ、テメェの息子は、本当によくテメェに似てやがるぜ」
エルディンはそう誰にも聞こえないような小声でつぶやくと、窓の外に広がる大空を静かに見詰める。
そして、一行を乗せた『イレーネ』はジョ・クルーク海を抜ける。
数日後の夜、星空の海を『イレーネ』は静かに航行を続けていた。
夜番の軍人を除いて、皆が寝静まっている夜中。明日はいよいよトブルクに着くという事でフィーリア達も早めに休んでいる。が、そんな中クリュウは寝付けなくて一人飛行船甲板に出ていた。
気嚢の下に船体を備える一般的な形の飛行船とした『イレーネ』。その船体の後部に露天甲板がある。
気流も穏やかな為、甲板を撫でる風はそよ風のよう。クリュウはそんな風と砂漠地帯特有の夜の肌寒さに少し身を震わせながら一人夜空を見詰めている。
すでにトブルクには伝書鳩で討伐隊（自分達の事だ）を派遣する旨を伝えており、自分達はこのまま明日にもセクメーア砂漠に入る。
セクメーア砂漠はドンドルマの指定狩場の一つで、ドンドルマのハンターは比較的馴染み深い場所だ。クリュウ自身は村から一番近いレディーナ砂漠を主戦場にしていたのであまりセクメーア砂漠は詳しくはないが、他の三人は経験があるので地理的には問題はない。
クリュウが不安に感じているのは、ディアブロス自体だ。
リオレウスよりも巨大で重量のある体、角竜と言われる由縁である二本の巨大で堅い角を生かした突進を攻撃主体とする凶悪な飛竜。バサルモスと同じく飛竜と分類されるも飛ぶ事はほとんどなく、リオレイア以上に陸上戦に特化した飛竜だ。
訓練学校での授業時、フリードが自身の経験も交えながら説明してくれたが、それを聞くだけでも強力な飛竜だとわかる。滑空突進では

なく自らの脚で駆ける地上突進では全モンスターで最速と言われ、その激しい闘争心、凶暴性から多くのハンターが命を落としてきた。
多くのハンターが通常の飛竜で最も恐れるのがディアブロスと挙げる事からも、ディアブロスが最強最悪の戦闘飛竜である事がわかる。
その常軌を逸した戦闘飛竜に、今回自分達は挑む事になった。
あのリオレウスよりも強力で、凶悪な飛竜。そう思うだけで、柵を持つ手が震える。これが武者震いならかっこいいのだが、クリュウの場合は恐怖による震えだ。そんな化物相手に、自分はちゃんと戦えるのか。恐怖と不安が入り交じり、拳が震える。
リオレウスもリオレイアも、自身を除いて他三人は程度は違えど討伐経験があった。しかし今回は討伐経験があるのはシルフィードだけという、他の三人にとってもこれまで以上の厳しい戦いになる事が安易に予想できる。
チームとしても、今回の狩猟はかってない苦しい大激戦になる事は必至。それに巻き込んでしまった罪悪感は当然彼の胸の中で渦巻く。本人達は気にしていないだろうが、クリュウは簡単にそういう気持ちを切り捨てられる程心の切り替えがうまい人間ではない。
さらに不安に拍車を掛けるのが、これまでと違って討伐経験が皆無に等しい中で挑む事から他のメンバーの危険度も跳ね上がっている事。もしも怪我をしたら――もしも、命を落とすような結果になれば……
今回ばかりは、冗談では済まない危険度なのだ。基本的にどうしてもネガティブ思考になりがちなクリュウは、先程から悪い方悪い方へと思考が進んでしまう。
自身だけの危険度なら、ここまで悩む事はない。問題は自分以外、フィーリア達の命が懸かっているのだから、覚悟が決まらない。
アルトリアには当然行きたい。だが、それ以上に今の大切な仲間を傷つけたり、失ったりするのは辛い。
クリュウの心は、不安で押しつぶされそうだった。
何度ついたかわからないため息を漏らした時、背後から物音がして

驚いて振り返る。すると、後甲板と船内を繋ぐ扉が開かれていて、そこに少女が一人立っていた。
　黒い軍服を纏った、サクラのような漆黒とは違い、少し明るめな黒髪をショートカットに切り揃えた小柄な少女。知的なメガネの奥には強い意志が窺える鋭い瞳が煌く――今回の遠征の責任者、海軍総司令官のカレン・デーニッツ。
　ランタンを片手に、カレンはジッをクリュウを見詰めている。クリュウも彼女と直接話した事はほとんどないので、声を掛けるべきか迷う。
「消灯時間はとっくに過ぎています」
　一瞬の沈黙の後、声を発したのはカレンの方だった。明らかに警戒した物言いにクリュウは苦笑しながら「ごめんなさい。ちょっと、眠れなくて」と謝る。見た限り同年代に見えるが、相手は一国の一軍最高指揮官。一応敬語で接する。
　クリュウの返答に、カレンは特に反応を示さなかった。彼自身に一切の興味がない。そういった感じの振る舞いだ。
　注意はした。そう言いたげにカレンは元来た扉へ振り返る。
「あの、今時間ってあります？」
　背を向けたカレンに、クリュウは声を掛けた。その声に、カレンは怪訝そうに振り返る。何も言わず、厳しい瞳を向ける。その瞳はまるで「何を言っているのですか？」と言っているかのよう。だから、クリュウは言葉を続ける。
「いえ、ちょっと話でもしたなぁと思いまして」
　クリュウの言葉に、カレンは無言だ。
　しばしの沈黙が続き、クリュウが今のはなしと言おうと口を開くと同時にカレンはため息を零した。驚くクリュウに瞳を向け、彼女は静かに近寄って来ると、彼の隣に並び立つ。
「あの……」
「総統陛下より、貴殿の願いは可能な限り叶えるよう命令を受けていますので」
「本当は嫌ですしそんな時間はありませんが、陛下の命令とあれば仕

方がありません」という言葉が続きそうな口調で述べるカレン。実際、彼女の心中ではほぼ同じような言葉が浮かんでいる。
　クリュウは苦笑しながら、嫌々ながらも付き合ってくれる彼女に感謝していた。一人でいるとこのままどんどん悪い方へ思考が働きそうだったので、誰かが傍にいてくれた方がありがたい。
「それで、私はあなたの隣に人形のごとく無言で立っていればよろしいのですか？」
「いや、普通に話してほしいんですけど……」
「興味のない話なら、一切の反応を断りますがよろしいですか？」
「……まぁ、独り言よりはいいかな」
　クリュウは苦笑を浮かべながらそう言うと、目の前に広がる無数の輝く星々を見詰める。自分からは話掛ける気はないのだろう、カレンもまた同じように星に視線を向けている。
「あの、司令官は――」
「デーニッツで結構です。それと敬語も不要です。部外者相手に軍の上限関係を押し付ける気はありませんので」
「そ、そう？　その方が僕としてもありがたいけど……」
　ほんの少しだけだが、彼女との距離が縮まったように感じた。まぁ、相変わらず警戒心全開という様子には変わりないが。
「質問を遮ってしまいましたね。続きをどうぞ」
「あ、いや、大した事じゃないんだけど――デーニッツはどうして、そ、総統陛下に仕えてるのかなぁって」
　クリュウの問い掛けに、カレンは特に驚いた様子はなく。ただほんの少しだけ、遠くの空を見詰める。
「答える義務はありませんが、まぁいいでしょう。私の一族は代々海軍軍人の家柄です。祖父も曾祖父も海軍将校でしたし、父は王国時代の海軍総司令官でした」
「ものの見事に海軍一族なんだね……」
　一族揃って役目は違えど、同じ世界に身を置く。何となく、両親と同じハンターの道を選んだ自分と似ていて、少しだけ親近感が湧いた。

だが、どこか誇らしげに海軍一族だった家族の事を言ったカレンだったが、その表情が少しだけ曇る。
「ですが、父はローレライの悲劇の混乱に乗じたガリア・東シュレイド連合軍の侵略を撃退する為に、津波で主力艦をほとんど失った脆弱な艦隊で圧倒的な敵艦隊の迎撃を行いました。しかし結果は完敗。艦隊は全滅し、父はその海戦で戦死しました」
ギリッと、悔しげにカレンは歯軋りする。握られた拳は真っ白になる程強く、瞳には憤怒の炎が宿る。その顔を見て、クリュウの心が痛む。
……また、だ。
この国の人間はガリアと東シュレイドを憎んでいる。フィーリア達からそう聞いていたし、人々の様子を見ていてそれはよくわかった。憎しみの連鎖が、止まらずに続いている。カレンもまた、その一人だ。
「……国民は輸送船団を抱えた敵艦隊の迎撃に失敗した父を糾弾し、無茶な作戦で兵を犬死させたとして戦死した兵の遺族から罵声を浴びせられ、海軍名家と言われたデーニッツ家は没落しました。母は心労が祟って病死し、私は一人残されました」
怒りに打ち震える拳。握り締め、爪で皮膚が抉れるのではないか。そんな心配をしてしまう程、固く締められた拳。見ているだけで、痛々しい程に白い。小刻みな震えが、怒りの表れ。
だが、そんな拳は意外にもあっさりと解けられた。視線を上げると、先程まで憤怒に染まっていた彼女の顔が、冷静さを取り戻していた。だが瞳は濁り、まるで過ぎた事だと自己完結しているよう。
「……母の死後、父の忠臣に引き取られた私は父の無念を晴らそうと海軍再建を志に抱き、死に物狂いで勉強しました。しかし、共和制に移行した国は他国からの恫喝に屈し、一切の軍隊を保有しない事を決めました。自分の努力が、無様に崩れ落ちる瞬間。今でも、忘れる事はできません」
目標を見失う。人が生きる上で、最も苦しい事柄だ。良い事でも悪い事でも、目標があれば人はそれを生き甲斐とし、強く生きられる――

――復讐に狂うのもまた、それを目標にしているからこそ信念の強い人間になる。
「目標を失い、生きる意味を見失った私は廃人と言っても過言ではありませんでした――そんな時に、あの方と出会いました」
口元にフッと小さな笑みを浮かべ、カレンは懐かしそうにその時の事を思い出す。
「全てを諦め、海に身を投げたあの日。冬の冷たい海水が、私を包んでいく感触。光が失われ、次第に意識が遠のきました。その時、私の手が握られ、勢い良く海面に引き摺り出された――咳き込む私が見たのは、まさに女神でした」
瞳を閉じ、そっとその時の光景を思い出す。
「高貴で、凛々しく、勇ましくて、美しい戦女神。美しい顔にきれいな髪を海水に濡らし、鋭い瞳で私を見詰めていました。刹那、私は頬を叩かれました。何が何だかわからない私に、あの方は言いました――「逃げる為に死ぬ事は愚行以外の何ものでもない。死ぬ覚悟があるなら、大義を成してから死ね」と」
そっと、頬を撫でる。こうしていると、あの時の痛み、そして熱が蘇る。
「そして、あの方は呆然としている私に手を差し伸べた――「無駄死にするくらいなら、貴様は私のものになれ。その助けられた命、今度こそその使い道を見失うな」と仰られました」
そっと瞳を開き、カレンは深く軍帽を被る。視線の先には、今も思い出せるあの時、彼女の手を掴んだ時の温もりが残る自分の手。ギュッと、先程までとは違う拳を握り締める。
「私は総統陛下の臣下に下りました。陛下はそのカリスマ性であっという間に国家を愚図政治家どもから奪還し、今のすばらしき国を作り上げました。私はその中で父と同じ椅子、海軍総司令官になった。全ては陛下のおかげ。私の命の全ては、陛下の為にあります」
心からそう思っているのだろう。そう言う彼女の表情は凛々しく、生き生きとしている。目標を持っている人間の、やる気に満ちた表情。それは、どんな目標・目的であっても美しい。

クリュウは、そんな彼女を見て内心少し尊敬していた。誰かの為に、そこまで尽力できる。信じているからこそ、どんな苦難も乗り越えられる。

人を信じるという強さ、彼女はその強さをしっかりと持っている。

「信じる、か……」

フリードリッヒに対して絶対の信頼を寄せている彼女に対して、自分はどうだろうか。

信じているかと問われれば、迷わず首肯するだろう。だが、ほんの少しだけそんな自分に自信がない――自分は、彼女のように心から信頼しているだろうか。

そんな事はないと言い切れる。でも、自分の態度や行動はそんな自分の想いに反しているのではないか。

信頼するというのは、全てを任せるという事だ。

信じているからこそ、任せられる。

信じているからこそ、頼れる。

ディアブロスという強敵相手に、確かに皆が怪我するのではないかと不安になるのは仕方がない事だし、そういう心配もして当然だ。でも、今まで自分達はそんな苦難をいくつも乗り越えてきた。

怪我をするかもしれない、その不安は決して消える事はない。

でも、信じるという事は心配する事とは違う。信じているから、きっと大丈夫と前向きに思う事が大事なのだ。

後ろ向きではなく、前を向いて進む。信じるとは、そういう事だ。

心配はいくらしてもいい。でも、信じているなら大丈夫だと信じ抜く。仲間の想いを裏切らない事こそ、チームという組織では一番大事な事だ。

そう結論付けると、自分でも気づかないうちに肩の荷が下りていた。難しく後ろ向きばかりに考えていた思考はある意味で開き直ったとも取れる、でも悪い気はしなかった。

今まで見えなかったものが、薄っすらとだが見えてきた。そんな、心地良い感じ。

自然と、笑みが浮かんでいた。

そんな彼の様子を見て、彼の心境の変化を知らないカレンは怪訝そうに首を傾げる。
すると、クリュウはそんな彼女の手を取った。突然の事に驚き言葉を失うカレンに向かって、クリュウは満面の笑みを浮かべながら礼を述べる。
「ありがとうッ。君のおかげで、気持ちの整理ができたよッ」
「……は、はぁ？」
何も知らないカレンはただ戸惑うばかり。だが彼に握られている自分の手を見ると、頬を赤らめて不機嫌そうに眉をしかめる。
「我が軍ではセクハラ行為は軍法会議ものですけど」
「えぇッ!?　そ、そんなつもりは全然ないよッ！」
ジト目で見詰めるカレンの言動にクリュウは慌てて手を離した。変に意識してしまったので頬は赤く、これではまるで説得力を持たない。そんな彼の様子を見て、カレンは小さくため息を零す。
「何を狼狽える必要があるのですか。心にやましい気持ちがなければ何も問題はないはずです。それとも、何かそれに類する感情をお持ちですか？」
「そ、そんな事は断じて無いッ！」
疑わしいと言いたげにジト目でしばし見詰めた後、興味を失ったように彼から視線を離すとカレンは再び夜空を見詰める。その横顔を見てクリュウはまだ赤い頬を掻いた。
「……総統陛下の前では言えませんが――お母様の手がかり、何か見つかるといいですね」
突然発せされたカレンからの言葉に、クリュウは思わず「え？」と返してしまった。驚いて彼女の方を見ると、こちらにジト目を向けていた。
「何ですか？　私がそのような発言をする事が何かおかしいのですか？」
「そ、そういうんじゃないけど……ちょっとビックリしちゃって」
つぶやくように小声になるクリュウを見て、カレンはため息を零す。

「私、そんなに薄情な人間に見えますか？」
「いや、ほんとそんなんじゃないからさ」
「……まぁ、いいですけどね」
軍帽を深く被ってまたしても視線を夜空に向けるカレン。自分の不用意な発言のせいで下りた沈黙に、クリュウは気まずそうに言葉を発する事もできずに沈黙を続ける。どうにか話題を振ろうと模索するも、そもそも彼女と本格的に話したのはこれが初めてだし、そもそもつい数日前に会ったばかりだし、その間もほとんど関わっていない為振るような話題も見つからず、クリュウは頭を悩ませる。
だが、そんな彼の苦闘は意外にもあっさりと打ち砕かれた。
「――私も両親を失っている身です。その気持ち、わからない訳ではありませんから」
目を伏せ、小さくもしっかりと聞き取れる声でつぶやくカレン。彼女もまた、両親を失っている身。だから、彼の母の軌跡を追おうとする気持ちも、わからなくはない。
フリードリッヒに忠誠を誓う彼女は、もちろん彼女の考え方や行動などに共感している。彼女の言う事は絶対であり、その絶対を確固たるものにするのが自分達臣下の役割だとも認識している。でも、今回ばかりは自分と少し似た境遇の彼の気持ちもわかる。
先程の発言は、彼女なりの思いやりだったのかもしれない。
表情や言動から彼女に対して厳しくて冷たい人、という印象がなくもなかったクリュウ。だがしかし、その印象が少しだけ変わった。
「ありがとう」
ただ純粋に、そう礼を述べた。
彼女達から見れば敵対関係とまではいかないが、一種の敵に等しい境遇に置かれている自分達。その中心人物である自分に、たった一言でも背中を押してくれる言葉を言ってくれた彼女に、ただそういう感謝の気持ちが浮かんだのだ。
クリュウの感謝の言葉に、カレンは口元に小さな笑みを浮かべるだけ。何も言わなかったが、その表情で十分だ。
「それでは、私はそろそろ失礼します。明日も早いのですので」

「そうだね。付き合ってもらっちゃって、ありがとう」
「いえ、貴殿も早く寝てください。灯り用の油も経費が掛かっていますので」
「……あはははは、すぐ寝るよ」
苦笑しながら答えるクリュウの返事に満足したように頷くと、カレンは一礼して踵を返す。背を向けて離れていく彼女の後ろ姿を見てクリュウも部屋に戻ろうと振り返る。
――その瞬間、突然の突風が吹き荒れた。
「うわっぷッ!? のわッ!?」
激しい風圧で動けなくなったかと思ったら、今度は突然床が傾いた。クリュウは手すりに掴まって何とか堪える。
地面が斜めになるという異常事態に一瞬困惑したが、すぐに今は空を飛ぶ船の上だという事を思い出す。どうやら強烈な横風を受けて飛行船が大きく傾いたらしい。
慌ててカレンの姿を探そうと振り返った瞬間、目の前からその当人が転がって来た。
「あ、危ないッ!」
反射的に彼女の体を受け止めたクリュウだったが、斜めになった床では思うように足に力が入らず、衝撃を受け止め切れない。結局、受け止めたはいいもののそのまま一緒になって転倒してしまう。
床に背中から激しく叩きつけられ激痛が走る。だが反射的に悲鳴を上げようと口を開くが、その口は何かに押さえ付けられて動かなかった。
柔らかくて、熱を帯びたその感触。クリュウはそれに似た感触を、知っている。
激痛に反射的に閉じていた瞳を慌てて開くと、目の前には信じられないくらい近い距離で視界いっぱいにカレンの顔があった。ただ、先程までのクールで冷静な軍人らしい彼女ではなく、今目の前にいるのは大きく瞳を見開き、顔を真っ赤にして固まっている少女。
あまりにも突然で、突拍子もなくて、非現実的な出来事に、その状況を理解するのにしばし時間が掛かった。しかし程なくして、理解す

る。
唇から熱が離れたと同時に、頬に熱が零れる。
「――わ、私の……ファースト……キス……ッ」
ボロボロと瞳から涙を零し、目の前で一人の少女が泣いていた。
クリュウはただ、唇にまだハッキリと残っている記憶と目の前の彼女の姿に呆然とし、黙りこくる。
――夜の月が、静かにそんな二人を照らし出す。

第１５３話　空中挺進　砂海に舞い降りる四人の狩人

翌朝、『イレーネ』は無事にセクメーア砂漠の上空に達した。地平線の向こうまで砂漠が広がっているセクメーア砂漠は、ドンドルマが管轄する狩場の中では最も広大な場所だ。

クリュウ達は全員武装を整えて後部甲板に集まっていた。着陸次第すぐに出撃できる構えだ。

甲板にいるのはクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードのハンター四人。他に上級将校であるエルディンとカレン、その他に兵士が数人という状況だ。

なぜか困ったように苦笑を浮かべるエルディンの隣には、目を真っ赤にして不機嫌そうに仁王立ちしているカレン。その厳しい瞳は、一直線に気まずそうに視線を逸らしているクリュウを串刺しにする。

「クリュウ様、どうかされたのですか？」

いつもの彼らしくないクリュウを見て、心配そうにフィーリアが声を掛ける。そんな彼女の問い掛けにクリュウは「だ、大丈夫」と一言返すだけでまた沈黙する。様子のおかしなクリュウに、フィーリアはやっぱり首を傾げる。

「……クリュウ、あの女と何かあった？」

ジーッと見詰めてくるサクラの視線と問い掛けもうまく避けていると、エルディンと何事かを話していたシルフィードが戻って来た。その手には何やら太い筒が握られている。数にして二本、青と赤と色分けされている。

「シルフィ、それは何？」

「信号弾だ。討伐が完了したり討伐失敗の場合など、私達を回収してほしい場合はこちらの青の信号弾を上げてほしいそうだ。そうすれば上空に待機しているこの艦が降りて来るらしい」

「ふぅん、じゃあそっちの赤い方は？」

「ディアブロスを見失った時にこの赤い信号弾を上げると、奴の位置

を教えてくれるそうだ。砂の中を移動する相手だからな。一応保険だ」
　なるほど。上空を飛んでいるこの艦ならディアブロスの位置を簡単に見つける事ができる。その条件を利用した良策だ。
「みんな、準備はいいか？」
　信号弾の筒を腰に下げたシルフィードは振り返り、居並ぶ仲間達を見回す。そんな彼女の問い掛けに、仲間達は準備万端という出で立ちで構える。
「問題ありません。すぐにでも出撃可能です」
「……疾（と）うに準備はできている」
「準備万端だよ」
　三人の準備完了という返事に満足気にうなずくと、シルフィードはエルディンを一瞥し、その横に立つカレンに向き直る。
「こちらは準備完了した。出撃するから着陸してくれ」
「着陸はしません」
　ピシャリと断るカレンの言葉に、シルフィードは首を傾げる。他の面子も似たような反応だ。
「いやしかし、着陸してもらわないと出撃できないのだが」
「着陸しなくても出撃は可能です」
　そう言うと、カレンは兵士に何やら指示を出す。すると兵士達は備えていた何やら物々しい装備をクリュウ達四人に手渡す。
「これは？」
「空挺部隊用の落下傘（パラシュート）です」
「ぱ、パラシュート？」
　きょとんとするクリュウ達を前にして、カレンは堂々と言い放った。
「皆さんにはこれから、パラシュートによる降下をしていただきます」
　十数分後、空挺兵から簡単なレクチャーを受けた四人は、まだ狩りが始まった訳ではないのに皆顔を真っ青にしていた。
「つ、つまり、ここから飛び降りてこのパラシュートを開いて地面に降りろと？」

冗談だよね、という意味合いを込めての問い掛けに対し、カレンは一切の迷いなく「その通りです」と断言した。
顔色を真っ青にしているのはクリュウだけではない。他の三人も前代未聞の事態に戸惑いを隠せないでいる。
「こ、この高さから降りるのはなかなか勇気がいるな」
「勇気どころの問題じゃありませんッ！　自分の命をこんなひ弱そうな布に預けるなんて無理ですぅッ！」
「……空中挺進。無茶苦茶ね」
百戦錬磨の戦乙女達も、これぱっかりは経験がないので尻込み状態だ。そんな彼女達を一瞥し、クリュウは話は終わったさぁ飛び降りろとばかりに偉そうに仁王立ちしているカレンに近づく。
「ねぇ着陸してよッ！　こんな無茶苦茶な事できないよッ！」
「できないのであれば任務失敗としてこのまま帰投しますが」
「何でそうなるのッ！　っていうか当初の予定ではちゃんと拠点（ベースキャンプ）近くに着陸するはずだったでしょ!?」
「予定よりも気流が乱れているので、危険な岩場に着陸するのが難しいのです。砂場ではそれこそディアブロスやその他のモンスターに襲われる危険性があるので実現不可。様々な可能性を考慮した結果、これが最善の策だと考えます」
「いや、でもさ……」
「軍隊という組織はその場その場で作戦を細かく変更していきます。目的の為なら多少の手段が変わる事は何も問題ではありません」
「だからって、これじゃ嫌がらせ意外の何ものでもないじゃんッ！」
異議申し立てるクリュウの言葉に、カレンはギロリと鋭利な刃物を思わせるような鋭い瞳で睨みつける。まだ赤い瞳は責めるような眼差し。頬の赤らみも幾分か濃くなったよう。
「……嫌がらせ？　あなたが私に行った行為に比べればずいぶんとマシかと」
「うぐ……ッ」
そう言われてしまうとクリュウは返す言葉もなく押し黙ってしまう。責めるように睨みながら言うカレン。その瞳には依然として怒

りの炎が燃え盛っている。
　彼女の言うクリュウのした嫌がらせとは、昨晩の《事故》の事だ。クリュウは一応すぐ謝ったのだが、カレンは泣きながらクリュウに平手打ちを一発入れて去った。当然、許してもらえているとは思っていなかったが。
「いや、だからあれは事故であって。その、ほんとごめん……」
「謝罪の言葉で私の《初めて》が返還されるなら、私だって文句は言いません。どうした所で、貴殿が奪った事実は変わりがありません」
　取り付く島もないとはまさにこの事だろう。カレンは許す気など一切無く、クリュウの謝罪の言葉の全てをシャットアウト。
　クリュウもクリュウで事故とはいえ罪悪感は当然ある為強くは言い返せない。結局、カレンの言葉に逆らえなかった。
「こんな所で無意味な議論に有限である時間を潰すのは愚の骨頂。どう足掻いても結果は変わりません。となれば、自ずと答えは見つかりませんか？」
「……空挺出撃します」
　がっくりと肩を落とし、クリュウは了承した。そんな彼を見ていい気味だと少しだけ口元にカレンは笑みを浮かべた。
　チームの中心人物であるが故にリーダーであるシルフィード以上に影響力を持つクリュウが折れた事で、反発気味だった他の三人も諦めて了承する事になった。
　――そして、いよいよ出撃の時。
　後部甲板から艦底へ移動した一行。そこは地上爆撃を行う際に使われる投下爆弾が収められた爆弾倉。その中心にそれらの爆弾投下用のハッチがあり、クリュウ達はそこから飛び降りる。
　ハッチが開かれると外風が吹き込み彼らの髪を揺らす。クリュウは気合を入れると共に手にしていたレウスヘルムを被る。同じようにサクラは額当てを、シルフィードは髪留めのリボンをきつく締める。
　四人はそれぞれ武装を整えており、その背中にはリュック状に収納されたパラシュートが背負われている。

「大型の荷物はお前らが出た後に同じく荷車ごと空挺で下ろす。爆弾類も一緒に下ろすが、もちろん信管は抜いてあるから地上で入れてから使うように」
そう言う彼の背後にはパラシュートを備えた荷車が置かれている。クリュウは「お願いします」と彼に言うとハッチに向かって歩き出す。そんな彼を心配そうに見守るのはフィーリア、サクラ、シルフィードの三人。
開かれたハッチの端に到達する。次の一歩から足場はなくなり、空中へと投げ出される。吹き込む外風の向こう、眼下には広大なセクメーア砂漠が広がっている。
クリュウはその場で大きく深呼吸すると、いよいよ覚悟を決める。腕を組んで仁王立ちしているカレンを一瞥してから、心配そうに自分を見詰めている三人に振り返る。そして、そっと微笑んだ。
「それじゃ、先行ってるよ」
そう言ってクリュウは正面に向き直ってヘルムのバイザーを下ろし――飛び降りる。
一瞬の浮遊感の後、重力に引っ張られて体が落ちる。次の瞬間には彼の体は艦底から離れて空の上に投げ出されていた。
猛烈な下からの風が、まるで彼の侵入を拒むように吹き荒れる。だが飛竜や鳥のように重力から解放された訳ではない体は、まるで弾丸のような猛烈な速度で落ちて行く。
迫り来る地面に恐怖がない訳ではない。でもそれ以上に空を飛んでいるという非現実的な感覚に対する興奮の方が上だった。
ヘルムで隠れた口元に、笑みが浮かぶ。
「にゃあああぁぁぁッ!?　落ちる落ちる落ちますぅッ！」
「お、落ち着けフィーリアぁッ!?　冷静を保ってないと死ぬぞッ!?」
「しょんな事言われましてもおおおぉぉぉッ!?」
暴風の音を掻き分けて聞こえる声に上を見ると、自分と同じく飛び降りた三人の姿が見える。すっかりパニックになっているフィーリアと、そんな彼女を落ち着かせようとしながらも自身も軽くパニックになっているシルフィード。

ふと、サクラの姿が見えないと気づく。すると、体を横向きにして飛んでいる三人に対して臆する事なく頭を下にして一直線に落下してくる少女――サクラ。
「……どぉん」
「のわぁッ!?」
サクラはクリュウに向かって衝突。と同時に彼の体に抱きついてきた。バランスを失った二人は抱き合ったままの状態で錐揉み落下。
クリュウは慌てながらも何とかバランスを取り戻すと、抱きついているサクラに怒る。
「ちょっとサクラッ！　今はフザける場合じゃないんだけどッ!?」
「……大丈夫。私はいつも本気だから」
「余計に厄介なんだけどッ！」
空中でクリュウは抱きついているサクラを引き剥がそうとするが、彼女はガッチリとクリュウに抱きついていて離れない。すると、さっきまで落下している事で手一杯でパニックだったフィーリアまでもがクリュウに抱きついてきた。
「サクラ様ばっかりズルいですッ！　私だってクリュウ様とハグしたいですぅッ！」
「……クリュウ、ぎゅぅ～」
「あぁッ!?　わ、私もぎゅぅ～ですぅッ！」
「ちょッ、ちょっと二人とも何もこんな時にぃ……ッ！」
「――取り込み中すまないが、そろそろパラシュートを開かないと危ないぞ」
呆れるシルフィードの言葉にハッとなって下を見ると、確かにそろそろパラシュートを開かないと危険な距離にまで地面が迫っていた。
「二人とも離れてッ！　パラシュート開くからッ！」
クリュウの必死な声に二人も我に返ると慌てて離れ、四人はそれぞれ距離を開いて一斉にパラシュートを開いた。一瞬体全体を一気に引き上げられるような感覚。その後は急激に落ちる速度が遅くなり、ゆっくりとした降下に変わる。見上げると、自身と結ぶ紐の先に巨大なパラシュートが開かれている。

周りを見ると、自分と同じようにパラシュートを開いて降下する三人の姿が見える。
シルフィードが下を指差したのでその方向を見ると、真下に巨大な岩場が見える。あそこに拠点（ベースキャンプ）がある。予定ではその少し横の砂漠に落下する手はずになっており、四人はパラシュートを操作してそちらの方向に針路を変えて落下を続ける。
そして、まずはシルフィードが砂の上に着地。その次に少し距離の離れた場所にフィーリアが着地し、クリュウもその少し横に着地する。すると、またしてもサクラが「……どぉん」とパラシュートごとクリュウにタックル。クリュウは砂の上に背中から押し倒され、その上にサクラが抱きつく。
「さ、サクラぁ……」
「……クリュウ、ぎゅぅ～」
「あぁッ！　サクラ様抜け駆けはダメですぅッ！　私もぉ～ッ！」
着地早々に二人の少女に押し倒されるクリュウを見て、シルフィードは疲れたようにため息を零しながらそんな三人に近づく。
「……君達は本当に緊張感がないというか、裏表ないというか、公私混同が著しいというか」
「呆れてないで助けてよぉッ！」
しばしそんなやり取りをした後、二人は意外にもあっさりとクリュウから離れた。首を傾げるクリュウを前にして、二人はぐったりとした様子。
「ふぃ、フィーリア？　サクラ？」
「あ、暑いですぅ……」
「……氷結晶イチゴが食べたい」
どうやらあまりの暑さに抱きつくという暑苦しい行為に限界が達したらしい。いつの間にか外れたレウスヘルムの下にあった彼の額にも大粒の汗が浮かんでいる。クリュウは立ち上がり、砂を払ってからヘルムを拾い上げる。
「とりあえず、狩場には入れたみたいだね」
クリュウはそう言って上空を見上げると、遙か天高くに自分達が

さっきまで乗っていた航空哨戒艦『イレーネ』が見える。
「まずは向こうに落ちた荷車を取りに行くぞ。それから拠点（ベースキャンプ）へ向かい、そこから狩猟開始だ」
　シルフィードの指示に三人はうなずき、一行はまず自分達の落下地点から少し離れた場所に降下した荷車の下へ向かう。砂地に着地した荷車はしっかりと紐とシートで固定されており中の物が散乱するなどという事はなかった。紐に縛られたパラシュートを外し、個人用パラシュートと共に荷車に収納するのに五分と掛からなかった。
　そしていつものようにクリュウが荷車を担当し、その周りを護衛するように他の三人と共に一路岩場の中にある拠点（ベースキャンプ）を目指して歩き出した。
「お、どうやらうまく着地できたみてぇだな」
　艦橋から双眼鏡片手に目下を見詰めるエルディン。その視線の先には無事に着地して今まさに拠点（ベースキャンプ）へと歩き出すクリュウ達の姿が映る。
「っていうか、我が国ではまだ試験段階の空挺をやらせるとは。嬢ちゃんも無茶するねぇ」
　双眼鏡から目を離したエルディンは、隣で同じように双眼鏡で彼らを見詰めているカレンに向き直る。
「確かに我が軍ではまだ試験段階のものですが、すでにアルトリアでは実際に使われている戦法ですので、可能であると実証されています」
　双眼鏡から目を離す事なく、淡々と答えるカレンにエルディンは苦笑を浮かべる。
「かもしれねぇが、空挺ってのは熟練の兵士にしかできない荒業だぜ？　それを素人にやらせるとはなぁ」
「今回の事はいい参考になりました。すでにアルトリアに兵員輸送用の飛行輸送艦の発注をしてありますので、近い将来我が国でも空挺作戦が可能となるかと」
「……娯楽でのパラシュートは嫌いじゃねぇが、結局はこれも軍事利用されるのか」

「軍人が言うセリフじゃありませんね」
「俺はあくまでハンターだ。国を守るハンター組織を統括しているに過ぎない。俺自身は自分が軍人になったつもりはねぇよ」
「……あなたはそうかもしれませんが、私は軍人です。国を守る為、総統陛下の御身を守る為に全力を注ぐ。それこそ、軍人の真骨頂です。その為なら、手段など選んでいられません」
「……嬢ちゃんも、もっと女の子らしい生き方をしてみたらどうだ？彼氏でも作ってよぉ」
からかうように言ったエルディン。だが、返って来たのは沈黙。カレンは答える必要ないとばかりに双眼鏡を構えたまま黙っている。エルディンは諦めたように肩を竦ませると、再び双眼鏡で愛弟子達の姿を見詰める。
そんな彼の横で沈黙しながら双眼鏡を覗くカレン。だが、構えた双眼鏡は小刻みに震え、頬は赤らんでいる。そして、先程から必死になって見詰めているのは先程空挺出撃した四人のハンター達――の中の、三人の美少女に囲まれて時々抱きつかれたりしている少年、クリュウ。
そっと、カレンは唇に指を当てる。
――今でも忘れられない、あの時の熱と感触。大切に大切に守ってきたファーストキスを、無理やり奪った奴。
「……責任は、きっちり取ってもらいますから」
小さな小さな彼女のつぶやきは、誰にも聞こえる事はなかった。
セクメーア砂漠。《乾きの海》という意味を持つ名のこの砂漠は主に地平線の向こうまで続く砂漠地帯とその砂漠の海にポツンと浮かぶ島のような岩場、さらに外の灼熱と正反対に冷たい地下水が流れる極寒の地底湖と、環境がまるで異なる場所で形成されている過酷な狩場だ。
ドンドルマのハンターが一般的に「砂漠」と呼ぶこの地域は砂漠の街と西竜諸国、ドンドルマなどの都市への物資の輸送ルート及び商人の通行ルートとなっている為、多くの人々がこの砂の海を渡っている。しかし狩場に指定されているだけあってここには凶暴なモンス

ターが数多く住み着いており、時には強力な飛竜なども住み着いてしまう。その為、ここを渡る者達は一般的に護衛にハンターを付けて渡るのが常識となっている。
今回のクリュウ達の任務はそんな護衛任務ではなく、この砂の海に住み着いてしまった凶悪な飛竜、角竜ディアブロスを甚大な被害が出る前に討伐するというものだ。
セクメーア砂漠の拠点（ベースキャンプ）はそんな砂漠に聳え立つ岩場の一つの頂上付近、岩場の割れ目の中に設置されている。天井となっている岩が灼熱の日差しを遮っており、砂の上を走る熱風もこれくらいの高さになると幾分か暑さも和らいだ風となって吹き抜ける為、ここは砂漠の中心にあってもクーラドリンクなしで居る事ができる。
拠点（ベースキャンプ）に到着した一行。すぐに天幕（テント）の横に置かれた支給品ボックスを開けて、シルフィードは中に入っている物を確認する。
「……とりあえず必要な物はある程度は入っているな」
シルフィードはそう言って中に入っている物を取り出すと、地面に布を引いてそこに並べ始める。支給品はいつものように応急薬や携帯砥石、携帯食料、地図、ペイントボールなどの基本品の他に砂漠ならではのクーラドリンク、ガンナー用の各種弾丸、そして――音爆弾。
「ディアブロスに対しては、音爆弾が有効なんだよね？」
音爆弾の一つを手に取り、確認の為にシルフィードに尋ねるクリュウ。
「あぁ。砂の中に潜った奴を引き摺り出す際に使える。ただし、怒り状態の時は効かないから気をつけろ」
「わかった」
クリュウはうなずくと、分けられた自分の分の支給品を手に取ってそれらをしっかりと道具袋（ポーチ）に収める。他の三人もそれぞれ自分の分の支給品を受け取ると、装備の最終確認を行う。
「それぞれ回復系統の薬及びクーラードリンクは十分持っているな？
それと、音爆弾も各自五発ずつ携帯しているな？」

シルフィードの問い掛けに三人はしっかりとうなずく。シルフィードも満足気にうなずくと、背後に振り返る。そこには携帯できないような道具類が搭載された荷車が置かれている。荷車には大タル爆弾Ｇ四発、小タル爆弾Ｇ五発、シビレ罠三つ、トラップツールが二つ、その他の道具類が搭載されている。
「本当はもっと爆弾を用意したかったんだけどね」
残念そうに言うクリュウの言葉通り、今回は爆弾類が彼にしては少なめだ。参考までにルーデルと共にリオレイアに挑戦した際は大タル爆弾Ｇは二発多く、さらにこれに大タル爆弾六発という、ルーデルに「あんたはこの島で鉱脈でも発見しようとか考えてる訳ッ!?」と呆れられた程だ。
「仕方がありませんよ。準備期間が短かった上にエムデンではハンター仕様の爆弾の入手が難しかったんですから」
「軍隊の爆弾なんて、それこそ戦争用のものだからな。使い勝手も威力も異なるから使う訳にはいかなかったしな」
二人の言葉にうなずくと、クリュウは「まぁ、これだけ集められただけで良しとしないとね」と自分を納得させる。相手が相手なのでそれに見合っただけの爆弾を用意したかったのだが、仕方がない――まぁ、彼の場合の《見合う》が世間一般のそれと差異が生じているのは言うまでもないが。
クリュウはデスパライズを引き抜いて刃毀れしていないか確認をし、フィーリアは小型モンスターと遭遇した場合に備えて通常弾ＬＶ１を装填しておき、サクラはこれが初陣となる飛竜刀【翠】を華麗に振り回して具合を確認している。シルフィードはそれらの確認が終わるのを待ってから、三人を見回す。すると、彼女の表情が厳しいものに変わった。それを見て、自然と三人の表情も引き締まる。
「正直言うと、今回の戦いはこれまで以上に厳しい戦いになると思う。全員が常に自身の全力を注ぎ続けて、ようやく互角かそれに多少劣る程度と言った所になるだろう」
それはシルフィードの、リーダーとして隠していた本音。このチームでディアブロスに挑むのはかなりの危険を伴う事はわかっている。

全員が本気で立ち向かって、ようやく並べるか並べないかというような状態だ。正直、勝てるかどうか難しい。
だが時に指揮する者とは、決して勝てない戦だとわかっていても部下を鼓舞し、その残虐な戦いに彼らを立ち向かわせなければならない。それが、指揮する者の責任と重圧だ。
だが、シルフィードは鼓舞しなければいけない状況なのにあえて本音を言った。それは指揮する者としてはある意味失格ものだ。しかし、彼女には確信があった。
ジッと自分を見詰める三人の《仲間》達を見回し、シルフィードは自信に満ちた凛々しい表情のまま、断言する。
「――だが、私達は決して負けない。そうだろう？」
シルフィードの試すような問い掛けに、居並ぶ三人は一瞬顔を見合わせた後、一斉に不敵な笑みを浮かべる。
「当然です。私達に勝てぬモンスターなど、この世に存在しませんッ」
力強くそう断言すると、フィーリアは満面の笑みを浮かべた。心から仲間を信じているからこそ浮かぶ、本当の笑顔。
「……クリュウの目的を阻む輩（やから）は、誰であろうと斬り伏せる。例えそれが、ディアブロスだとしてもよ」
いつもと変わらぬ無表情で淡々と述べるサクラ。だがその隻眼は闘志に燃え、口元にはわずかながら大胆不敵な笑みが浮かぶ。天上天下唯我独尊自分絶対至上主義。彼女の突貫を止められる者など、この世には存在しない。
そして……
「みんなと一緒なら、負けないさ――絶対に勝ってみせるッ」
固く拳を握り締め、クリュウは力強く断言する。瞳はキラキラと希望の光に満ち溢れて煌く。その力強く煌く瞳と表情を見てフィーリア、サクラ、そしてシルフィードの三人の表情にも希望が満ちる。
「そうですッ！　クリュウ様と一緒なら、私達の無敗神話は不動ですッ！」
「……クリュウと私、夫婦（めおと）の契りを結び合った私達に不可能はない」

「大嘘を言うなですッ！　いつそんな契りを結んだと言うのですかッ!?」
「……クリュウ、子供は何人ほしい？」
「はい？」
「ストーップですぅッ！　それ以上の発言は禁止禁止禁止ですぅッ！」
　あっという間にいつものノリに戻ってしまう三人、というか主に二人。シルフィードは呆れ半分感心半分と言った様子で苦笑を浮かべるとケンカする二人の間に仲裁に入っているクリュウの肩にポンと手を置く。振り返る彼に、静かに微笑んだ。
「まったく、君達は相変わらずだな」
「……見損なった？」
「いや、むしろその方がこちらとしても気が楽だ。ほんと、いいチームだよ」
「……そうだね。ちょっと緊張感ほしいけど」
「確かにな」
　そう言って二人は互いを見合うと、おかしそうに笑い合う。そんな二人、特にクリュウの方を見て喧嘩していたフィーリアとサクラは恥ずかしそうに頬を赤らめた。
「わ、笑わなくてもいいじゃないですか……」
「……不愉快」
「ごめんごめん。でも、ねぇ？」
「だな？」
　唇を尖らせる二人を見てクリュウとシルフィードは互いの顔を見合って意味深な笑みを浮かべ合う。そんな二人を見て、さらに頬の赤らみを濃くするフィーリアとサクラ。
「――さて、そろそろ気を引き締めるぞ」
　そう言ってシルフィードの表情が真剣なものに変わると、残る三人の表情も一斉に引き締まる。先程までの年相応の少年少女の顔から、狩人（ハンター）の顔になる。そんな仲間達を見回し、シルフィードはリーダーとして高らかに作戦開始を告げる。

「出撃するッ。目標は砂漠に住まう暴竜ディアブロスだッ。行くぞッ」
シルフィードの掛け声を合図に、クリュウ達四人の狩猟が開始された。
拠点（ベースキャンプ）を出発した一行はクーラードリンクを飲みながらまず最初にエリア2へと到達した。エリア2はこの狩場で最も広いエリアで、砂地が限りなく遠くまで広がった場所だ。左手には巨大な岩山が聳え、後方にも先程まで自分達がいた拠点（ベースキャンプ）がある岩山が聳え立っている。右手には厚い岩に包まれた洞窟状のエリア4があり、前方の開けた砂漠を進めばエリア1、左手の岩山の方へ行けば岩場のエリア3へと繋がる。
エリア2へと到達したクリュウ達。ディアブロスは砂の中を移動するモンスターなので、砂に覆われた場所は基本的に奴が現れる可能性がある。その為、いきなり遭遇する危険性を考えて緊張しながらエリアへと入った四人はエリアに奴の姿が見えないのを確認すると、一斉に入り過ぎていた力を抜く。
「杞憂だったようだな。ここもディアブロスが出没するエリアだが、どうやら他のエリアにいるらしいな」
「……早計ね。奴は砂の中に潜んでいる可能性だってあるわ」
「その可能性は捨て切れませんが、気配も感じないのでおそらく他のエリアにいると思いますよ」
エリアを見渡し、完全に奴の気配がないのを確認する三人の背中を少し遅れて入ったクリュウが見詰める。彼はいつも通り荷車を引いている為三人が先行したのだ。
「大丈夫そう？」
「はい。どうやらディアブロスは他のエリアにいると思われます」
フィーリアの返答に安堵の息を漏らして三人に近づく。辺りを鋭い瞳でまだ警戒しているサクラの横ではシルフィードがアゴに手を当てて何かを考えている。
「シルフィ、どうしたの？」
「いや、無策に捜索しても仕方がないからな。部隊を分派した方がい

いかと思ってな」
　シルフィードの提案にクリュウとフィーリアも思案顔になる。ようやく警戒を解いたサクラも合流し、ひとまず作戦会議となる。
「……良し、やはり部隊を分派させよう。その方が効率的だ」
　相手が空を飛ぶのと砂の中を移動するのとでは勝手が違う。発見するのは難しく、一極集中では発見に時間がかかってしまう。だからこそチームを分派させるのは効率的な策だ。だが、そんな彼女の提案に対し反対の意見も上がる。真っ先に手を上げたのはフィーリアだ。
「確かに効率的かもしれませんが、当然危険度は増します」
　すると、フィーリアの意見に対しシルフィードが不敵な笑みを浮かべる。
「確かにそうだが、君達ならやってできない事じゃないだろ？」
　シルフィードの挑発的な返しにフィーリアは一瞬呆気に取られたが、すぐに自身も不敵な笑みを浮かべて答える。
「当然です。レヴェリの名を受け継ぐ者に不可能はありませんッ」
「……フン、愚問ね」
　サクラも不敵な笑みを浮かべて答える。そんな二人の反応を見て満足気にうなずくと、携帯食料片手に地図を見ているクリュウに向き直る。
「捜索隊は全三班に分ける。フィーリア、君は単独でこのエリア２で待機。サクラは同じく単独でエリア５へ向かってくれ。余裕があれば隣接するエリア９の捜索も頼む。クリュウは私と共にエリア３経由で７へ向かう。各自奴を発見次第ペイントボールを投げて仲間に知らせ、他の誰かがペイントボールを投げた場合はすぐさまその場所へ急行する事。無理はせず、危険と思ったらすぐに離脱するように。以上だ、何か質問、意見はあるか？」
　シルフィードの問い掛けに対し、彼女の提案に不服そうな二人の戦姫が手を上げる。予想していたのだろう、シルフィードはため息混じりに「何だ？」と問う。
「チーム分けですけど、どうしてクリュウ様とシルフィード様が一緒なのですか？」

「クリュウは荷車を引いてるんだ。誰かと組ませないと危ないだろう？」
「それはそうですが……」
「……なぜ貴様だ？」
　ギロリと背負う飛竜刀【翠】のように鋭い瞳で睨むサクラの問い掛けに、シルフィードはやれやれとばかりにため息混じりに答える。
「まずフィーリアだが、そもそもディアブロスとの交戦経験がない。そんな状態で他人のフォローをするのは厳しいし、ライトボウガンでは完全に引きつけるには火力が低い」
　シルフィードの冷静な理由の説明に、不服そうではあるが一応は納得するフィーリア。クリュウと一緒がいいのは当然だが、自分では今回彼を守り切る自信がない。正確には自信はあるが、不安もある、という具合だ。
「次にサクラだが――」
「……交戦経験はあるし、護衛任務は私の最たる得意分野。クリュウは、命に代えても守り抜く」
「――クリュウと二人っきりにすると、彼を襲いかねないのでな。却下だ」
「……表出ろクソ尼。ディアブロスの前に貴様を殺すぞ」
　飛竜刀【翠】を引き抜いてシルフィードに斬り掛かろうとするサクラ。その背中かフィーリアが抱きつき、必死になって彼女を止める。
「仲間に武器を向ける人がありますかッ！　正気を取り戻してくださいッ！　というかすでに表ですぅッ！」
「……放せッ。あんなデタラメを言われて黙ってられるか……ッ」
「――でも実際二人っきりになったら襲いますよね？」
「……当然よ」
　しれっとサクラが断言すると、すぐさまフィーリアの行動が拘束から攻撃に切り替わる。だがサクラもそんな彼女の攻撃をさらりと受け流すと反撃し、二人は取っ組み合いのケンカになった。
「クリュウ様は私が断固死守しますッ！」
「……クリュウは渡さないッ」

ギャーギャーとケンカする二人を見て疲れ切ったようにため息を零し、呆然としているクリュウに振り返ると、彼の肩をポンと叩くシルフィード。
「……とまぁ、単純にこの二人のどちらかを君と付けるともう片方が過激に反発するのでな。君を私と組ませたのは一種の折衷案（せっちゅうあん）だ」
「は、はぁ……」
状況が理解できずに困惑しているクリュウ。そんな彼の反応を見てため息を零し、シルフィードは砂の上で取っ組み合いのケンカをしている二人の首根っこを掴んで互いから引き剥がす。
「とにかく、まずはディアブロスを発見しない事には狩猟も開始できない。今は発見に全力を注ぐ時であって、ケンカしてる場合じゃないだろ」
シルフィードに怒られてようやく冷静さを取り戻す二人。フィーリアは恥ずかしそうに謝り、サクラは素直に謝るのは気が引けるのか不機嫌そうにそっぽを向く。そんな二人を見て「私は学校の先生じゃないんだぞ……」とため息を零すシルフィード。原因であるクリュウはその後ろで苦笑を浮かべている。
「それじゃ、各自先程説明した目的に沿って行動するように。しつこいようだが、無理はするなよ。それでは散開」
シルフィードの号令にクリュウ達はひとまず三隊に別れる。エリア1に残るフィーリアは「お気をつけて」と皆、特にクリュウに言って三人を見送る。サクラも「……必ず、戻って来るから」とクリュウの手を取って宣言すると、砂煙を上げながら怒涛の勢いでダッシュ。どうやら早くクリュウと合流したいが為に全力疾走で片付けようとしているらしいが、肝心な時に体力がないなんてオチがない事を祈ろう。
すさまじい勢いでエリア1へと向かうサクラの背中を見詰め、クリュウはぽつりと、
「……今のって、死亡フラグっぽくなかった？」
「まあな。だがサクラはそういう《常識》に一切縛られない奴だから

な。問題ないだろう」
「そ、そうだね……少しは縛らてほしいけど」
「まったくだ。だが、彼女の前でそういう事は言うなよ？」
「当然だよ。傷ついちゃうからね」
「……いや、《縛る》という意味を猛烈に間違った方向へ理解する可能性が否定できないからなんだが」
「え？」
「……いや、何でもない。行くぞクリュウ」
　疑問符を頭に浮かべているクリュウを連れ、シルフィードはフィーリアと別れて彼と共にエリア３へと向かう。
　エリア２の砂漠地帯を北へ向かい、岩山を迂回するように北西へ向かった先にある岩場地帯。岩が雨風で長い年月を経て削られた、まるで岩の中をくり抜いたような場所。外からの日差しはずいぶんと抑えられるので砂漠に比べれば涼しいが、それでもやはり暑い事には変わりない。
　エリア３はそんな岩場の中でも比較的狭い場所で、エリア２から入ると左手に人の身長くらいの高さの段があり、少し広めの広場と言った具合。飛竜が暴れ回るには少々手狭だが、動き回れない事はない。
　シルフィードを先頭に、その後ろに続く形でクリュウもエリアの中に入る。一見する限りではディアブロスの姿はなく、砂の中に潜っているにしても静か過ぎる。数秒の沈黙の後、シルフィードの肩がゆっくりと下りる。
「どうやら、ここにもいないようだな」
「二人もまだ発見できていないみたいだし、本当にいるのかな？」
「ディアブロスは運が悪いとことん遭遇すらできない事も少なくはないからな。だが、この狩場のどこかにいる事は事実だ。それに、本命はこの先のエリア７だ。あそこが最もこの狩場ではディアブロスが現れる可能性が高い。気を引き締めて行くぞ」
　早々にこのエリアを立ち去ろうと歩き出すシルフィード。クリュウもそれに続いて歩き出し、エリアを横断する。と、その時何かの叫び声が轟いた。

驚いて振り返ると、先程までエリアには一切のモンスターの姿がなかったが、いつの間にか背後に三匹のゲネポスが現れていた。どうやら岩壁の向こうから飛び降りて来たらしい。
何か言うでもなく、無言でシルフィードが荷車の後ろに移動する。クリュウも荷車を一旦置くと彼女に並んで戦闘態勢になる。
「ちょうどいい。本番前のウォーミングアップといくか」
「無駄な戦闘は避けたいんだけど……」
「向こうはこっちを取り逃がすつもりはなさそうだ――来るぞ」
威嚇の声を上げていたゲネポスが一斉に動き出した。一直線にクリュウ達に襲い掛かる。そんな彼らを出迎えるように動いたのはシルフィードだ。
シルフィードは愛剣キリサキを引き抜いてブレードを展開させると、横薙ぎに豪快に振り抜く。その一撃で接近していた二匹のゲネポスが吹き飛ばされた。
残る一匹は一直線にクリュウを目指す。クリュウは腰に下げていた、奇しくもゲネポスの素材で作られたデスパライズを引き抜くと、迫り来るゲネポスを迎え撃つ。まずは向こうからの爪と牙の一撃を横に避け、がら空きの胴体を横から斬り掛かる。皮が裂け、血飛沫が迸りゲネポスが悲鳴を上げる。その隙にさらに距離を詰めると、クリュウはその場で回転斬りを炸裂させ、ゲネポスを吹き飛ばす。
シルフィードは手早く一匹を始末すると、満身創痍という状態で無策に突っ込んでくるゲネポスに振り上げたキリサキを豪快に振り下ろす。その一撃にゲネポスの首が折れ、絶命して倒れる。シルフィードがゲネポスを片付けるのと同時にクリュウも突きの一撃でゲネポスの倒した。
クリュウは手早く祈りを捧げてからゲネポスの素材を剥ぎ取る。そんな彼を特に注意する事もなく見守るシルフィード。郷に入れば郷に従え。彼女はすっかり彼のやり方を認めていた。
「終わったか？　じゃあ行くぞ」
クリュウが素材の剥ぎ取りを終わると見るやすぐに歩き出す。そんな彼女を追ってクリュウも荷車を引いて歩き出す。

ゲネポスとの適度な戦闘で本格的に狩猟モードに切り替われた。クリュウも自然とヘルムの下の表情が引き締まり、荷車を引く腕にも力が入る。
エリア3を抜けた二人はそのまま岩壁同士に囲まれた狭い道を進み、ちょうど拠点（ベースキャンプ）の真裏に位置するエリア7へと到達した。
エリア7は周りを岩壁に囲まれ、天井も岩で塞がれた、ある意味闘技場のような場所だ。地面は大半が砂で覆われ、岩壁付近の一部は堅い岩盤が覆っている。エリアの中央には硬そうな岩が突き出し、その向こうにはこの砂漠のオアシスと思われる水辺が広がっている。この狩場の岩場地帯では最も広い場所だ。
エリア7は今二人が来たエリア3の他に地底湖のあるエリア6と小ぶりな岩山が雨風で浸食して洞窟状になったエリア１０の三箇所と繋がっており、地理的にこの狩場の中心に位置する場所だ。
エリアに入った二人はすぐに辺りを見回す。このエリアは真ん中の岩以外視界を遮るものはないので、地表に奴の姿が見えない事はすぐにわかる。
「ここにもいないみたいだね」
肩透かしを食らったクリュウはため息と共につぶやくが、その横に立つシルフィードの表情は険しいまま、ジッと鋭い瞳でエリアを見回している。
「このままエリア6を通過してエリア5でサクラと一度合流してみる？」
次のエリアへ行こうと提案するクリュウの声も聞こえていないのか、シルフィードは無言のまま辺りを見回し続けている。
「シルフィ……？」
「――おかしいな」
「え？　おかしいって、何が？」
「いや、この水辺にはアプケロスがいる事が多いんだ。それが一匹も姿が見えない」
確かに、彼女の言う通りエリアにはディアブロスはおろかアプケロ

スの姿もない。
アプケロスとは砂漠や火山など高温度の環境に適応した草食モンスター。ただし同じ草食モンスターでも温厚なアプノトスと違ってアプケロスは縄張り意識が強く、近づいただけで攻撃を受けるなど非常に好戦的。大型モンスターとの戦いでは一般的に先に片付けるのが常套だ。
そのアプケロスが、一匹もこの狩場にいない。
「単純に水を飲み終えた後――な訳ないよね」
シルフィードの言葉にクリュウの表情も厳しくなる。
狩場とは常に流動している。様々な要因が重なり、常に一つとして同じ環境が形成される事はない。つまり、狩場の雰囲気を読み解けば、自分達の目指すものがわかる。
クリュウは今まで多くの狩場で、この異様な雰囲気に直に触れてきた。だからこそわかる――この違和感は、何かがこのエリアにいる証拠だ。
クリュウはそっと荷車を壁際に置くと、警戒を続けるシルフィードの隣に並び立つ。
二人は何も言葉を発せず、不気味な沈黙が辺りを支配する。聞こえるのは、複雑な岩の間を通り抜ける風の音だけ。
その沈黙が、一体どれほど続いただろうか――それは、突如破られる。
――突然、地面が揺れだした。
「うわッ!? な、何これッ! 地震ッ!?」
「……違うッ。これは」
足から伝わる、地面の中を何かが動く感触。地震ではなく、何かが、震源が動いている――確信に、変わる。
「――来るぞッ!」
シルフィードの怒号の直後、エリア中央の突き出た岩の向こう側の地面が割れた。膨大な量の砂が舞い上がり、それらは風に乱れて砂塵に変わる。打ち上げられた砂の小粒が、まるで雨のように地面に叩き落される。

そして、割れた地面の中から、巨大な何かが現れる。
巨大、と言うにふさわしい大きさ。単純にリオレウスやリオレイアよりも大きく、太い。彼らと違い、空を舞うという事を捨てて地上で動き回る事に特化した究極の突撃獣。
褐色の体色は岩場や砂漠での保護色となっており、全身を覆う甲殻は鋼のように硬く、自身を守る鎧としてだけではなく突進時の武器にもなる。まさに、全身が凶器というにふさわしい。
遠目で見てもわかる、巨大で力が漲った筋肉。あの巨体を支え、猛突進を生み出す原動力。今まで遭遇したモンスターの中で、おそらく最も発達した筋肉だろう。もはや甲殻だけではなく、あの強靭な筋肉もまた身を守る鎧の一部に見える。
そして何より、《角竜》と言われる由縁であり、最大の特徴。体に合った大きな頭に備えられた、巨大な二本の角。どんな岩や装甲よりも堅く、外敵の体を串刺しにする凶悪な武器。角だけで、人の身長くらいの長さはあるだろう。
割れた地面から太く長い尻尾も飛び出し、裂け目は周りに押し出された膨大な量の砂が重力に引っ張られるようにして落ち、あっという間に塞いでしまう。
巨大な脚でしっかりと不安定な砂の上に巨体を支え、体に纏わり付いた砂を払うように身を震わせる。震える筋肉や甲殻が、躍動感をビシビシと伝えるかのよう。
巨大で、凶悪な、褐色の突撃魔獣――角竜ディアブロス。
姿を現したディアブロスを遠目に見ていた二人は、その圧倒的な存在感と迫力に息を呑む。シルフィードからすれば久しぶりの難敵であり、クリュウからすれば初めて出会う強敵。
クリュウは、奴の巨大さに圧倒されていた。今まで討伐してきたモンスターの中ではガノトトスの次くらいに巨大だ。だが、大きさだけでは確かにガノトトスの方が大きいが、迫力や存在感、圧迫感などではガノトトスの比ではない。
全く違う水の中を主戦場とするガノトトスと、自分と同じ地上を主戦場とするディアブロスの違い。自分の力を最大に発揮できる地上

において発達した筋肉や鋼のような甲殻は、圧倒的な圧迫感すら感じてしまう。
水の抵抗をできるだけ減らす為にスマートで長い体をしたガノトトスに対して、ディアブロスは突撃で相手を押し飛ばせるだけの質量をうまくコンパクトに纏めた、まるで重戦車のよう。
空気を震わせて伝わる圧倒的な存在感。胸の奥で本能が逃げろと警鐘を叩き鳴らす。これほどまでに本能が反応するのは、初めてリオレウスの前に立ったあの時以来だ。
まだまだ未熟だった自分が挑んだ強敵リオレウス。
未熟には変りないが、人並みの実力はつけたと自負する自分が今から挑もうとしているディアブロス。
自身の状況が変わったのに、同じくらいに本能が警鐘を鳴らす。それはつまり――あの時と同じくらい、もしくはそれ以上の相手だという事だ。
恐怖が全身に纏わりつき、声すらも上げられない。武者震いとは違う震えが、デスパライズの柄を握る腕を震わせる。
それはシルフィードも同じなのだろう。彼女の横顔は、これまで見た事のないような緊張と恐怖が見える。ギリッと、唇を噛む。
不気味な沈黙。すると、これまで背後を向けていたディアブロスがゆっくりとこちらに向き直る。
凶悪で強大な角が正面に向けられ、燃え盛る闘志を宿す瞳が不気味にこちらを向き――目が合った。
その瞬間、クリュウの体は完全に硬直した。睨まれた訳でも威嚇された訳でもない。ただ、見られただけで体が動かなくなるほどの恐怖。死、そのものが自分達を発見した。そんな不気味な感じ。
一瞬の沈黙の後、ディアブロスの瞳に明確な敵意の炎が燃え盛った。その変化を見てすぐに動いたのはシルフィードだ。
「奴の正面は危険だッ！　走れクリュウッ！」
ハッとなって、クリュウはシルフィードと共に慌てて横へ走り出す。
動き出した小さな敵を睨みながら、ディアブロスがゆっくりと体を

持ち上げる。全身を真っ直ぐ伸ばすその姿まるで全身全てを使うかのよう――刹那、エリアに空前絶後の爆音が響き渡った。
「ギュオワァァァ

光が全てを真っ白に染めたのは一瞬。

再び視界が戻った時、彼の目の前に彼女の姿はなかった。彼女は――

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」

――ディアブロスに向かって勇ましく挑み掛かっていた。

第１５４話　破壊神大暴走　希望を打ち砕かれる四人の狩人

閃光玉で視界を封じられたディアブロスは反射的に歩みを止めた。すでにその時点で彼我の距離は最初の半分程に短くなっており、奴の突進速度の早さを物語っている。

目を潰されて藻掻くディアブロスに対し、正面から勇ましい咆哮を上げながらシルフィードが突っ込む。そしてディアブロスの頭の下で足を踏ん張り、勢い良くキリサキを引き抜き、勢いをそのまま乗せて振り下ろした。切れ味の高い万能大剣キリサキは吸い込まれるようにしてディアブロスの頭部、そこから生える右角に叩き込まれた。

「ぐぅ……ッ!?」

弾かれる事はなかったが、そのあまりの硬さに腕が痺れシルフィードは顔を顰めた。角は厳しいと判断すると、すぐに前転して一瞬でディアブロスの懐に潜り込み立ち上がる。そこはちょうどディアブロスの両足の間。シルフィードはキリサキをその巨大な脚に向かって振り下ろした。

ギギギギ……ッと表面が削れるだけで肉には到達しない。やはり想像以上にディアブロスの甲殻は硬い。シルフィードは舌打ちすると持ち方を変えて体を回転させるように横薙ぎに振るう。

ディアブロスの脚下で攻撃を開始したシルフィードを見て、クリュウも遅れて突撃する。まずはディアブロスの脚に向かってペイントボールを投げる。うまく命中し、辺りに嗅ぎ慣れたあの匂いが広がる。これで他の二人にも遭遇した事がわかるだろうから、しばらくすれば合流できる。

ペイントに成功すると、今度は攻撃に転ずる。が、ディアブロスはまるでそれを拒むように回り込んで接近したクリュウに対して尻尾を薙ぎ払うようにして叩きつける。仕方なく一度立ち止まってやり過ごすと、改めて接近を行う。

すでにシルフィードはうまく攻撃位置を確保しており、クリュウは

その外周から攻撃する。引き抜いたデスパライズを勢い良く振り下ろし、ファーストアタック。だがデスパライズの刃はディアブロスの硬く厚い甲殻の表面をわずかに削るだけ。続けて二度斬り掛かり、回転斬りに繋げるが、それでも表面を撫でるように削るだけ。クリュウはディアブロスの硬さに舌打ちすると、シルフィードと同時に奴の脚下から離れた。十分な距離を取ると同時に、ディアブロスの視界が回復する。

「硬過ぎて全然刃が入らないよッ」

「そうだな。これは思ったよりも厳しいぞ」

並び立った二人の頬を嫌な汗が流れる。道具が効かないとか罠が効かないとか以上に、武器がうまく入らないというのは一番辛い。何せ主力がそれなのだから、他の道具類でいくら小細工はできても、肝心の武器がそれでは問題だ。

「うまく刃が入るような場所を探すしかないね」

「そうだな――っと、来るぞッ！」

話し合えたのは一瞬だ。すぐにディアブロスがそれを邪魔するように突進して来る。二人はそれぞれ左右に別れて回避し、ディアブロスは二人の間を突き抜ける。その速度、迫力、どれもリオレイアの比ではない。

リオレイアは突撃を重視するモンスターだが、結局はブレスやサマーソルトと言った他の攻撃手段を持ち合わせている。だがディアブロスにはこの突進以外に武器はない。だからこそそれに特化した体つきや動きを体得している。結果的に、ディアブロスの突進は想像を絶する恐ろしさと破壊力を兼ね備えた。あの突進で迫られ、凶悪な角で貫かれれば、レウス装備と言えど大怪我は免れないし最悪命を落とすかもしれない。

クリュウは恐怖に背中が冷たくなるのを感じながら、急停止するディアブロスを見詰める。これも突進に特化した体だから成せる業だろう。リオレウスやリオレイアは基本的に体を投げ出すようにしてその巨体の勢いを無理やり急停止させる為、一瞬の隙が生まれる。だがディアブロスはその強靭な脚力を生かして倒れる事なく急停止

し、すぐに次の行動に移れる。同じ飛竜に分類されていても、生体も攻撃方法もまるで違う。
だが、逆に言えば突撃しかない相手なら必ずこちらに向き直る。クリュウはその瞬間に賭けていた。開いてしまった距離をできるだけその間に埋め、ディアブロスが振り返った瞬間を狙って構えた閃光玉を投擲。一瞬遅れて辺りが全て真っ白な光に包まれる。クリュウは瞳を閉じながら、頭の中で次の行動を一瞬考える。まずは回り込んで側面から攻撃する。いつもの常套手段だ。
煙などと違い、光が辺りを支配するのは一瞬だ。思考の時間は本当に一瞬で、自分の中で次の行動を決めて瞳を開けると――猛烈な勢いで迫り来るディアブロスの姿。
「え……？」
「避けろクリュウぅッ！」
シルフィードの怒鳴り声が聞こえるが、もう横へ跳んでも逃げられるような距離ではなかった。一瞬考えるだけで目の前にまで迫った凶悪な角で貫かれる。クリュウは本当に反射的に盾を構えた――直後、強烈な衝撃に彼の体は吹き飛ばされた。
「クリュウッ！」
シルフィードの目の前で、クリュウはディアブロスの角に貫き飛ばされた。その光景にシルフィードが崩れ落ちた。構えていたキリサキを取り零し、勇ましく大地を翔けていた足は力を失い地面に倒れる。
吹き飛ばされたクリュウは砂の上を何度も転がり跳ね、止まる。が、クリュウは立ち上がる事なく、その場で倒れ続ける。
「く、クリュウ……？」
震える声で彼の名を呼ぶが、彼は答えてはくれない。
一方ディアブロスは彼を吹き飛ばす際に振り上げた頭をゆっくりと下ろしていた。その先に備えた凶悪な二本の角。あれが、クリュウを襲った……
「……ッ！　き、貴様ぁあああああぁぁぁぁぁッ！」
力を失った体に再び力が戻る。地面に倒れたキリサキを掴み取る

と、シルフィードは怒りに任せてディアブロスに襲い掛かる。作戦も戦法も何もない、感情に任せての突進。彼女らしくない、滅茶苦茶な攻撃だ。

霞む視界の中、彼女が突撃していくのが見えた。

とっさに盾を構えたおかげで角の直撃は何とか避けたクリュウ。だがそのあまりの衝撃と地面に何度も叩きつけられた事で全身に激痛が走り、うまく頭が回らなかった。だが、霞む視界の中で見慣れない怒り狂った表情でディアブロスに突撃するシルフィードの姿を見て、頭の靄（もや）が消し飛ぶ。

「シルフィッ！」

彼の必死な声が届いたのか、シルフィードはこちらを見ると足を止めた。その表情に先程まであった憤怒は消え、自分が無事だった事に安堵したのか、幾分か表情が和らぐ。が、すでにそこはディアブロスの目の前。

「危ないッ！」

クリュウの叫び声にシルフィードが驚いて振り返ると、目の前に迫ったディアブロスが右脚を一歩前に出したかと思ったら身を一瞬縮め、蓄えた筋力をそのまま一気に解放。まるで一瞬にして壁が迫って来た。そんな錯覚すら覚える、ディアブロスの体当たりだ。

「……ッ！」

シルフィードはとっさにキリサキを縦に構えてガードの体勢を取る。直後、大剣にディアブロスの巨体がぶち当たった。その圧倒的な威力に踏ん張っていたはずのシルフィードは意図も簡単に吹き飛ばされた。クリュウと同じく砂の上を二転三転した後、キリサキを地面に突き刺して衝撃を相殺し止まる。

「くぅ……ッ」

膝を折り、苦悶に顔を歪めるシルフィード。隙を見せてはいけないと、ディアブロスの位置を確認しようと顔を上げた瞬間絶句する。すでにディアブロスは唸り声を上げながら自分に向かって突進を開始していた。

「くそ……ッ！」

シルフィードは横へ転がるようにして正面から逃げる。だが完全には逃げ切れず、剣を構えてガードの体勢を取る。直後、キリサキの胴にディアブロスの脚が激突し、再びシルフィードの体が吹き飛ばされる。砂の上を何度も転がった後倒れるが、何とかすぐに立ち上がる。

自分を吹き飛ばしたディアブロスを睨みながら、シルフィードは口の中に入った砂を唾と共に吹き出す。

二度もディアブロスの突進をガードした結果、腕がビリビリと痺れ痛みすら感じる。何度か握ったり開いたりして武器を持つ事に問題がないかを確認する。その間にクリュウが駆け寄って来た。

「シルフィ、大丈夫ッ!?」

「あぁ、問題ない。君の方こそ無事か？」

「僕は何とか……」

「そうか……、ペイントは付いているな」

そう言って二人はゆっくりとこちらに向き直り咆哮（バインドボイス）をするディアブロスを見る。この距離なら何とか耳を塞がなくても済む。そして、そんなディアブロスのの右脚には確かに桃色の粘着物が付着しており、辺りに独特な匂いが漂っている。

「二人も気づいたはずだ。もうしばらく耐えるぞ」

「一度撤退した方がいいんじゃないかな」

「確かにそれも手だが、そうすると二人が別々に到着したら一人で奴を相手にしなければならない。いくら二人が優秀なハンターでも、奴を相手に単独で無事でいられるかは疑問だ。それなら、二人編成の私達が踏ん張って二人の到着を待った方が危険は少ない」

シルフィードの意見は正論だ。ディアブロスは並大抵の相手ではないし、サクラもフィーリアも討伐経験がない。フィーリアに至っては初見の相手だ。二人にそれぞれ単独で戦わせるのはかなり危険だ。なら、自分達が踏ん張って二人を一人にしないように状況を作り上げる他ない。だがそれは、当然自分達二人には厳しい戦いが強いられる事になる。

「――クリュウ、できるか？」

シルフィードの問い掛けは、この危険な役目ができるかという問い掛け。自分を信じて、共に戦ってくれるか、そんな彼女の問い掛けだ。
ヘルムの下で、クリュウは柔和に微笑んだ。それは顔が隠れていてもわかる。
「任せといてよ。シルフィと一緒なら何だってできるさッ」
「……そうか」
シルフィードは口元にフッと笑みを浮かべると、キリサキの柄を力強く握り締める。
咆哮（バインドボイス）を終えるディアブロスを見て、クリュウはふと想い出す。
「そういえば、シルフィのスキルって耳栓だったよね？　ディアブロスの咆哮（バインドボイス）はそれじゃ防げないはずじゃ……」
「あぁ、エムデンで急遽スキルを変えたのさ。今の私はディアブロスの咆哮（バインドボイス）も防げる高級耳栓だ。まぁ、そのおかげで見切りスキルを捨てなければならなかったがな。ディアブロス相手ならこちらの方が使える」
平然と言ってのけるシルフィードを見て、クリュウは改めて彼女を尊敬した。いつものある程度準備ができる狩りと違い、今回は準備の面でも不十分な状態だ。ディアブロスに対して有効な武器を揃えられなかったり、爆弾の量が少ないなど、お世辞にも万全とは言いがたい。そんな状態でも彼女は自分でできる最善の策を考え、実行に移している。そしてそれが、見事に発揮できていた。
頼もしい彼女の背中を見詰め、クリュウは微笑む。
二人の会話はそこで終わった。咆哮（バインドボイス）を終えたディアブロスは半歩を身を引く。その動きを見て二人はすぐに左右に分かれた。直後、ディアブロスは突進を始めた。
砂塵を巻き上げながら、猛烈な勢いで迫るディアブロスだが、その二本の角が貫いたのは二人が先程までいた場所。ディアブロスは何も無い場所を突き抜けた。
どちらから声を掛ける事もなく、二人は同時に動いた。突進の勢いを殺そうと脚を踏ん張りながら急停止するディアブロスの左右から

二人が斬り掛かる。
クリュウは勢いを止めようと筋肉を引き締めている脚に向かってデスパライズを叩き込む。が、当然その一撃では表面を削る程度。ディアブロスの動きが完全に止まった所で勢い良く回転斬りを叩き込む。同じように反対側ではシルフィードも豪快に横殴りのようにキリサキを叩き込む。だが、二人の本気の一撃を喰らってもディアブロスはびくともしない。
纏わり付く外敵を煩わしげにディアブロスは体を回転させて尻尾で振り払おうとする。が、その飛竜では定番の動きは見切っている二人はむしろより深く斬り掛かっていた。軸となる両足の下に喰らい付いて剣を振るう。
斬り落としから横斬り、そして斬り上げから回転斬り。一連の流れを全て組み込みながら剣を振るうクリュウの連撃。だが、ディアブロスの甲殻は硬くなかなか刃が通らない。迸る麻痺毒も、これでは意味を成さない。
「クソ……ッ」
苛立ちながらクリュウ無我夢中で剣を振るった。だがディアブロスはそんな彼の攻撃など気にも止めずに突如角を地面に突き立てた。首を左右に振るい、角で地面に穴を開けると両翼も使ってその穴を広げる。そして、そのままディアブロスは穴の中へその巨体を埋めてしまった。
今までの飛竜とは明らかに違う行動。クリュウはその光景に一瞬動きを止めてしまった。頭の中では確かこのタイミングで音爆弾を投げれば奴を引きずり出せるはず、という知識が浮かんでいる。だが、その知識を使って道具袋（ポーチ）に手を伸ばした時には、すでに時間が経ち過ぎていた。
「バカッ！　早くそこから離れろッ！」
シルフィードの怒号に慌てて道具袋（ポーチ）に伸びていた手を引っ込める。それと同時に地面が割れる瞬間が見えた。その一瞬の光景で、クリュウは反射的に盾を構える。
――直後、地面から二本の巨大で無骨な槍が彼を襲った。

クリュウの軽い体は簡単に吹き飛ばされて空を舞う。数秒の浮遊の後、背中から地面に叩き落された。肺の中の空気が一気に吐き出されて咳き込むが、幸いにも砂の上に落ちたので大した怪我はなかった。ただ、ガードに使った盾を備えた左腕には鈍痛が走り苦悶に顔が歪む。

クリュウを吹き飛ばしたディアブロスはその後一瞬で地上へと現れた。さながらそれは水面に突如現れるトビウオのよう。奴は砂の中を自在に動き回れる、桁破りなモンスターだ。

そんなディアブロスの行動を見たシルフィードはすぐに動いた。豪快な動きをした事で生まれる一瞬の隙。彼女はそれを狙っているのだ。だが、まるでそんな彼女の思惑がわかっているかのように、ディアブロスはそれを阻む。

背後から接近する彼女に対して、接近を拒むようにディアブロスは尻尾を大きく左右に振り抜く。地面に置き、砂を巻き上げながら振るわれる太い尻尾での一撃。シルフィードは舌打ちして接近を中止せざるを得ない。

立ち止まったシルフィードに対してディアブロスは彼女に向き直ると、至近距離で突進を仕掛ける。シルフィードは急いで横へ跳び、砂に頭から無様に突っ込む。だがおかげでディアブロスの突進は失敗に終わった。

滑るように急停止するディアブロスに、今度はクリュウが接近する。まだ左腕は痛むが、剣を持つ右腕は問題ない。クリュウはディアブロスに追いつくと、すぐさま脚に向かって剣を振るう。だが、そんな彼の攻撃を封じるようにディアブロスは首をもたげると、天高く轟く咆哮（バインドボイス）を放つ。

「ギュオワァァァ

間が掛かってしまった。必死になって彼の所へ向かおうと走るが、とても間に合わない。
「クリュウッ！」
爆音のように響く奴の怒号の前では、彼女のそんな必死な声も彼には届かない。
必死になって逃げようとするが、体は全く言う事を聞かず、動けない。痛む左腕を無理やり動かし、何とかガードの構えだけでもと思っていても耳から手を離せば鼓膜が破れるかもしれないし、それ以前にそんな簡単な事すら咆哮（バインドボイス）が響く中ではできない。
そのうち、咆哮（バインドボイス）が鳴り終わる。急いで体を動かすが、それよりも一瞬早くディアブロスが突進の構えを整えた。クリュウの表情が戦慄に染まる。
――そして、ディアブロスが動く。
「……クリュウッ！」
――刹那、彼の体は横へ吹き飛んだ。
横からの何かが体当たりするかのような衝撃。だがそれはディアブロスの突進のような殺意に満ちたものではなく、必死になって彼を守ろうとする優しさに満ち溢れたもの。
砂の上に押し倒され、その直後一瞬前まで彼がいた場所をディアブロスの角が砂を抉り上げながら通過する。
砂の上に倒れたクリュウは、自分の上に何かが覆い被さっている感触に気づく。目をゆっくり開くと、目の前には見知った少女の安堵に染まった顔があった。
「……クリュウ、良かった」
黒い眼帯で左目を隠した、漆黒の美しい長髪を流した少女。隠されていないもう一方の黒い隻眼は彼の無事を心から喜んでいるかのように、無邪気に揺れている。
「……遅れてごめんなさい。でも、大丈夫。もうクリュウを一人にはしないから」
チーム随一の人間離れした俊足を持つ、恋に生きる戦姫――サクラ。

「サクラ……」
サクラはゆっくり起き上がると、手を掴んで彼も起こす。助けられたクリュウは彼女の登場に驚きつつも、「あ、ありがとう」と礼を言う。だが、サクラはゆっくりと首を横に振った。
「……礼なんていらない。クリュウが私の傍にいてくれる。それだけで、私は幸せだから」
恥じる事なく言い切る彼女のセリフに、思わずここが狩場だという事も一瞬忘れてヘルムの下で顔を真っ赤にさせて照れるクリュウ。
「いや、その、えっと……」
困ったように小声で狼狽えるクリュウの手を、サクラがそっと両手で包み込む。
「……一緒に、がんばりましょう」
「う、うん」
何となくいい雰囲気になる二人であったが、そんな彼らの雰囲気をブチ壊すようにディアブロスが二人の方へ向き直る。その脚下ではバカな仲間を必死に守ろうとシルフィードが猛攻撃を仕掛けているが、ディアブロスの目標は変わらない。
半歩引き、突進の構えを見せた瞬間――ディアブロスの頭が爆発した。
「グギャァァッ!?」
これまでの戦いで初めてディアブロスが悲鳴を上げた。黒煙が顔を覆い、さらにもう一発側頭部で爆発する。
突然の出来事にシルフィードだけではなくクリュウとサクラも我に返って驚く。
「――まったく、サクラ様は詰めが甘いですね。もう少し周りを見てください。それじゃ、クリュウ様をお守りする事なんてできませんよ」
風に乗ってエリア中に響く凛とした少女の美しい声。風上の方へ三人が一斉に振り返ると、そこには桜色の姫が風を纏いながら立っていた。
靡く金色の髪を片手で軽く押さえながら、もう片方の手に構えたの

は身に纏う鎧と同じ桜色のライトボウガン。その銃口からは微かに硝煙が噴き出ている。
少女とディアブロスの距離はかなり開いている。なのに彼女は素早く狙いを定め、間違う事なく徹甲榴弾ＬＶ２二発をディアブロスの頭に命中させた。その技術は並大抵の事ではない。
少女は驚く彼を見て、天使のような優しげな笑みを浮かべた。
「ご無事で何よりです。到着遅れましたが、これよりクリュウ様の援護に全力を注がせていただきます」
サクラと同じく恋に生きる、的確な支援射撃で仲間達の道を切り開く凄腕の銃姫（ガンナー）――フィーリア。
「……おいしい所を持っていくなんて、最低」
「抜け駆けするサクラ様の方が最低です」
そう言ってしばし睨み合う二人だったが、どちらからとなくその表情が緩む。
「まぁ、今はケンカしている場合じゃありません。私達の目的は共通なのですから、ここは共同戦線です」
「……仕方ないわね」
クリュウを守るように並び立つ二人の恋姫。無茶苦茶な二人だが、その実力も彼を想う気持ちも本物だ。互いが互いを認め合った、ある意味最強のコンビ。
頭を振るディアブロスの脚下で、シルフィードは冷や汗を流しながら苦笑を浮かべる。
「……まったく、世話を掛けさせてくれる」
だが、そう言う彼女はどこか嬉しそうだ。
強敵ディアブロスを前に、ここにようやくチーム全員が揃った。
すでに戦闘準備万端という具合の二人を見て、クリュウの表情にも気合が漲る。自分達は四人で一つのチーム。だから――
「――これからが本番って訳だね」
クリュウの自信に満ちた声に、フィーリアとサクラが同時にうなずく。
「遅れた分、きっちり働かせてもらいます」

「……思う存分暴れてやる」
「頼りにしてるよフィーリア、サクラッ！　シルフィもッ！」
その声に、応えるように三人の姫が一斉に動いた。
脚下にいるシルフィードは再びキリサキでディアブロスの脚に襲い掛かり、サクラは必殺の突貫で開いた距離を一気に縮め、フィーリアは走りながら新たに装填した貫通弾ＬＶ２で遠距離射撃を開始する。そんな三人に負けないように、クリュウもディアブロスの正面を避けながら近づく。
散開しながら接近する敵に対して、ディアブロスはまず脚下に纏わり付く敵の排除に取り掛かる。右脚を一歩前に出したかと思ったら、次の瞬間にはディアブロスの側面全体が一瞬にして襲い掛かって来る。ディアブロスの体当たり攻撃に対し、シルフィードはガードで何とかやり過ごした。が、その強力な衝撃を相殺する事はできずに大きく後退を余儀なくされる。
シルフィードを退けたディアブロスは続いて遠方からの攻撃に終始しているフィーリアに狙いを定める。
装填した全弾を撃ち終え、フィーリアは手早く新しい弾丸を装填し、狙いを定める。が、その時にディアブロスがこちらに向き直った姿を見るやいなやスコープから目を離してすぐに正面から避けるように横へ走る。
低い唸り声を上げながら、ディアブロスが突進を開始する。迫り来る暴竜相手にフィーリアは全力で横へ走り奴の針路から逃げる。ディアブロスが突進に失敗して砂塵を巻き上げながら背後を滑り通った瞬間、フィーリアはその場で回転。振り返ったと同時に狙いを定め、すぐさま射撃を再開する。砂塵を纏いながら急停止するディアブロスの背中を貫通弾ＬＶ２が何発も命中する。
そして、フィーリアを狙って走った瞬間に動いていたサクラ。急停止するディアブロスの側面から鬼神の如く襲い掛かる。
砂上を翔け、ディアブロスの横で砂を蹴って跳躍。振り返るディアブロスの顔面に向かって煌く飛竜刀【翠】を峻烈に叩き込む。
煌く刃先は真っ直ぐにディアブロスの眉間に炸裂する。が、ディア

ブロスは頭突きをするように彼女の一撃を跳ね飛ばした。押し返されたサクラは空中で器用に回転し、流麗に着地。すぐさま砂を蹴り飛ばしながら突貫。角に向かって一撃を叩き込み、弾かれるように回転して懐に潜り込み、がら空きの脚に一閃を入れる。華麗にして峻烈な攻撃の嵐の連続、彼女にしかできない動きだ。

ディアブロスは再び地面に角を突き刺して地中へ潜る。砂の中へ潜るディアブロスに対して完全に消える寸前の尻尾に向かってサクラは斬撃を一閃。すぐさまバックステップで離脱。すると、そんな彼女の視界の隅から何かが放り投げられた。刹那、キンッと甲高い音が鳴り響いたかと思うと、地面が割れる。

「ゴワァオッ!?」

悲鳴を上げて、ディアブロスの上半身が現れた。反射的に出てしまった為か、あっという間に穴は砂で埋もれ、ディアブロスは身動きを取れなくなってしまう。

藻掻くディアブロスを見て、サクラは振り返る。すると、そこにはデスパライズを構えながら突進するクリュウの姿があった。それを見て、サクラの頬が緩む。

「……さすがクリュウ」

クリュウの投げた音爆弾でディアブロスの動きがようやく止まった。このチャンスを逃さない、そんな決意と共にサクラは地面を蹴って必殺の突貫。藻掻くディアブロスの脇腹に勢い良く飛竜刀【翠】を突き刺した。

ゴリッという硬いものに弾かれる感触がしたが、無視して力づくで捻じ込む。すると、先程までいくら攻撃しても決定打にならず表面を削る程度だった一撃が、浅いながらも肉に到達。ようやく、血飛沫が舞った。

「……やはり、腹部周辺は柔らかい」

勝機を見出した、そう言いたげにサクラは不敵な笑みを浮かべると、一気に飛竜刀【翠】を引き抜く。血が噴き出すが、無視して次なる一撃を放つ。

斬撃の舞を踊るサクラの横で、クリュウも同じようにガラ空きの腹

部にデスパライズを叩き込む。彼もまた脚などに比べて柔らかい腹部の感触に、ヘルムの下で笑みを浮かべた。通じるとわかるやいなや、クリュウは連続して斬撃を放つ。

遅れてシルフィードも藻掻くディアブロスの背後に立つと、溜め斬りを構えを取る。常に動き回るディアブロス相手ではなかなか溜め斬りはできない。だが、この瞬間だけは必殺の溜め斬りが可能となる。

「うおおおおおおおおッ！」

勇ましい叫び声と共に、漲る力を注ぎ込んだ絶大な一撃を振り下ろす。いくら硬い背甲も、その強力な一撃に砕け、わずかではあるが血が噴き出す。

三人の剣士の猛攻の間も、フィーリアの的確な射撃は続いている。弾倉の中身が空っぽになるまで撃ちまくり、空になるとすぐに装填（リロード）。間髪入れない連続射撃。

四人の猛攻撃を受けながらも、必死に体を動かして脱しようとするディアブロス。砂の檻が崩れ、下半身が這い上がる。直後、ディアブロスはその巨大な翼を広げて暴風を起こした。その風に接近していた四人は一斉に動きを封じられる。その間にディアブロスは翼を羽ばたかせながら浮き上がった。飛竜と分類されるだけあって、ディアブロスも少しの間なら飛ぶ事ができる。

穴は砂に埋もれ、平らな地面に変わる。ディアブロスはそこへゆっくりと降り立ち、地響きで大地が震える。

風に阻害されながら、三人は一斉に離れる。そのうち、クリュウを狙ってディアブロスは体当たりを仕掛けた。撤退の最中なので横へ回避する事もできなかったクリュウはその一撃をガードするが、衝撃が強過ぎて弾かれるようにして吹き飛ばされる。

砂の上をクリュウが転がるのを見て、サクラが突っ込む。残像すら残りそうで、音が遅れてやって来るような錯覚をする程、彼女の突貫は疾い。突き出した一撃はしかし、ディアブロスの硬い角に跳ね飛ばされる。体勢を崩したサクラはディアブロスの横の砂に頭から突っ込む。そこへディアブロスが尻尾を放った。サクラはその場で腕だ

けで起き上がると、バク転で器用の振り抜かれる尻尾の上を跳んで回避。しっかりと足から地面に降りると、諦めずに再度突貫を仕掛ける。

サクラの怒涛の攻撃の嵐が続く中、クリュウも反対側からデスパライズを振るい、シルフィードも角に向かってキリサキを豪快に叩き込んだ。だがどれも決定打にならず、ディアブロスは無視してサクラを狙って突進。だがサクラはそれを意図も簡単に避け、ディアブロスは空白地帯を空しく突き抜ける。

すぐさま三人の剣士が追い掛けるが、ディアブロスは再び地面に潜って逃げる。足の速さで先頭を走るサクラはすぐに音爆弾に手を伸ばすが、距離が遠いと判断すると諦めて突然横へ走る。それを見て後続の二人も回避の動きに変わる。

三人が動きを変えた瞬間、地面を震わせ砂煙を上げながら地中からディアブロスが迫る。そして、ちょうどサクラが方向転換した場所からディアブロスが勢い良く姿を現した。

頭を振って砂を落とすディアブロスに、逃げていた三人が一斉に反転攻勢に出る。しかし背後から迫るクリュウとシルフィードに対してディアブロスは尻尾を左右に大きく降って接近を阻む。その間に側面からサクラが胴を貫くように突貫。強烈な刺突を炸裂させる。

剣士だけに意識が向かないように、ある程度の距離を置きながらフィーリアも的確な射撃を続けている。すでに弾丸は貫通弾ＬＶ２から通常弾ＬＶ２に変わっており、速射を使った本格的な射撃に移行している。

四人の連携攻撃にディアブロスは鬱陶しげにその場で体全体を回転させるようにして尻尾を振り抜くが、剣士組はその基本動作を簡単に避けて攻撃の手を一切緩めない。

業に煮やしたのかディアブロスは大地を震わせるような爆音、咆哮（バインドボイス）を放つ。これにはさすがのクリュウとサクラは動きを封じられ、距離を置いていたはずのフィーリアも苦悶に顔を歪めながら耳を塞いでしまう。だが、

「私にとってはまたとないチャンスだッ！」

高級耳栓スキルを持つシルフィードにはそんな攻撃は効かない。溜め斬りを体勢を取り、力を溜める。そして、咆哮（バインドボイス）を終えて下げられる頭に向かって絶大な一撃を叩き込んだ。
「ギャァッ!?」
その強烈な一撃に、ディアブロスが悲鳴を上げて仰け反る。その間に動きを封じられていた三人は体の自由を取り戻し、攻撃を再開。ディアブロスの策は失敗に終わった。
散り散りになる相手を見回し、ディアブロスは改めてクリュウに狙いを定めて突進を仕掛ける。が、回避に動いていた彼は簡単にそれを避ける。何もない所を素通りするディアブロスに向けてフィーリアが弾の威力が最大になる絶妙な距離を維持しながら狙い撃つ。
急停止したディアブロスはフィーリアからの鬱陶しい射撃を避けようと再び地面の中に潜る。だが、それを待っていたとばかりに最も近い位置にいたクリュウはすかさず音爆弾を投擲。甲高い破裂音が響いたかと思うと、ディアブロスが悲鳴を上げて引きずり出される。
下半身を埋めた体勢のまま藻掻くディアブロスに、四人が一斉に襲い掛かる。
サクラは右脇腹を、クリュウが左脇腹を、シルフィードは背中にそれぞれ位置取り攻撃を仕掛け、フィーリアはそこから少し離れた場所から援護射撃を続ける。
荒れ狂う怒涛の剣撃の嵐を舞うサクラに対し、クリュウは威力も手数も少ないが、確実に攻撃を当てる。ようやく肉に刃が通り、先程から少しずつではあるが麻痺毒がうまく注入できている。ここに来てやっと希望が見えてきた。
背後からはシルフィードが壮絶な一撃をお見舞いし、ディアブロスが悲鳴を上げる。そしてまたしてもディアブロスは翼を羽ばたかせて宙に舞うと、ゆっくりと降り立つ。
地響きと共に舞い降りたディアブロス。すると、その場でゆっくりと右脚を半歩引くように砂の上で擦ると、低い唸り声を上げる。見ると、ディアブロスの口から黒煙が漏れていた――怒り状態だ。
「気をつけろッ！　今までとは比べ物にならない速度だぞッ！」

シルフィードが悲鳴のように忠告を叫ぶ。それを聞いて三人は武器をしまうと、回避重視の構えになる。一体どれほどの速さなのか、まずは様子見。だが、ディアブロスは三人の予想を遥かに超えていた。

振り返ったディアブロスは血走った瞳で狙いを定める。その狙いはしつこく付き纏って攻撃していたサクラ。彼女はすぐに横へ走って回避運動をし、ディアブロスは唸り声を上げながら走り出す――だが、その速度はこれまでとは比べ物にならない程に疾い。

「……ッ!?」

常軌を逸した速度に、サクラは慌てて全力で走る。彼女の脚力を持ってしても、怒り時のディアブロスの突進は避け切れなかった。直撃こそ何とか避けたが、彼女の体はディアブロスの脚に跳ね飛ばされ、砂の上を二転三転して倒れる。

跳ね飛ばされたサクラを見て、三人が一斉に言葉を失った。

チームで最も足の速いサクラが全速力で走っても、ディアブロスの突進は避け切れなかった。その常軌を逸した速度と、あのサクラが完全には避けられなかった。その二つの信じられない事実を前に、クリュウ達は呆然と立ち尽くす。

腕を震わせながら、ゆっくりとサクラが起き上がる。彼女自身避け切れなかったという現実に、明らかに目が動揺していた。

一瞬にして戦意を挫かれたクリュウ達。そんな彼らを嘲笑うかのように、ディアブロスが怒り狂う怒号（バインドボイス）を放つ。

天高く響き渡るその声はまるで、勝機を見出し始めていた彼らに本当の戦いの始まりを告げるかのように、残酷に大地を震わせた……

第１５５話　大好きな彼の為に　必勝を誓いし最強の戦姫達

エリア全体に響く怒号が消え終わる前に、ディアブロスは突進の体勢になる。その狙いはクリュウだ。

「逃げろクリュウッ！」

シルフィードの叫び声を聞くまでもなくクリュウは全速力で走り出す。横目に見ると、ディアブロスが走り始めていた。その速度はこれまでとは比べ物にならない程早く、その速度で走りながら微妙にコースを曲げて逃げるクリュウを追跡する。

猛烈な勢いで迫り来るディアブロス相手に、必死になって逃げるクリュウ。全速力で走り痛む足を無理に動かす。そして、最後の一瞬で身を投げ出すように前に突っ込んで回避。倒れたクリュウの足のすぐ後ろを砂塵を巻き上げながらディアブロスが突き抜けた。まさに紙一重の距離とタイミングだ。

砂煙を噴き上げながら止まるディアブロスに対し、怒涛の勢いで突っ込むサクラ。振り返るディアブロスの顔面目掛けて跳躍すると、振り抜いた刀を閃かせる。

角を狙って振り下ろされた飛竜刀【翠】は弾かれた。だがサクラはその反動を利用して加速。右側を通り抜けるように翔け、翼に向かって刀を一閃。硬い感触を無視して刃を立て、翼膜をわずかながら斬り裂いた。

砂の上に降り立ち、反転して再び突っ込むサクラ。その攻撃を遮るように巨大な尻尾が振るわれるが、わずかな隙間に体を捩じ込んで止まらずに回避すると軸となる巨大な脚に刀を叩き込む。

ディアブロスに怒涛の攻撃の嵐を行うサクラ。クリュウを狙った事で彼女もまた怒り狂っているようだ。ガードができない太刀使いならではの紙一重の回避の連続に彼女の表情にも疲労で苦悶に歪み、頬を汗が流れる。だが、その苦しみをねじ伏せて振るわれる一撃一撃は、着実にヒットしてダメージになる。

サクラの攻撃など効いていない。そのような様子でディアブロスは援護射撃を行うフィーリアに向き直ると、サクラを吹き飛ばした必殺の突進を仕掛ける。恐ろしい速度で迫るディアブロスにフィーリアは銃をしまって全速力で走るが、距離はあっという間に潰される。そして――フィーリアは吹き飛ばされた。

悲鳴を上げて砂の上に転がるフィーリア。寸前で正面は何とか避けたようだが、巨大な脚にわずかに触れて跳ね飛ばされてしまった。ほんのちょっと接触しただけで吹き飛ばされ、起き上がった彼女の表情は苦悶に歪む。そんな彼女を一瞥しながら、引き離されたサクラは必死になって砂漠を翔ける。

一方、フィーリアと程近い場所にいたシルフィードを彼女を狙って近づいてきたディアブロスに向かって怒りを込めてキリサキを叩き込む。まるで岩に向かって斬り込んでいるのに近い硬い感触に腕が痛み、シルフィードの表情が辛そうに歪む。だがその痛みを堪えて気合で跳ね返される刃を前に押し込む。甲殻の一部が削り取れ、隠れていた肉が露になる。

ようやく生まれた攻撃地点。すぐにシルフィードは剣を大振りに旋回させて構え直し、そこ目掛けて剣を叩き落とす。だがディアブロスはそれを拒むかのように身を翻してしまった。結果、脚の位置が変わり振り下ろされたキリサキは何も無い砂に剣先を埋めてしまう。

「くそ……ッ！」

すぐにキリサキを引き抜く。が、構え直したと同時にディアブロスは彼女に向かって体当たりを放ってきた。回避はできない距離、シルフィードは構えたキリサキでガードするが、体勢が整い切っていない状態でのガードで彼女の体は簡単に吹き飛ばされてしまった。腰から地面に落ち、そのまま数メートル滑る。

シルフィードを引き離したディアブロスに、今度は左右からそれぞれクリュウとサクラが迫る。同時に左右から攻撃を仕掛けるつもりだ。しかしディアブロスは突如地面に角を突き刺して砂を巻き上げると、そのままあっという間に砂の中に消えてしまった。

慌てて足を止めた二人は、回復薬などを飲んで体力の回復を済ませ

たフィーリアとシルフィードと共に散開してバラバラに走り出す。
ディアブロスが地中に潜った地点に背を向けて走るクリュウ。道具袋(ポーチ)に手を伸ばすと、そこには音爆弾が収められている。だが音爆弾は怒り状態では通用しない。せっかく奴が地面の中に潜ったというのに、この策は使えない。
「クリュウ様ッ!」
考えに耽っていたクリュウはフィーリアの悲鳴にハッを顔を上げる。振り返ると、砂煙の壁が背後から自分を追いかけてきていた。その真下には、凶悪な角で獲物を狙うディアブロスが潜んでいる。
クリュウは慌てて右足で地面を横に蹴って左側へ跳ぶ。直角に針路を変えた上に最後はジャンプして地面に倒れる。直後、彼が一瞬前までいた地面からディアブロスが角を振り上げながら現れた。凶悪な鋭い角は何も貫かずに天を仰ぐ。
クリュウは背後に現れたディアブロスを見てすぐに立ち上がると反転して攻撃に転ずる。動き回るディアブロス相手では、このわずかな隙も逃してはならない。
引き抜いたデスパライズを構え、比較的装甲の薄い関節部分を狙って叩き込む。それでもやはり硬い。しかし腕が痛もうが力づくで刃先を捻じ込む。噴き出す麻痺毒がわずかとはいえ体内に入り込むのが見えた瞬間、ヘルムの下で笑みが浮かぶ。少しずつでも前進している事実を目撃し、自分の行いが無駄ではないという感触を確かめられた。
もう一撃と剣を振るおうと構えた瞬間、ディアブロスは突然向きを変えたと思ったら低い唸り声を上げながら姿勢を低くする。その動作にクリュウは慌てて攻撃をやめてバックステップで距離を取った。
ディアブロスはクリュウを無視して走り出す。怒涛の勢いで走り抜くその先には、クリュウを援護しようと接近していたサクラがいた。
迫り来るディアブロスを見て、サクラは舌打ちする。横へ逃げるにしても結構ギリギリの距離だ。どうするか悩んでいる間にも、ディアブロスは迫る。

サクラの頬に、嫌な汗が流れる。だが、遠くから自分の名前を叫びながら必死になって追い掛けて来る彼の姿を見た瞬間、覚悟は決まった。
サクラは――突貫した。
彼女の信じられない行動に驚く三人。だがサクラは砂塵を纏いながら風のような速さで突っ込んで来るディアブロスに真正面から突貫。自分を狙って突き出された角が眼前にまで迫った瞬間、
「……ッ！」
グッと姿勢を低くしてスライディング。彼女の細い体はディアブロスの突き出た角を避け、その下にあるわずかな隙間に捩じ込まれる。そのまま砂の上を滑り抜け、一瞬でディアブロスの背後に抜ける。
突然目の前にいた敵が消えて驚きつつ、ディアブロスは滑りながら急停止する。
彼女の荒業を目撃して呆然としている三人に向き直り、サクラは腰に手を当てて自慢気に口元に不敵な笑みを浮かべる。
「……余裕よ」
そんな彼女の威風堂々とした姿を見て、シルフィードはフッと口元に笑みを浮かべる。
「まったく、君という奴は……」
本当に無茶苦茶な子だ。あんな危険な荒技を平然とやってのけ、しかもそれを「余裕」と言い張る度胸。まったくもって――凄腕の狩人（ハンター）だ。
そう思ったのはシルフィードだけではない。クールな表情で凛と砂漠に立つ彼女の姿を見て、フィーリアもまた悔しいが彼女のすごさを認めていた。
「私だって、負けてられないッ」
気合いを入れ、ハートヴァルキリー改を握る腕にも力が入る。自分には彼女のように豪快な精神も卓越した身体能力がある訳ではない。でも、自分にはどんな状況でも正確に弾を命中させる集中力と技術力がある。例え目立たないスキルだとしても、チームを支える一角を

担っている自負はある。
　振り返るディアブロスを見てすぐに動き出すサクラを一瞥し、フィーリアは遠方にいるディアブロスに向かって引き金を引いた。装填された徹甲榴弾ＬＶ２が撃ち出され、一直線に飛翔。ディアブロスのこめかみ付近に命中、爆発。その瞬間、サクラに意識を向けていたディアブロスの敵意に燃える瞳が自分の方に向き直るのを感じた。
　振り返って少し驚いた表情になるサクラの顔を一瞥し、フィーリアは戦場に舞う戦乙女のように美しくも自信に満ち溢れた不敵な笑みを浮かべる。
「私がいる事を忘れられては困ります」
　唸り声を上げてディアブロスはフィーリアに向かって突進する。だが、フィーリアは逃げず迫る魔竜と対峙する。
「……バカッ」
　慌ててサクラは反転すると怒濤の瞬発力で加速。ディアブロスに負けず劣らずの速度で砂塵を巻き上げながら突貫。フィーリアの下を目指すが、間に合わない。
　だが、迫り来るディアブロス相手にフィーリアの余裕の表情は崩れない。冷静に距離を見極め、彼女は構えたハートヴァルキリー改のスコープを覗き、狙いを定める。そして――引き金を引いた。
　響き渡る発砲音と共に撃ち出された弾丸は一直線に迫るディアブロスに向かって飛翔。こめかみ付近に命中すると、一瞬遅れて起爆。ディアブロスの頭が火炎と黒煙に包まれる。
「グオォッ!?」
　炸裂した徹甲榴弾の爆音の中、ディアブロスの悲鳴が響く。すると、確かな足取りで迫っていたディアブロスは突如脚をもつれさせ、横倒しに転倒した。
　砂塵を巻き上げながら横倒しに滑るディアブロス。やがて、その横滑りと地響きが止まる。
　砂の上に倒れ、もがくディアブロス。その眼前に立つフィーリアは、ゆっくりと構えていたハートヴァルキリー改の銃口を向ける。ガチャリと、新たな弾を装填。

「ハンターは何も華々しい剣舞だけじゃありません。こうした地味でも確実な積み重ねも重要なんですよ」
自信満々に、まるで駆け寄って来たサクラに向けて言ったかのような言葉。足を止めたサクラはそんな彼女を見て無表情を貫く。が、その口元に一瞬笑みが浮かんだ。
「……フン、地味子」
「地味子言うなですぅッ！」
ムキーッと拳を振り上げて怒るフィーリアを鼻で笑うと、サクラは倒れているディアブロスに向き直る。そして、背負っていた飛竜刀【翠】を引き抜き、構える。
「……でも、貴様らしい」
そうつぶやくように言い残すと、サクラはフィーリアの生み出した隙を無駄にしないように突貫する。そんな彼女の背中を見て微笑むと、凛々しき表情になってボウガンを構える。
「今のうちに攻撃をッ！」
射撃と同時に言い放つフィーリアの言葉に、駆け寄っていたクリュウとシルフィードはうなずき、めまいを起こして倒れているディアブロスに殺到する。
一番最初に到達したサクラは倒れているディアブロスの脚を狙って剣乱舞闘。煌めく剣先は鋭く空気を斬り裂きながらディアブロスの硬い甲殻を弾き飛ばす。押し返される刀を、最も威力が最大になるような角度でひたすら振るい続ける。わずかに抉れた隙間に刃をねじ込み、刃を濡らす強力な毒を奴の体内に流し込む。
練気を限界まで溜め、刀を振るう腕にさらに力を加える。流れるような一撃一撃は、確実にディアブロスの強靭な鎧を削り取っていく。
「……今ッ！」
刹那、サクラの動きがさらに鋭く、荒々しくなった。右へ左へ流れるように刀が動く。その刃先は硬いディアブロスの甲殻も物ともせずに砕く。そして、加速に加速を重ねた勢いを殺さずに最後に刀を振り上げ、一気に叩き落とす。
「……チェストオオオオオッ！」

一刀両断。強烈な一撃を受けてディアブロスの甲殻が砕け、中の肉が露わになる。サクラはすぐに気刃斬りから通常攻撃に切り替え、攻撃の手を緩めない。

遅れて到着したシルフィードは頭を狙って溜め斬りの構えを取り、クリュウは尻尾を狙って駆け寄る。

「ここならッ！」

クリュウは暴れる尻尾に跳ね飛ばされないよう注意しながら尻尾に近づき、引き抜いたデスパライズを叩き込む。すると、やはり硬いには硬いが脚などに比べればずいぶんと柔らかい。しっかりと刃が入る感触に、思わず頬が緩む。

「いけるッ」

目標が定まると人間というのは強くなる。自分の攻撃が確実に届く場所を見つけた。それはメンタル面で強い心の支えになる。自分の小さな攻撃が、わずかでも相手にダメージを与えられる。それだけで、この苦しい戦いの中にわずかな希望の光が見える。

クリュウはひたすらに尻尾に向かってデスパライズを振るう。麻痺毒が迸り、血飛沫が舞踊る。

右から横一閃に剣を閃かせ、返す勢いでもう一撃。最後に右足を軸にして体全体を回転させるように回し斬り。踊り狂う鮮血を物ともしない連続攻撃は確かにディアブロスの尻尾にわずかながら傷を生む。

「うおおおおおおおおッ！」

気合裂帛。空気を打ち振るわせながら轟く勇ましい咆哮と共に放たれる強大な一撃。限界まで引き絞られた力を一気に解放し、藻掻くディアブロスの頭にシルフィードは豪快にキリサキの刃先を叩き込む。直撃した瞬間に腕に走る痛みに一瞬顔を顰めるが、構わず剣を前に打ち放つ。

悲鳴を上げてディアブロスがゆっくりと起き上がった。すぐに剣士三人は離れるが、ディアブロスは最初に視界に捉えたシルフィードに向かって怒号を上げながら突進を仕掛ける。

武器を構えたままの為に思うように動けないシルフィードは舌打

ちしてガードの体勢を取る。そこへディアブロスの凶悪な角が貫いた。
「……くはぁッ？」
角は何とかキリサキの峰で防ぎ切ったが、衝撃は直撃。人一人の力と体重ではディアブロスの突進の勢いを止める事はできず、シルフィードは吹き飛ばされる。
「シルフィッ！」
慌てて彼女の方へ走るクリュウを見て、サクラは逆にディアブロスに突っ込む。それを見てフィーリアもすぐに通常弾ＬＶ２での速射攻撃を開始する。
追撃を試みようとしていたディアブロスの動きをフィーリアの放つ銃弾が阻む。そればかりか突貫してきサクラは振り返るディアブロスの眼前に跳躍。太陽を背後の砂塵を纏いながら戦姫が舞う。
「……はぁッ」
日の光を浴びて煌めく剣先が横一閃に振るわれる。その一撃はディアブロスの額を薄く斬り裂く。突然の出来事にディアブロスは怯む。
地面に着地したサクラはすぐさま加速。ディアブロスの脚下で暴れ回る。
二人がディアブロスを引きつけている間に、クリュウは砂の上に倒れているシルフィードに駆け寄る。
「シルフィッ！」
「くぅ……ッ」
地面の上を何度も転がって倒れたシルフィードは顔を苦悶に歪めながら起き上がる。倒れた際に頭を打ったのか、シルフィードは頭を押さえながら苦しそうな表情を浮かべている。
「シルフィ、大丈夫？」
「あ、あぁ……」
ゆっくりと立ち上がるシルフィードだが、一瞬足の力が抜けてしまったのか倒れそうになる。慌ててクリュウがそれを抱き止めた。
「す、すまない……」

「本当に大丈夫？」
「あぁ、もう平気だ」
　シルフィードはそう言って彼の腕から離れると、取り零したキリサキを拾い上げ、背負い直す。そして二人掛かりでディアブロスを足止めしている二人を見る。二人とも表情に明らかな疲労の色が見えていた。だがその攻撃はブレる事なく鋭く、正確に放たれている所はさすがだ。
「……そろそろ撤退した方がいいな」
「そうだね。これ以上の戦闘はジリ貧だよ……」
　そう言うクリュウも息が荒い。まるで底なしの体力を持つディアブロス相手にした長期戦では、圧倒的に体力の限界が近い人間の方が不利だ。しかも相手は常にフィールド中を動き回る相手。当然こちらの動きも必要以上に増えてしまい、持久戦という不利な状況に追い込まれる。
　一度ここで休憩を挟まなければ、体力劣るこちら側はさらに苦境に立たされる。そう判断したシルフィードは道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出した。
「私が閃光玉で奴の動きを封じる。そのうちにこのエリアから撤退するぞ」
「方向は？」
「ひとまずエリア３に撤退する。行くぞ」
「うん」
　撤退作戦の方針を決め、すぐに実行に移そうとディアブロスに駆け寄る二人。だが、そこで二人が目にしたのは、
「……がはッ」
　ディアブロスの尻尾の薙払いの直撃を受けたサクラが跳ね飛ばされる瞬間だった。
「さ、サクラッ！」
「クソ……ッ、行くぞクリュウッ」
　地面の上を何度も転がった末、岩壁に背中から叩きつけられて崩れるサクラ。クリュウは急いで彼女に駆け寄る。それを援護するよう

にフィーリアの通常弾ＬＶ２による集中砲火が加速する。撃ち放たれる弾丸の全てを頭に当てて、何とか奴の気を削ごうとしているのだ。
　シルフィードも閃光玉を構えながら走り寄る。まだ有効範囲外の為、閃光玉は投げる事はできない。そのわずかな距離でさえ、今のシルフィードには煩わしかった。
「クソ……ッ、もっと早く……ッ」
　砂を蹴って全速力で翔け抜ける。手に持った閃光玉を握り締める手にも、自然と力が入る。
　だがディアブロスはシルフィードの接近を阻むようにフィーリアからの攻撃を無視して角を地面に突き刺し、勢い良く砂の中に潜ってしまう。
「……チッ、このタイミングでッ」
　シルフィードは憎らしげに砂の中へと消えるディアブロスを睨みつける。そこへ、息を切らせながらフィーリアが駆け寄って来た。
「これ以上の戦闘は厳しいです……ッ」
「わかっている。次に奴が姿を現したらすぐに閃光玉を当てて撤退するぞ」
「わかりましたッ」
　フィーリアに指示を伝え、二人はディアブロスが潜った地点を凝視する。どう動くか、そのわずかな動きも見逃さない。
　一方、岩壁に叩きつけられたサクラはピクリとも動かなかった。慌ててクリュウが駆け寄ると、グッタリと倒れているサクラを抱き起こす。
「サクラッ」
　隻眼を閉じ、力なく倒れている彼女の姿に一瞬嫌な予感が頭を過ぎった。だがその最悪な予想に反して彼女はしっかりと呼吸していた。どうやら気を失っているだけらしい。そうとわかった途端、クリュウの表情が安堵に染まる。だが、依然として状況が悪い事には変わりない。クリュウの表情は再び厳しいものに変わり、彼女を抱き起こして振り返る。

少し離れた場所ではフィーリアとシルフィードが同じ地点を見詰めていた。二人の様子を察するに、二人が見詰めている先の地点にディアブロスが潜ったのだろう。当然、クリュウの視線もそこに注がれる。

……どこから現れる。

風の音だけが不気味に響く沈黙の中、何も起きないで時間だけが流れていく。

嫌に長く感じられるようで、本当の所は数秒と経っていないだろう。その不気味な沈黙は、突如破られた。

地響きが轟き、砂煙が濛々と噴き上がる。それはディアブロスが動き出した証。三人の心臓も一斉に飛び跳ねる。だが、ディアブロスは二人の足下にもクリュウの近くにも向かわなかった。

砂煙は誰もいないエリアの真ん中を横切るようにして南側へ抜け、そして消える。

地中に潜んでいるのか。警戒を解かずに最後に砂煙が見えた地点を三人は凝視する。しかし、動きはない。

そのうち、風が吹いた。そこにわずかに匂うペイントの匂い。その風は明らかにこのエリアから吹いたものではなかった。つまり、奴がエリアを移動したという事だ。

ディアブロスが去った事が確認できると、三人は一斉に砂の上に座り込んだ。皆一様に疲労の色が見え、息は荒い。かってない激戦に、すっかり疲労困憊という様子だ。砂漠の暑さも、疲労に拍車をかけている。

フィーリアは愛武器ハートヴァルキリー改を投げ捨てて水筒を手に取ると、女の子らしさとか気にせずにゴクゴクと喉を鳴らして水を一気に飲み干す。乱れた髪を簡単に整え顔を上げると、額には大粒の汗が噴き出していた。

「……想定していたとはいえ、やっぱりキツイですね」

「あぁ、こんなにも一度の戦いで疲れるのは久しいな」

シルフィードも疲れたようにそう言うと、水を一気飲みする。彼女の言う通り、これまでこのチームで体験した戦闘の中では最も厳しい

戦いだ。いつも幾分か余裕を持っている彼女も今回ばかりはその余裕もない。
　二人とも足を投げ出してぐったりとしている。だが相当疲れていても二人の視線は自然とサクラの方に向けられる。
「どうやら、気を失っているだけのようだな」
「そのようですね……」
　二人はそう言うとゆっくりと立ち上がり、二人の下へ歩み寄る。走り寄れない自分の震える足が、悔しい。
　近寄ると、サクラはクリュウの腕の中でぐったりと気を失っていた。いつも何を考えているかわからない隻眼は閉じられ、彼の腕の中で眠るように気絶しているサクラ。安らかな息のリズムが、彼女が無事である証拠だ。
「とにかく一度、拠点（ベースキャンプ）に戻るぞ」
　シルフィードの言葉に二人はうなずくと、撤退の準備を始める。荷車はシルフィードが担当する事になり、クリュウはそのままサクラを背負う事となった。フィーリアは散弾ＬＶ１を装填して小型モンスターからの護衛役。
　役柄を決めた三人は気を失っているサクラを連れて、拠点（ベースキャンプ）まで撤退するのであった。
　拠点（ベースキャンプ）に戻ったクリュウ達。クリュウは真っ先に天幕（テント）に向かうと背負っていた気絶しているサクラをベッドに寝かせる。ここに至るまでの間でも彼女は目を覚ます事はなく、彼の背中で意識を失ったままだった。さすがのクリュウも心配になり、寝かせた彼女の横に座り込む。そんな彼を心配そうに見詰めるのはシルフィード。
「クリュウ……」
「サクラ様のご様子は？」
　そこへ拠点（ベースキャンプ）にある井戸から汲み上げた冷たい水で濡らしたタオルを持ったフィーリアが歩み寄って来る。そう言う彼女の表情も暗い。
「まだ意識が戻らないみたいだな」

「……このまま戻らないなんて事は、ないですよね？」
自信なさげに、頼るような目線で見詰めながら問うフィーリアに、シルフィードはフッと口元に笑みを浮かべる。
「サクラがこんな所で倒れるような奴か？　奴が死ぬ時は、クリュウの膝の上以外ありえないだろう？」
「……そう、ですね」
シルフィードの言葉に、フィーリアの表情が明るくなる。彼女の言う通り、サクラはこんな所で倒れるような少女ではない。彼女のクリュウに対する野心家は筋金入りだ。クリュウのお嫁さんになるまでは、例え地獄の底からだろうが這い上がって来る――こんな所で倒れるような、そんな柔な恋姫ではない。
「――でも、そのような野望は私が断固阻止しますッ。クリュウ様のお嫁さんになるのは、この私ですッ！」
力強く拳を握り締めて断言するフィーリアを見て、シルフィードは苦笑を浮かべる。そして小さく「お嫁さん、かぁ……」とつぶやいてみたり。
そんな二人に対して、ベッドの上で目を覚まさないサクラの傍で無言でいるクリュウ。その表情は暗い。
「サクラ様なら大丈夫ですよ」
掛けられる声に顔を上げると、穏やかな笑みを浮かべたフィーリアが立っていた。
「フィーリア……」
「きっとすぐに目を覚まして、クリュウ様に抱きつくという横暴を平気でしでかしますよ。まぁ、その時は私が全力でクリュウ様をお守りますッ」
拳を握り締めて力強く宣言するフィーリアを見て、クリュウは苦笑を浮かべる。
少しだけ表情が軟らかくなったクリュウを見て安堵したのか、フィーリアは微笑むとサクラに近づき、彼女の額当てを外して手に持っていた濡れたタオルをそっと置く。
「……んぅ」

すると、少しだけサクラが反応した。クリュウとフィーリアはお互いに顔を見合わせると、慌てて彼女の顔を覗き込む。
「さ、サクラ……？」
しかし、サクラは目を覚まさない。閉じられた隻眼は堅く、ピクリとも動かない。
「サクラ……」
再び表情が暗くなるクリュウ。すると、サクラの両腕がゆっくりと起き上がる。
「え？」
呆然としているクリュウの首に絡まり、そっと彼の体を引き寄せる。その先には、なぜか頬を赤らめて唇を尖らせるサクラの顔が……
「え？　ええ？　えええええええええッ!?」
「何してやがるですかあああああぁぁぁぁぁッ！」
怒号を上げて。フィーリアはどこからか取り出した特大ハリセンでサクラの顔面をブッ叩いた。
「えええええええええッ!?　ふぃ、フィーリアぁッ!?」
「何人の心配する気持ちに付け入ってるんですかぁッ！」
顔を真っ赤にして怒るフィーリアに対して、ゆっくりと上半身を起こすサクラ。叩かれた鼻を手で擦りながらサラリと、
「……眠り姫が目を覚ますのは、王子様のキスと決まっている」
「そ、それは間違いじゃありませんが……それを堂々と実行するなんて、恥ずかしくないんですか？」
フィーリアの問いに対し、サクラはなぜか腕を組み胸を反らし、偉そうに断言する。
「……クリュウの為なら、羞恥心なんて簡単に捨てられるわ」
「少しは大事にしてくださいッ！」
あっと言う間にいつものようにギャーギャーと言い合う二人。そんな二人の姿、特にさっきまで本当に気絶していたのかと疑ってしまう程にいつも通りなサクラの姿に一人取り残されて困惑するクリュウ。すると、そんな彼の肩がそっと叩かれた。振り返ると、苦笑を浮かべたシルフィードが立っていた。

「どうやら杞憂だったようだな」
「……何だか、ドッと疲れが押し寄せたような」
「ははは、君も大変だな。まぁ、自分で撒いた種だと思って我慢するんだな」
「え？　僕、何かしたっけ？」
「……まったく、少しは察する事を覚えてほしいものだよ」
　意味が分からないという感じに首を傾げるクリュウを見て、シルフィードはため息を零す。ハンターとしては確実な成長が見える彼だが、未だにこっちの方は成長する兆しすら見えないのが現状だ。
「ほら、君達もいつまでも遊んでるな。狩猟中だぞ」
　ギャーギャーと言い合う二人を注意し、ため息を零しながらシルフィードは一人―天幕（テント）を出る。それを追ってクリュウが続き、二人も睨み合いながら天幕（テント）を出る。
「フィーリア、ひとまず昼食にしよう。腹が減った」
　グゥと小さく腹を鳴らし、恥ずかしそうに頬を赤らめながら苦笑するシルフィード。それを聞いて、サクラと無言で睨み合っていたフィーリアが振り返り顔が微笑む。
「そ、そうですね。じゃあお昼にしましょう。材料はある程度持って来ているので。何系がよろしいでしょうか？」
「……キングトリュフと飛竜の卵のかき卵」
「どんだけ無茶な注文なんですかッ!?　高級レストランで扱うような料理ですよッ!?」
「……じゃあ、特産キノコキムチおにぎり。私も手伝うわ」
「却下ですッ！　またオンリートウガラシの地獄激辛おにぎりを仕込むつもりですよねッ!?」
「……チッ、覚えてたか」
「一生忘れられませんよあんなトラウマッ！」
「……あぁ、そういえば君達と初めて狩りをした時にそんな事件があったな」
　懐かしいなと思い出し笑いするシルフィードに対し、当の本人達は睨み合う。

そんな三人を見て苦笑しながら「あのさ、結局どういう系の料理にするかは決まったの？」と止まっていた昼食の話題を進める。
「そ、そうでしたッ。どのような物をお食べになりたいですか？」
「そうだなぁ……、私はガッツリ肉系がいいな」
「僕も同じかな」
ガッツリ肉系を共通にプッシュするシルフィードとクリュウの二人。フィーリアは大きくうなずく。
「ではこんがり肉をベースにした料理にします。ただし、お二人とも最近野菜をあまり摂られていないので、サラダもお付けします。ちゃんと食べてくださいね」
そう言い残し、フィーリアは早速準備に取り掛かる。そんな彼女の背中を一瞥し、クリュウとシルフィードは互いに顔を見合わせるとどちらからとなく苦笑を浮かべた。
「まったく、フィーリアはいい嫁になるな」
「そうだね」
「……クリュウ、私は尽くすタイプだから」
「はい？」
先程までディアブロス相手に激闘を演じていたとは思えない程にほのぼのとした空気。だがあれだけの緊張の連続だったのだから、緊張を解く時も手抜きはしない方が精神的にもいい。
その後フィーリアを中心にクリュウと何だかんだでサクラも加わり、三人で昼食の準備を進める。言うまでもないがシルフィードは料理場に近づく事すら禁じられている。
「……女として、これほど情けない事はないな」
力なくシルフィードがつぶやいた事を、三人は知らない。
ちなみに以前彼女は《女》は捨てたと豪語していたが、最近はほんの少しだけその言葉を撤回していたり。
昔に比べてフィーリアも結構物怖じをしない子になった。サクラの影響か、謙虚な子ではあるが自分の意見はハッキリ言う子になったし、サクラのボケに対しても最近は容赦がない。クリュウに対するアタックもサクラ程ではないが少しばかり強気になった。

サクラは……言うまでもないだろう。
クリュウだけではない。彼の影響で三人もハンターとしてだけではなく、一人の人間として、一人の女の子として確実に成長、変化している。
リオレウスを相手にしていた時とは違う。今の彼らの絆は、確かなものだ。だからこそ、あれだけの苦戦の後だと言うのに、笑っていられる。
どんな強敵が相手でも。どんな苦しい戦いだとしても。信頼し合った大切な仲間と一緒なら、きっと乗り越えられる。そして、いつかきっと、この戦いを笑って語れるようになる。そう信じているから、笑える。
いつしか、クリュウを中心に構成されていたチームは、互いが互いを認め合い、信頼し合う、掛け替えのない狩友同士で結成されたチームに変わっていた。
誰かの代わりなんていない。この四人だからこそ、最強なのだ。
「――って、何ドサクサに紛れてクリュウ様に抱きついてるですかぁッ！」
「……クリュウ、女体盛りって興味ある？」
「にょたいもり？」
「どぅあああああぁぁぁぁぁぁッ！　クリュウ様の前で何という発言をしてるですかあああぁぁぁぁッ!?」
「……クリュウ、耳を塞ぐんだ。君の健全な精神を育成するには不要な情報だからな。今の単語も今すぐ忘れるんだ」
……まぁ、一見するとそんな風には見えないのが難点ではあるが。
十数分後、地面の上に敷いたシートの上にはおいしそうな料理が並んだ。
スライスしたこんがり肉と砲丸レタス、レアオニオンソースで味付けした具をマスターベーグルで挟んだサンドイッチを主食。アプトノスの細切れ肉とまだらネギ、ヤングポテト、根棒ネギ、レアオニオンを具材にしたシモフリトマトスープも付けた豪華なもの。クリュウとシルフィードにはサラダも忘れないなど、さすがフィーリア抜か

りがない。
　全体的に野菜が多いのも、仲間の健康を気遣った彼女らしい。こんだけ野菜が多いのに、野菜嫌いでもおいしく食べられてしまうのだから不思議だ。
「さすがフィーリアだな。狩場でこんな豪華な料理を、しかも短時間で作れるとは」
「時間の掛かる料理じゃありませんから。トマトソースも濃縮したソースを持参したので、水で薄めるだけで簡単にスープも作れますし」
　料理が上手なだけではなく、手際も良く調理ができる。エレナによく料理を教わっているだけあって、フィーリアも日々料理の腕を上げている。
「慣れればこの程度なら子供でも作れますよ」
「……もうすぐ十九になるが、相変わらず兵器しか生み出せない私は子供以下か」
　フッと、先程までの凛とした光に満ちた瞳から濁った瞳に変わり、遠くを見詰めるシルフィード。フィーリアが慌ててフォローに入るが、料理ができる人が何を言っても無駄だ。
　料理が上達するフィーリアの一方で、シルフィードは相変わらず食材を生物兵器に変える能力が衰えていない。まぁ、自覚がないよりはマシなのだが、それにしてもたまご焼きですら兵器にしてしまう能力は、もはや才能と言う他はないだろう。
　ちなみにサクラは実はさりげなく料理の実力はフィーリアに匹敵する。彼女曰く娯楽で始めた彼女と生きる術として始めた自分では雲泥の差だそうだ。ただ、彼女は主に東（あずま）料理専門なので、一概には比較できないが。
「ごめんねフィーリア。ほとんど一人でやってもらっちゃって」
　井戸の水で簡単に顔と頭を洗い終えたクリュウがタオル片手に戻ってきた。そんな彼の言葉に「いいえ。好きでやっているのでお構いなく」とフィーリアは天使の笑顔で返す。
　クリュウも定位置に着き、ようやく昼食が開始される。言うまでも

なくフィーリアの料理はどれも絶品であり、サンドイッチに自然と手が伸びる。
「うん、すっごくおいしいよッ」
「えへへへ、良かったです」
「……味付けが濃いわね」
「君は姑か」
そんなやりとりをしつつ食事は進み、サンドイッチの量が半分になった頃。水を飲み干したシルフィードが口火を切った。
「さて、どうだった？　ディアブロスを本気で相手にしてみた感想は？」
シルフィードの問いかけに、それまで和気藹々と楽しいげに会話していた三人が一斉に沈黙する。それを見て、ある意味予想していたシルフィードは苦笑を浮かべた。
「まぁ、君達の気持ちはわかる。戦ってみてわかったと思うが、奴は凶暴極まりないモンスターだ。これまで相手にしてきたどのモンスターよりも強敵で、厄介だ。決して手加減した訳でもないのに、我々が四人束になって挑んでもああして振り回される」
深刻な表情で彼女が述べているのは、決して過剰に言っている訳でも装飾している訳でもなく、真実だ。だからこそ、彼女の言葉にフィーリアとサクラの表情も厳しくなる。
クリュウも先程の戦いは正直信じられなかった。
――今まで、これほどまでに三人が苦戦している姿を見た事があっただろうか。
チームで最も動いて暴れ回るサクラはその役柄、しかも武器の特性上どうしても怪我をする事はある。だがこれまで彼女が気を失うような事態は早々起きた事はない。
常に絶妙な間合いを取る為、最も怪我が少ないはずのフィーリアも今回は危ない場面が多く、ディアブロスの突進で跳ね飛ばされて苦悶に表情を歪めていた。
そして何より、最前線で相手を引きつける最も危険な役柄を引き受けていながらこれまで大した怪我なく、危険な場面もほとんどなく、

勇ましく戦っていたシルフィード。しかし今回は何度もディアブロスに吹き飛ばされ、危ない場面も多々あった。
　これまで、一人くらいがそういう危ない状況になる事はあっても、チーム全員がそのような状況に陥った事はなかった。強いて挙げれば、まだチームとしての連携が未熟だったリオレウス戦の時くらいだが、状況としてはこちらの方がはるかに厳しい。何せ、こちらはあの時とは比べ物にならない程に連携ができているのだから。
「何度も言っているが、私達四人でディアブロスを相手にするのは正直厳しい。その理由がわかっただろ？」
　シルフィードの問い掛けに答える者は誰一人いなかった。だが、その沈黙が答えだ。
　三人の表情からは、出撃した時の自信や希望の色が一切消えていた。あまりにも強敵過ぎる相手に、すっかり戦意が喪失している。シルフィードが最も恐れていた展開だ。
　クリュウは基本的に物事をネガティブに考えがちなので大した事はないのだが、何だかんだで自分の実力を誇りにしているフィーリアや自信過剰なくらいに強気に物事を考えるサクラがこんな状態というのは、ある意味最悪な状態だ。
　自然と、シルフィードの口からため息が漏れる。
「私も、熟練のハンターと共同で狩った事が一度あるだけだからな。奴相手にうまく立ち回れる自信はあまりない。特に、先程は何度も無様に砂の上に倒れた後だしな」
　シルフィードも表情に出していないだけで、その実は相当ショックを受けていた。これまで、これほどまでに自分の無様な姿を彼らに晒した事はなかった。三人の自信の喪失の原因の一つは、そんな自分の姿だろう。だからこそ、シルフィードは人一倍辛い。
　だが、いつまでも落ち込んでいられる程自分達には余裕はない。すぐにでも行動を起こさないと、このままでは本当に戦意を完全に喪失してしまう。
　リーダーとして、仲間達を鼓舞しなくてはならない。
　――シルフィードは知っている。こういう時、彼らの心に火を灯す

方法を。
「――どうする？　このまま逃げ帰るか？　クリュウの願いを諦めて」
シルフィードはあえて挑発気味に言ってみた。その言葉にクリュウはショックを受けたようだったが、状況の厳しさを熟知しているからこそ、残念そうに顔をうつむかせる。だが――彼女達は違う。
「……ふざけるな。そんな事をするくらいなら、今ここで切腹した方がマシよ」
先程までの光を失った瞳とは違う、激しい憤怒の炎が燃え盛る鋭い隻眼で睨みつけてくるサクラ。刃物のように鋭い隻眼は、殺意すら見え隠れする。
ダンッと引き抜いた飛竜刀【翠】をサクラは地面に突き刺す。いつでも腹を切ってやる、そんな構えだ。
「サクラ様は少々行き過ぎですが、私も同感です。このまま逃げ帰るなんて、断固拒否します」
そう言ってフィーリアも不機嫌そうな表情で断言した。いつもは優しげな柔らかな瞳が、サクラほどではないが鋭く細まっている。
二人の空気が豹変した事に気づいたクリュウは困惑していたが、シルフィードは平静を装いつつも口元にわずかな笑みが浮かんでいた。
「まったく、君達は揃いも揃って……」
だが、決して呆れている訳ではない。二人のクリュウを想う気持ちは筋金入りだ。本気だからこそ、自分の軟弱な意見に対して怒りを露わにしている。
――本当に、クリュウの事が好きなんだな。
微笑ましいくらいに必死に自分の恋心をクリュウに伝えようとがんばっている二人の姿を見ていると、ついつい応援したくなる。
……チクリと、胸が痛んだ。
何事かとうつむき、痛んだ胸に片手を当ててみる。そこは左胸、ちょうど心臓がある位置だ。ドキドキと胸が早めに鼓動を刻んでいる。だが、その胸が時々チクリと痛む。
意味が分からない。だが、視線はいつの間にか自然とクリュウの方

へ向いていた。クリュウは一人地図を見ながら何かを思案しているようだ。その凛々しい横顔を見た途端、胸がドキッと弾む。
顔が熱くて、頬に手を当てると熱を感じる。
「……熱でもあるのか、情けない」
ため息を零し、頭を振って気合いを入れ直す。今は少しくらいの体調の悪さを気にしてなどいられない。
話を戻すとばかりに、自分の挑発がうまくいったのか、瞳に戦意が戻った二人を見てアンドするとシルフィードは口を開く。
「戦ってみてわかったと思うが、奴は常に動き回るモンスターだ。しかもその速度は通常時でさえ我々の全速力よりも早い。この状態の速度に対抗できるのは唯一サクラくらいなものだ」
シルフィードの説明に、サクラは自慢げに平らな胸を反らしてみる。まぁ、聞きようによってはさりげなく人外扱いされているのだが、同時にそれは彼女の特筆すべき能力とも言える。
「そんな奴をまともに相手すればこちらの体力が持たない。そこで、次からは道具（アイテム）を多用してできるだけ奴の動きを封じながら戦う。閃光玉、シビレ罠、音爆弾を主体にすれば、奴の動きはかなり制限できる。それにクリュウのデスパライズによる麻痺効果もあるからな」
そう言ってシルフィードはクリュウの方を向き、微笑む。「期待しているぞ」という意味を込めた彼女の笑顔を見て、クリュウはしっかりとうなずいた。
「先程の戦いはあくまで前哨戦、様子見にしか過ぎない。ここからが本番だ。力押しが通じる相手ではないからこそ、私達の戦い方を貫いてこれに勝つ。いいな？」
シルフィードの問い掛けに、三人はうなずく。彼女の言う通り、ディアブロスは力押しや無策で勝てるような相手ではない。念入りに策を練って、こちらの利点を最大限に利用した戦いに持ち込まないと勝機はない。
だからこそ、いつもの自分達らしい戦い方を貫く。それが大事なのだ。

「ディアブロスは確かに強敵だ。だが、決して勝てない相手ではない。もし負ける事があったとすれば、それは私達が全力を出し切れなかったから以外にはありえない。勝利したいなら、全力を出し切れ。いいな？」

シルフィードの言葉に、三人はそれぞれうなずく。

ディアブロスは強敵に違いない。だが、彼女の言う通り自分達の実力の１００パーセントを出せば必ず勝てる。理論的な根拠などない。ただ、そんな確信が四人の胸にはあった。

「食事終了後、順次再出撃準備。準備完了次第ディアブロスとの第二戦に出陣する」

第１５６話　戦姫を狙う邪双槍　少年の起こした奇跡の一撃

「お、ようやく拠点（ベースキャンプ）から出て来やがった」
セクメーア砂漠上空を航行する航空哨戒艦『イレーネ』。その食堂室の窓際、純白のテーブルクロスを敷いたテーブルが設置され、椅子に腰掛けながら双眼鏡片手に眼下、拠点（ベースキャンプ）から出撃していくクリュウ達を見詰めるエルディン。そんな彼を見て、正面に座るカレンは不機嫌そうに眉をしかめる。
「ロンメル元帥。食事中に行儀が悪いです」
「生憎と俺は野戦育ちだからな。行儀なんて貴族染みた言葉には縁がねぇんだよ」
カレンの注意を無視し、エルディンは片手に構えた双眼鏡で眼下を見ながら、器用に空いているもう片方の手で料理を食べ進める。
聞く耳持たないといった様子の彼を見てため息を零し、カレンは黙々と料理を食べ進める。
テーブルの上に並ぶのはソーセージにザワークラウトと呼ばれるキャベツの漬物と蒸かしたジャガイモを添えたもの。これにパンとジャーマンポテト、オニオンスープなどが並ぶ、エルバーフェルドでは定番の料理だ。本当はここにビールがあれば最高なのだが、今は任務中だ。
オニオンスープにもジャガイモが入っており、一見すると少な目な量でも十分腹は膨れる料理ばかりだ。
エルバーフェルドは元々ガリアやシュレイドなどの温暖な国と違い、寒冷で痩せた土地が多い。その為、荒地でも育ち満腹感を得られるジャガイモは昔からエルバーフェルドの食糧危機を何度も救ってきた。先のローレライの悲劇の際にも、多くのエルバーフェルド国民を飢えから救ったのがジャガイモだった。その影響で、エルバーフェルドには「女の子はジャガイモでフルコース料理が作れないとお嫁に行けない」という言葉があるほど、ジャガイモは非常に大切な存在だ。

ちなみに、一応作法としてフリードリッヒもカレンも料理はできる。当然、ジャガイモも完璧だ。
オニオンスープにパンを浸して食すカレン。行儀が悪いと注意したエルディンを次第に羨ましそうに見詰める。すると、そんな彼女の視線に気づいたエルディンが振り返り苦笑を浮かべた。
「見たいなら見ればいいじゃねぇか。行儀なんてくだらない事やめてさ」
「お断りします。これでも貴族出身なので」
ピシャリと彼の言葉を封鎖し、食事を進めるカレン。エルディンは「素直じゃないねぇ」と苦笑を浮かべると、おもむろに立ち上がった。
「食事中にどこへ行くつもりですか？」
「うん？　トイレだよトイレ」
「なッ!?　最もしてはならない禁忌（タブー）を平然と……ッ」
エルディンの非常識さに驚きと共に呆れ切るカレン。エルディンは気にした様子もなく「食いながら小便垂れるよりはマシだろ」と笑い飛ばす。
頭を抱えるカレンを残し、エルディンは食堂室を出る。エルディンがカレンと二人っきりで食事がしたいと申し出た為、現在食堂室にはカレン一人が残されている。
無言でソーセージをナイフで切り、一口サイズにしたものを口に運ぶカレン。ふと、そんな彼女の視線が無造作にエルディンが置いた双眼鏡に向けられる。
「……ちょ、ちょっとだけ」
誰も見ていない事を確認し、カレンは双眼鏡を手に取ると眼下を見下ろす。すると、目的の人物はすぐに発見できた。
手元の地図で見ると、エリア２と呼ばれる場所。どうやら彼らは北へ向かっているらしい。
先頭をエルディンの弟子の銀髪ポニテが進み、その後方をレヴェリ家三女と異国の隻眼剣士が左右を守る。そして、そんな三人の少女に守られながら荷車を引くのが――クリュウ・ルナリーフ。自分のファーストキスを奪った卑劣な男だ。

空挺降下してから、カレンはずっと彼を監視していた。ディアブロスとの戦闘では常に危険と隣り合わせのような危ない場面が多々あり、そのたびにヒヤヒヤさせられた。
仮にもこんな所で死なれたら大迷惑だからだ。
「責任取ってもらうまで、死んでもらっては困るんだから……」
頬を赤らめながら、唇を尖らせつぶやく。そんな彼女の視線は双眼鏡越しに彼の横顔をずっと見詰めている。
エルディンが戻って来るかもしれない。そんな事すっかり彼女の頭から抜け落ち、礼儀も作法も無視してカレンは彼を見詰め続ける。
「……ったく、嬢ちゃんと同じでほんと素直じゃねぇな」
食堂室の外、壁に背を預けながら苦笑を浮かべるエルディン。彼はトイレにも行かず、ずっとここで立っていた。そもそもトイレに行く気などなかったのだ。
「しゃあねぇな。もうちっと時間潰すか」
後頭部を面倒くさそうに掻きながら、エルディンは音を立てずに食堂室を後にした。
ディアブロスは一度エリア7から3へ移動。そこから再びエリア7へ戻った為、クリュウ達もエリア7へと向かった。しかしその途中、エリア3を通過中にディアブロスは今度はエリア5へと移動した。
現在クリュウ達はもぬけの殻となった、先程激戦を繰り広げたエリア7を通過する最中だ。
先程、ここで自分達はディアブロスと激戦を繰り広げた。だが、再び入ってみると不気味なくらい静かで、先程の戦いの痕跡はほとんど残っていない。地面が砂なので、抉ったり穴が開いたりしてもすぐに塞がってしまうからだ。
ペイントの匂いはこの奥、エリア5にある。となればこのエリアに危険はないはずだ。アプケロスもゲネポスもいない為、クリュウ達は適度に警戒しながらも比較的落ち着きながら進んでいた。
先頭を進むシルフィードに続く形で荷車を引きながら進むクリュウ。エリアの中頃を過ぎた辺りでふと足を止めた。

「クリュウ様？　いかがなされました？」
突然足を止めたクリュウを怪訝そうに見詰めるフィーリア。サクラとシルフィードも足を止めて何事かとばかりに彼を凝視している。
「いや、ちょっと……」
クリュウはそう言って荷車を置くと、一人隊列から離れる。そして彼はエリアの中央部にポツンと突き出した大きな岩に駆け寄る。
ジッとクリュウはその岩の質感や構成物質を見詰める。そしてガントレットを外し、素手で岩に触れてみる。直に伝わる岩の感触に触れ、クリュウは何事かを考える。
「結構硬い……」
ポツリとそうつぶやくと、クリュウは何か名案を思いついたのか、ヘルムの下で笑みが浮かぶ。
「もしかしたら、これ使えるかも」
「クリュウ、そろそろ先へ進みたいんだが」
遠くからシルフィードが呼ぶ。クリュウは慌てて振り返り仲間達の所へ走る。
ポチャン……
水の音が響き、クリュウは反射的に振り返る。エリアのちょうど反対側には水辺があり、見ると風もないのに微かに水面が揺れていた。
「……石でも落ちたのかな」
クリュウは不思議に思いつつも、先を急ぐぞと前進を始める三人の所へ慌てて戻った。
冷たい地下水が流れる為に砂漠の暑さとはまるで正反対に寒冷な地底湖、エリア6を抜け、一行は再び灼熱の砂漠地帯、エリア5へと進入する。
エリア5はエリア6側から進入すると右手に袋小路のようなエリア9、左手にはエリア1へ至る道があり、正面は底が見えない程深い崖に面した巨大な砂漠地帯だ。それこそディアブロスが何頭も走り回ってでも余るくらいに広い。
広大なエリアにはディアブロスの姿はなかった。いるのはエリア中を忙しなく動き回っているガレオスが二匹。上ビレを砂上に出し

ながら砂中を泳ぐ砂漠のトビウオだ。あとは仲間から逸れたのか、ゲネポスが一匹だけエリアの真ん中で辺りを見回している。
「……いない」
「そんなはずはない。ペイントの匂いは具体的にはわからないが、奴が確かにここにいる事を示している」
「という事は、砂の中に潜んでいるという訳ですね」
警戒心を強める三人の後ろ、クリュウは一人エリア6に繋がる洞窟の入口から右手に突き出た岩の陰に荷車を移動させる。
不気味な沈黙。だが奴は必ずこのエリアのどこかにいる。今自分が立っている足下から、突然凶悪な角が突き出して来るとも限らない。そんな恐怖に、暑さとは関係ない汗が背中を流れる。
「……クリュウ、気をつけて」
いつの間にか背後に立っているサクラからの忠告。クリュウはうなずくとエリアを見渡す。が、砂上には奴の姿は未だに確認できない。
四人は一度エリアの中央部まで進んでみる。遠くにいたゲネポスがこちらに気づいて威嚇の声を上げる。シルフィードはため息を零し、背負ったキリサキの柄を握る。
声を上げて迫るゲネポス。だが次の瞬間、彼は天を舞っていた。
突如地面が割れ、巨大な二本の槍が刺き出した。そのうちの一方が彼の体を貫き、吹き飛ばす。
「グオオオオオオオオオッ!」
巻き上がる砂のカーテンの中を、巨竜が姿を現す。天を舞ったゲネポスはそのまま放物線を描きながら落下。砂の上に落ちて動かなくなった。
パラパラと降り積もる砂雨の中、ディアブロスがゆっくりと振り返り――クリュウ達と目が合う。
「来るぞッ!」
シルフィードの声を聞くまでもなく、三人とも一斉に戦闘態勢に入る。クリュウとサクラは攻守どちらにも動けるよう構え、フィーリアは早速ハートヴァルキリー改を構える。そしてシルフィードは躊躇

う事なくこちらに向き直るディアブロスの眼前に向かって閃光玉を投擲する。
　低い唸り声を上げて突撃してくるディアブロスは突如眼前で炸裂した強烈な閃光に目を焼かれ、突進は不発に終わる。
「行くぞッ！」
　シルフィードを先頭に、四人は一斉に走り出す。
　フィーリアはすぐに的確な射程距離に立つと通常弾ＬＶ２の速射でディアブロスへの攻撃を開始する。狙うはゆっくりと動く尻尾。甲殻が薄い尻尾は弾丸では有効な弱点部位だ。
　攻撃を開始したフィーリアに対し、三人の剣士はディアブロスに突っ込む。まず最初に到達したのは怒涛の勢いで先頭を走るシルフィードを追い抜いた疾風迅雷、狂瀾怒涛のサクラ。砂を蹴り、ダンッと跳躍。視界を封じられてもがくディアブロスの眼前に突撃し、構えた飛竜刀【翠】を風を纏いながら、ディアブロスの額に向かって突き刺す。
「グオォッ!?」
「……よくもやってくれたわね。命をもって償いなさい」
　額に刀の先端を突き刺し、不安定な足場でも器用に立つ。そして、腰に下げた小タル爆弾Ｇを引き抜くと、悲鳴を上げるディアブロスの口に向かってねじ込んだ。
「グエェッ!?」
「……料理は爆発、ってね」
　飛竜刀【翠】を引き抜くと同時に跳躍。ディアブロスから降りる。刹那、ディアブロスの口腔が爆発。ディアブロスは悲鳴を上げ、黒煙を噴きながら倒れる。
　砂の上に流麗に着地したサクラは乱れた黒髪を片手で掻き上げて直す。
「……無様ね」
　見事な尖兵ぶりを披露したサクラを見てシルフィードは苦笑を浮かべると、サクラが作った大きなチャンスを利用し、倒れているディアブロスの頭の前に立ち剣を引き抜く。力を溜めるように足を踏ん

張り、腕の筋力を引き締め、筋力に加速力を加え続ける。そして、限界に達すると同時に一気に解放。重量のある巨大な大剣が彼女の腕力を受けて射出。真上から下ると同時に重力をも味方につけ、動けぬディアブロスの頭に向かって叩き込む。

悲鳴を上げてもがくものの、動けないディアブロスに向かって今度は横殴りな一撃を叩き込み、背負い直すと間髪入れずに再び叩き落としの一撃。連続した強力な剣撃の嵐でディアブロスを嬲（なぶ）り続ける。

遅れてクリュウもディアブロスに到達する。ペイントボールを当ててから倒れて藻掻くディアブロスの背後に回り込み、再び尻尾の付け根に向かってデスパライズを叩き込む。ここが一番武器が弾かれずに刃が到達する場所なのだ。

連続して剣を叩き込むクリュウ。デスパライズはまるで絶好調かのように麻痺毒を次々にディアブロスの体内に送り込み続ける。

「そろそろ、効果が出始める頃なんだけど……ッ」

血塗れになる付け根に向かってもう一撃を入れる。しかしその一撃は麻痺毒は不発に終わった。

先程からフィーリアの攻撃は尻尾をクリュウに譲って翼を狙い撃ちしている。距離があるからこそ、ディアブロスの動きを全体的に見る事ができる。スコープで狙いを定めながら攻撃していると、ディアブロスの足がゆっくりと確かに地面を踏み締める瞬間が見えた。

「離れてくださいッ！」

フィーリアの叫び声が聞こえた瞬間、三人は一斉にディアブロスから離れる。一瞬遅れて倒れていたディアブロスがゆっくりと起き上がった。するとディアブロスは角を地面に突き刺し、潜り始める。その瞬間クリュウが道具袋（ポーチ）に手を伸ばすのを三人は見逃さなかった。

尻尾が砂の中に消える寸前、クリュウは道具袋（ポーチ）から引き抜いた音爆弾を投擲。潜ったディアブロスの直上で炸裂すると、程なくしてディアブロスが悲鳴を上げて飛び出して来る。

砂の中に下半身を埋めてもがき苦しむディアブロスに対し、四人の

狩人（ハンター）が一斉に襲い掛かる。
腹部の前に立って毒刀嵐舞。全身の筋力を限界まで酷使するような激しい立ち回りと暴れ回る刀捌き。甲殻に次々にヒビを入れ、破片を飛ばす。砂上という不安定な足場を感じさせない鬼神の如き猛攻撃にディアブロスが暴れ狂い、仲間達の士気は高まる。
シルフィードはそんなサクラの動きを見て口元に笑みを浮かべると、ディアブロスの背後に回り込んで先程と同じように背甲に向かってキリサキを叩き込む。
少し離れた場所からはフィーリアが猛烈な装填捌きで間髪入れない集中砲火を浴びせている。彼女の周りには次々に無数の空薬莢が落ち、その数に比例するだけの弾丸がディアブロスに命中していく。薄い皮膜は無数の弾丸を受けて所々に穴が空き、甲殻も砕け、確実にダメージを蓄積させている。
そしてクリュウはサクラの横、右脇腹の前に立ってで剣を振るう。暴れる翼の根元、関節部分は比較的装甲が薄い。そこを狙えば刃が弾かれずに済むと予想していたが、どうやらその予想が当たったらしい。次々に振るわれる剣は角度によっては弾かれるもそのほとんどが皮膚を切り裂き、真っ赤な鮮血を生み出す。
順調に攻撃を重ねるクリュウだったが、剣を入れる角度を間違えた。
「あぐ……ッ!?」
硬い甲殻に思いっきり剣を叩き入れてしまい、弾かれる。まるで岩を殴ったかのような衝撃と激痛が腕を襲い、思わずデスパライズを取り零してしまった。
ズキズキと痛む右腕に苦悶の表情を浮かべながら、クリュウは落ちたデスパライズを左手で拾い上げる。そして他二人よりも早めにディアブロスから離れた。そんな彼の様子を三人は一瞥をくれるも、攻撃の手を緩めない。
クリュウは一人ディアブロスの前面に移動すると、道具袋（ポーチ）に手を伸ばす。
直後、ディアブロスが砂の檻から解放された。傷ついた翼を広げて

一度浮き上がる。その寸前でシルフィードとサクラはディアブロスから離れている。その位置はちょうどクリュウに背中を向けている形だ。
クリュウは浮かび上がったディアブロスの眼前に向かって手に持った閃光玉を投擲した。放物線を描いて飛ぶ閃光玉は、巨体を浮かべるだけで不安定なディアブロスの眼前で炸裂。強烈な光が視界を奪い、ディアブロスは悲鳴を上げて地面へと崩れ落ちた。
地響きが轟くと同時に辺りを支配していた激光が消え、四人の視界が回復する。すると、先程まで宙に浮いていたディアブロスが地面に落ちて横倒しに倒れていた。
「うまいぞクリュウッ！」
シルフィードは彼の行動を高らかに賞賛すると一度離れた距離を再び埋めてキリサキを倒れているディアブロスの尻尾に向かって振り下ろす。サクラもクリュウがせっかく生み出したチャンスを無駄にしない為に全速力で戻って来ると、再び怒涛の剣嵐舞闘を炸裂させる。
フィーリアは相変わらず冷静に攻撃を続けている。弾種を貫通弾ＬＶ２に変更し、硬い甲殻を持つディアブロスに更なるダメージを蓄積させる。
そしてクリュウは再びディアブロスに迫ると、右腕の痛みを堪えながら投げ出された脚に向かって剣を叩き込む。最初に攻撃していた時よりも幾分か弾かれずに済む。見ると、脚の甲殻の至る場所に亀裂が生じ、砕けたり割れていたりしている。サクラの怒涛の攻撃の成果だ。
クリュウは彼女の奮戦に感謝しつつ、必死になって剣を叩き込む。そして、彼の努力が実る時が来た。
「ギャオァッ!?」
突然ディアブロスは悲鳴を上げると、身を強ばらせた。クリュウの度重なる攻撃で蓄積された麻痺毒が、ようやく効果を現したのだ。
麻痺毒で体が痺れ、だらしなく涎（よだれ）を垂らしながら痙攣するディアブロス。それを見てシルフィードの表情が華やぐ。

「よくやったクリュウッ！」
シルフィードはそう叫ぶと引き続き尻尾に向かって剣を叩き込む。ディアブロスの突進は確かに脅威だ。だが、それが終わった後の隙は貴重な攻撃チャンスとなる。しかしディアブロスもそれはわかっているのか、突進の後はこの尻尾を使って敵の接近を阻もうとする。その為、剣士は貴重なチャンスとわかっていても深入りができない。
シルフィードの狙いはその障害となる尻尾を切断し、その貴重な隙を最大限に利用する為の布石を打つ事。成功すれば、確実に戦いはこちらに有利に働くようになる。
灼熱の太陽に吹き出る汗を吹き飛ばしながら、シルフィードは大剣キリサキを振るう。
サクラは転じて、今度は動かぬディアブロスの側頭部を狙って立ち回る。暴風を纏うように暴れ狂う彼女の刀は容赦なくその身を切り裂く。限界まで溜まった練気を一気に開放し、峻烈にして嵐のような気刃斬りを炸裂させる。暴れ狂う剣撃が甲殻を砕き、弾き飛ばし、肉に到達し、血を撒き散らし、より鋭さを増す。
「……チェストオオオオオオオオオオッ！」
クリュウは続けて脚に向かってデスパライズを叩き込み続ける。刃が刃毀れを起こしていても構わずに剣を振るう。今は、この貴重な時間にできるだけダメージを与えておく事に専念する。奴がこんなにも長い間動きを拘束される事など、そうそうない。だからこそ、このチャンスを最大に活かして攻撃を続ける。
総攻撃に転ずる剣士組に対し、ガンナーのフィーリアは違っていた。それまでの貫通弾ＬＶ２から別の弾丸に変更すると、スコープで狙いをつけて正確に一撃を叩き込む。撃ち放たれた弾丸は一直線にディアブロスの顔面に命中。炸裂すると同時に薄い水色っぽい煙を放つ。
溜め斬りを尻尾に向かって振り下ろしたシルフィードはその煙に気づくと、彼女の意図をすぐに察した。麻痺での拘束時間はそろそろ限界だ。シルフィードはキリサキを背に戻すと、その場から離れながらまだ攻撃を続けている二人に叫ぶ。

「撤退しろッ！　そろそろ限界だッ！」
二人はその声を聞くとすぐにバックステップでディアブロスから距離を取る。その間もフィーリアからの攻撃は続く。
そして、ディアブロスが麻痺毒の鎖から解放された。激しい怒号を辺りに轟かせ、憤怒に満ちた叫び声が大地を震わす。
ディアブロスの怒号（バインドボイス）にクリュウとサクラが反射的に耳を塞いでその場に拘束される。高級耳栓を持つシルフィードは急いでディアブロスの眼前に移動する。こちらを向き次第閃光玉を投擲して奴の動きを封じる気だ。
一方、麻痺が解ける寸前までに怒号（バインドボイス）を警戒して安全距離にまで脱していたフィーリアは無事。依然として攻撃の手を緩めない。
そして、怒号（バインドボイス）を終えてシルフィードとディアブロスの目が合う。
シルフィードが構えた閃光玉を投擲、する寸前にディアブロスのこめかみに弾丸が命中する。薄い水色の煙が噴き出し、ディアブロスの鼻に吸い込まれていく。その途端、ゆらりとディアブロスの体が揺れる。
「これは……」
構えた閃光玉を、シルフィードはゆっくりと下ろす。彼女は感じていた。エリア全体を支配していたディアブロスの強過ぎる気配が、収束していくのを。それは怒号（バインドボイス）の影響から脱した二人も同じだ。
一人、ディアブロスを狙撃していたフィーリア。その口元に笑みが浮かぶ。
ゆらりと揺れ、ディアブロスの巨体が力なく崩れ落ちる。砂上に倒れた瞬間、その巨体が生み出す衝撃と風が砂塵を巻き上げる。
倒れたディアブロスからは先程までの殺意に満ちた気配は消えていた。力なく倒れるディアブロスは、体を規則的にわずかに動かし――眠っていた。
眠るディアブロスを前に、四人はゆっくりと武器をしまうと、その

前に集まる。
「さすがフィーリアだな。うまく眠らせたな」
「クリュウ様のおかげです。麻痺状態だったからこそ、的確に睡眠弾を撃ち込めました」
シルフィードの言葉にフィーリアは照れたような笑みを浮かべると、近寄って来たクリュウを見て恥ずかしそうに言う。
彼女が撃っていたのは睡眠弾ＬＶ２。文字通り対象となるモンスターを眠らす事ができる特殊弾丸だ。フィーリアはクリュウの生み出した麻痺状態の間に的確に睡眠弾Ｌｖ２を当てて、ディアブロスを眠らせる事に成功したのだ。
「すごいよフィーリア。さっすが頼りになるよ」
「え？　あ、ありがとうございますッ」
クリュウに誉められ、フィーリアは嬉しそうに無邪気に微笑む。そんな彼女を彼の後ろで羨ましげに見詰めるサクラ。
「……クリュウ、私は？」
「え？　も、もちろんサクラも頼りにしてるよ」
「……そう」
「あぁッ！　せっかく私だけがお褒めいただいてたのにずるいですぅッ！」
クリュウに同じく誉められ、嬉しそうに小さな笑みを浮かべるサクラ。そんな横取り的な彼女をフィーリアが怒る。そんな三人を見て、シルフィードは微笑む。
「あ、シルフィードももちろん頼りにしてるからねッ」
「うん？　何だか取って付けたような言われ方だが、ありがとう」
思い出したように慌ててシルフィードにも言うクリュウの言葉に苦笑しつつも、ほんのりと頬を赤らめて喜ぶシルフィード。だがその笑顔も一瞬の事。すぐに表情は引き締まり、狩人のものに変わる。
「さぁ、雑談はここまでだ。剣士組は砥石を使って刃の切れ味を回復させる事。フィーリアにはシビレ罠の設置を頼む。用意が整った者から荷車から爆弾を下ろして設置するぞ。急げッ」
シルフィードの号令に、すぐに三人は行動を開始する。剣士組三人

はディアブロスの堅牢な甲殻に何度も斬りつけた為にすっかりボロボロになった切れ味を砥石を使って回復させ、フィーリアは一人荷車からシビレ罠を一つ取ってエリアの真ん中付近に設置に向かう。
砥石で切れ味を回復させた剣士組はすぐに荷車に近寄って大タル爆弾Ｇを取り出す。三人がそれぞれ持ち、数は三発。すぐにディアブロスに近づき、眠っている奴の近くに設置する。それぞれ頭に二発、足に一発だ。
フィーリアもシビレ罠の設置を終えて戻って来る。合流した四人は最後の確認を行う。
「よし。フィーリア、君が起爆させてくれ」
「了解しました」
シルフィードの指示にフィーリアがハートヴァルキリー改を構える。弾倉に装填するのは余った睡眠弾ＬＶ２。
「起爆次第、攻撃を再開する。撃てッ」
フィーリアが引き金を引くと、発砲音と共に弾丸が発射される。それは一直線に吸い込まれるようにして眠るディアブロスの顔のすぐ横に設置された大タル爆弾Ｇに命中する。途端、辺りを吹き飛ばすような大爆発がディアブロスの体を包み込んだ。
吹き荒れる爆風が四人を襲う。巻き上がり暴れ狂う砂塵に一瞬目をやらせそうになるが、手で遮断して防ぐ。ヘルムを被っていない女子三人の髪が暴れる。
もうもうと上がる黒煙の柱を凝視する四人。倒せたとは思っていない。だが、一体どれほどのダメージを与えられたか。息をするのも忘れながら、黒煙を凝視する。
「ぐぅ……ッ!?」
「あぅ……ッ!?」
「……ッ!?」
――黒煙が吹き飛び、天を震わす大咆哮（バインドボイス）が轟く。その爆音を近距離で受けた三人は耳を押さえてその場にうずくまった。皆、耳を塞いでいても痛いくらいに耳に響く怒号に顔を苦悶に歪め、本能に直接作用する恐怖に身を震わせる。

恐怖に身を震わせて目を瞑りながらうずくまるクリュウ。そんな彼の肩を唯一高級耳栓スキルを持つシルフィードが掴んで揺らす。
「しっかりしろッ！　奴はまだ健在だぞッ！」
クリュウだけではなく、フィーリアとサクラの肩も揺らして怒号（バインドボイス）から解放するシルフィード。その表情は緊張に染まり、脂汗が頬を流れる。
「固まっているのは危険だッ！　散開――ッ!?」
「グギャアアアアアオオオオオオオオッ！」
再び轟く大咆哮（バインドボイス）。三人はまたしても耳を塞いで崩れ落ちる。どんな優秀で熟練の狩人でもこの本能に直接作用する恐怖に打ち勝つ事はできない。動かなくてはいけないとは頭ではわかっているのに、体は言う事を聞かない。
「厄介な事をしてくれる……ッ！」
シルフィードは歯軋りしながら単独で黒煙に突っ込む。道具袋に手を伸ばしたは閃光玉。黒煙が晴れたと同時に投げて、奴を拘束するつもりだった。
風が吹き、黒煙の柱が崩れていく。次第に輪郭を失い、崩れていく黒煙の柱を見詰め、シルフィードは閃光玉を構える。そして一際強い風が吹き、黒煙の檻が消え去ると――そこに奴の姿はなかった。
「何ッ!?」
驚愕に顔を強ばらせるシルフィード。その頬を嫌な汗が流れ落ちる。歯軋りはより強く軋みを上げ、その表情に明らかな動揺が生まれる。
爆弾で消し飛んだ？　そんな訳がない。いくら大タル爆弾Ｇでもたったの三発でそこまでの威力はないし、そもそも黒煙の中で轟いた咆哮（バインドボイス）は確かに奴のものだった。それは、奴が健在だという何よりの証しだ。
考えられる可能性はただ一つ。
――刹那、地面が揺れる。
「しま――ッ!?」
いつもの冷静な彼女なら、こうなる事を予想して安易に近付く事は

なかっただろう。
仲間が危ない。何としてでも仲間を守らなければ。そんな想いが彼女から冷静さを失わせ、こんな無様な突撃ぶりを披露してしまった。
急いで動いても、もう避け切れない。だが、諦める訳にはいかない。
周りの音が全て聞こえなくなる。本能が何とかこの危機を脱しようと五感を今使うべきものに特化させているのだろう。視覚が限界にまで引き上げられ、迫り来る砂煙がゆっくりと見える。だが同時に、自分の体はもっと遅い。どんなに急いでも、避け切れない。
彼女の表情が、恐怖に染まる。
次の瞬間には、自分はあの巨大な角に貫かれて身を真っ赤に染めているだろう。そんな最悪のイメージが、脳に焼き付く。
そして地面が割れ、巨大な二本の巨槍が彼女を襲う――と、思われた。だが、現実は少し違った。
「グァァッ!?」
地面に飛び出したディアブロスは苦しげに藻掻きながら、下半身を砂の中に埋めて暴れている。それは決して、彼女を狙って砂中から角を突き上げたとは思えない、無様な姿だ。
眼の前で藻掻くディアブロスを凝視しながら、シルフィードはペタンと力なくその場に尻餅をついてしまう。そんな彼女に駆け寄る者がいた。
「シルフィッ！」
振り返ると、目の前にクリュウの顔があった。その表情は安堵に満ち溢れている。
「く、クリュウ……？」
「良かったぁ……ッ！　何とか音爆弾が間に合ったんだね……」
彼の言葉に、ようやく状況を理解する。今背後で砂の中に下半身を埋めて藻掻くディアブロスは彼女狙って砂中から意図的に飛び出したのではなく、彼が投げた音爆弾によって砂上に引き摺り出されたのだと。
もしも、彼の行動が一瞬でも遅れていれば、ディアブロスは砂を

蹴って砂上へと現れ、自分はあの巨大な角に串刺しにされていただろう。彼の投げた、たった一発の音爆弾が、寸前で奴の行動を妨害した――そして、自分は今生きている。
先程まで、死を覚悟すら仕掛けたシルフィード。だがしかし、結局は彼のおかげで助かった。
呆然とするシルフィードに向かって、クリュウはヘルムを取って嬉しそうに微笑んだ。
「約束したでしょ？　シルフィを守るって」
真っ直ぐであるが故に、飾り気がなくて、でもだからこそ心に響くその言葉。彼の優しさが溢れたその言葉は、彼女の心を打ち振るわせる。そして――
「……まったく、君という奴は」
小さく苦笑を浮かべるシルフィード。その頬を、涙が流れる。
恐怖から解放された安堵か、約束を守ってもらえた嬉しさか、彼の優し過ぎる優しさへの感動か。ゴチャゴチャに混ざった気持ちの中で、それは見つける事はできなかった。でも、今こうして目の前で慌てる彼を見ていると、何だか胸が熱くなる。
「し、シルフィッ!?　ど、どこか怪我でもしたのッ!?」
自分の身を案じて慌てる彼の姿がおかしくて、シルフィードは笑う。涙を拭い、「いや、大丈夫だ。砂が目に入っただけさ」と誤魔化しながら、彼女は立ち上がる。それでもまだ心配そうに自分を見詰めている、自分よりも背が低くて頼りなさげな彼の頭をそっと撫でる。そして、一言礼を言う。
「ありがとう、クリュウ」
クリュウはその言葉を聞くと一瞬呆けたような表情を浮かべたが、すぐにその表情を笑顔一色に染める。
「大した事じゃないよ。仲間として当然の事をしたまでさ」
言ってくれる。彼の言葉に口元に笑みを浮かべたシルフィード。しかしすぐにその表情を狩人のそれに引き締め直す。それを見てクリュウも脱いでいたヘルムを再び被り直し、戦闘態勢に戻る。
「……邪魔」

まるで二人の間を引き裂くように、二人の真ん中をサクラが突き抜ける。風を纏いながら突貫する彼女は引き抜いた飛竜刀【翠】を構えると、藻掻くディアブロスに襲い掛かる。がら空きの胴体に向かって、煌く剣先を閃かせる。

ヒビの入った甲殻を削り取るように刃を入れて、弾かれなようにしながら確実にダメージへと繋げる。豪快にして繊細な一撃の連続は、サクラだからこそできる芸当だ。

砥石を使って戻した切れ味は絶好調。先程までは弾かれた部位も、刃がしっかりと入り血を踊らせる。

度重なる攻撃の連続は確実にディアブロスの体力を削るのと同時に、刀本来の力を開花させる。

突然ディアブロスの動きが鈍くなるのを、サクラは見逃さなかった。その途端、彼女の口元に笑みが浮かぶ。

「……やっと」

暴れるディアブロスは苦しげに藻掻きながら、口からよだれを垂らす。サクラの飛竜刀【翠】の特殊能力は毒。クリュウの麻痺毒と同じく度重なる攻撃数で刃から体内へと流れた毒が、ようやく効果を発揮したのだ。

足下で砂の檻が壊れる音に、サクラはバックステップで距離を取る。直後、ディアブロスを縛っていた砂の檻が壊れ、浮き上がる。

上空へと上ったディアブロスを見詰め、サクラは不敵に微笑むと振り返る。

「……クリュウ」

「任せといてッ」

そう言ってクリュウは閃光玉を放る。炸裂する膨大な光は一瞬で空中を飛ぶディアブロスの視界を奪い、ディアブロスは悲鳴を上げて墜落した。

砂煙を巻き上げて落ちたディアブロス。それを見てシルフィードは不敵な笑みを浮かべた。

「まったく、容赦がないな君達は」

そう言いながら、背負ったキリサキの柄を握り締めてディアブロス

に近寄ると、藻掻くディアブロスの角に向かって剣を振り下ろす。
「そう言うシルフィード様も容赦ありませんよ」
そう言って苦笑を浮かべると、フィーリアは新しい弾を装填してディアブロスに対する射撃を再開する。
クリュウもデスパライズを引き抜くと急いで倒れているディアブロスに駆け寄り、藻掻く脚に向かって振り下ろす。叩きつけるように一撃し、二撃三撃と続け、最後に回転斬りを決める。もう一度と剣を振り上げた所でディアブロスが起き上がる。仕方なくクリュウは後退する。
起き上がったディアブロスを見て四人は後退を始める。シビレ罠へ誘導するつもりだ。そんな彼らを憎々しげに睨みつけると、ディアブロスは突如砂の中へ潜り始める。クリュウが慌てて音爆弾を手を投げるが、寸前でディアブロスはこちらに向かって移動を始め、音爆弾は奴のいない砂上で炸裂。無駄に終わる。
迫り来るディアブロスに対して慌てて散開する四人。その目の前で、ディアブロスが砂上へと現れる。そこはちょうどシビレ罠の設置していた場所。砂を巻き上げて現れたディアブロスは同時にシビレ罠も薙ぎ払った。天を舞った後、シビレ罠は地面へと落ちて粉々に壊れてしまう。それを見てシルフィードは舌打ちする。
「貴重なシビレ罠を壊されたか……」
続けて、ディアブロスはクリュウに向き直ると姿勢を低くして突進して来る。フィーリアの必死の銃撃を無視して駆けるディアブロス。クリュウは横に跳んでその攻撃をギリギリで避けた。
砂の上を滑走して止まるディアブロスに、残る三人が急いで殺到するが、それを拒むようにディアブロスは砂を掻き分けて砂中へと消える。先陣を走っていたサクラは起き上がったばかりのクリュウに近づき、心配そうに彼を見詰める。
「平気だよ。それより、固まってると危ないよ」
「……わかった」
四人は散開してディアブロスの砂中からの強襲に備える。奴の消えた部分の砂、例え一粒でも奴の動きを表す手がかりを見失わないよ

うに凝視する四人。砂漠の灼熱の日差しがじわりと彼らの体温を押し上げ、緊張感と相まって頬を汗となって流れる。
一体どれくらいの時が経ったのか。十数秒、数十秒、数分。実際にはほんの数秒の出来事でも、まるで時間がゆっくり流れているかのような錯覚を覚える程に長い沈黙。
そして、時が動く。
「え？」
クリュウは目の前に光景に思わず声を漏らした。
ディアブロスは突如方向転換すると、そのままエリア1の方へ砂煙と共に動き、そして消えてしまう。
あまりにも呆気ない展開に、クリュウだけではなく他の三人も呆然とエリアから去ったディアブロスが消えた地点を見詰めたまま立ち尽くす。
真っ先に我を取り戻したのはシルフィード。フゥとため息を零すと引き抜いていたキリサキを背負い直す。
「匂いが移動した。今奴は隣のエリア1だな」
他の三人もその言葉に全身に漲らせていた緊張を解く。全員、一撃でも当たれば大怪我というディアブロスの攻撃に常に神経をすり減らしながら戦っていただけあって、力を抜いた途端にぐったりという様子。フィーリアはペタンとその場に崩れ落ち、サクラも彼女らしくなく膝を立てて腰を落としている。そんな二人の様子を見て、そっと頬を緩めるシルフィード。
クリュウもヘルムを脱いだ途端、突如彼の体が吹き飛んだ。
無様に地面に倒れたクリュウは背中に手を当てて苦痛に顔を歪める。振り返ると、すっかり忘れていたこのエリアにいたもう一つの勢力が……
「が、ガレオス……？」
緊張を解いていた為か、それとも疲れが溜まっていた為か、クリュウは呆気無く気を失うのであった。

第１５７話　優しさに満ちた膝枕　守るという意味のすれ違い

「んぁ……？」
目が覚めると、目の前には青空が広がっていた。
自分が横になっている感覚。まだ意識がハッキリしていないのか、思考がうまく機能しない。だが、確か自分は狩猟中だったはず。何で、こうして横になっているのか。
視線をズラしていくと、シルフィードの顔が見えた。自分はどうやら彼女の横で眠っていたのか、彼女の顔を下から見上げる形になっている。
どこか遠くを見詰めているシルフィード。すると、ふと下を見て自分が起きている事に気づいたらしく、彼女は優しげに微笑んだ。
「気分はどうだ？　クリュウ」
「シルフィ……？　あれ、僕何で……」
記憶がまだしっかり整理されていない。確か自分は彼女達と一緒にディアブロスと戦っていたはずだ。そして……
「ガレオスに後ろから襲われて呆気無く気絶したんだよ。まったく、疲れていたとはいえ情けないぞクリュウ」
肩を竦め、苦笑しながら言う彼女の言葉にようやく思い出す。自分は確かディアブロスを撃退したすぐ後、気を抜いていた所をガレオスに背後から砂ブレスを受けて気を失ったのだ――何とも情けない事この上ない話だ。
「まったく。君が倒れた後の二人を止めるのには苦労したぞ。ディアブロスの狩猟中だというのに二人して世界中のガレオスを根絶やしにすると豪語して戦列を離れようとするからな。首根っこを掴んで説得するのも楽ではないぞ。特にあの二人、妙に息が合ったパニックぶりを見せるからな」
苦笑しながら言うシルフィード。愚痴のようにも聞こえるが、彼女の口調からはそんな感じは微塵も感じられない。面倒でも可愛い妹

達の話をしている姉、そんな感じだ。その優しげな姿に、クリュウはそっと微笑んだ。
かっこいいシルフィードももちろん好きだが、こういう優しくて笑顔が素敵なかわいいシルフィードもまた大好きだ。
と、そこで自分の状況に気づく。砂の上に寝ているという事は何となく感覚と風景でわかる。だが、それにしては頭の高さが高い。まるで枕を置いているかのように適度な高さ。そして気づく。自分とシルフィードの妙に近しい距離。そしてこの頭の下のものが意味するものを――
「ひ、膝枕ッ!?」
頭で理解した途端、クリュウの顔が真っ赤に染まる。それを見て、平然とした表情を浮かべていたシルフィードの頬もほんのりと赤く染まる。
「か、勘違いするなクリュウ。膝枕と言っても鎧越しだから素肌は触れておらん。君が頭を置いているのはそんな装甲の上に置かれたタオルだ。やましい事などない」
「いや、確かにそうなんだけど……」
きれいな女の人に膝枕をしてもらっているという状況がすでに彼にとっては赤面ものなのだ。だが正直まだ体が痛むのでもう少し横になって痛いのが本音だ。ガレオスにやられてこの様とは、情けない事この上ない。
様々な恥ずかしさが重なり、頬を赤らめたまま黙るクリュウ。そんな彼を不思議そうにシルフィードは見詰めるが、特に声を掛ける事もしないので二人の間には自然と沈黙が舞い降りてしまう。それが気まずくて、クリュウは慌てて話題を振ってみる。
「そ、そういえばフィーリアとサクラの姿が見えないけど、二人はどうしたの？」
「フィーリアにはディアブロスに対しての狙撃へ向かった。サクラはその護衛だな」
「えぇッ!?　そ、そんなッ！　四人掛かりでもあんなに苦戦しているのに二人なんて無茶だよッ！」

慌てて身を起こそうとするクリュウだったが、ピッと立てられた彼女の人差し指が額に当たり、それを阻む。力づくでいけば何の問題もない程の指の力なのに、まるで姉に怒られる弟のような気分になり、思わずクリュウはそこで止まってしまう。
　すると、シルフィードは「落ち着けクリュウ。それと、一応まだ起きない方がいいぞ」と注意して彼の体を元通りに横に倒す。
「私とてそれくらい承知している。何も正面から戦えなどと無茶は言っていないぞ」
「じゃあ……」
「今奴はエリア3にいる。君も見たと思うが、あそこにはちょっとした高台があっただろう？　フィーリアにはそこに立って狙撃するよう指示している」
　確かにあそこには高い高台があった。高さは、ディアブロスの通常体勢で言うと背中くらいの高さか。そこまで考え、クリュウは彼女の言う指示の意図に気づく。
「……そっか。ディアブロスは飛ばないしブレスも撃たない。突進しかないから、安全に狙撃に専念できるんだ」
「そういう事だ。少し卑怯かもしれんが、狩りは生きるか死ぬかの命の奪い合いだ。あらゆる手段をもってしてでも勝つ。先生流の持論だ」
　そう言って彼女にしては珍しく、イタズラっぽい笑みを浮かべた。その見慣れない彼女の笑顔に、不意を突かれたクリュウは思わずドキッとしてしまった。一瞬だけ、いつも大人びた彼女が年相応の少女の姿を見れたような気がした。
「……シルフィとロンメルさんは、どういう経緯で知り合ったの？」
　クリュウはふと、ずっと気になっていた疑問をぶつけてみた。
　異国エルバーフェルドに来て、思わぬ形で師弟が再会した。それまで、シルフィードに師匠がいる事も知らなかったクリュウ。普通に考えれば師がいる事くらい普通のはずだが。彼女の口から直接そんな話を聞いた事はなかった。
　クリュウの問い掛けに、シルフィードの表情が曇る。そんな彼女の

表情を見て慌ててクリュウは「いや、話したくないなら別に言わなくてもいいんだけどッ」と話を掻き消そうとする。だが、シルフィードは小さく首を横に振った。
「いや、君には言うべきかもしれないな。君だって過去の話をしてくれたのに、私だけ言わないのは不公平だしな」
そう言って、シルフィードは何事かを考える。そして、ゆっくりと口を開いた。
「全てのモンスターを虐殺する為、力を追い求めるあまり私は力こそ全てという剣聖ソードラントに加わっていた。奴らは狩猟に快楽を感じるような者達ばかりで、スリルを求めるあまりにわざとモンスターを街に入れて市街戦を行うような性根の腐った連中だった。だが、力を欲していた私は奴らのその強さに魅せられ、彼らと共にいた。さすがに市街戦には参加してはいないがな」
剣聖ソードラントは、異名にこそ聖という文字がついてはいるが、実際には悪魔のような性格破綻者の集団。彼女の言ったような市街戦は珍しくなかったそうだ。ヴィルマで見たあの惨状を、わざと作り上げていた。そう思うだけで吐き気すら感じる。
だが、彼女はそこに身を置いていたのだ。復讐に狂い、ひたすらに力を追い求めていた、昔の彼女は。
「ある日、休暇をもらった私は一人でドンドルマの街を散策していた。と言っても、今も昔も女らしい事は何もしていなかったから、酒場でビールを飲んでいただけだがな。そこで先生が声を掛けてきたんだ」
「ふぅん、何て？」
「よぉ嬢ちゃん。これから俺と一緒にホテルでも行くか？」とな」
「それってまんまナンパだよねッ!?　しかも通過点を一気にぶっ飛ばして直球勝負のッ！」
男女の出会い方としては、ある意味最悪とも言っていい状況だ。まぁ、客観的に彼の様子を見ていると確かに軽そうな人という印象は抱いたが……
「そ、それで？」
「うん？　いや、当然無視したぞ」

「そ、そりゃそうだよね」
「――だがあまりにもしつこいので、一発土手っ腹に鉄拳を入れて黙らせた」
「それって明らかに過剰防衛だよねッ!?　正当防衛を主張しても通らないよッ!?」
　一応怪我人という扱いなのだが、構わず反射的にツッコミを入れるクリュウ。今の彼女からは信じられないような行動だ。先日彼女は昔の自分はかなり無礼だと言っていたが、これはそういうレベルではない。
　クリュウのツッコミに、シルフィードは苦笑を浮かべる。
「昔の私は、今のサクラに結構似ていたからな。彼女を見ていると昔の自分を思い出すしな」
「シルフィって、サクラみたいだったの？」
　信じられないし、ちょっとショックを受けるクリュウ。チーム一の常識人で頼れるリーダーでカッコいい狩人。それが昔は傍若無人で他人を片っ端から突っぱねる非常識人だったなんて……
「……そりゃ確かに、再会した時にロンメルさんが驚くのも無理ないよ」
「確かにな。先生もずいぶんと驚いていたな。まぁ確かに、昔に比べればずいぶんと落ち着いたからな」
　落ち着いたとかそういうレベルではない。人が変わった、そういう言葉が当てはまるような激変ぶりだ。
「先生は何かと私に構うようになって。ソードラントを抜けるよう何度も説得してきた。私がいくら突っぱねても、だ。数ヶ月ねばられて、ちょうどその頃にリーダー達の方向性の仲違いを起こしていたので、私はソードラントを抜けた」
　そういえば以前に彼女はソードラントを抜けた原因を目指す道が違ったと言っていた。方向性の違い、彼女と彼らを分けたのは、一体何だったのだろう。
　――だが、聞くまでもないだろう。狩りを楽しむ為だけに市街戦に持ち込むような連中と、シルフィードが一緒な訳がない。仲間想い

で、正義感の強い彼女を見ていると、そう確信する。
「先生は「今日から俺がオメェのお師匠様だ。ビシバシ鍛えてやるから覚悟しておけ」と笑いながら私の肩を叩いた。以降、私は先生の下で修行を積み、先生の説得もあって次第に復讐の鎖から解き放たれた。先生の下を卒業した後は、再びソロハンターとして実績を積み重ね、周りからは《蒼銀の烈風》などと持て囃（はや）されるようになった――そして、君に出会った」
　そう言って、シルフィードはクリュウを見て微笑む。その優しげな微笑みは、とても復讐に狂っていたとは思えない程きれいで、素敵で、温かくて。クリュウは思わずカァッと頬を赤らめてしまう。
「先生のおかげで闇から脱し、君と出会って光を知った。先生には感謝している。もちろん、君にもだぞクリュウ」
「いや、僕は別にロンメルさんと違って何かしたって訳じゃないよ。むしろ守られてばっかりで情けないくらいだし」
「……まったく、人の感謝は素直に受け取っておけ。どう言い繕っても、君と出会えた事で私は《幸せ》というものを知った。この事実は変わらんぞ――だから、ありがとうクリュウ」
　優しく微笑むシルフィードの言葉とその表情に、クリュウは頬を赤らめて「う、うん……」小さく返事をするだけで黙ってしまう。こう面と礼を言われると、だいぶ恥ずかしい。嬉しくもあるが、恥ずかしいのだ。
「――さて、そろそろ起きれるかクリュウ？　一度、拠点（ベースキャンプ）に戻るぞ。いつまでもこうして砂漠の真ん中で寝ていられる程、ここは安全じゃないからな」
　彼女の言葉に、自分がまだエリア5にいる事を思い出すクリュウ。見た所ガレオスの姿がないのは、おそらく怒り狂った二人が容赦なく駆逐したのだろう。想像するだけで恐ろしいが、そのおかげでこうしてゆっくりできていたのだから一応感謝はしておかないと。
　クリュウは身を起こそうとするが、まだ背中が痛む。どうやらこれは本格的に薬草でも塗っておかないとマズそうだ。でも起き上がれない事もないし、歩けない事もない。薬草を塗ってしばらくすれば問

題ない程度だろう。
　クリュウは上体を起こし、膝を立てて起き上がろとする。すると、スッと目の前にシルフィードが立ち、ゆっくりと腰を下ろして背を向ける。
「シルフィ？」
「まったく、怪我人が無茶をするな。ほら、おぶってやるから早く乗れ」
　その言葉に、彼女の行動を理解する。クリュウは慌てて手を横に振って「だ、大丈夫だよッ！　一人で歩けるからッ！」と断るが、シルフィードは譲らない。
「バカ者。こんな所で無茶をしていざという時に機能不全を起こされたら敵わん。私はリーダーだ。チームメイトの体調管理を負う義務がある。そんな無茶をさせられるか」
「で、でも……」
　女の人におんぶしてもらうのは男としてのプライドが……、と心の中でつぶやく。要は恥ずかしいのだ。最近本気で男としてのプライドやら自尊心が見事に木っ端微塵状態な彼にとって、踏み止まりたい一線なのだ。しかしある意味似た者同士であるシルフィードはそんな彼の心中など察する事はできずに一喝する。
「さっさとしろクリュウッ。時間は無限にある訳ではないのだぞッ」
「は、はいぃ～ッ」
　結局クリュウの方が折れ、シルフィードにおぶられる事になった。シルフィードは男の子一人背負っているというのにそれを感じさせない程に立ち上がって歩き出す。さすがは重量のある大剣をいつも背負っているだけの事はある。
　シルフィードの背中に背負われ、クリュウは恥ずかしそうに頬を赤らめながら沈黙する。風が吹くたびに彼女のポニーテールが揺れ、髪が頬を撫でる。そのたびに彼女のうなじから、彼女の汗の混じった匂いが鼻をくすぐる。臭い訳では当然ない。むしろいい匂いで、そう思う自分が変態みたいで、色々な恥ずかしさで彼の顔は真っ赤に染まる。

一方、クリュウを背負うシルフィードは背中に感じる彼の重さと温もりに頬を緩ませていた。
ディアブロスに殺される。そう覚悟した危機を救ってくれた頼もしいパートナー。なのにその体は思っていたよりもずっと軽い。こんなにも軽くて小さな体で、自分を必死になって守ってくれた。それが、嬉しくて仕方が無いのだ。
「し、シルフィ。重くない？」
「うん？　心配するな、君程度をおぶる事など造作もないぞ」
「いや、それはそれでショックなんだけど……」
「どうした？」
地味にダメージを受けているクリュウに対し、自分が彼を傷つけたという自覚はまるでないシルフィードは首を傾げる。そんな彼女を見て苦笑しつつ、クリュウは言う。
「いつか、僕がシルフィを背負えるようになるよ」
クリュウの言葉に、シルフィードの口元に笑みが浮かぶ。
「私より背の低い君が？」
「うぐ……ッ」
返す言葉もなく黙ってしまうクリュウの反応をおかしげに笑うと、しかしシルフィードはそっとつぶやく。
「――楽しみにしているぞ」
クリュウは一瞬彼女のつぶやいた言葉の意味がわからず、戸惑いの表情を見せる。だが、その意味を理解すると笑顔に変わる。
「うんッ」
クリュウはそっと彼女の首に回した両腕に力を込めて、少しだけ強く抱きつく。シルフィードはそんな彼の行動に頬を赤らめながら微笑むと、ゆっくりとした足取りで砂漠を進む。
拠点（ベースキャンプ）に戻ると、すでにそこには先客がいた。
「クリュウ様ッ!?　大丈夫ですかッ!?」
「……クリュウ」
天幕（テント）の前で向かい合うように腰掛けて何事かを話していたフィーリアとサクラ。クリュウとシルフィードの姿が見えた途端、

慌てて立ち上がって駆け寄って来る。その表情は安堵一色に染まっている。
「奴が移動した事はここに来る途中でわかったが、首尾はどうだ？」
クリュウを背負いながらシルフィードは狙撃を担当したフィーリアに尋ねると、フィーリアは自信満々な表情を浮かべる。
「シルフィード様の仰った通り、高台はディアブロスの攻撃が届かない為に一方的な狙撃を行えました。通常弾ＬＶ２の速射を大量に命中させたので、それなりのダメージを与えられたかと」
そう言ってフィーリアは自信を見せる。それを見てシルフィードはほっとしたようだ。特に怪我もなく、しかも確実なダメージを与えられた。これは未だに劣勢に変わりない状況を好転させるきっかけになるかもしれないと考えたのだろう。
一方、サクラはトコトコとシルフィードに背負われているクリュウに近づくと彼の鎧の裾を摘む。
「サクラ？」
「……クリュウ、大丈夫？」
不安そうな瞳で見詰める彼女を見て、心配してくれているのだろうと察すると、クリュウは安心させるように優しく微笑む。
「ありがとう。でも平気だよ。心配させてごめんね」
すると、サクラは首を横に振る。
「……夫の心配をするのは、妻の役目だから」
「君は本当に包み隠さないな」
サクラの発言にシルフィードは呆れ半分感心半分という具合に苦笑を浮かべる。すると、それまで穏やかな隻眼でクリュウを見詰めていたサクラが、突然刃物のように瞳を鋭くさせて、シルフィードを睨みつける。
「……さっさとクリュウから離れろシルフィード」
「わかった。わかったからそんな怒り狂った瞳で見ないでくれ。はぁ、何が悲しくてチームメイトに脅されなきゃならんのか……」
シルフィードはため息混じりにつぶやくと、クリュウを天幕（テント）の中のベッドまで連れて行き、彼を下ろす。

「ごめんねシルフィ。世話掛けさせちゃって」
「気にするな。これくらいどんどん掛けさせろ」
　そう言ってシルフィードは微笑むと、一人で天幕（テント）から出ると心配そうに中を見詰めているフィーリアに声を掛ける。
「フィーリア。クリュウの手当をしてやってくれ」
「え？　わ、私がですか？」
「うん？　君が適任だと思ったのだが。断るなら私が代行するが」
「い、いえッ！　ぜひにも私にさせてくださいッ！」
　そう言ってフィーリアは慌ててクリュウの手当の為の道具を片っ端から集め始める。そんな彼女の甲斐甲斐しい様子を微笑みながら見守っていると、視界の隅にキラリと光るものが……
「サクラ。首元に刀を押し付けるのはやめてほしいのだが……」
「……なぜ私が候補にいない」
「先程の分派と同じ理由だ。クリュウの素肌を見て君が正気でいられるとは思えん」
「……エリア２へ来い。貴様とは一度徹底的にやり合わないといけないようね」
　天幕（テント）の外でそんな出来事があるとは露知らず、天幕（テント）でクリュウは一人半裸になって薬草を塗る準備をしていた。するとそこへ意気揚々とかき集めた救急道具を持ってフィーリアが入って来る。
「クリュウ様。私が責任もって手当してさしあげ――ってぇぇぇぇぇぇぇッ!?」
「うわッ!?　ちょっといきなり入って来ないでよフィーリアッ！」
　突然女の子に入られて慌てるクリュウ。一方のフィーリアもまだ覚悟していない状態でいきなりクリュウの半裸を見た為か、顔を真っ赤にして慌てふためく。道具類を一度横の小机に置き、両手で真っ赤になった顔を隠す。
「す、すみませんッ！」
「……まぁ、いいけどさ。それで、どうしたの？」
「あ、いえ、クリュウ様の手当をシルフィード様からお受けしたので

……」
「シルフィが？　もう、そんなに心配しなくてもこれくらい一人でできるよ」
　シルフィードの心配性にも困ったものだと言いたげにため息を零すクリュウ。だが、そんな彼の言葉にフィーリアは「ダメですッ」と断固拒否する。
「手当はちゃんとしなくちゃダメです。その為に私が来たんですから、クリュウ様は背中を向けてるだけでいいです」
「いや、一人でできるって。フィーリアだって神経すり減らすような任務の後なんだから、僕に構わずゆっくり休んで――」
「ダメですッ！」
　大声で怒るフィーリアにクリュウは多少驚きながら、彼女の表情を見て拒否はできそうもないと悟ると、ため息を零して諦める。フィーリアはすごく謙虚で自分の言う事は快く引き受けてくれる心優しい子なのだが、こういう時はどんなに言っても絶対言う事を聞かない。クリュウの事が絡むと自分の意見をハッキリと言うし、それをそう簡単にはねじ曲げない頑固な子になってしまうのだ。まぁ、それも彼を想うがゆえの行動だという事は言うまでもないだろう。
　諦めたクリュウは背中を彼女に向けて手当を待つ。その間にフィーリアは打撲によく効く薬を取り出す。リリアが調合した特注品なので、薬草なんかよりもずっと治癒が早い優れものだ。
「それじゃ、薬を塗りますよ」
　目の前に愛しい人の素肌の背中。フィーリアの顔はカァッと真っ赤に染まり、変に緊張してしまって手が震えている。
「フィーリア？」
　黙ったまま固まる彼女を不審に思ったクリュウは振り返り、彼女の名を呼ぶ。その声にフィーリアは慌てて「す、すみませんッ。すぐに手当しますからね」と準備を始める。
　ベッドに二人で腰掛け、クリュウはフィーリアに背を向けて座っている。フィーリアは頬を赤らめたままビンを開けて塗り薬を自分の手に塗ってならす。そして、彼の背中の少し青くなっている部分に

塗っていく。
　触れた途端、鋭い痛みが走って軽く悲鳴を上げるクリュウ。しかしそこは曲がりなりにも男の子。我慢する。
　フィーリアはできるだけ手早く薬を塗り、しっかりと打撲部分全体に塗れた事を確認すると、ビンを閉じる。あとは包帯を巻くだけ。包帯を手に取って彼の体に巻いていく。その時、ふと視線に入ったのは彼の背中の傷。女の子でも羨ましいくらいに真っ白できめ細かい彼の肌。しかしそんな肌に包まれた背中において唯一の異質な存在。背中全体を一直線に走る古い裂傷。見ているだけで、痛々しい古傷だ。
「……クリュウ様、痛みますか？」
「え？　まぁ、薬を塗るとしばらくはちょっと痛いからね。でもすぐに収まるさ」
「いえ、そうではなくて……その、古傷の方は」
　口ごもる彼女の言葉にクリュウは一瞬彼女の言いたい事がわからなかったが、すぐに察するとクリュウは安心させるように笑みを浮かべた。
「大丈夫だよ。もうとっくに完治してるからさ」
「そ、そうですよね。いえ、こうして改めて間近で見るとすごい傷跡だなぁって……」
「まぁ、当時は相当な大怪我だったからね。気を失ってたから覚えてないけど、血塗れだったみたいだし」
　ルフィールを庇ってドスファンゴの角に貫かれた時、彼はそのまま気を失っていたので記憶がない。一瞬死すら覚悟したかと思ったら、次の瞬間には拠点（ベースキャンプ）で救護アイルーに荷車から捨てられていたのだから。その間の記憶はないが、話によると相当危険な状態だったらしい。だが、今こうしてピンピンしてるのだから特に気にする事もない。傷跡なんて男ならむしろ勲章みたいなものだと、見た目に反して妙に男らしい感覚のクリュウ。
　包帯を巻き終えたフィーリアはしばし彼の傷跡をジッと見詰めたかと思うと、そっとその傷跡を指先でなぞる。

「……でも、さすがクリュウ様ですね。女の子を庇う為に、身を盾にした事を平然としてしまう。普通の人には早々できないような事ですよ」
「そうかな？　まぁ、その時は必死だったからよく覚えてないけど」
「――でも、私の前ではそういうような無茶はしないでくださいね」
――刹那、頬を金色の髪がくすぐった。背中に感じるのは温かな温もり。優しく、包みこむような感覚。振り返らずとも、クリュウの顔が真っ赤に染まる。
「ふぃ、フィーリア？」
背中に突如フィーリアに抱きつかれたクリュウは顔を真っ赤にして狼狽える。慌てて離れようとするが、彼女はそれを許さない。
「フィーリア、あの、その……」
「――嫌ですからね」
ポツリと、耳元で彼女がつぶやく。
「……サクラ様の為、シルフィード様の為、誰かの為。ましてや私なんかの為にクリュウ様が傷つき、もしも、死んでしまわれたら。私、そんなの耐えられません」
背後から抱きつかれているので、彼女の表情は見えない。だが、耳元で囁かれる彼女の声は微かに震えていた。その震えが意味するものを、クリュウは察する。
「ふぃ、フィーリア……」
「ご自分の身を、最優先にお考えください。お願いします」
背中に、温かな水滴が落ちる。クリュウはその熱に何も言えなくて、ただただ沈黙を貫き続ける。
気まずい沈黙が、長く続いた。数分にも十数分にも感じられた沈黙、だが実際にはほんの数秒。そっと、背中を包んでいた温もりが離れた。だが、クリュウは振り返るのが怖くてそのまま前を見詰め続ける。その間に、背後ではフィーリアが片付けをしている気配。
「私は、そういう心優しいクリュウ様が大好きです。でも、誰かの為に自分の身を簡単に犠牲にしてしまう、そんな自分の命を軽視するようなクリュウ様はあまり感心できません」

「別に軽視してる訳じゃないよ」
「でしたら、ちゃんと行動で示してください。私だけじゃありません。サクラ様もシルフィード様も、そういう危なっかしいクリュウ様をいつも心配されています。どうか、その事だけは胸に留めておいてください」
そう言い残し、フィーリアは天幕（テント）を出て行く。一瞬だけ見えた彼女の横顔は、やっぱり泣いているように見えた。
手当を終えたクリュウはそのままベッドに倒れた。天幕（テント）の天井を見上げながら、ポツリとつぶやく。
「……だからって、みんなのうちの誰かでも僕は失いたくないんだよ」
フィーリアがクリュウを大切に想っているように、クリュウもまた皆を大切に想っている。
――それこそ、自分の身を犠牲にしてでも守りたい程に。
頭の中がゴチャゴチャになって、クリュウは考える事から逃げるように短い仮眠を取り始めるのであった。

第１５８話　怒涛の逆襲劇　絆に結ばれし乙女達の奮戦

クリュウの仮眠が終わり、全ての支度が終わった頃には砂漠の空は夕焼けに染まっていた。
朝から始まった狩猟は戦闘時間の長さもさる事ながら、広大な砂漠を徒歩で歩き回らなければならない為に思いの外時間が経つのが早い。それだけの長い間、時折気を緩めたりするものの基本的には神経を研ぎ澄ませ続けなければならない為、身体的疲労もさる事ながら精神的疲労も大きい。事実、四人の表情には朝とは違い明らかな疲労の色が見える。
拠点（ベースキャンプ）を出発し、エリア２へと達したクリュウ達。しかしそこで先頭を歩いていたシルフィードの表情が厳しいものに変わった。
「しまった……」
「どうしたの？」
仮眠の間に寝癖がついてしまったのか、ヘルムを取って律儀にそれを直しているクリュウは彼女のつぶやきに首を傾げる。そんな彼の問い掛けにシルフィードは申し訳なさそうな表情で振り返った。
「ペイントの効果が解けている。奴を見失ってしまった……」
シルフィードの発言に、三人は疲労の色が濃くなる。この広大な砂漠を、またディアブロスを捜索する為に歩き回らなければならないとなると、かなり厳しい。
明らかに士気が下がる三人を見て、シルフィードは慌てて言葉を続ける。
「いや、大丈夫だ。こういう時の為に先生から信号弾をもらったんだからな」
「そっか。そういえばそんな物あったね」
思い出したようにクリュウが言うと、他の二人もほっと胸を撫で下ろした。この疲れた体で戦闘はともかく、失敗すれば体力を無駄に削

るだけになってしまうような捜索は正直ごめんだ。特にフィーリアはこのメンバーの中で最も体力がないのだから。その安堵感も一番だ。
「それでは、早速打ち上げましょうか」
フィーリアの言葉にうなずき、シルフィードは早速信号弾の打ち上げの準備に掛かる。
夕焼けに染まったセクメーア砂漠上空に待機している『イレーネ』。気嚢も夕焼けに染まり、雲が緩やかに流れるように『イレーネ』も風に乗って穏やかな浮遊を続けている。
艦橋には相変わらずカレンが居座っていた。司令官用の席に腰掛け、仕事をしている。こんな祖国から遠い地に来ていても、彼女は一国の一軍最高司令官。仕事は山ほどあるのだ。
書類の束に目を通しては海軍総司令官として許可できる事項にはサインをし、許可できないものについては再検討もしくは破棄のいずれかを決定して印を押す。その際にはその事項のどこが悪いのかを羽根筆で記入する事も忘れない。
そうして夕焼けに染まる艦橋で仕事を進めていた時の事。
「司令官。信号弾が上がりました」
見張りを行っていた兵が双眼鏡から目を離してカレンに報告する。カレンは羽根筆を置くと席を立ち、窓から眼下を見下ろす。すると、砂漠の真ん中。地図にしてエリア2と思われる場所から　赤い信号弾が上がっているのが見える。それを見てカレンはフゥと小さなため息を零すと、兵に指示を出す。
「ディアブロスの現在位置は捕捉しているわね？　奴の現在位置を地図と照らし合わせて眼下の討伐隊の面々に発光信号で送って」
カレンの指示に兵達が慌ただしくディアブロスの捜索を開始する。カレンは大急ぎで自分の命令を実行に移す兵達を一瞥し、首に掛けた双眼鏡で眼下の四人を見下ろす。その視線は自然とこちらの反応を待って空を見上げているクリュウに注がれる。
「……まるでエサを待っている雛鳥みたい」
そう言って小さく笑みを浮かべるカレン。しかしすぐにその表情

は引き締まり、再び席に戻って書類整理を再開する。
心なしか、その表情が少しだけ明るくなったようにも見える……
『……』
一方、地上の討伐隊ことクリュウ達四人は思わぬ事態に呆然としていた。
上空に待機している『イレーネ』からは先程からチカチカと発光信号でディアブロスの位置を彼らに伝えている。だが、それを見詰めるシルフィードの頬を一筋の汗が流れる。
「ど、どうしたのシルフィ？」
「……すまん。私は発光信号がわからないぞ」
「えッ!?」
恥ずかしくて振り返る事もできないのか、シルフィードは呆然と発光信号を見詰め続ける。だが、その意味は全く理解できていない。
一方、クリュウは明らかに動揺している。
「じゃ、じゃあディアブロスの位置はわからないの？」
「まぁ、そういう事になるな……」
「えええぇぇぇッ!?」
思わぬ形で出鼻を挫かれたクリュウ達。呆然と『イレーネ』を見詰めているシルフィードの、いつになく小さな背中からクリュウは縋るような目でフィーリアに振り返るが、その視線に気づいたフィーリアはブンブンと首を横に振る。
「わ、私だってわかりませんよッ！　そもそも発光信号は軍で使われているものなんですから」
「……とすると、これは向こう側のミスだよね？」
クリュウの力ない問い掛けにシルフィードとフィーリアはうなずく。クリュウの言う通り、相手はこちらが一般人だという事を忘れているのではないだろうか。軍人にしかわからない発光信号を使われてもわかる訳がない。
「さて、仕方ないな。手分けしてまたディアブロスを捜索するぞ」
ようやく平静を取り戻したシルフィードは振り返り、仕方ないとばかりに班分けを考える。クリュウとフィーリアもため息を零しなが

らもそれしか方法がないとなると素直に従う。
話し合いの為にシルフィードへ近づこうとするクリュウ。だが、突如その腕を誰かに抱き留められる。振り返ると、ジッとこちらを見詰めているサクラと目が合った。
「さ、サクラ？」
「……こっち」
そう言ってサクラはクリュウの腕を引っ張って歩き出す。するとすぐさまフィーリアが「サクラ様ッ！　こんな時も抜け駆けするなんてズルいですッ！」と怒る。
「いや、そういう問題じゃないのだが……サクラ、どこへ行くつもりだ？」
「……エリア７」
「待て。捜索のエリア分けは今から行うから」
「……その必要はない」
「なぜだ？」
サクラはクリュウの腕に抱きついたまま振り返ると、平然と断言する。
「……奴はエリア７にいる」
「どうしてそんな事がわかる？」
シルフィードだけではなく、クリュウやフィーリアも彼女の方を見て言葉を待つ。そんな三人の疑問を答えるように、サクラは淡々と述べた。
「……さっきの発光信号がそう言ってた」
「さっきのって……待てサクラ。君はあの記号がわかるのか？」
驚くシルフィードの問い掛けに、サクラは無言で頷くと、同じく驚いたままでいるクリュウの腕を引っ張ってさっさとエリア７を目指す。
しばし呆然とそんな二人の背中を見詰めていたフィーリアとシルフィードだったが、フィーリアは慌てて「サクラ様ッ！　そのようにクリュウ様と密着なされるのは卑怯ですぅッ！」と二人を追い掛けて走り出した。

シルフィードは疲れたようにため息を零すと、クリュウが忘れて行った荷車を引いて歩き出す。その視線は、クリュウに抱きつくサクラに注がれる。
「……本当に世の中のルールに縛られない奴だな、彼女は」
苦笑しながらそうぶつやくと、やれやれとばかりに荷車を引いて三人を追い掛ける。
一行は一路、ディアブロスがいると思われるエリア7を目指して北上を開始した。
エリア3へと差し掛かった頃、先頭を歩いていたフィーリアが足を止めた。
「どうしたの？」
「あ、いえ。先程あの高台でディアブロスを狙撃したのですが……」
そう言って彼女が指さしたのは、エリア2に繋がる道の左手にある人の背丈より少し高い程度の高台。フィーリアとサクラはクリュウが気絶している間にあそこからディアブロスを攻撃していたらしい。
「その時、おかしな現象が起きたんです」
「おかしな現象って？」
「……ディアブロスは何度もあの高台に向かって突進して来た。そのたびに角を岩に突き刺していたんだけど」
「――その度に抜けづらいのか、しばらく動けないという事が何度もあったんです」
あれは何だったんでしょうか、とサクラと話すフィーリアの言葉を聞いたクリュウはしばし思案顔になる。そんな彼を見てシルフィードが「どうしたクリュウ？」と尋ねるが、彼は無言で考え続ける。そして、
「お、おいクリュウ」
シルフィードの声を振り切ってクリュウは二人が登っていた高台の前に立つ。表面の様子をジッと観察していると、ある事に気づく。
「これ、エリア7の岩とそっくりだ……」
自分の中にあった考えが形になった瞬間、彼の口元に笑みが浮かぶ。どうやら自分の考えは間違いではなかったらしい――勝機が、よ

り明確なものになった。
「クリュウ様？　如何なされましたか？」
背後からフィーリアが不思議そうに尋ねて来る。すると、クリュウはバッと振り返ると背後に立っていた彼女の両手をガッチリと掴んだ。驚くのはフィーリアだ。
「く、クリュウ様？」
「ありがとうフィーリアッ！　やっぱり君は頼りになるよッ！」
「ふぇッ!?　な、何が何だかよくわかりませんが……あ、ありがとうございますぅ」
突如手を握られてお礼を言われ、何が何だかわからない様子のフィーリア。だが、思わぬ形で彼と手を繋げた事や、頼りになるなど褒められたフィーリアは嬉しそうに笑みを浮かべる。そんな二人を不機嫌そうにサクラが見詰める。
「一体どうしたの言うのだクリュウ？」
彼の言葉の意図が掴めないシルフィードが尋ねるが、クリュウは楽しそうな笑みを浮かべて「そのうちわかるよ」とはぐらかす。三人の怪訝そうな視線をスルーしながら、クリュウは先に進む。
「ほら、ディアブロスが移動する前に早くエリア７へ行こうよ」
意気揚々とエリア７を目指すクリュウの背中を一瞥し、三人は不思議そうに首を傾げながら互いを見合うと、彼の後を追って歩き出す。
そして一行は、エリア７へと達する。
エリア７に着く頃にはすっかり日は落ち、辺りは暗い夜の闇に閉ざされてしまった。月と星の柔らかな光が辺りを薄っすらと照らし上げる。昼間とはまた違った死の大地の姿がそこにある。
砂漠は文字通り《砂の大地が漠然と広がっている》という意味。もちろん、川や湖などの水は一見するだけでは存在せず、木はおろか草すら、普通の植物は生息する事もできない不毛の大地。太陽熱を遮る空気中の水分がない為、ダイレクトに大地に熱が伝わるばかりか、その熱が砂に溜まって地面自体が発熱する為、上下から激しい熱波に晒される。その為砂漠は人間が活動するには厳しい暑さを放つ環境となってしまっている。

しかし逆に夜になると、強烈な日差しを遮る水分がないという事は同時に地表からの熱を保温する為の水分もなければ、同様の役割を果たす植物も存在しない。その為、夜の砂漠は逆に水があれば凍ってしまう程に寒い。

昼夜の激しい寒暖差。これが他の大地にない砂漠特有の過酷な環境だ。

まだ夕方から然程時間が経っていない為に砂に溜まった熱が程よい気温を作り出している事に加え、岩場地帯は砂漠の砂の冷たさから生まれる冷えた風を岩が遮ってくれる為、比較的人間が普通に過ごすにはギリギリの気温が保たれる。その為、クリュウ達は全員準備しておいたホットドリンクを飲んでいない。

再びエリア7にやって来たクリュウ達四人。昼間に見た時と違い、夜になると当然薄暗く、視界を遮るものが少ないとはいえやはり視野は狭くなる。だが岩の屋根の間から覗き込む月明かりのおかげで何とか見渡せる。そのうち目も暗闇に慣れればより見やすくはなるだろう。

岩の屋根の隙間からは美しい星空が見渡せる。砂漠の真ん中で空いっぱいの星空を見上げるのもいいが、こうした隙間から覗く星空もまた風情あがる。

だが、彼らは決してここに星を鑑賞しにやって来たのではない。その視線は全員、ある一点に注がれている。

暗闇に支配された大地にあって、なおその存在感が霞む事はない圧倒的な生命力。生命の息吹が遠く離れたここにまでヒシヒシと伝わって来る。

向こうもこちらに気づいたのか、ゆっくりと振り返る。その瞬間、敵意に満ちた瞳が闇の中で不気味に光り輝いた。

「行くぞッ！」

先手必勝。シルフィードの掛け声と同時に四人は一斉に行動を開始した。剣士組がシルフィードを中央に右翼をクリュウ、左翼をサクラが続き、その後方からガンナーのフィーリアが走りながら弾を装填する。装填したのはペイント弾だ。

カイト型の陣形で突進する四人に対し、闇の中に潜む魔竜ディアブロス。低い唸り声を上げると、迫る雑魚を撃破するように砂を蹴って地面を駆け出した。
必殺の突進で迫るディアブロスに対し、シルフィードとクリュウは右へ、サクラとフィーリアは左へ転進して中央突破で迫るディアブロスの突進を受け流す。
左右へ分散したクリュウ達に対し、ディアブロスはその間を突き抜けるように滑走する。その動きは昼間のそれと何ら変わりない勇ましいもの。その姿にクリュウは内心愕然としていた。こちらはかなり疲労を蓄積しているというのに、ディアブロスにはそんな素振りがまるで無い。相当なダメージを蓄積させているはずなのに、ディアブロスの突進にはそれを感じさせる衰えはまるでない。
――自分達の攻撃は、本当に効いているのだろうか。そんな疑問と不安が胸を支配しそうになるが、クリュウはそんな自分のネガティブ思考を無理やり封じる。
チームで狩りをする以上、自分一人だけが諦めてはいけない。
雄叫びを上げて反転ディアブロスを追い掛けるシルフィードも、無言のまま同じく反転して砂を蹴って地面スレスレを滑空するかのように突貫するサクラも、走りながらすでにペイント弾を当てて本格的な射撃を開始しているフィーリアも。皆、その表情には疲労の色はあれど絶望の色には染まっていない。
皆、まだまだ諦めてはいないのだ。だから、まだ諦めるには早過ぎる。
それに、まだ自分には秘策がある。その秘策を試すまでは、まだ自分にも諦めてはいけない。
一度は絶望に支配されそうになった心に、もう一度闘志の炎を燃え滾（たぎ）らせる。すると、次第に気温が下がってきて肌寒くなってきた外気を感じさせない程に体が温まる。それはまるで、エンジンが掛かったかのよう。
クリュウの表情に、再び戦意が戻る。
三人に遅れながらも、クリュウもディアブロスを追い掛けて砂を

蹴って走り出した。
砂を巻き上げながら急停止するディアブロス。その脚を狙って通常弾ＬＶ３を撃つフィーリア。夜の暗さで昼間に比べて正確な射撃が難しくなるも、そんな事をまるで感じさせない程彼女は正確に狙い撃つ。彼女の瞳には夜の闇など何の弊害もないのか、そう思わずにはいられない技量だ。
剣士組は常に暴れ回るディアブロスに肉薄して、文字通りその身を削るような危険な戦いを強いられる。自分の役目は、そんな三人の負担を少しでも軽くする事。常にディアブロスに銃弾を当てて、気を紛らわせる。それが自分のこのチームでの役目――自分にしかできない役目だ。
連続して片脚を狙い撃ちながら横へ走って未だ接近中の剣士組からディアブロスの気を逸らす。トリガーを引く人差し指は次第に疲労と寒さで感覚がなくなってくる。だけど、それでも一定のリズムで繰り返される伸縮運動はやめない。この一回一回が、確実にディアブロスのダメージとなり、仲間を救う一発には違いないのだから。
フィーリアはセレスティーナから綺麗と褒められる自慢の金髪を風に靡かせながら、翠玉（エメラルド）の瞳でスコープを通してディアブロスの一点を見詰め、そしてトリガーを引く。
轟く発砲音。闇夜で光り輝くマズルファイア。撃ち出された銃弾は一直線に狙い定めた箇所。振り返る瞬間のディアブロスのこめかみに命中する。
低い唸り声を上げ、ディアブロスの瞳がこちらを捉える。その瞬間、フィーリアは思った通りの状況に喜ぶと同時に確実な敵意を向けるディアブロスの瞳に恐怖する。二種類の震えが、トリガーに掛けられた指を震わせる。
だが、フィーリアが生み出した隙はしっかりと生かされた。
クリュウ達ではなく、横へ移動したフィーリアの方へ振り返った為に余計に旋回するハメになったディアブロス。そのわずかな角度は、同時にわずかな隙の延長と同義。時間にすれば本当に一瞬だ。だが、その一瞬があれば彼女は突き抜ける。

大地を蹴り上げ、姫は天を舞う。
ディアブロスの視界に、一瞬だけ影が入った。気にも留めないような一瞬の出来事。だが、それが彼女の残したわずかな軌跡。
「……がら空き」
蔑むようにつぶやくと、サクラはディアブロスの頭上から襲い掛かる。引き抜いた飛竜刀【翠】は月明かりを受けて妖艶に光り輝く。その刃先は、吸い込まれるようにしてディアブロスの首上を斬り裂いた。
「ガァッ!?」
突然首を斬り裂かれたディアブロスは悲鳴を上げて仰け反った。その間にサクラは地面に着地すると、がら空きとなった脚を狙って刀を翻す。
人間離れした身体能力であっという間にディアブロスに襲い掛かったサクラに対して、シルフィードは少々遅れるもサクラが生み出した隙を突いてディアブロスに襲い掛かる。
「うおおおおおおおおッ！」
勇ましい雄叫びを上げながらシルフィードはキリサキを引き抜くと、駆けて来た勢いも乗せてキリサキを一気に振り下ろす。キリサキは脚の甲殻を削るように表面を抉る。わずかに飛び出す血が、確実なダメージの証拠だ。
振り下ろした剣をそのまま翻し、今度は横薙ぎに体全体を使ってスイングするように薙ぎ払う。甲殻の表面を削る嫌な音を無視し旋回させ、続いて砂の上スレスレを撫でるように刃先を動かし、勢い良く振り上げる。打ち出された一撃はディアブロスの腹部の甲殻の一部を弾き飛ばす。
さらにもう一撃入れたい所だが、欲張ってはいけない。ここがちょうど引き時だと、彼女の勘が告げている。自分の勘を信じて彼女がバックステップで距離を置くと同時に、ディアブロスは体を旋回させて全体攻撃を行った。寸前まで彼女がいた場所を、空気を殴りながら巨大な尻尾が横切る。
前衛二人の攻撃が一時的に止んだと同時に、遅れてクリュウが攻撃

を開始する。旋回攻撃を行った隙を突いて接近した彼は目の前の巨大な大木のように太く、岩のように硬い脚に向かって臆する事なくデスパライズを叩き込む。当然、硬い甲殻に刃は簡単に弾き飛ばされてしまうが、構わずクリュウは続けて横薙ぎに剣を振るい、さらに縦斬りから回転斬りへと繋げて連続で剣を振るう。柄を握る手にも次第に力が入らなくなってきた。それでも諦めずに、痛む腕を気合で動かして剣を振るい続ける。

ディアブロスにとっては鬱陶しい事この上ない存在でしかないクリュウの攻撃。ディアブロスはそんな彼を跳ね飛ばそうと一瞬身を収縮させた後、爆発的に膨らむ。体全体を一斉に横へ滑らせる様はまるで壁が迫り来るかのよう。ディアブロスの体当たり攻撃に対し、クリュウは盾を構えてガードするが、勢いは受け止めきれずに砂の上では踏ん張る事もできずに簡単に後ろに吹き飛ばされてしまう。

地面の上を数メートル滑った末に尻餅をつく。しかしすぐに立ち上がって砂を払うと、取り零したデスパライズを拾い上げて諦めずに再び接近する。

そんな彼の姿に押されてか、サクラとシルフィードも同時に攻め込む。

ディアブロスを中心に三方向から迫る三人。援護するようにフィーリアのハートヴァルキリー改も唸りを上げる。次々に撃ち出される貫通弾ＬＶ２がディアブロスの強固な甲殻に突き刺さる。角度が良ければそのまま貫通するが、大多数はこうして硬い甲殻に阻まれてしまう。しかし例え三発に一発だとしても、確実に肉を抉る銃弾はその数だけディアブロスにダメージとなって蓄積される。

フィーリアからの攻撃に意識を逸らされそうになるも、ディアブロスは三方向から迫り来る敵に対して尻尾で薙ぎ払うように旋回攻撃。迫っていた三人は振るわれる凶悪な尻尾を前に接近を中断せざるを得ない。だが、侵入を阻んだのは一瞬だ。時計回りに振るわれる尻尾はクリュウの前を掠めた後、今度はシルフィードとサクラの眼前に振るわれる。全回転ではなく、半回転を二回繰り返しての全体攻撃は、振るわれる側は接近を阻むが反対側はまたとない隙となる。

クリュウはディアブロスの尻尾が反対側を薙ぎ払っている間に再び突進を仕掛ける。一気に距離を縮め、軸となっている脚を狙ってデスパライズを叩き込む。
一瞬遅れてサクラとシルフィードも同時に斬り込む。サクラは戦風となって暴れ狂い、シルフィードは力強い一撃でディアブロスの鎧を砕く。
群がる三人のうち、最も鬱陶しいサクラを狙ってディアブロスは短距離突進を仕掛ける。が、サクラはそれを簡単に回避し、ディアブロスは十数メートル進んだ後何もない空間に角を振り上げる。が、当然その角の先は何も貫く事はなかった。
再び三方向へと散る三人に対し、振り返ったディアブロスは今度はシルフィードを狙って突進を仕掛ける。シルフィードはその一撃に対しキリサキでガードしてやり過ごす。が、当然大きく後退を余儀なくされた。
シルフィードを吹き飛ばし、ディアブロスは振り返ると再びサクラに向かって突進を仕掛けるが、当然サクラはそれを簡単に避ける。その間、フィーリアは暴れ回るディアブロスに確実な射撃を行い続ける。
そしてクリュウも動く。
サクラに避けられて何もない空間を滑走するディアブロス。再び振り返る瞬間を狙ってクリュウは閃光玉を投擲した。
闇夜を斬り裂く光の弾幕。一瞬闇を完全に消し去った後、再び夜の闇が戻る。クリュウはディアブロスの足止めに成功したと確信していた。だが、
「グギャオオオオオオオオオオッ！」
「ッ!?」
唸る怒号（バインドボイス）に、クリュウは耳を塞いでその場に膝を突いた。激しい頭痛すら感じる膨大な爆音の中、クリュウは必死になって前方を見る。すると、ディアブロスは健在で天高く怒号（バインドボイス）を轟かせていた。
「……ま、またッ」

クリュウは悔しげに唇を噛む。
ディアブロスは突撃に特化したモンスターの為か、おそらく視野が他のモンスターに比べて左右が狭いのだろう。昼間の失敗と今の失敗で、クリュウは何となくそんな結論に至った。道理で確実に当てる自信がある閃光玉を二発も失敗したのだ。
悔しいが、この間は自分は何もできない。やがて、咆哮（バインドボイス）が終わって体が解放される。だが、それよりも一瞬早くディアブロスは動いていた。地面に角を突き刺し、あっという間に砂の中に潜ってしまう。とてもじゃないが音爆弾を投げても届くような距離ではない。
砂中に潜ったディアブロスに対して四人が散開する。誰を狙うのか、全員がディアブロスの潜った地点を凝視しながら走り回る。そして、奴が動いた。
「わ、私ですかッ!?」
狙われたのはフィーリアだ。さすがに常に銃弾を当てて気を逸らす役目を担っていただけあって、ディアブロスもその存在が鬱陶しかったのだろう。フィーリアは必死になって逃げるが、ディアブロスの砂中の速度と比べれば雲泥の差だ。その距離はあっという間に埋められてしまう。
フィーリアは必死に走りながら、すがるようにクリュウの姿を探すが、彼はちょうど自分と対極側に位置していた為、慌ててこちらに向かって走っているが、とてもじゃないが間に合わない。
再び視線をディアブロスに向けると、砂煙はもう自分のすぐ背後にまで迫っていた。
「い、嫌ああぁぁぁッ！」
「……ッ！」
刹那、ディアブロスが彼女の足下から角を振り上げて飛び出して来た。鋭い角は砂を吹き飛ばしながら彼女の体を貫――かなかった。
砂中から飛び出したディアブロスの一撃は、不発に終わった。
ディアブロスが砂中から飛び出すのと同時に、フィーリアは砂の上に激しく叩きつけられた。てっきりディアブロスにやられたと思っ

たが、それにしては痛みがあまりない。不思議に思って恐怖のあまり閉じていた瞳を開くと、目の前には異国の鎧を見に纏った戦姫が自分を抱き抱えるようにして同じように砂の上に倒れていた。
「さ、サクラ様……？」
　驚くフィーリアの横で先に何事もなかったようにサクラは立ち上がる。軽く砂を払うと、スッと彼女に向かって手を差し出した。
「……さっさと立ちなさい。そこで野垂れ死にたいのなら話は別だけど」
「サクラ様……私を助けてくれたんですか？」
　フィーリアの問い掛けに対し、サクラはプイッとそっぽを向く。その横顔は、心なしか照れているようにも見える。
「……勘違いしないで。貴様が死ぬとクリュウが悲しむ。私はクリュウにそういう顔をしてほしくない。それだけよ」
　いつもと変わらぬ彼女らしい容赦のない物言い。だが、不思議と今はその言葉はとても素直じゃない言葉に聞こえる。自然と、フィーリアの口元にも笑みが浮かぶ。
「クリュウ様に対しては欲望ムキ出しですが、それ以外に関しては本当に素直じゃないお方ですね、サクラ様は」
「……黙れ。余計な事をしゃべると斬るわよ」
　横顔ばかりか背を向けてしまうサクラの後ろ姿を見て、フィーリアはおかしそうにくすくすと笑う。そんな彼女を背にしたサクラの表情は少しばかり不機嫌そうにも見えるが、その頬はほんのりと赤く染まっていた。
「……これは貸しよ。それ相応の対価でしっかり返して」
　相変わらず素直じゃない発言をするサクラの背後で、フィーリアは優しげな微笑を浮かべながらゆっくりと立ち上がる。その表情は実に晴れ晴れとしていた。
「もちろんです。さすがにクリュウ様を寄越せなどという要求でしたら断固拒否しますが」
「……チッ」
「……そこで舌打ちをされるとは。さすがサクラ様です」

苦笑しながらも、その彼女らしい態度にはなぜか安心感を覚える。そう、こんな無茶苦茶な思考と言動をする天上天下唯我独尊自分絶対至上主義者。それが自分にとっては最強の恋敵(ライバル)であり、最高の親友なのだ。
(サクラ様の無茶苦茶さを見て安心するなんて、私もずいぶんと重症ですね)
心の中でそうつぶやき、彼女は苦笑を浮かべる。そしてそれは彼女らしい、可愛らしい自信に満ちた笑顔に変わる。
「――今度は私がサクラ様の危機(ピンチ)をお助けいたします」
「……フン、抜かしてろ」
自信満々に言い放つフィーリアを背後にしながら、彼女は振り返る事なく素っ気無く言い放つ。だが、その表情はどこか晴れ晴れとしている。
サクラの隻眼がゆっくりと鋭く細まる。再び狩人、戦姫の表情になったサクラは姿勢を低く構えると、必殺の突貫でこちらに振り向くディアブロスに向かって突撃する。そんな彼女の後ろ姿を見送り、フィーリアもまた表情を引き締めるとハートヴァルキリー改を構えて走り出す。
そんなケンカする程仲のいいコンビの姿を見守りながら、シルフィードは口元に笑みを浮かべると、ディアブロスに向かって背負ったキリサキの柄を片手で握り締めながら接近する。
一人先行してディアブロスに近づいていたクリュウは振り返るディアブロスの眼前に閃光玉を投げる。今度はしっかりと奴の正面に向けて投げた一撃は、ディアブロスの眼前で炸裂。目映い閃光が奴の視界を奪う。
「グオァッ!?」
「やったッ!」
ようやく閃光玉が成功して喜ぶクリュウ。その姿を駆け寄りながら見ていたシルフィードは微笑んだ。
視界を奪うと、感動を噛みしめている暇もなくクリュウはディアブロスに接近する。藻掻くディアブロスの横を通り抜け、狙うは脚。す

ぐに定位置に辿り着き、斬り掛かる。
右へ左へ次々に剣を振るい、続けて縦斬り。また右へ左へ剣を滑らせ、体全体を使って回転斬り。片手剣は大剣のような一撃一撃に大きなダメージは与えられない。でも、こうした積み重ねの連続は、大剣の総合的なダメージにも引けを取らない。もしも負けているとすれば、それは自分の実力不足。片手剣は、決して弱い訳じゃない。
必死になって剣を振るうクリュウだが、決して攻撃だけに神経を注いでいた訳じゃない。ディアブロスは尻尾を激しく動かしてクリュウを薙ぎ払おうとする。その一撃が身を叩く前にクリュウは動くと、ディアブロスの両脚の間へと潜り込む。当然、自分の脚の間に尻尾を叩きつける事はできず、ディアブロスの尻尾は空しく砂上を撫でる。
ディアブロスの両脚の間に潜り込んだクリュウはすかさず剣を振るう。間接部分の比較的装甲の柔らかい部分を狙って剣を叩き込む。
付きまとうクリュウを撃破しようと、ディアブロスは体全体を回転させて彼を吹き飛ばそうとするが、その攻撃は周りに群がる敵を攻撃するものであって、軸となる足下、それも直下に潜り込んだ相手に対してはただの隙でしかない。
クリュウは動くディアブロスの脚に蹴られないように注意しながらも、この隙を最大限利用して攻撃を積み重ねる。
彼に続けとばかりにシルフィードとサクラもディアブロスに到達して剣と刀を叩き込む。サクラは外側から脚を狙い、シルフィードは尻尾に向かって大剣を振り下ろす。
豪快な一撃は当たればかなりのダメージとなるが、常に動く尻尾を狙うとなるとなかなか当たらず、何度も空振りしては砂の中に剣先を埋めてしまう。そのたびにシルフィードは舌打ちし、だが諦めずにキリサキを振り回す。
練気が溜まり、必殺の気刃斬りを炸裂させたサクラ。刀を構え直し、何度も刀を当てた脚に再び刃を当てるが、その一撃は金属音と共に弾かれる。予想だにしない手応えにサクラの表情が苦悶に歪み、刀を取り零した。
「……切れ味が」

これまでの手数は、確実に飛竜刀【翠】の切れ味を消耗させていたらしい。切れ味が落ちた刃はこれまでのようにディアブロスの甲殻を斬る力はない。

サクラは舌打ちを一つすると、仕方なく前線から離れる。ある程度安全な距離を取ると、急いで道具袋（ポーチ）から携帯砥石を取り出して切れ味を回復させる。

一時的に前衛が減った。これを補うようにフィーリアのハートヴァルキリー改が唸る。次々に貫通弾ＬＶ２を命中させる。

そのうちに、ディアブロスの視界が復活する。すると、ディアブロスは今まさに携帯砥石で切れ味を回復させているサクラの方へ向き、姿勢を低くする。

「逃げてサクラッ！」

クリュウの声にサクラが視線を上げると、その瞬間ディアブロスが駆け出した。自身に向かって突進して来るディアブロスの姿にサクラは舌打ちすると、急いで立ち上がって走り出す。

反応が遅れたとはいえ、そこは俊足のサクラ。ギリギリながらディアブロスの針路上から離脱を図り、回避に成功した。

横をディアブロスが通り抜けるや否や、サクラは果敢に攻めに転ずる。月光に光り輝く漆黒の髪を靡かせながら、砂を蹴って地面を翔ける戦姫。その姿は流麗にして峻烈。何もない所で角を振り上げているディアブロスに背後から襲い掛かる。

背後から迫るサクラに対して、脚を止めたディアブロスは尻尾を激しく左右に揺らして彼女の攻勢を阻む。しかしサクラはそれを高度な足捌きで速度を落とす事なく器用に避けると、大振りな攻撃の際に生まれる隙を突いて突撃する。

がら空きのディアブロスの右斜後方からサクラが突っ込む。背に構えた、切れ味を回復させたばかりの飛竜刀【翠】を構えると、容赦なくその刃先をディアブロスの甲殻に向かって叩き込む。その一撃は先程とは違い、確実な手応えを彼女に知らせる。

サクラが襲い掛かると、遅れながらクリュウとシルフィードも同時に突っ込む。ディアブロスはそれらの敵を排除しようと体全体を

使って体当たり。クリュウとシルフィードの二人はガードするもその一撃に大きく後退を余儀なくされた。
単独でディアブロスに肉薄するサクラに対し、今度はディアブロスは彼女を狙う。突如右へと体を捻ると次の瞬間、勢い良く首を左へ向かって動かし、角を薙ぎ払うように振るった。この一撃はサクラも予期していなかったのだろう。初めて見る行動にサクラは回避できず、角で弾き飛ばされた。
そればかりか、角で攻撃している最中背後から接近していたクリュウ達も角と連動するように動く尻尾に妨害された。クリュウはガードするも弾き飛ばされ、シルフィードは針路を大きく遠回りせざるを得なくなった。
三人を排除したディアブロスに注意しながら、フィーリアは回復弾ＬＶ２をサクラに向かって撃って彼女の体力を回復させながら必死に起き上がろうとする彼女へと駆け寄る。
「サクラ様ッ！　大丈夫ですかッ!?」
「……これくらい平気よ。何の問題もないわ」
ガードができない太刀使いは、攻撃を受ける際は直撃かギリギリ体を動かして受け身を取るかしかない。サクラは間一髪後者に動いたので大きなダメージは受けなかったが、それでも全身に走る痛みに、いつもは鋼のように硬い表情が苦悶に歪んでいる。強がってはいても、彼女だった生身の人間だ。痛みを感じない訳でも疲れない訳でもない。それでも……
「……血反吐を吐こうが、腕や足の一本が折れようが、この戦いは負けられない――負けたくないのよ」
サクラの瞳は、まだまだ熱い闘志の炎が激しく燃え盛っていた。
フィーリアはそんな彼女の姿を見て、その勇ましき親友の姿に頼もしさを感じずにはいられない。本当に、強い人だ。
「奇遇ですね。私も全く同じ気持ちです」
「……フン」
自信満々に言い放つフィーリアの言葉を鼻で笑い飛ばすと、サクラはダメージを受けた事など感じさせない走りでディアブロスに突貫

する。フィーリアはそんな彼女の背後から援護するように貫通弾ＬＶ２を撃ち放つ。
先程サクラを弾き飛ばした一撃を、遅れながら突撃してきたシルフィードに浴びせるディアブロス。しかし一度見た動きをそう簡単に喰らう程、シルフィードはバカではない。寸前で前転してディアブロスの振るわれる角のギリギリ下を通り抜けて回避すると、両脚の間に立ってキリサキを勢い良く振り上げる。
シルフィードの攻撃が命中すると同時に、突貫してきたサクラが逆襲の一撃を振るう。そこへ反対側からクリュウが襲い掛かる。クリュウは腰に携えた小タル爆弾Ｇを構えると、ピンを抜いて投擲した。狙うは、ディアブロスの脚だ。
投げられた小タル爆弾Ｇはディアブロスの脚にガンッとぶつかった途端に起爆。大タル爆弾などに比べれば威力はないが、それでも甲殻などの装甲を無視した一撃にディアブロスの体が傾く。
「グオォッ!?」
バランスを崩したディアブロスはその場に横倒しに倒れた。これまでの四人の攻撃で脚に積み重なっていたダメージが、ようやくその効果を発揮したのだ。
「よくやったぞクリュウッ！」
シルフィードは彼の手柄を褒めると同時に彼が生み出した隙を無駄にしないように立ち回る。藻掻く脚からそのさらに後ろ、尻尾の前に立つ。見ると、クリュウとサクラもそれぞれの箇所で剣を振るい、遠くからはフィーリアからの援護射撃も続いている。
シルフィードは一度深呼吸すると、キリサキを構える。姿勢を低くし、重心を下げて構えるその一撃は、必殺の溜め斬り。力を溜めるように、キリサキを握る腕の筋肉が震える。限界まで力を溜めると、暴発するように力が解放される。その勢いはそのまま腕を信じられない力で動かす。
勢いを踏ん張る脚、体全体で剣を振るう為に動く腰、振り下ろす腕。その他の筋肉も一斉に力を開放し、その攻撃はまさに体全体の筋肉全てを使うような大剣使い最強の一撃。

「うおおおおおおおおッ！」
気合裂帛。ディアブロスの咆哮（バインドボイス）にも負けないような勇ましい咆哮を上げ、シルフィードは豪快に、そして力強くキリサキを振り上げ、一気に叩き落とした。
ゴリッ、という一瞬の不気味な音が響く。次の瞬間、尻尾に当てたはずの刃先は砂の中に深々とと突き刺さっていた。その身は真っ赤な血に染まり、砂の中に刃先を埋めたキリサキの横には、力なく横たわる――ディアブロスの尻尾。
「ゴギャアアアアアアアアッ!?」
この戦いの中で、最も悲痛な悲鳴を上げてディアブロスが吹き飛んだ。
跳ね飛ぶようにディアブロスの体が前に飛び、地面に横倒しになって倒れた。それどころか苦しげに身を震わせ、悲鳴を上げる。
「ハァ……ハァ……」
荒い息を繰り返すシルフィード。いつの間にか吐き出す息が白く染まるほどに気温は落ちているというのに、彼女の顔には大粒の汗が何個も浮き出ている。
苦しみのあまり暴れ狂うディアブロス。見ると、尻尾が中程から先が失われていた。その傷口からは大量の血が噴き出し、彼の体を赤く染め上げる。
砂に埋もれたキリサキを引き抜き、血に濡れた剣を一度振るって余計な雫を弾き飛ばすと、背中に背負い直す。チラリと、彼女は自分が今まさに切断した角竜の尻尾を見詰め、笑みを零す。
「これで、幾分か奴の隙が生まれるな」
シルフィードの一撃はディアブロスの尻尾を見事に切断した。その光景に、クリユウとフィーリアは歓喜の声を上げ、サクラは一人飛竜刀【翠】を下向きに構えながら、その口元にわずかな笑みを浮かべる。
彼女の一撃は、見事にディアブロスに対する自分達の優位性を確保した。ディアブロスは正面攻撃に特化したモンスターだけあって、背後からの攻撃には弱い。それを補うように常に尻尾を動かして外敵

の接近を阻んでいたのだ。その尻尾が失われれば、背後から攻めやすくなるという事だ。
流れが変わった。四人はそう確信した――だが、本当の戦いはこれからだった。
「ゴォアアアアアアアアアッ！」
天空を貫き、大地を震わす憤怒に染まった激怒の大咆哮（バインドボイス）。その広さはエリア全体を占める程に広大で、クリュウ、フィーリア、サクラの三人は再び耳を塞ぎ苦悶に表情を歪める。
そんな中、最もディアブロスの近くにいながら高級耳栓スキルのおかげで咆哮（バインドボイス）などどこ吹く風にしか感じないシルフィードは平然と怒り狂う魔竜の前に立ち塞がる。そして、
「さぁ、本気でかかって来いディアブロス。そろそろ決着をつけてやるッ」
大剣キリサキを引き抜き、剣先をディアブロスに向けて言い放つ勝利宣言。その時、季節外れの烈風がエリアを吹き抜けた。暴れる白銀の髪を気にせず勇ましく、凛々しく立つ彼女の姿は美しく、かっこいい。
蒼銀の烈風。その二つ名に相応しい、風を纏う蒼き鎧を身に纏いし白銀の戦姫――シルフィード・エア。
「グォアアアアアアアアアッ！」
怒り狂うディアブロスは再び怒号（バインドボイス）で大地を震わせる。その衝撃は確実に三人の足を止めるが、彼女には通用しない。
「行くぞッ！」
震える大地を蹴り、シルフィードは駆け出す。天高く唸り声を上げるディアブロスだが、高級耳栓スキルを持つシルフィードにとってそれは威嚇でも恐怖でもない、純粋なチャンスだ。
一気にディアブロスの正面へと駆け抜け、怒号（バインドボイス）を終えてゆっくりと下がる頭部を狙い、剣を引き抜く。
「はあああああぁぁぁぁぁッ！」
力強く振り下ろされたその一撃は、暴竜の誇りを砕き落とした。

第１５９話　勝利を信じての全力戦　希望の光に掛かる暗雲

「ギャアアアアアアアアッ!?」

再び轟く魔竜ディアブロスの悲鳴。後ろ倒しになるような勢いで首を持ち上げ、天を仰ぐ。その頭の先に生える角竜としての誇りの双槍。だが、そのうちの一本が根元付近から先を失っていた。

剣を振り下ろした彼女の足下に、その残骸が転がっていた。根元から叩き折られた角は無残に砂の上に転がっている。

シルフィードはその感触や感動を味わう暇もなく、間髪入れずにディアブロスの懐に突っ込む。苦しむディアブロスの真下で勢い良く剣を振り上げてディアブロスの肉を抉る。

口から怒りの黒煙を噴きながらディアブロスは足下のシルフィードを撒こうと片方だけになった角を地面に突き刺して潜り始める。シルフィードは追撃を断念してバックステップで距離を置くが、怒り状態のディアブロスは潜る際の速度も素早い。完全な安全圏に脱する事はできなかった。

砂の中へ消えたディアブロス。通常時ならこれは音爆弾を投げる絶好の機会だが、怒り状態ではそれは通用しない。

そして、怒り状態のディアブロスは自身の尻尾はおろか誇りの角までへし折ったシルフィードに襲い掛かる。

あと一歩である程度安全な間合いとなる寸前、シルフィードは目の前の地面が揺れるのを見過ごさなかった。反射的にキリサキでガードの構えをとった瞬間、突如地面が割れてディアブロスが飛び出してきた。

「なッ!?」

ディアブロスは首も使って勢い良く残った一本の角でシルフィードのキリサキの峰をぶち抜く。その勢いは壮絶で、質量の差で圧倒的に劣る彼女の体はまるでボールのように簡単に吹き飛ばされる。

砂の上に頭から突っ込み、それだけでは勢いを殺せずに二転三転と

転がり、うつ伏せに倒れた。
「くそぉ……ッ」
全身を強く地面に叩きつけられた激痛に表情を苦しげに歪めるシルフィード。それでも何とか痛みを堪えて立ち上がる。
「シルフィッ！」
クリュウの焦る声に顔を上げた瞬間、彼女の表情が凍りついた。
「何だと……ッ!?」
正面を向くと、目の前にまで怒り狂うディアブロスの角が迫っていた。
再びキリサキでガードするが、またしても角で貫き飛ばされる。再度跳ね飛ばされた彼女の体だが、運の悪い事にその先は中央に突き出た巨大な岩。フィーリアが悲鳴を上げると同時に、彼女の体は背中から激しく岩に叩きつけられた。
「がは……ッ!?」
背中を叩きつけられた瞬間、彼女の口から真っ赤な血が吐き出される。叩きつけられた彼女の体はそのまま岩の根元に横倒しに倒れた。
「シルフィード様ッ！」
フィーリアが慌てて彼女に駆け寄ると同時に、クリュウはディアブロスの眼前に向かって閃光玉を投擲した。夜の闇を消し飛ばす光の嵐が、執拗にシルフィードを狙おうと再び突進の構えを見せていたディアブロスの瞳を焼く。
視界を潰され、激痛に悶え苦しむディアブロスを無視し、クリュウとサクラも先行しているフィーリアと共に倒れたシルフィードに駆け寄る。
「シルフィッ！　だ、大丈夫ッ!?」
「あ、あぁ……」
上半身を起こしたシルフィードは口の端の血を拳で拭い取ると、道具袋（ポーチ）から巾着袋を取り出した。手の上でひっくり返すと、粒状の薬が出て来る。彼女はそれを口に入れて噛み砕くと、フィーリアが用意した水筒の水と一緒に一気に喉の奥へと押し込んだ。
「秘薬を呑んだ。しばらくすれば、元通り体も動く」

そう言って彼女は立ち上がるが、その足取りは少しフラついている。先程までのような勇ましい動きは、彼女の言う通りしばらくはできないだろう。
間もなく、ディアブロスの視界も復活する。クリュウ達はこのまま継戦するか、撤退するかの二択に迫られていた。
フィーリア自身は撤退案を考えていた。その案を出そうと口を開く寸前、全く別の意見を唱える者がいた。
「――僕に作戦がある」
その言葉に、三人は一斉に振り返った。そこにはヘルムを取って自信満々な表情で立つクリュウの姿があった。
視界が回復すると同時にもう一度サクラが閃光玉を投げてディアブロスを足止めしている間に、クリュウは皆に自分の作戦内容を手早く説明した。作戦と言っても、そんな細かい内容はないので説明は簡単に終わる。だが、三人の表情は半信半疑という感じのものだった。
「た、確かにディアブロスは先程私が狙撃している最中、そのような行動を見せていましたが。だからと言って必ずしもそうなるとは限りませんし、何よりどの岩でもいいという訳ではないようですよ」
「その点は大丈夫。シルフィ、この岩は硬かった？」
「うん？　まぁ、気を失いかけるくらいには硬かったぞ」
「……シュールな答えですね」
「この岩さ、さっきエリア３の高台の岩と同じ構成物質でできてる岩みたいなんだ。たぶん、この岩もあの高台の岩と同じ現象を起こせると思うんだ」
そう言ってクリュウは背後にある、先程シルフィードが叩きつけられたエリアの中央部に突出した岩を拳で小突く。
「とにかく、ディアブロスにこの岩に向かって突進させるんだ。そうすれば、確実に戦況はこちらに傾く――どうかな？」
皆に意見を求めるクリュウだが、フィーリアはとシルフィードは作戦のリスクも考慮に入れている為に難色を示している。だが、
「……私はクリュウを信じる」
一人サクラだけはクリュウの作戦を支持した。彼女の場合、二人の

ように頭で深くは考えていないだろう。その言葉通り、心から彼の事を信用しているが故に、彼の賭けに等しい作戦も何の疑いもなく信じられる。
　理論的ではなく、あまりにも幼稚な考え方だ――だが、今はそんな彼女の真っ直ぐさが何よりも効力を発揮した。
「……そうだな。元々も作戦らしいものがない戦いだ。試す価値はある」
「そうですね。実際私がその行動を目撃しているんですから、可能性は決してゼロじゃありません」
　サクラの本能むき出しの発言はもちろん根拠も何もない。だが、彼女の自信満々さや元来の挑発的な物言いは、冷静に考えるが故に躊躇してしまう二人の決意に火を灯した。それは彼女の計算なのか――たぶんそんな事はないだろうが、彼女のおかげで作戦方針が決まったのは紛れも無い事実だ。
「それじゃ、行くよッ」
　クリュウが作戦の開始を告げるのと同時に、ディアブロスの視界が復活して怒りの怒号（バインドボイス）が鳴り響く。当然三人は耳を塞ぐが、そんな彼らの頭をシルフィードが小突く。ちょっとした外的衝撃で本能的な恐怖はかき消す事ができるのだ。
　シルフィードのおかげで素早く動けるようになった三人。呆然とするクリュウの頭に、シルフィードはガボッとレウスヘルムを被せる。
「呆けている暇はないぞ。作戦はもう開始しているんだろ？」
「そ、そうだね。三人とも岩の陰に隠れてッ。フィーリアは岩陰からディアブロスを攻撃してッ」
　クリュウの指示に三人はうなずくと、彼の指示通りに三人は岩陰に隠れた。フィーリアは一人通常弾ＬＶ２を装填し、ハートヴァルキリー改を構える。そしてクリュウは――単独でディアブロスに向かって突撃した。
「危ないぞクリュウッ！」
　背後からのシルフィードの声を無視し、クリュウは構わずディアブ

ロスに突進する。振り返るディアブロスに向かって、クリュウは構えたペイントボールを投げつけた。
「こっちだディアブロスッ！　ついて来いッ！」
ディアブロスを挑発すると同時にクリュウは反転し走り出す。折れた角の根元にペイントボールが付着したディアブロスはさらなる怒りの炎を燃え滾らせ、彼を殺そうと大地を蹴って突進を仕掛ける。
圧倒的な速度で迫るディアブロスに対し、クリュウの速度はあまりにも遅い。サクラのような俊足を持たない彼とディアブロスの距離は一気に縮まる。だが、事前にディアブロスが動くよりも先に走っていたクリュウは、角が自分の背中を貫くギリギリの瞬間で横へと跳んだ。そこはちょうど、三人が隠れる岩の直前だ。
地面に倒れた瞬間、背後で激しい衝突音が響いた。その音に、顔を上げたクリュウの口元に笑みが浮かぶ。
起き上がり、振り返ると、そこには自分が思い描いていた光景がそこに広がっていた。
クリュウの思い通り、ディアブロスは岩に向かって突っ込み、そして――岩に角を突き刺し、抜けなくなっている姿が。
ディアブロスが衝突した岩は密度が濃く硬い。そんなものを貫けば、ギッチリと角は刺さり抜け辛くなる。彼の予想した通りの行動、光景だ。
「まったく、彼には本当に驚かされるよ」
そうつぶやきながら岩の前面に出たシルフィードの眼前には必死になって角を抜こうと藻掻くディアブロス。
「――さぁて、さっきはよくもやってくれたな。借りはキッチリ返させてもらうぞッ！」
キリサキを振り抜き、構える。そこは暴れるディアブロスの頭部のすぐ横。彼女は躊躇なくその首に向かって剣を叩き落とした。その一撃はディアブロスの首の横を斬り裂き、血飛沫を踊らせる。
同時にサクラも角を抜く為に踏ん張らなければならない脚に向かって襲い掛かり、フィーリアも通常弾ＬＶ２による速射攻撃でディアブロスを集中砲火。

そして、クリュウもディアブロスの頭に向かって攻撃する。
四人が一斉に襲い掛かり、動けないディアブロスを一方的に束縛する。だが、その時間は決して長くはなかった。
「そろそろ角が抜ける頃合いですッ！　離れてくださいッ！」
フィーリアの声にクリュウとシルフィードは一斉に離れる。彼女と共にディアブロスの角が刺さって動けない状態を目撃していたサクラはフィーリアの声を無視して自分のタイミングで撤退する。そして、全員が岩陰に隠れたと同時にディアブロスの角が岩から抜けた。すぐさまクリュウは岩の横へ飛び出しディアブロスを挑発。ディアブロスは再び突進を仕掛けるが、寸前でクリュウは岩の後ろに隠れ、ディアブロスは突進。再び角を深々と突き刺して動けなくなる。そこをまたしても四人が一斉に攻め込む。
クリュウの策は見事に成功していた。これまで翻弄されるばかりだったディアブロス相手を、完全に自分達の流れに引きずり込んでいた。
突撃だけではなく、一度砂の中に潜って砂中から突進して来た時には足下から現れるのではないかと警戒したが、どうやらこの岩は地中深くにまで到達しているらしく、ディアブロスの侵攻を阻んでくれた。
足下の安全を確保すると、不安は一切なくなる。つまりそれは攻撃に全てを集中できる証拠だ。クリュウ達の攻勢はより激しさを増す。
それから三度程、ディアブロスの動きを止めての攻撃が繰り返された。だが、ここで思わぬ事態が発生した。
それはディアブロスが四度目の突進を仕掛けた際の事。角が突き刺さった瞬間――岩が粉々に砕け散ったのだ。
「なッ!?」
これにはクリュウだけではなく四人が驚く。すぐに飛来する岩の破片から避けるように岩から離れる。人間の身長よりも高い硬い岩は粉々に砕け散り、その奥ではディアブロスが激怒に燃える瞳をギラギラと燃え滾らせている。その姿を見て、クリュウは苦笑を浮かべるがその頬を嫌な汗が流れる。

「さすがに、そう何度も同じ手には引っかかってはくれないか」
「だが、おかげで私も十分に回復できた。それに、与えたダメージは相当なはずだ。策を失ったとはいえ、確実に状況は好転したはず」
シルフィードの言葉にうなずき、四人は一斉に散開する。ディアブロスは怒り狂いながら突進する。狙うは、正面に捉えたクリュウだ。
「僕ッ!?」
クリュウは慌てて速度を上げて一気に走り抜ける。それでも足りないと判断するやいなや、すぐさま身を投げ出すように前に飛び込む。砂の上に無様に倒れるが、間一髪ギリギリ背後をディアブロスが恐ろしい速度で通り過ぎる。
立ち上がると同時に、ディアブロスは砂の中へ素早く潜行。怒り状態では音爆弾が通用しない為、無力化できないクリュウ達は逃げ回るしかない。次に狙われたのは、
「私かッ!」
地中から迫るディアブロスに対してシルフィードはディアブロスの針路とは直角方向へ逃げる。その動きは確かに先程までのような機敏さが幾分か戻っているように見える。
逃げるシルフィードが寸前までいた場所の地面が砕け、砂を巻き上げながらディアブロスが片角を振り上げて現れる。何も獲物を貫く事ができずに終わるディアブロスに、シルフィードは反転攻勢に出る。だが、まるでそれから逃れるようにディアブロスは再び砂中へと潜る。足を止めたシルフィードは逃した事に舌打ちするが、その直後ディアブロスは突然潜った同じ場所から姿を現した。
「何ぃッ!?」
慌ててキリサキを構えてガードするが、簡単に弾き飛ばされてしまった。
シルフィードが大きく後退すると同時に、代わるようにサクラが無防備となったディアブロスの背後から襲い掛かる。勢い良く突き出した一撃はディアブロスの甲殻を砕き、刃先吸い込まれるようにディアブロスの肉を抉る。その瞬間、ディアブロスは再び毒状態となった。

間髪入れずに怒涛の連続攻撃。流れるように刀を振るい、旋回斬りとバックステップを同時に放つ回避攻撃で距離を開けた瞬間、ディアブロスは振り返って彼女に向かって角を振り上げて襲い掛かる。が、寸前で距離を開けたサクラはこの攻撃を避け、構わず再び前進してディアブロスに斬り掛かる。

サクラが攻撃している間にクリュウが追いつき、フィーリアが援護射撃を再開し、シルフィードはガードのし過ぎですっかり刃毀れを起こしたキリサキに携帯砥石を当てて切れ味を回復させる。切れ味を回復させると、すぐに立ち上がりキリサキを背負って走る。

剣士組が奮戦を見せている間、ガンナーであるフィーリアも目立たないながらも確実な攻撃の積み重ねで仲間を援護している。弾を貫通弾ＬＶ２に変更し、比較的遠距離からの攻撃。通常時でも厄介な素早さを持つディアブロス。怒り状態ともなればその速さはより厄介なものに変わる。それに対応するには、当然より間合いを取らなければならない。その為に有効射程距離の長い貫通弾ＬＶ２を選んだのだ。

ロングレンジ攻撃となると確かにより安全圏になる訳だが、当然遠くの獲物を狙うとなると弾丸を命中させる技術は並大抵のものではない。しかしフィーリアはそれをやってのける。かわいい顔してその技術は一流の狩人だ。

「私だってやる時はやるんですよッ！」

激しい集中砲火で剣士組へのディアブロスの攻撃をできるだけ逸らすフィーリア。当然、振り向いたディアブロスは彼女を狙って怒涛の突進を見せるが、距離を十分に開けていただけあってフィーリアはそれを幾分か余裕を残して避けると、再び距離を取って狙撃を再開する。

切れ味を正したサクラと前線に復帰したシルフィードがディアブロスに襲い掛かる頃、クリュウは一人前線から離れていた。彼はエリアの入口付近の岩陰に隠した荷車に駆け寄ると、そこから必要な物を取り出す。ディアブロスから少し遠い場所、荷車に程近い場所にシビレ罠を設置した。

クリュウはすぐに同じく荷車から取り出した角笛を手に取ると、それを構える。一瞬、あのディアブロスに狙われるという恐怖に身を震わせるが、奮戦する仲間達の姿を見て気合を鼓舞すると、大きく息を吸い込み、一気に角笛を吹く。

エリア全体に響く角笛の音色に、戦闘中の三人が一斉に振り返った。その視線の先にはエリアの端で角笛を吹くクリュウの姿がある。その足下に見える電撃を見てすぐに彼の策を察すると、すぐさま散開してディアブロスに道を開ける。

角笛の音色に彼を見たのは三人だけではない。鬱陶しく肉薄乱舞していたサクラに向けていた敵意を、ディアブロスは視線と共に角笛を吹くクリュウに向ける。

「ゴォアッ！」

低い唸り声を上げ、ディアブロスが素早く身構えて走り出す。怒涛の速度で突進するディアブロスに対し、クリュウはバックステップで安全な距離にまで後退しながら奴をシビレ罠へと誘導する。

すさまじい勢いで迫るディアブロス。その怒り狂った瞳を前にしてクリュウは身を震わせるが、自分の前にはある意味最強の盾が存在する。奴の角は、決して自分を貫けない。

そして、ディアブロスの脚がシビレ罠を踏み抜いた――その瞬間、ヘルムに隠されたクリュウの口元に笑みが浮かぶ。

「ゴアァッ!?」

シビレ罠を踏み抜いた事で、ディアブロスの体を麻痺毒が縛りつけた。怒涛の突進は硬直した筋肉はそれまでの勢いを全て妨げる杭となる。当然、突進の勢いは失われ、彼を貫くつもりで突き出した角は、クリュウの眼前で止まる。

シビレ罠に拘束され、痺れて動けないディアブロスに対し、クリュウはすぐに行動を起こす。荷車へと走り、そこに残っていた大タル爆弾Gを引っ張り出すと、それを痺れて動けないでいるディアブロスの頭の横へと設置。そのまま小タル爆弾Gも設置してピンを抜くと、急いで離脱。荷車を隠してある岩陰へと身を隠した瞬間、起爆。すさまじい爆音と爆風が辺りを突き抜ける。爆風は最も近くにいたクリュ

ウを襲うが、幸い岩がそれを妨げてくれたので飛ばされずに済む。
吹き荒れる風と砂の中、クリュウは岩陰から顔を少し出してディアブロスの様子を確認する。
ディアブロスは悲鳴を上げながら天高く首をもたげそのまま横倒しに倒れた。重々しい地響き音を立てて砂の上に崩れたディアブロス。その角は最後の一本も砕け落ち、角竜と言われる所以の二本の角は、そのどちらもが失われていた。
「ディアブロスの角が……ッ」
「……フッ、やってくれる」
「……クリュウ、かっこいい」
驚愕するフィーリア、嬉しそうに笑みを浮かべるシルフィード、ポッと頬を赤らめて彼を見詰めるサクラ。三者三様ながら、三人はクリュウの見事な攻撃に感嘆する。だがすぐに彼が作った隙を無駄にしまいと攻め込む。
動き出した三人に対し、クリュウはこの機会に携帯砥石でデスパライズの刃を正す。付加効果のある武器は切れ味が悪くなると毒の出が悪くなってしまうからだ。それに、デスパライズでは切れ味が少し落ちただけでも簡単にディアブロスの甲殻に弾かれてしまう。
切れ味を回復させ、携帯食料を水を一緒に一気に流し込んで小腹を満たす。準備を全て済ませてから、三人に多少遅れるも突撃するクリュウ。
すでに倒れているディアブロスに対して俊足のサクラが到達して必殺の気刃斬りで襲い掛かっている。同時に距離が開いていても攻撃可能なライトボウガンのフィーリアの攻撃も再開され、距離が近かったが出だしが遅れたクリュウと逆に出だしは早かったが距離が開いていたシルフィードは同時に剣を叩き込む。
倒れて藻掻くディアブロス相手に、四人は容赦のない一斉攻撃を仕掛ける。皆これまでの戦いで確かな疲労が蓄積しているはずだが、その動きや表情はそれを思わせない程に勇ましく、峻烈だ。
すっかり外気は冷え、昼間の暑さとは打って変わって凍えるように寒い。まだエリア7は比較的温かい方なのでホットドリンクを飲む

ような寒さではないにしても、十分に冷える。そんな中でも四人は汗を飛び散らせながら武器を振るう。むしろ体は熱いくらいだ。
白い息を吐きながら奮戦する四人の狩人。状況は最初の頃に比べれば劇的にこちら側に有利なものになっている。だがそれはあくまで繊細なバランスの上で成り立っているに過ぎない。こちらは常に神経を尖らせて続けてミスの許されない戦いに対して、ディアブロスは一撃でも敵に与えられればその途端に戦況は一気に傾く。有利には違いないが、それは薄氷の上のギリギリの状況に過ぎない。
長さにしてきっと十秒もない。クリュウたちの一斉攻撃を蹴散らすようにディアブロスは起き上がると旋回攻撃を放つ。だが、角も尻尾も失われたディアブロスのその攻撃は最初の頃に比べて攻撃範囲は明らかに狭くなっている。それを見切ってサクラはギリギリの動きで回避すると、すぐさま攻撃へと転ずる。
群がる敵を一掃しようとディアブロスは突進で蹴散らすと共に体勢を立て直す為に距離を開ける。四人が追い掛けると、ディアブロスは砂中へと潜った。急いで散開するが、それを待たずにディアブロスが砂中から突っ込む。狙われたのはクリュウだ。
眼前にまで迫った砂煙の壁を見てクリュウは逃げられないと悟るととっさに盾を構えた。次の瞬間、足下の砂が割れて怒号と共にディアブロスが突っ込んで来た。貫くはずの角はなくとも、その岩のように硬い頭部で放たれる頭突きは下手すれば一撃で鎧が砕けるような威力。もしも盾を構えていなければクリュウは大怪我を負っていただろう。寸前の所で盾を構えたおかげでディアブロスの頭突きは盾で防いだ。だが、衝撃自体は防ぐ事も逃がす事もできず、彼の体はボールのように吹き飛んだ後、地面の上に落ちる。
全身を強打して激痛に顔をしかめるが、幸いにも落ちたのは砂の上で大した怪我は負わなかった。だが、背中を強く打った痛みで起き上がるの苦労している彼を見て、すぐにシルフィードとサクラが援護に動く。
シルフィードは閃光玉を投げてディアブロスの動きを封じ、その隙にサクラが疾風怒濤の勢いで視界を潰されて藻掻くディアブロスに

襲い掛かる。
「クリュウ様ッ！　ご無事ですかッ!?」
慌てて駆け寄って来たフィーリアに「だ、大丈夫だよ」と答え、クリュウは立ち上がる。ヘルムを脱ぎ、道具袋（ポーチ）から回復薬グレートを一気に二本飲み干す。口の端に付いた薬を手の甲で拭い取り、再びヘルムを被る。
「あまりご無理はなされないでくださいね」
「わかってる。それより、早く二人の援護に戻ってッ」
「りょ、了解しましたッ」
すぐさま戦線へと復帰するクリュウを援護するように、フィーリアも走りながら的確な射撃を再開する。クリュウが到達する頃にはディアブロスの視界も回復し、ディアブロスはサクラを狙って突進を仕掛けた。
黒い煙を口から吹きながら怒りの形相で迫るディアブロスに対してサクラは全速力で横へ移動して回避行動。これを幾分か余裕を残して回避すると、砂の上を滑走して止まるディアブロスに反転して攻撃を仕掛ける。振り返るディアブロスの眼前に突撃し、一瞬の隙を突くように跳躍する。
「……よくもクリュウをッ！　この死に損ないがあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
咆哮と共にジャンプの加速と風を突き抜くような鋭い刺突の一撃。その一撃は吸い込まれるようにディアブロスの左目を貫いた。
「グギャゴオオオオオオオオオオアアアアアアアアアッ!?」
すさまじい激痛に悲鳴を上げて大きく仰け反るディアブロス。その衝撃でサクラの体が吹き飛ばされて地面の上に二転三転する。刀を引き抜かれた眼窩（がんか）から夥（おびただ）しい量の血を噴き出して暴れるディアブロス。
悶えるディアブロスを前にして立ち上がったサクラは、口の中を切ったのか唇の端に血が垂れる。彼女はそれを唾を一緒に吐き出すと、口元に不気味な笑みを浮かべる。
「……たかが片目を失ったくらいで情けない。泣き叫ぶなら、もっと

多くのものを失ってからにしなさい愚竜が」
ディアブロスの片目を潰し、不気味な笑みを浮かべて血に濡れた刀を構えるサクラの姿に一瞬三人は戦闘中だという事を忘れて、その夜叉のような姿に身を震わせた。
サクラは常日頃から、クリュウが絡むと一切容赦がなくなる。そんなサクラの、本気の怒り。一切の躊躇なくディアブロスの眼球を抉り、不気味に微笑む。大切な人を傷つけられた事に怒り狂う、恋姫。サクラの本気の姿だ。
「……どちらが人外の存在か、あれじゃわからんな」
あまりにも容赦のない恐ろしい彼女の姿に、引きつった笑みを浮かべながら言うシルフィードの言葉に、隣で銃を構えていたフィーリアが「そ、そうですね……」と顔を引きつらせながら答える。
左目を失った激痛に苦しみながら、ディアブロスはサクラを睨みつけると、怒りの怒号（バインドボイス）を放つ。この咆哮（バインドボイス）に近づいていた高級耳栓スキルを持つシルフィード以外の三人は耳を塞いで動けなくなる。だが、そんな中でもサクラの隻眼は閉じられる事なくディアブロスを睨みつけ続けていた。
咆哮（バインドボイス）を終えると、すかさずサクラに向かって突進するディアブロス。だがサクラは体の自由が戻ると同時に走り出す。
距離的に逃げ切れるものではない。だが、ここで一つの奇跡が起きた。怒り狂いながらずっと全力で戦っていたディアブロスもいよいよスタミナ切れとなったのか、怒り状態が解けて突進の速度が鈍くなっていた。おかげで、ギリギリながらもサクラはこの一撃を回避する事に成功した。
一撃を回避したサクラだったが、彼女自身も並外れた動きの反動でスタミナが切れかけていた。荒い息を繰り返しながら、いつもなら攻撃に転ずるタイミングでも息を整える事に必死になっている。そんな彼女を横目にシルフィードが単身ディアブロスへ突撃する。
「うおおおおぉぉぉぉぉッ！」
勇ましい咆哮を上げて突っ込むシルフィード。ゆっくりと振り返

るディアブロスの顔面に向かって、気合裂帛。勢い良く構えたキリサキを力の限り殴りつけるように叩き落とす。
キリサキの刃がディアブロスの額を割り、血を迸らせ、衝撃で頭が下がる。だが、まるでそれを跳ね返すようにディアブロスは首を勢い良くもたげる。
「ぐわッ!?」
跳ね飛ばされるシルフィードは情けなく砂の上に腰から落ちる。その背後に、手から零れて跳ね飛ばされたキリサキが突き刺さった。
シルフィードの一撃を受けたディアブロスは低い唸り声を上げながら脚を砂の上で滑らせ、呼気が黒く染め上がる――その光景に、シルフィードの口元に笑みが浮かぶ。
「ようやく弱ってきたか……」
ディアブロスは他の飛竜種と違って脚を引きずるなどの弱みを見せない。最後の瞬間まで全力で敵に立ち向かう、そういうモンスターだ。だが、かといって弱っているかどうかを見極める方法がない訳ではない。ディアブロスの場合は、一撃などを入れただけですぐに怒り出した場合がそれに当てはまる。弱っている時こそ自分を強く見せようとする。ディアブロスは、そういうモンスターなのだ。
「ディアブロスは弱っているッ！　あと少しだッ！」
起き上がってキリサキを引き抜くと同時に叫ぶシルフィード。その言葉に三人の表情に希望の光が灯った。
――ディアブロスが弱っている。
それは、これまで必死になって剣を、刀を、銃を振るっていた自分たちの努力が報われる瞬間が近づいている証。この長く苦しい戦いの終焉が、もうじきだというシグナルだ。
ディアブロスに勝てる。
圧倒的なその戦闘力を前に一度は絶望しかけた相手。だが、そのディアブロスをあと少しで討伐できる。それは、疲弊していた精神を奮起させるのに十分な起爆剤だ。
「あともう少しですねッ！」
足場の悪い砂の上を走り回り続けた結果、足は痛いし呼吸は乱れて

いるし、疲れはそろそろ限界に達している。それでもフィーリアはシルフィードの言葉に鼓舞されるように元気を取り戻すと、ハートヴァルキリー改を構える。
「……フン、これくらい余裕よ」
苦し紛れを言いつつも、チームで最も激しく動き回っていただけあって彼女の疲労はかなりのものだ。乱れた息を整えたとしても、その疲労が消える訳ではない。それでも、あと少しという希望に全てを託し、温存していた最後の力をふり絞るように飛竜刀【翠】を構えた。
「貴様には悪いが、私達が勝たせてもらうぞ」
弱っているディアブロスを前にしてキリサキを構えるシルフィードの疲れも相当なものだ。慣れない強敵相手に、正直チームの練度としてはディアブロスを相手にするのは少し厳しいものがあった。サクラの奮戦のおかげで当初の予測よりはずいぶん戦況は良かったとはいえ、突破口を作るために何度も危険な立ち回りをしたシルフィードの疲労もまた厳しい。だが、そんな状況下でも勝てる可能性が目前にまで近づいている事実は、気合でそれらをねじ伏せる。
「あと少し……ッ」
クリュウも砂漠の過酷な環境での激しい戦闘は確実に彼の体力を蝕んでいる。ディアブロスとの立ち回りは命懸けな上、砂漠の気温の異常さや慣れない不安定な足場での全力疾走の数々は、相当な疲労として彼の体に蓄積している。
皆、長時間の戦闘と慣れない環境に疲労困憊という状況には違いない。それでも、弱っているディアブロスを見て、今にも緊張の糸が切れてしまいそうなギリギリの状態でも武器を構える。
あと少し。あと少しで勝てる。その目前にまで迫った、ようやく手が届きかけている勝利。やっと、朧気ながら見えてきた希望が、彼らにボロボロな状態でも闘志を沸き立たせる。
限界を超えた戦い。それもあと少しでを終わる。
一瞬、皆の視線が合う。疲れているのは皆一緒だ。誰が一番疲れているだとか、そういう野暮な事は考えない。皆、共に戦った仲間なのだから。ただ、一緒に勝利を掴みたい。その想いが、視線となって重

なる。
　唸るディアブロスを前に、四人の気持ちが一つになった――みんな一緒で勝つ。その想いが……一つに。
「いくぞ三人ともッ！　一気に畳み掛けるぞッ！」
　シルフィードの掛け声に答えるように三人は返事を返すと、四人一斉に走り出す。
　襲い掛かる四人の狩人を前にどう動くか思考しているのか、ディアブロスはゆっくりとこちらに歩むだけで攻撃の体勢は取っていない。シルフィードはクリュウに右側から、サクラに左側から突っ込むよう、フィーリアにはクリュウの後ろで攻撃するよう指示し、自分はディアブロスの正面から突っ込む。
　ディアブロスを中心に左右中央から一斉に攻撃を仕掛ける。これでディアブロスは一瞬でも誰を攻撃するか迷うはず。その隙に他の全員が一斉に攻撃を仕掛ける。
　首を左右に動かして狙いを定め切れないディアブロスに突撃する中、シルフィードは勝利を確信した。そして、背負ったキリサキの柄を握り締める。
「これで終わりだあああぁぁぁッ！」
　――その確信は、突如として砕け散ってしまった。
　シルフィードの指示に従って攻撃を仕掛ける四人。そんな中、ディアブロスの右側から迫るクリュウ。ちょうどエリアの南側にある湖の横を突き抜ける形で走っていた。手はすでにデスパライズを握り締め、接触と同時に剣を振るう構えを取っていた。
　見ると、サクラとシルフィードも同じように武器に手を当てている。ディアブロスは三方向から迫る自分達の誰を攻撃すべきか迷っているのか動かない。シルフィードの狙い通りだ。
　振り返ると、フィーリアが自分の後方から追い掛けてきていた。ハートヴァルキリー改を構え、走りながら弾倉に弾を全装填すると立ち止まり、ディアブロスに狙いを定める。
　一瞬、彼女と目が合った。するとフィーリアは「任せてください」とばかりに瞳を輝かせた。それを見てうなずき、クリュウは正面へと向

き直る。
ピチャン……
小さな水音が彼に耳に届いた。騒がしい狩場ではそんな小さな音は普通意識していなければ聞こえない。だが、なぜかその音は自然とクリュウの耳に入った。
何の変哲もない水音。だが、クリュウの胸がひどく苦しく締め付けられる――すごく、嫌な予感がした。
もう一度、振り返る。
何の変哲もない水辺。またしても振り返った自分にフィーリアが信じてくださいと言わんばかりにプンスカと怒っているのが見えた。
――気のせい、か。
不審に思いながらも再び正面を向こうとした時――見えてしまった。
その瞬間、クリュウは反転していた。
砂を蹴り上げるようにして前進の勢いを消し、全力で逆走する。
ディアブロスに照準を合わせていたフィーリアはそんな自分の行動を見て目を丸くして驚いている。その様子を見るに彼女は――気づいていない。
間に合えッ！
心の中で必死に叫びながら、クリュウは残っていた力を全部注ぎ込むようにして全力で走った。そして、狼狽するフィーリアを突き飛ばす――次の瞬間、彼の体が消えた。
「……え？」
本当に意味がわからなかった。
突如彼は反転すると、自分に向かって全速力で迫ってくる。ディアブロスに背を向けて、だ。
どうしてそんな必死な表情をしているのか。
どうしてそんなに自分に向かって腕を伸ばしているのか。
――そして、どうして自分は彼に突き飛ばされたのか。
自分の体が一瞬宙を舞っている浮遊感。次の瞬間にはきっと腰から砂の上に落ちているだろう。その時には、何をするんだとばかりに

怒ろう。そう決めていた。
だが、自分の腰が砂に落ちる寸前、彼の体が横へと吹き飛ばされるのが見えた。横から突然人間の腕程の太さの水の槍が現れ、彼の体を撃ち抜いた――理性が動いていたのは、そこまでだった。
砂の上に腰から落ちても、目の前で起きた光景が理解できなかった。ただ、水の槍で吹き飛ばされた彼の体は力なく天を舞い、そのまま落ちる。
鎧をずぶ濡れにして、ぐったりと倒れる彼の体はピクリとも動かない。
「あ……あぁ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……ッ！」
――そして、理解した。
エリア中に響く少女の絶叫。それは声が千切れるような、まるでこの世の絶望を見たかのような断末魔の悲鳴。
ディアブロスに向かって突撃していたサクラとシルフィードはその絶叫――フィーリアの悲鳴に思わず足を止めた。
尋常じゃない彼女の悲鳴に目を向けると、頭を抱えて狂ったように言葉にならない叫び声を上げているフィーリアが砂の上に崩れ落ちていた。そして、彼女の見詰める先には――力なく砂の上に倒れているクリュウの姿があった。
「な、何事だッ!?」
「……クリュウッ！」
勝利を確信したと思った瞬間に響いた仲間の絶叫。振り返ると、勝利とは真逆の絶望的な光景が広がっていた。
自分と共にディアブロスに向かっていたサクラも、倒れているクリュウを見て彼の名前を叫びながら駆け寄っている。
一瞬の出来事だった。たった一瞬で、あと少しだと思われていた勝利がずっと先に消えてしまった。
一体何が起こったのか、シルフィードにはわからなかった――だが、こんな光景を前にも見た気がする。
あれは彼らと初めて一緒に狩りをした、リオレウス戦の時の事。リオレウスの毒爪攻撃を受けて血塗れになった彼を見て、二人は取り乱

し、チームの絆はバラバラに砕け散ってしまった。
あの時の再現かのように、今自分の目の前にはそんな状況が広がっている。
あの時とは桁違いに強く結ばれたはずの絆が、またあの時のように砕け散ってしまっている。
一体、どうして……何が起きたのか……
――その時、空から光が消えた。
消えたといっても一瞬の出来事だ。まるで、自分の上を何か巨大なものが通過した、そんな影。
ハッとなって振り返ると、まるで自分達の無様な状況を嘲笑うかのように見詰めているディアブロスの横、巨大な化け物が砂の上を滑っている。そしてそれは突然起き上がった。
体高はディアブロスよりも高いかもしれない。大きさもおそらく、ディアブロスよりも一回り弱くらい大きい。全身を覆うのはディアブロスのような鎧に例えられる硬い甲殻ではなく、表面抵抗をできるだけ減らしたツルツルの翠色の鱗。巨大な翼は飛ぶ為ではなく、水中でのパドルの役割を担う為のもの。
ディアブロスとは明らかに体つきも生態も、そもそも種族も違う巨大なモンスター。鋭い歯が無数に並ぶ裂けた口は、闇夜でもわかる程に真っ赤。まるで血に染まっているかのようだ。
低い唸り声を上げて、奴はこちらに敵意を向ける。その光景に、泣き叫んでいたフィーリアも、クリュウに向かって走っていたサクラも、そして呆然と立ち尽くすシルフィードも我が目を疑った。そこにいるのは、決して今この場にはいてはいけない存在（イレギュラー）。
ディアブロスの横に立ち、今まさに戦闘態勢になろうとしているもう一頭の竜。
「――ガノトトス……亜種……だと……？」
震える声で、シルフィードは奴の名を口にする。
クリュウを襲い、今まさに自分達に攻撃を仕掛けようと動く巨大な水竜――翠水竜ガノトトス亜種。
あと少しで。あと少しで、ディアブロスに勝てる。

四人がそう希望を抱き、最後の力を振り絞って最終決戦に挑もうとしたまさにその時、招かれざる竜によって、その希望は脆くも打ち砕かれた。
泣き叫ぶフィーリアの声だけが、不気味にエリア中に響く。
走っていたサクラも、呆然と立ち尽くしていたシルフィードも、目の前の絶望的な光景に膝を折っていた。
「まさか、そんな事って……ッ」
皆、目の前の光景が信じられなかった。
――だが、その光景は決して夢でも幻でもない。残酷な現実だ。
満身創痍ながら最後の力を振り絞るように怒り状態のディアブロス。
突如現れ仲間一人を倒し、そして残る三人の希望も闘志も打ち砕いたガノトトス亜種。
巨大な二頭の竜を前に、四人の狩人に為す術など無かった。
膝を折り、両腕を砂の上に立てて何とか体を支えているシルフィード。だが、その瞳にはもうわずかな希望の光も闘志の炎もなかった。
彼女の瞳を支配するのは――絶望。
震える唇を動かし、彼女は力なく吐いた。
「……もう、無理だよ先生」
夜の砂漠を舞台にした戦いは、勝利の希望が砕け散り、絶望に支配されつつあった。

第１６０話　絶望を吹き飛ばす旋風　心優しき銀狼の想い

翠水竜ガノトトス。角竜ディアブロス。

二頭の巨大モンスターを前に、クリュウは気を失って砂の上に倒れ、フィーリアは悲痛な悲鳴と共に泣き叫び、サクラとシルフィードは愕然とその場に崩れ落ちている。

もはや三人の乙女に、戦意など微塵も残されていなかった。

目の前の地獄絵図に愕然としながら、シルフィードは倒れているクリュウを見る。ぐったりと倒れている彼は、先程からピクリとも動かない。気を失っているだけなのか――あるいは……

その先を想像するだけで、胸が痛いくらいに締め付けられる。

嫌だ。

クリュウが死ぬなんて、絶対に嫌だ。

何としても、彼を助けないと――でも、視線を前に向ければ、そこには絶望的な光景が広がっている。

もはや自分達にはわずかな体力しか残されていない。それを必死に掻き集めて、ディアブロスに最後の決戦を挑んだのがほんの数十秒前の事。だがそんな彼らの想いは、突如として現れたガノトトス亜種によって打ち砕かれた。

ガノトトス亜種の水ブレスでフィーリアを庇ったクリュウは地面に崩れ落ち、自分のせいで倒れた彼を見て絶叫するフィーリア。自分もサクラも、その光景に先程まであった闘志を完全に失ってしまった。

体力もなければ、気力もない。もう、自分達には何も残されていないのだ。

抵抗する力も、気も、まるで起きない。

そりゃそうだ。激戦の末にようやくディアブロスを追い詰めたかと思ったら、そこへまさかのガノトトス亜種が乱入。仲間一人が倒れ、三人が実質戦闘不能。これを絶望的な状況と言わずして何と呼

ぶ。
虚ろな視線で見詰める先で、ディアブロスとガノトトス亜種が動く。ディアブロスは必殺の突進を、ガノトトス亜種は首をもたげて水ブレスを放つ構えを取る。どちらにしても、避ける気も起きなかった。
――もう、ダメだ。
シルフィードは諦めるように顔を伏せた――瞬間、嵐が荒れ狂った。
「うおおおおおおおおッ！」
勇ましい咆哮に顔を上げると、砂の上を信じられない速度で走る夜叉がいた。サクラよりもさらに疾い、常軌を逸した速度だ。夜叉は跳躍すると、水ブレスを撃とうとしているガノトトス亜種の頭に向かって構えていた太刀を突き刺す。その瞬間、闇夜を斬り裂くすさまじい電撃が迸った。
頭蓋骨を貫通した刀から放たれる直撃の電撃に、ガノトトスはすさまじい絶叫を上げる。そしてそのまま地面に倒れ、動かなくなった。
突如現れた夜叉に戸惑う三人。それはディアブロスも例外ではなく、三人に向けていた突進を夜叉に向かって仕掛ける。
ガノトトス亜種をあっという間に倒した夜叉は迫るディアブロスに対しても全く動じる事なく、閃光玉で動きを封じた。
視界を潰されて藻掻くディアブロスの横を悠然を通り抜け、夜叉は呆然と自分を見詰めている三人に近寄る。
夜叉の正体は、女性だった。
まるで星の煌きを集めたかのような光り輝く銀色の髪をキリンテールと呼ばれる左目を髪で隠し、右後頭部をサイドテールで縛った髪型。碧色の力強い瞳が特徴的な女性だ。
彼女が纏っているのは銀色の刺々しい印象の防具。両肩からまるで刃物のように突き出た肩当や腕についた刃は、まるで全身が武器のような印象を抱かせる。名をギザミUシリーズ。上位クラスのショウグンギザミから採れる貴重な素材のみを使った上位ハンター装備。シルフィードと同じく、彼女もピアスをして兜は被っていない。

背負うのは身の丈程はある巨大な太刀。サクラの持つ鬼神斬破刀によく似た、しかしそれよりも強力な武器、名を鬼哭斬破刀。これも上位ハンターの武器だ。
女性は年の頃は二〇歳前後。シルフィードより少し年上に見える。
女性は見下ろすようにシルフィードの前に立つと、呆然と彼女を見上げるシルフィードに――そっと手を差し伸べた。
「大丈夫か？」
「あ、あぁ……」
シルフィードは彼女の手を取って立ち上がる。まだ状況がよくわからない彼女に、女性は「お前がこのチームのリーダーか？」と問う。
「あぁ。そうだが……」
「んじゃ話が早ぇや。そこで倒れてるガキを連れて今のウチに逃げな。その間に閃光玉であいつを足止めしといてやるよ。なぁに、せっかくテメェらが追い詰めた獲物を横取りなんかしねぇからよ」
「……す、すまない」
「――バァカ。こっちは妹が世話になってる身だ。これくらい安いもんだぜ」
「妹……？　まさか、あなたは――」
驚くシルフィードの問いに答える事なく、女性は泣き崩れているフィーリアへと近付く。自分の前で止まった足音に、フィーリアは伏せていた顔を上げる――その瞬間、彼女の表情が変わった。
驚愕一色に染まった彼女の口から、言葉が漏れる。
「る、ルミナお姉様……？」
フィーリアにルミナと呼ばれた女性はニッと白い歯を見せて笑うと、彼女の頭をグシグシと少々乱暴に撫でた。
「久しぶりだなフィーリア。元気にしてたか？」
「ど、どうしてルミナ姉様がここに？」
「うん？　いや、ドンドルマで受けた依頼でだよ。ガノトトス亜種の討伐ってね。でもどうやら、同じ狩場で二重契約（ダブルブッキング）してたみたいだけどな」
やれやれとばかりにわざとらしく肩を透かせる女性。そんな姉の

姿を、きょとんとフィーリアは見詰めている。
セクメーア砂漠は基本的にはドンドルマの管轄の狩場である。しかしセクメーア砂漠は砂漠地帯の重要な輸送経路の一つなので、砂漠に領地を持つ国が独断で狩猟依頼を出す事ができる。
しかし多くの国々はハンターズギルドと揉め事を起こしたがらないので基本はこういう場合ハンターズギルドに依頼を出すのが通例だ。だがエルバーフェルド、強いてはフリードリッヒはハンターズギルドの協力を得ようとはしない為に独断で討伐隊を出し、こうして時たまドンドルマの派遣したハンターと問題を起こす事がある。
今回もエルバーフェルドではディアブロス討伐を、ハンターズギルドではガノトトス亜種の討伐をそれぞれ行使し、こうしてブッキングしてしまった訳だ。
だが、今回の場合はむしろそのブッキングのおかげで助かったとも言えなくはないが。
「時間がない。さっさと撤退しろ。その時間稼ぎくらいはしてやるからよ」
「で、でも……」
「そこに転がってるガキの安全を確保する方が先だろ？　それとも、野垂れ死にした方がいいってか？」
「そんな訳ないッ！」
力強く叫んで怒る妹の姿を見てニッと満足気に笑うと「だったらさっさとしな。俺は気が変わりやすいんだ。知ってるだろ？」と言い残し、背を向ける。
「ルミナお姉様、一人で大丈夫？　私が援護した方が……」
「――いらねぇよ。俺を誰だと思ってんだ。称号持ちをなめんなよ。お前は足手纏いだ」
姉の言葉に、フィーリアの表情が曇る。確かに、姉の言う通りだ。姉はギルドから認められた称号持ち。その実力は相当なもので、もうじきG級ハンターへの昇格が決まっている。ここにいる全員の中で、確実に最強だ。それこそ、一人でディアブロス程度をねじ伏せる事も容易なはず。

だから、彼女の言う通り自分は足手纏いにしかならない。いくら姉の背中を追い掛けてがんばっても、まだ姉の背中は遠い。自分は、まだ姉の役に立てない。
表情を曇らせる妹の姿を見て、女性はフッと口元に笑みを浮かべると、再び彼女の頭をグシグシと髪を乱暴に掻き乱す。
「バァカ。お前のがんばってる姿は、ちゃんと見てたぞ。お前はもう立派なハンターだ。胸張れや」
それはきっと、姉の背中を追いかけていた自分が、最もほしかった言葉だったのかもしれない。
圧倒的な実力差のある、ずっと自分より前を走っている姉に、認めてほしい。
顔を上げると、姉はニッと白い歯を見せて笑っていた。美人なのに、その表情や瞳に宿る光はまるで少年のよう。希望に満ち溢れ、今を楽しんで生きている。
そんな姉に憧れて、ハンターを目指した。ハンターをしている姉は本当に輝いていて、きれいで、自分も姉のようになりたい。そう願って……
「ルミナお姉様……」
「……まぁ、お前はまだまだ張るだけの胸はねぇけどな。キシシシ」
美人丸潰れな意地汚い笑い声を上げる姉の言葉に、フィーリアは顔を真っ赤にして「それは言わない約束ぅッ！」と怒る。ビシッと指差す先には、自分よりもずっと大きな胸を自慢気に突き出す、いじわるな姉の姿。
散々笑い倒すと、女性はフィーリアに背を向ける。その背中は、フィーリアがずっと追いかけていた、かっこいい姉の背中だ。
「――さぁ、お喋りはひとまずここまで。さっさと行け」
姉の言葉にうなずき、フィーリアは立ち上がる。その間にシルフィードとサクラは倒れているクリュウの回収を終えていた。シルフィードが彼を背負っている。
「撤退するぞフィーリアッ！」
「は、はいッ！　じゃあ、ルミナお姉様ッ。殿（しんがり）よろしく

ねッ」
フィーリアの激励に、女性は背を向けたままヒラヒラと手を返す。
気を失ったクリュウを背負ったシルフィードを先頭に、フィーリアとサクラの三人は全速力でエリア7を後にした。
拠点（ベースキャンプ）にまで後退した三人。すぐにクリュウをベッドに横たえて手当てをする。幸い、怪我自体は大した事はなかった。あの状況でどうやらとっさに受け身だけは取ったらしい。経験で培った反射神経が功を奏した訳だ。
手当てを済ませたクリュウの次に、フィーリアはシルフィードの手当ても行う。先程岩に叩きつけられただけあって、どちらかと言えば彼女の方が怪我は大きい。
痛む部分にリリアの塗り薬を塗って包帯で固定する。
「すまないな。本当はクリュウの傍にいたいのだろう？」
背中を彼女に向け、包帯を巻いてもらっているシルフィードは申し訳なさそうに彼女に謝る。だが、フィーリアは小さく首を横に振る。
「シルフィード様だってお怪我をされているんですから、放ってはおけません――それに、私がいても何のお役にも立てませんし」
曇った表情のまま言う彼女の言葉に、シルフィードは振り返る。
「あまり気に病むな。あれは誰も想定していなかったイレギュラーだったんだ。君の責任じゃない」
自分の庇って倒れたクリュウ。その事に負い目を彼女は感じていた。それは、きっと彼女ではなくとも同じ状況になれば思う罪悪感。でも、あの事態は誰も想定できなかった事だ。彼女に責任はなく、気に病む事は当然無い。
自分を心配する彼女の言葉に、フィーリアは小さく笑みを浮かべた。
「お心遣い、感謝します」
それでも、その笑みはどこかぎこちなく、暗い闇が消えた訳ではない。無理もない、それが事実だとしても、自分のせいで彼が傷ついた。これもまた、変えようもない事実なのだから。
手当てを終え、天幕（テント）の中へと消えるフィーリア。その背

中を、シルフィードはいつまでも心配そうに見詰めている。
天幕（テント）に入ると、ベッドで横になっている彼の傍にサクラが座っている。心配そうに、眠っている彼の顔を覗き込んでいた。
「あの、サクラ様……」
「……別に謝る必要なんて無いし、あったとしてもそれは私に向けられるものじゃない」
フィーリアがその先の言葉を言うのを遮るように、サクラは淡々と言う。それは不器用なりな彼女の心遣いだった。彼女自身、あれは想定していない事態だ。彼女を責める理由も気も、ない。
ただそれでも、横になってずっと瞳を閉じている彼を心配そうに見詰める彼女の姿は、見ているこっちまで辛くなるような表情。自然と、フィーリアの表情も曇っていく。
「……自分の身を、最優先にって言ったのに」
つい数時間前、勇気を出して忠告したはずなのに。彼はそれを聞き入れなかったどころか、一番してほしくなかった自分を庇って傷ついた。
勝手なのはわかってる。助けてもらっておいて、彼を責めようとしている自分が許せない。許せないけど、同じくらいに彼の事も許せない自分がいる。
どうして、そんなに人の為に自分の命を簡単に投げ出せるのか。生きてこそ、守る事ができるという事を、なぜ彼はわかってくれないのか。
もしも、今回のような事がまたあって。その時に、本当に命を落とすような事があれば……そう思うと、怖くて体の震えが止まらない。
「どうして……」
「……クリュウは、バカなのよ」
そっとつぶやかれた言葉。ハッとなって伏せていた顔を上げると、彼の顔を覗き込むサクラが目についた。でもその表情はさっきまでのような悲痛に満ちたものではなく、優しさに満ちていた。
「バカって……」
「……大バカよ。本当に、信じられないくらいに、バカなお人好し」

スッと彼女も伏せていた顔を上げ、自分を見詰めているフィーリアと目が合う。刃物のように鋭い常の彼女の瞳とは違う、とても優しげな柔らかな瞳。
「……昔から、人の為に無茶ばかりする人。見ている方としてはいつも心配で気苦労が絶えなかったけど――その無尽蔵な優しさが、クリュウの一番素敵な所だから」
いつもはクリュウ以外にはあまり見せない穏やかな表情で言う彼女の言葉に、フィーリアはうなずく。彼女の言う通り、確かに彼の無茶ぶりは見ている方としてはハラハラさせられる。でも、その優しさに触れて彼を好きになってしまったのだから、それを否定する事は、自分にはできない。だからこそ、もどかしい。
「サクラ様は、クリュウ様が無茶をなさる事には反対ですか？」
「……私はクリュウの信念を尊重する」
それはクリュウを心から信頼している彼女らしい言葉。でも、フィーリアはそんな彼女の言葉に違和感を感じずにはいられなかった。
聞きようによっては、彼を心配していないようにも聞こえるセリフ。クリュウの事を本気で心配しているからこそ、彼女の言葉に引っかかりを感じてしまう。
「――私は、サクラ様の意見には賛同しかねます」
ハッキリとフィーリアはそう言った。すると、それまで穏やかな瞳をしていたサクラが一転していつもの鋭さを取り戻す。刃物のように鋭い瞳で見詰められて半歩引いてしまうが、負けずに見詰め返す。
「私は、クリュウ様が無茶をして傷つくのはやはり耐えられません。だから、先程忠告したばかりでしたのに……なのに……ッ　私のせいで……ッ」
忠告していながらそれを無視して断行したクリュウに対する憤り、その彼が無茶をする原因を自分で生み出してしまったという不甲斐なさ。様々な感情が渦巻き、彼女の心と共に握られた拳を震わせる。
悔しげにきつく拳を握り締めるフィーリア。そんな彼女の姿をしばしジッと見詰めたかと思うと、サクラはわざとらしくため息を零

す。
「……私はクリュウの無茶を止めない。その代わりに――クリュウが無茶して怪我をしないように守る。そう決めている」
「え……」
思わぬ彼女の言葉に驚いて伏せていた視線を上げると、サクラがジッとこちらを見詰めていた。責めるでも哀れむ訳でもなく、ただジッとフィーリアの瞳を見詰めるサクラ。
「……クリュウは自分の事を考えずに突っ込む。だったら、そんな彼に群がるあらゆる脅威を私が斬り伏せる。そうすれば、クリュウは傷つく事はない」
「サクラ様……」
「……確かにクリュウは自分の事を優先順位から外している。普通に考えれば自殺願望とも言える無茶苦茶さよ――でも、そうした覚悟と行動で今まで多くの命を助け、逆境を乗り越えてきた事も事実。それはクリュウの実力。それを否定する事は、クリュウ自身の信念や生き方を否定する事になる。私は、そんな事は絶対に許さない。だから、私はクリュウの信念を尊重する。だって――」
そう言うと、サクラはフッと口元に笑みを浮かべる。それは表情に対する感情変化が乏しい彼女なりの、精一杯の優しげな笑顔だったのだろう。小さくも、その笑顔は――きれいだ。
「――私はクリュウの事が好きだから」
飾り立てのない、自分の気持ちを表す真っ直ぐな言葉。自分のように色々な事を考えて悩み、壁に当たって苦しむのとは違う。全てを信頼という形で、ただ一心に彼を支える事を覚悟した、不器用でも確かな恋する乙女の気持ち。
たったその一言。それだけで、彼女が彼の事をどれほど信頼し、愛しているかがわかる。
それに比べて、自分はどうだ。彼に傷ついて欲しくないが為に、彼の信念を否定して止めようとする。口では信頼していると言いながら、自分の行動はその言葉を実行しているだろうか。そんな不安が、疑問が、胸を渦巻く。

本当に彼を愛しているなら。本当に彼を信頼しているなら、自分の考えや行動はやってはいけない事ではないのか。ましてや、自分はそんな彼の部分に恋した。そんな彼の行動に助けられた。それを否定する事は、同時に自分の彼に対する恋心も否定する事にはならないのか。

様々な考えが頭の中で渦巻き、ゴチャゴチャになる。だからこそ、親友（ライバル）の言葉は、そんな自分の頭の中の葛藤を消し飛ばした。

「――好きな人の全てを支えてあげたい。それは、当然の想いだから」

……結局、自分なんかよりもずっとクリュウの事をサクラは想っていた。

彼の全てを信じ、愛している。だからこそその全てを支え、守りたいと願い、行動している。自分の考えを押し付けるだけの自分とは違う、全てを信じるという――究極の信頼。

意気地がないとか、勇気がないとか、大胆さが足りないとか。自分がどうしてもサクラに勝てないのは、そんな表面上の事だけではなかった。もっと深い部分で、自分は彼女に負けていたのだ。

「……サクラ様は、本当にすごい方ですね」

口から漏れたのは、そんな素直な感想。それは同時に――自分の完敗を認める言葉でもあった。

自分は彼を想うが故に、彼を縛りつけようとしていた。最低な女だ……

だが、弱音を吐くフィーリアを見てサクラは小さく首を横に振って彼女の言葉を否定する。

「……私は不器用だ。貴様みたいにクリュウの為に考える事ができない。だから、彼の全てを支えるなんて選択しかできない。そういう意味で、私は貴様がうらやましい」

「サクラ様……？」

静かにそう言うと、サクラはフッと口元に小さな笑みを浮かべて、こう言った。

「――私達は二人でクリュウを支えられるのかもしれない」

彼女の言葉に、フィーリアは目を見開いて驚く。それはあまりにも彼女らしくない発言だった。
何事においてもクリュウを独占しようと誰よりも最初に行動し、波乱を起こすサクラ。だが、今の彼女の発言はそんな彼女とはあまりにもかけ離れている。それも、その片翼が自分だという事も、フィーリアは驚かせている。
「私達、二人で……ですか？」
「……正確に言えば、私と貴様。足して2で割るのがちょうどいいのよ。彼を信頼し、しっかりと支えながら、彼が曲がった道へ進まないように時には勇気を出して意見する――私は支える事しかできない。でも貴様は勇気を出して彼に意見できる。両極端な私達は、ある意味二人で彼を支えるのがベストなのかもしれない。そう思っただけよ」
そんな彼女の言葉に、どこか納得する自分がいた。
自分達二人は確かに両極端だ。全てを信じて支えるサクラと、彼を想うがゆえに自分の意見を押し付けてしまう自分。自分達はアクセルとブレーキの関係だ。どちらも必要で、どちらも欠けてはならない。
今のクリュウはきっと、サクラだけでも自分だけでも生まれてはこなかった。二人で彼の傍にいたから、こうして今の彼がいる。どうしてだか、そう思えた。
クリュウが好き。その気持ちは二人共変わらない。ただ、その表現方法が違うだけ。でもその違いが、大切なのだ。
自然と、どこか納得したような表情になるフィーリア。だが、そんな彼女の顔を見るとサクラは不敵な笑みを浮かべる。いつもの彼女らしい、自信に満ち溢れたあの表情だ。
「……でも、貴様にクリュウは渡さない」
「なッ!?　き、奇遇ですね。私も断固としてその気持ちは変わりませんよ」
いきなりの宣戦布告のような言葉に驚きつつも、フィーリアもしっかりと彼女に対峙して断言する。
二人の願いは、両立する事は決して無い。だが――

「……私のクリュウに対する愛はこんなにも大きい」
「わ、私の方がこんなに大きいですッ」
「……じゃあ、私はこれくらい」
「こ、これくらいですぅッ！」
腕をいっぱいに広げて自分達の彼に対する愛の大きさを競う、一見するとアホらしいやり取りだ。だが、そのどちらの表情もなぜか楽しそう。
――今はまだ、この関係を壊したくない。それは二人の共通した願いでもあった。
天幕（テント）の中であまりにも幼稚な争いを繰り広げる二人を、天幕（テント）の外で聞いていたシルフィード。その口元には小さな笑みを浮かんでいた。
「……まったく、私だっている事を忘れてもらっては困るぞ」
二人の絆がちょっとだけ羨ましく、そんな二人に弾かれている事がちょっとだけ寂しい。でも、そんな二人を見ていると、自然と笑みが浮かんでしまうのだ。
誰か一人でも欠けてはならない。きっと自分達は、そういうチームなのだ。狩猟においても、日常においても――恋においても。
そろそろ顔を出すかと天幕（テント）へ入ろうとした時、突然物音が響いた。振り返ると、そこには何も無い。あるのは、岩壁のすぐ傍に築かれた井戸だけだ。
「何だ？」
不審そうに井戸を見詰めるシルフィード。じっと凝視していると――ゆっくりと、井戸の縁に人の手が現れて……
「……ッ!?」
「な、何ですか今の悲鳴はッ!?」
「……シルフィード？」
突如響いたシルフィードの悲鳴。二人がその声に反応して急いで天幕（テント）から飛び出すと、シルフィードは腰の抜かして地面に座り込んでいた。
「シルフィード様ッ！　一体どうなされたのですかッ!?」

駆け寄って問い掛けると、シルフィードは引きつった表情のまま無言で前を指さす。二人はその指し示す先を見詰め、硬直した。
井戸の縁に掛けられた手。すると、ゆっくりと井戸の中から何かが出て来た。銀色の髪を不気味に顔の前に垂らした、びしょ濡れの女性。顔が見えない彼女の姿は、実に不気味だ。顔を引きつらせた三人は、その恐ろしい姿に、一斉に悲鳴を上げた。
「ま、待てバカ……」
一斉に悲鳴を上げて逃げようと走り出す三人を、井戸から出て来た不気味な女性が引き止める。三人はその声に体を硬直させると、ゆっくりとぎこちない動きで振り返る。
「……まったく、人を幽霊扱いしやがって。感謝の言葉は掛けられても悲鳴を浴びせられる筋合いはねぇぞ」
そう言って女性は前髪を掻き上げて、隠れていた顔を晒す。
「る、ルミナお姉様ッ!?」
「ったくよぉ、実の姉ぐらい見てわかれっつの」
苦笑を浮かべながら立つのは、先程彼らを助けた女性ハンターだった。
「あ、改めてご紹介します。この方はシュトゥルミナ・レヴェリ。我がレヴェリ家次女にして、上位のハンター。私の姉です」
フィーリアの紹介に女性――シュトゥルミナは「よろしくな」と屈託の無い笑みを浮かべる。美しく整った顔立ちに野性味が加わった美女。少年のような真っ直ぐでキラキラとした瞳が特徴的の人だ。
「いやぁ、汗掻いたから地底湖で泳いでサッパリしてから綱を登って来たんだが、外は思いの外寒いのな」
「当たり前でしょ？　水があれば凍ったって不思議じゃないくらいの寒さなんだから」
タオルを巻いたシュトゥルミナにそっと温かいココアを渡すフィーリア。姉の無茶苦茶さに心底呆れている様子だ。
「お、サンキュー」
妹の注意など聞いていないのか、シュトゥルミナはマグカップを受け取ると冷えた体を温めるようにそれを口にする。

「んー、やっぱココアは最高だな」
「相変わらずルミナお姉様は甘いものが好きだね」
「運動した後は甘いものが一番なんだよ。それに、かわいい妹の作ってくれたココアは格別だしな」
「……も、もう。お世辞を言ったって何もないよ」
　照れるフィーリアを見ておかしそうに笑うシュトゥルミナ。仲のいい姉妹という感じだ。だが顔立ちは確かに似ているが、性格は似ても似つかない。シルフィードはコーヒーを、サクラは緑茶を飲みながらそんな二人を見詰めている。
「最後に会ったのは二年前だったか？　お互いハンター家業で忙しい身だからそうそう家にも帰れないからな。だからって、まさか狩場で再会するとは思わなかったけどな」
「ルミナお姉様は、ドンドルマの依頼でここへ？」
「まぁな。別に俺じゃなくても良かったんだが、ちょうど姉さんからセクメーア砂漠で採れる希少素材の採取依頼を受けてたから、ちょうどいいと思ってな」
「セレスお姉様が？」
「あぁ。何でも今度の古龍に関する学会で発表する論文に必要らしくてな。古龍の化石が必要だって頼まれてな」
「それはまた難しい品だね」
「……まったく、聖女みたいな顔して人使いが荒いよ姉さんは」
　疲れたようにため息混じりに言うシュトゥルミナの発言にフィーリアは「そんな事言うと怒られるよ」と苦笑する。
　仲のいい姉妹トークを楽しむ二人に対し、その光景をサクラとシルフィードはジッと見詰めている。シルフィードの場合は二人の会話を邪魔するのは忍びないから黙っている。サクラは単純に二人の会話には興味がないのだろう。その視線はむしろシュトゥルミナの背後に立てかけられている鬼哭斬破刀に向けられている。自身の武器、鬼神斬破刀の進化形態とあってそちらには興味があるのだろう。
「あぁ、話を割ってすまないが。ちょっといいか？」
　しばし二人の談笑を見守っていたシルフィードだが、意を決したよ

うに二人の間に割って入る。二人は会話をやめて振り返った。
「まずは貴殿への謝辞だな。先程は助かった。礼を言う」
礼を述べるシルフィードに対し、シュトゥルミナは屈託の無い笑みを浮かべて手をヒラヒラと翻す。
「気にすんなって言っただろ？　妹が世話になってるのはこっちなんだからよ」
「いや、世話になっているのは我々の方だ。彼女の腕にはいつも助けられているからな」
そう言って微笑むシルフィードに、フィーリアは顔を真っ赤にして照れ笑いを浮かべる。すると、シュトゥルミナはそんな彼女の頬をつねる。
「調子に乗るな阿呆。そういう所がまだまだ子供なんだよ」
「ご、ごめんにゃしゃい……」
フィーリアの頬から手を離すと、シュトゥルミナはマグカップを片手にシルフィードに向き直る。その表情は先程までのような柔らかなものから硬いものへと変わっている。
「一つ、訊かせてもらってもいいか？」
「何だ？　私で答えられる範囲でなら、何でも答えるが」
「――妹は、よくやっているか？」
それは、妹を心配する姉の気持ちの表れだった。彼女の言葉に、頬を撫でていたフィーリアの表情が嬉しそうな笑顔に変わる。それを一瞥し、シルフィードはしっかりとうなずき、答える。
「――もちろんだ。彼女ほど優秀なガンナーはそうはいない。ハンターとしても、仲間としても、非の打ち所が無い」
シルフィードも、そんな姉に対して素直な意見を述べた。少々恋愛ごとで暴走しがちな所はあるが、それを差し引いてもフィーリアは最高の狩友だ。
「そうか……」
シルフィードの返答に満足したようにうなずくと、シュトゥルミナは残ったココアを一気に飲み干し、マグカップを置く。
「……さて、俺はここらで退散させてもらうよ」

そう言って立ち上がると、シュトゥルミナは立てかけていた鬼哭斬破刀を背負う。そんな彼女の行動を見て驚いたのはフィーリアだ。
「も、もう？　せっかく会えたのに。もう少しゆっくりしていっても……」
「バァカ。ここは狩場であって家でもホテルでもねぇんだ。ゆっくりする必要がねぇだろ」
「そ、それはそうだけど……」
「それに、一つの狩場に四人以上のハンターがいるのはあまり好ましい状況じゃねぇしな。俺はともかく、天幕（テント）の中で休んでる坊主のようにお前らに迷惑をかける訳にはいかねぇよ――まだ、戦いは続くんだろ？」
シュトゥルミナの言う通りだ。まだ、ディアブロスを倒せた訳ではない。狩猟はまだ、終わった訳ではないのだ。
姉の言葉に、フィーリアは複雑そうな表情を浮かべて黙っている。久しぶりに会った姉ともっと話をしたい気持ちは当然ある。だが、彼女の言う通り一つの狩場に四人以上のハンターがいる事はあまり好ましいとは言えない。ジンクスと言い切ればそれまでだが、それでもそれはハンターとしての鉄則であり、掟。それを破る事は、できない。
落ち込む妹の姿を見てシュトゥルミナは小さく微笑むと、その頭を優しく撫でた。
「ガノトトス亜種の討伐も、姉さんからの依頼も、俺にとっちゃどうでもいい事さ。だが、久しぶりにがんばってる妹の姿を見れたのは、何にも代えがたい報酬だ――短い間だったが、久しぶりにお前に会えて嬉しかったぞ」
優しい姉の言葉に、フィーリアは泣きじゃくりながらうなずく。実家に帰ればほぼ必ず会えるセレスティーナとは違い、同じハンター家業の為にいつも家にいないシュトゥルミナとはなかなか会う事はできない。またいつ会えるのか、わからない。それでも、姉との絆はちゃんと今も失われずに、結ばれている。それがわかった途端、フィーリアは嬉しかった。
泣きじゃくる妹の頭を優しく撫でながら、シュトゥルミナはシル

フィードとサクラに向き直る。
「――妹を、よろしくな」
「あぁ。任せてくれ」
答えるシルフィードに対し、サクラは無言だ。だが、その小さな笑みを浮かべた横顔を見る限り、彼女の返答は聞くまでもないだろう。
シュトゥルミナはそんな妹の仲間達の答えに満足したようにうなずくと、荷物の入ったショルダーバックを背負って拠点（ベースキャンプ）去る。
「待ってくださいッ！」
その声に驚き、シュトゥルミナが振り返る。天幕（テント）の中から、フラフラの状態で現れたのはクリュウだった。倒れそうになるのを慌ててシルフィードが支え「無茶するなバカ」と怒るが、彼はそれを無視してシュトゥルミナを見詰める。
「思ったより元気そうだな。それなら、秘薬でも呑んでおけばすぐ戦線復帰ができるな」
安心したように言うシュトゥルミナに対し、まずは助けてもらった礼を言う。そして、クリュウは礼などいらないと先程シルフィードに向けたのと同じ言葉を述べる彼女に、静かに宣言した。
「――フィーリアは最高の仲間です。彼女は絶対僕が守りますから、安心してください」
クリュウが笑顔でそう宣言すると、フィーリアは顔を真っ赤にして狼狽する。そんな二人の顔を見比べてシルフィードは苦笑し、サクラは不機嫌そうにそっぽを向く――そして、シュトゥルミナは……
「……ハッ、言うじゃねぇか坊主。気に入ったぜ。さすが将来俺の弟になる男だな」
嬉しそうに笑いながら言うシュトゥルミナ。クリュウはそんな彼女の発言の一部分に首を傾げ、同じ部分でフィーリアはさらに顔を真っ赤に染めて狼狽えまくる。
「坊主、お前名前は？」
「クリュウ・ルナリーフ」
「――クリュウ。妹を守りたかったら、もっと強くなれ。この俺、《銀

狼》を越えられるぐらいにな」

第１６１話　角竜最終決戦　朝日に染まる砂漠に立つ四人の狩人

シュトゥルミナが去ってから二時間程が経った。クリュウの体力も回復し、ガノトトス亜種の乱入で中断されていたディアブロスとの最終決戦に挑むため、四人は今まさに最後の出撃をしようとしていた。

「クリュウ様、本当にもうお体はよろしいのですか？」

自分を庇って怪我をしただけあって、フィーリアはいつも以上に心配しながら問う。そんな彼女にクリュウは「大丈夫だよ。小腹を満たすくらい薬を飲んだから。ちょっとそのせいで気分は悪いかもだけど」と冗談を言って余裕を見せる。

「で、ですが……」

「フィーリア。あまりクリュウを困らせるな。本人が大丈夫だと言っているんだから信じろ」

見かねたシルフィードが少々厳しい言い方ながら心配するフィーリアを止める。怒られ、しゅんとするフィーリアにクリュウは「本当に大丈夫から。ね？」と再度自分は大丈夫だと念押しする。

「わ、わかりました。でも、無理はなされないでくださいね」

「もちろん。一人で戦ってる訳じゃないんだから。みんなをちゃんと頼りにしてるよ」

そう言って屈託なく笑う彼の言葉に、三人の姫が頬を赤らめてそれぞれ視線を逸らす。そんな三人の反応にクリュウは首を傾げた。

「どうしたの？」

「あ、いえ……」

「……別に」

「まったく、君は学習しないな……」

頭の上に疑問符を浮かべまくる彼を見て、三人の恋姫は一斉にため息を零した。

そんなこんなで深夜、すっかり気温は零下を下回った凍えるような

寒さの中、四人の狩人はこの砂漠を統べる暴君、角竜ディアブロスとの最終決戦に向けて出撃した。
　シュトゥルミナが離脱する寸前にディアブロスにペイントボールを投げてくれていたおかげでクリュウ達は奴を見失う事はなかった。匂いを辿ると、どうやら奴はエリア1にいるらしい。エリア2へと出た四人は針路を南東へと取る事になった。
　エリア2を抜ける中、四人は夜の砂漠の凍えるような寒さに身を震わせる。すぐにホットドリンクを飲んで活動に支障が出ない程度にはなるが、それでも根本的な解決にはならない。
「しかし、まさか君の姉があの銀狼だとは。驚かされたよ」
　寒さを紛らわすように話題を振ったのはシルフィードだった。それは彼女だけではなくサクラも驚いていた事であった。表情にこそ出ていないが、クリュウから見れば動揺している事など丸わかりだ。
「称号持ち。それもG級ハンターへの格上げが噂されている実力者だ」
「……同じ姉妹とは思えないような実力差ね」
　二人の言葉にフィーリアは苦笑を浮かべる。姉の事を褒められているのだから、妹としては嬉しいはず。だが、絶賛の言葉を述べる二人に対してフィーリアはどうにも晴れない顔をしている。
「――なぜ、銀狼が姉だと言わなかったのだ？」
　シルフィードの何気ない質問に、フィーリアがビクリと震える。言い淀むように言葉にならない声を零しながら、視線を逸らす。そんな彼女の言葉を制したのはクリュウだった。
「それ以上の追求はなしだよシルフィ」
「クリュウ？　し、しかし……」
「シルフィ」
　どこか怒ったような表情で彼女の追求を阻止するクリュウ。そんな彼の態度に疑問を思いつつも、シルフィードは仕方なくそれ以上の追求をやめた。サクラも、クリュウのいつにない雰囲気に気圧されているのか、何も言葉を発しない。
「……正直言うと、僕はあまり称号持ちとかって人の事は知らない。

だから、シュトゥルミナさんがどんなハンターなのかも、知らない。でも、さっきの戦いや振る舞いから、凄腕のハンターだって事はわかった」
「銀狼は女性太刀使いとしては間違いなく五本の指に入る実力者だ。その豪快な攻め方と圧巻するような戦いぶり。だがほんのわずかでも逸れれば弾かれるような飛竜の鎧でも的確な角度で刃を入れる繊細さを兼ね備えた剣士。銀色の髪を優雅に流して闘うその姿は夜叉とも表現され、彼女の功績は数多い」
銀狼、シュトゥルミナを説明するシルフィードの言葉にクリュウは内心驚かされていた。クリュウにとってはサクラの太刀捌きは神業にも思える。あんな人間離れした動きと戦闘能力、自分には絶対に真似できない。だが、シュトゥルミナはそんな彼女よりもはるかに上のクラスにいる。正直、雲の上の話のようで信じられなかった。
だが、そんな驚きは決して表情には出さず、クリュウは彼女の話を中断する。そして、困惑する彼女を前にクリュウは言い切った。
「――例えシュトゥルミナさんが凄腕のハンターだとしても関係ないよ。フィーリアはフィーリアだ。称号持ちの妹なんかじゃなくて、僕達の頼れる仲間だ」
クリュウの言葉に、三人は目を見張った。フィーリアを姉と比較するな、彼はそう言いたいのだ。どんなにすごい人を姉に持っていても、フィーリアはフィーリア。例えその実力がずっと下だとしても、自分達にとっては代えがたい大切な仲間。彼はそう言っていた。
「……フッ」
彼の言葉に、シルフィードは口元に小さく笑みを浮かべた。
「そうだな。確かに君の言う通りだ。私達は《銀狼の妹》を仲間にした訳ではない。《フィーリア》だから仲間にしているのだ」
「その通りッ」
「……まったく、君に説教されるようでは私もまだまだだな」
「シルフィ、それってどういう意味？」
「言葉の綾だ。気にするな」
ジト目で自分を見詰めてくるクリュウの視線に苦笑しながら彼を

なだめるシルフィード。そんな二人の様子を見詰めていたフィーリアに、そっとサクラが耳打ちする。
「……クリュウは英雄の息子。両親共に、生ける伝説と言われた凄腕のハンターだった。だから、貴様の気持ちもわかるんでしょうね――英雄と比べられる、辛さを」
振り返ると、サクラは何事もなかったように髪を掻き上げながら空を見上げている。彼女の言葉を頭の中で反芻しながらフィーリアは彼の方へと向き直る。
「シルフィって、やっぱり僕を子供扱いしてない？」
「そんな事はないから、そろそろ疑いの目を向けるのをやめてくれないか？」
どうやらシルフィードをいじめるのが少し楽しくなっているのか、イタズラっぽい笑みを浮かべながら彼女を追い詰めるクリュウ。生真面目過ぎるシルフィードはそんな彼の遊び心などに気づかず、彼の視線から気まずそうに逃げている。何だか、本当の姉弟のように見えてしまう。
楽しそうに笑う彼の横顔を見て、フィーリアは小さく微笑んだ。
「……ありがとうございます」
フィーリアは駆け出した。そして、散々シルフィードをからかって歩き出そうとする彼の腕に抱きつく。
「ふぃ、フィーリア……ッ!?」
サクラとシルフィードも彼女の突然の行動に驚いているが、当の本人はもっと驚いている。腕に抱きつく彼女に頬を赤らめて困惑する。
「ど、どうしたのさ一体……？」
「クリュウ様、大好きですッ」
「えぇッ!?」
「……ッ！」
満面の笑顔で嬉しそうに言うフィーリア。その笑顔は本当に幸せそうな、恋する乙女の。そして、天使のような笑顔であった。
ギューッとクリュウの腕に抱きついて擦り寄る彼女の行動にクリュウは顔を真っ赤にして狼狽するが、すぐさまサクラが反対側に抱

きついてフィーリアを牽制。結局いつもの睨み合いになり、板挟みとなったクリュウは熱でもあるのかというくらいに顔を真っ赤にしてシルフィードに助けを求める。が、
「贅沢な悩みで私を頼るな」
と、いつになく冷たい反応で彼の救援を断った。シルフィードに拒否されてどうしたもんかと悩む彼を見詰め、シルフィードはポツリとつぶやく。
「……クリュウは、二人のようなかわいい娘が好き……なのか」
頬を赤らめ、シルフィードはチラチラと彼に抱きついている二人を羨ましげに見る。本当は二人のように彼の傍にいきたいのだが、妙なプライドやら責任感がそれを邪魔している。何とも不器用な子だ。
すっかりディアブロスの事など忘れて桃色空気全開な四人。クリュウを取り合う二人の戦いも激化し、サクラに関してはクリュウを押し倒さんという勢いだ。それを見てさすがに止めるかとシルフィードが振り返る――刹那、空気が変わった。
「――クリュウ、フィーリア、サクラ」
「うん。わかってるよ」
「……この気配」
「来ますッ！」
言わずとも、皆気づいていた。どんなに気を抜いていても、そこはハンターだ。狩場の微妙な空気の変化は敏感に感じ取れる。それに、吹き抜ける風に含まれる匂いが、全てを物語っていた。
それぞれが同じ方向を見詰め、武器に手を掛けて戦闘態勢。
不気味な沈黙は一瞬。そして、
「ガアアアアアッ！」
唸り声と共に彼らの見詰める先で砂が爆発した。天高くまで舞い上がる砂の中、砂中から奴は姿を現した。
両の角を折られ、尻尾も斬られ、片目を潰され、満身創痍な体を引きずりながらも奴は勇ましく彼らの前に姿を現した――角竜ディアブロス。
降りしきる砂雨の中、ディアブロスはゆっくりと振り返って四人と

目を合わせる。隻眼で憎々しげに睨みながらも、不意打ちなどはしない。自分をここまで追い詰めた敵に対する、彼なりの礼儀とでも言うのだろうか。
砂の雨が振り終えると、再び不気味な沈黙が舞い降りた。
グッとデスパライズの柄を握り締めながら悠然と月明かりの下で佇むディアブロスを見詰める。弱っているようには見えない。むしろ、まだまだ全然これからという雰囲気すら感じられる。だが、確実に相手は弱っている――おそらく、これが最後の戦いになる。それは彼だけではなく三人も、そして彼も……
不気味な静寂は、砂上に奴が現れた時のように突然失われた。
「グギャアアアアオオオオオオオオオオッ！」
すさまじい怒号（バインドボイス）が辺りに轟く。本能から逃げる事ができない恐怖を刺激するその声は、クリュウ達の体を縛り付ける。だが、それが効かないシルフィードは三人の肩を叩いてその拘束を解く。そして、
「行くぞッ！」
彼女の掛け声と共に、四人は一斉に動き出す。ディアブロスを包囲するように展開するハンター達。そんな彼らを薙ぎ払おうと動き出すディアブロス。
夜の砂漠を舞台に、壮絶な最終決戦の火蓋が切って落とされた。
ディアブロスを包囲するように展開する四人。その先頭、つまり正面を担当してディアブロスと真っ向勝負を挑むのはシルフィードだ。ディアブロスは当然正面から突っ込んで来る彼女に対して突進を仕掛ける。
突っ込んで来るディアブロスに対して、シルフィードはその場で剣を構えた。引き抜いたキリサキを背負い、力を溜めるように腰を落としてその場に固定。ディアブロスを待ち構える。
ギリギリと歯軋りしながら爆発するような力を無理やり押さえ込む。その間もディアブロスは砂煙を上げながら迫って来る。そして、眼前にまで迫った瞬間――彼女が動いた。
「うおおおおおおおおッ！」

気合裂帛。限界まで溜めた力を一気に解放するように体中の筋肉が一斉に動く。脚力は前へと踏み込みへ、腰は体の軸となって威力を増させ、腕は巨大な剣を豪快に撃ちぬく火薬となり、手首は的確な角度へと剣を導く。全ての部位と筋肉がただ攻撃の一点に集中特化。体全てを使った一撃は大剣使い最強の一撃にして必殺技。その破壊力は強大であり、その全てが剣に注がれて一直線に振るわれる。そして、振り下ろされた一撃は迫るディアブロスのこめかみを打ち砕いた。

「ギャアアアアアッ!?」

こめかみを砕かれ、踊り狂うように迸る血に顔を染めながら、ディアブロスは絶叫と共にその場に横倒しに倒れた。

横倒しになって藻掻くディアブロスに対してシルフィードは勢い余って砂中へ刃を埋めたキリサキを引き抜き、容赦なく振り上げた剣を叩き込む。そんな彼女に続けとばかりに他の三人も一斉にディアブロス目掛けて殺到する。頭付近は彼女に任せてサクラは翼を狙って刀を振るい、フィーリアは残っている通常弾ＬＶ２を撃ち尽くすような激しい速射攻撃で遠距離からディアブロスを狙う。そして、クリュウは――

「喰らえぇッ！」

クリュウは脚を狙ってデスパライズを振り落とす。拠点（ベースキャンプ）で携帯砥石を使って切れ味を回復させただけあって、傷ついたディアブロスの鎧に比較的簡単に刃が通った。

迸る麻痺毒。その流れは確実にディアブロスの体内を目指している。

あと一回。あと一回麻痺状態起こせるかどうか。弱っているとはいえ、ディアブロスは強敵だ。その暴走を止められるのは、自分のデスパライズだ。

必死になって剣を振るうが、その剣撃全てが麻痺毒を放つ訳ではない。その歯がゆさに、クリュウは歯ぎしりする。

「あと少しなのにッ！」

意地になって剣を振るうが、それを拒むようにディアブロスがゆっ

くりと起き上がる。悔しげに顔を歪め、クリュウは仕方なく一度距離を置く。戦いに熱くなっても、冷静さを忘れない。それがハンターだ。

ゆっくりと起き上がったディアブロスはその場で低い唸り声を上げながら口から黒煙を吹かせる。ディアブロスの弱っている証拠だ。それは、確実に自分達の勝利が目前にまで迫っている証。

この無限にも思える戦いの終わりは、もうすぐだ。

距離を話す剣士組三人を見回し、ディアブロスは正面に陣取るシルフィードに狙いを定めると、激情と共に駆け出す。

迫り来るディアブロスに対してシルフィードは剣を背負うと横へと走る。が、距離が詰まっていた事と怒り状態での突進速度の速さから避けられないとわかると、キリサキを構えてガードの体勢になる――刹那、ディアブロスの強固な額がキリサキの峰に激突。彼女の体が吹き飛ばされる。

足で踏ん張りながら砂の上を滑走しキリサキを砂に挿して止まると、膝を着く。

「くぅ……ッ、一体どこにまだこんな力があるんだ……ッ」

ディアブロスの無限とも言える体力に思わず弱音が飛び出す。いくら勝利が近づいているとはいえ、これではジリ貧もいい所だ。

シルフィードを吹き飛ばしたディアブロスに殺到するのはサクラ。突進の勢いを乗せて突き出す刺突の一撃は、ディアブロスの強固な鎧を突き破って脚に突き刺さる。吹き出る血飛沫に身を濡らしながら、彼女は歯軋りと共に刀を引き抜く。続けて連撃を炸裂させるが、ディアブロスはよろける事もなく振り返ると彼女をすくい上げるように頭突きを放つ。だが、寸前で横へ跳んでいた彼女にはその攻撃は届かない。それどころかサクラは反撃とばかりにディアブロスの顎の下から飛竜刀【翠】を突き出す。

「ギャアァッ!?」

防御の為の甲殻もない顎の下はいとも簡単に刀が突き通る。顎を貫き、口腔へと刃は達する。舌も貫いた刀を、サクラは容赦なく一気に引き抜く。

「ゴエエェッ!?」
ディアブロスは悲鳴を上げて口から大量の血を吐く。ボタボタと血を垂らしながら振り返り、ディアブロスは憤怒に満ちた瞳で彼女を睨みつける。だが、それを邪魔するようにフィーリアの撃ち放った通常弾ＬＶ３が次々にディアブロスの側頭部に命中する。
鬱陶しげに彼女へと振り返った瞬間、そこへシルフィードの咆哮と共にキリサキが叩き落される。再び額を砕かれ、悲鳴を上げて仰け反るディアブロス。口からさらに大量の血が悲鳴と共に吐き出された。
たたらを踏みながら後退するディアブロス。武器を構え直して攻撃しようとする二人を前にディアブロスは逃げるようにして砂の中に潜り込む。その姿を見て反射的に音爆弾へと手を伸ばすが、怒り状態だという事を思い出して手を戻す。
怒り状態で砂中へ入られれば、こちらは手出しができない。仕方なく散開して逃げ回る他はなかった。
散開して動く四人だが、クリュウはディアブロスの潜った地点を見詰めながらシルフィードへと駆け寄った。
「シルフィ、さっき大丈夫だった？」
「問題ない。それより私の近くにいると危ないぞ――尻尾に片角に、私は奴の体を傷つけ過ぎた。狙われるには十分過ぎるとは思わんか？」
自嘲気味な笑みを浮かべながら言うと、シルフィードはクリュウから離れる。そんな彼女の背中を見送っていると、砂中にいるディアブロスが動いた。
地響きと砂煙と共に動き出したディアブロスは――シルフィードを狙って突進する。
「やっぱりな……ッ」
ある意味予想通りなディアブロスの行動。だからといって彼女に迎撃手段がある訳ではない。怒り状態で砂中にいるディアブロスに対する有効な手段など、ないのだから。
情けないが、ここは逃げるしかない。シルフィードは全力で走りながらディアブロスと自分の距離を目測しながら、砂中から自分を狙っ

てディアブロスが出て来る直前で横へ跳んだ。結果、ディアブロスの攻撃は不発に終わり、シルフィードはすぐさま反撃に転じた。
軸足をしっかりと固定して、振り殴るようにしてキリサキをフルスイング。剣先は一直線にディアブロスの脚に炸裂し、ディアブロスは一瞬膝が落ちる。だがすぐに振り返り、シルフィードに向かって体当たり。彼女はそれをキリサキでガードしてやり過ごした。
シルフィードが攻撃に転ずるのに少し遅れてサクラも襲い掛かる。シルフィードを攻撃してできた一瞬の隙を突いて懐へと潜り込むと、脚を狙って乱舞する。横薙ぎへ振るう回転斬りと同時に足捌きを変えて前へと踏み込む。より深く、より鋭く、刃を滑らせる動き。下手をすれば峰の途中で折れてしまうかもしれないような無茶な動きだが、彼女はそれを刃を入れる角度を調整して難なく行なってしまう。それも、全ての剣撃においてだ。天才と言えばその一言で片付けられるが、彼女はそういう子だ。
ディアブロスは鬱陶しげに短くなった尻尾で彼女を薙ぎ払おうとするが、その短さがわずかに彼女に届かない。その範囲を見切っていたサクラは構わず攻撃を続ける。
サクラへとディアブロスが振り返ろうと動き出した瞬間、クリュウが背後から突撃する。デスパライズを振り上げ、両腕の力で一気に振り落とす。その一撃は容赦なくディアブロスのアキレス腱を斬りつけるが、シルフィードの大剣のような強力な一撃ならまだしも、片手剣の一撃程度ではビクともしない。クリュウは舌打ちすると連続して剣を叩き込む。
クリュウの攻撃を無視し、ディアブロスはサクラへと向き変える。だが、その瞬間横へ陣取っていたシルフィードの溜め斬りが炸裂。強力な一撃にディアブロスは悲鳴と共に血と何本かの歯を吐き出す。
怒り狂った瞳で今度はシルフィードへ向き直るが、それを妨害するようにクリュウが投げた小タル爆弾Gが側頭部で炸裂する。同時に錬気を溜めたサクラがそれを解放するように一気に気刃斬りで攻勢を強めた。
三人の剣士の猛攻撃に、誰か一人に狙いを定める事ができないディ

アブロス。さらにそこへ月を背後に無数の弾丸が落ちてきた。次々に振り注ぐのは貫通弾ＬＶ２の雨。全身を無数の貫通弾で撃ち抜かれ、褐色の鎧を自身の血で真っ赤に染め上げる。

口の中に溜まった血と共に濁った悲鳴を上げるディアブロスに対し、それでも容赦なく弾を撃ち続けるフィーリア。ここが踏ん張り所だとわかっているからこその猛攻撃だ。むしろ、これ以上の戦闘は自分の体力が持たない以前に弾丸が底を尽きてしまう可能性の方が高い。残っている弾丸はあとわずか。ガンナーは、弾がなければ戦う事はできない。だからこそ、自分が役に立たなくなる前に何としてで勝ちたい。その強い想いが、彼女を突き動かしていた。

腕が痛くなるほどの連射。だが、それでも彼女は攻撃の手を一瞬たりとも緩める事はしない。一瞬でも緩めれば、それは剣士組の危険に直結する。できるだけディアブロスの意識をこちらに牽引しつつ、弾が尽きる前に決着をつける。その為には、怒涛の連射でディアブロスを足止めし、剣士組三人が全力で剣を振るえるステージを用意しなければならない。それが、ガンナーである自分の役目だ。

四人の猛攻撃に動きを封じられるディアブロス。だが、たった四人の力で留めておける時間などほんの数秒か十数秒程度だ。すぐにディアブロスは逃げるように砂中へと消える。再び散開して相手の出方を伺っていると、ディアブロスは再びシルフィードを狙って砂中から迫る。

「しつこいぞ……ッ」

シルフィードは荒い息を繰り返しながら走り切り、何とかディアブロスの一撃を回避した。だが、すっかり息が上がってしまい整える為にいつもなら攻撃に転ずるタイミングでも立ち尽くしている。

サクラに続いてシルフィードにも、いよいよ疲労の色が本格的に濃くなり始めていた。それを感じたクリュウとフィーリアは一瞬目を合わせて攻勢に出る。息を整えている二人に対してクリュウは単独でディアブロスに接近して斬り掛かり、フィーリアも間合いを詰めてより命中精度と弾の最大威力を狙った立ち位置へと移動する。

だが二人が攻勢に出るも、単純な攻撃力ではこの組み合わせではシ

ルフィードとサクラの総攻撃力には明らかに劣る。当然、ディアブロスを足止めするだけの威力はない。だが、
「これでッ！」
一撃を入れた後にすぐ武器をしまい、腰に下げていたシビレ罠を手早く設置したクリュウ。鬱陶しい程に連射をするフィーリアを狙ってディアブロスが動き出すのと、クリュウがシビレ罠のピンを抜いたのは同時だった。
「グゲェッ!?」
強力な即効性の麻痺毒がディアブロスの巨体を拘束した。これで十秒程度ならディアブロスを完全に足止めできる。そして十秒もあれば、二人の呼吸も整うだろう。
「くぉのぉッ！」
当然、ただの足止めだけにシビレ罠を使う訳ではない。このわずかな時間の間にも、できるだけダメージを与えておく必要がある。クリュウは避けるという思考を排除してただ我武者羅に剣を振るいまくる。それに合わせてフィーリアも激しい連射で援護。
シビレ罠を踏み抜いて体の自由を奪われている為、ディアブロスは二人の猛攻撃を受け続けるしかない。必死に脱しようと藻掻くが、内的束縛から逃れる術などない。
何度も岩のようなディアブロスの甲殻に剣を叩きつけている腕はすでに痛みで一瞬でも力を抜けば取り零しそう。切れ味は砥石で回復しても、腕の痛みは回復薬を飲んでもそう簡単に治るものではない。痛みを取り払うのは時間だけだ。だが、自分達にはそんな時間すらも無駄に使う事は許されない――なら、腕が壊れる前に決着をつける。それだけだ。
激痛に顔を歪めながらも、決して手を抜かず剣を振るい続ける。その必死な戦いぶりに休憩していた二人も勇気づけられるように手早く息を整えて戦線に復帰した。
剣士組三人での猛攻撃に加え、フィーリアの射撃も衰えずに続けられている。
サクラとシルフィードが加勢できたのはほんの数秒だ。それでも、

一瞬合わせた目が全てを物語っていた――誰か一人ががんばるのではなく、みんなでがんばる。
心強い仲間と共に攻撃を続け、しかしついにシビレ罠が音を立てて壊れるとディアブロスが動きを取り戻した。それに合わせて剣士組は一度距離を置くが、フィーリアだけは途切れる事ない連続射撃を続ける。
シビレ罠の拘束から解放されたディアブロスはフィーリアの攻撃を物ともせずに自分を拘束した忌まわしい敵、クリュウを狙って突進する。砂煙を巻き上げながら迫り来る暴竜に対し、クリュウは間一髪閃光玉を投げて足止めに成功する。
目を潰されて再び動きを止めたディアブロスに対して、いつもなら攻め込むべきタイミングだがクリュウは動かなかった――否、動けなかったのだ。
「はぁ……はぁ……」
白い息を繰り返す彼の表情はヘルムに隠れて見えないが、明らかに疲れている事はわかる。彼もディアブロス相手に常に走り回っていただけあって、かなりの疲労が蓄積していた。寒い夜空の下だというのに、防具の下は汗だくだ。
狩猟をしていると剣の振り過ぎで腕が痛くなる事はよくあるが、ここまで足が重く痛く感じる事は滅多にない。慣れない砂漠という足場の悪い環境に加えて常に走り回るディアブロス相手にした戦闘は、全ての面で通常の狩りと異なる。その差異が、体に余計な負荷をかけて、こうして体に変調を起こす。
息はすっかり乱れ、足は痛さで一瞬でも気を抜けば崩れ落ちてしまいそう。それを無理やり気合で支えながら、クリュウはヘルムを脱ぎ捨てると、汗だくの顔を外気に晒す。水筒を取り出して水を飲み干すように一気飲みし、さらにそれを頭から被る。後で髪が凍りそうだとか、そんな発想は今の彼にはない。ただ、熱を帯びていた顔はその冷たさに一気に冷える。頭が再び回り出すと、彼の顔に希望の光が戻った。
「あと一息、だよねッ」

脱ぎ捨てたヘルムを再び被り直し、クリュウは再びディアブロスに向けて突撃する。そんな彼の行動に息を再び息を整えていた二人も、そして一人果敢にも射撃を続けていたフィーリアも後押しされるように再びディアブロスを包囲するように立ち回る。

人間とは、実に単純な生き物だ。ちょっとしたきっかけさえあれば、その能力を十二分に発揮する事ができる。

鈍っていた動きが再び鋭敏さを取り戻す。と言っても体力が回復した訳でも何でもない。単純にラストスパートを掛けて残っていた体力全てを振る絞るように使っているだけに過ぎない。ある意味、ただの気合任せの悪あがきに見えなくもない。だが、例えそうだとしても確実に四人の動きが変わったのは事実だ。

動き回る四人に対してディアブロスは誰に狙いを定めるべきか迷い、その場から動けないでいる。その間に背後からサクラが斬り掛かり、当然ディアブロスはそちらへと振り返る。だがそうするとその背後から今度はシルフィードが斬り掛かり、そちらへ振り返るとクリュウが横から攻撃し、振り返ろうとすると側頭部にフィーリアが撃ち放った無数の弾丸が命中する。四人の的確な連携攻撃を前に、すっかりディアブロスは翻弄されている。

だが、いつまでも動きを封じられている訳ではない。とにかくこの場から脱しようとディアブロスはサクラに狙いを定めると走り出す。だがサクラはそれを簡単に避けて事無きを得る。だが、ディアブロスが動いた事で包囲網が崩れてしまった。

包囲網を脱したディアブロスはすぐに振り返ると追い掛けて来る四人を牽制するように怒号（バインドボイス）で彼らの動きを封じる。その咆哮にクリュウ、フィーリア、サクラの三人は動きを封じられるが、シルフィードは構わず突撃する。そして、鳴き終えて首を下ろすディアブロスの顔面に向かって容赦無くキリサキを叩き込む。

「だりゃあああぁぁぁッ！」

力強く振り下ろした一撃がディアブロスの頭部を打ち砕く。悲鳴を上げて仰け反るディアブロスに対してシルフィードは続けざまにもう一撃を叩き込む。その間に動きを止められていた三人も動き出

し、加勢に加わる。
口から真っ赤な血を吐きながらディアブロスは迫り来るクリュウとサクラに向かって体当たりを仕掛ける。が、当然その大振りな動きは見切られ、二人はそれを器用に回避すると、その大きな隙を突いて懐へと入り、剣を振るう。
クリュウとサクラの武器はそれぞれ硬い装甲を持つディアブロス相手には真っ向勝負はできない。だからこそ、二人同時に脚の背後へと回り込み、生物の構造上どうしても鎧を身に纏えないアキレス腱を狙って斬り掛かる。
「喰らえッ！」
「……ここッ」
同時に斬り掛かった二人の剣と刀はディアブロスのアキレス腱を斬りつける。甲殻なんかを攻撃するよりはずっと楽だが、それでも人間のように柔らかいとは言えない。それでも二つの刃は褐色の肉を引き裂く。
「ゴアアアアアッ!?」
一瞬脚の力を失い、ディアブロスは無様に横倒しに倒れる。巨体を支える脚の、コントロールを司るアキレス腱を傷つけられれば、例えどんな強大な相手でも、脚で巨体を支える生物である限りその巨体を維持する事はできない。
二人の同時攻撃でディアブロスは完全に地面に倒れた。そこへ月明かりをバックに無数の銃弾が降り注ぐ。フィーリアからの最大級の火力支援だ。
「これが最後の銃弾ですッ！」
フィーリアはそう叫ぶと、最後の弾丸となった徹甲榴弾ＬＶ２を撃つ。施条（ライフリング）の施された銃身で弾は回転力を得て銃口から飛び出す。激しい回転が空気の流れを斬り裂き、初速段階での勢いを維持したまま目標へと突き進む。それは一直線に倒れているディアブロスの側頭部に命中。着弾の衝撃で発火装置が作動し、中に込められた火薬が破裂。小規模ながら至近距離での爆発が起き、ディアブロスは悲鳴を上げる。

爆発の際に発生した黒煙が、一瞬ディアブロスの隻眼を塞いで視界を奪う。そして、視界が再び晴れた時――目の前には巨大な剣を構えた戦姫の姿があった。

「――これで、仕舞いとさせてもらうぞ」

彼が最期に見た光景は、そうつぶやいた少女が力強く剣を振り下ろす瞬間であった……

天を震わせる断末魔の悲鳴を最期に、地に伏していたディアブロスの隻眼から生気が失われる。同時に全身に纏い、空気を張り詰めさせていた殺気の奔流も霞のように霧散し消える。

騒がしい程に爆音や騒音に包まれていた世界は、先程までの喧騒がウソのように静けさを取り戻し、耳が痛いくらいの沈黙が世界を支配する。その空間に微かに響く四つの荒い呼気。

クリュウは砂の上に膝を折って荒い息を繰り返しながら倒れ伏したディアブロスを見詰めている。サクラも同じように膝を折り、刀を砂の上に突き立ててうつむきながら息を整えている。フィーリアも玉のような汗を額に滲ませながら、深呼吸しながら一発も弾丸が残っていない銃を下ろしている。そして、

「ハァ……ハァ……」

一際大きく荒い呼気を繰り返しながら立ち尽くすシルフィード。剣先を砂の中深くに埋めた大剣キリサキの柄から腕を離すと、そのままフラフラと後退り、尻餅をついてしまう。見詰める先には、今しがた自分がトドメを挿したディアブロスの骸（むくろ）が無言で横たわっている。

地面に着いた、先程まで剣を握っていた手を見ると、小刻みに震えていた。疲れからくる痙攣か、外気に寒さに対する震えか。

そのどちらとも違う。答えは一つ――感動から来る震えだ。

頭はまだ状況が理解できず困惑しているが、体はしっかりと理解している。腕から伝わった確かな手応えが証明している。時に体は原始的ながらも、考えるよりも先に理解する。

震える腕を見詰めながら、シルフィードはポツリと零す。

「……勝った、のか？」

それは誰かに答えを求めているのではなく、自分に対する確認の意味を込めた問い掛けだった。
小刻みに震える腕は確かに勝利を確信し、目の前に横たわるディアブロスはピクリとも動かず骸として地に伏している。辺りを支配するのは殺気に塗れた圧迫されそうな空気ではなく、ただ冷たい風が吹き抜けるだけの不気味なほどに静かな砂漠。
荒れた息が次第に落ち着き、ゴクリと唾を飲む音だけが妙に空へと解けていく。
そして、ようやく理解する――
「……はぁ、終わったか」
バタリと砂漠の上に横たわり、空を見上げる。いつの間にか、夜は次第に明けつつあった。東の空はすっかり茜色に染まり始め、夜の闇を押しのけながら少しずつ広がっていく。
茜色に空と星が煌く、二つの空が同じ時間に現れる。それはまるで夢物語に出て来るような幻の光景だ。一日の間、ほんのわずかな間だけ現れる奇跡。
その神秘的な空を呆然と見上げていたシルフィードの口元が、ゆっくりと綻ぶ。
「夜明けか……、空も粋な計らいをしてくれる」
遠く、少し離れた場所では自分と同じく状況を理解した三人が抱き合って大喜びしている。さっきまであんなに疲労困憊で立っている事すら必死だったと言うのに、どこにそんな元気が余っていたのかと思ってしまう程だ。
ただまぁ、このきれいな空を見上げながら友達の喜ぶ声を劇伴にしながら眺めるのも、悪くはない。
疲れ切った体に、次第に感動が染み渡る。その心地良さ、これだから狩りはやめられない。この疲れさえ、今では心地良いくらいだ。
しばらく、この時間を味わっていたい。そう思いながら、スッと瞳を閉じる。
「シルフィ」
その声に今しがた閉じたばかりの瞳を開くと、そこには満面の笑顔

を浮かべたクリュウが立っていた。ヘルムを脱ぎ捨てた彼の若葉色の髪は先程被った水で湿っていて、その先端がこの寒さで少し凍っていたりする。
ジッと見詰めていると、そっと彼が自分に向かって手を伸ばしてきた。
「立てる？」
「……あぁ、何とかな」
シルフィードは彼の手を握り締めると、ゆっくりと上半身を起こす。もう少し横になっていたかったが、せっかくの彼の好意を無下にはできない。
起き上がると、遠くの方で自分と同じように腰を落として楽しそうに談笑しているフィーリアとサクラの姿が見える。談笑と言ってもフィーリアが一方的に話していて、サクラはそれにうなずいたり短い言葉などで相槌を返すだけだが。
二人のクリュウに対する仲の良さも相当なものだが、こうして見ているとあの二人の仲の良さもかなりのものだ。互いが親友と認め合っているだけあって、その絆はそれこそ鋼鉄のよう。
……いつも思うが、そんな二人の仲がとてもうらやましい。何だか、このチームの中で一番自分が浮いている。そんな感じがどうしても否めない。
「……まったく、焼いてしまうくらいに仲がいいなあの二人は」
「そうだね……と、言った傍から何だかケンカを始めたみたいだけど」
見ると、さっきまで笑顔で話し合っていた二人が今ではムキになって何かを言い合っている。大声で言い合っているので内容が耳に届く。どうやらクリュウの魅力を言い争っているらしい。傍から見ると「阿呆か」と呆れるようなバカラブっぷりだ。
「あはははは……」
クリュウからしてみれば何とも居心地の悪い暴露大会のようなものだ。止めたいのが本音なのだろうが、二人の剣幕にすっかり入る隙を失い傍観に徹しているらしい。
「まったく、ケンカする程仲がいいとは良く言ったものだ」

「そうだね。まぁ、ケンカの原因がいつも僕の事だったりするのは勘弁してほしいけど」
「贅沢な事を言うな。私が男なら実に妬ましい発言にしか聞こえんぞ」
「そうなの？」
「……まったく、君は本当に少しは自覚を持て。一生懸命がんばっている二人を見ていると涙が出て来るぞ」
　呆れながらため息混じりに言うシルフィードの言葉にクリュウは首を傾げる。初めて会った時に比べてハンターとしてはずいぶん成長した彼だが、ある意味一番肝心な部分はまるで進歩がないようだ。
　すると、クリュウは何を思ったのか腰掛けたままでいるシルフィードの隣に同じように腰を落とした。突然横に座られたシルフィードは驚く。
「どうした？」
「いやぁ、疲れたなぁと思ってさ」
　苦笑しながら言う彼の言葉に、シルフィードは「そうだな」と同意見だとばかりにうなずく。確かに今回の狩猟はいつも以上に疲れた。正直、ここ最近では一番の激戦だったと断言できる。さすがにディアブロス相手ともなると、厳しいものがある。
　正直な話、自分でもディアブロスに勝てた事に驚いていたりする。このチームは確かに全員優秀だが、まだディアブロスを相手にするには時期尚早だと思っていた。だが蓋を開けて見れば、確かに危険なシーンはいつも以上にありかなり危なっかしい戦いだった事は事実だ。でも、自分達は勝った。それもまた変えようのない確かな事実。
　まだまだ磨くべき場所はあるし、直さなくてはならない点などの反省点も多い。それは今後の戦い方に生かせばいい。今は、この勝利の余韻にもう少し浸っていたい。
「あのさ、シルフィ」
　そんな事を考えていると、ふと彼から声を掛けられる。「何だ？」と彼の方へ向くと、彼も自分の方を向いていた。その近さに一瞬驚くと、彼は優しげに微笑む。

「ありがとね」
「うん？　何がだ？」
「その、ディアブロス討伐を引き受けてくれて」
　彼の言わんとする事がわからず首を傾げていると、クリュウは照れたように頬を赤らめながらその続きを口にする。
「本当はまだディアブロスを相手にするのはしたくなかったんでしょ？　それを、僕の為に断行してくれて、色々と危険な目にも遭って、それでもこうして討伐できた。だから、ありがとうって」
　彼の礼の意味がようやくわかった。だが、わざわざ礼を言われるような事ではない。だからこそ、シルフィードは小さく首を横に振る。
「確かに、ディアブロスを相手にするのは正直まだ早いとは思っていた。だが、勝ったんだから、私の予想が外れていただけに過ぎん。むしろ、私としては自分の君達に対する評価を過小にしていた事を詫びる必要がある」
「シルフィは何も勝てないとは思ってなかったんでしょ？　ただ、危険性（リスク）の高さから時期尚早と判断していただけ。謝る事なんて何も無いよ」
「……どうやら、君の方が一枚上手だったようだな」
　完敗だと言いたげに笑うと、シルフィードはゆっくりと立ち上がる。自分を見上げる彼に振り返ると、そっと先程の彼と同じように手を差し伸べる。さながら、立ち位置が逆転した形だ。
「礼など言うな。それは野暮もいい所だぞ」
「そ、そうかな？」
「――君は笑っていればいいさ。その笑顔はきっと、あの二人にとっては最高の報酬だろう。もちろん、私も例外ではないがな」
　フッと口元に優しげな笑みを浮かべながら言う彼女の言葉に、クリュウは頬を赤らめると、照れ隠しするように苦笑を浮かべる。
「何だか、そういう風に言われると恥ずかしいなぁ」
「そういう君も、私はかわいいと思うが？」
「むッ、それ褒め言葉じゃないよ」
　ムスッと怒るクリュウを見てシルフィードはおかしそうに笑いな

がら「すまんすまん。どうも君を見ているとからかいたくなってな」とあまり悪気なく謝る。
「もうッ、シルフィがそんないじめッ子だとは思わなかった」
「そう怒るな。君に付き合っての狩猟だ。これくらいの報酬があってもいいだろう？」
「……むぅ」
そう言われると言葉を返す事もできず、納得はしていないようだがとりあえず黙るクリュウ。そんな彼の姿が実にいじらしくて、もう少しからかいたかったが、これ以上すると本気でご機嫌ななめになりそうなので適当な所でやめておく。
「ほら、そろそろ必要な素材を剥ぎ取るぞ。さっさと船に戻ってシャワーが浴びたい」
「そうだね――これで終わった訳じゃない。あくまで、切符を手に入れたに過ぎないんだから」
「そういう事だ」
クリュウはうなずくと、シルフィードの手を取って起き上がる。その瞬間、二人の横顔が朝日に暁色に照らされた。振り返ると、どこまでも続く砂の大地の地平線の向こうからゆっくりと朝日が昇ろうとしていた。
闇夜に支配されていた大地はその温かな黎明の光によって照らされ、光を取り戻していく。その陽射しは温かく、冷え切った大地を優しく温めていく。
全ての世界が茜色に染まっていき、夜は終わり、大地に新たな一日を告げる。
いつの間にかクリュウの周りにはシルフィードだけではなく、フィーリアとサクラも同じように立ち並び、朝日を見詰めていた。
一度振り返ると、砂の上に横たわるディアブロスの亡骸も朝日に静かに照らされていた。それが、自分達の勝利の証。生き物を殺した、事実。
勝利の嬉しさと共に、一つの生き物の命を奪ったという罪悪感も胸の中で渦巻く。この気持ちが、単なる殺戮者ではない証拠だ。

嬉しさもあるが、やはりそういう悲しみも感じてしまう。よく彼はハンターには向かないと言われる。それはきっと、彼のその優しさがいつか彼自身の命を脅かすかもしれないからだろう。
だが、優しさを忘れてしまったら、それこそ本当の殺戮者になってしまう。
生物が生きていくには、他の生物を犠牲にしなくてはならない。これは自然の絶対法則だ。だが、人間はその《当たり前》を疑問に思う事ができる唯一の種だ。
例え生きる為だとしても、何か成し遂げなくてはならない目的の為だとしても、命を奪う行為をした事実は変わらない。
理性で生きる自分達人間は、本能だけで命を奪う事を決してしてはならない。そして、自分が奪った命の重さを、感じ取らなければならない。
結局は自己満足かもしれない。命を奪われた側から見れば、その者が何をしたとしても自分の命が戻る訳ではない。償いという言葉も、自己満足の言葉だ。
だが、例えそうだとしてもその優しさを忘れてしまえば、人間はモンスターと同じになってしまう。
人間は、痛み以外で涙を流す事ができる唯一の種。その特別な涙の意味を、決して忘れてはいけない。
「クリュウ様」
そんな考えに浸っていると、自分の名を呼ぶフィーリアの声が聞こえた。振り返ると、フィーリアが満面の笑みを浮かべ、自分の手を取ってそっと握り締めていた。
「……クリュウ」
振り返ると、サクラが腕に抱きつくようにしがみつきながら、小さな小さな笑顔を浮かべて自分をジッと見詰めている。
「クリュウ」
そして、シルフィードはそんな自分に向かって頼もしい笑みを浮かべて立っていた。
「みんな……」

自分の中に渦巻く複雑さを、彼女達も理解していた。それはきっと、自分だけではなく、彼女達の胸の中でも同様に命を奪うという重さが渦巻いているからだろう。
だが、同じ気持ちを持つ友とならば、その苦しみも和らげる事ができる。そして、それを共に預け合える者達こそ――本当の仲間と呼べるのだ。
だが今だけは、そんな仲間達と共に純粋に勝利を喜ぼう。誰も欠ける事もなく、共にこうして勝利の大地を踏み締めている。そして、そんな彼女達に自分が掛けるべき言葉は、きっとこれだ。
「――お疲れ様」
朝焼けに照らされながら、クリュウは静かに微笑んでそう彼女達を労った。
朝焼けの大地に並び立ち、勝利を噛み締める四人。そんな彼らを、離れた岩場から見守る女神がいた。
銀色の美しい髪を風に靡かせながら、彼女は碧色の瞳で静かに彼らを――妹とその仲間達を見守っていた。
しばしそうして見守った後、彼女はゆっくりと踵を返す。
「――おいおい、もう行っちまうってのか？」
その声に女神――シュトゥルミナが振り返ると、静かに口元に笑みを浮かべながら男が立っていた。彼女のように狩場において防具を纏う事なく、その身に纏うのは黒色の軍服。深く被った軍帽を上げると、少年のような瞳が煌く。
「……ロンメルか。《砂漠の狼》はずいぶんと前に引退したと聞いていたが？」
「まぁ引退してる身には変わらねぇがな。今は後継者育成に尽力してる所さ」
エルディインの言葉にシュトゥルミナは「……ハッ、素直にもう現役は無理だって認めろよな」と鼻で笑いながら容赦ない発言をする。そんな彼女の言葉にエルディインは苦笑を浮かべた。
「おいおい、人を年寄りみたいに呼ぶんじゃねぇよ」
「ハンターから見ればもう十分隠居の身だろうが。テメェらが最強だ

と言われてたのは過去の話さ。時代は常に前へ進んでるんだよ」
「違いねぇな。俺もまさかあのヒヨッ子が俺と同じ称号持ちにまで上り詰めるとは思わなかったな」
「残念だが、それは違うな。俺はもうお前以上に強いぞ」
「……おうおう、相変わらず自信過剰じゃねぇかおい？」
「自信じゃなくて確信だ」
　ニッと白い歯を見せて自信満々な笑みを浮かべるシュトゥルミナに対し、エルディンはバカにつける薬はないと言いたげに肩を竦ませる。
「――だが、まだ師匠には届かないけどな」
　その言葉にエルディンは一瞬目を見開く。しかしすぐにその瞳を細く柔らかな曲線を描かせた。
「そうだな。結局、俺もあいつを超える事はできなかった」
　エルディンはどこか遠くの空を見るように、懐かしげな瞳をしながらつぶやく。そんな彼に「お前は一生師匠を越えられなぇよ」とからかうように笑いながら言う。
「うるせぇ」
「――エッジ師匠は、誰も越える事はできねぇよ」
　シュトゥルミナから出たその名を聞いた途端、エルディンは懐かしげな表情になる。その瞳に映るのはかつて常に自分の前にいた、永遠のライバルにして最高の親友の背中だ。
「エッジ・ルナリーフ。結局、俺は一度もあいつに勝つ事ができなかったな」
「それでよく師匠の事をライバルなんて言えたよな」
「うるせぇ。お前だって、勝手に師匠なんて呼んでるくせによ。アメリアっていう妻がいるエッジに散々アタックして玉砕しまくってたくせによぉ。人の夫を好きになるたぁ、子供ながら末恐ろしい奴だったな」
「う、うるせぇッ！　好きになっちまったもんはしゃあねぇだろうがッ」
　ニヒヒヒと意地汚い笑みを浮かべながらからかうエルディンに対

し、シュトゥルミナは顔を真っ赤にしながら怒る。が、
「……好きになっちまったんだから、しょうがねぇだろ」
一転して淋しげにつぶやく彼女の姿を見て、エルディンは小さく苦笑を浮かべる。
「あいつが死んでもう十年以上経ってるってのに、お互いにあいつを忘れられないもんだな」
「……そうだな」
会話が、そこで止まった。お互いに何か掛けるばき言葉もなく、ただ無言を貫くだけ。互いに何を考えているのかだけは、何となくわかった。十年以上も前の光景。永遠のライバルが、憧れていた人が生きていた、あの頃の光景。
その時、二人の耳に声が聞こえた。その声の主を求めて、岩陰から顔を出すと、今まさにディアブロスの剥ぎ取りを行なっているクリュウ達の姿があった。その隣では、フィーリアが嬉しそうに彼に話し掛けている。それを見て、二人は同時に笑顔を綻ばせた。
「……まさか、こんな形であいつの息子に出会うとはな。それも、あいつと同じハンターとして」
「俺もまさか、大事なかわいいかわいい妹があの人の息子に惚れてるなんてよぉ。ったく世界は狭いというか、神様って野郎はたちが悪いというか」
どちらも呆れたような口調だが、その優しげに満ちた表情を見れば、こんな奇妙な事態になった事をむしろ喜んでいるように見える。
自分の唯一の弟子が、かつての自分のライバルだった奴の息子とチームを組んでいたり。
自分のかわいい妹が、かつて自分が憧れていた人の息子に惚れていたり。
――何となく、今は亡きあの人と、今もこうして絆が結ばれているような気がして……
「――悪いが、俺はここで失礼させてもらう。あまり待たせると姉さんに頬を引っ張られるからな」
「……そうか。俺が言う事じゃないかもしれねぇが――死ぬんじゃ

ねえぞ」
　エルディインの言葉に背を向けながら手をヒラヒラと翻して答えつつ、シュトゥルミナは一人セクメーア砂漠を後にする。そんな彼女の背中を見送りながら、エルディインは静かに空を見上げた。
　先程四人が狩猟終了を告げる信号弾を上げた。今まさに、上空に待機していた『イレーネ』が静かに降下して来る。それに一瞥をくれ、彼が再び見詰めるのは若き四人の少年少女達の姿――十年以上も前に、自分も仲間と共にああして青春を送っていた光景が蘇る。
「……ったく、若い奴を見て昔を思い出すなんて、ルミナの言う通り年なのかもしんねえな」
　そう言って苦笑を浮かべながら、エルディインは静かに朝日を見詰めていた……

第１６２話　覚悟を決めた少女の夜襲　二人の絆を妨げる溝

ディアブロスの狩猟を終えたクリュウ達は再び『イレーネ』に乗り込むと、そこでシャワーを浴びて汗を流した後に食事を摂り、部屋に戻って休む事になった。

女性陣三人は同じ部屋だが、一応区別するという事でクリュウだけは個室を宛がわれていた。個室と言っても、狭い軍艦の中のものなので当然狭い。が、今の彼にとっては寝る場所であるベッドがあるだけで十分であった。

クリュウはフラフラと部屋へと戻ると、そのままベッドに倒れ込んだ。全身を包む布団の柔らかさが、痛いくらいの疲労を心地良く癒してくれる。

そのうち、次第に眠気がやって来た。別に逆らう理由もないので、クリュウはそのままその睡魔に身を任せ、泥のように眠りについた。

疲れのあまり、夢すら見る気力もなく爆睡していたクリュウ。相当な疲れが溜まっていたのだろう。まだ太陽が空の頂点にすら到達していなかった頃に寝始めたが、今ではその太陽は大地の下へと消え、それに代わって月が静かに闇を照らす夜へと移り変わっていた。

そんな夜。彼の部屋のドアが、ゆっくりと開かれて何者かが侵入してきた。

暗闇の中、その侵入者はベッドの上で眠っている彼に気づくと、ゆっくりと近付く。そしてそのままベッドの上に乗ると彼を跨ぎ、そして彼の上で覆い被さるように四つん這いになる。

「お、起きなさい」

侵入者は静かに彼の耳元でそう囁いた。だが、完全に眠り込んでいるクリュウはその程度の声では起きやしない。その証拠に、今も気持ち良さそうな寝息を立てながらぐっすりと眠っている。

「お、起きなさいってば……」

そっと優しく彼の胸の上に手を起き、揺らし起こす影。だが、そん

な事で泥のように眠っている彼を起こす事など、できやしない。
　気持ち良さそうに眠っている彼の姿は実に愛らしくはあるが、その影の人物にとってはむしろ自分の中の葛藤や羞恥心の元凶であるが故に、何の悩みもなく気持ちよく眠っている彼の姿は、腹立たしさすら覚える。
「起きなさいって……言ってるでしょうがッ」
「ごふぅッ!?」
　突如影は怒りに任せて握り締めた拳を眠っている彼の腹部に叩き落とした。その激痛にぐっすりと眠っていたはずのクリュウが飛び起きる。
　激しく咳き込みながら閉じていた瞳を開くと、その光景に彼は絶句した。
　月明かりが静かに照らす部屋の中、横になっていた彼の上に覆い被さるように四つん這いになっているのは一人の少女であった。月明かりの下でもわかる程に頬を赤らめ、瞳はキラキラと輝かせて、覆い被さる少女。
　いつもならこんな事をするのはサクラかリリア辺り。百歩譲ってフィーリアかエレナ辺りだろう。だがそんな彼の予想に反して、自分の寝込みを襲ってきたのは予想だにしない人物であった。
「で、デーニッツ……？」
　目の前にいたのは月の光を浴びて神々しく煌く黒髪の少女。碧色のいつもは凛とした瞳を、今はどこか柔らかげに揺らしている。見ると、彼女のトレードマークとも言うべき知的気な銀縁のメガネが外されている。それが余計にいつもの姿とのギャップとして、今の彼女を輝かせていた。
「やっと起きたのね」
　デーニッツは不機嫌そうにつぶやいた。だが、クリュウは目の前の光景を理解できずにいた。そんな彼の困惑ぶりなど露知らず、カレンは身を起こして乱れた髪を整える。だが相変わらず彼の上に跨るのはやめない。
「え、えっと……何事でしょうか？」

困惑しながらも、とりあえず状況の説明を願うクリュウ。だが、そんな彼の問い掛けを無視してカレンはしきりに髪を撫でて整えながら、彼の方をチラチラと見詰める。
「あの、デーニッツさん？」
「な、何よ――あ、あなた」
「……はい？」
寝起きで頭が回っていないせいか、彼女が何を言っているのか理解できなかった。今自分は、おかしな呼び方で呼ばれなかったか？　というか、それ以前に出撃前までは敬語を使っていなかったか？
様々な疑問が頭の中で渦巻いて困惑しているクリュウに対し、カレンは彼の上に乗ったまま何やらもじもじとしている。そんな彼女の姿を見て首を傾げながら視線を落とし――絶句する。
今まで驚きのあまりずっと彼女の顔を凝視していたクリュウ。だが、ここで初めて視線を落として彼女の全体の姿を見てしまった。そして、その光景にクリュウは顔を真っ赤にして言葉を失ってしまう。
――カレンはなぜか、エプロン姿だった。それも、ただのエプロン姿ではなく、それ以外何も身につけていないという、衝撃の格好だ。
絶句し、見惚れている訳ではなくただ単に衝撃の光景に硬直しているクリュウ。そんな彼の視線を受け、カレンの顔が真っ赤に染まる。
「じ、ジロジロ見るな……ッ」
そう怒って、カレンはクリュウの首を締めようとする。が、そう簡単に寝込みを襲われて暗殺される訳にもいかず、クリュウは逃げるように跳び起きた。が、
「キャッ!?」
当然、彼の上に跨っていたカレンを布団ごと吹き飛ばしてしまう。ベッドの上に腰から落ちたカレン。起き上がった事と、バランスを崩した事で余計にエプロンが乱れて素肌の面積が広がってしまい、結果的にクリュウは月明かりの下で彼女のあられもない姿をまじまじと見てすまう結果になる訳で……
「あ……」
「……うぅ」

双方共に言葉を失い、ただただ顔を真っ赤に染めて見詰め合う。お互いに恥ずかしくて仕方が無いのだ。
最初に視線を逸らしたのはクリュウの方だ。今しがた自分に掛かっていた毛布をスッと彼女の方へと差し出す。
「と、とにかくこれを巻いて。そんな格好じゃ、まともに話もできない」
「う、うん……」
カレンは小さな声で従い、彼の言う通り毛布を体に巻く。これでようやく向き合えたのだが、これはこれで何だかいけない格好に見えて困る。が、裸にエプロン一枚という暴挙よりはマシだろう。クリュウはわざとらしく咳払いしてから、起きてからずっと抱いていた疑問をぶつけてみる。
「えっと、僕に何か用かな？」
いきなり夜襲を受けたのだ。何かしらの理由があると考えるのが妥当だろう。
理由を求める彼の問い掛けに対し、カレンは視線を逸らす。言いづらそうに口を何度も小さくパクパクとさせるが、明確な言葉は一向に出て来る気配はない。仕方なく、今度は別の質問をぶつけてみる。だがそれはむしろより双方にダメージがある問い掛けであった。
「そ、それと――な、何でそんな格好をしてるの？」
口に出すのも恥ずかしそうに問い掛けると、カレンはビクッと体を震わせて明らかに動揺する。先程の質問以上に言いづらそうに視線を逸らしたまま、顔を真っ赤にさせている。
少しの間待ってみたが、それでもやはり彼女の口からは何も語られない。どうしたもんかとため息を零し、頭の中で逡巡していると、それまで視線を逸らしていたカレンがしっかりとこちらを見詰め返してきた。そして、ゆっくりと口を開く。
「――わ、私と結婚しなさい」
待ちに待った彼女からの返答はあまりにも突拍子がなさ過ぎて、クリュウは思わず「……え？」と素で聞き返してしまう。すると、そんな彼の反応に腹が立ったのか今度はより大きなハッキリとした声で

「私と結婚しなさい」と再度宣言する。
「け、結婚……？」
「そ、そうよ」
　恥ずかしいには恥ずかしいのだが、それ以上に困惑が勝っているクリュウは頭を抱えながらもう一度確認してみる。だが、カレンからの返答は変わらなかった。顔を真っ赤にしたまま、なぜか上から目線で求婚してくる。
「ど、どうして僕なの？　それに、僕君に嫌われるような事はしたけど、好きになられるような事をした覚えはないんだけど……」
　自分で言ってて情けなくなってくるが、それは紛れもない事実だ。
　彼女と出会って一週間、自分が彼女にした事と言えば少し相談にのってもらったのと――事故ではあるが彼女のファーストキスを無理やり奪ってしまった事。とてもじゃないが、嫌われても結婚を申し出られるような好意を抱かれる事は一切ない。
「な、何かの冗談……とかじゃないよね？」
「冗談で結婚を申し出たりしないわよ」
　ピシャリと怒られ「だよねぇ～」とクリュウは苦笑を浮かべる。だが、結果的に余計に混乱に拍車がかかる。だとすれば、一体何が彼女にそういう決意をさせたのか。微塵もその理由に思い当たりがないクリュウは必死に考えるが、当然答えなど見つかるはずもなく。
「と、とにかくあんたと私は夫婦なのッ。ふ、夫婦なら夜は共にするのが常識じゃない」
「ま、間違ってはないけど唐突過ぎるでしょッ！　色々な過程を飛ばし過ぎだよッ！」
　話がまるで見えない上に跳躍し過ぎてもはやついて行くだけで必死のクリュウ。寝起きでこれほどまでに頭をフル回転させたのは初めてだ。
「そ、それでその格好の意図は？」
　頭を抱えながら指を挿して問うのは彼女の格好。なぜ、エプロン一枚以外何も身につけていないのか。彼の問いかけに対し、カレンは顔を真っ赤にしたまま小声で答える。

「こ、こういうのを男の人は喜ぶって、宣伝大臣が……」
　頭の中で、あの妖艶な笑みを浮かべる大臣の顔が思い起こされる。明らかにこういう事柄に耐性のない彼女に間違った知識を教えているらしい。と、会って間もないというのに何となくの流れが想像ついてしまう。
「いや、まぁそういうのを喜ぶ人もいるにはいるけど、僕はあまり……」
「大臣の言う通り、ちゃんとニーソックスも着用してるし……」
「……もうどこからツッコミを入れるべきなのやら」
　彼女のように真面目な人間ほど、こういった間違った知識を信じ込んでしまいやすい。本気でそう思っているからこそ余計に正すのが面倒だし――的確に似合っていたりすると余計に厄介だ。
「あ、あのさ。どうしてまた突然結婚しようなんて言い出したの？そういうのに発展する程、僕達はまだ全然親密になった訳じゃないと思うけど」
　とにかく、まずは一番の疑問がそこであった。告白されるにしても、あまりにも自分達は接点がなさ過ぎる。自分にそんな魅力があるかどうかわからないが、一目惚れという可能性もあるだろう。だが、それにしては出発時までの態度が説明できないし、そもそも今とではまるで態度が違い過ぎる。一体、自分達がディアブロスと戦っている間に何があったのか。
　そんな風な考えと共に彼女に尋ねると、カレンは驚いたような表情になって彼を見詰める。
「な、何言ってんのよ――き、キスしたじゃない……ッ」
「……ッ!?」
　口に出して言うのも恥ずかしいのだろう。顔を真っ赤にして目を合わせられずにいながらも小声で叫ぶ彼女の言葉に、その光景を思い出してしまったクリュウも顔を真っ赤にして押し黙ってしまう。
「いや、だからあれは事故だった訳で……」
「じ、事故だろうと奪ったじゃない――大切な、ファーストキスを……」

恥ずかしそうに顔を赤らめながら言う彼女の言葉にクリュウは言い返す事ができない。事故だったとはいえ、彼女にキスしてしまった事は事実に変わりはないのだから。
言い返せずに押し黙る彼を見詰めながら、カレンは静かに言う。
「――キスは婚姻の証。キスしてしまった以上、私達は結婚しなくちゃいけないでしょ」
彼女の言葉を聞いてようやく状況を理解した。どうやらエルバーフェルドにはキスしてしまったら絶対結婚しなくてはならないという法律か風習でもあるのだろう。だからこそ彼女は覚悟を決めてここに来た。
「いやいやいや……」
だが理解はできたとはいえ、とてもじゃないが許容できるものではない。事故とはいえキスしてしまった事は事実だが、だからといってまだ会って間もない、しかもほとんどお互いの事を話した事もない女の子といきなり結婚しようだなんて無理な話だ。例え、カレンが美少女だとしてもだ。
「何迷ってんのよ。婚姻の証をしてしまった以上、私達の結婚は絶対なのよ。本人の望む望まずに関係なく。常識でしょ？」
「……いや、少なくともドンドルマ方面の中央地方付近ではそんな常識は聞いた事ないよ」
「え……？」
頬を掻きながら困ったように言う彼の言葉に、カレンは目を見張る。彼女の言動や今の反応を見る限り、どうやらその風習がとても局地的なものだと知らなかったらしい。まぁ、気持ちはわからなくもない。自分の地元の常識が、一般常識とは違っている事など地方出身者ならよくある事だ。国によって風習や文化が違うのもまた同じだ。
「僕も、村の常識がドンドルマで通じなくて苦労したもんなぁ……」
苦笑しながら思い起こされたのは、雪国である為に豊富な水源を持っていたイージス村と上下水道が整ってはいるが水の制限が厳しいドンドルマでの使用できる水の差だ。今でこそ新たな水源から水を引いたおかげで難なく生活できるが、ちょうど自分がドンドルマに

渡った頃はまだその工事中だったので水の制限が厳しかった。そこで普通に水をジャブジャブ使っていてフリードに激しく怒られてしまった。後にも先にも、教官にあれほど怒られたのはあの時だけだ。
「そ、そんな……夢のない世界ね」
「夢かどうかわからないけど、とりあえずキスすれば結婚できるって考える強硬手段というか既成事実を作ろうとする輩は生まれないだろうね」
「……ッ!? あ、あんたまさか……ッ」
「僕は違うよッ！ あれは明らかに事故だったでしょッ!?」
明らかに引いているカレンの誤解を解こうとクリュウは必死になるが、そんな必死になる彼を前に「それはまず置いとくわよ」とクールにカレンは話を切り替えてしまう。
「……いや、できれば無造作に置いといてほしくないんだけど」
「とにかく、私はエルバーフェルド人なの。郷に入れば郷に従って」
「いや、でもさ……」
「――キスしたのに結婚しないなんて、女性にとってはこれ以上ない屈辱なのよ」
涙目になってつぶやく彼女の言葉に、クリュウは返す言葉も無く黙ってしまう。そりゃ、好きでもない相手と結婚する覚悟をするくらいなのだから、その風習とやらの強さ、そしてそれを破棄された時の屈辱というのも本物なのだろう。一人の少女にそれほどの覚悟をさせる事を、自分はしてしまったのだ。
「……あんたが覚悟を決めてくれなきゃ、私一人が道化になるじゃない」
「……デーニッツ」
自分のせいで一人の少女をここまで追い詰めてしまっている。その光景は彼の心を痛めさせるが、だからといって他の解決策は思いつかない。あるのは、彼女と結ばれる他はないのだ。
涙目になって自分を見詰めてくるカレンを凝視しながら、クリュウは必死に考える。おそらく、無かった事にしようという提案は却下されるだろう。そんな事が可能ならとっくに実行に移しているだろう

し、女性はファーストキスを無かった事にきっとできないだろうから。
だが、幸か不幸か周りに女子が多い為に普通の男子よりもこういう事に対する経験が多いクリュウ。その思考力がフルに発揮された時、とても解決策とは言えないが、とりあえずの応急処置というか、延命策が思いついた――だがこれは自分にとっては最大級の打撃であり、しかし最大級の必殺技でもある一撃。
言葉にするのに躊躇はある。だが、これがお互いにとって最も平和的で、そして今自分ができる最善の策だった。
この際、プライドなんて捨ててしまおう。そもそも最近は本当に失いつつある身だ。ある意味、これ以上失う事はないだろう。
「デーニッツ。聞いて」
覚悟を決め、伏せている彼女の名を呼ぶ。彼女の瞳が自分に向けられると同時に深呼吸し、そしてその必殺技を口にする。
「……じ、実は僕――本当は女なんだ」
「……はぁ？」
――言ってしまったぁ。これでもう後には引けない。
自分の最大級のコンプレックスである、少女じみた顔立ち。周りからかわいいとか言われ、学生時代には文化祭で女装をさせられ、先日のヴィルマでは女装したままアイドルの真似事をやったりと、自分にとってはまさに男の尊厳を破壊し尽くしたトラウマ。だが、今はこの女っぽい顔立ちが、自分と、そして彼女を救う唯一の手段だ。
クリュウが考えた策。それは自分が女であるとウソを貫き通し、女同士ならノーカンとする、まぁ彼女を騙す逃走策。これなら結婚話はなくなり、彼女もこれから出会うであろう本当の運命の人と幸せになれる道が残される。今の自分にできる、最善の策だ。
退路は経たれた。ならば、前進あるのみ。
「あ、あんた何言ってる訳？」
困惑しながらも呆れている様子のカレン。そりゃ、さっきまで男として認識していた相手をいきなり女として見ろと言っているのだ。信用なんてできないだろうし、そもそも大胆というか無茶苦茶なウソ

だ。
「いやさ、ハンターって職業は職業柄男所帯みたいな所が強くて……。女ってだけで弾かれたり無能扱いされる事もあるんだ。だから、男と偽れば対等になれるかなぁって」
これはある意味事実だ。ハンターの世界は結局は力押しの世界であり、力がある者が強者となる。すると、どうしても単純に女性よりも力のある男の方が全体としては優位になる。結局は男性が主力となってしまう。
一部の、エルバーフェルドやアルトリアのような女性権力者が実権を握る国を除き、全世界的にはまだ男尊女卑の風習は残っている。最近はずいぶんと男女平等を目指してそのような女性差別は緩和されたが、それでも一部では根強く残っている部分もある。
クリュウの説明に対し、カレンは半信半疑という感じだ。まぁ、半分信じてくれているだけありがたいと言うか、悲しいと言うか。とにかく、彼女自身もそういう経験があるのだろう。軍隊という組織は基本的にはどこの国もハンター以上に男性主流の世界。実力はあっても権力を持つレベルになるのはそう簡単な事ではない。
「だから、男と偽ってこの世界に入ったんだ」
「……一理はあるわね。でもだからって、今まで男と認識していた相手を女と改めるだけの証拠能力はないわ」
そりゃそうだろう。普通は信憑性もない話だ。というか普通は外見でそんな大ウソはバレるものだ。だが、悲しい事に自分にはその常識を打ち破るだけの実力がある。
「証拠だったら僕の容姿で説明できないかな――こんなかわいい男が、いると思う？」
自分で言ってみて、情けなくて泣きそうになった。本気で男としての尊厳を失いそうだ。
聞きようによっては自信過剰にも聞こえる発言だが、残念な事に彼の容姿は本気で女装を目指せば壮絶美少女になれる要素満載なので、不思議とそういう風には聞こえない。
心の中で泣きながら、クリュウは精一杯の女の子らしい、かわいら

しい笑顔を浮かべる。フィーリアやサクラ辺りが見たら鼻血を出して倒れそうな、そんな破壊力抜群の笑顔。だがカレンはそれをジッと見詰めたまま無言を貫いている。
やっぱり、無茶な話だったらしい。そもそも、男性に見てほしいから男装をしている設定なのに、「こんなかわいい男が、いると思う？」という問いかけは、そんな設定を見事に無視したものだという事にも、彼は気づいていない。
設定に無茶がある上に、突拍子もなさ過ぎる。どうやら、自分で自分を傷つけただけに過ぎなかったらしい。それだけでも、心の中では号泣ものだ。
「ご、ごめんッ。今のはウソッ」と慌てて謝ろうとした時だった。
「プッ……、アハハハハッ」
突然、カレンが声を上げて笑い出した。なぜ笑われるのか、その理由の見当がつかないクリュウは困惑しながら黙って笑っている彼女を見詰めるしかない。しばらくそうして見ていると、浮かんだ涙を拭いながら「ごめんごめん」と彼女が謝る。
「いや、おかしいなぁとは思ってたのよねぇ」
「な、何が？」
「男にしてはずいぶんとかわいい容姿をしてるからさ。でもそういう男も中にはいるのかなぁとは思ってたけど。そっかそっか――あんた女だったんだ。それなら納得ね」
うんうん、となぜか納得したようにうなずく彼女をポカンと見詰めるクリュウ。どうやら、自分のこんな無茶苦茶なウソを信じてくれたらしい。信じられないような展開だが、事実のようだ――心の中で、また泣きそうになるが。
「あ、あはははは、そ、そうなんだよねぇ」
「なぁんだ。女同士ならキスは婚姻の証にはならないわよね。それならそうと早く言ってくれればいいのに」
「ご、ごめん。やっぱりそう簡単に女だってバラす訳にはいかなくてさ」
「まぁ、そりゃそうよね。なぁんだ、知らないも同然の男なんかと結婚

する覚悟まで決めたのに、損しちゃったわよ」
「ご、ごめんねぇ」
「――まぁ、あんたのお嫁さんになるんだったら、いいかなぁって思ってたけどね」
「……へ？」
　ほっとしたのも束の間。突然彼女の口から飛び出した言葉にクリュウは思わず目を見張る。すると、そんな彼の反応を見てカレンが頬を赤らめながら照れたように言葉を続ける。
「そりゃ、最初はあんたの事を認めてなかったし、恨んだ事もあったわよ？　でもさ、実はずっとあんたの活躍をこの船から見てたの。見た目はすごく頼りなさ気だけど、ディアブロスと戦うあんたすっごくかっこ良かったわ」
　笑顔で言う彼女の言葉に、クリュウはカァッと顔を真っ赤にさせ慌てて顔を伏せた。そんな風な事を真正面から言われると、嬉しいやら恥ずかしいやらで顔を上げていられない。
　自分の発言でどう反応したらよいやら困っているクリュウの様子に気づく事なく、カレンは続ける。
「だから、あんただったらお嫁さんになってもいいかなぁって。優しそうだから、不幸になる事はないかなぁって思ってさ。でもそっか、女の子だったんだ。ちょっとガッカリ」
　そう言って肩を竦ませる彼女を見て、騙している事に多少の罪悪感は感じる。でも、きっとこれが最善の策だったのだろう。そう信じる他はない。
「でも、むしろ良かったわ」
　清々しい笑顔を浮かべて言う彼女の言葉に、クリュウは「何が？」と首を傾げた。すると、カレンは静かに彼を見詰める――だが次の瞬間、その瞳の色が変わったのをクリュウは見逃さなかった。
「――だって私、男よりも女の子の方が好きなんだもん」
「……へ？」
「という事で、あんたは私の嫁決定ッ！　改めて結婚を申し付けるわ」
　ビシッと自分を指差して高らかに宣言するカレンの言葉。クリュ

ウがその意味がわからず困惑していると、カレンは突然クリュウに勢い良く抱きついてきた。
「ちょ……ッ!?」
「んぅ～、男装を決起するだけあって平らな胸ねぇ。でも、そんな所も愛らしいわね」
　胸元で気持ち良さそうに頬擦りするカレンに、クリュウは顔を真っ赤にして固まる。忘れていたが、今の彼女は布切れ一枚しか身に纏っていない。先程まで纏っていた毛布は見事に跳ね飛ばしてしまっている。
「ちょッ!?　そんな格好で抱きつかないでよッ！」
「何でよ。女同士なんだから別に構わないじゃない」
「そ、それとこれは話が別だよ……ッ」
　慌ててカレンを引き剥がそうとするが、ガッチリと抱きつかれてしまっていて逃れられない。そればかりか、無理に抵抗すれば自分が男であると疑われてしまう可能性もあり、下手に抵抗出来ず本気で引き剥がせない。つまり、されるがままという訳だ。
「あんたみたいな嫁をゲットできるなんて。私ってはやっぱり運がいい？」
「ちょ、ちょっと待ってッ！　結婚の話は女同士だから無かった事になったんじゃないのッ!?」
「うーん、まぁ女同士だからノーカンってのはその通りだけど。やっぱり、それでもあんたは私の初めての人だし」
「そ、それはそうかもしれないけど……そもそも、女同士じゃ結婚出来ないでしょッ!?」
「別に書面に縛られる必要はないじゃない。同棲って形でも私は構わないし」
「僕は構うのッ！」
　もはやこっちの話などまるで聞いていないかのように次々に話を進めてしまうカレン。瞳はすっかり本気の色に染まっていて、冗談ではなさそうだ。というか、初めて会った時とずいぶんキャラが違うように見えるが。

「ちょ、ちょっと待ってッ！　そうだとしたら君がそういう感情を抱く矛先は総統陛下じゃないのッ!?」
　思い出したようにクリュウは叫ぶ。確かに、彼女はずいぶんとフリードリッヒに陶酔していた。むしろそういう感情を抱くのは彼女に対してではないのか。
　すると、そんな彼の発言にカレンは呆れたような表情を浮かべた。
「そりゃ、総統陛下の美しさはすばらしいわ。人徳もあるし、カリスマ性もすごい。才色兼備、まさに最高の美少女よ――でも、私には高嶺の花過ぎるわ。アイドルってものは、神格化の対象であって、敬愛し、崇拝すべきもの。決して、パートナーにはなれないわ」
　ため息混じりに言う彼女の言葉は、どこか淋しげだ。どんなに努力して、尊敬する人の傍にいても、結局は自分とは住む世界が違う。距離を、壁を感じてしまう。見上げるのには眩くても、平等に見詰めるには恐れ多過ぎる。結局、対等な関係には決してなれない。そう、彼女は気づいているのだ。
「でも、あんたなら平等でしょ？　私、女の子を見てかっこいいと思ったのは総統陛下とあんただけ。だから、私はあんたを嫁にするって決めたの」
　そう言って楽しそうに笑う彼女は、実に少女らしい。その姿に、一国の軍最高司令官という重みはない。ただ単純に、楽しくて仕方がない、そんな印象を受ける。その笑顔はまさしく《可憐》。一瞬そんな彼女の笑顔に見惚れてしまう。すると、そんな彼の反応を見てカレンはニッと笑う。
「それにあんたは私と同じでしょ？」
「お、同じって？」
「瞳を見ればわかる――あんたも私と同じ、女好きなんでしょ？」
　……そりゃ、男ですから。女の子が好きというか、気になるのは当然です。ただ女が好きと、間に一文字を入れてくれないと、単純に節操のない人間に聞こえてしまうが。
「なるほどねぇ。だからあんた達って珍しい女の子だけのチームなんだ。何それ、両手に華？　食べ放題じゃない」

「……卑猥な発言しないで。そういう目で僕は仲間を見てないし」
「またまたぁ、満更でもないんでしょ？」
「……う、うるさい」
「――でも、あんたはこれから私の嫁になるんだから、私以外の女を見るのはダメ」
そう言ってカレンはクリュウの両頬を両手で掴むと、そのまま彼の唇に自身の唇を当て押し倒す。
今度は事故ではない。クリュウは何が起きたのかわからず硬直するが、そんなのお構いなしにキスを続けたままカレンは彼の体を抱き締める。
長い事そうして口を封じた後、ゆっくりと離し、微笑む。
「――あんたって不思議ね。あんたと話していると、何だか自然と本音をしゃべれちゃう。何でだろうね？」
「し、知らないよッ。というか、そろそろ離れてッ」
「んもう、冷たいわね。今時ツンデレって古くない？」
「いつ僕がデレたッ!?」
クリュウは思わず頭を抱えた。状況打破の為に苦手なウソをついて難を逃れたと思ったら、むしろ余計におかしな方向へと状況が暴走してしまっている。何だか、自分のやった事が尽く裏目に出てしまっているようだ。
「と、とにかくッ。僕は君とそういう関係にはならないッ！」
ハッキリと、クリュウは断りの言葉を言う。すると、そんな彼の言葉にカレンの表情が陰る。
「……私じゃ、嫌なの？」
「嫌というか、第一僕達はお互いの事を知らな過ぎるでしょ。僕は君の事を全く知らない。なのに、いきなり好きになるとか無理だよ」
「私はあんたの事が知りたい。あんたが私の事を知りたいなら、全部教えるし捧げる覚悟はできてる」
さっきまでのどこかふざけた表情ではなく、本気の瞳を向けながらそう断言するカレン。その瞳の光を見るだけで、彼女が冗談じゃない事がわかる。だからこそ、クリュウも真剣に答えた。

「そういうのは、もっと親しくなってからにしようよ。だからさ、まずはその……友達からじゃダメ？」
　言いながら、自分がいかに情けない発言をしているか身に染みる。それは典型的なお断り文句だ――そして、この文句に似た言葉で、自身も傷ついた事もある言葉だ。それを、自分を女と誤解しているとはいえ本気で告白する女の子に向けている。何とも居心地の悪い空気だ。
　しばらくの沈黙。まるで、クリュウの言葉に馴染むようにカレンは沈黙を続ける。問いかけた側であるが故に、クリュウも声を掛けづらく、二人の間に微妙な空気が流れる。
　数分にも感じられた沈黙は、しかし現実には十数秒程。ゆっくりと、うつむかせていた彼女の顔がもたげられた。
「……そうね。友達から、一歩ずつ」
　そう噛み締めるように、彼女は小さく微笑みながらつぶやいた。その笑顔はどことなく淋しげ。彼女にそんな顔をさせてしまった事に罪悪感はあるが、だからと言って半端な気持ちや口先だけで答える方がもっと傷つけてしまう。
　安堵と共に、そんな気持ちが彼の顔を暗く染める。すると、そんな彼の頬をそっとカレンの細い手が撫でた。顔を上げると、そこには微笑む彼女の姿があった。
「でもさ、どっちにしてもあんたは初めての人なのよ」
「どういう意味？」
「……私にとってあんたは――初めての友達だから」
　まるでそう口にするのが恥ずかしくて、でも嬉しくて。そんな様子で照れ笑いを浮かべる彼女の至近距離の笑顔に不覚にも一瞬ドキッとしてしまう。そんな彼の反応を見て、カレンはイタズラっぽい笑みを浮かべた。
「やっぱりあんたも女が好きなのね」
「……否定はしないけどね」
　視線を逸らしながらそう答えておく。ウソではないが、当然はぐらかす他ないのだ。そんないじめ甲斐のある彼の反応を見て嬉しそう

に微笑むと、そっと彼の頬に唇を押し当てる。
「と、友達なんじゃないのッ!?」
「そうよ？　友達同士なら頬キスくらい当たり前じゃない」
当然でしょと言いたげな反応を見せる彼女を見て、ここでも地域の差というものを思い知らされる。そういえば、西竜洋諸国の人間は同性または異性の親友に対して頬に唇を当てるという習慣があるらしい――以前、ガリアの地でシャルルに頬キスをされた際に、その理由を調べた際に見つけた知識だ。ガリアではこれをビズと言うらしい。
……ちなみに、その知識のせいで彼女の勇気ある行動を彼が完全に誤解してしまった事は悲しい事故だったりする。
「ぼ、僕の地方ではそういう風習はないからビックリして……」
「不思議な所ね。じゃあ、頬キスに変わるものって何よ？」
「いや、特にはないかな……うぅん、手を繋いだりとか？」
「エルバーフェルドはガリアの人間程ビッチじゃないけど、あんたの所ってずいぶん謙虚なのね」
異文化と自分の文化の違いに素直に驚いているカレン。だが、そんな彼女の言葉にクリュウから笑顔が消えた。
わかっていた事とはいえ、やはりエルバーフェルド人はガリア人に対して容赦のない暴言を吐く。それは、ガリア人に大切な後輩や、キャンディを始めとしたアルザス村の人達。さらには村の場所や行き方を教えてくれたブレストの人々、アルザス村までヒッチハイクで乗せてくれた人達など、多くのガリア人に接した事のあるクリュウにとっては正直耐え難いものだった。
クリュウが突然黙り込んだのに気づいて、カレンが「どうしたの？」と声を掛けてきた。
……頭ではわかっている。エルバーフェルドはかつてガリアの非道な行いに苦しめられて以来、ガリアを敵国として国民に対して憎むように教育してきた。そんな国に暮らしていれば、主体的な理由がなくても憎むようになる。それに加えて彼女は父をガリア軍との海戦によって失っている。他の人にはないような主体的な理由もある。
彼女がガリアを憎むのはわかっている。でも彼女を始めとしたエ

ルバーフェルドの人々のガリアへの暴言は、どうしてもあの脳天気なかわいい後輩、ガリア人のシャルルをバカにされているように聞こえてしまうのだ。それが、実に腹立たしい。
今まで、どんなにガリアの暴言を吐かれても我慢してこれた。だが、自分の事を《友達》だと言ってくれたカレン。自分も、彼女の事を友達だと思い始めていた所だ。だからこそ、友達がそういう発言をする事だけは、どうしても耐えられなかったのだ。
「……デーニッツは、ガリアが嫌い？」
つぶやくように、クリュウは問い掛ける。
「ガリア？　そりゃ、この国の人間なら誰もが憎んでいるわ。私自身、父親を奴らに殺されてるし。それに加えて私は軍人。敵性国家を好きになんて思える訳ないじゃない」
当然の事のように、カレンは答える。エルバーフェルド人にとって、ガリア嫌いはそれだけ普通の事なのだ。だからこそ腹立たしくて
――そして悲しい。
「……僕は、ガリアに大切な後輩がいる。それに、幼なじみの両親がガリアで世話になってる身だ」
クリュウから発せられた、小声でもハッキリとした言葉。それを耳にした途端、カレンの顔からも笑顔が消えた。
――明らかになった、自分達が決して相容れない思考。二人の間にあった、巨大な壁。それはまさに、二人の結びかけていた絆の糸を寸断してしまう程、二人の決定的な違い。
「君達エルバーフェルドの人間がガリアを恨む訳はわかる。そういう環境が構築されているという事も知っている。でも、百聞は一見に如かず。ガリア人は決して、君達が思っているような人達じゃない」
それは、資料や言伝で知る事ができるものではない。自分の経験から断言できる結論だった。百聞は一見に如かず。ガリア人は決して彼女達が思っているような非道な人々ではない。とても陽気で、笑顔に溢れている人々だ。
「……ガリアを擁護するような意見。この国では決して口に出してはいけません。ましてや、軍人の前では」

先程までとは違う、冷たくて硬質な声。いつの間にか、彼女は最初に会った時のように冷たい軍人の顔に変わっていた。口調も、彼女の本性である明るい女の子のものではなく、冷酷な軍人口調に変わっていた。
「あなたがどのような思考をお持ちであろうと、結局は外部の人間。そこに我々の思想や信念を押し付けるつもりはありません――ですが同時に、あなた方のそれも我々に押し付ける権利はありません」
「カレン……」
「……わかってください。私はエルバーフェルド海軍総司令官。敵性国家を好きになる事などできません。ましてや、私は父を奴ら蛮族に殺され、母はそのせいで体調を崩して病死しました。憎むな、という方が無理な話です」
カレンの言う通り。彼女は特にガリア人を憎むだけの理由がある。両親共に、ガリアに殺されたようなものだ。それなのに、そのガリアを憎むなという方が無理な話だ。だから、クリュウもあえてそれ以上は何も言わなかった。
自分には、彼女を止める事はできない。自分は、何も知らな過ぎる。だからせめて、自分の考えだけ言ってみただけだ。それで何かが変わるとは決して思ってはいない。だが、本当に友達になるなら、互いの根幹にある相容れない考えは、隠し通すものではない。
――だから、次に彼女が言う言葉も、何となく予想できていた。
「……ごめん。やっぱり、あんたとは友達にはなれないわ」
悲しげな表情でそう言い残して、彼女はベッドの下に置いてあったマントで体を隠すと部屋を出て行った。ゆっくりと閉まる扉が、ガチャリと完全に閉まると同時に、半身を起こしていたクリュウはそのまま倒れるようにベッドに横になる。
「……話の規模が、大き過ぎるよ」
暗い天井を見上げながら、クリュウは力なくそうつぶやいた――自分の無力さが、どうしようもなく情けなかった。

第１６３話　幼なじみとして　あの日失った背中の軌跡

四人の狩人を乗せた航空哨戒艦『イレーネ』は来る時と同じように穏やかな旅路を終え、帝都エムデンへと帰還した。

事後処理は全てエルディンが自ら引き受ける事となり、四人は数日ぶりの揺れない地面を味わいながら、自分達を待ってくれていたエレナ、ルーデル、セレスティーナと再会した。

「怪我はないでしょうね？　あんたが怪我してちゃ意味ないんだから」

帰って来たばかりの幼なじみの体の隅々を心配そうに見回すエレナ。クリュウはそんな彼女の視線に苦笑しながら「大丈夫だってば」と無傷を強調する。

「しっかし、まさか本当にディアブロスを狩っちゃうなんて。まぁ、これも全部フィーちゃんがいたからでしょうけど。あんた、ちゃんと役に立った訳？」

ニヤニヤとからかうようにルーデルが言うと、クリュウは苦笑を浮かべたまま「まぁ、ボチボチかな」と当たり障りのない答えを返す。まぁ、当然フィーリアが「ルーッ！」と怒るが、それこそルーデルはさらりと流してしまう。

そんな二人の容赦無い歓迎に苦笑する彼の背中を見詰め、シルフィードもまた「大変だな」とつぶやきながら苦笑を浮かべた。

すると、すっかりそんな待機組の二人にからかわれるクリュウの前にサクラが立ち塞がる。鋭い刃物のような瞳で二人を威嚇し、背後に立つクリュウを守る。その姿は実に凛々しく、自分を庇ってくれようとする彼女の気持ちはすごく嬉しい。

「……無能は黙ってろ」

――ただ、その相手の神経を逆撫でるような言い方は勘弁してほしいが。

当然のようにケンカを始める三人をフィーリアが慌てて止めに入

るが、しばらくは続きそうだ。そんな四人を放って、クリュウはひとまずソファに腰掛けた。
ここはエムデン宮殿の一室。とりあえず、帰還した彼らはここへ通された。エルディンとカレンはすぐにフリードリッヒへ報告へ向かう為に別離。ただし事前に伝書鳩で討伐報告は出してあるので、今頃はクリュウ達のアルトリア行きの最終決定がなされているだろう。
「大丈夫よ。総統陛下は良くも悪くも有言実行される方だから」
そう言って安心させるように声を掛けてきたのはセレスティーナ。今日も優雅なドレスを身に纏い、実に美しいご婦人だ。そんな彼女の声掛けにクリュウは「そうですね」と苦笑を浮かべる。
どこか浮かない顔をしている彼をセレスティーナは心配そうに見詰める。それは彼の背後に立つシルフィードも同じだった。ただ、彼がどうしてそんな表情を浮かべるのか、二人にはわからない。
そんな二人の視線に気づく事なく、クリュウはボーッと天井を見上げる。その頭の中にあるのはアルトリア行きの事でも母アメリアの事でもなく――数日前の夜、悲しげな表情を浮かべて立ち去ったカレンの事だ。
あれ以来、クリュウはカレンと一言も話していない。それというのも、カレンが艦内の一室に閉じ込もってしまった為だ。なので、先程艦を降りる際に一瞬会っただけ。その時もすぐに待機していた将校達に囲まれてどこかへ行ってしまったので、声を掛ける事もできなかった。
彼女との溝は、未だ埋まらないままだ。
座って以来、ずっと沈黙を続けるクリュウを見て騒がしかった四人も自然と口を閉じる。様子がおかしい幼なじみの後ろ姿を見て、ようやくエレナも異変に気づいた。
「クリュウ、どうした訳？」
「それが私達にもわからないんです。ディアブロスを討伐した翌日からあんな具合に……」
一緒にいたフィーリアにも理由はわからない。エレナの視線は自然とサクラの方へ向くが、彼女は心配そうに彼を見詰めたまま。その

様子を見るに、彼女も原因はわからないようだ。
　四人の心配そうな視線を一瞥し、シルフィードはため息を一つ零すとそっとクリュウの横の席に腰掛ける。クリュウはそれにすら気づかずに天を仰ぎ続けるが、突如シルフィードはそんな彼の頬を引っ張る。
「……へッ？　ひゃに？」
「いやなに、抓（つね）り甲斐のある阿呆面があるなぁと思ってな」
　おかしそうにイタズラっぽい笑みを浮かべながら言う彼女の言葉にクリュウは子供のように頬を膨らませて怒る。
「シルフィって、結構意地悪だよね」
「君がいじめてくださいオーラを出すからだ」
「出してないよッ」
「――まぁ、どちらにしてもようやく瞳が生き返ったな」
「え？」と思わず声を出して驚く彼の反応を見て、シルフィードは安心したように微笑むとそっと背後を親指で指差す。すると、ようやくクリュウも自分を心配そうに見詰めている面々の存在に気づいた。
「皆、君をずっと心配してたのだぞ？」
「……そっか。ごめんね」
「謝る事じゃないさ。ただまぁ、悩み事があるなら一人で抱え込まずに相談してみるのも手だぞ？　人間一人の知識や考え方には限界がある。知らない事や理解できない事など、それこそ五万とある。だが自分とは異なる人間が複数集まれば、可能性はゼロからわずか1パーセントくらいにはなるかもしれない。例え1パーセントでも、ゼロよりは遥かにマシだ。幸い、ここには良くも悪くも色々な人間が集まっているしな」
　苦笑しながら彼女が振り返ると、そんな彼女の視線に様々な反応を見せる四人。フィーリアは気まずそうに視線を逸らしているし、サクラは自信満々に無い胸を張っている。エレナは「どういう意味よそれ」と彼女の発言の真意を追求し、ルーデルは自分の変わり者さ加減を重々承知している為か苦笑を浮かべている。確かに、色々な人間が集まってはいる。それこそ彼の目の前には国立大学卒という高学歴

な貴族のお嬢様までいるのだ。
　そんな色々な人間の視線は、全てクリュウに注がれている。良くも悪くも色々な人間が集まっていると同時に、彼は多くの仲間に囲まれているのだ。それに今更ながら気づくクリュウは、そんな彼女達の視線に対し微笑む。
「みんな、ありがとう」
　その笑顔に、少女五人は一斉に頬を赤らめる。そんな恋する乙女達の様子を微笑ましげにセレスティーナが見詰める。
「そ、それで。君の悩み事ってのは一体何なんだ？」
　気まずい沈黙を打破するように、軽く咳払いして尋ねるシルフィード。そんな彼女の問い掛けにクリュウは一度うなずくと、ゆっくりと口を開いた。
「……憎しみの連鎖って、どうやったら止められるのかなって」
　――それは、皆の想像の遥か斜め上を翔け抜けるような難しくて、突拍子もなくて、厄介な疑問。五人は思わず一斉にその一文字を零す。
『……え？』
　それは、見事な異口同音なのであった。
「……難しい問題だな」
　クリュウから事の経緯を聞いたシルフィード達の表情は一様に難しげだ。事の経緯とはもちろんカレンとの一件だ。ただし、もちろん上辺の説明だけであって本能的に彼女達が怒り狂いそうな部分は割愛してはいるが。
　クリュウからの無理難題に、シルフィードは腕を組んで考える。だが当然、いきなり問題が解決するような妙案が浮かぶ訳もなく、困ったように天を仰いでしまう。そりゃ、いくら大人びていても十八歳の少女には実に重過ぎる難題だ。
「残念ながら、エルバーフェルドでの反ガリア思想は徹底的です。宣伝省にプロパガンダによって多くの国民がガリア・東シュレイドを憎むべき敵国と信じています。それに加えて、両国が行った我が国に対する侵略行為は紛れも無い事実。そう簡単に解けるような代物では

ありません」
　エルバーフェルド人であるフィーリアの言う通り、宣伝省よる国民誘導宣伝（プロパガンダ）は徹底的だ。フリードリッヒが政権を奪ってからは小等学校の段階から反東シュレイド・反ガリアが徹底的に叩き込まれている。憎しみの連鎖の暴走は、止まる気配はまるでない。フィーリアのように、他国を回って客観的に物事を判断できるようなエルバーフェルド人は、極僅かだ。
「でもね、フリードリッヒは何も感情的に嫌いな二国に対する嫌悪感を扇動してる訳じゃないわ。確かにあの子も東シュレイドとガリアを憎んではいる。でもこのプロパガンダはどちらかと言えば、共通の敵を生み出す事で国民団結を促し、その力を国の復興または経済発展の原動力にしようとしてるの。いずれ復讐する為、今は衰えた国力を回復させる準備期間。そんな風に誘導すれば、国の復興は信じられない速度で進むわ。事実、エルバーフェルドの復興速度は空前絶後と言われている程に早い。普通にやれば二〇年と掛かる事を、彼女は数年でやり遂げたんだから」
　セレスティーナが述べたのは、恐ろしい程に緻密な政府、即ちフリードリッヒの画策。確かにその方法を使えば一つの目的を果たす十分な起爆剤にはなるだろう。事実、エルバーフェルドはその結果ここまで国力を回復させたのだから。だが、国は復興できても同時に国民の中には憎しみが残されてしまう。その憎しみは世代を越えて受け継がれていき、いずれは戦争という形で狂気が暴れ出す。
　しかも厄介な事に、プロパガンダが全くのデタラメなら真実を解き明かせば怒りが消滅する可能性もあるだろう。だが、東シュレイドとガリアのかつての侵略行為は紛れも無い事実。だからこそ、憎しみの呪いの拘束力は強い。
「……憎しみという感情は、人間誰もが持っている感情。そして、最も扱いやすくて、最も力を得やすい感情」
「確かに。私も憎しみの力でここまで来たと言っても過言ではないからな。その力の凄まじさは身をもって知っている」
　憎しみを知っている二人の少女の言葉には、どこか重みを感じる。

二人共両親をモンスターに殺され、サクラはわからないがシルフィードは一時期憎しみに狂った事もある。憎しみという感情の恐ろしさ、身をもって体験している者達の言葉は重い。
皆の話を聞きながら、クリュウは小さくため息を零す。彼だって憎しみという感情を持ち合わせていない訳ではない。むしろ世話になった事もある。あまりにも身近過ぎる感情だからこそ、それに染まる恐怖は、誰もが知っているのだ。
クリュウの真剣な悩みに、皆の顔も自然と引き締まって精一杯考える。だが、そう簡単に解決策など見つかる訳もなく、皆妙案もなく複雑そうな顔を浮かべている。そんな中、一人だけケロッとした表情を浮かべる者がいた。その人物はゆっくりとクリュウの背後へ近づくと――何の躊躇もなく彼の頭を引っ叩いた。
「えぇッ?!」
突然頭を叩かれたクリュウは叩かれた部分を押さえて驚いて振り返る。すると、そこには今まさに自分を引っ叩いた体勢のまま立っているエレナの姿が。
「え、エレナ……？」
「ったく、何らしくない事考えて煮詰まってるんだか」
彼女の突拍子も無さ過ぎる行動に皆驚きのあまり絶句している中、エレナは実に彼女らしい、幼なじみのアホさに苦笑を浮かべている。
「らしくないって……」
「らしくないわよ。だってあんた――バカじゃない」
エレナの口からハッキリと放たれた二文字の暴言。その言葉にサクラが物言おうと前へ出るが、そんな彼女をそっとシルフィードが制す。サクラが睨んでくると、シルフィードは黙って見ていろと言いたげな視線を送った。
そんな背後の展開など知らず、困惑する彼を目の前にしてエレナはなぜか偉そうに仁王立ちしながらフンと鼻を鳴らす。
「バカはバカらしく、考える前に行動しなさい」
「考える前に……」
「あんた、友達を作るのに何か策を巡らせるような、そんな卑怯な人間

だった？」
呆れているような、軽蔑しているような、そんな視線で見詰める彼女の言葉にクリュウは首を振る。もちろん、否定を表す横方向だ。
人間自分の事ほどわからない事はないが、それでも自分がそんな人間ではない事は断言できる。
クリュウの返事に満足気にうなずくと、エレナはゆっくりと続けた。
「――だったら、当たって砕けなさい。そんな難しい事なんか考えないで、自分の気持ちをぶつける。それで十分よ。ダメな時はその時に考えればいい。行動をしてからこそ、結果ってものはついて来るのよ」
それは実に単純な、アホなくらいに真っ直ぐな言葉。どこかシャルルを思わせるような物言いだが、それは実にエレナらしい意見だ。容姿も正確も違うながら昔から意外と似てると思っていた両者。その心の真っ直ぐさはそっくりのようだ。
だが、どちらにも共通している事がある――それは、その真っ直ぐな意見に何度も救われてきた。という事実だ。
「あんた、自分の事結構頭いいとか誤解してると思うけど。実際は相当なバカだって事を忘れんじゃないわよ――あんたのそのバカさ、バカみたいな優しさが、今こうしてここにいるみんなを揃えた。違う？」
ニッと健康的な歯を見せて頼もしげに笑うエレナ。その周りにはいつの間にか乙女達が集結していた。フィーリア、サクラ、シルフィード、ルーデル、セレスティーナ。皆の視線は温かく、そしてクリュウ一人に向けられている。
「みんな……」
頼もしい笑顔で見守ってくれる皆を見て、クリュウもまた笑顔を華やかせる。根本的な解決がした訳ではないが、エレナの言葉で気が軽くなったのは確かだ。
そうだ。結局は自分の気持ち次第だ。どんな相手でも、自分の気持ちをぶつければいい。シルフィードを仲間にした時や、フィーリアの

両親に協力を求めた時もそうだ。自分の一生懸命さが、状況を動かした。後者の場合はサクラのおかげというのが大きいのだが。
希望の光を取り戻す彼の背中を、エレナは力強く叩く。そのあまりの威力にクリュウは咳き込むが、彼女はそんなの構いやしない。
「え、エレナ……」
「――がんばりなさい」
耳元でそっと囁かれた彼女の言葉にハッと顔を上げると、そこには頼もしい笑みを浮かべた幼なじみが威風堂々と立っていた。その姿に勇気づけられるようにクリュウは立ち上がると、無策ながら「ちょっと行って来るッ！」と部屋を飛び出して行った。
彼が部屋を出て行くと、皆の視線は一身にエレナへと注がれる。その視線は感動や尊敬の念に染まっている。
「さ、さすがエレナ様ッ！　クリュウ様の事をよくご存知でッ！」
「ハッ、一体何年あいつの幼なじみやってると思うのよ。こんなの訳ないわね」
当然よと言いたげに胸を逸らして自慢するエレナだが、どうやらそれがかなり恥ずかしい発言だとは自覚していないらしい。むしろフィーリアは感動し、サクラは悔しげにしている。
冷静なシルフィードが苦笑を浮かべていると、その隣にそっとルーデルが立ち並んだ。
「……あんた達ってさ、ほんといいチームよね」
羨ましげに言う彼女の言葉にシルフィードはどう答えたもんか悩む。彼女が仲間ができない理由は以前にクリュウとフィーリアから聞いた事があるからこそ、彼女の言葉の重みがわかる――だが、ここはきっとこの答えが合っている。
「そうだな」
シルフィードの返答にルーデルはくすっと笑うと、「ほんと、妬いちゃうわ」と笑いながらつぶやく。その笑顔はやはりどこか淋しげ。
彼女のそんな笑顔にシルフィードは何か話題を振ろうとした時、ふと思い出す。
「……何だか万事解決みたいな流れになっているが――クリュウとあ

の娘が仲良くなる事をよく君達は容認したものだな」
何気なく思い出したようにつぶやいた彼女の言葉に、それまで騒いでいた乙女達が一斉に沈黙する。そして、ゆっくりと振り返り……
『……え？』
「……クリュウもそうだが、君達も相当な阿呆だぞ」
ため息混じりにシルフィードがつぶやくと同時に、部屋の中はパニックに陥ったのであった。
「バカだなぁ……」
その頃クリュウは一人宮殿の廊下で頭を抱えていた。石畳の上に腰を落とし、柱に背を預けながらため息を零す。
勇良く部屋を飛び出したがいいが、肝心のカレンを見つけられずにいた。そりゃここは一国の首脳陣が集まる宮殿だ。その広さは半端ない。詳しい内装を知らない人間が目的の人物を探すのは相当苦労するだろう。というか、そもそも見つけたとして声を掛けられるのか。相手は一国の一軍最高司令官。その周りには先程のように大勢の将校が囲んでいる事など容易に想像できる。さらに言えば、彼女は軍人であって政治家ではない。ならばよくはわからないが海軍の総司令部が置かれている建物にいるのが筋だ。しかもそういう建物は大概こういう宮殿の中にはなく、首都の別地域に置かれているものだ。
冷静になるにつれて様々な考え――主にネガティブな思考がフルに発揮されていた。
「どうしよう……」
飛び出した手前、手ぶらで帰るのはものすごく恥ずかしい。その為、帰るという選択肢は却下だ。だがだからと言って行く宛てなどもちろんない。こうして蹲っているにしても限界もある。
どうしたもんかとクリュウが思考を巡らせていると、そんな彼の姿を見知った人物が運良く発見したのであった。
「おぉ、こんな所で何してんだ坊主」
その声に伏せていた顔を上げると、気さくな笑みを浮かべながらエルディンが立っていた。クリュウにとって、それはまさに渡りに船。

というか、神様にも思えた。
「ロンメルさん……ッ」
「お、おぉ？　何だよ、そんなキラキラした目で俺を見やがって。気味悪いぞ」
　クリュウの思わぬ反応に半歩引くエルディン。だが当然クリュウは逃すはずもなく素早く立ち上がるとそのまま彼の手を取った。
「た、助かりましたぁ……ッ」
「何だその反応？　宮殿の中で迷子にでもなってたのか？」
「ま、まぁ似たようなものです……」
　恥ずかしそうに苦笑を浮かべながら答えるクリュウに、エルディンも何となく事情を察したのか同じような苦笑を浮かべた。
「それで、君は一体どこを目指していたんだ？」
「あの、デーニッツを探してて……」
「嬢ちゃんを？　嬢ちゃんならさっき財務省から諸経費削減を指示されて頭抱えてたから……今頃海軍事務室にいるんじゃねぇか？」
「それってどこですか？」
「おいおい、国防に関係する部署をそう簡単に一般人に教えられるかよ」
　苦笑しながら答えるエルディンの言葉に、クリュウもまた苦笑を浮かべながら「そうですよね」と答えるしかなかった。彼の言う通り、カレンは国防の一角を担う一軍最高司令官。当然彼女がいる場所は軍関係施設になる訳で、そんな所を通常は一般人に教えるものではない。だが、
「……まぁ、ちょっとした質問に答えてくれれば考えなくもないが」
「ほ、本当ですかッ⁉　全力でお答えしますよッ！」
　彼の言葉にクリュウはすぐさま飛びついた。そんな彼の様子に微笑むと、エルディンは一度咳払いして改めて彼を見詰める。
「突然だが、君に言っておかなければならない事がある。実は――私は君の両親をよく知っている」
「な……ッ⁉」
　突然の予期せぬカミングアウトにクリュウは言葉を失った。驚き

のあまり目を見開く彼の反応を見て、大方予想通りだったのか特に驚いた様子もなく苦笑を浮かべるエルディン。
「僕の、両親を、ですか……？」
驚きながらも彼の口から出たのは、半信半疑というような口調であった。そりゃ、クリュウが住み両親が暮らしていたイージス村と遠い異国エルバーフェルドではまず接点を見出せない。そんな異国の地に、両親の知り合いがいるなどそう簡単に信じられるものではない。
そんな彼の疑心にも気づいているのだろう。エルディンは小さく肩を竦めると「立ち話もなんだ。ついて来い」と回れ右して彼を誘導する。クリュウは半信半疑ながらも彼を追い掛けて歩き出した。
「――もう三〇年も昔の話だ。俺は当時ドンドルマのハンター養成学校へ単身このエルバーフェルド、当時はまだ王国だった頃に留学生として参加していた」
そう言ってコーヒーを片手に昔話を始めるエルディン。ここは宮殿内にある三軍連絡室。その名の通り陸軍・海軍・独立歩兵師団三軍との伝書鳩による情報連絡を行う、宮殿における軍の前線基地とも言うべき場所だ。その為か、部屋というより館と言う方が相応しい程に広い。平時でも三軍の兵士達はそれぞれ忙しそうに書類整理に追われている。これが有事となればここもまた戦場と化すだろう。
そんな部屋の一角にある、上級将校にのみ仕様が許可されている応接室が二人のいる場所だ。
テーブルを挟んで向き合うようにしてソファに腰掛けている二人。クリュウはたっぷりミルクと砂糖を入れたコーヒーを飲みながら彼の話に耳を傾けている。
「当時の俺はガキながら暴れん坊でな。ケンカじゃ負け知らずで逆らう奴は片っ端からぶん殴っていた。もちろん、先輩年上関係なくな。まぁ、所謂ガキ大将だった訳さ」
「はぁ……」
「そんな時に一人のクラスメイトと些細な事でケンカになってな。当然殴り合いになった訳だが、激戦の末に俺はそいつに打ち負かされ

た。初めて拳と拳のぶつけ合いで負けた――その相手がお前の父親、エッジ・ルナリーフだ」
「ブホォ……ッ！」
　思わぬタイミングで父の名前が飛び出し、クリュウは驚きのあまり飲み掛けていたコーヒーにむせる。激しく咳き込む彼を見て「何してんだよ」と呆れるエルディン。
「ちょ、ちょっと待ってください……ッ。父さんって、そんな人だったんですかッ!?」
　クリュウの覚えている父の姿は優しい父親という感じで、モンスターはともかくとして人に手を上げるような人には見えなかった。だから、彼の口から飛び出た発言に驚きを隠せないでいる。
「まぁ、俺があいつと拳で殴り合ったのはその一回切りだ。俺が不良ならあいつは優等生って感じだな。技能学科共に優秀で、学科に関しては当時の上位成績優秀者の中に名を連ねていたからな」
「父さんが、僕と同じ上位成績優秀者に……」
「ちなみにその頃よく一緒につるんでたのが、今現在そこで教官をやってるフリードだ。知ってるか？」
「フリードって……ビスマルク先生ですかッ!?」
　知ってるも何も、何度も担任になった教官。クリュウにとっては恩師のような人だ。というか、昨今のあの学校関係者なら知らない者はいないような教官だ。
「知ってんのか」
「そりゃあもう、鬼教官として有名ですし」
「……まぁ、あいつは昔から不器用な奴だったからな。でもまぁ、いい奴だろ？」
「は、はい。尊敬してます」
「ははは、あいつが尊敬を受けるような奴になるたぁ。俺も年取ったもんだなぁ」
　心底楽しそうに笑うエルディン。昔なじみの今を知る事ができて嬉しいのだろうが、クリュウとしては正直苦笑を浮かべるしかない。何だかんだ言っても、世間は狭いんだなぁと。

「……だから、ビスマルク先生何かと僕を気遣ってくれたのかな」
フリードは特にクリュウに何かとアドバイスをしてくれていた。ずっと謎だったのだが、それがかつての友人の息子だとわかっていたとすれば納得はできる。少し残念ではあるが。
だが、そんな彼の言葉にエルディンは首を横に振った。
「あいつはんなセコい真似はしねぇよ。あいつがお前を気にしてたって言うなら、お前にそれをさせるだけの実力があったって事さ」
「そんなまさか……」
「ディアブロスとの戦いをずっと見てたが、お前はなかなかの腕だ――それも、エッジの戦い方によく似てる」
「父さんの……？」
エルディンの言葉にクリュウは心底驚いた。別に父エッジに教わって今の戦い方を会得した訳ではない。なのに、彼が言うには自分の戦い方は父に似ている。ずっと追い掛けていた背中が、何だか少しだけ近づいたように感じられた。
「まぁ、エッジは大剣使いだったからな。片手剣使いのお前とじゃ武器自体での戦い方は当然違う。でもあいつも道具を多用する奴だった。小細工をさせたらあいつの右に出る奴はそういねぇな」
クリュウが道具を多用するのは、片手剣という武器による所が大きい。片手剣は攻撃力が低いのでどうしても道具に頼ってしまう武器だ。それに加えて片手剣は常に片手を自由に使えるので道具も取り出しやすい。片手剣使い共通の戦い方だが、クリュウはその使い方が上手だ。それは他のメンバーも、そしてあのフリードも認めている部分だ。
「お前は本当にエッジの息子かってくらいに自分に自信を持てねぇ奴だな。あいつは無駄に自信に満ち溢れていたが」
「……まぁ、父さんを知っている人にはよく言われます。自信過剰な人だったって」
「アメリアも結構おてんばな所があったかならなぁ。お前、どっちにも似てねぇぞ」
「ははは……、それもよく言われます。「あの二人からこんなにしっか

りした子が生まれるなんて奇跡だ」って」
「事実奇跡だろ」
　面白おかしそうに笑うエルディン。不思議と、彼と話していると何だかほっとする。両親の事を知っている人だからというのももちろんあるが、どことなく頼れる感じがして話しやすい。何というか、実に親しみやすい人だ。
「あの、一つ質問してもいいですか？」
「何だ？」
「――父さんを殺した古龍の正体、ロンメルさんなら何かご存知ですか？」
　クリュウの真剣な問い掛けに、それまで笑っていたエルディンの顔からも笑顔が消える。
　それはクリュウが知らない、そしてどうしても知りたい真実。どんなに調べても、その事件に関する事は何一つ出て来ない。ただの一介のハンターの情報だと言ってしまえばそれまでだが、それにしても情報がなさ過ぎる。
　ジッと見詰めるクリュウの視線を受けながら、エルディンは少し考え口を開く。
「引退した身だから構わんが、他言は無用にしてほしい――俺とエッジはギルドナイトだったんだ」
「ギルド、ナイト……？」
　思いもしない単語の登場に目を見開く。ギルドナイトといえばハンターズギルド専属のハンター集団だ。その業務は多岐にも渡り、中には要人や法を犯したハンターの抹殺任務もあると噂されている。一介のハンターから見れば、正直関わりたくはない存在だ。
　クリュウの表情が厳しいものに変わったのを見てエルディンは慌てて訂正する。
「確かにギルドナイトの中には非合法な事を専門とする部隊もいる。だが、エッジが所属してたのはそっち側の部隊じゃない。俺とあいつが所属していたのは主に古龍討伐を専門とした《Dフォース》と呼ばれる機関だ」

「Dフォース……」
「俺も詳しい事はわからないが、あいつが最後に受けた依頼は確かローマリアからの依頼だった」
「ローマリアって、あのアテネ神教の？」
二人の言うローマリアとは、西竜洋諸国の一角を担う国家。神聖ローマリア法国の事だ。地理的にはガリアと共に西竜洋には面しておらず、ガリアのように他の西竜洋諸国と国境を面している訳でもないが、経済・文化・歴史などあらゆる面で西竜洋諸国と密接な事から、分類的には西竜洋諸国に位置づけられている。
ローマリアは王国制の国と同じような王が支配する国であるが、他の王政国家とは異なり教皇と呼ばれる指導者が君臨している。
ローマリアは全世界に普及している最大宗教、アテネ神教の宗主国である。アテネ神教とは《全ての命は神が与えし平等な命》とする生命平等宗教で、その関係からモンスターを討伐する事を生業とするハンターズギルドとは昔から対立が多い。熱烈な信者が狩場を占拠してデモを行い、ギルドナイトが出撃してこれを撃退するという事件も少なくない。
大陸人口の三割近くが信者と言われており、それを国家人口とすれば大陸最大国家とも言える。その為、神への冒涜を行うハンターズギルドだけではなく、国家転覆を危惧する周辺諸国との関係もあまり良くはない。特にエルバーフェルドではアテネ神教は国家転覆を企む危険思想とされ、国内での一切の信仰を禁止。これに反して信仰する者は国家転覆罪に罰せられ強制収容所に収監。布教を行う首謀者に対しては国内最高刑罰となる国家転覆扇動罪に問われ、処刑も辞さないという厳しい態勢を築いている。
クリュウもハンターであるが故、あまりローマリアの事は快くは思っていない。噂では狩猟中に信者が妨害に入ったり、地方のハンターズギルド支部が焼き討ちを受けるなどの被害も多数受けているそうだ。生命平等主義と言いながら、実際は異教徒と断定した相手には一切の容赦がない非道な連中だ。
ちなみにローマリアはジョ・クルーク海とアテネ海を結ぶアテネ運

河を支配しており、そこの交通費と信者からの募金で成り立っており、宗教国ながら財政は潤っている。
「でも、何でまたローマリアから。ハンターズギルドと敵対しているはずですよね？」
「おいおい、敵対とは言い過ぎだ。仲が良くないと言うだけで……まぁ、実質同じか。とにかく、そのローマリアの教皇庁からの依頼をハンターズギルドが受けて、エッジが派遣された訳だ。極秘依頼だったらしくてな、俺も詳しい事は知らない」
「そう、ですか……」
　結局、父を殺した古龍の正体はわからなかった。それでも、今までに比べればずいぶんと状況背景はわかった。それだけでも良しとしなければならない。言うなれば、霞のようなものからわずかながら輪郭が見えるようになったのだ。
「アテネ神教の聖書は読んだ事はあるか？」
「いえ、ありませんけど」
「アテネ神教は創造神アテネを神とした宗教だが、その最大の敵は世界を滅ぼすと言われている《白き邪神》だ。現教皇はその邪神の復活が近いと騒いでいるらしいが、当然ローマリアを快く思っていない他の周辺国家はこれに同調する動きを見せていない」
「それが、どうかしましたか……？」
「……これは俺の勝手な解釈だが、その邪神ってのはおそらく何か特殊な古龍だ。そして、エッジはその古龍に関係する事柄で命を落とした。そう思ってる」
　エルディンの話はかなり規模の大きなものだ。一つの国家が最大の敵としている伝説上の生物に関連する何かで父は命を落とした。普通に考えれば誇大妄想の甚だしい話だが、クリュウは自然とその話を信じられるような気がした。というか、信じたかったのかもしれない。
　父は古龍討伐のエキスパートだった。なら、その父が敗北を喫した相手というのは普通の古龍ではないはず――否、そうであってほしいという子供心だ。

次第次第に、父の死の背景が見えてきた。このままなら、本当の真実に辿りつける。そう思った矢先、エルディンはコーヒーを飲みながらそんな彼の気持ちを制した。
「言っておいて何だが、この件にはあまり深入りしない方がいい」
エルディンの忠告に、クリュウは思わず「え？」と声を零す。自分にこれだけの、しかも引退したとはいえおそらくはハンターズギルドの口外してはならない秘密まで語ってくれた。だが、その本人がこの件には関わるなと言っている。どういう事か理解できなかった。
「どういう、事ですか？」
「言葉通りの意味さ。この件には政治的なものも絡んでいる。それに俺がギルドナイトの権限を使って十年以上掛けて調べてもこの程度しかわからない。下手すれば、命を落とすぞ」
真剣な表情で言う彼の言葉は脅しのようにも聞こえるが、おそらくは事実を言っているに過ぎないのだろう。それだけ、危険な案件なのだ。だが、だからと言って父の死の真実を知りたいという彼の子供心が収まるはずもない。
「でも……」
「俺としちゃ、エッジとアメリアの息子が命を落とす結果になるのは目覚めは悪いが、結局は部外者の話だから特筆して気にする事もねぇ――だがな、お前に死なれると俺の愛弟子が悲しむだろうが」
彼の言葉にクリュウは思わずハッとなった。彼が言う愛弟子とはもちろんシルフィードの事だ。当然、仲間である自分が死ねば、彼女も悲しむだろう。
「シルフィードだけじゃねぇ。あのレヴェリの娘や眼帯の東方娘だってな。お前、自分が羨ましいくらい仲間に恵まれている自覚はあるか？　そんな仲間を悲しませるような事するな。お前は今を生きてるんだ。過去に囚われてても仕方ねぇだろ」
それは過去に囚われていた少女――シルフィードを救った一人の男の信念。彼もまた親友とも言うべき男を失い、過去に囚われた男。だからこそ、過去に囚われるなと言える。その言葉は重い。その言葉に、クリュウはその先を言う事はできなかった。

脳裏に浮かぶのは、皆の笑顔だ。その笑顔はきっと、自分がいなくなれば失われる。自信過剰な訳ではない。ただ何となく、そんな気がした。薄っすらとはわかっている。自分が、今のチームの一番の中核を担っている事を。戦略的なものではなく、精神的なものだ。

事実、レウス戦及び先日のディアブロス戦で自分が倒れた瞬間、チームは総崩れとなった。他の面々が脱落しても、何とか戦線を維持できるのに対して、自分が倒れただけで戦線はあっという間に崩壊する。

狩猟の中だけではない。日々の生活でも、自分はいつも皆の中心にいる――その自覚は、ちゃんとあった。

「親父の死の真相を知りたい、それは別に悪い事じゃねぇ。だがな、そんな事の為に今の仲間を悲しませ、自分を危険に晒す必要はねぇんだ。エッジも、息子のお前にそうなってほしいとは思ってねぇはずだ」

「ロンメルさん……」

「後ろに振り返る事は大切だ。だが、いつまでも後ろを向いてられる程世の中は甘くねぇ。気合入れて前を見据えて歩け。ルナリーフの名に泥を塗らないようにな」

そう言ってエルディンはクリュウの頭をグシグシと荒っぽく撫で回す。髪はかき混ぜられてぐちゃぐちゃだし、結構力があるので頭が振り回されて首も痛い――だが、自然とそれは嫌ではなかった。何となく、父親にされているような、そんな安心感があった。

「……チッ、ちゃんと結婚してればお前くらいの息子がいたのか。時の流れってのはつくづく恐ろしいぜ」

「ロンメルさんは、独身なんですか？」

「おぉ。俺は心に決めた女がいるからな。そいつ以外の女なんざ振り向きもしねぇよ――まぁ、結局は俺に振り向いてくれなかったんだけどな」

そう言って苦笑を浮かべるエルディン。その言葉に、何となくクリュウは引っ掛かりを感じた。

「ロンメルさん……」

「あいつは底抜けて明るくて、優しくて、本当に献身的な女だったよ。ちょっと世間知らずでバカな所もあったが、それによく笑わせてもらった。自然と、あいつの笑顔を見てると元気が出てなぁ。それでいてハンターとしては見た目に反して優秀で、あいつの援護に俺もよく助けられたもんだ。優しくて、きれいで、可愛くて、それでいて頼もしくて。あんないい女を妻にできたあいつは本当に幸せ者だ」
「それって……」
「ハハハ、人妻に手は出さねぇよ。それで親友もあいつも幸せになって、今目の前にかわいらしいその息子がいる。それで十分さ」
愉快そうに笑うエルディンだが、その笑顔は今までと違ってどこか淋しげだ。話の流れで、確信した。彼が心に決めた女性というのは……名前を上げるだけ野暮な話だろう。
「……アメリアは、死んだのか？」
「はい……」
一転して、真剣な表情となって問うてきたのはある意味クリュウは予想していた問い掛けだった。自分の返答に、彼はどんな反応をするのか。チラリと見ると、彼は顔を伏せたまま表情を見せなかった。ただ、「そうか……」と一言つぶやくだけ。
「時々あった手紙のやり取りが、十年くらい前から全くなくなってな。風の噂で死んだって俺の耳にも届いてた。だがな、確認に行く勇気がなくてよぉ、未練たらしく「あいつは生きてる」って信じ込もうとしてた。だがな、今回お前がやって来て、あいつの死は確信に変わった。そして今、真実となった。そうか……アメリアはやっぱり死んでいたか」
がっくりと項垂れながら「そうか……そうか……」と小さく繰り返す彼を見ているのが、とても心が痛かった。父の親友で、自分や父と同じくらい母を愛してくれていたもう一人の人。その辛さは、自分もよく知っている。だからこそ、こういう時は下手な慰めの言葉なんていらない事を、自分は知っている。ただ今は、黙っているしかない。
しばらくの沈黙。だがそれはずっと黙っていた彼の口が開くと同時に終わりを告げる。

「……これで俺も前に進めるって訳だな。ったく、お前に過去に囚われるなと言っておきながら、俺はずいぶんと囚われてたみたいだな。二〇年は長えぞ」
「ロンメルさん……」
「――今度、村へ二人の墓参りに行ってもいいか？」
苦笑しながら問う彼の言葉に、クリュウはどう答えるべきか迷っていた。だが、自分の中に流れている父と母の血が、その答えを教えてくれているような気がした。
「もちろん。父さんも母さんも、きっと喜びます」
母譲りの屈託の無い笑顔で、クリュウはそう答えた。

第１６４話　可憐な笑顔花咲かせて　優雅に再臨する微笑の女神

「あ……」
　コーヒーを飲みながら一息入れている時、部屋のドアが開いた。誰だろうと思って覗き込んだ瞬間、クリュウとその来訪者の目が合い、双方共に固まってしまう。それを見てエルディンはコーヒーを飲みながら小さく苦笑を浮かべた。
　部屋の中へ入って来たのは黒い軍服をピッチリと身に纏った、知的なメガネが印象的な少女。制服や階級章など、一般人のクリュウが見てもわからないが、それは海軍の上級将校のみが着る事を許される士官服。その襟に縫われた階級章は最高階級、元帥を意味する。
　海軍総司令官――カレン・デーニッツ元帥だ。
「な、何で……」
　カレンはクリュウが部屋の中にいる事にひどく動揺しているようだった。目を見開いて目の前の光景に呆然としている。一方のクリュウも突然の探していたはずのカレンの登場に固まってしまっている。
　だが、そこはさすが軍人。クリュウがまだ状況整理が整わずに困惑している間に一足早く状況を理解。すぐにこのテーブルを用意した張本人、エルディンを睨みつける。
「これはどういう事ですか？　ロンメル元帥」
「そう怒るなって嬢ちゃん。こっちはきっかけをわざわざ作ってやったんだ。感謝こそされても睨まれるような事はしてないさ」
「……失礼します」
「おいおい、いいのか？　今度の威力軍事演習に独立歩兵師団第十二演習場を海軍に野営地として貸し出すって話、オシャカにするぞ」
「な……ッ！　権力を使って公私混同しないでくださいッ！」
　あっけらかんと言うエルディンにカレンは頭を抱える。何となく、サクラを相手にしている時の自分と重なってクリュウは少し同情し

てしまう。
「まあまあ、人間諦めが肝心って言うだろ？」
「あなただけには言われたくないですッ！」
深いため息を零す彼女の肩を叩いて、ゆっくりと寸前まで自分が座っていたソファ。クリュウの正面に彼女を座らせると、爽やかな笑顔を浮かべて二人に振り返る。
「それじゃ、後は若い者同士でッ」
「お見合いじゃありませんッ！　何ですかそのムカつくくらい爽やかな笑みはッ!?」
唸るカレンをさらりと受け流し、エルディンはドアノブに手を掛ける。そしてゆっくりと振り返ってニッコリと微笑みながら、最後通牒を叩きつけた。
「――これから一時間ここを封鎖する。二人共、勝手に出て行くなよ」
「えええぇぇぇッ!?」
驚く二人に爽やかな笑顔を送り、さっさとエルディンは出て行ってしまった。閉じられたドアの向こうで大きな物音が……どうやら、ドアの近くにあった本棚を移動して封鎖してしまったらしい。勝手に出て行くなとか言いながら、これではそもそも脱出不能だ。
カレンは慌ててドアにしがみ付いて開けようとするが、やはり完全に封鎖されているらしくドアはビクともしない。
「あんのぉ、ちゃらんぽらん元帥めぇ……ッ」
「ひ、ひどい言いようだね」
「当たり前ですッ！　こっちは閉じ込められたんですよッ!?」
バンッと叩くのは封鎖されてしまった唯一の出入り口。名探偵を呼ぶ必要もなく、見事な密室の完成だ。どうやら本当に完全に閉じ込められてしまったらしい。カレンは大きくため息を零すと元の席に戻り、乱暴に腰掛ける。
「まったく……ッ、こっちは財務省のくたばり損ないの文官共の無茶難題をどう突っぱねるか策を練っていて時間が惜しいのに……ッ。兵員・兵器・予算で三流の部隊とは仕事量が違うのよッ」
イラつきながら乱暴に頭を掻き乱すカレン。その姿は一人の少女

というよりは、大人の事情に雁字搦（がんじがら）めになっている疲労困憊の権力者と言った所か。もちろん、一般人中の一般人であるクリュウにはわからぬ苦悩だ。
「た、大変そうだね……」
　同情するように言うクリュウの言葉にピクリと彼女が反応する。ゆっくりと顔をもたげると、そんな彼をギロリと睨みつける。その瞳は、若干の殺意すら感じ取れる。
「貴殿の差金ですか？」
「ち、違うよッ。僕だって何がなんだか……」
　クリュウがウソをついていないと瞳を見て判断したのだろう。大きなため息を吐いて「あなたも巻き込まれた側の人間ですか……」と苦笑を浮かべる。どうやら逃げられない状況に諦めたらしい。その辺の切り替えの速さがエルバーフェルド海軍を再建した元帥の才と言った所か。
「ま、まぁ君を捜してたには捜してたけど……」
「はぁ？　な、なぜあなたが私を捜す必要があるんですか？」
　クリュウの何気ない一言にカレンが明らかに動揺した。それまでの同世代とは思えない程多くの苦悩に悩む軍人としての顔が崩れ、同じ年頃の少女の顔へと崩れた。クリュウはそんな彼女の反応に苦笑を浮かべる。そりゃ、あんな別れ方をしたのだから、会う事自体気まずいのだろう。なのにクリュウはそれを乗り越えて彼女を捜していた。カレンからすれば動揺の一つや二つするようなものだ。
　別れた時とは違う、軍人としての仮面ではなく一人の少女としての姿で応対する彼女を見てクリュウはほっとしたように微笑む。その笑顔を見て、カレンの頬がほんのりと赤く染まった。
「そ、それで私に一体何の用でしょうか？」
　頬を赤らめながら話を進めるカレンの促しに一つ頷き、クリュウはそっと静かに彼女に向かって手を差し伸べた。それを一瞥し、カレンは憮然と尋ねる。
「これは一体どういう意味でしょうか？」
「どういう意味も何も――僕達友達でしょ？」

「なぁ……ッ!?」
微笑みながらさらりと言うクリュウの言葉にカレンは言葉を失った。何を言っているのか、彼女には彼の言っている言葉の意味が全くわからなかった。
「な、何を世迷い言を……ッ」
「世迷い言って……君が言い出した事だよね？」
彼女の発言につい苦笑が浮かんでしまう。何というか、彼女の真面目な顔と年相応の少女らしさに満ちた顔がコロコロと入れ替わるのは見ていて楽しくもあり、可愛らしく思えてしまう。
「あ、あの件は無かった事にしたはずです」
視線を合わせられないのか、カレンはうつむき加減で答える。指をツンツンとさせる姿は実に可愛らしく、頬を赤らめて恥ずかしがる彼女の姿に一瞬ドキッとしてしまった。
「勝手に友達宣言しておきながら一方的にそれを破棄するのは、振り回される方としては堪んないよ」
少し意地悪っぽく言うと、それだけでカレンはさらに動揺する。軍人としての冷静さは微塵も感じられない、普通の少女らしい反応だ。
「そ、それは……悪いとは思っています。ですが、私達は相容れない者同士です」
動揺しながらも、しっかりハッキリと答える。自分達二人の間にある、決定的な思想の違い。それはある意味十分な繋がりを結べない理由だ。そしてその理由はとても繊細で、簡単には解決はできない。それはカレンはもちろん、クリュウだってわかっている。
「……確かに。ガリア人の知り合いと持つ僕と、ガリア人を憎んでいる君とでは相容れないかもしれない」
「なら……」
「でもさ、それを取っ払えば僕達結構いい友達になれると思うよ？」
「……取っ払う？　私の両親を殺し、我がデーニッツ家を没落させたガリアに対する憎しみを、そんな適当な言葉一つで片付けないでください」
厳しい瞳で睨みつけるようにしながら憮然と言い放つ。その瞳に

は敵意すらも感じさせられる程に鋭い。彼女にしてみれば、ガリアは憎き敵なのだ。それを「取っ払う」など一言で片付けられるのは、実に腹立たしいのだ。

「……そうだね。取っ払うってのは言葉が悪かった。確かに僕と君の間の壁は厚くて高いかもしれない。表面上は友達になれるかもしれないけど、奥底ではわからない。でも――」

そこで言葉を区切り、一瞬クリュウは。沈黙する。そんな彼を真剣な瞳で見詰めながら、続きを待つカレン。その瞳には今は先程まであったような敵意などはなく、ただ一心に彼の答えを待ち望んでいる。その瞳を見ていればわかる――彼女の本心を。

彼女の強い視線を一身に受けるクリュウはだが、彼女のように拳を強く握り締めたり厳しい表情を浮かべる事もなかった。ただいつもと変わらない、屈託の無い笑みを浮かべてこう言った。

「――そういう障害が多い方が攻略し甲斐があるでしょ？」

「な……ッ!?」

笑顔で平然と言ってのけるクリュウだが、カレンはその言葉に顔を真っ赤にして唖然とする。

一方、クリュウはそんな彼女の反応に首を不思議そうに傾げる。当然、自分の何気ない発言が見事に聞きようによってはものすごい発言だという自覚はない。平然と、無意識に、悪気や策などなく誤解を与えるような言葉を口に出してしまう。彼の才能であり、同時に欠点でもある。

クリュウの爆弾発言に赤らんだ頬に手を当てて呆然と彼を見詰めていたカレンだったが、耐え切れなくなったように吹き出し、笑う。

「……ッ、ハハハッ。　あんた、もしかしてって思ってたけど――案外バカでしょ？」

「うーん、さっきハッキリと言われた所」

先程もエレナに思いっ切りバカ発言された身だ。自覚は無かったが、どうやら自分は相当なバカだったらしい。思わず苦笑が浮かんでしまう。だが、こうして一人の女の子を笑顔にさせられるなら、バカで構わないとも思った。

「まったく、あんた気弱そうに見えて意外と頑固なのね」
「少しくらい頑固じゃないとハンターなんてやってられないよ」
「ふぅん、あんた顔に似合わず結構男らしいじゃない。女だけど」
「……そういえば、そういう設定だったね」
「え？　何か言った？」
「な、何でもない何でもないッ」
　ポロリと零れた失言を慌てて笑って誤魔化すクリュウ。そんな彼の様子をカレンは不自然そうに首を傾げながら見詰める。
「変な奴。まぁ、あんたが変なのは今に始まった事じゃないしね。別にいいけど」
「……今、サラッとひどい事言わなかった？」
　先程までの他人行儀な敬語はすっかり消え、今ではあの夜の時と同じく容赦のない口調に変わっているカレン。言うまでもなくこっちが彼女の本性なのだろう。
　すると、カレンは途端に意地悪っぽい顔のになる。
「私を攻略しようなんて言うじゃない。私はシークレットルートくらい攻略は難しいわよ」
　まるでクリュウを挑発するように不敵な笑みを浮かべながら堂々とカレンは言ってのける。それを前にはクリュウも「がんばるよ」と苦笑を浮かべながら答えるしかない。
　クリュウの反応に満足げに頷くと、カレンは立ち上がる。不思議そうに見詰める彼へと近づくと、スッと顔を近づけて驚く彼の耳元でそっとささやく。
「――でも、あんたになら攻略されてもいいわよ」
「え？　って、うわぁッ!?」
　耳元でささやいた彼女の言葉に驚いて振り返ると、楽しそうに笑う彼女と目が合う。その瞬間、カレンが勢い良く抱き付いて来た。ソファに腰掛けていたので倒れる事はなかったが、むしろ逃げる事できずに彼女の抱擁を真正面から受ける事になった。
「ちょ、ちょっとカレン……ッ」
　正面から彼女を抱き止める事となったクリュウの胸にはハッキリ

とわかる程に彼女の胸が押し当てられ、それが更に彼の混乱に拍車を掛けていた。
慌てる彼の様子をからかうようにカレンは更に胸の膨らみを押し付ける。
「あんた顔真っ赤じゃない」
「そりゃ真っ赤にもなるよッ」
「女同士でしょ？　やっぱりあんたも女の子が好きなのね」
「あ、あのねぇ……ッ」
「――でも、私の事をちゃんと女の子として見てくれてるのは、ちょっぴり嬉しいかな」
照れたように微笑む彼女の可愛らしい、名前と同じ可憐な笑みに思わずドキッとしてしまう。視線を合わせておけずクリュウの視線は自然と逸れてしまう。
可憐は世間一般で言えば十分美少女の部類、それもかなり上位に入る娘だ。普通にしているだけで目を引くのに、そんな子の笑顔は当然威力抜群だ。この国の表に出る女性、総統のフリードリッヒも宣伝相のヨーウェンも、そして二人に比べれば国民の前に出る事はあまりないだろうが、カレンもまた美人だ。そればかりかフィーリアにルーデル、セレスティーナにシュトゥルミナと、エルバーフェルドの女性は美人ばかりだ。そういえば、学生時代に男連中が北国の女性には美人が多いと話していたが、それはどうやら本当らしい。
クリュウが照れて視線を逸らすのを見て、カレンも嬉しそうに微笑む。そして、そっと彼の耳に向かってフゥと息を吹き掛ける。
「ひゃあッ!?」
「あはッ、あんたかわいい声してるわね」
「か、からかわないでよッ」
「えぇ～、だってあんた何かいじめたくなるオーラがすごいんだもん」
「……シルフィにもさっき言われたんだけど」
最近なぜかシルフィが自分をからかう事が増えてきた。それだけ二人の距離が縮まっている証拠なのだが、クリュウにとってはそんな事わからないので最近彼女に何か悪い事したかなぁと考えを巡らせ

る。すると、そんな彼の唇にピタリと指が当てられた。視線を彼女に向けると、カレンはムスッとしたような表情で自分を見詰めていた。
「か、カレン？」
「他の女の子の話をしちゃダメ。私といる時は、私だけを見ていなさい」
「……ご、ごめん」
「うむ、よろしい」
　無邪気に微笑むと、カレンはそっと顔を近づけてそっとクリュウの頬に唇を当てる。驚く彼の反応を見る事もなく、そのまま再び抱きついて来る。また先程と同じ状態だ。だが、クリュウも何となく抵抗するだけ無駄なのだろうと気づいてた為、無理に抵抗する事はなくなった。――まぁ、こっ恥ずかしい事には変わりないが。
「お、女の子同士ってこんな感じだっけ？」
　記憶の中の女子の模範像、まぁ当然いつもの面々はお互いにこんな事はしていなかったはずだ。すると、そんな彼の疑問に身を起こしたカレンが頬を赤らめながら苦笑を浮かべる。
「いや、私も友達が初めてだから勝手がわからなくて……どこまでが妥当なのか」
「……とりあえず、離れようか。ちょっと近すぎる」
「そうかな？　ゲッペルス大臣はいつも総統陛下にこんな感じだけど」
「……まずは、女子の基本をあの人に当てはめようとするのはやめた方がいいと思う」
　会って間もない相手だが、何となくそれは確信を突いているような気がした。あの人は普通の女性とはちょっと違う感じがするので、模範像としては適任ではないだろう。
「ほら、早く離れてって」
「あ、ちょっと待って。最後にもう一回ハグしてから」
　そう言ってカレンは無邪気に笑うとギュッと抱きついてきた。クリュウとしては当然恥ずかしいのであまり気は進まないが、最後と本人が言っているのでこれだけは黙認する事にした。まぁ、かわいい女

の子と抱き合うのは恥ずかしいのは当然だが、もちろん嬉しくもあったりする。男というのは実に優柔不断な生き物だ。
「も、もういいかなデーニッツ」
「……カレンって呼んでくれなきゃ離れない」
耳元でささやく彼女の言葉に思わず笑みが浮かんでしまう。そして照れ隠しのようにわざとらしくため息を零すと、抱きつく彼女の耳元でそっとその名を呼ぶ。
「か、カレン」
「よろしい。なら、私もあんたの事はクリュウって呼ぶわ。光栄に思いなさい」
「……あ、ありがとう」
身を起こしてなぜか偉そうに腕を組んで上から目線。クリュウは苦笑を浮かべながら彼女を見やる。本当に、初めて会った時とはえらい差だ。もっとしっかりしている子だとばかり思っていた――だが、こちらの彼女の方が親しみやすいのは事実だ。
ようやくカレンがクリュウの上から降りる。すると、そのまま彼女は彼の横へ腰掛けた。どうやらすっかり懐かれてしまったらしい。嬉しいには嬉しいのだが、やはり恥ずかしさは消えないものだ。彼女のキラキラとした視線を真正面から受け止めるだけの度胸は彼にはない。
「クリュウってさ、何でハンターになったの？」
興味深げに問う彼女の質問に、クリュウは少し考えてから答える。
「君と同じかな。両親がハンターだったのがキッカケで、憧れてた。でも今は村を守りたい、その一心でがんばってる」
「ふぅん、私と同じね。私もキッカケは両親で、今は国を守りたい。その一心でがんばってる。分野は違うけど、互いに守りたいものの為に戦ってる。お互い、誇れる職業ね」
「まぁ、そうだね」
難しい話はなしにして、確かに自分達はよく似ている。今の仕事をするキッカケも、守りたいものも。規模も職種も違うが、同じ志を持つ者同士。そして、両親の跡を継いで……

「……なってみて初めてわかるのよね。親の偉大さってのをさ」
しみじみと言う彼女の言葉に、クリュウは素直にうなずいた。自身が両親と同じ道のスタートラインに立った途端、急に世界が変わった。夢想していた事と現実はあまりに乖離していて、その違いに煩わしさを感じてしまう。そして、両親がいた場所を認識し、改めてそのすごさを感じた――自分なんかよりもずっとずっと前を、歩いていたのだ。
「……ハンターになってさ、父さんと母さんの実力の凄さを知ったね」
「そうねぇ。私も実際に司令官になってみて、父の偉大さを知ったわ。昔とは軍の規模も兵器の質も格段に向上していても、結局は人間で束ねられた組織という点では変わらない。それを見事に統率していたんだから、父はすごいわ」
お互い住む世界も違う存在同士だが、同じ気苦労を持つ者同士。視線を合わせると、自然と笑みが浮かぶ。それはお互いに自分の仕事、そして親の偉大さを誇りに思っている証拠。
「ほんと、私達って結構似てるのよね。お互い美少女だし」
「……自分で言うかそれ」
「それもそうね」とおかしそうに笑う彼女の言葉に思わず苦笑が浮かぶ。だが、クリュウは決して口には出さないが言い過ぎではなくカレンは間違いなく美少女の分類に入ると断言できた。それだけに彼女はかわいらしい。だからこそ、一緒にいるとどうしても意識してしまうのだが。
「クリュウはさ、母親の故郷かもしれない、母親の事が知りたいから、アルトリアを目指すのよね」
「うん、まだまだわからない事だらけだけど。たぶん、アルトリアが母の故郷だって事は間違いないと思う」
「……大陸南洋に浮かぶ島国の住人と大陸北部に位置する村の村民。普通に考えれば接点なんてゼロに等しい。しかもアルトリアは大陸人を嫌っているから余計にね――でも、それでも確信できるだけの理由を、あんたは持ってるのね」
「まぁ、一応ね」

「なら、がんばりなさい。あんた一人のわがままの為に、今一つの国が動こうとしてる。空前絶後にも程があるような展開だけど、これはあんたがその手で勝ち取ったチャンス。陛下の温情に感謝しつつ――がんばりなさい」
そう言ってカレンはそっとクリュウの肩を叩いた。驚く彼の前へ立ち上がって移動すると、その場でくるりと回転。そして振り返り、彼を見やって笑顔を浮かべる。だが、その笑顔はどこか悲しげに見えた。
「……短い間だったけど、あんたと会えて良かったわ。友達として、私はあんたを応援する。だから、アルトリアへ行って、故郷に帰って、夢へと突き進んで――でも、時々でいいからさ、私の事も思い出して」
悲しげな瞳のまま、無理して笑う彼女の笑顔にクリュウは気づく。おそらく、フリードリッヒは自分のアルトリア行きを許可してくれるだろう。だとすれば、当然エルバーフェルドの地を離れる事になる。そうなれば、アルトリアは抜きにしてもイージス村からエルバーフェルドまではかなりの距離がある。当然、下手をすれば二度と会えない。彼女はそれに気づいていて、でも彼を笑顔で送り出そうとそれを殺して無理に笑っている。
だがクリュウはそんな彼女に向かって優しく微笑んだ。
「時々どころかちゃんと覚えてるよ。手紙だって、時々になるかもしれないけど書くし。それにここはフィーリアの故郷の国だから、滅多には来れないかもしれないけど永遠に来ないって訳じゃない――僕達の繋がりは、そう簡単に断ち消えるようなもんじゃないよ」
笑顔で言う彼の言葉にカレンはきょとんとした様子で呆然とするが、やがてフッと口元に笑顔を浮かべる。感心しているのか、呆れているのか、どっちともとれるような笑顔だ。
「……あんたってさ、言葉の端々にムカつくくらい優しさが滲み出過ぎよ」
「そ、そうかな？」
「――ったく、あんたが男なら本気で好きになっちゃうじゃない」
「な……ッ!?」

「あはは、安心しなさい。女の子でもあんたの事は大好きに変わりはないわ」
そういう意味じゃないのだが、屈託なく笑う彼女の言葉にクリュウは顔を真っ赤にしてドキドキする。女の子に面と向かって好きと言われるのはフィーリアやサクラによく言われていても未だに慣れるものではない。慣れてはいけないような気がするし、言われて嬉しくない訳がない。
照れて黙る彼の様子を見て微笑むと、カレンはそっとそんな彼の頬に口付けする。驚く彼が見やると、照れているのか頬を赤らめた彼女が笑顔で立っていた。
「――今度はまた観光で来なさいよ。その時は、一緒にデートしましょ」
数日後、クリュウ達は再びフリードリッヒなどが並ぶ王侯会談の場にいた。
前回と同じようにテーブルを挟んでフリードリッヒ率いる政府側とセレスティーナ率いるレヴェリ家側に分かれて座っている。前回と違い、今回はルーデルも会談の場に居合わせている。
相変わらずフリードリッヒは威圧的に構え、ヨーウェンは意味深な笑みを浮かべている。そして今回の交換条件となった遠征の責任者であるカレンと、前回は呼ばれなかったエルディンの姿もある。
エルディンもまた相変わらず場の緊張感を無視してリラックスした体勢で座っており、クリュウと目が合うと優しげに微笑む。緊張しているクリュウはそれだけでずいぶんと助けられた。
一方、カレンの方に目をやるといつもの軍人の表情で凛々しく座っていた。だが、ふと目が合うと口元にも小さな笑みが浮かべながら周りからバレないように小さく手を振る。前回の時は時々睨まれたりしていたのに、えらい違いだ。
この前とは様々な面で明らかに状況が違う。それがクリュウの緊張をわずかながらも和らげてくれた。
そして、いよいよ王侯会談が開始された。
「……まずそこの四人」

開口一番、フリードリッヒが口にしたのはクリュウ達を呼ぶ声だった。いきなりある意味名指しで呼ばれた四人は一斉に身構える。特にクリュウは何を言われるかゴクリと唾を呑んで彼女に向き合う。
終始厳しい表情を浮かべているフリードリッヒだったが、突如フッと口元を綻ばせた。驚く面々を前に、彼女は堂々と口を開く。
「ディアブロスの討伐、良くやってくれた。まずは礼を言う」
そう言ってフリードリッヒは深々と頭を下げた。その光景にクリュウ達はもちろん、政府側の面々も驚き目を見開く。ただ一人、ヨーウェンだけは小さく苦笑を浮かべていた。こういう流れになる事をわかっていたのだろう。
「ディアブロスはそう簡単に倒せるようなモンスターではない。それを倒したという事は、それ相応の覚悟があるという事だな」
その問いかけに、クリュウは静かにうなずいた。本気だからこそ危険な任務を受け、そして完遂させた。
クリュウの表情を見て確信を得たのだろう。フリードリッヒはそんな彼を見ながら不敵な笑みを浮かべる。
「――私は、本気で生きる人間が好きだ。君の本気、見せてもらったぞ」
最初に会った時は明らかな敵意のようなものを放っていたフリードリッヒだが、今ではその影は微塵も感じられない。それは彼女なりに彼らの奮闘を称え、そして認めた証だ。
「君の本気に応え、私も本気を見せよう――アルトリア政府との話はついた。君を正式に我が国の特使としてアルトリアへ派遣する事になった」
威風堂々と断言する彼女の言葉に、クリュウは一瞬だけ頭が真っ白になった。だがすぐに状況を理解し、パァッと笑顔が華やぐ。そして、感動を一気に吐き出――
「やりましたクリュウ様ッ！　アルトリア行き決定ですッ！」
「……クリュウ、良かった」
――す寸前で一斉にフィーリアとサクラが両側から抱きついてきた。二人共まるで自分の事のように大喜びしている。どちらの目に

も薄っすらと涙が浮かんでいる始末だ。大感動する二人に先を越された形のクリュウは叫びを引っ込めてしまう。何というか、こんなに二人が喜んでいるのに自分が叫ぶの何となく気が引けたのだ。
「あ、ありがとう二人共。これも君達のおかげだよ」
「何を仰いますかッ。これはクリュウ様が自分で手に入れられたものですよ」
「……私達がその手助けをしただけに過ぎない。これはクリュウの努力の賜物」
クリュウが二人に感謝の言葉を述べても、二人はそれを素直に受け取ろうとはせずにクリュウを絶賛する。何というか、実に二人らしい反応だ。サクラもいつもこれくらい謙虚な態度をしていればもう少し人当たりも良くなるのだが、とシルフィードは苦笑を禁じ得ない。
「私も、一応頑張った身なのだが……」
「そう思うなら、さっさと輪の中に加わりなさい。まずはあんた達四人で喜ぶの先よ」
そう行って輪の中に入るのを渋る彼女の背中を押したのはルーデル。問答無用という彼女に押されて遅れるもシルフィードも輪の中へ入った。当然クリュウは笑顔で彼女に感謝し、シルフィードは頬を赤らめながらその言葉に微笑む。
「良かったわね、クリュウ」
「フィーちゃんに感謝しなさいよ」
「良かったわねクー君」
エレナ、ルーデル、セレスティーナもその輪に加わり、クリュウを中心に盛り上がる面々。そんな彼らをフリードリッヒ達も黙って温かい目で見守っていた。ただ一人、再び笑顔を消して無愛想に席に深く腰掛けるフリードリッヒ。その彼女の頬を隣に座るヨーウェンがそっと指でつつく。
「あなたらしくない温情ね。租借地周辺に現れたディアブロス一体と同盟国アルトリアとの外交関係。天秤に掛けたら後者の方を優先するのが普通じゃない？」
「……どこぞのアホが私に辞表片手に頼み込んで来ただけさ」

そう言って苦笑を浮かべながらフリードリッヒは隣に座るカレンを見る。目が合った瞬間、カレンは慌てて視線を逸らした。気まずそうに沈黙する彼女の頭を、フリードリッヒがそっと小突く。
「腹心の中でも私に最も忠誠を誓っていたはずのお前が私を脅すとは、どういう風の吹き回しだ？」
「……い、一身上の都合です」
「あははは、カレンそれは無茶苦茶な言い訳ね」
「まぁいいじゃねぇか。反抗期の一つくらいないとガキはかわいくねぇ」
カレンらしくない自分の意思を重視した行動に喜ぶ二人に対し、カレン自身は恥ずかしそうに頬を赤らめながら気まずそうに沈黙を続ける。フリードリッヒもどうやら二人と同じ意見なのか、思いの外怒ってなどはいなかった。すると、チラチラと自分の方を見やる彼女の視線に気づく。フリードリッヒはため息を零すと彼女に振り返る。
「……特に罰を与える気などない。ただし、給料は三ヶ月間三割カットだ。いいな？」
「は、はい……ッ。温情感謝しますッ」
いくら何でも尊敬・敬愛するフリードリッヒに逆らったのだ。彼女としては軍の現状を鑑みるに更迭される事はないという確信はあったが、それでももっと厳しい罰が与えられるものだとばかり考えていた。だが実際に下ったのはあまりにも軽いものであった。驚きと同時に、フリードリッヒの思いやりに感謝感激する。
キラキラとした瞳で見詰める彼女の視線に苦笑しながら離れると、改めて身内で盛り上がっているクリュウ達を見詰める。
「話はまだ途中だ。静かにしろ」
フリードリッヒが静かにそう言うと、騒いでいた面々は一斉に黙る。そして申し訳なさそうに謝りながらそれぞれ席へと戻る。それを待ってから、フリードリッヒは再び口を開いた。
「そこで、君達に紹介しておきたい人物がいる」
「紹介したい人って？」
「貴様らは運がいい。ちょうど貴様らが出払っている間にアルトリア

とのＦＴＡ交渉の為に特使が来ている。アルトリアには彼らの乗る飛行船で向かえ。すでに許可は取ってある」
　アルトリア行きが決定したとはいえ、その手段までは考えていなかったクリュウ達。フリードリッヒの語る方法はまさにアルトリア行きを希望する彼らにとっては最高の手段だった。
「それで、紹介したい人というのは……」
「アルトリアＦＴＡ全権大使、アルフ・レキシントン農林水産大臣だ――入りたまえ」
　フリードリッヒの招き入れの言葉に、会議室のドアがゆっくりと開く。部屋の中へ入って来たのは背の高い壮年の男。痩せ型の体型の為ひょろっとした印象を抱くが、瞳や顔つきは自信に満ち溢れている。
　男――アルフは無言のまま部屋へ入室すると、双方の間となるテーブルの前で一礼。顔を上げ、静かに礼儀正しく自らを名乗る。
「お初にお目にかかります。私はアルトリア王政軍国農林水産大臣、アルフ・レキシントン男爵。貴殿らをアルトリアへご案内する役目、私が責任を持ってお引き受けしましょう」
「こ、こちらこそよろしくお願いします」
　クリュウは立ち上がり、一礼する。それに合わせてフィーリア達も同じように一礼。彼が、自分達をアルトリアへ導く人物。思いの外優しそうな人だという事がわかりほっとするフィーリア達。一方、クリュウは一人神妙な表情を浮かべていた。
「レキシントンって……」
　すると、そんな彼にアルフがゆっくりと向き直る。ジッと興味深げに彼を凝視していたかと思えば、フッと口元を綻ばせる。
「君がクリュウ・ルナリーフ君か。娘から話は聞いているよ。まさか、こんな形で君と出会うとはね」
「む、娘……って、もしかして――」
「――そのもしかして、よ。クリュウ君」
　突如響く凛とした、それでいて可憐な声。その声を、クリュウは以前に聞いた事があった――否、忘れるはずがない。かつての仲間、共

に戦ったクラスメイト。
その誰もを虜にする優しげな笑顔は女神の一人に数えられた。そして今、ドアを開け放って現れた少女はその時と変わらぬ、むしろ幾分か大人びた笑顔となったそこにあった。
腰まで伸びる桜色の美しい髪を伸ばし、翡翠色の瞳にはエメラルドのような美しい煌きが光る。柔和な優しげな笑みは息を呑むような美しさ。まさに、女神と言うにふさわしい美貌だ。
少女は優雅に純白のドレスを着こなしながらゆっくりと驚きのあまり席を立って立ち尽くすクリュウへ近付くと、屈託なく微笑む。
「――お久しぶりねクリュウ君。あら、ちょっとかっこ良くなったかしら？」
昔の友人の姿を見て懐かしそうに微笑む少女。
彼女の名はフェニス・レキシントン。かつてクリュウがドンドルマのハンター養成訓練学校に在学中に知り合った、最後の学年ではクラスメイトとして共に狩猟祭などを共に戦い、そしてルフィールを歓迎してくれた仲間であり、水の女神と称された美少女。
フェニスはあの頃と同じように優しげな笑みを浮かべながらクリュウの前に現れた。
――それは、クリュウの新たな物語が始まる瞬間であった。

第１６５話　懐かしき友との談笑　可能性は確信へと変わりて

「――お久しぶりねクリュウ君。あら、ちょっとかっこ良くなったかしら？」
「ふぇ、フェニス？」
　突如目の前に現れたかつてクラスメイト、フェニス・レキシントン。クリュウは思わぬ人物の登場にすっかり意表を突かれた。そりゃそうだろう、この場に自分の知り合いが突然登場するなど誰も想像などしない。
　一方、フィーリア達は皆一様に首を傾げている。サクラに至ってはすでに警戒心バリバリだ。そりゃ突然現れた美少女と自分の想い人が知り合いだと言うのだから、恋する乙女としては気にして当然だ。
　アルフの前に出て、呆然と立ち尽くすクリュウの前にそっとフェニスは歩み寄る。
「フェニス、何で君がここに……」
「お父様のお手伝い……と言う名の観光かしら」
　そう言って舌をペロリと出して誤魔化すように笑うフェニス。その可愛らしい笑顔にクリュウは思わずドキッとしてしまうが、何となく背後の視線が怖くて首を横へ振って邪念を振り払う。
「……フェニスって、どっかの国の政治家の娘だって事は何となく聞いてたけど。アルトリアだったんだ」
「驚いた？　遠い海を隔てた異国から、留学生としてドンドルマへ渡ったのよ。もちろん、アリアもシグマもアルトリア人。アルトリアの地にいるわ」
「アリアに、シグマも……」
　懐かしい名前が次々に出て来て、クリュウは思わず頬が緩んでしまう。卒業してから一年経つが、あれから全く連絡もやり取りもしていなかった。懐かしい名前を聞いて、自然と昔の思い出が蘇る。
　様々な学年の出来事が思い出させるが、中でもやはり最も印象的な

のは最終学年。シグマ率いるFクラスとして、まぁ様々な問題を起こしまくっていたあの頃。アリア率いるBクラスとは委員長同士の対立の影響でよく戦ったりした、あの騒がしい半年間。
「でもまさか、こんな形で君と再会できるとは思わなかったわ」
「僕もだよ。でも、ちょっと安心した。知り合いがいるとわかれば心強いよ」
「ふふふ、私で良ければ手助けしてあげるわよ。アリアの為にもね」
「アリア？　何でそこでアリアの名前が出て来るの？」
「……ちょっとかっこ良くはなったけど、あなた相変わらずなのね」
　成長しているように見えて、肝心な部分はまるで成長していない彼に思わず苦笑が浮かんでしまう。まぁ、実に彼らしいと言えば彼らしいのだが、これではアリアも大変だと苦笑を禁じ得ない。
　そんな風にして笑っていると、思わぬ乱入者が二人の間に割り込んで来た。
「あら？」
「さ、サクラ……？」
　二人の間に割り込んだのはサクラ。クリュウの前に立ってフェニスを威嚇するように睨みながら、二人の距離を離す。そしてまだ会ってすぐの相手に向かって、実に彼女らしい容赦のない一撃を浴びせる。
「……クリュウにあまり近付くな」
「なるほど。お姫様を守る騎士さんって所かしら？　うふふ、クリュウ君ってお姫様役が似合うかもね」
「似合わないよッ！」
　クリュウはすかさず否定を叫ぶが、居並ぶ面々の頭の中には純白の優雅なドレスを身に纏って微笑むクリュウの姿が――あり、だな。
　急に背筋が寒くなり、クリュウは自身を抱き締めながらブルブルと身を震わせる。何だか、今何か悪寒が走ったような……
　原因不明の悪寒に首を傾げるクリュウを一瞥し、フェニスは彼を守るように立ち塞がる騎士姫サクラを見やる。
「ずいぶん可愛らしい騎士さんね」

「……バカにするの？」
「うふふふ、安心しなさい。私は彼氏持ちだから」
「……そう」
　途端にサクラから滲み出ていた敵意が消え、二人の間から退散。またもクリュウの背後という位置に戻る。そんな彼女の行動を見てフェニスはおかしそうに笑った。
「クリュウ君、あなたやっぱり相変わらずみたいね」
「相変わらず？」
「……自覚がない所も含めてね――と、なると。ここにいる女の子も大多数がそういう事なのかしら」
　フェニスは興味深げにフィーリア達を見回す。いずれも皆美少女ばかり。そして、ジッとクリュウを見詰めている彼女達の胸の中の想いにも大体気づき、結論は小さなため息となって口から零れる。
「……ほんと、相変わらずみたいね」
「な、何でそこで僕をそんな呆れた目で見るの？」
「まぁ、あなたの鈍さは今に始まった事じゃないし。こりゃアリアも苦戦しそうね」
「だから、何でそこでアリアの名前が出て来るのさ」
　一人首を傾げるクリュウを無視して、フェニスはそっと彼の背後に待機しているサクラの方へ向くと、スッと腕を伸ばす。目の前に差し出されたその手を見て、サクラは訝しげに彼女を見やる。
「……どういうつもり？」
「クリュウ君は私の友達よ。友達の友達なら、私にとっても友達じゃない」
「……マルチ商法みたいな理論ね」
「友達は多い方がいいでしょ？」
「……断る。私はクリュウがいればそれでいい」
　そうハッキリ断言してフェニスの手を断りクリュウの背後から微動だしないサクラ。クリュウはそっと「ごめんね。この子、こういう子なんだ」とフェニスに謝るが、フェニスは首を横に振って気分を害した様子もなく微笑む。

「いいのよ別に。これくらいで怒ってちゃあの二人にはついていけないもの」
「それもそっか」
　いつもいつもアリアとシグマのケンカの仲裁に奮闘していたフェニスからしてみれば、これくらいの事では動じないらしい。落ち着いているというか、大人びているというか、それとも苦労が絶えないというか。確か一つ年上だったはずだが、ある意味踏んできた場数の違いが成せる振る舞いだ。
「あちらにいるのは、クリュウ君のお知り合い？」
　フェニスはクリュウの後ろで自分達のやり取りを心配そうに、訝しげに、興味深げに、不機嫌そうに。様々な反応を見せている乙女達を見ながら彼に尋ねる。クリュウは一つうなずき「紹介するよ」と一人ひとりをフェニスに紹介していく。
　一通り紹介を終えると、今度はフィーリア、サクラ、シルフィードの三人を呼ぶ。前に出た三人を、クリュウは改めてフェニスに紹介した。
「フィーリア、サクラ、シルフィード。この三人が今の僕のチームメイトなんだ」
　クリュウの紹介にフィーリアは恭しく一礼し、サクラは憮然と立ちながら小さく鼻を鳴らし、シルフィードは「一応、私がリーダー役を担っている」と苦笑しながら補足情報を提示しておく。フェニスは彼女達をそれぞれ吟味するように見回した後、自分の仲間を嬉しそうに紹介する彼の頭を彼女は軽く小突いた。
「え？　な、何で……？」
「あのねぇ、クリュウ君。誰にでも優しいのは君のいい所だけど、同時に問題点でもあるのよ」
「……問題点？」
　少し怒ったように言う彼女の言葉の意味がわからずに首を傾げるクリュウを見て、言っても無駄だと悟りため息を零す。フェニスはふと自分を見詰めている乙女達に向き直り、思わず苦笑を浮かべてしまう。

「大変ね」
「ンゥフンッ。ああ、盛り上がっている所済まないが、ちょっといいか？　まだ話の途中なのでな」
　すっかり自分を置いて盛り上がる娘とその友人の間にアルフは割って入る。その姿を見てクリュウは慌ててそれまでの気の抜けた態度から一変して気を引き締め直して彼と対峙する。それを見て、フィーリア達の表情も自然と厳しいものに変わる。
「お父様、あまり私の友達を緊張させないで」
「……まぁ、緊張するなと言う方が無理かもしれんが。そんなに気を張るな。別に君達をどうこうしようという訳ではない」
　アルフはそう言うと彼らに座り直すよう促す。いつの間にかフェニスと共に部屋に入って来たオコーネルが二人を席に案内する。そこはちょうどフリードリッヒ率いる政府とセレスティーナ率いるレヴェリ家と分かれていた長テーブルの短い方の辺、つまり二つの勢力の間という訳だ。
　オコーネルが椅子を引くと、フェニスは微笑みながら礼を言って席に腰掛ける。それを確認するとオコーネルは何も言わず再び部屋を出た。またドアの前で待機するつもりらしい。
　全員が席に着いた事を確認し、アルフはさてとばかり深く腰掛けてクリュウ達を見回す。
「詳しい話はグローセ総統陛下から大体聞いている。君達の事は客人として私が責任を持ってアルトリアへ連れ帰る事を約束しよう」
「あ、ありがとうございます」
　アルフの言葉にクリュウは深々と頭を下げて礼を述べる。それに合わせてフィーリア達も一斉に頭を下げた。もちろん、普段人に頭を下げる事など絶対にないサクラもだ。ただし彼女の場合は頭を隣に座るシルフィードに押さえ付けられての無理矢理のものではあるが。
　アルフは気にした様子もなく「そう畏まらなくてもいいさ」と笑いながら言い、隣に座るフェニスも「もう、気にしないで顔を上げなさいな」と微笑みながら皆の顔を上げさせる。
　二人の温かい声に、クリュウ達はほっと胸を撫で下ろした。そんな

彼らの様子に満足気にアルフはうなずくと、しかし表情と引き締め直す。厳しい表情になった彼を見て、自然とクリュウ達の表情も再び引き締まる。
「ただ今回の件にはちょっと問題があってな」
「問題、ですか？」
「……正直に言うが、これは私の独断で行っている事だ。君達を王政府が迎え入れるのではなく、農林水産省が迎え入れる手はずになっている。まぁ、表向きにはモンスターの生態調査の参考人って所だな」
「あなた達を連れ帰る事はすでに伝書鳩を本国に飛ばしてあるわ。でもこっちにも都合があるから返信を待っている暇はないの。だから事後承諾という形になるから、必ずしも歓迎してくれるとは限らない。特にウチの国はね」
　この世界での主な通信手段は手紙と伝書鳩の二つ。手紙は一般人や時には政府が用いる最もメジャーなら方法だ。ただし、竜車または馬を用いる為に迅速なやり取りには向かない。もう一つの手段が伝書鳩であり、これは政府など大きな組織が用いる方法で迅速な情報伝達が可能となる。ただし伝書鳩は鳩本来の帰巣本能を利用した通信手段の為、鳩によって届け先が決まってしまう事と、飛行船のような指定位置にいない場合は通信不能となってしまうという欠点がある。アルトリアでは現在電気を用いた革命的な通信手段を開発中という噂もあるが、現時点では完成には至っていない。
　エルバーフェルドとアルトリアはそれこそ大陸中部を挟んで正反対に位置する為、伝書鳩を用いても迅速なやり取りはできない。それを待っている暇などないという訳だ。
「でも、そんな独断が許されるんですか？　ご迷惑になるんじゃ……」
　国の事はよくわからないが、大臣というのは確かに権力はあるが独裁者という訳ではない。独断をすればそれなりの処罰もあるだろう。それを覚悟で押し通そうとして自分のせいで何か処罰を受けるのではと心配するクリュウ。だがアルフは気にした様子もなくそんな彼の不安を笑い飛ばした。
「なぁに、私は大臣である前に一人の父親だ。娘の頼みを無碍にはで

きんよ」
　頼もしげに笑うアルフに、隣に座るフェニスが「お父様、素敵よ」と微笑む――どうやら相当な親バカらしい。
「それに、これはいい機会だ。我が国は何かとかつての戦争から大陸人を嫌っている人が多い。これを契機に少しはそういった思考を変えられればいいのだがな。これからはグローバリゼーションの時代だ。いつまでも鎖国をやっていられるほど、時代は甘くはない」
　一転して真剣な表情でアルフは語る。それはどこかエルバーフェルドの現状にも似ていて、カレンやエルディン、ヨーウェンは複雑そうな表情を浮かべている。フリードリッヒだけは唯一表情を変える事なく黙って聞いている。
「レキシントン大臣は、僕達大陸の人間を嫌ってはいないんですか？」
「……嫌いな人間ばかりが住む遠い異国に、大切な愛娘を留学させると思うか？」
「それはそうですが……」
「誤解しないでほしいが、アルトリア人全員が大陸人を嫌っている訳ではない。アルトリア近海は季節によって嵐が頻発する海域があり、よくそこで大陸の船が荒らしに巻き込まれて沈没する事があった。流された生存者の一部は時にアルトリアの浜辺に打ち上げられ、村民などが献身的に介護して一命を取り留める事もある。だが、大陸と国交を基本的に断絶している我が国では流されてきた大陸人を再び大陸に返す術はない。それどころか政府に知れれば不法入国者として処罰されてしまう。そういった経緯から、隠れながらアルトリアに実質的に帰化する大陸人も中にはいた――私の母が、その一人だ」
　別段隠す事もなく堂々と言い放つ彼の言葉にウソ偽りはないだろう。そもそも、そんな事をする理由などないはずだ。だからこそ真実なのだろう。それを聞いたクリュウ達はもちろん、フリードリッヒ達も幾分か驚いているようだ。
　そんな彼らを見回すと、アルフは口元に小さな笑みを浮かべた。
「――母の故郷を悪く思うような子供はいないさ。そうだろう、クリュウ君？」

ある意味同じような境遇のクリュウは彼の言葉に迷う事なくうなずいた。大陸人は逆にアルトリアの事を特に気にしてはイない。政府などは考慮などはしているかもしれないが、クリュウのような一般人はそんな遠方の国の事など知識としては知っていても、何か感情を抱く程接点を持ってはいない。だからこそクリュウもアルトリアを嫌ってないどいない。ただし、好きになるような要素もまた持たないのだが……

「今回の事も、フェニスが私に頼み込んだからこそ実現した事だ。もし感謝をするのなら、私ではなく彼女にしたまえ」

「そう、ですか。ありがと、フェニス」

お礼を言うと、フェニスは微笑みながら「気にしないで。これもアリアの為だから」と答える。

全くもって、本当に今回の旅は人に助けてもらってばっかりだ。自分の為にみんながんばってくれた。自分は幸せ者だと心から思えた――だが、彼は気づいていない。彼の為に動いた者は全員それに匹敵、もしくはそれ以上の恩を彼から受けている者ばかり。もしも言葉を選ぶとすればそれはきっと、恩返しなのだろう。

彼が気づいていないだけで、彼を中心に様々な人間が集い、支えられ、そして彼を支えている。本当の幸せ者は富や名声に身を包まれた者ではなく、彼のようにかけがえの無い友に支えられている者の事を言うのだろう。

「出発は明朝。それまでに身支度を整えておきたまえ。君達の部屋はこちらで用意してある。後で案内を寄越すからその指示に従うように」

アルフの言葉にクリュウ達は一斉にうなずき、会談はそこで終了となった。

「それにしても、まさかフェニスとこんな形で再開するとは夢にも思ってなかったよ」

会談を終えたクリュウはヨーウェンの取り計らいで一室を宛てがわれて今は彼らだけのお茶会を開いていた。

驚いたように言う彼の正面には「クリュウ君、それもう何回目？」と

おかしそうに微笑むフェニスが座っている。テーブルは数人が使えるような大きさのものが数個ある程度で、ある程度複数のグループに別れる形となる。本来ならあと数人が同じテーブルに座っていてもいいのだが、何となく二人の間に入りづらくクリュウとフェニスは二人きりという形になる。そしてその他大勢はその他のテーブルにそれぞれ陣取っているが、言うまでもなく全員の視線は彼らに注がれる。

楽しげに話している二人の様子を遠巻きに見詰めているしかないフィーリア達。二人が話す内容は、残念ながら彼ら以外には全くわからない話だ。なぜなら二人の出会いはフィーリア達よりも古く、エレナが唯一触れられない学生時代の話。もしくは学友のその後の話などだからだ。

「アリアもシグマも、そして私もせっかく卒業したのにハンターらしい事はほとんどご無沙汰ね」

「それは残念だな。三人ともかなりの実力者だったのに」

「うふふ、ありがとう。あなたは卒業後にみんなとは連絡取ってるの？」

「ううん。みんな忙しいし、僕の村は辺境にあるからなかなか連絡を取り合えなくて。卒業後に会ったのはシャルルとエリーゼくらいかな」

「シャルルはあの元気印のハンマー使いの子よね。でもエリーゼって？」

「エリーゼ・フォートレス、生徒会で副会長をしていた女の子いたでしょ？　あの子」

「あぁ、あのメガネの子ね。でも、あなた生徒会に知り合いなんていたのね」

「……エリーゼはその、卒業後に本格的に知り合ったって感じかな？」

クリュウはとりあえずシャルルの故郷のアルザス村に行った事、そしてその村でエリーゼと再会した事、彼女達と共にガノトトスを撃破した話を聞かせてみせた。するとフェニスは驚いたように手を合わせる。

「あの子達、もうガノトトスを倒したの？」
「……まぁ、正直かなり厳しい戦いだったけどね」
「それでも勝つなんてすごいじゃない。あらら、すっかり置いてかれちゃったわね」
　友達の成長を嬉しそうに、でもどこか羨ましそうに言う彼女の言葉にクリュウは何て声を掛ければいいか迷う。だがそんな彼の気持ちを察したのか、フェニスは気にした様子もなく優しげに微笑む。
「いいのよ、気にしないで。結局ハンターの道には進まなかったけど、あの頃の思い出や経験は絶対無駄なんかじゃないから」
「……そっか」
　それを聞いてクリュウも安心した。そりゃかつて共に厳しい修行を共にした仲間が目指すべき道を変えたのだ。内心はショックもあったが、その経験を生かしつつ自分の夢へ進もうとしている彼女の姿は凛々しく、憧れすら感じてしまう。自分なんかよりずっと、夢に向かって真っ直ぐだ。
　安堵するクリュウを見て微笑んでいるフェニスだったが、ふと思い出したように彼に尋ねる。
「――それじゃあ、ルフィールちゃんとも仲良くやってるの？」
　途端、クリュウの表情が変わった。言いづらそうな、何とも複雑そうな表情。それを見て、フェニスも何となく察する。
「……会って、ないの？」
「うん。連絡も全くない」
「意外ね。あの子の様子なら毎日のように手紙を送るどころか、そのまま押しかけて来そうな感じだけど」
「僕も卒業後すぐにでも村に来るのかと思ってたんだけど。シャルルと一緒に卒業しているはずだから、きっと今頃武者修業でもしてるのかな」
「あら、花嫁修業の間違いじゃない？」
　くすくすと微笑むフェニスにクリュウは首を傾げる。彼が理解していないと気づくと、笑顔は一転して呆れ顔に変わり、親友とかつての後輩達の奮戦が全くもって効果がなかった事にため息を零す。

そんなフェニスの様子に気づく事なく、クリュウは一人考えに耽っていた。一つ、気がかりな点があった。
――兄者が怪我した一件以来、あいつかなり攻撃的な戦い方をするようになったっすから――
かつて、ドスファンゴの攻撃から彼女を守る際に自身は大怪我を負った。今も傷跡が消える事なく残っている、仲間を守った証。だが、ルフィールはその事で自分を責め続けているらしい。だからこそ、弓兵でありながらあえて前線に出て危険な戦い方をするようになった――二度と、自分のせいで誰かが傷つかないように。
きっとルフィールは、かつての失態から自分に会えずにいるのだろう。会いに来たくても、今の自分では会う資格はない。彼女はきっと、そんな制約を自分に課しているに違いない。そして、十分な実力――自分を守れるような力を得るまでは、おそらく会いに来る事もないだろう。
だが、同時に彼女の本心はきっとすぐにでも会いたいはずだ。自分は彼女にとって親友のような存在であり、同時に兄のような存在でもある。半年で卒業してしまうだけの努力が、その証拠だ――ただ、ルフィールにとっての彼の存在はもっと大きく、特別なものである事には、残念ながら彼は気づいていない。
会いたいけど会えない。それを打破するには、早く実力を身につける他はない。その為に彼女は無茶だって平気でするだろう。目的の為ならどんな苦行や手段でも躊躇いなく遂行する。それがルフィールという子だ。
「無茶してなきゃいいんだけど……」
思わず漏れたその言葉は、彼の心からの心配であった。
「ほんと、不器用な人達ね」
彼の口から零れた言葉を耳にし、フェニスは苦笑を浮かべながらつぶやいた。その言葉はきっとクリュウとルフィールだけに向けられたものではなく、自分の親友も含むのだろう。
その辺りで一度話の区切りがついた。互いに乾いた喉を潤すようにお茶を飲んでいると、

「あ、あのぉ……」
ものすごく申し訳なさそうな弱々しい声が二人の間に割って入ってきた。振り向くと、そこには声と同じく申し訳なさそうな表情を浮かべるフィーリアが立っていた。
「あら、何のようかしら。エルバーフェルドの貴族様」
自身もあまり位は高くはないが貴族の娘。微笑みながら彼女が話しやすいように道を作る。この辺の配慮が彼女は昔からうまかった。
話しやすい道筋ができると、フィーリアも安心したように一度ほっと胸を撫で下ろした後、最低限の緊張を持ちながら彼女に話しかける。
「あの、レキシントン様はクリュウ様の御学友でいらっしゃった訳ですよね」
「フェニスでいいわよ。うん、最終学年で一緒のクラスで色々と問題を起こしてたわ」
楽しそうに微笑みながら言う彼女の姿に、思わずクリュウは苦笑を浮かべる。彼女の言う通り、最後の学年では様々な問題を起こしたものだ。まぁ、そのほとんどがアリアとシグマの対立な訳だが。
人当たりの良さそうな雰囲気を纏うフェニス相手に、フィーリアは意を決したように話しかけた。
「以前、クリュウ様自身から学生時代の話を聞かせてもらいました。ですがそれはクリュウ様の主観的な記憶でしかありません。もしよろしければ、フェニス様から見た客観的なクリュウ様の学生時代をお話していただきたいのですが……」
「あら、それくらい――あら？」
承諾しようとしたフェニスだったが、それを遮るように目の前に座るクリュウが必死に首を横に振っている事に気づく。そして改めて周りを見回せば、いつの間にかこの場にいる自分を除く女子全員の視線が自分に集中している事に気づく。その瞳は本気の色に煌めいており――何となく、状況を察した。
再びクリュウを見ると相変わらず首を横に振っている。それを見てフェニスはため息を零すと、申し訳なさそうな笑顔でフィーリアに

向かい合った。
「ごめんなさいね。たぶんクリュウ君が話している事以上のものは私は持ち合わせていないわ。学友と言っても、同じクラスだったってくらいの付き合いだったし」
「そ、そうですか……」
「ほんと、ごめんなさいね」
「あ、いえ。全然構わないです。お話の途中にお邪魔してしまい、こちらこそ申し訳ありませんでした」
　礼儀正しく深々と頭を下げるとフィーリアは自分の席に戻る。が、その途中でフェニスが呼び止めた。
「どうせなら一緒にお茶にしましょう。このテーブル四角いから合わせれば大きなテーブルとして使えるでしょ？」
　フェニスの提案はまさに助け船であった。二人の会話に入りたくても入れなかった皆にとって、それはありがたい提案であった。乙女達の瞳が一斉にキラキラと輝くのを見てフェニスは嬉しそうに微笑む。
「さぁ、お茶会を始めましょう」
　フェニスの人当たりの良さはすさまじかった。あっと言う間にフィーリア達とも親しくなり、お互いを名前で呼び合う仲にまでなってしまった。その社交性の高さにクリュウは驚くと同時に、サクラにその１００分の１でもいいから分けてほしいとも切に願ったり。
　そんなこんなで親しげに話していると、話は自然と彼女の故郷であり、自分達がこれから向かうアルトリア王政軍国の話へと転がっていく。
「アルトリアってどういう国なの？　知識では知っていても、具体的にどんな所かは知らなくて」
　大陸の一般人にとっては遠過ぎるが故に、空想上の国にも思えるアルトリア。当然、アルトリアの詳しい情報など、一般人に過ぎない彼はほとんど持ち合わせていない。でも、だからこそ知りたいのだ。
「大袈裟でもなく、アルトリアはどの国や地域よりも科学力が発達した国よ。美しい街並みと自然が共存する、すばらしい国。現女王イリ

ス陛下はとても国民からは慕われていて、治安も良くて、本当にいい国よ」
　フェニスの口から語られるのはアルトリアの素晴らしさ。だがどれも一般人でも知る事ができるようなものばかり。クリュウが訊きたいのはそんな事ではない。
「もっと詳しく教えてくれないかな――例えば、アルトリア王家の事とか」
「王家？　別にいいけど、そんな事訊いてどうするの？」
「まぁ、ちょっとした予備知識にね」
　笑って誤魔化すクリュウの態度に気になる部分はあったが、触れてほしくない様子の彼を見てフェニスは追求する事なく語り始める。
「アルトリアは元々竜人族が統治していた名もない国だったの。人々は奴隷のように竜人族に支配されていた、悪しき国。でもそんな時、一人の少女騎士が人々と共に立ち上がり、竜人族に反旗を翻した。騎士は《双月の神竜》、リオレウス希少種、リオレイア希少種を従え、人々と共に竜人族の国を滅ぼした。これを《聖少女革命》と言うの。英雄となった少女騎士の名はアルトリア。人々は彼女を女王に据えて国を生み出した。それがアルトリア王国。つまりアルトリアの王家はその初代女王、英雄姫の末裔って訳」
　フェニスは簡単にアルトリアの国の成り立ちと、それに付随する王家の出で立ちを話した。アルトリアでは小等学校で習うような内容だが、大陸人にとっては全く知らない国の生い立ちだ。皆、興味深げに耳を傾けている。
「アルトリア人にとって、女王は英雄の子孫であり、自分達を導く指導者。王家に対する忠誠心は高く、アルトリアは女王を中心に動いていると言っても過言ではないわ。それほどにアルトリアの王族、特に女王の存在は大きいのよ」
「まぁ、よくある王国の王族の話ではあるな」
「ただまぁ、エスパニア王国のように王政府と国民議会が争うような国もあるにはあるんですけどね」
　シルフィードの一般論に対して、フィーリアが苦笑しながら例外を

述べる。エスパニア王国は西竜洋諸国の一国で古い歴史を持つ国だが、現在王を中心とした保守派と隣国ガリアのような民主化を求める革新派とで政治が揉めている。ちなみにエスパニアには鍛え上げたブルファンゴと闘猪士と呼ばれる人間が闘う闘猪と呼ばれる国技が存在し、国内外問わず熱狂的なファンを多く持つ。

「現女王はイリス・アルトリア・フランチェスカ陛下。先代のロレーヌ・アルトリア・ティターニア様のご息女で、ロレーヌ様が崩御された後に即位されてるわ。まだ若いながらも国民からの圧倒的な支持力を得て今のアルトリアを統治されている方よ」

フェニスが語ったのは外国人はあまりよくは知らないが、アルトリア人なら一般常識とも言える内容だ。これ自体にはクリュウが求めているような答えはなかった。だが、彼女の口から述べられた説明の中に彼は引っ掛かり、というか聞き覚えのある名前を見つけた。

「ロレーヌ……」

それは昔、母が生きていた頃の話。彼女が時たま夜空を見上げながらその名をつぶやき、何度も「ごめんね」と繰り返す事があった。その母のどこか悲しげで、罪悪感に満ちた、いつもより小さく見えた背中を子供心に焼き付いていた。

とっさに疑問を口にしようとして開きかけた口を、彼は寸前で閉じた。ヴィルマで出会ったアルトリアの総軍師に同じような質問をした際、下手に口にすれば命に関わると忠告を受けていた事を思い出したからだ。相手は元クラスメイトのフェニスだ。そんな危ない事はないだろうが、もしも彼女に迷惑を掛けてしまうような事になれば取り返しがつかなくなってしまう。あまり巻き込みたくはない、そんな気持ちが彼の唇を重くさせていた。

結局、疑問は疑問のまま胸の奥に押し込めておく事にしたクリュウ。

「まぁ、私の口から話せるのはここまでかしらね。もっと詳しい事が知りたいならアルトリアに着いてから王立図書館にでも行けば何か掴めるかもね」

笑顔で言う彼女のアドバイスにうなずき、ひとまずこの話はここで

終わった。
その後しばらく雑談を交えながら続いたお茶会はお開きとなった。
夜、フリードリッヒの計らいでクリュウ達は夕食をご馳走になる事になったのだが、その際なぜかカレンがエプロン姿（もちろん下は着ているが）でジャガイモ料理をクリュウに振る舞い、何かと彼に絡むという事件が発生。彼女の横暴に対して当然のようにフィーリア、サクラ、エレナの三人が反発し、激しいケンカになったのだが……それはまた別のお話。

第１６６話　恋する乙女の新たなる決意　蒼空の彼方への旅立ち

ドタバタの夕食会を終えた一行はフリードリッヒが用意した各部屋で休む事になった。クリュウも宛てがわれた部屋へ戻ると、大きなため息を零した後に倒れるようにベッドへ倒れた。

「疲れたぁ……」

夕食会は振舞われた食事自体は実においしくそれは満足なのだが、カレンが自作の料理を自分だけに振るまい、食べさせようとした際にフィーリア達が激しく反発してケンカに発展。事態を収拾する為に奔走した結果、必要以上に疲れてしまった訳だ。まぁ、自分で撒いた種と言えばそれまでだが……

とにかく疲れた。本当はこのまま寝てしまいたい気分ではあったが、正直汗は流しておきたかった。重い体を起こし、部屋に用意されているシャワー室へ向かう。ここは客間だと言っていたから、必要な設備が整っているのだろう。

脱衣室で服を脱ぎ、シャワー室で水を浴びる。ドンドルマの大衆浴場は中央工城の排熱を利用して湯を沸かせる為にお湯が使えるが、ここはそういったシステムがない為水だ。まぁ、田舎暮らしのクリュウにとってはむしろ水の方が当たり前なので慣れたものだが。

シャワーを浴びていると水の冷たさに思わずくしゃみが飛び出した。まぁ、冷水のおかげで疲れから来ていた眠気は吹き飛んだのだが、寒さに思わず体を震わせる。

「……クリュウ、背中を流して――」

――バタン。

背後で扉が開きかけたのを、クリュウは反射的に閉じた。

シャワーを止め、フウと小さくため息を零す。そして、

「……あのさ、サクラ。確か僕、部屋のドアに鍵をかけたはずなんだけど」

すると、ドアに嵌めこまれた曇りガラスの向こうにいる人影が自信

満々に答えた。
「……私とクリュウの間には、あの程度の壁は障害にはならない」
「……お願いだから、障害は障害のままで強行突破して来ないで」
ずぶ濡れの頭を押さえながらクリュウは疲れたようにため息を零す。本当に、この子には常識というものがまるで通用しない。というか、タオルも服も全部脱衣所にあるのだが、彼女がそこに陣取っている限り出れそうもない。どうしたもんかと悩んでいると……
「サクラ様、何で脱衣所で服なんか脱いで――って、クリュウ様ッ!?し、失礼しましたッ！　ほ、ほらサクラ様もさっさと服を着てくださいッ！」
扉の向こうでフィーリアがサクラを排除しているのが気配でわかる。というか、フィーリアも普通に部屋にいるし――サクラに関して言えば、もうすでに戦闘準備ができていたという訳で……
クリュウは大きなため息を零すと脱衣所に戻り、タオルで体全体を拭うと用意しておいた別服に体を通して部屋に戻る。すると、
「……クリュウ、お茶飲む？」
「って、そのお茶を用意したのは私ですよッ!?　何でおいしい所を堂々と持って行こうとするんですかッ!?」
「……すまん、邪魔してた」
サクラにフィーリアだけではなく、シルフィードまでがまるで自分の部屋のように振舞っていた。シルフィードに関して言えば少し気まずそうな顔をしている所を見ると、二人の暴走（主にサクラ）を止めようとしたが結局止めきれなかったという具合だろうか。彼女の苦労にはいつも頭が下がる。
「もう……」
でも、そんな三人を見詰める彼の表情はどこか安心していた。何というか、これまで様々な事が一度に起き過ぎていて整理がつかなかった。だが、こうしていつもの四人でいると、とても落ち着ける。もしかしたらサクラはそれを狙って部屋を強襲してきたのかもしれない。
「……クリュウ、今日は一緒のベッドで寝よう」
「何を言ってやがりますかッ！」

――まぁ、彼女の場合おそらく自分の欲望全開でここに来たのだろうが。
でもまぁ、何となくそうやっていつものノリを全力でしてくれる彼女達を見ていると安心できるのは事実だ。思わず笑顔が零れると、サクラが首を傾げた。
「……クリュウ？」
「あ、いや何でもないよ。悪いけどフィーリア、僕にも一杯もらえるかな」
「は、はいッ！　喜んでぇッ！」
「……どこの居酒屋の店員だ君は」
大喜びでお茶の支度をする彼女に思わず苦笑が浮かぶシルフィード。クリュウはそんな彼女の隣の席に腰掛けた。まだ塗れた頭をタオルで拭く。
「行水の最中にすまなかったな」
隣に座るシルフィードが申し訳なさそうに謝るが、クリュウは気にした様子もなく「別にいいよ」と笑顔で答える。まぁ事実彼女は二人の暴走を止めようと失敗した身なので彼女自身に非がある訳ではない。
「君の部屋に行くと二人が言って聞かなくてな。鍵が掛かっていたから諦めるかと思ったのだが、サクラが難なくその鍵を解除してしまって……まったく、彼女のスキルの異常さには慣れたはずなのに未だに驚かされる」
「ほんと、色々な意味で人間離れしてるよねサクラって」
「まったくだ」
向かい合いながらそう互いに言うと、思わず笑みが零れる。すると、そんな二人の間にズイッとサクラが割り込んで来た。キッとシルフィードを威嚇するように睨むと、シルフィードは苦笑しながら「何もしないさ」と両手を上げる。それを確認すると、反対側を向いてクリュウに横から抱きつく。その間の動きに一切の迷いがない所が彼女のすごい所と言えよう。
「クリュウ様ぁ、お茶が入り――って、何してるですかぁッ！」

そこへお茶の用意を終えたフィーリアが戻って来てより状況は混沌とする。両側からフィーリアとサクラが抱きついて奪い合う中、クリュウは苦笑を浮かべる。そんな彼の様子を横に見ながらシルフィードは静かに茶をすする。

しばらく放置していたが、さすがに色々な意味で隣の桃色空気に耐えられなくなったのか、シルフィードが二人を引き剥がして席に座らせる。

とりあえず落ち着いた所で、茶をすすっていたシルフィードが静かに口火を開いた。

「いよいよ明日か……」

その言葉を皮切りに、沈黙していた他の面々もそれぞれ口を開く。

「いよいよ明日ですね。アルトリア、どんな国なんでしょうか」

「さぁな。私も流浪ハンターだった経験から様々な国、とりあえず西竜洋諸国は一通り回ったが、さすがに渡洋冒険はした事はないな」

「……まぁ、どこの国も政治家って生き物は腐ってたけど」

元流浪ハンターとしての経験談をする三人。さすが皆旅には慣れたものでクリュウほど緊張はしていない様子だ――まぁ、サクラの意見はある意味放送禁止用語的なレベルだが。

「クリュウ様はあまり外国へ行く経験はございませんよね」

「そう、だねぇ。ドンドルマは一応外国の部類に入るのかな。それを抜いても前にガリアへ行ったのと、今回のエルバーフェルド。それくらいだね」

クリュウは三人と違って流浪ハンターという諸国を旅した経験はない。ハンターとして旅には慣れているものの、行く先は狩場かもしくは途中通過、または拠点とする街や村くらい。国という単位にはあまり経験はなかった。

「まぁ、今回の場合はいつものとまるで状況が違うからな。私達の経験も役には立たんだろう」

シルフィードの意見に残念ながら他二人もうなずいた。今回は一国の国賓扱い（まぁ、アルフ曰くそんな大それたものではないらしいが）での入国だ。今までそんな経験で入国した事は当然平民の出の三

人は経験はない。貴族出身のフィーリアもエルバーフェルドでは国賓として扱われる事はあってもそれが外国となるとまるで経験がない。
　不安はないかと問われれば、それは全員個人個人では今まで経験のない状況に当然不安は抱いている。だが、
「まぁ、君達と一緒なんだ。どこに行こうが、乗り切れるだろうさ」
「そうですね。私達は最強のチームですからッ」
「……クリュウに害をなす存在全てを斬り伏せれば問題ない」
「サクラは少し手加減してね？　でも、シルフィードやフィーリアと同意見だよ。僕達四人なら、どんな事だって乗り越えられるさ」
　互いを信頼し、互いを認め合い、互いを想い合い、互いを最高の仲間と心の底から想っている者同士。それがこの四人。イージス村が誇る最強精鋭のチームだ。
　四人の仲には確信がある――この四人でなら、どんな苦境も逆境も乗り越えられる。実際、これまでも無理や無茶と思えた事をこの四人で乗り越えてきた実績がある。
　この先、どんな事が自分達を待ち構えているかわからないという不安は確かにある。でも、信じられる仲間と一緒なら、きっとできる。そんな想いが、彼らの胸を満たしていた。
　自信満々に皆を見回すと、三人の視線が自分に集中している事に気づく。クリュウはそれらの視線に対して一つうなずくと、いつもの皆に元気を与える笑顔を華咲かせた。
「――ほんと、僕は幸せ者だよ」
　もしかしたら、本当に自分の不安を感じ取って励ましに来てくれたのかもしれない。
　一時間程前に部屋を出て行った三人に、クリュウは心から感謝していた。おかげで、ずいぶんと明日への不安は消えていた。
　自分の中の不安が薄らいでいるのを見て、クリュウはそんな風に考えていた。だとしたら、自分は本当に良い仲間を持った。もし違うとしても、タイミング良く現れてくれるという意味でも、いい仲間を持ったと言えるだろう。

明日への不安が消えた今、残るのは明日への期待。母の故郷に行ける。
それに、ここへ来たのは何もアルトリアへ行く為だけの通過点ではなかった。ちゃんとした収穫もあったのだ。
父と母のかつての友、エルディンから父の知らなかった姿を聞けた。さらにその後、母はアルトリア人であるという確証も得た。エルディンが以前母自身から自分の故郷がアルトリアだと聞かされていたのだ。
――可能性は、この国に来て確信に変わった。そういう意味では、皆に感謝するのは当然だが、その中でもエルバーフェルド行きを強く推進し、様々な手を尽くしてに尽力してくれたフィーリアには特に感謝しないといけない。
――気がついたら、体が動いていた。
外へ出てもいいような格好に変え、クリュウは部屋を出る。向かうのはフィーリアの部屋だ。
先程まで一緒だったのだから今更会いに行くのはおかしい事かもしれない。でも何となく、フィーリアと二人きりで話したい気がした。二人きりの時に、ちゃんとお礼が言いたかった。
レヴェリ側に立った全員が同じ階に部屋が割り当てられている。フィーリアの部屋を探すのは造作も無い事だった。
ドアの前に立ち、早速ノックをする。すると中から「あ、はい。どなたですか？」と可愛らしい声が届く。
「あ、僕だよ。フィーリア」
「えぇッ!? く、クリュウ様ですかッ!?」
ガチャッとドアが少し開き、その中からフィーリアが顔を出した。先程と違ってフリルがいっぱいの真っ白な可愛らしいデザインのネグリジェ姿だ。その表情は驚きに満ち、クリッとした瞳は一杯まで開かれている。その姿が何となく愛くるしくて、思わず笑顔が浮かんだ。
「え？ い、一体何の御用でしょうか？ あ、私何かクリュウ様のお部屋に忘れ物をしましたでしょうか？」

「ううん。特に理由なんてないんだけど……ごめん、理由がないのに来ちゃマズかった？」
「い、いいえッ！　むしろ嬉しいくらいですッ！　あ、あの粗末な部屋ですがどうぞ」
　そう言って中へ案内するフィーリア。自分の部屋ではなく宛てがわれた部屋だというのに《粗末》と言ってしまった所から見て、相当テンパっているらしい。まぁ、当然クリュウは気づいていないのだが。
「お邪魔しまぁす」
　部屋へ入ったクリュウは早速中を見回してみる。が、当然同じような作りの部屋だし持ち込んだ荷物もそんなに多くはないので私物もあまり見当たらない。だが所々に女の子らしいものがあったりする。
「ニャふぅッ!?」
　突然隣にいたフィーリアがベッドに突貫。そのままダイブしてベッドの上に倒れた。何事かと驚くクリュウにギコチない笑顔を浮かべながらこちらとは反対側へ転げ落ちる。
「ふぃ、フィーリア？　だ、大丈夫なの？」
「へ、平気ですッ！　お気になさらずッ！」
　姿を隠したまま焦ったように言う彼女の言葉に引っかかりは感じたが、本人がああ言うのだから詮索は無粋だろう。クリュウはそれ以上追求はしなかった。
　クリュウは気づかなかったが、実はベッドの上にはちょうど少し前に風呂から出た際に脱いだ下着が畳んで置いてあったのだ。今それはベッド横に倒れている彼女の手の中に。それを見詰める彼女の顔は真っ赤に染まり、追求をする事なく黙っている彼の優しさに感謝しながらホッと安堵していた。
　フィーリアは手早く下着をベッドの中に隠して、何事もなかったように振る舞いながら彼の所へ戻る。クリュウも無かった事にしようとしている彼女の気持ちを汲んで追求はせず、忘れる事にした。
　フィーリアは彼を席に座らせると、手早くお茶の支度をする。部屋に用意されている普通のお茶ではなく姉が分けてくれたレヴェリ産

のチューリップティーだ。ついでに自分用に買い揃えていたお茶菓子を用意して彼の座るテーブルへと戻る。
「ごめんね。何だか余計な気を遣わせちゃって」
「い、いいえ。好きでしている事なのでお気になさらず」
　カップに紅茶を淹れ、彼の前に置くと同様に淹れたものを自分の前に置いて席に座る。対面するように座ると、クリュウは早速紅茶、チューリップティーを口にする。その瞬間、口の中いっぱいにチューリップの香りが広がる。独特な甘さと苦味が絶妙で、クリュウは思わず「うわぁ……」と声を漏らした。
「お口に合いましたでしょうか？」
「うん、すごくおいしいよ」
「お口に合ったようで良かったです」
　クリュウが気に入ってくれたのを見て安堵したようにフィーリアは胸を撫で下ろした。自分の故郷の名産品とだけあってそれを彼が気に入ってくれた事に嬉しそうに微笑む。
「これ、レヴェリ領の名産品なんですよ」
「へぇ……」
「私も家にいた頃はよくお姉様と一緒にこれを飲みました」
「でも、高いんじゃないの？　すごくおいしいし」
「……そう、ですね。私も旅をするようになって自分の金銭感覚が変だという事を自覚したもので」
　恥ずかしそうに頬を赤らめながらフィーリアは苦笑を浮かべる。どうやら元貴族出身とだけあって、一般とは違った金銭感覚を持っていたらしい。彼女にしてみれば、忘れたい過去の一つなのだろう。
「貴族の生活も良かったですが、今の生活の方が私は向いているようです。どうも貴族の空気が私には合わなくて……」
「そうなの？　フィーリアってやっぱりお嬢様っぽいと思うんだけど……」
　立ち振る舞いや仕草、雰囲気など彼女はその端々で一般人とは違う高貴さを感じさせるのは事実だ。だからこそクリュウは彼女が自分が貴族らしくないと言うのが少し意外だった。すると、そんな彼の疑

念に答えるようにフィーリアは静かに首を横に振ると、照れたように頬を赤らめてペロリと可愛らしく舌を出した。
「私って結構おてんばですし、わがままですし、ちょっとした事でもパニックになっちゃったりと……とてもじゃないですが、優雅な貴族っぽさがまるでないんですよ。表面的な事なら何とかできますが、根本が貴族に向いてないらしくて」
「そう、なのかな？　僕は平民だからその辺の事はよくわからないや」
「セレスお姉様を見ていればわかりますでしょ？　あれが本当の貴族というものです。私には到底真似できません」
　苦笑しながら言う彼女の言葉に、申し訳ないと思いつつも納得してしまった。確かに、セレスティーナはまさに貴族のご令嬢という気品に満ちている。立ち振る舞いや仕草など、優雅で高貴な雰囲気を纏っている。フィーリアの薄っすらと感じるものとは違う、明確な気品だ。
「だからと言ってルミナお姉様のように自由奔放というタイプでもありません。そういう意味では、私は個性的過ぎる姉二人に霞んでしまう地味な末っ子です」
　自虐的な物言いだが、確かにあの二人の個性を前にすればフィーリアには申し訳ないが霞んでしまうのもうなずける。ある意味、彼女が謙虚な性格になってしまったのはそんな凄過ぎる姉二人に圧倒され続けた結果なのかもしれない。
　だが、それでもフィーリアの瞳は輝いていた。今の自分は輝いている、幸せなんだ。まるでそう言っているかのように、彼女の顔に笑みが咲き誇る。
「だからこそ、私は平民の世界で自立しようとハンターとなり、それなりの実力も身につけました。何より、今の私にはきっと貴族のままだったら得る事のできなかったものをたくさん得る事ができました。料理の師匠であり、ちょっと素直じゃないですけど心優しい先輩なエレナ様。ちょっとドジしますけど、尊敬でき、心から頼れる姉御さんのシルフィード様。実に無茶苦茶で、ルミナお姉様すらも霞むほどの自由奔放さで――でも、やり過ぎなくらい真っ直ぐ。私にとっては最

大のライバルであり、最高の親友と思っているサクラ様」
　彼女の口から飛び出すのは、今の彼女を取り巻く人達。彼女にとっては皆尊敬に値する人達なのだろう。その言葉の端々に尊敬と、信頼、そして絆が感じられる。まぁ、ちょっとサクラだけ毒舌っぽい気もするが、それでも最終的には彼女にとってサクラは特に特別な存在なのだと感じさせられる。
　そして、ゆっくりとクリュウを見詰め、頬を赤らめながら無邪気に微笑む。
「何より、今述べた方々に出会えたのはクリュウ様のおかげです。クリュウ様は私にとって本当に特別な人で、優しくて、強くて、真っ直ぐで、かっこ良くて、でもちょっと年上ですけどかわいいと感じる時もあって。本当に、私にとって特別な人。大好きな人――それが私の王子様。クリュウ・ルナリーフ様です」
　臆する事なく無邪気に笑いながら言う彼女の言葉にクリュウは照れたように頬を赤らめる。熱を帯びた頬を指先で描きながら何とも言えない照れ笑いを浮かべる。
「ちょっと、過大評価過ぎじゃないかな……」
「そんな事ありませんッ。これでも足りないくらいですッ。何でしたら二時間講習してさしあげましょうか？」
「え、遠慮しておきます。二時間耐えられる自信がないから……」
　そんなものを二時間も聞いてなどいられない。恥ずかしくて落とし穴にハマりたいくらいだ。だがフィーリアは話したかったのか、断ると残念そうに「そうですか……」とつぶやく。危ない所だった……
　クリュウが黙ると、フィーリアも自分から話しかける事はなく二人の間には沈黙が降りる。だがそれは嫌な沈黙ではなく、互いにチューリップティーを味わうという時間。しばらくすると、クリュウがここへ来た本来の目的を話し始める。
「その、ちゃんとお礼を言っておきたくて」
「え？　私に、ですか？」
　ホワイトチョコでコーティングしたクッキーを片手に紅茶を飲んでいたフィーリアは突如そんな事を言い出した彼を驚き見る。その

表情を見るに、どうやら彼からお礼を言われるような出来事が彼女の頭にはないようだ。クッキーの先端を口先に当てながらフィーリアは彼から礼を言われるような出来事を思い出そうとしているが、そのうち諦めたのか「私、クリュウ様にお礼を言われるような大それた事しましたでしょうか？」と逆に聞き返した。
「え？　あ、いや、その……」
　本人に自覚がないとわかると、クリュウはその先に困った。何せ自覚がないのだからむしろお礼を言うのが恥ずかしく思えたのだ。でも、クリュウは諦めず口を開く。わざわざお礼を言う為にその経緯を話すなんて恥ずかしい事この上ないが、ここは我慢だ。
「その、ほら、今回のエルバーフェルドでは特にフィーリアにがんばってもらったから、そのお礼を……」
「あ、そういう事ですか……そんなにお気になさらなくても良かったですのに」
　彼の言う《お礼》を理解した途端、フィーリアは妙に緊張していたのかほっと胸を撫で下ろした。そして、「だから、その……」とその先を言おうとする彼を制した。驚く彼を前にして、フィーリアは屈託の無い笑みで応える。
「私は特別に何かお礼を言われるような事はしていません。元々クリュウ様からお礼がほしくてした事ではありませんし。もしもそれでもと仰るなら、私は皆さんと同じお礼をしていただきたいです」
「同じ、お礼……？」
「シルフィード様もサクラ様も、エレナ様も。ルーやルミナお姉様も、自分のできる事の範囲内でクリュウ様の為に一生懸命がんばられました。私も、自分のできる範囲、自分が使えるカードをありったけ使ったに過ぎません。私の場合は皆さんとは違う貴族の出だったから、その人脈を駆使したに過ぎません。だから結果的に大きな働きをしたとしても、私は皆さんと同じ事をしたまで。なので、何か特別にお礼を言われるような事は何もしていませんよ」
　そう言って屈託なく笑う彼女を見て、クリュウも思わず笑みが浮かんでしまった。

本当にフィーリアは純粋な子だ。自分のした事がどれほど今回の出来事で大きな事だったかはわかっているはずだろう。でも、それを他の人と同じだと言い切ってしまう。報酬を目的にしていない、本当に心からクリュウの為にがんばった一人。彼女はそう自分を評価しているのだろう。だとすれば、彼女は本当にすごい子だ。

無邪気に微笑む彼女を見て、「それでも……」とクリュウは続ける。そして、彼女に負けないくらいの笑顔で――

「――ありがとう、フィーリア」

「はうッ……」

お礼など必要ないと言いつつも、彼の満面の笑顔でのその言葉は相当な効果を発揮したのか、フィーリアは顔を真っ赤にして「あの……」とか「その……」とか散々狼狽する。大きく深呼吸してから、小さな声で「もう、クリュウ様はずるいですぅ……」とちょっと文句を言ってみたり。まぁ、その表情は嬉しさのあまりすっかり緩んでしまってはいるが。

しばし嬉しくてえへへと頬を緩めていたフィーリアだったが、何かを思い出したようにハッとなる。途端にそれまでの緩みきった表情を消し、厳しい物に変わった。彼女の雰囲気が変わったのを感じ取って、クリュウは戸惑う。

「ふぃ、フィーリア？」

「……感謝と言えば、もちろん感謝はしています。ですが、許容できない事が一つあります――ガノトトスの奇襲を受けた際の事です」

真剣な表情で言う彼女の言葉に、クリュウは全てを悟った。彼女がどこか怒っているような表情を浮かべている事も、その原因となった自分の行動も。

「いやその、あの時は必死だったって言うか……」

彼女が怒っているのはきっと、その寸前の休憩で言っていた事だろう――誰かの為に自分を犠牲にする事に躊躇いのない自分の危なさ。

彼女が自分の事を心配してくれている事は痛いくらい感じている。でも、あの時はああする他はなかった。自分は自分の信念を貫いた、仲間を助けた。だけど、それは彼女の想いを裏切った行動だ。

「……わかってます。こうして私が生きているのは、クリュウ様のおかげだと。頭では重々承知しております。ですが、やっぱり納得できません――どうして、クリュウ様は他人の為にそこまで無茶ができるんですか？」

いつになく真剣な表情と口調で有無も言わさぬ迫力を持ちながら問うフィーリア。これほどまでに圧力的な雰囲気を彼女が出す事はこれまで片手で数える程しかなかった。それはつまり、彼女が本気で怒っている証拠だ。

クリュウは彼女の気持ちに気づいていない。好きな人が危険な目に遭う事が、想いを寄せる人にとってどれほど見ていて不安で、胸が苦しくなるか。

クリュウは知らない。自分を庇う為に好きな人が命を懸ける、その事の辛さを。自分の為にそこまで必死になってくれる嬉しさと、自分の為に命の危険に晒される苦しさを――その二つの相反する感情に板挟みになる辛さを。

射抜くような鋭い眼光。いつも緩やかな瞳を輝かせる彼女からしてみれば信じられないような光景だが、それだけに彼女の本気が見て取れる。だから、クリュウも決してウソを言う事はなく、真っ直ぐに自分の想いを答えた。

「――そりゃあ、守りたい人を守ろうと必死になるのに理由なんかないでしょ」

「守りたい人……？」

「自分にとって大切な人。失う訳にはいかない、かけがえの無い存在って事」

「それは……意味はわかりますけど……」

「大切な人を守りたい。この気持ちに理由付けなんてできないでしょ？　確かにフィーリアの言う通り、僕は自分の命を軽視する行動が多いかもしれない。生物として本能に逆らった行動だと思う。でもさ、自分の命より大切な人がいるって事は、僕はすごく幸せ者だと思うけど」

臆する事もなく平然と言ってのける彼の言葉に、フィーリアは開い

た口が閉まらないという様子だ。それに対してクリュウは当然の事を言ったという感じで笑っている。彼の場合、口先や理想論を言っているのではなく、本心からそう思っている所がすごい事だ。優しすぎる性格と評価される、実に彼らしい意見。

そして、クリュウの言葉を頭の中でしばし反芻していたフィーリアは彼の言葉の意味――彼にとって自分は《自分の命より大切な人》だという事に気づくと、途端に顔を真っ赤に染めて慌てふためく。

「で、ですがそれでご自分の命を落とされてしまっては本末転倒……」

「――なら、そんな無茶をする僕を君が守ってよ」

「わ、私がですかッ!?」

何の迷いもなく言い放つ彼の言葉にフィーリアは思わず目を見張る。そんな彼女の反応を見て「あ、あれ？　もしかして嫌だったりする？」と苦笑いを浮かべるが、それを耳にしたフィーリアは慌てて否定する。

「そ、そんなッ！　嫌な訳ではありませんし、全力でお守りする覚悟はできておりますッ！」

「なら、大丈夫だよきっと。フィーリアが僕を守ってくれるなら、僕は死なないでしょ？」

あっけらかんと言ってのける彼の言葉についにフィーリアは返す言葉を失った。脳天気と言えばそれまでだが、彼の言葉の裏には彼女に対する絶対的な信頼がある。信じているからこそ、こんなにも簡単に自分の背中を預けると言えるのだ。優柔不断なようで、クリュウはこういう所は妙に大胆な少年だ。

唖然として言葉を失っていたフィーリアだったが、そのうち大きなため息を零して肩を落とした。諦めたというか、彼の大胆さに負けたというか――彼の自分に対するちょっと重過ぎるくらいの信頼が嬉しかったりだとか。とにかく、どうやら彼には何を言っても無駄らしい。

ふと、頭に思い浮かんだのはサクラの言葉。

「……私はクリュウの無茶を止めない。その代わりに――クリュウが無茶して怪我をしないように守る。そう決めている」

彼女は自分のように彼の無茶を止めたりしないと言っていた。それは彼女自身が彼のそういった所を尊敬し、敬い、応援しているからに他ならない。だからこそ自分の志を貫く彼を、無茶で危なっかしい所がある彼を、自分の力で全力で守ると決めている。

同じ不安を抱いているはずなのに、自分は彼を制止しようとし、彼女は彼のやり方を全力援護すると決めている。

同じ想いを抱いているはずのに、自分達は全く逆だ。自分はまた彼を束縛しようとしている。彼の志や可能性を、自分はまた、自分のわがままで邪魔しようとしている――彼を心配するあまり、どうやら自分は相当な臆病者になっているらしい。情けなさ過ぎて笑えてしまう。

彼を本当に想うなら時には止める事も必要だ。だが、今はその時じゃない――こういう時、自分の親友ならきっとこう答えるだろう。

「――では私も、クリュウ様と同じく覚悟をもってクリュウ様をお守りしますッ」

彼女ならきっともっと至極簡潔に、真っ直ぐに言うだろう。自分はこんな時も遠回しだ。だがそれでいい。自分は彼女とは違うのだから、自分らしく彼を支える。誰かの真似事なんかじゃなく、自分の意思で、自分の力で彼を守り切る。そう、心から誓った。

フィーリアの言葉にクリュウは一瞬驚いたように目を見開く。だがそれはすぐに彼らしい困ったような苦笑いに変わった。

「それじゃ、どっちも動けなくない？」

「あ……」

フィーリアもようやく気づいたのか驚くと恥ずかしそうに頬を赤らめて「え、えっとぉ……」と思考を巡らせる。だがそんな彼女の姿が実に愛らしくて思わず笑みが浮かんでしまう。

「――でも、僕は君を信じてるからね」

それは魔法の言葉だ。たったそれだけで、自分の中に無限にも感じられるような希望と勇気が満ち溢れる。それが自分にとっての彼の存在――自分を勇気づけ、奮い立たせ、支えてくれる。

だから自分は真っ直ぐ前に進む事ができるのだ。

「はいッ」
元気良く、フィーリアは満面の笑みを浮かべながらそう答えた。
翌朝、帝都エムデン郊外にあるカースラント基地にクリュウ達の姿はあった。ここは帝都防衛の為エルバーフェルド国防軍の中でも精鋭部隊が揃う基地であり、同時にアルトリアからの連絡船が停泊する飛行船専用の船着き場がある基地だ。
カースラント基地の一角にある飛行船専用の船着き場には一隻の飛行船が停泊している。エルバーフェルド国防軍が保有する『イレーネ』を始めとする航空哨戒艦よりもはるかに大きな飛行船。全長は二〇〇メートル近く、軍艦としての威厳を見せるように艦体側面から無数の大砲が突き出ている。
以前にクリュウ達がヴィルマで見たうちの比較的大型の飛行船と同規模のもので、アルトリアでは中規模クラスの飛行軍艦だ。その飛行船の停泊しているバースとはまた違う場所には全長一〇〇メートル程の軍艦三隻が停泊している。おそらくは護衛艦なのだろう。
クリュウ達がいるのは大型の飛行船が停泊しているバース。飛行船の周りには複数人の兵士が護衛しており、クリュウ達の前を歩くアルフが近づくと見事な敬礼をしてみせた。その一糸乱れぬ動きにクリュウ達は思わず息を呑んだ。
飛行船の前に立つと、アルフは振り返って後に続くクリュウ達に背後に停泊している飛行船を紹介する。
「君達にはこの軽巡洋艦『シェフィールド』に乗ってもらう。荷物はすでに搭載しているから、早々に乗艦したまえ」
軽巡洋艦『シェフィールド』。クリュウ達は知らないがこの艦は以前ヴィルマに支援艦隊旗艦として作戦に参加しており、クリュウ達も一度目にしている。が、その際にはその周りに何十隻もいた駆逐艦ですら驚いていたので全く記憶に残っていないが。
軽巡洋艦は駆逐艦よりも砲と装甲が強力なものが搭載されているが、同様の機動力を持つ事からアルトリアでは迅速な任務の際に用いられる。以前のヴィルマ支援や今回のエルバーフェルドへの訪問も同様に迅速さを求められた為この艦が使われたのだ。

表面は耐火塗料を塗ったゲリョスの皮で敵の砲弾を跳ね返し、さらにその奥には鋼鉄の装甲板を施した大掛かりな防御装置を備えている。同じ飛行船でも『イレーネ』のような必要最低限の防御力が施された艦とはまるで違う、まさに空飛ぶ軍艦だ。

クリュウ達の背後に並ぶエルバーフェルド軍の兵士面々やフリードリッヒ、カレンなどは自国の技術力では到底作れない、そして同盟国とはいえ決して譲渡される事はない強力な兵器に目を奪われていた。彼らの内心は「この艦を大量に保有できれば、ガリアや東シュレイドなど数日で焦土にできる」という考えに染まっているのだろう。

ハンターであるクリュウ達はハンターの礼儀としてそれぞれ武装しており、エレナだけは純白のカットソーにサスペンダー付きの紺色のキュロットスカートというかわいらしい出で立ちだ。

そのような出で立ちで佇む彼らは『シェフィールド』を見上げその大きさに呆気に取られていた。以前ヴィルマで見た時は遠くから眺めていただけでその大きさに驚いていたが、今こうして目の前にしてみて改めてその大きさには度肝を抜かれる。

「リオレウス何体分かな……これ？」

「単純な長さなら十体分くらいか？　だが気嚢の大きさを考えるとそれじゃ足りんな」

「……これ、本当に空飛ぶの？」

「ヴィルマでは飛んで来てましたよね」

飛行船自体がここ数年で急速に民間レベルで普及した新しい移動・輸送手段である為、田舎にいるとその存在すら知らない事も多い。砂漠などでは砂上船と並んでよく使われている。その飛行船だって『イレーネ』よりも小型のものが主流だ。これ程の大規模な艦が空を飛ぶ事が、彼らにはまだ信じられなかった。それでもある意味、事前に『イレーネ』に乗った事があるだけに、それほど飛ぶ事自体に不安はなかったが。

すでに出港の準備はできているのだろう。気嚢の下にある全長一〇〇メートル程の下層艦橋のちょうど気嚢を挟んで真上にある全長五〇メートル程の上層艦橋から突き出た煙突からは動力部が活動し

ている証として黒煙が吹き出ている。それに合わせて艦体や気嚢の各所から突き出たプロペラがゆっくりと回転している。
「さぁ、早く乗りたまえ――と、言いたい所だが。その前にしばしの別れになる者、もしかしたら二度と会えんかもしれん連中に挨拶しておけ」
フッと笑みを零しながらアゴで挿した方へ振り返ると、そこには今回の一件で大変世話になった面々がこちらを見詰めていた。
このエルバーフェルド政府までの道筋を作ってくれたレヴェリ家のセレスティーナ、ルーデル。
そしてこうしてアルトリア行きのチャンスを与えてくれたエルバーフェルド政府のフリードリッヒ、ヨーウェン、エルディン、カレン。
四人が一斉に振り返ると、まず口火を切ったのはセレスティーナだった。
「フィー、体に気をつけていってらっしゃい。戻って来たらたまには家に顔を出してね。もちろん、クー君達も大歓迎よ」
「くれぐれも失礼のないようにね。あんた達揃いも揃って常識知らずな連中ばっかりだから。あ、もちろんフィーちゃんは別だよ?」
セレスティーナの言葉に微笑みながらうなずき、ルーデルの言葉には思わず苦笑を浮かべながらうなずいた。セレスティーナは本当に優しく思いやりに溢れている美しい麗人。ルーデルも素直じゃないだけでとても心優しく、仲間想いな子だという事を、自分達は知っている。そう思うと、彼女の実に素直じゃない見送りの言葉にも胸が熱くなる。
二人が口火を開くと、ゆっくりとエルディンが前へ出た。しっかりとした足取りで地面を踏み締めながら彼はクリュウの前に立つと、ポンとその頭に手を乗せる。
「気をつけて行って来いクリュウ。それと、帰って来て暇があったら一度俺の所へ武者修業に来るか? 一人前のハンターに育ててやるぞ?」
「あ、それはぜひにでも――」

「……断る。クリュウには私がいる。貴様の手など借りるか」
パンッとクリュウの頭に乗せられた手を払うと、サクラは二人の間に割って入ってエルディンを睨み上げる。女子としては平均的な身長を持つサクラでも、エルディンのような長身相手だとどうしてもその絵面は大人と子供になってしまう。だが、その隻眼に宿る光は、決して子供ではない。一人前の狩人の目だ。
「おいおい、手厳しいなぁ」
「す、すみませんッ。こ、こらサクラッ！」
「サクラは少し物言いに常識がないですが、私も同意見です。クリュウは私が――いえ、我々三人でもっと違う景色が見れる世界へと導いてみせます」
サクラを引かせ前へ出たシルフィードは、しかし自信満々に師の手を振り払った。その瞳にはもう過去の濁りや暗さはない。真っ直ぐ前を見詰め、希望と幸せに満ちた光り輝く瞳があった。それを見てエルディンはフッと口元を緩めると、今度はシルフィードの頭を撫でた。
「言うようになったなオイ。師としちゃ嬉しい限りだぜ。お前がそう言うなら、俺は手出ししねぇよ。だがまぁ、こいつはエッジの息子だ。そのうち化物みたいな実力を開花させるかもしれねぇ。その時、お前らの手におえなくなったら、いつでも俺を頼れや」
「……クリュウは化物になんてなりませんよ。なるとすればそう――英雄です」
「いや、それはさすがに言い過ぎだよ」
「そうか？　私は君がいずれ世界を変えるかもしれないと感じているが？」
からかうように言う彼女の口調は冗談なのか本気なのか、一見するだけでは見て取れない。だがその幸せに満ちた表情を見ているだけで、彼女のかつての姿を知っている身としては実に嬉しく感じる。自分にはできなかった事を、彼女にからかわれて困ったような笑みを浮かべる少年がやり遂げた。
親友と想い人の息子、その可能性はきっと自分の想像を遥かに超え

るだろう。
　エルディンは静かに再び彼の頭の上に手を置くと、振り返る彼にニッと微笑んだ。
「元気でなエッジの意志を受け継ぐ少年よ。そして見て来い、アメリアが生まれ育った国を――きっとそれはお前にとって、何かを変えるきっかけになるだろうから、しっかり目に焼き付けておけ」
　そう言ってエルディンはクリュウの背中を力強く押すと、踵を返して手をヒラヒラとさせながら下がった。するとまるでそれに合わせたかのように今度はカレンが前へ出た。彼が自分を見詰めている事に気づくと、カレンは頬をほんのりと赤らめた。
「元気でね。約束通り、ちゃんと手紙を書いてくれないとひどいんだからね」
「わかってるよ。ちゃんと書くから」
「よろしいッ――また、会えるわよね？」
　それまでの笑顔が一転して不安そうな表情で尋ねる彼女の問いに、クリュウは微笑みながら自信満々にうなずいた。
「もちろん。またきっと、この国に来るよ。その時にね」
「……そう」
　クリュウの返事を噛み締めるようにゆっくりとカレンはうなずくと、くるりと振り返る。そのまま数歩歩いて立ち去るのかと思いきや、少し先で再び振り返ると、そこには最初会った時には想像すらもできなかった満面の笑みを浮かべた彼女が立っていた。
「約束、忘れないでよッ。今度来た時は――絶対デートしてもらうんだからッ」
　それは彼女なりの、きっと最高の別れ文句だったのだろう。クリュウも一瞬頬を赤らめるも、その言葉にうなずき微笑んだ。周りから見れば、実に微笑ましい別れの光景だ――だが、同時にそれは問題発言でもあった訳であって……
「――クリュウ様ぁ」
　いつもは聞くだけで癒しすら感じられる事ができる彼女の声が、なぜか今だけは死刑執行を告げる警報に聞こえた。恐怖のあまりビ

クッと震えた後、ギシギシとサビついたドアを開けるようにギコちなく振り返ると、そこには満面の笑顔を浮かべたフィーリアが立っていた。
「クリュウ様、今のデーニッツ様とのやり取りでちょっと気になる点がございまして。詳しくご説明願ってもよろしいでしょうか？」
それはまさに天使の笑顔。世の中、これほどまで可愛らしい笑顔はそうないだろう――だがそれも、瞳が濁っていれば恐怖以外のなにものでもない。問い掛け口調も、今の彼女では決定事項を告げているようにしか聞こえないのが不思議だ。
クリュウが恐怖のあまり固まっていると、ゆっくりと歩み寄って来た彼女に右腕を、そしてなぜかいつの間にか忍び寄っていたサクラに左腕を確保される。そしてそのままほとんど引きづられるようにして背後へ、『シェフィールド』へ歩かされる。
「ちょ、ちょっと待ってッ！　まだ別れの挨拶が途中で――」
「ほらほらクリュウ様。出発は急ぐようレキシントン様が仰っていたじゃないですか。急ぎますよぉ～」
「……クリュウ、私も話がある」
助けを求めるようにサクラを見るが――ダメだ。この子も目が魔界に堕ちてしまっている。濁った隻眼は光を失い、不気味過ぎる。
そのうち、今度は突如首をガッチリと腕でキープされた。呼吸すら危うくなる程キツく締め上げられ、クリュウは声にならない悲鳴を上げる。見ると、そこには烈火の如く怒り狂うエレナの姿があった。
「クリュウッ！　船に乗ったら逃げ場はないわよ――容赦しないんだからッ！」
激怒中の激怒という具合に怒り狂う姿を見て、そして左右の濁った瞳で自分を処刑台へと連行する二人を見て、クリュウはいよいよ自分が命の危険に立たされている事を思い知らされる。
「し、シルフィッ！　た、助けてぇッ！」
唯一この場で冷静に立っているシルフィードに助けを求める。だが、ゆっくりと振り返ったシルフィードは冷静に一言。
「……クリュウ、君は少し節度が無さ過ぎだ。反省しろ」

と、冷たく突き放された訳で――この瞬間、クリュウの死刑執行の書類に印が押された。
少女三人に連行されクリュウは『シェフィールド』に強制乗艦。それに続いて無言でシルフィードも続き、嵐のように騒がしく現れ、嵐のように騒がしく彼らはセレスティーナやフリードリッヒ達の前から姿を消した。
クリュウ達が姿を消すと同時に、『シェフィールド』の煙突から噴き出る黒煙がより濃く、より膨大に膨れ上がった。それに合わせるように各所のプロペラが一斉に回転力を増し、空気を震わせながら高速回転を始める。そして、船体がゆっくりと浮上を始めた。
旗艦である『シェフィールド』が出航するのに合わせて他三隻の駆逐艦も次々に出港。あっという間に四隻の飛行船は空高くまで昇ると、ゆっくりと四隻は前進を始め、カースラント基地から遠ざかっていく。
空の彼方へ旅立っていく飛行船団を無言で見上げるエルディン。口元には頼もしげな笑みを浮かべ、静かに親友と想い人の息子と愛弟子の旅路を祈る。
「……何を阿呆面で空を眺めてる。さっさと宮殿に戻るぞエルディン」
その隣に不機嫌そうに眉をしかめたフリードリッヒが近づき、仁王立ちで彼を睨みつける。そんな彼女の反応を見てエルディンは苦笑を浮かべた。
「おいおい、愛弟子との別れをもう少しくらい味あわせてくれてもいいんじゃねぇか？」
「知るか。さっさと行くぞ」
さっさとこの場を去ろうとする彼女を見て思わずため息が零れる。そんな二人の姿を見ていたヨーウェンは「もう、フーちゃんは本当にかわいいわねぇ」と微笑みながら彼女を追い掛ける。
「セレスティーナ様、私達も帰りましょう――レヴェリへ」
「そうねぇ」
セレスティーナとルーデルも遠ざかっていく船団に別れを告げる

と、兵士に案内されながら退散する。
一人残されたエルディンは遠くで馬に乗ってこちらが来るのを不機嫌そうに待つ自分達のお姫様に苦笑しながら歩み出す。途中、一度だけ振り返るといつの間にか船団は雲の向こうへと姿を消していた。
船団が空の彼方へ消えたであろう、アルトリアのある方角の空を見上げながら、エルディンは静かに微笑んだ。
「――ったく、騒がしい連中だったぜ。達者でな、クリュウ、シルフィード」

第１６７話　想いの込もった夜食　凛々しき戦姫の儚き素顔

「うわぁ……、速いですねぇ」
「エルバーフェルドの哨戒艦よりだいぶ速いな。この大きさでこの速度とは、技術力に雲泥の差があるという事だな」
下層艦橋の一室に案内されたクリュウ達。フィーリアとシルフィードは窓に張り付いて軽巡洋艦『シェフィールド』の性能に驚かされていた。『イレーネ』で飛行船の感覚を体験しただけあってそこでは驚きはしないが、その速度に驚いていた。
「……大型艦だけあって揺れも少ない」
「でも何だか変な気分ね。空を飛んでるって実感がないもの」
紅茶を片手にソファに深く腰掛けているサクラと、この面子では唯一飛行船未経験者のエレナが不思議そうに別の窓から外を眺めていた。
ちなみにクリュウは現在この部屋にはいない。出港直後四人の激しい尋問を受け洗いざらい（もちろんキスの件は死守したが）白状させられ、その時の精神的・肉体的ダメージから今は宛てがわれた部屋で死んだように眠っている。
という訳で、結果的にこの部屋は女子部屋のような状態になっている訳だ。
しばらくは飛行船の話題で盛り上がっていたが、それだけでは話題は続かない。そして話題が尽きた時、話は自然とこれから自分達が向かう国――アルトリアの事へシフトしていった。
「今更だが、私達の誰もクリュウから詳しい話は聞いていないのだな？」
全員一度部屋の中央にあるテーブルに腰掛けた途端、そう口火を切ったのはシルフィードだ。その問い掛けに皆は一斉にお互いの顔を見詰め合った後、一様に首肯で答えた。
「そう、ですねぇ。実の所、アルトリアが自身のお母様の故郷かもしれ

ないとクリュウ様に言われただけで、詳しくは知りません」
「確かに。どうしてそういう結論に至ったのかってのはあいつ話してくれないわよね」
　フィーリアとエレナも内心疑問に思いつつも、何だか訊いてはいけないような気がしてクリュウ自身に問えずにいた疑問を零す。それはここにいる全員の疑問であり、クリュウを応援しつつも、どうしても拭う事ができない不安に直結する……
「……クリュウ、何か私達に隠し事してる」
　サクラは臆する事なく、皆の最大の不安を口にした。
　――クリュウは何か自分達に隠し事をしている。何か、まだ自分達に話していない重大な何かがある。そう彼女達は確信していた。物的証拠がある訳ではないが、女としての勘が、彼女達にそう警告していた。
「これは私の予測に過ぎないが――おそらく、以前ヴィルマでアルトリアの総軍師と話していた金火竜の紋章とやらが関係しているのではないか？」
「シルフィード様もそう思われますか？　私も、ずっと気にはなっていたのですが……」
　シルフィードとフィーリアの思い至る点は共通であった。それは以前、ヴィルマでアルトリアの総軍師、ジェイド・クルセイダーとクリュウが話していた事。彼はその際、金火竜の紋章について熱心に彼に質問していた。それを間近で見ていたフィーリアも、
　後に彼女からその様子を聞かされた三人もこの旅が始まって以来、常にどこか頭の隅に引っかかっていた出来事。
　どうしても、それが無関係とは思えなかった。
「……クリュウは、金火竜の紋章に興味を持っていた」
「でも、何であいつがアルトリアの紋章なんて興味を持つのよ」
「それがわかれば苦労しないんだがな。幼なじみである君が知らないとなると、彼しか真相はわからぬという事か」
　シルフィードの言う通り、このメンバーの中で最も彼と一緒にいた経験が長いエレナが知らないのだ。他のメンバーは知るはずもなく、

そしてそれはおそらく彼が胸の中に留めている秘密。何もわからない自分達はお手上げという状態だ。
「でも、わざわざこんな遠い所までついて来てあげてるんだから、今更隠し事なんて卑怯だと思わない？」
「それはまぁ、そうですけど……」
幼なじみに隠し事をされている。それが気に入らないのか、エレナは不機嫌そうに深くまで背中を背もたれに預けながら愚痴る。そんな彼女の問い掛けにフィーリアは微妙な反応だ。もちろん気になるし黙っている彼に多少の不満はあるだろう。だがそれ以上に彼が話したくない事を無理に聞き出そうとする程、彼女は積極的にはなれなかった。
「……今は、クリュウを信じる他にない」
何事においても常に積極的で常識外れの突撃力で物事を力づくで片付けるサクラも、クリュウが嫌がる事は決してしない子だ。彼が話す気がないのなら、気にはなるも聞き出そうなどと野暮な事はしないと決めているようだ。
クリュウに対して最も激しいアタックをする二人がこんな状態では、シルフィードとエレナもそんな二人を差し置いて彼を問い詰める事はできない。そもそも、そんな気もないのだ。皆、同じようにクリュウに無理強いをさせる気など毛頭ない。
結局、誰もがクリュウに疑問を投げかける勇気など持ち合わせてはいなかった。
「あぁ～もうッ！　焦れったくて腹が立つぅ～ッ！」
「あら、ずいぶん楽しそうね」
その声に部屋にいた四人が一斉に振り返ると、ドアを開いて「お邪魔しま～す」と陽気な声をと共にフェニスが入って来た。最初に会った時のような優雅なドレス姿ではなく、純白のブラウスに紺色のジャンパースカートという比較的動きやすい出で立ちだ。その姿だと貴族の令嬢と言うよりは町娘に近い印象を抱かせる。
「レキシントン様、どうしてここに？」
「フェニスでいいわよ。それだとお父様とややこしいから。えっと、

飛行船に乗っちゃうとやる事がないから、暇潰しにお話でもと思って」
そう言ってフェニスは優雅に、でもどこかイタズラっぽく笑った。本当に暇なのかもしれないが、何となく抜け出して来たというイメージを拭えない。そんな彼女の姿に思わず苦笑が浮かぶ。
「あら、クリュウ君は？」
「自室で休憩中だ」
まさか自分達の尋問で力尽きているとは言えず、シルフィードは至極簡潔に答えた。他の者もわざわざ自分達の墓穴を掘ろうなどとは考えておらず無言でうなずく。そんな彼女達の様子に些かの疑問を感じたであろうが、フェニスは特に追求する事もなく「あら、そうなの」とただ残念そうにつぶやいた。
「じゃあ、女の子同士お茶でも飲みながらお話でもしましょうか？」
フェニスの提案に、皆は賛成とばかりにうなずいた。
「うぁ……？」
混濁する意識の中、重いまぶたを開くと見慣れない暗い天井がまず目に入った。意識がハッキリするにつれて視野は広がっていく。どうやら自分は横になっているらしい。
「……あぁ、眠ってたんだっけ」
意識を失う前の記憶が蘇り、自分の置かれた状況を理解する。
ゆっくりと起き上がるとそこは自分がよく知らない、乗船直後に宛がわれた自分の部屋。まだ眠い目を擦っていると、部屋の異様な暗さに気づいた。振り返ると、窓の外には寝る前に広がっていた青空はなく、代わりに星々が煌めく夜空に取って代わっていた。
「……寝過ぎた」
状況を理解すると、思わず苦笑しながらそうつぶやいた。
ベッドから身を起こし、窓に近づいて眼下を見下ろすと暗くてよくわからないがどうやら海の上らしい。内海のジョ・クルーク海か、それとも外海のアテネ海か。まさかまだ西アルトリア海には入っていないだろう――どれにしても、アルトリアは確実に近づいているのは間違いない。

自然と手は自分の胸元に下げられた母の形見のペンダントに伸びる。
自分の中にある可能性、それは正直まだ自分の中でも半信半疑という状態だ。でも、その半信半疑もアルトリアに近づくにつれて少しずつ信じるに値するものに変わっていった。
まだ、自分の中にある考えは誰にも話していない。もちろんフィーリア達にもだ。本来ならもっと早くに相談すべきなのだろうが、何となく話しづらかった。それはきっと家族の事だから、母の事だからというのが大きいのだろう。自分でもよくわからないが、母の事は自分で何とかしたいという気持ちが強かった。
自分はこの可能性を使って何かをしたい訳じゃない。ただ、知りたいだけだ。純粋に、子が母の事を知りたい。そんな誰にでもある普通の気持ち。ただ彼の場合は、それを叶えるのがひどく難しいだけだ。
最初こそ必死に前に進みながらも、心のどこかで無理じゃないかとも考えていた。あまりにも無茶で突拍子もない手段の連続だ。普通に考えればとてもじゃないが可能とは思えない。
だが実際は、こうして今まさに飛行船に乗ってアルトリアへと向かっている。
「努力は報われる……か」
昔、母がよく言っていたセリフを口ずさむ。子供ながらに様々な失敗を経験し、落ち込んだ事もあった。だが、そんな時母はいつもこう言って励ましてくれた。
子供の頃にこうして自分を励ましてくれた大好きな母。自分は今、そんな母の軌跡に近づけているのか。
「母さん……」
自然と、胸元に掛けたペンダントを握り締める手に力が入る。
この闇の向こう、母の故郷が存在する。そこで自分は、一体何を見つけ、何を知れるのか。期待と不安が入り交じる胸に母の形見を下げながら、ため息を零した。
「……お腹空いたな」
鳴る腹を押さえながらクリュウは思わず苦笑を浮かべた。何せ朝

にこの船に乗った後、そのすぐ後にフィーリア達の激しい尋問で心身共に疲労困憊となって寝てしまったのだから、今日はまだ朝食しか食べていない。育ち盛りな彼にとって一日一食など言語道断だ。

クリュウはとりあえず汗を流す為にシャワーを浴びた。驚く事にお湯が出て来た。まぁ、この飛行船の動力は燃石炭を燃やしてその熱で水を沸騰させて水蒸気にし、その力でピストンを動かす蒸気機関。当然熱湯が発生するのでそれの有効活用という事か。そんな小難しい事を考えながら、そういえば以前ヴィルマで飛行船の不必要となったお湯を使った仮設風呂に入った事を思い出し思わず苦笑を浮かべた。

汗を流した後に着替えて、部屋を出た。すでに艦内は寝静まっているらしく、不気味な沈黙がそこには広がっていた。わずかに動力部の音が聞こえるだけで、辺りは静かだ。歩き始めると金属の床は足音を妙に響かせ、それが逆にこの空間に自分しかいないのではという不安をかき立てた。

そんな感じで歩いていると途中で兵士に出会った。エルバーフェルドの軍人とはまるで異なる草色の軍服姿。兵士はクリュウに気づくと訝しげに見詰めてきた。アルトリア人は大陸人を嫌っている。彼の目にも少なからずそんな意志が感じられた。

あまり関わらない方がいい。そう判断したクリュウはとりあえず何か食べ物がある部屋はないかとだけ尋ねると、兵士はぶっきら棒に烹炊室の場所を教えてくれた。礼を言うが、兵士は無視して闇の向こうへ消える。クリュウは多少ムカついたが、それは腹の奥に押さえつつ兵士に言われた通りの道順を進む。

程なくして烹炊室に着いた。中を覗き込むとコック姿をしたアイルー達数匹が今まさに食事をしている最中だった。人間の食事を用意し、その後片付けを終えてようやく一息ついての食事なのだろう。楽しそうに談笑しているが、アイルー語なので内容まではわからない。わざわざアイルー語を使っている辺り、何となく兵士達への悪口を言っているのだろうと察しはついたが。

漂って来るおいしい匂いに耐え切れなくなり、部屋へ入ろうとした

時。背後からとんとんと肩を叩かれた。驚いて振り返ると、そこには思わぬ人物が立っていた。
「え、エレナ？」
「あんたこんな所で何してんのよ」
　そこに立っていたのは幼なじみのエレナであった。エレナは驚くクリュウを不思議そうに見詰めている。兵士かと思っていたクリュウは見知った人物に安心すると「ちょっと小腹が減っちゃって」と苦笑しながら答える。
「あぁ、まぁあんた丸一日寝てた訳だからそれもそうね」
「うーん、寝てたのか気絶してたのか怪しい所ではあるけどね。エレナこそ何でこんな所に」
「ちょっと野暮用」
　そう言ってエレナは首を傾げるクリュウを追い抜いて部屋へと足を踏み入れた。彼女が部屋の中に入って来るとそれまで楽しげに談笑していたアイルー達が一斉に話を止めて彼女の方へ振り返る。そんな彼らに向かってエレナは臆する事なく仁王立ちで対峙する。
「ここの責任者は？」
　彼女がそう尋ねると、アイルー達の中から一匹のアイルーが前へ出た。純白の毛並みとサファイアのような碧い瞳がかわいらしいアイルーだ。
「オイラがこの烹炊室の料理長ニャ。一体何の用かニャ？」
「別に大した用事じゃないわよ。今日の夕食がおいしかったから、ぜひそのシェフにあいさつがしておきたかっただけ」
　エレナが笑顔でそう言うとアイルー達はお互いに顔を見合わせる。こんな事今までなかったのだろう、皆驚いている様子。そんな彼らの横を通り抜け、エレナは彼らの賄い食を見る。どうやらサンドイッチらしく、テレを染み込ませた細切れ肉とレタスを挟んだシンプルなものだ。その横には野菜スープも並んでいる。
「これって、今日の夕食のローストビーフの余り？」
「そうニャ。見栄えから端の部分はいらニャいからカットしニャきゃいけないけど、もったいニャいから有効活用ニャ」

「このスープは？」
「それも同じニャ。細切れ肉と野菜の切れっ端を塩と胡椒で味付けしたものニャ。切れっ端も貴重な食材ニャ」
「ふうん、わかってるじゃない。ちょっと味見してもいいかしら？」
「ニャ？　そんな客人に賄い食なんて失礼ニャ。お腹が空いてるニャら簡単なもので良ければちゃんと作るニャよ？」
「いいのよ。私もこれで料理人だから」
　あっけらかんと言いながらエレナはサンドイッチの一つを手に取って食べてしまう。他のアイルー達も彼女の行動に困惑しているようだ。すると、エレナはじっくり味わった後に一言。
「この肉、一度ブレスワインでフランベしてるわね？」
　エレナの問い掛けにアイルー達は驚いたように顔を見合わせる。すると料理長は感心したように「よくわかったニャ」と感嘆の声を上げた。
「これが隠し味って訳ね。うん、おかげで肉も柔らかくておいしい。でもいいの？　そんな高級なワインを賄いで使っちゃって」
「いいニャよ。使ったのは栓を抜いて日にちが経ったせいで風味が落ちて飲めなくなったものニャ」
「なるほど。それも有効活用って訳ね。このスープもシンプルだけとおいしいわ」
　いつの間にかエレナの周りには料理長だけではなく他のアイルーまで集まって料理の話で盛り上がっている。さすが料理人同士、話もよく合うのだろう。エレナの意外な一面に驚きつつも、何となくその光景が微笑ましくて見守るクリュウ。すると、そんな彼にエレナが気づいた。
「何そんな所に立ち尽くしてんのよ。入って来るならさっさとしなさい」
　まるで自分の部屋のように振る舞う彼女の様子に苦笑しながらもクリュウはそこでようやく烹炊室へと足を踏み入れる。そこでアイルー達ともあいさつを済ませる。
「それで悪いんだけど、何か食べられるものないかな？」

「ニャ～、ちょっと待ってくれれば簡単な料理が作れるニャけど」
「待って。このバカの面倒は私が見るから。キッチン借りるわよ」
そう言ってエレナは勝手にキッチンを占領する。そのあまりの堂々っぷりにアイルー達も止める機会を失ってしまい見守るしかない。というかクリュウはなぜか突然料理を始めた幼なじみの背中に首を傾げた。ただ何となく声を掛けづらくて黙っていると、十分もしないうちに「はい」と彼の前に料理が置かれた。
「これは……」
それはお粥だった。具は薬草と卵だけというシンプルなものだが、香りだけで間違いなくおいしい事がわかる。その香りに空腹に耐えていた腹は力なくグゥと鳴る。そんな彼の姿を見てエレナは苦笑を浮かべた。
「まぁ、私もちょっとやり過ぎたと思ってたし。体力回復も兼ねての夜食。こんな時間にガッツリ食べるのは健康に悪いから。まぁ夜食程度にね」
どうやら彼女も少しクリュウを痛め過ぎたと反省していたらしい。これはきっと、そんな彼女なりの謝罪の気持ちの表れなのだろう。素直じゃない彼女らしい、実に回りくどくて、でも心温まる計らい。
「あ、ありがとう」
「ふ、ふん。冷めないウチにさっさと食べなさい」
クリュウの礼の言葉にエレナは頬を赤らめながら素直じゃない態度を取る。ここでもう少し素直な態度を取れれば彼の中でももう少し評価が違っていたかも知れない。
クリュウはそんないつもと変わらない素直じゃない幼なじみの姿に苦笑しながら、ありがたく粥をいただく。
火傷しないように慎重に冷ましながら口に含む。そんな彼の様子を、エレナがどこか心配そうに見守っていた。
「ど、どう？」
じっくりと味わう彼に痺れを切らしてそう尋ねる彼女に対し、クリュウはゴクリと呑み込むと感想を笑顔と共に口にする。
「うん。すっごくおいしいよ」

「そ、そう？　ま、まぁ当然よね。何てったってこの私が作ったんだから。マズイ訳がないのよ」
　クリュウの褒め言葉に自信を抱いたのか、いつものような自信満々な態度が彼女に戻る。いつもの彼女らしさを取り戻したエレナを見てクリュウも安心したように微笑むと、お粥を食べ進める。誇張でもお世辞でもなく、やはりエレナの料理は何もかもが美味だ。その実力は折り紙つきで、実は幼なじみとしてちょっと自慢だったりする。
「……すっかり抜かれちゃったな」
　思わずそうつぶやいた。そんな彼の言葉に、エレナが反応する。
「何よそれ」
「料理の腕だよ。僕の方が先輩なのに、いつの間にか後から始めたエレナの方がすっかり上手になっちゃったなぁって」
「ふ、フン。当たり前じゃない、私とあんたじゃ元々持ってる才能に雲泥の差があるのよ」
「あははは、確かにそうかもね。君の料理を食べてると、本当にエレナはすごい才能だなぁってわかるもの」
「と、当然じゃない……ッ」
　微笑みながらベタ褒めするクリュウの言葉の数々に思わずニヤけそうになる顔を何とか引き締め維持するエレナ。まぁ、必死に隠しているがその表情はとてもじゃないが平常心とは程遠い。すると、そんな彼女の様子を一匹のアイルーが覗き見て一言。
「照れてるかニャ？」
　好奇心で訊いたのだろうが、迂闊だった。当然彼は首根っこを掴まれてエレナによって部屋の外へと排除された。振り返り、ギロリと他のアイルー達を睨みつけて黙らせる。余計な事を言ったら殺す、そんな雰囲気を纏いながら。
「え、エレナ？」
「な、何でもないわよッ！　さっさと食べて寝なさいバカッ！」
「えぇッ!?　何で僕が怒られるのぉッ!?」
　身に覚えのない事で理不尽に怒られるクリュウはそう叫ぶしかなかった。

そんなこんなで薬草粥を食べ終えたクリュウはアイルー達と料理の話で盛り上がるエレナに別れを告げて先に部屋を後にした。背後から聞こえるエレナの楽しそうな声に笑みを浮かべながら自身の部屋を目指して来た道を戻る。

船内の通路はどこも似たようなものなので、来る途中に通路に振ってあった記号を頼りに進んでいるおかげで迷う事なく自身の部屋のある階へと辿り着いた。

あとは自身の部屋を目指して通路を進むだけ。すると角を曲がると思わぬ人物と遭遇した。

「クリュウ？　どうしたこんな時間に？」

驚いたように目を見開きながらそう尋ねたのはシルフィードだった。いつものようにTシャツとズボンという実にラフな彼女らしい格好。だがいつもは後頭部の後ろでポニーテールに結った凛々しい姿の彼女も今はそれを解いて重力に任せて下ろしている。そのいつもと少し違う姿が妙に魅力的で思わずクリュウは見とれてしまう。

「クリュウ？」

「あ、ううん。シルフィこそ何でこんな所に？」

「何でと問われても、ここが私の部屋だからとしか答えられんな」

そう言って彼女は背後の扉を拳で小突いた。眠っていたクリュウは知らなかったが彼の部屋と同じ階にフィーリア達の部屋も一緒にあるのだ。要するにここはシルフィードに宛がわれた部屋の前という訳だ。

「私は先程まで夜風に当たりたくてここから少し先にある外部通路にいたのだが。君はこんな時間に何をしてたんだ？」

「まぁ、ちょっと色々あって……」

「そ、そうか？　あぁ、体は大丈夫か？」

言いづらそうに尋ねるシルフィード。彼女が気遣ったのは乗船直後の尋問の事だろう。主にクリュウに精神的・肉体的にダメージを与えたのは他の三人であり、彼女は傍観に徹していただけだが、助け舟を一切出さなかった事を気にしているのだろう。クリュウは別に怒っている訳でもないので「別に平気だよ」と気にしてないという感

じに微笑んで答える。それを見て安心したのか、シルフィードは「そうか……」と胸を撫で下ろしながら零す。
「まぁ、立ち話もなんだ。暇なら付き合え」
「別にいいけど」
「そうか。なら入ってくれ。と言っても借り部屋だから大した持て成しもできんがな」
苦笑しながら言ってシルフィードは扉を開く。中に通されるとそこはずいぶんとシンプルな部屋であった。と言っても彼が寝かされていた部屋と大した変わりはない。必要最低限の装飾が施されただけの簡素な部屋だ。
部屋へと入ったクリュウをシルフィードが中央にあるテーブルに座るよう促すと、自分は部屋の隅に置いてある氷結晶を使った氷冷式冷蔵庫からビールを取り出す。
「君も飲むか？」
「うーん、たまにはいいかな」
「珍しいな。まぁ、私としてもその方が助かるが」
クリュウが酒の相手をしてくれるのが嬉しいのか、シルフィードは上機嫌でグラスと共にビール瓶を持って戻って来る。彼の前の席に腰掛けると、栓抜きを使って慣れた手つきで瓶を開けてしまう。
「そういえば、シルフィって結構ビールを飲んでる事多いよね？」
「うん？　まぁ、嗜む程度にはな。酔う程は飲まんな。いつも一杯くらいで十分だからな」
確かに、シルフィードはよくビールを飲んでいるがいつもグラス一杯くらいでやめてしまっている。本人曰く嗜む程度なので、そんなに量は必要ないらしい。まぁ、少量の酒は健康にはいいらしいのが。
「ふぅん、よく酒場なんかじゃ酔い潰れてる人もいるけど、シルフィはそんなには飲まないんだ」
「……まぁ、実を言うとあまり酒に強くない体質でな。飲み過ぎると自制が効かなくなるというか、取り返しがつかなくなるというか。要するに面倒な酔っ払いになってしまうからその手前で踏み止まるようにしているだけだ」

恥ずかしそうに言うシルフィードの話を聞く限り、どうやら昔飲み過ぎて何か失態を起こしたらしい。それが何なのかはあえて訊きはしないが、シルフィードの新しい弱点を知れたのは何となく彼女に近づけた気がして嬉しいクリュウ。それにしてもシルフィードは完璧超人に見えて結構弱点が多い子だ。
「フィーリアも酒はあまり得意ではないらしく、サクラはビールよりワインを好む奴だからな。こうして誰かとビールを飲むのはずいぶん久しぶりな気がするな」
いつも一人酒に徹しているシルフィードにとっては、こうして誰かと一緒にお酒が飲める事がすごく嬉しいのだろう。あまり見れない彼女の喜ぶ姿を見て、クリュウも誘われて良かったと心から思った。
シルフィードはそれぞれのグラスにビールを注ぐと、片方を彼に手渡してもう片方を自身が取る。
「それではまぁ、まだまだ先は長いがとりあえずひと段落ついたという事で――乾杯」
「乾杯ッ」
カチャンと互いのグラスが触れて心地良い音色を響かせた後、二人して一気に喉の奥へとその独特の苦味とのど越しが勢い良く駆け抜ける。何とも気持ちのいい飲みっぷりだ――と、言いたい所だが二人して酒に弱いのでかっこ良く一気飲みはできず、お互いにグラスの半分より少し上辺りでテーブルに戻してしまう。
「うん、さすが本場エルバーフェルドのビールだな。キレが違う」
「そ、そうなの？　余計苦味が強いような気もしなくはないんだけど……」
同じようにビールを飲んでも一方は感動し、一方は難しい表情を浮かべる。そんな彼の様子を見てアルコールが入って上機嫌になったシルフィードが楽しそうに笑う。
「まぁ、私は君くらいの年齢の頃から飲んでいるからな。舌もそういう風に変化しているんだよ」
「へぇ。一応イージス村の掟だとお酒は十六歳からって言われてたから、お酒を飲み始めたのはここ数ヶ月の話だよ」

「……まぁ地方、村や街、国ごとに飲酒可能年齢がバラバラだったり、そもそもなかったりするからな。ドンドルマでは基本的に年齢制限はないから、そこに拠点を置いていた私は何の躊躇いもなく飲んでいたな」

彼女の言う通り、国や地域、将又（はたまた）村や街ごとに法律や掟が存在する。飲酒可能年齢の設定年齢や、そもそも設定の有無もそれぞれバラバラだ。こういう所では時たまこうして出身地が違う者同士で意見が割れたりする事もある。食べ物の風習などは特にそれが顕著に現れるものだ。

もう一口飲んでみて、やっぱり苦いなぁと顔を顰めるクリュウ。時にはこの苦味がおいしく感じる事もあるが、基本的にはやはりあまり飲めない。個人的にはハチミツ入りミルクの方が一番おいしい飲み物だと思っている――もちろん、自分でもお子様っぽいなぁとは自覚しているが、おいしいものはおいしいと開き直ってみたり。

ただ実は、おいしそうにビールを飲むシルフィードの姿に憧れて最近は少しずつビールを飲み始めたのは――内緒だ。

「そうか。君はビールの苦味が苦手なのか……なら今度、ラガーじゃなくてエールでも飲んでみるか？」

「な、何？　ラガーとかエールって」

「ビールの種類だ。詳しい事は知らないが、醗酵期間の長さで分けられるらしいな。ラガーは一般的なビールで、今私達が飲んでいる苦味を味わうのがラガー。エールは比較的甘口で香りやコクを楽しむタイプのビールだそうだ。ビール大国エルバーフェルドでも珍しいビールだそうで、入手するのは骨が折れるそうだが」

「ふぅん、ビールに種類なんてものがある事すら知らなかったよ」

「ビールも狩猟も同じさ。長期戦に持ち込む戦いもあれば、短期決戦で決着をつける戦いもある。同じモンスター相手でも、そうなれば戦術や戦法、使用道具などが大きく変わる。同じ狩猟でも、そうした種類がある。だからこそ、実に味わい深い」

ビールと狩猟は一概には比較はできないが、クリュウは何となく彼女の言う事がわかった。同じ狩猟でも方法が変われば全く違う狩猟

になる。だからこそ狩りは味わい深い。実に大人なシルフィードらしい考え方だ。
「やっぱりシルフィはかっこいいよね」
「……なぜか素直に喜べないのだが」
笑顔で褒めるクリュウの言葉に、複雑そうなシルフィード。口では女は捨てたと言いながらも、最近は彼に女の子らしく扱われたいなぁという願望が少なからずあったりする。以前にドレス姿になった際に彼に「きれい」と言われて以来、余計にその想いは強くなっているのだ。
ただ、そんな願望を口で直接言う事もできず、シルフィードはため息を零して一気に残ったビールを飲み干す。すると、何を思ったか瓶を手に取って二杯目を注ぎ始めた。その様子を見てクリュウが目を丸くして驚く。
「え？　シルフィ、一杯でいいんじゃなかったの？」
「今日は一杯じゃ足りない気分なんだ」
どこか不機嫌そうに言う彼女に戸惑いつつも、本人が飲みたいのだからと止める事はせず、シルフィードが二杯目を飲んでいる間に一杯目をチビチビと減らしていく。
――ただ、すでにこの時点で問題が発生していた。
お酒というのは気分が良い時や、逆に機嫌が悪い時などは思いの外飲み干すスピードが早く、飲み重ねるにつれて次第に理性の箍（たが）が外れて自制が効かなくなるものだ。
クリュウに女の子として扱われない事に若干の不満を抱いていたシルフィードは、それが少しだけ腹が立ってグイグイとビールを飲んでいく。そしていつの間にか、瓶一本を見事に飲み干してしまった。その時にはもう――
「うぅ……、ひっく」
――完全に酔っ払ってしまっていた。
「し、シルフィ？　ちょっと飲み過ぎじゃないかな……」
顔を真っ赤にしてぼけーっと天井を見上げているシルフィードに、クリュウが心配そうに声を掛ける。すると、まるでそれがスイッチ

だったかのようにシルフィードは突如彼を凝視すると、拳をダンッとテーブルに叩きつけた。その音と震動、それ以上に突然のシルフィードの信じられない行動にクリュウは驚いて言葉を失う。すると、そんな彼に向かってシルフィードは叫んだ。
「何を言うかッ！　私は酔っ払ってなどないッ！」
「――いや、明らかにいつもとはテンションが違うでしょ。シルフィのそんな姿見た事ないし」
　完全に酔っ払っているのに断固酔ってなどないと大声で否定するシルフィード。ムキになっているのかブンブンと腕を振り回しており、いつもの冷静沈着な彼女とは似ても似つかない。あまりの彼女の変貌ぶりに、クリュウはすっかり呆気に取られていた。
「うぁ？　クリュウ、君はいつの間に分身の術を覚えたのだ？　どれが本体だ？　これか、これか、これか」
「……いや、サクラならともかく僕にそんな人間離れした事はできないから」
　何もない空間に手を伸ばしては居る筈のない分身クリュウを捕まえようとするシルフィード。完全に酔っており、もはや幻覚まで見え始めてしまっている。もはや末期だ。
　いくら飲み過ぎたとはいえ、一人でビール瓶の大半を開けたとはいえ、これはさすがに酔い過ぎだ。彼女自身の言う通り、シルフィードは相当お酒に弱いらしい。
　クリュウはため息を零すと、「クリュウぅ～、クリュウぅ～」と自分を呼んでいるシルフィードに近付く。ただ残念な事に彼女が必死に手を伸ばしている方向には何も無い訳で……
「ほらシルフィ、少し飲み過ぎだよ。もう夜も遅いし、寝ちゃいなよ」
「うぅん？　そうだなぁ。確かに少し眠いしな……」
「ほぉら、肩貸してあげるからベッドまでがんばろう」
　そう言うとシルフィードは素直に従うようにクリュウの肩を借りて立ち上がる。すぐ間近で酔い潰れている彼女の姿を見てクリュウは思わず笑ってしまった。いつもいつも凛々しくてかっこいい彼女ばかり見ていると、こうしたちょっと情けない所を見れるのが嬉しく

なってしまう。何というか、こういう姿は信頼されているからこそ見せてもらえるものであって、彼女の自分に対する信頼の大きさが思わず嬉しくなってしまうのだ。
フラフラの足取りのシルフィードを支えながら、クリュウは彼女を部屋に置かれているベッドまで連れて行く。ここまでは優しくてかっこいい男の子という感じだが、ここでドジを踏むのがクリュウ・ルナリーフという少年だ。
「どぅわぁッ!?」
足下不注意。先程シルフィードがテーブルを叩いた際に転がった瓶に見事に足を取られてバランスを崩してしまう。倒れる最中、酒の影響で全く力の入っていないシルフィードは受身すら取れない状態だと気づき、慌てて彼女が怪我しないように自分が下敷きになるように動く。この配慮は実に紳士的だが、問題は彼はそういった行動を見事に裏目に出すというある種の才能がある事だった。
運良く、二人はベッドに倒れ込んだ。おかげで二人共怪我はない訳だが、寸前の彼の行動の結果――
「むぐぅ……ッ!?」
――シルフィードの下敷きになったクリュウの上に、彼女が倒れ込んだ。さらに言えば、彼女のその豊満な胸が彼の顔面を押さえ付ける形に。見ようによってはシルフィードがクリュウを押し倒しているようにも見える。
顔に押し付けられるシルフィードの豊満な胸にクリュウは顔を真っ赤にして慌てまくる。すると、そんな彼の様子に気づいたシルフィードが助け舟を出すようにトロンとした目で彼を見詰め、
「……んぁ？　どうしたクリュウ……一緒に寝るか？」
――助け舟かと思ったそれは、爆薬を満載した突撃艇だった。
クリュウは必死になって首を横に振ろうとするが、未だにシルフィードの胸でロックされている状態なので思うように首を動かせず、その意思表示はいつもは察しのいいシルフィードも酔っている為に鈍感になっている彼女には伝わらない。
すると、拒否の反応を示さない彼を見てシルフィードは嬉しそうに

屈託の無い笑みを浮かべた。いつもは凛々しい笑みを浮かべる彼女も、お酒の影響かその笑顔はずいぶんと幼く見え、歳相応の少女らしい可愛らしいものだ。その笑顔に思わずクリュウがドキッとしたり。
「クリュウは甘えん坊だなぁ。良し、お姉ちゃんが添い寝してあげよう」
　そう言ってようやくクリュウの上からシルフィードは退くが、彼に向き合うように隣へ寝転がる。楽しそうに笑っている彼女を見ていると今更拒否する事もできず、クリュウは無言でその場から動けずにいた。すると、右腕を突然掴まれたと思ったら、シルフィードはそれを大切そうに優しく抱きしめる。が、当然そうなればクリュウの腕は容赦なくシルフィードの大きくて柔らかい胸に押し付けられる訳であって……
「し、シルフィ……ッ」
「――クリュウの匂いは落ち着くな。君と一緒にいると、自然と安心できる」
　慌てて離れようとした途端に掛けられた彼女の言葉に、クリュウは動きを制された。そんな事を言われてしまえば無理に離れる事はできなくなる訳で、結果的にまたしても動く機会を失う。腕を彼女に抱き締められながら、クリュウは未だ赤みが落ち着く事のない頬を困ったように左手の指先で掻く。すると、そんな彼の腕をシルフィードがギュッと抱き締める。
「……私はいつも君に甘えてばかりだな」
　つぶやくように彼女が零したのは、あまりにも意外な言葉だった。
「そ、そんな事ないよ。むしろ甘てばかりなのは僕の方だと思うけど……」
　そう言う彼の言葉を、シルフィードはゆっくりと首を横に振って否定した。
「君が気づいていないだけで、私はいつも君に支えられているのだ」
「そ、そうなの？」
　シルフィードに頼る事はあっても、彼女から頼られる事などあまりないクリュウとしては正直藪から棒な話だ。自分が何かそれらしい

行動を取った事があるか記憶の中を探す彼の横顔を見て、思わずシルフィードは微笑んでしまう。
――そういう事ではないのだ。
何かの行動があったから彼を頼っている訳ではない。こうして、自分の横にいて微笑んでくれる。それだけで自分は勇気をもらえ、苦境に置かれても逆境の決意で震える足を叱咤して立ち続ける事ができる。そんな彼に甘え、そして頼りながら、自分はこうして彼らのリーダーという地位を維持し続けられている――彼女の中でのクリュウの存在は、もうなくてはならない程にまで大きくなっている事に彼は、そして彼女自身も気づいていない。
「……クリュウ、どうか私の前から消えないでくれ」
「え？　そ、そんなつもりは全然ないけど……」
「……お願いだから、決して私を一人にしないでくれ」
「う、うん。だからそのつもりだってば」
「クリュウ……」
「え？　ちょ、ちょっとシルフィ……ッ!?」
次第に近づいて来るシルフィードの姿に、ようやく彼女の様子がおかしい事に気づいた。瞳はどこか遠くを見ている感じで、心ここにあらずという状態だ。その状態で両腕をキープされ、いつの間にか足も彼女自身に足が巻き付くように絡まり動けない。完全に身動きを封じられてしまう。
「クリュウ……」
「シルフィッ!?　ちょ、ちょっとタンマッ！　タンマッ！」
目の前にまで彼女の、どこか蒸気した顔が迫るもクリュウは動けずにいた。次の瞬間、彼女の唇がクリュウの唇を塞ぐ――その直前、突然力を失ったように彼女の顔が倒れた。おかげで唇が重なる事はなかったが、彼女の顔はクリュウの肩にしなだれかかるように着く。
「し、シルフィ……？」
「スゥ……」
見ると、シルフィードは瞳を閉じて気持ち良さそうな寝息を立てていた――どうやら眠ってしまったらしい。それを見てクリュウは助

かったとばかりに安堵の息を漏らすが、静かに寝息を立てる彼女の唇を少し名残惜しげに見ては慌てて自分の中の邪念を振り払う。
　眠ってしまったシルフィード。仕方なくクリュウは彼女をベッドに残したまま一人退散しようと彼女の体をゆっくりを引き剥がし、仰向けに寝かす。だがベッドから退散しようとした途端、眠ったままのシルフィードの腕がクリュウの服の裾を掴んだ。驚いて振り返ると別に彼女は起きている様子もなく、気持ち良さそうに寝息を立てている。どうやら寝ぼけているらしい。起こさずに済んだ事にほっとしたものの、いざ彼女の握っている手を離そうとしたが思いの外強く握っていて解ける気配がまるでない。
「シルフィ……、ちょっと離してくれないかな」
　言っても聞こえている訳でもないが、思わずそう言わずにはいられない。すると、眠っている彼女の口から先程聞いた彼女の弱気な声が漏れる。
「一人にしないでくれ……」
　その言葉を聞いた瞬間、クリュウは彼女の手を解くのをやめた。そしてゆっくりとベッドへ戻ると、彼女の横に並ぶように寝転がる。先程のように密着はせずにある程度距離は保ったままだが、一応添い寝の形だ。そっと自分の裾を握る彼女の手の上に自分の手を重ねると、心なしか彼女の寝顔に笑みが浮かんだ。それを見てクリュウは静かに苦笑を浮かべた。
「……もう、今日だけだからね」
　聞こえるはずがない。だが、そんな彼の言葉に眠り姫は一つ小さくうなずくのであった。
　結局、クリュウはその夜シルフィードと一夜を共にした。と言ってもあれからそれ以上の展開もなくクリュウも朝までぐっすりと眠った。まぁ、翌朝正気を取り戻したシルフィードが隣にクリュウが寝ている状況に悲鳴を上げるわ、その声を聞いて雪崩込んで来た三人に詰め寄られて二人共猛烈に怒られるわ、クリュウはその後首根っこを掴まれて消えたと思ったら隣の部屋から彼の断末魔の悲鳴が聞こえてくるわと騒がしい朝を向かえるのであった。

――唯一の救いは、シルフィードが昨晩の事をまるで覚えていなかった事だろう。三杯目辺りから記憶がないらしく、当然クリュウを押し倒した事など覚えてはない。

それがせめてもの、リーダーとしての威厳を彼女から奪わなかった唯一の救いだ。まぁ、そのおかげでクリュウは再び夜中まで気絶する事になったのだが、それはまた別のお話。

第１６８話　王都アルステェリア　近付く金と銀の運命の絆

飛行軽巡洋艦『シェフィールド』の航海は順調に進んだ。空を飛んでいる為に雑魚モンスターに襲われる事もなく、飛竜すらも姿を見せない限り、この艦が傷つく事もない。同盟関係でもない国や地域の上空を悠々と通り過ぎても、彼らは見上げる事しかできない。対空兵器の概念もなければ、領空権という概念もまたまだこの世界には存在しないのだから。

燃石炭をエネルギーとしている為に煙突からは絶えず黒煙が噴き続ける。それを軌跡として『シェフィールド』はエルバーフェルド帝国を出発してからドンドルマの西、ジョ・クルーク海、神聖ローマリア法国、アテネ海の上空を通過。ついにはアルトリアの領海である西アルトリア海に入り、航海はいよいよ大詰めを迎えた。

そして『シェフィールド』はエルバーフェルドを出発してから一週間程が経つ頃――海洋に浮かぶ島国、アルトリア王政軍国へと到着した。

眼下に広がる景色は見飽きていた変化のない海から懐かしい陸地へと姿を変えていた。

美しい森や平原が続いており、時々小さな村や街の上を通り過ぎる。そのどれもが長閑な姿を見せ、この国がいかに平和かを物語っていた。

数時間そうして陸地の上を飛行していると、山を越えた先にそれは姿を現した。

「あ、あれがアルステェリア……」

思わずつぶやいたクリュウと同じように窓に張り付いて五人はその美しい都に見とれていた。それを見て、フェニスが嬉しそうに微笑む。

「そう、あれがアルトリア王政軍国の王都。水の都――アルステェリアよ」

それは一言で言えば純白の都市だった。
透き通るような巨大な湖に浮かぶ島。そこには純白に塗装された街並みが広がり、清潔な印象を抱かせる。周りの湖の青と木々の緑と調和するような姿は実に美しく、まるで絵本の中にある理想の街をそのまま再現したよう。
四方をそれぞれ一本ずつの跳ね橋で湖の対岸と結んでいる為、さながら本当に湖に浮かぶ都市という出で立ちだ。
美しい自然と調和した街並みの中、島の中にも小さな湖があり、その中央に純白の美しい城――アルトリア城が聳え立っている。
眼下に広がるアルステェリアの、そのあまりの美しい街並みにクリュウ達は思わず息を呑んだ。ドンドルマのような厳しさも、エムデンのような凛々しさとも違う。美しく包み込むような雰囲気の街だ。
「こんなきれいな街、初めて見ました」
フィーリアが零した言葉に皆が反応して同意するようにうなずく。大陸のどこにある街よりもアルステェリアは美しい都だった。整然と並んだ街並みはいかに高度な都市開発技術でこの街が作られたかを物語っている。
都市内部には複数の河川があり、そこを小さな船が何艘も行き来している。アルトリアはエルバーフェルドと同じく蒸気機関車という蒸気機関を用いた馬よりも早く、アプトノスより力強く動く機械があると聞いていたが、見る限りそれらしい姿は見えない。
「……機関車は？」
好奇心旺盛なサクラが無愛想に尋ねると、フェニスは逆に優しげな笑みを浮かべながら答えた。
「機関車も他の蒸気機関と同じで燃石炭を使うわ。そうすると黒煙を噴いちゃうから。それに機関車は線路っていう専用の道が必要だから景観と環境の都合から街中では使われてないのよ。街中ではもっぱら水路を航行するボートが主役ね」
技術力だけではなく、文化力でもアルトリアは段違いである事を見せつけられたような気がした。大陸ではまだ都市開発の為に景観、特に環境配慮がなされない場合が多数だ。特に環境問題は深刻でテ

ティル連邦共和国のように環境を悪化させていながら強引な生産を続けより悪化させる事は決して珍しくはない。大陸国家でそれがまともに働いているのは観光大国のガリアくらいなものだろう。
「それに機関車はまだ民間レベルでの運用はされていないの。一応軍用車両だから、ロサイス軍港に着けば見れるわよ」
「ロサイス軍港ですか？」
「そう。ラミリーズ湖の畔にある王軍艦隊第一機動艦隊の本拠地。あそこよ」
フェニスが指さした先を見ると、湖の畔に巨大な基地らしきものが見える。そしてその敷地内には何十隻もの大小様々な飛行船が停泊している。その数を見てクリュウ達は思わず言葉を失った。大陸の先進国がどれだけの努力と技術力を駆使しても未だ試作もできていない飛行船が、アルトリアには一つの基地だけであれだけの数が揃っている。その光景に、クリュウ達はこれまで以上に自分達の住む世界とこの国の技術力が雲泥の差がある事を認めさせられた。
アルステエリア上空を飛行する『シェフィールド』はフェニスの言う通り一度都市上空を通過した後に、郊外のロサイス軍港へと向かう。
ロサイス軍港は基地と位置づけられているが、敷地内の大半は飛行船が停泊する為の泊地となっている。敷地の隅の方に建物が数カ所あるだけで、あとは敷地内至る場所を機関車が走る為の線路が敷かれているぐらい。だがここが王都防衛を担う王軍艦隊主力、第一機動艦隊の根拠地なのだ。
ロサイス軍港上空へと達した『シェフィールド』はそこで前進の為のプロペラを止め、ゆっくりと降下を開始する。どうやら飛行船と飛行船の間の空いている場所に着陸するらしい。
次第に地面が近づけば誘導員と思しき人が左右に紅白の旗を持って着陸を誘導している。慣れたものなのだろう。『シェフィールド』は難なく着地を済ませ、アルトリア王政軍国ロサイス軍港へと到着した。
「着艦が終了した。これから下艦するから準備をしたまえ」

アルフにそう言われ、クリュウ達は急いで自室へと戻って準備を済ませる。と言っても必要最低限なものしか持っていないし、服装はすでにハンター四人はハンターとしての正装である防具姿だし、エレナもエムデンを出発した際の服装で準備を済ませている。すぐに準備を終えて戻ると、艦橋ではアルフとフェニスの親子が彼らを待っていた。

「それでは下艦する。ついて来たまえ」

いつになく真剣な表情で言う彼の言う事に首肯して従い、五人はアルフとフェニスに続いて外へ出る為の出入口へ向かう。ドアを開け放つと、飛行船は完全に着地している訳ではなく数メートル程浮いている。だがドアに横付けするようにステップが用意されていた。見るとアプトノスに引かれている移動式のステップのようだ。アルフとフェニスは慣れた手つきでステップへと移り降りていく。四人もそれに習って移動し降りる。

二人が降りると、五人の先頭を歩くクリュウが止まった。あと一歩で降りられる場所まで来ているが、その先を踏み出さない。不審に思う皆の視線を感じながら、クリュウはゆっくりと最後の一歩を踏み出す。そして彼の足裏はしっかりと母の故郷であるアルトリアの大地を踏み締めた。

「ここが、母さんの……」

美しい自然を残した光景が辺りに広がっている。周りはまだ軍港内だが、遠くには美しいアルステェリアの街並みも見える。

五人全員が降り終えると、まず最初に彼らが感じたのは警戒心に満ちた視線だった。周りを見れば作業中だった兵士達が皆手を止めてこちらを、特に外部の人間である自分達を見詰めていた。確かこの国にはハンターズギルドはなく、当然ハンターもいない。四人の格好は大陸ではハンターという身分を表すものでも、ここでは未知の異質な鎧として見られるのだろう。それらの視線はお世辞にも心地良いものではなく、自然と五人の表情は険しくなった。それを見てフェニスが困ったように苦笑を浮かべる。

「ごめんなさいね。この国の人は大陸人に慣れてないから」

「大丈夫。一応予想はしてたから」
そうは言いつつも、やはり快いものではない。
兵士達の嫌な視線を気にしながらも、クリュウ達はアルフに案内されて基地内を歩き続けた。しばらく歩くと、目の前に巨大な鉄の塊が姿を現した。見上げる程に大きなそれはリオレウス程の大きさ。黒塗り鉄の塊は飛行船と同じように絶えず煙突から黒煙を吹き続け、時たま巨大な車輪が並ぶ機体下部から白い蒸気を噴き出す。
「……これは」
「あなたが見たがっていた機関車よ」
そう言ってフェニスが紹介したのは現在アルトリアとアルトリアからライセンス契約で生産しているエルバーフェルドの二ヶ国でのみ製造・運用がなされている、高度な蒸気機関を用いた陸上を走る蒸気機関車。
黒塗りの巨大な鉄の塊を前に、クリュウ達は一斉に言葉を失った。飛行船もさる事ながら、この機関車も現在の大陸諸国や地域は独自技術で作る事は不可能だろう。それほどまでに高度な技術が用いられている事は、素人が見ただけでもわかった。
「……やっぱり、桁が違うなこの国は」
思わず苦笑しながらつぶやいたシルフィードの言葉に、クリュウ達も同意見とばかりにうなずいた。クリュウ達にとってはドンドルマが最先端技術が集まる場所と思っていただけに、そのドンドルマをも軽く凌駕するこの国はもはや物語の中にしか存在しないような架空の国にすら思えてしまう。だが、これは現実の光景であり、アルトリアは現実に存在する国家なのだ。
「さぁ、後ろの客車に乗って。軍用と言っても客車自体は政府高官が乗る専用車だから乗り心地は保証するわ」
そう言って彼女が指挿したのは機関車の後ろに繋がれた客車。これは木造らしく木でできており紺色の塗装がなされている。機関車の迫力に比べればかなり劣るが、それでも普通の荷車の二倍か三倍の長さはあり、アプトノスなら一匹では確実に引けないような重さだろう。それが全部で五輌連結されている。

クリュウ達は慎重に言われた通りに一号車へと乗り込んだ。中はさすがにフェニスが政府専用車と言っただけあってきれいな装飾がなされている。天井には小さなシャンデリアが吊るされ、純白のテーブルクロスが掛けられたオシャレなテーブルを挟む対面式の柔らかそうな座席。まるでホテルのような豪華な内装だ。ドンドルマなどでは珍しい窓ガラスも嵌めこまれ、客車と侮っていたがここにも技術大国アルトリアのすごさが表れていた。

フェニスとアルフも乗り込む。他の政府関係者はそれぞれ後ろの四輌のどれかに乗り込んだのだろう。しばらくして、豪快な汽笛の音が辺りに響き渡った。

「出発するわよ」

フェニスの言葉をまるで合図としたかのように、ガタンッと一瞬大きく揺れてゆっくり機関車は動き始めた。クリュウ達は窓を開けて外に顔を出して機関車を興味深げに見詰める。

「速いって噂は聞いてたけど、どれくらい速いんだろ」

「さぁ？　馬程に速いと聞いた事はあるが。まさかな……」

シルフィードも実際に乗った事はないので予想でしか答えられない。他のメンバーも似たような反応を示すが、一人フェニスだけはそんな彼らの会話を楽しそうに聞いていた。

話が盛り上がる中も次第に機関車は加速していき、あっという間にクリュウ達が予想していた速度よりも速い速度に達した。アプトノスどころか馬よりも速い。しかも後ろに五輌も車両を繋いでいるとは思えないような速度だ。その力強さと速度に思わずクリュウ達のテンションも一気に盛り上がった。

「何これッ!?　ディアブロスの突進よりも速いんじゃないッ!?」

「まさかここまでとはな……これが大陸に普及すれば劇的に物流速度が飛躍するぞ」

「……かっこいい」

「サクラ様？　何を純真無垢な瞳で機関車を見詰めてるですか？」

「ちょ、ちょっと速過ぎよッ！　こんなので曲がったらひっくり返るんじゃないッ!?」

田舎者丸出しな会話だが、本人達にとってはそれどころではないので周りの目など一切気にしない。むしろ周りにいるのはフェニスとアルフだけなので、二人共彼らの様子を微笑ましげに見詰めている。
機関車は黒煙と蒸気を噴きながらすさまじい速度で線路の上を翔ける。線路はずっと向こう、一直線に王都アルステェリアへと伸びている。
基地を出た機関車はしばし平地を勇ましく走りラミリーズ湖の周りを回るように進む。そしてアルステェリアとこちらを結ぶ橋へと進入した。この橋は石造りのしっかりとしたもので、木製の橋が主力の大陸とはここでも技術力の差が明らかだった。
橋の幅は意外と広く、人々や竜車が動く道の横に線路が敷かれていてその上を機関車が走る鉄道道路併用橋。これだけ重いものが走ってもビクともしない橋の耐久性にも驚かされる。
あっという間に機関車は最もアルステェリアに近い駅へと到着した。そこは橋の中程よりやや都市側の場所。線路はここで終わっており、ここから先は機関車では進めないらしい。
「何でこんな中途半端な場所で終わりなの？」
客車を下りながらクリュウがフェニスに尋ねると、彼女はスッと前方を指挿した。
「あそこには有事の際には外敵の侵入を阻む為の跳ね橋があるの。さすがに跳ね橋じゃ機関車は重過ぎて通れないから、ここまでしか街には近づけないのよ」
フェニスの説明にクリュウは納得したようにうなずく。アルトリアの技術を使ってもできない事があるのだと理解する。そんな当然の事さえ忘れさせるほど、アルトリアの技術は常軌を逸していたのだ。
機関車を降りると、今度は見慣れたアプトノスの竜車へと乗せられた。これもきれいな装飾が施されてはいるが、クリュウ達はその自分達の知っている世界を前にほっと胸を撫で下ろす。
「機関車はすごいけど、やっぱり僕はこっちの方が落ち着くな」
「確かにそうですね。何となくこちらの方が私達に合っている気もし

ますし」
　クリュウの言葉にフィーリアが何度もうなずきながら賛同する。ここで見るもの体験するもの全てが今のところ自分達の常識を越えたものばかりだ。思わず自分達の常識が通じるものを前にして安心してしまう気持ちもわからなくはない。
「子供の頃にはもう蒸気機関車は稼働してたから、私にとっては日常の風景ね。さすがに軍用だから乗る事は滅多にできなかったけど」
　大陸人であるクリュウ達とアルトリア人であるフェニスでは育ってきた環境も大きく異なる。同じものを見ても、こうも反応が分かれてしまうのだ。
　そのような会話をしていると、アプトノスの鳴き声と共に竜車が動き出した。
　動き出した竜車はゆっくりと橋の残りの距離を走る。隊列を組んで走る政府専用車に通行する一般人も訝しげにこちらを見てくるが、それらとは目を合わせる事なくクリュウが見詰める先には街の中央に聳えるアルトリア城。
　竜車はそのまま橋を渡り切るといよいよ都市内部へと入る。正門では検問が行われているが、政府専用車のおかげでパスで入れる。都市に入ると上空から見た純白の塗装が施された街並みが目の前に広がる。ドンドルマと同じ石造りの建物が主で、それを白塗りにしている為に街全体が岩の色剥き出しのドンドルマのような威圧感ではなく、同じ石造りでもどこか優しげな印象を抱かせる。ドンドルマのような無計画な増築を重ねたのではなく、ちゃんとした都市計画が最初から築かれていた事を物語せるような見事な街並みだ。
　美しさもさる事ながら、そうした技術や行政の実力でもこのアルステェリアの街は大陸のどの街よりも秀でている。
　そうした美しい都に住んでいる為か、往来する人々の表情も皆明るい。その様子を見ているだけで、この国がどれほどに平和で、国民に愛されている国かがわかる。
「平和な国ですね」
　皆が抱いた印象を代弁するようにフィーリアがつぶやくと、フェニ

スは笑顔で「ええ。今はとっても平和でいい国よ」と自分の祖国を嬉しそうにそう言う。だが彼女の言葉にシルフィードは微妙に引っかかりを感じた。
「今は、という事は以前は違ったのか？」
　シルフィードの何気ない問い掛けに、フェニスは困ったように隣に座ってずっと沈黙を続けている父アルフを見る。アルフは静かなため息と共に閉じていた口をゆっくりと開く。
「先代女王、ローレヌ陛下は無制限軍拡化政策を打ち出し、民に重税を課してでも軍事力の増大及びより強力な兵器の製造・研究開発を強行した。その結果アルトリア軍の戦力・兵力は増大し、兵器技術及び蒸気機関の性能向上は飛躍的に進歩した。だが重税政策は最終的に民から信頼を失わせ、『史上最悪の愚王』と罵る者もいる始末」
　アルフはおそらくローレヌが女王として君臨していた頃も政治家としてその手腕を振るっていたのだろう。愚王とまで罵られた女王の配下にいたのだからさぞかし苦労したはず。だが不思議な事に、彼の口調からは不満や罵声が飛び出す事はなかった。遠くを見詰める瞳は、どこか痛々しくも感じられる。
「……民と気持ちは乖離してしまっていたが、あの方も祖国を想って自らを愚王と罵られても国の為に尽力された。本当は指導者には向かない方だったのに」
「お父様はローレヌ陛下の女王秘書官だったの。女王秘書官は時の女王の政を補佐する役職で、総軍師の前身の役職よ」
「ふむ、よくはわからんがあまり民に支持されなかったのが先代女王だったと。それでは現在の女王は……」
「現女王イリス陛下は母君であった先代ローレヌ女王と違って軍拡化よりも経済拡大へ政策をシフトされてるの。ローレヌ陛下の統治時代に冷え切ってしまった大陸諸国との関係修復も行い、平和的に統治されている。減税政策や福祉や公共サービスの充実化などを積極的に行なっているから国民からの支持も高い。だからこそ、みんな今が幸せなのよ」
　二人の説明にシルフィードは納得したようにうなずいてそれ以上

の質問は取りやめた。そういう事情があるのなら、確かに今の国民が幸せそうにしているのも納得がいく。だが同時にシルフィードは彼女らしい引っ掛かりもまた感じていた。
「……ずいぶん娘想いな女王だったみたいね」
「君もそう思うか？」
　何やらシルフィードとサクラが二人でコソコソと話している。珍しい組み合わせだなぁと思いながらも、フィーリアは興味深げに「はいッ」と元気良く挙手した。
「アルトリアにはハンターズギルドもハンターも存在していませんよね？　やはり我が国と同じように軍隊がモンスター討伐を行うのですか？」
「そうね。基本的には諸外国の陸軍に相当する聖騎士団が人間に害を成すモンスターの討伐を行なっているわ。でも私の個人的意見を言わせてもらうと、兵士一人一人の実力はハンターの方が圧倒的に優れている感じね。モンスターの素材の加工技術に関して言えば大陸の技術、強いてはドンドルマの方が優れているもの」
　それは実際にドンドルマへ行き、ハンターとして数年間身を置いていた彼女だからこそわかる事。どんなに優れた戦術システムや兵法を用いても、圧倒的にアルトリアの兵士はハンターのような力はない。それを補う為に強力な兵器が次々に生み出されている。
　己が肉体を鍛え、技術と経験で戦うハンター。統制された組織として優れた兵器を効率良く運用して戦う兵士。同じ戦う者同士でも、双方はまるで違う存在だ。
「だからかしら、シグマってば大陸にいた頃の方が楽しかったなんて平然と言っちゃうのよ。ここでは大陸話はご法度なのにね」
「……まぁ、シグマならそれくらいの空気の読めなさ普通だしね」
　シグマをよく知っているクリュウは思わず苦笑を浮かべる。その脳裏に浮かぶのは無双の強さと勇ましさで大勢の仲間を率いていた熱きリーダーとしての彼女の姿。今思えばサクラやシルフィードの方が実力はずっと上のはずなのに、それでも勇ましさという点では今でもシグマに勝る者は彼の中にはいない。

「シグマもアリアも元気にしてる？」
「ええ。シグマは聖騎士団の団員として、アリアも次期ヴィクトリア家当主として日々勉学に勤しんでるわ。もちろん、私だって今は政治家になる為の勉強をしてるわよ」
「……すっかり道が別れちゃったけど、みんながんばってるんだね」
　ちょっと寂しい気もするが、それでもかつての仲間がそれぞれの道で頑張っていると聞けてクリュウは内心ほっとしていた。そんな彼の様子を見て、フェニスは楽しそうに微笑んだ。
「え、な、何？」
「ううん。クリュウ君はやっぱり変わってないなぁって思って」
「そ、そうかな？　ちょっとは背は伸びたし……それにハンターとしての実力だって」
「うふふ、そうじゃないわ。うん、やっぱり変わってないや」
「……何か、ちょっと不満」
　何となくバカにされているようで不満気なクリュウだったが、そんな彼の様子を見て楽しそうに笑っているフェニスの姿を見ていると自然と頬が緩んでしまう。彼女もきっと、かつての学友とこうして再会できた事を喜んでいるのだろう。それはクリュウも同じだ。フェニスとはあまり関わった事はなかったが、それでもこうしてお互いの事を話せる仲ではあった。だからこそ、彼女と話していると楽しいのだ。
　一方、そんな二人の会話に入る事のできない四人の恋姫はというと……
「むぅ、何だか除け者にされている気分です……」
「……あの女、調子に乗り過ぎ」
「まぁそう言うな。久しぶりの再会なんだ。少しくらい大目に見てやれ」
「シルフィード。あんた平然に振舞ってるみたいだけど、さっきから全然落ち着きがないんだけど」
　程度はどうであれ、皆不満そうな表情を浮かべている。四人にとって、フェニスの口から飛び出すのは自分達の知らない彼の姿。気には

なるも、決して話題の中には入っていけないのだ。
　すると、そんな羨ましげに自分達を見詰めている彼女達の視線に気づいたフェニスはにっこりと微笑むと再び彼に向き直って話題を変えた。
「ここからアルトリア城まではまだ少し時間が掛かるわ。その間に、卒業後のクリュウ君の話でも聞かせてもらおうかしら？　特に、あの子達との出会いの話とかね」
「え？　べ、別にいいけど」
　突然話題が変わった事に戸惑うクリュウに対して話を振られたフィーリア達は一斉に驚いたようにフェニスを見る。すると、そんな彼女達の視線に対してフェニスはにっこりと優しく微笑んだ。
「ごめんなさいね。あなた達もこっちに来て一緒にお話しましょう」
　優しげな笑顔と共に彼女達も参加できる話題を提供するフェニス。この時、四人全員がフェニスの事を『いい人』だと感じ、感謝したのは言うまでもないだろう。
　アルトリア城へ着くまでの間、六人の会話は途切れる事なく続いたのであった。
　竜車の隊列は静かに街中を通過してき、街の中心部にあるアルトリア城の堀、通称『女神の泉』と呼ばれる湖の畔へと出た。アルトリア城はアルステェリアと違い正面から伸びる一本の橋でしか入る事はできない。その正門は大きな門で守られ、多くの衛兵が門を護衛している。ここもアルフの手腕で難なく通り抜け、いよいよアルトリア城へ続く橋へと入る。
　ゆっくりと石橋の上を渡る中、近付く巨大な城を前にしてクリュウの緊張は膨れ上がっていた。自然と握る拳が震え、頬を嫌な汗が流れる。だがそんな彼の手をそっと誰かが上から手を重ねた。ハッと見れば、自分を心配そうに見詰めているフィーリアと目が合った。
「フィーリア……」
「大丈夫です。私達がついていますから」
　そう言って彼女が振り返った先を見れば、同じように心配そうな瞳で自分を見詰めているサクラ、シルフィード、エレナの三人の仲間。

そしてフェニスと目が合った。
「緊張するな、という方が無理かもしれんが。別に女王に謁見する訳でもあるまい。おそらくは法務大臣の滞在許可申請くらいだろう。そう肩に力を入れる事はないさ」
「……大丈夫。クリュウは私が守る」
「お願いだからさサクラ。あんた衛兵相手に荒事なんて起こさないでよね」
「エアさんの言う通りよ。お父様は農林水産大臣だから、外国人の滞在に対する権限はないの。まぁ、事後承諾だからお父様も私も相当お叱りを受けるでしょうけど、レキシントン家はそういう事あまり気にしない一族だから」
自分を気遣う五人のそれぞれの言葉にクリュウは彼女達の優しさを感じた。
「ありがと。そうだよね、大丈夫だ」
自分を納得させるように一度そうつぶやくと、皆を心配させないように笑顔で振る舞うクリュウ。本当はまだ不安はあるし、拳の震えは止まらない。それでも、重ねられたフィーリアの手のぬくもりが、少しずつその不安を和らげてくれる。
ここにいる皆は自分の為にこんな異国までついて来てくれた、自分の為にお叱りを受ける覚悟でこうして手引きしてくれた。本当に感謝してもし切れない。だからこそ、皆の期待に応えるように自分は決して俯いてはいけない。例えその背中が情けなく震えていても、決して目を逸らす事なく前を向いて立ち続ける事は、彼女達の期待を裏切らない事だから。
迫り来るアルトリア城を前に、クリュウは不安と期待が入り混じった複雑な気持ちに胸を痛めながらも、決して目を逸らす事だけはしなかった――その胸に掛けられた金色の飛竜を描いたペンダントが静かに揺れた事は誰も知らない。
アルトリア城中枢にある女王の間。ここにはこの国を統治する女王が常にその玉座に身を置き、家臣達の進言を聞き入れては最終的な判断を下す、言わばこの国の政治の最終判断を行う場所。アルトリア

にとって、ここでの決定は国の決定となる重要な場所だ。そこへ通されたアルフは苦笑を浮かべていた。思った通り、自分を待っていたのはお叱りの言葉であった。
「レキシントン農林水産大臣。此度のあなたの度を越えた越権行為は、とてもじゃないが看過できるものではありません」
そう冷静な声で怒鳴るのは他国では宰相に匹敵する、アルトリアでは実質ナンバー2の権限を有し女王を補佐する国務大臣である総軍師の任を受けているジェイド・クルセイダー勲功爵。飾り気のない軍服に灰色の髪、右目にモノクルを掛けた碧眼の青年だ。
玉座の隣に控えるジェイドは階段の下に跪いて報告するアルフを叱責していた。
「お前、いつからそんな大胆な事をするようになったんだ？」
おかしそうにからかうのはアルフの隣に立つ立派な口髭に聖騎士団の制服を身に纏った筋肉巨漢の大男。アルフの古い友人の一人であり、現在は聖騎士団の総団長を拝命しているオメガ・デアフリンガー男爵。
「笑い事じゃありませんデアフリンガー総団長。これは由々しき事態です。我が国に外国人を招き入れるなど《栄光ある孤立》を掲げる我がアルトリアに泥を塗る蛮行も同義。しかもそれを、大臣自ら扇動するなど国賊行為と言っても過言ではありません」
難しい言葉を並べてアルフを叱責するジェイドだったが、そんな彼の方を豪快に笑いながらオメガが雑に叩いた。大柄な彼の一撃は重く、ジェイドのような体格では簡単によろめいてしまう。
「そう難しく考えるな。聞けばその外国人はかつて娘の腹心だった少年らしいじゃないか。友達が遊びに来た、それくらいの考え方で良いのではないか？」
「なりません。大陸と必要最低限の関わりしか持たない我が国が大陸人を招き入れるなどという行為自体が問題です。さらに言えば、形式的とはいえ彼らは農林水産省の外部参考人。一つの省が外国人の国内入りを認可したという異常事態。謀反に等しい行いです」
ジェイドの断固譲らない発言にオメガはやれやれと具合に大きな

肩幅を揺らす。
　アルトリアはかつての戦乱期に大陸に侵攻され掛けた経験を持つ。その為に大陸諸国をあまり快くは思っていないのが現状だ。しかしジェイドは積極的にエルバーフェルドとの経済協定を結ぶなど大陸諸国とある程度の交流は必要だとする意見を持っている。これほどまでに彼が反対する理由は、イリス女王は圧倒的な民衆の支持率を背景に国政を行なっている為、ここで民衆が反発するような外国人の入国許可を認可できないという立場の為だ。
　もう少し落ち着いた時ならばまだしも、昨今貴族院議長のオスカー・クロムウェル公爵が複数人の大臣を抱き込んでイリス女王やジェイド総軍師の国政を妨害するなど、現在のアルトリアは一枚岩ではない。その時期にクロムウェルに弱味を握られるような行いはできるだけ避けたいというのがジェイドの本心だった。
　アルフとジェイドの交渉は続くが、どちらも意見を曲げないので話は平行線のままだ。さらに言えばアルフは女王派の人間なので基本的にはジェイドの指示に従う事が多いが、今回だけはジェイドに一歩も譲ろうとはせず、なかなか決着が見えない。
　時間にして十分程経過した頃、これまで黙って事の成り行きを聞いていた人物が動いた。玉座を挟んでジェイドの反対側の席に腰掛けていたのは白っぽいクリーム色の長髪に凛とした碧眼が特徴の若々しい貴婦人、枢密院議長を務めるアルカディア・ヴィクトリア大公。アルトリアでは実質ナンバー3に値する人物だ。
「ジェイド。ここは私に免じて許してもらえない？」
「ヴィクトリア枢密院議長……しかしですね……」
「――シグマ、フェニス、そしてアリア。私達の娘の友人が、わざわざこんな遠い国にまで来たのよ。親として、そんな芯の強い友達を追い返すようなマネはできないわ」
　アルカディア――アルカの言葉にオメガも「そうだ。我がデアフリンガー家は《友は死ぬまで大切にしろ》という志を持つ。ここで追い返せば我が一族末代までの恥だ」と無駄に大声で断言する。そんな彼にバンバンと肩を叩かれて苦笑を浮かべるアルフも「バカ親三人の願

い、聞き入れてもらえますか?」と最後のお願い。
女王派の強い後ろ盾三人の嘆願にジェイドはより一層表情を難しく歪める。敵対勢力に弱味を見せたくはないが、同時に味方の士気を失うのもまた避けたい状況だ。難しい決断に沈黙して考え込む。
「――オメガの言う通りじゃ」
不気味な沈黙の中、凛としたその声はまるで波の経っていない鏡のような水面に一滴の雫を垂らしたかのように波紋状に広がった。全員の視線が一点に――玉座に注がれる。
大きな玉座に腰掛けているのは、その玉座に対してあまりにも小さな体の君主であった。
銀色の美しい長髪に凛とした意志の強い碧眼。顔立ちはまるで人形職人がその人生の大半を心血注いで造形したかのような美しさで、肌は白く陶磁器のよう。触ればきっとマシュマロのように柔らかく、ほのかに甘い香りが漂って来そう。今はまだ幼い印象が強いが、数年後には大陸中に知られるような美少女になる事が期待できる片鱗がすでに表れている。
彼女こそ現アルトリア王政軍国君主、イリス・アルトリア・フランチェスカ女王陛下。御年十二歳の少女王だ。
凛とした鋭い瞳で眼下に並ぶ家臣達を見渡し、静かに言葉を放つ。
「友は大切にするべきじゃ。それを追い返すのは、アルトリア人としての恥。その恥を晒す方が、民の信頼を失わせるものではないか?」
「しかし陛下……」
「良い。ジェイド、その大陸からの客人を我が国の国賓として招き入れるのじゃ。滞在中の衣食住はこちらで提供するよう取り計らえ。全責任は妾が持つ」
「……仰せのままに」
ジェイドはまだ不満のありそうな感じではあったが、それでも敬愛する陛下の命令に対しては不服を申す事はなくそれに従う。すると、それを見守っていたアルフがおずおずと挙手した。
「いえ、客人は私の家で預かりますので、そこまでされなくても……」
「構わん。それに――」

途端、これまで威厳に満ちていた少女王の表情がフニャッと和らいだ。その変化は初めて見る者は驚くかもしれないが、ここにいる全員は彼女のこの《本当の姿》を知っている。歳相応の、かわいらしい少女としての姿を……

「――妾もその大陸人に興味があるのじゃ。娘達に会わせ落ち着いたら、一度妾の元まで連れて参れ」

そう言って、イリスは無邪気に微笑んだ。

――その胸元で銀色の飛竜を模したペンダントがキラキラと光輝きながら静かに揺れていた。

第１６９話　友と再会　豪快な笑顔と共に現れる勇ましき暴風娘

時は少し遡って、アルフが女王の間で叱責されている頃。アルフの指示でクリュウ達は客間に通されて彼の帰りを待っていた。
今ここにいるのはクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィード、エレナの五人。フェニスはアルフと同時に野暮用があるからと去っていた。
クリュウ達は通された客間でゆっくりくつろぐ手はずになっていたが、実際はその客間のあまりの豪勢さに呆然としていた。
「……チッ、これだから貴族やそれに類する生き物は嫌いなのよ」
舌打ちして部屋の装飾品を見ながらサクラは悪態づく。その言葉を背中に受けたフィーリアがビクリと震えた事に彼女は気付いていないだろう。
「エムデン宮殿は外見に反してずいぶんと質素な宮殿だったけど、ここは外見通り豪勢な内装が目立つわね」
「アルトリアは蒸気機関を用いた工業品の他、海上拠点としての役割による収益で相当に豊かな国と聞く。おそらく、王族がこのような豪勢な事をしても国民が反発しないだけ国民も豊かなのだろう」
感心半分呆れ半分という具合でつぶやくエレナの言葉にシルフィードが持てる知識で推理を披露する。実際は彼女の言う通り、アルトリアは国全体が豊かなので王家が多少の無駄遣いをしても反発が起きないのだ。財政面においても、この国は桁外れなのだ。
室内の豪勢さに話題を見出して会話する女子達の間、クリュウだけは終始無言であった。常日頃何かとこういう会話には入る事の多い彼らしくない。それを不安に思ったフィーリアがそっと彼の横に腰掛けた。
「あの、クリュウ様大丈夫ですか？」
「う、うん。平気だよ。大丈夫だから、心配しないで」
笑顔で答えるクリュウだが、その笑顔にいつもの輝かしさはない。

無理して笑っているのが丸わかりだ。ウソのつけない彼らしいドジだが、今はむしろその無理している姿がフィーリアの心を痛めた。
本当はもっと彼の支えになってあげたい。でも今回ばかりは自分のできる範囲を超えてしまっている。支えになってあげたくても、自分にはその手段がない。そのもどかしさに、フィーリアの表情も自然と暗くなってしまう。
そんな二人の様子に気づいたエレナがそっと二人の背後から近寄ると、両手で同時に二人の頭を掴むと、ワシャワシャと乱暴に髪を掻き乱した。
「ひゃあッ!?」
「な、何するんだよエレナッ！」
「なぁに辛気臭い顔してんのよ。らしくないわよ」
イタズラっぽく笑いながら二人の頭を散々掻き乱しながら言うエレナを見てシルフィードとサクラは同時に小さな笑みを口元に浮かべた。実に彼女らしい荒っぽいやり方だ。
パッと手を離すと、フィーリアはグチャグチャになった髪を慌てて直し、クリュウは振り返って「いきなり何するんだよ」とエレナに不満気に言葉を吐く。だがエレナは気にした様子もなく「あんたがあんまりにも情けない顔してたのが悪いのよ」と無茶苦茶な言い分を言ってみたり。
「な、何だよそれ……」
「いいから。んな辛気臭い顔されてちゃこっちの息が詰まんのよ――いつものあんたらしく、あんたは笑ってればいいのよ」
その言葉にハッとなって振り返れば、フィーリアだけではなくシルフィード、サクラも自分の方を見詰めている事に気づく。どちらの視線も、自分を心配しているのが見て取れた。それを見てクリュウは大きくため息を零すと、気持ちを切り替えるように今度こそ自分らしい笑顔で彼女達を迎える。
「ご、ごめんね。心配掛けちゃって、ちょっと考え事してただけだからさ。ほんと、心配されるような事じゃないから」
「そ、そうか？　なら構わないのだが……」

「……クリュウ、大丈夫？」
「平気だよ。ごめんねサクラ」
「……心配。今日、夜添い寝して――」
「――調子に乗るなセクハラ娘」
抱きつこうとするサクラの頭にチョップを入れ、ため息と共に呆れ果てるエレナ。頭を摩りながら文句を言いたげなサクラの視線を無視し、クリュウの額にデコピンをかます。
「あたッ！」
「紛らわしい事してんじゃないわよ。まったく、事が事だけにみんな不安なんだから」
「ご、ごめん……」
申し訳なさそうに謝るクリュウだが、それを遮るように再びエレナは容赦なく彼の額を指で小突いた。
「だぁから、辛気臭い顔すんなって言ってんのよ」
「ご、ごめ……うん」
「……ったく、世話焼かせんじゃないわよバカ」
厳しい口調で言うものの、その表情は先程までとは違いどこか明るい。本人は否定するが彼を心配していた身としては、いつもと違う彼の様子が心配するような事ではないとわかってほっとしているのだ。
「だが、何をそんな顔して考え込んでいたんだ？」
「いや、大した事じゃないんだ。うん、もう平気だからさ」
「そ、そうか？　ならいいのだが」
シルフィードはまだ疑問が残っていてもそれ以上は問いかける事はしなかった。本人が話したくないのなら、無理に聞き出すような事は彼女は決してしない。
「……クリュウ、平気？」
「大丈夫だよ。サクラもごめんね、心配掛けちゃって」
「……うん。でも、無理しないで」
サクラの言葉にうなずき、クリュウは気持ちを切り替える事にした。まだ解決した訳ではないが、それでもとりあえず解決する兆しも見えない為、ここで悩むのは諦めたのだ。

クリュウの表情が幾分か穏やかになったのを見て今度こそ彼の様子を心配していた少女達は一様に安堵の息を漏らした。皆彼の様子がおかしい事に緊張していたのだ。

皆が自分の事を心配していたと気づくと、クリュウは首を横に振って邪念を飛ばす。今回の騒動の当事者たる自分がここで弱きな姿を見せれば、皆の不安を煽ってしまう。決して、自分の弱い所を彼女達に見せてはならない――そう思っていたが、実際は自分のそんなウソはまるで通じず、皆の不安を煽ってしまった。

だが、エレナは言った。いつもの自分らしくしろ、と。

難しい事を考え過ぎるのは自分の悪い癖だとは自覚している。楽観視しろとまでは言わないが、それでも無駄に考え過ぎるのはやめよう。次のステップにどう進むかという問題は片付いてはいないが、それでも今は彼女達の信頼に応えよう。そう決意した。

その時、突然部屋のドアがノックされた。クリュウが答えると「私よ、開けてもらえるかしら？」と優しげな声が扉の向こうから響く。フェニスの声だ。

ドアを開けようと腰を浮かした途端「私が行きます」と率先してフィーリアが動いた為に少し浮いた腰をクリュウは再び下ろした。

ドアに近づいたフィーリアはそっとドアを開いてフェニスを迎え入れた。笑顔でお礼を言いながら優雅に入って来るフェニス。その背後にもう一人の人間が居る事は何となく全員が気配で気づいた。警戒しながらその人物の登場を待っていると、ゆっくりと部屋の中にその人物は入って来た。その瞬間、クリュウの目が大きく見開かれた事に恋姫達が一斉に気づいた。

美しい紫色の髪を凛々しくポニーテールに纏めた少女だった。凛々しく勇ましい、自信に満ち溢れた顔つきも。常に勝気で煌く紫色の瞳も。その圧倒的な存在感と猛々しさもまた、あの頃と何ら変わらない――いや、むしろ以前よりも幾分か大人へと近づき、よりかっこ良く、そして美しくなったかもしれない。その豪快さと美しさから、かつて周りから《炎の女神》と称された少女。

ニッと口端を吊り上げ、凛々しい笑みを浮かべながら少女は驚くク

リュウに近づくと、突然彼の首に腕を回して引き寄せ豪快に笑った。その無作法さというか、豪快さもまた懐かしい。
「よぉ、久しぶりじゃねぇかクリュウ。元気にしてたかぁ？」
「痛い痛いって……ッ」
嬉しさのあまりか、妙に力強く抱き寄せられたせいで首が締まりクリュウはギブギブとばかりに彼女の背中を叩く。少女が「おっと、いけね」と解放すると、クリュウは「まったく、君は相変わらずだね」と苦笑と共に変わっていない彼女の印象を口にする。
改めて彼女に向き合い、クリュウは笑顔で彼女を出迎えた。
「久しぶりだね――シグマ」
「おうよッ。卒業以来だから一年以上ぶりか。テメェもあまり変わってねぇな」
そう言って屈託なく豪快に笑うのは、彼がドンドルマのハンター養成訓練学校在学中にクラスを巻き込んで何度もライバルと壮絶な戦いを繰り広げ、五年生の時には敵クラスの委員長として、最後の学年では自分と同じFクラス委員長として奮闘し、何度もクリュウ達の危機を救ってくれる同い年だが頼れる姉御。共に青春時代を切磋琢磨し合った大切な学友――シグマ・デアフリンガーであった。
「ハッ、軍上層部も大騒ぎだぞ。突然外国人が我が国の飛行艦に乗ってやって来たってな。んな大胆不敵な事をするのはどんな連中かと思ったが、まさかテメェだったとはな。まぁ、テメェならこれくらいの無茶はやりかねねぇけどな」
「まぁ、学生時代散々無茶したからね。でもそれはシグマだってそうでしょ？」
「ハハハッ、違いねぇ」
豪快に笑いながらシグマはクリュウの背中を勢い良く何度もバンバンと叩く。クリュウはその威力に眉を顰めるが、同時にこれが彼女のスキンシップだと知っているので我慢するしかない。ただ、昔より腕力がついたのか以前よりも痛いが。
苦笑しながら彼女の過剰なスキンシップに耐えていると、ズイッと二人の間に割り込む者がいた。

「お、何だこいつ？」
「さ、サクラ？」
「……気安くクリュウに触るな、殺すわよ」
　クリュウとシグマの間に入って彼女を押しのけ、その鋭い隻眼に睨みつけるサクラ。彼女はこれがシグマ流のあいさつだと知らないが故に、彼女の行いを暴力行為と認定して止めに入ったのだ。その点は実に思いやりのある行動なのだが、問題はその容赦が無さ過ぎる発言だ。
　いきなり初対面の相手に「殺す」発言され、さすがのシグマも目を白黒させる。その横ではあちゃーとばかりにクリュウが頭を抱え、シグマの背後ではフェニスがおかしそうに笑っている。
「クリュウ、誰だこいつ？」
「えっと、サクラって言って、今の僕のチームメイト」
「……サクラ・ルナリーフ。クリュウの嫁よ」
「何どさくさに紛れて大ほらを吹いてやがりますかッ！」
　間髪入れずにフィーリアが怒りながら間に割って入って来た。邪魔をされて舌打ちするサクラに詰め寄って怒る彼女の姿を見て混乱に余計拍車が掛かって呆然とするシグマに、クリュウはため息と共に彼女を紹介する。
「この子はフィーリア。彼女も僕のチームメイトだよ」
　さりげなく紹介されたのを見てフィーリアは慌てて姿勢を正して一礼した。一瞬慌てふためいたとはいえ礼儀正しく一礼する彼女に合わせてシグマも戸惑いながら礼で答える。
「……何か調子狂うな。まるでシャルル達を相手にしてる時みたいだ」
「まぁ、性格は全然違うけどあの頃みたいに騒がしいのは変わりないから」
　苦笑しながらそう言うと、クリュウは改めてちゃんと自分の仲間達を紹介した。サクラ、フィーリア、シルフィード、エレナの順でフルネームと自分との関係を説明する。まぁ、当然彼の関係説明に乙女達は不満を抱くが、今は胸の奥に押し留めている。

一通りの説明を終えると、待ってましたとばかりにシグマは盛大なため息を零した。
「……お前、一年経っても相変わらずだな。神様ってものがいるとしたら、テメェは好かれてんのか試されてんのかわかんねぇぞ」
呆れ果てるシグマのセリフにクリュウは意味がわからずに首を傾げた。その反応を見て彼が全くの無自覚であると再認識すると、今度はフェニスの方へ向き直った。するとフェニスはお手上げとばかりに肩を竦ませる。そしてもう一度ため息を零し、
「ったく、アリアが苦労する訳だぜ……」
「……だから、何で話の途中途中でアリアの名前が出て来る訳？」
何気なく疑問を投げ掛ける彼の声に再びため息を零すも、気を取り直してシグマは威風堂々と客人の前に立ち塞がった。自信に満ちた勇ましい表情は、あの頃と変わらず輝き、美しい。
「名乗られたからには俺も名乗るぜ。俺はシグマ・デアフリンガー。クリュウとはドンドルマのハンター養成訓練の同級生で、時には腹心として、時には敵として共に切磋琢磨し合った仲だ」
そう名乗ってシグマは豪快に笑いながらクリュウの背中をバシバシと叩く。その衝撃にクリュウはよろけて咳き込む。それを見てフィーリア達の表情が険しくなったのを見て、シグマは今日何度目かわからないため息を零した。
「……こりゃ、学生時代よりも状況が混沌としてるな」
「あ、そういえばシグマ。君エルとはその後どうなの？」
「ぶほぉッ!?」
突然思いもよらぬ人物の名前が出た事にシグマは激しく咳き込んだ。「だ、大丈夫？」と心配するクリュウの首根っこを掴んで真っ赤になった顔で叫ぶ。
「テメェ……ッ、何でここであいつの名前が出て来やがんだッ！」
「え？　だ、だって学生時代仲良かったから……ほら、君だって妹みたいに可愛がってたみたいだし」
「う、うるせぇッ！　エルと俺は何でもねぇって言ってんだろうがッ！」

「えぇッ!?　何でそんなに怒るのッ!?」
「うふふふ、クリュウ君って本当にすごい子ね。何でこう絶妙に爆弾を爆破できるのかしら」
　ものすごい剣幕でシグマに怒鳴られるクリュウは至近距離での大爆音に耳をやられたのか、クラクラしながら彼女のされるがままガクンガクンと激しく首を前後に振る。そんな二人の様子を楽しげにフェニスは見守っていた。
　ようやく解放される頃にはフラフラと力なく後退し、慌ててシルフィードが支えて何とか倒れずに済んだ。そんな彼を一瞥し「フンッ」と鼻を鳴らしてシグマはそっぽを向く。だが次の瞬間大きく目を見開くと、再び気を失いかけているクリュウを凝視した。その瞳はまるで信じられないものを見る目だ。
「お、お前……それ、レウスシリーズか？」
「……シグマ、気づくの遅過ぎ」
　呆れ声と共にため息を零すフェニスの言葉を無視し、シグマは目を丸くしてクリュウの装備を見詰める。
「ま、間違いねぇ。これはレウス装備だ……クリュウお前――これどこで盗んで来た？」
「いきなりそれッ!?　君の中での僕の評価ってそんなに低いのッ!?」
　一瞬前までは気を失いかけてフラフラとしていたとは思えない鋭いツッコミ。観衆がいたら拍手が湧きそうな見事な切り替えの速さだ。さすが数少ないツッコミ役と言った所か。そんな彼の背後では彼の勇姿を頬を赤らめながら見詰めるサクラが「……かっこいい」と漏らし、エレナが「あんたのかっこいい基準って……」と少々呆れていたり。
「これは僕の所有物だよッ！　ちゃんとリオレウスを討伐して作ったんだッ！」
「……でもよぉ、お前学生時代実技は凡だっただろ？　それにいくらクリスティナの野郎クラスの天才でも、さすがに一年じゃリオレウスは無理だろ？　それにお前、ウソつくの下手だったろ？」
「そ、それは……ッ。な、何というか、その……仲間に恵まれてた……

から？」
「……寄生か？」
「だからぁッ！　どうして君の中の僕の評価はそうも人間として最低の部類になる訳ッ!?　当たらずも遠からずだから余計に傷つくわッ！」
　シグマのボケというか、容赦のない物言いにクリュウのツッコミの才能が全力開花する。これほどまでに彼のツッコミの才能が全力で使われる事はいつ以来か。何となくだが、彼が生き生きしているように見えるのは気のせいだろうか。
　すると、そんな彼の様子を見ていた恋姫達の表情が一斉に曇った。なぜかと言うと……
「クリュウ様のツッコミの能力が存分に発揮できないのは、私達が不甲斐ないせいでしょうか？」
「……嫁として、夫を立てられない自分が情けない」
「いや、あんた達のボケは少し自重しなさいよ」
「エレナの言う通りだ。パスというのは適度な速度で送るものであって、毎回豪速球で送られても手に余る。特にサクラはな」
　とまぁ、クリュウのツッコミ能力を存分に発揮させられない自分達の不甲斐なさを嘆いているのだが、エレナとシルフィードの言う通りこの四人のボケ（特にサクラの）はかなり濃い内容なので、クリュウが数を捌き切れないという事情がある。その点ではシグマなどのボケは威力も連射速度も手頃と言えるだろう。
　そんな乙女達の会議を背後にクリュウは必死になってシグマとこれまで特に訊いて来なかったフェニスに説明する。まぁ、説明すればするほどに三人の猛者の実力が目立ってしまうので、最終的にシグマが至った結論が「いや、それ寄生と言っても過言じゃないぞ」との一言で寸断された時は、さすがのクリュウも膝から崩れ落ちた。
「……まぁ、必至に弁明しても結局はそうなんだけどね」
「いや、今の冗談だから。お前がそういう人間じゃないって事はわかってるからさ……だからそんなに落ち込むなって――っていうか、早くテメェが立ち直ってくれねぇと俺がお前の仲間に殺されそうな

んだが」
　落ち込むクリュウを何とか立ち直らせようとするシグマの頬を嫌な汗が流れる。背後から身を貫くような八つの瞳が彼女のタフなはずの心臓を縮めていた。そんなあまり見慣れぬシグマの姿を、フェニスは楽しげに見詰めている。
　クリュウがようやく立ち直ると、シグマはわざとらしく咳払いして話題を変える。
「国に戻ってからは親父の言う通りに従って軍に入り、今は聖騎士団の団員って訳さ」
　今の自分を見よとばかりに自信満々の表情でシグマは仁王立ちした。
　よく見れば彼女の服装はただの服ではない。戦闘の際に身を守る戦闘服だ。
　それはハンターの防具を全身くまなくを硬いモンスターの素材で守る鎧と例えるなら、それは必要最低限の場所にのみ鉄製の装甲を施した装甲服と言うものだろう。利き腕の逆の左肩と胸に装甲板を構え、腕にはガントレット、足は鉄製の軍靴。腰回りに布製のスカートを穿いている所は遊び心かもしれないが、その下の腰回りにも鉄製の装甲が施されているのがわかる。動きやすさを追求した軽装備の出で立ちだ。国によって多少デザインは変わるが、一般的な兵士の野戦服はこのようなデザインである。
　だがこのような軽装備でも、ハンターの装備での動きを見ればわかるが大した違いはない。これには事情があって、モンスターの素材の加工技術ではハンターズギルドが世界一の技術力を誇る。しかもその技術を独占し、外部に漏らす事を徹底的に禁止している事から諸外国はモンスターの素材を用いた技術力は低く、とてもハンターの防具のような優れた能力を持つ防具など作れない。それを鉄製に代用すれば同規模の防御力を持つ事はできてもその重さから身動きが取れなくなってしまう。その他、モンスターの攻撃のどれもが一撃で死に至る可能性を持つ事から、転倒や衝突から守る最低限の防御力を備えれば良いという事から、こうした軽装備が軍では主流となっているの

だ。
　クリュウ達は知らないが、何の装甲も施していないエルバーフェルドのカレンのような軍服は正装と言う正式な場などで使う軍服であり、彼女が纏っているのは実戦で使う野戦服と呼ばれるもので、下士官クラスまでなら正装を施す場合以外は基本的にこれが通常服となる。
「と言っても、俺は普通の軍人とはちょっと異なるけどな」
「どう異なるの？」
「うん？　普通の軍人は基本的に敵対勢力との交戦を主とする、要するに人と戦うもんだ。だが俺は親父直轄の対モンスター戦を主とする第七聖騎士団っていう特殊部隊に属してるんだ。まぁ、普通の軍人よりはハンターに近い部類になるな」
　エルバーフェルドでのエルディン率いる独立歩兵師団や、アルトリアでのシグマが所属する第七聖騎士団など、先進国の間では外敵勢力と戦う軍隊の中に、こうした対モンスターを専門とする部隊を昨今編成するようになった。それまでは人とモンスター区別なく軍隊が討伐を行なっていたが、皮肉にも敵を撃破する為の兵器や戦法という概念が進化した事によってモンスターとの戦闘と大きく戦い方が異なった為にこうしてモンスター専門の特殊部隊が必要とされるようになったのだ。
「チームとかってあるの？」
「ハンターのようなチームって単位じゃないが、一応聖騎士団じゃ一分隊四名編成にはなってるな」
　分隊とは軍における最小の部隊単位であり、国によって異なるが大体一分隊四人編成となっている。これは四人という人数が戦闘、役割、人間関係などで最も理想的な人数とされているからであり、一説にはハンターズギルドの人数設定もジンクスなどではなくハンターの能力を最大限に発揮できる人数を四名としているからとも言われている。
　ハンターは軍隊で言う所の分隊が基本編成であり、一度の狩りに最大四人までしか参加はできない。だが軍隊では実際一度の討伐作戦

では戦闘部隊として歩兵一個中隊（約一〇〇名）に火砲による火力支援を行う砲兵部隊と陣地形成及び補給物資の管理を行う支援部隊の各一個小隊（約二〇名）、治療を行う医療部隊一個小隊（約十名）の計一五〇名程が投入される。これはエルバーフェルドの独立歩兵師団でもほとんど同じような編成となる。

国によって多少の編成人数の違いはあれど、平均して一個師団（この世界における軍隊の最高部隊単位。アルトリアでは一つの聖騎士団に該当）約三〇〇〇～四〇〇〇名で編成される。

一回の狩り（リオレウスなどの飛竜種を基準とする）に実戦部隊（歩兵・砲兵を含む）一〇〇人以上を投入する。ハンターからしてみればまるで古龍迎撃戦のような人数だが、これが一般的な軍隊の討伐隊の編成だ。そもそもハンターというものを職業としている人間達が異常な存在なのだ。巨大な飛竜相手に最大四人で戦いを挑むなど、普通は考えれない。そういった連中が軍隊という組織を作るのだ。

装備品の加工技術、特殊訓練による高度な人材育成、そして個人の驚異的な戦闘スキル。どれをとってもドンドルマ、つまりハンターズギルドは桁が違う。対して軍は多人数による連携攻撃と遠距離からの火力支援の二つを主として運用する組織力で対抗しており、その結果こうした大規模な編成が行われているのだ。

だが、結局は対モンスター戦の装備が貧弱なのは軍隊という組織が本来は人を相手に戦う組織だからというのが一番の原因だ。より遠距離から火砲によって殲滅する事を目的としているので、兵士の防具に対する技術革新が進んでいないのが現状だ。

「俺も一応国内で保護区域から漏れ出たリオレウスの討伐作戦に参加した事はあるけど、その頃の俺はまだ新人だったから前線に立たせてもらえなかった。が、距離を置いた場所で暴れ狂うリオレウスの恐ろしい姿は十分見れたけどな」

保護区域とは特定生物生息保護区域の通称で、文字通りモンスターの生態を守る為に人間が立ち入らない自然を残した地域の事を示す。この中でならモンスターがどれほど暴れようが人間の介入する事ではないが、人間の線引きなどモンスターにとっては無意味なものであ

り、よく保護区域から漏れ出すモンスターもいる。主に第七聖騎士団はこの漏れ出たモンスターの討伐を主としているのだ。
「じゃあ、シグマは卒業してからハンターとして戦った事はないの？」
「そんな事はないぞ。ランポス程度の撃退なら分隊単位で任務を請け負う事もあるから、聖騎士団の中で分隊を組んでる三人とはよく出撃するし、スケジュールさえ合えばフェニスとアリアと一緒に狩りに出掛けてたな。イャンクックやダイミョウザザミは簡単に倒したし、俺達で一番の獲物と言ったらバサルモスだな」
「バサルモスかぁ、うん今思い出しても厄介な相手だったよ」
以前フィーリアとサクラと共に討伐したバサルモス戦を思い出すクリュウ。バサルモスは岩竜とも称され、文字通り岩のように硬い甲殻を持つ事から比較的駆け出しの頃のハンター、特に剣士が大苦戦する事から別名『剣士泣かせ』とも言われる。クリュウも実際に片手剣で戦ったが、あまりの硬さに腕が何度も痺れた苦い思い出がある。
「腕が折れるかって思うくらいに硬いのな、あいつ」
「そうそう。でもって岩に擬態するから見つけるのが面倒でさ」
「火山には爆弾岩があって、俺あれに間違って近づいて爆死し掛けた事もあるぞ」
「あぁッ、僕も爆死し掛けたッ！」
と、バサルモストークで盛り上がるクリュウとシグマ。お互い剣士という事もあり、バサルモスで苦戦した話は出るわ出るわ。そのうちに一緒に参加していたフェニスも入って三人で盛り上がってしまう。
すっかり取り残された形の四人だったが、その中でシルフィードだけはこの状況に首を傾げていた。
確か自分の記憶が正しければクリュウはフィーリアとサクラ、初めて三人で組んだ際にバサルモスの狩猟を行ったそうだ。ならば一緒の狩りを経験している訳だから輪の中に入る事もできるはず。特にサクラなら容赦無くクリュウと話したいから話を割って入る事くらい造作も無いはず。しかしなぜか二人共決して動こうとはせず、しかもなぜか気まずそうに視線を逸らしている。そんな二人の妙な態度に、シルフィードは首を傾げ続ける。

彼女は知らないが、フィーリアとサクラにとって乙女のプライドを傷つけられた上にクリュウに見てほしくない姿を見られまくったババコンガ戦と、クリュウを奪い合って対立し取っ組み合いの大ゲンカとなってクリュウに激怒されたバサルモス戦は二人にとっては忘れたい、思い出したくない過去なのだ。特にバサルモス戦は自分達のいがみ合いで大失敗し、クリュウを危険な目に遭わせただけではなく、初めてクリュウに本気で怒られた。思い出すだけで二人して泣きそうになる、狩りとは別の意味で死ぬかと思った戦いだったのだ。

一方のクリュウはそもそも自分が危険な目に遭ったはの自分の失態だし、二人がケンカしたのも最初の狩りだったから意思統一がうまくできなかったのだと認識ている事から、全く気にしていない。この辺が、朴念仁と恋する乙女の差といった所か。

そんな感じでしばしバサルモストークで盛り上がる三人に対して、残された四人は気まずい沈黙が漂った。シルフィードは事情を知らないし、エレナも事情はクリュウなどから知っていてもあえて口には出さず、四人とも沈黙が続く。

「あ、そういえばアリアはどこにいるの？」

クリュウ達のバサルモストークが一段落しほっと胸を撫で下ろしたフィーリアとサクラの耳が、クリュウの口から突如飛び出した新たな女の子の名前がキャッチした。その瞬間、二人の恋姫はすさまじい警戒態勢になる。女の勘で、シグマとフェニスはともかく、そのアリアという名の女の子が危険人物だと悟っているのだ。

「アリアには外国人がお前だってわかると同時に伝書鳩を飛ばしておいた。屋敷にいるはずだから、伝書を受け取ってればそろそろ現れるはずだが――っと、噂をすれば何とやらって奴か」

ニヤリと笑みを浮かべながら言う彼女の言葉にクリュウが思わず「え？」と声を漏らした時、突然部屋のドアが勢い良く開かれた。その爆音に等しい音に一斉に全員の視線がドアに集中した。そして、乱暴に開かれたドアの前には一人の少女が激しく肩を上下させながらその場に立っていた。その姿を見てフェニスとシグマは微笑み、そしてクリュウはシグマが登場した時と同じように目を見開く。

腰程にまで伸びたクリーム色の美しい髪に紫色のバラを飾り付けたカチューシャが特徴的の少女。今は共学に染まってた顔もどこか高貴な顔立ちで、気品に満ちている。

貴族らしく優雅に可憐。時に高飛車な態度も取るが、貴族だからと言って平民を見下す事はなく、その分け隔てない性格と面倒見の良さも手伝ってシグマと並ぶ優秀な委員長として最後の学年ではBクラスを率いた、その迅速な指揮と美しさから《雷の女神》とも称された彼女の名は――

「あ、アリア……？」

「く、クリュウ……」

驚愕に満ちた表情を浮かべながら呆然と立ち尽くしていたのは、かつてのクリュウの学友――アリア・ヴィクトリアであった。

第１７０話　一年ぶりの再会　少女の恋心は変わらずより強く

　ドアの前に呆然と立ち尽くすアリアは驚愕に満ちた表情でクリュウを見詰め立っていた。その姿を見て同じように驚くクリュウと、そんな二人の様子を交互に見て何やら意味深な笑みを浮かべるフェニスとシグマ。そして、突然の新たな女の子の登場にフィーリア達は驚きと共に警戒感を露わにしている。
　逸早く驚愕から脱したクリュウは久しぶりに再会した友を前になるべくいつも通り振舞おうと気さくに片手を上げて笑顔で彼女の前に立った。
「久しぶりアリア。元気にしてた？」
　クリュウとしてはその後に腰に手を当てて髪を掻き上げながら「お久しぶりですわね。私がいなくて寂しかったのではなくて？」といつも通りちょっと上からという彼女なりのかっこいいポージングと振舞いで出迎えられるものだと思っていた。だが実際は――
「クリュウッ！」
「あ、アリアッ!?　うわぁッ！」
　貴族らしい振舞いも、プライド高い高飛車な態度もなくアリアは突然クリュウに勢い良く突っ込み、まるで子供が宝物を取り戻したかのように強く彼の体を抱き締めた。
　突然抱きつかれたクリュウは慌てている。その周りではフェニスは「あらあら」と楽しそうに微笑み、シグマは口笛を鳴らして二人を見守る。一方、この突然の展開にまたしても驚き固まるフィーリア達。一人先行してすでにサクラは背にした飛竜刀【翠】を抜き掛けているが、少し遅れて我を取り戻したシルフィードが慌てて彼女の背後から羽交い締めにして取り押さえる。
「あ、アリア？　ちょっと、どうしたのさいきなり――」
　頬を赤らめながら困ったように彼女に声を掛けようと彼女を見た時にようやく気付いた――自分の胸に顔を埋めていた彼女の一瞬見

えた頬を流れる一筋の涙を。
「あ、アリア……？」
「――背、少し伸びまして？」
スッと上に上げられた彼女の手がそっとクリュウの髪を撫でた。驚いて上げた視線を下げると、そこには自分の見知った優しげな笑みを浮かべたアリアの笑顔があった。記憶の中のアリアより少しだけ大人びたように見えるのは、一年という時がクリュウの思い出の中の彼女よりも成長している事を示していた。ただ唯一違う所と言えば、彼女の真っ白な肌に薄っすらと赤らんだ頬を流れる一筋の涙。
「あ、アリア……。もしかして泣いてる……？」
誰が見ても明らかなのに思わず問うてしまう。するとアリアはスッと離れたかと思うと頬を赤らめたまま拗ねたように唇を尖らせて彼を見詰める。
「そ、それは……久しぶりにクリュウに会えたのですもの――ずっと、寂しかったですのよ？」
恥ずかしそうに、最後の方は聞き取れるギリギリくらいの小声になってしまうアリア。きょとんとするクリュウの背後では恋姫達が驚愕から次第に警戒態勢、戦闘態勢へとシフトしていたり、フェニスとシグマの意味深な笑みが濃くなっていたりする。
アリアの言葉に一瞬きょとんとしてしまったクリュウだったが、すぐに平静を取り戻すと表情を苦笑に染めた。
「そうだね。僕もちょっと寂しかったなぁ」
「ちょ、ちょっとッ!? こ、この私（わたくし）と一年も会えなかったのに、ちょっととはどういう了見ですのッ!?」
「お、怒んないでよッ！ もちろんすごく寂しかったッ！」
「……そんな取って付けたような言い方じゃ、嬉しくありませんわ」
フンッとそっぽを向いてしまうアリア。どうやら完全に機嫌を損ねてしまったらしい。どうしたらいいか困るクリュウは思考に集中してしまい目の前の光景が見えなくなる。だから気づかなかったのか、こちらに背を向けるアリアの横顔がチラチラと彼を見ては嬉しそうに赤らんだ頬を緩めている事に。

「おいおい、一年ぶりの再会だってのに味気ねぇなおい」
そう言って二人の間に入って来たのはシグマだ。シグマはクリュウを見て「お前も少しは空気読めよな」と呆れながら忠告を一つし、今度はアリアの方を向いてそっと耳打ち。
「……テメェも何意地張ってやがんだよ。せっかく会えたんだろうが」
「だ、だってクリュウが人の気持ちも知らないで……」
「あいつが情けねぇ朴念仁だってのは今に始まった事じゃねぇだろうが」
「む、むぅ……」
シグマと何事かを話して黙ってしまうアリアを見ながら、クリュウは時折彼女が自分の方をチラチラと見て来る為にどうしたらいいか困ったような笑みを浮かべ続ける。何となく、シグマがこっちを見ながら蔑んだ目をしてるのが気になるけど……
「――コホン」
そのうち話し合いが終わったのかシグマが離れると、アリアはわざとらしく咳払いをすると改めてクリュウの前に立った。クリュウが想像した通りに腰に手を当ててふぁさッと長いクリーム色の髪を手で掻き上げ、優雅なポージング。何というか、アリアは本当にこういう格好を付けた仕草が良く似合う。皮肉でもなく、本当に似合うのだからさすがは貴族と言った所か。同じ貴族でも終始ビクビクしているフィーリアと違って、アリアは常に威風堂々と立ち振る舞う。まさに貴族、という感じの女の子だ。
キッと意志の強い瞳を細める。その視線に射ぬかれたクリュウはとりあえず彼女の次の言葉を待ってみる。
「ようこそアルトリアへ。私達はあなた方を歓迎いたしますわ」
凛々しく、エレガントに、アリアは自信に満ちた声でそう宣言した。が、返って来たのは沈黙。あまりにも唐突過ぎる展開に全員がついて来れていないのだ。そして、自信に満ちた顔は見る見るうちに真っ赤に染まり、
「私に恥を掻かせるおつもりですのぉッ!?」

「その怒りは理不尽でしょッ!?」
　呆れながらツッコミを入れるクリュウの首元を持って、アリアは恥ずかしさを隠すように怒鳴りなら彼の体をガクガクと前後に揺らす。散々サンドバッグのように揺れ終わると、目の前にはまだ恥ずかしそうに頬を赤らめているアリアがこちらを見上げるように睨んでいた。薄っすらまだ涙が残っている瞳ではまるで怖くはないが。
「フン、クリュウは相変わらず紳士的な配慮が致命的に欠落しているようですわね」
「君もかっこつけようとしてスベる所は相変わらずだね」
「な……ッ!?」
「おぉ～いクリュウ。事実だけど今のはシビレ罠な。もうすぐ爆弾が起爆するぞ」
　シグマの冷静な指摘の後、確かに爆弾が起爆した。もちろん、アリアの怒り爆弾だ。
「かっこつけようとッ!?　私は己の信念を貫いてエレガントに振舞っているだけですわッ！　その言い方だと私が無理をしているように聞こえますわねッ!?」
「いや、だって実際無理してるでしょ？　あの妙な高笑いだって時々咳き込んでたし」
「な……ッ!?　そんな事ありませんわッ！　このように、オーッホホホホッ！　オーホホホゲホォッ!?　ゴホォッ！」
「ほら」
「む、むぅ……」
　顔を真っ赤にして、でも言い返せなくて、悔しさと恥ずかしさで泣きそうになる瞳でキッと睨みつけるが、当然そんな瞳じゃまるで効果はない訳であって、クリュウは苦笑しながら「アリアって、相変わらず背伸びしたがるんだね」とあっけらかんと言ってみる。
「せ、背伸びだなんて、私は別に……」
「まぁ、それが君らしいと言えば君らしいんだけどね」
「むぅ……何だか、まるで私の事なら何でも知っているみたいな言い方ですわね。気に入りませんわ」

「これでも一応一年君の参謀を務めてたからね。ずっと見てただけあって他の人よりは君の事を知っているつもりだよ。さすがにシグマやフェニスには敵わないけど」
他意はなく、屈託の無い笑みと共に何気なく言うクリュウのセリフ。その言葉にアリアは「な……ッ!?」と言葉に詰まった後、恥ずかしそうに頬を赤らめながらうつむいてしまう。そして指先を遊ぶようにイジりながらボソリと、
「……ず、ずっと見てた」
その部分だけを口の中で繰り返し、思わず頬が緩んでしまう。
一年ぶりの再会に加えて、嬉しい言葉まで貰ってしまい、実はものすごく喜んでいるアリア。これまではルフィールやシャルルといった強敵に妨害されててあまりアタックはできなかったが、今度こそ自分のターンだ。そう確信し、さらなるステップへと移行しようとした時――彼女は思い知る事になる。今のクリュウの周りにはかつての二大恋姫と同等、もしくはそれ以上の強敵がすでに臨戦態勢になっている事を。
「……調子に乗るな脇役」
「な、何ですってッ!?」
自らを侮辱する言葉に瞳を鋭くさせてうつむかせていた顔を上げると、いつの間にか音もなく自分とクリュウの間に割り込んでいる少女と目が合う。長く艶やかな漆黒の髪を流した人形のように美しい異国の娘。その容姿を見るに、東方人の末裔だという事がわかる。左目に黒い眼帯をし、残る右目は鋭い隻眼となってまるで刃物のように煌き、自分を威嚇する。その瞳の鋭さ、纏う気から只者ではないと察する事ができる――だが、その瞳の奥に燃えている炎は、自分と同じ《恋の炎》だ。
「さ、サクラ?」
二人の間に割って入った少女――サクラは鋭い隻眼でアリアを威嚇しながらクリュウを守るように彼の前面で構える。隙のない構えは、いつでも背負った飛竜刀【翠】を引き抜ける事を示す。
一瞬、サクラとアリアの間で火花が迸った。が、もちろん本当に

迸ったのではなくあくまで比喩表現だ。だが、この表現は決して間違いではなく、二人の視線は今まさに鍔迫り合いを見せていた。
「あなたは？」
「……人に名を尋ねる時は自分から名乗れ。無礼者」
　サクラの容赦のない発言にアリアの表情がビシッと引きつる。プライド高いアリアにとって侮辱は何にも代えがたい苦痛であり、尚且つ目の前で戦闘態勢になっている明らかに自分よりも礼儀というものから逸脱している相手から無礼者扱い。アリアの中で沸々と怒りの炎が燃えたぎる。
「失礼。私の名はアリア・ヴィクトリア。このアルトリア王国で王家の次ぐ血統の由緒正しい貴族、ヴィクトリア家次期当主ですわ」
　こめかみに血管をビキビキと浮かしながらも若干引きつった笑顔であいさつするアリア。誰が見ても怒り心頭という感じだが、サクラはそんな彼女の怒りなどどこ吹く風。クールな振る舞いのまま至極簡潔に「……サクラ・ハルカゼ」と名前だけを名乗る。
「ハルカゼさん、でよろしいかしら？」
「……好きに呼べば。私は貴様の事など眼中にない」
「な……ッ!?」
　驚愕に染まるアリアと、一切表情を変えずに憮然と対峙するサクラ、そしてそんな二人のやり取りを見ながらややこしい事になったなぁとため息と共に頭を抱えるクリュウ。するとそんな彼に向かって当然のようにアリアの怒号が飛ぶ。
「クリュウ、何なのですのこの無礼なお方はッ!?」
「……あぁ、サクラはそれが素なんだ。その、ちょっと取っ付きづらいかもしれないけど、根はいい子だから」
「信じられませんわッ！　初対面を相手にこの無礼極まりない言動からどう真実の姿を受け取れとッ!?」
　アリアの疑問は当然だ。こんな無茶苦茶な子相手に「本当はいい子なんだよ」と言われても信じられる訳がない。そろそろ本気でサクラには自身の第一印象の悪さを直してもらわないといけないだろう。
　クリュウに回答を求めようと詰め寄ろうとしたアリアを、サクラは

「……クリュウに近付くな」と彼女の前に立って行く手を阻む。その瞬間、またしても二人の間で火花が迸った。
「……あぁ、すまんな。こいつはどうにも人と仲良くするという概念が喪失しているらしい。信じられないかもしれないが口は悪いが根はいい奴だ。仲良くしろとまでは言わんが、まぁ嫌いにはならないでくれ」
そう言って大人な振る舞いと共に三人の間に入って来たのはシルフィード。さすがチーム一の常識人だけあってさりげなく会話に入りつつサクラのフォローも忘れない。
「あなたは？」
突然間に入って来たシルフィードにアリアは訝しげに尋ねる。さすがに第一印象最悪だったサクラに比べれば、比較的穏やかな空気が流れる。
「私はシルフィード・エア。一応、クリュウ達のチームのリーダーを引き受けている身だ。まぁ以後お見知りおき、だな」
「よ、よろしくですわ」
サクラとは違った意味で物怖じしないシルフィードのあいさつに、アリアは少し押されながら受け答えする。学生時代はともかく、ここ一年では彼女はヴィクトリア家の令嬢として扱われてきたのだろう。こういう風に家の身分を気にせずに接して来る初見の者が久しぶりなのだ。
「あぁ、それと向こうで仁王立ちしながらクリュウを睨んでいるのは彼の幼なじみのエレナ・フェルノ。その隣で会話に参加したくても糸口が見つからなくて右往左往しているのはフィーリア・レヴェリ。彼女は君と同じエルバーフェルド国の由緒正しきレヴェリ家という名門貴族の娘だそうだ」
登場と同時にさり気なく会話に入れていない二人の紹介も忘れない。しかも彼女の紹介を突破口に残るフィーリアとエレナも近づいてきて会話の輪の中へと入る。個性豊かな面子に囲まれている為か、元々の素質の為か、シルフィードはこうした配慮というか気遣いが実にうまい。そういう所が皆からの信頼に直結しているのだろう。

リーダーという立場が実に彼女によく合っている証拠だ。
「レヴェリ家……聞いた事がありますわ。我がヴィクトリア家よりも古い家柄の、エルバーフェルドの名門貴族ですわね」
　アリアは驚いたように自分と同じ、しかも自分の家よりも古い家柄の貴族の末裔であるフィーリアに興味を持ったらしい。アルトリアは歴史の古い西竜洋諸国の国々に比べればまだまだ新興国の部類に入る。当然、歴史の古いエルバーフェルドのレヴェリ家の方が発祥は古いのだ。
「と言っても、私はそこの三女ですので。家はお姉様が継ぐ事になっていますから、私のレヴェリの名は飾りみたいなものですよ」
　そう謙遜するが、彼女だって立派な貴族の娘だ。それを思い知ったのはついこの間の事だが。
「……そうよ。貴族の名なんて飾り。いいえ、飾りにすらならない意味のないものよ」
　一方平民出身のサクラは自身の壮絶な人生経験から以前自身が言っていたように貴族というものを毛嫌いにしている。当然その物言いは厳しく、アリアの眉がピクリと上がり、フィーリアもまたビクッと身を震わせた。すると、それまでの憮然とした態度から一変してフィーリアの方をチラリと一瞥し、ポツリと零す。
「……貴族の娘なんて無意味なものじゃない。そこのアホの子は私達のかけがえの無い仲間よ」
「え……？」
　驚いて振り返ると、まるでその視線から逃れるようにサクラはプイッと背を向けてしまう。フィーリアからは見えないが、クリュウからだと丸わかりだ――照れているのか、珍しく頬を赤らめて憮然と立つ彼女の姿が。その姿に、クリュウは思わず微笑んでしまう。
「もう、素直じゃないね君は」
「か、勝手に話をしないでほしいですわッ！　人を踏み台にして何をいい雰囲気を作ってくれてやがりますのッ!?」
　一方彼女の言う通り見事に踏み台扱いされたアリアは怒り心頭という具合だ。容赦無くサクラを睨みつけるが、もちろんサクラの鋼鉄

のハートはそんな視線など微々たるダメージにもならない。
まだ会って五分と経っていないのに、すでに険悪ムード全開。どうにもアリアとサクラは相性が悪いらしい。
しばしサクラを憎々しげに睨んでいたかと思うと、ふとアリアは目の前の異常な光景に気がついた。
クリュウを囲むように並ぶのは――どれも美少女ばかり。しかも皆親しげに接している事から、その五人が親しい関係だと見て取れる。さらに言えば、これは彼とそれなりに長い間一緒にいたからこそわかる空気――その五人の関係性がクリュウを中心としたものであり、尚且つ女子全員が自分と同じ気持ちを抱いている事に、気づいた。
それまでのクリュウに向けていた屈託の無い笑顔が引っ込み、再び彼の前に立ったアリアは今にもブチギレそうなのを無理くり我慢して引きつった笑顔で向き合う。
「……クリュウ、この方達との関係性を詳しく教えてもらえます？」
「え？　あ、うん。えっと、フィーリア、サクラ、シルフィの三人が今僕と一緒にチームを組んでくれているハンターで。エレナは前にも言った幼なじみだよ」
そういえば五年生の頃、何気なしに故郷の話になった事があった。自分は一応正確な身分を隠して在学していたのであまり多くは語れなかったが、彼は嬉しそうに自分の故郷の話をしていた。その時に自分には村に幼なじみの女の子がいると話していた。自分以外の女の子の話を嬉しそうにする彼にイラついてほとんど覚えていないが、どうやらその幼なじみというのが彼女らしい。
だが、それも問題と言えば問題だが本当に問題なのはその他の女子三人だ。自分の中の人名一覧には彼女達の名前はない。という事は、卒業後に知り合ったという事。わずか一年の間に、これだけの美少女を三人も揃えてしまう彼はもはやそういう運命を背負っているとしか思えない。しかもその全員が彼を好いている事くらい乙女の勘でわかる。
それだけでも厄介なのに、問題は更にある――彼女達の装備だ。
フィーリアはリオレイア亜種から剥ぎ取れる素材を使ったリオ

ハートシリーズにハートヴァルキリー改。
サクラはラオシャンロンから剥ぎ取れる希少素材を用いた凛シリーズにリオレイアの毒棘を仕込んだ毒太刀、飛竜刀【翠】。
シルフィードはリオレウス亜種から剥ぎ取れる素材を使ったリオソウルシリーズにショウグンギザミの鋭いハサミの刃を用いたキリサキ。
全員が上位ハンターに程近い凄腕のハンターだという事がその装備から見てもわかる。そして気付いていたが、クリュウもまたリオレウスのから剥ぎ取れる素材を使ったレウスシリーズにドスゲネポスの麻痺牙を仕込んだ麻痺毒剣、デスパライズ。いつの間にか、愛しの彼もまた自分を圧倒するような凄腕のハンターへとこの一年で成長しているらしい。
学生時代の頃は、実技ではわずかながら自分の方が上だったはずなのに……それがちょととだけ悔しい。
「……クリュウ、あなた学生時代から進歩が無いですわね」
「え？　これでもこの一年で結構強くなったと思うけど……」
「腕っ節の話じゃねぇよ。ったく、テメェは本当に変わってねぇな」
もはや呆れるしか無いのだろう。ため息と共に呆れ返るシグマのセリフにもクリュウは首を傾げる。その様子を見て女性陣が一斉にため息を零したのは言うまもでないだろう。おぉ、見事な一体感。
「コホンッ。なるほど。あなた方は今のクリュウの仲間という訳ですわね？」
わざとらしく咳払いしてアリアが話を進めると、それに答えるようにシルフィードが「まぁ、そういう事になるな」と肯定の意味も込めてうなずく。それを確認し、もう一度目の前に居並ぶ少女達を見回した後、クリュウに向き直って一言。
「……最低」
「何でッ!?」
ジト目になってバッサリと切り捨てた彼女の言葉にクリュウは驚く。なぜ自分がそんな言われ方をしたのかまるで見当もつかないという様子だ。それが余計にアリアの機嫌を損ねる。

「女の子ばかりに囲まれて、ずいぶんといいご身分になりましたわね」
「いや、こいつは学生時代からこんな感じだったと思うけどな」
不貞腐れてしまうアリアの横で苦笑交じりにシグマがつぶやく。確かに彼女の言う通りクリュウは学生時代はルフィールにシャルル、それにアリアという面子に囲まれていた。状況は特筆して変わってはいないが、それでも単純なライバル数が倍以上になった訳だ――ちなみにアリア達は知らないが、クリュウはこの他にも各地に種をバラ撒いて（もちろん無意識で）いるので、単純なライバル数は学生時代の三倍と言った所か。これがわずか一年の間にやり遂げた彼の功績（？）だというのだから、クリュウの天然ジゴロの凄さを物語っている。
「あぁ、クリュウ。ちょっと付き合えや」
部屋の空気がどんどん険悪になっていくのを感じたシグマがクリュウの首をロックして無理やり彼を部屋から引きずり出そうとする。もちろんクリュウが「な、何するんだよッ!?」と反発するが、シグマの有無も言わせない迫力で「お前、ここで死にたいのか？」と言われた言葉に首を激しく横に振ると、黙って彼女に引きずられる。
驚く一同を前にシグマはフェニスに仲介役を頼みつつ、「お前ら、一度話し合え。ライバルかもしれねぇが、同じ気持ちを持ってる者同士だろうが。少しは互いに腹割って話して頭を冷やせや」と言い残してクリュウを引っ張ったまま部屋を去った。
その後、残された恋姫六人は監督役のフェニスを間に挟んでしばしクリュウの事について話し合う事になった。当然話し合いは紛糾し、フェニスは何度もため息を零すのであった。
「あのさ、何でいきなり部屋を出ようなんて言ったのさ」
「……お前、ハンターなのにあの殺気立った空気を微塵も感じなかったのかよ」
呆れ果てながら頭を軽く押さえるシグマにクリュウは頭の上に疑問符を浮かべながら彼女の後に続く。モンスターの殺気や狩場の空気の変化には鋭いクリュウだったが、事恋愛関する事になると途端にラオシャンロン並みに鈍くなってしまうのだ。学生時代の彼を知っ

ているシグマからすれば予想はできていた事だが、それにしても全く進歩していない事には呆れを通り越して少し感心してしまう程だ。
「とにかく、今はフェニスに任せておけ。これからしばらくこの国にいるんだろ？　今のうちにとりあえず最低限の関係だけは築いてもらわねぇと、これから厳しいぞ」
「……うーん、そうだね。アリアって結構見栄っ張りだから最初のウチはいつもあまりいい関係じゃないんだよね。そのうち話してればすぐに仲良くなれる所が彼女のすごい所だけど」
「……よく見てんだか節穴なんだかわかんねぇなテメェは」
　苦笑しながらそう零すと、シグマは適当に城の中を散策する。アリアとフェニスはどちらも政界の重役の娘達という事からシグマは一応彼女達の武官としての役目を負っている為、こうして城の中を自由に出歩く事ができるのだ。まぁそれは建前であり、一番の理由は彼女の父が聖騎士団の総団長だからそれなりに自由が利くからなのだが。
「ったく、ハンターとしては成長したみてぇだが、男としちゃまだまだ半人前って訳か」
「君を前にしていると、一人前だとは言い切れなくはなるけどね」
「テメェ、それはどういう意味だ？」
「別に。他意はないさ」
「……テメェ、一年の間に嫌味なんか覚えやがったのか？」
「さぁね？」
　イタズラっぽく笑う彼の笑顔を見て、「調子に乗るなバカ」と彼の頭を小突くシグマ。そう言いつつも彼女の顔には楽しそうな笑みが浮かんでいる。久しぶりに友人に会えて嬉しいのは何もアリアだけではない。シグマもまた、自分のクラスで問題を起こしまくった中核人物であるクリュウは特別な存在なのだろう――もちろん、アリアなどが抱いている特別とはニュアンスが違うが。
「そういえば、お前ルフィールとはあれから何かやり取りはしてんのか？」
「ううん。音信不通で今どこで何をしているのかもわかんないよ」
「意外だな。あいつの事だから卒業したらすぐにでもテメェの所に押

しかけていきそうだがな」
「でも無事卒業したらしいよ。シャルルと一緒に卒業したんだって」
「あのアホの子か。あいつとは会ったのか？」
「うん、ちょっと彼女の村まで行く事があってね。その時に――あ、あとエリーゼとも会ったよ」
　聞き慣れない名前にシグマが首を傾げたのを見てクリュウはすぐに「ほら、クリスティナが生徒会長をやってる時に副会長だった女の子」と、フェニスに話したのと同じような補足説明をすると、ようやくシグマも思い出したように手をポンとする。
「あぁ、あの気難しそうな奴か。お前、あいつと親しかったっけか？」
「ううん。学生時代は全く交流はなし。何でも僕らが卒業した後にシャルルと組んでたらしくて、その関係で彼女の村に行った時に親しくなったって感じ」
「ふぅん。クードのアホは？」
「そっちも音信不通だよ」
「……ったく、卒業したらみんなバラバラって訳か」
　悪態づくように言うものの、その言葉にどこか寂しいものが感じられる。学校という環境でこそ親しくなれる友もいる。そういった人は卒業という旅立ちの後、まるで連絡を取り合わなくなってしまう事もある。特にこの世界には互いの連絡手段が郵便のみなのだから余計だ。
「みんな、それぞれの道でがんばってるといいね」
「どうだか。ハンターという職業上同学年の連中で命を落とした奴もいるかもしれねぇしな」
「……笑えない冗談だよ、それ」
　シグマの言う通り、彼らは普通の人間ではない。ハンターという、モンスターを相手に死闘を繰り広げる者達だ。当然、その死闘に敗北し、大怪我を負ってハンターの道を諦める者もいれば、最悪命を落とす者もいる。実際、正確な統計を取った訳ではないので憶測の域を出ないが、卒業後一年の間に命を落としたり、ハンター生命を断たれる新人ハンターは全体の一割から二割と言われている。

音信不通の連中は、単純に連絡を取ろうとしていない為にそうなのか。それとも二度と筆を手に取る事ができなくなってしまっているのか。それは誰にもわからない。
「俺はテメェは卒業後すぐに死ぬと思ってたけどな」
「うわぁ、それひどくない？」
「冗談だ。テメェはそう簡単に死ぬような奴じゃねぇだろ」
試すようなシグマの物言いにクリュウは「さて、どうかな？」と惚けたように返す。それを見て「テメェ、ムカつくようになったなオイ」と嬉しそうに彼の頭を小突く。クリュウも久しぶりにシグマと話せて嬉しいのか、そんな彼女の小突きを楽しげに受けていた。
そんな風に会話しながらしばらく歩いていると、前から誰かがやって来るのが見えた。クリュウはその人物に心当たりがなく首を傾げたが、隣を歩くシグマの表情は不機嫌そうに染まったのを彼は見逃さなかった。
現れたのは燃えるような炎髪をポニーテールに結った女性。鋭い眼光と身を包む刃物を思わせる雰囲気から、彼女が只者ではない事がわかる。周りを威圧するような迫力は、これだけ距離を取っていてもヒシヒシと感じられた。
「デアフリンガー。こんな所で何をしている？」
「ただの散歩っすよ。アトランティス少佐」
シグマにアトランティスと呼ばれた女性は立ち止まるとジッと彼女を見詰めたかと思うと、今度は隣に立つクリュウを見る。その瞬間、彼女の表情が不機嫌そうに歪む。彼が装備している一式を見て、すぐに彼がこの国の人間ではないと見抜いたらしい。
「そちらの少年は？」
「聞いてるっすよね？　今日フェニスの親父が独断で連れてきた大陸人。こいつがそうっすよ」
「貴様が……」
睨みつける、とまではいかないが決して友好的な視線ではない。そんな彼女の視線はお世辞にも心地良いものではなく、クリュウも自然と表情が硬くなる。

長いようで実際は数秒程度だったのだろう。見詰め合いは突然彼女の方から終わりを告げ、再び女性はシグマの方へ向くと彼女に向かって「部外者をあまり城内で徘徊させるな」と忠告すると、二人の横を通り抜けて去って行った。
女性の背中が見えなくなると同時に横にいたシグマが疲れたようにため息を零す。
「ったく、お固い空軍軍人には困ったもんだぜ」
「知り合いなの？」
「ん？　別に知り合いって程親しい訳でもねぇよ。俺は陸軍であいつは空軍。基本的には関わり合いのない相手さ」
「空軍って、王軍艦隊の事だよね。聖騎士団と仲が悪いの？」
「……どこの国の軍隊も似たようなもんさ。軍事費ってのは決まってるから、それを三軍が奪い合ってる関係上どうしても仲良くはなれねぇんだよ。それに皆自分の面子やプライドがあるからな、そう簡単に引き下げらんねぇんだよ」
呆れたように言うシグマの言葉に、クリュウも何となくわかった。陸海空三軍はそれぞれの分野でプロの集団だ。お互いをライバル意識し、プライドを持っている。だからこそ他軍に弱い姿を見せられない。かっこいい事言っても、やっている事は子供の背比べみたいなものだ。
「あいつは王軍艦隊参謀とクルセイダー総軍師殿の補佐官を兼任するエイリーク・アトランティス空軍少佐。まぁ、テメェには関係のない相手さ」
忘れた忘れたと言いたげに歩き出すシグマは彼がついて来ない事を不審に思って振り返ると、クリュウは女性――エイリークが去った方向を凝視したまま止まっていた。
「おい、クリュウ。ボケっと立ってないで早く来い。置いて行くぞ」
「あ、うん……」
クリュウは後ろ髪引かれるように背後を気にしながらもシグマを追いかけて歩き出す。時々振り返ってみてはエイリークの姿を探すが、当然すでに彼女の姿はない。そんなクリュウの態度を訝しげに思

いながらシグマは彼を連れて城内を回った。
　部屋へ戻ると、どうやらこちらも事態が解決したらしく、それどころかフィーリア達とアリアがずいぶんと親しげに会話している事も部屋へ戻って来たクリュウは驚いた。実質、自分達がここを離れていたのは一時間も経っていないはずだが。
　シグマも驚いたらしく、目の前の光景に困惑していると近づいてきたフェニスがそっと耳打ちする。
「お互いにクリュウ君のかっこいい所を言い合ってたら、あんなに仲良くなっちゃって」
「……バカだな、あいつら」
　呆れ半分感心半分という具合な反応を見せるシグマの横を通り抜けて室内へと戻ったクリュウを出迎えたのは、サクラの抱擁であった。
「……おかえりクリュウ」
「あ、うん。ただいま」
「サクラ様ッ！　抜け駆けは禁止だと何度言えば気が済むんですかッ!?」
「サクラッ！　今すぐクリュウから離れなさいッ！　さもないと許さないですわよッ！」
　クリュウに抱きついたサクラを排除しようとフィーリアとアリアが拘束して無理やり引き剥がすと、そのまま暴れるサクラを部屋の奥まで引きずっていく。呆然と取り残されたクリュウにそっと背後からシルフィードが近づき、ポンとその肩の上に手を置く。
「まぁ、何だ。互いの想いは相容れる事はないが、想いの行く末は同じ者同士という訳だな」
「どういう意味？」
「こういう事は人に尋ねずに自分で考えるんだな」
　がんばれと言うように肩を軽くポンポンと叩くとシルフィード正座をさせられて二人がかりで怒られているサクラを助けに向かう。どうせ助けたとしても彼女から礼の言葉などないとわかっていても、そこは彼女達のリーダー。放ってはおけないのだ。

シルフィードが離れると、今度はそれと入れ替わるようにしてエレナが近づいてきた。クリュウの前で一度止まると、ため息と共に零す。
「……あんたさ、そろそろ本気でその鈍感さ何とかしなさい。これ以上増えたら私達の方が心労で倒れるわよ」
「どういう意味？」
「はぁ……」
深い深い疲れ切ったため息だけを残してエレナは立ち去る。クリュウが意味がわからずに首を傾げていると、またしても入れ替わるように今度はアリアがやって来た。見るとサクラはシルフィードに助けられたようだが、当然のようにサクラは無言でその場を離れ、残されたシルフィードは苦笑を浮かべていた。
「フィーリアもサクラもエレナも、そしてシルフィードもいい人達ばかりですわね」
「あれ？　みんなの事名前で呼ぶようになったの？」
「え？　あ、まぁ……そう、ですわね」
自分でも無意識だったのだろう。指摘されて初めて気づいたらしく照れたように頬を赤らめながら視線を逸らす。そんな彼女の仕草が可愛らしくて、思わずクリュウは笑ってしまった。
「そうやって、最初は拗れていてもすぐに仲良くなれるのがアリアのすごい所だよね」
「べ、別にこれくらい大した事じゃありませんわッ」
「後は、最初から仲良くなれるようにその無駄に高い自尊心を何とかすれば完璧なんだけどね」
「む、無駄とは何ですの無駄とはッ!?　失礼ですわねッ」
からかうようなクリュウの物言いにアリアは声を荒げるが、クリュウはそんな彼女の声をさらりと躱（かわ）しながら今はシグマとフェニス達と話しているフィーリア達を見詰める。
「……どうかな、僕の今の仲間は？」
「――いい人達ばかりですわね。すぐに友達になれましたわ」
「そうでしょ？　僕は友達運がいいみたいだからね」

「……だから余計に厄介なんですのよ」
「え？　何か言った？」
「何でもありませんわ……」
　はぁと大きなため息を零すアリアにクリュウは首を傾げながら「どうしたの？　もしかして体調でも良くない？」と心配そうに彼女の顔を覗き込む。するといきなり顔の目の前に彼の顔が現れた事に驚いたのか、アリアは「な、何でもありませんわッ！」と顔を真っ赤にして彼の視線から逃れるようにそっぽを向く。クリュウはそんな彼女の反応に怪訝そうに首を傾げている。
「……クリュウ、私を放っておいて何をしてる？」
「うわッ!?　さ、サクラ？」
　突然音もなく忍び寄って来たサクラにクリュウは驚く。彼女は本当に足音一つ立てず歩けるらしく、本当に気配もなくいつの間にか背後に立たれる事は珍しくない。彼女の基本ポテンシャルの高さというか異様さにはいつも驚かされる。
「……クリュウ、こんなアホ達放っておいて、デートしよう」
「いや、勝手に出歩いちゃマズイし……」
「……大丈夫。私にはどんな国家権力も意味を成さないから」
「すごくかっこいいセリフだけど、サクラの場合は絶対力づく的な意味だよね？」
　長年一緒にいるだけあって、彼女の考え方など手に取るようにわかるクリュウ。するとそんな彼の問い掛けにサクラはなぜか自信満々に「……当然」と答え、なぜかVサインまでしてみたり――前言撤回、この子の思考は誰にもわかりません。
「……クリュウ、デートしよう」
「いや、だからね……」
「あぁッ！　またサクラ様は抜け駆けをッ！」
　サクラがクリュウの腕に絡み付いて彼を外へと連れて行こうとした時、それまでシルフィード達と話していたフィーリアが大声を上げる。こちらを凝視、特にサクラを睨みつけて近づいてくると――なぜか当然のように反対側の腕に抱きついた。

「……あのさフィーリア。何で君も当たり前のように腕に抱きついてるのかな？」
「こ、これは……あッ、サクラ様がクリュウ様を誘拐しないように、私が身を挺して守っているんですッ！」
「今『あッ』って言ったよね？　絶対今思いついたよね？」
　クリュウのツッコミを無視し、早速彼を挟んでフィーリアとサクラの睨み合いが開始される。三人共防具一式を装備しているので狩場でのいつもの光景と言えばそれまでだが、今回はここにさらに二名ほど対抗馬がいる訳であって……
「ちょ、ちょっとッ！　何してんのよバカクリュウッ！」
「は、破廉恥ですわッ！　エロクリュウなのですわッ！」
「僕なのッ!?　非難轟々されるのは僕の方なのッ!?」
　エレナとアリアが揃って彼の正面から詰め寄る。前方に左右を塞がれたクリュウは逃げるように当然残された退路、後ろへと逃げようとする。が、
「ぬおッ!?　い、いきなり下がってくるなッ。びっくりするだろうッ？」
「……シルフィ？　何で僕の防具の裾を掴みながら背後に立ってるの？」
「あ、いや、これはそのぉ……」
　珍しく言い淀むシルフィードに興味はあるが、今はそれどころではない。前方をエレナとアリア、右をサクラ、左をフィーリア、そして後方をシルフィードが塞ぐ形で自分を囲んでいる。もはや逃げ場はなし。絵に描いたような四面楚歌だ。ただ意味合いが違うとすれば、歌は歌でもラブソングなのだが。
　見事に美少女に囲まれて狼狽するクリュウの姿を見て、少し離れた場所でそれをシグマとフェニスは呆れ半分感心半分という感じでそれを見守っていた。
「……ったく、どんだけ女に好かれりゃ気が済むんだ。あれじゃアリアが報われないぜ」
「そうね……うふふ、でもアリア、すごく楽しそうじゃない？」

「……そうだな。恋敵（ライバル）は多いが、久しぶりにクリュウに会えたんだ。それだけで嬉しいんだろ……ったく、アリアらしくない純情っぷりだぜ」
「そうかしら？　アリアらしいと思うけど」
　外野は外野での会話を楽しみ、クリュウを囲む女子達の対抗心が本格的に燃え始める頃、まるでそれを制するように部屋のドアがノックされた。一番ドアに近かったフェニスが開けると、そこには思いも寄らぬ人物が立っていた。
「失礼する」
　現れたのは炎髪のポニーテールに軍人らしい鋭い瞳で周りを威圧する女性――エイリーク・アトランティス少佐だった。その姿を見てシグマはあからさまに嫌そうな表情を浮かべ、応対したフェニスも、クリュウに詰め寄っていたアリアも表情が硬くなる。
　全員がいる事を確認するように部屋の中を見回すと、エイリークは憮然と言い放った。
「女王の間へ来い――イリス女王陛下がお待ちだ」

第１７１話　玉座に君臨する幼き少女王イリスとの出会い

一行はジェイド総軍師の補佐官を務めるエイリーク・アトランティス少佐に連れられて、今まさに女王の間へと向かっている最中だった。そしてその女王の間には、この国を統べる女王――イリス・アルトリア・フランチェスカ女王が玉座に君臨している事であろう。

先頭を歩くエイリークに続くようにクリュウ達は後を追って歩いている。ハンターとしての正装は防具姿ではあるが、さすがに一国の君主を前にしてはそのような出で立ちではマズイ。特に武器なんてご法度だ。その為今のクリュウ達はエルバーフェルドでフリードリッヒと対面した時と同じ正装に身を包んでいる。

クリュウは黒いスーツに白いワイシャツ、赤色の紐ネクタイを施した正装姿。彼の一張羅だ。

フィーリアも白を基調に黒で装飾されたゴシックロリータ調のドレス姿。胸元の網状に結ばれた赤いリボンがワンポンイトで、ワンピースの上から黒い上着を纏う事でかわいらしさと少し大人っぽさを意識したチョイス。前回と違うのは今回はツインテールではなくいつもの流しただけの髪型という点だけ。

サクラは全体的に大人な雰囲気の赤を基調に下地が黒いワンピース。決して過剰ではなく適度に飾り付けられたフリルがかわいらしさも忘れない。上生地の赤い部分は大きく少し大胆に開きつつも黒い下生地がフリルのように胸元を優しく隠すという少し凝ったデザインで、スマートなスタイルのサクラの魅力を存分に発揮するデザイン。

エレナは赤系を基調とした服で白いシャツに赤いチェック柄のスカート。腰は前を編み上げた黒い革地のコルセットで締め、足には黒いレース状のレギンスと長い茶色の革ブーツ。最後に胸元には赤い紐ネクタイでかわいらしさを出したもの。

そしてシルフィードはクリュウと同じような男装用のスーツ姿。

彼女らしくかっこいいのだが、シュバルツと対峙した時のドレス姿でないのが残念だ。フリードリッヒの時と同様恥ずかしいので辞退したらしい。
私服自体はフィーリア達は皆明るめなもので雰囲気も柔らかいがその表情は皆緊張の色に染まっていた。一国の長に会う事になるのはエルバーフェルド帝国でのフリードリッヒ・デア・グローセ総統以来二度目だ。二度目とはいえ、そう慣れるものではない。あのサクラでさえ緊張しているのだから皆の緊張の度合いはかなりのものだろう。ちなみに彼女が緊張しているかどうかは、クリュウにしかわからない事だ。
無言で歩く一行の中、しかし女性陣の視線はずっとクリュウ一人に注がれていた。なぜならエイリークが現れてついて来いと言ってから、彼は一言も言葉を発してはいないのだ。ずっと何か考え事をしているらしく、無言を貫いている。いつもは陽気に振る舞う彼が沈黙していると、どうしても緊張の度合いは跳ね上がってしまう。彼自身に自覚はないが、フィーリア達にとっては彼の明るい振る舞いこそがどんな苦境や恐怖にも打ち勝つ力になっているのだ。それが失われている今、彼女達の不安も膨らむばかりだ。
不安そうに彼を見詰めながら歩く仲間達を前に、シルフィードはため息と共に足を早めると、考え込むクリュウの頭の上に手をポンと置いた。その衝撃に、考えに耽っていたクリュウは一瞬にしてこちらの世界に引き戻される。
「え？　あ、シルフィ？」
「エレナにも言われただろう？　君が黙っていると彼女達が不安になるんだ」
「あ……」
シルフィードの忠告に思い出したように振り返り、自分を不安そうに見詰めているフィーリア達と目が合う。その瞬間、彼の表情が申し訳なさそうに曇った。それを見てシルフィードはまたため息を零して彼の額をデコピンで弾く。
「笑えとは言わん。だがそう暗い顔になるな。不安や緊張というのは

風邪以上に人に移りやすいのだからな」
「う、うん。ごめんね？」
「……フッ、わかればいいんだ」
　クリュウの表情が幾分か明るくなったのを見て表情を和らげると、シルフィードは彼の背中を優しく叩いて激励すると速度を落として先程と同じフィーリア、サクラ、エレナの後方へと下がる。すると、前方を歩く三人が自分に振り返っている事に気づいた。何だとばかり首を傾げると、代表するようにエレナが「ありがとね」と照れた笑みを浮かべながらそう言った。程度は違えど、見ればフィーリアとサクラも同じような様子だ。三人とも、クリュウの空気を変えてくれた彼女に感謝しているのだ。
　その光景にしばし呆然としてたが、すぐにフッと口元に笑みを浮かべると「大した事じゃないさ」とクールに彼女達の礼に言葉を返す。彼女らしい実にかっこいい照れ隠しだ。
「それにしても、さっきから何をそんな難しい顔してたのよ。そんなに厄介な考え事な訳？」
　クリュウの空気が柔らかくなったのを見計らって先陣を切ったのはエレナだ。長い付き合いなだけあってこういう微妙な状況でも彼に切り込めるのは彼女の特権とも言えよう。そんな彼女の問い掛けに対しクリュウは「ちょっと厄介かもね」と具体的な事は何も言わずはぐらかす。それがムッとしたのだろう。
「何よそれ。どうせ私達にも少なからず関わりのある事なんでしょ？　だったら隠してないでさっさと吐いちゃいなさいよ。その方が楽になるわよ？」
「え、エレナ様？　それじゃ犯罪者に対する尋問に等しいかと……」
　おずおずと会話に入って来たのはフィーリアだ。ずっと会話に入る機会を見計らっていたのだろう。彼女の問題提起に対しエレナは「ウソをついたりと隠し事をする奴は犯罪者予備軍みたいなもんでしょ」としれっと返す。その真っ直ぐというか無茶苦茶な理論にはさすがのフィーリアも呆れてものも言えない。ちなみに彼女の理論を採用すれば、全人類が犯罪者予備軍に該当する。当然、クリュウに対

して想いを隠しているという点で言えばエレナも十分予備軍の一員だ。
エレナの容赦のない追求に対してクリュウは「今はまだちょっと。僕の中でも決着がついてなくてさ。ごめんね」、やんわりと回答を拒否する。納得できないエレナは更に追求しようと前に出るが、それを制したのはサクラだった。
「な、何よ？」
「……騒々しい。クリュウを信じられないなら帰れ」
エレナ以上に容赦のない物言い――そして誰よりも正論で、誰よりも真っ直ぐな言葉だ。
サクラは余計な事は考えない。クリュウに絶対忠誠を誓い、信じ、愛し、そして彼の為に全力を尽くして全てを捧げる覚悟をとっくに決めている。その中には当然自身の保身もプライドもかなぐり捨てている。
想いの強さなら恋姫達全員は同率かもしれない。だが、覚悟という面ではサクラは圧倒的に他の恋姫達を凌駕している。
自分は考えず、好きな人の全てを信じて全力を尽くす。そう決めているからこそ、エレナのように彼を追求する事はない。信じているからこそ、何も言わずについて行くのだ。
「わ、わかったわよ……」
格の違いを見せつけられたような気がして、エレナは不満気に、しかし素直に負けを認めて大人しくなった。
結局、自分が怒っていたのは彼が何も自分達に話してくれない不満――要するに自己満足だ。納得できなくて、頼りにされていない気がして、不安と不満から彼を問い詰めた。情けない、自己満足。
本当にクリュウの事を想っているなら、サクラのように彼を信じて無言でついて行く。
「……敵わないなぁ」
思わず弱音が零れてしまった。だがそれはエレナだけではなく、サクラを除くこの場にいる恋姫全員が想った感想だ。
サクラが常に全恋姫の中で先陣を切れるのは、運や大胆な性格や行

動力だけで成せている訳ではない。彼を愛するという覚悟が、他を圧倒しているのだ。それを間近で見せつけられたような気がして、恋姫達は一斉に口を閉じてしまう。
　まだ会ってから半日と経っていないはずのアリアでさえ、サクラの本気の愛と覚悟を前に言葉を失っている。彼女からしてみればかつての大敵ルフィール・ケーニッヒ以上に厄介な恋敵（ライバル）に位置づけられる。
「あ、あれ？　どうしたのみんな？」
　今度はフィーリア達が一斉に表情を暗くしたのを見てクリュウが心配そうに声を掛ける。それに慌ててフィーリアが「な、何でもないですッ」と手をブンブンと振って何でもないとアピールする。
「……気にしなくてもいい。自分の矮小さに嘆いているだけよ」
　さらりと言ってのけるサクラの言葉に、恋姫達が一斉に軽く殺意を覚えたり。漏れ出したその殺気にシグマとフェニスはビクリと震えるが、クリュウは天性の鈍感さからそれにも気づかずサクラに「どういう意味？」と聞き返している。
「……クリュウには関係のない事よ」
「そ、そうなの？　ならいいんだけど……」
「くだらん話はそこまでにしてくれ。この先は許可された者しか入れない区画だ」
　クリュウ達の会話を止めて振り返ったエイリークの背後では軍服に剣を携えた兵士二名が守る門があった。鉄柵扉で閉じられた向こうはどうやら政府高官しか入る事が許されない区画らしい。エイリークが先頭を歩いているので兵士達は敬礼して彼らを中へ通す。
　全員が重要区画側へと入ると、外から兵士が鉄柵扉を閉めて鍵を掛ける。閉めるたびに鍵を掛ける所は厳重な警備が施されている証拠だ。鉄柵扉は重厚そうで、鉄鉱石をかなりの密度に高めたものを使っているらしい。これならイャンクック程度の突撃なら何とか一撃くらいは耐えられそう。当然、人間がどうこうできるようなレベルではない。
　ガチャリと鍵が掛けられると、それまで前を向いていたエイリーク

が不意にこちらへと振り返った。周りを威圧するような雰囲気と鋭い瞳でクリュウ達を見ると、真剣な表情のまま彼らに向けて最後の確認を取る。
「ここから先は我が国の中枢であり、我が国の国政や軍事面で重要なものが揃っている。然るにここで見た事聞いた事は決して他言無用。それとこれから君達は我が国の君主であらせられるイリス女王陛下へと謁見する。くれぐれも失礼のない振る舞いをする事。この二つが誓えないのであれば、即刻ここから退去してもらう」
「ち、誓います」
　エイリークの迫力に呑まれながらも何とか声を振り絞ってそう答えた。エイリークはクリュウの確認が終わると他の面々に確認を取る。全員が誓う事を宣言すると一つうなずいて再び前を向いて歩き出す。その瞬間、緊張の糸が切れたように全員の肩から力が抜ける。それだけエイリークの気迫はすさまじいものだったのだ。
　再びエイリークの後を追ってクリュウ達は歩き出す。今さっきここから先は状況が違うと言われた手前、誰一人無駄話をする事なく、結果的に一行は無言のまま歩き続ける。余計なものを見ないように、前だけに集中して歩き、来た道を忘れかける頃、先頭を歩くエイリークが足を止めた。そこは巨大な木製の扉であった。見るからに硬く、荘厳な趣きのある扉。
「……ユクモの堅木ね」
「何それ？」
「……東方大陸原産の良質な木材よ」
　素っ気なく答えるサクラだが、まさかこんな所で幼い記憶の中にあった家の柱と同じような木目の木材と出会えるとは思っていなかったので少し困惑しているのだ。
　さすがは海洋貿易拠点。世界中の品物が集まるだけに、中央大陸ではなかなかお目にかかれない東方大陸原産の木材をこうも堂々と扉の素材に使えるとは。
　クリュウ達が感心しながら扉を眺めていると、エイリークが振り返って静かにその扉へ手の平を上にしながら向ける。さながらその

姿はツアーコンダクターにも見えなくはないが――如何せん表情が厳し過ぎる。
「ここが我がアルトリア王国の様々な物事や法案を最終決定する場所――女王の間よ」
まるでそれが合言葉だったかのように、彼女の背後のユクモの堅木でできた荘厳な扉がゆっくりと開いた。巨大な扉が全開するまでには多少に時間がかかり、それはまるでゆっくりと視界が広がっていくかのような錯覚。
ガタン……と開け放たれた扉の向こう。まず目についたのは天井から吊るされた巨大なシャンデリア。部屋はちょっとしたダンスホール程に広く、城の内装各所に施された芸術的な彫刻や調度品は特にこの部屋ではより美しいものが揃っている。シャンデリアから注がれる光はガラス細工独特のまばゆさで思わず見上げ、目を細めてしまう。
最奥に位置する玉座に向かって一直線に真っ赤な絨毯が伸びており、それに沿うようにして居並ぶのは軍人。奥の方にはメイドの姿も数人見えるが、基本的にはこの空間には軍人の方が数が多い。見れば玉座には四方を囲むように薄いカーテンが掛けられており、そこに居るであろう女王の姿はよく見えない。
緊張しながらゆっくりと足を踏み入れると、まるでそれを歓迎するかのように軍人達は一斉に一糸乱れぬ動きで敬礼で出迎える。だが誰一人笑う事なく、氷のような表情のまま敬礼で出迎えるのは歓迎というよりは圧迫に近い。改めて、自分達が招かれざる客だという事を思わざるを得ない。
先頭を歩くクリュウがその圧迫感に思わず足を止めると、後続のフィーリア達も一斉に足を止める。フィーリアも居並ぶのが全員男性の軍人で、しかも怖い目をしている事から怯えているらしく先程からクリュウの影に隠れっぱなしだ。逆にサクラは自分やフィーリア達はともかくクリュウに対してそのような視線を向けられるのが腹立たしいらしく、先程から負けじと鋭い眼光で睨み返して周囲を威嚇している。エレナもサクラ程ではないが、負けじと大の大人相手に威

風堂々と振舞っている。
そんな二人の姿を羨ましく思っていると、背中をポンと叩かれた。振り返ると頼もしい笑みを浮かべたシルフィードがまるで「そう緊張するな」と励ましてくれているかのように立っていた。その頼もしさに感謝しつつ、クリュウは改めて真っ直ぐと前とを見据える。もう恐れたりしない。そんな強い意思を抱きながらの彼の横顔は真剣で、その凛々しい顔つきに乙女達は一斉に見惚れ、思わず頬を赤めた。
クリュウは恐れる事なく一歩を踏み出す。その一歩に勇気づけられるように他の面々も止めていた足を一斉に進める。
周りの居並ぶ軍人達の視線を恐れる事なく進み続けると、前方に居並ぶ軍人達とは明らかに違う一団が彼らを出迎える。
玉座を中心に立っているのは四人。その全員が他とは明らかに違うオーラを纏いながら彼らを出迎える。
左端にはアルフ、その横に白っぽいクリーム色の長髪に凜とした、でもどこか優しげな碧眼が特徴的な貴婦人が立つ。玉座を挟んでその横に控えるは飾り気のない軍服に灰色の髪、右目にモノクルを掛け憮然とした表情で立つ青年。そしてその隣、右端には立派な口髭に聖騎士団の制服を身に纏った筋肉巨漢の大男が迫力全開で仁王立ちしている。
エイリークを先頭に無言でその玉座へと近付く一行。そして、数メートル程という距離でエイリークは足を止めると、ゆっくりとした動作でその場に跪いた。振り返れば背後にいたアリア、シグマ、フェニスの三人も同様に跪いており、クリュウ達も慌てて同様の動作を行う。その時に拒否しようとしたサクラをクリュウが腕を引っ張って無理やりさせた。その際に「……乱暴にしないで」となぜか頬を赤らめながら言う彼女にとりあえず謝りつつ、クリュウ達は無言で玉座の前に跪いた。
「三獣士のご令嬢一同と、先頃入国した大陸人一同をお連れいたして参りました」
「ご苦労。こちらへ来い」
そう彼女を労い呼び寄せたのはモノクルを掛けた灰髪の青年。エ

イリークは短く返事をすると立ち上がり、クリュウ達を残して青年の背後へと移動し、そこで補佐官としての役目を全うするように控える。
　一瞬の無言。それを打破したのは話始めようとした青年の咳払いだった。
「顔を上げたまえ」
　その命令に素直にクリュウ達は従って顔を上げる。当然同じようにクリュウも顔を上げ、威風堂々と立つ青年の顔を見て目を見張った。それは隣に跪いていたフィーリアも同様だった。なぜなら、クリュウとフィーリアはその青年に面識があったからだ。しかし青年の方はクリュウ達を見ても何の反応を見せない。忘れているのか、覚えていないのか、それともあえて無視しているのか。とにかく、その事を尋ねられるような雰囲気ではない事は確かだ。
「事情はレキシントン農水大臣から聞き及んでいる。本来なら《栄光ある孤立》を掲げる我が国は君達のような大陸人を受け入れる事はない。密入国者は原則国外追放が我が国の対応だ」
「そ、それじゃあ……」
「あぁ、それはあくまで原則って話だ。それにお前達は密入国者ではないからな。どこぞのアホが見事に大臣の権限を使って連れ込んできたんだから、密入国にはならない。だから追い返すような真似はしないさ」
　そう言って彼らに安心するよう言ったのは右端の大男。屈強な体つきはまるで熟練のハンターのようで、しかし身に纏うのは自分達のようなハンター用の防具ではなくシグマがしているような聖騎士団のそれだ。
「先程、法務大臣から特例として入国許可書が発行された。これであなた達はアルトリア政府公認の入国許可人。安心してこの国を楽しみなさい」
　そう言って微笑むのはアルフの隣に佇む貴婦人。優しげな笑顔が魅力的だが、どこか厳しさも忘れない雰囲気は優しさだけではなく厳しさも兼ね備えた《できる女》という印象を抱く。そして、まさに貴

族というオーラが彼女の身を包む。
　そんな二人の言葉に彼らに顔を向けていたクリュウは、その二人がそれぞれ誰かに似ている事に気付いた。女性は顔つきが、男の方は何というか雰囲気が。もしかしてと思って振り返ると、いつの間にかアリア、シグマ、フェニスの三人が立ち上がって自分達の左右を迂回するようにして前に出ると、それぞれ別の人物の横に並んだ。
　フェニスはアルフの横に、アリアは貴婦人の横、シグマは大男の横に。それが、彼の中で確信に変わった。
「紹介が遅れましたわねクリュウ。この方はアルカディア・ヴィクトリア。私の母で、ヴィクトリア家現当主ですわ」
　娘の紹介に貴婦人――アルカは「よろしく」とその場で優雅に一礼する。アリアやフィーリアの一礼もどこか高貴なものを感じるが、彼女のそれはどちらかと言えばセレスティーナに近い。本物の貴族という立ち振る舞いだ。
「こっちは俺の親父だ。名前はオメガ・デアフリンガー。家じゃ母さんの尻に敷かれ、呆れるくらいの娘バカだが、これでもアルトリア聖騎士団の総団長を務めてる武士（もののふ）だ」
「おいおい、ひどい言われ様だな。お父さん泣いちゃうぞ」
「キモイから泣くな」
　そう言いつつ苦笑するシグマの頭を大男――オメガは優しく撫でる。シグマもそれを拒否する事なくどこか嬉しそうに受けるのを見る限り、言葉とは裏腹に二人は仲のいい親子だという事がわかる。とても微笑ましい光景だ。
「やっぱり、三人の親だったんだ」
「おうよ。俺とフェニスの父親、アリアの母親はアルトリアの貴族の中でも古い家柄で、王家に対して忠誠を誓っている一族さ。親父達は特に先代女王の代から二代続けて王家を支えていて、その功績から三獣士なんて呼ばれてる。俺達はその娘達で、親同様に三人仲良くやってるって訳さ」
　シグマの説明に「おかげで、二人とはそれこそ国立幼稚園の頃からの腐れ縁になったのですわね」と苦笑交じりに、でもどこか照れたよ

うに頬を赤らめながらアリアが補足説明を行う。
「あなたの事は、娘から聞いている。思っていた通り、可愛らしい少年ね」
楽しそうに笑うアリカの笑顔は、自分と同い年の娘がいるとは思えないほどに若く、美人で魅力的だ。そんな人に突然そんな素敵な笑顔を向けられたクリュウは思わず頬を赤らめて「は、はぁ……」と、いつもなら返すであろう「それって褒め言葉じゃないです」という返しも出て来ない。
「クリュウ様、見境がなさ過ぎます……」
隣でフィーリアが深いため息と共にそんな事をつぶやいたが、意味がわからなかったのでとりあえずスルーしておく。
「うぅん、お前の言う通り女々しい少年だな。体つきはカツラを付ければ女に見えなくもない」
「だろ？　あの容姿だから学生時代隠れファンは少なからずいたんだぜ」
親子揃って自分をからかうような事で盛り上がるオメガとシグマから聞こえる声に、思わず苦笑を浮かべながら「母さん似っていうのも、考えものだなぁ」と零す。クリュウはそんな反応を見せたが、一方シグマの方の言葉に敏感に反応したのはフィーリア達だ。
「か、隠れファンがいたんですか……」
「……クリュウは私だけのアイドルでいいのに」
「まぁ、普段からあの無尽蔵の優しさを振りまいていたプラス、あの容姿なら女子に人気が出るのも頷けるな」
「ある意味無差別襲撃に等しいわね」
危機感を持ったり、嫉妬したり、彼らしいなぁと苦笑を浮かべたり、変わらない彼に呆れたり。四者四様の反応を見せるフィーリア達。自分が好きになった人は、どうにも自分達の苦労を増やすばかりらしい。だがなぜか、だからといって彼を憎む事はできない。なぜなら、自分達はそんな彼の無尽蔵というか無差別の優しさに惚れた身なのだから。それを否定するのは自分達の恋心の否定と同義。恋する乙女の葛藤だ。

恋する乙女のため息が一斉に零れる。それを見て、当の本人はどうしたのだろうと首を傾げている。それを見て、また一斉にため息が零れた。
「アリア。あなたも難儀な人に恋したな」
「……本当ですわ」
クリュウには聞こえない声で娘の苦難に苦笑を浮かべながらつぶやくアルカの言葉に、アリアはため息と共にそう返した。それ以外、今の言葉の他には出て来なかったのだ。
わいわいと勝手に盛り上がる三獣士とその娘達、そしてクリュウ達。そのあまりにも世俗に染まった会話内容に居並ぶ軍人達もポカンとなっていることすらも彼らは気づかない。だがその軍人達も、そしてクリュウ達も話を戻そうとした青年の咳払いで元に戻る。
「話を戻すぞ。君達には入国許可が出た。つまり、国外退去処分を命じる事はない。長期滞在は認められないが、最大で一ヶ月程度の滞在なら可能だ。好きに動くがいい。ただし、イリス陛下の政を妨げるような行いをした場合には、問答無用で強制国外退去だ。いいな？」
まるで決められている事が書かれた紙を読んでいるかのように、その口調は《決定事項》という言葉が裏に隠れている。その有無を言わせぬ迫力に、思わずクリュウはうなずいた。特に反論する要素もなかったから余計にだ。ただし、そんな青年の物言いにフィーリア達はあまり良い印象を抱かなかったのか表情は微妙だ。特にサクラは早速彼を睨みつけてい隠している始末。それでも、こちらは招かれざる客なのだから追い返されない事になっただけ彼には感謝はしている身。プラスマイナスでプラスが勝っているからこそ黙っているのだ。
「見知らぬ国で宿を探すのも大変だろう？　滞在中は城の客間を使うといい。イリス陛下の心優しい計らいだ。感謝しろよ？」
そう笑いながら言うオメガの視線は自然と玉座に向けられる。その視線を追えば、当然全員の視線も同じ場所に注がれる。未だレースのカーテンで隠された玉座はやはり中の人物を詳しく見る事はできない。シルエットは何とか見えるが、それを見る限り中にいる女王はあまり身長の高い人物には見えない。むしろフィーリアなんかより

も小柄に見える。それが少し気がかりではあったが、女王は未だ顔を見せる事はおろか声も発さずに自分達の会話を見守っている。
「あの、ありがとうございます」
自分達の為に宿まで用意しれくれたイリス女王の計らいに、クリュウは反射的にそう礼を述べていた。だがそれは上流階級に接した事のない、平民のクリュウらしい実に飾り気のない礼の言葉。実際、その失礼にも聞こえる言葉に青年の表情が厳しくなる。が、何かを言おうと開けられた口は突然横から投げかけられた声で閉じられた。
「――良い。欲と権力で飾り立てられた礼より、妾は何の飾り気もない真っ直ぐな礼の方が好きじゃ」
レースに隠された玉座から響く凛とした静かな声。決して大きな声ではないのに、その声はとても澄んでいて水面に落ちる水滴で生まれた波紋のように部屋中へと響いた。
並ぶ軍人やアリア達が一斉に玉座へと振り返る。クリュウ達の視線も当然玉座に向けられるが、今の彼らの視線は信じられないものを見ている目に変わっていた。
「……子供？」
サクラの小さなつぶやきは、皆の心の内の言葉を代弁したものだった。
そう、玉座から広がった女王の声は――子供、少女のものだった。子供が大人びた口調と雰囲気を真似している、そんな滑稽にも思える声。だが不思議と嘲笑するような気持ちは生まれなかった。なぜなら、その声の奥にしっかりとした意志を感じたからだ。明確な強い意志と女王としての品格と決意。自分達とは違う、《王》としての尊厳。人の上に立つ者にだけある、己が信念を貫こうとする心――それはエルバーフェルド帝国総統、フリードリッヒ・デア・グローセと同じ、王の声。
その聴き惚れるような、美しくも気高い声に思わずクリュウは玉座を凝視してしまう。レースに隠された玉座はそうした所で透けたりする訳ではない。でも、その声はまさに《人を魅了する声》だった。
「それにジェイド。お主まだ自身を名乗ってはおらぬな。無礼じゃ

ぞ」
「……申し訳ありません」
女王に一喝されたジェイドはそれまでの威圧感を微塵も感じられない程に小さくなる。どうやら彼は相当女王陛下に頭が上がらないらしい。まぁ、最高国家権力者に逆らうような事は普通はしないだろうが。それを差し引いても彼は実に素直に自分の否を認めている。それだけ、彼にとっては女王の存在は大きいのだろう。
「失礼した。私はジェイド・クルセイダー勲功爵。アルトリア王政軍国総軍師、及び王軍艦隊司令長官を兼任している者だ」
青年――ジェイドは素直に頭を下げてから自らを名乗る。まぁサクラとシルフィードは以前にヴィルマで遠目に、クリュウとフィーリアは直接会っているので今更な感じもするが。唯一その自己紹介が意味を成したのは全く面識のないエレナだけだ。
「礼に始まり礼に終わる、人と話す際には大切な事じゃ。決してそれを忘れてはならぬ」
「はッ」
「……とは言うものの、妾も名乗っていない無礼者には違いないがな」
一瞬、王の仮面が崩れて歳相応の少女らしいイタズラっぽい声に変わった。それを聞いて、やはり王も人間なのだなぁと妙な部分で感心してしまうクリュウ。それはフリードリッヒの時も同じだった。
「妾もこのような布越しで失礼じゃったの。このレースは特殊な繊維でできており、銃弾やナイフのような類を防ぐ役割を持っておるのじゃ。まぁ、人の上に立つ者はそれ相応に命を狙われたりする。用心じゃよ」
おかしそうに言うが、その内容は決して笑えるものではない。
世の中、万民が幸せになる事はできない。誰かが幸せになれば、誰かが犠牲になる。そういう風に世界の構造はできている。王や君主などは、その比率を操る存在だ。大を助け小を切り捨てる。結果的にそれで多くの人民を救い、幸せにしてもわずかな民がその犠牲となる。世の中は天秤だ。何かを吊ってバランスを取る為には、それ相応の対価、犠牲が必要だ。

故に、天秤を操る役目を担う王や君主は常に犠牲になる者達からは憎まれ、恨まれ、時には命を狙われる事もある。そしてそれは国民からの圧倒的な支持率を誇るイリス女王も例外ではない――例えまだまだか弱い少女であっても、人の上に立つからにはそれ相応の覚悟を持たねばならない。そして彼女は、すでにその年でその覚悟ができている。

きっと、声からするに年齢は自分やフィーリアよりも下のはず。それでも、その声から感じ取れる覚悟や決意は、自分達よりもずっと大人だ。

「ジェイド。レースを開けよ」

「しかし陛下……」

「良い。三獣士の娘達が認めた少年とその仲間。心配するような事は何も起こらんよ」

「……御意」

ジェイドは一礼すると背後に吊るされている縄紐を掴み下へ引く。それに合わせて玉座を取り囲んでいたレースがサーッと開かれて、中にある玉座が現れた――そして、その玉座に君臨する幼き女王の姿も。

玉座を囲むレースが取り払われると同時に、少女王は静かにその小さな体に不釣合いな程に大きな玉座を降りて立ち上がる。颯爽と靡かせるのは美しい銀色の髪。純白に近い、白銀と称するに相応しいシルフィードの髪とは違う、光り輝く美しい銀髪。それを腰程にまで流し、まるで彼女を取り囲むように風が吹き、その銀髪を美しく靡かせる。

閉じられた瞳が開かれる。まるで南洋の海を模したかのような美しい蒼色をした碧眼は凛々しく、意志の強さを感じさせる強い光に満ち溢れている。

だが何より目を引いたのは、その美しく整った顔立ちだった。まるで世界一の人形技師がその半生を注ぎ込んで創り上げた至宝の一品のように美しい。肌は陶磁器のように白く、見るだけでその美しい肌が柔らかいとわかる。思わず手を伸ばして触ってしまいたくなるが、

当然そんな事はできるはずもないが。
子供ながらの小柄な体格で、当然シルフィードのような大人の女性らしいスタイルでは決して無い。それでも、銀髪と美しい白肌に合わせた純白のドレスに包まれた体は、まるで守ってあげたくなるように華奢だ。口調こそ大人びていても、その正体はそんなまだまだ子供であると表しているかのよう。
まだまだ子供という感じが拭えないが、それでも少女は美しい。将来は絶世の美女が約束された、そんな片鱗を持つ少女は今でも十分に美しい。クリュウは思わず相手が子供である事も忘れて、ついその姿に見惚れてしまった。
「――改めて名乗る。妾の名はイリス・アルトリア・フランチェスカ。このアルトリア王政軍国の女王じゃ」
アルトリア王政軍国女王――イリスはニッと子供っぽくもどこか凛々しい笑顔と共に名乗り、クリュウ達の前に威風堂々と君臨するのであった。

第１７２話　軍事大国の無邪気な少女王　紐解かれる真実の物語

玉座の前に威風堂々と立ち塞ぎ、自信に満ち溢れた瞳と表情で君臨するアルトリア王政軍国女王、イリス・アルトリア・フランチェスカ。その高貴な血筋を証明するかのように整った顔立ちはまだ幼いながらも、光り輝く瞳には王としての意志が静かに燃え宿っている。

目的のある人物というのは美しいと言うが、彼女もまた自分の王としての責務に自信と、そして使命感を抱いている。その誇りや自信が、彼女を眩く輝かせているのだろう。

普通の人とは違う、王としての輝き。それを目の前にして、フィーリア達は改めて彼女が王なのだと認識する。称号や役職ではなく、真に心からそう決意しているからこその輝き。人の上に立つ者としての覚悟を抱いた、一人の少女王の姿がそこにあった。

王としての輝きを放つ彼女の姿に見惚れるフィーリア達の中、クリュウは一人そんな彼女の姿を動じずに見詰めていた。まるで、彼女の姿を目に焼き付けるように。一秒たりとも視線を逸らさず、一瞬足りとも瞬きもせずに。

威風堂々と立ったイリスは自分を見詰めて呆けている客人達の姿を見て自信満々な笑みを浮かべ続ける。が、その視線がクリュウを捉えると変わる。ジッとこちらを見詰めたまま微動だしない彼の視線。なぜか、その視線に熱いものを感じ、見られているという事が急に恥ずかしくなってしまう。それはそのまま頬の赤みとして表情に出た。

「な、何じゃ。そのように見詰められると、妾も困るのじゃが……」

「え？　あ、すみませんッ」

困ったような笑顔に変わったイリスの言葉に、クリュウは自分が彼女に対して実に失礼な行いをしていた事に気づき、慌てて視線を外して謝る。すると、そんな彼の脇腹を少し強めに小突く者がいた――サクラだ。

「な、何？」

「……知らない」
特に痛い訳ではないが、突然小突かれた事で当然彼女の方へ向いて理由を尋ねるも、なぜかサクラは不貞腐れたように唇を尖らせてそっぽを向いてしまう。クリュウが何だろうと首を傾げていると、ジェイドの咳払いで慌てて視線を前に戻す。その瞬間、そっぽを向いていたサクラは彼の反応を見て不満げにぷくぅと頬を膨らませる。その姿はちょっと可愛らしいのだが、今はそれを見ている余裕はクリュウにないのが残念だ。
直接は怒られた訳ではないが、それでもジェイドの咳払いで気まずくなったクリュウは顔を下げてしまう。だが、
「少年。人に対して顔を背けるというのは失礼ではないか？」
イリスの言葉にまたしても慌てて顔を上げる。別にこれも怒られた訳でも責められた訳でもない。ただ直したらいい所を注意されただけだ。それでも、緊張でいっぱいいっぱいのクリュウにとっては心臓が潰れるかもというくらいの一撃にはなる。
誰が見ても極度に緊張しているクリュウ。その様子に呆れつつ、アリアが助け舟を出そうとした時、思わぬ人物が動いた。
「そのように緊張するな。見ての通り、妾はお主よりも年少じゃ。怖くもなかろう？」
そう言って微笑んだのはイリスだった。怖がるな、と言いたげにそれまでしていた女王としての仮面を捨て、今度は一人の少女としての笑顔で彼を出迎える。それは本当に人の事を想っている者ができる、屈託の無い笑顔。その笑顔を見て、クリュウも少しだけ緊張が緩んだ。
それだけの力が、彼女の笑顔にはあった。優しさに溢れた、人を心から温めてくれる、屈託の無い純粋な笑み。人の為に全力で頑張れるからこそ輝く、見る者全てに勇気を与える温かな笑顔だ――だが同時に、彼以外の人間にはある既視感（デジャブ）を抱かせた。
「……あの笑顔」
「何だか……」
「クリュウ様に……」

「似て、るわね……」
恋姫達はそんな彼女の笑顔と自分の想い人の笑顔に共通点を感じていた。笑顔の雰囲気もさることながら、よく見ればどことなくクリュウの顔立ちにイリスは似ている。それが、恋姫達を多少なりとも困惑させていた。他人の空似とかで片付ける事も可能だし、普通はそういう思考に至る。だが、彼女達の乙女としての勘が、それを否定していた。
訝しげにイリスを見詰める恋姫達を背中に、クリュウもまたイリスをジッと見詰めていた。彼もまた、彼女の顔立ちを見て何かの確信を得たのか。先程よりも表情が険しくなっていた。
「クリュウ、何をそんな怖い顔をしていますの？」
正面に立つアリアはそんな彼の表情にいち早く気付いていた。その言葉にフィーリア達、イリスやジェイドも彼に注目するが、その頃には彼の表情はいつも通りのものに変わっていた――否、いつも通りを装っていたのだ。
「何でもないよ。ちょっと考え事をしてただけ」
「おいおい、女王陛下の前で考え事たぁ肝が据わってんじゃねぇか」
呆れ半分面白半分という感じで言うシグマの言葉に「そういう訳じゃないんだけどね」といつも通りの苦笑と共にそう返すクリュウ。その横顔にはすでに先程あったような厳しいものは消えていた。
「それより、お前らもさっさと名乗れ。女王様に名乗らせておいて、テメェらが名乗らねぇってのは筋が通んないじゃねぇか？」
シグマのもっともなセリフにクリュウはうなずくと、無言で振り返ってシルフィードを見やる。その視線で彼の考えを汲み取ったシルフィードは小さく肩を竦めると、ゆっくりと折っていた膝を上げて立ち上がり、その場で見事な一礼をしてみせる。男装をしたかっこいい出で立ちの彼女がそうすると、まるで貴公子のような振る舞いに見える。事実、玉座の左右に数人いるメイド達からため息が一斉に零れた。
まず最年長のシルフィードが先陣を切って名乗ると、それに続く形で優雅な振る舞いと共にフィーリアが名乗り、緊張した様子でエレナ

が、憮然とした態度と共にサクラもそれぞれ名を名乗る。そして、最後に――

「――クリュウ・フランチェスカです」

クリュウ・ルナリーフは――クリュウ・フランチェスカと名乗った。

「フランチェスカ……？」

クリュウの名乗った姓に、イリスが首を傾げた。ジェイドも何か引っ掛かりを感じてはいるものの、特に何も言わずに無言を貫いている。一方、彼が本名を名乗らなかった事に対して彼の本名を知る全員が驚愕や戸惑いなどの反応を見せる。だが、誰もその疑問を口にはしなかった――クリュウの真剣な横顔が、それを許さなかったのだ。

「フランチェスカ……大陸では普通の姓として使われているのか。何だか妙な気分じゃの」

そう言って、でもどこか楽しげに言うのはイリス。彼女曰くアルトリアの古い言葉で《フランチェスカ》は第一王女という意味を持つ。その為アルトリアでは第一王位継承権を持つ長女、ひいては女王にのみ授けられるミドルネームのようなものらしい。

「妾もフランチェスカを名乗る者。良い、そなたの事は名で呼ぼう――構わぬか、クリュウ」

「構いません。僕もそっちで呼ばれる方が慣れていますので」

クリュウはなぜか一切の感情を面に出す事なく、事務的に答える。いつも喜怒哀楽が激しく表情がコロコロと変わる彼らしくない態度に、フィーリア達は妙な不安感を抱きながら彼を無言で見詰める。

「聞けばクリュウ。お主は亡くなった母がこの国出身であると考え、我が国を訪れたと聞く。これも何かの縁じゃ、妾達もできる限りの協力をしよう」

「ありがとうございます」

「……その代わり――大陸での話を妾に存分に聞かせるのじゃ」

それまで表情を引き締めて硬い態度で接していたクリュウは、そんな彼女の突然の言葉に思わずその仮面が外れてしまった。ぽかんと、呆けたような表情で無様に玉座を見上げる。それは他の面々も同じだったのか、それまでクリュウを凝視していた面々も一斉に同じよう

な表情で彼女を見上げる。そんな彼らの視線に対して、イリスはニッとイタズラっぽい笑みを浮かべた。
「なぁに、妾はこの城からあまり出られん身。城下町の事は小耳に挟む事はできても、さすがに大陸話となればまるで耳には入らん。我が国と文化も生活形式も違う土地の話、好奇心が疼（うず）くではないか」
　それはまるで、面白い事を見つけた子供のようにキラキラとした瞳だった。それを見て、改めて自分達の前にいるのが自分達よりも幼い少女だと思い出す。女王という責務と負っていても、その実はまだまだ少女。好奇心は実に旺盛らしい。
「陛下。あまりお戯れは……」
「良い。妾は政務で忙しい日々を送っておるのじゃ。これくらいのわがままは許せ」
「は、はぁ……」
　堂々とした物言いで補佐官であるはずのジェイドを黙らせると、イリスは何と玉座から離れて階段を降りる。そして跪いているクリュウの前に立つと、同じ視線にまでしゃがみ込む。ドレスの裾が見事に床に投げ出されるが、このお転婆女王は気にもしないらしい。
　キラキラとした瞳を輝かせながら、イリスはクリュウと至近距離で向かい合い、屈託の無い笑みを浮かべた。
「それ、早う面白い事を話せクリュウ」
　結局、クリュウ達――主にクリュウだが――が解放されたのはそれから一時間後の事だった。クリュウ達が話す何気ない事でも、イリスにとっては新鮮な話題だったらしく、根掘り葉掘りキラキラとした瞳で聞き出された。
　一時間程してジェイドが「陛下、そろそろ」と切り出すと、イリスは「うむぅ……、ここからが面白いのにのぉ……」と不満を漏らしつつも、そこは一国の長。公私混同はせず、「仕方ないのぉ」と話を切り上げた。
　そしてクリュウ達は女王の間を出され、クリュウ達とイリス女王の初顔合せは終わった。

「あんた、何で偽名なんて名乗ったのよ」
女王の間から出たクリュウに開口一番にそう尋ねたのはエレナだった。疑問を抱いたら迷わず尋ねる所は実に彼女らしい。しかもその疑念は皆の共通意識だったらしく、誰もがクリュウに視線を集中させて彼の言葉を待った。
皆の視線を一身に受けながら、クリュウは静かに首を横に振った。
「……ちょっと、考えがあって」
「何よ考えって」
「それは、まだ言えない……ごめん」
「はぁ？　何よそれ。いい加減隠し事は――」
「エレナ、あまり彼を責めるな」
語気を荒らげて突っ掛かるエレナの肩を持ってシルフィードは彼女を止める。だがずっと彼に隠し事をされているのが気に入らないエレナはその程度じゃ気が済まない。
「放してよシルフィードッ。あんた、こんな所まで来てもまだこいつに隠し事をされていて、悔しくない訳ッ!?」
「悔しいとか悔しくないとか、そういう問題ではない。彼が話したくない事を、無理に聞き出すつもりもない。彼は何か考えがあって行動している。それを邪魔する権利は私にはない。それだけさ」
「……あんた、前から思ってたけど冷め過ぎなんじゃないの？」
「どういう意味だ？」
「クリュウの事を仲間仲間って言ってるくせに、いつも冷めたような態度。あんた、本当にあいつの事を仲間とかって思ってる訳？」
「……何だと？」
エレナの挑発するような物言いに、シルフィードが珍しく眉を吊り上げて対峙する。こんな安っぽい挑発なら、シルフィードは普通は無視していただろう。だが例え安っぽくても、仲間（クリュウ）との絆を汚されるような発言だけは看過できなかったのだ。例えそれがエレナ相手でも、だ。
珍しい組み合わせで睨み合う両者の間に慌てて割って入ったのはフィーリアだ。二人を引き離すと「ケンカはやめてくださいッ。シル

フィード様は少し落ち着いてください。エレナ様もですッ」と二人それぞれを注意する。そんな彼女の言動にシルフィードは少し冷静さを取り戻したらしく「す、すまない」と素直に謝る。が、エレナはそれでも怒りを収められずにいた。
「フィーリアはどう思ってる訳？　こいつに隠し事をされてて平気な訳？」
「そ、それは……」
　フィーリアだって、クリュウに隠し事をされているのは快いとは思っていない。エレナと同じように、彼に隠し事をされている事には腹立たしいまではいかなくても不満は感じている。だからといって彼女のように彼を責め立てたり追求しようという気持ちにはなれない。ちょうどシルフィードとエレナの間という立ち位置だからこそ、エレナの問いに答えられずにいた。彼女の気持ちもまた、わかるからだ。
「……いい加減にしてエレナ。見苦しいわ」
「何ですってッ!?」
　シルフィードと同じく冷静な声で彼女を止めるのはサクラ。だがサクラはシルフィードのように優しくはない。一人で勝手に熱くなる彼女を、蔑むような目で睨みながら彼女の愚行を吐き捨てる。だがそんな物言いはエレナの怒りの炎に油を撒く事にしかならない事というのは、サクラだって重々わかっているはず。エレナとはこの面子の中ではクリュウに次いで長い付き合いなのだから。
　睨み合う両者。フィーリアは止めなければとは思いつつも、二人の睨み合いに萎縮してしまって動けずにいる。一方的に敵視するエレナに対して、サクラは同じく止めなければとは思っていても自分が原因だとわかっている為動けずにいるクリュウを一瞥すると、恥ずかしがる事もなく堂々と言ってのけた。
「……私はクリュウを信じてるから、何も言わないわ」
　フィーリアの時と同じく、クリュウを信じているからこそ何も言わずについて行くと断言するサクラ。そんな彼女の鋭い隻眼と決意にエレナは言葉に詰まった。あまりにも堂々と言ってのける彼女のセ

リフに、押し黙らされたのだ。それを見て、サクラはトドメとばかりに畳み掛ける。
「……見苦しく騒ぐ貴様の方が、クリュウの事を仲間と思っていないわね」
「そ、そんな事……ッ」
ない、と言い切れなかった。有無を言わせぬ迫力で彼女の歯切れの悪い意見をサクラは静かに黙殺すると、言いたい事は全て言ったとばかりに反転する。だが、それはまるで勝利者の背中のようで、敗者の烙印を押されたエレナはただただ悔しげにその背中を見詰める事しかできない。
エレナが黙ると、自然と五人の間には気まずい沈黙が流れた。数分にも思えるような重い沈黙だが、実際は十秒と経っていない。それを打破したのは当のクリュウ本人だった。
「その、ごめん……」
「謝るくらいなら隠し事なんかするんじゃないわよ、バカ……」
「ご、ごめん……」
エレナもバツが悪いのか複雑そうな表情のまま謝るクリュウに目を合わせられず、仕方なくそっぽを向く。クリュウもそれが彼女からの拒否だと思い黙り、必然的に二人の間には何とも気まずい沈黙が降りた。そんな二人の間にため息を吐きながら入ったのはシルフィードだ。
「クリュウ。君にも君の考えがあって動いているんだろう？　だがそれはずっと隠し通すつもりなのか？」
「そんな事はないよ。ちゃんとみんなにも話す……けど、まだ僕の中でも整理がついてないから、今はまだ話せない」
「……という訳だエレナ。まだ時期尚早なだけで、いずれは話すとの事だ」
「で、でも……」
「――どんなに美味なワインも、早熟では味気ないものになるだろう？　時が来れば彼の方から話してくれると言っているんだ。今は彼の自由にやらせてやれ」

まるで駄々をこねる子供を諭すかのように優しく語り掛けるように言う彼女の言葉にエレナは渋々という感じでうなずいた。本当は今すぐにでもクリュウをとっちめて聞き出したいが、シルフィード相手では論破はもちろん力技も通じないとわかっている。要するに、駄々をこねても無駄だとわかっているのだ。

不満げに鼻を鳴らしてそっぽを向く彼女を見て、クリュウは声を掛けようとするがそれをシルフィードに制される。

「今は何も言うな。余計な気遣いは言い訳にしか見えん」

「でも……」

「彼女の為を思うなら、余計な事は考えずにその考えとやらに集中してできるだけ早く片を付けろ」

余計な気遣いをするなという彼女の忠告にうなずきつつも、少し違和感を感じたクリュウ。何となく、シルフィードの語尾がキツイような気がしたのだ。不満そうなエレナの肩を叩いて歩き出すシルフィードの背中を訝しげに見詰めていると、ちょんちょんと背中を叩かれた。振り返るとそこにはフィーリアが立っている。

「フィーリア？」

「……シルフィード様も口ではああ言っていますが、やはりクリュウ様に隠し事をされているのはあまり快いものではないようですね」

フィーリアの指摘でクリュウの中で疑問が解決した。どうやら冷静を装いつつも、その内心ではシルフィードも若干は怒っているらしい。そう思うと、自然と表情は曇る。だがそんな彼の肩をポンと叩く者がいた――サクラだ。

「……気にしないで。過程が無駄とは言わないけど、結局は結果が全て。見返してやればいい」

「サクラの意見は極論だけど……うん、とにかく早く決着はつけるつもり」

「その意気ですッ」

エレナとシルフィードに怒られ、フィーリアとサクラに背中を叩かれ、クリュウの中で迷いは消えた。とにかく今は早急に自分の中にある考えに決着をつける――これ以上二人を失望させないように、これ

以上二人に心配させないように。
「あのさ、ちょっと訊きたい事があるんだけど」
「な、何かしら……ッ!?」
　女王の間を去ってから一時間後、クリュウは城内でアリアの姿を見つけると駆け寄って早速声を掛けた。突然声を掛けてしまったのでかなり驚いたのは申し訳ないが、それでも真摯に疑問に答えようとするアリアはやはり面倒見がいい娘なのだろう。
「その、立ち話も何だから……私の部屋に来ます？」
「アリアの部屋？　でもここって……」
「何かと城に出入りする事が多いから、そのうち陛下が大変だろうと気遣ってくださって部屋を宛てがわれてますの。実家の方に比べれば質素ですけど、平民を招待するくらいなら十分な調度品が揃ってますわよ？」
　なぜか自信満々に言うアリアだったが、すぐに自分が彼をバカにしたような言い方をした事に気づいて狼狽する。が、そこはクリュウ。その程度は特に気にする事もなく「そっか。じゃあ長くなるかもしれないから、お邪魔してもいいかな？」と貴公子スマイル。それだけでアリアの顔は熟れたシモフリトマトのように真っ赤に染まる。
「か、構いませんわよ。あまりいいお茶菓子なんかご用意できませんけど」
「別にお構いなく。じゃあ行こうか」
　思わぬ形でクリュウと二人っきりという環境が整ったアリアは平然を装ってはいるが、実際は嬉しさと戸惑いが両立するというおかしな気分を味わっている。何とも心地良い板挟みだ。
　そんな訳で急遽アリアの部屋へ行く事になった二人。緊張した様子で彼を扇動するアリアの後ろに続きながら、クリュウはそんな妙に動きがぎこちないアリアの姿に首を傾げる。そうこうしていると目的の部屋に到着した。元々利便性を重視した場所にあった部屋を宛てがわれただけあって、意外にもあっさりと着いた。
「ちょ、ちょっと待ってなさい」
　いざ部屋へ入ろうとした時、アリアは突然そう言って進もうとする

クリュウを制した。当然、すぐに部屋に入れるものだと思っていたクリュウは不思議そうに首を傾げる。
「どうしたのさ？」
「そ、その、ちょっと散らかってるから片付けたいの。五分でいいから、待ってなさい」
「え？　僕は別に散らかっててもの気にしないけど……」
「あなたがしなくても私がするんですのッ。本当にあなたはデリカシーがなさ過ぎますッ！」
「……よく、言われる」
「とにかくッ、準備ができたら呼ぶから、あなたはそこで待っていてください」
　返答の余地もなく決定事項を述べるようにそう言い残し、アリアは一人先に部屋へと入ってしまう。残されたクリュウは仕方なく彼女が部屋の掃除を終えるのを待つ事にする。まぁ、女子が多い環境にいる為か何かと女子は準備に時間が掛かる為、ある意味待ち慣れしている彼からすればこれくらい造作も無いのだが。ちなみに彼が背を預けている壁の向こうではアリアが全速力で片付けをしている。特筆して散らかっている訳ではないが、それでも生活感がある。要するに下着などが普通に置かれていたりするので、それを片っ端から片付けているのだ。
　時間にして五分後。有言実行を果たしたアリアは息を切らせながらドアを開くと「い、いいですわよ」と彼を招き入れる。招待されたクリュウは「お邪魔しまぁす」と社交辞令的に言って部屋へと入る。
　部屋の中は、まぁ普通の部屋という感じだ。絵画や家具など高そうな物が置かれてはいるが、結構スッキリとしている。一見すると生活感が感じられないが、細かく見れば化粧台の上には化粧品がきれいに並べられていたり、机の本棚には勉強に使うであろう書物が置かれていたりと、ちゃんと生活感は見て取れる。
　だが、どちらかと言えばサクラやシルフィードの部屋に近い感じの部屋だ。要するに、必要最低限なものだけを置いた、あくまで休む事を軸にした、フィーリアのような癒しを求めるのとはまた違った部屋

作り。ちなみにフィーリアの部屋には所々に女の子らしくぬいぐるみが置かれていたりする。特にお気に入りなのはかわいくデフォルメされたリオレイアのぬいぐるみ。彼女曰く珍しい品で手に入れるのに苦労したそうで、部屋で寝る時はいつもこれを抱いて寝ているらしい。

そういう意味では、ちょっとアリアの部屋は女の子らしくはない。それでも女の子の部屋特有の甘い匂いは漂っていて、それだけで純情少年クリュウはクラクラしてしまう。

「紅茶でよろしくて？」

「あ、うん。別に気を遣わなくても大丈夫だよ」

「客人にお茶の一つも出さないなんて、アルトリア人として恥ですわ」

エルバーフェルドも紅茶文化が根付いているが、アルトリア程ではない。アルトリア人は何よりもティータイムとお茶菓子を大切にする文化を持っており、お茶の淹れ方にも厳しい。礼儀＝紅茶という方程式が成り立つ程だ。当然アルトリア人であるアリアもまた紅茶にはうるさい。レヴェリ産のチューリップティーを持って来ればどんなに喜んだ事か。もったいない事をしたなぁとクリュウはちょっと後悔。

勧められた椅子に腰掛けて待っている間、クリュウは部屋の中を見回しながら《女の子の部屋》がどんなものなのかを観察する。まぁ、そういう目的ならフィーリアの部屋が一番しっくり来るのだが。

「あ、あまりジロジロと人の部屋を見ないでくださる？」

「え？　あ、ごめん」

確かに人に部屋をジロジロと見られるのはいい気分はしない。クリュウは謝って素直に視線を前に固定する。その先にはお茶の用意を終えたアリアがティーセットを持って戻って来るのが見えた。

「急な事だったから、簡単なお茶菓子しか用意出来なかったけど、いいですわよね？」

「お気遣いなく」

ティーセットをテーブルの上に静かに置き、自身も彼の対面の席に腰掛ける。慣れた手つきでティーポットからカップへ紅茶を淹れ、彼

の前に差し出す。
「砂糖やレモンはいるかしら？」
「ううん、最初の一口は何も淹れないんだ。何かを加えるのは最初の味を味わった後だよ」
「あら、何だか通な人の意見ですわね。驚きましたわ」
「いや、エレナがその辺にうるさくてさ。自然に」
「……そうですの」
　彼の通な意見を驚きつつもどこか嬉しそうに聞いていたアリアだったが、彼の口から女の子の名前が出た途端に表情はちょっと不機嫌そうなものに変わる。せっかくの二人っきりなのに、他の女の子の話や名前は聞きたくない。可愛らしい乙女の恋心だ。
　クリュウは突然表情を変えた彼女の様子を訝しげに見ていたが、香る紅茶の匂いにつられて視線は下に下がる。その先にあるティーカップを掴み、香る匂いを一回楽しんだ後に口に含む。この飲み方もエレナに叩き込まれたものだ。
「どうかしら？」
「うぅん……やっぱり砂糖入れるね」
「……相変わらず甘党なのですわね」
「甘党って訳じゃないんだけど、コーヒーも紅茶も砂糖を入れないと飲めないだけだよ」
「子供ですわね」
「うるさいな」
　一年の間にずいぶんと遠くに行ってしまったような気がしていた彼の、あの頃から変わっていない所を見つけて思わずアリアはくすくすと微笑んでしまう。昔から大人びているんだか子どもっぽいんだかわからない相手だったが、それもあの頃とはまるで変わっていないらしい。それがわかっただけで、つい嬉しくなってしまう。
「な、何さ？」
「別に。やっぱりクリュウは変わっていませんわね」
「……男としては、それってあまり嬉しくないんだけど」
「あら、じゃあ前よりかわいくなったと言えばよろしくて？」

「……怒るよ？」
「うふふ、冗談ですわよ。冗談」
　不機嫌な表情から一転して今度はご機嫌な彼女の姿にクリュウは戸惑う。一体何が彼女の表情をコロコロと変えているのか。不思議そうにしていると、角砂糖が詰まったビンを手渡される。礼を言って受け取ると、中の角砂糖を二つ入れる。温かい紅茶に入った角砂糖はすぐに溶け、姿を消した。それを見届けてからスプーンで軽くかき混ぜ、口に含む。すると、途端にさっきまでは苦味しかかんじなかった紅茶が自分好みの甘い飲み物に変わる。
「うん、おいしい」
「……何だか、紅茶じゃなくて角砂糖を褒められたみたいでいい気分しませんわね」
「そ、そんな事ないよッ。砂糖はあくまで引き立て役であって、主役は紅茶だよッ」
「何だかウソっぽい言い方ですわね」
「ほ、本当だってばッ！」
　気を悪くさせないように必死になって紅茶を褒めたと言う彼の姿をジッと見ていたアリアだったが、我慢できなくなったらしくプッと吹いて笑い出す。その途端、クリュウは「え？」と間抜けな表情に代わり、それが余計にアリアをおかしくさせる。
「あははは、何を必死になってますの？　格好悪いですわね」
「な……ッ!?　ひ、人が一生懸命だってのに何で笑うのさッ！」
「その一生懸命さが滑稽だと言ってますの。たかが紅茶じゃないですの」
「だ、だって――アリアが前に紅茶をバカにするのは絶対に許さないって言ってたから……」
　目に涙を浮かべておかしそうに笑っていたアリアだったが、クリュウの最後の消えそうになる小さな声を聞いた途端笑いが引っ込んでしまった。
　彼が口にしたのは、自分と彼がまだ出会って間もない頃。彼が自分の参謀役になって日が浅いある日、クラスで集めたアンケートの集計

が一段落した時に紅茶をご馳走した時――そういえばあの時も彼はまず一口紅茶を飲んでから砂糖を入れてたっけ――に彼が何気なしに言った「紅茶って結局違いなんてわかんないよね」の一言。これにあの時の自分は激昂し、まだ仕事の途中だったのに帰ってしまった事があった。その時に彼に怒鳴ったのが――「紅茶をバカにする人間は人間としてのクズですわッ！　許しがたい侮辱ですッ！」だ。

あの後、結局彼は自分一人で全ての仕事を終えて、翌日その集計結果を渡す際に何度も頭を下げて謝った。一夜明け、自分も紅茶に詳しくない人間相手に憤慨した事を反省し、自分も謝った。

今にして思えば、後に好きになった相手に怒鳴り散らしたという赤面ものの恥ずかしくて忘れたい記憶だ。だが彼はそれをちゃんと覚えていて、こうして今にその教訓を用いている――恥ずかしいが、でも自分の言った事を忘れないでくれていた彼の言葉に、嬉しくなってしまう自分もいる。どうすればいいのか、二つの意味で顔は真っ赤だ。

「アリア？」

「な、何でもありませんわッ」

妙な沈黙にクリュウが訝しげに彼女の顔を覗き込むようにして声を掛けると、突然彼の顔が目の前に現れた事にアリアは驚愕し、慌てて彼の顔を押し戻す。

「そ、それで私に用とは一体どのようなご用件なんですの？」

狼狽している事を隠すように一度咳払いしてアリアは無理やり話を本来の路線に戻す。かなり無理のある流れだが、クリュウはあまり気にせず彼女の疑問に一度うなずくと、自分好みの甘さに変わった紅茶を一口飲んで彼女に付き合ってもらった本来の話を切り出した。

「前女王、ロレーヌ・アルトリア・ティターニア陛下についてなんだけど……」

「先代女王陛下？」

クリュウの口から飛び出したのはアリアが予想していたどんな話題よりも突拍子がなかった。何せ彼とロレーヌを結びつける線がわからなかったし、そもそも平民と一国の女王とが結ばるとも思えな

い。アリアが不思議そうに首を傾げると、クリュウは話の続きを持ち出す。
「その、《ティターニア》ってどういう意味？」
「なぜそんな事を？」
「あ、うん。大した事じゃないんだけど、さっき陛下が《フランチェスカ》は第一王女の意味を持つって言ってたから。そうするとロレーヌ陛下のミドルネームはおかしいかなって」
　クリュウが口にした疑問。アリアはようやくその意図が理解できたらしくうなずいた。彼は昔から妙に好奇心が強く、よく気が付き、気になるとそれを解決しないと気がすまない質だ――その気を半分でもいいから恋愛面に回せば自分はこんなに苦労しなくて済むのに、とアリアが内心ため息を零しながら思ったのは言うまでもないだろう。
「アリア？」
「何でもありませんわ。えっと、《ティターニア》というのは古いアルトリア語で第二王女という意味を持ちますわ」
「第二王女？」
「ええ。先々代女王シェレス・アルトリア・フランチェスカ陛下には二人の娘がいたそうですの。その次女が、ロレーヌ陛下ですわ」
　アリアの説明にクリュウは納得したようにうなずいた。ロレーヌがなぜミドルネームが他とは違っていたのか。その疑問は彼女が第二王女、次女だからという簡単な理由だったのだ。だがこの疑問が解決すると、今度はまた別の疑念が浮かぶ。
「第二王女……王位継承って普通年上の兄弟から引き継ぐものだよね？」
「そうとも限りませんわ。確かに形式的にはどの王国も長男長女が王位継承権第一位ですけど、その人物が王に相応しくないと烙印が押されれば、第二位以降の王位継承権を持つ者が王位を継承する事もありますわ。まぁこれは一位の者が病で王としての仕事ができない。もしくは王位を継承する前、もしくは継承後に崩御された場合など、特異な場合のみに当てはまるので普通は継承権の順位が優先されて継

承されますわね」
「という事は、ロレーヌ陛下のお姉さんは病で女王の仕事ができなかったって事？」
　彼女の話から考えると、そう考え至るのが普通だろう。第一王女は病の為に王位を継承できなかった。もしくはすでに亡くなっているので王位継承が無効化となった。そう考えるのが妥当だ。
　だがクリュウの問い掛けに対してアリアは妙な表情を見せた。何というか、言うか言うまいか迷っている。何か密告しようとしている子供の葛藤する姿を思わせる、微妙な態度。
「アリア？　どうしたの？」
「……友人ですから特別に話しますけど、他言は無用でお願いしますわね。本当は一部の人間しか知らない、あまり口外してはならない話ですから」
　なぜか自分の部屋なのに周りをキョロキョロと警戒しながら小声で言う彼女の言葉にクリュウは面くらうが、すぐに無言でうなずいた。それを見て決心がついたのか、アリアはそっとその特別な話を口にする。
「その、ロレーヌ陛下の姉君は――とある兵士と駆け落ちなされたんですの」
「……はぁ？」
　それはクリュウが予想していたどんな話題よりも突拍子がないものであった。

第１７３話　二五年前の真実　夜空の下で結ばれる運命の絆

アリアの話を纏めるとこうだ。

二五年前、当時国を治めていたシェレス・アルトリア・フランチェスカには二人の娘がいた。

長女は明るく笑顔が素敵で、天神乱漫という言葉が具現化したかのような人で、その美貌と笑顔、優しさから現在のイリスをも上回る国民からの人気があった。王位継承権の順位的にも、人望などからも次期女王は確定していたそうだ。

次女ロレーヌ・アルトリア・ティターニアは逆に病弱だった為に物静かでいつも本を読んで部屋に引きこもるような子だった。しかしそのお陰か政治学・経済学・法学など様々な分野で博士号を得る程の天才だったそう。

人を纏めるのに秀でた姉と、人や目に見えない力を効率良く動かすのに秀でた妹。二人はまるで光と闇のようにお互いにない所を持った姉妹だった。その為、周りからも次の世代はこの二人でアルトリアという国は動くと思われていた。

女王として人をカリスマ的に纏めあげる姉と、それを補佐する宰相として国を実質的に運営する妹。すでにまだ共に十代の中頃でしかなかった二人の姉妹の次期《双頭体制》は確定したも同然だった。

だが、そんな大人の事情が錯綜する中、事件が起きた。

長女は当時、誰にも口外していない秘密があった。

当時アルトリア王国とハンターズギルドは試験的に同盟関係を結んでいた。互いの持つ技術を公開し合い、より多くの人民をモンスターから守ろうというもの。まぁ、あくまで表面的なもので実際は互いの武力の確認や牽制、及び互いの技術開示による自技術の向上など、これまた大人の事情が錯綜するものであったが。

その際、後の完全同盟に備えて互いの末端部分での信頼関係を築く為にアルトリアからは兵士が、ハンターズギルドからはハンターがそ

れぞれ数十人交換されていた。
現場の兵士達は本来の目的である互いの信頼関係を作る事に奮闘していたが、一説にはこれは互いが約束を反故した場合に備えての人質だったとも言われているが、実際の所は不明だ。
ともかく二五年前、アルトリアには数十人の大陸人――ハンターが派遣されていたのだ。
ハンター達はひとまず聖騎士団の特殊部隊の兵士という立ち位置を得て、アルステェリアでアルトリア軍の兵士達と合同で訓練や実戦を行い、互いの信頼を築いていた。
そんな中、一人の少年ハンターと長女が思わぬ形で遭遇した。長女は天神乱漫な性格からちょっとやんちゃでもあって、時々勝手に城から抜け出す事があったらしい。その際に森の中へ入ってしまい、そこでモンスターに襲われた所をそのハンターに助けてもらったのが始まりと言われている。
その出会いをきっかけに、二人はそれから幾度と無く密会を重ねていった。最初のうちは友達としてスタートした二人だったが、そこは年頃の男女。次第に二人の関係は友達のそれから離れていき、互いに想い合う許されない身分の違いの中で生まれた恋心を抱く、恋人同士へと変わっていった。
そして二五年前、長女はついに城から抜け出すと少年ハンターと駆け落ちしてしまった。すぐに捜索隊などが派遣され、全ての港を封鎖。国内に閉じ込めて必死の捜索がされたが、二人は見つからなかった。すでに貿易船に乗り込んで国外へと逃亡していたのだ。
次期女王と言われていた長女の逃亡は是が非でも国民に隠しておきたかった。その為王政府は二人が国外へ逃亡したとわかると捜索を打ち切り、長女は病で亡くなったと国民に公表した。
国葬が行われ国民全員が悲しみに暮れる中、この大失態は当時の一部の閣僚や関係者のみだけが知る以外、決して口外はされなかった。その為、現在でもアルトリア政府はその長女は病死したと決定している。
長女死亡。これは同時の王位継承権第一位の喪失と同義。その為

シェレスが崩御された後は繰り上げで王位継承権第一位となった次女のロレーヌが王位を継承した。
　ロレーヌは姉を奪ったハンターズギルドとの同盟関係を解消し、自国の力だけで諸外国を牽制する為に無理な軍拡化を強行。それが現在のアルトリア王政軍国の礎となった。
　そしてロレーヌ陛下もまた元々の病弱に無理を重ねた為か次第に衰弱していき、崩御。現在はその一人娘であるイリス・アルトリア・フランチェスカが王位を継承して現女王として君臨している。
　これがアルトリア政府が国民や諸外国に絶対に隠し通したい事件の真相であった。
「……その、これは本当に国家機密に関わる事だから、絶対に口外しないと約束してくださる？」
「う、うん。あまりにもすごい大恋愛の話だったからまだ現状が呑み込めていないけど、約束はする」
　アリアの口から明かされたのは、クリュウの予想のどれもを凌駕するような内容だった。あまりにもすご過ぎて、というかジャンルが違い過ぎて正直困惑しており、まだ頭は理解できていない。それでも、何となくこれは口外しちゃいけない事だという事だけはわかったので、ひとまず約束は守る方向に定めた。
「とにかく、そういう経緯があってロレーヌ陛下はフランチェスカの名を持っていなかったって訳ですの。わかりまして？」
「わかったけど……いいの？　それ、絶対一般人の僕が聞けるような話題じゃないけど」
「そりゃ、私がバラしたとわかれば母様に滅茶苦茶怒られますけど……あなたは口が堅い人とお見受けしてますし、それにあなたかたの頼みとあれば、私が断る謂れはありませんもの」
　そう言って微笑む彼女の笑顔に、無警戒だったクリュウは思わずドキッとしてしまった。慌てて視線を逸らし、じわじわと赤く熱を帯びてきた頬を冷ます。そんな彼の様子を見てアリアが首を傾げた。
「どうしたんですの？」
「な、何でもないよッ。何でも、ね？」

「そうですの？　変なクリュウですわね」
　アリアは気になりはつつもそれ以上の追求はせずにゆっくりと自身で淹れた紅茶を嗜む。そんな彼女のあまり見た事がないお嬢様らしい姿にも思わずドキッとしてしまい、クリュウは自分の心臓に手を当てて首を傾げた。
「……変だなぁ」
「何がですの？」
「な、何でもないってばッ」
「……何だか怪しいですわね」
　ジト目になって疑うような視線を向けるアリアに対して笑って何とか誤魔化しつつ、無理やり話を進める。
「その先代女王のお姉さんの名前や、駆け落ちした兵士の名前はわかんないの？」
「それはちょっと……どちらも王家にとっては忘れたい汚点ですもの。私も流れだけは母様から教えてもらいましたけど、さすがに名前は禁忌中の禁忌で、私にもわかりませんわね」
「そっか……ごめん、ありがとうね」
　笑顔と共に礼を述べるクリュウ。それは心からの感謝を込めた言葉と笑顔だ。何せ自分一人じゃわからなかった事、それもかなりの秘密話を聞けたのだ。まだこれが自分の中の疑問と結びつくかはわからないが、それでも情報はあって損はない。自分の為に親に怒られるような行いをしたのだから、本当に感謝してもし切れない。
「か、構いませんわよ。私とあなたのその……親しい仲じゃないですの」
　クリュウの無垢な笑顔を前に顔を真っ赤にしたアリアは慌てて視線を逸らし、消え入りそうな声でそれだけ搾り出した。最後の方はかなり勇気を出して言ったのだが、残念ながらそれは小さ過ぎて結局彼の耳には届かなかった。
「でも、こんな事を訊いて何に役立てると言うのですの？」
　一度咳払いして話を戻すアリアの問い掛けに、クリュウは少し考えて「うーん、内緒じゃダメかな？」と彼女の問い掛けをスルーしよう

とする。フィーリア達にも黙っているのだから、もちろんアリアだけに言う訳にはいかない。それにまだ自分の中でも整理がついてないのだから、根拠のない話は妄言でしかないと彼はわかっている。
　クリュウの返答に最初こそ不満そうな表情を浮かべていたアリアだったが、すぐにその表情を引っ込めて仕方がないと言いたげなどこかサッパリと諦めたような表情に変わる。
「まぁ、あなたは意外と何を考えてるかわかりませんものね。あえて追求はしませんわ」
「あ、ありがとう」
「その代わり、まだ紅茶のお茶菓子もあるからあなたの武勇伝でも聞かせてもらえるかしら？」
「武勇伝って……そんな大した話はないよ」
「いいんですの。ただ――あなたがこの一年間で体験した事を知りたいんですの」
　好きな人の事は何でも知りたい。恋する乙女のちょっとしたわがままだ。
　恥ずかしそうに頬を赤らめながら言う彼女の言葉に、クリュウもまた何だか気恥ずかしくて同じように頬を赤らめながら、「その、あまり面白い事はないよ？」と念を押しておく。だがもちろん、アリアからの返答は、
「構いませんわよ」
　笑顔でそう返されると、情報提供を受けた身としては諦める他はない。素直に諦めたように自分のこの一年の出来事を話してみる。以前にフィーリア達に学生時代の話をした事もあったが、それに匹敵するくらい恥ずかしいものだ。
　だから所々自分の情けない所は省略しながら話すが、もちろんそんな事はウソが苦手なクリュウ、しかも相手はそのクリュウに恋している乙女だ。そんなウソすぐに見抜かれてしまうのだが、アリアはあえて何も言わなかった。自分の事をかっこよく見せようとする彼の情けない姿が、ほんの少しだけ愛らしかったのは彼には内緒だ。
　アルトリア産の紅茶とお茶菓子を楽しみながら、クリュウとアリア

の二人だけのお茶会はその後一時間程続いたのだった。
「三日前、テティル連邦共和国の警備艇団が我が国の領海へ侵入。第3艦隊の国境警備隊が出撃して一時これと睨み合いとなったそうです。その後、こちらの威嚇射撃で共和国の警備艇隊は撤退した為、双方共に被害はなしです」
女王が仕事を行う専用の部屋、執務室でジェイドが話したのはテティル連邦共和国とアルトリア王政軍国の間で時々起きる国境問題だ。
テティル共和国は元々火山などの山岳地帯に囲まれた温暖な立地の国で農業国として栄えていたが、火山の噴火による火山灰や環境変化の影響で国土の大部分が火山灰を被ったり地殻変動によって元々国境外周にあった湿地帯が内部にまで広がるなどして農業に適さない土地が増え、一時国が滅びようとしていた。その際大陸へのパイプを模索していたアルトリア王国が商業協定を結ぶ見返りとして蒸気機関技術を提供。以降テティルは独自の技術も加えて今日では工業国として国を再建させたのだ。
しかし結局ロレーヌ女王の代になってアルトリアは鎖国化。同盟は解消され、アルトリアという監視役を失ったテティルはその後利益優先の為に環境問題を無視した結果、現在では首都テティリアでさえ工場の煙で空が隠れてしまう程に環境汚染が深刻化。イリス女王の代になってテティル共和国に対し環境改善を要求するもテティル共和国はこれを黙殺。それどころか無限の工業拡大の為に資源を欲し、資源が豊富なアルトリア国の領土であるフューリアス諸島を狙い、今では時々無断で国境を越えて領海へ侵入。アルトリア海軍の軍艦が国境警備に派遣されるなど両国の関係は悪化の一途を辿っている。
イリスは平和的に解決したいのが本音だが、だからと言ってテティルの悪行を放置しておいては国民からの支持を失いかねない。仕方なく、国境海域に軍艦を派遣して威嚇射撃に留めての発砲を許可している。その為、こうして時々両軍が睨み合うという状況が起きてしまっているのだ。
軍上層部などは王軍艦隊を派遣してテティル共和国の無人の土地

を焼き尽くして威嚇すべきという意見まで出始め、過激なものになれば首都テティリアを空爆すべきと言い出す将軍までいる始末。統率する身としては頭の痛い問題だ。
　いつもならジェイドの意見を聞きながら互いにアイデアを出し合って今後の対策を練るのがイリスの女王としての仕事だ。だがこの日は……
「陛下？」
　書類を片手に話を進めていたジェイドはその奇妙さに気がついた。いつもなら事細かく質問や改善点を言うはずのイリスが、今日に限ってなぜか沈黙しているのだ。不思議に思ってイリスの方を見やると、
「……うぬぅ」
　いつもなら真剣な眼差しをこちらに向けて話を聞いているはずのイリスが、なぜかぼぉっと視線を上に向けたまま時折唸っていた。当然、その様子からはお世辞にも話を聞いているようには見えない。
「陛下」
「……う、うぬ？　な、何じゃ」
　ぼぉっとしていたイリスはジェイドの声にハッとなり慌てて威厳ある顔つきの、女王としての仮面を被る。が、もちろんその前段階の顔を見ているジェイドは呆れたようなジト目で彼女を見上げる。
「私の話、聞いていましたか？」
「な、何を言うか。妾はちゃんと主の話を聞いていたのじゃ」
「では、今私は何をお話していたのでしょうか？」
「無論、今宵の晩餐の献立じゃ」
「……」
「……」
「……陛下」
「……す、すまん。聞いておらんかったのじゃ」
　見事にウソがバレたイリスはジェイドのいつになく低い声に申し訳なさそうに頭を下げて謝る。その姿は一国の長である女王としての風格は微塵もなく、あるのは怒られた子供のような弱々しい印象の少女の姿だ。そんな彼女の姿にジェイドは呆れたようにため息を零

すと、先程まで読み上げていた書類を脇に挟む。
「陛下がお考えの事、恐悦ながらご推測しますと――例の大陸人の一行の事をお考えでしょうか？」
「う、うぬ？　な、なぜわかったのじゃ？」
「丸わかりです。いつもの陛下なら私の言葉を一字一句聞き漏らす事なく聞いておりますのに、今日に限っては心ここにあらず。いつもと違う要因があるとすれば、それは例の大陸人の存在くらいのものです」
「うぬぅ、さすがジェイドじゃな。見事な推理じゃ。お主、推理小説を書いてみたらどうじゃ？」
「これくらい当然です。何年陛下の配下でお世話させていただいてるとお思いですか」
「う、うぬぅ……」
　話をすり替えようとしたイリスだったが、ジェイド相手ではそう簡単いくはずもなく失敗。困ったように唸る彼女を横目に、ジェイドは大きなため息を零す。
「一体どういうおつもりですか？　大陸人を招き入れる事を許可した挙句、この城内に留めるなど正気の沙汰ではございませんぞ。前者は百歩譲って許可したとしても、後者は明らかに突拍子が無さ過ぎます」
「そうかのぉ？　妾は客人に対して最大限の歓迎をしたまでなのじゃが」
「まずはそこです。彼らは決して客人ではありません。どちらかと言えば不法入国者に等しい存在です」
「アルフが連れて来たのじゃから、不法入国ではなかろう？」
「そこなんですよねぇ。まったく、レキシントン農水大臣にも困ったものです。優秀なのはこういう事においてもそうなのですかね」
　結果的に面倒事を増やしたアルフに対してジェイドはため息と共に皮肉を言う。
　この国はまだ先代ロレーヌ女王が崩御してから日が浅い。まだ完全には新女王であるイリスが実権を握れてはいない。その隙を突い

てクロムウェルが台頭したのが頭の痛い話だ。ロレーヌは自分の信念の為には一切容赦をしない《冷酷王》とも称され、自分に反対する者は容赦なく更迭や無力化を行うなどして敵を力づくで封じてきた。だがイリスは逆に話合いによる民族団結を信念としている為、力づくでの押さえ込みを拒否している。その結果、クロムウェルがイリス女王の政治に不満や不安を抱く者達を吸収して勢力を拡大させてしまった。

結局、まだ子供であるイリスの信念は綺麗過ぎる。世の中には残酷な程に正々堂々を忌み嫌う腐った連中がいる事を、まだ彼女は把握し切れてはいない。そんな彼女を支えるジェイドは逆にそうした腐った連中を牽制する役目も担っているので日々忙しいのだ。そこに敵にイリス政権を批判できる要因にしかならないであろう外人の入国滞在許可。ジェイドの心労は加速するばかり。

「とにかく、この事は国民には知らせない方がよろしいでしょう。それと彼らへの監視役としてアトランティスを付けさせてもらってもよろしいでしょうか？」

「構わん。じゃが、客人が不快を抱くような行いはするでないぞ」

「わかりました」

「――ところでジェイド。お主はあのクリュウという少年をどう見る？」

話題転換。突然これまでとは違う話を振られたジェイドは訝しげに「あの少年ですか？」と答えつつ、彼女の質問の意味を量る。彼の問いに対してイリスはうむとうなずく。

「彼がウソをついているように見えるか？」

「と、仰いますと？」

「妾には、奴がウソを言っているようには見えなかった。目が真剣だったからのぉ。じゃが、冷静に考えてみれば我が国から出て行った人間など、そうはいないであろう？　この国は海洋国家。大陸諸国と違って徒歩という訳にはいかん。船を使ったとなれば、奴の親というのは平民ではないと思うのじゃが」

「ですが、ここ数十年貴族などの蒸発はありませんが」

「じゃろ？　彼の祖母が我が国の民だというのであれば、戦乱時代に海戦で沈没した我が国の軍艦の兵士の生き残りという説が成り立つ。あの頃は時には大陸沿岸の砲撃なども行なっておったからのぉ。じゃが、奴が捜しておるのは母じゃ。そうなると、その母親は一体何者なのか――ちぃとばかり妾の好奇心を刺激してのぉ」

真剣な顔から一転してイタズラを思いついた子供のような表情にイリスは変わる。まだまだ子供な彼女だってイタズラが大好きなお年頃。時々それに付き合わされるジェイドはそんな彼女の子供らしい一面に安堵しつつも、厄介事が増えたとばかりにため息を零す。

「陛下。もうすぐヴィルマ支援の際に使い切った物資の買い付けを行う第一次補正予算案の採決です。その前に片付けておかねばならない仕事はまだまだあるんですよ」

「うぬぅ……、好奇心は刺激されても妾はそれに本能的に従える時間はないのじゃな」

「それが女王としての責務です、陛下」

ジェイドがピシャリと言い切るとイリスは不満げに唇を尖らせるが、そこは一国の長。まだ不満は残るがひとまず仕事を片付ける事に決めたらしく玉座の前に置かれた豪勢な作りの机の上に並べられた書類に目を通す。それを見てジェイドはひとつうなずくと、次の書類を読み上げる。

イリスはそんなジェイドの声を聞きながら、一瞬だけ窓の外を見やる。雲ひとつない青空を見やりながら、ポツリと零す。

「……気になるのぉ」

その一言を残して、イリスは今度こそ仕事へと意識を戻した。

その夜、クリュウは一人城の外にいた。正確には城を囲う城壁の内側なので城の敷地内なのだが、きれいな星空を眺められるここは分類的には外と言うに相応しい。

南方に位置している為、イージス村などに比べればずいぶんと暖かく普通に外で暮らせる程に快適だ。そんな外でクリュウは一人星空を鑑賞しながら肉焼きのうたを口ずさみながらこんがり肉を焼いていた。

二時間程前、イリスの計らいで夕食をご馳走になったのだが、如何せん出された料理は全てが高級料理。しかもオシャレな小皿に少しずつ盛るような形式だった為、緊張も加わって成長期の少年のエネルギー摂取には程遠いものだった。結局空腹に負けて、こうして一人夜空の下でこんがり肉を焼いているのだ。

ここは昼間の段階で兵士などもいない場所だとわかっていたので、気兼ねなく肉を焼ける。慣れた作業なので火の後始末などはお手の物なので、ミスってボヤ騒ぎになる事はないが、それでも兵士達の前で火をつけるのはあまりいい気はしない。ここはそういう意味ではうってつけの場所だ。

ここは正面口と反対側なので警備が薄い。そもそも大国アルトリアの本城に侵入しようなどという無謀者は絶対数が少ないし、城壁も高いのでそもそもの警備の兵士が少ないのだ。さらに言えばアルトリア城は二重の城壁で守られている。警備は主にこの外側の壁と城の内部に集中しているので、比較的この内側の壁の周囲には警備が少ないらしい。

まぁ、そのおかげでこうして気兼ねなく肉を焼けるのだからラッキーなものだ。

「……上手に焼けました、っと」

慣れた手つきで肉焼きセットの火から取り出した生肉は絶妙な焼き加減のこんがり肉になっていた。外はパリッと焼けていて、しかし中は柔らかくジュワッと肉汁が口の中いっぱいに広がる、まさにこんがり肉だ。フィーリアが持つ高級肉焼きセットならこんがり肉Gになるタイミング。ハンターの初歩の初歩は肉焼きと言われるが、熟練になればなるほど逆に肉焼きが下手になるハンターも少なくはない。最近はこんがり肉自体が販売されていたり、アイルーに焼かせるなどをするハンターが多いので、新人やそれに近いハンター程そういうゆとりがない分肉焼きがうまい。クリュウも一応分類的にはまだまだかけだしの方だし、そもそも肉焼きが好きなのでフィーリアが自主的にやる以外では基本自分でも肉焼きをする。

ハンターと言えば狩り、というのは一般人のイメージだ。本当はこ

うして自由気ままに肉焼きをしたり、釣りをしたりするのもハンターとしての一つの一面だ。
焼きあがったこんがり肉は湯気を立てながら香ばしい匂いでクリュウの空腹の腹を刺激する。まるでその登場を喜ぶかのように、彼のお腹は空腹の音でシンフォニーを奏でる。その音色に、一人でいるはずなのに恥ずかしくなって頬を赤めてしまう所が、彼のかわいい所だ――と、フィーリアとサクラは自信を持って断言するだろう。
ちなみに他の面々は今頃はアリアの部屋に集まって会話を楽しんでいる事だろう。いわゆる女子会という奴で、当然男子禁制。特に集まった面々が全員同じ少年に恋をしているというのだから、その当人は完全シャットダウン。そんな経緯があって、クリュウは一人寂しく夜空の下で肉を焼いていたのだ。
今頃フィーリア達は紅茶を片手にお茶菓子を食している事だろう。だが逆にクリュウはこういうガッツリとした肉を好むので、むしろ一人で助かってはいるが。
アプトノスから剥ぎとった段階で殺菌と防腐、及び下味と三つの意味で振った塩がこんがり肉の味を整え、同じく香りづけの為にまぶした乾燥させた香草の粉のおかげで肉の匂いにその香草の匂いが加わった香りは、まさに空腹には耐え難い攻撃力を秘めた香りだ。
クリュウは一人だという事で「いただきます」も言わずにそれにかぶり付く。想像通り、パリッとした皮の内側には柔らかな肉と旨みたっぷりの肉汁が待ち受けていた。塩を振って適度な日にちが経っている分、むしろ塩味が内側にまで浸透しているだけあって中まで絶妙な塩加減だ。
一口食べただけで口の中いっぱいに広がった美味。もちろん、そのままガツガツと勢い良く食べていく。貴族という連中が見たらさぞかし眉をひそめる光景だろうが、これが平民の食べ方だ。
口の周りに油がこびり付くのも気にせず、こんがり肉を貪るクリュウ。安心と次第に溜まる満腹感が、そんな彼の警戒心を解いていたのだろう。そもそもこんな所で警戒心を持つ必要もなかった事も災いして、クリュウは最後まで背後から近づいてくる存在に気づかなかっ

た。だから――
「このような場所で、お主は何をしておるのじゃ？」
――突然背後から掛けられた声に、心臓が飛び出しそうになる程にクリュウは驚くのだった。
驚いてこんがり肉を頬張ったまま反射的に振り返ると、そこには全身くすんだ茶色のローブを纏った小柄な少女が立っていた。目元までフードを被っているので、その顔は窺い知れない。
「え？　な、何でこんな所に子供が……」
「お主も分類的には童子であろうが。それに、妾の家の中をうろつこうが、それは妾の勝手じゃ」
その言葉の意味、そしてその難しい言い回しと特徴的なしゃべり方。クリュウが彼女の正体に気づくのにはそれ程の時間は掛からなかった。
「……も、もしかして――イリス陛下？」
「正解じゃ」
そう言って少女は深くまで被っていたフードを取り払う。するとその下から現れたのは紛れも無くこのアルトリア城の城主であり、アルトリア王政軍国を束ねる現女王――イリス・アルトリア・フランチェスカであった。
呆然とするクリュウを前にして、イリスは女王としての顔ではなく歳相応のイタズラに成功したやんちゃな少女の笑顔でそこに君臨していた。
数秒程目の前の光景が理解できずにフリーズしていたクリュウだったが、ようやく脳が理解すると慌ててこんがり肉を隠してその場で楽にしていた姿勢を正した。思わぬ形で一国の長と対面した為、その慌てぶりも半端ではない。が、そんな慌てまくるクリュウに対してイリスはおかしそうに笑いながら「そう緊張せんでも良い。見てみぃ、今の妾は王冠を付けてはおらんのじゃ。つまり、今の妾はお主と変わらぬ平民と言った所かのぉ」と冗談を言ってみる。
「いえ、王冠を取ったからと言っていきなり女王ではなくなるというのは無茶があるんじゃ……」

「そうなのじゃ。王冠を脱いだだけで王をやめられるのであれば、今頃妾は青春を楽しんでいたのじゃがのぉ……」
冗談なのか本気なのかわからない物言いでため息を零すイリス。その姿はそれこそ十二歳の子供だが、妙にその社会に揉まれた大人のような顔と口調とがギャップで、ちょっと奇妙な姿に見える。その姿が逆に、クリュウの過度な緊張をわずかではあるが解いた。
「あの、イリス陛下？　このような場所にどうして……」
「どうしてと言われてものぉ。ここは妾の月見ポイントなのじゃよ。じゃからわざわざ警備の兵士を外しておったのじゃが、思わぬ先客がいたようじゃの」
イリスの言葉にようやくクリュウがなぜここが兵士の警備がないのか理解した。彼女の言う通り、ここは彼女のある意味でプライベートスポットなのだろう。だからこそ一人になりたい時に邪魔な兵士を外していたのだ。という事はつまり、自分は女王陛下の特別な場所で肉を焼いてそれを食べていた事になる訳で……理解した途端、顔面が蒼白になった。
「す、すみませんッ。すぐに出ていきますッ」
「良い。別にここは妾だけの場所ではないからの。ゆっくりせい――それに妾はお主に話があった。そういう意味でも手間が省けた」
「僕に話、ですか？」
一国の長が平民の、それもつい数時間前に会ったばかりの外国人相手に一体何を話す必要があるのか。突然の展開に戸惑っていると、そんな彼の隣にイリスは腰掛けようとする。クリュウと同じように地べたに直接腰を落として、だ。
「あ、これ使いますか？」
そう言って彼が差し出したのはいつも持ち歩いているハンカチだ。彼の言っている意味を量りかねているイリスの落とそうとしている腰の下にそのハンカチをそっと敷く。一応これで簡易的なシート代わりだ。それを見てやっと彼の行動の意味を理解したイリスは微笑む。
「ローブを着ておるからそのような心配は無用なのじゃが、まぁお主

の好意に甘えるとするかのぉ」
　そう言ってイリスは静かにクリュウが敷いたハンカチの上に腰を落とした。ずっと見上げていた形だったイリスが同じ地面に腰掛けると、当然その小柄な体格に相応しい座高でクリュウよりも背が低くなる。その途端忘れかけていた、彼女が自分よりも年下の少女だという事を思い出す。振る舞いや落ち着きが大人びているので、雰囲気だけではとてもそうは見えないが不思議だ。
「して、主は一体ここで何をしておったのじゃ？」
「え？　あ、その、夜食をと思いまして……」
「うぬ？　夕餉（ゆうげ）では足らんかったか？　言うてくれれば用意したのじゃぞ？」
「あ、いえ、その、自分は至って普通の家出身なので、ああいう高そうな料理に慣れていなくて……」
　言ってみて自分の発言がとてつもなく恥ずかしい事を自覚してクリュウは一人顔を赤面させる。貴族出身のフィーリアならともかく、至って平凡的な平民出身のクリュウからしてみれば先程の夕食に並んだ料理の数々は縁遠いものだ。それこそ書物でしか知らないような材料や料理名のオンパレード。食べてみて料理をしているだけあって、その繊細な味付けや口触りに圧倒された。
　ここ一ヶ月程、エルバーフェルドにアルトリアと立て続けに大国への直訴を繰り返しているクリュウ。正直色々と心労も重なっていて、今はむしろこういうシンプルな料理の方が落ち着く。平民の悲しい性（さが）だ。
「……それが平民の食すものじゃな？」
　考えに耽っていたクリュウはそんな彼女の言葉に意識を戻されると、彼女が指差す先を目で追う。するとそこには自分が今現在握っているこんがり肉。彼女の興味津々の視線はその一点に注がれていた。
「あ、その、平民と言うよりはハンターの典型的な食事の一つ、ですね」
「おぉ、大陸のハンターズギルドが誇る無双の戦闘集団、ハンターのスタミナ源とな。ふむふむ、確かに鋭気を養うには十分過ぎる量じゃの。じゃが、これは見る限り肉を焼いただけかの？」

「あ、はい。日持ちと下味の為に生肉の段階で塩を振って、それをただ焼いただけです」
「ふむ。日持ちが効き、即座に調理ができ、尚且つ空腹を一撃で満たすだけのボリューム。確かに理に叶ってはいるのぉ。我が軍の兵士達の戦闘食の参考になるやもしれんのぉ」
うむうむと一人納得したように何度かうなずくイリス。そんなただ焼いただけの肉に興味津々な彼女の姿を見て、クリュウは思わず笑ってしまった。どうやら先程の夕食の料理を見る限り、彼女はいつもあんな豪勢な食事をしているらしいく、逆にこういうシンプルな食事というものが物珍しいのだろう。
「あの、良ければ食べてみます？」
何となく食べたいのかなぁと思って彼女にそう問い掛けると、イリスはあからさまに目を輝かせた。その様は、まさに歳相応の子供らしい少女の反応だ。
「よ、良いのか？　お主の夜食であろう？」
「別に構いませんよ。予備はありますから」
そう言ってクリュウは地面に置いた袋の中から生肉を取り出すと手際良く肉焼きセットにセッティングする。その一つ一つも物珍しいのか、イリスのキラキラとした好奇心に満ちた視線が注がれ続ける為少し小恥ずかしい。
慣れた手つきでセッティングを終えると、今度は肉焼きのうたを口ずさみながらの肉焼きだ。これは見られているとなると余計に恥ずかしい。本当は別にクリュウはもう歌わなくても肉焼きはできるのだが、これをした方が焼き加減がうまくいく気がする為、今でも口ずさんでいる。これはフィーリアも同じらしく、彼女の鼻歌はそれこそオルゴールのように心癒される。ちなみにサクラとシルフィードはどちらも無言焼き派だ。
興味津々で見てくるイリスの視線を感じながら、それでも努めて平静を装いつつ肉を焼く。そしていつものタイミングで一秒でも早く火から離すように一気に振り上げ、完成だ。
「上手に焼けました、っと」

横でイリスが「おぉ……」と感嘆の声を漏らしながらパチパチと拍手。そんな彼女に照れながら「どうも」とだけ返すと、焼き上がった肉を皿に置いて、ついでに食事用の小物入れからフォークとナイフを取り出す。相手は一応一国の長だ。食べやすいように切り分けるという彼なりの気遣いだ。だが、

「良い。郷に入れば郷に従え、じゃ。お主と同じように食べる」

「え？　で、でもお召し物が汚れるかもしれませんよ？」

「良い。ちょっとくらいやんちゃをしても良いように、こうしてローブを着ておるのじゃからのぉ」

そう言って彼女は着ているくすんだ茶色のローブを自慢気に見せる。お忍び用の為か、一国の長が着るにしては見窄らしい印象だ。しかもサイズも合っていないらしく、彼女が腕を上げても袖がだいぶ余る。それが余計に何だか彼女をかわいらしく見せていた。

「料理は出来立てに限る。早う」

「あ、待ってください。せめて布だけ巻きます」

とりあえず握り手になる両側に突き出た骨の部分だけには両方共に布を巻く。手を汚さない為の配慮だ。それを終えてからイリスに渡すと、イリスはその長過ぎる袖をまくる事なく袖越しに骨を掴む。どうやらそうやって物を掴むのが慣れているらしい。

「熱いですから、気をつけてください」

「……うぬぅ、お主妾の事を少し子供扱いが過ぎんか？　それくらい言われなくてもわかっておる」

ジト目になって怒るイリスの視線に慌ててクリュウは謝る。相手は一国の長だ。ちょっとの失礼な事でも致命傷になりかねない為クリュウの慌てっぷりは相当なもの。だがイリスは「まぁ良い」と特に気にする事なく視線を肉に戻す。その振る舞いは実に大人という感じだ。

クリュウが呆気に取られていると、イリスは一人渡されたこんがり肉にフゥフゥと息を吹きかけて食べようとしている部分を冷やしてから、大胆にかぶりついた。思いの外熱かったらしく口の中で肉を転がしながらほふほふと息を吸ったり吐いたりして冷ます。しばしそ

うしてから、ようやくよく噛んで味わい始める。そして、無言で咀嚼を繰り返した後、ゴクリとそれを胃の中に収めた。そして、緊張した面持ちでそれを見守っていたクリュウに向き直り、静かに口を開く。
「うむ。シンプルな味付けと料理法じゃが、むしろそれが素材の味を引き立てている。なかなかの美味、それもクセになる感じじゃな」
「そうなんですよ。僕も料理を作っている身なのでわかるんですけど、色々と試行錯誤して料理に挑戦しても、結局はこの一番シンプルな一品に戻ってしまうんです。このシンプルさが、結局は一番いいのかもしれませんね」
料理とは素材に《加工》を行う事で、その可能性を広げるものだ。素材それぞれに個性があり、それを調味料や料理法で他の食材と組み合わせて、可能性を何倍にも広げる。だからこそ、同じ食材を使っても料理法によってそれはまるで異なるものになる。例えるなら、同じ食材を使っていても中核となる調味料が違えばそれはカレーにもなるしシチューにもなる。料理法が変わればビーフシチューも肉じゃがへと変貌してしまうものだ。
そんな作り手の腕や知識によって左右される創作料理。だが万人が等しく作れ、そして最低限な味付けしかしないこの一品はそうした料理とは異なる。調味料を多用する料理は結果的に素材の味を生かし切れない事も多いが、この料理はむしろ素材の味をメインに据えている。
普段、調味料の味付けになれているイリスにとっては、むしろこのシンプルさが新鮮で、何とも魅力的な味だったらしい。それはハンターを志した直後、学校でこの料理を知った際に抱いたクリュウの意識革命と同じだ。
「うむ、今度シェフに作らせてみるかのぉ……」
「たぶん、想像を絶する努力で宮廷料理人になった人だから、そんな事を言ったら泣いちゃうかもしれませんよ？」
「ぬはははは、そうじゃなぁ。盛り合わせにサラダとスープくらいは求めんとのシェフの面目が丸潰れじゃ」
おかしそうに笑う彼女の姿にはまさにイタズラを思いついた子供

という感じだ。この娘が、一国の長だというのだから世の中わからないものだ。意識していないとつい忘れてしまいそうになる。敬語だって、本来クリュウは年上の人に向ける言葉であって、年下相手に使うというのはあまり慣れていないので余計にだ。

しばし他愛のない雑談を交わしながら、クリュウとイリスはこんがり肉に齧り付く。きれいな星空の下、平民と女王が、焼いただけの肉を、ガツガツと頬張る。それは何ともおかしくて、なかなか拝めない光景だ。

「うむ、美味であったぞ」

「え？　もう食べ終わったんですか？」

それにもう一つ驚いた事は、イリスは華奢な体つきからは想像できない程に大食漢だった事だ。クリュウより少し後に食べ始めたはずなのに、クリュウが半分を食べ終えた頃には完食してしまっていた。

「……言うでないぞ。ここだけの話、妾は時々城を抜け出しては城下町に出ては下々の店に入って平民の食事を食べておる。城の料理とは違う、無骨な味付けとボリュームは最初こそ戸惑ったものじゃが、今ではむしろ城の料理より好きじゃ」

「へ、陛下？　陛下ともあろう人が勝手に城下町に出てはいけないのでは？」

「うむ。何度もジェイドに見つかってこっ酷く怒られたものじゃ。じゃが妾は諦めずに何度も脱走を繰り返した。今ではジェイドの目を掻い潜る術も覚えたからのぉ。むふふふ、あの自信過剰なジェイドの鼻をあかすのはどんな娯楽よりも面白く、心踊るものじゃ」

「……陛下って、意外と意地悪ですね？」

つい反射的に、いつものクセで考えていた事がポロリと口から零れてしまう。慌てて口を塞ぐが時すでに遅し。イリスはしっかりとその言葉を聞いていて、ちょっぴり拗ねたように頬を唇を尖らせてツンとしてしまう。

「意地悪とは何じゃ。かごの中の鳥では一国を統治する事はできんのじゃよ」

「そう、なんですか？」

「当然じゃ。お主《百聞は一見に如かず》という東の諺（ことわざ）を知っておるか？」
「はい。百の事を聞くより、一度実際に見たものの方が信憑性のある、みたいな意味ですよね？」
「そうじゃ。妾はこう考えておる――百の書物を読むよりも、一人の民の言葉の方が重い。書物では知識でしか得られないが、実際に接する事で新たな発見があるものじゃ。紙の上の数字も重要じゃ。じゃが、実際に民が求めている声はその数字よりもずっと大切じゃ。妾には上がって来ないような、小さい、でも民にとっては重大な問題もそうしていれば知る事ができる。知る事ができれば、その対策も考えられる。「王とは支配者ではなく指導者」と妾が姉上が言っておった。指導する為には、そういった小さな事にも目を向けなくてはならん。だからこそ妾は城下町へと出向くのじゃ――妾が守るべき、妾の大切な赤子（せきし）達の姿をこの目に焼付ける為にのぉ」
　星空を見上げなら、静かにそう語るイリスの姿は子供だ。だが、その瞳や振る舞い、信念はまさに《王》。一国を、数百万の国民を束ねる王の責任と信念。彼女はそれを持ち合わせている。
　フリードリッヒに対しても感じた、自分とそう変わらない少女なのに、自分とは明らかに生きる覚悟が違う。抱いたのは尊敬の念だ。それはこの小さな少女王に対しても同じ。この小さな体に、不釣合いなくらいの重責を背負っている。でも彼女のすごい所は、それを決して重荷だと思う事はなく、むしろ自分に与えられた使命だと信じてその重責を正面から向かい合っている所だ。覚悟のない自分には決してできない、王の覚悟。
　自分よりも年下で小さな少女なのに、一国を背負っているイリス。クリュウはそんな彼女を心から尊敬した。
「……え？　あれ、陛下は一人っ子ですよね？」
「あぁ、正確には姉代わりじゃな。エルバーフェルド現総統のフリードリッヒの事じゃよ。ローレライの悲劇を発端とした革命で国を追われた当時の国王夫妻はその後このアルトリアへと亡命しておって、姉上はその最中に生まれたのじゃ。妾が生まれてすぐに病死した両

親の願いであった祖国再建の為に一人で国を出て、今ではエルバーフェルドの総統にまで上り詰めた。妾のように、王位継承権など使わず、実力で王座を奪い返したのじゃ。妾はそんな姉上を尊敬しておる。じゃから、大陸との友好関係の礎として同盟国をエルバーフェルドに選び、そして互いの国の繁栄を相互に助ける為に、形式的とはいえ妾と姉上は姉妹の契を結んだのじゃよ」

国の長と国の長が互いの子供や親類縁者を相互に婚約や養子にする事によって、相互の国の強固な信頼関係を築く。古より続く国家運営の王道手段だ。時にはこのやり方は悲劇を生む事もあるが、イリスとフリードリッヒはそうした悲劇となうものとは違う。互いが互いの数少ない理解者であり、信頼し合っているからこそできる事。そして、その信頼を形にしたのが、二人の姉妹関係だ。

そのせいか、二人は姿形も性格もまるで違うが、その信念を宿す強い瞳の輝きはよく似ている。

「でも、だからと言って陛下自ら城下町に出るのは危険なんじゃないですか？」

「まぁ危険も覚悟の上じゃ。何事においても命がけでなければ、それは片手間という程度に終わるからのぉ。それに、妾の他にも同じように城下町に出ては民の声を聞いていた王族もおったのじゃから、何も妾が初めてという訳ではない」

「そ、そうなんですか？」

クリュウは何気なくそう尋ねているが、その内心は思わぬ形で向こうから欲しかった話題を振られた事で動揺していた。事実、どうやらイリスは騙せたらしいが恋姫達なら一発でバレてしまうくらい彼の声は、微かにだが震えていた。

「うむ。母君の姉上殿が生前の頃は、妾のようにこうしてよく城を抜け出していたらしい」

「聞きました。その人、亡くなったんですよね。お若いのに……」

「う、うぬ？　そ、そうじゃ。惜しい人をなくしたものじゃ」

一方イリスの方は明らかに動揺が見て取れた。どんなに大人に振舞っていても、こういう細かい部分ではまだまだ彼女は子供なのだ。

逆にそういう部分で責めを仕掛けてみる自分は、むしろそういう意味では嫌な大人になったなぁと思わず苦笑が浮かぶ。
　そしてクリュウは内心彼女に対して今からする事に罪悪感を感じ、謝りながらも静かに――鎌をかけてみた。
「――そういえば、現在の王家の王紋旗は銀火竜に乗った騎士を模しているんですよね？」
「な、何じゃ突然？　確かに、妾と母君は銀火竜を模した王紋を受け継いでおるが……」
「以前金火竜は失われた王紋というのを聞きました。もしかして――そのお姉さんが死んでしまったから金火竜の王紋は失われてしまったんですか？」
　クリュウの問いかけに、イリスは目を丸くして驚く。だがすぐに動揺を隠し、平静を装う。その切り替えの速さはさすが女王といった所か――だが、その一瞬の隙がクリュウが求めていた何よりの確証だった。
「……お主、何を考えておるのじゃ？」
「いえ、母さんの故郷の事を必死になって調べた際に気になった事を聞いてみただけですよ。こっちにはエルバーフェルド政府と、その政府すらも動かせるレヴェリ家とのパイプがあるんですから」
　何とも自分らしくない嫌みたらしい言い方に、クリュウは内心反吐が出そうな思いだった。子供相手に何をこんな汚いやり口を使っているのか。でも、相手は子供でも一国の女王だ。平民の自分が彼女の前に立つ為には、これくらいの汚さがないとやってはいられない。
　しばしの沈黙。ジッとこちらの思惑を推し量るように見詰めていたイリスはしかし静かにため息を零すと、肯定するようにうなずき「その通りじゃ」と素直に認めた。
「妾の祖母、シェレス・アルトリア・フランチェスカには二人の娘がいた。姉には金火竜の紋章を、妹には銀火竜の紋章をそれぞれ王紋――その頃はまだ姉妹紋じゃったが――として授けたのじゃ。じゃが姉君は病で倒れ、亡くなった。王位は妹にして妾の母、ロレーヌ・アルトリア・ティターニアへと継承され、以後親子二代に渡って銀火竜の

紋章が王族の象徴とする王紋旗とされておる。その後金火竜の紋章は母上の政に反対する者達の象徴紋となった。「姉君の方ならこんな政治はしない」という皮肉を込めてな。母上はそんな自分に反対し、愛していた姉を侮辱されるような行いをする連中を片っ端から弾圧した。今では妾の政治は比較的穏やかな為、そういった反対運動は少ない。じゃが今でも警察や軍は反対勢力の象徴となりかねない金火竜の紋章を国家転覆の象徴として法律で使用を禁止しておる。じゃから、正確には失われた王紋というよりは禁断の王紋と言うべきじゃな」

イリスはクリュウが食後に用意したお茶を一口飲み、長話で乾いた喉を潤す。彼女にしてみれば安物の茶葉のお茶のはずだが、イリスは何も言う事なくそれを無言で飲む。クリュウは自分の為にあまり口にしたくはない話をしてくれて、しかも安物のお茶にも文句を言わない彼女の懐の広さに心から感謝した。だから、彼女がお茶を飲み終えると同時に「わざわざお話ししていただき、ありがとうございました」と礼を言ったのは、本当に反射的であった。

「良い。妾も好奇心には逆らえん人間じゃからな。気になったら夜も眠れなくなる気持ちはわかる。じゃが、これはあまり口にしていい話題ではないから、くれぐれも軽はずみにしゃべらんようにな」

「わかりました。それと陛下、最後に一つだけお願いがあるのですが……」

「……別に構わんが。その代わり、妾もお主に頼み事ができた。その交換条件でどうじゃ？」

試すような物言いで言う彼女の言葉に、クリュウは一瞬気後れする。が、どのような条件が提示されるかはわからないが、向こうがここまでこちらに譲歩してくれているのだ。こちらは多少の無理程度ならその交換条件を引き受ける覚悟でいた。だからこそ、クリュウは静かに頷く。

「よろしい。では、まずお主の願いとやらは何じゃ？」

「はい。失礼ですが陛下。陛下は銀火竜の紋章を象ったペンダントをお持ちだと聞きました。それを、見せてはもらえませんか？」

「うん？　うぬぅ、これは王位継承の証じゃから、母上からも決して自分の信頼のおける人間以外には見せるなと言われておるのじゃが――まぁ、なぜじゃかお主は信頼できる気がする。良かろう、特別に見せてやろう」
「あ、ありがとうございますッ」
　クリュウは大喜びしながら何度も年下の少女相手に礼を述べ、頭を下げる。そんな彼の姿を見て「そういちいち頭を下げるでない。首が疲れるじゃろうが」と彼を気遣う。本当に女王としても人間としてもイリスは素晴らしい娘だ。
　イリスは早速胸元までボタンをしめているローブのボタンを全て外す。すると、下は最初見た時に比べれば簡素ではあるが、それでも女王らしくドレス姿であった。簡素な上に動きやすさを追求したのか、スカートも昼間のものは床に着く寸前くらいまでに長かったが、今は膝程の長さしかない為、彼女の白くて細い足が眩しい程によく見える。
　純白のフリルがたくさんついた可愛らしいデザインのドレス。イリスはそのふわふわとした胸元に躊躇いなく腕を突っ込む。その動作に一瞬クリュウは慌てて視線を外すが、すぐにその腕は引き抜かれた。そして、その手には確かに銀色のペンダントが握られていた。
「これが妾の王紋にして王位継承の証――銀火竜のペンダントじゃ」
　そう言って彼女が見せてくれたのは銀色のチェーンに吊るされた、王冠を被った銀火竜に一人の騎士が跨って戦場を翔ける姿を模した銀製のペンダントであった。デザインは、見れば見る程に母の形見によく似ていた――そしてこの瞬間、クリュウの中にあった可能性は確信へと姿を変えたのだった。
「……ありがとうございました」
「うむ。じゃが、こんなのを見てどうするのじゃ？」
「今はまだ言えませんが、そのうちに僕から言わせていただきます」
「うぬ？　そうか、まぁ良い。では交換条件で、妾からの頼みを言おうかのぉ」
「あ、あの。今更ですが僕に出来る範囲でお願いしますね？」

ここで「何でも任せてください」と言えないのが彼の弱気ぷっりであり素直な所だろう。イリスも無茶を言う気はないらしく「何もお主に無茶難題を言う訳じゃない。ちぃと頼み事を頼まれてほしいだけじゃ」と彼の不安を和らげるような物言いをする。
「そ、そうですか？　なら、どのようなご用件で？」
「うむ。元々の予定にお主を参加させたいだけじゃ。要するに――これから妾と共に城下町へ行く。これが頼み事じゃ」
あまりにも予想外な交換条件に呆気に取られるクリュウを見ながら、イリスは一人ニコリと楽しげに微笑んだ。それはまさらに、面白い事を思いついた子供の、純粋なキラキラとした笑顔であった。

第１７４話　お姫様と狩人の秘密のデート　真実と直面する決意

アルステェリアの城下町は今まさに活気に満ちていた。
夜になると工業地帯で働いている労働者が一斉に市街地へと帰宅する為、それを出迎える飲食店などを中心に活気に満ちる。
誤解されるが、アルステェリアは何もこのラミリーズ湖に浮かぶ島だけが都市ではない。ここは都市計画での区画名は《城下市街地》と呼ばれるアルステェリアの中心部だ。だがアルステェリアという街はこの他にラミリーズ湖の対岸側にも街は広がっている。王軍艦隊根拠地であるロサイス軍港や他の軍隊の駐留基地、景観の関係から中心部から離れた場所に作られている工業地帯、治安の関係から中心部には作れない為に歓楽街もこの外周区画と呼ばれる場所に置かれている。要するに繁華街と市街地は本島に、歓楽街と工業地帯と軍事基地などは外周区画に。それぞれ住み分けが行われており、アルステェリアという街はラミリーズ湖を中心としたその畔の市街地と中心の本島を含めた部分全てを含んだ都市なのだ。
工業地帯は労働基準法を厳守して、一斉に同じ時間帯に終了する。その為、その時間帯を過ぎると工業へ勤めに出ていた労働者が一斉に本島の市街地や繁華街、または外周区画の歓楽街へと流れ込む。歓楽街にとっては、ここからが営業開始のようなものだ。
そんな活気に湧くアルステェリアの城下町に、クリュウとイリスという妙な組み合わせのコンビが紛れ込んでいた。
彼らが現れたのは繁華街だ。さすがに歓楽街は遠いし、そもそも子供が行くような場所ではない。イリス自身脱走するたびに基本繁華街にしか来ない。
昼間とは様子が異なる繁華街の中、クリュウはその人の多さにクラクラしそうだった。昼間見た際は主婦などが中心に談笑を楽しみながら優雅に買物や食事をしている風景が目立ったが、夜になると今度は男達の姿が目立つ。男向けのガッツリ系の料理を出す店は、今の時

間帯がピークを迎えているはずだ。でもだからと言って女性の姿がない訳ではない。半数とまではいかないが、それでも女性も多い。これが歓楽街の方なら女性の姿は売り子などを除けばほとんど見受けられなくなる。

子供連れの家族や夫婦、恋人など、ファミリーで動く姿も目立つ。昼間の穏やかな雰囲気もいいが、こういう活気溢れた姿もまた一つの街の一面なのだ。

大通りの一〇〇メートル程の長さでイージス村の人口を軽く超えるような人数が行き来している夜のアルステェリア市街。ドンドルマという都会慣れしたはずのクリュウも、その賑わいを超える賑わいを見せるアルステェリアには度肝を抜かれていた。それもそのはず。アルステェリアの人口はドンドルマの人口よりも多い。大陸も含めて、アルステェリアは世界最大の都市という一面も持っているのだ。

真っ直ぐ歩く事ができない程に賑わった道をクリュウは右へ左へ回避しながら進む。その後を目元を隠すくらいまでフードを被ったローブ姿のイリスが続く。その華奢な手はしっかりとクリュウに握られていた。先程あっという間にお互いに迷子になりかけたので、それを防ぐ為にもクリュウが彼女の腕を強引に掴んだのだ。こんな所で女王様を見失うような大失態は決して冒せないのだ。

一方、強引に腕を掴まれたイリスは困惑していた。女王として生まれてこの方、こんなにも無礼で大胆に腕を引いてくる人に会った事がなかったからだ。幼少の頃から教わったダンスの相手役の引き方と全然違う、無作法な腕の引っ張り方。でもなぜかその手はとても温かくて、アルステェリアにしては珍しく冷え込んでいる夜で冷えた手を優しく温めてくれる。その温もりが新鮮で、こそばゆくて、ちょっぴり嬉しくて、イリスは自分の中で渦巻く妙な感情に困惑していた。

「それで陛下――」

「あ、阿呆ッ。こんな誰の耳が立てられているかわからん場所で陛下など呼ばれては正体がバレるではないかッ」

「あ、そうですね。すみません……では、何て呼べばよろしいのでしょうか？」

「う、うぬぅ？　そ、そうじゃなぁ……い、イリスで良い。それに敬語もなしじゃ。年下の妾相手に敬語を使っておっては、それだけで周りに怪しがられる」
「そ、そうですか？　陛下がよろしいのでしたら……」
「良い。今宵のこれはひと時の夢じゃ。無礼講といこうではないか」
　そう言ってイリスはフードを少し上げて顔を見せると、ニッと健康的な白い歯を見せて笑った。頼もしげに微笑む彼女の笑顔を見てクリュウも安心したように微笑むと、そっと彼女を――自分なりの接し方で呼ぶ。
「――それじゃイリス。まずはどこに行けばいいのかな？」
「う、うぬ？　そ、そうじゃな。今宵は四丁目の大衆食堂に新メニューが出たという噂があるから、そちらに顔を出してみよう」
「え？　さっきこんがり肉食べたよね？」
「妾は育ち盛りだから体が栄養を欲しておるのじゃ」
「そ、そうなんだ。それじゃ、四丁目ってまずどっち方面？」
　そんなこんなでおかしな組み合わせのコンビはひと時の夢を楽しむ事になった。
　何でもない平民と一国の女王様の秘密のデート。それはまるで恋愛小説の中の展開だ。そういうつもりじゃなかったのに、一国を束ねる女王でも乙女なイリスはいつも読んでいるそういう類の小説とまるで同じような展開に心を弾ませていた。許される事ではない、それが余計にドキドキ感を踊り立てる。しかも相手もなかなかの美形ときているのだから、乙女のドキドキは止まらない。
　繁華街へ抜け出して来る事は時たまあったが、誰かと一緒というのはこれが初めてた。いつも見ている光景も、背中越しに見るだけでとても新鮮に見えるから不思議だ。
　人でごった返す道を歩きながら、クリュウとイリスは同じように道を行き来したり露天で元気良く呼び声を掛けている人々をキュロキョロと見回す。そうしていると突然二人の視線が吸い寄せられるように重なり、見詰め合う形になった。途端に何だか恥ずかしくなって互いに頬を赤らめ、苦笑いを浮かべた。

「誰かと一緒にこうして繁華街を歩くのは初めてじゃから、何だか妙な気分じゃの」
「そうなんだ。僕は単純に人の多さに慣れてないだけ。人口一〇〇人くらいの村出身だから」
「それはまたずいぶんと田舎じゃの」
「そりゃもう。ついこの前まで王軍艦隊だって知らなかったんだから」
「……それはまた、本当に田舎なのじゃな」
「――でも、いい村だよ。みんな家族みたいなんものだから、助け合って生きてる。だからかな、僕はやっぱりこういう栄えた街より小さな村の方が性に合ってるみたい」
　笑顔で言う彼の言葉に、イリスは静かに「そうか」とだけ答える。周りを見渡しても、ここが大都会だという事がわかる程に人の数は多い。皆楽しげに笑いながら道を行き交い、露天では飲んで大声を上げている者もいるなど、賑やかな街の光景が広がっている。
「確かに、小さな村というのは都会よりも固い絆で結ばれた者達の集まりじゃ。お互いをお互いを支え合うには、それほどの規模が理想的じゃ。じゃがな――こんなにも多くの赤子達に囲まれ、妾を笑顔で迎え入れてくれる。都会というのも、それはそれで良いものじゃよ」
　そう言いながら、イリスはフード越しに笑顔で夜の街を歩く人々を愛おしげに見詰める。その視線はまるで子供を見詰める母親のような慈愛に満ちたもの。彼女が、どれだけ国民を愛しているかがわかる。
　同じ国家君主でも、やはりフリードリッヒとイリスは違うようだ。フリードリッヒも国民の事は愛しているだろうが、目的の為ならその大切な国民である兵士を戦場に投入する事も厭わない冷酷さも持つ。王としては、おそらく彼女の方が正しいのだろう。しかしイリスは違う。本当に国民全てを家族のように想い、愛している。彼女の優しげな瞳からそんな事が見て取れる。まだ幼いからこそ、理想に向かって正々堂々と挑もうとしている。そんな彼女が国民を愛し、国民も彼女を愛する。そんな国なのだ、今のアルトリア王政軍国は。

「イリスはきっと、いい女王様になれるよ」
「な、何じゃ突然。それではまるで今の妾がまるでダメ女王とでも言いたいのか？」
「そういう訳じゃないよ。きっと、もっといい女王様になれるって事」
笑顔で心から思った事を言うと、イリスは一瞬面くらったような顔になると、ボンッと顔を赤らめて「も、もちろんじゃ。妾はアルトリア史上最高の女王になってみせる」と照れ隠しなのか、妙に自慢気にそんな事を言ってみる。彼女にしてみれば無作法に腕を引っ張ってくるのと同じように、面と向かってこんな事を言ってくる相手が初めてだった為に、いつもと違う扱われ方に困惑しているのだ。
そんな彼女の手を引きながら、クリュウは目的地である店を目指して歩き続ける。と言っても、彼自身はその店を知らないので、後ろから続くイリスの指示に従って歩いているに過ぎないが。
「あ、すみません」
人ごみに慣れてないせいか、クリュウは先程からちょこちょこと歩いている人と肩がぶつかってしまう。そのたびに謝っているのだから、礼儀正しくはあるが情けなくもある。一応そんなつもりはないが結果的に騎士役となっているクリュウがそんな情けない姿なのだから、イリスは少し不満げだ。
「先程から人にぶつかり過ぎじゃ。もう少し考えて歩かんかい」
「ご、ごめんね」
クリュウは苦笑交じりに謝りながら、人の間を縫うようにして進む。が、結局その後も何度もぶつかってしまう。あまりにも動きが悪いので、注意してやろうかとイリスが口を開きかけた時、気づいてしまった。
「クリュウ、お主……」
よくよく考えてみれば、自分だって人の事を言えたものではない。いつも一人で来る時は彼ほどひどくはないが、それでも人によくぶつかっていた。それが今日は一度もぶつかっていない事に気づいたのだ。そして、それを前提に考えれば、彼の行動も理解できた。
「お主、妾をかばって……」

そう。クリュウは自分一人ならそれこそほとんどぶつからずに動く自信はあった。ハンターとして培ったステップならこれくらい造作も無いからだ。だが今自分の背後には女王様が、一人の少女がついて来ている。だとすれば、動き方は自然と彼らしいものに変わっていった――つまり、自分はともかく後ろのイリスが人とぶつからないような道を選んで進んでいたのだ。

それに気づいてしまうと、ぶつかるたびに相手から睨まれたり鬱陶しげに見られたりするたびに謝る彼の姿も変わって見える。そんな情けないだけの姿の彼が、たったその前提条件が変わるだけで、すごくかっこ良く見えてしまうのだ。そう気づいてしまうと、自然と胸はドキドキと高鳴る。イリスは妙に鼓動を早める胸に手を当て、困惑しながらも彼の手を握りながらその横顔をほんの少しの笑みを浮かべて見詰めていた。

そうこうしているうちに、二人は目的の店に到着した。石造りの大きな建物で、店の入り口の両脇にはオシャレなオープンテラスが広がっていて、すでに満席だ。中を見ればそちらも人でごった返していた。

「結構混んでるみたいだよ？」

「時間帯が時間帯じゃからな。じゃが、こういう雑踏も一興じゃ」

そう言ってイリスは今度は逆にクリュウの手を掴んだまま店の中に入る。表から見た通り中は大勢の客で賑わっており、窓側の席もテーブル席、カウンター席も満席。空席を待つ人の数も二〇人近い。それを見たクリュウは思わず苦笑を浮かべた。

「ほんとに人気の場所なんだね。すごい人だよ」

「ここは数ある飲食店の中で最も労働者に人気のある店じゃ。値段も手頃でボリュームもあって、しかもうまい。そりゃ人気があるのも当然じゃな」

「……僕は逆にドンドルマでは人気のある店よりも、あまり人が来ない店の方が結構穴場だったりして好きだったな」

学生時代ドンドルマで過ごしていたクリュウは時々街へ出る事もあった。シャルルは友達と一緒に出て人気のカフェに行った所一時

間以上も待たされたと憤慨していたが、クリュウは逆にルフィールを連れて大通りから外れた場所にある喫茶店をよく利用していた。この初老のマスターはとても人が良くて、ルフィールのイビルアイを恐れも軽蔑もしない人だった。その為ルフィールも外では基本片目を眼帯で隠していたがその店では外していた。しかもこのマスターの淹れてくれるカフェオレや手作りのケーキがまたおいしい。味や値段に対して人があまり来ないのもいい所で、現在その店を知っている面子は自分とルフィールだけだ。

「うむ、妾は結局は下町に住む人間ではない。じゃから、あまり噂を耳にする機会がないから、そういった店を探すのにも苦労するのじゃ。まぁ、ない事もないのじゃが、今日は新メニューとやらを食べに来たのじゃから、ここで良いのじゃ」

「まぁ、待つ時間が長い程実際に食べた時の感動も大きいしね」

「そういう事じゃ」

シャルルなら五分で暴れるような理屈で二人の意見は一致する。

結局、二人が窓側の二人席に通されたのはそれから一時間近く経った頃の事であった。小さなテーブルを左右の席が挟む形の二人席。クリュウとイリスは当然その左右に席に分かれて座り、向かい合うような形になる。

給仕の女の子が額にきれいな汗を浮かべながら気持ちのいい笑顔と共に水を置き、去って行く。クリュウはその水を一口飲むと同時にイリスはメニューと睨めっこを開始する。

「……おぉ、これじゃな新メニューとやらは。何なにぃ……ふたごキノコクリームシチューポットパイ。ほほぉ、何やら面白そうな料理じゃの」

イリスは目的の物を見つけたらしく嬉しそうにメニューを見て笑っている。そんな彼女の姿に思わず見とれていると、そんな彼の視線に気づいたイリスが静かに顔を上げた。

「な、何じゃ。妾の顔に何か付いておるのか？」

「え？　いや、何でもないよ」

「何じゃ。妙な奴じゃの。それより、お主もさっさとメニューを決め

い。遠慮するな、ここは妾が払うぞ」
「いや、そういう訳には……」
「夕餉に誘ったのは妾じゃ。それなら妾が払うのが道理であろう？　遠慮するでない、ほら選ぶのじゃ」
　どうやら彼女が払う事は決定事項らしい。芯が真っ直ぐしているというか、単にわがままなのだろうか。でも何だか、一度決めた事は絶対に曲げない妙な頑固さは、どこか自分と似ているような気がした。
「じゃあ僕は兜ガニとホタテチップのシーフード炒飯にする」
「決まったな？　では店員を呼ぶとしよう。おい給仕ッ、注文じゃッ」
　慣れているのか、大声で店員を呼ぶイリス。確かにこの喧騒の中では大声でないと店員に声が届かないだろう。だが一国の女王が大衆食堂で大声で店員を呼ぶ……何とも奇妙な光景に思わずクリュウは苦笑を浮かべた。
　店員に注文を済ませると、今度はその待ち時間が暇になる。が、それを無駄にする暇もなく昼間の続きとばかりにクリュウに色々な話を迫るイリス。嬉々として自分の話を聞いてくれるので、最初はあまり乗り気ではなかったクリュウも自然と楽しく話してしまっていた。
「なるほどのぉ。両親を失っても、そんな二人と同じ道を志したのじゃな」
「二人の背中を見て育ったからね。子供の頃からハンターになるって決めてたし」
「自分で決めた夢なら、辛くても結局は楽しめるものじゃ」
「イリスはどうなの？　女王って、結局は生まれた時から決まってたんでしょ？　自分で決めた訳じゃないのに、それって辛くないの？」
　クリュウは確かに両親共にハンターだったので夢の方向性がある程度決まっていたとはいえ、自由に夢を選べる身だ。そして今は両親と同じハンターとなった。だがイリスは生まれた時からすでに次期女王として育てられてきた。今の自分は、そんな昔の自分が夢見た姿なのだろうか。
　クリュウの問いかけの意味を理解したイリスは一度考え込むよう

に黙ると、しかしフッと口元で笑ってみせた。
「確かに妾はお主と違って今の自分の立場を、自分で決めた訳ではない。じゃがな、妾は今の自分を、女王としての自分に誇りを持っておるんじゃ。自分の力量如何で国の行く末が変わる。責任も大きいが、その分やり遂げた時の喜びも大きい。そして何より、妾を温かく歓迎してくれる国民がいる限り、妾はその期待に応えたい」
　真っ直ぐ先を見詰め、真っ直ぐな言葉でイリスは言う。それだけで、彼女が心からそう思っている事が伺える。例え元から決められていた道だとしても、それは決して苦ではない。むしろ自分に他の誰にもできない役目を神様から与えられた。そう思っているからこそ、彼女は本気でいられる。女王として、数百万の国民の為に尽力できる。
「それに、どんなに国民から軍拡の暴君とまで呼ばれておっても、妾は知っておる。母上が、どれほどに国を想って、国の為に尽力したかを――妾は、そんな母上が必死に守り抜いて、妾に残してくれたこの国を宝物だと想っておる。じゃから、その宝物をもっと輝かせたい。まだ妾は経験もなく実力もあまりないかもしれない。じゃが、国を想う気持ちだけは歴代のどんな女王よりも強いと信じて疑ってはおらん」
　眩しいほどに真っ直ぐな生き様。自分で決めた事は決して曲げず、全力で頑張り、必死になれる。イリスというのは、そんな誰よりも真っ直ぐな女の子。誰よりも国を愛するアルトリア人。誰よりも人々を愛する少女王なのだ。
「すごいんだね、イリスは」
「何じゃ、突然」
　思わず思った事がそのまま口から飛び出してしまった。イリスはそんな彼の零した言葉に反応し、不思議そうに首を傾げている。どうやら自分がどれだけすごい事なのか、気づいてもいないらしい。表裏などなく、常に頑張れるというのは本当にすごい事なのに、だ。
「絶対、歴代最高の女王様になってね」
「う、うぬ？　と、当然じゃッ。妾に不可能な事などないのじゃッ」
　そう言って照れ隠しなのか、妙に胸を張ってそんな事を言うイリス。が、残念ながらその胸はまだまだ成長途中の為に迫力はあまりな

い。と、そんな事は口が裂けても言えないクリュウであった。
　そうこうしているうちに料理が届いた。イリスには新メニューのふたごキノコクリームシチューポットパイが。クリュウには兜ガニとホタテチップのシーフード炒飯がそれぞれ届く。
　ふたごキノコクリームシチューポットパイはシチューの入った皿の上を薄いパイ皮で覆った一品。食べる際には覆っているパイ皮をスプーンで崩して中を開いて食べるという、実にオシャレな一品だ。
「大衆食堂でこんなオシャレなものが出るんだね」
「うぬ？　そうでもないぞ。我が国ではポットパイは一般的な家庭料理じゃからな」
「そうなの？　ずいぶんオシャレな家庭料理だね」
「クリュウの所は違うのか？」
「……うーん、チーズフォンデュかな」
「何じゃそれは？」
「鍋いっぱいに溶かしたチーズを入れて、それにパンとか肉を浸してチーズを絡めて食べる料理だよ」
「何とッ!?　それはまた聞くだけでうまそうじゃなッ」
　見事にテンションが高くなるイリスに苦笑しながら彼が説明したのはイージス村というか、周辺地域一帯の家庭料理となっているチーズフォンデュだ。北国のイージス村では冬になると周辺での食料調達が難しくなる。その為に長期保存できるチーズとパン、加工肉、乾燥させて長期保存が可能となった乾燥野菜などが主役になる事から、自然とこの組み合わせでできる料理が栄えたのだ。今でこそドンドルマとわずかながら物流が通っている為に冬でも野菜などを食べる事はできるが、今でもイージス村での家庭料理と言えばチーズフォンデュというのが定着している。
「お主はそれを作る事はできるのか？」
「一応ね。これでも母親の代わりに料理を一手に引き受けていただけあって一通りはできるよ」
「そうか。では今度妾に馳走してみんか？　褒美は出すぞ？」
「そんな言い方しなくても、別に作って欲しいならいつでも作るよ」

苦笑しながらクリュウがそう答えると、イリスは満面の笑みを浮かべて「それは真かッ!? ヌフフフ、楽しみにしておるぞクリュウ」と期待に胸を膨らませる。
「まぁ、それは追々ね。とりあえず今は目の前の料理を食べようよ。せっかくの料理が冷めちゃうからさ」
「ハッ!? それもそうじゃな。せっかくの料理を冷ましてしまってはシェフに失礼じゃしな」
「そういう事」
意識を再び目の前の料理に戻すと、そこにはおいしそうな料理が食べられるのを待っているかのように温かな湯気を上げながら置かれている。クリュウが頼んだ炒飯は兜ガニとホタテチップを混ぜ込んで一緒に炒めた炒飯に、その上から餡を掛け、彩りを良くする為に最後に西国パセリを載せた一品。カニの匂いが香ばしく、その香りを嗅いだだけで口の中に唾液が溜まる。
「それじゃ、いただきます」
手を合わせて礼儀良くそう言うと、クリュウは早速レンゲで餡と一緒に炒飯を一口分すくい、適度に息を吹きかけて冷ましてから頬張る。口の中に入れた瞬間にカニの風味がふわっと広がり少し濃いめ餡が絡みついたご飯はパラパラで程良い味付けで、二つが合わさると何とも言えない絶品の味に変わる。しかも噛めば噛むほどホタテチップから味が染み出すので味わい深い――要するに滅茶苦茶うまいという事だ。
「うはぁ、これすごくうまいや」
「妾のポットパイもなかなかの美味じゃぞ」
皿を覆っているパイ皮をサクッとスプーンで崩し、中のクリームシチューとその破片を混ぜて食べるポットパイ。パイの皮から顔を出すシチューは野菜も豊富に入っていて栄養バランスを考えてある。さすがレディース料理と言った所か。
「うむ。実に美味じゃな。じゃが事前にお主の焼いた肉を食べておって正解じゃな。何も食べずにこれだけではさすがに満腹にはならんかったぞ」

苦笑しながら言うイリスの言葉を聞いて、クリュウも思わず苦笑が浮かぶ。レディース料理が足りないとは、さすが育ち盛りと言った所か。ちなみに最近のフィーリアならこの量でも十分かもしれない、なんてクリュウが内心思ったり――言うまでもないが、最近フィーリアはダイエット中の為、食事を我慢しているに過ぎない。
「まぁ、それはどちらかと言えばセットメニューっぽいからね。他に何か一緒に頼んで食べるものなんだよ」
実際、これを注文する際に店員が「単品でよろしいですか？」と訊いてきた。確かにセットメニューでは他にもスープやサラダ、小さなパンが付いたりするのだがイリスは単品でチョイスした。曰く「美味な物で腹を満たしたいのじゃ。サラダや安物のパンで無理に腹は膨らませたくない」だそうだ。何とも贅沢な思考だ。
「お主のも実にうまそうじゃな」
半分程食べ進めた時、おもむろにイリスがそんな事を言い出した。視線を上げると予想通りキラキラとした瞳で食べかけの炒飯を見詰めている。クリュウはそんな彼女の視線に苦笑を浮かべるとそっと彼女の方へ自分の皿を向ける。
「食べてみる？」
「良いのかッ？」
「別にいいよ。食事代は君のおごりなんだからさ」
「う、うぬ？　そうか。お主はいい奴じゃな。うむ、ではいただくとしよう」
イリスは皿を引き寄せると自分の使っていたスプーンで飯をすくい、口に運ぶ。その瞬間、あからさまに彼女の顔が輝いた。比喩ではなく、本当に笑顔がキラキラと輝いている。何ともわかりやすい子だ。
「おいしい？」
「うぬッ。カニとホタテチップがいい味を出しておるのぉ……じゃが、他に何か手を加えているような味付けじゃな。はて、これは一体……」
「たぶん牛脂を使ってるからだと思う。シーフード炒飯にしてるけ

ど、肉の旨味も両立させる事で単純な味わいに深みを出してるんだね」
　いつもエレナとドンドルマなんかで外食をした際にする、料理の味付け議論。そのクセでつい思った事を言ってしまったが、今目の前にいるのはエレナではない。それを思い出して慌てて炒飯から視線を彼女へと向けると、予想通りぽかんとした顔でこちらを見詰めていた。
「あ、いや、その……」
「……なるほどのぉ。お主が料理に心得があるのは事実のようじゃな。しかしよくわかったのぉ。妾はそこまでは気づけんかった」
「ううん。何か普通と違うなぁ、って気づくだけイリスはすごいよ。料理が大好きな人の証拠さ」
「うぬ。古今東西において衣食住のうち最も人を幸せにするのは食と決まっておる。妾はその真理に従っているだけじゃ」
「難しい事言ってるけど、単純に言えば食べるのが大好きって事か」
「むむむ、至極簡潔にされてもうたがその通りじゃ」
　もう少し言いようはなかったのか、と不満げに零す彼女の拗ねた横顔を見て苦笑を浮かべながらクリュウは水を一口飲む。水を飲む事で口の中に溜まっていた味が全て消え去るので、同じ物を食べても少し新鮮さを感じられる……ような気がする。
「好きなだけ食べていいよ」
「いや、それではお主の分がなくなるからのぉ。それに妾は自分の行動に責任を持つ人間じゃ。それは自分で選んだ料理も然りじゃ」
　要するに自分の物は自分で責任をもって食べるという事らしい。こんな所でそんな妙な生真面目さを出してどうするのやら。何というか、本当にイリスは背伸びをしている子供という言葉がピッタリな子だ。
「クリュウ、妾のポットパイを一口どうじゃ？」
「いいの？」
「無論じゃ。お主のを頂戴しておいて妾が拒否する謂れはないし、妾はそんなケチな人間ではないのじゃ」

ムフフと、なぜか自信満々に胸を張るイリス。そんな彼女の姿を微笑ましげに見詰めながら、クリュウは「それじゃお言葉に甘えて」とポットパイに手を伸ばす。が、手がそれを掴む直前でなぜかイリスは取り上げてしまう。
「え？　何で？」
「一度やってみたかったのじゃが――妾が直々に食べさせてやろう」
これまたなぜか威厳のあるように、でも実際はない感じに自信満々に胸を張る。クリュウは困惑しながら「え？　何でまた……」と困惑げに彼女を見やる。するとなぜかイリスは頬を赤らめながら視線を外した。
「その、何じゃ。時々こういう店にいるカップルがこういう事をやっておったのを思い出してのぉ。その、いい機会じゃから妾も試してみようかと……」
「別にいいけど」
「ほ、本当かッ!?」
「ちょッ!?　イリス静かにッ！　正体がバレたらマズいでしょッ!?」
突然大声を上げるイリスに慌てて小声で怒るクリュウ。イリスはすぐに片手で口を塞ぎつつもう片方の手でフードを深く被る。だが幸いな事に周りの喧騒は思いの外大きく、中には酔って騒いでいる連中も見えるのでそちらの方が声は目立ったらしく二人を見ている人間など誰もいなかった。
二人は一斉に安堵のため息を零し、それがおかしくてどちらからとなく笑みが零れた。
「それでは、準備は良いか？」
「そんなに緊張するような事？」
苦笑しながらクリュウは静かに口を開く。そこ目掛けてイリスはスプーンでシチューとパイを一緒に載せて彼の口へと運ぶ。もちろん事前に食べられる温度に冷ましておくのも忘れない。
「行くぞ」
クリュウは首の動きだけで答える。そのすぐ後に口の中へ金属の平たい物、スプーンが入る感覚。同時に口の中いっぱいに熱と香りが

広がり、それが逃げる前に口を閉じる。完全には閉じずに、スプーンが後退できるだけの隙間は残して。
　スプーンがゆっくりと引き抜かれる。途端に下ろされたシチューが舌に触れ、味覚がその能力を遺憾なく発揮する。コクのある旨みととろみ。口の中いっぱいに広がるのは、そんな《おいしさ》だ。
「ど、どうじゃ？」
　黙って味わうクリュウを、なぜか自分が作った訳でもないのに緊張した面持ちで見詰めるイリス。クリュウは首を傾げながら「おいしいけど」と答えるが、イリスは不満げに唇を尖らせる。
「そういう事を問うた訳ではないわ。その、どうじゃ？」
「何が？」
「じゃから、女の子にアーンをされる気分はどうじゃと聞いておる」
「どうって……別に普通だけど」
　素直に答えると、イリスはガクリと肩を落とした。そんな彼女の反応にクリュウは戸惑うばかりだ。
　ちなみにクリュウが動揺しない理由は二つある。第一に、イリスはまだ子供だ。クリュウが男としてそういう目を向けるには早過ぎるし、そんな事になれば彼は犯罪者予備軍という嬉しくない称号を得る事になるだろう。後の二つ名が『ロリコン』では天国にいるであろう両親にも顔向けできない。
　第二に、クリュウは超がつく程の朴念仁ながら周りには彼に好意を寄せる美少女が数多い。結果的に、《この程度》の事は彼の生活では日常に近い為、そもそも何か特別な事だという意識が抜け落ちているのだ。何とも贅沢且つ羨ましさを通り過ぎて腹が立つ理由だ。
「良い。次は主の番じゃ」
「僕も？」
「当たり前であろう？　妾だけにやられておいて、自分はしないというのは失礼じゃ」
「そういうものかな。別にいいけど」
　これまた上記の二つの理由から快諾してしまうクリュウ。特に食べさせてもらうより、食べされる方が彼は慣れている。実際慣れた手

つきでさっさとイリスの口に炒飯を載せたスプーンを向ける。口の中に入れてタイミングよく引き抜くと、なぜか頬を赤らめながら無言で咀嚼するイリス。ごくんと呑み込み、ポツリと零す。
「……ぬぅ、何じゃかドキドキするのぉ」
「慣れない事をしたからじゃない？　それより、残り少ないしさっさと食べちゃおう。並んで待っている人達の為にも早くテーブルを空けないと」
そう言って彼が視線を送った先には先程と変わらずに長蛇の列が食堂に入るのを待っている。それを見たイリスも同意権だったらしく、一度仕切り直す為に水を飲んだ後に残りを一気に片付ける。
二人して食事を同時に終えて、お勘定は有言実行でイリスが支払い、店を出る。
夜の繁華街は相変わらず人でごった返している。その中を、クリュウとイリスは来た時と同様に手を繋いで、クリュウが先導する形で歩く。
人が多いのでそれを避ける事に集中しているクリュウとは、当然道中の会話は少ない。そもそも店の中で散々話したので、特筆して話題もない。それに加えて、イリスの意識は街の群衆の会話に注がれていた。
「……ふむぅ、やはり小麦の値段が上がっておるか」
「小麦？」
「うむ。最近我が国の主要小麦生産地であるオーランドを結ぶ海域に海竜ラギアクルスが出現してのぉ。シーレーンが寸断されてしまって、オーランドから小麦を海路で輸送する際にその海域を避けて通っておる上に納入量も減った為、どうしてもコストが上がってしまってのぉ」
「ラギアクルス？　それって、モンスター？」
「そうじゃ。何じゃお主、ラギアクルスを知らんのか？」
「う、うん。聞いた事ない名前のモンスターだよ」
「……むぅ。まぁ、通常ラギアクルスは東方大陸周辺海域に住むモンスターじゃからな」

「ふぅん、東方大陸の固有種のモンスターか」
クリュウが知らないモンスター。それが、東方大陸にはいる。
昔授業で聞いた事がある。東方大陸と中央大陸では住むモンスターも大きく異なり、同じ種でも生態や行動が若干の違いがあるそうだ。生き物とは環境に応じてそれぞれに特化した進化をし、同じ種でも住む地域で違った生態や行動を持つ場合がある。
ならば、東方大陸には自分の知らない世界が広がっている。何となくワクワクを感じたが、まだ中央大陸にも自分の知らない事はたくさんある。それに、自分の目的は村の為にがんばる事。村を離れる気は、今の所彼の中には存在しない。
「今海軍を派遣して追い払おうとしておるのじゃが、如何せん相手が相手じゃからのぉ。ジェイドの奴、兵器研究所で開発中の新型対艦兵器を投入するとか言っておったが……」
ひとりごとをブツブツと言うイリスの口から何か物騒な言葉が聞こえたが、国防に関わる機密であろうからあえては問わなかった。ちなみに彼女が言う新型兵器とは後の世で海戦の主役の一つになる魚雷の事だ。
「それにしても、どうしてまた急に小麦の話を？」
「うぬ？　あぁ、先程露天酒場で話している者達が愚痴っておったのじゃ」
「ふぅん、よくそんな話が聞こえたね」
「忘れたのか？　妾はひと時の休息の為だけにこうして城外に出ている訳ではない。こうして民の声を直に聞いて政に反映させる為でもあるのじゃぞ」
「そう、だったね」
それにしてはずいぶん楽しげに食事をしていたように見えるが、それはあえてツッコミは入れなかった。何となく、それは言ってはいけない気がしたのだ。
「じゃが、今宵は実に楽しかったぞクリュウ。お主のおかげじゃ」
そう言って嬉しそうに微笑むイリス。その笑顔を見てクリュウは静かに微笑み「僕も楽しかったよ」と答える。するとイリスは「そう

かそうか」と何度もうなずいた。
繁華街の中央を過ぎ、次第次第に喧騒は落ち着いていく。その先には貴族区画がある為、庶民の騒がしさが届いて来ないのだ。静まり返った高級住宅街を抜け、元来た道を戻る。一度通った道なので覚えている為、クリュウも迷わずに彼女を先導する。もう人はいないのでぶつかる心配はないのだが、なぜかイリスは引き続きこうして手を繋いでいる。
そして外周の城壁へと至り、そこの裏門を使って同じように城壁の中へ入る。同じように内壁も突破して、本当の意味での城の敷地内へと入ると、つい数時間前に彼女と出会ったあの場所へと戻った。
「……それじゃ妾は戻る。そろそろ姿を見せないとジェイドの奴に勘ぐられるかもしれんからな」
「その方がいいと思うよ」
「うむ。改めて礼を言うぞクリュウ。今宵は良き夢を見れた。楽しかったぞ」
「うん。僕もだよ。誘ってくれてありがとう」
「う、うむ。それではクリュウ、お主も早う部屋に戻って休め」
「――はい。イリス陛下」
無礼講はここまでだ。これからはまた、平民と女王の関係に戻る。あれは、ひと時の夢に過ぎないのだから。元の、本来の姿に戻るだけ。クリュウも、こうするべきだと思っていた。だから、
「……う、うぬ。それでは、な？」
――イリスが最後、少し寂しげな表情で別れの挨拶を言ったのは少し意外だった。
しかし、元々二人が親しい会話をすれば今日の事がバレてしまう。そうなれば、彼女がこうして城下街へ抜け出す事が叶わなくなってしまう。だからこそ、これで正しいのだ――いや、それは詭弁でしかない。なぜならこれは、《合法の脱走》なのだから。
「――そろそろ姿を見せてくれませんか。あまりコソコソされるのは好きじゃないんです」
イリスが姿を消すと同時に、クリュウは振り返ってそう言った。そ

の表情は先程までの優しげなものから打って変わって、彼らしくない険しい表情に変わっていた。口調こそいつもの彼らしいものだが、雰囲気はまるで異なる。
　クリュウが威嚇するように闇を睨みながら待っていると、近くの木陰で微かに何かが動く気配がした。そこへ視線を向けると、先程まで姿を見せていなかった者が現れる。
「驚いた。まさか気づかれていたとはね」
「これでもハンターですからね。気配とかそういうのに敏感なんです」
「そう、いつから気づいてた？」
「大衆食堂を出た辺りかな。喧騒の中にうまく紛れ込んでたみたいですけど、視線ですぐにわかりました」
「そうか……」
　そう言って闇の中から姿を現し、月の光に照らされたのは赤髪をポニーテールに結った、まるで剣士のような雰囲気を持った女性軍人――エイリークであった。瞳は厳しく、向こうもこちらを警戒しているのが伺える。
　互いに牽制し合いながらの対峙。あまり心地いいものではないが、相手が相手だけに気を許す訳にはいかない。
「僕を見張ってたんですか？」
「それもある。だが、本来の私の任務は城下街へ夜な夜な繰り出す陛下の護衛だ」
「やっぱりね……」
　苦笑しながら彼が思い出したのはイリスのあの勝ち誇った笑顔。残念ながら、それは幻の勝利だったらしい。
　そもそもクリュウはかなり以前の段階からこれが仕組まれた脱走だと気付いていた。それはそうだろう。いくら安全な国とはいえ、女王が抜け出す事ができるなんてあまりにも警備がザル過ぎる。あの裏門だって、普通は兵士の一人くらいは立っているはずだ。なのに、それが外されているという事は配置命令に細工がされているとしか考えられない。

「総軍師さんの命令？」
「その通りだ。長官は陛下がこうして時々城を抜け出す事を黙認していた。お転婆な陛下は諦めが悪いと知っているし、息抜きは必要だと考えている。それに加えて陛下の行為が、政をより細かく行う為の情報収集も含んでいるとあれば、止める事もできない。だからこそ、私がこうして遠巻きに護衛する事でその行為を黙認していたのだ」
　要するに、イリスがただの息抜きだけではなく、民の声を聞いてより良い政治を行おうとしていると知っているからこそ、あえて止めはしなかった。せめて、腕利きの兵士を護衛としてこっそり付けていただけ。何とも女王想いな総軍師様だ。
「でも、今日はそれだけじゃないですよね。だからこそ、陛下がいなくなった後も僕を監視していた。違います？」
「その通りだ。では、私も単刀直入に言うが、今回の事、おそらく長官はあまり快くは思われないだろう。君のような平民、それも外国人相手に陛下が近づく事は極めて異例であり、禁忌だ。陛下が貴様に興味を持っている以上、無用な接触は避けたい――金輪際、陛下に近づくな」
　それは何とも一方的で高圧的な命令だった。彼女の部下になった記憶はないのに、まるで格下を相手にするかのような言い方。少しばかりクリュウはカチンと来た。
「そんなの、当人達の勝手だと思うけど」
「陛下は我がアルトリア国の長だ。貴様のような下賤な人間が触れて良いお方ではない」
　エイリークの物言いに対して、クリュウの中で疑問が浮かんだ。確かにイリスはアルトリアの女王様だ。だが、一緒にいたわずかな時間でもわかる。彼女はまだまだ子供で、普通の女の子だ。そんな彼女と接する事に、身分の違いなんて壁はあまりにも無慈悲で無機質で、無意味な物だ。
「――女王とハンターが関わるのは、そんなに許しがたい事なんですか？」
　思わず零れた言葉にクリュウは慌てて口を塞いだ。幸い、エイリー

クはこの件に詳しい人間じゃなかったらしく「当たり前だ。貴様のような存在は陛下の健やかな成長を阻害するものでしかない」と言葉通りの意味で解釈して、それに対する罵倒を返す。クリュウは安堵しつつも、やはりその言い方が気に入らなかった。
「とにかく、今後一切陛下には無意味に近づくな。関係のない奴は大人しくしていろ。いいな？」
そう一方的に残して、エイリークは去って行った。一人残されたクリュウは数時間前にそうしていたように地面に腰を落とすと静かに月を見上げた。胸の奥に隠しておいた金色の、母の形見のペンダントを取り出して、そっと握り締めながら。
「……イリスと僕は、関係なくなんかないんだ」
ギュッとペンダントを握り締めながら、クリュウは震える声でそうつぶやいた。

第１７５話　男子禁制　恋する乙女達の秘密の女子会

一方その頃、アリアの部屋で行われている女子会は実に和やかな雰囲気で進行――する訳もなく、どちらかと言えば紛糾していた。

当然だろう。何せ集まった面々の大半が一人の少年に恋しているというのだから、ぎこちない雰囲気を突破してしまえば後に残るのは互いの恋敵（ライバル）関係のみ。和やかにしろと言う方が土台無理な話だ。

「クリュウと私は第五学年第一期から卒業までの一年半という長い期間一緒の学園で過ごしていたのですわよ？　一緒に食事をした事も、狩りに出た事も、休日にデート（自分視点）した事もありますわ。学生生活というのは、実に青春らしい。その青春を私は彼と共に過ごしたのですわ」

フフンと自慢気に腕を組みながら自身の学生時代での彼との自慢話を言ってのけるのはもちろんアリアだ。颯爽と髪をかき揚げ、エレガントな振る舞いと共に他の女子を牽制する。自信に満ちた高笑いは今日も絶好調だ。

部屋に響き渡る絶好調の高笑いに、ぐぐぐッと歯を噛み締めるフィーリア。学生時代一緒というのは、何て羨ましいイベントなのか。言い返してやりたいが、自分には彼女の自慢話を打ち破る術はなかった。

「ふ、フンッ。ナメんじゃないわよ。こっちはガキの頃からあいつと一緒にいるんだからッ。たかが一年半で長い期間？　ハッ、十年以上の付き合いを持つ私の前でよくそんな紙屑よりも軽い期間を自慢できたものねッ」

一方、アリアに言い返せるのはこの面子の中で圧倒的にクリュウと共に過ごした時間が長いエレナだ。幼なじみのアドバンテージを遺憾なく発揮する発言の破壊力は絶大。これには先程まで優位に立っていたアリアも押し黙る。

十年以上の付き合いを持つエレナ。彼女の幼なじみとしてのアドバンテージの前ではサクラの昔なじみという数年の付き合いも霞んでしまう。当然約一年半の付き合いのアリア、約一年のフィーリア、そして半年程のシルフィードでは太刀打ちはできない。
「……それだけ長い時間一緒にいて、進展がない事を自慢するなんて、愚かね」
正攻法では太刀打ちできない。だが逆に、そのアドバンテージを無力化する術を彼女は持ち合わせていた。「な……ッ!?」と愕然とするエレナの視線の先で嘲笑するのは、常識にとらわれない最狂の恋姫、サクラだ。
「……私は、クリュウにドレスを買ってもらった。それだけじゃないわ、一緒の布団で寝る事も珍しくない。そんな上っ面だけの関係とは違うわね」
「あ、あんたは夜中に勝手に潜り込んでるだけでしょうがッ！」
「……そんな覚悟もない貴様達は相手にすらならない証拠ね」
世の中、こんなにも嘲笑が似合う十代の乙女がいるだろうか。相手を嘲つつ自身の優位性を示し、尚且つ牽制。これを同時並行できるのは、さすがサクラだとしか言いようがない。
「……恋において恥や外聞は足枷でしかないわ。本気で好きなら、そんなものは全て捨てなさい。じゃないと、貴様達はいつまで経っても私には勝てないわ」
「……覚悟としては立派だが、君は少し恥や外聞を取り戻した方がいいぞ」
コーヒー片手に恋姫達の話を聞いていたシルフィードは苦笑しながらサクラに忠告する。彼女の言う通り、サクラは少しそういうものを取り戻した方がいいだろう。皆同意見だったらしく、村組の面々は何度も頷く。
「……う、うるさいわね」
余程恥ずかしかったのか、サクラは頬を赤らめながらプイッとそっぽを向く。その際に余計な事を言ったシルフィードを睨みつける事も忘れない。そんな彼女の視線にシルフィードは苦笑で返す。

「わ、私はクリュウ様に頼りになるってすっごく言われますッ！」
勇気を出して言ったのはフィーリアだ。自分の中のアドバンテージとは何か。それを必死に考え、搾り出したのがそれだった。
自分はクリュウに最も信頼されている。そんな自信が彼女にはあった。自分は比較的彼から相談事を受ける事が多い。実際に頼りになると言われた事も一度や二度ではない。
自分にはエレナのような時間もアリアのような思い出も、サクラのような大胆さもない。でも、誰よりもクリュウの事を考え支えている。その気持ちは誰にも負けないと自負している。
ただし、最近は頼りになる役はシルフィードが引き受けているので多少ではあるが彼女のアドバンテージが霞んでしまったのは否めないが。
フィーリアの参戦で余計に恋姫達の言い合いがデッドヒート。もはや外野が何を言っても止められるような状態ではなくなってしまった。火に油を注ぐという言葉があるが、事実上それに限りなく近いような状態だ。
激しく言い合うそんな恋する乙女達を見守るのは外野であるシグマとフェニス、そしてシルフィードの三人だ。
「ったくよぉ、惚気話に付き合わされてるこっちの身にもなれっての」
「まあまあ、微笑ましいじゃない」
呆れるシグマの横で優しく微笑むフェニス。その目はまるで妹達を見守る姉のような優しげなもの。実際フェニスはクリュウやアリアよりも一つ年上なのでお姉さんと言っても通じる。
そんなフェニスの言葉に同意見だとばかりにシルフィードは静かに微笑む。
「確かに。一生懸命な彼女達を見ているのは胸が温まるな」
言い合ってはいるが、いがみ合っている訳ではない。その証拠に、何だかフィーリア達は楽しそうだ。お互いの好きな人が同じというのは恋敵（ライバル）であると同時に、自分と同じ気持ちや悩みを持つ同志でもある。自分の好きな人を褒められるのは嬉しい。その相乗効果が、彼女達を嬉々とさせているのだろう。

「何だかしけたような言い方だな。テメェも当事者じゃねぇのか？」
「冗談。私は彼女達のようにクリュウに何かしらの気持ちを抱いている訳ではない。彼とはただの仲間という関係に過ぎんさ」
　肩を竦ませながらシルフィードはそう答えると、シグマは「ふぅん、てっきりテメェもクリュウラブかと思ってたぜ」と意外そうな反応を見せる。その横ではフェニスが何か意味深な笑みを浮かべていた。
「……何だ、その意味深な笑顔は？」
「別に何でもないわ。ただ、あなたってクリュウ君そっくりだなぁって」
「私が、クリュウに？　どんな所がだ？」
「自分の本質がちゃんと見えていない所、かな？」
「うん？　どういう意味だ？」
　彼女の言わんとしている意味がわからず首を傾げるシルフィードに対してフェニスは「自分で見つけないと、意味が無いと思うわ」と彼女の問い掛けをスルーする。当然シルフィードは不思議そうに首を傾げた。
「シルフィードは、クリュウ君の事をどう思っているのかしら？」
「……手が付けられない程のお人好しと言ったところか。誰かの為に一生懸命になれる、そんな彼の部分は尊敬に値するな。私にはあそこまで人の為に一生懸命にはなれんさ」
「ふぅん、でもクリュウ君の為ならがんばれるんでしょ？」
「……そうだなぁ。私にできる範囲でなら、全力は尽くすさ」
「うふふふ、クリュウ君ってばモテモテね」
「ケッ、あんな軟弱者のどこがいいんだか」
　理解出来ないと言いたげに腕を足を投げ出しながら言うシグマに対してフェニスはわざとらしく驚きながら「あら、あなたはクリュウ君に輪をかけて軟弱なエル君の事が好きなんでしょ？」とシグマをからかう。
「だぁかぁらぁッ！　違うって言ってるだろうがッ！」
　面白おかしそうに笑うフェニスを前にシグマは顔を真っ赤にして怒るが、もはや彼女が何を言っても無駄だろう。

フェニスには彼氏がいるし、シグマにも事実上の彼氏がいる。そしてフィーリア達にはクリュウが。歳相応の娘達は皆それぞれ恋に生きている。その眩い姿にシルフィードは思わず目が眩みそうになった。

自分にはない、青春を謳歌する恋する少女達の輝き。何とも眩しいものだ。

そんなどこか遠い目をしてフィーリア達を見詰めていた時だった。突然ドアがノックされたのだ。その音に全員が口を閉じてドアの方を見詰める。シルフィードもまた表情を引き締めて振り返る。

「誰かしら？」

部屋主であるアリアが立ち上がってドアの前で「誰？　何の用かしら？」と尋ねるが、訪問者は何も堪えない。訝しげに警戒しながらアリアがドアを開くと、そこには思わぬ人物が立っていた。

「よぉ、ヴィクトリアの娘よ」

「へ、陛下ッ？」

驚く一同を前に現れたのは、この場にいる全員が予想だにしていなかった訪問者。ドアの三分の二程の高さしかない小柄な幼き少女。銀色の美しい髪を無邪気に揺らし、意志の強い碧眼を細めて笑うアルトリア王政軍国を統治する幼き女王――イリスであった。

「こ、紅茶です」

「おぉ、すまんのぉ。あ、別に妾に構わずとも談笑を続けても良いぞ」

アリアの淹れた紅茶を前に笑顔で言うイリスであったが、もちろん彼女の言葉通りに談笑を続けようなどとする人物は誰もいない。一国の女王を前にして恋話を咲き誇らせる勇気などこの場にいる全員が持ち合わせてなどいなかった。

イリスは紅茶を一口飲む。その瞬間、瞳を輝かせた。

「おぉ……、これは何じゃ。妾が飲んだ事のない紅茶じゃの」

「あ、それはエルバーフェルド産の紅茶ですわ。彼女、フィーリア・レヴェリのお土産の品です」

話題を振られたフィーリアはビクリと震えて驚くが、そこは貴族の娘。恭しく礼でイリスの視線に対すると「正確には我が領、レヴェリ

領のチューリップティーです。エルバーフェルドでも特級品に位置づけられている品です」と堂々と振る舞う。それはきっと彼女なりの空元気だったのだろう。それでも、レヴェリの名を汚したくない。その一身での虚勢。しかしその姿は実に自信に満ちた貴族らしい。
「ほぉ、エルバーフェルドの特級品の茶葉か。それはまた良い品じゃの。香りも口当たりも良い。至高の一品じゃ」
「お褒めいただき、ありがとうございます」
　チューリップティーをおいしそうに飲むイリスの横顔を見て安心したのか、フィーリアはほっと胸を撫で下ろす。そんな彼女の背中を労うようにシルフィードが叩く。
「うぬぅ、妾も何か土産を持って来れば良かったのじゃが。如何せん思い立って立ち寄っただけじゃからのぉ」
「そんな。お気持ちだけで結構ですわ――それよりも、一体どのようなご用件で私のお部屋に？」
　イリスの気遣いに謙遜しながら、アリアは意を決して彼女が訪れて以来抱いていた疑問をぶつけてみる。それはこの場にいるイリス以外全員の共通の疑問。彼女の問い掛けを、他の面々も興味深げに聞き入っている。
　そんな多くの視線を一身に受けていても表情を崩す事なく目を瞑りながら紅茶を飲むイリス。カチャリとテーブルの上にカップを戻すと、ゆっくりとその閉じられていた瞳が開かれた。
「……ちぃとな、お主達に尋ねたい事があったのじゃ」
　そう言ってイリスはフィーリア達を見る。突然の展開に驚くフィーリアを先頭にその背後ではサクラが訝しげに首を傾げ、その隣に立つシルフィードも同じような表情だ。
「女王陛下が、我々に尋ねたい事ですか？」
「うぬ。大した事じゃないのじゃが……」
　フィーリアの問い掛けに対してイリスは何かを考え込むような仕草をした後、意を決した様子で彼女に向き合う。その表情は真剣そのもので、幼いながらも一国の長としての凛々しい表情。それを見てフィーリアも自然と表情が引き締まる。

一拍の間があって、不気味な沈黙を破ってイリスが口を開いた。
「――クリュウとは、どういう少年なのじゃ？」
『……はい？』
文字通り、それは異口同音であった。誰もが同じような呆けた表情を浮かべ、半開きになった口から全く同じ反応が飛び出した。それ程までに、彼女の口から飛び出したのは突拍子も無い事だった。
「う、うぬ？　どうしたのじゃ？」
皆の反応に困惑するイリスは訝しげに首を傾げながら彼女達を見詰める。視線を向けられたフェニスは何とも言えない表情のままシグマに助けを求めるが、シグマは無理だと言いたげに首を横に振りまくる。そんな中、真っ先に冷静さを取り戻したのはやはり彼女だ。
「クリュウ、ですか？」
「うぬ。あの少年の事を詳しく知りたいのじゃ」
シルフィードの疑問に対してイリスは全く臆する事なく堂々と返す。その表情には一点の曇もなく、純粋なもの。南海の蒼と同じ碧色の瞳が純粋な輝きでキラキラと煌めいている。そんな彼女の視線を浴びながら、シルフィードは困ったような表情を浮かべる。というか、実際困っている。
「と、言われましても。何をどう説明したら良いやら……」
「別に難しい事は訊いておらん。お主達の目線から見てどういう人間なのかという事じゃ」
「はぁ……」
難しい事はと言っているが、実際問題人の説明程難しいものはこの世にはないだろう。困ったように頭を掻きながらシルフィードが考え込んでいると、思いがけない人物が口火を開いた。
「バカがつくくらいのお人好しですわ」
その声に全員が声の主を見詰める。その視線の先にいたのは、先程までの動揺がウソのように威風堂々と凛と立ち振る舞うアリア。その表情はいつものように根拠不明な自信に満ち溢れている。
「お人好し、とな？」
「はい。人の為にがんばり過ぎて自分が傷ついてしまう。しかもその

事に何の躊躇いもない大バカですわ」
「うぬぅ、人としては立派な心構えじゃが、自分の保身を捨て去るのは如何なものか」
「自分の事など二の次三の次という呆れるくらいのお人好し――でも、だからこそ本当に優しい。クリュウは、誰にでも心優しい、そんな人ですわ」
　まるで自分の事のように嬉しそうにそう語るアリア。バカバカバカと言いつつも、その《バカ》は決して侮蔑の言葉ではない。《バカ正直》と同じ、一種の褒め言葉。
　アリアの言葉にうむうむとうなずくイリスを見て、ようやく自分達が一歩出遅れた事に気づくフィーリア達。すぐさま巻き返そうとばかりに動き出す。その先陣を切ったのはフィーリアだ。
「や、優しいだけじゃありませんッ。クリュウ様は強くてかっこいいんですッ！」
「ほほぉ、強くてかっこいい。男を褒めるには理想的な言葉じゃな」
「……それでいて、かわいい」
「うぬぅ、それは男を褒める言葉ではないが……しかし、納得はできるのぉ」
　あっという間にイリスを取り囲むようにアリア、フィーリア、サクラの包囲網が完成する。この包囲網に参加していないのはエレナとシルフィード。そして一応外野のフェニスとシグマの四人だ。シルフィードはそもそもこの話に参加する気はないし、エレナはクリュウを褒めるという行為がひどく苦手な子なので、参加できずにいるのだ。その証拠に、参加したいけどできないという歯がゆさにエレナはひどく苦しんでいる様子。その葛藤する姿は、ちょっと可愛らしかったり。
　イリスの問い掛けは一度だったのに、そこからはまたクリュウの褒め合戦のような彼を賛美する文句が三人の口から速射のように飛び出す飛び出す。本人がいたら恥ずかし過ぎて気絶するような褒め殺しだ。イリスはそれを相槌をしながら真剣に聞き入っている。
　クリュウの褒め殺しが始まって十分程が経過した頃、全力で賛美の

言葉を放っていた三人は肩で息をして今は休憩中。フィーリアに至っては先程から水をゴクゴクと飲んでいる程だ。その間三人から入手した情報を整理するように考え込むイリスに近づく者がいた。
「陛下。ちょっとよろしいでしょうか？」
「うぬ？　何じゃ？」
　考え事を中断して視線を上げると、そこにいたのはシルフィードであった。視線を向けられたシルフィードは後頭部を掻きながら何か言いづらそうに黙っている。イリスが首を傾げるのを見て意を決したように口を開いた。
「なぜ、クリュウの事を尋ねるのでしょうか？」
　――本来、一番最初に尋ねるべき問い掛けであった。
　息を整えていた三人もシルフィードの疑問にハッとなる。エレナはある意味冷静な側にいたのでそんな三人の様子を見てフェニスやシグマと共に苦笑を浮かべていた。
「なぜ、と申すと？」
「いえ、クリュウと陛下はまだ会って日が浅い。それに実際に会っていた時間もわずかです。なのに、なぜ陛下はクリュウの事をそんなにも熱心に尋ねられているのか。少々疑問に思いまして」
　イリスは目をパチクリと何度か瞬かせた後、少し考え込む。すると、その間に彼女の白い頬がほんのりと赤らんだのを恋姫達は見逃さなかった。
「う、うぬ。別に大した事ではないのじゃ。彼はこの国に母親の事を調べに来たのじゃろ？　それに協力する為にも情報収集をしているに過ぎんよ」
　言っている事は実に正論なのだが、一度疑問を抱いてしまった恋姫達の視線は鋭い。もし本当にそうだとしても、彼女の質問内容はあまりにもその説に関係のない話だ。取って付けたようなウソなどでは彼女達を誤魔化す事はできない。
「……怪しい」
「ぬおッ!?　な、何じゃお主はッ!?」
　いつの間にかイリスの背後に回ってジト目で彼女を見詰めるサク

ラ。音もなく忍び寄るスキルはさすがと言おうか。イリスが驚くのも無理も無い。
「お、驚かせるでない。無礼な奴じゃの」
「すみません。この子は礼儀というものに最も縁遠い子でして」
「……シルフィード、私は貴様が嫌いだ」
　無礼極まりないサクラの頭を軽く叩きながら代わって謝るシルフィード。自分を不機嫌そうに睨みつけるサクラを無視してイリスの前に立つ。その堂々とした立ち振舞にはさすがのイリスも少し気圧されたのか「う、うむ。別に良いのじゃが……」と語尾が弱まる。それを見てシルフィードが攻勢に出た。
「何でしたら本人を呼びましょうか？　その方が手っ取り早いと思いますが」
「あ、いや、それには及ばん。それは追々行うつもりじゃ」
　シルフィードの提案に対してイリスは少しだが動揺を見せた。それを見てシルフィードは彼女が明らかにウソをついている事を見抜き、自然とため息が零れた。このため息はもちろん、一国の女王様相手でも容赦のないクリュウの天然ジゴロに対する呆れから生まれたものだ。
「……陛下。クリュウと何かありましたね？」
「な、何じゃ藪から棒にッ!?」
「声、裏返ってますよ……」
　シルフィードの苦笑交じりの指摘にイリスは顔を真っ赤に染めて黙ってしまう。かわいらしい反応を見せるイリスに遠くでフェニスが「陛下、かわええわぁ……」と頬を押さえながら喜び、隣でシグマが「そうかぁ？」と興味なさげに返している。
　妙な空気を打破すべく、イリスはわざとらしく咳払い。皆を牽制しながらその口をゆっくりと開く。
「ちょっと奴と話す機会があっただけじゃ。特に何があった訳ではない」
　当然それはウソだ。つい一時間程前まで彼女はクリュウと一緒に城下町でデートをしていたのだから。だがそれを正直に話す必要も

なければ、自分が夜な夜な脱走している事を口外する訳にもいかず誤魔化したのだ。
一方のフィーリア達も一応は彼女の言葉に納得していた。一国の女王相手にクリュウがそれ以上の接触を行ったとは想像もできなかったのだろう。まさか女王様とデートしていた、なんて発想は普通は生まれて来ないものだ。
「それで、妾の質問に答えてくれる者はいるか？」
頬の赤らみをまだ残しつつも、気持ちを切り替えて威風堂々と構えるイリスを前にフィーリア、サクラ、エレナ、アリアの四人は円陣を組む。敵を増やす、それも相手は一国の女王だ。そんな事に協力などしたくないのが本音だ。だが断るのも気が引けるし、そもそも相手は子供なのだからもし本当にそういう状況になってもクリュウが相手にするかも怪しい。何より本当にクリュウに対して自分達と同様、もしくはそれに近い感情を彼女が持っているのかまだ正確にはわからない。
小声で相談しながら対策を練る四人を横目に苦笑しながら、なかなか返答がなくて不貞腐れているイリスの前に立ったのはシルフィードだ。
「私でよければ答えられる範囲で答えますよ。ただし、私はクリュウとの付き合いはこの中では一番短いですが」
「構わん。基礎情報だけほしいだけじゃ。協力感謝する」
背後でザワザワしている四人の反応に苦笑を浮かべながらシルフィードはイリスの質問に答えていく。本人が言った通り彼女の口から出る疑問はどれも基礎的なものだ。出身地、交友関係、ハンターとしての実力の程度、どんな人間かなどなど。シルフィードにも答えられるようなものだ。
しばらくそうした彼女の疑問に答えていたが、何個目かわからない質問を答えた時だった。
「――クリュウには家族はおるのか？」
何気ない疑問だったのだろう。質問を口にしても特に顔色一つ変える事はなかった。だがシルフィードが答えに詰まったのを見て、そ

こで初めて自分の質問が余計な事であった事、そしてその疑問に対する答えが予想できた。
「す、すまぬ……」
「私は彼の両親に会った事はないので、謝られても困ります」
謝るイリスに苦笑しながらそう答えると、シルフィードは正直に答えた。
「――彼には家族と言える人はいません。一人っ子ですし、彼の両親は共にハンター。どちらもクリュウが子供の頃に亡くなっています」
「そうか……。孤児、という訳か？」
「正確には違いますが、分類的にはそうですね」
「……そんな事、あ奴からは微塵も感じなかったぞ」
「まぁ、もう何年も昔の事ですし。何より、クリュウは強い子です。その苦しみを乗り越えたからこそ、彼は強いんですよ」
シルフィードの言葉にイリスは静かに「そうか……」とだけ答えると、それ以上疑問を口にする事はなかった。無言で席を立つと部屋のドアの前に立つ。
「フィーリアとやら。お主の用意した紅茶、実に美味だったぞ」
「あ、ありがとうございます」
「――クリュウの母親についての事、こちらとしてもできる限り捜索を助力しよう。紅茶の礼じゃ」
そう言い残し、イリスは部屋を去った。
残されたフィーリア達は呆然と閉じられたドアを凝視していたが、いち早く脱したシルフィードがそっとフィーリアの肩を叩いた。驚いて振り返る彼女に対して、シルフィードは優しく微笑む。
「今回、君は本当に大活躍だな」
彼女の言わんとしている所を理解すると、フィーリアは顔を真っ赤にして謙遜する。するとそんな彼女をからかうようにシグマとエレナが両側から挟む。
「おうおう、やるじゃねぇかお前」
「無垢な笑顔を振りまきながら、何だか計画性を感じるわね」
「そ、そんにゃ事にゃいでふッ……ッ！」

両頬を二人にフニッと引っ張られるフィーリア。頬を引っ張られながらもどこか嬉しそうな表情を浮かべる彼女を見ていると、何だか微笑ましい。
「私も、ヴィクトリア家の力を使ってご助力いたしますわ」
「うふふふ、じゃあ私もがんばっちゃおうかな」
「おうよッ。俺は軍関係を当たってやるぜ」
アリア、フェニス、シグマの三人も助力を惜しまない。和気藹々（わきあいあい）と語り合う一同を見詰め、シルフィードは一人苦笑を浮かべた。
「……まったく、クリュウの人望の厚さには感服を通り越して呆れすら感じさせる」
言葉ではそう言いつつも、その表情はどこか楽しそうだった。
男子禁制の女子会はイリスの登場で一瞬緊迫したが、その後またすぐにクリュウの話で盛り上がりを取り戻し、それから一時間後にお開きとなった。
「……クリュウ、少しいい？」
「……とりあえず、ノックなしで部屋に入って来るのだけはやめて」
ため息混じりに言うクリュウの視線の先には堂々とドアを開けて部屋へと入り、不思議そうに首を傾げているサクラの姿が。相変わらず彼女はノックなどもせずに堂々とクリュウの部屋へ入って来る。慣れたとはいえ、いい加減やめてもらいたいのだが。本人はまるでその自覚がないらしく、いくら言っても無駄だ。正直、クリュウ自身半ば諦めている。
「とりあえず、好きな所に座りなよ」
「……じゃあ、クリュウの膝の上に座るわ」
「数ある座る場所の中で、なぜ迷わずそこを選ぶの？」
すぐさまクッションを膝の上に置いてブロックするクリュウ。サクラは不満げに瞳を揺らしながら仕方ないとばかりにクリュウの対面に腰掛ける。すると、突然彼女は左目にしている眼帯を取り外した。その行動を見て、クリュウは少しばかり驚く。
「眼帯、何で取ったの？」

「……別に。取っちゃまずかった？」
「いや、サクラって僕の前でも眼帯を取る事ないでしょ？　君の素顔を見たのも、初めて会った時以来だし」
「……そうね。クリュウにはああ言われたけど、やっぱりあまり人に見せたくないもの」
「じゃあ、何で」
「――今は、不必要なものだから」
　そう言って、彼女がうつむかせていた顔を上げる。いつもは眼帯に隠された彼女の左目。幼い頃にモンスターに襲われた際に負った傷で、眉の下くらいから一直線に走った裂傷。男ならそれくらいの傷は大した事なくても、女の子にとっては大問題だ。あまり人に見せたいものではない。だからこそ、サクラはずっと眼帯でそれを隠している。その素顔を知っているのは、今現在ではクリュウだけだ。フィーリアやシルフィード相手でも、眼帯の下は決して彼女は見せなかった。彼女曰く「……自分を全部見せるのは、クリュウだけ」だそうだ。
「不必要？」
　彼女が口にした言葉に、クリュウは首を傾げた。サクラは一つうなずくと、ジッと隻眼で彼を見詰める。そして、ゆっくりと口を開いた。
「……おば様は、私の眼帯姿を知らないから」
「おば様って、母さんの事？」
　サクラはコクリとうなずいた。
「……きれいな人、だったよね」
「う、うん。まぁ、子供の目から見ても美人だったよ。すっごく」
「……でも、子供以上に子供っぽかった」
「あははは、それは言えるね。よく僕達と一緒にサッカーとかやってたし」
　昔を思い出しながら、楽しそうに自分達と一緒にサッカーをやっていた母親、アメリアの姿を思い浮かべる。本当に彼女の言う通り子供以上に子供っぽい人だった。いつも楽しそうに笑っていて、底抜けて明るい人。彼女の悲しそうな顔を見たのは、片手の指の数くらいしかないだろう。

「……私も、よくあの人に振り回されたわ」
「うーん、そうだねぇ。母さん、できれば女の子がほしかったって言ってたから。女の子らしいサクラの事すごく気に入ってたもんね」
子供の頃、サクラが商隊と共にやって来た時は無口でいつもクリュウの後ろに隠れていた彼女を捕まえては本当に可愛がっていたアメリア。本人としては正直迷惑だったのだが、彼女も心の底から楽しそうにしているアメリアに対して、本当に拒絶する事もできず、結局されるがまま。まぁ、その関係でクリュウと仲良くなれたのだが。
ちなみにエレナは当時から男子に混じってサッカーやら野球やらと男のクリュウ以上に男の子っぽい遊びに熱中していたので、アメリアの言う女の子らしい女の子では対象外になる。その頃のエレナは動きやすいように髪はショートカットに切りそろえていて、それはそれで可愛らしかったのだが。
「……正直、今でもおば様が亡くなったのは信じられないわ。あのおば様が、ハンターだったというのも驚きだったけど」
「そう、だね。僕も母さんが武具を身につけた姿はあの日のただの一度きり。正直僕もあのぽけぇッとした母さんがハンターだったなんて、ちょっと今でも信じられないかも」
「……息子ながら手厳しい意見ね」
「息子だから、だよ」
それを合図にするようにして、二人は一斉に吹き出した。クリュウはおかしそうに笑い、サクラは口元に優しげな微笑を浮かべて。どちらもアメリアを知っているからこそ、笑える。
「……本当に、よくわからない人だったわ」
「あはははは、息子としてはその評価にどういう反応をすれば良いのやら……」
「……笑えばいいと思う」
「……どういう意味？」
「……特に意味はないわ」
不思議そうに首を傾げるクリュウに対してサクラは表情を変える事なく受け流す。

それを最後に目を伏せて黙ってしまったサクラを見てクリュウは彼女が訪れてからずっと疑問に思っていた事を口にする。
「っていうか、何で突然母さんの話を？」
クリュウの問いかけに対してもサクラは黙ったままだ。もう一度問おうと口を開いたと同時にサクラがゆっくりと伏せていた視線を上げる。
「……今回の旅の根幹だからよ」
視線を逸らす事なく堂々と真っ直ぐな言葉を向けるサクラに対して、クリュウは一瞬呆けてしまう。が、彼女の真っ直ぐな視線を前にして表情を引き締める。
「何が言いたいの？」
「……別に。今回のクリュウの行動には多くの疑問があるというだけよ」
「……怒ってる？」
サクラの言葉に対してクリュウは不安げ尋ねた。何せあのシルフィードだって今は自分のハッキリしない態度に少なからず不満を抱いているのだ。サクラだって不平不満を言いに来たと解釈しても何もおかしくない。だが、
「……なぜ私が怒る必要があるの？」
サクラは怒る事も不満をぶつける事もなく、ただ不思議そうにクリュウの問いかけに首を傾げる。その反応が予想外だったのか、クリュウは一瞬面食らってしまう。
「え、だって……怒って、ないの？」
「……なぜ私が怒る必要があるの？」
動揺するクリュウに対してサクラは再度同じ疑問を口にする。その表情は心底わからないと言いたげだ。
「いや、だって僕今回の事を君に何も話してないから。てっきり不満があるんだとばかり……」
「――不満は当然あるわ」
サクラは迷わずにそう即答した。その迅速な切り返しに対してクリュウは情けなくも呆けた表情に思わず「え……？」と声を零す。そ

んな彼の反応を気にした様子もなく、サクラはジッを彼を見詰めたまま口を開く。
「……私だって、クリュウに何も話してもらえないのは不満よ。何より、信頼されていないようで――悲しいわ」
「ご、ごめん……」
「……でも、私はクリュウを信じている。だからこそ、何も言わなくても私はクリュウについて行くし、従う。それが私の役目、私の信念」
真っ直ぐな瞳を向けたまま、サクラは迷う事なくそう断言する。心の底からそう思っているからこそできる、一切の曇のない瞳。その強い輝きは、彼女の信念の強さと比例するように強く輝いていた。そんな彼女の煌く瞳が、今のクリュウにとっては眩し過ぎた。
「……不満を抱いていても、サクラは僕について来るの？」
サクラは迷う事なくコクリとうなずいた。その即答が、余計にクリュウを動揺させる。
「どうして、君はそこまで……」
「――好きなのよ、クリュウの事が」
「え……？」
面食らったように呆ける彼を前にして、サクラはその黒く艶やかな長い髪を掻き上げながら真っ直ぐとクリュウを見詰める。前髪に隠れていた塞がれた左目も、隠す事なくクリュウに向けられる――それは、彼女の素顔だ。
「……クリュウの事が好きだから、クリュウを信じる。ただ、それだけよ」
恥ずかしがる事も、目を背ける事もなく堂々と言い放つサクラ。その度胸と覚悟は並大抵の事ではないが、彼女はその程度の事など造作も無い女の子だ。ただ、恥ずかしいのは隠せなかったのかほんの少しだけ頬が赤らんでいる所は可愛らしい。
「あ、いや、あ、ありがとう……」
クリュウも真正面から女の子に「好き」と言われ、少なからず嬉しくもあり照れているらしく頬を赤らめて視線を彷徨わせる。サクラもそんな彼に声を掛ける勇気はないのか、黙ってしまい、二人の間に

微妙な沈黙が舞い降りた。そんな空気が珍しく耐えられなかったのか、サクラが少し慌てながら「……と、特に深い意味はないわ」と訂正する。
「そ、そうだよね。あははは、びっくりしたぁ」
クリュウもサクラの言葉で少し安心したのか、小さく笑いながらほっとしたように胸を撫で下ろす。そんな彼の反応を見て不服そうに唇を尖らせながらも、自分のここぞという時の度胸のなさに呆れ、落胆するサクラ。同じ部屋の中で全く違う雰囲気になる二人。
「それで、母さんの話をしに来た訳じゃないよね？」
本題に戻すようにクリュウが言ったのは、今回のサクラが部屋に来た核心だ。遠回しの表現ではなく、ハッキリと尋ねるのは彼女を信頼している証だ。その信頼を肌で感じたのか、サクラはこくりとうなずくとその核心に触れる。
「……大した事じゃないの。ただ、私に手伝える事はないかなって」
「手伝える事？　いや、今の所特にはないかな」
「……そう」
クリュウの返答に少し残念そうにサクラは視線を伏せる。そんな彼女を見てクリュウは罪悪感を感じつつも本当に今は何も手伝ってもらいたい事がないので、どうしようもない。思わず「ごめんね」と零れるが、サクラはフルフルと首を横に振る。
「……クリュウが謝る事じゃない。これは私のわがまま――私がクリュウ一人で悩んでいるを見ているのが辛いだけだから」
「サクラ……」
「……でも、手を貸してほしい時はいつでも言って。その時は――私は命懸けでクリュウを助けるから」
煌く隻眼で見詰めながら、サクラは堂々と言う。そんな彼女の威風堂々とした姿にクリュウは思わず見とれてしまった。何というか、本当に彼女は真っ直ぐな子だ。迷う事なく、自分の行くべき道をわかっている。その眩しいくらいの輝きが、時々羨ましくもあり、いつも頼りになる。
クリュウは静かに微笑むと「ありがとう、サクラ」と礼を述べる。だ

が思った通り、サクラは小さく首を横に振る。当然の事を言っただけ、そんな声が彼女から聞こえてきそうだ。
「……じゃあ、私は部屋に戻るわ」
「うん。疲れてるだろうから、ゆっくり休んでね」
「……クリュウもね」
そう言ってサクラは小さく微笑むとテーブルに置いた眼帯を手に取り、慣れた様子でそれを装着する。それでいつもと同じ、眼帯姿の彼女に戻るとクリュウに背を向けて部屋のドアへと向かう。ドアを開けて出て行く瞬間に一瞬だけ振り返って微笑み、手を振るサクラを笑顔で同じように手を振って見送った。
パタンとドアが閉じ、一人残されたクリュウ。彼女が消えたドアを見詰めながら、クリュウは静かに微笑んだ。
「――ありがとう、サクラ」
サクラはきっと、気付いていたのだろう。自分が、これから何かをしようとしている事に。具体的にはわからなくても、自分が悩み、そして何かを実行に移そうとしている事に気付いていた。だからこそ、わざわざこうして部屋に来て、何か自分に手伝える事はないかと言ってきたのだろう。同時に、これは彼女なりの激励だったのかもしれない――いや、絶対そうだ。サクラは、そういうちょっと不器用な子なのだから。
自分は彼女の表情や感情を読むのに人より長けていると自負しているが、同時に彼女は自分のそういう心の動きを誰よりも敏感に感じ取れるのかもしれない。昔から、何か悩んでいた時は真っ先に彼女が気付いていたのだから。
ゆっくりと席を立つと、窓へと近づいた。カギを外し、両開きの窓を開けると、途端に外気が部屋の中へと流れ込む。初夏、とまではいかないがそれでもずいぶんと気温が高い。南国のアルトリアはもう夏へ入ろうとしているのだろう。イージス村が夏に入るのも、もうすぐだ。
夏――それは奇しくも母アメリアが亡くなった季節だ。夏の嵐の中へ消え、帰って来なかった母。それから約十年の時を経て、母の故

郷へと降り立ったクリュウ。それは偶然なのか、それとも……

「――決戦は明日。そこで全てがわかる……だよね、母さん？」

答えは返って来ない。返って来るのは虫の鳴き声、風の音だけ。ただ、頬を一瞬撫でた優しげな温かな風にクリュウは静かに微笑み、うなずく。

――パタンと、窓が閉じられた。

第１７６話　クリュウとイリス　二人を結ぶ奇跡の紋章物語

翌日の夜、クリュウは再び女王の間にいた。その背後には彼に連れられてフィーリア、サクラ、シルフィード、エレナの四人。対面には三獣士の面々とその娘達、アリア、シグマ、フェニスの三人。さらに相変わらず無愛想な顔で立つジェイドとその背後にはエイリーク。そして、そんな彼らに囲まれた玉座に君臨するはアルトリア王政軍国女王、イリス。今日も荘厳な女王としての正装を身に纏い、幼いながらも女王としての存在感を放ちながら玉座に座っている。だが少々大きめな冠を慣れないように被っている様はちょっと愛らしい。

女王の間にいるのはこの十四人だけ。昨日のように居並ぶ軍人も小間使い達もおらず、何より今回は最初からイリスは姿を表している。そのせいか、昨日よりは場の空気が若干ではあるが柔らかいようにも感じる。

「すまんのぉ、政務に手こずってこんな時間になってしもうた」

そう言って申し訳なさそうに謝るイリス。実は早朝の段階でもう一度会えないかと打診したのだが、今日は夜までずっと政務があったので抜ける事ができず、結局こんな時間になってしまったのだ。

「いえ、こうしてお目通りさせていただいているだけでありがたいです」

クリュウの言葉にイリスの隣に立つジェイドが不機嫌そうに鼻を鳴らす。本当は夜は夜で別件の仕事があったのだが、イリスがどうしても夜は空けたいと懇願した為、仕方なくスケジュール調整して空けたのだが、その懇願した理由がこれだった為にあまり快くは思っていないらしい。彼は典型的なアルトリア人らしく、大陸人を毛嫌いにしている。さらに昨晩の出来事がすでにエイリークから報告されているだけあって、クリュウに対しては特に厳しい。

「っていうか、今日も一日城にいたけどよ。お前母親の手がかりをを探さなくていいのかよ？」

「そう、ですわね。今日も図書室に篭っていたそうですけど……」
シグマとアリアが不思議そうに彼を見詰める。実はクリュウ、イリスとの対面が夜になるとわかるとアリアに頼んで城内の図書室でずっと調べ物をしていたのだ。それが彼女達にとっては意外だったのだろう。
「ちょっと調べ物をしてたんだ」
「調べ物って……、城の図書室なんか一般人の情報を探すにはお門違いな蔵書しかないぞ」
街の図書館ならそれこそ新聞の保存や一般の情報が多く保存されているが、城の図書室はそれこそ政治、経済、軍事、歴史書物、王家についての本などばかりな上に機密上閲覧できる量も限られる。そうアリアがアドバイスしたのだが、クリュウはここがいいと言って城の図書室にずっと篭っていた。
「でもおかげで、確証を得る事ができたんだ。ありがとう、アリア」
クリュウにお礼を言われてちょっぴり嬉しいアリア。だが、彼女もシグマと同じ疑念を抱いているので心からは喜べず、何だか微妙な表情を浮かべている。
「それで、その確証というのは……」
「――母さんについての事だよ」
クリュウの答えにその場にいた全員が少なからずざわつく。その反応は予想済みだったのか、クリュウは大して驚く事もなく前を見据え続ける。すると、そんな彼の肩を掴む者がいた。振り返ると、そこには訝しげな表情を浮かべたエレナがいた。
「アメリアさんの事、何かわかったの？」
「うん。一日図書室に篭ってたおかげで、色々と確証を得られたよ」
「そう、案外簡単に見つかったわね。それこそ何週間かかるかわからないと思ってたのに……」
エレナは少しばかり肩透かしを食らっていた。何せ、わざわざこんな遠い国にまで来たのだから、それがたった一日で情報を得られたのだ。昨日まであんなに彼が相談してくれなくて悩んでいたのに、何だかバカバカしくなってしまう。

少し不満げに唇を尖らせるエレナ。そんな彼女の肩を優しく叩きながら苦笑するのはシルフィードだ。
「まぁ、気持ちはわかるが今は陛下の御前だ。文句は後にしよう」
シルフィードの言葉に渋々という感じでエレナは引き下がる。それを見て再び前を向く彼の背中を、同じように少し不満げに見詰めるフィーリアと、何を考えているか悟らせない無表情を貫いているサクラ。そんな彼女達を背に、クリュウは一人イリスと対峙する。
「して、何か手がかりを得たらしいが、それはお主が求めていた物に相当するのか？」
「はい。むしろマカライト鉱石を求めてたのにエルトライト鉱石を手に入れたくらいです」
「ほぉ、それは重畳。わざわざ図書室の入室許可を出した甲斐があったものじゃ」
そう言って喜ぶイリス。何事においてもこの国での最高責任者は彼女だ。アリアの入室申請が難なく受理されたのは、どうやら彼女が裏から手を回してくれていたかららしい。予想していたとはいえ、クリュウは改めて彼女に対して感謝の気持ちでいっぱいになった。
「ありがとうございます、陛下」
「うぬ。礼には及ばんよ」
イリスは本当に清々しいくらいに良い人だった。クリュウはそんな彼女の姿を見て小さく微笑むと顔を伏せ目を閉じた。そんな彼の様子を見て、周りにいた面々は訝しげに彼を見詰める。
「クリュウ様……？」
そのままの状態で一度大きく深呼吸し、覚悟を決める。顔を上げ、再び瞳を開いた時には、それまでの彼とは明らかに雰囲気が違っていた。柔らかく、優しげな印象だった彼が突然真剣な表情になって、何かを決意した瞳で前を見据えている。その変化に、この場にいる全員が一人残らず困惑し、驚く。
「な、何だクリュウの奴。何か雰囲気が変わったんじゃねぇか？」
「えぇ。あれって……」
「何だか、ルフィールを守る時に似ている――クリュウの本気の顔で

すわね」
　アリア達もクリュウの様子が変わった事に気づいてざわついている。それは彼の背後にいる四人も同じだ。ただ一人、サクラだけはジッと彼の背中を見詰め続けている。
「クリュウ、どうしたのじゃ……？」
「――陛下、僕はあなたに一つウソをつきました。申し訳ありません」
「な、何じゃと？」
　クリュウの突然の爆弾発言にイリスは目を丸くして驚く。それは他の面々も同じだ。一般人が、一国の国家君主に向かってウソをついた。しかもそれを本人の前で堂々と言い張るのだから、常識外れにも程がある。
「貴様、偽証罪で牢にブチ込まれたいのか？」
　動揺するイリスの前に立ってクリュウを威嚇するのは総軍師のジェイド。厳しい瞳で眼下にいるクリュウを睨みつけるが、クリュウはその視線を避ける事なく受ける。
「平民の、それも汚れた血の大陸人の分際で……」
「ジェイド。まだあなたが出るべきタイミングではありませんよ」
　アルカの声にジェイドはフンと鼻を鳴らし、不満を残しながらもイリスの後ろへと下がる。アルフとオメガは事の成り行きを静観する事にしたらしく、今は黙っている。その娘達はまだ動揺しているが、それ以上に動揺しているのはイリスであった。
「お主……妾にウソをついたと申すか？」
「申し訳ありません……」
　愕然とした表情のまま、震える声で尋ねるイリスの声にクリュウは顔を罪悪感に染めながら頭を下げた。彼にとって人を騙すというのは耐え難い苦痛だ。それをしてしまった。しかも相手は自分を信頼してくれていた小さな女の子だ。その苦しみは、並大抵のものではない。だが、本当にショックを受けているのはイリスだという事もわかっているから、クリュウは黙って頭を下げる他はなかった。
　しばしの沈黙の後、ようやく動揺を振り払ったイリスがゆっくりと口を開いた。

「お主がついたウソとやらは、どのようなものじゃ？　妾を前に懺悔したのじゃから、説明できるものであろう？」
　それまでの優しげな声から一転して、相手を威嚇するような厳しい声色に変わっていた。自分への信頼が失われた声に胸が苦しくなるが、自業自得。クリュウはその苦しみに耐えながらゆっくりと口を開いた。
「クリュウ・フランチェスカ。僕は陛下にそう名乗りましたよね？」
「そうじゃが。お主のウソと言うのは、偽名を名乗っておったという事か？」
「はい」
　即答するクリュウの返事に、イリスの表情が少しだけ柔らかくなった。どんなウソをついたかと思えば、偽名だったというだけ。確かにウソだが、別段大きなウソというものでもない。騙されていた、そんな気持ちが彼女の中で少し薄れたのだ。
「偽名を名乗っておった。なぜ偽名を名乗る必要があった」
「昨日の段階では、そうしなければいけない理由があったんです」
「……という事は、今は本名を隠す理由はないと――では、お主の真の名を問おう」
　真っ直ぐとクリュウを見据えながら名を尋ねるイリス。その表情は少しだけ柔らかくなったとはいえそれでも尚厳しいままだ。そんな彼女の視線から逃げる事なく、クリュウは対峙すると――静かに本名を名乗った。
「僕の本当の名前は――クリュウ・ルナリーフです」
　何気ない、ただの名乗り。それで全てが終わるはずだった――だが、
「な、何じゃと……ッ？」
　イリスは、明らかな動揺を見せた。それはイリスだけではない。背後に控えるジェイド、そしてアルカも同じように驚愕に満ちた表情を浮かべていた。そんな三人の反応を見て他の面々は訝しげに首を傾げる。
「どうしたんだ坊主。何をそんな幽霊でも見ているような目をしてや

がんだ」
「アルカ？　どうしたんだ？」
　オメガとアルフの問いかけも聞こえていないのか、ジェイドとアルカは信じられないものを見るような目でクリュウを見詰めたまま固まってしまっている。そんな三人の反応を見て、クリュウは一気に攻勢に出た。
「僕の父の名はエッジ・ルナリーフと言います。訓練学校時代に、一度交換留学という形でこのアルトリアへ来た事があるはずです」
「交換留学？　あぁ、シェレス陛下の代の時にあったあれか。俺がまだ士官候補生だった頃の話だな」
「そういえばそんな事があったな。でもロレーヌ陛下に代わった際の鎖国政策で中止になったと聞いているが」
　オメガとアルフが互いに話すのをその娘達が興味深げに聞いている。初耳の者もいれば、詳しい内容を知らない者もいる。そんな彼女達にとって二人の話は貴重なものだ。
「だがよ、それがどうして本名を隠す事になるんだ？」
「さぁ？　アリア、どういう事かわかるかしら――アリア？」
　ただ一人、アリアだけはこの短いやり取りの間に全てを理解していた。母親と同じように驚愕に満ちた瞳で見詰める先には、恐れる事なく堂々と立つクリュウの姿。その横顔が一瞬、イリスと重なる。
「クリュウ……もしかしてあなた……ッ!?」
　アリアの震える声を耳にした瞬間、クリュウは一つうなずく。そして、驚愕のあまり固まってしまっているイリスを一瞥し、そっと腕を胸元へ突っ込む。そしてそこに隠された母の形見である、王冠を被った金火竜に騎士が乗って天を翔ける姿を模した金色のペンダント――それは、このアルトリア王政軍国において失われた金火竜の王紋そのもの。
「ま、まさかお主は……ッ」
　掲げられたペンダントと彼の顔を交互に見ながら、体と声を震わせるイリス。その目は信じられないものを見ているかのように大きく見開かれる。そんな彼女の問い掛けにクリュウはこくりとうなずく

と、静かにとどめの一撃を放った。
「僕の母の名前はアメリア・ルナリーフ。旧姓は――アメリア・アルトリア・フランチェスカ」
「衛兵ぇッ！」
突如響いた怒鳴り声に驚いて音源の方へ目をやるとこちらを威嚇するように睨みつけながらイリスを守るように立つジェイドの姿。遅れてけたたましい音と共に背後のドアが蹴り開けられる。反射的に振り返ると、どこに控えていたのか十数人の兵士達が現れた。
「この者達を捕縛せよッ！」
「な……ッ!?」
驚くクリュウがジェイドの方へ振り返ったと同時に兵士達が一斉にクリュウ達へ襲い掛かる。だが、それよりも早く動く者がいた。得意の突貫で男達の懐へ潜り込むと、走って来る勢いを利用して一本背負い。難なく兵士の一人を投げ飛ばした挙句、背後から迫った兵士の股間を的確に蹴り抜き、よろめく兵士の襟元を掴んで別方向から迫る兵士二名の方へ投げ飛ばし、兵士三人を撃破。
あっという間に兵士四人を返り討ちにしたのは迅速の戦娘――サクラ。
サクラは出端を挫かれて遠巻きに包囲網を敷く兵士達を睨みながら意識を背後、司令官たるジェイドの方へ向ける。
「……ずいぶん乱暴な歓迎ね」
「……ッ!? 何をしているかッ！ 小娘一人に臆するなッ！」
「――生憎、私達はただの小娘ではないのでな」
「――女の子相手に寄って集って、ずいぶんと情けないご身分じゃない」
そう言いながらサクラの横に並び立つシルフィードとエレナ。シルフィードは胸元のスカーフを解きながら、エレナは握りしめた拳をゴキゴキと鳴らしながら。無双の姫三人が立ち上がった四人を含めた十数人の兵士達に向き合う。一行に攻めに転じない兵士達を見て苛立ちが募ったのか、ジェイドが激昂する。
「えぇいッ！ 付近を固めている兵士全員呼び戻せッ！」

「どういう事ですかッ!?　いきなりこんな乱暴な事を……ッ！」
　フィーリアが泣きそうな声で叫びながらジェイドに駆け寄ろうとする。だがそんな彼女の前に立ち塞がる者がいた――エイリークだ。
「長官に近づく者は、私が斬り伏せる」
「そんな……ッ！」
　腰に下げた剣の柄に手をやるエイリークを見てフィーリアは愕然としながら半歩引く。動揺する彼女の肩をそっと叩いて前に出たのはクリュウだ。
「クリュウ様……」
「予想していたとはいえ、ちょっとやり過ぎなんじゃないですか？」
「……貴様、何が狙いだ」
　激昂するジェイドの刃物のような鋭い視線を前にクリュウは真剣な表情を崩さない。フィーリアはそんな彼の背後に隠れてジェイドの視線から逃げる。それ程までにジェイドの視線は恐ろしいが、クリュウは一歩も引かなかった。
「何が狙い？　言ったはずです。僕は母の事を知りたいだけです」
「……世迷い言をッ！　貴様、くだらん妄言で我が王政府を潰そうという気かッ!?」
「だから、そんな事考えてないって言ってるでしょッ！」
「黙れッ！」
「――黙れジェイドッ！」
　怒鳴るジェイドを怒鳴りつけたのはイリスだった。驚いて振り返る彼の手を掴むと、無理やり下がらせる。少女の腕力相手だ。男一人をどうこうできるものではない。だが驚きのあまりジェイドは体に力を入れる事ができず、簡単に後ろへ追いやられた。
　目の前にまで近づいているクリュウを前にして、イリスはジッを彼を見詰める。その瞳は驚いているとも困惑しているとも敵視しているとも、何の感情も窺わせないものだった。だからこそ、クリュウも逃げる事なくそんな彼女の瞳を見詰め返す。
「……お主のペンダント、よく見せておくれ」
　クリュウはうなずくと、ペンダントを首から取り払って彼女へ渡

す。イリスはそれを丁寧に受け取ると、ジッとそのペンダントを見詰める。そして、そっと首元から自身の持つ銀火竜のペンダントを取り出すと、横に並べて見比べる――素人目に見ても、それが同じ職人が作った姉妹作だという事がわかる。
「……確かに、デザインを見る限りでは妾の銀火竜の紋章と同系統の紋章じゃな」
「陛下ッ！　このような戯言に耳を傾けてはなりませんッ！」
「ジェイド、少しお主は黙っておれ」
「陛下ッ！」
「――妾に逆らうと申すかジェイドよ」
　幼い少女としてではなく、一国の長たる女王としての問い掛けにジェイドは黙るしかなかった。何か言いたそうな表情のまま下がり、隣に立つエイリークが不安そうに彼を見詰める。
「……クリュウ。少しお主と二人だけで話したい。ついて参れ」
「わかりました」
　立ち上がったイリスはクリュウを連れて歩き出す。それを見て慌てて追い掛けようとするフィーリアだったが、クリュウはそんな彼女に振り返ると小さく首を横に振る。ついて来ないで、そう瞳が言っていた。
「クリュウ様……」
　フィーリアは歩みを止めて去って行くクリュウの背中を見詰める。そんな彼女の不安げな瞳にクリュウは振り返ると大丈夫だよと言いたげに微笑んだ。そんな彼の笑顔を見て、フィーリアも安心したようにこくりとうなずく。
　無言で見送るフィーリア達の方へ一度振り返って微笑むと、クリュウはイリスと共に女王の間を出て行った。
「……さて、ヴィクトリア大公。話せる範囲であなたが知っている事を話してもらいたいのですが」
　二人が消えたドアから振り返り、開口一番に言うシルフィード。その視線の先ではアルカが先程から目を瞑って沈黙を貫いている。その横ではシルフィードと同じような目で見詰めるアリアも。

「お母様、どういう事かお教え願えますか？」
「……王家の恥を晒すけど、仕方ないわね」
「ヴィクトリア議長ッ!?」
「――ジェイド。こうなってしまえば、いつまでも隠し通せません。全てを話すしかないわ」
「し、しかし……ッ！」
「俺達にも詳しく教えてもらおうか。武官と一介の文官には、そういった機密事項はなかなか伝わって来ないんでな。俺達だけ仲間外れってのは気に入らねぇ。なぁアルフ」
「アルカ。差し支えない程度でいいから、教えてもらえるか？」
事の真相を一切知らないのは何もシルフィード達だけではない。武官のオメガも文官のアルフも王家に関わる機密事項など知る訳もない。三獣士の中で知っているのは王家に最も近しい血族であり、イリス政権の左腕とも呼ばれる彼女だけ。
二人の問い掛けにアルカはゆっくりと厳かにうなずいた。それを見てジェイドも説得はできないと悟ったのだろう。それ以上抗議する事はなく、ただ悔しげに顔を歪めながらイリスとクリュウが去った方向を見詰める。そんな彼の横顔をエイリークが心配そうに見詰めていた。
オメガやアルフだけではなく、その娘達、そしてシルフィード達も目を閉じて沈黙しているアルカを固唾を飲んで見詰める。そんな彼らの視線を一身に受けながらアルカはゆっくりと瞳を開けて話し始める――二五年前のあの事件を。
無言で歩くイリスの後ろを、同じようにクリュウが無言で続く。お互い特に声を掛け合う事なく黙って広い廊下を歩き続ける。前を歩くイリスの背中に何度声を掛けようかと思ったが、結局掛けられずにいた。
そうこうしているうちに歩みは進み、その途中何人もの衛兵とすれ違う。それだけで自分が次第に警備の厳しい場所へと連れられている事がわかる。若干の不安や恐怖はあるが、相手はイリスだ。彼女を信じて、今はただ彼女の背中に続くしかない。

そして、女王の間を出て十分程が経過した頃、長い廊下や階段の先に到達したのは一つの扉の前だった。女王の間と同じようにユクモの堅木を用いてはいるが、こちらは普通の大きさ。だがその装飾はまた見事。扉に絡まるようにツタが伸び、花がが美しく咲き誇る金色の鉄細工。それが純金でできている事は、何となくだがわかった。
「ここは……」
「妾の部屋じゃ」
そう短く答えると、イリスはドレスに隠されているポケットから鍵を取り出し、ロックを解除する。ガチャンという小さな音と共に解錠されると、縦に備え付けられたドアハンドルを持って扉を開いて中へと入る。そんな彼女の後ろ姿をぼーっと外から見ていたクリュウに、イリスが振り返る。
「早う入れ」
「え、でも……」
「家主が入れと言うておるんじゃ。それとも何か？　そこに立っていて衛兵に不審者として拘束される方が良いのか？」
「……お、お邪魔します」
クリュウはどこか緊張しながらイリスに招かれて彼女の部屋へと入る。中に入ると、やはりと言おうか中は実に豪勢な作りだった。まず入口が高台に位置していて、そこから緩やかな曲線を描く階段を降りた先にリビングが広がっている。そのリビングも普通のサイズの五倍近くはあるだろう。そのリビングの真ん中にはテーブルとソファが備えられ、部屋の壁面全体にはところ狭しと本棚が並んでいて、収められている冊数は実に千冊を優に超えるだろう。
天井には女王の間にあったシャンデリアをそのまま小型化したような豪勢なものが光り輝き、部屋を照らす。部屋の奥には暖炉もあるが、元々常春の国。あまり使われる事がないのかきれいに掃除されたままだ。
「何をしておるのじゃ。さっさとこっちへ来て座らぬか」
「あ、はい」
クリュウは慌ててドアを閉じて部屋の中に本格的に踏み入る。階

段を降りていくと、それを見てイリスは羽織っていたマントを服掛けに下げ、被っていた王冠を置いて一人隣の部屋へと消える。ソファの前に立ったクリュウはとりあえず手前のソファに腰掛けた。そこで改めて部屋を見回していると、隣の部屋からイリスがひょっこりと顔を出した。
「紅茶で良いか？」
「あ、はい。いいですけど、大丈夫ですか？」
「何がじゃ？」
「いえ、何かお手伝いした方がよろしいのではないかと……」
「構わん。この部屋ではお主は客人じゃ。そこで休んでおれ。これくらい一人でできる」
「はぁ……」
そう言って再び部屋の奥へ消える彼女を見届け、クリュウは言われた通りに黙ってソファに腰掛けて待つ。だが気になるのかチラチラと彼女が消えた方を見てしまう。きっと彼の頭の中ではイリスが一人でお茶を淹れられるのかという心配があるのだろう。だが彼女が来るなと言っているのだから行く訳にもいかない。実に彼らしい葛藤だ。
落ち着きなく部屋の中を見回していると、ある物に目が留まった。
「あれは……」
それはちょうど入口のドアの真下。階段の横に飾られた一枚の肖像画。純白の荘厳な正装を身に纏い、大きな青い宝石を上にはめ込んだ杖の天辺に両手を添えるようにして凛々しく立つ女性の肖像画だ。イリスのような長い銀髪を優雅に腰元まで流し、周りを寄せ付けないような意志の強い鋭い碧眼。美しい顔立ちは本当に人形のように完成された美しさ。王冠を被って立つその姿はまさに女王。
そして何より、その顔立ちにクリュウは見覚えがあった――否、似ているのだ。
凛々しくて厳しい顔つきをしているが、その根本の顔立ちはそっくりだ。瞳をもっと穏やかに曲線を描かせ、口も真一文字ではなく無邪気にカーブを描かせれば、いつも無邪気に笑っていたあの人そっくり

だ。
「母さん……？」
「――そうじゃ。その絵の人は、妾の母君。ロレーヌ・アルトリア・ティターニアじゃ」
　驚いて振り返ると、そこにはティーセットを携えたイリスがちょこんと立っていた。手にしたティートレイにはティーカップと茶器、それにクッキーの盛られた皿が置かれており、茶器の注ぎ口からは微かに湯気が揺らめいているのが見える。
「この人が、ロレーヌ陛下？」
「そうじゃ。一年程前に崩御した、先代女王。妾の母、そしてお主にとっては叔母になる人じゃな」
「叔母さん……」
「……まぁ、ゆっくり茶でも飲みながら語り合おうではないか。実は妾もまだ状況を理解できてなくてな、正直混乱しておるのじゃよ」
　そう言ってイリスは苦笑しながらクリュウが座っていたのとは反対側のソファに腰掛けた。手でクリュウに対面に座るように促し、彼が席に着くのを待って茶器からカップへ紅茶を移す。その間は何もしゃべらず、お互いに無言だ。
　クリュウの前に置かれたティーカップがカチャリと音を立てて皿の上で踊る。
「あ、ありがとうございます」
「――クリュウ。いつまで敬語を使っておるつもりじゃ？」
「え……」
　変な緊張のせいか妙に喉が乾いていたので早速飲もうと手を伸ばした彼に向かって、イリスはどこか不機嫌そうにそう言った。驚きのあまり間抜けな声を上げて彼女の方を見ると、声と同じように彼女の表情もどこか不満そうだ。
「あの……」
「二人きりの時は敬語はなしじゃ。昨夜のように」
「いや、しかし……」
「お主は妾の従兄弟なのだろう？　なら、気にせず普通に話せ。お主

に敬語で接せられると腹が立つし――何じゃか悲しいのじゃ」
「わ、わかり――わかったよ」
「うぬ」
　クリュウの敬語が抜けるとイリスは笑みを浮かべて満足そうにうなずいた。それを見てクリュウは一瞬呆けてしまったが、彼もまた安心したように微笑む。正直、彼自身もイリス相手に敬語を使うのに違和感を感じていただけに、彼女の申し出は助かった。
「あの、イリス。その、何て言うか……」
「ちぃと待つのじゃ。まずは一服しようではないか。話はその後じゃ」
「そ、そう？　そうだね。せっかくイリスが淹れてくれたんだから」
「うぬ？　ま、まぁそうじゃな」
　クリュウはとりあえずまずは紅茶本来の味を楽しむように一口飲んだ後、角砂糖を一つ手に取って紅茶に入れて落ち着く。喉が一気に潤うと共に優しげな甘さで少し緊張が解ける。自分でも思っていた以上に実は緊張していたらしい。
　しばし二人して無言で紅茶で喉を潤す。クリュウはチラチラとイリスの方を見ては話し出すタイミングを探っていた。そんな彼の様子にとっくに気づいているイリスはカチャリを音を立ててカップをテーブルに戻すと、自ら口火を切った。
「さて、一体何から話せば良いかのぉ……」
「そ、そうだね」
「何を他人行儀な事を言っておる。お主も当事者なのじゃぞ？」
　イリスに怒られ、クリュウは「ご、ごめん」と小声で謝る。そんな彼を見てイリスは「しっかりせい」と苦笑しながら言う。彼女の方が年下なのに、これではどっちが年上なのかわからない。
「まったく、お主は頼りにならないのぉ」
「面と向かって言われる事はそうないけど、自覚はしてるつもり」
「……不憫じゃな」
「お願いだから、哀れまないで」
　ころころと笑いながらがっくりと肩を落とす彼の反応を楽しむイ

リス。その笑顔はかわいくもどこかイタズラっぽく、よく見ればその笑顔はどこかイタズラ好きだったアメリアのそれと似ているような気がした。そして何より、彼自身は自覚はないがその屈託の無い笑顔もまたクリュウによく似ている。

「――さてクリュウ。そろそろ本題に入ろうと思うのじゃが、どうじゃ？」

紅茶を飲んでのどを十分潤すと、イリスはそう切り出した。その表情は先程までの子供っぽい笑顔ではなく、アルトリアの女王――イリス・アルトリア・フランチェスカとしての真剣な表情。その年下のはずなのに、気を抜くと呑み込まれてしまいそうな迫力にクリュウはゴクリと唾を飲み、うなずく。

「ひとまず、お主がアメリア君（ぎみ）の子息だという事は事実か？まずはその大前提を確認しておきたいのじゃが」

イリスが口にしたまず最初の疑問は、まさにこの問題の根本だ。クリュウが本当に二五年前に国を飛び出したアメリア・アルトリア・フランチェスカの子供なのか。疑うというよりは確認しておきたいというような問い掛け。事前に彼が持っていたペンダントを見ているからこその、比較的穏やかな問い掛けだ。

「正直、証拠を見せろと言われたらさっき見せたペンダントくらいしかないのが現状だよ。物証がないからこそ、状況証拠を揃えるしかなかったんだけど」

「状況証拠。ではその証拠とやらと申してみい」

表情を変える事なく、淡々と問いかけるイリス。彼女としてはまだ信じ切れるような事ではないし、もしも事実だとすればこの問題は是が非でも公（おおやけ）にはできないものだ。女王として、この問題をどう対処するのか。彼女にはその責任と義務がある。だからこそ、楽観的な表情を見せられないのだ。

クリュウも何となくだが彼女の心中を悟っていた。ジェイドが言っていた通り、自分の存在は決してこの国にとって良いものではない事くらい自覚している。でも、だからと言って黙っている事など彼にはできなかった。

「まず、僕の母は父さんと結婚する前はアメリア・フランチェスカと名乗っていた。そして、先のロレーヌ女王の姉君の名前もまたアメリアだった。これはさっき図書室で確認した事だよ」
「確かに、妾の伯母上はアメリア・アルトリア・フランチェスカじゃ。じゃが、あの忘れたい過去の事を記した書物は一般図書とは区別して厳重に機密区画に収めていたはずじゃが」
「そこはまぁ、その、人には言えないような行いで打破したというか……」
「……今、妾はお主を重要機密漏洩罪で処罰する事もできるのじゃが。まぁ良い、聞かなかった事にする」
「あ、ありがと」
「それで？　状況証拠とはそれだけか？」
イリスの問いかけに、クリュウは首を横に振るととりあえず自分が集めた情報をできる限り整理して彼女に話した。
父、エッジ・ルナリーフと母アメリア・フランチェスカ。
エルディインが言っていた、アメリアが元はアルトリア人だったという事。
エッジはエルディインやフリードと共に今のクリュウと同じくらいの頃にハンターズギルドの命令で留学経験があるという事と、アメリアとはそこで出会ったという事。
母としてのアメリアと、聞いたり読んだりしたアメリア王女との性格や行動パターンがよく似ている事。特に底抜けて明るくて、少々天然が入っている所など。
そして、時々夜に見かけたどこか寂しそうな母の横顔と、その時に口にしていた《ロレーヌ》という名前。その人に対していつも謝っていた事。
クリュウはできるだけ自分が集めた情報を並べてみたが、改めて並べてみてもどれも根拠も証拠もない証言や情報ばかり。とてもじゃないが、状況証拠と言うには乏しいものだ。
「だから、正直決め手はやっぱりこのペンダントしかなかったんだよね」

そう言って彼は首に下げた母の形見の金火竜のペンダントを眺める。彼の言う通り、決め手になるのはやはりこれしかなかった。あとは、イリス達が持っている情報とどれだけ一致するかという問題。
「……エッジ・ルナリーフ。確かに、伯母上はその名前の若いハンターと駆け落ちして国を出た。そう、言われておるな」
イリスは特に迷う事なくさらりとそれを口にした。その驚くくらいあっさりとした回答に正直クリュウは肩透かしを食らっていた。何せそれは王家に泥を塗るような情報だ。正直、彼女はこちらの考えを黙殺する事も封じる事もできるし、王家の過去の大失態を隠すにはむしろそれの方が正しいはずだ。
幾分か驚いているクリュウを前にしてイリスはそんな彼の心中を悟ったのか、フッと口元に笑みを零した。
「今更隠しても、隠し通せるものではないからのぉ。それに、お主にウソを言うのは何じゃか気が引けるからのぉ」
「イリス……」
「まぁ、妾は兄弟がいない身。親族と言える連中も皆欲に溺れた連中ばかりじゃから――こうして損得勘定抜きで話せる親族がいるのは、妾にとっても良い事じゃからのぉ」
そう言って、本当に嬉しそうにイリスは笑った。その笑顔の奥にある、血を分けた親族も信用出来ない女王としての苦悩があると思うと、クリュウは少しばかり胸が痛んだ。
権力者というのは、常に周りが欲に塗れた者達で囲まれているものだ。わずか十歳の少女王の周りでもそれは同じ事だ。真に信頼出来る人間はそう多くはない。そういう者達は腹心と呼ばれ、彼女のそれはきっとジェイドや三獣士などがそうなのだろう。
「親類には恵まれなかったが、妾はその分信頼出来る家臣に恵まれておるから何も問題はない。それに、今日から信頼出来る親類もできた事じゃしのぉ」
クリュウを見ながら、幸せそうにイリスは笑う。そんな彼女の前向きな考え方にクリュウもまた微笑んだ。自分にできる事は大した事ではないが、それでも自分の存在一つでイリスの肩の荷が少しでも落

ちるのなら、この国へ来た甲斐があったというものだ。
「でも、総軍師は僕の事かなり嫌っているようだけど」
「奴は大陸人を嫌っておるからのぉ。まぁ、大方の国民は大陸人に対して良い感情は抱いていないのじゃがな」
「そんなに嫌われてるの？」
「無論じゃ。我がアルトリアは大陸人によって一体何度侵略を受け、何千人の兵士が海の戦で命を落とした事か。最後の戦から半世紀程が経ったが、アルトリアの民は大陸諸国から受けた非道な行いを決して許す事はないからのぉ」
「……そっか」
「まぁ、経済の面から考えれば大陸諸国と貿易を円滑に進めた方がプラスなのじゃが。いくら国を豊かにする為とはいえ国民感情を無視できるものではないからのぉ。その見極めが難しいのじゃ」
　イリスは難しいとばかりに腕を組みながら考え込む。彼女の様子を見るに彼女自身は大陸人に対して憎しみや敵意、軽蔑といった感情は伺えない。好意を抱いているとまではいかなくても、経済の面ではアルトリアと大陸諸国は友好的である事が一番と考えているのだろう。一国の長として、国の繁栄を導くには経済の考え方も必要なのだ。
「経済とか、僕にはよくわかんないなぁ」
「まぁ、お主には無縁の学問じゃな」
「だよねぇ」
「――エルバーフェルドの攘夷思想は国の復興及び繁栄の為の原動力じゃが、アルトリアの攘夷思想は単なる国民感情じゃ。目標のない攘夷思想程、厄介で危ういものはないのぉ」
「……僕はそういう発想は嫌いだなぁ。何だか、人の気持ちを利用するのってあまりいい気はしないよ」
「クリュウ。お主は従う側の人間じゃからそう思うのじゃ。人を従える側の人間は、良くも悪くも統率しなければならない。感情とは人を操る中で最も原始的で、最も有効的で、最も扱いづらいものじゃ」
　紅茶を口に飲みながら語るイリスの言葉に、クリュウは微妙な表情

のまま首を傾げた。そんな彼の様子を見てイリスは「まぁ、確かにお主の言う通り他人の感情を利用するというのは道義的には許されんものじゃしな。お主の気持ちもわかる」と苦笑しながら答えた。その笑顔と言葉に奥には道義的には正しくないとわかっていても、王として国を統治する為にその正しくはない事を利用しなければいけない自身の醜さと矮小さがある。
「お主のように人を心から信用できる人間に、妾もなりたかったのぉ」
「大丈夫だよ。イリスならきっと」
「何じゃ。根拠もなしにそのような事を……」
「根拠ならあるさ」
「何じゃ？」
「――イリスはそんな卑怯な子じゃないからさ」
　迷う事なく笑顔でそんな事を言ってのけるクリュウ。そんな彼の言葉と笑顔にイリスは一瞬面食らったようにキョトンとするが、すぐに顔を真っ赤に染めて狼狽しながら「な、何を言うておるんじゃお主は……ッ!?」と声を震わせる。
「え？　思った事を普通に口にしただけだけど」
　一方のクリュウは平然としている。本人の言っている通り、彼はあくまで思った事をそのまま口にしているだけだ。そこに何の計算も世辞も含まれてはいない、飾り立てられていない本当の言葉。だからこそ余計に威力は絶大であり、容赦がない。事実、イリスはそんな事を言われ慣れていないせいか頬を赤らめたまま彼を直視できずに視線を左右に彷徨わせてしまっている。
「どうしたの？」
「お、お主はいつもそんな風に思った事を平然と口にしておるのか？」
「え？　うん、基本そうだね」
「……なるほど。道理でお主の周りには女子が多いのじゃな」
　全てを納得したと言いたげにうなずきながら、イリスは感心半分呆れ半分という具合にため息混じりに言葉を零す。そんな彼女の言葉の意味がわからずに首を傾げているクリュウを見て、さらに大きなため息を一つ。

「そういえば、以前母上から聞いていたな。伯母上は心に思った事を何の躊躇もなく口にするから、いつも問題発言をするのではないかとハラハラしておったと」
「あぁ、うん。確かに躊躇せずに何でも言っちゃう人だったな……」
　まるで他人事のようにクリュウは母の躊躇せずに本心をしゃべってしまうクセに悩まされていた事を思い出す。アメリアはクリュウに輪をかけて本音をしゃべってしまう人だったのだ。カツラを被っている近所のおじさんを見て「クーくん、あの人カツラだね。面白いねッ」と満面の笑顔で言ってのけるのだから、子供ながらクリュウはその対応に奔走していたのだ。
　そのおかげか、クリュウは実に立派に成長した。ただ一点、女子に対する事柄だけは母の遺伝が大きく影響してしまったのだが。
「妾は母上から頑固さを受け継いだと言われておるの。ジェイドからは少し融通を利かせと言われておるが、妾にそんな器用な真似はできんからのぉ」
　苦笑しながらイリスはそう言った。確かに、まだ決して長い時間を一緒にいる訳ではないが、それでも何となく彼女は頑固な感じがしていたクリュウ。そうでもなければ、外部の人間を招き入れるという事を腹心の反対を押し切ってまで強行する判断の説明がつかない。
　頑固者というのは臨機応変に対応できないというイメージがあるが、イリスのように自分の信念を貫く事もまた頑固と言える。だがそれは、決してマイナスではない。
「自分が一番だと思える事を徹底的にやるのが最良だと思うよ？　変な妥協をして後に後悔するのが一番ダメだからね。やってから後悔するよりもやらないで後悔する方が何倍も質が悪い。イリスはイリスのやりたいようにすればいいさ」
　頑固とは、それだけ自分がやりたいと思う強い気持ちがある表れだ。事なかれ主義に比べれば何倍もマシであり、その強い想いはきっとどんな力よりも頼もしいだろう。
　クリュウも妙な所で頑固だったりするからわかる。自分が貫きたい事があれば、それは決して妥協なんてしてはならない――やらない

で後悔するよりもやってから後悔する。それがクリュウの信条だ。
　クリュウの言葉に呆けたように彼を見詰めたまま話を聞いていたイリス。じっくりと味わうように彼の言葉を噛み締めた後、彼女はゆっくりと何度かうなずき、顔を上げた。その表情は実に晴れ晴れとした見ていて清々しいものだった。
「うむ。お主の言う通りじゃクリュウ。やらないで後悔するよりもやってから後悔する方が断然いいに決まっておる。何せ実行して失敗してしまった事は次に必ずや活かせるからのぉ。何もせず、頭の中で自分の都合のいいように解釈されたイメージなど雑巾程にも役に立たぬからのぉ――うぬ、お主は実に良い言葉を妾に教えてくれた。礼を言うぞクリュウ」
「……と、言ってもこれは母さんがよく言ってた事なんだけどね。後悔するならやれる事を全部やり尽くしてからにしろって。やれる時にやらずに年老いた後に後悔するのだけはしたくないってね」
「前向きというか、本当に噂通りの人物のようじゃな。妾の母上とは似ても似つかん性格じゃな」
「そうなの？」
「妾の母上は寡黙な人じゃったよ。滅多に笑う事もなければ表情そのものを変える事なくいつも無愛想。母上を嫌う者からは《冷徹王》とも称され、妾も母上の笑った顔を見たのは数える程しかないのぉ」
「……それはまた、僕の母さんとはずいぶん違うね」
「姉妹なのになぁ」
　お互いの母親を比較すればするほど、本当に姉妹なのかと思ってしまう程に二人はまるで正反対だ。アリアが言っていた通り、アメリアとロレーヌは互いが互いの持たぬ部分を持ち、互いを支え合える姉妹だったのだろう。
　だとすれば、その支え合う役目を放棄して国を飛び出したアメリアはどんなに罪深いのか。
　ロレーヌの政策や評判は国という規模で考えれば優秀な女王だったと言えるだろう。彼女の性格がそのまま表れたかのような効率的で富国強兵に特化した政策だ。だがその反面国民には一方的な重税

を課した為に支持率は低く評判も良くはなかった。
それはおそらく、彼女が影型の人間だったからだろう。表に立たずに裏から国を支える方が彼女には向いていたのだ。だからこそ周囲はアメリアを女王に据えてロレーヌを宰相にする事を望んでいたのだ。国民受けが良くてカリスマ的な指導力を持つアメリアと、裏で実質的な国の運営を行うロレーヌ。この双頭体制が二人での国の統治だったのだろう。
だが実際はアメリアがエッジと駆け落ちした事でその双頭体制は空中分解。結局はリーダーには向かないロレーヌが女王となった。政策や評判を見るに国民や身内からの反発も大きかっただろう。それを全て一身に受けられる程彼女は体が丈夫ではなかったはず。苦しい想いをしながら政を行なっていたとすれば、アメリアは自身の役目を放棄したと言える。
しかし、自分はそんな役目を放棄したからこそエッジとアメリアの間に生まれた子供だ。アメリアの行いを批判すれば自分の存在の否定となるし、そもそも大好きな母親を批判できるような人間では彼はない。
調べれば調べる程に、本当に何も考えずに飛び出したのではないか。クリュウは嫌なはずなのに少しずつだが母親への不信感を募らせてしまっていた。
「……そのように悲しい顔をするでない」
自分でも気づかないうちに表情を翳らせて視線を下げていただろう。気遣うようなイリスの声に現実へと引き戻され、ハッとなって顔を上げると声と同じようにこちらを心配そうに見詰めるイリスと目が合った。というか、ずいぶんと至近距離な事に驚いた。自分と彼女の間にはテーブルを挟んでいたはずだが、見れば彼女はテーブルに両手をついて覗き込むようにしてこちらに顔を近づけていた。
一瞬の沈黙。クリュウが「イリス、顔がちょっと近いよ」と困ったように言うと、イリスも無自覚だったらしく慌てて腰を落とす。さっきまで元気に揺れていた輝く銀髪も、今は心なしか光が鈍いようにも見える。

「す、すまぬ……」
「あ、いや、別にいいんだけど」
「その、クリュウが何やら悲しげな顔をしていたので、つい……」
　恥かしげにほんのりと頬を赤らめ、少し下向きの視線からチラチラとこちらを盗み見ながら言うイリス。その愛らしくも心優しい姿にクリュウは自然と口元を緩める。
「ありがとイリス。僕の事、心配してくれるんだ」
「と、当然じゃ。妾とお主は、従兄弟なのじゃからな」
　なぜそこで威張るのかわからないが、まだ成長未発達の平らな胸を張りながら言うイリスにクリュウは苦笑を浮かべた。だがしかし、それはすぐに先程のような翳りの見える表情へと変わる。
「あのさ、ロレーヌ陛下は母さんの事、恨んでたりとか、してたのかな……」
「何じゃ、突然そんな事を」
　本当に藪から棒にという具合だったのだろう。イリスは不思議そうに首を傾げながら彼の質問の意図を掴めずにいる。そんな彼女の真っ直ぐな視線を直視できず、クリュウは逃げるように少し視線を下げた。
「いや、だって、母さんが国を飛び出したせいですごく苦労したんでしょ？　だったら、やっぱり恨まれてるのかなぁって」
「あぁ、そういう事か……」
　クリュウの質問の意図を理解すると、イリスは紅茶を一口飲んだ。口の中で数回紅茶を転がして味わい、小さなかわいらしい音を立てて喉の奥へと納める。味わう際に閉じていた瞳をゆっくりと開き、彼を見据える。
「さぁな。母上は人前で弱音を吐くような人間ではなかったから、妾にはわからぬ」
「そっか……」
「――まぁ、そういう事は本人に聞いてみるのが一番じゃな」
　空になったカップがカチャリと小さな音を立てて受け皿に置かれるのと同時に、クリュウは彼女が言った意味がわからずに思わず「え

?」と声を零した。
呆然としている彼を前にイリスは静かに立ち上がると、先程掛けたマントを羽織り、再びそのサイズが合っていない王冠を被る。だが先ほどまでと違い、なぜか王冠はしっかりと彼女の頭の上で美しく乗った。さらには衣装棚から一本の杖を取り出した。それはロレーヌの肖像画に描かれていた青い宝石を埋め込んだ杖だ。
振り返り、呆然としている彼の前でカツンッと杖の先端が床を鳴らす。両手を添え、威風堂々と立つ様はまるで母ロレーヌ・アルトリア・ティターニアのように美しくも凛とした――真の女王の出で立ち。
「イリス……？」
「アーク・ロイヤル城へ向かうぞ。飛行船なら半日の距離じゃから、簡単な旅路の支度をしてこい」
「アーク・ロイヤル城？　どうしてそんな所に……」
困惑する彼を前にイリスはニッと健康的な白い歯を見せながらイタズラっぽく笑った。
「――お主には、母上に謁見してもらうのじゃ」

第177話　ロレーヌの真実　二人の想い交差する夜空の軌跡

美しい満月が光り輝く夜の空。星々の煌きが瞬く中を、数隻の飛行船が大地に降り注ぐ星々の煌きを反射しながらゆっくりとした速度で航行していた。そのうちの一隻は全長実に三〇〇メートルを超え、鈍色の船体からは無数の大砲が迫り出している。

王軍艦隊第一戦隊所属、飛行戦艦『ドレッドノート』。王軍艦隊旗艦である『プリンセス・オブ・アルトリア』の姉妹艦であり、プリンセス・オブ・アルトリア級飛行戦艦二番艦。王軍艦隊の主力戦艦の一隻だ。

船体側面や硬式気嚢の側面からは大小様々な無数の大砲が顔を覗かせており、最大片舷で三〇門を超える大砲を一斉掃射できる。他にも対地攻撃用の投下爆弾も無数に搭載しており、この一隻だけで中規模国家なら数日で攻略できるとまで言われる、アルトリア王政軍国の象徴とも謳われる一隻だ。

飛行戦艦『ドレッドノート』を中心に三隻の飛行駆逐艦が護衛する形で航行している。『ドレッドノート』に比べれば小さく感じるが、これでも八〇メートルはある。諸外国では十分大型艦として通じるような船だ。

彼らは首都近辺の夜間偵察艦隊だ。敵対国家がアルステェリアまで来るとは思えないが、それでもこうして毎日首都近辺は王軍艦隊の艦艇が警備の為哨戒している。ただし普通はこういう役目は駆逐艦が担うのだが、今回はここ一ヶ月内燃機関の調子が悪かった『ドレッドノート』の修理が終わったので、そのテスト航海も兼ねている為、滅多に見られない戦艦による哨戒活動が行われているのだ。

戦艦『ドレッドノート』第一艦橋。艦の頭脳とも言うべきここは航海から戦闘に至るまでの全指揮を行う場所。戦艦ともなればここに艦隊司令長官がおり、艦隊全てを指揮する場所にもなる所だ。

戦艦『ドレッドノート』艦長はヘルガー・ウォースパイト少将が任

命されている。同期達が皆艦隊司令官や参謀長、空軍参謀本部や王軍参謀本部などの幹部、空軍大学校の校長など重役に就いている中、一貫して現場での艦長を貫く初老の軍人。戦艦クラスの艦長は通常大佐が任命されるのだが、彼は特例として少将ながら艦長を務めている。それも、王軍艦隊の象徴とも言うべきプリンセス・オブ・アルトリア級飛行戦艦の一隻、飛行戦艦『ドレッドノート』の艦長を。

穏やかな人柄でありながら、時に厳しく兵士達を統率するその様から兵士達の信頼も厚く、皆から王軍艦隊の父親的存在として現場での指揮官を貫いている男だ。

ヘルガーはいつもと変わらぬ順調な航海に満足そうに穏やかな表情を浮かべながら司令官席に腰掛けて優雅に紅茶を嗜んでいた。

「艦長。我が艦隊の後方七時の方向に所属不明艦を発見しました」

そんな彼の優雅なティータイムを妨げたのは兵士からの報告であった。ヘルガーは怪訝そうな表情のままたくわえた白髪混じりのヒゲを撫でる。

「所属不明艦？　軍の輸送艦か、それとも別の哨戒艦隊ではないのか？」

「いえ、今日の飛行航路表にはこの付近を我々以外の艦はいません」

飛行航路表とは、一日にアルトリアを飛行する飛行艦の飛行スケジュールが全て記載されたものだ。アルトリアには一日に何隻もの飛行船が飛んでおり、それらが接触事故などを起こさないように、何らかの事故で不時着したなどの場合にはすぐに救助に迎えるよう、さらには敵対勢力の侵入を迅速に察知する為に設けられたものだ。

兵士の報告にヘルガーはしばし考える。そんな彼を艦橋にいる兵士達が彼の判断を待っていた。

時間にして数秒。戦場において司令官に許される決断の時間はそのわずか数秒だ。

「全艦反転一八〇度。所属不明艦との接触を行う。『エンデバー』へ発光信号。先行して所属不明艦に警戒信号を送れ」

ヘルガーの命令に兵士達が一斉に慌ただしく動く。それを見ながらヘルガーは紅茶を一気に飲み干し、軍帽を深く被った。鍔の奥で輝

く瞳は、まさに軍人の目だ。
「……テティルが軍縮条約に違法して飛行船を建造しているという噂もある。平和に呆けていられる時代は、そろそろ終わりなのかもしれないな」
大陸との最後の戦争を少年兵の頃に経験したヘルガー。その言葉が、不気味に艦橋へと響く。
四隻の艦は先頭を走る駆逐艦『エンデバー』を先頭に順次回頭。謎の飛行船を目指して全艦速力を上げる。缶焚（かまた）きと呼ばれる兵士達も忙しく燃石炭を火に放り込んではボイラーの出力を上げていく。それに比例するように各艦の煙突からはより濃い黒煙が噴き出す。
先頭を走る『エンデバー』が速力を上げて所属不明艦へ接近。発光信号で警戒信号を発した。
『我、第一哨戒隊所属駆逐艦『エンデバー』。貴艦ノ艦名及ビ所属隊名ヲ述ベヨ』
発光信号で何度も問い掛ける。するとその所属不明艦は何の返答もなく、次第に速力を落としてついには停止してしまった。『エンデバー』がすぐに並行するように停止し、遅れて本隊こと『ドレッドノート』も現場に到着した。
突然停止した艦を見て不思議がっていたヘルガーだったが、探哨灯で照らし出された艦を見た途端その表情が驚きに変わった。
「シェフィールド級軽巡だと？　何でそんなものがこんな所を……」
軍人たるもの、末端の兵士まで全てが自国の艦級を暗記している。見ただけで艦名まではさすがにわからなくても、何級かまでは把握できるものだ。
ヘルガーが怪訝そうにしながらも兵士にシェフィールド級軽巡への横付けを命令した。横付けとはその名の通り二隻の艦を密着させ、簡易的な橋などを用いて互いに行き来できるようにする事だ。海軍の軍艦ならそうでもないが、王軍艦隊の軍艦は空を飛んでいるので、新米兵士は眼下を見ては動けなくなってしまう事は少なくない。これに慣れると、空軍軍人として認められると言っても過言ではない。

ヘルガーは上着を来て外へ出る。向かうは横付けされた橋の所だ。
ゆっくりとした歩みで進むと、すでにシェフィールド級からこちらに乗り渡って来た者達がいた。だがそれを見て兵士達は困惑している様子。ヘルガーを見つけると助けを呼ぶように「艦長ッ！」と叫ぶ。
「何だ。騒々しい連中だな」
「そ、それが……」
「狼狽えるな愚か者が。シェフィールド級の責任者は誰だ？」
「――妾じゃ」
情けない兵士を叱責しながらこちらに渡って来た相手を見定めていたヘルガーだったが、その先頭に立つ者の姿と声に鍔の奥の目を大きく見開いた。
「へ、陛下ッ!?」
「うぬ。夜間の哨戒活動お疲れ様じゃ、艦長殿よ」
ニッコリと笑って彼らを激励したのは、彼ら軍人が忠誠を誓うべき対象。軍の最高司令官であり、この国の最高責任者――アルトリア王政軍国女王、イリス・アルトリア・フランチェスカだ。
「陛下から預かりし大切な戦艦『ドレッドノート』の艦長を務めさせていただいております、ヘルガー・ウォースパイト少将でありますッ」
先程までの厳しい司令官という顔から一転して、今度は二等兵顔負けなくらいの見事な兵魂で最上敬礼をしてみせるヘルガー。周りの兵士達も慌てて敬礼を行う。銃剣を持っている兵士達は捧げ銃の構えだ。
兵士達の出迎えに満足そうにうなずくと、イリスは改めて艦長のヘルガーに向き合う。
「お主の噂は聞いておるぞウォースパイト艦長。母上の代からこの王軍艦隊の創設に尽力してくれたばかりか、現場で兵士の育成にも力を入れていると。王軍艦隊の練度が高いのは、お主のおかげと言っても過言ではないな」
「そのようなお褒めのお言葉、ありがたき幸せであります陛下」
「妾はこれからちょいとお忍びで出かける所なのじゃ。急な事で貴艦への連絡が遅れてしまったせいで余計な手間を掛けさせたのぉ。すま

なかった」
「いえッ、こちらこそ陛下の貴重なお時間を削いでしまい誠に申し訳ありませんでしたッ」
「良い。ちゃんと警備の仕事をがんばっている証拠じゃ。それがわかっただけでも僥倖（ぎょうこう）。引き続き付近の警備を頼むぞ――それと、もう夏に差し掛かるとはいえまだ肌寒い。風邪を引かぬよう気をつけるのじゃよ」
「ハッ、ありがたいお言葉で感謝しますッ。陛下もお気をつけて」
ヘルガーや兵士達に笑顔で激励すると、イリスは護衛の為に引き連れて来た兵士達と共に自艦へと戻った。それを見て両艦から橋が取り外され、シェフィールド級軽巡の機関が再び息を吹き返す。勢い良く黒煙を煙突から噴かせて『ドレッドノート』から離れると、巡航速度を維持したまま四隻から離れていく。
闇夜に消え去る軽巡を見詰めながら敬礼するヘルガー。その姿が闇の中へと消えるのを見てゆっくりと上げていた手を下ろす。
「……全員持ち場に戻れ。それと、誰一人風邪を引くなよ。我らの陛下のお心遣いを無駄にしない為にもな」
軍帽を深く被り直し、ヘルガーは副官と共に艦橋へと戻る。
十分後、『ドレッドノート』は護衛艦三隻を引き連れて本来の軌道へと戻る。予定コースを外れた為に申請していた飛行航路時間に遅れが生じてしまった。通過地点にある基地から何事かを尋ねる発光信号が送られて来た。
ヘルガーは通信兵に対してこう返すように指示をした。
『時期尚早ノ夏風回避ノ為減速航行。予定時間超過スルモ異常ナシ』
本来なら一国の長が無断で軍艦を用いて航行中という異常事態は艦隊司令部へ当然報告が必要な事だが、ヘルガーはイリスの言った『お忍び』という部分を厳守すべく、報告を偽った。本来なら懲戒免職ものだが、この事を知っているのはこの四隻の兵士達だけ。そして――誰もヘルガーの虚偽報告を非難する事はなかった。
後方で待機したままこちらを見送る『ドレッドノート』率いる四隻の艦隊を甲板の上から見詰めるイリス。その隣にまるで副官のよう

に佇むクリュウの姿が。
「あれって……」
「うぬ。あれが我がアルトリア王軍艦隊が誇る最新鋭主力戦艦、プリンセス・オブ・アルトリア級戦艦二番艦、『ドレッドノート』じゃ。機関の調子が悪くてドック入りしてると聞いておったが、修理が完了していたようじゃな」
「この艦も大きくて驚いたけど、比べ物にならないくらい大きいんだね」
「我がアルトリアの造船技術の粋が結集した艦じゃからのぉ」
　まるで自分の事のように自慢気に話すイリスを見てクリュウは思わず微笑んだ。何というか、こういう子供らしい所を見ていると和んでしまう。女王としてではなく、女の子としての一面を隠さずに見せれくれる彼女の姿が嬉しいのだ。
「それにしても、またこの艦に乗るなんて」
「まぁ、ある意味当然かのぉ。この『シェフィールド』は妾の直轄艦である御召艦じゃからのぉ。妾のわがままが通じる艦は逆に言えばこれしかないのじゃ」
　そう言いながらイリスは振り返って自分が乗る軽巡洋艦『シェフィールド』を見詰める。クリュウ達にとってはこのアルトリアへ来る際に乗った艦であり、懐かしいと思える程には時間は経っていない。
「ほれ、何をしておる。艦内へ戻るぞ」
「う、うん」
「それと、今のうちに休んでおけ。アーク・ロイヤル城へは数時間の道のりじゃ。母上に会う時にうつらうつらされても困るからのぉ」
「そ、そうだね。うん、じゃあ、ちょっと休もうかな」
「うぬ」
　クリュウの返答に満足そうにうなずくと、イリスはゆっくりと艦内へと戻る。そんな彼女のご機嫌な背中を一瞥し、クリュウは静かに星空を見上げた。南国だけあって、イージス村とはまた違った星々の煌きがそこにある。そのどこかに、もしかしたらアメリアの星があるか

もしれない。そんな子供だましな事を考えながら、クリュウは困惑げに言葉を零す。
「ロレーヌさんが、生きていたなんて……」
「先代女王にして妾の母、ロレーヌ・アルトリア・ティターニアは生きておるのじゃ」
数時間前、イリスはジェイドに黙って『シェフィールド』を用意させると、クリュウを連れて勝手に城を飛び出してしまった。さすがにまずいのではと焦るクリュウを前にしてもイリスは「なぁに、これくらいのスリルがなくてはのぉ」と、むしろ楽しんでいるような様子だった。
そして、彼を艦内にある御召室へと連れて行き、席に腰掛けた所でイリスは突然そう切り出した。
用意された紅茶を飲み始めたばかりのクリュウはその突然の爆弾発言に激しく咳き込んだ。
「大丈夫かクリュウ？」
「ゲホゴホッ、だ、大丈夫。えっと、話を続けて？」
咳き込む彼を心配しつつも、イリスは紅茶を飲みながら彼が促す通りに話を進める。
「もう一年以上の前の事じゃ。病弱な母上は女王としての激務を続けた結果、ついに国を統治する事もできない程に衰弱してしまったのじゃ。そこで母上の王位を妾へと引き継ぎ、母上は隠居する事になったのじゃが――そこで母上が待ったをかけた」
「どうして？　女王を続けられないから娘に王位を引き継がせる事って普通じゃないの？」
「普通の事じゃ。じゃが、母上はあまりにも強引な政をし過ぎた為に民の信頼を失っておった。妾が王位を引き継いでも、裏から操って結局は傀儡女王とイメージが国民に植えつけられる事を心配したのじゃ」
ロレーヌ政権は重税政策を課して税金を集め、福祉や公共サービスを次々に廃止してそこで捻出した資金の全てを軍拡化の為の国防費に当てていた。ロレーヌが政権を取ってから国防費は五倍に膨れ上

がったと言われている。
　そんな国民の反対を押し切って軍拡化を進めた結果、アルトリアは西竜洋諸国全てが束になっても勝てないような巨大軍事国家へと変貌した。だが同時に基礎科学力もまた飛躍的に向上し、工業大国になったのも事実だ。
「母上が隠居して妾が王位を引き継いでも、結局は母上の操り人形に過ぎない。そう国民が思い込んでおったのじゃよ。実際は、母上は本当に国政から手を引くつもりじゃった」
「それが、何で死んだってウソをつく事になるの？」
「わからんか？　母上が死んだ事で妾が王位を引き継げば、《ロレーヌ女王の操り人形のイリス女王》という根底が崩れ、国民は《アルトリアの新女王、イリス》として妾を見てくれる。つまり、国民は新政権に対して希望を抱く事ができるのじゃ」
　つまり、ロレーヌの操り人形としてのイメージはロレーヌが生きているからこそ成り立つ幻想だ。ならば、ロレーヌが死んだ事にすればその幻想は消え、イリスの事をアルトリアの新女王として国民は迎え入れる。
　最初から壁を作られるよりも、最初から期待されている方が国は運営しやすいものだ。
「母上は、妾が女王として立派に政をできるように自らを殺した。しかも、母上は妾が政をしやすいように自らを愚王とまで陥れた」
「どういう事？」
「――母上は、妾が女王になった時に国民の不満が重責にならないよう、わざと自分の代の時に国民を虐げておったのじゃ」
「……反面教師って事？」
「そうじゃ。自分が国民を痛めつけるだけ痛めつけてから妾に王位を渡せば、妾が多少国民を犠牲にする政策を取っても「ロレーヌ女王の時はもっとひどかった」というイメージから妾への不満は最小限に留められると踏んでおったのじゃろ――本当に、自分を犠牲にして娘を守ろうとするなんて、柄にもない事をしおって」
　そう言いながらも、イリスの表情は明るかった。母親の愛を直に感

じ、嬉しかったのだろう。薄っすらと浮かぶ涙は、そんな彼女の感動の表れ。その姿を見ていると、クリュウの中でロレーヌ女王という一人の女性の姿がわからなくなる。
　図書館や噂を聞く限り、ロレーヌ女王は人の心がわからないと非難され、愚王とも暴君とも悪評名高い女王だ。だがイリスの話を聞いている限りでは、国と娘を守る為に自身を犠牲にしながら奮闘した良き女王であり、良き母親でもあるように思えた。
「母上は、ただ単にこの国を守ろうとしただけじゃ。祖国を、姉上との思い出の地を守る為に、自らを殺してでも」
「……すごい人、なんだね」
「当然じゃ。何せ妾の母上にして、妾が最も尊敬する女王なのじゃからな」
　恥じる事なく、屈託の無い笑みを浮かべながら言うイリスの言葉には一切のウソ偽りはない。心から母親を愛し、尊敬しているからこそできる笑顔だ。その笑顔だけで、彼女の母親に対する愛と信頼が見て取れる。まるで、子供の頃に母親の事が大好きだった自分のように、昔の自分と今のイリスの姿が重なる。
「それで、そのロレーヌさんと会うんだよね？　僕が」
「そうじゃ。何せお主は母上が大好きだった伯母上の子供じゃ。母上にとってこれ以上のサプライズもなかろうて」
　まるでイタズラを思いついた子供のように無邪気に笑う彼女を見て、クリュウは苦笑を浮かべた。何というか、すっかり素の彼女を見せてもらえるようになってしまった事に感動半分戸惑い半分という感じだ。
「伯母上の事を知りたいのなら、母上に聞くのが一番じゃろうて。何せ実の妹なのじゃからな」
「それはそうだけど。そんなに容態の悪い人にいきなり会っちゃまずいんじゃない？」
　話を聞く限り、女王としての仕事ができない程に弱っているらしいロレーヌ。そんな状態の彼女にいきなり失踪した姉の息子だと言って会って大丈夫なのか。変な負担になってしまうのではないか。ク

リュウはそれを心配していた。だが、イリスはそんな彼の疑問に対して小さく首を横に振る。その横顔には、先程までのような笑顔はなかった。
「イリス？」
「――母上の命は、もうそう長くはないそうじゃ」
彼女からの告白に、クリュウの息が止まった。呼吸音すらも邪魔になるような、そんな不気味な沈黙。イリスは静かに伏せていた顔を上げてクリュウと向き合う。その表情は悲しみに染まり、でも少しだけ安堵の表情も入り混じった複雑なもの。
「……じゃから、このタイミングで伯母上の息子であるお主がこの国へ来たのは、偶然ではないと思う。きっと、母上の最期の気がかりが解決する――お主のおかげで、母上はこの世に未練なく旅立てるかもしれない。じゃから、今しかないのじゃ」
それを最後に、イリスは沈黙した。クリュウもそんな彼女に何て声を掛ければいいかわからずに黙り込み、二人の間には気まずい沈黙だけが残される。
そんな沈黙が数分と続いた頃、イリスがその空気に耐え切れなくなったように立ち上がった。
「……日付が変わった。お主と妾、共に後悔しない一日にしよう。クリュウ」
「うん……」
彼女から差し伸べられた手を、クリュウはしっかりと掴んだ。
「……それで、どうしてこういう状況になったのかな？」
「何じゃ。妾はもう眠いのじゃから、つべこべ言わずに寝んか阿呆」
戦艦『ドレッドノート』と別れてから一時間後。なぜかクリュウとイリスは同じベッドで横になっていた。横になりながら困惑するクリュウの横では、そんな彼の腕枕の心地良さに早くも眠ってしまいそうなイリスが横になっている。それもイリスはわざわざクリュウの方を向いてぴったりと体をくっ付けている。
「いや、確かにもう休もうとは言ったけどさ。何で一緒の部屋？　そして何で一緒のベッドなのさ？」

「客室がリフォーム中で使えないと兵が言っていたじゃろうが」
「いや、別に僕はどんな部屋でもいいし」
「客人に対して兵員室を使う訳にはいかんじゃろうが。じゃからこの部屋に二人で寝る事にしたのじゃ」
「なら僕は全然床でも構わないのに……」
「阿呆。床に寝かすくらいなら兵員室を使った方がマシじゃ。男が細かい事をいちいち気にするな」
「……何で僕怒られてるの？」
　取り付く島もないとはまさにこの事だろう。見事に一蹴されてしまい、クリュウも半ば諦めていた。というか、別にそこまで抵抗する気もなかったのが本音だ。何せ相手は一応は血が繋がった従兄弟なのだから、家族のようなものだ。それにフィーリア達と違い、イリスはまだまだ子供。さすがのクリュウも子供相手では妙な感情を抱く事もない。だからこそ、諦めるのも早かった。これがフィーリアやサクラならもう少し抵抗していただろうが。
　だが、クリュウは乙女心というものに実に疎かった。彼は知らないのだろう。乙女心というのは、彼が子供と分類した年齢でもすでに抱いているもの。
　諦めて寝ようと黙ったクリュウの横で、そんな彼の服の裾をギュッとイリスが掴んだ。少しだけ近づいて、額をそっと彼の胸に当てる。
「クリュウ、もう寝たか？」
「ううん。まだ起きてるよ」
「そ、そうか……」
「……」
「……」
「……」
「……寝たか？」
「起きてるってば」
　クリュウはそう答えると顔を彼女の方へ向ける。視線が合った瞬間、イリスはビックリして慌てて視線を逸らすように身を縮めて顔を隠してしまう。そんな彼女の反応にクリュウは首を傾げた。

「どうしたの？　眠れないの？」
「べ、別にそういう訳ではない。ただ――誰かと寝るのはもう何年ぶりかわからぬ程昔の事じゃから、少し懐かしいのじゃ」
「……そっか。ロレーヌさんが隠居したのは一年以上も前。体を壊していたとすれば、それよりももっと前からイリスは一人で寝てたんだ」
「お主は一人で寝始めたのはいつじゃ？」
「うぅん、僕は母さんが死ぬまではずっと一緒に寝てたな。一人で寝るのと同時に一人暮らしが始まってたし」
「それはいつの事じゃ？」
「僕が十歳の頃だったかな」
「とすれば、お主は妾より親離れが遅かったという事じゃな？」
「……どうしてそういう解釈をするかな」
「妾の事をお姉さんと呼んでもいいのじゃぞ？」
「僕よりも背が高くなったら考えてあげるよ」
「……お主、妾を子供扱いしておるな？」
　ジト目で睨んで来るイリスの視線を苦笑で受け流しながら、クリュウは視線を天井へと向ける。飛行船の上の為に微妙に寝ていても体は揺れを感じるし、何よりエンジン音などが微かに聞こえる。最初こそ苦労していたが、『イレーネ』やアルトリアに来るまでの『シェフィールド』で経験した事もあって今ではほとんど気にならない。人間の慣れとは不思議なものだ。
「お主は……」
「うん？　何か言った？」
「……お主は、近いうちにこの国を出て行くのか？」
　視線を再び彼女の方へ向けると、イリスはジッとこちらを見詰めたまま自分の答えを待っていた。その凛と煌く瞳は一体何を求めているのかはわからないが、それでもクリュウが返せる言葉はこれだけだった。
「……まぁ、僕の故郷はイージス村だから。故郷に帰るのは当然の事だよ」

「ここはお主にとってもう一つの故郷のような場所じゃ。お主の居場所は、ここにもある」
「……嬉しいけど、それはダメだよ」
「なぜじゃ？」
「――総軍師から聞いたよ。何だか君の王政を邪魔しようとしている人がいるんでしょ？」
クリュウの口から放たれたのは、イリスが予想もしていなかった言葉だった。
このアーク・ロイヤル城行きの航海。実はコレもジェイドが裏から手を回していたからこそできる事だ。そもそもいくら女王命令とはいえ、こんな大掛かりな事を女王の補佐官である総軍師に一切バレずに行う事はできるはずもない。
停泊中の『シェフィールド』へ乗り込む前、クリュウはジェイドに捕まった。すでに彼はイリスの考えを読んでおり、不満はあるようだったが納得はしてくれていた。その時、彼の口から語られたのがこの国の一枚岩ではない政権運営だった。
「勘当されている身とはいえ、一応僕は王家の血を引いた人間だからね。形式的にではあるものの、僕にも王位継承権はある。当然僕はそんなもの必要ないから破棄するつもりでいるけど、国を乗っ取りたい人間から見れば僕の存在は君の政権を脅かす存在でしかない。いつまでも、この国にいる訳にはいかないよ」
ジェイドは言っていた。この国には自身の利権の為だけに国を腐らせようとしている連中がいる。だがそういう連中だからこそ力を持ち、自分達の政権運営を妨害する。今この国はまだ完全にはイリスが女王として国を掌握しているとは言えない状況だ。だからこそ、今ここでイリスの政権運営に足かせになるような出来事は起こしたくはない。そしてクリュウの存在は、イリスにとっては足かせでしかない。
「……妾は、お主を王家に迎え入れる事も考えている」
「僕、平民だよ？」
「お主が言ったのじゃろうが。自分には妾と同じ王家の血が流れてお

ると。それだけで十分王家に戻るだけの理由になる。反対する声があっても、妾が説得するなり潰すなりできる。じゃから……」
「……それは、イリスに負担を強いる事になるでしょ？」
「それくらい、何の問題もない」
「……今の政権運営だって手一杯なのに？」
「……」
　反論する事もできずに沈黙するイリス。敵対勢力との権力の奪い合いはお世辞にも優勢とは言えない。今は女王権限で議会の承認を無視したり強行採決で政権を運営しているが、いつまでもこれでは国民へ不信感を募らせてしまう。ジェイドの奮闘の甲斐あって次第に味方を増やしている事から、そろそろ強行手段を控えようと彼と相談したばかりだ。
「……王家は、お主達の存在を抹消した。仕方がなかったとはいえ、今に思えば非道な事だ。だから、せめてお主だけでも居場所を作ってやりたいのじゃ」
「気持ちは嬉しいけど、そもそもは国を飛び出した母さんが悪いんでしょ？　って、そんな事言ったら僕は生まれて来なかったんだけどね」
　クリュウの心中は複雑だ。自分の母親が飛び出したせいでロレーヌには迷惑を掛け、その影響は少なからず今のイリスにものしかかっている。それに加えて彼女自身が勘当した自分や母の事を気に病んでいるのだから、アメリアの行動は軽率だったと言わざるを得ない。だが、その行動の末に生まれたのが自分なのだから、こういう時彼女にどういう顔を向ければいいかわからず、彼の表情は微妙だ。
「ならせめて、平民で良い。この国にいるつもりはないか？　何なら、他の娘達と一緒でも構わない。全員分の家はこちらで用意する。じゃから……」
「――それは、ダメだよ。ここは君の居場所であって、僕達の居場所じゃない」
　そう、このアルトリア王政軍国はクリュウの居場所でも故郷でもない。ここは、母親の故郷だ。今回初めて来た国なのだから当然この国

に思い出の地も、これまで自分達がいたという痕跡も何もない。それがあるのは、自分が生まれ育ったイージス村だけだ。
「それに、僕には村に残してきた人達に必ず帰るって約束までしちゃったしね。いつまでもこの国にいる訳にはいかないよ」
「……そうか。お主にはお主の、帰る場所があるのじゃな」
「うん……」
　クリュウの返事は、きっとイリスも予想していたのだろう。でも、それを聞いたイリスの表情は悲しみと寂しさが入り混じった、暗いものに変わっていた。先程までは凛としていた瞳も、今はどこか弱々しい。
「せっかく、こうして会う事ができたのにのぉ……」
「別に二度と会えなくなるって訳じゃないでしょ。すごく遠いから、そう簡単には会えないとは思うけど。それでも、これが最初で最後って訳じゃないんだからさ」
「……そうじゃな」
　そう切って、イリスは黙りこんでしまった。
　眠くなったのか、クリュウは特に声を掛ける事もなく天井を見上げる。見慣れない天井、ここが自分の居場所ではないという何よりの証だ。
「……嫌じゃ」
「え？」
「――せっかく会えたのに、また別れるなんて嫌じゃッ！」
　突如イリスは大声でそう叫ぶと布団を跳ね除けて起き上がった。布団を跳ね飛ばされて驚く彼のすぐ横で、イリスは女の子座りをしたまま横になったままの彼を見下ろしていた。窓の外から入る月の光をバックに受けた彼女の表情はよくわからない。それでも、瞳の端に輝くそれは闇夜でもハッキリと見る事ができた。
「イリス……」
「言ったであろう？　妾の親類は皆権力や金に溺れた愚か者ばかりじゃと――お主は、せっかくできた、妾にとって初めて信頼のおける親族じゃ。何より、妾はお主に傍にいてほしい。そう思っておる」

迷う事なく、真っ直ぐな瞳でそう言う彼女の言葉にクリュウは息を呑んだ。
ただ、傍にいてほしい。それは誰もが願う、大切な人が近くにいてほしいという願いの根源。クリュウもかつて、母の笑顔を失った際に思い願った気持ちだ。だからこそ、彼女の気持ちがわかる。だからこそ、彼女の本気さもまた、わかる。
「僕とイリスは、まだ会って数日と経っていない間柄だよ？　どうして、僕にそこまで……」
長い時を過ごした、せめて一週間という期間があればそういう感情や気持ちを抱くだけの時間と言えるだろう。だが自分がこの国に来たのはまだ数日と経ってはいない。なのに、どうしてそこまで自分を信頼し、傍にいてほしいと焦がれるのか。
「……わからぬ」
イリスの答えは、正否のないものだった。
「わからないって……」
「う、うるさいッ！　わからぬからわからぬのじゃッ！」
「ええッ!?　ぎゃ、逆切れされても……」
「仕方ないじゃろッ！　初めて会った時からお主の事が妙に気になって、夜の街へ繰り出してからはお主の事ばかり考えてしまうのじゃッ！　おかげで政務にも集中できなくて、どうしてくれるのじゃッ!?」
「だ、だから逆切れされても困るってばぁッ！」
拳を振り上げて突如怒り出すイリスを前にクリュウは困惑しながら上半身を起こす。そんな彼との距離を詰めてイリスはポカポカと彼の胸元に振り上げた拳を何度も振り落とす。
「何なのじゃお主はッ！　妾に一体何をしたのじゃッ!?」
「な、何もしてないって……ッ」
「ウソを言うなッ！　ならばなぜ妾は――」
興奮の余り勢い良く彼の胸倉を引き寄せるイリスだったが、思いの外強く引いてしまって眼前にまで彼の顔が近づいてしまった。視界いっぱいに広がる彼の顔を見て薄暗い中でもハッキリとわかるくらいに彼女の顔が真っ赤に染まっていく。

「い、イリス……？」
「頭が高ぁいのじゃッ！」
「いたぁッ！　り、理不尽過ぎるでしょッ!?」
　思いっ切り突き飛ばされ、クリュウは壁に頭を強かに打ち付けてしまった。当然クリュウは抗議するが、イリスは「うるさぁいッ！　妾が頭が高いと言ったら頭が高いのじゃッ！」とわがまま丸出しな発言を大後で叫ぶだけ。とてもじゃないが夜中に出していいような音量ではない。
「ば、バカッ！」
　下手に騒げば兵士達がやって来てしまう。一緒の部屋に寝るのだって秘密なのに、今は一緒のベッドだ。彼女の人気を考えるにもしも兵士にバレれば……おそらく、いや絶対クリュウは極刑に処されるだろう。
「ムガぁッ!?　な、何をするか無礼者ッ！　むぐぐぅ……ッ!?」
「大声出さないでってばッ！　兵士が来ちゃうでしょッ!?」
　クリュウは慌てて騒ぐイリスを抱き寄せて口を押さえた。耳を澄ませても何の足音もしない。どうやら誰にも気づかれていないようだ。ほっとクリュウは胸を撫で下ろす――だがその瞬間、自分のしている事のまずさに気づいた。
「むぐぐ……ッ！」
　夜中に幼い女の子のベッドで、その少女を無理やり抱き寄せて叫ばれないように口を押さえる――誰がどう見ても、クリュウの今の姿は犯罪者にしか見えない。
「あッ!?　ご、ごめんッ！」
「……な、何をするか阿呆」
　すぐに口から手をどけてイリスを解放する。すぐに殴られるか怒られるか覚悟していたクリュウだったが、そんな彼の予想に反してイリスはなぜか大人しかった。小さな声で最低限の抗議の言葉を発すると、その場で全く動かない。
「あ、あの、イリス？」
「……何じゃ？」

「いやその、そろそろどいてくれないかなぁ……なんて」
「お主が無理やり膝の上に乗せたのであろうが。なのに用が済んだたら降りろとな？　実に身勝手な言い分じゃな」
「ご、ごめん……」
　全くもって彼女の言う通りな訳であって、返す言葉もないクリュウは黙って彼女を膝の上に置き続ける。彼が観念したのを見てイリスはそっと彼の胸にしなだれ掛かった。その頬は背後を向けているクリュウからは見えないが、ほんのりと赤く染まっていた。
「……本当に、帰ってしまうのか？」
　背を預けながら不安げに問うイリスの問いかけに、クリュウは言いづらそうに「うん」と小さく小声で返した。それを傍で聞いて、イリスは静かに「そうか……」と弱々しく声を零した。
「寂しく、なるのぉ……」
「そりゃ、僕だってイリスとお別れするのは寂しいさ。何ていうか、まだ短い付き合いだけど、まるで妹ができたみたいだったから」
「妹……」
　クリュウの口から零れ落ちたその単語に、イリスは小さく笑みを浮かべた。彼にそう思われるのが、家族として見てもらえるのが心から嬉しい。嬉しいのだが……胸の奥で一瞬だけチクリと痛みが走った。嬉しさの中にあるその痛さに、イリスは困惑した。だが、背中から感じる兄（クリュウ）の温もりは、全てを包み込むように温かい。
「……いつか」
「え？」
「……いつか。妾がこの国の全てを掌握したら。その時は――お主に会いに行っても良いか？」
　そっと背を預けながら、イリスは顔をもたげて上目遣いでクリュウの顔を覗き込む。不安げに揺れる彼女の瞳。クリュウはその吸い込まれそうな瞳をしばし凝視した後、フッと口元に笑みを浮かべてうなずいた。
「もちろん。大国の女王様を出迎えるには貧相過ぎる村かもしれないけど、小さな村なりに全力で君を歓迎するよ」

「そうか……」
クリュウの返答に満足そうに、嬉しそうにイリスはうなずく。そっと、シーツの上に置かれている彼の手の上に自分の手を重ねる。自分よりも一回り大きい彼の温かな手を、大事そうに握り締めながら。
「――約束じゃぞ。クリュウ」
「うん。約束だ」
その夜、結局二人はそのまま眠る事なく互いの手を握り合いながら、これまでの時間を埋めるように言葉を交わし続け、二人にとって大切な夜を明かしたのであった。

第178話　ロレーヌ・アルトリア・ティターニア

東の空が明るい朝日に染まっていく。新たな一日の始まりを告げる静かなる朝。
眠る事なく夜を明かした二人はまずイリスが部屋を出て行った。一緒に現れては兵士達に不審がられるからだ。イリスが出て行ってからしばらくしてクリュウも部屋を出て行く。向かう先は事前の打ち合わせ通り艦橋だ。
当直の兵士を除けば、多くの兵士が起床を始める頃合いで艦内が騒がしくなる。慌ただしく軍服を着こなして廊下を走る兵士とすれ違いながら艦橋に到着すると、そこには艦長や副艦長を始めとした艦橋常駐兵士の他に、簡易的ながら動きやすいドレスを身に纏ったイリスの姿もあった。
「おはようございます」
クリュウが挨拶すると壮年の優しげな艦長が笑顔で挨拶を返してくれる。艦長だけではなく他の兵士達も口々に挨拶をしてくれた。さすがにエルバーフェルドからアルトリアまで一週間もの間一緒にいただけあって、『シェフィールド』の兵士達とは気まずい雰囲気はほとんどなくなっていた。
「イリスも、おはよう」
「うぬ。昨日はよく眠れたか？」
「まぁね」
お互いに見え透いた芝居をし合う。表情にこそ出さないがその胸中ではお互いにこの見え透いた小芝居に苦笑し合っていた。二人の会話を訝しがる事もなく、兵士達は慌ただしく朝の仕事へと戻る。
窓の外を見下ろしているイリスの横にクリュウがそっと並び立つ。
「それでイリス。アーク・ロイヤル城にはあとどれくらいで着きそう？」
「――何を言うておるか。もう見えておろうが」
そう言ってイリスが指差した方向を見ると、確かにそこには城があった。

アルトリア城に比べれば大きさもデザインも全く異なる城だ。城と言うよりは大きな別荘と言うに相応しい規模のもの。レンガ作りの巨大な横長の箱状の建物と庭園。その二つで構成されたのが、アーク・ロイヤル城だった。
「あれが、アーク・ロイヤル城……」
「艦長。シップポートへ降下してくれ」
「ハッ。降下準備、急げぇッ！」
艦長の号令一下、兵士達の動きが慌ただしくなる。着陸警報が鳴り響き、『シェフィールド』はゆっくりと降下を開始する。その最中、イリスとクリュウはその場から動く事なく目指すアーク・ロイヤル城を見詰め続ける。
重々しい音と共に艦が着陸すると、二人はまるで合図をしたかのように同時に互いの方へ向く。そして一つうなずき合い、着陸作業を指示している艦長の前に立つ。
「お主達はこのままここで待機しておれ。城には、妾とクリュウだけで出向く」
「護衛の兵士は？」
「いらぬ。あそこには聖騎士団の中でも選りすぐりの兵士達が待機しておる。お主達の手を煩わせる事はない」
「……わかりました。お気をつけて陛下。ルナリーフ殿も、陛下をお頼みしましたぞ」
「わかりました」
艦長は見事な敬礼で二人を見送る。出口へ向かうとすでに入口に移動式のステップが横付けされており、クリュウがまず先導するようにステップへ移る。そして、イリスの手を握り締めて彼女をゆっくりとリードする。
ステップから降りると、数人の『シェフィールド』の兵士が見慣れぬ服装の数人の武装した男達と何事かを話していた。しかしイリスの姿を見るとどちらも一斉に見事な敬礼をしてみせた。
「お主達は下がっておれ」
イリスは『シェフィールド』の兵士達にそう言って下がらせると、全

身真っ白な礼装を纏い、剣を携えた男達の前に立つ。クリュウはそんな彼女の付き人のように背後を陣取っていた。
「事前連絡もなく、気持ちのいい朝に騒々しい出向き方をしてすまなかった。母上の容態はどうじゃ？」
「……正直に申しますと、日に日に弱っていらっしゃいます。医師も、そう長い命ではないと」
「そうか……。今、母上に謁見する事は可能か？」
「少々お待ちください」
　そう言って男は部下らしき男を宮殿の中へ走らせた。しばらくして、男が戻って来た。小声でイリスに謁見可能だと伝えると、イリスは一つうなずく。そして、ゆっくりとクリュウへと振り返った。
「覚悟は良いな。クリュウ」
「う、うん……」
「では、参るぞ」
　そう言ってイリスはマントを翻して歩き出す。その後をクリュウが続く。
　朝露が葉を濡らし、辺りは妙な湿気を帯びている。小鳥や虫もまだ眠っているのか、彼らの耳に聞こえるのは自分達の足音と時折辺りを吹き抜ける風の音だけだ。
　ゆっくりと門を潜り抜けると、中央庭園へと足を踏み入れる。庭園はきれいに手入れが行き届いており、美しい花々がきれいに花壇で咲き誇っていた。
「きれいな庭園だね」
「優秀な庭師が手入れをしておるからな。半年前までは母上が自らしていたのじゃが、もはや外を歩く事も母上はできないのじゃ」
「そっか……」
　気まずい雰囲気を打破しようと話題を振ったのだが、彼の思惑と外れて空気はより重くなる。イリスは構わず歩き続け、宮殿への扉の前に至った。門番二人が彼女に対して敬礼を行い、すぐに扉を開く。イリスは無言のまま開かれた扉の中へと入り、クリュウもそれに続いた。

城の綺羅びやかな装飾とは違う、物静かな装飾だが決して質素という事はなく所々に高そうな装飾品が並び、落ち着いた豪華さを静かに表している。
扉を入ると、中央に階段があり、中程で左右へと分岐する形だ。だがイリスは階段へ行く事はなく、そのまま左右に分かれた階段の下の、右側の入口へと進む。
「二階じゃないんだね」
「なるべく母上に負担にならぬよう、一階で療養してもらっておるのじゃ」
イリスは短く答えると、慣れた様子で中へと進む。何度か道を折れた先は行き止まり。ただし、そこには扉が一つあった。イリスはその前で立ち止まると、後から続いているクリュウへと振り返った。
「――この奥に母上がおる。妾が呼ぶまでここで待機しておれ」
クリュウがゆっくりとうなずくのを見てイリスはドアをノックする。
「……誰？」
ドア越しに聞こえたのは女性の声。その声色はどこかクリュウの記憶の中にあるアメリアの声に似ていた。姉妹だからなのだろうが、その声にクリュウの胸の中に懐かしさが広がる。
「イリスです。母上」
「イリス？　そう、入りなさい」
「……失礼します」
イリスが扉を開けて入ると、そこはそれほど広くはない部屋だった。落ち着いた装飾を施し、物静かな雰囲気が広がる部屋。生活感があまり感じられないのは衣装棚やテーブルといったものがないからだろう。そういったものは別の部屋にあってメイドが持って来るのだ。ここはあくまで、ベッドから動けない彼女の為の寝室兼治療室。
部屋の奥、長閑な森を眺められる大きな窓の横に置かれたベッドの上。そこに彼女はいた。
少し細めな体にあまり太陽の下に出た事がないだろうと予想できる程に白い肌。年で言えばもう四〇歳を超えているはずなのにその

美貌はそんな年齢を感じさせない。だが纏う雰囲気は逆にどこか疲れ切った老人に近い。
くすんだ銀色の長い髪はその輝きを失いつつあるが、イリスの美しく輝く銀髪とどこか似ている。髪と同じくどこか光が鈍い碧眼も、今まさに希望に満ち溢れて光り輝いているイリスの瞳とよく似ている。
文字通りイリスの三〇年後の姿と言っても通じるようなイリスに良く似た女性。ただお転婆なイリスと違って彼女は物静かで大人びた貴婦人という印象を抱かせる。
彼女こそアルトリア王国最後の女王にしてアルトリア王政軍国初代女王。富国強兵を掲げて国民に重税を課し、逆らう者は容赦なく排除して独裁的な政治を行い、アルトリア王政軍国を世界一の科学大国にして世界最強の軍事国家へと変貌させた人物。《暴君》《冷酷王》《氷の女王》《独裁者》など数々の汚名を受けながらも、ただ国の為に不器用なりに全力を尽くした元女王にしてイリスの母――ロレーヌ・アルトリア・ティターニアだ。
ロレーヌはイリスを見ると読んでいた本をパタンと閉じて娘を出迎える。その姿は一人の母親そのもの。ただ決して笑顔は浮かべる事はなく、考えを読ませない鉄の表情を崩さぬまま娘を見る姿は引退したとはいえ元女王としての風格に満ちていた。
イリスは部屋へ入ってベッドの正面に立つと、膝を折って敬々しく跪いた。一国の女王が見せる最上敬礼。それはまさにロレーヌの偉大さを物語っているかのようだった。
「顔を上げなさいイリス。アルトリアの王たるあなたが、私のようなもはや何の権力も持っていない者相手にそのような姿を見せてはいけません」
「……失礼しました母上」
イリスはどこか緊張しているように見える。大好きな母を前にしても、同時に相手は自分が最も尊敬し、最も偉大な元女王。全くもって頭が上がらないという感じだ。
「……イリス。今は国会が開いている最中のはず。そのような時期に私を訪ねる余裕もなければ、そのような軽率な行動をすべきではない

事、あなたならわかりますね？」
「はい……」
「……そのような時期に、それも『シェフィールド』を用いてまで私を訪ねる必要性――何か緊急の用件でもありましたか？」
　女王が国政の忙しい時期に危険を冒してまで行動する。イリスの行動を見てロレーヌは尋常ではない国難が発生しているのではと危惧する。大陸情勢の変化、テティル連邦共和国の動向、モンスターの異常発生、重大な事故の発生、経済を揺るがす出来事。様々な予想を立ててイリスへと尋ねるロレーヌだが、イリスの回答は彼女のどの予想にも当てはまらないものだった。
「その、母上にぜひ会わせたい者がいるのじゃ」
「私に……？」
　イリスの答えに鉄の表情を崩さないロレーヌも一瞬だけ困惑したような表情を浮かべた。だがすぐに一瞬前までと同じような凛々しさを取り戻す。
「……イリス。私が今、どういう身であるか、わかりますね？」
「はい――ロレーヌ・アルトリア・ティターニアはすでに死亡している」
　緊張した様子で答えるイリスの回答にロレーヌは「そうです」と短く答えてうなずいた。そして、突如としてそれまで幾分か穏やかだった雰囲気が一転して厳しいものに変わった。その原因は言うまでもなくロレーヌの目付きが変わったからだ。それまでと違う鋭い眼光は、冷酷王とも称された冷徹な王に相応しい魔剣のように鋭く、怪しく煌く。
　母親の雰囲気が変わったのを見て、イリスがビクッと震え、怯える。まるで部屋の室温が急に氷点下になったかのような錯覚に陥る程に、体の震えが止まらない。実の親相手とは思えない程の恐怖だ――それが、ロレーヌ・アルトリア・ティターニアという人間だ。
「ならば、あなたの行動は軽率としか言いようがないわね。それほどのリスクを冒してまで会わせたい人物など、私には思い当たらないわ」

「……確かに軽率な行動だった事は反省しておる。じゃが、どうしても母上に会ってほしい人がいたのじゃ。妾は、それだけのリスクを冒してでも会わせるべきじゃと判断している」
震えながらも、決して視線を逸らす事なく恐るべき母親と対峙しながら必死になって彼と会うよう説得するイリス。母親に逆らえばどんな目に遭うか、幼い頃から散々怒られてきたイリスはそれを痛いくらいに知っている。だが、その恐怖を押し殺してでも、どうしてもロレーヌに彼を会わせたかった。
イリスの一生懸命な姿をしばし見詰めた後、ロレーヌはふぅと肩の力を抜くようにため息を零した。その瞬間、部屋の空気が少しだけ和らいだのをイリスは肌で感じていた。
「……よろしい。ならば、あなたが言う会わせたい者を呼びなさい」
「は、母上……ッ」
「――先に言っておくが、彼氏を連れて来たとかではありませんよね？」
「にゃッ!?　ち、違うッ！　彼と妾はそういう関係ではないッ！」
「……彼？」
「ぬおッ!?　母上の目がまた恐ろしいものに変わっていく……ッ！　く、クリュウッ！　さっさと入って参れッ！」
再び表情が変わっていくロレーヌに怯えながら、イリスは震える声でドアの向こうに待機しているクリュウを呼ぶ。すると、ゆっくりと扉が少し開き、その隙間からそぉっと彼が顔を出す。
「……えっと、入って大丈夫？」
「無論じゃ。さっさと入って来るのじゃ」
イリスの許可を得てクリュウは今度こそ扉を大きく開いて部屋へと足を踏み入れる。そんな彼の様子をロレーヌが訝しげにイリスの肩越しに見詰める。
ゆっくりとした足取りでクリュウはイリスの横、ロレーヌの前に立つ。その瞬間、クリュウとロレーヌの目が初めて合った。
見る見るうちにクリュウの瞳が大きく見開かれる――そこにいたのは、記憶の中にしかいない母親によく似た女性、ロレーヌ。

記憶の中の母の姿に比べると、少し痩せこけて無駄に明るかった雰囲気はまるで感じられないし、言うまでもないが老けている。それでも、記憶の中の母親と今目の前にいる女性はよく似ていた。
ジッと見詰めてくるクリュウの視線を不審に感じながら、ロレーヌは静かに口火を開く。
「其方（そなた）は？」
「あ、その……」
ロレーヌの厳しい視線を前にクリュウは緊張のあまり黙ってしまう。当然そんなハッキリとしない彼の態度にロレーヌは不審に思い、慌てて隣に立つイリスがクリュウの脇腹を小突く。
「何をしておるか。しゃんとせい」
「う、うん」
イリスに怒られ、クリュウはその場で大きく深呼吸。何度かそれを繰り返して気持ちを整えると厳しい目つきでこちらを見詰めているロレーヌと対峙する。母親によく似た人、叔母を相手にするというのは妙な気分だ。しかも相手はこちらの正体を知らないのだから、これから打ち明ける身としては緊張も相当だ。
「は、初めましてロレーヌ陛下」
「陛下はイリスに向ける敬称よ。私に向けるものではない」
「す、すみません」
すっかり雰囲気に呑まれてしまって出鼻を挫かれてしまって黙ってしまうクリュウを前にイリスはため息を零す。するとロレーヌの目線はそんな彼女へと切り替わった。
「イリス。彼は私に関わる全ての事情はすでに熟知しているのね？」
「は、はい。全て話しました」
「……あなたは、彼を信頼しているのですね？」
「――もちろんじゃ」
迷う事なく堂々と宣言するイリスの自信満々な横顔とそんな彼女の返事にクリュウは思わず胸が熱くなった。まだ会って間もなく、交わした会話も決して多い訳ではない。それでも彼女は自分を信じ、堂々と自分を信頼していると言ってくれた。そんな彼女の姿が輝か

しく見え、何より心の底から嬉しい。
クリュウの感動した視線にイリスは頬を赤らめながら「そのような目で妾を見るな。小恥ずかしいではないか」と照れ笑いを浮かべる。
そんな二人の様子を見ていたロレーヌは終始表情を崩さない――だが二人が見詰め合った一瞬だけ、ロレーヌの口元が綻んだ事に二人は気付いていない。
「娘が信頼しているのなら、私も信頼しても大丈夫ね。改めて名を名乗ろう、私が前アルトリア王政軍国女王、ロレーヌ・アルトリア・ティターニアだ」
ロレーヌが名乗ると、今度は彼女の視線がクリュウの一点に注がれた。相手から名乗られたのだから、こちらも名乗るのは礼儀だ。だが彼にとって、彼女に名を名乗るというのは並大抵の勇気ではできない事。喉が痛いくらいに渇れ、ツバを呑み込むたびに痛みが走る程。唇は震え、視線は今にも彼女から逸らしてしまいそうなくらい、彼は緊張していた。だが――
「……イリス」
――震える彼の手を、イリスはそっと握り締めた。優しく包み込むような小さな手。視線を向けると、イリスはジッとこちらを見詰めていた。大丈夫じゃ、そんな言葉を込めた瞳が、彼を励ます。
クリュウはイリスの応援する視線にうなずき、改めてロレーヌに向き合う。まだ緊張はしている。それでも、手を通して繋がるイリスの存在が、彼を奮い立たせた。
「僕の名前はクリュウ・ルナリーフ。二五年前にこの国を飛び出したあなたの姉――アメリア・アルトリア・フランチェスカの息子です」
「姉上の、子供……？」
これまで彼らの前では厳しい表情を変える事がなかったロレーヌだったが、クリュウの言葉に初めて戸惑ったような表情を見せた。
「はい。僕の母はアメリア・アルトリア・フランチェスカ。二五年前に父さんと一緒にこの国を飛び出した、あなたのお姉さんです」
クリュウは改めて自分の母の正体を明かした。そんな彼の言葉に最初こそ戸惑っていたロレーヌだったが、次第にその表情が険しいも

のに変わっていく。
「……イリス。あなたは私にこのような妄言を聞かせる為に国政を放り捨てて、わざわざ私の前に出向いたのですか？」
　明らかにこれまでよりも鋭い眼光に射抜かれたイリスはビクリと体を震わせて怯えるが、一瞬だけ同じように緊張している彼の横顔を見て恐る恐るうなずく。
「はい……」
「話にならないわ。さっさと出て行きなさい」
「母上ッ。彼は、クリュウは本当に妾の従兄弟なのじゃッ」
「あなたまで何を言っているのよ。そんなの信じられる訳ないわ」
　目尻を釣り上げて妄言だと吐き捨てるロレーヌ。だがそんな彼女の反応は二人共予想していた。クリュウとイリスはお互いに目を合わせてうなずき、イリスは自分の懐から母から受け継がれた銀火竜の紋章を印したペンダントを取り出す。
「母上。これは母上から譲り受けた、金火竜と対を成す銀火竜の紋章じゃ」
「ええ、私があなたに王位を継承する際に渡したもの。世界に二つとしてない、王族の証」
「そして、対を成す金火竜の紋章は叔母、アメリアが持っているのじゃったな？」
「そうです。姉上の部屋を探しても見つからなかったのだから、今も姉上が持っているとみて間違いないわね」
「……クリュウ」
「う、うん」
　イリスの言葉にクリュウはゆっくりと自らの懐に腕を伸ばした。そしてそこから取り出したのは母の形見、金火竜の紋章が印されたペンダント――イリスの持つ銀火竜の紋章と対を成す、もう一つの王族を記す証。
　美しく光り輝く金火竜の紋章の煌きを見た瞬間、ロレーヌは我が目を疑った。厳しい表情を崩し、先程以上に動揺した様子で金火竜のペンダントとクリュウの顔を何度も見比べる。

「ま、まさか……ッ。いや、偽物という可能性も……ッ」
「ならば、自分の目で確かめてみるのじゃ母上」
イリスの言葉にクリュウはそっと自分の持つ母の形見を渡す。受け取ったロレーヌは震える手の上で何度もペンダントを転がしながらその正体を探る。
しばしの無言。だがそれはポツリと零れ落ちたロレーヌのつぶやきが終わらせる。
「本物……よ」
「当然じゃ。何せそれは本物じゃからな。クリュウの母上が妾の叔母である何よりの証じゃな」
「う、ウソよ……ッ。まさか、そんな……ッ」
信じられない。ロレーヌは震える手の上で輝く金火竜のペンダントを何度も見るが、それが偽物ではないという事は彼女自身が誰よりもわかっていた。
「う……ッ」
「は、母上ッ!?」
突如ロレーヌは胸を押さえて苦しみ出した。蹲るように体を折って痛む胸を押さえて苦しむ。突然の出来事にクリュウは驚きながらも「い、医者を呼んで来るッ」と急いで部屋を飛び出した。
すぐにクリュウが連れて来た医者が薬をロレーヌに呑ませた。服用してから数分は苦しんでいたロレーヌだったが、次第に痛みは引いて落ち着きを取り戻す。
医者が大丈夫と判断して部屋を出て行くのを見送って振り返ると、ベッドに横になっているロレーヌと目が合う。
「……すまなかったわね。驚かせて」
「いえ、それより、大丈夫ですか?」
「もう慣れた……私は昔から心臓が弱くてね。子供の頃は医者から三〇歳まで生きられないって言われてたけど、意外と長生きしたわ」
「そんな、ロレーヌさんはまだまだ若いですよ」
「……十分長生きしたわ。それにもう、私の心臓は長くは持たない。それは本人が一番よくわかっているもの」

そう言いながら、ロレーヌは自らの胸に手を当てた。自分でもわかる。胸の鼓動が弱まっている事など、自分が一番理解している。
「――本当に、姉上の子なの？」
心配そうに自分を見詰めていたクリュウに向かってロレーヌは尋ねる。だがその問い掛けにはもはや疑心の念はなく、ただ確認したい、そんな想いが込められていた。クリュウは静かにうなずく。
「はい」
「……そう」
ロレーヌは静かに天井を見上げた。何かを考えるように一瞬目を閉じる。そして、その頬をゆっくりと涙が流れた。
「そう、姉上は生きてたのね……」
安心したようにロレーヌは言葉を零す――そして、それまで一切浮かべる事のなかった笑顔を浮かべた。それはほんとうに綺麗な笑顔だった。澄み切った、心の底から安堵したような笑顔。まるで、何十年とあった心残りが取れたような、そんな安心しきった笑顔。
イリスはそんな母の笑顔を見て嬉しそうに頬を上気させながら何度もうなずく。
だがクリュウだけは、ロレーヌの言葉に複雑そうな表情を浮かべていた。するとそんな彼をロレーヌは無言で手招きする。誘いに従って彼女のすぐ脇に立つと、そんな彼の頬をロレーヌは優しく撫でた。頬に触れる温かくて柔らかな感触、そして傍に寄ればわかるいい香り。それは記憶の奥底にある今は亡き母のそれとよく似ていた。まるで、本当に母に頬を撫でられているような、そんな錯覚に陥る程に温もりも柔らかさも匂いも、アメリアとロレーヌはよく似ていた。
「……ほんと、よく見れば姉上によく似てるわね。目元なんてそっくり」
「母親似とはよく言われます」
「そう……」
そっと頬から彼女の手が離される。クリュウは消えた温もりに少しの寂しさを感じながら、ベッドに横たわるロレーヌを見詰める。そのどこか安堵した表情を見れば、彼女が心のどこかで自身の姉の事を

心配していた事が窺える。息子として、母の身を案じてくれていたロレーヌには感謝の気持ちでいっぱいだ――だが、だからこそ言わないといけない事もある。
「あの、ロレーヌさん。実は、母さんは――」
「――もう、亡くなってるのですね？」
「……え？」
　これから言おうとしていた事を逆に問われ、クリュウは驚きのあまり呆然とロレーヌを見詰めたまま固まってしまう。そんな彼の反応を見てロレーヌは静かに「そう……」とだけつぶやいた。
「どうして……」
「わかるわよ。もし国に戻って来る事情があれば、姉上はその先陣を切ってやって来る。代理人を使うような人ではありませんから。そんな姉上が来ずにあなたが来た。この事実を見れば、姉上が今どういう状態なのか、察する事は難しくない」
　そう言って、ロレーヌは表情を変える事なく淡々と答える。一見すると淡白に見えるが、それが素の彼女なのだろう。サクラだって今でこそあの無表情の細かな動きをクリュウは理解できるようになったが、他人が見たらただの愛想のない子だ。
　むしろ、迷う事なくアメリアの行動心理を完全に把握しながら語る彼女は、本当にアメリアの妹だ。自分以外に母の事をよく理解している人、クリュウはそれが嬉しかった。
「母さんって、昔から本当に考えなしに行動する人だったんですね」
「……どうやら、姉上は死ぬまでバカが抜けなかったみたいね」
　そう言ってロレーヌは口元にわずかな微笑を浮かべた。それが彼女なりの笑顔だったのだろう。だがそれもすぐに引っ込む。続いて現れたのは、一切の笑みが消えた真剣な表情。自然と、クリュウの表情も引き締まる。
「姉上は、何で死んだのですか？　あの人の事だから、私より先に病気とかで死にそうにはないけど」
「その、母さんは僕が生まれる前まで父さんと一緒にハンターをしていました」

「……あのお転婆な姉上なら、実にやりかねない職種ね」
「僕が生まれてからはハンターは引退して専業主婦になっていました。でも、九年前に父さんは殉職しました。そして母さんも、七年前に……」
「姉上は、ハンターをやめていたのではなかったのですか？」
「……その、嵐の日に森で迷子になった子供を助けに行って。そこでその子供を庇ってモンスターに殺された、と」
「……そう。最期の最期まで、実に姉上らしい生き方ね」
ロレーヌは目を伏せ、小声でそうつぶやいた。彼女はクリュウよりもずっと長い間、アメリアと一緒にいた。だからこそ、彼女のお人好しな性格を理解してたし、そんな彼女の最期もまた、ある意味納得できていた。
愛想がなくて物事を淡々とこなしていた自分と、天真爛漫で人の為に一生懸命になれる姉。昔から、ロレーヌは姉に憧れていた。あんな風に笑ってみたい、あんな風にみんなの為に一生懸命になりたい。でもそれは、自分には不向きな事。でも――
「――困っている人を放ってはおけない。それが姉上の信条だったから」
城を抜け出す姉に引っ張られて近所の公園で同世代の子達と遊んだ事があった。
アメリアは男の子達と一緒にサッカーをして、自分は一人だった。学校の宿題をテーブルに広げながらも会話中心で遊んでしまっている女子の輪に入れなかったからだ。そもそも、今時の女子の話題なんてそれこそロレーヌには暗号にしか聞こえず興味もなかった。
そんな時、頬に土汚れを付けたアメリアがにっこりと微笑みながらやって来た。
「――そんな所で一人でいないで、こっちにおいでよッ」
そう言ってアメリアはあっという間に女子の輪にも入ってしまった。そして輪に入れなかったロレーヌを迎え入れ、彼女にもできる役回り――教師を任命した。この時点ですでに彼女達が教わる基礎科目はとうに終えて応用科目も終盤に入っていたロレーヌにとって、彼

女達が理解に困る分野は完全理解していた。
たどたどしく一人ひとりのわからない所を聞き、適切に答えを導き出す方法を教える。決して答えを言って楽させる事はなく、ちゃんと理解する道筋を立てる。自分にも他人にも厳しいロレーヌらしい教え方だ。
ロレーヌの説明に少女達は次々に難題を解読していった。
「ロレーヌ様すごぉいッ！」
「本当に頭いいんだねぇッ。私にもちょっとでもいいからロレーヌ様の頭の良さがほしいよぉ」
「爪の垢を煎じて飲めばいいって、おばあちゃんが言ってたよ？」
「ロレーヌ様ッ！　是非あなた様の指を舐めさせてくださいッ！」
「……あぁ、この子は放っておいて。男の子に興味のない子なので」
「ロレーヌ様、ここ教えてもらえませんか？」
「あ、私も私もッ！」
あっという間にロレーヌは少女達の中心に位置してしまった。戸惑いつつも、皆が自分を頼ってくれる事がロレーヌにとっては少し嬉しかった。自分一人では、絶対こんな風に自分の周りに人は集まらなかった。
そんな自分じゃできない事を、意図も簡単にやってのけた。人を集めるカリスマ性、それが自分にはなくて彼女にある力。
問題の解き方を教えながら、ふとロレーヌはアメリアの方を見た。すると彼女は自分に向かってニッコリと微笑んだ。その優しくて頼もしい笑顔は、今でも忘れられない。
彼女はあっという間に友だちができない自分に友達を作り、そして同時に宿題に困っていた少女達をも救ってみせた。二兎を追う者は一兎をも得ずと言うが、彼女はその二つを同時にやってのけてしまう。それが、アメリア・アルトリア・フランチェスカという女の子だった。
そして、城を抜け出した事がバレた時もアメリアは自分で全部の責任を背負った。元々彼女に無理やり連れ出されたのだから自分は怒られる謂れはない。だが、楽しい時間だった事には変わりはない。だ

からこそ自分にも責任があると言ったが、アメリアは首を横に振った。
「――私はバカだから、これくらい大丈夫。ロレーヌは私みたいにバカになっちゃダメ。お母様が困っちゃうからね」
笑顔でそう言うアメリアの姿は、子供ながらにすでに輝いて見えた。この輝きが、自分と姉の決定的な差。そして、姉を尊敬する最大の理由だった。
アメリアが自分にないものを持つように、自分もアメリアにはないものを持っていた。それが勉強だった。アメリアはお世辞にも頭がいい子ではなく、皇宮学校ではいつも赤点かそのギリギリという点数でよく補修を受けていたが、自分はいつも学年トップだった。
元々頭が良かった事に加えて、日々の努力がその実績を作り上げた。でも別にトップになりたくて勉強をしていた訳ではない。ましてや国の為だなんて、その頃の自分は考えもしなかった。
――ただ単に、姉に頼られたかったからだ。
勉強がまるでできないアメリアはことある事に自分に勉強を教えてほしいと言う。ロレーヌにとって、大好きな姉に頼られる事は何よりも嬉しかった。姉に何を尋ねられても答えられるように勉強し、いつの間にか人に教えるのもうまくなっていた。
姉はバカだけど人を集め、その中心で皆を笑顔にさせる人。自分はそんな姉の輪の中で彼女を頭脳的に支える参謀役。二人はお互いにないものを、お互いで支え合って生きてきた。
――あの日、大好きだった姉の笑顔がどこかへ行ってしまうまでは。
「――母さんの事、恨んでますか？」
どこか遠い目をして黙り込むロレーヌを前に、クリュウは不安げにそう尋ねた。恨んでいると言われても、クリュウはそれに対して返す言葉がなかった。
母は役目を放棄して父と駆け落ちして、その重責の全てを妹のロレーヌに押し付けたのだから。でも、例えそうだとしても彼女に伝えたい事が一つだけあった。

「でも母さんは――」
「――別に、恨んでなんかいないわ」
ロレーヌの静かな声に、クリュウは自然と伏せていた視線を驚いて上げる。視線の先で、ロレーヌはジッとこちらを見詰めながらハッキリと言った。
「私は、姉上を恨んではいない」
「どうして……」
「……まぁ、最初こそ勝手にいなくなった事に腹は立ちましたけど」
その言葉にクリュウの表情は曇るが、そんな彼の様子を見てロレーヌは静かに苦笑を浮かべる。でもそれはすぐに口元にわずかな微笑を浮かべた、とても穏やかな表情へと変わった。
「――あなたを見ていればわかります。姉上はきっと、幸せだったはず。妹として、姉の幸せは何にも代えがたいもの。だから、恨んでなどいません」
真っ直ぐとクリュウを見詰めながら、ロレーヌは静かに、しかしハッキリと言った。その瞳の真っ直ぐさ、強い信念を抱いた瞳を見てクリュウの目が大きく見開かれる。
――容姿が似ているとか、声が似ているとか。そういう部分ではなく、ロレーヌとアメリアは似ている。心の強さ。意志の強さ。真っ直ぐ前を見て、己が信念を貫き、全力でぶつかっていく所。
性格は全く似ていない、正反対と言っても過言ではない二人。だけど、そんな二人の心の煌きは同質の輝きを持つ。その輝きはアルトリア王家の誇り高い血筋の為か。それとも、同じように自信を持って誇れる信念を、二人が持っているからか。
常に何事においても全力で生きていたアメリアの姿と、ロレーヌの姿が重なる。懐かしさや嬉しさで、彼の頬はわずかに緩む。
「父さんも母さんも僕が子供の頃に死んでしまったから、確証はできません。でも――息子である僕から見て、父さんも母さんも幸せだったと思います。僕の瞳には、二人の笑顔がしっかりと焼き付いてしますから」
クリュウもまた、迷う事なく言い切った。その瞳の輝きもまた、ロ

レーヌのそれとよく似ている。その輝きに何を見たのか、ロレーヌは静かに微笑んだ。
「……本当に、姉上によく似ている」
ゆっくりと、ロレーヌは体を起こした。慌ててイリスが背中に手を回して補助しようとするが、ロレーヌはそれを断り、再び彼を見詰める。
「そう、姉上は幸せだったのね」
「でも、時々悲しそうな目で月を見上げていた事がありました。その時に母さんはよく「ごめんね、ロレーヌ」と零していました。幸せの中で、一人残したあなたの事を心配していました。僕が知っている限り、母さんの悲しげな横顔は父さんを亡くした時とその時しかありません」
クリュウの言葉にロレーヌは一瞬瞳を見開いたが、しかしそれはすぐにいつもの細さに戻る。ただ「そう……」とだけ零し、視線を下げて毛布の上に置かれた自らの手を見詰める。
「……バカね姉上は。私にいつも「後悔のないように全力で生きなさい」って言ってたくせに、当人が後悔してちゃ説得力に欠けるじゃない」
「ロレーヌさん……」
「――でも、私の事を気に掛けてくれていた事は、ちょっぴり嬉しかったかな」
そう言ってロレーヌは微笑んだ。それは今までクリュウが見た彼女の笑顔の中で、一番嬉しそうに見えた。そんな彼女の笑顔を見ていると、こっちも自然と幸せな気分になってしまう。
「……もう、姉上には会えないとどこかで思って、諦めていたけど。でも、姉上に会えなくても、あなたに会えて良かったです。クリュウ」
「ロレーヌさん……」
「もっとこっちに来て、顔を見せてください」
クリュウはゆっくりとベッドへ近づき、脇にある椅子の上に腰掛ける。スッと伸びたロレーヌの手が優しく彼の頬を撫でた。その温もりや優しさは、やっぱり母親のそれとよく似ていた。

「あなたに会えて、良かった……」
「僕も、ロレーヌさんに会えて嬉しかったです。両親を亡くした僕には、親族なんていないと思っていましたから。こうして血が繋がったイリスやロレーヌさんと会えた事、本当に心から嬉しいです」
「……妾も、お主と会えた事、この出会いに導いてくれた神へと感謝しよう」
クリュウの隣にイリスは立ち、そっと母親の布団越しの膝の上に頬を寄せる。ロレーヌはクリュウの頬に当てていた手を今度はそんな彼女の髪の上へ置き、優しく撫でた。
「イリス、ありがとう。最高の贈り物です」
「母上……」
目元に涙を浮かべて満面の笑顔で微笑むイリスを優しく抱き締めるロレーヌ。そんな二人の様子を微笑ましく見詰めていたクリュウだったが、そっと手を引かれた。見ればロレーヌの手が腕を掴んでいた。戸惑っているとスッと引かれる。それは決してお世辞にも強い力ではなかったが、なぜか逆らう事ができずに布団の上に頬を着く。目の前には驚いたイリスの顔があって、するとロレーヌは二人の背中に腕を回し、優しく抱きしめた。背中に伝わる彼女の温もり、鼻をかすめる柔らかな銀髪。その隙間から見える彼女の横顔には幸せそうな笑みが灯っていた。
「……夢だった。こうして、姉上と私の子供を抱きしめる事。もう叶う事はないと思ってた夢が、叶った」
「母上……」
「ロレーヌさん……」
「……イリス、クリュウ。生まれて来てくれて――本当にありがとう」
満面の笑みを浮かべるロレーヌの頬を、輝く涙が一筋流れた。それはまるで、夜空に煌く流れ星のように、美しくも儚い、一瞬の出来事だった。
その後、クリュウはイリスの指示で一人先に『シェフィールド』に乗り込んでアルステェリアへと戻る事になった。
去って行く『シェフィールド』を窓越しに見送り、残ったイリスは

それに別れを告げるとゆっくりと振り返る。
ベッドの上で、ロレーヌは幸せそうな笑みを浮かべて眠っていた。弱った体であれだけ色々な出来事があったのだから、相当無理があったのだろう。でも、その寝顔を見れば自分が行った行為は決して間違ってはいなかった。そう、信じられる。
その幸せそうな笑顔を見詰めるイリスの頬を――涙が流れた。大粒の涙が、ボロボロと零れ落ちた。
――イリスは知っていた。ロレーヌの命はもう、いつ死んでもおかしくはない程に弱っている事を。
あと一ヶ月生きれるかわからない状態。だからこそ、彼女が生涯心残りとしていた大好きだった姉の現状を知るクリュウが来た時は本当に心から嬉しかった――同時に、これは神様が与えてくれた奇跡。そしてそれは、母の最後の心残りを取り除く事。母が天に召される時が来た、そう思えた。
そっと近づき、眠る母の手を握り締める。子供の自分と比べても、少し大きいだけの手。決して健康な大人の女性の大きさではない。
この細い体で、必死になって国を護り、自分を守ってくれた偉大な母親。大好きな母親に、自分は恩返しができたのだろうか。
母の手を握り締めながら、イリスはそっとベッドの横に置かれている箱を取った。その箱は横からハンドルが出ていて、上蓋を開けるとガラスの下には幾つもの歯車と無数のピンが付いたシリンダーが組み込まれている。イリスはそのハンドルを掴み、グルグルと回す。カチカチカチという小さな音が何度も聞こえ、しばしそうして回した後にベッドの脇へと置く。するとハンドルが勝手に逆周りを始め、中のシリンダーや歯車が回転を始めてシリンダーに備えられたピンが櫛状の鉄板を弾く。その瞬間、心地の良い金属音が部屋の中へと響いた。
無数のピンが様々な音色で音を立てると、それは一つのメロディーになる。オルゴールと呼ばれる、ゼンマイ動力で動く自動演奏機だ。
奏でられるメロディはアルトリアでは一般的な民謡曲。大人から子供まで知っている、故郷と家族の幸せを願った美しい一曲だ。

「……姉上が大好きだった曲ね」
目を瞑りながら、ロレーヌは静かに言った。
「起きてたのじゃな」
「何だか眠れなくてね」
「そうか……」
イリスはそっと、母であるロレーヌのベッドの片隅に腰を落とした。そんな彼女の手に、ロレーヌは自らの細い手をそっと重ねる。
「……クリュウには言ってなかったけど、実は姉上が国を飛び出したのにはもう一つ、理由があったのよ」
「――クロムウェルじゃな」
辛そうに語ろうとするロレーヌの言葉を制して、イリスは静かにその男の名を言った。その名前に、ロレーヌが少し驚いたように目を見張った。
「……気づいてたのね」
「奴は母上の代より以前から、国を乗っ取ろうと暗躍しているような奴じゃ。双頭体制のような権力分立は、奴にとっては面倒この上ない」
悔しげに唇を噛みながら、イリスは語る。その表情はこれまでクリュウに見せていた少女らしいものから、一国の王としての厳しさと覚悟に満ちたものに変わっていた。
「……妾は決して、奴に屈する事はない」
イリスは知っていた。アメリアがどうして国を飛び出したのか。必死に調べて、一つの可能性を見出していた。
アメリアは確かに底抜けに明るくて、ちょっとバカな所はある王女だった。だが王としての素質は彼女の方が大きく、その先見の明は策士である妹のロレーヌをも凌駕していた。
当時、現在は貴族院議長を務めるオスカー・クロムウェルはすでに暗躍をしており、王位継承権第一位のアメリアに擦り寄っていた。彼女を傀儡（かいらい）として、アルトリアを乗っ取ろうとしていたのだ。
しかし当時、宰相に最も近しいと思われていた彼を妨害する者がい

た。それが、自分と同じような策士の素質に溢れていたロレーヌだった。大衆もアメリアを女王として、ロレーヌを宰相とした双頭体制を熱望しており、いくらすでに大きな権力を持っていたクロムウェルも民意を無視して宰相になる事はできなかった上に、アメリア自身がすでにロレーヌとの双頭体制の調整を始めていたのだ。

そこで当時、クロムウェルはある作戦を練っていた――それが、ロレーヌの暗殺だった。

元々病弱だったロレーヌに毒を盛って暗殺する計画を、クロムウェルは立てていた。急死しても病弱だった為に誰も疑わない。さらに裏から手を回して真実を握りつぶす算段もついていたのだ。それだけの事をやれる程、すでに当時の彼は絶大な権力を持っていた。

だが、そんな彼の計画に気づいている者がいた――それがアメリアだった。

しかしアメリアにはその計画を阻止する術はなかった。否、できたとしても第二、第三の暗殺を止められる確証がなかったと言える。

例え一度目の暗殺を阻止できたとしても、奴はトカゲのように手下を尻尾のように切って自らは法の届く範囲外に逃げてしまう。確たる証拠がなければ、彼を政界から追放する事もできない。

ロレーヌに話せばもしかしたら何か対抗策もできたかもしれない。彼女はアメリアと違って非情な決断を下せる人間だ。女王の特権でクロムウェルとその息の根の掛かった者を追放する事はできたかもしれない。だが当時、大臣などの多くがクロムウェル派だった為、その全員を追放しては国の運営ができなくなる可能性があった。それに元々病弱だった彼女にそんな負担を強いる事は、姉としてできなかったのだ。

アメリアは悩んだ末、当時禁断の恋人関係であったエッジとの駆け落ちを選んだ。

自分が姿を消す事で双頭体制構想自体が消える。王位継承権は妹のロレーヌへと移り、ロレーヌなら自分と違ってドジは踏まずに国を運営できる。そう信じていた。

確たる証拠がない為に憶測の域を出ないが、おそらくそれが真実

だ。
　でなければ、いくら好きな人と一緒にいたいが為に妹との約束や国民の期待を裏切ってまで国を飛び出すとは、あのお人好しでは到底思えない。
　それが、妹であるロレーヌと、その娘であるイリスの辿り着いた答えだった。
「……だから、恨んでなんかないわ。むしろ、あの人の決断のおかげで、私はここまで生きられた。あなたという大切な愛娘を、生む事ができた。恨むどころか感謝してるくらいよ――まぁ、何も相談しないで全部一人で決めていなくなってしまった事は、今でも不満だけどね」
　穏やかな表情のまま、ロレーヌはそっとイリスの頬を撫でる。その細い手は、かつてはもう少しふくよかで、柔らかかった。彼女の命が、残り少ない事を表すかのように、彼女の手はあまりにも細い。それでも、その温かさが、彼女が今を生きている何よりの証。
「……クロムウェルも老い先が短い。そんな奴に見切りをつける者も出始めている。妾は、ジェイドと共に奴を完全無力化してみせる。そして、真の意味でこの祖国を統治してみせる」
「あなたならできる。私は、無理やり押さえつけていただけだから、あなたに背負わせてしまう事になっちゃったけど。あなたなら、きっとこの国を守っていける。私は、そう信じている」
　愛娘イリスの頬を優しく撫でながら、ロレーヌは確かな確信と共に言った。この子なら、自分の娘なら、きっと大丈夫。きっと、やり遂げてくれる。そう、信じていた。
「妾は必ず、アルトリア史上最高の女王になってみせる。妾が、この国を必ずや良き未来へと導いてみせる。それが妾の責務であり、妾の夢じゃ」
　満面の笑顔と共に、イリスはそう宣言した。後の事は全部自分に任せてほしい。母が残したこの国を、きっと守り抜いてみせる。そんな想いが込められた言葉に、ロレーヌもまた優しげに微笑んだ。
「……生き別れた姉上が幸せに生きた事を知れて、そんな姉上の息子

であるクリュウと会えて。何より、あなたの確かな決意を聞けて、良かった――これで、私の心残りは全部なくなった」
　その温かくもどこか寂しげなロレーヌの声に、イリスの肩がピクリと震える。
「な、何を言っておるか。母上にはまだ、元気でいてもらわなければ困る」
　背を向けて、顔を見せないままに強がるように語るイリス。だがその背中は小刻みに震え、何かを必死に堪えているように見える。それが何かなど、母であるロレーヌは全てお見通しだ。
「イリス……」
　そっと、ロレーヌは彼女の手を掴んで抱き寄せる。彼女の弱々しい手でも簡単に引ける程に、イリスは脱力していた。そして抱き締めた彼女の体は、震えていて、耳元の口からは微かに嗚咽が零れる。
「……ほんと、あなたは泣き虫さんね」
「な、泣いてなどおらぬ……ッ」
「……ウソ、相変わらず下手ね」
　そう言ってロレーヌはイリスの体を強く抱き締めた。それは、彼女に残された最後の力に等しい。母にこれほどまでに強く抱き締められたのはいつ以来か。イリスは、溢れ出る涙を我慢する事ができなかった。
「母上、妾は母上の事が大好きじゃ……」
　嗚咽混じりでも、その言葉はハッキリとロレーヌの耳に届いた。娘の必死の言葉を、ロレーヌは噛みしめるように味わった後、一度うなずき、そっと彼女の頬に唇を触れる。
「私も、大好きよイリス――ありがとう」
「母上……ッ」
　泣きじゃくるイリスを前にロレーヌは、優しく微笑んだ。それはイリスが知っている母の笑顔の中で、最も美しい笑顔だった。
「……音楽が終わったら、明かりを消してちょうだい」
　――それが、ロレーヌの最期の言葉だった。

第１７９話　例えどんなに距離が遠くても　空は繋がってるから

ロレーヌ・アルトリア・ティターニアの葬儀は、彼女が存命であった事を知る極少数人で静かに行われた。すでに国葬は終わっている為、多くの花束が置かれる事もなく、本当の葬儀は簡易的に行われた。

王家の墓へと埋葬され、彼女が存命であった痕跡を消し、全てが終わったのは彼女の死から一週間の月日が流れていた。

姉妹岬（シスターポイント）。ラミリーズ湖に面した二つの岬が向かい合う特殊な地形をした岬であり、そこから見える美しい湖の風景と自然の豊かさから観光スポットとしても有名な場所だ。

連日多くの観光客が訪れる姉妹岬（シスターポイント）だが、その日はその賑わいはなかった。落盤事故で道が塞がれてしまったので入る事ができない――というのは建前で、本当はイリスの命令で民間人の出入りを禁止したからだ。

夏の花が咲き始め、また違った美しさを見せる岬に、イリスは立っていた。その隣には同じように湖を眺めるクリュウの姿が。

二人の頬を風が撫でる。その風は何も言わずに夏の訪れを教えてくれる。

「きれいな所だね」

「……元々は名もない岬じゃったが、三〇年程前に姉妹岬（シスターポイント）と名付けられたそうじゃ。きっと、母上と伯母上の絆から付けられたのじゃな」

いつものように動きやすい軽めのドレス姿に茶色いローブ姿のイリスが静かに語る。今はフードを取って、海風にその輝く銀髪を靡かせている。それは今は亡き、大好きな母親から受け継いだものの一つ。彼女の誇りだ。

「母上が亡くなって一週間。何かとドタバタとしておったが、ようやく落ち着いた頃合いじゃな」

「……今でも悔やまれるよ。僕が帰ってすぐに、亡くなったなんて」

「じゃが、お主には感謝しておる。母上が死ぬ寸前に、心残りを拭い去ってくれたのじゃから」
「僕だって、ほんのわずかだったとはいえ、叔母さんに会う事ができた。イリスには感謝してる」
「……ならば、礼と礼の相殺じゃ。もう言う事はあるまいて」
「そうだね」
二人並び立ち、時々お互いの方を見合いながら静かに海を見詰める。
この岬には今、クリュウとイリスの二人しかいない。封鎖している道の向こうに自分達がここに来る際に使った馬車を待機させているだけ。それはまさに、二人だけの空間だ。
「この一週間、色々とドタバタしたが……お主には感謝しておる」
「イリス。感謝は相殺したんじゃなかったの？」
「その礼とは違う。これは、妾個人の礼じゃ」
「イリスの？」
「……母を亡くして悲しみに暮れる妾を支えてくれたのはお主じゃ。夜、泣きじゃくる妾と一緒に寝てくれた事は本当に嬉しかった」
「……まぁ、母親を亡くす辛さは僕も経験者だからね。誰かが傍にいてくれるだけで、楽になる気持ちはすごくわかるから」
母を亡くして間もない頃、悲しさと寂しさで押し潰されそうになった事は何度もあった。だが幸い、自分は一人じゃなかった。もしも一人だったら、立ち直る事はできなかったかもしれない。
落ち込む自分を部屋から無理やり連れ出して散々振り回したエレナ。あの時は彼女の行動は鬱陶しいと思っていたが、今思えば彼女が無理やり外へと連れ回したからこそ立ち直る事ができたと思う。
そして何より、彼女がいてくれたから……
――私を見るのですクー君。クー君は、一人じゃないのです。私がクー君《家族》になってあげるのです――
落ち込む自分を立ち直らせてくれたのは、あの変わり者だけど優しかった姉のおかげだ。彼女の笑顔が、彼女の優しさが、暗闇に支配されていた自分の心に光を灯してくれた。

一人じゃない。それが、幼い頃のクリュウを支えてくれていた。
「――でも、乗り越えなくちゃいけないんだよ。僕も、辛いけど乗り越える事ができた。だからイリスも乗り越えなくちゃいけないし、イリスならきっと乗り越えられる。そう、信じてる」
「……そうじゃな」
フッと口元に小さな微笑を浮かべ、イリスはうなずく。
母を失った悲しみは計り知れない。落ち込むし、枕を濡らす事もある。だけど、決して立ち止まってはいけない。振り返る事はあっても、足を止めてはならないのだ。自分には、母が残してくれた《未来》があるのだから。
「……明日、帰るのじゃな」
「うん……」
アルトリアへ来て二週間程が経った。クリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィード、エレナの五人はそろそろ村へ帰る事を考えていた。
村を出発して、もう一ヶ月程が経った。レヴェリ領、エムデン、セクメーア砂漠、アルステェリアと移動時間や滞在時間はかなりのものだった。どうしても、それくらいの月日が経ってしまう。その間、村をツバメとオリガミに任せておいたが、そろそろ戻らないと彼にも悪いし、何より村人達を心配させてしまう。エレナが戻らないと酒場も機能しないのだから不便極まりない。
クリュウは話合いの末、このアルトリア王政軍国から出発する事を決めた。その日時が明日。すでにイリスには相談しており、彼女は『シェフィールド』で村の程近くまで送ると提案してくれた。飛行船を使えばイージス村までなら一週間と掛からずに行ける。村に直接帰れないのは、村の周りが森林地帯の為。飛行船が着陸できる場所は村から少しばかり遠い平原地帯でないとできないからだ。
最初こそイリスはクリュウが帰る事に愕然とし、「は、薄情者ッ」と泣きながら部屋へ立て篭ってしまったが、クリュウの長い説得の末に納得してくれた。真っ赤に腫れた目に涙を浮かべながら「寂しく、なるのぉ……」と力なく零した彼女の声は、今もクリュウの耳から離れない。本当は一緒にいてあげたいが、そうもできない――自分の故郷

は、ここではないのだから。
「中央大陸の北端にある村と、中央大陸南海に浮かぶ国。信じられない程に遠いのぉ」
「会いたい、と思ってもそう簡単に会える距離じゃないのは事実だよ。でも、決してもう会えない事はないからさ。それに難しいかもしれないけど、手紙も書くからさ」
　事情を察したフィーリアがエルバーフェルド政府経由でアルトリアへ手紙を出せるよう手配をしてくれると言ってくれた。あのフリードリッヒがそう簡単に首を縦に振るとは思えないが、おそらくカレンも賛同してくれるだろう。それにセレスティーナもきっと。
「……不思議なものじゃ。お主がこの国に来て妾と出会ってからはまだ半月と経っておらんのに、何じゃか昔からお主とこうして居る事が普通だったかのように思える」
「僕もだよ。本当にイリスが僕の妹のように思えるもの」
「妹か……、嬉しいような寂しいような」
「え？　何か言った？」
「何も言うておらん。じゃが、寂しくなる」
「……ごめんね」
「謝らなくて良い。例え住むべき故郷が違ごうても、お主と妾を結ぶ金と銀の竜の絆は決して消える事はない。この紋章が、妾達を結ぶ絆じゃ」
　そう言ってイリスは首に掛けた銀火竜のペンダントを掲げる。クリュウもそっと同じく首に掛けた金火竜のペンダントを握り締める。
　金火竜と銀火竜の紋章。かつて離れ離れになった二つの道は、二五年の月日を経て出会い、そしてまたそれぞれの道へと離れていく。でもその間には確かに今までにない絆が結ばれている。例え離れていても、繋がり続ける絆が。
「……いつでも良い。またこの国へ来いクリュウ。ここはお主の、もうひとつの帰る場所なのじゃからな」
「もちろん。イリスも、時間があったら僕の村に来てよね」
「無論じゃ。必ず、お主の生まれ育った村へ行くぞ」

「約束、だね」
「約束じゃ」
二人はそう言って向かい合うと、互いに握り締めたペンダントをカチリとぶつけて鳴らす。それが二人なりの約束の仕方だった。
「……そろそろ戻るぞ。あまり長居しておるとジェイドに怒られるからのぉ」
「そうだね。じゃあイリス、はい」
「うぬ」
クリュウが出した手を、イリスは嬉しそうに握り締める。
二人は手を繋ぎながら、姉妹岬（シスターポイント）を去る。
かつて、アメリアとロレーヌが城を抜け出しては遊んでいた場所。外でも本を読むロレーヌの頭に、アメリアが笑いながら花飾りを乗せた場所。二人の少女が、仲良く遊んだ思い出の場所――そして、その子供達の約束の場所。
海風が吹き、岬に建てられた幾つかの風車が今日もゆっくりと回っている。
その夜、イリスは盛大なパーティーを開いた。もちろん、明日には帰ってしまうクリュウ達の送別会だ。イリスの命令を受けて料理人達が腕によりをかけて作った料理がテーブルいっぱいに並べられる。その中にはクリュウがイリスとの約束を果たす為に作ったチーズフォンデュもある。
クリュウ達五人はもちろん、立案者のイリスにアリア、フェニス、シグマも揃う。皆絶品の料理を食べながら最後の夜を過ごしていた。
「クリュウ」
チーズフォンデュの置かれたテーブルで、エレナに教わりながら悪戦苦闘しながらもチーズフォンデュをおいしそうに食べているイリス。そんな彼女を見ながら高級リュウノテールをじっくりと煮込んだビーフシチューの骨付き肉をおいしそうに頬張っていたクリュウは名前を呼ばれて振り返る。するとそこにはきれいにドレスアップしたアリアが立っていた。純白に胸元や所々に黒いレースが入ったゆったりとした印象のドレスに、白いレースで作った花を飾り立てた

黒色のシュシュで右寄りのサイドテールに髪を纏めている。いつもと違う美しい彼女の姿に思わずクリュウは見とれてしまった。
「ど、どうですの？　わ、私のドレス姿。似合ってるかしら？」
　恐る恐るという感じで尋ねるアリアの問い掛けに、クリュウはハッとなって改めて彼女の姿を見た後、少し照れながら「に、似合ってると思う」と答えた。するとアリアはそんな彼の返事に「そうですの。良かった」と頬を緩ませた。
「前のドレス姿も良かったけど、今の方がすごくきれいに見えるよ」
「ほ、褒め過ぎですわ……ッ。そんな風に言われてしまうと、恥ずかしくなってしまうわ」
　クリュウの絶賛にアリアはカァッと顔を真っ赤にしておろおろとする。そんならしくない彼女の反応にクリュウは首を傾げた。
「それで、どうしたの？　何か僕に用だった？」
「え？　あ、別に特に用というものはないのですけど……」
　クリュウの問い掛けにアリアは微妙な返事を返す。クリュウが不思議がっていると、意を決したようにアリアは話題の口火を切る。
「明日、帰ってしまいますのよね」
「うん。そろそろ帰らないとまずいからね」
「寂しく、なりますわね……」
「イリスにも言われたよ」
「……っていうかあなた、すっかり我らが王を呼び捨てね」
「まぁ、従兄弟だしね。イリスもそう呼べって言ってるし……あの総軍師さんにはいつも睨まれるけど」
　皿を置いてアリアと向かい合うようにしながら苦笑を浮かべるクリュウ。アリアはそんな彼を見てフッと口元を綻ばせた。
「まだ信じられませんわね。あなたが、王家の血筋を引く人間だなんて」
「血統ではそうだけどさ。でも、僕に王位継承権はない。ただの平民だよ」
　すでにクリュウは血の繋がりがある限り継承される王位継承権を放棄している。例えアルトリア王家の血が流れていても、これでク

リュウは決してアルトリアの王になる事はない。そもそもアルトリアは女性統治国家なので、男が王になる事はまずないのだが。念には念を入れておいた。
「そうですわね。でもきっと、初めてあなたに会った際に抱いた妙に感じた既視感は、本能的にあなたの血を感じ取っていたのかもしれませんわね――私と同じ、王家の血を」
「ヴィクトリア家も、元々は王家の血筋なんだよね」
「えぇ。と言ってもずいぶん昔に交わったから、今の王家の血とはずいぶん異なってしまうけど」
「それじゃ、ある意味僕とアリアも親戚みたいな感じになるのかな」
「……それは、お断りですわね」
　アリアの言葉にクリュウは少なからずショックを受けた。自分と親戚だと言われるのがそんなに嫌なのか。自分の行いが何か彼女に嫌われたのか、何も思いつかず困惑する。そんな彼の様子を見て、アリアはポツリと零す。
「……親戚になんて、なりたくありませんわ」
　彼女の胸の中で渦巻く複雑な乙女心。クリュウには理解できない、乙女達が抱く葛藤。
　黙り込むアリアを前にクリュウは話題を変えようと努めて明るく振舞った。
「アリアはもう、ハンターはしないの？」
「え？　そうですわね。私にはヴィクトリアの家を継ぐという役目がありますから。でも、二度と剣を取らない訳ではありませんわ。私の夢は、領民の為に自ら先頭に立って戦う領主ですもの。領地に現れたモンスターは、この私が全て薙ぎ払ってみせますわ」
　そう言ってアリアは少し強気な笑みを浮かべた。それは決してハンターと呼べる道筋ではない。でもどこかハンターとしての志が残っている夢。全く違う道へと進む訳ではなく、どこかに自分と同じ志がある。それを知り、クリュウは少しだけ安心した。
「そっか。ならいつか、僕と一緒に狩りもできるかもね」
「そうですわね。その時は、せいぜい私の足を引っ張らないでくださ

いね」
「現役のハンターを前に自信あるねぇ。まぁ、その自信に満ちていつも輝いている所が、君の素敵な所だと思うけどさ」
「……ッ!?　あ、あなたという人は無神経過ぎますわ……ッ」
　クリュウの何気ない褒め言葉にアリアは顔を真っ赤にして狼狽える。こういう事を何の予備動作もなく平然と言ってしまう所がクリュウらしいし、昔から全くもって進歩していない。この言動に、彼を取り巻く乙女達は皆振り回されてきた。それはアリアとて例外ではない。
　クリュウはなぜアリアが怒っているのかわからず首を傾げている。そんな何もわかっていない様子のクリュウを横目に見て、アリアは一人ドキドキしながらため息を零した。
「あ、そうだ。アリアにもちゃんと手紙書くから」
「手紙……？　あ、そうですわッ！　あなた、卒業後一度も私に手紙を送らないなんて、どういう了見ですのッ!?」
　クリュウの発言にアリアはハッと思い出すと、急に怒り出してクリュウの首根っこを掴んだ。ガクガクと彼を前後に揺らして「薄情ですわッ！」「ひどいですわッ！」と怒るアリア。だがクリュウは「ちょ、ちょっと待って……ッ！」とそろそろ首が締まりそうな彼女の手をどける。
「手紙を送るにしても、アリアどこに住んでるか言わなかったじゃないか」
「……え？　言って、ませんでしたの？」
「うん。シグマとフェニスと同郷って事しか」
　一瞬の沈黙。二人共黙ってお互いを見詰める時が数秒と流れた。だがそれはまたしても急に顔を真っ赤にして慌てふためくアリアの声で壊された。
「えぇッ!?　私、あなたに住所とか言ってませんでしたのッ!?」
「うん。国名すら告げずに別れちゃったから……」
　アリアは自分の凡ミスが恥ずかし過ぎて顔を真っ赤にしながらがくりとうな垂れた。一年間、ずっと彼からの手紙を楽しみにしていた

のに。それが来なくて何度怒ったかわからない。それが全て、自分の信じられないような凡ミスのせいで起きていた。恥ずかし過ぎて彼と目を合わす事もできなかった。
「だ、大失態ですわ……ッ」
「まぁ、僕も別れ際に訊かなかったのもいけないし。今回の事で君の居場所もわかったからさ、これからはちゃんと手紙を書くようにするよ」
　クリュウが笑顔を浮かべながら言うと、アリアは頬を赤らめて視線を少し彷徨わせた後、恥ずかしそうに顔を俯かせながら小声で「お、お願いしますわ……」と答えた。
「うん。まぁ、お互い忙しい身だからあまりやり取りはできないかもだけどね。距離も離れてるから届くのに一ヶ月とか掛かるかもしれないけどさ」
「そ、それでもッ」
　突如アリアは顔をバッともたげると、驚く彼を前に彼女は必死な表情で見詰めながら、決意に満ちた瞳を輝かせる。
「――必ず、手紙を書きますわ」
「……うん。僕も、きっと書くよ――」
「約束、ですわよ？」
「うん。約束だ」
　クリュウの言った《約束》という言葉に、アリアは嬉しそうに笑みを浮かべながらうなずいた。心から喜んでいるからこそ生まれる、本当の笑顔。それはとても素敵で、可愛らしくて、眩しい笑顔。アリアのそんな笑顔を見て、クリュウもまた嬉しそうに微笑んだ。
「――おぉ、クリュウ。楽しんでおるか？」
　そんな二人のいい感じの雰囲気にも気づかず、堂々とした歩みでイリスがやって来た。女王陛下を前にアリアは一瞬で姿勢を正すが、クリュウはそんな素振りを見せる事もなく「うん、楽しんでるよイリス」と全くのフランクで接した。
「そうかそうか。それは重畳じゃ」
　クリュウの返事に嬉しそうに笑うイリス。そんな彼女と彼を見比

べ、イリスは感心半分呆れ半分という具合にため息を零した。
「クリュウと我らが女王陛下が……何だか妙な気分ですわね」
「この後には軍楽隊の演奏があるのじゃ。我が国の軍楽隊の練度は高く、それは見事な演奏をしてくれるはずじゃ」
「そうなんだ。それは楽しみだね」
「そ、そこでなのじゃが――ど、どうだ？　その時に妾と一緒に踊らぬか？」
　そう言ったイリスの頬はほんのりと赤らみ、視線は彼を直視する事ができずに右へ左へと彷徨わせている。クリュウはそんな彼女の誘いに特に考える事なく「別にいいけど、僕はダンスうまくないよ？」と気軽に答える。
「も、問題ない。舞踏会という訳ではないのじゃから、楽しめればそれで良い」
「ふぅん、イリスは僕と踊れば楽しいの？」
「む、無論じゃッ」
「そっか、ならいいよ」
　笑顔で了承するクリュウの返事にイリスはパァッと顔を華やかせ、
「そ、そうか。この妾と踊れるのじゃから、光栄に思うが良い」と嬉しそうに胸を張る。クリュウはそんな彼女を見て苦笑を浮かべる。
　一方、そんな二人の様子を横目に見ていたアリアの表情は冴えない。楽しげに会話する二人を、どこか心配そうに見詰める。
「何だか、嫌な予感がしますわ……」
「……同感」
「え？　ひゃあッ!?　さ、サクラ？」
　いつの間にか背後に立っていたサクラに驚き、距離を置くアリア。サクラはそんな彼女に一瞥をくれて、再び先程までと同じようにクリュウとイリスを見詰める。
「……あの小娘、危険」
「我らが陛下に向かって小娘って……でも、私も同意見ですわ」
　サクラの無礼っぷりにはすっかり慣れた様子のアリア。彼女と同じようにしばらくそうして不安げにクリュウとイリスの二人を見詰

める。
　部屋の大扉が開き、軍楽隊の面々が入って来た。それを見てイリスはクリュウにそっと手を差し伸べる。その様はまだ幼いながらも、舞踏会の貴婦人さながらの高貴さを感じさせる。
「クリュウ。では、一曲妾と踊ってたもれ」
「お任せください、お姫様」
　軍楽隊の演奏が始まると同時に、クリュウとイリスは踊りだす。うまくないと言っていたクリュウだが、特別うまいという訳ではないが何とか様にはなっていた。学生時代にはルフィールを始め、シャルルやアリアとも踊った事があるなど結構経験豊富なクリュウ。独学の踊り方だが、イリスに恥をかかせる事はなかった。
　イリスも社交ダンスは作法として習っているのか、優雅に踊ってみせる。そんな二人の姿はとても輝かしく見える。
「うふふふ、お似合いな二人じゃない」
「いいのかアリア？　俺達のお姫様、ありゃクリュウに惚れてるぞ？」
「こ、子供如きに負けるような失態は犯しませんわ」
「……甘い。子供の方が、クリュウは親しく接する。貴様はそれを指を咥えて見詰めるしかない苦しみを知らない」
「リリアちゃんですね。あの子は特別だと思いますが……確かに、地獄でした」
「ロリコン疑惑もあるし、あいつ」
　いつの間にかアリアの周りに集まるフェニスとシグマ、それにフィーリアやサクラ、エレナまでもが揃って二人のダンスを羨ましげに、警戒するように見詰める。
　少し離れた場所ではそんな恋姫達の様子に苦笑しながらシグマが一人用意されたローストビーフを一枚皿へ移していた。
「私にも一枚、よろしいか？」
「あぁ？　あぁ……」
　トングを下ろそうとした時、隣からそう声を掛けられて振り返ったシルフィードは驚いた。そこにいたのはイリスの右腕、総軍師のジェイドだった。その隣では補佐官のエイリークがなぜかこちらを睨み

つけていた。
シルフィードが一枚トングを使ってローストビーフを皿へ移して差し出すと、ジェイドは「かたじけない」と礼を述べて受け取る。
イリスとクリュウが踊り終わると、今度は待ってましたとばかりにアリアやフィーリア達が一斉にクリュウに向かって一緒に踊ろうと群がる。あっという間にクリュウは取り囲まれてしまい、イリスは弾き飛ばされてしまう。が、すぐさまその群集の中に飛び込む。
そんな騒がしい彼らをシルフィードは苦笑混じりに呆れながら見詰めていた。その隣に、そっとジェイドが立つ。
「……色々と失礼な振る舞いをしてしまい、申し訳なかった」
突如ジェイドはそう言ってシルフィードに向かって頭を下げた。隣ではエイリークが仕えるべき主君が頭を下げた事に驚いて右往左往しているが、シルフィードは食べていたローストビーフを静かにテーブルの上に置いた。
「別に私が謝られる事は何もない。非礼を詫びるつもりならクリュウに言ってくれ――まぁ、あいつはそういう事気にしない質だから、無駄だろうがな」
「……クリュウ・ルナリーフ。私はあの男は好きになれん」
「ふむ、これはまた珍しいな。クリュウを嫌いになる人間がいるとは」
シルフィードが知る限りでは、彼の事を嫌う人間というのは一人もいない。それだけ彼は人に好かれやすい子なのだ。だからこそ、彼を嫌うと言ったジェイドを物珍しげに見詰める。
「クリュウの何が気に入らない？」
「……私にできなかった事をしたから、だな」
「できなかった事？」
「……陛下はロレーヌ様の命が短い事を知っていた。母の死が近いのに、助ける事も傍にいる事もできない。その苦しみから、陛下はここ数ヶ月ずっと笑う事はなかった――だが、あの少年はそんな陛下を笑顔にした。あんなに楽しそうな陛下を見るのはいつ以来か。それが、何だか悔しくてな」
ワインを一口飲みながらそう語る彼の姿は、これまで彼らに見せて

いた厳しい表情とは一転して、どこか肩の荷が降りたかのようなスッキリしたようなものに変わっていた。
「だが、感謝はしている。我らが愛しき陛下に笑顔を取り戻してくれた事。まぁ、面と向かって言うつもりはないがな」
そう言って切り分けたローストビーフを一口食べるジェイド。隣に立つエイリークはそんな彼を心配そうに見詰める。
「長官……」
「彼は明日、自らの故郷へ帰るのだろう？　そうすればきっと、陛下はまた笑顔をなくしてしまうかもしれない。だがその時は、今度こそ陛下の右腕として、陛下の笑顔を守ってみせる」
「――悪いが、それはないと思うな」
新たな決心を抱くジェイドを前に、シルフィードは彼と同じワインを一口飲みながらハッキリとそう言い切った。驚く彼の視線を一瞥し、彼女は楽しそうに笑っているクリュウとイリスを見詰める。
「陛下はきっと、大丈夫さ。クリュウとの絆がある限り、きっと闇に堕ちる事はない。前を見据えて、きっと笑顔を失う事はないさ」
そんな自信に満ちた表情で言う彼女の言葉に一瞬呆けていたジェイドだが、小さくため息を零すと、小さく苦笑を浮かべた。
「……私の出番はなし、という訳か」
「まさか。彼女はまだ幼い、摂政である総軍師殿の仕事はまだまだこれからさ」
シルフィードの言葉に静かに「そうか……」とだけ零すと、ジェイドはグラスと皿をテーブルに置いてその場を去る。その後をエイリークが慌てた様子で追い、二人は扉を開いて会場を出て行く。
閉じられた扉を見詰めながら、シルフィードは感心半分呆れ半分という具合にわずかな苦笑を浮かべた。
「……周りの気持ちに気づかない所。なるほど、どうやらアルトリア王家の血筋が原因らしいな」
そんな部分までもよく似た二人の様子を、シルフィードは静かに見守る。
どうやら決着がついたようで、順番に踊る事になった様子。トップ

バッターはフィーリアだったらしく、クリュウと向かい合いあって踊りだす。すごく照れて頬を赤らめながらもそこは貴族の娘。慣れた様子で美しく踊る。
スーツ姿のクリュウに、女性陣はみんなドレス姿だ。その例外と言えば彼と同じくスーツ姿の自分やシグマくらいなものだ。
楽しそうに踊るフィーリアの姿を見て、ふとシルフィードは自分の姿を見直す。フィーリア達のようにきれいなドレス姿ではなく、まるで男装をしているかのようなスーツ姿。もしも踊るとすれば、ものすごく的外れな服装だ。
ドレス姿がよく似合い、クリュウと優雅に踊ってみせるフィーリアが、少しだけ羨ましいシルフィードであった。
その夜、クリュウはイリスの部屋にいた。ベッドに横になり、その隣では彼に寄り添うようにしてイリスが横になっている。この一週間ずっと、こうしてクリュウとイリスは一緒のベッドで眠っていた。
当初はフィーリア達の激しい反対があったが、クリュウ自身が残り少ない日数をイリスと少しでも一緒にいたいと言い、イリスもそれを願っていた事からフィーリア達も強く反対する事ができず、渋々了承している。余談だが、この一週間クリュウの寝込みを襲えずにサクラが枕を濡らしたり、フィーリアやエレナが不安やイライラから軽い睡眠不足になっていたり、他の恋姫達に少なからず影響があったりする。
部屋の中は暗く、月明かりだけがほのかに照らすだけ。すでに消灯して数分経つが、一向にクリュウは訪れない眠気に飽き飽きしていた。閉じていた瞳をゆっくりと開き、すでに見慣れた天井を見上げる。ふと視線を横に向けると、隣でイリスがスゥスゥと小さな寝息を立てて眠っていた。その小さな手はしっかりと自分の寝間着の裾を握り締めていた。その姿に、思わず笑みが浮かぶ。
「……人の寝顔を見てニヤけるとは、お主は趣味が悪いのぉ」
「うわッ!? お、起きてたの?」
実は起きていたイリス。自分の寝顔を見てニヤけていたクリュウをジト目で見詰める。そんな彼女の視線にクリュウは「べ、別にそう

いう訳じゃないんだけど……」と目も合わせられずに笑って誤魔化す。
「何じゃ。眠れぬのか？」
「まぁね。イリスも？」
「そうじゃな。明日にはこうしてお主と一緒に眠る事もできぬ……そう思うと、眠れなくてな」
「イリス……」
「覚悟は決めておったはずじゃが、案外妾も寂しがり屋じゃな」
　そう言ってイリスは力なく笑う。その笑顔はどこか力なく、弱々しい。昼間には決して見せぬ、彼女の弱い一面。闇夜の中の怯えから現れるそのもう一つの彼女の姿に、クリュウは「ごめん……」と謝る言葉しか浮かばなかった。
　イリスは最愛の母を失ってまだ間もない。なのに明日には彼女の心の支えの一人になっている自分も故郷へと帰ってしまう。彼女を一人にしてしまう、そんな罪悪感が彼の胸の奥には常にあった。だからこそ、彼の口からはそんな言葉しか出て来なかった。
「……仕方ないのじゃ。お主と妾では故郷が違う。いつまでも一緒には居られんじゃ。わかっておったはずなのに……胸が痛いのぉ」
「イリス……」
「未練がましい事は重々理解している。じゃが、お主はもはや妾にとっては大切な人じゃ。失うのはあまりにも大き過ぎる程にのぉ」
「家族、だからね……」
「――クリュウ。妾は今程自分が女王という不自由な身である事を恨んだ事はないのじゃ」
　ギュッと、服の裾を握り締める彼女の拳に力が込もる。微かに震えるその拳に、クリュウはそっと自らの手を重ねる。
「そんな事言っちゃダメだよ。ロレーヌさんが悲しむし、君の夢は立派な女王になる事でしょ？　だったら――」
「そんなものを度外視する程に、妾はお主の事が好きなのじゃッ！」
　説得しようとするクリュウの、そんな言葉など聞きたくない。そんな想いが爆発し、イリスは悲鳴を上げるようにしてそう叫んだ。その

声に驚き押し黙るクリュウの胸元を掴み、イリスは涙でいっぱいになった瞳で彼を見上げる。
「離れとうないッ！　離れとうないのじゃ……ッ！」
すがりつくように声を震わせ、必死になって彼女はそう訴えた。その必死な声と表情に、クリュウは返す言葉も失い黙りこんでしまう。何も答えてくれない彼を見て、イリスの頬を大粒の涙が零れ落ちる。
「妾はただ、お主と一緒にいたいだけなのじゃ……ッ」
「イリス……」
クリュウは弱々しく自分にすがりつく声を震わせるイリスを、無言でそっと抱き締めた。腕の中で「クリュウ……」と小さな声で自分の名前を呼ぶ彼女を、ただ優しく抱き留める。
「ごめんね。本当に、ごめん……」
罪悪感で胸がいっぱいになる。腕の中にいる一人の小さな少女をこんなにも悲しませ、泣かせてしまった自分の選択は間違っていたのか。
村に帰りたい。この気持ちは本当だ。自分の役目は故郷の村の安全を守る事。父や母が守って来た村を、今度は自分が守る。そう決めて、ドンドルマのハンター養成訓練学校に行き、ハンターとなった。
間違っているとすれば、それは自分がここへ来た事だったのか。母の事を知りたい、そう願ってこのアルトリア王政軍国へと来た。だが、それは間違いだったのかもしれない。悲しむイリスの顔を見ていると、そんな想いが胸を満たす。
自分がこの国へ来なければ、彼女と出会わなければ、きっと、イリスを悲しませる事はなかった。そんな後悔が、頭を過ぎる。
「……すまぬ」
「え？」
「――お主に、そんな辛い顔をさせるつもりはなかったのじゃ」
一体、自分は今どんな表情を浮かべているのだろう。先程までとは違った悲しみに満ちた表情で自分を不安げに見上げるイリスの視線。心なしか、先程までよりも悲痛そうに見える。
「……妾は、バカじゃの。自分のわがままで、大切なお主を苦しませて

おる。本末転倒もいい所じゃ」
「いや、別に僕は……」
「……わかっておる。お主にはお主の故郷があり、役目があるのじゃろ？　お主は優しい奴じゃから、妾と村の間で板挟みになって苦しんでおる。違うか？」
　クリュウは、何も答えられなかった。だがその無言が、彼女にとっては肯定の意味を持っていたのだろう。静かにうなずき、次に顔を上げた時にはその表情は幾分か柔らかいものに変わっていた。
「――真にお主の事が好きなのなら、お主の夢や役目を尊重し、応援すべきじゃな」
「イリス……」
「……寂しいが、この世界のどこかでお主ががんばっておる。そう思えば、少しはこの寂しさも紛れるというものじゃ」
　そう言ってイリスは静かに窓の外を見詰める。その先に広がるのは夜の星空。世界のどことも繋がっている唯一のもの、それは空だ。凍てつく永久凍土でも、灼熱の火山地帯でも、その上に広がる空は同じ一つのもの。空は繋がっているのだ。見上げれば、同じ空がそこにはある。
「――じゃからクリュウ。妾の事、決して忘れないで」
　そう言って振り返る彼女の顔は、不安で押し潰されそうな程に弱々しく、瞳を震わせていた。
　忘れてほしくない。そんな必死な想いが、その瞳から感じ取れる――だからこそ、クリュウは笑顔で言い切った。
「――当たり前でしょ。絶対に忘れないよ、約束する」
　忘れたりなんて、するものか。ここで一緒に過ごした時間。唯一の親類であり、自分にとって本当の意味での妹のような存在。優しき小さなお姫様――決して、忘れる事なんてない。
　クリュウの言葉にイリスは嬉しそうに笑った。瞳の端に浮かんだ涙はきっと、温かい涙だと願いたい。
　クリュウは涙を流して喜ぶイリスの頭を優しく撫でながら、自らの首に掛けられた金火竜のペンダントを取ると、そっと彼女の首に掛け

た。
「これは……」
「これはイリスに預けておくよ。次に会う時に返してくれればいい。約束を果たす為の証だよ」
　胸元に輝く母の形見の銀火竜のペンダントと、クリュウの金火竜のペンダント。かつて分かれた二つの紋章が一つの場所で輝いていた。
「じゃ、じゃがこれはお主の母親の大切な形見じゃ。受け取れん」
「元々これはこの国にあるべきものだ。きっと、僕が持っているよりもイリスが持っていた方が意味がある。だから、君が持っててよ」
「じゃが……」
「確かに大切なものだけど。母さんとの思い出はそれだけじゃない。僕が住む家やアルバム、お皿にテーブルに。大きく言えば村だってそうだ。何より、僕には母さんとの思い出っていう何にも代え難い宝物がある。だから、大丈夫」
「クリュウ……」
「まぁ、あげるつもりはないから預けておくんだよ。いつかちゃんと返してもらう――だから、また会えるさ」
　そう言って笑顔を浮かべるクリュウを見て、イリスはフッと口元に笑みを浮かべた。
　何というか、クリュウはすごいと思った。噂に聞くアメリアそっくりだ。簡単に人を笑顔にして、虜にしてしまう。優しさと思いやりに満ちた、本当にすごい人。
　自分やロレーヌではまだまだ足りない、心の底から人の為にがんばれる優しさ。それが、彼を輝かせ、温かくさせる。
　こんな男だからこそ、きっと――
「大切なものだからこそ、預ける価値がある。その、クサいセリフかもしれないけど、それを僕だと思って大切にしてくれたら、嬉しいかな」
　自分でクサいセリフと言っているだけあって、クリュウは恥ずかしそうに頬を赤らめながらそう言った。そんな彼の姿が何だか可愛らしくて、つい顔が綻んでしまう。
「――大切にするに決まっておるじゃろ。これは妾の宝物にする」

そっと両手で包み込むようにしてイリスは金火竜のペンダントを手に持ち、微笑みながら言う。そんな彼女の笑顔と言葉に、クリュウも安心したように微笑む。
「そろそろ寝ようか。明日、お互いの目に隈がついてたらいけないしね」
「そうじゃな……」
お互いに半身を起こしていた二人は、ゆっくりとその身を横に寝かす。
横になり、ちょうどいい具合に眠気が訪れる。重くなるまぶたをゆっくりと閉じかけた時、ギュッと腕を抱き締められた。見ると、イリスが腕に抱きつくようにして眠っていた。その寝顔は、とても幸せそうに見える。そんな彼女の寝顔を見てクリュウは優しげに微笑むと、そっと彼女の髪を撫で、その小さな体を抱き締める。
お互いに抱き合うような形で、二人は眠りにつき、最後の夜が過ぎていった――

第１８０話　約束の空への旅立ち　悲しみの先にある答え

そして、別れの朝はやって来た。
早朝、ラミリーズ湖の畔にありロサイス軍港に停泊中の飛行巡洋艦『シェフィールド』のボイラーには火がともり、煙突からは機関が動いている証の黒煙が猛々と立ち上っていた。プロペラはゆっくりと周り、静かな朝に羽音を響かせる。
今まさに出航の準備を整えつつある『シェフィールド』を前に集まる面々。二つに別れ向かい合うは、一方はこれから『シェフィールド』に乗ってこの国を去ろうとしているクリュウ達。そしてもう一方は、そんな彼らを見送るイリスやアリア達。
「艦長。必ずやクリュウ達を無事に村まで帰すのじゃぞ」
「ハッ」
イリスの激励に艦長は見事な敬礼で答える。それを見て満足気にうなずくと、イリスはゆっくりと視線を変える。その先では涙ぐむアリアと今まさに別れの挨拶をしているクリュウの姿がある。
「クリュウ。風邪など引かぬよう、体には気をつけるんですのよ」
「アリアもね。君はがんばり屋さんだから、無理はしちゃダメだからね」
瞳を濡らしながら、本当は泣いてしまいそうなのを堪えて努めて笑顔を振る舞うアリア。その後姿を、親友のフェニスとシグマが微笑みながら見守る。
「クリュウ。テメェは次ぎ会う時までに少しはその鈍感な性格を直しておけよ。振り回される方の身にもなれって」
「え？　僕って、何か鈍感なの？」
心底わからないという様子で首を傾げる彼を見て、シグマは呆れ返ったように大きなため息を零す。その隣で「まぁ、今更な気もするけどね」とフェニスもまた少し呆れた様子で耳打ちする。
そんな二人の親友を一瞥し、アリアは再びクリュウと向き合う。

きょとんとしている彼を見て、アリアはフッと口元に優しげな笑みを浮かべた。
「……また、会えますわよね」
「もちろん。いつかまたこの国にも来るし、今度はアリアが僕の村に来ればいいよ」
「うふふ、そうですわね。その日が来るのを、楽しみにしてますわ」
微笑みながら、アリアはまるで彼の姿を目に焼き付けるかのようにクリュウを見詰め続ける。だがそれも辛くなったのか、アリアはじわりと目の縁に涙がいっぱい溜まると顔を隠すように慌てて視線を逸らすと、そのままシグマとフェニスへと駆け寄って抱きついた。
二人はがんばったアリアを慰めるように抱き締め、彼女のクリーム色の髪を優しく撫でた。そんな三人の様子をクリュウは怪訝そうに見詰める。
「アリア……？」
「まったく、オメガの娘が言う通りお主は少しその鈍感さを何とかせんといかんな」
そんな彼に呆れながら近づいてきたのはイリスだ。いつものように軽装備のドレス姿で王冠にロッドという、見るからに高貴な人とわかる出で立ちだ。子供がしていると妙に滑稽に見える姿だが、彼女がしているとなぜかしっくり来る。それが本当に高貴な血を持つ者の風格なのだろうか。
「僕って、何か鈍感なの？」
イリスの指摘にクリュウは振り返って背後に控えているフィーリア達に尋ねるが、返って来るのは彼女達の意味深なため息の音だけ。首を傾げる彼を見て、イリスは苦笑を浮かべる。
「ほんに、お主という奴は……」
呆れつつも、それでも実に彼らしい姿に対してイリスはどこか諦めたような笑顔を浮かべる。これがクリュウ・ルナリーフ、自分の従兄弟なのだと割り切っているようだ。
「――クリュウ」
名を呼ばれ、クリュウは振り返って改めてイリスと向き合う。自分

を見詰める、遠い異国の地で女王として君臨している従姉妹のイリス。今思い返してみても、実に信じられないような、まるで小説の中の世界のような物語――だがこれは全て真実の物語であり、今目の前にいるのは確かにこの国の女王であり、自分の従姉妹であるイリス・アルトリア・フランチェスカだ。
「向こうに帰っても、達者で暮らすのじゃぞ」
優しげな微笑みと共に言う彼女の言葉にクリュウも「イリスこそ。君もアリアと同じで無茶しがちな所があるから、気をつけるんだよ」と微笑み掛けた。
「何じゃそれは。アルトリアの女王を心配するなんて、お主も出世したものじゃな――じゃが、そうして心配してくれるお主の気遣い。何とも心地良い」
嬉しそうに無邪気に微笑む彼女を見て、クリュウは心の底から安堵した。その表情には昨晩のような暗さはなく、心の底から笑っているように見える。辛いのには変わりはないだろうが、それでも前を向いて歩き続ける覚悟を、彼女はもうしているらしい。
「総軍師さん。イリスの事、お任せしましたよ」
「フン、貴様に言われるまでもない」
クリュウの言葉にジェイドは不機嫌そうに鼻を鳴らして視線を逸らす。その隣ではいつもの彼らしからぬ態度がおかしいのか、エイリークがくすくすと笑っていた。いつも厳しい表情の彼女の笑顔を、クリュウは初めて見たが、それはただの歳相応な少女の楽しげな笑顔であった。
「……何を余所見しておるかお主は」
ジェイドとエイリークを見ていたクリュウの態度が気に入らなかったのか、イリスは不貞腐れたように頬を膨らませると、自分を見ないクリュウの両頬を掴んで無理やり自分の方を向かせる。驚く彼を至近距離で見上げるイリスの表情は、とっても不機嫌そう。
「い、イリス……？」
「お主の別れ際の顔を覚えておきたいのじゃ――じゃから、今は妾だけを見てるのじゃ」

頬を膨らませて怒る彼女を見て、いくら鈍感なクリュウでもそれがやきもちである事はすぐにわかった。何とも子供っぽくて可愛らしい彼女の姿に、思わず笑みが浮かび、彼女の銀髪を優しく撫でた。
「ごめんごめん。ちゃんと君を見てるからさ」
「う、うむ。それなら良いのじゃ」
クリュウに見られているのが嬉しくも恥ずかしいのだろう。頬を赤らめて、イリスはくすぐったいような笑みを浮かべた。だがいざジッと見られているのも恥ずかしくて仕方がなかったらしく、イリスは「そ、そうじゃッ」と突然声を上げた。
「お主に渡す物があったのじゃ――ジェイド、例の物を持って参れ」
「ハッ」
イリスの命令を受けてジェイドは彼女達が乗って来た馬に備えられた荷物の中から何かを取り出す。布に包まれたそれはそこそこ大きな品だ。イリスはジェイドからその品を受け取ると、両手で抱き締めてクリュウへと近づく。
「お主の宝物はしばし預かった」
そう言ってイリスは胸元に下げている二つのペンダントのうち、クリュウから預けられた金火竜の紋章を一瞥し、再びクリュウを見上げる。
「然（しか）らば、お主には我が王家の秘宝を授けようと思う」
「ひ、秘宝ッ!? いや、そんな物を貰っても……ッ」
「遠慮するでない。それに、お主の方がこれを使いこなせると思うのじゃ。受け取れ」
そう言ってイリスはその品をクリュウに押し付ける。思わず受け取ったクリュウだったが、その品の重みや形状に、初めて持ったはずなのに何だか慣れ親しんでいるような妙な安心感を感じた。
「こ、これって……」
「布を取ってみぃ」
言われた通り、品に巻かれている布を取ると――
「これって……」
「かつて蛮族に支配されたこの地を解放し、アルトリア王国を建国し

た初代女王ヴィルヘルム・アルトリア。当時彼女は双子の守護竜を使役していたのじゃ。独立戦争の前、彼女は山に住みし美しき双子の竜と戦って見事勝利し、その双子の竜を自らの守護竜としたと言われている。これはその双子の守護竜が認めたヴィルヘルムに与えたと言われている伝説の秘剣、我が王家の宝具――銘（な）を《煌竜剣（シャイニングブレード）》と言う」

それは、まるで芸術品のように美しい剣であった。

銀火竜の甲殻の中でも特に選りすぐった素材、銀火竜の堅殻で峰を飾り立てると同時に安定感と強度を高め、何より眩い銀色の煌きで見る者全てを圧倒する荘厳さを生み出している。触れるだけで如何なる物も切り裂いてしまいそうな鋼色の刃を綺羅びやかに輝かせたその剣は、見るだけでそれが強力な剣である事がわかる。

剣と対を成すのは、同じように選りすぐった眩い程に輝く金色の盾。金属製のシールド部分に金火竜の堅殻を用い、神々しさはもちろん武器としての耐久性も並みのものではない。マグマの熱にも耐える火竜の、それも希少種の堅殻を用いたこの盾で防げぬ火力はないと断言しても言いだろう。

武器としても、美しい芸術品としても一級品。それはまさにアルトリア王家が宝具と認定するだけの事はある、まさに秘剣であった。

「煌竜剣（シャイニングブレード）……」

「お主は片手剣使いと聞く。ならばこの武器を有効に使えると思ってのぉ。この武器はずっと我が王家の宝物庫に眠っておってな。武器なら武器らしく、使われるのが本望じゃと妾は思う。ならば、信頼出来るお主に譲渡するのが一番じゃと思ってな」

「いや、でも……」

すごい武器を前に渋る彼を見て「安心せい。その武器は人殺しの武器ではなく、建国後に国内に出没するモンスター討伐の際に使っていた武器じゃよ」と彼の抱くであろう不安を先に払拭するイリス。だが、クリュウは首を横に振った。

「これ、僕が持つにはすご過ぎる武器だよ。とてもじゃないけど、扱い切れない」

見ただけでもこの武器は銀火竜と金火竜、それも熟練の竜からしか剥ぎ取れない堅殻を用いた武器だとわかる。亜種はおろか、通常種でさえ未だに苦戦するようなレベルの自分が持つには、あまりにも高嶺の花であり、自分が触るだけでこの武器の神々しさが霞んでしまうようにも思える。それほどまでに、それは美しくも気高い武器であった。

「悪いけど、これは受け取れないよ」

自分には不釣り合いな武器だと、クリュウは剣を返そうとする。だがイリスは決してその剣を受け取る事はなかった。ただ真剣な瞳で、目の前の武器から目を背ける彼を見詰め続ける。

「妾はお主から、お主の大切な品を預かった。ならば、妾は妾が持つ物の中でお主の役に立つであろう物を授ける。これのどこに問題があるのじゃ」

「だからって、いくら何でもこれは……」

「――この武器は、アルトリアの血を受け継ぐ者にしか扱えない魔剣でもあるのじゃ」

突如切り出した彼女の言葉に、クリュウは目を見開いて驚く。魔剣、そんな物語の中にしかないようなオカルトな武器など存在しない。比較的現実主義なクリュウはイリスの言葉を信じようとはしなかった。

「魔剣って、そんな子供騙し……」

「この武器の素材となった双子の竜は、ヴィルヘルムの力を認めて軍門に下り、その忠誠の証として自らの体の一部を差し出し、ヴィルヘルムはこの武器を鍛え上げた。じゃから、この武器はヴィルヘルムの子孫である王家の人間にしか扱えない。それも、妾かお主のような正当な王家の血を受け継ぐ者だけじゃ」

「そんな話、信じられないよ」

「信じないのならば、布から取って握ってみぃ」

イリスの有無も言わせぬ女王としての威圧に気圧され、クリュウは渋々まだ柄の部分などに巻き付いていた布を全て取り払い、柄を握り締めた――その瞬間、不思議な感覚が走った。

「……しっくり、来る」
　まるで昔から知っていたかのように、握った瞬間しっくり来たのだ。新しい武器は慣れるのに時間が掛かるものだが、この武器にはそれがなかった。本当に昔から使い慣れていたかのような、体との一体感があった。剣も、盾も、まるで最初から自分の為に作られたかのように体に合う。
「エア、その剣を握ってみぃ」
「あ、あぁ……」
　指名を受け、シルフィードは半信半疑ながら仕方なくクリュウから剣を受け取る。使い慣れた大剣とは違うが、同じように柄を握り締める――だがその瞬間、まるで彼女に使役される事を拒むかのように彼女の腕に激痛が走った。
「くぁ……ッ!?」
「シルフィッ!?」
　悲鳴を上げて剣を放り捨て腕を押さえるシルフィード。そんな彼女にクリュウが慌てて駆け寄った。だが剣を放した瞬間痛みは消えたらしく、シルフィード自身驚愕に満ちた瞳で放り捨てられた剣を見詰めていた。
「これって……」
「そうじゃ。アルトリア王家の血を受け継いでおらぬ者が持つと、剣は使役される事を拒み所有者に苦痛を与える。じゃが、血を受け継ぐ者ならば剣は所有者に忠誠を誓って使役される事を望む――これでも、この武器が魔剣ではないと言えるか？」
　そう言いながら、イリスは地面に落ちた剣を手に取る。柄を握り締めても、シルフィードの時のような苦痛は起きない。剣が所有者を認めているからこそ、何も起きずに忠実に従っている証。それはつまり、アルトリア王家の血を持つ者だからだ。
「わかったじゃろ？　これは王家の血を受け継ぐ者、つまりは妾かお主にしか扱えない武器じゃ。そして妾はそのような剣を持つつもりもない。さすれば、その剣の居場所はおのずと決まると思うが？」
「……僕しか、使えないって事？」

「そういう事じゃ。まぁ、秘宝とか魔剣とかそんな面倒なものは取っ払って、妾は純粋にお主に怪我をしてほしくない。じゃから、お主が自身の身を守れる最善であるそれを選び、お主に授けようとしておる」
　真剣な表情で語るイリスだったがそこで一度話を区切ると、今度は一転してどこか悲しげな笑みを浮かべた。まるで、頼みを聞いてほしくて必死になる子供のような、どこか自虐に染まった悲しき笑顔。震える瞳を彼に向けながら、彼女は話を続ける。
「なぁクリュウ。妾の気持ちも考えて、受け取ってはくれまいか？　何もその武器に縛られる必要はない。武器選びもハンターの仕事のうちなのじゃろ？　ならば、ここぞという時に使ってもらえれば、それで十分じゃ――どうじゃ？」
　イリスの説得に、クリュウはしばし剣を見詰めながら考え込む。そんな彼をイリスはもちろんフィーリアやアリア達も無言でジッと見守っていた。そして、クリュウは小さくため息を零すと――イリスの持つ煌竜剣（シャイニングブレード）を手に取った。
　驚くイリスを前に、クリュウは剣を一振りし、うなずく。
「ありがとうイリス。そういう事なら、受け取っておくよ。いざって時には、ちゃんと使わせてもらうから」
　クリュウが笑顔でそう言うと、イリスは先程までの悲痛な表情から一転してパァッと笑顔を華やかせる。それはまるで春の訪れに喜びと共に開花する野花のように、日の下で美しく光り輝く。
「ま、まったく。人の好意は素直に受け取ってほしいものじゃ」
「ごめんごめん。あまりにもすごい武器だから、僕なんかが使っちゃっていいのかなぁなんて思っちゃって」
「阿呆。お、お主だから授けたのじゃ。他の奴などゴメンじゃ」
「え？　でもこれって、僕かイリスにしか使えないんじゃ……」
「こ、言葉の綾じゃッ！　き、気にするでない阿呆ッ」
「な、何で怒られるのかな？」
　怒ってプイッとそっぽを向いてしまうイリスを前にクリュウは意味がわからずに戸惑っている。そんな彼の様子に、周りで見守ってい

た少女達は一斉にため息を零すのであった。
「まぁ、イリスの気持ちは嬉しいよ。これ、ちゃんと大切に使わせてもらうからね」
　そう笑顔で言うと、クリュウはイリスの頭を優しく撫でた。髪の上をくすぐるように流れる彼の温かい手の感触に、イリスは幸せそうに瞳を細める。さながらその姿は喉を鳴らすアイルーのようだ。
「う、うむ。それなら良いのじゃ――あ、できればその……そのまましばらく撫でてもらえると嬉しい」
「うん、いいよ」
　イリスの可愛げな頼み事をクリュウは喜んで引き受けて、彼女の頭を優しく撫で続ける。そんな彼の姿を見て、アリアやフィーリア達は不満げだ。
「むぅ、いいなぁイリス様……」
「……羨ましい」
「チッ、あのロリコン野郎め」
「ほんと、見境がなさ過ぎますわ」
　不平不満懐きまくりな乙女達を、中立立場のフェニスやシグマ、シルフィードが苦笑しながら見詰めていた。
「欲しいもんがあんなら無理やり奪っちまえばいいのになぁ」
「世の中シグマみたいに2進数的な考え方しかできない人ばかりじゃないのよ」
「に、にしんすぅ？　何だそれ？」
「まぁ、彼がああいう奴だからこそ今の関係が成り立っているとも言えるがな。普通に考えればとっくに破綻している人間関係だからな。私達の周囲は」
　感心半分呆れ半分といった具合の乙女達を他所に、クリュウはイリスの頭を優しく撫で続ける。が、いつまでもそうしている訳にもいかない。スッと、頭の上に載せられた手をイリスが遮る。
「……もう、お別れじゃな。これ以上は、本当に別れが辛くなる――これ以上は、お主に泣き顔を見せてしまう」
　――声を震わせながら言うイリス。その笑顔が、無理にがんばって

浮かべているものだという事は、誰が見ても明らかだ。
決めたのだ。クリュウに見せる最後の顔、別れ際の彼に覚えておいてほしい顔は、自分の精一杯の笑顔だと。そう、決めていたのだ。だからこそ、彼女は必死になって笑っていた。涙を堪えて、一心に笑っていた。
そんな彼女の気持ちがわからない程、彼は鈍感な人間ではない。彼女のがんばりと無駄にしないよう、クリュウは一つうなずく。
「わかった。じゃあ、もう行くよ。色々と、ありがとうね」
「阿呆。礼は互いに言わない約束じゃろうが」
「……そうだったね。じゃあ――またね」
「うぬ。またいつか、お主と会える事を信じて――また、じゃな」
クリュウがゆっくりと差し出した手を、イリスは満面の笑顔と共にしっかりと握り締めた。お互いの熱が伝わる程の長い握手の後、ゆっくりとどちらからとなく離れる。
「……フィーリア、サクラ、シルフィ、エレナ――行くよ」
振り返った自分の表情は、一体どんなものだったのだろうか。きっと、イリスには見せたくないような、ひどい顔をしているのだと思う。息を呑む四人の反応を見れば、わかる。
だが、四人は本当に優しい子達だった。何も言わずにうなずくと、フィーリアとサクラがそれぞれ左右の手を握り締めてくれ、シルフィードとエレナは優しく見守ってくれる。
クリュウは四人の優しさに感謝しながら『シェフィールド』へ歩き出す。振り返ると、アリアやシグマ、フェニスや彼女達の親が盛んに手を振るっていた。ジェイドは言うまでもなくそっぽを向いたままで、それをエイリークがおかしそうに見ている――そしてイリスもまた大きく手を振りながら「達者でなぁッ」と笑顔で手を振っている。クリュウはそんな皆に向かって最後に微笑むと、『シェフィールド』へ乗り込んだ。
乗り込むと同時に扉が閉まり、クリュウ達はすぐに艦橋横の見張り場へと出る。露天のここは胸程の高さの柵で守られている以外はほとんど外に等しく、高度では風も強く吹く為見張り兵は必ず柵に命綱

をつける。五人は見張り兵が譲ってくれた場所に立って眼下を見下ろす。常に浮いている飛行船の艦橋の高さは地上十メートルはあるだろう。こちらを見上げながら手を振るイリス達を見下ろしながら、クリュウ達も必死になって手を振る。

一際大きな汽笛が鳴り響いた。それを合図に煙突から噴き出る黒煙が濃くなり、プロペラの回転速度が上がっていく。それに合わせて『シェフィールド』はゆっくりと上昇を開始した。

高度が上がるにつれて、手を振るイリス達の姿も小さくなっていく。それでも、クリュウ達は決して手を振るのをやめる事はなかった。

きっと声は届く。そう信じて、五人は大声で別れの言葉を叫んだ。

だがそれは、下から見送る者達も同じだ。

アリアは泣きながら手を振り、そんな彼女の背を支えながらシグマとフェニスも手を振る。そんな三人の姿を一瞥しながらアルフ、オメガ、アルカディアの三人も遠くなる飛行船を見送った。

ジェイドとエイリークは興味ないと言いたげにすでに帰還の用意を進めており、準備を整えたジェイドはイリスを呼ぼうと振り返る。

「陛下――」

「――好きじゃぁッ！　大好きじゃぁッ！」

突如イリスはそう叫びながら走り出す。ジェイド達の制止を振り切って飛び出したイリスは、決して追いつく事はないとわかっていても、走る事をやめなかった。

空の遠くへ行ってしまう『シェフィールド』を必死になって追いかける。彼女の目に見えるのはそんな艦ではなく、それに乗る大切な人の姿。

「好きなのじゃッ！　お主の事が、大好きなのじゃクリュウッ！」

きっとこの声は届かない。理性では賢い彼女は十分にわかっている。それでも、叫ばずにはいられなかった。

「また、またきっと会えるッ！　妾は、妾は信じておるッ！　その日が来るのを、一日千秋の思いで待っておるぞッ！」

その瞬間、彼女の細い足が平原にほんの少し突き出た石に引っ掛

かった。進行を妨害され、彼女の体はあっという間にバランスを失って倒れる。自慢のドレスは一瞬で砂まみれになり、純白の所々に泥色が染まる。
バッともたげられた彼女の頬には、女王なら普通付く事のない泥がしっかりと付いていた。それでも、彼女は気にしない。
いつの間にか、『シェフィールド』は雲の向こうへ姿を消していた。それでも、彼女の目にはしっかりと、クリュウ・ルナリーフという一人の少年の姿が映っていた。
頬に付いた泥が、零れ落ちる雫と共に洗い流される。とめどなく流れるそれは、彼女の震える瞳から溢れ続ける。
顔は悲痛に歪み、口からは嗚咽が漏れる。
彼に、決して見せたくなかった泣き顔。だが今はもう、彼は自分の姿を見る事はできない。だからこそ、もう我慢する必要もなかった。
「クリュウ……ッ、きっとまた、会えると信じておる……ッ」
歯を食いしばり、胸に煌く彼から預かった金火竜のペンダントを握り締めながら、彼女は必死になってそう叫んだ。そしてそれを最後に、彼女の口からは言葉にならない悲痛な泣き叫ぶ声が溢れ出る。
地面に転び、悲痛な声で泣き叫ぶ女王を、臣下達が優しく取り囲む。
アルカディアが優しく背後から抱き留め、正面からは同じ気持ちのアリアが抱きつく。フェニスが優しく彼女の涙を拭い取り、シグマが少し乱暴に彼女の頭を撫でる。
誰も決して、慰めの声は掛けない。今はただ、泣きたい時に泣けばいい。そういう想いが、皆の中にあった。
イリスは泣き続ける。
だが、彼女は諦めない。
クリュウとまた会う日。彼女は絶対に諦めない――胸に輝く、彼から預かった彼の宝物がある限り。これを返す日が来る事を、彼女は絶対に諦めたりはしない。
アルトリア王政軍国での一ヶ月に満たない日々は、一人の少年と一人の少女に、忘れられない思い出と絆を残し、幕を降ろしたのであった。

大陸最大の独立都市であるドンドルマから西へ竜車で数日。シルクォーレの森とシルトン丘陵からなるこの地方は《温厚な心》という意味を持つアルコリスと名づけられている。名の由来の通り、ここはとても穏やかで草食竜が平和に暮らしており、のどかな時間が流れている。

だが今、この地には温厚という言葉とは程遠い出来事が起きていた。一週間程前にここにリオレウスが住み着いてしまい、商隊が都市間の行き来を封じられてしまっていた。

じわじわとドンドルマなどにも物流が途絶えた影響が出始めた頃、リオレウス討伐依頼を受けたハンター達の火竜リオレウスとの戦いもまた決着を迎えようとしていた。

穏やかな地に突如鳴り響く爆音。それはリオレウスが放つ怒りに任せた全力ブレス。命中した岩壁は抉れるように崩れ、無数の破片となって大地へ降り注ぐ。その全てが、高圧の火力によって焼け焦げている。

辺りに漂うはそんな焼け焦げた臭いと、血の臭い。

ここはエリア4。森丘と呼ばれるこの狩場において山頂付近に位置する場所であり、細い道の先にある為、ここへ来れるのは人間か空を飛ぶ事ができる者だけだ。

エリア中央で暴れるのは火竜リオレウス。それは別名空の王者とも呼ばれ、天空において無双の強さを誇る最強クラスの飛竜。どのような敵も鎧袖一触で粉砕してきた王の中の王。だが、今その王は狩られようとしていた――人間という、ちっぽけな存在によって。

「ここで畳み掛けるぞッ！」

チームリーダーを引き受けている青年が大声で叫ぶ。彼が纏うはバサルSシリーズと呼ばれれる、岩竜バサルモスから剥ぎ取れる素材の中でも特に厳選された物が使用された防具であり、その防御力は本物の岩にも匹敵する強度を持つ。そんな彼が握るはバストンウォーロックと呼ばれるヘヴィボウガンであり、ヘヴィボウガンの典型的な形をベースに強力な素材を駆使した高性能な武器だ。その一撃はリオレウスの甲殻をも貫く威力を誇る。

青年、ジークフリート・ディアベルトの指示に他のハンターも反応する。前衛を引き受けるのは二人の男ハンター。一人はグラビドシリーズに豪槍グラビモス、どちらも鎧竜グラビモスの素材を使った灰色で無骨なフォルムの武具で、強力な武具だ。もう一人は鎌蟹ショウグンギザミから剥ぎ取れる素材を使った攻撃的なフォルムが特徴のギザミシリーズに雪獅子ドドブランゴの素材を用いた氷属性の太刀、白猿薙【ドド】を備えている。

二人の猛攻撃にリオレウスは動けず、その場で必死になって体を振り回す。だがすでに尻尾は切断されており、その反撃のほとんどが外れてしまう。

二人を援護するようにジークフリートも貫通弾ＬＶ１で狙撃を続け、リオレウスの体を次々に貫いていく。的確な一撃一撃は、確実にリオレウスの体力を奪っていた。

三人の猛攻撃に、リオレウスは包囲されていた。だが、怒り狂うリオレウスは無理やりその包囲網を突破する。グラビドシリーズの男を跳ね飛ばしリオレウスが包囲網を脱した。破れかぶれの無茶苦茶な突進だ。だが、その先にはもう一人のハンターが待ち構えていた。

「……往生際が悪いですね」

それは小柄な少女であった。

全身を世にも珍しい青いイャンクック亜種から剥ぎ取れる素材で作られたクックＤシリーズで守っている。無骨な青怪鳥の鱗や甲殻を使っているので、繊細さに欠けたデザインではあるが、比較的かけ出しのハンターにとっては十分実用的な防具だ。飾り羽を頭に二つ付けた顔を覆うようなキャップで、少女の素顔は見る事はできない。細いメガネの奥に輝くのは碧色の右目。左目は無地の黒い眼帯に覆われている。右の碧眼は臆する事なく迫り来るリオレウスを射ぬく。

「おい危ねぇぞ嬢ちゃんッ！」

ギザミシリーズの男が慌てた様子で叫ぶが、少女はリオレウスを前にしても一切動揺する事はなかった。ただ冷静に、握り締めた弓を構える。名をパワーハンターボウ１と言い、マカライト鉱石とドラグライト鉱石などの鉱石をベースに作られた武器であり、その硬さを生か

して簡単なガードも可能な――近距離戦タイプの弓である。
少女は構えた弓で照準を定めると、矢筒から一斉に三本の矢を取り出して構え、矢羽を弦に引っ掛けて力強く弦を引く。備えられた三本の矢の鏃は全てリオレウスを捉えていた。
無言のまま、少女は弦に掛けた矢羽を放した。引き絞られた弦が戻る勢いを利用して、矢は一斉に勢い良く飛び出す。そしてそれは寸分狂わずリオレウスの頭に命中した。だがその程度ではリオレウスは止まらない――だが次の瞬間、リオレウスの下半身が地面に埋没した。
「お、落とし穴ッ!?」
驚くジークフリートの声など聞こえていないように、少女は突如走り出す。
落とし穴に引っ掛かり、下半身を埋めて暴れるリオレウスに向かって少女は突っ込むと、矢筒から矢を数本一斉に引き抜き、それをまるで剣のようにして構えると、リオレウスの首筋に向かって勢い良く突き刺した。
「ギャァッ!? グエェアッ!」
激痛に苦しむリオレウスの声を無視し、少女は次々に矢を引き抜いてはリオレウスの体に突き刺して行く。だがそう長くリオレウスだって留まってはいない。落とし穴が壊れ、リオレウスは穴を脱して空へと逃げようとする。だが、少女の猛攻撃は止まる事はなかった。
矢筒から矢を一本引き抜き、天空へと逃げようとするリオレウスの右目に向かって容赦無くそれを突き刺した。
「ギャァァッ!」
悲痛な悲鳴を上げてリオレウスが地面へと崩れ落ちる。矢の突き刺さった右目からは赤い涙が零れ落ちる。唯一見える左目がギョロリと恨めしい敵の姿を捉えた――その目の前に、鏃が向けられている。
至近距離で弓を構え、ピッタリとリオレウスの左目に鏃を向けた少女。何も言わず、無言で矢を放った。
壮絶な悲鳴と共に、リオレウスは息絶える。その全身には、無数の

矢が突き刺さっていた。
リオレウス討伐を終え、拠点(ベースキャンプ)へと戻った四人。グラビド男とギザミ男は友人であり、リオレウスに勝ったという勝利の余韻を満喫している。
そんな二人と離れた場所、拠点（ベースキャンプ）にある池へ伸びる桟橋の上に、クックDシリーズを纏った少女が立っていた。ゆっくりと被っていたクックDキャップを外すと、現れたのは紺色の柔らかな髪。ザザミ結びと呼ばれるかわいらしい髪型で整えた少女。顔立ちはまだ少し子供のあどけなさが色濃く残っているが、それでもその表情は実にハンターらしい凛々しいものだ。少しずれた細メガネを、人差し指でブリッジをクイッと上げて直すのが彼女のクセだ。
「お嬢ちゃん」
声を掛けられ、少女は事務的に振り返る。その先にいたのはヘルムを取って野生的な顔立ちを露わにしたジークフリートだ。ジークフリートはゆっくりと少女へと近づく。
「何か？」
「お前、いつもあんな危ない戦い方をしてるのか？」
「危ない、と申しますと？」
「お前弓使いだろうが。なのに、まるで剣士みたいな戦い方をしやがる。ガンナーの防具で前衛に立つなんて、危ないとしか表現できないだろうが」
ジークフリートはこの狩りの間、少女の戦い方に違和感を感じていた。弓使いはガンナーであり、後方からの攻撃を主とするハンターだ。だが彼女はまるで剣士のように接近戦を好む戦い方をする。後方からの射撃をしたかと思えば、剣士の間合で矢を剣のように使って戦う。とてもじゃないが、正気の沙汰とは思えない戦い方だ。
だが少女は気にした様子もなく、ジークフリートの横を無言で通り過ぎる。
「お、おいッ」
「――ボクは、もっと強くならなければなりません」
振り返って呼び止めようとしたジークフリートに掛けられたのは、

少女の声だった。有無を言わせぬ迫力を放つ背中と、覚悟に満ちた声に、ジークフリートは押し黙ってしまう。
本当に、自分よりも十歳近く年下の子供か？　そんな疑念が、彼の頭に過ぎった。
「強くなって、誰よりも強くなって、先輩を二度と怪我させないくらい強くなる――その為なら、この身がどうなろうと関係ありません」
振り返って、堂々と言い放った少女の瞳は真剣だった。その尋常じゃない気迫に、結局ジークフリートは何も返す事はできなかった。
少女はその場で一礼すると、無言でその場を立ち去る。
一人残されたジークフリートはため息と共に頭を抱える。少し前、自分は何かと無茶したがる姉とそんな姉に振り回される不憫な妹という危なっかしい双子のハンターと組んでいた事があるが――少女のそれは、危なっかしいをとっくに通りすぎている。強さを求めるあまり、自分の事が完全に眼中にないのだ。そんな覚悟を、十五歳の子供がするものだろうか。
「――ルフィール・ケーニッヒ、……末恐ろしい嬢ちゃんだな」
数日後、ドンドルマにて狩猟達成報告を終えて報酬金を受け取った四人はそのままパーティーを解散した。元々リオレウス討伐の為だけに集まった面々の為、縛れる必要は何もない。
そして、報酬金を受け取って事務的にあいさつを終えたルフィールは、一人騒がしい酒場から姿を消したのであった。

登場人物紹介４

エルバーフェルド編

《ルーデル・シュトゥーカ》

異名【悪魔のサイレン】

身長　１５８ｃｍ

年齢　１６歳

容姿　白みがかった金髪ウィンドボブ／透き通った琥珀色の瞳

武器　ブラットフルート

防具　フルフルＵシリーズ

スキル　体力回復アイテム強化　広域化＋２　体力＋１０（体力珠×５）笛吹き名人（鼓笛珠×５）

フィーリアの親友にして、強力な狩猟笛使いのハンター。エルバーフェルド国出身で、主にフィーリアの故郷であり、自分にとっても第二の故郷であるレヴェリを中心にしつつもドンドルマやミナガルデなど大陸中を動き回って活躍中。勝気でプライド高く、自分より弱い者を見下す傾向があるが、素直じゃないだけで根はいい子。親友であるフィーリアの事が大好きで、彼女の力になりたいという気持ちが強い。一方でフィーリアに対して少々過保護な所もあり、フィーリアを奪い合う形でクリュウと険悪なムードになるも、一緒に狩猟をする事で互いを認め合い、暫定的にクリュウにフィーリアを預けている。前向きで明るい性格だが、元奴隷出身という暗い過去を持ち、腕には奴隷身分を意味する刺青が残っている。幼い頃に実の親に売り飛ばされ、奴隷商人に買い取られた後はまともな食事も与えられずに強制労働を強いられ、身も心もボロボロとなっていた。そんな時にレヴェリ領にて奴隷商人が逮捕され、彼女は晴れて自由の身となり施設に預けられた。そこで視察に訪れたレヴェリ三姉妹のうち、フィーリアが声を掛けた事から二人は出会い、以降ルーデルはフィーリアの遊び相手としてレヴェリ家に招かれ、四人目の娘として大切に育てられてきた。ハンターになったのは元奴隷という肩書きでも気にしない世界、自分の居場所を手に入れる為。そんな悲しい過去を聞いても軽蔑す

るどころか一人の友として接してくれるクリュウと接しているうちに、次第に彼に惹かれていっているが、親友の初恋の相手という事もありなかなか前に出れず微妙な立ち位置を貫いている。基本的にはいい子なのだが、血を見るとアレなスイッチが入ってしまい、狂ったような残虐性を解放してしまう為に狩友になってくれる人がおらず、狩猟笛なのにソロでしか戦えない事（これが悪魔のサイレンの由来）が彼女の悩み。

《フリードリッヒ・デア・グローセ》

異名【皇帝】

身長　１６８ｃｍ

年齢　１８歳

容姿　神々しく輝く金色の長髪／意志の強い碧色の瞳

大陸最強と謳われる国防軍を有するエルバーフェルド帝国初代総統。ローレライの悲劇で衰退した国家をわずか数年で目覚しい復興をさせた人物。その容姿、人々を魅了する声、圧倒的な政治力、絶大な人気から内閣支持率が常に９０％以上という大陸で最も国民に慕われている天才統治者。エルバーフェルド王国時代にローレライの悲劇が起きて国は衰退。その責任を問われ国を追放されたカイザー３世が後に亡命先のアルトリアで妃との間で生まれたのがフリードリッヒだった。両親亡き後祖国復興の為に国へ戻り、そこでそのカリスマ性を開花させて次々に仲間を迎え入れ、国家主義民衆党（通称ルチア党）を結党。党首として人々を演説で次々に味方につけてあっという間にエルバーフェルド王国崩壊後に誕生した議会制民主主義のエルバーフェルド共和国首相に就任。選挙で圧倒的勝利したルチア党の議席の数に物を言わせた強行採決の連発で遅々として進まなかった復興法案を次々に強行。様々な権限を自身に一本化させる全権移譲法も強行採決して、自身を最高権力者兼皇帝とするエルバーフェルド帝国を建国。自らを最高権力者たる総統とした。自身に反対する者は誰であろうが容赦なく追放、暗殺、処刑などの粛清を実行して敵対する者を弾圧。目的の為なら全くの容赦がない。現在では議会は完全に彼女の勢力下に置かれている。祖国復興が彼女の達成

したい目標であるが、同時にローレライの悲劇時に戦争を仕掛け、領土を奪い、策略で父を追放に追い込んだ東シュレイド共和国とガリア共和国に強い敵意と憎しみを抱いており、この二つの国を滅亡に追い込もうとしている。優秀な政治家であると同時に、腹心のヨーウェンのよってアイドルに祭り上げられており、その美声で人々を熱狂させている。天才政治家であり天才アイドルでもある彼女だが、歳相応の少女らしい一面も持っており、腹心の一人であるエルディンに密かに恋をしており、彼が他の女子と仲良く話していると嫉妬するという可愛らしい一面も持っている。

《エルディン・ロンメル》

異名【砂漠の狼】

身長　１８２ｃｍ

年齢　４３歳

容姿　少しくすんだ銀色の短髪／凛々しい碧眼

砂漠の狼とも称されていた元凄腕のハンター。現在はエルバーフェルド帝国国防陸軍独立歩兵師団（対モンスター戦特化部隊）の師団長を務めている。ヤル気のない言動が多く、一見すると怠け者に見えるが、その実は裏で何かと手を回していたりする。現役を退いており、今は師団長として部下にハンターの極意を教えている。フリードリッヒに直接勧誘されて国防軍へと入ったが、他の者は皆彼女の考えに賛同して同志として入るが、彼はフリードリッヒの危なっかしさを心配して、彼女を一人の女の子に戻そうと決めて彼女の傍にいる事にしている。その為腹心でありながら彼女の政策に異を唱えている。結果、カリスマな自分に従わない、完璧超人な自分をなぜか心配する彼に惹かれ、フリードリッヒは彼に恋をしてしまうのだが、彼自身は彼女の気持ちに気づいていない。実は同じような理由から前にも一人の少女を引き取り、師弟関係を結んで更生させた事がある。その弟子こそがシルフィードであり、村を潰され、力こそ正義だと信じ込み闇の中を生きていた彼女を救い出した。さらにクリュウの両親とも知り合いであり、父エッジ・ルナリーフとは学生時代からの腐れ縁だった。そして母アメリア・ルナリーフに密かな想いを抱いていた。

何かとクリュウの周りに関係しており、彼を気遣っている。

《カレン・デーニッツ》
身長　１５６ｃｍ
年齢　１６歳
容姿　漆黒の美しい黒髪のショートカット／鉄の意志を抱いた凛々しい碧眼

エルバーフェルド帝国国防海軍総司令官を務めている少女。フリードリッヒの腹心の一人であり、彼女の熱狂的なファン。祖父も曽祖父も海軍軍人、父は王国時代の王国海軍総司令官という生粋の海軍軍人家系出身であり、デーニッツ家は海軍名家として有名だった。しかしローレライの悲劇の際に侵攻してきた東シュレイド共和国・ガリア共和国連合艦隊との戦いで災害でその戦力の大部分を喪失した状態のエルバーフェルド海軍は脆弱であり完敗。父は戦死し、多くの兵士を失わせたとしてデーニッツ家は糾弾され没落した。父の復讐を誓い猛勉強して海軍軍人を目指したカレンだったが、エルバーフェルド共和国は二国の恫喝に屈して海軍を放棄。目標を見失ったカレンは絶望して自殺を図ったが、その時にフリードリッヒに拾われた。以降彼女の臣下として彼女を支え、フリードリッヒは総統となると海軍再建を決定し、カレンを海軍総司令官に任命。海軍復活を目標に、チャンスを与えてくれたフリードリッヒに強い忠誠心を抱いている。まだ若いながらもその信念は強く、彼女を慕う海軍軍人は数多く、容姿も可愛らしい事もあって、実は国民の中には密かなファンがいたりする。クリュウの事は特に気にしていなかったが、事故でファーストキスを奪われて以来意識するようになり、彼の強さや優しさに触れて本気で好きになってしまう。キスした相手とは結婚しなければならないというエルバーフェルドの風習からクリュウに求婚を迫るが、彼が咄嗟についた「自分は女だ」というウソを信じ、求婚を退いた。クリュウの事を本気で女だと信じているのか、それともウソだと見抜いた上で彼の優しさに甘えているのか。どちらにせよ、彼女は現在もクリュウにベタ惚れ中。ちなみにフリードリッヒの事は敬愛対象とし

ており、クリュウはもっぱら恋愛対象である。
《ヨーウェン・ゲッペルス》
異名【妖艶宰相】
身長　１７２ｃｍ
年齢　２４歳
容姿　黒く艶やかな長髪／血のように真っ赤な瞳
エルバーフェルド帝国宣伝大臣を務めており、実は副首相も兼任している事実上の宰相。フリードリッヒの最初の同志であり、姉的存在。無理しがちな妹のフリードリッヒの体調管理やスケジュール管理などマネージャーのような事も行なっている。フリードリッヒの人々を魅了する容姿や美声に気づき、アイドルとしてのフリードリッヒを創り出した張本人。宣伝大臣として彼女の魅力を国内で広げ、彼女を天才アイドルに仕立てあげた、ある意味天才プロデューサー。フリードリッヒに負けず劣らずな天才であり、自分達に逆らう者はあの手この手で失墜させ、自身の力を維持している。セレスティーナとは帝国大学時代の知り合い。
《セレスティーナ・レヴェリ》
身長　１６５ｃｍ
年齢　２４歳
容姿　長く美しい柔らかな金髪の長髪／優しげな丸っこい翡翠色の瞳
エルバーフェルド帝国レヴェリ領を統治するレヴェリ家三姉妹の長女。フィーリア、シュトゥルミナの姉に当たる。お淑やかで気品があり、心優しい美女。まさに貴婦人、貴族の令嬢と言うに相応しい人で、フィーリアのハンターとしての厳しさを抜いた純度１００％の優しさを持ち、雰囲気や見た目は一部を除いでまるでフィーリアが大人になった姿のよう。病弱な為、基本的には屋敷暮らしだが、時々ルーデルを連れて外へ出る事もある。優秀な古龍研究者でもあり、エルバーフェルドの古龍研究機関《シュトゥットガルト》の非常勤研究員も務めている。次女のシュトゥルミナと三女のフィーリアが共にハンターを目指した為、元々の素質も含めて彼女がレヴェリ家の次期当

主となっている。とても心優しく人の悩みを的確に見抜いて相談に乗るなど、人徳に溢れている。妹達を可愛がっており、フィーリアの恋を応援している。心優しい人ではあるが、やる時はやる人でクリュウの為に政府代表にして旧友のヨーウェンにケンカを売るなど、芯は強い。クリュウの事をとても気に入っており、フィーリアと結婚して自分の義弟になる事を強く願っている。

《シュトゥルミナ・レヴェリ》

異名【銀狼】

身長　１７５ｃｍ

年齢　２０歳

容姿　神々しく煌めく銀髪キリンテール／力強く勇ましい碧色の瞳

エルバーフェルド帝国レヴェリ領を統治するレヴェリ家三姉妹の次女。フィーリアの姉、セレスティーナの妹に当たる。心優しい慈愛に満ちた姉のセレスティーナと違い、豪快で粗暴な性格で貴族である事が自らを縛る事としか思えず、英才教育を放棄してきた。ハンターに憧れ、両親の反対を押し切って家を飛び出して修行し、ハンターとなった。当初は家と縁を切っていたが、幼いフィーリアがシュトゥルミナが出て行った事が寂しくて大泣きし、日に日に元気をなくしていってしまった事から両親と和解して家へ戻った。以降はシュトゥルミナの強さを両親も認めている。セレスティーナ以上にフィーリアを溺愛しており、素っ気ない態度をしつつも妹の事が大好き。妹の初恋相手の父親、要するにエッジ・ルナリーフと面識があり、彼に惚れていた。当時すでにエッジにはアメリアという恋人がいたが、シュトゥルミナは彼女に宣戦布告してエッジへ猛烈アタック。しかし結果はことごとく失敗。彼が死んだ今でも、まだ彼の事を引きずっている一途な乙女でもある。そんな関係から妹の初恋を複雑な心境ながらも応援している。

アルトリア編

《イリス・アルトリア・フランチェスカ》

異名【少女王】

身長　１４５ｃｍ
年齢　１０歳
容姿　神秘的に輝く銀色の長髪／意志の強い凛とした碧眼
世界一とも言われる科学力を駆使した蒸気機関と、それを転用した強力な兵器を多数有する南洋に浮かぶ海洋軍事大国、アルトリア王政軍国を統治する女王。弱冠１０歳という幼い女王ではあるが、すでに王としての覚悟と信念を備えており、右腕にして宰相のジェイドの補助を受けながら政を行なっている。その可憐さや先代と違った平和的な政策から国民からの支持も高く、アイドルのように人気がある。立派な女王になる事が夢ではあるが、まだまだ子供。イタズラ心や好奇心が旺盛で、よく城を抜け出しては城下町へ行ってしまうなど行動的。しかし城下町で遊びながらも民の生活を身近に感じながら、それを政に活かそうとするなど良き君主ではある。強く振る舞ってはいるが、本当はとても寂しがりやな子でクリュウにそれを見抜かれる。クリュウの母が伯母のアメリアだった事から、彼とは従姉妹関係。それを知ってからはまるで家族ができたかのように彼女はクリュウに甘え、慕うようになった。クリュウからも妹のように思われ、大切にされているが少し不満あり。母の死後落ち込む彼女の心の支えとなったのがクリュウであり、元々抱いていた想いがより強くなっていく。別れ際、自分の気持ちに正直となり、彼への恋心を認めた。また会える、そう彼と誓い預けられた金火竜のペンダントを胸に今日も少女王はクリュウを想いながらアルトリア王政軍国を統治している。

《ジェイド・クルセイダー》
身長　１７５ｃｍ
年齢　２７歳
容姿　灰色の髪／碧眼にモノクル
アルトリア王政軍国三軍統合幕僚長兼王軍艦隊司令長官。要するにアルトリア軍の事実上最高司令官であり、同時にまだ幼いイリスをサポートする摂政役。他国では宰相に相当する人物。生真面目な性格で常にイリスがうまく国政を行えるように裏から手を回しており、彼女に対する忠誠心は臣下の中でもずば抜けて高い。元々は幼いイ

リスの護衛役を務めていた兵士であり、彼女が王位を引き継いでからはその忠誠心の高さから彼女に抜擢されて女王補佐官に就任。後に軍の掌握及び摂政としての権限を持つ新役職、総軍師となる。イリスの事は女王として敬愛しているが、実際は彼女が幼い頃からの付き合いであり、どこか妹のように感じている。ただし妙にイリスの事となると冷静さを失ったりするなど、実はロリコンなのでは？という疑惑があったりなかったり。クリュウの事はイリスに懐かれている事からあまり好いてはいないが、彼によってイリスが笑顔を取り戻した事は認めている。イリスのイタズラや身勝手な行動を叱りつけるも、内心ではそれくらいが可愛らしいと思っている。

《エイリーク・アトランティス》

身長　１６８ｃｍ

年齢　２４歳

容姿　燃え盛る炎のように真っ赤な髪／紅蓮の炎が凝縮したような凛々しい赤眼

アルトリア王政軍国総軍師補佐官。常日頃忙しいジェイドの補佐を務めると同時に彼の護衛役も兼任している人物。彼に対する忠誠心は非常に高く、優秀な武官。実はジェイドの事を一途に想っており、一緒にいたいが為に彼の補佐官に立候補した。生真面目なジェイドの事も好きだが、クリュウと接する事で見せる素直じゃない所も好み。ジェイドからの信頼も厚く、陰ながらお転婆なイリスの護衛役も任されている。

《アリア・ヴィクトリア》

身長　１６５ｃｍ

年齢　１６歳

容姿　白っぽいクリーム色の長髪にカチューシャ／透き通った海のような碧眼

クリュウの元同級生にして、アルトリア王政軍国貴族名家、ヴィクトリア家当主アルカディア・ヴィクトリア大公の娘。学生時代にクリュウと一緒に過ごしているうちに彼に好意を寄せるようになり、一年経った今でも彼の事を健気に好いている。手紙を一切くれなかっ

た彼に対して怒りを覚えていたが、それは単純に彼女が住所を教えなかった為という、優秀に見えて実は抜けている所も。現在はハンター活動はしておらず次期当主としての勉強に明け暮れているが、ハンターとしての活動を今後一切しないという訳ではなく、戦える領主を目指している。学生時代はルフィールという強力なライバルがいた為にクリュウにアタックできず、今回も彼を囲む美少女達を前に苦戦を強いられた。幸か不幸か彼を好く恋姫達は皆いい子ばかりで同じ悩みを抱えている事から意気投合してしまう。親友のシグマとフェニスの応援も虚しく、今回もアタックは失敗に終わっている。

《シグマ・デアフリンガー》

身長　１７０ｃｍ

年齢　１６歳

容姿　美しく艶やかな紫色のポニーテールの髪／同色の凛とした瞳

クリュウの元同級生にして、アルトリア王政軍国陸軍、アルトリア聖騎士団師団長オメガ・デアフリンガー伯爵の娘。現在は父直轄の第七聖騎士団（対モンスター騎士団）所属の兵士。三人の中では最もハンターに近い活動をしている。学生時代は幼なじみのアリアとよくクラス規模の対決を繰り返しており、クリュウも何度も巻き込まれた。親友のアリアの恋を密かに応援はしている。学生時代、彼女を慕っていたエル・アラメインとは時々文通をする仲であり、本人は否定しているが周りは二人の恋を応援している。クリュウの事はアリアの初恋相手ではあるが、同時に友達としても大切に想っており、クリュウ自身も彼女を信頼している。口が悪く粗暴な性格をしているが、軍隊の中ではそういう性格の方が性に合っているらしく、彼女を慕う仲間は多い。

《フェニス・レキシントン》

身長　１６６ｃｍ

年齢　１６歳

容姿　腰まで伸びるきれいな桜色の髪／春の若葉のような鮮やかな翡翠色の瞳

クリュウの元同級生にして、アルトリア王政軍国農林水産大臣アルフ・レキシントン男爵の娘。今回のクリュウ達のアルトリア行きを実現した立役者。学生時代クリュウとはあまり親交はなかったが、元クラスメイトとして、何より親友の初恋相手という事で彼を国へ招いた。アリアと同じく現在はハンターとしての活動はやめている。子供っぽく無茶しがちな二人のブレーキ役であり、１６歳とは思えない大人びた雰囲気や考え方をしている。学生時代に付き合っていたシルト・ランドルフとは手紙でのやり取りが続いている。

《ロレーヌ・アルトリア・ティターニア》

異名【冷酷王】

身長　１７２ｃｍ

年齢　４２歳

容姿　くすんだ銀色の長髪／弱々しく輝く碧眼

イリスの母にして先代アルトリア王政軍国初代女王。シュレイド国分裂を発端とした戦国時代から国を守る為に国民に重税を課して無理な軍拡化を推し進めた結果、アルトリアは世界一の科学大国になり強力な兵器と優れた軍隊を有する軍事大国となった。しかし反面国民からは反発が大きく《冷酷王》とも称されていた。だが本当は国を愛するが故の行動であり、自分が悪者になっても国を守りたいという強い信念を持った人物であった。元々病弱であったのに女王としての重責を無理に続けた結果、すっかり弱ってしまい娘のイリスに王位を譲り、自分の存在が娘の政の邪魔にならないよう国民には死亡したとデマを流して隠居していた。クリュウの母、アメリア・アルトリア・フランチェスカの妹であり、彼女がまだ国にいた頃は人の上に立つ姉と、人の上に立つ人を支える妹として二人で国を統治すると言われていた。しかしアメリアはエッジと駆け落ちし、ロレーヌは一人で国を背負う事になった。死に際、姉の息子であるクリュウと出会い、唯一の心残りであった姉の事、姉は幸せだったと知ると、まるでそれを待っていたかのように亡くなった。

第２回　読者のハートを射止めたのは誰だグランプリ

レン「お、おはようございますからこんばんわまで。モンスターハンター　～恋姫狩人物語～外伝、《Ｃａｎｎｏｎ†Ｇｉｒｌｓ》主人公、レン・リフレインです」

エリーゼ「同じく《Ｃａｎｎｏｎ†Ｇｉｒｌｓ》主人公、エリーゼ・フォートレスよ」

レン「こ、今回は《モンスターハンター　～恋姫狩人物語～》のキャラクター人気投票、《第２回　読者のハートを射止めたのは誰だグランプリ》の司会進行を務めさせてもらいます。ふ、ふちゅちゅちゅか者ですが、よろしくお願いしまちゅ……ッ!?」

エリーゼ「……あんた、後半相当噛み倒してたわよ」

レン「……うぅ、最初はうまくいってたのにぃ」

エリーゼ「っていうか、何であたし達がこんな事しなくちゃいけない訳？　外伝キャラなんだから関係ないじゃない」

レン「い、一応私達はこのモンスターハンター　～恋姫狩人物語～の外伝作品を担当していますから。それにこっちでも登場していますし」

エリーゼ「だからって何であたし達なのよ。前回みたいにあのアホ面を司会に据えてればいいじゃない」

レン「えっと、作者さんが「前回と同じじゃ見栄えがパッとしないから」と言っていましたが」

エリーゼ「あのアホ作者。内々定が出たからって浮かれてんじゃないわよ」

レン「え、エリーゼさん。そういう事言っちゃダメですよ。作者さん、５０社とかエントリーしてがんばったんですから……」

エリーゼ「５０社エントリーして内々定が１社だけとか……」

レン「就職氷河期は大変ですね」

エリーゼ「……って、外の世界の事はどうでもいいのよッ。要は何

であたし達が担当しなきゃいけないかって事ッ！」
レン「えっと、作者さん曰く「君達は人気投票の結果が悲惨だったから司会くらいしか使い道がなかった」だそうですけど――エリーゼさんッ!?　突然ガンランスを構えてどこ行くつもりですかッ!?」
エリーゼ「決まってるでしょッ！　あのクソ作者を竜撃砲で木っ端微塵にしてやんのよッ！」
レン「だ、ダメですよッ！　作者さんを殺しちゃったら作品が永遠に続かなくなっちゃいますッ！」
エリーゼ「んなの知らないわよッ！　適当に『私達の戦いはこれからだッ！』的な事を入れておけば大抵の読者は騙せるわよッ！」
レン「エリーゼさんッ!?　怒り狂い過ぎてとんでもない事口走ってませんかッ!?」
エリーゼ「大体悲惨な結果ってどういう事よッ！」
レン「えっと、私が５ｐｔで１２位。エリーゼさんは０ｐｔで最下位――エリーゼさんッ!?」
エリーゼ「何であたしが０ｐｔなのよッ！　べ、別に応援してほしいとかこれっぽっちも思っていないけど……何かムカつくッ！」
レン「ま、まぁ元々私達は外伝キャラですから。今回の人気投票も本編の方々の為のようなものですし」
エリーゼ「フン、何よいい子ぶっちゃってさ。自分は票をもらったからっていい気になっちゃってさ」
レン「えへへ。Ｒさん、スコーピオンさん、ジャンさん。私を選んでくれて、ありがとうございました」
エリーゼ「フン、どうせそれだって１位票じゃなくて２位と３位の寄せ集めじゃない」
レン「……そ、それは言わない約束です」
エリーゼ「……」
レン「……」
エリーゼ「……」
レン「……で、では気を取り直して。ここからは見事多くの読者さんを味方につけてランキング上位に入った方々、ベスト５を紹介して

いきたいと思います。まず第５位はこの人ッ！」

エリーゼ「とりあえず死になさい」

クリュウ「何でッ!?　突然呼ばれたと思ったら開口一番にそれなのッ!?」

エリーゼ「逆にそれ以外にあんたに掛ける言葉が思い浮かばないんだけど」

クリュウ「ひど過ぎるよねッ!?　いくら何でも理不尽過ぎるんだけどッ！」

レン「え、エリーゼさんッ。お祝いごとなんですから、いきなりその雰囲気をブチ壊すような事はしないでくださいッ」

エリーゼ「どうせ出来レースでしょ？」

レン「エリーゼさんッ!?　公正な投票結果を全面否定するような発言しないでくださいッ！」

エリーゼ「チッ、わかったわよ。黙ってればいいんでしょ、黙ってれば」

レン「……あ、あの。何かすみません」

クリュウ「いや、君が謝る必要はないんだけど――それで、一体僕に何の用？」

レン「あ、はい。えっと――おめでとうございますッ！」

クリュウ「……え？」

エリーゼ「……レン、肝心な部分が欠落してるわよ。それじゃこいつの頭がおめでたい事しか伝わらないわよ」

レン「ふえッ!?　す、すみませんッ！　け、決してそのような意味で言った訳では……ッ!?」

クリュウ「いや、君がそんな事を言う訳ないってわかってるからさ。それで、何がおめでとうなの？」

レン「えっと、今回集計した《第２回　読者のハートを射止めたのは誰だグランプリ》にてお兄さん――じゃなくて、クリュウ・ルナリーフさんは見事総得票数４０ｐｔ（単独投票０ｐｔ）で第５位に輝きました」

クリュウ「え？　僕が第５位？　ベスト５入りしたの？」
レン「はい。ですので、おめでとうございます」
クリュウ「あ、ありがとう……って、ホントに？　冗談とかドッキリじゃなくて？」
エリーゼ「あんたにドッキリとか仕掛けるだけ無駄な時間でしょうが。こちとらさっさと終えたいんだから、ウソ言うはずないでしょ」
クリュウ「そ、そっか……えへへ、何だか嬉しいな」
エリーゼ「気色悪いわね……」
レン「も、もうエリーゼさんは黙っててくださいッ。えっと、お兄さんは前回は惜しくも第６位でしたが、今回は見事にランクアップしてベスト５入りしましたね」
クリュウ「そうなんだよ。主人公なのにベスト５を逃すとか、正直アレは落ち込んだなぁ。それにしても、何でぼくの票が伸びたんだろ。他にも人気がありそうな子はいっぱいいるのに」
エリーゼ「あんただって自分の順位を信じられてないじゃない……」
レン「えっと、アルトリア編でのお兄さんの活躍っぷりが評価されて得票に繋がったと思われます」
クリュウ「そっか。それじゃ、イリスのおかげだね。彼女には本当に心から感謝しないと」
レン「あの、そのイリス陛下なんですけど……」
クリュウ「イリスがどうしたの？」
イリス「妾に何の用じゃ娘」
クリュウ「い、イリス？　何でこんな所にいるのさ」
イリス「この娘に呼ばれたのじゃ。何やら妾に話があるらしいのじゃが」
レン「え、えっと、あの……」
エリーゼ「しゃっきりしなさいアホ」
レン「は、はいッ。えっと、ごほん。イリス・アルトリア・フランチェスカさん――おめでとうございますッ！」
イリス「な、何じゃ藪から棒に」

レン「いいえ、糠から釘です」
イリス「……何じゃその漫談のような切り返しは。お主は芸人か？」
レン「いいえ。これはお父ちゃんがよく言う切り返しなんです」
エリーゼ「あんたの父親のアホっぷりを披露しに来た訳じゃないでしょうが。ほら、本題」
レン「あ、はい。えっと、イリス陛下はお兄さんと同点（単独投票５ｐｔ）、同率５位なんです」
クリュウ「僕とイリスが同じ５位って事？」
エリーゼ「そういう事。ずっとあんた達二人で下位争いをしてたって訳」
クリュウ「下位争いって……」
イリス「ふむ。察するに人気投票の事かのぉ？　それで妾がクリュウと同じ５位となった訳じゃな」
クリュウ「どうやらそうみたい。偶然だね」
イリス「競争で５位という結果は不甲斐ないがのぉ」
クリュウ「そんな事言わないの。僕なんて主人公なのにようやく今回ベスト５入りしたんだあから」
イリス「……じゃが、お主と一緒の順位というのも悪くない」
クリュウ「イリス……」
エリーゼ「はいはい。桃色の雰囲気とか面倒だからさっさと片付けるわよ。それでレン、この女王様が５位になった理由は？」
レン「は、はい。主に「まだ幼いのに女王としてがんばる姿と女の子としてのかわいさ、二つを兼ね備えた魅力」「かわい過ぎる」「アルトリア編全体を通して二人のエピソードに感動した」などです。ちなみに補足情報ですが、イリス陛下とお兄さんは一人の投票者が投票できる３人の中でコンビで投票される率がかなり高いそうです」
エリーゼ「ようするに、アルトリア編での感動がそのままあんた達二人の票になったのね」
イリス「感動……妾としてはただ単に王家の恥を晒しただけのような気はするがのぉ」

クリュウ「あははは……」
イリス「――じゃが、お主と出会えた事は、我が人生最大の奇跡じゃな」
クリュウ「僕もそう思うよ。だってさ、普通なら逢えるような距離でも関係でもないんだから」
イリス「クリュウ……」
クリュウ「イリス……」
レン「……あたッ!?」
エリーゼ「……何寂しそうな目であいつの事見てんのよ。殴るわよ」
レン「い、今殴ったじゃないですか……ッ」
エリーゼ「今のは小突いただけよ。殴ってなんかいないわ」
レン「もう、物は言いようじゃないですか……」
エリーゼ「何か言った？」
レン「い、いえ何にも言ってませんッ」
エリーゼ「ふぅん。で、これで終わり？　正直あたしはこいつらの桃色の空気から早く脱したいんだけど」
レン「え、えっと。最後のお二人から今回応援して下さったファンの方々にコメントをお願いします」
クリュウ「そ、そうだね。えっと、応援して下さった皆様には心から感謝いたします。まだまだ若輩者ではありますが、今後これまで以上に精進し、皆様のご期待に応えられるような立派なハンターになってみせます。今後共、どうかよろしくお願い致します」
エリーゼ「……難しい事言ってるけど、読者が求めてるのはあんたの立派さなんかじゃなくて、一体誰に決めるかって事でしょうが」
クリュウ「どういう事？」
エリーゼ「……面倒になりそうだからパス」
レン「え、えっと。じゃあイリス陛下」
イリス「うむ。妾はクリュウと違って今回初登場の新参者じゃ。それに主人公であるクリュウと違うて、今後の登場は未定。正直、お主達から応援してもらった事は心より感謝するが、次にお主達の前に姿

を現し、その期待に応えられるかはわからん。じゃが、妾なりに全力は尽くす所存じゃ。じゃから、どうかその時まで妾の事を頭の片隅にでも覚えておいてほしい。妾からは、それだけじゃ」
レン「……さすが女王陛下。威厳のあるお言葉です」
エリーゼ「ほら、終わったんだったらさっさと行くわよ。まだこの先は長いんだから」
レン「あ、はい。じゃあお兄さん、また今度です」
クリュウ「うん。レンも元気でね」
イリス「達者でな」

イリス「……ところでクリュウ。あのレンとかいう娘とはどんな関係じゃ？」
クリュウ「え？　うーん、妹みたいな感じかな」
イリス「……この際、お主とはゆっくり話し合う必要がありそうじゃな」
クリュウ「どういう事？　っていうかイリス、何だか目がすごく怖いんだけど」
レン「……エリーゼさん。お兄さんがものすごく怖い顔をした陛下に首根っこを掴まれて連れ去られて行きますよ」
エリーゼ「自業自得でしょ。無視して次行くわよ」
レン「は、はぁ……」

レン「続いては総得票数６２ｐｔ（単独投票２５ｐｔ）獲得して第４位に輝きました、その凛々しさと気高さ、そして勇ましきで多くの方を魅了した蒼銀の烈風こと、シルフィード・エアさんですッ」
シルフィード「……この唐突な流れは、あれか？」
レン「はい。《第２回　読者のハートを射止めたのは誰だグランプリ》です」
シルフィード「そうか……つかぬ事尋ねるが、君達は誰だ？」
エリーゼ「あぁ、そっか。私達まだ本編じゃ顔合わせしてないのよね。えっと、あたしはエリーゼ・フォートレス。こっちの鼻水垂れ流

してるのがレン・リフレインよ」
レン「垂らしてなんかいませんよッ」
シルフィード「あぁ、君達か。確か以前クリュウとガノトトスの討伐をしたと言う」
エリーゼ「そういう事。まぁ、この空間は本編と直接の関わりは何もないからさ。伏線とかんな面倒なもん忘れていきましょうよ」
シルフィード「そうだな。その方が私としても助かる――それで、私は４位となったのか？」
レン「そうです。シルフィードさんは前回も４位ですので、順位を維持されたんですね」
シルフィード「そうだな。だが前回は確か４５ｐｔ票だったから、２０ｐｔ近く伸ばした感じか」
エリーゼ「票を入れた人の意見の多くが「かっこいい」「勇ましい」「頼もしい」の三拍子って感じね」
シルフィード「嬉しいには嬉しいのだが、何だか微妙な気分だな」
レン「あ、でも他にも意見がありますよ。「頼もしくも所々抜けている所が可愛らしい」「いつもは凛々しいのに時々見せる天然っぽさがいい」「あたふたした姿が最高」などなど、いわゆるギャップ萌えに対する高評価が多いようです」
シルフィード「……それもそれで喜ぶべきか悩む内容だな」
エリーゼ「あと「巨乳最高」って意見も中にはあったわよ」
シルフィード「……」
レン「シルフィードさん？　顔真っ赤ですけど、大丈夫ですか？」
シルフィード「……つかぬ事尋ねるが、これは人気投票とは名ばかりの私に対する公開処刑か？」
エリーゼ「まぁ、実質そうじゃない？」
シルフィード「……」
レン「あ、あの。ファンの皆様に何かコメントを……」
シルフィード「……あぁ、そうだな。投票してくれた人達には感謝する。これからは君達が喜ぶような情けない所はなくして、頼もしい戦姫としてがんばる所存だ」

エリーゼ「いいのそんな事言って。あんたの支持基盤を失うわよ？」
シルフィード「私はクリュウ達を率いるリーダーだ。いつまでも情けない姿を見せてはいられないからな」
レン「でもお兄さんって、シルフィードさんの時々見せるそんな所が可愛らしいとか本中で言ってますよね」
シルフィード「……」
エリーゼ「あんた、今早速自分の発言を撤回しようとか考えてるでしょ」
シルフィード「初期設定ではこんなに弱点は多くなかったんだがな……」
レン「えっと、色々と大変かもしれませんが。今後もお兄さん達を中心とした物語である恋狩では、シルフィードさんの指揮力が重要な役割となっています。どうかこれからもがんばってください」
シルフィード「あぁ、任せておけ」
レン「それでは、私達はこれで……」
シルフィード「あぁそうだ。まだまだこれから長いんだろ？　ちょうどクリュウ達に食べさせようと思っていた私の手作りのサンドイッチの詰め合わせがあるんだが。持って行くか？」
レン「うわぁ、いいんですか？　それじゃお言葉に甘えて――うにゃあああぁぁぁぁッ!?」
エリーゼ「逃げるわよレンッ！」
シルフィード「お、おい……ッ」

エリーゼ「ハァ……ハァ……」
レン「な、何するんですかエリーゼさん。せっかくのご好意なのに……」
エリーゼ「あんた、あの人の最大の弱点を忘れたの？」
レン「え？」
エリーゼ「食品を生物兵器にする程度の能力よ」
レン「……」

エリーゼ「もしもあれを一口でも食べてれば、想像を絶する事になっていたでしょうね……」
レン「……本当に、色々と惜しい人ですね。シルフィードさんって」
レン「続いて第3位は、総得票数７５ｐｔ（単独投票２５ｐｔ）獲得。天上天下唯我独尊自分絶対至上主義という覇道を貫きし、その凛々しき片目に彼への愛を誓う無双の戦姫、サクラ・ハルカゼさんです」
サクラ「……クリュウはどこ？」
レン「えっと、お兄さんなら第5位で出番が終了しましたのでここにはいませんが」
サクラ「……ならここに居る意味はない。帰る」
レン「えええええッ!?」
エリーゼ「噂通りの我が道の行きっぷりね」
サクラ「……そもそも、貴様らは何者」
エリーゼ「あぁ、毎回毎回面倒だからカットするわよ。確かあんた、前回も3位だったわよね？」
サクラ「……記憶にない」
エリーゼ「……会話にならないんだけど」
レン「えっと、サクラさんは前回４６ｐｔですから、大幅にｐｔを伸ばした訳ですね。人気が大きく伸びた要因は何だと思いますか？」
サクラ「……興味ない」
レン「えっと……」
エリーゼ「文字通り話にならないんだけど」
レン「あ、あの強いて言えば……」
サクラ「……クリュウへの愛」
エリーゼ「……あぁ、噂通りあんたはあのバカじゃないと相手になんないわね」
レン「あの、ファンの方々に対して何かコメントを……」
サクラ「……そうね。私とクリュウが結ばれるよう、これからも馬車馬のように私に従いなさい。拒否は許さない。拒否すれば、私の刀

が貴様らの首を跳ねるわ」
レン「……え、エリーゼさん」
エリーゼ「もはや何を言っても無駄ね、この子」
サクラ「……クリュウを捜さないと。捜して、手足を縛って、人気のない所へ連れ込んで、あんな事やこんな事を……ふふふふふふふふふふふふふ」
レン「怖いですッ！　サクラさんの目が狂気に満ちまくっているですッ！」
エリーゼ「……あのバカなら向こうにいるわよ」
サクラ「……協力感謝する」
レン「早ッ!?　一瞬でいなくなっちゃいましたッ！　……っていうか、エリーゼさん。正直に教えてしまいましたけど、お兄さんが危険じゃないですか？」
エリーゼ「知ったこっちゃないわよ」
レン「えっと、次に行きましょうか」

レン「第２位は総得票数１０２ｐｔ（単独投票３５ｐｔ）獲得。過去編が完結してから現実時間で２年半が経過しても根強い人気を誇る過去編ヒロインにして、神恋姫の座に君臨する二色の瞳を煌かし最強の恋姫、ルフィール・ケーニッヒさんです」
ルフィール「皆さんお久しぶりです。モンスターハンター　～恋姫狩人物語～のメインヒロイン、ルフィール・ケーニッヒです」
エリーゼ「監督責任者がいないからって言いたい放題言ってるわね、あんた」
ルフィール「お久しぶりです、生徒会長」
エリーゼ「その呼び方はやめてよ。もう卒業してんだし」
レン「えっと、エリーゼさんとルフィールさんはお知り合いなんですか？」
エリーゼ「……まぁ、知り合いと言えば知り合いだし」
ルフィール「敵同士だった、とも言えなくはありませんね」
レン「あ、あの……」

エリーゼ「こいつはあたしが生徒会副会長の頃にクリュウとシャルルとつるんで問題ばかり起こしていた問題児。そんであたしはそんな治安を乱す学生を制圧していた生徒会役員って訳」
ルフィール「失礼な物言いですね。ボクはこれでも3期連続主席という優等生ですよ」
エリーゼ「素行が問題なのよ。素行が」
ルフィール「あなたが生徒会長になってからは、主にシャルルさんが問題を起こしていましたけど」
エリーゼ「……文化祭で花火を打ち上げようとして理科室一個吹き飛ばすわ、運動会でパイ投げ大会を強行してあたしの顔面にブツけやがるわ。細かいのも含めたら本当キリがないわよ」
ルフィール「エセックス先輩卒業後、生徒会の力は大きく弱体化していたのも苦しいですね」
レン「え、エリーゼさんはすごい人ですッ！　弱体化なんてそんな……ッ！」
エリーゼ「前任者が化け物じみてるくらいにすごかったのよ。あとあの人の腹心とも言うべき優秀な人の大半が、あの人と同時に卒業したのも大きかったわね。今までサポート役のサポート役だった人がいきなり幹部クラスに置かれても、力を発揮できない。まぁ、大概はあたしが出向いてあのバカの脳天をぶん殴って止めてたんだけど」
ルフィール「見ている方としては面白い漫談でしたよ。あなた達の芸人魂には敬服します」
エリーゼ「漫談じゃないし、芸人魂なんてないわよッ！」
レン「あ、あの。私は全くついていけないんですが……」
エリーゼ「別について来なくていいわよ。とにかく、こいつとはそういう関係って訳」
レン「あの、今の話だとほとんどシャルルさんの問題行動しか出ていなかったような……」
エリーゼ「あのバカに色々と吹き込んだり、事態が大きくなるよう裏から手を回してたのがこいつなのよ」
ルフィール「失礼な物言いですね。こっちとしてはあのバカの女王

が致命的な事態を起こさないよう止めていた身なのですが」
エリーゼ「モノは言い様ね。理科室爆破事件だって、あんたが防衛戦と用意していたカギを突破したからあのバカが侵入した結果起きた事でしょうが」
ルフィール「それは語弊がありますね。あの時シャルルさんは強行突破しようとしていました。あのバカ力で暴れられたら、理科室一つの被害ではなかったと思いますが」
エリーゼ「……フン、やっぱりあたしはあんたとはウマが合わないわね」
ルフィール「奇遇ですね。ボクも至って同感です」
レン「あ、あのぉ……」
エリーゼ「……あんた、次章から復活するみたいじゃない」
ルフィール「ええ。過去編から2年半、臥薪嘗胆の想いで耐えて来た苦行にもひとつのケリをつけて、ボクが再び表舞台へと舞い戻る時が、ようやく訪れました」
エリーゼ「過去編でメインヒロインだったあんたが、サブヒロインだったあのバカやアリア達よりも後に登場とはね」
ルフィール「真打というものは、最後の最後に登場するものです。そして、この茶番に終止符を打ちます――先輩は、ボクが必ず取り戻してみせます」
エリーゼ「……まぁ、あたしにはどうでもいい話だけど――まぁ、がんばりなさい」
ルフィール「……努力なんて無意味。結果だけが全てです――ですが、努力を評価するあなたからの助言は、心に留めておきます」
エリーゼ「ハッ、ったく可愛げがないわねあんたは」
ルフィール「失礼します」
エリーゼ「ええ」
レン「……行っちゃいましたね」
エリーゼ「そうね」
レン「あ、コメントもらってませんけど……」
エリーゼ「無駄よ。あいつの目にはきっと、あの間抜け面しか写っ

てないんだから」
レン「――そうでもないみたいですよ」
エリーゼ「え？」
レン「これ、ルフィールさんの書き置きですね」
エリーゼ「あいつの？」
レン「えっと……、『皆様からの心温かい応援、心より感謝いたします。皆さんの応援に応える為にも、次章から最強の恋姫として先輩に群がる恋姫を全て駆逐してみせます。恋狩で一時期とはいえ唯一《メインヒロイン》という称号を持つルフィール・ケーニッヒ。主役と烏合の衆でしかないサブキャラとの違い、その目でしかと見届けてください。今後共、末永い応援をよろしくお願い致します――ＰＳ　がんばり過ぎる元生徒会長、昔のあなたよりボクは今のあなたの方が好きですよ』……だ、そうです」
エリーゼ「……ったく、柄にもない事言ってんじゃないわよ――バァカ」

レン「それでは第１位の発表ですッ」
エリーゼ「……いや、もうわかってるからさ」
レン「え、エリーゼさんッ！　一応秘密なんですから、ネタバレする危険性があるような事言わないでくださいッ」
エリーゼ「わかったわよ」
レン「え、えっと、第１位の発表――の前に、惜しくもベスト５には入れませんでしたがベスト１０入りした第６位～第１０位までを一挙に発表します。こちらですッ」
第７位　ツバメ・アオゾラ（↓）　１７ｐｔ（単独投票５ｐｔ）
第８位　シャルル・ルクレール（→）　１４ｐｔ（単独投票０ｐｔ）
第８位　ルーデル・シュトゥーカ（Ｎｅｗ）　１４ｐｔ（単独投票０ｐｔ）
第１０位　カレン・デーニッツ（Ｎｅｗ）　８ｐｔ（単独投票０ｐｔ）
エリーゼ「……ベスト５と比べると、ものすごい底辺の戦いね」
レン「第７位には前回第５位だったツバメさんという方がランクダ

ウンしています」
　エリーゼ「せっかく前回人気があったから使い捨てキャラからサブキャラに昇格したのに、すっかり出番がなかった子よね。運がないわね」
　レン「第８位には前回第１０位だったシャルルさんが浮上していますね。あのバカさがいい、熱血ぶりが最高、時々見せる女の子らしさにグッと来るなどが評価されているようです」
　エリーゼ「バカな女子が男子受けするのは、今の時勢の流れに乗ってるだけでしょ」
　レン「シャルルさんとタイで第８位となったのはルーデル・シュトゥーカさんという初登場のお方です」
　エリーゼ「前回の王者フィーリア・レヴェリって子の親友で狩猟笛使い。戦闘中よくアレなスイッチが入るなど、他にはない個性満載の人のようね」
　レン「戦闘中のアレなスイッチが入る以外は普通なのに、過去に辛いを経験を持ち、主人公であるお兄さんに頼ろうとする弱々しい一面とのギャップが良かったとの意見が多いですね」
　エリーゼ「キャラクターに何かしら暗い過去を持たせるのはアホ作者の常套手段よね。公開していない処女作でも主人公には幼馴染を殺されているというトラウマがあるし、艦魂って方の作品でも主人公は妹を失ったトラウマを持ち、そしてこの恋狩でもサクラ、シルフィード、そしてこのルーデルって子」
　レン「あとエリーゼさんもそうですよね」
　エリーゼ「はぁ？　あたしはトラウマなんかじゃないわよ。調子に乗んな愚図レン」
　レン「ひ、ひどい言われようです……」
　エリーゼ「生意気な事言うからよ、バカ」
　レン「……えっと、第１０位の方はカレン・デーニッツさん。こちらも初登場で、エルバーフェルド帝国において海軍総司令官を務め、お兄さんを女の子と勘違いしたまま友達となった方です」
　エリーゼ「……読み返しても、むちゃくちゃな話だったわよね」

レン「モンハン小説なのに、女王陛下に海軍総司令官などが人気キャラにランクインするのは何だか変な感じですね」
エリーゼ「アホ作者が無駄に広げすぎただけよ。モンハン小説なのに全然狩猟しないし」
レン「でも次章からは狩猟編に入るみたいですね」
エリーゼ「アホ作者的にはあと3体くらい狩猟を考えてるみたいだけど」
レン「どんなモンスターを相手にするんでしょう」
エリーゼ「まぁ、一応秘密だから言わないけど。クリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人編成で戦うのはあと一回くらいになるそうよ」
レン「じゃあ、あとの二回はまた分隊という形ですか？」
エリーゼ「一回はそうみたい」
レン「じゃあ、残る一回は……」
エリーゼ「まぁ、そこはこれからのお楽しみって訳。とりあえず、次の狩猟は次章にあるそうだから、まぁ期待しない程度で待ってなさい」
レン「以上、第６位～第１０位までの方々でした」

レン「それではいよいよ第１位の発表ですッ」
エリーゼ「……まぁ、大方の予想通りではあるけどね」
レン「《第２回　読者のハートを射止めたのは誰だグランプリ》、優勝したのはこの方ッ！　その無垢な天使の笑顔で多くの読者の心を撃ち抜いた史上無敵の純情可憐姫。《第１回　読者のハートを射止めたのは誰だグランプリ》に続いて見事二連覇を達成したフィーリア・レヴェリさんですッ！　獲得ｐｔは王座に君臨するに相応しい堂々とした１１６ｐｔ（単独投票４０ｐｔ）ッ！」
フィーリア「な、何事でしょうかッ!?」
エリーゼ「ひゃぁく……あんた、前回も確か単独で１００ｐｔ超えてたわよね」
フィーリア「あの、何でしょうか？　……あれ？　レンちゃん？」

レン「あ、お久しぶりですフィーリアさん」
エリーゼ「あぁ、そういえばあんた。前にレンとライザと一緒だったわよね」
フィーリア「そういうあなたは、エリーゼ様ですね。以前レンちゃんから色々とお聞きしました」
エリーゼ「あんた、何を言ったのよ？」
レン「ふえッ!?　そ、それはそのぉ……」
エリーゼ「あぁッ！　あたしの悪口とか言ってたんでしょッ！」
レン「い、言ってませんよッ！」
フィーリア「悪口なんて言っていませんよ。ただエリーゼ様の事を敬愛し、尊敬し、心よりお慕い申し上げているとお聞きしたまでです」
エリーゼ「余計恥ずかしいわよッ！」
レン「な、何でブツんですかぁッ!?」
エリーゼ「う、うるさいうるさいうるさぁいッ！」
フィーリア「あの、一体何しに来たのでしょうか……」
エリーゼ「何カマトトぶってんのよ。人気投票よ人気投票。あんたが１１６ｐｔ獲得してまた１位になったって言ってんのよ」
フィーリア「え？　そうなんですか？」
レン「すごいですよね。二連続優勝、しかもどちらも１００ｐｔを越えるという人気っぷり」
フィーリア「前回もそうですけど、そんなに多くの方々に好かれているなんてビックリです」
エリーゼ「でもこんだけ人気があるのに、あんたメインヒロインじゃないんでしょ？」
フィーリア「……正確には私を含めてサクラ様、シルフィード様、エレナ様の四人がメインヒロインという位置づけです」
エリーゼ「不憫よね。連載当初はあんたがメインヒロインだったのに、他のキャラが人気が出始めた結果、メインヒロイン四人体制。まるで最近の幼稚園や小学校の運動会みたい」
レン「どういう事ですか？」
エリーゼ「１位とか順位を決めないって事よ。モンスターペアレン

ツが怖いから」
レン「そ、そんな恐ろしいモンスターがいるんですか？」
フィーリア「……レンちゃん、たぶん意味間違えてるよ？」
エリーゼ「今回もあんたが見事１位を取った訳だけど、正直今回は前回と違ってあんたの完全勝利とは程遠い結果になったわよね」
フィーリア「そうなんですか？」
レン「はい。正直、フィーリアさんの得票率の伸び率はそれほど高くはありませんが、下位の方々の伸び率は驚異的です。特にルフィールさんは前回の人気投票から全く登場していませんが、前回よりも４０ｐｔ以上増やして今回は１０２ｐｔという快挙を成し遂げました」
エリーゼ「他にもサクラって子も前回より約３０ｐｔ、シルフィードって人も約２０ｐｔポイントを増やしてる。それに比べてあんたの伸び率は約１０ｐｔ。１位には変わりないけど、安泰とは言いづらいわよね」
フィーリア「……サクラ様やシルフィード様の台頭はわかりますが、なぜそのルフィール・ケーニッヒという方が伸びるのかがわかりません。仰る通り、前回の登場から二年以上未登場なんですよ？」
エリーゼ「ほら、一応あのバカのモノローグにはそれらしい描写が多いし、アルザス編の最後では全部の感動を持って行ったし。アメリア編最終回も彼女の無双っぷりが強調されていた。そして次回からはそのルフィールが再登場する訳だから、期待を込めた票も多かったって訳ね」
フィーリア「強敵、なんですね」
エリーゼ「うーん、確かに強敵かもしれないわね。あの娘を本気で撃退しようと思ったら、さっきあんたが言ったメインヒロイン四人がかりで五分か、六対四ってくらいかしら」
フィーリア「……相手にとって、不足はありませんね」
レン「でも、何はともあれフィーリアさんが見事二連続優勝されたんです。お気持ちはいかがでしょうか？」
フィーリア「そりゃ嬉しいよ。私なんかをこんなにたくさんの人が好いてくれるなんて……」

エリーゼ「1位の人間の謙虚な言葉程、下位の連中に対する侮辱はないわよ」
フィーリア「そ、そうですね。では、次回の人気投票では今回以上に他を圧倒してみせますッ」
エリーゼ「すぐそうやって天狗になるのよねぇ」
フィーリア「じゃあどうすればいいんですかッ!?」
レン「あ、あのッ。とりあえずファンの皆様にお返事のコメントを言ってもらえますか？」
フィーリア「そ、そうだね。えっと、前回に引き続いてこうして首位防衛ができたのも応援してくださった皆様のおかげです。心より感謝すると共に、皆様からのご期待に応えられるべく今後も精進いたしますので、どうか今後共よろしくお願い致します」
エリーゼ「……オチなんだけど。普通の事言われてもねぇ」
フィーリア「そんな事言われても……」
レン「あの、そんな事もあろうかとオチ要員をお呼びしました」
フィーリア「オチ要員？」
サクラ「……誰がオチ要員よ」
フィーリア「サクラ様ッ!? ど、どうしてここに……」
シルフィード「私もいるぞ」
フィーリア「シルフィード様、それにクリュウ様、イリス陛下まで……」
クリュウ「あははは、やっぱりフィーリアの人気は強いね。僕の三倍近いｐｔを取っちゃうんだもん」
フィーリア「い、いえ。今回は私も苦戦を強いられたと思います」
シルフィード「そのようだな。日別のポイントを集計してみると、前半はサクラの方がｐｔは高かった。中盤はルフィールが追い抜いて首位をキープするも、後半でフィーリアが一気に追い上げて逆転。前回のように君がずっと首位だったという展開ではなかったな」
サクラ「……最後の最後で組織票が動いたとしか思えない。選挙委員会に訴えるべき」
イリス「委員会などないじゃろうが。会長・副会長・会計・書記全

てを兼任しておるのは作者じゃぞ」
サクラ「……なら、作者を始末する」
シルフィード「……それは回りまわって我々の致命傷となるぞ」
クリュウ「それにしても、今回は5位以内は全員票が伸びたんだね」
シルフィード「前回よりも有効得票数1．5倍、参加人数約100名だからな。全体的に票も散っているようだし」
サクラ「……クリュウ、私、フィーリア、シルフィード。このイージス村四人だけで総得票数の過半数を占める」
フィーリア「すごいですね。やっぱり私達は最高の四人組ですね」
エリーゼ「というより、本編のメインキャラでしょうが。むしろそれくらいしてもらわないと、こっちとしては報われないわよ」
レン「あははは……」
クリュウ「じゃあ、そろそろ終わりも近いから閉めようか」
フィーリア「そうですね。読者の皆さん、今回は人気投票のご協力ありがとうございました。今後とも私達の物語、《モンスターハンター　～恋姫狩人物語～》をよろしくお願いします」
シルフィード「まぁ、この先どんな展開になるかは私達にはわからない。だがな、作者が挑んでくるどんな苦行も、私達四人で跳ね返してみせるさ」
サクラ「……私のクリュウに対する愛は、どんな障害も意味をなさない」
フィーリア「わ、私だってクリュウ様への愛はどんな壁だって乗り越えますッ」
シルフィード「まぁ、この四人の絆は最強だ……とでも纏めておこうか」
クリュウ「何だか、恥ずかしいよ……」
エリーゼ「……っていうか、MCは私達だったはずなのに、すっかり持って行かれたわね」
レン「そうですね。でも、最後だけはしっかりと纏めたいと思います」
エリーゼ「そうね」

レン「ゴホン。これにて《第２回　読者のハートを射止めたのは誰だグランプリ》は閉幕いたします。第３回はあるのでしょうか？　期待しましょう。それでは皆様、これからも応援よろしくお願いします。それでは～」

シャルル「……ま、またベスト５入りしなかったっす」
カレン「……新参者はこういう扱いなのでしょうか」
ルーデル「私が外野なんてマジムカつくんだけどぉ～ッ」
エレナ「……もう勝手にして」

皆さんこんばんわ。恋狩作者の黒鉄です。
さて今回は２週間かけて行った人気投票の結果をお送りさせていただきました。
前回はクリュウとアシュアをＭＣに配置しましたが、今回はエリーゼとレンのキャノンガールズでお送りさせていただきました。
さて、今回は何と約１００名の読者の方にご協力をいただきまして、無事にこうして人気投票を無事に送る事ができました。
第１位はやはりと言おうか、無双の強さを誇る最強の可憐姫ことフィーリア・レヴェリ。今回も堂々の１００ｐｔ超えで見事二連覇を達成しました。しかし今回は下位グループの台頭っぷりがすごく、前回のように圧勝とは言いがたい結果に。
第２位はルフィール。次章から活躍する予定だけあって、期待も込められてかなり今回は躍進。彼女も見事１００ｐｔを超えました。しかし前回から全くと言っていいほど登場していないのに前回よりも４０ｐｔも伸びるとは、末恐ろしい子ですね（苦笑）
第３位、４位も前回と同じくサクラとシルフィード。どちらも前回よりもｐｔを伸ばしており、サクラに関しては一時的にはフィーリアを圧倒していたのですが、後半で追いぬかれてしまいました。シルフィードは着実な伸びで上位グループを常に牽制していました。
そして今回、第５位には主人公であるクリュウと、そんな彼とアルトリア編で大活躍したイリスが同率でランクイン。こんな所でも仲

の良さをアピールしております（苦笑）
クリユウがベスト５入りして本当に良かったです。何せ主人公ですからね。入ってもらわないと……
イリスは前回のルフィールのような状況でしたが、前回のルフィール程は伸びませんでした。でもまぁ、今回は結構５位以外にも票が散っていましたからね。
そして５位入りしなかった子達もなかなか奮闘した方です。しかしエレナだけは今回はベスト１０すら逃す事に。前回よりも大幅に得票数を減らして、わずか６ｐｔ。一応最古参の恋姫であり、分類上はメインヒロインのグループに入るキャラなんですが……ものすごく残念な結果に。
とまぁ、こんな感じで人気投票は終わりました。
皆さんはこの結果、いかがだったでしょうか？
またこういう機会がありましたら、ぜひやってみたいです。その時はまたご協力をお願いします。

第１８１話　変わらぬ想いを抱き　少女は愛しの彼の前で微笑む

クリュウ達がアルトリア王政軍国から戻ってから、約一ヶ月の月日が流れた。季節はすでに北風も凍えるような寒さから涼しいものに変わった夏。春に芽を吹いた緑は皆一様にその淡い黄緑色を深緑に染め、生物達が最も活気づく季節。

北国に位置するイージス村は冬は極寒だが、そういう意味では夏は涼しくて過ごしやすい。この地域には貴族の避暑地があるほどだから、その過ごしやすいさは折り紙つきだ。

そんな夏の季節は、イージス村にも活気をもたらしていた。

貴族のように別荘はなくとも、避暑を求めて訪れる観光客がこの時期多い。大部分は利便性もいいアルフレアへ行くが、中にはイージス村へ来る珍しい者も少なからず存在する。当然、そんな観光客相手に村は活気づいていた。村の財政は収穫物の輸出の他に、こうした観光事業においても支えられている。

イージス村は周辺の村では一番栄えている村だ。雪解け水による湧き水が豊富であり、その水を水路を用いて各家庭へと流す仕掛けは村長の大偉業の一つだ。上水道が完備されているなんて、ドンドルマでもないような画期的なものだ。まぁ、ドンドルマは決して水が豊富な地域ではないので一概には比較はできないが。

避暑目当ての観光客の他にも、先日ドンドルマの情報誌で取り上げられたエレナの酒場が目的の観光客も多い。その結果、エレナの酒場はいつにも増して忙しく、臨時でフィーリアとツバメをバイトで雇い、近所の人の協力を得て何とか運営している状況だ。

そんな夏の活気に湧くイージス村で、クリュウは一人村の一番高い丘に位置する村長の家の横で稽古をしていた。木刀と木製の盾を持ち、足捌きや剣の振り方など、細かい場所を常に磨いている。ドンドルマなどの夏の暑さに比べれば涼しいここでも、彼の額には大粒の汗が浮かんでいた。体を振るたびにその汗がキラキラと輝きながら宙

を舞う。
右足で一気に踏み込み、剣をまるでレイピアのように突き刺してから手で捻って斬り上げ。そこから左腕に構えた盾をエルボーの要領で叩きつけ、捻った体を一気に回転させて回し斬り。その流れるような動きは全て繋がっており、練習に練習を重ねた結果生まれた動きだ。
「ふぅ……」
止めていた息を一気に吸い込み、吐き出す。止まらない汗を無理やり腕で拭い取ると、傍においてあった桶の中に浮かぶタオルへと手を伸ばす。桶の中の水は冷たく、それをたっぷりと含んだタオルを首に巻くだけで体の熱が和らぐ。村長の家にはより源泉に近い井戸があり、そこの水は夏でも凍るように冷たい。近所の子供達が遊び疲れてはよくここで水を飲んでいる姿を見かける。クリュウもまた、冷たい水を欲してここで練習していた。
「おぉ、クリュウ君。疲れただろ？　こっちへ来てスイカでも食べないかい？」
爽やかな笑顔と共に縁側から声を掛けたのはもちろん、村長だ。クリュウは汗を拭い取り「ありがとうございます」と礼を述べて縁側へ腰を落とすと、切り分けられたスイカにかぶり付く。決して甘過ぎないジューシな甘味が口の中いっぱいに広がる。体が甘い物を欲している事がわかるように、全身にスイカの果汁が染み渡る。よく冷えているのが余計に最高だ。
口の中に溜まった種を皿へと出し、口周りに付いた果汁をタオルで拭い取る。
「ふはぁ、やっぱり村長さんのスイカは最高ですね」
「あはははは、それは良かった。でもまぁ、高貴なお方にスイカなんて庶民じみたものはお似合いじゃないのでは？」
「……もう、そのネタはいいですから」
「あはははッ」
楽しそうに笑う村長に、クリュウは苦笑を浮かべた。
アルトリアでの事は、一応村長にだけは伝えてあった。村長は両親

と親しい仲だったので、伝えるべきだと思ったのだ。最初こそ驚いていたが、持ち前の臨機応変さですぐに順応し、今では時々こうしてクリュウをイジるネタにしている。
「だけど、エッジとアメリアの息子もずいぶんと大きくなったもんだね。ちょっと前まで僕の腰くらいの大きさだったのに」
「それ、いつの頃ですか？」
「うーん、キーちゃんがいた頃くらいかな？」
「それ、もう七年も前の話ですよ」
　年寄りは時間の感覚が壊れると言うが、どうやら村長もその例外ではないらしい。見た目は若く見えても竜人族である彼はこの村に住む最高齢のカリアおばあさんくらいの年月は生きているらしい。
　村長のボケを笑いつつ、クリュウはスイカを一気に平らげる。その時、
「ニャァ～ッ！　クリュウぅッ！」
　庭への入口の方から一匹のアイルーが走って来た。若葉色の毛並みにドングリメイルを着こなしたアイルーは、以前はマフモフメイルを備えていたがさすがにこの暑さに断念したらしい。
　ツバメのオトモアイルーこと、オリガミだ。
「オリガミ？　どうしたの、そんなに慌てて」
　足元まで走って来たオリガミをクリュウは不思議そうに見る。そんな彼の問いかけに、オリガミは息を整えると、キラキラとした瞳で彼を見上げた。
「アシュアから伝言だにゃッ。頼まれていた品が完成したから、最終調整をお願いしたいだってニャ」
「ほんとッ!?　すぐ行くよ」
　オリガミの報告にクリュウは目を輝かせると、村長にお礼を言って荷物を持って走り出す。振り返ればオリガミが縁側に上がって今まさに自分が食べていたようにスイカに頬張るのが見えた。
　長い階段を一気に駆け下りて、村のメインストリートを走り抜ける。すれ違うたびに村人達が明るく声を掛けてくれる。元々村では有名人だが、ハンターとなった今では余計にだ。

村人達一人ひとりに走りながら返事をして、クリュウは先を急ぐ。向かうは、村の住宅街から少し外れた丘の上に建つアシュアの工房だ。
いつも絶えず煙突から煙を出しているのは、彼女が仕事熱心な証だ。そして今は、自分が発注した品を作っている最中だろう。
「アシュアさん、クリュウですけど」
ドアをノックしながら声を掛けると、中から「おぉ、勝手に入って来てぇな」と元気なアシュアの声が響く。言われた通りにドアノブを回して中へ踏み入れ、住居ではなく工房へと入る。すると、外の外気とは比べ物にならない熱風が彼の頬を撫でる。
「暑ぅ……」
余計に噴き出す汗を手の甲で拭いながら、階段を降りて工房へ入ると、燃え盛る鑪（たたら）の前で作業をしているアシュアの姿を発見する。火花などで火傷しないように全身を長い作業着で包み、眩い火花から目を守るゴーグルを掛け、頭には手ぬぐいを撒いたその姿はまさに職人と言うに相応しい出で立ちだ。
何か作業をしていたアシュアはクリュウの姿を見つけると、ゴーグルを取っていつものように屈託の無い笑みを浮かべた。
「やぁクリュウ君。早かったやないか」
「そりゃ、走って来ましたから」
「そないに急がんでも品物は逃げへんて。ほんじゃ、最終調整と行こうかねぇ」
そう言ってアシュアは部屋の隅に置かれたそれの前に立つ。布で上から覆われたその品はクリュウの身長と同じくらいの大きさだ。もちろん、そういう風に調整されて作られているのだから当然と言える。
「いくでぇ、ほいさッ」
勢い良くアシュアが布を取り払うと、その品の全貌が明らかになった。
それは褐色の武骨な鎧だった。クリュウが今まで使っていた比較的スマートなレウスシリーズに比べると全体的に分厚く、その防御力

が今までのそれとは比べ物にならない程頑丈だという事が見て取れる。
肩当てが大きく、腰回りも巨大な甲殻で守られたそれは昔彼が使っていたバサルシリーズに近いデザイン。だが細部を見れば全く違う防具である事がわかる。何よりも、左右の肩から突き出た巨大な角がこの防具最大の特徴であり、同時にそれはこの防具の素材となったモンスターの最大の特徴でもある。
アシュアは自ら鍛え上げた品を満足そうに見ながら、今まさに目を輝かせているクリュウに向かって堂々と言い放った。
「これがクリュウ君の新しい防具――ディアブロシリーズやで」
それは先日、クリュウがアシュアに発注していた新防具であった。
エルバーフェルド帝国でのディアブロス討伐。その際に得た素材をアシュアに預け、彼女の腕と経験によって作り上げられ、完成したディアブロシリーズ。
角竜ディアブロスの素材を使ったこの防具は、単純防御力ではレウスシリーズを上回る。性能においてもかなり強化され、より実用的な防具となっている。一見するとずいぶんと重そうなデザインだが、角竜の甲殻は丈夫であると同時に同じ硬さの鉱石なんかよりはずっと軽い為、意外と見た目程は重くはない。ただしそれでもレウスシリーズと比べれば重くはなる。
「まぁ、元々ディアブロシリーズはどちらかと言えばランス使いやガンランス使いが好む重装甲防具やからな。せやけど、慣れれば片手剣使いのあんたでも使いこなせるようにはなるで」
「ありがとうございます。あの、早速着けてみてもいいですか？」
「ニャハハハ、せっかちさんやなぁ。まぁ、ウチも早くあんたにピッタリにしたいから、さっさと始めようや」
愉快に笑いながら、アシュアは慣れた手つきで防具を台から外していき、クリュウへ着方を教えながら着せていく。レウスシリーズとは着方も全く違うので、今のうちに慣れておかないと、一人で着るのに困るからだ。
十分程でヘルム以外の装備が終わる。採寸をしっかり測っていた

おかげで、大きさもピッタリで着心地はいい。アシュアは合っているか確認しながら細部で調整を行う。このわずかな調整をするかしないかで、より防具との相性が変わってくるのだ。
「でも、やっぱり重いですね」
「まぁな。せやけどクリュウ君鍛えてるからなぁ、数日も着てれば慣れるやろ」
　気にした様子もなく言うアシュアの言葉にクリュウは頷いた。実際、バサルシリーズを着る際だってあんなに重かったのも数日で慣れたし、それはレウスシリーズの際も同じだ。
「スロットの数もレウスシリーズより格段に増えてバリエーション豊かになってるからなぁ。注文通り、風圧【小】無効、見切り＋２の初期スキルに体力珠一つ付けて体力―１０を消して、残ったスロット五つ全部に爆師珠を付けてボマースキルを発動させといたで。これでええんやろ？」
「はい。やっと念願だったボマースキルも発動できました。これでより爆弾の破壊力を上げられます」
「あはははは、あんたはほんまに爆弾が好きやなぁ」
「別に好きとかじゃなくて、より効果的にダメージを与えられるから使っているだけですよ」
「何や？　クリュウ君、ツンデレ？」
「ち、違いますよッ」
　おかしそうに笑うアシュアにからかわれ、クリュウは顔を真っ赤にしながらそれを隠すようにヘルムを被る。視界が一気に狭まるが、狩りをする上での必要な視界は確保できている。昔はこの狭い視界が嫌いだったが、今ではすっかり慣れたものだ。
「どや？　苦しくないか？」
「大丈夫です。バッチリですよ」
「そうか。ほんじゃ、もう調整は終わっとるさかい。早速それをあの子達にお披露目してやったらどうや？」
「そうします。あの、ありがとうございました」
「礼なんていらんて。これも仕事やからなぁ。むしろ久しぶりにいい

仕事ができたからウチが感謝したいくらいやで」
　ニャハハハと楽しそうに笑うアシュアに別れを告げ、クリュウはディアブロシリーズを着たまま彼女の家を出る。もちろんヘルムはしっかり外しておく。言うまでもないがこれを被っていると誰だかわからないからだ。村人に覚えてもらうまでは、しばらくは村の中でもヘルムは脱いでおいた方がいい。
　意気揚々と帰宅の途についていると、すれ違う村人達が物珍しげにディアブロシリーズを見ては「新しい防具？」「かっこいいじゃん」「はぁ、立派に見えるぞクリュウ」としきりに声を掛けてくるのが、何だか少しこそばゆい。それらに愛想よく返事を返しながら彼が向かうのは村の中程にある自宅だ。
　家へ戻る途中、前方から見知った二人が歩いて来るのが見えた。こちらが声を掛けるよりも先に向こうの方から声を掛けて来た。
「あ、クリュウさん。こんにちは」
「やっほぉ～、お兄ちゃ～ん」
「エリエ、リリア。こんにちはぁ」
　ぺこりと丁寧に頭を下げて挨拶する鳶色のポニーテールに同色のクリッとした瞳が可愛らしい少女はエリエ・フォルシア。その隣で元気よく挨拶して、ちゃっかりと抱きついて来るの桃色ツインテールにきれいな金色の瞳をした元気いっぱいな少女、リリア・プリンストン。村の子供達の間ではリーダー的役割を果たす二人組であり、クリュウとは少なからず縁のある二人だ。
「あ、新しい防具ですね」
「すっごぉいッ。何がすごいのかわかんないけど、かっこいいよお兄ちゃんッ」
「あはははは、ありがとう」
　子供らしく天真爛漫に笑いながらグルグルとクリュウの周りを回るリリア。そんなリリアとクリュウの様子を、微笑ましげにエリエは見詰める。
「それより、二人してどうしたの？」
「私がエレナさんにおつかいを頼まれたんです。そしたらリリアちゃ

んが協力してくれて、今頼まれた品を届けに行く所です」
　そう言うエリエの手には食材が詰まった袋が握られていた。
「そっか。エレナの酒場、今忙しそうだもんね」
「はい。エレナさんにはお料理を教わったり、色々お世話になっているので少しでもご協力をしたいと思って」
　意外かもしれないが、エレナは面倒見がいい性格から子供からの人気が高い。たまに料理教室なんかも開いている為、クリュウ達よりもずっと子供達と仲がいい。優しげに微笑んで丁寧に教えてくれる所が人気らしいが、残念ながらクリュウはそんな彼女の姿を見た事は数える程しかないのであまり実感が沸かないのだが。
「それで、リリアの店に？」
「そうだよぉ。ちょうど行商人から色々と仕入れた所で。エレナお姉ちゃんが好みそうな調味料も仕入れといて良かったよ」
　ニパァッと笑うリリアは、この村唯一の道具屋を営んでいる。子供っぽくとも商人魂はかなりのもので、たまにリリアの店から怒鳴り合いが聞こえるのは、行商人との激しい値引き合戦をしているかららしい。この年で自分の店を持ち、それをきりもりできるのはすごい事だ。周りの皆に助けられているとはいえ、大したものだ。
「そっか。じゃあ、早く届けてあげてね」
「わかりました」
「じゃあ私達はここで。バイバイお兄ちゃん」
　手を大きく振って歩き出すリリアを追いかけるように、エリエが一礼して歩き出す。こうして見ていると、二人は何だか妹と姉のように見える。実際、あの二人は結構仲がいい。どちらもクリュウと少なからず縁で結ばれている結果、クリュウの事を話しているうちに意気投合した事は、彼は知らない乙女達の秘密だ。
　二人を見送ると、クリュウは改めて自宅を目指す。ここからならすぐに着く。
　五人が暮らしているだけあって、クリュウの家ことルナリーフ家は村の中でも結構大きい。元々ハンターだった両親が資金を貯めて建てた家なので、ハンターという職業柄、特に二人の実力はかなりのも

のだった為、自然と入るお金も多かったらしく、こんな大きな家を建てられたのだ。
　さらに、いつか三人で平和に暮らす為に蓄えられていたお金も相当あり、クリュウの学費の大部分がそこから捻出されていた。今でこそ自分で稼げるようになったが、これがつい一年半前までは重要な資金源だった。
　門を通り、庭を抜けて玄関を開く。玄関とリビングが併設されている為、帰って来れば誰かと顔を合わせる機会は多い。実際、リビングで一人がソファに横になりながら読書をしていた。
「ただいま、シルフィ」
「あぁ、クリュウか――お、ディアブロシリーズが完成したのか」
　ソファから起き上がったのは長い白銀の髪をポニーテールに結った凛々しい顔立ちのかっこいい美少女。クリュウ達のチームを率いるリーダー、シルフィード・エアだ。
「うん。似合う、かな？」
　少し照れながら問うと、シルフィードはうむと大きく頷く。
「あぁ、よく似合っているぞクリュウ。凛々しく見える」
「そ、そっか。えへへ、ありがとう」
　彼女に褒められた事が嬉しくて、クリュウは屈託なく笑った。そんな彼の笑顔を見てシルフィードもフッと口元を緩めると、手に持っていた本を閉じた。それは以前リオレウス戦の際に見せてもらい、その後も幾度と無く借りては勉強したシルフィードお手製の狩猟ノートだ。
「サクラは？」
「彼女なら、今台所にいるぞ」
「台所？」
「あぁ。そろそろ君が腹を空かせて帰って来るだろうと、率先してな」
　苦笑しながらシルフィードが指差した先、台所からは確かに料理をしている物音が聞こえる。姿を見る事はできないが、おそらくサクラだろう。リズム良く響く包丁で食材を切る音に、クリュウが慌て出した。

「いや、でも今日の食事当番は僕だよッ？」
「確かにそうだが、今はサクラの好意に甘えておけ。あの子が自分から積極的に何かをする時は、邪魔しない方がいいだろう」
そう言って気にした様子もなくシルフィードはソファに深く腰掛け、テーブルに置いたコップを手に取る。入っているのはアイスティーだろう。一口飲み、再びノートを開く。
「い、いいのかなぁ……」
自分が当番なのに、サクラが代行してしまっている事が彼としては罪悪感を感じずにはいられないのだろう。心優しいというか、責任感が強いというか。妙な所で不器用な少年だと、シルフィードは内心苦笑を浮かべていた。
「と、とりあえずお礼だけでも言っておくよ」
そう言ってクリュウは台所へ向かって歩き出す。が、それよりも先にサクラの方が台所から出て来た。クリュウの姿を見つけると、まるで主人が帰って来たのを心待ちにしていた子供の忠犬のようにかわいらしく駆け寄って来た。
だが、その姿を見た途端クリュウが顔を真っ赤にして突如逃げ出してしまう。何事かと思ってシルフィードが振り返ると――逃げるクリュウを「……待って、クリュウ」と追いかけるサクラは常軌を逸した格好をしていた。とりあえず、目の前を通り過ぎる所でむんずと彼女の首根っこを引っ張って確保した。
「……何をする」
「……君こそ、何をしているのだ？」
「……割烹着姿を見てわからない？　料理中よ」
「そうではなくてだな――なぜ裸の上から割烹着を着ているのかを問いただしているのだが」
そう、クリュウが逃げ出した原因。それは――なぜかサクラは裸の上から割烹着を着ていた。振り返れば、お尻丸出しという、羞恥心など微塵も感じられない常軌を逸した格好だ。
呆れ果てるシルフィードの問いに対し、サクラは全く動じずに堂々と返す。

「……裸割烹着は男の夢だと、アシュアが以前言っていた」
「あの小春日和め、適当な事をサクラに吹き込んで……とりあえず、クリュウが目のやり場に困るから普通の格好をしろ」
暴走するサクラを叱りつけ、すごすごと退散するサクラに呆れ返りながら、シルフィードはまだこっちに背を向けているクリュウに苦笑を浮かべながら声を掛ける。
「もういいぞ」
「あ、うん。ありがとう……」
「まったく、妙な事を吹き込むアシュアもアシュアだが、それを容易に実行するサクラもサクラだ……どうして私の周りには常識の箍（たが）が外れた連中が多いんだ」
「あの、僕もそれは含まれるのかな？」
いつもと変わらぬイージス村での日常。
雲がゆっくりと空を流れていくように、この何気ない日常もゆっくりと流れていく。誰もがそう信じて疑わない、何の変哲もない一日。
だが、青天の霹靂とは、突如現れる嵐を意味する。そしてそれは――恐ろしい暴風吹き荒れる、恋の嵐だった。
「……ここが、お前の目指す場所かニャ？」
「そうよ。ここが、先輩の故郷の――イージス村よ」
村の入口、崖の下の小さな港に接岸した定期的に村へ物資を補給する定期船から降りて来たのは一人の少女と、一匹のアイル―であった。
漆黒の美しい毛並みに、どこか鋭い眼光をしたアイルー。ドングリヘルムを深々と被り、ドングリメイルで胴を守り、マカライト鉱石の刃を備えたピッケルを背負った姿は、彼がオトモアイルーだという証だ。そして、そんな彼が見上げる先にいるのは彼が忠誠を誓うハンターの少女。
少女は特徴的な防具で全身を包んでいた。まるで、空を舞う蝶のような出で立ち。黄色い蝶の羽根をモチーフにしたデザインで、腰や胴は特に美しい羽が太陽の光を浴びてキラキラと輝く。鎧と言うにはあまりにも弱々しい印象を受けるが、これもれっきとしたハンターの

防具――名をパピメルシリーズ。オオツノアゲハの素材を中心に作られた防具で、防御重視と言うよりは回避重視の防具であり、スキルもそれに特化したものを備えている。
そして、少女の背には綺羅びやかな防具に相反するように無骨なデザインのパワーハンターボウ1が背負われている。この事から、彼女が弓使いである事は見て取れる。
少女は辺りを見回す。その凛々しい表情には、強さと共に知的さを思わせるような細メガネが掛けられており、なぜか少女はその下に左目を隠すように黒い眼帯をしていた。
紺色の髪をザザミ結びと呼ばれるかわいらしい髪型で整え、その上からパピメルカプトを被った少女。その目立つ黄色い蝶は、作業中の漁師達の目にもしっかりと捉えられていた。
「嬢ちゃん、ハンターかい？」
漁師達を代表して彼女に声を掛けたのは他の男達よりも一回りも二回りも大きな大男。彼らのお頭、バルドだ。
バルドの問い掛けに、少女は振り返る。
「はい。人を探して、ここまで来ました」
「ほぉ、人探し？　もしかして、クリュウの坊主か？」
「先輩をご存知なのですか？」
「おぉよ。この村でクリュウを知らねぇ奴はいねぇな。何せ、あいつは何度もこの村の窮地を救ってくれた英雄さんだ」
クリュウの事をまるで自分の息子のように褒め称えるバルドの言葉に、少女の口元に初めて笑顔が浮かんだ。その、滅多に見る事のできない笑顔を、オトモアイルーが興味深げに見守っていた。
「……やっぱり、先輩はすごい」
「クリュウなら今村にいるぞ。小さな村だからその辺歩いてれば会えるんじゃねぇか？」
「そうですか。ご丁寧に、ありがとうございました」
少女は恭しく頭を下げると、村へ入る為の長い階段を目指す。その後ろから、小走りでオトモアイルーが続く。
背後で男達が作業に戻るのを感じつつ、少女は無言で階段を登って

いく。その足取りは、軽いような重いような微妙なものだ。
愛しの人に会える嬉しさと、緊張や不安が混じった足取りは長い階段を歩く疲れとは違った震えを彼女の足にもたらす。それを背後から続くオトモアイルーが不安げに見守る。
「大丈夫かニャ？」
「平気よ。これくらい、何でもない」
決して弱音を見せる事のない主に、オトモアイルーはやれやれとばかりに無言で続く。
長い階段を登り越えると、ようやく村の全貌が露わになる。
崖下の漁師が言っていた通り、決して大きな村とは言えない。中規模程度の村と言った所で、これまでミナガルデやドンドルマなど比較的大都市で生活してきた少女にとっては、ずいぶんと田舎に見える。だが、ここがあの人の故郷だと言われると納得もできた。
皆、幸せそうな顔で暮らしている。この笑顔を守っているのがあの人だとしたら、やっぱりあの人はすごい人だ。きっと今も、自分なんかよりもずっと先にいるはず。それでも、彼の背中を守れるだけの実力はつけたと自負はしていた――だからこそ、やって来たのだイージス村に。彼の故郷の村に。
感動しながら村の光景を見ていると、心優しい門番が声を掛けてきてくれた。
「おや、ハンターちゃんかい？　なら、クリュウ君の知り合いか？」
本当に有名人、しかも皆に好かれている事がこのやり取りだけでわかる。
少女がうなずくと、門番は「彼ならたぶん今、酒場の方にいるんじゃないかな？　酒場はこの道を真っ直ぐ行った先にあるから、すぐわかるよ」とご丁寧に道のりまで教えてくれる。
少女は恭しく一礼すると、言われた通りの道を進む。自分の防具はかなり目立つ為、村人達が物珍しげに見て来た。だがそれは決して不快なものではない――本当に不快な視線は、もっと寒くて、怖くて、化物を見るような嫌悪感に満ちた視線だ。そして彼女は、その視線を知っている。嫌というくらいに。

その視線から、かつて必死になって守ってくれた人がいた。
――クリュウ・ルナリーフ。
二年前、少女はドンドルマハンター養成訓練学校において自分のある異質さから周りから迫害され、一人孤独に苦しみながら日々の生活を無為に送っていた。自分の異質さを呪い、これが日常だと諦め、絶望の中を生きていた――そんな闇の中でうずくまっていた自分を、光に満ちた世界へと手を取って解放してくれた人。それがクリュウ・ルナリーフという恩人。
彼の慈愛に満ちた笑顔は、本当に比喩ではなく光り輝いて見えた。その、今まで自分に向けられていたのとは明らかに違う、温かな瞳。氷のように凍りついていた心が、彼と出会った事でゆっくりと溶け始めた。
感謝、尊敬、忠誠――それらの感情が、恋心へと変化するのにはそう時間は掛からなかった。
誰にでも分け隔てなく優しい彼に惹かれ、誰にでも分け隔てなく優しい彼が嫌で、二つの相反する想いが何だかくすぐったくて、こんな気持ち初めてだった。
いつもは優しい彼が自分の為に怒り、人を殴り飛ばした事もあった。そんな彼の姿がかっこ良くて、でもその後に人を殴った事に苦しむ彼の姿を見て、罪悪感で胸がいっぱいになった。彼は、本当に優し過ぎるくらいに優しい人だった。
一年半前、彼は自分よりも先に学校を卒業してしまった。故郷のイージス村へ帰ると言い、また会おう。また一緒に狩りをしよう、そう約束して、彼は自分の前から姿を消した。
太陽を失った星が光を失うように、少女は大切な太陽を失った。それでも、彼が残してくれた友達という明かりは、確かに自分を照らしてくれた。
少女は努力に努力を重ね、通常は二、三年で卒業できる所をわずか一年で卒業した。
だが少女は、すぐには愛しの人の所へは行かなかった。自分はまだ、彼に会う資格がなかった。

彼が卒業する前、卒業課題としてドスランポスの討伐を命じられた際、手違いでエリアに乱入したドスファンゴの攻撃から自分を守る為、彼は文字通り身を挺した。背中に大怪我を負い、それは今でも傷跡として残るほどの重傷だった。

幸い、大事には至らず、彼も気にしないよう言ってくれたが、少女にとってそれは最大のトラウマとなり、彼に対する罪悪感となり、無力な自分を呪う最大の原因となった。

もう二度と、彼をあんな目に遭わせない。その為に、彼女は卒業後も武者修行に明け暮れた。身を削るような苦しい訓練に明け暮れ、通常の何倍もの速度でハンターランクを上げていった。

そして卒業から約半年。ようやく、彼の前に現れても恥じないだけの実力を身に付け、少女は彼の住むこの村へやって来た。

決意に満ちた碧色の右目が見詰める先に、きっと彼はいるはず。

早く会いたい。そんな想いが、彼女の足を早めた。

まるで子供のよう。真っ直ぐに全速力で走る彼女の後ろから、オトモアイルーが必死になってついて来る。

坂道を駆け抜け、目指すはこの村の酒場。周りの人達が何事かと自分を見て来るが、そんなもの自分には関係ない。今彼女に見えているのは、一年以上もの間会っていない、愛しの彼の姿だけ。彼の笑顔だけ。

そして、一際大きな建物が見えた。露天のテラスに腰掛けて数人と楽しげに話している彼の姿を、彼女は見つけた。

見間違える事なんてない。あそこにいるのは、確かにあの人だ。

少女の目にたっぷりの涙が浮かぶ。視界がぐにゃりと歪み、慌てて手の甲で涙を拭い取る。そして、彼から教わった《笑顔》を浮かべながら、少女は彼の名を叫ぶ。

自宅でサクラの手料理を堪能した後、クリュウは再びオリガミに呼ばれて今度はエレナの酒場に来ていた。

お昼時を完全に過ぎた今、ようやく店は一段落した。本来なら一日中開店するのだが、さすがに疲れたエレナが今日ばかりはランチタイム終了と同時に閉店。夕食時まで休む事となり、クリュウ達がお邪魔

する形になった。
「すごくお似合いですよ、クリュウ様ッ」
　クリュウのディアブロシリーズ姿を見て目を輝かせて喜ぶのはフィーリア。まるで自分の事のようにはしゃいで喜ぶ彼女は本当に純真無垢だ。
「あ、ありがとう」
「ハッ、格好だけ良くなっても中身がアレじゃない」
　そう言ってクリュウをバカにするのは彼女の幼なじみのエレナ。この店の店主であり、先程まで疲労のあまりぶっ倒れていたのだが、クリュウに弱みを握られないよう今は平然と振舞っている。まぁ、要するに素直じゃない子だ。事実、クリュウをバカにしつつも彼の凛々しい姿を横目に見て頬を赤らめている事は、彼以外にはバレバレだ。
「……クリュウ、素敵」
　そしてシルフィードを挟んでクリュウの二個隣に座るサクラはクリュウの凛々しい姿に目を輝かせて見ている。ハァハァと荒い息を繰り返して興奮する彼女は、今にも彼を押し倒しそう。それをさりげなく阻止しているシルフィードは、相変わらず狩猟関係以外の仕事が多い、苦労人だ。
「いいのぉ、ワシもクリュウのようなかっこいい防具がほしいものじゃ」
　ツバメは男らしい防具を着ているクリュウを羨ましげに見詰める。ドンドルマの中央工城へ行っても十中八九間違いなく女物の防具を作られてしまう彼にとっては、ある意味憧れの防具なのだろう。
　話題の中心にいるクリュウは終始仲間達の絶賛に頬を赤らめて照れていた。ただ照れ隠しの笑顔があまりにも可憐なので、乙女達の心を見事に撃ちぬく二次被害が発生しているのだが、本人は至って無自覚だ。
「スキルも今はボマースキルだけど、状況に合わせて変える事ができるから汎用性も高いし。レウスシリーズの時よりも色々な事ができるかなぁって」
「そうだな。以前のレウスシリーズはスロットの数が少ないのがネッ

クだったからな。攻撃力ＵＰ【大】を失ったのは大きいが、カバーするように見切り＋２がつき、その他有効なスキルが同時に発動できる点を考えれば、以前よりも使いやすい防具にはなるな」
「そうですね。防御力も格段に上がっているので、今までよりもより安全に戦えます。あ、でもだからって無茶はしないでくださいね？」
「……クリュウ、かっこいい」
「サクラ。お主はまずそのヨダレを拭け」
　ハンター達の専門的な会話がわからないエレナは一人自分だけ置いていかれているような気がして不服そうだが、そんな彼女の様子にいち早く気づいたシルフィードが「エレナ。悪いが皆に飲み物を出してもらえるか？　代金は私が持つから」と彼女へと話題を振った。
「え？　い、いいわよ別に。それくらいサービスしとくわ――あ、でもクリュウだけ有料よ」
「えぇッ!?　ちょっと待ってッ！　僕今この防具作って貯めてたお金が全然ないんだよッ!?」
「知らないわよんなもん」
　慌てふためくクリュウを見てエレナが楽しげに笑う。そんな彼の笑顔を見てシルフィードは一人微笑むと、すでに出されている水を一口飲む。
「まったく、お主も大変じゃな」
「もう慣れた」
　ツバメの同情に苦笑しながら返すのと同時、散々クリュウをいじめ倒したエレナがご機嫌そうに厨房へ消えていく。どうやらクリュウも無料になったらしい。まぁ、彼女も本気でクリュウから金を巻き上げようなんて思っておらず、結局はクリュウが無意味に振り回されただけだ。
「まったく、エレナは……」
「まあまあ。だがしかし、確かに今の君は全くお金がないからな。また適当なクエストをこなしてお金を集めないとならないな」
「そうだねぇ……」
「あ、でしたらちょうどいいクエストがありますよ。黄金魚や灰水晶

の結晶の納品クエストなんか、比較的報酬もいいかと」
「……納品クエは嫌い。それより、私に入って来てる商隊の護衛依頼はどう？　お得先だから、少しくらい報酬は上乗せしてもらえる」
意外だが、このメンバーの中で一番交友関係が広いのはサクラだ。天上天下唯我独尊自分絶対至上主義で他人と揉め事ばかり起こす彼女だが、仕事に関しては一流だ。そんな彼女の護衛を切望する者は多く、数々の護衛依頼をこなしているうちに自然と交友関係も広くなったという。
「そうだね。じゃあまずは護衛依頼でも引き受けて――」
その時、風の流れが変わった事をクリュウは敏感に感じ取った。前方から吹いていたそよ風は、一瞬にして逆からの風となった。そして、その風に乗って来る気配――その気配はすごく懐かしく、自然と胸が躍った。
ガタッと突然立ち上がったクリュウを見て、きょとんとする一同を無視し、クリュウは振り返る――その瞬間、二人は再会した。
「クリュウ先輩ッ！」
ハァハァと激しく肩を上下にさせ、少女は露天のテーブルに陣取っていたクリュウ達のすぐ横に立っていた。上気した頬には薄っすらと汗が浮かび、キラキラとした右目の先には愛しの彼の姿が。
一年半前と、全然変わっていない――いや、また一段とかっこ良くなっていた。
こちらを見て驚いた表情を浮かべている彼が、何だかかわいくて自然と笑みが浮かんでしまう。こういう風に普通に笑顔ができるようになったのも、全ては彼のおかげだ。
彼は地獄から自分を救い出してくれた恩人であり、命の恩人であり、初恋の相手であり、今でも大好きな人。それが、ずっと我慢していた彼の姿が、今目の前にある。
嬉しくて、嬉し過ぎて涙が出そうになるのを堪え、少女は満面の笑みを浮かべながら、ずっと決めていたセリフを言う。
「――ルフィール・ケーニッヒ。只今、先輩の下へ帰還しました」
新たな恋の嵐が吹き荒れようとしていた。

第１８２話　恋姫戦争勃発　二色の瞳を煌めかせる少女の決意

「――ルフィール・ケーニッヒ。只今、先輩の下へ帰還しました」
屈託なく微笑む少女――ルフィールの登場に、フィーリア達は一様に戸惑っていた。突如見知らぬ少女が現れ、クリュウに親しげに声を掛けた。あまりにも唐突過ぎて反応が追いついていないのだ。しかし、乙女の勘が告げている――この少女は、とてつもなく危険な相手だという事を。
一方、突然の事に面食らっていたクリュウだったが、目の前で微笑むルフィールの姿を見て徐々に状況を理解すると、震える声でゆっくりと彼女の名を呼ぶ。
「ルフィール……」
「お久しぶりですクリュウ先輩。お元気そうで、何よりです」
礼儀正しく一礼しながら挨拶するルフィールは、確かにクリュウがよく知るルフィール・ケーニッヒであった。そして同時に、それがフィーリア達を見ての仮面だという事も、クリュウは見抜いていた。だからこそ、余計に常識人を振舞おうとする彼女が、愛らしかった。
「ここが先輩の村なのですね。とても過ごしやすいいい村だと――ひやぁッ!?」
村の感想を述べようとしたルフィールだったが、突如それは制された。
「あ、あのクリュウ先輩……ッ!?」
顔を真っ赤にして慌てふためくルフィール。目の前には心の底から安堵した表情を浮かべるクリュウの顔。全身を包むのは、彼の優しげな温もり。防具越しでもわかる、彼の優しさに満ちた温かさ。
突然クリュウに抱きしめられたルフィールは慌てふためくが、当のクリュウはそんな事まるで気にしていない。ただ腕の中にある確かな温もりに、心の底から安堵していた。
「……ずっと、心配してたんだよ」

耳元でささやかれたのは、ずっと待ち望んでいた彼の声。それも、自分の身を本当に心配してくれていたとわかる、優しげなささやき。その言葉に、ルフィールの瞳からポロポロと涙が零れ落ちる。
あぁ、やっぱり変わっていない。あの頃からずっと彼は優しくて、頼もしくて――自分にとっての勇者様（ヒーロー）だ。
「クリュウ先輩……ッ」
「あれ？　少し背伸びた？」
「それを言うなら先輩こそ。前にも増して、かっこ良くなりました」
「そうかな？　それを言うなら、ルフィールの方こそ前よりもかわいくなったかな？」
「な……ッ!?　せ、先輩？　以前よりも大胆にっていませんか？」
突然「かわいくなった」と言われ、ルフィールは心の準備もできておらずさらに顔を真っ赤に染めて慌てふためく。耳元でささやかれたのが余計にドキドキする。
ドキドキと高鳴る胸を押さえながら、ルフィールはしかし相変わらずなクリュウを見て内心苦笑していた。
本当は、かっこ良く登場するはずだった。かっこいい決め台詞を言って、彼に凛々しくなった自分を見て欲しかったのだ。だが実際は最初からすっかりその計画は頓挫。彼の言動一つ一つに振り回され、情けない姿しか見せていない――だが、かわいいと言われたのはそんな失敗がチャラになる程に嬉しかったが。
「元気にしてた？　無茶とかしてない？　ご飯はちゃんと食べてる？」
「あの、先輩？　ボクもう十五歳になったので、さすがに子供扱いするのはいかがなものかと……」
まるで子供を心配する母親のような問い掛けに、ルフィールは苦笑を浮かべた。相変わらず彼は心配性な人だ。少しは自分を信じてほしいのだが、それでも彼から心配されるのは嫌な気分じゃない。むしろ、胸の底がポカポカと温かくなる。
「まあまあ、僕にとってはルフィールはいつまでもかわいい後輩だから」

「……嬉しいような、寂しいような。複雑です」
かわいいと言われる事は嬉しいが、後輩止まりな事は不服なルフィール。その心境は複雑だ。だが優しく頭を撫でられると、それだけで全部どうでもよくなってしまう。彼の手はまるで魔法のようだ。
頭を撫でられて嬉しくて微笑んでいると、そんな彼女の笑顔を見てクリュウも安心したように微笑む。
「それにしても、卒業していた事は知ってたけど。てっきり卒業してすぐに来ると思ってた」
「卒業はあくまでスタートラインに立っただけです。それでは先輩の足手纏いになるのは必至。そんな情けない姿を見せる訳にはいきません。なので約半年の武者修行を経て、ようやく先輩の背中を守れるだけの実力を身に付けたと自負し、こうして参上した次第です」
「相変わらず難しい考え方してるね」
ルフィールは学生時代はある理由から常に様々な騒動の中心にいたが、それ以外では実に優秀な成績を誇る学生であり、一種の模範生であった。何せ在学中は常に学校トップクラスの成績を誇り、上級生になった頃には学年主席の座にも君臨していた成績優秀な生徒だった。その影響か、妙に堅苦しい所があるのが玉に瑕だが。
すると、クリュウの言葉にルフィールは不満げな表情を浮かべて反論する。
「難しいも何も、無力では何もできない事は事実です。ボクは自分の無能さで先輩を再び危険な目に遭わせたくありません。その想いから、自分に厳しくしているんです」
「だから、あれはもう気にしなくていいってば……」
ルフィールが言う危険な目とは、クリュウが最終学年で卒業課題として行ったドスランポス討伐の際に狩場に乱入したドスファンゴの攻撃から彼女を庇って負った負傷の事。幸いハンターを続けていく上では何の障害にもならなかったが、背中には大きな傷跡が残ってしまった。彼自身はそんな事はまるで気にしていないのだが、ルフィールはずっとその事を気にしている。以前シャルルが、そう言っていた。

気にするなと言うクリュウの言葉に対して、ルフィールは首を横に振って明確に拒否した。
「あれは、ボクの人生最大の汚点です。自分の実力不足のせいで先輩の手を煩わせた上に、先輩に一生残る傷跡を作ってしまった。決して、許されるような事ではありません」
「いやだから、許すも何も僕は気にしてないって……」
「先輩は優しい人ですから、必ずそう言います。そしてそれは詭弁ではなく、本当に気にしてなどおらず、ボクを恨んでいるという事もないでしょう――ですが、ボクは自分で自分が許せないんです。先輩に一生残る傷を負わせて、平々凡々と生きている事がボクは許す事ができないんです」
悔しげに唇を噛み、悲痛に満ちた表情で言う彼女の姿に、クリュウの表情もまた暗いものへと変わっていく。自分は決して、彼女にそんな顔をしてほしくて、あの時彼女を庇ったのではない。だが結果的に、自分の行動が彼女をここまで追い詰めてしまっている。それが、彼にとっても苦しかった。
「もう一度先輩の背中を任せてもらう為には、自分をもっと鍛えなければなりません。だからこそ卒業後も厳しい修行を行い、実力を磨き、強くなってこうして先輩の前に再び現れました――もう二度と、先輩に血は流させません」
「ルフィール……」
眩いまでに煌めく碧色の右目は、強い意志に満ちていた。己が決めた信念を必ず貫く、そんな強い志を感じる強い光。彼女の言葉が詭弁ではなく、本気だという何よりの証拠だ。
きっかけはどうであれ、それが彼女を強くしたのは事実だろう。見ただけで、彼女が努力に努力を重ねて強くなった事はわかる。武具はもちろん、顔立ちや雰囲気も一年半前に比べてずっと凛々しく、一人前のハンターのそれに変わっていた。
自分とまた一緒に狩りがしたい。その一心で彼女はがんばってきたのだろう。そう思うと、何だか恥ずかしいし嬉しくなる。
悲痛な覚悟を彼女は背負ってしまった。だが、その覚悟があったか

らこそ彼女はこうして立派なハンターとなった。今は、そう前向きに考える事にしよう――彼女に無茶をさせない事、それが自分の役目なのだろうから。
「何はともあれ、疲れたでしょ？　ここは辺境の村だから利便性も悪かったでしょ？」
「狩場を行き来するのと大差ありません。それに、先輩に会えると思えば火山のような死の大地でも一流リゾート地に思えますから」
「何だよそれ」
　おかしそうに笑うクリュウの笑顔を見て、ルフィールは安堵したように微笑んだ。先程までの決意に満ちた悲痛なそれではなく、心から楽しげな笑顔だ。
　だが、それも一瞬の出来事であった。ルフィールはここでようやく周囲の状況に気づいたのだろう。ある一点を見ると突然表情を消し、威嚇するような目に変わった。その豹変に驚きながら彼女の視線を追うと――背後でこちらを厳しい表情で見詰めているフィーリア達と目が合った。
「……ところで先輩。あの方々とは一体どのようなご関係で？」
　先程までの嬉々とした声色とは打って変わって、何の感情も伺えない淡々とした事務的な問い掛け。だがクリュウは知っている――これは彼女の機嫌が急速に悪くなっている事を意味していた。そして、
「……クリュウ様、その子は誰ですか？」
「……その小娘、誰？」
　フィーリアとサクラの声も、いつになく冷たい。喜怒哀楽に表情がころころと変わるあのフィーリアが全くの無表情でいたり、一見するといつもと変わらぬ無表情のサクラだがその隻眼は厳しい。いつの間にかジュースを持って戻って来たエレナもこちらを不機嫌そうに睨みつけている。
　シルフィードとツバメはこの状況に完全に困惑していて、クリュウとルフィール、フィーリア達との間で視線を何度も行き来させている。
　それらの視線の中心にいるクリュウは、何やら自分を取り囲む空気

が急速に険悪の一途を辿っている事に気づいていた。嫌な汗が背を流れる。
「先輩？　よろしければご説明願えますか？」
　問い掛けてはいるが、彼女の口調は明らかに決定事項だ。冷たい瞳でこちらをジッと見詰めて来る彼女に苦笑しながら、クリュウはジト目で見詰めて来るフィーリア達を紹介する。
「えっと、右からフィーリア、サクラ、シルフィード、ツバメ、エレナって言って。フィーリアとサクラ、そしてシルフィードは――今の僕のチームメイトだよ」
「ち、チームメイト……？」
　クリュウの紹介に、明らかにルフィールが動揺する。紹介された面々を、特に前半三人を親の仇を見るような目で睨みつける。そんな彼女の視線に反撃するように睨み返すフィーリア達に、今度はルフィールの事を紹介するクリュウ。
「ほら、前に学生時代の話をしたでしょ？　その時にシャルルともう一人後輩がいたでしょ？　それがこの子、ルフィール・ケーニッヒだよ」
「ルフィール・ケーニッヒって……」
「……イビルアイの？」
　クリュウの説明に一段と表情を厳しくさせるフィーリア達。そんな彼女達の視線にルフィールはムッとすると、牽制するように睨みつけながらクリュウの背に隠れる。そんな彼女の反応により厳しい目つきに変わるフィーリア達にクリュウが慌てて間に入った。
「そ、そんな目で見ないであげてよ。ほら、彼女そういう視線にデリケートなんだからさ」
「あ、いえ私達はイビルアイだからと言って見ていた訳ではないんですが……」
「……クリュウとその女が親しげなのが、気に障るだけ」
　言うまでもないが、彼女達は別にルフィールがイビルアイだからと言って警戒している訳ではない。彼女達の警戒の理由は唯一つ――クリュウとルフィールが実に親しげな事。片思いの人が、他の女の子

と親しげに話している事が、警戒せずにはいられないのだ。
「先輩、この方々はボクの事……」
「前に学生時代の事を話す機会があってね。君の事は話してあるから大丈夫――もちろん、イビルアイの事も」
「……そうですか。誰であれ、先輩が信頼されている方々なら――」
何かを決意したようにうなずいてルフィールは彼らに背を向けると、メガネを外した。そして、左目を隠していた眼帯を取り外し、再びメガネを掛け直す。そしてゆっくりと振り返り、閉じていた瞳を見開く。
――夏の太陽の眩い光の下、二色の瞳が煌めく。
右は南海の海のような美しい碧色の瞳。左は神々しく煌めく神秘的な金色の瞳。左右で色の違う瞳が輝く者を、人々はこう呼ぶ――邪眼姫（イビルアイ）。
大陸に伝わる伝説の一つに、かつて左右で目の色の違う悪魔の女がいた。人々を怪しい瞳の輝きで惑わし、人々の心に恐怖を植えつけた悪魔。彼女の事を邪眼姫（イビルアイ）と呼び、以降彼女と同じように左右で目の色の違う事をイビルアイと呼ぶようになった。そして、その異質さから人々は伝説を信じるも信じなくともその存在を嫌い、迫害の対象としてきた。
ただ目の色が違うだけ。それだけで、イビルアイ達は周りから拒絶されていた。
ルフィールもイビルアイだからという理由だけで実の親に捨てられ、学生時代は迫害を受け続けてきた。それが常識だと、間違っているという認識を疾うの昔に捨てて、絶望の中を生きていた。
だがクリュウはそんな彼女の常識を打ち破った。彼女をイビルアイとしてではなく、一人の少女として接し、仲間として迎え入れた。
ルフィールは自分の目を何度も呪った。何度も片目を潰そうと思ったが、結局は怖くてできなかった。だがこのイビルアイのおかげで初めて手に入れた幸せ、それが彼との出会いだった。
今でもこの瞳で苦労する事は多い。それでも今はこの瞳が好きだ。だって、好きな人にきれいだと言われた、大切な瞳だから。

今は眼帯を片目にする事で自分の正体を隠して、何とか人並みには暮らしている。だからこそ、誰かの前でこうしてイビルアイを見せるのは久方ぶり。彼を信じているとはいえ、その内心は怯えていた。
「イビルアイ……」
初めて見るイビルアイを前に、一同は呆然と彼女の瞳を見詰める。その好奇な視線を一身に受けるルフィールは耐え切れず視線を逸らしてしまう。それを見たクリュウはルフィールの前に立って彼女を隠した。驚くルフィールの頭をポンと叩くと、フィーリア達に向き直る。少し怒っている彼の表情を見て、フィーリア達が一斉に慌てだした。
「ち、違いますよッ。初めて目の当たりにしたのでちょっとビックリしただけですッ」
フィーリアの言葉に皆同じだとばかりにうなずいた。クリュウはしかし「それでも、人をそういう目で見ない方がいいと思うよ」と忠告。彼の視線に若干の軽蔑が含まれている事に、フィーリア達は一斉に気まずそうに視線を逸らし、沈黙する。
クリュウはフゥと小さくため息を零すと、頭の上に自分の手を乗っけたままでこちらを見上げているルフィールに向き直る。
「まぁ、みんないい子達だからさ。きっとルフィールとも仲良くできると思うよ」
「……そうでしょうか？」
クリュウ越しに落ち込んでいるフィーリア達を見詰めるルフィールの表情は冴えない。彼は相変わらずの鈍感っぷりで気づいていないようだが、見ればわかる。彼女達はその大部分がクリュウに対して自分と同じ感情を抱いている。だからこそ、彼の言う《仲良くなれる》というのは疑点になってしまう――彼の伴侶になれるのは、一人だけなのだから。
「とりあえず疲れたでしょ？　こっちにおいでよ」
そう言ってクリュウはルフィールを連れて元の席に戻る。先程までシルフィードが座っていた隣に彼女を座らせると、呆然としているエレナを呼ぶ。

「あのさ、悪いけどジュース一杯もらえるかな？　代金は僕が持つから」
「え？　あ、いいわよ別に……」
　先程はお金がないからと叫んでいたのに、ルフィールにおごると言い出す彼を見てエレナはつまらなさそうだ。彼は決してかっこつけている訳でも見栄を張っている訳でもない。かわいい後輩を気遣っているに過ぎないのだが、それがつまらないのだ。
　機嫌を損ねたまま厨房へ消えるエレナを見送り、フィーリア達は無言で席に戻った。席は自然と移動し、クリュウとルフィールの正面にフィーリアとサクラ。隣のテーブルにシルフィードとツバメが移動する。
　やがてジュースを持ったエレナが戻って来て、ルフィールの前にジュースを置くと彼女はツバメの横に座った。全員が席についたのを見計らって、改めてルフィールが自己紹介する。
「改めまして、クリュウ先輩の学生時代の後輩のルフィール・ケーニッヒです」
　恭しく一礼して名乗るルフィール。礼をわきまえているとはいえ、それでも表情は相変わらず厳しいままでイビルアイを鋭くさせたままフィーリア達を牽制するように睨みつける。すでに警戒態勢全開なルフィールを相手にいつもは社交的なはずのフィーリアやシルフィードも彼女を警戒していて黙ったままだ。自然と彼らの間には気まずい沈黙が降りる。
「うぬ。ワシはクリュウとケーニッヒの関係を知らぬ。詳しい説明は追々求めるとして、お主はクリュウの学生時代の後輩なのじゃな？」
　この中で唯一ルフィールの事を知らないツバメは気まずい雰囲気になる事もなく、いつものように社交的に接する。そんな彼の問いかけに対してルフィールは首肯する。
「僕が最終学年の際に半年間組んでいたチームのメンバーの一人なんだ。知識豊富な上に弓使いとしての技術も優秀で、半年間僕の背中を守ってもらってたんだ」
　ツバメに対してまるで自分の事のようにルフィールとの関係を語

るクリュウ。簡単ながら彼女との出会いの経緯や、その後の関係性などを語る彼の話を横目にルフィールはクールな振る舞いを崩さない。そんな彼女の様子を横目で見ていたクリュウは内心苦笑を浮かべた。

先程はクリュウに会えた嬉しさから周りが見えずに素の彼女が全開だったが、元々ルフィールはクリュウ以外には冷たく、笑顔は見せたがらない子だ。今はすっかりクールな仮面を被ってしまっているらしい。シャルルくらい仲良くなれれば少しは緩くなるだろうが、そうなるには時間が掛かる。

クリュウはひとまずルフィールの事は置いておいて、手短にツバメに彼女の紹介を行う。もちろんイビルアイの事や、それが原因でのいじめなどもできる限り。真剣な表情で聞くツバメをルフィールは不思議そうに見詰めていた。

「……なるほどのぉ。お主も苦労しておったのじゃな」

話を聞き終えたツバメはルフィールに同情的な言葉と視線を投げかける。ルフィールはそれに対してずっと疑問に思っていた事を口にした。

「アオゾラさんは、ボクの目を何とも思われないのですね」

「ツバメで良い。そうじゃな、イビルアイというのは中央大陸の伝説なのじゃろ？　ワシの故郷の東方大陸や大陸東方部ではそのような伝説は聞いた事もない。じゃから、別段お主の目を恐れる理由もないのじゃよ」

イビルアイが悪魔とされる伝説を知らないからこそ、ツバメは特に嫌悪感も抱かない。それを聞いたルフィールは納得したようにうなずく。

「しかし、話を聞く限りではお主達相当互いを信頼し合っているようじゃな」

思った事をそのまま、何気なしに言うツバメの言葉にフィーリア達が一斉にビクッと反応するが、クリュウは気づく事なく「どうだろ？　僕はルフィールの事は信頼してるけど」と答える。するとそれを聞いたルフィールが「ボクは先輩に絶対の信頼を置いています」と短く答えた。あくまでも、第三者の前ではクールを装いたいらしい。

「あは、ありがとう」
信頼されていると言われた事が嬉しかったのだろう。喜ぶクリュウのお礼にルフィールは「いえ……」と素っ気ない返事を返すも、彼から見えない位置でニヤけてしまう。いくらクールに装っていても、大好きな彼から褒められればそんな鉄の仮面も簡単に砕けてしまう。
そんな仲良さげな二人の様子をフィーリア達は不機嫌そうに見詰めていた。二人の仲の良さが気に入らない。というか、怖いのだ。まるで自分達と接している時のように、クリュウはルフィールに対して本当の意味での素の姿で接している――要するにそれは、少なくともルフィールの事を自分達と同じくらい信頼している証だ。
「そう言うておるが、どうじゃ？」
「なぜ私に問う？」
正面に座るツバメから問い掛けられるシルフィードはそれまでずっと目を閉じて沈黙を続けていたが、その問い掛けに片目だけを開いてどこか不機嫌そうに短く答えると、そっぽを向いてまたしても沈黙してしまう。そんないつになく冷たい彼女を見てツバメはそっと苦笑を浮かべた。
「これはまた、厄介な事になったのぉ……」
どうしたものかと考えあぐねるツバメの目の前で、彼の好む好まざる関係なく状況は動き出す。
「それで、ケーニッヒ様はどのようなご用件でこの村に？」
いつもは人当たりのいいフィーリアもルフィール相手では厳しい口調だ。表情には一切の笑顔はなく、瞳も幾分か険しい。一つ年下のルフィール相手でも、まずは様子見とばかりに敬語で接するなど、警戒心バリバリだ。それはサクラやエレナも同じ様子で、二人共腕組みしながらルフィールの動向を窺っている。
誰が見ても、彼女達はまるで歓迎していない。クリュウはらしくない彼女達の対応に困惑しているが、ルフィールはどこ吹く風。幸か不幸か彼女は歓迎されない事の方が慣れている為、まったくもって気にした様子もなく淡々と彼女の問いに答える。
「当然、先輩の背中を再び預けてもらう為――要するに先輩の相棒に

戻りに来ただけです」
淡々と答えるルフィールの反応に、フィーリアはムッとした様子。それはエレナも同じだが相手はハンターだ。村を守る防衛力が増す事に対しては反対はしない。が、これまでクリュウの相棒役を担って来たのは自分の友達でもあるフィーリアやサクラだ。いきなりポッと出て来た小娘にそんな重要なポジションを与える気はない。
サクラとシルフィードはまだ無言を貫いている。こういう時には真っ先に食って掛かるはずのサクラが黙っているのは少し違和感を感じるが、何か考えがあるのだろう。親友が味方であると信じて、フィーリアは単独でルフィールに挑みかかる。
「ケーニッヒ様とクリュウ様のご関係は以前クリュウ様から教えていただいたので承知しています。ですが、それはあくまで《過去》のもの。《今の》クリュウ様は私達とチームを組んでおります故、定員オーバーです」
妙に時系列的な部分を強調しながら言うフィーリアの言葉に、今度はルフィールがムッとする番だった。険悪なムードになる二人を心配しながら、ふとクリュウは今のやり取りに似たような出来事が昔あった事を思い出す。それはフィーリアとケンカ別れした後にサクラが仲間になってくれた直後、ドンドルマで偶然フィーリアと再会した際にフィーリアとサクラが睨み合いながら同じようなやり取りをしていた。
「初めまして。クリュウ様と《以前》組んでいたライトボウガン使いのフィーリア・レヴェリです」
「……クリュウと《現在》組んでいるサクラ・ハルカゼ」
状況もあの時とよく似ている。
あの時は互いに互いを認めず、牽制し合い、二人の間には険悪なムードが漂っていた。しかしあれから約一年。今では二人はお互いを親友と認め合う仲にまで発展した。今でもよくケンカしているが、それはきっと《ケンカするほど仲がいい》という事なのだろう。
だとすれば、フィーリア達とルフィールもいい友達になれるのではないか。そんな期待を抱くが――残念ながら今の状況ではその片鱗

すら見えそうにない。
　フィーリアの牽制に対してルフィールはしかしすぐに反撃する事はなく、用意されたジュースを一口飲んで出掛かった言葉と一緒に胃に押し戻してから、一度じっくり考え直してから改めて反撃する。こういう一つ一つの言動に余裕がある態度が彼女の真骨頂だろう。
「そうですね。正直、先輩が新しいチームを作っていた事は驚きです。昔から節操のない人だとは思っていましたが、相変わらずなようです」
「節操が無いって……、そんな言い方しなくても」
「――また一緒に狩りをする。この約束、忘れた訳じゃありませんよね？」
　口調こそ厳しいものだが、その表情はどこか不安そうに歪んでいる。本当に、忘れてしまっているのではないか。そんな不安が、彼女の胸にある。きっとその一言が、彼女をここまで支えていたのだろう。また一緒に狩りをする――そんな、些細な夢を支えに。
　もちろん、忘れてなどいない。あれは卒業式の後にある表彰式が終わった後にそれぞれのクラスに戻った時の事。
　卒業する事になった自分を前に、別れたくない一心から心から卒業を祝えずにいたルフィールと話した。その時に一年という単位を秒単位で計算された時には本気で頭が痛くなった事を今でもよく覚えている。
　そこで彼女は言い切った――「一年です」と。覚悟を胸に、わずか一年で卒業してみせると豪語した彼女。そして、確かに言った。
　――ボクは必ず一年で卒業してみせます。そして、今度こそ先輩の片腕になれるような立派なハンターになって、また先輩の前に現れます。その時は、また一緒に狩りに行きましょう――
　そんな彼女の言葉に、自分は確かに頷いた。その事自体は今でも一切の後悔はない。彼女とまた狩りをしたい。その気持ちにウソはないし、今でもその気持ちは変わっていない。だが――
「もちろん覚えてる」
「だったら……」

「……少し、考えさせてくれないかな」
いつになく、弱々しい返事だった。その口調、内容にはその場にいたクリュウ以外の全員が驚いた。ルフィールもフィーリア達も、どちらも自分を選んでくれると信じていたからこそ、「考えさせてほしい」という彼の言葉が信じられなかった。
「クリュウ。本気で悩んでいるのか？」
まさか、これまでの自分達の絆がたった一人の少女を相手に崩れ去る危機に瀕している。それが信じられないという様子のシルフィードの問い掛けに、クリュウは力なくうなずいた。
「その、もちろんシルフィ達の事は大切な仲間だし、大事に思ってる。だけどさ――それと同じくらい、ルフィールの事も大事に思ってる。二者択一とすれば、後悔しないように考えないと」
「いや、しかし……」
「じゃがクリュウ。今はそれは置いとくのはどうじゃろうか？　せっかくお主に会いに遠路遥々来た後輩をそんな顔で迎えるのは可哀想じゃろ？　今は一年半という時間を埋めるように、楽しく話そうではないか」
重苦しい雰囲気になるクリュウ達を前に、ツバメは愛想良く笑いながらそう言った。そんな彼の言葉に一番に反応したのは、意外にもルフィールだった。
「そうですね。ひとまずそれは置いておきましょう。まずはお互いの近況報告でもしてみましょうか。一年半の間に起きた私が知らない先輩の勇姿、ぜひお聞かせください」
「なるほど。あの角竜ディアブロスまでも討伐されたのですか。さすが先輩です」
「いや、あれはフィーリアやサクラ、シルフィードのおかげなんだけどね」
セクメーア砂漠でのディアブロス討伐の話を終えると、それをじっくりと聞いていたルフィールは満足気だ。彼女からしてみれば、自分の大好きな先輩はそれくらいやってくれないと困る、という勝手な期待があったのだろう。どれだけクリュウの事を神格化しているのだ

ろうか。実に可愛らしい期待だ。
「相変わらず先輩は自分を過小評価して謙遜なさるのですね」
「いや、別に本当の事を言ってるだけなんだけど」
「まぁ、それはいいです。だから今、先輩はディアブロシリーズを着ている訳ですが。とてもお似合いですよ」
「あ、ありがとう。そういえばルフィールのそれって見た事ない防具だね」
　クリュウが装備しているディアブロシリーズは優秀な防具であるが、熟練のハンターなら使っている人は多くドンドルマなどでは見かける事は決して少なくはない。だがルフィールが着ている色鮮やかな防具と言うには装甲がまるでない防具は、ドンドルマでもあまり見かけないものだ。その理由の一つが、
「まぁそうでしょうね。これは女性専用防具ですから」
　防具の中には男性専用、女性専用の防具がそれぞれある。男性専用ならガーディアンシリーズ、女性専用ならヒーラーシリーズが代表例だろう。そしてハンターの人口は圧倒的に男性の方が多いので、女性専用防具などは早々お目にかかれる品ではない。
「これと対を成す男性専用防具は、オウビートシリーズですね」
「オウビートって、あのドスヘラクレスを使う奴？」
　オウビートシリーズはドスヘラクレスを素材に使った防具で、ヘルムに巨大な一本角を備えるなど、見た目もドスヘラクレスに酷似した防具だ。麻痺や毒などの特殊攻撃を強化できる事からクリュウも一度は考えた防具だが、結局レウスシリーズを貫いてしまった。
「って事は、それもドスヘラクレスを使ってるの？」
「はい。ですがオウビートと違ってこれはオオツノアゲハが主役になります。名をパピメルシリーズ。足だけは余裕があったのでパピメルSフェルムを備えました。回避性能と特殊攻撃に特化した防具です」
　そう言ってルフィールは立ち上がると軽くその場で回って全体を披露する。オウビートがドスヘラクレスを模しているなら、こちらはオオツノアゲハを模しているのだろう。全体的に黄色い蝶がイメー

ジされており、何やら物語の中に出てくる妖精を思わせるデザインだ。
防具らしいかと訊かれれば疑点になってしまうが、女性専用防具だけあって実に女の子らしいデザインの防具だ。ルフィールの可憐さも加わると、本当に妖精のように見えてしまう。
「その、似合っているでしょうか？」
上目遣いで尋ねて来る彼女の問い掛けに、クリュウは彼女を見ながら「うん。すごくかわいいと思うよ」と思った事をそのまま返答した。するとルフィールは頬を赤らめて「あ、ありがとうございます……」と語尾を萎ませながらお礼を言う。恥ずかしくはあるが嬉しいのだろう。真っ赤になった顔を隠し、彼からは見えない位置で口元を綻ばせていた。
「あれ？　でもルフィールって確か虫が全くダメなんじゃなかったっけ？」
クリュウが思い出したのは、何でもこなせる完璧超人なルフィールの数少ない弱点の一つだった。狩場や演習場などに出た際、虫に全く触れられずに常にシャルル任せ。彼女によくその事でからかわれていたはず。
クリュウが不思議そうに首を傾げていると、ルフィールが「あぁ、それならもう克服しました」と平然と答えた。それを聞いてクリュウは目を丸くして驚いた。
「え、でもルフィール。虫を眼前で見ただけで気を失うほど苦手だったでしょ？」
「……まぁ、そうですけど」
クリュウが自分の情けない姿を忘れないでくれていた嬉しさと不満という相反する想いに板挟みになりながら複雑な表情になるルフィール。そんな彼女の様子に気づく事もなくクリュウは「そんな状態だったのに、克服できたの？」と話を進める。
「克服しなければハンターとしてはやっていけません。ハンターの使う道具（アイテム）類の多くは虫を使うものばかり。いつまでも虫に触れないのでは半人前もいい所です」

と、なぜか自慢気に言うルフィールの言葉に苦笑を浮かべる者が二名。一人は考え方も言い方も相変わらずなルフィールを見て浮かべるクリュウ。もう一人は実は未だに虫類が苦手なフィーリア。彼女の言う半人前の条件に該当し、微妙な心境のようだ。
「どうやって克服したの？」
「学生時代、シャルルさんと虫修行をして克服しました」
「虫修行？」
「鎖で手足を封じ、虫をひたすら体にくっ付けていくというものです」
「……それ、誰の発案？」
「シャルルさんです」
「やっぱりあいつか……」
　想像通りの回答に、クリュウは頭を抱えた。要するにシャルルの考えたアホらしい方法を順守して克服したらしい。結果的には克服できたが、手段としては外道極まりない。手足を鎖で封じられて泣き叫ぶルフィールに悪魔のような笑顔で虫を纏わりつかせるシャルル――日頃ルフィールに負かされているシャルルからしてみれば絶好の仕返しタイムだ。
「たぶん、先輩が想像している通りの光景でした。結果的に克服できたとはいえ、あんな事は二度とゴメンです」
「だろうね。僕だって積極的にやりたいとは思わないよ」
　今度シャルルに会ったらとりあえず軽く一発殴っておこう。そう心に深く刻み込むクリュウであった。
「っていうか、ルフィールも断れば良かったのに」
「先輩。ボクが力でシャルルさんに勝てるとでも？」
「……ごめん。僕が悪かったよ」
　シャルルは小柄な体格ながら信じられない怪力を持つ少女だ。下手すれば体格のいい男子とでも力勝負に勝ってしまうような筋肉バカ相手に、頭脳担当のルフィールが勝てるはずもない。要するに虫克服を手伝うという大義名分のもとに無理やり鎖で縛られ、ドスヘラクレスなどをくっ付けられていたのだろう。
「とりあえず、今度あいつにあったら蹴手繰り倒す」

「是非お願いします」
まぁ、何はともあれ自分の弱点を一つ克服したルフィール。努力に努力を重ねて実力を身につけた彼女のがんばりは素直にすごいと思う。
卒業後に村へ凱旋し、フィーリア達と出会って実力を磨いたクリュウ。おそらくルフィールはクリュウが卒業してから、ずっと彼以上の努力を重ねてきたのだろう――全ては、もう一度クリュウと一緒に狩りがしたい為に。そう思うと、そんな彼女の気持ちが嬉しくて涙が出て来そうになる。
「――ひとつ、訊かせてもらえないか？」
そんな二人の会話に割って入ったのはシルフィードだった。それまでクールを装いながらも喜怒哀楽をわずかながら浮かべて話していたルフィールだったが、シルフィードの乱入に完全に表情を消した。そして鬱陶しいものを見るような目でシルフィードを見て「何でしょうか」と、全く抑揚のない声で答える。
「……クリュウとそれ以外で態度が露骨過ぎるぞ」
「大きなお世話です。それで、一体ご用件は？」
「いや、大した事じゃないんだが。パピメルＳフェルムは確か素材に火竜の体液を使うはずだ。火炎袋はイャンクックでも代用できるとはいえ、そればっかりは代用はできない――君は、リオレウスの討伐経験があるのか？」
その博識さからルフィールのリオレウス討伐経験の有無を尋ねるシルフィード。クリュウはまさかルフィールがリオレウスを討伐しているなど夢にも思っていなかったのだろう。驚いた顔で彼女を凝視する。
「――先日、他のハンターと一緒に討伐しましたが」
ルフィールは平然とそう答えた。愕然とするクリュウを一瞥し、シルフィードは「そうか。野暮な事を訊いてすまなかったな」と潔く撤退する。だが戦地に残されたクリュウは平然としているルフィールを前に困惑していた。
「え、本当にリオレウスを討伐したの？　卒業してから半年も経って

ないよね？」
「まぁ、他の方々と一緒でしたから。一緒と言ってもリオレウス討伐の為だけに結集された即席のチームですけど」
それが何か？と言いたげに首を傾げるルフィールを見て、クリュウは返す言葉もなく力なく苦笑を浮かべた。自分だってリオレウスを討伐したのは早い方ではあるが、それでも卒業から半年は超えていたはずだ。単純に、ルフィールは自分よりも早いスピードで成長しているらしい。
普通ならリオレウスを討伐した、という事実があればかけだしハンターなら自慢したくなる話題だが、ルフィールは当然の事をしたまでと言いたげに平然としている。肝が据わっているというか、ルフィールらしいというか。
「リオレウスの討伐。それがボクが自分に課した先輩の下へ帰る条件でした。それを果たしたからこそ、ボクはこうして先輩の下へ参上した訳です」
平然と言ってのけるルフィールの言葉に、クリュウは一人苦笑を浮かべた。
リオレウスを討伐するまで我慢する。一年で卒業を見事果たした彼女が自分に課した条件はあまりにも厳しい。リオレウスの討伐など普通なら最短でも卒業後一年や二年という過酷なものだ。それを、わずか半年で彼女はやってのけた。
全ては、クリュウの為。クリュウに会いたい、クリュウとまた狩りをしたい、クリュウの背中を守りたい。そんな強い想いが彼女を尋常じゃない速度で成長させたのだ。
呆然とする一同を前に無表情を貫くルフィールの姿を見て、クリュウは一人泣きそうになった。そこまで自分の為にがんばってくれるなんて、嬉し過ぎる。
「……寄生という可能性も捨てられないけど」
そう言ってルフィールを睨みつけたのは、こういう失礼極まりない事を平然と言ってのける少女、サクラ。今まで沈黙していた彼女の突然の発言に言葉を失う一同を前に、ルフィールは別段気にした様子も

なく、いつものようにメガネのブリッジをクイッと上げながら淡々と答える。
「――世の中、全ては結果です。過程や努力も評価基準にはなりえますが、あくまで補助的なものに過ぎません。結果さえ良ければ過程など問題はありません」
それは、努力に努力を重ねて強くなった彼女が言うにはあまりにも不可解な発言だ。だが彼女はそういう子なのだ。努力は評価にはほとんどならない。なぜなら、努力する事は当然の事だから、努力を含めて初めてゼロベースとなる。あとの評価基準は結局は結果。
努力を否定する訳ではないが、努力だけを見ようなどとは愚かな考え方。勝てば官軍負ければ賊軍。彼女はそういうサッパリとした考え方を持つ子なのだ。
ルフィールの発言に、サクラの隻眼が幾分か鋭さを増す。隣にいるフィーリアは自分に向けられている訳ではないのに、恐怖のあまりビクビクとしている。
「……寄生は、否定しないか」
「別にあなたにどう思われようとボクは一切関係ありません――それに、ハンターならハンターらしく、腕を見ればわかる事をいちいち口で言うだけ無駄ですから」
無表情で睨み合うサクラとルフィール。どちらも隻眼とイビルアイを鋭くさせながら互いを牽制し合う。当然二人の間には険悪な雰囲気が舞い降りる。そんな二人の雰囲気を見かねたクリユウが慌てた様子でルフィールの肩を叩いた。
「その、お腹空いてない？」
「何ですか突然」
「いや、空いてるなら何か作ってあげようかなって。久しぶりに僕の手料理とかどうかなぁって」
「……先輩の手料理。それは是非食してみたいです」
「そ、そっか。なら僕の家においでよ」
「承知しました」
と、勝手に二人の間でとんとんと話が進んでいくのを呆然と見てい

たフィーリア達だったが、二人して立ち上がるのを見て慌てて腰を浮かせる。が、
「あ、フィーリア達は悪いけどちょっと出ててくれないかな？　その、ルフィールと二人きりになりたいからさ」
「そ、そんなぁ……ッ」
「……クリュウ、待って」
「ほら、積もる話もあるからさ。お願いッ」
　手をパンッと胸の前で重ねながら頼み込む彼の姿に、フィーリア達は困り果ててしまう。そこまでされてしまうと強く言い出す事もできなくなってしまうからだ。サクラもクリュウのお願いには弱く、不満げな表情を浮かべるもそれ以上何も言わなかった。
　皆が渋々納得したのを見て、クリュウは事の成り行きを見守っていたルフィールを連れて自宅へと向かう。そんな彼とルフィールの背中を、フィーリア達は不安げに見詰める。
「クリュウ様、何だか楽しそう……」
「……クリュウ」
「あれが、私達が出会う前のクリュウの仲間という訳か……」
「何よ。飯ならここでも食べられるじゃない」
「……これはまた、嵐が吹き荒れそうじゃのぉ」
　こうして、酒場に残された一同はそれから数時間、悶々とした時間を過ごすしかないのであった。

第１８３話　恋姫達の想いが錯綜するルナリーフ家の事情

――今、ルフィールは緊張していた。

ここはクリュウの家。リビングに置かれたテーブルの椅子に腰掛けているルフィール。視線の先には彼の姿はないが、その先にある台所では今彼が自分の為に料理中だ。

姿勢良く座りながら待つルフィールだったが、ここはジッとしていられるような環境ではなかった。何せ、片思い相手の人の自宅だ。気にならないと言えばウソになる。

キョロキョロと辺りを見回せば実に生活感が現れている部屋だ。ソファの上には何かのノートが置かれていて、テーブルの上には薄桃色のきれいなコスモスの花が小さなビンに二本生けてあり、隣の椅子の上には見た事もない白い上着――彼女は知らないが、それはサクラの割烹着だ――が背もたれに掛けられている。

明らかに人が生活している証拠。そしてそこは、彼が暮らす空間だ。

ゆっくりと深呼吸すると、懐かしい香りが鼻孔をくすぐる。

「……先輩の匂い――と、その他多数の臭い」

先程から気づいていたが、どうやらクリュウは現在この家であの他の女子達と暮らしているらしい。直接訊いた訳ではないが、それでも所々に置かれている物の中には彼が使うものじゃないものがあるし、何より匂いでわかる。

自分がいない間に、クリュウが他の女と同棲――しかも複数の女の子と暮らしていた事には少なからず怒りを覚えるが、学生時代の彼の天然ジゴロっぷりを見ればある意味仕方がないのかもしれない。唯一の救いは相変わらずの鈍感っぷりで、誰とも一線を越えていない事だろう。まぁ、そのせいで自分も苦労しているのだが。

リビングを見回しただけで複数人の生活感が感じ取れる。ムッとしながら立ち上がると、彼に黙って家の中の散策を始めた。台所横に

ある階段を登って二階へ上がると、すぐにわかった――この階は女子部屋だ。彼の匂いは薄く、嫌な女の匂いだけが濃くなった。
感情を殺して無表情のまま二階の廊下を歩いて行き、まずは手前のドアを開いた。カギは掛かっておらず、というかカギ自体がないのだろう。中へ入ると、そこは実に整理が行き届いた部屋だった。
部屋の全てがきれいに片付けられていて、ベッドもきれいに整えられている。余計な家具やインテリアは置かれておらず、一見すると生活感がないようにも見えるが、本棚には小難しい本など大量に置かれている。衣装棚を開けてみれば、ここもTシャツやスラックスと言った着るのに必要なものしか置かれていない――片隅に見えた何個かのペンダントや指輪が少し気になるが、どうやらここは女の子らしからぬ女子が住んでいる部屋。要するに、
「あの胸のデカい透かした女の部屋ね」
彼女の言う胸の大きくて透かした女とは、もちろんシルフィードの事だ。実にルフィールらしい評価だ。
シルフィードの部屋はまぁ、本当に必要最低限なものしかない。後は博識の為の本が置かれている以外はこれといったものはなく、女の子らしさには欠ける部屋だ。まぁ、彼女らしいと言えば彼女らしいのだが。
ルフィールは無言で自分を見下げる。残念ながら一年半という月日を経ても自分の胸は相変わらず下を見るのには何の障害にもならない。
「あの巨乳は注意しないと……」
そう零すと、ルフィールは部屋を出る。次に入ったのはその隣の部屋だ。ドアを開けて中に踏み入れると、今度は逆に実に女の子らしい部屋だった。
衣装棚や机の上には可愛らしいデザインのインテリアが並び、ベッドの上には何個かのぬいぐるみが置かれている。その中で異彩を放つのは、何やら可愛らしくデフォルメされたリオレイアのぬいぐるみ。
無言のまま部屋へ足を踏み入れ、衣装棚を開くと予想通り可愛らし

い服が並ぶ。そこまででここが誰の部屋か理解した。
「あのアホそうな人の部屋ね」
彼女が言うアホそうな人と言うのはフィーリアの事だ。まぁ、見た目だけでは彼女が凄腕のハンターとは見えないし、可愛らしい＝アホっぽいというのも少なからず納得はできる。
ベッドに置かれたリオレイアのぬいぐるみを乱暴に掴んでムニムニと頬を引っ張ったりしながらいじっていると、布団の中に何かを見つけた。嫌な予感がしてぬいぐるみを置いてその物を引っ張りだすと、それは――明らかに男物のシャツだった。
「あのアホの娘めぇ……ッ」
怒りながら握り締めたそれは、まず間違いなくクリュウの物だ。見れば洗濯された形跡はなく、洗わずにくすねて来た品だろう。まぁ要するに――この先は彼女の名誉の為にも言わないでおこう。
「可愛い顔して、変態じゃないあのアホの娘……ッ」
没収とばかりに彼の私服を回収し、大股で部屋を出る。バタンッと力を入れて扉を閉めると、残っているもう一つの部屋の前に立った。ドアを開けて中に入ると、これまたこれまでとは違った雰囲気の部屋だった。
「異国の部屋……？」
そこは何だか不思議な部屋だった。本棚や衣装棚はこれまでと同じだが、椅子は見当たらない。部屋の真中にフローリングの上から草色のタイルマットが敷かれていて、その上に膝上程の高さしかないテーブルが置かれていた。
ベッドはなく、床に直接布団を敷いてあるだけ。よく見ればその他にも天井付近にわざわざ棚を設けて、そこには木製の何やら小さな家のような物が飾られ、濃い緑の植物を生けてあったり、白い紙をギザギザにしたものをぶら下げるなど、よくわからない物が置いてある。他にも見た事のない文字が書かれた細長い紙が壁に掛けられていたりと、これまでの部屋とはまるで違う。本当に異国の部屋に彷徨い込んだかのような錯覚に陥る程、ここは別空間だった。
こんな異文化的な部屋を使いそうなのはただ一人。

「あの隻眼の東方人の部屋ね……」
そう言って彼女が思い浮かべたのは、自分に向かって食って掛かって来た隻眼の東方人、サクラの姿だ。どこか自分に似た雰囲気の娘で、ある意味最も警戒しなければならない相手だ。ライバルだとすれば、キャラが被る相手程やりづらいものはない。
一見すると、内装が変わっているだけで整理された普通の部屋だ。だが、ルフィールの乙女センサーが感知していた――この部屋は、邪念に満ちている。
無言でルフィールは部屋の中の散策を開始する。すると――出るわ出るわのオンパレード。布団の中や衣装棚から次々に見つけるのはクリュウの上着や靴下など諸々。中には容赦なく下着の類も。それらを一つ一つ回収する頃には両手で抱える程の量になり、彼女の顔は怒りと羞恥心で真っ赤に染まっていた。
もはや呆れ果てて言葉も出ない。ルフィールはその後も一言もしゃべる事なく部屋を出ると一階へ降り、リビングのソファの上にそれらを置く。そして今度は一階の探索を始めた。
先程登った階段の横の道を進むと、二階と同じような複数の部屋のドアが並ぶ廊下へと出た。先程と同じように手前のドアを開き部屋へと入る。そこは先程のサクラの部屋によく似た部屋だった。草のパネルマットが置かれ、その上に背の低いテーブル。ベッドではなく直接布団を床に敷いている所などがよく似ている。が、先程と違ってここには邪念は感じられない。
特に警戒する必要もないと判断し、尚且つここはクリュウの部屋ではないと断定する。部屋の雰囲気というか、匂いでわかるのだ。彼の部屋ではないのなら長居する必要もなく早々に立ち去る。ちなみにここはツバメの部屋だ。
そしてその隣の部屋。ドアノブを回して中へ入り込んだ瞬間、それまでの無表情とは一転して顔を綻ばせた。その場で深呼吸すると、鼻をくすぐるのは大好きな彼の香り――ルフィールは確信する。ここはクリュウの部屋だ。
クリュウの部屋は彼らしいというか実にシンプルな部屋だった。

衣装棚と机、ベッドに本棚といった必要最低限な物しか置かれていない。学生時代の時も必要な物しか置いていなかった事もあって、実に彼の部屋らしい部屋だ。
ゆっくりと足を踏み入れて机の上を覗くと、勉強途中だったのかノートと参考書が開かれたまま放置されている。見ると、調合の素材と素材の組み合わせ書いては、それらの素材が採れる地域を事細かく書いていた。よく見れば参考書に見えたそれは調合書だ。どうやら今彼は調合を練習しているらしい。昔から勉強熱心な彼の変わらない所を見れて、ルフィールは満足そうだ。
部屋をゆっくりと見回していると、ある一ヶ所で彼女の視線が止まる。その視線の先にあるもの。それは――クリュウのベッドだ。
ゴクリと、喉が鳴る。まるで誘われるようにしてルフィールはゆっくりと彼のベッドへと近づく。妙に頬を赤らめながら何かを考える事数秒。静から動への切り替えは一瞬だった。
「えいッ」
突如クリュウのベッドへジャンプして飛び込んだルフィール。ボフッと柔らかい布団の上に飛び込むと、一瞬にして大好きな彼の香りに包まれる。まるで、彼の腕の中にいるかのような心地好さに、思わず顔がニヤけてしまう。
調子に乗って枕を抱き締め、彼の香りを堪能しながら無邪気に微笑む。彼女にとって、これ程までに幸せな時間はそうないだろう。嬉し過ぎて笑いが止まらないでゴロゴロとしてみる。
惰眠を貪る事程幸せな事はないが、これはこれで勝る幸せはそうないだろう。そんな何だか小難しい事を考えながらこの幸せな時間を噛み締めていると――
「……あの、ルフィール。何してるのかな？」
「ふぇぇッ!?」
バッを起き上がって振り返ると、そこにはエプロン姿のクリュウが困ったような表情で部屋の入口に立っていた。頬を掻きながら視線を彷徨わせる彼の頬は妙に赤らんで見える。そこまで見て、ルフィールの顔はより真っ赤に染まっていき、熟れたシモフリトマトのように

なる。目には薄っすらと涙が浮かび、あわあわと口が震え出す。
「あの、これはその……ッ」
「……えぇっと、ご飯できたからさ。冷めないうちに食べちゃってね。それじゃ」
「あ……ッ」
まるで逃げるようにドアが閉じられ、クリュウは去ってしまった。壁越しに聞こえる彼の足音は心なしか早歩きに聞こえる。
一人部屋に取り残されたルフィールは真っ赤になった顔を隠すようにバフッと再び枕に顔を埋める。先程と全く同じ行動のはずなのに、今はまるで生きた心地がしない。恥ずかし過ぎて、死にたくなる。
「うぅ……ッ、変な子だって思われたぁ……ッ」
ショックのあまり、このまま現実逃避したい気持ちにやられるが、せっかく彼が自分の為に料理を作ってくれたのだから、冷めないうちに席につかなければならない。そう考えると、こうしてショックに打ちのめされている時間はわずかしかなかった。
まだ完全回復とは程遠いながらも、ルフィールはまだ頬を赤らめたままとぼとぼと彼の部屋を出た。隣にもう一つ部屋があったが、当初の目的だったクリュウの部屋は突き止めたし、そもそも覗く気にもなれなかった。ちなみにその部屋だけ唯一鍵が掛かっている、アメリアの部屋だ。
足音を立てないように進んでそっと陰から様子を見ると、クリュウはテーブルの椅子に腰掛けて紅茶を飲んでいた。その前には彼が作ってくれた料理が並んでいる。遠目に見ても湯気が出ているのがわかる。これ以上、冷ます訳にもいかずルフィールは意を決してリビングの中へと足を踏み入れた。そんな彼女の気配に気づいたクリュウは振り返って彼女の姿を確認すると「あぁ、ルフィールはそっち座って」と席に座るよう促す。
ルフィールは無言でうなずくと指定された通り彼の対面の席に腰掛ける。が、先程痴態を見られ事もあって座った後も気まずそうに沈黙を続けている。そんな彼女の様子を見ながら、クリュウもまた微妙な表情だ。

「ルフィール。さっきの事なんだけど……」
「ち、違いますッ。つい好奇心で家の中を散策していたら先輩の部屋を見つけて……」
「いや、それはいいんだけど。何で僕のベッドで横になってたのさ？」
　クリュウの問い掛けにルフィールは答えづらそうに視線を逸らす。だが何か答えなければ余計に疑われてしまう。考えた末に出た答えは、
「その、寝心地の良さそうなベッドだったので。つい……」
　自分で言っててずいぶん無茶苦茶な理由だという事はわかっている。それでも、まさか彼の匂いを堪能していたなんて口が裂けても言えない。悩んだ末に出たのがこの回答だったが、さすがにこんなウソすぐに見抜かれて、
「そっか。先週布団を新しい物に変えたばかりだからフカフカなんだよね。確かに寝心地はいいと思うよ」
　と、屈託のない笑顔で答えるクリュウを見てルフィールは心から安堵した。どうやら彼は本気で信じてくれたらしい。彼の人の良さというか、少々抜けている所に感謝しつつ、ルフィールは何とか苦境を脱する事ができた。
「それより、冷めないうちにどうぞ」
　そう言う彼の表情を一瞥し、ルフィールは自分の前に置かれた料理を見る。それはルフィールが見た事がない料理だった。
「丼、ですか？」
「うん。サシミウオのユッケ風かな？　前に作った時は評判は上々だったよ」
　見た目は丼物だけあって器にご飯を敷き、その上に具材が乗ったスタイル。具材は一センチ程に角切りされたサシミウオに特製のタレと薬味として刻んだジャンゴーネギを絡めたもので、その上から温泉卵を乗せている。特製ダレの香りが食欲をそそる一品だ。
「ユッケってのは普通は生肉を使うんだけど、サシミウオの方がカロリーが少ないからね。実際フィーリア達にはこっちの方がお気に入りだったみたい」

さりげなくカロリー計算もしている所が憎らしい。何せ女の子が喜びそうな事を平然とやってしまうのだから。これで優しくて顔もなかなかの美形なのだから、女の子にモテるのも当然と言えよう。まったく、かっこ良すぎて困ってしまう。
「では、いただきます」
フォークを持って早速食べようとしたルフィールを見てクリュウは「あ、卵を割って食べるんだよ」とアドバイス。それに従って慎重に卵を割り、とろりとした黄身がサシミウオに絡まる。ルフィールはそこに向かってフォークを刺し、下にある熱々の大雪米と一緒に一口食べる。
「あ、おいしい……」
それが素直な感想だった。
口の中に広がるちょっと濃いめのタレ。ルフィールは知らないが、これは東方系の食材をふんだんに使った一品だ。正確には濃い目のショウユと呼ばれるタレにゴマ、すり潰したニンニクを少々。東方の一部の地域で使われているコチュジャンと呼ばれる調味料を加えている。
元々は生肉を使ったものでサクラが以前ご馳走してくれたのだが、それをクリュウがサシミウオで代用し、タレも一工夫して軽く煮込んでみた。こうする事でより味わいが増し、ついでにご飯と具材の間に刻みノリを振りかけるなどした結果、よりおいしい一品に仕上がったのだ。
クリュウとしてもこれは自信作だったようで、ルフィールの言葉に「でしょ？　材料さえあれば結構簡単にできるんだよねこれ」と誇らしげに語る。その姿はまるで母親に褒められた子供のよう。そんな彼の可愛らしい姿につい笑みが零れてしまう。
「以前よりも、また料理の腕を上げられましたね」
「もちろん。この一年ちょっとでサクラやツバメに東料理も教えてもらったからレパートリーも増えたし」
「失念しているかもしれませんが、先輩の本業はハンターですからね。歌って料理もできるハンターでも目指されているんですか？」

「どこのアイドルだよそれ」
くすくすと楽しげに笑う彼女の発言にクリュウは苦笑を浮かべた。何せ一度事情があってアイドルのようにステージの上で歌った事があるので正直笑えない。思い出すたびに欝になる黒歴史だ。
「冗談ですよ。先輩がしっかりとハンターとしてお強くなられている事は、先程の装備を見れば一目瞭然です」
今、クリュウはディアブロシリーズを脱いで私服姿となっている。さすがにあれは日常生活で使うには重くて動きづらい。一方のルフィールは頭のパピメルカプトだけ取っただけの姿。パピメルシリーズはそれこそ見た目は服にも見えるので、クリュウのそれとは違って日常生活でも普通に使える。まぁ、こんな目立つ色とデザインのものを好き好んで日常生活で使う人はあまりいないだろうが。
「本当に、一年ちょっと会わないうちに――先輩は以前よりもずっとかっこ良くなられましたね」
「そっかな？　自分ではよくわかんないけど」
「そうですね。自分の成長というのは、自分ではなかなかわからないものです。自分の実力に自信を持つ事は大切な事ですが、持ち過ぎては自信過剰となります。過剰な自信程質の悪いものはありませんからね。その点では先輩は卑屈過ぎるくらいに謙虚なのでそんな心配もありませんが」
「……あのさ、褒めてるの？　それともけなしてるの？」
「どっちもです」
楽しそうに言うルフィールの姿に苦笑を浮かべながら、クリュウは自分の紅茶を飲む。ミルクに砂糖をたっぷり入れたもので、彼のお気に入りの一つだ。ちなみにこういう時フィーリアは微糖入りのレモンティー、サクラは緑茶、シルフィードはコーヒーと見事に全員バラバラになる。
ひとまずそれを区切りとして、ルフィールはおいしそうにサシミウオのユッケ風丼を食べ進める。そんな彼女の姿を見てクリュウは一人安心したように胸を撫で下ろすと、自分が作った料理を幸せそうに食べてもらえる事ほど嬉しい事はそうない。

「そういえば、僕は前にシャルルには彼女の村で会う事があったけど。君はどうなの？　あれからシャルルとは会ってたりとか、手紙でのやり取りとかはしてるの？」
　しばらくして何気なしに訊いたのはクリュウにとってはルフィールと同じくらい大切に想っている後輩にして、ルフィールにとっても唯一無二の親友――本人達は否定するだろうが――であるシャルルの事。するとユッケ丼を食べ終えて口を拭いていたルフィールは静かに答える。
「――ガノトトスを討伐されたんですよね。シャルルさんと一緒に」
「あれ？　知ってたの？」
「はい。実は先輩と入れ違いで、先輩がアルザス村を出てから一週間後くらいに訪問させていただきました」
「そうだったんだ……」
　以前、クリュウはシャルルからの村が危機に瀕しているという手紙を受けて彼女の村へ行った事がある。その際に偶然村に来ていたエリーゼ、レンと共にアルザス村の脅威となっていたガノトトスの討伐を行った。
　クリュウ以外はガノトトスと戦えるようなハンターランクではなく、尚且つクリュウにとってもいつものメンバーが誰一人いないという状況。さらにはドスイーオスの乱入などの異常事態など次々に襲い掛かる苦難に悪戦苦闘しながらも、四人の力を結集させて激戦を繰り広げ、何とかガノトトスの討伐に成功。アルザス村の平和を取り戻した。
　クリュウはガノトトス討伐の数日後にはイージス村へと戻る事になり、エリーゼとレンも彼が村を出て数日後に出発。ルフィールが訪れたのはそんな頃の事であった。
「今でも忘れられません。もしもボクの到着が一週間早ければ、先輩と共に狩猟ができたんですから――あと、先輩と一緒に狩りをした事を自慢気に語るシャルルさんの優越感に満ちた表情も」
「……あいつ、昔から勉学以外で何とかルフィールに勝とうとしてたからなぁ。いつまで経っても子供だよ」

「まぁ、一度として勝てた試しはありませんけど」
「……お前も相変わらずだなぁ」
皆、自分の道へ進んでいる。それはアルトリアでのアリア達を見ていて強く思った事だ。あの時一緒の学び舎で学んでいた友は、今はそれぞれ自分の道を歩んでいる。それはちょっと見ないうちに大人びていたり、強くなっていたりと自分が知らない姿へと変わっていく。
だが、その中で自分の知っている姿を見られると、ほっとしてしまうのだ。あいつは変わっていないと、思える――ルフィールは自分がよく知っている、ずっと大切な後輩だと、心から思えるのだ。
「シャルルとはそれから手紙とかのやり取りはしてるの？」
「いえ。残念ながら今のボクは拠点を持たずに街や村を旅する流浪ハンターですから。手紙をやり取りを行える状況ではありません。それに、シャルル先輩は致命的に語学力が乏しい為、手紙を書けというのは酷な話でしょう？」
相変わらずシャルルに対して全く容赦がない。だが残念ながらその意見には賛成だ。クリュウは実際シャルルからの残念な手紙を読んでいるからこそ、余計にだ。
だがクリュウが引っ掛かりを感じた事はそこではなかった。
「ルフィール、今流浪ハンターしてるの？」
流浪ハンターとは文字通り特定の拠点を持たずに様々な街や村などを旅しながらハンター活動を行うハンターの事を言う。フィーリアやサクラは今でこそイージス村に拠点を置いているが、元々は流浪ハンターだった。シルフィードはドンドルマに拠点を置いていたので彼女だけは流浪ハンターには分類されないが。
「はい。自分の実力を磨く為にも一ヶ所に留まらず、様々な場所で様々な状況に身を置く事が重要だと思っていたので」
「どんな所を回ってたの？」
「そうですねぇ。ドンドルマ、ミナガルデ、エルバーフェルド、ガリア、エスパニアなどを周りました」
「主に大陸西部を回ってたんだ」
ドンドルマは言うまでもなく独立城塞都市。ミナガルデは西シュ

レイド王国の大都市であり、エルバーフェルドとガリアはクリュウもついこの前行った事がある場所。エスパニア王国はアルコリス地方が属する為クリュウもよく行く国だ。どれもドンドルマから比較的行きやすい場所ばかりだ。
「僕もミナガルデ以外は行った事あるな」
「エルバーフェルドにもですか？　あそこは入国管理が厳しくてボクも入るのに結構苦労したんですけど」
「……えぇっと、フィーリアって実はエルバーフェルドの名門貴族のお嬢様なんだ。その関係でほとんど入国管理は省いちゃったからなぁ」
　入国管理が厳しいのはクリュウも知っている。実際入国申請を行う長い行列を見ているのだから。エルバーフェルドは特に昨今周辺諸国との軋轢（あつれき）が増している為、余計に厳しいのだ。
　一方、クリュウの発言にルフィールは怪訝そうな顔になる。
「なぜそのような出自の方がハンターに？」
「まぁ、色々あってね」
「……理解できません。ボクと違って恵まれた環境で生まれ育っているのに、わざわざハンターを目指すなんて」
　不快そうに語るルフィールの言葉に、クリュウは言葉に詰まった。学生時代に彼女の口から聞いた彼女の出自。イビルアイのせいで親に捨てられて、教会で育った彼女。出身も孤児から、さらにイビルアイというハンデを背負っている彼女からすれば、目指せる道はそう多くはなかった。だからこそ恵まれて生まれ育ち、様々な道を目指せる中でわざわざハンターを目指したフィーリアの発想が理解できない――むしろ、腹が立つ。
　だがクリュウはフィーリアがなぜハンターを目指したかについても知っている。彼女の親友は奴隷出身だった。だからこそ目指せる道はルフィールのように多くはなく、そんな彼女がハンターを目指す事になったから彼女の助けになれればとフィーリアもハンターを目指した。
「まぁ、僕の口から言えるのはここまでかな。続きは本人から訊いて

みてよ」
「結構です。ボクは先輩以外の事は全くもって関心がありません」
「……ルフィール」
　本当に興味がないのだろう。堂々と宣言した彼女の瞳には一切の悪気が感じられない。相変わらず彼女は社交性がゼロに等しいらしい。イビルアイ云々抜きにして、まずはその性格と変えなければ友達を作る事もままならないだろう。
　彼女は一見すれば優等生に見えなくもないが、実際はシャルル並みの問題児だという事を知っている人はあまりいない。
「そんなんじゃ、一緒に狩りをしてくれる人なんてできないよ？」
「問題ありません。固(もと)よりボクは先輩以外の方と一緒に狩りをしようなどとは考えていませんから。リオレウスの時は例外中の例外。今後もボクは先輩以外の方と狩りをする気はありません」
　キッパリと言い切るルフィールの発言に、クリュウは困り果ててしまう。自分を信頼して頼ってくれる事は嬉しいのだが、少しは独り立ちしてほしいのが本音だ。
「それじゃ、僕がまた組む事を拒んだらどうするのさ？」
　何気なく探りを入れるつもりで軽く言ったクリュウだったが、ルフィールは真剣な表情で「その場合は当然――」と答え、堂々と宣言する。
「――二度と人を信じません」
「……真顔で何て事言うのさ君は」
　厄介な事に、ルフィールの目は本気だ。彼女は元々誰も信じないで生きていくと決心していた。だがクリュウと出会い、もう一度だけ彼を信じてみようと決意した。だからこそ、その彼に裏切られたら、もう人を信じるつもりはない。
　ルフィールにとって、クリュウはそれほどまでに大きな存在であり、言い過ぎではなく生きる希望なのだ。だからこそ、クリュウは困る。
「あ、そうだ。この前サクラが作ってくれたヨウカンって東菓子があるけど、食べる？」

「結構です。先輩以外の手料理を食べるつもりはありませんから」
「……この前僕が作った北風みかんのゼリーがあるけど、食べる？」
「是非いただきます」
「……あ、そう。持って来るね」
先程のヨウカンの時の興味なさげな表情から一転して、嬉々とした表情になって待ち望むルフィールの姿に苦笑しつつ、クリュウは彼女が食べ終えた食器を持って一人台所へと消える。
一人になり、台所に戻ったクリュウは事前に汲んでおいた井戸の水が入った桶から水を小さい桶に移してそれを流し台に置くと、石鹸とヘチマで作られたタワシを使って汚れを洗い落とす。ゴシゴシと擦っているうちに汚れは落ちていくが、手の動きとは関係なくクリュウは考え事に没頭していた。
正直、ルフィールと組みたくない訳ではない。むしろまた一緒に狩りをしたいとは思っているし、卒業後もずっと心の片隅で彼女の事を心配していた。
だが今はフィーリアにサクラ、シルフィードという頼れる仲間がいる。定員はいっぱいだし、シルフィードはともかくフィーリアとサクラは自分と離れる事をものすごく嫌う。だからと言ってシルフィードを外す訳にもいかない。彼女はチームのリーダーだし、一緒にいて頼れるという点では二人より上回る存在だ。
ハンター達の暗黙の了解で、一度の狩りでの定員は最大四人までと決まっている。自分とすでに三人がチームを組んでいる状態では、ルフィールが入る余地などない事は寺子屋に通う子供でもわかる算数だ。
だがだからと言ってルフィールを追い返す訳にもいかない。あの子は本気で自分から断られたら二度と人を信じなくなってしまうだろう。そんな事はないと思いたいが、死を覚悟する事もあるかもしれない。それほどまでに、彼女にとっての自分の存在は大きい。自慢とか思い上がりとかではないから厄介なのだ。
「どうしようかな……」
「――何をだニャ？」

「え？」
　予期しない返事に驚いて振り返ると、そこには見た事のないアイルーが一匹いた。美しい漆黒の毛並みのアイルーが、北風みかんゼリーの入った氷結晶を使った氷冷式冷蔵庫に寄り掛かってこちらを鋭い眼光で見詰めていた。ドングリヘルムにドングリメイル、鋭い刃先のピッケルを持った姿は、彼がオトモアイルーだと示していた。
「君は誰？　っていうか、どっから入って来たの？」
「裏口が開けっ放しだったニャ。田舎だからって防犯意識が低過ぎるニャ」
「そうなんだ。で、君は一体……」
「――俺の名前はレイヴン。ルフィールのオトモアイルーだニャ」
「ルフィールの？」
　漆黒のアイルー――レイヴンの発言に驚くクリュウ。先程までルフィールと彼女が自分以外とは誰とも組むつもりはないと言っていたばかりなだけあって、彼の登場は二重の意味での驚きだった。
「えっと、初めまして。僕は――」
「――クリュウ・ルナリーフ。ルフィールが口を開けば語ってるからニャ。お前の事はそれなりに知っているつもりニャ」
　ため息混じりに言うところを見ると、本当にしょっちゅう言っているのだろう。恥ずかし過ぎるし、自分の事のせいで興味もないのに聞かされていると思うと、申し訳なく思えてくる。
「ご、ごめんね」
「別に。お前が謝る必要はないニャ。ルフィールと組む上でのデフォルトだと思えば」
「あははは……」
「で？　何で一体悩んでるニャ？」
　厳しい瞳で睨んで来るレイヴンに、クリュウは押し黙ってしまう。相手はアイルーだし、アイルーだから身長も腰程しかない。なのに彼にはそれだけの迫力があった。歴戦の猛者という風格が、黙っている彼からヒシヒシと感じられる。
「いや、別に大した事じゃ……」

「――言っておくが、ルフィールを泣かせたら許さないニャよ。例え彼女の恩人だとしても、その時は容赦しない。覚えておくニャ」
クリュウを十分威圧した後、レイヴンは一人で先にルフィールのいるリビングへ戻ってしまう。そんな彼の背中を呆然と見詰めていると、向こうの方から「レイヴン？　何でこんな所にいるのよ」と彼女の声が聞こえてきた。
クリュウは洗い終わった食器を水切りしてカゴの中に入れると、冷蔵庫から北風みかんゼリーを取り出してスプーンも持ってリビングへと戻る。
椅子に座って律儀に待っているルフィールはクリュウの姿を見ると大喜び。そんな彼女の足元では椅子に背を預けて立っているレイヴンがこちらを鋭い瞳で見詰めている。
カチャリと小さな音を立てて彼女の前にゼリーを置き、クリュウは再び彼女の対面に座る。そして彼女の足元にいるレイヴンを見やる。
「あのさルフィール。そのアイルーって……」
「ご紹介が遅れました。この子はレイヴン、ボクのオトモアイルーです」
そう言ってルフィールは足元にいるレイヴンの両脇の下に手を入れて持ち上げると、彼に紹介する。ぶらーんと足を垂れて黙ってされるがままのアイルーの姿は可愛らしくはあるが、その鋭い視線に射抜かれていては可愛いもへったくれもない。
「その、かっこいいアイルーだね」
「ボクがシャルルさんと同じくらいに信頼を置いている子です」
そう言ってルフィールは自分の膝の上にちょこんとレイヴンを置く。レイヴンは恥ずかしいのか、そっぽを向くがそんな彼の頭をルフィールが何度も優しく撫でている。
「いや、ビックリしたよ。ルフィールにオトモアイルーがいたなんて」
本当は家に勝手に侵入されていた事にも驚いているのだが。そこは黙っておく。
クリュウの言葉にルフィールは「人は信用できませんが、アイルーは信用できますから」と平然と言ってのける。彼女らしいと言えば彼

女らしい発言に自然と苦笑が浮かんでしまう。
「でも何でまたオトモアイルーなんて連れてるの？」
「ソロで戦うにも限界というものがありますから。ボクは弓兵ですから、レイヴンには前衛を務めてもらう事でよりバランス良く狩りができるんです」
　確かに。オトモアイルーの存在は実にありがたい。剣士はもちろん、特にガンナーなら大型モンスターに対しては前衛役として。分が悪い小型モンスター相手では護衛役として力を振るってくれる。クリュウ以外と人と組む気はなくても、オトモアイルーなら良しとしているのだろう。
　あのルフィールが、アイルーとはいえ自分で作った友達を連れている。その事がクリュウにとってはものすごく嬉しかった。それこそ涙が出そうになるくらい――まぁ実際は出さないが。
「二人が出会ったのっていつ？　ネコバァの紹介？」
　ネコバァとは、キッチンアイルーやオトモアイルーを斡旋してくれる人の事だ。食事係やオトモアイルーを求めているハンターと、働き口を求めているアイルーの間に入って双方が納得できる主従関係を結べるように取り計らってくれるお婆さんで、皆からは親しみを込めてネコバァと呼ばれている。
「いえ。ボクがレイヴンと出会ったのは卒業後すぐのドンドルマで、酒場で出会いました」
「酒場で？　それはまた何で？」
「どうにも、前の主人と狩りの方向性で揉めたらしくて。クビにされた所をボクが拾い上げたんです」
「誤解されるような言い方をするニャ。俺は自分から辞表を叩きつけてやったのニャ。ネコバァの所へ戻ろうとしてた時に、お前に声を掛けられたんだニャ」
　クビにされたと辞表を叩きつけたとでは同じやめるにしても意味合いはかなり変わって来る。男として、そこは譲れないプライドだったのだろう。気持ちはわかる。
「ちょうどその時ボクはイャンクックの単独討伐を終えてルーククラ

スになり、新たにダイミョウザザミの討伐を考えていました。そこで彼をスカウトしたのです」
「何でまたアイルーを？」
「言いませんでしたが？　人間は信用出来ないと」
「……ルフィール」
「まぁ、それは置いといて。正確にはお節介なギルド嬢の仲介があったんですけど」
　ため息混じりに言うルフィールの言葉の中のある単語に、クリュウは引っ掛かりを感じた。彼女の言う《お節介なギルド嬢》とは、もしかして――
「もしかしなくても、ライザさん？」
「そうです。先輩はライザさんとお知り合いなんですよね」
「そうだけど。何で知ってるの？」
「ライザさんが言っていましたから」
　彼女曰く、卒業してすぐの頃に一人で狩りをしていた際に声をライザに掛けられたらしい。当初は無視していた――ここが実にルフィールらしい――のだが、ひょんな事からライザがクリュウをよく知っている事を知り、自分が彼の後輩だと明かした事から本格的な交流がスタートした。
　そして彼女と知り合いになって数週間後、酒場で揉めて雇い主のハンター決裂したレイヴンを見ていたライザが彼を呼び止め、ちょうど酒場の隅で今後の作戦計画を練っていたルフィールに声を掛けた事から二人は出会ったらしい。
「ライザさんらしいけど……でも何で二人共それを受け入れたのさ。聞く限りではレイヴンはすぐに他のハンターと契約を結べる状態じゃないし。そもそもルフィールはソロを貫くつもりだったんでしょ？」
　そうクリュウが疑問に思った事を問うと、ルフィールは難しい顔になったかと思うと溜息混じりに彼の問いに答えた。
「……仕方ないじゃないですか。お試しに一回一緒に狩りをしないと、ドンドルマでの狩猟許可申請を剥奪するなんて脅すんですから」

「……俺はネコバァに主人に対する不敬罪を言いつけると脅された」
二人共、見事にライザに弱みを握られてそれで脅されて仕方なく組んだ事がきっかけだった。と口を揃えて言う。その返答にクリュウは乾いた声で笑うしかなかった。
「それで、一緒にダイミョウザザミを討伐したの？」
「はい。最初こそ互いに望まぬコンビでの戦いだったのでギクシャクしていましたが、戦いの中で互いを認め合い、協力して戦い、ダイミョウザザミの討伐に成功しました。ドンドルマに戻ってそこでコンビ解消となったのですが、お互いにしばらく一緒にいる事にしてライザさんを通してネコバァさんに本格的な主従契約を結び、以後こうしてボクとレイヴンはコンビを組み続けている訳です――今ではボクの頼れる相棒です」
そう言いながら、ルフィールはギュッとレイヴンを抱き締める。彼女の腕の中で黙ってそれを抵抗なく受けるレイヴンは一見すると動じていないように見えるが、細かく見ると尻尾がピョコピョコと揺れているところを見ると、満更でもないだろう。アイルーも見た目じゃないらしい。
「相棒かぁ……」
「あ、もちろん先輩に遠く及びませんけどね」
満面の笑顔で言う彼女の言葉は嬉しいのだが、その瞬間レイヴンが怖いくらいの目でクリュウを睨みつけて来ている事に、彼女は気づいていない。レイヴンの敵意にも似た視線に射抜かれ、クリュウは冷や汗を流しながら慌てて話題を変えようと口を開く――直前、ルフィールの方が動いた。
「――盗み聞きとは、あまり感心できる事ではありませんが」
そう言ってルフィールは振り返る。クリュウも驚いてその視線を追うが、そこには玄関があるだけで誰もいない。が、ゆっくりとドアが開き、
「フィーリア、サクラ……」
現れたのはフィーリアとサクラだった。二人共まるでイタズラがバレた子供のように気まずそうな表情で入って来る。が、ルフィール

と目が合うと二人共一瞬にして厳しい目つきに変わった。
「バレていましたか」
「……気配は消していたつもりだけど」
「あれでよく言えましたね。殺意と嫉妬に満ちた視線が痛いくらい感じられていましたけど」
ルフィールと二人の間で起きる激しい睨み合い。バチバチと火花が飛び散るような光景に傍観していたクリュウはゾッとする。フィーリアとサクラは最初は仲が悪かった。だがこれはその時以上にひどい。
クリュウが慌てて仲裁に入ろうとした時、ルフィールは突如ビシッと部屋の一角を指差した。そこにはソファがあり、そして――
「ひ……ッ!?」
「……ッ!?」
二人の表情が引きつるのを見て、ルフィールの顔に不敵な笑みが浮かぶ。そして二人と同じように彼女の指差す先を追ったクリュウは、
「あれ？　これ、なくなったと思ってた僕の服だ」
クリュウが怪訝そうに掴んだのは、確かに彼の私服だった。上着からシャツ、ズボンにはたまた下着まで。ひと通りの一式が見事に揃っている。
「何でまたこんな所に……」
困惑するクリュウは気づいていないが、今まさに彼が手に持っている自分の私服。それを愕然とした様子でフィーリアとサクラは見詰めている。そして、
「……先輩を、そんな邪な感情を持って接していたんですか。お二人さん」
余裕に満ちた表情。それはある意味で勝利を確信した不敵な笑みだ。顔を引きつらせながら振り返った二人は、顔は信じられないくらいに真っ赤に染まり、瞳には薄っすらと涙まで浮かんでいる始末。
「……き、貴様ぁッ」
「人の部屋に勝手に入ったんですか……ッ!?」
「逆ギレですか？　別に構いませんが、あれの発見場所を先輩に言っ

てもよろしいのでしょうか？」
　余裕の表情で迎え撃つルフィールを前に、フィーリアとサクラは憎き仇敵と相対したかのような殺意に満ちた表情に変わる。困惑しながら服を見詰めていたクリュウが再び三人の方を向いた時、事態はさらに悪化していた。
「ちょ、ちょっと三人ともどうしたんだよッ」
　慌ててクリュウが間に入ろうとした時、二人が入って来て開けっ放しだったドアに「大変じゃぁッ！」と大声を上げながらツバメが飛び込んで来た。ここまで走って来たのか、荒い息を繰り返す彼を前に驚く一同。真っ先にクリュウが掛け寄り「どうしたのさ一体ッ!?」と彼の肩を持って声を掛ける。
　荒い息を深呼吸を繰り返して整えると、ツバメは顔面を蒼白にさせながら震える口をゆっくりと開き、彼らに今さっき入った情報を伝える。
「――セレス密林にガノトトスが。リフェル森丘にイャンガルルガが出現したのじゃ」
　それは、今までで最大級の危機が村を襲いつつあるという、最悪の知らせであった。

第１８４話　非常警戒態勢　凛々しき戦姫の胸を襲う小さな痛み

「シルフィッ！」
　酒場で村長やエレナと一緒に何事かを相談していたシルフィードがその声に振り返ると、クリュウが走って来るのが見えた。その背後にはルフィールとツバメ、いつの間にかいなくなっていたフィーリアとサクラが続く。
「すまないな。旧友との水入らずなひと時を邪魔してしまって。だが非常事態なんだ」
「ツバメに聞いたよッ。ガノトトスとイャンガルルガが出たんだってッ!?」
　酒場へ飛び込んだクリュウの発言に、シルフィードは険しい表情でうなずいた。まだ皆軽く混乱している中、村長がいつもの人懐っこい笑顔を引っ込めながら状況を説明する。
「さっきまで野草採取でセレス密林に行ってたんだけど、海に確かにガノトトスの背ビレを見たんだ。急いで村へ戻って来ると、近くの村の村長からリフェル森丘にイャンガルルガが現れたという伝書鳩を受け取ったんだ。正直、僕もかなり焦ってるんだよね」
　そう言って嫌な汗を流しながらため息を吐く村長。その隣でエレナが「その別の村の村長さんが、ウチの村にはハンターが大勢いるんだからそっちで対処してほしいって言って来たのよ。ガノトトスとイャンガルルガを同時進行で討伐できる程の戦力はうちにはないのに」と、彼女も参ったとばかりに困り切っていた。
　同時討伐でも難しいのに、それがそれぞれが別の狩場にいるのは余計に厄介だ。なぜなら、単純に片方しかすぐには討伐できないか、両方に戦力を分散させる他がないからだ。
「ガノトトスが海にいるとなると、バルト達漁師が仕事ができない。ちょうど定置網を張ったばかりだからさ。それが壊されたら漁業に深刻なダメージを受けちゃうし」

「リフェル森丘とここととの距離はリオレウスの活動範囲内。おそらく、イャンガルルガもほとんど同じくらいの活動範囲を持っているはずだから、こっちも放っておくわけにはいかないのよ」
村長とエレナの言葉に、ようやく村が置かれた最悪の二重苦の現状を理解した。どちらも放置できず、どちらも迅速な対応を迫られる状況だった。
「どうしようシルフィ」
こういう時、最も頼れるリーダーのシルフィードに意見を求めるが、今回ばかりはシルフィードも難しい表情のまま沈黙してしまっている。しばらくして、ようやくシルフィードがその重い口をゆっくりと開いた。
「……仕方がない。今回は戦力を分散させて各個撃破で討伐を行うぞ」
「戦力の分散……」
要するにそれはイージス村の全ハンターを総動員してセレス密林のガノトトス討伐班、リフェル森丘のイャンガルルガ討伐班との二チームに分けるという事だ。村のハンターは五人。ルフィールを含めて六人なので、均等に分けるとすれば三人一隊編成（スリーマンセル）となる――それはつまり、いつもの四人一隊編成（フォーマンセル）よりも人数が減るという事だ。
「戦力の分散は承知しました。ですが、チーム分けはどうするんですか？」
さすがは歴戦のハンター。フィーリアはすぐに状況を理解すると、シルフィードの意見に賛同しつつ彼女に作戦概要を促す。シルフィードはまたしばらく考え込むが、その間クリュウ達は黙って彼女の判断を待つ。
「……チーム分けは、以下のように行う」
しばらくして、考えが纏まったシルフィードは彼らが待ち望んでいたチーム分けを発表した。
「セレス密林にてガノトトス討伐を行う第一討伐隊は、チームリーダーをフィーリアとしてサクラ、ツバメ、オリガミの三人一匹とした

チームとする」
　第一討伐隊、ガノトトス討伐の命を受けた三人。ツバメは緊張した様子で「ま、任せるのじゃ」と反応したが、フィーリアとサクラは驚愕のあまり固まってしまっていた。そんな彼女達を無視して、シルフィードは続ける。
「リフェル森丘にてイャンガルルガ討伐を行う第二討伐隊は、チームリーダーを私としてクリュウ、ケーニッヒの三人一隊編成（スリーマンセル）としたチームとする」
　第二討伐隊、イャンガルルガ討伐の命を受けたクリュウはツバメと同じく緊張した様子でうなずいた。隣に立つルフィールはシルフィードに指揮される事に不満そうにしつつも、彼と同じチームという事で黙って聞き手に徹している。だが、このチーム分けに異を唱える者がいた。
「な、納得できませんッ！　なぜケーニッヒ様がクリュウ様と一緒で私達が別働隊なんですかッ!?」
「……納得出来ない。命令を拒否する」
　予想通り、フィーリアとサクラが反発する。だがそれはシルフィードも想定していた事だ。伊達に短くない間彼女達と一緒にいる訳ではない。彼女は冷静にこのチーム分けの根拠を話す。
「まず第一に、各隊に一人づつガンナーを分配したかったからケーニッヒとフィーリアは別チームとなる。その際、君は火炎弾を撃てるヴァルキリーブレイズを持っているから、火属性に弱いガノトトスの相手が適任だ。同じ理由で飛竜刀【紅葉】を持つサクラも当然ガノトトスの相手をしてもらう。この二人の補佐を行う為にツバメとオリガミを配置した」
　火属性に弱いガノトトス相手に、属性攻撃を最大限に活かした攻撃手を適切に配置したまでだと淡々と答えるシルフィードの言葉に、二人は押し黙ってしまう。確かに、彼女の言っている事は正論だ。だからこそ、反発ができない。
「……ならクリュウもバーンエッジを持っている。それに、クリュウはガノトトスの討伐経験がある。適任だわ」

そう。クリュウも火属性の片手剣を持っている。それもそのバーンエッジで以前アルザス村でガノトトスの討伐を行った事もある経験者だ。サクラの意見も正論であり、フィーリアも「そうですそうですッ」と援護に回る。その背後で結果的にすっかり邪魔者扱いとなったツバメが一人落ち込んでいたのだが、それはとりあえず無視する。

だがサクラの意見に対してもシルフィードは首を横に振った。

「確かにクリュウは火属性の武器を持ち、実際にガノトトスの討伐経験もある」

「……だったら」

「だが同時に、彼はオデッセイ改というイャンガルルガに効果のある水属性の武器も持っている。すでに火属性の武器を扱う者が二名いる時点で、そっちにそれ以上分配するよりこっちの攻撃手にした方が適任だ」

クリュウは以前フィーリアとルーデルと一緒にリオレイアを捕獲した事がある。その際に得た雌火竜の逆鱗を使って作ったのがオデッセイ改という水属性の片手剣。水属性はイャンガルルガの弱点属性でもある。

「さらに言えば、我々はクリュウ以外全員ケーニッヒとは初対面だ。となると、自然とチーム分けはクリュウとケーニッヒが一緒になる。その二人を指揮しながら前衛を務める役は耳栓スキルを備える私が適任だろう。だからこのようなチーム分けを行った訳だが、不服か？」

シルフィードの説明は全て見事に的を射ていた。だからこそ不満を露わにしたフィーリア達も彼女の説明に返す言葉も無い。不満はあっても、納得せざるを得ないのだ。

恨めしい目付きでシルフィードを見詰める二人に苦笑しながらシルフィードは「すまないな」と謝りつつ、改めて表情を厳しくして皆に向き直る。

「これが私が考えた最善の策だと思うが、何か意見がある者はいるか？」

不満はできるだけ減らしておきたい。だからこそ改善できるとこ

ろは改善する。その為にも全員に意見を求めるが、クリュウとツバメは彼女の作戦を支持しており、フィーリアとサクラはものすごく不満そうではあるが渋々了承している。そしてルフィールは、
「一つ、意見があります」
小さく手を挙げるルフィールにシルフィードが視線を向けると、ルフィールはいつの間にか背後に立っていたレイヴンを紹介した。
「この子はレイヴン、ボクのオトモアイルーです。なかなかの手練なので、是非連れて行きたいのですが」
ルフィールの紹介にレイヴンはフンと鼻を鳴らしてそっぽを向く。その姿を見てシルフィードは「君のオトモアイルーか。まぁ今は文字通りアイルーの手も借りたいところだ。こちらとしてもその方がありがたい」とレイヴンの同行を許可する。
「……俺の足手纏いにはなるニャよ」
「ほぉ、言うじゃないか。それでは、お手並み拝見と言くとしようか」
威勢のいいレイヴンの言葉に、シルフィードも満更でもない様子。一目見て彼がなかなかの手練だという事を見抜いているからこそ、その発言に不満はない。振り返り「クリュウも、構わないな？」と彼に確認を取ると、彼も「構わないよ」と了承する。ルフィールは深く一礼した。
全員が納得した形となり、シルフィードは一度うなずくと改めて皆に向き直る。いつになく真剣な彼女の表情が、今の状況の悪さを表しているかのようだった。
「準備が出来次第、各隊ただちに出発するように。詳しい事はそれぞれのリーダーに判断を仰いでくれ。それでは、解散」
シルフィードの解散指示に従い、六人と二匹はそれぞれ分けられたチームごとに集合した。フィーリア率いる第一討伐隊（ガノトトス組）は引き続きエレナの酒場で作戦会議となり、シルフィード率いる第二討伐隊（イャンガルルガ組）はクリュウの家にて作戦会議となった。
「さて、まず先に問うておくが。ケーニッヒ、君はイャンガルルガの討伐経験は？」

リビングのテーブルにそれぞれが腰掛け始まった作戦会議。開口一番にシルフィードがルフィールにイャンガルルガの討伐経験の有無を確認する。
「ありません。ボクはまだ一番上級の飛竜の討伐経験が合同でリオレウス。単独ではバサルモス止まりです」
首を横に振って否定するルフィール。その装備を見れば、イャンガルルガの討伐経験がない事は明らかだが、人は見た目によらない事もある。事前の確認だ。
「シルフィは、イャンガルルガの討伐経験は？」
「一度だけな。その時の知識が今回は役立つと思う。それでは、事前に奴の生態及び行動パターンの説明を行うぞ」
それから、シルフィードのイャンガルルガについての説明が行われた。クリュウにとっては自分が知らないモンスターとの戦闘前は必ず行われる講義のようなもの。ルフィールも黙って彼女の解説を聞き続ける。
「まずイャンガルルガは別名《黒狼鳥》と言われる。読んで字の如く黒い鳥だ。分類的にはイャンクックと同じ鳥竜種に分類され、姿形もイャンクックに酷似している。その為以前はイャンクックの亜種とされていたが、数年前に全く別のモンスターである事が立証された。その凶暴性、攻撃力、危険性は明らかに飛竜種、それもリオレウスやリオレイアに相当すると言われている」
「全く姿形は違うけど、攻撃パターンってリオレイアに似てるって聞いた事があるんだけど」
クリュウのおずおずとした質問にシルフィードは「その通りだ」とうなずく。
「奴は火球ブレスを吐くが、リオレイアと同じく単発及び三連ブレスを駆使する。同様に尻尾に毒を持っており、サマーソルトも使う。強力な攻撃はリオレイアに似ているが、細かい動作ではどちらかと言えばイャンクックに似ているな。ついばみ攻撃などはその最たるものだが、その破壊力は桁が違う。一撃で地面など簡単に割る事ができる程にな」

シルフィードの説明を細かくメモしながら聞き続けるクリュウに対して、ルフィールはずっと沈黙を貫いている。そのくらいの知識なら彼女はとっくに頭の中に入っている。さすがは元主席だけの事はあり、博識さでは他の追随を許さない。
「肉質の硬さもまたかなりのものだ。普通に攻撃していては簡単に弾かれてしまう。弱点部位である頭や尻尾を確実に狙い、攻撃を積み重ねる方が得策だ」
「それなら、尚更ツバメをこっちに入れた方が良かったんじゃないの？」
ツバメは双剣使いであり、鬼人化をする事で筋力が増して武器が弾かれなくなる。硬い肉質のモンスター相手ならそれこそ彼が必要となるだろう。だが、
「確かにその通りだ。鬼人化を使える双剣使いのツバメをこちらに入れた方がより有効的に狩りを進められるだろう。だが、そうすると必然的にツバメが主力となってしまう。正直、まだツバメはイャンガルルガ相手に主力を担えるだけの力はない。危険性を考慮すれば、こちらのチームに入れない方がいいだろう」
シルフィードは何も効率だけでチーム決めをしている訳ではない。それぞれの実力や個性を見た上で、的確にチームを分けている。ツバメの負担をあまり大きくさせない為の配慮が、彼を第一討伐隊に含めた理由だった。
「……あとはまぁ、今のフィーリアとサクラは機嫌がすこぶる悪い。ツバメには悪いが、八つ当たりで暴走しかねない二人のブレーキ役を担ってもらう」
「そういえば、何で二人共あんなに機嫌が悪いのかな」
『……』
心底分からないという様子の彼を見て、二人と一匹は同時に深い深いため息を吐いた。気を取り直して、シルフィードは説明の続きを行う。
「それと、一番の問題として奴は咆哮を駆使する事。他のモンスターに比較して細かく咆哮を使う事で敵の動きを封じて攻撃して来る。

耳栓スキルを持つ私は関係ないが、君達は気をつけるように」
　イャンガルルガの素材は耳栓スキルを強化する装飾品に使われる事もある。それはつまり奴が装飾品の素材にできるだけの咆哮に対する耐性がある事を意味し、それは同時にそれだけ咆哮を使いこなす事を意味する。
「攻撃パターンは主に君達が戦って来たモンスターのパターンに似た物が多い。冷静に焦らず戦えば、決して勝てぬ相手ではないはずだ」
　シルフィードの説明にイャンガルルガの事を改めて再確認し、どう攻略すべきか早速考え始めるクリュウ。こういう狩りに対して前向きなところが、彼の良い所だとシルフィードは常々思う。
「補足説明、よろしいのでしょうか？」
　そこへピッと真っ直ぐと挙手したのはルフィール。シルフィードは一瞬そんな彼女の行動に面食らった様子だったが、すぐに「何だ？」と彼女を促す。
「トラップ関連の事です。イャンガルルガはイャンクックと違い音爆弾による音やられは無効であり、シビレ罠の拘束時間も短いと聞きます」
「そうだな。同じ鳥竜種でもイャンガルルガには音爆弾は効かない。シビレ罠に関してはイャンクックやバサルモスに比べれば短いのは確かだ。だが正確にはリオレウスやリオレイアと同じくらいの短さなので、クリュウは問題無いだろう。君はその点を念頭に入れておいてくれ」
「それと、怒り状態では落とし穴が通じないと聞きましたが」
「あ、それ僕も聞いた事がある。何でも、通常時は大丈夫だけど怒り状態になると効かないって」
　クリュウとルフィールの問いに、シルフィードは「確かにその通りだ」とうなずいた。この生態は、今までにないかなり特殊なものだ。
「人間にも頭に血が上ると周りが見えなくなる者と、逆に妙に冷静になって今まで見えなかったものまで見える者もいる。イャンガルルガが後者で、怒り状態では落とし穴を見破ってしまい、そればかりか爪で器用にネットを引き裂いてしまう。だからこそ、貴重な落とし穴

を無駄にしない為にも通常時と怒り状態をしっかりと見極めないとならないな」
「厄介な相手だね」
「確かに簡単に倒せる相手ではない。だが決して勝てぬ相手でもないはずだ。準備をしっかりと行い、各々が自らの役目をしっかり果たし、連携すれば我々は必ず勝てる」
シルフィードの言葉に、クリュウはしっかりとうなずく。
そう、相手は古龍のように何も完全なる未知な相手ではない。攻撃パターンは今まで倒して来た飛竜に酷似しているし、種族も鳥竜種。全てが未知に包まれた古龍を相手にする訳ではない。これまでの経験をフルに発揮できれば、決して勝てぬ相手ではないはず。
何より、信頼出来る仲間と一緒なら不可能だってきっと可能にできる。自分の周りには、そんな仲間が大勢いるのだ。
「――問題があるとすれば」
そこでシルフィードは視線をルフィールの方へ向ける。自分が注目された事を知ると、ルフィールは平然とした様子で「何か？」と彼女の視線に対する。
「私とクリュウは今の君の実力を知らない。装備を見る限りでは、イャンガルルガを相手にするには少々酷かもしれん。何より、君と連携できるかどうかも未知数だ。ケーニッヒ、君は見知らぬ私を信じてついて来れるか？」
仲間というのは何よりも信頼関係が重要だ。例えランクの低いハンターと一緒でも、しっかりとした信頼関係を築いて連携すれば決して足手纏いにはならないし、むしろ頼れる仲間へと成り代わる。
シルフィードはルフィールとは初対面で、まだ出会ってからわずかな時しか経っていないし。そもそも会話もほとんどしていない。彼女を信頼できるかどうかは、まだ未知数なのだ。
シルフィードとルフィールの間の妙にピリピリとした雰囲気を見ながら、クリュウは沈黙している。ここで「ルフィールは信頼出来る子だよ」とフォローを入れる事は簡単だ。だがそれでは上辺だけの信頼になってしまう。二人が本当に互いを信じられるには、お互いに一

対一で決着をつけるのが一番だと、クリュウは考えていた。
クリュウが不安そうに見守る中、シルフィードの問い掛けに対してルフィールは静かに返答する。
「――ボクが信頼するのは先輩だけです。ですが、その先輩が信頼される方ならボクは反抗する気はありません。ボクと先輩は一心同体。先輩があなたを信じてついていくなら、ボクの進むべき道の先にあなたがいるまでです」
平然とした様子でルフィールは返答した。だがそれはクリュウが待ち望んでいた言葉とはあまりにもかけ離れている。彼女はシルフィードを信頼した訳ではなく、自分を信頼している。そしてその自分が信頼している相手なら、信頼はせずとも反抗する気はない――要するに、あくまでの利害の一致という関係に過ぎないと言い切ったのだ。
これにはさすがのクリュウも文句を言おうと腰を上げかけた時、彼女の返答を聞いたシルフィードの口元にフッと笑みが浮かぶのを彼は見逃さなかった。
「――いい答えだ。初対面の相手、それも実力も測れない相手をいきなり信用しろと言う方が無理な話だ。君が信頼できるのはクリュウだけ。そしてクリュウは私について来てくれる。それで十分さ。元々私達のチームはクリュウを中心に構成されていると言っても過言ではない。メンバーが変わっただけで、根本は何も変わっていないのさ」
呆気に取られるクリュウとルフィールを前に、シルフィードは満足そうな様子で先程用意したコップに入った水を一気に飲み干す。
クリュウが彼女の言っている意味を理解したのは、その直後だった。
自分は信頼しなくても構わない。だが、クリュウだけは信じてやってくれ。彼女の言っていた意味の根底はそこにあった。初対面の相手をいきなり信用できる人間などそうはいない。だからクリュウを信頼してルフィールは行動すればいい。自分はその二人のコンビの援護に回るだけ――いつものように、自分は支える側だ。

その意味を理解した途端、クリュウの口元にも笑みが浮かんだ。
「ほんと、シルフィは最高のリーダーだよ」
「フッ、褒めても何も出ないぞ」
クリュウの言葉に凛々しい笑みと共に答えるシルフィード。そんな彼女の様子を観察していたルフィールの口元にもまた、小さな小さな笑みが浮かんでいた。
学生時代から、彼が信頼する人は皆お人好しばかりだった。それはどうやら今も変わっていないのだろう。シルフィードを見ていると、そう思える――確かに、クリュウが信頼するだけあってシルフィードは頼れる人物だ。ルフィールの中で、シルフィードの人物評価がそう付けられた瞬間であった。
一気に水を飲み干して空になったコップをコトンとテーブルに置き、シルフィードはいつものようにかっこ良く、勇ましく、そして凛々しげな表情で告げる。
「――夕方には出発する。それまでに各自しっかりと準備をしておくように。それではひとまず終了し出発まで解散とする」
作戦会議がひとまず終了し出発まで解散となった第二討伐隊の面々であったが、結局は準備などで同じ倉庫を使うので三人と一匹揃って倉庫へと向かった。家の横に備えられた倉庫にはイージス村に所属するハンター全員の武具や道具（アイテム）類が保管されており、彼らの生活を支えていると言っても過言ではない場所だ。
比較的広い倉庫の中に入り、クリュウとシルフィードはまず最初に個人区画へと向かう。倉庫の中は大まかに分けると共同区画と個人区画に分かれ、共同区画には皆で共有するアイテム類が置かれ、個人区画にはそれぞれの武具だったり特に多用するアイテム――フィーリアならボウガンの弾系――などが保管されている。
クリュウは自分の区画へと入ると、壁に掛けられている武器を見回す。ここには彼の持つ武器が全て揃っており、比較的主力として使っているデスパライズやバーンエッジ、アルトリアにてイリスから授かった煌竜剣《シャイニングブレード》も保管されている。クリュウがその中から取り出したのはシンプルなデザインの片手剣。鈍い青

色の刀身に同色の盾が一対となった武器で、銘をオデッセイ改と言う。クリュウが持つ唯一の水属性の武器である。元々持っていたオデッセイを、以前にフィーリアとルーデルと共に捕獲したリオレイアから手に入れた雌火竜の逆鱗を使って強化した武器だ。
イャンガルルガの弱点属性は水属性。今回はこの武器が必要となる。
武器を取り出し、今度は道具（アイテム）類を取り出し始める。クリュウが取り出すのは主に閃光玉やトラップ類。共同区画にも当然あるが、彼はこれらの道具（アイテム）を多用する事もあって個人でもかなりの数を有している。完成している物もあれば、トラップツールとゲネポスの麻痺牙、ネットなど素材面でも充実している。これも日頃狩場やリーフ農場で素材を集めているおかげだ。
必要な道具（アイテム）類を取り出し、それを袋に入れて共同区画に戻ると、ルフィールが興味深げに道具（アイテム）類を見詰めている。
「ここにある道具（アイテム）なら自由に使ってもいいよ」
「いえ、ボクは自分の物がありますから」
「遠慮しなくてもいいよ。今回は村の防衛戦なんだから、道具（アイテム）もこっちで提供するからさ。何かほしいのある？」
「……そうですね。強いて言えば」
ルフィールはクリュウにスタスタと歩み寄ると、周りをキョロキョロと確認した後――彼をギュッと抱き締めた。
「る、ルフィール？」
「強いて言えば――先輩が欲しいです」
頬を赤らめ、上目遣いでこちら見詰めながら甘えて来るルフィールにクリュウもまた頬を赤らめて困ったような、恥ずかしいような微妙な笑みを浮かべる。
「あ、あのルフィール？」
「必ず、先輩を幸せにしてみせます」
「それ、普通は男の僕が言うセリフだよね？」
「でしたら、先輩がボクを幸せにしてくれるんですね」

「そういう意味ではないんだけど……」
　上目遣いで見詰めながら甘えてくるルフィール。周りを見て誰もいない事を確認すると、ようやく彼女が《素》の姿を見せている事に気づいた。彼女は他の誰も見ていない、クリュウと二人っきりの時だけ本当の自分を見せる――本当のルフィールはすごく寂しがり屋で、甘えん坊で、すごく可愛らしい恋する女の子なのだ。
「以前より、先輩の顔が遠くて寂しいです」
「どういう意味？」
「先輩の背が伸びているという意味です。前よりもかっこ良くなった反面、それがちょっと寂しいです」
「そっかな？　自分ではあまり伸びたって感じはしないんだけど」
「自分で自分の成長というのはわかりづらいものです。ですが、ボクはわかります――先輩は以前よりも凛々しく、かっこ良くなられました」
　満面の笑みを浮かべて褒め称える彼女の言葉にクリュウは「あ、ありがとう」と照れ笑いを浮かべる。そんな彼の反応が可愛らしかったのか、ルフィールはクリュウをよりギュッと強く抱き締める。
「あぁ、ボクは今すごく幸せです……」
「僕は今、すごく恥ずかしいんだけど……」
「構わないじゃないですか。今ここには、先輩とボクの二人だけなのですから」
「――あぁ、取り込み中すまんが。できればそこを退いてもらいたいんだが」
　突然の声にルフィールは目を丸くして驚き、慌てて彼の背後を確認する。そこには気まずそうに立ってこちらを苦笑いしながら見ているシルフィードが立っていた。
「……ッ!?」
　ルフィールは顔を真っ赤にさせて慌てふためくが、すぐに彼から離れると何事もなかったかのようにメガネのブリッジをクイッと上げてクールに振る舞う。が、一度紅潮した頬はなかなか元には戻らず、顔は真っ赤のままだが。

「邪魔してすまなかったな」
「いや、むしろ助かったかな――って、シルフィ。その武器は」
「あぁ。今回の狩りで使う武器――蒼刃剣ガノトトスだ」
そう言って彼女が構えたのは透き通った蒼色の大剣だった。
これまで彼女が使う武器は煌剣リオレウス、キリサキと青色の武器だった。今回もまた青色の武器に変わりはないが、これまでと違ってその武器は実に美しい剣であった。
翠水竜の上ビレをベースに翠水竜と水竜の上鱗などを用いて加工。刀身の骨組みや柄の部分には上竜骨を用いる事で耐久性としなやかさを両立させ、絶大な攻撃力を発揮する。刃の部分は鋭い上ビレを加工してより切れ味を増させたものであり、こちらも耐久性と切れ味を極限まで高めている。
武器としても芸術品としても完成度の高い大剣、それが蒼刃剣ガノトトスであった。
「シルフィってそんな大剣持ってたんだね」
「あぁ。最近アシュアに発注したんだ。まさかこんなに早く出番が来るとは思ってはいなかったがな」
そう言ってシルフィードはその場で蒼刃剣ガノトトスを構えてみせる。大剣は言うまでもないが巨大な剣だ。それを慣れた様子で、勇ましく、そして凛々しく構えてみせるシルフィードはさすがと言えよう。これ程までに大剣が似合う女性はそうはいないだろうとクリュウは心から思う。
「君達は準備は終わったのか？」
「僕は一応。ルフィールはまだだよね？　ここの自由に使っちゃっていいから」
「それでは、お言葉に甘えさせて頂きます」
そう言って、ルフィールはテキパキと必要となるだろう道具（アイテム）を選んでいく。そんな彼女の背中を見詰めるクリュウの背後から、シルフィードが小声で声を掛ける。
「……なぁクリュウ。私は彼女に嫌われているのだろうか？」
「ルフィールは基本僕以外には誰に対してもあんな感じなんだ。シル

フィの事を特筆して嫌いとか、そんなんじゃないから」
「本当に、君の事が好きなんだな……」
道具（アイテム）のカテゴリー別に分かれているカゴの中から必要な物を取り出すルフィールの背中を見ながら、シルフィードは静かにそうつぶやくと口元に小さな笑みを浮かべた。
何事においても、本気でがんばる人間がシルフィードは好きだ。彼女の目を見れば、彼女が本気でクリュウの事が好きな事は簡単にわかる。不器用なりにがんばるその姿は、つい応援してしまいたくなる程だ。
残念ながら、自分は中立を貫くと決めている。フィーリアにもサクラにも同じくらい応援しているつもりだ。誰か一人を推薦する事はできないし、仲間としてそれはしてはいけない事だ。何より、きっと彼女達の誰もが望んではいない――自分の力で彼を振り向かせる。それは彼女達の共通の想いなのだから。
シルフィードは「後は頼んだぞ」と言い残し、倉庫を出た。きっと自分がいたのではルフィールは素の自分を見せられないだろう。ここは邪魔者は早々に退散するのに限る。
「……お前も不器用だニャ」
庭に生えている一本の木。クリュウがよく修練を積む為に使ったり冬には薪を割ったりする場所に生えている木だ。その根元に小さな背中を幹に預けて腕組みして立つレイヴンが静かにつぶやく。
「私が不器用？　どういう意味だ」
「さぁニャ。それは、自分で考えるんだニャ」
そう謎の言葉を言い残して、レイヴンは去った。一人残されたシルフィードは彼の残した言葉に首を傾げる。全くもって心当たりがなかった。
「何だ、一体……」
薪を割る際に使う切り株に腰を落とし、ゆっくりと天を仰ぐ。今日は暑いくらいに晴天だ。あと数時間もしないうちに夕方になり、空が完全な茜色に染まる前に村を出発する予定だ。
ふと、視線は二人を残してきた倉庫の方へ向けられる。ドアが閉め

られているので中の様子はわからないが、きっとルフィールは素の自分で彼に甘えているのだろう。
――チクリと、胸の奥が痛む。
「またか……」
前々からあったこの小さな痛み。だが最近は次第にその頻度は増え、痛みは増し、後を引くようになっていた。左胸に手を当てるも、鬱陶しい程にその痛みはそこに残る。
シルフィードは、この痛みについては何もわからなかった。一度本格的に医者に診てもらった方がいいかもしれないが、何となくだがそれは無駄な気がする。この痛みの感じは身体的ではなく、おそらくは心理的なものだから。
「突発的に起きるこの痛み。一体何なんだ……」
自分の胸に残る痛みに、シルフィードは心底困惑していた。だが――
「――ただ一つ言えるのは、フィーリア達がクリュウに甘えている時に起きる事ぐらいか」
最近になって、痛みが起きる引き金を少し理解できた。クリュウが誰か他の女の子と親しげに話している時に高頻度で起きる、それがこの痛みの引き金だった。だがだからと言って、それがどうして痛みを起こすかまでは、彼女はわからない――それが彼女が気づいていないある想いから来る痛みだと、彼女は知らない。
胸の奥に妙に残る痛み。手を添えながら、シルフィードは無言で空を見上げる。
ゆっくりと流れていく雲は、風任せの旅だ。決して自分の意志で動く事も止まる事もできない。ただただ、流されるだけの存在。
ギリ……ッと、悔しげにシルフィードは唇を噛む。
「クソ……、何でこんなにイライラするんだ」
天を見上げていた視線は、いつの間にか再び二人のいる倉庫へと向けられていた……
日は傾き、空が次第に茜色に染まり始める頃。村の外にある漁港にてフィーリア率いる第一討伐隊とシルフィード率いる第二討伐隊が

出発の最終準備を行なっていた。
第一討伐隊はバルトの手配した漁船で海路にて向かいセレス密林へ向かい、第二討伐隊は陸路での移動となる。双方がそれぞれ船と竜車に荷物を載せる中、クリュウも大タル爆弾などを積載する作業に勤しんでいた。
「クリュウ様」
最後の大タル爆弾Ｇの積載を終えて一息ついていた時に掛けられた声。振り向くと、そこにはフィーリアとサクラが不安げな表情でこちらを見詰めていた。
「どうしたの二人共？　もう積載作業は終わったの？」
「は、はい。私達はクリュウ様程爆弾を多用はしませんから、荷物は少ないので」
「……漁船に積める量にも限界がある」
「なるほどね。それで、僕に何か用？」
ちょうど自分の方の準備も終わり、少しくらいなら話ができる余裕があるクリュウ。彼の問いかけに対し二人は顔を見合わせ、一瞬辺りを警戒するようにキョロキョロとして邪魔者がいない事を確認してから、小声で話し始める。
「あの、クリュウ様。ケーニッヒ様には注意してください」
「……あの女は危険。私より質が悪い」
二人は真剣な様子で彼にそう忠告した。だがクリュウからすれば彼女達の発言は突拍子がなさ過ぎる。当然、意味がわからず首を傾げた。
「どうして？」
「どうしてと問われましても、説明に困るんですが……」
「……とにかく、あの女は危険。気をつけて」
サクラはクリュウの手を掴むと、真剣な眼差しで見詰めながらつぶやく。そんな彼女の言葉にクリュウは困惑しつつも「う、うん」ととりあえずうなずいておく。それを見て二人はまだ不安そうだったが、途中で準備を終えたツバメに呼ばれた。
「えっと、ご武運をお祈りします」

「……気をつけて」
「うん。大丈夫だと思うけど、そっちも気をつけてね」
別れの挨拶を手短に済ませ、フィーリアとサクラはツバメとオリガミと合流。漁船に乗り込むとすぐさま出発した。こちらに向けて船尾から手を振って別れを告げる三人と一匹を船が木々の向こうに消えるまで見送った。
「さて、我々も出発するぞ。準備はいいか？」
チームリーダーであるシルフィードの問い掛けに二人と一匹が振り返る。第二討伐隊も第一討伐隊と同じくも三人一匹のチーム編成だ。
「こっちは準備完了だよ」
「いつでも行けます」
「……とっくに終わってるニャ」
三人の返事に満足そうにうなずくと、シルフィードは一度二人と一匹の顔を一人ずつ見渡す。そしてフッと口元に凛々しい笑みを浮かべ、高らかに声を張った。
「行くぞッ！」
『はいッ』
クリュウ、シルフィード、ルフィール、レイヴン。慣れぬ面々で出撃する一同ではあったが、誰一人その顔に不安はなかった。
一人運転席に座り久しぶりの旅路にご機嫌なアニエスの手綱を引くシルフィード。その背後の幌の中では隅の方でレイヴンが瞑想するように目を瞑って鎮座していた。そして、
「先輩……」
「……ルフィール」
困ったような表情であぐらを掻いて座るクリュウ。そんな彼の膝の上にルフィールは膝枕のように頬を乗せて幸せそうに甘えている。出発し、シルフィードが幌の視界から消えた瞬間にはもうこの状態。その俊敏さにはある意味脱帽してしまう。
「えっと……」
「申し訳ありませんが、少々寝不足なので休ませてもらいます」

「それはいいんだけど、何で膝枕なのかなぁって」
「これが一番落ち着くんです」
そうハッキリと言い切ると、それ以降ルフィールは何も答えずに沈黙した。眠ったのか、それともただ単に黙っているのか判別できない。仕方なくクリュウは小さくため息を零すと、そんな彼女を膝の上に乗せながら一人シルフィードに借りたノートを読み返す。
幌は後ろ側は開かれている為、そこから夕焼けの柔らかな日差しが幌の中を淡く照らし上げる。クリュウは夕焼けを時々見ながら、おさらいするようにノートを読み耽る。そんな彼の膝の上で眠るルフィールの頬は、淡い夕焼けとは違う赤みが薄っすらと浮かんでいる。
幸せそうに眠る彼女の寝顔を一瞥し、クリュウは苦笑しながらもどこか幸せそうにつぶやいた。
「――おやすみ、ルフィール」

第185話　一抹の不安を残して　黒狼鳥の咆哮に始まる狩猟

イージス村を出発し、竜車に揺られながら数日。クリュウ、シルフィード、ルフィール、レイヴンの三人と一匹は目的地であるリフェル森丘に到着した。

リフェル森丘はアルコリス地方によく似ているが、最大の違いはアルコリス地方は平野と山岳地帯に分かれているのに対して、リフェル森丘は山岳地帯と盆地でできている事だろう。

大昔、地殻変動でリフェル森丘一帯は地盤沈下した。高い崖に囲まれた広い土地はそのまま時が流れ、人々によってリフェル森丘と名付けられた。飛竜が休む山頂付近も周りの崖と比較すれば少し高いくらい。

ガタゴトと揺れる竜車はリフェル森丘を囲む崖の上の道を進む。目指すはまずは拠点（ベースキャンプ）だ。もうすぐ下に続く道へ入り、下に到達したら木々に紛れながら進んでいけば拠点（ベースキャンプ）へと到着する。

クリュウは幌から出る。運転席に座ってアニエスの手綱を引くシルフィードの隣に腰を落とす。視線を先へ向ければ、眼下には見知ったリフェル森丘が広がっている――だが、その光景はいつも見慣れたものとは決定的に違っていた。

「夜になっちゃったね……」

視線を上げれば夜空が広がる。煌めく星々が空いっぱいに散らばり、大地を神秘的に照らし出す満月が彼らを出迎える。

「そうだな」

「リフェルの夜って、リオレウス戦以来だね」

「あの時は夜は無理せず休んだがな」

クリュウ達は主にリフェル森丘には昼間で活動している。朝早く

に到着し、夕方前には帰るというのが定例だった。しかし今回は急いで出発した為到着スケジュールなどもなく、結果的に到着時間が夜になってしまったのだ。
「どうするの？　拠点（ベースキャンプ）で朝が来るのを待つ？」
「いや、今回は夜戦中心で戦う」
「夜戦で？　朝が来るのを待っちゃまずい訳？」
「イャンガルルガは比較的夜行性のモンスターだから、夜は活動的に動き回る」
「なら尚更昼間寝ている時に戦えばいいんじゃ……」
「モンスターも人間も、寝起きを叩き起こされるのは気持ちのいい事じゃない。下手すると常時怒り状態となるかもしれないからな。ここは安全を重視して夜戦でいく」
「そっか。じゃあ、ルフィールにもそう伝えておくよ」
「あぁ、頼む」
　クリュウは「オッケー」と気軽に答えると、再び幌の中へと戻る。幌の中ではルフィールがパワーハンターボウ1の緩んだ弦を引き締める作業を行なっていた。緩過ぎても締め過ぎても矢は遠く、そして真っ直ぐ飛ばない。絶妙な調整が必要なのだ。
　弓だけでなく、ライトボウガンやヘヴィボウガンなどガンナーが使う武器は繊細なものばかりだ。近接武器以上の調整が必要で、同じ武器でも個人の調整次第で色々なクセが出やすい。簡単に言えば同じボウガンでもロングバレルを付けて攻撃力を上げるか、サイレンサーを付けて隠密性を上げるか、バレル系を付ける事で発生しやすい弾詰まりやオーバーヒートなどの不測な事態を防ぐ為にあえてバレルを付けないという安全性を重視するか。それはハンターの個性や用途によって変わる。
　だからこそガンナーは、細かな調整を欠かさない。それはルフィールも同じだ。
　ロアーノックをついて弓を床の上に立て、アッパリムとロアーリムにクセづける。このクセも人によって微妙に異なる、個性の部分だ。
「シルフィから伝言。イャンガルルガに夜襲を掛けるってさ」

「そうですか。ボクもまもなく調整が終わりますので」
「前から思ってたけど、弓って調整が大変そうだよね」
「そうですね。単純な整備の難しさならガンランスが構造的に一番ですが、調整の種類の多さや個性が最も出るのは弓でしょう」
「ほんと、僕は片手剣で良かったって思うよ。片手剣は砥石を使って刃を整えるかグリップを巻き直すかくらいしかないから」
　それ以外の本格的な整備は基本的には鍛冶師のアシュアに一任している為、クリュウが行う整備や調整は少ない。武具の調整は専門家に任せ、自分は自分の身体の調整を行う。それが彼のスタンスだった。
「――弓は、ボクに似ています」
　調整を終えたパワーハンターボウ1を構え、矢を番える事なく弦を引き絞る。摘んだ弦を離すと、パンッと心地良い音が響く。月明かりを受けて弓を構える彼女の様は、どこか幻想的に見える。
「……弓は自らを痛めつける事で、矢を撃ち放ちます。何かを成し遂げるには、それに見合うだけの痛みを受ける。ボクは不器用ですから、目的の為には自分の心身を痛めずには成し遂げる事はできません。ボクの生き方は、まさに弓そのものです」
　自虐のようにも聞こえるが、彼女は決してそういう意味で言っているのではない。目的の為なら自分がどれだけ傷つこうが構わない。それほどまでに、彼女には強い目標があるという事だ。強い目標があれば、人はそれに向かって突き進み、強くなる。
　彼女が急成長した背景には、そんな彼女の強い想いがあるからでもあった。
「――ボクはもう、二度と目の前で大切な人を失いかけるような失態は犯しません」
　彼女をそこまで強くさせる理由。それは、クリュウの背中の傷。
　自分を守る為に、大好きな彼が生死の境を彷徨い、背中に一生残る大怪我を負ってしまった。自分の無力さを恨んだ、最悪の出来事。彼女にとってはトラウマに等しい。
　クリュウは彼女の言葉に表情を曇らせた。自分は彼女にそんな辛

い覚悟をさせる為にあの時命懸けで助けた訳じゃない。だが、結果的には背負わせてしまった。それが、彼の最大の後悔だった。
「ルフィール……」
「ボクはもう二度と負けません。負けてはいけないんです――それが、ボクの信念です」
痛々しい程に必死で、痛々しい程に本気。だがその顔は、月明かりに晒されるその顔は、美しい程に真剣だった。
人とは、目標を持ち、それに向かって真っ直ぐに進んでいる時が一番輝いて見えると言う。皮肉にも、悲痛な覚悟は彼女を強くさせ、美しくさせる。
――だからこそ、彼女の目標を全否定できない。それはきっと、彼女の努力を否定する事に等しいから。
神々しい月を見上げる彼女の覚悟に満ちた横顔を、クリュウはただ見つめる事しかできなかった――声を掛ける事も、この手で触れる事もできない自分が、どうしようもなく情けなかった。
リフェル森丘の拠点（ベースキャンプ）は森林地帯にある、木々の葉や枝が天井のように天を隠すここは上空から視認する事はほぼ不可能な隠れ家だ。近くには川の水が流れ込んだ池があり、魚達が気持ちよさそうに泳ぐ。
拠点（ベースキャンプ）でありながら天幕（テント）がないのは、利用者が少ないのでわざわざ建てる必要がないからだ。その代わり、竜車がそのまま天幕（テント）の代わりになる。
停車した竜車をロープでタイヤを固定し、逃げる心配のないアニエスを放し飼いにしておき、積んでおいた干し草も用意しておく。積んであった道具箱（アイテムボックス）を設置し、ひと通り拠点（ベースキャンプ）の設置は終わる。
道具箱（アイテムボックス）からシルフィードは一人積んでおいた荷物を取り出し、それを個別に分けていく。こういう作業はいつもシルフィードかフィーリアが行っている。
「拠点（ベースキャンプ）の設置、終わったよ」
「そうか。すまないな」

「まぁ、力仕事くらいは任せてよ。えっと、これが僕の分かな？」
「そうだ」
　クリュウは自分に配当される道具（アイテム）類を確認しながら一つずつ道具袋（ポーチ）の中に詰めていく。回復薬に携帯食料、砥石などの基本品の他に閃光玉やペイントボールなどの狩りに役立つ品。その他今回は解毒薬などの類も入り、いつも以上に道具袋（ポーチ）は膨らむ。大タル爆弾Ｇや落とし穴のような物は荷車に既に積載が終わっている。
「ルフィール。君の分も――」
　振り返り、彼女を呼ぼうとしたクリュウ。だが、その先の声は彼の口から出る事はなかった。
　木々の隙間からわずかに漏れる月の木漏れ日に照らされながら立つルフィール。パワーハンターボウ１を静かに構え、矢を弦に番えて引き絞るその姿は実に凛々しい。狙いを定めた先には、五〇メートル先に立つ一本の木。その幹には先程彼女がつけたバツ印の傷が。
　息を整え、風が吹くのが止まった瞬間――彼女の手から矢が放たれる。
　弦が元に戻ろうとする力はそのまま矢を飛ばす起爆剤となる。撃ち出された矢は目に止まらぬ速さで飛翔し、寸分狂わず狙った木に突き刺さる――その鏃は、見事にバツ印の中心に突き刺さっていた。
「フゥ……」
　止めていた息を再開し、身に纏った緊張を解す。それまで無音だった世界が、一気に音を取り戻した。
「すごい……」
　近くで彼女の飛躍した腕を見ていたクリュウは目を丸くしていた。わずか一年ちょっと見ないうちに、彼女の実力は飛躍的に成長していた。
「弓はボウガンよりも狙いをつけるのが難しいと聞く。スコープもなく、弾よりも矢の方が風の影響なども受けやすいからな。あの若さであの実力、大したものだ」
　隣で同じように彼女の力量を見ていたシルフィードも感心したよ

うに語る。専門外とはいえ、あのシルフィードが認める実力。努力の天才ルフィール・ケーニッヒは、それほどの実力者に変わっていた。
「……あれくらい、ルフィールなら当然ニャ」
フッと軽く笑いながら語るのはレイヴン。この中の誰よりも最近の彼女と一緒にいた彼だからこそわかる――ルフィールはまだその実力の半分も出してない事くらい。
慣れた手つきで弓を折りたたんで背負い直して振り返ると、自分に注目するクリュウ達と目が合う。その途端、ルフィールの頬がほんのりと朱色に染まる。
「あまり、ジロジロ見ないでください……」
「あ、ごめん」
クリュウが慌てて謝ると、そんな彼を唇を尖らせてルフィールはそっぽを向いてしまう。だが時々困る彼を盗み見ては、その頬をより濃い朱色へと染めている。そんな二人の様子を遠くから苦笑しながら見ていたシルフィードの近くで、レイヴンが動く。
「準備ができたならさっさと行くニャよ」
憮然とそれだけ言うと、どんぐりメイルを着たレイヴンはどんぐりヘルムを深く被って一人勝手に歩き出してしまう。
「あ、ちょっと……」
「ずいぶん勝手なアイルーだな」
戸惑うクリュウの隣で呆れたようにつぶやくシルフィード。その隣をスッとルフィールが一人通り抜ける。
「ああいう子なんです。それより、ボク達も行きましょう」
そう言ってルフィールはクリュウの手を取って、こっちも勝手に歩き出してしまう。彼女に連れられたクリュウは戸惑いながらもついて行き、その途中でシルフィードの方へ振り返る。するとシルフィードは諦めたように肩を竦めて荷車を引いて後に続く。
ついて来るシルフィードの方ばかり気にしているクリュウを見て、ルフィールは不満げに唇を尖らせると繋いでいた彼の腕を抱き締め興味を引こうとする。抱きつかれたクリュウは彼女の予想通りにこちらを向いてくれ、それをルフィールは満足そうに微笑んだ。

「久しぶりに一緒の狩り、楽しみですね」
「う、うん。そうだね」
すっかりいつもと違うペースに引きずられながらも、楽しそうな彼女の笑顔を見てクリュウも微笑む。こういう狩りも、たまにはいいかもしれない。
いつもと違う面々で、いつもと違う雰囲気の狩場を行く。目指すは黒狼鳥イャンガルルガ。神秘の月夜の下で、彼らの戦いが始まった。
拠点（ベースキャンプ）を出た一行をまず迎えたのはエリア1と分類された川沿いの広場。片手に地図を、もう一方の腕にはルフィールを抱きつかせ歩くクリュウ。この地図は自作のもので、シルフィード達と一緒に作ったものだ。エリア分けしてからは移動や採取も非常に便利になった。
「それ、先輩が作ったんですか？」
持って来た鬼人薬を飲みながら、ルフィールは地図を見て歩く彼の背中越しに地図を見て問い掛ける。
「僕だけじゃないけどね。みんなで作ったんだ」
少し自慢気に言うクリュウをルフィールは尊敬に満ちた目で見詰める。そんな二人の様子を背後からはシルフィードが、前方からはレイヴンが苦笑しながら見守っていた。
拠点（ベースキャンプ）に繋がる道を背後に進むと、川沿いのエリア1に入る。ここは普段アプトノスが草を食んでいる姿が見受けられるが、夜だとその姿は消えて代わりに大雷光虫がフワフワと忙しなく動き回っている。大雷光虫はこちらから手を出さなければ害はない為無視して進む。
「待つニャ」
このままエリア1を縦断しようとしていたクリュウ達を、先頭を歩くレイヴンが止める。
「どうしたの？」
「……チャチャブーニャ」
ルフィールの問い掛けに短く答えると、レイヴンは首で前方を示す。その先には奇妙な人影がある。背丈は人間の子供程で、奇妙な仮

面にその小柄な体格にしては大ぶりな剣を携えている。その奇妙な仮面から奇面族とも呼ばれるチャチャブーだ。
「無視して進む……訳にはいかないな」
チャチャブーはちょうどエリア2へと行く坂の途中でゆっくりと歩き回っている。まだこちらには気づいていないようだ。
クリュウが「任せて」と踏み出そうとした時、そんな彼をルフィールが止める。
「先輩の手を煩わせる必要はありません」
そう断言すると、ルフィールは静かにパワーハンターボウ1をセッティングし、矢筒から一本矢を引き抜くと弦に番えて構える。それを見たレイヴンが突然走り出した。
四足歩行で大地を蹴り、跳躍を繰り返しながら突撃する。そんな彼の姿を発見したチャチャブーが奇声を上げて威嚇する。が、その仮面にルフィールの放った矢が突き刺さった。
「ピギャッ!?」
「……どこを見ているニャ」
ルフィールの放った矢に驚いている隙に接近したレイヴンがチャチャブーの前に現れる。すかさず背負ったピッケルを引き抜いて構える。だが刃を向けるのではなく逆手に構えると、柄の部分でチャチャブーの足を払った。視界外への攻撃にチャチャブーは対処できずに倒れる。その顔のすぐ右横に再び矢が、左横にはピッケルの刃先が突き刺さる。
驚きのあまり動けずにいるチャチャブーに向かって、ピッケルを地面から引き抜いたレイヴンがどんぐりヘルムの隙間からギロリを睨み、威圧する。
「邪魔ニャ。さっさと消えないと、次は本気で殺すニャよ」
その脅しが効いたのか、それとも圧倒的な戦力差を見て戦意を喪失したのか。どちらにしてもチャチャブーは慌てて地面を掘り出すと潜ってしまった。穴の大きさに合わずに脱ぎ捨てた奇面族の仮面だけが、虚しく残されている。レイヴンは興味ないとばかりにピッケルの刃で仮面を突き刺すと、それを川へ放り捨ててしまった。

邪魔者は片付けたとばかりに振り返るレイヴンを見て、ルフィールが「行きましょう」と二人を促す。
事の成り行きをただ呆然と見ていた二人は顔を合わせると、ひとまず彼女の言うように歩みを進める。　それを見てレイヴンはまた単独で勝手に先行してしまう。呼び止めるクリュウの声を無視して、レイヴンは曲がり角の岩壁で姿が見えなくなってしまった。
「ああいう子なんです。気にしないでください」
隣を歩くルフィールの言葉にうなずきつつ、クリュウは曲がり角を折れて少し先を歩くレイヴンの背中を不安げに見詰める。
リフェル森丘に来るまでもレイヴンはあまり自分と会話をしようとはしなかった。こちらから話題を振っても黙殺されてしまう。何だか自分以外に対するサクラの冷たさによく似ており、嫌われているのではと思わずにはいられない。
「大丈夫かな……」
つい零れた弱音に、ルフィールが「どうしました？」と反応する。
「僕ってレイヴンに嫌われてる？」
「そんな事ないですよ。あの子は誰に対しても素っ気ないんですから」
「ならいいんだけど……」
慣れないチームに若干の不安を抱きつつも、決して歩みは止めずに前へ進み続ける。そんな彼の様子をルフィールが不安げに見詰めている。
前を進むそんな二人の様子を背後から見守っていたシルフィード。いつもと違う面々で色々と調子を崩しているのは何もクリュウだけではない。彼女もまた慣れない狩りに平静を装いつつも違う雰囲気に違和感を感じていた。
「いつもなら、この辺りでサクラがクリュウに無茶をしてフィーリアとケンカになるのが通例だが、今日はそれもなしか――夜の静けさとは違う静けさ。何となく物足りない気もするな」
いつもの騒々しい面々がいないと、やっぱり寂しいものだ。頼れる仲間であり、良くも悪くもムードメーカーな二人がいないと調子が狂

う――そんな事を考える自分に気づき、シルフィードは苦笑を浮かべた。
「……すっかりあのチームに慣れてしまった。昔はソロハンターだったのにな」
以前はソロハンターとしていつも一人で狩りをして、生活をしていた。だが今はイージス村でクリュウ、フィーリア、サクラと一緒に狩りをするようになった。その期間はソロハンターの期間に比べれば全然短いが、それでもすっかり自分の身に染み込んでしまっているらしい。それが内心呆れつつも嬉しかった。
「――だが、今は二人はいないんだ。いつも以上に私がしっかりしないとな」
そう言って一度パンッと両頬を手で打ち叩く。彼女なりの気合の入れ方で、その痛みをきっかけに気を引き締め直す。表情も心なしか前よりも凛々しくなったように見える。
先頭をレイヴン、中間をクリュウとルフィールが並んで続き、殿兼荷車を最後尾でシルフィードが続いての陣形で三人と一匹は狩場の奥へと歩んで行く。
エリア1を抜けた一行は続いてエリア2へと入る。ここはエリア1よりも少し登った先にある広場で、エリア3とエリア6に続く道がある。ただしエリア6へ行く為には高台を登らないといけない為、荷車を引いている際は行く事はできない。ちなみにエリア6とは以前のリオレウス戦で負傷したクリュウが逃げ込んだ洞窟がある場所だ。
エリア2へと入った一行を迎えたのはランポスの群れだった。数にして三匹と多くはないが、全てがこちらに気づいて威嚇の声を上げている。
「私に構わず、各個撃破で倒せ」
シルフィードの指示に従い、二人と一匹はそれぞれランポスを一匹ずつ引き受けての各個撃破に動く。まず隊列を飛び出したのは先頭にいたレイヴン。続いてクリュウ、そしてルフィールの順に飛び出した。
真っ先に飛び出したレイヴンは威嚇の声を上げるランポスに向け

て腰に下げたブーメランを投擲する。高速回転しながらブーメランは大きく弧を描いてランポスの右脇腹に命中。鋭い刃先がランポスの表面の皮を引き裂く。皮を引き裂いたブーメランはまるでランポスから離れるように空へ舞うが、そこへジャンプしたレイヴンが器用にキャッチすると、すかさず再投擲。今度もまた大きく回り込むようにしてブーメランが迫り、ランポスの左側の胴体へ深々と突き刺さった。悲鳴を上げるランポスに落下中のレイヴンは器用に身をよじって体勢を整えると、背負ったピッケルを引き抜いて空中からランポスに背中に向けて叩き込んだ。

「ギャァッ!?」

悲鳴を上げて仰け反るランポスに着地したレイヴンは返り血を浴びたピッケルをクルクルと器用に回転させて血油を跳ね飛ばし上段に構えると、一気に踏み込む。今度は脚を払うようにしてピッケルを振るい、ランポスを転倒させる。倒れたランポスにすかさずピッケルを叩き込みつつブーメランを回収。すぐさま距離を取った。

起き上がろうとするランポスを見てレイヴンは再びブーメランを投げる。しかも腰にもう一つ下げていたブーメランも一発目とは反対方向へと投げた。それぞれのブーメランは弧を描くようにして起き上がったばかりのランポスの左右から襲う。さらに正面からはピッケルを構えたレイヴン自身が突っ込む。二つのブーメランはそれぞれランポスの左右の胴体に突き刺さり悲鳴を上げる。そこへ正面から迫ったレイヴンが上段から一気にピッケルを振り落とす。その一撃は深々とランポスの首元に刺さり、悲鳴を上げる事もできずにランポスは崩れ落ちた。

レイヴンがランポスと交戦を開始した頃、クリュウとルフィールもそれぞれランポスへの攻撃を始めていた。クリュウは慣れた手つきで剣を振るい、器用にランポスの攻撃を避けながら攻撃を加え、あっという間に倒す。

一方のルフィールは接近しながら矢を数本発射。何本かは避けられるが、大多数は命中してランポスは悲鳴を上げる。そこへルフィールは弓を畳みながら突っ込んだ。

矢筒から矢を三本引き抜き、うち一本を右手に構え一瞬の隙を突いてランポスの首筋に突き刺す。その一撃にランポスは声帯をやられたのかくぐもった悲鳴と共に血を吐き出した。構わずルフィールは左手から器用に一本を右手に移し替えるとまるで双剣の要領で二本の矢を連続して剣のように振るう。斬り上げ、斬り下げと翻弄しながらルフィールはランポスの背後へ回り込むと血に塗れた二つの矢をそれぞれランポスの両脚の太腿に向けて突き刺した。

脚をやられランポスはその場に崩れ落ちる。だが死んだ訳ではなく、必死に立ち上がろうともがくが、脚をやられた身ではそれも叶わない。そこへ首筋に冷たい感触。ハッとなって視線を向けた瞬間、彼の命は途絶えた。

至近距離からの弦を限界まで引き絞って放った一矢はランポスの首を貫通。その下の地面に深々と突き刺さった。

あっという間にランポス三匹は全滅する。それを遠目で見ていたシルフィードは感心していた。クリュウの実力はもちろん申し分ないが、レイヴンもなかなかの手練のようだ。ランポス相手でもオトモアイルーはその体格の小ささからなかなか苦戦する事が多い。それなのに彼は単独で、それも余裕を持って倒している事から、歴戦のオトモアイルーだという事がわかる。

だがシルフィードは一人だけ、ルフィールの戦い方にだけ少し疑問を抱いた。ガンナーでありながら彼女は接近戦でランポスを仕留めた。確かに弓使いは矢を剣のようにして接近戦を行う事はあるが、それは不用意に相手に近づかれてしまった際に使うもので、積極的に近接戦闘を行う弓使いはそうはいないだろう。しかも彼女の場合はまるで双剣使いのように矢を器用に扱って戦っている。ただの弓使いではない、そんな気がした。

疑問を抱いていたのは何もシルフィードだけではない。一足早く片付けたクリュウはルフィールの戦い方を見ていたが、正直その表情は優れなかった。

以前にシャルルからルフィールの戦い方がかなり攻撃的になったと聞いてはいたが、確かに攻撃的だ。弓使いなら距離をある程度取っ

て安全に弓矢で戦うのが常だ。だが彼女はあえて弓を畳み、両手にそれぞれ矢を剣のように構えて接近戦をしてみせた。確かにその方がより高い攻撃力で攻撃はできるが、当然危険度は増す。剣士使いはその危険度に比例して防具が強力になるのだが、ガンナーのそれは動きやすさやスキル重視の為に最低限の防御力しか持たない。だからこそガンナーが接近戦を行うのは危険なのだが、彼女はそれを平然とやってのけた。

倒れたランポスを気にした様子もなく隊列に戻る彼女の姿を見詰めながら、クリュウは少しだけ彼女に不安を感じていた。

一行はそのままエリア2を抜けてエリア3へと入る。エリア3はひょうたん型の地形の広場で、山頂へ向かう道と森林地帯へ抜ける道が二つある、リフェル森丘の分水嶺となる場所だ。そして以前ここはクリュウが初めてリオレウスと遭遇した場所でもある。入ってすぐにある折れた木はあの時リオレウスにへし折られらもの。木自体は結局枯れてしまったが、その木に這うように今はツタが青々とした葉を広げていてちょっとした藪のようになっている。それが改めて、あれから半年以上の月日が流れている事を示していた。

先頭を歩くレイヴンの後にルフィールと並んで続いていたクリュウは突然彼女の隣を離れた。驚くルフィールを背に彼が駆け寄った先は殿のシルフィード。

「シルフィ」

「どうした？」

何事かと首を傾げるシルフィードの横にクリュウは立つと、背後の折れた木を見る。

「ここで君と一緒に初めてリオレウスと戦ったんだよね」

「……そうだが、前にも同じ事を言わなかったか？」

「そうなんだけどね。夜の姿で見るのが何だか新鮮でさ」

「そうか。まぁ、あの時のヒヨッ子君がここまで立派に成長するとは正直驚きだがな」

「ひどいなぁ」

「フッ、これでも褒めてるんだぞ？　君の成長っぷりにはな」

おかしそうに笑いながら語るシルフィードの言葉にクリュウもまた楽しそうに笑顔を浮かべる。その姿は仲のいい姉弟のようにも見え、恋人同士のようにも見える。そんな二人の様子を見ていたルフィールは不満そうに頬を膨らませた。
「先輩のバカ……」
ムッとした様子で二人の様子を見詰めるルフィールを振り返ったレイヴンがジッと見詰めている事にも、彼女は気づいていない。
「イャンガルルガってリオレウスと同じような行動範囲のはずだから、ここにも現れるかもね」
「そうだな。ならリオレウスの時と同様待ち構えるか？」
「……いや、今回は探してみようよ。夜の狩場の雰囲気や活動しているモンスターの違いなんかを見る為にさ」
「なるほどな。やはり君はリーダーとしての素質がある」
「そんな事ないよ。シルフィに比べればまだ全然――うわッ!?」
楽しげにシルフィードと話していたクリュウの腕にルフィールが突如しがみついた。驚く彼の視線を無視してルフィールは必殺のイビルアイでシルフィードを睨みつけて威嚇する。その姿は抗議する時のサクラに似ていて何だか妙な気分。声を掛ける暇もなくルフィールはクリュウを連れて離れてしまう。そんな彼女の背中を見詰めながら、シルフィードは小さく苦笑を浮かべた。
「ある意味フィーリアやサクラよりも厄介だな」
クリュウに対する依存度は二人よりも高いようだ。まぁ、彼女の過去を知っている身とすればある意味当然かもしれないが、そのせいで完全に自分は敵視されているらしい。
「そんなつもりはないんだがな」
そう言っても彼女は信じてくれないだろう。
今回の討伐対象は黒狼鳥イャンガルルガという危険な相手だ。だがそれ以前にどうも今回のチームは連携という部分では不安が残る。だからこそ今回はいつも以上に自分がしっかりしないといけないのだと改めて強く感じる。
ルフィールに腕を引かれながら不安そうにこちらを振り返るク

リュウに「大丈夫だ」というジェスチャーで返してシルフィードは荷車を引いて歩みを再開する。
　山頂へ抜ける道を通り過ぎてエリアの奥まで進むと、その先は二手に分かれている。どちらも森林地帯に繋がる場所であり、木々が生い茂るエリア８と、同様に緑が深く水飲み場となる池があるエリア４へと通ずる。その分かれ道の前で立ち止まったレイヴンが振り返った。どちらに進むか判断を待っているのだろう。
「どちらに進みますか先輩？」
　ルフィールは抱きついたままのクリュウにしなだれ掛かりながら彼に問うが、クリュウは振り返り背後のシルフィードを見る。その視線にシルフィードは少し考え、
「このまま真っ直ぐエリア４へ行こう。水飲み場は比較的飛竜種が出現しやすいポイントだからな」
　シルフィードの判断にうなずく一同。早速レイヴンが先頭を歩いてエリア４へと通じる狭い道を進む。その後ろをクリュウとルフィールが並んで続き、最後尾を荷車を引いたシルフィードが続くというこれまでと変わらない陣形で進む。
　エリア３とエリア４を結ぶ道は山の斜面にできた狭い道が続き、洞窟を抜ける道のり。森林地帯はどちらも山の麓の為これまで登って来た標高を降りなければならない。細い下り坂を荷車を引いて降りるのは最初こそ苦労するが、シルフィードも慣れた様子。
　坂道を下り、洞窟へと入ると真っ暗になってしまう。すかさずクリュウは荷車へと走りその中から何かを取り出す。それは木の棒の先端に布を巻きつけたもので、布の表面が湿っているのは油を塗っているからだ。クリュウはそれを手に取ると肉焼きセットの火打石で手際良く火花を散らし、布に着火させる。引火した途端辺りが一気に明るくなった。
「先輩、それは……」
「松明（たいまつ）だよ。あまり使った事はないけど、こういう真っ暗な場所では必須かな。ギルドの方で道具（アイテム）登録してる訳じゃないから。まぁ、ご当地アイテムだと思ってよ」

そう言ってクリュウはルフィールから離れると作業を見守っていたレイヴンの前に出る。それを見たレイヴンが「先頭は俺の役目だニャ」と憮然とした声で言うが、クリュウは「明かりを持っている人が先頭を歩くべきだよ」と言って彼を下がらせる。
隊列をクリュウを先頭にレイヴン、ルフィール、シルフィードの順に変更して一行は洞窟を進んで行く。
洞窟に入って十分程下ると、ようやく外へ通ずる出口に出る。月明かりの下へ戻るとクリュウは松明を消し、先頭をレイヴンへ譲る。
再び元の隊列に戻り、洞窟を抜けた一行はそのまま残る坂道を下って緑が深い森林地帯へと入る。しばらく進むと木々に囲まれて狭かった道が急に開ける場所に着く。そこがエリア４とクリュウ達が呼ぶ場所だ――そして、そいつはそこに悠然と立ち止まっていた。
エリア４は広場の周囲を深い木々が生い茂り、屋根のように大地に陰を作る。中央部には四方から伸びた枝葉が届かずに穴が空き、飛竜種が降り立つだけの広さを持つ。そこから降り注ぐ月明かりが池の水面をキラキラと輝かせる光景はとても神秘的だ――そして、その月明かりの下に黒狼鳥の姿があった。
大きさはリオレウスなどに比べれば小型だが、イャンクックよりひと回り程大きい。全身を包むのは月明かりに美しく輝く紫色の鱗や甲殻。その色合いは闇夜に溶け込むように計算されているかのように、一見すると周囲にその姿を隠しているようにも見える。まさにそれは夜の王と言うに相応しい姿だ。
イャンクックの亜種という学説は否定されたが、イャンクックとイャンガルルガは同じ鳥竜種であって原初は同じと言われている。だからこそ両者は非常に酷似しており、イャンクックの特徴である巨大な耳もまたイャンガルルガは備えている。しかし進化の過程において一体何があったのかは不明だが、その耳はわずかな音を聞き取ると同時に弱点だった強烈な音波攻撃は鼓膜が瞬時に調整してしまう為に相殺されてしまう。当然、音爆弾は効果はない。
巨大な耳に大きなクチバシはイャンクックと同じ特徴だが、そのどちらもが見ただけでイャンクックのそれとは比べ物にならない程硬

いとわかる。それこそあのクチバシで地面に打ち付けられたら肋骨が何本折れるか知れたものではない。耳の後ろには黒狼鳥と言われる所以である狼のような白い襟巻きが凛々しい。全身を包む鎧も明らかにイャンクックよりも硬いだろう。もしかすると、リオレウスやリオレイアに匹敵する程の硬さかもしれない。

尻尾はイャンクックのようなただ細長い尻尾ではなく、リオレイアのように先端が膨らみ、そこからはトゲが備えられている。リオレイア同様、それは毒針であり突き刺されば大怪我の上に毒を受ける。あの凶悪なサマーソルトを、奴も必殺技としている。

月明かりを受けて悠々と立つ夜の王者――黒狼鳥イャンガルルガ。

シルフィードはその姿を確認するやすぐに荷車を木陰に隠して全員に手で合図を送る。その指示に従い各自決められた陣形を形成するために動く。イャンガルルガが気づいたのは、こちらの陣形が整った時だった。

何気なしに振り返った先に展開する小さな敵。自らのテリトリーを害する招かれざる客は、彼の逆鱗に触れた。

「ギュワァァァァァァッ！」

イャンガルルガは突如ジャンプして激しく身体をバタつかせて怒りを露わにする。それは彼が敵と認識した相手に対する威嚇。確実なる敵意がクリュウ達に向けられた。

「来るぞッ！」

先頭に立つシルフィードが怒鳴る。その右斜め後ろではクリュウがディアブロヘルムを被り武器を構えている。反対側では毛を逆立てて警戒するレイヴンが、そして最後尾には弓を展開して矢を一本弦に番えて構えるルフィールが。剣士三人、ガンナー一人というクリュウ達のいつもの陣形（フォーメーション）だ。

それぞれが武器を構えて待ち構える。その一角を担うクリュウはまだ慣れたばかりのディアブロヘルムの視界にしっかりとイャンガルルガの姿を捉えながら、握り締めたオデッセイ改の柄をより強く握り締めた。

チラリと背後を見れば、緊張した様子で弓を構えるルフィールの姿

が。
今回はいつものメンバーとは違う。背中を任せられるフィーリアもいなければ、無双の旋風姫サクラもいない。決してルフィールとレイヴンを信頼していない訳ではないが、どちらも二人の実力と比べれば格下なのは間違い無いだろう。
何より、可愛い後輩であるルフィールを守る事は自分の役目だ。そう思うと自然と気は引き締まる。
いつもと違う狩場、いつもと違うメンバー、そして初めて相対するモンスター。
だからこそ、クリュウは叫ぶ――皆を、そして自分を鼓舞するように。
「絶対勝つよッ！」
――月明かりに淡く照らされるリフェル森丘にて、クリュウ達とイャンガルルガの戦いの火蓋が切って落とされた。

第１８６話　孤高の黒狼鳥　絆の力で挑みし若き狩人達の戦い

イャンガルルガの激しい怒号と共に撃ち出された単発の火球ブレスが開戦の合図となった。

それぞれが左右に分かれて回避すると、火球はちょうど先程まで三人と一匹がいた陣形の中心に着弾。爆音と共に地面が抉れ、腐葉土がバラバラと飛び散る。

抉れた地面は火球の威力の激しさを物語っており、リオレイアのそれと比較しても大差ない威力だとわかる。

まず先陣を切ったのはレイヴン。四本足で地面を蹴りながらイャンガルルガに迫ると、腰に下げたブーメランを二つ一斉に投げ放つ。高速回転しながらブーメランが左右からイャンガルルガを襲うが、二つともイャンガルルガの胴体に当たった瞬間甲高い音と共に弾かれてしまう。

「……チッ」

軽く舌打ちしてレイヴンは戻って来たブーメランを回収する。その瞬間にイャンガルルガは彼を狙って体を回し、その姿を正面に捉えると再び火球ブレスを撃ち放った。

レイヴンは横へ跳んでその一撃を回避し、斜め後ろで炸裂する火球の爆風を背に受けながら再びイャンガルルガに迫る。ブーメランから今度はピッケルに持ち替えて懐に潜ると、脚に向かってピッケルで回し斬りを放った。が、刃先が黒狼鳥の鱗に当たった瞬間、再び甲高い音と共にピッケルの刃が弾かれてしまった。

「下がれッ！」

弾かれた衝撃で体勢を崩したレイヴンにそう指示を飛ばしながらシルフィードが突進する。その右斜め後ろからはクリュウも接近を試みている。

シルフィードは腰の道具袋（ポーチ）からペイントボールを取り出すとレイヴンを狙うイャンガルルガに向けて投げつける。放たれた

ペイントボールはイャンガルルガの首元に命中し、独特な匂いと共に黒狼鳥に対するマーキングに成功する。その一撃にイャンガルルガはレイヴンを狙うのをやめてシルフィードへと向き直る。前方から迫る彼女に向かってイャンガルルガは怒号を上げながら前方へ跳躍。激しく首を上下させてついばんで来た。

シルフィードはその攻撃に横へ身を投げ出すように回避。後続のクリュウが彼女を攻撃した後の隙を突いて襲い掛かる。

「まず一撃ッ！」

目の前にある頭に向かってクリュウの最初の一撃が炸裂した。刃先が当たった瞬間噴き出す激しい水飛沫が接触面を抉るように迸る。しかしイャンクックの硬いクチバシの前ではかすり傷程度しか付けられない。しかしもう一撃としようとした時イャンガルルガがその場で体を一八〇度右回転させ、クリュウに向けてトゲの付いた尻尾をスイング。その一撃にクリュウは咄嗟に身を屈めて回避し、もう半回転する間に懐へ潜り込むと今度は脚に向かって第二撃を叩き込む。が、

――ガァンッ！

「……ッ!? 硬ぁ……ッ！」

激しい金属音と共に刃先が弾かれてしまった。手首が痺れ、思わずヘルムの下で顔を顰める。硬いとは予想していたが、並みの硬さではない。リオレウスやリオレイアよりもさらに硬い甲殻や鱗だ。その硬い鎧が、オデッセイ改の刃先を跳ね返してしまう。

脚に攻撃しても無駄だと悟り、クリュウはすぐさま懐を離れる。それと入れ替わるようにして回転を終えたイャンガルルガの顔面に向かってシルフィードが第一撃を炸裂させた。

豪快にして強力な一撃がイャンガルルガの頭部に叩きつけられる。迸る水飛沫と共に当てられた刃先は確実な手応えを共にイャンガルルガのクチバシに傷を付ける。だがイャンガルルガはまるで効いていないとばかりに一度首を右寄りに引き戻してから頭突きのような形で彼女に噛み付く。寸前でシルフィードは蒼刃剣ガノトトスを横向きに構えてガード。すかさず反撃とばかりに剣を横構えに持ち替

えてフルスイング。イャンガルルガの側頭部を叩き抜いた。
側頭部に重い一撃を受けたイャンガルルガは一瞬怯み、頭を軽く振ると正面に立つシルフィードに狙いを定め、軽く首を引く。そのクチバシの端から火花がが迸るのを、シルフィードは見逃さなかった。
反射的に横へ転がるようにしてイャンガルルガの正面からシルフィードが消えるのと、イャンガルルガの口から火球ブレスが撃ち放たれるのは同時だった。
目標を失った火球は轟音を立てながら飛翔し、地面に着弾。激しい爆発と共に地面を砕いた。
ブレスを回避したシルフィードはすぐさまブレスを撃った直後の隙を突いて再び剣を顔面へと叩き込む。
前線に立って奮戦するシルフィードを援護するようにクリュウも再度攻撃に加わろうと走り出すが、その横を「邪魔ニャ」とレイヴンが抜き去る。
イャンガルルガは首をもたげてクチバシをハンマーのようにしてシルフィードに向かって激しく何度も打ち付ける。回避が遅れたシルフィードはその攻撃をガードでやり過ごすが、激しい連続攻撃に大きく後退を余儀なくされる。その隙を埋めるように飛び込んだのがレイヴンだった。
走りながらレイヴンはブーメランを投げる。大きく旋回しながらブーメランはイャンガルルガの首に当たり、甲高い音と共に弾かれてしまう。だがその一撃にイャンガルルガはゆっくりと振り返った。すかさずレイヴンはいつの間にか腰に背負った小タル爆弾を器用に構え、ピンを抜いて投げつける。放たれた小タル爆弾はゆったりとした放物線を描きながらイャンガルルガの眼前に投擲され、その瞬間に炸裂した。
「ギャアッ!?」
強固な装甲無視の爆弾攻撃にはさすがのイャンガルルガも驚き怯む。黒煙で一瞬視界が封じられ、風に乗ってそれが消えた瞬間にレイヴンが突っ込む。
大きく跳躍しながら上段に構えたピッケルをイャンガルルガの首

筋目掛けて叩き込む。ガァンッという岩を打ち付けるような音と共に弾かれるが、彼はそれを反動にしてクルクルと回転しながら地面に戻る。その瞬間、彼の横を通り抜けてクリュウが突っ込む。
「僕だってッ！」
　クリュウも負けじと腰に下げた小タル爆弾Ｇをフックから取り外し、ピンを抜いて投げつける。この一撃もイャンガルルガの顔面で炸裂するが、今度はイャンガルルガも怯まずお返しとばかりに火球ブレスを撃ち放つ。
「……ッ!?」
　間髪入れない反撃にクリュウは慌てて横へ跳んで緊急回避。炸裂する爆音を背に立ち上がると、再びイャンガルルガがこちらに向かってブレスを撃とうと旋回するのが見えた。慌てて走り出してその一撃を回避する。
　クリュウが結果的に囮役になったのを見てシルフィードとレイヴンが同時に左右からイャンガルルガに襲い掛かる。が、イャンガルルガはそれを妨げるように翼を広げると同時に甲高い咆哮（バインドボイス）を轟かせながら空中へと浮き上がった。
　咆哮（バインドボイス）を受けてレイヴンは地面に倒れ込んで耳を塞ぐが、耳栓スキルを備えるシルフィードは構わず突撃。大地を震わせながら着地したイャンガルルガの眼前に突っ込み、すかさず蒼刃剣ガノトトスを引き抜き、その刃先をイャンガルルガの額に向けて叩き込んだ。
「ギャァッ!?」
　その強烈な一撃にイャンガルルガは首を激しくもたげて怯む。そこへクリュウが横から入り込み脚に向かってオデッセイ改を叩き込むが、その鱗の硬さの前に弾かれてしまい連続した攻撃に繋げられなくて悔しがる。それでもめげずに再び剣を構えた時、
「準備できましたッ」
　突如響いたルフィールの声に彼女の方へ振り返ると、弓を構えながら立つルフィールの足元には設置を終えた落とし穴がある。事前の作戦会議でルフィールは会敵後すぐに落とし穴の設置を任されてい

た。その設置がようやく終わったらしい。
　ルフィールの声に後退を始める二人と一匹。それを援護するようにルフィールは弦を引き絞って番えた矢三本を一斉に放った。軽い放物線を描きながら飛翔した弓は咆哮（バインドボイス）を響かせるイャンガルルガの背中に命中するが、硬い鱗に阻まれてその全てが弾かれてしまう。しかしその攻撃でクリュウの方を向いていたイャンガルルガがの意識が彼女の方へと向けられる。それを見てルフィールはすかさず矢を一本番え、弦を限界まで引き絞って一矢を撃ち放つ。空気を切り裂きながら突貫する矢はイャンガルルガの硬い鱗と鱗の隙間に捻り込み、突き刺さった。
「ギョワアアアアァァッ！」
　イャンガルルガは怒号を放ちながら彼女に向けて走り出す。左右に逃げて走るシルフィードやクリュウを追い抜いて迫るイャンガルルガは動こうとしないルフィールに必殺の体当たりを仕掛ける。が、あと一歩という所で彼が踏み抜いたのは彼女が設置した落とし穴。突如開いた穴にイャンガルルガは下半身を埋め、さらに強力な粘着性のネットが絡まり身動きが取れなくなった。
「グェァッ!?　ガァッ！」
　必死に藻掻いて脱出を図ろうとするが、落とし穴は一度捕まえたものは効果が持続する間は決して離さない。身動きが取れないイャンガルルガは、格好の的でしかない。散り散りになっていたクリュウ達が一斉にイャンガルルガに殺到する。
「各自一斉攻撃ッ！　抵抗する隙を与えるなッ！」
　シルフィードの怒号を合図にクリュウ達が一斉にイャンガルルガへと襲い掛かる。イャンガルルガの正面からはシルフィードが、背中にはクリュウが、左右はレイヴンとルフィールがそれぞれ突っ込む。
　暴れるイャンガルルガの頭部を狙ってシルフィードは必殺の溜め斬りの構えを取る。その間に一足早くクリュウとレイヴンがそれぞれ剣とピッケルの刃先を鱗の隙間を狙って叩き込み攻撃を開始するが、全力で振るう一撃を隙間に的確にねじ込む事は不可能に近い。事実、どちらもそのほとんどが鱗に当っては甲高い金属音と共に刃が弾

かれ苦戦を強いられ、腕に走る痛みに顔を歪めながら必死に武器を振るっている。
何度か剣を振るった腕は痺れ、痛みすら走る。ヘルムの下で苦悶の表情を浮かべながらオデッセイ改の刃先を見るといつの間にかかなり刃毀れしてしまっていた。弾かれているのに無理して力任せに剣を振るった結果がこれだ。事前に砥石をいつもの倍であり一度の狩りで持ち込める限界数ギリギリまで持って来ておいて正解だ。
クリュウは砥石を使う為に一度戦線を離脱する。それと同時に力を溜めるように剣を構えていたシルフィードの必殺の溜め斬りが炸裂する。藻掻くイャンガルルガの顔面に的確にブチ当てられたその一撃はイャンガルルガに激痛を与え悲鳴を天高く轟かせる。さらに顔を上げたイャンガルルガに向けて月をバックに無数の矢が降り注いだ。しかもそれらの矢は命中と同時に爆発し、イャンガルルガの体を一瞬にして炎で包み込んだ。
爆発を見て同時にイャンガルルガから距離を取ったシルフィードとレイヴン。二人が振り向いた視線の先では同時に複数の矢を一斉に放っては再装填し、再び放つという動作を高速で繰り返すルフィールの姿があった。よく見れば放たれる矢はただの矢ではない。その一つ一つに小さなビンが縛り付けられており、中には赤い液体が揺れている。
弓使いの必殺攻撃、強撃矢だ。ニトロダケを原料とした液体火薬を入れたビンを矢に備え付け、それをモンスター目掛けて放つ攻撃。その威力は矢のみの時よりも高く、弓使いの決戦兵器と位置づけられる。
ルフィールの容赦のない強撃矢の嵐にイャンガルルガは悲鳴を上げて暴れる。だがいつまでも拘束させてはおけず、限界に達した落とし穴が壊れてイャンガルルガが翼を羽ばたかせながら上空へと脱する。それを見たルフィールは強撃矢から普通の矢へと戻し、降り立つ瞬間を狙う。同時に砥石を使って切れ味を正したクリュウがイャンガルルガ目掛けて駆け出した。それを見て負けじとピッケルを構えたレイヴンも駆け出す。

翼を羽ばたかせながらゆっくりと降りて来るイャンガルルガ。その真下では大きな翼から放たれる風が荒れ狂い近づく事を拒む。その風圧に駆け寄ろうとしたレイヴンは妨げられてしまうが、クリュウは構わず突っ込む。彼が着るディアブロシリーズは風圧【小】無効スキルを備えており、イャンガルルガ程度の風圧攻撃なら無力化できるからこその突撃だ。

荒れ狂う風圧の中、クリュウは今まさに地面に降り立とうとするイャンガルルガの顔面に向かって切れ味を最大まで回復させたオデッセイ改で斬り掛かる。

「ガァッ!?」

着地と同時に炸裂したクリュウの一撃にイャンガルルガが悲鳴を上げて仰け反った。さらにそこへシルフィードが放った閃光玉が炸裂。激しい光の爆裂にイャンガルルガは目を焼かれ、視界を封じられた。

苦しげに悲鳴を上げるイャンガルルガを前にクリュウはその両脚の間を潜り抜けて揺れる尻尾に向かって斬り掛かった。これまで散々攻撃してもまともに刃先が入らずに弾かれていたクリュウだったが、この一撃には自信があった――そして、オデッセイ改の刃先がイャンガルルガの尻尾の鱗の一部を砕いた瞬間、ヘルムの下で彼の口がわずかに綻んだ。

シルフィードから借りたノートには、イャンガルルガは全身が異常に硬くてかなり切れ味のいい武器でないと太刀打ち出来ないと書かれていた。だがどんな装甲でも必ず弱点がある。彼女のノートにはそれがしっかりと書かれていた。

イャンガルルガは確かに全身が硬い鎧に包まれている。だが体の構造上どうしても鱗でガードし切れない頭部と、細さと靭やかさを兼ね備える上でどうしても鱗が弱くなる尻尾に関しては通常の武器でも攻撃可能。クリュウは彼女のメモを信じて尻尾へと攻撃を加え、その刃先は見事に通り、クリュウは初めてイャンガルルガの血を見た。

「いけるッ!」

体を強制停止させ、振り返ると同時にもう一撃尻尾に剣を叩き込

む。刃先は尻尾を叩き、確かな手応えと共に手傷を負わせた。だがその代償は大きかった。
イャンガルルガは小賢しい敵を振り飛ばそうとその場で尻尾を大きく振りながら旋回。大きく振られた尻尾はそのまま攻撃直後の体勢が整っていないクリュウの脇腹に激突。骨が折れるかのような一撃にクリュウは顔を歪め、軽々と吹き飛ばされた。
「先輩ッ！」
地面に激しく叩きつけられ、何度か転がりながら倒れたクリュウにルフィールが血相を変えて駆け寄る。それを見たシルフィードは閃光玉を取り出すとイャンガルルガの眼前に投擲。炸裂する膨大な光量で再び視界を封じられたイャンガルルガはクリュウへの追撃を阻止された。すかさずレイヴンが駆け寄りブーメランとピッケルで攻撃し、シルフィードも動けずにいるイャンガルルガに向かって蒼刃剣ガノトトスを力任せに叩き込む。
半身を起こしたクリュウは激痛に耐えながら回復薬グレートを飲み干す。痛む脇腹に手を当てると、手甲にわずかな血が付いた。どうやらトゲの一部がディアブロメイルの装甲を貫いて皮膚にまで達してしまったらしい。傷の具合は大した事はなく、これならあとで手当てすれば問題はないだろう。ほっとひと安心した時、視界がぐにゃりと歪んだ。
「……あ」
気がつくと、地面が視界の右端にあった。それが自分が倒れている事だと気づくのには少し時間が掛かった。まるでモヤが掛かったかのように、思考がスッキリしない。そればかりか吐き気や激しい倦怠感、鈍痛などが体を蝕む。起き上がろうとしても体が言う事を聞かず、全く体を起こせない。困惑していると、視界の隅に慌てた様子で駆け寄って来るルフィールの姿を捉えた。
「先輩ッ！」
ルフィールは腰の道具袋（ポーチ）から解毒薬を取り出すと、倒れているクリュウを抱き起こし、ディアブロヘルムを脱がせて素顔を晒し、焦点の定まらない目で自分をぼーっと見ているクリュウの口に解

毒薬のビンの縁を当てた。
「飲んでください」
　言われた通り、口の中に入る解毒薬を吐きそうになるのを我慢して喉の奥に押し込む。するとすぐに効果が表れ、体を蝕んでいた様々な障害がキレイさっぱり消え去った。
　クリュウの瞳の焦点が定まり、顔の血色も良くなったのを見てルフィールは安堵する。
「ルフィール……？」
「具合はいかがですか先輩？」
　ルフィールの腕から起き上がったクリュウは一度軽く首を横に振って視界を確かめると「大丈夫みたい」と答える。それを聞いてルフィールは安心するとディアブロヘルムを彼に返した。
「気をつけてください。イャンガルルガの尻尾には強力な毒針がありますから、皮膚にわずかに触れただけでも毒状態になります」
「わかってたんだけどね。まさかサマーソルト以外の攻撃でも毒に侵されるとは思わなかったよ」
「尻尾のトゲには当たらないよう注意してください」
　それだけ忠告するとルフィールは弓を構えて未だ視界を封じられてシルフィードとレイヴンの攻撃に晒されているイャンガルルガに突撃する。矢から引き抜いたのは通常の矢ではなく強撃ビンを備えた強撃矢。旋回攻撃でシルフィードとレイヴンを追い払おうとするイャンガルルガの頭を狙い、限界まで引き絞った一矢を解き放った。風を切り裂いて飛翔する矢は寸分狂わず旋回を終えたイャンガルルガの側頭部に命中。途端に強撃ビンが割れて爆発。イャンガルルガは短く悲鳴を上げて蹈鞴（たたら）を踏む。
　ギロリとイャンガルルガが睨む先には、弓を構えたルフィールが立つ。その激怒に満ちた視線で睨まれたルフィールはビクリと震えるが、負けないとばかりにイビルアイで睨み返す。
「ギョワアアアァァッ！」
　イャンガルルガは怒号を上げながらルフィールに向かって全力で走り出す。体を左右に揺らしながら無我夢中で彼女を叩き潰そうと

走るが、ルフィールはそれを横へ走って回避し、すれ違いざまに一矢を背中に向けて放つ。
目標を見失っても急に止まる事はできず、イャンガルルガはしばらく走った後に体を投げ出すようにして倒れて体を強制停止する。起き上がるまでのわずかな間、それを無駄にしない為にシルフィードが駆け寄る。
ゆっくりと起き上がるイャンガルルガの尻尾。無防備に晒されている尻尾の先端に向かってシルフィードは背負った蒼刃剣ガノトトスの柄に手を当て、引き抜くと同時に躍動する筋力を駆使して全力で振り下ろす。刃先は寸分違わず黒狼鳥の尻尾に当たるが、たった一撃では致命打にはならない。
まるでダメージを負っていないかのように振る舞うイャンガルルガを前に舌打ちし、次なる一撃を構えるシルフィード。だがその眼前でイャンガルルガの尻尾が大きく動くと、イャンガルルガはその場で体を旋回させ、ムチのように尻尾を振るってシルフィードを襲う。激突寸前でシルフィードは蒼刃剣ガノトトスでガードするも、彼我の力の差は歴然であり大きく後退を余儀なくされる。
シルフィードが後退したのを見てすかさずレイヴンがイャンガルルガへと走り寄り、脚元で動き回りながらピッケルを振るってイャンガルルガを翻弄する。それに合わせてルフィールも中距離を保ちながら次々に矢を放つ。ルフィールとレイヴンの連携攻撃は言うまでもなく見事だ。ルフィールはレイヴンの動きを見て彼に当たらないように矢を放ち、レイヴンもイャンガルルガの意識がルフィールの方へ向かないように気を逸らしている。
だがイャンガルルガはそんな連携攻撃を物ともせず翼を広げ、咆哮（バインドボイス）を放ちながら体を浮かせて後退。脚元にいたレイヴンと比較的距離を詰めていたルフィールを咆哮（バインドボイス）で動きを封じつつ、距離を取った。すかさず前方で動けずにいる敵に向かってイャンガルルガは容赦のない三連ブレスを撃ち放った。
ブレスの一発はレイヴンの近くで炸裂。爆風に彼の体は吹き飛ばされるが、大したダメージは負わなかったらしい。ルフィールも至近

距離で炸裂したブレスを横へ跳んで回避した。
だがイャンガルルガの猛攻撃は止まらない。今度はルフィールに狙いを付けて単発のブレスを撃ち放つ。迫る業火の一撃に再び横へ跳んでギリギリの所で回避する。何とか避けられたものの、ルフィールの表情はかなり辛そうだ。
弓使いは限界まで弦を引き絞って矢を放つ為、見た目に反してボウガンなんかよりもずっと体力を使う。それに加えてギリギリ回避の連続は普通に動く時よりもずっと体力を使う。ハンターとして鍛えているとはいえ、それでも十代中頃の少女に変わりはない。呼吸は乱れ、体の動きが少し鈍くなる。そのわずかな鈍さが、狩場で命取りになってしまう。
イャンガルルガはまたしてもルフィールを狙って単発ブレスを撃ち放った。シルフィードが阻止しようと投げた閃光玉は一瞬遅く、ブレスが放たれた直後に炸裂。イャンガルルガは動きを封じられるが、放たれたブレスは止まらない。
迫り来るブレスに慌てて再び回避しようと動く――その瞬間、急に足から力が抜けて転倒してしまった。度重なるスタミナ消費は、確実に彼女の体に疲労という形で蓄積されていた。
「しまった……ッ」
立ち上がり、再び回避するには時間が足りない。迫り来るブレスを前にしてルフィールはとっさにパワーハンターボウ1でガードしようとするが、いくら弓の中でも耐久力があるパワーハンターボウ1でも、所詮は弓。イャンガルルガの火球ブレスをガードできる程の強度はない。
迫り来るブレスを前に愕然とした時、自分とブレスの間に滑り込む者がいた。ハッとなってその背中を見て、ルフィールは泣きそうになった。
学生時代のハンターシリーズとは比べ物にならないほど強固で無骨なデザインのディアブロシリーズ。ヘルムまでしっかり被っている為その表情を見る事はできないが、それでもその背中の温かさを、自分は知っている。

「先輩……ッ！」
ルフィールを背後にブレスの前に立ち塞がったクリュウはすかさず盾を構えながら膝を折り、腰を落としてガードの体勢になる。直後、ブレスが爆発。爆炎がクリュウとルフィールを呑み込んだ。
「クリュウッ！」
「ルフィールッ！」
シルフィードとレイヴンの悲鳴が上がるが、それは杞憂だった。
立ち上る黒煙は風に払われ消え去る。そこには確かにクリュウとルフィールの無事な姿があった。
倒れたルフィールは呆然とクリュウの背中を見詰め、彼女の前に立つクリュウは鎧や盾から黒煙を上げながらもまるでダメージなどないように立っている。
「怪我はない？」
振り返らずに問い掛けるクリュウの言葉にルフィールは「は、はい」と自分が無事な事を伝える。その返答に安心したのかクリュウは余計に入っていた肩の力をそっと落とす。
「せ、先輩こそ平気なんですか？」
「ディアブロシリーズの堅牢さは折り紙つきだよ。ガードすればあれくらいの攻撃大した事じゃない」
イャンガルルガのブレスを大したものじゃないと言い切るクリュウの言葉にルフィールは目を丸くして驚いた。確かに上級飛竜に位置づけられるディアブロスの素材を使ったディアブロシリーズは強力な防具だ。その堅牢さがあればイャンガルルガのブレスでさえ防ぐ事はできるかもしれない。だが、いくら強力な防具を着ているとわかっていても、人間には恐怖心というものがある。迫り来る火球を前にしてそう簡単にそれを克服できるものではない。それをねじ伏せるには、それこそ場数を踏む必要があるだろう。
だからこそルフィールは改めて知った。彼がそれだけの場数を踏んで来た事を。自分が知る一年半前とは比べものにならない程、彼が成長していた事を――以前よりも、ずっとかっこよくなっている事を。

呆然と彼を見上げていると、そっと目の前に手を差し伸べられた。その優しい手を追えば、ディアブロシリーズを纏った彼と目が合う。無骨なディアブロヘルムで彼の顔は見る事はできない。それでも、隙間から覗く若葉色の瞳はとても優しかった。

「立てる？」

「は、はい」

ルフィールは彼の手を取って立ち上がる。心なしか引かれる時の力も以前よりも強くなっているように感じた。

立ち上がると、まるで自分を激励するように彼が背中をポンポンと叩いた。ヘルムの隙間から覗く瞳は柔らかく、どんなに無骨な鎧を纏っていても、彼の体からは自分を安心させてくれる優しさが、温かさを感じる。

「――援護、任せたよ」

彼はそう言い残すと、すでに攻撃を開始しているシルフィードとレイヴンの方へ走っていく。

月明かりに照らされる彼の背中をぽけぇっと見詰めていたルフィール。頭の中で反芻される彼の言葉に、自分の中で言葉では言い表せない熱が溢れる。

胸が熱く高鳴り、顔には自然と笑顔が浮かぶ。弓を握り締める手にも力が入り、二色の瞳（イビルアイ）はキラキラと目映く煌めく。

「任せてくださいッ」

大声でそう答えると、ルフィールは弓を構える。弦に番える矢の数は五本。彼女が一斉に撃ち放てる最大数だ。ギリギリと弦を軋ませながら狙いを定めるは閃光玉を受けてその場でグルグルと旋回しながら尻尾を振り回すイャンガルルガの直上。

狙いを定め、限界まで引き絞った弦を一気に解放。パァンッという心地良い音と共に五本の矢が一斉に放たれ、闇夜を切り裂きながら飛翔。そして、それら五本全てがイャンガルルガの背中や翼に命中する。

遠距離からの難しい五本撃ち、それも全本命中。並みの実力では不可能な技を、彼女はやり遂げてみせた。

――だが、ルフィール・ケーニッヒの本気はこんなもんではない。
腰に伸ばした手はスルリと道具袋（ポーチ）の中へ潜り込み、中を弄る。取り出したのは強走薬と怪力の種、どちらも一時的にスタミナと筋力を強化する道具（アイテム）だ。黄色い液体、強走薬の入ったビンのコルクを抜き、手にした怪力の種を一粒口に放り込むと、一気に強走薬を飲んで一緒に呑み込む。天空を見上げるように体を反らしながら一気に飲み干し、拳で唇の端に垂れる液体を拭い取る。月夜の下で、イビルアイが不敵な輝きで煌めいた。
「……ボクの本気、先輩に見せてあげます」
――刹那、ルフィールの姿が消えた。否、一瞬にして走り出した為消えたように錯覚したのだ。それほどまでに彼女は速かった。
姿勢を低くしながら突貫する彼女は、俊足を誇るサクラにも匹敵する速度でイャンガルルガに迫る。
イャンガルルガに向かって走っていたクリュウは背後から迫る気配に振り返る。その瞬間、ルフィールがすさまじい速度でルフィールが抜き去った。驚く彼の前で、ルフィールはさらに彼を驚かせる行動に出た。
走りながら腰に備えた矢筒から五本の矢を引き抜き、構えた弓の弦に番える。前方のイャンガルルガに狙いをつけ、番えた五本の矢を一斉に撃ち放った。闇夜を飛翔する五本の矢は全てがイャンガルルガの背中や翼に命中するが、そのほとんどが弾かれてしまう。だが、それでも閃光玉呪縛から脱したイャンガルルガの意識が確実に彼女の方へと向いた。
ルフィールの方を向いた瞬間、イャンガルルガは彼女に向かってジャンプするように駆け出し、彼女の眼前で何度もクチバシをハンマーのように振るい落とす。だがルフィールはそれをギリギリで転がるようにして回避すると、イャンガルルガのすぐ首の下へ抜ける。起き上がると同時に矢筒から矢を二本取り出して両手にそれぞれ一本ずつ構える。
ギョロリとイャンガルルガの目が動き、視線がぶつかる。その瞬間ルフィールはクチバシに向けて二本の矢を叩き込んだ。クチバシの

わずなか隙間を狙って矢を捩じ込む。その鏃のすぐ下に光るのは――強撃ビン。
クチバシの中に矢を捩じ込むとすぐさま矢を離して腕を引き戻す。刹那、強撃ビンが割れてイャンガルルガの口の中で爆発した。
「ギョワァッ!?」
突如口の中で起きた自分の意志とは関係のない爆発にイャンガルルガは悲鳴を上げて仰け反った。それを見る事もなくルフィールは矢筒からさらに五本の矢を抜き放つと、すかさず弦に番えて引き絞る。そして至近距離から一斉にイャンガルルガに向けて撃ち放った。それらのビン全てには強撃ビンが装填されており、命中と同時に爆ぜる。
ルフィールの連続攻撃にイャンガルルガは黒煙を上げながら怒号を放つ。だが彼女の方へ向こうとした瞬間に彼女とは反対側の側頭部で爆発。意識が削がれる。レイヴンの投げた小タル爆弾だ。
レイヴンの攻撃で一瞬イャンガルルガの意識がルフィールから離れる。だがその一瞬が、レイヴンの生み出したルフィールに対する援護だ。
イャンガルルガの意識が離れた一瞬の隙を突いてルフィールはイャンガルルガの腹の下に潜り込むと、腰に下げていた打ち上げタル爆弾二発をすかさず設置。ピンを抜いて離脱する。直後、打ち上げタル爆弾が飛び上がり直上の腹で炸裂。イャンガルルガは低く唸りながら足を滑らせながら尻尾を振るう。だがルフィールはそれを屈んで回避すると、バックステップで距離を取りながら矢筒から取り出した矢三本を一斉に放つ。振り返ったイャンガルルガのクチバシに命中し、装填された強撃ビンが爆ぜる。
「ギャアアアアアッ!」
「――私の事も、忘れてもらっては困るぞ」
音に敏感な耳が捉えたのは、そんな小さくも凛とした声。直後、後頭部に蒼刃剣ガノトトスが炸裂した。鱗の一部がひしゃげ、水と血が暴れ狂う。激痛に耐えながら振り返ると、そこには巨大な剣を構えて不敵に微笑む戦姫シルフィードの姿が。

「あまりガンナーが前に出るの感心しないが、君はどうやら剣士としての才能もあるようだな」
「遠近両道、それが私の弓道です」
「なるほど。だがまぁ、無理はするなよ」
横に並んで弓を構えるルフィールに不敵に笑いながらそう忠告すると、シルフィードは向き直るイャンガルルガに突っ込む。それに対してイャンガルルガは三連ブレスで迎え撃った。
激しい爆発を自身の前方、帯状に炸裂させて敵の接近を阻む。確かにその一撃はシルフィードの接近を阻んだ。だが、彼はシルフィードだけではなくもう一人のハンターの存在も忘れていた。
ブレスを撃った直後の一瞬の隙。背後から迫ったクリュウは小タル爆弾G二発を投げ放つ。放物線を描いて飛翔する小タル爆弾Gはそのどちらもがイャンガルルガの足下で炸裂した。
「ガァッ!?」
足下での突然の爆発にバランスを崩したのか、イャンガルルガは転倒する。そこへクリュウがオデッセイ改を構えて襲いかかる。
「ここならどうだッ!」
倒れた事で足下にまで下がった尻尾に向かってクリュウは剣を上段から振り下ろす。刃先が炸裂した瞬間、確かな手応えが剣越しに伝わって来る。その瞬間、ディアブロヘルムの下で笑みが浮かぶ。
「やっぱり、ここなら弾かれないッ」
クリュウは予想通りの結果に喜んだ。
事前にシルフィードのノートを熟読したクリュウは、イャンガルルガは体全体が鋼鉄でてきているかのように硬い事もわかっていた。その中で剣士である自分はどこを攻めれば良いか、その答えは彼女がしっかりと書き記していた。
全体は確かに鋼鉄のように硬いイャンガルルガだが、動きを制限できない場所は比較的柔らかい。その場所が頭と尻尾だった。尻尾も確かにイャンクックなどに比べれば硬いが、弾かれる程ではない。
クリュウはシルフィードの知識通り、やっと自分が狙える場所を見つけたのだ。

「このぉッ」
だが同時にそこは常に自分の身長と同等の高さにある難所。だからこそ、こうして狙いやすい高さにまで下がったこの瞬間を無駄にはできない。
そこへイャンガルルガが放ったブレスの爆煙の中からシルフィードとルフィールが現れる。状況を瞬時に理解した二人はすぐさま攻撃に転じた。
シルフィードは正面からイャンガルルガの頭の前に立ち、その場で腰を落として剣を背負うように溜め斬りの構えを摂る。ルフィールもまたイャンガルルガから中距離を保つと矢を三本取り出す。その場で道具袋（ポーチ）とは違う袋から取り出したのはビン。だがこれまで使っていた強撃ビンではなく、黄色い液体の入ったビン。それはマヒダケから抽出した麻痺毒が入った麻痺ビン。ルフィールはそれを矢に手早く縛り付けると弦に番えて引き絞る。狙うは倒れているイャンガルルガのがら空きの背中。風が消えたその瞬間、限界まで引き絞った弦と矢を一斉に指先から離す。解放された矢は闇を切り裂きながら飛翔し、倒れているイャンガルルガの背に命中。ビンが割れ、中に入った麻痺毒がブチ撒けられる。マヒダケの毒は触れただけでその効果を発揮する。鱗の間から中の肉へ染み込み、確実に麻痺毒がイャンガルルガの体内に蓄積される。だがその巨体故に毒が効果を発揮する為にはこの程度ではまだ足りない。ルフィールは続けざまに麻痺ビンを矢に結び構える。だが彼女が狙いをつけようとした瞬間、イャンガルルガがゆっくりと起き上がった。
起き上がったイャンガルルガの頭部目掛けてシルフィードは限界まで力を溜めた一撃を叩き落とす。だがイャンガルルガはその一撃を耐えると、そればかりか力勝負で彼女の刃を押し返してしまった。
思わぬ反撃にシルフィードは剣を取り零して転倒した。
「しまった……ッ」
慌てて地面に落ちた剣に手を伸ばすが、蒼刃剣ガノトトスが落ちたのは彼女から少し距離のある所。とてもじゃないが手が届きそうにはない。そしてイャンガルルガは、その絶好のチャンスを無駄にする

ような相手ではなかった。
目の前で倒れるシルフィードに狙いを定め、イャンガルルガは勢い良く息を吸い込む。喉の奥で火花が迸った瞬間、必殺の火球ブレスを撃ち放った。
爆音を轟かせながら撃ち出された火炎の砲弾はシルフィードを襲う。直撃かと思われたが、彼女は寸前の所で無理矢理体を動かして体をほんの一メートル程ずらした。そのわずかな距離が、彼女を直撃から救った。だが、
「がああああぁぁぁッ!?」
至近弾には変わりはなく、着弾と同時に爆ぜた爆風が彼女を襲い、吹き飛ばした。
「シルフィッ!」
クリュウは慌てて閃光玉を投げようとするが、そこへ思わぬ妨害を受けた。
「キキィッ」
突如甲高い鳴き声と共に、背後から何かに体当たりされる。バランスを崩したクリュウは閃光玉を投げる事はできずにそのまま転倒した。
「な、何ッ!?」
襲われた背後を振り返ると、そこには人間の子供程の大きさの巨大な昆虫がいた。青い甲羅で身を覆い、くすんだ赤く細長い脚で跳躍を得意とするモンスター。
「か、カンタロス……ッ!?」
起き上がりながらクリュウはカンタロスを睨みながらヘルムの下で唇を噛んだ。
この狩場には何もイャンガルルガしかモンスターがいない訳ではない。夜の密林ではカンタロスが出現する事は予想できていた事だった。なのに、自分はイャンガルルガにばかり目を向けていてその存在をすっかり失念していた。それが、こんな形で自分の行動を妨害するとは。
「くそ……ッ」

クリュウはすかさずカンタロスをオデッセイ改で殴りつける。一撃では足りず何度か攻撃を当てるとカンタロスは呆気無く砕け散った。邪魔者を排除したクリュウはすぐさま吹き飛ばされたシルフィードの姿を探す。するとブレスの着弾点から数メートル離れた場所でシルフィードは倒れていた。慌てて駆け寄ろうとすると、それを制止するかのようにシルフィードが身を起こす。

「……つぅッ、さすがに今のは効いたな」

そう言いつつも大してダメージはなさそうだ。幸いにも彼女が着ているのはリオソウルシリーズ。高い防御力に加えて優れた耐火特性を持つ。ブレスの至近弾ならそれほどのダメージにならないらしい。

起き上がったシルフィードはそのまま戦線を離れるように後退する。いくら大丈夫と言っても回復しないで戦える程ではない。彼女が抜けた隙を埋めるようにクリュウ、ルフィール、レイヴンがイャンガルルガに殺到する。だがイャンガルルガはそれを拒むのように甲高い咆哮(バインドボイス)を放って彼らの動きを封じる。運悪く、シルフィード以外は全員耳栓スキルを持たない為にその攻撃で全員が足止めを食らってしまう。

シルフィードは回復薬グレートを飲み、携帯砥石を使っていた所ですぐに加勢に加える状況ではなかった。

咆哮(バインドボイス)を終えたイャンガルルガはまだ動けずにいる目の前の敵、レイヴンに向かって狙いを定めると体を反らし、天高くまで上げた首を一気に振り落とした。

「ニャはぁ……ッ!?」

クチバシをハンマーのように地面へ叩きつける一撃。レイヴンは回避できずにその一撃の直撃を受けて地面に体を沈める。ゆっくりとクチバシが上げられると、激痛に苦しみながら力なくレイヴンが横たわっていた。

遅れて体の自由を取り戻したルフィールはすぐさま弓を構えると麻痺ビンを装填した矢を一斉に放つ。炸裂する矢の連撃にイャンガルルガの意識がレイヴンから離れた。

「先輩ッ！」
「わかってるッ」
　ルフィールが叫ぶ前に走り出したクリュウは彼女の方に意識が向いている間にイャンガルルガの懐に潜り込むと、倒れているレイヴンを救出する。ぐったりとしている彼の小さな体を抱き上げて離脱を図る。
「大丈夫？」
「……余計な真似するニャ」
「大丈夫みたいだね」
　言い返せるだけの元気はあるようなので一安心するクリュウ。彼を抱き抱えたまま一度エリアの隅へ移動するとそれを補うようにシルフィードが戦線に復帰する。
「はあああぁぁぁッ！」
　勇ましい咆哮と共に振り返るイャンガルルガの顔面に蒼刃剣ガノトトスを叩きつける。が、寸前の所でイャンガルルガは咆哮（バインドボイス）と共に空中へ逃れる。目標を失った刃先は虚空を斬り、地面に深々と突き刺さる。
「……チッ」
　舌打ちしながら急いで剣を地面から引き抜く。と同時にクリュウの方を見ると、彼はエリアの隅にある林の中へ飛び込んだ。おそらく、イャンガルルガが入り込めない木々の密集した場所にレイヴンを避難させているのだろう。
　クリュウはすぐ戻るとしてもレイヴンが抜けた穴をどう埋めるか。瞬時に作戦を練り直しながらシルフィードは蒼刃剣ガノトトスを構える。
　風を纏いながら地面に着地するイャンガルルガ。その背中に三本の矢が炸裂し、備えられたビンが割れて麻痺毒が迸った。
　イャンガルルガから中距離を保ちながら的確に麻痺ビンを備えた矢を放つルフィール。先程からかなり動き回っているが、息は全く乱れていない。
　先程彼女が飲んだのは強走薬と呼ばれる薬品で、強走薬グレートと

並んでこんがり肉なんかよりもずっと腹持ちして一時的にスタミナを底上げする効果がある。一説には狩場で消費するカロリーの何分の一に相当するカロリーが入っているとされる、究極のスタミナ飲料と言える。鬼人化の際にスタミナを激しく消費する双剣使いは特に使用者が多く、次いでハンマー使いや弓使い、ランス使いなども愛用者が多い道具（アイテム）だ。

さらに彼女が先程強走薬と一緒に呑んだ木の実もまた愛用者が多い怪力の種。こちらも一時的に筋力を強化して身体能力を飛躍的に向上させる効果がある。特に腕力を強化する効果がある為、攻撃力を上げる木の実としてハンターの間では有名な木の実だ。

薬と木の実の効果で飛躍的に身体能力を向上させたルフィール。その身体能力は一時的ではあるがあのサクラにも匹敵するだろう――問題は、そういう物を使わなくてもすでに並外れた身体能力を持つサクラはやはり人間離れしているという証明にもなる事だが、ここではあえて触れない事とする。

手早く三本の矢にそれぞれ麻痺ビンを縛り付けて弦に番えると、弓を構え、狙いをつけながら弦を引っ張る。ギシギシと軋むアッパーリムとロアーリムが、彼女の筋力が飛躍的に強化されている事を物語っている。

限界まで引き絞り、十分に力を溜めてから矢を放つ。放たれた矢は一直線にイャンガルルガの首元、脇腹、太股にそれぞれ命中し、割れたビンの中からブチ撒けられた麻痺毒が確実にイャンガルルガの体内へと蓄積される。

「まだダメですか……」

依然麻痺する兆候のないイャンガルルガを見てルフィールは舌打ちする。イャンクックならすでに麻痺状態になっていてもおかしくないが、やはり相手は最強の鳥竜種。飛竜種並みの身体能力があるとすれば、まだあと数発は当てないと麻痺状態にはできないだろう。

「……こちらのビンには限りがある」

調合素材も一応持って来たが、それでも麻痺ビンには限界数がある。さらに言えば麻痺状態になる事を繰り返しているうちに耐性が

できてしまい、回を重ねるごとに必要になる麻痺ビンの数は増えてしまう。数に限りがある上に、無駄遣いもできない。
「だったら……ッ」
ルフィールは矢を麻痺ビンを備えた矢を一本矢筒から引き抜くと弦に番えたまま走り出した。ギリギリと弦を引きながら弓を軋ませ、イャンガルルガに突撃する。
着地と同時に矢を受けた為、イャンガルルガも接近して来るルフィールに意識が向いている。正面から突っ込んで来るルフィールに対してイャンガルルガは三連ブレスで迎え撃つ。
扇状に放たれた火球ブレスは辺りを一瞬で焼き払う。あまりにも広大な範囲を攻撃され、接近しようとしていたルフィールは完全に足止めを食らって動けなくなる。
「チッ……」
舌打ちしながら正面を見ると、イャンガルルガは彼女目掛けて突進を仕掛ける。迫り来るイャンガルルガに対してルフィールは横へ走ってその射線上から逃れて何とか回避。イャンガルルガは体を投げ出すようにして地面に倒れ込んで身を止める。そこへレイヴンを脱出させたクリュウが戦線へ復帰し、すぐ傍にいるイャンガルルガに向かって襲い掛かる。
レイヴンを安全な所に置いたついでに携帯砥石を使って刃の切れ味も回復させた。鋭い刃先が捉えたのはまたしてもイャンガルルガの尻尾。先端の膨らんだ部分と細く靭（しな）やか尻尾本体を繋ぐ付け根の部分を狙って振り下ろした一撃は弾かれる事なく鱗の一部を吹き飛ばし、確かな手応えをと共に血が爆ぜる。
だがもう一撃を入れようとした所でイャンガルルガは立ち上がってしまい、尻尾はまたしても狙いづらい高さへと離れてしまう。そうなればいつまでも危険なイャンガルルガの攻撃範囲内に留まる必要はなく、すぐに離脱を図る。
起き上がったイャンガルルガは振り返る。比較的近くにいて攻守どちらにも動ける構えのクリュウの姿を確認すると脚を滑らせるように地面を撫で、尻尾を揺らしながら低い声で唸る。刹那、イャンガ

ルルガは天高く咆哮（バインドボイス）を轟かせた。
甲高い怒号が辺りに響き渡り、近くにいたクリュウの動きを封じた。耳を押さえながら蹲（うずくま）る彼を見て様子見で距離を取っていたシルフィードは慌てて距離を詰める。だが、そんな彼女の目の前でイャンガルルガが動く。
クリュウに正面を向けると、ゆっくりと顔をもたげる。それは飛竜種がブレスを撃つ際の予備動作。クリュウは頭では次にブレスが来る事がわかっていても、本能にある恐怖心を刺激されて動けずにいる体に焦る。このままではブレスの直撃を食らってしまう。
クリュウが狙われている。それを見てルフィールが動いた。
ギリギリと弓を軋ませながらイャンガルルガに狙いをつける。その距離は五〇メートルなど優に超えてしまっている。それでも、彼女はイャンガルルガの一部分を狙って、限界まで弦を引き絞って必殺の一矢を放った。
闇夜を切り裂き、空気の壁を貫きながら飛翔する一矢は寸分狂わずブレスを撃つ為に喉の奥で火花を迸らせたクチバシの中へ飛び込み、炸裂した。
衝撃で備えられた麻痺ビンは割れ、中にあった麻痺毒が飛び散る。それも、鎧などがわずかもない全てが肉の壁に覆われた口腔内で――その瞬間、ルフィールに笑みが浮かぶ。
「薬は注射より飲むのに限りますよ、黒狼鳥さん」
――刹那、イャンガルルガはその場で痙攣して動きを止めた。ルフィールの放った麻痺矢による効果がようやく発揮されたのだ。
「よくやったぞケーニッヒッ！」
シルフィードは嬉々と叫びながら彼女が生み出したチャンスにイャンガルルガへ突撃を仕掛ける。
一方、クリュウは目の前で硬直しているイャンガルルガを前に自身もまるで麻痺毒を受けたかのように硬直していた。否、呆然と立ち尽くしていたのだ。
「先輩ッ！」
そんな彼の耳に、頼もしい後輩の声が届く。振り返れば、麻痺ビン

から再び強撃ビンに切り替えた弦に番えて弓を構えるルフィールと目が合う。その瞬間、ルフィールは頼もしい笑みを浮かべた。闇夜で、彼女のイビルアイが神秘的に煌めく。
「――ボクが作った隙、無駄にしないでくださいねッ」
彼女の言葉に、少しずつクリュウの目に輝きが戻る。そしていつもの頼もしい顔に変わると、確かなうなずきで答えた。
「任せといてッ！」
クリュウはすぐに走り出し、イャンガルルガへ襲い掛かる。そんな彼を援護するようにルフィールも彼の後ろに続きながら支援射撃。走りながら矢を番えては、狙いを定め、撃ち放つ。その動作を、目にも留まらぬ早さで繰り返す。
すでに痺れるイャンガルルガの正面ではシルフィードが蒼刃剣ガノトトスを構え、溜め斬りの為に腰を落として力を蓄えている。躍動する筋力を押さえ込み、暴れ狂う力を制御する。次に解放する時は、それらが全て全力の攻撃の原動力へと変わる。
次なる攻撃に備えて沈黙しながら力を蓄える彼女の横を通り抜け、クリュウが肉薄する。痙攣すると筋肉が縮まる影響から関節が全て折り曲がり、その結果黒狼鳥の尻尾も狙いやすい位置にまで降りていた。
「今ならッ！」
ルフィールが作ってくれた隙を無駄にしない為にも、クリュウはこの機会を逃さない。構えたオデッセイ改を、助走の勢いも加えて全力で振り下ろす。刃先が当たった瞬間、僅かに鱗に跳ね返される感触。それを力押しで封じて刃先を押し込むと、今度は肉を斬る確かな手応えに変わる。
すぐさま剣を戻し、今度は左右から斬り払うようにして何度もオデッセイ改を叩きつける。
「うおらぁッ」
勇ましい声と共にクリュウは右足を軸として体を回転。構えたオデッセイ改を横に一閃。全力の回転斬りをイャンガルルガの尻尾に叩き込む。それと時を同じくして、シルフィードも静から動へ移り変

わる。
「はあああああぁぁぁぁぁッ！」
力強い叫び声と共にシルフィードは背負った蒼刃剣ガノトトスを背負い、そして振り落とした。その強大な一撃は狙い狂う事なくイャンガルルガのクチバシに叩き込まれる。刃先がクチバシを叩いた瞬間、黒狼鳥の鋭いクチバシの一部が砕け散った。
「ギャワァァァァァッ!?」
狩りが始まって以来のイャンガルルガの悲鳴が響き渡った。
クチバシの部位破壊をやり遂げ、口元に笑みを浮かべながらシルフィードは続けてハンマーのように自身を中心に重い剣を振るって回転斬りを叩き込み、すかさずその勢いを利用して斬り上げ、再び振り落とす。
シルフィードとクリュウが容赦のない攻撃を仕掛けているのと同時並行して、ルフィールも強撃ビンを備えた矢を撃ちながら接近すると、イャンガルルガの懐へと潜り込む。すぐさまそこで打ち上げタル爆弾を二発発射し、そのまま真下から腹部に向かって連続して強撃ビンを装着した矢を撃ち上げる。会敵してから休む暇もない緊張感が続いているのに、彼女は的確にして間髪入れぬ連続射撃を続けている。彼女の腕が新人のそれを遙かに上回っている証拠だ。
麻痺状態にあるイャンガルルガは文字通り指一本動かせず、クリュウ達の一方的な攻撃を受け続ける事になった。シルフィードは力の限り蒼刃剣ガノトトスを振るい、クリュウもまた連続してオデッセイ改を縦横無尽に振るう。どちらも付加属性の水飛沫が迸り、イャンガルルガの体表を血と共に濡らす。密林でも生息できるのにも関わらず、イャンガルルガの鱗などは湿気に弱く、湿るとその強固さが幾分か失われる事が学術研究で実証されている。原因は不明だが、黒狼鳥が水属性に弱いという事はハンター達の常識となった。
その常識の通り、二人の剣士が水属性の剣を振るう。風に揺れるポニーテールの隙間から覗くシルフィードのうなじには薄っすらと汗が浮かんでいる。額にも浮かぶ汗が、彼女の激しい動きの対価を意味している。

二人の剣士の猛攻撃に連携するようにルフィールも弓を折り畳むと、再び両手にそれぞれ矢を強撃ビンを装着した矢を構えると、痺れて動けずにいる脚に向かって矢を振り下ろす。当然鏃は堅牢な黒狼鳥の鱗を突破する事はできない。それでも鏃が激突する瞬間に爆ぜる強撃ビンの爆発は確実なダメージとして蓄積される。爆発する一瞬前に手を離しているのでルフィールは無事。それを繰り返して何本もの矢を連続して脚に振り下ろし、爆発させる。それはまるで爆弾で殴りつけているかのような豪快な攻撃だ。

しばらくの間クリュウ達の猛攻撃は続いたが、いつまでもイャンガルルガの巨体を封じられる程麻痺毒の効果は長くはない。強烈な一撃を叩き込んだシルフィードは蒼刃剣ガノトトスを背負うとすぐにその場から離脱を図る。それを見てクリュウも体全体を使っての回転斬りを一撃入れた後にイャンガルルガから離れる。そんな二人の様子を見てルフィールもすぐに懐から離脱すると何も備えていない通常矢に切り替えて援護射撃を開始する。

三人が突発的な攻撃可能な範囲を脱すると同時に、イャンガルルガの麻痺毒による拘束が解かれた。

体の自由を取り戻したイャンガルルガ。自らを束縛し、一方的に身を痛めつけた相手に対する憎悪は、すでに彼の激情を噴火させる程にまでなっていた。

「ギュワァァァァァァァァァッ！」

一際甲高く大きな激咆を天空高く轟かせ、イャンガルルガは激しい激情と共に地団駄を踏むようにその場で何度もジャンプしながら首を激しく上下に振り回す。

内燃機関である火炎袋が制御レベルを超えて燃え盛っているのか、クチバシの端からは溢れ出した火炎液が漏れ、空気に触れて火花を散らす。呼吸が乱れているせいか火炎袋内で酸素が足りずに不完全燃焼を起こしているのだろう、口の端からは火花と一緒に黒煙も噴き出している。

黒煙を吐き散らしながら怒号を上げて怒り狂うイャンガルルガ。その瞳にはもはや理性の欠片も残されていない、それはまさに獣。怒

りに身を任せた暴れる脅威――怒り状態だ。
スゥ、とイャンガルルガは息を吸い込むと、前方に散る敵に向けて連続して三発のブレスを撃ち放つ。轟音と共に撃ち出された火球は通常時のそれよりも遙かに色が濃い。それはつまり、温度も威力も桁違いに跳ね上がっている証拠だ。
着弾と同時に火球は爆ぜ、激しい爆発と爆風を当たりに炸裂させる。暴れ狂う暴風はそのままクリュウ達を襲い、動きを封じた。その爆風と目の前で吹き飛ぶ地面を見れば、その桁違いの威力がどれほどまでに凶悪かなど異とするに足りない。
怒り狂うイャンガルルガと真正面から対峙するクリュウは静かにその姿を視界に納めながら、オデッセイ改を握り締める手に力を入れる。相手の動きに合わせて動けるように構え、意識を集中させる。その時、
「撤退するぞッ！」
シルフィードの指示が飛ぶ。これからだと思っていたクリュウは些かその指示に困惑するが、理由を問うほどの時間はない。すぐにシルフィードは閃光玉を投擲してイャンガルルガの動きを封じ、さらにペイントボールを投げて匂いを塗り重ねる。これでまたしばらくはイャンガルルガを見失う事はない。
シルフィードはすぐに荷車を回収すると、先頭を走って離脱を図る。クリュウはルフィールと合流すると、その場で咆哮（バインドボイス）を轟かせて辺りを威嚇するイャンガルルガを横目にエリアからの離脱する。
イャンガルルガが完全に視界を取り戻した時、すでにエリア４には虫一匹すら動くものは何もいなくなっていた。

第１８７話　少女の痛々しき決意　同じ失敗を繰り返さない為に

　エリア４を脱した一行はそのまま休んでいたレイヴンを回収し、エリア５を通ってエリア６へと移動した。エリア６は細い木々が無数に乱立するエリアで、シルフィードは荷車をクリュウに任せて自ら蒼刃剣ガノトトスを振るって道を切り開く。そしてエリアの隅にある洞窟の中へと潜り込んだ。そこは以前、リオレウス戦の時に火竜のブレスを受けてエリア９からチーム全員が落下した際、クリュウとシルフィードが逃げ込んだあの洞窟だ。
　荷車を洞窟の奥へ置くと、シルフィードは壁に背を預けるようにして座り込んだ。その様子を入口に立ったまま呆然と見詰めているクリュウに向かって「君も座って休んだらどうだ？」と声を掛ける。
「あ、うん……」
　クリュウもシルフィードのすぐ横に腰を下ろしてディアブロヘルムを脱ぐ。激しく動き回った事で掻いた汗で髪や頬はビショビショだ。すると、そんな彼の前の前にタオルが差し出された。目でその持ち主を追うと、薄っすらと笑みを浮かべたルフィールのイビルアイと目が合う。
「どうぞ、使ってください先輩」
「あ、ありがと」
　クリュウは礼を言って彼女の手からタオルを受け取ると、汗を拭う。そんな彼の様子に満足したようにうなずくと、ルフィールはもう一つのタオルをシルフィードに渡す。
「あぁ、すまないな」
「なぜ、あの場で撤退を指示したのでしょうか？」
　クリュウが抱いていた疑問を、ルフィールは直球勝負で問う。全くもってクリュウ以外の相手には容赦がない。だがクリュウも疑念を抱いていた身。何も言う事はなく、ただシルフィードの返事を待つ。そんな二人の視線を受け、シルフィードは水筒の水で一度喉を潤して

から返答を述べた。
「まず第一に、怪我人をあのまま放置しておく事はできない。適切な手当てをする必要があったからな」
そう言って彼女が視線を向けた先では、荷車の上で横になるレイヴンの姿が。回収する際に起きたらしく、今はこちらを不機嫌そうに見詰めている。その目は「余計な事を……」とつぶやきそうだ。
「人と言うには種族が違い過ぎる気がしますが」
「ルフィール。揚げ足を取らないの」
「大王イカのゲソフライなら強奪するに値しますが」
「……ルフィール、少し会わないうちに性格悪くなった？」
「なぁッ!?」
クリユウに思わぬ印象を抱かれたルフィールは愕然とその場に立ち尽くす。そんな彼女の様子を見て横になっているレイヴンは一匹ため息を零し、シルフィードは苦笑しながら傷を広げるような事はせず話を進める。
「次に、長時間の戦闘を避けたかったというのもある。体力的にも集中力の面でも無理な長期戦は負担を強いるだけだ。一度態勢を立て直すついでに一息入れたかったのだ」
狩猟は言うまでもないが体力が必要だ。モンスターを追ったりその攻撃を避けたりする為に走り回り、武器を振るい、常に動き続けなくてはならない。それに加えて常に死と隣り合わせの為にすり減る精神力、一瞬の緩みも許されない集中力。モンスターを相手にしている際には、様々な力が消耗される。そしてそれらは例外なく無限ではない。長時間の使用はいずれどこかで限界を迎える。狩場でその瞬間は死へと直結する。
だからこそ、シルフィードはそれを避ける為にもまだ余裕があるうちに一度休憩を入れる為に撤退命令を出した。リーダーたるもの、チームメイトに対するそうした気配りも必要だ。
「そして最後に――個人的にあれ以上の戦闘は避けたかったんだ」
「どういう事？」
クリユウが尋ねると、シルフィードは苦笑しながら左手で右手を軽

く叩く。
「さっきのブレスを避け損ねた時に、ちょっと手を痛めてな」
「えッ!? だ、大丈夫なのッ!?」
怪我したと言うシルフィードの言葉にクリュウが目に見えて慌て出す。そんな彼の姿が少し愛らしくもあったが、シルフィードは「心配するな。軽く打っただけだから薬草でも塗っておけば次の戦闘では支障はないさ」と自身の怪我が問題ない、心配するなと彼に言う。それを聞いてクリュウは安心したらしくほっと胸を撫で下ろした。
「それじゃ、手当てしないと」
「いや、これくらい自分でできるさ。私よりもレイヴンの手当てを頼む」
「え、でも……」
躊躇する彼の背中を押して、シルフィードは改めて大丈夫だと言いたげに凛々しく微笑む。その頼もしい笑みを前にしてクリュウはうなずくとルフィールと共にレイヴンの手当てを始める。幸い、彼も大した怪我ではないのでしばらく安静にしていれば戦線復帰も可能だろう
シルフィードは一人、道具袋（ポーチ）から塗り薬を取り出す。リリア特製の打撲や打ち身用の塗り薬だ。これを塗っておけば、完治が早くなる上に痛み止めにもなる。面と向かっては言わないが、リリアが村に来てからは狩りもずいぶんしやすくなった。道具類も以前より揃うようになったし、こうした薬品類は特に重宝している。
慣れた手つきで薬を痛む部分に塗り、包帯で縛って手当てを終える。その頃にはレイヴンの手当ても終わっており、彼を横にしたクリュウとルフィールが戻って来た。
「どうだ？　イャンガルルガを初めて相手にした感想は？」
戻って来た二人にシルフィードが尋ねると、クリュウは苦笑しながら「攻撃パターン自体はリオレイアやイャンクックの動きと似ているから何とかなるけど、あの咆哮（バインドボイス）と鱗の硬さは厄介だね」と答えた。実際、クリュウは今回の戦闘ではずっと咆哮（バインドボイス）に動きを封じられ、鱗が硬過ぎて思うように攻撃ができ

なかった。
「やはり、ボクが今まで相手にして来たモンスターの中では最上位に位置する難敵です。咆哮（バインドボイス）の範囲も広く、間合いの見極めが難しいです」
「そうだな。私は耳栓スキルがあるからむしろ咆哮（バインドボイス）中は絶好の攻撃チャンスなのだが、クリュウの言う通り奴の装甲の硬さは非常に厄介だ。生半可な武器ではほとんどが弾き返されてしまう」
「バサルモス級の硬さだからね。とりあえず、次は爆弾を使ってダメージを与えてみようかと思ってる」
「確かに、今回は様子見の部分もあった。次からは道具（アイテム）類を多用して本格的に戦う。それまでに消耗した道具（アイテム）の補充をしなくてはな。クリュウ、閃光玉の補充を頼む」
「任せといて」
　早速閃光玉の調合に取りかかるクリュウを一瞥し、シルフィードは「さて」と話題を変えるように彼の背中を見詰めているルフィールの方へ向き直る。
「ケーニッヒ、少しいいか？」
「ルフィールで結構です。一体何用でしょうか？」
　シルフィードが話しかけるとルフィールは礼儀正しくこちらに向き直った。最初の頃は視線すら合わしてもらえなかったのだから、どうやらこの狩りの間に幾分かは彼女の信頼は得られたようだ。それを確認できて、シルフィードは一人安心したように胸を撫で下ろす。だが再び彼女の表情は引き締まる。
「単刀直入に言うが、君の戦い方は異常だ」
「存じています」
　意外にも、ルフィールはあっけなく自らの戦い方の異常性を認めた。これには切り出すか切り出さざるべきか迷っていたシルフィードも面食らう。だが動揺する所を見せない為にもあえて平静を装って話を進める。
「なぜ弓で近接戦闘を行う？　弓なら中距離を保ちながら射撃すれば

いいだろう」
　本来ガンナーに分類される弓は中距離からの攻撃を前提としている。その為防具もガンナー用のそれを使っている。ガンナー用の防具は、決して接近戦を想定してはいない。剣士のような強固さはなく、飛竜種の攻撃なら一撃でも大怪我を負う可能性もある。
　剣士用の防具はそれこそ飛竜種の攻撃にもある程度耐えられる設計がされているが、ガンナー用はどちらかと言えば武器を使う際の負担軽減、必要最低限の防御を前提としており、そもそも設計が異なる。
　だからこそ、ガンナーは接近戦を想定していない。その攻撃範囲の広さを最大限利用してのアウトレンジ攻撃がガンナーの真骨頂。決して、ルフィールのような戦い方はガンナーのそれとは異なる。
　シルフィードの問いかけに、ルフィールは一度目を閉じて深呼吸すると、ゆっくりとそのイビルアイを開く。
「ガンナーは遠距離戦に甘んじるあまり、突発的な近接戦に弱い。狩場では想定を超える事態というものが常に発生します。混戦となれば、距離を取っている暇など到底ありません」
「確かにその通りだ。だからこそ小型モンスター相手の接近戦なら私も納得できる。だが君は大型モンスター相手でも接近戦をしようとする。それは些か分不相応だと思うが」
「――あなたは、ケンカをした事がありますか？」
　突然の突拍子のない問いにシルフィードは一瞬呆けると、何とも答えづらそうな表情を浮かべながらもゆっくりと首を縦に振った。
「まぁ、あまり自慢できる事ではないが、人並みにはしているな」
「ならば、あなたも気づいているはずです――生物の視界というのは、至近距離が大きな空白地帯となる事を」
「灯台もと暗しという奴だな」
　シルフィードの言葉にルフィールはこくりとうなずいた。
「確かに近距離戦は危険を伴います。ですが、うまく立ち回れば肉薄する事は決して危険とは限りません。むしろより正確な攻撃が可能となり、狩りを優位に進める事も可能。単純にガンナーの武器は近ければ近い程に攻撃力が高い。弾にも矢にも撃ち出された瞬間、初速が

最も速いのですから。さらに言えば遠距離に比べて近距離は攻撃範囲の広角が狭く、回避の動きも最低限で済みます。非常に効率的だとボクは判断しますが」
　ルフィールは淡々と自らの戦法の有効性を強調する。確かに彼女の言う通り接近戦は攻撃力と命中性などでは優位であり、隙の大きい攻撃の回避は容易になる。だが反面、近距離戦は遠距離戦では受けないような攻撃を受けるようになる。モンスターが脚を少し動かしただけでも、体が衝突してダメージを負う。それから身を守る為に剣士の防具は強固であり、その恩恵があるからこそ剣士は接近戦を行える。
　接近戦は、それに見合うだけの防具を備えているからこそ実現できるもの。ガンナーのそれは、決してそれに見合うだけの強固さはない。
「確かに君の言う意見にも一理あるが、ガンナーの役目はあくまで後方からの支援だ。前衛は剣士に任せるべきだと私は思うが」
「それはチーム戦に慣れているガンナーだからこその考え方です。ボクは他人に甘える、そんな負け犬のような戦い方はしません。他人に頼り過ぎる者は、頼りにする人を失った際には無力です。その無力さが、頼りにしている人を危険に晒す事だってあります。だからこそ、ボクは全てを自分一人でしなくてはならないんです――二度と、同じ失敗を繰り返さない為にも」
　最後の一言は、まるで自分に言い聞かすようにルフィールはつぶやいた。その一瞬、彼女の表情が悲痛に歪んだのを、シルフィードは見逃さなかった。
「失礼します」
　恭しく一礼し、ルフィールはレイヴンの下へと歩み寄る。そんな彼女の背中を見ながら、シルフィードは一人ため息を零した。そこへレイヴンの手当てを終えたクリュウが戻って来る。
「シルフィ、怪我は大丈夫？」
「あぁ。私は問題ないが、レイヴンの具合はどうだ？」
「あっちも大丈夫。しばらく休めばまた戦線復帰もできそうだよ」

「そうか――なら、次は君の番だな」
半ば呆れたように言うシルフィードの言葉にクリュウは目をパチくちさせる。そんな彼の反応を見て苦笑しながら彼の脇腹を指差した。
「大した事ないだろうが、手当てくらいしておけ」
「……あはは、バレてたんだ」
「当たり前だ。君とは短くない付き合いなんだからな。隠しても無駄だよ」
「……うーん、ルフィールの目は誤魔化せたみたいなんだけど」
「誤魔化せてませんよ」
「うわッ!?」
背後からの声に驚いて振り返ると、ジト目でこちらを見上げるルフィールと目が合った。ルフィールはそのままクリュウの脇腹を見ると、軽く小突いた。
「……ッ!?」
「痛いのならさっさと手当てしてください」
「容赦ないな……」
声も上げられないような激痛に悶えるクリュウを呆れながら見下げるルフィール。その隣でシルフィードが彼女の容赦のない行動に苦笑を浮かべていた。そんな二人の視線の先で、悶えていたクリュウが涙目で振り返る。
「わ、わかってるなら優しくしてよ」
「先輩は優しくするとつけ上がりますから」
「……やっぱり、性格悪くなったよねルフィールって」
苦笑しながら言う彼の言葉が癇に障ったらしく、ルフィールは無言で彼の怪我している部分に強めの一撃を入れた。当然クリュウはその場で崩れ落ちて悶え苦しむが、ルフィールは不機嫌そうに鼻を鳴らしてレイヴンの所へ戻ってしまい、シルフィードも彼の自業自得だとばかりに助ける事はなく、クリュウはしばらく激痛に悶える事になった。
クリュウの手当てが終わり、レイヴンが回復した頃を見計らって一

行は改めてイャンガルルガを追って行軍を開始した。
「無理するなよ」
「……フン、図に乗るニャ」
シルフィードが掛けた言葉にレイヴンは鼻を鳴らしながら一蹴する。そんな彼の反応を見て大丈夫だと判断したのだろう。それ以上は何も言わず、彼に先頭を任せる。
隊列はレイヴンを先頭に荷車を引いたシルフィード、その背後をクリュウとルフィールが並びながらゆっくりとした歩みで進む。
現在一行はペイントボールの匂いを追ってエリア6からイャンガルルガがいるエリア2を目指して進んでいる。エリア6とエリア2は一本道で進めるが、エリア2の出口は高台の上に出てしまうので荷車はその手前で放棄しなくてはならない。なので直前で必要な道具（アイテム）を持って進入する必要がある。
道沿いに深い木々が立ち並び、天井を覆うように延びた枝に生える無数の葉が月明かりを塞ぎ、彼らが進む道は少し薄暗い。先頭を歩くレイヴンと殿を歩くクリュウの手にはそれぞれ松明が握られており、それだけが道を照らす明かりだ。
「あのさ、ルフィール」
松明で辺りを照らしながら歩くクリュウは、隣を歩くルフィールの方を向かずに彼女に声を掛ける。彼と並ぶように歩いていたルフィールは彼の方へと振り返った。
「何でしょうか？」
「さっき、シルフィとの会話を聞いたんだけど」
「……盗み聞きとは、あまりいい趣味とは思えませんが」
「洞窟の中で話していれば、普通に聞こえるでしょ」
「……まぁ、別に構いませんが。それが何か？」
「――頼っても、いいんだよ？」
「はい？」
彼の言葉にルフィールは立ち止まると、首を傾げた。そんな彼女の一歩先で立ち止まったクリュウはそこでようやく彼女の方に振り返ると呆然とこちらを見詰める彼女の頭をポンと叩いた。

「な、何ですか？」
「何でも一人でやろうとするなって事。僕達はチームなんだからさ、ちゃんと頼ってよ」
「……先輩を頼りにしていない訳ではないんですよ。ただ、先輩に負担を掛けたくないだけです」
「負担なんて、僕は全然そんな事思ってないよ」
「先輩が負担に感じていなくても、ボク自身が許せないんです。二度とあんな事、ごめんですから」
「ルフィール……」
「別に、先輩の事を責めている訳ではありません。助けてもらった事は心の底から感謝しています。ですが、ボクは先輩の背中に一生残る傷を負わせてしまった、自分の失態を許せません」
　ギリッと唇を噛みながら悔しげに握り締めた拳は小刻みに震えている。それはかつての失態を恥じる悔しさや無念さ、そして自分への怒り。その迫力に、クリュウは彼女へ声を掛ける事もできなかった。ただ――
「先輩……？」
　――ただ、何も言わず、クリュウはルフィールのその小さな体を抱き締めた。
　突然背後から抱き締められたルフィールは困惑しながら彼の方へ振り返る。その頬は松明の明かりに照らされたのとはまた違った淡い朱色に染まっていた。
「あの、先輩……」
「言ったでしょ」
「はい？　あの、一体……」
「――君は、僕の背中を守ってくれてた子だって」
　その言葉にルフィールは大きくそのイビルアイを見開く。だがその言葉の意味を噛みしめるようにうなずくと、顔を悲痛に歪めた。
「でもボクは、そんな先輩の背中を守れませんでした……ッ」
「――だったらさ、今度は大丈夫だよね？」
「え……？」

驚くルフィールの頭を、クリュウは優しく撫でる。そして、そんな彼女に向けてクリュウはまるで春の日差しのような暖かく、柔らかい笑顔で微笑んだ。
「――僕の背中は君に預けた。守ってくれるよね？」
クリュウの優しげな問い掛けに、ルフィールはしばし呆然と立ち尽くしていたが、その表情が見る見るうちに水を得た花のように煌めいていく。そして、それは満開の花を咲かせた。
「任せてくださいッ！　先輩の背中は、この邪眼姫（イビルアイ）のルフィール・ケーニッヒが必ずやお守りしてみせますッ！」
「頼りにしてるよ」
「はいッ！」
先程までの悲痛な表情から一転して、ルフィールは自信に満ちた笑顔と共に元気良く答えた。そんな彼女の満面の笑みを見て安心したクリュウもまた、優しげな笑みを浮かべている。
少し離れた場所からその様子を見守っていたシルフィードとレイヴン。そのどちらからとなく、口元に優しげな笑みが浮かぶ。
「まったく、本当に私の周りには常識の箍が外れた人間が多いな」
「ハンターになるような人間は、皆何かしらの問題を抱えているニャよ」
「ほぉ、それは私も問題児と言いたいように聞こえるが？」
「言葉の綾ニャ。気にするニャ」
視線をこちらに向ける事なくそう言い切って先へ進むレイヴンの背中を見詰め、シルフィードは苦笑しながらその後を負う。振り返れば大役を任されて輝きを取り戻したルフィールと、そんな彼女の背中を見て安心しているクリュウが続く。
「……まったく、どうしたらそんなに女子を笑顔にできるのだ。ある意味才能だな」
クリュウの生まれ持ったポテンシャルの高さに苦笑しつつ、シルフィードは視線を再び前に向ける。その時、前方の方から黒狼鳥の甲高い咆哮が轟いた。その声を聞いて、少しばかり緩んでいた気合いを締め直す。

「夜はまだ長い。これからが本番だな」
見上げれば、いつの間にか深い木々に覆われていた天井は消え、そこには満天の星空が広がっていた。神々しく煌めく淡い月明かりが照らす道の先に、黒狼鳥イャンガルルガが待ち構えている。
一行はイャンガルルガを目指して一路エリア２へと進み続ける。
エリア２に入る手前、シルフィードは荷車を置いて必要な道具（アイテム）を各自に分配。声を上げずに手で指示を送りながら自ら先陣を切ってエリアへと突入した。
匍匐前進で高台を藪に隠れながら進むシルフィード。その視線の先では月明かりに照らされた黒狼鳥が静かに佇んでいる。
シルフィードは視線を離さずに背後に同じように伏せている二人に合図を送る。それを見て、ルフィールは一つうなずくとその場で起き上がり、膝を地面につきながら弓を構える。矢を一本引き抜いてそれにペイントビンを備え付けると立ち上がり、弦にペイント矢を番えて引き絞る。
ルフィールが矢を放つのを合図に、それまで伏せていたクリュウとシルフィード、レイヴンが一斉に動き出す。高台から飛び降りると、二人は正面突破でイャンガルルガへ突撃し、レイヴンは側面から迫る。
上空で弧を描くようにして飛翔した矢は寸分狂わずにイャンガルルガの背中に命中し、砕けたビンの中に入っていたペイントが背中の一部を桃色に染め、弱っていた独特な匂いを重ね塗る。
矢を受けたイャンガルルガは振り返り、突撃して来るクリュウとシルフィードの姿を見て威嚇の声を上げる。
まず最初に到達したのはクリュウ。こちらを向いて低く唸っているイャンガルルガの顔面に向かって切れ味を最大まで回復させたオデッセイ改を振り下ろした。力強く振るい落とされた一撃は空気中の水分を集めながら水を迸らせ、強烈な水流の一撃と共に炸裂。水を纏った一撃は弾かれずらく、刃先がイャンガルルガのクチバシに傷をつける。
「ガァァァァァァッ！」

「……ッ!?」
イャンガルルガは甲高い咆哮（バインドボイス）を放ちながら翼を広げて後退する。耳栓スキルを持たないクリュウはその咆哮（バインドボイス）の直撃に耳を塞いでその場から動けなくなる。だが耳栓スキルを備える彼女にはそれは通じない。
クリュウの横を通り抜けて突撃するのはシルフィード。背負った蒼刃剣ガノトトスの柄を握り締めると、ちょうど着地するイャンガルルガの顔面に向けてその強烈な一撃を叩き込む。が、イャンガルルガはそれを首を振って跳ね返すと、一瞬隙が生まれた彼女に向かって旋回攻撃。ムチのように尻尾をしならせて毒針を備えた一撃を叩き込む。
「チッ……」
直撃寸前の所でシルフィードは蒼刃剣ガノトトスを縦に構えてガードして何とか直撃を避けた。が、その威力を前に大きく後退を余儀なくされた。
咆哮（バインドボイス）から解放されたクリュウと大回りして側面から突撃するレイヴンがそこへ同時に攻撃を仕掛ける。
レイヴンは二つのブーメランを同時に左右へ放ち、ピッケルを構えてイャンガルルガの脚に攻撃。大きくそれぞれ左右に膨らみながら飛翔するブーメランも同時にイャンガルルガの左右の翼へ命中。わずかにその表面を削った。さすがに翼膜は装甲化されてはおらず、狙いうちできる。一方で脚は硬く、ピッケルは簡単に弾かれてしまう為レイヴンは一度その場から離脱する。そこへクリュウが攻撃手を代行。背後へ回り込む時間がないとわかると、すぐに攻撃ポイントを変更してイャンガルルガの顔面に一撃を入れようと構える。が、
「クリュウぅッ!」
シルフィードの声を聞かずともわかる。イャンガルルガがその場で片足を半歩引くのを見てクリュウは次にサマーソルトが来る事を確信した。が、距離が近過ぎる為回避は間に合わない。そう判断すると同時に盾を構えてガードの体勢を取る。
次の瞬間、イャンガルルガはその巨大な翼を力強く羽ばたかせて空

中へ浮き上がると、その場でその巨体を信じられない速度で後転させた。一瞬遅れて、盾に強烈な一撃が炸裂する。しならせながら振り上げられた尻尾の一撃はそれこそハンマーの全力でのブチ上げと大差ない。その強力な一撃を前にクリュウの体は耐え切れずに吹き飛ばされた。

地面の上を何度か転がった後、クリュウはふらふらと立ち上がる。幸い直撃は避けたし、防具の堅牢さもあって大した怪我はしていなかった。頭を振って一瞬回る視界を正す。

高台の上からクリュウの無事を確認したルフィールは安堵の息を漏らす。すかさずルフィールは矢を弦に番える。その矢には再び麻痺ビンが備えられている。ルフィールは狙いをすましてレイヴンが囮となってその場で足止めしているイャンガルルガに向かって構えた矢の一撃を放つ。

弧を描くようにして飛翔する一矢は吸い込まれるようにしてイャンガルルガの背中に命中。ビンは砕け、中の黄色い液体がブチ撒けられる。その瞬間、麻痺毒が美しく煌めいた。空気に触れる事で麻痺毒は光り輝く性質を持っている。クリュウの持つ片手剣デスパライズも同じだ。

麻痺ビンを備えた矢を新たに三本弦に番え、ギリギリと軋ませながら弦を引き絞る。

「援護します先輩ッ！」

狙いを定め、引き絞った矢を一気に撃ち放つ。放たれた矢は鏃を月明かりにキラキラと反射させながら飛翔し、イャンガルルガの背中に炸裂する。飛び散る麻痺毒もまた闇夜で神々しく煌めく。

麻痺矢の集中砲火を浴び、イャンガルルガはその場から逃げ出すように駆け出す。その向かう先には接近しようと迫っていたシルフィードが走っている。迫り来るイャンガルルガ相手にシルフィードはすぐに横へ走ってその針路から身を回避。だがイャンガルルガは突如突進をやめると逃げるシルフィードの背後へと向きを変え、追いかけるように激しく首を上下に降りながら迫る。

背後からの攻撃にシルフィードは腰を落として緊急回避。体が擦

れそうになるような至近距離にまで迫ったイャンガルルガ。その顔面に向かって上空からブーメランが襲ったのはその瞬間だった。
　左右から飛来するブーメランが黒狼鳥のクチバシに当たる。が、それは致命打にはならない。だが一瞬とはいえシルフィードに対する意識が削がれた。その隙を突いてシルフィードはイャンガルルガの真下へ潜り込むと、背負った蒼刃剣ガノトトスを打ち上げるように振り上げた。鋭い刃先は強烈な衝撃と共にイャンガルルガのクチバシに激突。イャンガルルガは悲鳴を上げて天空を見上げた。そこへルフィールの放った麻痺矢と共にクリュウが襲いかかる。
「このぉッ！」
　振り上げたオデッセイ改を目の前の脚へと叩き込む。吹き荒れる水と共に打ち出された一撃は黒狼鳥の鱗の一部を削りながら刃先は肉へと到達し、わずかな傷を与えた。が、それ以上に刃先が跳ね返される衝撃に彼の腕が悲鳴を上げる。
「……ッ!?　ま、まだまだぁッ！」
　それでも、激痛が走る腕を無理矢理動かして剣を振り上げ、もう一撃脚の向かって叩き込む。刃先が割れそうになるような硬い脚相手でも、クリュウは構わず剣を叩き込む。狙うはこれまでの攻撃で幾分か鱗が損耗した箇所。そこを狙って何度も攻撃を繰り返すが、常に動く目標に対しては外す事も珍しくない。その度に鱗が健在な箇所に刃先が当たり、腕に走る衝撃は激痛に変わる。彼は歯を食いしばりながら、諦めずに剣を振るい続けた。
　そんな彼の攻撃を鬱陶しく思ったのか、イャンガルルガはその場で突如体を反らすと甲高い怒号（バインドボイス）を放った。直下にいるクリュウはその声に動きを封じられてしまう。すぐに耳栓スキルを備えるシルフィードが援護に回るが、それよりも早く動く者がいた。
「先輩ッ！」
　高台の上からの声。シルフィードが振り返った時、月下に輝く狩人の放った一矢が天を舞った。飛翔する一矢は空気を切り裂きながら突き進み、咆哮（バインドボイス）を終えたイャンガルルガの首筋に

突き刺さる。同時にビンが砕け、中に入っていた液体がブチ撒けられてイャンガルルガの体表に発光しながら飛散。次の瞬間、イャンガルルガは突如体を痙攣させて動きを止めた。それを見て月明かりをバックにした少女の口元に笑みが浮かぶ。

「先輩ッ！　今ですッ！」

ルフィールの声に咆哮（バインドボイス）による硬直から脱したクリュウはうなずくと、目の前で麻痺毒によって動きを封じられたイャンガルルガへ襲いかかる。狙うは先程から狙いを定めている尻尾だ。

麻痺状態となって動けずにいるイャンガルルガに対して、クリュウだけではなくシルフィードが攻撃に加わり、イャンガルルガの眼前に立って溜め斬りの構えを取る。そこへ一瞬姿を消していたレイヴンが地面の中から飛び出して来た。その手には自分の体くらいはある大きさの小タル爆弾が握られている。

レイヴンは無言でイャンガルルガへ接近すると、手にした小タル爆弾を投擲。上部から伸びる導火線には火が灯り、その長さを短くしている。そして、痺れるイャンガルルガの背中に当たった直後に導火線の火種が中の火薬に着火。激しい爆発が黒狼鳥の体を襲う。

一瞬広がった黒煙の中から、今度はレイヴン自身が突っ込む。手にしたピッケルを勢いよく振り上げ、そして全身を使って一気に振り下ろした。その一撃はイャンガルルガの右翼についている鋭い爪に命中。そのうちの何本かをへし折った。

砕け散る黒狼鳥の爪と同時に落ちるレイヴン。だがその顔には不敵な笑みが密かに浮かんでいた。そんな彼の行動を一瞥し、口元に笑みを浮かべながら力を溜めるシルフィード。痺れて痙攣するイャンガルルガの顔面に改めて狙いを定めると、限界まで引き絞った力を一気に解放。勇ましい咆哮と共に強烈無比な一撃を叩き込む。

悲鳴も上げられずに溜め斬りの直撃を受けるイャンガルルガ。そこへクリュウが突っ込む。同じく痺れて動かない尻尾に向かってオデッセイ改を引き抜くと、その刃先を全力で叩き込んだ。

もう何度目の攻撃かもわからない。でも少しずつ鱗は剥がれ、次第に肉が顕になる。オデッセイ改の刃先はそこへ的確に滑り込み、血を

迸らせる。疲労で痛む腕を鼓舞しながら、必死になって狙いを定めて剣を振るい続ける。そうして何発か的確な攻撃を当てた頃、そろそろ体の自由を取り戻すと判断したシルフィードが全員に下がるよう指示を出し、それに従ってクリュウとレイヴンも離れる。

「クリュウッ！　落とし穴を準備してくれッ！」

「わかったッ！」

シルフィードの指示にクリュウは前線を離れて腰に下げた落とし穴とベルトを繋いでいるロープをオデッセイ改の刃で切断し、すぐさま設置する。場所はちょうどエリアの中央付近。どう動いても誘導しやすい場所だ。

ピンを抜いた落とし穴はすぐに溶解液を下部から噴出させて直下の土壌を一瞬で液状化させる。さらにネットを展開させて完了。この間はわずか数秒の出来事だ。その間に体の自由を完全に取り戻したイャンガルルガはゆっくりと目の前に敵を見据える。そのクチバシの端から零れ出る危険な黒煙を見てシルフィードの表情に戦慄が走った。

「しまった……ッ」

慌てて背負い直した大剣の柄を握り締めて走り出すシルフィードだが、そんな彼女の姿など見えていないようにイャンガルルガはある一点を恨めしげに睨みつける。その先では落とし穴の設置を今まさに終えたばかりのクリュウが屈み込んでいる最中だ。

「クリュウッ」

シルフィードの声にハッとなって顔を上げると、こちらを睨みつけているイャンガルルガの怒り狂った瞳と目が合ってしまった。狩猟中、モンスターと目を合わせてはいけないと言うハンターもいる。その理由は、殺意に満ちた瞳で見られる事で恐怖で体が萎縮して動けなくなってしまう事があるからだ。熟練のハンターならいざ知らず、比較的かけだしの部類に入るハンターは特にその注意が必要だ。

自分に向けられた明らかな敵意と殺意。赤みがかった黄色い瞳は恐怖を煌めかせながら彼を射抜く。背筋がゾクッと震え、一瞬離脱する為の動きが止まる。そして、まるでそれを待っていたかのように

イャンガルルガは突如怒号を上げながら彼に向かって駆け出した。
全身を左右に揺らしながら身を投げ出すようにして走るイャンガルルガ。シルフィードの「逃げろッ！」という声を聞くまでもなくクリュウは慌てて落とし穴の背後へと逃げる。が、
「バカ……ッ！」
遠くからレイヴンのそんな声が聞こえた。何事かと振り返ると、イャンガルルガはちょうど彼が仕掛けた落とし穴の上へと到達した。その瞬間、心の中で奴が罠にかかった事に喜ぶ自分がいた――だが、その彼は次の瞬間跡形もなく吹き飛んだ。
落とし穴を踏み、ネットが重みでたわんだ瞬間。イャンガルルガは突如翼を大きく広げると羽ばたかせ、猛烈な風と共にその場から浮き上がった。しかもその瞬間、脚の先の鋭い爪で落とし穴のネットを引き裂くという器用な技を披露。クリュウの目の前で、今しがた設置したばかりの落とし穴は無残にも破壊されてしまった。
「しまった……ッ」
クリュウは目の前で起きた出来事に自分の失態を悔やんだ。
イャンガルルガは怒り状態の時では落とし穴に引っかからない。それどころか今目の前で起きたように爪の先でネットを引き裂いて使用不能にしてしまう。自分で知識として知っていて、さらにシルフィードに詳しく説明してもらったのに。今自分は、そんな事前知識を無視した行動を取り、貴重な落とし穴を一つ失ってしまった。
ディアブロヘルムの下で、悔しげに彼の顔が歪む。オデッセイ改を握り締める拳にも、ただ握り締めるのとは違う力で拳が震える。
シルフィードはクリュウの安全及び、彼の目の前で壊された落とし穴を見比べると、低空飛行で後退しながら地面へと着地するイャンガルルガへと視線を向け、悔しげに唇を噛んだ。
「私のせいだ……ッ」
クリュウが失敗したのではない。自分の判断ミスが原因だ。
イャンガルルガの怒り状態を見極める事ができずに落とし穴を設置するよう指示を出し、結果的に落とし穴は失われてしまった。彼に仕掛けるよう指示した、自分の判断ミスだ。

地面に着地し、今しがた落とし穴を切り裂いた爪で地面を何度も擦りながらイャンガルルガは低く唸り、こちらを睨みつけている。再び鶴翼陣形でイャンガルルガの包囲を試みるクリュウ達。だがそんな彼らを威嚇するようにイャンガルルガは天高く咆哮（バインドボイス）を轟かせた。

第１８８話　空回りする想いを乗り越えた先にあるもの

激昂するイャンガルルガは怒号を上げながら全力疾走。その先には閃光玉を構えたクリュウが立っている。クリュウはそのまま背後に向けて閃光玉を投擲し、炸裂する閃光はイャンガルルガの視界を封じた。

視界を封じられた事で突進をやめたイャンガルルガに対して剣士組が一斉に殺到するが、イャンガルルガは甲高く咆哮（バインドボイス）を轟かせ、その歩みを止める。視界を封じられていても、その特化した聴覚がある限り迫り来る敵の気配はわかるのだ。

だが、クリュウ達は咆哮（バインドボイス）で動きを封じられても、シルフィードの突撃は止められない。鳴き終えてゆっくりと降りるイャンガルルガの顔面に向かって、シルフィードは容赦なく一撃を叩き込んだ。しかし一撃では足りず、そのまま足を踏ん張りながら振り上げの追撃も加える。そんな彼女を援護するようにルフィールは咆哮（バインドボイス）の範囲外である高台から遠距離射撃で支援する。

シルフィードの剣先がイャンガルルガの顔面を叩いたと同時に、体の動きを封じられていたクリュウとレイヴンも自由を取り戻した。クリュウはすぐにルフィールに声を掛け、手で合図する。ルフィールはそれを理解すると、弓を折り畳んで姿を消した。それを見てクリュウもすぐに腰に下げていたシビレ罠に手を伸ばすと、エリアの中央部分に設置する。くるぶし程の高さしかない草の中に置いて安全ピンを抜いて準備完了だ。

シビレ罠の設置を終えたクリュウはすぐにルフィールが先程までいた高台を目指す。ツタを登って上まで行くと、ちょうどルフィールが戻って来た。その腕には大きなタルを抱えている。クリュウが用意した決戦兵器、大タル爆弾Ｇだ。

「ありがとルフィールッ」

爆弾を運ぶのは重いというのもあるが何よりも誤爆するかもしれ

ないという不安から精神的にも疲弊するものだ。事実ルフィールもクリュウに礼を言われたのに笑顔が引き攣っている。すぐにクリュウは彼女から大タル爆弾Ｇを受け取ると、同じように腕で抱きかかえる。

「それじゃ、シルフィードを援護しながらイャンガルルガの足止めをお願い」

「了解しました」

ルフィールはすぐさま弓を展開させると言われた通り閃光玉の効果が切れて執拗に襲いかかるイャンガルルガに苦戦するシルフィードとレイヴンを援護する。番えた矢の数は五本。それらを一斉に撃ち放った。

ルフィールからの支援の矢は的確にイャンガルルガに命中し、意識が一瞬削がれた。その瞬間にシルフィードは回避から反転攻勢に出る。レイヴンも再びブーメランを放った。

二人と一匹の攻撃を一瞥し、クリュウは高台から降りる。と言っても一気に飛び降りたら重い爆弾を抱えているのだから転倒する可能性が高い。当然転べば大爆発だ。そんなオチは絶対嫌だからこそ、クリュウは慎重に岩壁のわずかな窪みを足先で見つけ、そこに足を引っ掛けてゆっくりと降りていく。いつも草食竜の卵を運搬する際に使う道だが、手に持っている物が全く違うので、いつもと違った緊張感に額に汗が浮かぶ。それでも一応は慣れた道。何とか下まで降りると、安堵したようにため息を零す。しかしすぐに気を引き締め直し、自分が設置したシビレ罠まで向かう。

「シルフィッ！」

イャンガルルガと肉薄しながら剣を振っていたシルフィードはその声に振り返る。そしてクリュウの姿を見て全てを悟ると蒼刃剣ガノトトスを背負い、イャンガルルガから撤退する。レイヴンも地面へと潜って離脱した。

突然撤退する敵を前にイャンガルルガは激昂しながらその背中を追って突進する。

追いかけて来るイャンガルルガに振り返ると、シルフィードはすか

さず真横へと跳んだ。当然突然軌道を変えた相手に合わせられる程イャンガルルガの巨体は軽くはない。止まる事はできず、そのままクリュウが仕掛けたシビレ罠を踏み抜いた。

「ギャワァッ!?」

足元から強力な麻痺毒が体内へと流れ込み、再三イャンガルルガの巨体の動きを封じた。それを見てクリュウはすぐに持っていた大タル爆弾Gをイャンガルルガの足元に設置し、離脱。手で高台の上にいるルフィールに合図を送ると、待ってましたとばかりにルフィールは一本の矢をギリギリと弓全体を軋ませながら構え、狙いを定めて撃ち放つ。放たれた一撃は寸分違わず大タル爆弾Gに命中。その衝撃で大タル爆弾Gは起爆し、イャンガルルガの腹部直下で大爆発。その衝撃にはさすがのイャンガルルガも耐えられずに横倒しに転倒した。

巨体故に一度転べばなかなか起き上がれない。そこへ爆発の衝撃を回避していたシルフィードとクリュウ、地面の中へ退避していたレイヴンが殺到。そして高台の上からもルフィールが再び的確な矢の雨を降らす。横倒しになった今だからこその集中攻撃だ。

シルフィードは溜め斬りではなく、あえて普通に剣を振り下ろした。その一撃はイャンガルルガの腹部に炸裂。すぐさま斬り上げから再び振り下ろしへと攻撃を繋げていく。転倒の場合は起き上がるまでの時間が短い。溜め斬りだと不発になる可能性がある為にわざと彼女は溜め斬りを使わなかったのだ。

レイヴンも地面の中に隠していたのか、小タル爆弾を構えて投擲。倒れたイャンガルルガの顔面で爆発させた。

そしてクリュウもイャンガルルガの背中へとオデッセイ改の刃を叩き込む。背中の鱗は強固だが、これまでルフィールが浴びせた無数の矢のおかげでわずかではあるが鱗も疲弊していた。オデッセイ改の刃はそんな鱗を弾き飛ばし、中に隠された肉を斬り裂く。迸る血と水の舞の中、クリュウはひたすらに剣を振るい続けた。

ルフィールも負けじと誰もいないイャンガルルガの下半身部分を狙って矢を降らせる。今のうちに少しでも脚にダメージを与えておけば再び転倒させる事ができる。そんな計算が彼女の頭にはすでに

あった。
　だがクリュウ達の猛攻撃はそう長くは続かない。シルフィードの思っていた通りイャンガルルガはすぐに起き上がってしまった。急いで全員イャンガルルガの即撃範囲から離脱する。しかしそんなのはイャンガルルガにとっては無駄な事。すかさず咆哮（バインドボイス）を轟かせてクリュウとレイヴンの動きを封じた。シルフィードが急いで前に出るが、イャンガルルガは二人纏めて吹き飛ばそうと必殺の三連ブレスを放った。すかさずシルフィードはクリュウの前に立ち塞がると蒼刃剣ガノトトスの太い峰を前に出しながら横へ構え、腰を落として衝撃に備える。直後、強烈な一撃が彼女を襲った。
　一瞬にして爆発に包まれた二人を見て、ルフィールの顔が真っ青に染まる。だがすぐに巨大な剣を振り回して煙を払ったシルフィードが現れる。その背後では体の自由を取り戻したクリュウも健在だ。
「あ、ありがとシルフィ。助かったよ」
「礼を言われるような事じゃないさ。いくぞッ」
　シルフィードは蒼刃剣ガノトトスを背負い直すと、ブレスを撃った反動で一瞬動きを止めているイャンガルルガに接近を試みる。遅れてクリュウ、そして彼らが攻撃されている間にイャンガルルガの側面へと移動したレイヴンが一斉に攻撃を仕掛ける。驚いていたルフィールもほっと胸を撫で下ろすと、再び矢を番えて撃ち放った。
　先陣を切ったシルフィードはイャンガルルガにいち早く接近するが、イャンガルルガも激しく暴れて抵抗する。大きく顔を振り上げて硬いクチバシをハンマーのように地面へと叩きつける。その一撃で地面は簡単に割れる。信じられないような威力だ。しかも一発ではなく連続しての攻撃。仕方なくシルフィードは正面を諦めて迂回する。その間に後続のクリュウと側面に回っていたレイヴンが先に動いた。
　レイヴンは再び二本のブーメランを投げ飛ばし、クリュウも今持っている最後の小タル爆弾Gを投げ飛ばした。ブーメランと小タル爆弾Gが炸裂したのはほぼ同時。ブーメランは翼膜にわずかな傷を追わせ、小タル爆弾Gは顔面に命中して爆発。一瞬だけイャンガルルガ

の視界を封じた。その隙にクリュウは一気に接近し、イャンガルルガの硬いクチバシにオデッセイ改の刃を叩き込んだ。一撃では足りず、もう一撃、そして回転斬りへと繋げる。一方のシルフィードもイャンガルルガの懐へと潜り込むと、蒼刃剣ガノトトスを大きく振り上げ、腹の鱗を削り取った。そしてレイヴンもイャンガルルガの脚へと近づくと狙いを定める。狙うは鱗と爪のわずかな隙間。そこへ的確にピッケルの刃を滑り込ませる。鱗を無視した直接のダメージにイャンガルルガが悲鳴を挙げてたたらを踏む。レイヴンは初めて自分の攻撃でイャンガルルガが怯んだのを見てニヤリと不敵に笑った。

剣士組の奮闘を支援するように、ルフィールも高台の上からの支援射撃をやめない。的確にイャンガルルガの背中に矢を命中させていく。その時、人間が入れるような場所ではないもっと高台の上から何かが来る気配を彼女は察知した。次の瞬間、エリアに突如現れたのは三匹のランポスだ。思わぬ侵入者に剣士組の目がそちらに向く。その隙にイャンガルルガは咆哮（バインドボイス）を轟かせながら浮き上がり、後ろへ大きく後退した。

「レイヴンッ」

ルフィールの声にレイヴンはすかさず前線を離れると、威嚇の声を挙げるランポスへと突撃する。同時にルフィールも狙いをイャンガルルガからランポスへと変え、速射砲のように続けざまに矢を放った。

ルフィールとレイヴンが突然の乱入者であるランポスへと攻撃を切り替えた為、前線はクリュウとシルフィードの二人に託された。それを見てクリュウが真っ先に動いた。閃光玉を投擲してイャンガルルガの視界を封じ、接近してイャンガルルガの顔面を叩く。シルフィードも接近すると再び懐へと潜り込み、アキレス腱を狙って蒼刃剣ガノトトスをフルスイング。わずかにイャンガルルガが動いたせいでアキレス腱には当たらなかったが、偶然にも膝の裏側へと命中した一撃に、イャンガルルガは堪らず転倒した。

倒れたイャンガルルガへと、二人は攻撃の手を緩めない。シルフィードは尻尾の付け根部分を狙って必殺の溜め斬りを。クリュウ

も顔面を狙って剣を振り下ろす。
　シルフィードの溜め斬りは見事に炸裂するも、次の一撃を入れる前にイャンガルルガが起き上がってしまう。怒り狂ったイャンガルルガは大きく咆哮（バインドボイス）を轟かせてクリュウの動きを止める。しかも彼が立ち止まったのはイャンガルルガのすぐ目の前だ。目の前で動けずにいる憎き敵目掛けて、イャンガルルガは容赦なくクチバシの一撃を振り下ろした。
「がああああぁぁぁッ!?」
　直撃だった。硬いクチバシの一撃を受けてディアブロメイルが悲鳴を上げる。その衝撃は尋常ではなく、クリュウの体は簡単に吹き飛ばされてしまった。地面を何度か転がると、視界がグルグルと回っていた。頭を振って半身を起こすと、体に激痛が走り顔が歪む。直撃したとはいえ堅牢なディアブロシリーズ。直接の痛みは衝撃で負った打ち身くらいだ。
　クリュウはすぐに回復薬グレートを飲んで失った体力を回復させると、すぐに前線へと復帰する。だがイャンガルルガはシルフィードの猛攻を無視して接近するクリュウに再び襲い掛かる。クチバシを大きく振り上げて叩き落すあの攻撃だ。クリュウは一撃目は何とか避けたが、二撃目は避けられずに盾でガードする。当然勢いは殺せずに大きく後ろへと後退させられた。先程負った怪我に響く衝撃に、クリュウは思わず膝を折った。
　クリュウが膝を折ったのと同じ頃、ランポス全てを撃破したルフィールとレイヴンがそれぞれ戦線に復帰した。レイヴンのはなったブーメランとルフィールの矢の雨がイャンガルルガの集中を阻む。
　クリュウがいなくなった穴を埋めるようなルフィール達の猛攻撃にイャンガルルガは彼への追撃を断念し、先程から懐で暴れるシルフィードに向かってイャンガルルガは二歩後退し、必殺のサマーソルトを放つ。ちょうど剣を振り終えたばかりだったシルフィードはその一撃を受けて吹き飛ばされてしまう。痛みに顔を歪めながらもゆっくりと起き上がるシルフィード。そんな彼女への追撃を防ぐ為、クリュウはすかさず閃光玉を投げて再びイャンガルルガの視界を封

じた。
　シルフィードは手で礼を表すと、回復薬グレートを飲んで失った体力を回復させる。続けて全身を蝕む鈍痛や吐き気に慌てて解毒薬を取り出すと、一気に飲み干した。毒状態を脱したシルフィードはそのまま砥石を使って蒼刃剣ガノトトスの刃を回復させる。
　視界を封じられたイャンガルルガは敵の接近を阻む為に咆哮（バインドボイス）を轟かせる。だが今回はクリュウとレイヴンは迂闊には近づかず、攻撃はルフィールの遠距離射撃に任せていた。一人攻撃役を引き受けたルフィールは容赦なく連続攻撃を続ける。
　剣士組がそれぞれ砥石などを使って態勢を整えるのと、イャンガルルガの視界が回復したのは同時だった。それぞれイャンガルルガを包囲するように展開する。だがどんな攻撃にも対応できるよう全員が離れたと同時にイャンガルルガは突如翼を大きく広げると、激しい風圧を発生させながら浮き上がった。そしてそのままゆっくりと上昇していく。慌ててルフィールが矢を放つが、その一矢は最大到達高度まで昇ってもイャンガルルガに触れる事はできず、あっけなく地面に落ちた。そしてイャンガルルガはさらに上昇すると、人間では手が出せない上空で水平飛行に移ると、そのまま別のエリアの方向へと夜の空に消えて行った。
　イャンガルルガがいなくなった事でエリアに静けさが戻る。全員の緊張が解け、クリュウもほっと一安心。高台の上にいたルフィールも降りて彼へと近づく。一方シルフィードは珍しくその場に腰を落とすと、道具袋（ポーチ）の中から水筒を取り出すと中の冷たい水を一気に飲む。さらにそれだけでは足りず、頭から水を被った。冷たい水が動き続けていた事で火照っていた体を冷やし、風をより冷たく感じる事ができる。
　頭から水を被ってビショビショになったシルフィードは頭を振ると、再び道具袋（ポーチ）に手を伸ばす。だが目的の物を掴む前に、近寄ってきたクリュウがその目的の物、タオルを差し出していた。
「……すまない」
　彼のタオルを受け取ると、シルフィードは頭と顔を拭く。汗も一緒

に拭い取れ、かなりサッパリした。そんな彼女の姿を、ディアブロヘルムを脱いだクリュウが不安げに見つめていた。
「シルフィ、一人でがんばり過ぎだよ」
今日の狩りで、シルフィードは常に前線に立って戦っていた。別にそれ自体は珍しくはない。彼女が前衛に立って戦うのはいつもと変わらない。だが彼女に匹敵する程の攻撃力を有し、且つ他を圧倒する機動力を持って戦場を翔ける侍がいない今、彼女への負担はいつもよりも大きい。
心配するクリュウの言葉に、シルフィードは「別に大した事じゃないさ」と心配するなと言いたげに答えた。
「私は元々はソロハンターだ。それに、時々ソロで活動する事もある。これくらい造作も無いさ」
「で、でも……」
「心配するな。蒼銀の烈風の腕はなまっちゃいないさ」
不安そうな彼を安心させるように、シルフィードはそっと彼の頭を撫でた。するとクリュウは「こ、子供扱いしないでよッ」とその手から逃れる。そんな彼の姿を「すまんすまん」と笑いながら謝るシルフィード。クリュウは恥ずかしさで頬を赤らめながらフンッとそっぽを向いてしまう。
そんな二人の姿を、少し離れた場所から見ていたルフィールは不満そう。ムッとしながら彼へと近づくと、その腕を取って自分の方へ引き寄せ、威嚇するようにイビルアイでシルフィードを睨みつける。するとシルフィードは「別に彼をどうこうする気は私にはないさ」と敵意がない事をアピールするように両手を挙げる。そんな彼女を睨みつけたまま、ルフィールは静かに問いかけた。
「……蒼銀の烈風、以前ソードラントにそんな二つ名を持つ剣士がいたと聞いた事があります」
彼女の口から《ソードラント》という言葉が出た瞬間、柔和だったシルフィードの表情が厳しいものに変わった。クリュウは知っている。彼女に《ソードラント》の話を振るのはタブーだという事を。慌てて止めようとしたが、それよりも先にルフィールが動いてしまう。

「一般人も巻き込んだ市街戦に、古龍戦の際に共闘しているはずの別のパーティーをわざと見殺し、数々の暴力騒動に防衛対象の破壊。悪い噂には事欠かない連中だと認識しています」
「……まぁ、確かにその通りだな」
「あなたはかつてそのチームに所属していたんですか？」
「……あぁ」
　シルフィードの返答に、ルフィールの表情が変わる。これまでと違った、明らかな敵意や嫌悪感に満ちた瞳。自然と、言葉遣いも厳しいものに変わる。
「そんな史上最悪のチームに属していた人が、何で先輩と一緒にいるんですか。どうして平然とボク達の前にいられるんですか。一体何を企んでいるんですか？」
「ルフィール」
　追撃の手を緩めないルフィールを止めたのはクリュウだった。驚くルフィールと、彼女の激しい口調に返す言葉も無く黙っていたシルフィードも、そんな彼をジッと見詰める。
「昔の事だよ。それにシルフィは例えそんな連中と一緒だったとしても、そういう事はしてないよ」
「確証はあるんですか？　昔の事を、先輩はどれだけ知っているんですか？」
「……多くは知らないさ。でも――今日のシルフィの戦い方を見て、彼女がそんな人に思えた？」
　クリュウの問いかけに、ルフィールは気まずそうに「そ、それは……」と押し黙る。正々堂々真っ向勝負。どこかのバカが好きそうな言葉を表したかのような振る舞いで戦う彼女は、決して彼女が認識しているような連中とは違う。正直、彼女自身も半信半疑だったのだろう。
「あまり人の過去は詮索しないの。今の彼女を見てあげてよ」
　クリュウの言葉に、ルフィールはうなずくとシルフィードに深々と頭を下げて謝罪した。シルフィードも「気にするな。そういう追求には慣れている」と彼女の罪悪感を軽くしようと発言する。

「過去を知られたくないのは、ボクも同じです。なのにボクは……」
「やめてくれ。まだ狩猟の最中だ。そんな気持ちで接せられても困る。これまで通り、良き狩友（とも）として接してくれ」
「狩友（とも）……」
　目を大きく見開いてルフィールは驚いた。そんな風に言われたのは、いつ以来だろうか。イビルアイがバレれば嫌悪され、罵倒される。隠している時はいつバレるかわからないという恐怖から他人とあまり深く関わろうとはしなかった。だから、そんな風に言われたのは本当に久しい。それも、自分のこの瞳を認めながら。
「……ありがとうございます」
「何故礼を言われる事がある。さぁ、無駄話はこれくらいにして奴を追うぞ」
　話を切り上げて立ち上がると、シルフィードは一人歩き出す。そんな彼女の背中を見詰めていたルフィールの肩をクリュウが優しく叩いた。
「あれはシルフィなりの照れ隠しだよ」
「そう、なんですか？」
「シルフィは優しいよ、僕よりもずっとね」
「……先輩の優しさに勝てる人など、この世には存在しません」
「恥ずかしい事言わないでよ」
「――でも、ボクはあの人の事を少し誤解していたかもしれません」
　そう言ってレイヴンと並んで先を進むシルフィードを見詰めるルフィールの瞳は、ずいぶんと柔らかいものに変わっていた。クリュウやシャルルを見る時と同じ、心底安心しているような、信頼に満ちた瞳。彼女の中で、シルフィードに対する評価が変わった証拠だ。
「先輩があの方を信頼されるの、少しだけわかる気がします」
「そっか……」
　クリュウは短くそれだけ答えると、そっと彼女の背中を押して一緒に歩き出す。
　しばらく歩いていると、クリュウはルフィールから離れてシルフィードの横へつくと、何かを相談し始めた。お互いに意見を出し合

いながら、より良い狩りの方向性を模索する。そんな二人の、互いを信頼し合った関係――ちょっとだけ、羨ましく思った。

「……仲間、か」

自分はクリュウだけいればそれでいい。ずっとそう思っていたし、その基本方針は今後も変わる事はないだろう。だが、あの二人を見ていると、互いに信頼し合える仲間というものを羨ましく思える。

――あなたもきっといい狩友（ともだち）ができるわよ。私の友達にも素直じゃなくてずっと一人だった子がいたけど、今では唯一無二の親友……ううん、姉妹を得た。あなたもきっと、いつかそんな狩友（ともだち）ができるわよ。この街でのあなたの友達である私が言うんだから、間違い無いわよ――

ふと頭の中で、ドンドルマでやたら自分を気にかけてくれていたギルド嬢の言葉が過る。

自分に仲間なんて、存在するのだろうか。こんな異質な瞳を認め、自分でも自覚がある他人に厳しすぎるこの性格も認めてくれて、それでいて傍にいてくれる人。クリュウ以外に、存在するだろうか。

――仲間を助けるのに、理由なんてないっす――

クリュウの卒業試験の際、突如乱入してきたドスファンゴから身を呈して守ってくれた底抜けのバカが言った言葉が頭の中に響く。

シャルル・ルクレール。

きっと、百歩譲って、自分にとってそういう存在になるのはきっと……

「……弱音は吐かないって決めたんだ、もう二度と」

頭の中でバカ丸出しな笑顔を浮かべる年上の同級生の顔を掻き消し、ルフィールは気を引き締め直す。今はイャンガルルガの討伐中だ。今は目標に向かって全力で前に進むだけ。振り返っている暇など、ない。

「……無理するニャ」

いつの間にか隣を歩いていたレイヴンの言葉にルフィールは静かにうなずき「大丈夫よ」と短く答えた。その表情は再び狩人のものに変わっていた。レイヴンは何も言わず、そんな相棒の横を歩き続け

る。
一行はエリア2の高台へと移動し、荷車を回収してから元来た道を戻るようにエリア6へと入る。そして先程と違ってエリア7へと向かう。ペイントの匂いはその先、エリア8から漂って来る。
レイヴンを先頭にクリュウとルフィールが並び歩き、その背後を殿役のシルフィードが荷車を引いて歩くという今回のチームでの基本陣形のまま、一行はエリア8へと入った。
「ギュワアアアアッ！」
怒号と共に放たれた単発の火球ブレス。クリュウはそれをギリギリで回避すると構わず突撃を続け、ブレスを撃った後のわずかな隙にイャンガルルガのクチバシにオデッセイ改の刃を叩きつけた。
「無理するなクリュウッ！」
切れ味が悪くなった為にクリュウに前衛を任せて退却し、今まさに砥石を使って切れ味を正していたシルフィードが叫ぶ。そこから少し離れた場所からはルフィールが矢を撃ちながら彼を援護し、レイヴンもイャンガルルガ側面からブーメランを投げている。
エリア8での戦闘は実に二十分以上経過していた。その間にクリュウ達は的確に攻撃を重ねてイャンガルルガの体力を消耗させていた。だが反面クリュウ達も疲労が積み重なり、最初の頃に比べて明らかに動きにキレがなくなり始めていた。
皆の士気は高いが、体が追いついて来ていないのだ。シルフィード自身も先程から荒い息を繰り返している。
体力的には辛いのは事実だが、皆の士気が高いのもまた事実だ。退却すればここまで最高に維持してきた戦意を下げる事になる。それはそれで辛い。特に剣士組の武器が弾かれる煩わしさは戦意を失わさせる最大要因だ。
撤退するべきか、それともこのままの勢いを維持して一気に畳み掛けるか。シルフィードは選択に迫られていた。
シルフィードが悩んでいる事を、比較的近くにいたルフィールは気づいていた。彼女自身はこういう場合は一気に畳み掛けるタイプだが、撤退するべき理由も理解していた。正直、結構足はフラフラだ。

状況を冷静に分析しながらも、それでも葛藤するシルフィードを見てルフィールは突然動いた。
自分は攻撃続行支持派だ。ならば、悩む指揮官の背中を押すような動きをすればいい。彼女はそう考えたのだ。それに、自分のかっこいい所を彼に見ていてもらいたい。そんな気持ちも、彼女を突き動かしていた。
矢を連続して放ちながら一気に接近すると、突然前衛に出て来た彼女に驚くクリュウの横を通り抜け、矢筒の中から矢を六本取り出すと、三本ずつ左右の手に握り締める。いずれも強撃ビンを備えた強撃矢だ。
旋回攻撃で尻尾を振るって接近を阻むイャンガルルガに対して、ルフィールは姿勢をわずかに低くして尻尾のスイングを回避し、一気にイャンガルルガの懐へと入るとクリュウやレイヴンがこれまで積み重ねてわずかに鱗が剥がれて肉がむき出しとなった部分に向けて右手の強撃矢を叩き込んだ。
衝突と同時に爆発し、深々と矢が肉へと刺さる。続けて左の強撃矢も同じ箇所を狙って叩きつけた。一本はへし折れたが、合計五本の矢がイャンガルルガの内側の太腿に深々と刺さった。続けて今度は通常矢を二本ずつ両手に構えたルフィールは足元から脱するとクチバシを上下に振り回すイャンガルルガの右横へと現れ、下がり切ったクチバシに矢を叩きつけた。
激痛に耐えながら威嚇するようにクチバシを大きく開いたイャンガルルガ。そこへルフィールがいつの間にか導火線に火をつけた小タル爆弾Gを捩じ込んだ。「グエェッ!?」と驚きの声を上げてクチバシを閉じた瞬間に起爆。イャンガルルガは自らのブレスとは違う爆発が起きた口を大きく開いて天を仰ぐ。口の中からは黙々と黒煙が上がり、見ればクチバシのヒビはより深いものに変わっていた。
ルフィールの猛攻は続く。イャンガルルガを翻弄するように脚元を動きながら矢を的確に傷口へと捩じ込んでいく。その動きは常に紙一重での回避の連続だ。クリュウはルフィールの動きがあまりにもギリギリ過ぎて自分が勝手に動けば邪魔になるのではと動けずに

いた。その間も、ルフィールの猛攻は止まらない。
「いけるッ」
自分の連続攻撃について行けていないイャンガルルガを見て、ルフィールは勝てると思った。このまま相手を翻弄するように動けば、順調に狩りが進めば、勝てる。そう思った。
――だが、狩りとは必ずしも順調に進む訳ではない。むしろ、思うように進むものではない。高ぶる気持ちが、狩りの基本を彼女から失念させていた。
突如イャンガルルガは頭をもたげると、周りを威嚇するように天高く吠える。甲高い強烈な咆哮（バインドボイス）が辺りを包み、小賢しい敵を威圧する。
次なる一撃を放とうとしていたレイヴンも、様子が変わった事に慌てて閃光玉を投げようとしたクリュウもイャンガルルガの咆哮（バインドボイス）で動きを封じられる。そしてそれはイャンガルルガのすぐ傍にいたルフィールも同じだ。
生物としての本能に存在する恐怖感を刺激するモンスターの咆哮（バインドボイス）。耳栓スキルさえあれば防ぐ事はできても、一度呼び起こされた恐怖感を妨げる事はできない。それは生物としての生が脅かされる際に本能が危険だと知らせる働き。生物である以上、生物としての本能には決して逆らう事はできない。
イャンガルルガのすぐ傍で両耳を塞ぎながら鼓膜を守るも、一度呼び起こされた恐怖で体は全く動かなくなるルフィール。頭では早く動かなくてはいけない事は重々承知しているが、体が全く言う事を聞いてくれない。まるで自分の体じゃないかのように、硬直したまま動けない。
一足早くイャンガルルガが咆哮（バインドボイス）を終え、ゆっくりと動き出す。だがクリュウ達が動けるようになるのは一瞬遅れてしまう。その一瞬こそが、イャンガルルガの一発逆転の時間だった。
足下にいるルフィールを狙って、イャンガルルガはゆっくりを足を滑らせるように後退する。その予備動作が意味するものを、彼女もクリュウ達もよく知っていた

――サマーソルト……ッ!?――

頭ではイャンガルルガが次に放つがわかっている。なのに、体は自分の思うように動いてくれない。そしてようやく体の自由が戻った時にはもう、避けられないタイミングにまで状況が悪化していた。

ゆっくりと、イャンガルルガが浮かび上がり、その場で後転する。死の瞬間というのは時間がゆっくり流れるように感じると何かの本に書いてあった。そんなどうでもいい情報が流れ込むほど、彼女の頭はもうなにも考えられなくなっていた。頭ではわかっている――もう、どうしようもないのだと。

最期の瞬間を覚悟して、迫り来るイャンガルルガの尻尾から目を逸らす――その時、迫り来る毒トゲの付いた尻尾とルフィールとの間に体を捩じ込ませる者がいた。それは白銀の美しい長髪を勇ましくポニーテールで結った凛々しき戦姫――シルフィード。

シルフィードはルフィールの前に立つと同時にすぐさま背負った蒼刃剣ガノトトスを前でガードするように横向きに構え、腰を落として衝撃に備える。それは一瞬の動作。そして次の瞬間、強烈な一撃が蒼刃剣ガノトトスに激突。シルフィードの体は大きく後退し、ルフィールも巻き込んで転倒した。

「シルフィッ！　ルフィールッ！」

クリュウは今度こそ構えた閃光玉を投げてイャンガルルガの視界を再び封じて倒れた二人に駆け寄る。レイヴンは単騎でその場で暴れるイャンガルルガに迫り、ブーメランを駆使して攻撃。わずかなチャンスも無駄にしないのが彼のポリシーだ。一見すると冷徹にも見えるが、時々チラリとルフィールの方を見ている事が彼がそうではない事を証明しているだろう。

倒れたルフィールは背中を強打したらしく咳き込んでいる。だが自身を襲う痛みは予想していたよりもずっと大した事はなく、驚きを隠せない。そして、自分の横で倒れているシルフィードの姿を見て、言葉を失った。

「……さ、さすがに重い一撃だな」

自身も倒れた際に頭を強打したらしく痛そうに後頭部を押さえな

がらシルフィードは起き上がる。そしてゆっくりと振り返ると自分を呆然と見詰めているルフィールと目が合う。その瞬間、月明かりの下でシルフィードは頼もしい笑顔で彼女を出迎えた。
「怪我はないか？」
「は、はい……」
「そうか」
　それだけ返してシルフィードは立ち上がってルフィールの腕を掴んで彼女を立たせると、まだ呆然としている彼女の頭の上にポンと手を置くと、少し乱暴に頭を撫でる。
「まぁ、無理はするな。前衛は私に任せてもらえないか？　君の援護、頼りにしているぞ」
　そう言ってシルフィードはルフィールの肩を優しく叩くと、レイヴンを援護するようにイャンガルルガに突撃する。一瞬前にイャンガルルガの強力なサマーソルトの一撃を耐え抜いたとは思えない強靭さだ。
　呆然と突撃していくシルフィードの背中を見詰めていると、背後からゆっくりとクリュウが近づいて来た。
「怪我はない？」
「は、はい。大丈夫です」
「シルフィも大丈夫そうだね。良かった」
　心からほっとしたように言う彼の言葉に、ルフィールの表情が曇る。
　これで二回目だ。一回目はクリュウに庇ってもらい、そして二回目はシルフィードに庇ってもらった。自分は今日の狩りで、仲間を二回も危険に晒してしまった。
　クリュウと一緒の狩り。それが嬉しかったのは事実だ。だがそれが自らの判断を鈍らせ、二人に迷惑を掛けたのも事実だ。
　本当は、こんなはずじゃなかった。
　今回の狩りはいつもと違う。クリュウと一緒の狩りだ。自分の今の実力を、彼に見て欲しかった。
　がんばろう、自分の成長した実力を彼に見てもらおう。そんな想い

が彼女を突き動かしていた。だが実際は気持ちだけが先に走ってしまい、空回りしてしまった。結果的に彼の仲間に迷惑を掛け、彼の目の前で失態を晒してしまった。

「すみません……」

彼女の口から零れたのは、そんな弱々しい謝罪の言葉だった。

もう二度と、クリュウに迷惑を掛けない。そう決めていたのに、彼と一緒にいるのが幸せで、彼に頼られるのが嬉しくて、彼と狩りができるのが楽しくて、つい調子に乗ってしまった。

冷静に状況を見極め、できうる最大限の力と方法で的確に、そして鋭く攻めるのが自分の狩猟道だ。なのに今の自分は、そんな自分で決めた基本方針ですら守れていない。有頂天になって返り討ちにあった、ただの情けない負け犬だ。

悔しくて、悲しくて、空しくて、許せなくて。唇をギュッと強く噛む。様々な自分を責める感情が彼女の中で膨れ上がった。

黙りこんでしまったルフィールを見て、クリュウは少し考えると、彼女の頭を少し強めに小突いた。突然殴られたルフィールは驚いて視線を上げる。なぜ殴られたのかわからないと呆然と立ち尽くす彼女に向かってクリュウは静かに言う。

「――ルフィールは強くなったよ」

それは、ルフィールが求めていた感想だった。驚く彼女の前でクリュウは続ける。

「ほんと、ビックリするくらい強くなった――でもさ、何だか昔よりも辛そうに見えるよ」

「辛そう……ボクが？」

「うん。何だか色々と無理してるみたいでさ――まるで、自分の実力を認めてもらおうと無理してる感じ」

クリュウの言葉に、ルフィールは頭を殴られたような衝撃を受けた。そしてしばし呆然と立ち尽くした後、全てを理解した彼女の顔には、自虐的な笑みが浮かんでいた。

「……全部、お見通しだったんですね」

やっぱり、彼には敵わないなぁ。改めてそう思った。

自分がこの狩りに特別な想いを込めて挑んでいる事を、彼はとっくに気づいていたらしい。心の内を表に出さない事では結構自信があったのだが、どうやら彼には全く効果がなかったようだ。
「……ボクは、先輩に強くなった自分を見て欲しかったんです。だから、ちょっと無理してたのは認めます」
自覚はあった。イャンガルルガ相手に近接戦を挑むのはかなり無理があったのだ。でも、少しでも自分の強さを彼に見て欲しい。そんな想いが、ずっと自分に無茶をさせていたのだ。
「シルフィが言ってたでしょ。前衛は任せろって。だからさルフィール、昔のように――僕が背中を預けられるような弓使いになってくれるかな？」
彼は言ってくれた。自分に背中を預けると。過去にあんな失態をしでかした自分に、もう一度預けてくれると。そして今、どうしようもなく子供みたいな理由で無茶をしていた自分に、また預けてくれると言った。彼の優し過ぎる言葉が、胸にしみる。
自分はバカだった。シャルルの事をとやかく言えない程に、バカだった。
何を難しく考えていたのか。自分の成長した姿を見せたいとか、強くないと彼の傍にいてはいけないとか。クリュウはそんな事微塵も思っていなかった。ただ彼は――自分との狩りを楽しんでいただけだったのに。
「ボクは、大バカものです」
「ルフィールはバカじゃないよ。ただちょっと小難しく考え過ぎるだけ――もしかして、僕の背中を任せるのってそんなに負担になるの？」
少しでも彼女の負担を取り除こうとする彼の言葉に対して、ルフィールは首を横に振る。
「そんな事ありません。ボクにとって、先輩の背中を任せてもらえる事は何にも代えがたい勲章です――そうです、難しく考えなくてもいいんです。しっかりと先輩をお守りできれば、それで」
そうつぶやくように言う彼女の顔からは、まるで憑き物が落ちたか

のように晴れ晴れとしていた。どうやら、自分なりの答えが見つかったらしい。それを見て、クリュウもひと安心する。
「じゃあ、よろしく頼むよ。言っておくけど、これでも僕は自分の背中を預けられる人は選り好みするタイプだよ？　そんな僕が自信を持って任せられるのは、そう多くない。この意味、わかる？」
　試すような口ぶりでクリュウは彼女の耳元でささやく。その言い方は実に彼らしくない上から目線だ。だがルフィールはとっくに気づいている。それはきっと、自分を鼓舞する為のものだって事を。だからこそ、そんな彼の優しさと期待、そして何より彼に信じられている事が嬉しくて仕方がない。胸に湧き上がる高ぶりに、ルフィールは満面の笑顔を浮かべて答えた。
「はいッ！」
「いい返事だ。それじゃ、僕とルフィールが本気を出したらすごいって事を、イャンガルルガに見せつけてやろうッ」
「了解しました。ボクと先輩の絆の強さは、誰にも負けませんッ」
　クリュウは大きく頷くと彼女の背中を軽く二度叩いた。そして、この間をずっと戦線を保ってくれていたシルフィードとレイヴンの方へと駆け寄っていく。そんな彼の背中を見詰めながら、ルフィールはそっと胸の上に手をのせた。
　胸の奥がポカポカする。彼と一緒にいると、いつも心は温かい。自分が生きていると実感できる。言い過ぎではなく、自分にとってクリュウ・ルナリーフという存在は生きる原動力だ。
　自分を信じて、託してくれた彼に応えられる方法はただ一つ。
　ゆっくりと背中に腕を回し、背負っていた弓を取る。矢筒から五本の強撃ビンを備えた矢を取り出すと、弓を構え、矢を番える。狙うはクリュウも戦線に加わり、剣士組が見事に動きを封じているイャンガルルガ。距離はかなり離れているが、風はない。それは彼女にとって――造作も無い距離だ。
「ボクは忘れていました。自分のスタンスを――」
　目を細め、狙いを定め、イャンガルルガの動きが止まる一瞬を狙う。そして――パンッ。

まるで無音の中に突然弾かれたかのような心地良い音は良く響いた。放たれた矢は勢い良く飛翔し、見事にイャンガルルガに命中すると強撃ビンが割れて爆発を起こす。

悲鳴を上げて驚くイャンガルルガは怯む。イャンガルルガと肉薄していた剣士組が一斉に振り返る。そのどの顔も、彼女の実力を信じていた。皆の顔はそう――やっと戻ってきてくれた。そう言っているような気がした。

ゆっくりと弓を下げたルフィールは、そんな彼らに向かって一瞬だけ微笑むと、凛々しき戦姫の顔となる。

「――冷静沈着な狩猟。それがボクの狩猟道です」

第１８９話　決意の朝への誓いの果てに動き出す想い

　エリア８にてイャンガルルガに逃げられた一行は場所を変えて山頂付近のエリア９へと場所を変えていた。ここは以前クリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードが初めてチームを組んだリオレウス戦の際に全員が敗北を喫した苦い記憶の残る――同時に、そんな苦難を乗り越えてリオレウスを討伐した場所でもある。
　そしてあれから一年程の時が流れた今、成長したクリュウとシルフィードは新たな仲間であるルフィールとレイヴンと共に黒狼鳥イャンガルルガとの最終決戦に挑んでいた。
　月明かりに照らされる美しい頂に轟く爆音。紅蓮の業火が一瞬立ち上り、闇をさらに黒く染める黒煙がゆらゆらと月を目指して天へ昇っていく。パラパラと空から降り落ちるは爆心地が抉れた証拠である土の塊。辺りに漂うは火薬の臭いと焦げ臭さ、そして血の臭い。
　もうもうと上がる黒煙の柱。しかしそれは内側から伸びた巨大な一対の翼が激しく揺れる事で霧散する。爆心地から現れたのはボロボロの姿をした黒狼鳥イャンガルルガ。鱗は所々剥がれ落ち、焼け焦げ、血が紫色の体を赤く染めている。しかし燃え盛る炎のように橙色をした瞳には明らかな敵意と殺意に満ちており、彼がまだ戦意を喪失していない証拠だ。
　残った煙を吹き飛ばすかのようにイャンガルルガは天を仰ぐとその奥底から込み上がる怒号（バインドボイス）を天高く響かせる。ゆっくりと戻した視線の先には、もう何時間と戦闘を繰り広げている小賢しい四匹の敵の姿が映っていた。
「眠らせて、残った大タル爆弾Ｇ全部使ってもまだ立てるなんて……」
　悠々と立つイャンガルルガを前に、さすがのクリュウも驚きを隠せない。その隣では爆破を担当したルフィールが弓を構えたまま「しぶといですね」とつぶやく。
　エリア９での戦闘はルフィールがすぐに必殺の睡眠ビンを備えた

矢を使ってイャンガルルガを眠らせた。そして荷車に搭載していた全大タル爆弾G三発を一斉に起爆させた。相当なダメージのはずだが、イャンガルルガは未だ健在だ。
「さすが、しぶとさという点だけで言えばリオレウスにも勝る相手だな」
背負った蒼刃剣ガノトトスの柄にゆっくりと手を伸ばしながら言うシルフィードの横でレイヴンも「少し予想外だニャ」と苦々しくつぶやく。その手に握られているピッケルはこれまで何度も硬い黒狼鳥の鱗を叩いてきた為に、刃先は中程から折れ、先端部分を失っている。
予想外のしぶとさに少なからず動揺が広がるクリュウ達だったが、その眼前には未だ健在のイャンガルルガが低く唸り声を上げながらこちらを睨みつけている。その口端からは怒り状態を意味する火の粉と黒煙が噴き出している。
確かにイャンガルルガはまだ立っているが、その姿は決して無傷ではなく、むしろ満身創痍と言っても過言ではない。これまで与えたダメージは相当なもので、体力も残り僅かなはず。決して、これまでの努力は無駄ではない――あともう少しで、勝敗が決しようとしていた。
ゆっくりと引き抜いた蒼刃剣ガノトトスを前方へ構えるシルフィード。その横顔には多少の疲労が見えるが、それでもその表情には一切諦めはない。瞳には猛烈な闘志が燃え盛っている。
「あともう一息だッ。ここで一気に畳み掛けるぞッ！」
巨大な大剣を振り上げ、頭上で一回転させて再び構えるシルフィード。体の奥底から放たれた勇ましい声は一瞬戦意を失いかけていた仲間達を鼓舞する。
頂の風は強い。流れる風は彼女の白銀の髪を靡かせる。後頭部に纏められたポニーテールはまるで尻尾のように彼女の闘志に呼応して風に激しく揺られる。
揺れる髪の間から見える彼女の凛々しい横顔を見たクリュウは自らを鼓舞するように道具袋（ポーチ）に手を伸ばす。その手が握り締

めたのはルフィールから分けてもらった怪力の種。ヘルムを上げ、種を一つ口に放り込み咀嚼する。ヘルム越しに見える彼の瞳にもまた、シルフィードと同じまだ諦めていない闘志が轟々と燃え盛っていた。
「ラストスパート、張り切って行くよッ！」
「はいッ！」
彼の勇ましい声にルフィールは満面の笑みで答えると、すぐさま表情を戦姫のものへと変える。矢筒の中へ手を伸ばすと、残りの矢が少ない事がわかる。体力的にも矢の本数的にも、ここが正念場だ。
矢を一本引き抜き、そこへ同じく残り僅かな強撃ビンを手早く結わえ付けると、弓を構えて弦に番える。ギリギリと軋む音を響かせながら弓はしなり、鏃が引き寄せられる。狙うはイャンガルルガの顔面。もはや握力も限界が近づいているが、そんなもの親友直伝のド根性で捻じ伏せる。
フッ、と口元に自虐的な笑みが零れた。
「……ボクも、存外バカのようです」
いつも気楽に笑っている大バカな親友の笑顔を振り払い、ルフィールは矢を放った。まるで空気の壁を貫通しながら飛翔する矢は一直線にイャンガルルガの頭部に命中。続けてビンが割れて爆発を起こす。それが戦の再開の号令となった。
爆発を物ともせず、イャンガルルガは反撃とばかりに三連ブレスを撃ち放った。轟音を立てて飛翔する火球はクリュウ達の接近を阻むように炸裂。地面が吹き飛び、土や小石の礫となって彼らを襲う。シルフィードは構わず突っ込み、クリュウも盾で礫をガードしながら遅れて突撃する。
左右から接近する二人に対してイャンガルルガは毒針のついた尻尾を振り回して接近を阻む。しかしシルフィードは姿勢を低くしてこれを回避し、クリュウは尻尾が通り過ぎた後に突っ込み、難なく接近を果たす。まず最初に到達したシルフィードは勇ましい咆哮を上げながら大剣、蒼刃剣ガノトトスを振り下ろす。その芸術品のように美しくも鋭い蒼色のヒレ状の刃先は硬い黒狼鳥の鱗に触れた瞬間、まるで金属同士を打ち鳴らしたかのような高音と共に火花を迸らせて

弾かれるが、シルフィードは構わず弾かれて振り上がった剣を再び全力で振り下ろす。その強烈な一撃は鱗に炸裂した瞬間、その鱗を粉々に砕き、中の肉を斬る。大気中の水分を凝固させて大量の水を発生される刃先と、傷口から噴き出すイャンガルルガの血が混ざり合い、地面を薄っすらと赤く染めていく。

夏とはいえリフェル森丘の山頂付近は冷える。肌寒い程度の寒さではあるが、巨大な剣を振り回す彼女の額には大粒の汗が浮かんでいる。むしろこれくらいの気温の方が動き回って熱くなった体にはちょうどいい。

「うらあああぁぁぁッ！」

勇ましい声を上げながらシルフィードは剣を横殴りに叩きつける。狙うは鱗の薄い膝の裏、生物の構造上そこを狙えば脚のバランスが崩れる。まだ普通の女の子――ちょっとやんちゃだったかもしれないが――によく弟相手にやっていたイタズラ、膝カックン。ハンターとなった今ではその経験が役立っている。つまり――

「ギャワァッ!?」

膝の裏に炸裂した剣先はそのまま力づくで膝を後ろから押し、無理やり膝を曲げさせる。全く予想だにしていなかったこの攻撃にイャンガルルガは体勢を立て直す事ができず、そのまま正面へ傾き、顔面から地面に倒れ、横倒しになった。そこへシルフィードの猛攻に邪魔しては悪いと閃光玉を構えて待機していたクリュウが近づく。手には閃光玉ではなくオデッセイ改が握られている。全力で走りながらイャンガルルガの背後へと回り込むと、そこには無防備に転がっている黒狼鳥の尻尾があった。

クリュウはその場で足を止めると、両手でオデッセイ改の柄を握り締め深呼吸。そして、

「せいッ！」

振り上げたオデッセイ改を全力で黒狼鳥の尻尾へ振り落とす。

ゴリッ……

今までとは違う感触。見ると、これまでの攻撃で鱗が弾き飛ばされた部分には鱗の下に隠されていた血に濡れた肉の部分がむき出しに

なっていた。それを見てクリュウはそこに狙いを定めて、大きく振り上げた剣を力の限りに振り下ろす。
「うあああああぁぁぁぁぁッ！」
気合裂帛。放たれた一撃は的確にイャンガルルガの装甲を失った部分へと振り下ろされる。そして、確かな手応えと共に刃先は肉の壁を突破し、中に潜む尾骨を断ち、反対側の肉を引き裂く。それはつまり、
「ギャアアアアアアアッ!?」
壮絶な激痛にイャンガルルガは悲鳴を上げながら吹き飛んだ。体の構造を無視したかのような動き。悶え苦しむ激痛の正体。
荒い息を繰り返しながらクリュウが握るオデッセイ改の刃はイャンガルルガの血でベットリと汚れ、刃先からはポタポタと赤い滴が垂れる。その先には、血溜まりの中に無造作に放置された巨大な肉の塊が横たわっている――黒狼鳥の尻尾だ。
尻尾を切断され、千切れた部分から吹き出す血に自らの紫色の鱗を染めながら悶え苦しむイャンガルルガ。その周囲を包囲するようにシルフィードとクリュウが動く。彼らの背後からは新たな矢を番えたルフィールが弓を構えている。
「一気に畳み掛けますよッ！」
そう言ってルフィールは強撃矢を一斉に五本放った。飛翔する五本の矢は今まさに起き上がろうとしていたイャンガルルガに命中。爆発の中でイャンガルルガの悲鳴が響く。その時、突如イャンガルルガの足下の土の一部が吹き飛ぶと、そこから現れたのは……
「レイヴンッ!?」
驚くクリュウを無視し、レイヴンは穴の中から何かを取り出すとそれをイャンガルルガの足下へと仕掛ける。次の瞬間、
「ギャワァッ!? グエェッ!?」
突如イャンガルルガは痙攣してその場から動けなくなった。見ればイャンガルルガの足下にはシビレ罠が仕掛けられている。そしてその横ではさらに穴から打ち上げタル爆弾二つを取り出しセットするレイヴンの姿が。

レイヴンは手早く打ち上げタル爆弾をセットすると、その場から離脱する。次の瞬間、打ち上げタル爆弾は下部から炎を噴出させながら上へと飛翔。その先にはイャンガルルガの頭部がある。

一発目が炸裂し、イャンガルルガの頭部に炸裂。その衝撃でイャンガルルガの不気味に大きな耳が砕け散った。続けて二発目が腹部に炸裂。鱗などを無視した衝撃にイャンガルルガは悲鳴と共に口から血の塊を吐き出した。

だが、彼の苦痛はこれで終わらない。

「さすがレイヴンッ。グッジョブッ」

レイヴンの活躍にヘルムの下で笑顔を浮かべながら親指を立てるクリュウはシルフィードと共にイャンガルルガに接近する。レイヴンはそんな彼の言葉に鼻を鳴らすと、これまで何度も投げたブーメランを再び投げ放つ。

高速回転しながら滑空する二つのブーメラン。地面スレスレを草の葉を斬り刻みながら突進し、一方は左の太腿の外側を斬りつけ、もう一方はイャンガルルガの右目の部分に炸裂し、まぶたごと一気に左目を斬り裂いた。

シビレ罠から抜け出せないまま絶叫するイャンガルルガに対し、クリュウとシルフィードが一気に接近する。先頭を走るクリュウはそのままイャンガルルガの頭部に向かってオデッセイ改を叩き込む。続けざまに左へ斬り上げ、そして再び頭部中央へ剣先を叩き込む。その瞬間、イャンガルルガはシビレ罠から解放されて威嚇するように咆哮（バインドボイス）を轟かせる。直下にいたクリュウには逃げる術はなく、その場で耳を押さえてしゃがみ込んでしまう。だがヘルムの下の彼の口元には、確かな笑みが零れていた。

咆哮（バインドボイス）を終え、許し難い敵を吹き飛ばそうとブレスを溜めるイャンガルルガ。口の端からチラチラと火炎の木漏れが迸る。だが次の瞬間、彼が感じたのは口から発射されるブレスの衝撃ではなく、頭部への強烈無比な一撃だった。

「りゃあああああぁぁぁぁぁッ！」

攻撃を重ねていたクリュウのすぐ背後で溜め斬りの構えを取って

いたシルフィード。レイヴンが左目を潰し、右目も自らの血でボヤけていたイャンガルルガは、目の前で暴れるクリュウの姿しか見えていなかった。そこへ隠れながら溜め斬りの構えをしていたシルフィードはイャンガルルガの咆哮（バインドボイス）にも負けない咆哮を轟かせながら蒼刃剣ガノトトスを振り落とした。彼女の筋力を極限まで溜めて爆発させた一撃はイャンガルルガの頭部を打ち砕き、顔面を顎から地面へと陥没させる。そしてそのままイャンガルルガはバランスを崩して横転する。

だが、まだ攻撃は終わっていない。空気を斬り裂く無数の飛翔音に視線を上げると、自らに向かって無数の矢が降り注いで来た。いずれもルフィールが放った強撃ビンを備えた強撃矢の連射。横倒しになった事で晒している面積は広くなり、結果的に無数の矢のほとんどが命中。爆発に爆発を重ねるような連撃にイャンガルルガは悲鳴を上げる。

放たれた全ての矢が降り注ぎ、無数の爆発が止む。砂煙と黒煙が入り混じった濁った煙の中で、イャンガルルガはゆっくりと起き上がる。

イャンガルルガの目の前に立ち塞ぐ二人。まだ立ち上がれるイャンガルルガを前にわずかに動揺するも、まだ終わっていない戦いに剣を下ろしはしない。

次の行動は何か。ブレスか、突進か、咆哮（バインドボイス）か。どの攻撃にも対応できるよう身構えながらその時を待つ二人。だがイャンガルルガが取った行動はそのいずれでもなかった。

突如二人から目を逸らすと、そのままゆっくりと歩き出した。脚を引きずりながら、とにかくここから逃げる。そんな行動だった。それは大型モンスターが弱っている証拠だ。

「いかせるかッ」

すぐさまシルフィードが立ち塞がり、蒼刃剣ガノトトスを顔面へと叩き込む。だがイャンガルルガも一度逃げると決めた以上その意志を曲げるつもりはなく、血だらけの頭で蒼刃剣ガノトトスの刃を耐えながら押し返そうとする。弱っているとはいえ、相手は自分より数倍

も大きなモンスターだ。どちらも譲らない力比べだが、次第にシルフィードが押され始める。踏ん張る両足は地面を抉りながら後退する。

「く、くそぉ……ッ！」

何とか全力で押し込みを掛けるが、力の差は圧倒的だった。ちらりと覗けば、クリュウもイャンガルルガを転倒させようとアキレス腱を狙ってオデッセイ改を必死に振るっていた。だが、明らかにダメージは与えているものの、転倒するだけの威力はない。

もはやこれまでか。また場所を変えて、おそらく山頂の巣で最後の戦いを挑む事になる。そう諦めかけた時だった。

「離れるニャッ！」

背後から響いたレイヴンの声に思わず剣を滑らせるように移動させ、そのままイャンガルルガの前を離れた。身を翻し、背後を確認すると、そこにはいつの間にかレイヴンが愛くるしいアイルーの顔には似つかわしくないような不敵な笑みを浮かべて立っていた。その背後には、いつの間にか仕掛けられている落とし穴。そして、そのすぐ後ろには両手に何かを握り締めたルフィールが立っている。

夜風が彼女の紺色の髪を優雅に靡かせ、月明かりを反射する知的なメガネの奥では二色の瞳が自信満々に煌めいていた。ゆっくりと目の前から迫るイャンガルルガに対し、ルフィールが動く――そして同時に、イャンガルルガは落とし穴へと落ちた。

下半身を埋没し、粘着質のネットが体を縛るように取り付き、穴から逃れる事ができなくなる。必死になって暴れるイャンガルルガに対し、ルフィールはその肩に脚を掛けると、左右に激しく揺れる首にしがみつき、そして――

「――もう朝になりますけど、眠ってもらいます」

つぶやくようにそう言うと、ルフィールは両手に持った捕獲用麻酔玉を口の中に直接捩じ込んだ。暴れるイャンガルルガはとっさにその異物を噛む。その瞬間、口の中いっぱいに麻酔効果のある煙が爆発し、反射的に口を開いて息を吐き出すが、すぐに失った空気を戻すように吸い込む――目の前に滞留している麻酔薬も一緒に。

効果はすぐに現れ、イャンガルルガはゆっくりとその場に倒れ込む。そして、そのまま意識を失い、眠りについた。辺りに撒き散らされていた殺気や圧迫感は全て消え去り、静かな夜――否、暁色に染まり始めた夜明けへと戻る。

捕獲されたイャンガルルガを前に、ルフィールは満足気にうなずくとクリュウに向かって親指を立てる。それを見たクリュウもヘルムを脱いで暁色に染まり始めた空をバックに笑みを浮かべながら親指を立てた。そんな二人を見ながら、シルフィードも口元に笑みを浮かべながら戦闘態勢を解除し、いつの間にか刃先がボロボロになった蒼刃剣ガノトトスをゆっくりと背負う。その隣では腕を組みながら同じように口元に微笑を浮かべたレイヴンが立っている。

そして、全ての戦いが終わった事を告げるように、ゆっくりと西の空に朝日が上り始めた……

拠点（ベースキャンプ）へと戻った一行はすぐに帰路の準備をせず、まずは休憩となった。と言っても拠点（ベースキャンプ）にはクリュウとレイヴンの姿はなかった。どちらも現在は隣のエリア1の川辺で釣りに興じていた。朝食用の魚を確保する事が目的だが、本当の目的はと言うと……

拠点（ベースキャンプ）には二人の戦姫が残されていた。否、そのどちらも今は戦姿ではない。拠点（ベースキャンプ）には滝が流れており、膝下くらいまで水が溜まっている場所がある。そして二人は今、そこで水浴びをしていた――もちろん、一糸纏わずに。

滝の水を浴びながら汗を流す二人。お互いに狩りをしているとは思えない程に白く美しい肌を水で濡らし、木漏れ日を浴びて二人の美少女は神秘的に煌めいていた。

水を浴びながら、ルフィールは小さくため息を零す。

「先輩も一緒に入ればいいのに……」

残念そうにつぶやく彼女の言葉に苦笑を浮かべながら、シルフィードも水を浴びる。もしもここにサクラがいれば、クリュウを拘束して無理矢理にでも一緒に水浴びをしただろう。そしてそれをフィーリアが全力で阻止する。そしてタイミングを見計らってクリュウを助

ける。それがいつもの流れだ。
　そういう騒動がない分、今回の狩りは静かだった――というより何だか物足りない。二人のケンカがもはや恒例行事となっている以上、それがないと寂しく思う。どうやら自分は本当にあの三人と一緒に慣れてしまったらしい。昔なら想像もできないような事だ。だが、決して悔いてはいない。むしろそんな気持ちを抱く自分が嬉しかった。
「――それよりも」
　そんな事を考えて口元に笑みを浮かべていたシルフィードを、ルフィールは背後から接近すると両手を伸ばし、彼女の豊満な胸を鷲掴みにした。途端にシルフィードは「ひゃんッ」と滅多に見せない可愛らしい悲鳴を上げて顔を真っ赤に染めると、慌てて胸を隠しながら後退し、仁王立ちするルフィールから離れる。
「な、何をするんだ一体ッ!?」
「……まったく、何て憎たらしい武器を持っているんですかあなたは」
「君もか……」
　シルフィードはやれやれとばかりにため息を吐く。フィーリアやサクラも同様に時々自分に襲い掛かっては胸をいじり倒した挙句に「胸の大きさで女の魅力は決まらない」的な発言をし、二人で堅い絆を確認し合うのが恒例行事だ。正直、もう慣れてしまった。
「他の連中にも言っているが、胸が大きいのも考えものだぞ。重くて肩が凝るし、防具の中で圧迫される。防具を作る時も基本価格に特注価格を追加で支払う必要があるんだからな」
「……それ、対局に位置する人にとっては殺意を抱く戯言だとご存知ですか？」
「言うたびに怒られてるよ」
　苦笑しながら答えるシルフィードの言葉に、ルフィールは「まぁ、いいでしょう。ボクが知る限りでは先輩は年下好きの傾向がありますので、むしろ対先輩攻略の際にはこちらの方が有利と見ました」と特に気にする事もなく自らの絶対的地位を確立する。一方で彼女の言葉にシルフィードは「やはりか……」となぜか軽くうなだれてみたり。
「それはさておき、先程は助けていただきありがとうございました」

突然話題を変えると、ルフィールは恭しく頭を垂れる。シルフィードはそれが意味する事をすぐに感づくと「気にするな」と短く返事する。それを聞いたルフィールは「先輩と同じ事を言うのですね」とつぶやくと、どこか自虐的な笑みを浮かべた。
「クリュウと？」
「はい。先輩も、そう言ってボクを気遣ってくれます――でも正直、ボクはそれが辛い」
濡れた髪の先からポタポタと雫を垂らしながら、ルフィールは下向き加減でつぶやく。濡れた前髪がカーテンのように彼女のイビルアイを隠し、その表情は窺えない。でも唇はキュッと閉められ、寒さとは違う震えを小刻みにする肩を見れば、彼女の心境を察するには十分過ぎる要素だ。
「別に、気遣っているつもりはないと思うがな。彼は嘘が下手だ。きっとその言葉は本心からのものなのだろう」
「わかってます。だから、余計に辛いんです……」
ルフィールは静かに半身を水の中に入れるように腰を落とすと、自分を見詰めているシルフィードをゆっくりと見上げる。キラキラと煌めく二色の瞳が、悲しげに揺れた。
「先輩は人の為に無茶をする傾向があります」
「まぁ、確かにその通りだな。他人の為に自らを犠牲にする、ある種の自己犠牲の傾向があるのは事実だ」
「学生時代、先輩はボクやシャルルさんの為に色々と無茶をされていました。仕舞いにはボクを庇って大怪我を負ってしまいました。その事はご存知で？」
「あぁ、前に彼から聞いた事がある――傷跡も、見せてもらった」
「そうですか……」
シルフィードの口から零れた《傷跡》という単語にルフィールの表情が陰る。それが彼女にとっての最大のトラウマであろう事は、今までの二人の口ぶりから察していたシルフィードはしまったとばかりに自らの軽はずみな言動を恥じた。
「まぁ、今ではすっかり全快している。傷跡も彼自身は特筆して気に

している様子はない。君が重荷を背負う必要はないし、彼もそれは望んではいないだろう」
「……でもボクは、当時の何も出来なかった自分が許せません。何度自分の愚行を後悔したかわかりません。だからこそ、またボクとコンビを組んでくれると言ってくれた先輩の言葉は嬉しかった」
それは嘘ではないだろう。彼の言葉を頭の中で反芻しているのか、ルフィールは心の底から嬉しそうに語る。彼の言葉ひとつひとつが、彼女にとっては何にも代えがたいものなのだろう。その姿は宝物を大事そうに見詰める子供のよう。
だが次の瞬間その笑顔は消え、現れたのは堅い信念を決意した戦姫の凛とした表情だった。
「その時決めたんです。もう二度と同じ失敗を繰り返さない為、ボクは強くなる。誰にも負けない、無双のハンターになると。その為に、ボクは自らを傷つける事に何の躊躇いもなく修行を続け、今の戦法（スタイル）を確立しました。これならもう二度と先輩の足を引っ張らない。先輩の背中を今度こそお守りできる。そう思いました――ですが現実は惨憺たるものでした」
悔しげに唇を噛み、濡れた拳を強く握り締めるルフィール。シルフィードはそんな彼女を何も言わずにじっと見詰める。自らの無力さを認めざるを得ない苦しみは、理解しているつもりだった。自分も、己の無力さを何度恨んだ事か数しれない。そんな時は下手な慰めの言葉など必要ない事を、彼女は知っている。
「……ボクは、血の滲むような修行を積んできました。だからこそ、自らの実力を過信していたのかもしれません。心の片隅で、ボクは先輩をも上回ったと大それた事を考えていたかもしれません――でも実際は、ボクが努力していた間も先輩は当たり前ですが、努力して実力を上げていました。結果、ボクと先輩の距離は離れたまま。ボクは、あの人と対等の所にはまだ立てていませんでした」
パシャリと水の中にあった右手を上げ、手の平で右目を隠すようにうなだれる。自虐的な痛々しい笑みを浮かべながら「笑っちゃいますよね。ボクは大バカ者です。シャルルさんをバカと罵倒する権利も

ない程の、どうしようもないバカです」と自らを蔑む言葉を並べる。
シルフィードは何だか居た堪れない気持ちになる。まるで、昔の自分を見ているかのようだった。自らを闇から救ってくれたエルディンを出会う前の、過去のトラウマを引きずり、それから逃げるように戦いに身を投じていた、あの頃の自分と。今のルフィールは、よく似ていた。
だからこそ見ていられない。だからこそ――あの時自分を救ってくれたエルディンと同じ事をした。
――パンッ！
静かな朝に響く一発の破裂音。ルフィールは自らを襲った頬の痛みと突然の事態に困惑しながら、呆然と立つシルフィードを見上げていた。
頬がじんわりと痛みを引きずり、次第に熱を帯びるようになるのと比例して、ルフィールの表情が怒りに染まっていく。
「な、何するんですかいきなりッ!?」
「甘えるな愚か者が。私が貴様の愚痴を聞いた所で、何ができる。言っておくが、私は弱者の愚痴を素直に聞く程甘くはないぞ」
「じゃ、弱者って……ッ」
「自ら言っていたじゃないか。自分はどうしようもないクズだと」
「そ、それは……」
シルフィードの言葉に怒りはすれど、でも彼女が言う事に一切の嘘はない。全てが真実。だからこそ、余計に辛かった。言い返せなかった。認めざるを得なかった。
返す言葉も見当たらず、ガックリとうなだれるように揺れる水面を見詰める。そんな彼女を見下しながら、しかし手を差し伸べるなどの優しさは決して見せず、静かに背を向けるシルフィード。
「……自らの失態を悔いる事は必要だ。己の失敗を認めずに同じ過ちを繰り返す事は、それこそ過信、愚者と言えよう――だがいつまでも下を向いている暇は、君にはないと思うぞ。悪いが、君の実力はまだまだ未熟だ。フィーリアやサクラの足下にも及ばない。彼の背中を守っているのは、その二人だ。君の恋敵（ライバル）は、想像を絶す

る程に強い。君が再びクリュウの相棒をなりたいのなら、二人をも上回る実力を身につける必要がある。早くそれを成し遂げる為にも、君は時間を後悔に注ぐ程暇ではないと思うが？」

背を向けながら、淡々と己の考えを語るシルフィード。

ルフィールは確かに強い。養成所を卒業して一年半程でこれほどの実力をつける事は、才能と言えるだろう。だが、フィーリアとサクラは互いに場数を踏んで来た才能もある強者だ。残念だが、経験も実力も現時点ではルフィールは二人に劣る。そして今、クリュウの背中を守っているのはそんな二人だ。再びクリュウの背中を守ると言うのなら、二人を上回るような強者にならないといけない。いつまでも下を向いていられる時間はなかった。

シルフィードの言葉に、ルフィールはうつむいたまま沈黙を続ける。そんな彼女の方にゆっくりと振り返ると、シルフィードは静かに語りかけた。

「私なんかの言葉をどこまで信用できるかはわからない。だが、私が見る限りでは君はいずれ凄腕のハンターになれるだろう。それだけの才能と覚悟を、君から感じられる。だから、何だ。君には早く私と並び立てるくらいに強くなってほしいと思う。私もいずれ、君に背中を預けてみたい。そう思ったよ」

「シルフィードさん……」

ゆっくりと上げられたルフィールの顔には、わずかではあるが笑みが浮かんでいた。先程までの自らを罵倒し、自虐に満ちた表情とは違う。どこかスッキリしたような、何か自らの中で決意が変わったような、そんな晴れ晴れとした表情をしていた。

「……先輩があなたを心から信頼されているの、何となくわかる気がします」

「よせやい。私は褒められるのが苦手だ」

照れ笑いを浮かべながらシルフィードは静かに座り込んでいるルフィールに手を伸ばす。ルフィールもその手をしっかりと握り締める。彼女の手がしっかり握られた事を確認すると、シルフィードはその逞しい腕で引き起こす。

「今回の狩りで、ボクはまだまだ未熟者だと痛感しました――ボクはまだまだ、修行が必要なようです。まだ、先輩の隣に立つ事はできなかったんです」
「まぁ、彼はそんな小難しい事は考えていないだろうがな。今回の狩りも、純粋に君との狩りを楽しんでいたように見える」
「そう言ってもらえると、心が救われるようです。ですが、ボクの目標は先輩のパートナーになる事。狩猟においても、人生においても」
「……そうか」
「――村に戻ったら、また修行の旅に出ようかと思います。あなたに言われた通り、ボクには立ち止まっている時間などないのですから」
　クリュウと再び離れ離れになる事に若干後ろ髪を引かれる想いはあるが、それがルフィールの出した結論だった。まだまだ自分は未熟だ。一秒でも早く彼に追いつく為にも、まだまだ修行が必要なのだ。
　ルフィールの決意にシルフィードは短く「そうか……」とだけつぶやくと、滝の方へ向かう。そして流れ落ちて来る水を頭から浴び、ずぶ濡れになった状態で髪を掻き上げる。いつもは結われた髪を流した姿は、いつもとは違った美しさを魅せる。
「そろそろ上がろうか。あまり体を冷やすと風邪を引くからな」
「――シルフィードさん」
　岩の上に置いてあったタオルで髪を拭き初めたシルフィードに、背後からルフィールが声を掛ける。振り返ると、ルフィールは何かを決意した表情で彼女と向き合っていた。
「どうした？」
「……不本意ではありますが、今回の狩りであなたの実力は相当なものだとお見受けしました。ですが、いずれボクはあなたをも追い抜きます――それまでは、どうか先輩をよろしくお願いします」
　そう言って、ルフィールは深々と頭を下げた。彼女が自ら誰かに頭を下げる事はめったにない。そういう子ではないのだから。その彼女が頭を下げている。それはつまり、本当に彼の事が大好きだという証拠だ。自らのプライドを捨ててでも、彼の為にがんばる。本当にいい子だと、シルフィードは心から思った。そして、

「任せておけ。私にとってもクリュウは特別な存在だ。この身に代えても守ってみせるさ」
「……それを聞いて安心しました――が、同時に不安も抱きました」
それまでの雰囲気とは一転して、顔を上げた途端ルフィールの雰囲気が変わった。まるでフィーリア達を前にした時のような、敵を警戒するようなそんな目。突然豹変した彼女の態度にシルフィードは困惑する。
「ど、どうした？」
「つかぬ事お伺いしますが、シルフィードさんは先輩の事が好きなのでしょうか？」
「す、好き……ッ!?　いや、嫌いではないのだが、君達の想う《好き》とは違うというか……」
同じように、それまで凛々しかったシルフィードもルフィールの唐突な問いかけに対して顔を真っ赤にして狼狽する。だがその慌てふためきっぷりが余計にルフィールの疑念を確信に近づける訳であって。
「先輩を預ける前に、シルフィードさんの真意を探る必要があります」
「し、真意と言われても……」
頭二つ分くらい小さいルフィールを前によろよろと後退していくシルフィード。ルフィールもジロジロと見上げながら前進し、シルフィードを追い詰める。
「さぁ、素直に吐いていただきましょうか。先輩に対する想いを、全て、赤裸々に、一言一句全部ッ」
「あ、あぁぁ、あぁぁぁ……」
顔を真っ赤にしてペタンとその場に腰を落としてしまうシルフィード。せっかく拭いた髪も水の中でフワッと広がる。羞恥心からか瞳の縁には薄っすらと涙を浮かべ、口はガクガクと震える。
その後、ルフィールによる厳しい尋問にシルフィードが悲鳴を上げるのにそう時間は掛からなかった。
「……ニャ？」
「どうしたの？」

水面に浮かぶ浮きをボケェと見詰めていたクリュウは同じように水面を見詰めていたレイヴンが振り返ったのを見て訝しげに問い掛けた。クリュウの問い掛けに対してレイヴンは「気のせいニャ」と短く答えて再び水面を見詰める。
「サシミウオ、何匹釣れたっけ？」
「お前と合わせて八匹ニャ」
「あと何匹釣ろうか」
「知るかニャ」
興味ないと言いたげに話を切るレイヴンを前にクリュウを苦笑を浮かべる。どうやら一緒に狩りをしたものの、自分とレイヴンの距離は縮まらなかったようだ。
執拗に話しかけると鬱陶しがられそうなのでクリュウは黙って釣りを続ける。そうしてしばらく互いに黙る時間が続く。全く釣れなくなってしまいそろそろ引き上げようかと考えていたクリュウの隣で同じように岩に腰を掛けていたレイヴンが竿を引き上げて立ち上がった。
「帰るの？」
「魚の気配がないニャ。これ以上続けても意味ないニャ」
「そっか」
クリュウも同意見だったらしく竿を引っ込めた。そんな彼をジッと見詰めていたレイヴンは一度すっかり明るくなった空を見上げると、再び彼の方に視線を戻す。
「……お前、ルフィールの事をどう思ってるニャ？」
実に藪から棒な問い掛けだった。突然そんな事を尋ねられたクリュウは使わなかった釣りミミズを元の場所に返す途中で盛大にすっ転んだ。
「な、何だよ急に？」
起き上がったクリュウが振り返ると、レイヴンは相変わらず憮然とした態度で腕を組みながら立っている。そして、その視線はしっかりと自分に向けられていた。その瞳から、彼がふざけていない事を瞬時に理解すると、自然とクリュウの表情も引き締まる。

「どう思うって、どういう意味さ？」
「質問に質問で返すのはやめるニャ。どういう意味も、言葉通りの意味ニャ。お前はルフィールをどう思っているか、そう尋ねてるニャよ」
真剣な眼差しで真っ直ぐに尋ねて来る彼の問い掛けに対してクリュウは「どう思うも何も、可愛い後輩としか言いようがないけど……」とぼんやりとした答えで返す。するとレイヴンは幾分か目付きを厳しくさせると「それだけかニャ？」と先程よりも少し低い声で尋ねる。
レイヴンの小さな体から発せられる圧迫感にたじろぎながら少し考える。
「……妹のように感じてる、かな」
クリュウのルフィールに対する感情は、最も近いのがそれだった。シャルルと同様に、ルフィールの事は危なっかしくも可愛い妹、そんな印象を抱いていた。だからこそ放っておけないし、傍にいると安心できる。家族のように大切な存在だと感じていた。
クリュウの返答に対してレイヴンは何も答えない。ただ真っ直ぐに彼の目を通してその真意を探ろうとするかのように見詰め続ける。だがそれもほんの数秒の事。すぐに「……そうかニャ」と短く言葉をつぶやくと、視線を外す。
「……瞳には一切のウソがないニャ。本気で言ってるから、余計に質が悪いニャ」
「質が悪いって、何が？」
「何でもないニャ。それよりも最初に会った時に言った言葉、忘れた訳じゃないニャ？」
確認するように問う彼の問い掛けに、クリュウはゆっくりと頷いた。初めて彼と会った時、彼はこう言った。
――言っておくが、ルフィールを泣かせたら許さないニャよ。例え彼女の恩人だとしても、その時は容赦しない。覚えておくニャ――
忘れてなどいない。アイルーに脅される事などそうそうあるような経験ではない。それに、ルフィールに関係する事をそう簡単に忘れ

などしない。彼の言葉には、彼女を心配する気持ちが確かに込められていた。本人は否定するかもしれないが、彼は主であり相棒であるルフィールの事を心から心配している。だからこそ、あんな事を言ったのだろう――言われなくても、彼女を泣かすつもりなど彼には微塵もない。

「任せておいてよ。ルフィールを泣かせるような奴がいたら、それこそ僕が容赦しないよ」

「……最大の原因対象はお前だニャ」

「何か言った？」

「何でもないニャ。それよりさっさと戻るニャよ」

クリュウの任せろとばかりの自信満々な発言に対してレイヴンは呆れたように深いため息を零すと、釣竿を持って足早に拠点（ベースキャンプ）の方向へ歩き出す。クリュウも同じように釣竿と釣り上げたサシミウオを持って彼に続いて拠点（ベースキャンプ）へと戻った。

第１９０話　胸の奥で輝き出す淡い恋心　彼の笑顔が眩し過ぎて

「ただいまぁ」
「お帰りなさい先輩」
　拠点（ベースキャンプ）に戻った彼を出迎えたのはルフィール。彼の持っている釣り道具を受け取り、片付ける。その姿は帰宅した夫を出迎える妻にも見える。が、ここは家でなくて狩場の拠点（ベースキャンプ）であり、彼女もエプロン姿ではなくパピメルシリーズ姿だ。ある意味、その光景はシュールとも言える。
「とりあえず、サシミウオが八匹釣れたよ。積み込んである食材と合わせて朝食にしちゃおう」
「そうですね。夜通しで狩りをしたから、お腹ペコペコです」
　そう言ってルフィールはお腹をこする。最後にまともな食事をしたのは昨日の夕方、狩場に着く前に摂ったものが最後だ。以後は携帯食料やこんがり肉などで小腹を満たしていたが、後半戦では食べる暇も惜しんで猛攻を積み重ねた為、最後に食事を摂ってからすでに数時間が経過している。そりゃ空腹にもなるだろう。
「それじゃ、早速料理始めようかな」
「あ、ボクも手伝います」
「大丈夫？」
　クリュウの中でのルフィールの料理スキルはお世辞にも得意とは言えなかった。良くも悪くもマニュアル人間な彼女は料理本に書いてある通り、計量は一グラム単位で細かい。料理本がなければまるで料理などできない。一年半前の彼女はそんな娘だった。だが、
「これでもソロハンターとしてやって来たんですよ？　料理くらいもう克服してます」
　ルフィールは常に己を磨き続ける娘だ。不得意な部分があれば早急に克服し、得意なものも常に上を目指し続ける。一秒一秒、彼女は成長し続けている。いつまでも自分が知っている彼女ではない、ク

リュウは少し寂しい気もしたが、そんな彼女の姿を微笑ましげに見詰める。
「そっか。じゃあ、手伝いよろしく」
「はいッ」
笑顔で任せてくださいとばかりに胸を叩く彼女を連れて、クリュウは早速荷車から料理器具を降ろすと、それらを並べて料理を開始する。その傍ではシルフィードがクリュウに教えを請いながら手伝いをしている。そんな二人の姿を少し離れた場所から見ていたレイヴンは、楽しそうに笑うルフィールの笑顔を見て小さく口元に笑みを浮かべた。
一方、そんなクリュウ達から離れて一人竜車の運転席に腰掛けているのはシルフィード。筆を取り、何かを認（したた）めている。それはアルフレアにあるハンターズギルド支部宛ての手紙。黒狼鳥イャンガルルガを捕獲した為、受け取りを要請する為の物だ。さすがに彼らの荷車だけではイャンガルルガを移動はできないし、そもそも村で捕獲したモンスターをどうこうしようなどという考えも設備もない。こういうのは研究対象になったり、闘技場で歴戦のハンター達の腕試しの相手にされたり、まぁ用途は色々だ――クリュウは知らなくてもいい残酷な結末もある。
「良し」
手紙を書き終えたシルフィードはいつの間にか隣で待っていたアイルーに手紙を渡す。アイルーは「確かに承ったニャ」と手紙を受け取ると、大事そうに腰に下げた小タルの中に入れる。シルフィードは「いつもすまんな」と彼の頭を優しく撫でると、チップとしてマタタビを数個渡す。アイルーは満面の笑みを浮かべながらそれも小タルの中へ大切そうに入れる。
「君とも結構長い付き合いになったな」
「ニャァ。オイラも蒼銀の烈風ともあろう人がこんな辺境の狩場に何度も来るとは思わなかったニャよ」
「……リオレウス戦の際にはまぁ、仲間が無茶苦茶してすまなかったな」

「それもう何度も謝られてるニャ。もういいニャよ、オイラ達もリオレウスから怯えなくて済んだんだから、お互い様ニャ。それに、今回はイャンガルルガ。お前さん達ニャぁいつも感謝してるニャよ。って、長老が言ってたニャ」
「そうか。長老によろしく言っておいてくれ。それじゃ、手紙を頼んだぞ」
「任せておくニャ。村の伝書鳩で明日にはアルフレアのギルド支部には届くから、数日以内にはイャンガルルガは回収されるニャ。それまでは村の自警アイルー達が監視しておくから安心するニャ」
「わかった。よろしく頼むぞ」
「ニャハハハ、オイラと姉御の仲じゃないかニャ。任せておけニャ」
アイルーは胸を軽く叩くと彼女に別れを告げて足早に去って行った。彼はリオレウス戦の際に負傷したクリュウを看護したアイルーのうちの片割れだ。あれ以降どうやらこのリフェル森丘においてイージス村のハンター担当になったようで、何かとクリュウ達のアシストを行うようになった。今回も、彼に世話になった訳だ。
筆記用具を片づけ、シルフィードは地面へと降りる。荷車越しに聞こえてくるクリュウ達の声の方へ出ると、クリュウとルフィールが二人で料理中だった。シルフィードは近くの岩の上に腰を落とすと、そんな二人の姿を見詰める。
クリュウと楽しげに会話をしているルフィールの横顔をぼぉっと見詰めていると、隣にレイヴンが腰掛けた。
「お前は手伝わないニャ？」
「私は致命的に料理スキルがないようでな。台所には基本的に出入厳禁にされているんだ」
「……厳禁とは、穏やかじゃないニャ」
シルフィードの思わぬ情けない部分を知ってレイヴンは小さく笑うが、シルフィードが睨みつけると手で謝り黙り込む。そうしてしばらくそうして二人の料理している姿を見詰めていた時、そんな沈黙を破ったのはシルフィードのため息だった。
「どうしたニャ。お前らしくないニャ」

「……そうか？」
「数日の付き合いだからお前の事を詳しくは知らないニャ。でも、いつもと雰囲気が違う事だけはわかるニャ。正確には、オイラとあいつが釣りに出る前と後で違う――ルフィールと何かあったニャ？」
　レイヴンの問い掛けにシルフィードは何も答えない。ただ無言で前を見詰め続ける。その視線の先には、いつの間にかルフィールではなくクリュウの姿だけが映っていた。
「……ルフィールに怒られたよ」
「ほぉ、それはまた珍妙ニャ」
　くくくと心底楽しげに笑うレイヴンの隣で「君もずいぶんと意地が悪いな」と釘を差しつつシルフィードはゆっくりと目を閉じて、つい数十分前の出来事を思い出す。
　ルフィールの執拗な質問攻めを受け、無様に水の中で四つん這いになっているシルフィード。そんな彼女を見下げるルフィールのイビルアイは彼女の口から出る情けない言葉の数々にすっかり気勢が削がれ、呆れ返っていた。
「……それ、要するに先輩の事が好きって事じゃないですか」
　シルフィードの情けない言葉を全て聞いた上で彼女が出した結論がそれだった。腕を組みながら呆れたように言う彼女の言葉に、シルフィードは伏せていた顔をゆっくりと上げる。その顔には困惑の色が見えた。
「私が？　クリュウの事を好き……だと？　まぁ、当然嫌いではないのだが」
「そういう事じゃありません。はぁ、先輩みたいな面倒な鈍感キャラは一人で十分間に合ってるんですけど」
　深いため息を零し、ルフィールはそっと彼女の前で膝を折る。視線を彼女の高さと可能な限り合わせながら、羞恥で真っ赤になり、瞳の端には薄っすらと涙を浮かべたシルフィードの情けない顔を見てもう一つため息を零すと、そんな彼女の額をデコピンする。。
「ハッキリ申し上げます。あなたは先輩に対して明確な恋心を抱いています。まず、間違いありません」

「そ、そんな事は……」
「十中八九間違いありません」
「それではわずかではあるが違うという可能性も……」
「人の揚げ足を取らないでください。先日ボクも先輩に言われましたけど」
　嫌な事を思い出した為か、ルフィールは深いため息を零す。そんな彼女をシルフィードが訝しげに見詰めていると、ルフィールは気を取り直すように軽く咳払い。再び真剣な眼差しで彼女の方へ向き直る。
「確かに、私はクリュウに対して何らかの感情を抱いている。これは事実だ。だが、それが必ずしも君やフィーリア、サクラと同様の感情とは限らないぞ……」
　自分よりもずっと小さな少女相手に押し負かされている自身の姿に情けなくなってくるが、彼女の真剣な眼差しの前ではなぜか強く出れず、結果語尾が弱々しくなってしまう。
　シルフィードの言葉にルフィールはしかしキッパリと「ボクのイビルアイをナメてもらっては困ります。あなたが先輩に恋心を抱いている事など、丸わかりです」と彼女の意見を否定する。真っ向から否定され、シルフィードは頬を赤らめたまま「いや、だが……」とまだ納得出来ない様子。そんな彼女の姿を見てルフィールは呆れ気味にため息を零す。
「じゃあ、ボクが先輩を奪ってもあなたは何も言いませんね？」
「それは、当事者同士の問題だからな。私が口を挟む余地など――」
「――ではあなたの目の前で先輩とキスをします。もちろん、ディープキスです」
　ゆっくりと立ち上がり、頭上から真面目な顔で堂々と言ってのける彼女の勇気と意志の強さに感服しつつ、シルフィードはクリュウとルフィールのキスシーンを想像してみる。互いに舌を絡ませてのいやらしいキス。次第に勢いが強くなり――そこまで想像した時、彼女の顔は羞恥で真っ赤に染まった。そして、胸の奥で猛烈な絶望感が膨れ上がった。
「い、いや、それはさすがに……」

「ほら、嫌なんじゃないですか」
「いや、道徳的に公然とキスをするのは如何なものかと……」
「まだそんな事を言って自分の気持ちから目を背けるんですか？　蒼銀の烈風ともあろう凄腕の剣士が聞いて呆れますね。正直になってください。ボクと先輩がキスしても、本当にあなたは構わないんですね？　それ以上先の展開に発展したとしても、あなたは何も文句は言いませんね？」
　ルフィールの強い口調にシルフィードは押し黙る。だが、彼女の言葉一つ一つに胸の奥がズキズキと痛む。二人がイチャイチャしている姿を想像すれば、その痛みは無視できるようなレベルではなくなる。その痛みが意味するもの、よく考え、シルフィードはゆっくりと言葉を零す。
「……い、嫌だ」
「聞こえません。もっと大きな声で言ってください」
　キラキラと意志の強い二色の瞳を煌めかせながら問いかける彼女の言葉に、シルフィードは自棄になったように顔を真っ赤にしながら、思いの丈を叫んだ。
「そんな事嫌に決まってるだろうがッ！」
　自棄クソばりにほぼ逆ギレのように怒鳴るシルフィードの言葉に対し、ルフィールは静かに笑みを浮かべると「言えたじゃないですか」と満足気にうなずく。
　真っ赤になった顔を隠すように、そして冷やすように水を両手ですくって顔を洗うシルフィード。少し熱が冷め、冷静さを取り戻した頃。シルフィードはゆっくりと顔を上げる。
「いや、今のは違う。その、弟に彼女ができた時の姉の虚しさのような、そんなものだ」
「まだそんな言い訳するんですか？　往生際が悪いですよ」
「……まだ、自分でもよくわからないんだ。というか、信じられないんだよ」
　いつになく弱気な言葉を吐くシルフィードの頬はまだ少し赤い。平静を装ってはいるが、その実はまだ自分の中に芽生えた気持ちを前

に混乱しているのだ。そんな彼女に対して、ルフィールは優しく微笑む。
「別に変な事じゃありません。誰かを好きになる、それは当然の感情です。恥じる事ではありません」
「……私は今まで、クリュウの事は弟のような存在だと想っていたんだ。それが急に、一人の男性として好きだと言われても、困る」
「何を困る必要があるんですか。好きなんだから、素直に先輩を抱き締めればいいじゃないですか」
「……いや、そんな恥ずかしい事できないよ」
顔を赤らめてうつむかせながら人差し指をツンツンと突き合うシルフィード。その姿はいつもの頼もしく凛々しい戦姫の勇姿は微塵も感じられない、歳相応の恋する乙女だ。そんな彼女の姿にルフィールは「……先輩に匹敵するような幼稚な情緒ですね」と呆れる。
「まぁ、ボクとしては恋敵（ライバル）は少ない方がいいですが――あなたは本当にそれでいいんですね？　戦わずして負けを認めるなど、ボクは絶対に嫌です」
確認するように問いかける彼女の問いに、シルフィード「いや、別にクリュウの事を諦めた訳では……」と語尾の弱い言葉を述べるが、「そんな生半可な気持ちで挑んで、ボクに勝てるとでも？」と嘲笑する。
言い方は厳しいが、どうにも彼女の言動の裏には自分を叱咤激励するような意味が感じられるシルフィード。顔を上げ、堂々と立つルフィールの姿を見上げる。
「君は何故、私にそんな事を問うんだ？　このまま、私が自覚しなければライバルは少なかっただろうが。なのになぜ、わざわざライバルを増やす必要がある？」
シルフィードの疑問に対し、ルフィールは唇に拳を当てて少し考え、そして答える。
「確かに、ボクの今回の行動は自らに不利に働くかもしれません。ですが――ボクの事を友だと言ってくれたあなたに対して、ボクは全力でぶつかってみたいと思いました。全力で、正々堂々と、先輩を奪い

合う。そう決めたんです」
　バカみたいに真っ直ぐな彼女の言葉に、シルフィードは一瞬ポカンとするが、すぐに口元に小さな笑みを浮かべると「そうか……」と小さくつぶやく。どうやら彼女もクリュウと同じ、理屈云々関係なく正々堂々とした若者らしい。有利不利ではなくて卑怯になりたくない。真っ直ぐに己の信念を曲げずに貫く。そのどちらも、シャルルの影響だという事は言うまでもないだろう。
　ルフィールはそっとまだ膝を折っているシルフィードに手を差し伸べた。シルフィードは無言でその手を掴むと、ゆっくりと立ち上がる。
「改めて問います、シルフィードさん。あなたは先輩の事、どう想っていますか？」
　ルフィールの再びの真っ直ぐな問い掛け。先程は己の心の本音がわからず、口先で誤魔化していた。だが今は、己の本心を知った今なら、真っ直ぐに、己の本音を、ハッキリと、言葉にできる。
「私は、クリュウの事が――好きだ」
　ゆっくりとまぶたを開くと、そこには先程までと同様に楽しげに会話をしながら料理をする二人の姿があった。どうやら思いの外考えに耽っていたようだが、実際にはどれほど時間は経っていなかったらしい。隣を見れば、レイヴンが眠そうにあくびをしている。
　再び視線を前に、少し離れた場所で料理に勤しむクリュウの姿を追う。楽しそうな彼の横顔を見ていると、自然と胸の奥が温かくなる。今まではこの反応に困惑していたが、ルフィールのせいですっかりその正体を理解してしまった今では恥ずかしくもあるし、むず痒くもある。何とも奇妙な感覚だ。
「……これから、どう彼と接したものか」
　正直、しばらくは面と向かって会話できそうにないかもしれない。たぶん、彼と見詰め合うような事があれば自然と顔は真っ赤に染まるだろう。それこそ、フィーリアやサクラと同じように。
　今までどおり、とはもういかない。シルフィードはため息を吐きながら顔を伏せ、片手で顔を覆う。そんな彼女の姿を訝しげに隣でレイ

ヴンが見詰めている事にも、彼女は気づいていない。
「それより、二人に謝らないといけないか。気が重い……」
自分はフィーリアとサクラに対してどちらに加担せず、どちらも応援する腹づもりだった。二人もそれを承知している。だが、自分はそんな二人に対してもはやどちらの応援もできない。そんな事をし続ければ、自分が壊れてしまいそうな、そんな恐怖が過る。
自分に、二人を押しのけてクリュウを奪う覚悟があるだろうか――正直、ない。実力で奪う自信も、二人の悲しげな顔をねじ伏せて彼を奪う覚悟も、今の自分にはない。クリュウと同じくらい、二人にも悲しい顔をしてほしくない。それがリーダーとして、仲間としてのシルフィードのもう一つの本心だ。
「……見事な八方塞がりだな、これは」
自覚はしたものの、確実にこれまで奇跡と言ってもいい程のバランスで成り立っていた自分達の関係が良くも悪くも変化してしまう。下手すれば、関係が壊れてしまうかもしれない。それほどまでに、自分達の関係は砂上の楼閣のように脆い。
こうなってしまった以上、もうこれまでのような関係に戻る事は不可能だ。仮に自分が気持ちを黙殺して接すると決めたとしても、彼とこれまでと同様に接する事など不可能だ。微妙にズレが生じ、いずれはそのズレが関係を致命的に破壊してしまうかもしれない。
まさに進むも地獄、退くも地獄とはこの事だ。
シルフィードは一人今後の関係についてどうすべきかを悩み続ける。そんなこんなしているうちにクリュウ達の料理は終わり、クリュウが竜車に乗せている組み立て式のテーブルと下ろし、ルフィールがそれを組み立てて完成。後は完成した料理をその上に載せつつ、椅子を用意して準備完了だ。
「これで良し。シルフィ、朝食ができたよ」
クリュウが元気良く声を掛けるが、シルフィードは悶々と苦悩しており彼の声が届かない。クリュウは訝しげに彼女を見詰めながら仕方なく近寄って直接声を掛ける事にした。彼女へと近づく彼の背中を、ルフィールが黙って見詰める。

シルフィードの背後に迫ったクリュウは「シルフィ、ご飯だよ」と声を掛けながら、そっと彼女の肩を叩いた。その瞬間、
「ひゃあッ!?」
シルフィードは突然素っ頓狂な声を上げて振り返った。そして同様に驚くクリュウを至近距離で見た瞬間、彼女の顔はカァッと真っ赤に染まる。
「な、なな何だクリュウか。ど、どどどうした？」
「いや、朝食の準備ができたから声を掛けただけだんだけど……シルフィ、顔真っ赤だよ？　もしかして熱でもある？」
心配そうに彼女の額に手を伸ばそうとするクリュウだったが、シルフィードは「だ、大丈夫だッ」と後退って彼の手を避ける。訝しげに見詰めて来る彼の視線から逃れるように「食事はあっちか」とテーブルの方へ歩き始める。そんな彼女の背中を見送りつつ、クリュウは困惑しながら彼女の後を追った。
一方、彼から逃げるようにテーブルへと到達したシルフィードを待っていたのはルフィール。自覚した途端に情けない事この上ない状態になっている蒼銀の烈風の末路を見た彼女は一言。
「――アホですか？」
「……おそらく、どうしようもない阿呆だよ私は」
自覚があるからこそ、シルフィードは深いため息を零した。驚いたとはいえ、何て情けない声を上げて醜態を晒しているのか。避けられた彼にも悪いし、早速クリュウとの接し方に困惑してしまう。そんな彼女の姿を見て、ルフィールは呆れたように深いため息を吐いた。
「これじゃ、ボクの恋敵（ライバル）になるのはまだまだ先のようですね」
「そのようだな」
苦笑しながら答えるシルフィードの言葉にフッと笑みを浮かべると「席に着いてください。せっかく先輩が用意した料理が冷めてしまいます」と自ら進んで席に着席する。
シルフィードもルフィールはの対面の席に座り、遅れてやって来たクリュウとレイヴンはそれぞれルフィール、シルフィードの隣へ腰掛

ける。
　今日の朝食メニューは先程クリュウとレイヴンが釣ったサシミウオを油で揚げ、持ち込んだエレナの自家工房で焼いたマスターベーグルとクリュウお手製のタルタルソース、特売品の熟成チーズを組み合わせたフィッシュバーガー。さらに事前に家で作っておいた棍棒ネギ、ヤングポテト、激辛ニンジン、レアオニオン、くず肉をシモフリトマトとマイルドハーブで煮込んだ野菜スープを狩場で温めたもの。おいしそうな香りが、狩りで失われた栄養を欲しているお腹を刺激する。
「はぁ、お腹空いた。ほら、冷めないうちに食べちゃってよ」
　自ら作ったフィッシュバーガーを早速食べ始めるクリュウ。おいしそうに食べる彼の姿を見ていると、忘れていた空腹が一気に蘇る。鼻孔をくすぐるようなおいしそうな香りに、お腹が素直な反応をする。
「では、いただくとするか」
　シルフィードも目の前に置かれたフィッシュバーガーを手に取って一口頬張る。砲丸レタスは出撃の際に村の八百屋で朝に採れたばかりのものを購入した。それを氷結晶を敷き詰めた箱で冷蔵しておいた為、まだシャキシャキ感が十分過ぎる程に残っている。そのレタスのシャキシャキ感と採れたばかりの新鮮な魚を揚げた揚げ物のジューシーさと魚の風味、そしてその味を邪魔せずに見事に引き立てるタルタルソースの味のハーモニーはまさに絶品だった。
「うん、うまいな。さすがクリュウだ」
　料理の実力ならクリュウ達のチームはシルフィードを除いた全員が凄腕だ。実力派全員五分といった具合か、若干クリュウが上くらいのレベル。それぞれ郷土料理なら誰にも負けない実力者だ。まぁ、その三人よりもずっと上のレベルにいるのがエレナなのだが、彼女の場合は専門職なので必ずしも比較はできないが。
　その料理上手なクリュウが調理したフィッシュバーガーはまさに絶品だった。野菜スープもいい感じに煮込まれ、味が染みている。クズ肉が野菜の旨味を吸いつつ、自らの旨みをスープに出している、相

乗効果が素晴らしい。激辛人参が入っているので少しピリ辛だが、辛すぎずに味にどこか甘みを残しつつ爽やかな風味が鼻孔をくすぐるのはマイルドハーブのおかげだろう。
　自分にはこんな絶品料理は不可能だなと苦笑を浮かべるシルフィードの前で、同じようにクリュウの料理を食べているルフィールの顔もまた複雑そうだった。
「どうしたのルフィール？　もしかして、おいしくなかった？」
「……おいしいです」
「な、なら何でそんな難しい顔してるのさ」
　クリュウが問うと、ルフィールは深いため息を零して頭を抱えてしまった。心配するクリュウの事など忘れているかのように、ルフィールはがっくりとうなだれた。
「学生時代よりも圧倒的に料理スキルが向上しています。ボクも努力して来ましたが、それを上回る勢い。悔しいですが、料理では先輩には敵いません……うぅ、手料理で喜ばす事もボクにはできないなんて、先輩の常軌を逸したスキルの高さが恨めしい……」
　どうやらクリュウの料理スキルの向上を前に、自らのスキルの低さに絶望しているようだ。隣でクリュウは苦笑しながらどうしたもんかとシルフィードに助けを求めるが、シルフィードも諦めているとはいえ料理スキルではクリュウに全く敵わない身。助け舟を出す事もできず、無言でスープを飲む。
「本気で、料理の道を目指したらいかがですか？」
「いや、僕のはあくまで家庭料理だからさ。エレナみたいにそれで商売ができるようなレベルじゃない。料理ではエレナに、ハンターとしてはフィーリア達に、何だか僕って器用貧乏みたい」
　苦笑しながら言う彼の言葉にルフィールはどこか寂しそうに「また自分を卑下するような事を言って……」と苦言を呈する。そんな二人の会話に苦笑しながら、シルフィードは野菜スープをすする。
「まぁ、私は君の手料理は好きだぞ。家庭料理というのが、結局一番落ち着くしな」
　何気なく言ったシルフィードの言葉にクリュウは一瞬呆けたが、す

ぐに優しげな笑みを浮かべると「ありがとシルフィ」と礼の言葉を言う。そんな彼の言葉と笑顔にシルフィードは多少慌てながら「まぁ、フィーリアやサクラの料理もうまいがな」と続ける。そんな彼女の腰抜けな姿を見てルフィールは一人ため息を零す。

そんな感じの会話を交えながら食事は終わり、後片付けを終えた後、シルフィードが皆を集めた。集まった面々を見回しながらシルフィードは「さて、狩猟を終えて間もない所すまないが、そろそろ帰還の準備を始めるぞ」と通告する。

「おそらく、フィーリア達はすでに帰還しているだろう。あまりあの二人を、特にサクラをあのまま放置しておくのは村の治安に関わるからな。なるべく早く戻るべきだろう」

「……何となく事情は理解できましたが、ハルカゼさんはどういった人物なんですか？」

「扱いづらい所はあるが、まぁ根はいい奴なんだ。それだけ理解ておいてくれ」

シルフィードの説明に首を傾げつつも一応納得するルフィール。そんな彼女の説明にクリュウも苦笑を浮かべる。彼女の言う事はまぁ合っている。根はいい娘なのだ、根だけは、ね？

「捕獲したイャンガルルガの事はすでにアイルー経由でアルフレアのギルド支部へと通告した。後の事はいつもの通り現地のアイルーに任せておけばいいだろう。それでは各自出発の準備を進めておいてくれ」

シルフィードの言葉に全員うなずき、それぞれ出発の準備を始める。と言っても行きは狩猟に備えて準備していた為に荷物も多かったが、帰還時は道具（アイテム）類を使い切った後なので実は荷物と言える物は少ない。特にリフェル森丘から出るには長い上り坂を登らなければならない為、ある程度計算して帰る際には積載量を可能な限りなくす必要がある為だ。その為、村を出る時の半分くらいの時間で準備が完了する。

全員の準備が終わった事を確認すると、全員竜車へと乗り込む。幌の中にクリュウとルフィール、運転席にはシルフィードが手綱を持っ

て座り、その隣で憮然と座るのはレイヴン。
「出発するぞ、準備はいいな？」
シルフィードの問い掛けに幌の中からクリュウの「いつでもオッケーだよ」という声が帰って来る。それを聞いたシルフィードは小さくうなずくと「じゃあ、帰るか」と隣に座るレイヴンに声掛けるが、反応はなし。苦笑しながらシルフィードは黙って手綱を引く。
「キュイッ」
可愛らしい声を上げてゆっくりとアニエスが動き始め、竜車が進み出す。
時間にして約半日リフェル森丘で過ごし、慣れないチーム編成で見事黒狼鳥イャンガルルガを撃破した一行。来る時にあった見知らぬ相手に対するどこかギシギシとした空気はすでになくなり、幾分か和やかな雰囲気が一行を包んでいた。半日の狩りは、三人と一匹に確かな信頼の絆を生み出したらしい。
運転席にてアニエスに指示を出しながら村へと帰路を進むシルフィード。背後からはクリュウとルフィールの楽しげな会話が聞こえて来る。先程からその話題が気になって仕方がないが、運転している身としてはここを離れる訳にはいかず、先程からそわそわしっ放しだ。
そんな彼女の様子に気づいているレイヴンはしばらく黙って彼女の隣に座っていたが、突然深いため息を零すと彼女の手から手綱を奪い取った。
「お、おい何をするんだ」
「……気になるなら行って来るニャ。運転は俺がするニャ」
「いや、別に私は……」
「お前には借りがあるニャ」
「借り？」
「……相棒を守ってくれた事、感謝するニャ」
そう言って――彼は笑った。いつも憮然としているレイヴンが、その時だけはアイルーらしい可愛らしい笑顔を浮かべて、心の底からのお礼を彼女に言ったのだ。彼の表情、言葉からどれだけ彼が相棒であ

るルフィールを大切に想っているかがわかる。
　互いに望まぬ形でコンビになった二人。だが今ではもう、互いが互いを必要とする、そんな大切な関係になっている――そう、今の自分とクリュウのように。
「借りがあったままじゃむず痒いニャ。これでチャラニャよ」
　照れ隠しか、再び憮然とした表情に戻って手綱を引くレイヴン。シルフィードはそんな彼の姿に苦笑を浮かべながら「ずいぶんと対価が軽いな」とからかう。するとレイヴンは「別に嫌なら俺は向こうに行くだけニャ」と冷たく返す。そんな彼の姿に一瞬笑うと、シルフィードゆっくりと立ち上がった。
「じゃあ頼むとするよ――感謝する」
「フン」
　鼻を鳴らすだけで何とも素っ気ない反応。だが彼の尻尾は口と違って素直にぴょこぴょこと左右に揺れていた。
　シルフィードは幌の中に消え、すぐに会話の中に彼女の声も混じる。時折聞こえて来る相棒の笑い声に口元を綻ばせながら、レイヴンは竜車を前へ進み続けた。

第１９１話　決意を胸に抱きて　少女は未来へ向かって歩き出す

リフェル森丘を出た数日後、一行は無事にイージス村へと到着した。クリユウ達を出迎えたのは歓迎する村人達と、一週間程とはいえクリユウと離れ離れになっていたフィーリア、サクラ、エレナ、そしてツバメとオリガミ。特に彼の姿を見た途端サクラが駆け出し彼へと抱きつき、フィーリアもクリユウの右腕にしがみついて感動の再会に感激する。

シルフィードはそんな三人の様子を微笑ましくも複雑な心境で見守った後、ツバメに声を掛けた。狩猟の方はどうだったかと尋ねると、ガノトトスを無事に討伐したらしい。だが彼女が予想した通り、二人は怒りに任せてガノトトスを一方的に攻撃し、ツバメとオリガミはあまり出番がなかったらしい。ガノトトス相手に一方的に戦える二人の実力に驚くべきか、類まれなる戦闘能力を何とも子供っぽい理由で限界まで引き出す二人の幼稚さに呆れるべきか、シルフィードの心境は複雑だ。

ひとまずツバメに労いの言葉を掛け、シルフィードは村長に狩猟の報告を行う。その間もフィーリアとサクラのクリユウへのスキンシップは続くのだが、いつもならここへエレナが怒りながら乱入するのが常だが、今回はそんな彼女よりも先に動く者がいた。

「いい加減にしてください。先輩を困らせないでください」

甘える二人に威嚇するように堂々と仁王立ちしながら忠告するのは二色の瞳を煌めかせるイビルアイのルフィール。一瞬前まで笑顔全開だった二人も、彼女の登場に一瞬にして感情を殺す。秋空の下、ポカポカと暖かな日差しが降り注ぐ昼下がりのはずなのに、北風も吹いていないのに寒く感じるのは気のせいだろうか。

「……貴様に用はない」

まず最初に動いたのはやはりサクラ。クリユウを守るようにルフィールの前に立ち塞がりながら刃物のように鋭い隻眼を煌めかせ

ながら不敵に輝く邪眼（イビルアイ）と対峙する。どちらも気の強さだけなら相当な者同士だけあって、互いの瞳は強気に煌めく。
「あなたになくても、ボクにはあるんです。先輩は疲れているんですから、休ませてあげてくださいと意見具申しているに過ぎません。そんな事も気付けないなんて、それでよく先輩を好きとかほざけますね」
ルフィールの容赦のない物言いにサクラは悔しげに睨みつけながら押し黙る。悔しいが、彼女の言う言葉は全て正論だ。認めるのは癪だが、致し方ない。サクラは鼻を鳴らして彼女の方を一度睨みつけるとその場を去る。残されたフィーリアは一瞬クリュウとサクラの顔を見比べた後、急いでサクラを追って同様にその場を去った。
去って行く二人の背中を憮然と見送るルフィール。そんな彼女の頭を小突く者がいた。後頭部を小突かれたルフィールは不満そうに振り返る。その先には呆れ返るシルフィードが立っていた。
「君は協調性というものがなさ過ぎるぞ」
「ハルカゼさん程じゃありませんよ」
「……まぁ、否定はしないが」
協調性の無さという点ではサクラの右に出る者はいないだろう。その点ではシルフィードとルフィールは共通の認識を持っていた。まぁそれは置いといて、ルフィールの協調性の無さも相当なものなのだが。
「ルフィール。そんな言い方しなくてもいいだろ」
事実上二人を追い払ったルフィールに対しクリュウは苦言を呈するが、ルフィールはどこ吹く風。「ボクは事実を言ったまでです」と取り付く島もない。クリュウは苦笑しながら「まぁ、とりあえず家に戻ろうよ」と彼女の背中を押す。
「あ、エレナ。悪いんだけどランチの予約してもいいかな。フィーリア達の分も、僕が払うから」
「いいわよ別に。それくらいおごってあげるわよ」
「ほんと？　助かるよぉ、今回の報酬金が入らないと手持ち金がほとんどなかったから」

「……そんな時におごるなんて調子いい事言わないの」
呆れるエレナの言葉にクリュウは苦笑しながら「面目ない」と謝る。そんな彼の笑顔に口元に小さく笑みを浮かべながら「まぁいいわ。席を取っておいてあげるから、適当なタイミングで来なさい。どうせランチタイムも終わってるから」と言い残して先に酒場へと立ち去る。
ツバメはオリガミと共に村長に連れられて去り、残されたクリュウ、ルフィール、シルフィード、レイヴンのイャンガルルガ討伐組は村人達の感謝の言葉の花道を抜けると、ひとまず自宅を目指す。その道中、リリアとエリエに出会った。帰って来たクリュウの姿を見ると二人は満面の笑みを浮かべて駆け寄って来た。リリアはクリュウに正面から抱き付き、エリエもクリュウと幾つか言葉を交えながら嬉しそうに笑っていた。そんな小さな女の子二人にモテるクリュウの姿をジト目で見詰めるルフィールとレイヴン、複雑な表情を浮かべながら見守るシルフィード。
二人と十分ばかり会話をした後に別れ、一行はようやく自宅へと戻った。家の中に入ると、そこには先程去った二人の姿があった。どうやらテーブルに向かい合いながら座ってクリュウの帰りを待っていたらしい。だが二人が最初に目撃したのは愛しい彼の姿ではなく、愛しい彼と自分達を引き離す邪魔者。ルフィールの姿を見た途端二人共明らかな不快感を示すがルフィールは全く気にしていない。もはや肝が据わっているとか、そういう次元ではないようだ。
だがクリュウの姿を見た途端二人の表情が柔らかいものに変わる。視線を合わせたクリュウは優しく微笑みながら「これから酒場でランチしようと思うんだけど、二人も来る？」と二人を誘ってみる。当然返答は全力でイエス。二人の回答に満足気にうなずき、クリュウは「じゃあ半刻後に行くからね」と言い残して一人部屋の方へと消えて行った。
「さて、じゃあ私はひとっ風呂浴びようかな」
そう言ってうーんと腕を伸ばすシルフィード。するとフィーリアが「火はくべておいたので、もう入れると思いますよ」と気の利いた事を言ってくれる。シルフィードは「おぉ、助かるよ」と彼女に礼を

言って一人風呂場の方へと消えた。レイヴンもいつの間にか姿を消し、リビングにはフィーリア、サクラ、ルフィールというある意味最悪のトライアングルが残された訳で……

『……』

リビングには信じられないくらい重苦しい空気が漂う。誰も一言も口を利かず、誰一人沈黙を貫きながら睨み合ったまま立ち尽くす。友好的な雰囲気は一抹たりともなく、気まずい沈黙が続く。

「……あぁ、ルフィール。私と一緒に風呂でも入るか？」

そこへこの三人だけで残しておく事はまずいと気づいて戻って来たシルフィードがルフィールを風呂に誘う。するとルフィール「……そうですね」と短く答え、二人の方を睨みながらシルフィードの方へ移動し、彼女に連れられて風呂場へと去った。

気まずい雰囲気が消え、二人共ほっと胸を撫で下ろす。そこへ今度は私服姿に着替えたクリュウが戻って来た。リビングでぐったりとソファに腰掛ける二人を見て「どうしたの？」と声を掛ける。

「い、いえ何でもありませんッ」

慌てて姿勢を正して何事もない事をアピールするフィーリア。その隣では同じように姿勢を正してコクコクと同調するようにサクラがうなずいている。

「ふーん。シルフィとルフィールは？」

「お風呂に行きました」

「そっか」

手頃な椅子を引いてクリュウは腰を落とす。深呼吸すればそこは我が家の香り。やっと家に帰って来たという安堵が、胸いっぱいに広がるような不思議な感覚だ。

ようやくリラックスできたとばかりにくつろぐクリュウに、早速フィーリアが声を掛けて来た。

「あの、お疲れ様ですクリュウ様。黒狼鳥イャンガルルガを見事討伐されたんですよね」

「正確には捕獲だけどね。いやぁ、甲殻とかが硬過ぎたせいで腕がまだ痛いよ」

そう言ってクリュウは苦笑を浮かべながら腕をプランプランとさせてみる。正直、しばらくは筋肉痛などで日常生活にも軽く支障が出るかもしれないレベルだ。こんな後を引く感じはバサルモス戦以来だ。あの時に比べれば筋肉もついているはずなので、イャンガルルガの硬さには改めて驚嘆せざるを得ない。
「そっちはどうだった？　まぁ二人がいればガノトトスくらい大した事じゃないと思うけど」
フィーリアとサクラ、それぞれ単独でもガノトトスくらい余裕で討伐できるような実力者だ。その二人がタッグを組み、さらにツバメとオリガミが加わっているのだから特に問題なく討伐できた事は想像に難くない。が、
「ま、まぁそうですね……」
何とも煮え切らない答えで返しながらフィーリアは視線をサクラの方へ向けるが、サクラはそんな彼女の視線に目を合わせようとしない。まぁ、言えるはずもない。怒りに任せてガノトトスを一方的にボコったなんて。その戦いぶりはツバメとオリガミが互いに抱き合ったまま震えていた程なのだから。命を大切に想う心を持つ彼には、絶対に言えるような描写ではない。
「ケーニッヒ様とは、その、連携の方は……」
訊きづらそうにに尋ねる彼女の問いにクリュウは「うん？　そりゃあもうバッチリだよ。さすが昔僕と組んでいただけあって、互いの動きがよくわかる。いいパートナーだよ」とにこやかに答えるが、その返答に二人の少女が猛烈なダメージを負う事を、彼は知らない。
「……わ、私の方がクリュウのパートナーに相応しい」
フラフラと力なく立ち上がりながらも、凛とそう宣言するサクラ。クリュウの相棒として彼と連携して動ける者は他にはいない。そういう絶対の自信と自負とプライドが、彼女の心に炎を燃えたぎらせる。
「わ、私もクリュウ様の背中を守れるのは私だけだと自負していますッ」
フィーリアも負けじと自らをアピールする。

妙に対抗心を燃えたぎらせる二人のアピールにクリュウは「う、うん。二人共頼りにしてるよ、もちろん」と若干引きながら答える。そんな彼の返答に不満はあるも、ひとまず浮いていた腰を戻す二人。
「そりゃあもちろん、二人に比べれば圧倒的に経験が少ないからね。現時点ではまだまだだよ。でもまぁ、あの子は才能もあるし、決して弛まぬ努力を続けると思う。そうすればきっと、ルフィールは凄腕のハンターになれるよ」
ルフィールの実力はまだまだこの程度ではない。今はまだ経験が足りないだけ。それにまだ彼女は若い。これから多くの経験を積めば、その実力はまだまだ開花していくだろう。その潜在能力はきっと、自分をも上回るだろう。それだけの才能が彼女にあり、それだけの才能を引き出す努力を、彼女は諦めないだろう。
「ルフィールは、強くなるよ」
後輩の成長した姿を想像して、楽しげに笑う彼の笑顔を二人は複雑そうに見守る。ルフィールとクリュウは、自分達とクリュウとは違う関係性だ。先輩と後輩、ある意味ただの仲間という関係性より密接な関係と言えるだろう。その関係性が、今は少し羨ましかった。
「そ、それで……、あの、クリュウ様」
覚悟を決めたように何かを切り出そうとするフィーリアにクリュウは「うん？　どうしたの？」と彼女の方へ視線を向ける。フィーリアは一度大きく深呼吸すると、意を決したように切り出す。
「――クリュウ様は、私やサクラ様を、見捨てたりしませんよね？」
泣きそうな表情で必死にすがるように言う彼女の言葉に、クリュウはそれまでの和やかだった表情を一変させる。視線を逸らすと、同じような表情でジッとこちらを見詰めているサクラと目が合う。気まずそうな雰囲気の中、クリュウはゆっくりと口を開いた。
「そりゃあ、見捨てたりしないよ。しないけど……」
「私はクリュウ様と、これからもずっと一緒にいたいです」
クリュウの手を握り締め、必死に訴えかけるフィーリア。彼女のすがりつくような視線と言葉に対してクリュウは「もちろん、僕だってそうだよ」と素直に答える。その返答に幾分かフィーリアは安心した

ように微笑むが、その隣で憮然と立っているサクラの表情は厳しいままだ。
「……なら、これまで同様のチーム編成という事で異論はないわね？」
「いや、それはもうちょっと待って。もう少し、考える時間がほしい」
サクラの歯に衣着せぬ直球な問い掛けに対してクリュウは答えを出す時間をもう少しほしいと返した。その返答にサクラの表情に一瞬動揺が走ったが、すぐに平静を装い「……構わないわ。ただ、結論は早い方がいい」とだけ返すと一人階段を上って行ってしまった。
クリュウはそんな彼女の背中に向ける言葉が見当たらず沈黙していたが、そんな彼にフィーリアが静かに声を掛ける。
「……クリュウ様の優しさ、私は大好きです。でも、時にそれは残酷だって事、重々理解しておいてください」
そう言い残して、フィーリアは親友の後を追うように二階へと消えた。一人残されたクリュウは無言のまま柱へと近づくと、その柱に向けて思いっ切り頭突きをかました。視界が一瞬揺れる程の衝撃と、額に走る激痛。でもきっと、二人はずっとこの痛みなんかよりも痛い想いをしていたに違いない。二人のあんな寂しそうな顔、見たくなかったのに。
額を柱に押し付けたまま、クリュウはしばらくそうしてぐったりとうなだれていた……
「え？　旅に出るって……」
全員の着替えが終わり、オリガミから昼食の支度ができた事を聞いた一行はエレナの酒場にてランチをする事になった。エレナお手製の絶品ランチを堪能し、飲み物片手に団欒を楽しんでいた一行に対し、突如ルフィールが告げたのは、再び旅に出るという趣旨の発言だった。
動揺が広がる面々を前にしても、当のルフィールはひどく冷静だった。お茶を一口飲み、口の中を潤すと、動揺するクリュウ達に対して冷静に自らの意見を述べる。
「今回の狩猟を通して、自らの未熟さを痛感しました。修行を積み、一定の功績を残し、自らの実力は先輩の背中を守れるだけのものに成長

したと自負していましたが、結果は惨憺たるものでした。ボクは自らの過信を改め、再度修行を積むべきだと判断しました。名残惜しいですが、ボクはまだ先輩の相棒には相応しくありません」
　淡々と述べる彼女の発言に他の面々は戸惑いを隠せない。そんな中、クリュウは静かに砂糖たっぷり入った紅茶を淹れたカップをソーサーの上に戻す。
「僕が言うのも何だけど、君はまだかけだしのハンターだよ。それがいきなり経験を積んで一人前として前線で戦うハンターと比較して弱いなんて、ある意味当たり前。比較対象にする事すら無理な話だよ。特にシルフィは二つ名まで持つような猛者だからね」
　クリュウの言葉にシルフィードは複雑そうな表情を浮かべている。強いと褒められる事はハンターとして嬉しい事だが、女としてそれはどうなんだろうという葛藤を抱いているのだが、当のクリュウはそんな彼女の葛藤など気づく事なく続ける。
「それに、僕の個人的な意見を言えば――卒業後半年でその実力ならすごいと思うよ。当時の僕よりもずっと強いくらいだもん」
　苦笑しながら彼が言う通り、ルフィールの実力は彼が卒業半年後の時よりも上だ。元々の才能の差もあるが、何よりも彼女の弛まぬ努力が自らを鍛えていたからに他ならない。だがクリュウの褒め言葉にも、ルフィールはゆっくりと首を横に振る。
「ボクの目的はあくまで先輩の相棒になる事です。その為には、最低でも先輩と同等かそれ以上の実力を身につけなければなりません。現時点で先輩よりも実力が劣っている時点で、ボクは第一条件すら果たせていないんです」
「……別に、僕は実力で仲間を決めている訳じゃないよ。ただ信頼出来るか出来ないかであって、その点でルフィールは十分信頼出来る。仲間だとしても何の問題もない」
「ありがとうございます。先輩に信頼されている、それだけでボクはどんな苦行にも耐えられる。今回、その先輩の想いを再確認できただけで、ここへ来た価値は十分にありました。ですがやはりボクはまだまだ未熟者です。もっと経験を積んで、もっと見聞を広め、もっと強

くなる為にも、また旅に出る必要があるんです」
ルフィールは一度決めた事は絶対に曲げない子だ。その彼女が明確な決意と目標を持って決めた事だとしたら、先輩としてクリュウがすべき事はただ一つだ。
「……そっか。なら、もう止めないよ。いつか、君が本当に僕の相棒になれる日が来るのを楽しみにしてるよ」
笑顔で言う彼の言葉にルフィールも「……ボクもきっと、その日が来ると信じています」と微笑みながら答えた。
クリュウの言葉に引っかかりはあるものの、とりあえず現時点でのチーム解散という最悪の危機は脱した。ほっと胸を撫で下ろすフィーリア、サクラ、エレナ、シルフィード。だがルフィールは再び表情を引き締めると突如ビシッと彼女達を指差した。何事だとばかりに驚く彼女達を前に、ルフィールはニヤリと不敵な笑みを浮かべる。二色に煌めく必殺のイビルアイを輝かせ、強気に、言ってやった。
「――先輩は絶対に渡しません。覚悟しておいてください。ボクは、あなた方を超えてみせます。このイビルアイに誓ってッ！」
不敵に、それでいて楽しそうに、堂々と宣言する彼女の言葉に驚く一同。だがしかし、そんな彼女の宣戦布告に対してニヤリと笑いながら応える恋姫達。
「まぁ、期待して待っているさ。だが私も、そう簡単に負けるつもりはないがな」
腕を組みながら大人の余裕という感じで威風堂々と受けて立つシルフィード。
「わ、私だって負けませんッ！　レヴェリの名に懸けてッ！」
可愛らしくギュッと胸の前で両の拳を握り締めながら、年下相手には絶対に負けないとばかりに強気に受けて立つフィーリア。
「……貴様に受けた恥辱、未来永劫忘れない。貴様だけには、絶対に負けない」
強気に煌めく隻眼を輝かせながら、不敵に仁王立ちし、そして嘲笑する。何とも失礼極まりないが、それが彼女なりの覚悟の表れなのだろう。自信満々に売られたケンカを買うのは、さすがと言うか。

「……いや、そもそもあんたがあんな物を隠し持ってたのがいけないんでしょ」
一人冷静にサクラのボケにツッコミを入れるエレナ。しかしフッと口元に笑みを浮かべるとルフィールを前に「まぁ、私はハンターじゃないけど。料理の腕ならあんたなんかには絶対に負けないわよ」と別枠で勝負を買う。
四人の言葉にルフィールはブルブルと体を震わせる。強敵を前に恐怖しているのではなく、むしろ武者震い――否、彼女の瞳には薄っすらと涙が浮かんでいた。そんな彼女の姿をジッと見詰めていたクリュウは、心の底から安心したような笑みを浮かべた。
どこかぎこちない、それでも心から嬉しそうな満面の笑みを浮かべながら、彼女は尋ねる。
「――その前に、ボクと友達になってくれませんか？」
彼女を認めてくれる友達ができた事を、クリュウは心から喜んだ。
出発は明日とかなり急だが、可及的速やかにに修行を始めたいという彼女の意向を汲み、準備は進められた。今回村を守ってくれたお返しとして村長がドンドルマへ帰る手段として漁船を一隻提供してくれる事となった。
その夜、ルフィールの送別会という事で恒例のように村全体がお祭りモードとなった。村人達はイビルアイの彼女に対して何の偏見も持たずに接していた。元々田舎だけあって邪眼姫（イビルアイ）の伝説があまり伝わっていないという事もある。あれは元々アテネ神教に登場する悪魔なので、無神論者ばかりのイージス村では意味を成さない。それに村を守ってくれたという事実が、彼女を受け入れる最大の理由となった。
村の子供達もルフィールに殺到し、ルフィールは困惑しながらも子供達といくつか言葉を交わした。あまりこういう大勢での歓迎を受けた事がない彼女はかなり困惑し、ずっとクリュウの背中に隠れていた為に他の恋姫の嫉妬心はすごいものだった。しかし友達になったからには今日だけはルフィールに彼を預けると決めた以上手出しはできず、皆一様に酒を飲み倒して酔い潰れたのはまた別のお話。

散々騒いだ後、祭りはお開きとなった。酔い潰れた女子陣をクリュウ、ルフィール、ツバメ、アシュアの面々がそれぞれの部屋に送った後、クリュウとルフィールは二人で出掛けた。
「……何で、わざわざここに来たのさ」
慣れている所でも、さすがに夜に来る事はない為にクリュウは薄気味悪そうに辺りを見回す。そこは村の外れにある共同墓地。昼間には両親の墓参りに来る事はあっても、夜に好き好んで墓地には来ない。
そんな夜の墓場に、クリュウとルフィールの姿はあった。クリュウは下は長ズボン、上はTシャツにケルビの皮で作られた上着を羽織ったラフな格好。一方のルフィールはずいぶんとオシャレを意識した姿をしていた。燕尾服のような袖口が広めな白いシャツに黒を基調に四重のフリルがついたスカート。フリルは上から黒、紅白のチェック柄、黒、またチェック柄のように交互に二種類の生地が使われている凝ったデザイン。左腰にはオシャレチェーンを下げ、胸元にはノヴァクリスタルの欠片を六角柱に加工したペンダントが煌めく。言うまでもなく、クリュウを意識したオシャレ服だ。すでにお披露目を済ませ、クリュウにもかわいいと褒められた自信満々の服装だ。少し肌寒いが、オシャレの為ならそれくらい我慢できる。思考も昔に比べてずいぶんと女の子っぽくなった。
ルフィールは無言でリリアの店で買った雪山草の花束をそれぞれ並んで埋葬されているクリュウの両親の墓の前にお供えする。傍に置かれたランプの明かりが、墓石に刻まれた両親の名前をゆらゆらと浮かび上がらせる。
「せっかく先輩の故郷に来たんですから、先輩のご両親に挨拶するのが当然です。明日はドタバタしますので、できるのが今日の夜しかなかったんです」
「……そっか」
クリュウは膝を折って手を合わせるルフィールの頭を優しく撫でると、同じように膝を折って両親の墓の前で手を合わせる。
しばらくの無言があって、クリュウが閉じていた瞳を再び開く。視

線を感じてそちらの方へ向くと、ジッとこちらを見詰めているルフィールと目が合う。
「どうしたの？」
「ボクには、両親がいません。正確にはそういった類がいたからこそボクは存在してますが、ボクの記憶にはそういった存在はありません」
「……捨て子、だもんね。教会出身だったっけ？」
「はい。エルバーフェルドの片田舎にあるアテネ神教の教会でした。そこにはローレライの悲劇で生まれた孤児が何人もいて、ボクもその一人でした。アテネ神教ではボクのこの目は悪魔の象徴でしたけど、神父さんやシスターさんはボクや子供達に邪眼姫（イビルアイ）の事は伏せて育ててくれました。おかげで迫害される事はありませんでした。しばらくして、聖書を読んでいた際にボクは自分の異質さを知る事になりましたが」
「って事は、君はエルバーフェルド人なんだ」
「一応そうなりますね。まぁ、祖国に対して何の感情も抱いてはいませんが」
「君の名前も神父さんが？」
「はい。ケーニッヒはエルバーフェルド語で王を意味します。神父さんはボクに王のように勇ましく、気高く、強い人間になるよう意味を込めたそうです」
「そっか。一度、その神父さんに僕も会ってみたいな」
「無理ですよ。現政権になってからは徹底的にエルバーフェルドではアテネ神教が排斥されましたから。先日エルバーフェルドを巡った際に教会も訪ねましたけど、すでに取り壊された後でしたから」
　悲しそうに言う彼女の言葉にクリュウは「ごめん……」と短く謝った。ちょっと考えればわかる事だった。自分も数ヶ月前に同じくエルバーフェルドに行った。アテネ神教が同国でどういった類として扱われているかなど、重々承知していたはずだ。
　自分の軽率な発言を反省するクリュウを前にルフィールは「別に構いませんよ。たぶん、本国の方に帰って平和に暮らしていると思いま

すから」と微笑んだ。本国とはもちろん神聖ローマリア法国の事だ。
ルフィールは「でも、ボクはまだマシな方です」と言葉を続けると、そっとクリュウの母であるアメリアの墓を優しく撫でた。
「先輩はご両親に愛されて育ちました。だからこそ、そのお二人を失った時は言葉には出来ない程苦しまれたと思います。ボクは最初から両親の愛を知らずに育ちましたから、失うものが何もないボクと、大切なものを失った先輩。同じ孤児状態でも、ボクと先輩は違います」
「……そうかな。両親を知らないって方が、ずっと辛いと思うけど」
クリュウの記憶の中には、両親と過ごした幸せな日々が刻み込まれている。父親の記憶は子供過ぎた為に曖昧だが、それでも優しかった父親の事はよく覚えているし、何かと手を焼いた母親の事は特に大切な思い出だ。
ルフィールにはそんな両親と過ごした記憶が無い。それは、ある意味で自分よりも辛いのではないか。でもルフィールはそんな事を感じさせない。本当に気にしていないのか、あるいは……
「まぁ、いずれボクにも両親ができるかもしれませんが」
「え？　そうなの？」
驚くクリュウの反応を見てルフィールは疲れたようにため息を吐く。困惑する彼の目の前で「お義母さん、あなたは息子さんにどんな鈍感スキルを育んだんですか」と、アメリアの墓に向けて苦言を呈する。
「でも、先輩のご両親にはお会いしたかったですね。どんな方だったんですか？」
「う、うーん、ちょっと説明するにはややこしいかなぁ」
苦笑を浮かべるクリュウの反応にルフィールは不思議そうに首を傾げた。まぁ、母親が元王族で父親と駆け落ちして来た、なんて夢物語と言うかこれ以上面倒な説明はない程に複雑な関係だ。まぁ、それは追々話すとしてクリュウは「うーん、優しい人だったよ。父さんも母さんもハンターだったからさ、僕はその背中を見て育ったから」と二人の印象を話す。

「ご両親は、お強かったんですか？」
「うん。すっごく強かったよ、父さんは銀レウスの、母さんは金レイアのG級武装を身に纏って、どんなモンスター相手にも勇猛果敢に挑んでた。凄腕のハンターだよ」
「お強かったのですね。それでは先輩は、そんな有能なお二人の血を受け継いでいらっしゃるので、今後お二人を超えるようなハンターになるでしょう」
「どうかなぁ？　僕はハンターとしての才能はあまり受け継いでないと思うけど。自分で言うのも何だけど、平々凡々だし」
「東言葉に大器晩成という言葉があります。世の中にはその実力を開花するには時間が掛かる人もいる、という意味です。先輩はその部類に入りますよ」
「だといいけどねぇ」
　自分が凄腕のハンターになる。そんな姿はあまり想像できない。一人で古龍に挑む姿など、全く思いつかなかった――でも、仲間と一緒に力を合わせて挑む姿だけは、少しだけ想像できた。それは、どんなに頼もしい光景か。
「ボクも、負けてはいられませんね」
　そう言って、ルフィールは握り締めた両の拳を胸の前で揺らす。日進月歩、常に前へ進み続ける彼女の姿は、実に頼もしくて、勇ましい。その小さな体は、まだ無限の可能性を秘めているのだ。
「まぁ、無理はしないようにね。無理し過ぎて体を壊しちゃ意味がないんだからさ」
　そう言ってクリュウはルフィールの頭を優しく撫でた。ルフィールはそんな彼の温かくて優しい手を頭に感じながら嬉しそうに目を細め、屈託なく微笑む。
「ほんと、先輩はお優しい方ですね」
「それだけが取り柄みたいなものだからさ」
「またそんな事言って……」
　苦笑を浮かべながら頭を撫でる彼の言動に呆れつつも、どこか安心したようにルフィールは微笑む。自分が知っている彼の姿と、今の彼

の姿は変わっていない。昔よりも強くなったとか、かっこ良くなったとか。そういう事ではなくて、もっと根っこの部分で変わっていない。彼が自分の知っている彼でいてくれている。それが、ちょっぴり嬉しかった。
「先輩を見ていると、きっとご両親も素晴らしい方だったのだと想像できますね」
「うん、自慢の両親だよ」
「……お墓参り、できて良かったです」
そう言ってルフィールはゆっくりと立ち上がる。クリュウもそれに合わせて置いておいたランプを手に取って落としていた腰を上げた。ルフィールはクリュウの両親の墓を見下ろしながら、静かに微笑む。
「……また来ます」
「ルフィール」
名前を呼ばれて振り返った瞬間、ルフィールの両目が大きく見開かれた。
目の前で優しげな笑顔を浮かべながらクリュウが立っている。美しい月明かりをバックにして立つ彼はそっと自分の方へ手を差し伸べた。視線を落とし、彼の手を数秒見詰めた後、ルフィールは口元に微笑を浮かべながら彼の手を握り締めた。肌越しに伝わる彼の優しさ、温もり。少し冷えた手を、温かく包んでくれる。
「帰ろっか」
「……はい」
握ってくれる彼の手を、ルフィールもしっかりと握り返した。
二人並んで、クリュウとルフィールは歩き出す。共同墓地を出て、村の中枢へと繋がる一本道を互いの温もりを感じ合いながら無言で進む。
ルフィールはうつむき加減で彼の隣を歩いていたが、意を決したように繋がっている彼の手をグッと引き寄せると、そのまま彼の腕にしがみついた。両腕で彼の片腕を抱き締め、グッと近くなった彼の驚く顔にイタズラっぽく微笑む。

「先輩は、誰にも渡しません。先輩は――ボクだけの先輩ですからねッ」

第１９２話　胸に想いを抱きし少女達の新たなる旅立ちの朝

家に帰ると、すでに皆寝静まっている後だった。女子陣は酔い潰れているし、ツバメとオリガミもすでに就寝したらしい。二人は物音を立てないようにクリュウの部屋へと向かう。

すでにルナリーフ家は空き部屋がない。結構な人数が暮らせるはずの家だが、客室は全て村所属のハンター全員に開放されている為だ。民宿などは空きはあったが、ルフィールがクリュウの傍じゃないと嫌だと断固これを拒否した上に他の女子陣との相部屋も本人や相手側の拒否もあって難航。仕方なくクリュウの部屋に布団を敷く事になったのだ。当然他の女性陣、特にフィーリアとサクラの根強い反対はあったが、クリュウの説得もあって渋々了承し、何とかルフィールの今夜の寝床が決まったのだ。

クリュウの部屋は一階にある。本来ならルフィールとしては彼に案内されて、初めて彼の部屋を知るはずだったが、事前に侵入を果たしてしまっている為初見の感動はない。

部屋の前に到着するとクリュウはドアを開けて部屋に入る。それから入口で待っている彼女を招き入れた。部屋の様子は数日前の昼間に見たものと大して変わらない。昼夜の変化くらいしか、基本的に差異はなかった。

クリュウは手に持っていたランプを部屋の中央の天井から吊り下げられたフックに引っ掛ける。元々このランプはクリュウの部屋の灯りだ。持ち運びでもきるようになっている。大都市の街路灯などに使われているガス灯に比べれば明るさはないが、手軽に持ち運びできるという利点がある。

部屋に招き入れられたルフィールはそのまま彼のベッドの上に腰掛けた。数日前にここで恥ずかし過ぎる痴態を彼に見られてしまったというトラウマが蘇るが、頭を振ってその忌まわしい記憶を記憶の片隅へと追いやる。

「それじゃ、もう寝ようか」
クリュウはそう言って衣装ダンスの中から寝間着を取り出すと「それじゃ、僕は廊下で着替えるから。着替え終わったら呼んで」と言ってルフィールが止める間もなく部屋を出て行ってしまった。本来なら自分の方が廊下で着替えなきゃいけない立場だし、何なら同じ部屋で着替える事も構わないのだが、彼はそんな彼女の危険思想をいち早く察知して先手を打ったのだ。
ルフィールはため息一つ零すと彼を廊下に長居させてはいけないと手早く着替える。すでに二人共それぞれ個別で風呂を済ませている。風呂に入った後、一息入れていた際にルフィールがクリュウに無理言って彼の両親の墓参りをしたのだ。
彼に褒められた自慢の服を名残惜しそうに脱ぎ、きれいに畳む。下着は風呂を上がった時に換えたのでそのまま。ちなみに一年半前とサイズはまるで微動だしていない。二年くらい前に買った下着も使用できるので経済的な反面、何だか強烈な敗北感を抱かずにはいられない。
服を畳んだ後、ルフィールは持ち物の中からパジャマを取り出す。ちなみにこのパジャマもある意味勝負服だった。先程の勝負服と同様に某ギルド嬢に連行される形で入ったドンドルマの女の子向けのファッション店で手に入れた一品。女の子らしいかわいさを全面に出した、変化球的な勝負服。
クリュウには言えないが、普段はシャツ姿で寝たりとオシャレには一切興味を示さない出で立ちをしている。その為、今回の為に購入した慣れないパジャマに四苦八苦しながらも何とか着終え、クリュウを呼び戻す。
「入るよ。いい？」
「は、はい」
緊張した様子で返答するルフィールの声に多少の疑問を抱きつつも、クリュウは部屋に戻った。彼の服装はいわゆる一般的なパジャマ姿だ。若葉色と白を基調としたチェック柄の上下。最も寝やすい格好と言ってもいい。

部屋に戻ったクリュウだったが、目の前にちょこんと立っているルフィールの姿を見て一瞬言葉を失っていた。
そこにいたのはかわいい後輩――ではなく、かわいらしいメラルーだった。正確にはメラルーの格好をしたルフィールだ。
黒いワンピースのような上下が一体化した衣服を基礎にフードを備え付けたような形。しかもフードにはネコミミが備えられ、お尻からは黒い尻尾が垂れる。スカートの丈は膝より少し下くらい――要するにメラルーの着ぐるみパジャマという訳だ。
衝撃の光景に固まるクリュウに対し、ルフィールは頬をほんのりと赤らめながら右手を頬の横まで持ち上げ、そのまま拳を作って垂らす。そして、
「にゃ、にゃぁ……」
と、メラルーの鳴きマネを披露する。途端に頬は真っ赤に染まり、助けを求めるようにクリュウの方を凝視するが、クリュウもこの現状で彼女を救出する言葉が見つからずにいた。
妙な沈黙が数秒続いた。ルフィールが恥ずかしさのあまり奇声を上げそうになった時、そんな沈黙を破ったのはクリュウの「ぷっ」という吹き出し笑いだった。
「わ、笑わないでくださいッ！」
気まずい沈黙はなくなったが、ルフィールの羞恥心は限界にまで達しつつあった。こんな醜態を晒す事になるなんて、これを全面プッシュした某ギルド嬢には後で猛抗議する必要がある。慰謝料だって請求してもいいはずだ。
顔を真っ赤にしながら涙目で床を睨みつけるルフィール。すると、そんな彼女の頭の上にクリュウはポンと手を置いた。フード越しでもわかる彼の温かな手のひら。ネコミミの間に置かれた手は、さながら本当にメラルーの頭を撫でているかのようだ。
「ごめんごめん。いや、何か面白いというか、かわいい格好してたからつい」
楽しそうに笑う彼の言った《かわいい》という単語に、ルフィールは顔をうつむかせ続ける。だがその表情は先程までの穴があったら

入りたい的な羞恥に染まったものではなく、ニヤけが止まらない的なとてもクリュウにはお見せできない絵面になっていたり。
「いやぁ、ずいぶんとかわいいパジャマがあるもんだね。さすが都会」
単純にクリュウは都心のファッションのレパートリーの多さに驚嘆するが、彼の言った何気ない一言でルフィールは天にも昇る気持ちになっている。なでなでと優しく頭を撫でられ、ルフィールは嬉しくて仕方がない。
「さっきの服もそうだけど、ルフィールもオシャレを楽しめるようになったんだね」
「も、もちろんです」
えっへんと威張ってみるが、本当は某ギルド嬢が「女の子なんだから、もっとオシャレしなきゃダメッ。せっかく素材はいいんだからぁッ」と無理やり自分にオシャレをさせているのが。いつもは鬱陶しくて仕方がないが、今回ばかりは彼女のお節介に大感謝だ。
「うん、いいものを見れて良かった」
ルフィールが普通の女の子らしく暮らせているとわかり、安心するクリュウ。一方のルフィールは自身の格好が彼の目の保養になったと大喜び――どうにも二人の間には微妙に相違があるようだ。
「じゃあ、もう寝ようか。明日は早いんでしょ？」
「はい。ほんと、突然押し掛けたと思ったら早朝に出立するなど、騒々しくてすみません」
「いいよいいよ。こうして顔を出してくれただけでも嬉しいからさ。ゆっくりできないのは残念だけど、自分で決めた事なんでしょ？だったら、僕は何も言わないよ。ちゃぁんと明日は送り出してあげるさ」
「……先輩の温情に感謝します」
礼儀正しく頭を垂れるルフィール。その行為自体は実に礼儀正しく、立ち振舞も凛々しいのだが、如何せん格好が格好だ。ネコミミパジャマでは迫力に欠け、むしろそのかわいらしい外見からのギャップでかわいらしさの方が抜きん出る。
「じゃあ、布団を敷くから。この辺で大丈夫かな？」

クリュウが指し示したのはベッドの横。上から見れば並んで寝る形になる位置だ。一番無難だし、何の弊害もないはず。クリュウはこの選択に自信を見せたが、ルフィールからの回答は予想外のものだった。
「ダメです」
「え？　じゃあ、こっちとか？」
クリュウは別の場所を提示するが、ルフィールはそれも拒否。その後何度か別の場所を提案するも、ルフィールは全部拒否した。そんなに広くない部屋だ。敷設予定地などすぐになくなる。
「えぇ？　じゃあどこで寝たいの？　もしかして、ベッドの方がいいの？」
「そうですね。ベッドがいいです」
「え？　で、でもいつも僕が使ってるベッドだし。洗濯もしてないよ？」
女の子とはきれい好きであり、人が使った物を使いたくないという傾向が強いというのがクリュウの女子に対する認識だ。だが彼は知らない。世の中には例外というものがあるという事を。その例外とは、女子が特定の異性に抱く感情に起因するもので……
「構いません。ボクはベッドで寝たいんです」
「……いや、君がそれでいいなら構わないけど。じゃあ、僕はこっちに布団を敷いて寝るね？」
「ダメです」
先程の布団の敷設最中にずっと言われた言葉をまたしても言うルフィール。だが今回はこれまでと違って彼女の判断を仰ぐ必要はないはずだが……
「いや、隣に布団を敷くだけだから、別にいいんじゃないかな？　もう少し、向こうの方がいい？」
一年半前は常に後ろにくっついていた彼女も、今では異性とはあまり近づきたくない年頃なのだろうか。彼女の成長を嬉しく思う反面、何だか寂しい想いが胸いっぱいに広がる。どうにも複雑な心境だ。
ルフィールの成長をまるで父親のような視点で見詰めながら感動

するクリュウだったが、次に彼女の口から吐かれる言葉は彼の予想を遥かに上回るものだった。
「先輩も一緒にベッドで寝てください」
一切の躊躇なく、真っ直ぐな目で堂々と宣言するルフィール。なぜそこまで堂々とできるか理解できず、クリュウは顔を手のひらで押さえながら力なくうなだれる。ついさっきまで彼女の成長に喜んでいただけに、そのショックは大きい。
「ええっと、ベッドもあるし布団も用意できる。部屋だってそんなに広くはないとはいえ、布団を敷くくらいのスペースは十分にあるよね？　なのに、どうしてそういう結論に至るのかな？」
額を押さえながら尋ねる彼の問いかけに対し、ルフィールは「先輩と一緒に寝る事が前提条件ですので」と平然と返す。その威風堂々とした受け答えに、クリュウは疲れたように大きなため息を吐いた。
「前提条件からそもそもおかしいよね」
呆れたようにもう一度大きなため息を吐くクリュウ。そんな彼の反応にルフィールは心外そうに「ボクは何もおかしい事は言っていません」と堂々と言い張る。
「とにかく、僕はこっちで寝るから。君はベッドで寝てよ。明日は早いんでしょ」
もうこの話は終わりとばかりに無理やり打ち切るが、当然ルフィールは納得いかない。布団を敷こうとするクリュウの前に立ち塞がると、彼の行動を妨害する。
「話は終わっていません。それに、勝手に布団を敷かないでください」
「……ルフィール。自分の言動が明らかにおかしい事、わかってる？」
「ボクは何もおかしい事は言っていません」
断固自らが正しいと信じて疑わないルフィールの姿に、クリュウは半ば諦めたようにため息を零す。どうやら何を言っても無駄らしい。こういう頑固な所は昔から全く変わっていないようだ。成長していないようで嬉しいような、全く成長していない事に呆れるような。複雑な心境だ。
黙り込む彼を前にして、ルフィールはそっと彼の手を握り締めた。

そして、訴えるように彼の瞳を見上げる。二色の瞳を必死に輝かせながら、ルフィールは己の想いをぶつける。
「――ボクは先輩と寝たいだけですッ！」
「他人に聞かれたら誤解されるような事を大声で言わないでくれるかなッ!?」
　呆れを通り越してもはや頭痛すら感じるクラスだ。ちなみに彼が誤解した意味だとしても、ルフィールは彼相手なら拒否しないだろう事は、言うまでもないだろうが……
「……一年半ぶりなんです」
　額を押さえて考え込む彼の耳に届いたのは、そんな彼女の弱々しい声。視線を下げると、何をそんなに必死になっているのかと問い掛けたくなるほど、彼女は真剣な眼差しで自分を見上げていた。
「一年半、ずっと我慢してたんです。ずっと、寂しかったんです……」
　それは、彼女の本音だった。ずっと、胸の奥に留めていた想い。会いたいけど、会いに行けない。自分で決めた事だから余計に。いつか再会できる時を夢見て、ずっと夢の中でしか会えなくて。ずっと我慢してきた。我慢して我慢して、胸の奥に押し留めていた想い。
　一年半の時を経て、今それが叶った。ずっと待ち望んでいた彼が、今目の前にある――少しくらい、甘えたってバチは当たらない。
「もう、先輩と一緒に居られる時間は残りわずかなんです。だから……」
　淋しげにつぶやく彼女の言葉にクリュウは小さくため息を零す。そして、うつむく彼女の頭を優しく撫でる。視線を上げる彼女に向かって、彼は優しげに微笑んだ。
「仕方ないな。今日だけだからね」
「先輩……ッ」
　見る見るうちに満面の笑顔に変わっていくルフィールの姿に、クリュウもようやく諦めたらしい。半年間とはいえ、一緒に過ごした相手だ。自分が決めた事は絶対に曲げない彼女の頑固さには慣れっこだ。
「それじゃ、早く寝ちゃおうよ」

そう言ってクリュウはランプの明かりを消す。部屋の中に光が消え、残るのは窓から注がれる月明かりだけ。それがどこか、幻想的な光景に見える。
クリュウは先にベッドに入ると、端に寄る。そんな彼の元にルフィールがゆっくりと近づく。すると、立ったままうずうずする彼女に向かってクリュウは優しく微笑む。
「ほら、おいで」
「は、はい……失礼します」
ゆっくりとベッドに潜り込むルフィールは、そのまま彼と一緒の毛布の中に潜む。クリュウが布団を胸元まで引っ張ると、自然とルフィールの頭もすっぽりと収まる。ぷはっと顔を出すと、目の前にクリュウの顔があってビックリ。一瞬にして顔が真っ赤に染まる。
「……近いんだけど」
「す、すみません」
慌ててルフィールは距離を置く。二人してベッドの端に陣取る為、結果間には一人分のスペースが生まれる。それでも互いの温もりや存在を感じられる距離。自然と、二人共辺に意識してしまう。
ルフィールは無言のまま、そっと手を伸ばす。毛布の中で探し当てたのは、彼の手。温かなその手を握り締めると、自然と安心感が心を包む。
「先輩の手、温かいです」
「眠いからね」
クリュウも何だか照れくさいのか、妙に素っ気ない態度を取ってしまう。それがルフィールからすれば可愛らしかったのか、彼女の乙女心を妙に刺激する。
「照れてる先輩も、かわいいですね」
「か、からかうなよ」
「えへへ……」
楽しそうに笑う彼女の笑顔を見ていると、自然と笑みが浮かぶ。すると、そんな彼に向かってルフィールは距離を詰めると、彼のパジャマの裾を握り締める。そして、トンと額を彼の胸板に当てる。

「な、何だよ」
「先輩の匂いがします」
「ふ、風呂ならちゃんと入ったけど」
「別に臭いなんて言ってないじゃないですか。ボクは好きですよ、先輩の匂い」
　笑顔で言ってくる彼女の言葉が恥ずかしくて、クリュウは視線を彷徨わせる。そんな彼のいじらしい姿が余計にルフィールの胸を弾ませる。
「こうして、先輩とまた一緒にいられる事が、すごく幸せです」
「だったら、ずっとここにいればいいだろ。ここは辺境の村だからさ、君の目の事だって気にしないよ」
「……お気持ちは嬉しいですが、先輩と一緒にいるには、ボクはまだまだ実力不足です。なので、今は我慢して、もっと腕を磨きます。その為に、ボクは旅に出るんです」
　ずっと傍にいたい。でも、ただ隣にいるだけじゃ嫌。しっかりと、彼の支えになれるように強くなってからでない方が嫌だ。二つの相反する想いの中で葛藤し、彼女が決断した結果がそれだった。それはあまりにも彼女らしい決断だ。だからこそ、クリュウは彼女の想いを尊重する。
「……まぁ、君がそうしたいなら僕は止めないけどさ。無理だけはしないでよね」
「わかってます」
「何かまた強くなるまで僕には会わないとか自分に枷をつけそうだけど、会いたかったらいつでもおいでよ。何もない村だけどさ、歓迎するからさ」
「……ありがとうございます」
　クリュウの言葉に、ルフィールは小さく微笑んだ。たぶん、彼女はまた自分で目標を作って、それを実現するまでは村には来ないだろう。一度決めたら忠実に、真っ直ぐに。それがルフィール・ケーニッヒという子だ。だからこそ、今こうして自分が言っている事は無駄なのかもしれない。でも、例えそうだとしても、自分の言葉に安心した

ように笑う彼女の笑顔を見ていると、少しは無駄ではない。そんな風に思えた。
「――先輩、ギュッってしてください」
こちらを向きながら、物欲しそうな目で言う彼女の言葉にクリュウは少し逡巡する。
「先輩？」
「……まぁ、今日だけ特別だよ」
そう言って、クリュウはゆっくりとルフィールを抱き寄せた。背に腕を回され、体全体で抱き締められる。それはまるで、彼に包まれているかのよう。体全身で感じる彼の温もりに、ルフィールの口元にも自然と笑みが浮かんだ。
「先輩の体、ポカポカです」
「さっさと寝てよね。は、恥ずかしいんだからさ」
「ふふふ、こんな状態じゃ興奮して眠れませんよ」
「じゃあやめる？」
「もう、意地悪言わないでください」
ぷくぅと頬を膨らませる彼女のいじらしい姿にクリュウは楽しそうに笑みを浮かべる。楽しそうに笑う彼の笑顔を見て、ルフィールも自然と笑顔に変わる。気がつけば、どちらの顔にも楽しげな笑みが浮かんでいた。
「先輩、大好きです」
「僕も大好きだよ、ルフィール」
「……まぁ、今日はそれで我慢してあげます」
「何だよそれ」
「――でもいつかきっと」
「うん？」
「何でもありません。秘密です」
クフフと楽しそうに笑いながらルフィールは毛布の中に顔を引っ込めた。クリュウが覗き込むと、ルフィールは毛布の中で彼にしがみつき、胸板に頬を当てていた。幸せそうに笑いながら目を瞑る彼女の姿を見て小さく笑みを浮かべると、クリュウもゆっくりと目を閉じ

た。
　互いの温もりを感じ合いながら、二人の意識はそれぞれ別の夢の中へと落ちていく。
　静かな辺境の村の夜は、少女に幸せな夢を見させながら、ゆっくりと過ぎ去っていった……
　早朝、崖の下にある港には出発の準備を整えたルフィールとレイヴンがいた。その後ろには二人を見送る為にクリュウ達の姿もある。私服姿のクリュウ達に対して、ルフィールはパピメルシリーズでしっかりと身を固め、レイヴンのドングリ装備でしっかりと武装を施している。
「あの、武具の調整をしていただいて、ありがとうございました」
「ええってええって。クリュウ君の後輩ちゃんならウチにとって知らん仲やないし。せっかくの門出や、きれいに調整しておいた方がええやろ？」
　そう言ってニャハハハと楽しそうに笑うアシュア。だが笑い声に対してその表情はどこか疲れている。目の下には薄っすらと隈が浮かび、髪もボサボサだ。実はクリュウが無理を言ってルフィールの武具の調整をアシュアに依頼したのだ。その為アシュアは徹夜で彼女の武具を調整していたのだ。おかげでルフィールのパピメルシリーズは新品同様に生まれ変わり、パワーハンターボウ1も一度分解して摩耗した部品を全て新調したおかげで精度を増している。
　着心地が良くなったパピメルシリーズを纏いながらルフィールはその場で一度ふわりと回転する。朝日を浴びてキラキラと輝くその姿は、本当に妖精のように見える。
「いやぁ、クリュウ君も太っ腹になったもんやなぁ」
「ま、まぁ……」
　笑いながらも、クリュウの懐はフラヒヤ山脈のように凍えていた。イャンガルルガの捕獲が確認され、報酬金が手元に来るまでは一週間程掛かる。今回の狩りは一応周辺の村の合同で出された依頼な上に、捕獲をしてしまった為にギルドの仲介が必要など、色々と手間が掛かる。結果、報酬金の支払いも遅れる。ディアブロシリーズを作った事

であまりお金にゆとりがないクリュウからしてみれば、今回の調整費は借金する一歩手前だ。
「あの、先輩。ご配慮、ありがとうございました」
だが、嬉しそうに礼を述べる彼女の言葉だけで、そんな細かい事など吹っ飛んでしまう。何だかんだ言っても、後輩の前ではいい先輩ぶりたい。普通の男の子の思考回路だ。
そんな後輩に優しいクリュウの姿を他の女子陣は不満そうに見詰めている。ルフィールばかりいい想いをして、やきもちを焼いているのは明らかだ。そんな彼女達の様子を見ても、アシュアは楽しそうに笑う。完全にこの状況を楽しんでいるようだ。徹夜明けなのに、タフな人だ。
「どこに行こうとしてるの？」
「とりあえずドンドルマに行きます。その後は一応エルバーフェルドに戻ろうかと思います。しばらくはエアフルトに拠点を置くつもりです」
エアフルトとはエルバーフェルド帝国副都である。帝都エムデンよりも西に位置し、ハンターは沼地と呼称するクルプティオス湿地帯に向かう際は必ず寄る都市。そしてエルバーフェルド国内唯一のハンターズギルド支部が置かれている場所だ。
「エアフルトとは、また遠い場所だね。一度エムデンには寄るの？」
「公共竜車を使って移動するので、ひとまずターミナルとして寄るつもりです」
その時、クリュウとルフィールの会話を聞いていたフィーリアが動いた。突然二人の元へ歩み寄ると、無言のままルフィールに何かを手渡す。それは一枚の封筒。ひっくり返すと封蝋（シーリングワックス）でしっかりと封をされている。その封蝋（シーリングワックス）に描かれているのは、一輪のチューリップとレイピアが交差する紋章。見た事もない封蝋（シーリングワックス）にクリュウが戸惑っていると、フィーリアは憮然と口を開く。
「私の名義であなたの紹介状を書いたの。これがあればエルバーフェルドへの入国や領の行き来で面倒な検問をパスできる。封蝋（シーリ

ングワックス）と印章にレヴェリの紋章を使ったから、効果は抜群のはず。これ、あなたにあげる」
「ボ、ボクに、ですか……？」
「……勘違いしないで。私はあくまで、クリュウ様がこうした方が喜ぶかなぁって思っただけ。あなたの為じゃないよ」
そう言ってプイッとそっぽを向くフィーリア。いつもの素直さとは似ても似つかないような素っ気ない態度に周りの面々は面食らっていた。背後からサクラとアシュアが「……ツンデレね」「ツンデレやなぁ」とこそこそと会話している声が聞こえる。
「それと、困った事があったらレヴェリ領へ行って。そこには私の家族や親友がいるはずだから、少しくらいは力になってくれるはずだから」
ムスッとしたまま言うフィーリアの言葉にぽかんとするルフィール。すると、憮然としているフィーリアの頭をクリュウが優しく撫でた。驚くフィーリアが顔を向けると、彼の笑顔がまぶしかった。
「ありがとフィーリア」
「い、いえ。当然の事をしたまでですから」
久しぶりに頭を撫でてもらえて嬉しかったのだろう。満面の笑みを浮かべて喜ぶフィーリア。尻尾が生えていればピョコピョコと左右に動き出しそうな感じだ。当然サクラとエレナ、そしてシルフィードが羨ましそうに見詰める。
クリュウに頭を撫でられて喜ぶ彼女の姿に若干の苛立ちは感じたが、それでも彼女からの――友達からの好意にルフィールの胸いっぱいに温かいものが広がった。
「……ありがとうございます」
礼儀正しく頭を深々と下げて例を述べるルフィールにフィーリアはただ一言「気をつけてね」とだけ言い残すと、サクラ達の所へ戻った。ルフィールは大切そうに、その封書を道具袋（ポーチ）の中にしまった。
「……本当に、この村に来て良かったです」
「友達もできたもんね」

「それもそうですけど、何よりやっぱり先輩の元気な姿を拝見できた事が、何よりも嬉しかったです」
「僕も君の元気な姿を見れて嬉しかったよ」
「……良かった。遠方より訪ねた甲斐がありました」
そう言って、ルフィールは笑った。その屈託のない笑顔を見て、クリュウがどれだけ安心したか彼女は知らない。
ずっと、心の片隅で彼女の事を心配していた。元気でやっているだろうか、無茶していないだろうか、ご飯はしっかり食べているだろうか、友達はできたのだろうか。色々な心配が常にあった――でも、そのどれもが杞憂だったらしい。彼女はこうして、しっかりと前に向かって歩き続けている。それを見る事ができて、彼女が笑顔を取り戻してくれて、ほんとうに嬉しかった。
気づけば、クリュウは自然とルフィールの頭を撫でていた。そんな彼の優しい手を甘んじている彼女に向かって、クリュウは話しかける。
「元気でね、ルフィール。たまには手紙も出してよね」
「はい。これからは時々近況を報告します。基本的に色々な場所に移動するので先輩から送る事は難しいですが、手紙を出したら先輩からの返事が来るまではその場所に留まるつもりです――だから、ちゃんと返信してくださいね？」
「もちろん。君からの手紙、楽しみにしてるよ」
「はいッ」
クリュウの言葉に、ルフィールは楽しそうに笑った。そんな彼女の笑顔を見てフッと隣に立つレイヴンの口元に笑みが浮かんだのを、シルフィードは見逃さなかった。
「ルフィール。そろそろ行くニャよ」
「わかってるよ。もう、ムードも何にもないなぁ」
「フン」
鼻を鳴らしてそっぽを向くレイヴンに呆れつつ、しかしルフィール自身もそろそろ行かないといけない事にも気づいている。何せ港では村長が自分の為にドンドルマ行きの漁船を一隻用意してくれてい

るのだから。船頭は帆を広げて時折風の角度に合わせてマストの調整をしながら待ってくれている。
何度か深呼吸をした後、視線を再びクリュウに戻した時、ルフィールの気持ちは整っていた。
「それでは、そろそろ失礼します。先輩、お元気で」
「そっちもね」
そう言ってクリュウは手を差し出した。ルフィールも合わせて手を伸ばし、彼の手を取る。互いにしっかりと握手し、別れを惜しむ。だがその時間はわずか数秒。ゆっくりと、どちらからとなく手が離される。
「行くよ、レイヴン」
「あぁ」
ゆっくりと彼に背を向け、ルフィールはレイヴンと共に歩き出す。朝日の光にパピメルシリーズを煌めかせながら、ルフィールは新たな旅へ出発する。クリュウはそんな彼女に特に声を掛ける事なく、ただ無言で彼女の背中を見送った。
もう言葉は何もいらない。むしろ何かを発すれば、彼女の決意を揺らいでしまうかもしれない。振り返る際に一瞬見えた彼女の悲痛そうな表情を見て、クリュウはそう決めたのだ。
「またね、ルフィール」
彼女に聞こえるか聞こえないか、そんな小さな声でただ一言つぶやく。
すると、埠頭に足を掛けたルフィールは突然足を止めると、くるりと振り返った。そのまま顔をうつむかせて足早に戻って来る。クリュウが何事かと首を傾げていると、ルフィールはそのまま彼へと近づき、彼の胸元に飛び込むようにして抱きついた。
突然の行動に驚愕し言葉を失う村の乙女達。驚くクリュウの耳元で、ルフィールがそっとつぶやく。
「……ボク、先輩の事が大好きですよ」
そう言ってルフィールは彼の首に両手を回し、グッと彼の体を強く引き寄せる。眼前に彼女の真っ赤に染まった顔が現れた瞬間、クリュ

ウの脳内に一年半前の光景が蘇った。
一年半前、別れ際に彼女がした行為。それが思い出された瞬間、記憶の中の光景と感触が現実となり――クリュウのルフィールに再び唇を奪われた。
目の前には真っ赤になった彼女の顔があり、唇には柔らかな感触と熱いくらいに火照った彼女の唇が当てられている。
長いようで、本当は一瞬。彼女が離れると同時に、唇を押さえつけていた熱も消えた。残されたのは、突然の事に混乱しながら立ち尽くすクリュウと、顔を真っ赤にしたまま満面の笑みを浮かべたルフィール。
「えへへ、先輩とのキスはこれで二回目ですね。次はもっと大人なキスしましょうね、せ・ん・ぱ・い♪」
そう言い残してルフィールは全速力で漁船へと走った。漁船では船頭の男が下手な口笛を鳴らして彼女を出迎える。レイヴンは呆れたように「人間はわからんニャ」とだけつぶやくとそっぽを向く。
帆が完全に開かれた瞬間、漁船は風を受けて進み出す。船尾に陣取ったルフィールは大きく手を振りながら彼の姿を探す。彼女が最後に見たクリュウは、顔を真っ赤にしたまま恥ずかしさのあまりこちらを見れず、手だ振っているという愛らしい姿だった。そんな彼の姿に嬉しそうに微笑みながら、ルフィールは村を去る。
漁船はすぐに木々の向こうへと消え、嵐のように現れたルフィールは、再び嵐のように去って行った。
木々の向こうに消えた漁船。クリュウも振っていた手をゆっくりと下ろした。唇に残る熱はまだ強烈に記憶に刻まれている。顔は赤らんだまま、クリュウは恥ずかしさのあまり視線を彷徨わせる。その時、彷徨った視線がふと何かを捉えた。それは、自分の方を見詰める三人の美少女の姿。皆、顔を真っ赤にして、目の縁にたっぷりの涙を浮かべた怒りの形相。それを見た瞬間、真っ赤だったクリュウの顔は一瞬にして真っ青に染まる。
「あ、いや、これはそのぉ……」
「く、クリュウ様ぁ……ッ！」

「……浮気は許さない」
「二回目って、言ってたわよね？　詳しく話してもらいましょうか？」
もはやブチギレという言葉では言い表せない程、完全にキレまくっている三人。クリュウは逃げ出そうとしたが、フィーリアはともかくサクラとエレナから逃げ切る事はできないと、なぜか妙に冷静な自分が忠告する。
謝るにしても、そもそもどういう謝り方をすればいいのか。それに、たぶんだが謝ってもダメな気がする。そんな予感がしていた。
素直に三人にボコられるしかない。半ば諦めかけていたその時、そんな彼の前に立ち塞がる者がいた。伏せていた視線を上げると、そこにはいつも頼りになる彼女の背中がそこにあった。
「し、シルフィ」
自分を助けてくれようとしている彼女の姿にクリュウは感動する。きっとこの後、いつものように三人を納得させるような大人の説得をしてくれる。そう思っていた。だが、
「シルフィ、ありが――もぷッ!?」
突如振り返ったシルフィードはいきなり彼の首に両腕を回すと、自らに抱き寄せた。身長差的に、ちょうどクリュウの頭はシルフィードの豊満な胸の高さ。結果、抱き締められた事で彼の顔は彼の意思とは関係なくシルフィードの豊満な胸の中に埋まる。
言葉にならない事を言いながら暴れるクリュウを優しく抱き締めるシルフィード。その表情はいつもの凛々しい戦乙女の表情ではなく――年相応の、一人恋する乙女のものだった。
突然のシルフィードの行動に驚愕していた三人は、そんな彼女の乙女の表情を見た瞬間、全てを悟った。恋する乙女の第六感が、嵐が過ぎた後に現れた大嵐の予感を、察知していた。
「し、シルフィード。あんたもしかして……」
愕然とするエレナの問い掛けに対し、シルフィードはようやくクリュウを解放した。だが慌てて離れようとするクリュウを今度は背中から抱き締めた。背中にコンプレックスから武器へとチェンジした自慢の胸を彼の背中に押し付け、慌てふためく彼を愛おしそうに抱

き締めながら、愕然とする三人に向かい合う。そして、
「あぁ、すまんな。ちょっと自分の気持ちに素直になってみようかと思ってな――今日から君達の戦いに私も参戦させてもらうぞ」
そう言ってシルフィードはいつもの凛々しい表情とは違う、年相応の少女がするような純真無垢な屈託のない笑みを浮かべると、そっとクリュウの頬に唇を押し付けた。
早朝のイージス村に、少女三人の悲鳴が虚しく轟いたのは、その数秒後の事だった……

第１９３話　望まぬ再会で始まる血塗られた聖剣の闇の軌跡

大都市ドンドルマ。中央大陸最大規模の城塞都市として、中央大陸中部の政治・経済・物流・文化の中心地として栄えている為、中部地方は実質ドンドルマを中心に準国家のような状態となっている。

西シュレイド王国独立貿易都市ミナガルデ、エルバーフェルド帝国帝都エムデン、城塞都市ドンドルマ、アルトリア王政軍国王都アルステェリア。この四都市の事を世間一般には四大都市、または世界都市と言う。

他の三都市に比べればドンドルマの面積は狭いし、人口も少ない。しかし物流の拠点となっている事から他の都市よりも経済力は大きい。特に中央地方にてドンドルマに次いで物流が栄えていたヴィルマが崩壊以後は、ドンドルマへの物流が一極化してしまい、西竜洋諸国やテティル共和国、中部地方の街や東方地方などは有事の際に物流が滞る事に対する不安や、関税で大儲けするドンドルマに対する不信や不満は募り続けているなど、世界は常に一般人の知らない場所で動き続けているのだ。

そんな経済都市としても優れたドンドルマだが、一般的にはハンターズギルドのお膝元とあってハンターが大勢集まる事から、別名ハンターの都とも呼ばれている。拠点を置くハンターの数も年々増え続け、出稼ぎに来るハンターの数も多い。一日に動くハンターの数は、それこそ西竜洋諸国の一国に常駐するハンターの全員に匹敵するとも言われている。

だからこそ、ドンドルマに来れば様々な依頼や品物がハンター達を出迎える。そしてそれだけの数のハンターが集まれば、道を歩いているだけで見知った顔に出会う事も少なくない。そのまま意気投合して飲みに行ったり、勢いに任せて狩りに行ったり、後日また会う事を約束して一度その場を離れたり。対応は様々だが、そんな出会いがドンドルマにはある。

だがしかし、世の中には決して喜ばれぬ出会いも存在する。そしてドンドルマという場所は、そんな出会いも呼び寄せてしまうのだ。
ドンドルマ中央に位置するハンターズギルド本部。その一階部分は大衆酒場として主にハンター相手に開放されている。昼間だというのに、ここは一般人の時間間隔からは一線を画した生き方をするハンター達が飲んで騒いでを繰り返している。その飲み方も勝利の美酒に酔いしれている者もいれば、敗北の苦酒を味わう者もいるなど、千差万別だ。
そして、そんな飲んで騒いでの酒場の一角に彼らはいた。
「はぁ、疲れたぁ……」
そう言いながらぐったりとテーブルに突っ伏す少年。全身を角竜ディアブロスと言う砂漠に住まう飛竜の素材から作られたディアブロシリーズで身を固め、横に脱いだディアブロヘルムを置いている。腰には様々な鉱石を配合した特殊な鉄で作られたオデッセイ改と言う、盾と短剣が一対になった片手剣と下げている。疲れて突っ伏す少年の若葉色の髪が時折換気口から入って来る風にそよそよと揺れる。
少年の名はクリュウ・ルナリーフ。中央地方北部に位置するイージス村という辺境の村出身で、同村に拠点を置くいわゆる村ハンターだ。今回は出稼ぎでドンドルマを訪れている。
「通常の討伐依頼ではなく納品依頼だから楽かと思ったが、なかなかスリルがあったな」
そう言って苦笑を浮かべるのは全身を珍しい蒼色の火竜、リオレウス亜種の素材から作られたリオソウルシリーズで纏った美少女。背中には鎌蟹ショウグンギザミの素材から作られた蒼剣、キリサキと言う巨大な剣が背負われている。その切れ味は大剣の中では最高峰とも言われ、どんな物も一刀両断にする力を秘めている。武具だけを見ても、彼女が相当な実力者である事がわかる。
少女の名はシルフィード・エア。元ソロハンターであり、現在はイージス村に拠点を置いてクリュウや他のメンバーで構成されたチームを率いる若き隊長だ。
今回は他の二人、ライトボウガン使いのフィーリア・レヴェリと太

刀使いのサクラ・ハルカゼがそれぞれリオレイア討伐依頼と商隊護衛依頼で留守な為、余った二人でドンドルマへ依頼を探しに来たのだ。冬が近づくと村の周りではランポスなどの小型モンスターによる被害が減る為、仕事がないのだ。その為、より依頼が豊富にある大都市ドンドルマを訪れたのだ。

「スリルって……燃石炭採取で散々火山中を歩きまわるハメになるわ、ショウグンギザミに追いかけられるわ、やっと燃石炭を集めたと思ったら潜んでいたガミザミに足を引っ掛けられて転んだ拍子に燃石炭の入った袋を溶岩の中に放り投げるわ。こういうの、散々って言わないかな？」

彼の口から語られる事だけ聞いても、彼らがどれだけ苦労したかが何となくわかる。狩場は常に何が起きるかわからない。時に神様からいじめられているのでは？　これもギルドの陰謀か？　と思わずにはいられない程の不幸が次々に襲いかかる事もある。今回の彼らはそんな理不尽な不幸の恩恵を受けてしまったのだろう。

「まぁ、でも燃石炭を掘っている間に色々な鉱石が手に入ったからな。貴重な鉱石も手に入ったし、何より余計な分は売り払えばいい金になる。君の資金不足もこれで解決だな」

二人が達成した依頼とはドンドルマのハンター達から一般的に火山と呼ばれるラティオ活火山にて燃石炭を採取しろと言うもの。燃石炭の採掘を主とする会社が探索の結果、ラティオ活火山に新たな燃石炭の鉱脈が発見したのだが、運悪く鎌蟹ショウグンギザミが住み着いてしまい、近づけなくなってしまった。その為、研究サンプル用の燃石炭の採取をハンターズギルドに依頼し、それを二人が引き受けたのだ。

なぜショウグンギザミの討伐ではなく、燃石炭の採取なのか。シルフィード曰く燃石炭にもグレードというものがあり、そのグレードは鉱脈ごとに違う。それこそドンドルマのハンター達の武具を一手に製造、調整する中央工城のたたらに使われる最高級品から、黒煙は大量に出るがその分安価でもパワーがある為に軍艦の動力源など主に軍隊で用いられる軍用品、はたまたご家庭の台所などで大活躍する庶

民品など、グレードごとに用途は様々だ。そして当然、中には燃石炭とは名ばかりにほとんど燃焼力がない粗悪品もある。今回新たに発見された鉱脈にある燃石炭のグレードを調べない事には、採掘に踏み切れないのだ。その為、討伐依頼よりも依頼料を安くでき、尚且つすぐにサンプルが手に入る採取依頼として出したのだ。

まぁ、この先の事は依頼主達の問題だ。彼らハンターの役目は指定された依頼を遂行する事。それさえ終わってしまえば、後はどうでもいい。ちゃんと報酬金さえもらえれば、それでいいのだ。

「そうだねぇ。これでしばらくは依頼がなくても困らなそう」

そう言ってクリュウは今回の依頼の最中で手に入れた戦利品を見る。

燃石炭はピッケルで岩の割れ目から掘り出すのだが、その際周りにある別の鉱石も一緒に採れる事が多い。今回は燃石炭の採取に手間取った為、結果副産物である別の鉱石が大量に手に入ったのだ。

アシュアが喜びそうな大量の鉄鉱石。他にも円盤石やマカライト鉱石、貴重なドラグライト鉱石に紅蓮石など、様々な鉱石を手に入れた。武具を作る際、結構鉱石は素材同士を繋げたり、モンスターの素材だけでは補えない部分に使われたりと、用途は様々だ。持っていて損はないし、鉱石は結構高く売れたりするのでいい小遣い稼ぎにもなる。まさに今回は一石二鳥な依頼だったのだ。

特にクリュウは自身が今装備しているディアブロシリーズを作るのに有り金を全て使ってしまった為、ここ最近はずっと節約をして何とかしのいでいた。その為、今回の臨時収入はかなり嬉しいのが本音だ。

「あら、それならいっぱい注文してよね」

背後からの声に驚いてクリュウが振り返ると、そこにはきれいなギルド嬢がニッコリと笑みを浮かべながら立っていた。ハンターズギルドの花、酒場での接客や給仕を主とするギルド嬢。その頂点に君臨するギルド嬢長、ライザ・フリーシアだ。

「あ、いや、まぁ程々に」

苦笑いを浮かべるクリュウを前にシルフィードは「今は報酬金しか

ないからな。まぁあまり期待はするな」と助け舟を出す。するとライザは「えぇ～、ケチンボぉ～」と言いながら抗議するように頬を膨らませる。そんな彼女に対しシルフィードは呆れながら「まったく、君もいい年なんだからそういうのは自重したほうがいいぞ」と苦言を呈する。すると、

「――あらシルフィード。私、ちょっと今の聞こえなかったなぁ。何て言ったのかしら、ねぇ？」

満面の笑みを浮かべながら、ライザは尋ねる。だがその笑顔はなぜかすごく怖い。ニッコリとした笑顔、見詰める瞳は一切笑っておらず、不気味に煌めく。クリュウはガクガクと震えながらシルフィードの方を見るが、シルフィードも顔を青ざめさせている。

「い、いや。何でもない、ただの独り言だ」

声を震わせながら、引きつった笑顔のまま慌ててなかった事にするシルフィード。するとライザはその不気味な笑顔を浮かべたまま「あらそう？　それならいいのよ。オホホホホホホホホホ」と妙な笑い声を上げなら去って行った。途中後輩のギルド嬢とすれ違ったが、すれ違った瞬間にギルド嬢は顔面蒼白になってガタガタと震え出す。一体どんな顔をしていたのか、想像すらしたくない……

厨房の方へ彼女が消えたのを確認して、二人は一斉にため息を零した。

「もうシルフィ。君にはデリカシーってものがないの？」

彼女の軽はずみな言動を早速注意するクリュウ。するとシルフィードは心外だとばかりに「確かに今のは私が悪いが、デリカシー云々に関しては君だけは言われたくないな」と反論しながらプイッとそっぽを向く。クリュウが「どういう意味さ？」と尋ねるが、シルフィードは「君には一生わからないかもな」と取り付く島もない。

一方、クリュウはそんな彼女の反応に内心ちょっぴり嬉しかった。

つい半月程前に後輩のルフィール・ケーニッヒが突然嵐のように現れ、そして嵐のように去った。以後、なぜかシルフィードはこれまでと違ってやたら自分に甘えるようになった。それに連動して時折見せる女の子っぽさも増え、日々少しずつ歳相応の少女らしさを取り戻

しつつあった。
凛々しい彼女はもちろん好きだが、クリュウとしては時折見せる可愛らしい彼女も好きだった。それが少しずつ取り戻されているのであれば、こんなに嬉しい事はない。
嬉しさのあまり、つい表情が緩んでしまう。そんな彼のニヤケ顔を、シルフィードは見逃さない。
「何だクリュウ。何をニヤけている」
「べ、別に何でもないよ」
慌てて笑顔を引っ込めるが、シルフィードはそんな事では誤魔化されない。ズイッと身を乗り出して彼に近づくと、至近距離でジト目で見詰める。じーっという擬音がつい頭の中で再生されるような、そんな目だ。
「さっきの君の笑顔は、実に不愉快だったぞ。まるで、人を小馬鹿にしたようなそんな笑顔だった」
「べ、別に僕は小馬鹿になんかしてないよッ」
「……という事は、笑っていた事は認めるんだな？」
「うぐ……ッ」
見事に誘導尋問に引っかかったクリュウ。シルフィードは楽しげにふふんと自慢げに「君もまだまだだな」と勝利宣言。何の勝負かはわからないが、クリュウは自分が敗北した事を認めざるを得なかった。重ねて言うが、何の勝負かはわからないが……
「シルフィってさ、やっぱり最近ちょっと意地悪になったよね？」
「君はいじめたくなるんだよ」
くくくと楽しそうに笑う彼女に、クリュウは「もう……」と不貞腐れる。どうにも最近子供扱いされるというか、妙にいじられる。前からそういう傾向があったのだが、ルフィールが去ってからはそれが顕著になった。何というか、前に比べてやたら構われるような。
「シルフィ、何かルフィールが帰ってから変わった？」
この半月程気になっていた疑問を投げかけてみると、コーヒーを飲んでいたシルフィードは「ぶほッ!?」とむせ、激しく咳き込む。慌てるクリュウを前に「いや、大丈夫だ……ッ」とむせながら言う。

「だ、大丈夫？」
「あ、あぁ。君が突然変な事を言うから、驚いただけだ」
「そんな変な事言ったつもりないんだけど」
首を傾げる彼を横目にシルフィードは平静を装うが、その内心は穏やかではない。
半月程前、ルフィールや彼女の相棒であるオトモアイルーのレイヴン、そしてクリュウと一緒に黒狼鳥イャンガルルガを捕獲した。その際、ルフィールは自分でも気づかなかった本心を的確に見抜き、少々強引な手段で自覚させてくれた。
初めてクリュウに会った時、自分は彼の事をずいぶん昔に亡くした弟にどこか似ていると思った。だからこそ、ソロ狩りを好んできたのに突然彼らと一緒にリオレウスを狩るなど、らしくない事をしてしまった。
以後、拠点をここドンドルマから彼の故郷であるイージス村に移し、彼や仲間と一緒に過ごして来た。
自分にはもう存在しない故郷。でもイージス村は自分の事を明るく、優しく出迎えてくれた。村人は優しく接してくれ、ちょっと癖はあるが信頼出来る仲間もできた。ここが自分にとっての第二の故郷だと、心からそう思えた。
もう六年近く前の話だ。その頃の自分には故郷があり、家族もあった。まだまだかけだしのハンターで、ランポスを間引くくらいしかできなかったが、がんばる自分を褒めてくれる家族や村があった。そしてどこか頼りないかわいらしい弟もいた。
別に刺激なんて特にない、どこにでもある普通の村。過ごす時間も毎日が同じ繰り返しのような感じ。でも当時の自分はそれで満足していた。村の為にがんばる。みんなに喜んでほしい一心でがんばっていた。まだまだ大型モンスターが出現すれば別の街のハンターに討伐依頼を出していたが、いずれは自分が村を守ると決めていた。
だがそんな幸せな日々は突然、失われてしまった。
自分がちょっと別の街で依頼を受けて村を離れている間に、村は火竜リオレウスち雌火竜リオレイアの番いの襲撃を受け、壊滅した。木

造家屋が多かった為、二頭のブレスで村は大火災を引き起こした。結果、村は焼け野原と化し、生存者は誰一人いなかった。
一瞬にして村を、家族を、全てを失った。残ったのは、モンスターに対する並々ならぬ怒り、恨み、憎しみだけ。焼け焦げた匂いが充満する黒い大地の上で泣き叫んだ記憶は鮮明に覚えている。
以後、自分はどこにぶつけていいかわからない憎しみをひたすらモンスターにぶつけていた。目に入るモンスターはそれが例えアプトノス一匹だろうが容赦なく斬り殺した。人外の存在全てを憎み、一時はアイルーすら殺そうとした程、自分はモンスターに対する憎しみに支配されていた。
世界中のモンスター全てを根絶やしにする。そんな不可能を目標に、ただひたすらに力を求めていた。
力に溺れ、非道な力でも構わないと思った。だからこそ、当時実力はあるがその悪逆非道から誰もが忌避していた剣聖ソードラントに入り、ひたすらモンスターを殺し続けた。
だがそんな人生に転機が訪れた。それが後の師匠となった【砂漠の狼】の称号を持つエルディン・ロンメルとの出会いだった。彼は憎しみの渦の中にいた自分を心配し、何かと気遣い、ソードラントを抜けさせるきっかけとなった。
一年程彼の下で修行を積んだ後には、モンスターに対する憎しみはかなり失われていた。しかし元ソードラントという経緯から誰も自分に近づこうとはせず、自身も誰とも組むつもりもなかった為、以後はずっとソロ狩りに専念していた。そんな自分の姿に周りも少しずつ評価を改め、いつの間にか【蒼銀の烈風】などと呼ばれるようになった。
そして、そんな頃にクリュウと出会った。
彼と一緒に狩りをするのが楽しく感じた。これまで狩猟はあくまで仕事だと割り切っていた自分が、狩猟を楽しめるようになった。もちろん命を奪う事に快楽を抱くような事はないが、一緒に死と隣合わせの戦いをする事に、何か喜びにも似た感情を抱くようになったのは事実だ。何より、彼と一緒時間を過ごすのが嬉しかった。

最初は弟のような存在だと思っていたが、いつの間にか少しずつそんな気持ちは変化していった。気がつくと彼の事ばかり感がてしまったり、彼の笑顔を見て幸せになったり、時折見せる彼のかっこい姿にドキッとしたり、彼に優しくしてもらうとすごく嬉しかったり。初めて抱く感情に、ずっと困惑していた。

それが、ルフィールとの強引なやり取りの中でついに自覚してしまった――自分が、彼の事を好きだという事を。

自らの胸の奥で躍動する恋心。今まで感じた事のなかった、初めての感情。今でも困惑しているし、どうしていいか全然わからない。自覚してから一週間くらいはクリュウとまともに話す事ができず、彼を避けるような行動ばかりしてしまい、二人の間に妙な距離感が生まれてしまった。

だがまぁ、一週間も経つ頃には少しずつ彼との関係は戻り始めた。そして今では、以前と全く変わらぬように接する事ができるようになった――否、前とは違う。こうして二人っきりでいるだけでドキドキが止まらないし、彼を欲する気持ちはより一層強くなっている。もう前のような、ただの仲間という関係性だけでは我慢できなくなってしまった。

「……三人の気持ちが痛いくらいわかるよ」

「え？　何か言った？」

「何でもないさ。何でも、な」

首を傾げるクリュウを前にシルフィードは苦笑を浮かべて誤魔化す。こちら側になってみて、改めて彼の鈍感さには呆れを通り越して感心すら覚えるようになった。フィーリアやサクラ、エレナが今まで様々なアタックを繰返しても玉砕して来た理由がわかる。これは確かに難攻不落の要塞だ。

ちなみに、これまでは誰に特定する事なく、三人を平等に応援していたシルフィード。しかし自覚してからは三人の事は恋敵（ライバル）と認め、正々堂々と彼を奪い合う事を決意。最初こそギクシャクしたが、今では互いが互いを良き友であると共に良き恋敵（ライバル）だと認め合うようになった。

結果、クリュウを奪い合う戦いはより過激さを増し、クリュウは心休まる日を失った訳だが。
そんな状況が一段落したのが、二人の遠征である。ちょうどツバメとオリガミが旧友であるクレア姉妹から手紙をもらってアルフレアへ遊びに行って帰って来た事もあり、村を彼らに任せてクリュウとシルフィードはこうしてドンドルマにやって来たのだ。
他の二人と違い、シルフィードはあからさまにクリュウに甘えるという事はない為、結果としては二人の間には穏やかな雰囲気が流れている。元々シルフィードはフィーリアのように甘えたり、サクラやエレナのように彼を襲ったり――それぞれで意味合いは違うが――するような事はないので、クリュウとしても久しぶりの平穏を満喫していた。
「やっぱり、シルフィと一緒は落ち着くよ」
「そ、そうか？」
騒がしかった日常がウソのように穏やかな日々。思わずクリュウが素直な気持ちを吐露すると、シルフィードは少し狼狽しながらも平静を装う。その実は彼の言葉にドキドキしっぱなしだ。
「わ、私と一緒だと落ち着くのか」
「そうだね。うん、静かでゆったりとした時間が流れるっていうか、落ち着くんだ」
穏やかな笑みを浮かべながら語る彼の言葉に、平静を装いつつもシルフィードの内心は歓喜に満ちる。気を抜けばすぐに顔がニヤケてしまうような、そんなギリギリの攻防で何とか平静を保っている。
自らの気持ちに素直になってから、こんな事ばっかりだ。彼の言動一つひとつに振り回され、感情の上下運動を激しく繰り返す。だが自然と悪い気はしないのが不思議だ。こうして二人で過ごす時間が、幸せに感じられる。他の面々には申し訳ないが、これが本音だ。
「さて、この後どうする？　たぶんまだ二人共村には帰ってないと思うし」
「そ、そうだな。君は何かしたい事はあるか？」
「うーん、鉱石採取は今回十分できたし。あ、でもライトクリスタルが

全然足りてないんだよ。ノヴァクリスタルなんて一個もないし。ジョ・テラード湿地帯に行く？　ここからなら竜車で一日も掛からないからさ」
　クリュウの言うジョ・テラード湿地帯とは、ドンドルマのハンターが旧沼地と呼ぶ狩場である。ドンドルマから最も近い狩場であり、エルバーフェルド共和国（当時）がハンターズギルドにクルプティオス湿地帯（沼地）を解放するまでは沼地と言えばここの事を指していた。夜になると毒沼が発生する沼地に対し、旧沼地は比較的穏やかであり、常に地面が泥濘んでいる場所もあれば地盤がしっかりした場所もある。沼地に比べて危険度の高いモンスターが現れる可能性が高く、これまでに雌火竜リオレイア、鎧竜グラビモス、幻獣キリン、霞龍オオナズチなどの強敵の出現が確認されている。
　一方で火山程ではないが鉱石が豊富に採掘できる場所としても有名であり、白水晶や黄金石などハンターには無縁でも高い需要を持つ鉱石が採れる為、常にこの手の採掘依頼には事欠かない場所でもある。
「あ、いや、狩場に行くのは遠慮したいのだが」
　希少な鉱石に思いを馳せるクリュウに対してシルフィードは慌てて狩猟以外でと補足事項を加える。正直、また狩場に出てピッケルを振るうのは勘弁だ。あれは剣を扱うのとはまた違う筋肉を使うので、意外と重労働なのだ。
「え？　それじゃ、それこそ何かがしたいって事はないよ」
　ドンドルマ市内でする事と言えば素材集めくらいだろうが、特筆して市場に出回っている素材で欲しいものはないし、今日は安売りの日でもない。
　うーんと悩む彼を見ながらシルフィードは「まぁ何だ。君が行きたい場所がないなら、私に付き合え」とどこか緊張しながら誘ってみる。
「シルフィが行きたい場所？　別にいいけど、どこに行くの？」
　シルフィードが行きそうな場所に心当たりがないクリュウは首を傾げながら自然に尋ねる。そんな彼を前にシルフィードは「そ、そうだな」と慌てて考え始める。言ってみたはいいが、どこに行きたいな

どは特に考えていなかったようだ。
「そ、そうだ。ちょうど服を買いたいと思っていたんだ」
見つけたとばかりに少し声を大きくして言う彼女の言葉に「服？ふぅん、じゃあファッションショップに行きたいの？」とクリュウが尋ねると「そ、そうだ」となぜか偉そうに答えるシルフィード。
「うーん、でも僕が行くべきかな？　女性ものの服なんてわかんないし」
それに、クリュウの頭の中ではいつだったかサクラにドレスを買ってあげた際、店員に女子に間違えられた上に男子と承知の上でかわいい服を勧められるというトラウマもある為、あまりその手のお店に近づきたくなかったりする。
あまり乗り気ではない彼の反応を見てシルフィードは慌てて「い、いや。私も服についてはあまり詳しくないんだ。だからこそ、君が思う私に似合う服を選んでほしいんだ」と彼の説得に掛かる。
「それなら店員さんに訊けばいいんじゃない？」
何とも見事な正論が返って来てシルフィードは押し黙る。「わざわざ僕が行かなくてもいい気もするんだけど」と続ける彼を前にシルフィードは必死に彼を納得させられる説得を考えるが、思いつかない。そのうち「じゃあ、ここから先はバラバラに行動しようか」とクリュウが提案してしまう。その言葉にシルフィードは慌て倒した末

「き、君に服を選んでほしんだッ！」
――見事に落とし穴を踏み抜いたのであった。
穴があったら入りたい。時間を巻き戻す力があるなら今すぐ戻したい。記憶を消せる力があるのなら多少強引な手段でも行使したい。そんな決してやり直しができない状況に現実逃避しかかるシルフィード。ポカンとしているクリュウを前にシルフィードは顔を真っ赤にして「あ、いや、今のはその……ッ」と慌てふためく。そんな彼女の様子を注視していたクリュウは、
「うぅん、そういう事なら付き合うよ。でも、僕の価値観だから必ず似合うって保証はできないよ？」

仕方ないなぁと苦笑を浮かべながら了承した。シルフィードは「ほ、本当かッ!? た、助かるッ！」と大喜びし、嬉しそうに笑みを浮かべる。そんな彼女の喜ぶ姿を目にしてクリュウもまた良かったとばかりに微笑む。クリュウからすれば女子の服装を選ぶ自信はないが、それでも普段からオシャレには程遠い彼女の服装を見てれば、少しくらい手助けになれると思ったのだ。

クリュウとのデート（シルフィード視点）にこぎつけたシルフィードは大喜びしながら「そ、それでは今すぐ行くぞッ」と我慢出来ないとばかりに早速行こうと立ち上がる。クリュウも「仕方ないなぁ」とつぶやきながら立ち上がった。

クリュウとのデートに思いを馳せながら、嬉しそうにシルフィードが立ち上がった彼の手を取る――その時、辺りに広がっていた喧騒が一瞬にして鳴り止んだ。

突然の沈黙が舞い降りた酒場。クリュウが何事かと見回せば、ちょうど酒場にとある一行が入って来るのが見えた。シルフィードも彼の視線を追ってその一行を目撃する。その瞬間、シルフィードから一切の感情が表情から消えた。

現れたのは四人組のハンター達。周りのハンター達はその姿を見た途端に黙ったり、入口近くにいた者達がまるで蜘蛛の子を散らすよう避けていく。それは異様な光景だった。屈強な男達も彼らの姿を見た途端、いつもの血気盛んさを忘れて逃げる。

周囲のハンター達が退散したのを見て、四人はゆっくりとした足取りで酒場の中へ入って来る。

先頭を歩くのは銀髪赤眼の男。鋭い瞳で辺りを威嚇するように見回しながら進む。身に纏うのは古龍に次いで生息数が少ない上に、古龍以上に生息域が独特な銀火竜ことリオレウス希少種の素材、その中でも選りすぐりの素材を使って作られたS・ソルZシリーズ。伝説のハンターと呼ばれるような存在が纏う装備だ。背中には金色に輝く剣が携えられている。銀火竜と対を成し、同じく希少な金火竜ことリオレイア希少種の素材を使って作られた炎の剣。左腕には同じ素材を使って作られた盾を備えた、ゴールドイクリプスと呼ばれる最強ク

ラスの火属性の片手剣だ。
　さらに男にくっ付くようにして歩いているのは年の頃はシルフィードと同じくらいか。長い銀色の髪を耳の後ろ辺りから伸ばしたツインテールで纏めた赤眼の少女。顔立ちはどこか銀髪の男に似ていて、瞳も幾分か鋭い。それでも今は幸せそうに穏やかなカーブを描いている。身に纏うのは銀髪の男と同じＳ・ソルＺシリーズ。背負うのは火竜リオレウスの貴重素材を使って作られたライトボウガン、銘火竜弩。速射能力が高く、その砲撃性能は全ライトボウガンでもトップクラスに入る武器だ。
　そんな二人に続いて入って来たのは不気味な人物。全身をボロボロの黒い布で覆ったようなデザインのデスギアシリーズと呼ばれる防具で纏っている。左肩には巨大な、グリーヴにも大きく何かの生物の頭骨を持つ、不気味な防具だ。フードを深く被っているので顔を窺い知る事はできない。男女どちらかも、わからない。背負うのは地獄の死神が持つような不気味な大鎌型の太刀、鎌威太刀。猛毒袋を大量に装備した強力な毒液で刃を濡らした毒太刀でもある。
　そして最後に入って来たのは身長が二メートル程もありそうな大男。身に纏うのは鎧竜グラビモスから採れる素材の中で厳選したものを使ったグラビドＳシリーズ。その巨大な防具が余計に男を大きく見せ、辺りに与える威圧感も大きい。デスギアのハンターと同じくしっかりとグラビドＳヘルムを被っていて顔を窺い知る事はできない。背中に備えたのは黒鎧竜の素材を使って作られた漆黒の巨銃槍、ブラックゴアキャノン。防御性能、砲撃性能共に優れた重武装型のガンランスだ。
　四人全員が並々ならぬ実力の持ち主である事は、装備を見れば一目瞭然だ。だが、皆の驚き方はただの実力者を前にした時とは違う。何か、異質な存在に対する畏怖にも似たような、近付く事すら恐れるようなものだ。
　四人はゆっくりとした足取りで酒場の中を進む。周りのハンター達の視線を浴びながら、威風堂々とした歩みで。向かう先は受付カウンター。立っている受付嬢は慌てた様子で中へと引っ込む。すぐに

出て来たのは先程の受付嬢ではなく、ギルド嬢長のライザ。顔にはいつも以上にしっかりと営業スマイルの仮面を被って、万全の構えでの登場だ。
「シルフィ。あの人達って一体……」
見知らぬ一団に困惑していたクリュウはシルフィードに振り返って尋ねようとするが、その先の言葉は出て来なかった。無言で一団を見詰めるシルフィードの表情は、クリュウが知っている彼女のどの表情とも違う。嫌悪、焦燥、憤怒、様々な負の感情が混ざったような、いつになく厳しい表情。シルフィードの並々ならぬ様子にクリュウは開きかけた口を閉じた。
その間も四人は歩き続け、受付に到達する。その瞬間、ライザは「ドンドルマハンターズギルド本部へようこそ。ずいぶん久しぶりじゃない」と営業スマイル全開で応対する。先頭を歩いていた銀髪の男は「あぁ。今までリーヴェルの方にいたからな」と面倒そうに答える。彼が言ったリーヴェルとは東シュレイド共和国の首都である。
「……共和国大統領の名義で抗議文が届いてるんだけど？　勝手に国有林で狩猟をした挙句、天然記念物に指定されている樹木を相当数台無しにしたみたいじゃない。上層部が頭を抱え倒してたわよ？」
「何言ってるのよ。あたし達は善意で霞龍オオナズチを討伐してあげたのよ。感謝こそされど文句を言われる筋合いはないわよ。ねぇお兄様♪」
銀髪の男に寄り添いながらコロコロと笑う少女。彼女の発言にライザは頭を抱えながら「だとしても、国有林を無茶苦茶にしていい理由にはならないわよ」と溜息混じりに言う。
「だって邪魔だったんだもん。霞龍って姿を消せるからさ、邪魔な樹木を伐採した方が効率がいいじゃない」
「……しかもご丁寧に山火事まで起こしたそうね」
「火を放った方が手っ取り早いんだもん。ほら、霞龍って火に弱いじゃん？　効果抜群だったよ。キャハ」
心から楽しそうに笑う少女を前に何を言っても無駄だと悟ったライザは大きくため息を零すと、改めて男の方に向き直って「後でギル

ドマスターからお話があるそうよ。ちゃんと怒られて来なさい」と忠告。男は「あぁ、あのジジイまだ生きてんのか」と興味無さげに答え、ライザは何度目かわからないため息を零した。その時、ライザの目が一瞬クリュウ達の方を向いた。何事かと驚くクリュウの手を取ったまま、シルフィードは「行くぞ」といつになく感情を殺した声で告げると、彼を連れて酒場を出て行こうとする。

「あ、あのさシルフィ。ちょっと待って、手が痛いよ」

「……」

クリュウの言葉も無視し、無言で歩き続けるシルフィード。その時、突然シルフィードは彼の腕を引っ張ると自らの背後へと隠した。続けて背負った大剣キリサキを勢い良く引き抜くとその場で横へ振り抜く。驚くクリュウの目の前で、シルフィードは突然襲って来た鎌威太刀の刃を弾き飛ばした。弾き飛ばされた鎌威太刀はそのまま近くの酒樽に突き刺さる。

声を失ったままその場にペタンと腰を落とし驚くクリュウの目の前で、シルフィードはまるでモンスターを相手にした時のようにキリサキを構える。その視線の先では、鎌威太刀を投げつけてきたデスギアのハンターが酒樽に突き刺さった自らの武器を回収する。

突然の騒動にいよいよ誰も言葉を一言も発しなくなり、酒場に不気味な沈黙が舞い降りた。その中で背を向けていた銀髪の男がゆっくりと振り返る。そして、剣を構えたまま立つシルフィードの姿を見た途端、それまでのヤル気のなさそうな表情が一転し、まるで壊しがいのあるおもちゃを見つけた子供のような、不気味な嬉々とした表情に変わる。そんな彼の顔を見て、シルフィードの嫌悪感は限界にまで達する。

「よぉ、シルフィード。久しぶりじゃねぇか」

男に名を呼ばれたシルフィードは背後で腰を抜かしているクリュウの方を一瞥すると、警戒心全開のまま「あぁ、そうだなアイン」と返事する。

アインと呼ばれた男は「へへへ、俺の名前を覚えててくれるたぁ、嬉しいなぁ」と人を馬鹿にしたような嘲笑で応対する。それに対しシル

フィードは「貴様のような外道の名前、そう簡単に忘れられるか」と吐き捨てるように答えた。
　そんな二人の会話を見ていた少女の表情はいつの間にか憤怒に染まり、デスギアとグラビドSの男は事の成り行きを傍観している。そして、ようやくゆっくりと立ち上がったクリュウはいつになく怖い表情をしたシルフィードの背後から、躊躇いがちに声を掛ける。
「あ、あのさシルフィ。あの人達、シルフィの知り合い？」
　小声で尋ねる彼の問い掛けに、シルフィードは一切彼の方を見る事なく、吐き捨てるように答えた。
「あいつは【サントロワの亡霊】の称号を持つG級ハンター、アイン・ヴォルフガング――剣聖ソードラントのリーダーだよ」
　シルフィードの返答に、クリュウは言葉を失う。そして初めて見る剣聖ソードラントの姿に、ただただ呆然と立ち尽くすしかなかった。

第１９４話　憎しみの連鎖　癒えぬシルフィードの心の傷跡

「剣聖ソードラントって……」

突如目の前に現れた青年、アイン・ヴォルフガング。シルフィードは彼の事を剣聖ソードラントのリーダーと言った。それはかつてシルフィードが属していたチームであり、実力はあれど悪逆非道とも称される、田舎者のクリュウでも知っている程の有名チームだ。

まるでクリュウを守るように彼の前に立ち塞ぎながらキリサキを構えるシルフィード。そんな彼女を嘲笑いながら声を掛けて来たアインに対し、シルフィードは嫌悪感むき出しで構える。他人に対してそんな反応を見せるシルフィードの姿にクリュウは困惑しながら彼女の背後から事の成り行きを見守り続ける。

「……なぜ貴様がここにいる」

「おいおい、ここはハンターの都ドンドルマだぞ。全てのハンターが居ても何の不思議もない場所のはずだが」

意地の悪い笑みを浮かべながら言う彼の返しにシルフィードは短く「……そうだったな」と答える。彼女が訊きたいのはそういう事ではない。ハンターが依頼を受注したりするのは大衆酒場が基本だが、キングクラス以上ともなると別の場所で行うのが通例だ。これはレベルの違うハンター同士のいざこざを防ぐ目的や、下位ハンターなどには機密事項の依頼などがある為だ。

もちろん、エンペラークラスのアインがここに来る必要はない。彼女が言っているのはそういう意味なのだが、彼の人をバカにしたような笑みを見て全てを悟る――下等な連中の奇異や畏怖の視線を楽しんでいるのだ。

シルフィードは一度小さくため息を零すと、構えたキリサキをしまう。狩場以外のでの武器の使用は厳禁であり、抜刀行為も基本的には許されていない。今の場合は正当防衛だが、それでもいつまでも出し続けるのは良くはない。

だが武器をしまったシルフィードと違って、デスギアのハンターは依然として鎌威太刀を手に持ったままだ。
「噂には聞いてたぜ。お前、今じゃ蒼銀の烈風なんて呼ばれてるらしいな。大した二つ名を持ったもんだぜ」
「……別に二つ名をほしくてハンターをしている訳ではない」
アインの言動一つひとつに厳しい口調で帰すシルフィード。いつもの冷静沈着な、大人びた振る舞いからは想像できないような感情的な返し。それほどまでに、シルフィードはアインという存在に対して嫌悪しているのだ。
「つれねぇな。久しぶりに会った仲間じゃないかよ」
「貴様の事を仲間などと思った事はこれまでもこれからも一抹たりともない」
「ちょっとシルフィードッ。あんた天下のアインお兄様に何て口利いてるのよッ」
二人のやり取りの間に突如入って来たのはアインと同じ銀レウスの防具を纏った少女。ツインテールをフリフリと揺らすその姿は実に可愛らしいが、シルフィードを睨みつける表情は背筋も凍るような憤怒に満ちていた。憎き仇敵と相対したかのような、嫌悪と嫉妬に狂った表情。だがシルフィードは短く「ツヴァイか。何の用だ」と同じく嫌悪の対象を見る目で相対する。
ツヴァイと呼ばれた少女はアインの前に立ち塞がるとシルフィードを睨み上げる。身長が高いシルフィードに対してツヴァイは頭ひとつ分くらい小さく、身長で言えばクリュウと同じくらいしかない。
「あんた、どの面下げてお兄様の前に立ってんのよ」
「言いがかりだな。最初にケンカを吹っ掛けて来たのは貴様らの方だろうが」
「あぁ？　んなの知らないわよ。今の問題は勝手にお兄様の前に立つなって言ってんのよ」
「……相変わらず貴様は無茶苦茶な事を言うな」
下から睨み上げて来るツヴァイに対してシルフィードは呆れ返る。全く成長の見られない生意気な悪ガキを相手にするかのような、そん

な見下した態度。それが余計にツヴァイの癪に障ったのか、ツヴァイは突然シルフィードの頬を叩いた。パンッという軽い音が、不気味なくらいに静かな酒場全体に広がる。
「……ほんと、貴様は相変わらずだな」
頬を叩かれたシルフィードは叩かれて赤くなった箇所を手のひらで押さえながらツヴァイを睨みつける。それに対してツヴァイも
「あぁ？　何私を見下しやがってんのよ。ぶっ殺されたいの？」と激怒しながら睨み返す。このまま殴り合いに発展しかねない二人の雰囲気に、今まで入る余地がなくて右往左往していたクリュウが慌てて止めに入った。
「ちょ、ちょっとやめてくださいッ」
「お、おいクリュウ……ッ」
シルフィードの制止を振り切ってクリュウは彼女とツヴァイの間に入り込んだ。当然、その場にいた全員の視線がクリュウに集中するが、彼は構う事なく振り返ってシルフィードと対する。
「だ、大丈夫？」
「あぁ、別に問題ないさ」
彼を安心させるように微笑みながら言うシルフィード。クリュウが安心したのを見て改めて彼を下がらせようとしたが、それよりも早くクリュウが動いてしまった。
「ちょっと一体何なんですかあなた達はッ!?」
少し怒りながら恐れる事なくアイン達に文句を言う彼の姿に、周りのハンター達は彼の事を勇気あると評価するものやただのバカと評価するものまで様々だ。エンペラークラスのハンター相手にビショップクラスのハンターが抗議するのは前代未聞の出来事だ。というかそもそもこれほどまでにクラスに開きのある者同士が絡む事自体少ない。
一瞬虚を突かれたツヴァイだったが、すぐに「あぁ？　何なのよあんた。ガキに用はないのよ」と関わんなと言いたげにあしらう。そんな彼女の言動にさすがのクリュウもムッとする。
「ガキって、君とそう変わらない年齢だと思うけど」

「あぁッ!?」
「やめろツヴァイ。見苦しいぞ」
今にもクリュウに向かって殴りかかりかねないツヴァイをアインが一喝する。するとこれまでの好戦的な態度から一転して「ご、ごめんなさいお兄様」とまるで怒られた小さな子供を彷彿させるようにしゅんと落ち込む。感情の高低差があまりにも激し過ぎる。
アインはクリュウを見ながら「こいつは？」とシルフィードに問い掛ける。シルフィードは彼をアイン達に紹介するのはあまり気が乗らない様子だったが、この状況ではもうどうしようもなく、半ば諦める。
「クリュウ・ルナリーフ。私のチームメイトだ」
「チームメイト？　こいつが？」
シルフィードの紹介にアインは興味深げにクリュウを見詰める。何だか自分の事を値踏みされているような彼の視線に、クリュウは居心地の悪さを感じながら彼と対する。しばらく彼を観察した後、アインは一言。
「弱そうだな」
容赦のない一言を、嘲笑いながら言うアイン。クリュウは一瞬イラッとしたが、相手は素行はどうであれ実力では自分よりもずっと上な存在だ。弱いとバカにされても、言い返す事はできない。何も答えない彼を見て、アインは言葉を重ねる。
「俺から逃げ出した後、ずっとソロ狩りしていたお前が最近チームを組んだって噂があったが――このガキの事か？」
「ガキじゃない、クリュウだ。私の頼れる相棒だ。彼と私、あと二人仲間がいて四人一隊（フォーマンセル）のチームだよ」
「あぁ知ってるよ。隻眼の人形姫に桜花姫だったか？　どっちもちょっと実力があるからってちやほやされてるルーキーだろ？」
口元に不快な笑みを浮かべながら嘲笑する彼の暴言にはさすがのクリュウも怒りを覚えた。自分の事ならまだしも、仲間をバカにされる事だけはどうしても許せなかった。しかし文句を言おうと前に出掛かった彼をシルフィードが押さえ込む。「どうしてッ!?」と声を上

げるクリュウの方を一瞥すると、代わって彼女の方が一歩前に出た。
「少なくとも、貴様らよりは世間では必要視されている二人だ。桜花姫には多くのガンナーが憧れ、隻眼の人形姫には多くの商隊が信頼関係を築いている。貴様らのようなただ壊すだけしかできない連中より、よっぽど支持はあるさ」
冷静に、淡々と彼の暴言を跳ね返すシルフィード。大人びた振る舞いやその余裕を持った言動にアインは一瞬呆けたが、すぐにいつもの調子を取り戻す。
「まぁいいさ。だが、蒼銀の烈風に桜花姫、隻眼の人形姫と名だたる二つ名持ちがいる中で、全くの無名がいるって噂だったが、どうやら真実らしいな。なぁ、坊主？」
上から人を見下すかのような視線で見下ろし、口元には嘲笑を浮かべながらアインはクリュウの方を見やる。そんな彼の視線、そして言動にクリュウは思わず視線を逸らした。居心地の悪さに、反吐が出そうだった。
アインは容赦なくクリュウが最も気にしている事を突いて来た。普段笑っていても、どうしてもそれだけは胸の奥にあった想い――有名な女子三人に囲まれた実力もなければ無名な自分の存在。周りは気にするなと言ってくれても、どうしても気にしてしまう事実。
気まずそうに黙る彼の姿を見てニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべるアインだったが、そんな彼の前にまたしてもシルフィードが立ち塞がる。視線を彼女に向けると、心なしかさっきよりも怒っているように見える。
「世の中には無名でも実力があるハンターも大勢いる。彼は十分私や二人に並ぶだけの実力を持っているさ。何も知らない無知が、彼を勝手に評価するな。見下すな、見限るな、見誤るな、愚か者が」
堂々とした立ち振舞いで立ちながら、シルフィードはアインを一喝する。その勇ましい姿は相手が誰もが恐れるソードラントのリーダーだという事を忘れさせる程だ。誰もアイン相手にこんな風に食って掛かるような態度は取らない。唯一の例外こそが、シルフィードだけだ。

シルフィードの反撃にツヴァイが言葉にならない奇声を上げるが、グラビドSの男に止められる。デスギアのハンターは全く微動だしない。そんな背後の連中の動向を無視し、アインはシルフィードと睨み合う。しばらくそうして双方が沈黙していると、突然アインは面白おかしそうにクククと笑う。
「何がおかしい？」
「いや、お前変わったなぁと思っただけだよ」
「……そうか。自分では自覚はないがな」
「あぁ――つまらなくなったな」
それまでの嘲笑がウソのように、アインは突如感情を全て殺したかのような無表情になった。突然豹変した彼を前に警戒するシルフィードに対して、まるで全ての興味が失せたかのようにアインは彼女に背を向ける。
「昔のお前は近付くだけで斬り刻まれるような鋭さを持っていたが、今のお前からはその鋭さが感じられない。少し会わない間に、腑抜けたな」
「……あぁ、そうかもしれないな」
シルフィードをバカにされ文句を言おうとクリュウが口を開きかけた瞬間、シルフィードが静かにそう言った。驚く彼の視線に気づく事なく、シルフィードはゆっくりと語る。
「昔の私は無謀な憎しみに染まって、周りが見えなくなっていた。力を貪欲なまでに求める覚悟は昔の方がそれは強かっただろう。だがな私は今の自分の方が《自分らしい》って思う――私は今の方が幸せだという感じがするな」
そう言ってシルフィードはクリュウの方へ振り返ると、短くウインクする。そんな彼女を見て、クリュウもまた安堵したように微笑んだ。
前にエルディンが言っていた。昔の彼女はモンスターに対する憎しみに染まり、力に溺れていたと。でもいまのシルフィードはエルディンに救われ、自分達と出会った事で一人の少女らしさを取り戻したと――昔よりもずっと、輝いていると。

彼は自覚はないが、エルディンとの出会い、そしてクリュウとの出会いがシルフィードを変えたのだ。今の彼女は数年前のような憎しみに突き動かされる事はなく、自分の意志で幸せの為に剣を振るっている。恋する狩人（ハンター）だ。
「ふん、やっぱり今のお前は興味がねぇな。さっさと失せろ」
「言われなくてもそうさせてもらうさ」
シルフィードもこれで終わりだとばかりにそう吐き捨てるとクリュウの方へ振り返る。そして「行くぞクリュウ」と微笑みながら彼の手を握り締めた。クリュウも大きくうなずいて彼女に連れられて歩き出す。そんな二人の様子をもう興味を失って見向きもしないアインと未だ憤怒に満ちた視線で睨むツヴァイ。
遠くで入るに入れなくて事の成り行きを見守るしかなかったライザもほっと胸を撫で下ろす――その時だった。
「あ……あああ……あああああ……あああああああああああああああッ！」
突如デスギアのハンターが狂ったように叫ぶと、手に持っていた鎌威太刀を上段に構えながら跳び上がると、この場から去ろうとしていたシルフィードに背後から襲い掛かる。とっさにシルフィードはクリュウの腕を引っ張って再び自らの背後に収めるとキリサキを構えてガード。刃先同士がぶつかった瞬間、すさまじく甲高い音が酒場中に響き渡った。
「なッ!?　貴様正気かッ!?　今のは明らかに私を殺す気だっただろうがッ！」
未だに力押しで太刀に力を入れるデスギアのハンターの剣をキリサキで押さえながらシルフィードが怒鳴る。ギリギリと切迫する鍔迫り合いは、少し剣が動くだけで火花が飛ぶ。さすがのシルフィードも先程までのような余裕は一切無く、混乱しながらも何とか相手の攻撃を防いでいた。
脂汗を浮かべながら「やめないか貴様ッ！」と叫ぶシルフィード。だがデスギアのハンターは何も答えず、奇声を上げながらさらに力を込めてシルフィードを押し倒そうとする。そこへさすがに危険だと

感じたクリュウが転がっていた椅子をデスギアのハンターに向けて放り投げた。突如飛来する椅子を前にデスギアのハンターは飛び退いてこれを避ける。同時にシルフィードも動きを取り戻せた。
「助かったぞクリュウ」
　彼に礼を述べながらも、シルフィードの視線はデスギアのハンターに向けられたままだ。相変わらず武器を構えたまま、こちらを襲う気満々で隙を探っている。シルフィードは隙を見せないようにしながら、改めて問い掛ける。
「貴様、どういうつもりだ？　事と次第によってはただではすまんぞ」
　シルフィードの少々焦りながらも威圧するような問い掛けに対しても、デスギアのハンターは何も答えない。だが再び問おうとシルフィードが口を開いた瞬間だった。
「……ふざけんじゃないわよ」
　デスギアのハンターは小さくつぶやくようにそう言った。その声は明らかに女性のもの、それもかなり若い。てっきり男だと思っていたクリュウとシルフィードは一瞬面食らったようだったが、すぐに気を張り直す。
「何を言っているんだ貴様。貴様は一体……」
「ふざけんじゃないわよ。人殺しの分際で、何あんただけ幸せとか言ってんのよ。ウチはそんなの、絶対に認めない……絶対に認めないわッ！」
　激しい憤怒と共に吐き出された怒号は、その場にいた全員を威圧するような激しいものだった。クリュウは彼女の言っている意味がわからず困惑していたが、シルフィードだけはようやく彼女の正体に気づいたようだった。だが、その顔は信じられないとばかりに驚愕に染まり、先程までとは違った狼狽を見せる――その姿を見て、アインの口元に意地の悪い笑みが戻るのをツヴァイは見逃さなかった。
「き、君はまさか……」
「……忘れたなんて言わせないわよシルフィード」
　ゆっくりと、デスギアの女はフード状のデスギアゲヒルを脱ぐ。現れたのはシルフィードと同い年くらいの美しい金色の髪をショート

カットに整えた少女だった。凛とした勝気な紅蓮色の瞳が彼女の力強さを表しているかのよう。だがその瞳に燃えるのは邪悪な憎しみに染まった黒炎。その並々ならぬ憎しみは、全て目の前で驚いたまま硬直しているシルフィードに向けられている。
「トリィ……」
　驚愕に満ちたシルフィードがトリィと呼んだ少女は不機嫌そうに鼻を鳴らすと「へぇ、一応記憶には留めといてくれたんだ」と驚嘆しつつも、その表情は明らかに興味がなさげだ。瞳は相変わらず鋭くシルフィードを睨みつけている。
　一方のシルフィードは突如現れたトリィの存在に驚愕するあまり、まだ目の前の状況が理解できずにいた。
「トリィ。な、なぜ君がソードラントにいるんだ……？」
「はぁ？　決まってるじゃない――昔のあんたと同じ理由よ」
「……ッ!?」
　不敵な笑みを浮かべながら語る彼女の台詞に、シルフィードは顔の驚きは極限状態となる。まるで信じられないものでも見るかのようにトリィから目を離せずにいる彼女の横顔を、クリュウは不安そうに見詰めるしかできなかった。
　驚くシルフィードの表情が余程面白かったのか、トリィは愉快そうに笑う。
「何バカ面引っ提げてんのよ。何もおかしい事ないじゃない――憎しみに狂い、力に溺れ、非道な事でも平気でできる。昔あんたがやってたのと何も変わらないじゃない」
「そ、それは……」
「――ウチはネリスを殺したあんたを絶対に許さない。ウチはあんたなんかよりもずっと強いハンターになってやるわ。その為なら、どんな非道な手段でも構いやしない」
　憎しみの炎を瞳の奥で燃えたぎらせながら、トリィはシルフィードを睨みつけたまま、覚悟に満ちた表情で語る。その単語ひとつひとつにシルフィードは返す言葉もなく、ただただ苦しそうに唇を噛んで無言を貫き続ける。

「……何か言いたい事、ある？」
鼻を鳴らし、相手を見下しながら問いかけるトリィ。シルフィードは彼女の視線を向けられず、斜め下の方へ視線を落とすと、うなだれたままただ一言「すまなかった……」と謝る。驚くクリュウの目の前で、突如トリィはシルフィードの胸倉を掴んだ。その表情は憎しみに歪み、瞳の鋭さも増していた。
「――っざけんじゃないわよッ！　今更謝られたからって、ネリスが生き返るとでも思ってるのッ!?　あんたの身勝手で死んだネリスを、ネリスを殺したあんたを、許せる訳ないでしょッ!?　すまないの一言で逃げられるなんて思うなッ！」
胸倉を掴みながら顔を限界まで近づけ、至近距離で怒り狂いながら怒鳴り散らすトリィ。だがシルフィードはそんな彼女に何も返す事なく、視線すら合わせられずにうつむき続ける。そんな弱々しい彼女の姿を初めて見たクリュウは最初こそ驚いていたが、慌てて二人の間に入り込んだ。事情はまだよくわからないが、仲間が罵倒されていて黙っていられる程クリュウは非情にはなれない。
「ちょ、ちょっとやめてくださいッ！　シルフィを放してッ！」
クリュウはシルフィードの胸倉を掴むトリィの腕を引き剥がすと、二人の間に器用に潜り込む。突然の乱入者であるクリュウの登場に意表を突かれたトリィは簡単に下がる。二人の間に入ったクリュウはすぐにシルフィードの方に振り返り「大丈夫シルフィ？」と尋ねるが、シルフィードは何も答えない。焦点を失った瞳はどこを見ているかもわからなかった。彼女のそんな姿をクリュウは初めて見た。
「何なのあんた？」
一方、突然クリュウに乱入されたトリィは不機嫌そうに鼻を鳴らす。さっきのアインとのやり取りを見ていた彼女が自分の事を知らないはずはない。この問いかけは正体を尋ねているのではなく、勝手に割り込んで何様のつもりだ、という意味だ。
自分よりも年上の女性に睨まれるという状況。クリュウは一瞬気圧されそうになるが、勇気を奮い立たせて彼女の前に立ち塞がる。
「それはこっちの台詞です。一体何なんですかあなたは。いきなりシ

ルフィに襲いかかって来て、どういうつもりなんですか？」
「……部外者は引っ込んでなさい」
「部外者じゃないッ！　僕はシルフィの仲間ですッ！　関係なくなんかありませんッ！」
　力強く宣言するクリュウの言葉に対し、トリィは小さく舌打ちすると未だ沈黙を続けるシルフィードに向かって「仲間、ね。偽善にしても悪い冗談ね」と鼻で笑う。それに対してもシルフィードは何も答えなかった。
「シルフィもシルフィだよッ。何で言い返さないのさッ。シルフィが人殺しな訳ないでしょッ！」
　シルフィードの方に向き直って怒るクリュウだったが、シルフィードはそんな彼にすら視線を合わせられずにいた。するとそんな彼の様子を見たトリィの口元に不気味な笑みが浮かぶ。
「へぇ、あんた自分の過去の事この子に黙ってるんだ。ふぅん、ずいぶん便利な《仲間》ね」
「か、過去の事は過去の事です。僕は今のシルフィを信頼してるんですから」
「ふぅん、ならあんたは人殺しのこいつを信頼できるって言うんだ」
「だ、だからシルフィは人殺しなんかじゃ――」
「――人殺しなのよ。こいつは四年前に、ウチの幼なじみを殺したのよ」
　思い出すのも吐き気がすると言いたげに吐き捨てるトリィの発言にクリュウは押し黙る。心ではシルフィードがそんな人間じゃないと思ってはいても、彼女の真剣な声を前にそれを妄言だと切り捨てる事は、どうしてもできなかった。だから、
「シルフィ、この人が言ってる事って、もちろんウソだよね？」
　確認するように振り返って尋ねたクリュウだったが、シルフィードは視線すら合わせる事なく、何も返してくれなかった。その無言が意味するもの、それは――
「ウソ、だよね……？」
　信じられないとばかりに声を詰まらせながら、すがりつくように尋

ねる彼の問いかけにシルフィードはようやくその重い口を開く。だが、そんな彼女から発せられたのは――
「……すまない」
――クリュウが信じていた言葉ではなかった。
愕然とするクリュウの姿を見て、トリィは愉快そうに笑う。
「ウチが言った通りじゃない。こいつは――人殺しなのよ」
「う、ウソだッ！　シルフィはそんな事をする人じゃないよッ！」
動揺しつつも、クリュウは断固シルフィードを信じるとばかりにトリィの言いがかりを突っぱねる。そんな彼の姿をゆっくりと顔を上げたシルフィードが見詰める。
クリュウの反撃にトリィは鼻を鳴らすと「何も知らない奴が、知った風な口叩くんじゃないわよ」と威嚇する。それでもシルフィードを擁護しようとするクリュウに、さすがのトリィも鬱陶しくなったのか、「うっさいわね。いいから部外者は引っ込んでなさいよッ！」とクリュウの肩を掴むと、彼の体を易々と跳ね飛ばした。突然の事に対処できなかったクリュウはそのまま倒れ、テーブルに頭を打ち付けて悶える。それを見た瞬間、それまで炎を失っていたシルフィードの瞳に火が戻る――それも怒りの炎だ。
「貴様……ぁッ！　クリュウに何をするッ！」
突然怒り出したシルフィードは驚くトリィの胸倉を掴み上げると至近距離で激昂する。突如怒り出したシルフィードに驚きつつも、トリィの表情もまた怒りに染まっていく。
「ハッ、何ムキになってんのよ。自分の事は無関心を装って、お仲間さんの事になると見境がない訳あんたッ!?」
「私の事はどう罵倒しても構わんさ。実際、私はそれだけの大罪を犯したのだからな。だがクリュウは関係ないだろうがッ！」
「うっさいわね。たかがガキ一人に何ムキになってんのよ」
「き、貴様ぁ……ッ！」
いつもは冷静なシルフィードだが、今は完全にその冷静さを失っていた。今にもトリィに向かって殴り掛かりかねない勢いだし、トリィも殴られればすぐさま反撃に出る事も辞さない構えだ。そんな二人

の様子をアインとツヴァイは面白おかしそうに見詰めていて、止める気配はない。クリュウも後頭部を襲った痛みのあまり動けずにいた。
誰も止められず、一触即発なシルフィードとトリィ。だがそんな二人の間に割って入る者がいた。二人の顔の間に鉄製の食器プレートをねじ込み、驚いて互いに半歩引く二人の間に割って入ったのはギルド嬢長のライザだった。
「はいはいそこまでにしてねぇ。ここは酒場だから騒ぐのは構わないんだけど、さすがに喧嘩となっちゃお姉さんも黙ってられないなぁ」
いつもと変わらぬ笑顔を振りまきながら現れたライザを前に、シルフィードはバツの悪そうな表情を浮かべると悶えるクリュウの方へ駆け寄る。それを見届け、ライザは改めてトリィの方へ向き直った。
「あなた達の過去に何があったかは、お姉さんわからない。でも、ギルド嬢長として酒場内で流血事件は起こしたくないのよねぇ。そんなに喧嘩したいなら、外でやってくれないかな？」
だがトリィもライザの乱入に興ざめしたらしく、「面倒だからパス」と身を引いた。それを見届けたアインは「何だ、つまらんなぁ」と残念そうにつぶやいた。
「あなた達も、ギルドマスターが呼んでるんだからさっさと行って来なさい」
ライザが注意すると、アインは「わかったわかった」と面倒そうに答えると「行くぞ」とだけつぶやいて歩き出す。その後「あぁん、お兄様待ってぇ～」と甘い声を出しながらツヴァイが、一度シルフィードの方を睨みつけてからトリィ、そして最後にずっと石像のように固まって黙っていたグラビドSの男が続いて酒場の奥にあるギルド本部へ通じる出口へと消えた。
四人の姿がなくなると、少しずつ酒場の喧噪が戻り始める。それを見届けほっと胸を撫で下ろしたクリュウとシルフィードの方へと振り返る。
「大丈夫かしらクリュウ君？」
「は、はい。何とか……」
後頭部を押さえながらクリュウはシルフィードに支えられながら

起き上がる。シルフィードはそんな彼を心配そうに見詰めていたがライザと目が合うと気まずそうに逸らした。それを見てライザは小さなため息を吐く。
「さっきも言った通り、私はあなた達二人の過去は知らないわ。部外者である私がとやかく言える立場じゃないけど――せめてクリュウ君には、全部話してあげたら？」
ライザの言葉にシルフィードはビクリと震える。そんな弱々しい彼女の姿を初めて見たクリュウは不安そうにライザの方を見る。するとライザは「クリュウ君も、しっかりシルフィードを支えてあげなさい」と言って足早に立ち去ってしまった。
クリュウはシルフィードに支えられながらそんな彼女の背中を見送った後、そっとシルフィードの方を見る。いつもは頼もしい笑みを浮かべているシルフィードだったが、今は見ていられない程に弱々しい印象を抱く。
周りの喧噪がすっかり元に戻り始めた頃、クリュウはゆっくりと口を開く。
「……部屋に戻ろうか？」
「あぁ……」
返って来た返事も、また弱々しいものだった……

第１９５話　過去に犯した大罪に苦しみ続けて来た少女の涙

ハンターズギルド本部が置かれる施設は一階部分が大衆酒場として解放されており、さらに地下には大衆浴場が備えれている。そして二階から上にはハンターが泊まれる宿泊施設となっているが、どの部屋に泊まれるかは自分の実力次第となる。

ハンターの世界は実力によって階級がしっかりと区切られている。武具の製造や強化から酒場での食事のメニュー。はたまた宿に至るまでが全てが実力に見合ったものしか提供されない。ちなみに新人や初心者で構成されるポーンクラスというのは新人やかけだしハンターなどが借りる事ができる宿のレベル。室内には装飾品らしいものはほとんどなく、必要最低限のものしかない簡素なものだ。だが同時にかけだしハンターには嬉しい安価でもある。ギルドが認定した昇級クエストをクリアすれば次のランクへと進め、よりランクアップした待遇を受けられる。

ハンターのランクは大まかに下位、上位、Ｇ級と分けられるが、これはあくまでギルドが用いる基礎的なランク分けでしかない。なので一般のハンターはドンドルマで泊まれる宿泊施設のグレードで自らのランクを付けており、下からポーン、ルーク、ビショップ、ナイト、クイーン、キング、エンペラーとなる。簡単に言えばポーンからビショップまでが下位、ナイトからキングが上位、そして最上位のエンペラーがＧ級となる。当然、これらのグレードによって宿泊できる施設の泊まり心地の良さが変わっていくが、当然価格も変わっていく。新装備を作ったばかりで金欠のハンターならナイトクラスであってもポーンクラスの部屋を利用したりするし、中には貧乏性がすっかり着いてしまって実力に見合わぬ質素な部屋を好む者もいる。認められたランクより下のグレードの部屋は自由に選べるのだ。

二階は主に下位と呼ばれるルークからビショップまで、三階はナイトからキングまでの上位、そして四階が唯一Ｇ級と認定されるエンペ

ラークラスの部屋がある。ビショップクラスの部屋から上には個人風呂が備えられており、クイーンクラス以上になるとルームサービスを受けられる。

こうしたランクによる待遇の違いをつける事で、下克上を促しているのだ。衣食住は人間の基礎であり、これを刺激すれば努力の度合いも変わって来る。ハンターズギルドの優れたハンター育成計画の一環だ。

クリュウとシルフィードはそれぞれビショップクラスとナイトクラスであり、当然借りられる部屋のグレードは違うし、ちょうど下位と上位を分ける境界線の為に階層も異なる。なのでいつもと同じようにシルフィードがビショップクラスの部屋を借りている。クリュウ達のチームはクリュウとサクラがビショップクラスで、フィーリアとシルフィードがナイトクラスの為だ。サクラが実力に見合わぬランクなのは護衛依頼ばかり受けている為に昇級クエストを受けていないし、そもそも昇級クエストを受ける為に必要な大型モンスターの討伐数を満たしていない為だ。サクラ曰く「……自分の実力は自分で決める」との事。

今回は二人旅な為、並んだ部屋を取った。しかし今、二人の姿はシルフィードの部屋にあった。

ベッドに腰掛けたままうなだれているシルフィード。先程から一言もしゃべらずに沈黙を続けている。そんな彼女を不安そうに見ながら、クリュウは一人小さな台所でお茶の用意をしている。お湯を沸かして、家から持って来たレヴェリ産の紅茶を淹れる。レヴェリを訪れてからというもの、時々茶葉の差し入れがあるので重宝している。

紅茶を淹れ終えると、クリュウはティーセットを持って彼女の下に寄る。テーブルの上に置き、カップに紅茶を注ぐとシルフィードに手渡す。小さく「すまんな……」とだけ返してカップを受け取ったシルフィードだが、一口も飲む事なく持ったままぼーっとしている。

自分の分を淹れたクリュウは一口飲んで味を確認。そして勇気を出してこの状況の打破を試みる。

「あ、あのさシルフィ。早く飲まないと、冷めちゃうよ？」

本当はさっきの事を訊きたかったが、そんな勇気はなかった。せめてもの問い掛けがそれだった。するとシルフィードは「あ、あぁ……」と短く答え、ようやく紅茶を一口飲む。それを見てクリュウは少しだけ安堵した。
「お菓子も一応持って来てるんだ。どれがいいかなぁ」
クリュウは努めて明るく振る舞いながらお菓子を用意する。そんな彼の真摯な姿にシルフィードは少しだけ笑みを取り戻した。同時に彼にそんな気遣いをさせている自分がひどく惨めで、許せなくて。だから――
「……あれが、私がかつて与していたチームの面々だ」
――勇気を出して、話す事にした。
突然彼女の方から話の核心を切り出した事にクリュウは驚いたが、すぐに手を止めて姿勢を正す。
「剣聖ソードラント。まぁ、君の昔の仲間の事を悪く言うつもりはないけど、その、噂通りな人達だったね」
「……別に奴らの事を仲間などと思った事は一度たりともない。あくまで、利害の一致で共に行動していたに過ぎないからな」
紅茶を一口飲み、喉を潤わせ、シルフィードはゆっくりと語り始めた。
「先程の男がアイン・ヴォルフガング。サントロワの亡霊との異名を持つエンペラークラスのハンターで、剣聖ソードラントのリーダーだ。その隣にいた銀レウス装備の女はアインの妹のツヴァイ・ヴォルフガング。サントロワの死神と呼ばれる、同じくエンペラークラスのハンターだよ」
「……ツヴァイさんって、シルフィと同じくらいの年だよね？　なのに、エンペラークラスなんだ」
「言っただろ？　世の中には私以上の実力者は五万と居るとな。奴はその中でも性格は抜きにしてもハンターとしての実力や才能という面では天才だ。昔から、気にくわない奴だったよ」
思い出すだけでも嫌なのだろう。険しい表情のまま語る彼女の心中はわからないが、何となくそんな雰囲気だけはひどくよく伝わって

来た。するとシルフィードは「それと、ずっと黙っていたグラビドS装備の男がいただろ？」と問い掛ける。
「うん」
「あいつの名はチェルミナートル・バグラチオン。詳しくは知らないが、アクラ地方の出身で無駄な事はしゃべらない、キングクラスのハンターだ」
　アクラ地方とは中央大陸北方に浮かぶ小大陸の事。極寒の地で雪と氷に閉ざされた世界と言われている。大陸北方に位置するイージス村とは比較的地理的に近いが、海流の関係で常に沿岸は流氷が道を閉ざし、不凍港はわずかしかない為、中央大陸との交流は最低限なものしかない。
　詳しい事はあまりわからないが、アクラにはかなり古くから続く王政国家が存在した。しかしシュレイド国の分裂で生じた戦乱の時代にエルバーフェルド王国（当時）と戦争状態となり、実質敗戦。講和条約でエルバーフェルドとアクラが面する北海の八割をエルバーフェルドが握った為、当時大陸西方にあった不凍港の機能が著しく制限され、元々作物が育ちにくいアクラはさらに衰退してしまった。現在は十年程前に革命が起きて複数の共和国が構成する連邦国家、アクラ共生主義共和国連邦という巨大な国が全土を統治していると言われている。
　共生主義という独特な理想を掲げているが、この共生主義とは中央集権化を意味し、全ての国民の私財を禁止。土地も財も食糧も全て国家が有し、それを均等に国民に分配する。つまり一つの国を皆で平等に分けあって共に生きるという理想。これを基本理念にしてるのがアクラ共生主義共和国連邦、通称ア連である。貧しかった国で人々が共に肩を寄せ合って生きていたアクラの人達らしい理念だ。
　エルバーフェルド共和国の衰退時期に北海の本来の領海権を取り戻し、現在は西竜洋諸国とわずかだが国交を結んでいる。エルバーフェルド帝国とは領海権問題から依然国交断絶の状態が続いており、カレン率いる国防海軍の仮想敵国は実質ア連となり、定期的な巡視が行われている。

だが国交を結んでいる西シュレイド王国、東シュレイド共和国、エスパニア王国の各政府では共生主義はアテネ神教と同様な異質で危険な主義とし、一般国民が感化されかねない理想である事から警戒。必要以上な交流は行なってはいない。

だが皮肉な事にこの危険思想を持つア連が、アクラの氷の地の下にある膨大なエネルギー源を西竜洋諸国に輸出し始めた為にエネルギー問題が解決。結果的に資源戦争を何度も繰り広げて来た西竜洋諸国は薄氷の上とはいえ平和を維持しているのだ。

一部の国家が必要最低限な国交しかしていない為、中央大陸の人々はアクラがどんな場所なのか。ア連とはどんな国家なのか詳しくはわからない。もちろん、アクラ出身の者など見る事は稀だ。その稀な人物が、しかもハンターとして活動している。クリュウとしては驚くには十分過ぎる要素だ。

「そんな人が、どうしてソードラントなんかにいるのさ」

「わからん。バグラチオンはあまり多くは語らない男だったからな。ただ何か大志を抱きながらアインに与していた様子だったな」

「どんな大志を抱けば、ああいう人達と一緒にいようとなんて思うんだろ」

「……まぁ、単純に力だけを追い求めるとかな。私がその代表例だ」

自虐的に笑うシルフィードの言葉にクリュウは自分の失言に気づく。慌てて謝るがシルフィードは「別に君を責めている訳ではないよ」よ苦笑を浮かべ、紅茶をまた一口飲む。

「それで、あの、さっきの女の人は……」

クリュウとしては、最も気になるのはそこだった。シルフィードも覚悟の上だったのか、特に動揺する事なくゆっくりとティーカップをテーブルの上に戻す。不気味な沈黙の中、カチャンという陶器独特の綺麗な音が部屋に響いた。

「……彼女の名はトリィ・マクガイア。ソードラントの前に、私が所属していたチームのメンバーだ。特筆した名前もなく、二つ名持ちもいない、かけだし三人組の新米チームだった」

「って事は、その、シルフィードの村が……」

言いづらそうに口ごもるクリュウが言う先の言葉を理解した上で、シルフィードは「そうだ。村が壊滅してから一年程経った頃、ネリスの執拗な勧誘を受けて入ったチームだ」と、彼が知りたい情報をしっかりと提示する。
「ネリスって？」
「チームリーダーだった少年だ。年は私やトリィと同じで、トリィの同郷出身。いわゆる幼なじみという奴だった」
懐かしい話を思い出すように、どこか穏やかな表情で彼女は語り始めた。
村がリオレウスとリオレイアの番に蹂躙され、破滅してから一年。シルフィードはソロハンターとしてあらゆるモンスターを片っ端から殺していた。その残虐非道な戦い方から周りは彼女を畏怖し、遠ざけ、いつのまにか彼女は誰からも声を掛けられないようになっていた。
だが、もう二度と何も失いたくないと願う彼女にとって、それはむしろ僥倖だった。構わず、ただ力を求めて彼女は剣を振るい続けていた。
そんな彼女に声を掛けて来たのが、ネリス・アーネストだった。
彼はシルフィードと同い年で、まだまだかけだしのライトボウガン使いだった。装備もクックDシリーズにショットボウガン・紅という実力に見合ったもの。彼はシルフィードの力に惚れ込み、しつこく一緒にチームを組もうと言って来た。
当時相棒を務めていた幼なじみのトリィ・マクガイアはそんな彼の姿に不満を感じていた。当時の彼女はイーオスシリーズに鉄刀【禊】という同じく実力に見合った装備だった。
トリィはなぜ今まで二人でコンビで狩りをして来たのに、シルフィードという、しかもあまり前評判の良くない相手を誘うのか理解できなかった。それ以前に、ネリスが他の女をしつこく誘う姿を嫌っていたとも言える。
当時のシルフィードはすでにバサルシリーズにカブレライトソードという二人よりも上級の装備を身に纏っていた。ソロを好んでい

た上に、格下の相手と組む理由もなかった為、シルフィードは彼からの誘いを断り続け、もとい無視し続けていた。
だがネリスのしつこい勧誘は一ヶ月近くも続き、彼の諦めの悪さに根負けする形でシルフィードは二人のチームに入る事になった。
自信過剰で勝気、それでいて自分の考えが絶対正しいと信じ込んでいるトリィと余計な事は言わないし独断行動ばかりするシルフィードは当時から仲が悪く、というか一方的にトリィが毛嫌いにしていた。トリィがケンカをふっかけ、シルフィードが軽くあしらい、トリィが激怒するという構図だ。それを間に入って仲裁していたのがネリスだった。
すぐにシルフィードが除隊するとばかり思っていたチームだったが、何だかんだ言ってもシルフィードの実力はネリスはもちろんライバル視していたトリィも認めていた。一方でシルフィードもトリィの才能は評価していた。
シルフィードは当時から叩き上げで実力を磨いていた実力者だったのに対しトリィは天性の才能の持ち主だった。太刀の扱いに長け、まるで踊るように剣を振るう姿はまさに戦姫というに相応しいものだった。
ネリスとトリィはテティル連邦共和国の小さな村の出身で、互いの両親が四人チームを組んでいた家族ぐるみの付き合い。まさにハンターのサラブレットとも言うべきものだった。いつも一緒で、まるで姉弟のように育って来た。だからこそ村を出て、ドンドルマでハンター生活を送るのも、二人一緒だったのだ。そこにシルフィードが無理やり引きづられた関係だ。
二人との付き合いは半年程続いた。だが、とりあえずある種仲良くとも言える三人の関係性が壊れ始めたのは、まさにこの頃だった。
ある日、シルフィードはネリスに呼び出され――そして告白を受けた。一目見た時から好きだった、いわゆる一目惚れという奴だった。
突然の事に驚いたシルフィードだったが、彼女はトリィの気持ちも理解していた。彼女がネリスの事を好きだという事に。
だからこそ、シルフィードは彼の告白を断った。元々ただのチーム

メイトとしか思っていなかったし、トリィとネリスがくっ付く事が一番だと考えたからだ。
ネリスは「そっか……」と悲しげな笑みを浮かべて立ち去った。以後、何もなかったように三人の関係は続いたが、その実は次第にヒビが入り始めていた。
トリィもまたネリスの気持ちを気づいていた。だからこそ、自分が辛くても好きな人に幸せになってほしいとの願いからシルフィードにネリスと付き合うよう頼み込んだ。だがシルフィードはネリスの事を好きでもないし、二人が結ばれるべきだと主張してこれを断った。
もはや三人の絆は、崩壊寸前だった。
そんな折に、三人はフラヒヤ山脈にてブランゴの討伐依頼を受けて出撃した。ドドブランゴが現れた訳でもないのに、なぜかブランゴが麓の方まで降りて来た為、そこを通る障害となっていた為だ。麓付近でブランゴを相当数倒したが、そこへ今度はギアノスが麓に下りて来る始末。このままでは埒があかないとシルフィードは単独で山頂を目指す事にした。ネリスの反対の声も聞かず、一人で行ってしまう彼女に付き合う形で二人も山頂へ向かった。
「……そこで、ラージャンと遭遇してしまったんだ」
「ら、ラージャン……？」
彼女の口から飛び出したモンスターの名前に、クリュウは息を呑んだ。
別名《金獅子》とも呼ばれる牙獣種最強のモンスター、ラージャン。その戦闘能力は古龍にも匹敵すると言われ、銀火竜リオレウス、金火竜リオレイアと同じく準古龍として扱われるような強力にして凶暴なモンスターだ。牙獣種の得意な四本足を用いた脚力を駆使した機動力と、大木のように太い両腕を使った拳の一撃は岩をも砕くと言われる。さらに怒り状態になると金色の毛を逆立て、黄金に輝きながら圧倒的なスピードとパワーで周りの全てを粉砕する、まさに最強の牙獣種モンスターである。
クイーンクラス以上でなければ討伐依頼は受けられないし、そもそ

もクイーンクラスであっても互角に戦えるのはわずかな程、強力にして凶悪なモンスターだ。当然、当時のシルフィード達が敵うような相手ではない。
「そ、それで？」
「当然、敵うような相手じゃない。すぐに何もかもをかなぐり捨てて逃げるべきだったんだ――だが私は愚かだった」
　そこでシルフィードは目を伏せ、その先の言葉を言い淀む。しばしの沈黙の後、再び顔を上げたシルフィードの表情は悲痛に歪められていた。
「……全てのモンスターを憎んでいた私にとっては、ラージャンも憎しみの対象だ。頭では勝てぬ相手だとわかっていても、憤怒がその思考を止め、気がつけば私はラージャンに斬り掛かっていた。そして私はラージャンの拳を直撃こそ避けたものの弾き飛ばされ倒れた。動けぬ私の目の前で、私を助けようとネリスが立ち塞がり――私の目の前でネリスは殺された」
　殺された。彼女の口から出た言葉はあまりにも重く、そして暗いものだった。自然とクリュウの表情も暗いものに変わっていく。自分もモンスターに両親を殺された身だ。だが、シルフィードやサクラのように目の前で殺された訳ではない。その残酷なシーンを、瞳に焼き付けている二人の苦しみは、想像すらできない。
「……それで、その後はどうなったの？」
「泣き叫ぶトリィを連れて、何とか逃げたよ。私は閃光玉を持っていたからな。それを使って奴の目を潰して、その間にな。後日、腕利きのハンターがラージャンを討伐し、ネリスの亡骸を持ち帰ってくれた。彼の遺体は、彼の故郷に埋葬されたと聞く」
「そっか……」
「当然私はトリィに激しく罵声を浴びた。何発も殴られたし、汚い言葉で罵られたさ。でも、私には返す言葉がなかった。彼女の罵声や暴力を、無抵抗で受け入れる事しかできなかったんだ」
　苦しげに、シルフィードは唇を噛みながら肩を震わせた。その姿はいつもの頼もしい彼女とは思えない程に弱々しく、ちょっとした事で

も折れてしまうかのようなひ弱さを感じさせた。握られた拳は真っ白に染まり、小刻みに震えている。
「……程なくして、彼女は私の前から姿を消した。以後、彼女と会った事は一度もなかった。私は再びソロハンターに戻ったが、ちょうどその頃にアインと出会い、彼の強さに惹かれてソードラントへ入ったんだ」
「そんな事が、あったんだ……」
自分の知らない、シルフィードの過去。狩友を失う、チームを組むハンターなら常に隣にある恐怖。彼女はそれを、今の自分よりもずっと年下の頃に経験したのだ。
今のシルフィードは冷静沈着で的確な指揮をしながらも、強力な大剣使いとして常に前衛役としてモンスター相手に肉薄し、奮戦する頼もしいハンターだ。だからこそ、昔の彼女の姿と今の彼女の姿の差に困惑する。そしてその差が、そんな悲劇を生んでしまったのだ。
「……まさか、その彼女がソードラントに入っていたなんてな。全て私の責任だ」
トリィは言っていた。シルフィードを絶対に許さない。シルフィードよりも強いハンターになる、と。だからこそ昔の彼女のように非道な手段でも力を追い求め、今ソードラントに入っている。彼女の人生を狂わせたのは自分の責任だ。シルフィードは強く自分を責め、責任を感じていた。
「――幻滅しただろ？」
頭を抱えながら沈黙していたシルフィードは、小さな声でクリュウに声を掛けた。同じように目を伏せていたクリュウがその問い掛けに顔を上げると、シルフィードは目の縁に涙を浮かべながら自虐的に笑っていた。
「君にだけは、この話はしたくなかった。君の信頼を裏切り、幻滅させると思っていたからだ。だが私は卑怯だった。彼女の言う通り、自分の醜い過去を隠して君と接していた。君を裏切っていたんだ……幻滅されて当然だ」
両手で顔を隠すように押さえながら、シルフィードはさめざめと泣

き崩れる。
今まで、約一年程彼と一緒の時を過ごして来た。その中で互いに信頼関係を築き合い、彼はどうかはわからないが自分にとって彼の存在はずいぶんと大きなものになった。つい先日、ようやく自分が彼の事を好きなのだと自覚したばかり。これから、女としての幸せも始まる。そう思っていた矢先に、その全てを壊してしまうような自らの過去が露呈してしまった。
彼は純粋が故に非道な行いを嫌うタイプだ。そんな彼に幻滅されてしまうような事を、自分は過去に犯してしまったのだ。だからこそ自分は卑怯にも、その事実を隠し通して来た。だがもう遅い。全て彼に知られてしまった。自分の醜い過去の全てが……
――あぁ、嫌われたな。
感情的になる自分の中で、冷静な自分がつぶやいた。
最も恐れ、最も嫌で、でももうどうしようもない現実。自分は彼の信頼を失い、幻滅された。もう前のように、彼が自分に笑い掛けてくれる事はない――嫌われたのだ。
悲しくて、寂しくて、情けなくて、笑いが零れる。乾いた、情けない笑い声だ。顔を隠す手のひらは涙に濡れ、彼にこんな惨めな顔を見てほしくないから、離せない――笑えてくる。嫌われたとわかっていても、自分のひどい顔は彼に見てほしくないなんて。何もかも全てが終わったというのに……
「シルフィ……」
――だからこそ次の瞬間、そっと彼に抱き締められた事に驚いた。
後頭部に回された彼の二本の優しい腕と、彼の少し頼りない胸板に挟まれる。まるで、全身を包むような彼の温かさと優しさに、胸いっぱいに安堵が広がる。だが同時に、この状況に彼女は混乱していた。なぜ今、自分は彼に抱き締められているのか。どうして彼は自分に優しく接してくれているのか。それが理解できず、困惑していた。
「クリュウ……？」
涙を拭いて顔を上げると、そこには失ったと思っていた彼の笑顔が確かにあった。温かくて、優しくて、かわいくもどこか凛々しい。そ

んな笑顔に自分はいつもドキドキしてきた。そんな彼の、自分の大好きな彼の笑顔が、そこにあった。
　呆然とするシルフィードを優しく抱き留めながら、クリュウはそっと彼女の目の縁に浮かぶ涙を指先で拭い取る。そうすると、いつもと変わらない、彼女の綺麗な顔がよく輝いて見えた。
「……人には、知られたくない過去の一つや二つあるものだよ。僕にも、シルフィにもね」
「クリュウ……」
「僕は今のシルフィを、僕達の頼もしいリーダーとしてのシルフィード・エアを信じてる。例えその過去に何があったとしても、僕の知っているシルフィード・エアはかっこ良くて、頼もしくて、強くて凛々しい。でも時々ポカやって慌てたり、楽しい事を見つけて嬉しそうに笑ったり、たまに見せる弱々しさが放っておけない。僕にとってのシルフィは、そんな人だよ。過去の事を遡ってまで君を評価はしない――だって僕は、今の君が大好きなんだから」
　そう言って優しくはにかむ彼の笑顔に、心から救われた。そして同時に、改めて理解した。なぜ自分は彼を好きなのか――それは、彼のこの底抜けの優しさが、自分を優しく包み込んでくれるからだ。
　今まで、この優しさに何度も救われて来た。心惹かれてきた。ドキドキしてきた。だからこそ、一緒にいる事が何にも代え難いような幸せに感じたのだ。
　彼の優しい言葉に、心から救われた。だが同時に、そう言ってくれる彼の言葉に感じる負い目が胸の中でくすぶる。
「……君は、こんな私を軽蔑しないのか？　自分の独断行動のせいで、チームメイトを殺してしまった。この私を」
「別に君が直接ネリスさんを殺めた訳じゃないでしょ？　こう言っちゃ何だけど、そういう世界に生きてるんだよ僕達ハンターは。常に死と隣り合わせで、そういう覚悟と決意を持って武器を持ち、狩場に踏み入れ、モンスターと対峙する。些細なミスが、命を落とすような、そんな世界なんだよ。だから、ネリスさんの事は悲しい事故としか言えないよ。もちろん、君がそれに負い目を感じているのはわかってる

さ。でもさ、その出来事が僕の君に対する信頼を失わせる原因なんかにはなりはしない。だって、僕は君に何度も助けられたから。君の剣に救われ、君の後ろ姿に勇気をもらって、君の指示が僕をここまで成長させてくれた。これもまた事実でしょ？　僕に対する君の今までの功績がある限り、僕は君への信頼を失わないよ――それに、さっきも言ったでしょ？　僕は今の君が好きで、今の君だからこそ自慢の仲間だって思えるんだから」

彼女を勇気づけるように一つひとつ言葉を選びながら言っているうちに、ずいぶん恥ずかしい事を言っているのだと気づいたのだろう。クリュウは頬を赤らめながら照れ笑いを浮かべた。そんな彼のいじらしい姿や、自分を想っての気持ちが込められた言葉に、シルフィードの胸の奥が温かなものが広がっていく。

「……ほんとに、すごい奴だな。君って奴は」

彼には聞こえないような小さな声で、つぶやく。

どうしてこうも絶望に打ちひしがれていた心に的確に元気をくれるのか。どうしてこうも女の子が喜ぶような事を平気で言ってのけるのか。どうしてこうも、胸がドキドキさせてくれるのか――ズルいじゃないか。君のその優しさのせいで、自分はどんどん君を好きになってしまう。想いを止められなくなってしまうじゃないか。

「し、シルフィ……？」

背中に腕を回されて、今度は彼女の方から抱き締められる。驚くクリュウは困惑しながら彼女に抱き寄せられる。全身を包み込むような彼女の温もりに頬を赤らめながら「し、シルフィ……？」と彼女の名を口にする。顔を上げると、そこには穏やかな笑みを浮かべた彼女の顔がすぐそこにあった。

「……まったく、君は大した奴だよ。なぜ君の周りには人が集まるのか、身に染みるようだ」

「あの、何を言って……」

「私はどうやら君の事を過小評価していたらしい。それを改めさせてもらうよ――君は私にとって、最高のパートナーだよ。クリュウ」

「あ、うん。僕もシルフィの事は最高のパートナーだって思ってるよ」

「……君の言うパートナーと、私の言うそれは必ずしも一致する訳ではないが。まぁいいだろう」
頭の上に疑問符を浮かべるクリュウの何もわかっていないのが丸わかりのような顔を見て諦めたようにため息を零すシルフィード。だがその表情はどこか嬉しそうであり、この状況を楽しんでいるように見える。
彼の鈍感さは今に始まった事じゃない。それを突破するのはまだまだ自分にはできそうにはない。でも悲観する事はない。むしろこの微妙な、くすぐったい感覚を楽しむ事にしたのだ。よく言うではないか――祭は本番よりも事前準備の方が楽しいと。
彼を振り向かせる事に必死になる他の恋姫達とは違う。大人の余裕をもって、いつの日か必ず彼を籠絡してみせる。そんな桃色の強い決意が、彼女の胸にはしっかりと刻まれていた。
「クリュウ。君が私を信じてくれる限り、私も君を信じ続けよう――だから、これからも同じ道を進み続けよう」
そう言って、いつもの彼女らしい頼もしい笑みを浮かべながらシルフィードは手を差し伸べる。クリュウも「これからも、ずっと一緒だよシルフィ」と満面の笑みを浮かべながら差し出された手を握り締め、二人は固い握手を交わした。
思わぬ不幸な出会いで揺らぎかけた二人だったが、シルフィードは改めて彼の優しさと頼もしさを確認し、クリュウも自分が知らぬ彼女の一面を知ってより深く彼女の事を知る事ができたのであった。
ハンターズギルド本部の入る建物の宿泊施設。その最上階にエンペラークラスの宿泊部屋が入っている。これより上の階はハンターズギルド本部となり、一般のハンターは入る事が許されない。だがエンペラークラスともなると、その行き来も可能となる為、こうしてギルド本部のお膝元に部屋が用意されているのだ。
部屋は豪華な装飾で彩られ、絨毯も最高級品を用いて素足で歩きたくなる心地良さ。小さいながらもワインセラーもあり、一級品のワインが置かれている。ソファも柔らかく、全てが豪勢な部屋。それがエンペラークラスの部屋だ。

そんな一級品の部屋にいるのが、ソードラントの面々だった。
「……チッ、久しぶりにドンドルマに来たら、見たくもない顔を見るハメになるなんてマジ最悪」
悪態をつきながら、ガリア産の最高級ワインを味わう事もなく一気にグラスの中身全てを飲み干すのはツヴァイ。アインの前での可愛らしい振る舞いなど微塵も感じられない程の粗暴。テーブルの上に足を乗せ、表情も不機嫌そうに歪めている。先程までのS・ソルZシリーズは脱ぎ捨て、妖艶な紫色のドレス姿なのが余計にその態度の異質さを強調している。
現在アインと付き添いとしてバグラチオンの二人はハンターズギルド本部に出向いて今回のソードラントの問題行動でギルドマスターに小言を言われている。その為、今この部屋にいるのはツヴァイとトリィだけだ。
「あんたもそう思うでしょトリィ？」
ツヴァイが視線を向けながら問い掛けた先には、今まさにシャワーを浴び終えてガウン姿で戻って来たトリィが立っていた。まだ少し濡れている髪をタオルで拭いながら「ええ。気分が悪くして仕方ないわ」と同意する。
ツヴァイは粗暴な振る舞いと常識の箍が外れた問題行動ばかり起こす為、正直トリィもあまり関わりたくはない。だがその実力は確かなのでその点では尊敬はしているし、何より今回の彼女の問い掛けは自分と全くの同意見だった。珍しく、二人の意見が一致したのだ。
「でしょぉ？　昔から気に食わない奴だったけど、久しぶりに会ったらもっと気に食わないわね。特にあの無駄に大きな胸、思い出すだけで腹が立つ」
シルフィードは自分自身の正義感を貫くタイプなので、元々ツヴァイとは反りが合わなかった。ツヴァイは決して貧乳という訳ではないが、同い年のシルフィードの胸の大きさに昔から苛立ちを感じていたのだ。トリィとしてはそんな事どうでもいいのだが、シルフィードを毛嫌いにしている事は同意だった。
「ずっと一人寂しくソロハンターしてる思ってたら、何だか弱そうな

ガキを連れていっちょ前にリーダー気取り。ずいぶんと出世したものね、何が蒼銀の烈風よ。お兄様がつけてくださった《血塗られた聖剣》って二つ名を捨てて。ほんとムカつく」
「……ほんと、ムカつくわ。ネリスを殺しておいて、自分は男と一緒にのうのうと暮らしているなんて。絶対に許せない」
「っていうか、アレはあいつの彼氏な訳？　どうでもいいけど、ちょっと不釣り合いじゃね？」
「恋人同士という風には見えなかった――でも、あのガキを見ている時のあの女の目。あれは恋してる女の目だったわ」
「……って事は、片想い？　あはははッ、あのシルフィードが片想い？　何それ超ウケるわ～ッ」
　ゲラゲラと下品に笑うツヴァイは心底楽しそう。一方のトリイはギリッと歯軋りしながら、怒りに染まった瞳で床を睨みつける。おそらくシルフィードは今この下のどこかの階の部屋で、あの少年と一緒にいるはず。それを想像するだけで、嫉妬と憎しみが胸の奥で燃え広がる。
「――っていうかさ、あいつ昔ウチにいた頃は何かとお兄様に構われてたのよね。お兄様好みな目をしてたし、そのせいでアタシはいつも除け者にされてた。あの時の気が狂いそうな憎しみ、思い出すだけで頭がおかしくなりそう」
　ガシャンッと砕けるワイングラス。ツヴァイが苛立ちのあまり床に投げつけて粉々に割れてしまったのだ。砕け散ったワイングラスを睨みつけながら、ツヴァイは憎しみの言葉を続ける。
「……やっといなくなって、お兄様を独り占めにできてたのに。またあいつが現れた。またお兄様は、あいつの事を興味津々で見ていた。何でいつもあいつは、アタシのお兄様を奪おうとするのよ……ッ！」
　奇声を上げながら、ツヴァイは怒りに任せて最高級のガリア産のワインの入ったビンを壁に投げつけた。ビンは粉々に砕け、赤紫色のワインが飛び散る。砕けたワインのビンに貼られたラベルには生産地として《アルザス》と書かれていたが、飛び散ったワインが掛かり、今はその文字は虚しく滲んでしまっている。

床を濡らすワインは、まるで血のように広がっていく。それを睨みつけていたツヴァイだったが、急にその表情が変わった。それは面白い事を思いついた子供のように、やんちゃに、そして不気味に、楽しさ一色に染まった笑顔。
「……ねぇトリィ。あいつの大切なもの、滅茶苦茶にしてやったら、どうなると思う？」
静かな問い掛けに、服を着ている最中だったトリィは「大切なもの？」と返す。彼女の言う意味がわからずに首を傾げていると、ツヴァイがゆっくりと振り返った。その顔を見て、トリィは背筋が凍った。その邪悪なまでに楽しそうな笑顔。それは村一つを滅ぼした時と同じ、トリィが最も嫌い、そして恐れる彼女の笑顔だった。
黙るトリィを前に、ツヴァイは口端を不気味に吊り上げながら、シルフィードの大切なものを明かす。
「――あのガキよ。あのガキ、アタシとあんたで滅茶苦茶にしてやんない？　ボロボロになったあのガキを見た時のあのクソ女の顔を想像しただけで……あぁ、もう堪らないわぁ」
ほぉとため息を零し、不気味なまでに妖艶な笑みを浮かべながら、ツヴァイを両腕で自らを抱き締め体を左右に揺らす。頬を紅潮し、淫らな喘ぎ声を時折零す。その姿は艶やかではありつつも不気味だ。そんな彼女のスイッチが入った姿はいつもは軽蔑の眼差しで迎えるトリィだったが、
「……いいわね、それ。あのガキに恨みはないけど、ちょっと壊れてもらおうかしら」
ツヴァイとはまた違った不気味な笑みを浮かべながら、嬉々とした様子で彼女の提案に賛成する。大事な人をボロボロにされた時、あの女がどんな顔をするか。想像するだけで確かに全身をすさまじい快楽が包み込む。もはや彼女の理性は吹っ飛び、思考の全てがシルフィードに対する邪道な復讐に染まっていく。
宿泊施設の最上階の一室で、二人の少女の恐ろしい復讐計画が始まろうとしていた。

第１９６話　少年にとって忘れられない悪夢のような一日

翌朝、クリュウの姿は市場にあった。朝市を利用して定価よりも安く色々な道具（アイテム）を買う為にここを訪れたのだ。ちなみにシルフィードはまだ部屋で眠っている。彼女は頼もしいリーダーなのだが、致命的にまで朝が弱い為に朝市は参加できず、クリュウ一人に買物が任せられていた。

「ええっと。あと閃光玉の安売りがあったよなぁ」

事前に街の掲示板に貼ってあった広告から欲しい商品の情報をピックアップしたメモ書き片手にクリュウは買い物を進める。ショルダーバッグには今回の買い物で手に入れた戦利品が入っている。周りは同じように安売りを狙って買い物を進めるハンターの姿が多い。皆防具姿なので、少々物々しい光景だ。ちなみにクリュウはいつも市場に来る際は防具姿だが、朝市となると起きてすぐに部屋を出る為に着やすくて動きやすいＴシャツにケルビの皮の上着に長ズボンという姿だ。

閃光玉を売っている露天で一人五個までという安売りの閃光玉を購入し、これでようやく買い物は終了だ。しかも同時に昨日手に入れた鉱石のうち、売却用としていた物を一気に売り払った為、少し手持ちにも余裕がある。

「うーん、どっかで朝食でも食べようかなぁ」

何を食べようかと考えながら朝の賑わいに満ちた市場を歩いていた時、前方の人ごみの中にある人物を発見した。

「あれは……」

それは間違いなく、デスギアシリーズを着たトリィだった。彼女はこちらに気づいた様子はなく、市場の中を歩いている。日常生活が繰り広げられる市場で、彼女の死神のような出で立ちはかなり目立つ。事実、周りの人も彼女の不気味な装備を見て距離を置いているので余計だ。そんな彼女の姿を見たクリュウは、見失わないように後を付け

始めた。昨日、散々シルフィードに罵声を浴びせた相手だ。そのせいでシルフィードは落ち込み、泣き崩れてしまった。彼女の事情もわかるが、それでも文句の一つくらい言ってやろうと思ったのだ。

距離を詰めるようにトリィの後を追いかけると、突然トリィは横道に逸れてしまった。まるで一瞬で姿を消したかのような錯覚にクリュウは慌てて走って彼女が消えた場所にたどり着く。そして彼女が向かったであろう横道に入るが、彼女の姿はなかった。慌てて走って進むが、一行に姿は見えない。そのうち、市場の喧騒がずいぶんと遠くなってしまった。それでもトリィの姿は見つけられず、クリュウは荒い息を繰り返しながらその場で立ち止まる。

「おっかしいなぁ……」

ここまでは一本道だったはず。見失う訳ないのだが、いくら走ってもやはり彼女の姿はなかった。もしかしたらそもそもこの道には入ってないのかもしれない。そう思い元来た道を戻ろうと振り返ると――まるで退路を断つかのように背後に探し求めていたトリィの姿があった。

「うわッ!?」

突然の事にクリュウは驚いてすぐさま彼女から距離を置く。そんな慌てる彼の姿を嘲笑うかのように鼻で笑いながら「コソコソと私の後を付けて来て、何の用?」と尋ねるトリィ。思わぬ形で遭遇してしまったとはいえ、ひとまず落ち着きを取り戻したクリュウはすぐさま「昨日の事です」とハッキリとした口調で答えた。

「昨日の事?」

「シルフィに罵詈雑言を吐いた事です。事情は昨夜シルフィから直接聞きました。そこで改めてシルフィは人殺しなんかじゃないって言いたかっただけです」

相手はシルフィードにも匹敵するような凄腕のハンターだが、クリュウは臆する事なく自分の考えを言った。自分の事なら臆したかもしれないが、仲間の事となれば強気なクリュウだった。そんな彼の言葉にトリィの眉がピクリと動く。

「人殺しじゃない? 自分の都合のいいように脚色したのね、あの女」

「全て話してくれました。ウソなんかじゃないって事は、瞳を見ればわかります」
「ウソね。あの女は人殺しなのよ。ネリスを殺した、罪深い女よ」
「……どうやらあなたとは話は平行線になるみたいですね。とにかく、シルフィに二度と近づかないでください。これ以上彼女を傷つけたくないので」
　言う事は言ったとばかりに話を切り上げ、クリュウは彼女の隣を抜けて元来た道を戻ろうとする。だが、彼女の横を通り抜けようとした瞬間――クリュウの腹に強烈な拳がブチ込まれた。突然の事にクリュウは悲鳴を上げる事もできずに吹き飛ばされ、地面に倒れてしまう。
　殴られた腹を押さえ、激しく咳き込む。痛みに顔を歪め、脂汗を垂らしながら、突然襲い掛かって来たトリィを見上げる。ゆっくりとした足取りで歩み寄って来たトリィは、地面に倒れている彼を静かに見下す。
「な、何するんですか……ッ!?」
「ふぅん、あんた意外とタフね。今の、普通の奴なら気を失ってもおかしくないのに」
　少し感心したように言う彼女の言葉に、クリュウは自らのタフさを少し呪った。常日頃からエレナの飛び蹴りを受け続けていた体は、自分が思っていたよりも丈夫だったらしい。今の一撃で気絶できていれば、こんな痛みを感じなくても済んだだろうに。
　動けないでいるクリュウに近寄ると、そのがら空きの脇腹目掛けてトリィは容赦なく蹴りを入れる。デスギアフォルゼは骨で補強されたブーツだ。その硬さは飛竜の攻撃に耐えられるような設計な為、当然つま先は異常に硬い。そんなものを、防具もなしの脇腹に受けたクリュウは悲鳴も上げられずに激痛に苦しむ。
「……ぁッ!?」
　体を丸めて痛みに耐えるクリュウ。だがトリィはそんな彼の姿を嘲笑うと、その胸倉を掴んで持ち上げる。
「痛い？　でもね、きっと死ぬ時ってもっと痛いのよ」

そう言ってトリィは彼の体を投げ飛ばして壁に叩きつける。背中に強い衝撃を受けて咳き込んだクリュウが頭をもたげると、間髪入れずに頬を殴られた。口の中が切れ、痛みと共に熱、そして血の味が広がる。視界が一瞬歪むと、今度は反対側の頬に拳が。側頭部、腹部、再び右頬へと次々に拳がブチ込まれ、全身に激痛が走る。
「あ……ぅ……」
ぐったりと壁際に横倒しに倒れ、全身を襲う激痛に身動きできずにいるクリュウ。そんな彼の姿を楽しげにトリィは見下す。クリュウはこめかみを殴られた事でまだ歪んでいる視界の中で、彼女の嘲笑をぼんやりと見上げる。
「な……んで……？」
「――何で？　うふふふ、そんなの、あんたをボコボコにすればあの女の悔しがる姿が見られるからよ」
目の前にいるトリィの声ではない。視線を彼女の後方へと向けると、そこには仁王立ちで自分を侮蔑の眼差しで見詰めるツヴァイの姿があった。昨日と同じように銀レウスの装備を纏った姿は神秘的に見えるが、そんな出で立ちに反して表情はトリィ以上にこの状況を楽しんでいるかのように、愉悦に満ちている。恍惚とした表情はまさに獲物を見つけた肉食獣そのものだ。
「あらあら、可愛い顔が台無しじゃない。わざと顔を狙うなんて、トリィにしてはいい計らいじゃない」
「……この方が、シルフィードに対する脅しになるかと思って」
「――どうかしら？　あなた、あえて顔に傷をつけて殴る回数を減らそうとか考えてるんじゃない？」
ゆっくりと近づきながら、下から見上げるように覗き込むツヴァイの視線に、トリィは「そんな事ないわよ」と否定するものの、視線を外した。それが意味するものを理解して、ツヴァイは「ふぅん、まぁいいわ」と興味無さげに話を終えると、「変わりなさい」と言って彼女を下がらせる。
足下で動けずにいるクリュウを見て、ツヴァイの恍惚とした表情はさらに狂気に満ちる。

「ねぇ、ガキ。今のこの状況、どう思う？」
　クリュウの頭をSソル・Zレギンスで踏みつけながら、ツヴァイはゆっくりとした口調で尋ねる。だが尋ねていながらもクリュウが声を出そうとするとあえて体重を乗せて口を開けさせないという非道っぷりだ。何も答えられずにいるクリュウを見て、ツヴァイの口端が不気味に吊り上がる。
「こんな絶世の美少女に頭を踏まれて、最高の気分でしょ？　こんなご褒美、下々の下等な人間じゃ大金を叩いても味わえないのよ。感謝しなさい。ねぇ？」
　まるで道端のクソを踏みつけるようにグリグリと靴底を擦り付ける。クリュウはまだ体の自由を完全には取り戻した訳じゃないが、それでも抵抗する。彼女の足を掴んで引き剥がそうとするが、その瞬間、
「汚い手で私の足に触ってんじゃないわよッ！」
　突然激昂した彼女はクリュウの顔面を蹴り飛ばした。それは後ろで見ていたトリィが思わず顔を背けるような光景だった。鼻を蹴られたクリュウは鼻血を出して顔面を押さえる。手のひらの間から見える目元には痛みのあまり涙すら浮かんでいる。
　言葉にならない苦悶の声を上げながら苦しむ彼を、ツヴァイは容赦なく蹴りつける。顔はもちろん、腹や足、腕や肩。その蹴り方はまるで容赦がない。地面を転がる彼の体は服は汚れ、擦り切れ、手足についた傷跡や鼻から出た血で赤く染まる。
　散々蹴りつけた後、乱れた呼吸をツヴァイは整える。そんな彼女の足下には、ぐったりと倒れたクリュウの姿があった。鼻血と吐血で顔は赤く汚れ、瞳は生気を失ったように濁っている。
「あら、思ってたよりは脆いわねコイツ」
　期待はずれとでも言うように吐き捨てると、ツヴァイは彼の髪を掴んで顔を持ち上げる。痛さと苦しさで何も言えずにいる彼の顔に唾を飛ばし、地面に捨てる。そして再び最初と同じように彼の頭を踏みつけ、優越感に浸る。
「シルフィードなんかに肩入れするから、こんな目に遭うのよ。あの

女に関わり続ける限り、あんたはこうして私の前で跪く事になるのよ」
「ツヴァイ。もうその辺でいいでしょ」
ボロボロになった彼を見てさすがに居た堪れなくなったのか、トリィが止めに入る。だがツヴァイは、
「はぁ？　これからが楽しいんじゃない。こいつに残った亀裂に入ったプライドを完全に粉々にするのよ」
そう言う彼女の顔は、もはや病んでいるとしか思えない程狂気に満ちた、恍惚とした表情を浮かべていた。こうなった彼女は、もう止められない。トリィは諦めるように「好きにしなさい」と言って背を向ける。
「ええ、そうさせてもらうわ」
そう答えて再び彼の方を振り返る。その時、歪む視界の中で彼は見た。そして感じた。
――今まで、こんなにも胸が苦しくなるような恐怖を感じた事がなかった。彼女の顔は、壊し甲斐のあるおもちゃを見つけたような、狂気一色のある種の無邪気な顔だった。おどろおどろしいまでに恍惚とした表情を浮かべながら、ツヴァイの不気味に吊り上がった口から、狂気の言葉が零れる。
「――今日一日、たっぷりと可愛がってあげる」
クリュウの中で、何かが壊れる音がした……
「遅いな……」
短くそう呟いて、シルフィードは読んでいた本を閉じる。窓の外を見ればすでに日は落ちて、通りは夜の活気に満ち溢れていた。
だが朝早くに出掛けたはずのクリュウは未だに戻って来ていない。朝市に行くとしか昨日聞いてはいなかった。自分が起きたのは昼頃だったので、その時にはすでに帰っているとばかり思っていたが、そこに彼の姿はなかった。
この街は彼にとって第二の故郷とも言える場所だ。数年間この街で過ごしている為、通りを歩いていれば見知った顔で再会する事もあるだろう。その人物と意気投合して遅れる事もあるだろうし、そもそ

も休日の彼を束縛するつもりもない。だが、だとしても一言くらい書き置きや言伝があってもいいものだろう。彼はそういう配慮ができる人間だ。だが、連絡もなく彼は戻って来ない。日が落ちると、さすがに不安になる。
「……探しに行った方がいいか」
椅子から立ち上がると、寒空の下に出る為に厚めの上着を着る。休日はさすがに防具では過ごさない為、今の彼女は長ズボンに長袖のシャツ、外着程ではないが少し厚めの上着を着ているのだが、外に出るとなるとこれでは寒いのだ。
袖を通してしっかりと着終え、貴重品をポケットなどに入れた時だった。隣の部屋のドアが開く音が聞こえた。それはクリュウが取っている部屋だ。
「何だ、帰って来たのか」
シルフィードはやれやれとばかりに着たばかりの上着を脱ぎ捨てて部屋を出ると、彼の部屋の前に立つ。一応マナーとして髪型を整えたり服の乱れをチェックした後に、ドアをノックする。
「クリュウ？　私だ。帰って来たのか？」
ドアの向こうにいるはずの彼に声を掛けるが、なぜか返事はなかった。不思議に思って「クリュウ？」と彼の名を呼びながらドアを開けようとすると、
「入って来ないでッ！」
突然彼の悲鳴にも似た大声が轟くと共に、わずかに開けられた扉が閉められる。
「お、おいクリュウ。どうかしたのか？」
いつもと異なる異常とも言える反応にシルフィードは不安に陥る。だがドア越しに「だ、大丈夫。何でもないからさ」と答えるクリュウの声は、明らかにおかしい。
「こんな時間までどこにいた？　何があった？」
「な、何でもないよ。ほんと、何でもない」
ドア越しに聞こえる彼は平静を装ってはいるが、その声が震えている事などシルフィードには丸わかりだった。そんな彼の声に、いよい

よ尋常ならざる事態だと察したシルフィードは「クリュウッ。ここを開けてくれッ」とドアを強く叩きながら開けるよう言う。ドアノブを捻っても鍵が掛けられていて開かないのだ。
「おいクリュウッ！」
「な、何でもないってばッ！　お願いだから、ちょっと一人にして……ッ！」
叫びながらも語尾は弱々しく、どこか濡れた声。それは彼が泣いている事を意味していた。それを理解した時、シルフィードの中で冷静な部分が吹き飛んだ。一度自分の部屋に戻り、何かを持って戻って来た。それは剥ぎ取り用ナイフ。鋭利な刃先をドアに向けると、頭の中でライザに一度謝ってからドアに突き刺した。
何度も何度も、ドアノブ付近にナイフを叩き込む。元々ビショップクラス程度のドアなんて、少し硬めな木製のドアだ。ドアノブを破壊する事など、それほど難しくはない。
ドアノブを破壊し、鍵を壊して彼女は無理やりドアをこじ開けた。開かれたドアの向こうで彼女が見た光景は、言葉を失うには十分過ぎる光景だった。
「クリュウ……？」
足下に倒れているのは確かにクリュウだった。だがその姿は自分が知っているいつもの彼とはあまりにも程遠いものだった。
「シルフィ……、違う、これは……」
現れた彼女の姿に思わずクリュウは顔を伏せる。だがその顔はいつもの愛らしさと違って異様に膨らんで見えた。頬は腫れ上がり、口元には痛々しい青あざが浮かんでいる。
服はすっかり汚れ、所々乱暴にされた事で破けている箇所もある。右腕は肘付近から先が破れてしまっており、そこから見える腕もまたアザや傷だらけだった。
そこにいたのは確かにクリュウだった。しかしその姿はまるで誰かに暴行を受けた後のようなボロボロの姿だった。そんな彼の姿を見てシルフィードは取り乱しながら慌てて彼に駆け寄る。
「ど、どうしたんだクリュウッ!?　その怪我は一体……」

「……別に、何でもないよ」
そう言ってクリュウは顔を背ける。彼の惨状を前に狼狽する彼女は気づいていないが、彼の声のトーンや背けた際の表情は、いつもの彼らしくない程に暗かった。
シルフィードの問い掛けを無視しながらフラフラの状態でゆっくりと立ち上がろうとするクリュウだが、うまく体に力が入らないのか倒れそうになる。それを間一髪のところでシルフィードが支えて、何とか倒れずに済んだ。
「お、おい本当にどうしたんだ。何があったんだ？」
「……何でもないってば」
「何でもない訳ないだろッ！　何がどうなって――」
「――何でもないって言ってるでしょッ！」
悲鳴にも似た彼の大声にシルフィードはビクッと震え、思わず手を引っ込める。怒鳴られ呆然とするシルフィードを前にクリュウはゆっくりとした歩みで部屋の奥へと向かうと、ベッドにゆっくりと腰掛けた。シルフィードは気まずそうにしながらも部屋のランプに火を灯して明かりつける。部屋が明るくなると、改めて彼の惨状が目につく。
「クリュウ。本当にどうしたんだ？　何があったんだ？」
怒鳴られた事もあり、先程までのような強引な訊き方はせずに少しボリュームを下げて問う。その姿は彼の惨状はもちろんだが、彼に怒鳴られるという異例な状況に戸惑っているように見える。
だがクリュウはシルフィードの問い掛けに何も答えない。口の端に付いた血を拳で拭い取ると、狩猟の際に持ち出す救急箱を取り出す。
「あ、私が手当するよ」
「……いいよ。自分でやる」
ぶすっとした、彼らしくない返答だ。先程から可能な限り彼はシルフィードと目を合わせようとしない。ずっと憮然と沈黙を続けながら傷に消毒液をつけたカットされた綿で消毒する。染みるのか、その顔が痛そうに歪む。

「クリュウ……」
「……ほんと、何でもないから。もう出てって」
「いや、しかし。君をこのまま放置はできない」
「いいから、出てってよ」
「しかしだな……」
「出てけって言ってるんだよッ！」
　絶叫にも似た彼の怒鳴り声に、シルフィードは再びビクッと身を震わして半歩引く。いつもは凛々しい彼女も、彼に怒鳴られるという異例を前に困惑と不安で暗いものに変わる。
「クリュウ……」
　いつになく暗い表情の彼女を見て、クリュウは気まずそうに視線を逸らすと小さく「ごめん……」と謝る。だがそれ以上何も語らず、互いの間に気まずい沈黙が続く。
「何でもないからさ。ほんと、ちょっと出てって」
「しつこい事は重々承知している。だが、君をそんな状態で放置できる程、私は非情にはなれない。そもそも、君がどうしてそのような有様なのか、知る必要がある」
「別に、シルフィには関係ないよ」
「関係あるかないかは私が決める」
　シルフィードは諦めずに彼から事情を聞き出そうとする。だがそんな彼女のしつこい態度にさすがのクリュウもイラッとしたのか、歯をギリッと歯軋りすると、反射的に叫んでしまった。
「誰のせいでこんな目に遭ったと思って――ッ!?」
　慌てて口を塞ぐが、もう遅い。彼の言葉を聞いた瞬間、シルフィードは全てを理解した。そして、不安に満ちた表情を一変させ、激しい憤怒に染まった。
「奴らか……ッ！」
　激しく激昂するシルフィードを前に、クリュウは気まずそうに沈黙を貫く。だがそれを許さぬシルフィードは彼の肩を強引に掴むと、一気に詰め寄る。
「奴らかッ!?　ソードラントの奴らにやられたのかッ!?」

シルフィードの激しい問い掛けに、しかしクリュウは沈黙を貫く。だがその無言は結果として肯定の意味として彼女に伝わってしまい、シルフィードは短く「そうか……」と答えると踵を返す。
「ま、待ってッ！」
立ち去ろうとするシルフィードの腕をクリュウは慌てて掴んで彼女を止める。振り返らずに「放してくれ」と短く言う彼女の言葉に、クリュウは決して手を離そうとはしなかった。
「どこに行く気なの？」
「……決まってる。奴らを殴り飛ばしに行く」
そう答えて振り返る彼女の目は本気だった。本気で怒り、本気で連中の所へ強襲を掛ける気でいた。見る者全てがビビってしまうような激怒に満ちた彼女を前に、クリュウはしかし決してその手を離す事はない。
「それって、連中の思う壺だと思うけど」
激しい激痛の中で微かに聞こえた彼女の言葉の中に「ひどい顔してるわね。今のあんたの姿を見たら、あの女はどんな反応を見せてくれるかしらね？」と嘲笑しながら言った事を覚えている。自分が狙われた理由も含めて推測するに、連中は自分が襲われた事を知ったシルフィードが取るであろう行動――襲撃を期待しているのだ。
「僕の姿を見て君が怒るのを見て、楽しむつもりなんだよ、連中は」
「……実にツヴァイが考えそうな下衆な発想だな。その言葉を聞くに、君を襲ったのはツヴァイか？」
「……あと、マクガイア」
「彼女もか……」
ある程度予想はしていたのだろう。特に驚く事はなかったが、それでもあのトリィがこのような事に加担するとは。自分の記憶の中にある彼女は真っ直ぐな少女だった為に、正直そのギャップに困惑している自分がいる――だが彼女をそんなにも歪めてしまったのは、自分の責任だ。
責められるべきは自分のはず。だが彼女達は自分ではなくてクリュウを襲うという非道な手段に出た。シルフィードにとって、この

ようなやり方が最も好まない。嫌悪すら抱くような所業だ。
「罵倒されようが暴力を振るわれようが、それは全て私自身の責任だ。クリュウは全く関係ない。全く関係ない君にこのような悪行……決して許せる所業ではない」
静かなる怒りに燃えるシルフィードの吐き捨てるような言葉には、彼女の言葉には表現しきれないような憎悪に満ちていた。瞳は激しい憤怒に鋭く細まり、唇は怒りに噛み締められて真っ白に染まる。表情はこれまでクリュウが見た事もないような憤怒と憎悪に黒く染まっていた。
氷の激怒と称するに相応しい彼女の激昂に、クリュウは息を呑む。いつも冷静で大人なクールな彼女の、本気の怒りを前に体が震える。
このままだと本気で連中に殴り込みをしかねない彼女を前に、クリュウは痛む体に無理やり力を入れて起き上がる。
「お、おい無理するな。座っていろ」
すると先程までの怒りが消え、シルフィードは慌てて彼の肩を支える。その表情は彼の身を案じるような、どこか不安そうなものに変わっていた。そんな彼女の表情を見て、クリュウは不謹慎だとわかっていてもちょっぴり安心してしまった――だが同時に、自分の中に芽生えてしまった醜い感情と直面する事になる。
「……僕は君に心配される権利なんてないよ」
「どういう意味だ？」
首を傾げるシルフィードを前に、クリュウは片手で自分の顔を隠すように塞ぐ。その指の間に、ランプの明かりに照らされて煌めく雫をシルフィードは見る。
「クリュウ……」
「……二人に捕まって、殴られたり蹴られたりしている最中。一瞬だけだけど、君の事を恨んだんだ。僕は何も悪い事はしてないのに、何でこんな目に遭っているだろうって。その原因が君だって事はわかってた。わかってたから、君のせいで僕はひどい目に遭っているって。そう、一瞬でも思って――君の事を恨んだ。最低だよ……ッ」
クリュウにとって、二人に暴行を受けた事よりもずっと彼自身を苦

しめていたのは、一瞬でも抱いてしまった、自分の中に存在した黒い感情だった。自分に限って、こんな感情はないと思っていた。あったとしても、仲間に向けるべき感情ではない。なのに、一瞬とはいえそれが仲間に、シルフィードに向けられてしまった。

心から信じられる仲間だと思っていたじゃないか。なのに、自分はそんな彼女を一瞬でも恨んでしまった。それが情けなくて、許せなくて、合わせる顔がなくて……

「……ごめん」

零れるように漏れた彼の謝罪の言葉に、シルフィードは短く「気にするな」と声を掛けてそんな彼をそっと抱き寄せた。頭に腕を回して、包み込むように彼を抱き締めながら「元はといえば、私の責任だ。君を巻き込むつもりなど、一抹たりともなかったんだ」と、元は自らの責任だと言い切る。二人に彼が暴行された事も、自身の中に生まれてしまった感情に彼自身が苦しむ事になった事も、元は全て自分の責任だ。だからこそ、

「……やはり、私は奴らを許せん」

ギリッと歯を噛み締めて軋ませる。再び顔は憤怒に染まり、彼女の凛々しい顔を黒く歪める。それを見たクリュウは彼女の服の裾をギュッと握り締めた。裾を引っ張られる感触に視線を下げると、クリュウはゆっくりと首を横に振った。

「ここで連中の場所に行けば、それこそ連中の思う壺だってば。何も相手の手のひらの上で踊らなくてもいいよ」

「しかし……ッ！」

「――明日、ドンドルマを出て行こうよ。村にさえ帰れば、もう関わる事はないでしょ？」

クリュウが選んだ選択は――逃げ出す事だった。

本当は彼自身も文句の一つは言ってやりたいし、自分がシルフィード側なら自分だって殴りこみだって掛けてやるつもりだ。だがここで対策を講じているであろう相手の居城に殴りこみを掛ければ、自分はともかくシルフィードにより負担を掛ける事になる。これ以上彼女を悲しませない為にも、ここは撤退するのが得策だと彼は考えたの

だ。
　だがシルフィードは撤退という選択に納得はできない。仲間を襲われて、文句の一つも言わずに撤退する事は自身のプライドや信念に背くような行為だ。だが、
「僕は大丈夫だからさ。ね、シルフィ」
　服の裾を掴んだまま、不安そうな顔で見上げて必死に止める彼を振り切って連中の所に行ける程、シルフィードは薄情にはなれなかった。
「……わかった」
　悔しげに唇を噛みながら、納得はできなくても彼の願いを聞き入れる事にした。自分のプライドや信念も大事だが、それ以上に彼の事がシルフィードにとっては大事だった。彼の悲しむ顔は、もう見たくはなかった……
　互いが互いを思いやるが故の、互いが我慢するというある種最悪に等しい決断がされてしまった。
「とにかく、今は君の傷の手当てをしよう。幸い、リリアの薬品類は豊富にある。半日あれば動く事自体に支障は出ない程には回復するだろう」
　そう言ってシルフィードは途中で放置されている救急箱から適切な道具を取り出して彼の手当てを始める。先程と違って彼も抵抗する事なくそれを受け入れる。
「さっきはごめん。君に合わせる顔がなくて、つい……」
「いいんだ。君が謝る事は何もないんだ。だから……謝らないでくれ」
「……シルフィ」
「今回は撤退するが、いずれ連中との決着はつけてやるさ。いつまでも元ソードラントという汚名を背負い続けるのはごめんだ」
　上着を脱いで半裸になりながら手当てを受けるクリュウは、背後で背中に消毒液のついた布で消毒をしてくれているその時の彼女の顔を見る事はできなかった。どんな表情をしているのか、想像もできない。彼女が背負い続けるものの大きさは、自分が想像していたよりも

ずっと大きく重い。
今の自分に、そんな彼女を支える事はできるのか。仲間として、家族として、彼女の信頼に応える事はできるのか。正直自信がなかった。
それからは無言で手当てをするシルフィードと、掛けるべき言葉が見当たらずに結局黙ってしまうクリュウ。二人の間には、ずっと重苦しい空気が流れ続けていた。
その夜、眠らぬ街ドンドルマの歓楽街は賑わいを見せる頃、クリュウは小さな寝息を立てていた。眠らぬ街でもイージス村にとっては深夜の時間帯だ。そこで生まれ育った彼にはそこでの生活習慣がすっかり身についているのだ。
頭に包帯を巻き、頬にも湿布を貼った状態で眠るクリュウ。毛布に隠れた体も至る所に包帯が巻かれている。相当な暴力を振るわれたのだという事は、彼の無数のあざを見れば一目瞭然だ。手首にはロープのようなもので長時間縛られていた跡も残っていた。
食事はもちろん、水さえも与えられなかったらしく、ボロボロでも彼は握り飯だけは一つ食べた。慣れない作業のせいで歪な形になってしまった握り飯を、飯を丸めて塩を掛けただけのものを、あんなにも嬉しそうな顔で食べるクリュウの顔を見て、嬉しさと共に虚しさが胸をいっぱいにした。
ベランダに出て夜風を浴びながら、シルフィードは一人月を見上げながら考えに耽る。二人の顔が頭を過ぎった瞬間、手すりを握り締める手に力がこもって真っ白に染まった。
彼をひどい目に遭わせた二人の事を、どうしても許せなかった。彼の必死の言葉に断念こそしたが、気持ちでは今からでも連中のいる場所に殴りこみたい気分だった。場所なんて、価値もわからないのに高級好きなツヴァイの事だ。エンペラークラスの宿にでも泊まっているんだろう。
数年前までは、自分もその中にいた。最低な連中と行動を共にしていた昔の自分。今思い出すだけでも反吐が出る。冷静に考えれば、自分が周りに迷惑を掛けながら復讐に狂う事を両親や弟が願うはずも

ないではないか。なのに当時の自分は、そんな簡単な事もわからない程に、復讐に狂っていた。
脱したと思っていた。もうソードラントとは関わらないと、心のどこかで思っていた。だが自分は再びソードラントの連中と出会ってしまった。しかも、最悪とも言っていい形で。
振り返ると、クリュウは心地よさそうに眠っている。痛み止めが効いているようで、シルフィードはほっと安堵の息を漏らした。
「……リーダー、失格だな」
自らの過去すらも決着をつけられなかった自分が、彼らを率いている資格などない。
それどころか、自らの醜い過去を隠し続けてきた自分は彼らの期待に応えるべき人間ではないし、応える事などできない人間だ。
きっと、敗走した自分の事をサクラは強く非難するだろう。フィーリアもきっと、自分を軽蔑するに違いない。エレナもアシュアも、自分の体たらくに怒る事だろう――たった一度の失敗。だがそれは、周りから自分に掛けられていた期待や信頼を失わせるには十分過ぎるような大失態だ。
引くも地獄、進むも地獄。シルフィードは自らの八方塞がりっぷりに自虐的に笑う。
「……自分のクズっぷりに、反吐が出る」
片手で顔を押さえながら自虐的に笑う彼女の頬を、月明かりに照らされて煌めく雫が一筋流れた。

第１９７話　泣き叫ぶ少女の悲痛な決意　地を這う少年の雄叫び

翌朝、珍しくシルフィードの方が先に目覚めた。というより、横になったものの寝付けなかったと言う方が的確だ。眠っているクリュウを静かに起こし、帰る身支度を整える。幸いクリュウの怪我はリリアの薬が効いたおかげでゆっくり歩くくらいならできる程にまで回復した。これなら村に帰る頃までには普通に歩ける程には回復するだろう。傷のほとんどが打撲だったおかげだ。もしも骨が折れていたりヒビが入っていたりすれば、全快するのは一ヶ月以上も掛かるだろう。打撲などのあざの方が跡が残りやすい事から、シルフィードに対する挑発の意味を考えれば下手に骨折させるよりも効果があるという、ツヴァイの憎らしい計算の結果だ。

身支度を整えると言っても、そもそも旅行に来た訳ではなく狩猟依頼を受け取る為に来た二人の荷物は最低限なものしかなく、すぐに準備が整う。シルフィードは武具を纏い、クリュウは怪我している為に動きやすい私服姿で出立する事となった。ライザにもあいさつする事なく、裏口を使ってハンターズギルドを出る。あとは港までの竜車に揺られ、そこから川を使って北上して数日も進めば海に出て、そこからイージス村の漁港へと行くまで船旅だけだ。

慣れた道を進みながらも、その内心は二人共不穏だった。この道のどこかで、連中が待ち伏せているのでは。そんな不安が常に二人の頭の片隅にあった。そしてそんな二人の最悪の予想は、当たってしまった……

「どこへ行くつもりかしら？」

ドンドルマの南門へ向かっていた二人は発見される事を警戒していつも使っている大通りではなく、裏道を駆使して進んでいた。しかしそれが仇となってしまった。その最中で二人は、連中と遭遇してしまったのだ。

こちらを嘲笑いながら問うのはツヴァイ。その表情は獲物を見つ

けた飛竜の如く、狂気と歓喜に満ち溢れている。その背後にはトリィとこちらを興味無さげに見詰めるアイン、そして憮然とヘルムまでしっかり被った状態で鎮座するチェルミナートルの姿があった。全員、初めて会った時と同様物々しいまでの武装を施している。

待ち伏せされていたのだろう。だとすれば、相手はこちらの考えを読んでいたのだろう。自分の失態にシルフィードは苦々しい表情を浮かべる。そんな彼女の背中に隠れるようにしているクリュウの姿を見つけると、ツヴァイはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「あらクソガキ。昨日は楽しかったわね」

声を掛けられただけでクリュウはビクッと身を震わせるとシルフィードの背中に隠れてしまう。怯えたような表情を浮かべながら細かく身を震わせる彼の姿を見て改めて彼女の所業が彼に大きな心の傷を与えてしまった事を知り、シルフィードの怒りが再燃する。

「……貴様、昨日はずいぶん私の仲間をいたぶってくれたようだな」

「あら、お礼ならいらないわよ。私も久しぶりに楽しめたもの」

コロコロと笑いながら、心の底から楽しそうに言う彼女の言葉にシルフィードの表情が険しいものに変わる。彼の前、必死に激昂を我慢しているという具合だ。背後から不安そうに自分を見詰めるクリュウに対しシルフィードは一度振り返り、大丈夫だと言いたげに一つうなずくと、再び彼らと対峙する。

「あなたの事だから、てっきり襲撃でもして来ると思ったけど、あんたもずいぶん弱腰になったわね」

クククと笑う彼女の言葉にシルフィード「貴様の手のひらで踊らされるのはもうごめんだ」と切り捨てる。するとツヴァイは「ふぅん、つまんないわねぇ」と特に興味もなさげにつぶやく。そんな彼女の態度が、余計にシルフィードの癪に障る。

「仕方ないから、私直々にここに来たって訳」

「頼みもしない事を、余程暇なんだな貴様らは」

「そうよ。暇を持て余してるの。だから――私を楽しませてちょうだい」

ニヤリと狂気に満ちた不気味な笑みを浮かべながら言う彼女の言

葉に、シルフィードは本気で反吐が出そうだった。あの頃から全く変わっていない、ツヴァイの腐った根性。実力はともかく、奴のその腐り切った神経は昔から気に入らなかった。その正体がようやくわかった気がする――あいつは人間じゃない。
「断る。私達は貴様らと違って忙しいんだ」
　そう吐き捨てるように言うと、シルフィードはクリュウの手を取って反転する。だが振り返った途端、
「よぉ、そうつれねぇ事言うなや」
「……ッ!?」
　一瞬前までツヴァイの背後にいたはずのアインが、なぜか今は二人の前に立ち塞がるように立っていた。衝撃の光景に立ち止まるシルフィードに迫ると、アインはシルフィードの顎に手を当ててクイッと上げる。急接近する彼の顔を前に一瞬呆けたシルフィードだったが、すかさず拳を握り締めてアインの脇腹を殴りつける。が、寸前で彼のもう片方の手で押さえられてしまう。
「おいおい、初々しい反応は昔と変わらねぇな」
「下衆が……ッ！」
　空いている反対側の腕で殴りつけるが、拳が当たる前にアインは身を退く。拳は空を切った。睨みつけるシルフィードを前にアインはそんな彼女の反応を見て嘲笑う。
「昔のお前は近付くだけで斬られるような鋭さを持っていたが、今のお前はずいぶんその鋭さが失われた。それについては興味を削がれたが――その以前にも増して触れられる事を嫌う反応、悪くない」
「そんなに斬り殺されたいなら、相手してやろうか？」
　リオソウルシリーズを纏った状態で、シルフィードは背負ったキリサキを引き抜く。飛竜の鱗ですら削り飛ばす切れ味のキリサキの刃は、路地裏の細い空から注がれる日の光を浴びて神秘的に煌めく。
「シルフィッ」
「悪いクリュウ。竜車は何本か遅れそうだ」
　彼の胸を片手で押しながら壁際へと移動する。背後にクリュウを守るような形で、全方位を包囲するソードラントの連中と敵対する。

何としてもクリュウだけは守る。そんな彼女の強い意思が感じられる行動に、アインの表情が狂気に歪む。
「ほぉ、ツヴァイが言っていたが、お前その坊主の事……」
「戯言はいい。貴様が用があるのは私のはずだ。私以外を見るな」
「……ッ!?　し、シルフィードぉッ！　あんた、私のお兄様を独占するつもりッ!?」
「ははは、モテる男は辛いぜ」
　シルフィードの言葉に違う意味で反応して激昂するツヴァイを一瞥し、アインは愉快そうに笑い飛ばす。そんな反応を見せるアインを前にシルフィードは一切気を緩めない。本当に襲いかねないような雰囲気のシルフィードを前に、クリュウはどうする事もできなかった。
「面白い、面白いぞシルフィード。やっぱりお前は面白い。ぜひ俺の傍に置いておきたいものだ」
「断る。貴様に与するつもりは毛頭ない」
「取り付く島もないってか――なら、勝手に護岸工事させてもらうだけだ。チェルミナートル」
　彼の呼びかけに反応して、今まで像のように鎮座していたチェルミナートルが動く。アインが退き、シルフィードの前に立ち塞がる。二メートルはあるかという大男。それも屈強な肉体を鎧で守っている為に幅も広く、圧迫するような圧力すら感じられる。バイザー越しに、彼の瞳は見えないが見詰められている事を感じる。
　無言で立ち塞がるチェルミナートルを相手に、シルフィードはゆっくりと剣を下げる。
「……バグラチオン。貴様程の人間が、なぜいつまでもあのような愚と行動を共にするか。私は貴様がまっとうな人間だと思っている。何度か手合わせしたが、貴様の槍には黒さは感じられなかった。そんな貴様が、なぜだ？」
　シルフィードの問い掛けに、チェルミナートルはしばらく沈黙する。動こうとしない彼を見てツヴァイが「何してんのよッ！　さっさとやっちゃいなさいよッ！」と激昂する。

「バグラチオンッ！」
「……祖国の為だ」
　シルフィードに大声で名を呼ばれたチェルミナートルは、静かに口を開いた。
「アクラの為、だと？」
「……祖国の凍土にはモンスターに対抗する術がない。いつまでも異端に頼り続ける訳にはいかない。私は実績がほしいのだ。アクラの人間でも、モンスターを倒せると」
　淡々と語るチェルミナートルの言葉に、シルフィードは沈黙する。アクラは最近ようやくひとつの連邦国家として統一されたが、長い間小国同士での小競り合いが耐えなかった。その為、モンスターに対してまともに対抗できる術を持っていない。軍隊を投入しても、物量はともかく質では西竜洋諸国のそれに劣るア連軍は一度のモンスターとの戦闘でも多くの犠牲者が出る。この状況を打破すべく、ア連はハンターズギルドに対してハンターの駐留を求めた。現在はそのハンターの活躍もあってモンスターによる被害は最低限に押さえられている。ア連はこのハンターの強さに興味を惹かれ、ハンターズギルドに莫大な資源の贈与と引換に情報の開示を迫ったが、ハンターズギルド側がこれを拒否した為に破談となった。それでも諦め切れないア連はチェルミナートルのように優秀な軍人を選抜してハンターズギルドに入隊させた。今も彼のように諜報活動をしながらハンターを続けているアクラ人は数十人いると言われている。もちろん、この情報はハンターズギルドのトップシークレット情報。クリュウやシルフィードのような一般のハンターが知っている事ではない。
「実績を求めるなら、何も連中と一緒でなくてもいいだろうが。他にも方法があったはずだ」
「……私は不器用な人間だ。だから、アインの誘いは私にとっても僥倖だった。安心しろ、私もまもなくG級に認定される。そうすればここも用済みだ」
「うへぇ、寂しい事をサラッと言ってくれるねぇ。七年の付き合いだろうが」

「……アクラ人は、エルバーフェルド人を好ましく思っていない」
「チッ、俺はソードラント人だっての。エルバーフェルド人だと思った事は一度もねぇ」
チェルミナートルの言葉に不機嫌そうに答えるアイン。
彼の言うソードラント人とは、旧ソードラント連邦王国出身の民の事だ。三〇年程前に当時のエルバーフェルド王国との戦争、所謂チューリップ戦争にて敗北して解体された小国。それがソードラント連邦王国だった。現在はエルバーフェルドに併合され、ソードラント自治区とされている。
ソードラントの地方都市サントロワ。それがアインとツヴァイの生まれ故郷であり、そこを中心にハンターとしての才能を開花した二人は、それぞれ称号にサントロワという都市名が使われた。二人のチーム名『剣聖ソードラント』はその時の民族の期待が込められていた異名だった。当時はソードラント人の誇りだとされていたが、次第に二人の残虐性が顕になり、現在では『剣聖』は皮肉を込めたものとなっている。その為、ツヴァイは剣聖ソードラントと呼ばれる事をひどく嫌っている。
エルバーフェルドとアクラは戦争を経験し、現在も国交が結ばれていない。どちらの民族も、互いを嫌っている。
「そうか。貴様がいずれソードラントを抜けると聞いて安心したよ――貴様とは剣を交えたくはない。そこをどいてくれないか？」
シルフィードの問い掛けに、チェルミナートルは無言だった。それを拒否と受け取ったシルフィードは「そうか……」と短くつぶやくと、再びキリサキを構える。チェルミナートルは背負ったブラックゴアキャノンを抜く事はなく、全く微動だにしない。
「バグラチオン。正々堂々と勝負だ」
「……悪いな」
剣を構えたシルフィードの言葉にチェルミナートルは短くそう答えた。不自然に思うシルフィードを前にチェルミナートルは腕を突き出す。その手の中にはシルフィードも見覚えのある――否、ハンターなら誰もが知っている道具（アイテム）が握られていた。

「閃光玉ッ!?」
　気づいた時にはすでに遅く、突然小さな太陽が現れたかのように裏路地は膨大な光に一瞬支配される。その一瞬でチェルミナートルはその巨体からは想像もできないような速さで光の中で目を閉じているシルフィードの背後に回り込むと、彼女を羽交い絞めにして捕縛してしまう。
「……ッ!?　き、貴様ぁッ！」
　光が消え、視界が戻った時にはすでに決着はついていた。チェルミナートルの太く勇ましい腕で捕まったシルフィードはいくら暴れてもその腕から逃れられない。抵抗する彼女を、チェルミナートルは無言で羽交い絞めにし続ける。
「シルフィッ！」
「おっと、ここは通さないぜ坊主」
　シルフィードが捕まったのを見て慌てて駆け寄ろうとするクリュウの前にアインが立ち塞がる。余裕を持った物腰と、人を見下すその目に、クリュウは改めて嫌悪感を抱く。
「そこ、どいてください」
「通さないと言ったはずだが。まぁそう怒るな、別に俺はシルフィードに何をしようって気はない。だがお前が無駄に抵抗すれば、それこそがあいつを傷つける結果になるかもしれんが」
　ニヤニヤと意地汚く笑う彼の言葉にクリュウは悔しげに押し黙る。人質を取られてしまっている以上、こちらは下手には動けない。それを知っていてあえて忠告する。バカにされているようで、胸くそ悪い。
　ギュッと強く拳を握り締めて耐えるクリュウを見て「そうそう。俺は物分かりのいい奴は嫌いじゃないぜ」と人を馬鹿にしたようなふざけた笑顔を浮かべ、改めてシルフィードに向き直る。脱出できないとわかっていても、それでも必死に抵抗するシルフィードを前に、アインは楽しげに笑う。
「無様だなシルフィード。血塗られた聖剣が台無しだ」
「貴様が勝手につけた名など知るか。それより、これを解け。貴様の

命令だろうが」
「まぁそう怒るなって。俺はお前と話し合いをしたいだけだ。まぁこれはお前が逃げない為の保険だと思ってくれ」
「下衆が……ッ」
歯軋りしながら憎々しげに睨みつけるシルフィードの視線を楽しみながら、アインは「用件はたった一つだ」と切り出す。聞く耳持たぬと言いたげにそっぽを向くシルフィードを前に、アインは笑う。
「――お前、もう一度ソードラントに入れ」
アインの言葉に、その場にいた全員が驚いた。皆の驚愕に満ちた視線を受けながら、アインは意地汚く笑う。
「なぁ、俺が誰かの実力とかを見込んでわざわざ誘ってるんだ。これは名誉ものだと思うけどな」
ニヤニヤと笑いながら言う彼の言葉に、背後に立つツヴァイとトリィの顔が憤怒に染まる。どちらの厳しい視線もシルフィードに注がれていた。ツヴァイは兄から特別扱いされる彼女に対する嫉妬、そしてトリィは自分よりもシルフィードの方が高い評価を受けている事に対する激怒。どちらも、アインの提案は受け入れがたいものだった。しかし、
「さっきも言ったはずだ。貴様らには二度と関わりたくはない」
一瞬驚いたシルフィードだったが、すぐにいつもの冷静さを取り戻して彼の提案を全否定した。ソードラントに帰る気などケシ粒程もないし、そもそもクリュウ達と離別する気もない。約束したはずだ――これからも同じ道を進み続けよう、と。
シルフィードの拒否の言葉に、クリュウは確信があったとはいえ安堵の息を漏らす。そしてこちらも予想通りの反応だったらしく、特に驚く事なく彼女の発言を噛み締めるように目をつむりながらアインは何度か頷く。
「そうかそうか。まぁお前がそう簡単に俺に与するとは思ってねぇよ――だからちゃんと手は考えてあるさ」
「何だと？」
怪訝そうに見詰めてくるシルフィードに背を向けたアインは背後

で黙って立っていたクリュウに再び向き直る。突然自分に注目が集まったのを見て驚くクリュウ――だが次の瞬間、彼は地面に倒れた。
「クリュウッ！」
　シルフィードの悲鳴にも似た声が聞こえたが、クリュウはそれどころではなかった。猛烈な激痛が襲う腹部を守るように地面に倒れながら丸くなるクリュウ。脂汗を浮かべた顔をゆっくりと持ち上げると、今度は顔面を激痛が襲った。
　言葉にならない悲鳴を上げてもがく彼を前に、アインは冷静に彼を見下す。腹と顔面を蹴られたクリュウはその場で悶絶する。顔を蹴られた事で、鼻血が出る。口の中も切ってしまい、昨日と同じ鉄の味が口いっぱいに広がる。
「貴様ぁッ！　クリュウに手を出すなッ！」
「おいおい、俺は手なんか出しちゃいねぇぜ。足だよ、足」
「ふざけるなッ！」
　激昂するシルフィードを前にあっけらかんと言ってのけるアイン。シルフィードはこれまで以上に暴れ狂うが、チェルミナートルの屈強な体を使ったロックからは一向に抜け出せない。怒り狂い、激しい憎しみに満ちた彼女の鋭い視線に射抜かれるアインは臆する事なく、むしろその目を見て狂喜する。
「そうだぜシルフィード。お前はやっぱりその目がよく似合う。久しぶりだなぁ、その憎悪に満ちた瞳」
　楽しげに言うアインはさらに地面に倒れたままでいるクリュウの腹を蹴り飛ばす。
「あ…ぁぁ……ッ！　あが……ぁ……ッ！」
　蹴られた瞬間、微量の血を吐いて悶絶するクリュウ。そんな彼の姿を見ながら、後ろで怒り狂うシルフィードの声を聞きながら、アインは楽しげに笑う。
「よぉシルフィード。これが俺の考えた手だよ」
「何、だと……」
「――お前がうんと言うまで、俺はこの坊主を蹴り続ける。どうだ、最高だろ？」

振り返った彼の狂気に満ちた笑顔を見た瞬間、シルフィードの顔面は蒼白に染まった。
「もうやめてくれぇッ！」
恥じらいもなく泣き叫ぶシルフィードの言葉に、アインはゆっくりと振り返る。その足下には、もう何十発も蹴られ続けてぐったりと倒れているボロボロのクリュウが転がっていた。全身を襲う激痛に苦しみながら、何度も腹を蹴られた事で激しく咳き込む。頭も蹴られたせいで鼻血は止まらず、口の中も血塗れ。視界も涙とは違った歪みでぐにゃぐにゃだ。
ぐったりと倒れているクリュウを前にして、シルフィードは「もう、やめてくれぇ……ッ」と泣き叫ぶ。暴行を受ける彼を前に最初の頃は激昂して叫んでいたシルフィード。しかし次第に怒りよりも目の前の悲惨な状況に耐えられなくなり、後半はボロボロと涙を零しながら泣き叫んでいた。そして、何度目かの叫びで、ようやくアインは彼の吐血などでわずかに赤く染まったその足を止めた。
「おいおい、何だよシルフィード。綺麗な顔が台無しじゃねぇか」
しかしアインは全く悪びれた様子もなく、ヘラヘラと笑う。そんな彼を前に、シルフィードは「頼む。もう、やめてくれぇ……」と嗚咽の混じった声で懇願する。その姿はいつもの彼女の頼もしくも凛々しい戦乙女のそれではなかった。顔を悲痛に歪め、恥じる事なくボロボロと涙を流しながら懇願する彼女を見て、アインの笑みは加速する。
「お前らしくねぇぞ。たかがこんなガキ一人が何だってんだよ」
そう言ってアインは倒れている彼の腹を蹴る。
「あぐ……」
「やめろぉッ！」
咳き込むクリュウを前にシルフィードは泣き叫ぶ。その姿を見て楽しむアインとツヴァイに対し、トリィはそうでもなかった。シルフィードはともかく、倒れているクリュウを見ると気まずそうに視線を逸らす。シルフィードを拘束するチェルミナートルはヘルムをしていてその表情は全く窺えない。

「貴様らが話があるのは私だろうがッ！　クリュウは関係ないッ！」
「関係あるかないかは俺が判断するさ。それにお前を動かすにはこいつを使った方がやりやすいとわかれば、最短ルートを使うのが当然だろ？」
「ふ、ふざけるなッ！」
「ほぉ、まだそんな口を利けるのか」
　シルフィードの態度を見てアインはクリュウの胸倉を掴んで持ち上げるとそのままシルフィードの方へ放る。地面を二度程回転しながら転がった後、彼の体はシルフィードの足下で止まる。
「クリュウッ！」
　反応はなかった。気絶しているのか、それとも答えられない程に衰弱しているのか。とにかく今は、これ以上彼にダメージを負わせない。なのに、自分にはどうする事もできない。苦しむ彼を前に、何もできない。自分の無力さが、死ぬ程に嫌だった。
　倒れている彼を前に泣き崩れるシルフィード。そんな彼女へと、アインはゆっくりと歩み寄ると彼女の顎を取って顔を上げる。もはや先程までのような鋭い眼光はなく、涙でぐちゃぐちゃになった少女の顔がそこにあった。
「よぉシルフィード。どうだ？　俺ともう一度組まねぇか？」
「ふ、ふざけるな。誰が貴様のような奴と組むか」
　泣きながらも絶対に首は縦には振らない。そう決めていたシルフィードだったが、そんな彼女の反応を見てアインはクリュウの腹を蹴る。どうやら気は失っていなかったらしく、クリュウは激しく咳き込んだ。
「なぁ、今のは聞かなかった事にするよ。改めて訊くけどさ、どうするよ？」
　そう言いながらアインは彼の頭を踏みつける。返答次第ではまだまだ暴行を加えるという意思表示だ。アインは苦しむシルフィードを見ながら楽しそうに笑う。狂気に満ちた、心根が腐り切った笑顔だ。
　倒れているシルフィードを見ながら、シルフィードは悔しげに唇を

噛んだ。泣きながら、必死に頭の中で葛藤する。そして、彼女は決めた……

「……わかった。貴様ともう一度組もう」

――それが、彼女の下した決断だった。

アインとまた組むなど言語道断だ。そんな気は毛頭ないし、絶対に断る気でいた。だがボロボロになった彼を前にしては、そんな決意も揺らぐ。このままでは彼はずっと暴行を受け続けるだろう。アインという男はこうした蛮行を平然と行える奴だ。

大切な仲間を、それも好きな男をこれ以上傷つけられない。それがシルフィードという戦乙女の、自らのプライドや想いを捨てた苦渋の決断だった。

シルフィードの返答にアインは満足そうにうなずく。一方のツヴァイとトリィの二人は不満そうだ。ツヴァイは単純にシルフィードとまた一緒という事が気に入らず、トリィは自分よりもシルフィードの方が評価されている事が気に入らない。

そんな二人の憎しみの込められた視線にも気づく事なく、シルフィードはうなだれ続ける。そんな彼女の打ちひしがれたような様を見て満足気に笑うアイン――踏みつけられていたクリュウが、彼の足を握り締めたのはその時だった。

「ふ、ふざけるな……ッ！」

「あぁ？」

クリュウはアインの足を掴んだまま、その足を振り払う。アインは軽く後ろへステップして体勢を立て直しながら、ゆっくりと起き上がるクリュウを睨みつける。

「……クリュウ」

フラフラの状態で立ち上がったクリュウは、足下もおぼつかないままシルフィードの前に立つ。呆然と彼の背中を見詰めるシルフィードは、見た。散々蹴られたり殴られたその顔は腫れ上がって少し歪つな形をしているが――それでも、一瞬だけ見えた彼の横顔は、とても凛々しく、そして勇ましく輝いていた。

「シルフィは僕の相棒だ。お前なんかに渡すもんか……ッ！」

「はぁ？　お前の意見なんか聞いちゃいねぇんだよ。俺はシルフィードと話をして――」
「シルフィは約束したッ！　これからもずっと一緒に居ようってッ！　だから、僕はここで彼女と関係を断つつもりはないッ！　だって――シルフィは僕の大切な存在だからッ！」
　ボロボロの姿で啖呵を切る彼の姿はあまりにも滑稽に見えただろう。全くもって説得力もなければ、威圧感もない。それでも、シルフィードの目から見ればその姿はあまりにも眩し過ぎた。優しくて温かな光が、まるで彼の全身から溢れ出ているかのように、輝いている。
　彼の言葉に、胸の奥でつかえていた想いが溢れ出る。先程までとは違う、大粒の涙をボロボロと流しながら、シルフィードは零すように自分の想いを吐露する。
「私も、ずっとクリュウと一緒にいたい……ッ」
　頬を伝った涙はそのまま顎に流れ、そして地面へと落ちる。クリュウは背後から聞こえた小さなそんな彼女の声に口元にわずかな笑みを浮かべる。自分達の想いは、同じだ――ずっと一緒にいたい、そんな淡くも強い想い。
「……あぁ、うぜぇ」
　二人の会話を傍観していたアインは興味なさげにつぶやく。自分の前にボロボロな様で立ち塞がるクリュウの姿にイラッとしながら、彼の胸倉を掴んで地面へと叩きつける。元々立っている事自体が不思議なくらいの様なのだ。少しの力でクリュウの体は簡単に崩れる。
　地面に背中から叩きつけられて咳き込む彼の腹を、アインは容赦なく蹴る。
「何だ今の反吐が出るような茶番はよ」
　再び彼の頭を踏みつけながら、アインは彼を見下す。先程までとは違って、踏みつけられながらも必死に睨みつけてくるクリュウを前にイライラは加速する。
「何だ、その目は」
「お前みたいなクズに、シルフィは渡さないからな……ッ」

「チッ、ゴミクズの分際で俺をクズ扱いだぁ？　いい度胸じゃねぇか」
　再び蹴られて顔を苦悶に歪めるクリュウの髪を掴み、アインはグイッと彼の体を持ち上げる。もう足に力が入らないクリュウは膝立ちになり、至近距離でアインに睨みつけられる。
「もうシルフィードなんてどうでもいいや。単純に俺はお前がムカつく。泣いて謝ってももう許されねぇからな」
　そう言ってアインは拳を握り締め、それを大きく振り上げる。シルフィードが「やめろぉッ！」と叫ぶが、そんな声など聞こえないかのようにアインは拳を振り下ろす――直前で、アインの体は吹き飛んだ。否、正確には吹き飛んだように見える程の俊足の動きで後退したのだ。一瞬前まで彼がいた場所には一本の刀が突き刺さっていた。その刀の形状にクリュウとシルフィードは見覚えがあった。
「……貴様、私の旦那に何をしている」
　忘れるはずがない。その憮然とした威圧感全開の物言い。常識知らずで自分の考えこそが正義だと信じて疑わない天上天下唯我独尊自分絶対至上主義の申し子。悠然と現れ、場の空気を一気に自分へと引き寄せる存在感。漆黒の長い髪を揺らしながら、凛とした表情を崩さず、隻眼を鋭く細め、異国の鎧を纏うその様はまるで夜叉のよう。
　漆黒の夜叉はクリュウの前に立ち塞がると、今しがた投げた愛刀――鬼神斬馬刀を引き抜く。持ち手が持った瞬間、鬼神斬馬刀は本来の力を取り戻したかのように稲妻を迸らせる。
　稲妻を纏いし漆黒の夜叉は、平然と立っているアインを鋭い眼光で睨みつけると、ゆっくりとクリュウの方へ振り返る。その瞬間、フッとわずかな笑みを浮かべた。それは彼女の精一杯の満面の笑顔。それを見た瞬間、クリュウの中に安堵が広がる。
「……遅れてごめんなさい。助太刀に来た」
　飾り立てる事もない、真っ直ぐな言葉でそう言って、サクラは現れた。
　突然のサクラの乱入にすっかり場の空気を乱されたアインは「チッ、余計な奴が現れたな」と吐き捨てる。
「……余計かどうか、手合わせしてみる？　言っておくが、私の旦那に

手を出して生きて帰れると思うな」
「いや、サクラ。君の助太刀は大変嬉しいのだが、その発言は看過できんぞ」
　かっこ良く現れても中身は恋に一直線な乙女。その恥ずかしがる事もなく堂々と言う様は恋敵(ライバル)として称賛に値するするが、勝手に旦那宣言されても困る。複雑な心境のシルフィードだった。
　一方のアインは現れたサクラの姿を見て合点がいったらしい。
「あぁ、お前が隻眼の人形姫か。噂通り礼儀知らずな嬢ちゃんみたいだな」
「……私は生まれて初めて、私以上に無礼な人間がいる事を知って自らの評価を改めるわ」
「自分が無礼だという事は、自覚はあったのか」
「……自覚はしても曲げるつもりはない。これが私の生き様よ」
　迷う事なく堂々と言ってのけるその姿勢は大変素晴らしいのだが、如何せん発言内容があまりにも情けない。言ってやったと言いたげに凛とした表情で立つサクラを前に、シルフィードは心底呆れ返る。
　場の注目を一身に纏いながら、それでも凛とした様で立つサクラ。その姿はとても凛々しく、そして美しい。
「ふ、ふざけんじゃないわよッ！　お兄様に向かって何て失礼な物言いをしてるのよッ！」
　サクラの発言に激昂したツヴァイは怒鳴りながら銘火竜弩を彼女に向けて構える――が、彼女が引き金を引くよりも早く銘火竜弩の銃身が壊れた。正確には、銃身が狙撃されて壊されたのだ。
「な……ッ!?」
「――私も、クリュウ様を旦那と発言する事は看過できませんね」
　サクラが現れたと同じ方向から風に乗って聞こえる可愛らしい声。でも今はその可愛らしい声すらも凛々しく、そして頼もしく三人の耳に届いた。
　全身を桜色の雌火竜の鱗や甲殻で作った防具を纏う、金髪の少女。その手に持つ同色のライトボウガンの銃身からは今しがた撃ち出した銃弾の薬莢が放つ煙が吹き出て、風に揺られている。ガチャリと手

を操作し、煙が残る薬莢を排出すると、薬莢は地面に落ちて甲高い音を辺りに響かせる。
桜色の銃姫はゆっくりとした足取りで現れると、金色の美しい長髪を掻き上げる。現れたのは声と同じく可愛らしい顔立ちの少女の顔。しかしその瞳はいつになく鋭く、アイン達を睨みつけている。
「事情はわかりませんが、クリュウ様に乱暴をした以上、私としてもサクラ様同様にあなた方を無傷で帰すつもりはありませんので、覚悟してください」
そう言って再びハートヴァイルキリー改を構えるフィーリア。その銃口は迷う事なくアインの頭部を狙っている。狙われたアインは驚く事も慌てる事もなく、堂々と彼女の銃口に向き合う。その隣ではツヴァイが銃身が変形してしまった銘火竜弩を見て奇声を上げる。
「ちょっとッ！　よくも私の武器を壊したわねッ！」
「ロングバレルを壊しただけです。中央工城に行けば有料交換してもらえます。私が本気を出せば銃を破壊する事だってできるんですから、その点を配慮しただけでも感謝はされど非難される謂れはありません」
ピシャリと言い切ってツヴァイの抗議を切り捨てる。言葉遣いこそいつもの彼女だが、その口調や物言いは完全に怒っている。目の前でボロボロの最愛の人の姿を前に、怒りを堪えている感じだ。
「何ですってッ！」
「やめなさいツヴァイ。見苦しいわ」
そう言ってツヴァイの前に立ち塞がったのはトリィ。手には愛刀の鎌威太刀が握られている。その場でクルクルと何度か回転させた後、腰を落として突撃の構えを取る。
「言っておくけど、これでも私はクイーンクラスよ。二人共、どう高く見積もってもナイトクラス。武器をしまった方が得策と見るけど？」
「……問題ない。対人戦闘の方が得意よ」
武装解除を促すトリィの声にもサクラは平然と拒否する。彼女の対人戦闘の方が得意という発言には今は触れないでおこう。
トリィとサクラが睨み合うように対峙している間にフィーリアは

シルフィードの前に立つと、彼女を拘束するチェルミナートルに銃を向ける。相当な距離からロングバレルだけを狙う彼女の腕だ。この距離で外す事はまずない。
「シルフィード様を放していただけませんか？」
チェルミナートルは無言のまましばらく沈黙していたが、ゆっくりと彼女を解放した。拘束を解かれたシルフィードはフィーリアに短く礼を言うと、倒れているクリュウに駆け寄ってその体を抱き起こす。
「おいクリュウ。しっかりしろッ」
「……大丈夫。まだ死んでないから」
そう言ってクリュウは小さく笑った。こんな時でも相手に心配をかけさせない為に笑える彼は、本当にすごい。心から尊敬し、そして愛おしい。シルフィードはクリュウを無言で抱き締めた。
そんな二人の様を少し不満気に一瞥しながらもフィーリアとサクラは二人の前に立ってアイン達に立ち塞がる。
四人揃ったクリュウ達を前に、アインはしばらく無言だったが、やがて――
「――あぁ、興醒めだな」
そう言って、アインは面倒そうにため息を零す。その仕草にフィーリアとサクラの眉間がピクリと動く。
「興醒め？　ずいぶんふざけた事を言いやがりますね」
「……本気で殺すわよ？」
「おぉ怖い怖い。可愛い顔だ台無しじゃねぇか」
アインのふざけた物言いに二人の怒りのゲージは急激に上がる。そして彼の発言にツヴァイが嫉妬で激昂するが、トリィの「見苦しいわよ」という発言で歯軋りしながら黙る。
シルフィードの手を借りてゆっくりと立ち上がるクリュウを見て、アインはわざとらしく大きなため息を零す。
「何か面倒になってきた。もういいや、面倒くさいし。引き上げるぞ」
そう言ってアインは背を向けるが、その足下に銃弾が炸裂する。振り返れば銃口から煙を噴くハートヴァイルキリー改を構えたフィー

リアが「無傷で帰すつもりはない、と言ったはずですが」と言いながら再び銃口を彼の頭部に向ける。だがアインは短くため息を零すと道具袋（ポーチ）に手を伸ばす。フィーリアがすかさず引き金を引こうとするが、それよりも早く銃声と共にハートヴァイルキリー改が弾き飛ばされた。

「な……ッ?!」

銃声がした方を向けば、そこには銘火竜弩を構えたツヴァイが不敵な笑みを浮かべて立っていた。その手には今しがた銃弾を放ったばかりの硝煙を噴く銘火竜弩。驚くフィーリアは彼女の足下に転がっている折れ曲がったロングバレルを見て絶句した。

ライトボウガンのバレルは武器屋で取り付けが行われる。戦闘中の衝撃などで外れないように特殊な工具を用いてしっかりと固定されており、そういった工具がなければ普通は外せない代物だ。だがツヴァイは銃が壊れる事を全く躊躇せずにロングバレルを何度か地面に叩きつけて破壊して外したのだ。一歩間違えれば修理不能になりかねない行動だ。それも銘火竜弩ともなれば作るのには多額の資金や素材を必要とする。何より相棒に対してそんな行いはガンナーは普通はできない。それを、ツヴァイは平然とやってのけたのだ。

そして、ツヴァイが作った隙を突いてアインはけむり玉を取り出すと、それを地面に叩きつけた。途端に爆発するように広がった白煙はあっというまに路地を包む込む。さらにそこへ閃光玉や音爆弾などが投げ込まれ、視界は愚か音も無茶苦茶にされる。三人は奇襲に備えてその場でクリュウを守るように円陣を組む。

しかし煙が晴れた時、そこにはアイン達の姿はどこにもなかった……

第１９８話　私の帰るべき場所

ドンドルマ公共病院。街唯一の総合病院であり、軽い病状から重い病状まで。はたまた怪我を負ったハンターが入院したりするなど、常にある種の活気に満ちている場所だ。市民の健康を守りつつ、ハンターの怪我の手当てまで行う為に昼夜を問わず忙しい。そんな病院内の廊下にある椅子に腰掛けながら、沈痛な面持ちで三人の少女が座っていた。

「……そんな事が、あったんですか」

シルフィードから事情を聞かされたフィーリアは続けて「それは、大変でしたね」と彼女を労う。しかしシルフィードは首を横に振り、「全て私の責任だ」と自身を責めながらうなだれる。そんな彼女のいつになく弱々しい様を前に、フィーリアはこの暗い雰囲気に居心地の悪さを感じていた。誰だって、仲間同士で黙り合うような空気は好きではない。それに今背後の診察室ではクリュウが手当てを受けている最中だ。本当なら今すぐにでも飛び込みたいが、病院内で自分ができる事などない為、グッとそれを我慢しているのだ。

「……私の無力が、今回の事態を招いた。私は、未熟過ぎる」

「そ、そんな事は……」

「……そうね。未熟な上に大バカよ」

自責しながらどんどん自信を失っていくシルフィードを前に何とか励ますフィーリアの努力を無碍にするように、サクラは容赦なく彼女の自責を肯定する。そこにトドメの一撃を入れるのを忘れないのは、実に彼女らしい。

「ちょッ、サクラ様ッ!?　何を言って……ッ！」

「……貴様の過去の事など知らないし、興味もない。ただその過去のせいでクリュウは負わなくてもいい怪我を負った。これは事実。それを未然に防げなかった――貴様の無能さが招いた事だ」

「……そう、か」

サクラの容赦のない物言いに、打ちひしがれるように黙り込むシルフィード。自覚はあったとはいえ、仲間にそれを指摘されると余計に

ダメージが大きい。顔に手のひらを当ててため息を零すシルフィードを前にフィーリアは右往左往してしまう。
「さ、サクラ様ッ。少しは言い方というものを考えてから発言してくださいッ！」
「……私は事実を述べているだけ。客観的に、今回の事態の原因を指摘しているに過ぎない」
「だ、だとしても言い方が……」
「……貴様には幻滅したわ、シルフィード・エア」
「サクラ様ッ！」
「いいんだフィーリア。全て事実であり、全て私の責任だ」
怒るフィーリアをなだめると、シルフィードは再び黙り込む。サクラもそれ以上何も言う気はないのか黙り、三人は再び気まずい沈黙に支配された。そんな状況が数分と続いた時、ドアが開いた。中から看護婦が出て来て三人を呼ぶ。促されてフィーリア、サクラ、そしてシルフィードの順で中に入るとそこには――
「あ、みんな」
ちょうど診察が終わったのだろう。頭や腕に包帯を巻いて、頬には湿布を貼った状態で椅子に座っていたクリュウが振り返る。その仕草はいつもとまるで変わりなく、怪我を負っていても、いつもの彼の姿がそこにあった。
「クリュウ様、お怪我の具合はいかがですか？」
「うーん、僕は大丈夫だって言ったんだけど。どうやら一日は安静にしてろってさ」
そう言いながらクリュウは「ごめんね。ちょっと街を出るのは明日になりそう」と三人に謝る。当然三人ともそんな事どうでもいいのだが、フィーリアは努めて笑顔で「そ、そうですね。じゃあ宿の手配をしないといけませんね。入院という訳ではないんですから」と言うと、「うん、悪いけどお願い」とクリュウは笑顔で頼む。
「……クリュウ、平気？」
先程まで近付くだけで斬られるのではというくらいに鋭い雰囲気を纏っていたとは思えない程、とてとてとクリュウに駆け寄って彼の

すぐ隣に屈みながらサクラは心から彼を心配しながら気遣う。このギアチェンジの速さが彼女のすごい所だ。
「うん。大丈夫だよ。先生もビックリなくらい丈夫な体だって褒めてくれたし」
苦笑しながら「いつもエレナに鍛えられてるからね」と冗談を言う所を見れば、彼が言う通り本当に大丈夫なのだろう。それを見てサクラは心の底から安堵するようにほっと胸を撫で下ろした。
「……良かった」
「ごめんね。心配掛けちゃって」
そう言いながらクリュウは彼女の頭を優しく撫でる。彼の温かな手を感じながら、サクラは幸せそうに目を細めながら穏やかな笑みを浮かべてそれを受け入れる。そんな彼女の幸せそうな笑みを背後でフィーリアが羨ましそうに見詰める。
サクラの頭を優しく撫でながら、クリュウはゆっくりと視線を上げる。その先にはフィーリアの背後で黙ってこちらを見ていたシルフィードの姿があり、自然と彼女と目が合う。だがシルフィードは彼の純粋な視線に耐えられなくなりすぐに視線を逸らしてしまう。
「シルフィ」
彼に呼ばれ、シルフィード仕方なく視線を再び彼に向ける――その瞬間、彼女の瞳は大きく見開かれる。
視線の先にあったのは、彼の優しげな笑顔だった。ボロボロの姿になっても変わらず輝き続ける彼の優しげな笑顔は、見ているだけでこちらの心がポカポカと温まる。それこそ、心の氷をゆっくりと溶かすように……
「シルフィは、怪我は大丈夫？」
「あ、あぁ。私は平気だ」
「……そっか。良かった」
屈託なく笑う彼の笑顔を見て、良かったと思う反面今の自分には彼の笑顔があまりにも眩し過ぎるように感じる。自分にはこんな笑顔を向けられる資格など、ないというのに……
「どうしたのシルフィ？」

「あ、いや……」
「顔色悪いみたいだけど、念のために診察受けとけば？」
「いや、大丈夫だ。問題ない」
「そう？　ならいいんだけど」
　まるで何事もなかったかのように平然と振る舞う彼の姿に、シルフィードは違和感を感じていた。あれだけの目に遭っておきながら、どうしてこうもいつもと変わらぬ振る舞いができるのか。その疑問は他の二人も同じだったようで、
「あの、本当に大丈夫ですか？」
「大丈夫だってば。これでも鍛えてるんだから、これくらいの怪我」
「……クリュウ、無理してない？」
　サクラの問い掛けに、クリュウは一瞬黙った。そして、それまでの明るい笑顔を引っ込めると、その表情をほんの少しだけ翳らせる。
「……まぁ、あんな事あった後だし、気にしてない訳じゃないんだけどさ」
「……クリュウ」
「あんまりみんなに心配掛けたくないからさ」
　そう言って、クリュウはまた笑みを浮かべた。それは先程までの笑顔と違って、どこか悲しみを感じさせる、そんな物悲しい笑顔。そんな彼の姿を前に、三人の顔は一斉に曇る。だがクリュウは、
「ほら、やっぱりそんな顔する。そういう顔しないでよ」
　困ったような表情を浮かべながら言う彼の言葉に、三人は互いの顔を見合って苦笑を浮かべ合う。
　そうこうしているうちに四人は病院を後にした。何とか一人で歩けるクリュウを囲むように歩く三人の表情はやはり重い。そんな彼女達の様子を、クリュウもまた黙って見詰める。
　宿に着くとクリュウは横になり、大事をとって休む事となった。その間、三人は女子部屋として借りた四人部屋にて村まで帰る最も彼に負担を掛けないルートの選定に入った。
　その夜、フィーリアとサクラは公共竜車ではなく貸切の竜車の予約の為に竜車を多数扱う会社へ向かった。そして一人残されたシル

フィードはライザに頼んであまり重くない食事を用意してもらった。ハンター相手の大衆酒場にあるような料理は、大半が病人向けのものではない。その中でライザがプッシュしたのはフラヒヤ山脈産の大雪米にアルコリス地方の養鶏場から直輸入した卵と東方大陸原産の特製ソースを掛けて食べる卵かけご飯セットだった。彼女曰く「味は保証するわ。かわいい熱狂的なファンもいるくらいのおいしさなんだから」だそうだ。

料理の乗ったトレイを片手で持ちながら、シルフィードは彼の部屋の前に立つ。空いているもう片方の手でドアをノックしようとするが、構えられた拳はそこから全く動かなかった。

一体、自分はどんな顔をして彼に会えばいいのか。彼をあんな目に遭わせた原因を作った自分が、今更彼にどんな顔をして会えばいいのか。合わせる顔が、なかった。

少しずつ下げられる拳。だがホカホカに炊いたばかりの大雪米の湯気を見て、その拳が再び構えられる。ライザは言っていた。「熱いご飯に掛けるのがおいしいのよ」、と。

彼に栄養のある物を食べてもらいたい。それもおいしいものを。だったら、ここで迷っていてご飯が冷めてしまっては意味が無い。覚悟を決めて、彼女はドアをノックした。

「……クリュウ、私だ。夕食を持って来たんだが、入っていいか？」

「いいよ」

返事がすぐに返って来た事に、少しばかり驚く。てっきり彼は眠っていたものだとばかり思っていたのだが、どうやら起きていたらしい。思い切って部屋の中に入ると、彼はベッドの上に半身を起こして下半身に毛布を掛けながら座っていた。月明かりだけが照らす部屋の中に黙って座っている彼の横顔は、見惚れてしまう程にどこかかっこ良く見えた。

ゆっくりと振り返ったクリュウは呆けたように突っ立っているシルフィードの姿を見て「どうしたの？」と問い掛ける。

「あ、いや、夕食を持って来たぞ」

「ふぅん、それシルフィの手料理じゃないよね？」

「……君は意外と容赦のない性格をしているようだな」
「普段のお返しだよ」
そう言ってクリュウは楽しげに笑った。そんな彼の笑顔を見ていると、シルフィードもまたゆっくりと安心したように笑みを浮かべる。
シルフィードはゆっくり彼の方へ歩み寄ると、手に持っていたトレイをそっと彼に差し出す。目の前に差し出された料理を前にして、鼻孔をくすぐるおいしそうな香りにクリュウは嬉しそうに微笑む。
「おいしそう……」
「ライザのおすすめだ。熱いうちに食べてくれ。食べ方は――」
シルフィードに食べ方を教わりながら、クリュウは卵を割って別の皿に入れてから特製ソースと一緒によくかき混ぜる。それを最後に熱々のご飯の上に掛ければ、卵かけご飯の完成となる。キラキラと煌めく卵のコーティングをされた白米。素材本来の香りに食欲をそそる特製ソースの香りが合わさったそれは鼻をくすぐるまさに至極の香りだった。
クリュウは香りを楽しんだ後、スプーンを使って一口すくい、口に入れる。口の中にフワッと広がる香りと新鮮な素材と特製ソースの味が広がる。塩加減もちょうど良くて、そのシンプルな味が舌先を楽しませる。
余計な調味料はない。素材本来の味にちょっと調味料を加えただけの、限りなく素材の味に近いシンプルな一品。だがそれこそが、料理というものの本来の姿なのだろう。
「おいしい」
そう言ってクリュウはおいしそうに飯を頬張る。別に誰も獲ったり料理が逃げ出す訳もないのに、おいしさのあまり急いで食べる彼の姿を見て、シルフィードは思わず笑ってしまった。
「もっと味わって食べろ」
「ちゃんと味わってるよ」
そう主張する彼の頬には、ご飯粒が一粒ついていた。シルフィードは自分の頬を指差して「粒がついているぞ」と指摘するが、彼は反対

側に手を伸ばす。仕方なくシルフィードは彼の頬へ手を伸ばし、ご飯粒を取り除いた。すると、
「ありがと、シルフィ」
そう言って彼は笑った。優しさに溢れた、彼の柔らかくて温かな笑顔。屈託なく笑う彼の姿を見てシルフィードは頬を赤らめながら彼の頬から取り除いたご飯粒をおもむろに口に入れて、自分のした行為にさらに赤面する。
そんな事をしている間にクリュウは卵かけご飯を食べ終える。空になったお椀をトレイに戻し、満足そうに笑みを浮かべながら腹を軽く叩く。
「あぁ、おいしかった」
「そうか」
あとで改めてライザに礼を言わなければ。そんな事を思いながらシルフィードはトレイを部屋の端に片付ける。そんな自分の姿に、まるで妻みたいだと思い、またしても顔を赤面させる。だが、
「――ソードラントかぁ」
ぼそりとつぶやいた彼の単語に、それまでの幸せそうな彼女の顔が崩れる。一瞬にして悲痛に歪み、瞳は怯えているかのように視線を彷徨わせる。
背を向けたまま黙るシルフィードの様子に気づく事なく、クリュウは窓の外を見詰めながら続ける。
「久しぶりに思ったよ――本気で殴り倒してやりたいって思うような連中だった」
彼の発した言葉に、シルフィードはビクッと体を震わせる。彼の口から《殴る》という単語が出た事に驚くと共に、彼にそんな感情を抱かせてしまった罪悪感に押し潰されそうになる。
「僕は、奴らを絶対に許さないよ」
振り返るのが怖かった。今彼は、どんな表情でそのような事を言っているのか。
あれだけ殴られ、蹴られ、ボロボロにされた。誰だって怒りを覚える。もちろん彼だって例外ではない。だが普段の彼を見ていると、彼

とそのような感情は無縁に思えて仕方がなかった。だからこそ、そのような感情を抱く彼の顔を、見る事ができなかった――怖かった。
だから――
「――シルフィをあんな目に遭わせた連中を、僕は絶対に許さない」
次に彼の口から出た言葉に、シルフィードは驚きのあまり思わず振り返った。窓の外を見詰めている彼の顔は、こちからは見えない。だが布団を握り締める拳が小刻みに震えているのを見て、彼が怒っている事を理解する。
だが、彼の怒りの根本は自分が思っていたものと全く違う所から来ていた。自分はてっきり、暴行を受けた事に怒っているものだとばかり思っていた。だが実際は、彼はそんな事よりも目の前で仲間を泣かされた、辛い目に遭わされた事に対して並々ならぬ怒りを抱いていたのだ。
呆然と怒る彼の後ろ姿を見詰めていたシルフィードの瞳に、薄っすらと涙が浮かぶ。
クリュウ・ルナリーフというのは、そういう少年なのだ。自分の事よりも、他人の事の為に怒れる人間。一歩間違えれば自分の事を第一に考えない大馬鹿者。でも同時に、その誰かの為に一生懸命になれる彼の姿は、多くの者達に勇気と希望を与える――自分も与えられたその一人だからこそ、知っている。彼の底抜けの優しさを。
あんなひどい目に遭わされても、彼の抱く怒りは自身に降りかかったそれに対するものではない。目の前で泣き叫ぶ一人の少女を救えなかった自分の無力さ、彼女をそこまで追い詰めたアインに対する怒り、それらが彼の拳を小刻みに震わせている――気づけば、シルフィードはそんな彼の拳を覆うように片手そその拳にのせていた。
「シルフィ？」
驚いて振り返るクリュウの頭を、シルフィードは両腕で包み込むように抱き締める。突然抱き締められたクリュウはいつも抱きついてくる二人とは明らかに違う部分の豊満さに慌てふためいて逃れようとするが、それを拒むようにシルフィードは彼を強く抱き締めている。

「し、シルフィッ!?　ちょ、ちょっと……ッ」
「ありがとう」
　彼女の口から零れたその言葉に、クリュウは抵抗する事をやめる。ゆっくりと視線を上げると、そこには涙を流しながら微笑む彼女の笑顔があった。泣いてはいるが、無理をしている訳でも悲痛さを感じるようなそんね笑みではない、嬉しさと温かさに満ちた、そんな柔らかな笑顔だった。
「君はやっぱり、最高のパートナーだよ」
「え？　あ、うん。僕もそう思うけど……シルフィ？」
「――君と会えて、本当に良かったよ」
　そう言って、シルフィードは優しく彼を抱き締めた。
　辛い想いをさせてしまったし、彼に痛い想いもさせてしまった。奴らの非道を許すつもりは、今も一抹すらない。でも彼らのおかげで改めて知る事ができた――自分にとって、クリュウ・ルナリーフという存在の大きさと、大切さを。
　気がつけば、彼を抱き締めながら泣いてしまっていた。
　急に泣き出した彼女を前に、クリュウは最初こそ困惑していたが、いつもの凛々しい顔つきではなくて、一人の少女として泣き崩れる彼女を見ているうちに、彼女の抱いていた十字架を知る。ずっと仲間に隠していた過去、そしてやっと甘える事ができた彼女の姿を。
　クリュウは何も言う事なく、そっと彼女を抱きしめ返した。自分よりも身長も大きくて、巨大な剣を振り回す勇ましくて頼もしいリーダー。でも今だけは、一人の少女として自分の腕の中を頼ってくれている。いつもとは違う関係、距離に、クリュウは少しだけ嬉しさを感じていた。
　だから、そっとつぶやく。
「――僕も、君と出会えて良かったよ。シルフィ」
　そう言って、クリュウは彼女の頭を優しく撫でた。フィーリアやサクラにしているそれと、全く同じ撫で方で……
「いいんですか？」
「……今日だけは譲ってやる。それだけよ」

ドアの外に座り込むフィーリアとサクラは互いの顔を見合うと、どちらからとなく苦笑を漏らした。
少し前に帰って来てクリュウの様子を見に来た二人だったが、部屋の中の二人を盗み見てどちらも部屋に入れずにいた。あんな事があった後なのだから、今だけはシルフィにクリュウを譲る気になったのだ。本当は大好きな彼が他の女と抱き合っているシーンなんて発狂する程に嫌だが、相手があのシルフィードとなれば話は別だ。彼女はライバルである前に、自分達の頼れる仲間なのだから。
「シルフィード様って、すごくしっかりされている方だと思っていましたが――やっぱり、私達と同じなんですね」
「……そうかしら。むしろ、いつも気丈に振舞っているからこそ、脆い女よ」
シルフィード・エアという少女は、ずっと一人で生きて来た。全て自分でできる、自分でやらなければ。そんな想いが、常に彼女の心にはあった。仲間だと思っていても、何か違和感というか距離を感じてしまうのは、そんな彼女の変えられない生き様だったのだろう。
彼への恋心を自覚して、少しずつその距離が埋まっていた矢先に、今回の事件が起きた。一人で苦しむ彼女に、自分達は何も出来なかった。フィーリアは慣れない状況に困惑するばかりで手助けもできなかったし、サクラもまた人を貶す事はできても人を励ます事ができない不器用な娘だ。彼女の苦しみをわかっていても、掛ける言葉が見つけられないでいた。
「サクラ様って、シルフィード様の事もちゃんと見てますもんね」
「……別に、そんなんじゃないわよ」
からかうように言うフィーリアの言葉に、サクラはプイッとそっぽを向く。フィーリアはそんないじらしい彼女の頬を人差し指で何度も突く。
結局、彼女を救う事ができたのは、やっぱり彼だった。
自分達が落ち込んでいた時も、手を差し伸べてくれた彼。その優しさに、自分達は何度も助けられてきた。そして今回もまた、シルフィードを救った。本当に、憎らしいくらい落ち込んでいる女の子を

励ます事が得意な彼。まるで自分達の事が全て筒抜かれているかのような。でも不思議と、恐怖は感じない。だって、大好きな彼に自分の事は何でも知ってもらいたいというのは、恋する乙女なら誰でも抱く想いだから。

――まぁ、残念な事に肝心の恋心という点についてだけは彼は理解できていないのだが。

「今まで私達は、クリュウ様を中心に行動して来ました」

突然、思い出したように語り始めるフィーリアの言葉に、サクラは訝しげに彼女を見詰める。そんな彼女の視線の先で、フィーリアはずっと抱いていた想いを、吐露する。

「でもこれからは、本当のチームとして、クリュウ様を中心とした関係ではない、私達全体での関係にしていきましょう。一人が落ち込んでいれば、残る三人で助けられる。そんな、素敵なチームを作って行きましょうよ」

嬉しそうに語る彼女の言葉に、サクラは何も答えなかった。ただ、小さく一つうなずくだけ。

眠らぬ街ドンドルマの夜が、ゆっくりと過ぎていく……

翌朝、クリュウもハンターズギルド公認の薬のおかげでひとまず歩けるくらいには回復した為、一刻も早く村へ帰る事にして四人は宿を出た。全員が完全武装を施し、突然の敵襲に備えて警戒しながら予約した竜車が停車しているターミナルへ向かう。ドンドルマでは武装したハンターの姿は珍しくないので、防具姿でも全く怪しまれないどころか、日常の光景として出迎えられる。

だからこそ、四人の前に武装を施した一人の少女が現れても、誰も気にも留めなかった。

無言でクリュウ達の前に立ち塞がったのは全身をボロボロの布とモンスターの骨を組んで作ったおぞましい姿の防具、デスギアシリーズを纏った少女――トリィ・マクガイア。彼女の登場に三人は一斉にクリュウの前に立って迎撃の構えを見せる。昨日の今日だ。女子陣全員が彼女に対しても並々ならぬ怒りを抱くのも当然と言えるだろう。

そんな彼女達の怒りに満ちた視線を受けながら、トリィは――無言のまま頭を垂れた。
「え？」
それを見ていたクリュウは驚きのあまり短く声を漏らす。驚いたのは彼だけではない。彼を守るように展開していた三人の恋姫も互いに顔を見合わせて困惑している。
「先日は、すまなかったわね。怪我の方は、もう大丈夫かしら」
「あ、はい。何とか……」
クリュウも複雑そうな表情で答える。それはそうだろう。暴行の大半はヴォルフガング兄妹によるものだが、彼女にも暴行を受けた彼からしてみれば、怪我を彼女に気遣われるのは妙な感じだ。
「そうか。良かった……」
そう言ってトリィはほっとしたように胸を撫で下ろした。そんな彼女の姿を見てクリュウはさらに困惑する。彼の知っている彼女の姿は常に刺々しく、自分を殴り飛ばした後で見下していたあの恐ろしい目という印象だ。そんな彼女の、穏やかな表情は見慣れてはいない。
だが困惑する彼の前に立ち塞がる者がいた。憮然としたまま立ち塞がるのはチーム随一の武闘派恋姫のサクラ。最初こそ面食らったが、彼女がクリュウに暴行を加えた一人だという事はサクラも知っている。愛する人をひどい目に遭わされて、黙っていられる程サクラは薄情な娘ではない。
「……再び現れたという事は、斬り殺されても文句は言わないわね」
「勘違いしないで。私はあくまでその子に謝りに来ただけ。用事が終われば撤収するわ」
「無事に帰すとお思いですか？　こちらにはあなたに報復するだけの理由があるんですよ」
フィーリアもいつになく怒りに満ちた表情でいつでもボウガンを引き抜けるように構える。当然サクラもいつでも抜刀斬りできる構えを取る。血気盛んな二人の反応を見たトリィは、そんな二人を鼻で笑う。

「やり合いたいってなら相手してやってもいいけど」
そう言って背中に背負った鎌威太刀に手を掛ける。
一触即発な三人を前にシルフィードは止められずにいた。それもそうだろう。彼女自身も二人と同じくトリィを恨む理由がある。客観的に見れば止めるべき状況だが、主観的にはむしろ二人に加勢してもいいくらいだ。
シルフィードがどうすべきか悩んでいる間にも、今にもお互いに飛びかかりかねない三人。それを見て仲裁に入ったのは当事者であるクリュウだった。
「二人共、ちょっと下がって」
「え？　し、しかし……」
「いいから」
「……クリュウが、そう言うなら」
クリュウの言葉に、二人は渋々という感じで下がる。二人の間から出て来たクリュウを前にしたトリィは鎌威太刀に掛けていた手を戻すと、改めて彼に頭を下げた。
「悪かったわ。謝っても許してもらえない事は、わかってる。償いはする気よ」
「別に、僕は気にしてませんから」
そう言って優しく笑う彼の言葉に、トリィは顔を上げると明らかに困惑していた。てっきり怒鳴られるとか何か文句を言われると思っていたのに、実際はそのどの予想にも当てはまらなかった。
理解できないと困惑するトリィに対して、シルフィードは密かに笑った――クリュウとは、そういう少年なのだ、と。
「そりゃ、殴られて怒ってない訳じゃないですけど、あなたの拳には手加減がありました。本気だったんじゃないって事は、わかってますから」
最初の襲撃の際にツヴァイが言っていた「あえて顔に傷をつけて殴る回数を減らそうとか考えてるんじゃない？」という言葉。あの後、トリィが再び拳を振るう事はなかった。
それらの事を考慮するに、彼女はできうる限りで自分を庇うような

事をしてくれていた。何となく、そんな気がしていたが、彼女に改めて会って、それは確信へと変わったのだ。
「別に、手加減していた訳じゃないわ。気が乗らなかっただけよ」
そう言ってトリィはそっぽを向く。その仕草は年相応の少女らしさに満ちた、ごく自然のものに見えた。普通の人生を歩んでいればきっと、彼女はその表情が基軸となっただろうに。
「それと、逃げるならさっさとしなさい。連中の興味がまた再燃しないうちにね」
「そのつもりです」
クリュウの返事に一つうなずき、トリィはそっと道を譲る。クリュウは何も言わず、彼女の横を通り抜けて前へ進む。その後ろをフィーリアとサクラが警戒しながら通り抜け、最後にシルフィードもまた通り抜ける。何かを言おうとしたが、結局何も言わずにシルフィードは通り抜けた。
「言っておくけど、私はあんたを許した訳じゃないわよ」
二人の距離が少し開いた時、シルフィードの背中に向かってトリィは言葉を投げかけた。振り返るシルフィードを、彼女は憎しみに染まった鋭い瞳で睨みつける。復讐に生きる鬼、そんな言葉が頭に浮かぶような、そんな彼女の姿にシルフィードは何も言えなかった。
「――私は一生、あんたを憎しみ続ける。ネリスを殺したあんたを、私は一生許さないわ」
そう憎々しげに吐き捨てると、トリィは背を向けて歩き出した。無言で立ち去る彼女を前に、シルフィードは掛ける言葉を見つけられずにいた。謝罪の言葉は詭弁にしか通じないだろう。口先だけで何かを言って、彼女の気持ちが変わるとは思えない。あの明るく活発だった少女を、復讐に狂わせるだけの大罪を、自分はかつて犯したのだから。
罪の重さに下げていた視線を再び上げた時、彼女の姿はもうどこにもなかった。
無言で立ち尽くすシルフィード。そんな彼女の手を、優しく握り締める手があった。振り返れば、そこにはいつもと変わらぬ優しげな笑

みを浮かべた彼が立っていた。
「帰ろうシルフィ。僕達の村へ」
気遣うような言葉ではなく、あえてそう言ったのは彼なりの何か意味があったのか。それはわからない。でも、
「あぁ」
帰る場所がある。そう思うだけで、救われる気がした。かつて自分は、その帰るべき故郷を失った為に、間違った道へと進んでしまった。今回の事件で、自分は再び手に入れたこの幸せな帰るべき場所を失いかけた。でも結局、それは杞憂だった。
自分の帰るべき場所は、自分の醜い過去を知っても自分を受け入れてくれる、そんな場所だったから。
「あ、そうだ。帰りにレギドの村でビーフシチューを食べましょう。久しぶりに食べたくなっちゃいました」
「……そうね。シルフィードのおごりで行きましょう」
勝手に人の財布で明日の昼食を食べる予定を決めてしまう二人の言動に苦笑しながらも「仕方ないな。今回の事の礼も兼ねて、おごってやるさ」と気前よくおごる宣言をするシルフィード。二人のいつもと変わらぬ様子もまた、彼女にとっては心強かった。
「シルフィ」
「シルフィード様」
「……シルフィード」
クリュウだけではない。フィーリアとサクラからも手を差し伸べられたシルフィードは、その眩しすぎる光景に思わず目頭が熱くなった。だがきっと、彼らが求めているのは自分のこんな顔ではない。涙を堪えて、彼女は――
「……帰ろう。私達の故郷へ」
――幸せに満ちた、満面の笑みを浮かべた。

第１９９話　血塗られた雪景色　過去の痛みに疼く左目を押えて

少女は一人、雪山を歩いていた。
全身をマフモフシリーズと呼ばれるハンターも使う防寒着で包んではいるが、凍えてしまうような寒さで少女の体力は限界に達しつつあった。
もう何時間歩いたかわからない。ひたすら、逃げるように歩いて来た足は痛みすら感じる程に疲れ切っていて、雪上のわずかな凹凸でも転倒してしまいそうな程に弱っている。
ハァハァと呼吸するたびに視界は一瞬真っ白に染まり、すぐに肺には凍ってしまいそうな程に冷たい空気が満ちあふれる。
「あぁ……うぁ……」
呼吸と一緒に苦しげな声が漏れる。だがその声はあまりにも幼いものだった。それもそのはず。彼女はわずか八歳の幼い少女だった。
少女はフラフラの足に無理矢理力を入れて歩き続ける。
痛む足を無理矢理動かす彼女の顔は苦悶に歪んでいた。その片目には包帯が巻かれ、薄っすらと血が滲んでいる。先程の悲惨な事故で失われたものの一つだ。
残った方の目からは絶えず涙が零れ続ける。痛みもあるが、それ以上に彼女は自分の左目以上に大切なものを失ってしまった。
「お父さん……お母さん……ッ」
大好きだった両親を呼んでも、二人からの返事が返って来ない事はわかっていた――だって、二人とももうこの世にはいないのだから。
「く……ッ」
悔しさと悲しさ、怒りと焦り。様々な感情が入り交じって少女の頭はグチャグチャになる。歯軋りしたくても、寒さのせいで歯の根が合わなかった。
「……あ」
新雪の積もった地面にわずかにあった溝に足が引っかかる。すで

に歩き疲れてフラフラだった少女はいつもなら簡単にリカバリーできるはずのバランスの崩れも立て直せず、無様に雪の上に倒れ込んだ。

顔から雪の中に突っ込んだ少女はしばらくそのまま動かない。薄っすらと背中に雪が積もり始める頃、ゆっくりと顔を上げた――その表情は、涙と雪でグチャグチャになっていた。

「何で……ッ、こんな事に……ッ」

本当に、どうしてこんな事になってしまったのか。何度自問自答しても、わからなかった。

北にあるとある街で大量に仕入れた特産物を持って、大都市ドンドルマでそれを輸送料や利益を加えた値段で売る。至って普通の商いをする為の旅だったはず。

少女の両親はそこそこ名の知れた商人で、複数の竜車を率いる商隊の隊長と副隊長だった。少女は両親に連れられて全国各地を旅している。苦労も多いが、大好きな両親や気心の知れた仲間と一緒の旅は、それはそれで楽しいものがあった。

それに、少女には好きな人がいた。北回りルートと呼ぶ北国を経由するルートの際、休息を取りながら必要物資を補充する小さな辺境の村に寄る。寄る頻度は一ヶ月に一回あるかないかくらいだが、少女はその村へ行く事をとても楽しみにしていた。

そこにはとても明るくて優しい少年が住んでいた。人見知りが激しく、友達と言える存在がいなかった少女に優しく声を掛けてくれたのが、彼だった。

一緒に過ごしているうちに、彼の優しさにすっかり虜になってしまった。彼の笑顔がかわいくも格好良くて、悪ガキにいじめられそうになった時、結局は彼の幼なじみが蹴散らしてくれたのだが、ボロボロになりながら必死に自分を守ってくれた彼の姿を見て、少女は彼に恋してしまった。

だから、少女は今回の旅でもその村に寄る事を、彼に会える事を楽しみにしていた。彼にプレゼントしようと、不器用ながらマフラーを編んで彼をビックリさせようとしていた。

――だが、そんな彼女の恋心は、突然粉々に壊れてしまった。
最初は、ちょっと違和感を感じていた程度だった。
フラヒヤ山脈に入った際、麓付近にいつもは長閑な景色の象徴とも言うべきポポの姿がどこにもなかった。妙な感じはしたが、特筆して警戒する事もなかったので無視して商隊はフラヒヤ山脈を越える為に山頂を目指した。
護衛には一応四人の腕利きハンターチームを雇った。彼らに護衛されながら商隊が山頂に到達し、山の反対側へと向かう最中――それは突然現れた。
すさまじい咆哮と共に突如奴は空から降って来た。竜車を引くポポが身の危険を感じて暴れ出し、ハンター達も突然現れたモンスターを前にすぐさま商隊の前面に展開した。少女は、母の腕の中で突然現れたモンスターを前に恐怖のあまり震えていた。
モンスターはゆっくりと振り返り、商隊を見る。その瞬間、辺りの空気が変わった。気温が下がった訳ではない。でも確かに、体感温度はぐんと下がった。幼い少女は知らないが、それが殺気というものだ。
モンスターはゆっくりと胴を持ち上げ、フラヒヤ山脈中に轟くような咆哮を放つ――そしてそれが、虐殺の始まりだった。
少女の目の前で商隊はあっという間に壊滅した。モンスターは信じられない速度で雪上を縦横無尽に駆け回り、竜車を打ち砕き、ポポを食い荒らし、逃げ回る家族を殺戮した。ある者はモンスターに轢き殺され、ある者はモンスターが投げた雪玉を食らって圧死し、ある者はモンスターの鋭い爪で斬り殺された。
誰かの悲鳴に振り返れば、最後のハンターがモンスターに食い殺される瞬間だった。
少女は母と身を寄せ合って壊れた竜車の陰に隠れていた。すでにその時には壊れた竜車の破片で左目を負傷し、母親に止血だけしてもらいながら、恐怖と激痛で泣いていた。でも恐怖のあまり声も出なかった。
しかし、何度目かの突進で自分達が隠れていた竜車の残骸が吹き飛

ばされ、母と離れてしまった。その瞬間だった、少女は一生忘れられない光景を残った目で見てしまった――少女の目の前で、母親はモンスターに食い殺された。

一生忘れる事のできない純白の雪が一瞬で真っ赤に染まった光景と、柔らかな声が特徴的だった母の想像を絶する断末魔の絶叫。最期の一瞬に聞こえた「逃げて」という母の悲鳴。

母を食い殺し、母の血でべっとり汚れたモンスターの姿を目にした瞬間、少女の中に激しい憎悪の感情が沸き上がった。気がつけば、自分は竜車の残骸から角材のようなものを掴んでモンスターに突進していた。こんな物でモンスターを倒せない事は、子供でもわかっていた。でも、彼女を支配した憎悪は、そんな簡単な事も忘れさせるほど彼女を狂わせていた。

子供の、幼稚な速度での突進など、モンスターには止まって見えていただろう。モンスターはゆっくりと振り返り、ギロリと彼女を睨む。そして、まるで鬱陶しい虫を蹴散らすかのように腕を振るい、何人もの家族を惨殺したその爪で少女を斬り裂いた。

「――え？」

雪の上を真っ赤に染めたのは、自分の血ではなかった。目の前にあったのはモンスターの凶悪な顔ではなく、大好きな父の苦悶に歪んだ顔だった。

父は自分を抱いたまま地面に倒れた。その背中は爪の直撃を受けて裂け、大量の血が真っ白な雪を真っ赤に染めていた。

ゆっくりと歩み寄って来るモンスターを背後に、父は少女を抱いて突然走り出した。抱き抱えられた少女は何がどうなっているかわからず、ただ父の顔を呆然と見ていた。その時、父はゆっくりと自分の方を見ると、静かに言った。

「元気でな、サクラ」

――直後、少女の体は飛んでいた。否、少女は崖の上から父親に投げ捨てられたのだ。

下へと落ちていく中、少女は父の名を叫んだ。だが少女の目の前で、遠くなっていく崖の上に真っ赤な鮮血が迸ったのはその直後の事

だった。落下しながら、少女は泣き叫び続けた。
「……ッ!?」
ガバッと布団を蹴飛ばして、サクラは起き上がった。額には脂汗が浮かび、体は寒くもないのに夢の中での恐怖で震えていた。視界が歪んでいるのは、涙のせいか。頬に手をやれば、汗とは違うもので指先が濡れた。
「……夢」
サクラはゆっくりと片手で顔を覆いながら、ゆっくりと深呼吸し、グシグシと袖で涙と汗を拭い取る。視線を窓の外に向ければ、まだ外は暗い。深夜だという事は一目見てわかった。
「……何で今更」
サクラが見たのは、夢ではなかった。あの光景はもう何年も昔に、一瞬にして両親と家族を失った悲劇の日の光景だった。全て、彼女自身がその隻眼で見た虐殺の現実。
結局、サクラは三日程雪山を遭難した末に救助された。しかし両親は殺され、商隊は全滅し、膨大な借金と遺族による多額の損害賠償だけが彼女に残された。全てを失い、死すらも覚悟した地獄の日々の幕開けとなったあの日の残酷な光景。彼女が夢の中で見たのは、その光景そのものだった。
「……」
視線を自らの手に向けると、その手は細かく震えていた。もう何年も前で、自分は如何なるモンスターを前にしても動じないハンターとなった今でも、あの時の恐怖は忘れられないでいた。
「……チッ」
小さく舌打ちし、震える手をもう片方の手で殴りつける。自分はもう過去の恐怖でいつまでも震えているような弱虫じゃない。
あれから自分は、独学でハンターとなった。膨大な借金を返済する為には普通の稼ぎ方では何十年掛かるかわからなかった。一刻も早く借金を返済する為、何より、もう二度と自分と同じような境遇の人を生まない為に、ハンターの道を志した。
子供にも等しい少女がハンターになる事を、周りは嘲笑していた。

だがそんな周りの声など無視し、自分はハンターの道を邁進し続けた。特に護衛依頼に関しては割に合わない仕事でも引き受け、ただひたすらに身を削る思いで多くの商隊を護衛した。そしていつの間にか、自分は《護衛の女神》ともてはやされるようになり、誰が言い出したかはわからないが《隻眼の人形姫》という二つ名も知られるようになった。

今では子供の頃から好きだった彼と一緒に同じチームを組み、頼もしくて心から信頼できる仲間兼恋敵も居て、第二の故郷とも言うべきこの小さな村で平和に暮らしている。波瀾万丈の人生だったが、ようやく今人並みの幸せを得て暮らしているのだ。

なのになぜ、今になってあの時の記憶が蘇ったのか。思い当たる節もなく、サクラは言いようのない不安に胸が締め付けられるようだった。

窓の外を見れば、遠くにイルファ山脈が見える。秋も次第に冬へと移り変わり始め、あと一ヶ月も経てば再びイルファ雪山は閉山される。なぜか、そんな雪山に妙な不安を抱く自分がいた。

カタカタと窓が震える。嫌な風が吹き出して来たらしい。月もいつの間にか雲に隠れ、大地には月の恵みの光が届かず、闇に支配される。

いつの間にか、サクラは自分で自分を抱き締めるような格好で窓の傍に立っていた。

いつもと変わらない夜のはずなのに、なぜこうも不安に陥るのか――なぜ理由もなく、体は震えているのか。

ズキッと、失われた左目が痛む。

サクラは左目を押さえながら、残された右目で窓の外を見詰め続ける。

何かがおかしい。何か、とてつもない危機が迫っている。サクラの勘がそう告げていた。

「……何もなければ、いいのだけど」

サクラは静かにカーテンを閉めると、再び布団の中に潜り込んだ。頭まですっぽりと被って、布団の中で丸まる。無理矢理目を閉じて、

明日に備えて眠り始める。
ゆっくりと眠気がやって来て、意識が遠のいていく。そして、意識が夢の中へと落ちていった。
――夢の中に落ちる寸前、遠くから何かの叫び声のようなものが聞こえたような気がした。
イージス村を、暖かな朝日がゆっくりと包み込み始める。
フィーリアの朝は早い。誰よりも早く起床して、朝食の用意を始める。本当は当番制なのだが、早起きするフィーリアが習慣的に朝食担当になっていた。というか、朝が弱い上に料理スキルが殺人級のシルフィードは戦力外だし、サクラはクリュウが絡まないと積極的に動かないので、当番制自体が最近ではあまり機能しておらず、結果家事全般はフィーリアが担当という風になっているのだ。
台所に立って料理を始める頃にはツバメがオリガミと共に起床する。欠伸をしながら「おはようじゃ。お主はいつも早起きじゃのぉ」と現れるツバメに笑顔で挨拶して、テキパキと朝食の準備を進める。
「ワシも何か手伝うぞ」
「オイラもするニャッ」
顔を洗った戻って来たツバメとオリガミの申し出にフィーリアは礼を述べながらテーブル周りのセットを彼らに任せる。「任されたのじゃ」とツバメはオリガミを連れてリビングへと行き、テーブルを台拭きで拭くと、ナイフやフォーク、コップなどを並べ始める。一方でフィーリアは料理を皿に盛り付けていき、それをツバメとオリガミがリビングへと運び入れる。
「うぬ。良い香りじゃのぉ」
運ぶ料理から漂う香りに思わずニヤけるツバメ。それを見てフィーリアもまた嬉しそうに微笑みながら料理を並べていく。全てが終わるとツバメが振り返る。
「それでは、他の連中を起こすとするかのぉ」
「そうですね」
「うぬ。ではワシはサクラを起こす。オリガミはシルフィードを、フィーリアはクリュウを起こすのじゃ」

ツバメがあっという間に起こす面々を決定する。するとフィーリアは「はいッ」と笑顔を満開に咲き誇らせると、ウキウキ気分でクリュウの部屋を目指して奥へ消える。そんな彼女の背中を見送ったツバメはやれやれとばかりに肩をすくませる。
「本来なら、男子は同じ男子であるワシが起こすべきなのじゃが、それは野暮というものじゃろうて」
フィーリアの恋心を知っているツバメとしては、可能な限り応援したい。一応公平に応援しているが、やはり気持ちの上ではサクラの事を一番に応援してはいる。だが彼女のあんな幸せそうな顔を見ていると、やっぱり応援したくなってしまうのだ。
「ではワシはサクラを起こす。大変じゃが、シルフィードは任せたのじゃ」
「……ニャァ、シルフィードを起こすのは骨が折れるのニャァ」
朝がものすごく弱いシルフィード担当になったオリガミは前途多難だとばかりに苦笑を浮かべる。そんな彼の反応を見てツバメも「サクラを起こしたらワシも後から行くのじゃ」と苦笑を浮かべると、二人は二階の女子部屋へと向かった。
一方、二人より早く動いたフィーリアはクリュウの部屋の前にいた。廊下の窓を器用に姿見代わりに使って髪型を整える。エプロンもしっかりと装備し、右手にはおたまも装備。ちなみにこのおたまは料理用ではなくファッション用であり、エプロンとおたまはセットという妙な雑誌の影響が原因だ。
「良しッ」
気合を入れ、フィーリアは二度深呼吸してからドアをノックする。
「クリュウ様。もう朝ですよ。起きてください」
まるで新妻みたい。そんな事を思いながら思わず浮かんでしまう笑顔を引き締めて、返事がない事を確認してドアノブを回して部屋の中に踏み入る。
「クリュウ様ぁ。起きてくださぁい」
部屋の中に入ると、クリュウはまだ寝ているようだった。ベッドで布団を頭から被っている所を見ると熟睡しているらしい。それを見

てフィーリアはため息を零す。
　クリュウは基本的には早起きだし目覚めもいい。だがたまに夜更かしして朝が起きられないという事もある。どうやら今日はそれらしい。
　フィーリアは部屋のカーテンを開けてからベッドのすぐ隣まで歩み寄ると、毛布の上に手を当てて少し揺らしてみる。だがクリュウはまだ起きる様子はなかった。はぁと少し大きめなため息を零すと、覚悟を決める。
「クリュウ様ッ。せっかくの朝食が冷めてしまいますから、起きてくださいッ！」
　少々乱暴だと思いながらも、フィーリアは毛布をしっかりと掴んで一気に剥ぎ取る。これで起きない人間はいない、と思いたいがシルフィードにはこれすら通用しないのだが、クリュウには通用するはず。そんな事を思いながら毛布を剥ぎ取ったフィーリアだったが――
「……え？」
　――フィーリアが見たのは、眠っているクリュウに抱きつくような形でこちらも幸せそうに眠っている寝間着姿のサクラの姿だった。
「な……ッ!?　な、ななな……ッ!?」
　驚きのあまり言葉が出ないフィーリア。そんな彼女の目の前でサクラはゆっくりと目を覚ました。寝ぼけ眼を擦りながらサクラは半身を起こすと、呆然と立ち尽くすフィーリアを見て一言。
「……おはよう」
「おはようじゃありませんよッ！　何してるんですかッ！」
　顔を真っ赤にして怒るフィーリアの問い詰めに対して、サクラはボーッとしたままフィーリアの怒鳴り声で起きかけているクリュウを見て、
「……えへ」
「そこでなぜ頬を赤らめて照れ笑いを浮かべるんですかッ!?　何かものすごく不安なんですけどッ!?」
　朝っぱらからフィーリアはすっかりサクラに振り回され、すでに息

切れ寸前。二人は出会ってからもう結構長い付き合いだが、相変わらずサクラは我道を突っ走っていて、フィーリアは相変わらずサクラに振り回されるのがデフォルトとなっている。
「と、とにかく今すぐにクリュウ様から離れてくださいッ」
「……断る」
「なぜそこで断れるんですかッ!?」
「……妻だから？」
「疑問形にしないでくださいッ！　問うてるのは私ですッ！　それとさりげなく自らの立場を捏造するのはやめてくださいッ！」
　まるでライトボウガンの速射のように連続で撃ち出されるフィーリアのツッコミの数々。そりゃこれだけツッコミを入れれば息も切れる。ぜぇぜぇと荒い息を繰り返して息を整えているフィーリアを見て、サクラは「……朝っぱらから騒々しい」と他人事のように一言。
「だ、誰のせいだと思って……ッ」
　息を整えながら羽音のような小さなツッコミを入れるのは忘れない。最近、サクラのせいでツッコミ属性が自分に身についている事に気づいて少々ショックを受けたフィーリア。これでも一応貴族家出身なのだが、すっかり世俗に染まってしまったようだ。
「う……ん……？」
　すぐ隣でそんな風に二人が――特にフィーリアが――騒いでいれば、どんなに熟睡していても起きる。クリュウは陽の光に眩しそうに目を擦りながらゆっくりと目を開く。
「あ、おはよぉ……って、何事ッ!?」
　寝起きは頭が回りにくいものだが、目覚めてすぐに隣で寝間着姿の美少女が座っていて、そのすぐ横にエプロン姿で立っている美少女が立っていて、その二人が睨み合っていれば大概は驚きの余り目も覚める。
「あ、クリュウ様おはようございます」
「……おはよう、クリュウ」
「あ、おはよう……って、律儀に挨拶してくれたのは嬉しいけど、どういう状況？」

寝起きのクリュウは今自分を取り囲んでいる状況に困惑する。何がどうなれば朝っぱらからこんな修羅場のような状況になるのか。凄腕の脚本家もビックリな展開だ。
「……クリュウ、覚えてないの？」
なぜか振り返ったサクラはショックを受けたような表情で問うて来る。クリュウが「何が？」と彼女の問いの意味がわからずに聞き返すと、サクラはポッと頬を赤らめて、
「……昨日は、あんなに激しかったのに」
「はいストォーップッ！　それ以上はアウトですから一ミリたりとも口を開かないようにッ！」
サクラが爆弾発言しそうな雰囲気を感づいたフィーリアはすぐさま二人の間に割って入ってサクラの口を塞ぐ。ピュアなクリュウ相手によくもまぁそんな爆弾をぶっ込めるものだと、感心半分呆れ半分という感じでため息を零すと、今の自分の状況に気づく。
「あ、えっと……」
元々隣同士だったクリュウとサクラ。その間に割って入ったのだから、当然自分とクリュウの距離はものすごい近い訳で――というか、息が掛かるような距離だったり。
「す、すみませんッ」
顔を真っ赤にしてフィーリアは慌てて離れる。クリュウは何が起きたかわからず、頭の上に疑問符を浮かべていた。
「と、とにかくッ。もう朝食の準備はできていますので、お二人ともリビングへ来てください。それと、サクラ様は後で説教ですッ」
「あ、うん」
「……受けて立とう」
「……状況がまだわからないんだけど、とりあえず説教に対して受けて立とうっていう返しはおかしいと思うよ？」
クリュウの朝一番のツッコミが炸裂した所で、クリュウはベッドから降りる。口元を押さえながら大きなあくびをし、その場でうーんと体を伸ばす。そんな彼の体にサクラが無言でピタリと抱き付き、フィーリアがどこから出したのかわからないハリセンでド突いたり

と、相変わらずルナリーフ家の朝は騒々しい。
寝起きのクリュウの右腕をフィーリア、左腕をサクラが掴む形で彼を誘導する。二人の美少女に抱きつかれているというのに、当の本人はまだ眠そうだ。自分の幸せ過ぎる状況に全く自覚がないのは、彼の天然のせいか、それとも日常過ぎて麻痺しているのか。どちらにしても、何て贅沢な日常を過ごしているのやら。
二人に先導されながらリビングへと顔を出すと、そこにはすでにツバメとオリガミがそれぞれ席に腰掛けていた。
「何じゃ。やっぱりサクラはお主の所におったか」
部屋がもぬけの殻だったので、何となくそう予想していたツバメは特に驚いた様子はない。これもまた日常の光景なのだろう。
「シルフィード様は？」
姿が見えないシルフィードを探すフィーリアだったが、それに対してオリガミの返答は、
「無理ニャ。全く起きる気配がないニャ」
お手上げだとばかりに両前足を挙げるオリガミ。シルフィードの朝の弱さはかなりのものだ。狩人モードがオンになる狩場なら平気だが、オフになる日常では本当に起きない。
「やはりシルフィードを起こせるのは、クリュウくらいじゃな」
「え？　別に僕は普通に起こしてるけど」
「お主に起こされるとなれば、すぐ目も覚めるじゃろうて」
「そうなの？」
「そうなのじゃ」
首を傾げるクリュウを前に、ツバメは呆れたようにため息を零した。フィーリアとサクラと視線が合うと「お主達も大変じゃな」と同情する。そんなツバメの言葉に二人は苦笑を浮かべた。
「僕が行けばシルフィは起きるの？」
「まぁ、十中八九間違いないじゃろうて」
「そっか。じゃあ起こして来るよ。せっかくだからみんなで食べたいし」
そう言ってクリュウは一人二階へと消えた。応援に行った方がい

いか迷うフィーリアに対して、すでに席に座っているサクラとツバメ、オリガミは平然とお茶を飲む。皆、手助けがいらない事は十分わかっているのだ。
「あの、大丈夫でしょうか？」
「大丈夫じゃよ。好きな男に起こされれば、どんな寝起きの悪い女娘（おなご）でも起きるものじゃ」
「……寝ているなら、フィーリアと違って着替えを見られる心配もない」
「それだとまるで私が毎回のようにクリュウ様に着替えシーンを見られてるみたいじゃないですかッ！」
　そんなやり取りを三人と一匹がしていると、程なくしてクリュウが戻って来た。その背後には髪を下ろした状態でのシルフィードの姿が。それを見てツバメは「ほらな」と一言。
「おはようございますシルフィード様……あれ？　何だか顔が赤くありませんか？」
　確かにフィーリアの言う通り、シルフィードの頬は妙に赤い。フィーリアの問い掛けに対してシルフィード「あぁ、まぁ色々あってな」と何とも煮え切らない反応を見せる。
「……クリュウ、何があったの？」
　さすがサクラ。音もなくクリュウに忍び寄ると直球勝負な問い掛けをする。彼女の容赦のない問い掛けに対し、クリュウもまた若干頬を赤らめながら「いやまぁ、事故というかそのぉ……」と視線を逸らす。そんな彼の反応を見てサクラは一言。
「……フィーリアよろしく、シルフィードの生着替えでも見た？」
「なぜそこで私を比較対象として出すんですか。それと、着替えの前に余計な単語を入れるのはやめてもらえませんか？　何かものすごく卑猥に聞こえます」
「いや、そういう訳じゃないんだが……」
「何じゃ。ハッキリせぇ」
　痺れを切らしたツバメの促しに、いよいよ観念したのかシルフィードは言いづらそうに話す。

「……起こしに来てくれたクリュウに、寝惚けて抱きついてしまって」
「そのまま、押し倒されたというか……」
二人共恥ずかしそうに頬を赤らめながら互いに背中を向け合う。そんな微妙に桃色な雰囲気に包まれた二人に対し、三人と一匹は呆れたように見詰める。正直、バカップルのラブラブ話にしか聞こえないので、特にフィーリアとサクラは妙なイライラ感を抱いて仕方がない。
「本当に寝惚けておったのか？　お主、どさくさに紛れて欲望を剥き出しておらんか？」
ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべながら言うツバメの言葉にフィーリアとサクラの目が鋭くなる。そんな二人の反応を見て「ば、バカな事を言うなッ！　二人も本気にするなッ！」と怒鳴る。そんな皆の様子をクリュウは不思議そうに傍観する。
「とにかく、食事にしますよ。支度してください」
ぷくぅと頬を膨らませて少しいじけてしまったフィーリアの言葉に、ツバメとオリガミは席に着き、クリュウとサクラ、シルフィードの三人は洗面所に消える。食前の歯磨きを済ませ、洗顔してサッパリして戻って来る頃にはシルフィードの頬の赤らみも取れ、いつものピシッとした凛々しい顔立ちが戻る。
戻って来た三人と全員分のコップに北風みかんジュースを注ぎ終えたフィーリアがそれぞれ席に着く。そしてようやく食事が開始された。今日の朝食は昨日から煮込んでいるポポノタンシチューと焼いた頑固パンの組み合わせに付け合わせに季節のサラダとポポノタンシチューは、フィーリアは渾身の手料理だ。
フォークで切れる程トロトロに煮込まれたポポノタン。口の中に入れた途端、デミグラスソースをベースにしたシチューの味と肉の旨味が口いっぱいに広がる。それはまさに絶品と言うに相応しい料理だった。
「うん、おいしいよこれ」
「えへへ、喜んでもらえてがんばった甲斐がありました」
クリュウに褒められてフィーリアは上機嫌だ。この時期はポポが

冬に備えて秋のおいしい草や木の実を食べて肥え太っているので、生肉もポポノタンもそれぞれ脂ものっていて最も美味しい季節なのだ。
「ポポノタンがこのように柔らかくなるとは、不思議じゃのぉ」
「ポポノタンの塩焼きとビールの組み合わせは最高だが、ポポノタンのシチューもいいな」
「シルフィード、それじゃとお主おっさんっぽいぞ」
「う、うるさい」
「でもポポノタンを柔らかくする為にビールで一度煮込んでいるんですよ、これ」
「ニャー、これは姉御にも食べさせたいニャァ」
「もちろん、エレナ様やリリアちゃん、アシュア様にもお裾分けしますよ」
　おいしい料理を囲んでの朝の何気ない会話は弾む。狩場に出れば常に緊張の連続なハンター達にとって、こうした平凡な休日は貴重であり、何にも代えがたい幸せな日々と言える。
　だが、そんな朝の幸せな雰囲気に一人だけ乗り遅れてしまった者がいた。
「……ごめんフィーリア。私はパスするわ」
　そう言ってサクラは立ち上がる。驚いてフィーリアが見ると、サラダとみかんジュースはなくなっているが、シチューだけは一口も食べていないように見えた。
「え？　あ、あのお口に合いませんでしたか？」
　いつもは何だかんだ言っても好き嫌いせずに食べてくれるサクラの予想外の反応に、フィーリアはおろおろと狼狽してしまう。そんな彼女を気遣うように「……別に、たぶんおいしいと思う」と珍しくサクラがフォローする。
「じゃ、じゃあ何で……」
　フィーリアの当然の疑問に対し、サクラは目を伏せながら「……ポポノタンは、ちょっと苦手」と答えた。
「そ、そうだったんですか？　す、すみません。全く知らなくて」
「……いい。今まで言う機会がなかったのだが悪いだけ」

「サクラって、ポポノタン嫌いだったっけ？　昔は村の名産だからって一緒に食べてた記憶があるけど」
クリュウも昔の記憶を思い返しながらが、サクラのポポノタン嫌いに疑問を抱く。すると、彼の言葉にサクラは一瞬何かを逡巡した後、言いづらそうに答えた。
「……あの事故を、思い出すから」
「あ……」
サクラの言うあの事故とは、彼女が両親を失った事故の事だ。あの時、サクラの両親率いる商隊はポポに竜車を繋げていた。しかしモンスターの襲撃に遭い、ポポ達は全て目の前で無惨に食い殺された。その惨劇が目に焼き付いてしまっていて、サクラはポポノタンが食べられなくなってしまったのだ。
「ご、ごめん……」
嫌な事を思い出させてしまったと謝る彼の言葉に、サクラは首を横に振る。
「……クリュウは悪くない。私の方こそ、食事中にする話じゃなかった。忘れて」
そう言って、サクラは自分が食べ残した分と空になった食器を持って台所に消えた。残された面々は、いずれも食事の手が止まってしまっていた。特に知らなかったとはいえ、サクラに嫌な事を思い出させてしまったと落ち込むフィーリアに、シルフィードは優しく「気にするな」と気遣う。
「で、でも……」
「そうじゃ。サクラは強い娘じゃ。あれくらいで落ち込むような奴じゃなかろうて」
ツバメもまたフィーリアを気遣うように言う。そんな皆の励ましもあってフィーリアも少し元気を取り戻し「今後は、ポポノタン料理はやめますね」と空笑いを浮かべる。そんな彼女の言葉にポポノタン好きなシルフィードがちょっとショックを受けたりと、少しずつ平穏を取り戻す食卓。
それから十分程で、全員が朝食を食べ終えた。皆が自分の使った食

器を持って台所へと移動する中、同じように食器を持ったクリュウはふと窓の外を見る。遠くに見えるイルファ山脈は常に五合目より先は雪が積もっているのだが、冬になれば麓まで白色に染まる。まもなく冬に入ろうとしている秋だと、三合目辺りまで雪が積もり、周りの木々が紅葉していてイルファ山脈が最も美しい季節だ。ポポやガウシカが平穏に暮らす、長閑な雪山がそこに広がっていた。

「……あ、手紙書かないと」

先日エルバーフェルド帝国政府を経由して届いたアルトリア王政軍国現女王にしてクリュウの従兄弟のイリス・アルトリア・フランチェスカ女王からの手紙。そこには現在の近況と自分を気遣うような言葉に溢れていた。待ち望む彼女の為にも早急に返事を書かないといけない。が、

「……ええっと、イリスにアリア、ルフィールにシャルル、あとカレンとルーデルからも来てたっけ」

まるで狙ったかのように遠くにいる友人五人からも一斉に手紙が来ていて、それらに全てに返信しないといけない為、返事をするのも一苦労となる。ちなみに届く手紙の全てが彼に好意を抱いている美少女から送られたものであり、普通の人生を歩んでいては絶対に得られない超がつく幸せな状況なのだが、残念ながら彼にそういう自覚はない。

台所に食器を戻し、食器洗いは本来の食事当番である自分が引き受ける。川から引いている冷たい水に震えながら食器を洗う最中も、クリュウは一人それぞれの返信の内容を必死に考えるのであった。

第２００話　イルファの異変　胸の奥に渦巻く不安を抱きし少女

「え？　イルファ山脈の調査ですか？」
　午後、突然家にやって来た村長とエレナ、そしてリリアの三人。やって来た早々にリリアはクリュウに抱きついて甘えるのでクリュウはエレナにしばかれるというお馴染みの光景の後、村長が深刻な面持ちで口火を開いた内容が、イルファ山脈の調査だった。
「何を調査するんですか？」
「フィーリア。今日の朝食、確かポポノタンのシチューとか言ってたわよね」
「は、はい。後でお裾分けしますね」
「ありがと。で、問題はそのポポノタンなのよ」
「ポポノタン？」
　首を傾げるクリュウにエレナもまた深刻そうな面持ちで説明を始める。その内容は、今が旬であり秋の終わりから冬にかけて木の実や野草やキノコが採れなくなる時期に村の収入源の主力となるポポから獲れるポポノタン。特にイルファ山脈のポポは木の実を主食としている為、脂ののりがいいと有名であるが、今年はなぜかそのポポの数が少ないのだ。その為に狩りで捕まえられるポポの数も少なく、現在イージス村やアルフレア産のポポノタンは価格が高騰している、との事。
「フィーリアも、結構高かったんじゃない？」
「そうですね。例年に比べれ二割から三割高かったです」
「あれでも利益を減らして原価ギリギリにまで下げて卸してるんだよ。数は取れないわ利益が出ないわで、ほとほと困ってるんだよねぇ」
「その影響でウチのお店もちょっと売上が落ちてるんだ。村特産のポ

ポノタンと交換で仕入れられる品も交換できる上限がいつもより低いから、どうしても仕入れ量が減っちゃうし。そうなると価格を上げないといけないんだけど、そうすれば買ってくれる人が減っちゃって、見事な負のスパイラルなんだよぉ」

村長も道具屋を経営しているリリアもいつになく悲観的な様子。これからキノコや野草の数が減り、真冬には流氷の影響で漁業にも影響が出るとなれば、村の収入源は一気に減ってしまう。そこを補うはずのポポノタンが多く取れないとなると、収入は減るわ外貨は稼げないわで村の財政への影響は計り知れない。リリアの道具屋が機能不全に陥れば、村人の生活に与える影響も大きい。それほどまでにポポノタンの不作は村にとって致命的なのだ。

「それで、ポポの生態調査という訳ですか」

「まぁ平たく言えばね。ポポが何体くらいいるのか、山脈全体を回って見て来てほしいんだ。それと可能であれば原因の究明もお願いしたい。もちろん専門的な事はわからなくても、何となくいつもと山の様子が違う事があれば教えてほしいんだ」

「なるほど。状況及び依頼内容は理解した。村の窮地なのだから、我々も可能な限り協力しましょう。なぁみんな」

シルフィードの言葉に他のハンター四人も頷いた。皆の反応に村長はやっとパァッといつもの笑顔を咲かせると「ありがとッ。少ないけど報酬は出すから、よろしく頼むよ」と改めてお願いする。

「いえ、これくらいなら無報酬でいいですよ。ちょうど素材の補充も出来ますから」

クリュウの言葉に村長は改めて「あ、ありがとッ。ほんと助かるよぉ」と安堵する。無報酬でいいなど、さすがお人好しなクリュウだと他の面々は改めて彼を評価する。クリュウが言い出してしまったのだから、他の面々も従うほかはないが、皆の気持ちは一つだった。

「それじゃ明日の早朝から調査を開始するという事で、今日の夜には出発するってのはどう？」

クリュウの提案にフィーリア、サクラ、シルフィードも了承する。

「それでは午後は各々準備をしてください。夕食は早めにしてしっか

り眠ってから出発できるようにしますね」とフィーリアも家事全般において今日のスケジュールの大幅改正を進言。クリュウの「そうだね」の一言で今日の方針が決定した。
「ごめんねぇ。じゃあ、よろしく頼むよ」
　一つ案件が片付いた事で安堵した村長はそう言い残して去った。リリアも村長と村の重鎮と一緒に午前中に対策会議に参加していた為、店を半休にしていた事から、午後の開店の為に店に戻り、ルナリーフ家はいつもの日常を取り戻す。
　いつもの面々だけとなったルナリーフ家のリビングでは、当然先程の話題が続く。
「それにしても、何でポポが少ないんだろ。ギアノスは定期的に間引いてたはずだから、極端に減る理由にはならないはずだし」
「さぁ？　それがわからないから苦労してるんじゃない」
「同じ理由で今の時期は木の実も豊富なはずだから、エサ不足で減っているとも言えんしな」
「大型モンスターが現れたって報告は、今のところ入ってませんしね」
　ポポの数が減っている理由が思い浮かばない面々は頭を悩ませる。だが専門家でもない彼らが頭を捻っても出て来る仮説などそう多くはない。結局、行ってみなければわからないのだ。
「じゃあ、用意しないとね。念の為必要最低限な装備だけ整えて行こうよ」
　クリュウの提案に皆は了承し、早速準備に取り掛かろうと席を立つ四人。だがそんな彼らをシルフィードが待ったを掛けた。何事かと振り返る四人に、シルフィードは少し考えながら口を開く。
「今回は調査依頼だからな。できるだけ広い範囲に散ってもらいたい。そこでチームを二人一隊（ツーマンセル）で全三チームに振り分けたいと思う」
　イルファ山脈は広い。狩猟依頼ではないのだから、ここにいる面々は手練ばかり。ならば手際良く調べる為にも少数部隊を複数散らせた方が効率がいい。シルフィードの考えは正しい。正しいのだが、フィーリアとツバメ、オリガミはあからさまに嫌そうな顔をしてい

る。何せチーム分けとなるとフィーリアからすればクリュウと離れ離れになる可能性があるし、ツバメやオリガミからすればクリュウと別になってしまった面々と行くと腹いせに暴れる傾向にある為に、できれば避けたいのが本音だ。

そんな面々の反応を見たシルフィードは苦笑を浮かべながら「まぁそう嫌そうな顔をするな。今回は特チームのバランスを考えないから、チーム分けはくじ引きでやろう」と提案する。

最初は嫌そうだったフィーリアだったが、クリュウと二人っきりになれる可能性があると知ると少しばかりヤル気を出した。ツバメとオリガミは結局根負けという具合。

一方、そんなやり取りを見ていたクリュウはふと違和感に気づいた。こういう時、真っ先に参加するはずのサクラがずっと黙っているのだ。おかしいなと思って彼女の方を見ると、窓の外を見ながら彼女は立っていた。その横顔は、どこか険しい。

「サクラ？　大丈夫？」

「……平気」

サクラは短く答えると、クリュウの横を素通りしてくじ引きに参加する。いつもならこの隙を突いて抱きついて来たりするはずの彼女が何もしない。クリュウは妙な違和感を感じつつも、とりあえずチーム分けのくじ引きをした。

待つ事数分……

「では山脈東側はA班の私とオリガミ、西側はB班のフィーリアとツバメ、中央部はC班のクリュウとサクラと決まったが、異論はないな？」

「「異議ありッ！」」

ようやく決まった所だったが、やはり反発する面々がいた。予想していたとはいえやっぱりかという具合で呆れながら振り返ったシルフィードが見たのは、こちらを指差して立つ二人の少女。B班のフィーリアと無関係なエレナであった。

「クリュウ様とサクラ様を二人っきりにするなんて、一週間絶食していたリオレウスの前にアプトノスの子供を放り投げるような蛮行に

等しい行為ですッ！」
「サクラの危険性はあんただって知ってるでしょッ!?　この女、全くの容赦がないわよッ！」
　ガーッと怒鳴り散らす二人に、シルフィードも頭を抱える。実際公平なくじ引きで決めたとはいえ、確かに二人の言うとおりクリュウとサクラを二人きりにするのは危険だ。もちろんクリュウが危険という意味だ。フィーリアの言う通り、何が起きるかなんて明白と言えるだろう。
「し、しかしくじ引きで決めたからには……」
「クリュウ様をみすみす見殺しにしろと仰るつもりですかッ!?」
「帰って来た頃にはクリュウは貞操を失ってるわよッ！」
　怒鳴る二人に追い詰められて頭を抱えるシルフィード。そんな面々をツバメとオリガミがなだめようとするが、なかなか収拾がつかない。何をそんなに騒ぐ必要があるのか困惑するクリュウだったが、その隣をサクラが無言で通り抜ける。騒ぐ面々に「……ねぇ」と短く声を掛けると、皆は一斉に振り返った。
「……私、一人で行くわ」
　勝利宣言か、結婚宣言か、それとも完食宣言か。何を言い出すかと警戒していた面々に対し、サクラは全く違う方向での爆弾発言を言い出した。
「ひ、一人ッ!?　な、何でまた……」
　サクラと同じC班に配置されていたはずのクリュウは一人で行くというサクラの言葉に驚きを隠せない。しかしそれは彼女の日頃を知っている他の面々も一緒だ。こんな絶好のチャンスを、なぜサクラは自ら捨てたのか。心底分からないという感じだった。
　そんな驚く一同に対し、サクラは短く答える。
「……何だか、嫌な予感がするの」
　いつになく険しい表情で言う彼女の言葉に、いよいよ冗談や気が触れたとかではないと悟る面々。彼女の真剣な様子を見てシルフィードが「嫌な予感とは何だ？」と尋ねるが、サクラは何も答えずに首を横に振る。何かが起きそうだとわかっていても、何が起きるかはわか

らないのだ。
「だとすれば、余計に一人で行動するのは無茶だよ」
二人で行動すべきだと主張するクリュウに対し、サクラは首を横に振る。
「……クリュウはシルフィードやフィーリアと一緒の方がいい。その方が安全」
「安全って……僕だって、いつまでも守られてる側じゃないよッ」
サクラの発言はいつも飾り立てずに容赦がない。それはクリュウに対しても例外ではない。彼女は単純に自分と行動するよりも安全な方を彼に提示しているに過ぎないが、その言い方ではクリュウだってムカッとするのは当然だ。二人の雰囲気が急速に悪化していくのを見て、他の面々は口を挟む余裕すら失っていた。
「僕だって、サクラを守れるよッ！」
必死になって言う彼の言葉に、サクラは首を横に振る。そして、
「……クリュウは足手纏いになる」
――絶対に言ってはならない禁句を言ってしまった。
絶句するクリュウを前にさすがのフィーリアも「い、言い過ぎですよサクラ様ッ！」と怒鳴り込んで来る。シルフィードも「言葉を選べ」といつになく厳しく叱りつける。だがサクラは反省した様子もなく
「……事実を言っただけ」と取り付く島もない。
依然として反省しようとしない彼女にツバメが怒ろうとした時、
「……何だよそれ」
傍にいたクリュウの小さな声を聞いて振り返ると、顔を伏せていたクリュウがバッと顔をもたげた。いつもは優しげな笑みを浮かべている彼の顔は、怒り一色染まっていた。
「僕の事、そんな風に思ってたのか」
「……クリュウ」
自分に向けられる彼の厳しい視線に、サクラは思わず目を背ける。だが彼女は拳を強く握り締め、凛とした様で彼と対峙する。
「……別にクリュウが弱いとかは言っていない。ただ、私のやりたいように動くには、クリュウは邪魔になるだけ」

「結局は、足手纏いって事だろ」
「……そうは言ってない。一人の方が動きやすいって言ってるだけ」
サクラはいつも言葉が足りない。彼女の言う通り、彼女は別にクリュウの実力を卑下しているのではない。元々ソロハンターだった彼女からしてみれば、単独で動く方が利点が多いという事もある。彼女はあくまで、今回は単独行動をしたいと言っているだけに過ぎない。だが、問題はその言い方だ。
「……好きにすれば」
彼女の意図は理解して、自らの誤解と知ったクリュウ。だが一度抜いてしまった剣を鞘に戻すのは恥ずかしい行為。一回怒りだしてしまったからには、すぐに謝るのもまた恥ずかしい行為だ。自分の中にある妙なプライドが彼の素直さを邪魔してしまい、結果冷たい態度を取ってしまう。
クリュウの投げやりな言葉に対して、サクラは一瞬だけ表情を曇らせたが、すぐにいつもの無表情に戻って「……私は、私のやりたいようにやるわ」と言い残し、リビングを去った。
当然、リビングには残りの面々と重苦しい空気だけが残る。
「あの、クリュウ様……」
フィーリアが声を掛けると、クリュウもまた無言で立ち去ってしまう。伸ばした手は彼の肩に触れる事はできず、虚空を掴む。追いかけようとする彼女をシルフィードが止める。
「今は一人にしといてやれ。それより、本気でチーム編成を考えないといけないな」
「そっちは頼むのじゃ。ワシはサクラを叱って来る。今回はさすがにやり過ぎじゃからな」
そう言ってツバメはオリガミを残してサクラを追いかけてリビングを離れる。シルフィードに止められたフィーリアはクリュウが消えた玄関を見詰めるが、自分にはどうする事もできないとわかると素直に諦める。だがそんな彼女に対して諦めの悪い娘もいる訳で、
「私はクリュウを追うわ」
「いや、今は一人にしておいた方が……」

「幼なじみをナメないでほしいわね。蹴りの一発でも叩き込んでやればすぐに元に戻るわよ」
　そう言いながらエレナは清々しく笑ってみせた。それは幼なじみとして、彼を立ち直らせられる自信があるからこそできる笑顔。伊達に十年以上の付き合いではないのだ。そんな彼女の笑顔を見てシルフィードも小さく笑みを浮かべると「頼む」と彼女に任せる事にした。エレナは「任せといて」と言い残し、外へと出る。
「シルフィード様」
「君の不満はわかるが、今はエレナの方が適任だ。我慢してくれ」
「……いえ、感謝しています」
　羽音のように小さな彼女の言葉に振り返ると、フィーリアはどこか淋しげな笑みを浮かべていた。いつも幸せに満ちた満面の笑顔が似合う彼女からは信じられないような、弱々しい笑顔だった。
「――私には、エレナ様のようにクリュウ様を立ち直らせられる自信は、ないですから」
「フィーリア……」
「人にはそれぞれ役目がある。私の役目は、今は違うんです」
　そう淋しげに、フィーリアはつぶやいた。
「バカクリュウ」
　木の木陰に入って幹に背中を預けながら座り込んでいたクリュウを発見するのに、そう時間は掛からなかった。声を掛けると、クリュウはゆっくりと顔を上げる。
「何だ、エレナか」
「何だとは何よ。失礼しちゃうわね」
　彼の前に腰に手を当てながら立つエレナは不機嫌そうに答える。そして興味無さげに視線を下げる彼を見て「何らしくもなく哀愁に浸ってんのよ」と言いながら、当然のように彼の隣に腰掛ける。
　それから数分、エレナは無言だった。彼を追いかけて来たはずなのに、肝心の彼の隣に座ったというのに彼女は何も自分からは話そうとはしなかった。ただ黙って、彼に寄り添うだけ。最初のウチは無視してたクリュウも、次第に居心地の悪さを感じたのだろう。おもむろ

に、口を開き始めた。
「……足手纏いだって」
「うん？」
「足手纏いだって言われて、ショックだった」
「あら、あんたその自覚はあったんじゃないの？」
「……改めて、ハッキリ言われるとさすがにショックを受けるよ」
　組んだ腕に顔の下半分を埋めながら、つぶやくように言う彼の言葉にエレナは「あんたってほんと打たれ弱いわね」と呆れたように言う。昔から、自分の事を過小評価する傾向があるくせに、いざそうやって言われると落ち込む程ショックを受ける。人は防御線を引く為に謙虚な態度を取るのだが、彼の場合はその防御線が全く機能していないと言える。
「でもまぁ、あんたが思っているような意味じゃなくて良かったじゃない」
「そ、それはそうだけどさ。でもあんな言い方しなくても……」
「サクラが誤解を招くような言葉足らずなのは、昔からでしょ。今更何を言っても無駄だって諦めなさいよ」
　クリュウがサクラと子供の頃を共にしていた昔なじみなら、彼の幼なじみであるエレナもまたサクラとは昔なじみだ。昔は今と違って人見知りが激しく、常に誰かの後ろに隠れていたサクラ。しかしいざ仲良くなってみればそれまでとは一転して強気になる妙な子供だった。単語単語で話す癖があり、いつも言葉が足りなくて周囲に誤解を与えていた。今は昔に比べればずいぶんマシになった――逆に強気になり過ぎてしまった感はあるが――が、それでも相変わらず周囲に誤解を与えるような言い方は変わっていない。
　もうアレはデフォルトと諦めるしかないのだ。エレナ自身は、そしてクリュウもまた心のどこかではそう思っていた。
「……あのさ、今日のサクラってやっぱりどこかおかしいよね？」
　しばらく黙っていたクリュウが再び口を開いたのは、そんなタイミングだった。
「そうね。何ていうか、何か別の事を考えてる。そんな感じに見えた

わね」
　いつものサクラならクリュウと二人きりになる為なら何でもするし、こんな絶好のチャンスをふいにするとは思えない。なのに今日の彼女はどこか上の空で、自分達とは違う事を考えて行動をしている。みんなと一緒にいるはずなのに、一人孤立しているような、そんな何だか危なっかしい感じだ。
「やっぱり、ちょっと変だよね」
「――なら、何としても彼女を一人にさせちゃダメよ」
　考え込むクリュウに対し、エレナは軽い口調でそう言った。考え込むと顔を下げてしまう癖のあるクリュウが頭をもたげると、エレナは気さくな笑みを浮かべながらピッと人差し指を立てる。困っている人がいたら放っておけない、そんな姉御肌なエレナがよくする、人にアドバイスする時の癖だ。何度も何度も今まで助けられた、彼女の真骨頂。
「様子が変なら、それこそ一人にさせちゃダメ。あの子は、常日頃だって何をしでかすかわからない子だから、今の状態じゃほんとにシャレにならないわよ」
「で、でも……」
　あんな別れ方をしてしまった以上、今更彼女の傍にいる事はできない。それに、理由はどうあれ今は彼女に拒まれているのだ。それを強引に押し切って一緒にいようだなんて、そんなのエゴと言えるだろう。
　再び考え込むクリュウを前に、エレナは呆れたように大きなため息を零すと、彼の頭を優しく拳で小突いた。
「そんな細かい事気にしないのよ。男なら少しは強引になりなさいよ。特にあんたはそれくらいでやっと人並みくらいなんだから」
「何だよそれ」
　苦笑しながらも彼女のアドバイスを受けてクリュウの中で、自分のすべき行動は決まった。別にケンカした訳ではない。ただ、自分が彼女と顔を合わせづらいだけだ。ならば、自分の中にあるプライドなんて捨てて、アタックあるのみだ。自分の事なんてどうでもいい。今は

サクラの為だけに行動する。常日頃、サクラが自分にしているように。
「ありがとエレナ。やっぱり幼なじみは頼りになるよ」
「バァカ。伊達に十年以上も一緒にいないわよ」
そう言ってエレナは屈託なく笑った。昔から知っている困った時は頼りになる、幼なじみの笑顔。まぁ時々彼女の行き過ぎた行動力で苦労した事もある。冒険だと称してセレス密林で迷子になった時も、彼女はこんな笑みを浮かべて「大丈夫よ。あんたくらいなら私で守ってあげるから」と豪語していた。まぁ結局はアメリアが探しに来て珍しく怒られたのだが。どっちにしても、自分がくじけそうになった時は、いつも彼女がこうして励ましてくれた。
十年以上も、この関係は変わっていない。
「ほら、そうと決まったらさっさ行って来なさい」
二人して一緒に立ち上がると、エレナは彼の背中を押すように尻を軽く蹴飛ばす。実に彼女らしい背中の押し方だが、これ以上頼もしい背中の押し方もないだろう。クリュウは改めて礼を言って家に向かって走り出す。
遠くなって行く彼の姿を見送りながら、エレナは優しく微笑む。
「ほんと、世話が焼けるんだから」
文句を言いつつも、その表情はどこか楽しそうだった。
紅葉と雪が同じ光景の中に収まるイルファ雪山の秋。紅葉の色鮮やかさと純白の雪のコントラストは、至極の景色と言えるだろう。麓の防風林に囲まれた高台にある拠点（ベースキャンプ）から見える景色は、そんな絶景だった。
竜車から降りたサクラは一人身支度を整える。と言っても今回は調査任務なので装備は必要最低限な物に加えて用心の為にいくつか道具（アイテム）を追加しているに過ぎない。その為、拠点（ベースキャンプ）での準備はすぐに終わった。
身に纏うは何年も愛用し続けている、過去の惨劇を忘れない為に作り上げた老山龍ラオシャンロンの素材を使って作り上げられた異国の鎧風の防具である凛シリーズをベースに、スキル構成を考えて腕と

足だけレウスシリーズに換装した最近の彼女お気に入りの装備。背負う武器は雪山で最も効果を発揮する火属性の太刀、飛竜刀【紅葉】。鬼神斬馬刀と対を成すサクラの愛刀の片割れだ。鞘から引き抜くと、まるで暴れられる事を喜ぶように刀身で炎が踊り狂う。愛刀の元気な様を見て満足気にうなずくと、再び鞘に戻す。

支度は整った。いつでも出撃できる状態となったサクラはゆっくりと振り返る。その視線の先にはまだ支度を整えているクリュウの姿があった。全身を砂漠に住む突撃魔獣、角竜ディアブロスの素材を使った褐色の無骨な鎧、ディアブロシリーズで包み、腰には彼女と同じ火竜リオレウスの素材から作られた炎の片手剣、バーンエッジが携えられている。

「ごめんね、待たせちゃって」

屈託なく笑ってディアブロヘルム片手に駆け寄って来るクリュウはいつもの彼と何ら変わりなかった。いつもと変わる事なく、自分に微笑んでくれる。あんな事があってからまだそんなに日が経った訳じゃないのに。

いつもと何ら変わった様子もなく振る舞う彼を前に、むしろサクラの方が居心地の悪さを感じていた。後から思えば、あの時の自分はどうかしていた。発言も、思い返せば自分はかなりひどい事を彼に言ってしまった。翌日には反省して謝ったが、その時にはすでに彼はいつも通りな感じで「気にしないで」と言ってくれた。そして、あろう事か今日の調査依頼のチーム分けを最初の通り遂行しようと言い出した。つまり、自分とコンビでやろうと言ってくれたのだ。

その時は、本当に嬉しかった。あんなひどい事を言った自分を許してくれたばかりか、一緒に居る事を許してくれて。

でも、結局二人の間――というかサクラの方――には何とも言いがたい気まずさが残された。クリュウはそんな空気を払拭しようとあえていつも通り振る舞うが、サクラからしてみればその無理している感じが彼に気遣わせてしまっている、そういう罪悪感があった。

結果、二人の間には未だに微妙な空気が漂っていた。

「……行く」

サクラはそう言って、逃げるように拠点（ベースキャンプ）を出発する。クリュウもまたディアブロヘルムを被って彼女を追いかけてゆっくりとした足取りで歩き出す。拠点（ベースキャンプ）は高台の上にあるので、しばらく下っていけばすぐにアルフレアギルド支部が発行しているイルファ雪山の地図で言う所のエリア1に出る。ちなみに他の面々はそれぞれ東西側を調査中で、最終的には山頂で落ち合う事になっている。

エリア1は横に小川が流れていて、この雪山では比較的暖かい場所だ。草も絨毯のように生えている事から、ここはポポなどの草食動物が食事場として使っている場所でもある。普段ならここはポポが草を食んでいる光景がよく見られるのだが、村長の言う通りポポの姿は一匹も見えなかった。

「……静かね」

「そうだね。本当にポポの姿がないね」

クリュウは辺りを見回してポポの姿を探すが、一行にその姿を発見できずにいた。一方のサクラは歩きながら、その異常な光景に見覚えがあった。それはあの事故の前兆の光景と、そっくりな景色だった。

「……まさか、ね」

一瞬頭に浮かんだ可能性をすぐに振り払う。とにかく今はなぜポポの数が減っているのかを調査するのが先決だ。その為には、さらに雪山の奥へと進む必要がある。歩みを止めては、ならない。

無言で歩き続けるサクラの背中を見ながら、クリュウもまたゆっくりとした足取りで進む。前を行くサクラの背中が、妙に無理をしているように見えるのは、気のせいだろうか。やはり、今日のサクラはどこかいつもと違う。そんな風に感じていた。

「サクラ」

声を掛けると、サクラはゆっくりと振り返った。他人が見れば、いつもと変わらない無表情に見えるだろうが、クリュウからしてみればやはりいつもの無表情とどこか違うように感じた。

「肉、焼いていいかな。今回は支給品もないからさ」

本当は道具袋（アイテムポーチ）の中にこんがり肉は入っているの

で、それを食べればいい。サクラも同じ事を思っているのか、怪訝そうに首を傾げている。そんな彼女の反応を見て、クリュウは慌てたように続ける。
「その、温かい方がやっぱりおいしいからさ」
「……そう」
サクラは短く了承すると、その場に腰掛けた。それを見てクリュウは安堵すると「じゃあ肉焼きセット、持って来るね」と言い残して踵を返して拠点（ベースキャンプ）へと走って行く。そんな彼の後ろ姿を微笑を浮かべながら見送るサクラ。
川の向こうには平原が広がっていて、このずっと向こうにイージス村がある。川幅のある川の対岸には紅葉に染まった木々が美しい景色を作っていて、依頼で来ていないのならここでお茶でも飲んでいたい。そんな風にすら思ってしまうような光景だった。
「……クリュウと二人きり、か」
今更ながら、今の状況を思い返す。いつもなら彼を独占できると嬉しくて大喜びするような展開だが、今はどうしてもそんな気にはなれなかった。ハッキリとした理由がある訳ではないが、ただ妙な胸騒ぎがあって、それどころではないというのが本音。あの夢を見た日から、ずっと胸の奥に違和感を感じ続けている。そしてそれは、日増しに強くなっているようだった。
「……この山に、謎を解く鍵がある。そんな気がする」
見上げたイルファの頂は遠い。だがこの山に、自分の中に渦巻く胸騒ぎの謎を解く鍵がある。そんな気がしていた。だからこそサクラは単独行動を志願した。自由に動けて、皆に迷惑を掛けない為に。しかし結果は自分の失態でクリュウが心配してついて来てしまうという、ある種最悪とも言える結果となってしまった。
彼に迷惑を掛けたくはないし、危険にも晒したくない。そんな想いはあるのに、自分の思う通りには進まない。自分の不器用さには心底呆れ果て、嫌気が差す。
自分は真っ直ぐ進む事しかできない。フィーリアやシルフィードのように避けて通ったり引き返したりといった器用な真似はできず、

目の前の障害物を斬り伏せ、ただひたすらに真っ直ぐに進み続ける――動き出したら、もう前に進むしかないのだ。
「サクラぁッ！」
だが、そんな猪突猛進しかできない自分の手綱を引いてくれる者が、ここにはいる。
拠点（ベースキャンプ）の方から走って来るクリュウの手には肉焼きセットが握られている。嬉しそうに走って来る彼を見て、サクラの頬は自然と緩んだ。
結局、彼と行動を共にしてしまった。だが同時にそれは謎の胸騒ぎのせいでどこかで不安を感じている自分にとって、何にも代えがたい支えとなっていた。彼と一緒にいれば、自分は間違った方向には進まない。前にしか進めなくても、彼が手綱を引いてくれれば曲がる事もできる。
彼に危険が迫るのなら、自分がその危険を斬り伏せる。これまでと同じ、主君を守る侍の如く自分の責務。そう思えば、少しは彼と一緒に来た事に対する後悔が和らいだ。
走り寄って来たクリュウは早速肉焼きを始める。いつものように肉焼きの歌を口ずさみながら楽しそうに肉を焼く彼の姿を見ていると、やっぱり幸せな気分になれた。改めて気づく――自分はどうしようもなく、彼が大好きなのだと。
「上手に焼けました……はい、サクラ」
見事なこんがり肉を焼き上げたクリュウは自分よりも先にサクラに肉を渡した。こういう時は素直に受け取った方がいいと、経験上知っているサクラは短く「……ありがと」と礼を言ってそれを受け取る。
焼きたての肉は香ばしい香りを漂わせ、実は若干小腹が空いていたお腹が欲するように小さく鳴く。幸い小さな音だった事と、彼が自分の分の肉を焼き始めたおかげで彼には聞こえなかったようだ。ほっと安心して、サクラはこんがり肉にかぶり付く。
「……おいしい」
ただ肉を焼いただけなのに、とてもおいしかった。噛み締める度に

わかる、彼の愛情。本当はわかっていた。自分がいつもとどこかが違うと気づいていた彼が、自分を気遣っている事を。自分を気遣う、彼の愛が、このこんがり肉にはしっかりと表れていた。
食べ進めるごとにお腹と同時に心も満たされていく。言いようのない不安の氷が、彼の温かな優しさで溶けていく。そんな気がしていた。
幸せそうにこんがり肉を食べる彼女の姿を見て、クリュウもまた安堵していた。やっと、いつもの彼女らしくなった。そんな風に感じていた――結果、そのせいで余所見をしていた為に焼きあげのタイミングを見誤り、生肉は見事なコゲ肉になってしまった。
久しぶりの失態にがっくりと項垂れる彼を見て、サクラはおかしそうに小さな笑みを浮かべていた。
「これは……」
「……酷いのぉ」
イルファ山脈西部、狩場認定されていない名もない広場に来たフィーリアとツバメ。そこで二人が見たのは――無惨にも食い殺されたポポの亡骸だった。それも一体や二体ではない。この広場だけでポポの亡骸は十体近くあった。群れでいた所を一網打尽にされたようで、そのうちの半数はまだ子供のポポだった。いずれも、巨大なモンスターに食い殺されたように腹部は抉られ、真っ赤な血が薄っすらと積もっている白雪を朱色に染めていた。
ポポの亡骸を一体一体見ながら、二人はその無惨な光景に顔をしかめた。
「これは、リオレウスのような大型種に襲われたようじゃな。爪で斬られた跡や噛み付かれた跡がハッキリと残っておる」
「で、でも……、リオレウスもリオレイアも雪山には現れません。雪山に来る大型モンスターは、ドドブランゴやフルフルです」
「じゃが、これはそのような輩にやられたレベルではないぞ」
「……それは、そうですが」
だが事実、フィーリアの言う通り雪山に現れるようなモンスターは危険度は高いものの、これほど大きな傷跡を残せるような種ではな

い。しかし目の前に倒れているポポの傷跡は、明らかにドドブランゴやフルフルに襲われたようなレベルではなかった。
　フィーリアはまだ生まれて間もないポポの亡骸を見つけると居た堪れない気持ちになったのか、近くに咲いていた花をいくつか積んで亡骸の前に供えると、手を合わせた。そんな彼女の姿を横目に、ツバメはイルファ雪山の頂を見上げた。全体的にこの地域は晴れてはいるが、なぜか山頂付近だけには妙な雲が垂れ込めていた――まるで、何かを隠しているかのように。
「……先を急ぐぞフィーリア。何か、嫌な予感がするのじゃ」
　いつになく真剣な眼差しで、ツバメはそうつぶやいだ。

第２０１話　山頂に轟きし凶竜の雄叫び　絶望との再会の果てに

　エリア2から洞窟の中に入ったクリュウとサクラはそのままエリア4、5を抜けて山頂付近のエリア6へと到達した。外に出ると、麓は晴れていたはずだが、そこは曇天の空が広がっていた。チラチラと雪が振っていて、ホットドリンクを飲んでいても寒さで思わず身を震わせてしまう。口から吐き出される息は純白で、ゆらゆらと空へと昇っていく。
　広場は山頂付近では最も広く、背後は崖となっており、前方には断崖絶壁が広がっている。いつもならここにはギアノスやブランゴといったモンスターがいる事が多いが、今日はなぜか普段は麓の方にいるはずのポポが三匹程ゆっくりとした足取りで闊歩していた。
「こんな所にポポがいるなんて珍しいよね」
　普段は見られない光景にクリュウが思った事を素直に言うと、隣に立つサクラも同意する。
「……ポポは余程の事がない限り山登りはしないわ。何かに追われてここまで来たのか、何にしても異常事態よ」
「何かに追われて来たって……一体何に？」
「……それはわからない。けど、用心したほうがいいのは事実」
「そうだね」
　サクラの言う通り、雪国育ちのクリュウでさえこういう光景は見た事がない異常事態だ。彼女に言われなくても自然と気は引き締まる。原因を探るように辺りを見回しながら歩く彼の後ろから、サクラもゆっくりとした足取りでついて行く。しかし彼女の視線はある一転に注がれている。その方向には山頂がある。イルファ雪山にはそもそも大型モンスターの出現率が低い為、滅多な事では山頂まで登る事はない。だが今回は調査依頼なので全てのエリアを回る事が前提条件となっている。
　二人はこのまま山頂を目指し、そこで他の面々と合流する手筈に

なっている。そろそろ他のチームは着いているのだろうか、そんな事を考えるクリュウとは違って、サクラは山頂に何かある気がしていた。確証はないが、これまで多くの死線をくぐり抜けて来た勘が、確かにそう告げていた。

一体この先に何があるのか。この胸の奥に渦巻く不安の正体は何なのか。全ては、行ってみないとわからない。

「ねぇサクラ。何か感じる？」

考え込んでいた時、突然話しかけられたサクラは一瞬呆けてしまうが、すぐに小さくうなずいて答える。するとクリュウは「そっか……」とつぶやき、山頂を見上げる。

「……クリュウも、何か感じる？」

「うぅん、言葉ではうまく説明できないけど……何となく、空気が緊張している気がするんだ」

クリュウもいつもの雪山と何かが違う事を感じ取っていた。言葉にはできなくても、きっと自分と同じものを感じている。サクラにはそう思えた。

「……山頂は合流地点。どちらにしても、行かなくちゃいけない」

「そうだね。とりあえず、何が起きても即時対応できるよう備えながら行こう」

お互いにそれぞれバーンエッジ、飛竜刀【紅葉】の柄に手を掛けながらゆっくりとした足取りで山頂を目指して歩き進む。雪を踏み締める音も最低限なものにしながらのゆっくりの行軍。視線は常に様々な範囲に向けられ、わずかな動きも見逃さない。雪山特有の寒さも感じなくなるほど、感覚が索敵に特化される。目と耳を総動員しながら、足の裏から伝わるわずかな振動も見逃さない。そんないつになく警戒態勢のまま二人は歩き進め、ついに山頂ことエリア８へと到着した。

エリア８は周りのほとんどを雪と岩の壁で覆われ、南側の一部だけが切り立った崖となっている、闘技場のような形状をしている。広さは先程のエリア６よりは狭いが、それでも十分に動き回れる程の広さはある。イルファ雪山は大昔は火山だったと言われており、この凹ん

だ地形の事を専門的にはカルデラと称するようだが、イルファの頂はそんな形状をしていた。一部壁が壊れている場所は、エリア7や6に繋がる道と同様に大昔に溶岩が流れた後と言われている。
　エリア8に入った二人はすぐに辺りを警戒しつつ、エリア全体をくまなく見回す。だがそこには何も無かった。モンスターの一匹はおろか、合流する手筈になっている他の面々の姿も見られなかった。
「みんな、まだみたいだね」
「……ええ」
　辺りを警戒しながらも、拍子抜けしてしまったクリュウは柄から手を離す。サクラは依然として柄に手を当てながら辺りを見回す。その隻眼はいつになく鋭く、わずかな動きも見逃さない。
　エリアのちょうど真ん中にまでやって来たクリュウは改めて周囲を見回して何もいない事を確認する。すると、
「あれ、何だこれ」
　クリュウが見つけたのは、平らに積雪している中に見つけたわずかな膨らみだった。クリュウはそれに近寄ると、手で上に積もった雪を払いのける。周囲を警戒しながらサクラも彼の行動を見守る。そして、最後の雪を払いのけ、その正体に至る。
「これって、ポポだよね？」
　クリュウが見つけたのはポポの死骸だった。地面の上に横たわって死んでいるポポは、上に積もっていた雪を見ても少し前に殺されたとわかる。その証拠に周囲の雪の下には真っ赤な血が凍りついていた。そして、ポポの腹は何かに食い荒らされたようにポッカリと失われていた。
「……これ、何かに襲われたんだよね？」
　ポポの亡骸の状態を見て、どんなモンスターにやられたのかを推測するクリュウは意見を求めるようにサクラに振り返る。だが、
「サクラ？」
　サクラは無言でポポの亡骸を見詰めていた。眼帯にそっと手を当てながら、残っている右目でポポの傷跡を凝視する。その表情は信じられないものを見たかのように大きく見開かれ、寒さとは違った歯の

震えが起きる。
「どうしたの？」
彼女の尋常ならざる反応にクリュウが改めて声を掛けるが、サクラは何も答えない。ただジッと、ポポの亡骸を見詰めている。
ズキッと、眼帯の奥にある失われた左目が痛んだ。もう視力は失われたが、完治はしているはずの左目がズキズキと痛む。痛みに顔を顰めながら、しかし彼女は決してポポの亡骸から視線を逸らそうとはしない。
「サクラ、ねぇどうしたの？　ちょっと変だよ？」
「……まさか、そんな事って」
クリュウの問い掛けにも答えず、サクラはブツブツとそんな事をつぶやく。いよいよ彼女の様子がおかしいと思い彼女の両肩を掴んで「しっかりしてッ」と激しく揺らすクリュウ。その時、バサッという何かが落ちる音がした。振り返ると、自分達が入って来たのとは違う、反対側にある道の方に何かが横たわっていた。それは血塗れのポポの子供だった。
「え……」
なぜそんなものが。さっきまで何もなかったはずだ。そこまで思考が至ると、クリュウはゆっくりとポポが落ちて来たであろう方向を見上げる。そして、
「何、あれ……」
呆然と呟く彼の言葉に、サクラもゆっくりと視線を同じ方向へ向け――目を見開いた。
「……あいつは」
そしてそれは――現れた。
岩壁の上から飛び降りたそれは、ちょうどエリア７へ続く道の前に立ち塞がるように着地した。その衝撃と風圧に柔らかな新雪はあっという間に飛び散り、その異形の存在を純白の粉塵で包む。
粉塵の中から、明らかな敵意と殺意に煌めく蒼色の瞳が不気味に輝く。粉塵が晴れると、ようやくその全貌が顕になった。
それは褐色の鱗と甲殻に覆われたモンスターだった。長い首を持

ち上げて顔だけをこちらに向けて悠然と佇むそれは、四肢でしっかりと地面を踏みしめてそこにいた。その異質な姿に、クリュウは強烈な違和感を抱いた。

自分の持っている知識では、飛竜種は通常後脚で地面を踏み、前脚は脚としては退化して翼へと進化している。その為、一見すると飛竜種は逆三角形のようなシルエットをしている。しかし目の前のそれはしっかりとした前脚を持ち、人間で言う這っているような印象を受ける。結果、その体高は低く、見るからに地上戦に特化している。

だがドドブランゴやババコンガのような牙獣種とも明らかに違う。よく見れば、前脚には巨大な翼膜のようなものが備わっていて、それがきっと翼なのだろう。そう考えれば飛竜種に分類されるが、未だかつてクリュウはあのような飛竜種を見た事がなかった。自分の目でも、そして学生時代に散々読み通した教本にも、あのような形状の飛竜種は見た事はなかった。

下半身は通常の飛竜種同様屈強な脚と、長い尻尾を持っている。しかし上半身の翼を備えた巨大な腕は、明らかに普通の飛竜種とは異なっていた。

全くの未知の存在に困惑し、動けずにいるクリュウ。しかし、そんな彼の隣に立つサクラは違っていた。ゆっくりとこちらに振り返る褐色の竜を凝視しながら、その姿をしっかりと目に焼き付ける。そしてそれは、遠い過去の記憶の中のそれと重なっていく。

横倒しになった母を食い殺し、家族をその巨大な爪で斬り殺し、最後には父までも殺した謎のモンスター。母の腹に食らいつき、真っ赤に染まったその凶悪な横顔を、サクラはしっかりと右目に焼き付けていた。そしてその竜と、今目の前にいる竜の姿が完全に重なるのに、そう時間は掛からなかった。

「……あ、あぁ、あぁあぁあぁ」

見開かれた瞳からは涙が溢れ、次第にその瞳は妖刀のように鋭く細まる。全身に力が漲り、気配を静から動へと切り替える。全身を覆うのは、尋常ならざる殺意。噛み締める口からは憎悪に満ちたうめき声が漏れ、背負った飛竜刀【紅葉】を引き抜き、前傾姿勢を取る。その

姿はまさに野獣とも言うべきものだ。
「さ、サクラ？」
サクラの異常に気づいたクリュウだったが、一瞬遅かった。
「がああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」
野獣のような咆哮を上げて、サクラは突撃した。クリュウの止める手が触れるよりも早く、雪の粉塵を纏いながら一直線に突貫する。その速度はクリュウがこれまで見て来たいずれの突貫よりもずっと早い。弾丸のような、常軌を逸した速度だ。
思考を憎悪と殺意に染めながら、サクラは確信した――今目の前にいるこの竜こそ、あの日両親を殺した憎き仇敵だと。
暴風を纏いながら突貫する彼女を前に、褐色の竜も相手を本気で敵と認識したのだろう。グッと前脚を踏ん張りながらゆっくりと胴を持ち上げる。フゥと吐いていた白い息が一転してスゥっと口の中に吸い込まれていく。そして、野獣の如き突貫で迫るサクラの刀が触れる寸前、溜め込んだ力と空気を全て放出するように、褐色の竜は吼えた。
「ギャァオオオオオオオオオオオッ！」
山全体を震わせるかのような巨大な咆哮（バインドボイス）。放出された膨大な声量で押し出された空気の壁は暴風と化し、接近していたサクラの纏う風を一瞬で吹き飛ばし、彼女の動きを止める。耳栓スキルのないサクラはその咆哮をモロに受けて膝を折った。少し離れていて無事だったクリュウはサクラの動きが止まったのを見て慌てて動く。
「サクラぁッ！」
急いで走り出すが、クリュウの足ではサクラが一瞬で詰められる距離を追いつく事はできない。それでも諦めずに走り続けながら、道具袋（ポーチ）から素早く念の為に持ち歩いている閃光玉を手に取ると、褐色の竜の前に放り投げた。
上げていた上半身を本来の高さまで戻し、まだ耳を塞ぎながらも憎悪に満ちた隻眼で睨むサクラを見据え、グッと腕に力を込める。だが

その直後に、クリュウが投げた閃光玉は炸裂した。
「ギャアァッ!?」
突然出現した膨大な光量に目を焼かれた褐色の竜は視界を失い、目を焼く痛みに身を震わせる。
何とか竜の動きを封じたクリュウは安堵するが、そんな彼の想いに反するようにサクラが動く。何と、撤退するどころかそのまま竜に斬り掛かったのだ。
「サクラッ!?」
サクラの振るった刀の刃先は竜の頭頂部に炸裂し、辺りの雪を一瞬で溶かす膨大な炎を放出する。ブランゴ如きなら一撃で焼き殺される一撃に、さすがの褐色の竜も後退する――違う、あれはダメージを受けたのとは違う動きだ。クリュウが叫ぶよりも早く、褐色の竜は力を溜めながら後退したかと思うと、そのままその場で回転した。四肢を全て使っての、通常の飛竜種の回転攻撃とは明らかに違う、一瞬での全方位回転だった。突然の回転攻撃に、さすがのサクラも回避できずに振り殴られた屈強な腕に弾き飛ばされた。しかしサクラは空中で器用に回転して足から地面に着地すると、痛む体を無視して再び突貫した。
「サクラッ！　下がってッ！」
クリュウの必死の声も聞こえないのか。サクラは減速する事なく再び褐色の竜に迫る。しかし竜は再びその場で回転した。腕を振り殴る一撃はさすがに回避したサクラだったが、次に現れた尻尾は回避できず再び直撃した。短く悲鳴を上げて吹き飛ぶサクラは、今度は背後から地面に上に倒れた。
「サクラッ！」
倒れたサクラにクリュウはすぐに駆け寄る。その間もクリュウは竜の動きを注視するが、竜は三度目の回転攻撃を行う。リオレウスやリオレイアなどは閃光玉を受ければその場で動かなくなる傾向があるが、どうやらあの竜は閃光玉を受けると無茶苦茶にその場で回転攻撃をしまくるらしい。閃光玉で隙を作っても、剣士では接近する事は難しそうだ。そんな事を考えつつサクラに駆け寄ったクリュウはす

ぐに自分の道具袋（ポーチ）から回復薬グレートを取り出し、彼女に飲ませようとする。だが、
「……邪魔するなッ！」
　起き上がったサクラは目の前にいる彼をクリュウだと気づいていないのか、激しい憎悪に満ちた眼光で睨みつける。邪魔をするなら殺す。そんな威圧を込めた視線にクリュウは思わず彼女の肩に当てていた手を離した。その隙を突いて彼を跳ね除けてサクラは立ち上がると、回復をする事なく三度目の突貫を仕掛けた。竜が一瞬動きを止めた隙を突いてサクラの振るった飛竜刀【紅葉】の一撃は再び竜の頭頂部に炸裂する。炎を激しく燃え上がらせながら、サクラはその場で刀を縦横無尽に振るう。峻烈とも思える攻撃の連続は一見すると勇猛果敢に見える姿だが、良く見れば斬り方が無茶苦茶だ。いつもの彼女なら激しい剣撃の中でも冷静に刀の向きを変えて刃が最大の威力を発揮する角度で振るっている。だが今の彼女の攻撃はそんな事を一切考えない、ただひたすらに刀で殴り掛かっているような、そんな支離滅裂な攻撃だった。
　さすがのクリュウもいよいよサクラの様子がおかしいと気づき、彼女を援護するように竜に迫る。このまま彼女一人に攻撃させていては彼女の身が持たない。そう考えたクリュウはまず道具袋（ポーチ）からペイントボールを取り出して竜に投げつける。投げ慣れたペイントボールはしっかりと竜の背中に命中した。これで山の周囲にいるはずの他の皆にもこちらの異変に気づくはずだ。そしてクリュウは竜に迫ると、その翼膜を備えた太い腕に斬り掛かった。刃先が触れた瞬間、彼女の飛竜刀【紅葉】同様に荒れ狂う炎が竜の体表を焼く。しかし灼熱の業火を受けた竜の鱗は、まるで何事も無かったかのように不気味に煌めいていた。
「火が、効かないのか……ッ!?」
　属性攻撃が通じないと見るや、クリュウはバックステップで距離を取る。だがサクラは我武者羅に刀を振り回していた。言葉にならない奇声を上げながら、目の前の竜の頭に全力で斬り掛かる。だがその間に、奴の動きを制限していた閃光玉の効力が切れる。それを見たク

リュウが「危ないサクラッ！」と叫ぶと、ようやくサクラは状況に気づいたのだろう。竜と目が合った瞬間危険を感じ取った彼女はまるで飛ぶようなバックステップで大きく後退して距離を取った。
視力を取り戻した褐色の竜はその場で両腕に力を込めるように身を縮めると、一気に解放。両腕の力と脚で一気に後ろへと跳躍した。バックステップで距離を取っていた二人からは一気に数十メートルは離れる。これだけの距離があれば、相手がどんな行動をしても対応できる自信が、クリュウの中にはあった。
「次は何だ。ブレスか……ッ!?」
全く正体不明の竜相手に、ひとまず一般的な飛竜種にありそうな行動を予想するクリュウ。どんなブレスかはわからないが、とりあえず直線上にいなければ大丈夫だ。これまでの経験で、そう踏んでいた。ちらりと横を見ると、サクラは相変わらず血走った隻眼で奴を睨みつけている。いつまた斬り掛かるかわからない。早く頃合いを見て撤退しなければ。そんな事を思っていると、竜が動いた。
「ギョワアアアアッ！」
褐色の竜はブレスを撃つでもなければ咆哮（バインドボイス）を上げるでもなかった――突如、一直線に突っ込んで来たのだ。
「何ッ!?」
突進など、一般的な飛竜にありがちな攻撃パターンだ。それくらいクリュウも予想はしていた。だが、奴は彼の予想を遥かに上回る動きを見せた。通常の飛竜種は二本脚で走るが、奴は四肢を使って猛烈な勢いで突っ込んで来た。その速度はあの突撃の魔獣、ディアブロスにも引けは取らない。あまりの速さにクリュウは驚き、対応が遅れてしまう。慌てて盾を構えてガードするが、ものすごい衝撃と共に弾き飛ばされた。雪の上に背中から倒れ、ヘルムの下で「くそぉ……ッ」と悔しげにくぐもった声を上げる。
「そうだサクラッ！」
ガバッと身を起こして彼女の姿を探す。するとサクラはまたしても咆哮を上げて突進を終えたばかりの竜に突貫を仕掛ける。まだ突進を終えた直後で動けない竜に背後から襲いかかったサクラだった

が、竜は隙を見せる事なく体勢を立て直して振り返ると、突貫して来るサクラ相手に再び咆哮（バインドボイス）を轟かせた。これまたディアブロスにも匹敵するものすごい咆哮に、サクラの体は呆気無く吹き飛ばされた。これまでのモンスターと違い、奴の咆哮には猛烈な風が発生するようだ。

しかしそんな異色な咆哮を前にしても、クリュウがより驚いたのは奴の突進後の隙の無さだった。通常の飛竜種は二本脚で全力疾走する為、止まる際には身を投げ出して無理やり止まる奴が多かった。その為、突進後の隙は極めて大きかった。ディアブロスはその強靭な脚を使って転倒する事なく砂の上を滑走しながら止まってはいたが、それでもわずかな隙はあった。しかし目の前の竜は四本の脚を全て使って突進し、停止もまた四本の脚全てを使って止まる為、ディアブロス以上に隙がなかった。これでは、突進直後の隙を突いて攻撃する事は不可能も同然だった。

弾き飛ばされたサクラはすぐさま体勢を立て直すと、諦めず再び突貫を仕掛けようとする。だがそれを止めるようにクリュウが彼女の肩を掴む。

「サクラッ！　いい加減にしてよッ！　まともにやり合っても勝てる相手じゃないッ！　今すぐ逃げるよッ！」

「……放せッ！　邪魔するなら斬り殺すッ！」

「サクラ……ッ!?」

ギロリと睨んで来るサクラの隻眼は完全に理性を失っていた。激しい憎悪に支配された隻眼はクリュウを威嚇すると、再び褐色の竜に向けられる。その視線の先で竜はゆっくりとした動作で右腕を引く。そして狙いを定めながら、力を溜めるように縮ませていた筋肉を一気に解放し、力強く腕を地面に向けて押し出した。手のひらがぶつかった瞬間、地面にあった積み重なって硬くなった雪の塊が飛び出し、一直線にクリュウ達に襲い掛かる。迫り来る雪の塊を前にクリュウはとっさにサクラの前に立ってガードする。受け止めては体勢が崩れると咄嗟に盾の向きを変え、盾の表面で雪の塊を滑らせて衝撃を逃がす。結果、雪の塊は盾で流された事で軌道を変えて背後に着弾した。

着弾と同時に辺りの雪を吹き飛ばしたのを見て、その威力が直撃すれば骨の一本や二本が平気で折れるレベルだと知り、背中に嫌な汗が流れた。
攻撃をうまく防いでほっとしたのも束の間、サクラは再びクリュウを振り切って突貫を仕掛けてしまう。クリュウの制止の声など聞かず、咆哮しながら我武者羅に真正面から突っ込んで行く。褐色の竜はそれに対抗するように再び四肢を使って低い姿勢のまま突進を開始する。全力で迫る双方の距離はあっという間に消え、サクラは身の危険を感じて横へと跳んだ。うまく突進を回避しし、転ぶ事なく二本の足で着地したサクラはすぐさま反転攻勢に出ようとする。だが、そこで彼女は信じられないものを見た。
褐色の竜はサクラが避けた後も進み続けたかと思うと、その場で一八〇度反転したのだ。そして止まる事なく、再びサクラに向かって突進を続ける。その速度は衰える事なく、一気に彼女との距離を詰めてしまう。サクラは今度はもはや体勢など気にする事なく身を投げ出して回避した。雪の上に倒れ込んだ彼女のすぐ後を、褐色の竜が滑走する。
四肢を使って見事な急停止を見せる竜に対し、サクラはまだ体勢を立て直せずにいた。それを援護するようにクリュウが竜へと突っ込み、側面から再び腕に向かって斬り掛かる。
「うぉらッ！」
振るわれたバーンエッジは炎を爆ぜるが、竜の堅牢な鎧はその程度の炎ではビクともしない。続けて剣を振るった先は腕の先端に付いている爪だ。ここをうまく叩き割れれば状況は変わるかもしれない。そんな事を考えながら振るった剣だったが、その一撃は呆気無く弾かれてしまった。
「硬ぁ……ッ！」
ビリビリと痺れる腕が、その硬さを表しているかのようだ。バーンエッジでは刃が通らないとわかるや、攻撃箇所を変更する。だがその頃には相手もこちらへと振り返り、再びわずかに後退する動きを見せる。その動きはもう何度も見ていたので、すぐさまクリュウは盾を構

えると、直後に強烈な衝撃が彼を跳ね飛ばした。
「くぅ……ッ」
回転攻撃を何とか耐えたクリュウ。その横をサクラが通り抜け、再び竜に斬り掛かった。爆炎を纏いながら奮闘するサクラだが、彼女の峻烈な攻撃の嵐を受けても竜はビクともしない。横一閃に刀を煌めかせ、サクラは仕方なく下がる。だがそんな彼女を追撃するように竜は再び雪玉を飛ばす。回避行動中だったサクラは突然の攻撃に回避できずに雪玉の直撃を受けて吹き飛ばされた。地面に倒れ、苦しそうに悶える彼女の姿を見てクリュウはすぐさま閃光玉を投げて竜の動きを封じた。
視界に入った小さな物体を目で追っていると、突然破裂して膨大な光の奔流が辺りを支配する。同時に再び視界を封じられ、竜は悲鳴を上げながらその場で暴れる。
暴れ狂う竜を横目にサクラに駆け寄ったクリュウは今度こそ回復弾グレートを彼女に飲ませる。今度ばかりは素直に飲んだサクラだったが、一本飲んだだけですぐにフラフラと起き上がる。
「今のうちに逃げるよッ！」
「……うるさい。逃げたければ勝手に逃げて。私はあいつを殺す」
激しい憎悪に満ちた瞳で言う彼女の言葉と表情に、クリュウはゾッとした。今まで見た事がない程に憎しみに狂った彼女の姿は狂気すら感じられる程に激しく、禍々しかった。いつもの無感情な表情とは比べ物にならないほど感情任せな彼女の姿に、クリュウは困惑しながらも彼女の肩を掴んで説得を続ける。
「何でそこまであいつと戦いたいのさッ!?」
クリュウの問いに対し、サクラはギリッと歯を軋ませると、悶え苦しむ竜を見ながら吐き捨てるように叫んだ。
「――あいつが、お父さんとお母さんを殺したからよッ！」
激しい憎悪と共に叫んだのは、恐ろしい事実だった。クリュウは彼女の口から語られた真実に言葉を失う。そんな彼を横目に、サクラは苦々しくつぶやく。
「……忘れやしない。あいつが、お母さんを食い殺した。お父さんを

斬り殺した。家族を皆殺しにした――これは仇討ちなのよ。邪魔するなら、クリュウでも容赦しない」

ギロリと、血走った瞳で睨みつける彼女の視線にクリュウは黙り込む。否、恐怖のあまり声が出なかったのだ。今まで、サクラのここまでの激怒を見た事がないし、そもそも手がつけられない程怒っている時は大概は別の対象に向けられている。正面から、こうして彼女に激怒された経験がないクリュウは彼女の本気と、憎悪の激しさ、全身を覆う禍々しいまでの殺気に、呑まれてしまったのだ。

何も言わずに呆然と立ち尽くすクリュウなど眼中にないとばかりにサクラは彼の横を通り抜けると、再び竜に向かって突貫する。憎しみに狂うあまり、その戦い方はあまりにも粗雑だ。数撃当てるたびに竜に跳ね飛ばされて雪の上に倒れる。それでも立ち上がり、また突貫し、また弾き返される。その繰り返しだ。その自分の体の事など無視した特攻にも等しい攻撃の連続。しかしそんな無茶苦茶な攻撃では竜はビクともしなかった。前へ身を押し出すようにしての噛み付き攻撃。歯は避けたものの頭突きの勢いは回避できず、再び弾かれた彼女はまたしても雪の上に倒れる。みぞおちに入ったのか、激しく咳き込むサクラ。それを見てクリュウが走り出すが、竜は今度はクリュウに狙いを定めた。再び四肢を使っての雪上だと思えない速度の突進で彼に迫る。慌てたクリュウは横へ緊急回避して何とか避けたが、起き上がる頃には少し離れた場所に急停止した竜が再びこちらに向き直っている。本当に突進後の隙がない。

咆哮を上げながらまたしても突進を仕掛けて来る。今度はギリギリまで回避したが避け切れず、接触する寸前で盾でガードした。結果直撃こそ避けたが彼の体は簡単に跳ね飛ばされて雪上に倒れる。だがいつまでも倒れてはいられない。奴の突進後の隙のなさはこれまでも何度も見ていた。痛む体にムチを打って起き上がるクリュウを、竜の飛ばした雪玉が襲う。背中に凶弾を受けたクリュウは正面から再び雪の上に叩きつけられた。この一撃には強固なディアブロシリーズでもかなりのダメージを負ってしまい、クリュウは動けなくなる。そんな彼を助けるようにサクラが再び突貫を仕掛けた――否、も

はや彼女にクリュウの姿は見えてはいなかった。ただひたすらに、目の前の仇敵を殺す。それだけしか今の彼女の頭にはなかったのだ。
クリュウを動けなくした事で、今度は接近するサクラに狙いを定めた褐色の竜は再び正面から突進を仕掛ける。サクラは今度は回避せずに正面から真っ向勝負。跳躍し、接近する竜の頭部目掛けて飛竜刀【紅葉】を叩き込んだ。爆ぜる炎と強烈な一撃にさしもの竜も怯んで脚を止めた。結果サクラは退かれる事なく、すぐさま着地と同時に怒涛の剣撃の嵐を叩き込む。荒れ狂う剣撃の嵐は常の彼女の緻密な斬撃には程遠く、長期戦をしている訳ではないのにすでに刀の刃はボロボロになり始めていた。それでも彼女はそんな事お構いなしに刀を振るう。野獣にも思えるような咆哮を上げ、竜の返り血を浴びながらただひたすらに刀を振るい続ける。その姿は鬼神の如き戦姿だった。
だが怯んだ程度の一瞬の隙ではそう長くは刀を振るってはいられない。再び噛み付き攻撃を受けたサクラは雪の上に転がった。全く回復をせずにただひたすらに突貫ばかりを繰り返して来たサクラも、さすがにダメージが大きいのか立ち上がったものの再び突貫を仕掛ける事はなく、痛みを耐えながらフラフラと立っているのがやっとという状態だった。長期戦に備えての体力配分を無視した結果だ。
一時的とはいえスタミナ切れとなったサクラに対し、褐色の竜は容赦なく襲い掛かる。しかし猛烈な勢いで迫る竜相手にサクラは一切目を背ける事なく真正面から睨みつける。最後の一瞬まで絶対に憎しみの眼光をやめない。それが彼女のせめてもの抵抗だった。
激しい憎悪に満ちた刃物のように鋭い隻眼で睨みつけながら、サクラは真正面から竜の突進を受ける。だが、その寸前で彼女の体は横へと突き飛ばされた。突然の衝撃にやっと我に返ったサクラは一瞬前まで自分がいた所を見て絶句した。そこには、横から自分を突き飛ばしたクリュウの姿があった。必死の形相で自分を突き飛ばした彼と一瞬目が合った――次の瞬間、クリュウはサクラの目の前で竜の突進の直撃を受けて吹き飛んだ。
「クリュウッ！」
竜の突進を受けて吹き飛ばされた彼の姿を見て、サクラは着地と同

時に突貫した。残る体力を振り絞って、体中の筋肉の全てを駆使して、彼女の最高に等しい速度での突貫。それは常人のそれを遥かに上回る速度だった。雪を吹き飛ばし、風を纏いながら空気の壁を突き破っての突貫だ。

弾き飛ばされたクリュウの体は一直線に吹き飛ばされる。その背後には彼を受け止める壁はなく、雪風が吹き込む大きな空間が広がっていた。その下には、彼の足を立たせる床はない。あるのは――断崖絶壁。

サクラは必死になって突貫しながら、クリュウに向かって腕を伸ばした。クリュウも自分の置かれている状況を知って慌てて彼女の方へ腕を伸ばす。

「クリュウッ！」

「サクラぁッ！」

互いに伸ばした手が、あと一歩で触れる。そんな距離にまで縮まった。だが無情にもそのあと一歩が足りなかった。一度触れそうなくらいにまで迫った互いの指はあっという間に離れ、そして、

「クリュウぅッ！」

「サクラあああああぁぁぁぁぁぁ……ッ！」

――彼の体は、崖下へと落ちて行った。

雪の混じった風は、あっという間に彼の姿と声をかき消してしまった。伸ばした腕は空を掴み、その指は彼には届かなかった。サクラは絶叫しながらそのまま膝を折った。先程まで憎しみ一色に染まっていた隻眼は見る見るうちに鋭い輪郭を失っていき、頬を大粒の涙が流れる。

白い息と一緒に零れるのは、彼の名前をつぶやく彼女の震えた声。何度も何度も彼の名前を繰り返すが、決してそれに反応する声はなかった。絶望のあまり、頭の中には彼の事ばかり広がり、周りの音が消えていく。その背後では褐色の竜が大きく後ろへと跳躍し、彼女から離れた場所に着地した。そしてゆっくりと彼女の方へ向き直り、狙いを定めると再び雪玉を投げ飛ばした。

目の前でクリュウを失ったサクラは、溢れ出る黒い感情に呑まれて

全く気づいていない。ゆっくりと、届くはずもない彼に向かって手を伸ばす。
「クリュウ……ッ」
だが、どんなに名前を読んでも、彼からの返事はなかった。
迫る雪玉が彼女を背後から突き飛ばす寸前――蒼銀の戦姫がその間に体を捩じ込んで巨大な剣で雪玉を防いだ。防がれた雪玉は軌道が逸れ、何も巻き込む事なく崖下へと消えて行った。
「無事かサクラッ！」
エリアに入った瞬間からここまで全力疾走して来たのだろう。荒い息を繰り返しながらそう尋ねたのは蒼銀の姫、全身に蒼色の火竜の鎧を纏った戦姫――シルフィードだった。
防具と同じ蒼リオレウスの素材を使って作られた煌剣リオレウスを下ろし、雪玉が失敗した事に苛立ちながら唸る褐色の竜を見て「な、何だあいつは……ッ」と困惑する。今まで様々なモンスターに遭遇し、色々な書物を読んで来たシルフィードでさえ、目の前にいる褐色の竜は全くの未知の存在だった。
困惑する彼女のすぐ隣に遅れて現れたのは全身に専用のマフモフ装備を纏ったオリガミ。彼はすぐに辺りを見回し、異変に気づいた。
「ニャッ!?　クリュウはどこにいるニャッ!?」
「そういえば……おいサクラッ！　クリュウはどこだッ!?」
褐色の竜に意識を向けながらも、必死な声で尋ねるシルフィードの言葉も聞こえていないのか。サクラはずっと泣き崩れながら彼の名を呼び続ける。そんな彼女の姿を見たシルフィードは、そして彼女の見詰める先の崖を見て、全てを悟った。
「お、おいサクラ。まさかクリュウは……ッ」
「……クリュウ」
だが、悲しみに浸っている余裕を与える程、褐色の竜は生易しい相手ではない。再び四肢を使っての全力疾走で迫って来る。それを見たシルフィードはすぐに閃光玉を投げてその突進を阻んだ。再び視界を封じられた褐色の竜は悶え苦しむ。そしてシルフィードは泣き崩れているサクラの腕を取ると無理やり立たせて走り出す。

「とにかく今は脱出するぞッ！　オリガミッ！」
「ニャッ！　任せておけニャッ！」
逃げるシルフィードとサクラの代わりにオリガミは小さな道具袋（ポーチ）からペイントボールを取り出すと、暴れる褐色の竜に向かって投げつけた。これでとりあえず奴の動きを把握できる。任務を果たしたオリガミも先にエリアを脱した二人を追いかけて急いでエリアを脱出した。
閃光玉の効力が消える事、逃げる彼らの背後から雪山中に轟くような竜の怒号が響き渡り、そして曇天の空へと消えていった……

第２０２話　一日千秋の果てに　絶望の雪山に現れし最強の戦姫

「クー君は、私の可愛い弟なのです。困った時は、いつでも駆けつけるのです――だって、私はクー君のお姉さんなのです」

遠い昔の記憶。

大好きだった姉が、突然世界を周る旅に出ると言い出して一ヶ月後の別れの朝。泣きたいのを我慢して笑顔で姉を送り出していた彼に、そっと彼女が言った言葉。

そんな言葉を言い残して、彼女は去った。隣でエレナが泣きながら見送っているのを見て、自分は涙を必死に堪えながら彼女の姿を見送った。そして、彼女の姿は消えた。その後ろ姿はずっと、彼の記憶の片隅に残された。何の前触れもなく時々思い出しては、今頃姉は何をしているのだろう。そんな事を考える日々が七年程続いた。

夏の空の下で、白いワンピースと麦わら帽子という姿が最も印象に残る姉の姿。岩の上に立って見上げる自分の方に振り返ると、優しく微笑んでくれた、大好きだった姉。

今貴女は、どこで何をしているのだろう。夢の中の僕は、そんな事を考えていた。

ゆっくりと目を覚ますと、しばらく視界がハッキリしなかった。徐々にボヤけていた輪郭が元に戻り始めると、視界いっぱいに雪の天井が広がっている事に気づく。自分が横になっている感覚や、毛布を掛けていても感じる寒さ。そして全身を襲う鈍痛。意識がハッキリとし始めると、混乱していた記憶もゆっくりと確かなものに変わっていく。

そして思い出す。自分はサクラと共に突然現れた褐色の竜と戦っていたはず。だが彼女が褐色の竜に轢かれる寸前で助けた結果、自分が轢かれてしまい、そのまま崖下へと落ちた事――瞳に焼き付いて離れない、必死にこちらに向かって手を伸ばすサクラの顔を。

「そうだサクラッ」

慌てて飛び起きるクリュウだったが、体中を襲う鈍痛に思わず顔を顰めた。そこで改めて自分の置かれた状況を見る。どうやらここは洞窟の中らしい。崖から落ちたはずなのに、なぜこんな所にいるのか。わからず困惑していると横に何かの気配を感じた。振り返ると、そこには見知らぬ女性がこちらに背を向けて座っていた。
「……気がついて、良かったのです」
女性はこちらに背を向けたまま静かにつぶやいた。カーキ色のマントを羽織っていて服装はわからないが、髪の色は青みがかった白色で、それをショートヘアに纏めている。短い割には髪の密度が高いのかボリュームがあり、全体的に膨らんでいる感じの、どこか奇妙な髪型だ。
「あ、あの、あなたは……」
「ビックリしたのです。いきなり空から降って来たのです」
「あ……」
どうやら崖の下を通行していた彼女の目の前に、崖から転落した自分が落ちて来たらしい。おそらくそこは新雪が重なっていた場所だったのだろう。ディアブロシリーズの堅牢な防御力と重なって、それらの雪がクッションとなってかなり高い場所から落ちたのに、まぁ全身痛いけど無事だったのだ。
「何度頬を突いても起きないのです。仕方なく、ここまで運んで看護してたのです」
「それは、どうもすみませんでした」
助けてもらっただけでも感謝すべき事なのに、看護までしてくれて。見知らぬ相手だが、申し訳ない気持ちと感謝の想いで胸がいっぱいになった。
ひとまず助かった事に安堵すると、辺りにいい香りが漂っている事に気づく。匂いを追うと、女性はこちらに背を向けたまま焚き火の近くで何かを焼いていた。
「あの、それは……」
「麓で釣ったサシミウオを焼いたものなのです」
よく見れば、火に掛けられているのは串が刺さったサシミウオ。

ちょうどいい感じに焼けていて、香ばしい匂いを辺りに漂わせている。その香りには、思わず喉が鳴る。麓でこんがり肉を食べたばかりだと思っていたが、この空腹の具合を見れば、どうやらそれなりの時間気を失っていたらしい。
「そうだ、みんな」
　自分が一体どれだけ気を失っていたかはわからない。それでも、かなりの時間が経っているだろう。すぐにみんなの所に行かないと。そう思い立とうとしたが、
「……ッ!?」
　全身を走る痛みのせいで動けなかった。一応リオレウス戦の時程の重傷ではないが、それでもあの時と同様に崖から落ちているのだ。今すぐに動く事はどうやら無理そうだ。
「全身怪我だらけなのです。今動いてはダメなのです。手当てが無駄になるのです」
　女性の言葉にそこで初めて自分が手当てされている事に気づく。それどころかディアブロシリーズは全て外され、インナー姿となっていた。腕や胸、足には包帯が巻かれ、適切な手当てがされている事がわかる。隣を見れば脱がされたディアブロシリーズとバーンエッジが置かれていた。
「あの、これもあなたが？」
「そうなのです。自分用に用意した救急キッドがまさかこのような形で役立つとは、まさに青天の霹靂なのです」
　何やら感慨深そうにうむうむとうなずく女性の言葉にクリュウは改めて「す、すみません。何から何までしてもらっちゃって」と謝る。そんな彼の言葉に女性がピクリと反応した。
「……君は、私の事を覚えていないのです？」
　女性の言葉にクリュウは「え？　どこかでお会いしましたっけ？」と困惑する。というかまずずっと背を向けられていて顔がわからないのだから、もしも知っていてもわからないではないか。
　すると女性は「……薄情なのです。でもこれも時代の流れというもの。寂しいものです」とまた感慨深そうにうむうむとうなずく。そん

な彼女の反応に困惑するクリュウに対して、女性はゆっくりと立ち上がった。
「あ、あの……」
「しかし、久しぶりに思わぬ形とはいえの再会。もう少しクー君は男らしくなっていると思ってたけど、思いの外昔通りで安心したような、残念なような。複雑な心境なのです」
「クー、君……？」
クリュウはその部分に引っかかりを感じた。なぜ自分の名前を知っているのか、という問題よりもその呼び方に彼は反応した。なぜなら、自分の事を《クー君》と呼ぶ人は、これまでたった二人しかいなかったからだ。
一人は今は亡きアルトリア王政軍国先王の第一王女。そして元エンペラークラスのハンターだったアメリア・ルナリーフ。クリュウの母親だ。
そしてもう一人は――
「……でも、相変わらずクー君は可愛いのです。眠っているクー君の寝顔に、思わずキスをしてしまいたくなったのですが、何とか踏みとどまったのです。えっへんなのです」
この妙なしゃべり方と、若干人の話を聞かずに自分勝手に話し始める感じ。お姉さんぶりたいのに、全くもって頼りない――でも、自分にとっては唯一無二の存在だった。
「両親がハンターだったから、もしかしてハンターになっているのでは？　そんな私の推理は見事に命中。クー君もハンターになっていたとは、これも運命というものなのです」
うむうむと無駄にうなずくあの癖も、昔と何ら変わっていない。
突然嵐のように現れ、自分とエレナの姉として君臨。そしてまた嵐のように村を去った。クリュウにとってはたった一人の姉にして、クリュウにとって特別な存在だった、その人は――
「……もしかして、キー姉ぇ？」
懐かしい名前で呼ばれた女性は口元に嬉しそうな、そして満足気な笑みを浮かべるとゆっくりと振り返った。同時にバッとマントを翻

す。
　振り返った女性が身に纏うのはこれまでの激戦を共に戦い抜いて来た防具。防具というにはかなり露出が多く、肩口、上腕、腰、大腿などを露出し、それ以外の場所は幻想的な輝く青白い毛や皮で作った布で守った特殊防具。クリュウは知らないが、それは幻獣との別名を持つキリンと呼ばれる伝説の古龍の素材、それも長寿の古龍の中でも古参に入る歴戦のキリンの素材を選出して作られた、まさに英雄的活躍をした勇者のみが着る事を許される伝説級の防具――キリンXシリーズだ。
　女性は驚くクリュウの顔を見て楽しそうに、そして嬉しそうに笑った。そのどこかまだ笑顔が苦手なぎこちなさの残る笑顔は、昔から変わっていない。
　記憶の中にあったあの美しい純白の髪はどうやらキリンXヘルムで隠しているが、それでも顔には昔の面影がしっかりと残っていた。記憶の中の彼女の顔よりもずっと大人びているが、昔自分が大好きだったあの姉の顔が、そこにあった。
「久しぶりなのですクー君。お姉さん、ここに見参なのです」
　クリュウにとって姉代わりにして、かつて母を失った悲しみに溺れていた自分を救い上げてくれた存在――キティ・ホークラントは七年ぶりに彼の前に現れた。
「今すぐにクリュウ様を捜索すべきですッ！」
　声を荒げながら力強く進言したのは、今にも泣き出してしまいそうな程に顔を悲痛と不安と焦りに染めたフィーリア。皆が座っている中一人立ち上がり、胸の前に両腕をグッと構える。まるでそれを今にも倒れてしまいそうになる自分を自分自身で何とか支えているかのような、そんな健気な姿に見えた。
　ここはエリア４の洞窟の中。細い洞窟の中では大型モンスターは入る事はできず、先程のモンスターに襲われる心配もない。ギアノスなどの小型モンスターはすでに掃討を終えているので、今はオリガミに辺りを警戒させながら四人は状況報告と今後の行動を決定する作戦会議を開いていた。その会議の開口一番に叫んだのがフィーリア

だった。
「山頂から落ちたとなれば、少なくともクリュウ様は大変な怪我をされているはずですッ！　今すぐにでも急行して手当しなければならないんですッ！」
　悲鳴にも似た彼女の言葉にツバメは苦しげに唸る。彼も当然クリュウを捜しに行く事は最優先事項だとは思っている。だが、感情的になるフィーリアよりはずっと冷静な彼からすれば、それはそう簡単にできる事ではない事は容易に想像できた。
「少し落ち着けフィーリア。事はそう単純ではないんだ」
　そう言って彼女を落ち着かせるのはリーダーのシルフィード。その表情もフィーリアと同様に焦りや不安に歪めているが、それ以外にも彼女には様々な苦悩の中にあった。
「彼が落ちた箇所を確認する為には、山頂付近に戻る必要がある。しかし、そこには先程の謎のモンスターが陣取っていて、近付く事ができないんだ」
「クリュウ様の弔い合戦ですッ！　そんなモンスター、私達で総攻撃して叩き潰すだけですッ！」
「落ち着くのじゃフィーリア。それではクリュウが死んでしまっておる。縁起でもない事を言うでない」
「気持ちはわかるが、我々はあくまで調査依頼でここに来ている。装備はとてもじゃないが万全とは言えないし、捜索できるだけのホットドリンクの備蓄もない。長期に渡ってこの山を動き回る事はできない」
　シルフィードは冷静に現状の厳しさを提示する。今回は調査依頼、それもポポの調査依頼だった為、ホットドリンクはそんなに多くは持って来てはいなかった。元々山登りをあまりしないポポ相手の調査は麓近辺に限定され、山登りはそれほど重視されていなかったからだ。さらに言えば大型モンスターと戦う為の装備もない。砥石や回復薬の量に関して言えばホットドリンク以上に余裕はないのだ。
「君だって、そんなに多くの弾丸を持って来た訳ではないだろう？」
「そ、それはそうですが……ッ！」

「それに相手は、あのサクラが打ち負かされたような強敵だ。今の貧弱な装備のままで、感情的になっている君は、本当に五分な戦いができるか？」
　シルフィードの問いに、フィーリアは悔しげに黙り込む。本当はわかっているのだ。自分がどんなに無茶を言っているかは。でも、クリュウを助けたい。クリュウを襲ったモンスターに仕返しがしたい。その想いが先行してしまい、彼女の冷静な判断を邪魔していた。
　だがシルフィードの諭すような言葉は、フィーリアの中で後回しにしていた感情を爆発させるきっかけになってしまった。一瞬前までの不安や悲しみに満ちた表情を一変させると、彼女は激しく激昂すると隣でずっとうつむいたまま黙っているサクラの胸倉を掴んだ。
「元はといえば、サクラ様が無茶な戦闘を開始した事が原因じゃないですかッ！」
　激しい口調でサクラの失態を叱咤するフィーリア。その常の彼女らしくない激しい口調と怒りには、ツバメもシルフィードも口を挟めなかった。二人共、フィーリアの本気の怒りを前にその激しい感情に呑まれてしまっていた。
「見境もなしに戦闘をおっ始めて、挙げ句の果てにクリュウ様を遭難させるッ！　自分がしでかした事態を、わかっているんですかッ!?」
　胸倉を掴んで持ち上げ、膝立ちになるサクラを前に激しい口調で責め立てるフィーリア。しかしサクラは項垂れたままずっと沈黙している。何を言っても答えないサクラを前にカッとなったフィーリアは手を上げる。
「フィーリア。さすがにそれはやめてくれ」
　そう言って彼女の振り上げた手を止めたのはツバメだった。申し訳なさそうに謝る彼を前に、フィーリアはどこにぶつけていいかわからない想いを無理やり胸の奥に押し込み、取られた手を乱暴に取り戻すと太腿の横で拳が真っ白になるくたいに固く握り締める。
　必死に自分の中の怒りを押し込めるフィーリアを前に、これまでずっと黙っていたサクラはゆっくりとその場で正座すると、その腰を折った。

「さ、サクラッ？」
驚くツバメを見てフィーリアが彼の視線を追ってサクラの方を見ると、言葉を失った。
氷上に正座したサクラはそのままの姿勢で深々と頭を下げていた。手をハの時に頭の前に置いたその姿勢は、東方人最大の謝罪の示し方――土下座。
全てのプライドを捨てて、相手への誠意を示す最上級の姿勢。サクラはそれをフィーリアに、そして皆にしていた。彼女の土下座姿は、エルバーフェルドでシュヴァルツにアルトリア行きを政府に掛けあって欲しいという願いの時以来。だがそれは、かつての土下座とは全く異なるもの。前回のは愛するクリュウの為に頭を下げたが――今は自らの失態を認め、心からの謝罪を込めての土下座であった。
「サクラ、様……」
「……ごめんなさい。本当に、ごめんなさい」
顔を伏しているので表情はわからない。でもその声は微かに震えていた。皆には見えない角度で、彼女は氷の上に温かな雫を垂らしていた。自分の暴走と、自分がいながら彼を救えなかった罪悪感。今回の一件全てに対する謝罪を、彼女は泣きながら土下座という形で示した。逆に言えば、彼女にはそれしかできなかったのだ。
何を言っても言い訳になってしまう。言い訳を言いたくはないし、親友相手に言い訳なんかしたくなかった。だからこそ、彼女にできる事は――土下座しかなかったのだ。
「……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいッ」
「……もういいサクラ。もうやめてくれ」
あまりにも痛々しい程に謝り続ける彼女の肩に手を置いたシルフィード。自分を責め、猛省し、恥を捨てて謝り倒す彼女の姿を、もう見ていられなかったのだ。いつも全く謝らない、自分の行動を絶対だと信じて突き進むのがサクラ・ハルカゼという仲間だ。その彼女の、謝り倒す姿など、見たくなかった。
「……ごめんなさい、ごめんなさいッ」
それでもサクラはやめなかった。必死になって謝り続ける彼女の

姿にフィーリアは何も言えなくなってしまう。でも彼女に対して抱いている怒りは消える事なく、でも必死に謝る彼女に向かって怒鳴る事もできず、フクザツな心境を抱く彼女は、サクラを無視する事しかできなかった。

ツバメも加わり、ようやく頭を上げたサクラ。辺りには凍てつく風よりもずっと冷たい空気が張り詰めていた。混沌とした極寒の空気の中、シルフィードは話題を変えるように話を戻す。

「とにかく、一旦拠点に戻ろう。必要な装備を掻き集めてクリュウの捜索隊を編成する。同時にこの状況を知らせ、応援を呼ぶ為に一度村へ戻る帰路隊も編成。二正面作戦にて事に当たるぞ」

反対する声はなかった――もはや、誰も感情的な意見を言う者はいなかったのだ。

「食べるのです」

そう言ってキティは焼いたばかりのサシミウオをクリュウに手渡す。断る理由もなかったクリュウはそれを受け取ると一口食べる。元々生でも食べられるサシミウオだが、焼いてもうまい。やっぱり素焼きに塩をまぶしただけのシンプルな焼き方が一番うまい。

「うん、おいしい」

「どうだ。恐れいったかなのです。えっへんなのです」

「……魚を焼いただけでなぜそんなに威張れるさ？」

苦笑しながらも、クリュウは七年経っても相変わらずな姉の姿を見て懐かしい想いで胸がいっぱいになった。

キティ・ホークラントが初めて村にやって来たのは今から九年程前、アメリアが死んですぐの事だった。その時の彼は最愛の母親を失った悲しみからすっかり塞ぎ込んでしまい、周りを拒絶するようになっていた。エレナが必死に励ましたり、時には無理に遊びに連れて行こうなどしたが、結果的にそれが逆効果。彼はエレナさえも拒絶するようになり、二人の関係は修復不可能なまでに瓦解する寸前だった。

村の中で一人孤立していくクリュウ。そんな彼の前に突如現れたのが、村に引っ越して来たキティだった。クリュウよりも七歳年上な

彼女は、一人寂しく泣いていた彼にそっと手を差し伸べた。
今思えば、エレナでさえ拒絶したはずの他人を、なぜ彼女だけは受け入れたのか。今でもよくわからない。でも、自分を励まそうと慣れない笑顔をがんばって浮かべる彼女の姿に、悲しみの中に一筋の嬉しさを感じたのは、今でもよく覚えている。
――では、君の事は今日からクー君と呼ばせていただきます。クー君は私の友達第一号なのです――
妙な口調での、彼女の第一声もまた、今でもしっかりと覚えている。
それから常に彼に連れ添って、独り身になった彼の世話を親身になってしてくれたキティ。お世辞にも家事能力は高くはなく、結局いつもクリュウが後始末をする。いつの間にかキティとクリュウは姉と弟のような関係になっていた。
彼女と接するうちに次第に明るさを取り戻し始め、エレナとも和解。一年が経つ頃には元の彼に戻っていた。
それからはキティとクリュウ、そしてエレナの三人はまるで家族のように接し、楽しい日々を送っていた。一緒に遊んだり、一緒に寝たり。さすがにお風呂は入らなかったが。というかクリュウと一緒にお風呂に入ろうとするキティに対してクリュウが拒否し、エレナもまた却下した為に実現しなかった。キティが十七歳、クリュウとエレナが十歳の時の事である。
しかしそんな楽しい日々が終わりを告げたのは、彼が十一歳になったばかりの頃。元々病弱な彼女の母親の静養の為に村に来ていたホークラント一家。その母親が元気になった事で故郷に帰る事になったのだ。
そしてあの日、再会を誓ってキティは村を去ったのだ。
あれからもう七年。二人は思わぬ形での再会を果たしたのだ。
サシミウオを食べながら昔の思い出に浸るクリュウに対し、同じくサシミウオを食べながらそんな彼の姿を微笑ましく見詰めるキティ。昔のような二人の姿が、そこにあった。
「それにしても、まさかキー姉ぇもハンターになってたなんて驚きだよ」

クリュウは率直な思いを口にした。色々な道がある中で、クリュウは親の影響があったからハンターになったと言える。しかしキティの両親は普通の人だ。サクラのようなきっかけもなければ、普通は目指すような道ではない。
クリュウの疑問に対し、キティはサシミウオを食べながら語る。
「ふぇふぁいふゅうをほうへんふすはへはほへふ」
「……食べながらしゃべるのはやめようね、キー姉ぇ」
どうやら、物を食べながらも勝手に話始める癖は直っていないらしい。
クリュウに注意されたキティは素直に最後までサシミウオを食べ終えると、水を一口飲んでから改めて語り始めた。
「世界中を冒険する為なのです」
「世界を、冒険？」
「そうなのです。世界はとてもとても広いのです。色々な景色や文化を見る旅に出る。こんなに楽しい事はないのです。その旅を安全に成功させる為にも、自分の身は自分で守る。だからこそ、私はハンターという道を選んでみたのです」
えっへんとなぜか偉そうに言う彼女の言葉に、クリュウは思わず笑ってしまった。
世界中を旅してみたい。それは昔彼女が口癖のように言っていた彼女自身の夢だった。どうやらあれからずいぶん経っていても、その夢を諦めてはいなかったらしく、そして今はその夢を実現させているのだ。有言実行。それが彼女の行動指針だ。
「しかし、世の中わからないものなのです」
うむうむとうなずきながら感慨深そうに語る彼女の言葉に「何が？」と尋ねると、キティは困ったような表情を浮かべてしまう。
「護身術としてハンターになったものの、どういう訳かそこで才能が開花してしまったのです。迫り来るモンスターを片っ端から返り討ちにしている間に、いつの間にかエンペラークラスにまで上り詰めてしまったのです。おかげでギルドには常に居場所を報告しなければならず、肩身の狭い想いなのです」

むむと困り果てた感じで考える彼女の言葉にクリュウは思わず苦笑を浮かべる。何というか、昔から無茶苦茶な人だと思っていたが、相変わらずの無茶苦茶っぷりらしい。

エンペラークラスは、細かく分けられている区分けの中では最上位の位である。類まれなる実力と実績が評価された事で送られる最高位。現在中央大陸全体で数千人と言われている全ハンターの中で、エンペラークラスのハンターは五〇人に満たないと言われている。そんな実力を持ちながら、肩身の狭い想いを抱く彼女は相当な大物と言えるだろう。

「というか、キー姉ぇってエンペラークラスなんだね」

「えっへんなのです」

これぱっかりは威張っていいのだが、相変わらずの威厳のなさ全開なキティ。そんな彼女の姿に苦笑を浮かべていると、ふと浮かんだ疑問を口にする。

「そんなエンペラークラスのキー姉ぇが、なんでイルファ山なんかにいるのさ。というか、こっちに来てるなら村に寄ってくれてもいいのに」

水臭いキティの行動にちょっと不満そうなクリュウ。若干拗ねたように言う彼の言い方は実に愛らしく、キティは思わず彼を抱き締めてしまった。

「ちょッ!? キー姉ぇッ!?」

「クー君は可愛い可愛いなのです。いい子いい子なのです」

「こ、子供扱いしないでよッ」

抱きついて来る彼女を振り払い、顔を真っ赤にさせたまま怒るクリュウ。キリンXケープに包まれた彼女の美しく整った胸は昔よりもずっと膨らんでいて、彼を慌てさせるには十分過ぎる程の威力だった。

恥ずかしがるクリュウの姿を見てキュンとなるキティだったが、彼の疑問に答えるべくうむと一つうなずいて語り始める。

「ギルドからの特命なのです。このイルファに現れた正体不明のモンスターの偵察任務の為、ここに来ていたのです」

「正体不明のモンスターって、あの褐色の飛竜？」
「うむ。どうやらクー君はもうすでに知っているようなのです」
「知ってるも何も、そいつに突き飛ばされて崖から落ちた訳だし」
　やはりギルドも確認が取れていない正体不明のモンスターだったらしい。道理でクリュウも見た事がないはずだ。そもそもあんな姿勢の飛竜種がいる事自体、正直今でも信じられないくらいだ。
　キティは氷の壁に掛けてあったライトボウガンを手に取る。それはフィーリアが使うハートヴァルキリー改に良く似ているが、彼女の武器は桜リオレイアの素材を基軸に作られているのに対し、キティの持つ武器はそれを伝説の銀レウスと金レイアの素材を使って作られている。銘を金華朧銀の対弩と言う、これも最上位のライトボウガンだ。
「ギルドからの任務を遂行する為に、私はこの武器の様々な弾丸を駆使して奴を偵察していたのです。相当なデータを取り終え、報告の為に山を離れようとしていた時の事。突然山頂からペイントの香りが漂って来たので、何事かと戻っていたら突然空から君が落ちて来たのです。ビックリなのです。仰天なのです」
　どうやら彼女はギルドからの特命であの正体不明のモンスターの生態調査の為にこの山に来ていたらしい。そこへ偶然ポポの生態調査に来ていたクリュウ達がその件のモンスターと鉢合わせしてしまい、結果は惨敗。崖から落ちたクリュウをキティが見つけ、看護するというような状況に至ったらしい。
「それで、あのモンスターは一体何なのさ？」
「正体不明と言っても、ギルドの方でもある程度のデータは持っているのです。まもなくギルドの方から正式にモンスターの正体が明かされる予定になっているのです」
「そ、そうなんだ」
　ギルドは次々に新モンスターを公開している。昔はギアノスもランポスの突然変異種とされていたが、現在では亜種認定されて別のモンスターとされているし、常に情報は書き換わっている。それらの正しい情報を得る為にハンターズギルドはこうしてキティのような実

力者を派遣して調査をしているのだ。
「それで、あいつの事は何かわかったの？」
「まぁ、クー君は私の弟なのです。ちゃんと説明してあげるのです。でも――」
突然キティは再び彼の体を抱き締めた。優しく、そっと抱き留め、彼の温もりをしっかりと心に焼き付ける。ずっとずっとしてあげたくても、ずっとずっとできなかった、姉として弟にできるたったこれだけの事。七年の歳月を経て、やっとする事ができた。
先程までとは違う抱かれ方に困惑するクリュウに対し、キティは優しく彼を抱き留め続ける。
「クー君。ずっとずっと、逢いたかったのです」
そう言って、彼女は彼を抱き締める力を少し強める。ギュッと抱き締められ、クリュウは「だ、だったらいつでも会いに来れば良かったのに……」と少し照れながら言う。そんな彼の言葉に対し、キティはゆっくりと首を横に振った。
「どうして……」
「――怖かったのです」
そう言った瞬間、背中に回された彼女の手が微かに震えていた。手だけではない。彼女の体全体が、何かに怯えるように微かに震えていたのだ。
「クー君が、私の事を忘れてしまったのじゃないか。そんな恐怖が、ずっとあったのです。一ヶ月、半年、一年、二年と逢いたくても逢いに行く勇気が出ずに先延ばしにし続けた結果、七年も経ってしまったのです。もう、半ば諦めていた――私の事を、クー君が忘れているとしても、それも覚悟していた」
そう声を震わせながら言う彼女の言葉に、クリュウは心底呆れ返った。無駄に強気だったり、妙な自信家だったり、そして時にはこんな感じに妙に不安症だったり。キティ・ホークラントという人間は実に感情の上下運動が激しい。昔はよくこれに振り回されたが、一緒に過ごしているうちに次第に慣れた。そしてそれは、七年という歳月を経た今でも、変わる事はない。

「だからギルドの特命でこの地に来た時、覚悟していた。一目、君の姿を見たらもう未練を断ち切って、前に進み続けると。そう決めていたのです。なのに――」
ゆっくりと顔を上げたキティの目には薄っすらと涙が浮かんでいた。顔には嬉しそうな微笑を浮かべているが、笑顔が苦手な彼女にとってそれは最高の笑顔だ。すごく幸せそうな、昔エレナとこっそりと準備したドッキリ誕生パーティーにて出迎えられた際も、彼女は同じようにすごく幸せそうな笑みを浮かべていた。あの時と同じ、幸せに満ちた笑顔だ。
「――クー君は、私の事を覚えてくれていた。それが、今はすごく嬉しいのです」
そう言ってボロボロと涙を零す彼女を前にクリュウはわざとらしく大きなため息を零すと、ボロボロと零れる彼女の涙を指先で丁寧に拭い取り、そっと彼女の頭を優しく撫でる。
「……忘れる訳ないでしょ。キー姉ぇは、今までもこれからも――僕のたった一人のお姉ちゃんなんだから」
彼の言葉にキティは一つ大きくうなずくと、再び彼を強く抱き締めた。まるでここに彼がいる事を体全体で確かめるかのように、強く、優しく、温かく、彼を抱きしめ続けた。クリュウも抵抗する事なく、自らもそっと彼女の体を抱き返す。
そんな時間がどれほど続いただろうか。ゆっくりと、キティの方から体を引く。そうして、優しく微笑む彼に向かって、自身もまた優しく自らの想いを伝える。
「クー君はこれまでもこれからも、ずっと私の可愛い弟なのです――大好きなのです、クー君」
そう言って、キティは彼の頭を抱き寄せると、その唇に自らの唇を押し当てた。
日没間近。拠点(ベースキャンプ)にてシルフィードの指揮の下、クリュウの捜索隊と救援を呼びに行く帰路隊の二隊が編成された。捜索隊はシルフィード、フィーリア、サクラという実力者を配置。帰路隊にはツバメとオリガミが選出され、二隊の準備は全て整った。特に

捜索隊はありったけのホットドリンクを持ち、長期戦を覚悟で食糧も可能な限り持っての山登りとなる。
「ではシルフィード。どうかクリュウの事を頼むのじゃ」
「あぁ、君の方こそ可能な限り救援を早く頼む」
「任せておけなのニャッ」
　すでに必要な装備の積載を終えた竜車の前に立つツバメはシルフィードとの別れの挨拶を済ませると竜車に乗り込む。それを見たシルフィードはゆっくりと振り返り、未だに互いに気まずい雰囲気を漂わせている二人の方に振り返る。どちらもどう互いに声を掛ければいいかわからないといった感じ。それでもそのどちらもが、今はクリュウを捜す事だけに全力を尽くす。そんな覚悟でいた。
　シルフィードはそんな二人の肩を優しく叩いた。そして不安な顔を上げる二人に対して「大丈夫さ。クリュウはそう簡単に倒れるような男じゃない。きっと無事でいるさ」と二人を励ますように言う。そんな彼女の言葉にいくらか元気をもらった二人は小さくうなずいた。
　だが実際は、彼女の言葉は自分自身へ向けているも同じだった。胸の奥である最悪を予想して不安になる気持ちを、自らの言葉で鼓舞する。そうでもしないと、不安で押しつぶされそうだったのだ。
　夜間での捜索を覚悟の上での山登り。冬間近のイルファ、それも夜となれば気温はマイナスの方向へとどんどん加速するだろう。だがそれは同時にクリュウの体力を奪う脅威でもある。可能な限り彼を早急に発見しなくては。そんな想いが、彼女を突き動かす。
「では行くぞ二人共」
「はいッ」
「……ええ」
　竜車を出発させようとしているツバメに別れを告げ、三人は拠点（ベースキャンプ）を出発する。目指すは彼が落下したと思われる山頂より少し下付近。広大な雪原において彼を見つけ出す事はかなりの難易度だ。しかし諦めず、彼の姿を捜し続ける。そんな強い覚悟を抱いて、三人は覚悟の一歩を踏み出した――が、
「あ……」

そんな彼女達を出迎えたのは、ちょうど拠点（ベースキャンプ）から下る道の曲がり角から顔を出したクリュウだった。まだ動けぬ体をキティに背負われての何とも情けない姿ながらも、彼はその無事な姿を彼女達の前に現したのだ。

驚きのあまり呆然としている彼女達に対し、同じく出会い頭で困惑するクリュウは少し考えてから、恥ずかしそうに口を開く。

「あ、あの――ただいま」

照れ笑いを浮かべながら言う彼の言葉に三人は涙を浮かべながら、満面の笑顔で「おかえりなさい」と答え、彼を優しく出迎えたのだった。

第２０３話　心の傷を乗り越えて　覚悟を胸に抱きし人形姫の舞

クリュウ達がイルファ山脈に立った日の午後には村長はアルフレアへと出発した。周辺の村の村長とアルフレアの市長との対策会議の為だ。しかし原因が不明な状況では会議も進むはずもなく、ひとまずそれぞれの村やアルフレアに集められた情報の交換が行われた。その中で未確認ながら大型モンスターの存在を疑わせる内容が複数あった。ポポの死骸や何か巨大な生物が暴れた跡、時折山から聞こえて来る咆哮など、もはやイルファに何かがいるという事は疑いようもない事実となりつつあった。

そして二日後には村長が暗い顔をして戻って来た。村人達がそれを見て、イルファに何かが起きている事を察するのは容易であった。エレナとリリアは未だ帰って来ないクリュウ達の安全を心から祈るしかなかった。

そしてその日の夕方、クリュウ達は無事に村へと帰って来たのだった。

村の入口に来た彼らを最初に出迎えたのは話を聞いて飛んで来たエレナであった。全員が無事な姿で現れると心から安堵したような表情になる。出迎えてくれたエレナを最初に気づいたのはやはりクリュウだった。幸い、怪我の方はキティによる応急手当とリリア特製の薬のおかげでこの頃には普通に歩ける程にまでは回復していた。

「エレナ、ただいま」

一目見ても、彼女がずっと自分の事を心配してくれていたのがわかった。他の村人の様子を見ても、どうやら自分達がいない間に彼らを不安にさせるだけの情報が色々と入ったのだろう。クリュウはすぐに「心配掛けちゃってごめんね」と謝るが、エレナは「べ、別に心配なんてしてないわよッ！　バカぁッ！」と怒ってしまう。でもすぐに「でも、良かった……」と安心したように微笑んだ。そんな彼女の笑顔を見て、クリュウもまたほっと胸をなでおろした。

ひとまず不安の一つが減った事で心に少し余裕ができたエレナは、ここで彼以外の面子の様子に気づいた。
なぜかシルフィードとフィーリアはどこか不機嫌そうで、サクラはどこか落ち込んでいる様子。ツバメとオリガミは何かあったのかどう見ても疲れているように見えた。
「あ、あんた達どうした訳？」
当然の疑問を口にした時、彼らの背後からキティが現れた。突然出現した彼女を見て困惑するエレナに対し、キティは嬉しそうに小さな笑みを浮かべた。
「お久しぶりなのですレナ。少し見ない間にすごく美人さんになってビックリなのです」
「は、はぁ……」
一方のエレナは彼女を見ても気づかずに、フレンドリーに接してくる彼女相手に困惑していた。何せ七年も昔で、その頃と今の彼女ではキリンX装備を纏っているのもあってイメージが繋がっていないのだろう。それでも、どっかで会ったような気はするという感じで必死に思い出そうとしている彼女に対し、キティは至極残念そうにつぶやく。
「クー君はすぐに思い出してくれたのに、レナは薄情なのです。ひどいのです。鬼畜の所業なのです」
「そ、そこまで言わなくても……」
苦笑を浮かべるクリュウとそんな彼に「クー君は甘いのです。あまあまなのです。ハチミツ入りのミルク並みに甘いのです」と突っかかる彼女を見て、エレナの記憶の中でバラバラになっていたピースが一つになった。
「もしかして、キー姉ぇ？」
彼女の口から飛び出した懐かしい呼び方に対して、キティは満面の笑みを浮かべる。
「やっと思い出してくれたのです。レナ、お久しぶりなのです」
「キー姉ぇッ！」
思い出した途端、嬉しくなってエレナはキティに抱きついた。そん

な彼女を優しく抱き留めるキティの姿はどこか懐かしくて、クリュウも昔を思い出して胸が熱くなって思わず頬が緩んでしまう。そんな彼の手を、そっと背後から握り締めるフィーリア。振り返る彼に対し「あ、あの、ひとまず村長様の所に行きませんか？　色々と報告する必要があるので」と話を進めようとする。事が深刻な状況だけに早く対策をすべきだというのは本心だが、今の発言はどちらかと言えばこの居心地の悪い空気を何とかしたいという想いの方が強かった。

自分達の知らないキティ・ホークラントという人物と、自分達の知らないクリュウとエレナ、その関係性を前にして何だか自分達が除け者扱いされているような、そんな居心地の悪さがフィーリア達にはずっとあった。竜車の中でも楽しげに話す二人を、フィーリア達はただ見守る事しかできなかった。

「そうだね。色々報告があるから、村長にも報告しないと」

フィーリアの提案を快諾したクリュウはキティとエレナに近づくと村長の所へ行こうと提案する。エレナも「そうね。村長も他の村長とかとの対策会議から帰って来たばかりだから、あんた達の報告を待ち望んでるわ」と言って早速村長の家に向かって歩き出す。しかしフィーリア達の思うような展開にはならず、三人は歩きながらも楽しそうに話し続ける。

「……何だか、嫌な感じです」

「そう言うな。相手はクリュウにとって姉代わりの人間だぞ。それに、久しぶりの再会で沸き立つのに水を差したくはない」

「そ、それはそうですが……」

頭ではわかっていても納得出来ない。そんな感じのフィーリアはふと後ろ歩くサクラを見る。相変わらずサクラはうつむいたままずっと沈黙している。クリュウとキティが楽しげに話していても、いつもなら真っ先に間に割って入るはずなのに、ずっとこうして黙っていた。

その時、何気なしに顔を上げた彼女と目が合ったフィーリア。しかしサクラはすぐに気まずそうに視線を逸らしてしまう。そんな彼女を見て何かを言おうとしても、結局何も言えず正面に向き直りため息

を零すフィーリア。時を同じくしてフィーリアとサクラの微妙な距離も全く縮まってはいなかった。
　好きな相手が別の女と自分が間に入れないような話題で楽しげに話しているのと、一向に元に戻りそうもない仲間達の微妙な空気。一つでも厄介なのにそれが同時並行で起きている為、ほとほと困り果てているシルフィードはどうしたものかとため息を零した。
　そして、そんな気まずい雰囲気にずっと付き合わせれていたツバメとオリガミも、ほとほと疲れ果てたという具合に大きなため息を吐く。
　そんな背後の微妙な空気にも気づかず、クリュウとエレナ、そしてキティの三人は楽しげに話しながら村長の家へと到着した。
「いやぁ、まさかキーちゃんが帰って来てくれるなんて驚きだよぉ。見ないウチにずいぶん立派になっちゃって」
「村長は相変わらずお変わりないのです」
「竜人族は七年くらいじゃ見た目に大きな変化は起きないよ」
　久しぶりに再会できたキティ相手に村長は上機嫌だ。
　ここは村長の家の大広間に案内されたクリュウ達は上座に村長を置いて四角を描くように座っている。クリュウ達の他にもクリュウ達からの報告を待つリリアやアシュアなども列席している。しかしいずれもキティとは初対面とだけあって何やら居心地の悪そうにしている。
「さて、本当はもう少し君との再会の余韻に浸っていたいんだけど、そうも言ってられない状況だからね。とりあえずクリュウ君、状況を報告してもらえるかな？」
　キティとの会話も程々に村長はそう言ってクリュウを促す。指名されたクリュウは少し考えた後に、事前にシルフィード達と纏めた総意を伝える。イルファ山脈周辺にはポポの亡骸が無数にあり、いずれも何か強大なモンスターに喰い殺されたような凄惨な光景であった。そしてクリュウ達は山頂にて正体不明の大型モンスターと交戦。おそらくそのモンスターにポポが食い荒らされている。それがクリュウ達の総意での考察だった。

クリュウの話を聞いた村長は「やっぱりかぁ……」と特に驚いた様子はなかったが、それでも予想通りの最悪な状況に頭を抱えた。雪山にそのモンスターが居座る限り、生息しているポポは食い殺され、残ったポポも山の周囲から去ってしまう。このままではイルファ雪山のポポは全滅してしまう。そうなれば村の財政にも計り知れないダメージが及ぶ。村を治める長として、村長の苦悩もまた計り知れない。

頭を抱える村長に対し、村の財政について口を挟める立場ではないクリュウ達はそんな彼を心配そうに見詰めるしかできなかった。すると、妙な沈黙が支配した中ピッと手を挙げたキティ。当然周りの視線は全て彼女に集中する。

「ここからは、その正体不明のモンスターに関して私が知っている限りの情報を提示するのです」

キティの言葉にクリュウ達ハンターの眼の色が変わる。今回の原因とされるモンスターについては正体不明という事で彼らには全く情報がない。そんな状況下では彼女が持つ情報は貴重そのものだ。

こほんとわざとらしく咳払いをすると、キティは語り始める。

「まず最初に、仮称だけどギルドでは奴の事を轟竜ティガレックスと呼称しているのです」

「轟竜、ティガレックス……」

自分の両親と家族を殺したモンスターの名前。サクラはまるで噛み締めるように静かにつぶやいた。

「あの、竜という事はやはり飛竜種に分類されるのでしょうか？」

おずおずと手を上げて質問したのはフィーリア。彼女とツバメはまだティガレックスと遭遇してはいないが、クリュウやシルフィードの話を聞く限り、飛竜種に分類されるかが少々疑わしかった。そんな彼女に疑問に対し、キティは「イエスなのです」と肯定する。

「ただしティガレックスは世間一般に知られている飛竜種とは致命的に異なるのです。それは――奴が全ての飛竜種の元祖に近しい系統の竜だという事なのです」

「飛竜種の元祖に近しいとは、一体どういう意味だ？」

シルフィードの疑問に対し、キティはどう説明したものか少し考える。そしてある程度考えが纏まると、ピッと人差し指を立てながら語り始めた。
「君はティガレックスを見て、他の飛竜種と何が致命的に異なる感じたのです？」
「え？　あ、そうだなぁ……色々とあるが、やはり一番目立つのは翼の形状が異なる事だろうか？」
「イエスなのです。飛竜種が前脚が翼へと進化して大なり小なり飛行能力を持っているのに対し、ティガレックスは前脚は本来の前脚としての形を十二分に残し、翼は補助的にしか備わっていないのです――つまり、かつて翼のない古の竜が進化して大空を制する翼を得たのです。そしてティガレックスはその途中、飛竜種の最も古い形状の体格を持つ竜だと言う事です」
全ての飛竜は元々翼を持って生まれた訳ではなく、進化の過程で翼を得た。これはハンターでなくても世界での常識だ。鳥だって元々は翼のない生物が進化して翼を得て空を飛ぶようになったのだから。
前脚を次第に翼へと変化させ、ついに完全な飛行能力を得たのが現在の飛竜種である。しかしティガレックスはその完全な飛行能力を備える前、まだ飛行能力を補助的にしか使えなかった頃の飛竜種の生態に限りなく近しい種。これがギルドのティガレックスに対する見解であった。
「なるほど。という事は、奴はそんなに大規模な飛行はできないのだな？」
「イエスなのです。奴は飛ぶ事はできても他の竜のように自ら翼を動かして自由に飛ぶ事はできず、主に高所から飛び降りて長距離滑空する程度なのです」
それを聞いてクリュウ達はひとまず安心した。ここからイルファ山脈までは結構な距離がある。相手が飛行能力が低いなら村が奇襲される恐れはない。それを聞けて皆一様に安心したのだ。しかしそんな彼らに対しキティは「しかし反面、地上戦での戦闘能力の高さは他の飛竜種とは比較にならない程脅威なのです」と気が緩み掛ける

面々に忠告する。
「陸の女王リオレイア、砂漠の魔竜ディアブロス。いずれも機動力と強力な脚力で地上戦において無敗とも言える強さを誇る飛竜種なのです――しかしティガレックスはこの二頭をも遥かに超える地上戦能力を有し、地上では古龍種以外に敵なしとも言える凶悪極まりないモンスターなのです」
「そ、そんなに強い相手なんですか？」
リオレイアはともかくとしてセクメーア砂漠にてディアブロスと戦闘経験のあるフィーリアからすれば想像もできないような相手だ。あのディアブロス戦だって相当な苦戦を強いられたのだから。
信じられないとばかりに言う彼女の問いに対し、キティは「イエスなのです。ティガレックスとディアブロスでは地上戦においての根本が違うのです」と肯定する。
要するにディアブロスは古の地竜が飛竜種へと進化した後に、地上戦特化の為に飛行能力を犠牲にして脚力の強化や体格の大型化が行われたモンスターである。それに対してティガレックスは元々の古の地竜が飛竜種へと進化する過程の体格を持っている為、地上戦に特化していると言える。つまり、ベースとなるのがディアブロスが飛竜種であるのに対してティガレックスは古の地竜。地上戦に対する骨格形状がそもそも異なるのだ。
「クー君はティガレックスと戦ってみて、どう思ったのです？」
キティの問いかけに対しクリュウは素直に「正直、ディアブロスの比じゃない程強かったと思う。前脚も使って突進するから突進後の隙がないばかりか、ディアブロス以上の突進力に加えてリオレイアのように方向転換を容易にできる所を見ると、そう判断せざるを得ないね」と強敵だったと答える。それを聞いてフィーリアの表情があからさまに曇った。ディアブロス戦だって相当な苦戦を強いられたのに、相手はそれを超えるモンスター。正直、フィーリアからすれば自らの能力を遥かに超える相手だ。
しかし事態はそんなレベルではない。これまでの飛竜は個々で異なるが、大まかな行動や攻撃などは共通している部分が多かった。そ

の為、別の飛竜で得た知識や技術をうまく使う事で戦いを優位に進める事ができた。しかしティガレックスはそもそもそれらの飛竜とは異なる存在だ。当然、これまで別の飛竜で得たものは何も使えない。本当の意味でのゼロベースからのスタートなのだ。

「今後、ギルドハンターなど試験狩猟などを経て、次第に生態やより細かい攻撃パターンなどが追加発表されるのです。現時点では、ほとんどデータがないと言っても過言ではないのです」

全くの未知の敵。それを理解したクリュウ達の表情は一様に暗かった。これまでモンスターはシルフィードやフィーリアの優れた知識で弱点属性や弱点部位、細かい生態や攻撃パターンなどを事前に知った上で対策を練って挑んで来た。しかし今回はそれも通用しない。そればかりか、数分程の出来事とはいえ実際に戦った、しかも当時のサクラは冷静さを欠いていた事から、冷静にティガレックスと観察できたのはクリュウだけ。むしろクリュウが皆に大まかな特徴などを説明しなくてはならないのだ。

さすがのシルフィードも未知の相手となれば勝手が違う。いつになくその表情は険しい。

「で、でもそいつがいる限りポポは食い荒らされるんでしょ？　そのティガレックスとかいう飛竜がいつ山を去るかわからないんじゃ、こっちもどうしようもないわよ……」

エレナの言う通り、ポポの生息数の激減は明らかにティガレックスが住み着いた事によるものが原因だ。奴を排除しない限り、ポポは減り続ける。そうなれば村の冬越えに必要な資金調達は難航する。そればかりか下手をすれば村にも被害が出るかもしれない。飛行能力が低いとはいえ、こちらに来ないという確証はないのだから。

「その、こんな事頼める事じゃないんだけど……キーちゃんは凄腕のハンターなんでしょ？　討伐を、頼む事はできないかな？」

未知のモンスターを相手にするという事で臆するクリュウ達を見て酷だと思った村長はすがるようにキティに頼む。しかしキティは申し訳なさそうに首を横に振った。

「私としても、故郷のようなこの村を救いたい気持ちはあるのです。

でも――」
「――村長、エンペラークラスのハンターはギルドの許可なく勝手な狩猟を原則的に禁じられているんだ」
　話づらそうに言うキティを助けるようにそう言ったのはシルフィード。驚く村長が「ど、どうして？」と尋ねると、シルフィードは少し考えてから説明する。
「エンペラークラスのハンターは、一人で小国並みの軍事力に匹敵するとまで言われる猛者だ。勝手な行動をされると周辺諸国との関係が崩れる場合もある。それに、無用な狩猟にて貴重な戦力を疲弊させる訳にはいかない。有事の際、エンペラークラスのハンターは中核となる存在だ。それこそ、対古竜戦では数十人のハンターを束ねる最高司令官になる事もある。最強のハンターとは、そういうものなんだ」
　シルフィードの説明を聞いてクリュウはそっとキティを見詰める。何だか、七年という月日は彼女と自分の距離をどうしようもないくらいに広げてしまったような気がした。昔はいつも一緒にいた姉は、いつの間にか自分が目指す道の最強となってしまった。近くても遠い、そんな気がした。
「例外としては付近の村全域に避難勧告を発令するような、周辺の村々が滅びる可能性が極めて高い場合のみなのです。現状、この村の置かれている状況はそこまで深刻ではない為、この例外事項に当てはまらないのです」
　以前のフルフルやリオレウスのような討伐しなければ村に直接危険が生じるような急を要する場合ならこの例外事項が通用しただろう。しかしティガレックスは現在イルファ雪山のみでの活動で、周辺の村や商隊を襲っている訳ではない。現状では例外事項が適用されるほど深刻な状況ではないのだ。
「どうしてもと言うなら、私もギルドに逆らう覚悟で討伐を請け負うのです。この村は私にとっては第二の故郷なのです。その故郷の為ならお上に背く事も辞さないのです」
　そう言ってキティは羽織っていたマントを翻す。現れたのは最強の証であるG級装備、それも古龍に類別される幻獣キリンの素材を

使ったキリンXシリーズ。生ける伝説と言われるハンターしか使う事を許されない、まさにエンペラークラスのハンターの姿だ。
黙り込む村長を前にキティは静かに宣言する。
「――雷帝覇王の名に掛けて、ティガレックスを討伐するのです」
彼女の口から放たれた《雷帝覇王》という称号名に、その場にいた全員が驚いた。何せその称号は、大陸全土に響き渡る超有名ハンターの称号だったからだ。
「雷帝覇王、あの現役女性最強とも言われるバリアブルハンターか……」
驚くシルフィードのつぶやきに、キティは大きくうなずいて肯定した。
雷帝覇王とは、これまで数多の古龍や危険なモンスターをソロにて討伐して来た、エンペラークラスの中では確実に五本の指に入るような実力者だ。あのヴォルフガング兄妹よりもさらに上、現役の女性ハンターでは最強と言われているハンターなのだ。
その特徴は他の多くのハンターが一つ乃至二つの武器を得意とするのに対し、彼女は全ての武器を達人並みに使う事ができる。複数の武器を扱う事ができるハンターの事をバリアブルハンターと呼ぶが、彼女はその最強に君臨するハンターなのだ。
特に彼女は雷属性の武器を好む事やキリンX装備を纏う事、その圧倒的な力で他を寄せ付けない高貴さからついた称号が雷帝覇王。称号に王の名がつく程の実力者、それがキティ・ホークラントというハンターだった。
場がこれまでとは違った緊張感に包まれる中、キティはこれまでのように自由だった。臆するクリュウに近づくと、その頭をいい子いい子と撫でる。
「安心するのです。私は雷帝覇王である前にクー君のお姉さんなのです。昔と何ら変わらない、クー君が大好きなお姉さんなのです」
そう言って彼女は笑った。その笑顔は、数多の竜を撃破して来た猛者のものではなく、純粋に弟を可愛がる姉の笑顔だった。その笑顔を見るだけで、彼女が昔と何も変わっていないとい悟ったクリュウ。遠

くに行ってしまったように感じていたのは、自分だけだったのだ。
「ありがと、キー姉ぇ」
安心したように微笑む彼の姿を見て、キティも満足そうにうむうむとうなずく。そして振り返り、改めて村長に向き直ると「どうするのです？」と尋ねる。
村長からすれば雷帝覇王に村の脅威を討伐してもらえるのなら願ったり叶ったりだ。彼女程の実力があれば不安もない。これ以上の好条件などなかった――だが、
「……いくら村の為とはいえ、君に政治的な負担を掛けるつもりはないよ。気持ちは嬉しいけど、これは僕らの村の問題だから」
そう言って、村長は残念そうに彼女の申し出を断った。そんな彼の英断を、この場にいた全員が心から支持していた。村の為とはいえ、《家族》に将来を潰すかもしれないような事は頼めない。家族を愛する、それがイージス村の伝統だ。
「――それに、僕達にだって対抗手段がない訳じゃない」
そう言って村長はニッコリと笑うと、ずっと黙っているクリュウ達を見る。突然注目された事に驚く彼らに対し村長はまるで自分の宝物を自慢するように、心の底から嬉しそうに話す。
「僕達には頼れる村の防人がいるじゃないか。これまで何回も村の危機を救ってくれた、最高のハンター君達が」
村長の言葉に、クリュウ達は一斉に顔を見合わせた。
これまで、何度も村の為に立ち上がり、その脅威を撃破してきた最強のチーム。どんなに苦戦する戦いの中でも決して諦めず、互いを鼓舞し合いながらひたすら勝利を目指して奮闘して来た、信頼し合える最高の仲間達。これまでも、そしてこれからもずっと続く村専属のハンター達の戦い。これもまた試練にして通過点――これくらいの危機を救えなくて、何が村のハンターだ。
「――僕は、やるよ。ティガレックスを倒してみせる」
村長の方へ向き直ったクリュウは迷う事なくハッキリとした口調でそう宣言した。それを聞いて驚く者もいれば彼らしい答えに思わず頬が緩む者もいる。村長は後者だった。

「そっか。まぁこっちも支給品などでできる限り応援するよ」
「クー君の為です。私も調べた情報をできる限り提示するのです」
　クリュウの答えを聞いて嬉しそうに笑う二人の言葉に「ありがとうございます」と笑顔で礼を述べるクリュウ。そんな彼の隣でやれやれとばかりにため息をつくシルフィード。
「まったく、一応リーダーは私なんだから私を通じて宣言してほしいものだな」
「ご、ごめん。つい……」
「ふん、まぁいいさ。私も強敵を相手にできるとなればハンターとしての腕が鳴るというものだ」
「シルフィ……」
「君一人で行かせられるか。君の隣に私がいない狩猟など、認めないぞ」
　そう言ってシルフィードは頼もしく笑った。その笑顔を見るだけで、クリュウの中で勇気と自信が満ち溢れる。例えどんなに強敵でも彼女が一緒にいれば怖くない。心からそう思えた。
「わ、私も行きますッ！　ディアブロスよりも強いというのは少し怖いですが、村の為にがんばりますッ！」
　そう言ってフィーリアも慌てて立候補する。村の窮地を救いたいというのは本心だが、何よりもクリュウの傍にいたいというのが本音だ。それに自分はチーム唯一のガンナーにして後方支援役。みんなを弾丸や道具類を駆使して助けられるのは自分だけなのだ。そんな誇りにも似た気持ちが、彼女を突き動かす。
　クリュウにシルフィード、そしてフィーリア。村専属のハンター三人が立候補する中、事実上補欠となっているツバメは小さくため息を零すと隣に座るサクラの肩を叩く。
「お主はどうするのじゃ？」
「……私は」
「気持ちはわかるが、両親を殺された恨みで行動するのだけはダメじゃ。その場合は問答無用でワシがチームに入る。冷静さを失ったお主を抱えて万全な狩猟ができるとは思えぬからのぉ。単純に考え

るのじゃ。村の危機を救いたい、仲間と一緒に戦いたい――クリュウの隣に立っていたい。いつものお主らしいお主を見せておくれ」
ツバメの言葉に、今までずっと伏していた顔を彼女はゆっくりともたげる。そして彼を崖下に落としてしまってからずっと目を合わせる事すらできなかったクリュウの顔を、しっかりと見据える。その瞬間、クリュウは彼女を安心させるように笑った。その笑顔を見て、サクラの中で覚悟が決まった。
「……私も行く。今度は、復讐者としてではなくて――狩人（ハンター）として奴を叩く」
そう言った瞬間、彼女の隻眼が眩く煌めいた。剥き出しの戦意がギラギラと輝く、凛々しくも頼もしく、そして荒々しくも繊細な、サクラ・ハルカゼという武士（もののふ）の本気の瞳がそこにあった。
侍の目を取り戻した彼女を見て安心する一同。クリュウもまた自分のせいでずっと落ち込んでいた彼女がやっと元気を取り戻してくれてひと安心する。ほっと胸を撫で下ろしていると、何かの視線を感じる。振り向くと、サクラがジッとこちらを見詰めていた。
「な、何？」
「……今度こそ、御身を守ってみせる。我が命に代えても」
周りが萎縮するような威圧感と共に、彼女はそう宣言した。彼女の迫力と本気を前に場が一気に張り詰め、妙な緊張感が支配する。もう二度と失態は犯さない。今度こそ、必ず。そんな彼女の意思がヒシヒシと伝わって来る。だからこそ、彼は言った。
「その言葉、そっくりそのまま返すよ」
笑顔で言う彼の言葉に一瞬呆けたサクラだったが、すぐにフッと口元に笑みを浮かべると「……クリュウらしい」とつぶやく。いつもと変わりない彼を見て、いよいよ覚悟が決まったサクラは立ち上がるとその場で抜刀して見せる。飛竜刀【紅葉】を器用に使って剣舞を舞うと、ダンッと床を蹴る。彼女愛用の東方伝来の足袋がしっかりと床を踏みしめ、腰を落として刀を構えながら、隻眼を輝かせ――
「……サクラ・ハルカゼ、出陣する」
――見事な見得を切ってみせた。

出撃は明朝という事となり、ルナリーフ家に戻った四人はそのまま武器や道具類が収められている倉庫にて各自キティのアドバイスを受けながら武器の選定や持ち込む道具の選定など、狩猟の準備を開始した。

「確実な事は言えないのですが、この金華朧銀の対弩はほぼ全ての属性弾を使えるのです。可能な限りの属性弾で試した結果、最もティガレックスに有効な属性は雷と推測するのです。その為、武器の選定は可能な限り雷属性を使う事をおすすめするのです」

倉庫にて武器の選定に悩むクリュウ達を後押しするようにキティが言ったのは自身の偵察調査で得た情報、現時点で最も効果があるとされるティガレックスの弱点属性に対する情報だった。

「それ、本当ッ!?」

自らの武器を並べて困っていたクリュウの言葉に、キティは大きくうなずいた。

「ティガレックスは現時点では雪山と火山にて発見されているのです。その為、この時点で火属性と氷属性には耐性があると考えるのです。残る水属性と雷属性を重点的に調べた結果、最も効果があるのは雷属性だというのが私の結論なのです」

そう言って彼女が見せたのは自身の武器、金華朧銀の対弩。銀火竜と金火竜、それも特に長生きしていて体も大きく歴戦の飛竜二頭から獲れる厳選素材を用いて作られるこの武器は単純火力でも相当なものだが、同時に滅龍弾以外の全ての属性弾を撃てるという驚異的な能力を秘めている。キティはこれを用いてティガレックスの属性に対する耐性もすでに調べていた。そして至った結論が、ティガレックスの弱点属性は雷であるという事だった。

「となると、僕はサンダーベインで行くべきかな」

そう言って彼が手に取った武器は以前に討伐したフルフルとゲリョスの素材を使って作られた雷属性の武器、サンダーベイン。刃を除いた部分に絶縁のゴム質の皮を用いる事で刃の部分に集中的に内蔵された電気袋から発せられる電撃が炸裂する、片手剣では最もメジャーな雷属性の武器だ。

「うーん、しかしサンダーベインは火力不足になりかねない。攻撃力も属性攻撃力も低いからな。できればもう一段強化したいが、その為には古龍骨が必要だからずっと強化できずにいたしな」
　そう言ってサンダーベインを持ち出す事を渋るのはシルフィード。彼女の言う通り、サンダーベインはどうしても火力という点で劣る。なので今までは雷属性に弱いモンスター相手でも攻撃力の高い武器で挑んでいた。今回も、雷属性の武器を選びたい所だがどうしても火力という点で劣ってしまう。
「じゃあ、やっぱりこいつだよね」
　そう言って彼が手に取ったのは、これまでずっと幾多のモンスターを共に戦って来た愛剣デスパライズ。ドスゲネポスの強力な麻痺毒を仕込んだ麻痺属性の武器で、これまで幾多の戦いでモンスターを麻痺状態にして仲間の攻撃の隙を作って来た、クリュウが最も信頼する武器であった。
「そうだな。奴は常に動き回るモンスターらしいから、攻撃する隙が少ないだろう。君が、その隙を作ってくれ」
「うん、任せて」
　クリュウは今回の狩猟で使う武器をデスパライズと決めた。
　一方、サクラはすでに武器を雷属性の愛刀、鬼神斬破刀に決めていた。チーム随一の高威力の雷属性の武器を使う彼女は、今回は必然的に主力となる。鬼神斬破刀を背負ったサクラの目はいつになく本気だ。
　そしてフィーリアも武器は自らの防具と合わせてハートヴァルキリー改を選んだ。この武器は彼女が持つ武器の中で唯一電撃弾を撃てる武器であり、今回の狩猟では彼女もまた火力的な意味で主力となる。そしてシルフィードは、
「残念ながら私は雷属性の武器は持ち合わせていないからな。まぁ、いつもの通り単純攻撃力で他を圧倒するこの武器でいくさ」
　そう言って彼女が選んだはクリュウにとってのデスパライズと同じく、これまで最も多くの狩猟を共にしてきた愛剣キリサキ。ショウグンギザミのハサミなどを素材にしたこの武器は無属性ながらその

抜群の切れ味で幾多の硬いモンスターをも地に伏して来た名剣だ。
「こんな感じの武器の選択だけど、大丈夫かな？」
「問題ないのです。確定情報ではないので、無理に雷属性で攻めるよりはこうしてある程度のバランスを持たせた方が得策なのです」
「そっか。それでキー姉ぇ……」
　いつもならシルフィードに色々と教えを請うような状況だが、彼はこれまでずっとキティに色々と教わっていた。もちろん交戦経験があり、様々な情報を持っている彼女に色々と教えてもらおうというのは正しい選択だ。だが、いつも頼られているシルフィードとしては、やはりどこか面白くない。
　いつになく不機嫌そうに立っていると、その両隣をフィーリアとサクラが並び立つ。
「……あの女、嫌い」
「そんな事言っちゃダメですよ……でも、何だか落ち着かないです」
「まぁ、相手はクリュウにとって姉のような人だ。仕方あるまい」
　何かにつけてキティを頼るクリュウを、どこかムッとしながら見詰める三人。すると、そんな彼女達の背後から同じようにクリュウを見詰めていたエレナが短くため息を零した。
「どうしたエレナ、そんな浮かない顔をして」
「べ、別にそんな顔してないわよ……ただ、ちょっとキー姉ぇがねぇ」
　シルフィードの問い掛けに対し何とも微妙そうな顔を浮かべるエレナ。そんな彼女の妙な反応に疑問を抱くフィーリアは「ホークラント様はエレナ様にとっても姉のような方だってクリュウ様は言ってましたが、違うんですか？」と首を傾げながら尋ねる。キティはクリュウにとっても、そしてエレナにとっても幼少期に色々と世話になった姉的存在だ。それは違いないのだが……
「まぁ、そうなんだけど。その、あまり面と向かっては話しづらいというか……」
「どういう意味だ？」
　首を傾げるシルフィードの問い掛けに対し、エレナは楽しそうに話しているキティとクリュウを見ながら、どこか淋しげに口を開き――

三人の恋姫を驚愕させる事実を語った。

「キー姉ぇは――クリュウの初恋の人だから」

第２０４話　幼い頃に交わした約束　交差するそれぞれの想い

「く、クリュウ様って誰かに恋心を抱いた事があったんですか？」
　驚きを隠せないフィーリアの疑問に対しエレナは苦笑しながら「何だかひどい言われようだけど、まぁその通りよ」と答える。
　ここはルナリーフ家の裏庭。倉庫の中では依然としてクリュウとキティが何かを話しているようで、その間に入る事もできなかった四人はそそくさと退場し、ここに布陣してエレナから彼とキティの過去について聞かされていた。
　エレナの放った衝撃の事実に愕然とする面々に対し、しかしエレナは慌てて「そ、そんなに落ち込まないでよッ。初恋って言っても、ほら子供の頃の話だから。私達くらいの年齢で抱くそれとは必ずしも同じ訳じゃないし」とフォローを入れる。だがそれはきっと、彼女自身にも言い聞かす言葉だったのかもしれない。
　キティは自分やクリュウにとって姉のような、大切な家族だ。同時に、自分が好きな男の初恋の相手。彼女としても、この板挟み的な複雑な関係にはほとほと困り果てているのだ。
「ただ、あの頃のクリュウは何かとキー姉ぇに甘えててさ。キー姉ぇもあいつの事をとても大切にしてたから、何だかすごく仲睦まじくて、間に割って入る事ができないくらい……」
　思い出すたびに胸が苦しくなる。幼少期の彼を支えたのは自分ではなく、彼女だった。幼なじみとしての誇りが瓦解するような、そんな感覚。楽しそうに話している二人を見て、子供ながら胸を痛めていた、あの頃の記憶。
「クリュウにとって、キー姉ぇはアメリアさんと同等くらいに大切な人なのよ。幼なじみの私じゃ届かないくらい、あいつにとっては」
「エレナ様……」
　いつの間にか涙目になりながら話し続ける彼女の様子に胸を痛めたフィーリアはそっと彼女の正面から抱きつく。「無理しないでくだ

さい」と言う彼女の言葉にわずかながらも「無理なんか、してないわよ……」と反発するエレナ。だがそれはいつもの彼女とは比べ物にならない程に弱々しかった。
「た、例えホークラント様がクリュウ様の初恋の相手だったとしても、今は私達の方がずっと強い信頼関係でクリュウ様と結ばれているはずですッ。この強力な関係の前ではどんな過去の出来事など無意味ですッ」
「あいつのファーストキスの相手もキー姉ぇだとしても？」
「……実家に帰らせていただきます」
　エレナの放った強力な一撃を受けたフィーリアは濁った目をしたまま故郷へと帰ろうとする。慌ててシルフィードが止めに掛かるが、まるで魂が抜かれた人形のように彼女はぐったりと動かなくなってしまった。
「……それ、本当？」
　サクラに関して言えば今にも用意した鬼神斬破刀でキティを襲撃しかねない。そんな風に見えた。目は血走っていて、刀の柄を握る腕は怒りに小刻みに震えている。彼女なりに理性を保っているようだが、すでに限界に達しつつあった。
「本当よ。当時のキー姉ぇの部屋で二人が何かしていると思ってこっそり覗いた時、見ちゃったのよ――キー姉ぇが、クリュウを優しく抱き締めながら、あいつの唇を奪っている光景を」
「――あのクソアマ、今すぐ斬り殺す」
「――奇遇ですねぇサクラ様。私も電撃弾の試し撃ちをしてみたいと思っていたんですよぉ」
　こういう時だけはなぜか妙に息がピッタリな二人を、シルフィードが慌てて止める。本当は二人にも似た感情を持っているはずの彼女だが、どうしてもこの二人が暴走すると歯止め役となるので感情的になれない。ある種何とか常識を保っているが、最も損をしていると言えるだろう。
「そうか。ずっと気にはなっていたんだ。最初こそ再会を喜んでいたようだが、その後はずっと二人に近づかなかった君を。今の話を聞い

て全て納得した――まぁ、その何だ。君も大変だな」
「人間としての尊厳を失った笑みを浮かべている二人を必死で止めているあんたに比べれば、幾分かマシよ」
それは彼女なりのせめてもの強気の返しだったのだろう。だがやはりいつもの彼女の力強さは感じられない。ある意味、キティやクリュウと仲がいいからこそ余計に辛い彼女は、このメンバーの中では最も可哀想なのかもしれない。から元気で浮かべた笑顔もまたどこか淋しげで、いつもの彼女の元気さを知っているシルフィードからしてみれば痛々しく見えて仕方がなかった。
「――だがまぁ、過去は過去だと思うぞ」
ゆっくりと語る彼女の言葉に、制止されていた二人とエレナが驚いたような表情を浮かべて彼女を凝視する。するとそこには、いつもの頼もしい戦姫と、一途に一人の少年を愛する恋姫としての、二つの顔を持った乙女、シルフィードの自信に満ちた笑顔がそこにあった。
「例え過去にクリュウが好きになった相手でも関係ない。私はどんな相手であろうと蹴散らし、あいつを物にしてみせる――もちろん、君達も例外ではないぞ？」
まるで挑発するかのような物言いと笑み。しかしそれを見た三人は――
「……面白い。貴様らなど鎧袖一触で蹴散らしてやるわ」
「ふぅん、いい度胸じゃない。言っておくけど、私だって容赦しないわよ」
「わ、私だって負けませんッ！」
臆するどころか、逆にその挑発に見事に乗ってみせた。あの程度の挑発で臆する者はここにはいない。ここにいるのは、何が何でも勝利を掴もうとする恋の猛者達。クリュウ・ルナリーフを一途に愛し続ける健気な乙女達だ。
不敵に笑う三人を見てシルフィードもまた「クリュウを奪い取る為には倒すべき敵が多い事は今に始まった事じゃない。これまで通り、仇なす者全てを蹴散らせばいい。そういうものだろ？」と不敵に笑ってみせた。

四人の恋姫達は互いに不敵な笑みを浮かべ合うと、誰からともなくおかしそうな笑みに変わる。
「まぁ、正直クリュウの初恋の相手というのは厳しいが、あくまで子供の頃の話さ。今の彼の事を知っているのは我々だ。臆する事はないさ」
そう言って頼もしげに微笑んでみせる彼女を見て、フィーリア達は彼女の強さと凛々しさを改めて認めた。相手がどんな強敵でも臆する事なく、ただ前へと前進し続ける。これが天下に名を轟かせる最強の乙女、蒼銀の烈風なのだ。
「そ、そうですね。子供の頃の話と今の私達と想い。比べようがありません」
まるで彼女の言葉に力を得たように意気込むフィーリアの言葉にサクラも同意するようにうなずく。
「……奴は私がいない隙を突いてクリュウに近づいた。私がいる今は、奴の好き勝手にはさせない」
「それだとまるで私が不甲斐ないみたいに聞こえるんだけど？」
サクラの凛々しき言葉に苦笑しながら答えるエレナ。しかしその表情は他の面々同様に先程までのような気まずさはなく、やる気と気合に満ち溢れていた。
「それでは、ひとまず停戦しましょう。打倒キティ・ホークラント様ッ！　あの方からクリュウ様をお守りする、乙女連合発足ですッ！」
強敵を前に共闘を宣言するフィーリアの言葉にシルフィードもエレナも同調した。サクラも「……勝手にすれば」と突き放したような事を言うが、皆は知っている。これは彼女なりの了承なのだと。
「まずはホークラント様からクリュウ様をお守りするッ！　そしてクリュウ様死守の後はイージス村防衛に全力を注ぐ。これで行きましょうッ！」
「……まぁ、村の防衛が二の次になっているが、それでいくか」
苦笑しながらシルフィードも了承し、ここに四カ姫条約が締結されたのであった。
「こんな感じかな」

そう言ってクリュウは用意した道具類を並べてみる。彼が常日頃持ち歩く基本装備として回復薬、回復薬グレート、こんがり肉、砥石、ペイントボール、閃光玉。強敵仕様の小タル爆弾G、大タル爆弾G、落とし穴、シビレ罠、トラップツール、ゲネポスの麻痺牙。それに今回は雪山が舞台という事でホットドリンクも忘れない。

入念に準備を進めるクリュウ。そんな彼の背中をキティは頼もしげに見詰める。

少し会わない間に、すっかり成長した弟の勇姿を瞳に焼き付けるように。キティは彼の後ろ姿を見詰める。昔とは違って大きく逞しくなった彼の背中。横を向く度に見える彼の横顔もすっかり凛々しく成長し、見違えた。昔は可愛い印象だった彼も、今も可愛いには可愛いがその中に男の子特有のかっこ良さも加わり、素敵になった。

「クー君」

そっと近づいたキティは、後ろから優しく彼の背中を抱き締める。突然背後から抱きつかれたクリュウは「き、キー姉ぇ？」と戸惑う。そんな彼の可愛い反応を見て口元に笑みを浮かべると、キティは抱く腕に力を込めて彼を引き寄せる。

「クー君、少し見ない間に立派になったのです」

「そ、そうかな？」

キティに言われると、何だか嬉しくなってしまい照れ笑いを浮かべるクリュウ。だが横顔を覗き込むようにじぃっと見詰めて来る彼女を見て今の自分の状況に気づく。

「あ、あのさキー姉ぇ。離れてくれないかな？」

無防備に抱きついて来るキティは昔よりもずっと大きな胸が背中に押し付けられている。その温かさと柔らかさだけでも一杯一杯なのに、彼女に至近距離で見詰められると、どうにも落ち着けない。

この状況に困る彼を見て楽しげに微笑みながら「クー君は私の事が嫌いなのですか？」と尋ねる。

「いや、嫌いって訳じゃないけど……」

「じゃあ――好き？」

純粋な一途な瞳に見詰められたままの問い掛けに、クリュウは一瞬

ドキッとする。恥ずかしそうに赤面しながら、彼なりに頑張って「す、好きだけど」と小さな声で返す。そんな彼がいじらしかったのだろう。キティはさらにぎゅーっと抱き締める。
「き、キー姉ぇ……ッ」
「恥ずかしがる事ないのです。クー君と私はチューもした仲なのです。今更恥ずかしがる事は何もないのです」
「は、恥ずかしいよッ」
恥ずかしがる事なく平然と言ってのける彼女の言葉に、クリュウは顔を真っ赤にして叫ぶ。頭の中には幼い頃の記憶、当時の自分はキティの事が大好きで大好きで、彼女に向かって「大きくなったらキー姉ぇと結婚する」と告白した。その返事として彼女は自分の唇を奪った。返事は結局「クー君が大きくなった時も変わらない気持ちだったら、考えてあげるのです」という曖昧な形に終わったあの日。
子供の頃の事とはいえ、何とも大きく出た告白をしたものだ。十七歳になったクリュウは過去の自分の大胆さに驚く。そして――
「では、クー君は私と結婚するのです」
――昔の頃の約束をしっかり覚えていて、それを遂行しようとする彼女にも驚いた。
「え？　結婚って……」
「忘れたのですか？　クー君は昔、大きくなったら私と結婚したいと言っていたのです」
「そ、それは覚えてるけど……本気なの？」
「私はクー君の事なら何でも本気なのです。クー君の為に、ちゃんとバージンは取っておいたのです」
「そ、そういう事を女の人が平然と言わないのッ！」
顔を真っ赤にして怒る彼を見ておかしそうに笑うキティ。そして自分がからかわれている事に気づいてさらに顔を真っ赤にさせてそっぽを向いてしまうクリュウ。昔と変わらない、仲のいい姉弟の姿がそこにはあった。
「もう、キー姉ぇのバカッ」
「ごめんなさいなのです。あまりにもクー君が可愛かったので」

「可愛いって、僕は男なんだけど……」
　言われ慣れているとはいえ、やっぱり可愛いと言われる事は嫌なクリュウ。そんな不貞腐れる彼を見て「ごめんなのです。許してほしいなのです」と謝るキティ。そんな彼女の言葉に「べ、別にもういいけどさ」と折れるクリュウ。昔と同じ、彼女とのこういうやり取りでは自分の方が先に折れるのだ。
　許してもらって微笑むキティは、再びそっと彼の背中に抱きついた。
「だ、だからキー姉ぇ……ッ」
「――でも、クー君がその気なら、私はクー君のお嫁さんになるのですよ？」
　やめてと言おうと振り返った瞬間、息が掛かるような距離でキティは少し照れながらそう言った。その言葉と距離に思わずクリュウはドキッとしてしまう。それどころか、キティはゆっくりと顔を近づけて来る。
「き、キー姉ぇ……」
　少し見ない間に、自分もだが彼女も大きく成長した。最後に会ったのは今のサクラくらいの年だったが、今ではすっかり大人の女性に変わっていた。昔よりもずっと大人の女っぽくなって、胸も大きくなって、笑顔もさらに素敵になっていた。昔好きだった頃よりもずっと、彼女は魅力的に変わっていた。
　ゆっくりと近づいて来る彼女を、クリュウは拒む事ができなかった。ドキドキとときめく胸に、自分の気持ちがわからなくなる。自分は今も、彼女の事が……
「クー君」
　柔らかそうな唇が、そっと自分の唇に触れる――寸前、そのわずかな隙間を猛烈な勢いで刀の刃が通り抜ける。
「のわッ!?」
　二人の間を引き裂くように現れた刀に驚いて身を退くクリュウ。微かにカタカタと震える刀の柄の方を見て、クリュウは自分の中でサーッと血の気が引くのを感じた。そこには刀を持ったまま涙目に

なって怒るサクラがいた。その背後には不気味なくらいすごい笑顔なフィーリアと、今にも爆発しそうな怒りを堪えている感じのエレナ、そして不機嫌そうにそっぽを向いているシルフィードといった面々が揃っていた訳で。
「……クリュウ、最低」
涙目のまま短く一言つぶやくサクラ。その言葉がクリュウの胸にグサリと刺さった。だがもちろんそれだけで終わる訳ではなくて、右腕をフィーリア、左腕をエレナに拘束される。
「ちょっとクリュウ様、裏の林で処刑――じゃなくてお説教がありますので来てください」
とてもとても清々しいくらいの笑顔で言うフィーリアだが、その瞳は濁っていて全く微笑ましくはない。むしろ恐怖すら覚える。
「来なさいクリュウ。裏の林で処刑――じゃなくて話があるから」
ちょっと突いただけでも今にも爆発しそうなエレナ。こういう時のエレナは全く容赦がない訳であって。
「あ、あのさ二人共。お説教とか話の前に一回処刑って言ってなかった？　言ってたよね？　ね？　ねぇッ!?」
ズルズルと腕を拘束されながら引きづられていくクリュウ。いよいよ身の危険を感じたらしく慌ててシルフィードに助けを求めるが、彼女はそっぽを向いたまま無視する。彼女は助けてくれないとわかるやすぐに今度はキティに助けを求める。が、
「クー君はとてもとてもモテモテなのですね。お姉さんは安心したのです」
と、むしろ微笑ましく見詰めている訳で――ようやく、助け舟がないと悟ったクリュウ。「ちょ、ちょっと待って二人共ッ！　話せばわかるからッ！　情状酌量を求め――」と必死に叫びながら、彼は連行されていった。
倉庫に残されたのは問題のキティとサクラ、そしてシルフィードの三名。当然、サクラとシルフィードはキティに敵意剥き出しだ。だがそんな二人の視線にも気にせず平然としているキティ。さすがはエンペラークラスの凄腕ハンターと言った所か。

「……貴様、死ぬ前に何か言い遺す事はあるか？」
容赦なくキティの首元に鬼神斬破刀を構えるサクラ。その目は鋭く、誰が見ても本気だとわかる。気持ちはわかるが、さすがに流血沙汰にはしたくないシルフィードが止めに入る。が、
「――幻獣を統べる雷の覇王に剣を向けるからには、命を懸ける覚悟はあるのです？」
口調こそこれまでと何ら変わらないキティ。しかし彼女から放たれる気は明らかにこれまでとは違う。一国を統べる冷徹な帝王であったフリードリッヒともまた異なる、圧倒的なまでの威圧感。幾多の人物と相対して来たシルフィードですら彼女の凄みを前に恐怖すら覚える。しかしサクラは、
「……クリュウの為なら、私は命を捨てる覚悟はとうにできている――あの人の事を、好きになったあの日から、ずっと」
最強の狩人を前にしても、彼女は臆する事なく堂々とそう言い放った。その背中は恐怖で震える事もなく、ただ真っ直ぐに正面を覇王に向け続ける。例え相手がどんな人物だろうと、己が道を信じ、貫き続ける。前進する事しか知らない彼女らしい、でもその一点を突破する突貫力は誰にも負けない。不器用な、でも力強い乙女の背中。
自分勝手で無茶苦茶で、周りをいつも騒がせるある種の問題児。でも、シルフィードは思った――こんな素晴らしい仲間は、他にはいない。彼女こそ、自分が心から信頼出来る仲間なのだと。
恫喝にも恐れる事なく己が信念を貫き続けるサクラを前に、キティは無言で彼女を見据える。その時間が一分、十分、一時間にも感じられるが、実際はほんの十秒程の事。その果てに、
「……クー君は幸せ者なのです。こんなにも、愛してくれている人が傍にいるのですから」
そう言って、キティは小さく口元に微笑を浮かべた。それはまるで、弟の事を案じる姉の顔そのものであった。
「安心するのです。私はクー君の事は弟のように思っているだけなので、あなた達の好きとは違う意味なのです。私はあくまで、クー君のお姉さんなのです」

彼女の言葉にシルフィードはほっと胸を撫で下ろした。何せエレナから相手はクリュウの初恋の相手だと聞いていたので、これまでの恋敵（ライバル）とは根本から異なる難敵だった。その相手がクリュウの事は異性としてではなく、家族として見ていると聞いたのだから彼に恋する身としてはほっとするのも当然だ。そして、

「……失礼しました、お義姉さん」

「君にはプライドというものはやはり無いのかッ!?」

すかさずクリュウの夫という立場を主張し始めるサクラにすかさずツッコミを入れるシルフィード。その気持ちの切り替えの早さと図太さと機転の早さは呆れを通り抜けて感心すらしてしまう程だ。驚くべき点は、その瞳はとても純粋だという事。後ろめたさや後悔する事なく心の底から己が行動を正義と思っている所。何というか、ここまで我が道を突っ走られるともはや傲慢というよりは浪漫すら感じられるレベルだ。

「あなたはクー君の事が好きなのですか?」

キティの問い掛けに対し、サクラは迷う事なく「……心よりお慕い申し上げております」と答える。こういう事を恥ずかしがる事もなく堂々と言える所も彼女のすごい所を言えるだろう。そういう点に関してだけ言えば、シルフィードも彼女を尊敬する。

「あなたは、好きなのですか?」

そう言ってキティは今度はシルフィードに尋ねる。同時にサクラも振り返ってこちらをジッを見詰めている。二人の眼差しを一身に受けながらシルフィードは一瞬躊躇うが、すぐに覚悟を決めて頬を赤らめながらも小声で「す、好きだ」と答えた。それを聞いてキティは嬉しそうに笑い、そしてサクラも小さく鼻を鳴らした。

「さっきクー君を連れてった娘も、そしてレナもクー君が好きなのですね。かわいい女の子にこんなにも好かれているクー君はとてもとても幸せ者なのです」

うむうむと何度もうなずく彼女の言葉に、二人は苦笑を浮かべる。その結果、自分達は一人の少年を奪い合っている訳なのだが。まぁそれはあまり言わないでおこう。

「……お義姉さんは、クリュウとキスした事があると聞いた。それは事実か？」
　場の雰囲気が少し和み始めた頃、それを見事に正面からブチ壊すようにサクラが疑問をブチ込んだ。あまりにも容赦がない彼女の言動に絶句するシルフィードに対し、幾多の死地を乗り越えて来たキティは動じる事はない。
　サクラの問いに対し、キティは迷う事なく「イエスなのです」と肯定した。その瞬間、明らかにサクラの隻眼が鋭くなったが、キティは動じる事なく指を立てながら答える。
「私は可愛いものが大好きなのです。子供の頃のクー君はそれはもう可愛くて仕方がなくて、ついついキスしてしまったのです。今思えば、さすがにやり過ぎたと反省しているのです」
　つまり、これもまた恋愛感情によるキスではなかったと彼女は説明する。その返答に一定の理解を示したサクラとシルフィードだったが、結果的にそれが彼のファーストキスだったのだから、彼に恋する乙女としては許せないのが本音だ。
　そんな彼女達の気持ちを汲み取ったのか、キティは小さく笑みを浮かべると「安心するのです」と言葉を発する。その言葉の意味がわからず首を傾げる二人に向かって、キティは笑顔で答えた。
「今のクー君は純粋に姉として私を慕ってくれているのです。だから私は、クー君が好きになった娘を妹のように可愛がるのです――当然、あなた達も私の妹になる権利はまだ十二分にあるのですよ？　がんばるのですよ」
　翌日の早朝、狩猟の準備を整えたクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人は崖下に停めてある竜車に荷物を積載していた。今回は念入りに道具類を多めに用意しており、積載作業は難航するかと思われた。しかし村の男達が手伝ってくれた為に予定よりも早く終わり、四人は手伝ってくれた面々に感謝の言葉を述べる。だがいずれも返って来るのは「がんばってくれ」「頼むぞ」「気をつけてな」など彼らを労ったりする言葉ばかり。村の危機を救いに行く彼らに対し、男達の自分達ができるせめてもの行為だったのだろう。彼らの気

持ちをしっかりと受け取ったクリュウ達はいよいよ出発の準備を整え終える。
「私の知っている情報は全て提示したのです。これがバレたらギルドから怒られるですが、まぁその時はその時なのです。ギルドマスターに「私を叱責すると、怒ってギルドから抜けちゃうのです」とでも言えば、手のひら返してくれるのです」
「……たぶんじゃが、ギルドマスターはご高齢じゃからそんな事言えばポックリ逝ってしまうかもしれんぞ？」
　何とも頼もしいような危なっかしいような発言をするキティにすかさずツバメがツッコミを入れる。一緒に夕食を食べたりした関係で、どうやら二人の距離もある程度近づいたらしい。元々キティは誰にでも気兼ね無く接する人間なので、相手によっぽどの問題がなければ大体は仲良くなれる。何とも不思議な人なのだ。
「キー姉ぇの厚意を無駄にしない為にも、全力でがんばるよ」
　そう言って微笑むクリュウの言葉を聞いて、キティも安心したように笑みを浮かべる。だがすぐに顔を引き締めると、四人に向かって先輩ハンターとしてアドバイスを送る。
「相手はまだ生態もハッキリとは判明していない相手なのです。本当にゼロベースから戦わなくちゃいけない相手なのです。でも、あなた達は勝てるのです。あなた達の実力は装備や風格で何となく理解しているのです。それに加えてあなた達の絆はとても強い。総合的に判断し、私は十二分にあなた達がティガレックスと互角に戦えると見込んでいるのです。相手のペースに呑まれる事なく、常に互いの事を意識し合って、自分達の戦いを遂行するのです。そうすれば、必ず勝機は見えるのです――健闘を祈っているのです」
　キティの言葉に四人はしっかりとうなずくと、それぞれ竜車へと乗り込む。いつものように幌の中に三人が入り、運転席にシルフィードが座る。幌の中には今回の狩猟で使うであろう装備が満載されており、これだけの装備を持っての出撃はずいぶん久しぶりだ。念には念を入れての装備は、まさに万全を期していると言えるだろう。
「村の安全はワシとオリガミに任せておくのじゃ。まぁ、直ちに実害

が出るような範囲でもないし、村に害を及ぼすモンスターの数も多くはないから何事もないじゃろうがな」
幌の外でオリガミは頼もしげに笑う。その隣では「任せておけニャ」とオリガミも自らの胸にポンと手を当てて自信を見せている。いつもこの四人で出撃する際は村の留守番をお願いしている為か、すっかり慣れた様子。頼もしいには頼もしいが、何だか申し訳ない気持ちもあったりなかったり。
頼もしい仲間に村の安全を任せ、いよいよクリュウ達の心残りはなくなる。これで安心してティガレックス討伐に全力を注げる。そういう意味でもツバメとオリガミの存在はありがたいのだ。
「よろしく頼むよ」
「うむ」
大きくうなずいてツバメは拳を突き出した。その意味を理解したクリュウも笑いながら己が拳を突き出す。互いの拳は引かれ合うように近づき、軽く互いを小突き合う、それはまさに男同士の約束だ――残念ながらどちらも女の子にしか見えない外見と女の子っぽい外見のせいで、せっかくのかっこいいシーンも何だか微笑ましくなってしまうのは内緒だ。
「キー姉ぇ。色々とありがとう。感謝してるよ」
「何を言うのです。私は可愛い弟と愛する故郷の為に自分ができる事をしているだけなのです。何も、お礼を言われるような事はしていないのですよ」
そう言って口元に小さく笑みを浮かべるキティ。心の底からそう思っているのだろう事はその純真な笑顔を見ていればわかる。自分の事よりも他人の事を優先する。これは彼女の昔からの信念であり――クリュウの信念の礎となったものだ。昔は彼女のような人間になれるようがんばっている。自分は今、昔の自分が憧れていたような人になれているだろうか？
ふとそんな疑問が、胸を過ぎる。
「クー君は、とても立派ですよ」
まるで自分の心の中を読んだかのような彼女の言葉に驚きつつも、

クリュウは苦笑を浮かべながら「そっかな？」と疑問を抱く。自分は立派という言葉とは遠い気がする。失敗もするし器用な方ではないし、何より自分一人じゃ何も出来ない。そんな自分を、昔の自分が見たらきっと情けないと思うだろう。
「少なくとも、私はクー君をすごく立派な人間だと思っているのです。村の為に、一生懸命になってがんばる君の姿は、とても凛々しくて、かっこいいのです。これを立派と言わずして、何と呼ぶのです？」
「僕、かっこいいかな」
「とてもかっこいいのです。きっと、エッジさんとアメリアさんもそう思っているのです」
　褒められて照れ笑いを浮かべるクリュウだったが、ふと彼女の口から出て来た両親の名前に疑問を抱く。彼女は二人に会った事はないはず。名前くらい知っていたとしても、なぜここで二人の名前が出て来るのか。そんな彼の疑問に気づいたキティは小さく笑みを浮かべると、そっと口を開く。
「クー君。私は、あなたのご両親を知らないのです。でも、あなたのご両親の名前は、今でもハンターズギルドに伝説として語り継がれているのですよ」
「父さんと、母さんが？」
　驚くクリュウの口から零れた疑問に対し、キティは「イエスなのです」と肯定すると、ピッと指を立てる。
「《彗星の剣狼》のエッジ・ルナリーフ、《流星の姫巫女》のアメリア・ルナリーフ。歴史上唯一、夫婦でエンペラークラスとなったハンターだと聞いたのです。どちらも現在のエンペラークラスの中でも上位に入る程の猛者だったと。その二人が揃った時は、如何なるモンスターも彼女達を押し通す事はできないと言われていたそうです」
「彗星の剣狼、流星の姫巫女、聞いた事があるな。二〇年以上前に活躍していた伝説級のハンターだったとか。君のご両親だったのか」
　博識なシルフィードは、昔耳にした事のある名に少し驚きながら答える。そんな彼女の言葉に、キティは「イエスなのです」と肯定する。
　もう二〇年以上も前、クリュウが生まれる前まで二人が現役だった

頃の話だ。今ではすっかりその名も廃れてしまっているが、それでも今でも当時親しかったり世話になった者達が語り継いで、今もわずかではあるが二人の英雄伝を知る者は存在する。きっとこれからも、細々と語り継がれていくであろう、クリュウの両親の伝説。
「二人は報酬と見合わない仕事でも、困っている人がいれば手を差し伸べる。そういうハンターだったと聞いているのです。クー君のお父さんとお母さんらしいのですね」
「昔から、二人共お人好しだったからね」
「……あぁ、まぁ個人的見解を言えば君にだけは言われたくない気もしなくもないが」
苦笑しながら言うシルフィードの言葉に首を傾げながら「どういう意味？」と尋ねると、シルフィードは「いやまぁ、深い意味は無いんだ。気にしないでくれ」と笑って誤魔化す。
「君はそんなご両親と同じ道を、しっかりと歩んでいるのですよ」
「……父さんや母さんと、同じ道」
幼い頃に死んでしまった父と母。その二人が目指していたものは一体何だったのか。それはよくわからない。でも、自分がそんな二人と同じ道を歩んでいて、そしていつか二人が届かなかったゴールに辿り着ければ……それはきっと、最高の親孝行と言えるだろう。
「私が協力できるのは、ここまでなのです。ここから先はクー君の力で――クー君と、クー君が心から信頼出来る仲間と共にがんばるのです」
彼女の言葉にゆっくりとクリュウは背後へ向き直る。視線の先では三人の娘が笑顔を浮かべて立っていた。ずっと一緒に狩りをしてきた、心から信頼出来る仲間達。
「がんばりましょうクリュウ様ッ」
天真爛漫な笑顔を咲き誇らせ、屈託なく笑う天使のような女の子。その小さな手で撃つ一撃は点を射抜くような正確さを持ち、これまで何度も助けてもらって来た最高のガンナー乙女――フィーリア。
「……安心して。クリュウは私が護る」
口元に不敵な笑みを浮かべながら頼もしげに仁王立ちをする女の

子。疾風のように大地を翔け、蝶のように天を舞い、夜叉の如き剣撃の嵐で如何なるモンスターも斬り伏せる侍乙女――サクラ。
「君が進む道、その隣に私がいる事を忘れてもらっては困るぞ」
頼もしげに凛々しく微笑みながらそっと腕を伸ばす女の子。背負う巨剣で数多のモンスターを蹴散らし、その勇ましき奮戦と指示を飛ばす勇声で仲間を常に進むべき道を示す、頼れる我等がリーダー乙女――シルフィード。
この世界中を探しても、これほどまでに頼れる仲間はいないだろう。クリュウは心からそう思った。彼女達と一緒ならきっと、どんな遠い場所にも、どんなに道のりが険しくても、行けそうな気がした。
自分の言葉を待つ彼女達に、自分は一体どんな言葉を掛ければいいのだろう。振り返ると、キティは何も言わず優しく微笑んでいる。そんな彼女の笑顔に応えるようにひとつうなずくと、クリュウはフィーリア達に向き直る。どんな言葉を掛ければいいか逡巡し、これだと思った言葉を言い放つ。
「フィーリア、サクラ、シルフィ――こんな僕だけど、また力を貸してッ」
ここで「絶対勝つよッ」とか「ティガレックスなんかに負けないよッ」とか勇ましい言葉や、「この戦いが終わったら、話があるんだ」というような死亡フラグを立てる事もない、頼もしいようでやっぱりどこか情けない一言。でも同時にそれは実に彼らしい。そしてそれは――彼に心から信頼され、力を貸してほしいという願いの証。
三人の恋姫は互いに顔を見合すと、同時に笑みを浮かべ――
「もちろんですクリュウ様ッ」
「……言われるまでもないわ」
「まぁ、こんな私で良ければ喜んで」
――彼の言葉に答えた。
イルファ雪山を目指して出発したクリュウ達。四人の乗る竜車は次第に小さくなっていき、見えなくなる。見送っていた村人達も村へと戻る中、エレナもその列の中に混じって村へと戻る。その途中、少し先を歩いているキティの姿を見つけた。

「あ、あのさキー姉ぇ」
声を掛けると、キティはくるりと振り返って「レナから声を掛けてくれるとは珍しいのです。感激なのです」と、嬉しそうに返事する。そんな彼女の笑顔を見て少し躊躇したが、それでも覚悟を決めてエレナは前に出る。
「私今さ、お父さんとお母さんに代わりに酒場やってるんだ。良かったらこれから、朝食でもどう？」
「おぉ、レナの手料理なのですか？　それはとても楽しみなのです。ぜひお呼ばれするのです」
「そ、そう？　じゃあ一緒に行こうよ」
エレナの手料理を食べられると聞いて大喜びするキティを横目に、エレナは小さく笑みを浮かべる。
クリュウが彼女の事を好きだと気づいてから、ずっと彼女とは距離を置いていた。本当のお姉さんのように自分を可愛がってくれた人なのに。子供の頃の自分はずっと、冷たく接していたと思う。
でも今は違う。ちゃんと、彼女に向き合えるようになった。
だから――子供の頃にちゃんとできなかった姉孝行を、今からちゃんとやるのだ。
「あ、あのさキー姉ぇ。私さ、キー姉ぇの事、好きだよ？」
照れながら、小さな声で言ってみた。だがキティはそんな自分の小さな小さな声も聞き漏らす事なく、しっかりと聞き取ってくれた。そして小さく笑みを浮かべると、
「私もレナの事、大好きなのですよ」
そう言って、キティはそっとエレナを抱き締める。
伝わって来る姉の温かさ、匂い、優しさ。子供の頃に、自分から手放してしまったもの。そして仲直りする事もできないまま別れてしまい、もうずっと出会えないと思っていた姉が、こうして今自分を抱き締めてくれている。
薄っすらと浮かぶ涙を、キティは優しく拭きとる。
「――いっぱいいっぱい、お話するのです」
「……うん」

エレナの手にはそっと、キティの優しい手が添えられていた。

第２０５話　氷雪の山に轟きし咆哮　凶暴竜に翻弄される狩人達

　イルファ雪山に四人が入ったのは村を出発して二日後の夜明け前であった。闇に紛れて麓の拠点（ベースキャンプ）へと入った一行は竜車を停めて降車。続けて積載していた荷物の積み下ろし作業も開始した。今回は何があるかわからない為、とにかく大量の荷物を積載しているので、その積み下ろし作業だけでも普段の倍近く掛かってしまった。同時並行で野営地の設営作業も行った為、全てが終わる頃には東の空が薄っすらの明るくなり始めていた。

　さらにこれからの戦いに備えて英気を養う為にもとフィーリアが朝食を作り、それを食べ終える頃にはすっかり夜も明けて朝日が大地を優しく包み込んでいた。

　食事も済ませた四人は焚き火を囲むようにして最後の作戦会議を始める。

「知っての通り、ティガレックスは現時点ではギルドも正式発表していない未知のモンスターだ。当然、事前情報はほとんどない為に対策の取りようがないのが現状だ。キティ殿から幾分か情報を得ているとはいえ、それでも十分と言えるには程遠い。なのでまず最初は攻撃よりも奴の行動パターンの分析を優先する。ある程度分析が終わり次第、いよいよ総攻撃に入る。ひとまずの手順はこれでいいな？」

　シルフィードの立てた作戦は最初は相手の観察を主体として、ある程度分析が終了次第攻勢に出るというもの。この作戦方針自体はこれまで幾多のモンスターを相手にした時と変わっていないが、今回は様子見の部分をより慎重にする。相手はこれまでのモンスターと違って事前情報が全くないのだ。この部分を怠っては話にならない。

　シルフィードの立案した作戦は現状では最も現実的なものであり、当然反対意見は出ない。皆もまずは様子見をして奴の動きを観察したいのだ。クリュウとサクラはもちろんだが、まだ遭遇していないフィーリアとその目で見たとはいえまだほとんどその動きを見れて

いないシルフィードは特にその必要がある。
「戦闘陣形（アタックフォーメーション）は従来通り私が最前衛を担う。クリュウとサクラは機動遊撃、そしてフィーリアは後方から支援砲火を頼む」
　それがクリュウ達のチームの最も安定していて、最もチームの力が発揮できる陣形（フォーメーション）だ。最大の攻撃力と最高の連携力を発揮できる、クリュウ達の十八番とも言える陣形（フォーメーション）。これでこれまで幾多のモンスターを撃退して来た。
「しかし、相手はディアブロス並みの突進力とリオレイア並みの機動力を兼ね備えていると聞く。そうなれば機動力で劣る私が必ずしも前衛を務め切れるとは限らない。その場合は臨機応援に、遊撃役二人のどちらかが私が陣地転換が完了するまでの時間稼ぎを頼みたい。ただし、サクラは機動力には特化しているがガードができないし、クリュウも片手剣の小さな縦では相手の大技は防ぎ切れないだろう。なので無理はしないでくれ」
　シルフィードの指示に、二人は真剣な面もちでうなずく。二人とも、実際に奴の機動力を経験しているだけあって、その危険性は重々承知していた。だからこそ、慎重に立ち回るつもりでいた。
「フィーリアも火力支援をしつつも、状況に合わせて回復弾をうまく使ってくれ。相手が機動力に特化している以上、どうしても接近している私達は回復の隙が減ってしまう。それを補えるのは君だけだからな」
「任せてください。桜花姫の名に掛けてその任務完遂してみせますッ」
「……そういえば、あんたってそんな二つ名があったわね。私やシルフィードと違って出て来る機会が少ないから忘れてたわ」
「ひ、ひどいですサクラ様ッ！　人が気にしている事に容赦なさ過ぎですッ！」
「……あるだけいいじゃん」
　サクラの容赦のない発言に怒るフィーリアだったが、そんな彼女の台詞に今度はクリュウが遠い目をしてしまう。自らが踏んではなら

ない地雷を見事に踏み抜いてしまったと彼女が気づいた時点ではすでに遅し。首を傾けながら虚ろな目で乾いた笑いを浮かべる彼を前にフィーリアは必死に謝り倒す。
「す、すみませんクリュウ様ッ！　で、でも私は決してそのようなつもりで言った訳では……ッ！」
「……安心してクリュウ。二つ名持ちが必ずしも実力を伴うとは限らないわ。どこかの誰かのように装備の見た目だけで選ばれた二つ名もあるのよ」
「そ、そうですよッ！　私を見てくださいッ！　桜リオレイア様の素材を駆使しての装備からレイア様の別名桜花と姫を掛け合わせただけのなんて単純な――って、さりげなく私をバカにしましたねサクラ様ッ!?」
「おぉ、フィーリアのノリツッコミとは珍しいものを見たな」
「……あのさ、もういいから話進めようよ」
　村の危機、未知のモンスターを相手にしようとしているというのにいつもと変わらぬ相変わらずな感じのクリュウ達。一見すると緊張感がないようにも見えるが、この普段通りの態度こそが彼らの真骨頂と言えるだろう。どんな強敵を前にしてもいつものペースを崩さない。それこそが、彼ら最大の強みでもあるのだ。
「すまんな。話が逸れたが、とにかくいつもよりも慎重に事を進めようと思う。相手はこれまでと違って事前情報もなければ、ただの飛竜種とも違う相手だ。用心に越した事はない――だがまぁ、あまり力み過ぎては逆に普段通りの力も出せまい。いつもの通り、互いを信じて戦おう」
　そう言ってシルフィードはスッと腕を伸ばす。それが意味するものを、彼らは知っている。一人、また一人と同じ様に腕を伸ばし、四方から伸びた四つの腕はそっと手を中央で重ね合う。手の甲に落としていた視線を上げれば、心の底から信頼し合える最高の仲間の笑顔がある。
「必ず勝つぞッ！」
『おぉッ！』

少年少女の勇ましい声が、冬の雪山に心地良く轟いた。
拠点（ベースキャンプ）を出撃した一行は狩場の入口となるエリア1へと入った。気合いも十分にこれからの山登りに備えていた一行は朝露が朝日を浴びてキラキラと輝く雑草を見詰めながらエリアの中央へと進む途中、それは突然現れた。
突如空から咆哮を轟かせながらティガレックスが降って来たのだ。山頂付近での遭遇を想定したシルフィードの考えは拠点（ベースキャンプ）を出発してわずか十分程度で覆ってしまった。
「総員展開ッ！　急げぇッ！」
全くの想定外での遭遇戦。指示を飛ばすシルフィードの声にも焦りの色が見える。
シルフィードとサクラは前面に出て、フィーリアはそんな二人の少し後ろからそれぞれすぐさま攻撃できる構えをとる。荷車を引いていたクリュウは慌てて反転すると、比較的安全そうな場所に荷車を隠す。荷車には大タル爆弾Ｇなどの危険物から今回の狩猟で使う装備が満載されており、戦闘で破損する訳にはいかないのだ。彼が隠し場所に到達する間に、戦いの火蓋は切って落とされた。
「ゴアアアアアアオオオオオオオオオオオッ！」
轟竜の名に相応しき雪山全体に轟くような咆哮（バインドボイス）を放つ。その膨大な怒号を真正面から受け止める三人のうち、耳栓スキルを備えていないサクラとフィーリアはそれぞれ耳を塞ぐ。だがシルフィードだけは相変わらず咆哮（バインドボイス）は通じない。
真っ先に斬り掛かろうと前へ出るシルフィードはその口元に不敵な笑みを浮かべていた。
実はシルフィード、キティの説明を受けていた際にティガレックスの咆哮（バインドボイス）が通常のそれではないのではと疑問を抱いた。その為出発前にアシュアに無理を言って以前のディアブロス戦の時同様に見切りスキルを犠牲にして急遽耳栓スキルを一段上の高級耳栓スキルに変更しておいたのだ。今近距離で奴の咆哮（バインドボイス）を聞いてみて、やはり奴のそれはディアブロスにも匹敵するようなレベルだとわかった。事前にスキルを切り替えておいて正解

だったのだ。
咆哮（バインドボイス）を終えてゆっくりと上げていた顔を下ろすと同時に、シルフィードの抜刀したキリサキがティガレックスの顔面を叩き斬る。鎌蟹の鋏を基礎に作られたこの剣は普通の大剣とは比べ物にならない程の切れ味を誇る。その一撃を初撃を顔面に受けたティガレックスだったが、低く唸りながら顔を振り上げてキリサキを跳ね飛ばす。
「このぉ……ッ！」
シルフィードを跳ね飛ばしたティガレックスはその場で前脚を半歩引く動きを見せる。それを見たサクラはすぐさま「……シルフィードッ！」と声を掛ける。具体的な事はわからなくても、何か動きがある。そう感じ取ったシルフィードはすぐさまキリサキを前に構えてガードの姿勢を取った。
直後、ティガレックスは身を捩るようにしてその場で一気に回転した。これまでの飛竜とは根本から異なる全体攻撃。勢いよく回るティガレックスの腕がキリサキの腹に当たってシルフィードは弾き飛ばされた。
雪上で足を踏ん張ってを轍を残しながら止まったシルフィードの口元に不敵な笑みが浮かぶ。
「なるほど、回転攻撃の間に隙はないって訳か」
通常の飛竜は全体に対する回転攻撃の際は一八〇度回転を二回繰り返す事で行う。その為、半回転が終わった後に反対側から迫れば剣を一撃か二撃入れる隙があった。しかしティガレックスの場合は一瞬で全方位回転してしまう。これでは、近づく隙もない。これが、四本脚がなせる動きなのだ。
咆哮（バインドボイス）から解けたサクラがシルフィードの代わりに前進して回転を終えたばかりのティガレックスに攻め込む。稲妻を纏いし鬼神斬破刀を下段に構えながら突貫。一気に距離を縮めてティガレックスのこめかみ目掛けて刀を叩き込む。迸る雷撃が剣の刃先と一体化してティガレックスのこめかみを襲う。だがティガレックスがわずかに動いてしまった為に、威力が削がれしまい、刃先

は轟竜の鱗をわずかに削る程度しかダメージを与えられなかった。
「……チッ」
舌打ちするサクラだったが、そんな彼女を再び回転したティガレックスの腕が殴りつけた。とっさに受け身を取ったとはいえ、雪上に倒れるサクラ。頭から雪を被った彼女はゆっくりと起き上がると悔しげにティガレックスを睨みつける。
そこへクリュウが合流を果たし、距離を取ったフィーリアもまた支援射撃を開始してようやくチームの連携の準備が整った。背中にキリサキを戻したシルフィードが「行くぞッ」という掛け声と共にティガレックスに突撃し、チームとしての攻撃が開始された。
頭上をフィーリアの撃つ通常弾ＬＶ２が甲高い飛翔音と共に駆け抜け、ティガレックスの右腕に命中する。それに対しティガレックスは低く唸りながら攻撃して来た彼女に狙いを定めると、怒号を放ちながら這うような体勢のまま突撃を仕掛ける。通常の飛竜種とは異なる、雪上でも揺るぎのない恐怖の走りだ。
正面から迫っていた剣士三人はそれぞれ横へと跳んでこれを回避。フィーリアも武器を背負って全力で横へと走って何とか回避した。だが振り向きざまに再び銃を構えたフィーリアの顔には若干の焦りがあった。
「思った以上に、動きが早い……ッ」
確かに事前情報通り、相手はディアブロスに匹敵する程の速度で迫って来る。しかもディアブロスは突進の後倒れる事はしないがその自慢の脚力を駆使しても巨体を完全に止めるまで幾分か滑走していた。だがティガレックスはまるでそんな動きを見せず、すぐに停止すると一切の隙もなくすぐさま反転。これでは剣士はもちろんだがガンナーである自分も狙いをつける暇が削られる。
照準を合わせようと足を止めた途端、ティガレックスが飛びかかって来た。その巨体を四本の脚全てを柄っての跳躍は一気にフィーリアとの距離を縮める。慌ててフィーリアは後ろに向かって跳ぶ。雪の上に頭から突っ込む事になったが、そのすぐ背後にティガレックスは着地。間一髪攻撃を避けた。

雪まみれの顔を上げて振り返ると、すぐ傍にティガレックスの顔があった。それこそ、息づかいすらも聞こえる程だ。その着地地点は自分が一瞬前までいた場所。もしも反応が少しでも遅かったらと思うとゾッとする。

「このぉッ！」

フィーリアを襲うティガレックスに対しクリュウは道具袋（ポーチ）から音爆弾を取り出すと、ティガレックスに向かって投擲した。放物線を描きながら音爆弾は振り返るティガレックスに炸裂。甲高い音がエリア全体に響き渡るが、ティガレックスに対しては全く効果がなかった。

「音爆弾はダメか……」

相手が未知のモンスターである以上、色々な道具（アイテム）を試す必要がある。音爆弾が効果がないという事もまた重要な情報と言えるだろう。

だが音爆弾は効果がなかったとはいえ、ティガレックスの新たな照準はクリュウに向けられる。怒号を放ちながら突進して来るティガレックス相手にクリュウは横へ走ってこれを回避する。だが通り抜けたティガレックスは急停止すると、クリュウの体勢が整うのを待たずして反転してしまう。そこへティガレックスは巨大な雪の塊を突き飛ばして来た。盾を構えてガードするが、その質量の前では彼の体は簡単に吹き飛ばされてしまう。

倒れたクリュウを援護するようにフィーリアの速射が再開され、同時にサクラが雪上を翔ける。稲妻を纏いながら突貫するサクラは速射を受けて再びフィーリアに狙いを定めようとするティガレックスの側頭部に向けて鬼神斬破刀を叩きつける。だがティガレックスはそんな攻撃にはビクともせず、攻撃の甲斐なくティガレックスは再びフィーリアに向かって突進を仕掛けてしまう。

迫り来るティガレックスに対してフィーリアは再び武器を背負い直して逃げる。雪の上にまたしても倒れ込む彼女の背後を、轟音と共にティガレックスの巨体が通り抜けた。

しつこくフィーリアを狙うように振り返るティガレックス相手に、

それを妨害するように先回りしていたシルフィードが接近。ティガレックスの左腕目掛けてキリサキを叩き込む。重い剣の一撃と腕力を駆使した一撃だったが、ティガレックスは怯む事はなかった。幸い、フィーリアに向けていた殺気は今度はシルフィードに変わった為にフィーリアは体勢を立て直す時間を得た。だが反面、今度はシルフィードが狙われる事となる。

「ガアアアアアッ！」

怒鳴り声を上げながらティガレックスはシルフィードに向かって飛び掛かる。さすがにこの一撃は耐え切れないと判断したのか、シルフィードは剣を持ったまま横へ跳んで回避した。すぐ横に飛び降りて来る巨体の迫力と圧迫にゾッとするが、構わず振り向きざまに回転斬りを叩き込む。その一撃はわずかだがティガレックスの腕の鱗を弾き飛ばす。だがその程度の攻撃で怯むような相手ではない。再び四肢を使って素早く振り返ったティガレックスは今度はシルフィードに向かって噛みつくように前へと踏み込む。

「うおおおぉぉぉッ！」

勇ましい咆哮と共にシルフィードは剣をガードの構えを取ってこの一撃を防ぐ。だが押し切ろうとするティガレックスと、それを防ごうとするシルフィード。双方の力が拮抗してしまい、力比べのような様相を呈してしまう。

剣越しにすぐ近くに見えるティガレックスの凶悪な顔。鋭過ぎる牙を何とか防いでいるキリサキは不気味なくらいギシギシと軋む音を響かせる。血のように真っ赤な口の中からは肉の腐った臭いが白い息と共に吐き出される。あの臭いの一部になるなんて、なにが何でも嫌だ。

「このぉ……ッ！」

脂汗を浮かべながら耐えるシルフィードだったが、相手は巨大なモンスターだ。スタミナ切れを起こすのは明らかに自分の方。このままでは押し切られる。そう思い始めた時、彼女を援護するように仲間が動く。

中距離に陣取っているフィーリアは必殺の電撃弾を装填。ティガ

レックス目掛けて集中砲火を開始。それに合わせてクリュウとサクラもティガレックスに殺到。サクラの鬼神斬破刀が雷撃を迸らせ、クリュウのデスパライズも麻痺毒を迸らせる。
　三人の一斉攻撃にさすがのティガレックスも悲鳴を上げてわずかに怯んだ。その隙をついてシルフィードは一気に押し切ると、剣を振り抜く。その剣先はティガレックスの額をわずけに削る程度。だが同時にシルフィード自身がティガレックスの眼前から撤退するだけの時間は稼げた。
　鬼神斬破刀を縦横無尽に振り回すサクラ。その刃先は雷撃を纏い、斬りつけるたびに血と共に電撃を迸らせる。本当に雷属性が効くのかは、キティの言葉を信じる他はない。今はただ、刀を振り続けるのみだ。
　自らの中で力が湧き起こるのを感じる。練気が溜まっているのがわかる。でもまだだ。まだ足りない。もっと疾く、もっと鋭く、もっと峻烈に。剣撃の嵐は止まらない。バチバチと迸る雷撃はまるで小さな竜のように怒り狂い、彼女を包み込む。その様はまるで電撃を纏っているかのようだ。
　だがティガレックスもやられてばかりではない。殺到する相手を排除するようにその場で回転。寸前で回転攻撃前のわずかな後退を見逃さなかったサクラとシルフィードはその範囲外に脱し、わずかに遅れたクリュウもガードしてこの一撃をやり過ごした。
　剣士組の攻撃が止んだのを見て、動いたのはフィーリア。腰の道具袋（ポーチ）から閃光玉を取り出すと、それを回り終えたティガレックスの眼前に向けて投擲した。放物線を描きながら閃光玉は飛翔し、次の獲物を定めようとするティガレックスの眼前で炸裂。膨大な光の奔流が轟竜の目を焼き、その視界を奪う。
　フィーリアの投げた閃光玉でティガレックスの動きが封じられる。
「みんな、集まってくれッ！」
　攻め込むべきか否か考えていたクリュウはその声に振り返ると、シルフィードが皆を集めていた。何事かと思いつつもクリュウもフィーリアとサクラと同様に彼女の下へ駆け寄る。

「どうしたの？」
「いや、閃光玉を受けた際の奴の動きを観察しておきたいと思ってな」
そう言いながらシルフィードはティガレックスを見詰めている。他の二人も同様に轟竜の方へ視線を向けており、クリュウも同じようにティガレックスに視線を向ける。
視界を奪われたティガレックスはその場で噛みついたり、見当違いな方向に雪玉を飛ばしたり、その場で回転攻撃をしたりと暴れている。だが一向にその場所から移動する気配はなく、その場で止まって暴れているという感じだ。
「……どうやらティガレックスは、閃光玉を受けている最中は動き回る事はないらしいな」
ティガレックスは常に動き回るモンスターだ。その脚をどれだけ止められるかが勝敗を決めると言っても過言ではない。この場合、持ち込める数と利便性という点で最も優れるのが閃光玉だ。しかし閃光玉を受けた場合、モンスターは大人しくなるタイプもいれば無茶苦茶に動き回るタイプもある。リオレウスなどは前者であり、ドドブランゴなどは後者である。そしてティガレックスはその場で暴れ回るものの、基本的にはほぼ動かない後者だ。この見極めは、これからの戦況を左右する重要な情報だ。
「だとすれば、閃光玉を受けている最中は私とクリュウが前進する。私達はガードができるからな。サクラはあまり無理はせずに攻撃しつつ、状況に応じて罠の設置などを頼む。とりあえず、次の閃光玉では落とし穴を設置してくれ」
シルフィードの指示にサクラは無言でうなずいた。彼女の隣に立つフィーリアは「相手が動けないのであれば、速射で一気にダメージを与えられます」と息巻く。
ひとまずの作戦方針が決まったと同時に、ティガレックスの視界が回復する。敵が一カ所に集まっていると気づくと、そこ目掛けて雪玉を突き飛ばす。飛来する巨大な雪玉に対しクリュウとフィーリアは右に、サクラとシルフィードは左に回避する。
雪玉で分断されたクリュウ達に対し、ティガレックスはサクラとシ

ルフィードの方に向き直ると突進を仕掛ける。迫り来る巨竜を相手にサクラは横へ走って回避した。どうやら狙いはサクラだったらしく、それを回避されるとその場で脚を止める。だがそんな彼の前にはその動きを見切って陣取っていたシルフィードの姿があった。

ダンッと足を地面を力強く突き立てて踏ん張りながら、足を土台として腰を回転させる。腰の回転から始まって、体全部の筋肉を次々に連動させて動かし、全身をしならせながら回転する。最も遠心力が注がれるキリサキに全力を込めて、一気に叩きつける。

大剣の重量を加えられない回転斬りは筋力だけでの攻撃になりがちだ。だがうまく体を滑らせる事で重力の代わりに遠心力を得た一撃は斬り落としにも負けない一撃となる。

轟音を立てながら振るわれる横切りは容赦なくティガレックスの顔面を打ち抜く。これにはさすがのティガレックスも悲鳴を上げて仰け反った。そこへ背後からサクラが強襲。フィーリアも電撃弾で攻撃を加える。クリュウは攻撃には加わらなかったが、とりあえずポイントボールを当てる。これで突然ティガレックスがエリア移動をしても見失わずに済む。

一撃を入れたものの、それ以上の攻撃は危険と判断したシルフィードはすぐにその場を脱しようとする。だがティガレックスは諦めが悪く、彼女を追ってグッと前に踏み込みながら彼女に向かって噛みつく。幸いその一撃はガードでやり過ごした。

三メートル程距離を開けたシルフィードに対し、ティガレックスは今度は後ろから剣撃を浴びせるサクラの方へ振り返ると、バックステップで距離を開く彼女に向かって雪玉を飛ばす。だがその一撃は間に割り込んだクリュウが盾で弾いた。弾いたと言っても巨大な雪玉相手に彼ができる事は軌道をそらす事が手一杯。だがおかげで雪玉はサクラよりもずっと横の方に着弾した。

サクラは視線だけで彼に礼を送ると、ティガレックスの正面を避けるように右から大回りしながら接近する。

ティガレックスは一瞬目で彼女の方を追ったが、この間もずっと電撃弾を撃って来るフィーリアの方が鬱陶しくなったのだろう。今度

は彼女の方へ向き直ると、彼女目掛けて突進する。だがこの動きはフィーリアの想定内。彼女は落ち着きながら閃光玉を取り出すと後方へ投擲。自身は横へと跳んでティガレックスの突進を回避した。直後、突進中のティガレックスの眼前で炸裂した閃光玉が再び彼の視界を封じた。

「今だクリュウッ！　突っ込むぞッ！」

事前の手はず通り、シルフィードの指示でクリュウとシルフィードが暴れるティガレックスに接近する。サクラは刀を背負うと反転し、クリュウが隠した荷車へと向かう。サクラはシルフィードの指示に従って荷車から落とし穴を取り出した。山頂付近は地面の岩が硬くて落とし穴が使えない。だがここなら、使う事ができる。いきなり遭遇するとはさすがに思っていなかったが、奴が麓にも現れる事を想定しておいたおかげで、使う事ができる。念には念を入れた結果が、今発揮される。

一方、相手が動けない為に安心して使える通常弾ＬＶ２の速射に切り替えたフィーリアの攻撃を援護に受けながら、クリュウとシルフィードは動かないでいるティガレックスに向かって剣を振るう。

ティガレックスの右側の腕にクリュウはデスパライズで斬り掛かる。縦斬りから横斬りへと繋げ、その勢いを殺さずに続けざまに次なる攻撃に繋げる。そして最後は体全体を使っての回転斬り。片手剣の攻撃は基本的にこの単調な動きが続く。だが全武器の中でも特に軽いので手数という点ではどの武器よりも優れる。結果、こうした毒や麻痺などの状態異常属性や、通常の属性攻撃と相性がいい。片手剣は単純火力は低くとも、この手数の多さで状態異常などを起こしやすい。

逆る麻痺毒を見ながら、このまま押し切れると踏んだクリュウ。しかしティガレックスは目の見えない状況でも抵抗を見せる。その場で再び群がる敵を一掃するように回転。ガードのできる二人はこれをガードでやり過ごす。また攻め入ろうと前に出るクリュウだったが、

「……クリュウッ！」

背後からのサクラの声に振り返れば、そこにはこちらに向かってビシッと親指を立てるサクラの姿が。その足下には落とし穴がしっかりと設置されていた。
シルフィードも気づいているようで、二人は一斉にティガレックスから離れると一気に落とし穴まで撤退する。ちょうど湖を背にするようにして四人が集結した。
「爆弾は使う？」
「いや、ここはひとまず動けない奴に一斉に攻撃を集中させる。爆弾は次の機会に取っておこう」
シルフィードの言葉にうなずき、クリュウは落とし穴の後ろでデスパライズを構える。他の三人も同様に武器を構え、フィーリアだけはそのまま通常弾ＬＶ２の速射でティガレックスを狙い撃つ。
そのうち、ティガレックスの視界が回復する。辺りを見回し近くに敵がいない事を確認すると、ゆっくりと視線を上げる。するとその先にはまたしても一カ所に集まる敵の姿が。
「ゴアアアアアッ！」
怒りの声を上げながら、ティガレックスは敵目掛けて雪玉を投げた。すぐさま全員が横へ回避しようとしたが、速射の反動でフィーリアだけがすぐには動けなかった。それに気づいたクリュウは回避をやめて前に出ると再び雪玉をガードした。しかしうまく勢いを流せず、クリュウの体は弾き飛ばされた。軌道を逸らされた雪玉は湖へと着水するが、クリュウの体も湖の浅瀬に落っこちてしまう。
「クリュウ様ッ!?」
湖に落ちた彼を見て動揺するフィーリアにシルフィードが「来るぞッ！」と叫ぶ。ハッとなって前を向けば、ティガレックスがこちらに向かって突進して来ていた。一瞬ヒヤッとしたが、自分達の前には落とし穴がある。結果、ティガレックスは落とし穴を踏み抜いて下半身から地面に埋まって動けなくなる。
「今だッ！」
シルフィードは叫びながら動けずに暴れるティガレックスの眼前に立つと、再び足に力を込めるようにして踏ん張りながら剣を背負う

ようにして構える。
　サクラもまたティガレックスの脇腹に入り込むと、これまで溜めてきた練気を一気に解放。全身に力を漲らせ、一気に攻め込む。右上から左下に向けての袈裟斬りから、続けて逆に左上から右下へと斬り落とし、その勢いを殺さずに今度はダンッと地面を蹴って鋭い突きの一撃を斜め上に入れ、最後に左右から斜めに斬り落とした後、一気に上段からこれまでの刀の勢い全てを込めて一気に振り落とした。
　見事な気刃斬りの後、今度は鬼神斬破刀を横へ振り抜きながら後退すると、すぐさま通常斬りで斬りかかる。
　サクラの猛攻の間もシルフィードは静かに力を溜めて行き、限界まで溜まった所で一気に解放する。腰を回しながら全身をムチのようにしならせ、大剣の重量と腕力を一気に振るい落とす溜め斬りの一撃が炸裂する。
　強力な一撃が決まった後も、絶えず横斬りと振り上げなどを加えながら連続して攻撃を与えていく。
　二人の猛攻の間もフィーリアの通常弾ＬＶ２での攻撃は続く。目視をメインにしつつも時々スコープを覗いて狙いを確認しながら、フィーリアはティガレックスの脚を狙って射撃を続ける。大型モンスターは脚に攻撃を受け続けると転倒するのは常識だ。常に動き回る相手ならば、倒れさせるのも動きを止める手の一つ。ガンナーの役目は弱点を正確に狙う以外にもこうして状況に合わせての狙いの変更で味方を援護する事も役目なのだ。
　そして湖から出て来たクリュウもシルフィードの溜め斬りが炸裂する辺りでティガレックスに接近し、デスパライズを脇腹目掛けて振り下ろした。炸裂する一撃はわずかな血と麻痺毒を迸らせる。続けて横斬りから縦斬り、そして回転斬りと次々に攻撃を積み重ねていく。
　だがティガレックスを落とし穴が拘束していられる時間はわずかだ。落とし穴が瓦解し始めるとティガレックスは勢いよくそこから脱出する。それどころかそのまま素早く飛び上がった。
「なッ!?」

この予想外の動きに全員が天を見上げると、ティガレックスの巨体が落ちて来た。慌てて後退する四人に対し、ティガレックスはその場で前脚を踏ん張るようにして上半身を起こすと、天高く咆哮（バインドボイス）を轟かせた。

至近距離でこれを受けた四人はすさまじい声量から発せられる咆哮（バインドボイス）の衝撃波で吹き飛ばされた。女子三人は地面に倒れ、クリュウはまたしても湖に倒れる。

倒れた時に頭を打ったシルフィードは後頭部に手を当てて痛みに顔をしかめながら起き上がる。

「咆哮（バインドボイス）に衝撃波があるのか……ッ！」

彼女は高級耳栓を備えている為、どんな咆哮（バインドボイス）も意味を成さない。だがティガレックスの咆哮（バインドボイス）は音は防げてもその天まで轟くような声が放つ衝撃波がすさまじく、そればかりは高級耳栓を備えていても効果がないらしい。

「高級耳栓でも安心して戦えない訳か……ッ！」

自分のスキルの効力が事実上半減した事に、さすがのシルフィードもショックを隠せない。これでは他の三人のフォローに走れない。

とにかく、今は態勢を立て直す方が先決だ。シルフィードはすぐさま起き上がると、他の三人もちょうど起き上がった所だった。皆思わぬ攻撃に困惑しているようだ。だが、考えさせる暇を与えないようにティガレックスはクリュウ目掛けて飛びかかる。

「ちょ……ッ!?」

慌ててガードするクリュウだったが、そのままティガレックスに押し倒されてしまう。しかもそこは腰程にまで水が浸かっている場所。当然押し倒された彼の体は水中に没する。慌てて起き上がろうにも、ティガレックスの爪がガッチリと胴を押さえつけていて起き上がれない。

息が出来なくて苦しさでもがくクリュウだが、一向に起き上がれなかった。

クリュウが溺れている事に気づいたサクラがすぐさまティガレックスの背後から鬼神斬破刀で襲い掛かる。だがティガレックスは前

に噛みつくような動きをしながら尻尾を動かした。運悪く背後から迫っていたサクラはその振られた尻尾に跳ね飛ばされてしまう。
サクラの突貫が失敗したと見るや、今度はフィーリアが速射でティガレックスを狙い撃つ。結果、ティガレックスは彼女の方へ向き直りクリュウは解放される。急いで水面に顔を出したクリュウは激しく咳き込んだ。
クリュウが無事なのを見て安心したフィーリアだったが、今度は彼女に向かってティガレックスは飛びかかる。十分に距離を取り切れていなかったフィーリアは慌てて回避するが、ティガレックスの爪が背中に引っかかり、そのまま弾き飛ばされてしまう。
地面に強かに打ち付けられたフィーリアは痛さのあまりすぐには起き上がれなかった。今度は彼女を援護するようにシルフィードが動く。ティガレックスへと接近すると背後からキリサキに斬り掛かった。その間にフィーリアはゆっくりと起き上がると、回復薬グレートを飲んで体力を回復させる。ひとまず痛みはこれでかなり軽減できる。
ゆっくりと起き上がると、同じように回復薬グレートを飲み終えたサクラと目が合う。その隻眼は自分を気遣っているように感じた。大丈夫だとばかりにうなずくと、彼女も小さくうなずいて再びティガレックスに向けて突貫する。負けじとフィーリアも再びハートヴァルキリー改を構えて射撃を再開する。
湖からずぶ濡れの状態で上がって来たクリュウ。暴れるティガレックスを何とか押さえ込んでいる三人を見てすぐに応援に駆けつける。
恋姫三人の攻撃でティガレックスは押さえつけていたが、そんなの数秒と持たない。すぐにティガレックスは回転攻撃で剣士二人を弾き飛ばすと、速射で足や顔などを狙う鬱陶しい敵、フィーリアを狙う。自分が狙われた事に気づいたフィーリアはすぐに武器を背負って横へと走るが、それを妨害するようにティガレックスは雪玉を飛ばす。だがその攻撃は再びクリュウが盾で弾いた為に不発に終わる。
「ありがとうございますッ！」

颯爽と現れて自分の窮地を救ってくれた彼の姿に思わず胸キュンしてしまう。さらにお礼を言う自分の言葉に対し彼は何も言わずこちらに背を向けたまま親指を立てる。そのかっこいい仕草にもまた胸がドキドキしてしまう。思わず今は狩猟中だという事も忘れて幸せで胸がいっぱいになってしまった。

何度も自分の攻撃を妨害するクリュウが鬱陶しくなったのか、ティガレックスは彼に向かって跳躍して跳びかかった。だがクリュウはこれを横へ跳んで回避すると、着地のわずかな隙を突いて攻め込む。

一撃、二撃、三撃と攻撃を積み重ねているうちに、次第に麻痺毒が回り始めたのだろう。全身をフル回転させての回転斬りを炸裂させるとその一撃がとどめとなったらしく、ティガレックスは短く悲鳴を上げるとその場で痙攣し始めた。

「今だッ！　畳み掛けるぞッ！」

クリュウが作った麻痺状態という貴重なチャンスを無駄にする訳にはいかない。恋姫達は一斉にティガレックスに殺到すると猛攻を仕掛ける。

サクラは残っている練気を全て使っての気刃斬りの嵐。フィーリアは通常弾ＬＶ２の速射で集中砲火。シルフィードも頭を狙えないとわかると尻尾に向かって溜め斬りを放つ。そしてクリュウは次の麻痺状態を狙ってひたすらに剣を振るい続けた。

時間にすればわずか十秒程だ。それでも、四人はその十秒に全力を注いだ。その総攻撃力は相当なものだったはず。

麻痺状態から脱して短く唸り声を上げながらティガレックスは頭を数回横へ振るう。するとそのまま後ろへと大きく跳躍して四人の包囲網を脱してしまう。慌てて追いかける四人だったが、先頭を走るサクラが異変に気づいた。

ゆっくりと両の前脚を地面に突き立てて踏ん張るティガレックス。よく見ればその両方の前脚と頭に鮮やかな赤い筋が浮かび上がっていた。血流が増え、比較的皮膚の方を通っている血管が薄い皮膚越しに見えているのだろう。そして血流が突然膨大に増える理由は、

「……止まってッ！」

サクラの声に慌てて三人は足を止めた。直後、ティガレックスは胸を張りながらスゥと辺りの冷気を一気に吸い込み、
「ガァァァァァァァァァァァァッ！」
すさまじい咆哮（バインドボイス）を辺りに轟かせた。幾分か距離を取っていても響く声に思わずクリュウとフィーリア、サクラの三人は耳を塞ぐ。距離がある為衝撃波が届かなかった為唯一身動きできるシルフィードは三人の前に出る。
「怒り状態か。どう動く……」
怒り状態となったティガレックス。一体その動きは如何ようなものなのか。見極める為にも、その動きをわずかにも見逃さない。頬を、嫌な汗が静かに流れた。
頬を伝い、顎まで流れた汗は雫となって地面に落ちると、そこにあった雪に音もなく溶けた。
まるでそれを合図にするかのように、ティガレックスは四肢を使って走り出した。だがそれはこれまでの突進とは訳が違う。まるでこれまでのがお遊びだったかのように錯覚するような、常軌を逸した速度でティガレックスは雪上を疾駆する。これにはさすがのシルフィードも恐怖を覚えた。
「逃げろッ！」
他の仲間にそう声を飛ばし、自らはキリサキでガードの構えを取る。また先程のようにわずかでも押さえられるか。そんなわずかな期待を抱いていた彼女の目論見は見事に打ち砕かれた。
慌てて左右へと散った三人に対し、正面から受け止めようとしたシルフィードはティガレックスの突進を受ける。押さえ込もう足に力を入れて踏ん張ろうとするが、そんな足場は一瞬で崩れる。圧倒的な力の前に、彼女の力など意味をなさなかった。呆気無く弾き飛ばされたシルフィードは湖に沈んだ。
「シルフィッ！」
慌てて駆け寄ろうとしたクリュウだったが、まるでそれを阻むように疾駆していたティガレックスは突如その場で四肢を使って器用にドリフト。信地旋回であっという間に方向転換すると、走っていたク

リュウに向かって突撃して来た。
慌てて横へ身を投げ出すようにして緊急回避して何とかこれをかわす。だがティガレックスはここから驚きの行動を見せた。何と再びクリュウの背後で信地旋回して今度は停止位置を予測して接近していたサクラを狙って突撃したのだ。
さすがのサクラもまさかこのタイミングで自分が狙われるとは思っていなかった。慌てて横へと飛ぶが間に合わず、身を投げ出すように跳んだ彼女の脚がティガレックスの右腕にさらわれ弾き飛ばされた。そのまま彼女の体は雪の上に倒れる。
湖からシルフィードが顔を出したのはまさにその瞬間だった。
「無事かッ!?」
少し離れた場所で止まって短く吠えるティガレックスを横目に仲間の様子を確認すると、幸い全員大した怪我はしていなかった。皆ゆっくりと起き上がり、無事を伝える。
通常時よりもずっと早い速度で振り返るティガレックスを見ながら、クリュウの顔には焦りの色があった。
怒り状態になるとモンスターの行動は素早くなる事は珍しくない。ディアブロスだって怒り状態での突進は無茶苦茶なくらい速かった。だがティガレックスのそれはその比ではない。単純な早さもさる事ながら、一つ一つの動作の切り替えモーションの短縮、反転速度の加速、リオレイアに匹敵するかそれ以上の反転追撃能力。全てが怒り状態で強化されているらしい。これはもう無茶苦茶を通り抜けて破茶目茶だ。
こちらに向き直ると同時に、怒号を放ちながらティガレックスが滑走しながら迫り来る。横へ走ってこれを回避しようとした途端、迫るティガレックスの眼前に閃光玉が放たれその動きを制止した。
「今のうちに一度態勢を立て直すッ！　撤退するぞッ！」
どうやら閃光玉を投げたのはシルフィードだったらしく、全員に聞こえるように大声で指示する。他の面々も同感だったらしく、全員武器をしまって撤退を始める。クリュウもデスパライズを腰に下げ、荷車を回収して撤退する。ひとまず拠点（ベースキャンプ）まで後退す

るらしい。
閃光玉の影響で暴れ回るティガレックスを尻目に、四人は迅速に撤退する。そして閃光玉が解けた頃には、彼らの姿はどこにもなかった。
自分を散々痛めつけるだけ痛めつけた末消えた敵。この怒りをどこにぶつけていいかわからないティガレックスは激昂しながら天高く怒号を放つ。その怒号は雪山全体に響き渡った……

第２０６話　決死の反転攻勢　苦戦を強いられる狩人達の奮闘

拠点（ベースキャンプ）まで撤退した四人は一様にその表情は疲労の色が見えた。まだまだ戦えるが、それでも突然の遭遇戦に加えて相手はこれまで相手にした事のないモンスターだ。初戦は威力偵察の為の戦いと決めていたはずが、あまりのティガレックスの強さを前にそんな余裕はほとんどなく、実質本格戦闘となった。しかも正直、こちらが攻め切っていたというよりは、向こうに弄ばれていた感が強い。改めて、轟竜ティガレックスの強さを目の当たりにした気分だった。

「クリュウ様、シルフィード様」

竜車の中からタオルを取り出したフィーリアは、それを湖に落ちてずぶ濡れになった二人に差し出す。二人共それをありがたく受け取ると、顔や髪などを拭いていく。その間にサクラが手際良く焚き火を始め、二人はそれに当たる。正直まだ麓だが濡れた体に風は冷たく、ホットドリンクが欲しいくらいだ。

焚き火の火に当たりながら震える二人に、毛布を掛けてあげたり、温かい飲み物を用意したりとフィーリアは大忙しだ。彼女もティガレックス戦でダメージを受けたり疲れたりしているはずなので二人が気遣わなくていいと言うが、

「……お二人とも、寒すぎて歯の根が合っていませんよ」

と指摘されてしまうと、返す言葉も無く素直に彼女の厚意に甘える事となった。

一方のサクラは律儀に携帯砥石を使って鬼神斬破刀の刃を削って切れ味を正している。いつもならここでクリュウに抱きついたりしてフィーリアとシルフィードの神経を逆撫でるのが相場だが、今回は相手が相手だけに気を抜けないという事なのだろう。

「さて、どうしたものか」

フィーリアの淹れてくれたコーヒーを飲んで体が温まったシル

フィードはゆっくりとつぶやく。この頃にはフィーリアとサクラも焚き火の周りに集まっており、自然と作戦会議となる。
「実際に戦ってみてわかったが、予想以上の難敵だな」
そう言ってシルフィードは腕を組みながらため息を吐く。事前に難敵とは聞いていたが、百聞は一見に如かず。自分が予想していたよりも、轟竜ティガレックスは強敵だった。
そんな彼女の言葉に同意するように「そうですね。常に動き回っていて速射が使いづらいです」とフィーリアもため息混じりに言う。速射は引き金を引いている間に複数の銃弾が連続して発射するものであり、反動が大きい為速射中は銃口の向きを変える事ができない。結果、ティガレックスのような動き回るような相手には適さないのだ。
「やっぱり、電撃弾と通常弾ＬＶ３が主力になりますね」
そう言いながらフィーリアはむむぅと考え込む。何せ電撃弾は強力な弾だが持ち込める数に限界がある。それは他の弾も同じ事が言えるが、属性弾は通常弾などに比べて銃身にかかる負担が大きい為、結果的に持ち込める数も少なくなる。少ない決戦弾丸を主力として使うのは、長期戦を考慮すると後半が大変になる。
そして通常弾ＬＶ３にも問題がある。これは彼女が常日頃主力と位置づけている通常弾ＬＶ２よりも小型の弾丸の為、一度に装填できる数が多いというメリットがあるが、同時に小型軽量化されているので一発の攻撃力は低い。持ち込める数は通常弾ＬＶ２と同じなので、総火力では圧倒的に劣る。ただし通常弾ＬＶ３にも利点はある。それは弾丸の形状が独特な為、一度ヒットした後も威力を削る事なく跳ね返るのだ。これは跳弾と言い、通常弾ＬＶ３の利点だ。なので一撃の威力は低くても複数ヒットする事で通常弾ＬＶ２を超える威力を持つ。しかし跳弾は狙ってできるのは相当なガンナーの腕を持つ者だけであり、普通のガンナーが使っても弾はうまく跳ばず、明後日の方向に飛んで行ってしまう。
フィーリアは射撃の天才ではあるが、跳弾まではまだうまく制御は出来ない。だからこそこれまでずっと主力は通常弾ＬＶ２だったのだ。だが今回はこの通常弾ＬＶ２は速射機能のせいで使い勝手が悪

い。頭が痛い問題だ。
「……斬り込む隙がない」
短く感想を述べるサクラの表情もいつになく厳しい。
ティガレックスは常に動き回る為攻撃できる隙が少ない。彼女の常軌を逸した身体能力で疾駆しても十分な攻撃を与えられなかった。それに加えて太刀は大剣並みの破壊力と片手剣並みの機動力を兼ね備えた超攻撃型武器ではあるが、同時にその二つの武器と違って刀自体は細く、盾もない為ガードはできない。閃光玉でようやく攻撃できる隙を作っても、その場で暴れ回るティガレックス相手では不意の一撃に対処できない為、どうしても他二人よりも回避に重点を置いた戦いになので手数を稼げない。正直、太刀とはあまり相性は良くない相手だ。だが、
「……ある程度奴の動きは見切った。次はもっとうまく立ち回ってみせる」
――サクラはこういう娘なのだ。例えどんな難敵を相手にしていても、どんなに苦戦していても、決して諦めずに前に進み続ける。昨日よりも今日、今日よりも明日。常に前に進み続け、自らを磨き続ける乙女。それがサクラ・ハルカゼという娘だ。
「君はどう思うクリュウ？」
自分と同じくコーヒーを飲んでいるクリュウにシルフィードは尋ねる。ただし同じコーヒーでもシルフィードはブラック、クリュウは砂糖とミルクをたっぷり入れているが。
「正直、結構厳しいかなぁ。通常時でも厄介なのに、怒り状態になったらより凶暴性が増してスピードも早くなる。全力で挑んで良くて五分って感じかな」
コーヒーを飲みながら言う彼の意見には皆が同意だった。正直、ティガレックス単体の強さもさる事ながら情報不足という状況も追い打ちを掛け、此度の狩猟はかなり厳しいものとなっている。これを打破するのは、並大抵の事ではないだろう。
「――でもさ」
だがクリュウは決して絶望はしていなかった。彼の声に考え込む

ように伏せていた顔を皆が一斉に持ち上げると、そこには希望に満ち溢れた彼の笑顔があった。自分達が大好きな、自分達が心から護りたいと願い、自分達が心から愛する彼の笑顔が。
「僕達なら、勝てない相手じゃないよね？」
心から信じて疑わない言葉だった。真っ直ぐ過ぎる彼のこの発言にはさすがの三人も一瞬呆けてしまう。だがお互いの顔を見合わし、誰からともなく笑みが浮かぶ。
「まぁ、私達が本気を出せば勝てない相手ではないな」
「そうですよッ。私達四人が力を合わせれば、勝てない相手なんていませんッ」
「……私とクリュウの愛の力があれば、不可能など無い」
彼の言葉に返す彼女達の言葉はいずれも自信に満ち溢れていた。絶望なんてしない。これまで何度も壁にぶち当たって来たが、自分達はこの四人で、そんな苦難を乗り越えて来た。この四人なら不可能なんて無い。そんな強い想いが、彼女達の中にはあった。
そんな彼女達の自信満々な返答に満足そうにうなずきながら、
「僕もそう思う。さっきのはあくまで前哨戦、こっからが本番だよ」
クリュウの言葉に、フィーリアは「その通りですッ！」と同意し、サクラも「……ここからが本番」と不敵に微笑んでみせる。そんな三人の様子を見ていたシルフィードは一人口元に笑みを浮かべる。
「……立派になったものだな」
彼はきっと自覚はないだろうが、彼は自分が会った頃に比べてずっと立派になったと思う。今もこうして本来ならリーダーである自分がするべき仲間の鼓舞を進んで行なっている。それもそういう自覚がなく、天然でやっているのだからすごい。
エルバーフェルド、アルトリアという二つの大国を旅した目的は彼の母の事を調べる為だった。でもきっと、それ以上にあの旅で彼はたくさんの事を学び、そして成長した。あの旅を経て、彼は大きく成長したのだ。
士気を取り戻す三人を見て、シルフィードは短く息を零すと「まぁ、意気軒昂な事はいいのだが、自信と過信は違うからな。あくまでも慎

重に事は進めるぞ」と大人な対応で彼らの士気を高過ぎず低過ぎずの位置で歯止めを掛ける。
「ひとまず、威力偵察はこれで終わりだ。次の会敵からは持ち込んだ装備を惜しみなく使って全力で叩く。相手が相手だ、皆互いを常に意識し合い、常に互いを援護し合いながら行動するように――君達の奮戦に期待するぞ」
そう言って、シルフィードは手を前に突き出す。その意味を悟った他の三人も同じように腕を伸ばし、シルフィード、クリュウ、サクラ、フィーリアの順で手を重ねていく。
自分達の心はひとつ――必ず、この戦いに勝つ。
「反撃に出るぞ。ここからは本気の総力戦だッ！」
『おおおぉぉぉッ！』
気合の声と共に四人の腕が天に掲げられる。空を掴むように挙げられた腕を見上げながら、クリュウは虚空を掴む。握り締めた拳をゆっくりと降ろすと、そんな彼の拳をそっとサクラが優しく手で包み込む。
「……この戦いは、私にとっては特別。絶対に負けられないの――力を貸して、クリュウ」
いつになく真剣な面持ちで言う彼女の言葉に対し、クリュウは頼もしく笑ってみせた。
「当たり前でしょ。一緒にがんばろうッ」
あえて明るく元気良く言ってみせる彼の言葉に、サクラはフッと口元に優しげな笑みを浮かべると「……ありがとう」と短く礼の言葉をつぶやく。そんな二人の様子を見ていたフィーリアとシルフィードの口元にも優しげな笑みが浮かんでいた。
威力偵察戦だった為、ほとんどの道具が使われなかった為に特に補充するものはなく、一行は準備が完了次第すぐに拠点（ベースキャンプ）を出発した。幸いティガレックスはすでにエリア1から離れ、山頂手前のエリア6へと移動していた。一行は先程の戦闘の爪跡が残るエリア1を横断しながら、山頂付近を目指して歩き続けた。
エリア5に到着した頃、ティガレックスは再びエリア移動して今度

はエリア７に移った。その為一行はエリア５の分岐路でエリア６に繋がる右ではなくエリア７へと通じる左側の道へ折れ進撃を続けた。そしてエリア７へと到達する。

洞窟の内側に荷車を置き、外へ出る。すると崖側の方でティガレックスはこちらに背を向けて悠然と佇んでいた。シルフィードは無言で指と目線だけで全員に指示を出し、ティガレックスを包囲するように陣形を整える。そして、振り返ったティガレックスがこちらに気づいた瞬間、

「突撃ぃッ！」

シルフィードの突撃命令に四人は一斉にティガレックスへと殺到する。崖を背にした状態のティガレックスに対し、正面をシルフィードとサクラが、右斜めからはクリュウ、そして左斜めからはフィーリアが突っ込む。

複数箇所から攻めて来る敵に対し、ティガレックスは一瞬狙いを定めるのを迷う。その隙を突いてフィーリアは走りながら引き金を引いた。撃ち出された銃弾は吸い込まれるようにしてティガレックスのこめかみに突き刺さる。攻撃を受けた事で振り返るティガレックス。直後、被弾箇所に突き刺さっていた弾丸が爆発した。

「ギャァッ!?」

悲鳴を上げて仰け反るティガレックス。フィーリアが撃ったのは着弾後に突き刺さった銃弾自体に仕込まれた火薬が爆発する徹甲榴弾ＬＶ２だった。

仰け反った事でさらにわずかだが隙ができる。それを突いて残る剣士組が一斉に襲い掛かった。

まず斬りつけたのは俊足のサクラ。電撃と逆らせながらの一撃はわずかにティガレックスの鱗を弾いて褐色の鱗を赤く染める。シルフィードも一撃を叩き込み、クリュウも抜刀の一撃が決まった。だが相手は一瞬怯んだに過ぎない。全員二撃目は入れずにすぐにバックステップで距離を取る。直後、ティガレックスは周りを一掃するように回転攻撃。事前に距離を開いたクリュウ達は誰もその攻撃を受けなかった。

回転攻撃の後に生まれる本当にわずかな隙を突くようにサクラが斬り掛かる。一撃、二撃と剣撃を入れると反射的にティガレックスは彼女の方へ向き直ると、彼女に向かって噛み付く。ガチンガチンと二回その凶悪な顎で歯を鳴らす噛み付き攻撃を、サクラは身を捻って流れるような動きで回避する。そして間髪入れずに振り払いの一撃を叩き込む。

回避された事でしつこく追撃しようとしたティガレックスの尻尾に、シルフィードのキリサキが叩き込まれる。どのモンスターにも言える事だが、尻尾を斬る事で状況を有利にできる。飛竜種は特に回転攻撃を多用するので、その長い尻尾を切れば攻撃範囲はグッと狭くなる。それはティガレックスも同じ。あの高速での回転攻撃も尻尾を切れば尻尾の振るわれる範囲は消える。当然、回転直後のわずかな隙を突いての攻撃もより手数を増やせる。

そんな計算と想いを載せて振り下ろした一撃はティガレックスの尻尾にヒットするも、鱗の一部を弾き飛ばすのに留まる。もう一撃入れようと構えるシルフィードだったが、ティガレックスは素早く彼女の方へ振り返ると至近距離で駆け出す。

「くぉのぉ……ッ！」

回避が間に合わず、キリサキでガードしたシルフィードだったが体勢が整っていなかった為直撃こそ避けるも勢いに負けて弾き飛ばされる。雪の上に倒れた彼女を見て駆け寄ろうとするクリュウだったが、それを妨害するようにティガレックスは反転。彼に向かって突っ込んで来た。

「邪魔するなぁッ！」

クリュウはすかさずティガレックスの進行方向に向かって閃光玉を投げる。炸裂する光の一撃はティガレックスの視界を奪い、その突撃も止める。動きが止まったティガレックスを見てクリュウはシルフィードの下へ、残るフィーリアとサクラはこの隙を突いて攻撃を仕掛ける。

「大丈夫、シルフィ？」

心配そうに顔を覗き込んで来る彼に対し、シルフィードは倒れた時

に打った頭を押さえながら「……あぁ、大丈夫だ」と答えてゆっくりと立ち上がる。
「クリュウ、頼みがある。私と共闘して尻尾を斬るのを手伝ってくれないか？　あれを斬れれば、状況は今よりは良くなるはずなんだ」
「わかった。僕も出来る限り尻尾を重点的に狙ってみるよ」
「頼む。では行くぞッ」
　いつまでも二人に前線を預けておく訳にはいかない。作戦方針が決まったクリュウとシルフィードも閃光玉を受けて暴れるティガレックスに向かって突撃する。狙うはティガレックスの長い尻尾だ。
　二人が合流する頃にはティガレックスの視界は回復し、短く天に吠えて視界を取り戻すと、迫り来るシルフィードとクリュウに対して跳びかかる。二人はこれを左右に避けて回避する。逃げたクリュウを追って視線を動かすティガレックスのこめかみにフィーリアの撃った電撃弾が命中。ティガレックスは彼を追うのを諦めて振り返り、フィーリアに目標を定める。
　怒号を上げながら突進して来るティガレックスに対しフィーリアは無理な攻撃は避けてすぐに回避行動を取る。横へ走ってティガレックスの正面を避けると、すぐ近くを滑走して通り過ぎるティガレックスの背中に向けて電撃弾を撃ち込む。
　四肢を巧みに使って急停止したティガレックスは背中に受けた銃弾に再び彼女を狙って振り返るが、そこへサクラが強襲する。
「……はぁッ」
　両手でしっかりと握り締めた鬼神斬破刀での振り下ろしの一撃は振り返ったティガレックスの額に電撃と鮮血を迸らせる。この強烈な一撃にはティガレックスも悲鳴を上げて仰け反った。サクラはすぐさま横への振り抜きの一撃を入れると、ティガレックスの左腕の方へ移動すると、もう一撃叩き込む。
　姿勢を正したティガレックスは鬱陶しく斬りつけて来るサクラを轢き殺そうと必殺の突進を仕掛けるが、サクラはこれを見て逆にティガレックスの懐へと突っ込むと、振り上げられる左腕の下に潜り込んでこれを回避した。遠くの敵を狙っての突進ではなかった為、それほ

ど移動しなかったティガレックスは停止するとすぐに振り返るが、そこへ再びサクラが強襲。こめかみ目掛けて刀を振るうと、すぐさま左腕の方へ跳ぶ。

鬱陶しい敵の攻撃にティガレックスは再びサクラを狙って突進を仕掛けるが、サクラはこれも鮮やかに回避してみせた。そんな彼女の動きに他の三人は舌を巻く。

「もう見切ったというのか……」

驚くシルフィードの発言通り、サクラはすでにティガレックスの動きの大半を見切りつつあった。

片手剣や大剣と違ってガードのできない太刀は回避が最も重要な防御手段である。その回避をうまく達成する為には、モンスターのわずかな動きも見逃してはならない。そして、モンスターの動きを見て次の動きを読んで事前に動く事が何よりも重要だ。

ティガレックスは確かに一見すると隙が少なく、攻撃しにくい相手だ。だが位置取りさえ間違えなければ、回避の難易度はグッと下がる。そして回避を見事に決めれば、攻め込む隙が生まれる。その隙こそが、必勝の一瞬だ。

サクラが導き出したティガレックスに対する最適の位置が、このティガレックスの左腕の近くであった。

個体差があるかもしれないが、ティガレックスは雪玉を飛ばす際は右腕を使っている。その際の左腕は体を支える為に使われているので基本的には動かない。この時、左腕はがら空きとなるのだ。さらにティガレックスは突進の際の第一歩が左腕であり、その際に大きく振り上げて動く。その高さは人の背丈も越える程だ。ここにうまく入り込んでいれば、突進の際に轢かれる事なく立ち回れる。ティガレックスは肩幅が広い骨格をしているのか、後脚よりも前脚の方が発達している。その為、後脚に当たらない場所でも、前脚に当たる可能性はある。逆を言えば、前脚をうまく良ければ後脚に当たらないのだ。

そんな些細な動作を見極め、攻撃の動きを見切ったサクラ。その才能は素晴らしいの一言に尽きる。しかも理論はわかっても、これをうまく実践できるかは難しい。何せ回避の為に相手に接近するという

矛盾を恐れる事なく、しかも高い身体能力がなければこの動きは出来ない。彼女の強靭な精神と他を圧倒する身体能力が合わさってこそできる動き。まさに、サクラ・ハルカゼというハンターの高い戦闘能力の成せる業と言えよう。

自分の攻撃を華麗に避けるサクラに対し、ティガレックスの苛立ちは加速する。そんな彼に追い打ちを掛けるように、サクラはティガレックスを嘲笑う。

「……その程度？　私を倒したくば、本気を出しなさい――化石野郎」

「ゴオオオォォォッ！」

まるで彼女の嘲笑にキレたかのように怒号を上げて飛び掛かるティガレックス。しかしサクラはこれを鮮やかに回避してしまう。不発に終わった事でさらに怒るティガレックスは彼女の姿を探す。そこへフィーリアの電撃弾が次々に命中し、怒号は悲鳴へと変わる。同時にクリュウとシルフィードも攻撃を仕掛ける。このわずかな隙で一撃を入れるには尻尾を狙っている暇はないと判断した二人はそれぞれ別々の前脚に斬り掛かる。横振りの一撃を入れた後、すぐさま深追いはせずに距離を取る。その直後、ティガレックスは全方位攻撃で辺りを一掃した。

うまく攻撃を回避し、ティガレックスを包囲するように取り囲む四人。フィーリアは通常弾ＬＶ３を装填して背後からティガレックスに銃口を向ける。その瞬間、ティガレックスはこの包囲網を脱出するように後ろへと跳び、フィーリアの背後を取る。すぐさまティガレックスは至近距離で彼女に噛みこうと身を前に出す。迫り来る凶悪な牙を前にフィーリアは寸前で倒れ込んでこれを回避した。雪に頭から顔を突っ込む形になったが、肌は全く寒さを感じない。激しい動きの連続ですっかり熱くなり、むしろ心地良いくらいに感じる。だが背後にはティガレックスが佇んでいる。すぐさま起き上がってその場から逃げる。そこへサクラが正面からティガレックスに斬り掛かった。電撃を纏った一撃はティガレックスの額に直撃。鱗を弾き飛ばし、怯ませる。

深追いはせず、すぐにバックステップで距離を取る。その際、傍で

息を整えているフィーリアを見て怪我がないかを確認するのも怠らない。
頭を振って正面を見据えるティガレックスだったが、突如後方へ大きく跳躍した。そして着地した瞬間、舞い上がった粉雪の合間から見えた彼の両腕と頭部は不気味な赤く輝く筋が無数にひしめき合っていた。
「ゴアアアアアアアアッ！」
天高く咆哮（バインドボイス）を轟かせるティガレックス。その纏う気配はこれまでとは明らかに違う。目も血走り、激しい憎悪に支配される。ティガレックスの怒り狂った瞳と目が合ったクリュウは思わず背筋がゾクッとする。
ティガレックスの怒り状態。その凶悪さは先程、嫌というくらいに思い知った。全員怒り状態のティガレックスの恐ろしさは痛感している。すぐに固まっている事は危険と判断して、誰も何も言わずも全員がお互いに距離を取るように散る。そこへ、ティガレックスが突っ込んで来た。
怒号を上げながら猛烈な勢いで突撃して来るティガレックス。その速度はこれまでの通常時の比ではない。舞い上がる粉雪を纏いながら怒涛の勢いで迫るティガレックスは目が合ったクリュウを狙っていた。
全速力で横へ逃げるクリュウの背後を、ティガレックスが轟音と地響きと共に通過していく。だがこれで回避できた訳ではない事を、クリュウは知っている。背後を見れば、ティガレックスは少し離れた場所で信地旋回。針路を一六〇度程反転し、再びクリュウ目掛けて突っ込んで来た。
「くそぉ……ッ！」
今度は走っているだけでは回避できない。猛烈な勢いで突っ込んで来る轟竜を相手に人間の全速力などたかが知れている。直撃の寸前、クリュウは前に向かって身を投げ出した。雪の上に肩から落ちて思わず顔を顰めたが、こんなのティガレックスの突進の直撃を受けるのに比べたらマシだ。

荒い息を繰り返しながら起き上がるクリュウ。だが息を整えている暇などなく、すぐにティガレックスの姿を探す。すると、ティガレックスは再び信地旋回してこちらに向き直ろうとしていた。これにはさすがのクリュウも悲鳴が上がりそうになったが、転進したティガレックスはクリュウの倒れていた場所より少し外れた所を滑走した。誰を狙ったのかはわからないが、とりあえず助かった。

ゆっくり起き上がるクリュウを確認して、シルフィードは閃光玉を構える。

振り返ったティガレックスに向かって閃光玉を投擲する。だがそれよりも早く振り返ったティガレックスは彼女に向かって突進して来た。閃光玉が炸裂し、視界は一瞬にして真っ白に染まる。目をやられないように閉じ、光が消えると同時に目を開くと――

「な……ッ!?」

――視界いっぱいに、ティガレックスの顔が迫っていた。

閃光玉は確かに炸裂した。だが怒り状態のティガレックスの速さは閃光玉が炸裂するよりも早く空中にあった閃光玉を追い抜いてしまった。結果、閃光玉はティガレックスの背後で炸裂してしまったのだ。

原因がわかったとしても、この状況ではどうする事もできない。ガードも回避も間に合わず、シルフィードはティガレックスの突進の直撃を受けてしまう。大きく弾き飛ばされたシルフィードの体は雪の上に叩きつけられた。

「シルフィッ!」

クリュウはすぐにシルフィードに駆け寄ろうとするが、ティガレックスはそれを妨害するように彼女に向かって雪玉を飛ばして来る。シルフィードとティガレックスの間に割って入ったクリュウはすかさず盾で雪玉を弾いた。だが同時に衝撃は耐え切れず、彼の体は吹き飛ばされてしまう。

倒れているシルフィードのすぐ近くに倒れたクリュウはすぐに起き上がると、シルフィードの肩を掴む。

「シルフィ大丈夫ッ!? しっかりしてッ!」

「あ、あぁ……平気だ」
そう言って起き上がるシルフィードは頭を軽く振って揺れる視界を正す。どうやら軽くめまいが起きていたが、何とか治まったようだ。しかし後に襲って来たのは全身に走る痛み。これにはさすがのシルフィードも顔を歪めて膝を折った。
「大丈夫ッ!?」
シルフィードを心配しつつも意識の大半は暴れるティガレックスに向けられている。何とかフィーリアがうまく閃光玉を当てたおかげでティガレックスは暴れてはいるもののその動きは滅茶苦茶だ。フィーリアは通常弾ＬＶ２に切り替えて速射でティガレックスを狙い、サクラもギリギリの回避の連続でティガレックスの攻撃を避けながら一撃一撃しっかりとティガレックスに当てている。
シルフィードは安全を確認した上で回復薬グレートを一気に飲み干す。おかげで痛みはかなり軽減され、若干ふらついていた足もしっかりと大地を踏み締める。
「すまない。心配をかけたが、とりあえず大丈夫だ」
「そう？　ならいいんだけど、無理はしないでね」
「わかっている」
そう言ってシルフィードは再びティガレックスに接近する。そんな彼女の背中を追って、クリュウも走り出す。
閃光玉が解け、フィーリアは弾の攻撃力が最大になる間合いから回避しやすい距離にまで後退する。その間にサクラは左腕を中心に斬り掛かる。そして、これまでの度重なるサクラの剣撃やフィーリアの的確な射撃で脚を集中的に狙われていたティガレックスは、ここで初めてバランスを崩して転倒した。
この瞬間を無駄にしない為にも全員が全力でティガレックスへの攻撃を開始する。サクラは左腕に対して刀を縦横無尽に動かして気刃斬りを叩き込み、フィーリアも再び前進しながら速射で銃撃。そしてクリュウとシルフィードは尻尾へと向かうと、一斉に斬り掛かった。
シルフィードの大剣が持つ重い一撃と、クリュウの連続した細かい

剣撃が轟竜の尻尾に炸裂する。だが強靭な尻尾はそう簡単には切れず、クリュウはとにかく剣を振り回して傷を増やす。
だが転倒している時間はほんのわずかだ。すぐにティガレックスは起き上がってしまい、すかさずその場で回転攻撃。クリュウとシルフィードはそれぞれガードでこれをやり過ごし、サクラは一度後ろへ大きくジャンプしてこれを回避。最も遠距離にいたフィーリアは構わず通常弾ＬＶ２での速射攻撃を続ける。結果、ティガレックスは再び彼女を狙って飛び掛かる。四肢を使った跳躍はあっという間に彼女との距離を縮めた。慌てて後方へと跳ぶフィーリアは何とかこの一撃を回避したが、ティガレックスは間髪入れずにその場で回転。起き上がろうとしたフィーリアの背中にちょっとした木の幹程の太さの尻尾が叩きつけられた。
「あぅ……ッ！」
弾き飛ばされたフィーリアの体は雪の上を転がった後、そのまま倒れてしまう。痛みと衝撃で気を失い掛けたが、それだけは何とか踏ん張った。だがそれは同時に耐え難い痛みが全身を襲う事を意味している。痛さのあまり動けずにいるフィーリアに対しティガレックスが再び彼女の方へ向き直る。
「まずい……ッ！」
慌ててティガレックスを追いかけるクリュウだったが、距離が開きすぎている。心の中で「間に合えッ！」と叫びながら走る彼の視界の隅から、風と粉雪を纏いながらサクラが突貫する。クリュウよりもずっと速い速度で接近したサクラは構えた鬼神斬破刀でティガレックスの尻尾に斬りかかる。予期しない一撃にティガレックスは思わず仰け反った。サクラはその隙を突いて止まる事なくティガレックスの脇を転がりながら通り抜けると、倒れているフィーリアを抱き抱えてその場をすぐさま離脱する。
二人を追って振り返るティガレックスに向かって、クリュウの閃光玉が炸裂してその動きを止める。
二本の足を雪上に滑らせながら急停止する彼女の腕の中では痛みに顔をしかめるフィーリアが抱かれている。サクラはふぅと安堵の

息を漏らすと、道具袋（ポーチ）から回復薬グレートを取り出すとコルクを抜いて――
「……飲みなさい」
「ごぶぅッ!?」
フィーリアの口に無理矢理流し込んだ。
ビンを咥えながらもがき苦しむフィーリアに対しサクラは容赦なくビンを傾き続ける。しかもご丁寧に鼻を摘んでいる。息が出来ず必死になって回復役グレートを飲むフィーリア。飲み干し終えると、激しく咳き込む。
「な、なんばしよっとですかぁッ!?」
当然抗議の声を上げるフィーリアだったが、そんな彼女を抱きかかえるサクラは意外と元気そうな彼女を見て安心したように小さく微笑む。
「……意外と平気そうね」
「あ、その、ありがとうございます……」
怒りはしたものの、自分は助けられた身だと気づくと語尾が小さくなりながら頬を赤らめながら恥ずかしそうに礼を言う。そんな彼女を勇ましく抱きかかえるサクラの姿は実に凛々しく、まるで王子様に助けられたお姫様といった感じの絵になる光景だ。
「……重い」
そんな光景を見事にブチ壊すように、サクラは容赦なくフィーリアを放り捨てる。お尻から地面に落ちたフィーリアは打った所を押さえながら立ち上がりサクラに再び怒鳴り掛かる。が、サクラはどこ吹く風で彼女に背を向けて吹けもしない口笛を吹くフリをする始末。正直、現在進行形で狩猟が行われているとは思えない程、何ともいつもの光景となってしまっている。
何はともあれ、二人とも無事だった事に安心したクリュウはそんな二人を横目に荷車の方へ走る。本当は尻尾を狙いたい所だが、今はシルフィードに任せる事にした。大振りな大剣は周りに誰もいない方が思い切って剣を振れるからだ。
彼が荷車から取り出したのはシビレ罠。フィーリアとサクラはそ

んな彼の行動を見てすぐに二人共ティガレックスの方へ向かう。何も言わなくても、互いの行動がわかる。いつの間にか、クリュウ達はそんなチームに成長していた。
　ティガレックスに向かった二人のうち、サクラはティガレックスの頭目掛けて刀を叩き込む。迸る電撃と鮮血に彩られながら、彼女は雪上を舞う。そしてフィーリアは弾倉にペイント弾を装填し、ティガレックスの目掛けて撃ち込む。ペイント弾は見事にティガレックスの右腕に命中し、効果が薄まっていたペイント効果を補強する。
　二人の行動と並行して、クリュウはすぐにシビレ罠を持ってエリアのちょうど真ん中くらいの場所に設置した。手早く設置を済ませると、三人に合図を送る。するとすぐさま三人はティガレックスから離れてクリュウの方へとやって来る。
「シビレ罠で拘束して、僕とサクラ、そしてシルフィードの三人掛かりで尻尾を切るよ」
「……わかった」
「そうだな。そろそろ尻尾を切っておきたい」
「で、では私は通常弾ＬＶ２での速射で皆様を援護します」
　短くやり取りを済ませ、四人はティガレックスが来るのを待つ。そしてティガレックスの視界が回復すると、こちらへと振り返り――
「ゴアアアアアアアアアッ！」
　怒号と共に猛烈な勢いで突っ込んで来る。迫り来る凶竜を前に逃げたくなる衝動を何とか堪え、クリュウはしっかりと地に足をついてティガレックスを見据える。その威風堂々とした姿を横目にした他の三人がちょっぴりドキッとしたのはご愛嬌。
　四人を轢き殺そうと迫るティガレックスだったが、その勇ましき行軍はシビレ罠の拘束力によって阻止される。
「ガアアッ!?」
　シビレ罠を踏み抜いた事で一瞬で麻痺毒が全身に回ったティガレックスはその場でまるで張り付けにされたかのように動けなくなる。ティガレックスが麻痺状態となったのを見てすぐさま四人が動く。フィーリアはそのままその場で通常弾ＬＶ２の速射を始め、剣士

三人はティガレックスの後方へ回って尻尾に襲い掛かる。
サクラは残っている練気を全て使っての気刃斬り。シルフィードは力を極限まで溜めての溜め斬り。そしてクリュウは腕に全力を込めて思いっ切り叩きつける。
猛烈な勢いで刀を振るうサクラに対し、シルフィードは構えた剣を一気に叩き落とす。強烈無比な一撃を叩き込むと、もう一撃と重い剣撃を叩き込む。気刃斬りも溜め斬りも派手な攻撃のない片手剣のクリュウも、とにかく我武者羅に剣を振るう。剣が当たるたびに鱗が邪魔をするが、それでもこれまでの攻撃で尻尾の鱗はずいぶん削り取られている。このまま押し切れば、尻尾を切れる。そんな確信が生まれるが、それを阻むようにティガレックスがシビレ罠から解放される。
四人が一斉に距離を置いてティガレックスの次なる動きに備えて身構える。だが、ティガレックスはそんな彼らの目の前から突如として消えた。否、強靭な四肢を使って一気に上に飛び上がったのだ。慌てて全員が視線を上空に向けると、ティガレックスは遥か上方でこれまで畳んでいた翼を広げて飛び去った。
ティガレックスがエリア移動したのを見て、四人は一斉に力が抜けたのかその場に座り込んでしまう。
「キツイ……ッ」
ディアブロヘルムを取ってそうつぶやくクリュウの顔はずいぶんと疲労が蓄積しているようだった。極寒だというのに汗を掻いてしまい、髪はペタンとしている。他の三人も同様に疲労の色が見える。
「常に動き回る相手に合わせてこちらも走りっぱなしだからな。余計な体力を使う分、どうしても体力的にキツイ」
タフなシルフィードも今回ばかりは参ったとばかりに素直に疲れたと言う。両足を投げ出してぐったりとしている様を見れば、誰が見ても疲れている事はまるわかりだ。
ペタンと地面に座り込んでいたフィーリアはふと隣に腰掛けて砥石を使って鬼神斬破刀の切れ味を正しているサクラに目を向ける。その瞳を見れば、疲れてはいても闘志はむしろ激しく燃えたぎっている事はわかる。

「あ、あのサクラ様……」
　声を掛けると、サクラは手を止めてこちらに振り返る。
「……何？」
「あの、さっきはありがとうございました」
「……もう礼は言われた」
「あ、改めてお礼を言いたくて」
「……そう。別に、大した事じゃないもの。お礼なんていらない」
「で、でも……」
「――親友を助けた。ただ、それだけよ」
　そう言って、再び砥石を使って切れ味をただし始めるサクラ。素っ気ない態度に見えるが、皆知っている。それは彼女なりの照れ隠しなのだと。
　ぶすっとした感じで砥石を使っているサクラ。その頬はほんのりと赤らんでいる。そんな彼女の横顔を見ながら、フィーリアは目の縁に薄っすらと涙を浮かべながら「ありがとうございますッ」と満面の笑みを浮かべる。
　何とも仲睦まじい二人。そんな彼女達を、クリュウとシルフィードは微笑ましく見詰める。
「ほんと、いいコンビだよね。何だか妬いちゃうね」
「そうだな。まぁ、私も二人に負けないよう君といいコンビを組んでみたいものだ」
「大丈夫だよ。僕とシルフィだって最強のコンビだよ」
　楽しそうに笑いながら親指を立てる彼の言葉に、シルフィードは口元に微笑を浮かべる。二人に負けないようなコンビに、自分と彼はなれているだろうか？　いや、まだまだだ。もっともっと互いを信頼し合い、距離を縮め、心を通わせ無くてはならない――そう、もっと……
「……聞き捨てならないわね」
　無意識に彼の手に自らの手を伸ばしていたシルフィードは、突然二人の間に割って入って来たサクラの言葉に心臓が跳び上がる程に驚く。そんな彼女を牽制するように睨みつけながら、サクラはクリュウに抱きつくと「……私とクリュウのコンビこそ最強にして最高、そし

てベストカップル」と高らかに宣言する。
「そ、そんな事ありませんッ！　わ、私とクリュウ様の方がずっとずぅっとベストカップルですぅッ！」
そこにフィーリアまで参戦して、クリュウを挟んで二人は言い合いを始める。どうやら妙な対抗心を刺激してしまったらしい。二人に振り回されながら苦笑を浮かべるクリュウがシルフィードの方に視線を向けると、彼女は怒ったようにプイッとそっぽを向いてしまう。
「……クリュウのバァカ」
小さくつぶやいた彼女の言葉は、雪風に乗って寒空へと溶けていった……

第２０７話　褐色の暴風荒れ狂う山頂　吹雪の中の大激戦

　ティガレックスは山頂であるエリア８へと移動していた。態勢を立て直したクリュウ達四人は追撃を開始し、すぐさまエリア８へと向かう。だがその途中――

「……雪？」

　これまで晴れていたのだが、山の天気は変わりやすいとはよく言ったものだ。見上げる空にはいつの間にか鈍色の雲が空全体を覆っている。

「まずいな、これじゃ下手すると山頂付近は吹雪だぞ」

　そう言うシルフィードの表情は険しい。

　イルファ雪山は広い。それは五合目より上も同じだが、麓付近と比べて山頂付近は大型モンスターが降りられる場所が少ない。当然、広い山に転々としているエリアは、単純に隣のエリアと言っても数キロ離れている事だってある。結果、今から山頂に向かうとすれば、この雪の勢いから見て到着する事には天候はかなり悪化してしまうはず。

　吹雪となれば、視界は著しく悪化してしまう。そうなればちょっとティガレックスと距離が離れてしまうだけでその姿を見失いかねない。そして相手はあの機動力だ。遠くから突撃されればこちらが気づく頃には回避が間に合わない距離になっている可能性もある。

「どうする？　天候回復を待つか？」

　視界不良の危険性を回避する為、時間を置くかどうか問うシルフィードに対し、フィーリアは「そうですね。相手は強敵ですから、万全の状態で挑むのがベストかと」と慎重論を唱える。一方サクラは「……天気が回復するとは限らない。時間を置けば、せっかく与えたダメージを放棄する事になる。狩猟を有利に進めるには、多少の危険を冒してでも突撃あるのみ」と突撃論を主張。真っ向から割れる二人に対し、シルフィードはどちらにすべきか迷う。なぜならどちらも正論なのだ。後は、総合的に判断してどちらの方が利点があるかと考え

るだけ。
「クリュウはどう思う？」
荷車を引いて歩くクリュウに問いかけると、他の二人も彼に注目する。三人の仲間の視線を一身に受けながら、クリュウは少し考え、答える。
「僕はサクラの意見と同じかな。いつ晴れるかわからない天気を待っていると、相手に態勢を立て直す隙を与える事になるからね」
クリュウはサクラと同じく突撃論を主張した。二人の言う通り、このまま待っていても天候が回復する保証はない。それに持って来たホットドリンクの数にも限りがある事から、長期戦はこちらが不利になってしまう。そういう事を考慮した上で二人は突撃論を主張しているのだ。
「と、二人は言っているが？」
「私はあくまで相手が強敵なので万全の状態で挑んだ方が良いという主張です。皆様が吹雪の中でも全力で挑めるなら、私としては反対する理由はありません」
そう言ってフィーリアは引く。彼女の場合反対論と言うよりは慎重論と言うのが正しい。二人の意見も納得しつつも、慎重に行った方が安全に戦える。その為に天候の回復を待とうというのが彼女の主張だ。天候を敵に回した状態でも、長期戦を避ける為にも突撃する価値があると言うなら、反対するつもりはないのだ。
チームでの方針も決まり、シルフィードは「良し。ではこのまま山頂へ向かう。会敵後すぐに戦闘を開始する」と指示を出すと、自ら先頭を再び歩き始める。その後、残る三人もゆっくりと続いた。
長い長い細い坂道を歩き続けて行けば、山頂となるエリア８に到着する。その寸前、岩陰に荷車を隠してから四人はゆっくりとした足取りでエリアの中に足を踏み入れる。すると、エリアの中央にいたティガレックスがこちらに気づく。幸い怒り状態は解けているようだ。
エリア８へと入った一行を待ち構えていたように、ティガレックスは怒号と共に彼らに襲い掛かる。飛んで来た雪玉をクリュウとサクラは右へ、フィーリアとシルフィードは左へそれぞれ回避すると、左

右から挟撃するようにティガレックスに迫る。
左右から挟み打とうとする敵に対し、ティガレックスは左から迫る敵――クリュウとサクラの右翼隊に向けて突進を仕掛ける。
猛烈な勢いで突っ込んで来るティガレックスだが、怒り状態のそれに比べれば大した事はない。二人共距離が離れていた事もあって余裕をもって回避すると転進。止まったティガレックスの背後から襲い掛かる。
二人は一斉に剣を抜くと、目の前に投げ出されている轟竜の尻尾に向けて力の限り剣を叩き込んだ。鱗が弾き飛び、デスパライズからは麻痺毒が、鬼神斬破刀からは電撃が、そして轟竜の尻尾からは鮮やかな鮮血がそれぞれ迸る。
二人の攻撃に呼応するようにティガレックスの左側からはシルフィードの剣撃とフィーリアが通常弾ＬＶ３が襲い掛かる。
襲いかかる四人に対して、ティガレックスはその場で身を捻るように回転して辺りを薙ぎ払う。寸前で力を溜めるように身を引く動作を見過ごさなかった剣士組三人は一斉に離れたおかげでこの攻撃を避ける。剣士組が態勢を立て直す隙を作るように、フィーリアは通常弾ＬＶ３で撃ち続ける。
振り返ったティガレックスは攻撃を続けるフィーリアを狙って飛びかかるが、フィーリアはこれを横に飛び退いて回避した。慌てて起き上がる彼女を狙って尚も追撃しようとするティガレックスだったが、そこへサクラが背後から右の後脚に一撃を入れる。この一撃にティガレックスはフィーリアを追うのをやめて彼女の方に向き直ると、身を乗り出すようにして噛みつく。が、サクラはこの攻撃を体をわずかにズラす最低限の動きだけで避けると、鬼神斬破刀を翻して側頭部へ叩き込む。そんな彼女の背後でクリュウの投げた閃光玉が炸裂し、ティガレックスの視界を奪う。
視界を失い、その場で聴力を頼りに敵の姿を探そうとするが、ティガレックスの聴力はイャンクックなどに比べれば敏感ではないのだろう。殺到して攻撃する四人を相手に苦し紛れに前脚を突き出すように振るう。すぐ近くで剣を振っていたクリュウは空気を切り裂く

ように振るわれる一撃に冷や汗を流すが、幸いその爪の軌跡には誰もいなかった。
一撃を腕に入れた後、転がるようにティガレックスの背後へと移ったクリュウは尻尾を狙って剣を振るおうとする。だが狙った訳ではないだろうが、ティガレックスは前方に向かって噛みつく。その動作に連動して尻尾が暴れてしまう。運悪く振るわれた尻尾がクリュウの脇腹に当たってしまい、弾き飛ばされてしまう。
雪上に倒れたクリュウだったが、すぐに起き上がって回復役グレートを飲む。そんな彼の姿を確認したシルフィードは彼と交代するようにティガレックスの尻尾に向かってキリサキの強烈無比な一撃を叩きつける。
腰を回転させながら横斬りの一撃を入れ、轟竜の鱗を数枚弾き飛ばし、中の肉を血と共に露わにする。そこに向かってもう一撃と剣を構えるが、それよりも速くティガレックスは視界を回復させてしまう。
間に合えとばかりに力任せに素早く剣を叩きつけるが、剣先が直撃する寸前でティガレックスは背後へと大きく跳躍して四人の包囲網を脱してしまう。
「くそぉ……ッ」
しかも運悪く、思いっ切り振り下ろした一撃は深々と地面に刺さってしまい、抜けなくなってしまった。慌てて引き抜こうとするが、引っかかっていて抜けない。
他の三人はティガレックスの正面を避けて散り散りになるが、シルフィードだけは動けずにいた。そんな彼女の姿を捉えたティガレックスは好機とばかりに彼女に向かって右前脚を地面に突き刺し、そこにあった雪の塊を彼女目掛けて投げつける。
接近して来る雪の塊を前に剣を捨てて回避しようと身構えるシルフィードだったが、着弾寸前で雪の塊と彼女の間に割り込んだクリュウは盾で雪の塊を弾き飛ばした。軌道を逸らされた雪玉は大きく針路を外れて二人の背後に着弾した。
「すまない、助かったよ」
「間に合って良かった」

礼を言う彼女の言葉を聞いて安心したクリュウは地面に突き刺さったキリサキの周りの雪を砕くようにデスパライズを何度も突き刺し、瓦解させる。おかげでキリサキは簡単に引き抜けた。
「重ね重ね済まないな。本当に助かったよ」
改めて礼を言う彼女に対してクリュウは親指を突き立てて返すと、すぐに前線を任せている二人の援護に走る。そんな彼の後ろ姿を見ながら、シルフィードは小さく口元に笑みを浮かべるとキリサキを背中に納める。
「助けられてばかりでは格好が付かないからな。年長者の実力ってものを見せてやろうじゃないか」
不敵に微笑みながら、シルフィードも遅れてティガレックスに向かって突撃する。
噛みつくティガレックスに対しバク天で距離を取って回避するサクラ。そこへフィーリアの放つ電撃弾が数発ティガレックスの側頭部に命中。低く唸りながら振り返った途端、背後から左脚に向かってサクラが鬼神斬破刀を叩きつける。
再びサクラの方へと振り返ると、彼女に向かって突進を仕掛ける。だがサクラはすでにティガレックスの動きを見切っている為これを簡単に回避すると、動きを止めた途端背後からティガレックスに向かって襲いかかる。
一方、クリュウはエリアの中央部で辺りを焦りながら見回していた。
「どっちだ……ッ！」
実はこの時、吹雪のせいで視界はかなり悪くなっていた。そのせいでエリア中央部にいてもエリアの端が見えないような状態だった。ちょうどこの時、二人とティガレックスはエリアの北側の端で戦っていたせいもあってその姿をクリュウは見失っていたのだ。頼りになる耳も吹雪の音のせいでよくわからない。
焦るクリュウは辺りを見回すようにその場で回りながら目を凝らす――その瞬間、背後に強烈な衝撃と激痛が走った。
「がは……ッ！」

弾き飛ばされ、雪の上に倒れたクリュウ。背中を襲う痛みに顔をしかめながら、何が起きたのかと困惑する。実はこの時彼を襲ったのはティガレックスが投げた雪玉だったのだ。ティガレックスと戦闘中だった二人は突然自分達どちらでもない方向に向かって雪玉を飛ばしたティガレックスの行動に違和感を抱いていたが、戦闘中という事もあり気にせず戦っていた。まさか自分達の背後でクリュウがその雪玉の直撃を受けて動けなくなっているとは思いもしないだろう。

「くそぉ……ッ」

痛みに耐えながら、クリュウは回復薬グレートを飲んで失った体力を回復させる。飲み干すと、少しずつ痛みも和らいでいった。

ゆっくりと背中を押さえながら立ち上がると、北側の方で何かが光るのが見えた。それが鬼神斬破刀と電撃弾の雷撃だと気づくのにそう時間は掛からない。

「あっちか」

まだ若干の痛みを感じながらも、遅れを取り戻そうを電撃が見えた方向に向かってクリュウは走る――目の前に突然ティガレックスの姿が現れたのは、まさにその時だった。

「……ッ!?」

慌てて回避しようとしたが、気づくのが遅過ぎた。ティガレックスの頭突きをまともに正面から受けたクリュウはそのまま弾き飛ばされ再び雪の上に倒れた。

「……クリュウッ」

「クリュウ様ッ!?」

突然全く違う方向に向かって走り出したティガレックスを追って来た二人は、目の前で起きた光景に心臓が止まるかと思った。慌てて走り寄ろうとするが、それを阻むようにティガレックスは反転して二人に襲い掛かる。

「……そこを退けぇッ！」

怒り狂うサクラは真正面からティガレックスの顔面に向かって鬼神斬破刀を叩きつける。迸る電撃と衝撃に悲鳴を上げてティガレックスは転倒した。絶好の攻撃のチャンスだったが、二人は構わずティ

ガレックスを追い越してクリュウに駆け寄る。その頃には先に来ていたシルフィードが彼を抱き起こしている最中だった。
「クリュウ様、ご無事ですかッ!?」
「な、何とか……」
そう言いながら起き上がったクリュウは平気を装っているが、ディアブロヘルムの下では体に走る痛みに顔を苦悶に歪めている。心配掛けまいと無理するクリュウだったが、そんなのサクラにはお見通しな訳で――
「……一度撤退すべき」
彼の様子を見てこれ以上の戦闘は危険と判断し、撤退すべきと主張する。シルフィードも同意見らしく「そうだな」と同意する。しかし、
「だ、大丈夫だってば」
クリュウは反対した。何せデスパライズで蓄積した麻痺毒はおそらくそろそろ発動するはず。ここで撤退すればせっかく蓄積した麻痺毒が無駄になる可能性もある。モンスターは時間が経てば毒を中和する抗体を生み出してしまうからだ。デスパライズ最大のメリットはモンスターを麻痺状態にできる事。それを放棄する事は今後の狩猟に大きく影響するような愚行だ。
立ち上がったクリュウは道具袋(ポーチ)から秘薬を取り出すと、口の中に放り込んだ。心配そうに見詰める三人を前に改めて「大丈夫だから。このまま一気に攻め切るよ」と力強く言う。そんな彼の勇ましい姿を前に、サクラも短くため息を零すと「……私はクリュウに従うわ」と撤退案を引っ込める。
「ではこのまま戦うが、無理だけはするなよクリュウ」
「わかってる」
態勢を立て直した四人に対し、ティガレックスはゆっくりと起き上がる。低く唸り声を上げながらティガレックスは四人に向かって突進を仕掛けるが、四人は左右に分かれてこれを回避。止まったティガレックスに向かって殺到する。
四方から迫る敵に対し、ティガレックスはその場で体を捻るような動きを見せた後、必殺の回転攻撃。全方位を一瞬で蹂躙する一撃はし

かし、誰も巻き込まずに不発に終わる。巨体の遠心力を四肢で相殺するわずかな隙を突いて、四人の一斉攻撃が炸裂する。
　クリュウは左後脚に向かってデスパライズを叩きつけ、シルフィードは尻尾に一撃を落とし、サクラは左前脚に刀を振り抜き、フィーリアは右前脚を狙って電撃弾を撃ちまくる。一体何発当てたかわからないが、ティガレックスが動く寸前に放たれた銃弾はティガレックスの右腕の爪を砕いた。悲鳴を上げて仰け反るティガレックスに対し、クリュウは全力でデスパライズの刃を叩きつける――その一撃が引き金となり、刃先から流れ出た麻痺毒がティガレックスの巨体を拘束した。
「やったぁッ！」
　喜びの声を上げるクリュウだったが、すぐさま刃を翻してデスパライズを傷口目掛けて振り下ろす。このせっかく作ったチャンスを無駄にしない為にも、止まってはいけない。疲れて来た腕に無理にでも力を込めて剣を叩きつける。
　痙攣して動けなくなるティガレックスに対し、他の三人も一斉に攻撃を仕掛ける。サクラは左前脚に向かって鬼神斬破刀を振り下ろす。すぐさま自らの中でギアチェンジし、振り抜きから気刃斬りにシフト。縦横無尽に刀を振るい、轟竜の鱗を削り取る。
　激しい剣撃の嵐はティガレックスの左腕の先にある爪を砕き、褐色の鱗を赤く染め上げる。左右の斜め上からの連続斬り下ろしの後、天高く刀を掲げる。煌めく剣先は降り行く雪を斬り裂きながら振り下ろされる。
「……チェストオオオォォォッ！」
　気合いと共に振り下ろされた一撃は轟竜の鱗を何枚も弾き飛ばし、ティガレックスの体表と地面に降り積もる雪を赤く染める。
　少し距離を置いているフィーリアも今度は右の後脚を狙って電撃弾の連射を浴びせる。電撃弾は比較的大型の弾丸なので一度に弾倉に装填できる数は三発と少ない。なので当然次の弾を装填（リロード）する機会も多く、連射力に欠ける。しかし彼女は二発目を発射すると同時にガンベルトから新たに三発を片手で器用に取り、三発目の

発射後すぐさま装填（リロード）。可能な限り撃ち休みを減らす事で最速の連射を可能としている。この撃ち休みに隙をどれだけ短くできるかが狩猟を大きく左右する事もあるし、何より実力の証の一つとなる。フィーリアの実力あってからこその連射だ。

そしてシルフィードは――

「うおらあああああぁぁぁぁッ！」

気合裂帛。勇ましい咆哮と共に構えた大剣を力の限り振り下ろす。風を叩き割るような豪快な一撃は彼女の最大にして最強の一撃。力強く振り下ろされた剣撃は容赦なく投げ出されている轟竜の尻尾に叩きつけられる。硬い鱗を砕き、刃先はさらにその奥へと突き進む。肉を断ち、迸る血飛沫も構わず剣先を捩じ込むと、一瞬硬い感触にぶち当たる。構わず、勢いを殺す事なく一気に全力を込めて剣を押し込む。そして――硬い骨を切断し、刃先は勢いよく新雪を叩き割る。

「ギャアアアアアアアアッ!?」

尻尾を切断され、ティガレックスは悲鳴を上げながら吹き飛ぶ。これまで何度も見て来た跳躍とは違う、着地も無惨な反射的なもの。雪上に倒れたティガレックスは激痛に悶え苦しむ。

柔らかな新雪に突き刺さった剣を引き抜くと、傍に横たわっている轟竜の尻尾を一瞥し、シルフィードは口元に不敵な笑みを浮かべる。

「これで状況は好転するな」

尻尾を切断すれば、回転攻撃の範囲が大きく小さくなる。ただでさえ隙の少ないティガレックス相手ならば、この有無は戦況を大きく左右するだろう。

尻尾を見事切断したシルフィードに対し、フィーリアから「さすがですシルフィード様ッ！」と賞賛の声が上がる。サクラも口元に小さく笑みを浮かべ、クリュウもガッツポーズ。

ようやく勝利へのわずかな希望の光が見え、戦意が上昇する四人。しかし彼らの目の前で起き上がったティガレックスがの瞳には、極寒の雪山だというのに活火山を思わせるような怒りの炎が燃え上がっていた。見る見るうちに両前脚と顔に真っ赤な血筋が浮かび上がり、ティガレックスは大きく背後へと跳躍してクリュウ達から距離を取

る。慌てて追いかける四人に対し、怒り狂う轟竜は天を震わす咆哮（バインドボイス）を轟かせる。
「ゴギャアアアアアオオオオオオオオオオッ！」
離れていてもビリビリと感じる殺気と怒気に、四人は身を縮こまらせる。ティガレックスの本気の怒りを前に、自然と緩み掛けていた緊張が一気にピンッと張り直す。
「怒り状態か……」
嫌な汗が頬をゆっくりと流れる。愛剣デスパライズを構え直すと、気づいてしまう――剣先が微かに震えていた。気づかないうちに、体は危険だと警鐘を鳴らし、恐怖で震えていた。逃げなければヤバイ、そう告げる本能に対し、クリュウはハンターとしてその本能をねじ伏せる。
「こっからが、本番だよ」
ディアブロヘルムの下で、冷や汗を流しながらクリュウは不敵に笑みを浮かべる。
大地を震わす咆哮（バインドボイス）を轟かせ終えると、ティガレックスはクリュウ達目掛けて突撃して来る。通常時とは比べ物にならない速度での突進は、あっという間に四人との距離を詰める。距離があった事で何とか回避した四人だが、その表情は皆焦りの色が見える。
「やはり怒り状態は侮れないか……」
猛烈な速度で突進するティガレックスを前にシルフィードは歯軋りする。通常時でも厄介な相手だが、怒り状態となると手がつけられない。
雪上を猛烈な勢いで滑走した後、四人の背後で信地旋回で雪煙を立てながら転進したティガレックスは唸り声を上げながらサクラ目掛けて突っ込む。
狙われたサクラは舌打ちして横へと飛び退いて突進を回避すると、すぐさま立ち上がって背後へと流れて行ったティガレックスの姿を目で追う。その視線の先でティガレックスはさらに信地旋回して突っ込んで来る。だがその先には誰もおらず、最後の突進は失敗に終

わる。
　滑走している最中も数発電撃弾を当てていたフィーリアはその動きを見てある確信をした。
「……どうやらティガレックスは、二度目の信地旋回の後は目標を定められないのね」
　高速で滑走しながら信地旋回したのはいいものの、一度目はともかく二度目は旋回するだけで精一杯なのだろう。だとすれば、一度目と一回目の信地旋回の後の二度目の突進さえ警戒すれば、三度目の突進はそれほど脅威ではなさそうだ。目標無く走る際にその針路上にだけ入らなければ安全だ。
「だとしても、あのスピードを回避するのはそう簡単じゃない」
　極寒の空気に包まれていても、頬を汗が流れる。口から吐き出される息は真っ白く雪の降る空へと解けるように消えていく。
　距離が離れているせいで、視界が悪いここでは向こうにいるティガレックスの姿がぼんやりとしか見えない。これではどう動くかわからず回避もままならないと判断した四人は警戒しながら前進する。そこへ先頭を歩くシルフィード目掛けてティガレックスが跳び掛かって来た。
「ッ!?」
　視界不良の中、彼女からすれば突然目の前にティガレックスが跳び掛かって来たように見えただろう。反射的にキリサキでガードするも、重量のあるティガレックスの跳び掛かりには柔らかい雪上の上という事もあって耐え切れず、押し倒されてしまう。
　倒れたまま視線を上げると、ティガレックスが血走った目で自分を見詰めている事に気づく。その視線に背筋が凍り付くような感覚に陥る。彼女を助けようと慌てて駆け寄る三人に対し、ティガレックスは上半身を持ち上げ、胸を張りながら息をスゥと吸い込むと、
「ゴガアアアアアアアアアオオオオオオッ！」
　猛烈な衝撃波と共に咆哮（バインドボイス）を放つ。膨大な声量と共に放たれた衝撃波が近づいていたクリュウとサクラを吹き飛ばし、フィーリアも耳を塞いでその場で動けなくなる。そして――

「がぁぁ……ッ!?」
逃げられない状況で至近距離で咆哮（バインドボイス）の衝撃波の直撃を受けたシルフィード。簡単に体を吹き飛ばすような強力な衝撃波を、逃げられない状況で真正面から受ける。体が潰されるかのような衝撃に、声も出す事もできず激痛に晒される。
咆哮（バインドボイス）が終わると、ティガレックスはすぐさま動けずにいるクリュウ目掛けて突進を仕掛ける――同時に、脚下にいたシルフィードの体は蹴られ、一瞬の浮遊の後雪の上に叩きつけられた。
「シルフィッ！」
彼女の名を叫び、慌てて彼女の下へ行こうとするが、それを遮るようにティガレックスは彼に迫る。逃げられず、盾でガードするも、まるで殴られたかのような衝撃と共に彼の体は吹き飛ばされ、地面の上に倒れる。直撃こそ避けたもののダメージを負った事でフラフラと立ち上がったクリュウに対し、ティガレックスは容赦なく雪玉を投げつける。背後からの一撃に避けられなかったクリュウはその直撃を受け、雪の上に正面から倒れ込んだ。
二人を一瞬にして戦闘不能にまで追い込んだティガレックスはさらにサクラに向かって跳び掛かる。姿勢を低くして空気抵抗をできる限り小さくしながら素早くティガレックスの着地地点を避けたサクラは、てぃがが着地したと同時に反転して斬り掛かる。
だが、刃先が轟竜の甲殻に叩きつけられる寸前、再びティガレックスは咆哮（バインドボイス）を上げて彼女の体ごと吹き飛ばした。背中から強く地面に叩きつけられたサクラは痛みに顔を顰めながらも健気に起き上がる。
剣士組が壊滅的被害を受け、すかさずクリュウとシルフィードに回復弾ＬＶ２を撃つフィーリア。しかしサクラもまた蹴散らされたのを見てすぐさまティガレックスの正面へと走ると、こちらに向かって振り返るティガレックス目掛けて閃光玉を投げた。幸い、この一撃は見事に炸裂しティガレックスは視界を封じられる。
「ご無事ですか皆様ッ!?」

辺りを確認すれば、起き上がったサクラは回復薬グレートを飲みながら頷いている。クリュウも回復薬グレートを飲みながら右手を上げて無事だとサインを送る。そしてシルフィードもフラフラと起き上がると道具袋（ポーチ）から秘薬を取り出して口に放り込む。

「くそぉ……ッ」

秘薬を呑んだ事で全身に走る激痛が和らいだとはいえ、シルフィードは悔しげに唸る。自分がしっかりしないといけないのに、先程から無様な姿しか晒していないのが不甲斐なくて仕方がなかった。

「フィーリアは構わず電撃弾で奴を封じ込めてくれッ！　それ以外の者は態勢を立て直す事に全力を注げッ！」

シルフィードの指示に従い、フィーリアは電撃弾を装填（リロード）して暴れるティガレックスを狙い撃つ。クリュウとサクラ、そしてシルフィードの剣士組は砥石を使って切れ味を正したり、回復薬などで体力調整をしつつ、ホットドリンクや携帯食料で万全の状態を整える。全ての準備が整うと同時に、ティガレックスの視界が回復する

「来るぞッ！」

シルフィードの怒号に振り返れば、こちらに向き直ったティガレックスが怒号を上げながら突っ込んで来る最中だった。散開するように散り散りに回避行動する四人の中を突っ切るようにティガレックスは雪塵を纏いながら滑走する。

猛烈な滑走の後、信地旋回して方向転換するティガレックスはサクラを狙って突撃する。サクラは閃光玉を投げてその進撃を阻止しようとするが、視界が悪い中で怒り状態のティガレックスのスピードを見誤ったせいか、閃光玉はティガレックスの背後で炸裂してしまった。投擲した瞬間、改めて距離を見て失敗したと悟ったサクラはすぐさまその場を飛び退いたおかげでギリギリ回避はできたが、閃光玉一発が無駄になってしまった。

さらに獲物を失ったティガレックスは信地旋回しながら新たな獲物、今度はフィーリアを狙って突撃する。電撃弾を装填（リロード）していたフィーリアはこの動きを見て慌てて走って回避するが間に合わず、無理矢理身を投げ出して寸前の所で回避した。背後を滑走する

死の執行に恐怖しながら慌てて起き上がり、ティガレックスと距離を取る。すぐさま銃を構えるが、ティガレックスはさらなる信地旋回を経て雪上を滑走する。

四肢を使って急停止したティガレックスに対し、シルフィードが近寄る。だがそれを阻むようにティガレックスは大きく後ろへ跳躍して距離を取ると、シルフィード目掛けて突進して来る。

「鬱陶しいぞ貴様ッ！」

突進を回避したシルフィードは憎々しげに叫ぶ。相手が動き回っているせいでうまく立ち回れない事に苛立っていた。

フィーリアとサクラもそれぞれ武器を構えたまま宛もなく旋回して滑走するティガレックスを追っていた。

一方クリュウは一人戦列を離れると、荷車に駆け寄って積載している道具（アイテム）の中からシビレ罠を取り出すと、それを持ってすぐにエリアの中央を目指す。動けない相手なら罠（トラップ）でその動きを封じればいい。ただし、罠（トラップ）には限りがある。使いどころを間違えれば狩猟を失敗する可能性だってある。使うべきタイミングはしっかり見定めなければならない。そして、今がその時なのだ。

エリアの中央へと移動し、ティガレックスの動きを確認しながらシビレ罠を設置する。シビレ罠はハマれば確実に相手を拘束できる罠（トラップ）だ。だが個数が限られる上により難易度の高い状況判断が求められる為、閃光玉以上に使いどころが難しい。だがクリュウは、こういった道具（アイテム）の扱いは得意だった。

手早く設置を済ませると、他の三人を呼ぶ。彼の行動を横目に見ていた三人はすでに全員武器をしまって彼の方へと走って来る。それを追ってティガレックスは振り返り、低く唸り声を上げると雪塵を纏いながらティガレックスが突っ込んで来る。狙いは走るフィーリアだ。

後方から猛烈な勢いで迫るティガレックスに対し、フィーリアは必死に走って逃げる。先にシビレ罠の後方へと待避した二人とクリュウが必死に呼ぶ。仲間の所へ、フィーリアは全速力で走り続ける。

背後に迫る狂気。気配でわかる恐怖の死の執行。泣きそうになるのを必死に堪え、フィーリアは走り続ける。仲間を見詰めながら走り続けると、落とし穴の向こうでサクラが無言で手を伸ばすのが見えた。掴まれ、とばかりに伸ばされた彼女の手に向かって、フィーリアは必死になって自らも手を伸ばす。

あと少しで手が届きそう。そんな距離になった時、必死に走っていたフィーリアの足が限界を超えての走りに耐えかねてもつれてしまう。転びそうになるフィーリアの手を掴まえようとサクラは一歩踏み出し、そして彼女の手を掴む。転びそうになる親友の腕を引っ張り――フィーリアはサクラは腕の中に飛び込んだ。

――サクラの腕の中にフィーリアが飛び込んだ直後、ティガレックスは彼女達の手前にあるシビレ罠を踏み抜き、その巨体の動きを封じられた。

すかさずクリュウとシルフィードが斬り掛かり、サクラもフィーリアから離れて鬼神斬破刀を構えながら突貫する。

フィーリアは感謝の言葉は言わなかった。しゃべる事よりも今は戦うべきタイミングだという事もあったが、サクラの自分達の関係に礼の言葉はいらないという想いをくみ取って、あえて言わなかった。

感謝の気持ちは言葉ではなく、ハンターとしてその実力で返す。それが、狩友というものだ。

ハートヴァルキリー改を構え。弾倉に電撃弾と装填（リロード）する。スコープを覗き込み、麻痺毒の影響を受けて痙攣するティガレックスの脇腹目掛けて引き金を引く。銃口から飛び出した銃弾は銃身の中の施条（ライフリング）で回転力を得た事で空気の壁を貫いて突き進む。一瞬にして空を滑空し、狙ったティガレックスの脇腹に命中する。着弾と同時に弾ける電撃が轟竜の鱗を焼き、脆くさせる。次々に撃ち出され命中する電撃弾は一発一発が鱗を削り取っていく。

フィーリアの銃撃と平行して剣士三人による剣撃も続けられている。三人共、動けないティガレックスを相手にこれまで翻弄されていた分を返すように集中攻撃を浴びせる。皆、足場の悪い雪の上に踏ん張って剣を振るい続ける。強固な轟竜の鱗や甲殻もこれまでの攻撃

でかなり磨耗し、脆くなっている。次第に肉に刃が届くようになり、攻撃の威力は増している。
だが、一方的な攻撃が続くのはわずかだ。シビレ罠の効力が切れるとティガレックスは唸り声を上げながら姑息な束縛を解除する。すぐさま後退して包囲網を下げる四人に対し、ティガレックスは砕けた爪でシビレ罠を踏み潰しながら睨みつける。
一瞬の沈黙、相手がどう動くか見定めるように距離を開けながら見詰めていた四人の前で、ティガレックスは垂直に飛び上がった。そしてそのまま上空で翼を広げると別のエリアへと移動していく。
エリアから敵の姿が消えると、四人は安心したようにその場に腰を落とした。クリュウはディアブロヘルムを脱ぎ捨てると、極寒だというのに汗に濡れた顔が露わになる。水筒の中の水を飲むと冷たい水が喉を潤すと、ようやく一息がつく。
「ずっと走りっぱなしってのもキツイね……」
動き回るモンスターを相手にしている為、当然それを追ったり逃げ回ったりと動き回っているクリュウ達。しかも雪山という過酷で足場の悪い環境でこれほどまでに走り回る事はこれまでなかった為に余計にしんどい。クリュウだけではなく、他の面々の疲労の色もさらに濃くなっていた。だが、
「でも、だんだん動きがわかるようになって来た」
そう言ってクリュウは拳を握りしめる。疲れてはいても、その瞳には希望の光が満ちていた。それはクリュウだけではなく、他の面々も同じだ。
「そうですね。閃光玉をうまく当てられれば、動きはかなり押さえられます。まだ閃光玉の数には余裕がありますし、弾丸もまだまだ大丈夫ですッ」
フィーリアも胸の前に拳を握りしめてやる気を見せる。隣に座るサクラも何も言わずに砥石を使って刃を研いでおり、その横顔にはまだ諦めてはいない。
意気軒昂な仲間達の姿に、シルフィードは頼もしげに笑ってみせる。

「少し休憩したら奴を追うぞ。今度はもっとうまく立ち回ってみせるさ」
状況は決して楽とは言えない。それでも、少しずつ流れは自分達の方へと向いてきている。そう信じているからこそ、彼らは諦めず、前に進み続けられるのだ。例え相手が強敵だったとしても、自分達は負けない。そう心から、彼らは信じているのだ。
雪は相変わらず降っていて、視界はお世辞にもいいとはいえない。コンディションとしては最悪に等しい状況だ。それでも、諦めずに前に進み続ける。
「絶対に勝つんだ」
クリュウの自らを鼓舞するような言葉は、雪風に流されて曇天の空へと溶けていった。

第２０８話　壮烈な人形姫の覚悟　涙の果てに過去との決別の時

山頂に轟く大爆音。エリア８にで巻き起こった爆風は空からチラチラと降って来る雪と地面の上に積もった雪を吹き飛ばし、熱波は一瞬にして雪を焼いて水に変化させ、さらに次の瞬間には蒸発して白い煙となる。

まるで火山の爆発のような天に上っていく漆黒の黒煙と、猛々しいまでの火柱。その外縁を包み込む蒸気の壁。それを包囲するように見守る四人の狩人の表情はもはや疲労困憊と言うに相応しいまでに憔悴しきっていた。

鈍色の雲に覆われていてよくはわからないが、すでに時刻は夕刻を迎えようとしている。朝早くから始まった狩猟はすでにかなり長引いていた。エリア同士が離れているイルファ雪山の地形による移動時間もあるが、それ以上にティガレックスの体力はこちらの予想を遙かに上回っていたのだ。

もう倒れてくれ。祈るように見詰めるクリュウ達の視線の先で、黒と白の煙が霧散した。

「ゴアアアアアアアアアオオオオオオオッ！」

黒煙を吹き飛ばしながら天高く轟く怒りの咆哮（バインドボイス）。ゆっくりと姿を表したのは、全身を焼かれ、斬られ、叩き潰されてボロボロの体をした轟竜ティガレックス。そのダメージは相当なものはずだ。それでも、ティガレックスは倒れる事はなかった。ゆっくりと一歩、大地を踏みしめるように歩きながら、呆然としている狩人達を威圧する。全身を怪我し、体表は流れ出る血で赤く染まっていてわかりづらいが、血走った眼光は怒り状態を意味する。

威風堂々と立つティガレックスを前に、最後の希望が砕かれたクリュウは呆然としたまま膝を折った。

「……もうダメだよ」

思わず零れる弱音。だが、それは無理もなかった。

強敵ティガレックスを相手に、クリュウ達は全力を尽くした。持てる技術（スキル）と道具（アイテム）を駆使して奮闘し続けて来た。だが、ティガレックスはそんな彼らの希望を無惨にも砕いてしまった。
動き回るティガレックスを拘束する為の必需品だった閃光玉は底をつき、シビレ罠も残りわずか一つ。回復薬や食料といった類も少なくなっていた。決戦兵器として持ち込んだ大タル爆弾Ｇ四発も、わざわざフィーリアが眠らせてから設置しての爆破という最も破壊力のある使い方を選んで使った――だが、ティガレックスは倒れる事なく今自分達の前に立ち塞がっている。
万策尽きた……
今まで自らを鼓舞し続け、戦意を保ち続けてきた希望が砕かれた今、クリュウにはもう何もできなかった。
絶望に打ちひしがれているのはクリュウだけではない。フィーリアも電撃弾を全て消費してしまい、残る銃弾もわずかという有様。さすがのシルフィードも万策が尽きた状況に悔しげに歯軋りする。
もはや戦う気力すら失われてしまったクリュウ達に対し、ティガレックスは唸り声を上げながらゆっくりと迫って来る。まるで、無力なこざかしい敵を嘲笑うかのように、悠々とした足取りで迫る。
シルフィードがひとまず撤退しようと全員に指示を飛ばそうと決めた瞬間――ティガレックスの前に一人の少女が立ち塞がった。
戦意を失った三人の視線を一身に受けながら、ただ一人希望の光を失う事なく輝き続ける少女。異国の鎧は戦闘の激しさを物語るように傷だらけ。手に握る愛刀の刃も所々刃こぼれしてしまっている。それでも――彼女の隻眼は猛々しい闘志に満ち溢れていた。
「……私は絶望しない」
雪風にのって来たのは、そんな彼女のつぶやき。
「……私は貴様に与えられた絶望から生き延びた」
静かな、それでいて厳しく、そして厳かな彼女の声。
「……私は負けない」
頬を切ったのか、流れる真っ赤な血を人差し指で拭い取る。
「……例え刀を失っても蹴手繰り倒してやる。足を失っても殴り掛

かってやる。腕を失ったら体当たりしてやる。首を切られたら噛みついてやる。歯を奪われたら睨みつけてやる。目を潰されたら罵倒してやる」
壮絶でいて、強い覚悟に満ちた言葉を口にしながら、ゆっくりと人差し指についた血の滴を、そっと鬼神斬破刀の刃先に垂らす。
「……私は負けない。私が負けを認めたら、私の背後にいる人を守れない」
彼女の言う《人》は、クリュウ達の事であって、クリュウ達の事ではない。護衛の女神とも謳われる彼女の信念――守ると決めた、全ての守るべき者達。
「……私は決めた。全てを守るって。例え夢物語だとしても、私は夢を諦めない」
それは、クリュウと再会した時に彼女が言った言葉。彼女が全てを失って、そして得た、彼女の信念。
「……嘲笑うなら好きにしなさい。英雄気取りだって卑下するなら勝手にしなさい。子供の妄言だと一蹴するならほざいてなさい」
言っている事は、子供のわがままの延長線かもしれない。それでも、彼女はその夢を諦めない。
「……私は負けない。命が尽きるその瞬間まで、私は負けを認めない」
ゆっくりと刃先から鍔にかけて、鬼神斬破刀の刃を血の滴が流れ落ちる。
「……だって私は」
ゆっくりと垂れる血の滴が、まるで鬼神斬破刀が飲み込んだかのように、鍔先に消える――
「――私は勝利しか信じない」
構えられた鬼神斬破刀が猛烈な電撃を迸らせる。周辺の雪を一瞬にして蒸発させるような強烈な電撃は、辺りを神々しく、猛々しく、荒々しく煌めかせる――それはまるで、主の想いに応えるかのような鬼神斬破刀の忠誠心の雷撃だったのかもしれない。
辺りを包み込む水蒸気と電撃を纏う戦姫を前に、ティガレックスはその歩みを止めた。彼女の威圧に足を止めたのか、単純な気まぐれな

のか、警戒心からなのか、それはわからない。だが、その蒼色の瞳は雷撃姫の姿を捉えたまま離さない。
「……クリュウ」
　迸る電撃を纏いながら、サクラは少し振り返ってそっと背後で膝を折っているクリュウに声を掛ける。彼女の勇ましい背中をずっと見詰めていたクリュウは、彼女のわずかに見える横顔を見詰める。
「……例え使える道具がなくなっても諦めてはダメ。その時は決してあなたを裏切らず、且つ決してあなたの傍を離れない、あなたに忠誠を尽くす――私を使って」
　雪を蹴散らし、サクラは雷撃を纏いながら跳躍する。猛烈な勢いで周囲の雪を蒸発させながら、怒濤の勢いで彼女はティガレックスの正面から突っ込む。迫り来るサクラに対し、ティガレックスは雪玉を投げつける。
　眼前から迫る巨大な雪玉相手でも臆する事なく、彼女はさらに加速する。そして――雪玉を真っ二つに斬り裂いた。驚くティガレックスに向かって、彼女は止まる事なく突き進む。
　ティガレックスの眼前に向かって跳躍したサクラは雷撃を纏う鬼神斬破刀を構えながら突貫。ティガレックスの額目掛けて刀を振り下ろした。迸る電撃と共に決まった一撃に、ティガレックスは悲鳴を上げて仰け反る。だがサクラは構わず刀を横に振り抜いてさらに一撃を入れると跳躍。ティガレックスの背後へと回り込むと、後ろ脚目掛けて鬼神斬破刀で斬り掛かる。
　唸り声を上げながら振り返るティガレックスの側面に移動するように動きながら正面を避けると、腕に向かって刀を振り抜く。それを迎え撃つようにティガレックスは腕を振るうが、サクラは振るわれる腕を僅かにリーチの長い鬼神斬破刀の先端で斬りつけると、ティガレックスの腕が雪上を滑るのを見届けてから刀を槍のように突きの構えで姿勢を落とし、ダンッと雪を蹴って突貫。振り返るティガレックスの首筋を貫く。
　悲鳴を上げて仰け反るティガレックスに深々と刀を突き立てる。迸る血飛沫と雷撃にティガレックスは滅茶苦茶に暴れ狂う。刀が

深々を刺さっているせいで離れられないサクラは歯を食いしばりながらティガレックスの背中にしがみつき、鬼神斬破刀をさらに深々と突き刺していく

「サクラッ！」

暴れるティガレックスを包囲するように戦意を喪失していた三人が動く。サクラは援護に回りたくてもどう動けばいいか悩む彼に一瞥をくれると、深々と突き刺した鬼神斬破刀を一気に引き抜く。大量の鮮血が噴水のように吹き出し、悲鳴を上げるティガレックスから転げ落ちたサクラは雪の上に倒れるがすぐに起き上がると、血に濡れた鬼神斬破刀を構える。

「無茶し過ぎだよッ！」

駆け寄って来たクリュウが怒るのも無理はない。突然ティガレックスに襲いかかったかと思うと、危険な立ち回りで猛攻を仕掛けたのだ。彼女の身体能力あってこその凄技だが、少しでもミスれば大怪我を負いかねないものだ。だからこそその危険度を下げる為にも、そういう立ち回りは周りの歩調が合っている時にすべきもの。だが彼女は、全く周りと歩調を合わせず単独で突っ込んでしまった。

怒るクリュウに対し、サクラはジッと彼を見詰める。

「な、何……？」

「……私はまだ戦える。クリュウは？」

驚くクリュウを、ジッとサクラは純粋な瞳で見詰める。その隻眼は彼の答えを純粋に待ち望んでいる。だがその輝きは、自分が思っている答えを彼が言ってくれるものだと信じて疑っていない、綺麗な輝きに満ちていた。

サクラの問いかけに対し、クリュウは何も答えず辺りを見回す。遠くではティガレックスが頭を振りながらゆっくりとこちらに振り返るのが見える。そして自分達の周りには、サクラと同じく彼の言葉を無言で待つフィーリアとシルフィードが立っている。

再びサクラに視線を向けると、クリュウは覚悟を決めたように表情を引き締めると厳かにうなずいた。

「僕も、まだ戦えるよ。例え道具（アイテム）がもう残ってなくても、

まだ僕には戦う為の剣がある」
　そう言ってクリュウは腰に下げたデスパライズの柄を握り締める。ここまでティガレックスと奮闘して来た愛剣もまた、所々刃零れを起こしている。だがその輝きは決して衰える事はなく、まだまだ戦えるとばかりに刃先は煌めいていた。
　クリュウの答えにサクラは満足げにうなずくと、彼の隣に並び立ち、刀を構える。クリュウもまた剣を引き抜いて構える。並び立つ二人の剣士を前に唸るティガレックスを見据えながら、二人は互いを見合う。
「こっからは小細工なし。正々堂々勝負してやる」
「……過去の因縁と決着をつける」
　覚悟を決める二人の姿を見守っていたフィーリアとシルフィードは、どちらからとなくため息が零れた。
「まったく、二人で勝手に盛り上がらないでください」
　そう言いながらフィーリアは残弾数が少ない通常弾ＬＶ３を装填（リロード）し、二人の背後に立つ。そんな彼女と同じように苦笑を浮かべながら「私の事も忘れてもらっては困るぞ」とキリサキの柄に手を当てながらシルフィードも並び立つ。
　いつの間にか、四人の狩人（ハンター）達の戦意は元に戻っていた。その瞳には闘志の炎が燃え盛り、強敵を前にしてももう絶望しない、必ず勝ってみせる。そんな意気込みが感じられる。
　闘志を取り戻した狩人（ハンター）達を前にティガレックスは警戒心を向きだしにする。威嚇するように天高く咆哮（バインドボイス）を轟かせる。それを戦闘再開の合図にしたかのように、四人は一斉に雪を蹴って駆け出す。
　迫り来る敵に対し、ティガレックスは迎撃するように雪玉を投げ飛ばす。四人は散開してこの一撃を避けると、互いに間隔を開けながら接近する。
　まず第一撃を放ったのはフィーリア。走りながら的確な射撃で命中弾を与える。当然ティガレックスは彼女の方に向くが、それは計算のうち。振り向いた事で反対側に死角が生まれる。その死角から、雪

塵を纏いながら怒濤の勢いで突貫していたサクラが斬り掛かる。
「……あぁあぁぁッ！」
袈裟斬りでティガレックスの体表に傷を付けると、すぐさま横切りと同時に離脱する。ティガレックスは迎撃するようにその場で回転するが、サクラはその範囲外に離れている。
サクラがティガレックスの攻撃をうまく回避すると、今度はクリュウとシルフィードがフィーリアの援護射撃を受けながら突撃する。ちょうどフィーリアの正面から突っ込む形となった二人。ティガレックスはサクラを諦めて鬱陶しく攻撃を続けるフィーリアを狙って振り返るが、そこへ二人の剣撃が直撃する。
振り上げた剣を、二人は同時に振り下ろす。その刃先はどちらもこちらに向き直ったティガレックスの顔面。額に二本の剣が激突すると、鱗が砕け、額が割れ、真っ赤な血が噴き出す。だがティガレックスは怯む事なく二人に向かって噛みつく。クリュウは何とか盾でガードしたが、剣を振り下ろしていた事でガードができなかったシルフィードは牙は何とか避けたが、硬い鼻先でのタックルを受けて吹き飛ばされる。が、うまく着地したおかげで転倒はせず、すぐに態勢を立て直す。
一方クリュウはすぐさま再び斬り込み、サクラも側面から斬り掛かる。遠方からはフィーリアが通常弾ＬＶ３で援護射撃を続けている。
上段からの斬り下げの後、その勢いを滑らせて今度は斬り上げ。続けて体を回転させながら横へ剣を閃かせる回転斬りへと繋げ、クリュウは次々に軽快に剣を滑らせていく。サクラも素早く刀を振るい、峻烈な剣撃の嵐を浴びせる。
ティガレックスは二人の猛攻撃を避けつつ、遠くから攻撃するフィーリアを狙って彼女の方に向かって跳び掛かる。迫り来る轟竜を前にフィーリアはバックステップでこれをうまく回避する。目の前に着地したティガレックスに向かって、恐れる事なく銃弾を浴びせる。
低く唸りながら彼女を睨みつけるティガレックス。その背後からはシルフィードが後ろ脚を狙ってキリサキを振り下ろす。鋭い剣先

は轟竜の鱗を弾き飛ばし、その下で守られていた肉を斬り裂き、真っ赤な血が迸る。
　ティガレックスを追って迫るクリュウとサクラ。だがティガレックスは振り返ると、二人に向かって唸り声を上げながら突進して来る。怒り状態という事もあって猛烈な速度で迫る恐怖を前に二人は冷静に左右に分かれて回避すると、ティガレックスは誰もいない二人の間をすり抜ける。だがティガレックスは二人の後方で雪塵を立ち上らせながら信地旋回。集結する四人目掛けて怒濤の勢いで迫る。
　再び散開する三人に対し、シルフィードはその場を動かなかった。驚くクリュウ達の前でシルフィードはキリサキを背負うようにして構える。
　唸り声を上げながら迫り来るティガレックスを見据えながら腰を落とし、力を溜めるシルフィード。迫り来る飛竜相手に逃げる事なく真っ向勝負を挑むのは無謀とも言える。だが、彼女の姿を見た三人は誰も何も言わずとも動き出す。
　皆、シルフィードを信じているのだ。彼女ならきっと、やってくれる。そんな仲間の期待と信頼を一身に受けながら、シルフィードは迫り来るティガレックスと真っ向勝負を挑む。目を閉じ、神経を集中しながら力を溜めていく。
　彼我の距離が縮まり、その凶悪な牙と爪が彼女を襲う――寸前、カッと彼女の閉じられていた瞳が見開かれ、静から動へとギアチェンジ。
「うらあああぁぁぁッ！」
　気合いの咆哮と共に振り上げた剣を一気に叩き落とす。空気を切り裂きながら振り下ろされる剣撃は猛烈な勢いと共に重力や彼女の鍛え抜かれた腕力を味方にキリサキの鋭い刃がティガレックスの顔面を叩き斬る。
「ガァッ!?」
　驚きの悲鳴と共にティガレックスの頭は地面にめり込み、凶悪な進撃が止まる。顔を地面に埋めて横転するティガレックス。シルフィードは剣を構え直すと再び上段に構えて斬りかかる。同時に彼

女が進撃を止めてくれると信じ動いていた三人は一斉に剣や刀、銃を構えて襲いかかる。
　クリュウは上段から抜刀斬りを決め、続けて左右へと剣を滑らせると、最後は回転斬りで締める。片手剣を使う上で最も素早く、そして扱いやすい剣撃のコンビネーションだ。
　サクラもこれまでに溜まっていた練気を解放して気刃斬りで一気に畳みかける。峻烈な連撃は轟竜の鱗を蹴散らし、肉と共にティガレックスの体力を削り取って行く。
　シルフィードも二人に比べれば手数は多くはないが、重撃を一撃一撃確実に積み重ねていく。腰を落としてしっかりと叩き込まれる一撃は、一撃で多大なダメージを与えられる。
　そして剣士組と違い接近はせず、しかし冷静に的確な射撃を続けるフィーリア。その表情には疲労の色が見え、序盤に比べれば時折命中精度が鈍っている。それでも、スコープを覗きながら再びの転倒を狙って脚を狙い撃つ。
　四人の猛攻撃を受けながらも、ティガレックスは必死になって起き上がろうとする。巨体を起こすのは難儀だが、それでもようやくゆっくりと起き上がる。唸り声を上げ、辺りを威嚇するティガレックス。起き上がる寸前で剣士組は距離を取ってフィーリアと共にティガレックスを包囲する。
　一瞬の睨み合い。まだまだ戦闘は長引く事を想定して身構えるクリュウ達だったが、彼らは自分達が重大な誤解をしていた事に気づく。
　――突如ティガレックスは彼らに背を向けると、そのまま脚を引きずりながら去っていく。
「弱ってるッ!?」
　驚くクリュウと同じように、他の三人も驚いている。凶悪なまでにタフな体力と戦闘能力を持つティガレックス。自分達の攻撃がまるで通じていないなどと錯覚してしまう程に圧倒的な相手。だがこの世に無敵や不死というものは存在しない。自分達のわずかなダメージの積み重ねは、確実にティガレックスを弱らせていた。そして今、

それが形となって現れたのだ。
逃げるティガレックスを追って四人が突っ込む。怒濤の勢いで迫るサクラが抜刀斬りでティガレックスを襲うが、逃げるティガレックスはそんな攻撃など目もくれずに歩き続ける。そして、空へと跳び上がるとそのまか滑空してエリアを去った。
残されたクリュウ達無言のまま、互いの顔を見合う。いずれも疲労の色が濃く、疲れ果てている。だが、その瞳には希望の光が強く煌めいていた。
「……もう少し、だね」
「あぁ、もう少しだ」
クリュウの問いに、シルフィードは自信満々に答える。他の二人も、やっと見えた希望の光に頬を緩ませている。だが、勝利への可能性が見えて来たとはいえ、ティガレックスを倒せた訳ではない。緊張を解くにはまだ早い。
「たぶん奴は巣へ向かったはず。そこで奴との最終決戦だ」
クリュウの言葉に、三人は力強くうなずいた。
「サクラ。君の過去の因縁と決着をつけるよ」
サクラは厳かにうなずくと、手に持っていた鬼神斬破刀を背負う。
いつの間にか曇天の空は相変わらずだが、空から降って来る雪はだいぶ弱まっていた。もうしばらくすれば止むだろう。そうすれば雲も晴れ、いい星空が見えるに違いない。
クリュウ達は最後の決戦への期待と気合いを胸に、決戦場となる飛竜の巣があるエリア3を目指して歩き出した。
途中、ティガレックスが暴れ回っていた事で隠れていたのか、ギアノスやブランゴの襲撃を受けるもクリュウ達の敵ではなかった。砥石や携帯食料、回復薬などで万全の準備を済ませた状態で、クリュウ達は飛竜の巣であるエリア3の中へとゆっくりと進み入る。
エリアの広さはさほど広くはなく、ちょっとした広場程度。高い岩壁に覆われており、北側の岩壁の上にぽっかりと空いた穴が、大型モンスターの行き来する出入口だ。天井には大型モンスターは通れなくてもそれなりに広い穴が空いていて、そこから洞窟の中を薄暗くも

照らし上げている。
　そんな飛竜の巣、エリア3の中央でティガレックスは静かに眠りについていた。わずかな寝息を立てながら眠っていても、辺りの空気はどこかピンッと張りつめているような錯覚に陥る。それほどに、ティガレックスの存在は威圧的だ。
　岩陰に隠れながら、クリュウ達は眠るティガレックスを観察する。
「……どうする？」
　岩に背を預け、横目でティガレックスを覗き込むサクラは周りに膝を折っている仲間に問いかける。正面に控えるシルフィードは拳を顎に当てながら何かを考え込む。
「シビレ罠は残っているな？　なら、捕獲するのが最適だと思うが……」
「そうですね。ティガレックスはまだ未知のモンスターという事ですから、研究サンプルとしても生け捕りした方がギルドに恩を売る事はできるのですが……」
　シルフィードとフィーリアは捕獲する方が得策だと言いつつも、その言葉はいつもに比べてそれほど強くはない。まるで何かを気遣うような、そんな歯がゆい感じ。事実、二人の視線は絶えずサクラに注がれていた。
　ティガレックスはサクラにとって憎き親の仇だ。彼女の運命を変えた、運命の分岐点。恨みや憎しみを抱いて当然の相手であるが、今回の狩猟では彼女は憎しみを捨てて村の為に戦うと決意してくれた。そのおかげで自分達は狩猟をうまく続けられ、そして今こうしてティガレックスをここまで追いつめる事ができた。
　でもせめて、サクラには自分の過去の因縁との決着をつけてほしい。そう願うなら捕獲ではなく、完全なる勝利と言える討伐が相応しい。だが当然、そうなれば最後の戦いが始まる。道具（アイテム）に余裕がない状況で、これ以上の戦闘は正直控えたいのが本音だ。
　狩人としてはここで捕獲するのが正解だ。だが仲間としては、ここは決着をつけるのが正解。二つの相反する想いの中で、二人は揺れていた。

そんな二人の想いに気づいていたサクラ。ふぅと短く息を零すと、首をゆっくりと横に振った。
「……捕獲する」
彼女の口から発せられた捕獲の二文字に、二人は驚いたように互いの顔を見やると、ゆっくりとサクラに視線を向ける。
「いいのか？」
「弾は残り僅かですが、それでも戦闘ができない事はありませんよ？」
二人の気遣うような言葉に対しても、サクラは首を横に振った。
確かに、相手は自分の父と母を殺した憎き敵だ。正確には個体で言えば違うだろうが、それでも自分の運命を狂わせた相手には違いない。当然、この手で息の根を止めてやりたいとは思う。だが――
「……私は決めた。今度の狩りは復讐者としてではなくて、狩人（ハンター）として戦うって。だから、ハンターとして判断した――ここは、捕獲が最適」
仲間達は自分の決意を信じて同行を認めてくれた。協力してくれた。ならば、自分にできる事はそんな仲間達に心配をかけず、己の決意を示す事――仲間の期待に、応える事だ。
悔しい、という気持ちがない訳ではない。本当は自分の手で決着をつけてやりたい。そんな気持ちはもちろんある。でも、自分のエゴで仲間を危険に晒してはいけない。今回の狩猟は雪辱戦ではないのだから。
サクラの決意を知ったシルフィードは厳かにうなずくと、作戦方針を決めた。
「それでは、捕獲作戦で行くぞ。フィーリア、捕獲用麻酔弾の準備を」
「承知しました」
捕獲作戦へと方針が決まり、準備を始める二人。そんな二人の姿を頼もしくも、どこか寂しげに見詰める彼女の横顔を、見逃さない者がいた。
「――僕は、決着をつけるべきだと思う」
そう言い出したのは、これまでずっと沈黙を貫いていたクリュウだった。驚く一同を前に、クリュウは脱いだディアブロヘルムを抱き

ながら、しかし臆する事なく自分の考えを貫く。
「ティガレックスは、ここで討つ」
「……クリュウ」
「しかし、残る装備の事を考えるとこれ以上の長期戦は厳しいぞ」
皆で決めた作戦方針に異を唱えるクリュウ相手に困惑しながらも冷静に状況の厳しさを指摘するシルフィード。彼女の言う通り、ティガレックスとの激戦はかなりの長期戦となり、結果として装備はもはや貧弱と言える程にまで消耗してしまっていた。正直、ホットドリンクだって残りわずかだ。下山する分も含めれば、その量はギリギリと言えるだろう。
これ以上の長期戦は無謀だ。それがシルフィードのハンターとして、リーダーとしての意見だった。彼女の考えにはフィーリアも同意していて「私も、もう弾丸は本当にわずかしか残っていません」と残弾数の少なさを強調する。ボウガン使いは剣士を違って弾がなくなれば、もう何も出来ない。戦闘力を失うのだ。そんな状況の一歩手前、フィーリアは限界を超えた戦いの末にそんな状況に陥っていた。
そんな仲間の意見も十分に吟味した上で、しかしクリュウは改めて《決戦》を進言した。
「……クリュウ、どうして」
「――決着、つけたくないの？」
戸惑うサクラのつぶやきに対し、クリュウは彼女の方を見ると優しくそう尋ねた。驚く彼女の隻眼をジッと覗き込む。彼に見詰められて思わず頬を赤らめて視線を逸らしてしまうが、クリュウはそれを許さず彼女の肩を掴むと、ゆっくり彼女を正面に向けさせる。
「サクラ。過去の因縁と、決着つけるんでしょ？」
真剣な面持ちで尋ねる彼の言葉に、サクラは視線を逸らす。照れたからではなく、彼の純粋な眼差しを正面から受け止める事が、今の彼女にはできなかった。
「……でも」
「このまま、中途半端な形で終わってもいいの？　サクラはそれでいいの？」

「……」
クリュウの問いに、サクラは何も答えられなかった。否、答えられないのではなく、答えを拒否したのだ。だって本心は……
いつもは凛々しい隻眼も明らかに動揺の色が見える。そんな彼女の手を、クリュウは優しく掴む。
「サクラは本当は、どうしたいの？」
「……私は」
自分の本心は……決まっているじゃないか。
「……あいつを、殺したい……ッ」
堰を切ったように零れ出したのは、彼女の本心。必死に我慢していた想いと共に、隻眼から零れ落ちたのは、彼女の涙だった。
戦いの最中、何度奴を殺したくて理性が吹っ飛びそうになった事か。本心では怒りに任せて斬り殺したいとずっと思っていた――でも、頼れる援護をしつつもどこか危なっかしいフィーリアや女の自分でも時々惚れそうになってしまう程漢らしく勇猛果敢なシルフィード、そして自分に優しく接してくれて共に戦ってくれるクリュウの姿を見て、ずっとそれを我慢していた。
戦況的に捕獲という判断を下したのも、ハンターとして、さらに言えば仲間の為の苦渋の決断だった。
――でもクリュウは、自分の中の本心をしっかりと見抜いていたのだ。
「……殺したい、あいつが憎い、許せない。でも今は復讐戦じゃないから、ずっと我慢してた」
「うん。ずっと気づいてたよ、君が無理してるって」
彼の優しい言葉に、サクラは思わず苦笑を零した。どんなに取り繕っても、どうやら自分は彼にウソをつけないらしい。恥ずかしいような、自分の事をちゃんと理解してくれている事が嬉しいような、ちょっと悔しいような。何だか妙な感情が彼女の中で渦巻く。
「……でも、本当はあいつを殺したい。殺したいのよ」
「わかってる。でも、もしも君が復讐の為にあいつを殺したいって思うなら、僕はここで捕獲を容認するよ」

「……え？」
てっきり自分の味方をしてくれていると思っていたクリュウから、突然突き放された事にサクラは驚きと共に戸惑い、そして動揺する。困惑する彼女を前に、クリュウはゆっくりと言葉を紡ぐ。
「僕は、君が過去との決別の為に決着をつけるって言うなら、全力で協力するよ。でも、復讐の為に戦うっていうなら、僕は協力できない。復讐ほど、意味がなくて虚しいものはないんだから」
クリュウの優しく語りかけられる言葉に、サクラは無言だった。そんな彼の言葉にわずかに苦笑を浮かべたのはシルフィード。かつて自分は復讐に狂った身だから、彼の言葉はちょっと自分にもダメージがある。でもそれは決して嫌な痛みではなく、何だか小っ恥ずかしいような、そんな感じだ。
クリュウは優しく指先でサクラの涙を拭い取ると、そっと彼女の顔を覗き込む。顔を覗き込まれる恥ずかしさと泣き顔を見られてしまった恥ずかしさに頬を赤らめながら、しかし今度は彼の視線をサクラは真っ直ぐと受け止める。
「どうする？」
クリュウの問いかけに、サクラは顔を伏せて少し考える。そんな彼女の姿を他の二人も心配そうに見詰める。しばらくして、ゆっくりと顔を上げる。するとそこには、いつもの彼女の凛々しい姿が戻っていた。
「……奴と決着をつける。過去の因縁を、断ち切る為に」
「そっか」
サクラの答えを聞いて、クリュウは嬉しそうに微笑む。彼はきっと、彼女の答えをわかっていたのだろう。サクラならきっとこう答える。確信にも似た、彼女を知り尽くしているからこその信頼。それが彼とサクラの間にはある。
「……クリュウ」
彼を名を呼ぶと共に、サクラはそっと彼の手を取った。首を傾げ、優しげな笑顔を浮かべて自分の言葉を待ってくれる彼の優しさに感謝しながら、サクラは彼を見上げる。これだけでも十分嬉しいのに、

自分は彼に甘えようとしている――違う、甘えではない。
「……一緒に、戦ってくれる？」
一人では不安だ。
一人ではティガレックスに敵わないから？
違う。勝てないとか、そんな理由じゃない――ただ純粋に、彼と一緒にいたい。そんな自分のわがままでもあり、そして彼に対する信頼から発せられる言葉。
一人は怖い。でも、彼と一緒なら――愛する彼と一緒なら、自分はどんな戦いにも身を投じられる。勇気をもらえる。凛々しく、勇ましく狩場を翔けられるのだ。
サクラの問いに対し、クリュウは優しく微笑みながら、決まり切っている言葉を紡ぐ。
「もちろんだよ。一緒に戦おう、サクラ」
「……ありがとう、クリュウ」
涙を浮かべながら、サクラは嬉しそうに微笑んだ。それは小さくも、彼女からすれば精一杯の満面の笑みだった。それを知っているからこそ、クリュウも安心したように微笑む。
クリュウとサクラ。不器用者同士の、ちょっと回りくどくて、でも互いを気遣い合った、優しさと優しさの紡ぐ二人の絆。昔から変わらない、二人の信頼関係だ。
「……まったく、勝手に話を進めないでもらおうかな」
そんな言葉に振り返ると、シルフィードがやれやれとばかりに肩を竦ませる。ゆっくりと立ち上がると呆然としているサクラの額当てを人差し指を弾く。デコピンをされて驚くサクラに対し、シルフィードは苦笑を浮かべる。
「君が無理をしている事に気づけなかった私にも過失はある。だが、君にも問題があるぞ。やりたい事があるなら遠慮せずに言ってくれ。普段遠慮がないのに、どうして君は肝心な事を遠慮するんだ」
「……シルフィード」
「――仲間なんだ。言いたい事があるなら遠慮はするな。君が貫きたい事があるなら、私は必ず力になる。私だけではない。クリュウや

フィーリアもだ」
「そうですよ」
　シルフィードの背後から現れたのは、ハートヴァルキリー改を携えたフィーリア。その腰や太股などに巻かれているガンベルトには、もうほとんどの銃弾が残っていない。カートリッジやバラの弾丸が納められたバレットポシェットにも残弾は少ない。長期戦が不可能な事は、誰が見ても明らかだ。
　フィーリアはそっとサクラの前に跪くと、驚く彼女に向かって優しげに微笑んだ。
「サクラ様、言ってくれたじゃないですか――私の事を、親友だって」
「……あ、あれは言葉の綾よ。気にしないで」
　たぶん自覚なく言っていたのだろう。思い出して恥ずかしそうにそっぽを向く彼女のいじらしい姿に笑みを浮かべながら、フィーリアはゆっくりと言葉を紡ぐ。
「親友だったら、遠慮は無用です。言いたい事があったら、言ってください。私、全力で協力しますよ」
　眩しいくらいに純粋で、真っ直ぐな笑顔。心優しく、親友の為なら何だってする。そんな想いから生まれるその笑顔は優しく、そして美しい。
　親友の優しさに、サクラは思わず泣きそうになった。でもそれは決して表には出さない。プライドやキャラという理由もあるが、何よりも――恥ずかしいからだ。
「……じゃあ、クリュウと私の結婚式の仲人をして」
「絶対に嫌ですッ！」
　照れ隠しの冗談に対し、フィーリアは怒る。眠っているティガレックスを起こさないよう声を控える所は、最低限のハンターとしての心構えだけは残っていたらしい。
「……何でもするって言った。フィーリアのウソつき」
「ものには限度というものがあります」
　唇を尖らせて不満を漏らすサクラの言葉に、フィーリアは呆れながら返す。だがその表情は呆れているというよりは、いつもと変わらぬ

親友の姿を見て安堵しているように見える。
「サクラ。僕だけじゃない、みんな君の味方だよ」
クリュウの言葉に、サクラはゆっくりと仲間の姿を見回す。
頼もしく、やれやれとばかりに肩を竦ませながらもこちらを見詰めている友、シルフィード。
ちょっと頼りない所はあるが、自分が心から信頼できる最高の親友、フィーリア。
そして、自分が心から愛し、そして永遠の忠誠を誓っている最愛の人、クリュウ。
皆、自分の答えを静かに待ってくれている。
サクラは泣きそうになるのを何とか堪えながら、グッと想いを呑み込む。そして、自分のずっと奥で言葉を整理し、ゆっくりと、息と友に答えを紡ぐ。
「……みんな、私のわがままに付き合って」
ゆっくりと差し伸べられたサクラの手。三人は互いに顔を見合わせると、優しく微笑みながらその手を取った――答えなど、最初から決まっていたのだ。
「君のわがままに付き合わされるのは日常茶飯事だ。今更何の問題もない」
「水くさい事言わないでください。私達、一蓮托生じゃないですか」
「行こうサクラ。これが本当に最後の戦いだよ」
三人の頼もしく心癒される言葉に、自分の差し伸べた手を包む三人の手の温かさに、三人の信頼と慈愛に満ちた笑顔に、サクラは知る――自分は一人じゃない。
我慢できず、ほろりと隻眼から涙が零れ落ち、頬を垂れる。顎まで流れた涙は、滴となって落ち、雪に消える。
「……ありがとう、みんな」
そう言って、サクラは泣きながら微笑んだ――幸せに満ちた、最高の笑みを浮かべて。

第２０９話　轟竜最終決戦　過去の血塗られた因縁との決着の時

「……で、具体的にはどうする」
　涙を拭い取ったサクラは憮然と、いつもと変わらぬ無愛想っぷりを披露して平然を装う。だがその頬は恥ずかしさに赤く染まり、さっきまで泣いていた事もあって目も赤く、平静は残念ながら装い切れていない。
　そんなどこかおかしな彼女の姿に思わず笑ってしまったシルフィードに、サクラの容赦のない睨みが浴びせられる。慌てて笑みを引っ込めたシルフィードは逃げるように話題を変える。
「ひとまず、私が溜め斬りで奴を叩き起こす。すかさずサクラとクリュウが一斉に斬り込み、フィーリアも残弾でできる限りの援護を頼む。ここはこれまでのエリアと違って狭い。奴の動きを制限できる反面、こちらも動きが制限される。今まで以上に斬り込む隙はあるが、同時に相手にもこちらを攻撃する機会は増える」
「お互いに背水の陣という訳ですね」
「……その方がいい。鬱陶しいのは嫌いよ」
「僕とシルフィはガードできるからいいけど、二人はガードできないから無理はしないでね」
　簡単なミーティングを済ませ、準備は整った。何も言わず、シルフィードはスッと腕を伸ばした。その意味を理解し、三人も同じように腕を伸ばすと、差し伸べられた彼女の手の甲の上にフィーリア、サクラ、そしてクリュウの順に手を重ねていく。
「絶対勝つぞ」
　短くも勇ましい彼女の言葉に、三人は意気込みながら頷いた。
「良し。展開だ」
　シルフィードの指示に従い、四人は一斉に眠るティガレックスを包囲するように展開する。
　眠っていても恐怖を感じずにはいられない相手。警戒しつつ、ク

リュウはディアブロヘルムを被りながら静かに眠りについているティガレックスの全貌を見詰める。
改めて見ても、全身は強固な鱗や甲殻に覆われていて頑丈そう。筋肉も大きく硬く、これまでのモンスターとは明らかに違う骨格構造。まさに地上戦に特化した体つきだ。一目見ただけで、強敵だとわかる。
だがその自然の鎧も、これまでの戦闘でずいぶんと疲弊している。鱗は所々剥がれ、傷口からは今も血が滲んでいる。爆弾を使った事で焦げている箇所もあり、明らかに初めて遭遇した時と比べて弱っている事がわかる。その傷をつけ、ここまで奴を追い込んだのは、紛れもない自分達なのだ。
「あと少しだ」
まるで自分に言い聞かせるように、クリュウはつぶやく。
眠るティガレックスの正面に立ち、シルフィードは背負ったキリサキを引き抜き、構える。展開する他の面々もそれぞれ武器を構えており、シルフィードの確認の視線に頷きを返す。三人の返答にシルフィード自身も静かに頷き、キリサキを背負うようにして溜め斬りの構えを取る。その時、
「ギャアッ！　ギャアッ！」
突然巣に響く声。驚いて振り返ると、エリアの出入口からギアノスが三匹現れた。ギアノス達はすでにこちらに気づいており、一直線にシルフィードを目指す。
「こんな時に……ッ！」
溜めながら迫り来るギアノスを睨みつけるシルフィード。その表情はいつになく焦っている。すぐさまクリュウとサクラが撃退に走るが、ギアノスの方が速い。
「くそぉッ！」
仕方なくシルフィードは溜め攻撃をやめて迫り来るギアノスに向き直ると、正面を薙ぎ払うようにしてキリサキを振るう。振るわれた一撃はギアノスの胴を叩き、二匹を吹き飛ばした。もう一匹は駆けつけたクリュウとサクラが阻んでくれていた。

吹き飛ばされたギアノスは怒りの声を上げながら起き上がる。だが、ギアノスの二体程度など、シルフィードの敵ではない。一瞬焦ったが、すぐに態勢を立て直した一行。
だがギアノスなどランポス系のモンスターは、全モンスターの中でも飛び抜けた頭脳プレーを重んじる種族。そして、彼らは的確に獲物を狙う為には――囮だって使う。
三人が阻止した事で安堵するフィーリア。その背後に突如何かが着地する音が響いた。驚いて振り返ると、そこには新たにギアノスが三匹立っていた。
「しまった……ッ」
慌ててハートヴァルキリー改を構えるフィーリアだったが、引き金を引くよりも早くギアノスは散開してしまう。装填されているのは通常弾ＬＶ３。使い慣れている通常弾ＬＶ２よりも装填数は優れるが威力が低く、散弾のような優れた制圧面積はない。弾を装填し直そうにも、時間が足りない。
焦りながらフィーリアは近づくギアノスを狙って引き金を引く。撃ち出された銃弾は的確にギアノスの太股に刺さり、ギアノスは悲鳴を上げながら転倒した。だがその背後から残る二匹が現れる。
続けざまに発砲するが、焦っているせいかいつもの命中率を維持できない。数発外れ、その間にギアノスは目の前にまで迫る。とっさにハートヴァルキリー改でガードしようとするフィーリア。だがギアノスの振り上げた爪は彼女を斬り裂く事はなかった。何せ、悲鳴を上げて吹き飛んだのはギアノスの方だった。
仲間が飛ばされ、驚いて振り返るギアノスに向かってもう一匹を吹き飛ばす為に振り下ろした剣ではなく、左腕に備え付けた盾で殴りかかる。側頭部から盾で殴られたギアノスは悲鳴を上げてゆっくりと後退する。そして、フィーリアの前に彼女を守るように現れた少年は剣を構える。
「クリュウ様……」
「無事みたいだね。良かった」
ディアブロヘルムを被っている彼の顔を確認する事はできないが、

安堵したように微笑んでいる事はわかる。フィーリアは頬を赤らめながら「あ、ありがとうございます」と礼を言う。
「いいから、さっさとギアノスを片づけるよ」
「は、はいッ」
態勢を立て直した一行はすぐさまギアノスの排除に掛かる。だがギアノスはちょこまかと動き回り、クリュウ達もティガレックスを起こさないよう動きを制限される為、なかなか倒せない。そんな膠着が一分程続いた時、襲いかかって来るギアノスに向かってサクラは鬼神斬破刀を振り抜いた。雷撃を纏った一撃にギアノスは呆気なく吹き飛ばされる。これで一匹排除、そう思っていたサクラは自らの失態に気づいた。
――飛ばされたギアノスが落ちる場所には、ティガレックスが静かに眠っていた。
「……ッ!?」
気づいた時には後の祭り。ギアノスの亡骸はティガレックスの右腕に激突。そのままズルズルと地面に崩れ落ちる。だが同時に、閉じられていたティガレックスの凶悪な鋭い眼光が開き、煌めき出す。
ゆっくりと起き上がるティガレックスは、すぐに近くにいるクリュウ達に気づく。気づかれた事に慌てて散開しようとする彼らに向かって、ティガレックスは心の奥底から沸き起こる憤怒を、怒号と共に放出する。
「グギャアアアアオオオオオオオオオオッ！」
狭い洞窟の中に、ティガレックスの咆哮（バインドボイス）が轟く。距離が足りず、咆哮（バインドボイス）を受けたクリュウとフィーリアは耳を押さえ、至近にいたサクラは衝撃波で弾き飛ばされる。高級耳栓を備えたシルフィードだけが、急いでティガレックスに向かって斬り掛かる。
剣を振り上げるようにして構え、剣先を一気に叩きつける。だがティガレックスはそれを払うように彼女を腕で薙ぎ払った。剣を構えていた彼女はガードできず直撃を受け、弾き飛ばされる。そこへ援護するようにクリュウが突撃するが、まるでそれを阻むようにギアノ

スが立ち塞がった。
「退けぇッ！」
　クリュウはギアノスを斬り伏せようとするが避けられ、そればかりか氷液を吐いて攻撃して来る。氷液は何とか盾で防ぐも、ティガレックスに攻め入れない。苦戦するクリュウを横目にティガレックスにサクラが突貫を仕掛けたのはそんな時だった。
　稲光を迸らせる鬼神斬破刀構えながら突貫するサクラ。ティガレックスは周りのギアノス諸共吹き飛ばそうとその場で一歩身を捩らせる。だがその動き、すでに彼女は見抜いている。
　回転攻撃が来る。そう感づいたサクラはすかさず針路を変える。回転後の方向を計算に入れ、的確な位置に陣取る為だ。目の前で褐色の暴風が渦巻くようにティガレックスが回転する。目の前で沸き起こる旋風に黒髪を揺らしながら、睨みつけるサクラ。ティガレックスの動きが止まると、すかさず突貫する。
　四肢を踏みしめながら振り返るティガレックスの顔面に向かって剣先を翻す。迸る電撃と鮮血。ティガレックスは腕を振るって彼女を追い払おうとするが、それよりも早くサクラは身を翻して距離を取る。そこへフィーリアの通常弾ＬＶ３による火力支援が入る。命中した弾丸は跳躍して命中箇所の角度によって様々な方向へと飛ぶ。中にはまた新たな箇所に命中する弾も。これが跳弾だ。
　とにかく残っている弾をかき集めて戦うフィーリア。剣士組の態勢が立て直す時間を稼ぐようにあえて頭部を狙っている為か、ティガレックスは彼女に向かって襲い掛かる。跳び上がり、彼女へと迫るティガレックス。フィーリアはすぐさま反応して後方へ全力で逃れる。結果、ティガレックスは何もない場所へと着地する。
　続けて追撃を掛けようと動くティガレックスに向かって背後からシルフィードが斬り掛かる。右後ろ脚を狙って振り下ろした一撃は容赦なくティガレックスの屈強な脚の筋肉を傷つける。これまでのダメージの蓄積か、それとも長期戦に対する疲労かはわからない。だがその一撃が炸裂した事でバランスを崩したティガレックスはそのまま横倒しに倒れた。

転倒したティガレックスに対し、シルフィードは少し場所を変えてティガレックスの背中に陣取ると、溜め斬りの構えを取る。その間にクリュウとサクラも合流して斬り掛かり、フィーリアも的確な射撃でティガレックスを攻撃する。

サクラは気刃斬りで襲い掛かり、クリュウもデスパライズを振るう。あと一回、麻痺状態を起こせれば。そんな淡い期待を抱きながら、彼は剣を振るい続ける。そこへシルフィードの溜め斬りが炸裂した。

一方でこれまで的確な射撃で後方から攻撃を加えていたフィーリアの表情が苦しげに歪む。今し方撃ったのが、最後の通常弾ＬＶ３だった。すでに電撃弾はもちろん、通常弾ＬＶ２や貫通弾ＬＶ１などは使い切ってしまっている。残る弾丸は徹甲榴弾ＬＶ１が五発。とてもじゃないが、火力が足りない。

「ここまでなんて……ッ」

仲間はまだ必死に戦っているのに、自分はもうこれ以上の援護ができない。悔しさで握り締めた拳が小刻みに震える。その間にティガレックスは起き上がると、シルフィードを狙って突進を仕掛ける。シルフィードは冷静にこれを回避する。

サクラがティガレックスを追って動くのを見て追従しようとするクリュウだったが、フィーリアの異変に気づいて足を止めると急いで彼女に駆け寄る。

「どうしたのフィーリア？」

駆け寄って来たクリュウに声を掛けられたフィーリアは申し訳なさそうな表情を浮かべたまま手に持った五発の徹甲榴弾ＬＶ１を彼に見せる。彼女の表情とその差し出された弾丸から状況を悟ったクリュウの表情も厳しいものに変わる。

これまで剣士組が危機的状況に陥った際、フィーリアからの援護射撃でティガレックスはそちらに気を引かれる事で剣士組は態勢を立て直す隙を作る事ができた。ここからは、それがもう使えないのだ。

「罠を使おうにも、もう使えるものが残ってません」

泣きそうになるフィーリアに対し、クリュウは掛ける言葉が見当た

らなかった。ボウガン使いは弾がなければ攻撃手段を失う。しかも今は援護に使える道具（アイテム）も全て消費した後。これでは、攻撃以外での援護も期待できない。
「私、どうすればよろしいでしょうか……」
弾を失い、自信まで失ってしまったかのようにフィーリアは弱気になっていた。
どうすればいいか。必死にクリュウは考える。だがいつまでも考えている暇はない。今はたった二人に前線を任せている状況なのだから。
必死に弾丸を見ながら考えるクリュウ。その時、何かを閃いた。
「フィーリア。これって徹甲榴弾だよね？」
「は、はい」
「そっか……じゃあフィーリア、これで奴の頭を狙って撃ってくれる？　できるよね？」
「で、できなくはありませんが、この残弾ではめまいは起こせません」
「いいから。とにかく頭を狙って撃って」
彼の考えがわからず困惑しながらも、彼からの指示に従う事にしたフィーリア。「任せたよッ」と声を掛けながら前線へと復帰する彼の背中を見送りながら、フィーリアはハートヴァルキリー改に徹甲榴弾ＬＶ１を装填（リロード）する。
彼が何を考えていかはわからない。でも、今の自分にできるのは彼を信じ、彼の期待に応える事だけ。フゥと短く息を吐いて精神を集中させると、銃を構え、スコープを覗き込む。精密射撃となれば、それだけで神経をかなり使う。しかも長期戦を経ている彼女はもう体力も精神力も限界が近い。その中で残っている精神力をかき集めて狙撃するのは、彼女からしてもかなり難易度が高い。でも、
「私ならできるッ」
自らを鼓舞するように言いながらフィーリアは銃口を動かす。暴れるティガレックスの頭を正確に狙いながら、奴の動きが一瞬止まるのを待つ。常に動き回るティガレックスでも行動の後に一瞬だが動きが止まる。そこを正確に射抜かなければ、狙った箇所に当てるのは

難しい。
仲間の必死の奮闘を見守りながら、フィーリアは静かにその時を待つ。そして、その時が訪れる。
ちょうどサクラを狙って突進したティガレックスは彼女に避けられ、誰もいない場所で四肢を踏ん張ってその動きを止める。その一瞬止まった隙を狙って、フィーリアは引き金を引いた。
洞窟内に響く発砲音と共に撃ち出された銃弾は一直線に飛翔し、見事にティガレックスの側頭部に命中する。遅れて中の火薬が起爆し、小さな爆発が生じる。だがティガレックスは何事も無かったかのように背後へと大きく飛び退く。追いかけていたシルフィードは背後を取られて焦るが、そこへフィーリアの第二射が命中し、ティガレックスを仰け反らした。
空薬莢を排出（イジェクト）し、新たな弾丸を装填（リロード）し、すぐさま狙いを定めようと銃を構えるが、それを阻むようにティガレックスは怒号と共に彼女に向かって突撃して来る。仕方なくフィーリアはティガレックスから逃れるようにし走ってこれを回避。背後を通過したティガレックスの方にただちに向き直るとすぐさま銃を構えて狙いを定める。だがフィーリアからの位置だとティガレックスは背中を向けており、頭を狙う事はできない。すぐさまフィーリアは陣地転換の為に移動するが、同時にティガレックスも背後から襲い掛かったサクラに振り返ると咆哮（バインドボイス）を轟かせる。近すぎたサクラは衝撃波に吹き飛ばされるが受け身をとって大事にはならなかった。
咆哮（バインドボイス）で一瞬動きを止めたティガレックスの頭を狙って、フィーリアは第三射を放つ。撃ち出された銃弾は一直線にティガレックスに向かうが、運悪くティガレックスは側面から近づいていたクリュウの方へ振り返ってしまい、銃弾はティガレックスの頭のすぐ上を通過。氷壁に命中し、虚しく爆発が起きる。
「もう……ッ」
一発を外した事に焦るフィーリア。だが焦りは腕を鈍らせる。無理にでも冷静を取り戻さないといけなかった。今度は外さない。そ

んな決意を胸に再び彼女は銃を構える。スコープを覗きながら狙いを定めるが、クリュウを襲うティガレックスはその場で回転し、回転後も背後を向ける為に頭を狙えない。
だがティガレックスの背後からシルフィードが斬り掛かると、それに反応してティガレックスは振り返る。そこを狙ってフィーリアは第四射を放った。銃身の中で施条（ライフリング）で回転力を得た銃弾は一直線にティガレックスの側頭部を目指して突っ切る。正確に狙った一撃は見事にティガレックスの側頭部に命中し、爆発が起きる。
「次がラスト……ッ」
握り締めた最後の徹甲榴弾ＬＶ１に全てを込めて、しっかりと装填（リロード）する。最後の一発とだけあって、緊張しながらハートヴァルキリー改を構える。
スコープを覗き込むと、その先では三人の剣士がティガレックスを包囲するように猛攻撃を仕掛け、動きを押さえてくれている。そんな皆の努力に報いる為にも、この一撃は外せない。
額に、極寒の中だというのに汗が浮かぶ。ゆっくりと焦りを抑えるように深呼吸すると、吐かれた真っ白な息はゆっくりと冷たい空気の中に溶けていく。
スコープの向こうで、弱っている事を感じさせない動きでクリュウ達を襲うティガレックス。常に動いていてなかなか狙いづらいが、一瞬動きが止まる瞬間を狙って銃を構え続ける。そして、クリュウ達を弾き飛ばすように回転したティガレックスが一瞬動きを止めた。そこを狙って、フィーリアは引き金を引いた。
轟く発砲音と共に撃ち出された銃弾は極寒の空気を突き破りながら飛翔し、唸り声を上げるティガレックスの額に命中。起爆の衝撃でティガレックスは悲鳴を上げて仰け反った。
「クリュウ様ッ！」
仰け反るティガレックスを前に背後からフィーリアの声が響く。クリュウは彼女に背を向けたまま親指を立てて彼女の奮闘を称えると、デスパライズを構えて単身突撃する。頭を振りながら佇むティガ

レックスに向かってクリュウは突っ込むと、ゆっくりと降りて来たティガレックスの頭に向かって斬り掛かる。一撃を入れ迸る鮮血を物ともせずクリュウは次なる一撃を構える。だがそれは右腕に持った剣ではなかった。拳を握り締め、グッと腕を引いたのは左腕。左手には剣はなく、あるのは腕にしっかりと固定されたこれまでティガレックスの攻撃の数々を防ぎ抜いて来た堅牢な盾。

「喰らえぇッ！」

叫びながら、クリュウは全力を込めてティガレックスの頭を盾で殴りつけた。頭部を狙った打撃はハンマーなどに比べれば当然弱い。だが、確実に頭部を狙って炸裂した一撃は、これまでフィーリアが積み重ねていたダメージと加わり、その真価を発揮した。

「ギャアッ!?」

悲鳴を上げてティガレックスは転倒した。フィーリアの徹甲榴弾ＬＶ１五発による衝撃とクリュウの盾突きの一撃で脳震盪を起こしたティガレックスはめまいを起こしたのだ。

「やったぁッ！」

思い通りの展開に喜ぶクリュウ。だが他の三人は彼の行動に驚愕していた。何せ、片手剣の盾で相手を殴りつけるなど聞いた事もないのだ。訓練学校で習う事もなければ、そんな攻撃をしようとする者もいないだろう。片手剣の役目は道具（アイテム）を駆使した機動的戦闘であり、打撃など考慮していない。めまいなどはハンマーや狩猟笛の打撃武器、もしくはフィーリアのようなガンナーの徹甲榴弾など、使える武器は限定される。それをクリュウは、盾での打撃でやってのけたのだ。もちろん、事前にダメージを積み重ねていたフィーリアの協力あってこそだが。

とにかく、クリュウが作り出した見事な攻撃のチャンス。それを無駄にしない為にもシルフィードとサクラが襲い掛かる。攻撃手段を失ったフィーリアも、まだ残っている回復弾ＬＶ２を装填（リロード）して仲間の援護に備える。その回復弾もこれまでの戦闘で消耗し、残り僅かだ。ただその時が来るまでは、彼女にできるのは早く狩猟が終わる事を祈るだけだ。

倒れたティガレックスに襲いかかる剣士組。クリュウは自分で生み出した隙を使って、さらにもう一撃奇跡を起こそうとしていた。
「あと少し……ッ」
これまで蓄積していた麻痺毒が効果を発揮するまであと少し。タイミング的にも、きっとこれが最後の麻痺状態にできるチャンスだ。この倒れている間に、どれだけ蓄積でき、そして効果を発揮できるか。とにかく、クリュウは縦横無尽に剣を振り続ける。
シルフィードはティガレックスの右腕に向かって、サクラは頭部に向かって攻撃している。常に動き回る相手を一方的に攻撃できる隙はほとんどない。このチャンスを活かす為にも、剣を振るい続ける――彼の起こした奇跡に報いる為に。
だが、奇跡はこれだけで終わらなかった。
めまい状態が解け、ゆっくりとティガレックスは起き上がる。サクラとシルフィードは危険を感じ取って待避するが、クリュウは構わず剣を振り続けていた。ゆっくりと振り返るティガレックス。目が合った瞬間、一瞬動きが止まったがすぐに気合いで恐怖をねじ伏せる。
「うあああぁぁぁッ！」
叫びながら、クリュウはデスパライズをティガレックスのこめかみ目掛けて叩きつけた。鮮血と共に麻痺毒が迸り、ティガレックスを染める。そして――
「ガウァッ!?」
これまで蓄積された麻痺毒が効果を発揮し、起き上がったばかりのティガレックスの動きを封じた。これが本当のラストチャンス。ここで一気に畳みかけなければ、道具（アイテム）のほとんどを失っている自分達は勝つ事はできない。この数秒が、勝負だった。
剣士組はクリュウがさらに生みだし、延長された拘束時間を利用してさらなる攻撃を積み重ねる。シルフィードの強烈無比な一撃と、サクラの神速の剣撃、そしてクリュウの縦横無尽に振るわれる剣。三本の刃がティガレックスの体を切り裂き、血を迸らせる。
もはや褐色の体表の上にベットリと自らの血で真っ赤に染まった

ティガレックスは麻痺状態でも唸り声を上げて辺りを威嚇する。自らの命が尽きかけている事を知っているからこそ、許せない――こんな矮小な生物に負けるなど、許せるはずもなかった。
「ゴアアアアアアアアアオオオオオオオオオッ!!!!」
麻痺状態から脱したティガレックスは一際大きな怒号を轟かす。その衝撃波で三人は吹き飛ばされ、それぞれ雪壁に背中から叩きつけられ、激しく咳き込む。すぐさまフィーリアが回復弾ＬＶ２で援護を行う。
一瞬で三人を吹き飛ばしたティガレックスは、ゆっくりと振り返る。全身を真っ赤に染め、怒り狂う瞳はもはや理性を完全に失い、血走っている。口からは呼吸するたびに真っ白な息と真っ赤な血が溢れる。涎と血が混じった真っ赤な粘液を垂らしながら、轟竜は怒りに任せて咆哮（バインドボイス）する。
回復弾ＬＶ２を撃ちながら、フィーリアは剣士組の態勢を立て直す時間を作ろうとする。地面に転がっている石ころを手に掴むと、それをティガレックスに向かって投げつけた。銃弾を失っているフィーリアにできる抵抗は、これくらいしかない。
投げられた石ころはゴツッという鈍い音と共にティガレックスの頭部に当たる。振り返ったティガレックスはフィーリアを血走った眼光で睨みつけると、怒号と共に突撃する。
引きつける事には成功した。だが怒り状態となったティガレックスは尋常ならざる速度で突撃して来る。ただでさえ狭い巣の中では逃げる方向も限られる。慌てて回避するが間に合わず、振るわれた腕に掠ったフィーリアの体は呆気なく吹き飛ばされ背中から地面に叩きつけられた。
「かは……ッ」
肺の中の空気と一緒にわずかに血が吐き出される。痛みのあまり動けずにいるフィーリアに慌ててクリュウが駆け寄ろうとするが、そこへティガレックスの投げた雪玉が飛来。フィーリアしか見ていなかったクリュウは回避が遅れ、横から雪玉の直撃を受けて倒れてしまう。

「クリュウッ！　フィーリアッ！」
シルフィードはすぐさまティガレックスを止めようと斬り掛かる。だが、
「ガアアアアアッ！」
ティガレックスは迫るシルフィードに向かって大きく跳躍し、襲い掛かる。突然上から覆い被さるように襲い来るティガレックスに対し、シルフィードは慌ててガードの構えを取るが、巨体の体当たりを受けて大きく後退を余儀なくされる。耐え抜いた手足が痺れる程の一撃に顔を歪めるシルフィード。そこへティガレックスは容赦なく割れた鋭い爪を備えた腕で殴りつけた。手足が痺れていたシルフィードはこの一撃をガードできずに薙ぎ倒され、雪の中に倒れてしまう。
三人とも何とか無事のようだが、かなりのダメージを負っていた。今さらなる一撃を受ければ、さすがに危険だ。慌てて起き上がろうにもダメージが大きく、なかなか体が言うことを聞かない。その間に振り返ったティガレックスはクリュウを狙って動く。
遠くにいるティガレックスだが、怒り状態の奴ならこんな距離一瞬で詰める事ができるだろう。不気味なくらいに血走った眼光で睨まれたクリュウは恐怖で身を震わせた。
「ヤバイ……ッ」
これはさすがに危険だと思ったが、体が思うように動かないのではどうする事もできない。せめて、盾で直撃を避けようとするが、どれだけ役立つかわからなかった。
ティガレックスが雪上を駆ける為に一歩動いた瞬間、そのこめかみに石ころが命中した。そんな一撃ティガレックスからすれば全く効果がない。だが、意識をそちらに向けるだけには十分だった。
振り返ったティガレックスと相対するのは、一人の少女。全身を赤い異国の鎧を纏った、長く艶やかな黒髪を優雅に流し、黒い眼帯で左目を隠した東方娘――サクラ。
「……」
サクラは無言で、左目に掛けられた眼帯を外す。現れたのは幼い

頃、轟竜ティガレックスに襲われた際にできた傷。人形のように美しい顔に負った傷跡。左目の視力を失い、そして両親と家族を失った。
彼女の人生において、最悪の出来事。その原因が、目の前に佇むティガレックスだ。
奴に全てを奪われてから彼女は、自分のような犠牲者を作らない為にハンターを目指し、ひたすらに実力を磨いていった。そのうち、護衛依頼に関しては絶大な信頼を得るようになり、いつの間にか護衛の女神とも称され、隻眼の人形姫という二つ名を得た。
そして、愛する彼と再会を果たし、今は心から信頼できる仲間とチームを結成し、因縁の宿敵である轟竜ティガレックスとの戦に身を投じている。
ゆっくりと背の鞘から引き抜いた鬼神斬破刀は、最後の力を振り絞るように激しい雷撃を迸らせ、薄暗い巣の中を神々しく照らす。
先程吹き飛ばされた際に頭を撃ったのなか、頬を血の筋が流れる。口の中を切ったせいで広がる鉄の味をプッと吐き出し、神雷を纏う鬼神斬破刀を構える。その瞬間、一際大きな雷鳴と共に辺りの雪を溢れ出る雷が吹き飛ばし、一瞬で蒸発させる。全身に雷を纏う戦姫は、ティガレックスを静かに睨みつける。
「……掛かってこい。これで終わりにしてやる」
「ゴアアアアアッ!」
怒号と共にティガレックスは雪上を駆ける。血溜まりの軌跡を残しながら、雪塵を纏い、尋常ならざる速度で突撃する。その速度はこれまでで最速と言ってもいいだろう。やっと起き上がった三人は慌てて追いかけるが、とてもじゃないが追いつけない。
「サクラッ!」
クリュウはサクラの名前を必死になって叫ぶが、彼女は避ける事もせず、正面から突っ込んで来るティガレックスに鬼神斬破刀を構えたまま動かない。隻眼は愛刀のように鋭く細まり、青白い稲光に晒されたその表情は真剣で勇ましく、凛としている。精神を集中させている、彼女の本気の顔だ。
「……貴様は強い。敵ながら良く戦ったと誉めてやる」

迫り来る轟竜。血を吐きながら唸り声を轟かせ、雪上を狂気の轟速で突っ込んでくるティガレックスに対し、サクラは勇ましく相対する。瞳の中の黒い宝石に、キラリとティガレックスの姿が写る。

「……だが今回は、私達の勝ちだ」

――刹那、サクラは目にも留まらぬ疾さで鬼神斬破刀を振り抜いた。一瞬で迸る雷撃はまさに神鳴。迸る青白い稲光はまるで閃光玉が炸裂したかのように辺りを真っ白に染める。すさまじい光量にクリュウは思わず目を閉じた。そして、光が消え、ゆっくりと瞳を開くと……

「……ガアアァァ」

両腕を突き、胴を持ち上げて天高く最後の咆哮（バインドボイス）を轟かせるティガレックス。だがその声はもはや山を震わせる力もなく、細く、弱々しい。そして、肺の中の全ての空気を吐き出すように絞り出された声が消えると、ゆっくりとティガレックスの巨体が倒れる。

ズシン……という重々しい音と共に雪上に倒れたティガレックス。血走っていた瞳からは光と生気が失われ、そしてもう二度とその凶悪な四肢が動く事はなかった……

拠点（ベースキャンプ）に戻る頃にはすっかり闇が濃くなってしまっていた。

昨日の夜のうちに山に入った為、今晩はこのまま拠点（ベースキャンプ）で一夜を過ごす事にした四人。夜の山を動き回るのが危険というのもあるが、激戦を戦い抜いた四人の疲労は相当なものだったからとも言える。

拠点（ベースキャンプ）に着いた途端、クリュウは疲れ切ったようにその場に腰を落とした。シルフィードとサクラも同様に座り込み、足を投げ出している。ただそんな中でもフィーリアだけは健気に竜車の中からタオルを取り出して三人に手渡すと、手際良くコーヒーやお茶を作る為のお湯を沸かす為にたき火の用意を行うなど、ちょこちょこと動き回る。クリュウが手伝おうとするが、フィーリアは「休んでてください」と笑顔で言ってそんな彼の申し出を断る。仕方なく

クリュウは腰を落としたまま汗をタオルで拭う。
　そのうちフィーリアがシルフィードにブラックコーヒー、サクラには緑茶、クリュウにはカフェオレ、自らは紅茶を用意して戻って来る。それぞれが温かい飲み物を口に含み、喉の奥に流し込むとようやく一息ついた。
「勝てたね……」
　一息ついたクリュウは真っ白な息と共にそんな言葉を漏らした。彼の思わず零れた言葉にサクラが短く「……そうね」と答えながら静かに緑茶を飲む。
「いや、なかなか難儀な戦いたっだな」
　笑いながら言うシルフィードだが、その言葉はどこか重い。正直、これまで様々なモンスターをこの四人で狩猟して来たが、これほどの激戦は無かっただろう。ディアブロスを相手にしている時も大変だったが、今回は全くの未知の相手という事もあって事前情報が無く、さらにティガレックス自体の強さも尋常ではなかったので、その大変さは歴代トップと言える。
「ほんと、疲れました。ヘトヘトですぅ……」
　そう言いながら苦笑を浮かべ、紅茶を飲むフィーリア。チームメンバーでは最も体力がない上にガンナーは剣士と違って防具に弾を装填したガンベルトなどを装着する関係でどうしても防具の装甲が薄くなる。同じ素材を使った防具でも、剣士で耐えられる一撃がガンナーのそれは耐えられない事も多い。しかも今回は相手が尋常ならざるパワーとスピードを持った相手という事もあり、どうしても回避に重点を置いた動きになる。結果、動く量も増えるので体力が低い彼女はかなり厳しかっただろう。実際、後半戦では前半戦に比べて明らかに動きが鈍っていた。それでも、彼女の的確な後方火力支援あってこそ、自分達はティガレックスに勝利できたのだ。
「私もさすがに疲れたぞ。これは帰ったらしばらく寝て過ごしそうだ」
　そう言いながらシルフィードは苦笑を浮かべる。前衛役に加えて仲間の隙を作る為にティガレックスと肉薄する事も多かった彼女の

疲労も相当なものだろう。大剣との相性もあって、いつも以上に被弾していたのも大きい。
「だね。僕もしばらく動きたくないかなぁ」
　同じく苦笑を浮かべるクリュウも今回相当活躍した一人だ。機動力に長けるティガレックス相手の関係上、機動力に優れた片手剣は今回十分主力として力を発揮し、デスパライズの麻痺毒も見事にティガレックスを幾度となく拘束する事に成功している。何より、今回の彼は盾を駆使して幾度となく仲間をティガレックスの雪玉から守ったりとその功績は大きい。昔と違って、十分チームの立派なメンバーとして成長している証拠だ。
「……ならクリュウ。私と一緒にずっと寝ていましょう」
　そう言ってほんのりと頬を赤らめながら彼にしなだれかかるのは、今回のティガレックス戦において最も活躍。更に自らの因縁と決着をつけたサクラ。クリュウ同様、チーム随一の機動力を誇る彼女も今回の狩猟ではその自慢の身体能力を駆使して奮闘した。彼女の常軌を逸した機動力はこれまでも何度も脱帽して来たが、今回は特にそれが発揮されたと言えるだろう。当然、その活躍に比例するように疲れているのも事実だ。だが、
「そんなの絶対に認めませんッ！」
　ヘトヘトだと言っておきながら、すかさずサクラの発言に噛みつくフィーリア。すぐさまサクラの反対側に陣取ってクリュウの右腕にしがみついて威嚇する。だが当然サクラはそんなのどこ吹く風。気にした様子もなく、まるで彼女を無視するようにクリュウに甘えるサクラ。
　二人の美少女に挟まれながら照れ笑いを浮かべるクリュウ。ふと正面に座るシルフィードに視線を向けると、彼女は不機嫌そうに鼻を鳴らしてそっぽを向いてしまう。
　激戦を繰り広げた狩人達も、拠点（ベースキャンプ）に戻ってしまえばいつもの調子に戻る。今まで生きた心地がしないような戦いの連続だったので、ようやく一息つけたという具合だろう。
「だがしばらくは落ち着けないぞ。何せギルドも情報をあまり把握し

ていないモンスターを討伐したのだからな。ギルドに呼び出される事も考慮しておかないといけない」
　ハンターズギルドは常にモンスターの情報を求めている。それがまだ未知と断定されるようなモンスターならば尚更だ。シルフィードの言葉に、前途多難で思わず三人はため息を零した。そんな彼らの反応を見てシルフィードは苦笑を浮かべる。
「まぁ、捕獲していれば受け渡しの作業も加わって余計に面倒だったんだ。サクラのわがままに付き合ったのが、結果オーライだったな」
「……わがままで悪かったわね」
　シルフィードの意地悪な言い方に、サクラは唇を尖らせて拗ねてみせる。そんな彼女の可愛らしい姿に笑みを浮かべながら、シルフィードは静かにコーヒーを飲む。
「サクラの中で、決着はついたか？」
　コーヒーを飲みながら尋ねる彼女の問いかけに、サクラはゆっくりとうなずいた。
「……ええ。もう、大丈夫よ」
「そうか……」
　彼女の返答にシルフィードは安心したように微笑む。そんな彼女の笑顔を前にサクラは少し恥ずかしいのか頬を赤らめながらそっぽを向く。二人のそんな姿を見て、クリュウとフィーリアもまた嬉しそうに微笑んだ。
「それでは明日に備えて今日はゆっくり休みましょう」
「そうだな。さすがの私も疲れたぞ」
　フィーリアの提案にうなずき、うーんと腕をシルフィードが伸ばしていると、こっそりとサクラがクリュウに近寄る。
「……クリュウ、一緒に寝よう？」
「いや、ちゃんと人数分の寝具は用意してあるでしょ？」
「……クリュウと寝たい」
「無茶言わないでよ」
　困るクリュウを見て喜んでいるのか、サクラは口元に笑みを浮かべてどこか楽しそう。すると、そんな二人の間に当然のようにフィーリ

アが割り込み、サクラと言い合いになる。あたふたとするクリュウを、今度は背後からシルフィードが抱きつき、
「なぁクリュウ。寝る前に星空でも見に行かないか？　今日は流れ星が多くてきれいだぞ」
「う、うん。それはいいけど、あの、抱きつかないでくれるかな」
　頬を赤らめながら困る彼が実にいじらしいのだろう。シルフィードは楽しそうに彼をからかう。するとそこへ喧嘩していた二人が抗議に現れ、結局四人で星空を見る事に。全くもって変わらない、四人の日常。
　星空を観る為、四人は再びエリア1へと移動し、そこに静かに腰掛けて星空を見上げる。シルフィードの言った通り、今日は流れ星が多く空は神秘的に煌めいていた。どこに隠れていたのか、雷光虫までも空で踊り、辺りは神秘的な光に包まれた。
　キラキラと輝く空を、同じくキラキラとした瞳で見上げるフィーリア。そんな彼女の隣で腰にこっそり流れ星に何かのお願いをしているシルフィード。
　そして、そんな二人の少し後ろで並んで星空を見上げるクリュウとサクラ。きれいな空を大喜びで見上げるクリュウの横顔は希望に満ちあふれた少年そのもの。サクラからすれば、星の輝きなんかよりも彼のそんな横顔の方がずっと輝いて見えていた。
　そんな彼の輝きを、ずっと隣で見守っていたい。それが、彼女の願いだった。
　そっと彼の手を握り締めると、彼も優しく自分の手を握り返してくれる。すぐ傍に、愛する彼がいる。何気ない幸せなのに、彼女にとっては最高の幸せな時間だった。
「……クリュウ、愛してるわ。心の底から、あなたの事を」
　隣に立つ彼には聞こえないような、そんな小さな声で、彼女は流れ星に向かって自らの想いを伝える。いつか彼が自分に振り向いてくれる、そう信じて。
　星空に、また一つ星が流れていった……

第２１０話　安居楽業　少女が勝ち取った幸せに満ちた心の拠所

数日後、無事に村へと戻った一行は村長にティガレックスの討伐を報告。村長は「これで逃げちゃったポポが戻ってくればいいんだけど」と少しほっとした様子。正確にはティガレックスを倒したとはいえ逃げてしまったポポが戻って来た訳ではないのだが、ひとまず安心といった所か。

村長への報告を済ませ、疲れた体を早く休ませようと家に戻った四人。すると、

「クー君、ご無事で何よりなのです」

玄関を開けると、待っていたキティが早速クリュウを抱き締めて頭を撫で撫でするという暴挙を決行。背後から抱き締められたクリュウは顔を赤らめて「や、やめてよ恥ずかしい……ッ」と抵抗してみせるが、あまりその抵抗は強くはなく、実は満更でもない様子。一方のキティはクリュウの頭を優しく撫でながら「いい子いい子、なのですよぉ」と微笑む。

何て仲睦まじい姉弟なのだろうか。その光景は実に微笑ましくもあり――同時に並々なる怒りを抱く者達もいる訳であって……

「い、いくらクリュウ様の姉代わりの方でも、このような横暴は許されませんッ」

まず最初に反旗を翻したのはフィーリア。クリュウの右腕にしがみつくと、健気にキティを睨みつける。だがキティはまるで気にした様子もなくクリュウにもっとくっ付いてみせる。顔を真っ赤にして慌てる彼を見て苛立ちながらもっと言ってやろうと口を開いた時――見えてしまった。クリュウの背中に押しつけられる宿敵シルフィードにも勝る大きな胸を。

「……世の中、とてもとても不公平なのですよ」

フィーリア・レヴェリ、撃沈。

彼我の戦力差が圧倒的であると悟ると、もはや抵抗する気力すらも

削がれてしまったようだ。部屋の隅に移動すると、その場でこちらに背を向けて座り込んでしまう。近づく事すらできないようなどんよりとした空気が、彼女の周りに満ちていた。
「……立ちなさい、フィーリア」
そんな彼女の肩にそっと添えられた優しい手。振り返ると、そこには凛々しく立つサクラの姿があった。落ち込む彼女に向かってサクラは「……あんな脂肪の塊、恐るるに足らないわ」と堂々と言い放つ。
「で、ですが、殿方は大きな胸を好むものだと……」
「……貴様の覚悟は、そんなものなの？」
まるでバカにするように嘲笑しながら言い放った彼女の言葉に、フィーリアは思わずカチンとなる。ゆっくりと立ち上がり「どういう意味でしょうか？」と固い声で尋ねる。妙な雰囲気が、二人を包む。
「……貴様は世の野蛮な雄に好かれたい訳？　それとも、クリュウにただ一人に好かれたい訳？」
「そ、そんなのクリュウ様にだけ好かれたいですッ」
頬赤らめ、照れながらも一生懸命叫ぶフィーリア。そんな彼女の言葉にサクラは口元に不敵な笑みを浮かべると「……なら問題ない」とハッキリと言い切った。
「どうして、ですか？」
「……クリュウは小さい方が好み」
「そのネタまだ続いてたのッ!?」
キティに抱き締められながら叫ぶクリュウのツッコミなど耳を貸さない二人。サクラの言葉にハッとその事実を思い出したフィーリア。そんな彼女の反応を見てサクラは小さく微笑むと、
「……あんな後に垂れる脂肪の塊なんて、こちらから願い下げだわ」
とてもとても素敵な笑みと共に堂々と言い放つ――その発言に約二名程が相当なダメージを負った。
無言で固い握手を交わすフィーリアとサクラ。その表情は実に晴れ晴れとしていて、清々しい。青春という言葉は、彼女達のような表情にこそ相応しいに違いない。
一方、先程のフィーリア同様に部屋の隅で落ち込むシルフィードに

掛けるべき言葉が見つからず狼狽するクリュウ。そんな彼の背中に抱きつきながらキティは「クー君は、お胸の小さい女の子の方が好きなのですか？」といつになく暗いトーンで尋ねる。エンペラークラスの凄腕ハンターとはいえ、まだまだうら若き二〇代の乙女なのだ。
「い、いや、僕は別に胸の大きさとかはあまり気にしないんだけど」
そんな姉を気遣うように、尚且つフィーリアとサクラも傷つけないような言葉を慎重に選んだ末に放った言葉に、キティはほっとしたように「そうなのですか」と笑みを浮かべる――すかさずそこへエレナの跳び蹴りが決まった。
床に叩きつけられたクリュウは当然「何するのさッ!?」と怒る。すると、そこにはピキピキとこめかみを震わせながらエレナが仁王立ちしていた。貧乳とも巨乳とも言えない見事な中間点、普乳とも言うべき胸を張りながら、怒りの炎を激しく燃えたぎらせる。
「要するにそれって、女なら何でもオッケーって事でしょッ!?」
「どうしてそういう意味になるかなッ!?」
見事な汚名を着せられ、慌てて反論するクリュウ。だが、時すでに遅しという訳であって……
「クリュウ様……」
「……クリュウ」
「クリュウ……」
「クー君……」
――見渡せば、見事に周りの女子達の目線は冷たいものに変わっていた。
「あ、いや、違うんだよ？　ねぇ……」
涙目になりながら必死に誤解を解こうとするが、常日頃の彼の行動はそう思われても仕方がない程に女の子に甘いのが仇になった。妙に信憑性がある為、誤解が誤解で終わらない。
数分後、フィーリア、シルフィードと悩める若者を迎え入れた心優しい部屋の隅は新たに少年を一人優しく包み込んだのは、言うまでもない……
「まぁ、冗談はその辺にしておくのです」

「いや、冗談では済んでいないのだが……」
　まるで何事も無かったかのように場の空気を改めるキティ。他の面々も同意見らしく話題転換に舵を切っている。そういう点ではどうにも薄情になれないシルフィードは部屋の隅で落ち込むクリュウの方を見るが、先程から彼は微動だせずにどんよりとした空気を纏いながら座り込んでいる。どうやらしばらくは再起不能のようだ。
　シルフィード一人残して見事に話題転換を成し遂げた面々。その話題は早速轟竜ティガレックスのそれに変わっていた。
「しかし、未知のモンスターを相手に見事な勝利を成し遂げるとは。すごいのです。感動したのです。感銘を受けたのです」
　エンペラークラスのハンターから絶賛を受け、フィーリアは照れ笑いを浮かべる。一方のサクラまるで当然の事をしたまでと表情を一切崩さない。彼女の場合、クリュウ以外の誉め言葉など微塵も嬉しくはないのだろう。
「死体はあとでアルフレアのギルド支部に回収を申し込んでおくのです。一ヶ月以内にはギルド本部から専門家などが訪れて解剖し、生態などの詳しい調査結果がギルド本部に届くのです。あなた達は、ギルドに見事貢献したのです」
「えへへ、ギルドに貢献ですかぁ。嬉しいですねサクラ様」
「……興味ない」
「んもう、もしかしたらご褒美を貰えるかもしれないですよ？」
「……クリュウ以外に、私が欲するものは何もないわ」
「ったく、あんたらしいわね」
　欲がないというか、純粋というか、不器用なくらい真っ直ぐというか。何とも彼女らしい発言にフィーリアとエレナは思わず苦笑を浮かべた。すると、ようやく諦めてシルフィードが話題に入るのを確認してから、キティは切り出す。
「――君達、ギルドナイトになる気はあるのです？」
　突然の問いかけに、三人は面食らう。誘われたのは他の三人であって直接は関係ないとはいえ、エレナも突拍子もないキティの誘いに慌てる。

「ぎ、ギルドナイト？　な、何でよキー姉ぇ」
「何でも何もないのです。この三人はとても優秀なのですよ？　二つ名は程度は違えど、世間にある程度通じているものばかり」
そう言いながら、キティは静かに三人の顔を見定めていく。
「ガンナー界のうら若きルーキーにして、実はこっそりファンクラブがあったりする、《桜花姫》ことフィーリア・レヴェリ」
「ふぁ、ファンクラブッ!?　そ、そんなの初耳ですよッ!?」
「ちなみに会長は《悪魔のサイレン》ことルーデル・シュトゥーカなのです」
「ルウウウウウウウウウッ!!!!」
自分がいない場所でとんでもない事をしでかしている親友の情報を知ったフィーリアは顔を真っ赤にして空に向かって叫ぶ。当然その声は今も積極的に布教活動に勤しんでいる親友には届く事はない。
恥ずかしさで泣きそうになるフィーリアを横目に、キティは今度はサクラを見やる。
「護衛の女神とも謳われ、大陸通商連合会長から最も信頼されるハンターとして商人の間で有名な、《隻眼の人形姫》ことサクラ・ハルカゼ」
「……老いぼれに好かれても、嬉しくも何ともないわ」
大陸通商連合とは、文字通り中央大陸で商いを行う商人のほとんどが加盟している行商人組合のようなものだ。ここに未加入だと大都市では営業できないし、そもそも闇商人という扱いになる。この組合があるからこそ商人は自分で現地のハンターを雇う他に組合経由で優秀なハンターを雇う事も可能なのだ。危険地帯の通過や重要品目の運搬の際にはこの後者が選ばれる。何より、組合に加盟する商人間で商品の購買も行われる、一種の卸売業と流通業の役割を担っている。この組合があるからこそ、辺境の村でも最低限度の商品の販売が可能となるのだ。
そんな大陸通商連合は利権争いでハンターズギルドと対立する事は少なくない。特にヴィルマ崩壊後はドンドルマの重要物流拠点度合いが増し、ハンターズギルドが関税を荒稼ぎしている事も対立の原因となっている。その為現場の商人はともかく、組合幹部は基本的に

ハンターズギルド、そしてハンターを快く思わない者も少なくはない。あくまで利益の為に護衛を依頼しているに過ぎないという、嫌いな相手でも利益になるなら付き合う。まさに商人魂というべきものだ。

そんな大陸通商連合において、唯一無二で信頼を得ているハンターがいる。それがサクラなのだ。

単純なハンターとしての実力なら、彼女に勝る者など大勢いる。彼女はまだビショップクラス。それより上の階級のハンターは数多い。だが彼女程大陸通商連合、強いては商人に対する功績が目覚ましいハンターは存在しない。彼女の働きで多くの商人がその命や物資を守られ、無事に目的地に出向いている。そんな功績と彼女の命懸けの護衛、そして何より彼女の素っ気なさがむしろ仕事人という風合いを持ち、商人達から絶大な信頼を得るようになった。

大陸通商連合会長自ら表彰をしたり、組合側が専属のハンターになる事を依頼するなど手厚い施しを受けるも、サクラはそれらを全て拒否。フリーで居続ける事を選んだ。彼女曰く「……馴れ合いは嫌いだ」という事だが、実際は誰かに従属しては自らの意思で行動できなくなる事を嫌ったからである。自らにどれほどの利があっても、己が信念に背く道は選ばない。例えその道が茨の道だとしても、彼女はその道を貫く。そういう娘なのだ。

実はサクラはこういう経緯もあって、意外かもしれないがメンバーの中では最も顔が広い。実際、クリュウ達と狩猟などで色々な街や村を訪れても、そこで声を掛けられるのはほとんどがサクラだ。大概の場合はサクラの方は相手を忘れている事が多いが、これはそれだけの数の商人を守って来た証拠だ。

中央大陸の大陸総生産は世界中の他大陸の中でもずば抜けて高い。それを支えているのが大陸通商連合であり、そこに絶大な信頼を得ているサクラ。身体能力だけではなく、そういった点でももはや常人の域を脱している。ハンターとしての実力はもちろん、こうした人脈という点での潜在能力に関して言えば、彼女は言い過ぎではなくちょっとした国の国家元首程の発言力、影響力を持っているのだ。

そして最後にキティは腕を組んで座っているシルフィードを見やる。
「《砂漠の狼》と称される伝説のハンター、エルディン・ロンメルの唯一無二の弟子にして元ソードラント所属。経歴だけでも注目すべきものなのですが、実力ももちろんなのですが、何よりも先日発表された『かけだしハンターが守ってもらいたい先輩ハンターランキング』で上位入賞を果たした事から巷で人気急上昇中な《蒼銀の烈風》ことシルフィード・エア」
「な、何だそのランキングは？」
「ドンドルマハンターズギルド本部ギルド嬢長、ライザ・フリーシアが時折企画推進するイベントの一環として行われたものなのです」
「あ、あの阿呆が……」
「そのランキングにおいて見事８位に入ったのです。見事なのです」
「……なるほど、道理で最近年下のハンターに声を掛けられたりしてた訳だ」
呆れたようにため息を零すシルフィード。実は一週間程前までドンドルマに出張していたのだが、その際やたらと新米ハンターに声を掛けられていた。何事かと思いつつクールに無視していたのだが……いくらクールを装っても根がいい人なので結局根負けして色々とアドバイスをしたりしていたのだ。
先日の怪奇現象の理由が判明し、シルフィードは頭を抱える。
キティの説明にて二人の少女がお天道様の下を歩けない状態となってしまうが、本人は至って平然と話を進めてしまう。
「君達がギルドナイトになれば、実力はもちろん話題性という点でも朗報なのです。如何なのです？」
ギルドナイトは単純な実力社会という訳ではない。そこには政治的な意味合いもあり、複雑な事情を孕んでいる。実力者がギルドナイトという訳ではない。ギルドナイトに必要なのは、どれだけ周りに影響力を与えられるかなのだ。もちろん、それに見合うだけの実力がある事は大前提だ――そして、三人はその素質が十分にある。特にサクラが与すれば、大陸通商連合との溝を埋める橋渡し役としての存在も

大きい。
キティの申し出に、三人は互いを見合う。そんな彼女達の背中を、不安そうにクリュウが見詰めていると――三人は彼の方へ振り返り、一斉に笑みを浮かべた。
「悪いが、私達は現場で活躍していたいんだ。君みたいに縛られる事なく、自由にな」
「……なかなか手厳しいのですね」
エンペラークラスの自由度のなさを非難するような物言いに、キティは苦笑を浮かべる。自らは自由に世界を旅していたいのに、それを許されない立場。何て歯がゆいのだろうか。そう、世の中には自分がすべき事と自分しかできない事が違う者がいるのだ。その間で、その者達はジレンマに陥ってしまう。
「私達は別に偉くなりたい訳じゃありません。偉くなりたいだけなら、国に戻ればいいだけです」
西竜洋諸国の中でも特筆して軍事力が高く、実質大陸最強の軍事大国と化したエルバーフェルド帝国。その帝国内の名門であり、政府に対しても物言いができる貴族のレヴェリ家出身のフィーリア。本当に権力が欲しいなら、そこに戻ればいい。彼女には、ある種簡単に権力を手に入れるだけの環境が整っているのだから。でも、
「私はただ、クリュウ様のお側にお遣いしたいだけなのです」
彼女がここにいる理由。それは大好きな彼の傍にいたいから。彼女がここにいる理由はたったそれだけで、そして、たったそれだけでいいのだ。愛する人の傍にいたい。ただそれだけなのだから。
「……私も、馴れ合いは御免だわ。それに、私が貴様らに屈したら私を信じて護衛を依頼してくれる商人達を裏切る事になる――何よりも、私はクリュウ以外に屈するつもりはない」
隻眼を鋭く煌めかせ、堂々と言い放つ。凛々しく立ち振舞い、颯爽と黒髪をはためかせ、仁王立ちするサクラ。その腕には何百という商隊と、そこにいる何千人もの商人の信頼が込められている。その信頼を裏切らない為にも、そして大好きな彼の傍にいる為にも、彼女はここを離れるつもりはない。

三人にとってイージス村はもう一つの故郷であり、クリュウは心の拠り所なのだから。
乙女三人の決意と返答をもらったキティは静かに口元に浮かべると、「残念なのです。でも、ちょっぴり嬉しいのです」と言葉を零す。そしてクリュウを見て、
「本当に、クー君はとても良いお友達に恵まれたのですね」
「うん、最高の仲間（パートナー）だよ」
笑顔で答える彼の言葉に安心したように微笑み、キティは小さくうなずく。
「――安心したのです」
ただ短く、ほっとしたように彼女はそうつぶやいた。
「え？　もう行っちゃうの？」
村長やキティへの報告を済ませ、エレナの酒場に舞台を移してようやくほっと息をついたばかりの頃、突然キティの口から告げられた。
「はいなのです。私は今回の事を早急にギルドに報告する為にも、そろそろお暇（いとま）させていただくのです」
ショックを受けるクリュウとエレナを前に、キティもまた残念そうに話す。だが彼女は本来この地域にはティガレックスの生態を調べる為に派遣された。その任務が終わった以上、報告を済ます為にも早く戻らなければならないのだ。
「そっか、残念だな」
ショックではあるが、仕事なら仕方がない。残念ではあるが、自分達のわがままで彼女に迷惑は掛けたくはない。弟として、姉に負担を掛けてはならないのだ。
「でもさ、また来てくれるよね。今度はちゃんと、仕事じゃなくて里帰りって形で」
クリュウのがんばって浮かべた笑顔を前に、キティもまたぎこちなくも小さな笑みを浮かべて応える。
「約束するのですよ」
キティの言葉に、クリュウは笑みを浮かべながらゆっくりとうなずいた。精一杯の笑顔は、傍から見ているとどこか痛々しく、でもどこ

か仲睦まじくて。そんな二人の関係が近くて、眩しくて、羨ましくて、フィーリア達は何も言えなかった。
「皆さん」
そんな時、そっとキティがこちらへと振り返り、声を掛けた。身構えていなかった四人は一瞬慌てるがすぐに平静を装い、彼女の視線に向かい合う。ジッと見詰める彼女の瞳を前にしながら、四人は息を呑む。そんな緊張が長いように感じられるも、ほんのわずかな時。フッと彼女の口元に笑みが浮かぶ。
「クリュウの姉として、皆さんにお願いするのです――どうか、私の弟をよろしくお願いしますなのです」
そう言って、キティは静かに頭を下げた。それはただひたすらに、可愛い弟を想うが故の行動。自分が傍に居てあげられない弟を、自分の代わりに支えてほしい。そんな、身勝手かもしれないが、それでも言わずにはいられない想い。本当はずっと傍にいてあげたい。でも自分はそれができない。
キティは決して、ハンターをやめたい訳ではないのだ。やめたいと思っていれば、自由が奪われる選択をするはずがない。ハンターを続けたいからこそ、自由を犠牲にしてでもその道を選んでいる。それはクリュウが相手でも例外ではない。むしろ安易な選択をすれば、それはクリュウをも裏切る結果になる。だからこそ、彼女は選んだのだ――彼を支えるのは自分ではなく、彼女達なのだと。
頭を下げるキティを前に、クリュウは何も言わなかった。ただ、彼女と同じように自らも四人に向かって頭を下げた。今まで支えてくれたみんなに、どうかこれからも一緒にいてほしい。そんな、想いを込めて……
「……言われなくても、そのつもりよ」
沈黙を破ってそう宣言したのは、サクラだった。二人が顔を上げると、サクラは腕を組んで憮然と座っていた。二人の視線に対し無表情を貫いていたサクラだったが、その口元にフッと笑みが浮かぶ。
「……旦那に尽くすのは妻の役目よ」
「何を堂々と大ボラ吹き倒してやがりますかッ！」

すかさずフィーリアが叫ぶ。するとサクラは鬱陶しいものを見るように立ち上がった彼女を見上げ、「……何？」と不服そうに尋ねる。彼女からすれば当然の事を言ったに過ぎない、という事なのだろう。
「どさくさに紛れてとんでもない事を言ってるんですかッ！」
「……事実？」
「虚偽報告ですッ！」
早速ケンカをおっ始める二人を横目にため息を吐くシルフィードは、呆然としているキティを前に「すまないな。こういう奴らなんだよ」と代表して謝る。だがすぐに口元に笑みを浮かべると、キティに向かって微笑んだ。
「あなたに頼まれるまでもない。我々は、これからも彼と一緒だ――家族なのだからな」
その言葉に、どれだけの安堵を抱いたか。キティは安心したようにうなずくと、静かに笑みを湛えた。
「どうやら私の願いは、杞憂だったようなのです」
「まぁ、できる事なら私達はあなたとも親しくなりたい。何せあなたは、彼の姉なのだから」
「そうなのです。私はクー君のお姉ちゃんなのです。私が認めた相手ではないと、クー君とのお付き合いは認めないのですよ？　えっへんなのです」
何を威張る必要があるのか。胸を張ってみせるキティの発言に隣に座るクリュウは苦笑を浮かべる。昔からどうにも思考が普通の人のそれと乖離している傾向がある。気にしないで、と言おうと口を開くクリュウだったが、それを阻むようにサクラが動いた。
「……お義姉さん、安心してほしい。クリュウは、私が一生尽くしてみせるから」
頬を赤らめ、微笑みながら語る彼女の言葉に不意を突かれたクリュウが思わずドキッとした事は内緒だ。彼女の言葉にキティはうむとうなずいてみせる。すると、
「ちょ、ちょっと待って下さいッ!?　お義姉さんってどういう意味ですかッ!?」

すかさずフィーリアが反応を見せる。するとサクラはまたしても当然の事を言っているだけだと言いたげな目で彼女を見詰める。そんな彼女の隻眼から全てを悟ったフィーリアもすぐさま、
「わ、私も一生クリュウ様に奉仕し続けますキティお義姉様ッ！」
恥ずかしい事を言っているという自覚はあるが、ここでサクラに引けを取ってはならないと大きな声で宣言してみせるフィーリア。もはや二人の目にはキティしか見えておらず、その隣で恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしながら顔を伏せているクリュウになど気づいてもいない。
そんな二人の姿に唖然とするエレナの隣で、シルフィードは大きなため息を零す。
「まったく、君達は本当に無茶苦茶だな」
「む、無茶苦茶具合ではサクラ様と対等という事はありえませんッ！明らかにサクラ様の方が常軌を逸していますッ！」
「……表に出ろ影薄小娘」
「影は薄くないですぅッ！」
喧嘩する程仲が良いという言葉はきっと彼女達の為にあるようなものなのだろう。懲りる事なく言い争う二人を見て、シルフィードは常々そう思う。何というか、そんな二人を羨ましく思う事もある。
「仲がいいのです。あの二人は」
キティの言葉にシルフィードはうなずき、「親友だからな」と口元に笑みを浮かべる。そんな彼女の言葉にキティは「そうなのですか」とうむうむとうなずく。
「君にはそういう子はいないのです？」
「残念ながら、あの二人のような関係の友人は持ち合わせていないな」
「それは残念なのですよ」
むむぅと残念そうに眉間にシワを寄せるキティの姿に苦笑を浮かべながら、シルフィードはコーヒーをすする。
「――クー君は違うのです？」
「ゲホッゴホッ!?」
キティの口から突如クリュウの名が出た事に驚いたシルフィード

は激しく咳き込む。すぐに彼女に駆け寄って背中を擦るクリュウ。その辺の気遣いはさすがと言える。
落ち着いた頃を見計らい、シルフィードは「だ、大丈夫だ。すまなかったな」と彼に謝って席に戻すと、腕組みしながらこちらを見詰めているキティに向かって小声で声を掛ける。
「な、なぜそこでクリュウの名前が出るんだ？」
「いえ、君とクー君はいいコンビになりそうだと思ったので。それこそ、あの二人に負けないくらいの親友になれる気がするのですよ」
うむうむとうなずきながら語る彼女の言葉に苦笑を浮かべるシルフィード。いいコンビと言われる事は嫌ではないが、どうにも自分が求める形とは異なる。
「悪いが、私は彼と親友になるつもりはない」
「むぅ、それは残念なのです。クー君はいい子なのですよ？」
「それは知っているさ。ただ私は彼と親友になるつもりはないと言っているだけさ」
「それは、どういう意味なのです？　親友以外でなりたい関係でもあるのです？」
ムフフと意味ありげな笑みを浮かべて尋ねる彼女の問い掛けにシルフィードはくぐもる。知っていてあえて尋ねているのだろう。彼女の意地の悪さに一瞬怒りを覚えるが、それも一瞬の事。すぐに諦めたようにため息を吐くと、今はエレナと何かを話している彼の横顔を一瞥し、
「……こ、恋人だ」
顔を真っ赤にして、小さな小さな声でそう宣言した。恥ずかしそうに顔を赤らめながらブスッとする彼女の横顔を見てキティはニッコリと微笑む。
「初々しいのです」
「う、うるさいぞ」
「……本当に、クー君は幸せ者なのですよ」
安心したように微笑むキティの笑顔を見て、シルフィードは呆れたようにため息を零す。弟であるクリュウの事を心の底からかわい

がっているのだろう。世の中には親バカという言葉があるが、彼女の場合は姉バカと呼称するに相応しいだろう。
「それでキティ殿――」
「おや？　君は私の事をお姉さんと呼ばないのです？」
ニヤニヤとこれまた意味ありげな意地悪な笑みを浮かべる彼女の言葉に再びシルフィードは口を閉じる。先程と同じように一瞬彼女に怒りを覚えるも、大きな大きなため息を吐いてその怒りを無理やり冷ます。相手はクリュウの姉なのだ、と。
数回深呼吸した末に何とか平静を取り戻すも、まだその頬は赤い。
今か今かと待ち望むキティの視線を直視できず、シルフィードは視線を逸らしながら憮然とした態度を取る。そして、
「……あ、義姉上」
顔を真っ赤にしながらこれまた小さな声で言う彼女の言葉をしかと聞きとめたキティは満足気にうむうむとうなずく。そんな彼女の姿を見て、シルフィードは本日何度目かわからないため息を零す。本当に掴みどころのない人だ。
「クー君」
いつの間にかフィーリアとサクラの奪い合いに巻き込まれていたクリュウにキティは声を掛ける。二人はキティを威嚇しながら彼を放すまいとしていたが、クリュウに説得されて渋々その腕を放した。呼ばれたクリュウはそのまま彼女の隣の席に腰掛ける。
「君は本当にすばらしい仲間に囲まれているのです」
「うん、僕の自慢の仲間さ」
「……羨ましい限りです」
心からキティはそう思った。
エンペラークラスのハンターはその実力から下位のハンターと交流する事がほとんどない。正確にはあるものの、周りからその力を畏怖の目で見られる為、なかなか仲間を作りづらい。それに加えてギルドの密命を帯びる事もあるから安易に情報を漏らさまいと他人との接触を拒む傾向がある為、なかなか仲間を作りづらい環境にあるのだ。

だからこそ、彼女からすれば素晴らしい仲間に囲まれた生活をしているクリュウが羨ましく思える。同時に、弟が幸せな日々を送っている事を喜ぶ姉としての想いもあった。
「こんな素敵な仲間を、決して失ってはいけないのです」
「もちろん、みんなの事は僕が守ってみせるよ。まだまだ守られてばっかりだけど、いつかきっと……」
それはクリュウの心からの願いだった。周りにいる仲間は自分よりも優れた力を持つ実力者ばかり。昔に比べればずいぶん近づいたとはいえ、それでもまだまだお互いの差は埋まらない。でもいつか、自分がもっともっと強くなって、彼女達を守れるようになりたい。それが彼の願いであり、ある種の夢となっていた。
自分の両親は優れたハンターだった。その手で多くの人達を救ってきた。そんな二人の背中を見て育ったからこそ、クリュウの夢もまた同じ道を進む。それはどこかサクラと似た道。でも彼女のそれは一人で突き進むものであり、自分の道はそんな彼女や他の仲間達と一緒に進む道。似ているようで、ちょっと違う。でも、結果は同じ――誰かを守れるようになりたい。
自らの想いを話しながら、決意に燃えるクリュウ。そんな彼をキティは眩しそうに見詰めていた。自分にはない、まだまだ夢と希望に満ち溢れた若者の輝きだ。こんな事を考える自分は、思ったよりも年老いているのだろうか。そんな事も思いながら……
「クー君」
呼び掛けると、彼は不思議そうな顔で振り返った。そんな彼に向かって立ち上がったキティは、バッとマントを翻す。顕になったのは最強の証であるキリンXシリーズ。肌の露出が多く、実に目のやり場に困る装備でもある。もちろんクリュウも慌てて視線を逸らすが、そんな彼の両頬を押さえて無理やり自らに顔を向けさせたキティは、そっと彼の額に自らの唇を当てた。
顔を真っ赤にそて驚くクリュウと、その光景に驚愕と共に嫉妬に怒る乙女達の視線を一身に受けながら、キティは静かに微笑んだ。
「――クー君、大好きなのですよ」

翌朝、嵐のように現れ、そして嵐のようにキティはイージス村を去った。
もう泣かないと決め、笑顔で送り出すエレナと、姉の旅路を笑顔で祝おうとするクリュウ。そんな二人をキティは優しく抱き締めた。我慢しようとしていたのに、エレナは結局我慢できずに泣きだし、クリュウも瞳をわずかに濡らした。
そんな二人、というかクリュウの姿を複雑そうに見詰めながらも、静かにキティの出発を見送るフィーリア、サクラ、シルフィードの三人。昨夜別件から戻って来たツバメとオリガミや、さっきまで寝ていたアシュアに、忙しい中やって来てくれたリリアや村長など、村人総出での見送りとなった。
キティはそんな皆の見送りに不器用な笑顔で応えると、颯爽とマントを翻して村を去った。エンペラークラスに相応しい、そして可愛い弟にかっこいい所を見せたいという姉の想いからのものだった。
森の中へと消えて行ったキティを見送り、ほっとするクリュウ。本当はもっと一緒にいて色々な事を話したかったが、もう自分も子供じゃない。わがままを言ってはいけない事も、わかっているのだ。
そんな彼の手を、優しく握り締める者がいた。振り返ると、そこにはサクラが立っていた。
「……大丈夫。クリュウには私がいるから」
彼女らしい、実に真っ直ぐな言葉だった。クリュウは笑顔で彼女の励ましに応えると、その頭を優しく撫でた。忠犬のように、主の手を受け入れるサクラ。その姿は凛々しくはあったが、何だか尻尾を嬉しさのあまりフリフリと振る姿が思い浮かんだ。
すると今度は反対側の手をフィーリアが掴んだ。屈託なく微笑む彼女の笑顔は実に眩しくて、可憐で、いつも心が温かくなる。暗い気持ちも吹き飛ばしてくれるような、そんな天使の笑顔だった。
今度はシルフィードが無言で彼に近づくと、その頭の上にポンと手を置いた。彼と目が合うと、頼もしく笑ってみせた。いつもかっこ良く、凛々しくて、でも時々見せる天然さが可愛らしい。頼もしい姉御肌な彼女は、今日も自分を励ましてくれる。そして、

「ったく、本当にしょうがないわね。バカクリュウ……」
目の前に立ち、腰に手を当てて呆れたように立つエレナ。その表情は呆れつつも、どこか温かさを感じる。他の三人と違って実際にお互いに命を預け合うような関係ではない。でも狩猟に行く際と戻って来た際にいつも温かな料理を振舞ってくれる。彼女の料理と笑顔と、時々暴力があって、やっと村に帰って来れたんだという実感が胸いっぱいに広がる。
どれも決して欠けてはならない、クリュウにとって大切な人達。
そしてもう見えなくなってしまったキティも、彼にとってはそんな人達の一人なのだ。
そんな事を考えるクリュウの腕にしがみつきながら彼の横顔を見詰めていたサクラ。ふと何かを思い出したように反対側から自分を威嚇するように唸るフィーリアに目を向ける。今まで無視されていたのに、突然視線を向けられて驚くフィーリアは目を瞬かせる。
「な、何でしょうか？」
「……フィーリア、お願いがあるの。聞いてくれる？」
「え？　まぁ、私でできる事なら何でもしますけど……」
「……クリュウをください」
「絶対嫌ですッ！」
ウーッと髪の毛を逆立てて威嚇するフィーリアを前にサクラはフッと口元に笑みを浮かべると「……冗談よ。用件は別にあるわ」と言葉を続ける。冗談だとわかっても何を頼まれるかわかりやしない。警戒を緩めずにいるフィーリアに向かって、サクラは少し恥ずかしそうに頬を赤らめながら、うつむき加減に自らの頼みをつぶやく。
「――また、ポポノタンシチュー作ってくれるかしら？」
少し上目遣いでの、懇願するような問い掛けに一瞬面食らったフィーリア。だがすぐにその顔に優しげな満面の笑みを浮かべると、
「もちろん、腕によりをかけて作っちゃいますよぉッ！」
満面の笑みを浮かべて張り切る彼女の姿に、安堵したようにサクラも口元に小さな小さな笑みを浮かべる。そんな二人の姿を見て、クリュウとシルフィード、そしてエレナの三人もまた幸せそうに笑みを

浮かべていた。
　イージス村に訪れた轟竜ティガレックスによる危機は、クリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人によって撃破された。一人の少女の暗い過去に一つの終止符が打たれ、辺境にある小さな村の穏やかな一日が、今日も始まろうとしていた……
　イージス村から数キロ程南下したキティ。ゆっくりとした歩みで歩いていた彼女はふとその歩みを止めた。振り返り、何かを見詰める。その視線の遥か先にあるのは、クリュウ達がティガレックスを葬ったイルファ雪山。
　無言で山を見詰めていたキティだったが、突然短く舌打ちをした。キリンXホーンの下から覗く表情は先程までクリュウ達に向けていた柔らかなものではなく、迫り来る危機を前に葛藤しているような、そんな厳しいものだった。
　ギリッと鈍い音を立てながら歯軋りするキティ。握り締めた拳は震え、ぶつけようのない怒りに抗うかのようだ。
　瞳は鋭く、遥か先に聳え立つイルファ山脈を見詰めている。吐き捨てるように「くそ……ッ」と短くつぶやくと、再び前に向かって歩き出す。だがそれは先程までのような穏やかな歩みではなく、怒りをぶつけるように地面を蹴るような、そんな乱暴な歩き方。
「何で、あれがあんな所にあるのです……ッ！　何で……ッ！」
　激しい怒りと共に彼女が握りしめたのは、何かの破片だった。長い年月を経て朽ちたように見えるそれは、すっかりサビついた何かの鉄の破片。だがそれは、ある者の手がかりであった。そしてそれがあの山にあったという事は……
「……九年前、引退していた流星の姫巫女が死んだ。引退していても、あのクラスのハンターが命を落とす事などありえないのです……だとすれば、可能性はただひとつ――奴に殺された……ッ」
　鉄片を怒りに任せて握り締めると、気づかないうちに切っていたのだろう。真っ赤な血が流れ出し、腐食した鉄片を赤く染め上げる。だが痛みなど感じない。怒りのあまり、一時的に彼女は痛覚を失っていた。それほどまでに強い憎悪と怒りが、彼女の胸の中で渦巻いている

のだ。
「早く本部に報告して対処しないと付近一帯の村や街が――イージス村が滅びる」
逸る気持ちを抑えられない。キティは走り出す。ここからドンドルマまでは歩きで行くような距離ではない。だとしても、次の村まで走ってそこで馬なりを借りてでも迅速に戻らなければならない。自分が知ってしまった災厄の情報を伝え、何らかの対抗策を練らなければならない。
自分にとって故郷のような場所を、そして何より――大好きな弟を護る為にも。
キティは数々のモンスターを葬って来たその自慢の脚力を駆使して、全速力で道を駆ける。その疾さはあのサクラをも上回るものであり、まるで疾風のように木々の間を突き抜ける。時折、クリュウの名をつぶやきながら……
通常五日は掛かる道のり。だが彼女がドンドルマに着いたのはそれから三日後の事であった。
そしてすぐさま彼女の報告を受けたハンターズギルドは緊急で対策会議を開いた。そして下された決断は――あまりにも非情なものであった。

登場人物紹介５

《クリュウ・ルナリーフ》
ランク　ビショップ
異名　なし
身長　１６５ｃｍ
年齢　１７歳
容姿　柔らかな若葉色の髪／優しげなエメラルドグリーンの瞳
武器　片手剣［《デスパライズ》／バーンエッジ／オデッセイ改／サンダーベイン／煌竜剣（シャイニングブレード）］
防具　頭／ディアブロヘルム
胴／ディアブロメイル
腕／ディアブロアーム
腰／ディアブロコイル
足／ディアブログリーヴ
スキル　風圧【小】無効／見切り＋２／ボマー（体力珠×１／爆師珠×５）

本作の主人公の少年。ドンドルマのハンター養成訓練学校での修行を積んだ後に故郷のイージス村に帰郷。以後そこを拠点にハンター活動をしている。一年程前にフィーリア、サクラ、そしてシルフィードと出会い現在はこの四人をベースにチームを結成している。仲間と共に多くのモンスターを倒し、様々な経験を経て立派な青年へと成長している途中。実は母がアルトリア王政軍国の元王女であり、現王イリス・アルトリア・フランチェスカとは従兄弟関係にある王族出身。彼の底抜けの明るさや母の事を調べる旅で様々な国の人と知り合った結果、一般人でありながら信じられないような人脈を持つ。特に女の子に対してはとても優しく、本人は気にしているが中性的な顔立ちもあって好意を寄せられる事が多いが、残念ながら乙女心に対してものすごく鈍感な為に、今まで幾多の乙女達がアタックを掛けても失敗に終わって来ている。ハンターとしてはまだまだ磨きがいのある原石のような状態だが、次第に英雄クラスのハンターだった両親

から受け継いだ力の片鱗を見せ始めている。片手剣を補う為に道具類を多用する戦い方を好み、特に閃光玉、罠系統、爆弾類などの使い方はチーム随一の腕前。基本的には前向きな思考を持っているが、自分の事になるとネガティブ思考になりがち。周りの女子が強過ぎる事もあって自分の実力を過小評価して卑下する傾向があるが、最近は少しずつ改善してきている。

《フィーリア・レヴェリ》

ランク　ナイト

異名【桜花姫】

身長　１５７ｃｍ

年齢　１６歳

容姿　柔らかな神秘的な金色の長髪／純真無垢なエメラルドグリーンの瞳

武器　ライトボウガン［《ハートヴァルキリー改》／ヴァルキリーブレイズ］

防具　頭／増弾のピアス

胴／リオハートレジスト

腕／リオハートガード

腰／リオハートコート

足／リオハートレギンス

スキル　回復アイテム強化／装填数ＵＰ／精霊の気まぐれ／抗菌（全癒珠×１／抗菌珠×２）

本作の恋姫（メインヒロイン）の一人の少女。クリュウが卒業後初めてコンビを組んだ少女ハンター。純真無垢な性格で誰に対しても優しく接する心優しい少女。初めて会った時からクリュウに対して好意にも似た感情を持っていたが、一時期彼とケンカ別れしていた時期に彼への恋心を自覚。以後ずっと彼の傍にいて自分の想いを届けようと健気にがんばっているが、周りのライバルが積極的な娘が多い為に押され気味。まだまだ成長段階ではあるが、現時点で胸がちょっと小さい事にコンプレックスを抱いていたり。恋姫の中では最も女の子らしい性格をしており、家事全般が得意。クリュウ曰く「彼女を

お嫁さんにできた人は幸せ者」レベル。ハンターとしても優秀で、女性ではソロ最年少でのリオレイア討伐記録を持つ程の腕前。ガンナーとしての才能に溢れたルーキーであり、《桜花姫》という二つ名はガンナー界では有名。ハンターという職業ながら実はエルバーフェルド帝国の一等貴族であるレヴェリ家三女という身分。貴族出身であるがハンターを目指して家を飛び出した。と言っても両親や姉達とは良好な関係を築いている。純白の汚れのない乙女ではあるが、白というのは染まりやすいという意味もあり、最近は攻撃的なエレナやサクラに感化されてクリュウに対する嫉妬のあまりちょっとバイオレンスな行動をする事も。クリュウ曰く「濁った目をしながら満面の笑みを浮かべている時が一番怖い」。二度の人気投票で二冠を達成した読者からも人気の高い恋姫。

《サクラ・ハルカゼ》

ランク　ビショップ

異名【隻眼の人形姫】

身長　１６２ｃｍ

年齢　１７歳

容姿　美しく長く艶やかな黒髪／凛々しき漆黒の鋭い隻眼

武器　太刀［《鬼神斬破刀》／飛竜刀【紅葉】／飛竜刀【翠】］

防具　頭／凛【鉢金】

胴／凛【胸当て】

腕／レウスアーム

腰／凛【腰当て】

足／レウスグリーヴ

スキル　回復速度＋１／攻撃力ＵＰ【小】／探知（早復珠×２／攻撃珠×２）

本作の恋姫（メインヒロイン）の一人の少女。クリュウとは子供の頃によく遊んでいた昔馴染みの少女ハンター。口数が少なく、何を考えているかわからない無表情を徹する少女ではあるが、気心の知れた相手にはそれなりにしゃべる。彼女の無表情を見分けられるのは現時点ではクリュウのみ。天上天下唯我独尊自分絶対至上主義者であ

り、自分の信念や行動は全て正義であり、正しいと思い込んでいる。その為周りと意見が対立したり世間常識が通じない事もしばしば。しかし一本気な性格なので頑固やわがままとはまた違う。本人は否定するが面倒見が良くて実はとても仲間想いで、それを指摘されると妙に慌てる。商人だった両親の間に生まれ、幼い頃はよく商隊がイージス村に立ち寄っていて、その際にクリュウやエレナと知り合い、それ以来ずっと一途にクリュウを思い続けている。両親は轟竜ティガレックスの襲撃に遭い死亡。左目もその際に失い、今は常に眼帯をしている。その為誰かを護りたいという想いは人一倍強く、護衛依頼では例え腕や足を折ってでも成功させるという強い思い入れがあり、これまで幾多の商隊を守り抜いてきた事から《護衛の女神》と称される。その関係で実は商人に対する顔が広かったりする。チームでは人間離れした俊足さと機動力を駆使してモンスターを撹乱させつつ、強力な一撃を叩き込む遊撃手。クリュウの事が大好きであり、隙あらば彼に抱きついたり、隙あらば寝込みを襲ったり、隙あらば入浴中を襲ったりするなど、ものすごく積極的。本人曰く「……クリュウの為なら、恥やプライドなんて捨てられる」との事。クリュウへの想いは誰にも負けない侍乙女。

《シルフィード・エア》

ランク　ナイト

異名【蒼銀の烈風】

身長　１７６ｃｍ

年齢　１９歳

容姿　煌めく白銀色のポニーテール／流氷のような美しい碧色の瞳

武器　大剣［《キリサキ》／煌剣リオレウス／蒼刃剣ガノトトス］

防具　頭／レッドピアス

胴／リオソウルメイル

腕／リオソウルアーム

腰／リオソウルコイル

足／リオソウルグリーヴ

通常時スキル　攻撃力ＵＰ【中】／見切り＋１／耳栓（猛攻珠×１、達人珠×３、防音珠×３）
耳栓時スキル　攻撃力ＵＰ【中】／高級耳栓（猛攻珠×１／防音珠×６）
本作の恋姫（メインヒロイン）の一人の少女。チーム最年長にしてリーダーを務める冷静沈着な知能型ハンター。大人な雰囲気と可愛らしい乙女を兼ね備えた、容姿端麗で誰もが目を奪われる美少女。男よりも男らしい（＝かっこいい）性格で実は姉御肌であり、チームの頼れるリーダー。クリュウからの信頼も厚く、彼の当面の目標は彼女のようになる事。まだハンターとしてはかけだしだった頃に、自分が留守の間に故郷を失った。その際に両親と弟も失ってしまう。その経験からモンスターを憎むようになり、力に溺れていき、力こそ正義と考えるようになる。剣聖ソードラントに属していたが、エルディンの説得があって離脱する。以後はソロハンターとして活躍してたが、クリュウと知り合ってからは彼達と行動を共にしている。巨大な大剣を自由自在に振り回し、モンスターの鱗や甲殻ごと叩き潰す強大な一撃を炸裂させる。仲間の危機を身を呈して守ったり、仲間に的確な指示を飛ばして狩りを優位に進めるなどハンターとしても、指揮官としての腕も抜群。容姿、実力、性格、人望とすばらしいの一言で一見するとまるで非の打ち所がないが、実は料理が壊滅的に下手だったり、野菜嫌い、朝が弱いなど意外と弱点は多い。クリュウの事は亡くなった弟に雰囲気が似ている事から色々と世話を焼いていたが、次第にそれが恋心に変化していき、先日ついに自らの気持ちを自覚して彼へのアタックを始めた。全恋姫の中では唯一と言ってもいい程の巨乳の持ち主であり、仕事の邪魔になるし妙な羨望の眼差しで見られるこの胸は彼女にとってコンプレックスだったが、彼への恋心の自覚以後はこれを武器にして彼に迫るなど、現在フィーリア達が最も警戒している相手。彼に好きになってもらいたいが、同時に同じような想いを抱く二人とはこれからも信頼し合える仲間でいたいなど、未だに葛藤が続いている。心優しき頼れる姉御な美少女。
《ルフィール・ケーニッヒ》

ランク　ルーク
異名　なし
身長　１５２ｃｍ
年齢　１５歳
容姿　艶やかな紺色のザザミ結びの髪／イビルアイ（左目・金、右・碧）＋細メガネ
武器　弓［パワーハンターボウ１］
防具　頭／パピメルカプト
胴／パピメルペクトス
腕／パピメルブラッソ
腰／パピメルコクサ
足／パピメルＳフェルム
スキル　回避性能＋２／状態異常攻撃強化／ぶれ幅ＤＯＷＮ（光避珠×１／点射珠×５）

クリュウの学生時代の後輩にして、過去編の恋姫（メインヒロイン）。大陸伝説にある災厄の象徴である邪眼姫（イビルアイ）と同じく世にも珍しい左右で瞳の色が違うイビルアイの持ち主。このイビルアイのせいで周りから迫害を受け、両親にも捨てられて教会で育ったという悲しい過去を持っている。それが当然であり自分は世界からいらない子と受け入れていたが、クリュウと出会い、彼に認められた事によって次第に明るくなっていった。自分を認め、必要としてくれるクリュウに対して好意を持つようになった。クリュウが卒業後はシャルルやエリーゼと共に優秀な成績を修めて卒業。その後は一人武者修行を続け、その途中でオトモアイルーのレイヴンと出会う。そして「また一緒に狩りをしよう」という約束を守って一年半ぶりに彼の前に現れた。しかし彼にはすでに三人もの仲間がいて、しかもいずれも彼に好意を抱く美少女達という状況に愕然とするも、健気に彼に対してアプローチを決行する。黒狼鳥イャンガルルガとの戦いで自らの実力不足を痛感して意気消沈してしまうが、シルフィードの励ましもあって再び武者修行に出る事を決意。その際にシルフィードに自らの恋心を自覚させ、対等で彼を奪い合う事を宣言する。オトモア

イルーのレイヴンと共に彼の元を離れて再び武者修行に出たルフィール。現在はエルバーフェルド帝国副都のエムデンに拠点を置いてレイヴンと共に狩りに勤しんでいる。

《キティ・ホークラント》
ランク　エンペラー
称号【雷帝覇王】
身長　１７２ｃｍ
年齢　２４歳
容姿　美しい純白色のセミロング／澄み切った蒼穹色の瞳
武器　全武器［金華朧銀の対弩／他］
剣士防具
・頭／キリンＸホーン
・胴／キリンＸベスト
・腕／キリンＸアームロング
・腰／キリンＸフープ
・足／キリンＸレガース
ガンナー防具
・頭／キリンＸコルノ
・胴／キリンＸケープ
・腕／キリンＸグローブ
・腰／キリンＸショルト
・足／キリンＸブーツ
両用スキル　ランナー／属性攻撃強化／精霊の加護／回避性能＋１（天耐珠×１／回避珠×１／光避珠×３）
突如クリュウ達の前に現れた現役最強と言われる女性ハンター。ハンターの最高位であるエンペラークラスの中でもトップクラスの実力者。全身を幻獣キリンの厳選素材を使ったキリンＸ装備を愛用している。雷属性の武器を好む傾向とその防具からついた称号は「雷を統べる覇道を突き進みし王」という意味を込めて【雷帝覇王】。数少ない全ての武器を扱えるバリアブルハンターでもあり、その実力は神

懸かりとも言われている。今から９年程前に当時１５歳だったキティはイージス村へと引越して来た。その際に母を亡くしたばかりで落ち込んでいたクリュウの姉代わりとして彼の事可愛がっていた。しかし７年前に「世界を旅する」と言って去って以来、彼とはずっと音信不通だった。その旅の最中でハンターとなり、才能を開花させた。クリュウの事を今でもとても可愛がっており、可愛い可愛い弟のように想っている。実はクリュウのファーストキスの相手であり、幼少の頃のクリュウの初恋の相手だが、本人はあくまでクリュウの事は可愛い弟と思っている。「～なのです」という語尾が特徴で、若干人の話を聞かなかったり、容赦がない物言いがあったりするが、とても優しい人物。クリュウの事を心から愛しており、彼に対してすぐに抱きついたりするなど、他の恋姫達のイライラゲージを常にＭＡＸ状態にキープしている。現時点で作者が詳しいキャラ設定などを作っているキャラでは最強の実力者。クリュウとエレナからは「キー姉ぇ」と呼ばれている。その他深い意味を込めてフィーリアからは「お義姉様」、サクラからは「お義姉さん」、シルフィードからは「義姉上」と呼ばれている。

《アイン・ヴォルフガング》

ランク　エンペラー

称号【サントロワの幻影】

身長　１７８ｃｍ

年齢　２４歳

容姿　尖った銀髪／辺りを威圧する血のように真っ赤な赤眼

武器　片手剣　［ゴールドイクリプス］

防具　頭／Ｓ・ソルＺヘルム

胴／Ｓ・ソルＺメイル

腕／Ｓ・ソルＺアーム

腰／Ｓ・ソルＺコイル

足／Ｓ・ソルＺグリーヴ

スキル　攻撃力ＵＰ【中】／心眼／火事場力＋２（硬守珠×１／危機珠×２／危難珠×２／危険珠×１）

剣聖ソードラントのリーダー。Ｇ級ハンターとして認定されており、その実力はソロでも最強クラスに位置づけられ、単独での古龍討伐経験も数多い。しかしモンスターの討伐を優先する余り防衛対象である砦を半壊させたり、街の中で市街戦を行うなど問題行動が多い上、冷徹で非道な男。エンペラークラスに相応しく凄腕で一応実績も数多い為にハンターズギルドも軽度の懲罰処分にするだけで基本的には不可侵。かつてのシルフィードを「血塗られた聖剣」と称し、憎しみに囚われながらも凛とした生き様を気に入り、彼女を支配する事を思いつくもあと一歩の所でエルディンに邪魔されて失敗。再会後はすっかり丸くなった彼女を見て幻滅するも、クリュウの事が絡むとかつての鋭さが戻るとわかると、クリュウに執拗に暴力を振るい、怒り狂う彼女を見て楽しむ。サントロワとは二人が生まれ育ち、かつて拠点を置いていた街。旧ソードラント連邦王国という小国の地方都市だったが、三〇年前に王国はエルバーフェルド王国（当時）との戦争（チューリップ戦争）に負けて併合された。十年程前にアインがその才能と実力から世間の注目を浴びていた頃、数々の街を守り抜いた功績から『剣聖ソードラント』と呼ばれた。しかしその後ツヴァイが入ってからは彼女の行動やアイン自身の任務優先主義で多くの街や村が犠牲になった事から、現在では『剣聖』は皮肉を込めた言われ方であり、ツヴァイはこの名を嫌う。

《ツヴァイ・ヴォルフガング》

ランク　エンペラー

称号【サントロワの死神】

身長　１６８ｃｍ

年齢　１９歳

容姿　流れるような銀髪ツインテール／血のように真っ赤な強気の赤眼

武器　ライトボウガン　［銘火竜弩］

防具　頭／Ｓ・ソルＺキャップ

胴／Ｓ・ソルＺレジスト

腕／Ｓ・ソルＺガード

腰／Ｓ・ソルＺコート
足／Ｓ・ソルＺレギンス
スキル　攻撃力ＵＰ【中】／貫通弾・貫通矢威力ＵＰ／火事場力＋２（硬守珠×１／危機珠×２／危難珠×２／危険珠×１）
剣聖ソードラント所属のＧ級ハンター。アインの妹で、兄であるアインの事が大好き。その度合は常軌を逸しており、アインを見て性的興奮を覚える程。性格は限りなく下劣で非道であり、ソードラントの悪行の大半が彼女によるもの。異常な程の破壊主義、快楽主義者であり、市街戦などの壊れる光景が大好きであり、わざと市街戦に持ち込む事も多い。狩猟中に関係のない村にわざとモンスターを誘き寄せて村を壊滅させるなど、異常とも言える問題行動を多々起こす。力を貪欲なまでに求めつつも一定の正義感を持っていたシルフィードとは気が合わない上に、大好きな兄が気にかけていた事もありシルフィードの事を毛嫌いにしている。性格は異常だが、その実力はエンペラークラスに相応しく相当なもので、かなりの猛者。再会後、またしてもアインがシルフィードに興味を持ってしまうと、嫉妬に狂い、トリィと共謀してクリュウを罠にハメてシルフィードを陥れる策略を実行する。
《トリィ・マクガイア》
ランク　ナイト
異名【死神姫】
身長　１７２ｃｍ
年齢　１９歳
容姿　月の煌めきのような金髪ショートカット／憎しみの炎色の赤眼
武器　太刀　［鎌威太刀］
防具　頭／デスギアゲヒル
胴／デスギアムスケル
腕／デスギアフォアスト
腰／デスギアナーベル
足／デスギアフェルゼ

スキル　隠密／心眼／砥石使用高速化／体力―２０（研磨珠×５／体力珠×１）

剣聖ソードラント所属の上位ハンター。かつてのシルフィードの狩友。シルフィードがソードラントに属する前、彼女と幼馴染であり片想い中だったネリス・アーネストと一時的にチームを組んでいた。しかしネリスはシルフィードに片想いしていた上に、シルフィードの独断強行的行動で命を落とした。以来トリィはシルフィードに対して並々ならぬ憎しみを抱き続けており、かつてのシルフィード同様に力に溺れてソードラントに入った。破壊主義者であるツヴァイとは基本的に反りが合わないが、その圧倒的な実力には一目置いている。シルフィードに対する憎しみという点では共通しており、シルフィードの大切な存在であるクリュウの優しさを利用してツヴァイと共にシルフィードへの復讐を企む。

《チェルミナートル・バグラチオン》

ランク　クイーン

異名【要塞（アプロート）】

身長　１８５ｃｍ

年齢　３２歳

容姿　不明

武器　ガンランス　［ブラックゴアキャノン］

防具　頭／グラビドＳヘルム

胴／グラビドＳメイル

腕／グラビドＳアーム

腰／グラビドＳコイル

足／グラビドＳグリーヴ

スキル　ガード性能＋２／防御＋３０／砲術師／鈍足（鉄壁珠×１／石壁珠×２／大砲珠×５）

剣聖ソードラント所属の上位ハンター。シルフィードが在籍していた頃からいる寡黙な男。必要以上な事は話さず、アインとツヴァイの命令を忠実に遂行する。二人の命令ならどんな悪逆無道な事でも黙ってやる。攻撃よりも防御に重点を置いた戦い方で前衛役を担う。

シルフィードの現在の戦い方は彼の戦い方を参考にしている面も大きい。アクラにある謎の国家、アクラ共生主義共和国連邦から来た。絶対的な強者が世界を平等に支配するという共生主義思想の持ち主であり、現在絶対的な強者、つまり自らが従うべき人間はアインだと思っている為彼に忠義している。シルフィード以上に現実主義者であり、クリュウの理想主義を真っ向から否定する。

第２１１話　村に迫る空前の災厄　狩人達に託された村民の想い

轟竜ティガレックスとの死闘から三ヶ月、中央大陸全体が新年を迎えてしばらく経った頃。真冬の装いに相応しく純白の雪景色へとその姿を変えた大陸北部の辺境にあるイージス村。イルファ山脈にもポポが戻り、モンスターの多くが冬眠した事で目立った事件も起きる事なく、まさに平和という言葉に相応しい長閑な日々を村人達は送っていた。

そんな平和な村において、奇妙な噂が囁かれるようになったのはここ最近の事だった。

「ラヴィーナ村に避難命令？」

ルナリーフ家に併設されるように建てられた倉庫の中で、武器の手入れをしていたクリュウ。そんな彼に訪れたツバメからもたらされたのは、思いがけない情報だった。

「うぬぅ、詳しい事はわからぬが、どうやら地域政府からの命令のようじゃ」

イージス村が属する北方地域は、西竜洋諸国のように厳格な定義によって国家が形成されてはいない。この地域一帯に存在する自治組織、つまり村や街は独自で行動している。だがそれではあまりにも不便だという事で、北方地域の村や街は共同で地域自治組織を運営し、それぞれがその組織に属する形となっている。それがアルフレアに置かれている地域政府である。定義上、アルフレア自治区と呼ばれている。国のように細かい縛りはないが、郵便や通行、流通や医療など様々な部分で結びつく事で互いの自治を維持しつつ、孤立せず、発展できる仕組み。国家に属さない村や街の大半が、こうした周辺の村や街と合同で地域政府を自治制を取っている。と言っても、利権や事情で常にこの地域という括りは変化しているので、自治区がどれほどあるのかは、未だ正確な数はわかってはいないが。

本当に小さな自治区もあれば、アルフレア自治区のように自治面積

が西竜洋諸国の国家に引けを取らない巨大な自治区も存在する。自治区が巨大であれば、それだけ何事においても便利である。そういう意味ではイージス村は恵まれていると言えるだろう。
　そんな自治組織には様々な役目があるが、その中の一つに危険な状態の村や街の住民を避難させる義務がある。その際に発せられるのが避難命令である。
「どうして？」
「どうやらイルファ雪山の天候が不安定らしい。ラヴィーナ村だけではなく、その周辺の村にも同様に避難命令が出されているようじゃ」
　ラヴィーナ村とはイルファ雪山の麓に位置する小さな村である。規模で言えばイージス村と同じくらい。イルファ雪山に入る者が身支度を整える際に訪れる村であり、クリュウ達も何度も世話になっている。
「天候が？　この時期ってそんなに不安定になるような要因はないんだけどなぁ……」
　首を傾げながら振り返るクリュウの手には今まさに油を塗って磨きを掛けている剣、煌竜剣（シャイニングブレード）が握られている。遠い異国に住む従兄妹から授けられた、大切な剣だ。
「ワシは外部から来たから詳しい事はわからぬが、イルファは今の時期は安定期なのか？」
「安定期というか、大陸風が弱いから常に雪が降るような状態ではあっても、荒れる事はほとんどないんだよ」
　大陸の上空を吹く大陸風。中央大陸に様々な恩恵や厄災をもたらす風だ。季節や天候はもちろん、未だに動力を持たない帆船などはこの大陸風を利用して海を進む。経済用語で大陸風の事を貿易風と言うのは、その名残だ。
　大陸風は季節によって強さが異なる。今の時期だと風はそれほど強くはなく、中央大陸全体がこの時期は穏やかな天候となる場合が多い。だからこそ、この時期に局地的に天気が荒れる事など、普通はありえないのだ。
「荒れる事があっても、避難命令が出るようなレベルなんて異常だよ

ね」
「うぬぅ、この村は平気かのぉ？」
　不安そうに尋ねるツバメの問いに、クリュウは笑顔で答えた。
「大丈夫だよ。この村はアルフレア自治区の中でも最東端に位置する村なんだよ？　この村に避難命令が出るような事になったら、アルフレアはもちろん自治区のほぼ全てに避難命令が出るのと同義。そんな大嵐なんて十年に一度起きるかどうかだもん。安心してていいよ」
　この村に生まれ育った経験から、そんな事は起きないと笑い飛ばすクリュウ。そんな彼の言葉に安心したのか「そうか。いや、どうやら杞憂だったようじゃな。すまんすまん」と謝りつつ倉庫を後にしたツバメ。だが彼の言葉に一度は安心したツバメだったが、倉庫から離れるに連れてその顔に難色が浮かぶ。ふと振り返って視線を向けたのは、遠くに聳え立つイルファ山脈。確かに、いつもは山頂付近は晴れているのだが、今は鈍色の雲に覆われてその姿は見えない。
「……何か、嫌な予感がするのじゃが」
　再び胸の中に渦巻く不安から表情が冴えないツバメ。気のせいだと言うのは簡単だが、どうにもそう言い切れない。嫌な予感がする、そんな気がしてならないのだ。
　ツバメの不安を他所に、イージス村は平和な時が流れていた。このままずっと穏やかなまま春を迎える。誰もがそう思っていた――だが、ツバメの不安は最悪の形で現実のものになろうとしていた。
　ラヴィーナ村に避難命令が出た後も、地域政府はさらにその避難範囲が拡大を続けた。ついには自治区区都である大陸北部最大の貿易都市であるアルフレアにも避難命令が発令。その後も避難範囲は拡大を続け、最初の避難命令発令からおそよ半月後――自治区最東端に位置するイージス村にも避難命令が発令された。
「避難命令ってどういう事ですかッ!?」
　突如ドンドルマのハンターズギルド及びドンドルマに避難して事の対処に当たっている地域政府から伝書鳩を通じて伝わった避難命令に、すぐさま村長の家には村の重役が集まって対策会議が開かれた。その中には村の村防力となるクリュウ達ハンターの姿もあった。

会議が始まった開口一番、エレナが叫んだ疑問はここにいる皆の想いそのものであった。
「我々も詳しい事は聞かされていない。ラヴィーナならともかく、アルフレアやこの村に避難命令が出るのだからもはや天候という理由では説明がつかないぞ」
胡座を組んで座るシルフィードの言葉に、バルドやアシュアなども厳かにうなずく。彼女の言う通り、天候でこれだけの範囲に避難命令が出る事はない。事実、現在イージス村は曇天の空からチラチラと雪が降っているが、荒れているとは言えない。
「村長、どういう事なんですか？」
皆を代表するように尋ねるクリュウの問い掛け。だがそんな彼の声もまた言い知れぬ不安から震えていた。
「ごめんね、僕にも詳しい事はわからないんだ。ただ、地域政府から早急に住民を避難させろって命令書が伝書鳩で一方的に送りつけられてきただけ。理由はイルファ山脈周辺の悪天候って事だけど、おかしいよね。この村はイルファ雪山からはそれなりに離れているから、それが理由とはとても考えづらいんだけど……」
村長自身、事態が呑み込めずに困惑している様子だった。その表情には焦りや疲れの色が見える。村民の安全を守るのは村長の役目だが、突然の避難命令にどうすればいいか悩んでいるのだろう。確実な理由があれば話は別だが、今回の避難命令はあまりにも雑過ぎるのだ。
「あのさ、ウチには難しい事はわからんけど……避難先とかの指示はあるん？」
全員が突然の避難指示自体に困惑する中、アシュアはその先の事について尋ねる。村長の言葉の中には避難という単語はあっても、具体的な避難先について提示がなかったからだ。
だが、アシュアの問いかけに対して村長は首を横に振った。
「……地域政府の方からは、具体的な避難先について言及はなかった。避難先については、各自治体の判断に任せるみたいだね」
村長の言葉に、いよいよ居並ぶ面々の顔に動揺が走る。避難命令に

も驚きと戸惑いがあったが、肝心の避難先の指定がないとなれば状況はさらに劣悪だ。何せ、最終的には避難を強いられるとしても、行き先未定ではどうしようもないからだ。
「付近の村に、避難民を受け入れられるような所はあるか？」
漁業組合組合長、漁師の長たるバルドの問いかけにも、村長は首を横に振った。何せ、イージス村と親交のある自治体の多くは同じ地域政府に属している。そして、それらにも避難命令が出されているのだ。近くへ逃げる事はできそうもなかった。
「じゃあ、我々はどうすれば……」
民宿を営む男の動揺に満ちた言葉に、その場にいる他の面々のざわめきも増していく。動揺が広がる村民を前に村長は慌てた様子で「で、でもこの事態にはドンドルマの方も動いてくれるらしいんだ。避難民キャンプの設営なんかも手助けしてくれるみたい」と皆をひとまず安心させられるような情報を言う。
アルフレアの地域政府はすでにドンドルマにその政府機能を暫定的に移し、そこで避難の指揮を執っている。ドンドルマ側も北部物流の拠点であるアルフレアの窮地を救うべく動いてくれているのだ。
だが、問題が改善したとは言い難い。アルフレア自治区の中には幾つもの村や街がある。それらの住民全てが避難するとなれば、その難民数は数万人にもなる。それだけの規模の避難民を、ドンドルマだけでカバーできるとは思えない。さらに言えば、避難先で村民がバラバラになってしまう可能性もある。とてもじゃないが、不安は消え去ったとは言えない状況だ。
未だ動揺が消えない村民を前に、村長は決断に渋っている様子だった。地域政府の命令に背くのはしづらい。だが、不確定情報だけで避難命令を受諾もできない。ほとほと困り果てているという様子だった。
そんな大人達を前に、クリュウ達は沈黙を続けていた。村全体の事に関わる大規模問題が前では、クリュウ達は何も言う事はできない。これまで幾多のモンスターを撃退してきたとはいえ、今のこの状況では彼らも村長の指示に従う村民でしかないのだ。

様々な場所で村民同士が話し合う。だがそのほとんどは今後についての不安の吐露でしかない。結論など出るはずもなかった。
混乱する村民を前に、村長はしばし静観を決め込んでいた。だが突如同じくフィーリア達と話し合っていたクリュウに視線を向けた。その視線に気づいてクリュウが村長の方に振り返ると、村長はその重い口をゆっくりと開いた。
「クリュウ君に頼みがある」
「な、何でしょうか？」
「――イルファ雪山の調査をしてくれないか？」
それは、三ヶ月前にクリュウ達が引き受けた際と同じ、イルファ山脈の調査依頼であった。
村人達は何事かと皆が沈黙して村長の言葉に耳を傾ける。フィーリア、サクラ、シルフィードも村長の方に向き直り、姿勢を正す。その間も、クリュウと村長の会話は続く。
「調査……ですか？」
「避難命令があったって事は、少なくとも山に何かの異変が起きているんだ。でもそれが明確に村に悪影響を及ぼすと判断できないと、僕としては避難命令には従えない。避難中の村民の生活を守るのも村長の役目。どちらのリスクの方が大きいか、明確に判断しないといけない」
村長として、避難命令に従って避難する事は簡単だ。だが、同じく村長として村民の生命と財産、そして生活を守る義務もある。避難する事、日常とは違う生活を行う事もリスクなのだ。村民に高過ぎるリスクを与える訳にはいかない。村にはお年寄りや子供も多く、特にリスクを考えなければいけない。
「だからこそ、今山で何が起きているのか知る必要があるんだ。避難するに値する異変があれば当然避難するさ。でも、村に影響がないレベルであれば警戒はしても避難準備に留めておこうと思う。その判断材料を、君達に集めて来てほしいんだ」
それが、村長の依頼だった。
本当にイージス村の村民が避難するような危険が、今イルファ雪山

で起きているのか。それを調査して来て欲しいと言うのだ。
そんな村長の頼みに対し、フィーリア達の表情は冴えなかった。なぜなら、三ヶ月前の調査と現在は状況がまるで違う。内容や緊急度の違いもあるが、最も大きな違いは季節にある。
前回のイルファ雪山の調査の時期は秋だった。だが今は真冬である。冬の雪山はその山に慣れた人でも命を落とす危険性だってある。事実、イルファ雪山は一ヶ月以上もの間冬恒例の閉山を行っている。特別な許可がなければ入山すらできないような状況だ。
フィーリア達はもちろん、地元に住んで長いクリュウでさえ冬のイルファ雪山には入った事はない。しかも麓の村などに避難命令が出ている程の悪天候だ。その中に突撃して調査を行うのは、あまりにも危険過ぎた。
フィーリア達の考えもわかっているのだろう。村長は無理強いはしなかった。
「冬の雪山が危険な事は、僕も重々承知している。だからこそ、無理強いはしないよ。だから頼んでいるんだ。無理だと判断するなら、僕は避難命令に従って村民全員を――このイージス村から避難させる」
村長の強い決意を前にしても、フィーリア、サクラ、シルフィードの三人の表情は曇ったままだ。ハンターは別に命を懸ける事が仕事ではない。危険な仕事だと思えばいくら金を積まれても動かない。そういうものだ。しかも今回はほぼ無償での依頼となるだろう。もしもの場合には、いくら資金があっても足りないのだから。
だからこそ、三人はクリュウの答えを待っていた。最終的に、自分達の行動を左右するのは彼の決断だ。
皆の視線が集中する中、クリュウは一人しばしの間考え込んでいたが、ゆっくりと伏せていた顔をゆっくりと上げる。
「……わかりました。その調査依頼、引き受けます」
その返答は、ある種この場にいた全員が予想した通りのものであった。彼の性格を考えれば、村が困っているのだから立ち上がる。心優しい彼らしい選択だ。だからこそ、フィーリア達も彼の返答はわかっていた。誰も驚きはしない。むしろ、そんな彼の優しさに笑みすら浮

かべている。
　すると、ゆっくりとクリュウは振り返ると、背後に座っていたフィーリア達を見回す。
「って、勝手に決めちゃったけど……あの、冬の山は本当に危険だからさ、みんなは無理してついて来なくてもいいんだよ？」
　申し訳なさそうに言う彼の言葉もまた、三人は予想していた。だからこそ誰も驚きはしない――誰も、首を横には振らなかった。
「何を言っているんですか。私達はクリュウ様と一蓮托生ですよ。ついて行くに決まっているじゃないですか」
　心外だとばかりに頬を膨らませて怒るフィーリアを皮切りに、サクラも「……私はクリュウにどこまでもついて行く」と短く言葉を続け、シルフィードも「君だけ行かせる訳にはいかないよ」と苦笑を浮かべながらついて行くと言う。
　三人の優しい言葉に、クリュウは照れながら「あ、ありがと」と礼を述べる。
「……では、ワシはまた待機じゃな」
　そう言って自ら身を引いたのはツバメ。その隣に座るオリガミも「仕方ないニャ」と慣れた様子。クリュウが申し訳なさそうに謝ると、二人とも気にするなとばかりに笑みを浮かべる。
「なぁに、村に残って村を守る役目も必要じゃろうて。そう気にするでない」
「ごめんね」
「気にするニャよ」
　ツバメとオリガミの笑顔に励まされ、クリュウは改めて村長に向き直ると、改めて調査依頼を引き受ける事を宣言する。そんな彼の言葉に村長は笑みを浮かべながら礼を述べた。
「それじゃ、早速で悪いんだけど明日にでも出発してもらえるかな」
「わかりました」
　かくして、クリュウ達は三ヶ月ぶりにイルファ雪山の調査へと出撃する事が決定したのだった。
　その夜、事前準備を終えた四人はエレナの酒場に集まって早めの夕

食を取っていた。
　それぞれが注文した料理を食べながら会話を弾ませる。と言っても、話題は自然とイルファ雪山の異変に流れていく。
「イルファ雪山の異変ねぇ……」
　頬杖をしながらどうにも現実味のない展開に困惑するエレナ。イージス村は嵐に備えて様々な工夫が施されている。水路は生活用水を供給する以外にも雨を流す為の雨水路になるし、積雪に備えた家は頑丈で、嵐程度の風でどうにかなるようなものではない。もしもの場合は、村自体が切り立った崖の上にあるので村の下にある崖下から村へと上る道などに利用されている洞窟の中に防災豪が設営されているのでそこに逃げればいい。
　イージス村の防災対策は村の規模に比べて非常に高い水準だ。村長が村の資金を多額に投入しているからだ。おかげで未だに道路を舗装できないと村長は笑いながら言っているのだが、おかげで村民は今日まで安心して村に住む事ができた。
　イージス村の防災対策レベルの高さは地域政府も理解しているはず。なのに、その地域政府が避難命令を出した。いったいどれほどの大嵐か想像できない。しかも村の上空は曇っていても嵐を感じさせないので尚更だ。エレナのように、現実味を感じない村民も少なくはない。
「単なる嵐とは、違う気がするな」
　そう言うのはシルフィード。夕食と言いつつも、その前に置かれた食器の上には茹でた七味ソーセージ、西国セロリのレモン漬けといったいわゆるツマミが盛りつけられ、彼女の手にはキンキンに冷えたフラヒヤビールの入ったジョッキが握られている。その中身はすでに半分程なくなり、頬はほんのりと赤らんでいる。判断力を失う程ではない、いわゆるほろ酔いという状態だ。
「確かにイルファ山脈の方角には鈍色の雲が特に濃く居座っている感じがある。だが、どうにも嵐と言うには穏やか過ぎる雲な気がする。私は気象の専門家ではないが、あの雲でそれほど強い嵐ができるとは思えない」

「僕も同感だよ」
　そう言って彼女の意見に同意するのはクリュウ。サイコロミートのステーキに砲丸レタス、レアオニオン、シモフリトマトに少しだけワイルドベーコンとクルトンが加えられ、特性のシーザードレッシングをかけたサラダ、ココット米の並盛りというサイコロステーキセットを食べ終えた彼もまた氷樹リンゴジュースを飲みながら難しい顔で考える。
「この時期の風向きは確かに東向きだけどさ、アクラ地方から来る寒波はそれこそイルファ山脈が壁になってくれてるから、山を越えた空気は雪は降らせても荒れる事はほとんどない。冬のイージス村は雪は多くても穏やかなんだ。それが、今年に限って大嵐になるなんて事、あるのかな？」
　クリュウ自身も気象に詳しい方ではないが、それでも地元に住む者として今回の避難が必要な程の嵐には疑問を抱かずにはいられない。そんな彼の言葉にエレナも「確かに、この時期は雪はすごくても風は穏やかなのよねぇ。正直、嵐って言われてもピンと来ないわ」と頬杖を解いて腕組みしながら考え込む。
「……考えても仕方がない。行けばわかる」
　一方、たてがみマグロ丼を平らげたばかりのサクラは特に考え込む事もなく、淡々と引き受けた任務を完遂すべきだと主張する。ここで考えていても仕方がない、百聞は一見にしかず。行って見ればわかる、というのが彼女の考えだ。考えるよりも先に行動する。実に彼女らしい。
「まぁ、それはそうだけどさ。っていうかフィーリア、あんたさっきから何してる訳？」
　サクラの意見に一部納得したエレナ。話が一区切り終わった所で、話題を変えるようにして彼女は先程から黙って何かを書いているフィーリアに声を掛ける。食事も北風みかんジュースとワイルドベーコンと砲丸レタスのサンドイッチを二つ食べだけで、ずっと黙々と筆を走らせている。
「あ、はい。ちょっと実家の方に手紙を書いていまして……」

フィーリアの実家は大陸最強の陸軍を有する軍事大国、エルバーフェルド帝国の一等貴族、レヴェリ公爵家である。王家に近しい家系で、王国時代から政府に対して物言いができる数少ない貴族の一角を担う貴族家。彼女はそんな大貴族の娘、いわゆるお嬢様なのである。
「レヴェリに？　何かあった訳？」
「いえ、ちょっとお父様にお願いをしようと思って」
「お願い？」
「――村の人達の避難先に、レヴェリの領地を提供してもらうようにと」
筆を置いて答えたフィーリアの言葉に、誰もが驚きを隠せなかった。シルフィードに至っては食べようとしていた食べようとしていたソーセージを落としてしまう程だ。
「村民を、レヴェリに？」
「はい。避難先の選定に苦慮されているようなら、レヴェリの領地に避難していただこうかと。もちろん、避難中に不自由なく暮らせるよう支援についてもお父様にお願いするつもりです」
「いや、気持ちは嬉しいけどさ……いくら何でもそこまでは……」
フィーリアの気持ちと申し出は、クリュウにとって言葉にできないくらい嬉しかった。だがいくら何でも今回のその提案はあまりにも大き過ぎる。イージス村の人口は百数十人。それだけの人数を避難させ、且つ生活の支援までもらうとなれば、莫大な金額が必要となる。相手はフィーリアの父親とはいえ、クリュウ達からみればほとんど他人のような人だ。そんな人に、そんなお願いは正直できない。だが、
「今は非常事態です。可能な手段があるなら、惜しみなく使うべきです。それに、私にとってこの村は第二の故郷みたいなもの。そこに住んでいる方々も家族のような存在です――私としても、皆様の事を守りたいんです」
真剣な眼差しで語る彼女の言葉に、誰も返す言葉がなかった。その必死の視線から、彼女の本気を感じ取ったからだ。村の為に全力を尽くしている。彼女の言う通り、今は使える手段があるなら惜しみなく使うべき状況なのだ。

「あの、ありがと。僕が言うのもおかしな話だけどさ」
　別に自分は村の代表ではない。でも、村民の一人として彼女にお礼を言いたかったクリュウ。頭を下げて礼を述べる彼に対し、フィーリアは笑顔で返す。
「お礼なんて言われるような事はしていません。私は、自らの家族を守りたいだけなんですから」
　そう言って微笑む彼女の姿に、その場にいた者全てが救われた事を、彼女は知らないだろう。皆、先の見えない状況に多かれ少なかれ不安を抱いていた。その不安を少しでも拭う事のできる提案をフィーリアが行ったというのももちろんある。だが、こんな状況においても笑顔を忘れず明るく振る舞う彼女の姿に、皆心が救われたような気がしていた。
「お父様から正式な返答がない段階では村長様に報告するのはやめておきましょう。おそらく大丈夫でしょうが、仮に無理だとなった際に期待を裏切る事になりますから」
「そうだな。今村長はかなりいっぱいいっぱいの様子。これ以上負担を掛けるような事は避けるべきだろう」
　ひとまず村長にはフィーリアがレヴェリに避難要請を出した事は伏せるとして、ひとまず大きな問題は一つ片づいたと言えるだろう。村から避難するというのは最後の手段にしておきたいが、それも今度の調査で決定する。そう考えると、自然とクリュウの表情も険しいものになる。自分の判断が、村民全ての避難という大きな決断の判断材料になるのだ。
　責任重大。自然と険しい表情になる四人を前に、エレナはわざとらしくうため息を零す。
「つたく、せっかくお父さんとお母さんが久しぶりに帰って来るってのに……」
「え？　おじさんとおばさん、帰って来るの？　っていうか、おばさんの具合は良くなったの？」
　驚くクリュウの問いかけに、エレナは嬉しそうに微笑みながら「ガリアでたっぷり療養したから、お母さんの体調がすごく良くなったの

よ。それで、また村に戻って来る事になったのよ」と嬉しそうに語る。エレナは両親とここ二年程会っていない。手紙のやりとりは続いていたが、会うのは久しぶりだ。それもまたこの村で暮らすというのだから、嬉しさも相当なものだろう。だが――

「――その矢先に今回の騒動が起きちゃったのよね。せっかくまた二人と一緒に暮らせると思ったのに……」

残念そうに、ひどく落ち込むエレナを前にクリュウは掛ける言葉を見つけられないでいた。すると、落ち込む彼女の肩をシルフィードがそっと叩く。振り返るエレナのどこか哀しげな瞳を前に、シルフィードは頼もしく微笑んだ。

「まぁそう気を落とすな。まだ避難が確定した訳じゃない。私達の調査での報告を考慮して最終判断が出されるのだからな。君の期待に応えられるよう、私達もがんばるさ」

そう言ってシルフィードはエレナの頭をグシグシと少々乱暴に撫でる。髪を乱されたエレナは「わ、わかったから手を放しなさいよッ」と怒る。シルフィードが腕を引っ込めると、エレナは抗議するような眼差しで彼女を見詰めながら髪を正す。そんなエレナの姿を見てシルフィードは口元に笑みを浮かべる。

「っていうか、本当に大丈夫な訳？　冬のイルファは危険なのよ」

乱れた髪を整えながら尋ねるエレナの声には心配の色が込められていた。冬のイルファ雪山が危険な事はエレナだって知っている。そこへ調査依頼とはいえ入山するクリュウ達の事を、心配しているのだ。

エレナの問いに対し、クリュウは「まぁ、無理はしないつもりだよ。心配してくれてありがと」とエレナを心配させまいと笑みを浮かべる。

「ば、バカッ。別にあんたの事なんか心配してないわよッ」

頬を赤らめながら怒るエレナの反応にシルフィードの口元に笑みが浮かぶ。だがそれも一瞬の事で、すぐに表情を引き締めるとクリュウ達を見詰める。

「エレナの言う通り、冬のイルファ雪山は危険だ。いつも以上に準備

を万端として挑むぞ」
　シルフィードの言葉に、三人は厳かにうなずいた。話題は自然と調査依頼のものへと変わって行く四人を前に、エレナは無言で台所へと入ると、そこの裏口から外に出る。裏口には様々な食材が入った木箱が置かれていた。この時期のイージス村は寒いので、冷蔵庫を使わなくてもこうして冷蔵ができるのだ。その中からとっておきのジュースを手に取ると、再びホールへと戻る。話し合いをする四人のテーブルに、途中の台所で手に入れた四つのコップと一緒にジュースの入ったビンを置く。
「これ、私のおごりよ。これでも飲んで気合い入れなさい」
　そう言って彼女が差し出したジュースを見て、クリュウは笑みを浮かべた。
　それはクリュウが好きで、エレナが無理して仕入れてくれているジュース。可愛い後輩の故郷、アルザス村の名産品のグレープジュースだ。
　フィーリアが注いだグレープジュースを飲み干したクリュウは気合いが入った様子で、そんな彼のやる気に触発された三人と共にその後も会議が続き、夜は更けていった……
　翌朝、クリュウ達は村のターミナルにいた。必要な荷物を竜車に積載し終えたクリュウ達を見送る為に、村へと続く崖下の入口には多くの村人達が集まっていた。その表情は皆期待と不安に満ちており、それだけクリュウ達の調査内容が重要なのかが見てとれる。
「心配しないで。お姉ちゃん達がんばるから」
　集まる子供達を前に彼らの不安を拭い取るフィーリア。村でクリュウに次いで人気のあるフィーリアお姉ちゃんの言葉に子供達にも少しずつ笑顔が戻っていく。詳しい事はわからなくても、村に何かが起きている事くらいは彼らもわかっているのだ。それでも、フィーリアの言葉を信じて笑顔を取り戻す子供達を見て、クリュウの口元にも自然と笑みが浮かぶ。
「アシュアさん、いつもいつも急ですみません」
「気にせんでええよ。あんたらはウチにとってお得意さんやから

ねぇ。それに、村の為だと聞いちゃウチにもできる事がんばらんとねぇ」
　そう言いながら笑みを浮かべるアシュアは、髪はボサボサで目の下には隈が浮かんでいる。明らかに寝不足の証だ。
　昨日の対策会議に出席していたアシュアは、クリュウ達が雪山に調査依頼へ行くと知ると彼らに武具の調整を申し出た。万全の状態で挑んで欲しいという彼女なりの気遣いだったのだろう。それに甘え、クリュウ達は武具を彼女に預けた。そして先程、調整が終わった武具を預かって装備した所だ。徹夜して間に合わせてくれた彼女には感謝の限りだ。
「お兄ちゃん……」
　アシュアの傍にはリリアが不安そうな目でこちらを見詰めていた。クリュウは彼女を安心させるように笑みを浮かべると、彼女の頭を優しく撫でる。
「リリアもありがとうね。ホットドリンク融通してくれて、助かっちゃった」
「私も、村の為に何かしたくて……」
「うん、わかってるよ。ありがと」
　それはクリュウの心からの言葉だった。リリアもまた、無理をして色々と道具（アイテム）を融通してくれた。特にホットドリンクの無償提供はありがたく、クリュウ達の装備が万全なものになったのは彼女のおかげと言っても過言ではなかった。
　クリュウに頭を撫でられ、不安に満ちていたリリアの顔にも笑みが浮かぶ。無邪気に微笑む彼女を見て、クリュウもまた、改めてこの村を守りたいという気持ちが強くなる。この笑顔を守る為にも、自分にできる事に全力を注ごう。心からそう思った。
「まぁ、留守は任せておくのじゃ。何があっても、ワシとオリガミで対処してみせるのじゃ」
「大船に乗った気でいるニャ」
　留守中村を守るツバメとオリガミの言葉にクリュウはうなずき、手を伸ばす。その意味を悟ったツバメもまたうなずくと、そっと手を差

し出す。二人は無言のまま、ガッチリと握手した――お互いを信じ合いながら。
　オリガミとも握手を済ませたクリュウは最後にこれまでずっと黙っていたエレナに視線を向ける。視線を向けられたエレナは無言のまま群衆の中から前に出て来る。
「行って来るね、エレナ」
「うん……。あの、これ」
　言いづらそうに小さめな声で彼女が差し出したのは、小綺麗な布に包まれた物。何だろうと受け取ると、中からはいい匂いが漂って来た。その匂いで、その正体に気づく。
「これって……」
「お、お弁当よ。あんた達朝早くに出て行くって言うから、どうせ朝ご飯食べないと思って作っといたのよ。道中、お腹でも空いたら食べなさい」
「あ、ありがと……」
「アシュアやリリアと違って、私にできる事はこれくらいしかないけど――私も、村の為に少しでも力になりたい。これは、その一環よ」
「そっか……」
　エレナの言葉に、クリュウは改めて気づかされる。
　村最大の危機に今、村人達の心は一つになろうとしている。自分達のできる事を、全力でやろうという想いに満ち溢れていた。皆、村の為にがんばっている。そんな皆の期待を受けている自分達もまた、全力でがんばらないといけない。そんな想いが、胸の中いっぱいに広がっていく。それはきっとフィーリアとサクラ、シルフィードも同じだろう。
「では村長、行ってくる」
「うん、任せたよ」
　シルフィードが村長に挨拶を済ませると、三人も村人に別れを伝えて竜車に乗り込む。それを確認すると、シルフィードはアニエスの手綱を引っ張った。短い鳴き声を上げて、アニエスがゆっくりとした足取りで動き出す。連結されている竜車の車輪も、ガタゴトとゆったり

とした速度で回り始め、進み出す。
幌の後ろ側の開かれた部分から顔を出したクリュウとフィーリアは、手を振って見送ってくれる村民達に応えるように大きく手を振る。幌の中ではすでにサクラが隅に陣取って目を閉じ、静かに鎮座している。彼女鳴りの精神集中だ。
運転席では後ろから聞こえて来る村人達の激励と期待の声に背中を押されるような感覚を抱きながら、シルフィードが手綱を握っている。これからイルファ山脈までは片道で五日程の道のりだ。一日の調査を入れ、多めに見積もって次に村に帰るのは約二週間後と言った所だろう。その間、村民達が不安を抱き続けるのだと想うと、できるだけ早く戻りたいとも思う。だがアニエスに負担を掛けない為にも、何より逸る気持ちを抑えなければ常の力は発揮できない。気持ちの空回り程、本調子を狂わす要因はない。
「イルファ山脈か……」
遠くに見えるイルファの山脈には相変わらず重苦しく厚い鈍色の雲が居座っている。あの雲の下で一体何が起きているのか。それは誰にもわからない。自分達の役目は、そんな山に足を踏み入れてその実状を調査する事にある。
手綱を握りながら雲で見えぬイルファの頂を見詰めていたシルフィード。村の運命を背負っているという事もあるが、いつになく胸騒ぎがしてならなかった。
「……嫌な感じがする。何も起きなければいいんだがな」
不安が胸の奥に渦巻くのを感じながら、シルフィードは手綱を握り続ける。
先日のティガレックス襲撃の際のような、予想外の事態が起きない事を祈り続ける。
だが言葉にできない不安を抱いているのは、彼女だけではなかった。幌の中にいる三人も、村人達の姿が見えなくなると、自然と話題はこれから向かうイルファ雪山の現状についてのものに変わっていく。
「地域政府が避難命令を出す程深刻だとすれば、天候は最悪だよね」

「そうですね。吹雪は体感温度を著しく下げますから、かなり厳しいかと思います」
「……視界も著しく制限される」
イルファに限らず、冬の雪山は危険な場所である。年で最も気温が低いという事もあるが、天候も荒れる事が多く、吹雪で視界も封じられ、積雪で道を塞がれたりなど、地元の住民ですら入山を控えるような場所もある。イルファ山脈はそういった山々に比べれば温厚な山ではあるが、それでも地域政府が避難命令を発する程の嵐だとすれば、天候は最悪と言えるだろう。そんな中で山へと突入するのだから、万全の準備を整えて挑まなければならない。
「それでも、村の運命が懸かってるんだ。行かなきゃいけないんだ」
まるで自分に言い聞かせるように呟きながら、クリュウはギュッと拳を握り締める。その表情はいつになく厳しく、村の運命を背負っているという強い想いと責任感が表れている。そんな彼の真剣な表情を前に、二人も厳かな表情のままうなずく。
これは彼の問題だけではない。イージス村は自分達にとっても第二の故郷のような場所だ。守りたい場所だし、守りたい人達がいる。これまでのように、あの村で幸せな日々を送りたい。それはこの場にいる四人、そして村にいる村人の総意だ。
なぜ地域政府は避難命令という異例の命令を下したのか。そしてそれはイージス村に悪影響――村民の全避難という事態に直結するようなものなのか。全ては、あの氷と雪に支配された山にある。
四人の少年少女達は言い知れぬ不安を抱きながら、慣れ親しんだはずなのに不気味に見えるイルファ山脈を目指して出発した。

第２１２話　雪嵐怒涛　嵐天より舞い降りし厄神と狩人達の邂逅

イージス村を出発してから四日目の夜、一行はイルファ雪山の麓町であるラヴィーナ村へと到着した。だがそこは常の活気はなく、人々の往来もなければ人が生活を営んでいる証である明かりもない。まるでそれはゴーストタウンのような、無人の村となっていた。

いつもならポポに荷車を引かせた商人や村民が往来する村のメインストリートにも、アイルー一匹すらその姿を見る事はできない。ここは全ての村民がすでに避難を終えた、無人の村と化していた。

「……人がいなくなった村って、こんなに寂しいものなんだね」

無人の村と化した、慣れ親しんだはずのラヴィーナ村を前に、クリュウは悲しげに呟いた。その言葉の裏には、もしかしたらイージス村もこんな風になってしまうのでは。そんな不安があった。彼の不安を感じ取ったフィーリアがすかさず「大丈夫ですよ。イージス村の人達が安全に村に住める証を見つければいいんですからッ」と励ます。そんな証拠がある確証はないし、彼の不安は的中してしまうかもしれない。そんな事はこの場にいる全員がわかっていた。それでも、フィーリアは例え嘘になってしまっても、こう言うしかなかった。否、こう断言したかったのだ。

フィーリアの言葉と想いに、クリュウは笑みを浮かべて「そうだね。その為に、僕達はこの山に来たんだから」と言って、前方に広がるイルファ山脈を見上げる。その笑顔はいつもの彼らしくない、作り笑顔だ。本当は笑えるような状況ではない。でも、仲間に不安を与えないように努めている。そんな事、この場にいる乙女三人はとっくに気づいている。とっくに気づいていて、彼のその優しさに胸を打たれた。

「……麓の天気は雪。山頂付近は、確認できない」

ラヴィーナ村の上空には厚い雲が覆っており、星空は確認できない。チラチラと降り積もる雪は吹雪とは言えない程に穏やかだが、住民の消えた村は除雪する人もいない為、道は厚い積雪が覆い隠し、屋

根の上にも雪が積もっている。そして肝心の山頂付近は暗くて確認する事ができなかった。
「しかし、妙だな……」
そう言って辺りを見回したのはシルフィード。その目線は放棄された家屋に注がれているが、その視線は疑念に満ちていた。だがそれは彼女だけではなく、この場にいた全員共通の意見だった。
「ラヴィーナ村の避難理由って、嵐って聞いてたけど……そんな様子はないよね」
クリュウの言う通り、ラヴィーナ村の家屋は雪で白く染まってはいるが、全く損壊している様子はなかった。それどころか天気も雪がチラチラと降っている程度で風は穏やか。とてもじゃないが嵐とは言い難い天候だった。
「……やっぱり、地域政府は何かを隠している――あの山に、何かある」
そう言ってサクラはイルファ雪山を見上げ、それに習うように他の三人も一斉に山を見上げた。そこには曇天の空をバックに、どこか不気味なイルファの山が聳え立っていた。
「やはり、行ってみなきゃわかりませんよね」
雲で見えぬイルファの頂きを窺いながら、フィーリアも厳かにつぶやく。そんな彼女の言葉に静かにうなずき、クリュウは雪の上に一歩を踏み出す。
「――行こう。山で何が起きているのか、調べなきゃ」
彼の言葉にうなずき、一行は再び竜車に乗って進み出す。本来ならこの村でアニエスを預けてポポを借りて山入りをするのだが、村民の避難に使われたのかポポは残っていない。予想していた通りの状況で、クリュウ達はアニエスに特製の上着を付けて防寒対策を整えた上でイルファ雪山へと向かう。その道中も、彼らは誰ひとりとも会う事はなかった。
拠点（ベースキャンプ）に到着した一行はいつもの通り竜車をそのまま天幕（テント）代わりにして設営を終えると、道具類の確認に入る。調査依頼の為に用意された支給品は最低限しかないが、それぞれ

が必要と思われる装備を持参し、装備は万全だ。
ガチャリと音を立て、ハートヴァルキリー改に通常弾ＬＶ２を装填したフィーリアはガンベルトなどを確認して自らの準備を確認する。呼吸するたびに白い息が空に溶ける程の寒さでも、彼女は震える事なく毅然と振る舞う。
サクラもまたその場で基礎的な太刀捌きで飛竜刀【紅葉】を振るう。凍てつく空気を焼き払う炎撃に一つうなずくと、静かに鞘に刀を戻す。
シルフィードはすでに準備を整え、地図を片手に今後の行動を熟慮している。調査依頼とはいえ、前回のティガレックスのような事もないとは言い切れない。どう動くのが最善か、リーダーとして考えている。
そしてクリュウは、一人サクラと同じように基礎的な剣捌きを練習する。踏み込みと同時に突きの一撃を入れ、すかさずバーンエッジの刃を翻して横へ薙ぎ、その動きを殺さずに大振りに剣を右から左へと振り下ろし、今度は反対に左から右へと薙ぎ、最後はその場で軸足を中心に身を翻しながら剣を薙ぎ払うようにして振るう回転斬り。ひと通りの動きを練習し、十分に体が温まった頃には全員の準備が完了していた。
「それでは、これよりイルファ雪山へと入山する。今回は四人で行動するものとする」
シルフィードの指示に、反論する者はいなかった。前回は調査内容をより精度を高めつつ効率良く山を調査する為に複数の小人数の班に分散した。その結果、クリュウとサクラは轟竜ティガレックスと遭遇して被害を受けた。今回はそういった想定外の自体に備えて、多少効率が落ちても万全の構えが取れる四人一隊（フォーマンセル）をシルフィードは採択した。
「今回は荷車はない。その為、フィーリアを中心に先頭を私。右後方をクリュウ、左後方をサクラが進む形の陣形（フォーメーション）で進む。異論はないな？」
反対意見はなかった。皆納得したようにうなずき、シルフィードの

指示に従う。それを見てシルフィードはうなずくと「それでは、出発する」と言って先頭を歩き出す。それに続いてフィーリア、クリュウ、サクラの順で四人は拠点(ベースキャンプ)を出発した。陣形(フォーメーション)はフィーリアを中心とした三角形を描く三角陣形(デルタフォーメーション)。普段は荷車を引いているクリュウを中心とした陣形(フォーメーション)であるが、今回は接近されると弱いガンナーであるフィーリアを守る形で剣士三人が配置されている。

片手剣使い及びランス、ガンランス使いは攻撃重視型と防御重視型で構えが変わる。攻撃重視型の場合は利き手に剣を持ち、防御重視型は逆に利き手に盾を持つ。クリュウの場合は前者であり、右手に剣を持ち左手に盾を持っている。なので通常の場合クリュウは左側に配置するのが理想だが、今回クリュウは右側に配置されている。これはサクラが隻眼である事に関係しており、彼女は左目を失っている為、彼女を右側に配置する事が優先され、結果的にクリュウが左側に配置される事となった。これがシルフィードの考えた最善の陣形(フォーメーション)だった。

まず最初にエリア1へと入った一行の目の前には、すっかり真っ白の雪景色に染まった川辺が広がっていた。いつもならわずかに草が生えていてポポがそれを食む光景が見えるのだが、真冬ともなるとそれらの草も雪の下にその姿を消してしまい、ポポもまた食事場所を変えているのか姿は見えなかった。

「……寒い」

ハァと白い息を吐きながら身を震わせるサクラの一言に、隣を歩くクリュウがうなずく。その彼も寒そうにディアブロシリーズの下で身を震わせていた。

「ちょっと早いけど、これはホットドリンク飲んだ方がいいよね」

「そうだな。予定外だが、この寒さは敵わん。全員ホットドリンクを飲んでおけ」

真冬のイルファ雪山はエリア1でもすでにホットドリンクが必要な程に気温が低いらしい。シルフィードの指示に従い全員が予定よりも早くホットドリンクを飲み、寒さに備える。慣れ親しんだはずの

山も、季節が違うだけで全く状況が異なるという事を早速身を持って知った四人は改めて警戒しながら山頂を目指して山を上って行く。
だが、エリア2に入ってもそこにはガウシカの姿も見られなかった。そこで初めて先頭を歩いていたシルフィードが足を止めた。ゆっくりと振り返った彼女は「やはり妙だな」とつぶやく。
「サクラ、君はこの状況をどう思う？」
話題を振られたサクラは憮然とした様子を崩す事なく淡々と「……轟竜の時と同じ雰囲気」と簡潔に答える。だがそれはこの場にいた全員が感じていた事で、皆の意見と共通していた。
以前轟竜ティガレックスがこの山に居座った際、四人は勇猛果敢に挑みこれを討伐した。その際、ティガレックスを恐れてか草食モンスターはいずれも姿を消していた。草食モンスターは気配にとても敏感であり、狩場に住まう天敵の気配を感じて身を隠す習性がある。今の状況は、ティガレックスの時とあまりにも酷似していた。
不気味な程に静かな山。それを前にしたクリュウ達はそれとは反対に胸が騒いで仕方がなかった。やはり、この山で何かの異変が起きている。それはいよいよ確信へと変貌しようとしていた。
「気を引き締めて行くぞ」
エリア2の奥の方にある坂を登った先にある、洞窟であるエリア4へと通ずる入口の前に到達した一行に振り返ってシルフィードはそう言うと、緊張した面持ちのまま洞窟の中へと入る。クリュウ、フィーリア、サクラの三人もそれに続く。特にフィーリアはすでにハートヴァルキリー改を構え、突然の奇襲攻撃に備えている。サクラとクリュウもそれぞれの武器の柄に手を当てながら、ゆっくりとした足取りで進んでいく。
そんな仲間達の緊張を背中に感じながら、自らも警戒を怠る事なくゆっくりとした歩みで進んでいくシルフィード。いつになく緊張の糸を引き締めながら、一行はエリア4を抜ける。途中にギアノスの奇襲を受ける事もなく一行は無事にエリア7へと至る。
出口が見え、ゆっくりとした足取りで抜けると、そこは山の斜面にできた平地。片側を崖が、その反対を険しい山肌が聳える形のエリア

7。快晴であればここから眼下にきれいな景色を見る事ができるのだが、生憎天気は荒れていた。動きを制限される程強い訳ではないが、横風が吹き荒れ、空から降る雪もその風に流されてゴォゴォと音を立てて横殴りに地面に落ちる。所謂吹雪と言うに相応しい悪天候だった。

「くそぉ……やはり山頂付近はこうだったか」

予想していた通りの悪天候にシルフィードは顔の前に腕を構えながら舌打ちする。後続の三人も吹き荒れる風に一瞬動きを止めるが、目を凝らして辺りを調査する。風はいつにも増して冷たく、ホットドリンクを飲んでいるはずなのに体中の血が凍ってしまいそうな程に寒い。

クリュウは盾を風上に向けながら顔を守るようにして風下を見回す。足元はいつにも増して積雪しており、正直かなり歩きづらい。それでも足場をしっかり確認しながら歩く一行は周囲を調査し続ける。

「……何もいない」

サクラがポツリとつぶやいた言葉に、シルフィードはうなずく。

「天気は確かに悪いが、別段変わった点はないな」

「でも、麓はこんなに荒れてなかったよね。山頂付近が荒れているのは仕方ないにしても、これでラヴィーナ村はともかくイージス村が避難対象になるとは思えないんだけど」

「ただ、確かに天気が悪いにしても一匹もモンスターと遭遇しないのはやはり妙かと」

四人は吹雪の中話し合いを続けるが、現状の情報だけでは判別できないとの結論に至る。確かに山に異変が起きている事は何となくわかるが、明確な原因は不明だった。明らかにする為には、

「……山頂を目指す他はない、か」

山頂を見上げ、ため息を零すシルフィード。山頂手前でこれほど荒れているなら、山頂の天候は最悪だ。風や雪もさる事ながら、普段よりもグッと寒い風が体温を奪う為、気力も削がれる。ホットドリンクを飲んでこれなのだから、もしもなかったらたちまち凍え死んでしまうかもしれない。冬の山を舐めていた訳ではないが、予想以上に厳し

い。
「行くぞ」
シルフィードの掛け声と共に、一行の進撃が再開される。目的地は山頂のあるエリア８。気を引き締めて歩みを再開する一行の中、クリュウもまたゆっくりとした足取りで雪を踏み締めて歩みを続ける。
その時、
「ん？」
遠くに一瞬何かが光るのが見えた。クリュウは「ちょっと待って」と言い残してその光った物を目指して隊列を離れる。どうしたのかと怪訝そうな顔でこちらを見やる三人を背に、クリュウは目的の物を拾い上げた。
「……何だこれ？」
それは、見た事もない異物だった。原型を留めない程にまでサビついた鉄片。腐食が激しく、全体がサビてしまっていて中を窺い知る事はできない。明らかにスクラップと言っていい品だった。
「これ、何だろ？」
集まって来た三人に見せても、いずれも首を横に傾げた。どうやら三人も見覚えがないようだ。というか、ここまでサビてしまっては原型がわからないのも無理はないが。
「……ただのゴミよ」
サクラは興味を失ってそう言い捨てるとスタスタと歩いて行ってしまう。フィーリアも「別段何か特別な意味がある品にも見受けられませんね」と言い残して勝手に歩いて行ってしまうサクラを追う。
「……うーん、ただのゴミかなぁ」
だがクリュウはどうにもしっくり来なかった。ここは輸送ルートからも外れた山である為、普段商隊が入る事は少ない。竜車の部品の一部、商品の一部といった線は薄いだろう。そしてここは山の上だ。風で飛ばされて来たという説は成り立たない。だとすれば、これは一体どこから来たのか。全く想像がつかなかった。
一方、彼の持つ謎の朽ちた鉄片を凝視していたシルフィードは、難しい表情を浮かべていた。それに気づいたクリュウが声を掛けると、

シルフィードは険しい顔のまま「……昔、これに似たような物を見た記憶があるのだが、思い出せないんだ」とつぶやく。
「そうなの？　だったら、何か思い出したら教えて。手がかりになるかもしれないから」
「善処しよう」
　いつの間にかかなり先まで行ってしまった二人を追ってクリュウとシルフィードは歩き出す。道具袋（ポーチ）の中に朽ちた鉄片を入れたクリュウは遠くで自分を呼ぶ二人の姿に苦笑しながら小走りで進む――その背後を、謎の影がゆっくりと通過した事に気づく事もなく……
　山頂があるエリア８はイルファ雪山が死火山であり、古の頃に大噴火を起こした事実を感じさせるカルデラ地形となっており、周りを壁に囲まれたまるで闘技場のような形状のエリアである。東側が最も高く、正確にはその上に山頂があり、専用の装備があれば登る事はできるが、クリュウ達の目的は別に山頂に登る事ではない為、いつもそこまでの装備は持たずイルファ雪山に入っている。だからこそ、今まで山頂に登った事はなかった。だが今回は調査依頼の為、それらの装備を持参して入山していた。
　吹雪の中、慎重にアイスクライミング用の装備を身につけ、クリュウが代表として山頂へと登って行く。下から不安そうにこちらを見上げている三人に時折「大丈夫」と声を掛けながら、ゆっくりゆっくり慎重に登って行った。
　そしてようやくの思いで山頂へと到達したクリュウ。そこで彼を待ち受けていたのは……
「何、これ……」
　山頂は決して広いとは言えない。部屋一つ分くらいのスペースしか無い狭い場所だ。だがそこ一杯に鎮座している異物を前に、クリュウは言葉を失っていた。
　それは巨大な鉄の塊だった。長年そこに放置されていたのだろうそれは、すっかり朽ちてサビに塗れて原型を留めていなかった。そしてそれは、

「これ、だよね……」
彼が持っていたエリア7で手に入れた朽ちた鉄片と同じものであった。だがそこに横たわっているのは彼が手に持っている破片とは比べ物にならない程巨大。それこそ大型モンスター程の大きな鉄塊だった。
「こんなの、見た事ない……」
周囲を歩きながら観察してみるが、特筆して妙な部分はない。こんな雪山の山頂にこれほど巨大な鉄塊がある事自体が異常なので、それ以外の些細な点など気にならないというのが本音だった。ただ今回は調査依頼なので、目視だけではなく様々な手段を用いてこの鉄塊を調査してみる。
サビを取ってみようと磨いてみたり、火を起こして燃やしてみたり、仕舞いには持参した小タル爆弾で爆破してみたりするもビクともしない。ただ亀裂を見つけてピッケルを振るうと中からフルフルの幼体であるフルフルベビーが出て来た際には驚いたが、この鉄塊は文字通りただの鉄の塊でしかないようだ。
これ以上持参した道具（アイテム）では調べられないと悟ったクリュウは諦めて元来た道を戻るようにして山頂を下る。ロープを慎重に下ってエリア8の地へと戻ると、自分の帰りを待っていた三人が駆け寄って来た。
「どうだった？」
開口一番に尋ねるシルフィードの問いかけに、クリュウは道具袋（ポーチ）から例の朽ちた鉄片を取り出すと「これの巨大な塊が転がってた」と簡潔に述べる。
「……何なのこれ？」
「いや、僕にもわからないんだけど……」
サクラの疑問にも、クリュウは答えられない。彼自身がそもそもこの鉄片の正体がわからないのだから、説明のしようがないのだ。
クリュウから謎の鉄片を受け取ったサクラはしげしげと見詰めるが、興味を失ったのか隣から覗き込んでいたフィーリアに押しつける。慌てて受け取ったフィーリアも鉄片を慎重に見詰めていたが、最

後には首を横に振ってクリュウに鉄片を返す。
「こんな物、見た事もありません……」
「だよねぇ。こんな鉄の塊が山頂に放置されてるんだよね」
「……飛行船の残骸？」
「いや、そういう風には見えなかったよ。何だろ、ハッキリした事は言えないんだけど――何だか、何か大きな生物の抜け殻みたいな印象を受けたんだ」
　ぼんやりとした事しか言えないクリュウの言葉にピクリと反応したのはシルフィード。凍える程寒い風が吹き荒れているのに、彼女の頬を大粒の汗が流れる。空気は雪が降っている事もあって湿っているはずなのに、喉が渇いて仕方がない。
「生き物の抜け殻、ですか？　でもこれって鉄ですよね？」
「あ、うん。だから僕の思った印象だからさ。その、気にしないで」
　自分でもおかしな事を言っていると自覚しているからこそ、フィーリアの冷静な意見に笑って誤魔化すしかない。この話は終わりだとばかりに切り上げ、山の反対側へと調査範囲を拡大させようと言い出すクリュウの言葉にフィーリアとサクラも同意する。だがそんな三人に背を向けたまま、山頂に目を向け続け一人沈黙を貫くシルフィード。
「シルフィ、どうしたの？」
　そんな彼女の異変に気づいたクリュウが声を掛けるが、シルフィードは何も答えない。ただ無言で山頂を見詰め続けている。
「シルフィ？」
「――すぐに山を下りるぞ」
「え？」
「今すぐ下山するッ！　急げッ！」
　突然怒鳴るように下山指示を飛ばすシルフィード。その表情は切羽詰まっており、恐怖と焦燥が入り交じったような表情。いつもの冷静さを失った彼女の感情的とも言っていい悲鳴にも似た声に、状況を理解できず困惑している三人の足は動かない。
「し、シルフィード様？　ど、どうなされたんですか？」

「……シルフィード、変」
フィーリアとサクラもらしくない彼女の姿を前に困惑している。だがシルフィードはそんな二人の反応など見えていないように二人の背中を押して無理矢理にでも歩かせようとする。その間も「急げッ！　とにかく洞窟内まで走れッ！」とこの場から脱せよと叫び続ける。
完全に冷静さを失ったシルフィードを前にクリュウが慌てて彼女の肩を掴んで振り向かせる。
「ど、どうしたのさシルフィッ!?　一体どうしたって言うのッ!?」
「いいから言う事を聞けッ！　話も抗議も全て後に聞くッ！　ただ今はとにかく走れッ！」
「それじゃ納得できないよッ！　ちゃんと理由を言ってッ！」
「だからッ！　今この山にはクシャ――」
それ以上の言葉は聞こえなかった――次の瞬間には、四人は空を舞っていた。
全身をバラバラに引き千切られるような感覚。悲鳴すら上げられない激痛。まるで風の刃で全身を斬りつけられているかのような感覚。意識が一瞬で飛びそうになる程の衝撃と激痛だった。だがそれも一瞬の事で、次の瞬間には空中に身を投げ出されている浮遊感。そしてその次に襲ったのは地面に倒れる衝撃と痛みだった。
雪の上に倒れた四人。何が起きたのか理解できず全身を襲う激痛の中で困惑する。倒れている者全ての口から苦悶の声が上がる。
全身を襲う激痛に顔をしかめながらも、クリュウは腕をついてゆっくりと半身を起こす。次の瞬間、猛烈な吐き気に襲われ、慌ててディアブロヘルムを取って嘔吐する。咳き込みながら胃の中のものを全て吐き出し、ゆっくりと頭をもたげる。その時、彼は見てしまった。
いつの間にか天気はさらに悪化し、視界はかなり制限される暴風雪。その中を、何かがゆっくりと降りて来た。
それは巨大な翼を持つ赤茶色の体色をした竜だった。
巨大な翼で荒れ狂う暴風を吹き飛ばし、ギシギシと何かが擦れる音を響かせながらゆっくりと鈍色の空から雪上へと降り立つ。地面に

脚が着く寸前、脚下に積もっていた新雪がブワッと舞い上がる。
白銀の大地へと降り立った竜は、クリュウがこれまで知っている飛竜の知識とは似ても似つかない異形のものだった。
全身に赤茶色の鎧を纏った竜は鈍色の空いっぱい巨大な翼を広げている。尾と首は細長く、首の先には巨体には少し小さめな頭があり、空気抵抗をできるだけ減らしたかのようなその出で立ちは鋭い印象を受ける。
スリムな体つきに巨大な翼。それは飛竜種の典型的な特徴であり、それ自体は特筆して驚くべきものではない。だが、その竜は飛竜種とは明らかに異なる特徴を持っていた。
「よ、四本脚……ッ!?」
赤銅色の竜は翼をゆらゆらと揺らしながら、大地をしっかりと踏み締めている。だがその数は通常の飛竜種が二本の脚で大地に立つのと違い、逞しい四本の脚で地面を踏み締めていた。クリュウの知る限り、翼を持ちて四本の脚を備える飛竜は存在しない。飛竜種は前脚が翼に進化した種であり、四本の脚を備えたまま翼を持つ飛竜種など、この世には存在しない。
だが同時に、彼は知っている。この世の中に、その例外とも言える四本の脚と翼を備える竜がいる事を。そしてそれは飛竜種とは異なる種族。
古よりその存在は神秘と厄災の象徴とされ、人々から畏敬の対象とされてきた存在。その者が通過するだけで自然災害に匹敵する程の被害と、時には恵みを与えると言われてきた。つい先日にはその一種が城塞都市一つを一夜にして焼け野原とした事も記憶に新しい。
最強にして最悪のモンスター。その生態のほとんどが謎に包まれ、個体数も限られ、ある種伝説の存在として語り継がれる者達。その名は――
「古龍……ッ!」
極寒の雪風に晒されているのとは違う意味で全身の震えが止まらなくなる。歯の根が合わずガタガタと震え出す。暴風に乗って来る殺気に本能がこれまで経験した事のない危険だと警鐘をやかましい

くらいに鳴らしている。
会ってはならない相手。運命の糸が決して絡まってはいけない存在。なのに、運命のいたずらか。それともこれ自体が運命なのか。出会ってしまった……
ゆっくりと雪上を闊歩するその姿は威風堂々としていて、恐怖を抱かずにはいられない。すでにこちらに気づいているのだろう。ブリザードと共に体に吹き付ける強烈な殺気に全身の震えが止まらない。
左右に倒れていたフィーリアとサクラも同じように目の前の古龍を凝視したまま恐怖で身を震わせている。サクラは隻眼をこれまで見た事もない程に広げ、フィーリアに至っては恐怖のあまりそのクリッとした瞳の縁に大粒の涙を浮かべている。
そしてシルフィードは現れた古龍を前に他の面々と同様に恐怖で身を震わせながらも、憎々しげに相手を見据える。古龍と視線が合っても決して視線を逸らす事なく、静かにその名をつぶやく。
「鋼龍――クシャルダオラ……ッ」
威風堂々としていながらも、どこか優雅さすら感じられる進撃の歩みを赤銅の龍――鋼龍クシャルダオラが止めたのはその時だった。目の前で自らを眺めたまま呆然としているちっぽけな四つの生物を前にしばしの沈黙が舞い降りる。だがそれも、自らの縄張りを荒らす敵だと判断するまでのわずかな時でしかなかった。
クリュウ達を敵とみなしたクシャルダオラはその身から放つ殺気をさらにより凶悪に、より濃く、より荒々しく拡大させると、屈強な四本脚のうち後ろの二本だけで立ち上がる。前脚を掲げ、翼を広げながら、伸ばした首の先にある凶悪な頭の鋭い瞳を煌めかせ、その雄叫びを己が領域全体に響かせる。
「グギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」
轟竜ティガレックスや角竜ディアブロスの咆哮（バインドボイス）に比べればその声量は大した事はない。だが本能的に、その雄叫びはこれまで聞いたどの咆哮（バインドボイス）よりも心から恐怖を抱かずにはいられないものだった。
寒さとは違う震えが全身を襲い、咆哮（バインドボイス）の範囲外

だというのに体は指一本すらも動かす事ができない。生物としての本能が、絶対的強者を前にして全ての抵抗が無意味であると叫んでいるような絶望。それでも――

「……ッ！」

クリユウは無理矢理立ち上がると、その場で剣を構えた。驚く他の面々の前に出て、こちらを睥睨するクシャルダオラを前に盾を前に突き出すような防御重視の構えで挑み出る。その足が震えている事など、背後の三人だってわかっているはずだ。

本当は怖くて怖くて仕方がない。今すぐこの場から逃げ出したい。そうしなければ危険だと、本能が叫んでいる――だが、それが何だというのだ。

ここから逃げる事は難しいができない訳ではないだろう。だがそれは単身だった場合だ。今の自分の背後には守るべき仲間がいる。大切な、決して見捨てる事などできない仲間達が、後ろにいるのだ。そんな彼女達を残してこの場から逃げ去るなど、できるものか。

怖くても怖くても、前に出て盾を構え、剣を突き出す。男として、女の子にかっこいい姿を見せたいとかそんな気持ちではなく――男として、女の子は守らなければならない。そんな責務にも似た想い。

――だがそれは、決して彼だけではない。

「全員で逃げ切るには、ひとまず逃げる隙を作らなくてはな」

そう言って震える彼の肩を叩いて横に並び立ったのはシルフィード。いつもと変わらぬ彼女の姿を見て一瞬安心したクリユウだったが、すぐにその異変に気づいた――肩に乗せられている手が、微かに震えていた。

よく見れば顔も引きつっており、いつもの彼女の凛々しさはそこにはなかった。それでも彼女は並び立ってくれている。恐怖に震えながらも、気丈に振る舞って隣に並び立ってくれる――それだけで嬉しい。

「……古龍。相手にとって不足はないわ」

同じく軽口を叩いてみせるが、その足は小刻みに震えているサクラ。表情も平静を装ってはいるが、その実はまだ突然のクシャルダオ

ラの襲撃に心が追いついていない様子。それでも、愛する彼が危険をかえりみずに立ち向かう様を見て震える足を叱咤して前に進み出ている――その姿に、心救われる。
その時、腕に誰かがしがみつくのを感じた。振り返ればそれはフィーリアだった。恐怖のあまりカタカタと全身を震わせながら、ギュッと目を閉じて抱きついて来る。怖くて怖くて仕方がない、そんな気持ちが痛いくらいに伝わる――だから、クリュウは優しく声を掛ける。
「大丈夫、可能な限り素早く撤退するから。その為には君の力が必要なんだ――がんばれる？」
「……怖くて怖くて仕方がありません――でも、がんばりますッ」
まだ全身の震えは止まっていないし、恐怖だってもちろん消えていない。空元気だって事くらいすぐにわかる。それでも、気丈に振る舞いながら少女は銃を構えた。銃口がカタカタと震えているが、その瞳は目の前の圧倒的な存在から離さない。そんな彼女を守るように、クリュウは盾を構えながら更に一歩歩み出る。
こちらの様子を窺いながら低く唸り声を上げるクシャルダオラを前に、四人は震える足を叱咤して果敢にも戦闘態勢を整える。そんな小さな敵達を、クシャルダオラはしばし睥睨する。そして、
「グギャアッ！」
唸り声を上げ、その強靭な四肢で雪を蹴って突っ込んで来る。
――イルファ雪山において、四人の狩人達と鋼龍クシャルダオラの戦いの火蓋が切って落とされた。

第２１３話　荒神の如し古龍の猛攻　鋼鉄の暴風吹き荒れし戦場

雪上を翔けるクシャルダオラは舞い上がる雪と風を纏いながら突っ込んで来る。飛竜種のそれが地面を震わす程の足音と共に突っ込んで来るのに対し、雪上だという事を引いてもクシャルダオラのそれは軽やかだ。雪上とは思えない速度で突っ込んで来るクシャルダオラに対し、クリュウ達は左右にそれぞれ回避行動を取った。

足場の悪い雪の上を走ってクシャルダオラの針路から飛び退いたクリュウはすぐに振り返ってクシャルダオラの姿を探し、そして驚愕した。クシャルダオラは自分達が先程までいた場所にピッタリと止まっていたのだ。通常飛竜種の多くは突進を終える際はその巨体が仇となって止まれず、最後には身を投げ出して止まるものが多い。例外は強力な脚力で倒れる事なく滑走しながらも停止する角竜ディアブロス、そして先日戦った四本の脚を持ち前脚に翼膜を備えた轟竜ティガレックスくらいのものだろう。

通常の飛竜種と違ってピッタリと止まって見せたクシャルダオラ。だがその動きは実はクリュウの中である程度予想はできた。四本脚で地面を走るティガレックスは見事な停止を見せた。ならば同じく四本脚のクシャルダオラも同様の動きができるのではと疑う事は安易だった。なので、正直な所この動きはそれほど驚きはなかった。だがクシャルダオラは突然体を持ち上げて後脚二本で立ち上がると、その場でくるりと反転してこちらに向き直り、再び前脚を地面に下ろした――何と、一瞬にしてこちらへと向き直ったのだ。

「な……ッ!?」

これにはクリュウだけでなく同じように回避行動を取ったフィーリアとサクラも驚く。四本脚で驚異的な機動力を見せたティガレックスをも超える旋回速度だ。だが驚く三人に対しシルフィードだけはこの動きに驚く事はなく、ただただ苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

シルフィードは剣聖ソードラント時代に、一度クシャルダオラと交戦経験があった。当時はまだ腕も未熟で、圧倒的な力で古龍であってもねじ伏せるアインやツヴァイ、チェルミナートルが主力となり、自分はほとんど剣を振るう事はなかった。その為戦ったとはあまり言えない。だがこの中の誰よりも、鋼龍クシャルダオラに対する知識はあった。

「だからこそ、厄介な相手だと嫌というくらい知っているんだ……ッ」

泣き言を言っていても何も始まらない。戦いの火蓋は切って落とされてしまったのだ。嫌がおうでも戦う他に選択肢などないのだ。

奴の攻撃手段を記憶の奥底から引っ張り出す間、シルフィードの横を通り抜けてクシャルダオラへと近づく者がいた。吹雪を物ともしない突貫で鋼龍との間合いを詰める戦姫、サクラだ。

「バカッ。無防備に突っ込むなッ！」

シルフィードの忠告を無視して更に加速してサクラはクシャルダオラに斬り掛かる。が、

「……ッ!?」

剣先がクシャルダオラの頭部を捉えた瞬間、突如猛烈な風がサクラの体を押し返した。振り下ろした飛竜刀【紅葉】の刃先は鋼の龍鱗に触れる事もできず、サクラの体まるでクシャルダオラから追い払われるように吹き飛ばされ尻餅をついてしまう。

突然の事に困惑しながら腰を落とすサクラ。だが鋼龍はそんな隙を与えようとはせずにすぐさま攻撃に転じる。右前脚を振り上げると、彼女に向かって振り下ろす。

「……ッ」

振り下ろされる鋭い前脚を前に、サクラはすかさず飛び退いた。雪の上をゴロゴロと転がるように回避。一瞬遅れて彼女がいた場所にクシャルダオラの爪が振り下ろされる。新雪が舞い上がり、その下の降り積もって固まった氷を容易く斬り裂き、地面を抉る。冗談ではなくシルフィードのキリサキに負けず劣らずの切れ味だ。クシャルダオラの爪は、硬く鋭い剣のように斬れるらしい。

地面が一瞬で抉られたのを見て、前傾姿勢のまま凝視していたサク

ラの頬を大粒の汗が流れる。だがすぐにその顔が悔しげに歪む。
あと少しで刀で斬りつけられたはず。なのに、その直前でまるで見えない何かの力で突き飛ばされたように体が飛ばされた。普通の飛竜種が着陸時などに発生させる風圧とはどこか違う、明確な意志を感じられる風だ。
続いてフィーリアがサクラを援護しようと動く。すぐさま通常弾ＬＶ３を装填してハートヴァルキリー改を構える。速射機能を持つ通常弾ＬＶ２ではなく通常弾ＬＶ３を選択したのは様子見を兼ねているからだ。
一瞬だけスコープを覗いて狙いを合わせる。狙うはクシャルダオラの右後脚。いつものように冷静に狙いを定め、引き金を引く。銃声と共に打ち出された弾丸は吹雪の風など物ともせずに飛翔し、鋼龍を捉える――だが着弾の寸前、まるで見えない壁に弾かれたかのように弾丸は跳ね返された。
跳ね返された弾丸はそのまま元来た方へと針路を変えて飛翔する。
そして――
「……ッ!?」
――驚愕するフィーリアの頬を掠めて、空の彼方へと消えて行った。
固まるフィーリアの頬を赤い筋が浮かび上がる。熱を感じて指先で頬を撫でると、わずかな血が指先についていた。
「な、何これ……」
呆然とするフィーリアの横を通り抜け、クシャルダオラへと突っ込むのはクリュウ。すでにバーンエッジを構えながら雪上を走る。サクラもフィーリアもクシャルダオラの纏う風を前に未だ呆然から脱し切れていない。この間に二人が狙われないように動くクリュウ。
風に対する勝算はあった。クリュウの纏うディアブロシリーズは風圧【小】スキルがある。多くの飛竜種が着陸時や離陸時に使う風圧はこのスキルで相殺できる。だからこそ、クシャルダオラのそれも打ち消せるのではないか。そんな淡い期待があった――だが、そんな彼の期待はあっさりと砕かれた。

接近する自分に気づいて振り返るクシャルダオラに対しクリュウはバーンエッジをその頭部目掛けて振り下ろすが、サクラ同様に接近するのを阻むように風が体を持ち上げて押しやってしまう。足に力を入れて吹き飛ばされないようにするが、その甲斐もなく彼の体は簡単に吹き飛ばされしまい、雪の上に尻餅をついてしまう。

風圧【小】スキルの甲斐なく吹き飛ばされたクリュウは舌打ちする。そこへクシャルダオラは首を持ち上げるような動作をする。それを見てとっさにブレスが来ると思ったクリュウは反射的に盾を構えた。周りの空気が歪み、鋼龍の口の中へと吸い込まれていくのが見えた。次の瞬間、まるでクシャルダオラの前で嵐が発生したかのような猛烈な風が発生し、一直線に撃ち放たれた。迫り来る可視の風塊の直撃を覚悟した時、ブレスと自分の間に突っ込む者がいた――シルフィードだ。

シルフィードはクリュウの前でキリサキを抜き放つと、剣先を氷に突き刺した。そのままガードの構えを取り、直後に風ブレスが直撃する。猛烈な風に全身が斬り刻まれるような感覚。だが体へと直撃するはずだった風の大半はキリサキが防いでくれ、実際には大したダメージは追っていない。

嵐の塊が背後へと吹き抜け、爆散する。その弾道にいた二人は何とか無事だった。

「あ、ありがと」

「礼は後だッ！　下がれッ！」

いつになく焦り気味な声で怒鳴られ、クリュウは慌てて立ち上がって後方へと下がる。それを気配で感じ取ったシルフィードは逆に前へ挑み出る。クシャルダオラの正面から迫り、サクラやクリュウよりも長いリーチを活かしてキリサキを振り上げ、一気に叩き落とす。風の壁の外から振り下ろされた一撃は壁を破ってその鋭い刃先を鋼龍の角に叩きつけられる。

ギャンッという金属音が辺りに響き渡る。鋼龍は文字通り全身が鋼のように硬い金属質の龍鱗で守られている。弾かれるも力業で何とか刃は通った。だがその衝撃は腕を襲い、ビリビリと痺れさせる。

想定していたとはいえ、かなり硬い。
「チッ」
舌打ちし、シルフィードは続けて横から腰を回しながらキリサキを薙ぎ払う。これもまた鋼龍の角に直撃するが、クシャルダオラはまるで何事もなかったかのように飛び上がると、大きく後方へと後退した。
風を纏いながら着地し、唸り声を上げる。そこへ呆然を脱したばかりのフィーリアが放った銃撃が襲いかかる。だがまたしても見えない風の障壁に弾かれ、銃弾は元来た方へと戻る。慌てて身を屈めたフィーリアの直上を弾丸が通過していく。ほっとするのも束の間、シルフィードに名前を叫ばれ視線を上げると、クシャルダオラがこちらに向かって突っ込んで来た。慌てて横へ跳んでこれを回避するが、クシャルダオラはフィーリアが一瞬前までいた場所で止まると再び反転して倒れているフィーリアの方に向き直る。鋼龍の碧眼と目が合った瞬間、恐怖のあまり凍り付くフィーリア。
動けないフィーリアに対し、クシャルダオラは容赦なく爪を振るう。だがその鋭い爪先がフィーリアを斬り裂く寸前、彼女の体を抱き起こしてその場から一瞬にてサクラが離脱した。結果、クシャルダオラは氷の上に鋭い爪痕を残すだけに終わる。
フィーリアを救い出したサクラは彼女の礼の言葉も待たず、飛竜刀【紅葉】を携えたまま再びクシャルダオラに向けて突貫する。だがクシャルダオラはそんな彼女を無視して背後から近づいていたクリュウの方に向き直ると、彼に向かって突進。サクラは振り切られてしまう。
「……チッ」
舌打ちしつつも、すぐさまクシャルダオラを追いかけて針路を変える。
一方、迫り来るクシャルダオラに対してクリュウは横へ逃げてこれを回避する。自分が一瞬前までいた場所に急停止したクシャルダオラは素早く反転し、再びクリュウと目が合う。次の瞬間、彼を狙って風ブレスが撃ち放たれる。猛烈な暴風の塊の接近に回避が間に合わ

ないと悟ったクリュウはバーンエッジの盾を前に突き出してガードの構えを取る。直後、鋼龍の風ブレスが着弾。全身を四方八方から攻撃されているかのような衝撃と、荒れ狂う風の中で一瞬息ができなくなる。ディアブロメイルなどが軋み、重量があるはずの鎧を纏っているのに、彼の体は簡単に弾き飛ばされた。

雪上に倒れた彼を援護するように他の三人が動く。しかしフィーリアは弾丸が弾かれる為に慎重になり過ぎて攻撃を渋り、サクラは接近を阻む風を前に思うように斬り込めず、シルフィードも動き回るクシャルダオラ相手に翻弄され、いずれも決定打を与えられずにいた。

一方、雪上に転がったクリュウは頭を振ってフラフラとする視界を正して立ち上がる。そして気づく。

「……ッ!? 凍ってる……ッ」

ディアブロメイルやアームなど、鎧の至る所が凍り付いていた。恐らく風ブレスで巻き上げられた雪がこびりつき、そのまま強風による冷却で凍り付いたのだろう。厄介な事に防具の関節部分も凍り付いてしまい、可動域が制限されて思うように動けなかった。

「解氷剤……ッ」

クリュウは急いで道具袋（ポーチ）から解氷剤を取り出す。解氷剤は火薬草とはじけイワシを調合して乾燥させた粉末だ。氷に触れると粒の一つ一つが弾ける。氷の粒子の隙間にも潜り込んで弾けるので氷が砕ける代物であり、雪山戦では必需品とも言える道具（アイテム）だ。

クリュウも例外ではなくしっかりと解氷剤を用意していたおかげで助かった。すぐに解氷剤を使って鎧にこびり付いた、特に関節部分に付いた氷を砕く。おかげですぐに可動域が戻り、動きの阻害がなくなった。

動きを回復したクリュウはすぐに他の三人に任せていた前線へと復帰する。前線では三人が苦戦を強いられていた。

銃声と共に撃ち出された通常弾ＬＶ３は寸分違わずクシャルダオラの前脚に吸い込まれるが、着弾の寸前で風の障壁に阻まれて反転。初速と変わらぬ速度で撃った本人であるフィーリアに襲い掛かる。

狙撃と同時に滑るような足捌きで横へ移動したフィーリアのすぐ隣を銃弾が掠め飛ぶ。背後に着弾したのを確認したフィーリアは悔しげに唇を噛んだ。
「これでは掠り傷一つ与えられない……ッ」
ハンターにとって、自らの武器が通用しないという現実は何にも代え難い苦痛であり不安だ。先程から一撃も与えられない現実に、フィーリアの中で焦りだけが先走る。
サクラも果敢に攻め込むがそれを阻むように可視の風が彼女の体に纏わりついて、彼女の突貫を押し返す。闇雲に刀を振るっても、剣先でわずかにサビ付いた鋼龍の体表を削るだけ。踏み込みたくても踏み込めないもどかしさにサクラの苛立ちが募る。
そしてシルフィードもサクラ同様に風の障壁の影響でうまく近づけず、決定打を欠いていた。記憶の中でアインやチェルミナートルがどう動いていたか思い返すが、とても常人の動きではなく真似できそうにない。ならばクシャルダオラの動きはどうかと問われれば、あの時の自分は必死に剣を振るっていて正直あまりよく覚えていない。冷静さを取り戻す頃にはアインとツヴァイ、そしてチェルミナートルの猛攻でクシャルダオラは倒されていた。
チーム唯一の交戦経験者でありながら、役立てずにいる。その無力さもまた彼女を追いつめ、焦りを募らせていた。
鋼龍の風の鎧を前に三人の戦意は著しく失われていた。これ以上の戦闘は難しいが、だからと言って逃げ切る事はできない。できると判断すればとっくに背を向けて逃げ出している。
一方的に体力と精神力を消耗する戦いに皆の心が挫けそうになった時――彼が現れた。
「目を閉じてッ！」
彼の声にほとんど反射的に三人が目を閉じた瞬間、瞼越しでもわかる程に強烈な閃光が炸裂した。
「ギャアッ!?」
初めてクシャルダオラが悲鳴にも似た驚愕の声を上げる。目を開けば、先程までその機動力で四人を翻弄していた鋼龍は闇雲に爪を振

るったり、唸り声を上げている。まるで四人の姿を見失ったかのようだ。
　驚く事はない。ようやく動きを封じたクシャルダオラを前に動きを止めた三人の所に、クリュウが戻って来る。その彼が閃光玉を投擲して鋼龍の動きを封じたのだ。
「みんな無事ッ!?」
「何とかな。皮肉にも風の鎧のせいで踏み込めないでいた事でこちらもダメージは最小だ」
　苦笑を浮かべるシルフィードの言葉にクリュウはほっと胸を撫で下ろした。他の二人もやって来て、そのいずれも大した怪我はしていなかった。元々本格的な戦闘を行う気はなく、更にシルフィードの言う通りクシャルダオラの未知の能力、風の鎧のせいでうまく踏み込めなかった事も幸いしていずれも逃げに徹していたおかげだ。
「二人とも大丈夫？」
　こちらに駆け寄って来るフィーリアとサクラに声を掛けると、二人は無言でうなずいた。だがそのどちらの表情にも余裕はなく、いつにも増して不安と焦りの色が見える。
「……風が邪魔。近づけない」
　悔しげに唇を噛むサクラの言葉に、シルフィードもうなずく。
「クシャルダオラは別名【風翔龍】とも言い、何らかの力で自らの周りに風を纏っていると聞く。その風の障壁がある限り、不用意に近づく事はできない」
「その風の障壁のせいで、私の銃弾も届きません」
　苦しげに語るフィーリアの言葉にも、クシャルダオラの風の障壁に対する悔しさが滲んでいた。自らの武器が通用しない事が、彼女を追いつめているようだった。
「クリュウ。閃光玉はあと何発残っている？」
「僕は残り二発だけ。みんなは？」
「残念ながら私は持ち合わせていない。二人はどうだ？」
「すみません。私も一発も持っていません」
「……持っていない」

慎重な性格のクリュウだからこそ持参していた閃光玉。他の三名は討伐依頼ではない事を理由に持っていなかった。だがそれは決して非難されるような事ではない。ハンターの持ち込める道具（アイテム）には限界があるし、本来の依頼とは異なる状況に陥っているのだから。特にフィーリアなどは弾丸など他の面々よりも道具（アイテム）制限が大きいのだ。

「二発しかないのではなく、二発もあるのだ。それだけあれば、奴の目を潰して洞窟に逃げ込む事ができる。そのまま下山して一気に山を出る。現状の方向性としてはこれだ」

鋼龍クシャルダオラは今の自分達が敵うような相手ではない。しかも万全の状態でもそのような有様なのに、今の自分達は決してクシャルダオラの討伐でこの山に来ている訳ではない。なので当然装備も不十分なのが現状だ。

「そろそろ閃光玉の効き目が切れる。クリュウは隙を見て閃光玉で再び奴の動きを止めてくれ。その隙に全力で撤退する。残る一発は予備として使ってくれ」

「……つまり、チャンスは二回って事？」

「そうだ。君に全てを押しつける訳じゃないが、閃光玉の扱いが君が一番長けている――頼まれてくれるか？」

シルフィードの言葉に、クリュウは少し考える。背後ではまもなくクシャルダオラが視界を回復させるだろう。考えている時間はない。だがそれは決して彼の決断を早計にさせるものではない。むしろこの状況だからこそ、自分に頼んでくれる彼女の言葉に信頼を感じた。だからこそ、

「わかった。その役目、引き受けたよ」

彼女の期待と信頼に答える為にも、その大役を引き受ける事にした。

「頼むぞ」

彼の言葉に安堵したように微笑むシルフィード。フィーリアとサクラもクリュウに任せる事に異論はなく、彼に現状の打破を託す。彼に対する信頼の高さがなせる判断だ。そんな三人の想いに応えるべ

く、クリュウも「任せておいてよ」と努めて笑顔を浮かべて応えた。
四人の行動指針が決まった所で、辺りの空気が変わった。振り返れば、鋼龍クシャルダオラが唸り声を上げてこちらへと振り返る。閃光玉の効き目が切れたらしい。心なしか、今まで弱まっていた風が勢いを盛り返したように見える。
「……風が、弱まってた？」
その微妙な変化に気づいたのはクリュウだけだった。だが確証もなく、今はそんな事を考えている余裕はない。雑念を抱きながら戦えるような相手ではないのだ。
「行くぞッ！」
シルフィードの掛け声と共に四人は一斉に走り出す。それに対してクシャルダオラは牽制するように風ブレスを撃ち放つ。迫り来る暴風に対し四人は左右に分かれてこれを回避。右翼にクリュウとフィーリアが、左翼にサクラとシルフィードと分かれ、その間を暴風が突き抜ける。
至近距離を通過する暴風を見送るクリュウ。新雪の下の氷ごと砕く猛烈な暴風を前に、改めてあれの直撃を受けたらただでは済まないと悟る。
鋼龍に接近する四人のうち、まず最初にフィーリアが通常弾ＬＶ３で銃撃する。だがこれまで同様に風の障壁が阻み、跳ね返って来た銃弾が足下に炸裂し、足が止まる。
フィーリアが止まった事に気づいてはいても、剣士組は止まらない。ガンナーと違って剣士は相手の懐に潜り込まなければ攻撃を加えられない。距離が空いていては一方的にやられるだけだ。危険を承知でも、空いての懐に飛び込まなければ一矢すら報いる事はできない。
迫り来る三人を相手に、クシャルダオラは雪上を翔けて突撃して来る。雪上とは思えない速度で迫る鋼龍相手に三人は散開してこれを回避する。
散開した三人のちょうど中央を抜ける形で通過したクシャルダオラを相手に、回避した三人は反転して三方向から攻撃を仕掛ける。

真っ先に迫ったのは俊足のサクラ。紅蓮の炎を刀身に纏う飛竜刀【紅葉】を構えながら、突貫する。だが燃える剣先が鋼龍の鎧にあと一歩で届く寸前で、クシャルダオラは突然飛び上がった。

「……ッ!?」

振り抜いた刀は空を切り、勢い余った体はたたらを踏む。

飛び上がったクシャルダオラはそのまま大きく後退し、合流を果たしたフィーリアを含めた四人から一気に距離を取って着地。唸り声を上げながらこちらを威嚇すると、再び風ブレスを撃ち放つ。

迫り来る風ブレスを前に、クリュウは大きく回避してしまう。その横を轟音を立てながら通過する風の塊を一瞥し、クリュウは悔しげに唇を噛んだ。

「間合いがわからない……ッ！」

クシャルダオラの放つ風ブレスは不可視の一撃だ。正確には圧縮された空気が通過する際に空間に歪みが起きるのでぼんやりとした輪郭は見えるのだが、正確な範囲がわからない。リオレウスの火球ブレスがその範囲がわかりやすいのに対し、ほとんど目に見えない鋼龍の風ブレスは厄介極まりない。どこが安全でどこが危険なのかがわからず、自ずと回避も大きくなってしまう。そしてそれは次への行動へ移行する時間が余計に掛かる事を意味し、結果的に反撃の機会を失う事になる。

それは他の面々も同じようで、いつも以上に慎重に動いている。その為どうしても攻撃に移れないでいる。ただし今回に限っては相手を討伐するのではなく、あくまで撤退戦だ。相手を威嚇する程度でそれほど踏み込んだ戦いはしなくていい。だが回避の動きが大きくなっては、その肝心の撤退行動にも移れない。閃光玉の範囲外へと飛び、そこから不可視のロングレンジ攻撃。頼みの綱のフィーリアによるこちらのロングレンジ攻撃は風の障壁の前では無力。正直、笑えてくるくらいの劣勢だ。それでも――

「……ッ！」

諦めず、立ち向かう者がいる。

雪上を翔け、クシャルダオラが一瞬で開いた距離を、すさまじい速

度で突貫して詰め寄る少女。煉獄の炎を纏い、下段に構えられた剣先から吹き出る炎は氷を一瞬で蒸発させる。水蒸気を立てながら吹雪の中を猛然と翔け抜けるサクラ。正面から迫る彼女を相手にクシャルダオラは凶悪な爪を振り上げて、彼女に向けて叩きつける。サクラはその一撃を横に跳んで回避すると、鋼龍の右側面から炎を纏った刀を振り下ろす。だが再び風の障壁が彼女の攻撃を阻み、あっという間に彼女の体を吹き飛ばしてしまう。尻餅をついた彼女の方に首を振ったクシャルダオラの碧眼が不気味に煌めく。

「……くッ！」

ゆっくりと振り上げられる凶悪な爪を前に為す術がないサクラ。ただその瞬間を前にしても彼女は決して目を逸らそうとはしなかった。隻眼でしっかりと、鋼龍を睨み続ける。その時、一発の銃声が轟いた。刹那、クシャルダオラの胴体に火花が飛び散った。

「……え？」

驚くサクラの前で、クシャルダオラは腕を下ろしながらゆっくりと長い首で振り返る。その先には、こちらに銃口から煙を噴くハートヴァルキリー改を構えたフィーリアが、サクラ同様に驚愕の表情のまま立っていた。

「あ、当たった……？」

驚く彼女の口から思わず零れる言葉。だがすぐに表情を引き締めると、こちらを凝視したまま尻餅をついているサクラに向かって叫ぶ。

「今のうちに逃げてくださいッ！」

そう言って彼女は再び引き金を引いた。銃声と共に撃ち出される銃弾は先程と同様に風の障壁を突き破ってクシャルダオラの胴体に命中する。硬い金属の鎧の為か当たってはいても大した傷にはなっていない。その証拠に火花が迸り、銃弾が弾かれている事がわかる。それでも、銃弾は確かに風の障壁を越えたのだ。

風の障壁が突破されたと知るや、クシャルダオラはフィーリアに向き直ると彼女に向かって風ブレスを撃ち放った。雪と氷を砕きながら進む一撃にフィーリアは慌てて横へ回避する。だがそこへ今度は

クシャルダオラ自体が突っ込んで来る。
逃げきれないッ！
心の中で思わず弱音を叫んでしまう。だがフィーリアの足では迫り来るクシャルダオラから逃げ切る事はできない。そんなの、自分の事なのだからわかっている。それでも、諦めずに走り続ける他はない。
その時、誰かに首根っこを掴まれた。そしてそのまま力強くクシャルダオラの針路から投げ出される。雪の上に尻餅をついたフィーリアは見た――迫り来るクシャルダオラを前にして、勇猛果敢に挑むシルフィードの姿を。
「シルフィード様ッ！」
「くぅ……ッ！」
ガードの構えを取り、クシャルダオラの突進を正面から受け止めたシルフィード。だが圧倒的な力の差を前に、彼女が踏ん張れたのはほんの一瞬だ。すぐに弾き飛ばされ、雪の上に倒れた。だが初撃をガードで耐えたおかげで、大した怪我もなくシルフィードはすぐさま起き上がる。
そこへクリュウが躍り出る。意識をこちらに向けようと彼が投げつけたのはペイントボール。放物線を描きながら飛翔する玉は吸い込まれるようにしてクシャルダオラの頭寄りの首に命中した。途端に辺りに嗅ぎ慣れた匂いが充満する。
「届いた……？」
だがクリュウはそれよりも、ペイントボールが命中した事自体に驚いていた。自分で投げたものの、それが命中するとは正直思っていなかったのだ。クシャルダオラの風の障壁は人間自体も吹き飛ばすようなものだ。それがペイントボールを防げないというのは理屈に合わない。
その時、クリュウは思い出す。シルフィードが一度だけ真正面から風の障壁に妨害される事なくクシャルダオラに一撃を入れていた事を。
「もしかして……」

クリュウの中で、ある可能性が生まれた。
一方、シルフィードを援護するように銃撃を再開したフィーリア。先程まで弾丸は全て弾かれていたのに、突然今度は全ての弾丸が風の障壁を突破できるようになった。クリュウ達はその事に疑問を抱いていたが、当のフィーリアだけは、その理由を知っていた。
「貫通弾は、跳ね返されないんだ」
そう、フィーリアはこの時これまで使っていた通常弾ＬＶ３から、貫通弾ＬＶ２に切り替えていたのだ。確信があった訳ではなく、単純に通常弾では効果がない事から貫通弾へと切り替えたに過ぎない。だが結果的にそのおかげで難題だった風の障壁を見事に突破する事ができたのだ。
「これで、私も戦える……ッ！」
自らの武器が通用するようになった。これ以上にハンターにとって心強い事はないだろう。戦意を取り戻したフィーリアは続けざまに貫通弾ＬＶ２を撃ち込む。撃ち出された弾丸はいずれも風の障壁を突破し、クシャルダオラに命中する。しかしそのどれもが鋼龍の硬い龍鱗を貫通できずに弾かれてしまう。風の障壁を突破する際にその威力のほとんどを失っている事も痛い。だが、確実にクシャルダオラはフィーリアの攻撃に気を削がれていた。
起き上がったばかりのシルフィードを狙って動こうとしたクシャルダオラはフィーリアの攻撃を鬱陶しく思ったのか、今度はそちらに向き直り風ブレスを撃ち放つ。距離が離れていた事もあってフィーリアはこれを横へ走って回避した。
フィーリアへの一撃が失敗し、彼女を追うように視線を動かすクシャルダオラに向かって、クリュウとサクラが左右から挟撃する。サクラはクシャルダオラの右後方から飛竜刀【紅葉】を構えて突貫するが、風の障壁に阻まれる。無理矢理前に突っ込んで強行突破を試みるが失敗し、彼女の体はまたしても吹き飛ばされる。
一方のクリュウはサクラと違ってクシャルダオラの左前方へと移動。そのまま鋼龍の正面に現れると、視線を自分に向けるクシャルダオラの目の前からバーンエッジで斬り掛かった。

サクラ同様にまたしても風の障壁で防がれる。誰もがそう思っていた――だが、彼の振るった剣は風の障壁に一切の邪魔を受けず、その剣先は確かに鋼龍の角にぶち当たり、甲高い金属音を響かせた。その金属音は、吹雪と戦闘の音に支配された山頂に、不思議と良く響いた。

「やった……ッ！」

思った通りだ。クシャルダオラは確かに風の鎧を纏っているが、何も全方位全てをカバーしている訳ではない。獲物を攻撃する為にはむしろこの風の障壁は邪魔となるのだろう。そのせいかはわからないが、風の障壁は正面には展開していないのだ。先程のシルフィードの一撃とペイントボールでそんな仮定を導き出したクリュウは自らそれを実践する事にした。結果は、彼の考えは見事に的中した。

今まで、風の障壁のせいで近づく事すらできなかった。一方的になぶられるだけの展開だったが、光明を得た瞬間であった。

古龍に対して、やっと一撃を入れる事ができた。歓喜するクリュウだったが、そんな彼の心の隙を狙ったかのように、クシャルダオラは彼の攻撃など物ともせず、彼に向かって爪を振り払う。とっさに盾で防いだが、足下に力が入っていなかった彼は衝撃に耐える事ができずに雪上を転がる。

倒れた彼を見て援護に移ろうと、彼の見出した勝機を無駄にしないようにサクラが正面から斬り掛かろうと迂回しながら鋼龍に迫る。だがそんな彼女の動きを察知したクシャルダオラは突然翼を大きく広げると、ギシギシと錆び付いた金属音を響かせながら翼をはためかせ、天空へと舞い上がる。上空へと飛び立とうとするクシャルダオラに対し、サクラは悔しげにそれを見送る。

誰もがそのまま飛び去るのではと甘い期待を抱いた。だがクシャルダオラは飛び去る訳ではなかった。人の背丈程の高さにまで上ると、そこで何と滞空（ホバリング）したのだ。これにはクシャルダオラと初めて戦う三人は驚いた。唯一交戦経験のあるシルフィードだけが、クシャルダオラの行動を見て唇を噛む。

鋼龍は通常の飛竜種よりも卓越した飛行能力を持つ。それは自身

の周りに展開している風の影響もあるのかはわからないが、常に滞空（ホバリング）しながら自由に動き回る事ができるのだ。事実、この行動に驚いたものの援護しようと銃撃を再開したフィーリアに向かって、クシャルダオラは羽ばたきながら低空で迫る。慌てて逃げようとする彼女に向かって、クシャルダオラは容赦なく風ブレスを放った。しかも三発連続だ。

一発目と二発目は何とか避けたフィーリアだったが、三発目は至近弾となり弾き飛ばされて雪上に倒れた。ゆっくりと起き上がる姿を見る限りダメージは負っているようだが、致命傷にはなっていないらしい。だが先程のクリュウ同様に体が凍り付いてしまったらしく、動きをかなり制限されているようだった。

解氷剤を使う為に一時的とはいえ戦線から離脱するフィーリア。その隙を突いて背後から迫っていたシルフィードに空中で隙なく振り返ったクシャルダオラは突如その動きを加速。彼女に向かって勢い良く突っ込むと彼女の正面から前脚を振り上げ、まるで押し潰すように体ごと叩きつけた。

クシャルダオラの凶悪な攻撃の数々の中でも一、二を争う破壊力を持つ空中からの蹴り攻撃。ブレスなどに比べれば地味だが、クシャルダオラの全体重を押しつけての衝撃と鋭い爪が加わった一撃は硬い氷すらも粉砕する威力だ。クシャルダオラのこの動きを以前の戦闘で知っていたシルフィードだからこそとっさに回避できたのだ。

凍えるような寒さの中で、四人は汗を掻きながら戦闘を続けていた。

諦めずに接近を試みるサクラに対し、ゆっくりと羽ばたきながら迫るクシャルダオラ。その動きを見てチャンスだと思ったクリュウは道具袋（ポーチ）に手を伸ばし、閃光玉を構える。そしてサクラの背後に炸裂するように計算して閃光玉を投擲した。後はそのまま閃光玉が炸裂して空中から引き吊り下ろすだけ。そう考えていたクリュウは次の瞬間には自らの計算の甘さを痛感する事となった。

クシャルダオラは突如大きく翼を羽ばたかせると、まるで空中で滑るかのように一瞬にしてクリュウの右側面へと回り込んだのだ。そ

れはいくら飛行能力が優れているとしても、物理的に不可能な動きだ。身に纏う風を使ったとしか思えないような鮮やかな回り込みに、クリュウは自らの目を疑った。だがそれは現実で、閃光玉はクシャルダオラの右斜め後ろで炸裂し、不発に終わる。慌てて逃げようとする彼の背中に向かって、クシャルダオラは容赦なく風ブレスを撃ち放った。

「……クリュウッ！」

逃げる彼の横からサクラが突っ込み、彼に抱きつくようにして自らと共に風ブレスの射線から離脱した。肩から雪上に倒れた二人の足下を、風ブレスが轟音を立てながら通過したのは一瞬遅れての事だった。

「あ、ありがとうサクラ……」

「……いいから、早く立って」

礼を言うクリュウの言葉にも淡々と返すサクラ。いつもの彼女らしからぬ言動だが、強敵クシャルダオラを前に余裕などないという事なのだろう。彼女に言われた通りすぐに立ち上がったクリュウ。その間、クシャルダオラの意識を逸らすようにシルフィードが奮戦していた。

「このぉッ！」

風の障壁のせいで懐に入り込めない煩わしさに苛立ちながらも、シルフィードはうまく立ち回って剣先でクシャルダオラの体表を削り取る。だがそれは決して致命打にはならない。それでも鋼龍の意識を削ぐ事には成功した。

横薙ぎにキリサキを振り抜いた後、離脱を図る彼女を追って視線を巡らせるクシャルダオラ。そして、その凶悪な瞳が不気味に煌めくのを、クリュウは見逃さなかった。

「シルフィッ！」

クリュウの叫び声にシルフィードが振り返る――次の瞬間、彼女の体が宙を舞った。

全身を引き裂くような風の刃の中に晒され、激痛に声すら上げる事ができない。暴れ狂う風が呼吸すらもさせてはくれず、呼吸困難に陥

る。だがそれは一瞬の事で、数秒の浮遊感の後に背中から地面に激突する。違う痛みに顔を顰めながら、歪む視界の中でクシャルダオラの姿を探す。
「くそぉ……ッ」
痛みに耐えながらゆっくりと身を起こすと、背中に衝撃を感じた。その瞬間、全身に走っていた痛みが和らぐ。それがフィーリアの撃った回復弾ＬＶ２のおかげだという事はすぐにわかった。
「助かる……」
キリサキの剣先を雪上に突き立て、杖代わりにしてシルフィードは立ち上がる。そんな彼女の視線の先でサクラがやっと着陸したクシャルダオラに斬り掛かる。だが風の障壁が彼女の体を吹き飛ばしてしまう。それでも彼女は諦めず、何度も何度も突貫を仕掛ける。
クリュウは閃光玉のタイミングを図っており、フィーリアは貫通弾ＬＶ２にてサクラを援護している。いつまでも前線を任せておく訳にはいかない。シルフィードは回復薬グレートを二本一気に飲み干すと、まだ若干痛む体にムチを打って駆け出す。
悪戦苦闘する面々を見て、クリュウは一人焦っていた。
自分が閃光玉でクシャルダオラを足止めできずにいるから、自分達は圧倒的不利な状況下で古龍との戦いを強いられている。今すぐにでも握り締めた閃光玉で隙を作り、一刻も早くこの場を離脱しなければならない。なのに、そのタイミングが掴めずにいた。
一発が失敗し、残るは今手に持っているこの一発だけ。これを失敗すれば、古龍相手での無謀な撤退戦となる。それだけは何としても避けなければならない。
早く投げなければ。でも失敗は許されない。そんなプレッシャーに挟まれながら、クリュウの焦りは増していく。どうすればいいかわからず、必死に悩み続ける――だからこそ、彼は鋼龍の動きを見逃してしまった。
「――クリュウ様ッ！」
フィーリアの声に伏せていた顔をハッともたげると――目の前にクシャルダオラが浮かんでいた。凶悪な碧眼に見下され、突然の事態

と恐怖に体が動かない。鋼龍と目を合わせたまま動けずにいるクリュウを助けようと三人は一斉に走り出すが、間に合わない。
クシャルダオラは巨大な翼で風を発生させながら、空中から呆然と立ち尽くすクリュウを睨みつける。そして、その凶悪な鋭い牙が並ぶ口をガパッと開くと、凍てつく空気をスゥと吸い込む。
「あ……」
――刹那、クシャルダオラの風ブレスがクリュウを直撃した。全身を切り刻むような風の刃に晒され、はね飛ばされた彼の体は全身を襲う痛みと浮遊感を同時に体感する。高く舞い上がった彼の体は、すぐに重力に捕まって降下を始める。
そして、彼の体は地面に叩きつけられた――その瞬間、地面に真っ先に激突した左足に彼がこれまで体験した事のある痛みの中でも最上級の激痛が襲った。
「あがぁあああぁぁぁ……ッ！」
雪の上に倒れ、左の足首を押さえながら言葉にならない悲鳴を上げて悶え苦しむクリュウ。激痛に悶絶する彼を見て、三人は顔を真っ青に染めながら駆ける。だが、それを妨害するように振り返ったクシャルダオラは彼女達の前に立ち塞がった。
「……退けええええええええッ！」
激しい憤怒に満ちた怒号と共に、サクラは紅蓮に燃え盛る飛竜刀【紅葉】を槍のように構えながら雪上を翔け、クシャルダオラに向けて突貫する。それに続くように声を上げながらシルフィードもキリサキの柄を握ったまま突っ込み、フィーリアは貫通弾ＬＶ２を連射する。
少女達の怒りに満ちた戦声も聞こえずに、クリュウは一人悶え苦しみ続けていた……

第２１４話　鎧風一触　無念の敗走の末に待ち受けていた現実

足を負傷して悶える彼を見て、三人の少女達が救出に走る。それを妨害するように立ち塞がるクシャルダオラに対し、少女達の怒りが爆発する。

「……退けええええええええッ！」

怒りに満ちた紅蓮の炎が荒れ狂う飛竜刀【紅葉】を槍のように構えながら突っ込むサクラ。それを援護するようにフィーリアもまた貫通弾ＬＶ２でクシャルダオラを狙い撃つ。吹雪の中を放たれた弾丸は横風に流される事なく勇ましく突き抜け、風の障壁すらも突破して鋼龍の体表に火花を迸らせる。

唸るクシャルダオラに向かって、サクラは雄叫びを上げながら真正面から突っ込む。そして、燃え盛る炎刀を力の限り振り下ろした。鋭い刃先は一瞬何かの障壁を捉えたが、構わず火炎と共に斬り飛ばす。次に襲ったのは、まるで鉄の塊を殴ったかのような衝撃だった。思わず腕に走った痛みに顔を顰めるが、それでもサクラの表情には不敵な笑みが浮かんだ。

「……通った」

これまで一太刀すらも入れられなかったのに、ようやく刃が鋼龍の鱗を捉えたのだ。今まで自分はこのまま一矢すら報いれないとすら思って、内心焦っていた。だが、それは違った。自分の刀は、ちゃんと通るのだ。

わずかな希望を見出したサクラだったが、そんな彼女を力を盛り返した風が勢い良く吹き飛ばした。背後に背中から倒れたサクラだったが、すぐさま起き上がって刀を構えてクシャルダオラと対峙する。

一方、サクラが攻撃している間に背後からクシャルダオラを狙おうとしていたシルフィードだったが、フィーリアの援護もあってうまく立ち回れているサクラを見て方針を転換。倒れているクリュウに駆け寄った。

「しっかりしろクリュウッ！」
ディアブロヘルムを取って彼の耳元で叫ぶが、クリュウは脂汗を浮かべたまま顔を苦悶に歪めていて、痛みを堪えるように食い縛る歯の間からはくぐもった声が漏れるだけ。こちらの声も聞こえていないのだろうか。
「立てるかッ!?」
肩を掴んで彼を立たせようとするが、足を負傷していてうまく立てない。仕方なくシルフィードは力任せに彼を立ち上がらせた。負傷した左足が地面に触れて言葉にならない悲鳴を上げるクリュウに「すまない」と謝りつつも、何とかこの場からの離脱を図る。
「フィーリアッ！」
比較的近くにいたフィーリアを呼ぶと、彼女は銃口をクシャルダオラに向けたまま振り返った。そんな彼女に向かってシルフィードは先程クリュウの道具袋（ポーチ）から取り出した閃光玉を投げる。慌ててキャッチした彼女に向かって「それを使って撤退する隙を作ってくれッ！」と叫ぶシルフィード。彼女の意図を理解したフィーリアは大きく頷くと、閃光玉を持って前線へと躍り出る。最前線ではサクラがうまく立ち回ってクシャルダオラを引きつけている。
背後からフィーリアが近付く気配と、先程の会話を何とか聞いていたサクラがすかさず彼女を援護するように動きをシフトする。風ブレスや振るわれる爪を器用に回避しながら、フィーリアの方へと移動する。突然方向を変えて動くサクラに対してクシャルダオラは後脚だけで器用に立ちながら素早く旋回する。一瞬にして反転したクシャルダオラだったが、その眼前にフィーリアが投擲した閃光玉が炸裂したのはその瞬間だった。
破裂し、猛烈な光が爆発する。至近距離でその直撃を受けたクシャルダオラは目を潰され、激痛と何も見えない苛立ちから唸り声を上げ、その場で暴れ出す。
「撤退だッ！」
クリュウを背負いながら叫ぶシルフィードはすでに撤退を開始。続いてフィーリアも走り出し、殿はサクラが自発的に刀を構えたまま

務める。
　ひとまず来た道を戻る為にエリア７へと繋がる出口を目指して走る四人。その背後ではクシャルダオラが暴れており、まだ視界が回復した気配はない。そのまま三人で出口に達した頃、背後でクシャルダオラの怒号が轟いた。
「……やはり、回復が早い」
　先程の閃光玉の際に気づいた事だが、クシャルダオラは閃光玉の拘束時間が短いらしい。今度の事で疑念は確信へと変わった。背後からクシャルダオラが迫る気配がするが、三人は構わず細い道を下っていく。クシャルダオラの巨体では歩けないような崖に面した細い道を下り続ける。道自体は狭くて使えなくとも、鋼龍の優れた飛翔能力があれば上空から襲撃する事も不可能ではないだろう。だが幸いにも今のところ追って来る気配はない。上方を気にしながら、三人はエリア７を目指して下っていく。
　とにかく走り続けた三人は無事にエリア７へと達した。だが、そこへ上空から風の暴風が襲い掛かった。突然上空から放たれた風ブレスは雪を抉りながら三人を狙うが、三人はこれを回避する。
　態勢を立て直そうとする少女達を前に、クシャルダオラが舞い降りて来る。暴風を纏いながら、吹雪と共に表れる鋼龍。あと少しでエリア５へと通ずる洞窟へ入れるのにと、シルフィードは悔しげに唇を噛む。その背後では背負ったクリュウが苦しげに声を漏らしている。
　どうすれば良いか。もう閃光玉はないので、先程のように閃光玉で足止めをしている間に逃げ切る事はできない。悩むシルフィードの前に、サクラとフィーリアが立ち塞がったのはその時だった。
「お前達……」
「ここは私達に任せて、シルフィード様はクリュウ様を連れて撤退してください」
「……足止めくらいならできる」
「すまない……」
「……クリュウの事、死ぬ気で守りなさい」
「必ず、逃げ切ってください」

「わかった。君達も、無理はするなよ」
別れの言葉も程々に、地面へと降り立ったクシャルダオラに対してサクラとフィーリアが突撃する。そしてそんな彼女達を背に、後ろ髪を引かれるような想いでシルフィードはエリア５へと通ずる洞窟を目指して走る。
背後では銃撃と剣撃、怒号と悲鳴が入り混じった喧騒が響く。だがシルフィードは振り返る事なく、自らの情けなさを痛感しながら走り続けた。そして、二人の姿は洞窟の奥へと消えて行った……
二人と離別してから、クシャルダオラの出現で小型モンスターのほとんどがその姿を消していた事から特に妨害を受ける事なく、シルフィードは下山に成功。無事に拠点（ベースキャンプ）へと帰還した。
「痛むか？」
拠点（ベースキャンプ）へと戻ったシルフィードは早速クリュウをベッドに座らせて彼の怪我の手当てを行う。ディアブログリーブを外して彼の左足を見た所、足首が腫れ上がっていた。診た感じ、どうやら骨折している訳ではなく軽い捻挫をしているようだった。
シルフィードは手早く磨り潰した薬草を塗った包帯でテーピングする。その間、彼は終始痛そうに顔を歪めていたが、一言もしゃべる事はなかった。
「良し、これでとりあえず大丈夫だな」
「……ごめん」
処置が終わると、ようやく彼が初めて言葉を発した。だがそれはいつもの彼らしからぬ、暗く、小さく、力のない声だった。表情も薬草を塗った事で痛みが軽減したはずなのに、苦しそうに歪めたままシルフィードと一切視線を合わせようとしない。それが罪悪感から来るものである事は明白であった。
「謝る必要などない。今回は古龍相手に知識も装備も不十分での遭遇戦だ」
「……でも、ごめん」
シルフィードとしては古龍相手に善戦できた方だと思う。戦いのほとんどが決定打を与えられずに翻弄されただけだったかもしれな

いが、何もかもが不十分な遭遇戦だと考慮すればそれも仕方がないと言える。
だが、クリュウからすればそんな事関係ない。彼にとっての事実とは、自分が皆の足を引っ張る形となった。ただその一点に尽きる。
「それよりシルフィ、二人の援護に行って。いくら何でも、クシャルダオラ相手に二人じゃキツイよ」
「いや、あくまで二人は私達が逃げる為の時間を稼ぐ為に残った。だとすればもう撤退しているだろう。今私が向かえば入れ違いになる可能性がある。なぁに、二人共実力あるハンターだ。二人を信じて、今は待とう」
「……そうだね」
そこで、二人の会話は止まってしまった。
クリュウはそれから一切言葉を発さなくなり、激しく落ち込む彼の姿を前にシルフィードも掛ける言葉が見つからず黙り込み、結果的に二人共沈黙が続いた。
そんな時間が数分と続き、耐えられなくなったシルフィードが勇気を出して声を掛けようと口を開き掛けた時、先に声を発したのはクリュウの方だった。
「何で、あんな所にクシャルダオラが……」
愕然とした様子で呟いた彼の言葉に、シルフィードは開きかけていた口を閉じた。彼の言葉は答えを誰かに求めているようなものではない。ただ単に、この状況が理解できず、困惑しているのだ。何で、何でと繰り返す彼の言葉に、シルフィードは一度は閉じた口を開く。
「……君は、山頂で異物を見たと言ったな？」
突然の問いかけに困惑しつつも、クリュウはゆっくりとうなずいた。その彼の首肯に対し、シルフィードは短く「そうか……」とつぶやく。
「それが、一体何だって言うのさ……」
「私が昔、一度だけクシャルダオラを戦った事がある事は知っているな？」
クリュウは短くうなずいた。

シルフィードが以前、クシャルダオラと戦った事がある。それはまだ彼女がソードラントに属していた頃の事。戦闘に参加していたとはいえ、主力はほとんど他の面子だった。シルフィードとしては自らの無力さを離すようであまりいい思い出ではないが、今はその時の情報が必要だった。
「その後、私はクシャルダオラの事について調べた――もちろん当時の私らしく、次は私自身の手で殺す為にな」
自虐的に笑う彼女の表情と言葉に、クリュウは返す言葉がなかった。当時の彼女はモンスター全てを憎み、全てを殺す事を目的として行動していた。それ故に、力を求めてソードラントに属していたのだ。
「その時に知った事なのだが、クシャルダオラは約十年おき程度の頻度で、脱皮を行うそうだ」
「脱皮？」
「クシャルダオラは、自らの体を鋼で組成している。どういう理屈かはわからんが、鉄の体を持つモンスターだ。だが鉄というのは頑丈ではあるが、時が経つにつれて腐食し、劣化する。そうなれば脆いものだ。だからクシャルダオラは定期的に新しい鉄の鎧を纏う為に、古くなったサビついた鎧を脱ぎ捨てる。君が山頂で見たのは、きっと以前奴が纏っていた鎧の残骸だ」
「鎧の残骸……あれが」
確かに、異物だった。山頂という何もない白の世界において、異色の物体であるそれはどうしてそこにあるのか、理由を見つける事はできなかった。雪山の天辺に鉄の残骸がある。それも本当に鉄の残骸であり、飛行船などの残骸とも違う。気にはなっていたが、まさかそれがクシャルダオラの脱皮した残骸だとは、知識のない状態ではいくら考えても思いつかない。だが、答えを知ればあれを見た時の自分の中にあった違和感とも合点がいった。
「奴は一度脱皮した場所で再び脱皮する習性がある。きっと、あの山の天辺は奴の脱皮場所だったんだろう」
「でも、何で今まで知られてなかったんだろ……あんな残骸があると

知れば、とっくの昔に調べてるはずでしょ？」
「私達と同じだよ。誰も、あの山の天辺に登った事はなかったんだろう。専用の装備がなければ登れない、ましてや何の特徴もないただの平凡な雪山を踏破したいと思う登山家もいない。結果的に、今までその存在を知る者はいなかったのだろう」
　イルファ雪山はハンターズギルドに認められた狩場ではあるが、第一級狩場に認定されているフラヒヤ山脈と比べると、第二級狩場。重要度も異なる為、訪れるハンターの数は少ない。特筆した特徴がある山でもないので、これまでしっかりとした調査が行われる事はなかった。結果、誰も山頂にあんな物があるとは知らなかったのだ。
「もしかして、この周囲に避難命令が出されたのって……」
「――おそらく、奴が出現したからだな。クシャルダオラは風を纏う古龍で、現れると天候が大きく荒れると聞く。だが実際は奴の出現自体に避難命令が出されたのだろう。そしておそらく、無用な混乱を避ける為にあえてクシャルダオラの存在は伏せて嵐による避難という名目にしているのだろうな。だからこそ、天候による避難なのにドンドルマが動いてくれたのに違いない」
　ドンドルマにあるハンターズギルドは慈善団体ではない。自らの仕事の範囲外の事はしない。その自らの仕事こそがモンスターに関わる事だ。シルフィードは、ハンターズギルドが動いたという時点ですでに何らかのモンスターの影響があると薄っすら気づいていたのだ。
「これから、どうすればいいのかな……」
　イージス村の避難命令の理由が古龍の出現だというのなら、自分達には正直どうしようもない。古龍を迎撃するだけの力がないというのが最大の理由だが、同時にただ脱皮の為に訪れたのなら刺激を与えない方がいい。
　判断に悩むクリュウを前に、シルフィードはため息混じりに「まぁ、我々が勝手に判断する事ではない。この情報を持ち帰って、決断は村長にしてもらう事にしよう」と、自分達での決断を放棄する。これは村の存亡に関わる問題だ。自分達は判断する資格はない。

「それに、君の足の事も心配だ。これ以上無理はしたくない」
クリュウの負傷した左足を見ながら言う彼女の言葉にクリュウはまたしても表情を暗くして「ごめん……」と謝る。シルフィードは慌てて「いや、別に君を責めた訳ではないんだが……」と、こちらも気まずそうに黙り込んだ。
二人の間にまたしても微妙な空気が流れてしまう。互いに、何か言葉を発する事を恐れて、何も話せない。気まずくて、怖くて、居心地の悪い沈黙だ。
そして何より、落ち込む彼を前にして掛けるべき言葉が見つからず。年長者なのに何もしてやれない自分の無力さが嫌で仕方がないシルフィード。
そんな居心地の悪い沈黙が数分と、実際十数秒程だったのだが、それでも長く感じた。沈黙に耐えられなくて、何かしようとシルフィードは焚き火の用意を始める。手早く薪を用意し、火を起こして引火する。程なくしてパチパチと音を立てて火が燃え上がる。
身震いする程に冷たい空気が張りつめる中、焚き火の暖かさだけが心地良かった。
更にそこへ助け船とばかりにフィーリアとサクラが戻って来た。二人ともかなりボロボロの姿となっていて、疲労困憊という様子だったがどちらも大した怪我はしていなかった。どうやら二人が撤退した後すぐに離脱を図ろうとしたのだが、しつこいくらいクシャルダオラに追い回されていたらしい。
「そっか、二人とも無事で良かったよ。ほんと、ありがと」
クリュウは二人を労うように微笑むと、それだけで疲れ切っていた二人の表情に明るいものが戻る。正直かなりキツイ戦いだったが、それでも大好きな彼にお礼を言ってもらえた。それだけで、二人は十分だった。
「それよりもクリュウ様、足は平気ですか？」
「うん。ちょっと挫いちゃった」
「……骨折してる訳じゃないのね。良かった」
「……でも、これじゃまともに動けないよ」

苦笑しながらクリュウは自らの負傷した左足に触れる。それを見てさっきまでほっとしていた二人の表情が曇った。すかさずシルフィードが「まぁ、二週間くらいあれば完治するようなレベルだ。そんなに気に病む必要はないさ」とフォローに入る。
「クリュウ様、痛いですか？」
彼の足下に屈んで心配そうに彼の怪我した足を見詰めるフィーリアにクリュウは笑みを浮かべて「ちょっと痛むけど、シルフィのおかげでだいぶ楽になったよ」とシルフィードを見ながら笑みを浮かべる。そんな彼の言葉にシルフィードは「大した事はしていないさ」と照れ笑いを浮かべた。
ほっとするフィーリアを押しのけて、今度はサクラがクリュウの前に立つ。
「サクラ？」
「……力になれなくて、ごめんなさい」
そう言って、サクラは深々と頭を下げた。慌てるクリュウや戸惑う二人に対して、サクラは無言で頭を下げ続けた。そんな彼女の姿勢を見て、一人クリュウは彼女の想いを悟った。
今回の戦いで、サクラはいつもの実力を発揮する事はできなかった。風の鎧を突破する事ができず、ほとんどの攻撃を当てる事ができなかった。結果、今回の戦いで役に立てなかった。そんな想いがきっと彼女にはあるのだろうと。
事実、サクラは頭を伏せながら悔しげに顔を歪めていた。自分が役に立てず、愛する彼が怪我をしてしまった。決して彼女のせいではないが、彼女にしてみれば彼を守れなかったというのが事実であり、彼女自身を苦しめる。
サクラは人一倍責任感が強い子だ。だからこそ、苦しんでしまう。
頭を伏せたままの彼女を前にシルフィードとフィーリアは互いの顔を見合わせる。だがクリュウは、
「何言ってるのさ。僕だって似たようなもので、ほとんど風の障壁のせいで剣を入れられなかった。でもさ、君の動きがクシャルダオラの意識を削いでくれたからこそ、みんなうまく立ち回れたんだよ。僕の

怪我は、僕の不注意が原因だからさ、君が気にする事はないよ」
「……クリュウ、ありがと」
顔を上げたサクラは小さく微笑みながらそう呟いた。そんな二人の姿を見てやれやれとばかりに肩を揺らしながら、でもどこか嬉しそうな笑みを浮かべるシルフィード。だがそれもそこまでだった。すぐにそんな笑みは引っ込み、現れたのは狩人の顔だ。
「ひとまず、現状を村長に報告しよう。疲れている所悪いが、ここは危険だ。早急に山を出るぞ」
シルフィードの言葉に、反対する者はいなかった。皆、同じ結論を抱いていたのだ。
すぐさま山を出る準備を始める三人に対し、クリュウは一人先に竜車の中にいた。怪我人という事で出発準備に加えられなかったのだ。本人としては簡単な事でも手伝おうとしたのだが、三人の反対を受けて大人しくこうしている。
幌の隙間から見える、忙しそうに動き回る三人の姿を見て、クリュウは何もできない自分の無力さに胸が苦しくなる。目を閉じれば、思い出すのは鮮明に目に焼き付いているクシャルダオラの姿。神秘的でありながら凶悪で、これまで強敵を相手にしても何とか勝利を手にしてきた、そんな自分の自信を木っ端微塵に砕く、圧倒的な存在。本当に、一矢すらも報いれなかった、完敗だった。
「……あんなの、勝てる訳ないよ」
顔を手のひらで押さえながら、クリュウは一人苦しげにそう呟いた。
熟練のハンターは、古竜相手に勇猛果敢に挑み掛かる。それはもちろんクシャルダオラも例外ではない。だが、自分には無理だ。それほどまでに、奴は圧倒的な存在だった。
確かにクリュウの怪我は大した事はなかった。村に戻ってリリアの手当てを受ければ、三日もあれば回復するであろう、そんな程度の怪我だった――でも、クシャルダオラが彼に残した心の傷は、とても大きかった。
数日後、クリュウ達の姿はイージス村にあった。村に戻ったクリュ

ウは早速村長へ報告に行こうとしたが、待ち受けていたエレナとリリアが彼の怪我を見て手当てが先だと聞かず、結局クリュウはエレナとリリアの押しに負けて手当ての為にリリアの道具屋へ行き、村長への報告は残る三人に任された。
　村長宅へと向かった三人はすぐにイルファ山脈に鋼龍クシャルダオラが出現した事を報告した。これを聞いた村長以下村の重役達の顔から血の気が引いた事は言うまでもないだろう。
「イルファに、クシャルダオラが……」
「山頂にクシャルダオラの抜け殻があった事をクリュウが確認している。恐らく、あそこは奴の脱皮場なのでしょう」
　愕然とする村長に対してシルフィードがそう続ける。更にフィーリアが「クシャルダオラは約十年周期で脱皮を行うそうなので、仮に今回何事もなく過ぎ去ったとしても、また十年後には同様の厄災が発生します」とフィーリアが補足事項を付け加える、すると、そんな彼女の発言にピクリと反応したのは漁業組合の長であるバルドだった。
「……そう言われれば、確かにこの村は約十年ごとに大嵐に襲われていたな。二〇年前には親父の船が潰れちまったし、九年前には――」
「――アメリアちゃんが、死んでる」
　村長が呟いた言葉に、その場がしんと静まり返った。その場にいた全員が目を見開いて驚き、だが誰もが納得したような表情を浮かべていた。
「……クリュウには伏せているが、私も村長と同意見だ。引退していたとはいえ、流星の姫巫女が命を落とすような相手となると、それは古龍クラス。そしてアメリア・ルナリーフが死んだのが九年前で、クシャルダオラの脱皮周期は約十年。偶然と片づけるには、あまりにも出来過ぎている」
　村長とシルフィードの意見は重なっていた。九年前、クリュウの母アメリア・ルナリーフはセレス密林で迷子になったエリエ・フォルシアを捜索する為に嵐の中村を出た。結果、エリエは助かったがアメリアは彼女を逃がす際に謎のモンスターと交戦して行方不明。後日、彼女の身につけていた血塗れの防具の一部が発見され、本人は見つから

ず、アメリアは死んだ事にされた――そのアメリアを亡き者にした者こそが、鋼龍クシャルダオラなのだろう。
二人の意見に、その場にいた全員が黙り込む。村の一大事という大変な事態を前にしても、彼らの推理はそれを度外視する程に強烈で、悲壮なものだった。
「そうか、そういう事だったのか……」
村長は全ての謎が解けたかのように言葉を漏らす。だが謎が解けたというのにその表情は暗い。謎が解けたとはいえ、それは決して喜ばしいものではなく、むしろ知りたくなかった事実だったからだ。
「かつて、アメリアちゃんが命懸けでエリエちゃんを、そしてこの村を救ってくれた。なのにクシャルダオラはまたしても現れ、そしてこの村がまたしても危機に晒されている――しかも、アメリアちゃんはもういない」
村長の言葉を皆は黙って聞いている。彼がどのような決断を下すのか、待っているのだ。
「確かにイルファ山脈からこの村は離れている。でも、決して安全とは言えない。事実、前回奴はセレス密林に出現しているんだ」
否、もうみんな知っているのだ。村長が、この村人の事を何よりも大事に思っている、心優しき青年村長が下す決断を――皆、知っている。
「村のみんなを守るのが、村長である僕の役目だ。断腸の思いだけど――全村民を、このイージス村から避難させよう」
――イージス村が始まって以来初めての全村民避難命令が発令された瞬間であった。
小さな村でしかないイージス村全体に避難命令が発令された事は、一時間程で全村民が知る事となった。エレナ伝いに避難命令が出された事を知ったクリュウは一人「そっか……」と短く、力なく呟いた。
「避難先は、決まってるの？」
牛乳を飲んでいたリリアの問いに、エレナは「ええ」と肯定した。
「クリュウ達が村を離れている間にフィーリアのご両親から手紙が届いたの。フィーリアが頼んでいた村人の避難を受け入れてくれるっ

てもので、向こうでも受け入れ準備を開始してるらしいわ」
村を離れる直前、フィーリアは実家に村の危機的状況と村民が避難する場合には受け入れてほしいという旨の手紙を出していた。それに対しフィーリアの父シュバルツ・レヴェリ侯爵はこれを受諾。すぐさま領土内に避難民受け入れの準備を開始していた。
「……フィーリアのお父さんには、後でお礼を言わないとね」
そう言ってクリュウは笑みを浮かべたが、それが空元気から来るものだという事くらい、二人はお見通しだった。腰に手を当てながら「何しけた顔してんのよ」とエレナは呆れるが、それは決して彼を責めているものではなく、むしろ彼を心配して平静を装っているに過ぎない。不器用な彼女なりの気遣いだった。
「んな事あんたは考えなくていいのよ。あんたは自分の怪我を治す事に専念しなさいよ」
「……そう、だね。僕じゃ、何にもできないもんね」
エレナの何気ない素直じゃない発言に対し、クリュウの表情が曇る。いつもの彼なら鋭い返しがあるはずなのに、それがない。常の彼らしからぬ反応に、困惑するエレナ。
「な、何よあんた。元気ないじゃない」
「どこか痛いの？」
怪我が痛むのだろうと心配する二人に対し、クリュウは「足は大丈夫だよ」と笑みを浮かべて答えるが、それも先程と同じでどこか虚ろに見える。困惑する二人を前に、クリュウは視線を外して窓の外を眺めた。
「避難準備、忙しくなるだろうね」
「ま、まぁそれはそうよね。私も荷物纏めないといけないし、あんただって荷物纏めるんでしょ？　何だったら、私手伝うわよ？」
「ありがと」
目線を合わせずに礼を言う彼の様子に、いよいよ彼の様子がおかしい事を確信したエレナ。キュッと顔を引き締めると、虚ろな瞳でいる彼の前に立ち塞がった。首を傾げる彼の視線は、やはり虚ろで――その視線は、自分を見てはいない。

「あんた、どうしたのよ」
「どうしたって、何が？」
「帰って来てからずっとそう。あんたらしくないわよ」
「僕らしい……それって何だよ」
　仏頂面で言う彼の言葉に、何か言葉にできないモヤモヤが胸の中で渦巻く。それは悲しさか、怒りか、それとも両方か。どれにしても、気持ちのいいものではない。
「いつものあんたなら、こういう時は村を守る為にもう一度クシャルダオラに挑むとか、無茶言うじゃない」
「……バカじゃないの？　この足で、どう立ち回れって言うのさ」
「その足だって数日もすれば元通りになるわよ。足のせいにしてんじゃないわよ」
　いつの間にか、彼の視線が自分に集中している事に気づく。それはしっかりと、自分を見てくれていた。だがそれは、決していつもの彼が自分に向けてくれる優しいものではない――嫌悪と憎悪に満ちた、彼の怒りの目だ。
「――勝てる訳ないだろ」
　吐き捨てるように彼の口から放たれたのは、信じられない言葉だった。それは驚愕するエレナだけではない、リリアも目を大きく広げて驚いている。
「あんた、何言って……」
「あんな化け物相手に、勝てる訳ないって言ってんだよ」
　次々に彼の口から飛び出すのは、彼らしくない言葉の数々だった。確かに彼はネガティブ傾向が強い。だがそれは自分に対するものの時だけであって、村の危機とか、みんなを守る為とか、そういう危機的状況ではむしろ周りが悲観的になる中で、希望を失わず光り輝いて立っている。その勇ましさと頼もしさが、数々の戦いでフィーリア、サクラ、シルフィードを救って来たかわからない――もちろん、幼なじみであるエレナもまた、その一人だ。
　そんな彼の口から、村が危機だというこの状況で出る悲観的な発言の数々。明らかに、彼らしくない――自分の好きな、幼なじみと発言

ではなかった。
「……何で、そんな事言えるのよ」
　気がつくと、勝手に口からそんな言葉が溢れ落ちていた。ギュッと握りしめた拳は固く、爪が手のひらに食い込む程強く、拳は細かに震えていた。それが怒りから来るものだとわかるのに、そんなに時間はかからなかった。
「今がどういう時か、あんたわかってるでしょッ!?」
　突然激昂すると、エレナはクリュウの胸倉を掴んで無理やり彼を立たせた。それは相手が足を怪我しているという配慮など一切ない、怒りに任せた行動だった。一瞬足に走った痛みに顔を顰めたクリュウだったが、目の前で激昂する幼なじみを前にクリュウは口を固く閉じた。
「何あんた、やる気を失ってるのよッ！　この非常時に、シャキッとしなさいよッ！」
「……うるさいなぁ」
「なッ……!?」
　視線を合わせる事なく、鬱陶しげに呟いた彼の言葉にエレナの怒りの炎は激しく燃え盛る。胸倉を掴んだまま、怒り狂うエレナは激しく怒鳴る。
「あんたはこの村を守るハンターでしょッ!?　それが、村の一大事に何してんのよッ！　何で立ち上がらないのよッ！」
　次々に吐き出される彼を責める言葉の数々。だが、いずれの言葉にもクリュウは無反応だった。まるで聞いていないかのように、一切視線を合わせようとせず、その瞳は濁ったままだ。無気力、そんな感じが彼から滲み出ていた。
　一行にやる気を見せないクリュウの、情けない様に耐えられなくなったエレナは彼の胸倉を外すと突き飛ばし、そのまま背を向けて出て行ってしまった。尻餅をついたまま動かないクリュウを、リリアが心配そうに見詰める。
「お兄ちゃん……」
「……戦ってない奴に、わかるもんか」

床を見詰めたまま、力なく彼は呟いた。
村最大の危機を前に、本来なら一つになるはずの気持ちがバラバラになる少年達。その回復を待つ暇もなく、イージス村では急ピッチで村を脱出する為の作業が進められていた。

第２１５話　恋姫達の決死の出撃　イージス村に迫る空前の厄災

全村民の避難命令が発令された翌日の昼過ぎ、村民の避難スケジュールを話し合う村長宅に突如シルフィード、フィーリア、サクラの三人が現れた。驚く一同を前に、シルフィードは決意に満ちた表情で口火を開いた。

「――村人の全避難が完了するまで、私達三人が鋼龍クシャルダオラを引き付ける」

それは三人が話し合い、そして決意した行動だった。

集まった村の代表者達は彼女達の言葉にざわめく。その中でただ一人、村長だけは冷静に彼女達を見詰めていた。若く見える青年村長も、村で一番長生きの者に匹敵する程の年を重ねた年長者だ。他の者達とは踏んで来た場数が違う。

いつもの穏やかな瞳を隠し、いつになく鋭い瞳で三人を見詰める村長は、決意に満ちた表情で対する彼女達に向かって、重い口を開いた。

「……確かに、前回奴は突然村の近くにまでやって来た。何の防衛対策もない状態で避難する村民を確実に逃がす為には、奴をイルファの地に引き留めておく必用があるのは事実だよ。でも、君達にそんな危険な役目は任せられない――君達も、僕の村民（かぞく）だ。危険に晒す訳にはいかないよ」

真剣な眼差しを向けたまま語る彼の言葉に、シルフィードはフッと口元に笑みを浮かべた。

「村長の気遣い、心から感謝する。だが、我々は貴殿にこの村の防衛を任されている身だ。今こそがその本懐を遂げる時だろうと我々は考える。我々も村民（かぞく）を守る為に、この力を遺憾なく発揮したい。例えそれが厳しい戦いになるとしても、だ」

「シルフィード様の仰る通りです。前回は予期しない遭遇戦でしたが、今回は万全の準備を整えての戦いです。皆様が安全に脱するだけの時間を、私達が必ず稼いでみせますッ」

「……攻撃は最大の防御。今度は負けないわ」
三人の言葉に、村民達の表情が柔らかいものに変わる。彼女達は自分達と違って、この村に生まれ育った者ではない。それでも、この村を故郷を考え、村人を家族として慈しみ、今村の危機に自らの危険を冒してでも戦いを挑もうとする三人を、彼は心から誇りに想っていた。
彼らの想いを無駄にしたくはない。でも同時に、そんな可愛い自分達の子供と変わらないくらいの年齢の彼らに危険な戦いを押し付けたくない。そんな相反する想いに苦しむ彼らを前に、村長はゆっくりと立ち上がった。
その場にいた全員の視線が、一斉に彼に注がれる。村民達の視線を一身に受けながら、彼は決断をせねばならない。何事においても、誰かの上に立つ者の役目は決断する事だ。それが例え非情な決断だとしても、大義の為にしなくてはならない。
今の自分の大義は、村人を安全にエルバーフェルド帝国レヴェリ領に送り届ける事。その為には、最大の脅威であるクシャルダオラを何としても近づけてはならない。そして、今目の前にいる彼女達は、その役目を自ら進んで行おうとしている。彼女達の想いを無駄にせず、そして村人の安全を守る為――決断は、もう決まっていた。
「……すまない。頼めるかい？」
申し訳なさそうに言う彼の言葉を、誰も責めようとはしない。むしろ三人は自分達のある種のわがままを聞いてくれた村長に対して感謝の念すら抱いていた。
「あぁ、任せてくれ」
仲間を鼓舞する時に浮かべる頼もしい笑みを浮かべながら言う彼女の言葉に、村長の顔にも笑みが浮かんだ。村民達も、心配はしつつも彼女達の出撃を心から感謝していた。そして村の為に役立てる事に、三人もまた歓喜していた。
「面子は君達三人だけかい？」
「ええ。ツバメとオリガミには避難民の護衛を任せたい。足を負傷しているクリュウは完治次第第二陣の護衛を行なってもらう」

この時、イージス村の村民の数は三〇〇人近くにまで増えていた。避難命令が下された他の村や街の住人が避難して来ており、村民の数に加えてこうした難民も抱えていた為だ。その為、村長が立てた避難スケジュールでは、まず第一陣として若い男集、約二〇〇人が徒歩にてレヴェリを目指す事になっていた。そして残る女性や子供、高齢者など約一〇〇人はレヴェリ家が用意して送り込んでくれる竜車隊に乗車して村を離れる。大きく分けてこの二段構えの避難方法を考えていた。その為、ツバメとオリガミは第一陣の、そしてクリュウには第二陣の護衛が任される事になった。

「第一陣は体力のある者達ばかりだから、護衛はツバメ君とオリガミ君だけで何とかなると思う。第二陣にはレヴェリの兵士も来てくれるみたいだから、最悪クリュウ君の足が治り切ってなくても何とかなると思う。問題は君達だよ」

そう言って村長は三人を見詰める。彼女達の役目は全ての中で最も危険度が高いのだから、心配するのは当然だ。だが彼が本当の意味で心配しているのは、実はそこではない。そんな彼の不安を感じ取ったのか、シルフィードは肩を竦ませる。

「言わんとしている事はわかる。チームの要であるクリュウを欠いた状態で、我々が連携できるのかを心配しているのだろう？」

「まぁ、そうだね」

これは何を意味しているのか。それは、彼ら四人のチームの根幹に関わる事であった。

クリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィード。この四人で無敵のチームなのだ。更に言えば、チームリーダーは確かにシルフィードではあるが、実際はクリュウを中心としたチームである。彼の人柄に惚れ、集まった乙女達。そしてそんな彼女達の信頼を得てチームの中心人物として君臨するクリュウ。この四人の連携が、このチーム最大の強さの秘訣であった。

だが今回、おそらくこのチームにとって最大最強の敵になるであろう鋼龍クシャルダオラを相手にする戦いだと言うのに、肝心のチームの中心人物であるクリュウは負傷して参加できない。彼を中心に編

成されたチームで、彼を欠いた状態でこの戦いに挑もうというのだから、村長が心配するのは当然と言えるだろう。
だが、彼の心配は杞憂であった。
村長の言葉に対し、三人はフッと口元で笑ってみせた。驚く彼を前に、三人は凛々しい表情を浮かべながら君臨する。
「確かに我々は、彼を好いた者達の集いだ。彼を守りたい、彼の為にがんばりたいという娘の集いで、その力が結集したチームだ。だが、同時に今では我々だって友だ。例え彼を奪い合う恋敵（ライバル）だとしても、我々はこれまで互いに背中を預け合って来た戦友だ。その集いが、故郷を守る為、家族を救う為の戦いとあれば、協力しない理由はない――戦友同士のチームの実力、舐めてもらっては困るぞ」
そう言って不敵に笑ってみせるシルフィード。その隣では自分達も同じ想いだと言わんばかりに同じような笑みを浮かべながら二人が頷いている。
三人の表情を見て自らの心配は杞憂であった事を悟ると、村長もまたフッと口元に笑みを浮かべながら「そうだね。もう、昔の君達じゃないんだ」と、どこか安堵したような笑みを浮かべた。
「正直、これだけの人を一斉に動かすんだから準備にも時間が掛かる。その間にクシャルダオラに動かれたら避難の意味がなくなる。君達がその足止めをしてくれる事は、こちらとしても助かる」
「そうか……」
「だが、これだけは約束してほしい――必ず生きて帰って来い。僕達が助かっても、君達がいなくちゃ意味がない。アメリアちゃんの時みたいな事は、もうごめんだ」
それはその場にいた村人の総意であった。皆、村長と同じく強い瞳でこちらを見詰めている。そのいずれもが、彼と同じ想いを抱いているのだ。そんな彼らに対し、三人は凛とした表情を崩さず答える。
「もちろんだ。家族を守る為の戦いで、家族を悲しませるような事はしないさ」
「決死の覚悟で挑みますが、必死ではありません。生き残る事は、大前提ですからね」

「……私が死ぬのは、クリュウの腕の中と決まっている。寒空の下で野垂れ死ぬつもりはないわ」
　三人の言葉に村の代表者達は安堵の表情を浮かべる。村長も同様で、彼女達の言葉と表情を見て短く「わかった」と答えると、腰に手を当てる。そしていつもと変わらぬ柔和な笑みを浮かべ、
「行って来い」
　――いつものように、元気良く見送ってくれた。
　その夜、クリュウ宅に集合した三人はエレナとクリュウに対し明日の早朝にイルファ山脈へ向かう事を話した。目的はもちろん村民の避難が完了するまでの間、鋼龍クシャルダオラを食い止める事だ。
「君に相談なしで勝手に決めた事は詫びる。だが、これも村の為なんだ。わかってくれ」
　頭を下げるシルフィードの言葉に対し、クリュウは何も答えなかった。フィーリアとサクラも同じように頭を下げていて、エレナはそんな双方を見比べているばかり。いつもは騒々しいリビングに、不穏な沈黙が舞い降りる。
「……僕は、足手纏いって事？」
　ようやく口を開いたクリュウだったが、吐き出された言葉はあまりにも弱々しく、だがどこか刺々しいような印象を受けるものだった。
「そういう意味ではない。村人を護衛するのも立派な役目であり、君の足の事を考えて最良の選択だと私が独断した。不快な思いをさせてしまったのなら、それも詫びよう。だが、今はどうかわかってほしい」
　頭を上げる事なく言う彼女の言葉に対しても、クリュウは再び沈黙してしまった。頭を下げながら、フィーリアは正直頭を上げる事が怖くて仕方がなかった。それほど、今の沈黙は怖かったのだ。
「……クリュウ、怒ってる？」
　逸早く頭を上げたサクラが不安そうに尋ねると、クリュウはフゥとゆっくりとため息を零した。その音が静かな空間に妙に良く響き、頭を下げたままのフィーリアの肩がビクリと震える。
「――別に怒ってなんかいないよ」

続けて放たれた彼の言葉は、誰もが予想していたものとは違うものだった。声色もどこか優しげで、驚いて顔を上げると、そこには苦笑を浮かべた彼の姿があった。
「……クリュウ」
「むしろ、ごめんね？　僕がこんな怪我じゃなきゃ、みんなに迷惑掛けないのに……」
悲しげにつぶやきながら、クリュウは自らの負傷した足を見詰める。その視線を追った四人の表情もまた暗いものに変わる。
「仕方がない。怪我してしまった事は、決して君の責任ではない。古龍相手にむしろその程度の怪我で済んで良かったくらいだ」
「だとしてもさ、結果的にみんなと一緒にクシャルダオラの足止めに参加できない。肝心な時に役立たずだよ」
どこか投げやり気味に言う彼の言葉に、シルフィードはどう返せばいいかわからず黙ってしまう。そんな彼女の代わりにクリュウに近づき、彼の手をそっと握り締めたのはサクラ。ジッと真剣な瞳で彼を見詰める。
「……クリュウ、忘れてはダメ。村民の避難護衛の方がずっと大事。私達はあくまで鋼龍の足止めをするに過ぎない。村民の命に直結するのは、クリュウの方。護衛は地味だけど、大事」
それは護衛依頼を大事に考える、彼女の信念だった。護衛依頼は討伐依頼などに比べて報酬も少なければ派手さもない地味なものだ。だが討伐依頼なんかよりもずっと人の命に直結するし、戦闘時に考える事もずっと多い。面倒だからと敬遠するハンターも多い。だが彼女は過去の悪夢からその誰もが受けたがらない護衛依頼を重点的に遂行してきた。だからこそ護衛依頼の大事さを誰よりも痛感している。
そんな彼女の真剣な眼差しと言葉に、クリュウは目を背けた――今の自分には、彼女の真っ直ぐ過ぎる瞳を直視する事ができない。
「……クリュウ」
「……わかってるよ、ごめん」
視線を合わす事なく謝る彼の姿に若干の違和感を感じつつも、サク

ラはそっと彼の傍を離れた。この時、彼女が抱いた違和感は、他の面々も薄々感じていた。
「クリュウ様、もしかしてご気分が優れないのですか？」
「そんな事ないよ。体調は、悪くない」
「そう、ですか……」
彼の言葉を疑う訳ではないが、やっぱり何かがおかしい。
そんな中、シルフィードの短い咳払いが辺りに響いた。自然と皆の視線は彼女に集中し、彼女の次の言葉を皆が待つ形になる。そんな彼らを見渡しながら、シルフィードはゆっくりと口を開いた。
「とにかく、今は非常時だ。フィーリアとサクラ、そして私はクシャルダオラとの戦いに備えての準備を行う。クリュウとツバメは村長の所へ行って避難スケジュールの調整をしてくれ。ここからは別行動だ」
その言葉を最後に、フィーリア達は倉庫の方へと向かい、明日の出撃に備え始める。クリュウとツバメはシルフィードに言われた通り村長宅で避難時の護衛について話し合う事となった。ツバメの肩を借りて歩いて行くクリュウの背中を、倉庫の前に集った三人が不安げに見詰めていた。
「……クリュウ、変だった」
「です、よね……」
小さくなっていく彼の背中を不安げに見詰める二人の後ろで、シルフィードは深いため息を零した。そのため息に振り返った二人に、シルフィードは肩を竦める。
「……完全に戦意を失ってしまっているな」
「戦意、ですか？」
「初めて古龍を相手にして、その圧倒的な力を前にして、戦う気力を失ってしまっている」
シルフィードの言葉に改めて振り返るフィーリアとサクラだったが、その視線の先にはもう彼の背中はなかった。不安げに彼の消えた道を見詰める二人の肩を、シルフィードが優しく叩く。
「私達も一度は通った道だ。これを乗り越えてこそ、彼は一人前のハ

ンターになれる。タイミングと相手が悪い事は否めないが、これも運命という奴だ。どう乗り越えるかは、本人次第。私達にできる事は、今はない」
「そうですね……」
「……私達が今成すべき事、それは」
一度伏せた視線を上げ、サクラは振り返る。そんな彼女の視線を追うと、三人の目は自然とイルファ山脈の姿を捉えていた。鉛色の空をバックに、不気味に聳え立つ山々。見知った、でも見知らぬ山となった場所。そしてあそこにいる彼の者こそ、この平穏な村に厄災を呼び起こす者。その彼の者を憎々しげに睨みつけるように、サクラは鋭い視線を向けたままつぶやく。
「――あの鋼野郎を、一歩たりともあの山から出さない事よ」
彼女の言葉に対して、二人の少女は厳かにうなずいた。
その夜、クリュウは一人家を抜け出した。家々の外には用意した避難の際に持っていくであろう荷物が置かれており、いつもなら寝静まっているはずの時間帯でも道を歩く人の姿が多い。だがそのいずれもが不安や焦りに表情を翳らせながら、慌ただしく道を行き交っている。クリュウはそんな住民達の姿を一瞥した後、目を合わせないようにしながら歩き進める。
しばらくそうして歩いていると、村の中心部から外れる。木々を抜けた先、そこは村外れにある市営墓地。村で亡くなった人が埋葬される場所であり、その中にはクリュウの両親である父エッジ・ルナリーフと、母アメリア・ルナリーフの墓がある。並んで建てられた墓の前に到達すると、彼はゆっくりとその前に座り込んだ。
「……父さん、母さん」
呼んでも、返事がない事くらいわかっている。それでも、そうつぶやいてしまう。
父は幼い頃にギルドの依頼を受けて、古龍との戦いで命を落とした。そして母もそれから数年後に、エリエを捜しに行った先でモンスターと交戦し、命を落とした。
そして今、二人が守り抜いて来たイージス村が、かつてない危機に

襲われようとしていた。不安に怯える住人達の顔が、目に焼き付いて離れない。守らなければならない人達を前にしても、何も出来ない自分。足を負傷しているというのももちろんあるが、それ以上に――

「……くそ」

微かに震える手を握り締め、地面を殴りつける。

戦おうと考えると、手が震えて止まらなくなってしまう。自分でもわかっている、鋼龍クシャルダオラの圧倒的なまでの力を見て、自分がビビっている事くらい。今がどんな状況で、そんな暇がない事も重々承知している――でも、戦えないのだ。

戦いたくても、戦えない。どうせ自分では、奴に太刀打ちできない。むざむざ殺されに行くようなものだ。それこそ、両親の二の舞だ。

「……最低だな」

項垂れていた頭をゆっくりと上げると、自虐的な笑みを浮かべた彼の顔が顕になる。

正直、三人がクシャルダオラの足止めに行くと行った時――心の何処かで安心した自分がいた。これで、あいつと戦わなくて済む。

「くそ……ッ」

自分が情けなくて、何度も何度も拳を地面に叩きつける。皮膚が擦り切れて血が滲んでも、痛みすらも感じない。何も出来ないという情けなさももちろんだが、今の彼を最も苦しめるのは戦わなく済む事に、戦いを彼女達に押し付けてしまった事に、どこかで安心してしまった自分だった。

「……ごめん父さん、母さん。僕、二人みたいな立派なハンターには、なれそうもないや」

彗星の剣狼エッジ・ルナリーフと流星の姫巫女アメリア・ルナリーフ。歴史上唯一夫婦でエンペラークラスになった、今でも伝説のハンターとして語り継がれる英雄。それが彼の両親だ。

子供の頃、二人に憧れてハンターを志し。二人のようなハンターになる事を夢見てがんばって来た。だが成長するにつれて、二人がどれだけ遠くを歩んでいたかがわかった。自分の歩みでは、どうがんばっても届かないような、そんなずっと先を、二人は歩み続けていた。

皮肉な事に、力をつければつけていく程に、二人の凄さを痛感してしまう。いつしか、自分は二人のようなすごいハンターにはなれない。そう思うようになっていた。それでも、その現実に目を背けて前に進み続けてきた。それも、どこかで限界に達しつつあったのだ。

キティは言っていた。自分は、両親と同じ道をしっかりと歩んでいると。でもそれはきっと、ハンターという同じ道を歩んでいるに過ぎない。二人のような強さも、二人のような覚悟も、自分は持っていない。

英雄と呼ばれた二人の息子なのに、情けなさ過ぎて笑えてくる。

「……僕、どうすればいいんだろ？」

「――あぁもう、何グチグチと面倒くさい事考えてんのよ」

誰もいるはずもない墓場に突如響いた声。驚いて振り返ると、そこには腰に手を当てながら呆れ返った表情を浮かべたエレナが立っていた。驚きのあまり言葉が出ないクリュウを前に、彼女はわざとらしく大きなため息を零す。

「ど、どうしてここに……」

「あんたが家を出る所を偶然見たのよ。それで追っかけて来たって訳。っていうか、ハンターなのに私の気配もわからないとか、あんた弛んでるんじゃないの？」

呆れるエレナの言葉にようやく状況を理解したクリュウだったが、そんな彼女の台詞に「……そう、かもしれないね」と小声で肯定する。すると、てっきり何かしらの反応があると思っていたエレナは拍子抜けしたようにぽかんとする。

「あんた、ホントどうしちゃった訳？」

「……ホント、どうしちゃったんだろうね？」

空笑いを浮かべる彼の言葉に、エレナは何も答えなかった。ただ黙って、彼の隣に座ると無言でジッとエッジとアメリアの墓を見詰める。

「エレナ？」

「――古龍、実際に戦ってみてどうだった？」

唐突な質問だったが、クリュウは少し考えて、

「……全く、歯が立たなかったよ」
ウソ偽りなく、正直に答えた。圧倒的な存在を前に、自分の無力さを痛感したあの戦い。一方的に弄ばれ、こちらの必死など届かないような戦いとも言えぬ戦いだった。自分がこれまで幾多の戦いで築きあげて来たスキルが、まるで役に立たなかった。今までの自分の努力など無駄だった、まるでそう言われているかのような無惨な戦いだった。
暗い声で答える彼の言葉に対し、エレナは短く「そっか……」とだけつぶやいた。非難するでも、気遣うでもない。ただただ彼の口から発せられた事実に対して、至極簡潔に相槌を打っただけ。
「まぁ、古龍なんて人間が勝てるような相手じゃないのかもね」
「……身も蓋もない事言ってくれるな」
あっけらかんと言う彼女の言葉に、クリュウは思わず苦笑を浮かべる。確かにそうかもしれないが、それを言われてしまうとハンターという生業が成り立たなくなってしまう。だがエレナはまるで事実だと言いたげに続ける。
「古龍って天災に匹敵する存在なんでしょ？　天災に対して、人間ができる事なんで身を守る事しかできない。そうでしょ？」
「そうかもしれないけどさ……」
「今だって、一頭の古龍が出現しただけで近隣の村や街の大勢の人達が避難している。大の大人達がそんな状況になる相手に、あんた達は四人で戦いを挑んだ。それで負けたからって、誰が文句を言う訳？もしもんな事言う奴がいたら、私がボコってやるわよ」
「エレナ……」
「言い方は悪いかもだけどさ、英雄だって言われたエッジさんも古龍相手に亡くなった。そういう相手なんだよ、古龍ってのは。だから、怖がるのも当然だし、何もできなくたって誰も文句は言わない。勝てないとわかっているなら、逃げる事に全力を注ぐのは決して悪い事じゃないと思う」
エレナが言っている事は正しい。何も間違ってはいない。ハンターは決して命を懸けてはならない。なぜなら、ハンターの最大の役

目は《生きて狩り続ける》事だから。逃げる事だって、戦いたくなくたって、何も悪い事ではない。一般論では確かにそうだ――でもそれはあくまで一般論の話。感情という面では、決して納得できるようなものではない。
「あんたは、何でもかんでも自分のせいだって抱え込み過ぎなのよ」
「そう、かな？」
「幼なじみが言ってるんだから、そうなのよ。ついでに幼なじみから忠告よ」
　ピッと人差し指を立てて偉ぶってみせる彼女の視線を向けると、エレナはフッと口元に浮かべる。驚く彼を前に「あのさ……」と口を開く。
「エッジさんとアメリアさんがすごかったからって、別に誰もあんたに過度な期待はしてないわよ。あんたはあんたなりにがんばってる。それはみんな、私もわかってる。むしろ二人の列伝のせいで、あんたが無理して、怪我しないか、それが心配――あんた、昔から無茶しちゃうからさ。待っている人を、あんまり不安にさせないでよ」
　頬を赤らめ、優しげな笑みを浮かべながら語る彼女の言葉に、クリュウは何も答えない。そればかりか、顔を伏せたままで、その表情すらも窺い知る事はできない。そんな彼の反応を見て、不満気にエレナは唇を尖らせる。
「何よ、何かいいなさいよ」
「――それって、僕が父さんと母さんの面汚しって言いたい訳？」
「え？」
「どうせ僕は父さんや母さんのようにはなれないッ！　そんな事、言われなくたってわかってるよッ！」
「ち、違うッ！　私は別にそんなつもりで言った訳じゃ……ッ！」
　勘違いしているクリュウを止めようとするエレナだったが、伸ばした手を振り切るようにクリュウは立ち上がって歩き出す。だが足を負傷している彼の歩く速度などたかが知れている。すぐに追いついたエレナは彼の肩を掴んで振り返らせるが、それを拒むように彼は正面へと向き直る。

「放してよ……」
「人の話は最後まで聞きなさいよッ！　私は――」
「――幼なじみだからって、馴れ馴れしいんだよッ！　他人の事に口を出すなよッ！」
　クリュウの怒鳴り声に、エレナは思わず手を放してしまう。その隙に彼は歩き出し、彼女との距離を離す。その歩みは遅く、普通に歩いてもすぐに追いついてしまうような速度だ。でも、エレナは彼を追う事はできなかった――ただ、呆然と立ち尽くしながら、彼の背中を見送る事しかできなかった。
　小さくなっていく彼の背中を見詰めながら、エレナはぺたんとその場に座り込んでしまう。足は震え、力が入らず立つ事ができない。
　呆然と彼の背中を見詰める彼女の瞳から、一筋の涙が流れたのはその時だった。
「……他人」
　エレナにとって、その言葉はどんな鋭利な刃物よりも、彼女の胸の奥の引き裂いた。力なく項垂れる彼女を照らす月は、今夜は出ていない……
　翌朝、シルフィード、フィーリア、サクラの三人は鋼龍クシャルダオラを足止めする為にイルファ山脈へと出発した。村人総出での見送りのはずなのに、集まった群衆の中にクリュウとエレナの姿はなかった。
「あの、クリュウ様は……？」
　群衆の中にクリュウの姿が見えず不安になるフィーリアの問いに対し、その理由を明確に答えられる者はいなかった。
「朝、声は掛けたんだがな。返事はなかったな」
　シルフィードの言葉に、フィーリアは「そう、ですか……」としょんぼりと落ち込む。そんな彼女の隣ではサクラが目を伏せている。いつもはなかなか他人には感情の機微がわかりづらい彼女だが、今は誰が見てもクリュウがいなくて落ち込んでいる事がわかる。
「クリュウ君もやけど、エレナちゃんも居らんってのはどういうこっちゃ？」

クリュウと同じく姿が見えないエレナを探すアシュアだが、やはり彼女の姿も群集の中に見つける事はできない。異変に気づいた村人達もざわつき始め、フィーリア達は出発前に出鼻を挫かれる形となってしまった。そんな空気を見て村長がわざとらしく咳払いをして皆の視線を集める。
「まぁ、別に見送りは強制じゃないからね。今は非常時だから、二人も何か別用があっても不思議じゃない」
確かに村長の言う通りではあるが、如何せん相手はあの二人だ。どんなに自分が忙しくても、こういう時には真っ先に駆けつけるであろう二人なので、彼の仮定は通用しない。だがそれをここで言っても仕方がないのも事実。皆、疑問は感じていてもあえてそれを伏せていた。今は、そうしなければいけない時なのだから。
「それじゃ、頼んだよ」
「あぁ、任せておけ」
村長の言葉に、シルフィードは頼もしく頷いて見せた。その言葉と姿に村人達の間に浸透していた不安が少し和らぎ、一時的とはいえ笑顔が戻る。それを見てシルフィードは満足気に微笑むと、背後にいるフィーリアとサクラに向き直る。二人共クリュウが見送りに来なくて落胆してはいるが、それはそれ。シルフィードの準備はいいか、という視線に対してはしっかりと頷いてみせた。
「良し、出発するぞ」
それを合図にして三人は用意していた竜車に乗り込むと、村人達の見送りの言葉を背に受けながら出発した。まるで未練を断ち切るかのような、どこか慌ただしい出発。それでも竜車の中には万全の装備が満載されており、三人の気合いも十分だ。ただ、やはりいずれの顔にもどこか不安げなものが残る。
なぜクリュウは見送りに来てくれないのか。その疑問に答えてくれる者は、ここにはいない。
道中、三人は対鋼龍戦の作戦内容の確認については綿密に話し合ったが、雑談やそれに準じたものをする者は誰もいなかった。そんなメンバーを前にして三人の誰もが、気づいていた――村の存亡をかけて

の戦いに赴くというのに、士気は決して高くはなかった。
「よぉ、ようやく出て来おったか」
　その日の正午、リビングへと顔を出した彼を迎えたのはツバメであった。ソファに腰掛け、本を読む彼の膝の上にはすやすやとオリガミが眠っている。その為クリュウの姿を見つけても立つ事なく座ったままの応対だ。
「お主が見送りに来なくて、連中目に見えて落ち込んでおったぞ」
　彼が言うのはもちろん今朝出発したフィーリア達の事だ。そんな彼の言葉にもクリュウ「あぁ、ごめん」と心ここにあらずのような返しをする。ツバメの姿を一度も正面に捉える事なくクリュウは台所へと消えると、水を一杯飲む。コップをそのまま流しに置いたまま戻ると、先程と全く変わらぬ体勢でツバメが待っている。それすらも無視して彼の横を通り抜けると、
「エレナも来なかった。さっき様子を見に行ったが、尋常ではない様子だった」
　エレナの話題が出た途端、ゆっくりとした足取りで前に進んでいた彼の歩みが止まった。
「エレナが？」
「うぬ。ずっと泣いておったのかのぉ、目は充血して髪はボサボサ。いつもの元気など欠片も見受けられない程、憔悴しておった」
「そう……」
「別にお主達の間の事じゃ。ワシは詮索するつもりはないがのぉ――女の子を泣かせるなど、お主らしくないのぉ」
　どこか皮肉も入ったようなツバメの言葉にも、クリュウは何も返さなかった。ただ無言で、ツバメの前の席に腰掛けると、深いため息を零す。そんな彼の姿を見てツバメは苦笑しながら「お主も、尋常では無さそうじゃの」とつぶやく。
「……ちょっと、昨日エレナとケンカしちゃってさ」
「そんな事、誰もが気づいておるぞ」
「そう、なの？」
「お主達はわかりや過ぎるのじゃよ」

小さく笑う彼の言葉に、クリュウもようやく小さいながらも笑みを浮かべて「そっか……」とつぶやく。
「でもまぁ、ケンカというよりは、僕が一方的にエレナを遠ざけたってのが適切かな」
だがすぐにそんな小さな笑顔も引っ込めると、クリュウは表情を翳らせる。それを見て「まぁ、先程も言った通りワシはお主達の事を詮索するつもりはないのじゃが――」とツバメは続けると、腰に手を当てて胸を張ってみせる。
「――まぁ、一人の友人として相談には応じるつもりじゃ」
温かく、そして優しく言うツバメ。そんな彼の言葉にクリュウは小さな笑みを浮かべて「ありがと」と短く礼を言うと、彼の対面の席にゆっくりと腰掛けた。
短い沈黙の後、クリュウはツバメの目を見ながら「あのさ……」と口を開く。
「――全く、敵わなかったんだ」
小さな声で吐露されたクリュウの言葉は、実に脈絡がなかった。だがその対象が鋼龍クシャルダオラだという事は現状を鑑みるに想像をするのは難しくはない。ツバメもすぐに気づき、優しくオリガミの頭を撫でていた手を止めた。
「ワシは現場にいた訳ではないし、書物でしかわからぬが……鋼龍クシャルダオラは風を纏い、近付く者全てを吹き飛ばすと聞く。風の鎧を見極めなければ、剣先は鋼の体に掠りもしないそうじゃな」
「うん、見えない風に阻まれて全く攻撃を当てられなかった」
吹雪の中の激戦。だが激戦と言いながらその実は一方的に攻撃を受け続け、振り回されたに過ぎない。その中で、クリュウが攻撃を当てられたのはわずかな数しかなかった。圧倒的な力の前に、自らの無力さを痛感した戦いだった――そして初めて古龍と戦い、初めて絶望した戦いだ。
「あんなの、勝てる訳ないって、本気で思った」
「……お主らしくない言葉じゃな」
「クシャルダオラだけに、臆病風に吹かれたのかな」

「冗談を言う気力はあるみたいで安心したぞ。じゃが、少し寒いな」
　おかしそうに笑うツバメの言葉に、クリュウは苦笑を浮かべた。こんな軽口、全くもって自分らしくない事はわかっているが、今はそんな事でも言っていないと自分が保てないのだ。
「だからさ、正直フィーリア達が三人でクシャルダオラと戦いに行くって言った時、どっかで安心したんだ」
「クリュウ……」
「そんな事を考える自分が、許せないんだ」
　震える拳を握り締め、ソファを叩く。それは自分の情けなさに対するもの、何も出来ない自分の無力さなどに対する彼の怒りの表れ。強く握り締められた拳は細かく震え、爪が手の平に痛い程突き刺さる。だがその痛みすらも感じない程、彼の頭の中は憤怒に染まっていた。
「村を守りたい、村の為に戦いたい。この気持ちにウソ偽りはないんだ――でも、戦えないんだ。あれ以来、どうしても剣を持つと手が震えて、まともに振るえない。足が治っても、これじゃ……」
　戦意を喪失しているとシルフィードが言っていたが、事はそれよりも更に深刻だった。戦意を取り戻したとしても、彼の心に深い傷となったクシャルダオラに対する恐れが、彼のハンターとしての根幹をも揺るがしていた。剣を握れない、戦えない。それが余計に彼を追い詰めていたのだ。
「……そんな状態で、もういっぱいいっぱいで。だから、エレナに強く当たっちゃって」
「成程のぉ……」
「――最低でしょ？　僕は最低だ」
　自虐的に笑いながら、クリュウは泣きそうになった。子供の頃からずっと自分と一緒にいて、どんな時も励ましてくれた幼なじみのエレナに八つ当たって、仲間が決死の想いでクシャルダオラとの戦いに出陣したというのに自分はこんな所で言い訳を並べて戦おうとしない。最低以外の言葉では言い表せなかった。
　こんな話を聞いて、ツバメが自分をどう思うかなど手に取るようにわかる。

「……うぬぅ、まぁ最低じゃな」
「だよね……」
　わかっていたとはいえ、改めて人に言われるとショックを受けるものだ。そんな彼を、ツバメはジッと見詰め続ける。そして、小さくため息を零した。
「じゃが、理解できぬ訳ではない」
　ツバメの言葉に、クリュウは伏せていた顔をゆっくりと上げる。視線を向けると、ソファに腰掛けたままツバメは苦笑を浮かべていた。その苦笑を見てきょとんとするクリュウに対し、ツバメはゆっくりと口を開く。
「ワシは古龍と戦った事はないが、まぁ自分の力が全く及ばないような相手である事は想像には難くないじゃろ。そんな奴と戦って、恐怖を覚える事は珍しい事ではない。事実、火竜リオレウスと戦ったかけだしのハンターがトラウマに陥る事は少なくはないと聞く。お主の場合は、それが古龍じゃったというだけの事じゃ」
「そうかもしれないけど、でも……」
「ワシは経験はないが、それはハンターとして成長する上でぶつかる壁のようなものじゃ。それをどう乗り越えるかは、お主次第としか言えん。まぁ、状況が悪い事は否めないが、それもまた運命というものじゃな」
　優しく膝の上で眠るオリガミの頭を撫でながら語る彼の言葉に、納得はできなくてもその意味は理解した。何事においても一度は通る挫折という道。それが自分には今起きて、そしてその相手が鋼龍クシャルダオラだった。ある種それは運命とも言い、そしてタイミングが悪いとも言う。だが、起きてしまった事を今更変える事はできない。彼の言う通り、今の自分にできる事はこの壁をどう乗り越えるかを考え、そして実行に移す事。ただ、それだけだ。
「……ありがと、ちょっと自分でも考えてみるよ」
「あまり力になれなくてすまんのぉ」
「ううん。一人で考えるよりも、ずっといい答えが見つかった気がするよ」

「それは重畳じゃ。まぁ今は村の一大事じゃからな、お主には早く立ち直ってもらわんとのぉ」
「善処するよ」
「うむ」
　クリュウの答えに安心したように笑みを浮かべるツバメ。そんな彼の笑顔を見ながら、クリュウは自分の中に渦巻いていた想いが少し軽くなった事を実感する。まだ答えが見つかった訳ではない。それでも、方向性は見つかった。どうすべきかは、まだわからないけど、進むべき方向だけは見つかった。今は、それで十分だ。
「明日は、第一次避難隊が出発するんだよね」
「うむ。ワシとオリガミがその護衛を務める事になっておる。まぁ、途中でレヴェリからの竜車隊と一度合流して護衛役を何人かつけてもらる予定になっておるから、それまでの護衛役じゃがな」
「僕は引き続き村に残って、竜車隊が到着次第第二次避難隊と一緒に護衛役として村を出る」
「しばしの別れになるのぉ」
「そうだね。次に会うのはレヴェリだね」
　どこか淋しげに笑うクリュウの笑顔を見て、ツバメは「なぁに、事が過ぎ去ればまたここで楽しく暮らせる。それまでの辛抱じゃよ」と彼を励ますように言う。そんな彼の言葉に「うん、そうだね」と返しつつもその瞳はどこか遠くを見ているかのよう。
「誰も傷つく事なく、この状況を乗り越えられれば良いのじゃがな……」
　ツバメのどこか祈りにも似た言葉に、クリュウは何も答えなかった。
　翌朝、村の入口になる崖下には大勢の人々が集まっていた。村にいるアプトノスを総動員して大量の荷物を積載した竜車隊の周りには二〇〇人にも及ぶ男達がそれぞれ少なくはない荷物を更に持って集まっている。その中心に立つ村長は、無言で崖の上にある自らの村を眺め続ける。だが出立の時間になると、ゆっくりと視線を外して、見送りに来た面々を見据える。

第一次避難隊は、体力のある男達を中心に約二〇〇人にも及ぶ大部隊だ。その指揮を行うのはもちろん村長であり、一足先に避難地であるレヴェリを目指す。それを見送るのは救援に来るレヴェリからの竜車隊に乗って脱出する第二次避難隊の面々、約一〇〇名。そのほとんどが女性や子供、高齢者など体力が少ない者達だ。
「クリュウ君、足は大丈夫かい？」
「リリアの薬のおかげで、普通に歩くくらいなら何とか……」
村長の問い掛けに、苦笑しながら答えるクリュウ。彼はこの第一次避難隊には加わらず、第二次避難隊と共に村を出る。もちろん、道中の護衛役だ。だが護衛役と言いつつも、足はまだ完全には治りきっていない。口には誰も出さないが、第二次避難隊の面々には若干の不安がある。それでも、彼を信じているからこそ誰も文句を言わないのだ。
「まぁ、無理はするでない。護衛役はレヴェリの兵士が中心じゃ。彼らが来るまで村の中にいる限りは安全じゃよ」
「護衛役なのに、情けないよね」
「怪我人に無理は強いられんよ。それに、何事も起きない事が最善なのじゃ」
「そうだね」
そうじゃよ、と笑うツバメはすでに全身をフルフルシリーズを纏っている。腰に下げたギルドナイトセーバーも勇ましげに輝いており、準備は万端だ。その隣では彼のオトモアイルーであるオリガミがドングリヘルムを深く被っている。
「僕達は徒歩にてレヴェリを目指す。君達はすでに存じていると思うけど、レヴェリから救援が来る。その竜車隊に乗って村を脱出してほしい。レヴェリの竜車隊が来るのはあと数日。それまでは決して村から出ないでくれ。もしもの際は洞窟の中の避難壕に逃げて見の安全を守ってほしい。レヴェリで無事な姿を見られる事を、祈っているよ」
村長の言葉に、第二次避難隊の面々は厳かにうなずいた。一応第二次避難隊には頼りになる男達が十名程残されているが、それでもやは

り多くの男達が別離してしまう事に不安は残る。だが同時に危険な状況で先発して避難する第一次避難隊の方が危険なのも、彼女達は十分理解している。村長が自分達の安全に為に採択した方法だ。誰も文句など言うはずはない。
「ただ、もしもの際はクリュウ君。怪我している所悪いけど、君にがんばってもらうしかない――ごめんね、君にこんな重荷を背負わせたくはなかったんだけど……」
申し訳なさそうに言う村長の言葉に、クリュウはゆっくりと首を横に振った。
「重荷なんて、思ってませんよ。これもハンターの役目ですから。自分の力が必要とされているなら、全力でがんばるだけですよ」
「頼もしいよ。くれぐれも、よろしく頼むよ」
「はい」
クリュウの返事に満足したのか、村長は安心したように微笑む。だがその笑顔も次の瞬間には消え、再び顔が上げられた時にはその表情は改めて真剣なものに変わっていた。
「それでは、出発するよ」
その言葉を合図に、男達は家族や知り合いとの別れを済ませ、次々に歩き出す。荷物を満載した竜車もアプトノスに引かれゆっくりと進み出す。村長は皆の先頭に立って真っ先に森の奥に姿を消した。そして、
「……みんなを、任せたよ」
「任されたぞ。お主もしっかりのぉ」
「向こうでまた会おうニャッ」
ツバメとオリガミも出発する。そんな一人と一匹の姿を、クリュウは静かに見送る。
残された面々の別れの言葉を背に受けながら、第一次避難隊の約二〇〇名の男達は一路避難先のレヴェリ領を目指して愛する故郷と家族を残して、厳かに出撃した。
「……くそぉ」
猛烈に吹雪くイルファ雪山の山頂。一時間程前からここは三人の

少女と鋼龍による死闘が繰り広げられる闘技場と化していた。だが死闘とは言いつつも、その実は鋼龍クシャルダオラの一方的な蹂躙だった。近付く事を許さぬ風の鎧は少女達の猛攻をことごとく跳ね返し、荒れ狂う風のブレスは少女達を次々に吹き飛ばした。
　雪上に倒れるシルフィードも、もう何発の風ブレスを受けたかわからない。全身に走る激痛に顔は歪み、立とうと必死になって腕や足に力を入れるが、もはや立つ事すらもできない。
「きゃあああぁぁぁッ!?」
　その時、またしても仲間の悲鳴が轟いた。顔だけを何とか上げて彼女の姿を探すと、突如自分から数メートル離れた所に空から何かが落ちて来た。ぐったりと倒れているそれは、見知った仲間の無惨な姿だった。
「ふぃ、フィーリア……ッ」
　返事はなかった。ぐったりと雪の上に倒れているフィーリアはすでに気を失っていた。全身を纏うリオハートシリーズは所々ヒビが入ったり変形したりしており、これまでの激戦で幾度となく鋼龍の攻撃を受け続けた跡が刻まれていた。倒れた時に頭を打ったのか、彼女の真っ白な肌には不釣合な程に真っ赤な血が頭から頬にかけて流れている。
「くそぉ……ッ」
　仲間の無惨な姿を目にして、シルフィードは怒りに任せて無理やり体を動かす。震える膝を殴りながら、フラフラと立ち上がる。だが立っているだけでも限界な彼女だったが、それでも倒れそうになる体にムチを打って無理やり歩き出す。
「サクラぁッ！」
　それでも、残る一人の仲間の名前を叫ぶ。この吹雪の中では視界も悪く、クシャルダオラはおろかサクラの姿も見えはしない。全力で叫んだ声も、きっと彼女には届いていないだろう。それでも、叫ばずにはいられなかった。
「サクラぁッ！　無事かぁッ!?」
「……がああああぁぁぁぁぁッ！」

突如吹雪の音を掻き消すかのような少女の勇ましい雄叫びが轟いた。目をこらすと、吹雪の向こうで火花が迸るのが見えた。それがサクラの攻撃だとはすぐにわかった。慌てて駆け寄ると、今まさにサクラとクシャルダオラの壮絶な死闘が繰り広げられていた。

「……あああああぁぁぁぁぁッ！」

雄叫びを上げながらクシャルダオラに突っ込むサクラ。疲労が蓄積し、全身にダメージを負っている彼女の突貫はいつものそれと比べると明らかに鈍い。それでも近付くのを躊躇う程の怒気を纏いながら、サクラは我武者羅に突っ込んで行く。

一方のクシャルダオラはほぼ無傷に等しい状態だ。何せ風の鎧のせいでこちらの攻撃はほとんど当てられていないのだから。

迫り来るサクラに対し、クシャルダオラは翼を羽ばたかせて空中へと飛び立つと、大きく後退して彼我の距離を離す。そしてそこから無様な足取りで迫る彼女に対し、容赦なく必殺の風ブレスを放った。

「危ないサクラッ！」

シルフィードの声など聞かずとも、体が先に反応する。迫り来る風ブレスをわずかなステップでギリギリで回避すると、構わず進み続ける。続けてクシャルダオラは二発風ブレスを放ったが、いずれもサクラは紙一重で回避した。どんなに疲れていても、どんなにダメージを負っていても、サクラ・ハルカゼという少女の常軌を逸した戦闘能力は逆境の中で輝き続ける。

サクラは連続して三発の風ブレスを回避してクシャルダオラへと迫ると、正面から構えた鬼神斬破刀を振り上げる。刀身に纏わりつく電撃が光り煌めきながら、刃先と同時に風の障壁のわずかな隙間に捻り込まれると、クシャルダオラの頭に直撃した。

「ガァアッ!?」

この激しい戦闘の中で、ようやくクシャルダオラの驚いた声が轟いた。だがそれも一瞬の事。すぐにクシャルダオラは前脚で彼女の体を弾き飛ばす。無防備な状態だったサクラはそれを回避する事もガードする事もできずに跳ね飛ばされ、雪上に倒れた。

「サクラッ！」

慌ててシルフィードが駆け寄り、彼女の体を起こす。頭を打ったのかフィーリア同様に頭から血を流し、右目は不気味なくらいに濁っていた。どうやら気力だけで戦っていたらしい。その実は、もう限界だったのだ。
「君は休んでいろ。後は私に任せておけ」
聞こえているのかわからないが、それでもそう言葉を掛けてシルフィードはサクラをゆっくりと雪の上に寝かせると、彼女の前に立ってクシャルダオラに向き直る。背負ったキリサキを構えて鋼龍と対峙する。皮肉な事に攻撃のほとんどを当てられていない為にキリサキの切れ味は健在だ。煌めく刃先に自らの自虐的な笑みが浮かぶのを一瞥し、クシャルダオラの方へ一歩足を進める。
「よくも仲間を弄んでくれたな。覚悟しておけ、スクラップ野郎」
口角が釣り上がり、犬歯が不気味に煌めく。その煌めきに、彼女を睨みつけるクシャルダオラの瞳が煌めく。
いつの間にか吹雪は収まり、厚く垂れ込めていた雲が所々薄くなり、空から陽の光がわずかに木漏れて世界を明るく照らしていた。
勝てるなど、そんな恐れ多い事は考えてはいない。それでも、今ここで自分が粘らないと、自分の背には満身創痍の仲間達がいる。意地でも、ここから逃げる訳にはいかない。
体力はもうほとんどなく、全身が痛い。そして逃げる事ができない状況。まさに絵に描いたような絶体絶命という奴だ。あまりにも無理過ぎて笑いがこみ上げて来てしまう。足の震えを武者震いだと信じ込みながら、シルフィードは一歩前に足を踏み出す――だが、この絶体絶命のピンチは思わぬ形で終わる事となった。
「グオオオォォォッ！」
突如クシャルダオラは雄叫びを上げると、巨大な翼を羽ばたかせて天空へと舞い上がった。全く攻撃の素振りも見せる事なく、ただ上昇していくクシャルダオラをシルフィードは呆然と見上げる事しかできない。そしてそのままクシャルダオラは山の頂へと向かい、そこでゆっくりと着地した。
何をするつもりか、警戒するシルフィードは見てしまった――神秘

の光景を。
山の頂に舞い降りた鋼龍クシャルダオラは首を下げて低い唸り声を上げる。その体がギシギシと金属が擦れる音を一際大きく辺りに響かせながら、茶褐色の鎧が小刻みに震え出す。すると突然、金属板が千切れるような甲高い音と共にクシャルダオラの背中に大きな亀裂が入った。亀裂はさらに大きく広がり、やがて首元から尾の付け根辺りにまで一直線に大断裂が生じる。背中が背骨にそって膨れ上がり、そして――
「……何だ、これは」
驚くシルフィードの目の前で、クシャルダオラの背中の亀裂からゆっくりと何かが現れた。銀色のそれは、真新しい鉄の鎧を纏ったクシャルダオラだった。
それが、クシャルダオラの脱皮だと頭で理解したのはそれから少し後の事だった。今の彼女は、その美しくも荘厳で、神秘的な光景を前にただ見上げる事しかできなかった。いつの間にかサクラの肩を借りて意識を取り戻したフィーリアの二人もその光景を呆然と見上げている。
吹雪は止み、天から注がれる陽の光を受けて銀色の真新しい鋼の鎧はキラキラと煌めく。だがそれはまさに一瞬の出来事であった。クシャルダオラの体表はゆっくりと鈍い鋼色へと変色していく。空気に触れ、急速に酸化しているのだろう。だとすれば、あの輝くような銀色の姿は脱皮後のわずかな時にしか見せない一瞬の姿なのだろう。
「グオオオオオッ！」
雄叫びを上げながら、クシャルダオラは完全に硬化した鋼の翼を羽ばたかせてゆっくりと舞い上がった。激しい風に雪が舞い上がり、雪の粒を周りに纏いながら飛翔するクシャルダオラ。呆然とその光景を見上げていた三人だったが、クシャルダオラが水平飛行に移って飛び去るのを見て、その方角を知って正気を取り戻す。
「お、おい、あの方角は……」
「い、イージス村のある方向です……ッ！」
「……クリュウ」

曇天の空の下、鋼龍クシャルダオラはイルファ山脈から南の空へと飛び去った。奇しくもその方角は、彼女達が必死に守ろうとしていたイージス村がある方向だった。

クシャルダオラが去ったせいか、イルファ山脈の空はゆっくりと厚い雲が解けていき、陽の光が降り注ぐ。だがそれは決して彼女達の勝利を天が祝ったのではない。

血相を変え、慌てて村へと引き返す三人。だが山を降りるだけでも時間は掛かるし、麓から全速力で竜車を飛ばしてもクシャルダオラの飛翔速度に敵うはずもない。気持ちだけが焦るばかり。疲れている体にムチを打って全速力で山を降りる三人。その誰もが、心の中で彼の名を呼び続ける。

鋼龍クシャルダオラは、真っ直ぐイルファ山脈から南下を続ける。風を切る鋭い頭部。その頬に、わずかな傷跡が浮かんでいた。サビついていた時にはサビが纏わりついていて見えなかった、本当に僅かな傷だ。だがそれはむしろ深く抉られた傷。だからこそ、脱皮をしてもその内側にある新たな鎧にもわずかながらも浮かんでいる。それは九年前、彼がその龍生の中で最も手強く、そして激しい死闘の末に引き分けた難敵に与えられた傷。

彼は望む。九年前に自らと激戦を繰り広げた敵との再戦を。そして、今度こそ勝つという強い決意を抱いて。

彼は進む。九年前と同じ空を飛び続ける。彼女との再戦をする為に。

彼は向う。九年前と同じ場所に。彼女との決着をつける為に。

鋼龍クシャルダオラは、迷う事なく南下し続ける。全モンスターの中でも最速の飛行速度は、人間の使えるどんな移動手段よりもずっと早い。竜車なら五日、馬車でも三日程掛かる道のりを、彼はわずか一日で移動してしまった。アルフレアの上空を抜け、そのまま海へと出る。海を越えると、やがて陸地が見えて来た。遠くに切り立った崖が見える。その少し北側にある密林地帯。そこが、九年前に彼が敵と戦った場所だ。

纏う風で千切れ飛ぶ草の葉など気にせず、低空飛行しながら彼は目

的の者を探す。だが、いくら探しても彼女の姿はない。逃げるケルビやアプトノスの姿など無視し、血走った瞳で彼女を探す。それでも、いない。
「グウゥゥッ」
恨めしげに低く唸りながら少し高度を上げ、辺りを見回す。その時見えた。少し離れた場所にある切り立った崖に周りを囲まれたその上に、村がある事を。
確証はない。それでも、きっと彼女はあそこにいる。そんな気がしてならなかった。
「グオオオオオォォォォォォッ！」
勇ましい雄叫びを上げ、鋼龍クシャルダオラはその村へと向かう。
切り立った崖の上にあるその村を、人々はこう呼ぶ――イージス村と。

第２１６話　滅びゆく村　崩れ落ちる少年に振り下ろされる死爪

第一次避難隊が村を出発してから一週間の月日が流れた。村に残された女性や子供、高齢者といった面々はなるべく一箇所に集まりながらレヴェリからの救援を待ち続けていた。

主のいない村長の家は配給所となっており、人々が集めた食料で炊き出しを行なっている。今は昼時で、配給を取りに来た者達で賑わいを見せている。炊き出しの料理を作っている人の中にはエレナの姿もあった。自慢の腕を振るって次々の料理を作り上げている。その料理を食べて笑顔になる人々を見て、自らも笑みを浮かべる。だが、その笑顔にはどこか陰りがある。時々視線を辺りに巡らせて誰かを探すような素振りをみせる。誰を探しているかなど、決まっている。

エレナが探し求める人物は、一人村にある矢倉の上で望遠鏡でイルファ山脈の様子を探る。厳戒態勢という事もあって、武具は完全装備し、ディアブロヘルムも脇に置いている。念には念を入れて必要な道具(アイテム)類は村長の家の庭に置いた荷車に積載している上に、村の各所に道具（アイテム）を設置している。これは最後の手段として市街戦を想定している為だが、そのような事態にならない事を切に願う。

握り飯を頬張りながら、クリュウは先程からこうして双眼鏡片手にイルファ山脈を見詰めていた。エレナの温かい手作り料理ではないのは、彼女に会う事を躊躇っているせいだ。もう四日も彼女とは口を利いていない。時間が経つにつれて、話しかけにくくなっていた。

謝らなければいけない。そんな事はわかっている。でも、気まずくてできなかった……

「はぁ……」

思わず零れるため息。せっかくリリアが一生懸命に握ってくれた握り飯なのに、味がわからなかった。まぁ、リリアが塩を入れ忘れてしまったのでそもそも味などついていないのもあるが。

ただ、今の自分には優先すべき事柄があるのも事実だ。この一〇〇人を無事に守り抜く事。それが今の自分の役目である。幸いこの村は元々小型モンスターの襲撃には強い。村の中心部に繋がる道を事前に封鎖したおかげでモンスターが潜り込んで来る事もなく、非常時だというのに平和な時が流れていた。

そんな長閑な日々が流れていたのだが、リリアから握り飯を貰った際に彼は気づいた。遠くに聳え立つイルファ雪山上空に垂れ込めていた厚い雲が、解けているのを。慌てて矢倉へと上がり、その様子の観察を始めて今になる。

「晴れてる……？」

イルファ山脈上空を覆っていた雲が解け、山を温かな陽の光が照らし始めている。一ヶ月以上陽の光を浴びる事のなかったイルファ山脈の突然の天候回復。クリュウが困惑するのも当然と言える。何せ鋼龍クシャルダオラが居座った為にずっと山は嵐に支配されていたのだから。

だとすれば、クシャルダオラがいなくなった？

フィーリア、サクラ、シルフィードの三人がクシャルダオラを倒したのだろうか？

何の情報もない今は、どう判断すればいいのかもわからない。とにかく、この状況をみんなに伝えなければ。そう思い、矢倉を降りようとした時だった。突如猛烈な風が吹き荒れ、矢倉が大きく揺れ出した。

「わわわわ……ッ!?」

ハシゴに掴まりながら、必死に振り落とされないようにするクリュウ。だがその突風はすぐにおさまり、安堵のため息を漏らし、下がっていた視線を再び上げた時――彼は見てしまった。

「何で……」

そうつぶやかずには、いられなかった。

曇天の空に、奴はいた。全身が硬そうな灰色の鋼の鎧に変わってはいるが、見間違えるはずなどない。巨大な翼、鋭利なフォルム、細くも屈強な四本足、直視すれば身震いする程に恐ろしい鋭い碧眼――見

間違えるはずなど、ない。
「何で、ここにいるんだよ――クシャルダオラあああああぁぁぁぁぁぁッ！」
突如吹き荒れた強風に誰もが驚いた直後に響いたクリュウの怒号に誰もが天を見上げ、そして言葉を失った。村上空に突如現れた鋼の龍は風を纏いながら、呆然と見上げる人々を睥睨する。鬱陶しい敵の数に苛立ち、クシャルダオラは威嚇するように怒号を放った。
「グギャアアアアアアアアッ！」
その怒号に呆然と見上げていた人々は正気を取り戻し、慌てて逃げ出す。何の統率もされておらず、バラバラの方向へと逃げる様は彼らの混乱っぷりを表しているかのようだ。
散り散りに人々が逃げる中、一人だけその流れに逆らって鋼龍クシャルダオラの方へ向かう者がいた。
「クリュウッ！」
「ば、バカッ！　何してんのッ!?　早く逃げないとッ！」
逃げる人々を掻き分けて駆け寄って来たエレナに激怒するクリュウ。だがエレナは首を横に振って「あんたも逃げんのよッ！」とクリュウの肩を掴んで無理やり連れて行こうとする。
「僕が逃げるのは一番最後だよッ！　今はみんなの避難が終わるまで奴を食い止めないとッ！」
「あんた一人で何ができんのよッ！　あんた一人で――そんなに震えていて何ができんのよッ!?」
エレナに言われて初めて自分が震えている事に気づいた。圧倒的な力で自分を鎧袖一触したクシャルダオラを前にして、すっかりビビってしまっているらしい。情けない自分の姿に吐き気が出そうだった。それでも、
「このッ！」
「あ、あんた何してんのよッ!?」
クリュウは拳を何度も自分の震える足に殴りつけた。防具越しとはいえそれなりに痛い衝撃を何度も与えていると、少しずつ震えが収まった。呆然としているエレナに、クリュウは不敵に微笑んでみせ

る。
「そりゃ、怖いさ。みんなと一緒でも全く歯が立たなかった相手に一人で挑もうとしてるんだから」
「だ、だったら……ッ！」
「――情けなくても、虚勢くらい張らないと。みんなに示しがつかないでしょ？」
そう言って彼が見詰める先を見て、エレナは言葉を失った。
民家や木の陰などに隠れている村人達が、こちらを不安げに見詰めていた。中には二人に早く逃げるよう叫ぶ者もいたが、クリュウはこれらに対して首を横に振る。その間も、クシャルダオラはゆっくりとこちらに迫っている。
「僕はこの村のハンターだ。村を守る責任がある。それに、第二次避難隊約一〇〇人を守る義務もある。そんな僕が、逃げる訳にはいかないよ」
「で、でも……ッ！」
「……エレナ、頼みがある。みんなを早く地下の避難壕に誘導してほしい。どうがんばっても、僕ができるのはその時間を稼ぐ事くらいだからさ」
ここで「大丈夫。この村は僕が守ってみせるさ」と豪語できない自分が本当に情けない。それでも、ウソをついた所で何も解決しない事もわかっている。だったら、素直に自分のできる限界を示すしかない。その方が、特に自分のウソを見破るのが得意なエレナには伝わる。幼なじみだからこその選択だ。
「クリュウ……」
まだ震える足で立ちながら、それでも勝てない戦に挑もうとする幼なじみの姿に、もうエレナは何も掛ける言葉が見つからなかった。
「エレナのがんばり次第で、僕もがんばれる。頼まれて、くれるかな？」
「わ、わかったわ」
「そう言ってくれると思ってたよ。さすが僕の幼なじみだね」
笑いながら言う彼の言葉に、胸が熱くなるのを感じる。頬まで赤ら

んでしまい、慌てて背を向けてそれを隠す。ニヤける口からはそれを隠すように「こ、この前は人の事他人扱いしたくせに。都合のいい時だけ幼なじみ扱い？」と意地悪な台詞が飛び出す。
「あ、あれはその……ごめん」
「いいわよ。あんただって、いっぱいいっぱいだったんでしょ？　それに気づけなかった私も悪かったんだし。でも今度ドンドルマで高級レストランでのランチ、おごってもらうわよ？」
「……わ、わかったよ。それくらい安いもんさ」
「おぉ、羽振りがいいわねぇ。約束だからねクリュウ――死ぬんじゃないわよ、クリュウ」
「うん――みんなを任せたよ」
　それを最後に、クリュウはクシャルダオラへと歩み出て、エレナは村人の方へと走っていく。本当は危険に立ち向かう彼の肩を掴んで無理やりでも連れて行きたい。でも、今のこの状況でクシャルダオラにわずかでも太刀打ちできる可能性があるのは、彼だけなのだ。そして彼はそれを自分の責務として、逃げる事なく立ち向かおうとしている。自分にこれを、止める権利はない。
　だから、祈るしか無い。彼がきっと生きて帰って来ると。これまでと同じように、自分には祈る事しかできない。
　でも今は――
「みんなッ！　今すぐに避難壕に逃げるわよッ！　焦らず、でも急いでッ！　クリュウがそれまでの時間くらいは稼いでくれるッ！　だからお願いッ――あいつに無理はさせないでッ！」
「……ありがと、エレナ」
　背後で村人達が避難を始めるのを気配で感じながら、クリュウはゆっくりと歩み続ける。その間もクシャルダオラは巨大な翼を羽ばたかせ、風の鎧を纏いながらゆっくりと近づいて来る。いつの間にか村の上空には厚い雲が支配し、辺りを強い風が吹き抜けている。
　ディアブロヘルムを被り、視線を上げると、すぐそこにクシャルダオラは浮かんでいる。その凶悪な碧眼が自分を捉えた事を悟り、足の震えは更に加速する。引きつる表情を無理やり不敵なものに変え、精

一杯の虚勢を張る。
「この村は来る者は誰でも大歓迎ってのが習わしだけど、さすがにお前にはお帰り願いたいね――さっさとこの村から出て行けクソ野郎」
「グオオオオオオオオオッ！」
言葉を理解した訳ではない。それでも、目の前に小賢しい者が自分に歯向かう者だというくらいは悟ったのだろう。それまでただ辺りを威嚇するだけだった気配は一瞬にしてより攻撃的なものにシフトする。その気配を一身に受けながら、クリュウは腰に下げた剣の柄に手を伸ばす。
前回の戦いで使ったバーンエッジでは歯がたたない事はわかっている。何度か風の隙間に潜り込んで剣を叩き込むチャンスがあったが、クシャルダオラの鋼の鎧の前ではまともに傷をつける事ができないばかりか、弾かれてしまうだけだった。ならば、自分が持っている武器の中で最高の切れ味を誇る武器で応戦するしかない。
クリュウが持つ、最高の武器。それは――
「……イリス、使わせてもらうよ」
つぶやくように言いながら彼が取り出したのは灰銀色の剣と黄金の盾が一対になった武器。伝説の銀火竜と金火竜の素材を使って作られた、どんな甲殻や鱗をも引き裂く剣と様々な攻撃に耐える強固な盾。最強と呼ぶに相応しい伝説の武器。
アルトリア王政軍国現女王にして従姉妹のイリス・アルトリア・フランチェスカから授けられた、クリュウが持つ武器の中では群を抜いての攻撃力と防御力を誇る武器。銘を――煌竜剣（シャイニング・ブレード）と言う。
鋼龍クシャルダオラに対抗できる、彼が持つ唯一の武器。本当は自分の力で手に入れた訳ではない武器だから、正直使うのは少し気が引ける。だが今はそんな事を言っているような状況ではない。使えるものは全て使ってでも戦わなければいけない時なのだ。
柄を握り締めると、実戦で使うのは初めてだというのに、まるでこれまでずっと死線を共にしてきた相棒のように手に馴染む。この武器はアルトリア王族の血に反応するとイリスは言っていた。その片

鱗を見たとはいえ、まだ半信半疑は否めない。だが改めてこの手に馴染む感じを見れば、信じたくもなる――否、信じたい。この武器が、自分の最高の武器だという事を。可愛い従姉妹の選んだ剣で、村の命運を懸けた戦いに挑む。これを運命と言わずして何と呼ぶか。

ゆっくりと剣を引き抜き、刃に映る自らの姿を一瞥し、剣先を飛翔する鋼龍クシャルダオラに向ける。

自らに武器を向ける小賢しい者。先日の戦いで鎧袖一触に跳ね飛ばした相手。そういう認識しかなかった。だが今彼が握り締めている武器は何やら強力な力を秘めているような気がする。恐れている訳ではない。それでも、興味を持つには十分だった。

自分が探し求める彼女は見つからない……だが不思議だ。目の前にいるこの小賢しい敵と、かつての彼女の姿が重なって見えた――面白い。

この瞬間、これまで自らに近付く下等な生物としか思っていなかったクリュウの事を、クシャルダオラは一人の《敵》として認識した――敵ならば、全力で叩き潰すしかない。

ゆっくりと翼を羽ばたかせ、クシャルダオラは地面へと降り立つ。

村のメインストリートに降り立ったクシャルダオラ。それに対するは、この村で生まれ育ち、この村をこよなく愛する少年ハンターのクリュウ。

イージス村という一つの村の存亡を懸けた戦いが、今始まる。

「行くぞクシャルダオラあああぁぁぁッ！」

「グオオオオオオオオオオッ！」

――互いの叫び声と共に、双方が大地を蹴って駆け出した。

「グオオオオオオオオオオオオッ！」

浮遊する鋼龍クシャルダオラの風の鎧の外壁で次々に起こる爆発に次ぐ爆発の連鎖。風の鎧のおかげでダメージはないが、それでも鬱陶しい事この上なく、苛立つようにクシャルダオラは低く唸る。そんな彼に向かって次々に爆破攻撃を仕掛けるのは、先程からちょこまかと動き回っては小細工を重ねる敵。

「このぉッ！」

こちらを見据えたまま動かずにいるクシャルダオラに向かって、クリュウは構えた小タル爆弾Gを二発投げつけ、続けて打ち上げタル爆弾Gを水平に撃ち込んだ。しかしいずれもクシャルダオラの周りの風が弾き飛ばしてしまい、全く関係のない場所でタル爆弾四発が起爆する。後には虚しい爆音だけが響く。

「いくら何でも反則だよ、それ」

引きつった笑みを浮かべながら、クリュウは爆撃に対して全く動じていないクシャルダオラに向かって今度は投げナイフを二本投げつける。これらはうまく風の鎧を通り抜ける事に成功したが、いずれも今度はクシャルダオラの鋼の鎧に弾かれてしまう。諦めず、クリュウは今度は試しに音爆弾を投げるが、全く効果はない。

一方、クリュウの度重なる攻撃に鬱陶しくなったのか、クシャルダオラは低く唸り声を上げると、動き回る彼に向かって風ブレスを撃ち放った。クリュウはこれを何とか回避したが、目標を見失った風ブレスはそのままクリュウの背後の家屋に直撃。その尋常ならざる威力に家は呆気無く破壊された。

「しまった……ッ!?」

バラバラに砕けた家を見て、クリュウは悔しげに、そして憎らしげクシャルダオラを睨みつける。

ここは狩場ではない。生まれ育った故郷、イージス村の敷地内だ。下手に動いてクシャルダオラの攻撃を避ければ、その先で知っている誰かの家が壊れる危険性がある。だが、だからと言ってクシャルダオラの攻撃を全てガードできるはずもない。そんなの物理的に無理だし、何より身体が持たない。

「くそ……ッ!」

クリュウは舌打ち、崩壊した家屋を一瞥して走り出す。何とかクシャルダオラをなるべく家屋が少ない場所に誘導しなければ。ここはメインストリート沿いなので、被害が大きくなり過ぎる。そう考えて走り出すクリュウだったが、そううまくはいかない。横に走る彼を狙ってクシャルダオラが突進で迫る。慌てて回避したが、再びクシャルダオラは別の家屋に突っ込んでしまう。鋼の身体の直撃を受けた

木造家屋が耐えられるはずもなく、木っ端微塵に全壊してしまう。
「……ッ!? この野郎ぉッ！」
激昂し、怒りに任せて反転攻勢に出るクリュウ。だがそれを待っていたかのようにクシャルダオラは風ブレスで応戦する。頭に血が登っていたクリュウはこれを回避できずに直撃。全身を引き裂かれるような激痛と共に天空へと舞った。そのまま背後にあった家屋の壁に叩きつけられ、激しく咳き込む。
だが休んでいる暇はない。再びクシャルダオラは風ブレスを撃ち放った。慌てて回避するが、またしても背後の家屋が損壊する。
「グリードさんの家が……ッ」
何かが壊れる度に、クリュウの心は焦り、そして疲弊していく。
慣れない市街戦。鋼龍クシャルダオラという圧倒的な存在。短時間の戦闘でも精神的、肉体的疲労はいつもの比ではない程に増加していく。しかもこちらの攻撃のほとんどが通用しないのだから、焦りばかり募ってしまう。
クシャルダオラの背後に回り込み、再び小タル爆弾Gを投擲するも、風の鎧のせいで届かない。虚しく起爆する爆弾は、これで一体何発目だろうか。
「やっぱり、大タル爆弾Gじゃないとダメか……ッ」
さすがのクシャルダオラの風の鎧も、圧倒的な火力を誇る大タル爆弾Gの威力は流し切れないだろう。相手に大ダメージを与えるには、それしか現段階では方法がない。だが、仲間の援護がある状況ならまだしも、単独でそれができるかどうか。
「できるかどうかじゃない。やるしかないんだ……ッ！」
こちらに振り返るクシャルダオラに対し、クリュウは素早く撤退する。村の数ヶ所に大タル爆弾Gを設置してある場所がある。さすがに信管は抜いてあるが、それでもすぐに使える。問題は、信管を抜く隙をどう作るかだ。
「使いたくないけど、地の利しかないか」
ここは自分が生まれ育った村だ。裏道や防御に使えそうな岩の位置などは全て把握している。地の利ではこちらが圧倒的に有利だ。

だがそれは同時に村の設備や知り合いの家を危険に晒す事になる。村を守る為の戦いなのに、その村を犠牲にしなければないけない。身体を動かしているのとは違う胸の痛みが、彼を苦しめる。それでも、それしか方法がないのだ。

林に逃げ込み、クシャルダオラの視界からうまく消える。それでもクシャルダオラは風ブレスであっという間に林を薙ぎ払ってしまう。だがそのわずかな隙でクリュウはうまくクシャルダオラを撒く事に成功した。後は一番近い大タル爆弾Gの設置場所に向かうだけだ。

「こっから一番近いのは、ステラさんの畑の裏ッ！」

いつも瑞々しいシモフリトマトを分けてくれる優しいおばあさんの家。今は来春に備えて土作りをしている、そんな畑の裏に大タル爆弾Gを二発設置していた。隠しておいた爆弾を取り出し、手早く信管を抜く。これでもう起爆準備はできた。後は、

「さぁ、来いクシャルダオラッ！」

構えた角笛を勢い良く吹く。村全体に響き渡る笛の音色は、今まさに地下の避難壕に逃げ込もうとしている人々にも響く。それらを誘導するエレナもまた、その音に顔を上げて、今まさに死闘を繰り広げているクリュウを想う。

「クリュウ……」

角笛の音色は、確かに届いた。彼の姿を探していたクシャルダオラは振り返り、咆哮しながらその音源であるクリュウを目指して飛翔する。

ちょうどクシャルダオラから自らを隠していた林の木々が荒れ狂い、その向こうからクシャルダオラが現れる。その姿に畏怖しつつも、クリュウは不敵に微笑む。

「さぁ、来いッ」

その声に反応してか。クシャルダオラは唸り声を上げながら滑空して迫る。クリュウはバックステップで大タル爆弾Gから距離を取ると、その時を待つ。そして、

「喰らえッ！」

持っていたペイントボールを投げつけた。放物線を描きながら飛

ぶそれは、迫り来るクシャルダオラに向けたものではない。その直前に設置してある大タル爆弾Gに命中する。そのわずかな衝撃にも、中に詰め込まれた火薬は敏感に反応し、起爆。凄まじい爆音と爆風と共に爆発した。荒れ狂う爆風はクシャルダオラの風の鎧をも凌駕する風圧。距離を置いていたのに身体が吹き飛ばされそうになる程だ。

この程度で倒れたとは思わない。それでも、それなりにダメージは与えられたはず。

バイザー越しに黒煙の中にクシャルダオラの姿を探す。だが、それは必要なかった。突如風の向きが変わったかと思うと、立ち上るだけだった黒煙が渦を巻き始めた。まるで黒い竜巻と化したそれは、次第に黒煙を遥か空高くまで吹き飛ばしていく。そして、土煙だけとなった竜巻はまるで内部から爆発したかのように霧散――中から、クシャルダオラが現れる。

「く……ッ！」

やはり、大タル爆弾G二発程度では大したダメージは与えられない。見ればクシャルダオラの体表にはわずかな焦げや傷があるが、どれも掠り傷と言っていい程だ。風の鎧がだいぶ威力を緩和し、そして残った破壊力も鋼の龍鱗の前ではその威力を防がれてしまう。本当に、無茶苦茶過ぎる相手だ。

「グオオオオオオオオオッ！」

クシャルダオラは怒鳴り声を上げ、クリュウに向けて迫る。距離が詰まっていた事もあり、クリュウは回避する時間もなく直撃する。寸前でガードしたとはいえ、鉄の塊がぶつかるような衝撃を逃がし切れるはずもなく吹き飛ばされ、背後のステラの畑に倒れる。柔らかな土のおかげでほとんどダメージはなかった。

慌てて起き上がると、いつの間にか空へと登ったクシャルダオラが上空から風ブレスを叩きつける。寸前で回避したが、その一撃で畑には一瞬で大穴が空き、ステラが何十年かけて作った土が四方八方に無惨に飛び散った。さらに風ブレスは連続して放たれ、井戸を破壊し、小屋を破壊し、そして最後にはステラの家そのものを木っ端微塵に砕いた。

背後で無惨な姿になったステラの家や畑を、クリュウは呆然を見詰める――もう、あの甘いトマトを食べる事はできない。
「……このぉ、お前だけは……お前だけはあああああぁぁぁぁぁッ！」
怒りに任せて、クリュウはあろう事か正面からクシャルダオラに向けて突っ込んでいく。冷静さを失った瞳は鋭い刃物のようにクシャルダオラを射抜く。だがそんな彼の鋭い視線も、クシャルダオラの硬い鎧の前では傷ひとつ付ける事はできない。バカ正直に真正面から突っ込むクリュウに対し、クシャルダオラは風ブレスで応戦する。逃げる事も、避ける事もせず、我武者羅に突っ込むクリュウはその一撃に呆気無く吹き飛ばされた。
全身を切り刻むような風に跳ね飛ばされ、クリュウは地面の上に倒れる。震える腕を突っ張りながら何とか立ち上がろうとする彼を狙って再び襲う風ブレス。再び吹き飛ばされたクリュウは、今度は水路に落ちた。全身ずぶ濡れになり、思わず飲んでしまった水を咳と共に吐き出す。だが幸いにも三度目のブレスは水路の壁自体が防壁となってくれたおかげで受けずに済んだ。
だがいつまでも水路に隠れていても安全とは言えない。姿勢を低くしたまま水路を進み、クシャルダオラの右側面から現れると、再び剣を構える。幸い水を浴びた事で冷静さを取り戻した彼は無闇に突撃する事はなく、回避と防御どちらにも動ける構えと距離でクシャルダオラと対する。そんな彼の方へとゆっくりと向き直ったクシャルダオラは、再び空中へと躍り出た。
「くそぉ……ッ！　また空へ逃げるか……ッ！」
別に相手は逃げている訳ではない。クリュウは人間で、クシャルダオラは古龍。全く違う種族の戦いは、お互いの主戦場が異なる。だがその差が、空を飛べない人間であるクリュウにとっては最大の壁だった。更に両者の間には例え真正面から戦い合ったとしても、埋められない程に力の差が歴然だった。クリュウも冷静な部分ではわかっている。むしろ相手がちょこまか動き回ってくれているおかげで、真正面からやり合わずに済んでいる。だからこそ、何とかここまで食い下がっていられるのだ。

だが、互いに正面から戦う事を避ける戦いは、結果的に戦いを長期化させてしまう。戦いが長引けば、圧倒的にクリュウが不利だ。
ならば、ここで逃げるのか？
もうさすがに、住民は避難壕へと避難したはず。自分の当初の目的であった住民が逃げる時間を稼ぐ目的は果たしたはず――だが、この村を守るという、子供の頃に決意し、その為だけにがんばってきた最大の目的は、それでは果たせない。
背後には、無惨に壊れた建物や畑が広がっている。このまま相手を暴れさせ続ければ、更に被害は増えてしまう。それに避難壕だって決して安全とは言えないし、クシャルダオラがここに常駐すれば逃げ出す事もできない。備蓄している食糧だって限界がある。
全ての問題を解決するには、やはりクシャルダオラを撃退する他道はない。
だがそれを、自分一人でできるかと問われれば――無理だ。自分一人では、火力も機動力も低過ぎる。何より単独では作戦を立てようにも使える手段が限られる。自分にとっては姉のような存在であり、現役最強の女性ハンターと謳われるキティ程の力があれば話は別だが、自分は至って凡なハンターだ。
ゆっくりとこちらにクシャルダオラが向き直る間、クリュウの頭はこの絶望的な状況に対する焦りや不安でいっぱいになる。考えれば考える程に状況を理解し、それは最悪だと認めざるを得なくなってしまう。
それでも、自分にできる事は――抗う事だけだ。
例え見苦しく、勝てない戦だとしても、抗わなければいけない。
例え仲間がいなくて、孤軍奮闘の負け戦になるとしても、少しでも相手に傷を負わせられれば、きっとクシャルダオラを追って戻って来ているであろう三人の負担を減らせる。
勝てないとわかっていても、戦わなければならない時がある――それが、今だ。
振り返ったクシャルダオラと目が合う。その瞬間、クリュウは握り締めていた剣を構えながら間髪入れずに突撃する。

迫り来るクリュウに対し、クシャルダオラ正面から相対する。空中からクリュウ目掛けて蹴り掛かるが、クリュウはこれを回避。鋼の爪に抉られた大地を一瞥し、クリュウは一気にクシャルダオラに迫る。

だが、クシャルダオラは自らの纏う風を強め、彼の接近を拒む。何度も接近する度に妨害された、あの風の鎧だ。これでは、クリュウはクシャルダオラに近付く事はできない――だが、例え負け戦だとしても、抗うからには全力で抗う。クリュウには、策があった。

いや、策と言うにはあまりにも稚拙だ。ひらめきと言う方が相応しい。それでも、この圧倒的に劣勢な状況をわずかにも脱せる可能性があるなら、それに懸けるまでだ。

クリュウは左手に握り締めたものを、クシャルダオラ目掛けて投げつけた。それは彼が最も良く使い、絶大な信頼を持つ相棒とも言うに相応しい道具(アイテム)。拳大のそれは、クシャルダオラの眼前で炸裂すると猛烈な光を放出して相手の目を焼いた。

凄まじい光の直撃を受けたクシャルダオラは悲鳴を上げて地面へと落ちた。悠然と戦っていたクシャルダオラが初めて見せた情けない姿。横倒しになって暴れるクシャルダオラの周りに――風はない。

「今だッ!」

地面へと落ちたクシャルダオラ目掛けてクリュウは煌竜剣(シャイニング・ブレード)を構えて襲い掛かる。これまで彼の接近を阻んでいた風の鎧はなく、安々と近付く事ができた。そのまま斬り掛かると、やっと刃が届いた。

だが、刃自体はようやくクシャルダオラに届いても、彼を包む最後の鎧である鋼の鎧は非常に硬く、叩きつけた一撃はいとも簡単に弾かれてしまった。金属を殴りつけた時のような音と衝撃に顔を顰めるも、諦めず何度も剣を叩きつける。そのほとんどは弾かれてしまうが、よく見ればクシャルダオラの体表にわずかな傷が見えた。本当にわずかで、これでダメージを与えられているとは思えない。それでも、バーンエッジの時にはなかった光景だ。

煌竜剣(シャイニング・ブレード)の切れ味の高さは、確かにクシャルダオラにも通用するのだ。自分の武器が通用する。それはハン

ターにとって何にも代えがたい希望だ。クリュウの顔もこれまでの暗いものからわずかながらも明るいものに変わった。
「行けるッ！」
柄を握る手にも自然と力が入る。頭上高くまで振り上げた剣を一気に力強く下へと振り下ろす。火花を散らしながらも、鋭い刃先はわずかに鋼の龍鱗を削る。藻掻くクシャルダオラの横っ腹を何度も叩く。
やっとの事で掴んだ一瞬の攻勢。でもそれは本当に一瞬の出来事であり、閃光玉の効果が切れると辺りに再び風が吹き荒れる。猛烈な風はもう一撃と剣を構えたクリュウをいとも簡単に吹き飛ばした。
背中から地面に倒れたクリュウはすぐに起き上がる。その視線の先でクシャルダオラは再び風の鎧を纏い、辺りを震わせるような咆哮でクリュウを威嚇する。だがその声にも、クリュウは口元に不敵な笑みを浮かべる。
「やっぱり、閃光玉が効いている間は風は消えるんだ……ッ」
イルファでの戦いの中で、一瞬だけ見えた光景。閃光玉でクシャルダオラの動きを止めていた際、風が弱まっていたように見えた。何度もあの時の光景を思い出し、この考えに至った。ある種の賭けだったが、どうやらその賭けは成功したらしい。
だが、楽観的にはなれない。閃光玉の持続時間は短く、その時間しか風を止める術はないのだから。それに加えて閃光玉の数も限りがある。古龍の体力がどれだけあるかわからないが、限られた閃光玉で、しかも単独で与えられるダメージなどたかが知れている。正直、焼け石に水でしかない事くらい薄っすらわかっている。それでも、わずかな希望でも今の彼を動かすには十分だ――そうでも思っていないと、あまりの劣勢さに絶望しそうになるから。
死中に活を求める。これしか今の自分にできる事はない。
再び風を纏ったクシャルダオラはこちらに向かって地面を駆けて突進して来る。クリュウは横へ走ってこれを回避すると、背後に閃光玉を投擲。振り返るクシャルダオラは再び閃光玉で目を塞がれ、風の鎧を強制解除される。

クリュウは再び接近を図るが、そう何度も同じ手段に引っかかるような相手ではない。目が見えなくても敵が近付く事くらいわかる。正面から迫るクリュウに対し、クシャルダオラはその鋼鉄の爪で薙ぎ払う。
「……ッ!?」
寸前の所で足を止めたおかげで当たらなかったものの、クシャルダオラは構わずそのまま何度も辺りを爪で薙ぎ払う。鋭い切れ味の爪はいとも簡単土をしっかり固めたはずの村の道路を抉る。あんなものの直撃を受ければ、ディアブロシリーズの強固な防御力でも危険だ。
「クソォ、大人しくしてろよッ!」
それでもクリュウは迫る。風の鎧は閃光玉の持続中しか解除できない。暴れる相手だとしても、今は接近できるチャンスなのだ。
暴れるクシャルダオラの爪を避けながら、何とか懐に潜り込む。そこで足を踏ん張って、構えた煌竜剣（シャイニング・ブレード）を叩き込む。例え弾かれても、何度でも。だが、想いとは裏腹に閃光玉の効果を脱したクシャルダオラは再び風の鎧を纏ってしまう。吹き飛ばされ、背後の家の窓ガラスを割って中に弾き飛ばされるクリュウ。そこへクシャルダオラの風ブレスが放たれ、家は木っ端微塵に粉砕された。
瓦礫と化した家の中から、ゆっくりとクリュウは起き上がる。全身を瓦礫で強打し、これまでの戦闘でのダメージも加わって足はフラフラ。正直、自分でも立ち上がれた事にびっくりしているくらいだ。視界が赤く染まっているのは、頭を怪我したせいか。痛む箇所に手を当てると、いつの間にかディアブロヘルムが脱げている事に気づく。辺りを見回しても、見つからない。きっと瓦礫の下に埋もれてしまったのだろう。
「……最悪だな」
自分でも笑ってしまう程の最悪の状況だ。それでも、
「クシャルダオラ。正直、僕はお前が許せない」
道具袋（ポーチ）から秘薬を取り出し、それを呑む。これでひとま

ず体力だけは元通りだ。全身の痛みもだいぶ緩和された。
浮遊（ホバリング）するクシャルダオラはゆっくりと地面へと降り立つ。そこは花を愛するシリカ姉さんが丹精込めて世話している花壇の上。無惨にも踏み千切られ、纏う風の鎧は花々を茎から圧し折っていく。今はちょうど冬の花が咲いていたきれいな花壇は、グチャグチャだ。辺りを見回してみても、クシャルダオラによって村の建物や設備がかなり壊されている。木々もへし折られ、水路も途中で決壊してしまっている。正直、村の状況は中破といったところか。
「この村には、みんなの大切なものが詰まっている。それをお前は、ことごとく破壊した」
低い唸り声を上げながら、こちらを睨みつける鋼龍クシャルダオラ。そんな彼に対し、クリュウも負けじと睨み返す。いつもの彼らしくない、怒りと憎悪に満ちた黒い眼光。
「だから僕は――お前をぶっ殺すッ！」
「グオオオオオオオオッ！」
咆哮するクシャルダオラに向かって、クリュウは閃光玉を投げてから突っ込む。だがそう何度も同じ手段を食らう相手ではない。跳躍して閃光玉を回避してしまう。結果、閃光玉は鋼龍の背後で炸裂してしまう。クリュウは舌打ちして仕方なくクシャルダオラに接近する。遠くに行けば風ブレスの標的になってしまう。ある程度近づいて風ブレスを封じながら、風の鎧の範囲外で奴の隙を見極めるつもりだった。
だが迫り来るクリュウに対しクシャルダオラは空中へと浮かび上がると、滑るように横移動してあっという間にクリュウの背後へと回り込む。慌てて気づいたクリュウが振り返るのと同時に、クシャルダオラは前脚で薙ぎ払うようにして彼を跳ね飛ばした。幸いガードが間に合ったので直接のダメージはないが、体勢を崩してしまった。そこへ容赦なくクシャルダオラは風ブレスを放つ。逃げる事も防ぐ事もできず、クリュウは吹き飛ばされて地面の上に倒れた。
倒れたクリュウ目掛けてクシャルダオラが滑空で迫るが、寸前の所でクリュウは横に転がってこれを回避。すぐさま起き上がると急い

でクシャルダオラから距離を取り、腰に下げていた手持ちでは最後の小タル爆弾Gを投げつけた。振り返ったクシャルダオラの顔面で炸裂した爆弾に、さすがの鋼龍も怯んだ。その隙にクリュウは改めて閃光玉を投擲した。炸裂する眩い光の一撃はクシャルダオラの視界を奪い、そして同時に風の鎧も奪い去る。

無防備な姿となったクシャルダオラに向かって、クリュウは再び突っ込む。暴れるクシャルダオラの我武者羅な攻撃を全てかわし、懐に潜り込むと、クリュウは握り締めた煌竜剣（シャイニング・ブレード）を構え、力強く叩き込んだ。

例え弾かれても、何度も何度も叩きつける。鬱陶しい相手を追い払うように振るわれる爪の薙ぎ払いに特に注意しながら、クリュウは猛攻を続ける。だがそれもわずか数秒の事。すぐに風の鎧が復活し、彼の体を強制的に排除する。クリュウは自らを押す風に逆らう事なく、むしろその風を利用して大きく後退。クシャルダオラと距離を取った。

離れた相手に対し、クシャルダオラは唸り声を上げながら突進を仕掛ける。迫り来る鋼龍クシャルダオラに対し、クリュウもまた煌竜剣（シャイニング・ブレード）を握り締めて真っ向勝負を挑む。

一人と一頭の激しい戦いは、それから一時間近くも続いた。

「がはぁッ！」

背中を木に激しく強打し、肺の中の空気を一気に吐き出す。地面に倒れると、激しく咳き込んだ。腕を突っ伏して何とか起き上がろうとするが、もう力が入らず起き上がる事もできない。

地面の振動が、ゆっくりとクシャルダオラが迫っている事を知らせる。霞む視界で辺りを見回せば、こちらに向かってクシャルダオラがゆっくりと迫っているのが見えた。相変わらず風の鎧は健在で、鋼の龍鱗は至る所に傷はあるが、どれも致命打にはなっていない。それがクリュウの全力攻撃の末の結果なのだから、力及ばずと言ったところか。

全身を襲う痛みは、もはや痛いを通りすぎて何も感じない。ただ、全身に力が入らない。痛みは生物としての生存が危うい際の危険信

号だと言われているが、それが壊れているのだとすれば、自分はもうヤバイのかもしれない。
「バカ、言ってんじゃねぇ……ッ」
妙に冷静な自分を叱責しながら、クリュウはそれでも起き上がろうとして足掻く。力の入らない腕を無理やり突っ張って何とか今さっき自分の背中を強打した木に背を預けるのが精一杯。足にはもう全く力が入らなくて、立ち上がる事は無理っぽい。
思考もまるでモヤが掛かったみたいにハッキリせず、頬を流れる血は今も止まる気配はない。手当てが必要な事はわかっていても、そんな余裕もなかった。ずっとクシャルダオラの風に吹き飛ばされまくっていたのだから。
閃光玉があった時は、何とか立ち回れていたが、それが底をつきた途端に一方的な戦いへと戻ってしまった。接近すれば風で跳ね飛ばされ、距離を取れば風ブレスで吹き飛ばされ、どちらも風という不可視な攻撃の為、距離感が掴めずどうしても回避がしづらい。結果、回復系の道具（アイテム）がほとんど失われる程のダメージを受けてしまった。
回復手段もわずか、隙を作る閃光玉は底をつき、全身にはもう力が入らない。笑えるくらい絶望的な状況だった。
「クソォ……ここまでだって言うのかよ……ッ」
自分はまだまだ戦える。戦わなくちゃいけないのに、体が言う事を聞かない。納得出来ないし、したくもない。だが、受け入れなくてはいけない現実だ。
ゆっくりと足を進めていたクシャルダオラが、その歩みを止めた。低く唸りながら、こちらを睨みつけている。手にはしっかり煌竜剣（シャイニング・ブレード）だけは握り締めているが、振るう力もない。
不気味な沈黙が数秒流れた後、クリュウは不敵な笑みを浮かべてクシャルダオラを見据える。
何か策を思いついた訳ではない。状況は変わらず最悪だし、起死回生の何かがある訳でもない。それでも、最期の一瞬まで負けるつもりはない。

「僕一人を倒すのにここまで時間が掛かるなんて――お前も案外大した事ないな」
　人間の言葉を理解した訳ではない。それでも、自分をバカにされた事くらいは雰囲気でわかったのだろう。怒鳴り声を上げながら、クシャルダオラはその凶悪な爪を振り上げる。苦し紛れに、クリュウが盾を構えようとしたその時、突如爆音が辺りに轟いた。それもすぐ傍で。
「な、何……？」
　見れば、クシャルダオラに向かって次々に打ち上げタル爆弾が側面から撃ち込まれている。それらはこれまでクリュウが試したように風の鎧で弾かれて全然違う場所で炸裂しているが、クシャルダオラの意識を逸らすだけの効果はあった。
　突然の乱入にクシャルダオラが鬱陶しげに振り返る。その視線を追ってクリュウが目を向けると――少女が一人、無鉄砲にもクシャルダオラに向かって突っ込んで来るのが見えた。
「うおりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
　勇ましい咆哮を上げながらバカ丸出しに突っ込んで来るのは全身を桃毛獣ババコンガやその幼体コンガの素材で作られたコンガシリーズで纏ったオレンジ色のツインテールを風に揺らす少女。腰に乗せて構えているのは柄の先端に鉄の檻が付いたようなもので、その中には不思議な光が煌めくバインドキューブと呼ばれるハンマー。
　その姿を見て、クリュウは我が目を疑った。
「な、何で……お前がここに……」
　霞む視界の向こうに見える少女は、見間違えるはずがない。自分にとって可愛い後輩であり、自分がピンチの時には勇ましく助けに突っ込んでくる。バカみたいに真っ直ぐで、バカみたいに直情的で、バカみたいに猪突猛進で、バカみたいに素直で、バカ丸出しな少女の名は――シャルル・ルクレール。
「兄者に何してやがりますかぁッ！」
「ば、バカッ！　突っ込むなッ！」
　シャルルは知らない。クシャルダオラは全身に風を纏っていて、近

付く事すらできない事を。バカみたいに無鉄砲で、バカみたいに真っ直ぐ突っ込むシャルル。その体が風の鎧で吹き飛ばされる事くらい安易に想像できた。だが突如シャルルの背後に投擲された物を見て反射的に目を閉じると、それはまぶた越しでもわかる程の強烈な光を放った。閃光玉だ。

目を開くと、閃光玉の影響でクシャルダオラは目を潰され、風の鎧は強制解除されていた。そして、無防備となったクシャルダオラの顔面に向かって、接近したシャルルは必殺の横殴りの一撃を放つ。体重と遠心力が加わった重い一撃は、クシャルダオラの顔面を吹き飛ばし、鋼龍は悲鳴を上げて倒れた。

「うぉっしゃあああぁぁぁッ！」

自らの一撃で古龍をぶっ倒した事に歓喜の雄叫びを上げるシャルル。そんな彼女を呆然と見詰めていると、突如空から無数の矢が降り注いだ。風の鎧が解けている状態のクシャルダオラに対し、矢は寸分違わず次々に命中する。強撃ビンを備えた矢は次々に爆発し、例え鏃が弾かれても強撃ビンによってダメージを蓄積する。硬いモンスター相手には的確な攻撃だ。

無鉄砲なシャルルに対する的確な援護と、鋼龍クシャルダオラの特徴を理解した道具（アイテム）の選択、そして遠距離からの的確且つ強烈な援護射撃。これら三つを併せ持つ者は、クリュウが知る限り一人しかいない。

「――間に合って良かったです、先輩」

振り返ると、そこには妖精が立っていた。

全身をオオツノアゲハの素材を使った黄色い飛膜で覆われた極彩色の鎧、パピメルシリーズを纏った少女。手には適度な連射力と遠距離射撃に適した硬いワイヤーとフレームを備えた鋼鉄製の弓、パワーハンターボウ1が握られている。

極彩色の少女は、ぐったりとしている自分を心から心配していた。メガネの奥の不安そうに震える瞳がその証拠だ。その瞳は左右で色が違う。右目は晴天の空のような碧色、左目は燦々と煌めく太陽のような黄金色の瞳。

邪眼姫（イビルアイ）。大陸伝説の一つ、人々に災厄をもたらす堕天使と同じ目をした少女。その瞳のせいで、辛い目にもたくさん遭ってきた。それでも彼女は腐らず、成長を続け、今こうして目の前に立っている。

少し前に一度会っているはずなのに、何だかとても懐かしい。久しぶりに見る彼女は実に元気そうで、そして何より自分のピンチの時には必ず駆けつけてくる。自分にはもったいないくらいに頼りになり、可愛い後輩だ。

「ルフィール……何で……？」

クリュウの問いに、少女――ルフィール・ケーニッヒは口元に小さな笑みを浮かべた。

「先輩の村が一大事だという事で、駆けつけて来ました」

ルフィールは当然とも言いたげに、淡々と答えた。でもそれは、クリュウにとっては涙が出る程嬉しい言葉だった。

「兄者、無事っすか？　立てるっすか？」

こちらに駆け寄って来たシャルルもまた不安そうにクリュウを見詰めながら手を差し伸べてくれる。

「あぁ、大丈夫だ」

不思議だ。さっきまで立つ事もできなかったのに、今は何とかフラつきながらも立ち上がる事ができた。二人の姿を見て元気が出たのか、それとも後輩の前で情けない姿を見せたくないというちっぽけなプライドの為か。どちらにしても、二人のおかげでまた立つ事ができた。

「お前達……」

「詳しいお話は後です先輩。今は奴をどうにかしないと」

「あいつ無茶苦茶硬いっすよ――んで、あの野郎は何者っすか？」

シャルルの言葉に思わず倒れそうになるのを何とか踏み止まった――こいつ、相手が古龍だと知らずに突っ込んだのか。相変わらず無茶苦茶で、そしてどうしようもないバカだ。

「あれは鋼龍クシャルダオラ。古龍の一種で、全身に風を纏った面倒な相手です」

「ほぉ、あれが古龍っすかッ!?　ニッヒヒヒ、それはまたぶっ飛ばし甲斐がある相手っすね」
楽しそうに言うシャルルを見て、クリュウは思わず苦笑を浮かべた。
古龍を目の前に一度は戦意すら失った自分に対し、シャルルは相手が古龍だとしてもむしろ闘志を燃えたぎらせてしまう。戦闘バカと言えばそれまでだが、彼女のこういう真っ直ぐさは素直に尊敬できる。
「そうですね、先輩の大切な村をこんなにしたケジメは、しっかり取っていただかないと」
そう言いながら、パワーハンターボウーを構えるルフィールの表情はいつになく真剣だ。イビルアイは鋭く、怒りに満ちている。彼女は一度この村に来た事があり、この村の長閑さや村人の優しさを知っている。だからこそ、変わり果てた村を見て怒りを抱いているのだ。そしてそれは、見知らぬ村のはずのシャルルも同様だ。
「先輩の故郷を無茶苦茶にした奴を、シャルは絶対に許さないっすッ！」
バインドキューブを構え、怒りに満ちた鋭い眼光でクシャルダオラを睨みつけるシャルル。そんな二人の少女の背後で、クリュウは閃光玉の効き目が切れて風の鎧を再び纏うクシャルダオラを一瞥し、二人の肩を掴む。
「気持ちは嬉しいけど、二人に負担は掛けられない。これは僕の戦いだ。だから二人はすぐに逃――げふぅッ!?」
最後まで言う前に、腹部に炸裂した拳に悶絶するクリュウ。そんな彼を、殴ったシャルルが呆れたように見詰める。
「何らしくもなくかっこつけてやがるんすか。シャルはこれっぽっちも負担なんて思ってないっすよ」
「シャルルさんの言う通りです先輩。それに、先輩の戦いなら、それを全力で援護するのがボク達の役目――ボク達は、共に苦境を乗り切った第７７小隊なんですから」
そんな彼女達の言葉に、クリュウは呆然と二人を見詰める。二人

共、いつの間にかずいぶん頼もしい顔つきに変わっていた。もう二年近く前、学生だった頃とは違う、成長した二人の後輩の姿――どうやら自分は、二人の事を少々軽く見ていたらしい。先輩として、情けない限りだ。
「……わかった。なら、こっちからもお願いするよ。正直、僕一人じゃあいつには全く歯が立たない。でもルフィールとシャルルと一緒なら、もしかしたら一矢くらいは報えるかもしれない。厳しい戦いになると思う。それでも――僕と一緒に、戦ってくれる？」
　クリュウの問いに対し、二人の返す言葉など最初から決まっている。
「何言ってやがりますか。んなもん当たり前っすよ」
「ボクと先輩は一蓮托生です。不肖イビルアイのルフィール・ケーニッヒ。先輩を全力援護させていただきます」
　笑顔で答える二人の返答に、クリュウもまた満面の笑みで返した。
「ありがと二人共。二人はやっぱり、僕の最高の後輩だよ」
　二年ぶりに再結成された第７７小隊。もうひとりのメンバーであるクード・ランカスターはいないが、後輩二人と一緒のチームを組むのはずいぶん久しぶりだ。相手が鋼龍クシャルダオラというのは正直かなり厳しいが、それでも――たった一人で戦うよりはずっと心強い。
「シャル達の絆の力を、あの鋼野郎にたっぷり魅せつけてやりますよッ！」
　気合十分とばかりにバインドキューブをブンブン振り回して意気軒昂なシャルル。
「弓で挑むのは正直相性が悪い相手ですが、そこは知略で何とかします。ボクの武器は弓だけではありませんので」
　メガネのブリッジをクイッと上げて、相手にとって不足はないとばかりにパワーハンターボウ１を構えるルフィール。
「さぁクシャルダオラ。第７７小隊の力、思い知らせてやるよ」
　煌竜剣（シャイニング・ブレード）を構え、不敵な笑みを浮かべながら一歩二人の前に出るクリュウ。

三人の敵を前に、クシャルダオラは面白いとばかりに咆哮すると、大地を蹴って三人に向かって一直線に突撃して来る。
迫り来る鋼龍クシャルダオラを前に、クリュウの「行くぞッ！」という掛け声を合図に三人もまたクシャルダオラに向かって突撃する。
クリュウ・ルナリーフ、ルフィール・ケーニッヒ、シャルル・ルクレール対鋼龍クシャルダオラの戦いが、今始まった。

第２１７話　槌は力なり　弓は知恵なり　二人が奏でる愛の協奏曲

曇天の空の下、決戦の火蓋は切って落とされた。
突撃して来るクシャルダオラに対し、ルフィールは冷静に閃光玉を投擲する。彼我の距離と相対速度を瞬時に判断して投げられた閃光玉は見事に迫るクシャルダオラの眼前で炸裂。すさまじい光が鋼龍の視界を瞬時に奪う。同時にクシャルダオラが纏う風の鎧も立ち消えた。
「シャルルは右翼からッ！　僕は左翼から回り込むッ！」
「了解っすッ！」
「ルフィールはそのまま援護を続けてくれッ！」
「了解しましたッ！」
クリュウの指示に従い、視界を奪われて暴れるクシャルダオラに向かって殺到する三人。クリュウは左側から、シャルルは右側から迫り、ルフィールは正面に立って素早く矢を番えて弓を構える。狙いを定め、次々に自慢の連射力を駆使して矢を放つ。
空から降り注ぐ矢は次々にクシャルダオラに命中し、矢に装填された強撃ビンの効果で次々に爆発が起きる。低い唸り声を上げるクシャルダオラに対し、左右から二人が襲い掛かったのはその時だ。
「先手必勝っすッ！」
気合十分で突撃するシャルルはクシャルダオラから見て左側から接近すると、構えたバインドキューブをその脇腹目掛けて降り掛かる。重心の乗った一撃はクシャルダオラの鋼の鎧に直撃すると甲高い金属音を響かせて弾かれる。たたらを踏むシャルルだったが、その表情は嬉々としていた。弾かれて浮く体をうまく滑らせて回転させると、そのまま横殴りの一撃を左前脚に叩き込む。
一方、クシャルダオラの右脇腹にクリュウが遅れて斬り掛かる。煌めく剣先は吸い込まれるようにクシャルダオラの鋼の鎧に炸裂する。弾かれつつも、その鋭い剣先は鋼の龍鱗に傷を残す。何度も何度も叩

きつけると、鈍色の美しい鋼の鎧に無数の傷が生まれ、場所によってはわずかな亀裂を生じさせていた。自分の攻撃は無駄ではない。圧倒的な相手を前にして、それはわずかながらの希望だった。

シャルルも負けじと連続して攻撃を放つ。重い一撃が命中すると、時折黄金色の稲妻が迸る。その光を、クリュウは知っている。

「麻痺属性の武器か……」

バインドキューブは電気袋を使った装備であり、強力な電撃を発生させて相手を麻痺させる事ができるハンマーである。比較的簡単に作れる為、初心者はもちろんその使い勝手の良さから上級者も麻痺武器の主力として用いる事もある万能武器だ。

昔は武器を選ぶ基準は攻撃力のみだったシャルルも、いつの間にか属性攻撃なども考慮するようになったらしい。後輩の成長に思わず笑みが零れるが、それを邪魔するように辺りの風向きが変わった。

「もう解けたか……ッ」

視界を回復させた事で、クシャルダオラは再び風の鎧を纏う。すかさず撤退したクリュウに対し、初見のシャルルは逃げ遅れてしまい、風に跳ね飛ばされてしまう。しかしそこは持ち前の身体能力で倒れる事なくうまく着地して事無きを得た。そんな彼女のすぐ傍を矢が一本突き抜ける。ルフィールが放った強撃ビンを備えた矢だ。

一直線にクシャルダオラに迫る矢だったが、風の鎧に触れた瞬間に跳ね飛ばされてしまう。しかも元来た方向に跳ね返り、驚くルフィールの頬のすぐ傍を通り抜けて行った。

「成程、確かに厄介ですねこれは……」

思わず苦笑を浮かべるルフィールだったが、すぐにパワーハンターボウ1を折り畳んで背負うと、道具袋（ポーチ）に手を伸ばす。取り出したのは黄色い液体の入ったビン。フタを外し、一気に煽る。途端に体中に力が漲る。一定時間スタミナ切れを起こさなくなる強走薬だ。

ビンを放り捨て、ルフィールは走る。一時的且つ限定的とはいえ、その身体能力はサクラにも迫る。怒涛の勢いで突っ込むルフィールは、風の鎧を纏った事で近づけずにいるシャルルの横を通り抜ける。

「ちょッ!?　何してやがるんすか！」
　シャルルの声など無視し、一気に距離を詰めるルフィール。振り返るクシャルダオラに向かって再び弓を構えると弓を番え、限界まで引き絞る。狙いを定め、摘んでいた矢を放った。
　パンッという音と共に放たれた一撃は、クシャルダオラの頭部に命中した。風の鎧を纏っていたはずなのに、まるで最初からそんなものがないかのように、矢はブレる事なく命中する。驚く二人の視線など気にもせず、ルフィールは不敵に微笑む。
「やはり、頭部付近には風の障壁は存在しないのですね」
　一撃を入れられた事により、クシャルダオラの狙いは自然とルフィールに集中する。それを気配で感じ取ったルフィールは満足気にうなずき、今度は逆に全力で後方に走って距離を開くが、それを詰めるようにクシャルダオラは彼女を追いかけて突撃する。慌ててクリュウとシャルルがその行動を妨害しようとするが、一瞬遅くクシャルダオラは二人を振り切って背後からルフィールを襲う。だが寸前の所でルフィールは横に跳んで回避すると、再び弓を構えて矢を放つ。狙いはまたしても頭部。そして矢は再び命中した。
　再びルフィールを狙い、風ブレスを放とうとするクシャルダオラの眼前にシャルルの投げた閃光玉が炸裂する。視界を奪われたクシャルダオラは動きを止め、そこへ野獣の如き咆哮を轟かせながらシャルルが襲い掛かる。
　一方、ルフィールも援護とばかりに矢を放つ。風の鎧が解けている今なら翼や胴体といった部分を狙っても命中する。的確に、そしてスピーディーに攻撃を重ねるルフィール。その隣に、クリュウが歩み寄る。
「さっき、頭に矢が命中したよね。あれって……」
「――戦いとは、如何に有益な情報を数多く仕入れ、それを判断材料にして対策を講じるかで成否が大きく変わります。何も武力だけが戦いではありません」
　速度を落とす事なく連射を重ねるルフィールは、淡々とクリュウの質問に答える。

「事前情報で、クシャルダオラを包む風の鎧にも弱点がある事を知りました」
「弱点？」
「風の鎧を纏った状態で、風ブレスを放てば当然お互いの風が干渉して威力を相殺してしまいます。その為、クシャルダオラは自身の頭部及びその周辺には風の鎧を展開していません。そこを狙えば、風の鎧を無視して攻撃を当てる事ができます」
「やっぱりか……」
　クリュウは自らの予想が的中した事に笑みを零す。イルファ雪山での戦いで彼が見出していたクシャルダオラの纏う風の鎧の弱点。それがルフィールのもたらした情報のおかげでより確実なものになった。わずかとはいえ、希望の光が見え始めた。
　一方のルフィールは自信満々の情報だったのだろう。クリュウの反応を見て「ご存知だったのですか？」と問い掛ける。
「戦いの中で気づいたんだ。確証はなかったけど」
「……さすが先輩。戦いの中で光明を見出すとは」
「それほどの事じゃないよ」
　謙遜するクリュウだが、ルフィールは改めて彼の才能に驚かされていた。古龍相手の戦いは、身を守る事で精一杯になる事も多い。そんな危険な戦いの中で、ベテランハンターですら見つけ出す事が難しい鋼龍の弱点を見つけた。彼は自分の事を《凡ハンター》と称する事が多いが、ルフィールは自信を持ってそれを否定できる。
　彼のこれまでの功績を見る限り、とても凡と称されるようなものではない。確かに派手さはなくて地味なものばかりだが、それは自分も同じ。何かに大きく秀でている訳ではないが、基本となるポテンシャルが高いのだ。そうでなくては、クシャルダオラ相手にここまで生き残り、且つその弱点を見出す事など不可能だろう。
「でも、そんな情報よく手に入れられたね」
　古龍の情報など、ベテランハンターが大金を積んででも手に入れたい情報のはず。訓練学校の教科書はもちろん、一般閲覧可能な文献などにも有益な情報が乗っている事は少ない。しかもここは中央大陸

だ。これまで人間はモンスターとの生存競争をしながら、同時に同じ人間同士で争って来た。同じ人間なのに複数の国や地域に分かれて争い、今も互いを牽制し合っている。情報共有が完全にはし切れてはおらず、同じものの情報でも国によって見方が変わる事で意味合いが変わってしまう。そんな不完全な情報が氾濫する中で、ルフィールは入手困難な情報を手に入れ、こうして自分に教えてくれる。

驚くクリュウに対し、ルフィールは振り返る。二色の瞳と目が合った瞬間――その口元に笑みが浮かぶ。

「先輩、忘れたんですか？　ボクは――知識では誰にも負けません」

不敵に微笑むルフィールを見て、クリュウは思わず苦笑を浮かべた。

そう、ルフィール・ケーニッヒという少女はハンターとしての実力は正直凡才だ。技術という面ではどうしても天才とも言える身体能力を持つシャルルには遠く及ばない。それでも彼女の最大の強みは力ではない。

その類まれなる知識と、冷静な状況判断能力と推理力。それらを駆使して戦況を巧みに操り、的確な援護と攻撃をする事で、力を補う。パワー型の多いハンターの世界において、彼女は数少ない知能型のハンターなのだ。

「まぁ、この情報はここに駆けつける前にある方から教えていただいたのですが」

「それって……」

「セレスティーナ・レヴェリさん――フィーリアさんのお姉さんです」

「セレスティーナさんに？　って事は、ここに来る前はレヴェリに？」

「はい。シャルルさんとアルザスで合流した後、二人で武者修行の旅に出て、その道中で立ち寄った所でした。そこでフィーリアさんからの緊急伝書鳩を受け取り、且つエルバーフェルド政府からの情報でイルファ山脈に鋼龍クシャルダオラが出現した事を知り、こうして駆けつけた次第です」

「セレスティーナさんに情報提供を受けた事も驚きだったけど、エルバーフェルド政府はイルファにクシャルダオラが現れた事を知って

たの？」
「エルバーフェルドにはシュトゥットガルトという優秀な古龍研究所がありますから、不思議ではありません。何より、セレスティーナさんはその機関の人間ですから」
「そっか……」
　やはり、国という堅牢な巨大組織はすごい。地方自治体の集合体である自分達の地域とは違う、国内だけとはいえ情報統制がしっかりと行われている。その点は素直に感服する。同時に彼は知らないがその優れた情報統制が時にはプロパガンダで国民を思い通りの方向へ誘導する事もできる。何事においても、国というのは規模が違う。
「セレスティーナさんの情報はありがたいですが、同時にクシャルダオラの攻撃はそのほとんどが正面に特化しているので、剣士で正面から突っ込むのもまた自殺行為です」
「でも、閃光玉の数だって限りがあるでしょ？　いつまで持つか……」
　最大の攻撃力である剣士二人がまともに攻撃できないのでは、結果的にダメージを多くは与えられない。弓は確かに強い武器ではあるが、純粋な攻撃力ではハンマーや片手剣にも劣る。相手は無尽蔵とも言うべき体力を持つ古龍だ。有限である閃光玉の、わずかな時間しか攻撃できないのでは話にならない。
　するとルフィールはまたしても不敵な笑みを浮かべる。
「言ったはずです先輩。ボクは、知識では誰にも負けないと――ちゃんと対策は考えています」
「え……？」
　そう言ってルフィールは矢を一本矢筒から引き抜くと、手早くビンを装填する。それは先程まで彼女が使っていた強撃ビンではなく、紫色の液体が入ったビン。
「それって……」
「ガンナーの最大の利点、それは――臨機応変に様々な攻撃が可能という点にあります」
　閃光玉が切れ、クシャルダオラは起き上がる。それに合わせて風の鎧も再度強さを増し、シャルルを吹き飛ばす。だがそこは野生児シャ

ルル。器用に空中で回転して足から地面に着地すると、すかさずハンマーを構えて姿勢を低く取る。その直上を、ルフィールの放った矢が突き進む。

風の鎧の隙間、正面から襲い掛かった一撃はクシャルダオラの首元に命中するとビンが破裂して中の液体が鋼龍の体表にこびり付く。

「毒ビン装備の矢っすか。相変わらず小細工が好きっすねぇルフィールは」

「効率的な武器の運用と言っていただきたいですね――鋼龍を毒状態にします。シャルルさん、援護お願いします」

「気は乗らないっすけど――任せろっすッ！」

腰にバインドキューブを載せたまま、ルフィールは意気軒昂に突撃を仕掛ける。真正面からの真っ向勝負。バカ丸出しの無謀な突撃だ。背後に隠してあった道具（アイテム）類を補給していたクリュウは反応に遅れ、この無茶な彼女の行動を援護しようと慌てて走るが、距離が開き過ぎている。

正面から馬鹿正直に突っ込むシャルルに対し、クシャルダオラは容赦なく風ブレスを放つ。

迫り来る不可視のブレス。だがシャルルは口元に笑みを浮かべるとその場で身を捻りながら横へ跳ぶ。その脇すれすれを風ブレスが轟音を立てながら通過した。コンガヘルムの毛飾りが激しく揺れ、衝撃波がビリビリと彼女の体を震わせる。だがシャルルは不敵な笑みを浮かべたまま後方へと流れていく風ブレスを横目に突撃の足を緩めずに突き進む。

風ブレスを撃った直後、クシャルダオラにはわずかな隙が生まれる。その隙を突いてシャルルは一気にクシャルダオラとの距離を詰めると、驚くクシャルダオラの顔面に向かってバインドキューブを振り殴った。軸足を固定し、勢いをそのまま回転力に変え、全身を使っての回し殴り。その一撃は強烈無比で、クシャルダオラの首が大きく捻じ曲がった。

「ギャアッ！」

怒るクシャルダオラが威嚇の声を上げた途端、そこへルフィールの

放った毒矢が命中する。その矢でまたしても一瞬隙が生まれ、その隙を利用してシャルルは更に肉薄し、クシャルダオラの右前足を殴る。だがそこで風の鎧に触れてしまい、大きく外へ弾き飛ばされてしまう。しかしシャルルはまたしてもきれいに着地してみせると、振り返るクシャルダオラの正面を避けるように横へと走る。

「……ったく、相変わらず無茶するなぁッ！」

そう言いつつも、クリュウの口元には笑みが浮かぶ。昔からシャルルの無茶っぷりにはいつも振り回されて来たが、それでも彼女のその驚愕の行動力と、それを成せる身体能力にはいつも驚かされ、そして感服して来た――彼女のその気合と根性は、この圧倒的に不利な戦いの中では希望の光にすら思えた。

シャルルの行動に感化されたかのようにクリュウも正面からクシャルダオラに迫る。だがルフィールの言った通り、クシャルダオラの正面は最も危険を伴う場所だ。当然、クシャルダオラも接近するクリュウに対して大地を蹴って突撃を仕掛ける。軽やかにして重厚なその突撃はあっという間に互いの距離を詰める。

だがこれはクリュウも予想通りの行動だった。クリュウは補給したばかりの小タル爆弾Gをすでにピンを抜いて構えていた。迫り来るクシャルダオラに対して、クリュウはこれを自らの足元に投擲するとすぐさま横へと走った。

ギリギリのタイミングでクシャルダオラの進撃を回避したクリュウ。その直後、クリュウの投げた小タル爆弾Gが起爆。それはちょうどクシャルダオラの右前脚の下で炸裂した。

「ギャウッ!?」

滑走していたクシャルダオラはその小さな爆発にバランスを崩した。走っている時は、その屈強な四本の脚も全てが地面に着いている訳ではない。踏み外したクシャルダオラは呆気無く横倒しに倒れた。同時に風の鎧が一時的に消え、無防備な姿を晒け出す事になる。

「さすが先輩っすッ！」

倒れたクシャルダオラに対し、シャルルが威勢良く襲い掛かる。同時にクリュウも煌竜剣（シャイニング・ブレード）を構えて襲い掛かっ

た。一方のルフィールはここぞとばかりに毒矢を連続して撃ち放った。一斉に三本の矢を指に構えて撃ち放つと、続けて矢筒から素早く矢を引き抜いて装填して発射。これを目にも留まらぬ疾さで続けた。その速度は学生時代よりも――クリュウと共にイャンガルルガと戦った時よりも疾く、そして正確だった。

横倒しのクシャルダオラの脇腹目掛けて、シャルルは怒涛の勢いでバインドキューブを殴りつける。迸る麻痺電撃の黄金の輝きに照らされる横顔は真剣そのものだ。

「うぉらぁあああああぁぁぁぁぁッ！」

勇ましい雄叫びを上げながら、体全身を使ってバインドキューブを次々に殴りつけるシャルル。その勇ましさと苛烈さは、まだかけだしと言える実力のハンターとは思えない。相手が古龍だというのに、一切怖気づく事なく勇猛果敢に攻め入るその姿は、まさに真の狩人と言うに相応しい。

鋼鉄の鎧を殴りつける度に弾かれ、金属音と共に押し寄せる衝撃が腕を震わせる。痺れる腕を持ち前の気合と根性で捻じ伏せ、ただひたすらに打撃を加え続ける。その時の彼女の表情は鬼気迫るものだった。

そんな後輩の勇ましい姿を間近で見ながら、クリュウもまた負けじと煌竜剣（シャイニング・ブレード）を振るう。英雄王アルトリアに忠誠を誓った伝説の神竜と崇める銀火竜と金火竜から献上された素材を使って、伝説の鍛冶師が生涯最高傑作として生み出した伝説の剣、煌竜剣（シャイニング・ブレード）。その切れ味はこれまで鋼龍の鋼鉄の鎧をわずかとはいえ削り、ダメージを与えながらも一向に衰えない。その類まれなる切れ味の成せる業か、それとも剣に宿る神竜の加護か。それはわからないが、クリュウの猛攻は留まる事を知らない。

武器を振るうクリュウには一つの考えがあった。いくら強力な武器である煌竜剣（シャイニング・ブレード）でも、この尋常ならざる堅さを持つクシャルダオラを前にしてはその真価を発揮できない。だがどんなに堅牢な鎧を纏っていても、決して纏い切れない部分とい

うものがある。それは生物である限り決して逃れる事のできない――関節部分だ。
どんなに堅牢な鎧を持っていても、可動域となる関節にはその鎧を纏う事はできない。これまで戦って来た岩竜バサルモス、鎌蟹ショウグンギザミといった鋼龍クシャルダオラには劣るものの強力な鎧を持ったモンスターを攻略して来たクリュウにとって、それは経験から導き出した必勝方法だった。
事実、鎧に直接刃を当てても削るのが精一杯だった攻撃も、関節を狙えばより深くまでその鎧を削る事ができた。うまく攻撃を加え続けられれば、いずれこの鎧も剥がれ落ち、中の肉に直接斬り掛かれる。
そして後方から毒矢を連続して撃ち放つルフィールにも必勝策があった。エムデンを慌てて出発する際、お世話になっていたレヴェリ家の長女、セレスティーナが教えてくれた鋼龍クシャルダオラの弱点。
自分の事を、イビルアイを気にせずに接してくれ、まるで本当の妹のように優しく扱ってくれたセレスティーナ。そんな彼女の真剣な面持ちで教えてくれたアドバイスを、ルフィール・ケーニッヒという少女は決して無駄にはしない。
三人の猛攻撃は怒涛の勢いだった。しかしそれもクシャルダオラが再び起き上がるまでのわずか数秒の事。クシャルダオラがゆっくりと起き上がると、再び風の鎧を纏う。その風に剣士二人が後退を余儀なくされる中、構わず矢を射続ける。動くクシャルダオラの風の鎧で何本かの矢が弾かれるが、それでも構わず頭部への集中砲火を止めない。そして、撃ち放たれた一矢が怒りの声を上げるクシャルダオラの口腔に命中した瞬間――場の流れが変わった。
「グォルウゥ……ッ」
突如クシャルダオラは苦しげな声を漏らすと、明らかにその動きを鈍らせた。同時に、それまで暴風の如く吹き荒れていた風の鎧が消え去った。自らを守る第一の鎧を失ったクシャルダオラは、低い唸り声を上げてクリュウ達を威嚇する。それに対し、必然的にチームの参謀役となっていたルフィールの口から猛々しい声が飛んだ。

「この機を逃さないでくださいッ！　今こそ総攻撃の時ですッ！」
ルフィールの総攻撃命令に、回避行動を取っていた二人の剣士が呼応して反転攻勢に出る。突撃する二人に向き直るクシャルダオラの動きは明らかに鈍い。それが毒状態によるものだという事は簡単に予想がついた。そして同時に、ルフィールの策というものにも気づく。
「そっか。クシャルダオラは、毒状態の時は風の鎧を使えないんだ……ッ」
風の鎧を封印されて裸同然となったクシャルダオラの姿を見て、ルフィールの口元に笑みが浮かぶ。すぐさま毒矢から再び強撃ビンを備えた強撃矢に切り替え、先陣して総攻撃の火蓋を切る。
そう、ルフィールが事前にセレスティーナから得ていた鋼龍クシャルダオラの弱点。それは――クシャルダオラは、状態異常の際に風の鎧を失うという事だった。
常に風の鎧を纏うクシャルダオラだが、さすがに毒状態と弱っている時はそんな余裕もない。このわずかな隙、しかし閃光玉よりも長く風の鎧を無効化できる隙は、今のクリュウ達にとってこれ以上ないチャンスだった。
ルフィールの放つ強撃矢の連射で、背中や翼に小爆発を受けるクシャルダオラ。鬱陶しげに彼女の方へと振り返った直後、その顔面に強烈無比な一撃が叩き込まれる。
「どこを見てやがるっすかッ！」
力任せの一撃を叩き込んだのはシャルルだ。バインドキューブを構えたまま突撃した彼女は、限界まで溜め込んだ力をクシャルダオラの首下で発揮。渾身の一撃として振り上げたバインドキューブをその腕力と武器自体の質量を威力に変えて叩きつけた。悲鳴を上げてたたらを踏むクシャルダオラに、シャルルは容赦なく更に一歩踏み込んで一撃を入れる。
だが小娘にいつまでもやられる古龍ではない。四本の脚でしっかりと地面を踏み締めると、彼女に向かって右前脚を振るう。鋭い爪が襲い掛かるが、寸前でシャルルはバックステップでこれを回避した。

更に追撃しようと動くクシャルダオラの背後から、今度はクリュウが襲い掛かる。
「喰らえッ！」
雄叫びを上げながら振り上げた煌竜剣（シャイニング・ブレード）を振り下ろした先には、クシャルダオラの尻尾があった。刃が激突した瞬間、やはり硬かった。しかし常に靭やかに動く尻尾は他の部分と比べると若干柔らかかった。おかげで鋭い切れ味を誇る煌竜剣（シャイニング・ブレード）だと硬い鋼鱗を弾き飛ばし、その下の肉を傷つける事ができた。これまでの戦闘で初めて見た、古龍の血だ。
「行けるッ！」
尻尾なら武器が通る事を知ったクリュウは続けて尻尾に何度も剣撃を入れる。だが閃光玉で拘束している訳ではないクシャルダオラは、決してジッとしている訳ではない。翼を羽ばたかせて大きく後退すると、慌てて追い掛ける剣士二人に対して風ブレスを放つ。轟音を立てながら接近する一撃を二人は左右に分かれて回避。そのまま挟撃するように迫る二人に対し、クシャルダオラはシャルルを狙って突進を仕掛ける。
「ぬおぉッ!?」
怒涛の勢いで迫るクシャルダオラに対して驚き、慌てて横へ跳んで回避するシャルル。だがクシャルダオラは急停止してしつこく彼女を追う。振り返って逃げるシャルルの背中を狙うクシャルダオラ。だがその背後にルフィールの放った矢が数本命中する。鬱陶しげに唸りながらシャルルへの追撃を断念して再度振り返り、今度はルフィールを狙って風ブレスを放つ。
迫り来る不可視の攻撃をルフィールは弓を畳んで横に走ってこれを回避。しかしクシャルダオラは連続で二発の風ブレスを放った。暴風の塊が次々に命中し、辺りの木や岩、更に家屋が粉々に吹き飛ぶ。一軒の家が吹き飛んだのを見て、ルフィールが「しまった……ッ」と動きを止める。その隙を突いてクシャルダオラが大地を蹴って四本脚を活かして素早くルフィールに迫る。
気配に気づいて振り返った時には、凶悪な爪を振り上げるクシャル

ダオラの姿が眼前にまで迫っていた。イビルアイを限界まで開いて驚くルフィール。だがそんな彼女をクリュウは横から接近して彼女の身体を抱くと、そのまま勢いを殺さず横へ飛び退ける。直後、クシャルダオラの鋭い爪が大地を大きく抉った。

クリュウはルフィールの体を強く抱き締めたまま背中から地面に落ちる。衝撃と痛みに咳き込みながらも、腕の中のルフィールに声を掛ける。

「大丈夫？」

「は、はい。すみません……」

顔を真っ赤にしたまま、申し訳なさそうに謝るルフィール。だがクリュウは「いいって。どんどん頼ってくれちゃってよ」と頼もしい笑みを浮かべる。そんな彼の笑顔にほっと胸を撫で下ろすルフィール。

だがそんな余韻を与える程クシャルダオラは空気を読むような相手ではない。振り返ったクシャルダオラは容赦なく二人に向かって風ブレスを放とうとする。慌てて回避しようとする二人だが、間に合わない。

凶悪な牙が並ぶ口がガパッと開かれ、口元周辺の空気が歪むのが見えた瞬間、クリュウはルフィールを背中に隠して盾を構えた。背後から「先輩ッ!?」と驚くルフィールの声を無視して、ガードに全神経を研ぎ澄ませる。

次の瞬間、風ブレスが放たれ、直撃する――はずだった。

「どぉっしゃあああああぁぁぁぁぁッ！」

そこへ野生児シャルルが強襲攻撃を仕掛けた。クシャルダオラの側面から迫ったシャルルは雄叫びを上げながらクシャルダオラの右前脚に向かってバインドキューブを殴りつける。予期しない方向からの一撃にバランスを崩したクシャルダオラの体が傾く。直後に発射された風ブレスは体が傾く中で撃たれたせいで明後日の方向に放たれ、不発に終わる。

そのまま倒れてくれ。祈るシャルルだったが、クシャルダオラは踏み止まった。舌打ちしてシャルルは大きく後退して態勢を立て直した二人に近寄る。

「二人共無事っすか？」
「助かったよシャルル。ほんと、お前は頼りになるよ」
「へへへ、そうっすか？」
「シャルルさん。ちゃんと先輩の顔を見て判断してください。先輩、笑いながら言ってますよ」
「な、何すかそれッ!?　兄者、シャルの事をバカにしてるっすかッ!?」
「してないしてない。ただ、お前の無茶苦茶さにはほんと脱帽するって事だよ」
「歴史に名を残すくらいの後先考えないその行動力は、称賛に値します」
「……それ、やっぱりバカにしてるっすよね？」
　ジト目になるシャルルの視線に笑いながら二人は謝る。口ではこう言ってても、二人共シャルルのその仲間想いで恐れる事なく突き進む行動力には心から感服しているし、尊敬の念すら抱いている。これまで何度も助けられ、そして今も助けられた。第７７小隊の連携力は、二年のブランクを感じさせない程に強く、息がピッタリであった。
「それより、毒状態にも時間制限があります。今は相手に息をつかせる間も与えない波状攻撃が重要です」
「わかってる。シャルル、お前のパワーには期待してるからな」
「任せるっすッ！　シャル、滅茶苦茶頑張っちゃうっすよぉッ！」
　再びクリュウとシャルルが前衛に出て、その後方からルフィールが援護する形で攻撃が再開される。
　風の鎧のない状態のクシャルダオラなら、全方位から攻撃が可能だ。わざわざ危険な正面を避け、持ち前の機動力を駆使する剣士組二人の猛攻と、ルフィールの的確な援護射撃にクシャルダオラは防戦を強いられる。先程までの優勢がウソのようだった。
　だが、シャルルがバインドキューブの連続回転攻撃を当てた後、ダメ押しとばかりに威嚇する顔面に向かって振り上げの一撃を入れようと腰を入れた瞬間、周囲の風が荒々しく吹き荒れ始めた。
「ニャ？　ぬわぁあああああぁぁぁぁッ!?」
　突如吹き荒れた風にシャルルの小柄な体は簡単に吹き飛ばされて

しまう。追撃を仕掛けようとしていたクリュウは接近を中止し、直前に矢を撃っていたルフィールも慌てて横に回避。一瞬前までいた所を自らが撃った矢が跳ね返って来た。
「……毒状態が解けましたか」
悔しげに呟くルフィールの言葉通り、クシャルダオラは毒状態から脱した。その瞬間、風の鎧が再構築され、辺りに吹き荒れて再び三人の接近を阻む。
唸り声を上げるクシャルダオラに対して、次の手を考えるルフィール。また毒状態にしたいが、モンスターは状態異常を起こすと、抗体を体の中で生み出してこれを除去しようとする。これが時間が経てば状態異常が解除される原因だ。厄介なのはこの抗体がある事で次に同じ状態異常を引き起こそうとすると、前に使用した以上の量の毒が必要になる事だ。つまり、また毒状態を起こすには先程以上に毒矢を当てなければならない。だが毒ビンにも数の制限がある。調合分は持って来ているが、それでも相手は古龍だ。がんばっても引き起こせるのは三回程度。そのわずかな隙で、相手に致命打を与えきれるだろうか――正直、それは不可能に近いだろう。だが、それでもやるしかない。
「それに、状態異常攻撃はボクだけではありませんからね」
口元に笑みを浮かべるルフィールの言葉にクリュウは首を傾げる。その時、
「どっせえええええええいッ！」
相変わらず無駄に大声を出して自らを鼓舞しながら突撃するシャルルの声に振り返ると、クシャルダオラに吹き飛ばされたはずのシャルルがいつの間にかそのクシャルダオラに向かって突撃するのが見えた。
「あ、あのバカ……ッ！」
「――ええ、確かにシャルルさんは致命的なまでにお頭（つむ）が残念な方です」
振り返るクシャルダオラはすかさず近づこうとするシャルルに向かって風ブレスを撃ち放つ。だがシャルルはそれをわずかなステッ

プで見事に避けてみせた。不可視の一撃を、紙一重で回避してみせたシャルルの動きにクリュウは驚かされる。
「勉学と常識に関しては、もはやバカという単語が服を来て歩いているようなものです」
荒れ狂う風に激しく揺れる前髪の下で、シャルルは不敵に笑みを浮かべてみせる。健康的な犬歯がキラリと光った瞬間、シャルルは地面を蹴って更に加速する。
「――ですが同時に、天性の狩猟バカでもあります」
風ブレスを撃った反動で一瞬動きが遅くなったクシャルダオラに対し、シャルルは一気に懐に潜り込む。風の鎧に振れる寸前で再びシャルルは地面を蹴って真横へと跳んだ。クシャルダオラの側面から回り込んだはずが、一瞬でクシャルダオラの正面に移る。
「お前、正面ならがら空きなんすよね？」
ニヤッと不敵に微笑んだ刹那、シャルルは構えていたバインドキューブをフルパワーで横殴った。勢いを乗せたその一撃は破壊力抜群で、クシャルダオラは側面から叩かれて悲鳴を上げる。だが次の瞬間、彼はまた別の悲鳴を上げる事となった。
「グオッ!?」
短い悲鳴を上げ、クシャルダオラは己の体を縛る不可視の拘束具に動きを封じられた。驚く彼の目の前で不敵に微笑んでいた小さな敵が一際大きな声を上げた。
「麻痺ったっすよぉッ！」
バインドキューブから発せられる電撃が、クリュウの使うデスパライズの麻痺毒と同様に神経系を一時的に混乱させ、麻痺状態に陥れた。麻痺状態となったクシャルダオラは無防備にその鋼の体を晒す。その身を守る第一の鎧である風の鎧は――ない。
「あいつ……」
「……ほんと、天才は羨ましいですね」
そう言うルフィールの表情は複雑そうだ。親友の武勇を誇りに感じつつも、自分には決してないその生まれながらの才能をどこか羨んでいるような、そんな二つの相反する想いが交差する表情。

「ルフィール……」
「――先輩、せっかくシャルルさんが作ってくれたチャンスです。先輩として、無駄にはできませんよ？」
そうどこか挑発気味に言う彼女の言葉に、クリュウもまた苦笑を浮かべる。しかしそれはすぐに真剣なものへと変わり、クリュウは先にクシャルダオラの頭を狙ってバインドキューブを振るうシャルルの元へと走る。そんな彼の背中を見送りながら、ルフィールも強撃ビンを装填した矢を準備し、ここぞとばかりに一斉砲火を浴びせる。
追いついたクリュウも煌竜剣（シャイニング・ブレード）を振り上げ、動けずにいるクシャルダオラに襲い掛かる。先程狙いをつけた関節を狙って剣を振るい続けると、弾かれる率はグッと低くなった。これならいける。クリュウの口元にも自然と笑みが浮かんだ。
煌竜剣（シャイニング・ブレード）を力強く振るうクリュウの上空から、落下音と共に無数の矢が降り注ぐ。それら全ての矢に強撃ビンが備えられており、着弾と同時にビンの中の薬品が爆発してクシャルダオラの体を火炎で包む。しかも無茶苦茶で撃っているようで狙いは全て正確で近接戦闘を繰り広げる二人のいる場所には決して落ちない。その技術と集中力が彼女の強みだ。
一方、ルフィールがその実力を発揮している頃、シャルルもまたその並外れた実力を発揮していた。
「だらっしゃあああああぁぁぁぁぁッ！」
気合裂帛と共に打ち出された横殴りの一撃。腰を落として軸を固定しながら振り抜いたその一撃は破壊力抜群。動けずにいるクシャルダオラの側頭部をブチ叩き、硬い鋼の鱗を数枚弾き飛ばす。だがその勢いを殺す事なく、むしろ回転力に変えて一回転した後、ハンマーを投げるように上に振り上げ、そしてそこから一気に叩き落す。
大振りのようで、体全体を使って振るう一撃はスピーディーで、すかさずシャルルは連続回転打撃を加える。両足を軸にしてハンマーの重みと勢いだけで回転しながら次々に繰り出される打撃の数々はハンマーの攻撃の中では比較的高くない攻撃力だが、それを補うだけの連続攻撃にクシャルダオラの痺れる口から悲鳴が上がる。

負けじとクリュウもクシャルダオラの右後脚の関節を狙って攻撃を繰り返す。関節部分も十分に硬いが、力を込めて重点的に狙えばこの強力な切れ味の武器なら対抗できる。右へ左へ流れるような連続攻撃の後には、頭上まで振り上げた剣先を一気に叩き落す。すると、関節部分の鱗に亀裂が入った。そこへ更に一撃を入れるとそれは砕け、やっとの想いで中に隠れた肉の部分が曝け出した。
「ここだぁッ！」
すかさず傷目掛けてクリュウは煌竜剣（シャイニング・ブレード）を叩き込む。鋭い切れ味を誇る剣での一撃はいとも簡単に肉を斬り裂き、鮮血を迸らせる。これにはさすがのクシャルダオラも痙攣する口の隙間から悲鳴を上げた。だがそれもすぐさまシャルルの横殴りの一撃で封じられる。
猛攻を繰り出す二人を援護するように、ルフィールもまた連続で矢を放つ。次々に放たれる矢は、痺れて動けずにいる鋼龍の体表を焼いていく。だがルフィールの役目は攻撃だけではない。クシャルダオラのわずかな動きを見て、すぐにルフィールは叫ぶ。
「痺れが解けますッ！　逃げてくださいッ！」
ルフィールの声にすかさずクリュウは撤退した。無理をしてこのまま押し通すよりも確実に攻める方が得策だと考えたからだ。だがシャルルは反対にハンマーを勢い良く振り上げた。驚く二人の前でシャルルはニヤリと口元に笑みを浮かべる。
「大丈夫っすよ。シャルはいつまでもバカじゃないっす――やる時は全力っすよッ！」
軸足に力を入れながら腰を回し、体全体を回転させながら力強く振るわれた一撃は轟音を立てながらクシャルダオラの側頭部をブチ抜いた。その瞬間、これまで彼女が積み重ねた攻撃の数々がその真価を発揮した。
「グオォッ!?」
麻痺の拘束が解け、辺りの空気が再び荒々しく渦を巻き始めた途端に炸裂したシャルルの一撃。それはクシャルダオラに脳震盪を起こした。強烈なめまいと共にバランスを崩したクシャルダオラは、風の

鎧を纏う暇もなく横転。そのまま立てなくなってしまう。
古龍相手に見事なスタンを見せたシャルルは野獣のような歓喜の雄叫びを上げると、すかさずバインドキューブを構えて倒れたクシャルダオラに襲い掛かる。そんな彼女の常軌を逸した猛攻を前にクリュウとルフィールは互いの顔を見合うとどちらからとなく苦笑が漏れた。
「つたく、本当にあいつは――」
「――本物の大バカですね」
これまで一体何度彼女の事を「バカ」と呼んで来た事か。でも不思議だ――そのいずれも、言葉の意味とは裏腹にどこか温かいものが込められている。バカ正直という言葉が侮蔑ではないように、きっと彼女に向けられるバカという言葉は、愛が込められているのだろう。
世話のやける後輩を、面倒事をよく起こす先輩を、フォローする為に二人も動く。倒れたクシャルダオラに向かって再び剣を構えて突撃するクリュウ。その後方からはルフィールが矢を一斉に構えて猛烈な援護射撃を放つ。
倒れたクシャルダオラの顔面に向かってシャルルは雄叫びを上げながらバインドキューブを振り上げ、一気に叩き落す。悲鳴を上げるクシャルダオラの顔面が強烈な彼女の一撃を受けて地面に陥没する。龍鱗がひしゃげ、クシャルダオラの口から風ではなく鮮血が吐き出された。
後輩の猛攻を前に、先輩として負けられない。クリュウもまたシャルルが生み出した好きを突いて再び動けないクシャルダオラに向かって襲い掛かる。
再び関節部分を狙って剣を振るう。煌竜剣（シャイニング・ブレード）はこれまでの戦いで若干切れ味を悪くしているが、それでも使い手の気持ちに応えるように輝きを増し、堅牢な鋼の鱗を削り取る。腰を落とし、軸足を固定して体全体を振り回すようにして放つ一撃は剣自体の切れ味も加わって絶大だ。関節部分の若干脆い鱗程度なら何とか弾き飛ばす事ができる。鱗を削り、現れた肉を寸断。真っ赤な鮮血が、クリュウのディアブロシリーズを赤く染める。

雄叫びを上げながら全力で振るわれるクリュウの剣撃。鋭い切れ味を誇る煌竜剣（シャイニング・ブレード）の刃は飛び散る鮮血の雫すらも真っ二つに斬り裂く。

一方、剣士二人の猛攻を背後からバックアップするルフィールの矢撃も勢いを増していく。連続で放たれる矢の数々は着弾と同時に装填された強撃ビンが破裂して爆発を轟かす。強撃ビンの数にも限りはある。それでも、攻めるべき時は全力で攻めるのがルフィールの戦い方だ。

壮烈無比にして怒涛の勢いで攻勢を仕掛ける三人の猛攻。だが鋼龍もいつまでもやられているばかりではない。目眩を回復させるとすかさず四本の脚で素早く起き上がる。風の鎧を纏い直し、クリュウとシャルルを吹き飛ばす。事前に察知していた二人はこれをうまく着地してルフィールの前面へと展開した。

口の端から血の雫を垂らしながら、クシャルダオラが恨めしげにこちらを睨みつける。それだけで普通のハンターなら逃げ出してしまいそうなくらいの迫力だ。三人はそれぞれ震える足を拳で殴ってその衝動に対抗する。

不気味な睨み合いの中、クリュウは次なる手を考えていた。相手は常に動き回るようなモンスターだ。機動力もあるので、結果的に常にこちらが振り回される形になってしまう。だとすれば、先程までと同じようにわずかな時間でも奴の動きを封じる必要がある。その瞬間に全力攻撃を仕掛ける為だ。

不確実な手段だが、クリュウの頭の中では次の手が思いついた。

「落とし穴にハメれば、動きを止められるよね？」

クリュウの問いに対し、ルフィールは頷く。

「確かに、落とし穴に落とす事ができれば動きを封じられます。ですがその際に風の鎧が消えるかはわかりませんし、そもそもクシャルダオラに効果があるのかもわかりません。不確定な行動は危険です」

「でも、やってみる価値はあるでしょ？」

ニッと微笑んでみせる彼の笑みを見て、ルフィールは苦笑を浮かべた。

情報を何よりも大事にし、事前情報と事前準備で念入りに作戦を立てる自分と違って、クリュウは結構行き当たりばったりだ。シャルル程ではないが、そんな彼をいつも危なっかしく思う反面、その柔軟性にはいつも驚かされ、感服させられる。
確かに、今は不確定な情報を有益なものか無益なものかを判断するのも大事だ。相手は謎多き古龍だ。突然の出撃だった為、事前準備は正直万全とは言えない。だったら、現場で色々試すのみだ。
「わかりました。先輩、落とし穴の設置をお願いします。それまでは、ボクとシャルルさんで持ちこたえます」
「できる？」
クリュウの問いに対し、ルフィールとシャルルは互いの顔を見合わせると、どちらからとなく不敵な笑みを返した。
「問題ありません」
「シャルを誰だと思ってるっすか？　そんなのお茶の子さいサイクロプスハンマーっすよッ！」
二人の頼もしい言葉を信じ、クリュウは頷くと「任せたよ」と言い残して走る。ここから一番近い道具（アイテム）を隠している場所を目指して走って行く彼の背中を一瞥し、二人の少女は鋼龍クシャルダオラと向き直る。
「……って、啖呵を切ったのはいいっすけど、正直自信ないっすねぇ」
「できるできないではありません。やるのです、シャルルさん」
「ケッ、相変わらずムカつく言い回しをするっすねぇ――んなもん、言われなくてもわかってるっすよぉッ！」
バインドキューブを構え、怒涛の勢いで突撃するシャルル。そんな彼女を援護するようにルフィールは閃光玉を投げた。
背後で炸裂する閃光と戦の音に後ろ髪を引かれる想いを抱きながら、クリュウは全速力で補給地点へと走る。
仲間を信じて、ただひたすらに……

第２１８話　絶体絶命　少女の愛が奏でし音色が起こす奇跡の詩

落とし穴を持ってクリュウが戻って来ると――戦線は崩壊していた。

上空からはクシャルダオラがゆっくりと降りて来るのが見える。そして、地面に倒れる二人の少女の姿を見た途端、クリュウは二人の名を叫びながら走った。一番近くに倒れているシャルルを抱き起こすと、彼女は苦しげに顔を歪めていた。

「お、おいシャルルッ」

「あ、兄者？　戻って来たんすね……」

「だ、大丈夫ッ!?」

「た、大した事ないっすよ。かすり傷っす……」

「……って、怪我してるじゃないかッ！」

よく見れば、シャルルは左腕を庇っている。どうやら腕を痛めたらしい。激痛に顔を歪めながら、それでもシャルルは気丈に振る舞う。本当に、自分の弱音を見せたがらない娘だ。

「……ちぇッ、がんばったんすけど、戦線を維持できなかったす――ごめんな、兄者」

クリュウが戻って来るまで戦線を任されたのに、呆気無くそれを崩壊させてしまった事にシャルルは悔しそうに謝った。そんな彼女の謝罪の言葉に、クリュウは首を横に振った。

「バカ。んな事気にしなくていいんだよ。無茶を言ったのは僕の方なんだから」

「……兄者は優しいっすね――でもやっぱり、シャルとルフィールじゃ古龍はちっとキツイっす」

それはそうだ。二人共かけだしの部類に入るハンターだ。武器も防具も、とてもじゃないがクシャルダオラに挑むような装備ではない。それでもここまで戦えたのは、二人の類まれなる実力のおかげだ。それでも、もう限界だった。

「すみません、先輩……」
起き上がったルフィールもボロボロの姿だった。メガネもレンズにヒビが入り、足取りもフラフラだ。クリュウは彼女の言葉に首を横に振った。
「謝らないでよ。がんばってくれて、ありがと」
クリュウの言葉に、ルフィールは悔しげに唇を噛んだ。
シャルルは腕を負傷し、ルフィールも少なからずダメージを負っている。こんな状況でこれ以上二人に戦闘を強いる訳にはいかない――クリュウは決断した。
「……ここまで一緒に戦ってくれてありがと――二人は、今すぐにここから離脱して」
反論の声は上がらなかった。二人共、自分達の今の状態をしっかりわかっていた。今の自分達では、クリュウを援護するばかりか足手まといになってしまう。感情の部分では拒否したくても、このままここに居座る方が彼の迷惑になってしまう。
「……わかりました」
悔しげに、心の底から悔しげな表情を浮かべながら、ルフィールは了承した。シャルルも何も言わず、黙ってルフィールの肩を借りる。
「せめて、シャルの道具（アイテム）は置いて行くっす。閃光玉、まだちょっとあるっす」
「ボクも、せめてこれくらいさせてください」
二人はそう言って自らの道具袋（アイテムポーチ）を地面に捨てた。クリュウは「ありがと。大切に使わせてもらうよ」と礼を言うと、二人の肩を優しく叩く。
「この先に避難壕がある。そこに逃げ遅れた村人がいるはずだから。そこに隠れてるんだ。いいね？」
「わかったっす」
「……ご武運を」
二人は名残惜しそうにクリュウに背を向けて走って行く。シャルルに肩を貸すルフィールが振り返ると、ちょうど降りて来たクシャルダオラに向かってクリュウが突撃するのが見えた。何もできない自

分の無力さが、どうしようもなく嫌で、悔しかった。
「――シャル達、がんばれたっすよね？」
「え？」
すぐ近くにある、痛みを堪えて苦しげな表情を浮かべるシャルルの問い掛け。驚いて彼女の方を見やると、シャルルは痛みを堪えながら笑みを浮かべていた。
「シャル達はここまでっすけど、でもきっと、兄者の役に立てたっす――シャル達は、がんばれたっすよね？」
それはきっと、自分を責めるルフィールに対する彼女なりの心配りだったのだろう。らしくもなく、言葉で励ます彼女を見て、ルフィールもまたフッと口元を緩めた。
「そうですね。パピメル装備とコンガ装備で、クシャルダオラにあそこまで善戦できるのは、ボク達くらいのものですよ」
「へへへ、シャル達はやっぱり無敵コンビっすね」
「……ええ、ボク達は無敵コンビです」
互いに微笑みながら、どちらかとなく差し出した拳を、同時にぶつける。それはシャルルがよくする、心を許した相手にだけする挨拶であり、約束の印。二人の絆の強さの象徴でもあった。
背後で孤軍奮闘の戦いを繰り広げるクリュウに対し、二人は心からその無事を祈りながら、何とか避難壕へと逃げ伸びる事ができた。そこでエレナと合流を果たし、シャルルはすぐさま手当てを受ける事となった。ルフィールも打撲や切り傷を多数受けており、同時に手当てを受ける事となった――どちらも、これ以上の戦闘は無理である事を示していた。
ルフィールとシャルルが撤退してから一時間後、クリュウは地面に片膝をついていた。息は荒く、全身は更にボロボロになっていた。霞む視界の向こうには未だ健在のクシャルダオラの姿があった。だがその体表には無数の傷が生じていた。
閃光玉の補充を済ませたクリュウは閃光玉を駆使してクシャルダオラに猛攻を加えた。かなりのダメージを与えられたはずだが、まるで効いていないかのように鋼龍は彼の前に立ち塞がり続けた。結果、

彼もまた少なからずのダメージを負ってしまう。
単独でこれ以上の戦闘はもう無理だった。やはり、ルフィールとシャルルがいた時の方がずっと戦いやすかった。もちろん相手の注意が分散するというのもあるが、頼れる仲間がいるという安心感はこの追い詰められた状況では何にも代えがたいものだった。
だが、二人はもうここにはいない。今は避難壕で二人共疲労困憊で眠っている。救援に来る事はない。
――もう、奇跡は起きない。
「くそぉ、どうすればいいんだ……ッ」
悔しげに吐き捨てる彼の横には、無惨に壊れた落とし穴があった。結局、クシャルダオラに落とし穴は効かなかった。踏み抜いたはずなのに、落とし穴に落ちる事はなかった。それが奴の他を圧倒する飛行浮遊能力の成せる業だという事には後から気づいた。
とにかく、奴を足止めできるのは閃光玉だけだとわかった。しかし、その肝心の閃光玉も残り僅か。なのに、相手はまるで倒れたり弱ったりしている素振りを見せない。
正直、もう逃げ出した方がいい事はわかっていた。だが自分は今故郷を守る為の戦いをしている。負ける訳にはいかないのだ。
周りには無惨に壊された村の設備や家屋が散らばっている。守るべきはずだったものは、尽く壊されてしまった。クシャルダオラに対して怒りを抱かずにはいられないし、守り切れなかった自分にも怒る。
それでも、刃を納める訳にはいかない。奴がこの村を出て行かない限り、自分は決して奴の前から消えてはいけないのだ。
「こうなったら、一か八かやってやるか……ッ」
そう言ってクリュウは小タル爆弾Ｇ二つを両脇に抱いた。そしてそのまま、クシャルダオラに向かって真正面から突撃した。クシャルダオラは鬱陶しげにクリュウに向かって風ブレスを放つが、クリュウはこれを回避。すかさず小タル爆弾Ｇのピンを抜くと、そのままクシャルダオラに突っ込む。そして、起爆寸前でクリュウは至近距離でこれをクシャルダオラの顔面目掛けて投擲した。直後に爆発が起き、

クシャルダオラの頭部が爆炎の中に消える。
「これでどうだ……ッ！」
クリュウの捨て身とも言える特攻。だが、風がより威力を増して辺りに吹き荒れ、一瞬で黒煙を霧散させると、そこには相変わらず悠然と鋼龍クシャルダオラが佇んでいた。
「……ッ!?」
すぐさま撤退しようとするが、直後に風の鎧に巻き込まれて転倒してしまう。慌てて起き上がろうとするが、目の前にはすでにクシャルダオラが爪を振り上げて待ち構えていた。
「あ……」
ガードする事も逃げる事も不可能。振り上げられた巨悪な爪が自らの体を引き裂くのは、その一瞬後。もう、どうする事もできなかった。
そして、ゆっくりと鋭爪が振り下ろされる。
――カラン、カラン……――
突如、どこからともなく鐘の音が響き渡った。その途端、辺りに猛烈な風が吹き荒れた。これにはクシャルダオラも驚き、振り上げた前脚を地面に着けると一歩退く。その隙にクリュウは慌てて後方へと脱した。
何とか助かったと安堵するクリュウだったが、クシャルダオラはまだ健在だ。再び煌竜剣（シャイニング・ブレード）を構えて相対した時、クリュウは奴の異変に気づいた。
「……風の鎧が、消えてる？」
距離を置いたクシャルダオラは、何事もなかったかのように悠然と佇んでいる。だがその周りに吹き荒れていた風は、今は存在しない。
困惑するのは何もクリュウだけではない。クシャルダオラ自身も、何度も風を呼び起こそうとするが、まるで能力を封じられたかのように風は生まれて来ない。
互いに困惑し、一瞬の沈黙が舞い降りる――突如、その沈黙を破る爆発がクシャルダオラを襲った。
自らの背中で次々に炸裂する爆発にクシャルダオラは悲鳴を上げ

る。
　一方、突然の事にクリュウは戸惑っていた。一体何が起きているのか。もしかして、ルフィールとシャルルが戻って来たのか。戸惑っていると、クシャルダオラの背後から二人の狩人が突撃するのが見えた。
「いいッ!?　私があいつを引き付けるッ！　あんたは後方からの支援に専念ッ！　無茶すんじゃないわよッ！」
「はいッ！」
　指示を飛ばしながら走って来るのは、全身を硬い岩のような鎧に身を包んだ人物。クリュウはその装備を良く知っている。それは以前彼が使っていたバサルシリーズであった。岩竜バサルモスの甲殻などを駆使して作られたそれは、堅牢な防御力を誇る防具だ。背中には巨大な槍が備えられており、二つに折れているその形状からガンランスだとわかる。強力な砲撃能力と切れ味、そして堅牢な盾が自慢な近衛隊正式銃槍だ。
　バサルシリーズの人物は頭までフル装備の為、その姿を把握する事はできない。だが、その背後から砲撃音を轟かせながら支援砲火を行う人物の姿を見て、二人の正体にすぐ気づいた。
　大小の箱が上下に重なり、小さい箱から銃身が伸びた独特な形状を持つライトボウガン。それを構えながら拡散弾ＬＶ１を撃つのは全身を世にも珍しい青色のイャンクック亜種の素材から作られたクックＤシリーズを纏った少女。しかし堅牢な防具の中で唯一頭だけは使い込まれたレザーライトヘルムを被っている何とも珍妙なその姿。ヘルムの下から覗く紺色のセミロングヘアと、クリッとした同色の瞳。愛らしいその顔つきは、何とも小動物のようで、守ってあげたくなる不思議な保護欲が駆り立てられる。その少女の名は――レン・リフレイン。
「レンッ!?　って事は……ッ!?」
　クシャルダオラに迫ったバサル装備の人物は風の鎧を失った事で裸同然の鋼龍に対して側面から迫ると、その脇腹目掛けて近衛隊正式銃槍を構えて突き入れる。重いガンランスを物ともしない鋭い突き

の一撃だったが、クシャルダオラの鋼の鎧に弾かれてしまう。だがバサルは構わず続けて砲撃を放った。硬い鱗など無視した内部への直接攻撃だ。これには今まで経験した事のない攻撃にクシャルダオラは驚く。その隙を突いてバサルは腰を落とすと銃槍を固定。そのまま砲撃加速装置のスイッチを入れた。

途端に辺りに響き渡る加速装置の作動音。そして砲身先端が膨大な熱量を纏って青く煌めき出した途端、それは真っ赤な業火となって大爆発を轟かせた。まるで至近距離から火竜がブレスを放ったかのような強烈無比な一撃に、クシャルダオラは堪らず横転する。

――竜撃砲。ガンランスが持つ最大最強の必殺技だ。火竜のブレスを参考にした、一撃必殺に等しい破壊力を持つ強力な攻撃だ。その衝撃は凄まじく、重装備のはずのバサルシリーズを纏っているはずなのに、バサルを大きく後退させる程だ。

砲身のハッチが開き、辺りにもうもうと白煙を吹き出す。竜撃砲はその破壊力は絶大だが、一度使うと砲身を冷却しないといけない為、次の発射まで時間が掛かる事が難点だ。つまり、これからしばらくは竜撃砲は使えない事を意味している。

横転するクシャルダオラに背を向けて、レンとバサル装備の人物がこちらに駆け寄って来る。

突然の事に呆然としているクリュウに対し、レンは人懐っこい笑みを浮かべて挨拶する。

「お久しぶりですお兄さん。ご無事で何よりです」

「レン……って事はやっぱり君は……？」

「――何よ。私の顔を忘れたとでも言う訳？」

バサルヘルムのバイザーをカッを開けると、そこには勝ち気な瞳が不機嫌そうに煌めいていた。良く見ればヘルムの隙間からは桃色の髪が見える。

レンの絶大な信頼を受け、その勝ち気な瞳と強烈無比なガンランスの使い手と言えば、クリュウは一人しか知らない。

「エリーゼまで……どうしてここに？」

エリーゼ・フォートレスは不機嫌そうにフンと鼻を鳴らすとそっぽ

を向いてしまう。
「私は別に来たくなかったんだけど、レンがあんたに会いたいって聞かなくて仕方なく来たのよ。そしたらクシャルダオラに襲われてるって知って、私は無視しようって言ったんだけど……こいつが聞かなくて」
「た、確かにイージス村に来たいって言ったのは私ですけど、クシャルダオラに襲われてるって知った時に真っ先に救援に行こうって言ったのはエリーゼさんの方じゃ――ひゅばばばばばばばばッ!?」
「余計な事を言うのはこのいけない口かしらあああぁぁぁぁッ!?」
「ふぉ、ふぉへんははいッ！　ひゅひゅひへふははいッ！」
　先程のかっこいい登場とは打って変わって、何とも情けない姿の二人。そんな相変わらずな二人の姿を見て、思わずクリュウも笑みを浮かべてしまう。
　散々レンの頬を引っ張った後、エリーゼは「で？　何であんた一人であいつとやりあってる訳？　他にメンバーいるんでしょ？」と本題に戻る。エリーゼの問いに対し、クリュウは言いづらそうに答えた。
「本来のメンバーは、イルファ山脈でクシャルダオラの足止めをしてたんだけど、振り切られちゃったみたい。さっきまではルフィールとシャルルが手伝ってくれてたんだけど、二人共戦闘不能になっちゃって」
「ルフィールとシャルル？　何よその学生時代の問題児トリオは？」
「ははは……」
「んで？　今はあんた一人で寂しく戦ってたって訳？」
「まぁ、そんな感じかな……」
　命がけの孤軍奮闘の死闘を、一人寂しく戦ってたと表現するあたり相変わらずなエリーゼだ。しかも当たらずといえども遠からずなのが余計に嫌味っぽい。
「だったら、私達も手伝いますッ！」
　そんな中、一人明るく振る舞うレンの言葉にクリュウは慌てて首を横に振った。
「い、いや、ダメだってッ！　相手はクシャルダオラなんだよッ!?」

「でも、お兄さんの故郷をこんなにした奴、私許せませんッ！」
そう言ってレンは辺りを見回す。辺りは村の原型を留めていない程破壊され、林もなぎ倒され、家屋は崩れ、水路も潰れ、畑は土が抉れ、見るも無残な姿になっていた。そんなイージス村の姿を見て、レンはいつもは可愛らしい笑みを浮かべるその表情を、いつになく怒りに染めていた。
そんな彼女の姿を見て、エリーゼは面倒そうにため息を零す。
「こいつ、言い出したら聞かないのよね。ったく、付き合わされるこっちの身にもなってほしいわ」
「だ、だからダメだってッ！　危険過ぎるッ！」
「あぁッ⁉　あんた、いつからのこの私を心配できる立場になった訳ッ⁉」
二人の気持ちは嬉しいが、危険な戦いに巻き込めないと二人の応援を拒否するクリュウに対し、彼のその言い方にムカついたエリーゼが逆切れる。
「あのバカシャルルにできて、この私にできない事なんてある訳ないじゃないッ！　私の苗字は要塞（フォートレス）よ。バサル装備の堅牢さ、ナメんじゃないわよ」
「い、いやでもさ……」
「――それに、ちょうど三人加わるから四人編成になりますし」
笑顔で言うレンの言葉に、エリーゼに追い詰められていたクリュウがピクリと反応する――今、三人って言った？
「レン、今三人加わるって言ったよね？　でも、君達は二人でしょ？」
「え？　あ、はい。ここに来る途中で会った人なんですけど、お兄さんの知り合いみたいですよ？」
「僕の知り合い？」
「はい――あ、ちょうど来たみたいですよ」
そう言ってレンが指差した方向、背後に振り返ったクリュウは目を見張った。
――カラン……カラン……――
心地の良い鐘の音が聞こえた瞬間、体に力が漲るのを感じた。まる

でスタミナが無尽蔵に沸き起こるかのような、そんな無限の力を得たかのような感覚。さっきまで疲労困憊だったのがウソのように、今は体が元気に満ち溢れている。
「さっすが狩猟笛ね。不思議なもんだわ」
感心するエリーゼの言葉など、クリュウには聞こえていなかった。だって、そこにいたのは……
「久しぶりねクリュウ。あんた、まだ生きてた訳？　しぶといわね……」
そう嫌味を言いながらも、心の底から嬉しそうな笑みを浮かべた白みがかった金髪を優雅に流した少女。全身を包むのはカブレライト鉱石を主体にマカライト鉱石、ドラグライト鉱石、そして岩竜の涙などの鉱石で作られた淡い桃色の塗装を施されたハイメタUシリーズ。そしてその背には同色の巨大なハンドベルのような武器が背負われていた。その音色で自分及び周辺の味方やモンスターに多くの音響効果を与える支援型武器の究極系、狩猟笛。その一つ、世にも珍しい桜色の鱗で身を包んだリオレイア亜種の素材で作られた狩猟笛、サクラノリコーダー改。
装備は以前と変わっているが、そのエリーゼにも負けず劣らずな勝ち気な瞳。でも今はそれを安堵から柔和なカーブを描かせ、暴言ばっかり吐く口も嬉しそうに口端を上げている。その笑顔の下にルフィールとはまた違う黒い過去を背負いつつも、健気にハンターとして生きる少女。フィーリアの親友であり、クリュウとは彼女を争ったライバルであり、共にリオレイアを捕獲した戦友――悪魔のサイレン、ルーデル・シュトゥーカだった。
「る、ルーデル？　君までどうして……」
「はぁ？　そっちから助けてくれって手紙を寄越して来たんじゃない」
何を言ってるのよこのバカ、とでも言いたそうな表情で呆れるルーデル。その言葉にクリュウの中で合点がいった。
ルーデルは現在レヴェリを中心に各地を飛び回っているハンターだ。だとすれば、フィーリアが送った救援要請を彼女も知ったのだろ

う。それで駆けつけて来てくれたのだ。
「もしかして、僕達を助けに来てくれたの？」
「ま、まぁそうなるかしら？」
なぜか頬を赤らめてそっぽを向くルーデル。だがそんな彼女の言葉にクリュウの顔に笑みが浮かぶ。すかさずルーデルの両肩を掴むと、彼女を無理やり振り返らせる。驚く彼女の手を掴み、クリュウは心から感謝した。
「あ、ありがと……ッ」
「ちょッ!? な、何でそんな泣きそうな顔してる訳ッ!?」
慌てふためくルーデルの気持ちなど知りもせず、クリュウは何度も頭を下げる。その背後では「ねぇ、私達の時とはえらい違いなんだけど」「……お兄さん、ひどいですぅ」と完全に外野にされてしまった少女二人が不服そうにしていた。
「ま、まぁ正確には話を聞いた途端に私の制止も振り切って跳び出したバカ二人を追いかけて来たんだけど」
「それって、もしかしてルフィールとシャルルの事？」
「そう。今あの二人、レヴェリの屋敷に居候してるから。私が面倒見てたって訳」
「そ、そうなんだ。その、重ね重ねありがと」
「べ、別にあんたの為にやってる訳じゃないわよ」
相変わらず素直じゃないルーデルの言葉も、何だか懐かしく感じてしまう。自然と微笑んでしまう彼の笑顔を見て、ルーデルもこっそりとほっと胸を撫で下ろした。イージス村の近くに古龍が現れたと聞いた時はどれほど心配した事か。それこそ本当に衝動的に跳び出した二人のように着の身着のままで飛び出したかった。だが相手は古龍だ。万全の準備を施して行かないと逆に足手まといになる。
急いで行きたいのに、慎重に準備をしなければならない。そんなモヤモヤした時間に耐え、やっとの想いで彼の所に辿り着いた。ずいぶんボロボロにはなっているが、それでも無事な姿を見れて安堵したのだ。
感動の再会。その余韻に浸っていたい所だが、相手はそんな余裕を

与える気はないらしい。ゆっくりと起き上がったクシャルダオラは低く唸り声を上げてこちらを睨みつける。そんな古の龍を前にしてどこかぎこちないものの勝ち気な笑みを崩さないエリーゼ。そんな彼女の背後に立って怯えながらも健気に銃口を向けるレン。
「さぁって、ライザが聞いたら全力で止められるような相手にどう挑むべきかしら」
「古龍を見たら逃げろってのが世間一般の常識ですよね」
「まぁ、普通はね。でもごめんね、逃げるって選択肢はないんだ」
　これまでクシャルダオラと単身で激闘を繰り広げたクリュウはもはや臆する事なく二人の前に出る。自分だって普通は鋼龍に挑む事すらできない身分だ。自分よりも格下の、何より女の子を守らないとという彼らしい思考がそうさせているのだ。だが、そんな彼の肩を掴んで更にその前に出る者がいた。
「レヴェリは鋼龍を神龍と崇めているけど、さすがにこの悪行は許せないわね」
　そう言って最前衛に出たのはルーデル。持っていたサクラノリコーダー改を器用に自らの頭上で回転させ、最後には槍のように前方に向けて構える。その横顔は不敵に微笑んでいて――悪魔のサイレンという二つ名に相応しいものだった。
「安心してクリュウ。こっちは相手がクシャルダオラだって知って色々準備して来たんだから」
「準備？　もしかして、その装備の事？」
「そうよ。これが私が用意できる最善――対鋼龍撃滅用装備よッ！」
　そう叫ぶと、ルーデルは単身でクシャルダオラに向かって突っ込んでしまう。慌ててクリュウとエリーゼが追いかけ、レンも遅れて銃を構えながら突撃する。
「ま、待ってルーデルッ！　奴は風の鎧を纏ってて近づけないよッ！」
　これまで幾度と無く自分の攻撃を阻み、そして自らの体を吹き飛ばした恐るべき鎧。未だそれを突破するまともな対抗手段を持ち合わせていないクリュウは焦ったように叫ぶ。だがルーデルはそんな彼の忠告を無視して更に加速する。どうやらすでに移動速度強化を施

しているらしい。
「あのバカッ！　何が対鋼龍撃滅用装備よッ！　ただの特攻じゃないッ！　レンッ！」
「は、はいッ！」
　エリーゼの指示でレンが慌てて援護射撃を加える。装填されているのは貫通弾ＬＶ２。風の鎧を突破できる貫通弾の中で攻撃力と操作性が最も優れた銃弾だ。放たれた銃弾は簡単にクシャルダオラに命中して火花を迸らせる。
　そんなレンに援護射撃に一瞬クシャルダオラの意識がそちらに向いた瞬間、ルーデルがサクラノリコーダー改を構えてクシャルダオラの右斜め前から突っ込む。そこは風の鎧に守られていて近づけない角度だ。
「ルーデルッ！」
　焦るクリュウに向かってルーデルは一瞬振り返った。そして、その表情を見てクリュウは言葉を失った。なぜなら彼女は――笑っていたから。
「言ったでしょ？　対鋼龍撃滅用装備だって――粉砕撃破（ツェアシュラーゲン）ッ！」
　勇ましく咆哮するルーデルはクシャルダオラに飛び掛かる。その体は風の鎧で吹き飛ばされる――はずだった。だが、風の鎧は発生しなかった。驚くクシャルダオラの側頭部に向かって、不敵な笑みを浮かべたルーデルがフルスイングでサクラノリコーダー改で殴りかかった。
　激しい打撃音と共にサクラノリコーダー改の鐘の部分から黒い稲妻が迸った。その黒雷はクシャルダオラの体表にまとわり付き、火花を迸らせる。
　サクラノリコーダー改の打撃と、その特殊効果による黒い稲妻を受けたクシャルダオラが短く悲鳴を上げて仰け反った。そのままバランスを崩して再び横倒しになってしまう。
　一撃でクシャルダオラを横転させたルーデルの荒業を前に呆然とする三人。そんな三人の目の前にきれいに着地してみせたルーデル

は不敵に微笑む。
「サクラノリコーダー改。こいつは龍属性の武器で、古龍が最も苦手とする属性よ。そしてこいつは――鋼龍の龍風圧を無効化する力があるのよ」
「龍風圧の無効化……って事は、風の鎧を無くせるって事？」
「肯定（ヤー）。つまり、私がいる限り、あいつは風の鎧を纏う事はできない。奴は裸同然って訳よ」
不敵に微笑みながら自信満々に語る彼女の言葉に、クリュウは言葉を失った。今まで自分が何度挑んでもなかなか突破できなかった風の鎧。それを、ルーデルは難なく攻略してしまった。呆気無いと言えばウソになる。今までの自分の努力はなんだったのか……でもそれ以上に――
「――やっぱり、ルーデルには敵わないなぁ。すごいよ、ルーデルは」
心から、戦友の頭のキレの良さを褒め称えた。彼女は危険を冒してここまで来てくれた。しかもただ来てくれただけではなく、ちゃんと鋼龍の情報を集め、精査し、その中から有益な情報をピックアップ。そしてその情報を元に最善の準備を整えてやって来た。
情報が不足していた事は否めないが、対策を素早く実行できる彼女の実力はすごい。何より、彼女からすればこの村は今日初めて訪れた何の縁もない村だ。その村を守る為に、駆けつけてくれた。これが何よりも嬉しい。もちろん、その意味ではエリーゼとレンにも感謝の言葉でいっぱいだ。
「な、何よ急に。褒めたって別に何もないわよ」
突然クリュウに褒められ、ルーデルは頬を赤らめてそっぽを向く。でもその表情は、どこか嬉しそうだ。
藻掻くクシャルダオラを前に、クリュウ、ルーデル、エリーゼ、レンの四人が集結する。それぞれが選んだ最高の鎧を身に纏い、それぞれの手には最高の相棒が握られている。
ゆっくりと起き上がるクシャルダオラと対しながら、四人もまた武器を構える。
「本当は逃げるべきなんだと思う。でも、ここは僕の大切な故郷。守

りたい、故郷なんだ――だから、みんな力を貸してッ！」
クリュウの言葉に、三人の乙女達はそれぞれが頼もしく微笑んだ。
「当たり前でしょ？　何の為にこんな辺境の片田舎まで来たと思ってんのよ」
「任せてくださいお兄さんッ！　私、がんばっちゃいますッ！」
「割に合わない仕事はしない主義なんだけど、売られたケンカは買わないと女が廃るのよ」
三人の言葉にクリュウは嬉しそうに微笑むと、気を引き締めて再び正面に向き直る。すでに起き上がったクシャルダオラはこちらを憎々しげに睨みつけながら低く唸り声を上げている。その周りにあった風は、ルーデルの狩猟笛の効果で姿を消している。
鋼鉄の鎧は厄介だが、最大の難敵だった風の鎧はない。これまでの長く苦しい戦いに比べれば状況はかなり好転している。何より、自分には頼れる仲間がいる。それが、彼にとっては何よりも心強かった。
「行くよッ！」
彼の勇ましい掛け声と共に、乙女三人も鋼龍クシャルダオラに向かって走り出す。古龍を前にした戦いだというのに、その行軍は怯えを感じさせず、むしろ勇ましく感じる突撃だ。
士気旺盛。勇ましく突っ込んでくる敵を前に、クシャルダオラもまた雄叫びを上げながら相対する。
クリュウ・ルナリーフ、ルーデル・シュトゥーカ、エリーゼ・フォートレス、レン・リフレイン対鋼龍クシャルダオラの戦いが、今始まった。

第２１９話　壮絶な死闘の果てに　燃ゆる空に轟きし激戦の終音

怒りの声を上げるクシャルダオラに向かって、先陣を切るようにルーデルが突っ込む。移動速度強化されている彼女の歩みは、重い狩猟笛を持っている事を感じさせない軽やかにして疾い。

向かって来るルーデルに向かってクシャルダオラが狙いを定めようとした瞬間、そのこめかみにレンの放った通常弾ＬＶ２が命中する。それ自体は大した事はないが、一瞬だけクシャルダオラの意識が逸れた。その一瞬で近づいたルーデルは再び振り返るクシャルダオラの眼前に迫る。その瞬間、ルーデルはしゃがみ込んだ。それはクシャルダオラからすればまるで彼女が一瞬で消えたような錯覚を覚える。驚くクシャルダオラの顎の下から、ルーデルは不敵に微笑みながらサクラノリコーダー改を振り上げた。重量があり硬い鐘の部分がクシャルダオラの顎を打ち上げる。悲鳴と共に辺りに響いたのは、サクラノリコーダー改の美しい音色だ。

初撃を見事炸裂させたルーデルだったが、クシャルダオラも負けじと鋭い爪を彼女に向かって振り下ろす。だがそこはベテランのルーデル。顎を殴った勢いを殺さずに後方へとサクラノリコーダー改を振り、鐘の部分が地面にめり込んだ瞬間に自らもジャンプ。棒高跳びの要領で後方へと大きく後退してこれを回避した。

攻撃を避けられた事に苛立つクシャルダオラに向かって、クリュウが突っ込む。姿勢をできるだけ低くさせて、少しでも風の抵抗を抑えた彼の最速の突撃。クシャルダオラはまだルーデルを見ていて彼の存在に気づいていない。その隙に距離を詰めると、クシャルダオラの左前脚に向かって剣を振り下ろす。今まで何度も自分を吹き飛ばしていた風の鎧は、もう存在しない。

何の抵抗も受ける事なく、剣先はクシャルダオラの左前脚の関節部分にヒットする。そこで初めてクシャルダオラは彼の存在に気づいたが、もう遅い。クリュウは続けざまに二度三度と攻撃を積み重ね

る。鬱陶しい攻撃を繰り出す彼を振り払おうと腕を振り上げるクシャルダオラだが、そこにレンの集中砲火が炸裂して意識を削がれる。更に遅れて接近していたエリーゼがクシャルダオラの右斜め後ろに陣取って砲撃を炸裂させる。肉質無視の衝撃にクシャルダオラが一瞬バランスを崩した。

「私を忘れてもらっては困るわね」

ニヤッと不敵に微笑みながら、クシャルダオラの側頭部に向かってルーデルはサクラノリコーダー改を振り殴る。強烈無比な一撃に鋼龍は悲鳴を上げて後退した。翼を広げて大きく後ろへとジャンプしたクシャルダオラは着地すると威嚇の声を上げる。だがそんなもの恐れるような彼女ではない。

「はいはい、寝言は寝て言おうねッ！」

容赦なくルーデルは閃光玉を投擲してクシャルダオラの動きを封じた。すかさず突撃して唸るクシャルダオラの顔面にサクラノリコーダー改を叩きつける。どんな時も全力で戦う、実に彼女らしい戦い方だ。

同時にエリーゼも鋼龍に接近をして砲撃を加えていく。鋼の鎧を持つクシャルダオラ相手に自分の武器の切れ味ではまともに攻撃できないと判断したのだろう。彼女はどうやら砲撃主体で攻撃を加える事に決めたらしい。実に効率の良い武器運用だ。

一方でレンも貫通弾ＬＶ２を主力に攻撃を積み重ねていく。冷静に動かぬクシャルダオラに向かって集中砲火を浴びせている。以前彼女の実力を見ていたクリュウだったが、以前にも増して勇猛に戦う彼女の姿に思わず笑みが浮かんでしまう。

少し会わない間に、自分と同じように彼女達も成長していた。それはルフィールやシャルルも同じ。皆、いつまでも止まっていない。常に前に向かって進み続けているのだ。こんな危機的状況だというのに、皆が前に進んでいる姿を見て、何だか嬉しくなってしまう。

だが、いつまでも好き放題やられている古龍ではない。視界を封じられながらも前脚を振り上げて前方を薙ぎ払う。次なる一撃を叩き込もうと構えていたルーデルはこの思わぬ反撃に慌てて後退してこ

れを回避。直後に閃光玉が解けると、クシャルダオラは彼女に向かって突進を仕掛ける。バックステップで距離を取っていたルーデルはこの突然の接近に対応し切れずに激突し跳ね飛ばされた。
「この野郎ッ！」
振り切られたクリュウがクシャルダオラを追って接近する。レンも中距離を保ちながら射撃してクシャルダオラを攻撃する。だがクシャルダオラは構わず地面に尻もちを着いたルーデルを追撃。迫り来る鋼龍を前にルーデルは息つく暇もない。
「チィッ……」
舌打ちしながら起き上がる事は諦めて横へ転がってクシャルダオラの鋭爪を回避する。詰めの一撃を回避されたクシャルダオラは恨めしげに彼女を睨みつける。息が上がりつつも、そんな鋼龍の視線に対してニヤッと不敵な笑みを浮かべる。その挑発を理解したかどうかはわからないが、クシャルダオラは更なる追撃を彼女に仕掛けようとする。だがそこへ煌竜剣（シャイニング・ブレード）を構えたクリュウが襲い掛かる。
背後から襲い掛かったクリュウは煌竜剣（シャイニング・ブレード）を鋼の鎧に叩きつける。だがこれまでと違ってその鋭い刃は鋼の鎧を傷つける事はなく、甲高い音と共に弾かれてしまう。
「またか……ッ」
悔しげに顔を歪めるクリュウ。煌竜剣（シャイニング・ブレード）は最高の切れ味を持つ武器ではあるが、無敵ではない。何度も攻撃を積み重ねれば、当然切れ味は鈍る。特に相手は非常に硬い鋼龍。これまでも何度も砥石を使って切れ味を正して来たが、またしてもその時が来てしまった。しかも、タイミングは最悪と言える。
「このぉッ！」
ルーデルを追おうとするクシャルダオラを何とか止めようとクリュウはムキになっていた。切れ味が悪い状態で戦ってもダメージはまともに与えられない。それでも、攻撃をやめる訳にはいかなかった。
「どきなさいバカッ！」

無茶な突撃を仕掛けようとした矢先、そんな彼の肩を無理やり後ろに引っ張って前に出る者がいた。全身を岩のような鎧で身を守ったエリーゼだ。エリーゼはクシャルダオラの背後から武器を構えると続けざまに砲撃を連発する。弾倉の中が空となると同時にクシャルダオラが目標をルーデルから背後で鬱陶しい攻撃を重ねたエリーゼに変える。自分の方へと向き直るクシャルダオラを見てエリーゼはニヤリと笑った。

「――レエエエェェェンッ！」

「――はいッ！」

エリーゼの声よりも早く、レンは彼女の考えを読んで行動していた。振り返ったクシャルダオラの眼前に閃光玉が炸裂してその視界を奪う。悲鳴を上げて再び視界を封じられたクシャルダオラ。エリーゼはそのまま装填（リロード）すると、再び砲撃を浴びせる。レンも貫通弾ＬＶ２で援護する。

動きを封じられたクシャルダオラに向かって二人が猛攻を加えている間に、クリュウは砥石を使って切れ味を正す。ルーデルも何とか脱出し、再び演奏を開始して全員のスタミナを強化する。そんな彼女に砥石を使い終わったクリュウが駆け寄った。

「ルーデル、大丈夫？」

「無問題（カイネソルゲ）。ちょっと焦ったけど、まぁこの通りよ」

「……もう、あまり無茶しないでよ」

「切れ味の悪くなった武器で挑みかかろうとするあんたも大概だけどね」

「いや、それはまぁ……」

「――でもまぁ、ちょっとかっこ良かったわよ」

「え？」

視線を泳がしていたクリュウがルーデルの聞こえづらなかった言葉に振り返ると、そこには頬を赤らめながら先程までの自分と同じように視線を泳がす彼女の姿があった。頬を掻きながら、できもしない口笛を鳴らしてみたりしている。

「狩猟笛は吹けても、口笛は吹けないんだね」

「う、うるさいわねッ！　ほら、さっさと前線に戻るわよッ！」
ウーッと唸りながらルーデルは背を向けると、サクラノリコーダー改をブンブンと振り回す。どうやら本当に体の方は大丈夫なようだ。それを確認してほっと胸を撫で下ろしたクリュウはピカピカに刃を磨いた煌竜剣（シャイニング・ブレード）を天に向かって掲げる。
鋼色の刃をキラキラと反射させると、その光は橙色に輝いた。いつの間にか、日はすっかり傾いて夕暮れ時になっていた。自分でも気づかない間にずいぶんと時間が経っていたらしい。村の上空は重い鈍色の雲が垂れ込めているが、遠くを見れば晴れている光景は村を襲う異常を表しているかのようだ。
「日が沈む前に、決着をつけられればいいけど……」
それが自分の希望的観測だという事くらいわかっている。相手は無尽蔵とも言えるスタミナを持つ古龍だ。これまで仲間と共に積み重ねたダメージが一体どれだけになっているのかはわからないが、クシャルダオラの様子を見るに夕暮れまでに決着がつくような兆しは見えない。
――本当に、攻撃は効いているのだろうか。
胸の奥にチクリと刺さる、疑問。自分達の必死の攻撃は、結局は無意味なのではないか。そんな事を思ってしまう程に、相手は強大だった。
このまま戦い続けても、本当に追い返せるだろうか。
不安で、煌竜剣（シャイニング・ブレード）を握る腕が微かに震えた。その時、
「――無駄じゃないよ、あんたの努力はさ」
優しくかけられた声にハッとなって視線を上げると、そこにはまるで情けない弟の姿を見守る姉のような目をしたルーデルが夕日をバックに立っていた。逆光を受けている彼女の表情は、こちらから窺い知る事はできない。それでも、その表情が笑顔だという事は、彼女の口調を聞けば想像できる。
「努力は決して裏切らない。負け犬の戯言かもしれないけど、これが私の親友が一番大切にしている言葉よ。何より、世の中には『最強』は

居ても『無敵』はいない」
「ルーデル……」
「信じなさい、自分の力を。信じなさい――仲間の力を」
そう言い残して、ルーデルは雄叫びを上げながらクシャルダオラへと突撃する。一人残されたクリュウはしばし呆然としていたが、ゆっくりと深いため息を零した。
「……ったく、村を守るって息巻いてたのにこの様かぁ。情けないなぁ」
顔を片手で覆いながら深いため息を零したクリュウだったが、その手が外れた時にはもう先程までの情けない顔は消えていた。
「……努力は決して裏切らない、か。フィーリアらしい言葉だよ――僕もそれ、嫌いじゃないよッ！」
気合を全身に漲らせ、クリュウも遅れて鋼龍へと突撃する。そんな彼のやる気を取り戻した顔を一瞥し、ルーデルはサクラノリコーダー改を振り上げる。
「古龍（アルトドラッヘ）、いい加減この村から出て行けぇッ！」
強烈な一撃をお見舞いしようと構えたルーデルだったが、殴打が炸裂する寸前でクシャルダオラが閃光玉から脱してしまう。すぐさま後方へと大きく跳躍してこれを回避。空振りに終わった一撃は鐘の部分が地面にめり込んでしまう。回避された事に舌打ちし、ルーデルは急いでサクラノリコーダー改を構え直す。
後方へと脱したクシャルダオラに対し、レンが距離を取りながら銃撃を浴びせる。態勢を立て直したクシャルダオラはこの鬱陶しい攻撃に対して反撃とばかりに風ブレスを放つ。慌ててレンは横へ跳んで回避するが、ここで予想外の事態が起きてしまう。
レンの横を通り過ぎた風ブレスはもう何度目かわからぬが、背後の家屋を粉々に破壊した。その際に飛び散った破片が運悪く回避したばかりのレンの背後に当たってしまった。
「あぐぅッ!?」
背後から手痛い一撃を受けたレンは悲鳴を上げて倒れてしまう。ダメージ自体は大した事なかったが、思わぬ転倒に余計な時間が掛

かってしまった。このチャンスを逃すような相手ではクシャルダオラはなかった。
　起き上がろうとするレンに向かってクシャルダオラは照準をしっかりと合わせて息を吸う。口の周りの空気が歪んだ瞬間、吸い込んだ空気を喉の奥で圧縮して一気に吐き出す。猛烈な暴風と化した風の塊は轟音を立てながらクシャルダオラの前方へと放たれた。渦を巻きながら一直線に突っ込む一撃は風ブレスとなり、周辺に飛び散っている瓦礫などを巻き込みながら起き上がろうとするレンに襲い掛かる。
「レンッ！」
「バカッ！」
　クリュウとルーデルの声にレンがハッとなって視線を上げると、自分に向かって風ブレスが突っ込んで来るのが見えた。悲鳴すら上げる事もできず呆然としていると、そんな自分と風ブレスの間に割り込む者がいた。全身を堅牢な岩石で切り出したかのような灰色の鎧を纏った人物。その背中の大きさにいつも助けられて来た、最高の相棒であり、自慢の姉の勇姿――エリーゼだった。
「……ッ！」
　エリーゼは迫り来る風ブレスに対し、自らのその大きな盾を構えた。盾を地面に叩きつけ、下部をしっかりと埋め込んで姿勢を低く取りながら、背後のレンの肩を力強く引っ張って抱き寄せる。バサルヘルムの下の顔は恐怖に歪んではいたが、その視線は逃げる事なく迫り来る暴風を見詰めていた。
　――直後、風ブレスが二人に直撃した。
「ルーデルぅッ！」
「わかってるわよッ！」
　すぐさまルーデルは閃光玉を投擲してクシャルダオラの動きを封じた。その間にクリュウは二人に向かって駆け出した。風ブレスによって巻き上げられた瓦礫がバラバラと地面に落ち、粉塵がゆっくりと晴れていく。地面が一直線に抉られた先、その爪痕の終着点には、盾を構えたエリーゼと彼女に抱きつくレンの姿があった。どうやら

エリーゼは何とか風ブレスを防ぎ切ったらしい。
「……ったく、世話焼かせんじゃないわよ」
強気な言葉を放つエリーゼだったが、がっくりとその場で膝を折ってしまう。背後のレンが「エリーゼさんッ!?」と悲鳴を上げる。どうやら風ブレスを防いだとはいえ、完全には防ぎ切れなかったらしい。レンを庇っていた事もあって、相殺し切れなかったダメージを相当負ってしまったようだ。
「エリーゼさん、こ、これを……ッ」
「自分の分があるから平気よ。それはあんたが飲みなさいバカ」
レンから差し出された回復薬グレートを突っぱね、エリーゼは自らの回復薬グレートを飲む。一本ではなく二本連続で飲み干すと、ヘルムの下の顔色がようやく良くなった。
「すごいよ。風ブレスを防ぎ切るなんて……」
駆けつけたクリュウが感嘆の声を上げると、エリーゼはゆっくりと立ち上がりながら「ガンランスの盾は全武器の中でも最高の防御能力を持ってるわ。むしろこれで防ぎ切れないとか、何なのよあの無茶苦茶なブレスは」と文句を言うだけの元気はあった。彼女の言う通り、ガンランスの盾だからこそこれで済んだのだろう。クリュウの片手剣の小さな武器では直撃は防げても吹き飛ばされてそれでも相当なダメージを負っていたはず。動きは鈍いが、やはりガンランスの防御性能の高さには舌を巻く。
その時、遠くから鐘の音が響き渡った。どうやらルーデルが新たに龍風圧の無効化の旋律を奏でているらしい。正直な所、何とか善戦できているのはやはり彼女の存在が大きい。最大の障壁であった風の鎧がないというのはやはり助かる。
だが、何とか善戦できているとはいえこれ以上の戦闘は正直厳しいだろう。こんな難敵を相手に夜戦を行う、しかも特に自分はもう何時間と鋼龍と戦っており正直もう体力的に厳しい。こればかりは回復薬や回復薬グレートをいくら飲んでもどうしようもない。これもまたルーデルの強走効果【大】のおかげで持っていると言っていい。だがもうあと持って一時間と言った所だろう。自分でも動きが鈍く

なっている事がわかる。だとすれば、ここらで鋼龍に手痛い一撃を与えて村の外に撃退するまでは行かなくとも、とりあえず村の中で暴れない程度に弱らす必要がある。それを可能にする手段と言えば――

「やっぱり、爆破しかないか」

鋼龍もこれまでの戦いで幾分かダメージは受けているはず。ここで詰めとばかりに大タル爆弾Gを数発ぶつけて大ダメージを負わせれば、ひとまず一夜くらいは大人しくしてくれるはず。希望的観測ではあるが、夜戦を避けると決めた以上夜に暴れられては困る。可能性がある手段と言えば、今自分は使える中ではそれくらいだ。イージス村は普通の村だ。ドンドルマのようにバリスタや大砲が備えられている訳ではない。

閃光玉で目を封じられて暴れるクシャルダオラに警戒しながら、自然と四人が集まる。ルーデルは「そろそろ日が落ちるわ。夜戦うのは危険ね」と自分と同じ意見を言う。これにはエリーゼも「夜戦はしないわ。効率が悪いし」と同意する。レンはエリーゼに従うつもりなので、自然と四人の意見が纏まった訳だ。

「でもこのままこっちが撤退しても、あいつ絶対大暴れするわよ？」

面倒だとばかりにエリーゼは腕を組んで頭を悩ませる。その隣に立つレンは「村人は全員避難してるんですか？」とクリュウに尋ねる。

「いや、約一〇〇人程度がまだ村の下の避難壕に退避してる」

「クシャルダオラが暴れれば、その壕も必ずしも安全とは言えないって訳ね」

ルーデルの言う通り、避難壕も決して安全とは言えない。地下洞窟をそのまま利用している避難壕は元々は嵐などの際に使うものであり、古龍の襲来に備えたものではない。クシャルダオラがこちらが潜んでいる事に気づいて暴れれば、落盤の恐れだってある。最悪は落盤で道を塞がれて全員生き埋めだ。

「だとすれば、やっぱりクシャルダオラに夜の間だけでも大人しくしてもらわないと」

「でも、私達の装備で今からクシャルダオラにそれだけのダメージを負わせられるとは思えないんだけど」

自分と同意見なルーデルに対し、エリーゼが疑問を投げかける。その疑問もクリュウ達の共通意見だ。だがクリュウには策があった。
「奴を村の南部へと誘導する。そこにはまだ大タル爆弾Gが何発か隠してあるから――それを使って奴を爆破する」
「……やっぱりねぇ、あんたならそう言うと思ったわよ」
「心臓に悪いけど、効率はいいわよね」
「確かに、大ダメージを与えられそうですね」
三人共程度は違えど、クリュウが爆弾至上主義者だという事はよぉく知っている面々だ。クリュウの策に対して驚く者はもはや誰もいなかった。そんな皆の反応に苦笑しながらも、誰も反対しない事に心の中で感謝しながらクリュウは腰に下げた煌竜剣（シャイニング・ブレード）を構える。それを見て残る三人も同じように武器を構えた。いつの間にか、クシャルダオラの視界が復活してこちらを見据えていた。
「グオォォッ！」
集まっている敵を一蹴しようと、クシャルダオラは地面を蹴って駆け出す。迫り来る鋼鉄の突進を前にクリュウ、ルーデル、レンの三人は回避行動を取った。だが、ただ一人エリーゼだけは引かなかった。
「エリーゼさんッ!?」
驚くレンの前で、エリーゼは再び盾を構えた。ヘルムの下の彼女の表情はわからないが、それでもわかる――エリーゼが激怒している事を。
「さぁて、よぉくも私の妹を狙いやがったわね。この落とし前、きっちりつけてもわらないとねぇッ！」
「グオオォォォッ！」
――直後、両者が激突した。
激しい金属音が響くと、クシャルダオラの突撃が止まった。否、正確には大きく後ろにエリーゼが後退しているのだが、数メートル下がった所で彼女が踏み止まったのだ。巨大な盾に頭突するような形で四本の脚を使って前に進もうとするクシャルダオラに対し、エリーゼは両足を踏ん張って耐えていた。

「グゥ……ッ！」
「……うあああああぁぁぁぁぁッ！」
まるでかつての狩友と同じように気合と根性で拮抗するエリーゼ。ヘルムの下の顔は苦痛に歪み、脂汗が止まらない。それでも、決して退く事なく押し返す。だが所詮は人間の力。クシャルダオラがあと少し力を加えれば重量級装備とはいえ少女の体など簡単に跳ね跳ばせるだろう――だが、彼女は一人ではない。
「エリーゼさぁんッ！」
クシャルダオラに向かって貫通弾ＬＶ１を連射してレンが援護する。貫通性能の高い弾丸は硬い鎧を貫く事はできなくてもめり込み、鋼鉄にヒビを入れる事くらいはできる。その鬱陶しい攻撃にクシャルダオラが一瞬意識をレンの方に向ける――その一瞬、力が抜けたその隙をついてエリーゼは近衛隊正式銃槍を構えた。狙いを定め、砲撃加速装置のスイッチを入れる。いつの間にか、放熱板は閉じていた。
再び砲口が燃えたぎり、荒々しい灼熱の業火が集まり始める。空気が燃え、バチバチと火花が迸る。漏れる火炎はオレンジ色から赤色に、そして高熱過ぎる炎は青色と化す。尋常ならざる熱源にクシャルダオラが驚いて振り返った時――怒りの鉄槌が火を噴いた。
激しい爆音と共に猛烈な火炎が辺りを包み込んだ。激しい爆発は一直線にクシャルダオラの顔面に直撃。悲鳴を上げ、黒煙と火炎に包まれる顔面に悶え苦しみながらクシャルダオラは転倒する。同時に強烈な砲撃の反動でエリーゼは大きく後ろへと後退した。すぐさま放熱板が開いて大量の熱が放熱される。それは空気に触れた瞬間辺りの水分を一瞬で蒸発させる程。結果的に放熱板から大量の白煙が出ているように見えるのだ。
見事に竜撃砲の強烈な一撃を叩き込んだエリーゼ。呆然とこの光景を見詰めていたクリュウとルーデルに向かって「突っ立ってないで攻撃しなさいバカッ！」と怒鳴りながら自らも再びクシャルダオラへと突撃する。その声にハッとなった二人も遅れて鋼龍へと殺到。倒れているクシャルダオラに向かって猛攻撃を浴びせる。
「やるじゃないッ！」

倒れたクシャルダオラの眼前に立ちながらサクラノリコーダー改を連続して頭部へと叩きつけるルーデルの言葉に「あんたもねッ」と連続砲撃を浴びせながらエリーゼが答える。
「さぁて、私もそろそろ本気出しちゃおうかなぁッ！」
口端を吊り上げ、健康的な犬歯を煌めかせながらサクラノリコーダー改を振り上げる。彼女の気合に反応するように、サクラノリコーダー改の鐘の部分に黒い稲妻が迸る。バチバチを破裂音を響かせながら纏う黒雷は、まるで生き物のように鐘の周りで暴れる。それを見てニヤリと微笑んだルーデルは、雄叫びと共に力強くそれを打ち落とした。
吠えようとしていたクシャルダオラに対し、容赦なく振り落とされた鐘の一撃。激しい黒雷が迸り、美しい音色と共に鋼龍の顔がひしゃげると共にクシャルダオラの口から赤い血が吐き出された。その飛沫が辺りに飛び散る。その一滴が、ルーデルの頬に付いた。その光景を偶然見ていたクリュウは慌てる。
「……ッ！」
「ルーデルッ！」
彼が慌てたのは無理もない。彼女の二つ名が『悪魔のサイレン』と言われる由縁、それは彼女が常軌を逸した戦闘狂（バーサーカー）だからである。血を見ると興奮し、強烈な破壊衝動に駆られて周りが見えなくなる。以前彼女のその姿を見た事のあるクリュウだからこそ、その発動を恐れたのだ。
「――ハッ、いい声で泣くじゃない。もっと楽しませないよッ！」
血走った目で罵声を浴びせながら、ルーデルの攻撃が更に鋭く、激しいものへと変わる。やはり起きてしまった彼女のアレ状態。解除しようにもここには彼女の事を熟知しているフィーリアはいない為、対処方法がない。戦闘とはまた違った焦りにクリュウは頭を悩ます。だが、
「ルーデル？」
ゆっくりと起き上がったクシャルダオラに対し、ルーデルは攻撃をやめて大きく後退する。以前の彼女ならただ目の前の相手を殴りつ

ける事だけを考えて構わず武器を振るっていただろう。だが今の彼女はしっかりと引き時をわかっていた。それだけではない。
「ほらほら、こっち向け古龍（アルトドラッヘ）ッ！」
起き上がった途端、自分を無視して転倒のきっかけを作ったエリーゼを狙うように浮かび上がって彼女の方へと向くクシャルダオラに対してルーデルは角笛を吹いて鋼龍の気を引く。その音色を聴いてこちらへと向いた途端、閃光玉を投擲して視界を奪いつつ見事に撃墜してみせた。
地面に落ちて藻掻くクシャルダオラに対し、ルーデルは笑い声を上げながら突撃する。そんな彼女の動きを呆然と見ていたクリュウだったが、フッとその口元に笑みが浮かぶ。
「……ルフィールやシャルルだけじゃない。みんな、成長してるんだ」
どうやらルーデルはあれから戦闘狂（バーサーカー）状態を克服したらしい。完全には制御できてはいないとはいえ、あれなら味方もろとも吹き飛ばすような行動はしないだろう。彼女なりに、仲間と狩りをする為にがんばった結果なのだ。
レンもエリーゼも以前に比べて格段に動きや連携が良くなっている。ガノトトス戦以後も、二人はたゆまない努力を続けてきたらしい。
強くなり続ける五人の姿を見て、クリュウの心の中に『負けられない』という想いが膨れ上がった。自分だって、それぞれの別れから成長していない訳じゃない。ハンターとしての実力も、人としての器も以前よりも優れているはず。
だからこそみんなに見てほしい――クリュウ・ルナリーフという男の今の姿を。
「僕だってッ！」
視界はまだ封じられてはいるが、それでもゆっくりと起き上がったクシャルダオラ。攻撃を続けようと接近するルーデルとエリーゼを牽制するように爪を振り回す。我武者羅に振るわれる攻撃とはいえ、硬い鋭爪が掠ったりすればそれだけで大ダメージを負ってしまう為、二人は近づけない。その間はレンが単独で中距離を保ちながら銃撃

を続けている。そこへ、クリュウは突っ込んだ。
「ちょ、クリュウッ!?」
ルーデルの驚きの声を背後に聞きながら、クリュウは暴れるクシャルダオラに向かって突っ込む。相手は視界を封じられている為、こちらの接近には気づいていない。それでも、無茶苦茶に動いて敵の接近を拒んでいる。意思のない攻撃は離れていればただの悪あがきでしかないだろう。だがこちらが肉薄すればむしろ意思がないだけあって予想外な方向からダメージを負う事も考えられる。だからこそ二人は接近しないのだ。だがクリュウは違う。
「奴の前方特化型のモンスター。正面にさえ立たなければ怖くないよッ！」
そう、クシャルダオラは風と鋼の鎧に守られている為に難敵と言える。だがむしろその鎧さえ無視できれば奴の攻撃は爪とブレスのみの前方に対するものだけ。グラビモスやバサルモスのように全方位攻撃がある訳でも、ショウグンギザミのように超信地旋回ができる訳でも、ましてやリオレウスやリオレイアのようにその場で尻尾を全方位に振り回すような事もない。間合いさえわかれば、恐れるような相手ではないのだ。
孤独な、長く苦しい鋼龍との戦いは、いつの間にか彼の中に恐怖を打ち勝つ力を与えていた。
クリュウはクシャルダオラの正面を避けるように背後へと回り込むと、そこから一気に接近。がら空きの後ろから無造作にゆったりと動いている尻尾に向かって襲い掛かった。
煌竜剣（シャイニング・ブレード）の最高の切れ味が鋼龍の尻尾を傷つける。その一撃に背後から敵が迫っている事を知ったクシャルダオラはすぐさまその場で爪を振るいながら回転するが、クリュウもそれに合わせて動き、今度は右の脇腹目掛けて剣を振るう。
懐に敵に潜られた。クシャルダオラはすぐさま後方へと跳んで距離を開く。だがそこには――
「あんたばっかりにいい格好させられないわねッ！」
まるでこれを見越していたかのようにサクラノリコーダー改を構

えたルーデルが待ち構えていた。唸り声を上げるクシャルダオラに対し、ルーデルは雄叫びを上げながら重撃を叩き込む。体全体を使っての全力でのフルスイングはクシャルダオラの細い首を捻じ曲げ、鋭利な頭部を砕く。血と悲鳴を吐くクシャルダオラに対してクリュウ達の猛攻は止まらない。

「喰らいなさいッ！」

遅れて接近したエリーゼがすぐさま近衛隊正式銃槍を構え、装填されている砲弾全てを使い切っての連続砲撃を浴びせる。全弾撃ち尽くすと、すぐさま装填（リロード）して続けて連続砲火。更にレンも冷静に銃撃を浴びせてクシャルダオラの意識を削ぐ。

四人の猛攻に、クシャルダオラは為す術がなく一方的にやれるのみ。だがそれも彼の視界が回復するまでの短い時間に過ぎない。視界を回復させたクシャルダオラは上空へと浮かび上がると、まるで空を滑るように四人の背後へと回り込むと、すかさず風ブレスを撃ち放つ。この攻撃にルーデルとレンは脱出するもエリーゼとクリュウが被害を受けた。だがエリーゼは回避を諦めてガードに徹し、クリュウも直撃は避けた為に二人共大した怪我は負わなかった。

回復薬グレートを一気に飲み干す二人を援護するようにレンが銃撃を浴びせ、ルーデルがクシャルダオラへと突撃する。だがクシャルダオラはそんな二人を無視して回復薬グレートを飲み終えたばかりのエリーゼに向かって滑空で迫る。

「チッ……ッ！」

舌打ちしながらエリーゼは回復薬グレートのビンを投げ捨てて盾を構える。鉄と鉄が激突し、激しい金属音が辺りに轟いた。圧倒的な質量を持つクシャルダオラの突撃に、エリーゼはガードするも衝撃を逃し切れずに後ろへ吹き飛ばされた。そのまま数メートル飛んだ末、背後に会った木に背中から激突してしまう。

バサルメイルの強力な防御力のおかげでかなりのダメージは防げたとはいえ、背中を襲う痛みにエリーゼは顔をしかめて倒れてしまう。

「エリーゼさんッ！」

慌ててレンが駆けつけようとするが、それを予期していたかのようにクシャルダオラは再び空を滑るようにして移動。走るレンの側面へと移動すると、驚くレンに向かって爪を振る。盾を持たないガンナーの彼女にそれを防ぐ術はなく、突き飛ばされて地面へと倒れる。必死に起き上がろうとするが、視界が歪んでうまく立てない。クシャルダオラがこちらに迫っているかもしれないという恐怖に体全身の震えが止まらない。
「しっかりしなさいッ」
そこへルーデルが近づくと、彼女を無理やり立たせてレザーライトヘルムの上から引っ叩く。乱暴だが、その一撃にレンの視界がハッキリとなる。どうやら一時的に目眩状態になっていたらしい。
「あ、ありがとうございます」
「ほら、さっさと姉さん助けて来なさい」
お礼を言うレンの背中を叩いてエリーゼの所へ向かわせると、こちらに迫るクシャルダオラに目を向ける。
「ハッ、弱っている女の子を狙うなんて、古龍（アルトドラッヘ）の名が泣くわよッ！」
滑空で迫るクシャルダオラに対しルーデルは横へと走ってこれを回避すると、すぐさま方向転換して追い掛ける。だがクシャルダオラは着地はせずそのまま空中で回転すると、首を大きく引く。その動作に風ブレスを予期したルーデルは鋼龍の正面を避けるように横へと走った――だが、これが間違いだった。
確かに、クシャルダオラは風ブレスを撃ち放った。轟音を立てながら荒れ狂う風はまるで竜巻のようだ。だが今度の風ブレスはこれまでのように一直線に塊となって放出されたものではなかった。猛烈な風が、絶えず鋼龍の口から放たれて地面を抉る。そしてそのままクシャルダオラは首を曲げる。すると、風ブレスがまるで薙ぎ払うかのように横へと針路を変えたのだ。
「な……ッ!?」
まさかの新技、滞空放射風ブレス。全くの予想外な攻撃だった。正面さえ避ければ風ブレスなど恐れるものではないと思い込んでいた

ルーデルは、回避する事もできずにその直撃を受けてしまう。轟音と激痛が全身を包み込み、風の刃が全身を斬り刻むかのように襲い掛かる。そしてそのまま吹き飛ばれた彼女の体は地面の上を数度転がってようやく止まった。

「……ッ！　やりやがったわねぇ……ッ！」

腕を震わせながら起き上がろうとするルーデル。辛そうに立ち上がる彼女の姿は、誰が見てもかなりのダメージを負っているように見える。風ブレスの直撃を受けたのだから当然の結果だ。それを見てクリュウはすぐに援護に走る。レンはエリーゼに寄り添っているし、エリーゼもまた今は動けそうにない。今彼女を助けられるのは自分だけだ。

「間に合え……ッ！」

全速力で走りながら、クリュウは道具袋の中に手を伸ばす。もう持参の閃光玉は尽きてはいたが、まだこの中には最高の後輩からの激励の品、受け取った閃光玉が残っている。クリュウはそれを手にすると、ルーデルに向かって追撃のブレスを放とうと空中から狙いを定めるクシャルダオラの眼前に投擲した。膨大な光が一度に放出され、当たり一面が一瞬真っ白に染まる。その圧倒的な光量の直撃を受けた鋼龍は視力を奪われ、同時にバランスを崩して地面へと落ちる。転倒して藻掻くクシャルダオラを一瞥し、クリュウはルーデルに駆け寄ると彼女の肩を抱きながら、同じく二人から受け取った回復薬グレートを二本彼女に手渡す。

「早くこれを飲んで。すぐに撤退するよ」

「……チッ、敵に背を向けるのは私の流儀に反するんだけど」

「そんな状態でまともに立ち回れる訳ないでしょ」

「言ってくれるじゃない、格下。でもまぁ、正直ちょっとキツイわねぇ……」

減らず口は相変わらずだが、それでもかなりのダメージを負っている事は確かだ。彼女が回復薬グレートを飲み干すのを待ってから、同じく回復を済ませたエリーゼとレンが合流するのを待ってクリュウは改めて撤退を宣言した。

「そうね、私もそれに賛成。これ以上の戦闘は、圧倒的にこっちが不利よ」
「弾の数も少なくなって来ました。どちらにしてもどこかで調合しないと持ちません」
　エリーゼとレンもクリュウの撤退案に賛同した。間もなく日が落ちる。これ以上の戦闘は夜戦となり、ただでさえ難敵のクシャルダオラを闇夜の中で戦わなければならなくなる。こちらの命中率は下がり、むしろ被弾率は上がるだろう。
　だが同時に、ここで相手に背を向ければクシャルダオラは一夜を通して暴れ回るだろう。そうなれば村の被害はいよいよ甚大なものになるだろう。だからこそ――
「戦線を大きく下げる。このまま村の南側に撤退して、配備してあるありったけの大タル爆弾Gで奴を爆破して暴れられなくなる程度のダメージを与えた後に避難壕に完全撤退する。これでいいよね？」
　クリュウの撤退案に対し三人は同時にうなずいた。それを確認し、クリュウは「このまま南に逃げるよ。ついて来てッ」と三人を誘導しながら走り出す。背後では起き上がったクシャルダオラが暴れているが、まずは相手の視界が回復する前にその視界から姿を消さなければならない。クリュウは村の地形を熟知している為、林や家などを駆使してうまく撤退を成功させた。そのまま目的地である村営倉庫にまで移動し、倉庫内に隠してあった大タル爆弾G、計六発を引っ張りだす。
「……なんちゅうもん隠してんのよあんた」
　呆れるエリーゼの言葉に苦笑を浮かべながらクリュウは全ての大タル爆弾Gを用意を終え、改めて作戦内容を伝える。
「このままここで角笛を吹いて奴を引き寄せるけど、大タル爆弾Gを確実に当てる為には相手の動きを封じなくちゃいけない。でも奴には落とし穴は効かないし、おそらくシビレ罠もあの鋼鉄の鎧には効かないと思う」
「じゃあ、動きなんて封じようがないじゃない。閃光玉だってあいつ暴れるし。レンの武器は属性弾も状態異常弾も撃てないから、眠らせ

たり麻痺らせたりは期待できないわよ？」
　エリーゼの言う通り、現状クシャルダオラを完全に足止めする策はない。だが大タル爆弾Ｇを確実に当てる為には奴の動きは一時的にとはいえ止めなくてはいけない。
「ちゃんと策は考えてるよ。ここでキーマンになるのは――ルーデルだよ」
「わ、私？」
　突然名前を呼ばれて驚くルーデルに対し、クリュウは厳かな表情でうなずいた。
「ルーデルの使う狩猟笛は打撃武器だよね。頭を狙い続ければ、どうなる？」
　クリュウの言わんとしている事を理解したルーデルは苦笑を浮かべながら彼の疑問に答える。
「――スタンを狙えって事ね？」
「できる？」
「……無茶苦茶言ってくれるわね――でもまぁ、問題ないわ」
　確かにクリュウの立てた作戦は無茶苦茶だ。正面特化型のクシャルダオラに対し、正面に立って頭部を集中的に狙ってスタンを狙う。危険度はこれまでとは比べ物にならない。
　危険な役目を押し付ける事に罪悪感を抱くクリュウ。だがそんな彼の心情を察してか、ルーデルはあえて明るく振る舞った。
「こちとら狩猟笛で数多のモンスターの頭蓋骨を粉砕して来てんのよ。相手が古龍（アルトドラッヘ）だろうが関係ないわ」
「やって、くれるかな？」
「仕方ないわね。まぁこっちはあんたに借りがある訳だし、これで貸し借りなしよ」
　自信満々に微笑むルーデルの言葉にクリュウの表情もようやく安堵したように明るいものに変わった。そんな二人の姿を傍から見ていたエリーゼは「なら、このドジも少しは役に立つんじゃないかしら？」と不敵に微笑む。彼女の言葉の意味が理解できず困惑するレンに対し、クリュウは小さくうなずいた。

「そうだね。レンにも徹甲榴弾で頭部を集中的に狙ってルーデルを援護してほしいんだ」
徹甲榴弾は弾頭部が貫通弾並みに硬く、鱗や甲殻に突き刺さる事ができる。しかも弾着と同時に中の火薬に時間差で火がついて命中後数秒で爆発。硬い鱗や甲殻を持つモンスターに対して特に効果を発揮する弾丸だ。しかも徹甲榴弾は頭部に命中させれば爆発の衝撃が直接脳を揺さぶるので、打撃武器で頭を叩いた時のような脳に直接ダメージを与えられる。蓄積すれば脳震盪を起こしてスタン状態に追い込む事ができる。以前轟竜ティガレックス戦の時にフィーリアがクリュウの援護に使ったのと同じ方法だ。
クリュウの意図を理解したレンは期待されている事に不安を抱きつつも同時に喜びを感じていた。頬を紅潮させ「ま、任せてくださいお兄さんッ」と意気込む。
作戦方針は決まった。攻撃のメインはルーデルとレンに託し、クリュウとエリーゼは二人の援護に徹する。三人が作戦を理解したのを確認し、クリュウは角笛を吹いた。
村全体に角笛の音色が響く。それは再び避難壕にいた村人達の耳にも、そして四人の姿を見失って苛立っていたクシャルダオラの耳にも届いた。
――林の向こうで猛烈な竜巻が吹き荒れる。木の枝や石、瓦礫などを巻き上げながら渦巻く灰色の竜巻の中から、鋼色の古龍が姿を現す。猛烈な風を纏いながら、鋭利な瞳は待ち構える四人を確実に捉えていた。嵐を纏いながら怒り狂う鋼龍。その気迫に思わず身震いしてしまう四人。怒り狂うクシャルダオラの口の端からは白い息が漏れ出ている。風ブレスは強力な力で空気を圧縮し、前方へと解放する事で撃ち出される攻撃だ。怒りのあまり圧縮し過ぎているのか、奴の体内には凄まじく圧縮された風が押し込まれているのだろう。空気は圧縮されると熱を発生させるので、あの白い息は体内の膨大な熱が漏れている証なのかもしれない。
「……本当かどうかはわからないけどね」
思わずそんな事を冷静に考えてしまう自分に苦笑を浮かべる。余

裕があるのか、それとも現実逃避なのか。どちらにしても、小難しい事を考えていても仕方がない。怒り狂うクシャルダオラは更に風を纏い、辺りに無数の竜巻を発生させる。瓦礫が舞い上がり、様々な物体が空の上で狂い踊る。

「……ったく、何もかも桁違いね」

エリーゼの言葉に、その場にいた全員がうなずいた。竜巻を纏いながら、雷鳴のような咆哮を轟かせ、風翔龍が迫る。竜巻で巻き上げられた瓦礫が、まるで意思を持っているかのようにクリュウ達に向かって降り注ぐ。辺り一面に叩きつけられる大小様々な瓦礫をクリュウとルーデルは器用に避け、エリーゼはレンを背中に隠して自らの巨盾で守り切る。そして、瓦礫の雨が晴れるといよいよ本命がお出ましだとばかりにクシャルダオラが怒号を上げながら突っ込んで来た。上空から急降下しながら迫る鋼龍に対し、四人は散開してその突撃を避けた。

地面に激突する寸前で器用に体勢を立て直して浮遊（ホバリング）するクシャルダオラ。すぐさまルーデルが龍風圧を無効化する音色を奏でて彼の纏う風の鎧を消し去る。だがもはやそれも予想済みなのだろう。クシャルダオラは恐れる事なくその場で風ブレスを放った。先程ルーデルを蹴散らしたのと同様に浮遊（ホバリング）状態からブレスを吐き続ける。しかも今度は旋回しながら全方位に猛烈な竜巻と化した風ブレスを薙ぎ払った。クリュウとルーデルは直撃こそ避けるも吹き飛ばされ、エリーゼはレンを庇いながら何とかこの全方位ブレスを耐えた。

ブレスが止むと同時に、エリーゼの盾から跳び出したレンがクシャルダオラの頭部を狙って引き金を引く。装填されているのはクリュウの指示通り徹甲榴弾、そのＬＶ２だ。銃声と共に撃ち出された弾丸は嵐の風の中を突っ切って唸り声を上げるクシャルダオラの頭部に命中する。遅れて起爆し、その爆発に驚いてクシャルダオラが地面へと落ちた。そこを狙って一斉に剣士組三人が突撃する。

事前の作戦通り、ルーデルがクシャルダオラの頭部側へと向かい、他の二人は側面から攻撃を仕掛ける。クリュウは斬撃、エリーゼは砲

撃で攻撃を開始。そしてルーデルは構えたサクラノリコーダー改を振り上げ、藻掻くクシャルダオラの顔面に向かって振り下ろす。だがその寸前でクシャルダオラが起き上がってしまい、鐘は虚しく空振りに終わり地面に陥没する。

舌打ちし、すぐに構え直すルーデル。横薙ぎにサクラノリコーダー改を振り抜き、今度こそ側頭部から殴りつけた。続けてもう一撃と構えたが、視界を封じられても敵が正面に立っている事くらいは気づいているのだろう。クシャルダオラは苦し紛れに爪で前方を薙ぎ払った。運悪くサクラノリコーダー改を振り上げていたルーデルはこれを避ける事ができずに直撃。数メートル吹き飛ばされて地面に倒れた。

「ルーデルッ!」

駆け寄ろうとするクリュウに対しルーデルは手振りで大丈夫と伝えて立ち上がるとすぐに回復薬グレートを飲む。ビンを放り捨てると同時に自らのハイメタ∪メイルを見て身を震わせた。鉱石の中でも特に硬いカブレライト鉱石で作られたハイメタ∪メイル。その表面には無残にも抉られた爪痕が残っていた。まだ防具としては機能しそうだが、あと一撃でもまた爪の直撃を受ければ耐えられるかどうか怪しい。スキル性能を重視して自らの持つ防具の中では比較的低い防御力の防具を選んだ事がここに来て仇になったようだ。

「……やってくれるじゃないッ」

だが逆に、この傷跡は彼女の闘争心に火をつけた。面白いとばかりにルーデルは狩猟笛を構えて演奏を開始。再び自らの移動速度強化を重ねがけし、更に強走効果【大】に加えて先程のレンの失敗を考慮して気絶無効まで演奏。チーム全員の強化を完了すると同時にクシャルダオラの視界が回復した。

視界を封じられている間も、重量級の一撃は彼女しか出せないと知っているクシャルダオラは当然仕返しとばかり彼女を狙って首を動かす。そこへ再びレンが放った徹甲榴弾ＬＶ２が頭部に命中して爆発。その衝撃にクシャルダオラはルーデルからレンへと攻撃目標を変える。

命中と同時に自分が狙われる事を予想していたレンはすぐに銃を背負って横へと走って移動する。遅れて彼女が先程までいた場所にクシャルダオラの風ブレスが地面を抉りながら炸裂。彼の攻撃は不発に終わった。

風ブレスを撃った後の一瞬の隙を突いて接近したエリーゼが足元から砲撃を喰らわせて撹乱。そこへルーデルが再び接近してクシャルダオラの頭を狙うが、クシャルダオラは後ろへと跳んでこれを回避してしまう。後方へと退避して威嚇の声を上げながら、クシャルダオラは再び空へと舞い上がる。だがそこへクリュウが放った打ち上げタル爆弾Gが二発命中する。倉庫の中には大タル爆弾G以外にも道具（アイテム）類が隠されており、今彼が放ったのも補充した道具（アイテム）だ。

今度はクリュウに狙いを定め、クシャルダオラは三連続風ブレスを放つ。一撃目は余裕をもって避けたが、二撃目はギリギリ。そして三撃目は掠って吹き飛ばされてしまう。しかしうまく受け身を取って着地した為大したダメージではない。むしろその間に再びエリーゼがクシャルダオラの足元へと接近し、上方に向けて連続で砲撃を放つ。その攻撃に嫌気がさしたのか、クシャルダオラはゆっくりと着陸した。そこへルーデルの振り殴りの一撃が炸裂した。

「グオォッ！」

怒りの声を上げるクシャルダオラだが、そこへ更にレンの銃撃が加わる。後方からはエリーゼの砲撃とクリュウの打ち上げタル爆弾Gの攻撃が援護する。四方から攻撃を受けるクシャルダオラは次なる目標を一瞬迷った。その隙を突いてルーデルが突っ込む。

次なる目標を迷うクシャルダオラの死角から迫ったルーデルは雄叫びを上げながら突撃する。その声と気迫にようやくクシャルダオラは彼女の接近に気づいた――だが、もう遅い。

「粉砕撃破（ツェアシュラーゲン）ッ！」

気合裂帛。

ルーデルは力の限り振り上げた重量のあるサクラノリコーダー改を一気に叩き落とした。空気が震え、轟音を立てながら勢い良く振り

落とされたその一撃は驚愕するクシャルダオラの正面から額に向かって激突。鐘と鋼龍の額が甲高い音を立てて衝突する。猛烈な勢いで振るわれたその一撃は相当な大ダメージと共にこれまで彼女と、そしてレンが蓄積していたスタン値の上限を超えた。

「グオオオオオッ!?」

悲鳴を上げてクシャルダオラの体が揺れる。視界が歪み、平衡感覚が失われる。制御できなくなった巨体は立っている事すらも維持できず、呆気無く横倒しとなった。今自分がどの方向を向いているのかもわからず、立ち上がろうと藻掻くがそれすら叶わない。

目眩状態に陥った鋼龍クシャルダオラ――四人はこの瞬間を待っていた。

すぐさまクリュウとエリーゼが大タル爆弾G二発ずつ持ってクシャルダオラに迫る。ルーデルもすぐに武器を背負って残る大タル爆弾G二発を手に取って二人を追いかけて再びクシャルダオラに接近する。

まずクリュウがクシャルダオラの頭の右側に二発設置し、続いてエリーゼが反対側に二発設置。そしてルーデルがその間に二発設置した。合計六発の大タル爆弾Gがクシャルダオラの前方に隙間なく設置される。

「爆破（シュプレンゲン）ッ！」

急いでクシャルダオラから離れながらルーデルが叫ぶのと同時に、すでに大タル爆弾Gを狙って銃を構えていたレンが引き金にかけていた指を引く。

銃声と共に撃ち出された銃弾は吸い込まれるようにして寸分狂わずエリーゼが設置した大タル爆弾Gの一発に命中。連鎖的に他の五発の大タル爆弾Gも誘爆し、クシャルダオラは巨大な爆発の炎と煙の中に消えた。

猛烈な爆音と爆風が吹き荒れる中、クリュウが叫ぶ。

「撤退するよッ！　こっちだッ！」

クリュウに案内されてすぐさま三人は脱出する。クリュウは走りながら効くかどうかもわからないがとにかく無我夢中で道具袋（ポー

チ）の中から次々にけむり玉を後方に向かって投げまくる。放物線を描きながら着弾したけむり玉は次々に白煙を吹き上げて辺りが真っ白な煙に包まれた。その煙を隠れ蓑にして四人は迅速に離脱した。

黒煙が空の彼方に消え、しばらくするとけむり玉の煙も風に流されて立ち消えた。そして、爆風で半壊した倉庫の傍らには巨大なクレーターができていた。大タル爆弾Ｇ六発という大火力のすさまじさを物語っている。そして、その中心に鋼龍は鎮座していた。

「グルウウウウウ……」

低い唸り声を上げながら辺りを見回すが、すでに四人は姿を消していた。

鋼の鎧の奥には猛烈な怒りがこみ上げるが、さすがの古龍も大火力の爆発の直撃を受けたダメージは大きい。もちろんこれまでクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィード、ルフィール、シャルル、ルーデル、エリーゼ、レンの積み重ねていた攻撃も決して無駄ではなかった。

まだ倒れる程のダメージではないが、それでもさすがに疲れた。日も暮れて敵の姿もない以上、無闇に暴れるのは得策ではないと判断したのだろうか。クシャルダオラはそのまま翼を畳むと、静かにその場で丸くなった。眠っているのか、それともただ単に休んでいるだけなのか。それはわからないが、それから鋼龍は夜の間はその場から動く事はなかった。

第２２０話　少年の決意と少女達の想い　別れの朝に交わす約束

クリュウの案内を受けながらうまく鋼龍クシャルダオラから逃げ延びた四人はそのまま避難壕へと撤退した。避難壕への入口は数ヶ所あるが、この村で生まれ育ったクリュウはその全ての位置を熟知しており、その中で最も近い入口から入った。

洞窟の中を進んでいくと、全ての入口は同じ地下にある少し広めな空間へと繋がっている。そこが村民が避難している場所だ。この空間には村人全員が収容できるだけの広さがあり、すでに第二次避難隊で脱出するはずだった村民が大勢ここに集まっていた。

ランプの明かりが無数に照らす薄暗いこの空間では、人々が不安と恐怖に耐えながら厄災が過ぎ去る事を待っていた。そんな中、怖くて震える子供達を励まし続ける少女がいた。

「大丈夫よ。きっとクリュウがあんな奴追っ払ってくれるから」

そう言って努めて笑顔を振りまくのは村唯一の酒場の看板娘エレナだ。怖がる子供達に洞窟の中の調理設備で作った簡単なお菓子を振るまいながら励ます彼女の活躍もあって、子供達の不安は少しずつ解けていた。

ここにいるのは外部から逃げて来た人も大勢いるが、それでも大多数はこの村で生まれ育った者達ばかり。そしてその人達は皆クリュウの事を子供の頃から良く知っている者達ばかりだ。彼がこれまで積み重ねて来た功績もあって、皆心から彼がこの窮地を救ってくれると信じていた。

子供達が笑顔を取り戻したのを見て、エレナはその場を離れる。次に向かったのは、意外な者達の場所だった。

「調子はどう？」

エレナが声を掛けたのは、左腕にギプスをつけて安静にしている少女。オレンジ色の可愛らしいツインテールに同色の可愛らしい瞳が特徴の少女は全身を大猪の皮とコンガの毛や桃毛獣の毛で縫われた

機能性と耐久性に優れた桃色の防具、コンガシリーズを纏った彼女の名はシャルル・ルクレール。
「問題ありません。この人のモンスター並みの回復力の高さなら明日にはピンピンしてるでしょう」
　そんな彼女に寄り添いながらエレナの問いに答えるのは全身をオオツノアゲハとドスヘラクレスの素材を使い、蝶をモチーフにして作られた黄金色を主体に赤や青など鮮やかな色合いで彩られた軽量ながらの機能性に特化したパピメルシリーズを纏った少女。二色の瞳を持つ彼女の名はルフィール・ケーニッヒ。
　二人共クリュウがかつてドンドルマのハンター養成訓練学校に在籍していた際の後輩であり、今回村の窮地を知って駆けつけてくれた者達だ。先程までクリュウと共にクシャルダオラと戦ってくれていたのだが、シャルルが負傷した為にこの避難壕に避難して来ていた。
　以前クリュウが学生時代の話をしてくれた際に彼女達の事を話してくれていた為、エレナは警戒する事なく二人を迎え入れ、リリアと共にシャルルの手当てを行った。ルフィールの言う通り、シャルルの体はモンスター並みに頑丈且つ回復力に優れており、リリアの特効薬の効果もあって見る見るうちに回復していた。
「そう、良かった」
　シャルルが元気そうなのを見て安堵するエレナ。そんな彼女を見て、ルフィールが「ところで」と口火を開く。
「あなたの名前はエレナ・フェルノさんでしたよね？」
「えぇ、そうよ」
「……先輩の幼なじみの、ですか？」
「幼なじみっていうか、まぁ腐れ縁みたいなもんよ。子供の頃からずっと一緒に育って来た、姉弟みたいなもんよ」
　照れながら答えるエレナの返答に、ルフィールは表情を消しながら「そうですか」と事務的に答える。一方のシャルルは「へぇ、あんたが兄者がよく言ってた幼なじみっすかぁ」と相手が年上だというのに全く敬う様子もない。
「へ、へぇ。あいつ、私の事どういう風に説明してたのかしら？」

興味ない風に装ってはいるが、その実は興味津々というのが滲み出ているかのようなエレナの反応に、ルフィールの表情が険しいものに変わる。乙女の感でわかる――彼女も自分と同じ想いをクリュウに抱いているのだと。

一方のシャルルは全く彼女のそんな反応に気づいている様子はない。純粋に「うーん」と記憶の中の彼の話の中での彼女の印象を思い出す。

「……ものすごく粗暴で気が短い」

「――バカクリュウ、戻って来たらぶん殴ってやるわ」

猛烈な怒気を噴出しながら拳を震わせるエレナ。その修羅の如き迫力にはさすがのルフィールも息を呑んだ。これがクリュウが語っていた狂幼馴染（バーサーカー）の真の姿だというのか。

これまた彼女の怒気にも気づいていないシャルル。クリュウをどう八つ裂きにしてやろうか考えるエレナに向かって「でも――」と言葉を続ける。

「――本当はすごく優しくて、料理がうまくて気遣いができる、自慢の幼なじみって言ってたっすよ」

にこやかに言う彼女の台詞に、エレナから噴出していた怒気が霧散する。途端に顔を真っ赤に染めて「な、何よそれ。バッカじゃないのッ？」と怒りながら二人に背を向ける。その際の彼女の表情は先程までの修羅の形相から一転して幸せに満ちた嬉しくて堪らないといった満面の笑みだった。

そんな彼女の嬉々とする背中を、不機嫌そうにルフィールは見詰める。

――先輩と十年以上一緒にいる人。

自分と彼との思い出は学生時代の半年程と、つい先日村に訪れた際の狩りの時間も含めてのわずか数日程度。その日々は決して長いとは言えない。自分にとって彼は大切な存在だが、一緒に過ごしていた時間は多くはない。だが目の前のこの人は彼の幼なじみで、子供の頃からずっと彼と一緒にいる。共に過ごした日々で言えば到底敵うような相手ではない。何より、十年以上も彼と一緒にいる――こんな羨

ましい事はない。
彼にとって、このエレナ・フェルノという人はかけがえの無い唯一無二の幼なじみだ。じゃあ、自分は彼にとっては、一体どんな存在なのだろうか……
「あ、お兄ちゃんだぁッ！」
そんなに広い空間ではない洞窟内に嬉々として響いたのはリリアの声。その声にこの場にいた全員が入口の方を見ると――
「良かった、みんな無事だね……」
疲れ切った様子ながらも、皆の無事な姿を見て心から安堵した表情を浮かべたクリュウの姿があった。その背後には同じく疲労が蓄積した様子のルーデル、エリーゼ、レンの姿もある。
「ちょッ!?　あ、あんた怪我してんじゃないッ！」
頭を軽く切った為に血を流しているクリュウを見てエレナが悲鳴にも似た驚きの声を上げる。ルフィールとシャルルもそれを見て三人は慌てて彼に駆け寄った。
「だ、大丈夫なんすか？」
「は、早く手当てをしないと……ッ」
慌てふためく後輩二人に「大丈夫だよ」と心配を掛けないように笑顔を振る舞うクリュウだったが「かっこつけてんじゃないわよッ。さっさとこっち来なさいッ」と有無を言わせずエレナが強引に連行する。ルーデルも付き添った為、残されたのはルフィール、シャルル、エリーゼ、レンの四人。
「……同窓会でも催しましょうか？」
「あんたの冗談は笑えないのよ」
「でもまぁ、懐かしい面子っすねぇ」
ルフィール、シャルル、エリーゼは言わずと知れたクリュウの後輩であり、ドンドルマハンター養成訓練学校の学友同士。同じキャンパスで同じ時を過ごした者同士だ。特にルフィールとシャルルは同期であり、シャルルとエリーゼは同じチームを組んでいた事もある。それ以前に一方は様々な問題を起こす側、もう一方はそれを解決する側だった為、ある種の因縁じみたものがある者同士でもある。

同じ時を過ごした者同士、何だかんだで別段互いを嫌い合っている訳ではない為、昔の話や現状の話で盛り上がる。一人部外者となってしまうレンも、すでに知り合いのシャルルがルフィールに紹介してしっかり輪の中に入れてあげている。

そんな後輩達の姿を、エレナとリリアに手当てを受けながらクリュウは微笑ましげに見詰めていた。

「なぁに悟りを開いたくたばり損ないのジジィみたいな顔してんのよ」

呆れるルーデルの言葉に「相変わらず口が悪いね、ルーデルは」苦笑を浮かべるクリュウ。そんな彼に「ほら動かないで」と叱りながら頭に包帯を巻いていくエレナ。

「はい、お兄ちゃん」

笑みを浮かべながらリリアが彼に手渡したのは元気ドリンコ。即効性の高い栄養剤であり、クリュウは礼を言ってそれを一気に飲み干した。

「んなもんだけだと体壊すわよ。何か食べるでしょ？　すぐ適当なの作って来てあげるから」

そう言って彼の手当てを終えたエレナは一人調理場へと姿を消した。リリアもエリエに呼ばれて子供達の輪の中へと入っていく。すると、その場に残されたのはクリュウとルーデルの二人。ルーデルは無言で彼の隣の席に腰掛けた。

「はぁ、疲れたわぁ」

「お疲れ様」

「ほんとよぉ、私のウェイト高過ぎじゃない？」

「ご、ごめんね。頼りっきりになっちゃって……」

「……まぁ、私が役立てるよう色々と用意した結果だけどねぇ」

「ほんと、ルーデルのおかげで助かったよ。やっぱりルーデルは頼りになるね」

「……ふ、ふん。何当たり前の事言ってんのよ」

鼻を鳴らしながらそっぽを向くルーデルの横顔を見てクリュウは苦笑を浮かべた。そのままそっと彼女の手の甲に自らの手を重ねる。

驚いて振り返る彼女に向かって、クリュウは改めて「本当にありがとう」と礼を述べた。
「な、何よ改まって……」
「いや、本当にルーデルが来てくれて嬉しいよ。やっぱり君は頼りになる」
「……な、何よそれ。それって、つまり……私だから？」
見る見るうちに顔を真っ赤に染めていくルーデル。それを隠す為に手で両頬を押さえながら目を泳がせる。小声で「だ、ダメよ。フィーちゃんに何て言えばいいの……？」とつぶやく彼女に向かってクリュウは笑みを浮かべたまま頷く。
「ルーデルの狩猟笛、サクラノリコーダー改だっけ？　これのおかげで戦況はずいぶん好転した。風の鎧が無効化できたおかげでこっちも攻めやすくなった。他にもスタミナとか気絶無効とか、何より武器自体の龍属性も大きい。武器の選択としてはこれ以上打ってつけの武器はないよ」
そう言って彼が褒め称えたのは彼女の武器の選択及び、サクラノリコーダー改というまさに対鋼龍戦用とも言うべき最良の武器。ルーデルがこの武器を持って戦線に加わってくれたおかげで、後半はかなり善戦できたと思う。
彼女の横に置かれたサクラノリコーダー改を撫でながら嬉々とする彼を見て、自分がとんだ勘違いをしていた事に気づいたルーデル。先程とは違った意味で顔を真っ赤に染めると、キッと彼を睨みつけながらサクラノリコーダー改を奪い取る。
「る、ルーデル？」
「馬鹿（ヴァーンジン）ッ！」
驚くクリュウを突き飛ばし、ルーデルは怒りながら立ち去ってしまう。そんな彼女と入れ替わりでやって来たのはルフィールだ。
「……何をしでかしたんですか、先輩？」
ジト目でこちらを見ながら呆れ返る後輩の問いにクリュウは「いや、僕は別に何もしてないと思うけど……」と困惑している様子。そんな先輩の無自覚さは嫌という程痛感しているルフィールは深いた

め息を零しながら彼の隣に腰掛けた。
「まぁ、先輩らしいですよね……」
「どういう意味？」
「……別に、深い意味はありません」
　改めて、なぜ自分はこんな最高クラスに厄介な相手を好きになってしまったのか。鈍感道を極めし乙女心がまるでわからない最強の鈍感にして、尚且つ無自覚な優しさから彼を好く女子は数多い。どう考えても面倒極まりない相手だ。
「……でも、好きになっちゃったんだもん」
　ぷくぅと頬を膨らませるルフィールの横顔をクリュウは首を傾げながら見詰める。それからエリーゼやレンと楽しげに話しているシャルルの方を見やる。
「シャルル、どうやら大丈夫っぽいみたいだね」
「大した怪我ではありません。あの人の常軌を逸した治癒力があれば明日にはまたハンマーをぶん回せるようになりますよ」
「ルフィールも、怪我は大丈夫？」
「ボクは問題ありません。それよりも先輩の方こそ平気なのですか？」
「僕も平気だよ。自分でも大した怪我じゃなくてビックリだよ」
「古龍相手に一日中戦ってその程度の怪我で済むなど、奇跡としか言えませんね」
「まったくだよ」
　優しげに微笑む彼の姿を見てルフィールは頬を赤らめながら彼から視線を外す。そこへ今度はシャルルがやって来た。元気な右手を振り上げて「オっす、兄者ッ」と元気良く挨拶するシャルルに対しクリュウも「元気そうだな」と笑顔で出迎える。
「道具屋の娘っ子の薬のおかげで痛みもほとんど消えたっす」
「リリアの調合する薬は本当にすごいもんね」
　そう言いながらクリュウはエリエや他の子供達と一緒にいるリリアの方を見やる。彼の視線に気づいたリリアが元気に手を振ると、クリュウも小さく手を振って返す。そんな彼の姿を見てシャルルは一

言。
「兄者って、やっぱりロリコンなんすか？」
「どうしてそうなるッ!?」
クリュウのツッコミの声は、狭い洞窟の中に良く響いた……
エレナがサンドイッチを作って戻って来たのはそれからしばらくして。彼の分だけではなくそれ以外の者達の分もしっかり用意する所はさすがと言える。頭を冷やしたルーデルも戻って来て、エレナと六人のハンターが一同に集う。
「それで、これからどうする訳？」
レンに砂糖をたっぷり入れた紅茶を手渡したエレナの問いは、この場にいる者達全員の問いを代弁するものだった。こればっかりは外部の人間であるルフィールやエリーゼ達は何も言えない。この場には第二次避難隊の隊長、漁業組合組合長バルドの妻がいるが、実質この避難隊を守るハンター達が方針を決定する。そして、この場にいるハンター達にとって自然とその総大将となるのはクリュウだ。だから自然と、その場にいた全員の視線が彼へと集中する。
エレナの問いに対し、クリュウは紅茶を一口飲んで喉を潤わせてから自らがずっと考えていた方針を発する。
「――明日、夜明け前に第二次避難隊は村を脱出する」
それは、ある意味全員が予想していた事だった。このまま立ち去るかどうかわからないクシャルダオラを待っていては状況は悪化するばかりだ。まず備蓄の食糧にも限界があるし、人々の精神的負担も大きい。それにこちらに向かっているレヴェリの救助隊にも危険が伴ってしまう。これらを解決する為には、早々に村を放棄して脱出するのが最善の策であった。
予想済みのクリュウの判断に、誰も反対する者はいなかった。だが、次に彼が発した言葉は納得しようとしていた皆の心を大きく揺るがす事となった。
「避難隊の護衛隊長はルーデルに任せる。ルフィール、シャルル、エリーゼ、レンと共に避難隊を率いて村を脱出して――僕は村に留まって、クシャルダオラに最後まで徹底抗戦する」

クリュウの言葉に、その場にいた全員が驚愕した。誰もが避難隊を率いるのはクリュウであり、彼も含めての全員脱出を考えていたからだ。だが彼から発せられたのは自らは単独で村に残ってクシャルダオラとの戦いを継続するという、信じられないものだった。
「自殺行為ですッ！」
悲鳴にも似た声で叫んだはのはルフィールだ。クリュウ単独でクシャルダオラと戦うなど、勝ち目など全くない事を彼女は知っている。彼女だけではない、ここにいる面々は皆彼が単独で戦っている最中の窮地に駆けつけた者ばかりだ。
「何考えてるっすかッ!? バカっすか兄者はッ!?」
「……シャルルにバカって言われちゃ、おしまいだね」
笑って誤魔化すクリュウに対し「笑い事じゃないっすッ！」と怒鳴るシャルル。彼女の怒号に対してクリュウは表情を引き締める。
「冗談とかで言ってる訳じゃないよ。僕は本気だ」
「本気だからたちが悪いのよッ！ 何でそんなバカな事考えてる訳ッ!?」
幼なじみの狂気すら感じられるような決断に半狂乱になりながらエレナが問いただす。そんな彼女に対し、クリュウは落ち着きを払った声で理由を述べた。
「避難隊を無事に村から離すには、どうしてもクシャルダオラをこの村に留めておく必要がある。その為には、誰かが残って奴を挑発し続けなくちゃいけない」
「確かに、私もその考えには賛成よ。最も効率良く、且つ安全に避難を行える方法ね」
「エリーゼさんッ!?」
「――でも、それがイコールあんたが負わないといけない責務って訳じゃないでしょ？」
エリーゼの問いかけに対し「僕はこの村に生まれ育った人間だ。君達は違うでしょ？」と答える。だがそれは決して答えとして相応しいものではない。
「別に、君達が外部の人間だからって差別してる訳じゃないよ」

クリュウの説明に明らかに不満そうな表情を見せる五人。クリュウは苦笑を浮かべながら「これじゃ、ダメかな？」と問いかける。
「兄者が残るならシャルも残るっすッ！」
「そうです。先輩一人村に残して撤退するなど、看過できません」
予想通りと言うべきか、シャルルとルフィールが自らも残ると言い出す。するとレンも「私も残りますッ」と意気込み、そんな彼女の頭を小突きながら「あんたが残るんじゃ、私も残らないといけなくなるじゃない」と叱責しながらも、自らもさりげなく残ると意思表示するエリーゼ。
皆の優しさにクリュウは思わず泣きそうになったが、ここは心を鬼にして彼女達の助けを断らなければならない。そう決意した時だった。
「――それじゃ、誰も避難隊の護衛に付かないじゃない」
そう言って血気盛んになる皆を制したのはルーデルだった。皆の視線が自らの集中するのを見て、腕を組みながら言葉を続ける。
「今の私達の最大目標は、このイージス村に残っている村人を全員無事にレヴェリまで送り届ける事よ。鋼龍クシャルダオラを倒す事じゃない。だとすれば、何を最優先にすべきかは、決まっているでしょ？」
ルーデルの言う通りだ。これはクシャルダオラを討伐する為の戦いではない。村人を安全にレヴェリの地へと逃がす為の戦いだ。相手を倒すのではなく、相手を引き付ける戦い。なのに、その戦いに避難隊の護衛要員全てを投入するのでは本末転倒だ。道中はランポスなどの小型モンスターに襲われる事も想定される。非戦闘員である村人からすれば、ランポスもまた恐ろしいモンスターなのだ。
「クリュウは、村人を逃がす為に自ら囮になる道を選んだ。そして、最重要任務である避難隊の護衛をあんた達に任せるって言ってるの。この意味、こいつの事を良く知っているあんた達ならわかるわよね？」
ルーデルの問いに、誰も言葉を発する事はなかった。
だって、みんな知っているから――彼が、自分達を信頼しているか

らこそ村人の護衛を任せているという事くらい。
「……わかってます。今のボクではクシャルダオラとの戦いでは足手纏いにしかならない事くらい」
悔しげに、小さな声でつぶやくのはルフィール。拳を硬く握り締め、震わせながら語る彼女の姿は見ている身としては実に痛々しい。それでも、彼女はメガネの奥の二色の瞳を震わせながら、自らの想いを吐露する。
「だとしても、先輩一人を残す事はやっぱりできません……ッ」
危険な戦いになる。それは誰もが知っている。その戦いに、彼をたった一人残す事は、やはりどうしても納得ができなかった。それは彼女だけではなく、シャルルやレン、エリーゼだって同じ事。
心配する皆の想いを見て、クリュウは改めて「大丈夫」と言わなければと腰を浮かせた。だがそれを制して先にこう宣言する者がいた。
「安心しなさい。こいつ一人じゃないわ――私も残る」
衝撃の爆弾発言をしたのは、ルーデルだった。任せなさいとばかりに自信満々に宣言してみせる彼女の言葉に、ルフィールは「あなた、先程自分が言っていた事と今の言動、矛盾している事に気づきませんか？」と牽制する。涙を拭い、幾分か鋭くなった瞳で非難する彼女の問いに、ルーデルは首を横に振った。
「別に矛盾はしてないわ。避難隊の護衛はあなた達四人に任せる。そして私とクリュウでクシャルダオラを引き付ける。これで問題ないわよね？」
「自分勝手っすッ！　お前が残るならシャルだって残るっすッ！」
やっと護衛役を引き受ける事に納得しかかっていたシャルルが腰を浮かせて猛抗議するのも仕方がない。ルーデルが言っている事は確かに無茶苦茶だ。自分達を差し置いて、なぜ彼女がクリュウと組むのか。納得ができなかった。
だが、そんな中一人だけ冷静な者がいた。
「相変わらずあんたはバカね」
エリーゼの言葉に、シャルルがいつになく瞳を鋭くさせて振り返った。

「テメエ、何が言いたいっすか……？」
　低い声で問いかけるシャルルに対し、エリーゼは閉じていた瞳をゆっくりと開く。その視線が捉えたのは、ルーデルの背負う武器。
「この撤退作戦を確実に成功させる為には、この編成がベストだって事よ」
「ベスト？　それってどういう意味よ？」
　エレナの問いにルーデルは自らの武器、サクラノリコーダー改を叩く。
「これは奴の龍風圧を無効化できる音色を備えた、しかも奴が苦手とする龍属性の武器。私が居る限り、奴に龍風圧は纏わせない。龍風圧さえなければ、状況はかなり楽になるんじゃない？」
　そう、ルーデルの装備は対鋼龍撃滅装備。クシャルダオラに挑む事を前提とした装備だ。彼女の吹く音色はクシャルダオラの風の鎧を無効化できる。風の鎧はクリュウ達が最も苦戦していた奴の鎧。それがあるのとないのでは戦闘の難易度は大きく変化する。
「つまり、人数が必要な護衛任務には私達が。市街戦において最も重要な地の利を活かせるクリュウと、クシャルダオラに対して最良の武具を持つこの女がクシャルダオラと戦う。これが最も効率的で、ベストな編成だって言ってるのよ」
　エリーゼの言葉にルーデルはその通りと言いたげに首を縦に振った。
「この撤退作戦には、村人の命が懸かっている。失敗は許されない。だとすれば、最善の方法で挑むべき。私は、これが最善だと考えてる」
　ルーデルの言葉に、腰を浮かせて抗議していたルフィールとシャルルは静かに腰を落とした。二人共ルーデルの実力はレヴェリに居た頃に見ている。それに加えて武具の選択がクシャルダオラに対して特化しているのだとすれば、彼女が残るのは当然と言えるだろう。風の鎧に苦戦を強いられた二人だからこそ、あれの有無がどれだけ戦況を左右するかを痛感している。それを無力化できる力を彼女が持っているなら、クリュウを任せられるのは彼女しかいない。
「わかりました。先輩の事は、あなたにお任せします」

「納得はしてねぇっすけど、わかったっす」
二人は渋々といった様子でルーデルの申し出を受諾した。それを見て満足気にルーデルは頷くと、呆然と事の成り行きを見守っていたクリュウに振り返る。
「という訳で、あんたと私の二人でクシャルダオラに殴り込みよ。いいわね？」
「……いいの？」
彼女に決意を知って、クリュウとしては断れなかった。むしろ彼女が居てくれる方がクシャルダオラとの戦いは確実に好転する。だとしても、危険な戦いに彼女を巻き込む事になる。その決意があるか、クリュウはそう尋ねていた。だがそれに対するルーデルの答えは、もう決まっていた。
「あんたはこれまでずっと、私の唯一無二の親友を守ってくれてきた――今度は私があんたを守ってやるわよ」
そう言ってルーデルはニッコリと頼もしい笑みを浮かべた。その言葉と笑みだけで彼女の強い決意を悟ったクリュウはそれ以上何も言う事はなかった。
「じゃあ、避難隊の護衛は私達でやるわよ。人数は揃ってるけど、いずれも護衛任務には適さない武器だから、陣形（フォーメーション）を考えないと……」
早速エリーゼがルフィール達と共に作戦会議を始める。彼女の言う通り、彼女達は決して護衛任務に適した編成ではない。エリーゼのガンランスは機動力に欠け、シャルルのハンマーは一撃必殺系の武器の為に対多戦闘には適さず、残る二人は接近戦を不得手とするガンナー。だからこそ陣形（フォーメーション）が、ひいては事前の打ち合わせが重要となる。
まだ言いたい事はあるようだったが、ルフィールとシャルルも事の重要性は重々承知しているようで、渋々といった具合でエリーゼやレンと共に作戦会議に参加する。残されたのはクリュウ、ルーデル、そしてエレナの三人だ。
「ったく、あんたは本当に無茶ばっかりするわね……」

そう言いながらため息を零すエレナに、クリュウは苦笑を浮かべながら「呆れてる？」と尋ねる。
「今更呆れないわよ。そんなの、とっくの昔に通り過ぎてる。私はもう、何も言わないわ。どうせ幼なじみの私が何を言ったって、決意は変わんないんでしょ？」
「……さすがエレナ、何でもお見通しだね」
「何年の付き合いだと思ってんのよ。だから、私はあんたを止めたりしない。あんたがいつも、誰かの為に一生懸命だって事知ってるから。止めたりなんかしないわ――ただ」
そこで一度言葉を切ると、エレナは顔を伏せた。そして改めてその顔を上げた時、その表情は真剣なものに変わっていた。心の底から切に願う、そんなどこか必死にも見える、そんな表情。
「――絶対、死ぬんじゃないわよ」
エレナのいつになく真剣な言葉に対し、クリュウは優しく微笑みながら「心配してくれてありがと。でも大丈夫、僕は死なないよ」と答えた。それを聞いてエレナは安堵のため息を零した。
「大丈夫？　今のやりとり、何だか死亡フラグっぽいけど？」
そんな二人のやりとりを見ていたルーデルはからかうような言い方で二人の間に入って来た。ニヤニヤと笑いながら迫るルーデルに対し「縁起でもない事言わないでよ」とクリュウは苦笑を浮かべる。
「まぁ、私が居る限りあんたは死なせないわよ。悪魔のサイレンの二つ名をナメてもらっちゃ困るわ」
「その二つ名だと、頼りになるんだかならないんだかわかんないね」
「誰が付けたか知らないけど、失礼しちゃうわ」
「的確な二つ名だと思うけど……」
「女の子につけるもんじゃないでしょ？」
先程まで命懸けの死闘を繰り広げていたとは思えない程、今この瞬間だけはゆったりとした時間が流れている。先程から外が騒がしい気配もないところを見ると、どうやら最後の爆破はどうやらうまくいったようだ。
最後の作戦が成功した事でようやく本格的に気が緩んだクリュウ。

ため息と共に全身に張り詰めていた力を抜くと、その場でぐったりとなってしまう。
「つ、疲れたぁ……」
短くも、その言葉に彼の奮闘の全てが込められているかのような言葉。そんな彼の姿を見てエレナは小さく笑みを浮かべながら「お疲れ様」と優しく労いの言葉を掛ける。
「まだ勝った訳じゃないけどね。明日も戦いは続くんだから」
「それでも、あんたは今日一日、この村の為に戦った。だから、お疲れ様」
「……失ったものも多いけどね」
そう言って苦笑を浮かべる彼の瞳は疲労とはまた違うもので濁っていた。それが何であるかなど、戦いを見ていなくてもエレナにだってわかる。あれだけ戦音が激しい戦闘だ。村が完全に無事という事はないだろう。肉体的にも、精神的にも今回の戦いは彼の負担は大きい。
「そういえば、あの三人は今頃どうしてるのかしら」
傷つく彼の姿を見ていられなくて、反射的に話題を変えるエレナ。話題はイルファ山脈でクシャルダオラに振り切られてしまい、現状行方不明となっているフィーリア、サクラ、シルフィードの安否に関するものだった。
「たぶん、大急ぎで村に大返ししてる所だと思うよ。みんな、無事ならいいんだけど」
「あの三人なら大丈夫よ。あの三人はあれでもこの村が誇る屈指の猛者達なんだから。古龍相手でも遅れを取るような連中じゃないわ」
「そうだよね。みんな、強いから」
まるで自分の事のように嬉しそうに語る彼を見て、本当に人の為に笑える屈指のお人好しなのだとエレナは改めて彼の優しさに胸が熱くなった。自分の身を顧みない所は問題だが、誰かの為に自分の事のように一生懸命になれる所は、彼の何にも勝る良い所だ。
「まぁ、フィーちゃんやあの二人が居れば私なんて駆けつける必要もなかったでしょうけど」

自分以外の女の子の話を楽しそうにするクリュウを見て思わず不貞腐れるルーデル。そんな彼女の言葉にクリュウは「そんな事ないよ。ルーデルが来てくれなかったら、未だに風の鎧を突破できず、一方的にこっちが負けてたよ。ほんと、君が来てくれて感謝してる」と彼女を気遣う。
「な、何よ。小っ恥ずかしい事、面と向かって言わないでよね」
鼻を鳴らしてそっぽを向くルーデルだが、その頬は赤く紅潮し、その口元は嬉しさに柔らかな笑みを浮かべている事を彼は知らない。
「聞き捨てなりませんね」
背後からの声に驚いて振り返ると、そこにはジト目で仁王立ちするルフィールの姿があった。その隣では「シャルだってがんばったっすよッ！」とシャルルも抗議の声を上げる。
「二人共、護衛の作戦会議は？」
「作戦なんて小難しい事は頭でっかちなエリーゼ担当っすよ。シャルは言われた通りに動くだけなんで関係ないっす」
「……とまぁ、シャルルさんがこんな具合なのでボクもこの人に合わせて動けば問題ありません」
どうやら作戦会議は早々に切り上げてこちらに来てしまったらしい。二人の背後ではレンと二人で真剣に護衛に関する作戦を練っているエリーゼの姿が。何だか気の毒だが、この二人は良くも悪くも型にはまらないタイプなので、結局は自由に動いてしまうだろう。
「そんな事より、兄者がやけにこの笛女の肩を持つっすねぇ」
嫌味っぽく言うシャルルの言葉に「別にそんなつもりはないよ」とクリュウは戸惑いながら返す。なぜシャルルが不機嫌なのか疑問に思っている様子。そんな彼に追い打ちを掛けるように今度はルフィールが不満な声を漏らす。
「確かに装備及び実力ではボク達はあの方には大きく劣るでしょう。ですが、学生時代を共に過ごしたボク達を差し置いて、ぽっと出の新参者ばかり贔屓するのは納得いきません」
相変わらずルフィールの言葉は容赦がなく、そしてトゲがある。だがこんな言い方をすれば彼女に負けず劣らず気が強い彼女は当然反

応する訳で……
「新参者とは、ずいぶんな言われようね。学生時代の後輩だかなんだか知らないけど、ケンカを売りたいってなら喜んで買うわよ？」
結果、ルーデル対ルフィール・シャルルで激しく睨み合う事になってしまう。そんな両陣営の間で慌てるクリュウに対し、今度はエレナがそんな彼を小突く。
「な、何だよエレナ」
「知らない」
フン、とそっぽを向くエレナ。何を言っても振り返る様子はなく、クリュウの混乱は増すばかりだ。
そうこうしているうちに、ルーデルとルフィール・シャルルの言い争いは激化。元々直情的なルーデルとシャルルが掴み合いのケンカにまで発展し、さすがのエレナも慌てて止めに入る。クリュウも二人のケンカを止めようと下ろしていた腰を浮かせた時だった。
「ほぉら、あんたらその辺にしときぃな。疲れてる怪我人のクリュウ君にあんまり無理させんの」
そう言って二人の間に入ったのはアシュアだった。二人からすれば接点のないほとんど他人のような人物の仲裁など耳を貸す事はなかったが、クリュウに負担を強いる事になると気づくとすごすごと争いをやめてしまった。
気まずそうに違いに背を向けて無言を貫く二人を見てルフィールとエレナがため息を零す。そんな少女達を見て「青春やなぁ」とアシュアも苦笑を浮かべた。
「あの、何かすみません」
「ええって。まぁあんた達が賑やかやと、みんなも暗くならんで済むけど、あんまり騒がれるとなぁ。寝てる小ちゃい子もおすし、程々になぁ」
時刻は決して遅い訳ではないが、田舎にある村の寝静まりは早い。更にそこに済む子供になるとその就寝時間は更に早くなる。村が窮地だとしても、子供は迫る睡魔に抗う必要はないのだ。
「それとあんたら、後で一人ひとりウチの所においでぇな。道具は少

ないけど、バッチシ整備くらいはしたる。どっちの役目も、万全の準備で挑まんとなぁ」
そう言ってアシュアはにっこりと微笑んだ。彼女が鍛冶師だという事は皆知っている為、それぞれが礼を言って彼女の提案を快く受け入れた。
アシュアが入った事で皆冷静さを取り戻し、以後は楽しげな雑談に変わる。特にこの場にいる者達は元々は別の場所から集まった者同士。違いの近況を話すだけでも、あっという間の時間が流れていった。そして、
「……先輩？」
いつの間にか、クリュウが岩壁に腰掛けた状態で眠ってしまっていた。一日中、ずっと鋼龍クシャルダオラと激戦を繰り広げた彼の疲労は表にこそ出さなかったものの相当溜まっていたようだ。皆を心配させまいと無理をしていた彼の優しさを見て、改めて恋姫達は彼の優しさに惚れなおすのであった。
クリュウを横にすると、それぞれも眠りに入っていく。皆、この異常事態に疲れ果てていたのだ。
一人、またひとりと寝静まる中、最後まで残っていたのはエレナだった。
皆ぐっすりと眠っている寝顔を見て、エレナは小さな笑みを浮かべていた。そして、隣ですやすやと眠るクリュウへと視線を送る。
「……ほんと、昔からあんたは無理ばっかりして」
子供の頃は自分の方が身長だって高かったし、女だてらに山の中を走り回っていた。周りの同世代の子達からは『山猿』『オトコ女』などと揶揄された事もあった。別に嫌われていた訳ではないし、悪口のつもりで言っていた訳ではない。その証拠に今ではそういった事を言っていた者達とは仲良くやってるし、現に女友達の数名も今この中にいる。
そんな子供時代、弱虫で泣き虫で、ドジだった幼なじみのクリュウを引っ張りまわしていた自分。自分の方がお姉さんだと思い込み、情けない弟を守っている気になっていた。

でもいつだったか、山の中で迷子になった挙句に自分が足を挫いて動けなくなってしまった時。クリュウは自分の事を背負って、疲労困憊になりながらも何とか村へと連れ帰ってくれた。以後、自分が窮地に陥った時はいつも彼が自分を助けてくれた。

いつもは弱々しいクセに、いざとなったらかっこいい彼の姿に、いつからドキドキするようになったのか。いつから、自分は彼の言動や行動一つで感情の振り幅が大きく揺れ動くようになったのか。

詳しい事は、もう覚えていない。でも――気づいたら、好きになっていたのだ。

あれから十年。彼はまたしても自分達の為に、身を削りながら必死にこの場にいる全員のおそらく人生最大の窮地に挑もうとしている。ハンターではない自分は彼と一緒に戦う事などできず、ただただ彼に守られるだけ。いつの間にか、身長も立場もすっかり逆転してしまっていた。

いつも無理して、自分がボロボロになりながらも笑って奮闘する彼。こっちはいつもいつも心配させられたし、何度胸の痛みに耐えた事か。それでも、自分のこの痛み以上の辛さを耐えている彼の姿を見ていたから、自分はただただ彼を信じて、彼の帰りを待ち続けた。

疲れて帰って来る彼に食べてもらおうと、彼から料理を学んだ。今では教えを請うた彼よりも自分の方が料理の腕が上がり、今では酒場を経営できるまでになった。でも根本は変わっていない。おいしい料理を作るのは、いつも彼の為だった。

本当は彼の傍にいたいし、彼の隣にずっと居たい。でも彼と自分では目指す道が違っている為に、この場にいる他の娘達のように、彼と一緒に戦う事はできない。明日、自分はこの村を脱出する。命懸けの戦いに挑もうとする、彼を置いて。

こういう時、何もできない自分が嫌で仕方がなかった。幼なじみとして、好きな男の子に対して、自分ができる事が何もない。これほど辛い事は、きっとないだろう。

「クリュウ……」

眠る彼へとそっと近づく。

自分にできる事は、確かに実質何もないに等しい。でもだからこそ、これまでと同じように自分には自分にしかできない役目を果たすのだ。
彼の無事を信じて、ひたすらに祈り続ける。そして、ボロボロになって帰って来る彼の事を抱き締め、腕をふるった最高の料理で彼を出迎える。それが、自分のできる事。幼なじみとして、好きな男の子に対して、自分がこれまでして来た事。そしてこれからもし続ける事。
だから、私は祈り続ける……
そっと、彼の擦り傷だらけの頬に、自らの唇を当てる。初めて触れた彼の頬の柔らかさと熱に自らの体が火照るのを感じる。きっと今の自分は、シモフリトマトのように真っ赤になっているだろう。
名残惜しいが、ゆっくりと唇を離す。
まだ熱を持つ唇を押さえながら、今の感触、熱をしっかりと胸に刻み込む。そして、明日決戦に挑もうとする彼に向かって、そっとつぶやくのだ。
「――死ぬんじゃないわよ、バカクリュウ」
翌朝、まだ夜も明け切らぬ早朝。第二次避難隊の総勢一〇〇名が動き出した。皆、恐れながら避難壕から次々と姿を現す。誰もがクシャルダオラの奇襲を恐れていたが、そのような兆しはなかった。だがいつまでも安全とは言えない。人々は息を殺しながら崖の下へと集結する。
バルドの妻が率いて、第二次避難隊はゆっくりとした足取りで村を離れていく。そんな彼らを、クリュウとルーデルは笑顔で見送った。皆、二人の安全を心から願いながら、後ろ髪を引かれる想いで村を離れていく。
そして、そんな彼らを護衛する四人の狩人もまた、村に残って最後の奮戦を遂げようとする二人との別れの挨拶に集まった。
「それじゃ、みんなの事を頼んだよ」
そう言って、愛する家族の安全を託すクリュウの言葉に、シャルルは大きく頷いた。

「任せるっす。誰一人、傷つける事なく、必ずレヴェリに連れて行くっすよ」
　自信満々に言い放つシャルルは、元気いっぱいだ。まだ本調子とは言えないものの、彼女なりに彼の期待に応えようと必死なのだろう。無理をする親友の笑顔を横目に、ルフィールも続く。
「安全なルートを選定し、可能な限りモンスターとの交戦は控えるつもりです。それでももし戦となったとしても、必ずや人々を守り抜くと誓います。ボクの文武全てを駆使して、必ずやお守りいたします」
「期待、してるよ」
　クリュウの言葉に、二人はゆっくりと頷いた。そしてクリュウは次にそんな二人の姿を微笑ましげに見詰めていたレンとエリーゼに視線を向ける。
「二人もどうかお願いね」
「任せてくださいッ。私、がんばっちゃいますッ」
　両拳を握り締めて、決意に満ちた表情で言うレン。そんな彼女の頭、レザーライトヘルムをエリーゼは小突く。
「声が大きいわよバカ」
「す、すみませぇん……」
　しょんぼりと落ち込むレンを横目にエリーゼは一歩前に出た。ルフィールやシャルル、自分やレンと同様にアシュアに整備された万全の武具を纏ったクリュウとルーデルに対し、エリーゼはゆっくりと口を開く。
「こっちは安心しなさい。一癖も二癖もある連中だけど、実力は確か。それはあんたが一番良く知ってるでしょ？　絶対、レヴェリに無事に送り届けてみせる」
「ごめんね、部外者の君達にこんな大変な役目を任せちゃって」
「部外者なんて……ッ！」
　心外だとばかりに声を上げるレンを制止し、エリーゼは表情を崩す事なく真剣な眼差しで彼を見詰めながら「次そんな事言ったら、こいつらに代わって私があんらを蹴手繰り倒すわよ」と怒気を秘めた声で言い放つ。

「……みんな危険を承知でこの村に集まって来た。それは誰の為だと思ってんのよ。そんな連中を、二度と部外者なんて呼ぶんじゃないわよ」
「ご、ごめん……」
　自分が言葉を誤った事に気づいたクリュウが慌てて謝ると、エリーゼは苦笑を浮かべる。
「まぁ、こっちは任せておきなさい。それよりもあんた達の方こそ、無理すんじゃないわよ。殿を任せた奴らに死なれたら、こっちも目覚めが悪いからね」
「大丈夫。こっちだって死ぬつもりはないよ。ね？　ルーデル」
「当たり前でしょ。私はフィーちゃんの腕の中で死ぬって決めてんのよ。こんなクソ田舎で野垂れ死ぬつもりはさらさらないわ」
　何を当然の事をと言いたげに言い張るルーデルの言葉にエリーゼとクリュウは同時に苦笑を浮かべた。そんな彼にルフィールが近づく。
「先輩。これをどうか」
　そう言って彼女が手渡したのは何かのお守りのようなものだった。クリュウは「これは？」と尋ねると、ルフィールは淡々と答える。
「これは守りの護符です。持っているだけで如何なる厄災をも打ち払うと言われている護符です」
「ちょっとそれ、死の淵から奇跡的に戻って来たと言われてるハンター達皆が持っていたって言われてる伝説の護符じゃないッ！」
　驚くルーデルの言葉に、クリュウがこの護符がとてつもないご利益がある事を悟った。
「これってそんなにすごい物なの？」
「別名【死亡旗粉砕（フラグクラッシャー）】なんて呼ばれてる由緒正しきご利益のある伝説の神社でしか得られない護符ね。「俺、このクエストが終わったら、結婚するんだ」とか言って古龍に挑んだハンターが見事討伐して帰って来た際に持っていた、なんて言われてるわね。たまに行商人とかギルドストアなんかで売られてる事もあるけど、その場合は中間マージンなんかがすごいから、とんでもない高額

な品物になってるわ」
　ルーデル同様にたまげたとばかりに驚きながら守りの護符を見詰めるエリーゼ。そんな彼女の言葉に「大した事ありません。たかだか２万４０００ｚ程です」
「にま……ッ！」
　それがすさまじい金額だという事は、この場にいる全員がよく知っている。それこそ古龍級のモンスターを数頭討伐してやっと手に入るような金額だ。一介の下位ハンターが早々集められるような金額ではない。
「そんな高額な物、受け取れないよ」
「これは先輩にプレゼントする為に、節約に節約を重ねてようやく手に入った代物です。受け取っていただかねば困ります」
「いや、でも……」
「兄者、どうか受け取ってほしいっす」
　そう言ってルフィールの手から守りの護符を取ったシャルルは、それをクリュウに押し付けた。反射的に受け取ってしまうクリュウに対し、シャルルはニコリと微笑む。
「こいつ、本当にそれを買う為にがんばったっす。食事も切り詰めて、回復薬やビン、閃光玉なんかも全部狩場で採取した素材を調合して極力道具屋から物を買わずに、何ヶ月も掛けて溜めたお金でようやく買った代物っす。ただひたすらに、兄者にプレゼントする為に」
　シャルルの言葉に、クリュウは守りの護符を持ちながら胸の奥が熱くなるのを感じた。このお守りのご利益で体の底から力が沸き上がっているのか――そうかもしれないが、きっとこれは可愛い後輩の想いが嬉しくて仕方がないのだろう。
「シャルルさん。なぜあなたがおいしい所を持って行くのですか」
「ニャハハハ、めんごめんごっす」
　一番の見せ場を取られた事に憤慨するルフィールの怒りに引きつった笑みを浮かべながらシャルルは引いていく。口調こそ平静を装っているが、こちらからは見えぬ彼女の表情は相当ご立腹なのだろう。

「ありがと、ルフィール。これ、大切にするよ」
　クリュウは笑顔でお礼を言って、後輩から貰った守りの護符を防具の中にしまい込む。クリュウにお礼を言われたルフィールは頬を赤らめながら「是非、大切にしてください」と言って微笑んだ。
「さぁて、そろそろ行くわよ。夜明け前に村から離れないと」
　エリーゼの言葉に、別れの時が来た事を皆が感じ取った。クリュフはルフィール、シャルル、レン、エリーゼの順に握手をすると「気をつけて」と言葉を掛ける。
「あんたもね。ほらバカ共、さっさと行くわよ」
「ば、バカって、ひどいですぅッ」
「心外ですね。ボクとリフレインは決してバカではありません」
「ちょっと待てっすッ。それじゃシャルだけバカみたいじゃないっすかッ！」
「……え？」
「なぁに《違うのですか？》みたいな顔してるっすかテメェッ！」
　別れ際だというのに、相変わらずな後輩達の姿に思わず笑みが零れるクリュウ。その時、そんな彼の前に立ち塞がる者がいた。皆が驚く中、その者は閉じていた瞳をゆっくりと開く。
「必ず、私の所に戻って来なさい。そしたら――最高の手料理であんたを迎えてあげるわ。ありがたく思いなさいよね」
　目の縁に薄っすらを涙を浮かべながらも笑顔で言う彼女の姿にクリュウは胸の底が熱くなるのを感じた。だからこそ、彼もまた笑顔で応えた。
「それは楽しみだね――絶対、帰るから」
「約束よ」
「約束だ」
　必ず再会する。そんな誓いを結ぶ幼なじみ二人。今までも、そしてこれからも変わらない、絶対の約束。
　例えこの戦いがこれまでとは比べ物にならない程に危険なものだとしても、決して変わる事はない。
　――生きて帰る。それは、どんな達成目標よりも優先すべき事柄だ

から。
　これまでもずっと、こうして来た二人の絆。それを見守っていたルフィール達は微笑ましくも、何だかちょっぴり羨ましい。共に戦うのも愛の形だとすれば、彼を信じて待ち続ける事もまた愛の形なのだろう。
「それでは先輩。どうかご無事で」
「レヴェリでまた会うっすッ！　絶対っすよッ！」
「お兄さん、がんばってくださいッ」
「じゃあね。ほら、みんな待ってるからさっさと行くわよ」
「行ってらっしゃい、バカクリュウ」
「うん。また、後でね」
　別れを惜しみながらも、五人は手を振りながら歩いて行く。その先には自分達を待っている大勢の人達が。ルフィール、シャルル、レン、エリーゼにとっては絶対に守り抜くと決めた者達。エレナにとっても絶対に失いたくない家族達だ。
　五人と合流を果たした第二次避難隊は、クリュウとルーデルに別れの言葉を告げながら村を後にした。その姿が森の向こうに消えるまで、互いに手を振り続ける。
　そして、その姿が見えなくなると、クリュウはそっと手を下ろした。そんな彼の背中に、ルーデルは優しく声を掛ける。
「それじゃ、私達も行きましょうか――鋼の王の下へ」
「……そうだね。ルーデル、僕の命、君に預けたよ」
　クリュウの言葉にルーデルは一瞬驚いたが、すぐにいつもの不敵ながらも頼もしい笑みを浮かべる。
「それじゃ、私の命はあんたに託したわ。これで、お互い勝手に死ねなくなったわね」
「そうだね……まぁ、死ぬつもりなんて毛頭ないけどね」
「当たり前でしょ。なぁに当然の事言ってんのよ」
　笑い飛ばすルーデルだったが、すぐにその表情は真剣なものに変わる。そんな彼女の横顔を、薄っすらと明るくなり始めた空の明かりが優しく照らし上げる。

「この戦いに勝利なんてないわ。私達の役目は、あの人達が避難を終える為の時間稼ぎ。明確な勝利条件なんて、そもそも存在しない」
「それで十分だよ。別に僕達は奴に勝とうなんて思ってないし、そんな事無理なのは重々承知してる。認めざるをえないってのは、情けないけどね」
「……そうね。でも、それが古龍って存在なのよ。今の私達にできる最善、それを尽くす他ないわ」
「ルーデル。厳しい戦いになると思う。でも改めて言わしてほしい――よろしく頼むよ」
そう言ってクリュウはそっと手を差し伸べた。差し出された彼の腕に対するルーデルの対応、返答はとっくに決まっていた。
「不束者だけど、まぁよろしく頼むわ。二人の初めての共同作業――パァッと一発派手にいきましょう」
握り締めた彼の手は、優しく、そして温かかった……
夜が明ける。陽が海の向こうから姿を現し、温かな日差しが大地に降り注ぐ。その光は氷点下まで下がっていた為に空気中の水分が地面や物に付いた後に凍りついてできた霜をゆっくりと溶かしていく。
折りたたんだ自らの鋼の翼にも、薄っすらと霜が降りている。陽の光でそれらが溶けていくのと同時に、その熱が鋼の体を少しずつ温めていく。
――だがどうやら、ゆっくりと日に当たっている暇はないらしい。
気配でとっくに気づいている。視線を向ければ、昨日自分と激闘を繰り広げた者達がこちらに向かって歩いて来るのが見えた。数は少なくなったたった二人だが、見間違う事はない。昨日と同じ敵だ。
体の疲れや傷は少しは癒えたが、それでも一晩では全快とは言い難い。それでも、戦うだけの力は回復している。だとすれば、いつまでも座っているのは小賢しい敵に対して失礼極まりない。
ゆっくりと身を震わせながら、四本の脚で体を起こす。体表にこびりついていた霜がパリパリという音を立てて剥がれ落ちていく。翼を勢い良く広げると、それらは空気中へと浮かび上がり、ゆっくりと降りてくる。朝日を浴びて煌めくそれは、何とも幻想的な光景だ。

敵もすでに準備は完了しているのだろう。二人共武器を手に、こちらに近づいて来る。自らも武器を、そして防具を用意する。風を呼び起こし、全身に纏う。荒れ狂う風は昨日と同じく勢い良く、これからの戦いを喜んでいるかのようだ。
昔戦った相手とは違うが、それでも面白い敵だ。どうやら自分は、まだまだこの者達との――この少年との戦いを楽しみたいらしい。我ながら、面白い感情を抱いたものだ。だが、悪い気はしない。
「おはようクシャルダオラ。悪いけど、今日こそこの村から出て行ってもらうよ」
何を言っているかはわからないが、戦いの前の挨拶のつもりなのだろう。ならばこちらも礼儀で返すのみ。
「グオオオオオオオオオッ！」
天高く咆えて返す。空気が震え、辺りの木々が微かに揺れる。これは今日こそ貴様らに勝つという、我ながらの勝利宣言だ。
「朝っぱらからうっさいわねぇ。やる気満々だって言うなら、さっさと掛かって来なさいよ」
女の方が何かを言っているが、下等な敵の言葉など理解はできない。それでも、それが挑発だという事くらいはわかった。
ならば、その挑発に乗ってやろう。これもまた一興、面白い。
「グオオオオオオオオオオッ！」
雄叫びを上げ、敵に向かって突撃する。敵もまた勇ましい声を上げながら突っ込んで来る。
そして、剣と笛と爪がぶつかる――戦いの火蓋が、再び切って落とされた……

第２２１話　それぞれの決意を胸に懐きて　二人の激闘の果てに

「クリュウ……」

重い足取りでの歩みを止めたのは茶髪の長い髪を纏った少女。翡翠色の瞳を不安げに揺らしながら少女――エレナ・フェルノは自らが進んで来た道を振り返る。周りを進む人々はそんな彼女の行動を不審そうに見るが、誰も声を掛けたりはしない。彼女の気持ちを知っているからこそ、誰もが彼女をそっとしておこうと胸に決めているのだ。自分達のこの歩みは敗走でしかなく、一人の少年と一人の少女の奮闘の上に成り立っているから。

遠くを見れば、村のある切り立った崖が見える。時折遠くから響く爆音はきっと、二人の激闘を物語る戦音なのだろう。あの切り立った崖の上、村の中でクリュウと駆けつけてくれたルーデルが戦っている。圧倒的な力を駆使して近づく者全てを薙ぎ払う、古の龍王――風翔龍クシャルダオラと。

「そんな所に突っ立ってると、みんなの迷惑っすよ」

背後から掛けられた声に振り返ると、そこには健康的な犬歯を煌めかせながら笑う子犬が立っていた。否、まるで子犬の尻尾のように二本のツインテールを揺らす元気娘――シャルル・ルクレールだ。

「シャルル……」

「まぁ、兄者の事が気になるのはシャルも同じっす。本当は、すぐにでも駆け戻って、兄者の助けになりたいっすよねぇ――でも、今のシャルは足手纏っすから」

ニャハハハ、と元気なくから笑いを浮かべる彼女は今は来た時と同様に全身をコンガやババコンガの素材で作られた鎧と言うには軽装だが、その分機動力に特化したコンガシリーズを纏っている。左腕はまだ治りきっていない怪我を庇うように包帯が巻かれている。

「今のシャルの役目は、ここに居る兄者の家族を無事にレヴェリって所まで送り届ける事。必死になって戦ってる兄者が安心できるよう

に」
「……あんた、見かけに寄らず強いのね」
「見かけに寄らずってのは余計っす。シャルは最強っすよ」
拳を握り締め、元気満々に答えるシャルルの姿にエレナも小さく笑みを浮かべる。
そんな二人の様子を、少し離れた場所から見詰める少女がいた。二色の瞳を持った、全身をまるで物語の中の妖精のような出で立ち、パピメルシリーズを纏った弓兵――ルフィール・ケーニッヒ。
「……先輩」
先程のエレナと同じように、もうずっと後ろに見える崖の上で奮闘しているであろう彼を想ってその崖を見詰める。シャルル同様、本当はすぐにでも駆け戻って助けになりたい。でも、今の自分の力では彼の手助けはできない。自分はまだ、風翔龍クシャルダオラを相手にできるような実力は、ないのだから。
「何辛気くさい顔してんのよ」
そう言って彼女の頬を小突いたのは、全身を岩を削りだして作ったかのような灰色の石鎧を纏った、勝ち気な桃色の瞳と同色の髪をツインテールに纏めた少女。この第二次避難隊の護衛隊隊長――エリーゼ・フォートレス。
「別に、そのような顔はしていません」
「してたわよ。ったく、揃いも揃ってあのバカのどこがいいんだか」
全くもって理解できないと言いたげに呆れる彼女の口ぶりにルフィールはムッとなる。自分をバカにされるのは構わないが、大好きな先輩であるクリュウをバカにされる事は絶対に許せない。反論しようと口を開いた時、そんな彼女よりも先に怒る者がいた。
「お兄さんはバカじゃありませんッ」
拳を握り締め、必死に抗議するのは全身を世にも珍しい青色の怪鳥イャンクックの素材から剥ぎ取ったクックDシリーズを纏った小柄な少女。なぜか頭だけレザーライトヘルムを被っており、その下から見える紺色のセミロングの髪を揺らしながら、紺色の瞳に静かな怒りの炎を燃やしてエリーゼを見詰める。エリーゼにとって唯一無二の

親友にして妹――レン・リフレインだ。
「な、何よ急に。何怒ってんのよ、バカレン」
妹の突然の抵抗に多少おののいたエリーゼだったが、すぐに姉の威厳を復活。ムスッとするレンの両頬を引っ張って「私に向かって歯向かうなんて、ずいぶん生意気になったじゃない」と不敵な笑みを浮かべる。
「ひょ、ひょへんははいぃ～ッ」
さっきまでの凛々しい瞳はどこへやら。クリッとした瞳の縁にたっぷりの涙を浮かべながら謝罪するレン。そんな二人の姉妹漫才（？）を前にルフィールは小さくため息を零した。
「――あいつさ、昔から人の為にがんばり過ぎる事があるのよね」
遠くに見える村の姿を見詰めながら、エレナはぽつりと呟いた。その言葉に、他の四人の少女の視線が彼女に集中する。それに気づいているのか、それとも気づいていないのか。誰に語るでもなく、ただ思い出したようにエレナは言葉を紡ぐ。
「いつも誰かの為に自分を犠牲にして、自分がどんなに辛くても人の為にがんばっちゃう。お人好しなあいつらしい一面だけど、同時にそれは心配する身からすればいつもヒヤヒヤさせられてたわ」
子供の頃から変わっていない。底抜けのお人好しの彼の行動原理。誰かの為に自分がどんなに辛い事でもがんばってしまう。自分の事が優先順位にまるで入っていない、真のお人好し。でもそれは同時に自らの事を顧みない愚か者でもある。
少なからず彼と一緒に過ごした時を持つ他の四人も、彼のそんな一面を知っている。全くもってその通りだとばかりにうなずく四人。
「……でも、その底抜けの優しさが、ボクを救ってくれました」
そう言って小さく微笑むのはルフィール。煌めく二色の瞳は本当にきれいな色をしている。だが人々は何の説得力もない伝説に彼女を重ね、その瞳を忌み嫌い、彼女を虐げていた。誰も信じられず、孤立無援の道を進んでいた彼女を救い出し、少なくも信頼できる仲間を作ってくれたのは、その彼だ。
「シャルだって、兄者の優しさ、大好きっすよ」

初めて彼と出会ったのは、自分がまだ一年生の頃。同い年の女のクラスメイトをいじめられ、頭に来て上級生の男達に殴りかかった時の事だった。彼はそこに現れて自分の拳を止めると「女の子が暴力振るっちゃダメだよ」と言って男達の前に立った。かっこ良く登場したものの、まぁお世辞にもケンカが強い訳じゃないのは見た目通り。結局は教官達が駆けつけて終わり。ほぼ一方的にやられただけの彼はボロボロの顔で笑いながら自らより先に自分とそのいじめられていた女の子を気遣ってくれた。彼が三年生の時の事だった。

その後、自分が二年生となり彼が四年生となった際に同じクラスとなり、そこから本格的に交流がスタートした。以後も、彼のお人好しをこの目で何度も見て来た。

「すごい人ですよね、お兄さんは」

レンも以前のアルザス村でのガノトトスの戦いの中で何度もクリュウに助けられた。その中には彼自身が大怪我を負うかもしれないリスクがあるものだってあった。それでも彼は恐れる事なく自分を助けてくれた。自分だけではない。シャルルやエリーゼに対しても。彼は本当に誰かの為にがんばれる人なのだ。

「でもそれって、身を滅ぼす生き方でもあるわよね」

エリーゼはその例を知っている。彼の卒業が掛かった卒業試験での出来事を。突如現れたドスファンゴの突進からルフィールを庇って彼は背中に大怪我を負った。幸い何とか一命は取り留めたものの、一歩間違えれば命を失っていたかもしれない行動だ。誰かの為に自分を犠牲にできる。考え方自体は素晴らしいかもしれないが、それは自らをあまりにも軽視した危険思想でもある。

「あいつはほんとバカだから、自分の事を全然考えないのよね。私も何度も指摘したし、何度も胸が潰れるかと思うくらい心配した事もあった。でも、ずっと一緒だったからわかる。あれは本当に死んでも直らないって」

苦笑しながら言う彼女の言葉に、四人も同意見だとばかりに頷いた。

「だからね――」

そこで言葉を切って、エレナはゆっくりと振り返る。朝日をバックに、その茶色の美しい髪を揺らせながら振り返る彼女の姿はあまりにも可憐で、美しく、女の身でありながら四人は思わず見惚れてしまう。
「もちろん今だって胸が潰れるくらいあいつの事を心配してる。あのバカ、本当に何をしでかすかわからないから。心配するなって方が無理な話。でもね――」
淡い朝の光に照らされながら、決意を秘めた恋する乙女は静かに微笑む。
「私は決めたのよ。あいつを信じて、待つって。それが――幼なじみとしての、私の役目だから」
唸り声と共に放たれた風ブレスは、地面を抉りながら大地を駆け抜ける竜巻と化してルーデルに襲い掛かる。スタミナ強化の演奏中だったルーデルは慌ててこれを避けようとするが、一瞬遅く直撃は避けるも圧倒的な質量の風の余波を受けて吹き飛ばされてしまう。着地は何とか受け身を取った為にあまりダメージはないが、立ち上がったルーデルの表情にはもはや余裕はない。
「掠ってこの威力って、無茶苦茶じゃない……ッ」
歯軋りしながら上空に悠然と佇むクシャルダオラを睨みつけるルーデルの出で立ちは、これまでの激戦を物語るかのようにボロボロとなっていた。ハイメタ〇シリーズの至る所が変形したりヒビ割れており、耐久度の限界が近い事を表している。
本来、彼女程の実力があればもっといい防具も用意できた。しかしこの装備にもちゃんと意味がある。装飾品を限界まで詰め込んだこの装備は精霊の加護に加え、属性攻撃強化、回避性能＋1、笛吹き名人といった優れたスキルが多く発動している。特に属性攻撃強化は龍属性の威力を上げるし、笛吹き名人は演奏を強化してくれる。防御力を捨て、攻撃特化したこの防具は彼女の性格を見事に表わしていると言えよう。回避性能＋1が付いているとはいえ、被弾すればクリュウのディアブロシリーズよりも脆い。だがしかし、そんな装備でここまで戦えているのもまた彼女の実力の証明だ。
「これでどうだぁッ！」

ルーデルが体勢を立て直す隙を作ろうとクシャルダオラの背後から襲い掛かるクリュウ。手に持ったのはすでに導火線に火が付いている小タル爆弾G。それを回転斬りの時のように体全体でフルスイングして投擲する。ルーデルのおかげで風の鎧を無効化されているクシャルダオラはその直撃を受けるが、大したダメージにはならない。風に流される黒煙の中から振り返る鋼龍の鋭い顔が顕になる。鋭利な眼光で睨まれ一瞬臆するクリュウだったが、気合で恐怖を捻じ伏せ、雄叫びを上げながら突撃する。

迎え撃つクシャルダオラは翼を大きく羽ばたかせたかと思うと一瞬で滑るように空を移動する。クリュウからすれば消えたように錯覚する程の素早さで彼の背後へと移動したクシャルダオラはそこから彼に向かってその鋭爪で襲い掛かる。

「クリュウッ！」

ルーデルの叫び声と彼女の視線から背後の危険を悟ったクリュウは反射的に背後へと振り返ったと同時に盾を構えた。その瞬間、振り下ろされた鋭爪が直撃する。盾で防いだとはいえ、衝撃は逃せずに大きく後ろへと吹き飛ばされた。背中から倒れると、息つく暇もなく風ブレスが襲い掛かる。慌てて体を横へと投げ出してこの一撃は何とか回避したが、今度はクシャルダオラ自身が滑空で迫る。

「……ッ！」

再び盾を構えるが、体当たりの衝撃でまたしても大きく吹き飛ばされてしまう。

クリュウの危機に体勢を立て直したルーデルが急いで突撃するが、振り返ったクシャルダオラは彼女に向かって体当たり。鋭い爪で大地を抉る一撃に反射的に回避したルーデル。一瞬前まで自分が立っていた地面の惨状を目にして冷や汗が流れる。

再び彼女に向かって向き直るクシャルダオラに対し、クリュウは閃光玉を投擲。昨夜調合して補充したとはいえ、数にはやはり限りはある。しかし今使わずしていつ使うのか。投擲する彼に迷いはない。

放たれた閃光玉が炸裂し、クシャルダオラは視界を奪われてようやく地面へと崩れ落ちる。クリュウが作った隙に、ルーデルはようやく

息つく暇を得る。
「大丈夫？」
「それはこっちの台詞よ。ミイラ取りがミイラになりかけてどうすんのよ」
「ご、ごめん……」
「まぁ、あんたの詰めの甘さは今に始まった訳じゃないから、別にいいけどさ――あんまり心配掛けさせないでよ、バカ」
「え？　最後何か言った？」
「何でもないわよバカ。それより、このまま戦いを続ける気？　避難隊が出立してから結構時間が経つけど――もう引き際なんじゃないの？」
いつになく真剣な表情のまま語りかける彼女の言葉に、クリュウは無言だった。
――本当はもう気づいている。これが、避難隊が逃げる時間稼ぎという範疇を超えている事くらい。もちろん、その大義名分に嘘偽りはないし、本心からこの行動を取っている。だが、今鋭い剣先を美しく煌めかせているこの煌竜剣（シャイニング・ブレード）を握り締める拳を震わすものは、それ以上の想い。
周りを見渡せば、目を背けたくなるような惨状が広がっている。倒壊した家屋の数はもはや数知れず、舗装されてはいないがしっかり道として機能していた道は風やあの鋭い爪で抉られ、もはやその機能を失っている。先程からはむしろ二人に取っては塹壕として機能している程だ。
春の種まきを前に新しい土や肥料を加えている最中の畑の多くも、その柔らかい土が吹き飛ばされている。
小さな村でありながら整った上水道。道の脇を流れる水路も壊れ、行き場を失った水はあらぬ方向へと流れ落ちている。
もはや、イージス村の被害は尋常ならざるものとなっていた。誰が見ても、この村は廃村の道を免れない。それほどの荒廃っぷりだった。
柄を握り締める拳が、小刻みに震え続ける。

自分の愛する故郷が、無残にも壊された。その並々ならぬ憎しみと怒り、それが今の彼を突き動かしていた。
それはきっと、自分の人生の中であまり感じた事のない黒い感情だろう。だが、今はハッキリとそれが胸の奥に渦巻いていた。
わかっている。本当は全部わかっている。これ以上の戦闘は無意味だという事くらい。これ以上戦っても、勝ち目もなければ意味もない。ただこちらが無為に損耗するだけ。ただのジリ貧だ。
勝てるなど思っていない。古龍というのがどれ程の強敵なのか。それは、自分が憧れた両親の末路が物語っている。
でも、せめて――
「――倒せるなんて思ってない。でもこのまま、あいつをこの村に野放しはできないよ」
どんなに壊れてしまっても、ここは自分が生まれ育った故郷だ。このまま鋼龍クシャルダオラをここに残してはおけない。倒せなくても、何とかしてこの村から追い払わなくては。
古龍の中には巣とも言うべき場所を持つ者もいる。もしも奴がこの村に居座ってしまえば、村人達は本当に戻るべき故郷を失ってしまう。それだけは、何としても避けなければならない。
「だから、僕は退かない。ここで退いたら、僕は何の為にハンターになったのか。父さんと母さんが守って来たこの村を、大好きな家族が住む村を、守る為に僕はハンターになったんだ」
わかっている。死んだ父と同じ道を進むと子供の頃に母に言った時、母はあまり良い顔をしなかった。危険な夢を、息子に抱いてほしくない。平和に、穏やかな人生を歩んでほしい。それは母として当然の想いだろう。
でも、自分は結局両親と同じハンターの道を選んだ。全ては憧れる両親と同じ夢を追いたかったから。この村を守りたかったから。
「僕は、あいつを撃退する。死ぬ気なんてないけど――命懸けで」
それはお人好しで、他人の為なら自らを犠牲にする事を厭わない彼らしい、それでいて壮絶な覚悟を秘めた言葉だった。だが同時にそれは、いつもの彼の発言ともまた違っている事を、少なからず付き合い

のあるルーデルは見抜いていた。
――これは、彼の想いなのだと。
誰の為でもない、自分の為。結局は自分の志を貫く為に過ぎない。
村を守る為にハンターになった。それを貫く為にも、奴を撃退しなければならない。そんな使命感が、焦燥感が、責任感が、彼を突き動かしているのだと。
「これは僕のわがままだ。だから、ルーデルは逃げてよ。これ以上は本当に、命の保証なんてできない。僕のわがままに、これ以上付き合わなくていいから」
煌めく剣先に映る彼の横顔は真剣で、そして凛々しい。だがその表情にどこか寂しさを感じるのはきっと、気のせいなんかじゃない。
――孤高。
一人で修羅の道へ進む覚悟を、彼はすでに決めている。その道に、自分が付き合う必要はないのだろう。誰だって、そう言うに違いない。
「――バカ、他人がどう想おうと、私には関係ないじゃない」
ルーデルは誰に言うでもなく小さくそう呟くと、ゆっくりと足を動かす。後ろへではない。彼の隣へと至る歩みの第一歩だ。
撤退するでもなく、自らの隣へと歩み出たルーデルに驚くクリュウ。そんな彼に向かって、ルーデルは不敵に微笑む。
「バァカ。ここであんたを見捨てるようなカッコ悪い真似、できる訳ないじゃない。それに、ここであんたに死なれたりしたら、それこそフィーちゃんに顔向けなんかできないわよ」
「バカはどっちだよ。今はそんな事言ってる場合じゃ――」
「――好きなのよ、あんたの事さ」
顔を向ける事なく、今まさに閃光玉の効き目が切れてゆっくりと起き上がる鋼龍を見詰めながら、ルーデルはポツリと宣言した。その言葉は風に邪魔される事なく、彼の耳にも届いた。突然の事に驚き、狼狽する彼に向かって、ルーデルはフッと口元に笑みを浮かべる。
「何であんたみたいな情けない奴を好きになっちゃったのか。自分でも不思議で仕方がないんだけど――まぁ、好きになっちゃったもんは

しょうがないじゃない」
「ルーデル……」
「別にあんたに答えなんて求めてないわ。これは私の、胸の奥にある想いだから。それに、この想いはフィーちゃんを裏切る事になる。だから、これ以上は何も求めないし、言わない」
親友の好きな人を好きになる。小説なんかによくあるパターンで、何てベタで、そして厄介な展開なのだろうと自分でも正直思っている。でも、好きになってしまったものは仕方がない。この胸の奥に渦巻く想いは嘘偽りなく、疑いようのない事実なのだから。
「だから、これは私のわがまま。あんたに付き合って、この危険な戦いに身を投じるのも。あんたと一緒に、この村で命を張るのも。全部私のわがまま――好きな男を放っておけない、バカな恋する女のわがままなのよ」
不敵に、でもどこか健気に微笑むルーデルの笑顔。その笑顔に、絶望的な戦いに身を投じようとしていたクリュウは励まされた気がした。
自分の事を好きと言ってくれる少女。そんな彼女に対して、自分は何と答えれば良いのか。悩み、返答ができず黙ってしまう彼を見て、ルーデルは小さく微笑んだ。
「いいのよ、別に返事は望んでない。それに今は答えがあったとしても、ゆっくり聞いてる時間はないし。ただ、あんた一人に戦いを押し付けたりはしない。私も、あんたの隣で命を張る。これだけは理解して、そして――どうか一緒に戦ってください」
そう言って、ルーデルはそっと手を差し伸べた。驚く彼に向かって、優しく微笑むルーデル・シュトゥーカ。その意味に、クリュウもまた笑みを浮かべて手を差し出す。
「――こっちこそ、改めてよろしくね」
彼女の想いに応える為にも、クリュウは優しく、彼女の手を握り締めた。
刹那、クシャルダオラが怒号を上げて突っ込んで来た。軽やかな足取り且つ凄まじい勢いで迫って来るクシャルダオラに対し、二人は二

手に分かれてこれを回避した。
二人に体当たりが失敗したクシャルダオラはその場で停止するとすぐさま風を纏って空中へと浮かび上がる。空中でゆっくりと振り返ると、こちらに向かって突撃して来るクリュウと目が合う。
クリュウはクシャルダオラに向かって突撃しながら剣を構える。だがそれを阻むようにクシャルダオラは滞空放射風ブレスで彼の針路を吹き飛ばした。荒れ狂う風に晒され動けずにいると、今度は隙を見てルーデルがクシャルダオラの側面から迫った。
「はぁッ！」
重いサクラノリコーダー改を振り上げ、浮かぶクシャルダオラに向かって一気に叩き落とす。硬く重いサクラノリコーダー改の鐘の部分は遠心力でその破壊力を最大まで発揮し、鋼龍に炸裂する。迸る黒雷がクシャルダオラの鋼の鎧を焼くが、クシャルダオラは構わず彼女に向かって鋼爪を振るう。寸前でこの動きを察知したルーデルはバックステップでこれを回避。完全には回避できなかったが、爪の先端をサクラノリコーダー改のハンドルで受け流した。迸る火花の向こうで、ルーデルは不敵に微笑む。
「バカね、あんたの相手は私だけじゃないわよ」
不敵に微笑む敵の姿に、自分がようやく敵の罠に掛かった事を知ったクシャルダオラ。慌てて振り返った瞬間、クリュウが放った小タル爆弾Gが二発眼前で炸裂した。爆炎と黒煙が一瞬視界を封じたが、すぐに風で吹き飛ばす。だがその一瞬で一気に接近したクリュウ。クシャルダオラからすれば一瞬で敵が迫ったような錯覚だった。驚いて怯んだ一瞬の隙を突いて、クリュウは煌竜剣（シャイニング・ブレード）を振り上げ、鋼龍の頭へと叩き落とした。
「ギャアッ!?」
その一撃自体は大した事じゃないが、突然頭を斬りつけられた事でクシャルダオラは怯む。クリュウはその間に連続して剣を振るい、更に背後からルーデルがサクラノリコーダー改を叩きつける。
二人の挟撃に対し、クシャルダオラは風の鎧を展開させて二人を吹き飛ばした。背後から地面に倒れたクリュウに対して、ルーデルは何

とか綺麗に着地してみせた。すかさずルーデルは龍風圧を封印する音色を奏で始める。だがクシャルダオラも彼女の動きを気づいて風ブレスを撃ち放った。
演奏中だったルーデルはこの一撃を回避できずに直撃。吹き飛ばされ、地面の上に二度三度と転がった。
「ルーデルッ！」
「私は大丈夫よッ！　それより自分の心配しなさいッ！」
起き上がると同時に叫ぶルーデル。その声にハッとなって振り返ると、いつの間にか空中を滑るようにして移動したクシャルダオラが背後に迫っていた。
「なッ!?」
クシャルダオラは驚く彼に向かって空中から襲い掛かった。鋭い爪を振り上げ、空中から体当たりと同時に爪で襲い掛かる。寸前でこれをギリギリで回避したクリュウだったが完全には回避できず、爪の先端を盾で防いだ。盾の表面を爪が滑る際に迸る火花の向こうで衝撃に耐えるクリュウの表情が浮かぶ。だが踏ん張っていた訳ではない為に衝撃を逃し切れずに転倒する。その眼前で一瞬前まで自分が居た地面が盾の表面を傷つけた鋭い爪が地面を深く抉り飛ばした。
背中から倒れるも急いで起き上がるクリュウ。だがそこへ風の鎧が襲い掛かって彼を吹き飛ばした。
「ルーデルッ！　風を封印できるッ!?」
「わかってるわよッ！　って、鬱陶しいわねッ！」
演奏を開始しようとすると、クシャルダオラは狙ったように風ブレスで彼女を狙う。邪魔をされる為に演奏ができず、苛立つルーデル。その間もクシャルダオラはクリュウに接近戦を挑み続ける。
爪と風に翻弄されるクリュウは息を荒げるが、ルーデルも演奏しようと構えると風ブレスや竜巻が彼女を襲う為に演奏ができない。
いつの間にか二人の距離は離れ、共闘できないように陥れられていた。それに気づいたクリュウがルーデルの方へと行こうと武器をしまって駆け寄ろうとするが、それを妨害するようにクシャルダオラは滞空放射風ブレスで彼の前方を薙ぎ払った。

風ブレスで抉られた地面を見て絶句するクリュウ。そこへクシャルダオラが接近し、鋼の尻尾をムチのようにしならせて彼を吹き飛ばす。寸前で反射的に盾を構えたもの、衝撃は逃がせず吹き飛ばされた。
「クリュウッ！」
「僕は大丈夫ッ！　そっちに行ったよッ！」
クリュウを吹き飛ばしたクシャルダオラは今度はルーデルに向かって滑空突進を仕掛ける。ルーデルは舌打ちして演奏を中止して緊急回避。地面を転がるようにしてこの一撃を回避した。だが立ち上がった瞬間にクシャルダオラは風ブレスで彼女に襲い掛かる。連続して三発のブレスを撃ち放つが、ルーデルはこれを全て紙一重で回避した。
「鬱陶しいわねッ！　さっさと落ちなさいッ！」
激昂しながらルーデルは背後へ閃光玉を投擲した。こちらに向いているクシャルダオラからすれば前方で炸裂する光の爆発。目を焼かれ、クシャルダオラは悲鳴を上げて墜落した。
横倒しになって藻掻くクシャルダオラに対し、ルーデルはすかさず龍風圧を無効化する音色を奏でる。ここでようやく鋼龍の風の鎧を再封印する事ができた。
この間に二人は回復薬グレートをそれぞれ必要な本数飲み、クリュウは砥石を使って損耗した切れ味の回復に努めた。
起き上がったクシャルダオラはこちらの接近を阻むようにその場で爪を振り回したりして暴れている為、剣士の二人は近づく事ができない。その間に、二人は再び近寄り、共闘できる構えを取った。
「なるべく互いの距離が離れ過ぎないよう、お互いにうまく立ち回るしかないね」
「正直そんな余裕はないけど、まぁ心得たわ」
先程のように距離が離れ、互いのフォローができなくなる可能性を極力減らす為にも、離れ過ぎない事を再確認する二人。そこでクシャルダオラの視界が回復し、鋼龍は怒号と共に風ブレスを撃ち放つ。二人はこれを左右にそれぞれ避け、再び鋼龍に向けて突撃する。それを

妨げるようにクシャルダオラは滞空放射風ブレスを横薙ぎに撃ち払い、二人の針路を妨害する。
「小細工をッ！」
足を止めて苛立つルーデルに対し、クシャルダオラが動く。風の壁が壊れると同時にクシャルダオラは彼女に向けて四肢を駆使して突撃を仕掛けた。予備動作も見えなかったルーデルは回避が間に合わずこの直撃を受けた。
「ルーデルッ！」
地面の上を二度三度転がって倒れたルーデル。顔を苦悶に歪めながらも、しかしゆっくりと起き上がった。相当なダメージを負ったはずだが、幸い倒れる程ではなかったらしい。
クリュウはすぐに彼女が体勢を立て直す隙を作る為に走り出した。あえてクシャルダオラの正面から突撃を仕掛ける。この行動にクシャルダオラも気付き、大きく後ろへとジャンプして距離を置くと、そこから迎え撃つように突進を仕掛ける。クリュウはこれを横に跳んで避け、すぐに反転。止まったばかりの鋼龍の背後から斬り掛かった。
クリュウの行動は自分が回復する時間を稼いでいる。すぐにそれに気づいたルーデルは「かっこつけんじゃないわよ……」と呟き、苦笑を浮かべながら道具袋（アイテムポーチ）の中から秘薬を取り出してそれを呑み込んだ。回復薬や回復薬グレートとは比較にならない速度で痛みが引き、体の疲労感やダメージが消えていく。強気な瞳には再び炎が宿り、闘争心が燃え上がる。不敵に口端を釣り上げ、犬歯を煌めかせ、頬は紅潮し、力が漲る。
「まだまだこれからよ、鉄クズ野郎ッ！」
土を抉る程強く大地を蹴ってルーデルは突撃する。重い狩猟笛を構えているのを感じさせない程の豪速で距離を詰めた彼女は、クシャルダオラがこちらに向き直った事で一度距離を取って構えていたクリュウの横を通り抜ける。驚く彼を無視し、あえて正面からクシャルダオラに挑みかかった。
迎え撃つようにクシャルダオラは風ブレスを構える。口の前の空

間に風を集束させていき、景色が歪んでいく。だがそれよりも少女の突撃の方が速かった。
「遅いッ！」
ルーデルはサクラノリコーダー改を横薙ぎに振り抜いた。体全体を使った強烈なスイングは、今まさに風ブレスを撃とうとしていた鋼龍の側頭部に炸裂。直後に風が爆発し、衝撃であらぬ方向に向いていたクシャルダオラの口の中から暴れるように風が吹き荒れた。暴れ狂う風ブレスは竜巻となり、二人と全く違う方向へと流れて行った。
不発に終わった風ブレス。ルーデルはそのまま続けて連続してサクラノリコーダー改を振るい、頭部を叩き続ける。しかしクシャルダオラもやられているばかりではなく、反撃とばかりに爪で彼女に斬り掛かる。接近戦を挑んでいた彼女はこの攻撃を避ける事はできなかったが、寸前で爪と彼女の間にクリュウが入り込み、盾でガードした。しかし衝撃は逃せず、二人はもつれ合ったまま吹き飛ばされてしまう。体が宙に浮いている一瞬の間にルーデルは閃光玉を放り投げた。炸裂する閃光が鋼龍の目を焼き、更なる追撃の手を封じる事に成功した。それを見届けた瞬間、二人は同時に地面に倒れ込んだ。
「いったぁ……」
「あ、あんた、無茶するわねぇ……」
「君も大概だと思うよ？」
「フン、うっさいわよバァカ」
起き上がったルーデルはどうやら大丈夫そうだ。悪態をつきながら笑う彼女を見て、クリュウは安堵の息を漏らした。先に立ち上がると彼はそっとルーデルに手を差し伸べる。彼女はそれを見て微笑みながら手を取って立ち上がった。
少し距離の離れた場所ではクシャルダオラが暴れている。しかしそれも後数秒程だろう。その間に二人は適切な距離にまで移動し、攻守どちらにでも即座に対応できる構えを取った。その瞬間に鋼龍の視界は回復し、すぐに二人を探して動き出す。
目が合った瞬間、クシャルダオラは唸り声と共にクリュウに向けて風ブレスを放った。クリュウはこれを横に回避したが、今度はクシャ

ルダオラ自身が突撃して来る。これは避けられず、何とか盾で防ぎながら衝撃を逃して対処した。そこへ今度はルーデルが横から襲い掛かるが、鋼龍は大きく後ろへと飛び退いてこれを回避してしまう。

「ちょこまかとッ！」

苛立つ彼女に向かって、クシャルダオラは空中へと浮かび上がるとそのまま滑るようにしてルーデルの背後へと回り込もうとする。しかしルーデルは即座に反応し、むしろ迎え撃つようにして構えると移動して来た鋼龍に向けてサクラノリコーダー改を振り殴る。しかしその一撃はわずかに逸れてしまい鋼の鎧を掠っただけ。舌打ちし、すぐさまルーデルはバックステップで距離を取る。追撃しようとするクシャルダオラに向かって、クリュウの放った打ち上げタル爆弾Gが飛来したのはその時だった。

小規模な爆発が二発起き、クシャルダオラは鬱陶しげに振り返る。その視線の先でクリュウが剣を構えて突撃して来るのが見えた。

接近を阻むようにクシャルダオラは風ブレスを撃ち放つが、クリュウはこれを回避。更に距離を詰めて来る。更なる風ブレスを呼び起こそうと構えた鋼龍だったが、接近する彼の笑みを見て自分が罠にハマった事に気がついた。だが、もう遅い。

「背後ががら空きよッ！」

クリュウに気を取られている間にクシャルダオラの背後へと回り込んだルーデルの強烈な一撃が炸裂したのは、まさにその時だった。

荒れ狂う黒雷がサクラノリコーダー改の鐘で眩く迸る。激しい黒い稲妻を纏わせながら、ルーデルは桜色の鐘を力の限り鋼龍に向けて叩き落とした。金属と金属がぶつかる甲高い音と同時に、火花を迸らせながら黒い電撃が鋼の鎧を焼く。衝撃と龍属性のダブル攻撃にさすがのクシャルダオラも悲鳴を上げて仰け反った。そこへ更に接近していたクリュウが煌竜剣（シャイニング・ブレード）を叩き込む。金火竜と銀火竜の素材を使って作られた剣先はアルトリア女王伝説の中では空間をも斬り裂いたと謳われる程の切れ味を持つ。さすがにそれはお伽話だとしても、その切れ味は凄まじく、鋭い一撃は鋼の鎧をも斬り裂いた。

火花を迸らせながら、与えられた一撃は残念ながら深くはない。それでも鉄の亀裂からは血が流れ、剣先を赤く濡らした。例え一撃一撃は小さくても、少しずつでもダメージを与えている。それが証明されたようで、自然とクリュウの柄を握る手にも力がこもる。

だが、二人の奮闘を嘲笑うかのようにクシャルダオラは空中へと脱すると、そこから連続して風ブレスを放った。こちらの攻撃が届かない遠距離からのアウトレンジ攻撃。通常の風ブレスから滞空放射型の二種類を使い分け、更に風を呼び起こしそれらは竜巻となって二人を襲う。

こちらの攻撃範囲外からの一方的な攻撃の嵐。二人は防戦一方となった。クリュウも負けじと打ち上げタル爆弾Gを放つが、それこそ風で方向を変えられて全て不発に終わる。

攻撃手段を失い、苛立つクリュウ。そんな彼の様子を見て、ルーデルが走り出した。

「イチかバチか……ッ！」

サクラノリコーダー改を構えながら、怒涛の勢いで突撃するルーデル。移動速度強化をしていたとしても、その速度は並大抵のスピードではない。地面を蹴り、まるで翔んでいるかのように可憐に、力強く、そして疾く。

クシャルダオラは彼女の接近に何か嫌なものを感じ、風ブレスで応戦するが、彼女はそれを華麗なステップで全て避け切る。そして――彼女は翔んだ。

「な……ッ!?」

驚くクリュウの前で、ルーデルは翔び上がった。まるで、翼を得たかのように、美しく天空へと舞い踊った。

実際は至極単純だった。構えたサクラノリコーダー改を叩き落とすように地面に炸裂させ、軸として固定すると同時にジャンプ。棒高跳びの要領で高くジャンプしたのだ。そしてそのままサクラノリコーダー改を空中で構え直すと、驚くクシャルダオラの顔面に向かって――

「でぇりゃあああああぁぁぁぁぁッ！」

――強烈無比の一撃を叩き込んだ。
激しい衝撃と迸る黒雷を直接頭部に受け、クシャルダオラは悲鳴を上げてバランスを崩すと、そのまま地面へと落ちた。
自らの一撃で見事鋼龍を撃墜してみせた悪魔のサイレン、ルーデル・シュトゥーカ。思わず空中で拳を握り締めた――直後、彼女は風で吹き飛ばされた。
墜落寸前、クシャルダオラは怒りの反撃とばかりに風ブレスを放った。怒りを込めた強烈な風は空中であるが故に、実際には何の飛行能力も持たない為に回避行動すら取れない少女に炸裂した。
全身を斬り刻まれるかのような風の刃の連続攻撃。そしてそのまま吹き飛ばされたルーデルは地面に倒れる。ぐったりとしたまま動かない彼女の姿に、クリュウが慌てて駆け寄る。
「ルーデルッ！」
倒れた彼女を抱き起こすと、全身にかなりのダメージを負っている事がすぐにわかった。苦しげに顔を歪めながらも、それでも強気に笑ってみせる悪魔のサイレン。
「……あはははは、ミスっちゃったなぁ」
「無茶して……ッ」
「それは、お互い様でしょ……」
苦笑を浮かべるルーデルだったが、その表情が凍りつく。それを見て慌てて振り返った彼の視線の先で、鋼龍が再び龍の風を纏いながら天空へと浮かび上がる。黒い風と白い風、二つの風を纏いながら曇天の空へと舞い上がる鋼鉄の龍。その口元からは白い息が怨念のように漏れ出し、纏う気配は怒髪天。究極の怒りを纏いながら天空へと降臨した古の龍の姿に、クリュウは言葉を失った。
「……まだ、倒れないのか」
悔しげにつぶやく彼の耳元で、ルーデルが小さな声でつぶやく。
「……さっさと私を置いて逃げなさい。一緒に死ぬわよ？」
「バカッ！　君を置いて逃げられる訳ないでしょッ！」
「バカはどっちよ。ここであんたが死んだら、フィーちゃんが悲しむじゃない」

「それは君も同じだよッ！　お前が死んだら、それだってフィーリアは悲しむッ！」
「……二人死んだら、フィーちゃん泣いちゃうわね」
本当は彼だけでも逃したいが、全身に負ったダメージは今すぐに体を動かす事を阻んでいた。彼を突き飛ばす事もできず、ただ彼の腕の中で無様に倒れているだけ。このままではダメだと頭ではわかっていても、どうする事もできなかった。
そしてそれはクリュウも同じだった。今なら自分一人だけなら助かるかもしれない。だがそんな選択は彼の選択肢の中にはない。ルーデルと一緒に逃げるという選択肢しか、彼には存在しない。だがそれは実行不可能なコマンドだ。彼女を抱いて逃げたとしても、怒り状態の鋼龍の追撃を逃げる事など不可能。
ただ、二人一緒に死の執行を待つだけ。それが、今の二人の結末だった。
漏れる白い息が一度出た後、再び鋼龍の口の中に消えていく。更に周りの風が集まっていき、空間が歪む。強烈な風ブレスを撃ち放つ為のチャージを行っている証拠だ。
力なく自分の腕の中で倒れる少女の温もりを感じながら、少年は必死に願った。
神なんて信じていないし、奇跡なんてそうそう起こるものではない。むしろ今まで自分の危機にルフィールとシャルルが、そしてルーデルやエリーゼ、レンが助けに来てくれた。二度の奇跡が起きている、それだけでも異常なのだ。
なのに、自分はバカバカしくも願っている、祈っている。
三度目の奇跡が起こる事を。
自分が助かりたいなんて、そんなおこがましい事は願ってはいない。
ただ、今自分の腕の中で倒れている一人の少女の命を救うだけの、そんな大奇跡が起きてくれればいい。
自分はどうなっても構わない。でも彼女だけは生き残って欲しい。自分のわがままに付き合ってくれた勇気ある彼女に――自分なんか

を好いてくれる、可愛らしい女の子に。
「くっそおおおおおぉぉぉぉぉッ！」
クリュウの雄叫びを合図にするかのように、鋼龍は更に高度を上げ、首をもたげる。
もはや、数秒後には二人の命は風の絶望によって吹き飛ばされる――はずだった。
彼は知らない、東言葉にはこんな諺がある事を。
――二度あることは三度ある、と。
突如、眩い閃光と激しい爆発に二人の体は吹き飛ばされた。咄嗟にクリュウは彼女の体を抱き締めた。全身を襲う風に、一瞬は死を覚悟した。だがそれは想像していたよりもずっと弱い。というよりも、意志の感じられない風だった。まるで、何かの爆発に生じた爆風。そんな風だった。
更に凄まじい爆音の連続が耳にけたたましい程響いた。思わず閉じていた瞳を開くと、そこには衝撃の光景が広がっていた。
――空に、無数の花が咲き誇っていた。
空で突如至る所で爆発が起き、その火炎と破片がまるで花のように空に咲き誇っていた。上空で炸裂する爆発に吹き飛ばされないよう体を固定しながら、クリュウと、そしてルーデルはその不思議な光景を呆然を見上げていた。
そして、無数の爆発の華が鋼龍の姿を消す。その瞬間、爆音は収まった。
一瞬の沈黙。何が起きたかわからず混乱する二人は、互いの顔をゆっくりと見合った。
「一体、何がどうなって……」
「わ、私にもわかんないわよ……」
その時、鋼龍の怒号が辺りに響き渡った。慌てて空を見上げると、煙を吹き飛ばし、鋼龍が姿を現した。全身に火薬を被ったせいか、炎を纏っている。その姿は恐ろしくもどこか美しく、二人は思わず見とれてしまった。
だがそれも一瞬の事。すぐに風が炎を消し去った。あれだけの爆

発だったというのに、クシャルダオラは無傷だったらしい。
そう二人が判断した途端、突如遥か遠方から凄まじい砲音の連続が響いてきた。驚いてその音の元を探すと、それはイージス村の沖合の方からだった。良く見ると、水平線上に無数の船が浮かんでいるのが見えた。遠すぎてハッキリは見えないが、無数の船が次々に大砲を撃っている事がわかった。それらから撃ち出された砲弾が、今まさにクシャルダオラを襲っているのだ。
「……な、何がどうなってんのよ。あれ、どっかの国の艦隊？　それが、何でクシャルダオラを撃ってんのよ」
訳がわからないとばかりに混乱する彼女の口から漏れた言葉に、同じく困惑していたクリュウは状況を悟ると、思わず小さく笑みを浮かべた。
「そっか……、来てくれたんだ」
「はぁ？　何言ってんのよ。あんた、何か知ってるの？」
「君もたぶん、よく知っている娘だと思うよ」
首を傾げ、訝しがる彼女の視線を受けながら、少年は嬉しさに満面の笑みを浮かべながら続ける。
「この世の中に、僕なんかの為に艦隊を率いて助けに来てくれるのは、一人しかいないよ」
砲音と怒号が飛び交う甲板には、無数の兵士が今まさに激しい訓練の成果を見せるかのように一糸乱れぬ動きで戦闘を行っている。
巨大な戦艦に乗る兵士の数は一〇〇〇人を超え、更に周りには大小様々な友軍艦が無数に展開している。この作戦に参加する将兵の数は、それこそ巨大都市の人口に匹敵する。
それらの兵士達を束ね、今まさに最強の鋼の龍王に戦いを挑む長。
全身を凛々しい漆黒の軍服で身に纏い、美しい黒髪を砲風に靡かせながら指示を出し続ける少女こそが、この大艦隊を率いている司令長官だ。
全艦のマストには翻るのは横長の薄灰地に白の十字、その上から黒の十字が重ねられた、通称《鉄十字（アイアンクロス）》と呼ばれるその旗は、中央大陸の軍事大国――エルバーフェルド帝国の国旗。

そう、彼らはエルバーフェルド海軍所属の軍人達。イージス村沖合に展開する艦隊は、エルバーフェルド帝国国防海軍の軍艦で編成された艦隊。

エルバーフェルド国防海軍。西竜洋諸国に属し、中央大陸国家の中では最強と謳われる軍事国家エルバーフェルド帝国の海を守る軍隊。その兵器の質、兵士の練度どちらをとっても他の西竜洋諸国とは比較にならない程強力な軍隊である。

現在この海域に展開しているエルバーフェルド国防海軍の艦隊は、その中でも主力に位置づけられる部隊で編成された精鋭部隊であった。

それら最強の精鋭部隊をわざわざこんな片田舎まで率い、そして鋼龍クシャルダオラに戦いを挑んでいる少女。

彼の周りに集まる恋姫達と同様、彼に心を奪われた恋する乙女。奪われたのは心だけではない、愛しの彼には自らの初めての唇も奪われた。

守りたい、愛しい彼。

彼の為に、彼女はやって来た。自らについて来る無数の信頼できる部下を従え、西竜洋諸国が恐れ慄く最新鋭の軍艦、兵士と共に、彼女は助けに来たのだ。

轟く怒号と砲声の中、少女は笑みを浮かべながら叫んだ。

「絶対に守ってみせる、死なせないんだから――クリュウ・ルナリーフッ！」

少女提督――エルバーフェルド国防海軍総司令官、カレン・デーニッツ元帥の聖戦が始まった瞬間だった。

第２２２話　アルフレア沖海戦　恋する乙女は大艦巨砲主義

――イルフィアス海峡。

イルファ山脈の北に広がる、アクラ大陸と中央大陸のイルフィオーレ岬が最も接近している海は人々からこう呼ばれている。

西竜洋と蒼海を結ぶこの海峡は、西竜洋諸国と中央大陸北東部および東部、東方大陸等を繋ぐ貿易船が行き来する重要航路となっている。西竜洋に面している西シュレイド王国、東シュレイド共和国、エルバーフェルド帝国の三カ国から重要拠点と位置づけられ、エルバーフェルドを除く西竜洋諸国では非武装地帯として中立地域と宣言しているが、実際は地理的に最も近いエルバーフェルド帝国の支配下にある。

だがエルバーフェルド帝国も有事の際はともかく、平時においては復興や経済発展という点からこの海峡を封鎖するなどの強行手段を行う気はなく、大小様々な貿易船が一日何十隻も行き来している。

この時期はアクラ海流にのって流氷が西竜洋から蒼海へと流れ込む。イージス村の沖合に流れ込む流氷の大本はこれだ。

そんなイルフィアス海峡をこの日、数十隻にも及ぶ大艦隊が航行していた。重々しい威圧感と共に航行するそれらは民間の貿易船が集まった商船団ではなく、二つの大艦隊に分かれた軍艦であった。

一つは複数の輸送船とそれらを護衛する艦艇で形成された輸送艦隊。

一つはより攻撃的な艦艇が集結した戦闘艦隊。

二つの艦隊の艦艇を合わせると、その総数は四〇隻にも及ぶ。歴史上、これ程の規模の艦隊が動く事は、滅多にない。事実、演習以外において最後に行われた大艦隊の出撃はエルバーフェルド王国を襲ったローレライの悲劇の最中、同国に攻め入ったガリア・東シュレイド共和国の連合艦隊が最後である。

あれから約二〇年。各国が新たな戦争の火種を恐れて軍の動きを

制限する中、これ程の規模の艦隊を堂々と出撃させる事など異例中の異例。まるで、これからどこかの国を攻め滅ぼすかのようだ。
中央大陸の船の多くが帆に風を受けて航行する帆船が主流の中、それら全てには帆が張られたマストの代わりに煙突が備えられ、燃料の燃石炭を燃やす際に放出される濃い黒煙が絶えず噴き出している。風がなくても航行可能な動力を持った、最新鋭の蒸気船である。
大小様々な軍艦が入り交じっているが、それら全てのマストにはいずれも同じ旗が掲げられていた。横長の薄灰地に白の十字、その上から黒の十字が重ねられた、通称《鉄十字（アイアンクロス）》と呼ばれるその旗は、中央大陸の軍事大国――エルバーフェルド帝国の国旗である。
この大艦隊は、エルバーフェルド国防海軍の艦隊。それも本国艦隊と呼ばれるエルバーフェルド国防海軍の主力艦隊を基幹とした艦隊であった。
大陸国家の中では最強と謳われ、あの軍事大国であるアルトリア王政軍国に次ぐ世界第二位の軍事大国の誇る最強の水上打撃部隊。普段は西竜洋を拠点に西竜洋諸国やアクラを牽制するように軍事行動を繰り返す艦隊が、なぜイルフィアス海峡を越え、蒼海に現れたのか――それは旗艦である戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』に乗艦する、本国艦隊司令官兼国防海軍総司令官であるカレン・デーニッツ元帥の決断であった。
時は一週間程前に遡る。
エルバーフェルド政府は、古龍研究機関であるシュトゥットガルトを通してイルファ山脈に鋼龍クシャルダオラが出現した可能性が高い事をすでに察知していた。エルバーフェルド帝国総統フリードリッヒ・デア・グローセは国防軍に対して出撃を命令。これを受諾した国防軍総司令官のヴィルトラント・カイテル元帥はすぐさま東部国境防衛を担っていた第3軍に厳重警戒命令を発令。同時に東部地方に対して避難準備命令も出し、クシャルダオラに国境を越えさせない為の準備を整えた。
更に海軍も外洋艦隊が東方海域に展開して海上経由でのクシャル

ダオラの侵攻を阻む構えを取っていた。しかし主力艦隊である本国艦隊、そして総司令官であるカレンには別任務が与えられていた。それは対立関係が続くアクラを牽制する為、北方海域にて大規模海上演習を行うというものだった。

艦隊を出撃させる寸前で鋼龍の出現を知ったカレンは、すぐさまエムデン宮殿に戻ってフリードリッヒの下へ訪れた。親衛隊長のオコーネル・ゲルトハルトに謁見を一度は断られたが、緊急を要すると彼の制止を振り切っての、事実上の殴り込みだ。

執務室にてこれを出迎えたフリードリッヒは、特筆して驚く事もなく書類に目を通しながら彼女を出迎えた。

「突然どうした？　君には北方海域での演習を命じていたはずだが？」

「……総統。今回はお願いに参りました」

「――アルフレアに艦隊を派遣したいという願いなら、すでに断ったはずよ」

フリードリッヒの隣に立つ宣伝大臣のヨーウェン・ゲッペルスの言葉に、カレンは開きかけた口を閉じた。言いたい事を先に言われて困るカレンに対し、フリードリッヒは筆を置いて今度こそ真正面から彼女に対峙する。

「アルフレアと我が国は、特筆して何か交流がある訳ではない。なのに、なぜ我々がその救援に艦隊を出す必要があるのだ？」

「本国防衛の為です」

「その布石ならすでに打ったはずだ。その為に陸軍の第３軍と君の外洋艦隊を展開させたのではないか」

「相手は古龍です。こちらから打って出るくらいの覚悟がないと」

「奴が我が国に侵攻するという確実な証拠でもない限り、そんな事はできん」

「しかし……ッ」

「言い方を変えよう――なぜ我が国があの忌々しい少年の救援に艦隊を出す必要がある？」

不機嫌そうに言うフリードリッヒの言葉に、カレンの顔色は真っ青

になった。それを見てフリードリッヒは短くため息を零すと腕を組みながら彼女を睨みつける。
「やはりか……。まぁ、そうでもなければ君がこんなバカな事を言い出すとは思えん」
「カレン。あなたの気持ちはわからなくはないけど、仕事に私情を挟むものではないわ。今は総統の命令を遂行するのがあなたの役目よ」
「友を救えない者に、国は救えない。私の父の言葉です」
「妄言だな。救済というのは、そんな単純なものではないぞ」
「だとしても、私は救いたいのです。あの少年を――クリュウ・ルナリーフという男を」
「……忌々しい名前だな」
　吐き捨てるように言う彼女の言葉にカレンの目付きが尖さを帯びる。それを見てヨーウェンが「やめなさい二人共。これ以上ケンカする気なら、お姉さん怒るよ」と仲裁に入った。彼女の仲裁にフリードリッヒは鼻を鳴らして腕を組み、カレンも瞳の鋭さを戒める。
「君があの男に何かしらの感情を抱いている事は知っている。だとしても、君は誰だ？　我が帝国の国防海軍の総司令官だ。君の行動一つで内政や外交に多大な影響を与える事くらい自覚しているな？」
「……はい」
「その君が、たかが一人の少年を救いたいが為に独断で動かれては非常に困る。今帝国は非常に危ない橋を渡っている。君の行動でその均衡が破られる可能性だってあるのだ。君の行動は、祖国を裏切る事になるぞ」
「――ならば私は、祖国を捨てるまでです」
　そう言ってカレンは胸のポケットから封筒を取り出すと、静かにフリードリッヒの前に置いた。それを見てヨーウェンは驚愕し、一瞬驚いたもののすぐに冷徹な表情を取り戻したフリードリッヒが静かに問う。
「本気か、カレン？」
「お言葉ですが総統。私はいつでも本気で行動しております」
　カレンが出したのは、辞表だった。それはつまり、海軍総司令官と

いう地位を捨てるという事だ。
　真剣な表情で尋ねるフリードリッヒに対し、カレンもまた厳かな表情のまま答えた。
「友を救う為に今の身分が邪魔をするなら、それを捨てるまでです」
「君は、海軍の再建を悲願に掲げていたのではないか？」
「国防海軍は、陛下のおかげで再建できました。人も兵器も戦術も、様々な面で旧海軍を凌ぐ近代海軍として蘇りました。私の責務は、すでに達成されているのです」
「……つまり、未練はないという事だな？」
「――はい」
　カレンの言葉に、フリードリッヒは深い溜息を零した。隣に立つヨーウェンもまた同じような反応を見せる。どちらも――どこかわがままな妹を諭す事諦めたような姉の表情を浮かべていた。
「ひとまず、この辞表は預からせてもらおう。その上で君に最後の命令を下す――艦隊を編成して、すぐさま演習に向かいなさい」
「……了解しました」
　願いは聞き届けてもらえなかった。落胆し、カレンは無言でその場を立ち去る。かっこいい事を言ってみせたが、海軍に未練がないなんてウソだ。これからももっともっと海軍道を極め、世界最強の艦隊を編成する。そんな夢を抱いていたのに……
　カレンの頭の中では、最後の手段の準備が始まっていた。それはまだ自分の力が失われないうちに、側近を集めてクーデターを起こす事だった。巡洋艦クラスの一隻でも占拠して、祖国を捨てる覚悟で救援に向かう。それを行うのは、外部からの情報が入らない海の上。演習中に起こすのが一番確実だ。
　仲間や国民からの信頼は一瞬で失われるだろう。祖国を追われる事にもなるだろう。それでも、あの少年の為ならばそれくらいしてもいいかなと本気で思ってしまう。自分の唇を奪った、愛しいあの人の為なら。
「――それに、未亡人はエルバーフェルドでは生きづらいのよ」
　苦笑しながらつぶやき、カレンはドアノブを握って退出する。その

時だった。
「演習プランは全て君に任せる。編成や予想しえる戦闘、その際に必要な物資など、好きに使いなさい」
「……え？」
　出て行こうとしたカレンはそこで足を止めて振り返る。なぜなら、演習内容はいつもフリードリッヒが決めて、自分はその命令を遂行するのが常だった。それが、なぜ今日に限って全ての判断を委ねると言い出したのか。困惑するカレンに対し、フリードリッヒは不機嫌そうに鼻を鳴らしながらこう続けた。
「――例えば同盟国の地に古龍が出現し、その救援に向かうという演習でも構わん。救援物資などが必要なら、陸軍を経由して手配しろ。戦闘に必要な軍艦も弾薬も、救援物資を運ぶ為の輸送艦も好きに使え」
　そう言って鼻を鳴らしてそっぽを向くフリードリッヒ。その頬が少し赤みを持っている事を、何よりも全く素直じゃない彼女の言い方にヨーウェンはおかしそうにクスクスと笑う。そんな二人の様子、そしてフリードリッヒの言わんとしている事を理解したカレンの顔は急激に明るいものに変わっていく。
「あ、ありがとうございますッ！」
　大声で礼を叫び、すぐさまカレンは準備の為に部屋を出て行った。
　残されたフリードリッヒはまたしても深い溜息を零す。そんな彼女の肩を、ヨーウェンが優しく揉んであげる。
「もう、素直じゃないわねフーちゃんは」
「うるさい」
　ヨーウェンがからかうように言うと、頬を赤らめたままフリードリッヒは不機嫌そうに鼻を鳴らす。
「カレンにはまだ私の下で海軍に居てもらわなくては困る。こんな所で失うには惜しい人材だ」
「また素直じゃない事言っちゃって。素直に妹の願いを叶えたいって言えばいいのに」
「誰が妹だ。有能だが癖のある人材というのは苦労する。どこかの誰

かを一緒でな」
　責めるような視線を送るフリードリッヒの視線をさらりと流しながら、ヨーウェンは窓に近づくと、締め切っていた扉を開け放つ。風に自慢の黒髪を揺らしながら、小さく微笑んだ。
「……愛の力って、すごいわよね」
「振り回される方はたまったもんじゃないがな」
「あら、フーちゃんだって愛の力があったからここまでがんばれたんじゃない」
「どういう意味だ？」
「――ロンメルが来てから、あなた変わったものね」
「なッ!?　なぜそこで奴の名前が出て来るッ!?」
「あら、わかってるくせに」
「ヨーウェンッ！」
　顔を真っ赤にして激怒するフリードリッヒに対し、ヨーウェンはおもしろおかしそうに笑いながら彼女の必死の追撃を器用に避けてみせる。とても他人には見せられない、冷徹なアイドル総統と人心掌握の天才である宣伝大臣の寸劇。それは実にその後十分以上も続くのであった。ちなみにその様子をドアの外で警備していたオコーネルが鼻血を噴きながら覗いていた事を、二人は知らない。
　その後、カレンは陸軍総司令官のエリック・マンシュタイン元帥を通して必要な救援物資を揃えると、必要な戦力を集めて艦隊を編成。フリードリッヒへの直訴の二日後という異例のスピードで国防海軍の本拠地であるキール軍港を抜錨。エルバーフェルド国防海軍の精鋭部隊である本国艦隊を基幹として編成された艦隊が出撃した。
　国防海軍は全部で五つの艦隊から編成される。本国防衛を担う戦艦を主力とした本国艦隊、遠洋航海能力と高速展開性に優れた巡洋艦が主力の外洋艦隊、大陸南部の租借地やその周辺の防衛を担う旧式艦で編成された南方艦隊、司令部直轄の輸送艦を多数有して作戦に合わせて輸送船を派遣する輸送艦隊と補給艦や病院艦、工作艦などを従えて同様に作戦に応じて派遣する支援艦隊。これら五つの艦隊と各種海軍組織を従えるのが、国防海軍総司令官である。

帝国防衛の為にキール軍港を母港としている本国艦隊からは第１戦隊、第２戦隊、第６戦隊、第１２駆逐隊が。東方海域に展開している本隊とは別に演習の為に来港していた外洋艦隊演習部隊からは第５戦隊、第２水雷戦隊、第４水雷戦隊。司令部直轄の輸送艦隊からは第３輸送隊、第５輸送隊。同じく司令部直轄の支援艦隊からは給炭艦二隻と工作艦一隻が参加。

ここに、エルバーフェルド海軍伝統、複数の艦隊から成る大規模艦隊――大洋艦隊（ホーホゼーフロッテ）が編成された。

大規模な大洋艦隊がわずか二日で出撃できた。それは偏に彼女の無茶を事前に予想していたフリードリッヒが事前に準備を施していたからである事は、言うまでもない。

後日談だが、このカレンの愛する男の為に自分の人生を懸けて救援に向かうという話は小説や舞台などを通して人々に知れ渡り、カレンは国民から絶大な人気を得る事となった。ちなみにこの広報を担当したのが宣伝省であり、ヨーウェンが主君に反旗を翻した罰として与えたのは言うまでもない。

後日、カレンは語った――素直に海軍を辞めていた方が良かった、と。

大洋艦隊旗艦：戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』

【救援艦隊　護衛隊】

第１戦隊：戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』

第２戦隊：戦艦『ビスマルク』『シャルンホルスト』

第５戦隊：重巡洋艦『ケーニヒスベルク』『ドレスデン』『ザイドリッツ』

第６戦隊：重巡洋艦『ローレライ』『メテオール』『シャルロッテ』

第２水雷戦隊：軽巡洋艦『シュヴァルツァー』

第３駆逐隊：駆逐艦『Ｚ９』『Ｚ１０』『Ｚ１１』『Ｚ１２』

第４駆逐隊：駆逐艦『Ｚ１３』『Ｚ１４』『Ｚ１５』『Ｚ１６』

第４水雷戦隊：軽巡洋艦『シュトゥルム』

第７駆逐隊：駆逐艦『Ｚ２５』『Ｚ２６』『Ｚ２７』『Ｚ２８』

第８駆逐隊：駆逐艦『Ｚ２９』『Ｚ３０』『Ｚ３１』『Ｚ３２』

―全２７隻―
【救援艦隊　支援隊】
第１２駆逐隊：駆逐艦『Ｚ４５』『Ｚ４６』『Ｚ４７』『Ｚ４８』
第１補給隊：給炭艦『イルティス』『エーベル』
第１支援隊：工作艦『アリアドネ』
―全７隻―
【救援艦隊　本隊】
第３輸送隊：輸送艦『Ｔ７』『Ｔ８』『Ｔ９』
第５輸送隊：輸送艦『Ｔ１３』『Ｔ１４』『Ｔ１５』
―全６隻―

全四〇隻という、エルバーフェルド帝国史上最大規模の大洋艦隊は針路をアルフレアに向けて出撃。アルフレア沖にてそこからイージス村の方へと変針するとそのまま南下。村の沖合近くで支援隊と本隊を残し、護衛隊は全艦戦闘態勢のまま別離し、いよいよイージス村の近海にまで到達した。

「前方イージス村ッ！　上空に鋼龍クシャルダオラを捕捉ッ！」

海上を翔けるエルバーフェルド国防海軍大洋艦隊。第１戦隊こと旗艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』を先頭に第２戦隊、第５戦隊、第６戦隊という主力部隊とその左右に第２水雷戦隊、第４水雷戦隊と三列の複縦陣で航行しながらイージス村のある湾に突入した。

見張り兵からの報告に、艦橋の上にある戦闘指揮所にいたカレンの顔に緊張が走る。全長一五〇メートルにも及ぶ鋼鉄の艦に乗る約一〇〇〇名の将兵、そして艦隊全ての将兵に緊張が走った。

主力部隊の先頭を進む大洋艦隊旗艦、フリードリッヒ・デア・グローセ級戦艦１番艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』。エルバーフェルド帝国総統の名を冠した全長一五〇メートル、全幅二五メートル、基準排水量一万八〇〇〇トンを誇るこの鉄の巨艦は去年竣工したばかりの最新鋭の戦艦である。三〇センチ連装砲二基を前後に抱え、両舷に無数の砲を構えるこの戦艦は大陸では最大最強と謳われる。ちなみに余談ではあるが現在２番艦が建造中である。フリードリッヒはこの２番艦に『デーニッツ』と名付ける予定だが、カレンはこの事実

を知らないでいる。
国防海軍旗艦である『フリードリッヒ・デア・グローセ』単独艦で編成された第1戦隊の他に、前級のビスマルク級戦艦の二隻の第2戦隊が続く。その左右をケーニヒスベルク級重巡洋艦の三隻で編成された第5戦隊と、ローレライ級重巡洋艦三隻で編成された第6戦隊が続く。
戦隊とは一つの艦隊を編成する複数の艦船で編成された小艦隊のようなもの。通常は同級の姉妹艦で編成される。これは同じ性能の艦船でないと戦闘時の艦隊運動の際に差が生じてしまう為、効率の良い艦隊運動ができない為だ。その為、前級のケーニヒスベルク級より特に速度が勝る最新鋭艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』は単独で第1戦隊となっている。いずれ2番艦ができれば二隻で第1戦隊を編成する事になる。
海上に浮かぶ鋼鉄の城に居城を構える城主は、本国艦隊司令官を兼務する国防海軍総司令官であるカレン。その露天の戦闘指揮所にカレンは無言で立っていた。
「カレン提督。そろそろ交戦予想海域だ。艦橋に入った方がいい」
固唾を飲んで本国艦隊及び国防海軍総司令部の幹部達が見守る中、国防海軍総参謀長のエーリック・レーダー大将がカレンに声を掛けた。この壮年の男こそカレンの後見人であり、カレンの父の無二の親友、共和国時代には解体されるまで海軍総司令官として海軍の存続に尽力、そして今はカレンの右腕として力を振るう男だ。天才と言われるカレンを畏怖や尊敬の目で見る部下が多い中、彼だけが彼女に対して対等に接している。カレン自身もフリードリッヒの次に絶大な信頼を寄せる人物だ。
そんなエーリックの言葉に、カレンは首を横に振った。
「私はここで構わない」
「いやだが、ここは防壁も何もない剥き出しの指揮所だ。危ないぞ」
「父や祖父は、戦の時は必ずここに立って指揮をしていたと聞いてるわ」
「……お前の親父が死んだのもここだ」

「危険は百も承知よ。そしてそれは、ここで艦の目となる見張り兵も同じ事。部下が命を張っている時に、私が命を張らないのはおかしいわ」
　そう言ってカレンは呆けている見張り兵達に口元だけで笑みを浮かべた。まだ再建したばかりの海軍は装備こそ近代的だが、兵達はまだ若い。ここで見張りを務めるのも、十代や二〇代といった若者ばかりだ。そんな彼らも美少女であるカレンに微笑みかけられれば顔を赤面させるのも当然だ。何より、自分達と対等で戦おうとする彼女の姿勢に、改めて尊敬の念と、彼女の期待に応えるべく意気込んで双眼鏡を覗き込む。そんな兵達を見てエーリックは苦笑を浮かべた。
「まったく、お前さんは親父にそっくりだな」
「……エーリック。あなたこそ他の幹部を連れて艦橋に入りなさい」
「おいおい、お前が部下と対等に命を張るって言ったんだろ？　俺達だって同じさ。なぁ？」
　エーリックの問いかけに、背後にいた幹部達が頷く。皆、年若いカレンの事を最初はバカにしていた連中ばかりだ。だが彼女が本気で海軍の再建を目指し、尽力する姿を見て、心から彼女を尊敬するようになった者達ばかり。皆、彼女と同じ場所で命を張る覚悟はできていた。そんな上官想いの部下達を見てカレンは一瞬感極まりそうになったが、あえて平静を装いわざとらしくため息を吐く。
「バカね。海軍の頭が一ヶ所に集中してたら、もしもの時に全滅でしょ？　リスク分散、早く艦橋に入りなさい。これは命令よ」
　カレンの言葉にそれでも食い下がろうとした部下達を制したのはエーリックだ。首を横に振って諦めろと言わんばかり。そんな彼の様子を見て幹部達は渋々艦橋の中へと入っていく。残されたのは若い見張り兵が数人と、これまた必要な側近数名。そしてカレン、エーリックだけ。
「あなたも艦橋に入って、エーリック」
「総司令官殿の隣に立つのが、総参謀長の役目だ。お前の隣を離れるつもりはない」
「……あなたって、一度決めたら聞かないものね。いいわ」

「まぁ、お前がいい人を見つけたら、俺は潔く隣をそいつに譲るつもりだがな」
からかうように言うエーリックの言葉にカレンは頬を赤らめながらフンと鼻を鳴らす。そのいずれ自分の隣に立ってもらう男を助けに今向かっているのも、エーリックには知られているのだ。
和やかな雰囲気はそれまでだった。いよいよ交戦予想海域に入った艦隊。先程まで軽口を叩いていたエーリックも厳かな表情で陸を見詰めており、艦内の緊張が高まる。そんな中、カレンは無言で双眼鏡で村の様子を確認する。崖の上にある小さな村は、遠目に見てもかなりの被害を受けている事がわかる。家屋のほとんどが破壊され、道や木々が跡形もなく破壊されている。それをあの上空で悠々と浮かんでいる古龍がやったと思うと、まるで自分の故郷を荒らされたかのように怒りで腸が煮えくり返るようだった。
だが、憎しみに思考が支配される寸前、彼女の瞳はレンズ越しの目的の人物を発見した。上空に浮かぶクシャルダオラに対し、ボロボロになっても立ち塞がる少年。その無事な姿を見た途端、彼女の胸にあった黒いものが綻び、霧散していく。
「間に合って、良かった……」
心から安堵したように微笑みながら言うカレン。だがすぐに厳かな表情、総司令官の表情に戻ると双眼鏡を外して振り返る。背後には自分の命令を待つ将校達が自分を見詰めて立っていた。それらに向かって、カレンは命令を下す。
「取舵一杯。右砲戦用意。弾種、レーヴェンツァーン。主力部隊と水雷戦隊に隊を分派後、水雷戦隊は主力部隊より前方に展開。一斉砲撃でこれを攻撃するわ」
「聞いたかぁッ!? 取舵いっぱぁいッ! 右砲戦用意ぃッ! 弾種はレーヴェンツァーンだぁッ!」
復唱するエーリックの大声が甲板中に響き渡る。それを合図に艦内がにわかに慌ただしくなる。カレンの命令に従い、旗艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』が急速回頭。左に大きく針路を取った。続けて後続の第2戦隊の戦艦『ビスマルク』『シャルンホルスト』と続き、

その後を更に第５戦隊、第６戦隊の重巡洋艦６隻が続いて回頭する。その一糸乱れぬ動きは蛇のようだ。
　更にこれに合わせて第２水雷戦隊と第４水雷戦隊が速力を上げて主力部隊を追い抜いた。主砲口径の小さな砲を装備する水雷戦隊は射程距離が主力部隊のそれよりも短い。それを補うように主力部隊よりも前方に展開する必要があるのと、主力部隊である第１、第２、第５、第６戦隊を守る壁として敵に立ち塞がる為だ。
　兵士達が次々に砲戦準備に入る。前後に備えられた主砲塔が動き出し、右舷へとその砲身を向ける。同時に右舷速射砲群所属の砲兵達が配置につき、左舷速射砲群の兵士達が応援に駆けつける。各砲がそれぞれ村上空に滞空（ホバリング）するクシャルダオラに狙いを定めて砲の方向や角度を調整。多くの将兵達が右舷に集中し、カレンの砲撃命令を待つ。
　戦闘指揮所に立つカレンは双眼鏡でクシャルダオラを睨みつける。その間も測距員が彼我の距離を測定し、それを各艦に発光信号で通達する。この見事な連携もまた、練度の高いエルバーフェルド国防海軍の凄みだ。
　イージス村に対して、全艦がちょうど横切るような形で右舷を見せながら配置につく。
　準備は整った。後は、カレンの砲撃命令を待つだけだ。甲板に装備されている前後一基ずつの主砲と、右舷側の速射砲群の全てがクシャルダオラを狙う――全砲門、砲撃準備完了。
　不気味な沈黙が一瞬場を支配する。そして、クシャルダオラが一際大きく咆哮しながら高度を上げた瞬間、カレンが振り返る。
「全艦砲撃開始ッ！　撃ちぃ方始めぇッ！」
　――刹那、大洋艦隊二七隻の軍艦が、一斉にその使用可能全砲門から火を噴いた。
　村の上空に大輪の花が次々に咲き誇る。
　エルバーフェルド国防軍必殺の特殊砲弾、レーヴェンツァーン。エルバーフェルド語でタンポポを意味する名を冠したこの特殊爆弾は

目標物上空で時限信管が作動して爆発。砲弾の破片や装薬された火薬が爆発しながら辺り一面に撒き散らされる。炎上する火薬が周囲に撒き散らされながら様からタンポポを意味するレーヴェンツァーンと名付けられた、エルバーフェルド国防陸海軍共同開発された新型砲弾である。

対地攻撃では敵基地や敵部隊の上空で炸裂させ、広範囲を一斉攻撃するこの砲弾は対人及び軽防備兵器の殲滅。最近ではたった一門から放たれた数発のレーヴェンツァーンでランポスの群れを薙ぎ払った事から対モンスター兵器としても注目されている。

海軍でも上陸作戦支援時等に沿岸の敵迎撃部隊を殲滅する為にこの砲弾が採用されているが、カレンはこのレーヴェンツァーンを同盟国ながらも仮想敵国としているアルトリア王政軍国の飛行船に対する対空兵器として着目。敵飛行船上空で炸裂させれば気嚢にダメージを負った飛行船を撃墜もしくは戦闘不能にする事ができると考えたのだ。

レーヴェンツァーンを使った対空砲撃。訓練してきたとはいえ、相手がクシャルダオラというモンスターだとはいえ実戦で使用するのは初めてだ。

無数の火炎の花がクシャルダオラを包むように咲き誇る。カレンはすぐに砲撃中止を命令。上空に滞留した煙が晴れるのを待った。命中はしたはずだが、クシャルダオラがどれほどのダメージを負ったかは煙が濃すぎてわからない。

上空に滞留する煙が晴れるまで、艦隊将兵全てが息を呑んで見守っていた。だがそれも数秒の事だった。

突如大気を震撼させるような咆哮が轟くと、荒れ狂う風が一瞬にして煙を薙ぎ払った。姿を現したのは全身に火炎を纏ったクシャルダオラだった。燃える火薬を体表に纏っている為、まるで炎を身に纏ったかのような姿をしているのだ。だがその炎も風の鎧が消し飛ばす。

風が落ち着き、ようやくクシャルダオラの全貌を確認できた。双眼鏡で鋼龍を見詰めていた少年兵は声を震わせながら報告する。

「クシャルダオラ、無傷ですッ！」

衝撃が走る兵達の中、カレンだけは素早かった。
「全艦砲撃再開ッ！　このまま奴を挑発しながら外洋へと離脱ッ！　村からクシャルダオラを引き剥がすわよッ！」
カレンの命令に従い、全艦は再びレーヴェンツァーンでの対空砲撃を再開しながら速力を上げて針路を東北東へと転進。右砲戦を維持しつつ村から離れるように動き出した。
だが、カレンの思惑とは裏腹にクシャルダオラはレーヴェンツァーンの砲撃の嵐の中でも無傷だった。荒れ狂う風が炸裂するレーヴェンツァーンから放たれる破片や火薬を薙ぎ払い、全くクシャルダオラ本体へと届かないのだ。
「古龍ってのは無茶苦茶だって聞いてるが、いくら何でもチート過ぎるだろうが」
目の前の信じられない光景にエーリックが引きつった笑みを浮かべる。他の将兵達も必殺のレーヴェンツァーンがまるで効かない事に衝撃を受けていた。その中でもカレンは気丈だった。
「効果がなくても問題ないわ。奴を村から引き剥がすだけでいいの。接近してきたら通常弾でこれを撃つ。所詮レーヴェンツァーンは爆竹のようなもの。本命は鋼鉄の砲弾――徹甲弾よ」
砲撃を開始して数分後、嫌気がさしたのかクシャルダオラは雄叫びを上げながら艦隊に向けて突撃して来た。その尋常ならざる速度に計算が追いつかず、時限信管を備えたレーヴェンツァーンはクシャルダオラのはるか後方で炸裂する。距離や速度などを計算しながら設定する時限信管の最大の弱点が露呈した瞬間だった。
「鋼龍、来ますッ！　距離六五〇〇！」
「主力部隊は引き続きレーヴェンツァーンを撃ち続けなさい。第２、第４水雷戦隊は通常弾へと弾種を変更しつつクシャルダオラに向けて突撃。これを迎え撃ちなさい」
カレンは軽武装及び軽装甲の為に戦艦や重巡洋艦よりも速力と機動力に優れた駆逐艦と軽巡洋艦で編成された水雷戦隊にクシャルダオラとの接近戦を命じた。
カレンの命令に従い、第２、第４水雷戦隊の艦艇十八隻は第１、第

2、第5、第6戦隊で形成された主力部隊から離れてクシャルダオラへと突撃する。
離れていく二個水雷戦隊を見送りながら、カレンは再びイージス村の方を見やる。そして、そこに居る愛しの彼に向かって満面の笑みを浮かべながら、自らの決意を叫んだ。
「絶対に守ってみせる、死なせないんだから――クリュウ・ルナリーフッ！」
――歴史上初、艦隊による古龍迎撃戦が開始された瞬間だった。

第２２３話　突撃水雷戦隊　鋼の龍王に挑みし男達の激戦の軌跡

第２水雷戦隊旗艦、シュヴァルツァー級軽巡洋艦１番艦、軽巡洋艦『シュヴァルツァー』に座乗する第２水雷戦隊司令官、《水雷の神様》こと カール・ルドルファー少将は司令官席に深く腰掛ける大柄な男だった。愛用しているタバコを吸いながら迫り来るクシャルダオラを睨みつけていた。

「長い海上生活でも、さすがに古龍を相手に戦うのは初めてだなぁ」

五〇代の白髪交じりの髪に彫りの深い顔立ちのカールはそう言って不敵に微笑んだ。彼は王国時代からの海軍軍人であり、あのローレライの悲劇の最中で攻め入って来たガリア・東シュレイド連合艦隊に対して津波で主力艦隊の大半を失いながらも奮闘した大洋艦隊に参加した一隻の駆逐艦の艦長だった男だ。艦長と言っても臨時編成の為に繰り上げで艦長となり、艦も警備艦に引き下げられていた旧式の駆逐艦。乗組員も津波で損失した艦艇の生き残りの寄せ集め。参加艦艇の大多数が同じような状況でコンディションとしては最悪に等しい状況だった。だが大洋艦隊の奮闘ぶりは凄まじかった。祖国を守る大戦という事で慣れない艦、見知らぬ仲間達という状況でも兵士達の士気は極めて高く、最終決戦自体はエルバーフェルド王国海軍は敗北するものの、数倍の戦力で挑み掛かって来たガリア・東シュレイド連合艦隊の半数を撃沈または撃破する程の打撃を与え、参加艦艇のほとんどが撃沈または自沈するという壮絶なものだった。彼はその戦いで圧倒的に不利な状況で敵艦五隻を撃沈するという偉業を成し遂げた。その腕を買われ、現在のエルバーフェルド国防海軍では最高練度を誇り水雷科を目指す若者全てが憧れる精鋭水雷戦隊、第２水雷戦隊の司令官としてその腕を振るっていた。

余談ではあるが、第１水雷戦隊は本国艦隊にて第３水雷戦隊と共に主力部隊の護衛役としてその真価を発揮しているのに対し、外洋艦隊所属の第２、第４水雷戦隊。特に第２水雷戦隊は水雷戦の主力として

位置づけられている為に訓練も厳しく、水雷戦隊の中では極めて高い練度が必要とされる。故に第1ではなく第2水雷戦隊が最強の水雷戦隊として語り継がれているのである。
　ローレライの悲劇で起きた大海戦以来初の本格的な実戦。それも歴史上初艦隊による古龍を迎え撃つという戦いの一番槍。カールは武者震いに震えていた。
「クシャルダオラ、物凄い速度で我が隊に近づいてきますッ！　距離二〇〇〇ッ！」
　主力部隊のレーヴェンツァーン砲撃を無視して迫るクシャルダオラ。見張り兵の震え声を合図に、身長二メートルに迫る大男カールが立ち上がる。吸っていたタバコを捨て、軍帽を深く被りながら命令を下す。
「『シュヴァルツァー』はこのまま鋼龍に単艦にて突撃ッ！　３隊と４隊は左右に分かれて奴を包囲だッ！　鶴翼の陣で奴を迎え撃つッ！」
　カールの指示に従い、第２水雷戦隊の全艦が最大速度にて航行しながら陣形を形成する。一糸乱れぬ動き、それも最高速度にての陣形転換。神懸かり的な練度を誇る第２水雷戦隊だからこそできる神業だ。
　鶴翼の陣。総大将を中心に三日月型の陣形を形成するこの陣は鶴が翼を広げた形に似ている事からこの名がついた。総大将に向けて突撃して来る敵を左右から包囲してこれを全方位から殲滅する為の陣形であり、特に全部隊の連携が重要視される陣形だ。だが最高練度の第２水雷戦隊なら、これくらい造作も無い。
　右先頭を走る駆逐艦『Ｚ９』と左先頭を走る『Ｚ１３』の間をクシャルダオラが通り抜けた瞬間、両艦がそれぞれ舵を切った。『Ｚ９』は取舵、『Ｚ１３』は面舵を。それぞれの後方を走る残り三隻の駆逐艦もその動きに合わせて舵を切り、クシャルダオラの退路を断つ。
　迫り来る怒り狂うクシャルダオラを前に将兵達が恐れ慄く中、カールは不敵な笑みを崩さぬまま窓際にてクシャルダオラを迎え撃つ。
「舵そのままぁッ！　後進全速ッ！」
「司令ッ!?　そのような無茶すれば、スクリューが破損しますッ！」
　カールの度肝を抜くような指示に対し副長が悲鳴にも似た声を上

げる。だがそんな彼の肩にそっと手を置く男が居た。彼は何も言わず、無言で首を横に振る。
「……あいつの言う通りにしろ。艦が破損しても、責任は俺が取る」
「艦長……」
カールとは戦隊司令と戦隊旗艦艦長。階級もひとつ違うが、海軍兵学校同期のハラルド・ヴェイサー大佐の言葉に副長も覚悟を決めた。ハラルドと目が合ったカールは不敵な笑みを浮かべる。
「舵そのままぁッ！　両舷後進ぜんそぉ～くッ！」
副長の怒号にも似た指令が伝声管を通じて機関室へと届く。機関兵達はまた司令官の無茶苦茶な指示かと笑いながらも、その指示に従う――俺達の司令官は無茶苦茶でも、世界最強の水雷戦隊を率いる水雷の神様なのだから。
進む為に回転していたスクリューが一斉に停止し、すかさず全力で反転する。全速前進からの全速後進。スクリュー周辺の水流は乱れ狂い、スクリューが嫌な音を立てて震える。機関も想定外の圧力に悲鳴を上げるが、エンジンを知り尽くした男達はそんなじゃじゃ馬をうまく操作する。
急速に速度を失い、減速していく『シュヴァルツァー』。しかし舵はそのままなので、迫り来るクシャルダオラは相変わらず真正面から豪速で迫って来る。そして、クシャルダオラが『シュヴァルツァー』の艦橋に向かってその鋭い爪を振り上げる――その瞬間、第２水雷戦隊の本領が発揮される。
第３、第４駆逐隊それぞれの三番艦『Ｚ１１』『Ｚ１５』が舷側に備えられた大砲から放った拘束弾がクシャルダオラに命中した。クシャルダオラの鉄の鎧を超える硬度の鏃と頑丈なロープが備えられた拘束弾。鏃が鉄の鎧に突き刺さり、抜けないように返し刃がしっかりと喰い込む。頑丈なロープが限界まで伸び切った瞬間、クシャルダオラの動きが封じられた。振り下ろした鉄の爪が、艦橋にあと一歩の所で届かない。
「残念だったなぁ、クシャルダオラさんよぉ」
軽巡洋艦『シュヴァルツァー』は爪が触れる寸前で停止し、すかさ

ず後進を開始する。
　ある程度の距離が開くと、暴れ狂うクシャルダオラに向けて前部二基の主砲が狙いを定める。仰角を取り、弾薬室から砲弾が装填され、二基の主砲から「いつでも撃てますッ！」という勇ましい声が伝声管を通じて艦橋へと響く。それを聞いたカールは不敵な笑みを浮かべながら、瞳を勇ましく煌めかせ、開口する。
「キツイの一発ブチかましてやれぇッ！」
「撃ち方始めぇッ！　撃てぇッ！」
　ハラルドの命令と同時に『シュヴァルツァー』の前部主砲が一斉に火を噴いた。放たれたのは敵艦を打ち砕く為に硬い弾頭を備えた徹甲弾。レーヴェンツァーンの爆竹とは違う、重い槍の一撃だ。
　旗艦に続いて第３、第４駆逐隊も一斉に通常弾にての砲撃を開始する。全方位からの一斉攻撃。クシャルダオラは悲鳴を上げながらのたうち回るが、拘束されている為に脱出できず、ただただ砲撃を受け続ける。
　遅れてやって来た軽巡洋艦『シュトゥルム』率いる第４水雷戦隊も砲撃に加わり、十八隻の軍艦から一瞬の隙もない濃密な砲撃が加えられる。
　だがクシャルダオラもただやられているばかりではない。風の鎧を最大にして叩き込まれる砲弾をうまく逸らしていた。戦艦級の砲弾ではなく、比較的軽い軽巡洋艦や駆逐艦の砲弾が災いし、命中弾がなかなか生まれない。更に守るだけではなくクシャルダオラの反撃も凄まじかった。小さな嵐にも等しい風ブレスを次々に撃ち放ち、包囲する二個水雷戦隊を攻撃していく。
　拘束してから三分後、ついにその包囲網が崩れる瞬間がやって来た。
　クシャルダオラが放った風ブレスが『Ｚ１１』に命中。強烈な風の刃の直撃を受けた『Ｚ１１』は煙突やマストが薙ぎ倒される。拘束弾と艦を繋いでいたロープの牽引機も同時に破壊され、拘束していた二本のうちの一本が消失する。
　火災が発生し、甲板に兵士達が次々に現れて消火活動を開始する。

その間に被害状況を整理した『Ｚ１１』の艦長は戦闘継続不可能と判断。発光信号で旗艦である『シュヴァルツァー』にその旨を伝え、撤退を開始する。
「『Ｚ１１』大破ッ！　戦線を離脱しますッ！」
「構うなッ！　それよりも急いで拘束し直せッ！」
カールの怒号が響く艦橋に、更なる衝撃の光景が飛び込んで来た。残る一本のロープを結わえていた『Ｚ１５』は砲撃を中止し、『Ｚ１１』の分を補うように機関出力を最大にしてクシャルダオラとの壮絶な力比べを展開していた。だが風の鎧の一部を推進力に変えて対抗するクシャルダオラ。守りの風が薄くなり、砲弾が命中しても尚その力比べをやめようとしない。文字通り身を削りながら引っ張るクシャルダオラに対して前進全速しているはずなのに徐々に後退していく――直後、『Ｚ１５』の艦中部に爆発が起きた。
「『Ｚ１５』機関爆発ッ！　航行不能ッ！」
「拘束弾を準備できた艦から構わず撃ち込めッ！　奴を絶対に逃すなぁッ！」
カールの怒号の直後、残る艦が次々に拘束弾を放つが、いずれもクシャルダオラは器用に避けてこれを回避。機関が爆発した影響で牽引機も壊れた『Ｚ１５』のロープが外れたのはその瞬間だった。
「包囲網を緩めるなぁッ！　撃てる砲は全て撃ちまくれッ！」
十六隻となった二個水雷戦隊は再び猛烈な砲撃を浴びせる。だが、クシャルダオラは脅威の空中浮遊力でこれを回避しながら、反撃を開始した。
距離を縮めて至近距離から砲撃しようとしていた『Ｚ９』が風ブレスの直撃を受けて戦闘能力を失うと、続けて『Ｚ１２』がクシャルダオラの爪で煙突を切り倒されて炎上。この混乱の中で『Ｚ２８』と『Ｚ３０』が衝突するなど、次々に被害が拡大していった。
だがその中でも気丈に戦う艦があった。カールの乗る軽巡『シュヴァルツァー』だ。暴れるクシャルダオラに突撃すると、拘束弾を撃ってこれを拘束。一発では足らず、続けて三発発射。計四本のロープでクシャルダオラを捕らえた。

「主砲撃てぇッ！」
　カールの怒鳴り声と砲声が重なる。『シュヴァルツァー』の主砲が連続して撃ち、クシャルダオラを攻撃する。だが、クシャルダオラは怒りの声を上げながら更に強力な風を纏う。目で見える程に濃密な風の鎧は襲い掛かる砲弾を次々に吹き飛ばし、絶叫にも似た怒号は兵士達を怯えさせる。
「これが古龍……ッ！」
「無茶苦茶じゃねぇか……ッ！」
　動揺する兵士達を横目に、カールは更なる命令を下す。
「２水戦残存艦艇全艦、拘束弾で奴を縛り上げろッ！　ユーリに発光信号ッ！『全火力ヲ以ッテ敵ヲ砲撃セヨ』ッ！」
　乱れていた隊列はすぐに整い、第２水雷戦隊の残存兵力である旗艦『シュヴァルツァー』の他『Ｚ１０』『Ｚ１３』『Ｚ１４』『Ｚ１６』は次々に拘束弾を放ち、クシャルダオラを縛り上げた。全艦機関全速の証の濃密な黒煙を煙突から噴かせて奮闘する。
　第２水雷戦隊の奮闘を前に、クシャルダオラの前方に横並びに隊列を整える第４水雷戦隊。衝突事故を起こした二隻を除いた七隻の戦隊は全ての主砲と半分の副砲をクシャルダオラに向ける。第４水雷戦隊旗艦、シュヴァルツァー級軽巡洋艦２番艦、軽巡洋艦『シュトゥルム』に乗るのはユーリ・ヴェネティア少将。知的なメガネと氷海のような美しい透き通った蒼色の長い髪を流した美しい女声司令官だ。年はもう三〇代後半だが、小柄な体格の為に二〇代と言っても通じてしまう――もしかしたら十代と言っても問題なし？――幼い外見をしているが、一個水雷戦隊を率いる長だ。
「……はぁ、先輩は相変わらず無茶苦茶ですねぇ」
　呆れつつも、その表情はどこか嬉しそう。同じ水雷畑として、カールの事はやはり尊敬しているのだ。例え性格が無茶苦茶で、艦や戦隊の運用が少し雑でも、その実績と決断力の凄まじさは買っている。あれが水雷の神様と謳われる男の戦い方なのだから。
「格上の２水戦が拘束役で、格下の私達４水戦が砲撃役。普通は逆なんですけど――実にあなたらしい」

くすくすと笑う戦隊司令の姿に困惑する部下達に対し、ユーリは静かに振り返る。その時にはすでに第４水雷戦隊司令官、《水雷の姫巫女》と称されるユーリ・ヴェネティア少将の顔となっていた。
「全艦、右砲戦撃ち方始めなさいッ！」
ユーリの砲撃命令に従い、旗艦『シュトゥルム』が砲撃を開始する。続けて他の駆逐艦も次々に砲撃を浴びせる。連続して放たれる砲撃にクシャルダオラもまた負けじと風ブレスで反撃を試みる。だがそれを妨げるように拘束する第２水雷戦隊が巧みな操艦でロープを引っ張り、風ブレスの軌道を変えたり、ブレスそのものを封じたりする。
再び一方的な戦いとなったが、やはりクシャルダオラは常軌を逸したモンスターだった。風を巧みに操り姿勢を制御しながら、その鋭い爪で次々にロープを切断していく。強力な繊維を何十層にも織り込んだ強力なロープも、クシャルダオラの鋼の爪の前では無力だった。
切断されるロープの変わりに新たに拘束弾を発射するも、風の鎧がそれを防ぐ。そして、最後のロープが切断される。
「グオオオオオオオオオッ！」
天地を震わせるような激しい怒号が響き渡る。荒れ狂う風は更にその濃密さと荒々しさを増していく。怒り狂うクシャルダオラはもはや体内の制御もできない程怒り狂っているのだろう。口から白い風を漏らしながら激しい憎悪と共に睨みつけたのは、散々自らを攻撃した第４水雷戦隊。
怒号と共に第４水雷戦隊に向かって突撃するクシャルダオラ。慌てて第８駆逐隊がレーヴェンツァーンで弾幕を張って接近を阻むが、怒りの風ブレスを受けて一瞬で『Ｚ２９』『Ｚ３１』が吹き飛ばされる。煙突とマストが薙ぎ倒され、辺りに破片を撒き散らせながら機関停止に陥る。
追撃しようとするクシャルダオラに対し、旗艦『シュトゥルム』が立ち塞がる。主砲を連射して徹甲弾を次々にクシャルダオラに浴びせるが、風の鎧を巧みに操って弾道を逸らすクシャルダオラにはなかなか致命打を与えられない。それでも構わず『シュトゥルム』は攻撃

を続ける。
「面舵いっぱいッ！　左砲戦速射砲群撃ち方用意ッ！」
ユーリの命令に従い、『シュトゥルム』は面舵を回す。急激に右へと曲がっていく『シュトゥルム』。高速でいきなりの面舵全開に艦は大きく左へと傾く。艦内の兵士達は皆大きく傾く床に耐えながら配置へと着く。左舷速射砲群には次々に兵士達が集まり、自慢の大砲を次々に構える。
そして、クシャルダオラに対して艦が完全に立ち塞がる形になった瞬間、ユーリの号令が下る。
「撃ち方始めッ！」
ユーリの号令に合わせ、攻撃開始のラッパが鳴り響く。待ってましたとばかりに兵士達は次々に大砲を撃ち放つ。大小様々な砲弾が発射され、クシャルダオラへと襲い掛かる。無数の砲弾を受けて防戦一方となるクシャルダオラ。風の鎧を前方へと展開し、砲弾の嵐を防ぎ切る。
「さすが、風の鎧はなかなか打ち壊せない」
この光景に動揺する部下達を前に、ユーリは笑みを崩さない。メガネの奥の瞳を煌めかせ、罠にかかった獲物を見るように不敵に微笑む。
「――でも、そんなに前ばっかりに気を張ってていいのかしら？」
直後、クシャルダオラの背中が爆発した。悲鳴を上げて仰け反るクシャルダオラ。風の鎧が一瞬緩んだその隙を、ユーリは見逃さない。
「今よッ！　全砲門フォイアーッ！」
軽巡洋艦『シュトゥルム』の左舷全砲門と主砲が一斉に火を噴く。風の鎧が緩んだ一瞬の隙に浴びせられた砲弾はすさまじい爆発を起こしてクシャルダオラの姿を火炎と黒煙の中に消す。
散々砲弾を叩き込んだ末、ユーリは砲撃中止の命令を下す。煙が晴れるのを待つ為だ。
なぜ風の鎧を纏うクシャルダオラに一撃を加えられたか。実はこの『シュトゥルム』の攻撃自体が囮であり、且つ主力であった。実はあの時、クシャルダオラに対して防戦を強いる為に『シュトゥルム』は

あえて目立つ形となり、一斉砲撃を加えた。当然クシャルダオラは風の鎧を展開するが、前方からの攻撃に対しどうしても防壁も前方へと展開してしまう。そこへ事前にユーリから命令を受けていた『Ｚ３２』が背後へと回り込み、そこから砲撃を加えた。駆逐艦程度の砲撃とはいえ、直撃を受ければクシャルダオラも怯む。その一瞬の怯みが風の鎧の崩壊を意味し、その一瞬が『シュトゥルム』の全火力を集中させる時でもあった。

見事クシャルダオラに総攻撃を浴びせたユーリ率いる旗艦『シュトゥルム』。ユーリ自身、あれ程の砲弾を浴びせたのだからクシャルダオラも無傷ではいまいという判断だった――だがその判断は呆気無く覆された。

怒号と共に辺りに風が荒々しく吹き荒れると、煙を一瞬で吹き飛ばした。現れたのは全身に傷を負ったクシャルダオラ。確かに『シュトゥルム』の攻撃は効いていた。だがクシャルダオラを戦意喪失させる程ではなかった。

「ギャアアアアアアアアッ！」

憎悪に満ちた怒号と同時に放たれたのは、これまでとは明らかに威力も大きさも異なる風ブレス。全力全開の風ブレスは自らに打撃を与えた第４水雷戦隊旗艦――軽巡洋艦『シュトゥルム』に襲い掛かる。

「た、退避ぃ――ッ!?」

艦橋からこの光景を見ていたユーリはすぐに退避命令を出したが、遅かった。猛烈な風の塊の直撃を受けた『シュトゥルム』は艦上構造物を尽く破壊され、爆発炎上。航行不能に陥った。

「『シュトゥルム』被弾ッ！」

言われなくてもわかっている。さすがのカールも焦りの表情を見せた。

目の前で爆発炎上した第４水雷戦隊旗艦、軽巡洋艦『シュトゥルム』。旗艦を守るように隷下の残存駆逐艦『Ｚ２５』『Ｚ２６』『Ｚ２７』『Ｚ３２』がその周囲を取り囲むように展開。煙突から猛烈な黒煙を上げながら周囲を周回し、漆黒のカーテンで旗艦『シュトゥルム』を隠していく。

煙突から排出される黒煙でカーテンを作り上げ、旗艦を隠す第４水雷戦隊。しかし相手が悪かった。クシャルダオラは構う事なく風ブレスを横薙ぎに放ち、せっかく駆逐隊が作り上げた黒のカーテンを一瞬で消し飛ばす。顕になったのは、炎上する『シュトゥルム』と、カーテンがある間にロープを繋ぎ、今まさに曳航して撤退しようと止まっている四隻の駆逐艦の姿だった。

「まずいッ！　全艦突撃ッ！」

第４水雷戦隊の危機に、第２水雷戦隊が慌てて突撃を掛けるが、間に合わない。

鋼鉄のアギトを開き、暴れる風を無理やり集め、更に風を集め、塊を濃密にしていく。駆逐艦程度なら一撃で艦上構造物を吹き飛ばさる程の、強力な風ブレスだ。

四隻の駆逐艦の艦長が慌てて前進の命令を下すも、間に合わない。濃密な風ブレスが、怒号と共に放たれる――はずだった。

空に突如、まるで太陽が現れたかのような強烈な光の爆発が起きた。一瞬に過ぎない眩し過ぎる光の爆発。だがそれはクシャルダオラの視界を塞ぐのには十分な一撃だった。

悲鳴を上げ、風ブレスが不発となるクシャルダオラ。そのまま姿勢制御を失い、海へと落下した。

水柱を上げて海中へ没したクシャルダオラ。

驚くカールが振り返った先には遅れてやって来た第５、第６戦隊――重巡洋艦部隊の姿があった。

「間に合ったか……」

安堵の息を漏らすのは、第６戦隊司令官――ヴェルダント・ツェッペリン大将。年の頃はもう六〇代前半で白髪交じりの灰色の髪に同色のカイゼル髭が特徴的な年配の軍人。別名《海軍の長老》とも称される最年長の軍人でもある。

前年までは外洋艦隊司令長官を務めていたが、現在は後輩にその役職を譲り渡し、自らは現場指揮官としてあとわずかな軍人生活を送っていた男だ。第２水雷戦隊の司令官も勤めていた事もあり、ローレライの悲劇の最中の大海戦ではカールが乗艦していた駆逐艦が所属す

る水雷戦隊を率いていた男でもある。まさに、水雷の大御所とも言うべき男だ。
現場の指揮官として、まだ若い兵士が多い海軍の中で自らの技術や知識を教え伝えている最中で起きた今回の出撃。カレンは彼の身を案じて別の者に司令官を引き継がせようとしたが「突然隊の長が別の者に代わったら、下の者が困惑する。なぁに、ワシをあまり年寄り扱いするでない」とこれを拒否した。
後輩達の奮戦を見守っていたが、さすがに窮地だと知るや否や艦隊司令長官であるカレンの命令を待たず突撃。この行動にカレンはすぐに第５戦隊にも突撃命令を下した。
第５戦隊と隷下の第６戦隊の重巡洋艦六隻を従えたヴェルダント。炎上する『シュトゥルム』の背後から迫ると、主砲に装填しておいた閃光弾を発射した。
照明弾は夜戦において闇夜に隠れる敵艦をあぶり出す為に使われる砲弾で、発射後に上空で炸裂。パラシュートで降下しながら数分間燃え続ける事で辺りを照らすものだ。それに対し閃光弾は一瞬で燃え尽きる変わりに膨大な光を一瞬で放つ砲弾。主に敵の目を潰す事が目的の砲弾である。陸軍では比較的メジャーな砲弾だが、海軍では艦内に居る敵兵士にはあまり意味がなく、上陸作戦支援時等に使われるマイナーな砲弾として知られている。しかし今回相手が古龍と知ったヴェルダントは事前に輜重部隊に手配し、これを受け取っていたのだ。ハンターがモンスターに対して同様の道具、閃光玉という物を使っている事を知っていたヴェルダントは、古龍であるクシャルダオラにもこれが有効なのではと判断したのだ。結果、彼の判断は当たった。目を潰されたクシャルダオラは墜落し、海中へと姿を消した。
「カールに送れ。『第二及ビ第四水雷戦隊ハ現時点ヲ以ッテ戦闘海域ヨリ離脱。後続戦ハ我ガ引キ継グ』」
ヴェルダントの命令文を聞いた通信兵はすぐに艦橋を飛び出して行った。それを横目にヴェルダントは小さくため息を零すと、やれやれとばかりに肩を揺らす。

「この老いぼれ、もう二度と戦闘は経験しないと思っていたが――まさか古龍と相まみえるとは。世の中全くもっておかしなものよ」
可笑しそうに短く笑うヴェルダント。彼の指示に従い撤退を開始する第２及び第４水雷戦隊を見送る。その間に再び海に巨大な水柱が上がった。巻き上がった海水の柱の中から、風の鎧を纏ったクシャルダオラが姿を現す。激しい戦闘の後を物語るように全身に傷を負ってはいるが、まだ健在だ。
逃げていく第２及び第４水雷戦隊を追いかけようとするが、迫り来るヴェルダント率いる第５、第６戦隊の姿を見て矛先を変える。怒りの声を上げるクシャルダオラに全艦の前部主砲が動き、狙いを定める。
先頭を走るのだ第６戦隊旗艦、重巡洋艦『ローレライ』。悲劇の大災害の名を冠したこの艦には、あの惨劇の悲惨さと、敵国に祖国を陵辱された事を永久に忘れないという意味を込めて名付けられた。当時としては様々な新技術が使われた為、故障や誤作動も多く、周りからは「不吉な名前をつけたせい」「死神に取り憑かれている」と揶揄され、忌み嫌われた艦でもある。
だが今、仲間を救う為に古龍へと突撃しているのは、その死神艦だ。「ローレライよ。貴様の底力、ワシに見せてくれよ――全艦撃ち方始めぇッ！」
軽巡洋艦よりも重々しい砲撃音と共に砲弾が撃ち出される。主砲口径も砲弾も、軽巡洋艦よりも一回り大きな砲を載せている重巡洋艦。撃ち出された砲弾にクシャルダオラは風の鎧で防ごうとするが、今まで防いで来たいずれの砲弾よりも重い一撃。完全回避とはいかず、砲弾の先端が鋼の鎧を掠っていく。背後に炸裂した砲弾は、次々に巨大な水柱を上げていった。
間髪入れず連続砲撃する六隻の重巡洋艦に対し、クシャルダオラは唸り声を上げながら接近。圧倒的な機動力で先頭を走る第６戦隊旗艦、ヴェルダントの乗る重巡『ローレライ』に襲い掛かる。
怒りの声と共に撃ち出されたのは風ブレス。今まで駆逐艦や軽巡洋艦を一撃で戦闘不能に追い込んだ強力な攻撃だ。艦内の兵士達も

思わず悲鳴を上げるが、その中でヴェルダントは無言でその光景を見詰めていた。
そして、風ブレスが猛烈な暴風となって『ローレライ』の艦橋を襲った。だが、その手応えは今までとは明らかに異なっていた。
風ブレスを受けた艦橋は窓が割れるなどの被害が出たが、風が晴れた時、そこには強力な装甲がしっかりと残っていた。これにはさすがのクシャルダオラも驚愕する。その姿を見て、ヴェルダントは静かに微笑んだ。
「……戦艦に次ぐ強力な装甲を持つのが、この重巡洋艦だ。貴様の攻撃は確かにすごいが、所詮は風。分厚い装甲板を貫く程ではない」
そう、クシャルダオラの風ブレスは確かに強力だが、その威力の大半は吹き飛ばす事に重点が置かれている。貫通力は低く、軽装備の駆逐艦や軽巡洋艦程度なら撃破する事はできても、より強力な装甲を持つ重巡洋艦などとは相性が悪い。それもまたヴェルダントの計算の範囲内だった。
「残念だったな風翔龍よ。悪いが、カレンの頼みだ。貴様にはこの地域から出て行ってもらおう」
軍帽を深く被り、ヴェルダントはゆっくりと振り返る。そして、その背後で彼の指示を待つ将兵達に向かって静かに命令を下す。
「全艦、砲撃を続けながら前進――奴を押し切るぞ」
第6戦隊旗艦、重巡『ローレライ』を先頭に六隻の重巡洋艦が砲撃を続けながらクシャルダオラへと迫る。風の鎧で何とかこの砲撃を防ぐ鋼龍だが、重巡の放つ重い砲弾を完全に回避する事はできず、かすり傷を次々に負っていく。
このままでは危険だと判断したのか、それとも本能的なものなのか。クシャルダオラは突如翼を大きく羽ばたかせると、上空へと離脱する。それを追って各艦の主砲の仰角が上がるが、その途中で動かなくなってしまう。軍艦の大砲は水上の上の敵艦に向けるものであり、自らの上空に撃つ事はできない。最大仰角以上の高さまで逃げられてしまえば、軍艦はこれを攻撃する事はできない。対空兵装という概念がそもそもない、軍艦最大の弱点が露呈した瞬間だ。

これには第6戦隊司令部や軍艦に乗る将兵達にも動揺が走る。ただ一人ヴェルダントだけは慌てる事なく、冷静にクシャルダオラの次なる動きを待ち構えていた。

六隻の重巡の直上へと移ったクシャルダオラ。そこから怒号と共にクシャルダオラは一気に垂直降下。真下にいた重巡『ケーニヒスベルク』の後甲板へと着艦した。それを追って各艦が一斉に主砲を向けるが、まさか味方艦もろとも撃つ訳にはいかず、どの艦の砲も沈黙する他ない。

一方、着艦された『ケーニヒスベルク』は小型の速射砲数門でこれを迎え撃つが、それこそ風の鎧で阻まれてしまう。艦長は乗組員に対し白兵戦でこれを迎え撃つよう命令を下した。武装した兵士達が次々に現れ、クシャルダオラに挑みかかる。ある者は銃で、ある者は剣を持って。しかしそれではハンターとの戦いと何ら変わる事はなく、風の鎧で近づく事はできず、風ブレスで吹き飛ばされるばかり。鋼龍を振り落とそうと艦長は艦を左右へと急速旋回を繰り返すが、効果はなかった。むしろ『ケーニヒスベルク』の独断行動で隊列が乱れる結果となり、『ケーニヒスベルク』は他の重巡から孤立してしまう。

白兵戦が開始されて十分程が経過した時、これまで防戦に徹していたクシャルダオラが動いた。ゆっくりとした足取りで進むと、華麗なステップで甲板から主砲の上、そして艦橋へと登る。そして振り返ったクシャルダオラの振り上げた爪が、煙突を切り裂いた。

確かに軍艦は硬い装甲板で守られている。しかし全てが守られている訳ではない。煙突などももちろん装甲を張っているとはいえ、艦側面の装甲板などに比べてしまえば脆いもの。こればっかりはクシャルダオラの爪の方が硬度は優っていた。

煙突を破られたとはいえ、艦自体のダメージは大した事はない。だが、クシャルダオラは予想外の行動に出た。

破った煙突に体を突っ込むと、その中で大暴れしたのだ。爪を振り回し、風ブレスを次々に撃ち放つ。艦内はそれこそ装甲など張られてはいない。次々に様々な部分が破壊される。爪は壁を斬り裂き、風は瓦礫を吹き飛ばす。更に運の悪い事に電線が切れ、艦内は停電。伝声

管も千切れた上に、艦中央部の艦内が破壊された事で前後の行き来ができなくなった『ケーニヒスベルク』。結果的に航行不能となり、『ケーニヒスベルク』は沈黙した。

沈黙した『ケーニヒスベルク』を放棄し、クシャルダオラは再び上空へと舞い上がる。残る五隻がこれを撃ち落とそうとするが、すぐに最大仰角の上へと逃げられる。『ケーニヒスベルク』は復旧作業に入ったが、瓦礫や変形したドアに行く手を阻まれれ思うように復旧ができず、結局戦列に再び加わる事はなかった。

この突破法に味をしめたクシャルダオラはその後『ドレスデン』『ザイドリッツ』を襲撃。着艦後に艦上で大暴れし、両艦共に次々に甲板を砕かれ損傷。両艦共に火災を起こしてしまう。

軍艦の大砲は威力はあるが、砲や砲弾の性能からあまり遠距離には撃てない。結果、互いに近距離で砲撃戦を展開する事となる。その場合大砲は水平撃ちとなる為、おのずと被弾する場所は艦側面となる。その為軍艦は艦側面の防御力に重点を置いている。その為、甲板など艦上の装甲板はそれに比べれば劣る上、全ての甲板に必ずしも装甲が張られている訳ではない。張り過ぎれば重みで艦の性能が下がる上に、ひっくり返りやすくなる為だ。クシャルダオラの攻撃は偶然にもそういった軍艦の弱点を露呈した結果となった。

しかしヴェルダントの言う通り重巡洋艦の強力な装甲に助けられ、被害を受けた両艦共に戦闘航行には何ら支障はなかった。だが第5戦隊旗艦である『ケーニヒスベルク』が戦闘不能となった為、座乗する第5戦隊司令官は戦闘指揮を行えなくなってしまった。結果第5戦隊所属の『ドレスデン』『ザイドリッツ』は指揮系統を一時的に失ってしまった。

指揮系統を失った第5戦隊の二隻はすぐに転進し、第6戦隊と合流した。すでに『ケーニヒスベルク』に座乗している第5戦隊司令官からヴェルダントへ指揮権を移譲するよう発光信号が送られており、ヴェルダントはすぐにこの二隻を隷下に加えた。

五隻となった重巡洋艦部隊は応戦を続けながら隊列を整え、再びクシャルダオラに迫る。

壮絶な激闘が繰り広げられる事となった。猛烈な嵐の中、五隻の重巡洋艦は猛烈な砲撃でクシャルダオラを攻撃するも致命打を与えられず、クシャルダオラも再び『ドレスデン』へと乗り込んで攻撃するが、ヴェルダントの命令で白兵戦は厳禁とされた。

先程と違い、敵が姿を現さない事に苛立つクシャルダオラ。そこへ僚艦『ザイドリッツ』が右舷側から急速に接近して来た。何事かと思って振り返ったクシャルダオラに向けて、『ザイドリッツ』が拘束弾を撃ち放った。

再び拘束されたクシャルダオラは大暴れしてこれから逃れようとするが、それこそ駆逐艦や軽巡洋艦よりも重く、何より何倍も出力の出る機関を持った重巡洋艦。さすがのクシャルダオラもパワー勝負では負けてしまう。

拘束されたまま『ドレスデン』の甲板から海上へと叩き落とされ、尚も引きずられるクシャルダオラ。そこへ今度は離れた『ドレスデン』から海に下半身を沈めながら暴れるクシャルダオラに向かって攻撃が開始された。しかも今度はこれまでの砲撃ではなく、甲板に備えられた三連装の筒状の装置が狙いを定め、そこから棒状の物体が次々に撃ち出され、海中へと没した。しばらくすると、半身を海中へと沈めていたクシャルダオラの付近が爆発した。突然の爆発にクシャルダオラは悲鳴を上げる。海中では風が使えなかった事が災いし、爆発の直撃を受けた為だ。

重巡『ドレスデン』が行ったのは雷撃。魚型水雷、通称魚雷と呼ばれる海中を潜行して敵艦の喫水下に命中して爆発するという対艦兵器の一つ。艦を沈めるには水面下に穴を開けて海水を流し込むのが最も効果がある。そこで生まれた兵器であり、通常は対艦戦に用いるが、この時は『ドレスデン』艦長の独断で歴史上初めてモンスターに対して用いられた。

さすがのクシャルダオラも魚雷には驚き、すぐに上昇して海から離れる。しかし拘束具がしっかり稼働しており、逃げられない。暴れているとそれこそ他の重巡の砲撃の対象となった。

戦いは一方的なものとなった――とはいかなかった。クシャルダ

オラの影響か、辺りは激しい風と雨が吹き荒れる大嵐となっており、海は荒れに荒れていた。波は高く、巻き上げられた海水が甲板を濡らしていた。艦が激しく揺れる上に波が甲板を超えて流れ込む為に兵士達がうまく動けない上に、肝心のクシャルダオラへの狙いが安定しない為に命中弾もなかなか出せずにいた。更にクシャルダオラの反撃もすさまじく、風ブレスが猛威をふるう。重装甲とはいえ、マストが折れたり艦載艇やクレーンが壊れるなどの被害も出た上に、風ブレスで吹き飛ばされる兵士も少なくはなかった。

互いに致命打を与えられない戦いは数十分にも及んだ。その間『ドレスデン』と『ザイドリッツ』が拘束を維持していたが、ここで思わぬ事態となった。風上に向けて進んでいた為に波が激しく、艦は激しく上下に揺れていた重巡部隊。このままでは艦に損傷が出ると判断したヴェルダントは全艦に反転命令を出した。影響を受けづらい風下へと艦首を向ける為だ。

ヴェルダントの命令に従い『ドレスデン』もすぐに転進した。しかしクシャルダオラを『ザイドリッツ』と牽引している為、発光信号でタイミングを合わせながらの転進となった。しかしこの時風雨の影響で『ドレスデン』が放った発光信号を『ザイドリッツ』が見逃すというミスが起きてしまう。結果、『ドレスデン』単独で取舵を切ってしまう。

大きく舵を切った『ドレスデン』の行動に慌てて『ザイドリッツ』も追従して取舵を切った。だが慌てて舵を回した為に必要以上に回してしまい、ゆっくりと回る『ドレスデン』に対し『ザイドリッツ』は急速旋回。この動きを見た『ドレスデン』は拘束機に負担を掛けない為に舵を戻すよう『ザイドリッツ』に信号を送りながら自らも針路を直す為に面舵を回した。この動きに『ザイドリッツ』も急いで面舵を回した。結果、両艦の距離は詰まり、牽引ロープが緩んだ。そこでクシャルダオラが大暴れしてロープを激しく引っ張った。この反抗に両艦の距離は更に縮まってしまい、慌てて左右へと別れようとしたがすでに遅かった。

クシャルダオラに引っ張られ、急速に距離を詰めた両艦は激突。

『ドレスデン』の右舷中央部に『ザイドリッツ』が艦首がから激突するという衝突事故を起こしてしまった。
激突された『ドレスデン』の被害もさる事ながら、艦首から激突した『ザイドリッツ』は艦首が変形。大量の海水が艦内へと流れ込み、またたく間に艦前部が沈んでいった。幸い艦長の命令で速やかに水密扉が閉められた為それ以上の浸水は止められ、『ザイドリッツ』は艦の三分の一が沈むも何とか沈没は免れた。だが、とてもじゃないが航行は不能となった。
転進を終えたヴェルダントは後方の二隻の状況を見てすぐに『シャルロッテ』に対しクシャルダオラを拘束するよう命令したが、拘束していた両艦が放った拘束ロープが引きちぎられたのはまさにその時だった。
上空へと離脱したクシャルダオラは怒りに任せて今まで自分を縛り上げていた『ザイドリッツ』へと連続して風ブレスを放った。艦首を破損した『ザイドリッツ』の耐久性は極めて低下しており、風ブレスを受けて様々な箇所が破壊された。
この僚艦の危機に『ドレスデン』が『ザイドリッツ』の盾になるようにクシャルダオラと『ザイドリッツ』の間に割って入ると、速射砲で応戦。しかし『ドレスデン』も運悪く『ザイドリッツ』と激突した箇所に風ブレスを受けて損害が拡大。両艦共に戦闘不能に陥ってしまった。
偶然とはいえ、たった一体のモンスター相手に重巡三隻が戦闘不能に陥った。この異常な光景に残る三隻の将兵には動揺が走る。さすがのヴェルダントもこうも容易く艦三隻を脱落するとは思っていなかった。しかし、彼は冷静だった。
「司令官、このままでは……ッ」
「2水戦と4水戦の状況は？」
「両水雷戦隊共にすでに安全圏に離脱しました」
「……そうか」
助けるべき二つの水雷戦隊の無事を確認したヴェルダントはふぅとため息をつく。その行動を訝しがる艦長に対し、彼はゆっくりと命

令を下した。
「全艦、反転離脱せよ」
「逃げるのですかッ!? 誇り高き帝国国防軍が、あのような愚龍を前にしてッ!」
「全艦、左八点一斉回頭」
「司令官ッ!」
「バカ者、老いぼれの役目は終わった――主役のおでましだ」
単縦陣で航行していた重巡三隻が一斉に左へと回頭。全艦が一斉に左へ九〇度向きを変え、単縦陣は一瞬で単横陣へとなる。突如として迫っていた敵が逃げていくのを見て、クシャルダオラは訝しがった。その時、逃げる敵の背後から砲音が轟いた。迫る砲弾の飛翔音に、また敵の小細工かと呆れながら風の鎧を張る。また、敵の小細工をこの自慢の風でいなせばいい。そう彼は考えていた――だが、それは間違いだった。
次々に海面へと着弾する砲弾。その時に上がる水柱はこれまでのものとは比べ物にならないものだった。この光景にクシャルダオラは目を見張ると、危険だと判断して慌てて上空へと逃げようとする。そこへ砲弾が命中した。
反射的に風の鎧を前面へと展開させ、これを回避しようとしたクシャルダオラ。だが風の鎧はまるで効果はなく、鋼の重い一撃が炸裂。すさまじい一撃にクシャルダオラは血を吐き、黒煙を纏いながら海面に叩きつけられ、没した。
再び海の中へと姿を消したクシャルダオラ。その光景にまだ状況が理解できていない将兵達を前に、ヴェルダントは不敵に微笑んだ。
「俺の役目は足の遅い嬢ちゃん達が追いつくまでの時間稼ぎだ。どうだクシャルダオラ――戦艦の一撃はなかなか痺れるだろ?」
一斉回頭した重巡三隻の背後から現れたのは、エルバーフェルド帝国国防海軍総司令官のカレン率いる主力部隊――大洋艦隊旗艦、戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』と戦艦『ビスマルク』『シャルンホルスト』であった。

第２２４話　激闘主力部隊　恋する少女提督の決意に満ちた死闘

「命中ッ！　クシャルダオラ、海へと没しましたッ！」
見張り兵の報告、艦内が沸き立つ。それを無言で聞くのは、戦闘指揮所に立つ国防海軍総司令官、カレン・デーニッツ元帥。海風にその黒い髪を靡かせながら、水柱の下へと姿を消したクシャルダオラを睨みつける。
「さすがの古龍（アルトドラッヘ）も、戦艦の一撃は効いただろうよ」
そう言って不敵に微笑むのはカレンの右腕、国防海軍総参謀長エーリック・レーダー大将。
エルバーフェルド国防海軍の戦艦は現在七隻就役し、一隻が建造中である。いずれの艦に搭載されているのは、艦載砲としては最大の三〇センチ連装砲である。駆逐艦や軽巡が十センチ程度、重巡でも二〇センチ程度の口径の砲であるのに対し、戦艦は更に巨大な大砲を主砲として備えている。それこそ大地を穿つ程の威力を持った大火力の大砲だ。さすがのクシャルダオラもこれだけ巨大な砲が撃ち放たれた超重量の砲弾は防ぎ切れない。
駆逐艦や軽巡、更には重巡までもが倒せなかったクシャルダオラを、たった一撃で沈めた。戦艦の凄まじさが表れた光景に兵士達は沸き立つ。
大艦巨砲主義。巨大な艦に大火力の大砲を備えた戦艦こそが最強であり、海の戦いを制す。これはどの国の海軍においても常識であり、海上決戦の基本思想である。
厄災とも称される古龍を、たった一撃で沈めた。戦艦こそ最強と信じる彼らにとって、それは狂喜乱舞する程に刺激的で、最高の光景だっただろう。
だが、勝利を信じて疑わない兵士達に対し、カレンは冷静だった。
「２水戦と４水戦は？」
「どっちも支援隊と合流した。現在は２水戦と４水戦、それと支援隊

護衛の第１２駆逐隊で臨時の集成水雷戦隊を編成中。編成終了後、俺達護衛隊と合流する手はずになってる。４水戦のユーリも怪我してはいるが無事らしいぞ」
「……ツェッペリンに私達と合流するよう命令しなさい。ひとまずこの主力部隊六隻でクシャルダオラを潰すわよ」
「おいおい、まだやるってのか？　鋼龍も今の一撃で倒れたはずじゃ――」
――海が爆散したのは、まさにその時だった。
勝利に沸き立つ兵士達はその爆音に慌てて振り返り、そしてその光景に驚愕――恐怖した。
風の爆発。舞い上がった海水は雨のように海へと降り注ぐ。その中を、すさまじい風が吹き荒れていた。荒れ狂う複数の竜巻が絶えず海水を巻き上げ、辺りは塩辛い水の土砂降りとなる。主力部隊にもその雨が降り注ぎ、露天の戦闘指揮所に立つ少女提督をずぶ濡れにさせる。その中で、彼女の目は冷静に、そして冷たく、鋭く一点に注がれていた。
「お、おいおい……マジかよ……」
声を震わせるエーリックの言葉は、まさにこの場にいた全員の想いの代表だった。
曇天の空で狂ったように鈍色の雲が蠢き、迸る稲妻は激音と閃光を辺りに響かせる。無数の竜巻が踊り狂い、海水を巻き上げながら荒れ狂うそれは水と風の凶器と化す。そして、そんな無数の水竜巻の中央に――奴はいた。
鋼鉄の鎧はこれまでの戦闘でひび割れ、ひしゃげ、見る無残なものに変わっていた。誇り高き鋼の龍王の姿にしては、あまりにもボロボロな姿であった。しかし、その鋭利な刃物を思わせる鋭い頭部に煌めく瞳は、むしろ激しい憤怒にギラギラと輝いていた。
白い息を吐きながら、黒い風を纏うクシャルダオラ。無数の竜巻を従え、雷すらも己の隷下に従える姿はまさに嵐龍と言うべき姿であった。風を支配するその姿から風翔龍とも称されるクシャルダオラだが、もはやその姿は風どころか嵐すらも制する、嵐龍と呼ぶに相応し

い。もしくは暴風龍、どちらにしても、常軌を逸した光景であり、もはやその威圧する姿は恐怖以外の言葉では表せなかった。
「古より、世界を揺るがし、人々から厄災とも呼ばれる古龍。その暴龍を前に、人々は為す術もなく、これを前にしては如何なる反撃もしてはならない。厄災を前に、人々ができる事は逃げる事、その厄災が過ぎ去る事をただ震えて待つだけ。決して、これに抗ってはいけない――あんな姿、逆らおうなんて思う方がおかしいわね」
嵐を纏うクシャルダオラを前に、自虐的に微笑むカレン。その拳が微かに震えている事に、隣に立つエーリックだけが気づいていた。
国防海軍総司令官。国防の二大軍の一翼を担う海軍の、その総大将へと担がれた少女。彼女の国を想う強い力、海軍貴族とも称されるデーニッツ家の血筋、総統となったフリードリッヒの強い後押し。全ての事柄が奇跡的に組み合わさり、彼女は海軍総司令官としてこの大洋艦隊旗艦の『フリードリッヒ・デア・グローセ』に乗艦している。
だが、彼女は年端もいかない少女だ。若い兵士達と同じ、これまで戦闘を経験した事のない若者。本当の戦い、実戦を前に恐怖する事は仕方がない。
恐怖に身を震わせるカレン。エーリックはそんな彼女の肩を優しく叩く。
「やはりお前には荷が重過ぎる。戦いは俺に任せて、お前は艦内に入れ」
だが、彼の言葉に対しカレンは「問題ない」と短く答え、彼の手を払った。
「無理するな。そんなに震えてんのに」
「海水を被って、寒いだけよ」
「ふざけてる場合じゃ――」
「――あいつを助けないと」
短くも強い決意を秘めた彼女の言葉に、エーリックは全てを悟った。
震える拳は、やはり恐怖から来ているのだろう。本当は怖くて、逃げ出したい気持ちに蝕まれている。だがそれは誰も責める事はでき

ない。人間として、生物として、危険を避けようとするのは本能。間違いではない。ましてや相手は十六歳の少女。海軍総司令官に担ぎ出されているが、死と隣合わせの実戦経験もない。

そんな少女が、厄災に等しい古龍に戦いを挑もうとしている。祖国の窮地でもなければ、敬愛すべきフリードリッヒの命令でもない。彼女自身の決断で、こんな遠い辺境の海にまで来て、古龍と対峙している。それはなぜか、

「……鋼並みに堅物のお前がそこまでべた惚れるなんて、相手は一体どんな男だよ」

恐怖を捻じ伏せ、果敢に古龍へと挑もうとする彼女の姿に、エーリックは苦笑を浮かべた。バカにした訳ではない、むしろ彼女の信念と想いに、胸を打たれたくらいだ。

少女を戦いへと赴かせるもの、それは愛する彼への想いだった。

エーリックにとっては娘のような年頃であり、妹のようであり、何より家族に等しい存在のカレン。親友の娘というのもあるが、エーリックにとってカレンはそんな大切な存在だった。

冷静沈着に仕事をこなす彼女の姿に、人々は《鋼鉄乙女》や《少女提督》と彼女を呼んだ。鋼の意志を持ち、常に強く気高く行きて来たカレン。後見人として、皆に認められ慕われる彼女を誇りに思っていた。だが唯一心配だったのは、あまりに大人の世界に生きる為に年相応さを失いかけていた事だった。

同世代の乙女達が青春に生きる中、彼女は鉄臭い軍艦や重苦しい鎮守府での生活ばかり。毎日書類仕事や会議に追われる様は、とても十代の乙女の姿ではなかった。

そんな彼女が、たった一人の男の為に国を捨てる覚悟で直訴し、危険な古龍を相手にした戦いに身を投じている。冷静沈着な彼女にしてはあまりにも感情的で無茶苦茶な行動と言えるだろう。軍人として、組織を治める長としては間違った行動かもしれない。だが、一人の恋する乙女としてなら、この行動は納得できる――むしろ、エーリックにとってはこっちの方が安心できた。

「私は、あいつを助けたい。その為なら、どんな事だってやってみせ

る。相手が古龍（アルトドラッヘ）だろうが、一人でも戦ってやるわ」
壮絶にして勇猛な覚悟を決めて戦いへと赴くカレン。そんな彼女の言葉に、エーリックはフッと口元に笑みを浮かべた。
「艦長、警笛を鳴らしてくれ」
「は？　警笛ですか？　なぜそのような事を……」
「いいから、鳴らせ」
「了解（ヤヴォール）ッ！」
「エーリック？」
エーリックの指示に不思議そうにカレンが振り返った瞬間、辺りにけたたましい汽笛の音が轟いた。戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』、全長一五〇メートルにも及ぶ巨大戦艦の汽笛は凄まじく、辺り一帯に重々しい重低音の音が鳴り響いた。
突然汽笛を鳴らされ、反射的に耳を押さえたカレンは不機嫌そうにエーリックを睨みつける。
「突然汽笛を鳴らすなんて、どういうつもり？」
「なぁカレン。お前は一人で戦いを挑もうとしているが――お前は一人じゃねぇぞ」
「何を言って――」
――刹那、次々に汽笛の音が辺りに響き渡った。
驚いて振り返ると、その汽笛の音は背後の戦艦『ビスマルク』を始めとして戦艦『シャルンホルスト』、ヴェルダント隷下の重巡洋艦『ローレライ』『メテオール』『シャルロッテ』の計五隻からのものだった。それだけではない。今現在復旧作業中の『ケーニヒスベルク』『ドレスデン』『ザイドリッツ』、同じく航行不能に陥っている数隻の駆逐艦からも遅れて汽笛が鳴り響いた。
荒れる海に、鈍色の軍艦からの汽笛の音が響き渡る。
呆然としているカレンに対し、エーリックは不敵に微笑んだ。
「見ろよ、お前と一緒に戦おうとしてる奴はこんなにいるんだ――お前は決して、一人じゃねぇよ」
戦艦三隻、重巡洋艦六隻、その他数隻の駆逐艦に乗る兵士の数は五〇〇〇人にも及ぶ。それら全ての人が、カレンの命令に従い、ここま

でやって来た。今も彼女の命令があればすぐに行動を起こせるよう、彼女の命令を待っていた。
上官の命令だから、軍隊という組織だから。彼女の言動一つで全ての将兵達の運命が決まる。だが誰もそれを不快に思う者も嫌がる者も、この艦隊には存在しない。国防海軍軍人全てが彼女の事を慕い、心から忠誠を誓っているから――誰もがカレンの為に命を懸ける覚悟ができていた。
それを示され、カレンは思わず泣きそうになった。自分は、一人でもここに来る覚悟はできていた。でもきっと、皆はついて来ただろう。だって――ここにはバカが多過ぎる。
――君の行動一つで内政や外交に多大な影響を与える事くらい自覚しているな？――
ふと、フリードリッヒの言葉が蘇る。
もしも自分が反乱を起こしたら、下手すれば海軍全体の大反乱になっていたかもしれない。エルバーフェルド史上最大の軍事クーデターとなっていただろう。
自分のバカな行動一つで、祖国が火の海になっていたかもしれない。極例かもしれないが、冗談で済まないのが自分のバカな部下達の質の悪い所だ。
思わず、苦笑が浮かぶ。
――国防海軍は、陛下のおかげで再建できました。人も兵器も戦術も、様々な面で旧海軍を凌ぐ近代海軍として蘇りました。私の責務は、すでに達成されているのです――
何が責務が達成されている、だ。
兵士はまだ少年兵も多く、未熟だ。他国の軍に比べれば練度は高いと言われるが、烏合の衆と比較されても嬉しくも何ともない。
兵器や戦術もまだまだ改良の余地はあるし、何より人はバカばかりだ。
「……まったく、まだまだ私が居ないとダメね」
「おうよ。俺達は嬢ちゃんと世界の海を翔け抜けるって決めてんだ。こんな所でお前一人だけ脱落なんてさせねぇよ」

「エーリック……」
「――まぁ、寿退役するつもりなら、海軍全軍を挙げて挙式してやるぜ。全戦艦で一斉祝砲をブチかましてやらぁ」
「……バカ」
いつの間にか、カレンの顔からは緊張が消えていた。脱力した訳ではない、今は戦闘中だ。でも、無駄に入っていた力は抜け、必要最低限な緊張だけが残された、最も力が発揮される状態だ。
カレンは再び前へ向き直る。艦隊前方には竜巻と稲妻を纏った鋼龍が待ち構えている。本能が全力で逃げろと警鐘を鳴らす程、自分達は危険な戦いに身を投じている。
それでも、自分はこの場から逃げるつもりはない――あいつの所へ、行く為に。
そして、全てが終わったらきっとボロボロになっている彼を抱き締め、この胸の奥の気持ちを改めて伝える。前回はその場しのぎの彼のあまりにもバカバカしいウソに騙されてやったが――もう逃しはしない。
顔を上げたカレンと、遠方の空に浮かぶクシャルダオラの目が合う。
「次に会うのイージス村よ。誰一人欠ける事なく、あの陸（おか）へ辿り着きなさい――目標、前方の鋼龍クシャルダオラッ！　全艦最大戦速にて突撃ッ！　全火力を以ってこれを撃破せよッ！」
そして、少女提督は不敵な笑みを浮かべたまま全艦に壮絶な突撃命令を下した。
「両舷前進ぜんそぉくッ！」
艦長の命令に従い、戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』の機関が唸りを上げる。巨大な四つのスクリューが高速回転し、白波を激しく立てながら巨艦が海を翔ける。
「艦長、砲撃用意」
カレンの言葉に艦長は見事な敬礼で答えると、すぐさま伝声管に向かって叫ぶ。
「主砲、通常弾用意ッ！　高角砲群各砲装填！　信管自動調停装置作

動用意！　副砲群も対空射撃準備！」
「艦長。副砲は仰角が最大三〇度しか取れませんが」
「構わん。奴が高度を下げた瞬間を狙って一斉に撃て」
「ハッ」
　副長とのやりとりをしている間に、次々に各砲座から準備完了の知らせが届く。精鋭が乗るこの巨艦は、艦長の命令一つで迅速に行動できる。これだけの巨艦を、これほどスピーディーに動かせるのは、日頃の訓練の賜だ。
「主砲！　全門射撃準備！　射撃は高射器距離射法にて行う！」
　艦長の命令は伝声管を伝わって次々に関係各所へと届き、兵達がすぐさま行動する。その姿を見詰め、カレンは自らの日頃の訓練が決して間違ってはいなかった事を確認し、笑みを浮かべる。
「勝てるわ、絶対に」
「目標補足！　対空射撃諸元伝達！　主砲塔旋回！　仰角上げッ！」
　鈍い音と共に前後の主砲が動き出す。ゆっくりと空を飛ぶクシャルダオラの方へと向くと、同時に砲身が上がり、仰角を取る。事前に伝達された方位、仰角へと至ると、主砲発射を知らせるブザーが辺りに鳴り響く。
　艦長はカレンと目を合わせる。そして、カレンが静かに頷くのを見て振り返ると、戦艦の艦長として最大の栄誉ある命令を下す。
「主砲、撃ち方始めぇッ！」
　戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』の主砲から、轟音と爆炎と共に巨大な砲弾が撃ち出される。これに対しクシャルダオラは身を翻してこれを回避。背後に着弾した砲弾は大爆発と共に巨大な水柱を海面に立ち上らせる。
　旗艦の砲撃を合図に後続の戦艦『ビスマルク』『シャルンホルスト』が続けて主砲で砲撃。合流したヴェルダント隷下の重巡洋艦三隻も砲撃を再開し、同時に全艦全速力にてクシャルダオラに向けて突撃する。
　主力部隊の突撃に対し、クシャルダオラもまた怒号を上げて威嚇する。翼を大きく羽ばたかせ、辺りの竜巻を次々に敵に向けて放つ。無

数の竜巻が轟音と暴風と共にカレン率いる主力部隊に襲い掛かった。
二番艦『ビスマルク』の右舷側から巨大な竜巻が襲い掛かる。激突と同時に激しい衝突音が辺りに響き、艦が大きく揺れた。だが重巡洋艦よりも更に頑丈な装甲を持つ戦艦。大した被害もなく、お返しとばかりに主砲で反撃する。
「おいおい、排水量一万トン超の戦艦でもあれだけ揺れるのか。駆逐艦程度なら一撃で真っ二つだな」
後続の『ビスマルク』を襲った竜巻の威力を見てエーリックは冷や汗を浮かべる。カレンは一切背後に振り返る事なく「左四点逐次回頭」と次なる命令を下す。
カレンの命令に従い、戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』は取舵四五度にて回頭。それに従い後続の戦艦『ビスマルク』『シャルンホルスト』、重巡洋艦『ローレライ』『メテオール』『シャルロッテ』と次々に同じ方向へと回頭する。先程第6戦隊が行った全艦が同時に回頭するのは一斉回頭と呼ばれるものだが、逐次回頭とは先頭艦に従って後続艦が次々に回頭するもので、上から見ると蛇のように一列の艦隊が動く艦隊運動だ。
クシャルダオラの左を通り抜けるような針路に舵を取った主力部隊。こうする事で全艦が後部にある主砲及び右舷速射砲等小口径の副砲を使えるようにする為だ。すぐに全艦の砲兵等が右舷側に集まり、配置が完了した砲から次々に砲撃を開始する。
六隻の戦闘艦が次々に砲撃し、クシャルダオラを追い詰める。更にカレンの指示で戦艦は徹甲弾、重巡洋艦はレーヴェンツァーンにて砲撃し、役割分担を行っている。レーヴェンツァーンは鋼龍に対してはほとんど効果がない事は先程の戦いでわかった。だが一種の威嚇になる為、クシャルダオラの動きを制限する事はできる。戦艦の砲撃はそれこそ一撃必殺の火力を誇るが、命中率の低さは否めない。その為クシャルダオラの動きを制限し、その範囲内に全火力を集中する事でこの低さを補おうと彼女は考えていたのだ。
だがクシャルダオラも先程受けた戦艦の一撃の凄まじさを身をもって知っている。カレンの思惑には乗らず、上空へと退避してレー

ヴェンツァーンを回避。すぐに全砲門の仰角の限界の外へと逃げられてしまう。そのまま艦隊の上空へと至ったクシャルダオラはそこから連続して風ブレスを撃ち放つ。ここなら敵の攻撃は受けないとわかっているからこその一方的な攻撃だ。

主力部隊は戦艦と重巡洋艦という高い防御力を誇る艦艇で編成されている為、風ブレス程度では大した損傷は受けない。だがこちらが手出しできず、一方的に攻撃される状態は兵士達の士気を著しく下げてしまう。

「くそぉ、何とか奴を引きずり降ろさねぇと……」

苛立つエーリックを横目に、カレンは冷静に次なる命令を下した。

「艦長、ナルツィッセ攻撃用意」

「え？　ナルツィッセですか？　しかしあれは総統府の許可がなければ……」

「構わないわ。全責任は私が負うから」

「……了解（ヤヴォール）。ナルツィッセ攻撃用意ッ！」

艦長は伝声管を通じてカレンの下した命令を伝達する。そんな彼らに背を向けながら、双眼鏡で上空から未だ一方的な攻撃を繰り返すクシャルダオラを見上げる。

「おいおい、総統閣下ご自慢の極秘兵器を勝手に使っちまっていいのかよ」

そんなカレンに苦笑を浮かべながらエーリックが尋ねると、カレンは迷う事なく言い放つ。

「総統は兵器も弾薬も好きに使えと仰ったわ。ならば、使えるものは何でも使うわ」

「お前の無茶を、総統もきっと予想してたんだろうな」

「そうかもね……」

小さく笑みを浮かべるカレン。その背後、甲板中部では彼女の命令に従いある攻撃の準備が行われていた。木製の甲板が次々に捲り上がると、その下にはひとつひとつ穴が開き、そこには無数の爆弾が設置されていた。兵士達はその周りを入念にチェックし、障害物がない事を確認するとそれを艦長へと報告。艦長はこれを聞いて、カレンに

近づくと、
「ナルツィッセ、攻撃準備完了しました」
艦長の報告に無言で頷く。それを合図に艦長は上空のクシャルダオラを見上げ、命令を下す。
「面舵二〇度、第二戦速」
艦長の命令に従い、『フリードリッヒ・デア・グローセ』は艦隊から離れると、ゆっくりとクシャルダオラの真下へと移動する。その間、残る五隻が当たらないとわかっていても砲撃を続けてクシャルダオラを威嚇し続ける。
友軍に援護されながら『フリードリッヒ・デア・グローセ』はクシャルダオラの真下へと配置についた。カレンは双眼鏡で真上に居るクシャルダオラを確認すると、ゆっくりと振り返った。
「ナルツィッセ、撃ち方始めなさい」
「攻撃開始ッ！」
艦長の攻撃開始命令と同時に、艦中部の甲板に設置されていた爆弾に次々に火が点される。轟音を立てながらそれら全てが次々に上空へと撃ち出されていった。白煙の軌跡を残し、次々に爆弾が上昇していく。そしてそれらは五隻に夢中だったクシャルダオラへと真下から迫ると、次々に起爆。無数の爆発がクシャルダオラを包み込んだ。
白い軌跡がまるで葉や茎のよう、そして爆炎は花のように見える様からエルバーフェルド語で水仙を意味する《ナルツィッセ》と名付けられたこれは、レーヴェンツァーンよりも更にアルトリアの王軍艦隊用に特化した艦対空飛翔爆弾だった。規模こそ違えど、原理はハンターが使う打ち上げタル爆弾と同じ。上昇し、上空の飛行船に命中させて破壊する事を可能とした兵器だ。
完成して間もなく、現在試験的に『フリードリッヒ・デア・グローセ』に搭載されていた新兵器。極秘兵器の為、本来はフリードリッヒの許可がなければ使えないはずの兵器を、カレンは惜しむ事なく使ったのだ。
次々に撃ち出される飛翔爆弾ナルツィッセ。クシャルダオラは爆炎の中で風を駆使してダメージを減らしながらも、反撃とばかりに真

下にいる『フリードリッヒ・デア・グローセ』目掛けて垂直に急降下して襲い掛かる。
迫り来るクシャルダオラに対し、露天の戦闘指揮所に居た面々に動揺が走る。だが、カレンは冷静に言い放った。
「馬鹿（ヴァーンジン）」
――刹那、戦艦『ビスマルク』が撃ち放った砲弾がクシャルダオラに命中。艦上空に爆炎が吹き荒れ、クシャルダオラは吹き飛ばされ、海面へと叩きつけられた。
ナルツィッセもクシャルダオラに対しては大した火力にはならない事はカレンも重々承知していた。カレンが狙っていたのは、ナルツィッセで攻撃する事で反射的にこちらへと攻撃して来るであろうクシャルダオラが降下する事。高度さえ下がれば主力部隊の射程範囲に奴を入れる事ができる。
発光信号でこれを第2戦隊へと伝えていたカレン。カレンの命令を理解し、遂行した第2戦隊の二隻の戦艦。この連携が、クシャルダオラに大ダメージを負わせたのだ。
しかし海面に叩きつけられたクシャルダオラは今回の一撃はギリギリで直撃は回避した。風の鎧でわずかだが致命打を逸らし、その上風をクッションにして海面に激突するダメージも緩和。海面を滑るようにして体勢を立て直すと、背後で風を爆発させてその衝撃を利用して突撃。『フリードリッヒ・デア・グローセ』の横を通り抜け、そのまま自分を狙った戦艦『ビスマルク』へと突っ込んだ。
鋼鉄と鋼鉄の激しい激突。辺りに凄まじい金属音が響き渡った。鋼龍の体当たりに『ビスマルク』の巨艦が震える。しかし排水量一万トンを超える巨艦はパワーも凄まじい。押し切ろうとするクシャルダオラにむしろ舵を切って押し返す。負けじとばかりに背後に風を集束、爆発を繰り返して押し返すクシャルダオラの背後から重巡洋艦『メテオール』が近づくと、拘束弾を撃ち放つ。しかしクシャルダオラはこれに気づいて急上昇して回避。目標を見失った拘束弾は誤って『ビスマルク』に命中。すぐに『メテオール』はロープを切って拘束を解除する。そこへクシャルダオラが突撃。鋼鉄の拳を握り締め、体当

たりとパンチを同時に放った。鋭い爪が凄まじい勢いで炸裂。その一撃は甲板を突き破り、その下にあった機関室の一角へと至った。激しい爆発と共に機関を損傷した『メテオール』は機関が停止。急速に減速して艦隊から脱落した。

炎上しながら落伍する『メテオール』を横目に、ヴェルダントは再び主砲に閃光弾を装填。『ローレライ』は閃光弾を発射。炸裂する眩い輝きはクシャルダオラの視界を奪い、その鋼の体は海中へと姿を消した。

炎上する『メテオール』は戦闘不能と発光信号を送って隊列から離れた。五隻となった主力部隊はクシャルダオラが沈んだ地点に向けて次々に砲弾を放つ。凄まじい爆音と共に撃ち出された砲弾はクシャルダオラが沈んだと思わしき海にて巨大な水柱を何本も立ち上らせる。更に『ローレライ』『シャルロッテ』も一斉に魚雷を放った。

激しい砲雷撃だったが、その効果の程はわからない。命中しているのか、的外れなのか。それすらも判別できない。主力部隊の将兵全てが祈るように攻撃を続ける。だが、激しい爆発と水柱が立ち上る――集中攻撃していた場所より右にわずかに逸れた場所からだ。

水柱の中から、再びクシャルダオラが現れる。攻撃は全て外れていたのだ。

「撃ち続けなさいッ！」

カレンの命令に従い、全艦が再びクシャルダオラに狙いを定めて砲撃を再開する。だが再びクシャルダオラは上空へと逃げてこれを回避する。再び砲撃範囲外に逃げられてしまった。

「ナルツィッセ、まだ使えない？」

「弾薬室から次弾を装填中だ。連射性の低さがこの兵器の難点だからな。まだ使えるようになるのは先だ」

ナルツィッセはその構造上連射ができない。一度放つと新たに使用可能になるまで時間が掛かってしまう。これは一斉発射を前提にせず、逐次発射を前提としている為だ。しかしこの時は鋼龍相手に全弾を一斉に使ってしまった為、この前提が崩れてしまっている。極秘兵器故に、肝心の兵士にまでその運用方法がしっかりと伝わっていな

かったのだ。
「距離を取りましょう。そうすれば、また奴を射程範囲内に捉えられる」
カレンは一度クシャルダオラから距離を取る事を選んだ。すぐに艦隊を転針させようと指示を出そうとした時だった。
「『ローレライ』より発光信号ッ！『我、鋼龍ヲ誘致ス。貴艦ノ《ゲイボルグ》ノ使用ヲ求ム』ッ！」
それはヴェルダントからのものだった。この信号に、その場にいた将兵達に動揺が走った。
ゲイボルグ、それはエルバーフェルドの戦艦全てが搭載している最終兵器の事だった。
「ツェッペリンの爺さん、無茶苦茶言うね。あれは対戦艦用の武器だぞ。それを飛んでるクシャルダオラに当てろだなんてよぉ」
苦笑を浮かべるエーリックの言葉に、カレンもまた「そうね、ずいぶんと無茶を言ってくれるわ」と苦笑を浮かべる。だがすぐにその笑みは不敵なものに変わる。国防海軍総司令官、この場にいる数千人の将兵の命を預かる長の、決意に満ちた顔がそこにあった。
「撃艦槍（ゲイボルグ）、用意ッ！」
「おうよッ！　撃艦槍（ゲイボルグ）用意ッ！」
艦内が再び慌ただしくなる。そんな喧騒を聞きながら、カレンは背後へと振り返る。その視線の先で、ヴェルダント隷下の重巡『ローレライ』と『シャルロッテ』が転針するのが見えた。鋼龍と距離を開き、再び射程範囲外に捉えると砲撃を再開した。クシャルダオラは更に高度を上げてこれを回避するが、重巡二隻も距離を更に開いて常にクシャルダオラを捉え続ける。
鬱陶しくなったのか、クシャルダオラは怒号を上げながら重巡二隻に向けて突っ込む。
迫り来るクシャルダオラに対し、ヴェルダントは冷静に「拘束弾、用意」と静かに命令を下す。
恐ろしい速度で迫るクシャルダオラ。その距離が限界まで近づいた時、ヴェルダントは並んで走る『ローレライ』と『シャルロッテ』を

左右にそれぞれ舵を切らせた。艦が大きく傾斜しながら二隻は離れていく。その間をクシャルダオラが通り抜ける瞬間、左右から両艦が拘束弾を放った。再び拘束されて暴れるクシャルダオラだが、重巡二隻がその動きを制する。

暴れるクシャルダオラに二隻の艦長が怒号に近い声で指示を飛ばし、これを捕縛し続ける。そんな喧騒を聞きながら、ヴェルダントは静かに、そして不敵に微笑んだ。

「後は嬢ちゃん、君に任せた」

一方、戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』の艦内も慌ただしかった。機関室では機関の出力を上げ、スクリューとはまた別の物に動力を接続する準備が続く。砲兵達も衝撃に備えて艦内へと退避し、先程まで怒号が飛び交っていた甲板は人気がなくなる。

更にエルバーフェルド海軍の軍艦には艦首にチューリップを象った紋章が備えられている。その下の部分がゆっくりと開くと、中から巨大な鋼鉄の槍が出現する。光り輝くそれは、莫大な量のノヴァクリスタルを加工して作られた、最強の槍。

様々な要塞に備えられている対大型モンスター用に使われている巨大な槍、撃龍槍。エルバーフェルド海軍の戦艦はこれを一撃で敵の戦艦を沈める為の武器として採用している。ノヴァクリスタルを使ったこの槍の硬度は世界最強と言っても過言ではない。対艦槍（ゲイボルグ）、それがエルバーフェルド戦艦の最終兵器だ。

艦が大きく震える。どうやら槍に動力が接続されたらしい。カレンは静かに命令を下す。

「これより『フリードリッヒ・デア・グローセ』は単艦にて突撃する。覚悟はいいわね？」

カレンの問いに対し、エーリックは不敵に微笑んだ。

「何を今更。覚悟なんてとっくにできてるぜ。なぁ？」

エーリックが問いかけると、その場に居た全員が頷いた。それを見てカレンは小さく笑みを浮かべる。

「――ダンケ・シェーン」

「反転一八〇度ッ！　前進全速ッ！」

艦長の命令に従い『フリードリッヒ・デア・グローセ』は大きく左へと舵を切る。更に機関出力を最大にし、けたたましいエンジン音と共に加速していく。荒れる海を、すさまじい水飛沫を上げながら突撃する戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』。その前方では、二隻の重巡洋艦がクシャルダオラの動きを封じている。

迫り来る巨大戦艦に気づいたクシャルダオラ。拘束されていても迫り来る敵に対して激しい風ブレスで反撃する。更に海の至る所に竜巻が発生し、それらがまるで意志を持っているかのように突撃する『フリードリッヒ・デア・グローセ』を襲う。

左右から何本もの竜巻の、前方からは風ブレスの直撃を受けて艦上構造物に被害が出る『フリードリッヒ・デア・グローセ』。しかし舵はそのままクシャルダオラに向け、機関出力も下がる事はなく全速力でクシャルダオラに向けて突撃する。

「主砲、撃って撃って撃ちまくれッ！」

艦長の怒号と共に甲板前部にある第一主砲から三〇センチ砲弾が次々に発射される。風の鎧と巧みな浮遊（ホバリング）でこの攻撃を避けるクシャルダオラだが、動きが制限されている中ではうまくいかず、数発直撃を受ける。血と怒りの声を上げながら更に強烈な風ブレスで撃ち返す。

鋼鉄の龍と鋼鉄の艦が互いに身を削り合いながらの激しい砲撃戦。竜巻の直撃を受けて艦載艇を吊るすクレーンが折れたり、ハシゴがひしゃげ、探照灯が吹き飛び、マストが折れ、速射砲群の屋根が壊れる。どれも戦闘に支障はない程度とはいえ、激しい風が新鋭艦を傷つけていく。

戦音を聞き、荒れ狂う風の中髪を靡かせながら凛とした姿で立ち続けるカレン。前方の二隻の重巡洋艦がクシャルダオラを差し出すようにそれぞれ舵を切って離れていく。だが、そのどちらの艦でもすでに限界が近づいていた。

激しいクシャルダオラの抵抗で何度も拘束が解けるが、その度に別の方から拘束弾を撃って拘束し直していた。しかしそれも限界で、現時点で鋼龍を縛り付けているのがどちらの艦も最後の拘束弾だった。

しかもそれもすでに限界が近い。
激しい金属音と共にロープと艦を結んでいた金具が壊れ、一本、また一本と拘束が解けていく。
艦橋でこの光景を見詰めていたヴェルダントはどうか撃艦槍（ゲイボルグ）が決まるまで持ちこたえてくれと祈るばかり。
だが一本、また一本と拘束が解けていくにつれて次の拘束が解けていくのが加速する。分散していた負担が、ロープが壊れる度に残るロープへ増えていた為だ。
しかもクシャルダオラの抵抗で幾つもの風ブレスや竜巻を受けた両艦も艦上構造物がかなり壊れ、どちらもマストは折れてしまっている程だ。
それでもあと数分もたせばいい。だが、その数分が長過ぎた。
自分を縛る拘束が弱まっている。そう気づいたクシャルダオラは更に激しい抵抗を見せた。
拘束が緩んでいる。それに気づいたカレンは焦る。
「もっと速力は出ないのッ!?」
「無茶言うな、これが今の最高速度だ。これでも今までの戦艦よりはずっと速いんだぞ」
最新鋭、世界屈指の速力を持つ戦艦。それでも、今のこの状況では遅い。あと少しなのに、その少しが遠く感じられた。
何より、この一撃を当てる為に奮闘している部下達の為にも、これを外す訳にはいかなかった。
「必ず、当ててみせる……ッ！」
強い決意を抱きながら、カレンはもう目の前にまで迫ったクシャルダオラを見詰める。
そして、最後の拘束具が壊れ、クシャルダオラが自由を取り戻した。迫り来る巨艦を相手に、最大級のブレスを構える。至近距離で受ければ、いくら戦艦といえども被害は甚大だ。それでも、もう前に進むしか道はない。
そして――
「今よッ！」

「撃艦槍（ゲイボルグ）、放てぇッ！」
鋼鉄の龍と、鋼鉄の艦が、激突した――
「くそぉッ！　全艦最大速力で突っ走れッ！」
艦橋で苛立ちながら叫ぶのは第２水雷戦隊司令官、カール・ルドルファー少将。ここは第２水雷戦隊旗艦、軽巡洋艦『シュバルツァー』の艦橋。その中は激しく揺れ、立っているのも辛いような状況だった。嵐の中を最大速度で突撃している為だ。
猛烈な速度で荒波を蹴散らしながら進む艦隊は、第２水雷戦隊と第４水雷戦隊、それに支援隊を護衛していた第１２駆逐隊で臨時に編成された集成水雷戦隊。軽巡洋艦『シュバルツァー』を旗艦に第２水雷戦隊からは『Ｚ１０』『Ｚ１３』『Ｚ１４』『Ｚ１６』が。第４水雷戦隊からは『Ｚ２５』『Ｚ２６』『Ｚ２７』『Ｚ３１』。そして第１２駆逐隊の『Ｚ４５』『Ｚ４６』『Ｚ４７』『Ｚ４８』。軽巡洋艦一隻、駆逐艦十二隻。総勢十三隻からなる集成水雷戦隊は荒れ狂う海の上を猛烈な速度で進んでいた。荒波を蹴散らし、艦が損傷する事を恐れる事なく驀進する十三隻は、いずれも針路を南東方向へと向けていた。
第２及び第４水雷戦隊は一度無傷や航行は可能な艦船で戦線を離脱。損傷艦を支援隊と本隊に置いて、その護衛をしていた第１２駆逐隊と残存艦艇で臨時の水雷戦隊を迅速編成。すぐさま隊列を整えて残された護衛隊救援の為に再出撃した。
重巡や戦艦よりも軽く高速を誇る軽巡洋艦や駆逐隊で編成された水雷戦隊の速度はすさまじく、カールの指示で機関が損傷する可能性があるギリギリのレベルを維持しながら、最大速度で長時間航行を行い、あっという間に鋼龍クシャルダオラとの交戦海域にまで戻って来た。
クシャルダオラの影響か、交戦海域に近づくにつれて嵐は激しさを増していく。雨風は強くなり、波は荒れ、艦は大きく揺れる。それが、クシャルダオラの無事を知らせているようで、カールを焦らせていた。
「前方上空にクシャルダオラッ！」
交戦海域、先程までクシャルダオラと艦隊が戦闘を繰り広げていた

海域に到達した。見張り兵の報告に、カールはすぐさま双眼鏡を手に取って前方を確認する。
　双眼鏡で覗くと、竜巻を纏いながら風翔龍クシャルダオラが上空に浮いていた。あれから主力部隊が激戦を繰り広げたせいか、自分達が撤退する時よりもボロボロに見えたが、弱っているようには見えなかった。無限の生命力を持っているかのように、クシャルダオラは力を衰えさせてはいなかった。
「くそぉッ！　主力部隊はッ!?」
　辺りを探すと、すぐにクシャルダオラの近くに大型艦の姿が確認できた。
　荒波の中、まるで力を失ったかのように漂流する一隻の大型艦。様々な艦上構造物が壊れ、艦中部からは火の手が上がっていた。その正体は――
「前方の友軍艦は旗艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』ですッ！」
　それは大洋艦隊旗艦、カレンが乗る戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』だった。
「間に合わなかったか……ッ！」
　カールは悔しげに叫びながら床を蹴った。しかし諦める訳にはいかない。この海域にはまだ損傷している味方艦が多数漂流している。それに、まだ無事の艦も居るかもしれない。何より、クシャルダオラはまだここを去っていない。
「全艦、使用可能全砲門をクシャルダオラに向けたまま突撃ッ！　射程に入り次第一斉砲火を加えるッ！　行くぞッ！」
　カールの指示に従い、全艦の主砲がクシャルダオラの方へを向けられる。
　荒波を蹴散らしながら進む水雷戦隊だが、まだ射程にクシャルダオラを収める事はできない。その時、クシャルダオラが動きを見せた。まるで『フリードリッヒ・デア・グローセ』にトドメを挿すかのように、上空で猛烈な風を纏い始めたのだ。周囲に散っていた無数の竜巻が集められ、次々に合流。それはあっという間に二つの巨大竜巻へと変わった。

「あんな物を受けたら、いくら戦艦とはいえただじゃ済まないぞ……ッ！　まだ撃てないのかッ！」
焦るカールだが、まだ射程範囲外。ここで撃った所で意味はない。その間も竜巻が轟音を立てながら勢いを増していく。
このままでは、間に合わない。
味方を、大洋艦隊の旗艦を、自分達海軍将兵が忠誠を誓うカレン・デーニッツ提督を、目の前で失う。
水雷戦隊の将兵全員が焦るが、砲はまだクシャルダオラを射程に捉えられていない。
「間に合えええええッ！」
「……あぁ？」
ゆっくりと目覚めると、自分が横になっている感覚に気づいた。頭を打ったのか、少し頭痛がする。そんな頭を押さえながらエーリックは上半身を起こした。
まだ覚醒したばかりの脳はうまく動いておらず、どうして自分が倒れていたのか思い出す事はできなかった。しかし次第に意識がハッキリしてくると、自分達がどのような状況に居たのかを思い出す。
「クシャルダオラッ！」
その名を叫び、慌てて上空を見やると、そこには恐るべき光景が広がっていた。
全身に無数の傷を負った鋼龍クシャルダオラ。その傷が、これまで大洋艦隊が奮闘して与えたダメージの証拠だった。その中でも特に目立つ、頭部と右翼の損傷。先程まであった角は折れ、右の鋼鉄の翼はまるで引きちぎられた布のようにボロボロとなっていた。
「撃艦槍（ゲイボルグ）……」
それはエルバーフェルド海軍の戦艦が持つ対艦最終兵器、鋼鉄の槍による怪我だという事はすぐにわかった。そう、ゲイボルグはクシャルダオラに命中したのだ。だがわずかに逸れてしまい、胴体には当たらず角と右翼を破壊しただけだった。クシャルダオラは翼を損傷しても飛行能力を失ってはいない。他の飛竜種と違い、彼が自らが用いる風の影響で飛んでいる証拠だ。

そしてこちらには奴の超弩級の風ブレスが直撃した。艦上構造物が壊れた上に、次弾装填中だったナルツィッセに風ブレスが命中して誤爆。それが余計に被害を拡大させ、現在艦が炎上していた。
状況を理解すると、すぐにエーリックは彼女の姿を探した。
「カレンッ！」
すぐに自分の傍に倒れている国防海軍総司令官、カレン・デーニッツ元帥の姿を見つけた。刺し違えた際に自分と同様に転倒した際に頭を打ったのか、血を流しながら彼女は倒れていた。意識はないが、命に別条はないように見えた。
「おい、しっかりしろッ！」
激しく揺れ動かすと、小さな声が彼女の口から漏れた。遅れてゆっくりと目が開く。濁っていた瞳がゆっくりと澄んでいく程に、彼女の意識はハッキリしていった。
「ここは……」
「『フリードリッヒ・デア・グローセ』の艦上だ。まだ戦闘中だぞ」
「……そうだった。クシャルダオラは？」
問いかけるが、その視界の隅で今も上空を滞空する鋼龍の姿を捉えた。それを見て全てを悟ったカレンはゆっくりと立ち上がると、辺りを見回す。
エルバーフェルドの造船技術の粋を結集して作られた最新鋭の新造戦艦。それがこの『フリードリッヒ・デア・グローセ』だ。観艦式や演習では美しくも重々しい、そんな海の女王に相応しい風格を持った超戦艦も、今はクシャルダオラの最大級の風ブレスを受け、ナルツィッセが誘爆した影響もあって随分と損傷を負っているように見えた。ナルツィッセが爆発した影響で発生した火災は今も兵士達が必死の消火活動中だ。
そして、ゲイボルグは命中したものの直撃はせずわずかに逸れた――失敗したのだ。
上空に浮かぶクシャルダオラは依然として力を持ち続けており、今もすさまじい数の竜巻を操っている。そんな絶望的な光景に、思わず笑みが零れた。

「……さすがに、古龍相手じゃ分が悪いわね」
「カレン……」
「――軍艦旗を下ろしなさい。総員、最上甲板」
総員最上甲板。それは《逃げる》という言葉のない軍隊、それも海軍における艦を放棄して脱出せよという命令だった。そして艦の命であり艦の所属を証明する軍艦旗を下ろすというのもまた戦闘行動を終了するという意味を持つ――事実上の敗北宣言であった。
驚く艦長に、カレンは改めて同じ命令を言い放つ。
「まだ戦えますッ！　損傷は確かにひどいですが、装甲も砲もまだ生きていますッ！　友軍艦もまだ残っている状況で、なぜ負けを認めなければならないのですッ！」
「――あなたは、本気でこの状況がわからないの？」
呆れるカレンの背後で、辺りで吹き荒れていた竜巻が次々に集まっていくのが見えた。それらは二つの巨大な竜巻へと姿を変え、更に加速し、威力を増していく。その大きさは『フリードリッヒ・デア・グローセ』を呑み込む程に巨大だった。
「あんな竜巻を受けたら、さすがの新造戦艦もただじゃ済まないわ。損傷している状況では尚更ね」
「艦に居たら確実に危険だ。海の中に飛び込んだ方が、確かに安全かもしれないな」
エーリックもカレンと同意見だった。このままでは艦に乗る兵士全員の命が危うい。艦を捨てる事は耐え難い苦痛だが、部下を失いたくないというカレンの選択に、艦長以下将兵は従う他なかった。
「……総員最上甲板。繰り返す、総員最上甲板」
艦長の苦しげな声での命令が、静かに伝声管を伝わって艦内に響き渡った。最初は動揺した兵士達も、すぐに命令に従い退艦を開始した。海に飛び込む者やボートを降ろして退去する者等、とにかく艦から逃げていく。
艦長はすぐにカレン以下の国防海軍総司令部の要員に艦を降りるよう進言した。するとカレンは自分を除く面々に退艦を命じた。反発する部下に命令だと冷たく言い放ち、エーリックも「俺も残るから、

お前らは先に降りろ」と言って降ろさせた。更にカレンは艦長にも降りるよう命令した。反発する彼に「乗組員の安否確認はあなたにしかできないの。やりなさい、これは命令よ」と言って有無を言わせず艦を降ろさせた。
　次々に乗組員が艦を降りていく中、戦闘指揮所にはついにエーリックとカレンの二人だけが残された。
「……あなたは、降りないの？」
「それはこっちの台詞だ。どうせお前の事だ、陛下にお預かりした新造戦艦を失う責任を取るつもりなんだろ」
「……陛下の名を冠した艦を失っては、もう祖国には戻れないわ。それに、このままじゃあいつの居る村にも辿り着けない」
「新造戦艦を失う失態は確かに大きいが、総統からすればお前を失う方がずっと大きいと思うぞ」
「……私は、そんな大それた人間じゃないわ。たった一人の、好きになった奴の為に謀反にも等しい行いをして、部下を危険に晒している愚か者よ」
「だとしても、この艦隊の将兵は皆お前に恩義がある。誰も、お前を失いたくないと思っているはずさ」
「誰かが責任を負わなければならない。それは、艦隊の長たる私が負わなければならないものよ。私一人の命で、この艦隊に属する一万人を超える部下が無用な中傷に晒されないのなら、安いものよ」
　艦隊の長として、軍のトップとして、責任を負う覚悟を決めた事を語るカレン。だがエーリックからすれば、それはまるで全てを諦め、投げやりになっているようにしか見えなかった。たった一体の古龍に自慢の艦隊がまるで歯が立たず、更に守ると決めた男の所にすら行けない。自分は何の為に、この海にやって来たのか。部下を危険に晒し、自らのワガママを貫いた末の敗北。責任感が人一倍強い彼女には、あまりにも重いモノを背負ってしまった。
　どこか濁った瞳で、空を仰ぐカレン。その視線の先では、更に竜巻の破壊力を上げようと風を呼び起こす鋼龍クシャルダオラの姿があった。

砲の射程範囲外、ナルツィッセ使用不能、高速力を誇るも所詮は戦艦の『フリードリッヒ・デア・グローセ』の速力では今更逃げても避けられるような状況ではない。
ゆっくりと死の執行が迫っている、そんな光景に思えた。
ふと、遠くを見やれば廃墟と化しつつあるイージス村が見える。双眼鏡でようやく状況が見える程に遠いあの村に、今も彼は居る。
戦いに参加する一隻の、指揮所に立つ一人の人間など、あの村からは確認する事はできない。そればかりか、世間の常識に疎い彼からすれば、この艦隊がどこの国の所属かなのかもわからないだろう。突然村の港にやって来て、バカみたいに鋼龍と戦う艦隊。彼からすれば、そんな認識なのかもしれない。
ここに立つのが、自分なんて、きっとわからないだろう。
それでも――
「……まぁ、それなりにクシャルダオラにはダメージを与えられた。これだけ弱らせて負けるなんて、許さないんだから――クリュウ・ルナリーフ」
覚悟は決めた。最期の瞬間を、この目に焼き付けようと仁王立ちでクシャルダオラに対峙する少女。エルバーフェルド帝国国防海軍総司令官、カレン・デーニッツ元帥の最期の勇姿だった。
「――なぁに勝手に死のうとしてんだバカ」
覚悟を決めてクシャルダオラに対峙するカレン。そんな彼女の頭を、エーリックが小突いた。驚く彼女の前に出たエーリックは、一枚の伝文を彼女に手渡す。
「ここに来る途中に届いた緊急伝文だ」
「緊急伝文？　そんなの、聞いてないわよ」
「俺がお前への報告をさせなかったからだ。こんなの知ったら、お前張り合おうと無茶すると思ったからな」
まるで聞き分けの悪い娘を見るような、そんなどこか暖かな視線を送りながら語るエーリックの言葉に、カレンは戸惑いながら伝文を読み始める。その顔色がみるみるうちに変わっていった。
「――お、来たようだぜ」

エーリックが空を見上げながら呟くのが聞こえた。ゆっくりと視線を上げると、彼女にも見えた。
たった一人の少年の為に、主力艦隊を差し向けた国があった。常識的判断をすれば、何て滑稽で愚かな行いだっただろう。後の世はそう判断するかもしれない。
「おいおい、マジで大艦隊だなありゃ」
でも世の中には、もっとバカな国もあった訳で――
鉛色の雲海の至る所で雲柱が上がった。轟音を立てながら次々に雲の中から表れたのは飛行船。その光景はまるで海の中からクジラが現れたかのようなモノ。上下が逆だが、その例えは決して間違ってはいない。
空を飛ぶクジラが、雲の海に次々に浮上して来た。それも一隻や二隻ではない。大小様々な飛行船が十隻以上。しかもそのうち中心部を飛ぶのは、全長三〇〇メートルにも及ぶ巨大飛行戦艦だった。
この世界において、大規模な飛行艦隊を運用し、且つあれだけの巨大な飛行船を建造できる国など、世界広しといえども一国を除いて他はない。
その国こそ――
「アルトリア王政軍国空軍、その主力たる王軍艦隊。しかも旗艦に座乗しているのはアルトリアの女王様ときた――カレンよ、世の中にはお前以外にも大胆な事をする嬢ちゃんが居たみたいだな」
呆然と空を見上げるカレン。そんな彼女の姿を見て、エーリックはイタズラっぽい笑みを浮かべていた。

第２２５話　天と海の艦隊　己の無力さに流れる二人の少女の涙

自由貿易都市アルフレアより北へ数十キロ進んだ先にある海域。現在ここにはカレンが率いて来た大洋艦隊のうち、支援物資や海軍が誇る陸上部隊である海軍陸戦隊の兵員が乗艦した輸送艦六隻と戦いで傷ついた駆逐艦が数隻、その修理を行う工作艦が艦隊を組んで待機していた。本来の護衛役である第１２駆逐隊は先程カールが再編成した水雷戦隊に組み込まれて主力部隊支援の為に離脱してしまった為、現在こちらの本隊及び支援隊は実質護衛のない状態となっていた。本来こうした支援部隊に護衛をつけない事は作戦上問題だが、現時点でエルバーフェルドはどの国とも戦争状態にある訳ではない上、この付近に危険なモンスターがいない事が確認済みの為、異例の判断でこのように展開しているのだ。

とはいえ、護衛のない状態では兵士達も安心はできない。全将兵が警戒を厳にしている中、それは突然現れた。

「お、おい、空を見ろッ！」

誰かが放った言葉に、その場にいた全員が上を見上げ――絶句した。

艦隊のはるか上空に、無数の飛行船が見えた。それらは見事な輪形陣を形成しながら一糸乱れぬ動きで天空を進む。その練度は、自分達エルバーフェルド国防海軍に引けをとらない。

「王軍、艦隊だ……」

誰かが呟いたその単語を、否定する者はいなかった。

この世界において、あれだけの巨大飛行船を有し、且つ大規模運用できる技術力と経済力を持つ国等、一国しか存在しない。その国が誇る飛行船を兵器として運用する空軍、その大規模艦隊こそが――王軍艦隊。

遥か上空を悠々と飛行する飛行船の大艦隊を、エルバーフェルド国防海軍の軍人達はただただ呆然と見上げるしかなかった。

エルバーフェルド国防海軍の支援艦隊上空を悠々と通り過ぎたのは、この世界において最高の科学力と経済力、そして軍事力を兼ね備えた世界最強の大国――アルトリア王政軍国の誇る王軍艦隊であった。

上空一〇〇〇メートルにも及ぶ高度を、無数の飛行船が見事な輪形陣を形成しながら航行していた。それらの旗にはアルトリアの国旗である初代女王アルトリアの勇姿を模した旗が掲げられている。

飛行船は全長一〇〇メートル弱のものから、最大は三〇〇メートルクラスのものまで大小様々。それらの艦船は、中央を航行する巨大な飛行船一隻を守る為の艦隊であった。

この艦隊の旗艦であり、彼らが崇拝し、敬愛する者が乗るこの戦艦こそ、王軍艦隊旗艦である戦艦『プリンセス・オブ・アルトリア』であった。

全長三〇〇メートルの巨艦に、無数の速射砲を備え、大量の砲弾と爆撃用の爆弾を搭載したこの戦艦は、たった一隻で一国を滅ぼす事ができると言われている。その最強艦の妹艦でありプリンセス・オブ・アルトリア級戦艦2番艦『ドレッドノート』も後続で続いており、更に防御装甲を削った分だけ重量を減らし、高速力を得た巡航戦艦と呼ばれる高速戦艦、レナウン級巡航戦艦1番艦『レナウン』、2番艦『レパルス』も艦隊に参加している。

アルトリア王政軍国が誇る飛行戦艦が四隻も配備された艦隊。それはまさに最強の精鋭部隊。一国どころか西竜洋諸国全てを制圧できるだけの大規模艦隊だった。

通常、アルトリア王政軍国空軍は四つの機動艦隊と呼ばれる艦隊に分けられている。戦艦を主力とした本土防衛を担う精鋭艦隊たる第1機動艦隊、巡航戦艦及び重巡航艦を主力とした高速力と火力を重視した第2機動艦隊、軽巡航艦を旗艦として駆逐艦数隻で編成された機動戦隊と呼ばれる高速部隊が主力となる第3及び第4機動艦隊。

これら四つの機動艦隊を統率し、作戦に合わせて艦隊の垣根を越えて艦隊を編成する場合がある。厳密に言えばこうした複数の艦隊が空軍の長たる王軍艦隊司令長官の指揮の下で行動する場合のみ王軍

艦隊と呼ばれる。しかしアルトリア国民からは羨望の、大陸の民からは畏怖の対象として王軍艦隊という呼称がされる場合がある。
　そして、更にこれらの艦隊の名前が変わる時がある。それは、アルトリア王政軍国三軍の最高司令官であり、国のトップたる女王が乗艦し、自ら指揮を執っている場合。この時は形式上は王軍艦隊司令長官ではなく女王が直々に指揮を行っている為、この場合の艦隊は王軍艦隊ではなく女王艦隊と呼ばれる。
　そして、今この空を航行する大規模艦隊は、この女王艦隊と呼ばれる艦隊だった。旗艦である『プリンセス・オブ・アルトリア』のマストには国旗の他に現女王の紋章たる銀火竜の旗が掲げられている。これこそがこの艦に今まさにアルトリア王政軍国女王が乗艦している証だ。
　なぜアルトリア王政軍国が誇る飛行艦隊がこのような辺境の海上を翔んでいるのか。それは、アルトリア王政軍国女王たる彼女の決断に他ならない。
　旗艦『プリンセス・オブ・アルトリア』の全長三〇〇メートルに及ぶ巨艦下部にある艦橋には、大勢の軍人達が厳かに構えていた。見張り兵達は艦隊が安全に航行できるよう常に双眼鏡で辺りを警戒しており、将校達は今後の事について話し合っている。それらの兵士達をどこか冷徹な眼差しで見詰めている青年こそ、この王軍艦隊本来の長たる王軍艦隊司令長官にしてアルトリア王政軍国を支える宰相、ジェイド・クルセイダー勲功爵であった。モノクルの奥の瞳は、誰が見ても今の状況に納得がいっていない。どこか不貞腐れているように見えた。
「……陛下、改めてお尋ねします。本当に、鋼龍に戦いを挑むおつもりですか？」
「無論じゃ」
　厳かな軍服を纏った軍人ばかりの艦橋の中、少女の出で立ちは良く目立っていた。彼女の正装には三つの段階があり、式典などに使われる第一種正装から通常時用の第二種正装、そして今彼女が纏っている最も軽装な第三種正装がある。第三種とはいえ、スカートはロングス

カートでフリルや宝石などふんだんに使われた豪華なドレスだ。女王としての威厳に満ちた服装ながら、その頭に被るアルトリア王家に代々伝わる女王の証たる王冠は未だにサイズが合わずブカブカ。何より歳相応の小柄な体格や顔立ちは隠しきれず、一国の長なのにどこか華奢な印象を抱かずにはいられない。

しかしその胸の奥に抱く国を、そして民を愛する想いは歴代の女王にも負けない程強い。顔立ちこそは幼いが、その強い意志を感じられる銀色の瞳と同色の美しい銀髪は母親譲り。勇気と希望に満ち溢れたこの少女こそ国民からは親しみを込めて少女王とも呼ばれる、アルトリア王政軍国現女王――イリス・アルトリア・フランチェスカである。

艦橋の中央にある椅子に腰掛ける事もなく、どこか苛立っている様子のイリス。いつもは余裕に満ちた表情が多い彼女だが、今回はそんな余裕など一切なかった。そしてそんな焦る彼女の姿を見て、ジェイドは改めてため息を零す。

そもそもなぜ南洋に浮かぶ島国のアルトリア王政軍国の女王が遠く離れた北部海域の空の上に居るのか。

元々、今回イリスは同盟国であるエルバーフェルド帝国に条約の調印の為に遠くエルバーフェルドを目指しやって来た。この艦隊は女王である彼女を守る為であり、同時に他国に同国の軍事力の高さを見せつける、いわば砲艦外交とも言うべきものだった。

エルバーフェルド・アルトリア防国協定。

西竜洋諸国から孤立し、アクラとも関係が悪化しているエルバーフェルド帝国のフリードリッヒ政権と大陸国家との結びつきを強化しようとするアルトリア王政軍国のイリス政権。両国の長が姉妹の契を結んでいる事もあり、二国は急速に接近。数年前にこの同盟協定が結ばれた。しかしエウバーフェルド側はアルトリアを警戒、アルトリア側も大陸人を毛嫌いにしている互いの保守派の激しい反対もあり、実態はこの協定は骨抜きとも言うべき、形だけのものだった。しかし両国は互いの同盟国とし、民間レベルの交流も少しずつだが増やしていった。

時が経ち、フリードリッヒもイリスも互いに政権が安定した事もあり、エルバーフェルド側は今後更なる西竜洋諸国に対する牽制の為、アルトリア側も悪化の一途を辿っているテティル共和国連邦を威嚇する為にもより強固な同盟関係を望んでいた。

これら二つの国の利害が一致し、より強力に互いの国の同盟関係を明記した上、有事の際には互いが互いの国を守り、敵国を攻撃できるよう決めた協定――エルバーフェルド・アルトリア軍事同盟を締結する事となった。

本来は宰相であるジェイドだけで条約の調印は可能であったが、イリスが同盟国に対して君主自ら赴かなければ信頼関係は築けないとしてこの調印団に同行する事なった。

もちろん、この理由にウソはない。だが実はイリスとしては調印を終えた後にクリュウに会いに行こうと考えていたのだ。

クリュウとイリスは従姉妹関係であり、何よりイリスからすればクリュウは大好きな初恋の相手。本当はずっと一緒に居たいのを祖国の為、女王としての責務の為に我慢していた。手紙でのやりとりは続いていたとはいえ、やはり顔を見たい。その想いからの行動だった。もちろん、お目付け役のジェイドにはお見通しであり、彼の悩みの種の一つとなった。

そんな想いを抱きながら意気揚々とエルバーフェルド帝国帝都エムデンに入ったイリスだったが、そこで驚愕の事実を知る事となった――それが、イージス村に鋼龍クシャルダオラが現れたという情報だった。

イリスはすぐに全艦隊を率いてイージス村に行く事を決意した。ジェイドや王軍艦隊司令部の面々はこのイリスの命令に彼女を危険に晒す訳にはいかないと異を唱えたが、イリスはこれを拒否。女王権限で反対する者は国家反逆罪の重罪に処すとまで断言した。

いつもは温厚で優しいイリスが厳罰を断言した上で女王権限まで発動して命令を下した。彼女の本気と決意を知った将兵達は覚悟を決め、彼女の命令に従う事となった。

一方条約調印の準備を進めていたフリードリッヒ率いるエルバー

フェルド側は調印式を放棄して出撃しようとするアルトリア側を強く非難した。しかし頭に血が上ったイリスは全艦の砲門をエムデン宮殿に向け、改めて調印式の延期をエルバーフェルド側に求めた。実質上の脅迫外交だ。

エルバーフェルドの近衛部隊及び列車砲部隊、アルトリア側の女王艦隊と空軍陸戦隊が睨み合う事一日、フリードリッヒの方が根負けして調印式の延期を受諾。イリスはすぐさま全艦隊に出撃命令を下し、エムデンを立った。

全艦艦隊最高速度を維持しながら一路イージス村のある東を目指して飛び立った。奇しくもその方向は一週間程前にカレンがフリードリッヒに反旗を翻してまで向かった方向であった。

一人の男の為に自らが信頼する海軍の長の少女と、自らが信頼する妹のように親しい同盟国の少女が、自らを裏切るような形で飛び出して行った。

エムデン宮殿の総統室に残されたフリードリッヒは大きなため息を零した。

「わからないな。あんな軟弱な男に、なぜ二人があそこまで……」

信頼する二人に裏切られた。顔では平静を装っていても、その実彼女はかなり参っていた。たった一人の男の為に一人は祖国と恩人たる自分を捨てる覚悟を抱いて、一人は自分との姉妹の絆と唯一の同盟関係を捨てる覚悟を抱いて。

たった一人の男の為に全てを捨ててでも助けに行った二人。フリードリッヒにはその行動も、何より二人が惚れた男の魅力もまるでわからなかった。

一人悩む彼女の隣に立つ、宣伝担当大臣のヨーウェンはそんな彼女に向かって静かに囁いた。

「……誰かを好きになる事に理由なんてない。好きになっちゃったんだから、仕方ないじゃない」

笑顔で言う彼女の言葉に、やはり理解できないとばかりにため息を零すフリードリッヒ。どこか不貞腐れているような印象を受ける彼女の後ろ姿を見ながら、ヨーウェンは静かに、そして妖艶に微笑む。

「――あなたは、もうわかってるんじゃないかしら？　好きになった人の為なら、何でもする覚悟を」
フリードリッヒは何も答えなかった。ただ、わずかに見える頬を微かに赤らめて……
女王艦隊旗艦：戦艦『プリンセス・オブ・アルトリア』
第１戦隊：戦艦『プリンセス・オブ・アルトリア』『ドレッドノート』
第３戦隊：巡航戦艦『レナウン』『レパルス』
第５戦隊：重巡航艦『ドーセットシャー』『ランカスター』『アドヴェンチャー』
第１機動戦隊：軽巡航艦『イラストリアス』
第１駆逐隊：駆逐艦『アーデント』『フェニックス』『パラディン』『エセックス』
第２駆逐隊：駆逐艦『エクセター』『ブラッドフォード』『グリフィン』『フォックスハウンド』
第２機動戦隊：軽巡航艦『アトランティア』
第３駆逐隊：駆逐艦『エンデバー』『エンカウンター』『エクスプレス』『ヴァレンタイン』
第４駆逐隊：駆逐艦『ライトニング』『イカロス』『ラファール』『チャレンジャー』
第１給炭隊：給炭艦『フォーチュン』『フェアリー』『ハピネシア』
―全２８隻―
第１機動艦隊の部隊を主軸に、一部他の艦隊から抽出した部隊で編成された女王艦隊。その総数は二八隻にも及び、アルトリア空軍史上最大規模の遠征部隊となった。しかもこれらの艦艇は今まさに、歴史上初めてとなる飛行船による古龍迎撃戦に向かおうとしていた。
しかし、戦いに赴こうとする兵士達の士気は、正直カレンが率いていたエルバーフェルド艦隊の将兵よりも低かった。なぜならエルバーフェルド艦隊は一応祖国防衛の大義名分があったが、アルトリア艦隊にはそれがない。更に頑丈な鋼の装甲に覆われた水上艦に対し、飛行船の装甲は重さの関係で限界がある。元々の設計思想が兵器である上に対空兵装の概念がない為、被弾する事が前提として装甲を施

された水上艦よりも防御性能は著しく劣る。そんな状況で厄災とも称される古龍に挑むというのだから、自分達の行動は自殺行為なのではという疑心が兵士達の心にはあった。
敬愛する女王陛下の命令とはいえ、大義がない上に劣勢な戦に赴く事になる。兵士達の士気はどうしても今ひとつ上がらなかった。
そんな兵士達の様子に気づかないイリスではない。だが怒鳴り散らしても、戦いを強制させても、士気など上がるはずはない。むしろ自分はそういった事は苦手だ。何より、この戦いが自分のエゴだとわかっているからこそ、彼らを巻き込んでしまったという想いが、どうしても彼女の胸に残った。
彼の危機に思わず飛び出してしまったが、具体的な作戦などもない。このまま、無策に突っ込んでもこちがの一方的な蹂躙で終わるのでは？　そんな想いが、どうしても拭い去れない。
拳を握り締め、葛藤するイリス。そんな彼女の肩をそっと叩く者がいた。振り返ると、そこには一人の少女が立っていた。真っ赤な服のような鎧、イーオスの素材と鉄鉱石などを使って作られたイーオスシリーズと呼ばれる防具を纏った少女。背には鉄鉱石やマカライト鉱石を素材にして鍛え上げられた鉄刀【神楽】と呼ばれる刀を背負っている。
自慢のクリーム色の美しく艶やかな髪を流し、どこか神秘的な顔立ちをした少女。勝ち気な瞳を輝かせ、不安に怯える少女王の背中をそっと支え、そっと囁く。
「確かに、飛行船は古龍相手では正直一方的にやられるだけですわ」
少女の言葉に、イリスはやはりかとばかりに悔しげに唇を噛む。拳を強く握り締め、自らの無力さに無様に震わせる。そんな彼女の拳をそっと包み込む別の者がいた。全身をまるで刃物のような鋭い印象を受ける、鋭利的なデザインの青い鎧、鎌蟹ショウグンギザミの素材を使って作られたギザミシリーズ。背にはカブレライト鉱石と呼ばれる希少鉱石を心臓に大量の鉄鉱石やマカライト鉱石を素材に鍛冶職人がその腕をふるって鍛え上げた大剣、カブレライトソードが携えられている。

鮮やかな紫色の髪を凛々しくポニーテールに結い、イーオスの少女以上に勝ち気で、自信に満ち溢れた表情を浮かべた少女。口元にニヤリと不敵な笑みを浮かべ、いつの間にか滲み出していたイリスの涙を、そっと指先で拭い取る。
「だがな女王様、俺があなたの代わりにあのバカを助けに行くんだ。元クラスメイトとして、何よりあいつは俺の元舎弟だ。助けない理由はねぇ」
「あら、元クラスメイトという事なら、私も当てはまるわよね」
そう言って優雅な足取りで現れたのは全身を先程の娘と同じくイーオスシリーズで纏めた少女。背には初心者が使うハンターボウシリーズ、その第４版であるハンターボウ４と呼ばれる弓。
三人の少女の言葉に、一周呆けていたイリスだったがすぐに瞳を鋭いものに変える。真剣に、何一つ冗談を言うでもなく、イリスはこの無謀者達に叫ぶ。
「バカを言うでないッ！　お主達が行って何ができるのじゃッ！」
「――何か、できる事がある。私はそう信じてますわ」
「まぁ、確かに私達じゃ実力不足は否定しません。でも、きっと何かできるはず」
「俺達三人が集まれば、不可能なんてねぇんだよ。女王様」
そう言って少女達――アリア・ヴィクトリア、フェニス・レキシントン、シグマ・デアフリンガーは自信満々に微笑んだ。その笑顔に、どこかほっとした自分がいた。でもそれが、イリスは許せなかった。
「阿呆ッ！　シグマですら古龍に挑むのは無茶だというのに、お主達二人はここ最近はずっと戦いから身を引いていた身分ではないかッ！」
そう、聖騎士団に入ったシグマはモンスター討伐なども引き受けていた為、ハンターのような道を歩んで来た。ハンターとしての実力も、確実につけてきたのだ。
しかしアリアとフェニスはそれぞれヴィクトリア家を引き継ぐ道と、父と同じ政治家を目指す道へと旅立っていった。当然、ハンターとしての活動はしなくなった。ハンターとしての道は遊びだった訳

ではないが、一種のステップアップとして彼女達はドンドルマのハンター養成訓練学校に入った。本来の道へと戻った二人は、それぞれ太刀と弓は置き、重い鎧は華麗なドレスへと変えた。
だが今、そんな二人は再び太刀と弓を持ち、優雅なドレスを脱ぎ捨て重い鎧を身に纏った。
「確かに、シグマの武闘バカでも太刀打ちできない相手に、ずっとハンターを離れていた私達二人は全く役立たないかもしれない」
「勝てないとわかっていて挑むなど、愚かな行為じゃッ！　妾は、そんな無謀を許さぬぞッ！」
イリスの言う事は正しい。決して間違ってはいない。負けるとわかっている戦に、なぜ身を投じるのか。生き残ることが、何よりも優先すべき事。命こそが、最も大事なのだ。なのに、なぜ彼も彼女達もその最前提を無視して、無茶な戦いに挑むのか。理解できないし、何より彼女達もまた愛する国民だ。国民を、家族を犬死にさせる気など毛頭ない。
「――よう我らが女王様。あんた、何か勘違いしてねぇか？」
「何じゃと？」
振り返ると、そこには呆れた表情を浮かべたシグマが立っていた。その隣に立つフェニスも、どこか困ったような表情を浮かべている。シグマの言葉の意味がわからず、困惑するイリスに向かってシグマは苦笑を浮かべながら答えた。
「何も俺達は鋼龍にケンカを挑もうって訳じゃねぇ。俺は昔の舎弟の一人のように突撃するしか能が無いバカじゃねぇ。勝てない戦に命なんざ張らねぇよ」
「私達の目的はあくまで、無茶をしているであろうクリュウ君の救出。抵抗するなら気絶させてでも彼を救い出し、すぐに離脱する。無理をして、鋼龍クシャルダオラとは戦わないわ」
「陛下が命を何よりも大切にしろと日々仰っているのです。我々も、命を最優先に行動しますわ」
三人だってバカじゃない。今の自分達の実力では、それこそ現役のハンターとして活躍しているクリュウよりも鋼龍とはまともに太刀

打ちできないだろう。むしろその戦いに加われば自分達は完全に彼の足手纏になってしまう。ミイラ取りがミイラになっては元も子もない。
三人の目的はあくまでクリュウの救出だ。それが最優先目標となる。
もちろん、彼が鋼龍と戦っているというのは予想に過ぎない。もしかしたら村人と共に脱出しているかもしれない。だとすれば尚更その村人を安全に避難させる事も重要だ。自分達の目的はクリュウとそれに関係する人々の救出。決して、鋼龍クシャルダオラとの戦いではない。
「そうか……」
三人の言葉に自分が誤解していた事に気づいたイリスは肩に入っていた力を抜いた。どうやら自分はクリュウの危機に頭がうまく回っていないようだった。だとすれば尚更、今自分が艦隊を率いて突撃するのは無謀なのだろう。
三人のおかげで少し冷静さを取り戻したイリスはすぐに三人の為に艦隊の針路を変針した。彼女達を安全に、且つなるべく村に近い平野で彼女達を下ろす。その為に艦隊は一路現在は避難命令が出て無人都市となった自由貿易都市アルフレアの南にある平野に着陸するのが一番だ。そこからなら艦に積載している馬車隊との馬車を用いれば一日足らずでイージス村に到着する。何より、これより先は天候が荒れている事が予想され、飛行船が安全に着陸できないのだ。
イリスの命令を受け、艦隊は一路海から陸へと移動し、アルフレア上空を通過。そのまま南下を続け、いよいよアルフレアの南方に広がる平野へと至った。
安全に着陸できるよう、辺りを警戒していた見張り兵が眼下の異変に気づいたのはその時だった。
「直下にモンスターの群れを確認ッ！」
その声に様々な箇所を見ていた別の見張り兵達も次々に眼下を確認する。それは艦橋にいた四人の乙女も同じだった。
見ると、眼下にはイーオスの群れとガブラスの群れが共に行動して

展開していた。その数は双方合わせると一〇〇……もしかしたらそれ以上かもしれない途方も無い数だ。
「な、何だよあれ……あんな大群、見た事ねぇ」
　驚くシグマの言葉にアリアとフェニスも頷いた。元々イーオスもガブラスも群れを組むモンスターだが、これほどの規模など見た事も聞いた事もない。だが博識のイリスはその光景に以前書物で読んだある文面を思い出す。
「……古龍が出現すると周辺のモンスターが異様に凶暴化したりする場合があると聞く。それに、古龍が街などで暴れ回った後にあした小型のモンスターが大挙して襲撃し、残っていた人々を皆殺しにしたという記録もある。奴らはもしや、それではないか？」
　イリスの予想は的中していた。見ると眼下のモンスターの群れは迷う事なくイージス村の方向を目指していた。恐らく彼らは、イージス村へと向かっている最中なのだろう。
　現在イージス村は鋼龍クシャルダオラの攻撃を受けている最中だ。それが終わったとしても、今度はこのモンスターの群れに襲われる。イージス村は崖の上にある為こうした小型モンスターの攻撃には強い。だがそれは村の防衛設備が機能している状態である事が前提だ。
　村が危険な状態となれば、外界からの侵入口は全て塞がれて村は籠城戦を取る。だがクシャルダオラの攻撃を受けた村は、そうした防衛設備もシステムも失っている可能性が高い。そうなれば、いくら崖の上にあるとはいえ村は丸裸も同然。それにこの群れにはガブラスという空を飛ぶモンスターも含まれている。
　もしも村に残っている者がいれば、これらの群れの攻撃を回避する術はないだろう。
　連中の目的がわかった瞬間、イリスの目が鋭いものに変わった。
「全艦戦闘態勢ッ！　空対地攻撃用意ッ！」
　イリスの命令が艦内全体へと伝わり、更に発光信号や汽笛信号を介して全艦へと通達された。二五隻もの飛行艦の中が慌ただしくなる。
「これより、艦隊は眼下のモンスター群へ総攻撃を仕掛ける。砲撃、爆撃など全てを駆使して奴らを殲滅。一匹たりともイージス村へ向か

わせるでないぞッ！」
　イリスの命令に従い、艦隊は高度を下げ、更に密集隊形を取る。これで攻撃範囲を縮め、濃密な絨毯爆撃が可能となる。
　兵士達は次々に砲の周りに集まり、砲を眼下へと向ける。弾倉にも人が集まり、ハッチを開いて爆撃の準備を整えた。弾倉にはタル状の爆弾が無数に積載されており、それこそ街一つを滅ぼせるだけの爆弾が搭載されている。それら全てが、眼下に展開するモンスターの群れへと向けられた。
　全艦に乗る将兵達が、イリスの攻撃命令を待つ。
　眼下を走るイーオスの群れが異変に気づいて天を仰いだまさにその瞬間――
「全艦攻撃を始めるのじゃッ！」
　イリスの号令一下、女王艦隊の戦闘艦二五隻が一斉に眼下のイーオス・ガブラスの連合群に総攻撃を開始した。全砲門が真下へと向いて砲弾を撒き散らし、弾倉からは次々に爆弾が投下されていく。凄まじい砲撃の爆撃の嵐にイーオス達は為す術もなく次々に蹴散らされていった。
　まさに地形が変わる程の猛攻撃は実に二〇分間も続き、イリスの攻撃中止命令が出る頃には眼下にいたモンスターの群れはその数を激減させていた。更に生き残った連中は逃げるようにイージス村とは反対の方向を目指して行った。それらを見送りながら、戦艦『プリンセス・オブ・アルトリア』の艦橋ではイリスとアリア達の最後の打ち合わせが行われていた。
「今のように、イージス村を襲おうと考えるモンスターの群れはまだ居るかもしれない。だからこそ、俺達は行かなくちゃいけないんだ」
「……お主達の言う事はわかる。じゃが、本来ならばそういった役目は陸戦隊じゃ。しかし」
　実はこの時、空軍陸戦隊はエルバーフェルド帝国帝都エムデンに置いて来てしまった。本来今回の遠征において陸戦隊の役目は大臣や次官、その他大勢の文官の護衛だった。艦隊での戦となれば文官の彼らを巻き込む訳にはいかない為にエムデンへ置いて来たのだが、その

際彼らの護衛の陸戦隊も置いて来てしまったのだ。
一応他の空軍兵も陸戦はできる。しかし専用武器もなければ訓練も未熟。とてもじゃないが陸戦に特化した訓練を負っている陸戦隊の面々に比べれば陸戦能力は劣る。何より兵を下ろせばその分だけ艦に残る兵が減り、艦の維持が難しくなる。軍艦に乗る兵士の数は決して余裕がある訳ではないのだ。
「だから、俺達が行くんだよ。それに少人数の方が何かと動きやすい。特に今回は機動力と高速力が必要な任務だ。俺達三人の方が都合がいい」
そう言って任せておけとばかりに犬歯を煌めかせるシグマの言葉は何よりも心強かった。彼女の実力は折り紙つきなので、下手な軍人を送るよりは対モンスター戦では彼女の方が適任だろう。
「それに、これは私達のわがまま。ここまで付き合っていただけでも感謝ですわ」
そう言って優雅に微笑むアリアも学生時代はかなり優秀な成績を収めた元ハンターだ。いきなり大型モンスターの相手は厳しいだろうが、小型モンスター程度なら何とかなるだろう。
「陛下達はエムデンへ引き返してください。これ以上は、本当に危険です」
フェニスもまた優秀な元ハンター。この三人でなら、それこそ鋼龍クシャルダオラに挑むような無茶さえしなければきっと大丈夫だろう。彼女達に任せておけば、きっと大丈夫。
だから、自分はフェニスの言う通りエムデンへと引き返すべきだ――そう簡単に納得できる程、イリスは大人ではなかった。
「いや、妾はお主達を下ろした後も予定通りイージス村を目指す」
「陛下ッ！」
「勘違いするでない。クリュウの事はお主達に任せた。妾はエルバーフェルド艦隊の救援に向かう。古龍との戦いじゃ、おそらく向こうも相当な被害を受けておるじゃろう。それを助ける」
「お言葉ですが陛下、わざわざ大陸の国の艦隊の為に我々が危険を晒す必要はありません。ここは素直に引き返すべきです」

これまで話を無言で聞いていたジェイドが引き返すべきだと進言する。彼女の身を案じている事もあるし、言葉通りエルバーフェルドの為に自分達が危険を冒す必要はないと思っている為だ。だが彼のそんな言い方に対し、イリスは激しく激怒した。
「このたわけ者がッ！　同盟国の者達を見捨てるなど恥ずべき行為を、妾自ら行えとお主は申すかッ！」
「いや、しかし陛下……ッ！」
「――それに、助けを求めている者を見捨てるなど、そんな道徳に反する行為は妾は承服しかねる。助けられるはずの命を見捨てるなど、妾にはできぬ」
真剣な眼差しで語る彼女の言葉に、三人の娘達は頼もしげに微笑む。これが自分達が忠誠を誓う、祖国を統治する幼くも気高き、そして慈愛に満ちた少女王なのだ。
一方のジェイドもようやく諦めたように深いため息を零して黙る。彼女が一度こうと言い出すと聞かない事は、もう長い付き合いでよく知っていた。それに、今の彼女の言葉でこの場に居た兵士達はこれからの戦いに士気を取り戻しつつあった。
助けられる命を助ける為に戦いに赴く。戦う理由として、これほど立派で正義感に満ちたものもないだろう。ここで無理にでも反対すれば、それこそ自分が兵士達からの信頼を失いかねない。これ以上の抵抗は無意味だと判断したのだ。
諦めたジェイドを見て、イリスは表情を崩さないまま気高く、そして声高らかに宣言した。
「これより艦隊は三獣士の愛娘達を分派次第、同盟国エルバーフェルド帝国の水上艦隊の救援に向かうッ！　全艦、妾に続くのじゃッ！」
数十分後、女王艦隊は理想的な着陸場所を見つけて着陸。その場でアリア、シグマ、フェニスの三人と別れた後再び抜錨。空中で陣形を再編成し、そのまま最大戦速にしてイージス村を目指して出撃した。
離艦した三人もイリスから借りた騎兵隊から借りた馬に乗って遅れて艦隊と同じくイージス村を目指して突撃。
その数時間後――

「艦隊下方の海にエルバーフェルド帝国の艦隊を発見。その上空に鋼龍クシャルダオラを確認しました」
嵐を避ける為、雲の上を航行していた女王艦隊。イージス村の沖合と思わしき場所に到達した後、全艦第一種戦闘態勢に移行後に雲の下へと降下。雲の海を突き抜けて雲下へと至ると、その下の光景は想像を絶するものだった。
周囲には損傷したエルバーフェルド海軍所属と思われる軍艦が力なく浮いている。その中で異彩を放つ巨大な戦艦、あれが恐らくこの艦隊の旗艦だろう。その旗艦の前に鋼龍クシャルダオラはおり、今まさに力尽きた旗艦に向かって巨大な竜巻をぶつけようと構えている所だった。
「あの程度の戦艦なら、クシャルダオラの竜巻の直撃を受ければ致命傷でしょうな」
アルトリア王立海軍の戦艦はエルバーフェルドの戦艦など比ではない程に巨大で高性能だ。元々の造船技術と経済力が違う為、互いの国の最新鋭の戦艦でも大きな開きがある。エルバーフェルドからすれば眼下にある『フリードリッヒ・デア・グローセ』など旧式戦艦と言っても過言ではない。そんな戦艦、しかもあれだけ損傷していればクシャルダオラの巨大竜巻を受ければひとたまりもないだろう。
だが、例え自国に劣る他国の戦艦だとしても、あそこに乗る兵士達はこれまでクシャルダオラと勇猛果敢に戦い続けて来た海の猛者達。同盟国の、友とも言うべき者達だ。それを見捨てるなどという愚行にも等しい選択肢など、彼女は持ちあわせてなどいない。
更に遠くを見れば、荒廃したイージス村の全貌が良く見えた。きっと美しい村だったと思われるその村は、もはや瓦礫だらけの廃村と化していた。それが愛する彼の故郷だと思うと――彼女の胸の奥で黒く、そして激しい憤怒の炎が燃え上がった。
竜巻を操りながら突如現れた自分達を警戒するように見上げる鋼龍の冷徹な眼光と、そんな彼を怒りに満ちた鋭い眼光で見下す少女の目が交わる。そして――
「全艦総力を以って鋼龍クシャルダオラを攻撃ッ！　全艦突撃

じゃぁッ！」
イリスの怒声と共に、女王艦隊の攻撃が始まった。
旗艦である戦艦『プリンセス・オブ・アルトリア』を中心に輪形陣を形成した艦隊はすっぽりとエルバーフェルド帝国国防海軍旗艦、戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』の上空を取り囲む。
二五隻の飛行艦から一斉に放たれる砲弾の数々は次々にクシャルダオラに襲い掛かる。その猛烈な砲弾の雨にクシャルダオラはたまらず『フリードリッヒ・デア・グローセ』に向けようとしていた竜巻を盾のようにしてこれを防いだ。反撃に出たいが、凄まじい砲撃の嵐に防戦の一方となった。
しかしクシャルダオラも負けてはいない。竜巻を盾にしながら風ブレスのチャージを行う。顎を開き、前方の空間に風を圧縮していく。すさまじい空気の圧縮に辺りの温度が急上昇し、水蒸気は風と合わさって辺りを白く染めていく。そして、限界まで溜めた風を敵の最前方の艦に向けて放つ――寸前、背中が爆発した。
悲鳴を上げ、せっかく溜めた風ブレスはあらぬ方向へと飛ぶ。それは眼下の『フリードリッヒ・デア・グローセ』よりも百メートル程右に逸れた場所に着弾。轟音と共に海が割れる光景を見て、誰もがその威力に度肝を抜かれた。
だがクシャルダオラ突然背後から攻撃された事に焦っていた。何事かと思い振り返ると、続けて次々に砲弾が飛んで来た。風の鎧でこれらを弾きながら確認すると、水平線の向こうから白波を立てながら複数の艦船がこちらに向かって凄まじい速度で突っ走って来るのが見えた――カール少将率いる集成水雷戦隊だった。
戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』の艦上で歓声が上がる。同盟国に加えて先程離脱していた友軍艦隊が救援に来てくれた。絶望の淵にあった兵士達に、再び希望の光が満ち溢れた。まるで小説の中のような奇跡とも言うべき展開だ。
目の前の信じられない光景に呆然としていたカレンだったが、すぐに正気を取り戻すと隣でイタズラっぽい笑みを浮かべるエーリックを睨みつける。その表情は提督と言うよりも、恥ずかしいものを見ら

れて怒る歳相応の少女らしい羞恥の顔だった。
「何をヘラヘラしてんのよ」
「いや、この光景にお前さんは何て言うかなぁと思ってさ」
「……決まってるじゃない」
振り返ったカレンの目には再び闘志が燃え上がっていた。戦意を取り戻し凛々しい表情で振り返ったカレンは美しくも力強く、勇猛果敢な命令を声高らかに下した。
「カール少将率いる臨時水雷戦隊に発光信号ッ！『我竜巻攻撃ヲ受ク、各艦ハ我ヲ顧ミズ前進シ、敵ヲ攻撃スベシ』ッ！」
アルトリア沖海戦においてカレン・デーニッツ元帥が最後に放った攻撃命令。それは歴史上最も勇敢で勇ましい攻撃命令として、後に後世まで伝えられる命令となった。
アルトリア・エルバーフェルド海空連合艦隊による攻撃は苛烈を極めた。猛烈な弾幕はクシャルダオラの侵攻はもちろん攻撃も阻み、クシャルダオラは完全に防戦一方となった。
だがこれまでにない程クシャルダオラを追い詰めているはずの二国艦隊だったが、実はこちらも致命打に欠けていた。
アルトリアの飛行船は重量制限がある上に対艦戦を想定していない為、小口径の大砲を無数に備えているのが特徴だ。つまり、大砲の威力は実はエルバーフェルドの重巡洋艦や戦艦に劣る。その為クシャルダオラの風の鎧を突破できない上、嵐の影響でこれ以上近づく事ができずにいた。
更にエルバーフェルド艦隊も高火力の重巡洋艦や戦艦といった艦船は先程の戦いで大きな損害を受けた艦ばかりで砲撃戦に参加していないものが多く、現時点での砲撃戦の主力はカール率いる集成水雷戦隊の駆逐艦だった。これもまた威力が低く、風の鎧を突破できない。
互いに相手に致命打を与えられない戦いは十分程続いた。しびれを切らしたイリスが戦艦での突撃するよう命令しようとしたその時――突如クシャルダオラが反転し、艦隊から離れて行った。
一瞬、追い払ったのではと期待したが、その向かった先はイージス

村の方角だった。慌ててイリスは追撃命令を下す。だが、
「これ以上進むのは無理ですッ！　気流の乱れが激しく、このまま前進すれば墜落してしまいますッ！」
　艦長の悲鳴にも似た進言に、喉まで出かかっていた『突撃』の二文字が引っ込んだ。この激しい嵐の中では、繊細な飛行技術を要する飛行船は艦体を維持するだけで一苦労なのだ。それをこのままより激しく気流が乱れている所に突撃させるなど、自殺行為だ。
「じゃがこのままでは奴が再びイージス村に行ってしまうではないかッ！」
「このまま進めば、我々が犬死にするだけですッ！　これ以上進む事は、艦をお預かりする身として承服しかねますッ！　何より、陛下をこれ以上危険な地には向かわせられませんッ！」
　艦長は処罰される覚悟でイリスを説得する。これ以上進めば、本当に墜落しかねない。この艦だけではない、艦隊には大勢の軍人が乗っている。それらが乗る艦をこんな所で墜落させる訳にはいかないのだ。
「じゃが、しかし……ッ！」
　頭ではわかっていても納得できない。悔しげに地団駄を踏むイリスに対し、隣に立っていたジェイドが肩を掴んだ。動きを止める為のそれはいつもと違って痛いくらいに力強く、がっちりと肩を押さえていた。呆然と頭をもたげると、いつもと変わらない無表情の彼の顔がそこにあった。だがモノクルの向こうにある冷たい瞳は、いつもよりもどこか温かく感じた。
「陛下。我々はあくまでエルバーフェルド艦隊の救援にここに来たのです。今のうちに、海に投げ出された者達を収容しましょう」
　そう、自分達の目的はあくまでエルバーフェルド艦隊の救援。鋼龍クシャルダオラの迎撃ではない。そう、自分で言ったのではないか。
「そうじゃったな……」
　ジェイドの言葉を理解し、ようやく肩の力を抜いたイリス。ゆっくりとジェイドの手が離れると、力なく振り返る。心配する周りの兵士達に向かって、イリスは精一杯の笑顔を浮かべた。

「妾のわがままによぉ付きおうてくれた。礼を言うぞお主達。疲れている所悪いが、もう一つ命令を聞いてくれ。眼下の海に投げ出されている同盟国エルバーフェルドの兵士達を救助せよ。救出が終了次第――艦隊は当海域を離脱するのじゃ」

可憐な笑顔を浮かべる少女の頬を、一筋の涙が流れた事を指摘する者は誰もいなかった。皆無言で敬礼で応え、すぐさま救出準備を開始する。

泣きながら、涙で歪む視界で必死に遠くに見えるイージス村を見詰めるイリス。あと少し、あと少しなのに、これ以上彼に近づく事ができない。結局、自分は何もできなかった。

悔しげに、声を殺して泣き崩れる幼き少女王。誰も、その震える小さな背中を抱き締められる者はここにはいなかった。それができる彼は――あの近くても遠い村に居るのだから。

「鋼龍、村の方角へと移動して行きます」

見張り兵の報告を受けるまでもなく、鋼龍クシャルダオラは追いつけない速度でイージス村の方へと去って行く。その姿を、カレンはただ見詰める事しかできなかった。

大破した大洋艦隊旗艦、戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』の周りには、カール率いる集成水雷戦隊が輪形陣を形成するように展開している。そのいずれの砲も、現在は沈黙している。

クシャルダオラが去った事でカールはすぐに水雷戦隊の各駆逐艦に当海域にて漂流している損傷艦の救援を命じた。火災が発生している艦の鎮火や海に投げ出された兵士の救出など、これからやる事は数多い。

更に上空に展開しているアルトリア王政軍国の空中艦隊も高度を下げ、救命用のボートを投下して救助に助力してくれている。小回りの効く飛行駆逐艦等は限界まで高度を下げて実際にロープなどを使って救助作業を開始した。

カレンは全ての指揮をエーリックに任せ、一人長官室へと入った。激しい戦闘で艦が揺れた事を物語るように、きれいに整理整頓されていたはずの部屋の中はずいぶんと荒れていた。だが、そんな事を気に

する余力は、すでに彼女にはなかった。
「結局、私は奴を倒し切れなかった……あいつを、守れなかった」
ベッドに腰掛け、顔を手で押さえながら、少女提督はさめざめと泣く。濡れる頬を拭い取る事も、震える肩に手を乗せて励ましてくれる人も、ここにはいない。
あの優しかった笑顔を守りたかった。なのに、自分は結局その笑顔を壊す厄災を倒し切れなかった。奴はすでにイージス村の方へと移動した。本来なら追撃命令を下す所だが、すでに大洋艦隊の艦艇はいずれの艦も大なり小なり損傷している。戦闘不能に陥っている艦も多く、中には航行不能にまで陥っている艦もある。大陸最強と謳われるエルバーフェルド国防海軍が誇る精鋭艦隊、大洋艦隊。その威厳も誇りも、たった一体の古龍相手に粉々に壊されてしまった。
しばらくは主力艦抜きで国防を担わなければならない。祖国に戻っても、気が休まる暇はないだろう。だが、今はそんな事どうでも良かった。泣き崩れる少女の頭には、彼の事しかなかった。
「ごめんなさいクリュウ。ごめんなさい……ッ」
誰も彼女を責めたりしない。責める者が居るとすれば、自分自身。もっと自分に力があれば、あんな蛮龍に遅れを取る事はなかった。あの時ああ指示すれば、あの時もっと早く動ければ、そんな後知恵での後悔ばかりが、少女を苦しめる。
激しく後悔しながら泣き崩れるカレン。そんな彼女の部屋の外で様子を見に来たエーリックが無言のまま立ち去った事を、彼女は知らない。
アルトリア王立空軍の女王艦隊及びエルバーフェルド帝国国防海軍の大洋艦隊の戦闘は終了した。二国艦隊の全艦が一斉に海に投げ出されたエルバーフェルド兵の救出を開始する。海に投げ出された兵士達一人ひとりを、見逃す事なく救助していく作業は、それから数時間続く事となる。
こうして歴史上初、艦隊による古龍迎撃戦となったアルフレア沖海戦は幕を閉じたのである。二人の少女の涙だけを残して……

第２２６話　彼を助ける為に　名も無き平野に集いし者達の戦い

アルフレア沖の海上にてエルバーフェルド帝国国防海軍が鋼龍クシャルダオラと死闘を繰り広げている頃、アルフレアより南方に広がる名もない平野でもまた、一つの激闘が繰り広げられていた。

「どりゃっしゃあああああぁぁぁぁぁッ！」

勇ましい咆哮と共に突撃するシャルル。構えたバインドキューブを勢い良く振り殴ると、前方から迫っていたイーオス二匹が一斉に吹き飛んだ。その後方に控えていた他のイーオス達を巻き込んで倒れたが、あと一撃が足りずに二匹共起き上がってしまう。仕留め切れなかった事に舌打ちし、シャルルは腰を落として再び突撃の構えを取る。そんな彼女の後方から次々に矢が放たれた。上空へと至った矢は重力に従って一気に下り落ちる。鉄の鏃は次々にイーオスの群れを襲うが、いくら撃っても無数に襲い掛かる敵の前ではそれは焼け石に水に等しかった。

もう何発の矢を撃ったかわからない。腕が疲労で痺れ、ルフィールは悔しげに舌打ちする。それ以前に彼女達は鋼龍クシャルダオラと激戦を繰り広げていた。休憩を挟んでいたとはいえ、疲労が完全に消えていた訳ではない。万全の状態ではないまま、この絶望的な戦いを繰り広げていた。

少し離れた場所ではエリーゼが勇ましく単騎でイーオスの群れを蹴散らしていた。しかし動きの鈍いガンランスでは俊敏なイーオスをなかなか削り切れない。それを援護するようにレンが攻撃しているが、すでにその銃弾も尽きかけている。

状況は明らかにこちらが劣勢だ。そんなのバカなシャルルでもわかっていた。こんな戦い、普通なら逃げ出すような戦い。だが、自分達は決して逃げる事はできない――否、逃げないのだ。

自分達で結んだ最終防衛ライン。これを超えられれば、その背後には多くの一般人が震えながらこの光景を見詰めている。決して、そこ

へ敵を進ませてはならない――彼との約束を果たす為にも。
イージス村第二次避難隊。それが彼らの隊名だった。それは鋼龍クシャルダオラに襲われ、命からがら逃げてきた村人や周辺から避難して来た、主に女性や子供が中心の総勢一〇〇名程の避難隊。それらを護衛するのがエリーゼ・フォートレス率いる、ルフィール・ケーニッヒ、シャルル・ルクレール、レン・リフレインの護衛隊だった。
第二次避難隊は早朝、まだ夜も明けきらぬうちに村を脱出。森の中を隠れるように進みながら、昼過ぎにこの平野へと至った。隠れる所がない平野は正直迂回したかったが、こちらは体力のない者達ばかりで編成された避難隊。遠回りをして距離を歩くような事はできず、更にこちらに向かっているレヴェリからの馬車隊と合流する為にも、平野を突っ切るコースを選んだ。
竜車と、それらを取り囲むように避難人達、そしてそれらを護衛するように四人が展開しながら進み出した避難隊。だが、平野の中程まで至った時――それは現れた。
突如鳴き声と共に上空からガブラスの群れが突っ込んで来た。急降下しながら次々に毒液を吐き、避難隊を襲撃。この奇襲で村人の数名が毒を負ったが、幸いリリアがすぐに解毒薬を投与して大事には至らなかった。
突然の上空からの奇襲攻撃。それも三〇匹近いガブラスの群れによる集団攻撃。すぐにシャルル達は迎撃するも、空から襲い掛かる敵に苦戦。レンとルフィールのガンナー二人が撃ち落とし、そこへエリーゼとシャルルが仕留める形で数を減らしたが、まるでそれを補うかのように四方から次々にガブラスが集まり、あっという間に五〇匹近くにまで膨れ上がった。
焦るシャルル達を更に追い詰めたのは、地平線の向こうが真っ赤に染まった光景を見た時だ。それは地平線を埋め尽くす程のイーオスの群れだった。数は一〇〇……いや三〇〇匹近い。中にはドスイーオスの姿が複数確認でき、それがドスイーオス率いるイーオスの群れが複数連合を組んだ大群だと理解するのにそう時間はかからなかった。

この時点で、護衛隊隊長のエリーゼはすぐに全力撤退を指示したが、まるでそれを阻むようにガブラスが上空から毒液で空爆を開始。迎撃に必死だったエリーゼ達はまるで誘導されたかのように近くを流れる川の川岸に追い込まれた。仕方なくエリーゼは避難隊を一ヶ所に集中させ、その周りを四人で囲むように防衛線を展開。避難人達もルフィールの指示に従って事前に用意していた簡易の竜防柵をエリーゼ達の防衛線の更に後方に展開。イーオスの侵入を阻むように壁を築いた。子供は竜車の中に入れ、女性達は傘をもってガブラスの毒液爆撃に備えた。

わずかな間に最大限の防衛策を整えた第二次避難隊。そこへイーオスの大群が襲いかかった。

四人の奮闘は凄まじいものだったが、焼け石に水的な圧倒的劣勢を覆せるものではなかった。もはや押し切られる、そう誰もが覚悟した時だった。

「くそッ！　抜けられたッ！　アリアッ！」

焦ったように叫ぶシグマの声に彼女より後ろで戦っていたアリアがすぐに動いた。竜防柵へと突っ込もうとするイーオスへ横から太刀で一突きし、吹き飛ばす。倒れたイーオスの喉を斬り息絶えさせると、シグマに向かって親指を立てる。それを見てシグマはニッと歯を見せて微笑むと、再びイーオスの群れに突っ込んだ。そんな彼女を援護するようにフェニスの放つ矢が彼女の背後から襲いかかろうとするイーオスを牽制する。

そう、絶望的状況の中突如イーオスの群れに横から突撃する三人の姫は現れた。それは女王艦隊から離脱して騎士隊の馬に乗ってイージス村を目指していたアリア・ヴィクトリア、シグマ・デアフリンガー、フェニス・レキシントンの三人だった。三人はすぐに背水の陣で死闘を繰り広げていた四人と合流。レンを除いて知り合い六人は最初こそ互いがなぜこんな所に居るのか戸惑ったものの、話は後にしてともかく避難隊の護衛の為に三人は防衛線に参加。総勢七人のハンターによる迎撃戦が開始された。

「しかし、改めてなぜあなた方がここに居るのか不思議ですわね」

「それはボクも同じです。なぜあなた方がここに居るのです？」
　互いに背中を預け合うのは、学生時代にクラス別対抗で競い合ったB組委員長のアリアと、F組所属だったルフィールの二人。状況はしゃべっている暇などはないが、こうでもしていないとあまりの絶望的展開っぷりに心が折れてしまいそうだった。
「私はクリュウの故郷の村が鋼龍クシャルダオラに襲われたと知り、救援にここまで駆けつけたのですわ。そしたら、平野でイーオスとガブラスの大群に襲われているあなた達を見つけたのです」
「ボク達も先輩の救援に向かい、一度は先輩と共闘して鋼龍クシャルダオラと戦いました」
「ウソッ!?　あんた、またそんな無茶をして……クリュウは無事でしたの？」
「先輩は無事でした。しかし、戦いの中でシャルルさんが負傷し、ボクも限界に達してしまい、先輩の指示で撤退しました。そこへボク達二人と入れ替わるようにエリーゼさんとレンが先輩の救援に駆けつけたそうです」
「……何ですのそれは。同窓会でもおっぱじめようって腹積もり？」
「エリーゼさんに同様の事を言ったら、笑えないと言われてしまいました」
「それで？」
「先輩を含めてエリーゼさんとレンも一度は撤退するも、先輩の指示でボク達は避難隊の護衛として村を出ました。その途中、このような状況に……」
「……って事は、クリュウは？」
「――まだ、村に残って鋼龍クシャルダオラと戦っているはずです」
　悔しげに唇を噛むルフィールの姿と言葉に、アリアは呆然となる。まさか、本当にまだ彼は鋼龍クシャルダオラと戦っているなんて。厄災とも称される古龍と、彼は戦っているのだ。
「なら、すぐに救援に――ッ!?」
　会話を遮るように、上空からガブラス二匹が一斉に毒液を吐いて来た。回避する二人に、今度は周りを取り囲んでいたイーオスが一斉に

襲い掛かる。
「この状況で、どうやって救援に行けるって言うんですかッ！」
　迫るイーオスに対し、ルフィールは矢を二本引き抜くと両手に構え、双剣のようにしてイーオスを迎え撃つ。右の矢で首を挿し、左の矢で目を射抜き、悲鳴を上げるイーオスの口に蹴りを入れ、倒れたと同時に更に三本目の矢を喉に突き立て息絶えさせる。だがイーオスの数は無数だ。それこそ焼け石に水。
　迫るイーオス二匹に太刀を翻すように一閃させ、撃破。しかし後方から更に三匹のイーオスが押し切ろうと迫る。腰に下げた小タル爆弾を投げて爆破し、動きを牽制すると同時に突きの一撃で一匹を倒し、一度バックステップで距離を取るアリア。
「でも、クリュウが……ッ！」
「先輩は一人じゃありませんッ！　ボク達なんかよりもずっと強い、強気で可愛らしい女の子と一緒に戦っていますッ！」
「それはそれで安心できませんわッ！」
　迫る別のイーオスを撃破しながら叫ぶアリアの絶叫に、ルフィールは苦笑を浮かべながら「それもそうですね」とつぶやく。
　再び背中を合わせる二人。わずかな間に数匹のイーオスを蹴散らした二人だが、彼女達を取り囲む群れの数はその一〇〇倍と言って過言ではない。
「まずこの絶望的且つ一方的な蹂躙と言っても過言ではない負戦を、どのような奇跡とも言うべき天文学的数値な確率で起きるであろう、小説の中だけにあるようなご都合主義的展開を駆使して乗り切るか。先輩の救援はその先です」
「……そこまで悲観的な言葉を並べられると、いよいよ心が折れそうですわ」
「事実は小説よりも奇なり。否、現実は小説の中以上に絶望的展開です」
　ルフィールの言葉に、アリアも引きつった笑みを浮かべるしかない。相手は更に数を増やしたイーオスが五〇〇匹近くに加えドスイーオスが複数。更に上空からはガブラス五〇匹程度が常に攻撃を

してくる。対してこちらの防衛線力はルーク、ビショップクラス程度のハンターが総勢七名。どう考えても圧倒的劣勢なのはこちらだ。
一方、同じく背を預け合うシグマとシャルル。元Ｆクラスの中でもずば抜けて体育会系且つ脳筋タイプの二人。常に前向きで絶望的な状況も笑い飛ばす二人だが、さすがに今回の状況には笑う余裕などない。
「おいおい、これって報酬出るのかよ？」
「勝手に参加しておいて何言ってるっすか。それに、元々これは無報酬っすよ」
「ケッ、割に合わない仕事だなぁ」
「仕事じゃないっす――兄者との約束の為っすよ」
「そうか……って、話し中に鬱陶しいぞゴラァッ！」
迫るイーオスを自慢の大剣で蹴散らすシグマ。その背後ではシャルルも同じくバインドキューブを振り回してイーオスを吹き飛ばす。力自慢の二人の叩かいは壮絶で豪快で、絶望的な状況であってもそれはすごく輝いて見えて、思わず心が折れそうになる皆を自然と鼓舞していた。
「あの二人、すごく素敵ですね」
「ただの脳筋バカコンビでしょうが。汗臭いったらありゃしない」
二人の姿を目を輝かせて見るレンの言葉に、背を預けているエリーゼは呆れながら返す。そのどちらもこれまでの激戦ですっかり防具を汚しており、疲労も相当なものとなっていた。それでも、二人の目はまだ死んではいない。絶望的な状況なのに変わりはないが――二人なら乗り越えられると信じているから。
「こんなの、リオレイアに追い掛け回された時に比べれば全然マシよ」
「そうですね。それに今回はエリーゼさんとずっと一緒ですッ」
「う、うっさいわね。とにかく、私の足だけは引っ張んじゃないわよ」
「はいッ！」
絶望的な戦いの中でも、決して希望を捨てない狩人の娘達。最年長のフェニスはそんな彼女達の姿を見て、改めて自分の学生時代の面々は素敵な人達ばかりだと思った。毎日が楽しくて、退屈せず、ワクワ

クとドキドキに溢れていた学生時代。なぜだろう、こんなにも不利な戦いの中なのにあの頃感じていたような高揚感が、胸の奥に渦巻く。まるで、昔の続きをしているかのような、そんな不思議な感覚だ。
「……たった一人の男の子の為に、こんなに可愛いらしい女の子達が集まる。フフフ、クリュウ君、相変わらずモテモテね」
　微笑みながらフェニスは一斉に矢を放った。それらは上空からシグマを狙っていたガブラス二匹を牽制する。
　たった七人のハンター達は、この絶望的な状況の中でも実に善戦していた。数の上では今こうして生きているだけでも奇跡に等しい程の状況なのに、七人はいずれも致命傷を負わず、今もこうして戦い続けている。だが、そんな奇跡が長続きするはずもなく、次第に状況は更に悪化。防衛線も少しずつ下がっていき、いよいよ本当にこれ以上下がれない程に追い詰められた。
「くそぉ、護衛対象がいる中じゃ特攻だってできやしねぇ」
　悔しげにつぶやくシグマの背後のすぐには竜防柵。その向こうには守るべき避難民がこちらを祈るような目で見詰めていた。振り返ると、竜車の中から怯えながら見詰めて来る子供達と目が合う。シグマは安心しろとばかりに笑って応えるが、再び前を向く時にはその顔は悲痛に歪んでいた。
「俺達がやられれば、あのガキ達も奴らに殺されるってか……クソッ、胸糞悪いぜ」
「でも、正直もうこれ以上は無理ですわ」
　そう言って振り返るアリアの視線の先では、弾薬が切れてもはや何もできなくなったレンが身を震わせていた。そんな彼女を背に隠しながら戦うエリーゼの表情は必死だ。妹を守る為、死に物狂いで襲い掛かるイーオスを蹴散らしているが、それももう限界だろう。
　ルフィールとフェニスも矢の数も残り僅かだ。更にこれまで激闘を繰り広げていたシャルルもクシャルダオラ戦で負った怪我が悪化して動きが鈍くなっていた。
　こちらのコンディションは最悪。対して向こうはまるで数が減っていないかのように蠢きながら少しずつ包囲網を狭めている。あと

数分、保つかどうか……
「もういいッ！　もういいわよッ！　何なのよあんた達、なんで、見ず知らずの私達の為にそこまで……ッ！」
　竜防柵の向こうから泣き叫ぶエレナの声に、ルフィールはゆっくり振り返った。いつの間にか、避難民達の目は助けを求めるものから、この状況を諦めたかのように生気を失ったものに変わっていた。もはや、自分達が助からない事は火を見るより明らかだった。
　そんな状況の中でも諦めず、必死になって負戦を戦う七人の姿に、エレナは居ても立ってもいられなかった。
「あんた達は村で生まれ育った訳じゃないッ！　私達とだって、そんなに親しくないのに……なんでそんな私達の為にそこまで戦ってくれるのよッ！」
　傷つきながらも、必死に自分達を守る為に戦う七人の姿に、エレナはもうただ見ている事はできなくなっていた。もうこれ以上、見ず知らずの自分達の為に傷ついてほしくない。エレナの、必死の願いだった。
　――だが、
「何を言ってるっすか。誰かを助けるのに理由なんてないっすよ」
　そう言って立ち上がったのはシャルル。負傷した腕を庇い、痛みに耐えながら、それでも笑みを崩さない。やんちゃにツインテールを揺らしながら、気合と根性で一歩前に出る。
「それに、シャルは約束したっす――お前らを、絶対に守り切るって。だから、守るっすよ」
「でも、もう……ッ！」
「……お前、兄者と一体何年幼なじみをやってたっすか？」
「え……」
　シャルルの言葉の意味がわからず、困惑するエレナ。そんな彼女に向かってゆっくりと振り返ったシャルルは、なぜか満面の笑みを浮かべながら、同じく困惑する他の面々の視線を一身に受けながら、高らかに宣言した。
「――シャルが惚れた兄者は、本当にみんなから好かれてたんすよ？」

刹那、どこからともなく鬨の声が響き渡った。無数の人々の雄叫びに今まさにとどめを刺そうとばかりに展開していたイーオスとガブラスの群れ、更にはルフィール達やエレナ達避難民も戸惑う。そんな中、シャルルだけは笑みを崩す事はなかった。

「……ほんと、兄者は人気者っすねぇ」

雄叫びを上げながら、平野を二〇人の若い狩人達が突撃する。その手には全員巨大なランスが構えられ、土煙を上げながらイーオスの群れに突っ込んだ。猛烈な勢いでのランスによる突撃。それも見事な単横陣にての一糸乱れぬ広範囲突撃。イーオスは次々に吹き飛ばされていく。

突然の奇襲攻撃に慌てふためくイーオス達。更にランス隊の後方からは今度は総勢三〇名にも及ぶ片手剣や双剣、太刀を持った同じく若い狩人達が雄叫びを上げながら突撃して来た。機動力に特化したこれらの狩人達は混乱するイーオスの群れに突っ込むと、指揮系統を寸断されて混乱するイーオス達を次々に撃破していった。

前方のイーオス達がやられている間に、その後方に控えていたイーオス達と上空にて傍観していたガブラスが反撃とばかりに態勢を整える。だがそこへ次々に銃弾と矢が降り注いだ。

片手剣や双剣、太刀を装備した機動隊の後方から今度はライトボウガンやヘヴィボウガン、矢を構えたガンナー隊が支援攻撃を開始。その数は二〇名程だ。それらから放たれる銃弾や矢はすさまじく、上空に展開していたガブラスは次々に撃墜され、イーオス達も遠方からの攻撃動きを封じられる。

そして、ガンナー隊の前に展開していた主力部隊。大剣やハンマー、狩猟笛にガンランスといった重武装の武器を構えた三〇名程のハンター達が更にイーオスの群れに突っ込んだ。

総勢一〇〇名にも及ぶ大ハンター部隊。これにはイーオス達も大混乱に陥り、その間に次々に撃破されていった。

突如現れたハンターの大部隊に、これまで死闘を繰り広げていた七人のハンター達は呆然とする。あれだけかっこ良く構えていたシャルルも、まさか本当に奇跡が思っていた訳ではない。いつもの根拠の

ない自信からの虚言だったが、まさか本当になるとは……
　そんな中、誰よりも早く平静を取り戻したエリーゼがある事に気づいた。
「ねぇ、あの連中の装備って全員ハンターシリーズじゃない？」
　よく見れば、今イーオス達と戦っているのは全員ハンターシリーズというハンターが最初の頃に装備する初心者用の防具だった。武器も全ての武器の一番最初の物ばかり。軍隊という統率された組織のないハンター達は基本的に皆バラバラだ。それがあんなにも装備を統一し、且つあれだけの規模のハンター達が見事な連携で戦いを繰り広げている。
「どうなってんだあれ……」
「まるで軍隊みたいですわね」
　呆然とするシグマとアリアの言葉に「何を驚く事があるのですか」と無表情のままルフィールが答える。振り返る二人に向かって、ルフィールは口元にわずかな笑みを浮かべながら続ける。
「ボク達も、少し前まではあのように皆同じ装備で、見事な組織的行動を取っていたではありませんか」
「それって……」
「まさか……」
「――あぁ、そのまさかだよ」
　突然の声に驚き、その場にいた全員が声の主の方へと振り返った。そこに立っていたのは全身をカブレライト鉱石やドラグライト鉱石等の鉱石を主体に、所々に火竜の鱗やドスファンゴの毛皮などで強度を高めつつ軽量化を図った機動型の防具、ハンターＳシリーズを纏った少女。少女というには少し大人びた彼女はハンターＳヘルムと呼ばれる額当ての下で不敵に微笑む。そんな彼女を見て、その場に居たレンやエレナを除いた者全員が驚く。なぜなら、そこに立っていたのは……
「か、会長……ッ!?」
「ふふふ、エリーゼ。まさか君までこんな所に居るとはな。驚くくらい懐かしい顔ぶれが揃っているわね」

　まるでアクラの沖合の海上に浮かぶ氷河のように透き通った青白い美しい髪を優雅に風に靡かせ、鋭くもどこか優しげな蒼色の瞳を持ったその少女の名は――クリスティナ・エセックス。ドンドルマハンター養成訓練学校史上最強と謳われた伝説の生徒会長を務めていた、クリュウやアリア達とは同期で卒業した、クリスティナだった。
「クリスティナッ!?　何でテメェがこんな所に居るんだよッ！」
「シグマ、君は相変わらず口が悪いな。驚く事ではないさ、すでにドンドルマの方でもアルフレア地域に鋼龍クシャルダオラが出現した事は知れている」
「まぁ、あそこはハンターズギルドの総本山ですから、そういった類の情報に敏感なのは納得できますわね」
「それがルナリーフの故郷が現場だと知ってな、何かできる事はないかと生徒達を連れて救援に来たんだ」
　そう言ってクリスティナが指差した背後では、今まさにドンドルマハンター養成訓練学校の生徒達がイーオス・ガブラス連合軍に対し怒涛の総攻撃を仕掛けている所だった。よく見れば見知った面々もチラホラと見える。そう、この場に駆けつけたハンターの集団は彼女達の母校、ドンドルマハンター養成訓練学校の後輩達だったのだ。
「後輩達が駆けつけて来たという事だけでも異常っすけど、それを何で会長が率いてるんすか？」
「シャルル、私はもう会長ではない。まぁ、強いて言うなら今の私は《教官》と呼ばれる方が正しいな」
「は？　教官っすか？　それって……」
「あぁ、私は今母校で生徒達を教える立場――教官を務めているのだよ」
　突如明かされた彼女の現状発言に、その場に居た面々が一様に驚きを見せる。シグマに至っては「お、お前教官志望だったのかよッ!?」と大声で驚き、隣に居たフェニスが苦笑しながら耳を塞いでいる。
「あぁ、入校時は通常にハンターを目指していたが、教える立場というのも面白みを感じてな。まぁまだ正確には教官実習生だがな」
「あなたが教官になっていた事も驚きですけど、救援部隊の総司令官

もあなたが率いているんですの？　こういう事はそれこそビスマルク教官の方が適任ではなくて？」
「あぁ、旦那はこの事件でハンターズギルドの方に呼ばれて、そこでオブザーバーとして会議に――」
「ちょッ!?　ちょっと待てぇッ！　旦那って何だ旦那ってッ！」
　さらにと語られた衝撃の単語にすかさずシグマが反応した。激しい反応を見せたのは彼女だったが、その場に居たほとんどの面々があまりの衝撃に言葉を失っていたのだ。
　無自覚だったのだろう、ポロッと自ら出してしまった事実にしまったとばかりに顔をしかめる。誤魔化そうとも考えたが、すでに全員の視線が自らに集中している事はどうしようもなく、諦めたようにため息を零す。そして――
「あぁ、まぁその何だ。改めて名乗ろうか。私はドンドルマハンター養成訓練学校指導教官実習生、クリスティナ・ビスマルクだ。所謂人妻という奴だ。どうだ？　淫靡な響きだろう？」
　頬を赤らめながら、どこか嬉しそうに新たな名を語った――クリスティナ・ビスマルク。側近として彼女の傍にずっと居たはずのエリーゼですら彼女のそんな表情など見た事がなかったのだろう。幸せに満ちたクリスティナの笑顔を見て、驚きのあまり硬直してしまっている。
「……先輩、本当にビスマルク教官と結婚したのですか？」
　平静を装っているが、他の面々同様内心は穏やかではないルフィールの問いかけに、クリスティナは「まぁ、今では私もビスマルク教官なのだが……卒業後しばらくしてから付き合いを始めて、昨年末に挙式した」
「マジでか？　あの脳筋教官をどうやって落としたんだよ？」
「シグマ、君も相当な脳筋娘だと忘れてはいないか？　まぁ、最初は相手にしてもらえなかったが、真摯に想いを伝え続けた結果だと、私は考えている」
「その、こんな大変な状況だけど……おめでとうですわ」
「あぁ、ありがとう。まぁ、この話はこれくらいでいいだろう――それ

より、状況が変わった」
　そう言ってそれまでどこか浮かれた様子だったクリスティナの表情が変わる。それに反応して彼女の視線を追って振り返った面々は、その言葉の意味を悟った。
「ヤバイっすね。親玉の野郎が出て来やがったっす」
　シャルルの言う通り、蹴散らされる部下の失態に苛立ったのだろう。無数のイーオス達を束ねる大きなトサカとイーオスよりも二回り以上も大きな体を持ったイーオスのボス、ドスイーオスが五匹がイーオスの群れを割って前面に出て来た。それまで連携してイーオスを蹴散らしていた生徒達だったが、ドスイーオス相手に大苦戦。それまでの攻勢がウソのように防戦に転じていた。
「ドスイーオスですか、在校生には少々厳しいですね」
「そうだな」
　ルフィールの言葉にうなずくと、クリスティナは腰に下げていた打ち上げタル爆弾を足元に設置して着火。通常の打ち上げタル爆弾とは違い、煙に青の着色を施した打ち上げタル爆弾が上がると、機動隊が少しずつ後退を始めた。
「態勢を立て直す。支援隊隊長のレナと副長のシアに機動隊の撤退の援護をするよう命じて。機動隊隊長のエルは二人の部隊の支援を受けながら主力部隊のシルトと合流。竜防柵の前面に大規模防衛線を展開。ひとまず、一般人の護衛に全力を挙げるよう命令しなさい」
　背後にいつの間にか現れた生徒に命令を下すクリスティナ。その命令の中に出て来た名前、その全てが実に懐かしいものばかりだった。
「え、エルが隊長？　柄じゃねぇだろオイ」
「ユンカース姉妹。性格に少々難はありますが、腕は確かですね」
「あなたが性格についてとやかく言えますの？」
　良く見れば、各隊の中に見知った顔がチラホラ見える。その中でも各隊の隊長はルフィール達が在校時代によく交流していた面々だ。卒業して二年と経っていないはずなのに、何だかすごく懐かしい。だが時を感じさせるように皆顔立ちもずいぶん大人びて見える。十代

の二年は、それほどまでに若者を成長させるのだ。
「……」
シグマはエルの、フェニスはシルトの成長した姿を薄っすらと頬を赤らめながら見詰めている。そんな二人は今はそっとしておくとして、クリスティナは総司令官として部隊に合流。ルフィール達も部隊に合流し、ハンターの大部隊ＶＳモンスターの大群という構図に形を変えて、第二次避難隊の防衛戦が展開される事となった。
総司令官のクリスティナの陣頭指揮の下、学徒隊は善戦する。しかしドスイーオスが五匹前面に出た事で防衛線の瓦解し始め、更に追い打ちをかけるようにドスイーオスを援護するようにイーオスが、上空からはガブラスが連携して攻撃を開始。数の上で勝るモンスターの大群の方が優勢となり始めてしまう。
「これだけのハンターが合同で戦うなんて、古龍迎撃戦級ね」
「でも、それだけ異常事態なんですよね」
生徒会会長を務めた事もあるエリーゼはすぐに顔なじみの後輩達と合流し、それらを束ねてうまく防衛戦を展開していた。その隣には輜重部隊から給弾した弾丸で戦闘継続が可能となったレンも攻撃に加わっている。
「おらエルッ！　左翼隊が崩れかけてるぞッ！　右翼隊は俺に任せて、お前は部下を助けに行けッ！」
「は、はいッ！」
機動隊隊長のはずのエル・アラメイン。恋人であるシグマとの久しぶりの再会を喜ぶ暇もなく戦いに身を投じている。しかし残念ながら隊長という肩書のはずなのに、すっかりシグマの部下となって戦ってしまっている。エルが指揮というのが苦手なのもあるだろうが、やはりシグマのカリスマ性の成せる業なのだろう。
「支援隊に合流しなくていいのか？」
「あら、私は大切な未来の旦那様を守っているだけよ？」
「……ッ!?　恥ずかしい事言うなよな」
「うふふふ」
シルト・ランドルフと合流したフェニスは彼の護衛として矢を補充

して参加。厳しい戦いの中だというのに、不思議と幸せな気分に満ちてしまう。ただ周りの学生達が二人の甘い雰囲気に居心地の悪さを感じていたりいなかったり。
「私の背中、あなた達に任せましたわよ」
「「はいッ！」」
そう言って突撃するアリアを援護するのはユンカース姉妹ことレナ・ユンカースとシア・ユンカースの二人。それぞれライトボウガン、ヘヴィボウガンを構え、自慢の腕を披露してイーオスの群れの中を翔けるアリアを援護する。彼女を横から襲おうとしたり針路を塞ごうとするイーオスや上空から狙いを定めるガブラスを次々に撃ち抜いて行く。
生徒達の奮闘は凄まじいものだったが、次第に防衛線が後退し始めてしまう。やはりドスイーオス五匹の存在が大きく、在校生ではこの攻撃を止める事ができない。その為卒業生が手分けしてこれの相手をするが、そうするとイーオスの防衛の戦力が削られてしまう。限られた戦力では、これだけ広大且つ難易度の高い防衛戦は難しかった。
クリスティナの表情にもいよいよ余裕が消え始め、生徒達の顔にも疲労が見え始める。
ルフィールとタッグを組んで一体のドスイーオスと激闘を繰り広げるシャルルも、ついに膝を折ってしまう。
「もう、もう力入んないっすよ……ッ」
「自慢の気合はどうされたんですかッ!?」
「んなもん、もう燃料切れっすよ」
さすがのルフィールも鋼龍クシャルダオラとの戦い、圧倒的劣勢の中の防衛戦、そしてその延長の大規模戦闘。三連続戦に疲労困憊だった。それでも何とか矢を放つが、いつもの勢いもキレもない。
「このままじゃ、ヤバイですよ会長ッ」
「あなたも私の後任で会長を務めてたでしょ。でも、さすがにキツイな」
クリスティナと合流したエリーゼも疲労で倒れる寸前だった。全体の士気も下がり続け、生徒の中には一部この状況に脱走した者も居

る。有志を募ったとはいえ、逃げ出すのも当然だろう。クリスティナとしてはここまで戦ってくれただけで感謝している為、別に逃げた者を責めるつもりはない。だが、確実な戦力低下には違いない。
「何とか、退路を確保しないと……ッ」
レンの言う通り、このままではいずれ撃破されるのはこちらだ。何とかそれまでに退路を確保しなければならないが、現状それすらも難しかった。
次第に各隊の距離は詰まり、お互いの顔が良く見える程にまで縮小してしまっている。皆、総大将であるクリスティナに奇跡の指示を仰ぐが、さすがのクリスティナも為す術がない。
ドスイーオス五匹を前面に最後の仕上げとばかりに総攻撃を仕掛けようと構えるイーオス達。生徒達もまた覚悟を決め徹底抗戦の構えを取ったその時――突如、イーオスの群れの真ん中で爆発が起きた。
一発の爆発は、更に続けて数発の爆発へと続いて行く。次々に起きる爆発にイーオス達は吹き飛ばされていく。
イーオスやドスイーオス、上空を飛ぶガブラスも突然の爆発に狼狽するばかり。しかしそれは生徒達も同じだった。何が起きたかわからず、皆戦闘の構えすらもやめて呆然と立ち尽くす。
「な、何が起きているんだ？」
困惑するクリスティナの問いかけに答えられる者はいなかった。だがその中でルフィールだけは素早く状況を判断していた。
「北方からの砲撃ですね。11時の方向、何か来ます」
言われた通りの方向を見ると、平野の向こうで砲撃の際に生じるマズルフラッシュが迸る。さらに続けて無数の人々が雄叫びを上げながら見事な隊列を組んで突撃して来る。そしてそのまま混乱するイーオスの群れに奇襲攻撃。激しい乱戦となった。
突如突撃して来たのは全身を黒尽くめの軍服に簡単な鎧を纏った者達。皆手にはハンターの装備している武器に良く似た武器を備えている。ハンターに負けず劣らずな動きを見せる彼らだが、何より一番驚くべき事は見事な連携だった。四人一隊（フォーマンセル）の小

隊を複数束ねた中隊、それらを複数束ねた大隊と、見事に統率されて戦闘を繰り広げている。これはハンターとは大きな違いだった。
　そして、誰かが気づいた。
「おい、あの旗ってエルバーフェルドの国旗だよな？」
　その声の主の言う通り、隊列の中には旗を掲げる者が居る。その掲げられた旗こそ、鉄十字（アイアンクロス）と呼ばれるエルバーフェルド帝国の国旗だった。つまり彼らはエルバーフェルド国防軍の兵士だった。
「エルバーフェルドの兵隊さんが、何で俺達を助けてくれるんだよ？」
　シグマの疑問は皆の疑問だった。状況がわからず困惑する生徒達。そこへ、兵隊の中から驚くべき見知った人物が現れた。
「おぉ、無事だったかクリス」
「ふ、フリード……ッ」
　体格の言い軍人達の中でも、更に一回りくらいの巨躯の男がクリスティナに駆け寄って来た。その人物の登場にクリスティナはもちろん、周りに居た生徒達からも歓声が上がる。そしてルフィール達も、その男の登場に驚愕した。
「び、ビスマルク教官ッ！」
「おぉ？　デアフリンガーか。それにヴィクトリアにレキシントン。フォートレスにケーニッヒ、ルクレールまで。何だ何だ、懐かしい顔ぶれだなぁッ」
　卒業した自分達の名前と顔をしっかり覚えていてくれた。それだけで、ルフィール達の表情が緩む。学生時代は鬼教官として恐れ、でも慕っていた彼女達の恩師。そして今ではクリスティナの夫となった――フリード・ビスマルクだった。
「ビスマルク教官ッ！　何でこんな所に居るっすかッ!?」
「それはこっちのセリフだ。お前らが何で……っと、その前に」
　驚くシャルルの言葉に答えるのを一度辞めたフリードは改めてクリスティナに向き直る。自らの危機に駆けつけてくれた夫、その姿はまるで白馬の王子様に見えるのだろう。どことなく熱を帯びた視線を送るクリスティナ。だが、目の前にいるのは物語の中で美化された

王子様ではなく――
「バカ者ッ！　突然生徒達を招集して勝手に学校を飛び出して、何をやっているんだッ！」
　まるで火竜の咆哮（バインドブレス）のようなフリードの怒声が辺りに響き渡った。近くに居た者達は本当に咆哮（バインドブレス）を受けたかのように耳を塞いでしまっている。その中で、最も近く、且つ言葉を向けられたクリスティナは呆然としていた。ジワリと熱と痛みが広がる頬を手で押さえながら、何が起きたかわからず立ち尽くす。
「こんな危険な所に生徒達を連れて来て、貴様は教官失格だッ！」
　クリスティナに対し、激しく激昂するフリード。だが、それは当然と言えるだろう。本来ならば生徒を守るべき教官が、自ら生徒達を危険な地に率いたのだ。教官失格と言われても仕方がない行いだった。
　夫に怒られ、クリスティナは「す、すまなかった……」と顔をうつむかせる。余程堪えたのか、その肩は微かに震えていた。
　二人のやりとりに、シグマが間に入ろうと動く。確かにクリスティナの行いは教官としては失格だろう。だがそのおかげでこうして自分達、そして第二次避難隊の人々は現在まで持ちこたえる事ができたのだ。その功績を、決して見逃してほしくはなかったのだ。
「教官待ってくれッ！　こいつのおかげで俺達は――」
「――まったく、夫をあまり心配させるな。このバカ嫁が」
　それまでの険悪な表情から一転して破顔させたかと思うと、フリードは穏やかな笑みを浮かべながらそっとクリスティナの抱き締めた。巨大で無骨な腕で、大切に細い彼女の体を抱きとめる。彼の胸の中で、クリスティナは全身を包む彼の温もりに、目頭が熱くなった。
「ごめんなさい……ッ」
「お前の行いは教官としては失格だ。だがな、かつての友を助けに行こうとしての行動だ。俺はそういうのは嫌いじゃない。学校に戻ったら、俺もお前と一緒に罰を受けてやるさ。夫婦の共同作業って奴だ」
　恥ずかしそうに頬を赤らめながら語るフリードの言葉に、クリス

ティナは目元に涙を浮かべながらコクコクと頷いた。誰が見ても、仲の良い夫婦そのものだ。周りの生徒達からも、安堵の息が漏れる。彼らは全員クリスティナの単騎突撃に志願して集まった者達ばかりだ。罰を受ける覚悟も、クリスティナを庇う覚悟もできていた。だが、どうやらそれらは全て杞憂だったらしい。

「とまぁ、俺は飛び出したバカ嫁を連れ戻しに来たんだ。そしたらその途中にこれまた懐かしい顔に会ってな」

「懐かしい顔？」

「この子達が、君の教え子かい？」

巨漢のフリードの背後から現れたのは、他の兵士達と同じく軍服に簡単な鎧を纏った、少しくすんだ銀色の髪を短く刈り揃えた男だった。今まさにイーオス・ガブラス連合軍と戦っている兵士達と同じ出で立ちをしているが、その身のこなしや雰囲気は、他とは明らかに違う。一見するとフラッとしていて隙だらけのようだが、よく見れば逆に全く隙がない。こちらに視線を向けていても、しっかりと全体を把握している目。手に持つ無骨で巨大な剣も、まるで自分の手のように鮮やかに構えている。

そういった類の事には職業柄詳しいルフィール達は、すぐに気づいた――この男、只者ではない。

「この人、誰っすか？」

「あぁ、俺の幼なじみって奴で、昔は一緒にチームを組んでいた事もある。まぁ腐れ縁みたいなもんさ」

「初めまして、だね。私の名は――」

「ロンメルさん？」

名乗ろうとした男を制して声を掛けたのは、今まで輪の外にいたエレナだった。驚いたような表情を浮かべながら男を見詰める。男もまたエレナの方を見て目を丸くさせた。

「君は、確かレヴェリの娘さんと一緒に居た……」

「エレナ・フェルノです。お、お久しぶりです」

「驚いたね。まさか君がここに居るとは……他のみんなは？」

男の問いかけに、エレナは目を伏せた。それだけで男は全てを悟っ

たらしく、ただ短く「そうか……」とだけ呟いた。
「さて、ここに居る面々はほとんと初顔合わせだね。私の名はエルディン・ロンメル。フリードの言う通り昔はこいつとチームを組んでいた事もある元ハンターだ。今はエルバーフェルド帝国に雇われて対モンスター戦用の特殊部隊を率いている身だ。よろしくな」
　そう言って気軽に挨拶する男――エルディンに対し、ルフィール達も簡単に自己紹介する。ひと通りそれが終わった所で、スッと手を挙げる者がいた。
「はい、そこの素敵な目を持つ君」
「……皮肉ですか？」
「いや、俺は素直にそう思うけどね」
　おどけた調子で言うエルディンの言葉にルフィールは不機嫌そうに鼻を鳴らす。そんな彼女の様子を見ていたシグマがそっとフェニスに耳打ちする。
「あれ、クリュウが言ったらあいつ頬を赤らめるんだろ？」
「同じ言葉でも、言う人が違うと皮肉に聞こえたり素敵に聞こえたり。恋って不思議ね」
　そんな二人の会話をあえて無視し、ルフィールは言葉を続ける。
「エルディン・ロンメル、その名前聞いた事があります。十年程前まで活躍していた、古龍に匹敵する凶悪にして強敵な片角の魔王を単独で撃破した《砂漠の狼》と称される伝説のハンター。それがあなたですか？」
　ルフィールの問いかけに周りに居たアリア達は驚いてエルディンの方を見やる。エルディンもまた驚きの表情を浮かべるが、すぐにフリードと目を合わせ、どちらからとなく笑みを零す。
「まさか、俺の事をまだ覚えてる奴が居てくれるとはな。それも、君みたいな子供が」
「書物で得た知識ですが。現在は現役を退いて隠居していると思っていましたが、現役は退いても隠居はしていられないようですね」
「隠居って言うと年寄りくさいが、まぁ俺もゆっくり暮らすつもりだったんだが。まぁ、あの帝国の嬢ちゃんに目をつけられたのが運の

尽きって奴かな」
　諦めたように肩を竦ませるエルディインの言う嬢ちゃんとは、もちろんエルバーフェルド帝国総統、フリードリッヒ・デア・グローセの事だ。エレナは知っているが、他の面々はピンと来ていない。それでも、伝説のハンターが今こうして自分達の目の前に居る、その状況だけは理解できた。
「その伝説のハンターさんが、何でこんな只事じゃねぇ数の兵隊さんを率いてこんな所に居るんだよ？　ここはエルバーフェルド国外だぞ」
　シグマの疑問は最もだ。ここはエルバーフェルド国の国内ではない。それどころかアルフレア地域政府が管轄する地域内。そこに対し、他国や他地域の軍事的組織が勝手に入る事は下手すれば侵攻、立派な戦争原因となる。エルバーフェルドは、アルフレアに対しても戦闘行為を行おうとしているのか。先日の電撃的なズデーテン地域に対する侵攻作戦はすでに世界中に知れ渡っている。あの国ならしかねない。そんな憶測をさせてしまう程、人々はエルバーフェルドという国を警戒しているのだ。
　シグマの問いかけに対し、エルディインは「待て待て。こっちはちゃんとアルフレアの承認を得て領土内に入ってるんだ。侵攻なんかじゃねぇぞ」と否定する。
「アルフレアは独自の軍隊を持たないからな。今回の事態を終結させるだけの力がない。その為、隣国であるエルバーフェルドに対し救援を打診してたんだ。俺達は総統陛下の命令でその救援の為にアルフレア、そして現場であるイージス村を目指している所だ」
　つまり、アルフレア地域政府は今回の事態に対し隣国エルバーフェルドに救援を求めた。それに応じてエルディン率いる独立歩兵師団が派遣され、その行軍中にモンスターに襲われているルフィール達を発見し、その救出を行った。そんな経緯だったのだ。
「これだけの人数の兵隊が、イージス村を助ける為に集まったんですか？」
　エレナは現在自分達の周りで戦っている兵士達の数を見て驚きを

隠せない。イージス村の全人口を遥かに上回る数の兵隊だ。数にすれば五〇〇人を超えるだろう。そんな大部隊が、小さな村の救出に動いているのだ。驚くなと言う方が無理な話だ。だが、驚くエレナに対しエルディンは苦笑を浮かべる。
「いや、俺達は少ない方だ。別の理由ですでに海軍がイージス村に向かっているはずだ。そっちは主力艦隊が差し向けられてるから、それに乗艦する兵士の数はそれこそこっちの十倍は居るぜ」
「つまり、五〇〇〇人ッ!?」
「確かに、侵攻と言われても不思議じゃねぇだけの数の軍隊が投入されてるわな」
　おかしそうに笑うエルディンの言葉に、いよいよ開いた口が塞がらないといった様子の面々。この平野だけでエルバーフェルド軍の兵士五〇〇人、ドンドルマハンター養成訓練学校の生徒が一〇〇人。海上経由で向かっている艦隊には五〇〇〇人の兵士が乗艦している。更にその輸送船団には海軍陸戦隊や災害支援部隊などの別兵員が二〇〇〇人乗艦している。ルフィール達は知らないが、女王艦隊も現在イージス村の上空へと到達しており、そこにも五〇〇〇人程度の兵士が乗艦している。
　たった二〇〇人足らずの村の救援に、一万人を超える人間が動いているのだ。大陸史上、かつてない規模での動き。空前絶後の事だった。
「それで、状況を見るにあそこに居るのが村人か？　やっぱり少ないな」
「いえ、私達は第二次避難隊です。すでに第一次避難隊はレヴェリへと到着しているはずです」
「レヴェリ？　またあそこは国に何の説明もなく勝手に動いてるな。こりゃ嬢ちゃんが知ったら機嫌悪くなるなぁ」
　エレナの説明に面倒な事になりそうだとばかりにため息を零すエルディン。その時、彼の腹心と思わしき兵が駆け寄って来た。只事ではないその様子に、その場に居た面子全員の顔に緊張が走る。
「師団長ッ。南方より新手ですッ！」

「何だ、またモンスターの群れか？」
「いえ、あれは――」
「およ？　本当にエルバーフェルド軍だよ。アルフレアに待機中の観測隊の報告通りだね」
　イーオス・ガブラス連合軍、ドンドルマハンター養成訓練学校の学生とエルバーフェルド軍の兵士の激闘が繰り広げられる平野。そこに突如現れた全十台の竜車が隊列を組む謎の隊。そのうちの一台、旗艦車の天井の上に立つ女性はその光景を双眼鏡越しで見ながら楽しげに微笑む。
「それに加えて、勝手に抜け出した訓練学校の生徒達まで。まるでウソのような光景ね。これだけの規模の部隊が展開しているなら、わざわざ私が出払って来る必要はなかったかしら。あぁ、老いぼれ共を苦労して説得したのに、何だか肩透かしね」
　はぁとため息を零すものの、女性の顔はどこか嬉しそう。
　たった二〇〇人足らずの村の救援に、一体どれだけの規模の人達や組織が動いているのだろうか。エルバーフェルド帝国、アルトリア王政軍国、ハンターズギルド、レヴェリ家、ドンドルマハンター養成訓練学校。それも全ては、あの村に住むたった一人の少年の人徳の成せる業だろう。そして自分もまた、そんな彼の為に無理をしてまで駆けつけた一人。
「でもまぁ、支援物資は多いに超した事はない。まずは、あのモンスターの群れを蹴散らさないとね」
　そう言って女性は眼下に居並ぶ者達を見る。この救援部隊の護衛を務めてくれている、自分が信頼できるハンター達。数にすれば十二人と四人一隊（フォーマンセル）が三チームという、エルバーフェルド軍に比べれば大した事はない。だが、彼らはいずれも無双を誇るハンターズギルドが誇るハンター、それも全てがナイトクラス以上の精鋭だ。
　女性の願いに対し、快く応じてくれた十二人。そして今、自分からの命令を静かに待っている。そんな彼らに対し、女性は静かに命令を下す。

「総員、前方のモンスターの群れに突撃ッ。本物のハンターの戦い方、思う存分見せつけてやりなさいッ！」
『おおおおおおおおッ！』
勇ましい雄叫びと共に、武装をしたハンター達が一斉にイーオス・ガブラスの群れに向かって突撃していく。飛竜の素材から作られた無双の鎧を身に纏い、様々な人外を葬って来た無敵の武器を持ち、狩人達が大地を翔けていく。
そんな彼らの突撃を見ながら、女性は満足気に微笑む。そして、ふと思い出したように女性はイージス村の方を見やる。きっと彼はまだあそこに居るだろう。そんな予感が、彼女の胸の奥にあった。
きっと生きている。そしてまた、いつも酒場で見せてくれていたあの可愛らしい笑顔を、見せてくれるに違いない。彼女はそう祈って――信じていた。
「クリュウ君。必ず生きて帰って来てね。じゃないと、お姉さん本気で怒っちゃうわよ」
いつもの彼女らしくない、真剣な表情で語るライザ・フリーシア。彼女が率いるのは、ハンターズギルドのイージス村救援部隊。救援物資を積載した竜車隊と、その護衛兼鋼龍迎撃の為に集まったハンター達の部隊だった。
エルバーフェルド国防陸軍独立歩兵師団、ハンターズギルドイージス村救援部隊護衛隊、ドンドルマハンター養成訓練学校学兵隊、第二次避難隊護衛隊。凄まじい数の兵士とハンターの猛攻撃にイーオス・ガブラス連合軍はその数はあっという間に減らし、ドスイーオスも正規のハンター達の活躍で一匹を残して全て討伐され、モンスター達はついに散り散りに敗走して行った。
大陸史上最大規模の大戦は、こうして終戦を迎えた。
戦闘を終え、各部隊の責任者が集まる。エルバーフェルド軍からはエルディン、ハンターズギルドからはライザ、学兵隊からフリード、避難隊からはエリーゼが集って様々な協議を行った結果、学兵隊はこのまま第二次避難隊を護衛しながらレヴェリへ向かう事となり、残りの部隊はイージス村奪還の為に改めてイージス村へと行く事となった。

学兵隊はクリュウと親しかった一部の生徒を除いてフリードが責任を持って第二次避難隊と共にレヴェリへ向かう事となった。
第二次避難隊からは護衛隊のハンター達、そして本人の強い要望でエレナが離脱。第二次避難隊護衛隊、エルバーフェルド軍、ハンターズギルド救援部隊の三軍による連合軍が編成され、イージス村奪還の為の大規模部隊が改めて激戦地を目指して北上する事となった。
そして舞台は、再びイージス村へと戻る……

第２２７話　再び村に舞い戻りし鋼龍　少年の決意と最後の奇跡

　海上にてエルバーフェルド国防海軍大洋艦隊と鋼龍クシャルダオラが死闘を繰り広げている頃、クシャルダオラが離れた事で一時的とはいえイージス村は危機的状況を脱した。村にて激闘を繰り広げていたクリュウとルーデルは一度避難壕へと退避し、小休憩及び負傷したルーデルの手当てを行う事となった。

「大丈夫？」

「ええ、大した事ないわ。でも、さすがにもう戦えそうもないわね……」

　そう言って足首を押さえるルーデル。先程の攻撃を受けた影響で足を負傷してしまった彼女は、すでに自力で立つ事も困難になっていた。鋼龍クシャルダオラとの激闘による疲労が思った以上に彼女の体力を低下させていた為だ。

　手当ては終わったが、これ以上の戦闘は無理そうだった。それどころか自力で立つ事も難しい彼女では、単独での脱出もままならない。現在クシャルダオラは海上へと移動している為、仮に脱出するなら今しかない。

　本当なら、クシャルダオラが完全に村の近隣からも去らない限りは再びの戦闘に備えて迎撃態勢を整えておかなければならないのだが、彼女を放っておく事などできない――彼の中で、決断される。

「今のうちに、村から脱出しよう。大丈夫だとは思うけど、早くちゃんと手当てしてもらわないとね」

　彼女を連れて村から脱出。それが彼の出した結論だった。自分のエゴの為に彼女に危険を強いた上に、これ以上彼女に負担を掛ける選択など、彼はできなかった。彼らしい、実に優しい結論だ。だが、

「バカね。あんたはさっさと私を置いて迎撃の準備をしてきなさい。まだあいつが戻って来ないなんて確証はないんだから」

　呆れたように言うルーデルの言葉に、クリュウは「いや、そういう

訳にはいかないよ」と首を横に振った。怪我している女の子を放っておける程、彼は非情にはなれない。実に彼らしい決断であって、ルーデルは彼ならそんな決断を下す事と思っていた――否、知っていたのだ。自分の好きな少年は、そんな優しい人だから。

だからこそ、自分はハッキリと言わなければならない。

「あんた、こんな中途半端な形であいつとの戦いが終わっていいと本気で思ってる訳？」

「いや、それは……」

「確かに、あの艦隊のおかげでこっちは態勢を立て直す時間ができた。でもさ、あんなポッと出の奴らにあいつをやられたら、これまで戦ってた私達がバカみたいじゃない。それに、あんなのに乗って弱腰に戦ってる奴らに、あいつがやられる訳がない。いえ、むしろその程度の奴らにやられたクソ野郎だったって事ね」

「ルーデル……」

彼女は、今自分達の為に戦ってくれている艦隊が、まさかエルバーフェルド国防海軍の艦隊だとは知らない。祖国の誇るべき艦隊だと、彼女は知らないのだ。でも、もしも知っていたとしても、言葉の形はどうであれ、彼女の言葉の本質は変わらなかっただろう――あいつは必ず戻って来る、その時に備えなさい。

「私は、この通りやられちゃったからもう戦えない。あんたの隣で戦わせてとか言っておきながら、この体たらく。情けないなぁ……」

苦笑を浮かべる彼女の言葉に、クリュウはすぐに首を横に振った。

「そんな事ない。君のおかげで、ルーデルのおかげでここまで戦えたんだ。感謝してもし切れない。本当に、ありがとう」

頭を下げて、改めて礼を述べる彼の言葉にルーデルは「な、何よ改まって。別にあんたの為じゃないって言ってるでしょ。これは私のわがままなんだから、あんたが謝ったり礼を言う必要なんて無いのよ」と少し気恥ずかしそうに頬を赤らめながら答える。そんな彼女の素直じゃない態度に、思わずクリュウは笑みを浮かべた。

「な、何よその笑顔はッ。イラつくわねぇッ」

「ご、ごめんごめん。ほら、傷に響くよ」

クリュウの言葉にルーデルは舌打ちしながら浮いた腰を戻すと大きなため息を吐き、一度落ち着く。そして改めて「いいから、私はここで大人しくしておくから。あんたはさっさと準備を整えて来なさい」と彼を促す。

彼女の言葉に最初こそ渋っていたクリュウだったが鋼龍との決着をつけたいという想い、何より彼女の想いに応える為にも、クリュウは決意する。

「時々様子は見に来るから。一人じゃ不安だと思うけど、待っててて」

「バァカ。私は子供じゃないのよ。さっさと行って来なさい」

行け行けとばかりに手を振って促す彼女の言葉に苦笑を浮かべながら、クリュウは装備を整えて避難壕を後にした。一人残されたルーデルは先程まで彼を見送る為に浮かべていた笑顔を引っ込めると、顔をうつむかせて大きなため息を吐いた。

「……死ぬんじゃないわよ、クリュウ」

真剣な面持ち呟いた後、彼女は体を休めつつも眠る事はなかった。ただひたすらに、彼の無事を祈り続けて……

地表に出たクリュウはそこで改めて鋼龍クシャルダオラを迎え撃つ為の準備を開始した。これまで村の広範囲に散らしていたアイテムの供給場所を近くへと密集させると同時に、残存アイテムの量を確認。瓦礫などを除去し、戦い易いようにフィールドを整えつつも障害物や壕を作るなど、徹底抗戦の為のゲリラ戦に必要な設営も開始。休む暇もなく続けたこれらの準備は予定よりもずっと早く終わった。

海が見える場所へと移動し、そこでようやく一息つく。道具袋(ポーチ)には携帯食料が入っており、それを水と一緒に胃に流し込んで食事を終える。クシャルダオラがこの村に来てから、彼の食事はこれのみだ。栄養は補給できるが、あくまでもその程度。体を癒やすという点ではまるで効果はない。だが、今は非常時だ。そんな贅沢は言ってられないのが現状だ。

海の方を見やれば、海が荒れている影響で海上でどのような戦いが繰り広げられているかなど詳しい事はわからない。沖合の方から断続的に聞こえて来る砲音や爆音だけが、今も海上でエルバーフェルド

国防海軍と鋼龍クシャルダオラが激闘を繰り広げている事を知らせていた。
「カレンの奴、無理してなきゃいいけど……」
彼女との付き合いは、あのエルバーフェルド帝国を回っていた時のわずかな期間だけでしかない。だがその短い期間の間に、彼女とは少なからずの付き合いがあった。ルーデルやエレナ同様素直じゃないけど、本当はとても優しくて、負けず嫌いで、何よりもとても仲間想いの娘だ。一度親しくなった相手の為なら、全力を尽くす娘。
エルバーフェルドの時では、彼女にとても世話になった。そして今もまた、異国に住む自分の、ちっぽけな村を救う為に艦隊を率いて来てくれて、更には危険な鋼龍クシャルダオラと激闘を繰り広げている。
プライド高く、負けず嫌いな彼女はきっと鋼龍クシャルダオラに対しても一歩も引かない戦いをしているに違いない。無理してない事を、今は祈るしかない。
「こんな小さな村の為に、本当にたくさんの人が動いてくれている。こういうの、奇跡って言うのかなぁ」
そう言って嬉しそうに微笑む彼だったが、すぐに表情を暗いものに変える。
「でも……」
振り返れば、その守るべき村は無残な姿を晒していた。ほとんどの家屋が倒壊し、畑や林、道や水路なども崩壊。もはやイージス村は村としての命が尽きていた。これを再興するには、これまでイージス村が築いてきた歴史に相当するだけの期間と、大勢の人の力と、木の実や野草、ポポノタンなどで財政を賄っている小さな村からすれば莫大な金額の復興費用が掛かるだろう。それはむしろ、村を放棄して、一から作り直した方がいい程だ。
もはや、イージス村は廃村以外の道は残ってはいない。
こんな、もう直る事のない村の為に、命を張る自分は、もしかしたらものすごくバカなのかもしれない。でも……
「ここは、僕が生まれ育った場所だ」

無残に壊れた景色も、記憶の中の景色と重なる。あの畑はトウモロコシが栽培され、よく子供の頃に隠れんぼをしていた。あの水路には魚が居て、昔は釣りをして遊んだ。あの家はカティーンおばさんの家で、よく自慢のクッキーを焼いてもらった。あの折れた木は村の中ではかなり高い方で、よく木登りをしてはそこから見える村の全貌を眺めていた。

無残に壊れた景色の中には、自分の大切な想い出が今もたくさん詰まっている。新しく作るものにはない、ずっと昔からあるからこそ見える景色。

例え、村がなくなるとしても。ここが自分が生まれ育った故郷という事には代わりはない。ならば、その村にあの鋼龍を二度と近づけない為にも、奴を完膚なきまでに叩きのめし、撃破するしかない。

この戦いに勝利などはない。

あるのは、意地と誇りだけ。

わかっている。この戦いは負戦であって、奴を倒せなくても撃破しても、結果は変わらない。

だとしても、自分は勝たなければならない。

決着を、つける為にも……

「来たか……」

ゆっくりと空を見上げれば、曇天の空に見覚えのある鋼の龍王の姿があった。エルバーフェルド艦隊に突撃していく前に比べてかなりのダメージを負っているのがわかる。翼は原型を留めない程に破壊され、全身の鋼の鎧には無数のヒビが入り、満身創痍といった様子だ。

でも、奴は倒れてはいない。まだ、戦いは終わっていないのだ。

「僕も正直ボロボロだ。でも、君もボロボロだ。これで、少しは対等な戦いができるんじゃないかな？」

相手はモンスターだ。人間の言葉など理解はできない。そんな事、小さな子どもでもわかっている常識だ。でも、口は止まらない。言葉は、続く。

「さぁて、そろそろ空の上も飽きたんじゃないかな？　ちょっとは地上に降りて、僕と殴り合いしてみる気はない？　お互い、文字通り最

後の力を振り絞って戦おうよ」
理解など、できる訳もない。なのに、鋼龍はゆっくりと降りて来た。風を操りながら、ボロボロの体でも優雅に、そして神々しく地表へと舞い降りる。鋼の爪が地面の土を抉り、鋼の巨体が地表へと降り立つ。
辺りに風が吹き荒れ、木々が騒ぎ、瓦礫が宙を舞う。
少し前なら、それだけで古龍の力と恐れていただろう。逃げていただろう。怖気づいていただろう。
でも今は、なぜか怖くない。奴の本気が自分に向いている。それは普通に考えれば恐ろしい事なのに、今はどうしようもなく気分が良い。
あの古の、鋼の龍王が本気で自分と戦う為に降臨している。
村を壊された恨みはもちろんある。だが、それ以上に今は、奴との戦いに、この戦いに決着を付けたい。そんな想いが、彼を動かしていた。
「これが正真正銘、最後の勝負だ。僕とお前の、一対一の、真剣勝負。覚悟はいいね、鋼の王よ」
返事はない。だが、こちらに向ける彼の瞳は、その提案に乗ったかのようだった。言葉は通じないに、人間と同じ思考パターンを持っている訳ではない。それでも、今この瞬間だけ、意志が伝わった。そんな気がした。
腰に下げていた、切れ味を最高にまで整えた煌竜剣（シャイニング・ブレード）を引き抜き、構える。煌めく剣先は鋼の龍王を、そして自分の姿を反射させる。これまで、ずっと自分の武器として戦ってくれた剣は、まだ戦える。大昔、自分の祖先が伝説の金火竜と銀火竜に授けられたこの剣の可能性は無限大だ。その可能性を引き出せるかは、自分次第。
腰を落とし、突撃の構えを取る。鋼の龍王も四肢を踏みしめ、迎撃の構えを取る。二つの視線が交わり、一瞬の沈黙。そして……
「俺とお前の一騎打ち、これで全てを終わらせるッ！」
「――否定。この戦いは、私達夫婦の戦いよ」

風が、変わった……

鋼の龍王の視線が、自分から背後に向けられるのを感じた。驚いて振り返ると、そこには……

「最後の最後まで虚偽報告しないでください。私達の戦い、そうですよね？」

全身に桜色の桜火竜リオレイア亜種の素材とマカライト鉱石やドラグライト鉱石などで作られたリオハート装備と呼ばれる桜色の防具一式を纏い、手には同じく桜火竜の素材を使って作られたハートヴァルキリー改と呼ばれるライトボウガンを構えた、美しい金髪を風に優雅に靡かせた新緑色の瞳をした少女が、静かに微笑む。

「あぁ、ずいぶんと遅れてしまったが、まぁまだ遅くはないだろうクリュウ？」

頼もしく微笑む白銀色の髪を勇ましくポニーテールに結った、碧眼の少女。全身を蒼火竜リオレウス亜種の素材とマカライト鉱石やドラグライト鉱石で作られた蒼色の鎧を纏い、背には鎌蟹ショウグンギザミのハサミを基礎にして作られた鋭い大剣キリサキを背負い、威風堂々と立つ。

「……遅くなってごめんなさい。埋め合わせに、今度デートしよ？」

ここが命を懸けた激戦地だというのに、相変わらず自分のペースを崩さない少女。全身には彼女のハンターとしての基礎となった激戦で手に入れた老山龍ラオシャンロンの素材で作られた異国の鎧、凛シリーズを主体に、腕と足は火竜リオレウスの素材を使ったレウスシリーズを纏い、手に構えた鬼神斬破刀と呼ばれる太刀が勇ましく雷撃を迸らせる。黒く艶やかな長髪を風に揺らめかせ、吸い込まれそうな漆黒の隻眼を煌めかせながら、不敵に微笑む少女。

突如現れた三人の少女達。それは、クリュウがずっと待ち望んでいた最高の奇跡だった。

「フィーリア、シルフィ、サクラッ！」

それは、イルファ山脈にて鋼龍クシャルダオラに振り切られた、クリュウにとって最高のチームメイト達。フィーリア・レヴェリ、シルフィード・エア、サクラ・ハルカゼの三人だった。

「クリュウ様、お怪我はありませんか？　ずいぶんと、疲れているように見えますが……」
　現れて早々にクリュウに駆け寄り、彼の身を案じるフィーリア。ボロボロの彼の姿を見てすぐに血相を変える。おろおろとする彼女に対し「大丈夫、とりあえず大した怪我はしてないから」と彼女を心配させないように気遣う。
「すまないな、到着が遅れてしまった為に君に負担を掛けてしまった」
　そう言って彼の肩を叩くシルフィードは本当に申し訳なさそうな表情を浮かべていた。彼の身を案じて村に残してイルファに向かった結果、逆に彼単独での村の防衛という難題を与えてしまった。リーダとして、自らが下した決断が彼をこんなにボロボロにさせてしまった。その事に、彼女は責任を感じていた。だが、
「大丈夫だよ。何だか、色々な人に助けられてここまで生き残れた。負担なんて、全然感じてなんかいないさ」
　そう、自分は一人じゃなかった。
　ルフィール、シャルル、ルーデル、エリーゼ、レン。エレナやリリア、アシュアにカレン。色々な人に助けられて、どうにかここまで生き残れた。一人じゃない、ずっと、誰かと一緒に戦っていたのだ。
　彼の返事に、シルフィードは小さく笑みを浮かべる。
「そう言ってもらえると、気が楽になるよ」
　肩の荷が下りたような様子のシルフィードを見てクリュウもまた安堵の笑みを浮かべる。その時、黙って周りを見回しているサクラに気づいた。彼女は無言で、周りの変わってしまった景色を、その隻眼に焼き付けているかのようだった。
「……クリュウ。これ、あいつがやったの？」
「サクラ……」
　その言葉に、フィーリアとシルフィードも背けていた現実と向き合う事になった。
　周りを見渡せば、見知ったのどかな光景はすっかり変わり果てていた。無残に壊れた家屋や水路、抉られた畑や道路、折れた木々、散らばる瓦礫。これが本当に、あの静かで温かな、あのイージス村だった

のか。目を疑い、背け、否定したい現実。だが、それは変えられない現実だった。
「あぁ」
サクラの問いかけに、難しい言葉はいらない。ただ、そう肯定するだけ。後は、周りの状況が物語っている。クリュウの返事にサクラはただ短く「……そう」と答えるだけ。
「……全てを守る。結局、そんな事はできやしない」
静かに、サクラは語る。
「……自分の目の前にいる人を守る事で精一杯。何かを守るって事は、同時に何かを犠牲にする事。大多数を助け、少数を見捨てる。小説の中の英雄のように、全てを守る事なんてできやしない。いいえ、目の前にいる人すら守れない。そういう事もある。それが現実」
サクラは変わり果てた村を見回しながら、静かに、己の信念に対する疑念を吐露する。全てを守りたい、でもそれは現実的ではない。彼女の信念と、現実が、相反する二つが、彼女を苦しめる。
「……私は、この村に拠点を置いてから決めていた。クリュウと一緒に、この村を絶対に守ると。でも、できなかった。私が守りたかった、あの穏やかで優しくて、温かな村は――もうない」
風が吹き、半壊していた家屋が崩れ落ちる。それはまるで、村の命が完全に潰えたかのような。そんな錯覚を抱く光景だった。
「……カルナスと同じ、私は守れなかった」
自由貿易都市カルナス。両親を殺した轟竜ティガレックスと並ぶ、彼女の人生を大きく変えた出来事。大陸南西部にあった、立地と関税の低さから交易が盛んに行われた自由貿易都市。しかし二年程前に現れた老山龍ラオシャンロンによって都市は崩壊し、現在も復興作業が行われている最中だ。人々の想いが詰まった街が、いとも簡単に壊され、残されたは無残で莫大な瓦礫の山。目を背けたい現実に人々が絶望し、言葉にならない悲しみと怒りが、その場に居合わせた者全員を支配した。
老山龍迎撃戦として、カルナスはハンターズギルドに協力を打診し、尚且つ自らもハンターを大量に雇って迎撃体制を整えていた。し

かし要塞都市ではなく、貿易都市の為に行き来がしやすい平野に作られたカルナスは十分な対大型モンスター用の防衛設備を整えておらず、且つハンターズギルド側とカルナス防衛対策本部という二つの指揮系統が存在した為にハンター達が十分に連携できず、個々の奮闘は目覚ましいものだったが、結局は防ぎ切れずに敗北した。あの戦いに、彼女も参加していたのだ。

守ると決めたのに、守れなかった。さっきまであった街が、瓦礫となり、消えてしまった。その光景を、彼女は見ていた。その絶望の景色と、今の村の惨状が――重なる。

「……クリュウ、あいつが憎い？」

振り返ったサクラの目は、恐ろしい程に黒かった。彼女の瞳の色ではない、もっと奥底の、冷たく、淀んだ、恐ろしい感情が、瞳を通して見えているのだ。怒り、憎しみ、恨み、悲しみ。負の感情が、混ざり合い、彼女の澄んだ瞳を濁らせていた。

彼女の瞳を見て、フィーリアとシルフィードは息を呑んだ。彼女の本気の怒りと悲しみ、それを直視してしまい、怖気づいているのだろう。だが、その瞳を目の前から向き合うクリュウは、決して目を背けたりしない。しっかりと、正面から見据える。

「憎くない、と言えばウソになる。でも、復讐程意味がなくて虚しいものはない。前にサクラに言った本人が、復讐を望む訳にはいかないでしょ？」

苦笑を浮かべる彼の言葉に、サクラは無言だった。それは以前、轟竜ティガレックス戦の時に捕獲ではなく討伐を望む彼女に対し、それが復讐ではなく決着という意味でなら協力すると彼が打診したセリフ。

サクラに対し、そんな事を言ったクリュウ。だからこそ、復讐を望む事はできない。否、もしも言っていなかったとしても、彼は復讐は望まない。本心から、それが無意味だとわかっているから。

「……じゃあ、クリュウはどうしたいの？」

サクラの問いかけに対し、クリュウはしばし無言だった。フィーリアとシルフィードが心配になり一歩前に出た時、ゆっくりと彼の口が

開く。
「――奴との戦いに決着をつける。そして、何としてもこの村から追い出すよ」
　真剣な表情を崩す事なく、こちらを警戒しつつも、まるでこちらが準備を整えるのを待っているかのように立っているクシャルダオラを見詰めながら語るクリュウ。それに対し、サクラは無言だった。無言のままゆっくりと彼の前に歩み出ると、手に持った雷刀、鬼神斬破刀を構える。主の想いに応えるように、刀は雷を纏い、迸る。荒れ狂う雷光は雷鳴と共に辺りの空気を震えさせた。
　迸る稲妻の眩い雷光に照らされながら、サクラは静かに、そして力強く鋼龍クシャルダオラに相対する。
「……夫の決めた事、妻として全力で支えるわ」
　真剣な表情のまま、実に彼女らしく、そしてストレートに、クリュウと共に戦う事を宣言した。呆気に取られるクリュウだったが、すぐにそれを笑顔に変える。
「ありがと、サクラ」
「……妻として、当然の事よ」
「何が妻としてですかッ！　大嘘も大概にしやがれですッ！」
　凛々しく、かっこ良く、それでいて可憐に大嘘を吐くサクラに対し、当然のようにフィーリアが間に割って入る。頬をぷくぅと膨らませ、可愛らしく怒るフィーリアを、クリュウの隣をどかせられたサクラは鬱陶しげに睨みつける。
「……フィーリア、邪魔」
「サクラ様はやっぱり危険ですッ。クリュウ様の身は私がお守りしますッ」
「あ、ありがと……」
　ここが激戦地であり、目の前には恐るべき力を持っている古龍クシャルダオラが居るというのに、いつもと変わらずケンカする二人の姿に思わず苦笑を浮かべるクリュウ。だが内心ではこんな非現実的な状況の中でもいつもと変わらない二人の姿に、どこか安堵を覚えていた。そんな彼の二人とは反対側の肩を、シルフィードがそっと叩

く。
「一人で良く耐えたな。えらいぞ、クリュウ」
「子供扱いしないでよ。それに、一人じゃない――色々な人に助けられた。ほんとに、たくさんの人に」
「そうか……」
短くそう答えるとシルフィードはクリュウの前、そして睨み合う二人の前へと歩み出る。こちらを見詰めたまま待つ鋼龍クシャルダオラを前にしても恐れる事なく、威風堂々と、勇猛果敢に相対する。
「私が居ない間に、クリュウが世話になったな。これまでの分も含めて、貴様には礼をしてやらないとな――覚悟しろ鋼の龍王よ。クリュウを傷つけて、ただで帰れると思うな」
静かに語るシルフィードの言葉に、鋼龍は無言だった。クシャルダオラだけではない、背後に居た三人もシルフィードの姿を凝視したまま硬直していた。口調こそ普段通りだが、その背中が凄まじい憤怒に染まっている事を感じていたから。
村を壊され、愛する人を傷つけられ、それでいて平静でいられる程シルフィードは非情にはなれない。彼女の静かなる激怒に、辺りがシンと静まり返る。
「……シルフィード。クリュウの気持ちも考えて。復讐はしない、そう決めたはず」
怒り狂うシルフィードを前に、サクラが落ち着きを払った声で制止する。これは復讐戦ではない、村から奴を排除する為の迎撃戦だ。そう決めたのは、他でもないクリュウだ。
「……わかっている。だが、覚悟を決めるくらいはいいだろう？」
そう言って振り返ったシルフィードの表情は、いつもと変わらない頼りになる凛々しい笑顔だった。その笑顔を見てサクラはフッと口元に笑みを浮かべ、クリュウとフィーリアも安堵の笑みを浮かべる。
「そうですね。私達の故郷を、私達で取り戻しましょうッ！」
努めて笑顔で明るく振る舞うフィーリアの言葉に、クリュウはどこか淋しげな笑みを浮かべた。『守りましょう』ではなく『取り戻しましょう』。彼女に自覚はないのだろうが、もはやこの戦いが守るべき

村が崩壊した事を示しているかのようだった。守れなかったのは、全て自分の責任だ。守ると決めたのに、守れなかった。その罪悪感が、彼の胸を苦しめる。でも――

「そうだね、取り戻そう。僕達の居場所を」

自分達の居場所は、今も昔も、そしてこれからも。この温かくて優しいイージス村だ。形がどんなに変わっても、それだけは変わらない。そんな居場所を、鋼龍から奪還するのだ。

「三人共、イルファから村への大移動で疲れている所悪いけど。どうか、もう一度僕と一緒に鋼の龍王と戦ってほしい。危険は承知だけど、正直僕一人じゃ奴には勝てない。でも、みんなと一緒なら、きっと……」

「それより先は、結構ですクリュウ様」

頭を下げようとする彼を制し、そっと優しく声を掛けるフィーリア。伏せかけていた顔を上げると、そこにはいつも皆に元気を与える、天使の笑顔がそこにあった。

「――勝てるに決まっているじゃないですか」

「フィーリア……」

「クリュウ様と私、サクラ様とシルフィード様。この四人が集まって、不可能な事なんてありません。私達は、四人で無敵のチームなんですから」

一人では勝てなくても、四人集まれば勝てる。今まで、どんな難敵をも蹴散らして来たこの四人だからこそ、できる奇跡。相手がどんなに強く、恐ろしい古龍だとしても、この四人なら絶対に勝てる。フィーリアは、心からそう信じていた。そんな彼女の想いと言葉に、自然と三人にも笑みが浮かぶ。

「そうだな。私達は、このメンバーで無敵のチームだ。例え相手が最強の生命体、古の龍王だとしても、私達は負けない――必ず、勝つ」

「……私が居る限り、クリュウは負けない。私は、クリュウに勝利しか捧げない」

必ず勝てる。そう断言する二人の言葉と強気な振る舞いに、クリュウは笑みを浮かべながら「ありがとう」と礼を述べる。

「……そうだね。僕達は負けない、必ず勝って――奴からこの村を取り返すよッ！」
「はいッ！」
「……当然よ」
「言われるまでもない」
　三人の力強い返事に頼もしげにうなずくと、クリュウはゆっくりと正面へ向き直る。その視線の先にはこれまでの四人の会話を黙って待っていた鋼の龍王の姿が映る。こちらの態勢が整ったのを理解したのだろう。閉じていた翼を広げ、改めて臨戦態勢となる。
　こちらの準備ができるまで待っていた、彼なりの騎士道精神のような礼なのだろうか。何だとしても、その精神は感服する。
「待たせて悪かったね。まぁ、見ての通りこっちはやっぱりこの四人で君と戦う事にするよ。僕達は一心同体、チームだからね。でも、これが最後ってのは本当だよ。今度こそ、決着をつけよう。お互いに、全力で」
　クリュウの問いかけに対し、人間の言葉は理解できなくても何かを察したのだろう。クシャルダオラは翼を大きく広げ、首を持ち上げ、天高く咆哮を轟かせる。空気が震え、風が鋼龍の周りに集まり、渦巻く。風を纏い、威風堂々と対峙するクシャルダオラ。しかし戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』との激闘で負った負傷、角を折られた事で風の制御が難しくなっているのか、今までに比べれば纏う風が弱い。彼も、これが最後の勝負だとばかりに残っている力を全て集めて戦おうとしているのがわかる。
　彼に比べればちっぽけな存在である自分達に対して正々堂々と全力で戦いを挑もうとする鋼の龍王。そんな彼の姿勢に対し、クリュウ達も敬意を払う。
「さぁ、これが本当に正真正銘最後の勝負だ。全力で行くよッ！」
　勇ましい掛け声と共にクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードは武器を構えて鋼龍クシャルダオラに突撃する。襲いかかる敵に対し、鋼の龍王は風を纏って上空へと浮かび上がる。
「グオオオオオオオオオッ！」

力強い咆哮を天空へと轟かせ、鋼龍クシャルダオラは自らに挑みかかる敵に対し真正面から正々堂々と迎え撃つ。
鋼の龍王と、若き狩人達の最後の戦い。長く苦しかった戦いも、いよいよこれが最後の勝負。互いに負けられない、一歩も引かない死闘。
鋼の龍王は風の刃と鎧を纏い、狩人達はそれぞれ死闘を共にして来た武具を構え、激突する。
中央大陸北部にある小さな小さな村を舞台に、様々な人々が繰り広げた激闘の物語。その終わりが、近づきつつあった。

第２２８話　英雄の証

すでにまともに風を纏う力も残っていないのだろう。鋼龍クシャルダオラは風の鎧を失っていた。更にエルバーフェルド艦隊との激戦で負った負傷で鋼の鎧も脆くなっていた。ボロボロの姿となったクシャルダオラだったが、その闘争心は全く衰えてはいなかった。

雄叫びを上げ、クシャルダオラは怒涛の勢いで突撃する。その突進攻撃に対し、正面に展開していたクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人は左右へと回避行動を取る。散らばった四人の間をクシャルダオラが通り抜ける。停止すると同時に、一斉に四人が襲撃する。

まず襲い掛かったのはチーム随一の俊足を誇るサクラ。雷を帯びた刀を構えながら、鋼龍に負けぬ勇ましい雄叫びを上げながら突撃する。背後からの強襲攻撃。雷刀、鬼神斬破刀を構え、クシャルダオラの懐へと入ると、軸足を固定し、怒涛の剣撃の嵐を炸裂させる。荒れ狂う剣撃は、鋼の鎧にそのほとんどを弾かれてしまうが、脆くなった鋼の鎧はその全てを耐え切る程の強度はなかった。ヒビ割れ、迸る電撃が鉄を砕き、粉砕する。露わになったその中の肉に、サクラは容赦なく刀を突き立てる。

「グオオォォォッ!?」

肉を斬られ、迸る電撃がその肉を焼く。激痛にクシャルダオラは悲鳴を上げるが、すぐに翼を羽ばたかせて空中へと退避する。その風圧にサクラは吹き飛ばされてしまうが、相変わらずのその常軌を逸した身体能力で綺麗に着地し、すぐに追い掛ける。

後方へと大きく後退したクシャルダオラだったが、着地と同時に今度は一番近くにいたシルフィードが側面から襲い掛かる。

「うおおおおおぉぉぉぉぉッ！」

勇ましい咆哮と共に構えたのは鋭い刃先を持つ大剣キリサキ。背後から襲い掛かると同時に掲げた大剣を一気に振り落とす。炸裂した一撃は鋼の鎧を粉々に粉砕。次なる一撃を入れようと構えるが、そこへクシャルダオラが爪を横薙ぎに振るって襲い掛かる。この一撃

はガードで耐え、すかさず剣を横薙ぎに振るって爪を弾き飛ばす。
怯むクシャルダオラに対し、シルフィードは更に前へと出ると強烈な突きの一撃を放つ。鋭い剣先は吸い込まれるようにクシャルダオラの首筋に命中するが、弾かれてしまい不発に終わる。しかし構わず突きの勢いで前進し、剣を戻す勢いも加えて斬り掛かる。怒涛の一撃はクシャルダオラの首元にわずかなヒビを生む。そこに向かって更なる一撃を加えようと構えるが、それよりも早くクシャルダオラが後方へと飛び去った。距離を空けられたシルフィードは無理に追撃はせず、構えたキリサキを背負い直す。大剣はその重さから抜刀時の機動力が低い。距離が離れている時は納刀するのが基本的な戦い方だ。
「やはり、鋼の鎧も相当脆くなっているな」
これまでとは明らかに手応えが違う。イルファで戦っていた頃よりも相当弱っているらしい。これなら、押し切れる。そんな自信が彼女の中で生まれた。
シルフィードから逃げるように着地したクシャルダオラ。すかさず反撃に出ようと風ブレスを構えるが、そこへ銃声と共に数発の銃弾が炸裂する。鬱陶しげに振り返ると桜色のライトボウガン、ハートヴァルキリー改を構え銃撃するフィーリアの姿が目に入る。
「幾分か耐久力が衰えていても、やはりなかなか弾が通らない……ッ」
悔しげに呟きながら、フィーリアは歯ぎしりする。鎧の耐久性が脆くはなっているとはいえ、それでも大多数の飛竜種に比べれば硬い。貫通力が高い貫通弾ＬＶ２だが、鋼龍の鋼の鎧相手ではやはり分が悪い。
「それでも……ッ」
致命打が与えられない事はフィーリア自身予想していた。だが、それはそれで対応のしようがある。銃弾が命中すると貫通はできなくても硬い弾頭が鋼の鎧に当たるたびに火花が迸る。それが鬱陶しいのだろう、クシャルダオラの意識がこちらに向くのを感じた。
「意識を逸らすくらいは、できる……ッ」
反撃とばかりにクシャルダオラがフィーリアに向かって風ブレスを撃ち放つ。猛烈な風が大地を穿ちながら彼女に迫るが、寸前で

フィーリアは横へとこれを回避。すぐに銃撃を再開する。
鬱陶しい銃弾に追撃を掛けようとするクシャルダオラ。その側頭部で爆発が起きたのはその瞬間だった。
黒煙を振り払い、苛立ちながら振り返ると、打ち上げタル爆弾Gが更に二発突っ込んで来る。風の鎧を失っている状態では防ぐ事はできない。だがこの爆弾の威力が大した事がないのはすでに知っている。クシャルダオラは構わずこれを受け、自慢の鋼の鎧でほぼ無傷で耐え切る。
打ち上げタル爆弾Gが命中した事を確認し、クリュウが襲撃を掛ける。姿勢をできるだけ低くしての突撃。彼の中では最速での突撃で接近すると、手に持った煌竜剣（シャイニング・ブレード）で勢い良くクシャルダオラに斬り掛かる。鋼の鎧に一度は弾かれるが、構わず次の一撃を叩き込む。狙うは体中にあるひび割れた箇所。そこに狙いを定め、力の限り剣撃を叩き込む。手に走る衝撃に思わず顔を顰めるが、構わず攻撃を続けるとひび割れがより広がり、鎧は砕け、中の肉が露わになった。そこ目掛け、クリュウは剣を構える。だがそんな彼の思惑に逆らうようにクシャルダオラは身を翻して彼の剣撃を回避。たたらを踏む彼の背後から鋭爪で襲い掛かった。
「がはッ!?」
鋭い爪の一撃を背後から受けたクリュウは弾き飛ばされ、地面に倒れた。フィーリアの悲鳴にすぐに手を上げて大丈夫だとアピールする。ディアブロメイルの強力な防御力のおかげで大した怪我は負わなかった。
回復薬を飲む彼の姿を見てほっとするが、すぐに怒りに燃えるサクラ。鬼神斬破刀を構え、迸る雷撃を纏いながら地面を蹴って突貫する。稲妻は彼女の怒りを表すかのようにより密度を高め、激しく、荒々しく迸る激雷となる。
「……はあああああぁぁぁぁぁッ！」
怒涛の突貫で迫ったサクラは振り上げた鬼神斬破刀を勢い良く振り落とした。激しい一撃は峻烈な雷撃と共にクシャルダオラに炸裂する。尋常ならざる雷撃にひび割れていた鋼の鎧は砕け散り、衰える

事なくその下に隠されていた肉を焼き切る。迸る鮮血と響く鋼龍の悲鳴に、サクラは容赦なく刀を突き立てる。
激痛に身悶えするクシャルダオラに対し、フィーリアも狙いを定めて貫通弾ＬＶ２を撃ち放つ。そこへシルフィードが更にクシャルダオラの背後から剣撃を叩き込む。三人の姫のど等の攻撃にクシャルダオラは悲鳴を上げて空へと逃げ出す。だがそこへ今度はクリュウの放った打ち上げタル爆弾Ｇが二発命中した。風の鎧を失い回避する術もない上、自らを飛ばす風も弱まっているのだろう。二発が爆発した衝撃でバランスを崩したクシャルダオラはそのまま地面へと墜落した。
横倒しになって悶えるクシャルダオラに対し、雷撃姫が容赦なく襲い掛かる。地面を蹴って空へと飛び出し、クシャルダオラの真上から襲撃する。動けない相手に対し一切の躊躇なく激しい剣撃を浴びせるサクラ。シルフィードとクリュウも攻撃に加わり、フィーリアも速射機能のある通常弾ＬＶ２に弾種を切り替えて攻撃を開始する。
四人の猛攻に倒れていたクシャルダオラは避ける術がない。だが一方的にやられているのもそれまでだった。起き上がると同時に気合で風を展開し、三人の剣士を吹き飛ばす。
風の鎧を警戒していなかった三人は受け身も取れずに地面に倒れた。慌ててフィーリアが銃撃でクシャルダオラの気を引こうと動く。そんな彼女に対し、クシャルダオラは風ブレスを撃ち放った。連続して三発の嵐に対し、フィーリアは全力で走って何とかこれら全てを回避した。安堵し、改めて狙いを定めようと振り返った瞬間――目の前に鋼龍の凶悪な顔が迫っている事に気づいた。
「え……」
直後に凄まじい衝撃と共に彼女は吹き飛ばされた。空中へと投げ出されたフィーリアは、そのまま地面へと倒れる。他の三人とは違い、すぐには起き上がれず苦悶に顔を歪めるフィーリア。
「サクラッ！」
「……チッ、面倒掛けさせて」
悪態をつきながらもサクラは急いで閃光玉を投擲する。炸裂する

光の爆発はもう何度目かはわからないが、クシャルダオラの視界を奪う。目の痛みに耐えながら、接近を拒むように暴れるクシャルダオラを放置し、クリュウとサクラ、そしてシルフィードは倒れたフィーリアに駆け寄った。
「大丈夫か？」
「は、はい。何とか大丈夫です」
シルフィードの肩を借りてフィーリアは立ち上がると、大丈夫だとアピールする。すぐに回復薬グレートを飲むと、ふらついていた足がしっかりしたものに変わった。
「油断しました」
「いや、私達も風の鎧を警戒していなかった。弱っていても、さすがは古龍といった所か」
「……小細工は嫌い」
「サクラの場合は突撃あるのみだもんね」
「……私は突撃バカじゃない」
「ごめんごめん」
不貞腐れるサクラに対し、クリュウは苦笑交じりに謝る。そんな二人のやりとりに思わず笑みを零したシルフィードだったが、すぐに表情を引き締め直す。
「だが、今ので奴はもうほとんど風の鎧を纏う力が残っていない事がわかった。鋼の鎧も相当脆くなっている。このまま押し切れば――勝てるかもしれないぞ」
シルフィードの口から飛び出した《勝利》の文字。その言葉に、クリュウは胸の奥が熱くなるのを感じた。
これまで、クシャルダオラとの激闘には様々な人が力を貸してくれた。
今ここにいるフィーリア、サクラ、シルフィードはもちろん。ルフィール、シャルル、ルーデル、エリーゼ、レン、そしてカレン。
彼は知らないが、彼の為に動いているのはもっと大勢居る。それだけの人に支えられ、助けられ、これまで鋼龍と死闘を繰り広げて来た。犠牲は決して少ないとは言えないが――その結果が、ようやく見えて

来たのだ。
「もちろん、油断はするな。奴は古龍だ。通常のモンスターとは何もかもが桁違いだ」
「でも、あと少しなんですよね」
「確証はない。だが、決して遠くはない事は確かだ」
シルフィードの頼もしい言葉に、フィーリアの表情が明るいものに変わる。サクラも無表情を貫いているが、握り締めた拳が全てを語っているかのようだ。そしてクリュウも、
「戦いが終わっても、剣では解決できない戦いが始まる。それはきっと長くて、辛い戦いになると思う。でも――この戦いが終わらなきゃ、何も始まらないんだ」
固く拳を握り締め、何かを決意した表情で語る彼の言葉に、三人は静かに頷く。村の復興という戦いは、自分達がこれまで剣や刀、銃で戦って来た戦いとはまるで違う。長く苦しく、大変な道のりだ。でも、奴を倒さなければ、それも始まらない。自分達は、前に進めない。
「クリュウ様」
握り締めた拳を、そっとフィーリアが握り締める。柔らかく、温かく、そしてその優しい手にゆっくりと視線を上げると、真剣な面持ちでこちらを見詰める彼女がいた。
「フィーリア……」
「復興は、並大抵な事ではありません。私の祖国は、二〇年前の大災害からまだ完全には復旧できていないし、火山灰の影響や地殻変動で失われた村や街もたくさんあります」
フィーリアの故郷、エルバーフェルド帝国はローレライの悲劇と呼ばれる大災害で甚大な被害を受けた。フリードリッヒの絶大なリーダシップとカリスマ性で復旧が急速に行われているのは確かだが、実際はその大部分が都市圏ばかり。未だ、辺境などでは復興がまともに行われていない所も多い。あの大国をもってしても、復興にはそれだけの期間と労力が掛かる。小さな村と大国は一概には比較できないが、復興というものがどれだけ大変かは、変わらない。
「でも、クリュウ様は一人じゃありません」

まるで天使のような、優しく温かな笑顔が、そこにあった。
「クリュウ様は一人じゃありません。どんなに長く苦しい戦いだとしても、最後まで私がお付き合いします。イージス村は私にとっても第二の故郷ですし。何より、私はクリュウ様のお力になりたい。私は――クリュウ様を心よりお慕い申し上げております」
「フィーリア……」
満面の笑みで語る彼女の言葉に、胸の奥が熱くなる。先程のとは違う、こみ上げて来る程に強く、でも優しい、そんな熱さ。いや、熱いというよりは温かい、そんな気持ち。
自分を元気づけようと微笑む彼女。その手は小さくて、細くて、本当にこんな手でライトボウガンを持ち、数多のモンスターと戦って来たのか疑う程に華奢だ。でも、その実力は自分もよく知っている。ずっと助けられて来た、ずっと支えられて来た。
初めて会った時、こんなにも長い付き合いになるとは思ってもいなかった。長い、と言ってもまだ二年程だ。でも、よく小説の中で言われているが、十代の二年なんて以降の同じ年よりもずっと濃密で、大切だ。その大切な期間を、自分は彼女と一緒に過ごして来た。
そうだった……
自分はずっと、彼女と一緒だった。
楽しい時も、嬉しい時も。悲しい時も、辛い時も。どんな時も、自分は彼女と一緒だった。どんな時も、彼女のその優しくて可愛らしい笑顔に励まされて来た。
失ったものは確かに多い。でもまだ、自分には――
「おいおい、私の事も忘れてもらっては困るぞ」
そう言って苦笑を浮かべたのはシルフィード。
そうだ。今までどんな苦難も窮地も、彼女が頼もしく、そして力強く助けてくれた。それは狩りの時はもちろん、普段の生活においてもだ。チームのリーダーとして、この何かとアクの強い面子をうまく纏め、時には厳しく、時には優しく、自分達を導いて来てくれた。
彼女がいれば、どんな逆境だって越えられる。そんな自信が、確信があった。

「……私も、妻として全力で支えるわ」
自信満々に、少々残念な胸を叩いて宣言するサクラ。ある意味、このメンバーの中では彼女との付き合いが一番長い。
子供の頃は、いつもずっと自分やエレナの後ろに隠れていた、気の弱い女の子。少し会わない間にずいぶんと気どころか度胸まで強くなり、何よりもその類稀なる身体能力で、いつの間にか自分よりもずっと強くなっていた。
黒髪を靡かせ、刀を振り回し、夜叉の如き猛攻でモンスターを追い詰める。その鬼神の如き強さと、でも神秘的な美しさを兼ね備えた、異国の剣士。
どんな窮地でも、彼女は颯爽と現れ、その壮絶怒涛の猛攻と突貫でモンスターを撃破して来た。それはきっと、これからも変わらない。
そう、変わらないのだ。
自分には――変わらずに自分を支えてくれる者達が、居るのだから。
「ありがとう、みんな」
それは、自分の心からの想いだった。そんな彼の言葉に、三人は無言で首を横に振った。自分達の間に礼などいらない、そう言いたいのだろう。思わず、笑みが零れる。
背後で、ゆっくりとクシャルダオラが動き出すのを感じた。閃光玉の効き目が切れたのだろう。振り返ると、案の定クシャルダオラがこちらを向いている。口を開き、空気を吸い込む。歪む空間が、空気の圧縮を表していた。
臨戦態勢となる四人。そして、強烈な風ブレスが放たれる直前、彼は叫んだ。
「絶対に勝つッ！」
「はいッ！」
「……当然よ」
「当たり前だッ！」
爆音と共に風ブレスが放たれる。それを左右に散開し、四人は一斉にクシャルダオラに襲い掛かる。

怒涛の勢いで突貫するのはサクラ。膨大な稲妻を刀に纏わせながら、迸る雷撃に照らされる彼女は、雄叫びを上げながらクシャルダオラに迫る。彼女の接近に後方へと脱しようと空中へと飛び立つクシャルダオラだが――彼女には関係ない。

「……逃すかあああああぁぁぁぁぁッ！」

風を突き破り、髪を靡かせ、突貫するサクラ。そして、地面を抉る程強く蹴り抜き、彼女は天へと躍り出る。驚くクシャルダオラの真正面へと至った彼女は、そこから一刀両断に鬼神斬破刀を振り下ろす。迸る猛烈な電撃と共に放たれた一撃はクシャルダオラの頭殻を粉砕する。

「ギャアアアアアアアアッ！」

悲鳴を上げ、クシャルダオラはバランスを崩して落下する。地面へと横倒しになった瞬間、猛烈な砲火が彼を襲う。

中距離からはフィーリアが徹甲榴弾ＬＶ２による攻撃。同じくクリュウも打ち上げタル爆弾Ｇを水平発射して猛烈な爆撃を行う。二人共、まるでサクラが鋼龍を撃墜するのを予感していたかのような速攻だ――否、予感ではない。二人は確信していたのだ。

サクラなら、やってくれると。

徹甲榴弾ＬＶ２と打ち上げタル爆弾Ｇの猛烈な砲火にクシャルダオラは悲鳴を上げる。そこへシルフィード、そして着地したサクラが殴り込みを掛ける。

勇ましい咆哮と共にシルフィードが鎌剣キリサキを振り上げ、一気に振り落とす。とっさにクシャルダオラは翼でガードしようとするが、シルフィードは構わず力の限り一気に剣を叩きつけた。凄まじい切れ味を誇るキリサキは、まるで彼女の想いに応えるかのように光輝き、鋼翼を斬り裂いた。

シルフィードの斬鉄の一撃は、そのままその下のクシャルダオラの脇腹をも斬り裂き、鋼が飛び散り、真っ赤な血がキリサキの青い刀身とクシャルダオラ自身の鉛色の身を鮮やかに染め上げる。

クシャルダオラの背後からは雷撃姫が再び襲い掛かる。神鳴を轟かせ、雄叫びを上げながら突っ込むサクラ。鬼神斬破刀は彼女の想い

に応えるように激しい雷撃を迸らせ、蒼雷で彼女自身も包み込む。凄まじい電圧が、サクラの黒く艶やかな髪を逆立てる。咆哮しながら突っ込む彼女のそんな姿は、まるで獣を思わせるかのようだった。

後ろ足を狙って、サクラは怒涛の剣撃を浴びせる。右へ左へ踊るようにステップを決め、刃の威力が最大になる角度を自在に操りながら、激しい剣撃をの嵐。迸る電撃も更にその威力を上げて行き、雷撃の爆音が辺りを劈く。

打ち上げタル爆弾Ｇ攻撃を止め、クリュウも接近戦へと切り替える。二人に遅れてクシャルダオラへと剣を持って襲い掛かるクリュウ。しかしクシャルダオラもいつまでも倒れている訳ではない。体勢を立て直し、起き上がるとその場で後ろ足だけで立ち上がり、咆哮を轟かせる。至近距離でこれを受けたサクラは身動きが取れなくなった。すぐにシルフィードが彼女の肩を掴んで後ろへと放る。その行動を察知していたかのようにクリュウが背後から彼女を抱きとめた。

怒り状態となったクシャルダオラはすかさず風ブレスで三人を吹き飛ばそうとするが、フィーリアの放った徹甲榴弾ＬＶ２が頭部に命中。炸裂する爆発に意識を逸らされた。その隙に三人は鋼龍と距離を取った。

距離を取り、態勢を立て直す三人。

「……助けてくれてありがとう、クリュウ」

「いや、助けたのはシルフィだよ」

「そうだぞ。礼を言うなら私に言うべきだ」

「……私達の間に礼なんていらない」

「君は本当に欲望に素直だな。呆れを通り越して感心すらしてしまうぞ……」

命懸けの戦いの最中でも、ある意味自分のペースを崩さない。それがサクラ・ハルカゼという娘だ。そんな彼女の姿勢を改めて見て、思わず苦笑を浮かべるクリュウとシルフィード。しかしすぐに狙われたフィーリアの援護に走る。

フィーリアを狙って突撃したクシャルダオラの背後からまずサク

ラが斬り掛かる。だが寸前でクシャルダオラは上空へと舞い上がった。空中で振り返った鋼龍は背後から迫っていたシルフィード目掛けて上空から襲い掛かる。鋭い爪を振り上げ、一気に振り落とす。上空からの強襲攻撃に対し、シルフィードは回避できないと判断してガードする。

鋭爪が刀身にぶつかった瞬間、甲高い金属音と共に激しい火花が迸る。頭上からの衝撃にシルフィードは顔を苦悶に歪めながら足を踏ん張って耐え抜く。力で押し切ろうとするクシャルダオラは更に力を込めようとするが、そこへ側面からサクラが斬り掛かる。だが寸前でクシャルダオラ滑るようにこの攻撃を回避した。

不発に終わった一撃に舌打ちしつつも、サクラはすぐに反転してクシャルダオラを追う。そのクシャルダオラの足元に先回りしていたクリュウが攻撃を開始するのが彼女の目に映った。

「クソッ、剣が届かないッ」

クリュウは剣を掲げるように斬りつけるが、片手剣の短い刀身ではなかなか浮遊（ホバリング）しているクシャルダオラに届かない。苛立つ彼に向かってサクラが「……クリュウ離れてッ」と叫びながら突っ込んで来る。クリュウはすぐに彼女の邪魔にならないように撤退する。片手剣に比べてリーチの長い太刀なら、何とか届くかもしれない。

自分は奴が降りて来たら攻撃すればいい。そう思い、鋼龍から距離を取る。だがそんな考えを元に行動する彼に対し、クシャルダオラがサクラを無視して襲い掛かる。

突如クシャルダオラは上空で体を水平にすると、逃げるクリュウ目掛けて滑空突進で迫る。慌てて加速したサクラだったが、振り下ろした剣先はわずかにクシャルダオラには届かなかった。

迫るクシャルダオラに対し、クリュウは盾を構える。直後に激突し、クリュウは跳ね飛ばされた。地面の上を転がるようにして倒れたクリュウだったが、すぐに起き上がると横へ跳んだ。そこへクシャルダオラの放った風ブレスが炸裂。一瞬前まで彼が倒れていた場所が抉り飛ばされる。

攻撃を回避したクリュウを狙って更なる風ブレスを撃ち放とうと構える鋼龍。それを側面からシルフィードが阻止に掛かる。構えたキリサキを雄叫びを上げながら一気に振り落とす。強烈無比な一撃はクシャルダオラの鋼の鎧を砕き、血を迸らせる。
悲鳴を上げ、クシャルダオラは後方へと滑るように移動する。それを追撃するようにサクラが怒涛の勢いで突貫を仕掛ける。
一方で倒れたクリュウにフィーリアが駆け寄るが、クリュウは「大丈夫」と言って一人で立ち上がった。
「あれだけの傷を負っていても、やはり侮れませんね」
驚嘆するフィーリアの言葉にクリュウは静かに頷いた。
「さすが古龍……やっぱり一筋縄じゃいかないね」
「ですが、やはりこれまでのクリュウ様の奮闘で弱っている事は確か。気を緩める事なく、確実に攻撃を積み重ねていけば、押し切れます」
「そうだね。それに、何とか今日中に決着をつけないとね」
「確かに、これ以上の戦闘は避けたい所ですよね」
「もちろんそれもある。でも、僕にとっては今日は特別な日なんだ」
「特別な日？」
訝しがるフィーリアの問いに、クリュウはふと村の奥の方を見詰める。その先にあるのは――村の共同墓地。
「――今日は、母さんの命日だから。ちゃんと、あいつと決着をつけないと」
クリュウの口から語られた言葉に、フィーリアは目を丸くして驚く。
「……いつから、気づかれていたのですか？」
「って事は、フィーリアは気づいてたんだ」
「は、はい。シルフィード様が――あの鋼龍はきっとクリュウ様のお母様、アメリア様を討った仇敵だと」
「そっか……」
驚くフィーリアに対し、クリュウはとても冷静だった。今目の前に居るのが、母親を殺した相手だとわかっているのに、彼は怒り狂う事もなく、ただ平静で武器を構えている。あまりにも静かな彼の様子

に、フィーリアは訝しがった。
「どうして……」
「古龍は情報が少ないけど、でも基本的な行動原理は解明されている。教科書にも、鋼龍は約十年周期で特定の場所で脱皮するって書いてあったからね。母さんが死んだのはまさにこんな天候の時だった。そして、周期的にも重なる。何より、あの母さんが敗北したような相手だ。それが並のモンスターじゃない事は確かだ。これらの要因を考えれば――奴が母さんを殺した相手だって事は予想できる」
淡々と語る彼の言葉に、フィーリアは首を激しく横に振った。
「違います。なぜ、そんなにも落ち着いていらっしゃるのかとお尋ねしているのです。相手はお母様の仇、村を壊されたという恨みも加われば、普通なら憎悪の対象です。なのに、なぜクリュウ様は……ッ」
「復讐からは何も生まれない。そうサクラに言ったのは僕だ。だから、僕は相手を恨んだりしない」
「でも……ッ」
「――もう、過去の事だよ」
「……ッ！」
静かに語る彼の言葉に、フィーリアは言葉を失った。そこにあったのは、どこか淋しげに微笑む彼の姿。いつも自分達を励ましてくれるあの優しげなものとはまるで違う、冷たい笑顔だった。
「今更あいつに恨みを抱いて倒しても、母さんは戻って来ない。それに、ただ復讐の為だけにあいつを倒したら、僕の身を案じて集まってくれたルフィール達に申し訳がないでしょ。僕にとって母さんは大切な存在だ。同時に、ルフィールやフィーリア達も僕にとっては大切な存在。その想いを、自分の自己満足の為に踏みにじりたくはない」
「クリュウ様……」
「言ったでしょ？　僕達の戦いは、村を取り戻す為の戦い。復讐の為じゃない、明日を取り返す為の戦い。それに、母さんはきっと僕に復讐なんて望んでほしくはないと思ってるから――あの人は、本当に僕の事を愛してくれてたから。僕の幸せを、本当に願ってくれていたから」

そう言って彼が浮かべた笑顔を見て、フィーリアの口元にもわずかな笑みが浮かんだ。
そう、この笑顔だ。
幸せそうに、明るく、優しく微笑むクリュウ。その笑顔は、本当に素敵だった。人の為に一生懸命になれる、お人好しな、彼の優しい笑顔。自分やサクラ、シルフィードにエレナ、様々な人が、この笑顔に助けられて来た。
相手が母親の仇だとわかっていても、皆の想いを考えてすでに自分の中で決着をつけているのだ。
どうやら、自分の心配は杞憂だったらしい。
「そうですね。あと少しで、イージス村を私達の手に取り返せます。その為にも、明日の為にも、私達は勝たないといけない――絶対に勝ちましょう」
「言われるまでもないよ」
笑顔で語るフィーリアに、クリュウもまた笑顔も返す。だがその笑顔もすぐに消え、真剣な面持ちで前方に向き直る。その視線を追うと、サクラとシルフィードの猛攻に耐え、二人を跳ね返す鋼龍クシャルダオラの姿があった。
「一旦態勢を立て直すよ」
そう言ってクリュウは道具袋(ポーチ)から閃光玉を取り出すと、クシャルダオラに向けて投擲。炸裂する閃光玉の輝きがクシャルダオラの視力を奪い、前線の二人が後退する。代わりにクリュウとフィーリアの二人が突撃する。
下がったサクラとシルフィードはすぐに砥石を使って衰えた切れ味を正す。同時に携帯食料でスタミナを回復させる。そのわずかな隙を作り、同時にその隙の間も戦いを挑むクリュウ。
突撃するクリュウを援護するようにフィーリアは銃撃を開始する。視力を奪われ、やたらに暴れるクシャルダオラはこの攻撃で敵の方向を掴み、そこに集中して風ブレスを連続で撃ち放った。だがこれはフィーリアの作戦だった。クリュウが突撃する方角とはまるで違う方向から攻撃し、相手をこちらに引き付ける。

フィーリアの作戦は見事達成し、クリュウは何の弊害も受ける事なく側面からクシャルダオラを奇襲した。まず二発の小タル爆弾Ｇを投擲し、突然側面から攻撃を受けた事で驚くクシャルダオラに対して今度は剣で斬りつける。

ようやくフィーリアの攻撃が陽動だと知ったクシャルダオラはすぐにクリュウを迎撃するように爪を振り上げるが、そこへフィーリアの放った徹甲榴弾ＬＶ２が炸裂する。強力な爆発はこれまでの戦闘で疲弊していた鋼龍の鋭爪を砕く。爪が割れ、悲鳴を上げるクシャルダオラに今度は側頭部へ徹甲榴弾ＬＶ２が命中。

クリュウへの反撃をする暇もなく、クリュウはこの隙に連続して剣を叩き込んだ。だがそれも数秒の事。すぐにクシャルダオラは視力を回復し、敵の姿を確認して今度こそ反撃に出る。至近距離で踏み潰そうと突撃を仕掛けたのだ。だが、それを遮るように背後からサクラとシルフィードが攻撃を仕掛ける。二人同時に刀と剣をそれぞれ構え、無造作に投げ出されている尻尾に向かって刃を翻す。その一撃は一瞬硬さに弾かれそうになるが、構わず力を入れると刃は尻尾の中へと入り、次の瞬間――尻尾は先端部分から先が斬り飛ばされた。

「ギャアアアアアアアアアッ!?」

切られた尻尾から大量の血を流しながら激痛に悶え苦しむクシャルダオラ。だが痛みに苦しんでいる暇もなく、サクラとシルフィードは追撃。互いに連携しながら左右から同時に攻撃を仕掛けた。

シルフィードは一撃必殺の重量級の剣撃を。サクラは鮮やかにして怒涛の剣撃の嵐を。二人の猛攻に、クシャルダオラは怒り狂いながら反撃に出る。だがそこへ今度はクリュウの撃ち放った打ち上げタル爆弾Ｇが二発命中する。黒煙に視界を封じられた一瞬、晴れた次の瞬間には目の前に剣を構えたクリュウの姿があった。

「喰らえッ！」

クリュウは振り上げた煌竜剣（シャイニング・ブレード）を勢い良く振り落とす。炸裂する一撃はクシャルダオラの側頭部に炸裂する。火花を散らせながら鋼の鎧と煌竜剣（シャイニング・ブレード）の刃がせめぎ合い、深い傷跡を残した。それはかつて彼の母が遺した傷跡

をなぞるように抉っていた。
クリュウの攻撃を援護するように三人も連携して攻撃する。だがクシャルダオラはこれらの攻撃から脱するように空中へと脱する。そのまま四人から距離を取って着地すると威嚇の声を上げ、怒り狂いながら反撃の突撃を仕掛ける。
軽やかな足取りでの速攻突撃。迫り来る鋼の鎧に対して四人は避けようと散開するが、クシャルダオラは突如四人の前方で再び飛び上がると、そこから辺り一面を薙ぎ払うように滞空放射ブレスを放つ。地面を抉りながら横一直線に炸裂した風ブレス。抉られた土片が空を舞い、雨のように辺りに降り注ぐ。
四人は抉られた地面の後方へと集結し、態勢を立て直す。
サクラとシルフィードが前面に出て、フィーリアを守るようにクリュウが前に出る。集結した四人はゆっくりと地面へと降り立つクシャルダオラを警戒しながら注視する。そんな中、クリュウはふと空を見た。
相変わらず空は曇天が覆い隠しているが、よく見れば所々に穴があき、そこから日の光がわずかに大地へと注いでいる。辺りの風もいつの間にかかなり弱くなっている。
鋼龍は嵐と共に現れる。この異常な気象現象はおそらくあの古の龍王の力なのだろう。だとすれば、雲が緩み、風が勢いを失っているこの状況は、奴の力が弱まっている証ではないか。
あの古の龍王が、いよいよその力を失おうとしている。それ程までに、自分達は奴を追い詰めているのだ。あと少し、あと少しで――勝てる。
手に持つ、従姉妹イリスから預かった煌竜剣(シャイニング・ブレード)は、まだまだ戦える。美しく刃を煌めかせるそれは、まるでイリスが自分を鼓舞しているかのようだ。
体は正直もう限界に近い。ぶっ通しでずっと鋼龍と戦っているのだ。疲労もかなり蓄積しているし、正直全身が痛い。それでも、あと少しなのだ。
最初に会った時、まるで敵わなかった鋼龍。でも、それをあと少し

まで自分達は追い詰めている。
あと、少しなのだ。
ゆっくりと着地したクシャルダオラ。だが一瞬踏み外したのかバランスを崩す。すぐにたて直すが、それは奴がもう疲れ切っている証拠だ。
クリュウはゆっくりりと前に出る。シルフィード、サクラの横を通り抜けて最前面へ。クシャルダオラの視線が自分に向くのを待ってから、クリュウは不敵に微笑む。
「さぁ、力尽きるまで戦おう。思う存分、後腐れなく、決着をつけるぞ鋼龍ッ！」
「グオオオオオォォォォォォッ！」
雄叫びを上げ、クリュウとクシャルダオラが突撃する。三人も彼を追って突撃。
激しい激戦は、それからしばらく続いた。
轟く大爆音。イージス村の西側、崖沿いに面した小さな平野で巻き起こった爆風は辺り一帯の土や草を吹き飛ばし、木々は激しく枝を揺らす。
天高く上って行く漆黒の黒煙と、荒々しいまでの火柱。それはクリュウが残された最後の大タル爆弾Gを爆発させたものだった。しかし火炎の柱の中から逃げるようにして鋼龍は現れる。全身は満身創痍と言うに相応しい程に壊れ、鋼の鎧はひび割れ、変形していた。もはやそよ風程度の風すらも起こせず、着地すると同時に膝から崩れ落ちる。
そんな彼を包囲するようにクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードが展開する。だがそのいずれも顔も疲れ切っていた。特にクリュウはサクラの肩を借りて何とか立っていられる程にまで弱っていた。他の三人と違い、ずっとこの村で激闘を繰り広げていたクリュウ。すでに、その体力は限界に達していたのだ。
更に、今の攻撃で最後の大タル爆弾Gも使ってしまった。村中に設置してあった様々な道具類もほぼなくなり、事実上これが最後の作戦だった。後は、文字通り己の体のみの戦い。しかしその肝心の体はす

でに疲労でまともに動かない。クリュウは気力だけで戦っていたが、もはやそれも尽きかけていた。
荒い息を繰り返し、濁った瞳で懸命にクシャルダオラを睨みつける。せめて闘志だけは失わまい。そう必死になる彼の姿はあまりにも痛々しく、サクラは目を合わせる事ができなかった。
フィーリアはそんな彼を心配しつつも、ハートヴァルキリー改を構える。新たな弾を装填（リロード）し、銃口をクシャルダオラに向ける。シルフィードもキリサキを構え、最前線に挑み出る。
まだこちらへ向かって来る敵に対し、クシャルダオラは威嚇の咆哮を轟かせる。それは血を吐きながらの濁った雄叫び。それでも、敵に対して一切の手抜きもなく戦おうとする彼の本気に、離れてはいても恐怖心を抱かずにはいられない。フィーリアの銃口は震え、キリサキを構えるシルフィードの目が鋭くなる。
「決着をつけるぞ。ここで奴を仕留めるッ！」
意気込むシルフィードの声にフィーリアは頷き、再び銃を構え直す。その時、辺りを支配していた黒煙が晴れ、一帯の景色が一望できるようになった。その瞬間、フィーリアは声にならない悲鳴を上げた。
突然、フィーリアから戦意が失われた。それを感じ取ったサクラが瞳を鋭くさせる。
「……何をしているの？　銃を構えなさい」
「だ、ダメです。ここじゃ戦えませんッ」
「……なぜ？」
「だってここは――」
濁った瞳でクリュウが辺りを見回すと――そこは墓地だった。
いつの間にか四人はクシャルダオラを追い詰めて村の奥地、この西端に位置する村の共同墓地にまで達していたのだ。先程の爆発では奇跡的に墓石などに被害はなかったが、ここで戦えば墓地が破壊される事など明らかだった。
「こんな所では戦えませんッ」
「……そんな余裕はない。ここで奴を倒す」

「眠る死者の上で、争いなんてできませんッ！」
「決していい気持ちはしない。だが、こちらもいっぱいいっぱいなんだ。ここで奴を押し切れなければこちらの負けだ。覚悟を決めろフィーリア」
シルフィードの言葉に食い下がろうとするフィーリアだったが、サクラの肩を借りて立っていられるのがやっとのクリュウの姿を見て、悩んだ末に再び銃を構えた。これ以上、彼に負担を強いてはいけない。そう判断した結果だった。
いつの間にかすっかり空の雲は消え、辺りは夕焼け色にそまっていた。気づかない間に、どうやら夕暮れを迎えていたらしい。この村の共同墓地は西端に位置している為、海に没する夕陽を一望できる。空も海も大地も、全てが茜色に染まっている。
傷ついた鋼龍の体も、鉛色ではなく温かな夕日色に染まっていた。迫り来る敵に対し、力を振り絞って立ち上がる。ここで決着をつける、それは彼も同じだった。
例えここで敗北しても悔いはない。邪魔な敵に阻まれもしたが、自分は彼との戦いを思う存分戦えた。勇気あるこの少年との戦いは、実にやりがいがあった。今まで多くの敵と戦って来たが、こんな気持ちは彼女以来だった。
もしも悔いがあるとすれば、やはりもう一度彼女と戦いたかった。
覚悟を決め、血反吐を吐きながら鋼龍は最期の突撃を仕掛けようと姿勢を低くする。相手もこちらの意図を察してか迎撃の構えを見せる。
一瞬の沈黙、そして敵に向かって壮絶怒涛の突撃を仕掛けようと大地を蹴る――寸前、風が吹いた。
自分の力とは違う、自然の風。普通なら気にも留めない、柔らかなそよ風。だが、彼の突撃は止まった。
突然動きを止めた鋼龍に対し、迎撃の構えを見せていた四人もまた困惑する。なぜなら、これまで辺りを支配していた殺気や緊迫感が、今の一瞬で全て消えてしまったからだ。まるで、クシャルダオラから戦う意志が失われたかのような、そんな奇妙な感覚。

訝しがるフィーリア、サクラ、シルフィード。だが、そんな中クリュウだけは気づいていた。先程まで自分達を向いていたクシャルダオラが、今は別の場所を見詰めている事に。
「そっか……」
クリュウはゆっくりとサクラから離れると、心配する彼女を置いて一人クシャルダオラに近づく。驚き付き従おうとする三人を制し、クリュウはたった一人でクシャルダオラに近づく。鋼龍は、そんな彼の接近にも気づいていないようだった。
そよ風の中にあった、一瞬の香り。それは、忘れもしないかつて激闘を繰り広げた彼女の香りだった。
なぜ今頃彼女の匂いがしたのか。不思議に思い、匂いのした方向を見ると、そこには妙な石が置かれていた。決して自然にできたものではなく、作られたものだとわかる十字架。匂いは、わずかだがそこからしていた。
なぜ、彼女の匂いが土の中からするのか。十字架や墓地という概念がない彼でも、その意味を察するのに時間は掛からなかった。
――そうか。彼女はもう……
「ごめんねクシャルダオラ。母さんは、もうこの世にいないんだ」
これまでとは違い、優しげな敵の声に振り返ると、そこにはたった一人であの少年が立っていた。こちらを、どこか淋しげな視線で見上げている少年。その悲しげな微笑みが、かつての彼女と重なった。
そして、全てを悟った。
なぜ彼と彼女が似ていると思ったのか。
なぜ彼との戦いが、まるで彼女との戦いのように楽しかったのか。
なぜこの土の下から彼女の香りがするのか。
そしてなぜ――彼があんな笑顔を浮かべているのか。
人間とは異なる思考を持つモンスター。だがこの瞬間人間とモンスターの心が通い合った。
クシャルダオラはゆっくりとアメリアの墓石の前に座ると、鼻先で十字架に触れる。
……あぁ、そうか。君はもう――死んだのか。

胸の奥に、言いようのない虚無感。ぽっかりと穴があいたような、そんな感覚。これまで感じた事のない感情が溢れ、視界が歪む。
それは、彼が生まれて初めて感じた感情――悲しみ。
刹那、クシャルダオラは天高く咆哮を轟かせた。
辺りに居る敵に威嚇するものではなく、悲鳴にも似たその声は、まるで彼の龍が泣き叫んでいるかのように感じられた。
アメリアの墓の前で、ただひたすらに咆え続ける鋼龍クシャルダオラ。この行動を、クリュウだけではなく他の三人も理解した。そして、ゆっくりと武器を下ろす。
もう、彼に戦う意志はない――戦う理由が、なくなった。
「モンスターと人間。決して互いに理解し合う事などできない。そう思っていました」
「……何を当たり前の事を言ってるの」
「だが、今この瞬間だけは、それを撤回してもいいのかもしれんな」
三人の言葉に、クリュウは何も答えない。ただ、無言で泣き叫ぶクシャルダオラを見詰め続けていた。
クシャルダオラの絶叫は、まるで永遠にも感じられた。だがその実は数十秒程だった。口を閉じ、ゆっくりと振り返ったクシャルダオラの瞳にはすでに先程までギラギラと輝いていた闘争心は失われていた。そしてそれはクリュウもまた同じ。濁った瞳はいつの間にか澄んだものに変わり、柔らかなカーブを描く。
「僕達が戦う理由は、なくなった。鋼の龍王よ、君は君の世界に帰るんだ。お互い、自分達の日常に戻ろうよ」
クリュウの言葉に、三人は目を見張る。慌ててフィーリアが「何を言っているんですかッ!? 決着をつけないとッ!」と駆け寄る。
「……奴を倒す。そう決めたはず」
「いいのか?」
サクラとシルフィードも駆け寄って来るが、すでにクリュウには戦う力も気もなかった。穏やかに微笑みながら、クシャルダオラを見上げる。
「今度は、僕が君の所に行くよ。その時こそ、決着をつけよう。いい戦

いだった――ありがとう」
クシャルダオラに向かって礼を言う彼の言葉に、三人はもう黙るしかなかった。愛する彼が決めた事、自分達はそれに従う。何よりも、普通に考えればおかしな事のはずなのに、実に彼らしいと思ってしまう。
剣を納めた敵を見て、全てを悟った鋼龍クシャルダオラ。そして――
大きく翼を広げ、鋼龍は飛び上がった。
ゆっくりと高度を上げて行き、遥か彼方まで上り上がると、そこから西の空に向かって飛んで行った。
夕陽に向かって消えていく鋼龍。クリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人は静かにその姿が消えるまで見送り続けた。
茜色に染まる村を舞台にした一頭の古龍と、一人の少年とそれに協力する為に集まった戦士達の戦いは、ここに幕を閉じたのであった。

第２２９話　勝利の朝に集いし仲間達との再会

鋼龍クシャルダオラが村を去ってから数時間後、クリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人は安全を確認した後に避難壕へと退避。そこで負傷して動けずに居たルーデルと再会した。彼女は眠る事なく、ずっと彼の帰りを待っていた。

「そう、撃退したんだ」

クリュウ達から鋼龍との戦いの行く末を聞いたルーデルは噛みしめるように聞くと、そう静かに呟いた。

「あんたらしいっちゃ、あんたらしいわね」

「そうかな」

微笑みながら語る彼女の言葉に、クリュウは苦笑を浮かべながら答えた。命懸けの戦いの結末が、撃退。それも自分の勝手での選択だ。命懸けで戦ってくれた彼女に申し訳ないと思っていたクリュウだったが、ルーデルは決して彼を責めようとはしなかった。むしろ、彼らしいと笑ってくれた。

「それよりルー、怪我は大丈夫？」

「平気よ。ちょっと足を痛めたくらいだから」

心配するフィーリアに対し、ルーデルは笑顔で大丈夫と答える。実際、彼女の主だった怪我は足の負傷だ。数日もすれば回復するだろう。

ルーデルの具合が悪くない事を知り、ほっとするクリュウ。安堵して彼女から離れようとした時、

「あ……」

「……危ない」

一瞬視界が歪み、思わず倒れそうになった。それを隣にいたサクラが気づき、受け止めてくれた。結果、彼は倒れずに済んだ。

「あ、ありがとう」

「……クリュウ、疲れてる」

この場に居る面々の中で、彼が一番疲労しているようだった。それもそうだろう、古龍相手に二日間ほとんど休む事なく激闘を繰り広げ

ていたのだから。
「少し休んだ方がいい。後の事は、私達がやっておく。君は少し寝ていろ」
そう言ってシルフィードは彼をゆっくりと横にする。横になったクリュウにサクラがすかさず毛布と枕を用意した。いつもの彼なら「大丈夫」と言って無理しようとし、すぐに三人に止められて仕方なく休む、そんな流れだ。だが、
「ごめん……」
クリュウはそう一言謝ると、そのまま眠りについてしまった。どうやらもうそんな事を言う余裕すらも彼にはなかったらしい。
疲労困憊のあまり眠りについてしまった彼を見て、彼に尋常ならざる負担を強いてしまった事に三人の顔が曇った。そんな彼女達に対しルーデルは「そんな顔しないのよ」と声を掛ける。
「別に大怪我してる訳じゃないんだし、疲れてるだけなんだから」
「そ、そうだけど……」
ルーデルの言葉にフィーリアは納得していない様子だったが、そんな彼女の肩をシルフィードが優しく叩く。
「君が責任を感じる必要はない。彼を村に残して遠征に出る結論を出したのは私だ。すべての責任は、私にある」
「そ、そんな事はありませんッ。私だってその提案に賛成したんです。だから私だって……ッ」
「はいはい、話はそこまでね。あんまり大きな声出すとせっかく寝たあいつが起きちゃうでしょ」
呆れるルーデルの言葉にフィーリアは慌てて口を閉じる。クリュウの方を見ると、どうやら彼は起きる様子もなく静かに寝息を立てていた。ほっと安堵するフィーリアに対し、ルーデルはケラケラと笑う。
「ったく、フィーちゃんは真面目過ぎるのよ。フィーちゃんが責任感じる必要はない。それはあんたやサクラも一緒よ。むしろ、あんた達が妙な顔をしてる方が、こいつの為にならないわ」
ルーデルの言葉に、シルフィードは「それはわかっているが……」と

理解を示す。示すものの、やはり自らの決断に責任を感じているのだろう。
　根が真面目過ぎる二人の様子に、ルーデルは呆れながらため息を零す。どうしたもんかと頭を悩ませるルーデルだったが、ふと二人しか姿が見えない事に気づく。気になってサクラの姿を探すと……
「……温かい」
「さりげなくあんたは何してんのよッ！」
　ルーデルの怒鳴り声に振り返った二人が見た光景、それは眠っているクリュウの背中に抱きついて添い寝にふけこんでいるサクラの姿だった。
「さ、サクラ様ッ！　一人で何をしてやがりますかッ！」
「き、君は何をふしだらな事をしているんだ……ッ！」
　三人掛かりでクリュウからサクラを引き剥がす。すると当然サクラはものすごく不満そうな反応を示す。
「……何をする」
「君は、本当にブレないな……」
　呆れを通り越して感心すら覚えるサクラの大胆不敵な行いに、シルフィードは苦笑を浮かべる。フィーリアは「お疲れになっているクリュウ様に、あなたは何をしているんですかッ！」と至極まっとうにサクラを叱りつける。ルーデルは頭が痛いとばかりに頭を抱えていた。そんな三人に対し、サクラは相変わらずの無表情だ。
「……避難壕は冷える。寒がるクリュウを温めていただけ。貴様らに配慮して服を脱いで直接体温で温める方法は取らなかっただけ、私は十分貴様達に譲歩している」
「……君は一度、本当に初等教育から学校に通ってその捻じ曲がり過ぎて原型を留めていない常識感覚を矯正した方がいいな」
「は、肌と肌を合わせてって……不潔ですッ」
「でもフィーちゃんはいずれあいつとそうなりたい訳よね？」
「ルーッ！」
「……あぁ、すまんがその辺にしておいてくれ。いよいよ本気で頭が痛くなって来た」

ギャーギャーと騒ぐ面々を前に頭を抱えるシルフィード。だが、
「……ふふふ」
「……シルフィード？」
突然顔を手で押さえたまま笑みを零す彼女に対し、周りの面々が訝しむ。それらに対しシルフィードは謝りながらゆっくりと顔を上げる。何かがおかしそうに笑いながら、シルフィードは静かに口を開く。
「いや、さっきまで古龍と死闘を繰り広げていたとは思えない程、実にいつも通りな気がしてな。おもわず笑ってしまった」
「ったく、全くもってその通りよ。緊張感のカケラもない」
シルフィードの発言にその通りだと同意するルーデルだが、率先してそんな空気を作っていたのは彼女であり、隣に立つフィーリアは何とも言えない愛想笑いを浮かべる。
「だがまぁ、その方が私達らしいがな。せっかくの勝利だ」
「……勝利？　これが本当に勝利って言えるの？」
この方が自分達らしいと笑い飛ばすシルフィードの発言に対し、クリュウの寝顔を見詰めていたサクラがふざけるなと言いたげに反論する。上げられた顔は相変わらず無表情だが、その隻眼が並々ならぬ怒りに染まっている事くらい、この場に居る全員にもわかる。
「……確かに、私達は鋼龍を迎撃した。迎撃戦という定義では、確かに勝利したと言える。だが私達の任務はこの村を守る為の防衛戦。迎撃戦でも討伐戦でも、ましてや侵攻作戦でもない。防衛戦という意味で考えれば、村は事実上の崩壊。戦術的には辛勝だったとしても、戦略的には敗北。貴様は、その程度の事もわからないのか？」
サクラの冷たくも怒りに染まった言葉の数々に対し、その場に居る全員が誰も反論する事はできなかった。彼女の発言は正論であり、自分達は確かに鋼龍クシャルダオラを撃退した。だが、肝心の村は大損害を受けた。必ずしも、勝利とは言えない。
「わかってるわよ。それに、それはクリュウ自身も自覚してた。この戦いには勝利はない。意地と誇りだけの戦いだって。私達の戦いは、強いて言えば惨敗を惜敗にした。それくらいでしかない」

ルーデルの言う通り、自分達は決して勝った訳ではないのだ。あくまで、村を恒久的に脅かす存在となる可能性のあった鋼龍クシャルダオラを撃退したに過ぎない。主戦場は当初イルファ山脈だったが、実際は防衛の要であったイージス村。激しい戦闘で村は壊滅的被害を受けている。

鋼龍クシャルダオラからイージス村を解放した。強いて断言できる事があるとすれば、恐らくはその程度だろう。

「だが、起きてしまった事をいつまでも悔やんでいても仕方がない。これから先の事を考えるにしても、まずはクシャルダオラが常駐していては何もできないからな」

そう言って悲観的になる面々を元気づけるのはシルフィード。皆が一様に暗い表情になる中、彼女は努めて明るく振る舞う。リーダーとして、年上の先輩として、常に皆を導いてきた彼女だからこそ、こういう時には頼りになる。

「これから先の事は、私達にはどうしようもない。村の今後については、当然長である村長の判断を仰がなければならないからな。だが、これだけは言える」

悲壮に染まる皆に対し、シルフィードは一人ひとりその頭を少し乱暴に撫でる。突然の事に何がなんだかわからず呆然とする仲間達に対し、シルフィードは満面の笑みを浮かべながら労いの言葉を掛ける。

「――みんな、お疲れ様」

「……私は、夢でも見ているの？」

「いや、たぶん現実だと思う。僕も、正直信じがたいけど」

「れ、歴史的瞬間とは、こういう事を言うのでしょうか？」

「だとしても、これはさすがに非現実的過ぎない？」

「いやはや、中央大陸史上空前の大集結だな」

鋼龍クシャルダオラを撃退した翌朝、鋼龍が去った事で空はこれまでとは打って変わって快晴だった。

あまりにもいい天気の為にゆっくりと体を休めていたクリュウ達。そんな彼らの穏やかな朝はすぐに消し飛んだ。

あまりにも非現実的な光景にクリュウ、サクラ、フィーリア、ルーデル、シルフィードの五人は呆然と立ち尽くす。彼らの視線の先には、それこそ小説の中でしかありえないような光景が広がっていた。
イージス村上空にはアルトリア王政軍国空軍主力艦隊、女王艦隊の飛行船が展開。
イージス村沖合にはエルバーフェルド帝国国防海軍主力艦隊、大洋艦隊の大艦隊が停泊。
イージス村の周りにはエルバーフェルド国防陸軍独立歩兵師団所属の兵隊とハンターギルドの支援部隊、及びドンドルマハンター養成訓練学校学兵隊の一部が展開していた。
大陸北部の小さな村に、二国一都市の総勢一万人を超える人々が集結していた。大陸史上最大規模の支援部隊が到着したのだ。
「先輩ッ！」
「兄者ッ！」
村の崖下に建てたれた仮設テントの数々。エルバーフェルド陸軍と同海軍陸戦隊及び設営部隊が設営した臨時の対策本部だ。そのうちの一つのテントの中にある会議室で、エルバーフェルド兵に案内されるまま入ったクリュウを出迎えたのは、第二次避難隊護衛隊として離別したルフィールとシャルルだった。
クリュウの姿を見た途端抱きつく二人に、クリュウは倒れそうになるが何とか踏みとどまって二人を抱きとめる。
「二人共、無事だったんだ。良かった……」
「それはこっちのセリフっすッ！　滅茶苦茶心配したんすよッ!?」
涙目になりながらクリュウの無事な姿を見て安堵するシャルルに対し、クリュウは申し訳なさそうに「ごめん」と謝る。一方、シャルルとは反対側の腕に抱きついているルフィールも同じく涙目になりながらも、小さく笑みを浮かべた。
「ボクは、先輩を信じていました。先輩なら、決してあのような愚龍に遅れをとらないと」
「しゃ、シャルも信じてたっすよッ！　本当っすよッ！」
「……そっか、ありがと二人共」

自分の事を心から心配してくれていた可愛い後輩二人を、クリュウは微笑みながら優しくその頭を撫でる。大好きな彼の温かな手で頭を撫でられ、二人はまるでアイルーのように目を細めて笑みを浮かべる。

クリュウの腕の中で彼に甘える二人。普通なら何とも感動的な光景で、皆が祝福の拍手の音色を奏でていただろう。だが、ここに集まった面々は見事に偏っていた。

「……貴様ら、そこは私の定位置だ。その聖域に踏み入るなら、年下と言えど容赦はしない」

「く、クリュウ様はどうしてそう女の子の頭を平然と撫でられるんですかッ!?」

「感動的な光景だって事はわかる。でも、イラッとするのよねぇ」

早速サクラ、フィーリア、ルーデルの三人が後輩二人の横暴に対して抗議する。だがいずれも自分よりも年もランクも上のハンター相手とはいえ、ルフィールとシャルルも根は負けず嫌いな娘だ。

「う、うるせぇっすッ！　シャルだって、兄者に甘えたいっすよッ！」

「ボクは先輩と話をしているんです。外野は黙っててください」

見事に睨み合う事になった五人の恋姫達。まだ会議室に入ったばかりだと言うのに、すでに騒々しいクリュウ達。原因である自覚があまりないまま仲裁に入って余計に事態をややこしくするクリュウを、背後に立つシルフィードが苦笑しながら見詰める。

「ったく、来た早々に騒々しいわね」

「エリーゼ……」

呆れたように言いながらも、どこかおかしそうに笑うのは護衛隊隊長を務めてくれたエリーゼだ。その隣に立つレンもクリュウと目が合うと深く頭を垂れた。

「二人共、怪我もないみたいだね」

「当然でしょ。私を誰だと思ってんのよ」

「お兄さんも、ご無事で何よりです」

クリュウの無事な姿を見て安堵したのか、心の底から嬉しそうに笑うレン。その天使過ぎる笑顔にクリュウが思わず見惚れていると、

「……エリーゼ、顔がすごく怖いんだけど」
「レンを変な目で見たら、殺すわよ」
「どんな目だよッ！」
　レンを守るように彼女を背中に隠すエリーゼの目は、とてつもなく冷たい軽蔑の視線。なぜそんな道端のゴミを見るような目で見られないといけないのかと抗議するクリュウだったが、エリーゼは聞く耳すら持たずレンを連れてさっさと離れて行ってしまう。
　追いかけて誤解を解きたい所だが、すでに自分の周りでは三人の女の子がケンカをおっぱじめる寸前にまで陥っている。こっちの解決の方が先だ。
　どうしたもんかと彼が悩んでいると、
「そもそも先輩がハッキリしないのがいけないんです」
「そうっすよッ！　ここはキッチリケジメつけてもらわねぇと困るっすッ！」
「……クリュウ、浮気はダメ」
「えぇ……」
「両手に花どころか、君は一体どれだけの花束を抱えるつもりだい？」
「え、エルディンさん？」
　いつの間にか女の子同士のケンカが彼に対する不満の流出に変わり、あれよあれよという間に追い込まれていたクリュウに声を掛けたのは、全身に漆黒の軍服を纏ったエルバーフェルド国防陸軍独立歩兵師団団長のエルディン・ロンメル元帥だった。苦笑しながら声を掛けるエルディンに対し、クリュウは「な、何でエルディンさんがここに？」と疑問を投げかける。
「総統様の命令で、アルフレア救援の為にこのイージス村に部隊を率いて来たんだよ。まぁ、結局は無駄足だったようだがな」
「そ、それはわざわざありがとうございます」
「まぁ堅苦しいのはそれくらいにして――ほら、前を見てみろ。お前を助けに来たバカ連中がお集まりだぞ」
「え？」
　エルディンが指差す先を見ると、そこには――

「まったく、騒々しいですわね。心配して損しましたわ」
「おいおい、心配し過ぎて夜泣いてた奴が何言ってんだよ」
「なッ!?」
「はいはい、あなた達も静かにねぇ」
　会議室のテーブルの一角に腰掛けて騒いでいるのは、第二次避難隊の護衛に尽力したアリア、シグマ、フェニスの三人だった。驚くクリュウに対し、呆れ顔から一転して笑みを浮かべ、アリアはその場で立ち上がり優雅に一礼する。
「お久しぶりですわねクリュウ。鋼龍に戦いを挑むなんて、まったく無茶をして……でも、ご無事で何よりですわ」
「アリア、どうして君がこんな所に――」
「――妾が、エルバーフェルドとの同盟調印式に連れて来たのじゃ」
　忘れるはずがない。その懐かしい声にクリュウは声の主の方へと目をやる。そこには一人の少女が威風堂々と鎮座していた。
　優雅で気品にあふれた、しかし幼い彼女を無理に大人っぽくはしない、フリルは宝石を各所にあしらった高貴なドレスを身に纏った少女。長く美しい、まるで煌めいているかのように輝く銀髪をふわりと流し、王としての覚悟を秘めた意志の強い銀眼を嬉しそうに柔和に和らげ、静かに微笑む。まだ多少サイズの合っていないブカブカの王冠が、彼女の立場を表わしている。
　呆然とするクリュウに対し、少女は笑みを浮かべながら静かに立ち上がると、ゆっくりとした足取りで彼の前に至る。周りの人間が皆、自然と距離を取ってしまうのは、彼女が一国の長だという事はもちろんだが、その全身から溢れる高貴なオーラに思わず足がたじろいだからだろう。
「久しいなクリュウよ。元気そうで、何よりじゃ」
　そう言って健康的な犬歯を煌めかせながら微笑む彼女の名は、イリス・アルトリア・フランチェスカ。南洋に浮かぶ大国、アルトリア王政軍国を統べる女王にして――クリュウの従兄弟、イリスだった。
「い、イリス……」
「何じゃ。久しぶりの再会じゃというのに、ムードのない奴じゃの」

やれやれとばかりに呆れるイリスだったが、本当は誰よりもこの再会を楽しみにしていた人物だ。彼とは短いながらも強い絆を結び、互いの道を目指す為に別れた。本当は毎日のようにでも彼に会いたいのに、女王としての責務を背負っている彼女にはそれは許されない。
南洋の大国の女王と、大陸北部の小さな村に住む少年ハンター。身分も違えば離れている距離も遠い。お互いに親しい親族を持たない二人は、唯一無二の血の繋がりを持った家族と言える。
エルバーフェルドとの同盟調印が終われば、すぐにでも彼に会いたいと思っていた。そこに届いた彼の危機に、彼の身を案じ、どれだけ心配した事か。
だが、こうして今無事な彼と再会でき、自分のそれらは全て杞憂だったと確認できた。安堵し、思わず笑みが溢れる。
一見すると彼は大した怪我はしていなさそうだった。だが万が一という事もある。確認しようと彼に尋ねようと口を開いた瞬間――彼女の小さな体は彼の腕の中にあった。
「く、クリュウ……ッ!?」
「久しぶりだねイリスッ！　元気そうで良かったぁ」
イリスの小さな体を強く抱きしめ、本当に嬉しそうに笑いながら彼女との再会を喜ぶクリュウ。突然の事にイリスは顔を真っ赤にして狼狽した。
「な、何をするか無礼者ッ！　こ、こういう事は二人きりの時にじゃな……ッ！　えぇい、離さぬかぁッ！」
ジタバタと手足をいバタつかせて暴れるイリスだが、内心は満更でもない事は思わずにやけてしまっている彼女の顔を見れば一目瞭然だろう。
「まさかこんなに早くイリスに会えるなんて思ってなかったよ。あははは、相変わらず小さくて可愛いねイリスは」
「……ッ!?　う、嬉しくなくはないのじゃが、妾だって日々成長している身。その褒め方は素直に喜べぬ。複雑じゃのぉ……」
自分では少しは成長したと自負している控えめな胸を押さえながら、何とも複雑そうな表情を浮かべるイリス。そんな彼女の葛藤など

つゆ知らず、彼女との再会に大喜びするクリュウ。だが、そんな二人の間にキラリと光る刃物が……

「……あまりクリュウにベタベタするな。クリュウは私の夫だ。クリュウも、浮気はダメ。私よりも胸の小さい女に優しくしないで」

二人の間に刀を入れ、間に割って入ったのはサクラ。イリスを敵視するように威嚇しつつ、自らの悩みのタネである小さな胸を押さえながら淋しげにクリュウに訴える。

大国の国家元首に対して武器を向ける。常識が通用しない彼女にしかできない芸当だ。当然彼女の護衛役でもあるジェイドとサクラが睨み合う事になるが、そこはアリア達が間に入って何とか事無きを得る。三人もアルトリアでの短い付き合いでサクラという人間がどれだけ無礼で常識外れかは学んでいた。

「あの、エルバーフェルドとの同盟調印とは？」

エルバーフェルド人であるフィーリアからすれば祖国の大ニュースだ。気になるのは当然と言えるだろう。それに対しイリスは「文字通りの意味じゃよ」と語る。

「大陸国家とのパイプを繋ぎたい我が国と、西竜洋諸国にて孤立しているエルバーフェルド。数年前に防国協定を結んでおったが、当時は双方共に保守派の反対も根強くて実質形だけの同盟じゃった。今回は共に政権が安定した事もあって改めて強固な同盟を結ぶ事となり、エルバーフェルド・アルトリア軍事同盟を締結する事になったのじゃ。妾はその条約調印の為に国を出ておったのじゃよ」

「でも、クリュウの村がクシャルダオラに襲われてるって知ったら、条約調印式をボイコットして駆けつけちゃったのよ」

おかしそうに笑いながら語るフェニスの言葉に、イリスは顔を真っ赤にして「余計な事を言うでないわッ」と怒る。

「ど、同盟調印式をボイコットって、大丈夫なのそれ？」

政治とかには疎いクリュウであっても、それがボイコットしていいようなイベントではない事くらいはわかる。心配する彼の不安を他所に「それなら大丈夫だ」とシグマが説明に入る。

「向こうさんの許可は取って、事が終わり次第条約は締結するさ。

まぁ、その時多少乱暴な手段を使ったりはしたが」
苦笑を浮かべるシグマの言葉に、クリュウはイリスがかなり無茶をしてでも自分の為にここまで駆けつけて来てくれたのだと理解した。
フェニスとシグマに、今思えば自分の恥ずべき行いを曝露されたイリスは頬を羞恥に赤く染めながら不貞腐れる。そんな彼女の髪を、クリュウはそっと触れる。
「僕なんかの為に、無理させちゃってごめんね」
「クリュウが責任を感じる必要はない。妾が勝手に行った事じゃ」
「だとしても――ありがとう」
笑顔で礼を言いながら彼女の頭を優しく撫でるクリュウ。そんな彼の優しくも温かな手に触れられ、イリスは幸せそうに目を細める。
そんな二人の様子を、フィーリア達やアリア達は羨ましそうに見詰め、事情を知らないルフィール達は困惑する。
イリスの頭を優しく撫で続けるクリュウに対し、そっと近づく者が居た。振り返ると、そこには以前アルトリアで会った優雅なドレス姿ではなく、イーオスシリーズを身につけたアリアが立っていた。
「アリア……」
「心配かけさせて。まったく、あなたって人は」
「ご、ごめん」
「――でも、無事で何よりですわ」
そう言って嬉しそうに微笑む彼女の姿を見ていると、自分がどれだけみんなに迷惑を掛けたかがわかる。申し訳なさそうに萎縮する彼に対し、アリアは小さく笑みを浮かべながらそっと彼の頬を撫でた。
「私達は、あなたの為にここまで来ました。激しい戦いを乗り越えて……。それなのに、せっかく会えたあなたの顔がそんなに悲しそうでは困りますわ」
「そうだね……」
アリアの言う通りだ。みんな、自分の為に集まってくれた。なのに、肝心の自分がこんな情けない表情を浮かべていては示しがつかない。
クリュウは一度自らの頬を軽く叩くと、力強く頷く。そして、

「助けに来てくれてありがとう、アリア」
「ふふふ、そう。あなたはそうでなくちゃいけませんわッ」
嬉しそうに笑う彼女の目の前には、彼女がずっと待ち望んでいたクリュウの優しげな笑顔があった。そう、自分はこの笑顔を守る為にここまで来たのだ。愛する彼の、この大切な笑顔を。
「そういえば、激しい戦いってどういう事？」
事情を知らないクリュウはアリアの言った《激しい戦い》を知らない。そんな彼の疑念に対しルフィールが代表して説明してくれた。
エリーゼ率いる第二次避難隊が平野で突如イーオス・ガブラス混成大群の襲撃を受けた事。その迎撃の際にアリア達、母校のハンター養成訓練学校の後輩達、更にはエルディン率いるエルバーフェルド軍までもが加勢してくれ、この危機を脱した事。
全てを知ったクリュウは短く「そっか」とつぶやくと、その場に集まった者達全員と向かい合う。何事かと思って彼を見詰める皆の視線を受けながら、クリュウは静かに頭を下げた。
驚く面々に対し、クリュウは心から感謝を示した。
「本当にありがとう。僕の家族の為に、みんな一生懸命がんばってくれて。ほんと、言葉じゃ言い表せないくらいの感謝をしてる」
頭を下げて謝意を示すクリュウに対し、皆は一度お互いの顔を見合う。そして、誰からともなく笑みが零れた。
「頭を上げるっすよ兄者」
「そうです。ボク達は、先輩との約束を守ったに過ぎません」
そう言って頼もしげに微笑むのはシャルルとルフィール。二人は村を離れる際に約束した。必ず、彼の家族を守り抜くと。二人にとっては、どんなに厳しい戦いだったとしても、その約束を果たす為に戦い抜いた。彼との約束、それを守る為に。一生懸命に。
「まぁ、私達は任務を果たしただけよ。ずいぶん割に合わない仕事だったけどね」
「もう、エリーゼさんは本当に素直じゃありませんね」
「余計な事を言うのはこのバカ口かなぁ？」
「ふ、ふひはふぇん……ッ！」

口では素直じゃなくても、エリーゼもまたルフィールやシャルル同様に約束を果たす為に奮戦してくれた。割に合わない仕事はしない、非効率的な事はしない等と日頃からクールを装っているエリーゼだが、その実は誰よりも仲間想いで面倒見がいい事を、クリュウはもう知っている。

エリーゼに頬を引っ張られて涙目になっているレンも、村人を守る為に奮闘した。厳しい戦いで、何度も危機に陥った。それでも、彼女は決して諦めずに銃を構え、引き金を引き続けた。

全ては、クリュウの為に――

ここに集まった面々は、皆自分の為に駆けつけてくれた。自分なんかの為に、皆必死になって危険を覚悟で来てくれた。感謝しても、し切れない。

「おぉ、ルナリーフ。元気そうじゃないか」

背後のドアが開いたと同時に掛けられた声に振り返ると、頼もしげに微笑むクリスティナの姿があった。

「か、会長ッ!?」

「君もか。もう私は会長ではないんだがな……ふふふ、だが悪い気はしないな」

驚くクリュウの反応を見て嬉しそうに笑うクリスティナ。彼女の登場に思わず身構えてしまったクリュウだが、それは彼だけではなかった。

「エリーゼ。君ももう少し楽にしていろ」

「そ、そういう訳には……」

学生時代、さんざん世話になった憧れの先輩を前にしてはあの堅物のエリーゼもおろおろしっぱなしだ。学生時代のクセか、思わず背筋が伸びてしまう。そんな彼女の見慣れぬ姿にレンは戸惑う。

「あぁ、エリーゼは学生時代あいつの部下だったんすよ。そのクセがまだ抜けねぇんすよ」

そんな彼女に事情を説明するシャルルは実に楽しげだ。いつも自分相手の時は生意気なエリーゼも、あの伝説の生徒会長を前にしては子供のよう。その情けない姿が心底面白いらしい。

ケラケラと笑うシャルルに対し、エリーゼが「後でぶっ殺す……ッ」と呪詛を言い放ったのは言うまでもない。
「会長まで、どうして……」
「君にはまだ話していないが、私は今は教官実習生として母校で後輩共を指導する立場にある。君の村が危機だという噂が流れた頃、君を良く知る者達から学内の有志を募って援軍を派遣しようという直訴が多数あってな。他の教官達が反対するのを押し切って、私自らその者達を率いて来た訳だ。レヴェリへ君の村の難民を送り届けた後、学校へと戻っている頃だろうな」
「みんなが――」
「ちなみにこいつ、マジでビスマルク先生とくっつきやがったっす」
「――僕なんかの為に……え？」
「えぇいッ！　もうその話はするなッ！　こっ恥ずかしいったらありゃしないわッ！」
後輩達の行動に感動していたクリュウだったが、シャルルの発言に完全にそんな気持ちはどっかに行ってしまった。詳しい事を訊こうとするも、当のクリスティナは情報漏洩させたシャルルを連れて再び部屋の外へと行ってしまった。他の面々に尋ねても、皆曖昧な答えを返すばかり。どうやら、この場に居る全員がまだその事情を良く理解していないらしい。
しばらくすると、部屋のドアが再び開いた。見ると、不機嫌そうに鼻を鳴らしながらクリスティナが入って来た。その背後からは涙目のシャルルが入って来る。どうやらこっ酷く怒られたらしい。自業自得の為、皆は苦笑を浮かべる他ない。そして、更にその後から人がやって来たのだが、その姿を見てクリュウは更に驚いた。いや、クリュウだけではない。フィーリア達やエリーゼ達も同様に驚く。
「ら、ライザ？」
「あら、エリーゼにレンちゃんまで居るなんて。ほんと、知り合いばっかりだわぁ」
嬉しそうに微笑みながら入って来たのは、ドンドルマを利用するハンターなら知らぬ者が居ない、ハンターズギルドのギルド長、ライザ・

フリーシアだった。いつもとは違い、さすがに給仕服は着ていないが、ハンターズギルド指定の正装を身につけての登場だ。
「ライザさん。どうして……」
驚くクリュウの姿を見ると、ライザはにっこりと微笑みながら彼に近づき――そっと、彼の頭を抱き寄せた。
豊満な胸に彼の頭を埋め、幸せそうに微笑むライザ。当のクリュウは完全にテンパってジタバタするが、背後にしっかりと腕を回されていて脱出できない。そしてそんな二人の姿を見てその場に居るほとんどの女子の空気が変わる。
「な、何するんですか……ッ!?」
ようやく胸からは脱出できたものの、しっかりと抱きつかれていて動けないクリュウは抗議の声を上げる。だが、それ以上言葉は続かなかった。目の前にある彼女の顔が、本当に嬉しそうな笑みを浮かべていたから。
「ライザ、さん……？」
「良かった。クリュウ君が無事で、本当に良かった……」
目の縁に薄っすらと涙を浮かべながら微笑む彼女の笑顔を見て、クリュウの表情が曇る。どうやら自分は、色々な人に心配を掛けさせてしまったらしい。みんな、自分を心配して、何かできる事はないかと集まってくれた。それがルフィール達やアリア達、そしてライザもまたその一人だった。
「ごめんなさい。心配かけちゃって……」
申し訳無さそうに謝る彼の言葉に対し、ライザは頬を膨らませながら怒る。
「本当よ、とっても心配したんだからッ」
「ご、ごめんなさい」
「――お疲れ様、クリュウ君」
そう言って、ライザは改めてクリュウの頭を優しく抱き寄せる。柔らかな胸の感触と温もり、そして彼女の優しさに包まれて、クリュウもまた思わず泣きそうになった。
なぜだろう、色々な人に労いの言葉をもらっても、彼女に言われる

と一番素直に嬉しく思え、安心する。それはきっと、自分が彼女の事を姉のように感じているからかもしれない。キティと同じ、頼れるお姉さん。

ドンドルマから旅立ち、激闘を経て戻った時も、彼女の笑顔を見ると「あぁ、帰って来たんだ」と思え、安心できる。自分にとって、彼女の笑顔を見る事は戦いの終わりを意味しているのかもしれない。

こうして、彼女の傍にいるだけで、まだ自分の中にあった戦闘の緊張が、ようやく解けたような、全身の力が抜けるような、そんな感覚。

「ライザさん……」

「――あぁ、ライザ。その辺にしておいてくれないか、そろそろ場の空気が本気でヤバイ事になりそうだ」

頭を抱えながらライザの肩を叩き、さりげなくクリュウを奪還するシルフィード。彼を奪われて不満気なライザだったが、自分に突き刺さる乙女達の敵意の込もった視線の集中砲火に、思わず苦笑いを浮かべる。

「クリュウ君、モテモテね」

「まったく、君も迂闊な事はするなよ。私にだって許容できる範囲というものがある」

「ご、ごめん……」

「……」

「……あのさ、何で抱き締めるの？」

背後から抱き締められて困惑するクリュウに対し、抱き締めているシルフィードは実にご満悦な様子。まぁ、すぐにフィーリア達やルフィール達の激しい批判に晒され、彼女はクリュウから距離を取らざるを得なくなってしまうのだが……

「しかし、すごいメンバーが揃ってるね」

改めてこの場に居る面々を見回すと、多種多様な人達が集まっている。

イージス村本来の専属ハンターであるクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィード。

クリュウの後輩であるルフィールとシャルル。

学生時代の同期であるアリア、シグマ、フェニス。
頼りになる狩友と言うべきルーデル、エリーゼ、レン。
ハンターズギルドの支援隊を率いて来てくれたライザ。
更にはクリュウの従兄弟であり、アルトリア王政軍国女王のイリス。
クリュウの為に、本当に多くの者達が集まっていた。自分の為に駆けつけてくれた皆を見ながら、クリュウは改めて嬉しそうに微笑む。その時、再びドアが開いた。見ると、数人の男達が入って来た。全員漆黒の軍服を着ており、それがエルバーフェルド国防海軍の軍人である事は見てわかる。
「各々方、ご着席ください」
その中のリーダー的な男の言葉に従い、ようやくクリュウ達は席に着く。男達は壁際に控え、まるで誰かの到着を待っているかのようだ。一体何事かと思い、クリュウが質問を投げかけようと腰を浮かせた時、再びドアが開いた。
「……何で女の子ばっかり揃ってるのよ」
ドアを開けて部屋に入って来たのは、男達と同じく全身に漆黒のエルバーフェルド国防海軍の軍服を纏った少女。肩には金飾緒、胸には勲章を装飾した見るだけで高級将校だとわかる少女。不機嫌そうに居並ぶ女子達を見回す。そして、腰を浮かせ損なったクリュウと目が合うと、それまでの不機嫌そうな顔を引っ込め、無邪気に微笑んだ。
「久しぶりね、クリュウ・ルナリーフ」
「か、カレンッ！」
エルバーフェルド国防海軍総司令官のカレン・デーニッツ元帥。イージス村に集まった部隊の中でも最大規模を誇る、エルバーフェルド国防海軍大洋艦隊を率いて来た少女だった。

第２３０話　それぞれの心の奥底の想い

「現在、総統陛下がエムデンより出立なされました。数日中にはこのイージス村へとお越しになられます。その際にはイリス陛下、総統陛下と緊急の会談をしていただきます」
「あぁ、構わぬ。向こうに無理を言っているのは妾の方じゃ。民に負担を掛ける事ではなければ、妾は全て従おう」
「それでは、それまでの間はどうぞご自由に。周辺の警備は陸軍の独立歩兵師団及び、我が海軍の陸戦隊が行いますのでご安心を」
「うぬ。すまんの」
　クリュウやルフィール、アリア達の目の前で一国の女王と一国の海軍の総司令官の会話が続く。話題はクリュウ達にもわかるようなものから国政に関わる難しいものまで多岐に渡る。正直、クリュウ達はまるで置いて行かれているかのような、そんな感じだ。
「あの、僕達って居る必要ある？」
　まだ話が終わりそうにない二人に対し、クリュウがゆっくりと手を上げながら小声で尋ねる。その瞬間、海軍元帥と女王がこちらに振り返る。肩書だけ見れば恐ろしい二人の視線だが、クリュウからすれば二人は知り合い。だとしても怖いのだが……しかし二人はそんな彼の心境を察してか、優しく微笑む。
「あぁ、すまんの。デーニッツ殿は軍人でありながら姉上の側近。どうしても会話が政治絡みになってしまうのぉ」
「お言葉ですが陛下。我が国は原則的に軍人が国の政へと関わる事は禁じております。我が国は司法、行政、立法、軍事。それら全てが総統陛下の下にあるもの。決して、我々が政治に関わる事はできません」
「それは大義であろう。武力による国の安定化、姉上は独裁はお主達軍部のお膳立てのおかげじゃ。宣伝大臣も、元々は陸軍出身であろう？　力の誇示と情報操作、民を支配する権限が全て軍部にあるのは、これは偶然かのぉ？」
「……お言葉ですが陛下。貴国の宰相殿も軍部出身者であり、空軍の

最高指揮官です。貴国の方こそ、武力による国の安定化を行っているのではありませんか？」
「それはあくまで先代までの話じゃ。妾は対話による民との幸せを作り上げる事に終始しておる。そのような前時代的な考えは、お主達も捨てるべきじゃの」
　一度はクリュウ達の方を見た二人だったが、すぐにまた難しい会話を始めてしまう。戸惑うクリュウを不憫に思ったのか、エルディンが席を立つ。
「嬢ちゃん達よぉ、あんまり国の恥を晒すなよぉ。それに、ここには無関係な人間も大勢居る事を忘れるな」
「陛下。向こうの軍人の方の言う通りです。皮肉は苦手なのに、無理して自爆されないように」
　エルディンとジェイドに指摘され、二人は恥ずかしそうに頬を赤らめながら思わず浮いていた腰を互いに戻す。そんな二人のおかしな姿に笑っていたクリュウだったが、すぐに二人に睨まれて視線を逸らす。
「まぁ、国政絡みの話はこれくらいにしておいて――次は村の現状についてじゃな」
　再び難しい顔つきになったイリスの口から放たれた言葉に、クリュウから笑顔が消えた。それを心配そうに見詰めるフィーリア達だったが、決して避けられない話題だという事も覚悟していた。
「視察した限りでは、相当な被害を受けているようじゃの」
「私も先程視察しましたが、正直壊滅的と言って過言ではないでしょう」
　クリュウの方を見ながら、イリスとカレンはウソ偽りなく真っ直ぐに言葉を述べる。発言力がある為、二人は普段から並大抵のプレッシャーでは動じない。そんな二人だからこその正直な感想だ。だからこそ、どんなに飾り立てた言葉よりも重い。改めて、目を背けてきた現実をつきつけられた。クリュウからすればそんな感想を抱かずにはいられない。
「クリュウ。あまり言いたくはないのじゃが――廃村という可能性が

ある事は、理解しておるか？」
　イリスの問いに対し、クリュウは静かにうなずく。フィーリア達から見れば、彼の顔はちょうど頭だけが見える角度なので、その顔色を窺い知る事はできない。だが、彼の顔を凝視していたカレンが目を逸らし、イリスもまた目を閉じ静かに「そうか……」と小さくつぶやく。それだけで、彼がどんな表情をしているか予想できた――否、予想したくなかった。
「まずはどちらにせよ、瓦礫の撤去じゃな。廃村にするにしても、再建するにしても、まずは瓦礫がある限り作業ができぬ。しかし村の者の私物なども散乱しており、勝手に我々が独断で行えるものではない。それ以前に、本来ならば村の長の許可無く我々外部の人間が勝手に足を踏み入れるものではない。クリュウよ、お主の村の村長には手紙は出したのか？」
「うん。カレンから軍用伝書鳩を借りてすでに事態が終結した旨はレヴェリ家の方に伝えた。数日中には村長からの返事、もしくは村長自身が戻ると思う」
「そうか。では、それまではしばらく待機じゃな」
　イリスの言葉に、クリュウは短く「そうだね」と答えただけだった。それ以上の言葉はなく、無言を貫くクリュウ。その表情を背後にいるフィーリア達は確認はできない。それでも、不安げに彼を見詰めるイリスとカレンの表情を見れば、それが辛そうな表情を浮かべているくらいはわかる。
「クリュウよ。落ち込む気持ちもわからなくはないが、お主に責任はないのじゃ。お主は善戦した。胸を張るのじゃ」
「……村がこんなになって、何を誇れって言うんだよ」
　静かに彼の口から飛び出した、彼らしくない冷たい言葉。背後に居るフィーリア達はその声だけで表情が凍りつく。言葉を向けられたイリスも一瞬狼狽し「す、すまぬ。不用意な発言じゃった」と慌てて謝罪した。
「……ごめん。ちょっと、疲れてるみたい。席、外すよ」
　クリュウはそう言って席を立つと、背後のフィーリア達に何の言葉

も掛ける事もなく部屋を出て行った。そんな彼の態度に、部屋の空気が重いものに変わる。
「あの、気にしないでね。あいつ、今ちょっと気が立ってるだけだから」
慌ててエレナがフォローに入るが、そんな彼女に対しイリスが短く「良い」と制す。皆の視線が自らに集中すると、イリスは小さく苦笑を浮かべた。
「故郷がこんな状況になっておるのじゃ。気が立つのも仕方がないじゃろうて。妾は全く気にしておらぬ。いらぬ心配をかけさせて、すまんかったのぉ」
そう言ってイリスはフォローしてくれようとしたエレナを気遣うが、それが無理している事くらい、表情を見ればすぐわかる。嘘が苦手な、真っ直ぐ過ぎる女王様の気持ちなど、すぐにわかる。
その後クリュウが退席した事で、特にこれ以上議題もなかった会議は静かに閉会した。
「ここよ」
一人行く宛もなく歩いていたクリュウ。そんな彼に声を掛け、彼の為に用意していた個人用の天幕（テント）へと案内したカレン。彼女の案内で天幕（テント）に入ったクリュウは静かに礼を述べると、カレンは「これくらい造作もないわよ」と笑顔で答えた。
「まぁ、あんたとイリス女王との関係は総統陛下から聞いてるから特に何も言わないけど、一国の国家元首に向かって……何より、小さな女の子にあんな言い方はないわよ」
「……ごめん」
「まぁ、状況が状況だから仕方ないけど」
先程から自分と一切目を合わす事なく、ソファに腰掛けたまま項垂れているクリュウ。カレンはそんな彼を終始不安そうに見詰めていた。
「……ちょっと、本当に大丈夫なの？」
「僕は平気だよ。それよりも、カレンの方こそ大丈夫なの？」
突然顔をもたげたクリュウ。いきなり目が合った事に驚いたカレ

ンは一瞬慌てたが、すぐに平静を装い「私は平気よ。特に怪我もないし」と答える。
「それもだけど。クシャルダオラとの戦いで、艦隊もかなりの被害が出たんでしょ？　兵の方も、怪我人ってたくさん出たの？」
　自らも大変な状況で疲れているというのに、彼はカレンや、更には見ず知らずの兵達の怪我を心配するクリュウ。そんな彼の優しさ、何よりも実に彼らしい姿に、カレンは思わず笑みを浮かべた。
「一国の艦隊の事を、あんたが心配する必要はないのよ」
「で、でも……」
「それに、艦隊の被害状況なんて一国の秘匿情報を、一般人のあんたに話せる訳ないでしょ？」
「……そうだよね」
　カレンの返事に、語気を弱めるクリュウ。そんな彼に対しカレンは苦笑を浮かべながら「安心しなさい。怪我人は出てるけど、幸い死亡者は出てないわ」と彼を安心させる言葉を付け加える。
「そっか……」
　カレンの言葉にひとまず安堵したように肩の力をわずかに抜くクリュウ。そんな彼に対し「少しは落ち着いたかしら？」とカレンは静かに尋ねる。
「うん……」
　少しはいつもの彼らしいやわらかな表情を取り戻したのを見て、カレンは静かに彼の隣に腰掛けると、そっと彼の頭の上に手をのせる。彼女の行動に戸惑い、振り返る彼に向かってカレンは静かに微笑む。
「村が大変な事になって、あなたも大変だと思う。だからこそ、一人で絶対に抱え込まないで。私にできる事があれば、何でもするわ。エルバーフェルド帝国国防海軍総司令官として。もちろん、カレン・デーニッツという一人の友人としても」
「ありがと、カレン」
「れ、礼なんていらないわよッ。当然の事をしてるだけだもの」
　クリュウに礼を言われ、カレンは頬を赤らめながら微笑む。そんな彼女の健気な姿に、少しはクリュウの気持ちも楽になった事は、言う

までもないだろう。
　その後少し会話を重ねた二人だったが、カレンは突如立ち上がる。
「カレン？」
「そろそろ、旗艦に戻らないと。海の上での仕事が、結構溜まってるのよね」
「……大変なんだね、総司令官ってのも」
「そうね。でも、やりがいはあるわ。自分で選んだ道だもの」
「そっか……」
　カレンはゆっくりとした足取りで天幕（テント）の出口に近づくと、スッと布を開く。そのまま出て行くかと思われたが、カレンはその場で止まったまま動かない。クリュウが不審に思っていると、カレンはゆっくりと振り返り、優しく微笑む。
「じゃあね、ダーリン」
「無愛想なお前とは思えないくらい、優しいじゃないか」
「……盗み聞きなんて、ずいぶんいい趣味してるじゃない」
　天幕（テント）から少し出た所に立っていたのは、国防海軍総参謀長のエーリック・レーダー大将。睨みつけるカレンに対し、エーリックは小さく苦笑を浮かべる。
「偶然だよ。お前を捜してたら、ちょうどここだっただけさ」
「……処分は保留にしておくわ。それより、被害状況が整理できたのね」
「海に投げ出された兵を回収していた救助隊が沖合に戻って来たそうだ。負傷者は第１２駆逐隊の各艦に分乗後、本国に帰還する手はずになってる」
「そう……それで、戦死者数は？」
　先程まで、クリュウに向けていた優しげな笑顔はそこにはなかった。一人の軍人として、冷徹に構える少女提督の顔。そんな彼女に向かって、エーリックは少し言いづらそうに悩むも、覚悟を決めて口を開く。
「死者は二四名。行方不明者は十五名だ。が、不明者も諦めた方がいい」

「そう……少ないとはいえ、出てしまったわね」
「死者数なし……あの少年に言った言葉は、安心させる意味合いもあるが、お前自身の願いだったんだろ？」
　エーリックの問いに、カレンは無言で彼を追い抜いた。後ろからついて来るエーリックに一切目を向ける事なく、早歩きで港へと向かうカレン。小さな漁港に着くと、停泊している内火艇に乗り込む。エーリクもそれを追って乗り込んだ所で、ようやくカレンが振り返った。
「戦死者は通常水葬処理が行われる。でも、今回の戦死者は第１２駆逐隊と共に本国へ戻しなさい。家族と面会後、海軍主催で軍葬を行うわ。そこで、国民に謝罪する」
「……お前だけが責任を取る必要はねぇ。俺もちゃんと責任を取ってやらぁ」
「エーリック……」
「まぁ、たぶん艦隊将兵全員が自分も責任を取るって言いやがるぜ。お前、自分がどれだけ部下に好かれてるか、そろそろ気づけよ」
　落ち込むカレンを勇気づけるように笑い飛ばすエーリックに対し、カレンは無言で彼の脇腹を殴りつけた。咳き込む彼に対し、カレンは「知ってるわよ、バカ」とつぶやく。
　内火艇は、臨時旗艦となっている戦艦『ビスマルク』へと向かう。『ビスマルク』のマストには、艦隊旗艦を意味するカレンの元帥旗が翻っている。
　内火艇が近づくと、甲板で作業していた兵士達が一斉に甲板の縁に一列に集まって敬礼を始める。あっという間にその人数は一〇〇人を超えた。それだけではない、付近に停泊していた他の艦艇の甲板にも次々に兵士達が現れ、敬礼で自分達が命を預けるカレンを出迎える。
　ゆっくりと進む内火艇の上でこの光景を見ていたカレンは、静かに微笑んだ。
「エーリック」
「何だ？」
「――私は、最高の幸せ者ね」

そう言って笑う彼女の笑顔は、内火艇に乗っていた誰もが見惚れる程に可憐で、とても澄み切った綺麗なものだった。
カレンが去ってからしばらくして、クリュウは天幕（テント）から出た。行き交うエルバーフェルド軍の兵士数人とすれ違うも、見知った顔は誰もいない。現在、村人はレヴェリ領にて仮住まいをしている為、故郷だというのに慣れ親しんだ人は誰もいないのだ。
ふと視線を上げれば、切り立った崖が見える。その上に、故郷イージス村がある。だが、クリュウはそちらへと足を向ける事はなかった。行った所で、今は自分にできる事は何もないと知っているから。何より、村の惨状を直視したくはなかった。
視線を下げ、再び歩き出そうとすると、目の前に見知った顔を見つけた。
「フィーリア」
「あ、クリュウ様……」
偶然横道から出て来たフィーリアと出会ったクリュウ。突然の出会いに驚いたクリュウだったが、それはフィーリアも同じ事。目を大きく見開いて驚いた後、少し慌てながら「ぐ、偶然ですね」と笑顔を浮かべる。
「クリュウ様、どうしてこんな所に？」
「何となく、散歩してた感じかな」
「そ、そうなんですか」
そこで会話が止まってしまった。いつもならこんな事は決してないのだが、どうにも先程の会議室での出来事もあり、話しづらい。特にフィーリアの方が顕著であり、何か話さないとと思っているのだろう。先程から口を開いては閉じて、開いては閉じてを繰り返している。
フィーリアに気を遣わせてしまっている。それに気づいたクリュウは「ねぇ、フィーリア」と助け舟を出すように声を掛けた。
「は、はいッ」
「疲れてない？　色々あったから、無理してない？」
「え？　あ、大丈夫ですッ。元気いっぱいですよッ」

胸の前で両拳を握り締めて元気をアピールするフィーリアの健気な姿にクリュウは小さく笑みを浮かべる。
「そっか。それにしても、ずいぶん早く戻って来れたよね。イルファからだと、どうがんばっても三日は掛かるでしょ？」
それはクリュウが少し気になっていた事だった。イルファ山脈とイージス村はそれなりに距離が離れている。通常は竜車だと彼の言う通り五日は掛かる道のり。馬を走らせても三日程度はかかってしまう距離はある。だが彼女達はそれよりも早く村へと戻って来た。一体、どのような手段を使ったのだろうか。
「あ、それはちょっと事情がありまして……」
クリュウの問いかけに対し、思い出したとばかりにフィーリアは自分達の帰路について語り始めた。
「クシャルダオラがイルファ雪山から飛び立ってすぐ、私達もそれを追って山を出ました。すぐに村へ引き返す予定でしたが、シルフィード様の判断で海路の方が早く戻れるとの事でアルフレアへ向かう事になったんです」
「でもさ、アルフレアはすでに全都避難指示が出てるから、人は残ってないんじゃないの？」
「そうですね。すでに大部分の住民は避難を終えていましたが、一部街に残っている方もいましたので。ですがすでに定期便は全運休でしたし、商船も全て去った後だったので、海路という選択はできませんでした。途方に暮れていた時、王立書士隊の方と出会ったんです」
「王立書士隊って……西シュレイドの？」
「はい」
かつて栄華を誇った大陸最大の大国家シュレイド王国。大陸において最強の大国として、大陸全てを支配していた大王国だ。しかし今から約一〇〇〇年の昔、突如としてその大国は滅んでしまった。内乱説や疫病説、中央大陸外の国家による侵略説など様々な仮説があるが、現時点で最も有力視されているのが、古龍による破国説である。しかしこれも一体どのような古龍による襲撃だったのかはわからない為、真相は未だに不明である。

シュレイド王国が滅んだ後に生まれたのが、旧王都であったシュレイドがあったシュレイド地方を境に王が現在の王都であるヴェルドへと遷都して新たな国家を樹立した西シュレイド王国。一方王に見捨てられた東側の民は当時の血の革命で王政を打破して共和国の樹立を宣言したガリアの影響を強く受け、共和制による新たな国家を樹立。それが東シュレイド共和国である。

このような経緯があり、西シュレイド王国は旧王国時代から親交のあったエスパニア王国と、東シュレイド共和国は共和制を参考にしたガリア共和国と特に親しい交流を築いている。

シュレイド分裂後、次に勢力を増したのが旧エルバーフェルド王国であり、エルバーフェルドに対向する為にそれぞれが西の剣、東の盾と呼ばれる同盟を組んで対抗。現在はその同盟は無いが、それぞれの両国の絆という形で残っている。

ちなみに西シュレイド王国とエスパニア王国はとても温暖な気候である。逆に内陸の東シュレイド共和国とガリア共和国は寒冷地帯であり、双方で当時から経済格差があった。あのローレライの悲劇で疲弊したエルバーフェルドに攻め入ったガリア・東シュレイドにはこうした土地の困窮が原因であったと言われている。

現在では資本主義による競争社会化で経済力を拡大させた東側と、古い王政によって格差は少ないが国全体の経済力はあまり高くない西側と、大きく異なっている。

現在、エルバーフェルド帝国を除いた西竜洋諸国は西竜洋諸国連合という連合同盟を組織。西竜洋諸国を一つの巨大な連合国家として絆を結んでいるが、先に上げた経済格差から実は西側と東側でよく意見衝突を起こしている。

なぜ国家形態が違う為に対立も多い国同士が同盟を結ぶのか。もちろんエルバーフェルドに対向する為というのも理由の一つだが、現在最も有力視されているのが最終決戦主義と呼ばれる連合国による大連合軍の為だ。

議長国ガリア共和国を筆頭に、西シュレイド王国、東シュレイド共和国、エスパニア王国、神聖ローマリア法国。この五大国の軍事力を

結集すれば、それこそ単純な兵員の数では世界最大規模になる。
現在、旧シュレイド王国の王都であったシュレイドには如何なる国家も侵略してはならないという永久不戦中立宣言が出されている。しかしその周辺には各国が強力な武装を施した進駐軍を派遣。まるでシュレイドを囲むように五大国の大部隊が展開しているのだ。
シュレイド王国の滅亡。この最も有力視されている説は謎の古龍の襲撃だ。現在もシュレイド、特に古城であるシュレイド城の上空は重苦しい黒雲が垂れ込めており、遠方からその内部を探る事はできない。過去に連合国合同による偵察隊を派遣した事が数度あったが、いずれも全員が未帰還という異常事態となっている。
その為、西竜洋諸国の民達は未だにシュレイドを滅ぼした古龍がシュレイド城に住まっていると恐れている。こうした民の不安を拭う為、そして実際に古龍が居た際には国家存亡の最終決戦に備え、五大国による連合迎撃作戦を行う為、西竜洋諸国連合という概念が誕生したと言われている。
更にモンスター討伐の専門機関であるハンターズギルドも、連合と協力関係にある。人類存亡の危機と言われるシュレイドの古龍。当然ハンターズギルドも最大の脅威として対策を講じており、連合と手を組んでこの対策を行っている。
シュレイドの古龍に対する西竜洋諸国とハンターズギルドの最終決戦作戦。それは五大国の総力と、ハンターズギルドの総力を結集して挑む大陸史上最大規模の迎撃決戦なのだ。作戦には各国の主力軍が投入され、持てる全戦力と物資を投入して総力戦を想定。ハンターズギルドも全ハンターを集結させ、迎撃を行うプランを策定するなど、まさに人類存亡を懸けた最終決戦なのだ。
現時点でどの国もハンターズギルドもシュレイドに関する如何なる事も公表していない。
ただ大陸最大規模の連合軍が、たった一つの街を巨大で堅牢な壁と撃龍槍を備えた難攻不落の要塞群を幾つも建築し、各要塞を地下トンネルで結んで兵員や弾薬の移動を行うなどの大規模且つ最新鋭の防御陣地を作り、そこに一説には数十万人にも及ぶ大部隊を駐留させて

包囲している。その異常性だけが、今日まで続いているのだ。
　このシュレイドを囲む要塞群と壁を総称し、この防衛線を提唱した当時のガリア陸軍大臣のアンドリュー・マジノの名を冠して『マジノ線』と呼ぶ。
　最終決戦作戦。要塞戦を得意とする連合最大の軍事大国であるガリア軍が要塞に立て篭もって最終防衛線の死守に尽力。騎馬を用いた機動戦を得意とする勇猛果敢なエスパニア軍、強力な連携により大規模な軍団の扱いに長けた西シュレイド軍、少数精鋭部隊の扱いを得意とする軍略に長けた東シュレイド軍、そして信者を通して大陸中に張り巡らせたパイプを駆使して情報戦と後方支援に長けたローマリア軍等各国が役割分担を行い、それぞれが最高の形で決戦に挑めるよう様々な想定が施された大作戦である。
　ハンターズギルドも最終決戦作戦の一環として特に親交がある西シュレイド王国に対し、一都市の全自治権を預かって築城した特別都市がある。それがドンドルマに次ぐハンターズギルド第二の要塞都市であるミナガルデだ。一般的なハンター達からはミナガルデはドンドルマと並ぶハンターの都と思われているが、実際は最終決戦作戦におけるハンターズギルドの最前線基地の役割を担っているのだ。
　現在、このシュレイドの古龍に対して対策を講じているのは西竜洋諸国連合とハンターズギルドを中心とした連合軍が最大規模である。元々神聖ローマリア法国が正確には西竜洋諸国に属していないのに連合に加盟している理由が、彼らのアテネ神教において世界に大いなる災厄をもたらす漆黒の魔龍が人類を滅ぼすと言われており、ローマリアではこの魔龍こそがシュレイドの古龍だと考えている為だ。
　他国とあまり親交を持たないテティル共和国連邦はそもそもシュレイドの古龍の存在を夢物語だと一蹴して否定の立場を取っているし、アルトリアも中央大陸の伝説を信じる訳もなく、この両国は全く警戒も対策も行っていない。
　一方、区分上は西竜洋諸国に所属するエルバーフェルド帝国は敵軍を位置づけている連合に加盟する訳もなく、一国単独による対策を講じている。それが対ガリア・東シュレイド防衛線として建築中の南北

に伸びた国境沿いに広がる大要塞『ジークフリート線』である。
　連合のマジノ線程ではないが、堅牢な要塞と壁、防御陣地を無数に整えた防衛線。建前は敵軍の侵攻を阻む防衛拠点であるが、同時にシュレイドの古龍に対するものとしても想定されている。このジークフリート線に国防陸軍の西部方面担当の第２軍が本拠地を置いて活動しており、海軍もジークフリート線最北端にあるキールに次ぐ第二の軍港都市ヴィルヘルミナハーフェンに本国艦隊と外洋艦隊の一部を駐留させ、海軍陸戦隊の根拠地となっている。
　このように、その存在自体も謎とされているシュレイドの古龍に対し、各国が真剣に対策を講じているのだ。そして、かつてのシュレイド王国時代のモンスターに関する研究機関として発足し、現在は様々なモンスターを研究するモンスター研究機関の筆頭組織。それが西シュレイド王国王立書士隊である。王立書士隊の研究は全てのモンスターが対象となる。古龍及びそれに準ずるモンスターを主に研究する古龍観測所と共に、モンスターの研究機関の有名所、それが王立書士隊だ。
　鋼龍クシャルダオラの出現。それは王立書士隊としても十分観察、研究する対象だ。当然、王立書士隊が来ていても、それは決しておかしくはない。彼らの究極の研究、それこそがシュレイドの謎を解明する事、つまりは古龍の研究なのだから。
「それで？」
「王立書士隊の方々は観測の為、気球を用意していました。どうやら観測に向かう所だったようで、事情を話したら村まで送り届けてもらえる事になったんです」
「書士隊の人が？　それは、珍しい事もあるもんだね」
　王立書士隊は危険な地に赴く事が多いが、基本的には学者の組織。一部を除いて基本的には非戦闘員で構成される。その為、護衛としてハンターを雇う事が多い。当然、ハンターズギルドとしても情報提供を受けている（正確には王立書士隊が論文を発表し、古龍観測所がハンターズギルドに対して編集して情報提供が行われる）身の為、要請があればハンターを護衛に派遣している為、基本的には両者の関係は

良好だ。
　しかし、だとしても命懸けの研究に行こうとしている矢先、見ず知らずのハンターを送り届ける為だけに気球に乗せるだろうか？　しかも相手はキングやエンペラークラスというG級ハンターなどでもない。
　クリュウの疑問は当然だが、フィーリアはそんな彼の疑問に対して
「それが……」とゆっくりと口を開く。
「王立書士隊の隊員の中に、クリュウ様を知っている方が居らして。その方がクリュウ様の為ならと、上官を説得してくださったんです」
「僕の知り合い？　でも、書士隊に知り合いなんて居ないけど……」
　それこそフィーリアやシルフィードのようにある程度の実力があり、交友関係もあるならともかく、クリュウは至って普通のハンターだ。そんな所に知人など居ないはず。だが次の瞬間、彼女の口から放たれたその人物の名前に、クリュウは目を見張る事になる。
「その、クード・ランカスター様と名乗られておりました」
「く、クードッ!?」
　それは、忘れるはずもない名前だった。
　クリュウが学生時代に共に勉学に励み、最終学年ではルフィールやシャルルと共に同じチームを組み、同期として共に卒業した。端正な顔立ちでいつも笑顔を浮かべて女子の人気を一身に集めるも、面白い事に目がないという厄介な所もあった親友でもあり悪友でもあった男。その男こそが、クード・ランカスターであった。
「あぁ、そういえばクードは西シュレイド王国出身だったっけ。それに、確かに王立書士隊希望だったけど……本当に書士隊に入ったんだ」
　王立書士隊は簡単になれるものではない。当然、モンスターに対する相当な知識が求められる。クードは学生時代、上位成績優秀者だった。特にモンスターに関する科目の得点が高い傾向にあった。彼の当時を知る身とすれば、決してその志望が無茶ではない事はわかる。
「そっか……クード、王立書士隊になってたんだ。それで、彼が働きかけてくれたの？」

「はい。上官に頭まで下げて頂いて、私達は気球に乗る事ができました。それでイージス村の近くまで送って頂いて、そこからは全力疾走にてクリュウ様の下へと馳せ参じた訳です」
「……相変わらず、かっこいいなぁ」
学生時代、女子の人気を一身に集めていたクード。そのカッコ良さもまたどうやら健在らしい。昔から、自分の為に色々と奮闘してくれたクード。どうやら、今回も彼に助けられてしまったらしい。
「それで、クードは今どこに？」
「わかりません。私達を下ろした後は、本来の観測任務の為に空へと上がってしまったので……たぶん、アルフレアの方に戻られていると思いますが」
「そっか……」
本当に、自分は今回色々な人に助けられてばかりだ。
クシャルダオラと一対一で戦っている時もあった。たった一人で、強大な相手に挑むという状況に、何度も心が挫けそうになった。でも、違ったのだ。そんな時も、自分は誰かに助けられていたのだ。一人なんて事は、決して、なかったのだ。
歩きながら会話を続けていた二人は、近くの木の下へと移動すると、その場に腰掛けた。空を見上げれば、葉の間から暖かな木漏れ日が自分達を優しく照らしている。クシャルダオラが去った事で天候は回復し、空は快晴となっている。気持ちのいい天気だ。
木の幹に背中を預けながら、優しげな陽の光で体を温める。この時間だけは、難しい事とかが頭の中から消え、穏やかな時間が流れる。フィーリアもあまりの気持ち良さに目を細める。
「気持ちのいい天気ですね。昨日まで嵐だったなんて、信じられません」
優しい風が頬を撫で、彼女の美しい金髪をいそよそよと靡かせる。揺れる髪を手で押さえながら、フィーリアは微笑む。そんな彼女の可憐な笑みを一瞥し、クリュウは小さくうなずく。
「ほんと、昨日までとは全然違う。全て、何もかもが、変わっちゃった……」

彼の暗い声に振り返ると、彼は顔を俯かせていた。気づけば、彼は木の影の方に座っていた。暖かな日の光は彼には届かず、彼は冷たい影に座っている。暖かく、穏やかな日差しは、彼には届いていなかった。
「クリュウ様……」
「どうして、こうなっちゃったんだろ」
俯かせていた顔をゆっくりともたげ、彼が見上げた先は崖の上。鋼龍クシャルダオラとの戦いの舞台となってしまった村は、現在は海軍陸戦隊が瓦礫の倒壊の恐れがある為、封鎖されている。クリュウも、カレンの許可がなければ立ち入りができない。瓦礫の倒壊という名目があるのはもちろんだが、実際はカレンが壊れた村に彼を近づける事を拒んでいる為だ。廃墟と化した村を見て、彼が傷つくのを恐れている為だ。
守るべき故郷は失われ、廃墟と化した村には近づく事もできない。一ヶ月前まで、村はいつもと変わらない日々を送っていたはず。なのに、鋼龍クシャルダオラが現れ、戦った結果、全てが変わってしまった。
自分は全力を尽くした。全力で彼の龍に立ち向かい、そして勝った。でも、あの時もっとこうしていれば、もっと自分に力があれば。そんな後知恵での後悔が、彼を苦しめ続けていた。
暖かな日の光を避け、一人暗がりに居るクリュウ。そんな彼の姿を見たフィーリアは意を決して彼に抱きつく。
「ふぃ、フィーリア？」
「そんなに、悲しい顔をされないでください」
視線を上げたフィーリアの顔は、今にも泣き出しそうな、そんな悲しげな表情だった。クリッとした目の縁にはたっぷりの涙を溜め、潤んだ瞳で彼を見詰める。そんな彼女の悲しそうな顔を見詰め、クリュウは言葉を失った。
絶句する彼の頬を優しく撫で、フィーリアは優しく語りかける。
「あの、こんな時どんな言葉を言えばいいか、正直わかりません。でも、身勝手かもしれませんが、私は、クリュウ様にそんな悲しそうな

顔をしてほしくありません」
「フィーリア……」
「これから、一体どんな未来になるのかわかりません。不安になる気持ちも、わかります。でも、クリュウ様は一人じゃありません。今ここには、クリュウ様を助けたい一心で様々な方が集まられております」
　フィーリアの言う通り。今この村には、この村を救いたい為に大勢の人間が国籍組織問わず集まっている。そしてその中核となる人の多くが、クリュウ・ルナリーフの助けになりたいという一心で集まった者達ばかりだ。
　フィーリアは知っている。
　クリュウ・ルナリーフという人間は、本人が言う通り特筆して何かに秀でた人間ではない。狩人としても、将来性は十分感じられるが、現時点ではまだまだ未熟だ。
　しかし人間性、特にその誰に対しても思いやれる優しい性格。それが今回発揮された、彼の常人を遙かに凌駕する人脈の根底にある。皆、彼の人に触れ、彼を心の底から信頼し、彼の窮地に力になりたいと思い、危険を承知で駆けつけた。それらが集まり、今回の中央大陸史上最大規模の大集合となったのだ。
「これから、どんな困難が待ち受けているかはわかりません。でもきっと、皆さんがクリュウ様のお力になるでしょう。ここに集まった方々は、みんなそういう方々ばかりですから」
　クリュウを元気づけようと、必死に自分は一人じゃないと諭すフィーリア。そんな彼女の言葉に、何より、自分を元気づけようとがんばる彼女の姿に、クリュウは少しずつ顔を明るいものに変えていく。
「そうだよね。僕は一人じゃない。みんなが、僕の為に力を貸してくれている。そんなみんなの為にも、僕もがんばらないと。フィーリアの言う通り、困難も多いだろうけど、大丈夫だよね」
「はい」
「ねぇ、フィーリア。その、助けてくれる人の中に、君も入ってるのか

な？」
少し恥ずかしそうに、照れ笑いを浮かべながら尋ねる彼の問いに一瞬きょとんと困惑するフィーリア。だが彼の問いの意味を理解すると、彼女は大きくうなずく。
「当然じゃないですか。私はいつでもクリュウ様のお力になります――だって私は、ここに集まった誰よりもクリュウ様をお慕い申し上げているんですから」
そう断言するフィーリアは、まるで天使のような慈愛に満ちた満面の笑みを浮かべる。そんな可憐な笑みを浮かべる彼女に対し、クリュウは恥ずかしそうに頬を赤らめながら、同じく笑みを浮かべ返す。
「ありがと、フィーリア」
少し元気を取り戻したクリュウが去って行くのを見て、ほっと胸を撫で下ろすフィーリア。彼の姿が完全に見えなくなるのを見届け、嬉しそうに微笑む。
「良かった……」
「フィーちゃんッ！」
狩場でもない為、特に警戒心もなかったフィーリア。そんな彼女の背後に忍び寄り、突然彼女を羽交い締めにしたのは、イタズラっぽい笑みを浮かべている少女。
「る、ルーッ!?」
「ニヒヒヒッ、恋する乙女の顔になってるよぉ？　かわいいなぁもうッ」
「ひゃんッ!?　ちょ、どこ触ってるのよぉ……ッ！」
背後からフィーリアを羽交い締めにしたルーデルは、楽しそうに彼女の胸やお腹をまさぐる。フィーリアは顔を真っ赤にして抵抗するが、根本的な筋力の差からルーデルの拘束を解く事はできず、結局されるがままだ。
散々フィーリアの体を弄び、満足したルーデルは実に満足気に微笑む。一方、弄ばれたフィーリアは顔を真っ赤にしたまま地面に座り込んでしまう。涙目になりながらこちらを睨みつけて来る彼女を見て、少しやり過ぎたかなぁと反省したのか、微妙な笑みを浮かべながら

ルーデルは彼女から視線を逸らす。
「ルー、何か言う事は？」
　恨みがましげに睨みつけて来るフィーリアに対し、視線を逸らしていたルーデルは少し考え、一言。
「ごちそうさま？」
「どういう意味よッ!?」
「他意はないわ。フィーちゃんの愛らしいおっぱいを堪能させてもらったから、感謝の意味を込めてこの言葉を送るわね」
「恥ずかしい事をそんなに堂々と言わないでッ！　それと小さくて悪かったわねッ！」
　自分のコンプレックスである小ぶりな胸を押さえながら怒るフィーリアに対し、ルーデルは「いやいや、フィーちゃんはそのちっぱいも魅力だと私は思うよ？」と悪びれた様子もない。
　昔からこういう性格だと親友故に良く知っているフィーリア。反省の様子がないのを見て大きなため息を吐いて諦める他ない。
「それで、ルーはこんな所で何してたのよ」
「別に、宛もなくプラプラ歩いてただけよ」
「相変わらず、無駄に行動力あるよねルーは」
　呆れる親友を横目に、ルーデルはふとある方向を見やる。その方向はちょうど先程クリュウが去って行った方向。もう見えない彼の背中を、少し淋しげに見詰める。
「ルー、どうしたの？」
　急に黙って全然違う方向を見詰めるルーデルを訝しがるフィーリア。そんな彼女の問いにルーデルは「何でもないわ」と短く答えて振り返る。
「ねぇ、フィーちゃんはクリュウの事、好き？」
「ふえぇッ!?」
　振り返ったルーデルの突拍子もない問いに対し、困惑するフィーリアは「な、何でそんな事をこんな所で訊くのよ？　別に、そんな事わざわざ訊かなくても……」と顔を赤らめながらはぐらかす。だが、
「真剣に訊いてるのよ。ちゃんと、フィーちゃんの言葉で聞かせて」

いつになく真剣な様子のルーデル。いつもはふざけているのに、なぜ今に限ってこんなにも真剣にこんな事を尋ねて来るのか。不思議に思いながらも、何か有無を言わせぬ迫力に、フィーリアもはぐらかす事をやめる。
「……うん、好きだよ。大好き」
頬を赤らめながら、恥ずかしそうに小声で彼への想いを語るフィーリア。その幸せそうな表情を見て、ルーデルもまた小さく笑みを浮かべる。胸の奥に、チクリとした痛みを抱きながら。
「そっか、そうだよね……うん、そっか」
まるで、何かを噛み締めるようにつぶやくルーデル。そんな彼女の様子を心配そうに見詰める親友に対し「ううん。何でもないわ」と笑みを浮かべる。
「ルー、何でそんな寂しそうに笑うの？」
「寂しくなんてないわよ。気のせいじゃない？」
「気のせいなんかじゃないよ。親友だもん、それくらいわかる。嘘は通じない」
いつもと様子が違う親友の様子に、先程とは逆に有無を言わせぬ迫力ではぐらかすルーデルを問い詰めるフィーリア。だがルーデルは「別に、何でもないわよ。フィーちゃんは、気にしなくていいの」と答えようとしない。
「ルーッ」
「大丈夫よ。これは私自身の問題だから、フィーちゃんは気にしないで」
「でも……」
「それに、もう整理がついたから、心配しないで」
そう言い残し、ルーデルは心配する親友から逃げるように足早に立ち去ってしまった。不安げに立ち去るルーデルの背中を見詰めるも、なぜか追いかける事ができないフィーリア。親友が大丈夫だと言い切るのだから大丈夫なのだろうが、それでもやはり不安は拭えない。
「ルー……」
視線の先の彼女の背中は、小さくなっていた。

「イリス？」
クリュウが一人、共同墓地の方へと赴くと、そこにはすでに先客が居た。彼の母、アメリア・ルナリーフの墓標の前に膝を折って祈りを捧げているのは、間違いない。クリュウの従兄妹にしてアルトリア王政軍国女王、イリスだった。
「おぉ、クリュウか。奇遇じゃのぉ」
祈りを終えたイリスは振り返ると、クリュウと会えたのが余程嬉しかったのか満面の笑みを浮かべて彼を出迎えた。
「こんな所で何をやってるの？　……っていうか、そのひどい格好はどうしたのさ？」
苦笑を浮かべる彼の視線の先には、ここまでの苦労が見て取れる程にボロボロとなったドレスを纏ったイリスの姿。自らのはしたない姿を確認し、イリスは頬を赤らめながら「ここに至るまで数え切れぬ程転んだのじゃよ」と苦笑いを浮かべて彼の問いに返した。
「そこまでして、一体何しに――って、聞くまでもないか」
クリュウの視線は、イリスの背後に注がれていた。そこにあるのは、間違いなく自分の母であるアメリアの墓標だ。先程までの彼女の姿を見ていれば、その目的など簡単に想像できる。
「母さんに、挨拶してたんだ」
「うむ。伯母上に初めて会うにしては、みすぼらしい格好になってしまったが、早く挨拶がしたくてのぉ」
苦笑を浮かべるイリスの顔が、どこか母や自分に似ている。
彼女の母、ロレーヌ・アルトリア・ティターニアはクリュウの母、アメリア・ルナリーフの妹にあたる。その為、クリュウからすれば彼女は従兄妹になる。
母アメリアは当時のアルトリア王国の第一王女だったが、父エッジ・ルナリーフと恋に落ち、その他様々な要因があって彼と駆け落ちして国を飛び出した。
後に妹であるロレーヌが王位継承し、強権で独裁的ながらも富国強兵化を推し進め、アルトリア王政軍国と国名を変え、その後娘であるイリスに王位を譲り渡し、現在に至る。

一方のクリュウは駆け落ちしたアメリアとエッジの間に生まれ、極普通の平民として育った。
先日のクリュウの母の事を知る為にアルトリアへ渡って以来、初めてお互いを従兄妹として知り合った。言わば、身分はまるで違うが二人は唯一無二の血縁者と言える。顔がどこか似ているのも、当然と言える。
「ここが、主らがクシャルダオラを撃退した場所なのじゃな」
「まぁね。幸い、ここはほとんど被害は無かったんだ」
そう言って見回すも、壊れている墓標等はない。最終決戦地となったここだが、同時にここは戦わずして彼が去った場所でもある。
「……聞いたぞ。そのクシャルダオラが、叔母上を殺した相手だったのじゃな」
「うん……」
「無粋な事を訊くぞ？　お主は、鋼の龍王を憎んでおらぬのか？」
イリスの問いかけに、クリュウは一瞬彼女の背後にある母の墓標を見た後、静かに首を横に振った。
「まぁ、憎んでないって言えばなくはないけど。前程は憎んではいないかな。剣と爪を交えて、何だか通い合ったみたいな気があるし」
「モンスターと、通い合う？」
「うまく言葉に出来ないんだよ」
変だよね、と苦笑を浮かべるクリュウに対し、イリスは静かに首を横に振った。
「お主らしいではないか。まぁ、お主がそれで良いと申すなら、妾は良いのじゃ」
「ごめんね。イリスにも、色々と迷惑かけちゃったのに中途半端な結果になっちゃって」
「何を気にしておるか。妾はお主が無事なら、それ以上に何を求めん。お主の笑顔が、妾にとって何よりの宝じゃ」
そう言って嬉しそうに微笑む彼女の笑顔を見て、クリュウもまた静かに微笑んだ。わざわざ遠い異国から来て、大掛かりに助けてくれたイリス。感謝してもし切れないが、何よりも嬉しいのは、こうして不

安な時に彼女が笑ってくれる事だ。この笑顔を見れただけで、生き残れた事を実感できる。
「おぉ、それとお主にこれを返すぞ」
　そう言ってイリスは胸元からキラリと光る何かを取り出した。良く見るとそれは、金色のペンダント。クリュウはそれを見て目を大きく見開いた。見間違うはずのないそれは……
「それ、母さんのペンダント……」
「うぬ。お主に再会を約束した際に預かった物じゃ。これを機にお主に返すぞ」
「え、でも……」
「何を言っておるか。これはお主に次に会う為に約束の証として預かった物。約束が守られた以上、お主に返却するのが当然じゃろうて」
「そっか……ありがと」
　クリュウはイリスの手から母の形見のペンダントを返して持たうと、愛おしそうに一度表面を撫でてからポケットへとしまった。
「……お主の故郷、もっと違う形で見てみたかったのぉ」
　そう言って、残念そうに村の方を眺めるイリスの言葉に、クリュウも表情を暗くする。
「……ごめんね」
「バカを言うでない。別にお主を責めておる訳ではない。もっと早く、お主の元へと馳せ参じておれば、もう少し違う形に終わったのではないか。自分の行動を後悔しているまでじゃ」
「イリスは何も悪くないよ。それを言うなら、僕の方が自分の行動を悔やむ所は数多いよ。あの時もっとこうしていれば、そんな風に考えてばっかりだよ」
「お主は最善を尽くした。悔やむ必要などない」
「だったら、イリスだって同じだよ。助けてくれただけでも、ありがたいんだから」
　クリュウの言葉に、イリスは「これではお互いに暗くなってばかりじゃのぉ」と言って苦笑いを浮かべる。そんな彼女の言葉に、クリュ

ウもまた苦笑を浮かべる。
「では、明るい話をしよう。無理にでも笑っておれば、気分も明るくなるものじゃ。せっかくの機会じゃから、別離してからの互いの話をせぬか？　妾は、お主に話したい事がいっぱいあるのじゃッ」
そう言って笑みを浮かべて明るく振る舞う彼女の姿に、クリュウは心から助けられた。彼女の言う通り、心の中はどんなに笑っていても暗い。そんな暗く冷たいものが、彼女の笑顔を見ていると少しだけ溶けていくような気がした。
彼女に促されるまま、クリュウはそっと腰掛ける。
アメリアの墓標を前に、彼女の息子のクリュウと、彼女の妹の娘であるイリスが腰掛けながら互いのこれまでの話をし合う。運命の糸で結ばれた二人は、遠い辺境の村の小さな岬で、静かに語り合い続けた。

第２３１話　明日への誓い　動き出すそれぞれの物語

フィーリアと離れてしばらく行った所にある道脇の岩の上に腰掛けたルーデルは、静かにため息を零す。項垂れるように地面を見詰める事数分、ゆっくりと顔をもたげた彼女の瞳の縁には薄っすらと涙が浮かんでいた。

「そうだよね。好き、なんだよね。わかってたけど……辛いなぁ」

そう、わかっていたのだ。最初から。

クリュウ・ルナリーフという少年は、親友のフィーリア・レヴェリの初恋の相手である。親友が、心の底から慕い、愛している男。それが、クリュウだ。

わかっていたはずだ。だって、好きな人ができたと嬉しそうに打ち明けられ、以後も彼の事を楽しげに話す彼女。その時の彼女は、本当に幸せそうに笑っていた。その笑顔を、親友を取られた形でちょっと嫉妬心を抱いていたが、それでも親友の嬉しそうな姿に自らも心のどこかで応援していた。

親友の恋を応援する。親友として、当然の事のはずだ。なのに、自分はそれが心の底からできない。

だって――自分も、クリュウ・ルナリーフという少年が好きなのだから。

親友の好きな相手を好きになる。小説の中のようなベタベタな泥沼展開。ベタであるが故に、一番面倒極まりない関係となってしまった。

今ならわかる。フィーリアが、どうしてあんなに幸せそうだったのか――人を好きになる事が、どれだけ幸せな事なのか。

彼の顔を思い浮かべるとドキドキし、彼に話しかけられただけで心臓が止まりそうになる。気がつけば、視線はいつも彼を追い、頭の中ではずっと彼の事ばかり考えてしまう。

きっとフィーリアも、自分と同じような気持ちで居るのだろう。こ

の、くすぐったくも焦れったい。そして何とも言えない幸福感。恋、それは今まで経験した事がない感情に満ち溢れている。
だが、自分は決してこの感情に押し流されてはならない。なぜなら、自分の恋は間違っているのだから。
彼は自分にとって初恋の相手だが、彼は同時に親友であるフィーリアの初恋でもある。この想いは、親友を裏切る、決して許されないものなのだから。
――だから、ケジメをつけなければならない。つけなければ、ならないのだ。
「あぁもうッ！」
頭の中がゴチャゴチャになり、思わず感情的に自らの両頬を左右から叩いてしまう。力加減しなかった為、予想以上の痛みに苦悶するルーデル。
だが痛みが引くにつれて現実へと戻ると、またモヤモヤとした想いが胸の奥を渦巻いてしまう。
「ケジメ、つけなくちゃいけないのに……」
親友の為に、ケジメをつけなくてはならない。そう決めたはずだ。なのに、自分はまだ未練がましくそれができないでいる。この想いはフィーリアを裏切る事になる。わかっているはずなのに。
フィーリアは唯一無二の親友だ。絶望の闇のどん底で、全てを諦めていた時。彼女は突然現れ、純真無垢な笑顔で自分に光を教えてくれた。自分に、笑顔を取り戻してくれた大切な人。親友であり、恩人であり、家族でもある。
そんな大切な存在であるフィーリアの、大切な想いを踏みにじりたくない。裏切りたくない、ずっと彼女の親友でいたい。だからこそ、ケジメをつけなくてはならないのだ――クリュウへの想いを、諦めると決めたはずだ。
なのに、自分はまだ未練がましく、彼への想いを諦められずにいる。
「……ッ！」
悔しげに、ルーデルは何度も拳で自らが座っている岩を叩く。拳が赤くなり、激痛が走るが、それを歯を食いしばって耐え抜く。

「間違ってる。こんな想いは間違ってる。私はあんな軟弱男の事なんか、全く何とも想っていない」
　自らに言い聞かすように何度も同じような事をつぶやく。だが、どれだけやってもその刷り込みは通用しない。依然として、自分の胸には彼に対するどうしようもない《好き》という感情が居座り続けている。
「何でよッ。何でなのよ……ッ！　私は捨てなくちゃならないのに、何で消えないのよッ。間違ってる、この想いは間違ってるのにッ！」
「――間違って、ないと思うよ？」
　突然の声にハッとなって伏せていた顔をもたげると、そこには――
「誰かを好きになるって事は、絶対間違いなんかじゃないよ」
　自分が大好きで、でも今は最も会いたくなかった相手――唯一無二の親友、フィーリアが小さな笑みを浮かべて立っていた。
「フィー……ちゃん……」
「そっか、ルーもクリュウ様の事、好きだったんだ」
　突然知ってしまった親友の本心に困惑しながらも、目の前の現実を受け入れようとするフィーリア。何度も「そっか、そっか……」とつぶやく姿は突然の事態を受け入れようと自らに言い聞かせるよう。複雑そうな笑みからは、彼女の心境が見えるようだ。
　一方のルーデルの突然フィーリアに自らの想いを知られてしまい最初は呆然としていたが、すぐに立ち上がって慌てふためきながらも否定の声を上げる。
「ち、違うッ！　わ、私がクリュウの事が好き？　ば、バカ言わないでよ。何で私があんな軟弱者を好きにならなきゃいけないのよッ。じょ、冗談も休み休み言ってよねッ」
　若干早口になりながら必死に否定の言葉を並べるルーデルだが、その姿はあまりにも必死過ぎて全く説得力がない。親友のそんなあからさまな姿に、フィーリアは苦笑を浮かべる。
「ルーって昔からウソが下手だよね。本心を隠そうとする時、いつも声が大きくなって。必死過ぎてまるわかりだよぉ」
　フィーリアの言葉に更なる否定の言葉を並べようとしていたルー

デルは開きかけた口を閉じた。フィーリアの言葉と表情から、どんなにウソを並べても彼女には通用しない。そう、気づいてしまったから。
「……やっぱり、フィーちゃんには敵わないなぁ」
諦めたように、ため息混じりにつぶやくルーデル。そんな彼女の姿にフィーリアも小さく笑みを浮かべる。
「何年一緒に居ると思ってるのよ」
「そうだよね、フィーちゃんにはウソは通じないもんね」
語気を弱め、観念したように肩に入っていた力を抜くルーデル。そんな彼女に対しフィーリアは笑みを引っ込めると、改めて彼女の本心を問いかける。
「ねぇルー。ちゃんと、ルーの言葉で聞かせて。ルーは――クリュウ様の事が好き、なの？」
いつになく真剣な表情で問いかけるフィーリアの言葉と表情に彼女の真剣さ見たルーデルは、自らも覚悟を決めたように表情を引き締めると、素直に、自らの想いを告げる。
「……うん、私もあのバカ――クリュウが好きよ」
「そっか……」
「うん……ごめんね、フィーちゃん」
「謝る必要なんてないよ。誰かを好きになるって事はとても素晴らしい事だと思う。例えその相手が、私も好きな人だとしても、それは決して謝る必要なんてない」
静かに、でもどこか力強くひとつひとつの言葉を選びながら語るフィーリア。その強さに驚きながらも、彼女が自分を傷つけないよう言葉を選んでいる事にも気づいている。彼女の優しさは親友である自分にとっても自慢だが、今だけはその優しさが辛い。
「ほんと、ごめんね。私、フィーちゃんを裏切った。応援するって言ったのに、こんな事になっちゃって、本当にごめんなさい」
「……もう、だから謝る必要なんてないよ」
「でも、怒ってるでしょ？　私が、こんな想いを抱いた事。怒ってるでしょ？」

「――うん、怒ってる」
「……ッ！」
　恐る恐るという風に尋ねたルーデルの問いに対し、フィーリアはキッパリとそう答えた。彼女の返答に、ルーデルの表情が引きつる。だがフィーリアは怯えるルーデルに対し、静かに微笑みかけた。
「勘違いしないでね。私が怒ってるのは、ルーがクリュウ様を好きになった事じゃない――私が怒ってるのは、ルーが私の為にクリュウ様への想いを諦めようとしてる事だよ」
「え……」
　予想外の言葉に、呆然としながら伏せていた顔を上げると、そこにはいつになく真剣に怒るフィーリアが可愛らしくも、怒りに染まった表情で立ち塞がっていた。
「ルーは優しい娘だから、私を想って身を引いてくれるんだと思う。でもさ、それで本当に私が喜ぶと思う？　だとしたら――私はルーを軽蔑するよ」
　いつになく強い口調でルーデルに迫るフィーリア。いつもは優しい親友の怒りを顕にした態度に、ルーデルは返す言葉もなくただ黙って彼女の言葉を聞くしかない。そんな彼女に対し、フィーリアは改めて問い質す。
「ねぇ、ルーは私の親友だよね？　私はそう思ってるけど、ルーはどう思ってるの？」
「私も、フィーちゃんの事は大切な親友だと思ってる」
「そう。ならさ、ルーが私の幸せを願ってるように、私だってルーの幸せを願ってるって事くらい、わかるよね？」
　フィーリアの問いかけに対し、ルーデルは無言でうなずいた。その瞬間、フィーリアの目つきがより厳しいものへを変わる。
「なら、わかるよね？　私が、親友を犠牲にしてまで幸せを得たいなんて、そんなバカげた事を願う訳ない。私はそんな卑怯者じゃない」
「知ってるわ。フィーちゃんは、昔から誰かを犠牲にする選択を嫌う。心優しい、私の大親友」
「だったらどうして、ルーは私の為に身を引くなんて考えたの？　私

が、それで本気で喜ぶと思ってるの？」
「……わかってるわよ。そんな事で、フィーちゃんが喜ぶはずない。そんな当たり前な事、十分わかってるわよ」
「ならどうして――」
「私だって、この選択が間違ってるって事くらいわかってるわよッ！　でも、仕方がないじゃないッ！　私が、親友であるフィーちゃんの恋敵になる？　私が、フィーちゃんの敵になる？　そんなの嫌よッ！　私は――大好きなフィーちゃんを失いたくないのッ！」
悲鳴のように叫ぶ彼女の言葉、それが彼女自身の本当の気持ちに他ならない。親友の好きな人を好きになる。それだけでも心優しい彼女にとっては負担なのに、もしも本気で彼を好きになってしまえば、それは同時に親友であるフィーリアとクリュウを奪う敵同士になってしまう――親友であるフィーリアを、失うかもしれない。
奴隷商人から開放され、孤児施設に預けられてしばらくした頃に視察に訪れたレヴェリ三姉妹。その中の一人、末っ子のフィーリアと初めて出会ってから、これまでずっと親友として過ごして来た。
ルーデルにとって、唯一無二の親友。それを失うかもしれないような選択を、彼女が取れるはずもなかった。
そう、ルーデルが自ら身を引こうとしていたのは親友であるフィーリアの幸せを奪う選択ができないという事。そして、親友であるフィーリアを失うかもしれないという恐怖からだったのだ。
「私にとって、フィーちゃんはたった一人の親友なのッ！　そのフィーちゃんと敵になって、フィーちゃんを失うかもしれない。そんな選択できるはずないじゃないッ！」
目の縁に涙を浮かべ、泣き叫びながら自らの想いを語るルーデル。その表情は見ていられない程悲痛に歪んでいる。そんな彼女の姿を、フィーリアは静かに見詰め続ける。
「私はクリュウが好きッ！　好きなのよッ！　でも、でも……ッ！　それと同じくらい私はフィーちゃんが好きなのッ！　大好きなのッ！　どっちも、私にとっては捨てられない想い、大切な人なのよッ！」
悲痛な想いを泣き叫ぶルーデルは、そこで膝を折ってうずくまって

しまう。伏せた顔の下の地面にはポタポタと悲しみの雫が垂れる。頬を流れる涙は止まる事なく溢れ続ける。
　頬を零れ落ちる悲しみの雫。フィーリアはゆっくりと膝を折ると、手を伸ばし、ルーデルの頬を流れる涙を指先で拭い取った。
「私だって、同じ想いだよ。私だって、ルーを失いたくない。私にとっても、ルーは親友だから」
「フィーちゃん……」
「――でも、私の親友はそんな弱気な人じゃない」
「え？」
　驚き、思わず伏せていた顔を上げると、そこには真剣な眼差しでこちらを見詰めているフィーリアの顔がそこにあった。呆然としているルーデルに対して、フィーリアは静かに語りかける。
「私と敵になるのが嫌だから、好きな人を諦める？　そんなの、私の親友のルーデル・シュトゥーカじゃない。私の知っているルーは、自分の気持ちを押し殺したりなんかしない。自分の願いを諦めるような人じゃない。いつも真っ直ぐ前を見て、勇猛果敢に困難に挑んでいく、かっこ良くて、強くて、優しくて……でもちょっぴり不器用で。何より――私を失望させたりなんかしない」
　ゆっくりと、一つ一つ言葉を選びながら語るフィーリアにとってのルーデル・シュトゥーカ像。それは、幼い頃からずっと一緒にいた親友だからこそ知っている、ルーデルの本当の姿。自分以上に自分を良く知っている、そんな親友が語る自分と、今の自分とのギャップに気付かされたルーデルは返す言葉を見つける事ができなかった。
　フィーリアを見詰めたまま黙り続けるルーデル。そんな彼女に対して、フィーリアはさらに言葉を続ける。
「ねぇルー。ルーは本当にそれでいいと思ってるの？　そんな中途半端な気持ちで、本当にこれからもクリュウ様と親しくできる？　私と一緒に居られる？　そんな、曖昧な気持ちで、本当にこれからも私達二人とやって行けるの？」
「そ、それは……」
「できない、よね？　ルーは真っ直ぐだから、そんな器用な事はできな

い。どっちとも気まずくなって、結局どっちともグチャグチャになっちゃう」
　返す言葉がなかった。彼女の言う通り、自分は不器用な人間だ。自分の気持ちを押し殺したまま彼と接する事などできないだろう。色々な気持ちがグチャグチャになって、彼とは会話すらままならなくなる。それはきっと、親友であるフィーリアも同じだ。結果、自分は二人のどちらとも、これまで通り接する事はできない。二人との関係を守りたいが為の行動は、結局どちらをも失ってしまう……
　愕然とするルーデルに対し、フィーリアはゆっくりと最後の説得を行う。
「ねぇルー。私はね、確かにルーがクリュウ様を好きになっちゃって正直複雑だよ？　親友の恋は応援したい。でも、その相手は私も好きな人。応援したくても、できない。こんな想いをルーはずっとしてたんだよね？　だから――今まで、本当にごめんなさい」
　そう言って、フィーリアは深々と頭を下げた。今自分が胸の奥で渦巻く複雑な感情。考えれば考える程胸が締め付けられて、頭が回らなくなる。複雑すぎて自分じゃどうしようもない。こんな感情を、今までずっとルーデルは抱いていたのだ。押し付けていた、気付かなかった自分が情けない。だからこその謝罪の言葉だった。
「フィーちゃんが謝る必要なんてないッ！　謝るのはむしろ私であって――」
「――でもね、ルー。私はこうも思ってるんだ」
　謝るべきは、むしろこんな複雑な状況にしてしまった自分だと謝り返そうとするルーデル。そんな彼女の言葉を制したフィーリアはゆっくりと下げていた頭を上げる。その瞬間、ルーデルは彼女の表情を見て言葉を失った。だって、彼女は――
「私が、心の底から愛している人。その人を、私が大好きで信頼できる最高の親友であるあなたも好きになった――こんなに嬉しい事って、そうないと思うんだ」
　――そう言って、フィーリアは笑みを浮かべた。本当に幸せそうな、見るだけで周りが優しく、温かくなるような、そんな天使の笑顔。

彼女の笑顔に見とれながら、ルーデルもまた彼女と同じ想いだった。
親友同士、同じ人を好きになる。それは確かに複雑だし、結局は奪い合う形になってしまう。結末はどうがんばっても、双方がハッピーエンドには決してならない。でも、考え方を変えれば自分達が好きになった人が同じというのは、互いにその相手、クリュウの素晴らしさを認めているという事。自分の好きな相手が、本当に素晴らしい人だという証拠でもある。
自分の恋は間違っていない。形は複雑でも、親友同士互いに認め合っている。
そう考えれば、確かに複雑な状況ではあるし、結果は決してハッピーエンドにはならない。これから先、きっと大変な道のりになる事は予想できる。でも――
「……そうね。確かにあいつは軟弱者だし優柔不断だし、良くも悪くも誰にでも優しい面倒な奴よ。でもさ――そういう所が素敵よね」
「うん。ライバルも多いし、私達の想いにも全然気づいてくれない鈍感な人。でも――やっぱり好きなんだよね」
――今だけは、クリュウの事を想って、笑い合える。
「好き、なんだよね。うん、私はクリュウの事が好き。やっぱり、諦め切れない。フィーちゃんの言う通り、あいつを狙う奴は多い。乳デカクール女や、常識知らずの眼帯女、暴力幼なじみ。可愛くないイビルアイに、突撃しか知らないバカツインテール。はたまたアルトリアの幼女王に世間知らずのエルバーフェルド国防海軍総司令官様。きっと、もっとたくさんあいつを好きな女は居る」
「……言葉は悪いけど、誰が誰かは良くわかるね。っていうか、本当にすごい人ばっかりで正直参っちゃうなぁ」
「何より、最強の恋敵(ライバル)であるフィーちゃんも居る。これは、ものすごく攻略難易度が高いわね。でも、私は負けないわ。絶対に全員を蹴散らして、あいつを奪い取ってみせる。悪魔のサイレン、ルーデル・シュトゥーカの恋唄は、止まらないわ――もちろん、フィーちゃんにも負けない」

不敵に微笑んでみせるルーデルは、フィーリアが良く知っている親友の表情そのものだった。強い相手であればあるほどに燃え、勇猛果敢に挑み掛かる。常に強く、凛々しく、猛々しい。でもその不敵な笑顔の下には心優しくも素直じゃない、十七歳の少女の顔がある。恋に生きる乙女の強い決意。

不敵に微笑む親友に対し、フィーリアもまた頼もしく笑い返す。

「私だって負けないもん。クリュウ様への想いは、誰にも負けない。もちろんルーにだって。前途多難で、きっと大変な恋だと思う。でも、私は負けない。必ず、私はクリュウ様のお嫁さんになるもんッ！」

「言うわねぇ。私だってあいつを婿にしてみせるわ。クリュウ・シュトゥーカ、なかなか痺れる名前じゃない？」

「そ、それを言うならフィーリア・ルナリーフの方が素敵だもんッ」

「ルーデル・ルナリーフ……ラ行ばっかりで舌噛みそうね」

「それを言うなら、クリュウ・レヴェリだってラ行が多いし、何より語呂が悪いよ」

真剣にお互いの将来の名前について考え合う二人。傍から見るとあまりにもバカバカしい光景でも、恋する乙女にとっては重要な問題だ。真面目に考える二人の視線が、ふと重なる。その瞬間、どちらからとなく笑いが零れた。

面白おかしく、声を上げて笑う二人の少女。

親友同士、互いの好きな人が一緒。何て複雑で、神様が居るとすれば蹴手繰り倒してやりたいような無茶苦茶な運命。でも――今だけは、笑っていられる。今だけは、幸せな想いが胸の奥にある。お互いに好きな人が一緒で、同じ想いを抱く者同士。自分達は全くタイプが違うようで、やっぱりどこか似ている。

恋する乙女、信頼し合える親友同士、フィーリア・レヴェリとルーデル・シュトゥーカ。

二人の恋は、まだ始まったばかりだ。

「……ルフィールは、前にこの村に来た事があるんすよね？」

「えぇ。とても長閑で、素敵な村でした」

「……そっか。それはシャルも見たかったっす」

「本当に素敵な村でした。だからこそ――胸が痛いですね」
瓦礫が散らばる、荒れ果てた村の有り様を見ながら悲痛そうに語るルフィールの言葉にシャルもまた辛そうに顔を顰める。
会議終了後。クリュウとフィーリアが二人で話しているちょうどその頃。カレンの許可を得てイージス村の中へと入ったシャルルとルフィールの二人は、無残に破壊された村の現状を歩きながら視察していた。ルフィールは村の無事な姿を知っているからこそ、記憶の中の素敵な村の光景と今の無残な光景を重ね合わせ、胸を痛める。無事な姿を知らないシャルルも、自らの故郷のアルザス村と比べながら、悲惨なこの光景に胸を痛めていた。
特にルフィールからすれば、ここの村の人達は自分の目を見ても恐れる事なく、むしろ優しく接してくれた事から一回した来た事のないイージス村に対しても好意を抱いていた。だからこそ、余計に辛い。
「この村は上水道が整っていたのですが、その見る影もないですね」
「じょうすいどうって何すか？」
「要するに水路の事です。これは、その水路の残骸ですね」
「あぁ、クシャルダオラとの戦いでお前が隠れてた場所は水路の残骸だったんすか」
「戦争などでよく使われる塹壕戦を参考にしたのですが、思いの外役に立ちました」
「……お前の言葉は時々難しくてよくわからないっすよ」
「別に構いません。シャルルさんに辞書が必要になる単語を理解できるとは微塵も思っていませんので」
「……テメェはどんだけシャルをバカにするっすか」
睨みつけるシャルルの視線を無視し、ルフィールは瓦礫を跨いで道を進み続ける。そんなやりとりをしながら二人が目指した場所、そこは倉庫を備えた一軒の住居だった。壁や屋根の一部が壊れ、窓は全て割れている。全壊の家屋も少なくない中、半壊で済んだこの家は――
「……これが、兄者の家っすか？」
「はい。正確にはこの村に常駐するハンター全員が住んでいた、所謂駐屯所のような場所でした」

「だから、難しい言葉をわざわざ使うなっす。要するに兄者の家っすよね」
そう、二人が訪れたのはクリュウの家だった。クリュウの家は村の中心部に位置していた。そしてそこは最も激しい戦闘が行われた場所でもあった。事実、周辺の家屋のほとんどが全壊している。その中で半壊で済んだのは、ある種の奇跡だったのかもしれない。
破壊されたドアを開けて中へと入ると、中も家具が散乱してひどい有様となっていた。それでも、そこは確かに以前自分が過ごした愛しい彼の家だった。
「あ、これ……」
シャルルが見つけたのは、床に落ちていた一冊の本だった。それはずいぶん使い古された本で、至る所にに付箋が貼られていたり、ページの端が折られている。中を開ければ色々な箇所に線が引かれ、後から書き加えられた彼直筆のメモ書きも据えられている。
「それ、訓練学校の頃の教科書っすよね。確かモンスター学の」
「はい。モンスターの基本的な生態や動き等が書かれている教科書ですね」
二人してその教科書を覗き込むと、どちらからとなく苦笑が漏れた。
ページの本文以外に、空いているスペースにビッシリと彼の文字で補足が書き加えられ、中には付箋にまで書いている場所もある。別の資料の情報や実際に経験した内容などが細かく書かれている。彼がどれだけこんも教科書を愛用していたかがわかる。
「相変わらず、兄者はクソ真面目っすねぇ」
「その真面目さが、素敵なんじゃないですか」
「まぁ、そうっすけどねぇ」
頬を赤らめながら微笑むルフィールの言葉に、同じく頬を赤らめたシャルルが犬歯を見せながら微笑む。
親友同士、互いに同じ人を好いているルフィールとシャルルの二人。しかしいがみ合う事なく、むしろお互いを認め合い、切磋琢磨している二人。性格もバトルスタイルも全く違う二人だが、彼を思う想

いはどちらも負けてはいない。
学生時代、初めて彼と出会い、彼の優しさに触れ、様々な苦難を乗り越えて来た二人。その彼と共に過ごした時間の中には、当然お互いの出会いがあり、ケンカし合いながらも切磋琢磨し合った日々も含まれる。
あの頃から共に過ごし、現在は共にルーデルの働きもあってレヴェリ領を拠点にハンター活動をしている。そして彼を救う為に村へと駆けつけ、古の龍王クシャルダオラと激闘を繰り広げた。そして今、こうして二人して彼の教科書を覗き込んでいる。
全ては、彼と出会った時から変わった。自分にとって、かけがえのない時間だ。
だからこそ、辛い――
「……この家、もう一度兄者が笑って過ごせるようになるっすかね？」
半壊した家は、素人目に見ても修理が並大抵な事ではない事がわかる。もちろん、家だけが戻っても仕方がない。周りの家々が戻り、村人達が戻り、村が蘇らないとならない。
定義は様々だが、シャルルが言う事の意味は文字通りの意味だ。それに対し、ルフィールは首を横に振った。
「村の状況は、正直絶望的です。瓦礫の量が多く、まずその撤去が並大抵ではありません。それが終わったとしても道路や上水道の修復、家屋の復旧があります。更に長期的には畑や果樹園の復旧といった住民の収入源の確保も必要です。港もあの嵐の影響でかなりの被害を受けて港湾設備がダメージを負っている事に加えて、漁船もずいぶん沈没してしまっています。復興には膨大な時間と大勢の人手、莫大な復興費用が掛かるでしょう」
「……お前の話は長くて周りくどいっす。要するに、どういう事っすか？」
普段はどんな言いづらい事でも淡々と語るルフィールだったが、この時ばかりは一瞬言葉に詰まった。しかし意を決して、臆する事なく自らの判断を下す。
「……廃村、そういう選択が濃厚かと思われます」

「――阿呆、そのような悲しい結末、妾は認めんぞ」
突然の声に二人が驚いて振り返ると、そこには二人とはまるで縁のない身分の少女が威風堂々と立ち塞がっていた。
「あ、あなたは……」
「先程の会議の初めに名乗ったはずじゃが、まぁ良い。妾の名はイリス。イリス・アルトリア・フランチェスカ。南洋に浮かぶアルトリア王政軍国で女王を務めておる者じゃ」
そう言って名乗ったのはアルトリア王政軍国女王のイリスだった。
突然一国の女王が現れた事に呆然とするルフィールに対し、バカシャルルは――
「お前、確かどっかの国の女王とか言ってたっすよね」
――何と、一国の女王に対して恐ろしい程のフランクな態度で接するシャルル。これにはイリスの方が驚いた。大体の人々は自分の肩書を知れば萎縮するのだが、シャルルはそんなのお構いなしだ。
「申し訳ありませんッ」
自らも常識がない方だとはある程度自覚はあるルフィールだが、さすがに一国の女王に失礼な態度はできない。すぐにバカシャルルの頭を掴んで無理やりにでも頭を下げさせる。当然シャルルは抵抗するが、そこは付き合いの長いルフィール。皆が畏怖するイビルアイで睨みつけて無理やり黙らせた。
一国の女王に対しての無礼。何を言われるかヒヤヒヤするルフィールだったが、頭を下げていた彼女の耳に飛び込んで来たのは、高貴の欠片もない笑い声だった。
驚いて顔を上げると、イリスが大笑いしていた。
「あ。あの……」
「あぁ、すまんのぉ。妾の身分を知ってそのような態度をする奴が珍しくてのぉ」
「す、すみません。この人ものすごくバカなので……」
「シャルはバカじゃないっすッ！」
「黙っててくださいッ！」
「良い。気に入ったのじゃ。無用な敬語はなしで、友人に接するよう

な口調で構わんぞ」
　笑いながら無礼講で構わないと言うイリスだが、当然そんな事できないと首を横に振るルフィール。だがシャルルはと言うと、
「女王さんだか何だか知らねぇっすけど、敬語しなくていいって言うならシャルはいつも通りっすよ」
　敬語なんて全く使えないシャルルからすれば、それをしなくていいというのはとても楽だ。シャルルの楽観的な発想に思わず頭を抱えてため息を零すルフィール。そんな彼女の苦悩など知らず、シャルルは早速イリスへと近づく。
「しっかしお姫さん。お前、ずいぶんボロボロっすねぇ」
「シャルルさんッ！」
　血相を変えてシャルルへと駆け寄ったルフィールは慌てて彼女の口を塞いで再び頭を下げさせる。イリスがどういう姿をしているか、それはルフィールも最初に気づいていた。
　シャルルに指摘されたイリスは、小さく苦笑を浮かべる。
「うぬぅ、妾はドジでのぉ。こういう足元の悪い所だと転んでばかり。しかも簡易とはいえドレスはどうにも動きづらくて……」
　そう言ってその場で一周してみせたイリスは、全身ボロボロだった。ドレスは裾の部分が破れ、泥だらけ。一国の国家元首としてはあまりにも惨めな姿だった。
「後でジェイドにまた怒られてしまうのぉ……」
　苦笑を浮かべるイリスの表情を見て、ルフィールの緊張が少しだけ和らいだ。一国の国家元首という事で萎縮していたが、その表情を見る限りは年相応の少女に見える。イタズラがバレるのを恐れつつもどこか諦めている、そんな表情だ。
　一国の国家元首と言えど、年下の女の子なのだ。
「して、お主らはこんな所で何をしておるのじゃ？　確かお主らは……」
「ルフィール・ケーニッヒです。こっちの頭が残念極まりない方はシャルル・ルクレール」
「テメェ、どんな紹介をしてやがるっすかッ！」

「どちらも、クリュウ先輩の学生時代の後輩です」
「おぉ、クリュウの後輩とな。それは、妾にとっても他人とは言えぬのぉ」
うむうむと何度も一人で頷くイリスに対し、彼女とクリュウの関係を知らないルフィールとシャルルは訝しげな表情で彼女を見詰める。
「あの、女王様」
「そのような他人行儀でなくても良い。友人関係のような振る舞いで構わんぞ」
「いえ、そういう訳には……」
「あのさ、イリスにちょっと訊きたい事があるんすけど……」
平然と気軽にイリスに声を掛けるシャルルを慌てて止めようとするルフィールだったが、イリスが改めて「良い」とその制止を止める。そんなやりとりの後、結局いつも通りの感じでイリスに改めて話しかけるシャルル。
一国の女王に対し気軽に話しかける事ができるシャルル・ルクレール。恐るべき大物なのか、それとも前代未聞の大馬鹿者なのか。十中八九後者の方ではあるが、シャルルの裏表のない性格は、むしろイリスに好感を与える結果となった。
「イリスと兄者の関係って、どんな関係なんすか？　兄者は国無（ノンカントリアス）の平民。あんたは大国の女王様。どう考えても接点がねぇんすけど」
彼女の無謀さに呆れながらも、彼女の口から放たれた疑問はルフィールも抱いていたものだった。
ルフィールの問いに対し、イリスは苦笑を浮かべる。二人の疑問は最もな事は理解しているが、何せ複雑過ぎる状況の為どう説明したものか悩む。それに加えて、彼の許可なしに彼の後輩に勝手に自分達の関係を告げるべきか悩んでもいた。
しばしの無言の後、イリスは二人に全てを話す事を決意する。クリュウの後輩という立場もあるが、特にシャルルの歯に衣着せぬ物言いに好感を抱いたからだ。
イリスはゆっくりと、自分とクリュウの関係を語り始めた。自分と

彼が血縁関係にある事、彼女の母が王族出身であった事、彼とのアルトリアでの日々等を二人に説明する。最初はあまりにも大き過ぎる、小説の中のような展開に驚くばかりだった二人だったが、彼女がウソを言っているようには見えなかった。
　全てを聞き終えた二人はしばし呆然としていたが、内容を理解するにつれてゆっくりと口を開く。
「あの先輩が、アルトリアの王族の血筋の方だったなんて……」
「マジで本の中の話みたいな話っすね」
　驚く二人に対し、イリスは苦笑交じりに「妾も自らで体験しなければ夢物語だと笑い飛ばしておったのぉ」と二人の発言に同意する。
「それじゃ、兄者は王族って事っすか？　すげぇっすッ」
「いやまぁ、彼の母上は王室的にはある種の破門となっておる。じゃから彼には王族としての権限も無ければ、男であるが故に元々王位継承権もない。我が国は女王統治国家じゃからな。今の彼はただの平民じゃよ」
「だとしてもすげぇっすッ！　さすが兄者っすッ！」
「シャルルさんはすぐに流石という言葉を使いますが、意味をわかって使っていますか？」
　変に盛り上がるシャルルと窘（たしな）めるルフィール。二人のいつもの光景に、イリスは可笑しそうに小さく笑みを浮かべた。
「まぁ、そんな訳で妾とクリュウは現在では唯一無二の従兄妹同士。彼が故郷に戻ってからは手紙でのやりとりだけは続けておってのぉ。じゃが、ちょいと外交関係の都合でこちらに来る用事ができてのぉ。ついでに立ち寄った訳じゃが、まさかこのような事になっておったとはなぁ……」
　そう言ってイリスは辺りを改めて見回す。家の中はずいぶんと壊れているし、家の外はそれこそ瓦礫だらけ。これがつい数日前までは長閑な村だったとは、信じられない荒廃ぶりだ。
「して、主らはなぜこのような場所におるのじゃ？」
「ここは、先輩の家なんです」
「……そうか、ここがクリュウの生家なのじゃな」

クリュウの家だと知らされたイリスは興味深げに辺りを見回す。ずいぶんと荒れてはいるが、良く見れば人の生活の後が見える。それが、彼が暮らしていた証拠だ。
「全壊は免れたとはいえ、それでも大規模な修繕が必要じゃな」
「そうですね。それに、例えこの家だけ直ったとしても、村が立ち直らなければ意味がありません」
ルフィールの言葉に同意見だとばかりに頷いてみせる。彼女の言う通り、例え彼の家だけが戻っても意味はない。村が戻らなければ、それは復興とは言えない。
「想像以上の被害じゃ。これが、古の龍王の力なのか……」
一国を預かる女王という立場。モンスターとの戦いに対してどのような対策を行うかも彼女の仕事の一つと言える。その最大の厄災、古龍との戦いが如何に激戦を極めるか。村の被害状況、そして軍事機密の為正確な情報はわからないが、それでも同盟国エルバーフェルド帝国の精鋭艦隊が大損害を受けた。古龍というものが、それだけ凶悪にして脅威な証拠だ。
「村全体が、ずいぶん被害を受けています。被害を免れたのは、西の岬の方だけだと聞いています」
「西の岬？　あぁ、この村の墓地がある方向っすね」
「墓地とな？　では、伯母上の墓もそこに……」
村の共同墓地が西の岬にあると知ったイリスは少し考えると、まだ何かを話している二人に背を向けた。
「女王さん？　どうしたんすか？」
「あぁ、すまんのぉ。ちょっと西の岬へ行ってくる」
「それは良いっすけど、何でまた」
「先程話した通り、クリュウの母は妾の叔母上に当たる人物じゃ。まだ墓参りをしておらん。今のうちにしておかんと、しばらくできそうにないしのぉ」
そう言ってイリスは玄関へと向かうが、転がっていた分厚い本に足をつまずかせて転倒。ビタッと見事に床に倒れ込んでしまった。
起き上がらず倒れたままの女王と、それをとんでもないものを見て

しまったと目のやり場に困る平民二人。奇妙な沈黙が数秒続いた後、シャルルは一言。
「……女王さん、シャル達が送ってくっすよ」
「……すまぬ」
「悪いわね。手伝ってもらっちゃって」
会議終了後、エレナは酒場の片付けの為に村へと入った。そんな彼女の手伝いをする為に、シルフィードも同行する事となった。ついでにいつも通り協調性のないサクラを連行して、珍しい三人での組み合わせで、今まさにエレナの酒場で片付けに勤しんでいた。
棚から落ちて割れた食器などを片付けるエレナは、壊れたテーブルを外へと運び出しているシルフィードに申し訳なさそうに謝るが、シルフィードは小さく首を横に振る。
「気にするな。ここで君にうまい飯をたらふく振る舞ってもらった。その礼だと思え。それに、困った時はお互い様だよ」
「……ありがと。やっぱりシルフィードは違うわねぇ。それに引き換え――」
苦笑するシルフィードから視線をズラした先には、一人無事だったテーブルに腰掛け、腕組みをしながら目を閉じて瞑想するサクラの姿があった。
呆れるエレナは「そんな所で座ってないで、少しは手伝いなさいよ」と彼女に声を掛けるが、サクラは無言を貫いた。イライラするエレナに対し「まぁ、そう怒るなエレナ」とシルフィードが宥める。
「彼女には彼女の気持ちがある。そう無理強いはするな」
「……シルフィードは甘いのよ」
「まぁそう言うな。細かい事はできんが、力仕事なら私に任せておけ。ほら、次はこのテーブルを外に出せばいいのか？」
率先して手伝いに勤しむシルフィードに対し、苦笑を浮かべながらエレナは「そっちのテーブルをお願い」と指示を飛ばす。同時に、皆がまだ村の破壊に現実を受け入れきれていない中、一人すでに前を向いて進んでいるシルフィード。その心の強さにエレナは感心していた。

シルフィードからすれば、クリュウを中心とした今回村に集結しているメンバーのほとんどは自分よりも年下ばかり。だからこそ年長者である自分が一番しっかりしなければという想いが強かった。同時に、彼女は幼い頃に自身の故郷を失っている。その経験があるからこそ、人より故郷が壊れる事に耐性があった。もちろん、だからといって辛くない訳ではない。それを隠し、強く振る舞っているだけだ。

まだ現実を受け入れられないものの、とにかく今できる事として片付けに勤しむエレナと、それを手伝うシルフィードの二人に対し、サクラはずっと無言を貫いていた。

「……」

無言でいるサクラの心境は複雑だ。

彼女は老山龍ラオシャンロンに襲われて廃街したカルナス決戦での生き残りだ。守るべきものが崩れ去る事を経験し、彼女は「全てを守る」という理想を掲げている。そんな彼女の理想は、守ると決めていたイージス村の破壊で揺らいでしまった。

全てを守ると決意していたのに、守れなかった。ぶつけようのない想いと、自らの未熟さを痛感した今回の戦いで、彼女は気力を失っていたのだ。

自分が守ると誓ったイージス村は失われた。自分はこれから、どうすればいいのか。考えても答えは見つからず、結果それは彼女を無気力にさせてしまっていた。

三者三様の想いが渦巻く酒場。そんな酒場に一人の来訪者が現れた。

「あれ？　どうしたの、みんな揃って」

現れたのはクリュウだった。クリュウは酒場へと入ると、居るメンバーを確認する。そのうちの一人、エレナと目が合った。

「クリュウ？　どうしたのよ、こんな所に」

「いや、通り掛かったら声が聞こえたから立ち寄ったんだけど」

「まぁ、見ての通り片付けの最中だ。ここはクシャルダオラとの戦いで直接の被害を受けた訳ではないが、嵐の影響でそれなりに荒れてい

るからな。ひとまず、拠点として使えるくらいには復旧しないと」
「拠点？　ここを拠点にするの？」
「まぁね。ほら、ウチって食材なんか地下の倉庫で保管してるでしょ？　幸いそっちの方は被害がなかったから、食材の備蓄は結構あるのよ。村のみんなが戻って来た時、さすがに軍隊の携帯食料ばっかりじゃ可哀想でしょ？」
　すでにカレンの計らいでイージス村の村民が戻って来た際にはエルバーフェルド海軍から食料提供を受けられるよう手配してくれている。早朝に接岸した輸送艦には陸戦隊の他にそういった食料や復興に必要な備品などが大量に用意されていた。カレンがフリードリッヒに無理を言って用意した支援物資だ。
「カレンの助けはかなり有難いが、やはり郷土料理というのは体だけではなく心も満たしてくれる。エレナは、そうした心を充実に努めるそうだ」
　皆がまだ、現実を受け入れきれず困惑している中、エレナはすでに覚悟を決めて復興へとの第一歩を踏みだそうとしているのだ。そんなエレナの想い、強さにクリュウは彼女に感心する。
「そっか。じゃあ僕も手伝うよ」
「いいわよ。もうほとんどシルフィードにやってもらったし」
「そっか……じゃあ、何かあったら言ってね。手伝うから」
「ありがと」
　笑顔を浮かべて礼を述べるエレナ。そんな彼女に笑みを返したクリュウだったが、すぐに部屋の隅でずっと無言を貫いているサクラに気づいた。彼の視線を追った二人もまた、らしくない彼女の振る舞いに戸惑いを見せる。
「いつもなら、真っ先にクリュウに飛びつくはずなのに」
「さすがに、ちょっと変だな」
「サクラ？　どうしたの、具合でも悪いの？」
　心配するクリュウの問いかけに対し、サクラは無言で首を横に振った。
　無言を貫こうとするサクラだったが、心配する彼の表情を見て沈黙

はできないと思ったのか。ゆっくりと小さなため息を吐き、そして静かに口を開く。
「……私はまた、守れなかった」
「サクラ……」
その言葉の意味を、クリュウは知っている。
護衛の女神、そう謳われる彼女は護衛任務に依頼の重点を置いている。その対象は危険地域を通り抜ける商隊の護衛などが主であるが、時にはこうした村や街の防衛も含まれる。
護衛任務は民間人が依頼主の為に報酬金額が少なく、地味に加えてそれぞれで達成条件が細かく異なる。何より、巨大なモンスターを討伐してこそ狩人（ハンター）だと考える者が多い為、どうしても受注する絶対数が少ない。その為、毎日のようにハンターズギルドには数多くの護衛依頼が届くが、それが実際に受注されてハンターが赴くのはそのうちの半分にも満たない。
結果、現在でもモンスターの襲撃が予期されていながら十分な迎撃準備ができず、結果として故郷を放棄する自治体は存在する。商隊に関しても同様で護衛者が居ない状態で危険なエリアを通り抜け、結果壊滅的被害を受ける商隊は後を絶たない。多くの商人が、現在でも命を落としているのだ。
彼女は自身の過去、両親と大切な仲間を轟竜ティガレックスによって奪われた。その経験から護衛依頼を何よりも重要な最優先任務と考え、これまで多くの街や村、更には商隊を守って来た。その奮闘ぶりは凄まじく、腕が折れようが脚を負傷しようが、夜叉の如き猛烈怒涛の剣撃で数多のモンスターを撃破。血反吐を吐きながら自らの命をも顧みず護衛対象を守る様は、いつしか商人達の絶対の信頼を得るようになり、今では隻眼の人形姫というハンターの中での二つ名の他に、商人達からは護衛の女神とまで呼ばれるまでになった。
彼女が単純な戦闘能力ならフィーリアや、更にはシルフィードをも上回るのに二人よりもランクが下なのは、任務達成で得られるポイントが討伐依頼などに比べて低い護衛依頼ばかり受けている証拠だ。大型モンスターの討伐記録も二人よりは少ないが、逆に小型モンスター

の討伐記録は常軌を逸している。
全てを守る。それは、彼女がいつも公言している彼女の理想、信念、夢、願い。
目の前で両親や仲間を殺された。カルナス防衛戦では老山ラオシャンロンによって守るべき街を破壊された。その二つの過去から、彼女は常軌を逸した気迫で護衛依頼を完遂して来た。その気迫と実力が、いつしか彼女を女神と謳われるまで成長させたのだ。
だが、今回のイージス村防衛戦は鋼龍クシャルダオラを撃退したとはいえ、その実は失敗だ。守るべき村は壊滅的被害を受けた。全てを守る、そんな信念を抱く彼女にとっては、心が抉られるような敗北だ。
戦闘地点が当初のイルファ雪山ではなく、肝心のイージス村になってしまい、イルファ雪山で戦闘を繰り広げていたサクラ、フィーリア、シルフィードの三人は村の防衛戦前半には実質参加できなかった。今回は、鋼龍クシャルダオラの予想だにしない行動で、クリュウと、駆けつけた仲間達、更にはエルバーフェルド海軍とアルトリア空軍などが迎撃に参加するなど、サクラの予想を遙かに超えた戦いとなった。
彼女が責任を感じる必要は全くない。だが、無法者に見えても人一倍責任感が強いサクラ。守ると決めたクリュウにとって、そして自分にとっても大切なイージス村を守る事ができなかった。それは事実だ。そしてその事実が、彼女を苦しめる。
悲しげにつぶやくサクラの言葉に、エレナとシルフィードは掛けるべき言葉を失う。彼女の夢を、理想を知っているからこそ、今の発言が彼女の自責の言葉だとわかるから。荒廃した村の惨状を見詰めながら、サクラは静かに続ける。
「……私はこれまで多くの商隊を守って来た。守った人の数は、千人はくだらない。でも、この村は守れなかった。たくさんの思い出と感謝してもし切れない程の恩義のあるこの村を、守れなかった。肝心な時に、私は役立たずだ」
サクラは、これまで多くの人々を守って来た。それこそ、千人を超えるだろう。正直、顔も覚えていない者達も多い。以前ヴィルマで会ったサラ・ブヴァルディアもその一人だった。でも、そういったた

くさんの人達を守って来た事は、彼女からすれば当然の事。でもどこかでその実績は自らの自信に繋がっていた。
今の自分なら、本当に全てを守れるかもしれない。過信とは違うが、でもどこかで自分の強さを信じていた。
だが実際は、運命の歯車が少し噛み合わなくなっただけで、自分は無力となってしまった。結局、自分はただの小娘でしかない。子供のように、目の前の苦難にただ抗って、それで満足していたのだろうか。
幼い頃、轟竜ティガレックスに両親を殺され、全てを守ると決意したあの時の誓い。それと今の自分の信念は、本当に同じものなのだろうか？
自分は無力だ。肝心な時に、全く役に立たなかった。
今回の鋼龍迎撃戦は、村の損壊だけではない。大した怪我人は居ないとはいえ、クリュウやサクラのように心に傷を負った者達は多い。
自らの無力さを痛感し、ひどく落ち込んでいるサクラ。そんな彼女に対しエレナとシルフィードはどうする事もできない。いつも自信満々で根拠の無い自信に満ちあふれている、己の信念を貫き通して来た強い戦乙女サクラ。そのサクラが自信を失っている。らしくない彼女に対し、どう声を掛ければいいか迷ってしまう。
わかっていたはずだ。彼女は人一倍責任感が強く、そして脆い。常の無茶苦茶な振る舞いは、そんな自らの弱さを隠しているようにも見える。だからこそ、誰かが支えてあげなければならない。わかっていたはずなのに、自分は何もできなかった。リーダーとして、仲間として失格だ。
しかし、自分は彼女を支えきれない事もまた自覚していた。なぜなら、彼女にとっての心の支えは――
「村を守れなかったのはサクラの責任じゃない。むしろそれは、最もクシャルダオラと戦っていた僕の方に責任がある。力及ばず、奴を村の中心部で暴れさせてしまった、僕にね」
悲しげに、しかし優しげに彼女に話しかけるクリュウ。その言葉に、サクラは小さく首を横に振って否定する。
「……クリュウは悪くない。クリュウはがんばった。クリュウに責任

はない」
「だったら、サクラにだって責任はないはずだ。古龍は災害だ。嵐や竜巻で被害を受けても誰も悪くないように、今回の事も誰も責任を追う必要はないと思う。無責任かもしれないけどさ、そういうもんだと割り切るしかないと思う」
「……クリュウ」
「それに、サクラは僕の窮地に駆けつけてくれた。あと少しで死んでいたかもしれない僕を、君は助けてくれた。サクラは何も守れなかった訳じゃない、救えたものだってあったんだよ。僕がその証拠だよ。僕が、君の守れた証さ」
　自らの胸を叩いて力強く宣言するクリュウの言葉に、サクラはゆっくりと目を見張り、そして口元に笑みを浮かべる。そんな二人のやりとりを見ていたエレナとシルフィードは、どちらからとなく笑みを零した。
「全く、どうしてあんな恥ずかしいセリフを平然と言えるのかしら、あのバカは」
「まぁだが、不思議なものだな。彼らしいというか、彼が言うとあんな使い古されたセリフもかっこ良く感じてしまうな」
　サクラはしばしの無言の後、静かに「……ありがと、クリュウ」と礼を述べて小さく笑った。彼女の笑みを見たクリュウは安堵したように表情を緩める。そんな彼に対し「……私、決めたわ」とサクラは小さくつぶやく。
「決めたって、何を？」
「……私が守るべきもの」
　そう言ってサクラは外へと出る。何事かと思い追いかけて来た三人の前で振り返ると、静かに背負っていた鬼神斬破刀を引き抜いた。そして静かにそれを構えると、クリュウ達の目の前で――その長く美しい髪を切り裂いた。
「さ、サクラッ!?」
　驚く三人を前に、サクラは切った髪を天へと放り投げる。風に乗ってそれらは彼方へと消え、残されたのは、肩程までに髪が短くなった

サクラだけ。
　呆然とするクリュウ達を前に、サクラは鬼神斬破刀を地面へと突き立て、その柄の先端に手を添える。短くなった髪を風に靡かせながら、サクラは静かに語る。
「……私が守るべきもの。それは、今も昔も変わらない。私の目の前に居る人、私が守りたいと願う存在。その全てを守ってみせる」
「サクラ……」
「……もう迷わない。もう負けない。もう何も失わない。私は勝利しか信じない。私は、全てを守ってみせる。カルナスで誓った理想を、改めてこの場で誓う――私は、全てを守る」
　静かに、しかし力強く己の信念を貫く事を決意するサクラ。その強さ、凛々しさに、三人は思わず見惚れてしまう。言っている事はやはり夢物語であり、全てを守るなんて事できやしない。それは彼女だってわかっている。だが、例えできなくても全力を尽くす。自分が守ると決めたものは全て守る。限定的だが積極的、相反するようで一致する。彼女の決意、信念、願い。サクラ・ハルカゼという少女を突き動かし続ける原動力、それは今も昔も変わらず、むしろ更に強く彼女を突き動かす。
　凛々しく、力強く己の決意を述べるサクラの姿に、クリュウは笑みを浮かべて「そっか……」とつぶやく。彼女の夢を、理想を、自分も認めているし応援している。彼女ならきっとできる、そう信じていた。
　すると、サクラは薄っすらを頬を赤らめ、しきりに短くなった髪の先をいじり始めた。何事かと戸惑う彼に対し、サクラは恥ずかしそうに少し上目遣いになりながら、そっと彼に問いかける。
「……変、じゃない？」
　不安げに問う彼女の問いに対し、クリュウは彼女を安心させるように笑みを浮かべ、自らの率直な想いで答える。
「変じゃないよ。髪の短いサクラも、すごく可愛いと思う」
　恥ずかしがる事もなく堂々と言い張る彼の言葉にサクラは顔を真っ赤に染めてうつむき、エレナとシルフィードは呆れ返りながらも

実に彼らしいと複雑な想いを抱きながら苦笑を浮かべる。
可愛いと言われたサクラは俯きながら彼に隠れてニヤニヤしていたが、ゆっくりと顔を上げると、今頃になって自らの発言が恥ずかしかったのか照れ笑いを浮かべる彼に対し、サクラはゆっくりと微笑み掛ける。
「……好きよ、クリュウ。世界で一番、私はあなたを――愛しているわ」
鋼龍クシャルダオラを迎撃してから数日後、エルバーフェルド帝国帝都エムデンから出立したオコーネル・ゲルトハルト親衛隊長が指揮する武装親衛隊に守られたエルバーフェルド帝国総統とヨーウェン・ゲッペルス宣伝担当大臣等のエルバーフェルド帝国首脳陣がイージス村に到着した。
フリードリッヒは到着後すぐにアルトリア王政軍国女王イリス・アルトリア・フランチェスカとの首脳会議を行った。議題は当たり前だがイージス村の事ではなく二国間の問題だ。
その最中の事だった。村長率いるイージス村の重役達がレヴェリに村民の多くを置いて戻って来たのだ。
村長達は村の現状を把握した後、重役会議を開いた。そして――イージス村の廃村が正式決定された。

第２３２話　絶望の闇を照らす奇跡という名の光

「……イージス村は、放棄する」
村長の言葉に、その場に居た誰もが言葉を失った。
その言葉の意味を理解できず、呆然とする面々の中、真っ先に状況を把握したのはクリュウだった。
「村を、捨てるって事ですかッ!?」
クリュウの言葉に、ようやく事態を飲み込めたフィーリア達も動揺する中、村長は厳かに彼の問いに答える。
「そうだよ。村は放棄する。しばらくはレヴェリに臨時役場を作って村人の生活管理を行い、その間に新たな村の代替地を探す。まだ詳しい予定は決まってないけど、まずはこの道筋で行こうと思う」
「で、でも、村を放棄するなんて、そんな……ッ！」
「――あんな瓦礫だらけの村に、人なんて住めないよ」
冷たく、どこか吐き捨てるように言い切る村長の言葉に場が静まり返った。いつもニコニコ笑顔を浮かべて、誰にでも明るく優しい好青年である村長。だがそんな彼の苛ついた姿は、今まで誰も見た事がなかった。否、見たくなかった。
自らの発言で場が静まり返ったのを感じた村長は顔を伏せながら静かに「……ごめん」と謝る。
「別に、クリュウ君達を責めている訳じゃないんだ。むしろ僕は、君達は良くがんばってくれたと思う。第二次避難隊の人達が無事に村を脱せたのは、クリュウ君のおかげだ。そして、村はあんな事になっちゃったけど、今こうして村に帰って来れたのはクリュウ君を始めとしたハンターのみんな、エルバーフェルドやアルトリア、更にはハンターズギルドの人達のおかげだ。感謝こそすれど、非難なんてしないよ」
そう言いながら、村長は居並ぶ現在このイージス村に集まった組織の代表一人ひとりに頭を下げる。イリスとフリードリッヒは無言を貫き、カレンは小さく頭を下げ返した。
「でも、みんながんばってくれたけど、村は壊滅的打撃を受けた。も

う、復旧の見込みはない。だから、村の重役達と話し合って決めたんだ――村を放棄して、また一からやり直そうって」
辛そうに、でも意を決した様子で語る村長の言葉に、クリュウは何も言えなかった。確かに、村の惨状を見た時にこれはもうやり直せないと思ったのが本音だ。村の中は瓦礫だらけで、とても人が改めて住めるような環境ではなかった。
予想はしていた。でも改めて村の長たる彼に『廃村』と言われると、覚悟はしていたとはいえやはり辛い。
悔しくて、拳を握り締めるクリュウ。そんな彼の震える拳を見たシャルルが、無謀にも立ち上がった。
「諦めるのは早いっすよッ！　瓦礫を片付けて、またここに村を作るっすッ！　それが一番っすよッ！」
重苦しい雰囲気が垂れ込める部屋の中に、シャルルの元気な声が響き渡る。だがその声が微かに震えている事に、付き合いの長いクリュウとルフィールは気づいていた。自らの発言は、部外者である自分が言えば無責任にも取れる発言だと、彼女なりに気づいているからだ。でも、それでも叫ばずにはいられない。大好きな先輩の村が、消滅の危機に瀕している。黙っている事など、できないのだ。
シャルルの発言に同調するようにフィーリアとエレナ、ルーデルやアリア等も村の再建を主張する。だが、村長はそれらの意見に対して頑なに首を横に振り続けた。
「残念だけど、それはできない」
「何でっすかッ！」
「僕は村長だ。村人の生活を守る義務がある。すぐにでも、みんなの生活を保証しなきゃいけない。その為の最短の道のりは、村を別の場所に移す事だと判断してるんだ」
「村を再建する候補地を探すのも、大変ですわよ。ちゃんとモンスターに対する対策ができる土地でないと、せっかく作ってもまた壊される。そうやって、立地を失敗して滅んだ村や街は多いですわ」
アリアの意見ももっともだ。村を新しく別の場所に作るとしても、土地選びが重要となる。土地なんてどこかの国に属していない地域

でならでこでも村を作る事はできる。しかし、そういった自然の要塞となるような土地を選ぶのは、どうしても時間が掛かってしまう。とても最短の道のりとは思えない。
　それに比べて村を復興させるなら、村は地上の設備や家屋が被害を受けたが、元々の崖の上にあるという立地が破壊された訳ではない。現状でもモンスターからの攻撃はかなり防げる好立地だ。
　アリアの意見に対して、村長も一度は頷いた。だが、
「でも、君達も見たでしょ？　村は、瓦礫でいっぱいだ。道路も畑も土が抉られて穴だらけ。これを復旧するのは大変だよ。瓦礫の撤去だけで、どれだけの時間と人手と資金が必要か。瓦礫を片付けても、今度は家屋の再建、道路の再舗装、上水道の復旧。村を立て直すってのは、とても難しいんだ。それに、お金もたくさん掛かるし、時間も掛かる。そんな大変な道を、村人達に押し付ける事なんて、できないよ」
　村長は、とても心優しい青年だ。だからこそ、大切な家族である村のみんなに負担の大きな復興という道を、あえて避けたのだ。村を再建するとなると、村人総出で終わりの見えない長い戦いになってしまう。それを、子供や老人にも強いるような選択を、彼はできなかった。
　それに比べれば、用地さえ確保できれば瓦礫の撤去の時間や費用、手間がなく家屋と設備の整備だけで行える移転の方が、人々への負担が少ない。彼はそう決断したのだ。
「でも、やっぱり村を捨てるなんて……」
　諦め切れない様子のエレナの肩を、シルフィードが優しく叩く。振り返った彼女の目の縁には薄っすらと涙が浮かんでいた。そんな彼女の涙を指先で拭い、シルフィードは小さく首を横に振る。
「故郷を捨てる選択を、誰が好んでするものか。村長殿も、苦渋の決断なんだ。自分の決定で村を捨てる。その重圧に耐えて英断した彼を、そう責めるな」
　シルフィードの言葉に、自らの発言が自然と村長を責める形になっていたと気づかされたエレナ。慌てて村長に対して謝罪するが、彼は小さく笑って「いいよ、気にしてないから」と優しく返す。
「とにかく、みんなには悪いんだけど、やっぱり村は放棄するよ。大変

だけど、新天地でがんばろう」
　村長の言葉に、もはや誰も反論する者はいなかった。皆の反応を見て了承を得たと判断した村長は、静かに締めの言葉を告げる。
「それじゃ、みんなには悪いけど一度レヴェリへ来て。そこで村人に改めて方針を説明して、今後の対策を練ろう。出発は明日って事で。僕はアルフレア臨時政府の方に廃村申請の手続きを行いに行ってから合流するよ。それじゃ解散――」
「――待つのじゃ」
　村の方針決定会議は終わりだとばかりに締めようとしていた村長に対し、そう言って止めたのは、これまでずっと沈黙を続けていたイリスだった。周りの視線が自らに集中している事など気にもせず、呆然とこちらを見詰めている村長に対し、イリスは静かに口を開く。
「故郷を捨てる。そのような悲しい決定、見過ごす訳にはいかんのぉ」
「で、でも私達にできる最大の対策は、これしかない訳で……」
　まさか小さな村の行く末の決定に対し、大国の君主から止められるとは思っていなかったのだろう。慌てる村長に対し、イリスは静かに続ける。
「要するに、資金と人手が必要な訳じゃな？」
「え？　まぁ、そうですね。ですがうちの村の男衆にも限界がありますし、何より復興資金が足りません」
　イージス村は小さな村だ。住んでいる住民の数も少なければ、財政も決して余裕がある訳ではない。港湾設備も破壊されている為、資金源の大部分である水産資源が失われている今、どうしても資金不足の道は避けては通れない。
　村長の返答に対し、イリスは口元に不敵な笑みを浮かべ、こう宣言した。
「それなら気にするでない――復興資金はアルトリア王政府が出そう」
　イリスの爆弾発言に、部屋中に衝撃が走った。
　辺境の小さな村の復興に、世界屈指の大国と謳われるアルトリア王政軍国が資金提供を行う。それは空前絶後、歴史上極めて異例と言え

る宣言だった。
「あ、アルトリア政府が、資金提供ですか？」
　あまりの事態に声を震わせながら問う村長の問いに対し、イリスはうむと大きく頷いてみせる。
「我が国が資金提供をすれば、復興費用など考える必要はなかろう？」
「し、しかし我々のような小さな村の民が、貴国のような大国から援助を受けるなど、普通じゃありません」
「勘違いするでない。妾が資金援助をするのは、あくまでもクリュウの為じゃ」
「イリス……」
　視線を村長からクリュウへと向けたイリスは、どこか淋しげに微笑む。
「本来ならば、お主は我が国で王子の身分じゃったはず。それが、我が国の陰謀で国を脱してしまったが故に、平民として暮らすハメになってしもうた。もちろん、その生活が不憫だったとは思わん。お主を見ておれば、その日々がとても幸せだったと予想するのは簡単じゃ。じゃが、お主から王族としての生き方を奪ったのは紛れもない我が国じゃ。その責任くらいは、果たさねばならん」
「でも、あまりイリスには迷惑を掛けられないよ……」
「心配無用じゃ。妾を誰じゃと思うておる？　世界最強の軍事経済大国、アルトリア王政軍国の女王じゃぞ？　妾の決定を阻める者など、この世にはおらんのじゃ」
　ふふんと不敵に微笑みながら断言するイリスに対し、クリュウは思わず苦笑を浮かべた。どうやら、自分がアルトリアを訪れていた頃よりも、政権は安定しているらしい。それだけ独裁が増しているのだとうが、国民が納得しているならそういう幸せな独裁もあるのだろう。
「とまぁ、こういった我が王家の絡みの事情がある故の特別配慮じゃ。ここで断られると、妾の名に傷がつく。素直に受け取ってもらえると、妾としても助かるのぉ」
　そう言って無邪気に微笑むイリスの言葉に、それまで呆然と立ち尽くしていた村長は深々と頭を下げる。目の縁に薄っすらと涙を浮か

べながら、何度も何度も感謝の言葉を述べる。
「だが、資金提供を受けたとはいえ人手不足は否めないな。特に水路の再建やモンスターに対する防衛設備などは、さすがに専門家じゃないと直せない。それに、物資の運搬の手も考えなければな」
シルフィードの言う通り。いくらお金があっても肝心の人手が村には足りない。特殊な設備の復旧にはそれこそ専門家も必要だ。何より、そういった復興の為の物資を運搬する手はずも考えなければならない。まだまだ、問題は山積しているのが現状だ。
「――ま、待ちなさい」
そんな新たな難題に直面しようとしていたクリュウ達に対し待ったをかけたのは、これまでフリードリッヒの背後に控えていたカレンだった。驚くヨーウェンやフリードリッヒを一瞥し、カレンは意を決したように口を開く。
「海上輸送での物資の運搬、及び村の設備の設営は、我がエルバーフェルド帝国国防海軍が力を貸すわ」
「ちょ、ちょっとッ！　何を言って……ッ！」
驚くヨーウェンの制止を振りきって、カレンは更に前にい出て宣言する。
「我が海軍は港湾設備がない陸地にも直接物資を揚陸できる特殊揚陸艦を数隻有しているわ。村の再建の為に必要な物資の運搬は、我が海軍が責任を持って引き受けてあげる。人の面も心配しないで。海軍陸戦隊を村の復興の為の人手に回すし、キールに待機している優秀な技術と道具を有する第８設営隊をこちらに派遣する。これで、物資の運搬と人手不足は解決するわね」
独断で村の復興の手助けをすると宣言したカレンの発言に、さすがのヨーウェンも慌てる。
現在エルバーフェルド帝国は西竜洋諸国と先日のズデーデン紛争で緊張状態が続いている。そんな中で帝国が国外の村に対して援助を行うのは極めて危険だ。他国にエルバーフェルド帝国の東方進出の疑いがあるとされれば、緊張状態が激化する。ズデーデン奪還の為に軍事行動に出たとはいえ、エルバーフェルド帝国も本気で戦争を行

いたいとは思っていないのだ。
　こんな危険な申し出を行うカレンをヨーウェンは止めようとする。だが、そんな彼女の制止の声を封じ、彼女の方へと振り返ったカレンは不敵に微笑む。
「まだ、我が艦隊の演習は終わってないわ」
「え？」
「総統陛下は、今回の演習においては何を使っても良いと仰られたわ。だから、私は演習に必要だと思われる揚陸艦と設営部隊を新たに派遣するの」
「そんな屁理屈が通用するとでも？」
　いつになく厳しい視線で睨みつけるエルバーフェルド帝国の実質ナンバー2、宣伝担当大臣のヨーウェンに対し、同じくエルバーフェルド帝国海軍の長、国防海軍総司令官のカレンは一歩も引かない。
「総統陛下は今回の演習に対して期限を設けていない。演習プランも全て私に任せてくれている。演習をいつどこで行い、どのようなプランで遂行し、いつ終わらせるか。その全ての権限が今は私にあるの。副総統様とはいえ、海軍の決定を止める権限はないわ」
　一歩も引かないカレンの態度を一瞥し、ヨーウェンはふと無言で座っているフリードリッヒを見る。彼女は小さくため息を零すと、目を閉じたまま口を開く。
「好きにしろ」
　カレンの独断を許す事にしたフリードリッヒの決断にカレンは歓喜し、ヨーウェンは改めて驚愕する。問い詰めようとしたヨーウェンだったが、フリードリッヒの口元にわずかな笑みが浮かんでいる事に気づいてハッとなる。
「まさか、全て想定の範囲内だったの……？」
　フリードリッヒがあえて演習プランの全てを任せたのは、もちろんカレンの無茶を容認する為だ。更に、村の復興にまで手を貸そうとする度を超えた無茶も容認したフリードリッヒ。それも全て、彼女の中では予想通りだったのだ。
　なぜ、そんな無茶を許すのか。それは恐らく、近々予定されている

西竜洋諸国合同海上演習に対する布石だろう。
西竜洋諸国合同海上演習、通称ウェスドックは数年前から西竜洋諸国所属国の海軍の連携強化を目的として行われている。だが連携強化はあくまでも表向きで、実際はアクラやエルバーフェルドのような関係が悪化している国々に対する抑止を目的としている。
その為、国防海軍側はこれに対して我が国独自の海上大規模演習をウェスドックのすぐ近くの海域で行う事を決定している。その規模は歴代最大規模を予定し、国防海軍の総力を挙げての演習が予定されている。
しかし総統府はこれに対して中止を強く要望しているのだ。現時点でこれ以上関係悪化に拍車を掛けるのを快く思っていない為だ。現在外交面では西竜洋諸国との関係改善を模索しているのが現状であり、その中で関係悪化を著しくしかけない対抗演習は極めてまずいのだ。
しかしフリードリッヒも海軍側に演習中止を強く言えない。ズデーデン紛争では陸軍が活躍し、国防上陸軍優先の国防軍。海軍側の不満も強く、この演習は海軍の意地でもあるのだ。
もちろん、カレンも強くこの演習を押している。今回の戦いで損傷してしまったが、大洋艦隊新旗艦である新型戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』も参加予定だった程だ。
何としても演習をやめさせたい本音のフリードリッヒ。そこで今回あえてカレンの無茶を黙認したのだ。結果、カレンはもはやフリードリッヒの命令を無視できなくなった。恐らく、今回の無茶の代償としてカレンは演習の中止を認めるだろう。
更に同盟関係にあるアルトリアと歩調を合わす事で関係強化も狙える。西竜洋諸国との関係改善を模索する一方で、西竜洋諸国と関係があまり良くないアルトリアとの関係も強化する。フリードリッヒが掲げる二正面外交政策にも一致するのだ。
様々な利益、不利益を考慮して今回このような決断を行ったフリードリッヒ。その先見の明はやはり常人のそれを凌駕している。その凄さを目の当たりにし、改めてヨーウェンはこのアイドル総統のカリ

スマっぷりを認めた。
「……全く、末恐ろしい総統様ね」
一方、目の前で国の内政の争いを見せられたクリュウ達は困惑する。そんな彼らに対し、カレンがわざとらしく咳払いする。
「とにかく、海上経由で物資の運搬をしてあげるわ。大型機材や大量物資の運搬なんかは任せて」
「あ、ありがとカレン。何か、何から何まで世話になっちゃって……」
申し訳無さそうに礼を言うクリュウに対し、カレンは少し頬を赤らめながら小さくはにかむ。
「別にいいのよ。私がやりたくてやってるだけだもの。あんたが気にする事はないわ。それに私達の国も復興の最中。故郷を失った悲しみは、私達エルバーフェルド人全員が知っている。だからこそ、同じ苦しみを抱く人は放っておけないの」
「カレン……」
「うむ。これで資金は我が国が、物資の運搬と実際の村の復興はエルバーフェルド海軍が行う事が決定したのぉ。これで、ずいぶんと条件は良くなったはずじゃ」
うむうむと嬉しそうにうなずくイリスの言う通り、ずいぶんと条件は良くなった。これだけでも奇跡と言えるに十分な好待遇だ。だが、だからと言って全ての問題が解決した訳ではない。
「残る問題は、一番肝心な実際の物資の調達。そして海上輸送ができるとはいえ、最大の運搬ルートである陸路での輸送だな」
シルフィードの言う通り。村を一つ復興させるだけの資材などの調達は難しい。更に海上輸送はどうしても港湾都市に限られるが、内陸都市からしか調達できない物資も数多い。協力してくれる運搬業者や商人を確保するのも、また大変だ。
これに対しては、正直エルバーフェルドとアルトリアは協力できない。エルバーフェルドは関税を高く設定して自国産業を守る復興政策を行っている。その為、外部の商人やその組織とは関係があまり良くはない。アルトリアに至ってはそもそも中央大陸の商人との関係がない。どちらも、こればかりはどうしようもないのが現状だ。

更に、現在そういった緊急物資輸送ルートの多くは、それこそ炎王龍テオ・テスカトルの襲撃で壊滅的被害を受けたヴィルマ復興に使われている。今新たにその緊急ルートを、それも小さな村の為に使える余力はない。

カレンはエルバーフェルド経由で物資を積載し、海上輸送にてイージス村に全力で支援すると言ってくれたが、ある種の鎖国政策を取っているエルバーフェルドでは調達不能な物も数多い。他国の港にエルバーフェルド帝国の軍艦が入港すれば、それこそ国際問題に発展する。カレンだって、そこまでバカではない。

もちろん、カレンの海上輸送はありがたい。だが海路と陸路、二つあって初めて補給路が完成する。片方だけでは、未熟なのだ。

ハンターズギルドに頼む事もできるが、すでにエルバーフェルド帝国とアルトリア王政軍国が関わっている問題だ。ハンターズギルドとしても介入に慎重にならざるを得ないだろう。

希望が見え始めた所で、またしても雲行きが怪しくなってしまった。だがまずは、どちらにしても瓦礫の撤去が先だろう。カレンはすぐにでも陸戦隊に瓦礫撤去を命じると共に、本土の第8設営隊を派遣すると宣言。先はまだ不透明だが、とにかく前に進む事はできる。今はとにかく、前進あるのみだ。

「妾も、我が国と比較的友好関係にある港湾都市の自治政府に働きかけ、輸送ルートを確保してみる。じゃが、時間は掛かる」

「海軍の輜重部隊も派遣するけど、限界があるわ。ごめんなさいね」

力及ばず。申し訳無さそうに謝る二人に対し、クリュウは首を横に振った。

「こっちこそごめん。そんなに無理しなくていいから。支援してくれるってだけでもありがたいし。何より、これは村の問題だから。自分達でできる事は、自分達でがんばらないと」

そんな彼の言葉を締めの言葉とし、詳しいこれからの対策は後日とし、エルバーフェルド帝国、アルトリア王政軍国が関わる事となった対策会議は幕を閉じる――かと思われていたその時、

「邪魔するぞぉ」

突然対策会議が行われている天幕（テント）の入口から一人の小柄な男が現れた。年の頃は六〇代半ばくらい。白髪交じりの黒髪は灰髪となり、顔には彼がこれまでどれだけ長生きしてきたかを刻み込んだような深いシワがいくつもある、見るからに老人といった様子の男だった。そして何より目立つのは、その尖った耳、それは彼が竜人族を意味する特徴だった。

竜人族の老人を筆頭に、次々に男達が入って来る。竜人族と人間が入り混じったそれらの団体に対し、呆けていたカレンが厳しい声を上げる。

「貴様ら、ここは関係者以外立ち入り禁止よ。陛下の前からすぐ立ち去りなさい」

この議場の警備を行っているのは海軍陸戦隊だ。その長であるカレンからすれば、侵入者の存在は自らの責任だ。すぐに追い返すべく控えていた兵士を呼び寄せる。にわかに物々しくなっていく中、慌てた様子で現れたのは別行動中だったライザだった。

「ご、ごめんなさいね。私が呼んだのよ。追い返すのはちょっと、待ってくれないかしら？」

お願い、と手を合わせて懇願するライザに対しカレンは一歩も引かず退去を命じる。そこへクリュウが間に割って入り、カレンを説得して事無きを得る。

「それで、この人達は一体……」

カレンが渋々といった様子で腰を落としたのを確認し、クリュウは改めてこの謎の老人達の正体をライザに尋ねる。だがライザが説明するよりも早く、老いた竜人族の男は部屋の中に居る一人の人物を見つけると、声を掛けた。

「おぉ、やっぱり嬢ちゃんか。久しぶりだなぁ。お？　髪型変えたのか？」

男が声を掛けたのは――これまでずっと無言で座り続けているサクラだった。

驚く面々の視線を一身に受けながら、サクラは不機嫌そうに閉じていた瞳を開く。その視界に男の姿を捉えると、深々とため息を吐い

た。
「……何の用だ。アルフレッド」
「そう邪険にするな。俺とお前の仲だろうが」
「……私と貴様は、あくまでも仕事上の付き合いだけだ。気安く話しかけないで」
「相変わらず可愛げがないねぇ」
ホッホッホッと楽しげに笑う男、アルフレッドに対しサクラは全く動じない。どうやら二人はサクラの言葉とは反して、ずいぶんと親しい仲のようだ。
「サクラ、あの人達は一体……？」
サクラが彼らを紹介するよりも早く、アルフレッドの方から自ら名乗りを上げた。
「申し遅れた。私の名はアルフレッド・クルーガー。大陸通商連合の団長を務めておる」
アルフレッドの名乗りに、その場にいた多くの人々がざわめき始める。彼が相当な有名人である事の証拠だ。一方で世間に疎いクリュウが一人ポカンとしていると、助け舟を出してくれたのはルフィールだった。
「大陸通商連合。この中央大陸で商いを行う商人の多くが加盟する、大陸最大規模の商人の互助会です。互助会というよりは、商人の巨大組織と言った方が適切かと」
「つまり、商人組合の一番偉い人って事？　それが何でサクラとあんなに親しいんだろ……」
クリュウの疑問は、この場に居た多くの人間が抱くものだった。一介のハンターと通商連合の団長。普通に考えればそう接点はないはずだ。そんなクリュウ達の疑問に対し、アルフレッドが説明する。
「彼女は我々大陸通商連合、通称《連合》最大の功労者だからな。仕事を頼む事も多いし、何より疑い深い商人達がこぞって彼女だけには絶大な信頼を寄せている。我々と彼女は、いわば共存関係にある」
アルフレッドの説明で何人かは納得した様子だが、まだ理解できていない者も数多い。それを補足したのはシルフィードだった。

「サクラは護衛任務専門と言っていい程に護衛任務ばかりを受け、更にその多くを成功させている。護衛対象は様々だが、その多くは彼らのような商人が率いる商隊（キャラバン）だ。危険な旅を全力で護衛してくれるサクラは、彼らにとっては絶大な信頼を置ける相手なのだろう」

シルフィードの説明でようやくクリュウも理解した。

サクラは商人だった両親を目の前で轟竜ティガレックスによって殺された。その経験から特に護衛任務を重要視しており、その夜叉の如き猛攻で商隊を守る様、そして功績から商人からの信頼は絶大だ。

そしてそれは商人を束ねる最大組織、大陸通商連合においても同様なのだろう。

「……それで、貴様は一体何をしに来たのよ。言っておくけど、今は仕事は全て引き受けないわよ。そんな状況じゃないから」

「わかっている。だから、我々がやって来たのだろうが」

「……どういう意味？」

アルフレッドの言う意味がわからず眉をひそめるサクラに対し、アルフレッドは居並ぶ面々を前に堂々とその空前の宣言を放つのであった。

「この村の復興に、我々大陸通商連合も力を貸そう。陸路での物資運搬はもちろん、大陸中から必要な物資の調達も全て任せてくれ。大陸通商連合は、イージス村の復興を全力支援するぞ」

それは、空前の申し出であった。

大陸通商連合と言えば、大陸で商いを行う商人のほとんどが加盟している巨大組織だ。その連合が協力するとなれば、もはや物資の調達と陸路での運搬の心配は全くいらない。なぜなら、そういった事々の専門集団だからだ。

エルバーフェルド国防海軍、アルトリア王政軍国の協力だけでも空前の奇跡。それに加えて大陸通商連合までもが支援をしてくれる。それはもはや前代未聞の異例中の異例だ。

村長は顔を真っ赤にして感謝の言葉を述べる。クリュウやフィーリアも当然礼を言い、アルフレッドは多くの感謝の言葉を受ける。そ

んな彼に対し、相変わらず厳しい視線を向けているサクラは無言で立ち上がった。
　再び自らの視線が集中するのを感じつつも、気にせずサクラは続ける。
「……どういう風の吹き回し？」
「何の事だい？」
「……とぼけないで。連合が、利益にならない事なんてしない。商人は、常に自らの利益で動くもの。アルフレッド、あなたもそうでしょう？　そんなあなた達が、何の利益にもならない村の復興に力を貸す。裏を探るのは当たり前よ」
　サクラは自らの意見を包み隠す事はない。常に直球勝負で来る。時にそれは失礼極まりない発言となり、クリュウ達を慌てさせる。今回も慌ててクリュウが止めに入るが、アルフレッドはそんな彼女の無礼を笑い飛ばした。
「相変わらず容赦がないな。まぁ、確かにお前の言う通り商人は利益で動くものだ。営利ってのは、そういうもんだ」
　サクラとはそれなりの付き合いがあるアルフレッドは彼女の無礼にも慣れたものだ。だが彼女の意見に対して同意しつつも、「だがな……」と前置きし、言葉を続ける。
「お前さんは守った相手なんざすぐ忘れるかもしれねぇ。それだけの人数を、あんたは守って来たんだ。だがな、守られた側はお前の事を一生忘れねぇんだよ」
「……どういう意味？」
「お前が拠点にしている村の付近に古龍が現れたって情報は、ずいぶん前に俺達の耳にも届いてた。するとだ、各地の商人から次々にお前さんを支援するよう要請が飛び込んで来たんだ。その陳情の数は、それこそ数百にもなったぜ」
　そう言ってアルフレッドは持っていたカバンの中から縛った大量んぼ便箋を取り出す。その一つひとつが、連合宛に送られた各地の商人からの陳情書なのだろう。
「俺達連合の役員会はこれらの陳情に対して緊急会合を開いた。する

とだ、全会一致でこの陳情を受ける事になった。それで、俺達がやって来た訳だ」
「……」
「なぁ、人形姫。お前はな、自分が思っている以上にみんなから好かれてんだよ。商人達が、自らの利益を度外視して助けたい相手がいる。それがお前さんだよ。お前さんの功績には、俺達みんなが感謝してるんだ。だから、今度は俺達がお前を助ける番だ――お前さんの大切な居場所を、一緒に取り戻そう」
　はにかみながら語るアルフレアの言葉に、サクラは無言だった。無表情を貫くサクラに対しフィーリアが何か言おうと前に出るが、それをクリュウが制した。
「クリュウ様？」
「……見てみなよ、サクラの表情」
　言われて良く見ると、フィーリアの表情にも笑みが浮かんだ。
　クールに無表情を貫いているサクラだが、それは平静を装っているに過ぎない。だって、その目の縁にはたっぷりの涙が溜まっていた。
　涙を拭い取り、サクラは顔をうつむかせる。そんな彼女の肩をアルフレッドは静かに叩く。
「……バカね。ほんと、みんなバカばっかり」
「確かにバカばっかりだ。だが、悪い気はしねぇだろ？」
「……そうね。良いバカ達よ、ほんと」
　小さな笑みを浮かべたサクラはゆっくりと振り返り、クリュウの方を見る。彼と目が合うと、頬をほんのりと赤らめた。短くした黒髪を指先でいじりながら、彼女は小さく照れ笑いを浮かべる。
「……私、意外と人望あるみたい」
「意外とって……サクラは十分周りから信用される人だよ」
「……連合が力を貸してくれれば――村は元に戻るよね？」
　どこかすがるような様子で彼に問いかけるサクラに対し、クリュウは「そうだね……」と前置きしながらも、小さく首を横に振った。
「元には、戻らないと思う」
「……そう」

「でもきっと前よりも、ずっといい村になると思う――ううん、しなくちゃいけないんだよ」
そう言って力強く拳を握り締める彼の言葉に、フィーリアは「そうですね。必ずどこにも負けない素晴らしい村にしましょう」と意気込み、シルフィードも「一度壊れたものを直すというのは大変だ。だが、やりがいはあるな」と頼もしげに微笑みながらうなずく。
「……私も、がんばるわ」
「ボクも微弱ながらお手伝いします」
「シャルもがんばるっすッ。力仕事ならお任せっすよッ！」
「まぁ、関わったからには最後まで見届けないとね」
サクラ、ルフィール、シャルル、ルーデルもそれぞれ協力は惜しまないと宣言する。そんな彼女達に対し、クリュウは小さく笑みを浮かべながら「ありがとうみんな」と礼を述べる。
「それじゃ、今後の対策を練らないとね。色々な人達が協力してくれるんだ、僕もがんばるぞぉッ！」
先程までの悲痛に歪んでいた顔から一転。希望が見えた事でやる気を取り戻した村長の言葉に、部屋の中は鬨の声に包まれる。
士気高く、意気軒昂。前途多難で先の見えない戦いを前にしても、彼らは決して絶望せず前を見据え続け、そして進み続ける。
盛り上がるクリュウ達を、まるで自分の事のように嬉しそうに笑いながら見守るイリス。そんな彼女と隣で嬉しそうに笑うカレンを盗み見て、こっそりと笑みを浮かべるフリードリッヒ。そしてそんな彼女を見てこれまた嬉しそうに微笑むヨーウェン。
――奇跡。
たった一〇〇人程度が住む小さな辺境の村。特殊な防衛設備もないこの小さな村を舞台にした鋼龍クシャルダオラとの激闘は迎撃組の辛勝という形で終結した。有史以来、今回の戦い――神盾の奇跡と後に呼ばれるこの戦いはまさに奇跡としか言えない戦いとなった。
若き狩人達の必死の抵抗に加え、その中のたった一人の少年を守る為に大陸最強の軍事大国エルバーフェルド帝国が誇る海上精鋭部隊、大洋艦隊。更には世界最強の軍事海洋国家アルトリア王政軍国が誇

る飛行部隊、王軍艦隊が駆けつけ、鋼龍と激しい戦いを繰り広げた。
更に終戦後、荒廃した村の復興の為にアルトリア王政府、エルバーフェルド帝国海軍、大陸通商連合に加え、後にハンターズギルドという中央大陸において絶大な影響力を持つ二国二組織が協力を行う事となった。
これを奇跡と言わずして、何と言うのか。
後に世界史の奇跡の一つとして語り継がれる事になる神盾の奇跡は、こうして幕を閉じた――否、始まったのだ。

第２３３話　彼女の軌跡　時を越えて動き出す物語

鋼龍迎撃戦から二ヶ月後の月日が流れた。

村の復興速度は著しく、すでに瓦礫の撤去は終わり、住居の建設と村の設備の設営が同時進行で行われていた。エルバーフェルド帝国国防海軍陸戦隊の兵達、更に精鋭設営部隊として名高い第８設営隊の技術力に助けられた村の復興は村長の予想を遥かに上回る速度で続いていた。

更に海上経由でエルバーフェルド帝国から木材や石などの資材が大量に送られ、陸上からは大陸通商連合の商隊が次々にイージス村へと入り支援物資を供給し続ける。それらの代金は全てアルトリア王政府が負担するなど、大陸最大の奇跡と言われる村の復興は急ピッチで進んでいた。

そんな村の復興の中、クリュウ達は――

「のあぁッ!?」

慌てて横へと跳んだクリュウのすぐ脇を、数百度に熱せられた火炎の柱が突き抜ける。目が焼ける程に眩い炎の稲妻は、一瞬にして漆黒の地面を焼き、真っ赤に融解させる。その様はまるで、一瞬にして一筋の溶岩の川が生まれたかのようだ。

何とか炎撃を避けたクリュウは改めて今の攻撃を放った巨大な重戦車を見詰める。全身を岩のように硬い灰色の鎧で覆っているのは、幼竜バサルモスと酷似しているが、その硬度は更に高く、並大抵の一撃ではその鎧に傷ひとつつける事はできない。何せあの鎧は、溶岩の中であっても溶ける事なく彼の竜を守る程だ。

胴体下部には通気口のような穴が数ヶ所開いており、その中から様々な毒ガスを噴出させる事ができる。可燃性ガス、毒性ガス、睡眠ガスなど、ただでさえ強力な鎧に加えて接近を阻む技術にも優れているときた。

そして何よりも脅威なのが先程の一撃。体内の火炎袋を食した燃石炭を使って溶鉱炉のような状態にする事で、すさまじい熱量を持つ事ができる。その中で圧縮された火炎ガスを口から体外に放出する

と同時に発火。凄まじい爆発は正面に一直線にガスを噴出させ、それらが次々に引火。結果、それは凄まじい炎の柱のような攻撃となる。これを狩人達は熱線と呼び、恐れ戦いている。
体内の火炎袋が怒りのあまり激しく燃焼している証拠だ。口の端からは黒煙が漏れ、血走った眼光が今しがた熱線を避けた自分を射抜く。かなりの距離があっても、その威圧に思わず腰が抜けそうだ。
鎧竜グラビモス。人々からそう呼ばれる火山最強とも謳われる重量級モンスターを前に、クリュウは冷や汗を流しながらも不敵に笑う。
「やっぱり、一筋縄じゃいかないよね。でも……ッ！」
クリュウが手にしたオデッセイ改を掲げると、背後から次々に銃撃が放たれた。それらの一撃の全てが鎧竜グラビモスに命中し、その厚い装甲を砕いて貫通する。
クリュウの上空を通り抜けたのは貫通弾ＬＶ２。それらを放ったのは、背後の高台に構えたフィーリアだった。
次々に命中する銃弾を確認し、相棒のハートヴァルキリー改に次弾装填（リロード）するフィーリア。全身を世にも珍しい桜色の桜火竜リオレイア亜種の素材を使って作られたリオハートシリーズを纏い、長く美しい金髪を優雅に流し、そのエメラルドグリーンの瞳でスコープを覗き込む。射撃時の安定とグラビモスの視界にこの瞬間まで入らないように地面に伏せていた彼女の奇襲攻撃に、グラビモスは混乱する。そこへ、同じく鎧竜を挟んで左右の岩陰に隠れていたサクラとシルフィードが突撃する。
姿勢を低くして突撃する肩口程にきれいに切り揃えた黒髪を優雅に揺らしながら突撃する凜シリーズを纏った紅の侍サクラ。開かれた右目が、グラビモスの視線と重なる。だが、もう遅い。
グラビモスの腹の下へと滑り込んだサクラは、真上に広がる先程の爆撃で装甲が剥がれて顕になった肉目掛けて鬼神斬破刀を突き立てる。両足と腕をバネにして、雷を纏った鋭い刺突の一撃は肉を斬り裂き、血と雷撃を迸らせる。
鈍い悲鳴を上げるグラビモスは体を震わせると、腹部の至る所にあ

る噴出口から可燃性ガスを噴き出す。慌てて撤退するサクラだったが、それよりも早くガスが引火して爆発が起きた。グラビモスの周りが爆発したかのような衝撃に、サクラは吹き飛ばされるも何とか綺麗に着地して再び刀を構える。

一方、ガスの噴出が収まったのを見計らって今度は全身を蒼火竜リオレウス亜種の素材で作られた、耐久性と耐火性に優れたリオソウルシリーズを纏ったシルフィードが近づき、サクラ同様に腹の下へと入って同じように肉目掛けて振り上げた蒼刃剣ガノトトスを叩き込む。この強烈無比な一撃にグラビモスは悲鳴を上げて仰け反る。そこへクリュウが投擲した閃光玉が着弾し、鎧竜の視界を奪って動きを封じた。

動きを止めたグラビモス目掛けてクリュウとサクラが一斉に突撃を仕掛けるが、グラビモスは視界を奪われた中でも敵の接近を阻むように咆哮（バインドボイス）を辺りに放つ。

洞窟内という事もあり、咆哮（バインドボイス）は外へ逃げる事もなく乱反射を繰り返し、洞窟全体に響くような大音量となってクリュウ達を襲う。まるで全方向から受けているかのような大音量の本能を揺さぶる一撃に、クリュウだけではなくサクラとフィーリアまでが耳を塞いで動きを止めてしまう。

本能に直接作用する強烈な叫び声に目を閉じ、苦しげに顔を歪めながら耐えるクリュウ。だが、その口元が次の瞬間には笑みに変わる――計算通り。

「うおおおおおぉぉぉぉぉッ！」

鎧竜グラビモスも咆哮（バインドボイス）にも負けない雄叫びを上げながら、怒涛の剣撃を放つのは、蒼銀の烈風シルフィード・エア。彼女のリオソウルシリーズは高級耳栓というモンスターの咆哮（バインドボイス）を無効化するスキルが備わっている。つまり、彼女には咆哮（バインドボイス）は通用しない。それどころか、咆哮中はモンスターハンターの多くが無防備になる為、彼女にとっては――怒涛の攻撃チャンスとなる。

雄叫びを上げながら、シルフィードは右へ左へと蒼刃剣ガノトトス

を振るう。次々に肉を切り裂き、噴き出た血が雨のように降り注いで彼女の蒼色の防具を朱色に変えていく。
グラビモスの視界が回復したのはその瞬間だった。すぐさま迎撃しようと、閉じられていた噴出口が再び開く。今度はどんなガスかはわからないが、これを防ぐ術は彼女にはない。
舌打ちしつつも、シルフィードは攻撃の手を緩めたりはしない。ザッと地面の上で左足を滑らせ、右足を軸として、一度引いた剣を再び前で構え直し、気合と共に頭上の肉目掛けて力強く刺突する。
勇ましく突き上げられた蒼刃剣ガノトトスは吸い込まれるようにグラビモスの腹の中深くへ刀身を沈める。同時に夥しい量の血が溢れ出る。
「ゴオオォォァッ!?
くぐもった悲鳴と共に、グラビモスの口からも大量の血が吐き出された。
全身を自らの真っ赤な血で染めた鎧竜に対し、遅れてクリュウとサクラも突っ込む。背後からは再びフィーリアからの支援射撃が続く。
懐で暴れる敵に対し、グラビモスは再び火炎ガスで撃退する。吹き飛ばされたシルフィードはすぐに立ち上がり、剣を構える。その間もフィーリアの攻撃は続き、グラビモスは怒りに任せて彼女が陣取る高台目掛けて熱線を放つ。
下から上へと流れるように放たれた高熱の一撃は一瞬で岩を溶解させ、高台は音を立てて崩れ落ちた。
「フィーリアッ!」
焦るクリュウだが、彼女の心配をしている余裕はなかった。前方のグラビモスは彼目掛けて突進して来る。一歩一歩の進撃で洞窟が震えるのは、それ程までに奴が重量級のモンスターだという証拠だ。あんな奴の突進をまともに受けたら、それこそ一撃で圧死する。
クリュウはガードは諦めて横へと走ってこれを回避した。背後へと突き抜けていくグラビモスを一瞥し、瓦礫と化した高台へと走る。すると、瓦礫の中からフィーリアがゆっくりと這い出して来た。彼と目が合うと、大丈夫だとばかりに手を振る。その顔はずいぶんと汚れ

てしまってはいるが、幸い大した怪我はなさそうだ。
彼女が無事だとわかり、ほっとしたのも束の間。振り返ったグラビモスが再び突撃して来る。三人はこれを走って回避すると、すぐさま後を追い掛けて背後から襲撃する。フィーリアも銃を構えながら突撃し、支援攻撃を再開する。
三方向から剣士三人が襲いかかるが、グラビモスは体を回転させるようにして尻尾を振るって接近を阻む。だが、
「……見切った」
振るわれる槌のような巨大な尻尾を前にサクラは逃げる事なく刀を構えて迎え撃つ。隻眼を鋭く細め、揺れる黒髪を優雅に流しながら、鬼神斬破刀を構えるサクラ。主の想いに応えるかのように、鬼神斬破刀は眩い激雷を刀身に纏う。迸る稲妻が辺りに飛び散り、転がっている石や岩を砕く。静電気が彼女の黒髪をふわりと揺らし、雷撃が更に濃密なものに変わっていく。そして――
「……ッ！」
――鎧竜グラビモスの尻尾を、一刀両断に切断した。
「ゴアアアアアアアアアアッ!?」
サクラの背後へ切断された尻尾は音を立てて転がり落ちる。それに一瞥もくれる事なく、目の前で激痛に堪らず倒れ込んだグラビモスを睨みつけるサクラ。未だに雷撃を纏う鬼神斬破刀を再び構え、容赦なく突貫していく。
顔色一つ変える事なく襲い掛かって来た尻尾の一撃を切断してみせたサクラに対し、クリュウとシルフィードは互いに顔を見合わせて苦笑を浮かべ合った。
「相変わらず、常人のそれを凌駕しているな。彼女は」
「技術もすごいけど、やっぱり気迫が違うよね」
「さぁ、我々も負けてはいられないぞッ」
剣を担いで再び倒れてもがいているグラビモスへと突撃するシルフィードに「もちろんッ」と答え、クリュウも彼女を追って突撃する。
立ち上がったグラビモスは再び怒りの咆哮（バインドボイス）を轟かせるが、構わずシルフィードが突っ込みその顔面に向けて蒼刃剣ガ

ノトトスを叩き込む。血と悲鳴を吐くグラビモスに、遠距離だった為に咆哮（バインドボイス）の影響を受けなかったフィーリアの支援射撃が続く。

怒り狂う鎧の重竜は咆哮（バインドボイス）でまだ動けずにいるクリュウとサクラを狙って熱線を吐こうと構える。口を開き、口腔が真っ赤に染まる。これに気づいたシルフィードは雄叫びを上げて蒼刃剣ガノトトスを横薙ぎにフルスイングして熱線を撃つ為に地面に固定している脚を斬り殴る。体を固定している状態で軸足に強烈な一撃を受けたグラビモスはバランスを崩す。しかしそこは重鎧竜。ゆっくりと横倒しになる中でも狙いを定め、熱線を放った。しかしわずかに逸れ、二人の横を掠る程度に終わり、横倒しに倒れた。

すぐ横の地面が溶岩化するのを見て冷や汗をかくクリュウだったが、顔色ひとつ変えずに倒れたグラビモスに襲い掛かるサクラを見て苦笑を浮かべながら、彼女を追ってグラビモスへと襲い掛かる。

横倒しになった事で頭上にあったグラビモスの装甲が割れた腹が攻撃しやすい場所に降りてきた。そこへ向かってシルフィードを筆頭にサクラ、クリュウと剣士が総攻撃を仕掛ける。中距離へと距離を詰めたフィーリアも容赦の無い銃撃を浴びせる。

倒れた事で抵抗できないグラビモスは四人の猛攻をただ受けるだけ。悲鳴と怒号が混じった叫びを上げながら必死に暴れるグラビモスに対し、四人は全く攻撃の手を緩めない。

だが、ようやくグラビモスが立ち上がると深追いはせずに一度距離を取った。この判断が功を奏し、立ち上がり直後の毒ガス攻撃を回避する事ができた。

態勢を立て直す四人に対し、グラビモスは怒り狂いながら突っ込んで来る。迫り来るグラビモスに対し、四人は回避せずに真正面から迎え撃つ。一見無謀にも見えるこの構えだが、四人には策があった。

先頭に立つクリュウがディアブロヘルムの下で笑みを浮かべた瞬間、鎧竜グラビモスは彼らが事前に設置した落とし穴を踏み抜いてその進撃を阻まれた。

突然身動きを封じられたグラビモスは慌てふためいて暴れるが、ハ

ンターズギルド公認の落とし穴の拘束力は例え飛竜種最重量級モンスターと言われるグラビモスであってもそう簡単には抜け出す事はできない。
落とし穴にはまり、更に下半身が穴に埋まった事でまたしても腹の破損箇所が攻撃しやすい場所へと変わる。そこ目掛けて剣士三人が再び一斉攻撃を仕掛け、フィーリアも銃撃を続ける。
三人の強烈無比な斬撃の嵐に、顕になった肉の部分からはおびただしい量の血が飛び散り、流れ続ける。三人の防具も鎧竜の血で赤く染まるが、構わず力の続く限り剣を振るい続ける。
一方、銃撃を続けていたフィーリアは三人の猛攻を見届けると、ハートヴァルキリー改をしまって背負う。すると道具袋（ポーチ）の中から閃光玉を取り出す。
その間に、グラビモスはようやく落とし穴から脱してその巨大な翼を広げて天へと舞い上がる。鎧竜は角竜ディアブロスと同様に翼が退化しており、長距離飛行はできない。だがその巨体を浮かべる事くらいはできるのだ。
例えるなら、先日観たエルバーフェルド帝国海軍の戦艦のような重圧感と巨体を持つグラビモスが天へと飛び立つ様は、衝撃的だ。だが、彼らは冷静だった。
浮かび上がったグラビモスに対し、先程閃光玉を構えていたフィーリアがすぐさま背後へと投擲。炸裂した閃光が空中にあるグラビモスの視界を再び奪った。バランスを崩した鎧竜はその巨体を維持できずに落下。地面へと叩き落とされた。
地面が激しく揺れる程の衝撃で地面へと倒れたグラビモスに対し、再びクリュウ達は総攻撃を仕掛ける。
巨体故に一度倒れたらそう簡単には起き上がれないグラビモス。その間はクリュウ達にとっては格好の攻撃のチャンスとなる。その僅かな隙を逃さぬ為、クリュウ達の怒濤の攻撃は続く。
倒れていた巨体がゆっくりと起き上がるのを見て、三人は攻撃を断念して後方へと退避する。
血まみれとなって起き上がったグラビモスは、包囲する敵を睨みつ

ける。しかし、更なる追撃を警戒する四人に対して鎧竜は突如彼らに背を向けると、そのまま後方にある溶岩の方へと退避していく――巨体を支える、脚を引きずりながら。
「弱っているぞッ！　追えッ！」
シルフィードの再突撃指示に剣士組は一斉に突撃する。俊足のサクラがすぐさまグラビモスの前へと躍り出ると、雷刀鬼神斬破刀で襲い掛かる。クリュウとシルフィードも脚を狙って剣撃を浴びせ、フィーリアも徹甲榴弾ＬＶ２で攻撃を浴びせる。三人の猛攻、徹甲榴弾ＬＶ２の爆発に耐えながら、グラビモスは逃げ続ける。そして、ついには溶岩の中へと消えて行ってしまった。
「……逃がしたか」
舌打ちし、サクラは見事な剣捌きで背なる鞘へと納刀する。
「だが、ペイントの効果は残っている。場所は見失ってはいないさ」
蒼刃剣ガノトトスを背負ったシルフィードはそう言って近くにあった岩に腰掛けて息を整える。
「あと、少しだね」
クリュウも水筒を取り出して水を飲む。氷結晶が入った水筒の中身の水は、ここが日火山地帯であっても良く冷えている。
「長かったですが、ようやく追いつめる事ができましたね」
フィーリアも武器をしまい、少し疲れた様子だが勝利を目の前にして意気軒昂だ。
「ここでグラビモスを討伐できれば、グラビモスの出現で身動きが取れなくなっている商隊がこのラティオ活火山から脱出できますね」
「そうなれば、村の燃石炭が補給できるね」
クリュウとフィーリアも、あと少しでの勝利とその先の展開に頬を緩ませる。そんな二人に釘を差すのはリーダーであるシルフィードの役目だ。
「だが、追い込まれている以上相手も文字通り死に物狂いで抵抗するはずだ。油断はするなよ」
「……問題ない。死に損ないに遅れは取らない」
短く返すサクラの言葉に苦笑を浮かべながらも、この三人なら釘を

刺すまでもない事もわかっているシルフィード。手短に最後の作戦会議を済ませ、いよいよクリュウ達は出立する。
　これまでの長戦に疲れはあるが、四人全員が士気高く意気軒昂。気合十分に鎧竜グラビモスが休む巣に向けて歩み出す。
　――この後、鎧竜グラビモスとの激しい死闘の末に勝利を収めたクリュウ達。その戦い模様はまた別の機会に。
　大陸通商連合所属のイージス村支援部隊の一つ、第７方面商隊がラティオ活火山に村で使う燃石炭の採掘に来た際、鎧竜グラビモスと遭遇してしまった。何とか逃げられたものの、火山の中で身動きがとれなくなってしまった。
　これを知ったクリュウ達が、今回救援の為にこのラティオ活火山へとやって来て、鎧竜グラビモスと交戦したのが、今回の戦闘の原因だ。
　鋼龍クシャルダオラとの死闘から二ヶ月。村の復興は村人の誰もが思っていたよりも早いスピードで続けれている。すでにエルバーフェルド帝国の独立歩兵師団やカレン率いる大洋艦隊も引き上げており、イリス以下の王軍艦隊も去っている。村にはカレンが派遣した陸戦隊と設営隊が中心となって村の再建にあたっている。大陸通商連合も約束通り補給を続けてくれており、誰もが悲観した村の復興はもうすでにあと少しの所まで来ていた。
　鎧竜グラビモスを討伐し、商隊と共にドンドルマへと引き上げた四人はそこで商隊と別れ、久しぶりに大衆酒場へとやって来た。
「あら、久しぶりじゃない。みんな元気そうね」
　そう言って明るく出迎えるのは、ハンターの心のアイドルことギルド嬢長を務める人気ギルド嬢、ライザ・フリーシアだ。
「……お茶」
「……あんた、久しぶりの再会だってのに開口一番にそれ？」
「……ライザは店員。私は客。間違ってはいない」
「それはそうだけど……友達でしょ？」
「……お茶と茶菓子」
「……はいはい。緑茶と茶菓子セットね」
　サクラに一蹴されしおしおとオーダーを取るライザの姿に苦笑を

浮かべながら、クリュウ達は席につく。
「それで、今回はどうしたのよ？　今は村の復興中でしょ？」
「あぁ、その関係でちょっとラティオ活火山に用があってな」
　そう言ってシルフィードは事の顛末を説明する。それを聞いたライザは「それはまた、大変だったわね」と同情してくれる。
「でも、もう結構村の復興は進んでるんでしょ？」
「まぁな。カレンがかなり尽力してくれているらしく、海上経由での物資補給に人員の派遣など本当に助かっている。もちろん、アルトリアからの援助や大陸通商連合の協力、それにハンターズギルドも力を貸してくれているからな。信じられない速度で復興は進んでいるぞ」
「改めて考えても、夢物語みたいな展開よね」
「まぁ、だから大国二国が関わっている事は極秘にはなっているがな。西竜洋諸国を刺激しない為だそうだ」
　カレンやイリスは、クリュウの為に今回の支援を申し出てくれた。だが実際この二人が動くと何かと外交面で波が立つ為、その行動は極秘とされている。その辺はハンターズギルドや大陸通商連合も把握しており、二ヶ国の事については関係者全体に緘口令が敷かれている。
「陸戦隊の方からは、あと一ヶ月もすれば作業は完了するとの事だ。すでに住民も大半が仮設の天幕（テント）暮らしだが、戻って来ている。皆、一致団結して村の復興に勤しんでいるよ」
　シルフィードの説明にライザは嬉しそうに「そっか。良かったわね」と笑みを浮かべる。彼女は本来の仕事の為に早期に村を離れた為、村がどういった現状になっているか良く知らなかった。ずっと気にはなっていたが、何かと忙しい立場。どうしても確認する事ができずにいたのだ。心残りがなくなって、安堵したのだ。
「それで？　あなた達はすぐにでも村に戻る訳？」
「そうですね。復興には人手はたくさんあるに越した事はないので」
　そう言うクリュウに「そっか。がんばってね。応援してるから」と言い残し、オーダーを取って別のギルド嬢へと渡すと、別の席のオーダーを取りに入口付近の席へと向かう。その時、ちょうど酒場へと

入って来る者がいた。ライザはすぐさま営業スマイルを浮かべて迎えるが、次の瞬間、その顔から笑みが消えた。
「わ、びっくりしたぁ……帰ってたのね」
驚くライザの目の前に立っていたのは二人組の女ハンターだった。一人は星の輝きを集めたかのような光り輝く銀色の髪で左目を隠し、右後ろでサイドテールを結ったキリンテールと呼ばれる髪型をした、意志の強い碧色の瞳をした女性。
全身を物々しく刺々しい銀色の防具、ギザミUシリーズで武装し、背には強力な雷刀として有名な鬼哭斬破刀を下げている。
もう一人は青みがかった白色の髪をショートヘアに纏めた謎めいた蒼色の瞳をした女性。全身を防具と呼ぶにはあまりにも軽装で、至る所を肌に晒した幻想的な蒼白色の毛や皮で縫われた一見すると服のように見えるそれは、幻の古龍と呼ばれる幻獣キリンの素材を使った伝説の英雄級でしか装備できないキリンXシリーズと呼ばれる防具。背には硬度の高そう鈍色の巨大な鉄銃が装備されている。二つ折りのそれはヘヴィボウガンであり、その流れるような流線型の美しい研磨された銃は、鋼龍クシャルダオラから採れる厳選素材を使って作られたコルム＝ダオラと呼ばれる伝説の銃。
前者はクイーンクラス、後者に至ってはエンペラークラスに分類されるハンターズギルドでも数少ない強者だ。普通なら大衆酒場ではなく、直接上の階にある上級ハンター専用の酒場へと行くはずだが、なぜか二人は直接下の大衆酒場に現れたのだ。そして、突然の伝説級の二人の登場にざわつく酒場内を見回し、目的の人物を発見する。すると、
「クー君。久しぶりなのです。お姉さんは感激のあまり涙が止まらないのです」
先程までの何を考えているかわからない無表情から一転して目を両の拳で押さえ、子供の文字通り泣いてますアピールをしながら口で「うえーん、なのです。うえーん、なのです」とあからさま嘘泣きを始めるキリン娘。あまりの三文芝居っぷりに笑いすら起きず、場は凍りつく。そんな彼女の様子に隣のギザミ娘は「相変わらず訳わかんねぇ

ぜ」と呆れ顔。
　目の前で寒い漫才を見せつけられたライザはきょとんとしたまま動けない。すると、そんな彼女の隣からクリュウが顔を出した。
「……どうしてこんな所に居るのか。尋ねる前にまずは騒ぎを起こさないでよキー姉ぇ」
　ギザミ娘と同じく呆れ顔のクリュウ。だがその表情は隠し切れない嬉しさの笑みもまた浮かべていた。クリュウが声を掛けるとキリン娘は手を外して「クー君、会えて嬉しいのです。ギュッってしちゃうのです」と言って今度はクリュウを前から抱き締める。
　嫌がるクリュウだが、心から嫌な訳ではなく、ただ恥ずかしいだけ。キリン娘の方も離す気はないらしく、抱き締めたまま今度は頬ずりを始めてしまう。
　隣のギザミ娘はキリン娘の度を超えたブラコンっぷりに呆れつつ、いつの間にかクリュウの背後で殺意を噴出させている三人の娘を牽制する。
「あぁ、まぁ気持ちはわからなくはないが久しぶりの再会だから許してやってくれ。それとフィーリア、お前まで何て目で見てやがんだ」
　大衆酒場に現れたのは、クリュウ達も良く知る人物。
　クリュウの姉的存在であるG級ハンター、キティ・ホークラントとフィーリアの実の姉である上位ハンター、シュトゥルミナ・レヴェリの二人だった。
「ちょっとまぁ、ギルドの極秘任務ってのでキティの姉御と二人とコンビを組んでな。その任務を終えて帰って来た所だったんだ」
　紅茶を飲みながら事の顛末を説明するのはフィーリアの姉、シュトゥルミナ。フィーリアと同じく名門レヴェリ家出身、それも次女という立場ながら全く貴族っぽくない。だが下手に堅苦しいよりも彼女くらい大雑把な方がハンターの世界では受け入れられやすい。
「あの、極秘任務って何だったの？」
　フィーリアが数少なく、タメ口を利ける相手。それが姉であるシュトゥルミナだ。妹の問いに対しシュトゥルミナは苦笑を浮かべる。
「バァカ。極秘だから極秘任務って言うんだよ。内容なんて言えねぇ

よ」
「――東方大陸に、応援に行ってたのです」
えっへんとばかりに腰に手を当てて、ものの見事に極秘任務の内容を明かしたキティ。その発言に隣に座っていたシュトゥルミナは紅茶を零す始末。フィーリア達もまさかこんなにも簡単に言ってしまうとは思っていなかったらしく呆然としてしまっている。
一方クリュウは姉のアホっぷりに頭を抱え、キティはというと
「クー君、お姉さん偉い？　お姉さんすごい？　誉めていいのですよ？　頭撫でなでしてくれてもいいのですよ？」とクリュウに褒めてもらいたいとアピール。
しばしの間があって、ようやく平静を取り戻したシュトゥルミナはクリュウを睨みつけ、
「なぁ、お前の姉貴はアホなのか？」
「……否定はしません。天才とアレは紙一重と言いますし」
「クー君が天才と褒めてくれたのです。お姉さん、感激なのです」
「……姉御、全然褒められてねぇぞ」
どうやらキティとシュトゥルミナは旧知の仲らしく、シュトゥルミナとクリュウはお互い残念なキティを抱える悩みを持つ者同士、一気に距離が近くなった。
そしてキティが暴露してしまった為、もはや隠す必要もなくなってしまった極秘任務について、改めてシュトゥルミナが説明してくれる。
「東方大陸にもハンターズギルドはあるんだが、後発組織の為にまだ俺達級のハンターが少なくてな。時々東方大陸に俺達級のハンターが応援って形で行くんだよ」
「東方大陸に、ですか？」
「おうよ。こっちじゃ見れねぇ固有のモンスターから、こっちでお馴染みのモンスターも向こうじゃ変わった動きをしやがる。なかなか有意義な時間だったぜ」
楽しげに笑う彼女の姿に、東方大陸のモンスターに興味が湧くクリュウ。彼もハンターの端くれだ。見た事もないモンスターに興味

を持つのは当然だ。
「特にユクモ村って場所は最高だったぞ。温泉が湧いててな、それが最高の心地でよぉ。湯に浸かりながら飲む酒ってのは最高だぜ」
「しかも混浴なのです。私達美人さんだから、男の人の情熱的な視線に思わず身を震わせてしまったのです」
「まぁ、近づいてきたバカな男共は俺が全部蹴り飛ばしてやったがな。もちろん、全部股間にな」
　その時の事が余程楽しかったのか大声で下品な笑いを響かせるシュトゥルミナ。これが本当にフィーリアの姉で、あの名門貴族のお嬢様だとは未だ信じられないのが本音だ。
　一方のクリュウは何を想像したのか、顔を真っ青にして股間を押さえている。隣に座るシルフィードは自分には想像できない痛みに怯えるクリュウの姿が妙に可愛らしく見えたのか、クスクスと笑う。
「それで向こうのギルド指定の任務を幾つか終えて、こうして凱旋して来た訳さ。しかし、やっぱり酒はこっちの方がうまいぞ。向こうにはビールがないからな」
「そうなのか。それは残念だな」
　お酒の中ではビールが好きなシルフィードは少し残念そうに答える。ワインと言えばガリア、ビールと言えばエルバーフェルドとそれぞれブランドがある。全く別の地へと行けば、当然そういった品に出会い辛くなるのだろう。
「だったら、何でそのまま上の酒場に行かないのさ。大衆酒場にキー姉ぇが来れば大騒ぎでしょ？」
　クリュウの指摘はもっともだ。実際、さっきも軽く騒ぎになった程だ。彼の疑念に対し、シュトゥルミナが「おぉ、そうだった」と思い出す。
「いや、ちょっと東方の方で興味深い情報を得てな。それをお前に話したくてすぐにでもイージス村に行こうとしてたんだが、ちょうどお前達がここに居るという情報を得て来た訳さ」
「……クー君、お姉さん達が居ない間、大変だったのですね。肝心な時に力になれなくて、ごめんなさいなのです」

それまでの天然っぷりから一転して、申し訳なさそうに謝るキティ。村の窮地に駆けつけられなかった自分に責任を感じているのだろう。そんな彼女に対し、クリュウはゆっくりと首を横に振った。
「キー姉ぇが気にする事じゃないよ。何とか撃退はできたし、村も今復興中だけど何とかなりそうだからさ」
「でも、お姉さんはクー君のお姉さんなのです。クー君のピンチに力になれなかった。お姉さん、失格なのです」
しょんぼりとする姉を前に、弟としてどうしたもんかと考えるクリュウ。落ち込む姉に対し、クリュウは言葉を選びながら慰める。
「僕だって、もう一人前のハンターだし男だよ。いつまでも、キー姉ぇに守られたり、心配されたりされるだけじゃない。だから、キー姉ぇは気にしなくて大丈夫。実際、僕はこうして元気なんだし。せっかくの再会なんだからさ、そんなにキー姉ぇの悲しい顔、見たくないよ」
困ったように苦笑を浮かべるクリュウの言葉に、キティは伏せていた顔をゆっくりともたげる。弟の優しげな笑みを見て、キティは先程とは違って本当の涙を目の縁に浮かべながら、小さく笑みを浮かべる。
「……クー君は本当に優しい子なのです。お姉さんの自慢の弟なのです。大好きなのですよ。愛しているのです、クー君」
そう言って、キティは優しくクリュウを抱き締めた。今度は恥ずかしいからとか言って抵抗せず、素直にそれを受け入れるクリュウ。抱き合う二人の姿は本当に姉妹のようで、見ているこっちまで幸せになりそうな光景だ。二人のそんな姿に、シュトゥルミナもまた静かに笑みを浮かべる。そして――
「……感動のシーンを前に、何でお前らは全員そんな怒り狂った目をしてやがんだ」
――嫉妬に狂う三人の娘を静かにたしなめたのであった。
「それで、興味深い情報というのは？　それをクリュウに知らせる為に、ここに来たのでしょう？」
いち早く平静を取り戻したシルフィードの促しに「おう、それがなぁ……」と、なぜか話しづらそうにキティの方を見る。

クリュウを解放したキティは、シルフィードと同じく二人の説明を待っているクリュウの方を見ると、いつになく真剣な表情を浮かべる。姉の真顔に、事の重大性を悟ったクリュウも自然と表情を引き締めた。

しばしの無言の後、キティがゆっくりと口を開く。

「クー君。もしも、もしもの話なのです」

「うん」

「もしもアメリアさん――あなたのお母さんが生きているとしたら、どうするのです？」

「え……？」

真剣に彼女からの話を待っていたクリュウは、思わぬ問いかけに呆然としてしまう。それは周りで話を聞いていｔフィーリア達も同様だ。特に三人の中では唯一生前のアメリアと親交があったサクラも隻眼を大きく見開く。

そして、死んだはずの実の母が生きているとしたら。そんな無茶苦茶で、事と次第によっては不謹慎極まりない質問に対し、クリュウは少し狼狽する。

「いや、どうするって言われても……母さんは死んだはずじゃ」

「……そうなのです。でもクー君、アメリアさんの遺体は発見された訳じゃないのですね？」

「ま、まぁそうだけど……いや、でもそんな事ありえないよ」

死んだはずの母が生きている。そんな事ありえないとばかりに言い切るクリュウだったが、いつになく真剣な表情を崩さない姉を前に、その否定も揺らぐ。

「どうして、母さんが生きてるなんて思うのさ」

クリュウのもっともな問いかけに対し、キティは静かにその根拠を語る。

「実は、ユクモ村である人物の情報を得たのです」

「ある、人物？」

「それがよぉ、異国人の女性ハンターで、名前が《アメリア》って言うらしいんだ」

半信半疑と言った様子で語るシュトゥルミナの説明に、クリュウも「同姓同名って可能性だってあるでしょ？」と否定的だ。だが、「調べた結果、そのアメリアという人物はかなりの腕で、ライトボウガンを使うそうです」
「母さんは、ライトボウガン使いだったけど」
「会った事のある人の話によると、ハンター以外の事になると見ているこっちが不安になる程の天然で、美しい金髪の美人さんだとの事です」
「……まぁ、確かに良く母さんの特徴に似てはいるけどさ」
半信半疑の気持ちを捨て切れないクリュウ。だが、先程までに比べれば心が揺れているのは確かだ。困惑するクリュウを守るように間に割って入ったのは、この場に居る中ではクリュウとたった二人しか居ないアメリアを知る人物、サクラだ。
「……その人物がおば様だったとして、ならば何故そんな所に居る。なぜ、最愛の息子であるクリュウの所に帰って来ない？」
アメリアが生きているなど信じていないサクラからすれば、クリュウの心の傷を抉るような話をするキティとシュトゥルミナに対し激しい軽蔑と敵意に似た感情を抱かずには居られない。吐き捨てるようにそう疑念を投げかけた後「……悪い冗談よ。事と次第によっては、クリュウの姉だろうがフィーリアの姉だろうが許しはしない」と隻眼を険しく細め、怒りを顕にする。
フィーリアとシルフィードもサクラ寄りであり、二人の話に少し不快感すら抱いていた。妹からの「もうこの話はやめてください」と言わんばかりの視線に、シュトゥルミナも居心地が悪そうだ。
「なぁ、やっぱりやめようぜ。俺もアメリアが生きているなんて信じられないぜ」
やっぱりデマだったんだよ、とこの話は終わりと言いたげな視線を送るシュトゥルミナ。しかしキティは首を横に振った。
「もちろん、お姉さんとしてもデマという可能性が高い事を想定しているのです。でも、少しでも可能性があるのなら徹底検証。お姉さんは、諦めが悪いのです」

「可能性って？」
　クリュウに促され、キティは「これも人から聞いた話なので不確定要素なのです」と前置きしながら、自らの諦め切れない可能性について言及する。
「そのアメリアという女性、記憶喪失らしいのです」
「記憶喪失……」
「今から約十年前、海を漂流している所を東方人に助けられたそうなのです。ですが、その時にはすでに記憶を失い、彼女自身も大怪我を負っていたそうなのです。懸命の処置の末、何とか助かったものの結局記憶は戻らず、行く宛もない彼女はそのまま東方大陸に残ったそうなのです。当時の身なりから彼女がハンターだという事だけは確かだったようで、以後彼女はハンターとして活躍されているそうなのです。実力は相当なもので、お姉さんやルミナにも匹敵する実力者という噂も。各地を転々としているようで、正確な居場所は不明なのですが……」
　そこまで説明し、キティは一度用意されていた水を一口飲むと、改めてこの話を聞くクリュウを見詰める。彼の目は、半信半疑ながらもこの話に相当な興味があるようだった。
「クー君。もちろん、お姉さんもこの噂はデマだと思っているのです。そんな夢物語みたいな話、現実にはない。頭ではそう思っているのです。でも、クー君はわかってるのですね？」
「――もちろん、キー姉ぇは疑り深くて諦めが悪い。でしょ？」
「ビンゴ、なのです」
　昔から、興味を持ったら徹底的に調べないと気が済まないタイプだった姉。そんな姉をすぐ近くで見て育ったからこそ、彼女がなぜこんな話を自分にするかよくわかる。
「本来ならば、お姉さん直々に調査を行いたい。気持ちではそう思っているのです。でも……」
「――エンペラークラスのハンターは、ギルドの指示を無視した独断行動はできない。ずいぶん窮屈な身分だな」
　シルフィードの言葉に対しキティは苦笑いしながら「もちろん、メ

リットもあるのですよ。この情報だって、この身分だからこそ集まった情報なのです」と答える。
「そこで、クー君に頼みがあるのです」
「その頼みって、もしかして……」
クリュウの問いに答えるようキティは一度うなずくと、改めて彼に相対しながらその頼みを明かす。
「――この噂の真相を確かめる為、クー君には東方大陸に渡ってほしいのです」

第２３４話　進む覚悟と留まる覚悟　揺れる心の狭間

キティからの信じられない話――クリュウの母、アメリア・ルナリーフが東方大陸で生きているかもしれないという話を持ってクリュウ達はすぐさまイージス村へと戻った。

村の各所には仮設の天幕（テント）があり、今はそこに住人が暮らしている。

数々の家屋が破壊された中で、奇跡的に残された建物がある。それは村人達の憩いの場であったエレナの酒場だ。フィーリア達と一度別れ、酒場へと向かったクリュウはそこで人払いを行い、エレナと二人きりで話し合う事となった。

「そんなの、デマに決まってるじゃない」

話を聞いたエレナは開口一番に自らの結論を述べた。考える余地もないと言いたげに断言したエレナだが、正直クリュウも同じ想いだった。

「だよね。母さんが生きているかもなんて、考えた事もなかったよ……」

腕を組みながら考えるクリュウの表情は複雑だ。正直、キティの話はあまりにも突拍子がなさ過ぎる。普通ならエレナの言う通りデマだと切り捨てる事ができただろう。だが、

「でも、情報源がキー姉ぇなんだよね」

「……だとしても、さすがに今回はないでしょ」

エレナも情報源がキティだと言われると少し声がトーンダウンした。

昔から、キティは何かと疑り深くて徹底検証しないと気が済まないタイプだった。しかもそれを調べると必ず新事実が発見されるのだ。つまり、彼女が気になった事は全てが何か裏があった。これまで、その疑りが外れた事は二人の記憶する限りにはない。

あの勘の鋭いキティが気になった情報だ。いくら信じられない情

報だとしても、どうしても気になってしまう。
「クリュウ。あんたとしては、どう思ってる訳？」
自らの意見は言った。次は当人であるクリュウの番だとばかりに彼を促すエレナ。そんな彼女の問いかけに、クリュウは少し黙って、ゆっくりと口を開く。
「もちろん、僕も正直今でも信じられない。あの母さんが、もしかしたら生きているかもなんて。そんな夢物語はあるはずがない。でも――」
そこで言葉を一度切り、少しだけ考えた後、静かに己の決断を下した。
「ずっと考えたんだ。息子として、もしも仮に母さんが生きているとしたら、会いたい。それに、あのキー姉ぇの頼みだからね」
「じゃあ……」
エレナの言葉に、クリュウは小さく頷く。
「――村の復興が一段落したら、僕は東方大陸に渡るよ」
「……私もついて行く」
クリュウ達が暮らしている仮設の天幕（テント）にてクリュウは集まった仲間達、フィーリア、サクラ、シルフィード、ツバメ、エレナ。更に現在も村に常駐してくれているルフィール、シャルル、ルーデルを集めて自らの決定を話した。
黙って彼の話を聞いていたその場に居た全員が、彼の決定に驚きはしなかった。予想はできていたし、ある種の覚悟もできていたからだ。そんな中、開口一番にこう言い放ったのは、激しい陣取り合戦の末にクリュウの隣を勝ち取ったサクラだった。
「いや、今回ばっかりは僕一人で行くよ」
遠い異国の地。それもこれまでのような隣国ではなく、全く違う大陸へと向かう事になる。更に言えば、今回ばかりは完全に自分の勝手だ。仲間達に迷惑は掛けられないと単独での渡洋する気でいたクリュウは、いきなり出鼻を挫かれる形となった。
「……ダメ。私とクリュウは二人で一つ。つかず離れず、一蓮托生」
「サクラはこの大陸の商人に必要とされてるんでしょ？　その期待を

裏切っちゃダメだよ」
「……私はクリュウにしか従わない。クリュウにしかついて行かない。クリュウとしか生きていけない。だから私達はいつも一緒。絶対ついて行く」
「サクラ……」
「……お願い、私を一人にしないで」
　手を握って必死に置いて行かないでとアピールするサクラ。その隻眼は真剣で、今にも泣き出してしまいそうな程に悲痛に染まっている。そんな目で見られれば、クリュウとしても強く突っ返す事もできない。どうしたもんかと困っていると、
「その情報の信憑性はかなり不確かです。ですが、クリュウ様がその可能性に一縷の望みをかけて東方の地へ赴くと仰られるならば、その旅路には私もご同行致します」
　そう言って静かに、そして力強く同行を宣言したのはフィーリアだ。彼女は席から微動だする事なく強い眼差しでクリュウの事を見詰めている。その瞳が、彼女の本気を物語っていた。
「いや、でもフィーリアだって実家との色々がある訳だし……」
　サクラは大陸通商連合、つまりは商人達からの信頼が厚く、常に様々な護衛依頼が彼女宛に届けられる身分だ。そしてフィーリアはエルバーフェルド帝国の名門貴族であるレヴェリ家のお嬢様だ。二人共、独り身の自分と違ってあまり無茶はできない立場にある。だからこそ、クリュウは二人を説得しているのだが、そんな彼の配慮もこの二人には全く無意味であって。
「サクラ様の言葉を引用する訳ではありませんが。私はクリュウ様に忠誠を誓っております。クリュウ様の赴く所には常に私も居ます。私は、クリュウ様のお側で御使いしたいのです」
「フィーリア……サクラ……」
　二人の真剣な表情、真剣な想い、真剣な願い。それを直に感じ、クリュウは思わず目頭が熱くなった。だが、彼は決して首を縦には振らなかった。
「それでも、やっぱり二人を連れては行けないよ」

「クリュウ様ッ」
「身勝手かもしれないけど、僕が居ない間の村の守りを二人に任せたいんだ。もちろん、二人共有名人だから忙しい身分だって事はわかる。それでも、やっぱり故郷を託すんだから、信頼できる人に任せたいんだ」
　何がなんでもついて行くと更に強く言おうとしていた二人だったが、クリュウの説明に開きかけた口を閉じてしまう。何か言いたそうに何度か開くものの、やはり言えず、浮いていた腰をゆっくりと落とす。
「……クリュウの意地悪」
「クリュウ様、ずるいです……」
「……ごめん」
　謝る彼に対しても、二人は何も言えなくなってしまう。
　故郷を任せる。それは、彼が自分達の事を本当に信頼しているからこそ託しているのだ。そんな風に言われてしまえば、それを拒否してでも、という気持ちが揺らいでしまう。彼がそれを計算して言ったとは思えないが、結果は二人を黙らせてしまった。
「僕が村を離れている間。その期間がどれ程になるかはわからない。早くても半年は掛かるだろうし、下手すれば二年とか三年とか掛かっちゃうかもしれない。その間、村を任せられるのは、やっぱり信頼できる人じゃないと」
「で、でも、そんなに長い間クリュウ様と離れ離れになるなんて……やっぱり嫌ですぅッ！」
　一度は納得しかけたフィーリアだったが、やはり彼と長い間会えなくなるという現実に耐えられず、涙ながらに「やっぱり私はついて行きますッ」と叫ぶ。サクラも無言でクリュウの手を掴んだまま離さないし、二人の視線にクリュウも困り顔だ。こんな時にいつも助けてくれるシルフィードも、今回ばかりは無言を貫いていた。気になって彼女の方へと振り向くと、シルフィードが静かに口を開く。
「君の気持ちはわかる。だがな、もう少し仲間の事も考えてくれないか？　君は以前のアルトリア行きでも自分一人で決めてしまった。

少しは私達仲間を信じて相談する事を覚えろ――寂しいじゃないか」
怒っているようで、でも悲しんでいるようで、そんな複雑な表情を浮かべる彼女を前にしてクリュウは一言「ごめん……」と短く謝る。そんな彼に対し、シルフィードは小さくため息を吐いて言葉を続ける。
「君が東方大陸へ行きたいと言うのなら、私は止めない。好きにすればいいさ」
「シルフィ……」
「シルフィード様ッ!?」
「――だが、その時は私とフィーリア、サクラの三人も一緒だ。その同行を許さずに君一人で勝手に行くと言うのなら、私は君を幻滅し、軽蔑し、ドンドルマへ帰るぞ」
冷たく、しかし熱く彼に対してある種の最後通牒を突きつけるシルフィード。彼女からすればいつも勝手に決めて、その度に振り回されている身だ。毎度の事とはいえ、今回ばかりはさすがに看過できない。そこまで彼が身勝手を貫くと言うのなら、こっちだって勝手にさせてもらう。そんな想いすら抱いてしまう程、内心で彼のわがままに怒っているのだ。
シルフィードの冷たい怒りに、クリュウは思わず黙ってしまう。そんな彼を見て軽く深呼吸をして落ち着きを取り戻したシルフィードは続ける。
「別に君の東方大陸行きを止める気はない。だがな、私達はもうチームなんだ。勝手に行動されては困る。私達は四人で一つなのだからな」
そう言いながら、シルフィードは小さく口元に頼もしい笑みを浮かべた。何だかんだ言っても、結局は見捨て切れない。彼女はクリュウの事をお人好しだと言うが、実際は彼女の方が十分お人好しだ。
シルフィードの言葉に同意見だとばかりにフィーリアとサクラはコクコクとうなずく。
「私達は、もうバラバラにはなれないんです。だって、家族みたいなものなんですから」

「……私は、クリュウ無しでは生きていけない」
二人の言葉がダメ押しとなり、クリュウもどこか諦めたように小さくうなずくと、静かに三人に微笑み掛けた。
「正直、僕は世間知らずだからさ。一人旅ってすごく不安なんだ。その点は三人の方が先輩だし……何よりやっぱり、一人だと心細いよね――みんな、付き合ってくれる？」
クリュウの問いかけに、待ってましたとばかりに三人は大きく頷いた。
「例え東方大陸だとしても、私はクリュウ様にどこまでもお付き合い申し上げますッ」
「……問題ない。ハネムーンみたいなものよ」
「全く違うぞサクラ。だがまぁ、やはりこの四人でないと始まらんしな」
クリュウの誘いに対し、三人はすぐさま快諾した。これまで幾多の危険を共に乗り越え、西はエルバーフェルド、南はアルトリアと自分について来てくれたフィーリア、サクラ、シルフィードの三人。今度は東、それも全く別の大陸へと渡ると言うのに、ついて来てくれる。自分の無茶に、どこまでも付き合ってくれる。そんな三人の存在に、クリュウは思わず胸が熱くなった。
「兄者が行くなら、シャルも行くっすよッ！」
クリュウ達が東方大陸へと渡る決意を決めるのを目の前で見ていたシャルルも、その流れに続けとばかりに同行宣言を放つが、そんな彼女を止めたのは意外な人物だった。
「シャルルさん。あなたはなぜそう深く考えもせずにノリと勢いだけで行動するのですか？　バカなのですか？」
呆れ返るのは隣に座るルフィール。大きなため息を吐いて相方の無茶っぷりを嘆く彼女に対し、シャルルが食って掛かる。
「ルフィール、お前は兄者と離れ離れになってもいいって言うんすかッ!?」
「そのような事は言っていません」
「じゃあ……ッ！」

「――シャルルさん。あなたは、故郷のアルザス村を捨てるのですか？」
淡々と、しかしバカな相方を説得するようにゆっくりとした口調で尋ねる彼女の問いに、これまで血気盛んだったシャルルの口が閉じる。
そう、彼女にだって守るべき故郷がある。大切な家族が居る。そのような存在を捨てて、本当にクリュウについて行けるのか。ルフィールはそう尋ねているのだ。
案の定そこまで考えていなかったのだろう。シャルルは口を閉じて複雑そうな表情を浮かべる。そんな予想通りな相方を前に、ルフィールは再度大きなため息を零す。
「何かを決断するというのは、確かにその場の勢いというのも大切です。しかし、それによって生じる不利益の事も考慮しなければなりません」
「そ、そうっすよね。アルザス村と、離れ離れにならないといけないんすよね」
トーンダウンするシャルルだったが、やはりどうしても諦め切れない様子。何としてもクリュウの役に立ちたい。そんな想いが、隣に座るルフィールに強く伝わる。
大好きな彼の為に何かしたい。そう想うも、うまくできずに悩む相棒の姿を見ながら、ルフィールは小さく苦笑を浮かべる。
「別に、先輩と共に居る事がイコール先輩の手助けになるとは限りません」
「……それ、どういう意味っすか？」
ルフィールの言わんとしている事の意味がわからずに困惑するシャルルに対し、ルフィールは改めてクリュウの方を見やると、自らがすでに決めた決意を高らかに宣言した。
「――ボクは本日付けでイージス村に拠点を置きます。先輩がお留守の間、この村の防衛に全力を注ぎます」
ルフィールの宣言にクリュウは目を大きく見開いて驚く。隣に座るシャルルも「マジすっかッ!?」と驚きの声を上げる。そんな彼女の

問いに答えるように、ルフィールは静かにうなずく。
「先程先輩は、フィーリアさんやサクラさんに自分が不在の間の村の防衛を頼まれていました。先輩が不在の間、誰かが先輩の故郷を守らなければなりません。ボクはまだまだ未熟者ですが、それでも先輩の為に役立ちたいのです。だから、決めました――ボクが、先輩が居ない間この村を守ってみせます」
　そう言いながらルフィールはクリュウを見詰めながら、優しく微笑む。自らの人生を大きく狂わせた二色の瞳をキラキラと輝かせながら、ルフィールは続ける。
「……本当は、ボクも先輩にお供したいです。でもボクはまだまだ未熟で、先輩の隣に立つだけの力がありません。今の自分では、同行しても先輩の迷惑になってしまいます。それに、ボクには放っておけない残念な相棒が居ますから、この大陸から離れる事もできません。そんなボクが先輩のお役に立つ役目は、これくらいしかありませんから」
「ルフィール……」
「ルフィール、お前……」
　クリュウとシャルルの視線を受けながら微笑んでいたルフィールだったが、ほんのりと頬を赤らめたと思うと視線を下げる。
「か、勘違いしないでください。ボクはあくまで先輩の為にこの決断に至ったんです。シャルルさんの事がこの決定に至る要因となったのは、極めて微量です」
「……何恥ずかしがってんすかぁ？　素直じゃないっすねぇ」
　ニヤニヤと楽しそうな笑みを浮かべながらルフィールに絡むシャルル。その笑顔から、彼女がどれ程嬉しいかが見て取れるようだ。一方のルフィールはしまったとばかりに狼狽している。顔を真っ赤にしながら「勘違いしないでください。シャルルさんの為ではありません」と先程の発言を撤回するが、時すでに遅し。
「素直じゃないルフィールってムカつくっすけど、可愛い所もあるじゃないっすか」
「ちょ、調子に乗らないでください。シャルルさんの考えているよう

な事ではありません」
「ニヒヒヒ、好きなら好きって言えっすよ。お姉ちゃん、抱き締めてあげるっすよ？」
「誰がお姉さんですか。シャルルさんがボクより優っているのは年齢くらいじゃないですか。そんな人をどうして敬う必要がありますか」
「いつもならムカつく発言も、今だと全部可愛いっすねぇ」
「……ッ！」
珍しくシャルルに主導権を握られてしまっているルフィール。先程までのルフィールは可愛くもかっこ良かったが、今はただただ可愛いだけ。
いつの間にか、本当の親友になった後輩二人の姿を見て、クリュウも思わず顔が綻ぶ。そんな彼を見て「何ニヤついてるんですか先輩」とルフィールはジト目で睨んで来るが、シャルルに頬ずりされている状態では全く怖くない訳で。
「あぁ、二人揃って騒がしいわねぇ」
そこへ今までほとんど会話に参加していなかったルーデルが頭を掻きながら間に割って入って来る。
「何っすかルーデル。何か用っすか？」
「……シャルルさん。とにかく離れてください。張っ倒しますよ？」
「このルーキー二人じゃ厳しいでしょ？　仕方ないから、私も力貸してあげるわよ」
「ルーデルも？」
「何よ、不満でもある訳？　これでもあんたよりランクは上なんですけど？」
「いや、不満なんて……でも、いいの？」
クリュウが心配するのは当然だ。彼女だって今はエルバーフェルド帝国のレヴェリに拠点を置いてハンター業をしている。そこでの活動を兼任しながらこのイージス村でも活動するのは、かなり大変だ。だがそんな彼の心配をルーデルは笑い飛ばす。
「バカね。今だってドンドルマとレヴェリの二ヶ所で活動してるのよ。っていうか、ハンター業のほとんどはドンドルマが中心。今更こ

の村が増えたって何の問題もないわ」
「でも、ルーデルまでそこまでしなくても……」
ルーデルの負担が増える事を危惧するクリュウに対し、「別にあんたが気にする事じゃないわ」と言ってルーデルは優しく微笑む。そしてクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人を見回し、小さく肩をすくめる。
「さすがに東方大陸までは行けないけどさ、一応力にはなりたいって思ってんのよ。ありがたく受け取っておきなさい。それに言ったでしょ？　私はあんたが好きなのよ。好きな奴の為に力になりたいってのは、ダメな訳？」
不敵に微笑みながら語り掛ける彼女の発言に、クリュウが慌てたのは言うまでもない。事実、この場に居た面々のほとんどがざわつく。ただ一人ツバメだけがおかしそうに笑っているだけ。
「る、ルーデル、何でこのタイミングでッ!?」
「あら？　今この場で言われるとあなたに何か不利益でもある訳？」
「いや、そういう訳じゃないんだけど……ほら」
「……貴様、私の旦那に手を出そうとは、いい根性してるわね」
クリュウの前に立ち塞がるようにして、すでに抜刀して敵意むき出しなのはもちろんサクラ。隻眼を恐ろしいまでに鋭く細め、ルーデルを威嚇する。構えた鬼神斬破刀は主の怒りを表すかのようにバチバチと稲妻を迸らせる。
サクラ程血気盛んではないが、すでにシルフィードやルフィール、シャルルもルーデルを睨みつけている。そしてフィーリアは、
「いや、あのねルー。確かに諦めるなっては言ったけど、こうも真正面から来られるとどうしたもんやら……」
彼女が初恋を諦めようとしていたのを止めて、前に進むよう促したのは自分だ。だが、同時にその相手は自分にとっても初恋の相手な訳で。複雑な心境を抱える彼女からすればこの状況はどういう顔をすればいいか正直わからないのだ。その表情からも、彼女の複雑な心境が見て取れる。
一方のルーデルは、むしろこの状況を楽しんでいるようだ。

「まぁ、今は何よりも団結が必要な訳で、不用意な発言はやめにするわ。とにかく、あんたの留守中は私とこのバカ二人に任せなさい」
「誰がバカっすかッ！」
「……ぼ、ボクがシャルルさんと同次元だなんて」
「お前は傷つくポイントが何か違うっすよッ！　シャル、本気で泣くっすよッ!?」
「あぁ、騒がしいのぉ。少しは静かに語り合う事はできんのか」
　騒がしくなる皆を戒めたのは、これまで黙っていたツバメだった。皆の視線を一身に受けながら、ツバメは静かに語り始める。
「当然、ワシも残ってこの村を守るぞ。元々、主らの留守中のこの村の守りはワシの役目じゃからのぉ。故に、登場頻度が少なくてエレナと同じく主要キャラなのに存在感が薄いのじゃが」
「そこで何で私の名前が出て来る訳？　っていうか、何の話よそれ」
「まぁそれはさておきじゃ。ワシはこれまで通り、この村を守る事にするぞ。ワシにとっても、もはやこの村は故郷も同然。サクラとかクリュウを抜きにしても、ここを守るのはワシの責務じゃからのぉ」
　そう言って、彼は頼もしげに微笑んだ。呆然としているクリュウに向かって、ツバメは「なぁ、クリュウよ」と優しく言葉を続ける。
「お主は本当に幸せ者じゃと思うぞ。お主を想い、それぞれで決断し、行動してくれる仲間がこんなにも大勢居るのじゃ。お主は少し自分で抱え過ぎるのが玉に瑕。少しはそんなワシらを頼るが良い。決して、バチは当たらんぞ」
「ツバメ……」
「そうっすよ兄者。一人でできる事なんてたかが知れてるっすよ。１＋１は２とは限らないっす」
「……シャルルさん。１＋１の答えは２ですよ。ついにそのレベルの計算もできなくなってしまったのですか？　お悔やみ申し上げます」
「例えの話っすよッ！　テメェはシャルの事をどんだけバカにするっすかッ!?　いよいよ本気で泣くっすよッ!?」
　かっこいい事を言おうとしても、まるでシャルルがかっこいい事を言う事は似合わないとばかりに揚げ足を取りまくるルフィール。そ

のある種息の合った掛け合いは、如何に二人が親密な関係かを証明しているかのようで、クリュウは思わず笑みを浮かべた。
「確かにシャルルの言う通りだ。一人でできる事には、絶対に限界がある。正直、今回の事は僕の勝手だから君達を巻き込みたくはない。でも、結局はみんなに迷惑を掛ける訳だから」
そう前置きし、クリュウは改めてこの場に集まった皆を見回す。その一人ひとりの顔をそれぞれ見比べた後、クリュウは静かに頭を下げた。
「みんな、どうか――僕の東方大陸行きを助けてほしい」
クリュウの頼みは、満場一致で可決された。
クリュウ達四人の東方大陸行きはすぐに村長にも報告し、その出発予定日は一ヶ月後となった。ちょうどその頃に中間経過観察の為にイリスとカレンがそれぞれアルトリア王政軍国とエルバーフェルド帝国から来る予定になっているので、そこで二人に東方大陸行きを伝えてからの出発となった。
村長は最初こそ驚いていたものの、クリュウの東方大陸行きを「寂しくなるね」と寂しそうに笑いながらも応援してくれた。
こうしてクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの東方大陸行きが確定したのであった。

第２３５話　心の奥底に隠し続けてきた想いと揺れる心

その夜、クリュウ達の姿は外界と村を結ぶ洞窟の中にある、行き止まりで前方と天井が無いまるでベランダのような所にあった。現時点で仮設の天幕（テント）に暮らしている者も多いが、中にはクリュウ達のように洞窟の中に居住している者も居る。

露天となっている場所に置かれたテーブルに腰掛けながら、クリュウは一人ぼーっと夜空を見上げていた。澄んだ空はずっと遠くまで見通せる程に綺麗で、星の輝きと月の明かりが眩しいくらいに夜を照らしている。

「クリュウ様？」

そんな彼に声を掛けて来たのはフィーリアだった。洞窟の中には地下水が流れている所もあるので、水浴びでもしていたのだろうか。濡れた髪をタオルで拭いながら現れた彼女に、クリュウはゆっくりと視線を向ける。

「あ、フィーリア」

「どうされたんですか？」

「いや、何かちょっと疲れちゃって。色々な事ばっかり起きるからさ」

苦笑を浮かべるクリュウの顔は、確かに少し疲れが見える。身体的疲労ももちろんだが、精神的なものがやはり大きいだろう。

この三ヶ月は、本当に激動だった。ちょうど三ヶ月前にアルフレア地域政府から避難命令が出て、その原因究明の為にイルファへと入り、そしてそこで鋼龍クシャルダオラと遭遇し、これと交戦。クリュウが負傷した事で撤退し、改めてフィーリア、サクラ、シルフィードの三人編成による討伐隊がイージス村から出発。同時並行で村人は二度に分けて避難する事となった。だが第二陣が村で準備中にクシャルダオラが突如村を襲撃。クリュウは単独にてこれを迎撃する事となった。

その後駆け付けてくれたルフィールとシャルル、ルーデルとエリー

ゼとレンなどと入れ替わりながら戦闘を継続。翌日にはカレン率いるエルバーフェルド帝国の大洋艦隊とイリス率いるアルトリア王政軍国の王軍艦隊が救援に駆け付け、更にはイルファから帰って来たフィーリアとサクラとシルフィードと最後の決戦を挑み、辛くも撃退に成功した。

鋼龍撃退後も村の復興等でクリュウは特に力を注ぎ、休む暇もなく活動を続け、実質ここまでぶっ通しで来たのだ。そして今度は彼の母であるアメリア・ルナリーフが東方大陸に居るかもしれないという情報からの東方大陸行き。まさに、激動と呼ぶに相応しい過酷な三ヶ月間を過ごして来た。

「ずいぶんお疲れに見えますが、大丈夫ですか？」

心配するフィーリアの問いかけに、クリュウは「平気だよ？　疲れてるように見える？」と笑って誤魔化す。だがいくら笑みを浮かべたって、フィーリアの目は欺けない。

「はい。無理は、なさらないでくださいね」

周りに心配掛けないよう振る舞うのは実に彼らしい。ここで無理に休めせようとすれば、逆により平気を装ってしまう。彼は素直に見えて、こういう所は実に頑固だ。彼とはもう短くない付き合いのフィーリアは、そんな彼の性格を良く理解していた。

「まぁ、休める時はちゃんと休むよ」

フィーリアの言葉に、クリュウはそう答えて改めて星空を見上げる。

「ここさ、昔良く母さんと来た所なんだよね。ほら、ここって何か隠れ家っぽいじゃん？」

「そうだったんですか。確かに、子供なら目を輝かせて喜びそうな場所ですよね」

「いやまぁ、見つけて大はしゃぎだったのは母さんの方だったんだけど……」

「うふふふ、本当にクリュウ様のお母様は子供のような方だったんですね」

「うん。幼稚、とはまた違う。何て言うか、文字通り子供心を忘れてな

いんだよね。今思えば、子供の頃に子供っぽい経験を出来なかった反動だったのかもしれないけど」
　クリュウの母、アメリア・ルナリーフは南洋の大国、アルトリア王政軍国の先々代女王の娘、第一王女だった。イリスを見ていればわかるが、王族の暮らしというのは豪勢だが何かと不便だ。あの好奇心の塊だった母を見れば、その日々は相当に退屈なものだっただろうと簡単に想像ができる。
「木に登って木の実をかじったり、ワンピース姿で川に入って魚を追い掛け回したり、僕を驚かす為に良くかくれんぼをしてさ。本当に、子供ながらに母さんの行動にはヒヤヒヤさせられたよ」
　苦笑を浮かべながら母との思い出を語る彼の言葉に、フィーリアも小さく笑みを浮かべる。
「本当に楽しいお方ですね、クリュウ様のお母様は。私も、ぜひ会ってみたかったです」
「……本当に会えるといいね」
　そう言ってクリュウは小さく、でもどこか寂しそうに笑った。その笑みの奥の彼の感情は複雑だ。そんな彼の心境を悟ったフィーリアの表情も、また複雑。
「正直、私は何と申し上げればいいかわかりません。希望を抱かせるような発言もできなければ、これから向かわれる前に切り捨てるような発言もできません」
　ゆっくりとクリュウの対面の隣に腰掛けたフィーリア。彼女の髪から漂う石鹸の匂いにクリュウが思わず顔を赤らめたが、複雑な表情を浮かべる彼女を見て彼もまた表情が硬くなる。
「でも、もしも本当に生きておられるなら会ってみたいです。クリュウ様のお母様、きっと素敵な方だったと思います」
「……まぁ、息子の目から見ても美人だったと思うけど」
「それに、私はアメリア様にお礼を言いたい」
「お礼って何を？」
「秘密です」
　フィーリアがアメリアにお礼を言う理由がわからず首を傾げるク

リュウ。そんな彼を見ながらフィーリアは楽しげに微笑んだ。胸の上にそっと手を添えて、己が胸の奥の想いに触れる。
――クリュウ様を、私が大好きになった人を産んでくれて、ありがとうございます。
それに、もしも生きていたら自分のもう一人のお母さんになるかもしれない相手だ。そう考えるとついつい口元が緩んでしまう。
なぜかニヤニヤしているフィーリアを見て「どうしたの？」とクリュウが声を掛けると、フィーリアは慌てた様子で「何でもありませんッ」と自らのニヤケ顔を正す。
「もちろんその場合におけるクリュウ様の感情は私とは比べ物にならないでしょうが」
「情報源がキー姉えじゃなければ、絶対にないって言い切れるんだけどね」
「そんなに、キティ様の情報は信憑性があられるのですか？」
「信憑性ってのとはまた違うけど、今まで外れた事がないんだよね。それ以前に、姉の願いはなるべく聞いてあげたいじゃん？」
「うふふふ、クリュウ様は本当にお姉様想いなのですね」
「エレナにはシスコンだって良くからかわれてたけどね」
「……羨ましいですね、キティ様は。クリュウ様にそんなに想われて」
本当に羨ましそうに言うフィーリアを見て首を傾げると「でもさ……」と言葉を続ける。
「僕自身も気持ちの上では生きててほしいと思ってる。そりゃ、そう思うだろうさ。でも、頭ではそんな訳ないって思ってるんだ。こんな中途半端な気持ちのまま、見知らぬ東方大陸へ行く。それも、みんなを巻き込んで。これが正しいかどうか、正直わからないよ」
自らの身勝手でみんなを巻き込んだ。それも、その覚悟もまだ揺れている。自分の中に正義を見つけられず、彼は迷っているのだ。そんな悩む彼を見て、フィーリアは「別に正しいとか正しくないとか、そんなの気にしなくても良いのではないですか？」と首を傾げる。
「自分がやりたい事なら、迷わず実行すべきだと思います。良く言うじゃないですか、やらないで後悔するよりもやってから後悔する方が

良いと。必ずしも今回の遠征が後悔するような形になるとは限りませんし。それにクリュウ様の場合は協力してくださる方が大勢居るんですから、安心して多少の無茶はすべきだと思います」
「……フィーリアって慎重に見えて結構大胆だよね」
「そうですか？　悩むくらいなら前に進むべきだと思っているだけです」
「それがすごいんだよ。僕はほら、優柔不断だからいつも迷って立ち止まっちゃう」
「もちろん、迷う事は必要です。進むにしても退くにしても、一度は立ち止まり、迷う事は大切です。サクラ様のように迷う事なく前に向かって全力突撃するくらいなら、ある程度の優柔不断は必要かと」
「サクラの場合は、本当に猪突猛進だからね」
　我が道を突っ走るサクラの生き様に、二人は思わず笑みを浮かべる。基本的には彼女の生き様は無茶苦茶で、いつも振り回されている二人。だが時々皆が迷い立ち止まる中でも迷わず自らの信じた道を突っ走り続ける様は羨ましく感じる事もある。
「それに、私自身は少しだけ今回の遠征が楽しみなんです」
「楽しみ？」
「東方大陸って、実はハンターの間ではちょっとした人気なんですよ？」
　人差し指をビシッと立てて楽しそうに微笑みながら語る彼女の言葉に「そうなの？」と何も知らないクリュウは首を傾げる。そんな彼の反応を待ってましたとばかりにフィーリアは大きく頷いた。
「この大陸には居ない、全く違ったモンスターの数々。こちらに居るモンスターも生態が異なる事が多く、武器もこちらでは使われていないものがあると聞きます。東方大陸とは、ハンターにとっては新天地のような場所なんです」
「あぁ、そういえば前にイリスもそんな事言ってたな」
　以前、アルトリアの繁華街をイリスと回っていた際に彼女の口から出た聞いた事もないモンスターの話があった。東方大陸とは、クリュウ全く知らない未知の世界なのだ。

「この中央大陸も不思議はいっぱいです。でも、冒険者としては見知らぬ土地というのにはどうしてもドキドキしてしまいます。もちろん、クリュウ様のお母様の捜索には全力を注ぎますが、東方大陸での狩りというのもすごく興味がある訳です」
そう語る彼女は、いつになく興奮気味だ。こんなにも楽しそうに狩りを語る彼女を見るのは、久しぶりな気がする。それこそリオレイアの話をしている時のようだ。
「あ、すみません……」
自分が興奮してしまった事に気づいたのだろう。慌てて口を閉じるフィーリアに対し、クリュウは小さく首を横に振る。
「そうだよね。母さんの事ばっかりで頭がいっぱいだったけど、東方大陸はここと全く違う場所なんだよね。モンスターも狩りも全然違う。思ってもみなかったけど、確かに面白そうだよね」
空を見上げながら、クリュウは少し考える。
母を探すにしても、まずは向こうで生活の基盤を確保し無くてはならない。寝泊まりする場所を確保し、且つ生活できるだけの稼ぎがないといけない。自分達にできる仕事と言えば、もちろんハンター業だ。
だとすれば、全く生態系が異なる新大陸での狩りは、こちらの狩りとはまるで違うだろう。不安もあるが、彼女の言う通り楽しみもある。向こうにはどんなモンスターが居て、どんな素材があって、どんな武具があるのか。想像するだけで、何だか胸の奥が熱くなる。
「確かに、不安材料は多いです。別の大陸へ行くというのは、これまでの旅とは比べ物にならない程に大変です」
フィーリアの言う通り。これまでだってクリュウ達は狩場の行き来で様々な国を訪れた事はある。確かに国境を越えたりすると、世界観が変わったり文化の違い等で驚かされる事は多々あった。だがアルトリアを除いて言えば、結局は同じ中央大陸の中での話だ。
しかし、今度目指すのは新天地東方大陸。モンスターが違えば狩りも異なる。それだけではない。これまで以上に文化の違いや価値観の違いがあるだろう。更に言えば、ドンドルマに総本山を置くハン

ターズギルド本部。正確に言えば《ハンターズギルド中央総本部》。東方大陸にはこれの隷下にある《ハンターズギルド東方本部》があり、東方大陸で狩りを行えばその下に入る事になる。これまでと同じようなサービスが受けられるとは限らないし、同じハンターズギルドでも全く違う組織かもしれない。

同じ大陸内の国の情報なら比較的簡単に手に入るが、別の大陸となれば情報も限られる。一体どんな土地なのか、断片的な情報しかない今では、不安要素の方が多いのは事実だ。

「ですが、私は正直不安はありません」

「え？　だ、だって別の大陸だよ？　エルバーフェルドの常識とか、通じないかもしれないのに」

「確かに今までの私達の常識が通じない世界かもしれません。ですが――」

そこで一度言葉を切って、フィーリアはクリュウの顔を見詰める。自らの顔に何かついているのかと頬等を確認する彼の姿を見て、フィーリアは嬉しそうに微笑む。

「だって――クリュウ様と一緒ですから」

「フィーリア……」

「クリュウ様と一緒なら、私は怖くないですし、寂しくもありません。クリュウ様と一緒なら、私は大丈夫です」

そう言って、フィーリアは小さく拳を握り締める。呆然と彼女の姿をクリュウが見ていると、フィーリアは照れ笑いを浮かべる。

「えへへへ、ちょっと調子に乗っちゃってますかね？　でも、クリュウ様と一緒なら私はどんな場所でも大丈夫です。きっとそれは、サクラ様やシルフィード様も一緒です」

「みんなも？」

「はい。だって――私達みんな、クリュウ様の事が大好きですから」

真剣に、しかし嬉しそうに、頬をほんのりと赤らめながら照れ笑いを浮かべるフィーリアの姿に、クリュウもまた小さく笑みを浮かべた。

彼女の笑顔は、いつだって自分の心を明るくしてくれる。何かに悩

んだ時や、不安でどうしようもなくなった時、いつも彼女は自分の事を心配してくれて、励まし、そしてこうして笑ってくれた。
どんなに辛い時も、どんなに大変な時も、いつも彼女はこうして笑ってくれる。その笑顔に、これまで何度助けられて来た事か。
「何だか、恥ずかしいよ……」
照れ笑いを浮かべるクリュウに対し、フィーリアもまだ赤い頬を押さえながら「えへへへ、たまにはクリュウ様の照れ顔を見てもいいじゃないですか」とイタズラっぽく笑う。
「フィーリアの方が顔、真っ赤だと思うよ？」
「えぇッ!?　そ、それはそうかもしれませんが、クリュウ様だってお顔が真っ赤ですッ！」
二人共、お互いに顔を真っ赤にし合いながら笑い合った。
夜空の下、二人の笑い声が静かに、そして楽しげに響き渡る。
「ありがとう、フィーリア」
ひとしきり笑った後で、クリュウはおもむろにそう言って彼女の方を見る。フィーリアは「いえ、別に私は何もしてませんよ」と小さく笑って彼の言葉に返す。
「いつもいつも、フィーリアに助けてもらってばっかりだよね」
「何を言ってるんですか。私の方こそ、いつもクリュウ様に支えられてばっかりです」
「じゃあ、僕達はお互いに支え合ってるって事だよね」
「うふふふ、そうかもしれませんね。何だかちょっぴり恥ずかしいです」
照れたようにはにかむ彼女の笑顔を見て、クリュウは小さく笑って、そっと天を仰ぐ。空にはきれいな満月が浮かんでおり、夜空には美しい星々がキラキラと輝いていた。
「初めて君と会った時の事、覚えてる？」
「……お、覚えてますけど。あまりその話はしないでくださいッ。は、恥ずかしいでうぅ」
「そっかな？　あんなにかっこ良く僕を助けてくれたのに」
「そ、その後お腹が減って倒れてしまったんですよ？　台無しもいい

所じゃないですか」
「あははは、そうだったね。でもさ、まさかあの時からこんなに長い付き合いになるとは、正直思ってなかったよ」
「私だって、こんな気持ちになるなんて思ってませんでしたし……」
初めて会った時、確かに話しやすい人だとは思った。男の人が苦手だった自分からすれば、彼は優しくてとても接しやすかった。最初の頃、自分が彼に向けていた印象はその程度だった。
まさかそれがいつの間にか惹かれ、そして好きになってしまうなんて。当時の自分が知れば驚くに違いない。
今思えば、あの頃の自分は他人のようだ。あの頃の自分はクリュウの事を年上でもちょっと弟のようにも感じていた。だって、危なっかしくて頼りなくて、見ているこっちが不安になってしまうようだったからだ。それが今では好き過ぎて、こうして顔を合わせているだけで自然と頬が赤らみ、胸が高鳴り、幸せな気持ちでいっぱいになってしまう。
「フィーリアは、いつまでハンターとしてやってくつもりなの？」
クリュウからの突然の問いかけに、フィーリアは目をパチクリとさせる。そんな事、そういえば考えた事もなかった。何せ、自分は今の生活、そしてこの狩人としての道を楽しんでいる最中だ。
だが、ハンターという体を張った仕事が寿命が短い事も知っていた。多くは四〇代の手前には引退してしまい、早ければ三〇代始めで体力の衰えから引退していく世界。自分はまだ十代だが、決して遠い未来の話ではない。
「あまり深く考えた事はありませんが……できれば結婚を機に、みたいな感じがいいですね」
自分の将来の話をするのは何だか照れくさい。思わずそう曖昧な返しでこの話を終えてしまおうとした。だが、
「結婚かぁ……フィーリアはきっといいお嫁さんになるよ。料理はおいしいし、家事もできて、何かと色々気にかけてくれて」
クリュウの言葉に、フィーリアはまたしても顔を真っ赤にさせてしまう。彼からそんな風に褒められると、どうしても胸が高鳴る。嬉し

くて嬉しくて、頬が緩んでしまう。
「も、もうッ。からかわないでくださいよぉ……」
「からかってなんかないよ。本気でそう思ってるんだから」
そう言って、クリュウは否定する為にパタパタと動かしていたフィーリアの手を掴んだ。突然手を握られて驚くフィーリアに、クリュウは顔を近づける。
今までにないくらいに近い彼の顔。それに、何だかいつもと違う彼の表情。真剣に何かを訴えようとする彼の表情は、凛々しくもあり、そして恐ろしくもあった。
「あ、あのクリュウ様？　何だか、顔が怖いです……」
「フィーリアは、誰か好きな人って居るの？」
「えぇッ!?」
突然の思いもよらない質問に、フィーリアは驚き、慌てる。だってその好きな人は、今目の前に居るのだから。
「わ、私はそのぉ……」
「僕も、いつか結婚するんだと思う。それは、何年先になるかわからないけどさ、やっぱり守るべき奥さんと子供が居るってのは、男の夢だと思うし。僕も、そういう生活がしてみたいと思う」
「そ、そうですか」
いつになく真剣な表情で語る彼の口調に、フィーリアは少し違和感を感じていた。何か、いつもの彼のそれとは違う、どこか鬼気迫るものを感じる。
「僕は、できるならフィーリアみたいなお嫁さんが欲しいなぁ、なんて」
「ふぇッ!?　わ、私みたいな、ですか？」
クリュウの言葉に、フィーリアは顔を真っ赤にしながら慌てる。どうすればいいか狼狽する彼女の手を握りながら、クリュウが更に少し距離を詰める。
「あのさ、もし良ければ、なんだけど。もしも、フィーリアが良いって言うならさ」
「え？　えぇッ？　えぇぇぇッ!?」

目の前に彼の真剣な顔がある。しかも、何だか恋愛小説の中のような展開。恋する乙女の想像力はフルスロットルだ。もしかして、本当に小説の中のような展開になるのか。だとすれば、自分は……

息が掛かる程の距離。すぐ近くに聞こえる彼の声と息。鼻をくすぐる彼の香り。信じられない距離にフィーリアの目はもうグルグルと回りまくる。

「あ、あの、クリュウ様、もしかして……」

ずっと夢に見ていた展開。フィーリアも覚悟を決めて、彼からの言葉を待つ。お互いに頬を赤らめ合いながら、真剣に見詰め合う。クリュウも覚悟を決めたように一度うなずき、ゆっくりと口を開く。

「あのさ、フィーリア。どうか僕と――いひゃぁッ!?」

それまでの凛々しい顔が一転して、突如奇声を上げて飛び跳ねるクリュウ。突然の事に呆然とするフィーリアだったが、彼の背後に忍び寄る影に気づいた。

「さ、サクラ様ッ!?」

「……クリュウ、浮気はダメ」

いつの間にか、クリュウの背中に抱きついているサクラ。先程までフィーリアと一緒に水浴びをしていたせいか、少しまだ濡れている髪を靡かせながら、サクラはクリュウに抱きついたまま彼の耳にフゥと息を吹きかける。先程の彼の奇声はこれだったらしい。

「い、いつの間にッ!?」

クリュウも驚きを隠せない様子。だって、全く気配を感じなかったからだ。まぁ、彼女なら気配もなく忍び寄る事はできるとは頭ではわかってはいるのだが。

「……クリュウ。そんなに結婚したいなら、私と結婚して。私、がんばって子供たくさん作る。大丈夫。私、夜に強いタイプだから」

なぜかビシッと凛々しい真顔で宣言するサクラ。ものすごい下ネタなのに、彼女が言うとすごくかっこ良く聞こえる。だがまぁ、結局は下ネタなのだが。

「いや、別に僕は……」

逃げようとするクリュウに抱きついたまま、サクラはクリュウの耳

をそっと舐める。
「いひゃぁッ!?」
「……クリュウは昔から耳と首が弱い。私、何でも知ってる」
そう言って、サクラは妖艶にクリュウの首筋を舐める。彼女の言う通り、クリュウは滅法この攻撃に弱く、一瞬で脱力してその場に倒れ込んでしまった。這って逃げようとする彼の背中を押さえたまま、サクラはなおも執拗に彼の耳や首を攻める。
「さ、サクラマジで勘弁ッ。ほんとにタンマッ！」
顔を真っ赤にしながら実質のギブアップ宣言をするクリュウだが、サクラはどうやらこの状況が気に入ったらしく、攻撃の手を緩めない。このままでは本気でクリュウの男としての尊厳が木っ端微塵に砕け散りかねなかったが、ここでようやくフィーリアが助けに入った。
「さ、サクラ様ッ！　ふ、不潔ですッ！　そのようなはしたない行いはやめてくださいッ！」
顔を真っ赤にしながらサクラの横暴に攻撃するフィーリアに対し、何気にクリュウの服を脱がそうとしていたサクラは真顔で彼女を見詰める。
「……クリュウは汚くないわ。あなた、失礼よ」
「えぇッ!?　わ、私だってクリュウ様の事を汚いなんて思ってませんよッ!?　クリュウ様、信じてくださいッ！」
「……フィーリア。早速サクラの話術に踊らされてるよ？」
サクラの下敷きになりながら、クリュウのツッコミが見事に炸裂した。
サクラの襲撃から逃げるようにクリュウが去り、その場にはフィーリアとサクラだけが残された。サクラは持っていた水の入ったコップを自らの前に、そして対面に座るフィーリアの前に置く。
「あ、ありがとうございます」
小さくお礼を言って、フィーリアは水を少し飲む。熱くなっていた体が、少しずつ冷えていくのがわかる。
少しずつ冷やすようにゆっくりと飲むフィーリア。そんな彼女を

見詰めながら、サクラが小さく口を開く。
「……クリュウは、きっとあんたの事が好きよ」
「ぶはぁッ!?」
　サクラの言葉が耳に入った瞬間、思いっきりむせてしまったフィーリア。激しく咳き込む彼女を、サクラは冷たく見詰める。しばらくして、ようやく咳が収まるとフィーリアは涙目になりながらサクラに向き合う。
「く、クリュウ様が、私の事が好きッ!?　な、何言ってるんですかッ！」
　顔を真っ赤にして叫ぶフィーリアに対し、サクラは小さくため息を吐く。
「……わかるわよ。私、クリュウの事は全部わかる。だから、わかるの。クリュウは、たぶんあなたの事が好きなのよ」
「いや、さすがにそんなはずは……」
「……さっきの彼、きっとあなたに告白しようとしてた」
　サクラの発言を笑い飛ばそうとしたフィーリアだったが、その言葉に開きかけた口を閉じてしまう。
　先程の彼は、確かに様子がおかしかった。あんな彼の行動、今まで見た事がない。それに、あの言葉の数々。自分だって、一度はそう思い掛けた程だ。今考えれば何かの間違いだったと少し残念に思っていたのだが。
「わ、私はクリュウ様の事が好きです。でも、クリュウ様が私の事を好きだなんて、そんなはずは……」
「……私を誰だと思ってるの？　私は、クリュウの全てを理解できる。だから、わかるのよ。彼の態度や口調、振る舞いから漏れるあなたへの特別な想い。私やシルフィード、エレナ達と接する時と、彼はあなたに接する時とでは微妙に違う。その微妙が、あなたに好意を抱いている証拠よ」
　淡々と語る彼女の言葉を理解する程に、フィーリアの顔はより真っ赤に染まっていく。
「そ、そんなはず、ないじゃないですか」
　声の震えが止まらない。息は荒く、やっと収まった体の火照りが再

び急上昇していく。一種のパニック状態になっている彼女を前に、サクラは淡々と言葉を続ける。
「……さっきのを見て、まだ否定する気？」
「でも……」
「……ふざけないで。クリュウの想いを、踏みにじる気なの？」
　これまでの冷静さとは打って変わって、感情的な声で問いかけるサクラ。見れば、彼女の隻眼はいつになく真剣で、そして悲愴に満ちていた。今にも泣き出しそうなのを、必死に堪えているような、そんな瞳。
　親友の瞳の奥の想いを知り、ようやく認めざるを得ないと覚悟したフィーリア。小さく、首を縦に振る。
「クリュウ様が、私の事を好きだなんて……」
「……クリュウは、昔からあなたみたいなタイプが好きだった。童話の中のお姫様に、何度も憧れてたわ」
「お、お姫様だなんて……私はそんなに高貴な身分じゃないです」
「……あなたが言うと、何だか無性に腹が立つわ」
　ジト目で見詰めてくるサクラの視線に、フィーリアは苦笑を浮かべる。
　フィーリアは確かにお姫様ではないが、大国エルバーフェルド帝国の由緒正しき一等貴族であるレヴェリ家のお嬢様だ。十分高貴な身分ではある。
「でも、私は爵位継承権は第3位です。それに、家はセレス姉様が継ぐ事になってます。出身は確かにそうですが、今は事実上の平民です」
「……別にクリュウは貴族であるあなたを好きな訳じゃない。貴族のお嬢様として、健気で、おしとやかで、可憐で、守ってあげたいような女の子が好きなのよ――何を言わせるのよ」
「自分で言い始めたんですよッ!?　恥ずかしいのはむしろこっちですッ！」
　サクラの口から自分を褒め称える言葉の数々が出た事に、フィーリアは嬉しくもあり恥ずかしくもあり、顔を更に真っ赤にさせる。もはや熟したシモフリトマト状態だ。

「……私は、正直クリュウのタイプとは違う。だから、子供の頃はクリュウの好きなそんな風な女の子を目指した。でも、途中でやめたわ」
「どうして、ですか？」
「――だって、そんなの私じゃないもの」
キッパリとそう言い切って、サクラは小さく拳を握り締める。月明かりに照らされる彼女はどこか神秘的で、でもその決意に満ちた力強い表情は凛々しくもあった。
「……私は、クリュウに私を好きになってほしい。偽りの自分じゃない、本当の私を。だから、私は決めたの。私は決して自分にウソをつかない。私自身を好きになってほしいから」
真剣に、静かに自分の想い、決意を語るサクラ。フィーリアはそんな彼女の凛々しい姿に思わず見惚れてしまった。同じ女性の目から見ても、自分に正直に生きる覚悟を決めている彼女は、凛々しく、そして美しく見えた。
「……でも、クリュウは私じゃなくて、あなたを選んだ」
「サクラ様……」
悲しげにつぶやく彼女の言葉に、フィーリアは掛ける言葉を見つけられなかった。自分は彼女の親友のはずなのに。でも今は、自分の言葉は全て彼女を苦しめてしまう。そんな気がして、喉の奥がつかえて、言葉が出ない。
「……でも、悔しいけど――少しだけ嬉しいの」
「え……？」
彼女の顔を見ていられなくて、思わず伏せていた顔を上げると、サクラはこちらをジッと見詰めていた。いつもと変わらず、何を考えているか窺い知る事のできない無表情で、こちらを見詰めている。その表情が――小さな笑みに変わる。
「……だって、フィーリアは私の唯一無二の親友なんでしょ？　親友の幸せは、私にとっても幸せだから」
そう言って、ぎこちなく小さく微笑む彼女の瞳は本当に嬉しそうだ。幸せに満ちた、優しげな瞳。そんな彼女の煌めく隻眼を目の前に

して、フィーリアの胸の奥に熱いものが込み上げて来る。
　自分とサクラは親友だ。それは、お互いが認め合った関係だ。だが、こうして彼女の方から言われる事は滅多にないし、こうして笑いかけてくれる事などきっとこれまで数える程しかなかった。
　自分の為にサクラが喜び、そして祝福してくれる。まるでもう一人の親友であるルーデルから祝福されている時のような、そんな喜びが胸の奥いっぱいに広がった。
「サクラ様……私、サクラ様の為にも――」
「――でも、クリュウは渡さないわ」
「え……」
　先程までの優しげな微笑みはどこへやら。炎王龍テオ・テスカトルすら尻尾を巻いて逃げ出しかねないような邪悪にして高圧的で、大胆不敵且つ挑戦的な笑みを浮かべ、サクラは静かに、そして高らかに、親友――否、恋敵（ライバル）へ宣戦布告する。
「……例えクリュウが貴様の事が好きだとしても関係ない。私は偽善と幻想で塗り固められた純愛に興味はない。真の愛とは、何が何でも勝ち取るもの。私は血生臭くて狂気に満ちた略奪愛でも構わない。むしろ、私に仇なす全ての敵を蹴散らし、クリュウの寵愛を受ける。私は誰にも負けないわ――私は貴様から、クリュウを奪い取る。覚悟しておきなさい、親友」
　そう言って、大胆不敵に挑発的な笑みを浮かべてみせるサクラ。その隻眼は愛に激しく燃え上がり、彼女の恋心はグラビモスの火炎袋よりも熱くなっている。
　親友の略奪愛宣言に対し、フィーリアだって負けてはいない。
「わ、私だってただ手をこまねいてたりなんかしませんッ。絶対に、クリュウ様のお嫁さんになってみせますッ！」
「……愚かな。クリュウは私の婿になるのよ。あなたは私とクリュウの愛の営みを家政婦として見守ってるがいいわ」
「恋敵に好きな人を奪われた挙句、奴隷のようにコキ使われるんですかッ!?　どんだけ残虐な人生なんですかそれはッ!?」
　一人の少年を巡って、争い合う二人の美少女。だがそのどちらに

も、絶望の闇はない。
親友同士なのに、好きな人は同じ。普通に考えれば、二人が幸せになるハッピーエンドなど存在はしない。片方のハッピーエンドは、もう片方にとってはバットエンド。二人の想いは、決して同時には報われはしない。
互いに、一人の男を奪い合う。壮絶で辛い戦いになる事はわかっている。だが、どちらも決して悲観してはいない。それどころか、相手を憎む事もしなければ、むしろこの状況を楽しんでいるようにも見える。
確かに、二人の幸せは決して同時には報われはしないだろう。だが今だけは、同じ人を好きになった者同士。彼の言動にドキドキしながら、親友と楽しく笑える、そんな時が刻まれている。まだ二人は、その微妙でくすぐったくたい関係でいたい。そう感じ取っていた。
いつの間にか楽しげに笑い合うフィーリアとサクラ。二人の恋は、まだまだこれからだ……
「……本当に、君は幸せ者だな。クリュウ・ルナリーフ」
楽しげに語らう二人からは死角になっている洞窟内の岩陰に腰掛けて二人の会話をこっそり聞いていたシルフィード。フッと口元に笑みを浮かべながら、隣で同じく黙って二人の会話を聞いていたクリュウの頭を撫でる。
「僕は幸せ者なんかじゃない。僕は、最低人間だよ」
瞳に薄っすらと涙を浮かべながら、小さく、弱々しくつぶやくクリュウ。その表情は悲痛に歪み、今にも大粒の涙を流しながら泣きだしてしまいそうな程に弱々しい。そんな彼の頭を撫でながら、シルフィードは優しく声を掛ける。
「何が最低だ。そんな事を言えば、あの二人が怒るぞ？」
「僕が、中途半端に居続けるから。だから、二人は争う。僕が、優柔不断だから」
「……君は、今の自分達の関係を崩したくなかった。そうだろう？誰かを選べば、この奇跡とも言える繊細な均衡で維持されている関係は一瞬で崩れ去る。それ程に、私達の関係は脆い。だから君は選ばな

かった――否、気づいていないフリをしていたのだろう？」
　シルフィードの問いかけに、クリュウは無言で頷いた。そんな彼の返答を見て、シルフィードは小さく項垂れる。
「まったく、君はとんだ役者だな」
「ごめん……。本当は気づいてたよ。フィーリアとサクラの気持ち。エレナやイリスにアリアにカレン、ルフィールとシャルル――そして、君の気持ちも」
「……全ての娘達の想いを知った上で、君は気づかないフリをしていた。それは偏に、私達との関係を壊したくなかった。もはや家族も同然の、私達の関係。それを想って、君は決断しなかった。決断どころか、気づいていない事にした。そうだろう？」
　小さくため息をするシルフィード。自らの問いかけに対する彼の返事は確認する事はなかった。もう、答えはわかっている。だから、別に彼の方を見る必要はない。淋しげに冷たい地面に置かれた彼の手の甲に、自らの手のひらをそっと添えるだけ。
「君は、本当は誰が好きなんだ？」
「……まだ、正直ちょっとわからない。でも、きっと僕は――フィーリアが好きなんだと思う」
「そっか……つまり、私はフラれてしまった訳だ」
「ごめん……」
「謝る必要はないさ。恋なんてそんなものさ。結ばれるかフラれるか、二つに一つ。君が私をフッた所で、私は君に感謝すれど恨む事はしないさ――少し、傷つきはするがな」
「ごめん……」
　小さく、そして申し訳なさそうに謝るクリュウ。そんな彼を、シルフィードはそっと抱き寄せる。自らの胸に弱々しく震える彼の体を優しく抱き留めながら、シルフィードは静かに続ける。
「むしろ、私の方こそすまなかった。君は一人、ずっと苦しんでいたのだな。自らの想いを隠して、一生懸命に今の関係を守ろうとした。それに、私は気づけなかった。リーダー失格だな」
「そんな、シルフィは何も悪くないよ」

「……まったく、君はフッた相手にも優し過ぎる。今は、君の優しさが少し残酷だぞ」
「……あ、ごめん」
　再び申し訳なさそうに謝る彼に対し、シルフィードは小さく首を横に振り、そっと彼の頭を自らのその大きな胸に抱き寄せる。慌てる彼の耳元で、シルフィードはイタズラっぽく、そして妖艶に「君はエッチだな」とささやいた。
「好きな女が居るのに、ちょっと別の女にこうされただけで顔は真っ赤。本当に、君はエッチで、可愛らしい男の子だ」
「か、からかわないでよッ」
「ふふふ、すまんな。どうやら私はやはり、君の事がどうしようもなく好きらしい」
「シルフィ……」
　何て声を掛ければいいかわからず、呆然とするクリュウ。そんな彼を優しく抱き締めながら、シルフィードはそっと彼の耳元に口を寄せる。
「――決めた」
「え？　決めたって、何を――ひゃッ!?」
　クリュウが小さな悲鳴を上げたのも無理はない。彼の耳元で一言そうつぶやいたシルフィードは、そのまま彼の頬に優しくキスをしたのだから。
　彼女の柔らかな唇を受けた頬を押さえながら、顔を真っ赤にしたまま狼狽するクリュウ。そんな彼を再び、そして強くシルフィードは抱き締める。そして、宣言する。
「サクラは君を諦める気はないらしい。ならば、私も君を諦める必要はないな」
「シルフィ……」
「お姉さんをナメるなよクリュウ・ルナリーフ。君が本当にフィーリアと結婚するまで、私は君を諦めないからな。必ず、君の隣に立ってみせるぞ」
　そう力強く宣言したシルフィードは、そのまま満面の笑みを浮かべ

ながら彼に覆いかぶさる。慌てふためき声を出しかけた彼の唇に自らの唇を押し当てたのは、そのすぐ後の事だった……

第２３６話　新たなる物語への旅立ち

――そして、クリュウ達が東方大陸へと渡る日が来た。
イージス村の沖合に、突如として砲声が轟いた。
次々に鳴り響く砲音は、静かなイージスの海を打ち壊すように鳴り続ける。鳥達はその爆音に驚き飛び立ち、獣達は恐れ森の奥へと去って行く。
無数の砲声を轟かすのは、イージス村の沖合に展開している大艦隊の主砲の数々だ。
数にして一〇〇隻以上。超大型戦艦から駆逐艦クラスまで、大小様々な艦艇が見事な隊列を組んでイージス村沖合に並んで停泊している。
世界広しと言えど、これほどの規模の大艦隊を擁する国はそう存在しない。だが、この中央大陸においては、たった一国だけがこれを成し得る。
各艦のメインマストには、平時には艦尾に翻すはずの国旗が厳かに翻っている。
横長の薄灰地に白の十字、その上から黒の十字が重ねられた、通称《鉄十字（アイアンクロス）》と呼ばれるその旗は、中央大陸の軍事大国――エルバーフェルド帝国の国旗である。
そう、この大規模艦隊の正体、それは中央大陸最強と謳われる軍事大国、エルバーフェルド帝国の海の国防を担う組織。エルバーフェルド国防海軍の艦隊。それも帝都防衛の要たる本国艦隊と、侵攻作戦時の主力となる外洋艦隊、それぞれの精鋭部隊が連合艦隊を組んだエルバーフェルド海軍伝統の主力部隊、大洋艦隊（ホーホゼーフロッテ）だ。
そんな無数の艦船が停泊する中には、戦艦も数隻含まれる。だが、その中でも一際巨大な戦艦が二隻、それも艦隊の最も中心に停泊している。大洋艦隊旗艦、フリードリッヒ・デア・グローセ級戦艦1番艦、戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』だ。そしてその隣に停泊しているのは先日竣工したばかりの新型戦艦、フリードリッヒ・デア・

グローセ級戦艦2番艦、戦艦『アドミラーリン・デーニッツ』。古代エルバーフェルド語で《大提督デーニッツ》を意味する、新戦艦だ。
そんな大艦隊が、見事な隊列を組みながら今まさに次々にその自慢の砲からイージス村に向けて火を噴かす。その様は、まるでイージスに向かって艦砲射撃をしているように見えるが、実際はそんな恐ろしい光景ではない。
クリュウ達の旅路を、大洋艦隊を挙げて祝福しているのだ。
沖合の大艦隊から次々に撃ち上がる祝砲に、クリュウ達は苦笑いを浮かべる。もっと静かに旅立ちたかったが、どうやらそうもいかないらしい。
一方、そんなクリュウ達の気持ちを知らず、自らが用意した旅立ちの儀を堂々と披露するのはこの大艦隊を率いてきた、少女提督ことエルバーフェルド帝国国防海軍総司令官であるカレン・デーニッツだ。
「どうかしら？　大陸最強の艦隊である我が海軍からの新たなる旅路の祝い。こんなに栄誉な事はないと思わない？」
「……僕はエルバーフェルド人じゃないから、こういうのが嬉しいとは正直思えないなぁ」
「大丈夫よ。私もエルバーフェルド人だけど、こればっかりは理解不能よ」
そう言って胸を張るカレンの隣から現れたのはルーデル。遠くに浮かぶ艦隊を一瞥し、自らの祝福をバカにされて怒るカレンに向かって小さくため息を吐く。
「こんな事にみんなの大切な税金を使わないでください提督。我が国の国家予算を、どれだけあの大規模艦隊の維持費に割いているかわかってるんですか？」
「言うじゃないレヴェリの狂犬。一応あの艦隊は蒼海海上演習艦隊として総統陛下の許可は受けているのよ。ちゃんとした定期的な演習だから、無駄じゃないわ」
不敵に微笑むカレンに対し、ルーデルは呆れたように小さくため息を吐く。そんな二人のやりとりに、クリュウは苦笑を浮かべていた。
クリュウの東方大陸行きを知ったカレンは、東方大陸まで彼を送り

届ける事を約束してくれた。本当はドンドルマ経由で貿易船に乗って行く予定だったが、ちょうどエルバーフェルド帝国の東方大陸唯一の同盟国である津洲帝国に対する技術供与の為の艦隊、遣東艦隊の派遣の時期と重なっていた事から、それに乗せていく形となったのだ。

津洲帝国とは東方大陸にある帝（みかど）と呼ばれる神聖化された王を中心とした立憲君主国。その歴史は古く、世界最古の国とされている。あの温泉地として有名なユクモ村がある国で、東方大陸最大の国家だそうだ。

中央大陸において味方がいないエルバーフェルド帝国は、アルトリアや津洲などの大陸外の国との親交を強化している。津洲帝国は豊富な資源国家な為にエルバーフェルドにとっては資源輸入を頼る形となっている。一方の津洲も東方大陸内での民族、宗教対立から周辺国との対立があり、近年軍事力を強化。その最中で中央大陸最強と謳われるエルバーフェルド帝国の技術力に興味を持ち、二国は急接近。現在ではエルバーフェルド・津洲防国協定が結ばれている。

後に津洲がアルトリアとも親交があった事から三国はより強力に互いを相互に守り、支える、経済においても密接に繋がる事を目的にエルバーフェルド・アルトリア・津洲三国連合同盟を締結。互いの国の位置を線で結ぶと巨大な三角形となる事から、通称《トライアングル同盟》と呼ばれる事となる。

現在村の沖合に停泊しているのは、そんなクリュウ達を乗せて津洲帝国へと向かう遣東艦隊の他に、先程カレンが言っていたように蒼海海上演習艦隊が存在する。というか、停泊中の艦船のほとんどが後者に所属する。

例のウェスドックに抵抗する為に行われる予定だった西竜洋北部海域での海上演習は、フリードリッヒの厳命を受けたカレンの決断で中止が決定された。しかしやはり海軍内での反発は根強く、カレンとフリードリッヒは話し合いの末に西竜洋ではなく蒼海において海上演習を行うという妥協案を提示。海軍側もこれに渋々ながらも同意した。

大義上は同盟国津洲帝国との海上部隊の連携となり、津洲帝国側も

艦隊を派遣する事が決定されている。蒼海において二国艦隊は合流し、大規模な海上演習を行う予定となっている。
実際の遣東艦隊は先日のアルフレア沖海戦で奮闘した軽巡洋艦『シュヴァルツァー』『シュトゥルム』と同じシュヴァルツァー級軽巡洋艦3番艦『シュメルツェン』を旗艦とし、護衛の駆逐艦4隻と物資を積載した輸送船2隻の小規模艦隊の予定だ。
世界屈指の大艦隊をバックにして睨み合う二人の少女に対し、周りの者達は苦笑を浮かべながらそんな二人の争いを見守る。そんな二人に「あの、国の恥を晒すのはそれくらいにしていただけないでしょうか……」とフィーリアが間に入り、ひとまず二人の争いは終結する。
「しかし、ずいぶんと豪華な門出だな」
そう言ってシルフィードが見回す限り、村の崖下にある港には大勢の人が集まっていた。現在村に残っている村人や、復興に協力してくれている海軍陸戦隊や設営隊の軍人、大陸通商連合所属の物資運搬に訪れていた商人達等が数百人規模で集まっている。もちろん、クリュウと関わりの深い者達も多い。
「先輩。ボクのお守り、ちゃんと持っていますか？」
そう言ってこちらに近づいて尋ねて来たのは、現在正式にイージス村に籍を移して村の防人となったルフィール・ケーニッヒ。二色に煌めくイビルアイを不安げに揺らしながら尋ねる彼女の問いに、クリュウは「持ってるよ」と言って懐を叩く。服の下には彼女から以前渡されたどんな厄災をも跳ね返す伝説のお守り、守りの護符がある。これがあると、どんな困難をも乗り越えられるような気がする、そんな不思議なお守りだ。
「とても大変な旅路になると思いますが、どうかお体を壊さず、元気でお過ごしください。ボクは、先輩が元気で居る事が一番の願いですから」
そう言って、ルフィールは小さく微笑む。その笑みがわずかに寂しさが感じられるのは、やはり彼との別れが辛いのだろう。これから、彼女は彼の代わりにこのイージス村に残って村の防人として活動する事になる。クリュウ達が再びこの村に戻って来るのは、今のところ

未定だ。半年先か、一年先か、三年先か。どれにしても長い時間離れ離れになる。彼女からすれば、その期間は苦痛を伴う。
　そんな淋しげに微笑むルフィールの頭を優しく撫で、クリュウは微笑む。
「ありがとうルフィール。君も、どうか元気でね。それと、僕が不在の間、村の事は任せたよ」
　クリュウの言葉に、ルフィールは「任せて下さい。全力を以って村の防衛に努めます」と力強く断言した。表情を引き締め、威風堂々と宣言する彼女の言葉にクリュウは「ほんと、ルフィールが居てくれて頼もしいよ」と優しく声を掛ける。
「光栄です。先輩に頼っていただけるなんて」
「ちょっとッ！　シャルも居るっすッ！　シャルもがんばるっすよッ！」
　そんなルフィールの横から顔を出して自らの存在をアピールするのは、ルフィールと同じくクリュウの不在の間村の防衛を任されたシャルル・ルクレール。ルフィールと違って籍は故郷のアルザス村に残し、二つの村を行き来しての防衛となる。やんちゃにツインテールを揺らし、頬を膨らませて怒るシャルルに「もちろん、シャルルにも期待してるってば」とクリュウは笑いかけ、そっと彼女の頭を撫でる。髪を優しく撫でられ、シャルルはアイルーのように目を細めて嬉しそうにそれを受ける。
「シャルが居るからには、兄者は安心して向こうで元気でやるっす。どんと任せておけっすッ！」
「ほんと、シャルルは頼りになるよ。頼むよ」
「ニヒヒヒ、任せるっすッ！」
「……まったく、シャルルさんのその根拠の無い自信は一体どこから湧いて来るんですか？」
　シャルルはいつでも元気いっぱい自信満々。その源泉の所在はいつも不明であり、彼女の最大の謎でもある。根拠や理論付けを優先するルフィールからすればその発言や振る舞いは理解不能だろう。呆れ返る彼女の問いに対し、シャルルは気にもせず「自分にできる事を

全力でする。当たり前の事を言ってるだけっすよ」と笑い飛ばす。
「シャルルさん。何が起きるかわからない以上、万全の態勢を整えた上で慎重に慎重を重ねて対策を整えた上で、ようやく自信を持ってそういう発言をしてください。今の現状は全くの準備不足だと、わからないのですか？」
「ったく、ルフィールは考え過ぎなんすよ」
「シャルルさんが考え無さ過ぎなのです」
　少しはそのバカな考えを辞めろとばかりに追求するルフィールに対し、シャルルは気にした様子もなく飄々としている。今更ながら、なぜこの真逆な二人が親友として関係を築き、そして維持できているのか不思議だ。
「まったく、これでは先が思いやられます」
　はぁ、と深いため息を零すルフィールに対しシャルルは「ため息すると幸せが逃げるっすよ」とニャハハハよ笑い飛ばす。そんな彼女の気楽さが癇に障ったのか、ルフィールはイビルアイを細めて「そのような科学的根拠のない妄言は信じませんし、仮にそうだとすれば原因は明らかにシャルルさんにあると思いますが？」と突っかかる。
　不機嫌なルフィールに対し、シャルルはやれやれとばかりに肩を竦める。
「何をビビってるすっか？」
「私が何に対して恐れをなしているとお思いですか？　そのような言いがかりはやめてください」
「大丈夫っすよ。どんなに大変だとしても問題ないっす――だって、お前が助けてくれるんすよね？」
　ニヒヒヒ、と楽しげに笑うシャルルの言葉にルフィールは目をパチクリとさせる。だがその言葉の意味を理解するにつれて次第に頬を赤らめ、「ば、バカな事を言わないでくださいッ。な、何を最初から他力本願全開でいるんですか？　い、意味がわかりませんッ」と慌てながらそっぽを向く。
「だって、ルフィールはシャルの親友なんすよね？　なら、シャルのピンチは絶対に助けてくれるっすよ。お前は信頼できる奴だし、何より

頼りになるっす。お前が居れば、シャルはどこまでだってバカでやれるし、どんな無茶でもやってみせるっすよ」
　ニャハハハハと豪快に笑い飛ばすシャルルの発言に、ルフィールはもう顔を真っ赤にさせてそれを隠すように俯いている。だがその手はそっと笑うシャルルの服の裾を握っている事をクリュウは見逃さない。二人の仲の良さに安心したクリュウは、安心したように小さく微笑む。
　何も気にせず突っ走るシャルルと、常にあらゆる事態を想定して身構えるルフィール。確かに真逆の二人だが、それは同時にお互いがお互いの持たないものを持っているという事。互いが互いを支え合う存在。いつの間にか、二人はそんな関係になっているのだろう。
「何女の子を見てニヤニヤしてんのよ。ロリコン？」
　背後からの声に振り返ると、そこには不機嫌そうに佇むルーデルが居た。腕を組み、仁王立ちで構える彼女はフンッと鼻を鳴らす。
「何でそうなるのさ。別にいいでしょ？　微笑ましい光景なんだから」
「女の子を見て微笑むなんて、いい趣味してるじゃない。そこの提督さんに憲兵でも呼んでもらう？」
「……君は僕を犯罪者予備軍に陥れたいの？」
　がっくりと項垂れるクリュウを前に、楽しげに「冗談よ冗談。何マジになってんのよ」とルーデルは楽しげにケラケラと笑う。
「それがこれから旅に出ようとしてる友達に接する態度？」
「友達？　あはははは、バカ言わないでよ。何であんたが私の友達な訳？　バッカじゃないの？」
　面白い冗談だとばかりに大笑いするルーデル。一方、彼女の友達否定発言にクリュウはかなりのショックを受けたようで……
「……ち、違うの？」
　声を震わせながら愕然とするクリュウ。そんな実にいじらしい彼を前に、ルーデルは「違うわよ。あんたは私の友達なんかじゃない」と改めて友達を否定する。そして、唇にそっと人差し指を当て、優しく、そして妖艶に微笑む。

「――あんたは私の好きな人。友達なんて身分じゃもったないわよ」
楽しげに、そしてイタズラっぽくも、可愛らしく。微笑む彼女の笑顔にクリュウは思わずドキッとしてしまうが、すぐに「だから、そういう事をこう堂々と言わないの」と彼女に自制を促す。
「ったく、ノリが悪いわねぇ。別にウソを言ってる訳じゃないんだから、いいじゃない」
「だから、だとしてもそういう事を堂々と言わないでよ」
「何よ。照れてる訳？　こんな美少女に好きって言ってもらえて。そりゃ照れるわよね？」
「自分で言うか、普通」
「あら、私って可愛い部類だと思うけど、違うの？」
試すようにその場でくるりと回った後、クリュウを下から見上げるルーデル。首をわずかに傾げながら見上げるそのポーズは、彼女の可愛さを最大限に引き上げる。クリュウは頬を赤らめたまま「きゅ、及第点だよ」と一言返すのがやっとだ。
「えぇ～、それひどくない？　まぁ、あんたの基準で及第点なら問題ないか」
「……ッ！」
「あはははは、照れてる照れてる」
楽しそうに笑うルーデルに対し、完全に彼女に踊らされてしまっているクリュウ。以前の《好き》発言以来、ルーデルはこの手法に味をしめたらしく、時々こうして彼をからかっては彼を赤面させている。やられる側はたまったものではないのだが……
「まぁ、冗談はさておき。あんた、言っておくけどフィーちゃんに何かあったら、マジ殺すわよ？」
「本当に唐突な話題変更だね。まぁ、そうならないよう努力はするよ」
「これは冗談なんかじゃないからね。親友を任せるんだから、それ相応の覚悟はしてもらわないと」
これまでのふざけた様子から一転して、真顔で言うルーデル。彼女の変化について行けず若干困惑しているものの、ひとまずクリュウも真剣に返す。

「大丈夫だよ。僕だって男だからね、女の子はちゃんと守ってみせるよ」
「ふぅん、頼りないけど、まぁ仕方ないわね」
良しとばかりに頷いて途端にニパァッと明るい笑顔を浮かべるルーデル。その笑顔は心の底から安堵しているようで、クリュウも思わず笑みを浮かべた。
彼女からすれば親友と好きな人が一斉に遠くへ行ってしまうのだ。寂しくないはずがないのだが、彼女は健気にそれを隠し、笑顔で二人を見送る覚悟を決めていた。その心の強さを感じられる笑顔は、見る者全てに勇気をくれる。
「あのさ、ルーデル」
「何よ？」
「ごめんね。何か、色々任せる事になっちゃって」
「……あんたそれ何回目？　何度も気にするなって言ってるじゃない。いい加減しつこいわよ」
「だとしても、やっぱりごめんね」
村の守りから後輩達の面倒など、色々な事を任せる事になってしまった。その事について、クリュウはこれまで何度となく謝って来た。ルーデルからすればもうそれは聞き飽きた話なのだが、クリュウからすれば何度謝っても足りない程の恩義に感じるのは、彼の性格上仕方がない。
ルーデルはわざとらしく大きなため息を吐くと、腰に手を当てる。
「あのさ、これは私が好きでやってる事なの。あんたが気にする必要はないわ。何度も言わせないでよ」
「でもさ……」
「あぁもう焦れったいわねぇッ！」
頭を掻きむしるように乱暴に髪を乱し、ルーデルは腕を突き出す。その手は彼の胸倉を掴むと、グイッとその身を引き寄せる。吐息が掛かる程に接近した二人。慌てるクリュウに向かってルーデルは頬を赤らめながら、キッと彼を睨みつけて己が想いを叫ぶ。
「いいッ!?　よぉく聞きなさいッ！　好きな奴の力になりたいって想

いを、無駄にすんなバァカッ！　あんたが私に謝る気があるなら、さっさと目的を果たしてこの村に戻って来て、私と結婚しなさいッ！
　それまでここで花嫁修業しててやるって言ってんのよッ！」
　顔を真っ赤にしながら大声で爆弾発言するルーデル。周りの視線が集まっている事など気にもせず、ルーデルはしばらく彼を睨みつけると、その手を離す。解放されたクリュウもまた赤らんだ頬を指先で掻きながら「ま、まぁなるべく早くは戻って来るよ」と、小さな声で返すのがやっとだった。
「じゃあ、この話はこれで終いよ。いいわね？」
「よ、良くないわよッ！　な、何勝手な事言ってるのよッ！」
　話は終わったとばかりに切り上げたルーデルだったが、そんな二人の間に割って入って来たのは漆黒の礼装を纏ったカレン・デーニッツ。国防海軍総司令官としての凛とした表情を崩し、歳相応の可愛らしい少女の顔で、慌てふためいた様子で二人の間に入って来た。
「ちょっと狂犬ッ！　あんた、何滅茶苦茶な事言ってる訳ッ!?」
　軍帽の下の顔を真っ赤に、そして怒りに染めて怒るカレンの激昂に対し、ルーデルは「な、何よ。何を言おうと私の勝手でしょ？　外野は黙ってて」とイラ立ちながら返す。もはや同じ男を奪い合う者同士、敬語もクソもないという事か。
「み、認めないわッ！　あんたは彼には相応しくないッ！　あんたみたいな狂犬はダメなのよッ！」
「いい加減その狂犬って呼び方やめてくれないッ!?」
「……認めないわ。クリュウは私の旦那。誰にも渡さない」
　そこへ今度はサクラまでが加わり、完全に乱戦と化してしまう。ルーデルをルフィールとシャルルが、サクラとカレンはそれぞれ商人と軍人が止めに入るが、大暴れする三人を前になかなか止めに入れずにいる。
「まったく騒々しい。少しは静かな旅立ちをできんのか」
　そう言いながら、呆れつつもどこか楽しげに語るのはシルフィードだ。睨み合う三人の少女達を一瞥し、「まったく、モテモテだなクリュウ」と彼の頬を突いてからかう。からかわれたクリュウは頬を少し膨

らませて「そういう言い方はやめてよね」とそっぽを向くが、シルフィードからすればそんな彼の反応も可愛らしく見えてしまう。
「まぁ、嫌われるよりはマシだが、好かれ過ぎるのも考えものだな。私としても心境は複雑だぞ」
「……そ、それはそうかもだけど」
　そんな事を言われても、と困るクリュウ。そんな彼を見てシルフィードは楽しげに微笑むと「冗談だ。まぁ、正確には今は気にしないと言っておこう。こういう騒々しいのも、嫌いじゃない」と優しい口調で続ける。
　彼を好きな想いはもちろんあるが、今のこの状況を楽しんでいるのだ。まるで妹達を見守るような目で争う三人を見詰めるシルフィードに、クリュウは小さくため息を零す。
「シルフィって、ほんと逞しいよね」
「……言わんとしている事は理解するが、その単語はあまり女性を誉める時に使うものではないぞ」
　不服そうに語る彼女の反応を見て、クリュウは小さく微笑みながら「そっかな？　シルフィって《かっこいい》とか《頼もしい》とかって褒め言葉が似合うと思うけど」と続ける。
「だから、それが女性を誉める言葉ではないと言っているんだ。私はそんなにも女らしくないだろうか……」
　自らの女らしさに自信を失い、少しショックを受けるシルフィード。慌てたクリュウは「いや、そういう意味じゃなくて、シルフィはかっこいいけど可愛い所もあって、あのッ」とフォローをする。すると、
「クリュウ様。シルフィード様の顔をご覧になってください。とてもこの状況を楽しんでいらっしゃるように見えますが」
　横から入って来たフィーリアの言葉に彼がシルフィードの顔を見ると、シルフィードはおかしそうにくくくと笑っていた。どうやら、先程の表情は演技だったらしい。当然、クリュウは怒る訳だが、シルフィードは笑いながら「すまんすまん」としか謝らない。
「もうッ、シルフィなんて知らないよッ！」

怒るクリュウに「まぁ、クリュウ様。これから旅立ちなのに、いきなりケンカしないでくださいよ」とフィーリアが優しく宥める。
そんなクリュウの姿を、少し離れた場所から見ていたエレナは腰に手を当てて小さくため息を零す。
「ったく、ほんと騒々しいわね」
「あら、いいじゃない。クリュウ君らしくて、私はいいと思うわ」
そう言って彼女の隣で微笑むのは、彼女に良く似た中年の女性。少し細過ぎる印象を受けるのは、彼女がずっと病気がちだった影響だ。長い茶色の髪を後頭部で束ねたポニーテールを風に揺らし、少しくすんだ翡翠色の瞳を優しく細めるのは、つい先日村に戻って来たエレナの母、レジーナ・フェルノだ。彼女の夫でエレナの父であるローディ・フェルノも群集の中からこの光景を見詰めている。振り返ると、ローディは小さく手を振ってくれる。それが何だか恥ずかしくて、エレナは頬を赤らめながらすぐに前に向き直る。
「……あのさ、お母さん。ごめんね？　帰って来たばかりで、酒場を任せる事になっちゃって」
申し訳なさそうに言うエレナの手には、大きな荷物が握られている。
クリュウは当初単独での旅を想定していたが、いざ出発の時になるとフィーリアとサクラにシルフィードの三人。更にはエレナもまた同行する事となり、その総人数は五人となった。
病弱な母と看病していた父が帰って来てまだ一ヶ月程なのに、そんな二人に酒場を任せて旅に出る事になった事に、エレナは負い目を感じていた。だが、そんな娘に対しレジーナは少しだけ膝を折って彼女の視線に合わせると、優しく自分譲りの美しい茶髪を撫でる。
「何言ってるのよ。これまでずっと私達が居ない間、酒場を守って来てくれたんでしょ？　今度は、私達の番になっただけ。あなたは、何も心配しないでクリュウ君について行きなさい」
「お母さん……」
「――クリュウ君の事、好きなんでしょ？」
「ッ!?　な、何言ってるのよッ！　そ、そんな訳ないじゃないッ！」

母の耳打ちに対し、エレナは顔を真っ赤にして大声を発しながら否定する。そんな彼の様子に周りから戸惑いの反応が起きるが、エレナが睨みつけると全員が視線を一斉に逸らした。そんな素直じゃない娘に対し、母レジーナは軽くその柔らかな頬を引っ張る。
「もう、あなたは昔から恥ずかしがって本音を言わない。悪いクセよ？」
「へふぇ、ふぇほぉ……」
「でもじゃないの。好きなんでしょ？　クリュウ君の事。子供の頃からずっと」
二人をよぉく知るレジーナだからこそ、娘の幼い頃からの想いは良く知っていた。だからこそ、エレナは決して敵わない。諦めたように肩から力を抜くと、恥ずかしそうに頬を赤らめながら小さくうなずいた。それを見てレジーナは安心したように笑みを浮かべる。
「いつの間にか、クリュウ君すごくモテモテになっちゃってるけど。エレナは誰にも負けないくらい可愛いし、家事だってできるいいお嫁さんになれるわ。あとはその素直じゃない所さえ克服できれば、完璧よ」
「そ、そうかな……？」
クリュウの周りに居る女の子は、女の自分から見ても美少女ばかりだ。その中で、自分が勝てるかどうかは正直怪しい所だ。そんないつになく自信のない娘に対し、レジーナはふぅと小さくため息を吐くと、再び彼女の頬を引っ張る。
「エレナの良い所は、いつも真っ直ぐ明るい所。そんなに自信を失って暗くなっちゃ、あなたらしくないじゃない」
「おふぁあはん……」
そっと頬を離したレジーナは優しく微笑み、娘の頭を撫でる。そんな母の姿と言葉に少しだけ勇気をもらったエレナは、小さく「私、がんばってみる」と母に宣言する。それを聞いてレジーナは何も言わず、無言でうなずいた。
「エレナッ」
呼ばれて振り返ると、クリュウがこっちに手を振ってるのが見え

た。その周りにはすでに大勢の彼に好意を寄せる美少女達が。少しムッとしたが、彼に呼ばれる事は決して嫌な訳ではない」
「はいはい、今行くわよ」
　彼に呼ばれて、仕方ないとばかりに歩き出すエレナ。その足取りが少しだけスキップになっている事を、母であるレジーナは気づいていた。娘の可愛い反応に、レジーナは嬉しそうに微笑む。
　エレナが合流すると、カレンが軽く咳払いをする。どうやらこれからの航路予定を説明するらしい。
「まず、村を出た後は遣東艦隊と演習艦隊は合同で蒼海まで向かうわ。そこで艦隊を別離。ここで私とはお別れね」
　少し淋しげに言うカレンは、国防海軍総司令官だ。今度の海上演習の陣頭指揮を執る立場にある。当然旗艦である『フリードリッヒ・デア・グローセ』に乗って艦隊指揮を行う。彼女の隷下を離れ、遣東艦隊はここから津洲帝国を目指す。
「遣東艦隊の目的地は、ツシマ海軍の本拠地であるヨコスカ。そこであなた達は降りて、以後は自由に行動なさい。遣東艦隊の主要陣はそこから帝都であるマツシロへ向かうから」
　津洲帝国蒼軍根拠地であり、東方大陸最大規模の軍港都市。それが夜虎渚だ。ちなみに蒼軍とは他国で言う海軍に相当する。同様に陸軍の事は翠軍と呼ぶ。
　そして夜虎渚から程近い場所にあるのが、津洲帝国帝都である奉城だ。国家君主であり生き神と人々から崇められる帝が住まう、津洲帝国の首都である。
「情報収集を目的にするなら、帝都であるマツシロへ向かうのも良し。後は東方大陸最大規模の経済都市であるサカイへ行くのも手よ」
　カレンの言うサカイとは、津洲帝国最大の経済都市であり東方大陸最大規模の経済都市である境の事だ。大規模な貿易港があり、東方大陸と中央大陸の貿易の多くがこの港を使っていると言われている程だ。また、津洲中の主要道路が交差する街でもあり、陸と海のターミナル都市となっている。
「あとはツシマを出てハンターズギルド東方本部の支部がある都市へ

行くのも手よ。私は良く知らないけど、ロックラックっていう砂漠の都市。あとは常に移動してるから詳しい場所は不明だけどキャラバンが集まった移動都市とも称されるバルバレって所を目指すのもいいわね。まぁ、どれにしてもまずはヨコスカで最初の情報収集次第ね」

カレンの口から出て来る都市名の数々。当然だがクリュウはその全てを知らない。本当に、全く未知の世界なのだ。急に不安になる彼の心境を察してか、シルフィードが一歩前に出る。

「まずはロックラックだな。ツシマもエルバーフェルドやアルトリアと同じく国内でのモンスターの事案はほとんど国軍が担当していると聞く。ハンターズギルド支部は少ないだろうし、あっても制限が多いだろう。その点ロックラックはこちらから東方大陸へ向かうハンターの多くが向かう最初の街だ。何をするにしても、そちらの方が都合がいいな」

「じゃあ、ヨコスカって所についたらまずはロックラックへ行こうよ。行き方は向こうで調べなきゃだけど、まずはそこに拠点を置こう」

シルフィードの提案に、クリュウはもちろんフィーリアとサクラも同意する。もちろん、この四人について行く形となったエレナも同意見だ。

まずは大まかな旅の予定が決まり、手探り状態で不安だった五人はひとまず安心する。そんな五人を見てカレンは小さく微笑むと「そろそろ出発の準備を初めて。ツシマ海軍との合流時間もあるから、遅刻は許されないわよ」と言い残し、その場を去る。付き添いの軍人が大勢彼女に続く様を見て、改めてあの少女があの大艦隊を指揮する総司令官なのだと認識する。

カレンと別れた五人は、群衆の中で眠そうにあくびをするアシュアへと近づく。五人の接近に気づいたアシュアは「やぁ、ついに出発やねぇ」と眠そうな目を擦りながら話しかけて来た。

「すみません、また僕達の武具の調整を引き受けてくださって。また徹夜だったんですか？」

「まぁ、言い出しっぺはウチだしねぇ。新しい大陸に行くって言うな

ら、装備も万全にしておかんと」
まだ少し目は眠そうだが、腰に手を当てて微笑むアシュア。彼女は最後までクリュウ達の武具の整備をしてくれていたのだ。本当に、毎度毎度頭が上がらない。
クリュウからすればドンドルマハンター養成訓練学校を卒業して戻って来てからずっと、彼女に武具を整備してもらって来た。他のハンター達も、いつも彼女に整備してもらい、これまで幾多の戦いを潜り抜けて来た。決死の激戦も数多あったが、それらを全て勝って来れたのも、陰ながら彼女の功績は大きい。
「しばらく、アシュアさんの整備を受けられないのは、寂しいですね」
「嬉しい事言ってくれるなぁクリュウ君。まぁ、ハンターは旅してナンボみたいなもんやから。新天地でも、無理せず頑張るんやで。特にサクラは無茶苦茶な動きするから、いつも防具の負担が大きいんだから。少しはセーブしぃや」
アシュアの指摘に、サクラはプイッとそっぽを向いてしまう。どうやら無茶をやめる気はないらしい。苦笑を浮かべるクリュウに対し、アシュアは「それと、みんなに忠告するで」と言って眠い目を擦りながらその忠告を口にする。
「こっちと向こうじゃ、武具の概念が細かく違うんよ。そりゃ、採れる素材が違うってのもある。せやけど、向こうの武具は向こうの戦い方に合わせたものになってるんや。落ち着いたら、今の装備じゃなくて向こうの装備を整えぇや。こっちの武具の調整方法を、向こうの鍛冶職人は知らん事もある。まともな整備を受けられない状態で無理に使い続ければ、予想外な不幸が起きるもんや。ええな？」
それは、鍛冶職人アシュア・ローラントからの忠告だった。武具とは当たり前だが戦う為に作るものだ。だからこそ、その戦い方に合わせた調整が必要なのだ。同じ防具でも、人によって体格が違う。その調整はもちろん、動き方や武器の扱い方等の戦い方にも個人差がある。そのひとつひとつを調整しなければ、決して１００％の力は出せない。
中央大陸と東方大陸では、モンスターも違ければその対処方法も違

う。気候も違えばハンターとしての基礎の動きも違うかもしれない。今までのやり方が通じない事も多いだろう。その都度検証し、解決策を取らなければ決して前に進む事はできない。そしてそれは彼らが纏う武具も同じ。愛着があるというのもあるが、決してそれを重視して無理はしてはならない。向こうには向こうのルールが、戦い方がある。それに合わせて、武具も整えろ。鍛冶職人として、アシュアはそう四人に忠告しているのだ。

「……わかりました。ちゃんと、無理はせず向こうのやり方に合わせます」

アシュアの忠告に対し、クリュウは素直にうなずく。シルフィードも「まぁ、戦いに合わせて装備を変えるのは当然だな」と同意した。しかし一方で、

「東方大陸にも、彼女はおられるんですよね？」

「……私は拒否する。生涯この凜と共に戦うと誓った」

リオレイア大好きッ娘のフィーリアは消極的だ。サクラに至っては断固拒否の構えを見せている。そんな二人の反応にアシュアは苦笑を浮かべ、「まぁ二人は君から追々説得してぇな」とそっとクリュウに耳打ちする。同じように苦笑を浮かべながら、クリュウは静かにうなずいた。

「うぅ～ッ！　やっぱり私もついて行くぅッ！」

「リリア、無茶言っちゃダメだよぉ……」

アシュアの隣で地団駄を踏むのはリリアだ。その隣でそんなリリアを説得するエリエ。リリアはクリュウ達が東方大陸へ行くと決めてからずっとこの調子だ。当然、アシュアが許すはずもなく、今に至る。

「だって、お兄ちゃんをずっと会えなくなっちゃうんだよッ!?　そんなの嫌だよぉッ！」

「リリア……」

泣きじゃくるリリアを前に、エリエも強く言えない。本当は彼女だってクリュウと離れるのは嫌だ。クリュウとは仲が悪い訳ではないし、むしろ良好な関係を築いていた。もちろんリリア程の強い執着

や好意がある訳ではないが、近所のお兄さんが遠くへ行ってしまうというのは、それなりに抵抗はある。
　アシュアが説得するも、泣きじゃくるリリアは聞き入れようとしない。そんな彼女に対し、クリュウは膝を折って彼女と同じ高さに視線を合わせると、そっと彼女の頭を撫でる。
「ごめんね、リリア。全部僕のせいなんだ。僕が勝手に決めて、みんなを巻き込んだ――嫌いになった？」
「ならないよッ。私はずっとお兄ちゃん大好きだもんッ」
「……そっか。でも、ごめん。今回の旅は今まで以上に大事なものだから、今更取りやめる事はできない。それに、全く知らない世界だから、リリアちゃんを連れて行く事もできない。だから、辛いだろうけど、この村で僕の帰りを待っててもらうしかないんだ。ほんと、ごめん」
　申し訳なさそうに頭を下げるクリュウ。そんな彼の姿に対し、泣きじゃくっていたリリアはグッと涙を堪え、袖口でグシグシと涙を拭うと、頭を下げたままのクリュウを優しく抱きとめた。小さな小さな腕の中で、まだ顔を上げられないクリュウ。そんな彼に対し、リリアは涙を我慢しながらそっとささやく。
「やめてよ。私、お兄ちゃんにそんな姿してほしくないよぉ」
　小さな小さな、震えた声で言う彼女の言葉に、クリュウは無言でしか答えられない。そんな彼に対し、リリアは更に強く抱きしめる。
「悪いのは、私だよ？　お兄ちゃんと離れたくない。お兄ちゃんの心の中に、私が居なくなっちゃうんじゃないか。それが、怖くて。ただそれだけで、こうして泣いちゃって。みんなに、お兄ちゃんに迷惑掛けちゃってる」
「そんな事……」
「……うん、もう大丈夫」
　一度うなずいたリリアは改めて最後の涙を拭うと、パンッと両頬を叩く。思いの外強気叩き過ぎたのだろう。頬は赤く腫れてしまい、痛みでせっかく拭い取ったはずの涙がじんわりと浮かぶ。そんな自分のアホさ加減に対し、リリアはおかしそうに笑った。

「私、やっぱり待ってる。この村で、お兄ちゃんの帰りを、何年でも待ってるから」
「リリア……」
　上げられた彼の視線の先で、リリアは面白い事を思いついたように楽しげに微笑む。
「覚悟しておいてよね、お兄ちゃん。私、すっごい美人さんになっちゃってるよ？　私の家族も親戚もみんなおっぱい大きいから、私だってないすばでいになっちゃうんだからッ」
　無理して笑っているのは誰が見てもわかっている事だ。だから、ここはあえて彼女の空元気に乗ってやるのが、自分の務め。そう思い、クリュウもまた優しく微笑む。
「それは困っちゃうな。そんな美人さんが待ってるなら、早く帰って来ないと」
「むふふふ、お兄ちゃんのエッチ。でも私、お兄ちゃんならどんなエッチな事されても平気だよ？」
「あ、あはははは……」
「クリュウ君。身内のウチから見ても、マジでリリアは美人さんになるで？　それこそ、フィーリアやサクラ、シルフィードやエレナさえ超えるで？」
　まるで挑戦するかのような物言いに、背後に立っていた四人がムッとなる。確かに、シルフィードを除いた三人からすればアシュアの巨乳さ、そして不摂生な生活をしているのにまるでそれを感じさせないスタイルの良さや肌質や髪質の美しさは驚異的だ。それがもしも本当にリリアにも受け継げれているなら、数年後には脅威となっているに違いない。
　リリア・プリンストン。恐ろしい娘である……
「カレン。そろそろ時間だぞ」
　エーリックの言葉にカレンは小さく頷くと、最後の一時を少しでも長く過ごそうと会話を弾ませているクリュウへと近づく。そんな彼に、自分は少し残酷な宣言をしなければならない。もっとも、彼の望みなのだから彼女が責任を感じる必要はない。それでも、心優しい少

女提督は少し申し訳なさそうに声を掛ける。
「取り込み中悪いけど、そろそろ出発するわ。同盟国を待たせる訳にはいかないから」
「……わかった」
クリュウはそう答えると、改めてリリアとエリエを優しく抱き締め、最後の別れを済ませる。そして、用意していた荷物を持つ。その頃には一緒に旅立つフィーリア、サクラ、シルフィード、エレナの四人も準備を完了していた。
「それじゃ、行ってきます」
最後に、これまでずっとお世話になって来た村長へとの別れを済ませる。村長は頼もしい笑みを浮かべて「君達が戻って来る頃には、大陸中に知られるすごい村にしてみせるよ」と力強く宣言する。そんな彼の言葉に安堵したのか、クリュウは小さく頭を垂れた。
カレンに促されるまま埠頭へ向かうと、そこには小さな船が停泊していた。内火艇と呼ばれる沖合に停泊している艦船への移動に使われる小型船だ。クリュウ達が乗り込むと同時にエンジンが稼働し、燃石炭を燃やした時特有の黒い煙が煙突から噴き出す。
そして、ゆっくりと船は動き出す。
「先輩ッ！　どうかお元気でッ！」
「シャル、ずっと待ってるっすよぉッ！」
「フィーちゃんに何かしたら、マジ許さないからねぇッ！」
ルフィールとシャルル、ルーデルの言葉に見送られ、クリュウは見送ってくれる家族達へ笑顔を浮かべて手を振り続ける。本当は寂しくて、悲しくて泣いてしまいそうだったが、彼らの最後の自分の表情が泣き顔では申し訳がない。そんな想いから、無理をしてでも笑っていたのだ。
そんな心優しい彼の姿を、フィーリア、サクラ、シルフィード、エレナ、そしてカレンが優しく微笑みながら見詰めていた。
内火艇はゆっくりと大洋艦隊旗艦である戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』へと近づき、接舷。階段（ラッタル）を上って甲板へと至ると、さすが海軍総司令官様を出迎えるだけの事はある。大勢の

黒服の軍人達が等間隔に立ち並び、敬礼をしながら彼女の道を作っていた。

カレンはそんな彼らに答礼で応えると、クリュウの手を引いて歩き出す。楽しげに彼と手を繋ぐカレンを前に反抗したい四人だったが、ここは完全にアウェー。下手に暴れれば今後の航海に支障が出ると我慢する。特にサクラは今にも暴れ出しそうだったが、そこは三人がかりで何とか押し黙らせた。

一方のクリュウも実に居心地が悪い。何せ居並ぶ軍人達はまだ海軍を再建して間もないせいか少年兵や青年兵が多いのだが、中には自分に敵意丸出しで睨みつけて来る者も少なくない。エーリックから内火艇の中で注意を受けたが、カレンはフリードリッヒの次に国民に人気がある。海軍の中、特に若年兵達からはそれこそ敬愛すべき長として、同時にアイドルとして慕われているらしい。そんな彼女が男を連れて笑っているのだから、ファンとしては実に虫の居所の悪い光景なのだろう。

クリュウは苦笑いを浮かべながら、カレンに連れられて歩き続ける。そんな彼の心境など知らず、カレンが調子に乗って抱きついたせいでついには恋姫四人、更には少年兵達が抗議を始めてしまい、結局エーリックの仲裁が入るまで実に十分間も甲板で足止めを食う事になってしまった。

第２３７話　可憐に咲き　可憐に散る　儚い恋唄の調

「第１水雷戦隊抜錨、出航します！」
「第５戦隊出航しまーす！」
「第８戦隊出航しまーす！」
「第８駆逐隊出航しまーす！」
「第２戦隊出航！　戦艦『ビスマルク』前進微速！」
　見張り兵から次々に入る、各隊の出航の知らせ。それを聞いているだけで、この艦隊がどれだけ大規模な艦隊かがわかる。
　艦橋へと案内されたクリュウ達だったが、ここはまるで別世界だ。軍人達が、厳しい訓練で鍛え上げた見事な連携で、巨大な艦隊という組織が動いている。素人には理解できず、そしてそのスケールの大きさに驚くばかりだ。
「艦長、錨収容完了。いつでも出航できます」
　年若い少女兵の言葉に、艦長と呼ばれた男が厳かにうなずく。軍人は男の世界だと思っていたが、どうやらカレンの指揮の下では女性軍人も活躍しているらしい。
　艦長は居並ぶ部下達を見回した後、最後にカレンの方を見やる。そして、カレンが静かに頷いた事を確認すると、機関室へと繋がる伝声管に向かって小さく息を吸い込み、そして命令を下す。
「出航するッ！　両舷前進微速ッ！」
『両舷前進びそおくッ！』
　伝声管から勇ましい返答が返って来ると、ゆっくりと艦が動き出した。周りを囲む艦艇は、事前の訓練通り艦隊旗艦である戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』を守る為、囲むように隊列を組んでいく。それも航行中でだ。如何に彼らの練度が高いかを物語っている。
　集結した艦艇の規模は前回のアルフレア沖海戦の時を遥かに上回る。一〇〇隻以上の艦艇が大艦隊を形成している。本土に最低限の部隊だけ残してのほぼ全戦力を投入して行われる海軍の大軍事演習。

エルバーフェルド国防海軍がどれだけこの演習に意気込んでいるかがわかる。
「予定通り、第８駆逐隊及び第１５駆逐隊を哨戒部隊として先行。殿は第１０駆逐隊が担当する。偵察母艦は偵察艇を上げて上空から周囲の異変を探りなさい」
カレンの指示が次々に飛び、それらはすぐに様々な連絡手段を用いて艦内、そして各艦へと伝えられていく。ちなみに偵察母艦とは偵察艇と呼ばれる小型の飛行船を積載した艦隊の目となる偵察艦である。飛ばすと言っても風の強い海上でまともに飛ばしても回収不能になってしまう為、必ず艦とロープで繋いで上げられる。連絡用のライトを積載しており、発光信号を使ってより素早く、そして的確に大艦隊全艦に連絡を行う連絡艦として。更には艦隊の遙か上空から周囲を偵察し、敵よりも早く敵艦を発見する為の偵察艦として、二つの重要な情報統制を行っている。軽巡洋艦にも満たない小型艇ながら、大艦隊には必ず必要となる重要な艦艇だ。
艦橋の窓から、偵察母艦『プフィール』の甲板に飛行艇が準備されるのが見える。すぐに離艦し、あっという間に艦隊の遙か上空へと至る。しばらくすると飛行艇から発光信号が放たれた。どうやら周辺に脅威となるモンスターや所属不明艦などはいないらしい。
「引き続き警戒を続けなさい。特に、海洋モンスターの警戒を厳としなさい」
カレンが警戒を強めるのには訳がある。この先、蒼海は西竜洋よりも生息する海洋モンスターの数が多く、危険な海域なのだ。エルバーフェルド海軍の輸送艦や民間船が、蒼海にて海洋モンスターの攻撃を受けて撃沈された事がある。それも何隻もだ。
主に危険なのは、中央大陸でも水辺で猛威を振るう水竜ガノトトス。そして蒼海にしか生息していないと言われている海竜ラギアクルス等だ。
古龍クシャルダオラとの戦いで、艦隊は実質敗北した。モンスターに対して、古龍ではないとはいえこれまで以上に警戒するのは当たり前だ。

「私達海軍の当面の敵は、モンスターよ」
静かに呟くカレンが後に艦隊による対モンスター戦の第一人者となるのはこの数年後の事である。
一方のクリュウ達は、遠くなっていく故郷イージス村を目に焼き付けるように見詰めていた。カレンの提案で艦橋の更に上にある戦闘指揮所へと案内され、露天のそこで海風に当たりながら故郷と最後の別れを告げる。
イージス村の姿が見えなくなる頃には、艦隊は完全に隊列を組み終えていた。中心を旗艦である戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』と妹艦『アドミラーリン・デーニッツ』以下の戦艦部隊が航行し、その周りを重巡洋艦部隊が。更にその外周を各駆逐隊が護衛している。更に両側にはそれぞれ右を第1水雷戦隊が、左側を第3水雷戦隊が護衛している。更に艦隊中心部から離れた両側にそれぞれ第2水雷戦隊と第4水雷戦隊が控えている。
参加艦艇一〇〇隻以上。まさにエルバーフェルド艦隊の総力を挙げての演習艦隊だ。
「エルバーフェルドって、すごい国なんだね」
「まぁ、ちょっと物々しいですけど。全ては民の為に総統陛下が尽力なさっている結果です」
祖国を褒められ、ちょっぴり鼻が高いフィーリア。そんな何気ない雑談を交わしていると、艦橋からカレンがやって来た。風に軍帽が飛ばぬよう押さえながら「賓客室へ案内するわ」と言って中へと案内してくれた。
艦隊旗艦となれば、それこそカレンのような海軍の幹部。更には外国の国賓等を通す事もある。もちろん軍事機密に触れるような場所には近づけさせないが、その為にこうした艦隊旗艦となる艦船には賓客室が設けられているのだ。
賓客室はやはり豪華な彫刻品や絵画などが置かれた、豪華絢爛な部屋であった。クリュウはあまりにも柔らかすぎるソファに落ち着かない様子。そんな彼を見て「貧乏人丸出しで恥ずかしいったらありゃしない」と苦言を呈するエレナも、誰が見ても落ち着いていない様子

だ。
というか、この面子の中でこの柔らかなソファに慣れているのはやはりと言おうか、フィーリアだけだ。
カレンも上座へと座ると、従兵と呼ばれる専属の雑用係の少女兵に各人に紅茶を振る舞う。カレンにも負けない美少女が淹れてくれる紅茶に、クリュウが思わず照れるのも無理はないが、当然カレンとしては面白く無い。
「下がりなさい、ユリアーネ」
何も悪い事をしていないのに怒られたユリアーネという少女兵は完全なとばっちりだ。茶髪が美しい可愛らしい少女兵は信愛するカレンに怒られたのが余程ショックだったのだろう。明らかに肩を落として部屋を出て行った。そんな彼女の後ろ姿を見て、カレンは実に気まずそうだ。
「あ、後で謝っておかないと」
少し慌てるカレンの姿を見て、クリュウは本当に不器用な子だなぁと思わず笑ってしまうが、カレンに睨まれて慌てて視線を逸らした。その視線の先にはフィーリアがジト目でこちらを見ていて、気がつけばみんな同じような目線。クリュウは、苦笑いを浮かべる他なかった。
「二日後には演習海域に到達するわ。あなた達はその前日、同行している遣東艦隊に移って私達と離別。ヨコスカを目指しなさい。ヨコスカに到着するまでの間、私の厳命であなた達には快適に過ごせるよう可能な限り手配するから、安心しなさい」
紅茶を飲みながら、改めて今後の日程を簡単に説明するカレン。そんな彼女の言葉にクリュウは「何から何まで色々と迷惑世話になって、ありがとう」と礼を言う。それに対しカレンは「気にしないで。別に元々この時期に遣東艦隊を派遣する事は決定事項だった。それに多少手を加える程度、大した事じゃないもの」と涼やかに答える。
「それでも、僕らがこうして確実な旅ができるのは、カレンのおかげだ。感謝してる」
「ふーん、じゃあ感謝の証として私と結婚でもしてくれる訳？」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべながら言う彼女の言葉にクリュウは苦笑いを浮かべる。そんな二人のやりとりを、他の面々が苛立ちながら見ている為だ。そしてカレンもクリュウの予想通りのつまらない反応に「ったく、何でノッて来ないかなぁ。こんな美少女が誘ってるってのに」と不満気だ。

「まぁ、それとあんた達にこれを渡しておくわね」

そう言って彼女が取り出したのは一通の封筒だった。素人目に見ても高そうな紙を使ったその封筒を手に取ったクリュウが尋ねると、カレンは「大したものじゃないわ」と答えた。

「それは私直筆の紹介状よ。これがあればツシマ国内ならある程度自由に行動できるはずよ。ちゃんと末尾には『この者達に不誠実な処置を断行した場合は、帝国国防海軍全軍に対する宣戦布告と見なし、貴国に対して相応の行動を講ずる』って脅し付きだから効果てきめんね」

「……あ、ありがたいような、物騒なような」

「準備に越した事はないわ。同盟国とはいえ、相手は全く違う土地と思想の人間。保険は必要でしょ？」

「君の意見も一理ある。これはありがたく受け取っておこう。できれば、使いたくはないがな」

クリュウの手から封筒を預かったシルフィードの言葉に、クリュウは小さく頷く。シルフィードが封筒をしまうのを確認してから、カレンは仕切り直すように咳払いする。

「夕食の時間までは、ひとまずこの部屋で過ごしてなさい。悪いけど、本艦は国家機密の塊みたいなものだから出歩く事はある程度制限させてもらうけど、制限内では可能な限り自由に過ごしてもらって結構よ」

カレンの言葉の通り、軍艦というのはその国の技術力の象徴。不用意に外部の人間に見せるようなものではない。特に彼らが乗るのはエルバーフェルド国防海軍の最新鋭戦艦であり、且つ国防海軍旗艦である。文字通り機密の塊のようなものだ。例え相手が軍事どころか兵器や船に疎い人間であっても。例え総司令官であるカレンの客人

であっても、だ。
「それだけでも十分好待遇だよ。ありがと、カレン」
「どういたしまして。私は今後のスケジュールについて関係各員との会議があるから、これで失礼するわ。夕食は国防海軍一のシェフがフルコースを用意するから、期待してなさい」
そう言い残して、カレンは部屋を去った。何から何まで、クリュウはカレンにもはや全く頭が上がらない。あの鋼龍迎撃戦の救援から、村の復興、そして今回は東方大陸への遠征など、彼女には助けてもらってばっかりだ。
「カレンって、ほんと頼りになるよね」
「……確かに、今回総司令官殿には何かと助けてもらってばかり。感謝してもし切れない事は事実だろう。だがなクリュウ、君は少し周りを見た方がいい」
なぜか腕を組みながらどこか不貞腐れた感じで言うシルフィードの指差す先では、彼女以上に不貞腐れてしまっている少女が二名。どうやら、ここまでの間ずっとカレンにべったりだったクリュウに対し、相当思う所があるようだ。
「あ、あはははは……」
ひとまず充てがわれた部屋は一室。これから夕食まではかなりの時間がある。それまでの間、まずはどうこの拗ねてしまった乙女三人のご機嫌をたて直すか。クリュウのG級クエストが始まった瞬間だ。
その夜、クリュウ達はカレンの宣言通りエルバーフェルド国防海軍が誇る一流シェフのフルコースを堪能する事になった。クリュウからすればこれまで食べた事のないような料理の数々が並んだ豪華絢爛な晩餐となった。しかし後に彼は「あまり覚えていない」と語る事になる。その理由は宴の席で彼の隣に陣取ったカレンが終始彼に甘え続けた結果、他の女子陣が怒り狂い、常に殺伐とした空気が流れ続けていたからに他ならない。
そんなクリュウからすればある意味生き地獄的な晩餐会が終わると、クリュウ達は再び用意されていた部屋へと戻る事になった。その後フィーリア達は揃って風呂に入る事になり、カレンの従兵であるユ

リーシアに案内されて風呂場へと向かった。
カレンが国防海軍総司令官を務めているだけあって、エルバーフェルド国防海軍は他国の軍と比較して圧倒的に女性の徴用が進んでいる事から、艦内にも少なからず女性兵士が活躍している。その為、他国の軍艦にはない女風呂もしっかり用意されていた。
脱衣所へと入る際、風呂場の入口に武装をした女性兵士が十数名警邏に当たっていた。物々しいその装いは、決して番頭には見えない。彼女達の正体を尋ねたフィーリアの問いかけに対し、ユリーシア曰く「女風呂を覗かれない為の、女性兵士で組織された自警団みたいなものです」との事。
エルバーフェルド国防海軍の兵士は練度は高くとも再建されてからまだ日が浅い。その為若い兵士が大勢活躍しているのだが、当然そういった問題行動を起こす者も多い訳であって、女性兵士達は自らの貞操と誇りを守る為にヴァルキリーズと名づけたこういう自警組織を艦それぞれで組織しているそうだ。その厳重警備対象は、風呂場や更衣室、またはトイレなどに集中しているとの事。
「本日は客人を招いている為、通常よりも兵士の数を増強して警備しておりますのでご安心を」
ユリーシアの言葉に少し不安を抱きつつも、フィーリア達は脱衣所へと入る。そこで服を脱ぎ、そして浴室へと消えて行った。
後日談だが、美人揃いと評判なエルバーフェルド国防海軍においてもフィーリア達は美少女という事もあって通常の数倍の不埒者が現れた訳だが、当然事前準備で警備を強化していただけあってこれら全員を拘束。独房へと打ち込まれたのであった。
フィーリア達が風呂場にて体を休めている頃、クリュウはフィーリア達の案内を終えたユリーシアに案内されて艦橋の上、戦闘指揮所へと来ていた。彼をここまで案内したユリーシアはその場で一礼して去ってしまう。一人残されたクリュウは辺りを見回すが、周辺に人の姿は見えなかった。
この戦闘指揮所には常に十数名の兵士が常駐し、双眼鏡で周囲を警戒している、言わば見張り場でもある。しかしなぜか、今はその姿を

一人も確認する事ができない。
不気味な静けさが辺りを支配する。不安になったクリュウが少し奥へと進むと、今まで陰になって見えなかった羅針盤台の陰に自分をこの場に呼んだ人物を発見した。
「そんな所で何してるの？」
クリュウが声を掛けると、海を見詰めていた人物がゆっくりと振り返る。
「あら、来たわねクリュウ・ルナリーフ」
振り返った人物は夜の闇に吸い込まれそうな漆黒の黒髪を優雅に流し、美しい碧色の瞳を美しく煌めかせる。身に纏うは漆黒の軍服で、それが彼女の可愛らしい顔立ちに反して物々しく、しかし同時に複雑なかっこ良さを兼ね備えさせる。不敵に微笑み、彼を出迎えた者こそ、この艦隊を指揮する長――カレン・デーニッツ国防海軍総司令官だ。
「わざわざ悪かったわね。部屋で休んでいた所、急に呼び出したりしちゃって」
「いや、大丈夫だよ。別に何してたって訳じゃないし」
「そう、なら良かったわ。ちょっとこっちに来て」
そう言って彼女に言われるがままついて行くと、カレンは海の方を指差す。視線を追ってその先を見ると、そこには幻想的な光景が広がっていた。
「……すごいなぁ」
「でしょ？　私のお気に入りの景色なんだ」
カレンが彼に見せた景色。それはまるで、海の上に星空が生まれたかのような神秘的な煌きに満ち溢れた世界だった。
艦隊を組む各艦がそれぞれ敵味方、及び方向を示す為に用いる識別灯と呼ばれる明かり艦の至る所で灯している。そんな艦がこれだけの規模になると、それらの明かりがまるで夜空に輝く星々の煌きのように、美しい夜景を演出していた。上空の星空と合わさり、まるで自分達が星の海に居るかのような幻想的な光景だ。
こういう事に疎いクリュウでも、さすがにこの光景には目を輝かせ

る。そんな彼を見て、呼んで良かったとカレンは嬉しそうに微笑んだ。
「綺麗でしょ？　これ、私のお気に入りの景色なんだ。ここ、艦の中でも一番高い所だから良く見えるのよ」
「これを見せる為に、僕を呼んでくれたの？」
「そうよ。ちゃぁんと人払いまで済ませて、準備万端よ」
「へぇ、軍隊って闇に隠れて移動するものだと思ってたから、こんな景色があるなんて知らなかったよ」
「作戦行動中、それも有事の際なら灯火管制で艦内の明かりは一切漏らさないってのが鉄則だけど。今は平時だしここは敵対勢力が居ない外洋。むしろこうして大っぴらに明かりをつけてた方がモンスターにも襲われなくていいでしょ？」
「なるほどねぇ」
　クリュウはそのあまりにも美しい光景に、しばしそうして見惚れてしまった。しかししばらくすると、クリュウは彼女の隣に立つ自分という存在に罪悪感を感じ始めていた。
　今自分の隣に立つ彼女は、自分に対して好意を抱いてくれている娘だ。しかし自分は、自分でもまだよくわからないが、たぶん別の娘の事が好きでいる。そんな自分でもわからない感情を抱いたまま、彼女の隣に立つ自分が間違っているような気がしてならない。
　隣で瞳を星空と同じように輝かせる彼女の姿を見ていると、そんな想いが胸にいっぱい広がってしまう。
　このままではいけない。そんな想いが、彼を突き動かす。
「あのさ、カレン。話が――」
「そういえばあんた、私にウソついてたわよね？」
「――あるんだけ、ええ？」
　勇気を振り絞って口火を開いたクリュウの言葉を遮ったのは、カレンの突拍子もない問いかけだった。思わず開いていた口を閉じ、クリュウは首を傾げる。
「ウソって、何の事？」
「とぼけても無駄よ。あんた、私に自分が女なんだって無茶苦茶なウ

ソを信じ込ませようとしてたでしょ？」
呆れたように言う彼女の言葉に、彼女の言わんとしている事を理解する。視線を向けるべき方角を見失い、泳ぐ様は明らかに挙動不審だ。
「あぁ、あれかぁ。あれねぇ……」
「まったく、あんた見た目通りウソが下手よねぇ。騙されたフリする方が大変だったんだから」
カレンの言葉に、クリュウは恥ずかしさのあまり真っ赤になった顔を両手で隠す。彼からすれば、あれはかなりの勇気を振り絞った渾身の演技だったのだが、結果は見るも無残な大惨敗。恥ずかしさのあまり、彼女の顔を直視できない。
一方のカレンはそんな彼の姿を見てニヤニヤが止まらないでいる。
「あんなバレバレなウソで、本気で人を騙せると思ってたなんて。あんたって本当に間抜けよねぇ」
「見破ってたなら最初から言ってよッ。あぁもう恥ずかしいなぁッ！」
顔を真赤にして怒るクリュウに対し、カレンは楽しげに笑いながら「ごめんごめん」と軽い口調で謝るが、クリュウは納得しない。そんな彼に対し、目の縁に浮かんだ涙を指先で拭ったカレンは、静かに口を開く。
「――だってさ、言える訳ないじゃん。私の為にできもしないウソを必死になってつこうとしているあんたに対して、そんな無粋な事言えないもの」
そう言って、カレンは頬を赤らめながら優しく微笑む。自分の為を思って、できもしないウソを無理についてしまう。そんな彼の優しさが嬉しくて、焦れったくて、胸の奥が熱くなる。
騙された訳ではないが、彼は自分を騙そうとした。でもそれは決して自分を不幸にするものではなく、むしろ自分の為を想っての事。だからこそ、こんなにも嬉しい――だからこそ、自分は彼の事が大好きなのだ。
カレンが屈託なく微笑んだ瞬間、クリュウは顔を真っ赤に染めて慌

てて顔を逸らす。背後で「どうしたの？」とカレンが首を傾げるのを無視し、クリュウは口を押さえながら動揺してしまう。
だって、あんな笑顔は卑怯だ。騙そうとした相手に、何でそんな笑顔ができるのか。そんなの、卑怯ではないか。だって――あんな笑顔を見せられたら思わずドキッとしてしまうではないか。
突然顔を逸らせたクリュウに対し、最初は困惑していたカレンだったが、一瞬だけ見えた彼の横顔が赤く染まっていたのを見て、彼が何故そのような反応をしたのか理解し、頬を赤らめる――そして、決意する。
「ねぇ、クリュウ・ルナリーフ」
カレンは彼の名を呼ぶと、彼の肩を掴んで振り返らせる。驚くクリュウが次の瞬間に見たのは、振り返ったと同時に一歩前へと踏み込んだカレンの顔のアップだった。呼吸すら届きそうな程の距離に詰め寄られたクリュウは驚き、視線を逸そうとするが、そんな彼の行動を阻害するかのようにカレンは彼の両肩を掴んで自らの前から逃さない。
「ちょ、ちょっとカレン……」
「ねぇ、クリュウ。私を見て頂戴。この私、カレン・デーニッツを。国防海軍総司令官として祭り上げられる少女提督としてではなく。ただ一人の、女の子としての私を見て頂戴」
いつになく真剣な表情で語り掛ける彼女の言葉に、クリュウは視線を逸らせない。否、逸らすなんて卑怯な真似、できるはずもなかった。
ちゃんと、彼が自分の事を見てくれている。誰でもない、今ここに居る自分を。嬉しさのあまり、思わず顔がニヤけてしまいそうになる。だが、決してそれを面に出してはならない。
たぶん、きっとこの想いは……
「あの時は、結局答えを貰えなかったし。急だったから、あなたを困惑させてしまったわ。だから、今改めてもう一度言う」
きっと……
「クリュウ・ルナリーフ、私はあなたの事が好きです――どうか、結婚を前提にお付き合いしてください」

二日後、エルバーフェルド大洋艦隊の姿は蒼海海上にあった。空前絶後の大艦隊は見事な隊列を組みながら蒼海を航行している。そんな大艦隊から、わずか七隻の艦隊が別離していく。それはこのエルバーフェルド蒼海海上演習艦隊に同行していたエルバーフェルド帝国の特使艦隊。東方大陸にある同国の同盟国である津洲帝国へ技術供与の為に派遣される遣東艦隊であった。

遣東艦隊は見事な単縦陣を形成して艦隊から離れていく。先頭を行くのは艦隊旗艦のシュヴァルツァー級軽巡洋艦３番艦、軽巡洋艦『シュメルツェン』。その後ろを二隻の駆逐艦、二隻の輸送船、そして二隻の駆逐艦が続く。

白波を立てながら進む遣東艦隊に対し、蒼海海上演習艦隊の各艦の甲板には手空き総員が集まって友軍の旅立ちを見送る。皆、持っていた帽子を勢い良く振って七隻の艦隊との別れを惜しむ。人々の声、見送りの汽笛、旅立ちを宿す空砲の音が、静かな蒼海を賑わせる。

大洋艦隊旗艦であり、この演習艦隊を率いる戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』の甲板にも大勢の兵士達が集まり、別れを賑わせている。そんな彼らを見詰めるのは艦で最も高い艦橋の更に上、戦闘指揮所に立つ国防海軍総参謀長のエーリック・レーダー大将。視線を甲板から離し、本隊から別離していく遣東艦隊を静かに見送る。

遣東艦隊を一瞥し、エーリックは隣に立つ少女を見やる。自分よりもずっと若く、華奢な体つきをしている少女。厳かな漆黒の軍服を纏っていても、軍帽の下から覗くまだ幼さの残る顔立ちは隠せない。自らの今は亡き親友の娘であり、今は国防海軍のトップとして君臨。自らの上官であり、家族にも等しい少女。国民から愛される少女提督、カレン・デーニッツ元帥。それが彼女の名だ。

これから演習艦隊は更に北上し、そこで同盟国津洲帝国の水上艦隊と合流の後、国防海軍の悲願であった大艦隊演習作戦を行う。カレン自身もこの演習作戦を心待ちにしていたはずだが、見る限りその顔に喜びや興奮といった感情は感じられなかった。

この大演習作戦の為に、国防海軍の投入できる全戦力を率いて来たと言っても過言ではない。もちろん本土防衛の為の戦力は残してい

る。
本土防衛艦隊は第４戦隊所属のロートリンゲン級戦艦の戦艦『ロートリンゲン』と同型艦『ラインラント』、第６戦隊所属のローレライ級重巡洋艦の重巡洋艦『ローレライ』『メテオール』『シャルロッテ』と駆逐艦十数隻を中核に、航続距離が短い本土近海を活動拠点とする海防艦や水雷艇で編成された臨時艦隊。艦隊司令官にはカレンが信頼している第６戦隊司令官のヴェルダント・ツェッペリン大将に任せている。
祖国から遠い海まで来て、これから悲願の大演習作戦に向かおうとしているのに、カレンの表情は冴えないままだ。否、二日程前からずっとこんな調子だ。
心配するエーリックの事など気づかず、カレンは一人双眼鏡で遣東艦隊旗艦の『シュメルツェン』の甲板でこちらを見詰める彼の姿を追っていた。まるで、その姿を目に焼き付けるかのように、無言でずっとそうしている。だが、それももう終わり。
ゆっくりと双眼鏡を下ろすと、小さくため息を零す。そして勢い良く振り返り、背後にある伝声管のフタを開けて全艦に命令を下した。
『これより、艦隊は演習海域へと向かうッ！　全艦針路を北北東へ転進せよッ！』
カレンの命令はすぐに実行に移される。彼女が乗る『フリードリッヒ・デア・グローセ』だけではなく、発光信号や旗信号等様々な手段を用いて各艦へと伝えられていく。この伝達速度の早さも、エルバーフェルド艦隊の練度の高さが成せる技だ。
カレンの指示通り、艦隊は次々に隊列を組みながら北北東へと転舵。艦首を北へと向けて次々に転進していく。これだけの大艦隊が針路を大変更するのだから、それなりの時間を要する。その間、カレンは無言で艦隊の動きを見詰め続けていた。
「なぁカレン。いつものお前らしくないぞ。体調でも悪いなら、俺が艦隊指揮を代行するが」
「……ありがと、エーリック。でも、大丈夫。別に気分が悪いとかじゃないから」

「なら良いが、やっぱりおかしいぞ」
カレンを気遣うエーリックの言葉に、周りの兵士達の視線も集まる。不安が広がってはならないと、エーリックは彼らに席を外すように命じる。見張り兵が居なくてもこれだけの大艦隊だ。問題はない。
兵士達は言われた通り艦橋へと下っていく。そして、戦闘指揮所にはエーリックとカレンだけが残された。人払いが済むと、エーリックは静かにため息を零す。
「あの少年と、何かあったのか？」
カレンの様子がおかしくなったのは、たぶんそれだろうとエーリックも感づいていた。
エーリックの問いかけに、首を横に振るのは簡単だ。だがカレンはあえて小さく首を、縦に振った。そんな彼女の返答に、やはりかとエーリックは再びため息を零す。
「まぁ、気持ちはわからなくもない。奴らは東方大陸に旅立つ、これからは今まで以上に会う事が難しくなるからな」
「違う。そうじゃないのよ……」
エーリックの言葉にカレンは小さく首を横に振り、そっと隣に立つエーリックの服の裾を握り締める。エーリックがそれに視線を向けると、その手が細かく震えている事に気づいた。
常に気丈に振る舞う、弱さを見せない鋼鉄の少女提督。あの鋼龍クシャルダオラと相対しても決して背を向ける事の無かった冷静沈着勇猛果敢な彼女が、震えている。
だがエーリックは知っている。海軍の長として、海軍の象徴として祭り上げられた彼女は、まだ十七歳の少女だ。どんなに大人の世界に生きていても、その本質は決して変わらない。だとすればこの震えは、国防海軍総司令官カレン・デーニッツ元帥としてではなく、一人の十七歳のカレン・デーニッツという女の子の震えだ。
エーリックは静かに彼女の頭の上に手を載せる。ポンと置くと、改めて彼女の小ささを感じてしまう。この小さな体に、一国の海軍の希望と重責が詰まっているのだと思うと、大人として、男として、彼女にそれら全てを押し付けてしまっている事の恥ずかしさや責任を感

じてしまう。
「エーリック」
「話せよ、何か話があるんだろ？」
　エーリックの問いかけに、カレンはコクンとうなずく。
「あのね、私――フられちゃった」
「そうか……」
　何となく、予想はしていた。あのカレンが、あの少年の事でこんなにも落ち込む理由などむしろそれくらいしか浮かばない。
　国防海軍総司令官として、どんな苦難や困難をも乗り越えてきた最強の提督。だが、どうやら一人の少女として恋という戦いには、敗れ去ってしまったらしい。
「……情けないなぁ。国防海軍総司令官様が、聞いて呆れるわよ」
　小さく、つぶやくように言う彼女の言葉にエーリックは無言だ。こういう時、慰めの言葉はきっと禁句だろう。勝手に共感して、勝手に慰める。それは一見すると優しさなのかもしれないが、冷静に考えれば何の公算もないデタラメだ。そんな身勝手な事、言うべきではないし、言える訳もない。
　エーリックが何も答えてはくれない。でもカレンはむしろそれが彼らしいとすら思っていた。幼い頃から、ずっと年の離れた兄のように慕って来たエーリック。反抗期の時だって、彼は笑って会いに来てくれた。
　海軍再建を胸に、フリードリッヒの力を借りて国防海軍総司令官になった際、相棒となる総参謀長には彼を指名した。信頼でき、良く知っていて、何より頼りになる。ちょっと皮肉を言って意地悪したりするが、いざという時には彼ほど頼りになる人は居ないだろう。
　軽いように見えて、でも芯は真っ直ぐで。だからこそ、不用意な事は決して言わない。だからこそ、自分の弱さを露わにできる数少ない相手、それがエーリック・レーダーだ。
「あぁ、国防費を散々使ってこのザマかぁ。ほんと、情けないわね」
　彼の手を離れ、縁に寄り掛かるカレンは軍帽を深く被って顔を隠す。口では軽口を叩いていても、その肩が震えている事に、気づかな

いエーリックではない。
「全くだ。鋼龍迎撃戦で一体どれだけの予算を注ぎ込んだ事か。ただでさえ俺達は財政省に金食い虫だなんて言われてるんだからな」
やれやれとばかりに軽口を叩くエーリック。国防海軍は見ての通り、大規模艦隊を有しているに加え、現在も次々に新鋭艦を建造中だ。建艦費に維持費等、国費にかなりの負担を強いている。その為、財務省や一部の人間からは無用の金食い共と言われる始末だ。
エーリックの発言に、カレンは口元にわずかな笑みを浮かべて「そうね」と短く答えると、ため息を零しながら天を仰ぐ。空はムカつくくらいの快晴で、雲ひとつない晴天だ。
「はぁ、何だかもう演習とかどうでも良くなってきちゃったなぁ。エーリック、やっぱりあんたに艦隊の指揮権を貸してあげるわ」
「おいおい、そんな理由でこんな大艦隊を預けられても手に余るぜ」
「ふふふ、冗談よ。私の部下達は、決して誰にも渡さないわ。彼らの命を預かる責任があるんだから」
そう言って、カレンは両手を広げる。その背後には、今まさに彼女の部下。大艦隊の姿が見える。これだけの艦隊だ、参加兵員数は二万人近いだろう。その全てが彼女の部下であり、命を預かっている者達だ。この年で、これだけの兵員を統率するなんて、彼女くらいにしかできない芸当だろう。そんな彼女に、自分達は付き従っているのだ。
「私は一度決めた事は決して曲げない。曲げないのよ」
まるで、自らに言い聞かせるようにそう繰り返すカレン。心配になったエーリックが彼女に近づき、そっと肩を叩こうとすると、彼女はするりとその手を避けて彼の背後に回り込む。驚いて振り返ると同時に「良し、私決めたわ！」と彼女の声が響く。
「決めたって、何をだ？」
「ふふん、やっぱり私は諦めないわよ。クリュウ・ルナリーフを、必ず手に入れてみせるわ！」
そう宣言し、カレンは振り返る。そんな彼女の姿を、エーリックは無言で見詰める。何も答えてくれない彼に対し、カレンは更に言葉を続ける。

「だって、そうでしょ？　私は一度決めた事は決して曲げないのよ。あの人を手に入れるって決めたんだから、何としてでも手に入れてみせる」
　腰に手を当て、胸を逸らしてふふんと自慢気に語る彼女の口調はいつもと変わらない、自分と二人きりの時にしか見せない素の彼女。何も変わらない、冷静に見えて負けず嫌いな、女の子の姿。
「国防海軍総司令官様が、好きになった男も自分のものにできないなんて、情けないったらありゃしないわ！」
　軍帽を取ると、彼女の黒く美しい髪が海風でそよそよと揺れ動く。手に持った軍帽をくるくると指先で器用に回すのが、彼女が強気な時のクセだ。
「だって、私はこんなにも可愛い美少女なのよ？　総統陛下には負けるけど、でも彼の周りに居るような女達に負けてるとは思わない。この私が本気を出せば、こんな恋なんて簡単に攻略出来ちゃうんだから！　待ってなさいよ、クリュウ・ルナリーフ！」
　軍帽を再び被り直し、空いた手の先でビシッと海を指差す。その先には今まさに艦隊から離れていく遣東艦隊の姿が。あの中に、彼女の想い人が居る。逃しはしないとばかりに断言する彼女は、決していつもと変わらない強気なお嬢様だ。
　エーリックは終始無言で彼女の宣言を聴き続けていた。そして、ゆっくりとポケットに手を入れて、中から何かを取り出すと、そっと彼女に差し向けた。
「何よ、これ」
　差し出された物を見て、カレンは首を傾げる。あまりにも今の自分には不要な物を差し出されて、呆れて視界が歪んでしまう程だ。
「もういい、無理するなよ」
「はぁ？　この私のどこが無理してるってのよ？　失礼な事言わないでよね」
「うるせぇ。今は黙ってそれでその顔を何とかしやがれ――そんな辛そうな泣き顔見せられるこっちの身にもなれってんだ」
　エーリックの言葉にカレンは差し出されたハンカチを手に取る。

まだ触れたばかりのそれは、まるで雨でも振ったかのように表面にシミが幾つも浮かんでいる。しかもそれは次々に生まれては、ハンカチを湿らせていく。おかしいなぁ、雨なんて振ってないのに。
「あ……、あれ？」
ゆっくりと手を頬に当てると、そこはびっしょりと濡れていた。雨のような冷たい雫ではなく、温かな雫が頬を濡らしていたのだ。それをゆっくりと指先で辿っていくと、歪む視界を映す瞳に辿り着く。
困惑する彼女、カレン・デーニッツは泣いていた。自覚もなく泣く彼女の顔は、見ていられない程に悲痛に歪んだ、悲愴に満ちたものだった。
「な、何で私が泣いてるのよ？　あ、ありえないわ。な、何で、何で……ッ！」
気づいてしまったら、まるでそれが合図だったかのように悲しみがせり上がってくる。目から零れ落ちる涙は止まる事なく、むしろどんどんと溢れていく。言葉は次第に込み上げて来た嗚咽で聞こえなくなり、肩は震え、足腰が立たなくなる。震えは全身へと波及していき、止まらない。
悲しみが止まらない。泣き叫びたい気持ちでいっぱいになる。自らの意思と関係なく、溢れかえりそうになる感情。必死に堪えるカレンを、エーリックが静かに抱きしめる。今にも倒れそうだった彼女に、その力を抗うだけの力は残っていなかった。
「もういい。艦隊指揮はやはり俺が預かる」
「な、何よ勝手な事言ってッ！　私は、私は国防海軍総司令官……ッ！」
「いいから黙って指揮権を俺に寄越せ。そして今だけは、国防海軍総司令官なんて物騒な肩書は忘れて、一人の女の子として――十七歳の、カレン・デーニッツという普通の女の子になってろ」
抱き締めるエーリックの腕の中、彼の言葉でカレンの中にあった最後の抵抗が粉々に崩れ去った。もう、感情を止める手段はない。嗚咽はより大きく、涙はボロボロと溢れ続ける。言葉にならない声が、今にも溢れそうになる。そして、

「――泣きたい時は泣け、バカ妹が」
その言葉をきっかけに、彼女は絶叫した。
同時に、辺りに巨艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』の汽笛が鳴り響いた。艦隊出航を知らせる為の何の変哲もない合図だったが、まるでそれは自らが敬愛する国防海軍総司令官であるカレンの絶叫を掻き消すかのように、静かな海にいつまでも鳴り響いた……

第２３８話　優しさの残酷さ

力強い汽笛と共に戦艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』以下、蒼海海上演習艦隊がゆっくりと離れていく。各艦の甲板には大勢の軍人達が居並び、こちらに向かって手を振って見送ってくれる。もちろん、彼らが見送る対象は同盟国へ遠征に向かうこの艦隊の仲間達に対するものだが、それでも自分達に向かってあれだけの大勢の人々が見送ってくれる事は、何だか気恥ずかしい。

遣東艦隊旗艦、軽巡洋艦『シュメルツェン』の甲板からこの光景を眺めていたフィーリアは恥ずかしそうに小さく手を振る。そんな彼女の背後に立つサクラとシルフィード、エレナの三人は特に手を振る事はしないが、別れを惜しむかのように離別する艦隊を眺めている。

一方、そんな少女達の更に後方から離別していく艦隊を見詰めるクリュウ。その視線は艦隊を見ているというよりは、艦隊の中心を航行している旗艦『フリードリッヒ・デア・グローセ』、その艦橋最上部にある戦闘指揮所に注がれている。彼の視線の先には、ハッキリとは見えなくてもカレンの姿が映っていた。

あの日の夜、カレンは自分に決意に満ちた表情で告白をしてきた。差し伸べられた手は不安で震え、今にも泣き出しそうなくらいに緊張していた事を覚えている。

そして、差し伸べられた手に対して自分は――その手を握り締める事はできなかった。

彼女の告白を、断ってしまった。

自分は、きっと別の娘の事が好きだから。彼女の想いは嬉しくても、その想いに応える事はできない。向こうが決意して告白してきたのだから、これに対して中途半端な返事をする事はできない。だから――「ごめん」と一言、謝った。

理由を尋ねられ、迷った末に今の自分の想いを正直に話した。自分は、まだ人を好きになる気持ちがよくわからない。でも、ある娘に対してきっと皆が《恋》と想う感情を抱いている事、だから君の気持ちには応えられない。そう、正直に答えた。

言葉としては無茶苦茶で、結局曖昧な返しには変わりはないだろう。でも、キッパリと彼女に対して想いには応えられないと返した。それに対してカレンは一度頷いた後、泣きながら悲しそうな笑みを浮かべて――「そっか」とだけ答えた。

それから、必要最低限な会話だけ済ませて別れ、以降彼女とはまともに会話をしていない。『フリードリッヒ・デア・グローセ』からこの『シュメルツェン』へと移乗する際も、会話はなかった。

今の自分は、彼女に対して接する事も許されない。だって――自分は、彼女の想いを断ってしまったから。

それでも、彼女は自分に対して怒る事なく、こうして東方大陸への道を閉ざす事はなかった。約束は別、という彼女の生真面目さが表れているだろう。

彼女は、約束を守ってくれた。約束を守って、こうして今自分は東方大陸へ向かう艦に乗っている。改めて、彼女に対しては恩義を感じざるを得ない。そして、そんな彼女に対して自分は何もする事ができない無力感。彼の心境は複雑だ。

無言で離れていく艦隊を見守るクリュウ。そんな彼の異変に、四人の少女達も気づいていた。

水平線の向こうへと消えていく蒼海海上演習艦隊。遣東艦隊は速力を上げて針路を南東へと向けて航行を始める。

甲板で帽子を降っていた兵士達も次々に持ち場へと戻って行き、甲板から賑わいが消える。残されたのは、クリュウ達だけだ。

四人の少女達は互いに顔を見合った後、ずっと艦隊が消えていった方向を見詰めたままのクリュウに近づく。

「海の上は寒いな。風邪を引かないよう、早く中に戻ろう」

「そ、そうですね。クリュウ様、戻りましょう。温かい紅茶を淹れますよ」

シルフィードとフィーリアは彼に艦内へと入るよう促すが、クリュウは小さく首を横に振った。

「ううん、僕は少しここに居るよ」

「で、ですが……」

「ちょっと考えたい事があるだけだからさ。みんなは先に戻っててよ」
そう言ってクリュウは先に中に入っているよう促す。フィーリアは食い下がろうとしたが、それをシルフィードが制す。
「先に戻っていよう」
「ですが……」
「そういう時もあるものさ。無理強いする理由もなければ必要もないだろう」
そう言ってシルフィードは「では、先に戻ってるぞ」と言い残して一人先に艦内へと戻ってしまう。迷った末、フィーリアも「では、先に戻ってますね」と言って去ろうとするが、一歩も動こうとしないサクラに気づいて足を止める。
「サクラ様、戻りますよ」
「……私はここに残る」
サクラの予想通りの反応に、フィーリアは小さくため息を零す。
「わがまま言わないでください。クリュウ様の意見を尊重してください」
「……別に、クリュウの邪魔はしないわ」
「ダメです。とにかく、来てください」
嫌がるサクラに対し、フィーリアは強硬手段に出ようとする。サクラは抵抗するも、クリュウの意見を無視する自らの行動に対して心の中では幾分か負い目があるのか、あまり強い抵抗はせず、結局フィーリアに連れられてシルフィードとエレナと共に艦内へと去って行った。
皆が去るのを確認すると、クリュウは一人甲板に座って海を見詰める。
航海の最中に知ったが、軍艦では毎朝当番制で兵士達が甲板を丁寧に磨いている。超大型戦艦から、小さな駆逐艦に至るまで関係なく。この『シュメルツェン』でも同様に掃除が行き届いている為、甲板はビックリするくらい綺麗だ。手をついても、手のひらは全く汚れない。

しばし海を見詰めていたクリュウは、ゆっくりと背を傾けてその場に横たわる。
海風のと波の音を聞きながらただ流れていくだけの空を見上げ続ける。
一体、どれくらいの時間そうしていたのか。数分か、それとも数十分かもわからない。そろそろ戻ろうと考え始めた時、空しか映っていなかった視界の隅にエレナの姿が映る。
「エレナ？」
「ったく、一体何分一人でそうしてるのよ」
呆れながらエレナは背を起こしたクリュウの隣にゆっくりと腰掛けると、両手に持っていたティーカップのうち、片方をクリュウに手渡す。
「ほら、フィーリアが淹れてくれた紅茶。あんたにって」
「あ、ありがと」
カップを受け取ったクリュウはまだ淹れたての熱い紅茶を息で少し冷ましてから一口。わずかに砂糖を入れたほんのりとした甘さが程良い、絶品の紅茶だ。
「ふぅ……」
「――少し、落ち着いた？」
「え？」
隣で紅茶を飲むエレナの問いかけに、クリュウは驚く。そんな彼の反応を予想してか、エレナは小さくため息を零した。
「何よ、その意外そうな顔は？」
「いや、突然そんな事言われて驚いただけだよ。別に普段通りだし」
「……あんたバカでしょ？　そんな辛気臭そうな顔しておいて何もないなんて大嘘通じる訳ないでしょ？」
「え？　そんなに顔に出てた？」
「丸出しよ。何の為にあの娘達が気遣ってくれたと思ってるのよ」
呆れるエレナの言葉に、クリュウは苦笑いを浮かべる。自分では隠し通していたつもりだったが、どうやらバレバレだったらしい。カレンの時の同様、自分には演技の才能がまるで無いらしい。

「また、みんなに変な心配掛けちゃったんだね」
「まったくよ」
「ごめん。でも、大丈夫だからさ」
「……まぁ、確かに大した事無さそうだから心配いらないってあの娘達には言っておいたけどね」
「さすがエレナ。そこまで見切ってるんだ」
「一体何年の付き合いだと思ってるのよ。幼なじみをナメんじゃないわよ？」
　ビシッと人差し指を立てて自信満々に言い切る彼女の言葉に、クリュウは苦笑い。きっと、彼女は自分がどうして悩んでいるのか。何となくはわかっているのだろう。そんな彼の予想通り、エレナは静かに言葉を続ける。
「どうせ、あの提督様と何かあったんでしょ？」
「そこまでわかるんだ」
「当たり前でしょ。あんた、ずっとあの娘と目線を合わせなかったじゃない」
　やっぱり、子供の頃からずっと一緒に居る彼女には、敵わない。
「……好きって、言われたんだ」
「へ、へぇ」
　クリュウの言葉にエレナは心の中の動揺を悟られないよう平静を装う。どこか遠い目をしていたクリュウはそんな彼女の反応に気づかず、話しを続ける。
「でも、断ったんだ」
「ふ、ふぅん。どうして断ったのよ。あ、あの娘は結構可愛い部類だと思うけど？」
「そりゃあ、カレンはすごく可愛いと思う。海軍のアイドルってのも納得するよ……な、何でそんな怖い目で見るのさ」
「別に。それで？」
「カレンは可愛いし、いい娘だって事は僕も思うよ。でも、それと《好き》とかは別だよ。僕はあの娘に対して、そういった感情を抱いていない。だから、気持ちには応えられないって言ったんだ」

クリュウは静かに、ゆっくりとした口調で自らの想いを話す。そんな彼の言葉に、エレナは一人小さく笑みを浮かべた。まったくもって、実に彼らしい考え方だ。だからこそ、こんな事訊いても意味がない事はわかっている。それでも、一応問う。
「だとしても、付き合うって考えはないの？　可愛い女の子が、向こうから好きって言ってくれてるのよ？　何となくでも付き合いたいって思わないの？」
「……そんな事、相手に対して失礼でしょ？　そんなクズみたいな事、できないよ」
吐き捨てるように言う彼の言葉に、エレナは嬉しそうに微笑んだ。
やっぱり、彼はこういう人なのだ。相手の想いをじっくりと考え、その誠意に対して常にどう対応すればいいか考えている。常に自分よりも相手を大切にする、実に彼らしい考えであり、決断だ。
「それで、断っちゃって以来彼女とは全然話せなくて。そのまま」
こうして、別れてしまった。それが、ずっと心残りとして彼の胸に小さな刺のように突き刺さっていたのだ。
だが、カレンは蒼海海上演習艦隊と共に水平線の向こうへと行ってしまった。洋上を進むこの遣東艦隊も夜虎渚へ向けて進み続けており、その歩みを変える事はできない。できたとしても、彼女にどのような言葉を掛ければいいかもわからない。
結論の出ない事で悩む彼は、一見するとバカなのかもしれない。それでも、平静でいられる程、彼は非情にはなれないのだ。
そんな悩みを抱える彼に対し、エレナは小さくため息を零すと、彼の頭を軽く叩く。
「別にあんたが悩む必要なんてないでしょ？　フッた側が、フラれた側の心配をする必要なんてないのよ」
「そんなひどい言い方しなくてもいいでしょ？」
「ひどいのは、あんたの方よ」
キッパリと言い切る彼女の言葉に、今まで伏せていた顔を上げると、彼の目に映ったのは、真剣な表情でこちらを見詰める、エレナの姿だった。

「エレナ……」
「あんたは、彼女の想いに応えなかった。明確に、彼女の想いを拒否した。その時点で、もうあの娘とは完結してるの。それなのに、フッたあんたがいつまでもそんな態度じゃ、終わった話も終わらない。前に進めないのよ」
　いつになく真剣な口調で言い切るエレナの言葉に、クリュウは返す言葉もなく黙ってしまう。彼女の言わんとしている事はわかる。だが、だからと言ってそれを肯定するのは、やはりひどいように思えた。そんな彼の考えを見抜いてか、エレナはキッと彼を睨みつけると、彼の胸倉を掴んだ。突然胸倉を掴まれたクリュウは驚くが、そんな彼に迫り、エレナは静かに彼の間違った考えを正す。
「あんたは、バカがつくくらいに優しい。それは幼なじみとして認めるし、面倒に思う事もあるけど誇らしくは思うわ。でもね――今のあんたの優しさはね、身勝手で、ただの自己満足で、何よりもすごく残酷な事なのよ」
「残酷……」
「火は、人に様々な恩恵を与えた。全ての文明の始まりは、人が初めて火を手に入れた事から始まった。それはつまり、人にとって火は素晴らしいものって事よ。でもね、そんな便利な火だって使い方を誤れば人を襲う脅威になる。優しさはね、それと全く同じなのよ」
　一度そこで言葉を切り、静かに一回深呼吸をしたエレナはようやくクリュウを解放する。半ば突き飛ばされる形で解放されたクリュウは呆然とエレナを見詰める。そんな彼の視線に物怖じする事なく、エレナは堂々と彼と対峙した。
「フッた相手に優しくなんてしないで。あんたが相手の想いを断った時点で、どんなに取り繕うとその事実は変わらないし、ハッピーエンドになんて決してならない。あんたへの想いに決着をつけなくちゃいけない時に、あんたが相手を惨めに思って優しくなんてしてみせない。それは、あんたが相手に呪いを施したのと変わらないわ。あんたの存在が、あんたの優しさが、一人の女の子の一生を狂わせる。それくらい、今のあんたの優しさは凶悪極まりないって言ってるの」

「そ、そんな事……」
「うっさいわね。とにかく、そのカレンって娘に対してあんたが負い目を感じる必要はないし、あんたが変に悩んだり、変な小細工をする必要はないって言ってるの。あんたはとにかく、自分の事だけ考えてればいいのよ」
　そこまで言い切ってフンッと鼻を鳴らして腕を組むエレナ。少しだけ頬を赤らめ、そっぽを向く彼女の横顔を見て、クリュウはふと彼女の本当の想いに気づく。
「……もしかして、慰めてくれてるの？」
「べ、別にそういう訳じゃないわよ」
　クリュウに本心を悟られたエレナは動揺してしまう。そんな彼女の反応を見て、嬉しくて思わず笑ってしまうクリュウ。そんな彼の笑顔に、エレナは顔を真っ赤にさせたまま怒る。
「わ、笑ってんじゃないわよッ」
「ごめんごめん――それと、ありがと」
「う、うん」
　自分に向けられた彼の笑顔を見て、思わず頷いてしまったエレナ。見る見るうちに顔は更に真っ赤に染まり、耐え切れず立ち上がってしまう。首を傾げるクリュウに対し、エレナは「さ、先戻ってるわ。あんたもさっさと戻って来なさい」と言葉を残して艦内へと続くドアへ向かってしまう。
　取手に手を掛けドアを開き、その場で一旦足を止める。振り返ったエレナはこちらを見詰めているクリュウに対し、静かに言葉を残す。
「いい？　絶対、フッた相手に優しくしないで。お願いだから」
　――ゆっくり、扉が閉じた。
「……盗み聞きなんて、趣味が悪いわよ」
「そう怒るな。君達を心配して来たんだぞ？」
　ムスッとするエレナの前で、壁にもたれ掛かって苦笑いを浮かべているのはシルフィード。エレナは「余計なお世話よ」と言い残してその前を通り過ぎる。そんな彼女に対し、シルフィードは静かに語り掛ける。

「さっきの君の言葉、あれは忠告ではなく、君自信の願いだったのか？」
「……どういう意味よ？」
　足を止めて振り返ったエレナの視線は、いつになく厳しい。睨みつけるように目を尖らせる彼女の表情に、シルフィードは再び苦笑を浮かべる。
「君も、彼の選んでいる娘が誰なのか、気づいているのだろう？　だからこそ、あんな忠告を彼にした――自らがが落伍する時の、備えとして」
「……意味がわからないわ。何で私が、あいつの恋路なんて気にする必要があるのよ」
「君も素直じゃないな。まぁそう怒るな。私はむしろ君に感謝しているくらいだ――これで、私も負けた時には潔く身を引けそうだ」
　そう言って、シルフィードは淋しげに笑った。その笑顔に、彼女が胸の奥に自らと同じ想い、そして苦しみを抱いている事を知ったエレナ。無言で前を見据え、静かに歩き始める。
「……優しさの残酷さ。彼には、一番理解してもらいたい事だな」
　静かに、その言葉の意味を噛み締めるシルフィード。そんな彼女に対し、エレナは歩きを止めると振り返る。気配でそれを感じ取ったシルフィードが彼女の方を向き、目を疑った。
　そこには凛とした表情と意志の強い瞳を輝かせ、強気な笑みを浮かべた――恋する乙女、エレナ・フェルノが立っていた。
「あんたが何を言ってるか、私はわからない。でも、一つだけあんたにアドバイスしてあげる」
　静かに息を吸い込み、凛々しく、そして力強く自らの想いを宣言する。
「最初から負ける気持ちで戦いを挑む時点で、それは負けなのよ。戦いを挑むなら、何が何でも勝つって腹積もりと、己の全力で挑みなさい。負けた時の事なんてその時考えればいい――私は、誰にも負けるつもりはないわ」
　不敵に微笑み、エレナは勇ましい後ろ姿を残して去って行った。

一人残されたシルフィードはしばし呆然とその場に立ち尽くしていたが、徐ろに手を上げて顔を隠す。静かに深いため息を零した後、クツクツと笑いが込み上げる。
「まったく、年長者の私が一番臆病者という訳か。サクラといいエレナといい、心が強いな」
壁にもたれ、シルフィードは笑い続ける事数秒。再び大きなため息を吐くと、両手を構え、思いっ切り両頬を叩いた。鋭い痛みは、まるで自らの心を麻痺させていた何かを弾き飛ばしたかのよう。再び上げられた彼女の瞳は、キラキラとした輝きを取り戻していた。
「ルフィールと約束したんだ。正々堂々と、全力でぶつかり合うと。なのに私が腑抜けていては面目が立たん。エレナにも、サクラにも――そしてフィーリアにも」
何の根拠もなければ、優れた計画がある訳でもない、無鉄砲と言うに相応しい滅茶苦茶な突撃。だが何も考えず、ただ己の想いだけで突き動く。こんなにも清々しく、重荷を感じない生き方はないだろう。
くくくと口の中で笑いながら、シルフィードは一人の少女を思い浮かべる。やんちゃなツインテールを揺らし、常にバカ丸出しで、アホ極まりない、でも誰よりも真っ直ぐで、誰よりも力強く生きるあの少女を。
「……私といいルフィールといい、エリーゼにクリュウもか。案外、君の生き方が一番人の人生を変えているのかもしれないな――シャルル・ルクレール」
無邪気に微笑む、生粋のバカ娘にして最強の恋する突撃乙女の名を、シルフィードは口にする。そして、
「ここはひとつ――私もバカになってみるかッ！」
不敵に微笑む彼女の笑みはどこか――やんちゃにツインテールを揺らすあのバカ娘に似ていた。
演習艦隊と別離して一週間後、軽巡洋艦『シュメルツェン』率いる遣東艦隊は目的地である東方大陸最大国家、津洲帝国最大の軍港都市――夜虎渚へと到着した。
そこから、クリュウ達の東方大陸での旅が始まった。

――そして、時は流れ……

第２３９話　牙神勝鍛　王者に挑みし狩人達の記録

湯雲ノ杜。

地元の人々からそう呼ばれる、広大な森が広がるこの一帯は豊富な生態系が育まれており、様々な生物が自然の姿のまま暮らしている。当然、様々なモンスターが生息する事もあり、ハンターズギルド東方本部からも正式な狩場と認定されており、ハンター達からは一般的に『渓流』と呼ばれている。その名の通り、狩場中央部に川が流れている自然豊かな狩場として知名度は高くはないが、知る人ぞ知る人気狩場だ。

普段は東方大陸固有種である鳥竜種、ジャギィやその雌であるジャギィノスの姿が良く見られる。これらは中央大陸に生息するランポス系と祖先は同じケプトスとされているが、全く異なる地域に住まった事で異なる進化を遂げたと言われている。

ランポス系が硬い鱗と鋭い頭部が特徴であるのに対し、ジャギィ系は丈夫な皮と鮮やかな体色が特徴。『竜』という進化を遂げたランポス系に対し、ジャギィ系は『獣』という進化を遂げた種であるとされている。

日が落ち、生物の営みが静かなものに変わった夜においても、ジャギィや一回り大きなジャギィノスの姿は良く見られる。ただいつもに比べて辺りを飛ぶ雷光虫と呼ばれる光り輝く虫の姿が多いだけで、渓流は普段と何ら変わりのない静かな夜であった。

――天轟く、その雄叫びが響くまでは。

迫り来る迸る稲妻の塊に対し、狩人は横へと跳んでこの一撃を回避した。背後へと消えて行った雷塊は木に衝突すると火花を散らす。同時に光を失うと、複数の雷光虫となり、それらは夜の闇に霧散していく。

今の一撃は、活動が活発になった雷光虫が複数集まった事で膨大な電力を放出していたらしい。雷光虫はこの地方はではシビレ罠等の材料とされているだけあって電力を有する。しかし、あれほどまでに強烈な電力を放出するような種では通常ない。

狩人は、藪の中へ消えていく雷光虫を見送ると、視線をゆっくりと前に向き直す。その視線に映る無数に空を蠢く雷光虫の群れが放つ綺羅びやかな光の中に、一頭の巨影が映る。

雷光虫が放つ光に照らされるのは、力強い蒼色の鱗と飾り立てるような美しい純白の体毛。鱗は美しくも硬く、彼の竜を守る。そして白毛は近づく雷光虫と触れる度に火花を迸らせ、逆だっていく。その様は、見る者全てを威圧するような迫力を秘めていた。

ゆっくりとした、王者の歩み。流れる川の水すらもまるで彼の竜を恐れ避けているかのようだ。

美しい満月から照らされる光が、木の影に隠れていた竜が出た瞬間にその姿をより鮮明に魅せる。

凶悪にして鋭い印象を受ける、まさに『獣』と呼ぶに相応しい顔立ち。纏う雷撃を稲妻に見立てたかのような恐ろしくも見惚れてしまう程に屈強な二本の黄金角。

その鋭い頭部に対し、体は予想以上に大きい。それは、彼の竜が地上戦に特化する際に獲得した他の竜を圧倒する程に進化した筋肉の姿。

地面を踏み締めるたびに大地が震えるのは、彼の竜が屈強な四本の脚を持つ為。特に攻撃にも使われる両前脚は大木を思わせる程に太く、その先端に備えられた鋭爪はどんな強力な鉄壁さえも斬り裂いてしまいそうだ。

屈強な脚を持ち、王者の風格で歩み続ける蒼竜。迸る電撃を纏い、無数の雷光虫を従えるその姿はまさに『王』だ。

空の王者と称される火竜リオレウスや、鋼の龍王とも称される鋼龍クシャルダオラ。様々な王と対峙してきた彼女にとっても、思わず見惚れ、そして敬意すら抱いてしまいそうになる絶対的な王の姿。

そんな王に対し、自分は戦いを挑もうとしている。

恐怖はある。だが、彼女を震わせるのはそんなものではない。圧倒的に強い強敵を相手に、彼女の中の狩人魂が歓喜に震えている――武者震いだ。

圧倒的な蒼の王者を前にするのは、大人びた顔立ちと雰囲気を纏

う、落ち着いた物腰の彼女は狩人（ハンター）。全身を覆う純白の鎧は凍土に住まう氷牙竜ベリオロスと呼ばれる飛竜から剥ぎ取った素材を使って作られたベリオXシリーズ。白銀の騎士をイメージしてデザインされたこの防具は全身をこれまた服のように氷牙竜の皮などで覆っており、要所は甲殻や牙などで補強されたもの。動きやすく着心地も良く、そして強力な防御力を有する。白と蒼、そしてベリオロスの牙の橙色のコントラストが美しい防具を纏う騎士姫。力強いポニーテールを揺らし、振り返る蒼の竜と威風堂々と対峙する。緊張しながらも呼吸を乱さないようゆっくりと呼吸しながら、氷海に浮かぶ氷山を思わせる澄んだ蒼の瞳で迫り来る竜を見据える。

そして、その歩みが目印にしておいた岩を越えた時、ベリオ娘は剣を天高く掲げる。

「撃てぇッ！」

彼女の声を合図に、彼女の遙か後方で火花が迸る。遅れて銃声が轟くと同時に、彼女のすぐ横を何かが通り過ぎる飛翔音が翔け抜けた。そして、それは一直線に蒼の竜の右腕に命中する。

竜の歩みが止まる。それを待っていたかのように立て続けに銃声が轟き、銃弾が次々に竜に命中する。だが、王者はその程度の攻撃ではビクともしない。無言で、自らを攻撃する者の姿を探す。

ベリオ娘と竜が対峙する遙か後方の高台、枝葉を掻き集めて藪に偽装した簡易陣地にうつ伏せで伏せながら狙撃をするのは、森に隠れるのに適した緑色の鎧を纏った金髪の少女。その全身を覆うのは雌火竜リオレイアと呼ばれる、別名《陸の女王》とも称される深緑色の竜の素材を使ったレイアXシリーズと呼ばれる防具。鉱石を主体に鎧を形成し、射撃時に前方に位置する部分を雌火竜の鎧や甲殻で補強する事で軽量でも強力な防御力を有する優秀な防具だ。

雌火竜の翼膜で作られたレイアXキャップの下から流れる彼女の美しく長い金髪は、美しく月明かりを反射してキラキラと煌めいている。

うつ伏せで狙撃体勢を取る少女が構えるのは、同じく雌火竜リオレイアの素材を使って作られた妃竜砲【姫撃】と呼ばれるヘヴィボウガ

ン。重量がある分扱い方は難しいが、その長いバレルから撃ち出される銃弾の破壊力が高いのが特徴のヘヴィボウガン。その中でも特に狙撃に特化し、耐火性の優れた雌火竜の素材を使う事で銃身などのオーバーヒートのリスクを極力排除した高性能な重銃である。特にパワーバレルと呼ばれる外部銃身を取り付ける事でより破壊力を増したタイプだ。一般的に銃は銃身が長い方が破壊力が増すと言われている。これは銃身の中でより長い間銃弾が回転する力を得る事で銃弾の回転力が増し、空気抵抗を受けづらく、そして貫通力を強化できる特徴がある為だ。その分、より大型になる事で狙撃以外の際は扱いが難しいのが難点だ。

少女は自らの身長にも近い巨大な銃を地面に置き、うつ伏せになる事で最大出力で射撃を行っていた。引き金を引く度に重々しい銃声と共に巨銃が震え、空薬莢が排出される。

可変スコープで竜を狙うその瞳は美しい翡翠色。引き金を引く指を支える腕は巨銃を扱うにはあまりにも細い。それでも彼女が無双の狙撃手であるのは、彼女の実力が確かな証拠だ。

淡々と、冷静に狙いを定めながら少女は狙撃を続ける。弾種は貫通弾ＬＶ２という貫通力に特化した銃弾だ。

スコープの向こうで、最前線で竜と対峙するベリオ娘が腰を落とす。彼女が攻撃態勢に入った証拠だ。それを援護する為にも、更に銃撃の間隔を短くして波状攻撃を加える。

一方、蒼の竜はレイア娘からの狙撃などまるで通じていないかのように纏う雰囲気を変えたベリオ娘に対し、先制攻撃を仕掛けようと四肢を踏み締める――その背後から、黒い影が襲い掛かる。

気配もなく竜の背後へと回り込み、襲い掛かるのは全身を漆黒の鎧で纏った少女。鎧と呼ぶにはあまりにも貧弱で一見すると服にも見えるそれは、全防具の中でも最軽量の部類に入る高機動に特化した防具の為だ。迅竜ナルガクルガと呼ばれる機動力に特化した飛竜の素材を使った事で機動力特化の防具となったナルガＸシリーズは必要最低限箇所、胸と腰、腕と足などを迅竜の皮などで被っただけのシンプルな装備だ。この皮は滑らかながらも硬く、十分な防御力を持つ。

その代わりそれ以外の部分を露出させる事で軽量化を実現した、まさに機動力特化の防具だ。
怒り状態になった際にナルガクルガが逆立てる刺をイメージしたナルガXキャップを逆立て、夜の闇に吸い込まれそうな漆黒の隻眼で冷徹に蒼の竜を睨みつける少女。構えた武器は夜刀【月影】と呼ばれる同じく迅竜ナルガクルガの素材を使った鋭利な太刀。夜の闇にまるで溶けるような漆黒の刃を構え、少女は蒼の竜の背後から襲い掛かる。
鋭い切れ味を持つ夜刀【月影】は刃を煌めかせながら蒼い鱗へと吸い込まれ、その硬い鱗を斬りつける。さすがに硬いだけあって一撃では破壊できなかったが、それでも深い傷を残した。夜刀【月影】が常軌を逸した切れ味を持っている証拠だ。
黒い少女はそのまま蒼の竜の背後で猛烈な勢いで刀を振るう。
少女の攻撃に、蒼の竜は苛立ったかのように顔色を変えると、太い筋肉の塊のような尻尾を大きく振るい、少女を跳ね飛ばそうとする。だが少女はそれに気づいてすぐに離脱。空振りに終わった所で再度突貫を仕掛ける。
ナルガ娘の剣撃の嵐、レイア娘の狙撃を受ける蒼の王者。鬱陶しい程の連撃に嫌気が挿したのか、纏う雰囲気を一変させる。これまでの圧倒的な自らの力故に余裕ぶっていた彼も、いよいよ群がる相手が『敵』であると判断したのだろう。狩場全体を支配する威圧感は、一瞬で息苦しい程の殺意の奔流へと変化する。
敵の空気が変わった。敏感に感じ取ったナルガ娘は夜刀【月影】を背負った鞘へ納刀すると、風のような速度で竜の脇を通り抜けてベリオ娘の隣へと移動する。
敵が真正面へと揃ったのを見計らい、蒼の竜は上半身を持ち上げる。大木のように太い両前脚を伸ばし、首をもたげ、その凶悪な歯が並ぶ顎を開く。そして、
「ヴオオオオオォォォォォッ！」
天高く轟く雄叫びを上げる。遙か天空の彼方まで届くような、澄んだ、そして重圧な遠吠え。その雄叫びに、二人の少女達は耳を塞いだ。

生物としての本能に直接作用するその声は、二人の動きを本能という生物としての根幹から封じてしまう。耳を押さえ、その場に拘束される二人。

苦しげに顔を歪めながら耳を塞ぐベリオ娘の視線の先では、信じられない光景が広がっていた。

雄叫びを続ける蒼の竜の背には腕甲のような黄金色の硬い突起物が等間隔で生えており、それは背びれのように彼の竜をより厳かな存在に魅せる。その背ビレが青白く光り輝いているのだ。

発光現象を起こす背ビレ。それだけでも異常な光景だが、それを上回る光景が彼女達の前に広がっていた。

これまで、何の統率もなくただ彼の竜の周りを飛び交っていた無数の雷光虫。それらが急に群れを成して彼の竜の周りを飛び回る。グルグルと、蒼の竜の周りを隊列を組んで飛ぶ雷光虫達。それはまるで、彼の竜を中心に回る光の竜巻を思わせる。しかもその雷光虫達が次々に激しい光と共に稲妻を迸らせる。天空から大地に降り注ぐような圧倒的な電圧ではないが、それでも並の生物なら気絶しかねないような電力だ。

雷光虫達が激しい激雷を迸らせる。その雷は次々に青白い雷光と共に蒼の竜の背ビレへと吸い込まれていく。まるで、彼の竜が雷光虫達から雷の力を得ているかのようだ。

凄まじい電圧は、彼の竜の純白の毛を逆立てていく。体中の至る所で火花が迸り、彼を囲む雷は更に数を増し、濃度を上げていく。そして、限界電圧まで達した時、彼の竜の瞳が見開かれる。その瞳の奥に雷撃が迸ったのを、二人は見逃さなかった。

「ヴオオオオオオォォォォォォッ！」

これまでとは明らかに違う凄まじい咆哮と共に、凄まじい雷撃が雷光と共に彼の竜を包んだ。暴れる電撃は次々に大地を穿ち、木々や草は一瞬で焼け、石は砕け、川の上を雷撃が翔け抜けて水蒸気へと変える。

辺りを水蒸気が包み込み、ナルガ娘とベリオ娘は視界を奪われた。一方で遠距離から狙っていたレイア娘も竜の周りに発生した水蒸気

で彼の竜を見失った。一瞬慌てたが、すぐにスコープを覗き込んでその姿を探す。
最前線にいるベリオ娘とナルガ娘は奇襲に備えて武器を構える。ナルガ娘は再び黒刀、夜刀【月影】を構える。そしてベリオ娘もずっと背負っていた武器の柄を手に取ると、その大振りな武器を勢い良く構えた。
彼女が構えたのは長身な彼女の背丈にも匹敵するような長斧。ゴアゲイルフロストと呼ばれる氷牙竜ベリオロスの厳選素材と最硬鉱石とも名高いエルトライト鉱石で作られたスラッシュアックスだ。エルトライト鉱石で作られた刃は岩をも砕く破壊力を秘めており、ベリオロスの素材を使った事で常に強烈な冷気を宿した氷属性の武器。
二人の狩人が武器を構え、前方を気配を殺して見詰める。その視線の先で、ゆっくりと煙が晴れた時――真の雷王が降臨していた。
背ビレと白毛を逆立てて、その隙間から爆音と共に雷撃を迸らせる。全身を青白く輝かせながら、再び雷光虫達を従えて光り輝く蒼の竜。それは、彼の竜の真の姿、雷を纏った――雷狼竜ジンオウガの真の姿であった。
「あれが、ジンオウガの超帯電状態か。危険な気配がビリビリ伝わって来るな」
「……関係ないわ。どんな相手でも斬り伏せるまでよ」
「相変わらずだな君は。だが、君の強気はこういう時は頼りになる」
「……来るわよ」
抜刀して構える二人に対するように、蒼の雷竜――雷狼竜ジンオウガが迫り来る。
低い唸り声を上げながら、腕に雷撃を纏う。その火花が激しく飛び散った瞬間、彼の竜は突撃して来た。一瞬で距離を詰められたかのような錯覚を覚える程の速度で迫ったジンオウガに対し、ベリオ娘はとナルガ娘は二手に別れる。そこへジンオウガは振り上げた右前脚を振り落とす。雷撃を纏った蒼爪はその強烈無比な一撃で地面を穿ち、迸る稲妻は爆音と共に地面を焼く。凄まじい雷撃を伴ったパンチだ。
強烈な攻撃を避けた。二人の娘はすぐに反撃へと出る。大振りな

一撃の後は、モンスターの多くは動きが止まる。それを狙っての攻勢だ。だが、
「ウオゥッ！」
ジンオウガは止まらなかった。そのまま続いて雷撃を纏った左腕を振り上げると、迫っていたナルガ娘に向かって振り落とす。この攻撃に慌てたナルガ娘だったが、自慢の脚力で横へと飛び退けてこの一撃をかわす。地面に倒れ込むようにして緊急回避したナルガ娘の頬を、冷や汗が流れる。
一方のベリオ娘もこの攻撃に驚いて動きを止めた。だが、
「グゥォッ！」
――ジンオウガの攻撃は、まだ終わっていなかった。
振り返ったジンオウガは再び右腕を振り上げてベリオ娘を殴りつける。寸前で回避したベリオ娘だったが、二人の反撃は見事に失敗した。
二人に攻撃をかわされた事に悔しげに唸りながら、ゆっくりと地面にめり込んだ右腕を引き抜くジンオウガ。一方再集結した二人からはいよいよ余裕が消える。
「雷爪三連撃といった所か。あれほどの破壊力がある一撃を、よもや三発も連続でやれるとはな」
「……厄介ね」
お互いが向き合い、一頭と二人は無言で対峙する。そこへ、再びレイア娘の支援攻撃が再開された。遠方からの狙撃に、ジンオウガの意識が逸れる。それを好機とばかりに、ナルガ娘が突撃する。真正面から夜刀【月影】で襲い掛かるナルガ娘だったが、振り下ろした剣撃が触れる寸前、ジンオウガが回避してしまう。否、移動したのだ。
ナルガ娘とベリオ娘を振り切って突撃するジンオウガ。それは真っ直ぐとレイア娘が陣取る狙撃陣地へと向かっていた。
迫り来る雷狼竜を前に、慌ててレイア娘は連続砲火を浴びせるが、いずれの銃弾が命中してもジンオウガは構わず迫り来る。そして、
「グオォォッ！」
ジンオウガは先程二人を襲った時と同様、レイア娘が隠れる高台の

根本の岩に向かって雷を纏った爪で三度強撃した。大地を穿つ程の破壊力を秘めた超撃を三度も受けた岩は粉々に砕ける。そして礎を破壊された高台はあっという間に音を立てて崩落してしまった。
「……ッ！」
数メートルの高さから落ちたレイア娘だったが、相棒の妃竜砲【姫撃】を大切そうに抱きながら何とか受け身を取った事で大したダメージは受けなかった。それでも、無防備な状態で雷狼竜の前に投げ出された事に変わりはない。
悲鳴を上げてジンオウガから逃れようとするレイア娘に対し、容赦なくその背後から襲いかかろうとするジンオウガ。だが、
「……させないッ！」
疾風の如き疾さで川を翔け抜けるナルガ娘。怒濤にして俊足の進撃で突貫する彼女はジンオウガの爪がレイア娘を襲う寸前でその背後へと至ると、すかさず夜刀【月影】で襲い掛かる。
横斬り、縦斬り、突き刺し、突き上げ。縦横無尽に刃を煌めかせながら壮絶怒濤の剣撃の舞を披露するナルガ娘。両の足を滑るようにステップを踏み、息つく間も与えない剣撃の波状攻撃。レイア娘を襲おうとしていたジンオウガは、堪らずこの攻撃に振り返る。
後脚に力を入れ、前脚を地面から離す。まるで立ち上がったかのように胴を持ち上げたジンオウガは、両爪を振り上げる。背ビレが著しい雷光を煌めかせ、迸る雷撃は両爪へと流れていく。
凄まじい攻撃が来ると予感したナルガ娘は、攻撃を止めてすぐに横へと飛び退いた。そこへ、ジンオウガは両前脚を大地に向かって振り落とす。地面に爪が触れた瞬間、まるで落雷があったかのような爆音と共に大出力の雷撃が地面を砕く。
雄叫びを上げ、攻撃が失敗した事を恨めしげに睨みつけるジンオウガの視線の先で、ナルガ娘が再び刀を構える。
漆黒の侍と対峙する雷狼竜ジンオウガ。四肢を踏み締め、彼女に向かって突撃しようと構えた時、雄叫びと共に白の騎士姫が突撃して来る。
「うおおおおおおおおッ！」

勇ましい叫び声と共に迫るベリオ娘。背負ったゴアゲイルフロストの柄を握り締め、ジンオウガの右脇から迫ると、すかさずその長斧を振り上げ、一気に叩き落とす。エルトライト鉱石でできた強靭な刃は月明かりを不気味に煌めかせ、その鋭い刃先はジンオウガの青い鱗に叩きつける。強烈な一撃と鋼鉄の刃は岩をも砕く。だがジンオウガの鎧はそう簡単には砕けない。嫌な金属音を響かせながら、火花を飛び散らせて刃先は鱗の上を滑り落ちる。

一撃目は失敗した。だが諦めず、ベリオ娘はゴアゲイルフロストを構え直し、前進と共に突き出す。刃先がジンオウガの右前脚の腕甲に当たって火花と共に金属音を飛び散らす。構わず今度は右へと斧を振り、すかさず横殴りに叩きつける。この一撃は腕の鱗の一部を砕いた。

勢いを殺さず、今度は全身を使って重斧を一気に振り上げてジンオウガの顎を叩く。この一撃は予想外だったのか、ジンオウガは初めて悲鳴を上げて仰け反った。構わず、ベリオ娘は振り上げた斧を今度は思いっきり叩き落とす。

ベリオ娘の猛攻を見て、ナルガ娘も夜刀【月影】でジンオウガに襲い掛かる。縦横無尽に刀を振るい、疾風の如き剣撃の嵐でジンオウガを翻弄する。

一方、二人の猛攻の間に距離を取ったレイア娘。今度は高台からの狙撃ではなく、同じ高低差のない大地に陣取って中距離からジンオウガを狙撃する。ヘヴィボウガンは火力重視の為に大型化した上に重い為、取り回しが難しい。ライトボウガンに比べて攻撃できる隙が減ってしまうが、その一撃は軽銃とは比較にならない程の強撃だ。

今度は一度の装填数が貫通弾ＬＶ２よりも多い通常弾ＬＶ２を装填。装填（リロード）の時間を減らす事でより攻撃の手数を増やす選択だ。一撃の破壊力が高いヘヴィボウガンなら、多少威力が劣る通常弾ＬＶ２でも十分通じると判断したのだ。

腰を落とし、すぐに銃撃を開始する。これくらいの距離ならスコープを使わなくても彼女の実力があれば正確な銃撃が可能となる。

引き金を引く度、重い衝撃が彼女の肩を襲う。長年使い慣れたライ

トボウガンからこのヘヴィボウガンへと転向して数ヶ月。すっかりこの衝撃にも慣れたものだ。
風を切って飛翔する銃弾は次々に雷狼竜ジンオウガの背中へと命中する。
三人の猛攻に晒されるジンオウガ。だが、蒼の雷竜は彼女達の猛攻にも遅れは取らない。四肢を踏み締め、姿勢を低くし、一歩下がる。そのわずかな動作に気づいたベリオ娘はすかさず後方へと退避した。その動きを見て危険を感じ取ったナルガ娘が同じく撤退しようとした時――蒼の暴風が吹き荒れた。
突如ジンオウガはその場で体を撚ると、更にその勢いを殺す事なくジャンプした。まるでムチのように巨大で太い尻尾で辺りを殴りつけながら、地上数メートルまで飛び上がる。その際に振るわれた強力な尻尾の一撃。ナルガ娘は直撃こそしなかったが体が引っかかってしまい、そのまま勢い良く吹き飛ばされてしまう。
一瞬にして跳び上がったジンオウガは、すぐに次の瞬間には綺麗に四肢で着地してみせる。そのアクロバティックな動きに、レイア娘とベリオ娘は度肝を抜かれた。
一方吹き飛ばされたナルガ娘は川の上を数度転がった後、ゆっくりと立ち上がる。口の中を切ったのか、口の端から血が垂れる。それを拳で拭い取り、口の中の血を唾と共に吐き捨てる。黒い隻眼は、より鋭いものへと変わっていた。
「……やってくれたわね、犬野郎」
ナルガXキャップを逆立て、夜刀【月影】を振り、その場で突撃の構えを取るナルガ娘。その怪我が大した事ない事を悟った二人は安堵する。だが、目の前に雷狼竜が健在な事には変わりはない。
再びゴアゲイルフロストを構えて襲いかかろうとするベリオ娘の動きを防ぐように、ジンオウガはその場で跳び上がって後転。槌のように尻尾を地面へと叩きつけた。その一撃を回避する為に横へ跳んだベリオ娘。ジンオウガが着地すると同時に背後から襲い掛かる。斧を振り上げ、一気に叩きつける。重みがあり、腰の入った一撃がジンオウガの背中に炸裂する。

低い唸り声を上げてこの一撃を耐えたジンオウガに対し、今度は反対側からナルガ娘が強襲する。ナルガXキャップを振り乱し、夜叉の如き速度で迫ると、再び峻烈怒濤の剣舞を披露する。

レイア娘も射撃を再開し、中距離からの支援砲火を続ける。

三人の猛攻に対し、ジンオウガだって負けてはいない。出会い頭にベリオ娘を襲った雷光虫を用いた雷球を放って攻撃したり、突進からの反転襲撃。はたまた背中から地面に自らを叩きつけると同時に雷光迸らせる等、アクロバティック且つ滅茶苦茶な動きで狩人達を翻弄する。

攻撃の機会を得られない程動き回るジンオウガに対し、剣士二人は翻弄されるばかり。そんな前衛の苦戦ぶりを見かねたレイア娘は妃竜砲【姫撃】を背負う。巨大な長銃はちょうど真ん中辺りで折り畳める為、折り畳めば背負う事も可能だ。

銃を背負い、腰に下げた筒状の道具（アイテム）を手に取る。レイア娘は戦闘を続ける二人を意識しながらも、エリアの中央部へと移動する。そしてそこで手に持った筒状の道具の背後に突き出たハンドルを手動で高速で回し始める。ハンター達から単純にハンドルと呼ばれているが、専門的にはイナーシャ―と呼ばれる装置らしい。これを高速回転させる事で中の歯車を回すのだ。これを行わないと、この道具（アイテム）は不発に終わる。

十分中の歯車を回転させた所で、地面へと突き刺す。そして中の歯車の勢いが衰える前に、ハンドルの側面に付いている安全装置のピンを抜き、その場から離れる。数秒後、爆発音と共に地面が吹き飛ぶ。地面が抉れ、人一人分くらいの深さの穴ができたかと思うと、穴を生み出した装置がすかさずその上を覆うようにネットを展開する。

ハンター達がモンスターを拘束する際に使う、落とし穴と呼ばれる罠（トラップ）が完成した瞬間だ。これも自分が使い慣れた方式とは違う、かなり豪快な設置方法だが慣れればこれはこれで便利な時もある。

「落とし穴設置しましたッ！」

トラップを仕掛けた事を他の二人へと報告する為、レイア娘は声を

上げて二人を呼ぶ。その声を聞いた二人は攻撃を止めてすぐにレイア娘の方へと走る。当然、ジンオウガもそれを追って遅れて走って来る。

二人が落とし穴を飛び越えてレイア娘の所に到達すると、すでにレイア娘は銃撃の構えを取っていた。座り込むように腰を落とし、パワーバレルに備え付けられている固定用の脚を地面につけて反動で銃身がブレる事を防ぎながら銃身を固定する。体と銃身を固定する事で移動不能となってしまうが、その分ブレる事なく連続射撃が可能となる。その状態でレイア娘はカートリッジを外し、腰に下げた無数の弾丸が備えられたガンベルトを外すと、それをそのまま装填する。ガンベルトに備えられた弾丸は通常弾ＬＶ３。それが三〇発連続して繋がっており、連続三〇発発射が可能となる。これを備えた際は動けなくなってしまう為にこの状態、通称《しゃがみ撃ちモード》でしか使う事ができない。

しゃがみ撃ちモードは装填するガンベルトの関係上動けなくなってしまうが、固定砲台となる事で瞬間火力を飛躍的に向上させる、まさに一点突破銃撃形態なのだ。

レイア娘が攻撃準備を完了した頃、集まった三人を一網打尽にしてやろうとジンオウガが爪を振り上げて襲い掛かる。その軸脚が落とし穴を踏み抜いた瞬間、雷狼竜は落とし穴にハマってしまった。

深い穴に下半身を取られ、粘着性の強いネットが余計に彼の脱出を阻む。突然動きを封じられた事で慌てるジンオウガに対し、三人の狩人娘が一斉に攻撃を仕掛けた。

ナルガ娘は漆黒の刀、夜刀【月影】を両手でしっかりと構えながら乱舞する。彼女の気合と気迫に連動するかのように、漆黒の刀が光輝き始める。その輝きを失わせないよう連続の剣撃を浴びせ続ける。そして、その漆黒の隻眼が鋭く細まる。

「……チェストッ！」

軸足を鋭く地面に突き立て、両腕に力を込めると同時に軸足を爆発。腕を振るう力と共にその身を捩り、一気にその身を高速回転。その回転力をそのまま振り回した刀の破壊力へと連動させる。まるで

漆黒の竜巻が吹き荒れたかのような、一瞬の風。太刀使いの秘伝奥義、気刃大回転斬りだ。
強烈な一撃を浴びせ、仕切り直すように納刀する。この東方大陸の太刀使いに伝承される秘伝奥義。習得して数ヶ月、彼女の並外れた身体能力と才能と努力によって、彼女はその奥義を完全に自分のものとしていた。
一方、ナルガ娘の猛攻に対してベリオ娘は静かだった。暴れるジンオウガの前に陣取ると、一度大きく深呼吸。そして背負った斧を構えると同時に手元のスイッチを入れる。一瞬の機械音と共にエルトライト鉱石で出来た漆黒の斧刃が手元の方へとスライド、続けて漆黒の斧刃の反対側に備えられた橙色の剣刃が前面へと展開する。その刃は氷牙竜ベリオロスの牙を加工して作られた鋭い剣刃。エルトライト鉱石でできた斧刃よりも硬く、鋭い刃。
スラッシュアックスの真骨頂。変形による通常時の斧モードから攻撃形態である剣モードへの移行。巨大な斧は、一瞬にして巨大な剣へと姿を変えた。
スラッシュアックスは巨大故に重い斧だが、斧モードの際はエルトライト鉱石の刃が鉱石で出来ている特性上硬い分とても重い為、重心が前の方にあるのでバランスが取りやすく、重さの割にそこまで動きの制限を受けない。しかし剣モードになるとその重刃の重心が柄の方へと移動し、比較的軽い氷牙竜の牙でできた剣刃が先端へと移動するので、重心が柄寄りに変わる。途端に手にかかる負担が大きくなる為、動きの制限を受けてしまう。
重心が先端にある事で動きやすく、振り回した際の破壊力が増す分大ぶりな攻撃ばかりになってしまう斧モード。
重心が中心部へと移動する事で動きは鈍くなるが、体を固定させた際の怒濤の剣撃によって瞬間攻撃力は桁外れとなる剣モード。
この二種類のモードを使いこなして戦うのが、スラッシュアックス使いだ。
変形したゴアゲイルフロストは、まるで暴れられる事を喜ぶように、刃の隙間から猛烈な勢いで純白の冷気が噴出する。その極寒零度

の冷気は彼女の周りの草葉を一瞬にして凍結させる。
剣モードへと切り替えたゴアゲイルフロストを構えたベリオ娘、スゥと息を吸い込むと、次の瞬間――白騎士姫の剣乱舞踏祭の幕が上がる。
一歩踏み込むと共に、構えた剣を一気に突き立てる。鋭い突きの一撃は雷狼竜の鱗に炸裂した途端、それを破壊する。氷牙竜の牙の切れ味は鋭く、如何なる鎧をも砕く威力を誇る。
突きの一撃から抜くと同時に左右への連撃へと繋げていく。ナルガ娘程の連続斬りはできないが、それでも凄まじい速度での剣撃の嵐を炸裂させる。煌めく剣先を連続して叩き込んだ後、一度剣を引き、止めていた息を再び吸い込み、気合と共に剣を勢い良く突き出す。
鋭い剣先は再び雷狼竜の腕の甲殻を砕き、そのまま肉を断って突き刺さる。そのままの状態でベリオ娘は再び別のスイッチを起動する。
スラッシュアックスにあるもう一つの機能。刀身に仕込まれていたビンと剣先が直結する。内部に仕込まれたビンにはゴアゲイルフロストの氷属性の効果を一時的に劇的に飛躍させる効果がある。ビンと直結した剣先は凄まじい冷気を放出する。
白い冷気が荒れ狂い、彼女と雷狼竜の腕を包み込む。絶対零度の冷気は剣先と雷狼竜の腕を凍結させる。更に冷気は密度を増していき、仕舞いにはベリオ娘のベリオX装備の至る所までが凍りつく。そして、
「破ァッ!」
気合と共に氷の大爆発。凄まじい冷気が勢い良くジンオウガの腕と彼女自身の鎧にこびり付いていた氷を一瞬で破壊し、その勢いで強烈に腕の甲殻を砕け散らす。
圧倒的の冷気の大放出の反動でベリオ娘は勢い良く後退する。と同時に限界を越えた出力を放出したゴアゲイルフロストは通常時の斧モードへと強制変形した。
一方のレイア娘もジンオウガが落とし穴にハマった瞬間からずっと引き金を引き続けている。間髪入れない連続射撃によって次々に銃弾が撃ち出され、空になった薬莢が辺り一面に次々に飛び散ってい

く。銃身が高熱を発するが、雌火竜の素材で作られた銃身はこの程度の熱ではビクともしない。凄まじい勢いでガンベルトが吸い込まれ、装填された通常弾ＬＶ３が次々に撃ち出されていき、あっという間にベルトに備えられていた三〇発の通常弾ＬＶ３が撃ち尽くされてしまう。

レイア娘が最後の一発が撃ち出されたと同時に、ジンオウガがようやく落とし穴から脱出した。抜け出すと共にその自慢の脚力で跳び上がると、上空で一回転して地面へと降り立った。

拘束を脱した雷狼竜を前に、再び刀を構えるナルガ娘と斧を構えるベリオ娘。そしてしゃがみ撃ちモードを解除して通常射撃形態へと戻ったレイア娘の三人が包囲する。

三人の包囲に対して、雷狼竜は恐れる事なく咆哮（バインドボイス）を轟かせる。天高く透き通るような力強い雄声に、三人は警戒する。そんな彼女達に向かって、ジンオウガは唸り声を上げて突っ込んで来る。右前脚を振り上げ、彼女達に向かって勢い良く振り落とす。

迫り来る強烈な一撃に三人はそれぞれ走って回避する。巨大な爪が地面に炸裂し、深く大地を穿つ。その大振りな一撃を前に、ナルガ娘が攻撃後の隙を狙って夜刀【月影】で襲い掛かる。だが、

「ガアアアァッ！」

ジンオウガは背後から迫る彼女の接近を拒むかのように尻尾を振り上げてその場でジャンプして後転。振り上げた尻尾を勢い良く叩き落とす。その一撃に接近していたナルガ娘は寸前で回避した。そんな彼女を援護するかのようにベリオ娘も突っ込む。だが、

「ガアッ！」

ジンオウガの猛攻は止まらない。その場で体を捻り、再びジャンプ。先程ナルガ娘を吹き飛ばした時と同様に尻尾で辺りを薙ぎ払いながらのジャンプだ。この一撃にいよいよ回避が間に合わなかったナルガ娘と近づいていたベリオ娘が巻き込まれ、それぞれ吹き飛ばされてしまう。

ナルガ娘とベリオ娘はそれぞれ地面に叩きつけられ、数度転がった後にそれぞれしばらく動けなくなる。そんな二人の窮地を救おうと

レイア娘が再び銃撃での猛攻を開始する。だが、そんな彼女もジンオウガの放った雷球の餌食となる。一撃は回避したが、背後から迫っていたもう一撃を回避できずに直撃。全身に電撃を受け、痺れながらその場に倒れてしまう。

ベリオ娘がゆっくりと起き上がるが、先程受けた一撃のダメージが大きかったらしくその場で膝を折ってしまう。ナルガ娘に至っては防具の軽装備さが仇となってしまったせいか痛みで起き上がれずに顔を歪めている。

そしてレイア娘は全身が痺れてしまい動けない。

たった一瞬にして三人の狩人娘が戦闘不能となってしまった。

この地域では最強と謳われる雷神ジンオウガ。別名《無双の狩人》と呼ばれる彼の竜の全力を前では、急激に知名度を上げている実力ある若き狩人娘達でさえ敵わない。

圧倒的な力を前に、激痛を堪えながら、しかし視線だけは外さない三人。目を背けてしまっては、心まで敗北してしまう。せめて最後の意地だけは、貫かなければならない。

迫り来る雷狼竜を前に、ベリオ娘は抗う術を持たない。ただ、苦し紛れに睨み返すだけ。もはやこれまでかと思われたその時、一発の銃声が轟く。その一撃は命中こそしなかったが、雷狼竜の右前脚のすぐ前に炸裂した。ベリオ娘とジンオウガが同時に振り返ると、レイア娘が構えた妃竜砲【姫撃】の銃口から煙が上がっていた。

まだ立つ事もできない為か、横倒しのまま妃竜砲【姫撃】を撃ったのだ。その為まともに狙いもつけられなかったらしく、彼女にしては珍しく外してしまったらしい。だが、その一撃は確実にジンオウガのベリオ娘への歩みを止めた。しかし、

「バカッ！　逃げろぉッ！」

振り返った雷狼竜ジンオウガは怒りの声を上げてレイア娘へと突撃する。慌てて追おうとするベリオ娘だが動けず、ナルガ娘も立ち上がって突貫するが、その勢いはこれまでとは比較にならない程遅く、しかも途中で倒れてしまった。

「……フィーリアッ！」

「フィーリアッ！」
　二人の声を背に、雷を纏いながら突撃して来る雷狼竜ジンオウガ。向かって来る雷神を相手に、レイア娘は為す術がない。相棒を抱き抱え、涙を我慢しながら迫り来る無双の狩人を見詰める。だが、振り上げられた鋭爪を前にした時、思わず目を閉じてしまう。そして、
「く、クリュウ様あああああぁぁぁぁぁッ！」
　――自然と、《彼》の名を叫んでいた。
「ジンオウガあああああぁぁぁぁぁッ！」
　突如響いたその声に、レイア娘は閉じていた目を再び開く。目の前に迫る雷狼竜ジンオウガ。その背中に向かって、空から剣を構えた少年が襲い掛かる。
　森の木々の枝から飛び降りた少年は、そのまま雷狼竜ジンオウガの背に飛び乗った。
「グワアアァッ!?」
　突如背に飛び乗られた事にジンオウガは驚き、その場で横たわってしまう。しかしすぐに起き上がると、背中に飛び乗って来た敵を排除しようと大暴れする。無茶苦茶に動きまわって拳を振り回し、岩や木に体当りする等し、更には怒りの咆哮（バインドボイス）を轟かせるが、背に乗った少年は諦めない。
　構えた剣を何度も背中に向かって突き立て、ひたすらに攻撃を加え続ける。動きが活発化した際は振り落とされないように背中にしがみつき、何とかその場に留まり続ける。そして、
「ガアアァッ!?」
　ついにジンオウガは少年の攻撃に倒れてしまう。地面に数度転がってのた打ち回る雷狼竜ジンオウガ。その背から飛び降りた少年は倒れていたレイア娘へと近づく。
「ごめん、合流するのに手間取った」
　そう言って、申し訳無さそうに謝りながら少年はレイア娘に手を伸ばす。
　全身に纏うのは紫色の竜の皮で出来た防具。ジャギィやジャギィノスを率いる群れのボスである狗竜ドスジャギィの素材を使った

ジャギィX装備。ドスジャギィの特徴である大きなエリマキを使っている為、防具の各所が色鮮やかな装飾が施されているのが特徴だ。頑丈で柔軟性に優れた狗竜の皮を中心に、要所をエルトライト鉱石などで補強した装備。少し重いが、それでも男性用防具としては軽量の部類に入る機能的な防具だ。

紫色の帽子を被ってはいるが、隙間からは春に芽吹く若葉のような綺麗な緑色の髪が見える。エルトライト鉱石製の鍔の下から覗く顔立ちは、少年というには少し凛々しく、でも青年と呼ぶには幼い。少し女性っぽい中性的な顔立ちの少年の顔が顕になっている。その表情は、目の前の娘を気遣うかのように、少し不安げだ。

「大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です！」

少年に声を掛けられ、レイア娘は頬を少し赤らめて興奮気味に返事する。少年は彼女の手をとってゆっくり立ち上がらせ、彼女に怪我がない事を確認し、ようやく安堵の息を漏らす。

「良かった、大丈夫そうだね」

「はい。ご迷惑をお掛けしてしまい、申し訳ありません」

「何言ってるのさ。俺が来るまでみんなを守ってたんでしょ？　さすが【翠銃】のフィーリア」

「は、恥ずかしいです……ッ」

少年に褒められ、レイア娘――【翠銃】のフィーリア・レヴェリは嬉しさのあまり頬を真っ赤にしながら笑みを浮かべる。そんな彼女の可愛らしい反応を見て少年も思わず笑みを浮かべる。

「……クリュウ、浮気はダメ」

そう言って少年の腕にしがみ付くのはナルガ娘。秘薬を呑んだ為か、ようやく完全回復できたらしい。先程までの凛々しい無表情から一転して恋する乙女の顔になった彼女は、まるで甘えるように少年の腕に抱きついたまま彼を引き寄せる。

「……クリュウさすが。かっこいいわ」

「あ、ありがと。でも、ちょっと離れて」

「……どうして？　私の事、嫌い？」

「いや、そうじゃなくて……サクラの装備ってやっぱり何か直視できなくて」
　照れたように頬を赤らめながら語る少年の言葉に、ナルガ娘の表情が少しだけ嬉々とした、イタズラっぽいものに変わる。
「……クリュウ、エッチ」
「ち、違うッ！　俺は別にそういう意味で言った訳じゃ……」
「クリュウ様ぁッ！」
　ナルガ娘の反対側にフィーリアが抱きついて頬を膨らませる。そんな彼女に誤解だと説明しようとする少年だが、そんな彼の両頬を掴み、ナルガ娘は無理やり彼の視線を自らに向ける。
「……ダメ。クリュウは私だけを見て」
「クリュウ様ぁッ！」
「いや、だからその……」
「――まったく、狩りの最中だというのに騒々しいな」
　そう言って苦笑を浮かべながら三人へと近づいて来たのはベリオ娘。ナルガ娘同様に秘薬を呑んだおかげでダメージを回復できたようだ。
　両手に美少女二人を抱える形となった少年に対し、呆れた様子のベリオ娘。ジト目で見てくる彼女の視線に、少年は苦笑いを浮かべながら視線を彷徨わせる。
「君も少しは慎めサクラ。【黒狼】の名が泣くぞ」
「……誰につけられたかわからない名前に興味はないわ。私はクリュウしか必要ない」
　そう恥じる事なくどこか誇らしげに真っ向から断言するナルガ娘――【黒狼】のサクラ・ハルカゼ。そんな彼女に対し、ベリオ娘とフィーリアは呆れた様子。
「サクラ様……」
「まったく、さっさと離れないか」
　サクラを注意し、ベリオ娘は少年をようやく解放した。両腕が自由となり、ほっとした少年は礼を言おうとベリオ娘に向き直る――だが、次の瞬間彼の顔は彼女の胸の中にあった。

「むぐ……ッ!?」
「君達ばかりズルいではないか。私も彼とラブラブしても良いだろう？」
　先程までの凛々しい顔つきとは打って変わって、サクラ同様に恋する乙女の顔になったベリオ娘。胸に抱いた彼の頬を愛おしそうに撫でる。一方の少年は顔を真っ赤にして離れようとするが、元々の筋力の差か、それとも単純にテンパっている為かなかなか抜け出せない。
　そんなベリオ娘の横暴に対し、フィーリアとサクラが怒る。
「シルフィード様ッ！　は、ハレンチですぅッ！」
「……貴様の方が、【烈風】の名が泣くわよ」
「君の答え、そのまま使わせてもらうよ」
　フフンと誇らしげに佇むベリオ娘――【烈風】のシルフィード・エアだったが、頬を赤らめながら少年を胸に抱き寄せているその姿では、あまりかっこ良くはない訳で。
「もうッ！　お二人共いい加減にしてくださいッ！」
　そう叫び、フィーリアは少年の腕を引っ張って引き寄せる。ようやくシルフィードの胸から解放された少年だったが、今度はフィーリアが腕に抱きついたまま二人を威嚇する形になる。髪を逆立てて「フーッ、フーッ」と唸る様はまさにアイルーのよう。
　怒るフィーリアを相手に、シルフィードも冗談が過ぎたとばかりに両手を上げる。サクラは少年を奪還しようとするもフィーリアが威嚇する為に近づけないでいた。一方少年は、
「ふぃ、フィーリア。あの、離れて……」
　先程二人に抱きつけれた時に比べれば落ち着いてはいるが、明らかに反応が違っていた。この状況を嫌がっているようで、実は満更でもない、そんな歯がゆい反応だ。そんな彼に対してフィーリアは「クリュウ様も、もっとしっかりしてもらわないと困りますッ」と指をビシッと立てて怒る。そんな彼女の注意に少年は苦笑いを浮かべて視線を逸らす。すると、
「……」
　サクラとシルフィードの冷たい視線が突き刺さり、少年はぎこちな

い笑みを浮かべて目線を彷徨わせる。その時、視線の端でゆっくりと雷狼竜ジンオウガが起き上がる姿を捉えた――途端に、少年の表情が変わる。
少年の表情が変わったのを見て、三人の娘達もこれまでのどこか緊張の解けた様子を一変させ、再び真剣な表情に変わる。
「どうやら、雷狼竜はご機嫌が斜めなようだな」
「……関係ないわ。クリュウが一緒なら、私は決して負けないわ」
「四人揃ってこそ私達はチームなんです！　こっから反撃開始ですよぉッ！」
不敵に微笑みシルフィードはゴアゲイルフロストの柄を握り、鋭利な刃物を思わせる隻眼で雷狼竜を睨みながらサクラは夜刀【月影】を構え、勝利を信じて疑わないフィーリアは妃竜砲【姫撃】に新たな弾丸を装填する。
そんな三人の恋姫達を見て、少年もまた小さく口元に笑みを浮かべ、静かに背負った巨大な鋼鉄の盾を左腕に構え、右腕にはその巨盾に収納されていた鉄剣を構える。
その見た目通り、重量のある巨大な盾。それは耐久性能に優れたランスやガンランスの盾には劣るものの、全武器でもトップクラスの防御性能を誇る。
「遅れた分、しっかり働かないとね」
少年が構えたのはエルトライト鉱石、ユニオン鉱石、メランジェ鉱石、ノヴァクリスタル、ピュアクリスタル等の様々な鉱石を駆使して作られた鋼鉄の剣と盾。その切れ味はサクラが持つ夜刀【月影】に匹敵する程の鋭利な刃を持つ剣だ。
剣と盾を構えながら、三人の姫達の前に歩み出る少年。彼らの前には雷を纏った蒼い雷竜、雷狼竜ジンオウガが立ちはだかる。
「さすが、無双の狩人って言われるだけの事はあるね。威圧感がすごいや。でも――」
そこで一度言葉を切って、少年は盾を構え、静かに剣をジンオウガに向ける。その横顔は自らの勝利を信じて疑わない――否、自分達四人の勝利を疑わない勝利の笑みを浮かべていた。

不敵に、凛々しく微笑む彼の勇姿を背後に並ぶ三人の姫達は頬を赤らめ、惚けた表情で見惚れる。
元々かっこ良く、頼り甲斐があった少年。だがこの大陸に渡って以来、その凛々しさがより磨きが掛かった気がする。この新天地の地を踏み締めてはや一年、三人の乙女達それぞれが立派に成長したと自負する中、その三人が口を揃えて一番成長したと認めるのは彼だ。
いつの間にか、彼はすっかり自分達と同じ場所に立っている。これまではどこか三人の後ろから静かに見守ってくれていた彼。今では共に並び歩いて笑い合い、時には先陣を切って自分達を導いてくれる。
少年は、確実に大人へと成長していた。
三人の姫達が見詰める中、少年は不敵に微笑みながらジンオウガと対する。誰もが恐れ、その勇ましい姿に畏怖する無双の狩人ジンオウガ。だが少年は、そんな竜すらも恐れる事はない。それだけの場数を踏んだ、真の狩人だからだ。
「君に恨みはないけど、お世話になってる村の人達が困ってるんだ。悪いんだけど、君にこの渓流で自由にさせる気はない。だから――俺達が君の覇道に終止符を打つ、覚悟しろジンオウガッ」
「ゴアアアアアアアアッ！」
彼の宣戦布告にまるで応えるように雷狼竜ジンオウガが唸り声を上げる。ビリビリと伝わって来る威圧感と殺意に身を震わせるフィーリア。そんな彼女の肩を隣に立つサクラが優しく叩き、そんな彼女の頭をシルフィードが優しく叩いた。
「……何よ」
「さぁて、四人揃った所で本番だな。相手が誰であろうと、私達四人が揃ったからには勝利しかない。だろう？」
シルフィードの試すような物言いに、サクラは不敵に微笑む。
「……当然よ。私は――クリュウに勝利しか捧げないわ」
そんな二人のやりとりに、フィーリアもまた小さく笑みを浮かべながら妃竜砲【姫撃】を構える。自らの細腕には少々重い銃だが、この大陸では幾多のモンスターを粉砕してきた相棒。何より、彼の背中を

守れる最高の武器だ。
「私も、必ずお役に立ってみせますッ」
三人の言葉に後押しされ、少年は小さくうなずき、改めて雷狼竜を見詰め返す。雷神の瞳と彼の瞳、二つの視線が重なった瞬間――戦いの火蓋が切って落とされる。
「行くよ、みんなッ！」
「はいッ！」
「……御意」
「やってやるさッ！」
少年の掛け声を合図に、狩人達は突撃する。
フィーリアがすぐさま妃竜砲【姫撃】で銃撃を開始する。重々しい発砲音と共に銃弾が放たれ、その全てがジンオウガに命中する。怒り狂うジンオウガに対し、一番槍のサクラが襲い掛かる。
正面から構えた夜刀【月影】を振り上げ、一気に叩き落とす。しかしジンオウガは自らの角でその斬撃を迎え撃つ。刃と角がぶつかった瞬間、竜と姫の鍔迫り合いとなる。
火花を散らせながら力と力をぶつけ合う。しかし当然サクラも竜相手に力勝負を挑む程愚かではない。すぐに刃を翻して角を逃がすと、横薙ぎ一閃でジンオウガの顔を斬りつける。
頬を切られ、怒りに燃えるジンオウガは腕を振り上げて彼女に向かって叩き落とす。
振るわれた強烈な一撃をサクラは身を翻して避けるが、続けて二撃目が襲い掛かる。これも彼女の並外れたステップで回避したが、最後の一撃だけは難しかった。
せめて直撃だけでも避けようと回避行動を取りながら同時に受け身の体勢へと移行するサクラ。しかし雷狼竜の爪が彼女を襲う前に、側面から雄叫びを上げながらシルフィードが斬り掛かる。
強烈な勢いで振るい落とされたゴアゲイルフロスト。斧モードの強烈な衝撃を伴う斬撃は見事にジンオウガのがら空きの脇腹に炸裂する。猛烈な一撃を受けてジンオウガは悲鳴を上げて怯んだ。そこへ少年がサクラを追い抜いて真正面から襲い掛かる。

構えた鉄剣を振り上げ、一気に叩き落とす。ゴアゲイルフロストのような強烈な一撃でもなければ、夜刀【月影】のような切れ味と軽快さもない。二つの武器に比べて何かに特化した一撃ではないが、確実な一撃として雷狼竜の甲殻を砕く。

ジンオウガの右腕に向かって連続して少年は剣を振るう。斬り落としから斬り上げ、更に右や左から剣撃を振るい、次々に剣撃を加えていく。

少年の攻撃に嫌気が差したジンオウガは左腕で彼を弾き飛ばそうとするが、振るわれた鋭爪を少年は左腕に備えた盾でやり過ごす。

サクラやシルフィードと違って、彼の武器の最大の特徴はガードが可能な事。防御しながら確実に攻撃を積み重ねる。彼の性格を表したかのような堅実な攻撃だ。

爪の一撃を盾でやり過ごした少年は、そのまま剣を浴びせ続ける。

だがジンオウガも負けてはいない。ジンオウガは一度彼に背を向けて大きく後ろへとジャンプして後退したかと思うと、今度はそのまま勢い良く彼に向かって跳び掛かる。振るい上げられた爪の一撃と体当たりを、少年は再び盾でやり過ごした。

衝撃で大きく後退した少年は反撃に出ようとするが、そんな彼のすぐ隣を銃弾が通り抜ける。背後からのフィーリアの支援射撃だ。振り返ると、フィーリアが皆を援護するように銃撃をしている姿が見える。

少年はすぐに反撃に出る為、再びジンオウガに向かって突撃する。そんな彼の視線の先で、猛攻を繰り広げていたシルフィードがジンオウガの振るわれた尻尾で吹き飛ばされる。地面に倒れた彼女に向かって、ジンオウガが襲いかかろうとしていた。

「させるかッ！」

少年は一度武器を背負うと、腰に下げた小タル爆弾Ｇを手に取ると、それのピンを抜いてすかさず投げつける。放物線を描きながらジンオウガに向かっていく小タル爆弾Ｇはジンオウガの背中で爆裂する。突然の爆発攻撃に大したダメージにもならなかったが、ジンオウガが振り返る。そこへ、少年が斬り掛かった。

しかし、それはこれまでの剣撃の構えとはまるで違った。盾を取る事なく、盾に納刀したまま柄を持って振り上げる。すると、何かが作動する機械音と共に、振り上げられた剣が変形していく。
納刀状態のまま盾が火花を散らしながら回転し、まるで刃先のような鋭い方が上へと向き、ちょうど背負っている時とは剣を収めた箇所が反対向きになる。更に変形は続き、盾の両刃が開く。それはまさに一瞬の出来事であった。
振り上げられた剣は一瞬にして巨大な斧となった。盾にしては重く鋭い外見をした鉄盾は、一瞬で巨斧の刃となる。
それが剣斧スラッシュアックスと対を成す武器――盾斧チャージアックスの真の姿だ。
振り上げられたチャージアックス、シュヴァルツスクードの斧モードで少年は襲い掛かる。全力を込めて、重い斧を一気に叩き落とす。
「喰らえええええええッ！」
少年の全力の一撃が、雷狼竜ジンオウガに襲い掛かる。

第２４０話　新たな村　新たな日々　新たな願い

東方大陸。世界最大にして最高の栄華を誇る中央大陸の東方に浮かぶ大陸であり、中央大陸とはまた違った文明が栄華を誇る大陸である。

東方大陸もまた、中央大陸同様に複数の国家が存在する。様々な国が独自の文化を形成する中、一際巨大な国家が存在する。それが東方大陸最大の強国、世界最古の立憲君主国である津洲帝国だ。

それぞれの国が国家間において活発な交流を行う中、一部の国や地域は中央大陸の国とも交流を行っている。

中央大陸においても有名な都市としては東方大陸西側に位置する巨大な砂漠地帯にある自由交易都市ロックラック。

大陸東部を中心に、複数の商隊で形成される移動都市バルバレ。

そして、東方大陸最大国家であり世界最古の立憲君主国、津洲帝国領内にある温泉地、湯雲村などだ。

民間レベルでの交流は大昔からあるが、最近では国家間の交流も盛んになっている。特に中央大陸において西竜洋諸国と敵対関係が続いているエルバーフェルド帝国と東方大陸最大の国家、津洲帝国の同盟関係がその象徴だ。

他にもハンターズギルドも中央大陸に元々存在した現在のハンターズギルド東方本部の前身組織と関係を強化。ハンターズギルド総本部の指揮下にあるものの一定の自治権を許された東方本部が設置された。

東方大陸にもモンスターとの長い戦いの歴史が存在するが、中央大陸の方がその技術は高く積極的に中央大陸のハンターを勧誘している事から、昨今中央大陸から東方大陸に渡るハンターの数も少なからず存在する。

彼らの存在が、東方大陸の狩人伝説に新たな歴史を刻もうとしていた。

東方大陸津洲帝国領内、自然豊かな原生林が残る湯雲ノ杜。津洲帝国政府より国有林に指定された森の中、その村はひっそりと存在す

る。
山間の谷に作られたこの村は平地が少なく、谷の岩壁に密集するように家々が立ち並んでいる。谷にある事でそもそもモンスターに狙われ辛いが、竜防柵で村の周りを囲んでいる程度で、村防力はそれほど高くはない。
村の地下には膨大な湯量を誇る源泉が存在し、村の各家庭にはそこから供給される温泉が流れており、各家庭に天然風呂が存在する。その為、各家庭の煙突からは常に湯気が上がり、村の各所から湯気が立ち上っている。その景色はまさに温泉地だ。
湯雲村。それが湯雲ノ杜のどこかに存在する秘湯と、それを生業とする村人が集った小さな温泉村である。東方大陸では本当に名が知られていない、温泉好きと上質な木材が手に入る事から林業に携わる者達だけが知っている秘湯中の秘湯だ。しかし、この村には時折中央大陸からも人が訪れる事がある。その理由は以前中央大陸で発売された旅行雑誌で、湯雲村が名湯であると紹介されたのが理由だ。
しかし、温泉地としては優れた村ではあるが、帝都奉城からは遠く、他の大都市とも離れた場所にある為、交通の便はとても不便だ。その為に観光で訪れる人はいても定住してくれる者は少なく、中でもハンターの数は深刻だった。
元来、湯雲村は比較的穏やかな地域にある為、モンスターの被害は少なく、旅で訪れるハンターにその時々で依頼を引き受けてもらう程度で済んでいた。その為にわざわざ村専属のハンターを雇う必要がなかったのだ。
しかし最近その状況が一変していた。湯雲ノ杜のモンスター達が凶暴化し、これまで見られなかった大型モンスターが現れるようになったのだ。その為、常駐のハンター無しでは村の村防が危うくなり初めていた。
そんな中、ある四人組の異国のハンターが訪れ、そのまま定住してくれる事になった。おかげで村防危機は去った上、彼らが類まれなる実力の持ち主だった事から周辺の都市からも湯雲村には依頼が届くようになり、湯雲村の名は東方大陸内でも次第に知れ渡る事になっ

た。
　そんな湯雲村を守る防人の四人こそ――
「あ、帰って来たぁッ！」
　村の広場で遊んでいた子供達の一人が、門の外を指差して叫ぶ声が村中に響く。その声を聞いて、次々に村人達が集まって来る。彼らの視線の先にはガーグァと呼ばれる飛べない大きな鳥に引かれた鳥車が一台村へと入って来るのが見えた。
　門の前に辿り着くと鳥車は止まり、幌の中から乗っていた狩人達が姿を表した。
「到着ですぅッ！」
　歓喜の声と共に地面に降り立ったのは、美しく煌めく長い金髪を流した翠眼の少女。うーんと体を伸ばし、にこやかに笑みを浮かべる彼女こそ村の防人の一人、【翠銃】の二つ名を持つフィーリア・レヴェリ。
「……疲れた」
　と言いつつも、表情からは彼女の本心はまるでわからない無表情を浮かべた、肩口で切り揃えた艶やかな黒髪に漆黒の隻眼娘も遅れて降り立った。彼女もまた村の防人、【黒狼】のサクラ・ハルカゼ。
「さすがに、今回ばかりは疲れたな」
　そう言って肩を揉みながら二人の後から現れた流氷のような透き通った蒼色の長いポニーテールに凛々しい青眼の娘。村の防人にしてこのチームを率いるリーダー、【烈風】のシルフィード・エア。
「みんなお疲れ様」
　そして最後に操縦席でガーグァの手綱を握っていた少年が降りる。春の柔らかな若葉色の髪に同色の瞳を持った、中性的な顔立ちの少年。彼こそがこのチームの実質的な中心人物であり、湯雲村で最も人気で信頼されるハンター。数々のモンスターの恐怖から村を守って来た英雄――【護剣】のクリュウ・ルナリーフである。
　四人のハンターの登場に、村人総出で迎える。それを見たクリュウは照れ笑いを浮かべながら手を振った。それを合図に更に歓声の声は大きくなり、小さな村には村人達の大きな声が木霊する。そんな彼の様子を見ていたシルフィードは小さく笑みを浮かべた。

「すっかり、ユクモ村の英雄様だなクリュウ」
「え、英雄だなんて。俺はそんな大した存在じゃないって」
「そう謙遜するな。見てみろ、ああやって村人総出で迎えに来てくれているんだ。もっと胸を張れ」
　そう言ってシルフィードはクリュウの背中を優しく叩く。彼女に背中を押されたクリュウは少し照れながら一歩前へ出ると、大きく深呼吸。そして、
「みんな、ただいまぁッ！」
　クリュウの大声に、村人達も大きな声で応え、辺境の小さな温泉村に盛大な歓声の声が上がった。
「あら、クリュウ様。ご無事で何よりです」
　村の中腹にある小さな平地。そこに置かれた椅子に腰を掛けた妙齢の女性。薄紫色の着物を来たその美女は、クリュウの姿を見ると静かに微笑む。喜ぶ時のアイルーのように揺れる長い耳が、彼女が人間ではなく竜人族である事を示していた。
　彼女こそ、この湯雲村の村長。この温泉村を治める長であり、同時に村最大の宿である湯雲荘の女将を兼ねる女性だ。
「村長、ただいま戻りました」
　クリュウが挨拶すると、村長は「ご苦労様」と彼らを労う。その言葉に笑みを浮かべるクリュウの前に出たシルフィード。村長と目が合うと、単刀直入に依頼結果を伝える。
「渓流に現れた雷狼竜ジンオウガだが、ひとまず渓流奥地へ撃退した。それなりの打撃を与えた為、しばらくは大人しくしているだろう」
「そうですか。討伐は、しなかったのですね」
「あぁ。このお人好しが撃退で済ませようと言ったのでな」
　そう言ってシルフィードは隣に立つクリュウの頭を撫でる。少し乱暴に頭を撫でられたクリュウはシルフィードの手を弾いて不貞腐れながら髪を直す。そんな彼を見ながら、村長は「なぜ、倒さなかったのですか？」と静かに尋ねる。
「……ジンオウガはこの村、強いてはこの地域一帯の人達にとっては神獣なんですよね？」

「ええ。雷狼竜は、我が津洲の民にとっては古来よりその勇ましい姿から人々から畏敬の念を抱かれてる特別なモンスターです。国竜にも指定されている、神聖な竜です」
「だったら、無理に倒す必要はないですよね。それに、何だか様子がおかしかったんです。だから、倒すに倒せなくて……」
　頬を掻きながら言葉を濁すクリュウ。そんな彼に対し村長は「様子が、ですか？」と首をかしげながら尋ねると、クリュウは自信なさげに頷く。
「何ていうか、まるで何かに追われて渓流まで降りてきたって言うのかな？　戦ってみて、何だかそんな気がして……確証は何もないですけど」
　自分でも何を言ってるのかわからなくなったのだろう。自らの発言が全く信憑性がない事くらい、言っている本人が一番良くわかる。苦笑を浮かべるクリュウに対し、村長は小さく首を横に振る。
「でも、クリュウ様がそう仰るのでしたら、そうなのでしょう」
「良いんですか？　村の脅威を、完全には排除できた訳じゃないんですよ？」
「構いません。もしもまた彼の竜がこの村の脅威になったら、その時には再びあなた方に討伐依頼を出します。その時は、引き受けていただけますか？」
　手を合わせ、微笑みながら尋ねる村長の問いかけに、クリュウは大きく頷いた。
「もちろんです。俺達はこの村に世話になっている身。どんな事があろうと、必ず守ってみせます」
　拳を握り締め、力強く宣言する彼の言葉に、村長もまた嬉しそうに頷く。
「さすが我が村の英雄様。頼りにしています」
「……だから、その英雄ってのやめてくれませんか？」
　恥ずかしそうに言う彼の言葉に、村長は首を横に振ると、遠い空を見上げる。彼女の瞳には、半年程前の記憶が蘇っていた。
「クリュウ様がこの村に来て、森へ向かった彼女を探す為に渓流へと

赴き、そしてそこで彼女を守りながらドスジャギィを倒してくださって以来、この村の英雄様はあなた以外にはおられません。もちろん、後から合流なさったフィーリア様やサクラ様、シルフィード様も頼りにしております」
　村長の言葉に、フィーリアは頬を赤らめながら嬉しそうに微笑む。サクラも無言を貫いているが、その頬は少しだけ緩んでいた。そしてシルフィードも「まぁ、我々にとってもこの大陸での故郷のようなものだからな」と頼もしく微笑んだ。
「それにしても、ジンオウガはなぜこの地に現れたのでしょうか？」
　ふと思い出したように語るフィーリアの言葉に、村長は少し考え、自らの持論を答える。
「雷狼竜ジンオウガは、湯雲ノ杜の奥深く。あの神龍山脈の更に奥に住まうと言われております。その地には霊峰と呼ばれ、私達湯雲の民が霊山と信仰する山があります。もしかしたら、その地で何か異変が起きているのかもしれません」
「異変……何か、得体の知れない奴でも住まっているのかもな」
　冗談交じりに言うシルフィードの言葉に、サクラは「……もう古龍なんてごめんよ」と言い放つ。彼ら四人は、かつて中央大陸で鋼龍クシャルダオラを撃退した経歴を持つ。その時の想像を絶する戦いを経験しているからこそ、古龍という存在の凄まじさを身をもって知っているのだ。
「まぁ、ジンオウガが渓流の奥へと逃げたのなら、しばらくは安全です。クリュウ様達もお疲れでしょう、早く湯に浸かって御身をお休めください」
　そう言って村長は背後の階段を指差す。その階段を上った先にあるのが、この湯雲村において最大の浴場、大衆浴場を備える村長が経営する宿――湯雲荘だ。
「ふぅ……」
　心地良い湯に浸かりながら、クリュウはまるで体の中にあった悪いものを全て吐き出すかのように長いため息をする。全身を包む少し熱めのお湯は、まるで体中の疲れを取ってくれているかのような、気

持ち良さで包んでくれる。
ここは村最大の宿であり、村長が経営する湯雲荘。村に訪れる旅人の多くが宿泊する宿であり、同時に湯雲村のハンターズギルド支部が設置されている場所でもある。ドンドルマで言う所の大衆酒場のような所で、お酒も飲めるし食事もとれる。そして何よりこの村独特なのが、この大衆浴場である。
酒場部分の隣に源泉を調整した温泉があり、そこで体を休める事ができる。村人や旅人はもちろん、クリュウ達ハンターにとってもここは疲れた体を癒やす最高のお風呂である。
今この湯船にはクリュウ一人しか浸かっていない。夕方前という事もあって、誰も入っていないのだ。
クリュウは足を伸ばし、広いお風呂を独り占めにできる喜びを漫喫していた。だが、そんな彼の下へ来訪者が訪れる。
「あ、クリュウ様」
扉の向こうから現れたのは、フィーリアだった。美しい金髪は頭を洗ったせいか濡れ、より艶やかに。長い髪を今はシニヨンと呼ばれるポニーテールを後ろで丸めた結び方で纏めていた。体にはタオル地のワンピースを着てはいるが、太腿から下や胸より上の部分は肌を晒している。
お湯で軽く体を温めてから来たのだろう。ほんのり肌を赤らめたフィーリアはクリュウの姿を見て喜ぶように笑みを浮かべる。そんな彼女を見たクリュウは頬を赤らめて顔を逸らした。
「ふぃ、フィーリアも浴場に来てたんだ」
「はい。あ、お隣いいですか？」
「え？　あ、うん」
許可を得て、フィーリアは嬉しそうに微笑みながらクリュウの隣に浸かる。湯に浸かったフィーリアは先程クリュウがしていたように足を伸ばし、くつろぎ始める。
一方のクリュウは、頬を赤らめたまま少し居づらそうだ。
湯雲荘にある大衆浴場は混浴である。脱衣所と体を洗う場所はそれぞれ男女分かれており、一応そこにも室内に流した温泉があるのだ

が、露天風呂だけは男女共同のこの湯が使われている。室内風呂は狭い上に露天風呂の方が人気がある為、男女それぞれの利用するほとんどの人が一度タオル地の水着を着て、こうして露天風呂へと現れるのだ。
　初めてこの制度を知った時、クリュウもフィーリア達もかなり驚き、最初のうちは室内風呂ばかり利用していたが、暮らしているうちに次第に慣れ、今はこうして互いに露天風呂を使っている。
　最初の頃はフィーリアもクリュウに半分裸のようなこの姿を見られる事を恥じていて、岩陰に隠れていたりしていたが、今ではすっかりリラックスしている。一方のクリュウは表情こそ平静だが、実はまだあまり慣れていない。その為、どうにも居心地の悪さを感じてしまうのだ。
　ちらりと隣のフィーリアを盗み見ると、彼女はとてもくつろいでいた。ほんのりと赤らんだ白い肌、いつもは隠れているうなじも今は顕になり、日々美しくなっていく少女をより色っぽく見せる。
　クリュウはより頬を赤らめ、慌てて視線を前に向けた。そんな彼の心境など知らず、フィーリアはご機嫌だ。
「やっぱり、いいお湯ですねぇ」
「そうだね」
「このお湯に浸からないと、やっぱり帰って来た感じがありませんね」
「まぁ、疲れを取るには最高だよね」
　狩りから戻って、受付で報告を済ませたらこうして湯に浸かって体を癒やし、そして酒場で飯を食べる。それがクリュウ達がこの村に来てからの日課になった習慣だ。
「え？　フィーリアが居るって事は、つまり――」
「……フィーリア、ズルい」
「抜け駆けは、あまり感心しないな」
　その声に振り返ると、そこにはフィーリアと同じくタオル地の水着を着たサクラとシルフィードが立っていた。
「まったく、抜け駆けは禁止のはずだが。それは協定違反と受け取るが？」

フィーリアと同じく長い髪をシニヨンで纏めたシルフィードの言葉に、フィーリアは慌ててクリュウから距離を取ると「べ、別に私そういうつもりなんて……ッ！」とあわあわと慌てふためく。
ジト目で睨んで来るシルフィードの視線に背を向けてしまうフィーリア。ちょっと可哀想になったクリュウが助けに入ろうとした時、背後に気配を感じた。
「……クリュウ、一緒にお風呂」
突然背後から抱きつかれ、慌てるクリュウ。鼻をくすぐるのはこの湯雲荘秘伝の石鹸の香りと、ほのかに甘い匂い。首に回された柔らかく細い腕。背にはタオル越しでもわかる控えめな柔らかな二つの感触。全てを理解するにつれて顔を更に真っ赤にしていくクリュウの耳に、フゥと息が吹きつけられる。
「……クリュウ、顔真っ赤。可愛い」
「さ、サクラ……ッ！」
クリュウの背中に抱きついたのはサクラだった。ナルガXキャップを外した彼女は黒く艶やかな髪を肩口で切り揃えた髪を濡らし、少し頬を赤らめてクリュウの背中に抱きついていた。
慌てるクリュウの声にこの行動に気づいたフィーリアがすかさずサクラを引っぺがすと、サクラは大層不服そう。
「……フィーリア、邪魔しないで」
「サクラ様の方が明らかに協定違反ですッ！」
「……協定？　知らないわね、そんな事」
「サクラ様ッ！」
湯船に立ちながら言い合う二人の姿に、思わず苦笑を浮かべるクリュウ。そんな彼の隣に、ちゃっかりとシルフィードが腰掛ける。
「まったく、騒々しい連中だな。湯は静かに浸かるものだ」
「まぁ、あの二人が揃った段階で静かだった方がむしろ不安になるよ」
「まったくだ。飽きもせずよくケンカするな、あの二人は」
呆れ半分感心半分と言った様子のシルフィードの言葉に、クリュウは苦笑を浮かべたが。すぐに顔を逸らした。そんな彼の反応を訝しげに思ったシルフィードだったが、すぐにその理由に気づくと、イタ

ズラを思いついた子供のように微笑み、そっとクリュウの肩に手を回して彼を引き寄せた。
密着し、彼女のある部分が彼に触れた瞬間、彼の頬はこれまで以上に真っ赤に染まった。
「し、シルフィ……ッ」
「うん？　どうした？」
「ち、近いって……ッ」
「……ふふふ、君はやっぱりエッチだな」
恥ずかしがるクリュウを抱き、シルフィードは楽しげに微笑む。こうして可愛らしい彼をからかうのが、シルフィードの楽しみだった。
「お、俺もう上がるからッ」
そう言ってクリュウは立ち上がると、逃げるようにして男風呂の方へと消えてしまった。
彼が去り浴場には三人の娘達が残された。言い合いをしていたフィーリアとサクラはしばし彼が消えた男湯の方を見ていたが、振り返り、湯船に使ったまま微動だしないシルフィードを見る。
「……すまん、ちょっとやり過ぎた」
頬を赤らめ、申し訳なさそうに謝る彼女の言葉にフィーリアはため息を零す。
「シルフィード様、あまりクリュウ様をからかわないでください」
「……シルフィード、意地悪」
「いや、彼は思わずいじめたくなると言うか……すまん」
「まったく……」
「……クリュウと一緒のお風呂が」
呆れるフィーリアに対し、サクラは誰が見てもわかる程に落胆してしまい、そのまま湯の中へと消えてしまった。居心地の悪くなったシルフィードは顔の下半分を湯に埋めたまま、ブクブクと息を噴き出してやり過ごす。
露天風呂を、岩から絶えず流れ続けるお湯が湯船を満たす音だけが虚しく響き続けていた。
浴場から出たクリュウは、東方大陸式の着物と呼ばれる服装に着替

えると、そのまま隣接する大衆酒場へと姿を表した。その場で近くにあったテーブルに腰掛けると、ぐったりとテーブルに倒れる。
「……みんな、無防備過ぎるんだよなぁ」
頬を赤らめたまま、クリュウは困ったとばかりにつぶやく。
この一年で、彼女達はより大人へと成長し、より可愛く、より美しく成長していた。一緒に居てドキドキする機会も増えたし、自分もまた以前よりも彼女達の仕草に思わず目がいくようになっていた。まるで、男友達とスポーツに興じる事だけが楽しいと思っていた子供が、思春期になるにつれて女の子を意識し始めたかのじょうな、そんな感じだ。
「はぁ……」
「――何こんな所で腐ってるのよ」
掛けられた声に顔を上げると、そこには一人の少女が立っていた。
長い茶色の髪を後ろで纏めたポニーテール、クリュウと同じ若葉色のクリッとしながらもどこか意志が強そうな瞳でこちらを見詰める少女。二部式と呼ばれるこの東方大陸の民族衣装の一つをモデルにした、深緑色の服に紅色の前掛けに三角巾という出で立ち。この湯雲荘での仲居の衣装を着た少女の問いかけに、クリュウは「別に腐ってる訳じゃないよ」と返す。
そんな彼の様子を見た少女はわざとらしくため息を零す。
「はぁ、村の危機を救った英雄様の情けない姿、あんまり晒さないでよね。あんたに憧れる可哀想な子供って、結構居るんだから」
「か、可哀想ってひどいなぁ……」
苦笑を浮かべるクリュウの言葉に、フンッと鼻を鳴らす少女。彼女こそクリュウの長年の幼なじみであるエレナ・フェルノであった。村の専属ハンターとして活躍する四人に対し、ハンターではない彼女は持ち前の料理の腕を思う存分振るう為、こうして湯雲荘の仲居兼板前として活躍しているのだ。
「はい、ミルク」
「え？　まだ何も頼んでないけど」
「どうせ頼むんでしょ？」

「まぁ頼むけど、ありがと」
クリュウが礼を言うと、エレナは小さく鼻を鳴らして彼の対面の席に腰掛けた。クリュウが「いいの？」と尋ねると、エレナは「どうせこの時間じゃ暇だしいいのよ」と答えた。周りを見ても、確かに彼以外に客はいなかった。
旅行客も居なければ、この村の生計の主力となる林業を営む男衆もまだ山の中。お客が最も少ない時間帯なのだ。
「聞いたわよ。ジンオウガ、追い返したんだって？」
「うん。また現れたら、今度はちゃんと倒すよ」
「相変わらずお人好しねあんたは。全然変わらない」
「そっかな？　この大陸に来て結構成長したと思うけど」
「ハンターとしてはね。ただ、あんたはいつまで経っても子供よ」
「何だよそれ、俺だっていつまでも子供じゃないよ」
「その【俺】っての、あんたに似合わないって何度も言ってるけど？」
「う、うるさいな。いつまでも【僕】って訳にもいかないでしょ」
頬を膨らませて不貞腐れてしまうクリュウ。その姿は文字通り不貞腐れた子供のよう。残念ながら、まだまだ彼は子供っぽさが抜けないようだ。そんなちぐはぐな彼の姿を見てエレナは小さく笑みを浮かべる。
「……もう一年になるのよね、私達がこの大陸に来て」
ミルクを飲んでいたクリュウは、エレナの言葉にコップを置くと「そうだね」と短く答えた。
クリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードのハンター四人とエレナの五人は元々中央大陸北部にある小さな辺境の村、イージス村に住んでいた。そこで数々のモンスターと戦い、様々な人物と出会った。そして去年、そんな村の存亡を脅かす出来事があった。
鋼の龍王、風翔龍クシャルダオラの襲撃だ。
クリュウを中心にハンター達、更には彼を助ける為に二つの国の国軍が応援に駆けつけて激闘を繰り広げた戦い。【神盾の奇跡】と呼ばれたこの大規模な古龍迎撃戦の末、鋼龍クシャルダオラは撃退された。

更に損害を受けた村の復興にこの戦いに国軍を投じた西竜洋諸国の大国エルバーフェルド帝国と南洋に浮かぶ海洋大国アルトリア王政軍国の二国、更にはハンターズギルド総本部に中央大陸の商人のほとんどが加盟する組合である大陸通商連合までもが支援を表明。空前の大規模復興となった。

そんな最中、クリュウ達はクリュウの姉代わりのG級ハンター、キティ・ホークラントが東方大陸で手に入れたある情報を提示した。

それが、東方大陸のどこかに死んだはずのクリュウの母、アメリア・ルナリーフが生きているかもしれないというものだった。

クリュウの母アメリアは元々アルトリア王政軍国の前身、アルトリア王国の王女だった。しかしある事情からクリュウの父エッジ・ルナリーフと共に国を飛び出し、エッジの故郷であったイージス村に住む事になり、そこでクリュウを産んだ。

ハンターだった父エッジ・ルナリーフは後にギルドの極秘任務で謎の古龍と戦い殉職。母アメリアもまた村の付近に現れた鋼龍クシャルダオラから子供を守る為に戦いを挑み、亡くなった。

その死んだはずの母が、この東方大陸で生きているかもしれない。そんな噂話を確かめる為、去年クリュウ達五人はこの東方大陸へと渡って来た。

エルバーフェルド国防海軍の力を借りて東方大陸最大の大国であった津洲帝国、その蒼軍の根拠地であった夜虎渚へと到着。帝都奉城へと向かい、そこから経済都市境へ向かい、国を出てハンターが多く集う砂漠の大都市ロックラックへ。更には商隊で作られる移動都市バルバレなど様々な地を回ったが、アメリアに対する情報は得られなかった。

そんな中、クリュウが旅先で東方大陸の奥地にある湯雲村という所でそんな名のハンターが居たという情報を手に入れた。早速湯雲村へと向かったクリュウ。そこで渓流に行ったまま帰って来ない子供の救出を行い、同時に狗竜ドスジャギィを討伐した。

アメリアと名乗った女性は確かに居たが、すでに村を出ていた。しかしその特徴は母の特徴と似ており、この大陸に来て初めての収穫

だったが、またしても情報は無くなってしまった。
ロックラックへ戻ろうとしていたクリュウだったが、現在村の周辺に異変が生じている事、そしてハンターが不在という事を知った。モンスターの恐怖に怯える村人を見て、クリュウは新しいハンターが決まるまでこの村に常駐する事を決めた。
後に各地に散っていたフィーリア、サクラ、シルフィードも合流して今に至る。時折ハンターは来るが常駐はしてくれず、今もクリュウ達はこの村に居続けていた。
「渓流周辺に色々なモンスターが現れていた原因は、たぶんジンオウガに縄張りを追いやられたからだろうね。ジンオウガの出現情報が出た頃と、渓流が騒がしくなった時期はちょうど重なるし」
渓流には青熊獣アオアシラに狗竜ドスジャギィを始め、雌火竜リオレイア、迅竜ナルガクルガなどが出現して騒がせていた。更に村の周辺や遠方からクリュウ達の実力を見込んで依頼が来るようになり、依頼に事欠かない日々が続いている。
この大陸に来てから各地で白兎獣ウルクススや氷牙竜ベリオロス、赤甲獣ラングロトラ、彩鳥クルペッコ、水獣ロアルドロス、土砂竜ボルボロス、鬼蛙テツカブラ、絞蛇竜ガララアジャラ等、これまで幾多のモンスターを撃破してきた。
東方大陸には中央大陸には居ないモンスターがたくさん居た。中央大陸に居たモンスターもここでは変わった動きをしてクリュウ達を翻弄した。中央大陸にはない武器もあり、クリュウとシルフィードはそれぞれ片手剣と大剣をチャージアックスとスラッシュアックスへと変え、フィーリアも火力強化の為にライトボウガンからヘヴィボウガンへと転向した。サクラだけは太刀を使い続けていたが、この大陸に伝わる技を習得し、更に実力を増していた。
驚いたのは、この大陸の一部では水中に潜って狩りを行う者達も居るという事。水獣ロアルドロスや水竜ガノトトス、灯魚竜チャナガブルや海竜ラギアクルスなどを水中で討伐してしまうハンターが、この大陸には存在するのだ。
さすがに水中戦は習得できていない為に経験はないが、それでも高

台からモンスターの背に飛び乗って攻撃するなど、中央大陸では考えられない戦い方が、この大陸ではたくさん存在した。
母アメリアの情報はこの一年ほとんど得られていない。だが、ハンターとして彼らは凄まじい勢いで成長していた。結果、クリュウ達はそれぞれ中央大陸とは違う新たな二つ名を得た。フィーリアは【翠銃】、サクラは【黒狼】、シルフィードは【烈風】。そしてクリュウも生まれて初めて二つ名を得た。それが【護剣】である。
そしてエレナも東方料理を学び、その実力に更に磨きを掛けていた。
中央大陸の料理もまた物珍しさとボリュームから村では男衆を中心に人気を博し、時たま中央大陸からこの大陸に渡って来たハンターが故郷の味を求めてこの村に来る程、彼女もまた料理人として世間に名を轟かせていた。
この湯雲村という新天地で、クリュウ達はそれぞれその実力を謳歌していた。当初の目的があまり進展ないのは問題ではあるが。
「そもそも、何でジンオウガは渓流に来たのよ。あいつって渓流のもっと奥、シンリュウ山脈って所に住んでるんでしょ？」
「さぁ？　そこまではわからないけど。シンリュウ山脈で異変が起きてるって事かもね。落ち着いたら調査にでも行って来るよ」
「ふぅん、おばさんの情報集めは？」
「……そ、それもまた今度タンジアへでも行って情報を集めるよ。あそこはサカイに並ぶ東方大陸最大規模の経済都市だからね」
「クリュウ、あんたって追い込まれると視線を逸らすクセがあるの。知ってる？」
「うぐ……ッ」
視線を逸らしたまま言いよどむクリュウを見て、エレナは楽しそうに笑った。そんな彼の頬を優しく突付き、エレナは席を立つ。
「どうする？　夕食にはまだ早いけど、何か食べる？」
「そうだね、じゃあミルクプリンもらえるかな？」
「またぁ？　あんた、ここに来る度にそれ頼むじゃない」
呆れるエレナの言う通り、クリュウはこのミルクプリンを気に入っ

ており、ここに来れば必ずと言っていい程に頼んでいる。それを知っているエレナは呆れた様子だが、クリュウは「だっておいしいじゃん」と続ける。
「あ、あれメニューに載ってない裏メニューなんだけど」
「知ってる。でも、必ずあるでしょ？」
「あ、あんたがバカの一つ覚えみたく毎日頼むから、一応作ってるのよ」
「あれ、エレナの手作りなんでしょ？　だからおいしいんだよね」
楽しそうに、そして嬉しそうに語る彼の言葉にエレナの顔が真っ赤に染まっていく。いよいよ彼に見せられなくなり背を向けると「と、取って来る」と無愛想な言葉を返すのが精一杯。そのままエレナは厨房の方へ消えていく。それを見送り、クリュウは一人ミルクを飲む。
そう、この大陸に来た理由は母の行方を探す事。正確には生きていれば会ってみたい。そんな小さな希望と姉の言葉を信じてやって来た。だが収穫はほとんどなく、正直目的を見失いかけていた。
諦めて、イージス村へ帰る事だって考えた。でも――この湯雲村へ来て、自分達を頼りにしてくれる村人達と会って、もう少しだけがんばろうと思ったのだ。
もちろん、母の情報集めは続けている。だが今は、それ以上にこの村の為にがんばりたい。そういう風に思っていた。
もちろん、イージス村の事だって忘れてはいない。この一年この大陸中の様々な都市を転々としていた上、大陸が違う為に手紙での連絡もできていない。それでもきっと、村はもうかなり復興が進んでいるだろう。
自分達の帰りを待ってくれている仲間や村人達。彼らが頑張っている。だからこそ、自分も頑張らないといけない。そう思えた。
何より、こんな中途半端な事でやめてしまうのは、この東方大陸行きを助けてくれたみんなに申し訳がない。
「絶対、達成しなくちゃ。それが、どんな結末になろうとも」
旅の本来の目的は、正直未だ目立った結果を挙げられてはいない。
母、アメリア・ルナリーフは本当に生きているのか。それともやは

りガセだったのか。どちらの結果を判断しようにも、まだその為の判断材料が十分ではない。
だからこそ、より帰る訳にはいかない。必ず、結果を持ち帰らないとならない。例えそれが皆が笑顔になるハッピーエンドでも、悲しいバッドエンドでも。終わらないと、始まれないのだ。
「何深刻な顔してんのよ」
掛けられた声に顔を上げると、呆れ顔のエレナと目が合った。エレナはため息を零すと、彼の前にミルクプリンを置く。そのまま立ち去るかと思ったが、再びクリュウの対面の席に腰掛けた。見ると、手には用意良く自分用のお茶まで準備されていた。
「あんた、また面倒な事考えてるでしょ？」
「そうかな？」
「そうよ。物事を難しく考えて、それで自滅する。そんな感じの顔してるわ」
「何だよそれ。それじゃまるで俺がバカみたいじゃないか」
「……え？　違うの？」
「……エレナ、その素直な反応、とても傷つく」
「ふふふ、冗談よ。でもまぁ、あんたはぶっちゃけ相当なバカよね」
「お、おいおい……」
肩をがっくりと落とすクリュウを前に、エレナは楽しげにくすくすと笑う。その笑顔も、この一年でまた少し大人びたものへと変わっていた。だからこそ、ただ笑っただけなのに、クリュウの心は揺れてしまう。そんな彼の心境など知らず、エレナは静かに続ける。
「そうね。バカってのは、失礼よね――」
「そうだよ」
「――シャルルに」
「……どういう意味、それ？」
意味がわからず困惑する彼に向かって、エレナは手に持っていたお茶を一口飲む。一瞬の沈黙の後、エレナは笑う。
「バカってのは、あの娘みたいな生き方を言うのよね。自分の考えを信じ、貫く。例えそれが周りに理解されない事でも、ただ自分だけが

信じ、夢見て、ただただ真っ直ぐ前に進み続ける。ある意味、バカってのは究極の理想主義者って言い方もできるわね。そういう意味では、サクラもバカって事になるかしら？」
「まぁ、二人共自分の決めた信念みたいなものに従って前に進んでる感じだよね。それ以外に関しては本当に常識知らずな所はあるけど」
「でも、あの二人の生き方って見ててとても羨ましいわ。あんたもそう思うでしょ？」
　エレナの問いに対し、クリュウは苦笑いを浮かべながらもゆっくりと首を縦に振った。
　周りから無知や常識知らずと笑われても、常に己の中の理想、信念、願望を信じ、ただそれだけに突き動かされ、前に進み続ける。小細工はできないし、退く事もできない不器用な生き方だ。でも、だからこそ常に直球勝負で、一直線で、力強く、そして美しい。己を信じ、己の理想を信じ、ただその達成の為に、どんな苦難も逃げる事なく真正面から挑み、打ち負かし、破り、壊し、乗り越える。そんなバカ丸出しな生き方――羨ましくない訳、ないじゃないか。
「だから、バカっていうのはあんたには相応しくない。というより、そんな簡単な言葉では表せないわね」
「じゃあ、強いて表すとするならどんな言葉さ」
「うーん、難しいけど……強いて言うとすれば――アホかしら？」
「……あの、エレナさん？　それ結局言ってる意味同じ気がするんだけど」
「違うわよ。バカってのは自己中で常識と学習能力がなくて、周りを巻き込む奴の事を言うのよ。対してアホってのは常識はあるしある程度社会適応能力があるけど、行動理論が独特で、周りを巻き込む事なく自滅するタイプ。まぁ、近い言葉で言えば天然よね」
「へぇ、本来はそういう意味なんだ」
「さぁ？　あくまでこれは私の持論よ。本来の意味は辞書でも読めば？」
「……おい」
「でも何となくわかるでしょ？　バカにつける薬はないって言葉もあ

るからしてさ」
「まぁ、何となくね。だったらさ、エレナの考えで俺がアホな理由は何さ」
　あくまで一般的な意味とは違う、エレナ流の『バカ』と『アホ』の違い。その意味を知ったクリュウは当然、自らを『アホ』と表した彼女の真意を探る。そんな彼の問いに対し、エレナは腕を組んで少し考える。
「あんたは昔からそう。自分の考えや理想を持っているクセに、常にそれを自らが疑っている。憧れているクセに、信用できず常に疑いながら行動する。常に周りの迷惑を考えて、自分の意見を押し通そうしないばかりか、口にすらしないで黙っちゃう。ほら、バカとは全然違うじゃない」
「……まぁ、当たってなくはないかな」
　気まずそうに視線を逸らすクリュウ。どうやら見事に彼の事を言い表した表現だったらしく、自分も納得しかけてしまったようだ。そんな彼の反応を見てエレナは楽しげに笑いながら続ける。
「あんたは、常に色々な事を考え過ぎなのよ。もっと簡単に、バカみたいに考えればいいのに。それができないアホ。バカ二人はもう少し考えた方がいいとは思うけど、あんたはもう少しバカになった方がいいわね。その方が、きっと色々とスムーズだし、あんた自身も楽になる。何より、その方が見守っている身としては安心、かな？」
　そう言って、エレナは小さく笑った。その照れ隠しのような小さな小さな笑顔。クリュウは少し頬を赤らめ「まぁ、善処はするよ」と短く答えた。そんな彼の反応に「期待しないでおくわ」とエレナも笑いながら返事をする。
「あ、クリュウ様……」
　そこへ着替えを終えたフィーリア、サクラ、シルフィードの三人が合流して来た。全員東方大陸風の着物へと着替えている。中央大陸の服装とはまるで違うこちらの大陸での民族衣装。慣れたとはいえ、やはり彼女達が着るとその姿もよく映える。
「あの、先程はその、申し訳ありませんでした……」

頬を赤らめて申し訳なさそうに謝るフィーリアに、クリュウは「だ、大丈夫。全然気にしてないから」と心配を掛けないように努めて笑顔で振る舞った。しかしフィーリアが少し乱れた髪を直した時に見えた首筋が目に入った瞬間、先程の風呂場ので光景を思い出してしまい頬を赤らめ、うつむいてしまう。

そんな彼の反応を見てフィーリアもまた顔を真っ赤にして黙ってしまった。

気まずい雰囲気に包まれる二人を見て、シルフィードは小さくため息を零しながら近づくと、そんな二人の頭を軽く小突く。

「まったく、君達は初々しいな。今更何を恥じる必要がある」

「そ、そんな言い方しないでください。恥ずかしいものは、恥ずかしいんです」

「シルフィ、女の子がそういう事言っちゃダメだよ」

「私ももう二〇歳だ。女の子という年でもあるまい。君達だってもう子供じゃないんだぞ」

「そ、それはそうかもですが……」

「……クリュウ、あんた何したのよ？」

「俺のせいッ!?」

そんないつも通りのやりとりの後、三人も席に座りってエレナにそれぞれ注文を済ませる。エレナは注文を片手に一人調理場へと消え、その場に残されたのは四人だけだ。

「さて、ジンオウガの脅威も当面は排除された。しばらくはこの村も安泰だろう」

先にエレナが持って来た水を一気に飲み干したシルフィードが開口一番に言ったのは、今回のジンオウガ撃退戦の事だ。この四人でジンオウガを撃退した為、当然話はそういった方向へと向かう。

「危険があるとすれば、ジンオウガに刺激されてモンスターが凶暴化しかねない事だが、まぁ大した事ではないな。今の所渓流には奴以外の目撃情報はないと、偵察隊も言ってる」

シルフィードが言う偵察隊とは、ジンオウガ来襲の際に村に居たアイルーの有志達で編成された特別偵察隊の事だ。渓流に潜入し、その

状況を偵察すると共にそこに住まうアイルー達と交流する事で情報を集めている。今の所彼らからの報告ではジンオウガ以外のモンスターの目撃情報はない。
「問題があるとすれば、クリュウが抱いた疑問くらいか」
　そう言ってシルフィードの視線が自らに注がれるのに気づいたクリュウは小さく頷く。そんな彼の考えを知っているフィーリアは顎に手を当てて、少し考える。
「シンリュウ山脈に住まうはずのジンオウガが、何故麓の渓流に現れたのか。確かに気になりますね」
「その調査もいずれ必要だな。しかしまぁ、まだジンオウガがこのユクモ村の脅威には変わりない。当面は他地域への旅は自重し、経過観察をしよう」
「偵察隊には引き続き、渓流の奥地へ退避したジンオウガを対象にした索敵を実施してもらおう。その間に、俺達は俺達で再襲撃に備えて準備だね」
　クリュウの提案に、リーダーであるシルフィードも頷いた。フィーリアも「了解しました」と同意し、サクラも無言で頷く。当面の作戦がひとまず決まった事で、クリュウの顔にも少し余裕が生まれた。しかしすぐに今後の話し合いを始めるフィーリアとシルフィードに対し、申し訳なさそうに「ごめん」と謝った。そんな彼の言葉に対し、フィーリアは目をパチくりさせて「なぜ、クリュウ様が謝られるのですか？」と尋ねる。
「いや、あのまま押し切って強行追撃すれば、こんな面倒な事にならなかったからさ。あの場で追撃を止めた事、今になってちょっと失敗だったかなぁなんて」
「何だ、そんな事か」
　クリュウの言葉に対し、シルフィードは気にした様子もなく笑い飛ばした。そんな彼女の態度に「笑い事じゃないよ」とクリュウは怒るが、そんな彼に対しシルフィードは「君の判断は正しかった」と彼の判断を尊重する。
「リーダーである私が、君の判断に従ったんだ。責任は最終判断した

私にある、君が気にする事じゃないさ」
「で、でも……」
「私も、クリュウ様の判断は正しかったと思います」
　自分の判断が正しかったのか迷う彼に対し、今度はフィーリアもがそんな彼を気遣う。
「あの時点で、私達の方も装備面でかなり厳しい状況でした。全員の回復薬や食料等の不足、身体的疲労等、あれ以上の戦闘はかなり難しかったです。私自身、残弾数も厳しかったのは事実です」
「フィーリアの言う通り、あれ以上戦闘を続けた所で決定打を打てるとは限らなかった。逃げる奴を無理に追う必要もなかった。相手の戦う意志が消失したとなれば、こちらも戦闘を終えて撤退するのは正しい判断だろう」
「そ、そうかな」
　現状、ジンオウガを取り逃がしてしまった為に脅威は残ったまま。その為の対策を講じなければならず、今もこうして話し合いが行われている。村の人達も原則としてジンオウガが渓流に居る為に杜の立ち入りや村同士の移動も制限されたままだ。
　早急な脅威は追い払えたとはいえ、この状態が続くのは問題だ。その問題を残してしまった事に、クリュウはどうしても責任を感じてしまう。そんなクリュウに対し、フィーリアとシルフィードは互いに顔を見合わせてどちらかとなく笑い合った。
　この大陸に来て、彼もずいぶんと自分に自信をつけたようだが、まだまだこういう所では己に自信がないらしい。
　日々かっこ良く成長していく彼の勇ましさも良いが、こういう変わらない所を見つけられるとそれはそれで嬉しくも感じる。
　すると、そんなクリュウの手をそっと握り締める者が居た。彼の隣の席に腰掛けた、サクラだ。サクラは無言で彼を隻眼で見詰め続ける。
「さ、サクラ？」
「……クリュウは間違っていない。クリュウの判断は正しかった」
「サクラ……」

「……私はクリュウの決定にしか従わない。世界中の人間がクリュウを悪く言っても、私だけはクリュウの味方だから。だから、クリュウは間違っていない。私が、その証拠よ」
相変わらず、あまりにも自己中心的で破茶滅茶な考え方だが、その強い言葉にクリュウはようやく安堵したらしく、小さく笑みを浮かべて「ありがと、みんな」と礼を言う。それを見て、三人共嬉しそうに笑い合った。
「それでは、引き続き対策を考えようではないか」
頼り甲斐のある笑みを浮かべ会議を再開するシルフィードの言葉に、クリュウ、フィーリア、サクラの三人は力強く頷いた。
数分後にはエレナが注文の品を持って現れ、食事を取りながら対策会議が進む。
真剣な面持ちでそれぞれが意見を出し合う雷狼竜の対策会議は厳かな雰囲気で行われる。隣接する露天風呂に絶えず注がれるお湯のせせらぎの音をバックミュージックに、対策会議は続いた。

第２４１話　クリュウの意志を継ぎし者

「あ、サチだ」
　雷狼竜ジンオウガの対策会議も一段落し、エレナと別れて湯雲荘から出た四人。その先頭を歩いていたクリュウが湯雲荘へと続く階段の遙か下に居る人物に気づいた。
　ちょうど村長と会話をしていたのだろう。村長がこちらを指差し、それを追って視線を上げた少女と、クリュウの目が合う。少女はクリュウに向かって一礼すると、小走りでこちらに駆け上がって来る。
　全身を包むのは、この地域のハンターが一番最初に装備する、クリュウ達もかつて着ていたこの地域の旅人の出で立ちをモデルにしたユクモ装備。ユクモの木やケルビの皮、ガーグァの羽などで作られたこの装備は鎧と言うには耐久性が低く、あくまでも序盤のハンターが使う初期装備だ。
　三度笠と呼ばれる形のユクモノカサの下から覗くのは、綺麗な漆黒色の髪と同色のクリッとした瞳が可愛らしい少女。小さなポニーテールをやんちゃに揺らしながら、まるで子犬のように駆け足で階段を上って来る。
　身に付ける武器もユクモの木で原型を作り、そこにケルビの皮やこの地域に伝わる頑丈な布で固定した鉄鉱石の大きな刃を備えた小剣と、同じく鉄鉱石とユクモノ木等で作られた小さな盾。この二つで一対の武器となった、ユクモノ鉈改という片手剣。こちらもまた初心者用の武器として知られている。
　これらの出で立ちから、彼女がまだ経験の浅い初心者ハンターだという事がわかる。
　少女は駆け足で階段を駆け上がって来るが、あと三段という所だった。
「あ……」
「危ないッ！」
　少女はクリュウの前で、階段に躓いたのかその場ですっ転んだ。しかし倒れる寸前でクリュウが反応して駆け寄って支えた為、少女は転

ぶ事を免れた。
「ふぅ、大丈夫？」
　クリュウの腕の中で、少女はコクリと頷いた。
「ごめんなさい、もう、大丈夫」
　少女はゆっくりとクリュウから離れると、仕切り直すように軽くその場で埃を払う動作をした後、待っていた彼に向かって右手を額に当てて敬礼する仕草は、彼女の癖だ。
「お帰りなさいお師匠様。遠征、お疲れ様です」
「うん、ただいまサチ。ごめんね、留守番任せちゃって」
　謝るクリュウの言葉に、少女は小さく首を横に振ると、胸の前に片手の拳を当てる。
「問題ない。師匠の不在を代行するのも、弟子の役目ですので」
「でも、ありがと」
　そう言ってクリュウが笑みを浮かべると、少女は無言のままその場でうつむいてしまう。クリュウからは見えないが、フィーリア達は気づいていた――その頬が、ほんのりと赤く染まっている事を。
　三度笠の下で小さなポニーテールを子犬の尻尾のように揺らす少女は、再び顔をもたげると先程までの表情を隠し、平静を装う。
「村長から聞いた。雷狼竜ジンオウガを撃退したとの事」
「うん、何とか森の奥に追い返す事はできた。しばらくは、森も静かになると思うよ」
「無双の狩人と称される、雷狼竜を撃退するなんて、さすがお師匠様。その武勇、弟子であるサチも誇らしいわ」
「ちょっとやめてよ。勝てたのは俺だけの力じゃない。みんなのおかげだよ」
　そう言って振り返ると、背後に並んでいたフィーリア達と目が合う。フィーリアは小さく拳を握り締め笑顔で頷き、サクラは何故か親指を立てる。そしてシルフィードは苦笑を浮かべて肩を竦ませた。
　謙遜なんかではない。この四人だったからこそ、あの強敵ジンオウガを打ち負かす事ができたのだ。決して、自分一人だけの力ではない。

そんな師匠の言葉に、サチと呼ばれた少女は小さく笑みを浮かべた。
「例えそうだとしても、お師匠様の活躍は並々ならぬものだったはず。弟子として、お師匠様の武勇を褒め称えるのは当然。だから、言わせて――さすがです、お師匠様」
「……うん、ありがと」
少女の言葉に、クリュウは嬉しくも気恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべた。
クリュウに対し、絶大な信頼と親愛を隠す事なく向けるこの少女こそ、クリュウがこの村を離れない理由の一つでもある。
彼女の名はサチ・サナダ。こちらの大陸風に言えば《真田　幸》。この湯雲村出身の見習いハンターだ。クリュウがこの村で助けたのが彼女であり、そしてこの村に居たとされるアメリアに修行してもらった娘でもある。つまり、今の自分と母を結ぶたった一つの手がかりだ。
「でも、本当にギリギリだったんだよ。今回は、正直運が良かったって感じだし」
「運も実力の内。お師匠様は、サチのお師匠様です。強くて、優しくて、かっこ良い。サチが憧れる、サチの大切な師匠。お師匠様の力が本物なのは、弟子であるサチが良く知ってる。だから、この勝利はお師匠様の実力だと、サチは思う」
一歩も退く事なく、自らの師の勝利を信じて疑わない愛弟子サチ。
笠の下で、純真無垢な漆黒の瞳がキラキラと輝く。その自分を全く疑う事のない瞳を前に、クリュウは小さく苦笑いを浮かべた。
真面目で、日々の鍛錬を決して怠らず、勉学に勤しみ、着実に成長を続ける愛弟子。少しドジな所はあるが、子供の頃に読んだ冒険書の英雄に憧れ、それを目指してがんばっている頑張り屋。何より、師匠である自分の事を決して疑わず、心の底から信じている。その期待と信頼を裏切らない為にも、彼女の師匠を引き受けたあの日から、自分はずっと、彼女の理想の師匠でなければならない。
「まぁ、あくまで今回は撃退しただけだから安心はできないよ。ジン

オウガは追い返したのに過ぎないから、また戻って来るかもしれない」
　クリュウの慎重な言葉に対し、サチは小さく首を横に振ると、クリュウの事をジッと見詰めた後、小さく微笑んだ。
「問題ない。その時は、今度こそお師匠様が倒すとサチは信じてる。もしもの時は、サチがお師匠様の背中をお守りする」
　そう言って、サチは腰に下げたユクモノ鉈改の柄を握り締める。師匠想いのそんな愛弟子の姿に、クリュウは思わず笑みを浮かべてしまう。だがその内心はそんな事にならない事を祈っていた。
　まだまだ修行が必要だが、その剣捌きはかなりの実力を秘めている。修行を積み、実戦を繰り返せば、彼女はきっと無双の侍となるだろう。しかし、今はまだまだドスジャギィくらいなら何とか勝てるくらいの実力しかない。そんな彼女に、ジンオウガと戦わせる事などあってはならないのだ。
　クリュウはそっとサチの笠の上に手を置くと、戸惑うサチに向かってそっと笑いかける。
「俺はお前の師匠だ。師匠として、弟子に無茶はさせられない。大丈夫だ、今度またジンオウガが現れたら、その時は今度こそ必ず倒すよ。任せておけ」
　精一杯のハッタリだ。戦いにおいて、必ずという言葉は存在しない。常に予想外の事態が起き、余裕の勝利も惜敗へと変貌してしまう事もあるだろう。クリュウはそういった事案を、数多く経験してきたからこそ《必ず》という言葉の重さを知っている。
　でも、今はこの可愛い愛弟子を安心させる為にも、ちょっとくらい格好をつけても、許されるだろう。そんな気がした。
　クリュウの言葉にサチは少しばかり戸惑っていたが、敬愛する師の頼れる言葉に、サチは笑みを浮かべ、嬉しそうに尻尾のようなポニーテールを揺らす。口元だけの小さな小さな笑顔だが、それは彼女の精一杯の笑顔だった。
「はい、お師匠様」
　やはり、自分の師匠はすごい人だ。サチは心の底からそう思った。

半年程前、湯雲ノ杜にて熱を出した近所に住む子供の為、薬草を取りに行った時。いつもよりジャギィやジャギィノスの数が多い中、彼女は奥深くまで進み、目的の品を手に入れる寸前でドスジャギィの襲撃を受けて負傷してしまう。

絶体絶命の中、突如現れてドスジャギィを撃破し、救ってくれた者が居た――それがクリュウであった。

クリュウは傷の手当をしてくれたばかりか、事情を知ると手負いの自分と共に薬草の入手に協力。再度現れたドスジャギィを今度こそ討伐し、無事に薬草を入手する事に成功した。しかも村まで無事に送り届けてくれた。

見知らぬ地、見知らぬ相手に対して、普通なら考えられない程の協力を、彼は惜しみなくしてくれた。

誰かの為に、自分の事のように一生懸命になってくれる。それは子供の頃に絵本で憧れた英雄のよう。

だからあの日、自分は改めて彼に弟子入りを願った。この人のように、目の前の困った人の為に自分の力を使いたい。その為にも、もっと強くなる必要があった。

あれから約半年、自分は以前よりもずっと強くなった。それもこれも、全ては尊敬するクリュウ・ルナリーフ師匠のおかげだ。

これまで幾多の厄災から村を守り、そして今回も雷狼竜の脅威から村を救ってくれた、心より尊敬し、崇拝する我が師。

サチにとって、クリュウは誇りでもあった。

そんな愛弟子の熱い視線など気づかず、クリュウはフィーリアと今後の事について話し合う。雷狼竜を撃退したとはいえ、他にも彼らが抱えている問題はある。それらについての話し合いだ。そんな彼の背後に、そっと忍び寄る影をサチは見逃さなかった。

「何をするおつもりですか？　サクラ殿」

「……むぅ」

クリュウの背後を襲おうとしたサクラ。しかしその画策は立ち塞がるサチの手によって阻まれた。

一方のサクラはクリュウへのスキンシップを妨害されてひどく不

機嫌だ。隻眼を鋭く光らせ、サチを威嚇する。しかしサチは一歩も退く事なく、まるでクリュウを守るように立ち塞がり続ける。
「……退きなさい、サチ公」
「それはできません。サクラ殿のお師匠様に対する行動は、目に余る」
サクラとサチの争いにようやくクリュウが気づいて振り返ると同時に、サクラは実力行使に出た。これまで幾多のモンスターを撃破して来たその自慢の脚力で跳躍。一気にサチを畳み掛けようとした――だが、それは呆気無く失敗に終わった。
「ハッ！」
迫るサクラの手を取り、サチはその勢いを利用して彼女の体を背負い上げると、そのまま投げ飛ばしてしまった。
吹き飛ばされたサクラだが、そこは歴戦の狩人。綺麗に着地してダメージはない。だが再び襲い掛かるも、今度もまた腕を取られてしまい、そのまま逆に押し倒されてしまった。
地面に押し付けられたサクラに対し、サチはまるで刃物のように手を首元に当てる。完全なるチェックメイトだ。
「まだ、やりますか？」
「……うぐ」
戦いは決したとばかりに、周りから拍手が上がる。当然、それはフィーリアとシルフィードのものだ。二人はサチに駆け寄ると、口々にその腕前を褒め称える。フィーリアに至ってはまだサチに決められているサクラの頬を指先で突いてはくすくすと笑う始末。サクラは顔を真っ赤にしながら低く唸るしかできない。
そんな四人の姿を見て、クリュウは苦笑を浮かべた。
サチの実力を評価する理由の一つが、彼女が子供の頃から習っている格闘技もその一つだ。詳しくは知らないが、これを習得しているサチはサクラに負けず劣らずの身体能力を発揮する。戦闘時もサクラ並みの機動力を発揮し、驚かされたものだ。しかし最も驚いたのが技の本来の使い道である対人戦。あの愛の狂戦士サクラでさえ勝つ事ができないのだから、凄まじい実力者だ。
その為、サチが居る時はサクラはあまりクリュウに近づけない。何

せ中央大陸ですらサクラの愛は行き過ぎだったが、こちらの東方大陸では更に恋愛に関しては厳格な風習がある為か、彼女の行動は不謹慎極まりないとサチに判断され、強制的に排除されてしまう。結果、このようなやり取りがしょっちゅうある訳だ。

見事自らの師を守ったサチはサクラを解放すると、クリュウに対して自慢気に「お師匠様は、私が守る」と断言する。それに対しクリュウは苦笑しながらそんな彼女の頭を小突いた。

「気持ちはありがたいが、あまり乱暴な事をするな」

「サクラ殿はお師匠様に対して危険。だから守っているのに」

「……あれでも数年来の仲間なんだ。そうあまり毛嫌いにするな」

そう言ってクリュウはサチの横を通り抜け、解放されたサクラに手を伸ばす。

「大丈夫？　ほら、手貸すよ」

「……クリュウ」

サクラはクリュウの優しさに感激した様子で、目をキラキラと輝かせた後ゆっくりと彼の手を取り――そのまま抱きついた。

当然クリュウは慌てるし、フィーリアは怒り出し、シルフィードが苦笑を浮かべるという結局いつも通りの展開に。一方のサチはせっかく危機を未然に防いだのに、自ら自爆した自らの師匠の姿に、思わずため息を零していた。

「ったく、宿の前で何バカ騒ぎしてるのよ」

呆れ声にシルフィードが振り返ると、そこには騒ぎを聞きつけたエレナが声と同じように呆れたような表情を浮かべながら立っていた。

「エレナか。宿はいいのか？」

「今は客なんていやしないわ。夕食時の下準備も済ませてるしね」

「そうか。だがまぁ、暇とはいえ騒ぎが過ぎる。すまんな」

「あんたが謝る事ないわよ。このバカ達のバカ騒ぎは今に始まった事じゃないわ」

呆れるエレナの言葉にシルフィードも「それもそうだな」とおかしそうに笑う。そんな二人の視線の先で、ずっと事の成り行きを見ていたサチが我慢ならなくなったのだろう。ムッとしや様子でフィーリ

アとサクラの間に挟まれるクリュウへと近づくと、無言で二人からクリュウを奪い取ってしまった。
「さ、サチちゃんッ!?」
「……貴様、何のつもり?」
二人とクリュウの間に割り込んだサチは、再び手刀を構える。サクラに負けず劣らずの鋭い眼光で睨み返すサチは、静かに二人に向かって警告する。
「お師匠様に不埒を働く者は、誰であろうとサチが許さない」
敬愛する師匠が不埒な輩に振り回される事が堪えられなかったのだろう。まるでお姫様を守る騎士のように、性別も立場も逆ではあるがクリュウを守るように立ち塞がるサチ。だが、その行動に対して当然二人は反発する。
「……サチ。クリュウの弟子とはいえ、妻である私とクリュウの愛を邪魔する事は許されない。控えなさい、子犬」
隻眼を鋭く煌めかせ、主に近づく全てに挑みかかるまさに忠犬。クリュウを愛し、常にクリュウの側で彼を守り続ける侍姫。彼女の愛は、今日もまた絶好調だ。
「サクラ様の妻発言は妄言ですが、サチちゃんはクリュウ様に対して厳し過ぎます!」
フィーリアとしてはサクラの暴走を止められる数少ない存在のサチは正直ありがたい訳だが、その守備範囲が自らにも適応されている為、結果としてクリュウにあまり甘えられない事は不満だ。
唸るサクラ、頬を膨らませるフィーリア。二人の反論に対しサチはまるで聞く耳を持たない。クリュウのチームメイトである二人に対し、自らはそのクリュウの弟子。年も実力も下ではあるが、そんなのお構いなしだ。
チームメイト二人と弟子が睨み合う光景に、当のクリュウは苦笑いを浮かべている。そんなクリュウに対し、背後から近づいたエレナが蹴りを加えた。
転んだクリュウを呆れた様子で見下ろすエレナ。一方前方に意識を集中し過ぎていた為、背後からの襲撃を感知できなかったサチは大

慌て。倒れたクリュウの隣に寄り添い「だ、大丈夫お師匠様!?」と珍しく狼狽している。
「エレナ殿！　お師匠様に何という無礼を！」
「いいのよ。人がケンカしてる姿を半笑いで見てるようなアホにはこれくらいしないと」
「そんな笑い方してないだろ!?」
　起き上がったクリュウはエレナに抗議するが、当然エレナは聞く耳を持たない。すると師匠の代わりとばかりにサチが抗議の声を上げるが、エレナは有無を言わせずサチの両頬を引っ張って黙らせてしまう。
　殴りかかって来る相手なら容赦なく反撃するサチだが、こういった変則的な攻撃に対してはどのような反撃をすれば良いかわからず、結果的に防戦となってしまう。ある意味、サチが最も不得手な相手と言えるだろう。
「あんたも少しは自重しなさい。さすがに鬱陶しいわよ」
　エレナの忠告に対し、サチはその手を振り払って離れると、引っ張られて少し赤らんだ頬を押さえながら尚も抗議する。
「鬱陶しいとは何事か。サチはお師匠様に仇なす外敵を排除しようと――」
「敵じゃないでしょ。私達、同じ村の家族みたいなもんでしょうが」
　何を当たり前な事をと言いたげなエレナの態度に、サチはぽかーんとしてしまう。その反応を見たエレナは自らの発言がとても恥ずかしいものだと気付き、顔を赤らめる。そして視線を彼女の背後、フィーリア達に向けると――案の定、何か言いたそうな含みのある笑いで出迎えてくれた。
「な、何よ」
「い、いいえ何でもありません！　ねぇサクラ様ぁ？」
「……エレナ、間違ってる。私とクリュウは夫婦、あなた達は使用人――ハッ、広い定義では家族と言えなくもない？」
「君の妄想力の底知れ無さには、呆れを通り越して感心すら覚える」
「……エレナは調理担当、シルフィードは門番ね。フィーリアは……

雑用？」
「私だけ扱いがひどくないですかッ!?」
「騙されるなフィーリア。前提条件がおかしいんだぞ」
　エレナの発言を見事に取り込んである意味盛り上がる三人に対し、エレナは自らの発言の無意味さ、杞憂のようなものに脱力し、ため息を零す。その時、ふと自分を見詰めるサチと目が合った。その瞬間、サチは事の成り行きを苦笑いで見守っていたクリュウの背後に隠れる。そして、
「サチの家族は、父様と母様、そしてお師匠様だけです。あなたは、違う」
　……地味に、傷ついた。
　木の幹に手を添えて、明らかにショックを受けた様子のエレナを見て、さすがのクリュウもそんな彼女を訝しげに見詰めるサチの頭を小突いた。小突かれたサチは驚きこちらを見やる。
「何をするのです、お師匠様？」
「今のはお前が悪いぞサチ」
「なぜ？　サチは、事実を言っているだけ。何も間違ってない」
　サチは本人の発言通り、まるで悪びれた様子がない。間違った事は何も言っていないと、心の底から思い込んでいるのだろう。クリュウはそんな弟子の姿を見てため息を零すと、エレナを励ますフィーリアを見る。続けてエレナ、サクラ、シルフィードの順で見回した後、最後にサチを見やる。
「俺にとってはみんな家族だ。なら、お前にとっての家族は俺だけじゃないはずだ」
「……お師匠様の言いたい事はわかる。でも、サチが家族と呼べるのは、この中ではお師匠様だけ」
　少し頬を膨らませて抗議するその姿は、歳相応の少女らしい。
　サチの両親は共に林業を営む山師だ。この湯雲村は温泉街として賑わうと共に、湯雲ノ杜の良質な材木を周辺に輸出する事で生計が保たれている。村の最大の財源であり、常に様々な危険と隣り合わせの山師は皆から尊敬の眼差しを向けられる立派な職業だ。しかも彼女

の両親は共に一級山師。山師には等級制があり、一番下の三級は比較的村の近く。二級が杜の奥地、そして一級となれば神龍山脈に程近い場所で伐採が可能となる。杜の過剰な伐採にブレーキを掛ける為に山師が認可制の仕事である事に加え、より危険な杜の奥地へ経験の浅い山師が仕事を行えないようにする為の制度だ。一般的に霊峰へ近づけば近づく程人の手が引き届いていない為に樹齢が長く、良質で立派な木が多い為だ。当然そういった木の方が材木としての価値は高いが、モンスターが跋扈する杜の奥地へと進む為に危険度も高い。

その為、サチの両親は村を離れている事が多く、禁伐期以外では一年を通して杜の中に居る事が多いのだ。現在も二人は杜の奥地で仕事をしている。最初にジンオウガの来襲を知ったのも二人で、村に逸早くそれを知らせる為にお付きのアイルーを伝令に寄越してくれた為、今回の撃退を達成できた。

いつも家に居ない親の代わりに家を守っているのがサチだ。幼い頃からこうした生活をしている為か、一人で過ごす事に何の躊躇いもない彼女。しかしこの半年程はクリュウ達が家を間借りする事となり、今は一緒に暮らしている。

同じ屋根の下に居て、同じ釜の飯を食べる。だからこそクリュウは自分達を家族と言っているのだが、サチからすれば敬愛するクリュウ以外は眼中にない為、家族とは言えないというのが本音なのだ。

家族の定義が根本から異なる為、二人の溝は埋まる事はなかった。

「まぁ、それはさておき。サチはどこかへ行ってたの？」

クリュウは話題を変えようと、サチに問い掛けてみる。村に戻って来た時、サチの姿は村になく、どうやら先頃戻って来たようだったが。

「ええ。ちょっと農場の方で作物の手入れを。あ、今日はシモフリトマトが少し採れたので、後で塩で食べる？」

湯雲村から少し下った場所の川沿いの平地に、サチの農場がある。サチが毎日のように手入れをして、様々な野菜を育てている農場だ。野菜以外にも狩りに使う様々な葉や実、更にはキノコや鉱石も採取できる場所であり、サチだけではなくクリュウ達の狩人生活にも欠かせない存在だ。

「へぇ、この前まで緑色だったのに。もう赤くなったんだ」
「はい。魚も少し採れたので、今日は食料がいっぱい」
「じゃあ、今日は豪華なお夕食が作れますね！」
　サチの言葉に大喜びするのは、今日の食事当番のフィーリアだ。
「腕によりをかけますよぉ！」と意気込む彼女を見て、クリュウが「期待してるよ」と声を掛けると、更に嬉しそうに喜ぶ。
「ふむ、久しぶりに豊富な食材を使った君の料理が食べられるとは。これは酒がうまくなりそうだ」
　シルフィードもまた嬉しそうに語る。一方のサクラは興味が無いのか、ぼーっと空を見上げている。本当に自分に興味のない事には無関心らしい。
「じゃあ、早く戻って支度しないと。サチちゃん、手伝ってくれる？」
「まぁ、仕方ありませんね」
「私ももう少ししたら上がりだから、その後合流するわね」
　そう言って、サチはフィーリアとエレナ合流すると早速今晩の夕食の献立の相談を始める。そんな三人の様子を見て、クリュウは安堵したように微笑む。
　口ではああ言ってても、すっかりこのメンバーの一員なのだ。
　先行して歩き出す二人を追い掛け、クリュウ達もその後を追って歩き出す。エレナと別れ歩き出す五人の様子を、村人達が優しく見守る。時折掛けられる声に、応えながら、クリュウは村を見回す。
　この、イージス村よりも少し大きな、でも辺境の小さな村。湯雲村は、すっかり自分達の第二の故郷となっていた。すれ違う人達も皆知っている人達ばかりだし、皆が自分達を優しく出迎えてくれる。ここは、優しくて温かな、そんな村だ。
　こうしていると、時々本当の故郷であるイージス村の事を思い出す。
　残してきた皆の顔が、思い浮かぶ。村長やバルド、アシュアやリリア等の村人達。更に今は自分達の代わりに村を守ってくれているルフィールやシャルル、ルーデルやツバメ等の顔もまた、目を閉じれば思い出せる。

ドンドルマには、ライザが居て、きっとエリーゼとレンもがんばっている事だろう。
エルバーフェルドではカレンが今日も海軍の為にがんばっていて、そんな彼女をエルディンがからかい、フリードリッヒが嫉妬し、ヨーウェンが笑っている事だろう。
アルトリアではイリスが国の為、国民の為にその小さな体でがんばって政を行い、そんな彼女をアリアやシグマ、フェニス等が支えている事だろう。
中央大陸に残して来た仲間達は、今日もきっと努力を惜しむ事なくがんばっている事だろう。だからこそ、負けてはいられないと思ってしまう。
この大陸に来て、自分は少しは成長できただろうか。向こうでは知らないモンスター達と幾多の戦いを繰り広げ、ついに難敵である無双の狩人、雷狼竜ジンオウガを撃退に追い込んだ。
皆が前に進み続けているように、自分もまた、常に進み続けている。
場所は違えど、皆も自分も、常に前に進み続けている。いつか、また出会えた時にお互いがお互いを確認し、そして認め合う。そんな日を夢見て。
「お師匠様？」
その声に振り返ると、サチがこちらを訝しげに見上げていた。どうやらずっと黙っていた自分を心配してくれているらしい。何て心優しい愛弟子だろうか。
「ちょっと考え事してただけだよ、大丈夫」
母の手が掛かりを見つける旅は終わった訳ではない。まだまだ、この旅の終わりは見えない。
もちろん、それだって重要な事だ。でも今は、それと同じくらいこの村の為にがんばりたいと思う自分が居るし――何より、この愛弟子をしっかりと立派なハンターにするという夢がある。だから、止まる事はできない。
「クリュウ様？　どうされましたか？」
「何だ、もう腹でも減ったか？」

「……クリュウ？」
サチに続いて、フィーリア、シルフィード、サクラの三人も自分の方へと振り返った。どうやら黙っていた為に皆にいらぬ心配を掛けさせてしまったらしい。クリュウは笑顔を浮かべて「何でもないよ」と答えた。
こんな遠くの地まで、自分の為について来てくれた三人。あともう一人、エレナもまた自分の無茶に付き合ってここまで来てくれた。
皆には感謝してるし、いつまでもこうして一緒に居たいと願ってしまう。
その願いは、いずれ歯車が絶対に合わなくなり、軋み、壊れる儚い願いだとは知っている。でも、今はまだその時じゃない――でも、その時が来たら、ちゃんと答えを示さなければならない。その覚悟は、できているつもりだ。
こちらを向いている、自分が心から信頼できる仲間達であり、家族のような存在。そんな彼女達に向かってクリュウは心からの感謝を込めて笑みを浮かべる。その笑顔は優しく、温かく、邪念の一切ない無垢な笑顔。可愛くもあり凛々しくもあるその優しげな笑みに、その場に居た乙女達が頬を赤らめた。
そんな彼女達の一人ひとりと目を合わせた後、その背後を見やる。その視線の先には湯雲荘のすぐ下にある一軒の家が見える。それこそがサチの家であり、今自分達が暮らしている家だ。
クリュウは静かに微笑みながら、フィーリア達に優しく声を掛ける。
「それじゃ、帰ろうか――俺達の家に」
クリュウの言葉に、フィーリア達はお互いに顔を見合わせた後、それぞれが温かな笑みを浮かべ、一斉に頷いた。
ゆっくりとした足取りで雑談を交わしながら進む五人は家の前に辿り着くと、最初にサチが扉を開いてフィーリアを招き入れる。その後をサクラ、シルフィードの順で入っていく。そして最後にクリュウが足を踏み入れる。その直前、ふと風が頬をくすぐった。
頬を触れたのは何でもないただの風。だがしかし、その風にわずか

に母の温もりが感じられたような気がした。風の来た先を探すと、遥か遠くに神龍山脈が見えた。雷狼竜ジンオウガが本来住まう、湯雲ノ民が霊山として信仰する山、《霊峰》が存在する所だ。
ぼーっと神龍山脈を見詰めるクリュウ。そんな彼の様子に気づいた恋姫達が、それぞれ声を掛ける。
「クリュウ様」
「……クリュウ」
「クリュウ」
「お師匠様」
恋姫達に呼ばれたクリュウは「ごめんごめん」と謝りながら振り返り、扉を引く。ゆっくりと扉は静かに閉まっていき、そして――ガチャリと閉じられた。
程なくして、家の中で賑わいが起こる。楽しげな笑い声が、彼らが今幸せと感じている証拠だ。
東方大陸の辺境の森の中にある小さな村の一軒家、今日もまた楽しげな時間が過ぎていく。

最終話　モンスターハンター　～恋姫狩人物語G～

雷狼竜ジンオウガを撃退してから一ヶ月後、渓流に再びジンオウガが現れたという偵察隊の報告を受けたクリュウ達は今度こそジンオウガを討伐する為に出撃。

エレナとサチ、村長達村人総出の見送りを受けて村を旅立った――今度こそ、雷狼竜ジンオウガと決着をつける為に。

渓流に辿り着いたクリュウ、フィーリア、サクラ、シルフィードの四人はまずは拠点（ベースキャンプ）に陣を敷く。

渓流の拠点（ベースキャンプ）は切り立った崖の上にある。天幕（テント）はなく、自然にできた岩壁の窪みを利用したシンプルな場所だ。

拠点（ベースキャンプ）に布陣したクリュウ達はいつもの通り支給品をそれぞれで分配し、必要な装備を整える。爆弾類や嵩張る道具（アイテム）類は荷車へ積載し、必要な装備だけを持って準備を完了する。それぞれがそれぞれの武器の最後の確認をする中、クリュウは拠点（ベースキャンプ）の端でアイルーとメラルーと何か打ち合わせをしている。

笠に合羽を纏い、眼帯をして口元に葉のついた茎を加えた旅人風の出で立ちをしたメラルー。彼の名は『転がしニャン次郎』。本名ではなく通名だが、彼の役目はタル配達便だ。

中央大陸同様、東方大陸でもアイルーが郵便や荷物の配達を行っている事がある。中には彼のようにメラルーも存在し、人々の貴重な流通や連絡を支えている。

東方大陸ではハンターズギルド東方本部がこうしたアイルー達のタル配達便会社と契約を結び、狩場に居るハンターと外部の連絡や、物資の運搬を引き受けてくれている。今回の支給品も彼が事前に準備してくれたのだ。

クリュウは彼に礼を言ってチップを渡そうとするが、ニャン次郎はそれを断って立ち去ってしまった。彼らの送料はギルド側が負担してくれている為、ハンターが払う必要はない。しかしチップという文化が根付いている中央大陸出身者のクリュウからすれば、それを受け

取らない事は最初は戸惑ったものだ。
東方大陸でもチップの文化がある国は存在するが、津洲帝国には存在しないらしい。津洲民族は礼儀と敬意を重んじる民族であり、他国にはない無償でのサービスが充実している。
当然だが、津洲帝国以外にも東方大陸には国が存在する。国土の半分が山岳地帯であり、残り半分の平野に主に人々が居住している東方大陸最大の国家、津洲帝国。国内には狩場《渓流》の他に《原生林》が存在する。
広大なコルトル高原を支配する騎馬民族の国、津洲帝国と並び立つ東方大陸の大国であるウルス騎士帝国。国内には狩場《遺跡平原》が存在する。
一〇〇年程前までは東方大陸最大国家だったものの、ウルスとの戦争に敗れ首都を奪われて南の煌洲へと遷都し国を立て直した文明大国、蒼王国。国内には狩場《孤島》が存在する。
ロックラックを有する砂漠の民、ディンギルが支配する広大なバルビニア砂漠地帯を支配するシュメル王国。国内には狩場《砂原》が存在する。
赤道近くの熱帯雨林を統治する森の民が住む自然豊かなアーニャ共和国。国内には狩場《水没林》が存在する。
ウルス騎士帝国と蒼王国が戦争を繰り広げていた時代、二大国に対抗する為に複数の少数民族国家で形成されたアミール首長国連合。国内には狩場《天空山》や《地底洞窟》が存在する。
かつては蒼王国、現在はウルス騎士帝国の属国であり大陸北部に存在する大公と呼ばれる貴族が統治する氷の国、ヴィスティア大公国。国内には狩場《凍土》や《氷海》が存在する。
他にも様々な国が存在するが、ハンターの狩場は国を跨いで存在する。これらの維持管理や情報連絡、物資運搬等に彼らのようなタル配達便が欠かせない存在となっているのだ。
もう一匹のアイルーは、村のアイルー達の有志で集った渓流偵察隊の連絡員だ。現在のジンオウガの様子や森の状況など、クリュウは彼から詳しい情報を受け取っていた。

「そっか、ありがと」
「ニャッ！」
　アイルーは綺麗に敬礼して見せると、そのまま踵を返して四足歩行で走り去って行った。アイルーからの情報をメモした紙を見直して整理するクリュウの背後に近づいたシルフィードは、そっと彼の後ろからそのメモを覗き込む。メモには現在のジンオウガの状況、狩場の様子、ジンオウガが寝床としているエリア等の情報が簡略的に書かれていた。
「ふむ、ジンオウガの奴、前回と同じ場所を寝床にしているのか」
「うわッ!?　ビックリしたぁ……」
　突然背後から声を掛けられ驚くクリュウ。そんな初々しい反応をする彼を見てシルフィードはイタズラっぽく笑う。
「いやぁ、やはり君はいい反応をしてくれるなぁ」
「もうッ！　俺をからかって何が楽しいのッ!?」
「君のその初々しい反応全てが愛おしいと私は思う……すまん、私が悪かったからそんな目で見ないでくれ」
　気まずそうに視線を逸らすシルフィードに対し深い溜息を零しながら、クリュウはメモを彼女に手渡す。それを受け取ったシルフィードは苦笑いしながらそれを読み込む。すると、その表情が少し曇った。
　そんな彼女の背後から先程の彼女同様にフィーリアとサクラがメモを覗き込み、同様の表情を浮かべる。
「これは、ちょっと面倒ですね」
「……問題ない。クリュウに仇なすものは全て私が斬り伏せるまでよ」
「だが、障害には違いない――まさか、渓流にジンオウガと一緒にアオアシラまで居るとはな」
　メモを読みながら、フィーリアとシルフィードの表情は曇ったままだ。一人サクラだけは当人の発言通り気にしていないのだろう。肝が座っているというか、もしくは何も考えていないのか。
　青熊獣アオアシラ。全身青と白の体毛で覆われた牙獣種に分類さ

れるモンスターだ。ハチミツを好み、発達した爪や前脚で攻撃して来る好戦的なモンスターで、東方大陸の温暖な気候全域に生息する。渓流でも比較的出現率の高いモンスターではあるが、どうやら今回ジンオウガと同時に出現してしまったらしい。

アオアシラ単体はそれ程苦労するような相手ではない。新人ハンターにとっては中央大陸で言う怪鳥イャンクックのような一番最初に苦戦するような相手だが、クリュウ達くらいの実力になると問題ない。が、さすがに同時に相手するとなれば話は別だ。

ジンオウガは単独でも厄介な相手。実際前回は痛み分けという形で終わったような相手だ。それが今回はアオアシラの相手をしながら討伐しなければならない。難易度は更に上ったと言えるだろう。

チームを率いるリーダーであるシルフィードはメモを見ながら考え込む。自分の判断でチームは動き、戦闘を行うのだ。慎重に考えるのは当然と言えるだろう。

真剣に、対策を熟慮するシルフィード。指揮官として、己の決断の重さを知っているからこそ真剣なのだ。なのだが――

「……おいサクラ。何どさくさに紛れてクリュウに抱きついている」

――中身は恋する乙女だ。

珍しくイライラするシルフィードが睨む視線の先では、サクラがクリュウの腕に抱きついて甘えている。抱きつかれているクリュウはと言えば、居心地が悪そうに明後日の方向を見ている。その頬は赤く染まっている。

サクラが身に纏うナルガXシリーズは、機動力特化の最軽量とも言うべき防具――もはや防具と呼べるのかも怪しい程の代物だ。

ナルガクルガの皮で胸元を隠してはいるが、それ以外は腕を除いて上半身は裸。下半身も同様にズボンとなっているが、内腿はザックリ開いており、その中にある下着の上に履いた黒いショーツが丸見えという、服と呼ぶにも露出度の高い装備だ。

そんな装備の為、クリュウとしては毎回目のやり場に困っているのだ。サクラ曰く自らの戦闘スタイルに最も合った着心地やスキルから選んだとの事だが、クリュウの反応を楽しむ為という理由も大きい

のでは、そんな予想がシルフィードとフィーリアの共通認識となっている。
サクラは頬を赤らめ、甘えるようにクリュウに抱きつく。両腕を彼の首にかけ、寄りかかるように無防備な胸元を彼に押し当てる――その胸が残念な高低差しかない事は、彼女の自尊心の為にも黙っておこう。
当然、そんな蛮行を許すフィーリアではない。すぐにクリュウの反対側に対抗するように抱きついて対抗心を燃やす。普段は大人しいが、サクラに挑発された時は大胆になるフィーリア。
美少女二人に抱きつかれたクリュウは、いよいよ顔を赤らめたまま困ったように視線を彷徨わせる。ふと、視線を感じてそちらを向いた瞬間、彼の表情が凍りつく――視線の先では、シルフィードがとても冷たい目でこちらを見詰めていた。
「あ、いやぁ……シルフィ？」
「ずいぶん幸せそうだな、クリュウ君」
人が真剣に考えている最中にイチャイチャ（正確にはサクラが抱きついて来たのだが）していたのが気に入らなかったのだろう。すっかり拗ねてしまい唇を尖らせてシルフィードはそっぽを向いてしまう。
いよいよ助け舟を失ったクリュウは自力でサクラをまず引き剥がす。サクラが退けば対抗していたフィーリアも顔を真っ赤にして離れてしまう。それはそれでちょっと残念だったクリュウの心内を見抜いたシルフィードは更にご機嫌斜めになってしまい、クリュウは何とか機嫌を直してもらおうとがんばるのであった。
十分後、ようやく機嫌を直してくれたシルフィードと共にクリュウ、フィーリア、サクラの四人は改めて対策を協議する。
「先にアオアシラを討伐するのが定石だな。その間、ジンオウガの場所を常に把握しなければならないが」
「それではまずクリュウ様達剣士組がアオアシラの討伐へ向かってください。私は単独でジンオウガを捜索し、ペイント弾を狙撃します。以降、そのままジンオウガを尾行しながら改めて生態を調査致します」

同時討伐の際は、一般的には優先度の低い相手からまず討伐するのが定石だ。その間、もう一方にはペイントをしておく必要がある。アオアシラのような中型モンスターとガンナーのフィーリアの相性はあまり良くない。彼女はそれらも考慮した上でチームの分派を提案したのだ。

シルフィードもその方向で行こうと決めており、とりあえずの作戦行動は決まった。しかし、これに異を唱える者が居た。

「……あなた一人では危険よ。怪我するかもしれない」

そう言って反対意見を出したのは意外にもサクラだった。相変わらずの無表情で何を考えているかはわからない彼女だが、その発言に自らの実力を疑われたと思ったフィーリアはムキになる。

「だ、大丈夫ですよ。私、これでも立派な狙撃手です！」

グッと拳を握り締めて《できます》をアピールするフィーリア。実際彼女の実力があればこの程度の任務は大した事はない。シルフィードもそれは認めている。しかし、サクラは首を横に振った。そして、

「……でも、心配よ。私の親友にもしもの事があったら、私、嫌だわ」

そう言って、サクラは視線を落とした。どこか辛そうに、そして寂しそうに語る彼女の言葉に、フィーリアは顔を真っ赤にして喜ぶ。

自分達は親友、それは互いが互いに認め合っている関係だ。しかし彼女の方からそういった発言をする事はめったに無い。だからこそ直接口で言ってもらうと、涙が出る程に嬉しいのだ。

「さ、サクラ様……ッ！」

「……だから、シルフィードと二人で行動した方がいい。途中でジャギィに襲われたらガンナーのあなたは危険。何より、ジンオウガと戦う事になったら、前衛役が居た方がいい。シルフィードは、優秀な剣士。あなたも立派な銃士。二人なら、できるわ」

頭をもたげたサクラは、真っ直ぐな目で語り掛ける。自分が心の底から認めている二人なら、必ずできる。そう力強く訴える彼女の言葉に、フィーリアは熱くなった目頭を拳で擦り、快諾する。

「わかりました！　ではシルフィード様と二人でジンオウガの足止め

を行います！　それでいいですねシルフィード様ッ！」
「……フィーリア、お喜びの所すまないが、君は完全にサクラの口車に載せられているぞ」
「え？」
　ぽかんとするフィーリアに対し、シルフィードは額に手を当てながら語る。
「彼女があのような発言を純粋にすると思うか？　冷静に考えろ。彼女はクリュウと二人きりになる環境を作る為に、わざとあんな事を言っているのだぞ」
「え？　あ、え？」
　状況が理解できず、狼狽するフィーリアだったが改めてサクラの方を見やると、サクラは明らかに不機嫌そうにそっぽを向いていた。作戦が失敗して拗ねているのだが、その様子を見てようやく理解したフィーリアは別の意味で顔を真っ赤にし、
「さ、サクラ様あああああぁぁぁぁぁッ！」
　拠点（ベースキャンプ）中に、少女の怒りの声が響き渡ったのである。
「……あのさ、話が進まないんだけど」
　さすがにこのままではまずいと思ったクリュウが進行を始めると、スムーズに事が進み始めた。サクラもクリュウが真面目に話している時は真面目に聞いてくれるので、本当に何も起こらず真剣な作戦会議となった。その間、シルフィードが自らのリーダーシップに少しだけ自信を失った事は秘密だ。
「それじゃ、作戦方針はさっきの案でいこう。俺、サクラ、シルフィの三人はまずアオアシラを討伐。その間にフィーリアはジンオウガの索敵及び尾行。ただし、無理はしない事。見つかったらすぐに逃げる事。いいね？」
「はいッ」
「俺達は俺達でアオアシラを優先するけど、先にジンオウガと遭遇した場合はそのまま戦闘へ移行。その場合は俺がペイントボールで奴の位置を知らせるから、フィーリアはすぐに合流してこれを攻撃。こ

の時点でアオアシラの奇襲があった場合は、俺がこやし玉をジンオウガに投げて奴を強制退去させた後、四人で一気にアオアシラを討伐。これを撃滅の後に総力をもってジンオウガを追撃。これを撃破する。異論はある？」
　クリュウの案に、フィーリアとサクラは問題ないとばかりに大きく頷いた。二人の了承を得たクリュウは最後にリーダーであるシルフィードの意見を窺おうと振り返る。すると、そんな彼の頭の上にポンとシルフィードの手が置かれた。
「え？　何？」
「いや、すっかり君がリーダーだなぁと思ってな。私が言いたい事を全て言ってしまって、本来のリーダーである私は役目がなく、こうして君の頭を撫でているだけだよ」
「あ、ごめん。俺また勝手に……」
「構う事ないさ。私としてはいずれは名実共に君がリーダーになってほしいと思っている。その為の練習だと思えば、問題ない」
　シルフィードの言葉に、クリュウは「このチームのリーダーはシルフィだ。俺はなる気はないよ」と答える。そんな彼の言葉にシルフィードは苦笑を浮かべた。
「君も頑固だな。まぁいい、とにかく今君が立てた作戦でいこう。補足するとすれば、奴は超帯電状態になる為に必ず雷光虫を従えて電力をチャージする為に動きを止める。そこを集中攻撃しつつ、必ず奴が超帯電状態になるのを阻止。あの状態の奴は凶悪きわまりないからな」
「……そうね。静電気で髪が傷んでしまうわ」
「サクラ様、お気持ちはわかりますが、問題はそこじゃないと思います……」
「前回、超帯電状態となった奴相手に何度も撤退を余儀なくされた。回復系のアイテム類の大半はその時に消耗し、負傷の多くは奴が超帯電状態になってからだ。その意味が、わかるな？」
　シルフィードの問いかけに、クリュウ達は静かにうなずく。
　ただでさえ通常の飛竜種と異なる地上特化型の竜、ジンオウガ。そ

の動きは疾く、且つ強烈で隙がない。それが超帯電状態になると強化される上、近づく事すら難しくなる程の電圧を身に纏う。そんな状態の奴と真正面から戦うのは危険過ぎる。全てのモンスターに言える事だが、こちらの攻撃はひとつひとつが積み重ねであるのに対し、向こうの攻撃は全てが一撃必殺。当たらない事を前提にしなければ、戦う事等できない。その為にも、危険な要素は極力排除するのが狩りの基本だ。

「ジンオウガは強敵だ。こちらはリオレウス、ディアブロス、ベリオロスを倒し。更にはクシャルダオラを撃退した実績があるとはいえ、力の抜けない相手だ。だが、万全の作戦の上に各々が全力を出し切り、互いを信じ、剣を、刀を、銃を諦めず向け、立ち向かえば――決して勝てぬ相手ではない」

そう言って、シルフィードは不敵に微笑んでみせる。いつもいつも頼もしく、皆を鼓舞する彼女の頼もしくも挑発的な笑み。その笑顔に、三人は一斉にうなずいてみせた。

そう、相手がどんなに強敵であったとしても、決して勝てぬ相手ではないのだ。これまでだって、何度も何度も挫けそうになった事はある。でも諦めず、戦い続けた結果がこれまでのひとつひとつの勝利が証となって彼らを支えている。

皆が互いを信じ、自らの全力で戦えば、決して勝てぬ相手ではない――無双の狩人と畏怖される雷狼竜ジンオウガであっても、その例外ではない。

作戦会議は終わった。シルフィードは静かに立ち上がると、まだ座ったままのクリュウ達に向かって頼もしく、そして不敵に微笑む。

「さぁ、雷帝ジンオウガと最後の決着をつけにいこうじゃないか」

シルフィードの言葉に、三人は互いに顔を見合わせると一斉に立ち上がる。その誰もが、これから厳しい戦いに赴くとは思えない程、清々しい程のえみを浮かべていた。

「はいッ！　全力でがんばりますッ！」

両の拳を力強く握り締め、美しい金髪を綺羅びやかに輝かせ、頬は興奮で少し上気させ、エメラルドグリーンの瞳を煌めかせる。全力で

がんばると気合を入れてみせるフィーリア。
「……今度こそ必ず勝つ。そして、クリュウに勝利を捧げてみせるわ」
静かに、しかし力強く勝利を宣言する。美しいナルガクルガの毛で飾ったナルガXキャップを風に靡かせ、眼帯で隠されていない右の漆黒の瞳を輝かせるサクラ。
「気合は十分のようだな。頼もしいぞ」
不敵に微笑みながら、氷牙竜ベリオロスの長い毛をポニーテールのように結ったベリオXヘルムを勇ましく靡かせ自信に碧眼を煌めかせるシルフィード。
そして――
「じゃあ、行こうか。今度こそ、必ず勝つよ！」
綺麗な若葉色の髪を、自らの名前と同じ異名を持つ狗竜ドスジャギィの素材で作られたジャギィXヘルムで隠し、同色の希望に満ち溢れた瞳を輝かせ、勇ましく気合の入った掛け声を放つクリュウ。
クリュウの掛け声に、三人の恋姫達からも頼もしい声が返って来た。
出発の準備を終えたクリュウ達は、雷狼竜ジンオウガが住まう渓流へと向かう。まずはエリア1を目指し、進み始める。隊列は先頭をシルフィードが皆を先導するように進み、その次を辺りを警戒しながら進むフィーリアが続く。更にその後ろに荷車を引いたクリュウ、そして殿を担うサクラと続く。
エリア1は拠点（ベースキャンプ）から降った先にある小さな広場だ。ここには丸鳥ガーグァがいつも水を飲みに来ており、今日も姿を見る事ができた。人を襲う事はなく、驚かせないように進まなければならない。
拠点（ベースキャンプ）から来ると段差がある為、荷車は少し苦労する。おまけに水が流れている為に足場も悪い。ここは四人がかりで荷車をゆっくりと下まで降ろさなければならない為、ちょっと不便な場所だ。
荷車をゆっくりと降ろす人間達を、ガーグァ達が訝しげに見て来る。クリュウが愛想笑いを浮かべるのに対し、サクラは見るなとばか

りに睨みつける。その眼光が怖かったのだろう。ガーグァ達は慌てて逃げ出してしまう――ビックリし過ぎたのだろう、一匹が卵を産み落とし、そのまま去ってしまった。
荷車を下ろした後、シルフィードが無言でサクラの頭にチョップを入れると、サクラは不服そうに睨みつける。そんな二人のやり取りを見ていたフィーリアが苦笑いを浮かべながら産み落とされたガーグァの卵に近づくと、それを抱き上げた。
「それでは、私は予定通りここで別離します。この卵は拠点（ベースキャンプ）に置いておきますね」
エリア1は山肌の岩場となっているエリア2と、かつてあった村の跡地となっている広々としたエリア4の二ヶ所に進む事ができる。クリュウ達剣士組はこのままエリア4へ、フィーリアは単独でエリア2へと向かう予定となっていた。
「気をつけてね」
クリュウの言葉にフィーリアは「はいッ」と嬉しそうに答えると、一人クリュウ達から別離して拠点（ベースキャンプ）へと去って行った。残された三人は当初の予定通りそのまま前進を続け、エリア4へと到達する。
高台の広い平地がエリア4とされている場所であり、至る所に廃墟が見える。ここは元々村があったそうだが、十年程前に突如として起きた大嵐によって村は滅んだそうだ。村人は散り散りになり、湯雲村にもその生き残りが住んでいる。
エリアへと入ったシルフィードは辺りを警戒するが、モンスターの姿はなかった。ここはジャギィがよく現れる所だが、幸い今は居ないようだ。
このエリア4もまた川岸のエリア7と森の中のエリア5、更にはフィーリアが向かったエリア2へも分岐する場所だ。
シルフィードは改めてエリア全体の様子を探った後に振り返り、クリュウとサクラに向き合う。
「それじゃあ、このままエリア5とへ向かい、そのままエリア6へと向かうコースを取る」

「エリア5にはハチの巣があるよね」
「あぁ、アオアシラはハチミツを好むからな。奴が現れる可能性が高いとすればエリア5。あとはこの渓流の中心地であるエリア6だな」
「……同時に、ジンオウガの出現頻度が高い場所ね」
　エリア6は渓流の中心部であり、高台から流れる水が滝となって地面へと落ちた後、川となって下る場所。水深は浅く人のくるぶし程しかないが、当然足場が悪いのだが、中心部という事もあって様々なエリアと繋がっており、最もモンスターが出現しやすい場所でもある。
「サクラの言う通り、ここから先はジンオウガも跋扈する生息域だ。全員、気を引き締めて進むぞ」
　シルフィードの言葉にうなずき、彼女に続いて二人も歩き出す。エリア5へと繋がる道は北西側の道を進む事になる。荷車を引きながら進むクリュウはふと北の空を見上げた。北側は崖になっており、高い山々や下に広がる森を眺める事ができる。そんな山々の更に向こうに見える山脈が神龍山脈。雷狼竜ジンオウガが本来住まうべき場所だ。
　あそこに何か異変が起きているからこそ、ジンオウガがわざわざ離れた湯雲村近くの渓流に現れた。だとすれば、一体何が、あの場所で起きているのか。
「シンリュウ、山脈か……」
「おいクリュウどうした？」
「……クリュウ？」
　一人足を止めたクリュウを不審に思った二人が振り返る。クリュウは慌てて「ごめんごめん」と謝りながら二人の後を追った。
　二人と合流したクリュウは、そのままエリア5へと続く道を歩いて行く。そんな彼の後ろのずっと向こう、遥か彼方の神龍山脈は黒い雲に覆われている。漆黒の雲が蠢く中、眩い紫色の稲妻が一瞬迸った。
　エリア5にはアオアシラの姿はなかった。肩透かしを食らった三人はそのままエリア6へと向かった。そして――
　川下の方からエリア6へと入ったクリュウ達。岩陰から姿を見せた刹那、一発の銃声が轟いた。驚いて銃声が聞こえた方へと振り返る

と、木の上にフィーリアの姿があった。彼女もこちらに気づいたようで驚愕の表情を浮かべていた。しかしすぐに慌てた様子で叫ぶ。
「ぜ、前方ジンオウガですッ！」
彼女の声に驚いて振り返る。しかし、エリア6にはモンスターの姿は見られない。ジャギィ一匹すらこの川の近くには存在していなかった。
「何言ってるのさフィーリア、ジンオウガなんてどこにも――」
「……クリュウ構えて、来るわ」
サクラの声に改めて前を見ると、それは突然起きた。
突然川上の滝が爆発したかと思うと、青白い稲妻が辺りに迸った。突然の事に驚き目を一瞬閉じてしまったクリュウ。再び見開くと――奴は厳かにその姿を現した。
滝の中にはエリア8と分類される洞窟がある。そこから現れただけなのだが、滝を砕いて威風堂々と現れる様は、やはり驚かされる。何より、奴の神々しいまでの輝き、胸を押し潰されるような圧迫感、恐怖のあまり足がすくむ程の威圧感、一歩一歩進むたびに震える大地の振動。全てが奴を神格化させる。
滝の中から現れた蒼色の巨影。純白のたてがみに黄金の角、光り輝く雷撃を纏い、辺りに無数の雷光虫を従えたその姿はまさに『王』だ。
――雷狼竜ジンオウガ、それが奴の名だ。
ジンオウガの右肩にはフィーリアが放ったペイント弾が命中していた。そして隠れる場所がないここでは、滝の中から出た瞬間すぐに発見されてしまう。すでに奴もこちらに気づいているのだろう。鋭い眼光は自分達を捉え、辺りを支配する威圧感は一瞬で殺気へと変わり、迸る雷撃がその密度、輝きを更に強める。
こちらも戦闘準備に入る。まずシルフィードが走り出し、全員の前方に立って巨大な長斧ゴアゲイルフロストを構える。その背後には音もなく進むサクラが漆黒の刀、夜刀【月影】を構える。更に木の上にいたフィーリアも飛び降りて来て、すぐさま妃竜砲【姫撃】を構える。
「す、すみません。タイミングが悪くて……」

「仕方ないよ。運が悪かっただけさ」
謝るフィーリアにそう言って、クリュウもまた歩みを進める。
ジンオウガはゆっくりとした足取りでこちらに迫る。その瞳は、一秒たりとも目の前に現れた敵を見逃さない。
小さな小さな敵だが、その実力が相当なものだという事は前回の戦いで知っている。決して、見くびれるような相手ではない。
厳かに迫り来るジンオウガに対し、単身突出して前衛を担うシルフィード。大剣時代から変わらぬ立ち位置だが、スラッシュアックスはガードができない。しかし大剣以上の機動力と、負けず劣らずな破壊力を持つスラッシュアックスでも、彼女の最前衛の戦いに変わりはない。
ジンオウガの僅かな動きを見逃さまいと身構えるシルフィード。そんな彼女の横からゆっくりとクリュウが追い抜いた。声を掛けようかと思ったが、彼の真剣な表情を見てシルフィードは苦笑を浮かべながら一歩後退した。
最前衛に出たクリュウ。それはつまり、最もジンオウガと近い場所に出たという事だ。ジンオウガも彼の姿を見て、ゆっくりと歩んでいた歩みを止める。
巨大な竜と、一人の少年の目線が、静かに重なった。
「また会ったね、ジンオウガ」
クリュウの言葉に、ジンオウガは低く唸るだけだ。人間の言葉なと理解はできない。それでも、彼が何かを語りかけている事くらいはわかる。だからこそ、その場から動かない。目はしっかりと敵に向け、耳はどんな動きも聞き取れるよう敏感にし、そして奴の礼儀を待つ。彼なりの、それが礼儀なのだ。
襲い掛かってくる事なく、静かにこちらの話を聞くジンオウガ。その勇姿に小さく微笑み、クリュウは静かに語り続ける。
「前回はお互いに痛み分けで終わった戦い。今度こそ、決着をつけに来たよ。君も、それを望んでるんじゃないかな？」
クリュウの語りかけに、ジンオウガは無言だ。しかし、まるでその言葉を嬉しく思うように口端がゆっくりと釣り上がる。その頬には、

前回の戦いでクリュウが刻みつけた傷跡がハッキリと残っていた。モンスターの尋常ならざる回復力でも、あの傷は早々に消えるものではない。
「君が何故本来の住処から、こんな所まで来たかはわからない。でも、どんな理由があったとしても、ここは俺達の土地だ。君だって、自分の縄張りを荒らされれば怒るだろ？　それと同じさ。君にここに居座られると、俺達の住む村が危険になる。だから、君には何としてもここから出て行ってもらいたい」
　クリュウの語りに、ジンオウガは無言だ。黙って、彼を見詰め続ける。その鋭い瞳は一瞬たりとも彼を見逃す事はない。更には、遠巻きに少しずつ距離を詰めて来る他の敵も忘れはしない。
　警戒したまま動かないジンオウガに対し、クリュウは更に続ける。
「でも、君はここを立ち去る気はないみたいだね。だから、君にはここで倒れてもらうよ。今度こそ、俺達が必ず勝つ！」
　そう宣言し、クリュウは背負った巨大な鋭い刃盾と、煌めく剣が一対となった盾斧シュヴァルツスクードを構える。鋭い刃先は陽の光を反射してキラキラと煌めく。それはまるで、彼自身が輝いているかのような、そんな幻想を魅せる。
　敵が武器を構えたのを見て、ジンオウガもまた姿勢を低くして突撃の構えを見せる。敵を睨みながら、その動きの僅かも見逃さない。耳を研ぎ澄ませ、目を見開き、相手の出方を伺う。その時、その視線があるものを捉えた。その瞬間、彼の中に怒りが湧き上がる。
　戦闘が始まる。そう判断し、フィーリアは弾を込める。その時、背後で物音がした。驚いて振り返ると、そこには青い巨大な熊が聳え立っていた。
「あ、アオアシラッ！」
「グオウッ！」
　突如現れた全身を濃い青色の毛と甲殻に覆われた巨大な熊。よだれを垂れ流し、鋭い爪とグローブのように発達した硬い甲殻に覆われた腕を振り上げてフィーリアに襲い掛かる――青熊獣アオアシラ、それが奴の名だった。

爪を振り上げて遅いかかるアオアシラに対し、フィーリアは転がるようにしてこの一撃を回避すると、すぐさま銃撃する。
突然思わぬ形で戦いの火蓋が切って落とされた。背後からの奇襲に対し、すぐさまサクラが反応して駆け出す。シルフィードはそんなサクラを見てジンオウガの動きに注視する。当初の予定通り、ジンオウガにこやし玉を当てる為だ。
一方のクリュウは思わぬ形で戦闘が始まった事に動揺しつつも、ここはシルフィードに任せてフィーリアの援護に走ろうとする――その横を、蒼い閃光が翔け抜けた。
「グアアアアアッ！」
怒号を上げて、突如走りだしたジンオウガ。圧倒的な脚力を使ったその走りは人間のどの最速よりも速い。あっという間にフィーリアの背後に迫る。
前方をアオアシラ、後方をジンオウガに挟撃されたフィーリアは為す術もなく、悲鳴を上げる。
サクラが必死の形相で突貫するが、とても追いつかない。ましてやクリュウやシルフィードは更に遠い。四人の悲鳴が、辺りに木霊する。そして、そこにジンオウガの怒号も重なる。
振り上げられた巨大な腕、その先の鋭い爪を勢い良く――アオアシラに振り下ろした。
「え？」
目の前の光景に、フィーリアは呆然とする。
ジンオウガは、彼女に襲いかかろうとしたアオアシラの胸にその鋭い爪を突き刺した。アオアシラは悲鳴と共に吐血し、もがき苦しむ。そこへ更にジンオウガはアオアシラの首元に噛み付き、投げ飛ばした。
吹き飛ばされたアオアシラは岩壁に叩きつけられて短い悲鳴を上げながら激痛に苦しむ。そこへ更に追い打ちとばかりにジンオウガはあの三発の強烈な拳を叩きつけた。岩をも砕く一撃、それを三発も直撃したアオアシラは断末魔の叫びを上げた後、動かなくなった。
目の前のあっという間に終わった戦闘に、クリュウ達は理解できず

呆然とする。
一般的にモンスター同士でも争う事はもちろんある。だがそこに人間が混じった場合はより非日常の存在である人間を優先的に排除しようとするのが常だ。だからこそハンターは同時狩猟の際はその挟撃を何よりも恐れるのだ。
しかしジンオウガは一瞬にしてアオアシラを倒してしまった。クリュウ達の前で、人間よりも先に優先して倒したのだ。これは、異例中の異例、異常事態とも言える。
目の前の信じられない光景に驚くフィーリアやサクラ、シルフィードに対し、クリュウだけは逸早くその意味を理解した。ゆっくりと振り返るジンオウガを見て、その口元がわずかに釣り上がる。
「誰にも、邪魔されたくないって訳か」
自分と同じく、ジンオウガもまた今回で決着をつけたいという想いが強いのだろう。だからこそ、誰にも邪魔されたくないのだ。正々堂々と戦い、勝つ。それが彼なりの騎士道のようなものなのだろう。
己の信念、聖戦を邪魔されたくない。その一心で目の前の邪魔な存在、アオアシラを排除したのだ。
呆然とアオアシラの亡骸を見詰めていたフィーリアだったが、すぐに我に返ってジンオウガと距離を取って銃撃体勢になる。
サクラもジンオウガの動きを警戒してより近い位置で武器を構え、シルフィードも距離を詰める。それらを満足気に見回した後、ジンオウガは最後に再びクリュウと目を合わせる。
渓流の戦士としての誇り、湯雲の戦士としての誇り。二人の戦士の誇りが、ぶつかろうとしている。
「どうやら、君も俺達と今度こそ決着をつけたいみたいだね。だったら、今度こそ正々堂々戦って決着をつけよう。俺達が勝つか、お前が勝つか。勝負だジンオウガ」
クリュウの言葉に全員が次の瞬間に始まるであろう戦闘に備えて武器と身を構え、覚悟を決める。
辺りの空気の流れが変わった。それを敏感に感じ取ったジンオウガは嬉しそうに身を震わせながら、静かに、しかし勢い良く雷光虫達

を従え、眩く煌めく。稲妻を迸らせ、毛は次第に逆だっていく。
前回、彼らとの戦いを忘れた日はない。その続きを待ち焦がれ、ついにその時が来た。歓喜に体は震え、心は荒れ狂う。息を整えたくても自然に乱れ、高揚が止まらない。
相手もまた、今回で決着をつける気である事はわかった。ならば、こちらも当然全力で挑む。挑み、戦い、そして勝つ――必ず勝つ！
ジンオウガの目が鋭くなったのを合図に、クリュウはこれまで苦楽を共にして来た仲間達に向かって、己の想いを叫ぶ。きっと、元気で頼りになる返事が返って来ると信じ――確信して。
「いくよみんなッ！　絶対に勝つよッ！」
クリュウの言葉に、恋姫達はそれぞれの言葉で勇ましく返す。
「はいッ！　クリュウ様ッ！」
「……当然よ、勝利以外に興味はないわ」
「言われなくても、勝ってみせるさ！」
フィーリア、サクラ、シルフィードの力強い言葉にクリュウは満足気にうなずき、クリュウは走り出す。
中央大陸からこの東方大陸まで、ずっとずっと彼女達と一緒だった。
共に暮らし、共に狩りをし、共に旅をし、信頼し合う関係になった。
彼女達の想いは、もうとっくに気づいている。だからこそ、いつかはちゃんと答えなければならない。いつまでも逃げていられる程、人生は甘くはない。
それでも、まだ今はこの関係でいたい。それは自分のエゴかもしれない。それでも、今それだけはハッキリと言える自分の中の本心だ。
この東方大陸でもまた新しい出会いがあった。
一期一会、この地にあるこの言葉を、クリュウはとても気に入っている。
だからこそ、この出会いに感謝し、そしてこの出会いを無駄にしたくない。
自分はまだ十代だ。これから先の人生は、まだその何倍も長い。その歴史の中でも、彼女達と、これまで出会って来たみんなと一緒に歩

み続けたい。
どんなに苦しい事があったって、どんなに高い壁にぶち当たったって。みんなと一緒なら怖くはないし、必ず乗り越えられると信じている。
だから、これからも走り続ける。終わりなき、長い長い道をみんなと一緒に。
ジンオウガに向かって走り出したクリュウ。それを合図にフィーリアは銃撃を開始し、サクラは側面から先制攻撃の突貫を仕掛け、シルフィードは真正面から襲い掛かる。
四方からの同時攻撃に、雷狼竜ジンオウガは天高く雄叫びを放つ。それはまるで戦いの始まりを告げるかのように、天高く響き渡った。
広大な自然に包まれた人とモンスターが共存する世界。
人々の歴史は常にモンスターとの互いの命を懸けた戦いの歴史でもあったが、人々はモンスターに対抗する為に様々な知恵や道具を使って強く生きていた。
そんな世界の辺境にある小さな村――イージス村。どんなモンスターでさえ進入する事のできない絶壁の上に建つ鉄壁の小さな村の中で人々は平和に暮らしていた。
そんな村に修行を終えた一人の少年ハンター、クリュウ・ルナリーフが帰って来た。多くのモンスターと対峙し、仲間達と共に数々の戦いを生き抜き、多くの事を学び、クリュウは強くなっていく。
そして、舞台はイージス村のある中央大陸から新天地、東方大陸へと移った。
これから先、まだまだ続くクリュウ・ルナリーフという少年の物語。少年は大人となり、そしてその物語にまた一ページ刻む。それを繰り返し、彼の物語は続く。
これはモンスターと共に人々が生きる世界。そんな世界で仲間達と共に幸せを願い、戦い続ける一人の狩人、クリュウ・ルナリーフの物語――その序章に過ぎないのだから。
～Ｆｉｎ～

エピローグ

「あぁ、私ってほんとにバカだなぁ……」

天高く蠢く曇天を見上げながら、私はポツリとつぶやいた。

全身はこれまでの戦いで傷つき、指一本も動かせない程に疲労してるし。何よりもずっと振り続ける雨で全身の体温はすっかり奪われ、もう動けない。

全身を包むのは、大好きだった自分の母譲りの長くて綺麗な金髪と同じ金色の防具。名をG・ルナZと言う、伝説の金火竜リオレイア希少種の素材を使って作られた防具。奇しくも自分がかつて捨てた紋章と同じ竜の防具。

遠くに転がっている相棒も、同じく金火竜の素材、それと対を成す銀火竜リオレウス希少種の素材を使って作られた金華朧銀の対弩という強力なライトボウガン。

作るのに苦労したけど、心強い私の相棒。でも今は手元になく、少し離れた場所に転がっている。

武器も失い、防具もボロボロ。体は指一本も動かず、疲労と痛みで意識も混濁してる。

あぁ、私は何でこんな所に居るのだろう。

思い返せば、昔お世話になった村の近くの山に異変が起きていると知って、調査の為に来たのが始まりだ。

古龍観測所の依頼だったから、古龍が関係してると思って万全の装備で来たものの、まさかあんな奴が居るなんて、誰が想像できるってのよ。

ぼやける視界には激しい雨を降らす曇天が蠢いているだけ。辺りには木の一本も生えてはいないので、空がよく見える。その鈍色の空に、一瞬映った白い影に、私は思わず苦笑いしてしまった。

「色々なモンスターと戦って来たけど、あんたみたいな無茶苦茶な奴初めてよ」

白い影は辺りに風を起こし、その風に身を任せるようにゆらゆらと揺れている。あまりにも巨大過ぎて、この距離だと全身を把握するの

は難しい。まるで天女の羽衣を纏っているかのような、そんな幻想的なモンスター。いや、荒ぶる厄神と言う方が相応しいかな。
「勝てっこない。そんな風に思ったのはあんたが初めてよ。年のせいかなぁ」
　おかしそうにくすくすと笑う。こんな絶体絶命的な状況で笑えてしまうとは、いよいよ自分は危ういらしい。そんな事を冷静に考えられる自分を見つけられて、また笑ってしまった。
「――でもね、実は今私はあんたにすごく、心の底から感謝してるのよ」
　相手はどんなに幻想的で、どんなに凶悪で、そして伝説的な存在だろうか。そんな空前の相手に、人の言葉が通じるとは思えない。でも、言葉は止まらないのよ。
「私ね、実は記憶が全然ないのよね。十年くらい前から、それ以前の記憶が全然ないの。いやぁ、最初は自分の名前しか思い出せなくて、慌てたものよ」
　おかしそうにケラケラと笑う。楽しそうに笑ってはいるが、自分の頬に熱いものが流れている事には気づいている――ほんと、すごく不安だった。怖かった、寂しかった。
「でもさ、色々な人達に助けられて、その恩返しがしたくて、私はハンターになった。元々ハンターだったぽかったのよね、私。これが結構強くてさ、色々な所から私を頼ってくれて、嬉しかったなぁ」
　そう、この十年は幸せだったと思うわ。
　誰かの為にがんばりたくて、誰かの笑顔を守りたくて、誰かの役に立ちたくて。一生懸命に狩人としてがんばった。そしたらみんなが笑って私を出迎えてくれて、頼ってくれて。本当に幸せだった。
「でもね、幸せな時にチクリと胸が痛くなるの。何か、とても大切な事を忘れている気がして。だから、幸せの中でも常に心にポッカリと穴は開いていたわ。それが何なのか、いくら考えてもわからないし、失われた記憶は戻らなかった――あんたに出会うまではね」
　そう言って、少しだけハッキリした視界であいつの姿を探してみた。すると、あいつは少し離れた場所にゆらゆらと風を纏いながら浮

かんでいた。全身硬そうに見えないくせに、バカみたいに硬い。でも柔らかくて、本当に羽衣のような鎧を纏った、巨大な神のような相手。
思い出した最後の記憶、私は奴みたいな古龍と戦った。大きさは全然違うし、全身に纏っていたのは羽衣ではなく鋼鉄の鎧。でも神々の力で風を付き従え、圧倒的な力で世界に君臨する風の王。
「昔ね、あんたみたいに風を纏う古龍と戦ってさ。引退してたせいで思うように動けなくて、そいつの風ブレスをモロに受けて、頭打って、そっから記憶を失っちゃったのよね。ほんと、小説みたいなベタベタな記憶喪失っぷりよねぇ」
笑って言ってはみるが、全然笑えない話だ。そんな理由で十年も記憶を失って、大切な大切な記憶を失って、今日まで平々凡々と生きて来たなんて――笑える訳ないでしょ、バカ。
「でもあんたと戦ってる時、何だか懐かしい感じがした。昔、骨のある奴と戦った、そんな気がね。ずっと、何かを思い出しそうだった。そしてさっき女性相手に大人げない程の勢いで地面に叩きつけられた時に頭打ってね――全部思い出しちゃった」
記憶が戻った時、頭が割れる程痛かった。突然一気に二十年以上分の記憶が蘇ったのだから、脳だってそりゃビックリするわよ。あまりの痛さに涙が出たけど――今思えば、それは痛みのせいの涙じゃなかったのかな。
「私ね、実は元お姫様なんだぁ。あ、信じてないでしょ？　まぁ当然よね。でもほんとよ？　アルトリア王国って言う、綺麗な国のお姫様だったんだ。そこで国民の為に、大好きな妹と協力して立派な女王様になる事を夢見てたのよね」
遠い昔の記憶。子供の頃の話。いい年した自分が語るような話ではないかもしれないけど、いい年になるまで忘れていたのだから、今くらいはいい気がした。
「でもある日、私は運命の出会いをした。かっこいい王子様が現れたのよ。いやぁ、ほんとカッコ良かったなぁ。本当にあるのね――ひと目惚れって奴」
体温はもう危険な程低くなっているのに、乙女とは不思議なもの

ね。大好きな彼の事を思い出すと、頬が熱くなる。記憶の中の彼は、いつまでもカッコイイ、私の王子様。
「すっごく優しくて、かっこ良くて、でも時々ドジしちゃって。でもね、私はそんな彼の全てが好きだった。心の底から愛おしいと思ったわ」
　記憶の中の王子様は、最初に出会った少年の頃から、少しずつ年を重ね、いつしか立派な青年へと変わっていた。でも、ある時から彼の成長は止まってしまった。そう、彼は――
「でもねぇ、王子様は私を残して死んじゃったの。ひどいよねぇ、愛すべき妻と息子を残して勝手に死んじゃうなんて……」
　彼はある日、古龍の調査に出かけて行き死んでしまった。古龍観測所や王立書士隊、様々な組織の依頼でシュレイド城を調査する調査隊に加わった事までは知ってた。シュレイドには謎のモンスターが住んでいると噂されてたけど、どうやら本当だったらしい。
　次第に消えていく王子様の代わりに、少しずつ見えてきたのは、彼に良く似た可愛らしい男の子。
「私は決めたのよ。あの人亡き後、この子を立派に育てるって。あの人の分も愛情を注いで、あの人の分も幸せになってもらうって。この子が本当に可愛くて、私の事を慕ってくれるのよね。あ、あとすっごくしっかりしてて、料理も家事も苦手な私の代わりに全部やってくれて。私の自慢の息子、立派なお嫁さんになれるしっかりさん――あれ、何かおかしい？」
　自分で言ってて、だんだんわからなくなってきた。どうやら思いの外頭を強く打ったせいで、まだ意識がぼやけてるみたい。でも、その方が何も考えず思い出に浸れる。
「そう決めてたのに、あの子を残して記憶をバカみたいに落っことして。自分は第二の人生を勝手におっ始めて、今の今まで忘れて生きて来た――最低最悪の、クソバカお母さん。ううん、母親失格よ」
　意識の混濁とは違う意味で視界がぼやけてきた。自分のバカさ、愚かさに反吐が出そうだ。自分が許せなくて、憎くて、殺してしまいたい程嫌いだ。だって、大切な一人息子を残して、自分は今まで何を

やってたのか。ほんと、バカバカのバカよ、私は。
「あれからもう十年くらいかしら。あの子、きっと今は初めて出会ったあの人と同じくらいの年になってるわね。うふふ、あの子はあの人に似てるから、きっとすっごくかっこいいんだろうなぁ。それに優しくてしっかり者だから、きっとモテモテね」
どんなにクソバカ母親でも、あの子に許してもらえなくても、私はあの子のたった一人の母親。子供の成長を喜ぶのは、母親として当然よ。想像の中の今の息子は、とても凛々しくて、でもやっぱり時々ドジして、でも底抜けて優しいしっかり者――うん、やっぱりあの人の息子だ。
「ほんと――会って、みたいなぁ」
あぁ、会いたいわ。
どんなに取り繕ったってダメ。
あぁ、早く息子に会いたい。あの大好きだった、可愛い可愛いあの子に。
この胸に抱きしめたい。忘れていた、離れていた十年分。しっかりと抱きしめて、十年分の愛を注いであげたい。私がママだよって、笑って言いたい。
怒られるかもしれないし、冷たくあしらわれるかもしれない。それだけの過ちをしたのだから、それは当然の報いだから、私はそれを受け入れる。でも、やっぱり会いたい。大好きな、たったひとりの息子に。
「――だから、私は負けないわ」
不思議ね。あんなに体はボロボロで、立つ力どころか指の一本も動かせなかった自分が、いつの間にかこうして二本の足でしっかりと立っている。
その様はきっと無様だろう。足はガクガクと震え、視界も安定せずぼやけ、支えられない上半身は揺れ動き、今にも倒れてしまいそうな有り様。
それでも、私は立っている――あの子に会う為に。
「もうダメ。私はここで死ぬんだ。そんな風に思ってたけど、今はも

うそんなの知った事じゃないわ――私は生きる。絶対に死なない。あの子に会うまでは、例え木の根を食べて、泥水を啜ってでも、無様に生にしがみついてみせる」

遙か上空に浮かぶ奴を見上げながら、私は決心した。

必ず生き残ると、絶対に死なない。生きて、あの子に会いに行く。会って、抱きしめて「愛している」と伝える為に。

「さぁて、そういう訳だから、私は負けないわ」

フラフラの足で進み、地面に転がっていた金華朧銀の対弩を拾い、構える。至る所にこびり付いた泥を落とし、弾倉に新しい銃弾を装填する。これまでずっと共に戦ってきた相棒は、まるでもう一度戦える事を喜ぶかのように、絶好調。

「さぁ、降りて来なさい風を纏いし天空神。風を、嵐を操るあなたを、この私が相手してあげる。完全に思い出した、本当の私。フランチェスカの名を捨てた、私の名は――」

女性は不敵に微笑みながら、美しい金髪を風に優雅に流す。濡れた髪はわずかな光でもキラキラと輝く。この輝きは、彼女自身の輝き――母親としての、煌めきだ。

息子に受け継がれた若葉色の瞳はいつの間にか濁りは取れ、宝石のようにキラキラと輝く。

整った顔立ちは、まるで人形のように美しく。純白の肌は彼女が四〇代だとは思えない程にハリとツヤに溢れ、シワはなく、三〇代――二〇代と言っても通じてしまうのではないか。それ程に若々しい。

高貴な血筋と、底抜けた明るさ、そして愛すべき息子を思う想い。

美しく、そして眩く輝く彼女こそ、元アルトリア王国第一王女にして、伝説のハンターとして《流星の姫巫女》との称号を持つ。

「――アメリア・ルナリーフ。それが、私の名前よッ！」

アメリアは叫び、そして走り出す。銃を構え、引き金を引く。撃ち出される無数の銃弾は天空に浮かぶ神目掛けて飛翔する。

次々に命中する銃弾に、嫌気がさしたのか、神は身を捩り、その場で唸り始める。すると、辺りの風の流れが変わった。

荒れ狂う風はまるでひとつの意志を持ったかのように集まり、神を

中心に次々に回り出す。それはいつの間にか巨大な竜巻と化した。
走るアメリアはその竜巻の脅威を知っている。慌てて反転して離脱しようと走るが、あまりにも近過ぎた。
荒れ狂う暴風は彼女を引きずり込もうと凄まじいパワーで吸い込む。
アメリアは必死に走るが、飛んで来た石を避けようとして転倒。そのまま引きずられていく。
「負けるかあああぁぁぁッ！」
アメリアは必死に地面に突き刺さった瓦礫の一部を掴むと、必死になって足掻く。
下半身はすでに浮き、自らを支えるのは瓦礫を掴んだ腕だけ。
顔は激痛で歪み、あまりの風に呼吸すらままならない。
それでも、彼女は諦めない。
必ず生きて帰り、あの子に会う。そんな夢を、願いを、強い決意を抱いて。
風はあと数秒もすれば終わる。これはこれまでの戦いの経験で掴んでいた。あと少しなら、まだ腕は堪えられる。そう思った――でも、運命って奴は、ほんと残酷よね。
――瓦礫が地面から抜けたのは、まさにその瞬間だった。
「え……」
体は自由を失い、竜巻目掛けて舞い上がる。
地面がどんどんと離れていき、あっという間に風の中に消える。
荒れ狂う風はまるで刃物と化してアメリアを襲う。防具は次々に砕け、粉々になっていく。顕になった皮膚には次々に刃で斬られたかのように切れ、血が噴き出す。
全身を切り刻まれるかのような激痛に、彼女の口からは絶叫と共に大量の血が噴き出す。
急速に遠のいていく意識の中、最後の最後で彼女は一言、愛する息子の名をつぶやいた。
「――ごめんね、クーくん」
アメリアの姿は、鈍色の竜巻の中に消えていった……

「母さん……？」
どこからともなく、母アメリアの声が聞こえたような気がして、クリュウは歩みを止めた。
辺りを見回してみるが、特に異常は見られない。
おかしいと思いつつ首を傾げるクリュウ。そんな彼の様子に気づいたシルフィードが訝しげに振り返る。
「どうしたクリュウ？」
「クリュウ様？」
「……クリュウ？」
同じくフィーリアとサクラも心配そうに声を掛けてきた。クリュウは慌てて「何でもないよ」と笑い飛ばす。
「それなら構わないが、先を急ぐぞ。もうすぐ山頂だ」
そう言ってシルフィードが見上げた先をクリュウも追いかけて視線を向ける。
漆黒に蠢く曇天の空からは常に強い雨が振り続け、風は絶えず強く、不気味に吹き荒れる。
そんな不気味な空の下、クリュウ達の目の前に広がる岩肌剥き出しの黒い山。
湯雲の民から《神が住まう山》として崇められる神龍山脈、その最も高く荘厳な山。湯雲の民から《霊峰》と呼ばれるその山の山頂まで、あと少しの距離。
この山の上で、何が起きているのか。
クリュウは不安と、なぜか少しの期待を胸に、振り返るシルフィード、フィーリア、サクラに声を掛ける。
「さぁ、山頂まであと少し。頑張って登るよ」
生き別れていた二つの運命が――再び重なろうとしていた。